# 星河の覇皇

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星河の覇皇

【Ｎコード】

Ｎ１０８９Ａ

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

一千年後の銀河。人類はその広大な銀河において四つの文明世界において政治と闘争の中にいた。その数多の星達の中から姿を現わす英雄達。彼等とその周りに集う群星達の物語です。

# プロローグ一

プロローグ

人類が宇宙に旅立つのは予想されていたよりも早いものとなった。コンピューター技術の画期的な進歩が宇宙船等にも応用されたのである。これにより飛躍的な進歩を遂げた宇宙技術はその速度を速めていった。

まず人類は月を開発した。月はその予想通り資源の宝庫であった。これによりエネルギー問題は大きく変わることとなった。

資源の枯渇という問題ではない。その取り合いである。これには人類全体の利害、そして生存がかかっていたのである。

とりわけアメリカ、中国、日本等環太平洋諸国と欧州の対立は激しかった。その膨大な人口を背景に多くの取り分を主張する環太平洋諸国に対し欧州側は先に領土とした権利を主張して互いに譲らなかった。

しかしこれを調停したのはロシアとインドであった。彼等は太平洋側につきその有利になるように調停を行なった。欧州側はこれに対し強い不満を露わにしたが太平洋側の圧倒的な力と自分達が必要な取り分は確保出来たことにより引き下がった。この調停は『シンガポール条約』と呼ばれる。

よりによって環太平洋諸国の本拠地で結ばれたことがこの条約の性質を物語っていると言えよう。しかもこの条約はそれからの人類の宇宙進出に大きな影響を与えた。

この条約を太平洋側に有利に進めたことによりロシアは環太平洋諸国の中で大きな発言権を持つようになった。それまで日米中三国と比べいささか弱い立場にあったがその三国を調停する役割を担うようになったのである。

これは米中の専横を警戒するＡＳＥＡＮ諸国や日本の支持もあった。その日本にとってもロシアは厄介な相手であったが北方領土問

題の解決が彼等の関係を修復させた。ロシアにとっても今更北方領土など大した問題ではなくなっていたのだ。時代は宇宙へ向けて大きく歩もうとしていたのだから。

これに中南米諸国も参加した。オセアニアはその盟主的存在であるオーストラリアとニュージーランドが既に環太平洋諸国の重要な一員であるから問題はなかった。韓国やモンゴル、メキシコ、カリブ海諸国等も参加した。後にはロシアの周辺諸国やＥＵの一員であったトルコも参加した。彼等はその圧倒的な人口と力を使い宇宙進出を積極的に広めていった。既に宇宙進出のノウハウを多く持っていたことも大きかった。

インドは彼等に加わらなかった。そのあまりにも独特な文明風土が環太平洋諸国ともロシアとも合わなかったせいであるが彼等は独自路線を歩むことにした。これはアメリカや中国とそりが合わなかったことも大きくいまだに彼等とは疎遠であった。

しかし日本とは友好関係を結びその技術で宇宙に進出していった。それを横目で歯噛みしつつ見ていたのが欧州諸国であった。月での資源獲得に敗れた彼等は人口や技術においても大きく遅れをとっていた。元々コンピューター技術においても遅れていたこともあり彼等の宇宙進出は太平洋諸国の後塵を帰する形となた。かつてのＥＵの面影は何処にもなく欧州は再び人類世界の辺境に甘んじることになるかと思われた。

だがそこで彼等に幸運が訪れる。新たな指導者の誕生である。

ハインリッヒ＝フォン＝ブラウベルク。オーストリアに生まれた公爵家を先祖に持つこの男は欧州議会の第一野党である革新政党から欧州議会の議員に立候補した。引き締まった長身、豊かな金髪、青く強い光を放つ瞳、そしてギリシア彫刻のような美貌を持つ二十五歳のこの若者はその弁舌でも欧州の市民達を魅了した。

彼は議会に入るとまず演説を行なった。歴史に名高い『復活祭の演説』である。この当時欧州議会は復活祭に開始されることとなっていた。当時の欧州の宗教はギリシアや北欧の神々が復権しカトリ

ックと融合しているものが主流であったのだ。古の神々の復権は十九世紀には既に見られていたがそれが現実のものとなるのに更に数百年必要であったのだ。

この演説は閉塞状況にあった欧州の人々を熱狂させた。革新政党のリーダー達もそれに賛同し彼は忽ちその政党の若きリーダーとなった。

ブラウベルクはその政策を次々と発表させた。宇宙への積極的な進出、科学者及び技術者の保護、教育の再編成、労働者達の権利保護。そのいずれも宇宙進出に絡めたものであった。

すぐに与党の中にも彼に賛同する勢力が現われた。彼等は党を出て野党に合流した。これにより議会における勢力関係は一変した。

そして議会は解散となった。それに伴う選挙により革新政党は圧倒的な勝利を収めた。彼は欧州議会に欧州議会議長、すなわち欧州のリーダーに選ばれた。

彼は自らの政策を通していった。これにより欧州はその力を取り戻した。そして欧州も宇宙に大きく進出することとなった。

これを面白く思わない勢力もある。環太平洋諸国だ。とりわけアメリカ、中国、ロシアといった面々は不快に思った。

まず刺客を送った。だがそれは失敗した。しかも彼等の行動が明るみにされた。三国の諜報機関は批判の嵐に曝されその名声は地に落ちた。

これで暫く大人しくしていたがその間にも欧州の進出は活発になる。だが今のところは何も出来なかった。暗殺事件の発覚により失脚した対欧州強硬派に替わり太平洋議会の主流になった穏健派にとってもブラウベルクは意識しなくてはならない存在であったからだ。

しかし経済制裁も効果が期待出来なかった。彼等は既に独自の経済基盤を持っていたからだ。資源も手にしていた。

彼等はシンガポール条約をたてにすることにした。それにより宇宙進出のいい部分は独占することにした。戦争を売ろうにも先に手を出したのがこっちであるとわかった以上支持者も期待出来なかっ

たからだ。しかも太平洋諸国は諸国で問題を抱えていた。
彼等の特徴は多くの参加国である。だがそれはかえって弱点ともなっていた。強力なリーダーシップを取る存在がいないのである。
日米中露四ヶ国がそのリーダーである。だがそのリーダー間での衝突がことあるごとに起こるのだ。しかもそれに他の参加国も加わる。とにかく話が進みにくかった。
これは利権争いもあった。彼等は決して一枚板ではなくそれが為に欧州に対して確固たる行動がとれなかった。
それはブラウベルクもよく認識していた。彼は行った。
「船頭多くして船進まずとは彼等のことを言うのだな」
と。わざわざ中国の諺を持ち出したのは彼一流の皮肉に富んだ言葉であった。
だがその力の差は変わりがなかった。彼もシンガポール条約は何とかしたかったがどうにもならなかった。どうにかする為には戦争でもするしかない。しかしそれは出来ない。
戦争になれば流石に彼等も団結する。そうなればこちらが負ける。彼は欧州の勢力を確立させることにした。

## プロローグ二

これは成功した。欧州は環太平洋諸国に対抗し得る勢力を確立することが出来たのである。ブラウベルクは『欧州の新たな父』とまで呼ばれるようになった。

後に欧州の人々はその進出を絞ることになる。そして独自の勢力を築き続けるのである。

何はともあれ宇宙の進出は続く。アラブやアフリカ諸国もそれに続く。

それから数百年が経った。環太平洋諸国はその名を『星間国家連合』と変えた。人類の過半数以上を擁する彼等はそのまま進出を続けていた。彼等はゆるやかな連合体の続いていたのである。

当然その間に大きな衝突も度々あった。だがそれでも各国の調停等により戦争までには至らずここまできたのである。地球をその首都に置き参加国百以上、領有する星系は数万に達し、人口は三兆という人類最大の勢力であった。

だが相変わらずまとまりには欠けていた。参加国同士の意見対立は多くしかも広い領土の開拓、治安に追われていた。連合議会と中央政府、星間裁判所があるが統制は弱かった。それぞれの国家の発言力が強く中世の欧州の領邦国家的な一面が強かった。

議会はそれぞれの国の権利を強く主張し重要な法案は各国の利害が絡み合い容易には決定しなかった。裁判所も統制が弱く各国の法律の方が強かった。

しかも各国の星系がモザイク状に入り乱れている場所もあったりする為一旦他の星系に逃げてしまえば犯罪者を拘束出来なかった。その為宇宙海賊が跳梁跋扈した。これは開拓地が多くそこに犯罪者が逃げ込むことも多かったことが影響している。

中央政府も断固たる政策を実行できなかった。あくまで中央政府であり各国の存在を無視出来なかった。とりわけ日米中露といった

大国の存在は大きく彼等の意向がしばしば連合の意志となった。救いはそのうちの一つ日本が連合政府に対して忠実なことが大抵でありその際に小国の大部分国がそれに賛同することが多かったことだった。

中央軍も中央警察もなかった。各国がそれぞれ軍や警察を持っている為治安維持等も複雑であった。その為管轄地域についても入り乱れ宇宙海賊を満足に取り締まれないようになっていたのである。しかもその取り締まりをやり過ぎだ、と批判するＮＧＯ団体の存在も無視出来なかった。おまけに彼等の中には海賊との関係を噂される連中もおり全体的な治安は中々よくはならなかった。こうした状況が数百年以上も続いた。

しかし連合は発展し続けた。確かに海賊もおり各国の思惑が複雑に絡み合ってはいるが彼等には豊富な資源と果てしない土地、そして技術があった。

「ここが駄目なら別の星に行け」

こういう言葉も出来た。彼等は自分達の手で成功を掴む、そうした精神に満ち溢れていた。開拓地があればそこに移り住み農地を開墾し鉱山を掘る。そして産業を興す。こうして彼等はその勢力圏を大きく拡げていったのである。

彼等にとって幸運だったのは心配された異星人の存在もなかったことである。その為開拓は容易に進んだ。

医学や宇宙航行の技術の発展も大きかった。人口は増大し流通は進歩した。そして瞬く間に人口は三兆を越えたのである。

確かに治安は悪く各国の勢力は複雑な状況にあった。だがそれがかえって各国の武力衝突も抑えていたのだ。

戦争よりも海賊の掃討、それこそが重要課題であった。各国は海賊の取り締まりに追われ戦争どころではなかった。流通や宇宙航行の発達が海賊の動きをより速めていった。それに対処する必要があったのだ。

種々雑多な寄り合い所帯、それが星間国家連合であった。宿敵欧

州との対立もあったが彼等は自分達だけで独自の世界を形成していた。
彼等の進出はまだ続いていた。開拓は辺境に及びその先にあると言われている未知の星系の存在についても調査されていた。彼等の進出はまだまだ続いていたのである。
さて彼等と同盟関係にあるインドであったが彼等はその独特の文明体系をそのまま維持していた。進出した地は連合とは別の地域であった。
連合と不可侵条約を結んでいたが彼等はそれをあまり信用していなかった。信用するにはあまりにも危険な国が多かったからである。
彼等は出来るかぎり連合から離れた場所への進出を考えた。幸いその地はあった。
長大なアステロイド帯の向こうに多くの星系があったのである。そこに彼等は進出した。そして一方的に領有宣言を行なった。
これに対して連合も欧州も沈黙した。連合は彼等の星系の開発に忙しかったのである。欧州も同様であった。
インドはそこにある多く星系に入った。そして最初に足を踏み入れたその星を『ブラフマー』と名付けた。彼等の神話の創造神から名をとったのである。
そしてそこに地球からインド本土を持って来た。彼等はそこに完全に移り住むつもりだったのである。
これには連合も驚いたが反対はしなかった。彼等にしても自分達の勢力圏から彼等が立ち去ることは好都合であったのだ。
彼等は慎重に開発を進めた。そして一定のところで止まった。南方にはまだ開発可能な星系が多くあると言われていたがそこで一旦止まった。そして連合との境の防衛を固め海賊を締め出した。そして各星系の開発をさらに進めていった。人口は二千億程度で抑制をはじめ連合に比べ活気には乏しいが一つの勢力圏を築いていた。
連合程ではないが緩やかな連邦制であり大統領制をとっている。今は国名を『マウリア』というかつての王朝の名にしている。平和

を愛する穏健な勢力である。
連合の宿敵欧州であるが彼等はその正式名称を『エウロパ』に変えていた。ギリシアの美しき少女、欧州の語源になった名であるがこの名を国名にしたのである。
彼等もまた連合とは離れた場所に進出することにした。インドと同じく長大なアステロイド帯の向こうにその場所を見出していた。丁度人類の勢力圏を東西に分ける帯であった。
その帯の北側、そこが彼等の勢力圏であった。彼等はその中の中央にある星系に首都を置いた。その名は『オリンポス』。ギリシアの神々が住んでいた山の名である。
彼等の勢力圏は小さかった。しかしそれぞれの星はどれも豊かであった。そして人口では劣りながらも連合に次ぐ勢力を形成した。これは彼等の結束が比較的強かったことも幸いした。
彼等は連合やマウリアよりも強い中央政府のある国家であった。各国の主権は国家元首位でありその他は全て中央政府にあった。そのリーダーシップにより開発を進めていった。
欧州本土はオリンポスに移された。連合の市民達は宿敵が一人残らず去り大いに喜んだという。
「今に見ておれ」
そう言ったのは当時の欧州総統ヘンリー＝スチュアートであった。彼は何時しかエウロパが連合を凌ぐ勢力になるとその死の間際まで言っていた。
しかしそれは実現しなかった。あまりにも星系が少なく勢力圏が狭かった。
これは誤算であった。エウロパの北と西には星系は何十万光年もなく太陽系の果てであったのだ。
しかも東には連合がいる。彼等とはアステロイド帯を挟んでいるが唯一つの通り道があった。
ブラウベルク回廊。欧州再興の父の名を冠したのはこの先に希望が広がっていると言われたからであった。

だが今この回廊は人類の勢力圏の中でも最も緊張した地域の一つとなっていた。よりによってその向こう側は連合の中でも特に欧州の勢力を嫌う国の勢力圏であったのだ。

彼等は各国の援助を得て回廊の出口、連合から見れば入口に要塞群を建設した。そしてそこから一歩も通さないつもりであった。

エウロパにとってもそれは同じであった。回廊の入口にこちらも要塞群を築いた。そして睨み合いを続けたのである。

彼等の進む方向は南しかなかった。だがそれは困難であった。

南方はアステロイド帯だけでなくブラックホールや磁気嵐、超新星、彗星等がひしめく異様な地形であった。容易には進出出来なかった。連合やマウリア、当然エウロパの勢力圏にもこれ等はあったが質量共にその比ではなかった。

しかしそこに進出した人々も既にいたのである。それでもエウロパはそこに進出せずにはいられなかった。最早どの星系も人口は限界にあった。一千億だというのに養える数は限界に達しようとしていた。スペースコロニーを築くのにも限度がある。しかも不経済であった。

結果的に侵略になる。連合はそれを冷笑し批判した。だがそれでもやるしかなかった。

だがここで一つの問題が生じる。以前よりここに住んでいた人々はどうなるのか。

当然武力衝突となる。だが状況はエウロパにとって有利であった。

何故か。彼等は一つの勢力ではなかったからである。

一つのまとまった勢力を築くことが出来なかったアラブや北アフリカ各国はそれぞれ独自に進出した。連合やマウリアに入る者も多かったし事実北アフリカ各国以外のアフリカ諸国はそうであった。彼等は全て連合に入った。だがそれでも彼等は進出した。

だが進出する先はあまり残ってはいなかった。他の勢力に入ることを潔しとしなかった彼等はこの複雑に入り組んだ地域に入ったのである。

彼らは宇宙でも統一した勢力を築かなかった。各国がいがみ合い抗争が続いた。そして戦っていた。
そうした状況が何時までも続いた。この地域では多くの国が興亡したが栄枯盛衰を繰り返しそして血が流れた。それでも戦いは終わらなかった。
そしてそこにエウロパが侵攻してきたのである。彼等は少しずつその勢力圏を拡げていった。
「これは我等の危機である。一刻も早く統一した勢力を！」
こう主張する者もいた。だがそれは逆効果であった。
有力な国が我が、我がと名乗りをあげ再び争いを激化させたのである。そしてエウロパを退けるどころではなくなった。
「これは神々が我々に与えた僥倖だな」
エウロパの司令官の一人がこう言ったという。その通りであり彼等はいがみ合いに明け暮れ外に目を向けようとはしなかった。
こうした彼等かってのアラブ諸国の末裔達にとっては再び嫌な時代が続いた。エウロパの侵略は続き連合も辺境の開発の他に彼等の勢力圏に眠るとされる多くの資源に関心を持ちはじめていた。
「奴等には有り余る程あるだろうが」
しかしそれとこれとは別であった。人間の欲望には際限がないのだから。
まさに危機的な状況であった。誰もが何とかしたいが何も出来ない状況であった。
「このまま他の奴等に食い散らかされてしまうのか」
その中央にある星ムハンマドに移されたメッカを見て嘆く者もいた。彼等は最早他国と内部の戦乱に弄ばれる哀れな存在であった。
しかしその惨状も幕を降ろす時が来た。人々が望むものは出て来るものなのである。
英雄、指導者。彼等が欲していたのはそれであった。彼等を統べ護り戦う者。それが今出て来ようとしていたのである。

# 第一部第一章　若き将星その一

## 第一章　若き将星

多くの星間国家に分裂している旧アラブの人々を中心に構成されている地域、『サハラ』は人類の宇宙進出後千二百年を経てもいまだ統一した勢力とはならず小国家同士の対立、戦争が続いていた。多くの国家がありそこにエウロパが侵略しているという彼等にとってはまことに苦しい状況であった。そうした状況が百年近くに渡って続いていた。

これは西暦三三四八年においても同じであった。尚宇宙進出後暫くして、西暦二五〇〇年を期に別の暦も制定されている。それを『銀河暦』という。

今は丁度銀河暦八四八年である。この年の四月サハラの西方において一つの小規模な戦闘があった。

サハラ西方もまた幾つかの国家に分かれていた。大小合わせて七つ程あった。互いに時には手を結び時には戦いといった群雄割拠の状況であった。

オムダーマン共和国もそうした国の一つであった。この西方では第三勢力といわれるこの国は第一勢力であるサラーフ王国と局地戦を行なっていた。

事の発端は領土問題であった。両国の境にあるカッサラ星系をめぐって両国の意見が衝突したのだ。

このカッサラ星系というのはサハラ西方における交易の中心地であった。土地も豊かでありこの星系を押さえるということはその勢力に莫大な富と西方における確固たる地位を約束するということであった。

その為この地を巡って何百年もの間戦いが続いていた。とりわけサラーフとオムダーマンの対立は激しく彼等の衝突の主戦場となっていた。

この時もこの星系を巡って衝突があった。まずオムダーマンがこの地の一方的な所有宣言を行ない兵を派遣した。それに対し事前に兵を置いていたサラーフが応戦したのである。
参加兵力はサラーフが百万に対しオムダーマンは百五十万、兵力的にはオムダーマンがやや有利であった。
しかし戦局はサラーフ有利に進んだ。地の利を心得るサラーフは星系の中にあるアステロイド帯からオムダーマン軍に対し奇襲を仕掛けたのだ。
これに対しオムダーマンもすぐに反撃した。しかし先手を打たれたのは大きかった。
しかも艦艇の主砲の射程はサラーフの方が長かった。これにより戦局はサラーフに大きく傾いていった。今も戦闘が行なわれているが損害を受けるのはオムダーマン側の方が多い。次第に星系から追い出されようとしている。
「奴等の術中にはまったな」
オムダーマン側の旗艦において司令官であるムスタファ＝アジュラーンは苦虫を噛み潰したような顔で呟いた。
彫が深く日に焼けた顔をしている初老の男性である。髪は黒く口髭を生やしている。その口髭には白いものが混じっている。がっしりとした長身を赤い軍服で覆っている。
「そのようですな。これ以上の戦闘は無意味かと」
傍らに控える参謀の一人が言った。
「そうだな。撤退するか」
彼は艦橋のスクリーンに映し出される双方の陣形の映像を見ながら言った。
「損害の酷い船から後退せよ。殿軍はわしが務める」
「ハッ」
参謀はその言葉に対し敬礼した。そして伝令の船が旗艦から飛び立つ。
「だが」

アジュラーンはその伝令の船達を見ながら呟いた。
「果たしてこの撤退上手くいくかな」
既に包囲されようとしている部隊もある。事は一刻を争う状況であった。
「何っ、撤退だと！？」
その話は最前線で戦う将兵達にも届いた。
「はい、損害の酷い船から随時撤退せよとのことです」
艦橋のスクリーンに映し出された伝令が各艦の艦長達に対して伝えた。
「そうか、撤退か」
戦局は彼等が最もよくわかっていた。それも致し方ないと思った。
「だがこの状況で退けと言われてもな」
彼等のすぐ前には敵の艦隊がいるのである。しかも火が点いたように攻撃を加えてきている。
「損害の軽微な艦及び無傷の艦は友軍の撤退を最後まで援護して欲しいとのことです。司令官もこちらに来られます」
「まああの親父が来るのなら頑張ってやるか」
アジュラーンはその面倒見の良い人柄から将兵達に好かれていた。また退却戦にも定評がある。
「おい、もう一踏ん張りするぞ。そしてサラーフの奴等をもう少し苦しめてやろうぜ」
その艦長は部下達の方を振り向いて言った。艦橋は歓声に包まれた。
これは巡洋艦アタチュルクにおいても同じであった。その艦の艦長は部下達に対して言った。
「よし、ここが見せ所だ。俺達の戦いをサラーフの奴等によく見せてやれ！」
彼は高く張りのある声で叫んだ。部下達がそれに応える。
黒い髪と瞳を持つ凛々しい顔立ちの若者である。高い鼻と少し切れ長の翡翠の様な瞳。唇は薄く炎の様に紅い。その顔は一目だけで

は俳優か何かかと思える程整っている。黒く豊かな髪は整髪料でまとめられ光を反射し黒光りしている。顎は三角形で鋭利な印象を与える。引き締まっているが痩せ過ぎもしない顔である。それは身体全体に対しても言えた。

背は高くもなく低くもない。筋肉質であるが鞭の様に引き締まっている。そしてその仕草は機敏でまるで狼のようである。

彼の名はアクバル＝アッディーン。この戦いの直前にこの艦の長に選ばれたばかりのまだ二十歳の若者である。

オムダーマンの首都アスランに生まれた。幼い頃から銃や船が好きであった。両親は普通の公務員であったが彼は軍人になることを希望した。成績が優秀であったので担任に幼年学校への受験を薦められ見事合格した。この時十二歳であった。こうして彼は軍服をはじめて着た。

幼年学校入学においては成績は常に上位であった。とりわけ歴史と艦艇運営の実践においては教授達も舌を巻く程であった。

卒業後は同期達のように士官学校には進まずすぐに入隊した。教授達は彼のこれからを思い進学を薦めたが彼はそれを拒否した。立身出世よりも戦場に身を置きたかったからだ。

まず彼は巡洋艦の砲雷士官となった。最初の戦闘で敵の三隻の戦艦を沈めた。これにより中尉となり次の戦闘で今度は戦闘機を五機、そして駆逐艦を一隻仕留めた。大尉になった。

次に戦場に出た時は駆逐艦の艦長であった。その駆逐艦で敵の駆逐艦五隻を向こうに回したが無傷で全滅させた。そして少佐になった。

## 第一部第一章　若き将星その二

こうして彼は次々に武勲を挙げていった。前の戦いでは敵の防衛線を最初に突破している。これにより中佐になり今に至る。

彼を同僚達は『若き狼』という。精悍で動きが速くしかも優れた能力を持っているからだ。その気性も熱く攻撃的である。そして同時に極めて冷静な思考を出来る人物でもある。

この戦いにおいては中央艦隊にいた。だが戦局の悪化により最前線に送られたのだ。

「友軍の撤退状況はどうなっている」

彼は傍らにいる副長に対して問うた。

彼もまだ若い。といっても二十五である。茶色がかった髪に濃い茶の瞳、浅黒い肌を持つ長身の美青年である。名をイマーム＝ガルシャースプという。アッディーンと同時にこの艦に配属された人物である。階級は大尉である。

士官学校卒業後順調に進みこの艦の副長となった。温厚で堅実な人物といわれている。

「ハッ、既に損害の酷い艦は徐々に戦場を離脱しております」

彼はモニターを手で艦橋の上部に映し出された指し示しながら報告した。

「それに対し敵軍は攻勢を強めております。駆逐艦及び高速巡洋艦の部隊がこちらに接近してきています」

「どうやら我が軍の数が減ったのを見て一気に攻めるつもりか」

アッディーンはその駆逐艦及び高速巡洋艦の一群を見ながら言った。

「その様です。それも撤退する艦を集中的に狙うつもりのようです」

「我々は戦艦の主砲に任せてだな。成程、手堅い戦法だ」

彼は不敵に笑いながら言った。

「だがそうそう上手くいくものではない」

彼は口を引き締めてそう言った。
「今から敵駆逐艦及び高速巡洋艦部隊に対し攻撃を開始する。主砲及びミサイルを全弾装填せよ！」
「ハッ！」
砲術長が敬礼した。
「奴等の進行方向に行く。そして一斉攻撃を浴びせよ」
彼は次々に命令を出した。アタチュルクはそれに従い大きく動いた。
戦局は変わった。アタチュルクの攻撃により敵の駆逐艦及び高速巡洋艦はその動きを制止させたのだ。
「今だ！」
これに対してオムダーマン軍は攻撃を仕掛けた。動きが止まったところに攻撃を仕掛けられたサラーフの駆逐艦、高速巡洋艦部隊は次々とビーム砲やミサイルを浴びた。
「敵の動きが止まっているな」
それは前線に来たアジュラーンの旗艦からも確認された。
「ハッ、アッディーン中佐の艦が敵駆逐艦及び高速巡洋艦の部隊を止めたのです」
「一隻でか！？」
彼は驚きの声で問うた。
「はい、敵の進行方向に向かい一斉攻撃を仕掛けたのです」
「そうか、それで動きを止めたのか。やりおるな」
彼はそれを聞いて大きく頷いた。
「だがそれで戦局は変わったな」
見れば敵の駆逐艦及び高速巡洋艦部隊は殆ど壊滅してしまっている。戦艦、ミサイル艦部隊も彼等が前にいる為容易に攻撃出来ない。
その間にオムダーマン軍は上下から回りこんだ。そして挟み撃ちにする。
オムダーマン軍の艦艇の特徴はその火力にある。これはサハラ諸国の中でも特に際立っていた。

その火力で攻撃を開始したのである。サラーフの艦艇は次々に炎に包まれ白い光となっていった。
「司令、もしかするとこれは・・・・・・」
参謀は次々と破壊されていく敵の艦艇を見ながらアジュラーンに言った。
「うむ、勝てるかも知れんな」
アジュラーンは薄く笑って答えた。彼は戦局が次第に自軍に傾こうとしていることを感じていた。
「戦場に残る兵力はどれ程だ？」
彼は別の参謀に問うた。
「ハッ、今退却せずこの場に残っているのは役百二十万程です」
その参謀は敬礼をして答えた。右腕を胸の高さで肘を直角にし胸に対して水平にするオムダーマン式の敬礼である。
「そうか、思ったよりずっと多いな」
アジュラーンはそれを聞いて笑みを浮かべて言った。
「作戦変更だ、一気に攻勢に転ずる。全軍突撃用意！」
彼は右手を挙げて言った。
「このまま敵を押し潰す。そして勝利を我等が手にするのだ！」
そう言うと旗艦を敵軍の方へ突入させた。他の艦もそれに続く。
それはアタチュルクからも確認された。
「艦長、我が軍が攻勢に転じました」
ガルシャースプはアッディーンに報告した。
「何、またそれは極端だな」
彼はその報告を聞いて思わず苦笑した。
「ついさっきまで撤退しようとしていたというのに」
「戦局が変わりましたからね。我が艦の行動により」
彼は表情を変えることなく言った。別に嬉しくもないような口調であった。
「そうか、ビームもミサイルも全て撃ち尽くしたらすぐに後退しようと思っていたのだが」

「そのわりには大胆な行動ですね」
「大胆！？別にそうは思わないが」
アッディーンは不敵に笑って言った。
「連中は傷付いた艦を狙おうと躍起になっていた。そこに油断が生じていた。その前にいきなり出て斉射すればその動きが止められると思ったからやったんだ」
彼はしれっとした口調で、しかし不敵に笑ったままの顔で言った。
「しかしあれだけの数の敵の前に一隻だけで出るのは自殺行為ですよ」
「死ぬとは思わなかったからな。奴等は俺を見ていなかったから」
彼は視線をモニターに映る敵の残骸に移して言った。
「だからああなったのだ。戦場において油断はそのまま死に繋がる。それを教えてやったのだ」
「えらくきつい教え方ですな」
ガルシャースプは言った。
「ああ。しかしガルシャースプよ」
「何ですか」
「それを表情を変えずに言うのは少し無気味だな」
「そうでしょうか」
やはり彼は表情を変えなかった。アタチュルクも攻撃の中に加わっていった。
戦局は完全にオムダマーン軍のものとなっていた。サラーフ軍は次々に撃沈され次第にその数を減らしていった。
損害が二割を超えようとしていた。サラーフ側の司令官はそれを見て遂に退却を決意した。

## 第一部第一章　若き将星その三

「司令、敵軍が撤退していきます」
参謀はモニターに映る敵軍が退いていく姿を見て言った。
「うむ、どうやら勝ったな」
アジュラーンもそれは見ていた。満面に笑みを浮かべている。
「追いますか」
参謀は問うた。
「いや」
彼はそれに対して首を横に振った。
「これでカッサラ星系は我等のものになった。これ以上の戦闘は意味がないだろう」
「ですね」
参謀はそれを聞いて頷いた。
「あとは政治の問題だ。外交部の連中に任せよう」
「はい。連中のお手並み拝見といきますか」
オムダマーンの外交部は特に無能と評判があるわけではない。むしろ他国からは有能であると認識されている。
しかし軍部との仲は悪かった。やり方が手ぬるい、腰抜けだというのだ。
「軍人はいつもそんなことを言う。あまり突出しては他国の恨みを買うだけだ」
外交部の者はことあるごとにそう言う。彼等にしてみれば勢力均衡こそが一番の関心であり勝ち過ぎることはあまり喜ばしいことではないのである。
「確かにその通りだが」
アジュラーンは外交部の高官達の言葉を脳裏に思い出しながら呟いた。
「そんなことを言っていたら何時まで経ってもこのままだぞ」

彼はそう呟き顔を顰めた。彼はサハラが統一されエウロパの勢力を追い出すことを願っていたのだ。
やがて停戦となり両国の外交官がこの星系に到着した。そして交渉が行なわれた。
カッサラ星系はオムダマーン共和国の領土となった。この星系の権益も皆共和国のものとなった。
サラーフ共和国の軍はこの地より撤退することとなった。賠償金は支払わずこの星系の割譲と近隣十光年の軍隊の立ち入りを禁止するという内容となった。
「とりあえずはこれでよし」
交渉を終えたオムダマーンの外交官達はそう言ってカッサラ星系を後にした。
「今回は上手くまとめてくれたな」
軍部はそれを見ていささか皮肉混じりに言った。
「我々とて遊んでいるわけではない。それに戦いに勝ったのだからこれ位は勝ち取らないとな」
じゃあ賠償金も欲しかったな、といいたいところだがそれは出来ないのもわかっていた。サラーフはこの地域で最も勢力の大きい国であるサハラ全体でも三強に入るのである。
「まああのサラーフ相手に勝てたからよしとするか」
軍部はそれで満足することにした。
「それに結構危ないところだったしな。一時は撤退すら考えていたそうじゃないか」
軍の上層部は軍務部の会議室でこの戦いについての検証を行なっていた。
「そのようだな。不意打ちに遭い一時は劣勢に追い込まれている」
高級参謀の一人がパンフレット状にまとめられた資料に目を通しながら言った。
「だが一隻の巡洋艦の活躍で我が軍の戦局は一変した」
「アタチュルクだ」

それを聞いた提督の一人が言った。
「そうだ。アクバル＝アッディーン中佐が艦長を務めているあの艦だ」
参謀はそれに対して言った。
「アッディーンか。またやったのか」
「ああ。しかも今度は戦局を一変させた。それも僅か一隻で」
「戦法も見事だな。血気にはやる敵軍の前に来て総攻撃を仕掛けて止めるとは」
別の提督が資料を読みながら言った。
「そうだな。そうそう出来るものではない」
参謀の一人が言った。
「アジュラーン司令は何と言っている」
「かなり評価しているようだ」
「・・・・・・そうか」
彼等はそれを聞いて何か意を決したようだ。
「これからは彼には思う存分働いてもらうか」
「そうだな。サハラの大義の為に」
現在の軍上層部は強硬派の牙城と言われている。彼等はサハラ統一を掲げており民衆からも人気は高い。
「それでは彼を大佐にするとしよう」
「このままいくとすぐに将官になるだろうな」
「そうだな。そうなった時が楽しみだ」
彼等はそう言って会議を終えた。この会議でアクバル＝アッディーンの大佐への昇格及びカッサラ星系での大規模な軍事基地の建設が決定された。
カッサラ星系への軍事基地建設は議会も承認した。それにより一個艦隊がこの星系に駐留することとなった。
「流石に軍部の人気は議会も無視出来ないか」
アッディーンはこの星系に駐留する艦隊に配属されることとなった。今度は戦艦の艦長である。

「今度は戦艦か。それにしても大きい艦だな」
彼は港にある今から自分が乗る艦を見て言った。
「それはそうですよ。特にこの艦は最新鋭の大型艦ですからね」
傍らにいるガルシャースプが言った。
「最新鋭か。そういえばまだ綺麗なのものだな」
彼は艦を見て言った。
「この艦はこれまでの艦とは違いますよ。何しろ我が国の技術の粋を結集させたものですから」
「それはいいな。今までの艦は少し設計思想が古いんじゃないかと思っていたところだ」
二人は艦に続く桟橋を登りながら話している。

## 第一部第一章　若き将星その四

「ええ。射程も相当なものですよ。今までみたいにサラーフのアウトレンジに悩まされることもありません」
「そうか。それは有り難いな」
アッディーンはそのビーム主砲を見て言った。
「連中の射程の長さには今まで悩まされてきたからな。実際に戦うまではわからないがそれは有り難い」
「はい。この技術はこれからの新造艦及び改修する艦全てに使われるそうです」
「とすれば戦術もかなり違ってくるな」
「そうですね。今までの我が軍の戦術は火力に頼った集中突撃ばかりでしたから」
二人は入口で敬礼を受け艦の中に入った。
「中の設備も整っているな」
アッディーンは艦内を見回して言った。
「はい。居住設備もいいですね」
ガルシャースプもそれに同意した。
「士気に大きく関わるからな。こうした気配りは有り難い」
そして艦橋に向かった。
「ハッ！」
艦橋に将兵達が敬礼する。アッディーンはそれに敬礼で返した。
「艦橋はどうだ」
彼は操舵手を務める壮年の曹長に対して尋ねた。
「素晴らしいです。特に電子関係がいいですね」
彼は笑顔で答えた。
「特に通信関係が素晴らしいです。今までの艦とは比べものになりません」
若い下士官が答えた。

「何かかなり凄い艦のようだな」
アッディーンは微笑んでガルシャースプに対して言った。
「ですね。うちの技術班も頑張ったみたいです」
彼は口元にほんの微かに笑みを浮かべて言った。
「それにしても不思議だな」
彼はふと気付いたように言った。
「何がですか？」
ガルシャースプはそれに対して問うた。
「いや、技術班のことだ。今まで我が軍の技術班はお世辞にも大したことはなかったからな。何処かの国の二番煎じばかりやっていたからな」
「それですが技術長官に関係があるようですよ」
「長官に！？」
彼は語気を上ずらせた。
「はい。新任の長官ですが」
「確かルクマーン＝ハイデラバート大将だったな」
彼は長官の名を思い出しながら言った。
「はい。ハイデラバート大将が長官になられてから我が軍の技術班は大きく変わったのです」
ガルシャースプはほんの微かに笑ったまま言った。
「それは聞いていたがどうせいつもの宣伝だけだろう、と思っていたぞ」
「それが今度は違うようですね。有望な若手をどんどん抜擢して開発をさせていますから」
「それの結集の一つがこの艦と」
アッディーンは再び艦橋の中を見回して言った。
「そうです。しかもまだまだ序の口らしいですよ」
「というとまだ技術班はやる気なのか？」
彼は左の眉を少し上げて尋ねた。
「はい。さらに改革を進めていくつもりのようです」

「そうか。ならいいがな」
アッディーンはそれを聞いて微笑んだ。
「手強い敵よりろくでもない武器の方が頭にくる。強い兵器が次々にもらえるのならそれに越したことはない」
そう言って嬉しそうに笑った。
「その通りですね。ところで艦長」
ガルシャースプはアッディーンに対して尋ねた。
「何だ？」
彼は言葉を返した。
「この艦の名前ですが」
「艦名か。そういえばまだ決めていなかったな」
彼はふと思い出したように言った。
「はい。何にしますか」
オムダーマンでは艦名は艦長が名付けることになっているのだ。
「そうだな」
彼は考え込んだ。
「前の巡洋艦はアタチュルクだったしな。何か別の名にしたいな」
「では何に？」
ガルシャースプは問うた。
「そうだなあ・・・・・・」
彼は腕を組み考え込んだ。
「そうだ」
そして明るい顔で顔を上げた。
「アリーにしよう。伝説の英雄アリーだ」
「アリーですか。確かにいい名ですね」
ガルシャースプもそれを聞いて上機嫌な声で答えた。アリーとはムハンマドの娘婿で『神の獅子』とまで謳われた英雄である。また長い間イスラムの二大勢力の一つであったシーア派の開祖ともされている。
「そうだろう、これからの俺の戦いを共にするに相応しい名前だろ

う」
彼は満足気に微笑んで言った。
「そうですね。神の獅子が艦長のこれからの武勲を守護して下さるでしょう」
「そうだな。まあ俺は誰かに頼るということは好きじゃないが」
そう言って正面に身体を向けた。
「だがアリーよ、俺の戦いを見守ってくれよ」
そう言って二人は艦橋を後にした。そして今度は艦内をくまなく見回りだした。

# 第一部第二章　銀河の群星その一

銀河の群星

カッサラ星系におけるオムダーマン軍の勝利の報はすぐに銀河中に伝わった。それはエウロペや連合においても同じであった。

「カッサラ星系がオムダーマンの手に落ちたか」

エウロペの総統であるフランソワ＝ド＝ラフネールはエウロペの首都オリンポスにてそれを聞いた。

麻色の髪を後ろに撫で付けている。目は茶色だ。中肉中背でその穏やかな顔立ちは何処か宗教家を思わせる。革新政党出身で温厚でかつ堅実な人物として知られている。かっては弁護士でありそこから政界に転身した。公正でバランスのとれた政策が支持を得ている。この時六〇歳であった。

「まあ兵力を考えると勝って当然だな」

彼は秘書から報告を受けると資料を執務室の椅子に座りながら読んで言った。

「しかしオムダーマンも苦戦したようだな」

彼は戦局の流れに目を通して言った。高めのバリトンの声がよく響く。

「はい、いきなり奇襲を受けましたから」

秘書はそれに対して答えた。

「それからサラーフ得意のアウトレンジか。一時は撤退さえ決意しているな」

「それが急に変わったのです」

「この一隻の巡洋艦の動きによってか」

彼は資料を机に置いて言った。

「はい、その巡洋艦がサラーフの駆逐艦及び高速巡洋艦部隊の動きを止めたのです」

「見事だな。油断している敵の前にいきなり出て一斉射撃で動きを

止めるとは」
「それに勝機を見たオムダーマンは一気に攻勢に転じました。そして数を頼りに総攻撃に出たのです」
「そして勝ったと。彼等が得たものは大きいな」
「はい、カッサラ星系は要地ですから」
「甘いな、それだけでは正解は半分だ」
ラフネールは秘書に対して言った。
「確かに彼等があの星系を手に入れたことは大きい。おそらく今後はあの星系を拠点に軍事行動を起こしていくだろう。その分あの星系を巡る抗争があるだろうがな。ただあの星系を軍事基地化するようだ。そうおいそれとは陥落出来んだろう。それにだ」
ラフネールは言葉を続けた。
「一人の英雄があの場所にいる。そう、君が答えられなかった部分だ」
「と言いますと？」
秘書は問うた。
「あの戦いでオムダーマンは一人の英雄を見出しているのだ」
「誰ですか、それは」
「その巡洋艦の艦長だ」
「ええっと・・・・・・」
秘書はその言葉に対し資料を調べた。
「アクバル＝アッディーン中佐、戦功により今は大佐ですね」
「そうだ。彼の存在はおそらく今後のオムダーマンの動向に大きく関わることだろう」
「そうでしょうか。一介の大佐ですよ。確かに資料を見る限りかなり有能な人物のようですが」
「今はな。ほんの一介の大佐だが」
ラフネールはここで知的な笑みを浮かべた。
「すぐに将官になる。そしてそれから艦隊司令、そしてやがては軍の指導者となっていくであろう」

「そう上手くいくでしょうか」
秘書は問うた。
「いくだろうな。もっともそれからはわからんが」
彼はそう言って席を立った。
「まあ今はただ見ているだけでいいだろう。当分サハラの情勢は大きくは変わらん。相変わらず彼等同士の抗争が続くだけであろう」
彼は顔から笑みを消して言った。
「西方もオムダーマンは大きく勢力を伸ばすだろうがまだまだやらねばならぬことがある。それにサラーフもこのまま黙ってはおるまい」
「第二勢力であるミドハド連合の存在もありますしね」
「そうだ。彼等もカッサラ星系は狙っているだろうからな。場合によってはサラーフと手を組むかもな」
「それは・・・・・・」
秘書はその言葉に対しては疑問をあらわした。
「ほう、それは彼等が犬猿の仲だからそう思うのかな」
彼は秘書に対して微笑んで言った。
「確かに彼等は建国以来の対立関係にある。だがそれも共通の敵が現われた場合に限り別だ」
「敵の敵は味方、というわけですか」
秘書は言った。
「そうだ、共通の敵が出来たならば手を組む、それが政治だ」
彼は顔を元に戻して言った。
「その証拠に連合がそうであろう。連中は宇宙進出の頃から我々に対しては団結する」
彼はその知的な顔を少し嫌悪で歪ませた。
「普段はまとまりに欠くというのに」
秘書は彼よりも露骨に嫌悪感を露わにした。
「そうだ。しかもここ二百年は中央政府の権限を強化してきているときた」

「その方が連中の開拓にとって有利ですからね」
「そう。あれだけの勢力を持ってまだ開拓するところがあるのだ」
ラフネールは忌々しげにそう言った。

## 第一部第二章　銀河の群星その二

連合は西にはマウリア、エウロパ、そしてサハラの境ともなっている長大かつ高いアステロイド帯があり容易にはいけない。だが北、東、南そして上下には何処までも続く空間がある。彼等はそこへ向けて常に進出しているのだ。

「最近では中央警察を建設したしな」

「はい、高い武装と機動力を持っているようですね」

「そして聞いた話によると各国の軍を統合し連合独自の軍を建設するそうだ」

「また大掛かりな話ですね」

秘書はそれを聞いて言った。

「名目上は宇宙海賊への対策らしいがな。だが信用は出来ないな」

「はい。軍事力の拡大にはおあつらえ向きの口実です」

秘書は声にまで嫌悪感を滲ませていた。

「我々の連中に対する備えはアステロイド帯のブラウベルク回廊にあるニーベルング要塞群だが。あちらへの備えは抜かりはないな」

「ハッ、精鋭を配置しております。そうおいそれとは陥とせるものではありません」

ニーベルング要塞群はニーベルング星系の唯一の惑星であるニーベルングを軸としその周りに十六の人口衛星を置いた要塞群である。その人工衛星全てに強力なビーム砲を装備させておりそれぞれに無数のビーム砲座やミサイル発射管もある。

「うむ。ならば良い。確かにあの要塞群はそう易々と陥とせるものではない」

ラフネールは後ろに手を組んで言った。

「だがあの要塞群が抜かれたなら」

彼はここで言葉を一旦区切った。

「我等にとっては最早連合を止める手立ては無い」

深刻な声でそう言った。秘書はそれを暗い顔で聞くだけであった。
そのエウロパの宿敵ともいえる連合であるが今彼等はその中央政府の権限を大きくしようとしていた。
これは二〇〇年程前からの運動であった。それまで宇宙海賊の跳梁跋扈に悩まされてきた彼等だが遂にそれを連合の勢力から追い出そうと決意したのである。
彼等の存在は最早黙ってみているわけにはいかなくなっていた。辺境の開拓地は彼等に怯え商人達も次々に襲われた。しかも各国の複雑な境界線とそれぞれ独自の法律により治安を司る警察や軍隊も容易に動けなかった。しかも少しでも強硬手段を採ろうとすれば人権派団体がうるさかった。彼等の中には呆れたことにその海賊達との関係を噂されるような者達までいる始末であった。
そうした事態を何とかしようという声が各国で起こりはじめた。その為には中央政府の権限を強化すべし、との意見が主流を占めたのだ。
まずは法律からだった。中央政府の法を上位に置き各国の法よりも優先させるとした。これにより法の適用がわかりやすく適用しやすいものになった。
次に財政である。税制を改革し中央政府に金が集まるようになった。これにより政府の機能を拡大し優れた人材が集まるようになった。
そして次は宇宙海賊の問題であった。まずは宇宙海賊への刑罰を厳格化し、そのうえで投降してきた者には過去は問わずそれぞれの国の軍へ編入したり職をあてがうといった硬軟両方の手段を採った。これにより海賊の数は大きく減り治安は格段に良くなった。
その上で海賊達と結託していた団体を次々に検挙し裁判にかけた。その中には市民派を気取りやたらと正義を振りかざし他者を糾弾する議院もおり皆驚いた。正義派は仮面でその正体は海賊と裏で繋がる悪党であったのだ。
こういった輩は次々と裁判にかけられた。そして重罪を科せられ

ることとなった。
　そしてそれと前後して中央警察が設立された。これは中央政府の管轄にある連合全体の治安を司る組織であり彼等は宇宙海賊や星系をまたにかける凶悪犯達を取り締まった。この存在がさらに治安をよくしたことは言うまでもない。
　こうした状況が二百年に渡って続いた。その歩みは遅い。これはやはり連合の多様性と各国の主権及び個性の強さからくるものであるがそれでも連合は次第に変わっていた。
　今連合の首都地球はそれまでの名目上の首都ではなくなっていた。今や本当の意味での首都となっていた。
　かって『太平洋の真珠』と呼ばれたシンガポール。今そこには中央政府の元首である大統領の官邸及び連合中央議会、そして連合中央裁判所等がある。南洋のこの都市とその周辺は千年以上経ても今尚連合の心臓部であった。
　その官邸の廊下を歩く一人の若者がいた。
　その周りには多くの秘書官や護衛達がいる。そのものものしい様子から彼がかなり高い地位にいる人物であるとわかる。
「それにしても急に呼ばれるとは」
　その若者は少し首を傾げて言った。
　長身で細い身体をしている。切れ長の目に黒い髪と瞳、アジア系独特の顔立ちである。今や混血はかなり進んでいる。とりわけ多くの多様な国家から成る連合ではそれは特に顕著である。人種問題などというものはこの時代には既に愚かな過去の遺物となっていた。
　見ればその顔だけでなく物腰からも気品が漂っている。貴公子を思わせる高貴な美貌がそれを一層際立たせている。
　歩き方もまた優雅である。本来ならば武骨である筈の黒と金の軍服も彼が着ると豪奢なものとなってしまう。
「一体私に何のご用件であろう」
「閣下でなければならないと言っておられたそうですが」
　側に控える秘書官の一人が言った。

「私でなければ、か」
彼はその言葉に対し再び首を傾げた。
「それにしては妙だな」
彼は今度はその整った細く綺麗な眉を顰めて言った。
「二人で話がしたいと大統領から言われるとは」
「いや、こうしたことは結構あるものです」
秘書の一人が言った。

## 第一部第二章　銀河の群星その三

「閣下は日本の軍務大臣なのですよ」
「そう、連合の中でもかなりの重要人物なのです」
「そう言われると何か妙な気分になるな。私は総理に大臣に任命されただけなのだし」
　三百国ある連合の中でも日本は主導的な国の一つである。アメリカ、中国、ロシア、ブラジル等と並ぶ大国であるが米中露が大昔より変わらぬ覇権主義的思考で何かと自国の利益を優先させようとし中央政府にも従わないことが多いのに対して日本は連合設立当初より中央政府に対して友好的であり忠実であった。その為他の大国に比べて他の国々からの支持も高く中央政府からも頼りにされている。
　中央政府がその権限拡大についても日本を頼りにするのは当然であった。その資金の多くも日本から得ている。そして何よりも地球の位置は日本の勢力圏の側なのである。
「つまり我等の立場は魯かな。中国の大昔の歴史の」
　若者は少し微笑んで言った。
「またえらく昔の話ですな」
　秘書の一人が苦笑して言った。
「うん。学生時代に習ったことをふと思い出したんだ」
　彼は軍務大臣であるが士官学校を出ていない。日本のとある大学を出た後軍に入り将校となった。この時代でも大学を出ている者は軍では将校となった。これは最早伝統であった。
　そして政治家であった父の後を継ぎ若干二十五歳にして日本の衆議院議員になった。多くの政策、特に軍事関係においてそれを立案しそれが所属していた保守系の政党の総裁の目に留まった。そしてその総裁が総理になるとその能力に注目した彼に軍務大臣に抜擢された。それから二年経つ。今二十八歳、政治家としてはまだまだ若いがその才とカリスマ性から将来を渇望されている。

「そういえば閣下は歴史学を専攻されていたそうですね」
「うん、やはり面白いし何かと勉強になるからな。歴史から学ぶことは実に多い」
「成程、では今から行なわれる会談についても歴史から学んだことを活かして下さいね」
秘書の一人が少し意地悪そうな声で言った。
「大統領は中々人が悪いですから」
別の一人がいささか冗談をまじえて言った。今の大統領は小国の一開拓民から大統領になった人物である。軍人となり宇宙海賊討伐で軍功を挙げそこから出世した。そして遂には連合の大統領となった立志伝の様な人物である。
「おい、それは失礼だぞ」
若者は周りにいる者達を窘めた。
「連合の元首である方だ。その様に言ってはならぬ」
「ハッ、これは失礼しました」
周りの者達はその言葉に畏まった。
「言葉は慎むべきだ。口は禍の元となる」
「そうでした」
彼等は若者の言葉に恐縮した。
「わかってくれればいい。さて、とそろそろ閣下がおられる部屋だな」
「はい」
一向は赤い絨毯が敷かれた廊下を進んで行く。そしてある扉の前に来た。
「お待ちしておりました」
その前にいた黒い軍服の衛兵達が敬礼をする。見れば若者が着ている制服と同じだ。
（どういうことだ。服を変えたとは聞いていないが）
彼はそれを見て内心そう思った。だが口には出さなかった。
「閣下はおられますか」

彼はそれを置いておいて衛兵に尋ねた。
「中におられます」
衛兵は答えた。そして扉を開けた。
「閣下、日本の八条義統軍務大臣が来られました」
そして部屋の中にいる人物に対して言った。
「はい、ご苦労さん」
部屋の中にいる人物はいささか大統領に相応しくないのではないかというようなざっくばらんな言葉で答えた。連合の言語は多くの国家から成るが一つに統一されている。英語や中国語、スペイン語、アラビア語、日本語等多くの言語が混在した結果出来たもので『連合語』と言われている。若しくは『銀河語』ともいう。アルファベットと漢字その他の文字が混在しているがわかりやすい文法と発音のしやすさ、応用力の高さで知られている。多くの国家から成る連合にとって実によくあった言語だと言われている。尚エウロパはラテン語から発生した欧州各国の言語を再び統一させた新ラテン語と言うべき『エウロパ語』を、サハラは昔ながらのアラビア語を使っている。
銀河語はフランクな表現が多いことでも知られている。だがこの人物の言葉は特にそれが凄い。元々開拓民の出身のせいもあるが彼は飾ったことを好まなかったのだ。
彼の名はラゴス＝キロモト。前述のとおり連合の大統領である。
ケニアの開拓民に生まれた。彼の家は開拓された広い農場を持っておりそこの九人兄弟の七番目として生まれた。彼の住む開拓星は宇宙海賊もおらず平和な状況であった。彼はこのままいけばごく普通の農民として一生を過ごしたであろう。だが子供の頃にホノグラフィテレビで見た軍人の姿を見たことが彼の一生を変えた。
彼は早速両親に軍人になりたいと言った。両親はそんな彼に対しなりたいならまずは身体を鍛えよく勉強し正しい心を身に着けろと言った。
彼はそれに従った。学生時代は地元の学校でスポーツに、勉学に

励んだ。後輩の面倒見もよく慕われていた。
高校卒業後彼は軍隊に入隊した。士官学校を受けたが落ちたので下士官候補生となった。これは将校への道も約束された軍では地位の高いコースであった。
彼はそこで頭角を現わした。それを見た上官達は彼に士官学校を再度受けるよう薦めたが彼は断った。彼はまず下士官で軍を知ることを望んだのだ。
彼は陸戦部隊となった。そこで宇宙海賊達を相手に戦勲を挙げ士官に抜擢された。そして今度は陸戦部隊の指揮官となった。

## 第一部第二章　銀河の群星その四

そこでも功を挙げ彼の名は軍だけでなく世の者にも知られることとなった。そして彼は少将で軍を退き連合の議員に立候補した。
一回落選したが二回目で当選した。彼は軍で身に着けた積極的な行動力と果断な判断力を発揮し連合議会の中でも知られるようになった。政府内の要職を歴任するようになりそして遂には大統領にまでなった。
この時六十五歳、年齢を感じさせぬ若々しい顔立ちをした筋骨隆々の黒人の巨人でありその短く刈られた髪はまるで若者のそれである。
「ようこそ、八条大臣。お待ちしておりましたぞ」
彼は満面に笑みを称えて八条に対して挨拶をした。
「いえ、こちらこそ。お招きして頂き恐悦至極です」
八条はそれに対し畏まった態度でいささか形式的な挨拶を返した。そしてキロモトの方へ歩み寄る。
二人は握手をした。キロモトはそれを終えると八条に席に座るよう薦めた。
「これはどうも」
八条はそれに従いキロモトに続き豪奢な椅子に腰を下ろした。見れば椅子だけではない。この部屋の中も白を基調とした豪奢な装飾で飾られている。
「どうでした、ここまでの旅は」
キロモトはまずここまでの旅順について尋ねてきた。
「旅といいましても。我が国からこの地球まではすぐ側ですし」
「おっと、そうでしたな」
キロモトはそれを聞くと顔を崩して笑った。
口を大きく広げて笑う。豪快な笑いだ。
「では話を変えるとしましょう」

彼は笑い終えるとニコリと笑って八条に対して言った。
「はい」
八条は態度をあらためた。そして再び畏まった。
それからは日本の軍事関係に対する要望であった。一言で言うならば連合の治安の為にもっと貢献して欲しいというものであった。
「それはお約束します」
そのことは総理からも言われていた。彼は快くそう言った。
「貴国にそう言って頂くと有り難いですな」
キロモトは笑顔でそう言った。体制が整えられてきているとはいえ連合の権力基盤はまだ脆弱である。こうした大国の支持がやはり必要である。
「そして・・・・・・」
彼は話を続けた。後は連合及び銀河の平和と友好の発展を支持するといったこれもまたありたきりな宣言で締めくくられる普通の会談となった。
こうして会談は終わった。八条は宿舎に帰り休息をとった。明日は明日で仕事がある。連合の要人達との会合があるのだ。
「さてと」
シャワーを浴びた彼はガウンを羽織りベッドに向かおうとした。その時鏡の前に置いていた携帯が鳴った。
「！？」
見れば大統領からである。一体何事であろうか。
「今後の会談の打ち合わせか」
彼は首を傾げてそう言いながら携帯を手に取った。
「はい、八条です」
彼は電話に出た。すると大統領の声がした。
「こんばんは、閣下。実は早急にお話したいことがありまして」
声が普段よりも真摯なものとなっている。
「なんでしょうか」
八条は尋ねた。勘が彼に警告していた。

「今からそちらにお伺いしてよろしいでしょうか」
「いえ、それは」
八条はそれをやんわりと拒絶した。
「閣下は大事なお身体です。何かあっては大変なことになります。私がお伺いしましょう」
「そうですか。それではお願いします」
彼はそう言うと電話を切った。八条は携帯を直すと背広に着替えた。
「さて、一体何の用件か」
彼は着替え終えるとホテルの扉を開けた。そこは私服の警備員達がいた。
「済まない、今から大統領官邸に戻る。何人かついてきてくれないか」
「わかりました」
その中から二人やって来た。彼等の中でも特に腕の立つ者達である。
八条はこっそりとホテルを出た。従業員達にも気付かれることなく裏口から出てそれからタクシーを拾って官邸に向かった。
「わかりました」
運転手はそれに応えるとタクシーを官邸に向かわせた。十分程して到着した。
タクシーを降りた。そして官邸に入る。
「お待ちしておりました」
見れば警護兵は大統領が常に側に置いている者達だ。そして大統領の首席補佐官が彼を出迎えた。それだけ見てもかなりの用心をしていることがわかる。
補佐官に案内され官邸に入る。そして大統領の私室に案内された。
「よろしいのですか？」
八条は補佐官に尋ねた。幾ら何でも大統領の私室に入ることは躊躇いがあった。

「はい、大統領からの直接の指示ですから」
補佐官はそう答えた。彼はその言葉を聞いて警戒をさらに強めた。

## 第一部第二章　銀河の群星その五

（それ程重要な話か）
彼は意を決して部屋に入った。キロモトは妻とは大統領就任前に死に別れている。子供もいなく孤独な男やもめだ。姉の子を一人養子にしている。彼は今祖国で畑を耕しているという。
（それがあの人らしいな。あくまで素朴に飾らずに、か）
そう思いながら部屋に入った。そこにはその当人がいた。
「ようこそ、夜分遅くに呼び出して申し訳ありません」
キロモトは八条に対して言った。彼は背広のままである。
「いえ。それよりも重要なお話とは何でしょうか」
八条は単刀直入に尋ねた。
「はい。実は私は今考えていることがあるのです」
彼は八条を見据えて言った。その声は重く慎重なものである。３６
「考えていること」
八条はその言葉を自分でも言ってみて尋ねた。
「はい、今連合はこの中央政府の権限を強化する方向に動いています」
「そしてそれはかなりの成果を挙げていますね」
八条は言った。
「そうです、中央議会及び裁判所の権限を拡大し中央警察を設立しました」
「そしてそれにより宇宙海賊と彼等と結託する者達を次々と捕らえました。これにより我が連合の治安はかなりよくなりました」
「その通りです。しかしそれだけではまだ足りません」
「と、いいますと」
八条はそこで尋ねた。
「もう一つ、この連合をまとめるのに必要なものがあるのです」
「それは？」

「閣下も軍におられたからおわかりでしょう。連合中央政府直属の軍です」
「え・・・・・・」
キロモトのその言葉にさしもの八条も驚いた。連合では軍はそれぞれの国が独自で持つものだからだ。
「各国の軍を統合しこの中央政府の下に置くのです。そうすれば我々のまとまりもかなり良くなるでしょう」
「それはそうですが・・・・・・」
確かに理想としては素晴らしい。この連合が長い間人類の中で最大の勢力を誇りつつもエウロパの存在を許しサハラに何も出来なかったのはひとえにこのまとまりの悪さからであった。まず動くには各国の利害を調整せねばならずそこをエウロパに付け込まれたことが度々あった。これはブラウベルの頃から何も変わってはいない。その為外部に勢力を向けることも出来ず開拓に専念するしかなかったのだ。またその開拓も各国の利害が複雑に絡み合い思うように進まなかった。
連合設立の時より欧州の様な強力な統率力を持つ中央政府の設立が叫ばれていたがそれは叶わぬことであった。大国の力が強く多くの国からからなりその個性がどれも極めて強い状況ではどうしても緩やかな組織になるしかなかった。またその方が大国には都合が良かったしそうした緩やかな組織に親しみを持つ者も多かった。結果今に至るのでありそして今の連合の中央への権限集中も実は批判が多い。
「確かにそれは素晴らしいことですが・・・・・・」
八条は口篭もりつつ言った。
「我が連合のまとまりはもう充分ではないでしょうか。設立と同時に経済及び貿易は自由化され関税や市場の統合も為されています。しかも共通の通貨までありますし」
これは既に連合の設立の頃に為されている。連合の通貨は『テラ』という。地球からとったものだ。

しかしこれは連合に住む者なら誰でも知っているようなことだ。彼も自分で口にして何を言っているんだ、と思った。
「そして中央警察も設立された、もうそれで充分ではないかと」
キロモトは微笑みながらその話を聞いていた。
「はい」
八条は答えた。
「成程、確かに一理あります。今の我等の中ではそれが意見の主流でしょう」
「そうですね。我々はあくまで互いの主権や個性を尊重し合うということを何よりも重要視していますから」
連合の特徴の一つである。エウロパやマウリア、サハラ各国に比べてこの連合では個人主義的風潮が強い。自分のことは自分でせよ、相手の個性や考えにまで口を出すな。これは構成する各国の文化や風習の違いが凄い為にそうなったことである。大国も他の国のそうしたことには口出しはしなかった。何故なら彼等の中にも様々な風習や文化がありそれを言うととんだヤブヘビになるからだ。
「ですが私の考えは違います」
キロモトはニヤリ、と笑ってそう言った。
「連合の中で統一された軍を持つことは我々の団結をより強いものにします。そして治安や国防も考え易くなります」
「確かにそうですが」
「我々に敵がいないというのは誤りです。今は遭遇していませんが人類以外の知的生命体との遭遇も考えられます」
「はい」
これは誰もが一度は漫画やテレビ、本、ゲーム等で見ていた。攻撃的な侵略者。一千年以上も昔から変わらない他の知的生命体からの一方的な攻撃である。
「この宇宙は広い。我々の開拓地もさらに広くなります。そうすればさらに遭遇する可能性は高くなるでしょう」
それもまた以前より言われてきている。むしろ今まで遭遇しちえ

ないこのことが奇跡なのだとも言われている。
「まだ遭ってもいない、という話は通用しません。遭ってからでは遅いのです」
「それはその通りですが」
八条は答えた。
「それにエウロパに対しても防衛は完璧ではありません」
キロモトは目を少し険しくさせて言った。
「といいますと！？」
八条はこの言葉には少し面食らった。エウロパとの唯一の国境であるブラウベルク回廊にはガンタース要塞群がある。これはガンタース星系の十五の惑星全てを要塞化したものでエウロパのニーベルング要塞群をも遥かに凌駕するものである。その強化は常に行なわれており陥落させることは不可能と言われている。

## 第一部第二章　銀河の群星その六

「ガンタース要塞群が陥とされた場合の防衛はそうなりますか？絶対に陥ない要塞などないのですぞ」
「・・・・・・・・・」
八条は何も言えなかった。エウロパは今はサハラに目がいっている。そして彼等には侵略の意図は無い。だが外交や謀略により連合の内部を撹乱したうえでガンタースを陥落させたなら・・・・・・。連合は敗れはしないまでもかなりの被害を受けるであろう。これも以前より危惧されてきたことだ。実際にエウロパからの撹乱はこれまで何度もあり中には彼等と結託していると思われる宇宙海賊や市民団体もあった。
「そうした時に最も有効に動けるのは統一された軍隊です。今までのような各国ごとに分かれたバラバラの軍ではなく」
今までの連合は軍人や艦艇の数こそ多いが烏合の衆と呼ばれていた。それはエウロパやマウリアのような中央からの統制が無いからだ。
「おわかりでしょう、外部からの敵に備える為我々は強力な軍を持たなければならないのです」
「はい・・・・・・」
八条はようやく頷いた。
「しかしいざ作るとなるとかなり難しいですよ」
彼は言った。
「反対しないまでも難色を示す国は多いでしょうし」
「それは折込済みです」
キロモトは言った。
「何せ我々は実に多様かつ雑多な集まりですから」
彼は笑っていた。何処か自信のある笑いだ。
「しかしですね」

彼は顔を引き締めた。
「困難だと思われることも実際にやってみないとわからないものなのです。そして実際には意外なところに解決方法があるものなのです」
「それは！？」
八条は再び問うた。
「例えば最初に何処かの国が参加を表明するとかね」
彼はそう言うと八条の顔を見てニヤリ、と笑った。
「それが発言権の強い国ならなおよし」
「大統領、貴方はまさか・・・・・・」
八条はキロモトの顔を見た。その顔には笑みが戻っていた。
「そうです、まずは貴国に参加して頂きたいのです」
彼は単刀直入に言った。
「貴国は中央政府に対し友好的です。しかも位置は丁度この地球の側にある。そして他の国からの評判もいい」
「しかしだからといって・・・・・・」
彼は少し口篭もっていた。
「そちらの国内世論は大丈夫だと思いますが。中央政府に対しては比較的好意的ですから」
「それはそうですが」
「総理には私からもお話しておきます。それならば問題ないでしょう」
「いえ、そういう問題ではありません」
彼は言った。
「閣下もご存知でしょう。確かにそれで設立は出来るかも知れません。しかし軍はそう簡単にはいかないものなのです」
「といいますと？」
彼はとぼけたふうに尋ねた。
「設立してから暫くは柱となるものが必要です。軍を主導出来るような。それから指針をつければ後はシステムが動いてくれますが」

「つまり基礎を固めるべき指導者がまず必要であると」
「そうです、これはどの組織にも言えることですが」
「成程」
キロモトは八条の言葉を最後まで聞いて頷いた。
「それならば最適の人材がいますよ」
「誰ですか？アメリカのマクレーン提督ですか。それとも中国の劉提督でしょうか」
二人共名の知られた人物である。軍人としてだけでなく人物の評判もいい。
「確かにあの二人も悪くはないですね。ですが」
キロモトは言葉を続けた。
「私は彼等以上の人材を知っているのです」
「それは誰ですか！？」
八条はまた問うた。
「今私の目の前にいる方です」
そう言って悪戯っぽく笑った。
「な・・・・・・」
八条はキロモトのその言葉に対し絶句した。
「貴方ならば軍を主導出来ると信じています。期待していますよ」
「閣下、冗談は止めて下さい」
八条は言った。
「私は若輩の身に過ぎません。それに軍歴があるといっても僅かです。そのような人物に新しく生まれた軍の統率が出来ると思われるのですか」
「はい」
キロモトは答えた。

## 第一部第二章　銀河の群星その七

「年齢は関係ありません。貴方にはそれだけの能力があります。私はそう見ていますよ」
「そんな筈は・・・・・・」
「おっと、謙遜は止めて下さいよ。私は謙遜はあまり好きではないのです」
　彼は言った。
「日本人というのは昔から謙遜したがりますね。ですがそれは自信が無いようにしか見えないのです」
「そう捉えて頂いても構いませんが」
「貴方は日本の政治家になられてから多くの軍事関係の政策を立案されました。そしてその全てが議会を通って施行される、またはされようとしております」
「運がいいだけです。私の政策を党の同志達も国民も受け入れてくれただけで」
「その誰もが受け入れざるを得ないような優れた政策を立てられる、その能力を買いたいのです。私から見ても貴方の政策は非常に優れたものです」
「有り難うございます」
　八条は礼を言った。
「その能力を今度は新しく設立される軍で使ってみたくはありませんか？貴方ならばこの軍を正しく導く指導者になれる筈です」
「・・・・・・・・・・」
「よく考えて下さい。強制はしません。しかし私は貴方の能力を高く買っておりますよ」
「はい」
　八条は答えた。実際に彼の頭の中はかなり混乱していた。
「すぐに総理ともお話させて頂きます。それまでによく考えておい

て下さい」
「わかりました」
八条は官邸を後にした。そしてホテルに帰った。
一ヵ月後日本の総理伊藤佐知子とキロモトの会談の場が設けられた。彼女は四十を越えたばかりの美人であり政治学者出身である。学者出身とは思えぬ程実務に優れた人物でその判断力の高さでも知られている。
この会談には八条も同席していた。彼女はこの若者を何かとよく立てていた。彼女は結婚しているが彼との関係が何かとからかわれていた。中にはこの美貌の若者を総理の燕とまで揶揄する者もいた。
だがこれは彼女が彼の能力を高く買っていただけである。彼女は男女関係にはかなり潔癖な考えの持ち主で異性問題をことのほか嫌う人物であった。
「八条君」
会談を終えた伊藤は後ろにいる八条に対して声をかけた。
「はい、総理何でしょうか」
彼は答えた。伊藤は小柄なことで知られているが長身の八条と一緒にいるとそれがさらに際立つ。
「大統領からお話は聞いたわ。いいお考えだと思うわ」
彼女は中央軍設立の話について言っている。
「私は支持したいわ。そして日本軍が最初に参加する」
「そうですか」
彼女は賛成する、彼はそう読んでいた。だから驚かなかった。
「そして君のことだけれど」
どことなく姉が弟に語りかけるような口調である。彼女は上に兄や姉ばかりいた。だから八条の様な存在が以前より欲しかったようなのだ。振り向いた時黒いストレートのロンヘアーが波打った。
「折角の愛弟子を手放すのは私としても非常に残念だけれども」
彼女は八条に微笑んで言った。
「行ってらっしゃい。健闘を期待するわ」

彼女もまた彼の本心がどうであるかをを知っていた。
「わかりました。ご期待に沿えましょう」
彼は答えた。それで彼の一生は決まった。
それから数ヵ月後キロモト大統領は連合中央軍の設立構想を発表した。日本は最初にその発表に支持を表明し参加を希望した。そして早速それの是非を問う選挙が行なわれ圧倒的支持を得た。日本人の連合中心主義によく合ったものであったからだ。
無論反対もあった。だがその旗振りをしている政党の党首及び幹部があまりにも稚拙な人物であった為支持はごく一部であった。しかもこれからどうするべきか、日本人は彼等が思うよりも遥かによくわかっていたのだ。
その党首は落選後宇宙海賊との黒い関係を暴露された。マスコミの一部は彼を擁護したがこのマスコミも以前より海賊の人権を擁護しておりその関係もネット等で知られていた。そのマスコミは結果倒産し党首共々裁判にかけられ実刑判決を受けた。彼等は最後まで己が罪を認めずこともあろうに裁判の場やテレビの前で互いに責任を擦り付け合った。世の人々はそれをおおいに嘲笑したという。
日本の参加は大きかった。日本に同調する国家が次々と中央軍に参加を申し出てきた。三ヶ月もした頃には中央軍に参加していないのは日本以外の主導的な大国達とそれに近い国々だけとなっていた。
「その国々においても区内世論が高まっております。いずれは参加することになるでしょう」
キロモトは笑顔で八条に対し言った。
「はい、ですが問題もあります」
八条は顔を引き締めて言った。
「それは？」
「各国それぞれの機関です。例えば士官学校や技術班等はどうしましょう」
「士官学校はそのまま置きます。教育機関は減らさないほうがいいでしょう」

「ですね。ただし教育内容は統一させたほうがよろしいかと」
「それは当然です。学校ごとに違う教育が行なわれていたら軍の編成や統制にも支障をきたします」
この言葉は意外だった。キロモトはそこまで考えることが出来たのだ。
（悪く言えば大雑把というイメージの強い方だったが）
八条は彼の顔を見ながら思った。
（これは案外細かいところまで見ていてくれているな）
そう思うとこちらもやる気が出た。

## 第一部第二章　銀河の群星その八

「そして技術班ですね。これはどうしましょう」
「技術班は統合します。ただし削減はしません」
「何故ですか？」
「それぞれの系列で競わせてみたいです。それから新たな兵器が開発されるかと」
「成程、そうなれば今までのよりも遥かに優れた兵器が期待できますね」
八条はそれを聞いて笑みを浮かべた。
「はい。兵器開発も一つの系統だけではあまり進歩しませんから」
「そうですね」
これは八条にも思い当たるところが多かった。日本では軍需産業は一つの兵器は一つの産業が扱う傾向にありその質は高いが今一つ進歩が見られていなかったのだ。
「閣下、これからはさらに忙しくなりますよ」
キロモトは彼の顔を見て言った。
「何せ未曾有の軍が出来上がるのですから」
「それは覚悟のうえです」
彼は答えた。
「むしろやりがいがあるというものですよ」
彼は仕事が多く困難であればある程働きたがる性質の人間であった。
「それは頼もしい。私は仕事はなるべくしたくないという考えの人間でしてね。正直貴方のような人が側にいてくれると実に有り難いのです」
「それはどうも」
彼は特に迷惑にも有り難くも思わず答えた。自分が仕事ができればそれでかまわなかった。

「ではお願いしますよ。連合軍のこれからは貴方の双肩にかかっているのですから」
「はい」
それからすぐ米中露においても選挙が行なわれた。そして中央軍の参加が決定された。これはそれまで何としても己が権勢を保とうと腐心してきた彼等からは思いもよらぬ行動であった。
「まあそれでも何かと口は出そうとするだろうがな。連中の考えは嫌という程わかる」
八条は新設された連合中央政府国防省の建物の執務室で呟いた。
その部屋はあくまで実務を優先させた質素なものである。そして彼は椅子に座り窓から見える景色を眺めていた。国防省はシンガポールに置かれていた。彼は窓の向こうに見える椰子の木を眺めていた。
「連中とは長い付き合いだ。その間にどれだけ煮え湯を飲まされてきたことか」
彼は少し怒気を含んだ声を漏らした。
「だがそれも全て折り込み済みだ」
彼はそう言うと席を前に戻した。
「軍がなければ金を使ってくるだろうがな。しかしそれも昔から知っている」
彼等の経済力は他国と比べてもかなり高い。経済力あっての大国であるのだ。
「しかしそれならうちにも対処方法が充分にある」
そう言うと机の上にあるホットラインを手に取った。一千年前のそれと比べるとかなり小型でしかも光による通信で速い。
「あ、どうも八条です」
彼はあるところに電話をかけた。
「はい、お久し振りです。一つお願いしたいことがありまして」
彼はそうやら知り合いに電話をかけているようだ。
「そうですか、ご協力して頂けますか。感謝いたします」

彼は電話からの返事を聞いて笑みを浮かべた。
「それではお願いします。あ、よろしいですよ、礼なぞ。お互い様ですから」
彼はそう言うと電話を切った。そして来客を出迎えた。
「・・・・・・八条君も頑張っているみたいね」
伊藤は首相官邸の自分の執務室で電話を切ると小さい声で言った。

## 第一部第二章　銀河の群星その九

「それにしても彼等を経済面で牽制して欲しい、か。難しいことを言ってくれるわ」
彼女は微笑みながら言った。
「けれどやるわね。軍事以外のところから攻めようと考えられるなんて。流石は私の愛弟子」　そう言うと再び電話を手に取った。
「もしもし、私だけれど」
彼女は部下に電話をかけた。
「すぐに経済産業省と財務省、そして通産省、あと内閣調査局長官を呼んで。至急に話したいことがあるの」
こうして首相官邸に三人の大臣が入った。
それから暫く後米中露等を中心に金権スキャンダルが起こった。連合議会に対する不正献金疑惑だ。疑惑は疑惑であり確固たる証拠は遂に見当たらなかったがこれにより軍に対して悪い意味で何かと干渉しようとしていた中央議会の議員達は大人しくなった。
「一歩間違えたら軍部の横暴と言われかねないところよ」
伊藤は日本に会談にやって来た八条に対して言った。
「それは私も危惧していましたよ」
彼は微笑んで言った。このような話をする時でも気品を漂わせる笑みだ。
「しかし我が軍の最高司令官は紛れもなく大統領にありますから。それに対し侵害を計るような連中こそ問題でしょう」
「確かにね。もう連合軍は彼等の軍じゃないのだから」
伊藤はそれを聞いて言った。
「軍の指揮権は確立されておかねばなりませんから。まあだからといって統制されなくてよいというものではありません」
「それは正論ね。文民統制、かなり昔からある言葉だけれど」
「私もこうやって軍服は着ていますが身分上は紛れもなく文民です

からね。しかしそれに付け込んで軍を自分達の意のままにしようとするのは見逃せません」
「けれど連中はそう簡単には諦めないわよ」
「でしょうね。議会は相変わらず大国の利害の衝突の場という一面がありますから」
これはなかなかなおりそうにもなかった。議員がそれぞれの国から選ばれる以上仕方ないところもあった。
「政党よりも地域、というところがあるわね。我が国から出ている議員達もそうだけれど」
伊藤は渋い顔をして言った。
「我々の弱点ですね。それがよいところでもあるのですが」
長所が短所、というわけである。連合の多様性は時としてまとまりの悪さとなるのである。
「キロモト大統領も苦労しておられますよ。自分の政党の者達を説得するのが最も大変だと」
政党にいる政治家達も各国ごとに入り乱れている。政党よりもその国の有力な議員の主張に賛同する傾向があるのだ。
「こういったところはアメリカや中国が羨ましいですよ。緩やかな連邦制なのに政党政治はとりあえずまともに機能しているのですから」
「それを言ったら我が国や台湾の方が普通の政党政治になってる気がするけれどね」
アメリカや中国はそれぞれの星系の主張が強く選ばれる政治家もその星系の代表であるという意識が強い。政党は選挙の時だけ集まるといった形式である。
「それでも中央議会よりはましかと。とにかく機能しないのですから。その癖自分達の国の主張は無理矢理にでも通そうとしますし」
「それはもう強力な指導者がそれぞれの政党に出て来るしかないかもね」
伊藤は八条の顔を見上げて言った。

「しかし一千年以上出てきませんでしたからね。今都合良く出て来るとは」
「あら、それはわからないわよ」
彼女は微笑んで言った。
「人材は時代が必要とされる時に出て来るから。今までは別に国同士で喧々囂々やってても問題はなかったでしょ」
「それは異星人もエウロパやマウリア以外はこれといった対外勢力もありませんでしたから」
「けれどこれからは異星人がいるかも知れない。まあもう暫くは大丈夫でしょうけど」
連合の辺境と異星人がいると推測される星系からは今数十万光年離れていると言われている。当分は安心だ。
「それに今は中央の力が強まり連合もまとまりを持とうとしている時だもの。ひょっとしたら出て来るかも知れないわよ」
「そんないうまくいきますかね」
「そんなことを言ったら連合軍だってこんなにすぐ出来なかったでしょ」
「それはそうですが」
伊藤の話は後に見事に的中することになる。だが今はそれを誰も知らない。
「今君は連合軍の骨格を作ることを考えなさい。そして連合軍を本当の意味での私達を守る軍隊にしてね」
「わかりました」
「よろしい」
伊藤は八条の返答に対し微笑みで返した。そして二人は別れ休息をとった。だが時間には休息はない。時代は刻一刻と動き続けていた。

# 第一部第三章　海賊征伐その一

## 海賊征伐

カッサラ星系を制圧したオムダーマン共和国はこの星系に軍事基地の建設を開始した。そしてアジュラーン大将率いる駐留艦隊を置きサラーフ等に備えた。

「確かにカッサラ星系を得たのは大きいな」

アッディーンは自分の艦の艦橋にあがりつつ言った。

「そうですね。カッサラは交易の中心地でありますから」

隣にいるガルシャースプが答えた。

「この地から得られる収入も莫大なものですが軍事的に見ても西方の要地ですし」

「そう。この地からサラーフやミドハドを攻めることも出来る。今我々は軍事的に見てかなり有利な状況にある」

「はい。これにより西方の小勢力が我々に帰参したいと申し出ておりますよ」

「いいな。戦わずしてその国力を併合出来るのだから」

アッディーンはその話を聞いてニヤリと笑った。

「艦長は別に戦うのがお好きではないのですか？」

ガルシャースプは彼のその笑みを見て言った。

「いや、そういうわけじゃないけれどな」

アッディーンは答えた。

「ただ無益な戦いはしないにこしたことはない。無意味に血を流してもそれは無駄というものだろう」

「成程、それは良いお考えです」

ガルシャースプはそれを聞いて言った。

「今俺達が従事している任務にしろそうだ。相手が降伏してくれればそれに越したことはないがな」

「そうですね」

彼等は今カッサラ星系近辺に跳梁跋扈する宇宙海賊掃討の任務についていた。彼等は星系周辺にあるアステロイド帯に隠れ商人達を襲わんと常に息を潜めているのだ。
彼の艦を長として巡洋艦五隻、駆逐艦十隻がその任にあたっている。彼等は周辺を哨戒しながら海賊達を探している。
「何処かおかしなところはないか」
アッディーンはレーダー手に対し問うた。
「今のところはありません」
レーダー手は答えた。
「そうか。奴等にとってこの辺りは遊び場のようなものだ。警戒を怠るな」
「ハッ」
レーダー手は敬礼した。そして任務に戻る。
「そろそろ出て来る頃だろうがな」
アッディーンは目の前に映し出されているモニターを見上げながら言った。
「だが一体何処から出て来るか」
そのモニターには複雑なアステロイド帯が映し出されている。
「わかりませんね。ここの何処かに息を潜めているのは確かですが」
ガルシャースプもモニターを見ながら言った。
「こんなことなら空母も連れて来れば良かったな。やはり航宙機の索敵能力は頼りになる」
「そうですね。しかし今更言ったところでどうにもなるわけではありません。今空母は余分に戦力を割けない状況にありますから」
「そうだったな。基地の建設が早く終わればいいんだが」
今駐留艦隊の空母はその殆どを惑星防衛にあてている。今攻撃を受けたらもともこもないからだ。
「しかしだからといって退くわけにもいくまい。各艦からの報告はあるか」
「ハッ、今来ました」

通信士が答えた。
「来たか。何処からだ」
「巡洋艦ムスタファからです」
この艦は艦隊の先頭を進んでいる艦である。
「よし、何と言っている」
「前方のアステロイド帯のところに識別不明の艦隊反応があり、その数三十だそうです」
「来たな」
アッディーンはその報告を受けて言った。
「あそこだな」
彼はモニターに映るアステロイド帯を見て言った。
「他の場所には反応はないか」
「はい、一切ありません」
「よし、やるぞ」
彼は不敵に笑って言った。
「各艦に伝えよ。駆逐艦部隊はアステロイドを大回りし奴等の後ろに回り込め。巡洋艦部隊は俺と共に奴等の正面に移動する」
「わかりました」
「いいか、見つかるなよ。一瞬で勝負を着けるからな」
「ハッ！」
彼の言葉に従い艦隊は二手に分かれた。駆逐艦部隊は敵が隠れていると思われるアステロイド帯を大きく回り敵の後方に向かった。アッディーンは巡洋艦達と共に敵の前に向かった。
「お頭、オムダーマンの奴等が来ましたぜ」
見ればかなり旧式の艦である。軍からの横流し、若しくは普通の船に無理矢理武器を備え付けただけのものである。しかし彼等は何ら臆するところはなかった。
「ヘッ、遂にきやがったか」
お頭と呼ばれたその下品な顔立ちの男は下卑た笑いを浮かべて言った。

「正規軍だか何だか知らねえがここは俺達の縄張りなんだ。調子こいてるとどうなるかその身体で教えてやるぜ」
彼はそう言うと周りの者達を配置に着けさせた。
「いいか、最初が肝心だ」
彼は部下達に言った。
「まずは徹底的に痛めつけてやれ。そうすれば連中も俺達に手を出さなくなる」
「へい」
手下達はそれに答えた。
「来たぜ、一気にやるぞ」
アッディーンの艦隊が接近してきた。彼等は攻撃準備を整えた。
「お頭、来やしたぜ！」
レーダー手がそれを見て叫んだ。見ればかなり旧式のレーダーである。
「よし、行くぜ！」
海賊達はアステロイドの影から一斉に襲い掛かろうとした。だがそれより先にアッディーンの艦隊は攻撃を仕掛けて来た。
既に主砲をこちらに向けていたのだ。その斉射が彼等を襲う。

## 第一部第三章　海賊征伐その二

「うわっ！」
たちまち艦を貫かれる。そして何隻かは光に包まれた。
「クソッ、読んでやがったのか！？」
衝撃で倒れた頭は起き上がりながら前を見て叫んだ。
「だが構うことはねえ。数はこっちの方がずっと上だ。一気にやっちまえ！」
だがその時だった。後ろからも激しい衝撃が襲った。
「今度は何だっ！」
彼は叫んだ。レーダー手がレーダーを見つつ青い顔で叫んだ。
「後ろからも来ました、光子魚雷を撃って来ました！」
「何っ！」
見れば駆逐艦部隊がいた。魚雷を放ち終えた彼等はそのまま突っ込んで来る。
「そろそろいい頃だな」
アッディーンは彼等が前後からの思わぬ攻撃でうろたえているのを見て言った。
「あれを出せ」
信号手に対して言った。
「わかりました」
彼は答えた。そして信号を出した。
「お頭、向こうから信号が来ました」
「何！？」
彼は頭から血を流しながらもその信号を見た。それは降伏勧告であった。
「・・・・・・どうします！？」
手下達は彼の顔色を窺いながら尋ねた。
「どうするって言われても・・・・・・」

見れば命は保証し自軍に編入するとある。悪い条件ではない。
「食いっぱぐれねえみてえだしここは大人しく従ったほうがいいだろ」
こうして彼等は降伏した。そしてカッサラ星系に連行されそこで正式にオムダーマンの軍隊に編入された。
海賊達は次々とオムダーマン軍に加えられていった。彼等の艦艇は旧式なものや民間のものを改造したものばかりであったので全てオムダーマンのものに替えられた。そしてその艦艇に適応する為の訓練が施された。
「飲み込みが早いみたいだな」
アッディーンは彼等の訓練を見て言った。
「元々船に乗っていましたからね。もっともそれを見込んで編入しているのですが」
隣にいるガルシャースプが答えた。
「とりあえずこの辺りの海賊達はこうして編入していったほうがいいな」
「はい。かなりの戦力になりますよ」
アッディーンの海賊討伐は続いた。やがて戦う前に帰参する者も現われやがてカッサラ星系のほぼ全ての海賊達がオムダーマンの軍門に降った。
「討伐は完了しました」
アッディーンは司令室にいるアジュラーンに敬礼して報告した。
「早いな」
彼はそれを聞くと微笑んで言った。
「はい。後半は自ら帰参してくる者ばかりでしたので」
アッディーンは無表情で答えた。
「こちらの損害も殆どないしな。まさかこれ程うまくいくとは思わなかった」
「いえ、私はこうなると予想しておりました」
「ほう、何故だ」

アジュラーンは問うた。
「海賊といっても装備は粗末なものばかりです。そして彼等はそれぞれ分散しておりました。地形に気をつければどうということはありません」
彼はやはり表情を変えなかった。
「大した自信だな。それを実践するとはより凄いが」
アジュラーンはそれを聞いて言った。
「だが貴官のおかげでこの星系の治安はかなり良くなった。そして軍も強化された。これは私からも礼を言おう」
「有り難うございます」
アッディーンは敬礼して答えた。
「その功により貴官は准将になった。今日首都から連絡があった」
「私が准将ですか」
彼はそれを聞いて思わず口にした。
「どうした？嫌なのか」
アジュラーンはそれを聞いて悪戯っぽく口に笑みを浮かべた。
「いえ」
アッディーンはそれを否定した。
「私も上級大将になった。ここに駐留する艦隊の規模も大きくなったしな」
「おめでとうございます」
「うん。そしてアッディーン准将、君は戦艦アリーの艦長の任を解くことにした。そして分艦隊の指揮官になってもらう」
「分艦隊のですか」
「そうだ。高速機動部隊を率いてもらう。戦いにおいては先鋒を務めてもらう。どうだ、やってくれるか」
「喜んで」
彼は答えた。こうしてアッディーンは准将に昇格し分艦隊の指揮官に就任した。艦隊はアジュラーンの言葉通り高速戦艦及び高速巡洋艦から編成される部隊でありその数約千隻。小規模ながら精鋭揃

いの艦隊であった。
「旗艦はアリーのままですね」
新たにアリーの艦長となったソホラープ＝ムラーフ大佐がアリーの艦橋においてアッディーンに問うた。歳は三十代後半といったところか。黒い髪に濃い顎鬚を持っている。
「ああ。この艦の速度はかなり速いしな」
アッディーンはそれに対し答えた。
「それに電子設備もこの艦が一番いい。特に問題はないだろう」
「はい」
ムラーフはそれを聞き答えた。
「それでは早速訓練を開始するとしよう。敵は待ってはくれないからな」
「了解」
そしてアリーは港を後にした。その後ろを彼が率いる千隻の艦隊が従っていた。

サハラ西部は多くの勢力が入り乱れている。大小合わせて七つ程だがその中でも大きい勢力は三つ程である。
一つはサラーフ王国。西方の約半分を占めるこの地域最大の勢力である。その国力は高くサハラにおいてもかなり強大な勢力である。
そしてアッディーンがいるオムダーマン共和国。第三勢力であったがカッサラ星系を手に入れたことによりその勢力はかなり強くなっている。今や第二勢力とさえなりつつある。
その第二勢力がミドハド連合である。それぞれの星系の政府から成る連邦国家でありカッサラ星系から見て東にある。領土はそれ程広くはないが星系はそれぞれ豊かであり人口も多い。とりわけ資源が豊富なことで知られている。
彼等もまたカッサラ星系を巡って争ってきた。そしてサラーフやオムダーマンと血みどろの戦いを繰り広げてきたのだ。彼等の艦艇はそれ程優秀ではないが数が多くそれによる物量戦と空母を使った

戦いを得意としている。
だがそれはオムダーマンには通用してもサラーフには通用しない。何故なら数は向こうの方が多いからだ。そして今その国力をオムダーマンに抜かれようとしていた。
「やはりカッサラ星系が連中の手にあるのが大きいな」
ミドハド連合主席であるイマーム＝ハルドゥーンは補佐官が持って来た資料を見て顔を顰めながら言った。
六十を越えたばかりの白髪の老人である。ミドハドで二番目に大きな惑星に生まれ官僚になった。そして政治家に転身し国の要職を歴任した後選挙に立候補し主席に選ばれた。温和な外見とは裏腹に中々の策士と言われている。
「はい。しかもオムダーマンはあの星系に軍事基地を建設しようとしております」
補佐官は彼に対して言った。
「その基地の建設は今どの位進んでいる？」
ハルドゥーンは問うた。
「情報部の話ですと六、七分位とか」
補佐官は答えた。
「そうか。破壊するのなら今だな」
彼はそれを聞いて言った。
「といいますとやりますか」
補佐官は再び問うた。
「当然だ。今手を打たないと厄介なことになる。すぐに艦隊を出動させよ」
彼は席を立って補佐官に対して言った。
「わかりました。すぐに第一艦隊及び第二艦隊を出撃させます」
「よし。数では負けてはいない。すぐにカッサラをこの手に収めるぞ」
「はい」
こうしてミドハド連合はカッサラ星系に兵を進めた。それはすぐ

にオムダーマンにも伝わった。
「やはり来たな」
アジュラーンは司令室でその情報を聞いて呟いた。
「すぐに迎撃に向かいましょう」
側にいた参謀はすぐにそう進言した。
「よし。動ける艦艇は全て出撃する。すぐに全軍に知らせよ」
「了解」
参謀はそう言って敬礼した。
「数は向こうの方が多い。気をつけねばな」
「はい。敵は二個艦隊でこちらに向かっているようです」
「そうか。そして何処から来るのだ」
「ミドハド領からまっすぐにこちらに向かって来ております」
「数を頼んでそのまま来るか。あそこにもアステロイド帯があったな」
アジュラーンは壁にかけてる星系の地図を見ながら言った。
「はい。ここでも特に複雑な場所です。しかも磁気嵐が出ております」
「そうか。ならばアステロイド帯と磁気嵐の間に布陣するとしよう」
彼はニヤリと笑いながら言った。
「あとアステロイド帯には機雷を撒いておけ。あそこから突破されると面倒だ」
「ハッ」
「司令、よろしいのですか？」
別の参謀がアジュラーンに対して問うた。
「何がだ！？」
アジュラーンは彼に顔を向けて問うた。
「その布陣ですと正面からぶつかることになりますが」
敵はまっすぐにこちらにやって来ている。その正面に布陣する形となっているのだ。
「それか」

彼はそれを聞いて再び笑った。
「我が軍は一万隻、兵士数にして約百万。敵は二万隻、約二百万です。正面からぶつかるには不利かと」
「そうだな。正面から挑んではならん相手だ」
アジュラーンはまるで他人事のように言った。
「だがそれは普通にやった場合だ」
彼は不敵に笑って言った。
こうしてカッサラ星系を巡るオムダーマンとミドハドの戦いが開始された。オムダーマンはアジュラーンの考え通り磁気嵐とアステロイド帯の間に布陣しミドハド軍を待ち構えた。
「アッディーン准将の方の準備は整っているか」
アジュラーンは旗艦の艦橋において参謀に対し問うた。
「ハッ、既に布陣を終えているとの報告がありました」
参謀の一人が敬礼して言った。
「そうか。ならば良い」
アジュラーンはそれを聞いて微笑んだ。
「この戦いは彼にかかっているからな」
やがて前方にミドハド軍が姿を現わした。
「来ました。数は約二万です」
「予想通りだな」
アジュラーンはオペレーターの言葉を聞いて言った。
「正面から突っ込んで来ますね」
参謀はモニターに映る敵陣のコンピューターグラフィックを見ながら言った。
「うむ。しかも巡洋艦や駆逐艦に護衛された空母が主力だ。これも予想通りだな」
ミドハド軍の得意戦法である航宙機を使った戦術で来るようだ。
「良いか、こちらは守りを固める。対航宙機防衛に重点を置け。まずは徹底して防御する」
「ハッ」

参謀達はそれを聞いて敬礼した。
「充分に引き付けろ。そうすればおのずと勝機が見える。我等が動くのはそれからだ」
敵軍が戦艦の射程内に入った。こうして戦いが開始された。
まずは両軍の一斉射撃で始まった。個々の艦の火力に勝るオムダーマン軍は二倍以上の兵力を向こうに回しながらも敵軍に少なからずダメージを与えた。
「だがそれは計算通りだ」
ミドハド軍第一艦隊司令官であるスールフ大将は不敵に笑ってそう言った。
「数ではこちらの方が上だ。気にせずどんどん進め」
彼は部下達に対して言った。艦隊はその言葉を受けて前へと突き進む。
やはり数がものをいった。オムダーマン軍の攻撃をものともせずミドハド軍は接近して来る。

## 第一部第三章　海賊征伐その三

「よし、今だ！」
ミドハド軍は航宙機を発進させた。
「来たな」
それはオムダーマン側も予想していた。こちらも航宙機を出す。
「良いか、砲座との連携を忘れるな」
「了解」
航宙機は次々と飛び立つ。そして星の海の中で格闘戦を開始する。
「やはり数が多いな」
オムダーマン軍のパイロットの一人が敵の航宙機の部隊を見て言った。
「良いか、決してこちらの砲座の射程からは出るなよ。あくまで連携して敵を倒せ」
そこに部隊指揮官から通信が入った。
「了解」
彼等は散った。そして敵に向かって行く。
戦いは五分と五分だった。数の劣勢を航宙機と砲座の連携で補うオムダーマンに対しミドハドは数とパイロットの個々の能力で戦う。
「やはり航宙機の扱いは向こうの方が上か」
アジュラーンは戦局を見詰めながら言った。
「はい。やはり彼等に一日の長がありますな」
参謀の一人が答えた。
「こちらの損害は次第に増えております。このままいくと敵に押し切られるかと」
その通りであった。やはり数の差が大きくものを言っていた。
「そうだな。ここままいくとだな」
アジュラーンはモニターを見て呟く様に言った。
「だがこれも計算通りだ」

そう言うと不敵に笑った。
「そろそろ頃合いですね」
アステロイド帯の機雷が撒かれていない場所に彼等はいた。
「ああ。どうやら敵さんはこちらの存在には全く気付いていないようだな」
アッディーンはガルシャースプに対して答えた。
「よし、それでは全軍動くぞ」
彼は部下達に対して令を下した。一千隻の艦隊がそれに従いアステロイド帯から姿を現わした。
「今から敵の後方に回り込む。そして一斉攻撃を仕掛けるぞ」
艦隊はアッディーンの言葉に従い全速力で動く。
敵軍はまだ気付いてはいなかった。彼等はその真後ろに達した。
「よし、今だ。全艦突撃！」
アッディーンの右腕が振り下ろされた。艦隊は矢の様な速さで突撃を開始した。
「後方に敵軍発見！」
ミドハド軍のオペレーターの声は悲鳴そのものであった。
「何っ、まだいたのか！」
後方で指揮を執っていたミドハド軍第一艦隊司令官はそれを聞いて思わず声をあげた。
「こちらにまっすぐに突っ込んで来ます。その数一千隻！」
それは彼のいるところに突撃してきている。彼はそれを見て蒼白となった。
「いかん、何としても食い止めろ！」
彼は絶叫した。
「駄目です、間に合いません！」
そこに一斉射撃が襲い掛かった。司令の乗る旗艦は七条の光の帯を浴び爆発四散した。
これで第一艦隊の指揮系統は混乱状態に陥った。アッディーンが率いる一千隻の艦隊はそのまま敵軍の中に踊り込んだ。

「よし、周りは敵しかいない。撃って撃って撃ちまくれ！」
彼の指示が下る。艦隊は周りを手当たり次第に撃つ。そして光の爆発が辺りを包む。
敵軍は混乱状態に陥った。今まで戦いを有利に進めていたのが嘘の様であった。
それは前線においてもそうであった。自らの後方が混乱状態にあるのを知り彼等は浮き足立った。
「アッディーン准将、上手くやりましたな」
参謀の一人が混乱する敵艦隊を見て言った。
「ああ。またやってくれたな」
アジュラーンはそれに対して答えた。
「よし、今こそ勝機だ。一気に攻勢に転ずるぞ！」
彼は全軍に対して指示を出した。
「全軍総攻撃だ！」
オムダーマン軍は一気の攻勢に転じた。まずは浮き足立っていたミドハド軍の航宙機部隊が餌食になった。
「さっきまでよくもやってくれたな！」
彼等はオムダーマン軍の航宙機と砲座の集中攻撃により次々と撃ち落とされていった。そして次はその母艦である空母、そしてやがて敵中央にまで進んでいく。
それと呼応してアッディーンの艦隊も行動を速めた。一度敵艦隊を突き抜け再び後方に出る。
今度は敵第二艦隊司令部に襲い掛かった。下からミサイルを浴びせる。
「いかん、かわせ！」
第二艦隊の司令官は必死に命令する。だが間に合わなかった。彼は乗艦と運命を共にした。
戦いは何時しか一方的なものとなっていた。ミドハド軍の艦艇は次々に沈められオムダーマン軍は敵軍を所々で寸断し各個撃破していった。

やがてミドハド軍は壊走を開始した。皆それぞれ散り散りとなり戦場を離脱する。
「追いますか」
それを見た参謀の一人がアジュラーンに対して問うた。
「当然だ。この際徹底的に叩いておく」
彼は答えた。そしてそれがミドハド軍に止めを刺した。
ミドハド軍は尚も攻撃を受け続けた。そして戦場に残るのはオムダーマン軍だけとなった。
こうして戦いは終わった。劣勢にあったオムダーマン軍の知略による大勝利であった。
参加戦力はオムダーマン軍百万、艦艇一万隻、ミドハド軍二百万、艦艇二万隻であった。損害はオムダーマン軍が一割強であったのに対してミドハド軍のそれは三割を越えていた。しかも両艦隊の司令まで戦死するという致命的なものであった。
すぐに両国の間で停戦交渉が開始された。これによりオムダーマンは二つの星系の割譲とミドハドからの多額の賠償金を手に入れた。そしてそれにより小勢力二ヶ国がオムダーマンに帰順を申し出て来たのだ。これによりオムダーマンは西方で第二の勢力となった。
「とりあえずはいいことづくめだな。やはり勝利というのは気持ちがいい」
アッディーンはムラーフと共に司令室に向かいながら上機嫌で話している。
「ですね。これで我々は西方で第二の勢力となりましたし」
ムラーフも機嫌がいい。
「そうだな。あとは今回の勝利と得たものをどう生かすかだ」
「それですね。二つの星系を手に入れたのはやはり大きいです」
カッサラ星系に隣接する二つの星系は豊かなことでも知られているのだ。
「そうだな。これから暫くの我が国の動きが西方の運命を決定するかもな」

アッディーンは考える顔をして言った。
司令室に来た。あくまで実務を重視した簡素な部屋にアジュラーンだけがいた。
「おお、よく来てくれたな」
彼はアッディーンの顔を見て微笑んだ。
「閣下のお招きに応じ参りました」
アッディーンは彼に対し敬礼して言った。
「うむ。今度の戦いのことでだが」
彼はアッディーンを見詰めながら言う。
「君は少将となった。そして新たに新説される艦隊の司令官となった」
「私が艦隊司令ですか？」
アッディーンは思わず問うた。
「そうだ。艦隊といっても新設されたばかりでその規模は他の艦隊の半分程度だが」
オムダーマンでは艦隊司令になるのは本来では中将以上とされているのである。
「そうですか。しかし艦隊司令に任命されたのは嬉しいですね」
「そうだろうな。最もやりがいのある仕事と言われているからな」
アジュラーンは笑って言った。艦隊司令はオムダーマン軍の中では特に人気のあるポストなのである。
「さて、早速だが君に任務がある」
「何でしょうか」
彼は問うた。
「君はカジュール公国についてどう考える」
カジュール公国とはカッサラ星系にある小国である。西方では最も勢力が小さいがミドハドと友好関係にありそれにより国を保っている。いわば属国である。
「カジュールですか」
彼はその名を聞いて思案した。

「これは私の仮定ですが」
彼はそう前置きして話しはじめた。
「今後ミドハドとことを構える場合何かと邪魔な存在になると思います。それにあの地を押さえればミドハドに侵攻する際に二方向から攻めることが出来るようになり我等にとって好都合かと思います」
「ふむ、君はそう思うか」
カジュールの兵はあまり多くはない。規模にしてオムダーマンの一個艦隊程度である。だがその後ろにはミドハドがいる。
「実はカジュールに侵攻しようという考えが軍の上層部から出ているのだ」
「よいお考えかと。ミドハドの兵が引き揚げている今は絶好の機会です」
「だが我々も余分な兵はない。サラーフの存在もあるしな」
サラーフは今先の敗戦の借りを返そうと画策している。特にこのカッサラ星系を虎視眈々と狙っていた。
「だが君の艦隊だけは別だ。新設されたばかりだしな」
「はい」
彼は答えた。そしてアジュラーンが何を言わんとしているか察した。
「今回のカジュール侵攻には君の艦隊にやってもらおうという話になっているのだ」
「失礼ですが閣下」
彼はアジュラーンに対して口を開いた。
「カジュールは確かに小国です。しかしその軍の規模はわが軍の一個艦隊程度はあります。流石に半個艦隊では相手をするのは難しいかと」
「それはわかっている」
アジュラーンは彼を見て言った。
「それにかの国にはその地形を利用した多くの軍事基地があります。攻略は容易ではありません」

「そうだな」
彼は何かを待っているような態度である。
「それだけに攻略には時間がかかります。そして時間がかかればミドハドがやって来るでしょう」
「その通りだ。だが君にも何か考えがあるだろう？」
アジュラーンは彼の顔を微笑みながら見て言った。
「そうでなければこの計画を支持したりはしない」
「はい、あります」
アッディーンは答えた。
「では聞かせてもらおうか。その案を」
「はい、まずは・・・・・・」
アッディーンはアジュラーンに対して自分の考えを話しはじめた。
そして一時間後彼は司令室を後にした。
二日後新設されたばかりのアッディーンの艦隊は出撃した。そしてカジュール公国に向かって進軍を開始した。

# 第一部第四章　若き獅子その一

若き獅子

サハラは多くの勢力に別れている。オムダーマンのある西方は大小七つの勢力に分かれており南方はそれ以上の多くの小勢力がある。東方にはサハラ最大の勢力であるハサン王国とその属国達がある。そして北にも別の勢力が存在している。

サハラ北方にはエウロパが植民地を形成していた。人口増加に悩む彼等はこの地が多くの小勢力に分裂しているのに乗じ侵攻しその地を奪ったのだ。それはこの地のおよそ七割に達していた。そしてそれは日増しに伸張していった。北方の国々はその勢力拡大に怯える日々であった。

無論これはこの地に住んでいた者にとっては迷惑以外の何者でもない。彼等は住むところを追い出され東方に流れるか遠い連合に逃れるかしていった。中にはエウロパの者に仕える者もいたがその様な者はサハラの恥とされた。

「だがこれも我々が生きる為に仕方のないことだ」

赤と黒、そして金の豪奢なエウロパの将校の軍服に身を包んだ長身の青年が白亜の宮殿の中を進みながら行った。

「そうでなければ我等はこれ以上の人口を養えぬ」

彼はその豊かな金髪をたなびかせながら言った。

立派な体格をしている。引き締まっているが筋肉質ではない。瞳は青く湖の様である。その顔はまるで古代ギリシアの彫刻の様に整っている。彫りは深く鼻は高い。そして青い目は大きく唇は地球産の薔薇の様に紅い。

彼の名をヴォルフガング＝フォン＝モンサルヴァートという。ドイツの有力な貴族である名家の嫡男として生まれた。幼い頃より活発で頭の良い子供として知られ長じて士官学校に進んだ。そして卒業後このサハラに赴任となり今まで大小無数の戦いを経てきた。そ

して若くして大将に任命されている。性格は勇猛で名誉を重んじる。そして苛烈にして清廉な人柄の持ち主と言われている。この地のエウロパ軍の柱とさえ称えられる若き名将である。この時二五歳、その武勲は歳に反比例してあまりにも高いものであった。

この白亜の宮殿は彼の屋敷である。元々裕福な家で生まれ育った彼であるがこの宮殿は特に気に入っていた。

かってはこの地を治めていた王の宮殿であったという。だが彼の国はエウロパに滅ぼされ王は東方に逃れていった。言うならば彼は奪い取った家に住んでいるのだ。

「サハラの文化は私には合わないと思っていたが」

彼は側に従う美しい侍女に対して言った。

「この宮殿は別だな。実に素晴らしい」

見れば内装は全てかつて欧州でその絢爛さを称えられたロココ様式である。煌びやかでありかつ装飾は様々な形であった。

「こうした宮殿に住むのは征服者の特権だと連合の者達は言うが」

彼は連合政府に対して激しい敵意を持っていた。

「あれだけ豊かな領土と無限の資源があれば何とでも言える。我々にはそれがないのだ」

彼は連合は自分達が豊かであるからそう言えるのだと考えていた。そしてそれはある意味において真実であった。

「我々には限られた土地と資源しかない。そんな状況ではこうするしかないのだ」

エウロペは半ば追い出されるような形で今の星系にやって来た。この地は比較的豊かであり彼等は最初はこの地に進出出来たことを多いに喜んだ。

だがそれは暫くの間だけであった。彼等がいる場所は北と西は何千、何万光年もの間何もない場所であった。恒星も何も無い。ただただ拡がる暗黒の空間があるだけであった。

そして東は広く高く厚いアステロイド帯に阻まれている。ここは磁気も激しく彗星までが乱れ飛んでいる。変光星や超惑星、赤色巨

星、ブラックホール等がひしめいていた。しかも全域に渡って重力も異様なものであった。それは事実上連合とエウロパを阻む壁であった。これは連合とマウリア、サハラとの境にもあったがエウロパの側にあるこれは一際長く高く厚いものであった。

唯一の回廊には相互に要塞群を置いている。互いの侵攻を阻む為だ。そこからは誰も行き来することなど出来はしなかった。

そうした閉塞した状況に彼等はあった。そんな彼等が多くの勢力が林立している南方のサハラに進出するのは当然の成り行きであった。

「スペースコロニーなどたかが知れているしな」

エウロパにはスペースコロニーも多い。だがこれはかかる費用や資源の割には収容出来る人員が少なく甚だ不経済な代物であった。

コロニーは巨大なものは作れない。技術的には可能でも資源がそれを許さなかった。コロニーを建造するよりも惑星を開発し居住可能にする方が余程効率が良かった。

しかしエウロパにはそれが可能な惑星は残されてはいなかった。元々狭く惑星も一つ一つは豊かだが数は少ない。そして資源についてもそれは同じであった。

連合の様に何処までも続く開拓地など無い。彼等はその狭い領土で人口を何とか抑制してその勢力を保っていた。

「連合の人口が三兆を越えているというのにな。我々は長い間一千億で抑制せざるを得なくなっている」

それはエウロパにとって致命的な弱点となっていた。彼等は経済力、技術力において連合と比肩していたが人口において大きく水を開けられその国力差は覆せないものとなっていたのだ。

だが連合がまとまりに欠くうちはそれでも気にならなかった。しかしここ二百年の流れは連合の中央集権に傾いていた。

「だが今までは特に気にする段階ではなかったのだ」

しかしこの前遂に中央軍が設立された。各国の軍を連合中央政府の下に統合して置いた連合の統一軍である。

「奴等が中にいるうちはまだいい。しかしそれが外に向かったならば・・・・・・」
真っ先に狙われるのは小勢力に分裂しているサハラとエウロパであろう。とりわけこのエウロパには致命的な弱点が存在していた。
この領土は狭いだけではなかったのである。地形は単調でこれといった障壁は存在しない。ブラウベルク回廊を越えたならば護りはニーベルング要塞群だけしかないのである。
「若し連合がその全戦力を使ってニーベルング要塞群攻略に向かったならば・・・・・・」
エウロパは忽ちのうちに蹂躙されるであろう。それは容易に想像がついた。
「最早一刻の猶予もないらん。今整えなければ大変なことになる」
彼は心の中でそう呟きながら自身の執務室に入った。
執務室はかってこの宮殿の主であった王が執務室にしていた。従ってその内装は見事なものであった。
大理石を基調とし白銀やダイアで装飾されている。机はこの地では貴重なものとされるサハラ東方産の黒檀から作られている。ペン等机の上に置かれているものも見事な装飾が施されている。
「だが今私がこの場でどうこう言ってもはじまらないな」
彼は机に座りそう思った。
「それに今はこのサハラ北方への殖民を進めていくことも重要だしな。連合が動くにしてもまだ時間がある」
その通りだった。連合にとって最大の関心は開拓とその地の治安である。それがある程度まで進むまでは動くことはないと彼は見ていた。この予想は的中する。だが彼の予想を越えた部分もあった。そのことを彼は後に驚愕と共に知ることになる。
机の上の電話が鳴った。彼はそれを手に取った。
「はい」
電話の主は彼の直属の上司であるサハラ総督マールボロ元帥からであった。頭がすっかり禿げ上がった皺の多い人物である。

「これは閣下、お早うございます」
「うむ、お早う」
マールボロは挨拶を返した。
「どうやら気分は良いようだね」
「少し悩んでおりますが」
彼は冗談交じりに言った。
「どうした、また若い女の子に振られたのかね」
マールボロも冗談で返した。モンサルヴァートは別に女好きというわけではない。だがその整った美貌の為女の子からは人気が高い。流石に俳優やアイドル程ではないが。
「ええ。とびきりの美人に。おかげでこの宮殿で今まで沈み込んでおりました」
これはこの地のエウロパ出身の女の子の間の格好良い男性ランキングで惜しくも二位になったことを言っているのである。一位は今大人気のアイドルだ。
「ははは、まあ彼には勝てはしないだろうな」
マールボロはそれを聞いて笑って言った。彼は中々の芸能好きで知られている。
「確かに男前ですからね。それでも男色家という噂がありますが」
この時代では同性愛はどの地域でも特に珍しいものではなくなっていた。同性の間でも結婚も認められていた。だがやはり異性同士のカップルが圧倒的に多いのは言うまでもない。
「それは彼の事務所の社長の趣味だろう。わしも彼とは会ったがごく普通の好青年だぞ」
「そうなのですか」
「ただ髭が濃いな。あれでは全身毛だらけだろう」
一部の若い女の子が聞いたら幻滅しそうな言葉である。だが今この場には彼のファンはいなかった。
「まあその話はこれ位にして」
マールボロは話を変えてきた。

「君に頼みたい仕事があるのだが」
「何でしょうか？」
モンサルヴァートは表情を変えた。
「アガデス連邦についてどう思うかね」
アガデス連邦とはサハラ北方にある国の一つである。エウロパの進出に反対する強硬派である。
「アガデスですか」
モンサルヴァートの蒼い目が光った。
「今彼等は大統領派と首相派に分裂しております。好機かと思います」
彼はそう言った。
「そうだな。ではそこにつけ入るか」
「そうすべきかと」
「よし、では早速手を打とう」
それから暫く後でアガデスにおいて内乱が勃発した。首相派が突如としてクーデターを起こし大統領と彼を支持する者達との間で武力衝突を起こしたのである。
彼等は確かに仲違いしていた。しかし武力衝突する程のものではなかったのにである。
ことの発端は些細なことであった。首相と仲の良い軍の高官の一人を何者かが銃撃したのだ。
銃弾は逸れた。だがそこに残っていたのは大統領直属である特殊部隊の使用する特殊な拳銃から放たれるビームの後であったのだ。
これに首相と彼の近辺は激昂した。このままでは自分達の命も危ないと危惧もした。そして彼等はすぐに行動に移したのである。
内乱はアガデス各地で起こった。とりわけ首都での騒乱は凄まじいものであった。アガデスは大混乱に陥った。
ここでエウロパが動いた。彼等はアガデスにいるエウロパ市民の保護を口実に軍を派遣してきた。そしてそれに抗議するアガデス大統領に対し一方的に宣戦を布告した。そしてモンサルヴァート率い

る艦隊がアガデス領内に入って来た。
これに驚いたのは大統領である。首相とも争っているのにもう一つ敵が増えたのだから。
彼は首相と手打ちをしようとした。だがそれより前に首相は急死した。夜青い色をしたコーヒーを飲んだら急に胸を押さえて倒れたのである。
首相派はリーダーを失い瓦解寸前になった。エウロパは彼等を瞬く間に掃討し武装を解除させた。これで残るは大統領だけとなった。
大統領は首都にて徹底抗戦を叫んだ。そして首都のすぐ側にまで進撃していたモンサルヴァートの艦隊に対して決戦を挑んできた。
「ほう、来たな」
モンサルヴァートは旗艦リェンツイの艦橋でアガデス軍を見て言った。

## 第一部第四章　若き獅子その二

「正面から決戦を挑むつもりか」
両軍の兵力はほぼ互角であった。双方共正面から楔形の陣を組んでいる。
「面白い。ならばこのモンサルヴァートの戦いをよく見せてやろう」
彼は自信に満ちた笑みを浮かべそう言った。
エウロパ軍はそのまま突っ込んで来た。
「来たぞ、全軍一斉射撃！」
アガデス軍の司令官は全軍に指示を下した。艦隊はそれに従い主砲から一斉にビームを放った。
だがそれは効かなかった。エウロパ軍は正面にとりわけ防御力に優れる戦艦部隊を置いていたのだ。そして彼等はそのエネルギーを正面のバリアーに集中させていた。
それでも普段ならば幾らかは効いていたであろう。しかし今のアガデス軍は内乱で疲れきっていた。どの艦も大なり小なり損傷しておりエネルギーも減っていたそれがこの攻撃に出たのである。
「やはりな。彼等は普段の戦力を発揮出来てはいない」
モンサルヴァートはそれを見て言った。
「今彼等は動揺している。すぐに決着をつけよ！」
モンサルヴァートの左腕が振り下ろされた。それに従い全軍突撃した。
戦いはこれで決まった。アガデス軍は瞬く間に蹴散らされた。そしてエウロパ軍は首都に再び進撃を開始した。
「そうか、敗れたか」
大統領は敗戦の報告を聞くと肩を落としてそう呟いた。そして全軍に対し停戦及び武装解除を指示した。
翌日エウロパ軍から降伏勧告があった。彼はそれを受け入れた。
彼はその後で執務室に一人になった。そして机の奥にあった拳銃

を取り出した。
　こうしてアガデスはエウロパの領土となった。アガデスの民衆は国を失いその殆どはサハラ東方や連合に流れていった。
「これでまた我等の地が増えたな」
　モンサルヴァートは国を去る民衆の船を見ながら言った。彼等の周りをエウロパの艦隊が監視している。大人しく出て行かせる為である。
「はい。しかしあまり気分のいいものではありませんな」
　傍らにいる幕僚の一人が晴れない顔で言った。サハラ進出と地域民追い出しはエウロパ内においても批判が多い。実際に選挙の時は世論を真っ二つに分け僅差で可決されている。今だに反対派が多く殖民よりも何万光年先の星系に移住した方がいいという意見が多い。
「だがこうするしかあるまい。あの何万光年もの先に強大な異星人がいた場合取り返しのつかないことになる」
　エウロパの人々はその何万光年にも及ぶ空白の宙域を『暗黒宙域』と呼ぶ。果てしなく何一つない空間が広がっているだけだからである。
「それに我々は彼等の命まで奪おうというわけではない。こうして艦艇まで与えて他の地域への移動をさせているではないか」
　一部にはそれでも残ろうという者もいるが実際に残るのはごく一部である。エウロパの者に仕えるようなことを好まない為である。
「ですがこれによりサハラ、そして連合において我等に対する批判が高まっております。これは憂慮すべきことかと」
「それはわかっている。だがサハラは小勢力に分裂している。反感は気になるが我等が生きる為には無視しなくてはなるまい。しかしな」
　モンサルヴァートはここで顔を顰めた。
「連合の者達に言われたくはないな」
　その言葉には怒気を含ませていた。
「連中は数をたてに何かと宇宙開発で有利なように話を進めてきた。

そして幾度となく我等の発展を妨害してきた。そして今の領土に追いやってくれた。もとはといえば奴等のせいではないか」
シンガポール条約以降エウロパは何かと連合に遅れをとっていた。彼はこのことに対し強い不満を覚えていたのである。
「しかもあの者達には無限ともいえる開拓地と資源がある。持てる者に持たざる者の気持ちがわかってたまるか。その証拠にあの者達の人口を見よ」
エウロパの人口は一千億である。それに対し連合の人口は三兆、約三十倍の差がある。
サハラやマウリアの人口は二千億程度である。やはり連合の人口が圧倒的に多い。これには多くの原因がある。
まずエウロパは移住した時より避妊具等を使い人口を抑制していた。これは将来のことを考えてのことだが先見の明があったと言えよう。実際に今彼等は人口問題に悩まされている。これは流石に辛かった。これにより今のサハラ殖民が行なわれるに至ったのである。
サハラは土地はエウロパよりずっと広く南方や西方に開拓可能と思われる星系が多数存在するが戦乱に明け暮れ開拓は全く行なわれてはいない。特に南方は複雑な地形で知られるサハラにおいてもあまりにも複雑な地形の為人口も少なく惑星ごとの国家や海賊、軍閥等が乱立しているような状況である。彼等は特に人口を抑制したりはしないが戦乱の為人口はそれ程増えなかったのである。
マウリアは領土が広く地形もそれ程複雑ではなかったが彼等は決して焦りはしなかった。独自の文明を持つ彼等は泰然自若とした行動を好みゆっくりと開発を進めていった。人口は積極的に増加させるような政策は採らず増えるに従い他の惑星に進出するといった方法を採った。彼等は別に平和主義でもなかったが連合やサハラとはアステロイド帯等で安定した国境があり外敵に悩まされることもなかった。その為穏やかな進出が可能となったのである。
さて連合であるが彼等は元々の人口が多かった。当初の構成国である環太平洋諸国だけで全人口の約半分に達していたがそこにブラ

ックアフリカの国々や中南米、トルコ、イスラエル等が入ったのである。これにより彼等全人口の大半を抱え込むこととなった。
そして彼等が得た領土は広かった。なおかつ何処までも広がっていた。彼等は東に、北に、そして南に、次々と進出していった。
そして多産を奨励した。これは開拓をより的確かつ迅速に進め国力を高める為であった。ただでさえ人口が多い彼等はこれにより爆発的に増加した。そして彼等は今の人口に至ったのである。
人口増加政策は連合に合っていた。こうして彼等は人類の全人口の約七分の六、国力にして九割近くを占めるようになったのである。個々の星や人々の豊かさにおいてはエウロパの方が上であったが彼等には数があった。今までまとまりに欠いていたおかげで他の三国の脅威とはならなかったのである。
「だがそれも変わってきているからな」
あまりにもまとまりに欠ける為治安上の問題が深刻であったのだ。そして跳梁跋扈する宇宙海賊を取り締まる為に中央警察を設置し中央政府の権限を強化した。そして今度は。
「中央軍が出来たとなると情勢は一変しかねないな」
モンサルヴァートは危惧する顔をした。
「果たして上手くまとまるでしょうかね。あの連中が」
「指導者次第だな」
彼は幕僚に対して言った。
「今の大統領キロモトは中々能力のある人物のようだ。それに国防省となった八条という男だが」
「日本の政治家だったのでしたな。何でも大学を出て軍に入ったとか」
「そうだ。あの男の行動により今後連合は大きく変わる可能性がある」
「今まで変わらなかった連中がですか？」
別の幕僚が言った。
「そうだな。変わる時はあっという間に変わるものだ。連合がその

時に来ているとしたら」
モンサルヴァートは言葉を続けた。
「この宇宙に及ぼす影響は計り知れないものになるだろうな」
最後の船が出発した。モンサルヴァート達はそれを黙して見ていた。
エウロパによるアガデス侵攻は幕を降ろした。エウロパはアガデス政府の降伏と領土の併合を宣言しアガデス市民のほぼ全てを国外退去させた。そしてこの地にエウロパ市民を移住させる計画を発表した。
これに対し連合中央政府及び構成国全ては強く抗議した。そしてアガデス市民の受け入れを発表した。彼等の多くはサハラ各地に亡命するか連合の開拓地に入っていった。
サハラ各国もマウリアも抗議した。とりわけサハラでは反エウロパの運動がさらに激化していくことになった。なおアガデス攻略の司令官であったモンサルヴァートはこの功績により上級大将となった。
「おめでとう、これで君もその背にそのマントを背負うことになったな」
マールボロは司令室においてモンサルヴァートに対して笑顔で言った。エウロパでは少将以上は軍服の両肩にケープを着ける。大将になると黒いマントを着用するのだ。上級大将になると白いマントだ。今彼はそれを身に着けたのである。
「はい、有り難うございます」
モンサルヴァートは微笑んで答えた。
「二十五歳で上級大将とはな。これはエウロパ軍設立以来のことだぞ」
マールボロは上機嫌なままである。彼の昇格が余程嬉しいらしい。
「そして君は新たな役職に任命されたぞ」
「それは何でしょうか」
彼は問うた。

「エウロパサハラ方面軍の艦隊司令だ。どうだ、やりがいのある仕事だろう」
「はい」
この地には今だ多くの反エウロパの旗を掲げるサハラの国やレジスタンスが存在していた。そしてこの地には総督が置かれていた。彼の下に軍があり宇宙艦隊は彼等に対するエウロパの主力ともいえる存在である。
その司令官ともなれば与えられる兵力及び権限は絶大なものである。事実上ここにいるエウロパの軍の司令官とも言える存在であった。
「卿にはやってもらうことが山程ある。期待しているぞ」
「お任せ下さい」
モンサルヴァートは自信に満ちた声でそう言うと敬礼した。そして彼は颯爽とその場を立ち去った。
「将来が楽しみだな」
マールボロはそんな彼の後ろ姿を見送ってそう呟いた。

この時連合では一つの大きな騒動が起こっていた。
アメリカと中国、そしてロシアで行なわれる総選挙である。三国共同時期に、しかも大統領を選ぶ選挙まで行なわれていたのである。
選挙の争点は連合軍への参加であった。日本がまず参加を表明すると日本に賛同する多くの国がそれに従った。そしてオーストラリアやブラジル、そしてトルコといった他の影響力のある国々も次々に参加を表明した。それから暫く経った今連合軍に参加を表明していないのはこの三国と彼等に近い国々だけであった。
三国共保守派は参加に反対の意向を示していた。連合の独自性に反するというのである。もっとも自分達の勢力を維持したいという考えもそこにはある。それに対し改革派は賛成であった。勢力の維持など最早関係なくこれは時代の流れであると彼等は主張する。そして連合の大義に従うべきだと。

三国の世論は真っ二つに分かれていた。テレビでも雑誌でもネットでも議論は紛糾していた。中には暴動まで起こっているところもあった。

「果たしてどうなりますかね」

連合の首相を務めるラフディ＝アッチャラーンがキロモトに対し問うた。彼はタイ出身で若くして政治家となりそれから今に至る人物である。やや小柄な痩せた身体つきの人物であり実務派として知られている。

「そうだな。おそらく賛成派が勝つだろう」

キロモトはそのざっくばらんな笑顔を見せて言った。

「世論は何だかんだ言っても賛成派が多数を占めるしな。反対派で目立つのは一部の声が大きい者達だけだ。こうした時少数派はどうしても声が大きくなり目立ってしまうものなのだ」

これは彼等が追い詰められているからであろうか。民主主義においてはよく見られることである。

「それに時代がそちらに向かっている。賛成派が言うようにな。これは人間には如何ともし難いものだ」

彼は時代の流れも読んでいた。

「では閣下は今回の議論について何も心配はされていないのですね」

「うむ。今は吉報を待っているだけだ」

彼は笑顔で言った。

「それでは食事にしないか」

丁度お昼時であった。

「今日は地球産の鶏を焼いてスパイスで味付けしたものだ。マウリア風らしいぞ」

「ほう、マウリア風ですか」

マウリアの料理はスパイスをふんだんに使ったものが多い。そして独特のカレールーは人気が高い。

「それでしたらご一緒させてもらいますか。私は自国のものとマウリアの料理が大好きでして」

彼はとりわけ細長くサラサラした米が好きである。
「うん、では食堂に行こう」
二人は食事を採った。そして午後も選挙に対する分析を行なった。
そして選挙投票日となった。投票日まで激しい議論が交わされテレビやネットはこのことで話題がもちきりであった。
投票結果が発表された。三国共僅差であったが賛成派が勝利した。
「これで決まりだな」
キロモトはテレビでそれを見て満面の笑みを浮かべた。
新たに発足した三国の政権はどれも中央軍への参加を公式に宣言した。そして残る国々もそれに続いた。こうして連合の各国の軍隊は全て中央軍に編入されることとなった。
「これで全ての国の軍が中央政府の中に組み入れられたわね」
伊藤はシンガポールにある少し洒落た日本食のレストランで食事を採りながら向かいに座る八条に対して言った。
内装は日本風である。二十世紀頃の日本の料亭をイメージしたらしい。木の椅子やテーブルは白っぽく料理は箸を使って食べる。連合の食事はフォークとナイフ、スプーン、そして箸を同時に使うことが多いが日本食は箸のみで食べるので非常にユニークな料理として知られている。
「はい。ようやく全員揃ったというところでしょうか」
八条は地球の大西洋で採れた海老の天麩羅を天つゆに入れてそれを口に入れた。口の中に衣のカラッとした歯ざわりが満ち海老の弾力が歯に伝わる。
「そう、色々なメンバーがいるけれどね」
伊藤はカルフォルニア産の鮭の刺身にワサビ醤油を漬けた。そしてそれを食べる。鮭のあの脂っこくそれでいてトロリとした味が口の中を支配する。
「これは大変なことよね。人類の歴史史上最大規模の軍隊が突然現われたのですもの。そしてその構成員はどれもこれも一癖も二癖もあるのばかり」

「はい」
しかも装備も編成もバラバラであった。
「それを纏め上げて再編成するのは大変よ。これは骨が折れる仕事になるわよ」
伊藤は八条を悪戯っぽい眼差しで見た。
「けれどだからこそやりがいがあるって思っているでしょ」
彼女はそこで微笑んでみせた。知的でその中に優しさを含んだ笑みである。
「はい。今何から何まで私のところに仕事が来て目が回りそうですけれどね」
それは嘘ではなかった。親切された国防省は今不眠不休で働いている状況である。

## 第一部第四章　若き獅子その三

「教育システムや後方任務、部隊編成、通信設備、そして装備・・・・・・。何から何まで違いますからね。それを一つに統一するのだけでも大変ですよ」

「これどこれが達成されたら連合にとって大きな力になるわね」

「はい。今までのまとまりの悪い国家連合ではなく中央の程良い統制の下まとまったものになるでしょう。中央軍はその柱となります」

「そうね。やっぱり統一された軍というものの存在は大きいわ」

これは何時の時代も変わらない。それが無かった今までの連合は中央政府の権限はあまりに弱く各国の利害調整により運営されていたのだ。

「けれどもうそんなのは止めたほうがいいわね」

「そうですね。エウロパみたいにとはいかなくともう少しまとまりのあるものにならなければ」

エウロパは中央、それも元首である総統の権限が強い。各国の政府は国王や大統領等象徴的な元首が存在する程度である。法はエウロパ中央政府の法しかなく議会も中央議会の権限が圧倒的に強い。

「じゃあ期待しているわよ。私の愛すべき弟がどうやって軍を作り上げていくか」

彼女はよく彼を自分の弟子とか弟とか冗談で言う。実際に彼は大学時代彼女の講義を受けたこともある。彼女にしても彼は本当の意味での愛弟子であった。

食事は終わった。そして伊藤は連合の財務相との会談に向かった。八条は仕事だ。

「さて、と。やることはこれからもどんどん増えていくぞ」

彼は執務室に戻ると苦笑しながら席に着いた。

「長官、お電話です」

早速電話が鳴った。インドネシア政府の高官からだ。

「はい、それは以前お話した通りです」
彼の仕事は続く。連合軍は今その産声をあげたばかりである。彼はその父となるのであった。

「そうか、連合も遂に統一された軍隊を持つに至ったか」
マウリアの首都ブラフマー。ヒンドゥー神話の創造神の名を冠するこの星はマウリアの心臓とも言える存在である。
この国は中央政府の権限はそれ程強くはない。といっても連合のような国家連合ではないから連合程いちいちもめたりはしない。彼等は地方にその権限の多くを委譲させていおるのである。
その中央政府大統領官邸で一人の壮年の男性が部下からの報告を受けていた。マウリア主席マガバーン＝クリシュナータである。
インド風の白い服とズボンを着ている。頭にはターバンが巻かれている。これは古より変わらないインドの服装である。
マウリアで最大の人口を擁する北方のヴィシュヌ星系の家に生まれた。この時代カースト制度は法律的にはなくなっていたが生まれはそれほど悪くはなかった。順調に大学に進み普通の企業に入った。そして独立したところで頭角をあらわしたのである。
彼の経営センスは傑出していた。忽ち巨万の富を築き大富豪となった。そして政治家に転身しそこでも秀でた才を発揮した。そして遂に国家主席に選ばれたのだ。浅黒い肌に彫りの深い顔立ち、黒い肌に瞳を持つ痩身の男性である。背はマウリアの男性では普通位である。
「はい。その数九十億、艦艇にして三千万に達するこれまでにない規模の軍です」
部下である若い男は姿勢を正し報告した。
「ふむ。それはまた凄い数だな」
クリシュナータはそれを聞いて言った。
彼は今主席の官邸にいる。見ればこの官邸もインドのものである。彼等は昔ながらの文化を固辞しているところがある。この官邸にも

多くのそういった装飾品が置かれている。寺院に行けば多くの神々の色彩豊かな像がある。
「それ程までの規模の軍なぞ今まで見たとこも聞いたこともない」
彼は他人事のように言った。
「閣下、お言葉ですが」
部下はそんな彼の様子を見て心配そうな顔になった。
「あまり他人事ではありませんぞ」
それだけの軍が誕生したとなるとその影響力は連合内にだけ留まるものではない。この人類社会全体に及ぶ問題である。
「今我々は彼等とは長年に渡る友好関係を保っておりますが」
「それでも彼等の存在を忘れてはならない、と言いたいのだな」
「はい、若しも彼等がその関係を放棄し我が国に雪崩れ込んで来たならば・・・・・・」
「その時は瞬く間に蹂躙されるな。数が違い過ぎる」
クリシュナータは落ち着いた声で言った。その通りであった。
連合の人口は三兆、それに対するマウリアの人口は二千億と言われる。だが彼等は連合各国やエウロパのように厳密な人口統計をとっているわけではないので実際はそれよりもずっと多いと言われている。だがそれでも大きな隔たりがあるのは事実である。
それは軍の規模に直結する。マウリアの兵力は四億程度である。彼等は連合と友好関係にあり隣接するサハラは多くの小勢力に分裂しておりさ程軍備を必要としなかったのである。国境警備と治安維持さえ出来ればそれでよかったのである。
「そうです、今のうちに手を打たないと大変なことになります」
部下は深刻な表情でクリシュナータに対して言った。
「そうだな。では軍の拡張と国境線の防衛の強化をするように」
「ハッ、他には！？」
「とりあえずはそれだけでいい」
彼は落ち着いた声で言った。
「あの、連合は九十億の軍を持ったのですよ」

部下は彼のその声に今度は呆然となった。
「だからといってすぐに動けるというものではあるまい」
彼は部下に対して言った。
「今彼等はその膨大な軍を本当に統一された軍にする為に必死だ。今は積極的な行動に出ることは出来ない」
「そうでしょうか」
「そうだ。制服の生地から艦艇まで何もかもが全く異なるのだぞ。それを一つにするまでには時間がかかる。それまでは気にする必要はない。そして我々はその間に備えをしておけばよい」
「それでよろしいでしょうか」
「うむ。それに彼等はまず領内の海賊を一掃させるだろう。それからまずはエウロパだろうな。それに開拓をさらに進めたいだろうし」
連合にはまだまだ開拓するべき星系が無限に広がっているのである。
「我々も南方に開拓すべき星系を多くもっておりますがな。しかし彼等のそれには遥かに及ばないでしょう」
「だろうな。それだけでも彼等は恵まれている」
その通りであった。連合やマウリアはまだ進むべき場所がある。だからこそ戦争に入らなかったのだ。
しかしエウロパにはそれがない。これ以上の人口を養うにはサハラへ進むしか道はなかったのである。
「連合に頭を下げるわけにはいきませんからな」
「それにお互いの交流を絶っている。だからサハラ東方が栄えるのだ」
サハラ東方にはサハラでは最大の国がある。彼等は連合、エウロパ、そしてマウリアと国境を接しているという利点を活かし中継貿易で大きな富を得ていた。
「もし彼等がサハラ東方に進出したら大変なことになりますね」
「うむ。そうならない為に色々と手を打っておく必要があるかもな」
二人は話が終わるとその場を後にした。そして別の仕事に取り掛

かった。

# 第一部第五章　電撃作戦その一

電撃作戦

アッディーン率いる艦隊は指令通りカジュール公国に向けて進軍していた。

カジュール公国は西方で最も小さい国だる。領土も人口も少なくミドハドの属国のような存在であった。

この国が今まで生き長らえてきたのはその地形によるところが大きい。あまりに複雑な地形の為他の国々が手出し出来なかったのである。大艦隊を動員して敗れた国も多い。

「そこで発想の転換だ。出来る限り少数の兵で奇襲をかけるというわけだ」

アッディーンは艦橋でガルシャースプと共にいた。

「隠密に行動し一気に首都を衝く。そして瞬く間に敵艦隊を叩くのだ」

彼等は敵艦隊の配置を既に知っていた。敵はオムダーマンとの国境に兵を重点的に配置していた。

それに対し彼等は陽動に出た。アジュラーンが艦隊をその国境沿いに偏って移動させたのだ。

カジュールはそれに乗ってしまった。彼等は新設されたアッディーンの艦隊の存在を知らずアジュラーンの艦隊に対して兵の殆どを動かしたのだ。当然そこに隙が生じた。

「アジュラーン閣下のフォローが有り難いですね。これで作戦がやり易くなりました」

「ああ。だがそれでも危険はまだあるぞ」

迂闊に行動して存在が知られれば全てが水の泡である。

「一気に国境を抜ける。そしてあとはわき目もふらず首都を衝く。いいな」

「はい、行きましょう」
こうして彼等は作戦を発動した。道案内はこの星系出身であったかつての海賊がつとめた。彼は軍にもいたことがありカジュールのことには詳しかった。
まずは国境を突破した。僅かな兵しか配置されておらず彼等は国境を何なく抜けた。
そしてそのまま休むことなく首都を目指した。最短距離を突っ切った。
「行け、敵に追いつかれるな！」
首都までには二つの軍事基地がある。まずは交通の要衝サダム星系にあるサダム要塞である。
この基地は強力なビーム砲で装備していることで知られている。周りはアステロイド帯や磁気嵐が渦巻いている。避けては通れない。
まず彼等は出撃してきた敵の艦隊を一蹴した。アッディーンは彼等の姿を認めると一気に接近しそのまま突撃を加えて蹴散らしたのだ。
それを受けて算を乱して逃走する敵艦隊。彼等は要塞に向けて逃げた。
「追え、そのまま進め！」
アッディーンはそれを見て指示を下した。オムダーマン軍はそれに従い敵艦隊を追う。
「来たな」
要塞の防衛司令官はそれを見て言った。彼等が今ビーム砲の射程には入ったことを確認した。
「よし、撃て！」
彼は命令を出した。だが撃てなかった。
「何故だっ！」
彼の問いに対して参謀が答えた。
「駄目です、ビームの射程内に味方がおります！」
「何っ！」

彼は慌ててモニターで確認した。その通りであった。
これがアッディーンの狙いであった。敵の艦隊に紛れ込むことで敵にビーム砲を撃たせなかったのだ。
敵が手をこまねいている間にもアッディーン達は突き進んだ。そして要塞に貼り付いた。
「よし、陸戦隊突入せよ！」
その言葉に従い厚い装甲に身を包んだ兵士達が要塞内に切り込む。そしてその中を瞬く間に占拠していった。
ビーム砲にその防御の殆どを頼んでいたうえに不意を衝かれた彼等はオムダーマン軍陸戦隊の敵ではなかった。彼等は戦うよりも降伏する方を優先させた。こうしてサダム要塞は陥落した。
彼等はそのまま進んだ。そして今度は首都の前にあるリクード要塞の前に来た。
この要塞は長大な壁を持つことで知られている。その壁で首都を守っているのだ。
後方には敵艦隊が迫っている。領内を急襲された彼等は国境に最低限の兵を置いたうえで慌てて急行してきたのだ。
「閣下の軍への備えを最低限にしてか。また思い切ったことをするな」
アッディーンは敵艦隊があと三日の距離まで達したという報告を聞いて思わずその言葉を口にした。
「その危険を冒してでも戻って来なくてはまずいでしょう。何せ首都が危ないのですから」
ガルシャースプはアッディーンに答えるように言った。
「ほう、あの要塞があるのにか？」
アッディーンの顔は目の前にある長大な壁の防衛線に向けられていた。
「そういう問題ではないでしょう。今我々がここにいることが問題なのです」
「どのみち一緒だがな」

アッディーンはそう言って笑った。
「今から俺達は首都に突入するのだからな」
そう言うと全艦に突撃を命令した。
彼等は突撃を開始した。といっても正面に突撃したのではない。
まずは大きく迂回した。そして壁の一番下の端の部分に向かった。
「全艦一斉射撃！」
アッディーンの命令が下される。彼等はそれに従い壁に向けて総攻撃を開始した。
五千隻もの艦艇が一斉に攻撃を開始したのである。それも一点に。彼は敵の防御の最も弱い点を見抜きそこに総攻撃を仕掛けたのだ。
壁は崩れた。アッディーンはそれを見逃さなかった。
「よし、入るぞ！」
敵が守りを固めようとするのより早く動いた。そして要塞の中に侵入した。これで決まりであった。
これでリクード要塞も陥落した。アッディーンはそのまま首都へ突入した。
敵の姿を見たカジュール政府は肝を潰した。そして国民と彼等の身の安全の保障を条件に降伏を申し出てきた。
アッディーンはこれを快諾した。こうしてカジュール公国は僅か二十日でオムダーマンの前に滅びた。
この戦いの最大の功労者は当然アッディーンであった。彼は中将に任ぜられると共にこれまで彼が持っていた艦隊と旧カジュールの軍を新たに加えたカジュール駐留艦隊の司令官となった。
「これで遂に正式な艦隊の司令官になったな」
アジュラーンはモニター電話でアッディーンに対して祝辞を送った。
「はい。ですがミドハドとの戦いがまだ控えていますからね。喜んでいる暇はありません」
ミドハド政府はこの度の侵攻に対し激しい怒りを露わにしていた。そして再び軍を動員しようとしていたのである。

「その件だがまた君に働いてもらうことになりそうだ」
「こちらに攻めて来るのですか？」
「すこし違うな。今度は我が軍が攻めるのだ。悠長なことを言っていられる状況ではなくなってきたようなのだ」
「といいますと？」
アッディーンは問うた。
「うむ。今回の勝利で危惧を覚えたミドハドは水面下でサラーフと接触しているようなのだ」
「ほう、犬猿の仲の二国が」
両国の対立関係は昔からでありそれはオムダーマンとサラーフの関係よりも根が深かった。
「そうなのだ。我等の勢力伸張と敗戦の恨みを晴らす為にお互い手を組もうとしているらしい。そして我々を叩くつもりのようだ」
「よくある話であすね」
「そう言ってしまえばそれまでだがな。だが我が軍もそれに対して手をこまねいているわけにはいかない」
「そこでミドハドを徹底的に叩くと」
「そういうことだ。先んずれば人を制す、というしな」
これは古代中国の覇王項羽が言った言葉である。
「今回の作戦においてミドハドを完全に潰す。そして後顧の憂いを完全に絶つということで決まった」
「その為の兵は既に決まっているのですか？」
「まずは君の艦隊だ。そしてカッサラ方面から六個艦隊を向ける」
「といいますと閣下も？」
「私は今回の作戦には直接参加はしない。カッサラ星系の防衛が任務だ。サラーフの動きが気になるしな」
「成程」
当然といえば当然であった。
「今回君はカジュール方面からの侵攻を担当する。言わばカッサラからの主力とは別の陽動部隊だ」

「ですがかといって油断は出来ませんね。おそらく連中も必死ですから」
「そうだ、我が軍は今九個艦隊を持っている。そのうちの大部分を使う。それでも苦戦は必至かもな」
　対するミドハドは十個艦隊である。先日アジュラーンとアッディーンに敗北した二個艦隊はようやく再建されたばかりである。
「閣下の艦隊をカッサラ防衛に置き一個は予備ですか」
「そうだ。この戦いは戦力の劣勢を承知で行なうものだ。そして作戦成功は君の手にかかっている」
「私にですか？」
　アッディーンは思わず問うた。
「そうだ。まず君はカジュール方面から進出し迎撃してくる敵軍を撃破した後敵主力の後方に回ってくれ。そしてカッサラから侵攻する我が軍の主力の援護を頼む」
「こちらに向けられる敵の戦力はどれだけですか？」
「一個艦隊程だと思われる。今カジュール方面に向かっている敵艦隊があるらしい」
「そうですか。ではカッサラから攻める我が軍にはかなりの戦力を向けてくるでしょうね」
「おそらく七個か八個だろう。一個は首都防衛だからな」
「向こうには地の利もあります。これはかなりリスクの高い戦いですね」
「そうだ、しかし今やらねば我々にとってより危険な状況になる。それだけは避けなければならん」
「そうですね。では素早く作戦を進めるとしましょう」
「うむ、頼むぞ」
　こうして二人は電話を切った。それから暫くしてオムダーマンは軍を動かした。そしてカッサラ星系から六個艦隊、カジュールからアッディーン率いる艦隊をミドハド領内へ侵攻させた。こうしてオムダーマンとミドハドの決戦の幕が開いた。

先日行なわれた米中露の選挙においては連合軍への参加が争点であった。結果は参加賛成派が勝利を収め三国の軍は連合軍に参加することが決定した。
そして態度を決めかねていた他の国々もそれに賛成した。こうして連合の全ての国の軍隊は連合軍に編入されることとなったのである。
「これで中央政府は絶対的な力を手に入れたな」
白亜の宮殿の奥深くにある執務室から声が聞こえてきた。
「そうですね、おそらくこれまでとは比較にならない程の発言力を持つことになるでしょう」
豪奢な机の前に立つ若い男が目の前に座る人物に対して話していた。
「我が国の連合内での発言力の低下は避けられないかと」
「それは承知のうえだ。しかし連合軍に参加しなくては我々は孤立してしまうからな」
若い男に向かい合って座るその男は低い声で言った。
金髪碧眼の黒人である。背は座っていてもわかる程の長身である。肌は褐色だがその顔立ちは白人のものに近い。鼻が高く唇は薄い。彼の名をヘンリー＝マックリーフという。先の選挙でアメリカ合衆国の大統領に選ばれた人物である。
農業の盛んなことで知られる星系の中流家庭に生まれた。幼い頃から頭がよく大学では法律を学んだ。そして弁護士となり辣腕を振るった。それを当時の改革派政党の党首に見出され政治家となった。彼の下で副大統領を務めた後大統領選に出馬したがこの時は敗れた。しかし今回の選挙で勝利を収め大統領となった。行動力に溢れた人物として知られている。
「それに我々は軍を失ったわけではないぞ」
「国軍ですか」
「そうだ」

マックリーフは答えた。
国軍というのは中央軍とは別にそれぞれの国が持つことを認められた軍隊である。地球にあった頃のアメリカの州軍のような存在であり小規模ながらそれぞれの国の治安を守ることを目的として保有が認められている軍である。当然中央軍に比べて規模も装備も微々たるものでありいわば予備戦力である。
「ですがそんな大した存在ではないですね。ないよりましという程度で」
「確かにな。だがないよりはましだ」
マックリーフは無機質な調子で言った。
「しかし君は重要なことを見落としているな」
「といいますと！？」
若い男はその言葉に目をパチクリさせた。
「何も影響力は軍事力だけではないぞ。それを忘れてもらっては困る」
「はあ」
「軍事力だけでどうこうするのなぞ一千年以上前に終わっている。それは我々が最もよくわかっている筈だがな」
彼の言葉は正論であった。今の時代は衝突があった場合軍事力ではなく貿易や経済で手を打つことのほうが遥かに多いのだ。無論サハラのような地域もあるが連合内ではそれが主流であった。その調整の為に中央政府があり国同士の武力衝突は長い間絶えていたのである。
「それに議会がある」
中央議会には政党というものは存在しなかった。それぞれの国から選出された議員が祖国の権利を声高に主張する場となっていた。
「我々は何といっても中国と並ぶ最大議席を保有している。この意味は大きいぞ」
「確かにそうですが」
彼は口ごもった。

「まあ見ているのだ。軍事力など使わなくとも我々の力は保持出来る。私のやり方を見ているがいい」

彼はそう言うと自信に満ちた声で笑った。そして執務室を出て隣国の外相との会談に赴いた。

## 第一部第五章　電撃作戦その二

「キロモトと八条にしてやられたな」
中国の首都星京の中央にある大統領官邸。ここは地名の名をとり『長春城』とも呼ばれる。中国の政治の中心地として知られている。
そこの海が見える部屋に一人の年老いた男がいた。中国の大統領李金雲である。
少し白い髪にやや広めの額、顔は少し四角いが結構整っている。黒っぽいスーツに身を包んでいる。
彼は政治学者として名を知られていた。政治家に転身した時学者特有の空論ではないかと言われたが彼は実務も優れており、また現実主義者であった。そして激しい権力争いにも勝利し今回の選挙で大統領に選ばれたのである。親分肌で部下からの人望も厚い。
「はい。まさか中央軍を一気に作り上げるとは思いませんでした」
傍らに控える秘書官が言った。
「これも時代の流れか。だが我々の存在は誇示しておかなくてはな」
李は波を眺めながら言った。
「我々は連合において主導的な役割を果たしてきた、今までな。そしてこれからもだ。アメリカや日本に負けるわけにはいかない」
彼の目が鋭く光った。
「国軍もある。そして何よりも我々にはこの豊かな国がある」
中国の国力はアメリカ、日本と並んでいる。人口においてはアメリカと同じ位の数字である。
「これを使わぬ手はない。すぐに周辺国に手を回せ」
「ハッ！」
秘書官は頭を下げた。そして彼等はその部屋を後にした。
「アメリカと中国が動いているようです」
キロモトに下に彼等の動向に関する情報が入ってきた。

「やはりな。動くだろうとは思っていたが」
キロモトは執務室でそれを聞くと口の両端だけで微笑んだ。
「如何いたしましょう」
報告した官僚が問うた。
「こちらは今は動かなくともよい。少なくとも経済や貿易で動くのならこちらの望むところだ」
経済関係での調整は連合政府の最も重要な仕事である。従ってそれに関しては彼等も自信がある。そうでなくては今までこの連合という雑多で広大な国家をまがりなりにもまとめていたわけではない。
「ですが議会のことになると厄介ですな」
「それはな。だがそれもすぐに変わる」
「変わるといいますと？」
「すぐにわかるさ」
彼はそう言うと再び笑った。
それから暫くしてこれからの連合の在り方についてこれまでにない議論が起こるようになった。
一つはこのまま開拓地を開発していき何処までも進んでいくべきだと主張する派、もう一つは連合軍が設立されたのだしとりあえずは落ち着いて内部を固めるべきであると主張する派、その二つの派で議論が交あわされるようになったのである。
「これまではただ進んでいくだけだったしな」
街頭演説を聞いた市民の一人がポツリと言った。
まず開拓を主張する者達は保守派と呼ばれた。彼等はこれまで通りの連合であるべきだと主張していた。連合軍の設立で連合の中央集権を止め、あとは既存路線でいくべきだと主張した。
それに対して内部を固めるべきであると主張する者達は連合派と呼ばれた。彼等は今のところは開拓を控え連合内部の整備を行い中央の権限をより強化すべきであると主張した。
彼等の主張は連合全体を包んだ。そしてそれは先の連合軍設立の時よりも更に大きなうねりとなっていったのである。

「さて、面白くなってきたな」
キロモトは新聞でその話を読みながら言った。
「連合の国を越えた話になっている。違う国の人間の間でも議論になっているな」
「はい、彼等は選挙においてもそれを争点としているようです」
「ほう、選挙においてもか」
「そうです。今やそれぞれ二つの派に分かれて議論をしているところです」
「ふむ、政党が出来るかも知れんな」
キロモトはそう言ってニヤリ、と笑った。
「政党、ですか」
「そうだ。今までこの連合では中心にはなかったものだ」
連合においては各国にはそれぞれ政党が存在していたが中央にはなかった。これも連合の強い地域性の特色であった。
「だがそれが出来るとなるとどうなる」
「連合の中の目が中央により一層集まりますね」
秘書官は言った。
「そうだ。我々もようやく力を持つ中央政府を持つ事が出来るのだ」
「エウロパのようにですか？」
「ふむ、エウロパか」
キロモトは秘書官の言葉に対し思わせぶりに笑った。
「少し違うな。我々はあそこまで中央が強くなる必要はない」
エウロパにも各国政府があるが元首だけがいる事実上の象徴であり連合のようにそれぞれが強い権限を持っているわけではない。
「エウロパはエウロパ、我々は我々だ。意識する必要もないだろう」
「そうですか」
「ただし、ある程度は参考にすべきかも知れんがな」
やがて朝食を知らせるベルが鳴った。キロモトは秘書官と共食事に向かった。

連合のこの動きはエウロパにも伝わっていた。ラフネールはそれを執務室で聞いた。
「彼等が中央に政党を持つようになるとはな」
彼はそれを聞くと静かな声で言った。
「まだそうなると決まったわけでは・・・・・・」
それを伝えた補佐官は少し眉に陰を落としていた。
「いや、これは時代の流れだ。彼等は必ずや中央に政党を持つようになるだろう」
「そうなるでしょうか」
「なる。時代の流れだけでなく強力な指導者も出てきているしな」
「この二人ですね」
補佐官はそう言うと持っていたファイルから二枚の写真を取り出した。
それは二人の人物のそれぞれの顔写真であった。一人は若い白人の女である。白人といっても何処かポリネシア系が混ざっている。髪は茶色がかった金色であり瞳は黒い。
もう一人はアジア系の男である。肌は黒めであり全体的にやや四角く眼鏡をかけている。その目は知的な光をたたえている。
「平面写真とはまた古風だな」
ラフネールはその写真を見て苦笑いを浮かべた。
「申し訳ありません」
補佐官は頭を垂れた。
「謝る必要はない。こういった写真はこちらのほうが見易いしな」
彼はそう言うと写真を受け取った。
「こちらの女性がキリ＝ト＝マウイか」
「はい、ニュージーランド出身の保守政治家です」
「保守系か。一体どういう経歴かね」
「はい、ニュージーランドの法学校を卒業後とあるベンチャー企業を経営していましたがそこで政治家の夫と知り合い結婚、そして彼に影響を受け政界に入ったのです」

「だが彼女は連合議会の議員になったのだね。夫はニュージーランドの議員だったのに」
「それが彼女の一風変わったところです。どうも中央議会に理想を求めたようです」
「あの中央議会にか。確かに変わっているな」
連合の中央議会といえば大国の利害の衝突の場である。それはエウロパにおいてもよく知られていた。
「法学校を卒業してすぐにベンチャー企業の経営を始める程ですからね。そして彼女は今は保守派の指導的な役割を任ずるようになっております」
「どういう経緯でだね？」
ラフネールは再び尋ねた。
「あの連合軍の設立以降連合の在り方について議論が起こっておりまして」
「それは知っている」
「その中でとある総合雑誌に論文を発表したのです。連合はどうあるべきかという論題で」
「そして彼女はこのままでよい、と主張したのだね」
「そうです。そしてそれに反論したのが」
「このランティール＝モハマドだね」
ラフネールはここでもう一枚の写真に映る男を見た。
「彼はマレーシアの首相だったな」
「はい、ついこの前まで」
「かなりのやり手だったと聞くがな。あのアメリカや中国に対して一歩も引かなかったとか」
「連合一の寝業師とも呼ばれていましたな。日本に対して良いことを言いながらも牽制を忘れなかったりと」
「まあそうでなくてはあの連中を相手にはできないな」
アメリカや中国、日本とマレーシアの国力差はかなりのものである。

「連合軍の参加にも最後まで最も強硬に反対していたそうじゃないか」
連合軍の参加には反対していたのはアメリカや中国、ロシアだけではなかったのである。マレーシアは反対する国々の中でも特に連合軍の設立及び参加に強い反対の意見を主張し続けていた。
「それも外交上のテクニックだったというわけか」
「そうです。それで自国の意見と存在を連合の各国に誇示したのです」
「煮ても焼いても食えないな。そんな男は今まで聞いたことがない」
「イギリスには結構いそうですがな」
ラフネールもこの補佐官もフランス出身である。両国の微妙な関係は今だに続いている。
「フフフ、確かにな。まあ我がフランスも言えた義理ではないが」
フランスもそうだ、とよく言われる。しかもお高く止まっている、と。
「それは根拠のない誹謗中傷に過ぎませんがね」
「君も言うな、大人しい顔をして」
「これこそフランス流です」
補佐官はそう言うとニコリ、と笑った。
「さて、そして彼はマレーシアの首相を退いたんだな」
「はい、連合軍参加と共に」
これが連合軍設立の最後の決め手となったのである。
「そして今何故改革派のリーダーになっているのかね？」
これはラフネールにとっても少し妙なことであった。
「マウイの主張に早速反論してきたのです。その考えは連合の動きを停滞させるものである、と」
「わからんな。彼は連合軍にも反対していたのだろう」
「それがポーズに過ぎないということはおわかりだと思いますが」
「・・・・・・確かにな」
微笑んだ。ラフネールも伊達にエウロパの総統ではない。この程

度のことは見抜くことが出来る。
「そして彼は改革派の指導者となった、ということか」
「はい」
「しかし連合も相変わらず妙なところだな」
「といいますと！？」
補佐官はラフネールの言葉に首を伸ばした。
「うむ、開拓を更に推し進めていくべきと主張しているのが保守派で中央の権限を強め内部をまず整えるべきだと主張しているのが改革派とはな。普通は逆のことが多いのだがな」
「そういうものですね、政治とは」
補佐官は少し感嘆したように言った。
「保守と革新の差なんてそんなものでしょう。どちらが善でどちらが悪とは政治の世界では絶対に言えませんしね」
「言ったらそれこそフランス革命か二十世紀の全体主義だな」
「はい」
フランス革命のジャコバン派やナチス、ソ連といった存在は人類にとって魔女狩りと並ぶ忌まわしい流血の歴史として伝えられていた。
「例えば、だ」
ラフネールは一言断ってから補佐官に話しはじめた。

## 第一部第五章　電撃作戦その三

「革新派を絶対の正義としよう。ならば保守派は絶対の悪となる。そして保守派は一人残らず抹殺され革新派の悪行は正義の名の下に覆い隠されてしまう」
「ぞっとする話ですね」
「今でも市民団体はそうした傾向があるな。エウロパはまだいいが連合の市民団体の中には海賊や犯罪組織と結託している連中もまだいるそうだな」
「それは聞いております」
連合の社会問題の一つである。
「我々のところにも多少はいるがな。だが連合程多くはない」
「連中のところには海賊等が多いですからな」
「その海賊だが連合内ではかなり減ったようだな」
ラフネールは海賊に話を移した。
「はい。特に近頃は連合軍に投降する者が相次いでいるようです」
「そして投降した彼等を軍に組み入れているらしいな。おかげでその数はかなりのものになったというが」
「そうですね。彼等には軍律から教えているそうですが」
新しく出来た連合軍の風紀は厳しい。特に一般市民への行動に関しては厳罰を以って処される。
「またそれは気の長い話だな。我々ならば問答無用で最前線に送り込むがな」
実際にサハラの国ではそうしている国もある。
「そうもいかないのでしょう。連合はこと人権に関しては我々より五月蝿いですから」
それが海賊と結託する市民団体の存在を許してきた。
「そうだな。つくづくエウロパに生まれてよかった」
ラフネールは祖国への愛と連合への侮蔑を交えた笑みを浮かべた。

「エウロパ程の規模の国が一番ことをやり易い。連合程大きくては小回りが利かない」
「連合の連中は我々を一飲みに出来ると言っておるようですが」
「そう言って千年以上経っている。そうこうしている間に我々はサハラを完全に我がものにし奴等に正面から対抗する力を手に入れてやる」
「その時こそ我等がもう一度人類の頂点に立つ時」
「そうだ、欧州の黄金時代の再現だ」
彼等は強い口調で言った。そして話を続けた。

サハラ西方でオムダーマンがミドハドに対して大規模な攻勢に出たという情報はサハラ北方のエウロパ総督府にも伝わっていた。
「最近オムダーマンは何かと忙しいな」
艦隊司令の一人ヴォルフガング＝クライストが隣にいる男に対して言った。
長身である。全体的に筋肉質であり陸上競技の選手を思わせる身体つきである。蜂蜜色の髪に青灰色の瞳を持っている。顔はやや童顔で年齢より若く見える。二十代に見えるが実は三十代で妻も子供もいる。用兵の迅速さには定評のある人物である。
「ああ。何でも一人凄い奴が出てきたそうだぞ」
クライストに声をかけられた黒い髪に瞳の男が答えた。
豊かな髪である。そしてその瞳は琥珀の様に輝いている。クライストに比べてやや小柄ながら均整のとれた身体をしている。その顔立ちは彫りが深く美男子と言ってよいものである。彼もまた艦隊司令の一人でルチアーノ＝ステファーノという。勇猛果敢な人物として知られている。
「アクバル＝アッディーンか？確かまだ二十代という話だが」
「ああ。だがその作戦指揮はかなりのものだという。カッサラ星系の戦いは聞いているな」
「オムダーマンが敗北の一歩手前から盛り返した戦いだな」

「そうだ、その盛り返すもとを作ったのがそのアッディーンという男だ」
「ほお、巡洋艦一隻で敵の正面に行きその進撃を止めたのはその男だったか」
クライストは眉を上げた。
「そうだ、それから瞬く間に昇進し今や中将だ。そして今度はミドハド侵攻に参加するらしい」
「ほう、ミドハドにもか」
「そう、先に併合したカジャールから攻める艦隊の司令官だそうだ」
「カジャールか。あの進撃は見事だったな」
クライストは感嘆の言葉を漏らした。
「二つの要塞を抜き首都を電撃的に陥としたからな。あれば見事だった」
「そして今度はミドハドとの決戦か。これは楽しみだな」
「うむ」
そして二人はそれぞれの艦隊の司令部に戻っていった。
モンサルヴァートは司令室で一人書類に整理にあたっていた。艦隊司令ともなればその決裁をあおぐ書類も膨大なものとなる。
「ふう」
彼は一枚の書類にサインをし終え嘆息をついた。
「どうもこういう仕事は好きにはなれないな」
彼はデスクワークはあまり好きではない。
「司令、仕事は終わりましたか？」
そこにエウロパの軍服に身を包んだ一人の青年が入ってきた。
「貴官か」
モンサルヴァートはその若者の姿を認めて言った。
「もうすぐ終わるところだ」
「それは何よりです」
若者は微笑んでそう言った。
「しかしな」

モンサルヴァートは顔を顰めて言った。
「こうしたデスクワークは私より貴官の方が得意だと思うのだがな」
「まあ私はそれが専門ですからね」
彼は笑顔のままで言った。
彼は後方参謀である。階級は大佐、二十代にしてこの地位にあるのは彼がこのサハラ北部で果たしてきた多大な貢献による。
彼の名はプラシド＝ベルガンサ。士官学校を優秀な成績で卒業し軍に入った。赤い髪と蒼い瞳で有名な美男子である。
彼の能力は補給の運営及び管理にあった。それによりサハラにおけるエウロパの軍事行動はこれまで以上に迅速かつ的確に動けるようになっていたのだ。
彼はその時に何がどれだけいるか、常に的確に把握しちえた。そしてそれに合わせて補給を行なう。その為のシステムも整備していたのだ。
『サハラのエウロパ軍はベルガンサにより支えられている』
とも評される。彼はこの地のエウロパ軍にとって欠かせぬ存在であった。
「しかし私の仕事はもう終わってますよ。あとは閣下のぶんだけです」
「さらりと言ってくれるな」
彼は苦虫を噛み潰した顔をした。
「私とて自分のやらなければならない仕事はわかっている。だがやはり好き嫌いはある」
「好き嫌いなど言えないのではないですか？」
ベルガンサは笑みをたたえたまま言った。
「閣下の双肩には多くの者の命がかかっているのですから」
「確かにな」
モンサルヴァートはその言葉に頷いた。
「仕事の好き嫌いなど言える身分ではないか」
「厳しいことを言えばそうですね」

「はっきりと言ってくれたな」
「閣下は的確かつ迅速なことを尊ばれるので」
「そうだが」
しかしにこやかな顔をして言いにくいことを言う、モンサルヴァートはそう思った。
「それにしても今日は書類がやけに多いな」
「先の戦いのぶんがありますからね」
「そして次の作戦のぶんもか？」
「そうです」
「・・・・・・やれやれ」
モンサルヴァートは嘆息をついた。
「だがこの苦労も勝利によって報われるようにしたいな」
「同感です」
「それには君の協力が必要だ」
モンサルヴァートはベルガンサを見て言った。
「そして閣下の健闘も」
「それは任せておいてくれ」
彼はそう言うとこの日はじめて笑った。そして彼に話した。
「ところでサハラの西が最近何かと騒がしいな」
「はい。オムダーマンが勢力を伸ばしていますね」
「今まではそんなに大きな勢力ではなかったがな」
「サハラの西方で第三勢力でしたね」
「うむ」
東方は別にしてサハラは多くの勢力に分かれている。その中でオムダーマンは大きい方であったがそれでもエウロパから見れば小勢力に過ぎない。
「今のところは特に警戒する必要もないだろうな」
「はい、例えミドハドに勝てたとしてもサラーフもありますし」
「そうだな、それにミドハドとの戦いが長引けばサラーフも動くだろう」

エウロパとサラーフは直接国境を接しているわけではない。間に数ヶ国存在する。だがサラーフの存在は意識している。
「まあ今は様子見ということですか」
ベルガンサは言った。
「そうだな。ただ」
モンサルヴァートはここで考える目をした。
「あのアッディーンという男だが」
「はい」
「興味があるな。これからの戦いでどうなるかはわからんが」
彼は言葉を続けた。
「はい、もしかするとサハラを大きく変えるかも知れませんね」
「それは我々にとっては不都合だがな」
モンサルヴァートは笑ってそう言った。なおベルガンサの言葉は近い将来に的中することになる。だがこの時神ならぬ二人はそのことを知るよしもなかったのである。

オムダーマン軍はミドハド領内に侵攻していた。主力である五個艦隊はカッサラ星系から進撃しアッディーン率いる艦隊はカジュール星系から進撃していた。
「来たか」
その報告はミドハド政府にもすぐさま伝わった。ハルドゥーンはそれを聞き静かに言った。
「どうしますか？」
「決まっている、迎え撃つ」
官僚の言葉に答えた。
「すぐにカッサラ方面に六個艦隊を向けよ。ビスクラ星系で迎え撃て」
「ハッ」
ビスクラ星系はミドハドの地理上において最も重要な地である。この星系からミドハドの首都ハルツームにまでほぼ一直線に行くこ

とも出来、各星系に睨みを利かすことも出来る。この地を押さえられることはミドハドにとっても危機を意味する。
「カジュールから来る敵に対しては如何致しましょう」
「カジュールからか」
先のカジュール侵攻はオムダーマンのあまりにも迅速な動きの前に手を打てなかった。その為今二方向から攻められる事態に陥っているのだ。今度は何としても防がなければならない。
「あちらには二個艦隊を向けよ」
「二個ですか？」
「そうだ」
ハルドゥーンは答えた。
「まずカジュール方面を叩いたならばすぐにビスクラに向かうよう指示しろ。そしてあの地でオムダーマン軍を倒す」
「わかりました」
官僚はその言葉に対し頷いた。
「一個艦隊は予備戦力としてビスクラ後方に置いておけ。そして残る艦隊は首都の防衛だ」
「わかりました」
「数では負けてはいない。落ち着いて対処すればどうということはない」
「そうですね」
実はこの官僚は侵攻にいささか動揺していた。しかし彼の言葉により落ち着きを取り戻した。
「ではすぐに各艦隊に伝えよ。そして吉報を待っている、とな」
「わかりました」
官僚はそう言うとその場をあとにした。ハルドゥーンは部屋に一人となった。
「さて、と」
彼は厳しい顔になった。
「上手くやってくれればいいが」

彼は壁に映るホノグラフィーの地図を見ながら呟いた。実は彼は軍事のことにはあまり明るくはないのである。

オムダーマンとミドハドの戦いははじまった。今は両軍共互いに兵を進める段階であった。

# 第一部第六章　疾風怒涛その一

疾風怒涛

アッディーン率いる艦隊はカジュール方面から進撃していた。今のところ敵艦隊の情報はなく進撃はすみやかなものであった。

「敵の情報はまだないか」

アッディーンは艦橋にて問うた。

「はい、今のところは」

艦隊の主席参謀であるラシーク中佐が答えた。切れ長の瞳を持つまだ二十代後半の若い将校である。彼はこの作戦の直前にこの艦隊に配属されたばかりである。若いながらも優れた洞察力を持つことで知られている。

「おそらくこちらに来ていると思われますが」

「だろうな。我々を放っておくとは思えないしな」

アッディーンはそう言うとモニターにミドハドの地図を映させた。それはホノグラフィーで浮かんでいる。

この地図はカジュールで手に入れたものである。今はオムダーマン軍全てに行き渡っている。この地図が今回の作戦の計画及び立案に多大な貢献を果たしたことは言うまでもない。

「そうだな」

アッディーンはその地図を見ながら言った。

「おそらく敵艦隊と遭遇するのはサルチェス星系になるだろうな」

サルチェス星系はビスクラから二つ向こうの星系である。小惑星や衛星が多い。

「サルチェスですか」

「ああ」

アッディーンはラシークに対し答えた。

「おそらくそこで遭遇する。規模は・・・・・・多分こちらより多

いな」
「でしょうね」
これはラシークも察していた。
「おそらく二個艦隊程か」
それは見事に的中していた。
「分艦隊の司令官達を集めてくれ」
彼は側にいるガルシャースプに対して言った。
「了解しました」
ガルシャースプはその言葉に対して敬礼した。そしてすぐに各分艦隊の司令達が旗艦アリーに集められた。
「よく来てくれた」
アッディーンはいささか形式的ながら彼等に挨拶をした。
この艦隊には四人の分艦隊司令がいた。数字により四つの分艦隊に分けられている。
第一はスライマン＝アタチュルク、濃い顎鬚を生やした筋骨隆々の大男である。古くから艦に乗り込む歴戦の武人である。
第二はハルーン＝ムーア。痩せた顔付きの男で切れ者として知られている。
第三はユースフ＝コリームア。やや小柄ながら筋肉質である。用兵の速さで知られる。
第四はバイバルス＝ニアメ。整った口髭を持つ美男子である。若き名将と謳われる。
この四人がアッディーンの艦隊の分艦隊司令である。皆アッディーンがその目で見て自分の艦隊に入れたオムダーマンでも名の知られた者達である。
彼等はアッディーンに対して敬礼した。アッディーンはそれに敬礼で返すと話しはじめた。
「ミドハドの動きだが」
分艦隊の司令達も幕僚達も黙って聞いている。
「今はバルガ星系にいるそうだな」

「ハッ」
情報参謀が頷いた。そこは今彼等がいる宙域から少し離れている。
「だが敵は今我等を倒さんと躍起になっている。敵軍に領内を進まれるの程軍人にとって忌まわしいものはないからな」
彼は珍しく落ち着いた声で言った。
「今我等は攻めている。これは攻撃地点を自由に決められるということだ」
今更のような話であった。それは戦争においての常識であった。
「そこで私は今回敵を誘き出すことにした」
「何処にですか？」
アタチュルクが問うた。低く重い声である。
「サルチェス星系だ。あの場所で敵軍を倒す」
彼は強い声でそう言い切った。
「敵はおそらく我等より多いだろう。だがそこで彼等を殲滅する。そして我が軍の主力の援護に向かう」
「簡単に言ってくれますね」
それを聞いてムーアが苦笑しながら言った。
「こちらより数が多く、しかも敵地において敵を殲滅してですか。そうそう上手くいきなすかね」
「いく。必ずな」
アッディーンはそれに対して自信に満ちた声で言った。
「その為の私の考えを今から諸君等に言いたい」
そして彼は再び話しはじめた。
「まず兵を二手に分ける」
「兵力が劣勢なのにですか？」
これには皆驚いた。
「話は最後まで聞くようにな。まずはサルチェスには主力部隊が向かう。これは私が率いる」
彼は皆を宥めてから再び言った。
「主力は一万だ。これはそのままサルチェスに入り布陣する」

「そしてもう一つの部隊はどうするのですか？」
コリームアが問うた。
「そこだ。サルチェス星系の後方には大規模な補給基地があるのは知っているな」
「はい」
これは地図にもある。ミドハドにおいてもかなり大きな補給基地である。
「敵がサルチェスに入ったならすぐに別働隊はここに襲撃を仕掛ける。そうすれば敵は進退が窮まる」
「そして戦場に誘き出すということですね」
ラシークが尋ねた。
「そうだ。そして別働隊は主力部隊と敵軍を挟撃する。それが今回の私の作戦だ」
「戦場は何処なのですか？」
「それだ」
アッディーンはアタチュルクの質問に頬を緩ませて答えた。
「この場所を考えている」
彼はそう言うとサルチェスの第五惑星を指し示した。
そこは巨大な惑星であった。周辺にリングを形成している。これは太陽系にある土星と同じものだ。こうした惑星を土星型惑星と呼ぶ。
「このリングの外側に布陣する。恒星サルチェスを右に見てな」
「問題は敵が何処から来るか、ですね」
「前から来る」
アッディーンはムーアに対して答えた。
「今敵はバルガ星系にいる。そこは今この惑星とは一直線に正対している形になっている」
「敵はまっすぐにこちらに向かって来ると考えて折られるのですな」
「そうだ。兵力は敵の方が多い。ならば数を頼りに攻めてくる筈だ」
彼はニアメに対し自信に満ちた声で言った。

「そして敵がこの星系に入ったところで補給基地を叩くのだ」
その基地は第八惑星の衛星の中にある。今はバルガ星系から見て右手に位置している。
「敵が補給基地の辺りを通過したところで別働隊はその基地を攻撃する。そうすれば敵は選択の余地がなくなる」
「しかしそれならば別働隊を叩きに反転してきませんか？」
アタチュルクが問うた。
「するだろうな」
アッディーンは答えた。
「その時は別働隊はすぐに撤退してくれ。無理をする必要はない。それにそれが狙いなのだからな」
「狙い、ですか」
一同はその言葉に目を光らせた。
「そうだ。おそらく兵を分散させてくる。主力部隊はその分散された敵をまず叩く」
「それから基地の方にやってきた部隊を攻撃するのですね」
「そういうことだ。各個撃破していく」
彼は皆に対し答えた。
「そしてすぐに友軍の援護に向かう。そして今回の戦いでミドハドを滅ぼすぞ！」
「ハッ！」
一同はその言葉に対し敬礼した。そして各自それぞれの持ち場に戻っていった。
数日後アッディーンの艦隊はサルチェス星系に入った。そして予定通り主力部隊を第五惑星のリングの外側に布陣させた。やがてミドハド艦隊がサルチェスにやって来たとの報告が偵察隊から入ってきた。
「来たな」
アッディーンはそれを聞いて微笑んだ。
「アタチュルク少将とコリームア少将は今どうしている」

別働隊はこの二人が率いることとなっていた。彼等の用兵の迅速さを買ってである。
「今第六惑星の辺りです」
ガルシャースプが答えた。
「そうか、予定通りだな」
アッディーンはそれを聞いて言った。
「それならば問題はない。あとはあの二人に任せよう」
「了解しました」
ガルシャースプはその言葉に敬礼した。
「我々は作戦の準備だ。分かれた敵を一気に叩くぞ」
そして彼は全軍に戦闘用意を命じた。
ミドハド軍はアッディーンの予想通り第五惑星付近にオムダーマン軍がいると知ると全軍をもってそちらに向かってきた。二個艦隊で数はやはりアッディーンの軍より多い。
「よし、このまま叩き潰すぞ」
その二個の艦隊のうち一個の艦隊の司令が言った。
「敵は劣勢だ。すぐにけりをつけて主力部隊に合流する」
彼は艦橋で部下達に対して言った。
「そしてオムダーマンの奴等をこのミドハドから追い出す。返り討ちにするのだ」
艦隊はそのまま第八惑星付近を通過した。それはオムダーマンの別働隊からも確認された。
「敵軍通過しました」
アタチュルクはそれを乗艦の艦橋において聞いていた。
「そうか」
彼はそれに対し頷くと航宙長に対し言った。
「予定通り進め」
「わかりました」
航宙長は頷いた。そして艦隊は進路をその基地に向けた。
ミドハド軍は第五惑星から一日の距離に達した。オムダーマンの

艦隊の位置も確認した。
「明日は総攻撃だな」
二人の司令は旗艦の司令室において食事を摂りながら話していた。
「うむ。敵将はアッディーン中将だったな」
彼の名はミドハドにおいてもよく知られていた。苦杯を嘗めさせられているから当然である。
「ああ。これで奴も終わりだ」
二人のうち髭を生やした方が杯を傾けながら言った。
「今度という今度は奴の首を獲る」
「そして武勲は我等のものだ」
二人がそれぞれの艦橋に戻った時だった。急報が舞い込んできた。
「何事だ！？」
それに対するオペレーターの声はひどく狼狽したものであった。
「大変です、補給基地が敵軍の襲撃を受けております！」
「何っ！」
どうやらオムダーマンは別働隊を動かしていたらしい。彼等はそれをすぐに理解した。
そして部隊を二つに分けた。基地を襲撃している。敵の規模はわからないので半分を向かわせた。
「予想通りだな」
その動きはアッディーンからも確認された。
「はい、どうやらかなり狼狽しているようですね」
傍らにいるラシークが言った。モニターには二手に別れる敵部隊の姿がはっきりと映し出されている。
「これで勝利は我等のものだ。明日は総攻撃を仕掛けるぞ！」
「ハッ！」
翌日アッディーンの言葉通り敵軍に対し総攻撃が仕掛けられた。

## 第一部第六章　疾風怒涛その二

「ムッ、怯むな！」
数のうえでは互角である。敵艦隊の司令官は自軍を叱咤激励して戦わせる。彼は後方で指揮を執っていた。
「攻撃を一点に集中させよ！」
アッディーンは敵の動きの軸に攻撃を集中させた。全ての艦の攻撃がその地点に集まる。
幾千もの光の束がその地点にいる敵軍を撃った。そしてそこに巨大な穴が開いた。
「よし、突撃だっ！」
そしてその穴の中に突入する。彼は旗艦アリーを真っ先に突入させた。
指揮官のこの行動に全軍奮い立った。皆それに続き敵軍に雪崩れ込んだ。
「いかん、防御を固めよ！」
それに対し敵の司令は必死に体勢を整えようとする。
「空母だ、空母を出せ！」
それに従い本来は決戦用であった空母部隊がそこへ向かう。だが遅かった。
「空母を狙え！」
アッディーンの指示が下る。敵陣に踊りこんだ全艦は空母に襲い掛かった。
ミドハド軍の空母の攻撃射程は短い。防御も薄い。それはより多くの航宙機を搭載する為である。それが仇となった。
オムダーマン軍の砲撃が次々に炸裂する。ミドハド軍の空母はそれに耐え切れず爆発していった。
「司令、空母部隊が！」
参謀が叫ぶ。だがどうにもならない。空母はその数を瞬く間に減

らし最早部隊といえる数ではなくなっていた。
突入した部隊がそのまま突き抜ける。そこに前面にいた部隊が広範囲に一斉射撃を仕掛ける。
内部を掻き回され混乱状態に陥っていたミドハド軍にこれに対する力はなかった。その砲撃で大きく数を減らした。無数の白い光が銀河を照らしそして消えていく。
そこに再び艦隊が突入する。今度は司令部に突撃する。
「旗艦を狙えっ！」
アッディーンの腕が振り下ろされる。それに従いオムダーマン軍はミサイルを放った。
そのミサイルが餓狼のように襲い掛かる。ミドハド軍の艦艇はそれを必死に逃れようとする。
「全艦退避行動に移れ！」
だが間に合わない。忽ち数艦にミサイルが命中する。そして真っ二つに別れ銀河に消えていく。
そして旗艦にも命中した。艦橋に衝撃が走る。
「総員退艦！」
司令の指示が下る。
「閣下もご一緒に！」
部下達が司令にも艦を脱出するよう言う。だが彼はそれに対し首を横に振った。
「私はいい。あと副司令はいるか」
「はい」
副司令が前に出てきた。彼はこれから退艦するところであったのだ。
「指揮権を君に移譲する。そして全艦に伝えてくれ」
「はい」
「降伏せよ、と」
「わかりました」
数分後ミドハド軍の旗艦は爆発した。そしてミドハド軍は降伏を

伝えてきた。
「どうされますか？」
ガルシャースプは艦橋においてアッディーンに対して問うた。
「決まっている」
アッディーンはそれに対して微笑んで答えた。
「サハラの戦士は白旗に対しては攻撃しない。快く受諾する」
「わかりました」
こうしてこの宙域での戦いは終わった。ミドハド軍は武装解除されオムダーマン軍の監視下に置かれることとなった。
その監視に一部の兵を置くとアッディーンはさらに進撃を命令した。今度は残るもう一方の艦隊に対してである。
「このままの勢いで一気に叩き潰すぞ！」
彼は全軍に伝えた。そしてそれに従い軍が動く。
艦隊は補給基地に向かった。敵艦隊は陽動でそちらに向かった。ならばそこにいると考えられたからだ。
「敵艦隊は発見したか」
アッディーンは進撃しながら艦橋で情報参謀に対して問うた。
「はい、今偵察艦より報告がありました」
参謀は答えた。
「どうだ？」
「はい、今ここよりすぐの場所におります。進路は補給基地側です。そして我等の存在には気付いていない模様です」
「そうか。好都合だな」
アッディーンはそれを聞くと不敵に笑った。
「アタチュルク提督とコリームア提督に連絡はとれるか」
「はい」
「そうか。ならば伝えてくれ。すぐにミドハド軍の攻撃に向かってくれとな。敵の側面を衝くように」
「了解しました」
そして艦隊はさらに動きを進めた。やがて敵艦隊が見えてきた。

「まだこちらには気付いていないようですね」
ガルシャースプはモニターを見ながら言った。
「ああ、好都合だな」
アッディーンもそれを見て言った。
「よし、全艦砲門を開け、まずは一斉射撃だ！」
全艦それに従い砲門を開いた。そして距離を詰める。
「全艦射程に入りました」
参謀の一人が伝える。
「よし、撃て！」
アッディーンの右腕が振り下ろされた。それと同時に光の帯が集まり壁となり放たれる。
それは敵艦隊の背を強烈に叩いた。瞬く間に敵はその数を大きく減らした。
「閣下、敵です！」
「何っ、第五惑星のところにいたのではなかったのか！」
彼は敵の思わぬ襲撃に思わず叫んだ。
「どうやら我が軍を破ったようです、そうとしか思えません！」
「クッ、アッディーンめ・・・・・・」
彼はその言葉に歯噛みした。
「すぐに攻撃に移れ、全艦反転！」
反転しすぐに攻撃に移ろうとする。だが反転する時に隙が生じた。そしてそれを見逃すアッディーンではなかった。
「フン、隙だらけだ！」
彼はそこにさらに攻撃を命じた。反転行動中で攻撃の出来ない敵艦隊にさらにビームが襲い掛かる。
そして再び光の壁が打ちつけられる。それはミドハド軍にとっては死神の壁であった。
それが終わるとアッディーンは全艦に突撃を命じる。そこに敵の横から新たな部隊が姿を現わした。
「右に敵艦隊！」

「クッ、補給基地を襲っていた連中か！」
司令は舌打ちした。彼等はそのままミドハド軍の横っ腹に食いつかんと迫り来る。
「よし、全艦我に続け！」
その艦隊の先頭を行くコリームアが叫んだ。彼は真っ先に敵の部隊の中に踊り込んだ。
「コリームア提督の部隊を援護せよ。全艦砲門を敵に向けよ！」
アタチュルクは友軍を援護するように言った。そして彼の部下達はそれに従いコリームアの艦隊が突入するところに砲撃を浴びせた。
後方と側面、両方から突撃を受けたミドハド軍は壊滅状態に陥っていた。最早それは戦闘と言えるものではなかった。
撃沈される艦、降伏する艦が相次いだ。しかしその中でも果敢に戦う者達もいた。
「まだだ、まだ負けたわけではない！」
突入するオムダーマン軍の前にいる一隻の戦艦の艦長が叫んでいる。
「敵の攻撃に耐えよ、そして反撃の時を窺うのだ！」
彼は部下達に命令する。砂色の髪に鳶色の瞳を持つ均整のとれた身体つきの人物だ。顔は美男子といってもよいだろう。
「アガヌ艦長、司令からのご命令です！」
オペレーターが叫んだ。
「何だ！？」
彼は名前を呼ばれそれに顔を向けた。
「全艦退却せよ、とのことです」
「そうか」
彼はそれに対し少し消沈した声で応えた。
「ことここに至っては止むを得んな」
「損傷の激しい艦から戦場を離脱するように、無傷の艦はその退却の援護をするように、とのことです」
「了解した。ならば一人でも多くの友軍を助けるぞ！」

「ハッ！」
部下達はその言葉に対し敬礼した。
ミドハド軍は撤退を開始した。まずは損傷の激しい艦から戦場を離脱していく。
「逃がすな、一兵残らず撃破せよ！」
オムダーマン軍はそれを追おうとするが出来ない。ミドハド軍の防衛は思ったより固かった。
「特にあの戦艦の動きがいいな」
ニアメは前線で友軍のフォローをしながら戦う一隻の戦艦を指差して言った。
「はい、敵ながら見事です」
彼の副官もそれを見て言った。
「あの艦の艦長は誰だ」
それはミドハド軍の司令からも見えていた。
「フラーグ＝アガヌ大佐です」
参謀の一人が答えた。
「そうか、アガヌ大佐か」
彼はその名を聞いて頷いた。
「この戦いで生き残ることが出来れば名のある人物になるだろうな。見事な動きだ」
彼の乗る旗艦も戦場を離脱した。そしてミドハド軍は戦場から完全に撤退した。
サルチェス星系における戦いは終わった。参加兵力はオムダーマン軍が約一五〇万、ミドハド軍が約二二〇万、損害はオムダーマン軍が十万に達しなかったのに対してミドハド軍の死傷者は六十万を越えた。そして多数の捕虜を出しサルチェス星系をオムダーマン軍に明け渡す結果となった。
「敵は何処に撤退した」
アッディーンはガルシャースプに尋ねた。
「ケルマーン星系に向けて撤退しているようです」

「そうか、ケルマーンか」
彼はそれを聞いて頷いた。ケルマーンはサルチェスから見て北西、斜め下にある。前方にはミドハドの要地であり今回の侵攻において両軍の主力が激突すると考えられるジャースク星系が控える。
「あの地に逃げ込んだということは」
「おそらく予備戦力になるか、若しくは敵主力と合流するつもりであると思われますね」
「そうだな。では我々のとる方法は一つだ」
「はい」
ガルシャースプはアッディーンの言葉に頷いた。
「ここに最低限の治安維持の為の兵力だけ置きそれ以外はすぐにケルマーン星系に向かうぞ。全軍進撃だ！」
「ハッ！」
こうしてアッディーンの艦隊は再び進撃を開始した。そして幾多の星が彼等の動きを見守っていた。

# 第一部第七章　壁と鉄槌その一

## 壁と鉄槌

「オムダーマンとミドハドの戦局はどうなっているか？」
モンサルヴァートは近頃そのことばかり考えていた。
「ハッ、サルチェス星系がオムダーマンの手に落ちました」
ベルガンサが答えた。
「そうか。速いな」
彼はそれを聞いて顎に左の指を当てて言った。
「あの方面は確かアッディーン中将が受け持っていたな」
「はい」
「あの男、戦えば必ず勝っている」
「今のところは」
ベルガンサは少しシニカルな声で言った。
「勝敗は戦争の常です。何時までも勝ち続けることは出来ません。何時かは負けるものなのです」
「そうだな。カール流星王もそうだったしナポレオンもそうだった」
「彼等は戦争に頼り過ぎましたから」
「戦争は政治の一手段に過ぎない、ということか」
「そうです、本来は物事の解決を図るにあたり戦争はその一つに過ぎません」
「それに頼り過ぎるのは危険ということか」
モンサルヴァートは考える目をして言った。ベルガンサの言葉は十九世紀より欧州において常に言われていたことである。
「そうです。我々にしろ武力のみでこのサハラ北方を手に入れているわけではないですし」
実際に彼等は武力でこのサハラに入り込んでいる。だがそれよりも政治外交に長けた彼等は巧みな外交政策によりこの地を侵食して

いっているのだ。武力侵攻をする方が少ない。
「あの連合を御覧になって下さい。彼等は内部であれだけいがみ合っていても武力衝突だけはしておりません」
「そうなったら交易も金融も何もかも破綻しかねないしな」
彼等にとってそれは甚大な損害である。それよりも政治的、経済的に圧力をかけたりする方が遥かに効果的なのだ。これはアメリカや中国の常套手段であった。自分達の言う事を聞こうとしない小国にはこうして圧力をかける。だがそれに唯々諾々と従う国も当然ながら極めて少なく彼等は別の大国をバックにしたり小国同士で同盟を組みそれに対処する。彼等の行動は二十世紀後半の環太平洋地域におけるそれと殆ど変わってはいない。
「まあ彼等は内に宇宙海賊等を持っていて実戦経験は豊富なようですが」
「だが国同士の戦争は絶えてない、と」
「そうです。我々とも武力衝突には結局至っておりませんし」
彼等にとってそれは幸運であったと言ってもよかった。
「今のところはな。彼等はまとまった軍すら持っていなかったし」
「ですが連合軍ができました」
「それだ。どうやらそのおかげで宇宙海賊は益々掃討されていっているらしいな」
「中には投降する者も出ている位らしいですね」
「そして戦力はさらに拡充されるということだ。ただでさえあれだけの戦力を持っているというのにな」
「彼等の動きが気になりますか」
「当然だろう。気にならない筈がない」
彼は答えた。
「若し彼等がその兵をこちらに向けてきたらどうなる。ニーベルング要塞群が抜かれたとしたら」
「我々は窮地に陥りますね」
「そうだ。滅ぼされるだろうな」

「ですが彼等と我々が干戈を交えるにしても少し先のことになりそうですね」
「何故だ！？」
モンサルヴァートはその言葉に対し問うた。
「今彼等は統一された兵制及び装備、システムの確立に必死です。とても外に目を向けられる状況ではありません」
「そうだったな」
彼はその言葉に対し頷いた。
「それに彼等の中でも意見が分かれています。これまで通り開拓地を拡げていこうと主張する派と中央政府の権限を拡充させようと主張する派の二つに。どちらの意見が主流になるかで彼等の動きも変わりますよ。そしてそれから実際に動きを開始するでしょうし」
「エウロパの政党のようになっているのだな」
「はい」
エウロパにおいては大小多くの政党が存在する。もっとも彼は軍人であるので政治のことを学んではいても積極的に関わろうとは思わない。選挙には行くが。
「政党政治が悪いは決して思わないが」
彼は考え込みながら言った。
「やはり決定に時間がかかるというデメリットは否定できないな」
「それは一千年以上も前から言われておりますね」
「ああ。だが根本的な解決は一向に見られないな」
「ですが独裁政治なぞよりは遥かにいいでしょう。サハラの一部にまだ残っているような」
サハラは群雄割拠の状況であり実際にそうした国もあるのだ。連合の中にもいささか強権的な国家元首がいないわけではないが彼等は独裁者ではない。
「我々も中央の権限はかなり強いがな」
「ですが独裁政治などではありませんよ」
「それはわかっている」

彼は答えた。
「だが連合が我々に矛先を向けてきたら危険だぞ」
「まあニーベルング要塞群を粉砕しようとはするかも知れませんね」
「それだけで充分過ぎる程だがな」
「ですが結局それまででしょう」
彼は静かな口調で言った。
「何故だ？」
「我々の領土は彼等にとってさして魅力的ではないからです」
彼は冷徹ともとれる声で言った。
「我々の領土にあるものは全て彼等も持っています。個人所得こそは我々の方が多いですが」
「さして気にならないということか」
「確かに彼等と我々の対立は一千年に渡るものですがそれでも攻めるメリットがないのです。彼等は欲しいものがあれば開拓すればいいのですし。若しそれ以上のものが欲しいならば」
「サハラを攻めるか」
「そういうことです」
ベルガンサは答えた。
「まとまっている我々を攻撃するより彼等を攻撃する方が容易ですしね。それに資源は彼等の方が遥かに持っておりますし」
サハラは戦乱に明け暮れているがその眠っている資源はかなりのものだと言われている。エウロパの侵攻もそれを狙って、という一面もある。
「ですがそれも全て暫く後の話です」
ベルガンサは再びそう言った。
「今は彼等の行動をシュミレーションし、その対策を考えているだけでよろしいでしょう」
「今のところはそれでいいか」
「はい」
「では上層部にはそう進言しておこう」

「お願いします」
「この件はこれでいいな。ところでサハラに話を戻そう」
彼は話題を変えた。
「オムダーマンとミドハドの戦いだがな」
モンサルヴァートの顔がさらに引き締まった。
「率直に聞きたい」
「はい」
「あの戦いはどうなると思う？」
「そうですな」
ベルガンサは暫く考えた後口を開いた。
「兵力においては確かにミドハドが有利です。しかし」
「しかし？」
「勝敗はそれだけで決まるものではありません」
「そうだな」
彼はその言葉に頷いた。
「オムダーマン軍は補給路も確保しております。アッディーン中将の艦隊にしてもサルチェスの補給基地を押さえております」
「あれは大きいだろうな」
「はい、彼の行動は迅速ですがその実補給を常に心がけております」
「そういえばカジュール侵攻においても補給路の確保は怠っていなかったな」
「そうです。あの作戦はそれを見抜けなかったかジュールが迂闊でしたが」
あの戦いにおいてアッディーンは確かに疾風の様な動きを見せた。だがそれは補給あってのものだったのだ。彼はカッサラを起点としてカジュールの補給基地を陥落させていき二つの要塞を抜いたのである。
「そして今度はサルチェスを足掛かりにして攻めるというわけか」
「そのようですね。おそらく彼が次に向かうのは」
「ケルマーン星系だろうな」

モンサルヴァートはベルガンサが言う前に言葉を発した。彼もサハラのおおよその地理は掴んでいる。
「おそらくは」
「そして後方から回り込み友軍を援護する。そう考えているだろうな、彼は」
「そうでしょうね。ですがそうそう上手くいくとは限りません」
「ミドハドにも意地があるだろうしな」
「そうです。しかしこの戦いで勝利を収めたならば」
「彼の戦功にまた一つ輝かしいものが加わるということだ」
モンサルヴァートは言った。そして二人はその場を後にした。彼等も暇ではない。作戦行動がなくとも山の様な書類が彼等の決裁を待っているのだ。

## 第一部第七章　壁と鉄槌その二

山の様な書類の決裁を抱えているのはモンサルヴァートだけではなかった。連合中央政府国防長官である八条もそれは同じであった。
「ではこれを広報部に渡してくれ」
彼は決裁が終わった宣伝に関する書類を秘書官の一人に手渡した。連合軍は徴兵制ではない。連合を構成する国々はどれも徴兵制は連合設立と共に廃止している。これは二十世紀から軍の立場が相対的に弱まったこともあるが連合においては対外戦争は絶えてなく宇宙海賊に対するものであったから特に多くの兵を必要としなかったのである。そして元々人口が多い為志願制だけでもかなりの兵が期待できたのだ。
だからといって何もしないのでは兵は集まらない。志願制の軍隊は常に自分達のことを宣伝しなくてはならない。何処が長所かということを。これは一般の企業と同じである。そうでなければ多くの優秀な人材は集まらないのだ。
「日本にいた時もこれは変わらなかったな」
八条は部屋に残るもう一人の秘書官を前に苦笑した。
「とかく居住設備の充実や食べ物の質の向上にもうるさいしな。地位や待遇のことも考慮しなければならない」
「最早軍が粗末な環境で我慢していいという時代ではないですからね」
そうした話は一千年程前に終わっていた。アメリカ軍がその先鞭をつけたと言われているがそうしなければ軍全体の士気に関わるのだ。
「だがそれにかかる費用も莫大なものになってしまうな」
「しかし徴兵制にしてもそれは変わりませんよ。しかも士気は期待できませんし」
「そうだな」

連合では軍人はあまり人気がある仕事とは言えない。軍人や役人になるよりは開拓地に行って大農園を起こすなり鉱山や油田を掘り当てるなり会社を興す方がよっぽど儲かるからだ。文才や芸術の才能があるとそちらに向かうし想像力があれば作家や漫画家になる。こうした風潮が連合独特の大衆文化のもとにもなっている。

「これで人材が集まってくれればいいのだけれどな」

「人は集まりますよ。それも多量に」

「それに元々の数もあるか」

八条は自軍のことを頭に思い浮かべて言った。

「数が確保できているのは有り難いな。それだけで大きな力だ」

「はい」

軍はまず数である。それは何時の時代も変わらない。

「だがそれはそれで問題が出てくる」

彼はそう言うと手元にある書類を手にとった。

「後方支持も大規模なものになる。情報部と補給部、そして経理部のことだが」

「それに技術部もですね」

「そうだ、予想はしていたがここまで規模が大きいとことあるごとに支障をきたす恐れがある」

「そうなった場合我が軍にとっては破滅的な事態になりますね」

「そうだ。システムの整備もさることながら運営する人材も選ばないとな」

「そうですね」

「衛生設備のこともある。課題はまだまだ山のようにあるぞ」

「それからですね、軍を動かせるようになるのは」

「そうだな、今はこれまで通り宇宙海賊の掃討しか出来ない。だが当面はこれでいい」

「はい」

「問題はその後だな」

彼はそう言うと考える目をした。

「さて、この連合軍がこれからどう動くかだ」
彼はそこで言葉を止めた。そしてその手にする書類の決裁をはじめた。

舞台はミドハドに移る。サルチェス星系を手中に収めたアッディーンの艦隊は彼の言葉通りケルマーン星系に向かっていた。
「敵艦隊の情報は？」
彼は情報主席参謀であるシャルジャー大佐に尋ねた。
「ハッ」
痩せて学者のような風貌の人物である。三十代半ばであろうか。軍服よりは地味なスーツの方が似合いそうである。彼は司令の問いに敬礼をした後で答えた。
「ケルマーン星系に一個艦隊が確認されております」
「やはりな。そして今どうしている？」
「只今サルチェスより撤退した艦隊と合流し我が軍を待ち受けているようです」
「ふむ。おそらく彼等は予備戦力だったのだろうな。ジャースク辺りで行なわれるであろう戦いの為のな」
「そうであると思われます。そして我々への備えの意味もあったかと」
「そして今その備えになったというわけか」
「計らずもそうなったと言えるでしょう」
シャルジャーは答えた。
「彼等を破りケルマーンを手に入れたなら友軍の大きな援護になるな」
「そうですね。敵の主力は後方を脅かされるのですから」
「今我が軍の主力は何処に展開している？」
「ジャースクに今入ろうとしていると思われます」
鋭利な風貌の男が答えた。二十代後半であろうか。シャルジャーよりも長身である。

「ふむ、作戦参謀はそう見るか」
「はい」
彼はアッディーンに対し答えた。
「ではシンダント大佐、貴官はジャースクでの敵の動きはどう予想するか」
アッディーンはその作戦参謀の名と階級を呼んで尋ねた。
「おそらくはすぐに攻撃を仕掛けてはこないと思います。我が軍の主力の様子を見るかと」
「そうか。こちらに兵は向けては来ないと見るか」
「はい。ケルマーンにいる戦力だけで太刀打ちできると考えているでしょう」
「だろうな。数のうえから言っても」
アッディーンは考える目をして言った。
「ケルマーンにいる艦隊もすぐには動かないでしょう。防御を固めているかと思われます」
「そして主力同士の戦いが終わった後に我等を叩く」
「おおよそはそう計画していると思われます」
「だが計画は計画だな」
アッディーンはここで不敵に笑った。
「ケルマーンの敵艦隊の位置は確認できるか」
「はい」
シャルジャーは答えた。
「よし、ならば我が軍は今より全ての交信を途絶する。そして識別信号も出すことを禁じる」
「ということはまさか」
「そう、そのまさかだ」
アッディーンはシンダントの言葉に対して微笑んだ。
そしてオムダーマン軍はアッディーンの指示通り動いた。そしてミドハド軍へと向かった。

一方ミドハド軍はケルマーン星系の恒星ケルマーンを背に布陣していた。アッディーンの得意とする後方からの奇襲を避ける為だ。各惑星に索敵を徹底させ自らはそこで迎え撃たんとしていた。
「話は聞いている。見事な戦いだったそうだな」
ミドハド軍の艦隊司令はアガヌに対し声をかけていた。サルチェスの戦いから逃げ延びた艦隊の司令は中将、彼は大将であるので艦隊の指揮は彼が執ることになっていた。
「いえ、私は何もしておりません」
アガヌはそれに対して謙遜して言った。
「そんなことはない。貴官のおかげで多くの将兵が戦場から無事離脱することができた。これは貴官の功績だ」
「有り難き御言葉」
「これからの戦いでも期待しているぞ。ここで食い止めなければジャースクにいる我が軍の主力に危機が訪れるからな」
「ハッ」
今ミドハド軍は恒星を背に防御を固めている。前方及び側方、そして上下の監視は怠っていない。
「相手はアッディーン中将だ、気は抜けないぞ」
「はい」
「おそらく今度も何かしてくるだろう。警戒を怠ってはいけない」
「そうですね」
アガヌはその言葉に対し同意した。だが心の中で一抹の不安覚えていた。
「司令、御言葉ですが」
「何だ」
司令は彼の言葉に対し顔を向けた。
「ここで布陣するにしても通信や識別信号は消され、場所を変えられた方がよろしいのでは？」
「オムダーマンに我が軍の存在を知られない為にか」
「はい」

アガヌは頷いた。
「その必要はあるまい」
だが彼はそれに対し首を横に振った。
「敵はおそらくここに向かって来るだろう。我々はそれを迎え撃てばいい。それに彼等が幾ら姿を消そうが我々のこの監視網の前には逃れられまい」
「そうでしょうか」
残念なことにこの司令はオムダーマン軍の艦艇の隠蔽能力を甘く見ているところがあった。そしてアッディーンの能力も少し甘く見ていたかも知れない。
「我々は必ず彼等の存在を掴む。そして臨機応変に対処するだけでよいのだ」
「つまり防御に徹すると」
「そういうことだ」
司令はそう言うと強く頷いた。

## 第一部第七章　壁と鉄槌その三

「心配は無用だ。恒星を背にしていては彼等も奇襲は仕掛けられない。そして兵力においても優勢にあるしな」
「はい」
だがアガヌは思った。それでもサルチェスでは負けたのだと。
アガヌは司令の下を退いた。そして自分の艦へと戻った。
「危ないな、司令は油断されている」
彼は艦長室に戻ると一人呟いた。
「アッディーン中将は必ず仕掛けて来る。おそらく我々の思いもよらぬところから」
彼は壁に掛けられている立体地図を見た。それはこの星系のものである。
「そうやって今まで勝ってきたのだ。今度も必ずやって来るだろう」
その目は強いが悲観した光を放っていた。
「だが問題は何処からか、だ」
彼は恒星を見ながら言った。
「それがわからない限りはこちらとしても手の打ちようがないな」
彼はその地図の上に駒を置いた。それは自軍の艦隊のものであった。
それから二日経った。オムダーマンの艦隊の情報は一向に入って来ない。
「まずいな」
アガヌは艦橋で一人呟いた。
「一体何処から来るかわからんぞ、これは」
ミドハド軍は今前方を重点的に警戒して布陣している。左右及び上下には惑星がある為でもある。そちらの索敵を惑星の偵察基地に任せているせいでもある。
「確かに監視網に懸かった時点で対応しても間に合うが」

彼は心の中に不吉なものが生じるのを感じていた。
「もし彼等がこの索敵網を既に潜り抜けていたならば」
その時は恐ろしいことになると思った。
それから数時間経った。やはり情報は何も入ってはこない。
「来ませんね」
航海長が彼に対し言った。
「今のところはな」
だが彼はそれに対しても厳しい表情のままである。
「だが必ず来る。それも思わぬところから」
彼の言葉は当たっていた。アッディーンの艦隊はこの時彼等の右斜め下にいたのである。
「もうすぐ主砲の射程内に入ります」
ガルシャースプがモニターを見ながら言った。
「よし、ここまでは上手くいったな」
アッディーンはモニターに映る敵艦隊から目を離さない。
「他の艦艇はついてきているな」
「御心配なく。一隻の落伍者もありません」
「ならいい。では全艦に伝えよ、隠蔽をすぐに止めよ、通信も復活しろとな」
「ハッ」
その指令は忽ち全艦に伝わった。全艦それに従い姿を現わす。
「よし、全艦一斉射撃。そしてそのまま一気に突き崩すぞ！」
「了解！」
彼等はそれに従った。そして全艦の主砲からビームが一斉に放たれた。
「敵艦隊発見！」
その艦影はミドハド軍にも発見された。
「何処だ！？」
司令はそれを聞いて身を乗り出した。
「右斜め下からです、近いです！」

「何っ、まさか我が軍の索敵をかい潜ってきたというのか！」
「その様です、今膨大なエネルギー反応がしました！」
「何っ、まさか！」
それが何か、わからぬ軍人はこの銀河にはいない。
「はい、駄目です、避けきれません！」
最後の言葉は最早絶叫であった。オムダーマン軍の一斉射撃がミドハド軍を下から打ちつけた。
忽ち数百の艦が撃沈された。エンジンを撃ち抜かれた艦が動きを制御できなくなりそのまま漂う。そして隣の艦にぶつかり共々爆発する。
ある艦は艦橋に直撃を受けた。そしてその中を炎が荒れ狂い忽ち全ての乗員をその中に飲み込んでいった。
オムダーマン軍は再び一斉射撃を仕掛けた。これは先制攻撃を受けたミドハド軍に対しさらに打撃を与えた。
「態勢を整えよ！」
司令の指示が下る。ミドハド軍はそれに従い艦隊の編成を立て直し艦の向きをオムダーマンに向けた。
だが遅かった。オムダーマン軍は二度の一斉射撃を終えるとそのまま突撃を敢行してきたのだ。
「全艦突撃せよ！」
アッディーンの右腕が振り下ろされた。それに従い全艦ミドハド軍にそのまま斬り込んだ。
まずは光子魚雷を放った。魚雷は敵の間を跳ね回りその腹や背を撃つ。そして混乱したところにオムダーマンの艦艇が踊り込んだ。
「イエニチェリ発進！」
アッディーンの指示が下る。そして新しく開発された航宙機イエニチェリが発進する。この出兵の前に配備されたものだ。攻撃力と機動性を重視した構造になっている。
イエニチェリはミドハドの艦艇の間を編隊を組んで飛び回る。そしてまずは迎撃にやってきたミドハド軍の航宙機に向かう。

「よし、一機一機確実にやれ！」
指揮官機から指示が下る。各機その言葉に従い散開した。
そして編隊全機でもってまず先頭の機を撃つ。それから次の機を。見れば他の編隊とも協力している。
ミドハド軍の航宙機は性能が高いことで知られている。だが先手を打たれているのと数の違いが出ていた。この宙域のミドハド軍には空母は少なかったのだ。その殆どをジャースクに向けていたのだ。
それが裏目に出た。ミドハド軍の航宙機は忽ちその数を大きく減らし遂にはオムダーマン軍のイエニチェリに対抗できなくなってしまった。
「よし、今度は艦艇を狙え！」
指示が下る。イエニチェリ部隊は敵のビーム砲座に対し散開しそれぞれ攻撃を仕掛ける。そして艦艇にダメージを与えていく。
「クッ、各砲座、何をやっている！」
だが彼等とて必死だ。懸命に狙いを定める。しかし命中しないのだ。
「そうそう当たってたまるかよ！」
イエニチェリの運動性能は極めて高かった。ビームを何なくかわし攻撃を仕掛ける。そしてミドハド軍の艦艇は次第にその戦闘力を減らしていった。
戦局はオムダーマン軍に有利に進んでいた。ミドハド軍はやがて組織だった戦闘が不可能になっていった。
「クッ、ここでもアッディーン中将に遅れをとったか」
アガヌはその数を減らしていく友軍を見ながら苦悶の声を漏らした。
「だがそうそう好きにはさせん。行くぞっ！」
そう言うと自分の艦を敵の最前線に持っていかせた。
「まだ負けるわけにはいかん。主砲、一斉射撃！」
それがオムダーマン軍の戦艦の一隻を撃沈した。
「ムッ、敵の反撃か？」

それはアッディーンの旗艦からも確認できた。
「いえ、一隻だけです。どうやら組織立った反撃ではないかと」
ガルシャースプがモニターを見ながら言った。
「だとしても骨のある奴だな。一隻だけで向かって来るとは」
「しかし一隻だけではどうにもなりませんよ」
「そうとは限らんぞ。カッサラでの俺のことを思い出せ」
「・・・・・・そうでしたね」
彼は一隻で攻撃を仕掛けようとする敵の部隊の前に急行し一斉射撃でその動きを封じることにより戦局を変えている。戦局とはふとしたはずみで変わることもあるのだ。
「あの艦に攻撃を集中させろ、戦艦を数隻向かわせろ！」
その言葉に従い数隻の戦艦が向かう。だがアガヌはそれに対しても善戦した。
「中々しぶといな」
アッディーンはそれを見て思わず感嘆の言葉を漏らした。それ程までに見事な動きであった。
しかし戦局はオムダーマン軍のものとなっていた。ミドハド軍は各所で寸断され各個撃破されていた。
「司令、これは最早挽回出来るものではないかと」
旗艦の艦橋において副官が司令に進言した。
「・・・・・・そうだな」
彼は腕を組み苦汁を舐めた顔で言った。
「全艦撤退だ。ジャースクまで撤退せろ」
「ハッ」
「そしてあの地で主力と合流することにしよう」
「わかりました」
こうしてミドハド軍は撤退に移った。各艦反転し戦場を離脱していく。
「追え、逃がすなっ！」
アッディーンの指示が下る。オムダーマン軍は追いすがり攻撃を

仕掛ける。その前にアガヌの艦が立ちはだかる。
「そうはさせんっ！」
そして友軍を一隻でも多く逃がさんと決死の援護攻撃を仕掛ける。
そしてオムダーマン軍を寄せ付けない。
「またあの男か」
アッディーンは彼の艦を見て再び感嘆の言葉を漏らした。
「敵ながら見事ですね」
ガルシャースプもそれは同じだった。
「うむ。だがこれを放っておくわけにもいくまい」
彼は右腕をゆっくりと挙げた。
「今度こそ確実に仕留めろ！」
各艦の主砲が一斉に放たれた。その中の一つがアガヌの艦のエンジンの一部を撃った。これが決まりだった。
「行動不能です」
機関長が報告した。アガヌはそれを聞いて黙って頷いた。
「ならばもういい。降伏しよう」
「はい」
こうしてアガヌはオムダーマン軍に投降した。そしてこの星系にいるミドハド軍は彼の奮戦もありかろうじて戦線を離脱することが出来た。彼等はジャースク星系に向かって落ち延びた。
ケルマーン星系での戦いも終わった。参加兵力はオムダーマン軍百万、艦艇一万隻、ミドハド軍は百六十万、艦艇一万六千隻であった。隠密行動を取り奇襲を仕掛けたオムダーマン軍の勝利に終わりミドハド軍は撤退した。この勝利によりアッディーンの艦隊はジャースク星系にいる友軍の主力部隊と合流することが可能となった。
「今回も勝ちましたな」
「当然だがな」
アッディーンはシンダントの言葉に自身に満ちた笑みを浮かべて応えた。
「だがこれで終わりじゃない」

「はい、すぐにジャースクに向かいましょう」
「そうだ。ところで捕虜達はどうしている？」
彼はそのことに対して尋ねた。
「今はカジュールにある捕虜収容所に送られていますが」
「そうか」
後方参謀であるバヤズィト大佐が答えた。少し太めの大男である。
「この戦いが終わったらそちらに向かうとしよう。一人会いたい男がいる」
「そうですか」
「うむ。だがそれにはまず勝たなくてはな」
「はい。次に戦いで決まりますね」
皆ガルシャースプの言葉に対し頷いた。
「よし、捕虜の護送部隊の他は全艦ジャースクに向かうぞ。そして友軍と合流だ！」
「ハッ」
皆その言葉に対して敬礼した。そして一路ジャースク星系に向かった。

ケルマーンの戦いのことはすぐにジャースクにいる両軍の間にも伝わった。これにオムダーマンの将兵達は歓喜しミドハド軍は消沈した。
「そして我が軍はどうなった？」
「いまこちらに向かっております。合流する為に」
ミドハド軍の旗艦の艦橋では司令と参謀達は深刻な顔で軍議を行なっていた。
「そうか。その数はどのくらいだ？」
「八十万程です」
「随分手酷く痛めつけられたな」
「はい。そしてオムダーマン軍もこちらに向かってきております」
「そうだろうな。敵将はアッディーン中将か」

「その通りです」
「うむ・・・・・・」
司令はその白いものが混じった口髭に手を当てながら考えた。そして決断を下した。
「布陣する場所を変えよう。バンプール星系との境だ」
バンプール星系とは首都であるジャーハバードの一個前の星系である。そのを越えれば首都である。最後の防衛線と言ってよい。
「いざという時はあの場所に逃れられるようにな。そしてあの地を背にすれば奇襲を仕掛けられることもあるまい」
「そうですね」
参謀達はその言葉に頷いた。
「こちらに向かっている友軍と合流が済み次第陣を移す。そしてそこで戦うとしよう」
「了解」
皆その言葉に対し敬礼した。そしてミドハド軍は陣を移した。
アッディーンは友軍と合流を果たした。二度の戦いに大勝利を収めた若き名将の合流にオムダーマン軍は喜びの声に包まれた。

## 第一部第七章　壁と鉄槌その四

「見事だ、よくここまで来てくれた」
この侵攻の総司令官であるメフメット＝マナーマ上級大将が笑顔で彼を司令部に出迎えた。頭の毛が少し薄い男である。長い間参謀畑を歩いてきており艦隊指揮の経験は乏しい。しかし慎重な性格がいい方向に向かい今回の侵攻においては的確に進めている。
「有り難うございます」
アッディーンはその笑顔に対し敬礼を返した。
「貴官の合流は実に心強い。早速敵の主力を討つとしよう」
「はい」
アッディーンは応えた。
「敵は布陣する位置を変えたそうだな」
マナーマは参謀に対して尋ねた。
「はい、バンプール星系との境に移っております」
「そうか」
マナーマはそれを聞いて頷いた。
「では我々も動くとしよう。そしてそこで彼等を叩く」
「それについて良い策があるのですが」
ここでアッディーンが言った。
「それは！？」
皆その言葉に顔を向けた。
「はい、それですが」
彼は話しはじめた。一同それを聞くと大きく頷いた。

ミドハド軍はバンプール星系との境に布陣した。オムダーマン軍はそれを追う形でやってきた。双方互いに向かい合って布陣している。
「やはりいるか」

ミドハド軍はアッディーンの部隊を確認して言った。だが彼の部隊は後方に控えている。
「予備兵力ということでしょうか？」
「かもな。これまで三回の戦いを経ているし」
ミドハド軍の司令官はそれを見て言った。
「だが彼の動きには警戒しろ。一体何をしてくるかわからんぞ」
「はい」
彼等はオムダーマンの陣を見ながら話していた。
戦いはまずはオムダーマン軍の前進からはじまった。ミドハド軍はそれに対し主砲を向ける。
「撃て！」
指示が下る。それと同時に両軍は砲撃を開始した。
最初は互角であった。だが数の差が次第にものをいってきた。
オムダーマン軍はアッディーンの艦隊を入れて六個艦隊である。対するミドハド軍は合流した兵力を含めて七個艦隊になる。この差は大きかった。
「ここでは勝てるかもな」
戦局はミドハド軍に有利に進もうとしていた。彼等はここぞとばかり攻勢を仕掛けてきた。
「主砲一斉発射！」
司令の腕が振り下ろされる。それと共に光の帯が放たれる。
オムダーマン軍はそれに対して徐々に退きはじめた。ミドハド軍はさらに攻撃を強めていく。
「よし、どんどんやれ！」
勢いづいた彼等はそのまま押そうとする。オムダーマン軍はそれに対し退くばかりである。
「勝てるな」
ミドハド軍はそう感じた。そして攻撃の手を緩めなかった。
「上手い具合に進んでいますね」
それを見てほくそ笑む者がいた。アッディーンである。

「ああ。まさかこうまで順調にいくとはな」
彼はガルシャースプ達の言葉に対し頷いた。彼等は後方で待機しながら戦局を見守っているのだ。
「動くとしたら今ですかね」
「いや、まだだ」
アッディーンは獲物を見る猛禽類の目をして笑った。
「まだまだ引き付けてもらわなくてはな。動くのはそれからでよい」
「そうですか」
「だが動く時は一気に動くぞ」
彼の目が光った。
「そして戦局を一気に決める」
「はい」
彼等はまだ動かなかった。そして戦いを黙って見ていた。
「アッディーン中将の部隊は動きませんな」
ミドハド軍の参謀は後方で沈黙している彼等の部隊を見て言った。
「うむ。どうやら本当に疲れきっているのかもな」
司令もそれを見ながら言った。
「だがそれはこちらにとっては好都合だ。何しろ彼には本当に今まで散々やられたからな」
「はい」
「よし、総攻撃だ。このまま戦いを決めるぞ！」
「ハッ！」
ミドハド軍は攻撃の手を更に強めた。オムダーマン軍はまたもや退きやがてアッディーンの部隊のすぐ前まで来ていた。
「よし」
アッディーンはそれを見て頷いた。
「全軍動くぞ。右に行く」
「はい」
艦橋に集まっていた幕僚達は皆頷いた。
「今こそ勝機、勝利は我が手に！」

「ハッ！」
アッディーンの部隊は突如として動いた。友軍の後ろを右にかけていく。
「アッディーンの中将の部隊が動きました」
それはマナーマの司令部からも確認された。
「そうか、遂にな」
彼はそれを見て満面の笑みを浮かべた。
「よし、もうすぐ戦局が変わるぞ。もう暫く持ち堪えろ！」
「ハッ！」
オムダーマン軍は活気づいた。そしてその守りをさらに固めた。
これはミドハド軍も確認した。だが彼等はたかをくくっていた。
「フン、今更動いても遅いわ」
彼等はアッディーンの部隊を見ながらせせら笑っていた。
「もう戦局はこちらのものだ。精々無駄なあがきをするんだな」
彼等はアッディーンの部隊が友軍の援護に入るものだと思っていた。だがそれは違っていた。
アッディーンの部隊は反時計回りに動いた。そして友軍と合流せずにそのまま前に出た。
「何！？」
そしてミドハド軍の側面に来た。そこで艦首を一斉に左に向けた。
「今だ、撃て！」
アッディーンの右腕が振り下ろされる。そしてミドハド軍の横っ面をビームでおもいきり殴った。
「うわっ！」
忽ち一千隻近い艦が爆発する。そして動きが止まった。
「大変です、側面から攻撃を受けました！」
ミドハド軍はそれを受けて忽ち混乱状態になった。司令官もそれをはっきりと確認した。
「兵力を横に向けろ！」
彼はすぐに指示した。そして兵の一部をアッディーンの部隊に向

けようとする。
だがアッディーンの動きは速かった。やはり反時計回りに動き攻撃を仕掛けながらミドハド軍の後方に回っていく。
「これは避けられまい」
次々にビームやミサイルを放つ。そしてミドハド軍の艦艇を次々に沈めていく。
これを見てオムダーマン軍の主力部隊も元気付いた。守勢から攻勢に転じ混乱するミドハド軍に突撃する。
「よし、今だ！」
「進め、今こそ勝機だ！」
それに対し今度はミドハド軍が守勢に立たされた。次第に後ろに退こうとする。
だが後方にはアッディーンの部隊がいる。彼は攻撃の手を一切緩めず彼等の背を撃ち続ける。
やがて戦局は完全にオムダーマン軍のものとなった。彼等はミドハド軍を各地で寸断し各個撃破していった。
「これで決まりですな」
オムダーマンの司令部で参謀の一人がマナーマに対して言った。
「うむ、流石だな、アッディーン中将」
彼はアッディーンの名を呼んだ。事実この勝利は彼がもたらしたものだからだ。
ミドハド軍は包囲されようとしていた。だが彼等はそれから必死に逃れようとする。
「横だ、横に動け！」
司令が絶叫した。彼は挟み撃ちにされながらも逃げ道を咄嗟に見つけたのだ。
そこは側面であった。そこはバンプールに続く。彼はそこに目をつけたのだ。
「全軍退却だ、バンプールまで退くぞ！」
彼は指示を下した。そして自ら側面に飛び出た。

後の艦もそれに続く。そしてミドハド軍は何とかオムダーマン軍から逃れた。
オムダーマン軍はそれを追おうとしなかった。ただ彼等の逃げるに任せたのである。
「よろしいのですか？」
幕僚の一人がマナーマに対して問うた。
「いい。もう勝負はついた」
彼は謹厳な表情で言った。
「勝敗はついた。これ以上無益な損害を出すこともあるまい」
「ですがまだ首都での戦いが残っていますよ」
「首都か」
彼は一言、呟くように言った。
「もう陥落したも同然だがな。我々はこれ以上の戦闘はなくミドハドの首都に入城することになるだろう」
「果たしてそう上手くいきますか？」
幕僚達は皆首を傾げていた。
「必ずな」
彼は答えた。
「さて、軍を集結させよう。まだ残敵がいるかも知れないし捕虜の処遇もあるしな」
「はい」
「よし、全軍集結だ、そして次の作戦に対して備えるぞ！」
こうしてジャースク星系での戦いは終わった。参加兵力はオムダーマン軍約六〇〇万、艦艇六万隻、ミドハド軍は約七五〇万、艦艇七万五千隻であった。数に優るミドハド軍であったがオムダーマン軍の誘い込みと迅速な攻撃に対処しきれずこの戦いにおいても敗北した。兵力の三割以上を失いバンプールに退却することになったが最早士気も戦闘能力も絶望的なまでに落ちていた。それに対してオムダーマン軍は勝利により士気を高めただけでなく多量の物資も手に入れた。これにより彼等はミドハド軍の首都への進撃に向けて大

きく動くこととなった。
「これでミドハドは我等の軍門に降りましたな」
バヤズィトはアリーの艦橋においてアッディーンに対して言った。
その顔は勝利でほころんでいる。
「おそらくな。だがまだ油断はできない」
彼はまだ顔を緩めてはいなかったのである。
「首都は容易に手に入るだろう。問題はそれからだ」
「問題といいますと」
「主席のハルドゥーンだ。あの男は中々老獪だぞ」
彼はどうやらハルドゥーンが何かしてくると考えているようだ。
「ゲリラ活動等ですか」
「その可能性も高いな」
彼はバヤズィトの言葉に対し硬い表情のまま頷いた。
「首都は大人しく明け渡すだろうがな。おそらく故郷に帰りしつこく抵抗する筈だ」
「確か彼の出身地はブーシルでしたね」
「そうだ。ミドハドで二番目に大きな星系だ」
ミドハドで最も大きな星系は首都星系である。ブーシルは土地も肥え資源も豊富な為首都星系の次に人口が多い。
「あの星系の首長はハルドゥーンとは密接な関係にあるしな。それに」
「あそこはサラーフと境を接していますね」
「そうだ」
アッディーンはその言葉に対し頷いた。
「下手をすればサラーフが介入してくるぞ。彼等は今までミドハドとは犬猿の仲だったがな」
「近頃我等に対抗する為に接近しておりましたな」
「だからこそ警戒するのだ。今までは我等とミドハドの戦いを静観していたのだろうが」
「大局が決した今すぐにでも動きかねませんね」

「うむ。ブーシルに来られては後々面倒なことになるぞ」
アッディーンは顔を顰めて言った。
「それだけは阻止しなくてはなりませんね」
「考えられるのはハルドゥーンがブーシルに臨時政府なり何なりを設立することだ。そしてそこにサラーフが彼等を助けるという名目で介入してくる」
「よくある話ですね」
「このサハラでは特にな。だからこそ警戒しなければならない」
そこでシャルジャーがやって来た。
「司令、只今首都から司令に通達がありました」
「通達？何だ？」
彼はそれを聞いて顔をシャルジャーに向けた。
「これをお読み下さい」
シャルジャーはそう言うと一枚の書類を彼に手渡した。
「うむ」
彼はそれを手に取った。そして封を切り読みはじめた。
「俺も大将になったか」
彼は表情を変えず頷いて言った。
「えっ、大将ですか！？」
艦橋にいた者はそれを聞いて皆ざわめきだった。
「特に驚くことでもないだろう」
彼はそれに対し取り乱しもせず驚くこともなく応えた。
「何を言われるのですか、大将といったら凄いですよ」
「そうですよ、しかもその若さで」
大将はオムダーマン軍においては元帥、上級大将に次ぐ地位である。その権限は中将と比べても比較にならず軍の最高幹部の一人と言っても過言ではない。
しかもアッディーンはこの時まだ二十一歳である。その若さで大将というのは前代未聞のことであった。
「大したことではない、俺はただ戦いに勝っただけなのだからな。

階級なぞ問題ではない」
「そうですか」
彼等は司令官の落ち着いた様子に自らも落ち着きを取り戻した。そこにもう一つ通達が来た。今度はこの作戦の総司令官であるマナーマからだ。
「今度は何だろう」
アッディーンはそれを受け取った。それはこれからの作戦行動であった。
「そうか、司令も気付かれていたか」
彼はそれを読むと一言そう言った。そして艦橋にいる者達に対して言った。
「諸君、すぐにブーシルに向かうぞ」
「やはり」
バヤズィトはそれを聞いて思わず言った。
「うむ。何やらあの星系で不穏な空気があるらしい。そして予想通り彼等も動こうとしている」
「サラーフですね」
「そうだ、連中は今ブーシルとの国境に集結中だという。一刻の猶予もならない」
「しかし今我等の艦隊は万全ではありませんよ」
バヤズィトはいささか顔を暗くして言った。
「兵の三分の一がサルチェスやケルマーンにおります。それに物資の補給も必要です」
「我々の兵はすぐに交替させこちらに向かって来るそうだ。そして補給は今から至急行なわれるそうだ」
「またえらく急ですね」
「それだけ切羽詰っているのだろう。補給が済み次第すぐに向かうぞ」
「サルチェス等の兵は？」
「ブーシルで集結してくれとのことだ。とにかくすぐにあちらに向

かってくれと言っておられる」
「そうですか。それでしたら」
「うむ。よし、全軍今から補給を受けるぞ、そしてそれが済み次第すぐにブーシルに向けて出撃だ！」
「ハッ！」
　こうしてアッディーンは大将になってすぐにブーシルへ向かうこととなった。そこにもやはり新たな戦いが待っていた。そして彼の戦いにまた彩りを加えることになるのであった。

第一部　　完

２００４・４・２７

# 第二部第一章　策略その一

策略

オムダーマン共和国とミドハド連合の戦いはオムダーマンの圧倒的な勝利に終わった。ジャースクでの戦いに敗れたミドハド軍はこれ以上の戦闘は無意味と悟り武装解除、投降をはじめた。オムダーマン軍はそれを快く受け入れた。

オムダーマン軍はミドハド連合の首都ハルツームに無血入城した。組織的な抵抗もなく彼等は悠然と降り立った。

そしてそミドハド連合の降伏が調印された。オムダーマンの使者が到着し式は滞りなく行なわれた。結果ミドハド連合はオムダーマン共和国に吸収されその軍及び施設、官僚機構は全てオムダーマンに組み込まれることとなった。法も国家システムも段階的にではあるが全てオムダーマンのものとされることとなった。ここにミドハド連合はその歴史に幕を降ろすこととなったのである。オムダーマンはこれによりその勢力を大きく伸張することとなった。

ただ問題があった。ミドハドの主席であるイマーム＝ハルドゥーンの姿が見えないのである。今頃敵国の国家元首を裁判にかけたり処刑したりなぞはしない。その愚かさは二十一世紀でわかっていることであった。それに彼の国はもうこの銀河にはないのだ。

しかし彼がまだミドハドを諦めていないなら話は別である。仮にもミドハドの元首であった男である。その影響は大きい。そしてその行動如何が混乱を起こす怖れもあった。

オムダーマンの最も怖れることはそれであった。だからこそ彼の出身地ブーシルにアッディーンの艦隊を送ったのである。だが彼の所在はまだ掴めてはいなかった。

「問題は何処にいるかだな」

オムダーマンは彼の所在について必死に捜索していた。

「首都に残ってはいないでしょうか」

誰かがそう言った。
「それはないだろう。ここは彼の故郷ではない。隠れるには無理がある」
ミドハドは多くの星系から構成される連合国家である。従って国民の帰属意識はそれぞれの出身星系に強く連合中央政府には弱かった。
「彼が首都に隠れることは出来ない」
その通りであった。隠れるとすれば故郷であり地盤のあるブーシルしかないのである。
しかしまだ見つからない。余程上手く隠れているようだ。
「こうなったら彼にも行ってもらうか」
高官の一人がふと漏らした。
「彼といいますと」
それを聞いた周りの者が言葉を止めた。
「特殊部隊に連絡を」
その高官はそれには答えずそう言った。
「ハッ」
すぐに一人が敬礼し部屋を出た。そして誰かが新たに呼ばれた。

「もう少し長引くと思ったがな」
モンサルヴァートは司令部にある自らの執務室でオムダーマンとミドハドの戦争に関する資料を読みながら言った。
「ジャースクで終わりだとはな。もう一戦あると思ったが」
「将兵の士気が極端に下がっていたと聞いております」
緑の瞳に金色の豊かな髪を持つ女性が答えた。
見ればかなりの美貌の持ち主である。細長く形のいい顎を持つ整った顔立ちをしている。肌は白くまるで雪のようである。そして唇は薄く色は紅である。古の北欧の愛の女神フレイアの様な美貌である。
その官能的で整った肢体を赤と黒の軍服で包んでいる。ズボンか

らでもそのスラリとした脚がわかる。
彼女の名はエレナ＝プロコフィエフという。エウロパ軍の中将にしてサハラ北方のエウロパ軍の参謀総長でもある。
さる侯爵家の長女として生まれた。彼女の他に子はなく彼女は幼い頃より家の当主となるべき教育を受けた。この時代は相当保守的な家でも女子が家を継ぐ事を認めていたのである。
士官学校に入り入学当初からその秀才ぶりを高く評価されていた。そして首席で卒業し参謀畑を歩んでいった。参謀本部等においてもその切れ者ぶりを遺憾なく発揮し瞬く間に昇進していった。そして先月このサハラのエウロパ軍に配属されたのである。冷静沈着にして広い視野を持つ人物として軍部では極めて評価が高い。
（私はさして女性に興味があるわけでないが）
モンサルヴァートは彼女を見ながら思った。
彼は特に女好きというわけではない。かといって男色家でもないが。普通に親同士が幼い頃に決めた許婚がいる。彼女はドイツの伯爵家の令嬢だという。彼はかっての名家とは爵位は持っていた。伯爵である。だから釣り合いのとれた婚姻であった。エウロパでは貴族制度が残っていた。これは容易には消せるものではなかったのである。
（やはり軍部で評判になるだけはあるな）
それ程彼女の美貌は際立っていた。彼女はこのサハラの軍でも評判になる程の美貌であった。しかし彼女に声をかける者は実はいない。
「あれだけ完璧だとね」
というのが理由だ。美貌の上に頭脳明晰、家柄もいい。隙がなさすぎるというのだ。人間とは完璧なものは案外好まないものなのである。
人間的にも悪くはない。部下に優しく自分に厳しいと言われている。実際に彼女を慕う部下や士官学校の後輩は多い。
（まだ二十代後半だというがな。そのわりには人間ができている）

そろそろ身を固めては、と言われる歳である。だが彼女はそれに対しては微笑みと共に断りを入れる。噂によると彼女も許婚がいるらしい。

（貴族の家にはよくあることだがな。結婚というものは元々は家と家を結ぶつけるものであったし）

これはどの国においてもそうであった。とりわけエウロパは現在オーストリア王家として復活しているハプスブルグ家に代表されるように政略結婚が盛んであった。貴族達は常に家と家を結び付ける為に互いに婚姻を結んでいたのだ。

「士気の問題か」

モンサルヴァートは軍事のことに思考を戻した。そして彼女に対して問うた。

「はい。三度に渡る敗戦によりミドハド軍の将兵の士気は著しく低下しておりました」

「だろうな。アッディーン提督にあれ程派手に破られてはな。だがまだオムダーマンに対抗できる戦力はあっただろうに。補給上の問題もなかった筈だしまだ挽回はできた筈だ」

「士気の他にもう一つ問題が起こったのです」

「それは何だ！？」

「上層部が早々と諦めてしまったのです」

「ハルドゥーン主席がか？」

「はい。彼はジャースクでの敗戦を知るとすぐに降伏を受諾するよう強く主張したということです」

プロコフィエフは背筋を見事に伸ばしたまま言った。姿勢も完璧である。

「わからないな。彼はそんなに諦めのいい男ではない筈だが」

彼は策謀家として有名である。執念深い一面もあるとも言われている。

彼は何度か失脚している。選挙に敗れたこともあれば政争に敗れたこともある。しかしその度に甦り権力の座に返り咲いている。そ

して政敵に対し報復し裏切った者に対し復讐してきた。彼が主席の地位に着くまでに多くの生臭い政争や駆け引きがあったのである。
「今までの経緯があるからな。彼にしてはやけに諦めがいいな」
「姿もくらましましたし」
「そうだ。政府と軍に降伏を受諾するよう言ってな。それだけでも妙な話だ」
普通は政府の首脳が条約に調印してはじめて降伏が成立する。だが彼はそれを首相に押し付ける形で何処かに消えてしまったのだ。これは外交儀礼上許されないことであった。
「あの男ならこの程度のことはやるにしてもだ。自軍を捨ててまで何故隠れたのだ？」
「それ以上の切り札があるのかと」
「切り札か」
彼はプロコフィエフの言葉を聞き考え込んだ。
「軍以上の切り札か」
少し考えられなかった。
「一体何だ」
「レジスタンスかと」
「レジスタンス！？」
モンサルヴァートはそれを聞いて思わず声を上ずらせた。
「降伏したというのにか」
「認めなければよいかと。少なくとも彼は調印していないのですし」
「指示したとしてもそんな事は言っていないと言えば済むことだしな。あの男ならやりかねん」
彼は顔を顰めた。
「しかしそれだと無害の市民まで被害に曝すことになる。まあそんなことを気にするような男でもないか」
彼の権力志向の強さと今までの政敵へのやり方を見ているとそれはよくわかった。
「そうですね。それに彼等以上の切り札を持っていると思われます」

「それはまさか・・・・・・」
「はい、サラーフ軍です」
「やはりな」
彼はそれを聞いて表情を暗くさせた。
「外国の軍を自らの権力維持の為に使おうというのか」
「歴史上よくあったことです」
「それはそうだが」
それは売国奴と呼ばれてもおかしくない行為である。
「名目は何とでも言えますから。問題はありませんよ」
「しかし」
「彼には彼の言い分があるのでしょう。何を言っても無駄です。そしてそれにサラーフが乗った、それだけなのです」
「そしてミドハドはサラーフの属国になると」
「その時には彼はまた考えを変えるでしょうが」
「だろうな。食えない男だ」
彼はそう言うと再び顔を顰めた。
「ですが国も人もそうして生き残る場合が多々あります」
「そうだったな」
春秋戦国時代でもよくあったことである。とりわけ群雄割拠の状況においては。
「そうして生き残るか。だが上手くいくかな」
「そこまではわかりませんね」
「まあいい。それはあの男次第だ」
モンサルヴァートはそう言うと席を立った。
「さて、これからの我が軍の行動だが」
「それについて私の意見をお聞きしたいとのことですが」
「うむ。何かしらよい提案があると聞いているのでな。悪いがわざわざ来てもらった」
モンサルヴァートは態度をあらためて言った。
「各艦隊の司令官達にも来てもらっている。早速話をはじめたいの

だが」
その言葉と共に何人か入ってきた。
「長官、お呼びでしょうか」
そこには八人の男がいた。
まずはクライストとステファーノである。彼等はサハラ総督軍の第一及び第二艦隊の司令である。
その後に六人いる。第三艦隊を率いるニコライ＝ゴドゥノフ。顔を濃い髭で覆った筋骨隆々の大男である。くすんだ金髪に灰がかった青い瞳をしている。猛将として知られている。
続いてホセ＝ヴァン＝マトク。砂色の髪に藤色の瞳をしている。かって僅か数百の艦で一千隻を越える敵艦隊と渡り合い守りきったことがある。防衛戦の名手である。彼はまだ二十代である。その名から貴族出身であるとすぐにわかる。
トーマス＝ターフェル。赤い髪の茶の瞳を持つこの男は歴戦の人物である。まだ三十代であるが多くの戦いを経てきた。彼はその経験に裏打ちされた指揮により勝利を収めてきた。
シラノ＝ジャースク。ダークブラウンの髪と瞳を持つこの人物はかなりの美男子で女好きでも知られている。だがその采配は意外にもバランスのとれたものである。
ドミトリー＝ニルソン。金髪碧眼の長身のこの男は勇将として有名である。かなり短気なことで知られ決闘沙汰も多く起こしている。だが家庭は大事にする。かなりの愛妻家である。
最後にレナート＝アローニカ。士官学校卒業後パイロットになりそこで活躍した。その経験からか彼は空母を使った作戦を得意とする。
この八人が総督軍の艦隊司令である。彼等はそれぞれ名のある人物でありまた武勲も重ねている。
「諸君、よく来てくれた」
モンサルヴァートは彼等が皆中に入ったことを確認すると彼等に対し言った。

「ハッ」
彼等は一斉に敬礼した。皆階級は中将である。プロコフィエフと階級は同じである。
「参謀総長」
彼はプロコフィエフに顔を向けた。

## 第二部第一章　策略その二

「はい」
彼女はそれに対し敬礼した。
「皆集まった。それでは卿の話を聞きたい」
「わかりました」
彼女は答えると手に持っていた一枚の地図を拡げた。そしてそれを執務室中央のテーブルに置いた。
それはサハラ北方の三次元地図であった。ホノグラフィーで全ての星系が描かれている。
「まず今の我々の状況ですが」
彼女は棒で赤く塗られたエウロパの勢力を指し示した。
「アガデス併合後その勢力はさらに大きくなっております。そして市民の入植も順調に進んでおります」
「それはいいことですな」
ジャースクが言った。
「はい。ですが問題が一つ生じております」
ジャースクの目が微かに光った。
「それにより北方のサハラ各国の反発が高まっております」
「それはいつものことだ。今更という気がするが」
ゴドゥノフがその野太い声を出した。
「はい。それが一国ごとであれば問題はありません」
「一国ごとであれば、か」
ターフェルはそれを聞くと顎に手を当てた。
「どうやら団結して我々に向かって来るということか」
「その動きが見られます」
プロコフィエフはステファーノの言葉に対し言った。
「だが集まってもその総兵力は我等の半分程度。それ程怖れることもなかろう」

ニルソンはそれに対しいささか傲然と胸を張って言った。
「そうも言えないのではないか。もしここにハサンが介入してきたら」
アローニカがニルソンに対して言った。ハサンは兵はあまり動かしたりはしない。交易に中心をおく彼等は無闇に兵を動かすことを好まないのだ。だがその兵力は決して無視できるものではない。その兵力はサハラにいるエウロパ総督軍を上回っているのだ。
「まさか。彼等が動くとは思えないぞ」
クライストがそれに対して反論した。
「そうだな。今まで我々との交易に重点を置いていたのだ。今我々に刃を向けるとは考えられん」
マトクもクライストの意見に賛同した。ここでモンサルヴァートが口を開いた。
「そう言い切ってよいとは思えないがな」
彼はそう言うと一同を見回した。
「彼等もサハラの者だ。表向き我々を客として笑顔を向けていても内心ではかなりの敵愾心を持っている筈だ」
サハラの者にとって彼等は侵略者だ。住んでいた星から追い出し自分達がそこに住む。忌むべき強盗である。
「彼等も思っている筈だ。いずれ自分達も侵略されるとな。これは事実だが」
彼等はサハラ全土を自分達の植民地にすることを計画していた。これはサハラの市民達の権利を奪い蹂躙するものだという意見も多かったが結局はそれより僅かに大勢がこの植民の賛成した。
「そう考える彼等が我々に牙を剥いたとしても不思議ではない。むしろ今まで剥かない方が不思議だったのだ」
「・・・・・・・・・」
彼の言葉を聞いた八人の提督達は沈黙した。
「そのことは常に念頭に置いて欲しい。さもないと急に足下をすくわれるからな」

「わかりました」
彼等はその言葉に対し敬礼した。モンサルヴァートはそれを見て頷いた。
「わかってくれればいい。さて、参謀総長は続けてくれ」
「わかりました」
プロコフィエフは頷き説明を再開した。
「その各国の動きですが」
サハラ北方の北部、西部、東部は全てエウロパの領土となっている。本拠地は北部のアレクサンドリア星系に置かれている。かってこの星系はカイロという名でとある国の首都であったがエウロパに滅ぼされ彼等の領土となった。そしてアレクサンドリアに改名され総督府が置かれたのである。無論以前いたサハラの者達は追放されている。
「南部だな」
「はい」
彼女はモンサルヴァートの言葉に対し頷いた。
南部はその北方の残る三割程度である。アガデスも南部にあった。ここも次第にエウロパの手が伸びているのが現状である。
「アガデス併合に危惧を覚えた南部各国が団結しようとしているのです」
「今までは互いにいがみ合ってばかりだったというのにな」
クライストが言った。彼の言葉通り南部各国もエウロパに対するよりも互いで争うことの方が多かった。これはサハラの特徴でありエウロパの侵攻もこれにつけ込んでいた。
「それが変わってきているのです」
「ふむ」
アローニカはそれを聞いて思わず頷いた。
「我々の侵攻にようやく危惧を覚えたということか」
「人間は危険が目前に迫らないとわからないものだしな」
ステファーノとジャースクが言った。

「そうした時は時既に遅し、という時が多いが」
ニルソンは醒めた目で言った。
「そして今彼等はどう動いているのだ」
モンサルヴァートは再び尋ねた。
「今の段階では互いに連絡を取り合っている状況のようです。ですがその動きはかなり速いです」
「そうか」
彼はそれを聞くと腕を組んだ。そして考える目をした。
「何かお考えだな」
ターフェルはそれを見て思った。彼は考える時よく腕を組むのだ。
「マールボロ閣下は何と言っておられる」
やがてモンサルヴァートは顔を上げた。そしてプロコフィエフに問うた。
「今のところは特に何も」
「そうか」
彼はそれを聞くと頷いた。
「どうしますか？」
マトクが尋ねた。
「動くのなら速いほうがよろしいかと」
ゴドゥノフもそれにならった。それはモンサルヴァートもよくわかっていた。
「だが待て」
彼は提督達を止めた。
「確かに敵は早く叩くにこしたことはない。だが速攻と拙攻を取り違えてはならない」
「ハッ」
「サッカーでも連合で盛んなベースボールでもそうだ。急ぐあまり雑な攻撃になっては無駄な損害を出してしまう」
この時代でもサッカーやベースボールはある。細かいところは千年も経ているのでかなり違ってきているが。

「今は彼等の状況と地形を知ることの方が先だ。そして外交だ」
ここで彼はプロコフィエフに顔を向けた。
「参謀総長」
「はい」
彼女は落ち着いた声で答えた。
「卿はどう考えるか」
彼女はその問いに対してその落ち着いて澄んだ声で話しはじめた。
「彼等が結託すれば確かに大きな勢力になります。おそらくその背後にハサン等が加わり我々にとって侮り難い勢力になってしまうかと」
「ならばすぐにでも」
「まあ話は最後まで聞け」
モンサルヴァートはニルソンを窘めた。
「ハッ」
彼女は話を続ける。
「ですがそれは確固たる連合になった場合です。一つ一つではさしたる脅威ではありません」
「ふむ」
モンサルヴァートも提督達もそれはよく理解していた。
「よってこの場合まずは外交戦略により互いを対立させることがよろしいかと思います。そうすれば彼等は小勢力の集まり、一国ずつ倒していくのは比較的容易であると存じます」
「成程、外交で分裂させた後に各個撃破というわけか」
「はい」
「戦略の基本だな」
モンサルヴァートはそれを聞き終えて言った。
「だがそれが一番いいな。よし、マールボロ閣下にそう進言しよう」
「お願いします」
「まずは同盟の動きを潰す。動くのはそれからだ、いいな」
「ハッ！」

プロコフィエフと提督達はその言葉に対し敬礼した。モンサルヴァートはプロコフィエフの提案を彼女の名でそのままマールボロ提督に進言した。
「ふむ、流石はエウロパ軍きっての才女だけはあるな」
彼はそれを聞いてニコリと微笑んだ。
「はい、私もそう思います」
モンサルヴァートも彼に同意した。
「では本国の外交部と情報部にはそう打診しよう。すぐにスタッフが来るぞ」
「はい」
「彼女もこれに参加してくれるのだろうな」
「当然です」
「ならば良い。スタッフに美しい花がいるのは実にいいものだ」
彼は頷きながら言った。
「私の妻と愛犬よりは落ちるがな」
「閣下、それは違うのでは」
彼はそれを否定しようとした。
「ジョークだよ。私の国での嗜みだ」
彼の国イギリスでは昔からウィットに富んだジョークが好まれる。これを解し操ることは知性のステータスシンボルの一つであり紳士としての嗜みであった。
「そうなのですか」
モンサルヴァートの国はドイツである。昔からジョークには疎い。音楽や哲学に重きを置く。こうした文化風土はそうそう変わるものではなくいまだに残っていた。
「花といっても棘のある花だ。知性という棘のな」
「はい」
これはわかった。今回の戦略においても彼女の存在は不可欠である。その洞察力と分析、状況判断力は大きな力になるだろう。
「その後は全て君に任せる。頼むぞ」

「わかりました」
こうしてエウロパは再び動きはじめた。やがて南部に企業家やビジネスマン、船員達に混じって多くの工作員達が紛れ込んだ。彼等は闇に潜み暗躍を開始した。

サハラの情報は連合にも伝わっていた。彼等はそれを新聞やネット、テレビニュースで知った。
「このアッディーンという人物は凄いようだな」
時には冗談半分で、時には真面目に彼のことが語られるようになっていた。中には彼に断りなく刊行された研究本まであった。プライバシーというものを無視していい遠い国の人物の話なのでかなり好きなことを書いている。その内容はネットの書き込みと大差ないものであったが売れた。中々のベストセラーとなった。
「実際にはこの人はどういう人物なのですか？」
八条も彼のことには関心があった。何しろ立て続けに武勲を挙げオムダーマンの力を増大させた人物である。興味がないと言う方が不思議である。
「私もよくは知らないのですが」
八条の執務室にもう一人いた。黒と金の連合の軍服に身を包んだこの人物は壮年で口髭を生やしている。肌は浅黒いが黒人程ではない。サハラの者に似ている。
彼はブワイフ＝サルムーンという。トルコ出身の軍人であり階級は大将である。今は統合作戦本部にいる。
「幼年学校からすぐに軍に入りそのまま軍歴を重ねていたそうです。話によるとまだ二十を越えて数年程だとか」
「それで大将となったのですか。信じられませんね」
連合においては階級の昇進はそれ程早くはない。戦争もないので当然であるがそんな彼等から見てサハラ各国やエウロパの軍人達の昇進の早さは信じられなかった。
「それだけ優秀であると見ていいのではないでしょうか。オムダー

マンはご承知のとおり共和制でエウロパのように貴族制をとってはいません。それに戦う度に劇的な勝利を収めているのですから」
「カッサラでもカジュールでもミドハドでもですね。こうして見ると実に鮮やかですね」
八条は手元にある資料を見ながら言った。
「はい。そのうえで補給や情報収集も忘れてはいません。そうしたバランス感覚も備えているようです」
「天才、ですかね」
「それはどうでしょう」
サルムーンはそれに対しては異議を唱えた。
「まだわかりませんよ。彼は今のところ一提督に過ぎませんし。これからどうなるかわかりません」
一瞬の煌きだけで終わることもよくある話である。そして以後は精彩を欠くということも。
「それはそうですが」
八条は感じていた。この人物はより大きくなると。そしてこれ以上のことをすると。
「まあ今は遠いサハラの西の話ですね」
サルムーンは言った。
「我々の影響になることは殆どありません。あちらの国々には中央政府の領事館さえ置いていませんし」
連合はサハラの国とはあまり関係がない。東方のハサンとは国境を接しているだけあり交易も盛んで中央政府も各国も大使館や領事館を置いているがこの国だけである。他にはこれといって関係のある国はない。基本的に連合内だけで足りていた為これといって外に向けて積極的に外交や交易をする必要がなかったのである。
「ですね、今のところは」
八条もそれに同意した。
「これからどうなるかはわかりませんが」
「そうですね。ただ」

サルムーンは言葉を続けた。
「あらゆるパターンは考えていた方がいいでしょう。戦略として」
「はい」
それは戦略の基本であった。
「サハラが彼のいるオムダーマンにより統一された場合も含め」
八条が今言った言葉は後にある程度というレベルにおいて的中した。だがそれを知る者はいなかった。
「ですね。それもシュミレーションする必要があるでしょう」
サルムーンはそれをあくまで起こりうる事象の一つとして考えていた。だがこれが後々になって生きる。
「今はハサンが健在であればサハラについては問題ありません。それを脅かすのはエウロパでしょう」
「ですね」
彼等はここでもエウロパと対立関係にあったのだ。
「しかしエウロパも何時まであのようなことを続ける気でしょう」
サルムーンはここで顔を顰めた。

## 第二部第一章　策略その三

「あのようなこととは？」
「サハラ侵攻ですよ。幾ら人口が増え過ぎたからといって他国を侵略し住民を追い出しそこに移住するとは。あれではまるで強盗です」
「ほんの一千年前までそれが常識でしたよ」
八条はそれに対して素っ気なく言った。
「しかしですね」
「それにより百億単位の難民が生じている、と仰りたいのですね」
「それもありますが」
八条は比較的冷静だがサルムーンは何処か感情的である。普段は冷静な彼にしては珍しかった。
「それは彼等の身になって考えないとわからないことですよ。彼等は我々のように広大な開拓地など持ってはいないのですから」
「開拓地、ですか」
「はい。我々がこうして曲がりなりにも今まで武力による衝突も分裂もなく緩やかな連合体でこれたのはひとえに三方に続く未開の星系のおかげです。それがあるからこそ産業も科学も発達し人口も増えたのです」
そうであった。衝突があっても別の星系に進出すればよく開拓を進める為に科学技術が発達し人口も驚異的な増加を果たしたのだ。連合の特徴はこの開拓地なくして語れない。未開の星系はまだ何十万光年も続いていると言われている。彼等にとってそこはあらゆる問題の解決口であり発展の源であったのだ。
「彼等にはそれがありません。もとはといえば我々の祖先があの場所に追いやったのですが」
「あの時彼等は歯噛みして向かったそうですね」
「はい。しかし個々の惑星はかなり恵まれたものでそれは喜んだらしいですが」

「しかしそれは限られていた、と」
「残念なことに」
言葉は皮肉めいたものにも聞こえるが口調は淡々としたものであった。
「彼等にとってはあの地への侵攻は生きる為に仕方がないのです。それを道義だ何だので責めることは出来ませんよ。我々も同じ立場ならそうしたでしょうし」
「そうですか」
「残念なことですが。人間の歴史とはそうした一面もあります」
八条は無表情のまま言った。
「それに我々も将来彼等やサハラの勢力と衝突する可能性もありますよ」
「そうですね。若しハサンが滅びそこにエウロパや我々にとって脅威となる勢力が現われたりしたら」
「その時は戦わねばならないでしょう」
予防戦だ。あらかじめ脅威となり得る敵を強大なものとなる前に叩いておこうというものだ。
「たださしあたってはサハラ諸国との衝突はないでしょうが」
八条は表情を穏やかなものにした。
「彼等は互いに争い、またエウロパに対抗しなくてはなりません。今のところは」
「はい」
「エウロパですがやはりブラウベルグ回廊が気になりますね」
連合とエウロパの唯一の国境である。ここは長い間激しい睨み合いが続いている。
「ガンタース要塞群の防御をさらに強化しておきますか」
「そうですね、さしあたってはそうしましょう」
「わかりました」
サルムーン大将はそう言うと退室した。八条はそれを見届けると電話を手にした。

「技術総監部へ」
やがて技術総監部から誰かが出て来た。
「総監をお願いします」
暫くして執務室に一人の男が入ってきた。
「只今参りました」
少し浅黒いアジア系の痩せた四十代の男である。髪は黒く豊かである。顔も頬がこけ黒い目は知的な光を放っている。連合軍技術総監グエン＝バン＝チョム大将である。
元々は軍人ではなく科学者であり技術者であった。大学院で工学の博士号をとった後ベトナムの兵器開発企業に入ったがそこで見込まれ軍にスカウトされた。そしてベトナム軍の技術将校となりそこで艦艇を主に開発していった。ベトナムの地理的状況に見事に適応した艦艇を積極的に開発しベトナム軍の兵器の発展に貢献した。連合軍設立にあたって彼の事を知る八条に招かれ技術総監となった。研究及び開発の為には寝食も忘れる程の熱心な男である。
「お待ちしていました」
八条は席を立って彼を出迎えた。
「ではこちらへ」
そして彼等は話をはじめた。国防省である八条は自身の椅子に座りチョムは机を挟んで彼と向かい合って立つ。
「艦艇の開発はどうなっていますか？」
八条は率直に尋ねた。
「ハッ、まずは戦艦ですが」
チョムは敬礼をした後答えた。
「索敵能力及びダメージコントロール、そして防御を重視した構造にしたいと考えております」
「宇宙海賊を重視してですか」
八条は索敵及びダメージコントロールに注目して言った。
「そうです。彼等は何処から姿を現わすかわかりませんから」
連合内における最大の脅威である。それは当然であった。

「巡洋艦も同じです。速度やワープ能力はこれまで通りですがやはり索敵やダメージコントロールを優先させた構造を計画しております」
「空母はどうなるのですか？」
「空母は艦載機の搭載を多くしたものにしていきます。今まではどの国の空母も多くて百機程でしたが二百機を考えております」
「それだとかなりの大型になりますね」
「はい。戦艦や巡洋艦もこれまでより大型なものにしていこうと考えております」
「火力はどうなるのですか？」
「火力も当然強化します。ただ空母は搭載を重視し正面に集中させます」
「ですね。空母の発着はどうしますか？」
「発着口を複数置きます。そこから十機単位で発着させます」
それまで連合の多くの空母は後方に発着口を置き数機単位で発着していたのだ。
「砲艦やミサイル艦も同じです。大型化し火力と索敵能力、ダメージコントロールを強化していきます」
「駆逐艦もですね」
「当然です。そして各艦の速度を出来る限り統一させたいのですが」
「同時に行動できるようにですね」
「はい。そして補給艦及び揚陸艦の搭載量を増加させたいのですが」
「了解です。補給艦や揚陸艦もかなりの数が必要になりますね」
「はい。そして各艦には数機ずつ無人の偵察機を搭載できるようにします」
「念入りですね」
「敵の場所を知ってこその戦術ですから。索敵能力は高いにこしたことはありません」
「わかりました。他には何かお考えがありますか？」
「パトロール艦ですね。駆逐艦並の索敵能力にしこれまで一隻ずつ

であった行動を十隻単位で行動できるようにしたいです」
　パトロール艦は主に星系の防衛にあたる。他の艦艇が海賊の討伐にあたるのに対してこの艦は防衛が任務である。
「艦載機は今専門の開発チームを作っております。どうやら速度、火力及び装甲を重視したものになりそうです」
「重装備のものですか」
「はい。機動性よりも攻撃力と生存力を重視しているようです」
「成程」
　あくまでも連合の実情に合わせた開発である。彼等は海賊等を掃討するのを主な目的に置いている。そして速度を同一にすることにより同時に行動出来るようにしちえた。あらゆる事態に対応でき、数でも敵を圧倒することを考慮に入れていた。
「あと一つ考えがあるのですが」
「何でしょうか」
「破損した艦艇を修理する艦の事を考えているのですが。工作艦です」
　戦場で傷ついた艦艇を後方で修理する艦である。陸上戦における衛生兵のようなものである。
「個々の艦のダメージコントロールだけでは限度があります。こうした艦の存在は不可欠かと」
「わかりました。あとは後方基地の修理用ドックの増設もですね」
「はい」
　八条はやけにダメージコントロールにうるさい人だと思った。だがそれは正論であったので特に何も言わなかった。
「あとは・・・・・・これ位でしょうか」
「ですね。これだけでも連合の装備はかなり変わりますよ」
「陸上部隊のことはレイミー中将に聞いて下さい。私はあちらについては疎いので」
「わかりました」
「ところで私は一つ考えていることがあるのですが」

「何でしょうか」
「連合の象徴となるような兵器はないでしょうかね」
「象徴ですか？」
「はい。我が軍は設立されて間もないです。その心を一つに繋ぎとめるような象徴があればいいと思うのです」
「そうですね」
彼はそれを聞いてふと考え込んだ。
「私の私見ですが」
そう断ったうえで口を開きはじめた。
「戦艦か空母がよろしいかと存じます。それも巨大なものを」
「戦艦か空母ですか」
「はい。艦隊戦におけるこの二つの役割はかなり重要です。それを考えると妥当ではないでしょうか」
「確かに。それに電子、通信の設備を強化するのですね」
「そうです。艦隊全体の指揮及び統率が可能なように」
「成程」
八条はその言葉に頷いた。
「ですがそれはまだ進めなくてよろしいかと存じます」
「まずは他の艦艇及び艦載機ですね」
「そうです。全てが整ってからでも遅くはないかと」
「わかりました。それではそうしましょう」
「はい」
次にレイミー中将が入って来た。黒に近い茶の髪のダークブルーの瞳を持っている。技術系とは思えぬ程の逞しい身体つきをしている。彼は陸上兵器の開発及び研究がその専門分野である。
「チョム大将からお聞きしたのですが」
八条はそう前置きしたうえで話しはじめた。
「陸上兵器の開発はそうなっておりますか？」
「あまり順調とは言えません」
彼は少し顔を顰めて答えた。

「全ての兵器において今何を重点に置き開発すべきか議論が別れているのです」
「といいますと」
「生存能力を重視すべきか機動性や攻撃力を重視すべきかで。今真っ二つに別れているのです」
「そうなのですか」
これは兵器の開発においてはよくある話である。
「艦艇の場合は海賊を主な相手としておりますから用途がすぐに決まります。しかし陸上兵器となりますと」
「テロ組織はまた別ですからね」
「はい。特殊部隊の武装はまた別に開発しておりますが」
この時代においてもテロ組織等に対しては専門の特殊部隊が必要であった。こうした狂気の輩にはそれ相応の対処が必要なのである。
「暴動の抑制は催涙弾で充分なのでこれは省きます。あらゆる地形に対応出来るような設計はもう同意しているのですが」
「生存性をとるか攻撃力をとるかですか」
「そうなのです。どうすべきでしょうか」
「そうですね」
八条はレイミーに話を振られて考え込んだ。
「やはりここは」
暫く考え込んで話しはじめた。
「生存能力を重視すべきであると思いますね」
「長官はそうお考えですか」
「はい。我が軍は志願制ですし。将兵の死傷者が多ければそれだけ志願者も減るというものです」
「志願者ですか」
「はい。志願者なくしては成り立ちませんからね。徴兵制は今更ですし」
連合においてはどの国も志願制である。これはエウロパも同じである。

「そういったことを考えると生存性を重視する方がよろしいかと。我が軍は数はあるのですし攻撃力が多少不足してもそれは数で充分補えます」
「そしてその数を減らさない為にもですね」
「そういうことです。私はそう考えます」
「それではスタッフにそれを伝えましょう。おそらくそれで決まるかと思います」
「お願いします」
「わかりました」
こうしてレイミー中将も部屋を去った。陸上兵器の開発もこれでおおよその開発方針が定まった。
一人になった八条はあることを考えていた。
「入隊の年齢をどうするかだな」
軍の入隊は若者が入るものである。従ってその年齢制限は他の職種と比べて遥かに厳しい。
「各国によって学制も異なるしな」
これは致し方ないことでありあれこれと口出しできるものではなかった。
「今一般兵士は十八歳からか。これは問題ないな」
彼はそれはすんなりと決めた。
「あとは士官学校か」
連合各国にはオムダーマンや他のサハラ諸国のような幼年学校はない。これは軍事に対する考え方の違いである。
「学制の違いがあるからそうそう容易には決められないか」
彼は各国の学制の資料を見ながら呟いた。
「ここは可変的にいくのが一番か」
彼はあることを決めた。
士官学校の入学年齢は下は十八歳からとした。これは各国の高校教育の終了年齢の一番下の年齢である。中には中学過程が五年で高校家庭が三年、二十歳になって終わる国もあるからだ。士官学校は

大学扱いなので高校課程修了をその受験及び入学の最低条件としたのだ。尚各国の高校卒業の割合は何処の国も百に近い。
「そして上限だな」
これは思い切って高くした。二十六歳までとした。
「これで志願者も増えるし多くの人材が集まるだろう」
彼のこの士官学校の年齢制限は上手くいった。志願者が増えより多くの有望な人材が入って来たのである。
連合軍は次第にその形を整えてきていた。だがそれはまだほんの序曲に過ぎなかったのだ。

## 第二部第一章　策略その四

ミドハド軍を倒したオムダーマンは治安維持の艦隊を残しその殆どをオムダーマン本土に戻していた。カッサラには更に駐留する艦隊を増やした。

ブーシル星系には特別に一個艦隊が留まっていた。アッディーンの率いる艦隊である。彼等はここでサラーフに備えると共にこの星系に潜伏しているであろうハルドゥーン元ミドハド連合主席を探していた。

「中々見つかりませんね」

司令部を置いたブーシルの旧政庁でアッディーンの部下達は司令の前に集まっていた。

「どこにも見当たらないようだな」

アッディーンも彼等の顔を見回して言った。

「はい。流石は狸親父と言われただけはあります」

アタチュルクが顔を顰めて言った。

「一体何処に隠れたのか。本当に上手く隠れてますよ」

シャルジャーの声は苛立っていた。情報参謀である彼にとって今の状況は我慢できないものである。

「苛立つ気持ちもわかるが」

アッディーンはそんな彼等を宥めるようにして言った。

「ここは落ち着いて探してくれ。焦ると向こうの思う壺だぞ」

「はい」

一同は彼のその言葉に気を少し落ち着けた。

「あと国境には気をつけておけ」

アッディーンは表情を引き締めて言った。

「サラーフの動きが妙だからな」

「確かに。既に多くの工作員が入って来ているという報告もありますし」

ガルシャースプが答えた。
「憲兵隊には抵抗組織と共に彼等にも警戒するよう伝えておけ。おそらく両者は繋がっている」
「はい」
ガルシャースプはそれに対し敬礼して答えた。
「各惑星間の監視は厳重にしろ。おそらく奴は惑星間を転々としているぞ」
「わかりました」
これに各分艦隊の司令達が敬礼した。
「とりあえずはこれでいいな」
アッディーンは考え込みながら言った。
「はい」
一同を代表してガルシャースプが答えた。
「だがこれだけではどう考えても不完全だ」
「ですね。これ位ではあの男は捉えることは出来ないでしょう」
「そうだ、やはり特殊部隊が必要だな」
アッディーンは顎に手を当てて言った。
「今首都から派遣されようろしているらしいですけれどね」
「果たして誰が来るのやら」
「我が軍の特殊部隊はそれなりに優秀ですけれどね」
「それはそうだが」
アッディーンはラシークの言葉に頷いた。実際にオムダーマン軍の特殊部隊は各国の間で定評がある。
「さて誰が来るか」
アッディーンは考えた。ブーシルは陰の戦いの舞台となろうとしていた。
当のハルドゥーンであるが彼は大方の予想通りブーシル星系に潜伏していた。
市庁のある惑星である。その辺境の寒村である。

そこは特にこれといった騒ぎもなくのどかで落ち着いた村であった。
その中の一つの小屋。そこに彼は潜んでいた。
「オムダーマン軍はいないか」
彼はその地下に息を潜めていた。
「はい、今のところは」
彼の支持者であるその小屋の持ち主が言った。彼はこの村の出身で軍では将校をしていた。同郷のよしみで彼に取り立てられ大佐まで昇進したのだ。軍を退いて暫くは故郷で静かに暮らしていたがハルドゥーンが失脚し故郷に帰って来ると彼を匿ったのだ。
「ですが私の身元も調べられているでしょう。ここにも長くは」
「それはわかっている」
彼は低い声で言った。
「今も警戒は厳しいが特殊部隊が到着するとこの比ではないだろう。今のうちに場所を移した方がよいな」
「そうされるべきかと」
「うむ。同志達は今どうしている？」
ハルドゥーンは尋ねた。
「各地に潜伏しております。それぞれ時を窺っております」
「そうか、ぬかりはないな」
「はい」
彼は頷いた。
「ではここから去るとしよう。今まで世話になったな」
彼はそう言うと席を立った。
「では私も」
彼はそれに従おうとする。
「駄目だ。君には家族がいる」
「しかし」
彼はそれでもついて行こうとする。
「家族がいる者を入れるわけにはいかない。君に何かあれば奥さん

や子供さん達はどうなるのだ」
「それは・・・・・・」
彼は今は農業を営んでいる。家の重要な働き手だ。
「わかってくれたか。君の気持ちは受け取ろう。私は君のご家族が哀しむのを見たくはないのだ」
「わかりました」
彼はそれに従った。ハルドゥーンはそれを見届けると階段に足を入れた。
「ではな。機会があったらまた会おう」
「はい」
こうしてハルドゥーンはその村を後にした。変装し村を一歩出るとその左右を男達が取り囲んだ。
「行くか」
「はい」
彼等は車に乗った。そして山の方に向かった。
「よろしいのですか？」
彼を左右から警護する男の一人が問うた。
「何がだ」
「彼を連れて行かなくて」
「よい」
ハルドゥーンはそれに対して素っ気無い声で言った。
「家族がある者は入れてはならぬ。いざという時にそれが足枷になる」
「そうですか」
「そうだ。何も失う者でなければ手駒にはならぬ。下手な愛情に縛られぬからな」
「わかりました」
「ところでサラーフは何と言っておる」
「協力を約束してくれました。まずは武器の供給です」
「そして特殊部隊の増援か」

「はい」
サラーフ特殊部隊は諜報部隊から入った者が多い。その為諜報活動に秀でている。
「これで幾らかは粘ることができるな。そしてその間にサラーフ軍がやって来る」
「そして彼等にオムダーマン軍を倒させるというわけですな」
「そうだ、そしてミドハドから奴等を追い出してわしが主席に返り咲く」
「その後でサラーフも追い出すと」
「よくわかっておるな、その通りだ」
ハルドゥーンはその言葉を聞いてニヤリと笑った。
「ミドハドの復活はじきだ。そしてあのアッディーンという小僧に目にもの見せてやろうぞ」
「はい」
彼等を乗せた車はそのまま山の方へ消えた。そしてそのまま何処かへ姿をくらました。

# 第二部第二章　狐の登場その一

## 狐の登場

アッディーンの艦隊がブーシルに駐留しハルドゥーンを血眼になって捜している頃カッサラに一人の若い男がいた。
彼は港を降り立ちそのままミドハドに向かう船に向かおうとしていた。白い肌に黄色っぽい髪と黒い眼をしている。背は普通位でかなり痩せた身体をしている。顔は鋭利で引き締まり眼からは鋭い光を発している。
「ここからブーシルだとかなりの長旅になるね」
彼は高めの鋭い声で隣にいる若い男に対して言った。
「そういうわけでもないですよ」
その男は答えた。
「ブーシルは確かに辺境にありますがそこまでの道は開けていますから。案外速く到着することができます」
「そうだったのか。私は船旅を楽しめると思ったのだが」
「中佐、不謹慎ですぞ」
彼はそれを聞いて顔を顰めた。
「そう怒るな、ウルドゥーン君」
その黄色い髪の男はその男を宥めた。
「私もブーシルへ行く為に色々と準備をしておいたから」
「そうなのですか？私には遊んでばかりいたような気がしますが」
「それは君が私の一面しか見ていないということの証左だ」
彼はウルドゥーンに対して言った。
「一面でそう見られるというのは人間として問題だと思いますが」
「人を一面だけで判断してはいけないよ」
「悪い一面だけで全てをぶち壊してしまう人もいますね」
「・・・・・君も口が減らないな、相変わらず」

「中佐と一緒になってからです」
ウルドゥーンは顔を顰めてそう言った。
「まだ士官学校を出たばかりだというのに世間ずれし過ぎている。それではいけないな」
「中佐と一緒になってからこうなったんですよ」
「何でも私のせいにするのはどうかと思うが」
「では何と言えばよろしいのですか？」
「やれやれ」
彼はお手上げといった仕草をした後で彼に対して言った。
「例えば君の士官学校の時の先輩に悪いことを教えられたとか」
「私の期の上の方々は皆立派な方ばかりでしたよ」
「そうだったな。士官学校も落ちたものだ」
「中佐を反面教師としてらしたみたいですよ」
「それは心外だな、私みたいな真面目な人間を」
「何処が真面目なんですか。昨日の夜何処に行っておられました？」
「社会の勉強にね。軍人だからといって世の中を知らなくていいというものじゃないだろう」
「そう言っていつも夜の街に消えるんですから。ちょっとは慎んだらどうですか」
「大丈夫だよ、私をに害を為そうという愚かな奴はいないさ」
彼はそう言うと不敵に笑った。
「油断大敵という言葉をご存知ですか？」
「いいや。実力がものをいうとは聞いているけれど」
「どうやら中佐は一度痛い目に遭われないとおわかりになられないようですね」
「私はそういった趣味はないのだけれど」
「冗談もいい加減にして下さい、さあ行きますよ」
「うん、ブーシルには可愛い女の子はいるかな」
「それしか考えられないんですか！？」
二人は慌しく港に向かった。暫くしてブーシルに向かう便が宇宙

に旅立った。

サラーフ王国はサハラ西方で長い間最大の勢力を誇っていた。サハラ全体においてもその勢力は二番目にある。東方に勢力を張るハサン王国に次ぐ勢力で今まで西方の中心勢力として動いていた。

その兵力も今までは他の西方諸国を大きく引き離していた。だが今は事情が異なる。急激に勢力を拡張してきているオムダーマンに並ばれようとしているのだ。

首都アルフフーフ。ここには王宮の他政府の中枢が置かれている。この国は立憲君主制である。表向きは王の権限が強く王が首相を選ぶ制度になっている。といってもそれは形式的なものであり実際には議会が選んだ首相を王が追認している。

その首相官邸に二人の男がいた。

「ブーシルに潜り込ませている者達からの報告はあったか」

額の広い太った男が会議室で向かいにいる男に対し尋ねた。

「はい、今のところは順調のようです」

サラーフの黄土色の軍服に身を包んだ男が答えた。

「今のところは、か」

「はい。問題は多々ありますから」

軍服の男は言った。見れば髪も髭も銀である。彼は『サラーフの銀狐』と呼ばれる軍務大臣オストゥール＝ハルージャである。もう一人の太った男は首相のムスタフード＝サレム、サラーフ与党の領袖でもある。

「まずハルドゥーンの手中にある者達の規模がどれだけのものかいまだに把握できていないのです」

「多く見せている可能性もあるということか」

「はい。彼はそうしたことが得意ですから」

「そうだな。実際には全然いないということも有り得る」

「それは充分考えられることです」

彼は目を鋭くして言った。

「あの男は信用なりません故」
「それは私もわかっている」
サレムはそのたるんだ頬を歪めた。太ってはいあるが顔立ちはわりかし整っている。
「今まで我が国をどれだけペテンにかけてきたか。あの男は狡賢い」
「ですね。絶対に信用はできません」
ハルージャもそれに同意した。サラーフはミドハドの外交に何度も煮え湯を飲まされているのだ。
「だからといって利用しないわけにはいかない。今はオムダーマンの方が脅威だ」
「はい、今や彼等は我々に匹敵する勢力を持つようになりました」
彼は言った。
「人口及び兵力においてもほぼ互角です、まさかこんな短期間にここまで勢力を伸ばすとは」
「全てはカッサラからだったな。あの男が表舞台に現われてから」
「アッディーン提督ですね」
彼の存在はサラーフにとっては今や目の上のタンコブであった。
「しかもそのブーシルにいるのはあの男だ」
「よりにって、というものです」
二人は顔を顰めた。
「しかしあの男は艦隊戦には強いがゲリラ戦はどうなのだ？」
「今のところは何も。ただ宇宙海賊との戦いは見事だったようですが」
カッサラ周辺の海賊掃討の情報は彼等にも届いていた。
「未知数というわけか。しかしオムダーマンの特殊部隊は手強いからな」
「はい、どのみちハルドゥーンにはより一層のテコ入れが必要です」
ハルージャは言った。
「特殊部隊はそうして逐次潜り込ませていくか。ところで艦隊の方だが」

「はい、今二個艦隊をあちらに向かわせようと計画しています」
「国境にいる艦隊と合わせると三個だな」
「はい、ブーシルでハルドゥーンが蜂起した後隙を見て一気に侵攻させます」
「そしてそこからミドハドに入りハルドゥーンをハルツームに戻してやると」
「後は我々の傀儡政権です。思う存分こき使ってやりましょう」
「そこまで上手くいけばな」
サレムはそれにはいささか懐疑的であった。
「さっきも言ったがあの男は狡賢い。それに向こうも我々を利用しようと考えている」
元々そういった同盟である。オムダーマンの勢力が伸張した為互いに接近し敗れた後も彼等に対抗する為そうして兵を送ったりしている。ハルドゥーンとサラーフは完全に打算によって結び付いている関係であった。そもそもついこの前までは不倶戴天の敵同士であったのだ。
「それはお互い様ですけれどね」
政治とはそうしたものである。
「実際には傀儡政権ではなくそのままミドハドを併合してもいいと思うのだがな」
「そうはなさらないのですか？」
「したいのだがハルドゥーンと約束してしまった」
「密約でしょう？破棄すればよろしいかと」
「陛下がお許しになられぬ」
何だかんだ言ってこの国では国王の存在は無視できない。サラーフ国王は信義を破ることを好まなかった。それは国家の信用を落とすことになるからという理由からであった。
「陛下が。それは仕方がないですな」
「うむ。だがその後であの男がまた汚い手を使えば話は別だ」
「その時は何の躊躇もいりませんな」

「そういうことだ。では艦隊と特殊部隊は頼んだぞ」
「わかりました」
こうして二人は会議室を後にした。そして暫くしてアルフフーフから二個艦隊がブーシルとの国境に向けて出撃した。

## 第二部第二章　狐の登場その二

ハルドゥーンはブーシルの中枢に密かに潜り込んだ。そしてスラム街の木賃宿で密かに情報を収集していた。
「オムダーマン軍の動きはどうだ」
彼は一室でノートパソコンを叩いている男に対して尋ねた。
「流石にこの一帯には目がいっていないようですね」
男はモニターに映し出されたオムダーマン軍の警備状況や巡回の状況を見ながら言った。
「そうか。まさかわしがスラム街にいるとは夢にも思うまい」
彼はそれを聞いて叶笑した。
「そうともばかり言い切れませんよ」
後ろから声がした。サラーフから送られて来た特殊部隊の者である。
「ここにも鼠が数匹紛れ込んでおりました」
「本当か」
「はい、やり過ごしましたが」
「そうか、ではここも去った方がいいな」
ハルドゥーンはそれを聞いて考え込んだ。
「おい」
そしてノートパソコンを叩く男に声をかけた。
「同志達に伝えろ。場所を変えると」
「わかりました」
男はキーボードを叩きながら答えた。
「何処にですか？」
「そうだな」
ハルドゥーンはまだ暫く考え込んでいたがやがて顔を上げた。
「一先下水道に隠れよう」
「了解」

下水道は昔からテロ組織や抵抗組織の有効な隠れ家であった。彼等はそこを拠点とし、複雑な迷宮を伝い奇襲を仕掛けてきた。
それは今でも変わらない。連合にもエウロパにもテロリストは存在しこのサハラではそうした組織がモザイク状に入り組み存在しているが彼等は都市部においてはそうした下水道を使うことが多い。毒ガス等でいぶり出そうにもその前にそれを察して逃げてしまうことが多い為に効果はなかった。
ハルドゥーン達は地下に潜伏した。以後彼等は一時的に活動を停止した。
「そして今もこのブーシルにいるということか」
アッディーンは司令室で不機嫌な表情をして言った。
「我々が痺れを切らすのを待っているのでしょうか」
ガルシャースプが首を傾げていた。
「だろうな。今サラーフの艦隊がこちらに向かってきているそうだ」
「国境には既に一個艦隊が配属されております」
「その艦隊と合流して侵攻してくるつもりだろうな」
「同時にハルドゥーン達も蜂起、ですか」
「そうだ。そしてこのブーシルからミドハドの復活が幕を開けるというわけだ。歴史的な名場面になるぞ」
アッディーンの言葉はシニカルなものであった。
「俺達は忌むべき侵略者だ。それを追い出したハルドゥーンは堂々と凱旋する」
「救国の英雄として」
「そうだ、そしてその後サラーフとミドハドは盟友となりオムダーマンを征伐する。大方そんなところだろう」
「そしてその後はお決まりの内部分裂ですね」
「それを見る頃にはオムダーマンは少なくともこの旧ミドハド領から一兵残らず追い出されている」
アッディーンは言った。
「今はハルドゥーンを先に始末するべきなのだがな」

「ですがその所在が掴めません」
「上手く隠れている。下手に強引な捜査や攻撃を仕掛けて民間人を巻き添えにしたら向こうの思う壺だしな」
「はい」
それはゲリラやテロリストの狙いの一つである。ナポレオンのスペイン侵攻においては農村を歩いていたら急に後ろから銃で撃たれる。そうしたことが続き疑心暗鬼になり一般市民をゲリラとみなし殺す。そうなると彼等はフランス軍を憎む。そしてゲリラに協力したり参加するようになる。最終的には彼等はフランスをスペインから追い出した。
だがそれはナポレオンのロシア遠征の失敗とライプヒチの敗戦による失脚が要因であった。スペインでの泥沼の事態は確かにゲリラは彼を苦しめたが倒したわけではなかった。ゲリラによりスペインは大きな犠牲を払った。今エウロパの中央美術館に残されている当時のスペインの画家ゴアの絵にもそれは描かれている。
「ゲリラやパルチザンは同時に高度な外交や政治的センスを必要とする。チトーもそうだったな」
「ええ」
チトーとは第二次世界大戦の時バルカン半島に侵攻したドイツ軍に対抗して戦った指導者である。彼はドイツへの抵抗組織を率いゲリラ戦術で彼等を苦しめた。彼は優れた戦術指揮能力を持っていたが同時に卓越した政治センスを併せ持っていた。
連合国に侵略者ドイツと果敢に戦う自分達の存在をアピールしたのだ。それによりドイツ敗戦後は独立を勝ち取った。ソ連の介入に対しても強気でられたのはそれがあったからだ。そしてソ連に対しても臆することがなかった。離れていたことと大戦によるソ連の疲弊、そして自らの強さを陰に陽に主張したからだ。このチトーによりバルカン半島はユーゴスラビアという連邦国家として存在することができた。
「ハルドゥーンはそれも見越している」

「悔しいですがそうですね」
アッディーンもガルシャースプもハルドゥーンの政治能力はよく知っていた。だからこそこのゲリラ活動に危機感を募らせていたのだ。
「もう暫くしたら各地でテロ活動が起こるぞ」
「ですね。将兵には警戒するよう通達しておきます」
彼等の危惧は不幸にして的中した。数日後ブーシル各地で次々に突発的な爆発事故や将兵への襲撃が起こったのだ。
「早速きたな」
アッディーンはその報告を聞いて顔を顰めた。死傷者も出ていた。
「現場の指揮官達から徹底した掃討を許可するよう要請が出ていますが」
「駄目だ」
アッディーンはそれに対して首を横に振った。
「下手に民間人を巻き添えにすると事態はより悪化する。今は守りを固め自重しろと伝えよ」
「わかりました」
そして数日が経った。被害は増える一方であった。
「現場の不満は頂点に達しております」
「そうか」
彼はシンダントからの報告を受けていた。
「治安維持にあたる将兵達は精神的にも肉体的にも限界に達しようとしています。このままでは暴発するのも時間の問題かと」
「それはわかっている」
彼はそう言うと席を立った。
「だがそれでも我慢をしてもらわなくてはならない」
窓の方へ向かった。
「それにもうすぐ敵艦隊がこちらに到着する」
「はい」
「出撃の準備をしておかなければならないが」

「武器、弾薬及び燃料庫は厳重な監視のおかげで無事です。何度も襲撃を受けましたが」
「問題はこれからだ。運び出す時が最も危険だ」
「そうですね。特殊部隊の援助も頼みましょうか」
「特殊部隊はハルドゥーン達の捜索で手が一杯だろう。それは出来ない。そうだ」
アッディーンはここであることを思い出した。
「特殊部隊の増援はどうなったのだ」
「それでしたら」
シンダントはふと思い出し脇に抱えているノートを取り出した。
「予定でしたら明日到着ですね。約七千名」
「それだけいたらかなり心強いな」
「ですね。問題は指揮官ですが」
シンダントじゃそこで顔を顰めた。
「誰だ！？」
それはアッディーンも認めた。
「ハルヴィシー中佐です」
彼は溜息を漏らすようにして言った。
「随分不満そうだな」
アッディーンはそれを見て言った。
「閣下はご存知ないのですか」
「何をだ？」
「実は私は彼と同期なのですが」
「ではよく知っているな」
「ええ。悪い意味で」
その言葉からは好感は全く感じられなかった。
「士官学校の頃から素行が悪い男でして。浪費家で女好きで有名でして」
「それ位何処にでもある話だと思うが」
「限度があるのです。門限破りもしょっちゅうでしたし美人と見れ

ば誰彼かまわず口説きにかかるし」
「ドン＝ジョバンニか？」
モーツァルトのオペラである。演出はかなりおおがかりになっているがオペラは今でも上演される。モーツァルトはこの時代においても天才と称されている。
「そんないいものではありません。とにかく何に対してもいい加減な男でして」
「それでよく士官学校を退学にならなかったな」
「成績は良かったので。それも射撃や諜報活動は士官学校始まって以来だったとか」
「特殊部隊に入る為に生まれてきたような男だな」
「はい。ですが特殊部隊に入っても相変わらず酒と女に溺れているようです。全く同期の恥さらしですよ」
「だがそう言うわりには怒っていないな」
「まあ。彼には色々と世話になっていますし。一緒によく遊びましたし」
「ならいいじゃないか。で、ハルヴィシー中佐は何時来るのだ？」
「ええと・・・・・・」
シンダントはノートを調べた。
「今日ということになっていますが」
「そうか。来ると思うか。どうも時間にはルーズなようだが」
「微妙ですね」
その時ドアをノックする音が聞こえてきた。
「入れ」
二人の男が入って来た。
「やっと来たな」
シンダントは前にいるその男を見て顔を顰めた。
「おいおい、同期に対してやけに冷たいじゃないか」
彼はそれに対して笑いながら言った。
「当然だろ。貴様を知っている人間で顔を顰めない者はいないぞ」

シンダントは辛辣な言葉を出した。
「やれやれ。皆少しは内面というものを見て欲しいものだ」
「その内面を見て言っているのだが」
シンダントの言葉は厳しさを緩めない。
「彼がハルヴィシー中佐か」
アッディーンはそのやりとりを見てシンダントに尋ねた。
「はい。アスランより只今到着致しました」
ハルヴィシーは敬礼して答えた。
「よく来てくれた。貴官の任務は聞いているな」
「はい。この星系にいるミドハドの抵抗組織及びそれと結託するサラーフ特殊部隊の一掃ですね」
「そうだ。わかってくれているようだな」
実際アッディーンも不安であった。シンダントの話からは到底まともな人物とは思えなかったからだ。
「では早速取り掛からせて頂きたいのですが」
ハルヴィシーの目が光ったのを見た。
「到着してすぐにか」
「はい。既にサラーフの艦隊がこの星系に向かっていると聞いていますし。彼等が来る前に倒しておきたいでしょう」
「それはそうだが」
だが準備等もあるだろう、と言おうとしたその時だった。
「部下達に既に準備は整えさせております。要員は全て配置に着いております」
「もうか！？」
これにはアッディーンもシンダントも驚いた。
「はい。ここに来る前に打ち合わせをしておきましたので。あとは私が現場に行くだけです」
「陣頭指揮をとるのか」
「そうです。連中を相手にするにはそれが一番ですから」
ハルヴィシーは当然といったふうに言った。

「提督は敵艦隊に専念して下さい。ハルドゥーンは私が引き受けますから」
「頼めるか」
「はい」
シンダントは一瞬アッディーンの顔を見た。そして彼の決断を知った。
「では頼む。貴官の言う通りこちらはサラーフの艦隊に専念させてもらう」
「わかりました」
こうして彼等はそれぞれの敵へ向かった。ハルヴィシーはまずスラム街に入った。
「まずはここからだな」
彼はその複雑に入り組んだ小路を見回して呟いた。
「ウルドゥーン中尉」
そして隣にいるウルドゥーン中尉に声をかけた。
「ここにいるメンバーは誰だ」
「はい、サルダーン大尉とマナーム少尉、そして二人の部下十人程です」
「そうか」
その声も表情もカッサラのようにふざけたものではなかった。、まるで全てを見抜くような鋭いものであった。
「彼等に伝えてくれ。まずはここを取り囲めと」
「わかりました」
ウルドゥーンは携帯のメールを打った。
「あとは下水道だな」
彼は考えた。
「チームを大きく二つに分ける。市街を固めるチームと下水道に入るチームだ」
「はい」
彼はまたメールを打った。

「下水道に入る方は私が指揮を執る」
「中佐自らいかれるのですね」
「いつもそうしている筈だが」
「それはそうですが」
ウルドゥーンは彼のその射抜く様な目に押されることはなかった。
「ではそれで問題ない」
「はい」
ただ彼は指揮官自ら敵と対峙するのはいざという時指揮系統に問題が生じるのではないかと思ったのである。だがそういった心配を全く計算に入れないのがハルヴィシーである。
「ここを一通り洗ったら下水道に行こう。そして彼等を見つけ出すぞ」
「わかりました」
二人はスラムを歩いて行く。そして多くの危険が迫って来るのを感じ、それを楽しんでいた。

## 第二部第二章　狐の登場その三

「サラーフが兵を動かしたか」
それはエウロパにも情報が入っていた。
「はい、二個艦隊をブーシルに向かわせたようです」
マールボロとモンサルヴァートが昼食を摂りながら話していた。
「サラーフも必死のようだな」
マールボロはフォークとナイフでサハラ産の角牛のステーキを切りながら言った。
「このままですとオムダーマンが彼等に匹敵する勢力になってしまいますからね」
モンサルヴァートはそう言うと同じくサハラでとれた紫葡萄のワインを口に含んだ。地球等にある葡萄で作ったワインよりもずっと甘い。
「そうだな。そうなっては彼等も何かとやりづらいだろう」
二人はステーキを食べ終わった。そしてデザートが運ばれる。無花果のシャーベットだ。これは地球のものと同じである。
「それを阻止する為にハルドゥーンとも手を組んでいるらしいですね」
「相変わらずだな、奴も」
「はい。しかもミドハドの主席の座を諦めてはいません」
「その為には何でもするか。奴らしいと言えばそうだが」
シャーベットを口にした。ザリッとした食感が歯に伝わる。そして甘さが口全体を覆う。
「かっての宿敵の手先になってまで権力が恋しいか。つくづく見下げ果てた男だ」
マールボロは古い貴族の家で生まれ育っている為そうしたことを好まない。彼は古風な騎士道精神を重んじる男なのだ。それが如何にもイギリス人らしいと半分皮肉で言われようともだ。

「それは私も同意です」
モンサルヴァートもそうした考えは持っている。
「しかしそれもまた人間の性ですからね」
「それは否定しない」
だがマールボロはそれがわからない程人生経験が浅いわけでも愚かでもない。
「だが好き嫌いという観点から私が見ると」
「嫌いなのですね」
「そういうことだ」
彼は口と目だけで笑った。
「私は世間知らずな男でね」
「そうは思えませんが」
モンサルヴァートは彼の軽口に合わせた。
「軍に長い間いると世間とはどうしても乖離してしまう」
「閣下はそうは思えませんが」
「いやいや、この前一旅行先で切符の買い方を忘れていることに気付いてね」
彼は趣味人でもある。旅行もその一つだ。
「御夫人がいつも買っておられたのですか？」
「いや、実はうちのも買い方を知らなかった。執事が全てしておったのだよ」
「それはまた」
「その執事がたまたま休暇でな。気付いたら私も妻も切符をどうやって買うのかわからなかったのだ」
彼はその広い額に手をやりながら笑った。
「この禿頭は肝心なことは何一つ入ってはおらんのだよ」
「それとこれとは関係がないと思いますが」
モンサルヴァートは苦笑した。実は彼はジョーク等には疎いのだが彼と会ううちにそれを解するようになってきていた。
「いやいや、物事を常に考え過ぎると髪の毛が抜けると言うじゃな

いか」
「単に遺伝の問題では」
「確かに我が家は先祖代々この頭だが」
「増毛とかはなさらないのですか？他にも治療方法はありますが」
禿の治療方法は既に八百年前に確立されている。水虫もである。
「そういうのはあまり好きではないんだ」
彼は苦笑した。
「髪の毛は先祖代々かからな。今まで誰も増やそうとしなかったし私もそういったことは好きじゃない」
「そういうものですか」
「うん。大体歳と共に自然と抜け落ちていくものだしな。個人差はあるが」
「とある役者は二十代から増毛していますがね」
「ハハハ、彼は見栄っ張りだからな」
二人はエウロパで人気のとある二枚目俳優のことを話題にした。彼はデビュー当時から頭髪が薄かったが不思議と禿ない。だが髪の量が増えているので皆真相はわかっているのだ。本人もそれを知らないふりをしている。
「さて、と。私のこの眩しい頭の話はこれでお終いにしよう」
「はい」
「今回の作戦の進行状況はどうかね」
彼はプロコフィエフが中心になって進めているサハラ北方各国に対する作戦の進行状況について尋ねてきた。
「ハッ、それですが」
モンサルヴァートは敬礼をして答えた。
「只今プロコフィエフ中将が中心に各国の分断工作を進めております」
「そうか。それは順調かね」
「はい、今のところは」
「ならばいいがね。一つ気になる話を聞いたのだ」

「何でしょうか」
「メフメット＝シャイターンという男を知っているかね」
「いえ」
モンサルヴァートは首を傾げて答えた。
「そうか。私もよくは知らないのだが何でもサハラ南方からやって来た男らしい」
「サハラ南方からですか」
南方はサハラにおいても特に複雑かつ障害の多い地形として知られている。そして各星系の勢力が強い。その為主導的な大国がなく多くの小国が互いにいがみ合っているのだ。
「そうだ。そこで傭兵隊長をしていたらしい」
「傭兵隊長・・・・・・」
連合やエウロパにおいて傭兵というものは存在しない。志願制による市民兵を採用している。彼等の勢力を考えるとそれが最も妥当であった。
だがサハラ各国は違う。殆どの国が徴兵制を採用し互いに争っている。それだけで足りない場合は傭兵を雇うのだ。
オムダーマンやミドハド等の西方では傭兵はあまり使われない。これは彼等の国が傭兵を好まないからである。理由は徴兵した兵士達の方が信用がおけるという判断からである。それにそこまで兵士には困っていなかった。
だが南方各国は違う。それぞれ小勢力で時には複数の敵を相手にする場合もある。従って徴兵された兵士達だけではなく傭兵を雇う場合もあるのだ。戦乱の続くサハラである。エウロパに追い出された者達もいる。傭兵のなり手には困らない。
金は当然かかる。しかも彼等は忠誠心が薄く形勢不利となればすぐに逃走するか寝返ったりする。しかし背に腹は替えられず彼等を使うのだ。傭兵はハサンでも見られる。だが僅かである。
「何か歴史的な響きのある呼称ですね」
「そうだな。だが実際にサハラ南方ではいるからな」

「そしてその傭兵隊長が何をしているのでしょうか」
「彼等の存在価値は一つしかないさ。我々に対抗し戦う為だ」
「そしてその数は」
「二百万程だ。そこに正規兵を合わせると五百万程か」
「それならあまり怖れる必要はありませんね、戦力だけを考えると」
「問題はそこではないと」
「はい。そのシャイターンがどういう人物であるかが問題です」
彼は目の光を鋭くさせて言った。
「私は今まで傭兵と戦ったことはありませんし。それにシャイターンという男がどういう人物か全く知りません」
「敵を知り己を知れば、という考えか」
マールボロは孫子の言葉を引用した。この時代にも孫子の書は残っている。
「そういうことです。彼の情報を知りたいのですが」
「それだが少し待ってくれ。外交部も情報部も今データを集めているところだ」
「そうですか」
「一つわかっていることは彼もかなり若いようだ。まだ二十代だという」
「傭兵隊長としてはでしょうか？」
「そうだな。大体四十代か五十代の年期のある働き盛りがなるらしいからな」
「そうですか」
「彼については暫くしたら情報が入るだろう。悪いがそれまで待ってくれ」
「はい。作戦発動は各国を分断させてからと考えていましたし」
モンサルヴァートは言った。
「ならばそれまでは訓練と物資の確保に専念してくれ。頼んだよ」
「ハッ！」
モンサルヴァートは答えた。食事の席なので敬礼はしなかったが

強い声であった。
数日後シャイターンのデータがアッディーンに届いた。彼は自分の執務室でプロコフィエフ、ベルガンサ等と共にそれを開いた。
「さてと」
まず顔写真であった。見ればかなりの美男子である。
「顔はいいな」
古風な顔写真であるがそれからでもよくわかる。黒い髪を後ろに撫で付け顔の形は鋭利である。まるで古代ギリシア彫刻の様に彫が深く引き締まっている。黒い眼は細めで多少吊り上がっている。
「だが」
モンサルヴァートはその顔に少し妙な感じを覚えた。何処か陰があり邪な感じがするのだ。
「妙だな。これ程整った顔立ちの男でこうした雰囲気を感じるのは」
「美形悪役というのは漫画でも小説でもよくありますが」
参謀のひとりモナコ中佐が少しおどけた声で言った。
「中佐」
生真面目なプロコフィエフはそれを嗜めようとする。
「いや、いい」
モンサルヴァートはそれを制止する。
「気品があるが何か険があるなと思ってな」
「確かに。見たところ生い立ちもそれ程悪くはないですが」
生まれはサハラ南方の宗教家の家である。この時代のサハラの宗教はイスラム教がベースであるが昔と比べると多くの宗派が存在している。エウロパにあるバチカンですらかなり変貌し古代ギリシアや北欧の神々を取り入れていることを考えるとそれも当然であるがその中には聖職者を設けているものもある。かってはシーア派にも存在していたがその宗派はスンニーの流れを汲んでいるようだ。それで聖職者が存在するというのも驚くべき変化であった。
「だが待て。この宗派は確か聖職者の妻帯を許していなかった筈だ。

しかも彼の父は大司教だぞ」
「あ・・・・・・」
一同はモンサルヴァートの言葉にハッとした。
「ということは・・・・・・」
「そうだな。私生児ということになる」
そこでモンサルヴァートは別の資料を出した。
「成程な」
それを見てまずモンサルヴァートが頷いた。
「聖職者の腐敗というのは大なり小なり何時でも何処でもあるらしい」
彼の父は神学校を卒業後司教になったがそれは自らの栄達の為であった。そして彼は権謀術数の限りを尽くして出世し大司教にまでなったのだ。
その間彼は贅を楽しんだ。美食と荒淫を好み多くの愛人を持った。
その愛人の一人との間に生まれたのがメフメット＝シャイターンであった。彼は形式上は大司教の弟ということになってはいる。
「そうした弟がこの大司教には何人もいるな」
彼は長男ということもあり軍人になった。だが士官学校に入るのではなく傭兵となった。
「あの若さで傭兵隊長となったのは父の後ろ楯があったからでしょうか」
「そのようだな。裏で多くの金が動いたようだ」
モンサルヴァートは資料を読みながらプロコフィエフに対して答えた。
「だがそれからは全て自分の力だからな。傭兵の世界はそうだと聞いている」
その通りであった。正規軍と傭兵は違う。全ては金と隊長の力による。
「見たところその力もあるようだな」
彼はそれなりに戦いを積んできているが敗北はまだない。それど

ころかその兵力は次第に増えていっている。
「父親の資金力も関係しているようですけれどね」
「確かにな。後ろ楯に宗教があると何かとやりやすい」
それは昔から変わらない。
「だがそれを上手く活かすのはやはり実力だ」
モンサルヴァートは言った。
「兵士は金で集められる。だがそれを繋ぎとめるには能力が必要だ」
「そして彼にはその能力があると」
「そういうことになる」
「事実参加した全ての戦いにおいて武勲を挙げていますね」
サハラ南方も戦乱に明け暮れている。その中で彼は戦うごとに功績をあげている。
「それに謀略も得意なようだな」
モンサルヴァートはふと目を停めた。
「他の傭兵隊長の部隊を乗っ取ることが多いが。その際に暗殺や買収を上手く使っている」
それも傭兵の世界ではよくあることだった。権謀術数に長けていなくては傭兵隊長は勤まらないのだ。
「それで以って勢力を拡大していっている。褒められたものではないが」
モンサルヴァートの整った顔が微かに歪んだ。
「ここには二百万の兵をもって来ていますがまだ多くの兵を持っているようです」
「そのようだな。五百万といったところか」
彼等はシャイターンの持つ傭兵隊のデータを見ながら言った。
「さて、その二百万だが」
モンサルヴァートは言葉を続けた。
「それでどう戦うのかな。お手並み拝見といこう」
今聖杯の名を冠した若き名将と砂漠に潜む魔王の対決がはじまろうとしていた。

## 第二部第三章　魔王その一

魔王

モンサルヴァート達が情報を収集しているその男、メフメット＝シャイターンは今サハラ北方諸国の一つブワイフ共和国にいた。

「ようこそ、ブワイフに」

黒く装飾されたブワイフの大統領官邸で彼は大統領等政府要人達と会談していた。

「いえ、同じサハラの同胞の危機を見過ごすわけにはいきませんから」

彼はありきたりの社交辞令で礼に応えた。

「それよりもエウロパの動きはどうなっていますか」

低く、それでいて透明感のある声である。男らしいが何処か女性的な響きも含まれている。

「はい、それですが」

大統領は話しはじめた。

彼の話によるとエウロパは外交や謀略により同盟諸国の切り崩しを図っているという。既に一国同盟から切り離されようとしているという。

「動きが速いですね。もう切り離しが成功しようとしているとは」

「はい、残念なことに」

ブワイフの要人達はうなだれて答えた。

「エウロパは昔から外交や謀略には長けておりました。だからこそ我々は彼等の進出を許してしまったのです」

「先のアガデスもそれにより倒されてしまったようですね」

「はい」

アガデス滅亡の件はシャイターンもよく知っていた。

「エウロパは一千年以上前にアラブを侵略した時から謀略を得手としてきました」

これはそのアラブの民を祖先とする彼等サハラの者にとっては忌々しい歴史であった。
「哀しいことに我々は今もそれに悩まされております」
シャイターンの言葉は何処か宗教家めいていた。
(やはり大司教の息子であることはあるな)
要人達の中の一人がそう思った。だがそれを口には出さなかった。
「しかしそうした屈辱の歴史も終わる時が来たのです」
彼は厳かな口調で言った。
「今彼等を打ち破れば我等は再び我等の地に住むことが出来るのです」
あえて誇張して言った。
「その為にはまずこの戦いに勝たなければなりません」
ここで彼はブワイフの要人達の目を見回した。
「その為に何を為すべきか・・・・・・」
言葉を一旦区切った。
「おわかりですね?」
「はい」
彼等はまるで催眠術にかかったような様子で答えた。そしてこの会談によりブワイフは今回の作戦の全権を彼に委託することとした。

「ブワイフはこれでよし」
ブワイフの港に泊めてあるシャイターンの旗艦イズライールの個室に彼はいた。
見ればかなり大型の艦である。外装は漆黒でありながら豪奢であり一見軍艦とは思えない。だがその装備は重厚でありサハラの他の艦よりも遥かに重装備である。
またエンジンがかなり大きい。それから見るにこの艦が攻撃力と機動力に秀でた艦であるということがわかる。
彼の部屋は豪華な装飾で飾られていた。まるでオスマン=トルコのスルタン=カリフの部屋のようである。

所々に宝玉がありベッドは絹の天幕である。椅子もテーブルも極めて高価なもので彼が手に持つ杯は水晶である。
彼はそこで絹の服に身を包んでいた。軍服も似合うがこうした装飾の多い服も似合っている。
「あの国を抑えれば他の国も順調にいく。諸国の軍事を全て手中に収めるのはここ数日で出来るな」
彼は杯をテーブルに置いて言った。そこに紅のワインが注ぎ込まれる。
「ご苦労」
彼はそこにいる侍女の一人に声をかけた。
「エウロパを破れば私の名はさらに上がる。それからここに居つくのも悪くはない。いや」
ここで彼はニヤリ、と笑った。
「ここに私の勢力を築いておくとこれからがやり易いな」
まるで魔界の覇者の様な顔であった。整ったマスクにえもいわれぬ邪悪さが差し込んだ。
「閣下」
不意に扉を叩く音がした。
「入れ」
彼は部屋に入るよう言った。一人の少年兵が入って来た。
「ハルシーク様がお話したいことがあると来ておられますが」
「そうか」
彼はその言葉に頷いた。
「すぐに行こう。服を持て」
「はい」
彼は侍女に服を着替えさせた。そして軍服に身を包むと少年兵に案内され艦の作戦室に向かった。
「よく来てくれた」
彼はそこに立つ壮年の男を見て微笑んだ。
「はい」

そこにいたのは鋭利な顔立ちのやや小柄な男であった。シャイターンと同じ軍服を着ているがマントは羽織っていない。彼はトゥース＝ハルシークという。シャイターンの傭兵隊の最古参の一人であり彼の知恵袋でもある。
「まあ座れ。お茶でも飲みながらゆっくりと話そう」
「わかりました」
シャイターンが席に着くのを確認してハルシークも席に着いた。シャイターンは席に着くと少年兵に向けて指を鳴らした。彼はそれに対して頷きその場を後にした。暫くしてコーヒーとお茶菓子を持って来た。
コーヒーはブラックであった。砂糖は入れない。お茶菓子はチョコレート菓子である。ケーキに似ているが少し違う。何処かクッキーを思わせる。
「甘いものは好きだったな」
「はい」
ハルシークは答えた。そしてシャイターンがコーヒーを口にしたのを見て自分もコーヒーを口にした。
「美味いな」
シャイターンはコーヒーを口にして少年兵に対して言った。
「有り難うございます」
彼は嬉しそうに頷いた。
「菓子もいい。ただし砂糖はもう少し控えてくれ」
「わかりました」
彼はそれには少し残念そうに頷いた。
「折角チョコレートを使っているのだ。砂糖よりそちらを上手く使った方がいい」
「はい」
彼の味覚はかなり鋭いようだ。しかも舌もかなり肥えている。
「こういったことも経験だ。よく学ぶがいい」
「はい」

少年兵は敬礼した。そしてその場に控えた。
「いい。下がってくれ」
シャイターンは彼を退かせた。そして部屋にハルシークと二人だけになった。
「さて、と」
彼はコーヒーを再び一口口に含んだ後口を開いた。
「エウロパの動きはどうなっている」
「ハッ、それですが」
ハルシークは主に促され話をはじめた。
「今は外交及び謀略に重点を置いているようです」
「そしてそれが既に功を奏してきている、と」
「はい。一国既に同盟から離脱しようとしております」
「マヤムーク王国だな」
「そうです」
マヤムーク王国はサハラ北方の国の一つである。これといって特徴のない小国である。
「規模としてはそんなに大きくはないが」
「一国でも同盟から離脱されると士気に大きく関わります」
「問題はそこだ。彼等を繋ぎ止めるなり大人しくさせるなりしなければならないが」
「それにはこちらも謀略を使うのがよろしいかと」
「いつものようにだな」
シャイターンはその言葉にニヤリ、と笑った。
「そうです。ではいつものようにやってよろしいですな」
「うむ。誰にも悟られぬようにな」
「それはお任せ下さい。慣れております故」
ハルシークは悪魔の様な笑みを浮かべて答えた。
「ではすみやかに頼むぞ」
「わかりました」
こうして二人は会議室を後にした。後日マヤムークの親エウロパ

派の要人達が会食をしているレストランが謎の爆発により崩壊した。これによりエウロパと関係の深かったマヤムークの要人達は一掃された。
シャイターンの動きは速かった。彼はすぐにマヤムークに向かい国王と会談し今回の作戦における統帥権を譲り受けた。これによりマヤムークの兵権は全て彼の手に握られることとなった。
「マヤムークはこれでよし」
国王との会談を終えた彼はマヤムークで最も知られる高級ホテルのロイヤルスイートルームで昼食を摂った。
見ればかなり豪勢な料理ばかりである。マヤムークでしか獲れないかなり貴重な魚や動物を希少価値の香辛料で味付けしている。そしてそれが数十品も並んでいる。
その後ろに六人の将校達が並んでいる。階級は傭兵隊はそれぞれ独自の階級章を使用しているがシャイターンの隊ではそれは中佐をあらわすものである。
彼等は皆屈強な身体つきをしている。だがそれよりも目を引くのは彼等が黒い鉄の仮面を被っていることである。
シャイターンは彼等を後ろに従えたうえで悠然と食事を摂っている。そしてその前にはハルシークが控えている。
「はい、これで二ヶ国の兵権が閣下の手に入りましたな」
ハルシークは立っていた。そして頭を垂れて言った。
「そうだな。だがこれだけではまだ不十分だ」
彼は漆黒に近い赤の葡萄酒を口に含んで言った。
「全ての国の権限を私に集めなければな。この戦いは勝てぬ」
「その通りです」
明確なリーダーを設けずしては勝てぬ。戦争における鉄則の一つである。
「そしてエウロパに勝つ。全てはそれからはじまる」
「というといよいよですな」
「そうだ、今まではしがない傭兵隊長に過ぎなかったがな。これか

ら私の野望が現実となるのだ」
　彼は凄みのある笑みを浮かべた。その整った顔がまるで悪魔のそれのようになる。
「期待しております」
「うむ、このサハラが統べるに相応しい者に統べられる。今まで長きに渡って誰も為し得なかったことだがな」
　彼は笑みを浮かべたまま言葉を続ける。
「サハラ統一、それが遂に達成されるのだ、この私の手でな」
「はい、これでもう我々はエウロパや連合の後塵をきすることもありません」
　エウロパには侵略を受け連合からは下に見られている。彼等はそれを内心屈辱に思っていたのだ。
「そうだ、そしてここに私は我が理想国家を築き上げる。その為には・・・・・・わかっているな」
「はい。このハルシーク、その為には全てを捧げましょう」
　暫くしてサハラ北方諸国の兵権はシャイターンの手に握られることとなった。彼はそれを以ってまずは内部に潜伏しているエウロパの工作員達を炙り出した。
「かなりの被害が出ているようだな」
　それはエウロパ軍の上層部にも伝わっていた。モンサルヴァートはプロコフィエフに対して言った。
「はい、同盟諸国の兵権があの男のものになってからかなりの損害が出ております」
　彼女はその古代ギリシア彫刻のような官能的な顔を深刻なものにさせて言った。
「シャイターンによってか。どうやら謀略に強いというのは本当のようだな」
「はい。外交官達の周りにも不審な人物が動いているという報告があります。中には暗殺された者も出ております」
「そうか。外交官がそうだと工作員はより深刻な事態に陥っている

のだろうな」
「既に各国で捕まる者や消息を絶った者が続出しております。内部に作り上げた諜報網もかなりの損害を受けております」
「壊滅と言っていいな」
「残念ながら。如何いたしましょう」
「諜報網まで損害を受けてはな。ここは退く方がいいだろう」
「撤収ですか」
「致し方あるまい。これ以上の工作はかえって危険だ」
「わかりました。それでは退かせるとしましょう」
「頼む。以後作戦を切り替える必要があるな」
「残念なことですが」
こうしてエウロパの作戦は大きく軌道修正されることとなった。彼等は事前の外交や謀略活動を打ち切りそのままオーソドックスな侵攻作戦に移ることとなった。
「問題は何処から攻めるかだが」
モンサルヴァートは提督や参謀達を集めて話をしていた。
「私はサンドリム連合から攻めるべきだと考えます」
プロコフィエフが提案した。
「サンドリムからか」
モンサルヴァートも提督達もそれを聞いて頷いた。
「確かにな。あの国は北方諸国の中では最も地形が平坦だ」
「ブラックホールも赤色巨星も少ないですし。それに北方を攻略していくには格好の拠点候補もありますしな」
「エマムルドだな、あの星系は物資の集積地だしな」
提督達は口々に言った。
「閣下はどうお考えですか？」
そして彼等はモンサルヴァートに対して問うた。
「サンドリムか」
彼はまず地図を一瞥した。
「攻めるにあたってはここが最もいいだろう。エマムルドを陥落さ

せることができたならばそこを拠点にして作戦を容易に進めることができるしな」
彼は地図を机の上に戻した。
「しかし敵もそれは読んでいるだろう。おそらくこの星系に戦力を集結させてくるぞ」
「そこを叩けばいいのです。彼等の兵力は我々のそれより少ないですし一度勝利を収めれば以後の作戦がより楽になりますよ」
「確かにな」
彼はベルガンサの言葉に頷いた。
「ではまずはエマムルドを陥落させよう。そしてそれからはそこを足掛かりとして同盟諸国を各個撃破していく。それでいいな」
「ハッ！」
提督も参謀達も一斉に敬礼した。こうしてエウロパの作戦行動は決定した。
彼等はすぐに作戦行動に移った。モンサルヴァート率いる艦隊がサンドリムに侵攻してきた。
その報告はすぐにシャイターンにも伝わった。彼はその時既にエマムルド星系にいた。
「そうか、やはりサンドリムに来たか」
彼もエウロパの動きは読んでいた。そして既にこの星系に主力艦隊と共に駐留していたのだ。
「規模はどの程度だ？」
彼は傍らにいる同盟諸国の情報参謀の一人に対して問うた。
「ハッ」
参謀は彼が所属する国の敬礼をした。
（これもすぐに統一しなければいけないな）
シャイターンは密かに思ったが口にはしなかった。
「規模にして六個艦隊程のようです。そしてその後方に多数の揚陸艦が確認されております」
「そうか、明らかにこのエマムルドに侵攻してくるつもりだな」

シャイターンはそれを聞いて言った。
「敵の指揮官はわかるか」
「モンサルヴァート司令自ら出撃しております」
「何っ、彼自らか」
「はい、旗艦リェンツィも確認されております故」
「そうか、彼自ら来たか」
彼はそれを聞いてほくそ笑んだ。
「諸君、どうやらこのサハラ北方を完全に我々の手に取り戻す時が来たようだぞ」
彼は艦橋にいる者全てに対して言った。

## 第二部第三章　魔王その二

「敵将自ら来ているからでしょうか」
その中の一人が問うた。
「それは本質であるが正解ではないな」
彼は不敵な笑みを浮かべて答えた。
「モンサルヴァート提督により諸君等は今までどれだけ苦しめられてきた？」
「それは・・・・・・」
エウロパのサハラ侵攻はモンサルヴァートがやって来てから余計に激しくなった。アガデスだけでなく彼に敗れ滅びた国は多い。
「その彼がいなくなることがどういう意味かはわかるな」
「はい」
彼等を脅かす最大の脅威がなくなるだけではなかった。彼等もエウロパに勝てるということが心の中に植えつけられるのだ。シャイターンは後者は言わなかったが。
「今こそモンサルヴァート提督を討つ、そして我等の地を取り戻すぞ！」
「ハッ！」
皆シャイターンの言葉に奮い立った。そして陣を整えはじめた。
「これでよし」
シャイターンはその様子を見て笑った。
「彼等は皆私の下に戦う。私の思うがままだ」
何処か悪魔的な笑みであった。

彼は部屋に戻った。扉は例の六人の鉄仮面の将校達が守っている。
「護衛も完璧だな」
それを他国の兵士が見て呟いた。
それを聞いた仮面の男の一人が顔を向けた。兵士はそれに驚いて

慌てて逃げ出した。
「閣下」
ハルシークは部屋の中でシャイターンの前に立っていた。
「どうした、何か言いたいことがあるようだが」
彼は私服に着替えくつろいでいた。保護種に指定されている貴重な鳥の羽毛で作られた白い服である。
「先程の発言ですが」
それに対してハルシークの表情は真摯であった。くつろぎとは全くの無縁である。
「モンサルヴァート司令を倒すというあれか」
彼は椅子に座り酒を口にしながら問うた。
「はい。実際に戦闘で彼を倒すのは困難であると考えますが」
ハルシークは両軍の戦力を頭に入れながら言った。
「数は彼等の方が上です。そこで無理をして彼を討とうとすれば」
「かえって無理な突撃になりそこを付け込まれる恐れがある、と言いたいのだな」
「お言葉ですが」
彼は謹んで言った。
「それよりもじっくりと防御に徹するべきであると存じます。我々には無駄な兵力がありません故」
「それは私も同じ考えだ」
シャイターンは落ち着いた声で言った。
「やはり。では何故あのようなことを仰ったのですか？」
「わかっていると思うが。彼等の心を掴む為だ」
彼はうそぶくようにして言った。
「雑多な軍を一度で纏め上げるには時として共通の強大な敵を指し示すことが必要だ」
「左様ですか。そして私はもう一つお聞きしたいことがあるのですが」
「何だ」

彼は察してはいたがあえて問うた。
「サハラ北方のことです。本当に手中に収めようとお考えなのですか」
「当然だ」
彼は笑って答えた。
「北方だけではない。いずれサハラの全てが私のものとなる。それはいつも言っていることだろう」
「はい」
「だが北方を手中に収めるのはまだまだ先のことだ」
彼の言葉は果たして何処までが真で何処までが嘘なのか、凡人には理解し難かった。だがハルシークにはよくわかっていた。
「まずは土地の基盤を持たなくてはな。父上のバックだけでは心もとない」
「はい」
「私自身がここに根付く必要がある」
「それにはどうお考えですか？」
「ハルーク家との縁組を考えているのだが」
「ハルーク家とですか」
「そうだ」
ハルーク家はこのサハラ北方一の富豪である。鉱山を数多く保有しておりサハラ全土でもその富は屈指のものである。今は当主が世を去り彼の年老いた未亡人が当主代行を勤めている。
「あの家と結び付くことができればその基盤は確固たるものになる。そしてそれからの動きが楽になる」
「ですがその為にはまずは」
「この戦いに勝たなくてはならない、と言いたいのだろう。それは既に決まっている」
彼はまたもやその悪魔的な笑みを浮かべた。
「私が勝つということがな」
「左様でしたな」

ハルシークもそれに頷いた。
「今度の戦いは楽ではないか。引き分ければそれでよいのだからな。このエマムルドを守ればいいだけなのだからな」
「そういうお考えでしたか」
「私は常に最短で最良の計画を立案し実行する。その為の手段は選ばないだけでな」
やはりその笑みは何処か悪魔めいている。これは彼のそうした性格によるものなのだろうか。
「だがハルシークよ」
彼は表情を真摯なものとした。
「問題はそれからだ。どうやって私がここで権力を握るか」
「婚姻の後ですか」
「そうだ、まずは邪魔になる人間をリストアップしておけ」
「わかりました」
「その連中を全て消すのだ。私の邪魔をする者には死を以って消えてもらう」
冷徹な声であった。そこには感情はなかった。
「言っておくがハルーク家の人間であってもだ。いや、ハルーク家の人間は他にも増して厳重に調べろ」
「はい」
「それから次の計画に移る。邪魔者を全て消した後で」
「それからサハラ北ですか」
「それはわからないな」
シャイターンの口の端が歪んだ。
「モンサルヴァート提督の下にも刺客を送っておきたいがな。だが彼は切れる男だ」
「あまり期待はできませんか」
「そういうことだ。もし成功してもエウロパには切れ者が多いしな。そうそう容易には攻められまい」
「ではまずは彼等を凌駕する勢力を築かれると」

「それが先決だな」
そう言うと酒を再び口に含んだ。
「狙い目は何処になるかな」
「そうですな・・・・・・」
ハルシークは問われて考え込んだ。
「サラーフなど如何でしょうか」
「サラーフか」
それを聞いたシャイターンの眉がピクリ、と動いた。サラーフと北方諸国の一部は国境を接しているのだ。
「あの国は西方で第一の勢力だが」
「今はそれも脅かされておりますな」
ハルシークは言った。
「確かにな。今はオムダーマンの勢力が日増しに大きくなっている。今ブーシルで手こずっているようだが」
「ブーシルですか」
ハルシークはそれを聞いて口の両端だけで笑った。
「閣下はブーシルについてどうお考えですか」
「あの星系でのレジスタンスとやらについて尋ねているのか」
「はい」
彼は答えた。
「あのようなものすぐに鎮圧される。そしてサラーフの侵略も失敗に終わる」
「やはりそう見ておられますか」
「当然だ。最早ミドハドの命運は尽きている。今何をしようがそれは覆らない」
彼はテーブルの上にグラスを置いた。そこに侍女が酒を注ぎ込む。
「ご苦労」
彼はそれを見て侍女に言葉をかけた。
「そして近いうちにサラーフとオムダーマンの全面的な対決があるだろう。双方の戦力が均衡しているがな」

「どちらが勝つと思われますか」
「わからないな」
シャイターンはその整った眉をピクリ、と歪めた。
「どちらが攻め込むかで事情が異なってくる。今までの経緯から察して先に兵を動かすのはサラーフだと思うが」
「でしょうな。カッサラのこともありますし今も現に兵を動かしています」
「それは撃退されるだろう。オムダーマンはそれから反撃に移る筈だ」
彼はそう読んでいた。
「ですが地の利はサラーフにありますな」
「うむ、兵力がほぼ互角の場合これはかなり大きいな」
「長期戦になるかも知れませんぞ」
「それは双方にとっても避けたい事態だろうな」
シャイターンは言った。
「国力を疲弊させてしまっては元も子もない。我々が付け入る隙は出来るだろうが」
「閣下は両国の戦闘が長期化するのをお望みですか？」
「まさか」
それは否定した。
「いずれ私の領土となる地だ。疲弊させてしまっては意味がないではないな」
「そう言われると思っていました」
「相変わらず意地が悪いな」
「ふふふ」
ハルシークは含み笑いを漏らした。
「短期決戦になってもらわなくてはな。そしてどちらか、恩をより多くくれる方につきたい」
「それでしたらオムダーマンでしょう」
「やはりそちらか」

シャイターンはその言葉を予測していた。
「サラーフは守り抜けばいいのですがオムダーマンは完全に攻め落とさなければなりません。これは大きいです」
「我々がサラーフの後方から攻め込めばそれだけオムダーマンは楽になるな。向こうに割り当てられる兵力も減るし」
「はい、彼等にとっては一石二鳥の参戦になります」
彼等は既にこの北方諸国は自らのものにあると考えていた。
「それでは今後の方針も決まったな。だがオムダーマンにも今後順調に勢力を拡大してもらっては困るな」
「ではその為に手を打っておきますか」
「時が来ればな」
彼は意味ありげに笑った。
「いずれ彼等にも消えてももらわなければいけないのは事実なのだしな」
「はい、ではそれはサラーフとの戦いの後で」
「うむ、準備はしておこうか。頼むぞ」
「そちらはお任せ下さい」
「よし。では話をこちらに戻すとしよう」
彼は酒で喉を潤して言った。
「エウロパの軍勢は持久戦に持ち込もう。そしてその間に色々と手を打つか」
「戦いは何も正面から剣で斬り合うばかりではありませんからな」
「そうだ。それでは私の戦い方を彼等に見せてやろう」
ハルシークは席を立った。そしてシャイターンはそのまま休息をとった。

数日後エウロパ軍がエマムルド星系に到着した。それに対しシャイターン率いる北方諸国連合軍は正対して布陣していた。
「攻撃に移りますか」
旗艦リェンツィの艦橋でプロコフィエフがモンサルヴァートに対

して尋ねた。
「うむ」
彼は頷いた。まずは一斉射撃を加えた。
だがそれは殆ど効果がなかった。北方諸国軍は前面に特殊合金による防壁を置いていたのだ。
「楯にするつもりか」
そしてその間から攻撃を仕掛けて来る。モンサルヴァートはそれを見て顎に手を当てた。
「敵の将はシャイターン隊長だったな」
「はい、今は彼等の全ての軍の全権を委任されています」
プロコフィエフが答えた。
「そうか。噂通りだな。中々考えている」
モンサルヴァートはモニターに映し出されている敵の陣を見ながら言った。
「右に磁気嵐、左にはアステロイド帯。そして上下には機雷を撒いている」
「我々の動きを制限する為でもありますね」
「そうだ。我々は彼等を正面から打ち破らない限りこの星系を手に入れることはできないな」
「では一気に打ち破りますか」
「それも愚だ。わかるだろう」
「はい」
彼女はそれを知りながらモンサルヴァートの考えを知る為にあえて問うたのだ。
「ここで彼等を打ち破ってもこうした防衛線を二重三重に置いている筈だ。下手に攻撃を仕掛けて戦力を消耗すべきではない」
「それでは予備戦力をこちらに呼びますか」
「そうだな。攻撃を仕掛けるのはそれからだ」
彼は決断した。そして補給線を確保したうえで敵軍と向かい合って布陣した。

「さて、エウロパ軍は動きを止めたわけだが」
シャイターンは会議室で諸国の提督や参謀長達を集めて軍議を開いていた。
「彼等は侵攻を諦めたわけではない。これはわかっていると思う」
「はい」
ここにいる殆どの者はシャイターンより遥かに年長である。しかし彼はそれに対し全く臆することなく話をしている。
「今後方から予備戦力を呼んでいる。それが到着し次第すぐに攻撃を仕掛けて来るだろう」
それを聞いた彼等の顔が暗くなった。
「だが心配する必要はない」
シャイターンはそんな彼等を宥めるように言った。
「私がいる限り彼等はこのエマムルドを手に入れることは出来ない」
かれはの声は自信に満ちていた。
「まずは彼等の後方を脅かす」
彼はそう言うと指揮棒でモニターに映し出されている両軍の陣を指し示した。
「我が軍の中から少数を選び出し彼等に敵の後方を襲撃させる。これでまずは補給線を脅かす」
それはオーソドックスな戦法といえた。
「そしてそれで彼等が疲弊したところで次の手を打つ」
彼は地図を再び指し示した。
「この陣地を棄てる」
「えっ！？」
これには皆驚いた。シャイターン直属の者達を除いて。
「話は最後まで聞くように」
彼は学校の教師のような言葉を出した。
「既に次の陣地は決定している。そこに撤退してさらに敵を誘い込むのだ」
「成程」

彼等はそれを聞いて一先納得したようである。
「だがそれだけではない」
シャイターンは言葉を続けた。
「この陣地にはトラップを多数置いておく。機雷や無人攻撃砲座をな」
「そして彼等に少しずつ損害を与えていくと」
「そういうことだ」
彼は言った。
「それを繰り返す。そして彼等の戦力が消耗しきったところで叩く。そうすれば如何に彼等の兵が多くとも怖れることはない」
「一気に戦いを決めるのではなく持久戦に持ち込むのですか」
「うむ。今まではエウロパに皆正面から挑んでいた。こうして正面からの戦いを避ける戦い方もあるだろう」
「はい」
まるで目から鱗が取れたかのようであった。彼等は今までエウロパとの戦いは正規戦が多かったのだ。これは彼等の巧みな戦略に誘い込まれそう仕向けられた向きもあるが。
「よいな、まずは正面からの衝突は絶対に避ける。襲撃を仕掛ける部隊も敵が来たならばすみやかに撤退せよ」
「ハッ！」
こうして北方諸国の作戦は決定した。そして彼等は守りを固め小部隊でエウロパ軍の補給線を襲撃していった。
「こうした戦い方をしてくるとは思わなかったな」
モンサルヴァートは補給線が脅かされていることを見て言った。
「すぐにパトロール及び護衛の数を増やしましょう」
プロコフィエフが進言した。
「そうだな。このままでは将兵の士気だけでなく物資の欠乏が起きてしまう」
彼とて補給の重要性はよく認識している。そしてプロコフィエフの提案をすぐに採用した。

これにより補給線への襲撃はかなり避けられるようになった。だが兵をそこに割いた為そこを北方諸国に衝かれる。今度は彼等は本陣に奇襲を仕掛けて来たのだ。
奇襲といっても全軍を以って来るわけではない。不意を衝き攻撃を仕掛け去って行くのだ。被害は微々たるものだ。しかし何時攻撃を仕掛けられるかわからないので皆神経を尖らせていた。
「本陣の警戒態勢を強化しよう、そして陣を組み直すぞ」
彼は攻撃用の突撃を意図した左右に拡がった陣を解体し方陣に組み直した。そしてそれで援軍を待った。
援軍が来た。彼はそれを得てようやく前に進もうと考えた。
「お待ち下さい」
プロコフィエフがそれを制止した。

## 第二部第三章　魔王その三

「見たところ敵は撤退に取り掛かっております」
「本当か！？」
これにはモンサルヴァートも驚いた。
「はい、これを御覧下さい」
彼女はモニターを映し出した。そこには北方諸国軍が映っている。
「ううむ」
見れば彼等の動きがおかしい。何か後ろに向かおうとしている。
「それだけではありません。よく御覧下さい」
しかも陣地に何かを置いていこうとしている。機雷や無人砲座、その他の多くのトラップ等だ。
「退く時にも損害を与えようというつもりか」
「そのようです」
彼女はモニターを見上げながらその美しい眉を顰めていた。
「ここは慎重に進むべきかと。補給線も長くなりますしトラップのこともありますし」
「そうだな。仕方ないか」
彼は元々正面から大軍がぶつかり合う正規戦が好きなのである。そして戦いは短期決戦が信条であった。
その彼にしてみればこういった補給線を厳重に守りながら少しずつ進んでいく戦いは性に合わなかった。だが好まないからといって必要に応じ作戦を変更しないような愚かな男でもなかった。
彼は補給線を確保したうえで敵の撤退を確認し慎重にそのあとを追った。そしてトラップを少しずつ除去しつつ前に進み次の陣を組んだ。わざわざ守りに適した地を選んだうえでのことである。
「今度もまた厄介な場所にいあるな」
北方諸国軍はエマムルド星系の一番外側の惑星のリングの中に布陣した。そこは隠れるのに適していた。

「誘き出すか」
モンサルヴァートは苛立ちを覚えて集めた提督達に対して言った。
「それでしたら私が」
早速ニルソンが名乗りをあげた。
「いや、卿は止めたほうがいい」
ジャースクがそれを制した。
「何故だ、私に何か不満でもあるのか！？」
「不満とかそういう問題ではない。向いていない」
ジャースクは激昂しようとするニルソンに対して言った。
「いや、はっきりと言わせてもらうとそうした行動は今は控えたほうがいい」
ジャースクはそう言うとモンサルヴァートに向き直った。
「閣下、ここはそうした行動は慎むべきかと存じます」
「意味がないか」
「それだけではありません。無駄な損害を出す怖れもあります」
「そうか」
彼はそれを聞いて考えをあらためた。
「よし、それでは誘き出すのは止めだ。だが彼等を倒さずしてこの星系は手に入らないぞ」
「はい、それは敵もよく承知でしょう」
「だからか。我々との戦いを避けているのは」
「そうでしょうな。彼等は負けなければこの星系を守れるのです。しかし我々は・・・・・・」
「勝たなければならない、絶対に」
「そうです、心理的にこの差は非常に大きいものです」
ジャースクはそう言い終えると頭を垂れた。
「それがわかっているから余計に正面からの衝突を避けるか。そしてその間に補給線を脅かし奇襲を仕掛ける」
「そうして我々の士気及び戦力を徐々に奪っていくつもりなのでしょう」

ここでベルガンサが口を開いた。
「現に我が軍の士気は落ちはじめようとしておりますし」
「シャイターンという男」
モンサルヴァートはそれを聞き彼の名を口にした。
「思ったよりそうしたゲリラ戦に長けた男のようだな。正規戦を好むと思ったのだが」
彼はここで思い違いをしていた。そのことは後に知ることになる。
「ここは我々も守りましょう。先に痺れを切らした方が負けです」
「そうだな、ここは致し方あるまい」
モンサルヴァートはあまり面白くはなかったがベルガンサの案を採用した。こうして両軍は睨み合いを続けた。

「さて、モンサルヴァート上級大将だが」
焦り不快を感じるモンサルヴァートに対しシャイターンは余裕を以って陣中にいた。
「さぞかし焦っていることだろうな」
彼は司令室で食事を摂っていた。士官用の食堂には行かない。彼はいつも司令室で食事を摂るのである。
その食事は陣中とは思えぬものであった。巨大なテーブルの上に数十品程が並んでいた。
「はい、彼等は正規戦で決着を着けたいようです。ですが今は自重しております」
彼に仕える傭兵部隊の将校の一人がその前に控えていた。
「だろうな。だが動かぬと」
シャイターンはフォークとナイフを優雅な手つきで動かしながら言った。
「はい」
「先に動いた方が敗れるからな」
彼は肉を口に入れる前に言った。
そして肉を口に入れる。重厚な肉汁が口の中に満ちる。

「こちらも動く必要はない。ただ敵の動きをよく監視し時折襲撃を仕掛ける程度でよい」
「はい、ですが・・・・・・」
将校はそこで顔を暗くさせた。
「我が軍にもそれに不満を持つ者があらわれはじめている、と言いたいのだな」
「は、はい」
彼は自分が言おうとしていることをその前に言われてしまい内心焦った。
「君は命は惜しいか？」
シャイターンは唐突に尋ねた。
「！？」
将校はその言葉の意味がよく理解できなかった。
「命ですか！？」
「そうだ、惜しいかね、大事かね」
「それは・・・・・・」
軍人としての答えは決まっていた。
「何時でも国家の為に捧げる覚悟はできております」
「軍人としての答えではない。人としてはどうなのか。言っておくがその答えで君をどうこうするつもりはない」
彼はそう断ったうえで尋ねてきた。
「では聞こう。惜しくはないかね？」
「はい、私にも家族がありますし」
「そうだろう、死にたくはない人間はあまりいないものだ」
彼はそう言うと微笑んだ。
「それは私とて同じだ。ましてや徴兵で連れて来られた兵士はどうだ」
サハラ諸国は徴兵制が主流である。
「それは当然ながら」
「そうだろう、故郷に残してきた両親や恋人のことが気にかかる。

絶対に生きて帰りたいと思うだろう」
「はい」
「そういうことだ。彼等に伝えておけ。戦って勝つのと戦わずして勝つのとどちらがいいとな。答えは決まっているだろうが」
「わかりました」
その将校は敬礼した。そしてシャイターンのもとを退いた。
以後この状況に対して不満を漏らす者は大きく減った。そしてシャイターンの指示の下エウロパ軍と対峙を続けた。
その間にもエウロパ軍に対する襲撃や様々な謀略は続けられた。モンサルヴァートもそれには頭を悩まされていた。
「こうした戦い方も確かにはあるが好きではないな」
彼は不快感を露わにしていた。
「将兵の士気も落ちている。どうやら戦局は次第に我が軍にとって不利となりつつあるようだな」
彼は次第に撤退を考えるようになった。それを見抜かぬシャイターンではなかった。彼は各国の政府首脳にひそかにエウロパと講和するよう促していた。
「今講和することができれば貴方達の功績になりますよ」
という言葉も忘れなかった。
やがて戦局不利を悟ったエウロパ総督府は撤退を決定した。軍をエマムルド星系から退かせた。
「これでエマムルドは救われましたね」
各国の提督達はシャイターンを囲んで口々に言った。
「一時はどうなることかと思いましたが」
「戦わずして勝つ、ですな。お見事です」
だがシャイターンはそれに対して口を開かなかった。本心からの言葉ではなく世辞であると見抜いていたせいもあるが他のことも考えていたのだ。
「これで終わりだと思われますか？」
彼はふと居並ぶ提督達に対して問うた。

「？はい」
彼等は暫しきょとんとしたがそう答えた。
「また来ますよ、新手が」
「新手ですか？エウロパは撤退しましたが」
「今サラーフ軍が不穏な気配を見せております」
「サラーフがですか！？まさか」
否、一部の国にはそれは容易に想像がついた。サラーフはサハラ北方への進出の機会を常に窺っていたのだ。
「今こちらに大艦隊を向かわせる計画を進めているという話です」
「本当のお話ですか、それは」
提督の一人が疑問を述べた。
「ブーシルで敗北したばかりだというのに」
彼等はブーシルにおいてアッディーンの艦隊に大敗北を喫したのだ。
「だからこそ侵攻を決意したのでしょう」
シャイターンは言った。
「ブーシルでの敗北はただの敗北ではありません。ミドハドへの介入の機会も失った戦略的に大きな敗北です。それの埋め合わせ、そして敗戦の批判を打ち消す為には」
「それ以外の地を獲得し、勝利を収めるということですか」
「そうです」
シャイターンは彼等の言葉に頷いた。
「それが出来なければ政権の崩壊に直結しますしね。只でさえ王室や国民から今の政権の侵略政策には不満が多いというのに」
「成程」
彼等は頷いた。
「ではすぐにサラーフとの戦いの準備に入りましょう」
「当然ですね。今回は早期戦になるでしょう」
「何故ですか！？」
「エウロパが再び変な気を起こさない為にです」

シャイターンは答えた。そして彼等はサラーフとの国境にすぐに向かった。
その動きは速かった。瞬く間にサラーフとの境であるアムド国のズアラ星系に到着した。
そこには既にサラーフの艦隊が来ていた。七個艦隊、兵力にして約七百六十万、七万隻という大軍である。
それに対するシャイターン率いる北方諸国連合軍は四個艦隊であった。一個はエウロパの備えにエマムルドに残しておいたのだ。兵力は四百二十万、艦艇は四万をかろうじて越えるだけであった。
双方敵を発見するとすぐに動いた。まずは正面での戦闘である。これは数において有利に立つサラーフがそのまま有利に立った。シャイターンは一戦してすぐに兵を退かせた。
「逃げたか、追え！」
サラーフ軍の指揮官は即座に追撃の指示を出した。全軍そのまま追撃する。
しかしシャイターンの用兵は迅速であった。サラーフ軍を瞬く間に離していった。
「何という速さだ。だがいい」
司令官は戦いに勝ったと思った。
「あとはこの星系を占領するだけだ」
そして各惑星に艦隊を送った。揚陸艦を送り占領を開始する。有人惑星はないが軍事基地は複数存在する。それに対し攻撃を仕掛ける為だ。既に将兵は撤退していたが簡単なトラップや無人兵器が存在する為だ。
「敵は惑星占領に取り掛かったか」
シャイターンは隣の星系でその報告を聞いた。
「はい、既に半分程を占領したそうです」
参謀の一人がそう報告する。
「そうか、機は熟したな」
彼はニヤリと笑った。

「全軍に伝えよ。すぐに反転しズアラに向かうとな」
「ハッ」
「そして敵艦隊を各個撃破していく。一兵たりとも逃すことなく」
戦いを前にしたは異様に落ち着いた言葉であった。
「では行こう、勝利は我が手にある」
そして北方諸国軍はズアラに向かった。敵に見つからないように通信を途絶し密かにズアラに入った。
まずは一番外側の惑星を攻略していた艦隊を襲撃した。
「何っ、敵襲！？」
その艦隊を指揮していた司令官は思わぬ敵襲に戸惑った。
すぐに艦隊を出撃させようとする。だがそれより前に惑星への攻撃がはじまった。
「あの惑星には敵しかいない。遠慮なくやれ」
シャイターンは言った。将兵はその言葉を待つまでもなく攻撃を仕掛けていた。
その艦隊はあえなく壊滅した。シャイターンはすぐに次の惑星に向かった。
そうして僅か一日で三個艦隊の通信が途絶した。司令は不思議に思い残る艦隊に連絡を入れた。
彼が直率する艦隊を含め三個艦隊は無事であった。だが残る一個はそうではなかった。
「すぐに援軍を！」
それが言葉であった。
「今敵の攻撃を受けております！すぐに援軍を送っていただけないと我が軍は・・・・・・」
そこで通信が途絶した。あとは何の連絡もとれなかった。
敵がこの星系にいて攻撃している、そう察した彼はすぐに全軍の集結を命じた。
そうして二個艦隊が集まった。残る艦隊は来ない。
「まさか・・・・・・」

そのまさかであった。僅か数隻がふらふらになりながらやって来た。
「移動中に後方から攻撃を受けました。艦隊は為す術もなく・・・・・・」
生き残った将兵は力ない声でそう言った。
「そして壊滅したというのか」
司令はそれを聞き震える声で言った。
「五個艦隊が壊滅するとはな。しかも僅か二日で」
「司令、ここは撤退されるべきかと」
幕僚の一人がそう進言した。
「そうだな、こうまで戦力が減ってしまっては」
彼はその進言を受け入れた。そして僅かに残った艦隊を撤退させることにした。
サラーフ軍は撤退を開始した。だがその時だった。
突如として後方から猛攻撃を受けた。
「まさか！」
旗艦にも衝撃が走った。艦橋は大きく揺れ司令は倒れた。彼はそれから立ち上がると顔を上げて叫んだ。
その危惧は当たった。シャイターン率いる艦隊が後ろから攻撃を仕掛けていたのだ。
「よし、このまま彼等を生かして返すな」
彼は艦橋に立ち全軍に指示を出していた。
「追い詰めよ。そして一兵残らず倒せ」
その指示は落ち着いているが内容はそうではなかった。将兵は逆にそれに奮い立った。
北方諸国軍は攻撃を続けた。サラーフ軍はそれにより数を大きく減らしていく。
「司令、如何いたしましょう！」
次第に破滅的な状況になっていく戦局を見て参謀の一人が問うた。
「クッ・・・・・・」

司令は歯噛みした。反撃しようにもそれは焼け石に水である。
「全軍撤退だ！こうなっては止むを得ん！」
彼は叫んだ。そして旗艦の艦長に言った。
「すぐに全速力で戦場を離脱せよ！このままでは我々も死んでしまうぞ！」
「は、はい！」
艦長はその剣幕に暫し呆然としたがすぐに我を取り戻し敬礼した。
旗艦はすぐに戦場を離脱しにかかった。司令自ら遁走したのである。他の艦もそれに続いた。
「逃げて行くな」
シャイターンは艦橋でその有様を見ながら笑った。
「追いますか」
ハルシークが問うた。
「当然だ」
彼は言った。それが合図となった。
諸国軍はさらに追撃を行なった。サラーフ軍はそれに対して逃げるだけで最早戦うどころではなかった。
それでも何とか半数の将兵がサラーフ領に逃げ込んだ。シャイターンはそれを見てようやく追撃を止めた。
結果としてサラーフ軍は参加兵力の殆どを失った。僅か数日で六個艦隊分の戦力がなくなったのである。これはそう簡単に取り戻せるものではなかった。ブーシルの敗戦と合わせてサラーフにとって大きな打撃であった。
「これでサラーフの力は大きく減退した」
帰還したシャイターンを待っていたのは熱烈な賞賛の声であった。だが彼はそれに対しては涼しい顔をしていた。
「当然のことに賞賛の声をあげるのはどうかと思うが」
彼は無表情のままそう言った。
「あれだけの大勝利だったのにですか！？」
これには配下の提督達も驚いた。彼等は車に乗り市民達の歓喜の

声を受けている。
「あの状況ではごく普通のことだ」
だがシャイターンの表情は変わらない。
「いや、むしろ失敗したな。一個艦隊分逃がしてしまった」
「しかし僅か数日で敵の殆どを討ち滅ぼしましたし」
「サラーフの損害は今後に大きな影響を与える程ですよ」
「だからそれは当然のことなのだ」
彼はまた言った。
「サラーフ軍は油断していた。そして兵力を分散させていた。そうした状況では勝利を収められるのは当然のことだ」
だがそうした状況に導くのは容易ではない。
「だがこれで大きく変わったな」
彼は一言だけ言った。
「はい、我々は救われました」
提督達は笑顔で言った。
「これも閣下のおかげです」
「そうか」
だが彼は北方諸国のことを言ったのではなかったのだ。
(この地での私の地位は確立されたな)
彼はこれからのことを考えていた。
(ハルーク家との婚姻は容易に進みそうだ)
そしてそれからのことも。
(まずはここからはじまる。そして)
彼はニヤリと笑った。
(このサハラが私のものとなるのだ)
後日彼はハルーク家の未亡人と会うこととなった。そして以後彼女との密接な関係が噂されるようになる。

## 第二部第四章　二つの戦いその一

二つの戦い

ブーシルは緊迫した状況にあった。今この星系に戦乱が起ころうとしていたのだ。

まずはブーシルに向けて進撃してきているサラーフの艦隊である。三個艦隊である。

そしてこの地に潜伏しているハルドゥーン達と彼等に協力するサラーフの特殊部隊、いずれも厄介な相手であった。

「レジスタンスと特殊部隊は彼に任せるしかないな」

アッディーンは司令室で提督達と話していた。

「はい、こうしたことは正規の部隊ではなかなかできませんから」

そうなのであった。特殊部隊に対抗できるのは特殊部隊だけなのであった。

「我々は敵艦隊のことに専念すべきでしょうな」

バヤズィトが言った。

「そうだな、今ここであれこれ言ってもはじまらない」

アッディーンは彼の言葉に頷いた。

「とりあえず今はサラーフの艦隊を打ち破ることを考えよう」

「ハッ」

こうして彼等は軍議をはじめた。

その頃ハルヴィシーは下水道の中を進んでいた。

彼は漆黒のスーツに身を包んでいる。共にいる部下達も同じだ。

「そちらはどうだ」

彼は隣の通路からやって来た部下達に対して問うた。

「いませんでした」

彼等は首を横に振った。

「そうか、そちらにもいなかったか」

彼はそれを聞き考え込む顔をした。
「こちらにもいなかったしな」
「上手く隠れているようですね」
ウルドゥーンが言った。
「そうだな、ここは彼等の庭のようなものだしな」
「地の利は向こうにあります」
「そうだ、おそらくは我々が探し疲れるのを待っているのだろう」
ハルヴィシーの言葉は彼等が今最も恐れていることであった。
「そしてそこで彼等は姿をあらわす。我々を消す為に」
「レジスタンスやゲリラの常套手段ですね」
「そうだ、そして隙を見せてもいけない」
語るハルヴィシーの顔は普段のそれとは全く違っていた。
「隙を見せたら襲い掛かって来る。彼等は今も牙を研いでいる。この闇の中でな」
「・・・・・・・・・・」
皆その言葉に表情を張り詰めさせた。
「それを防ぐには彼等を倒すしかない。見つけ出してな」
「ですね。しかし何処にいるのやら」
「それだが」
ハルヴィシーの目が光った。
「この下水道にいるのは間違いない。だがこの下水道は果たしてここだけにあるかということだ」
「といいますと!?」
部下達は問うた。
「この街は古い歴史を持っているようだ。一度地震で崩壊しその上に新たに都市を建設している」
「この下水道の下にもう一つ街があるのですか」
「そういうことになる。彼等はそこに潜んでいる可能性がある」
ハルヴィシーはそう言うと下を見た。
「その為にはそこに行く道を探し出す必要がある」

「ですね。しかし」
彼等はそこで顔を顰めさせた。
「問題はその道が一体何処にあるかです」
「それだな」
ハルヴィシーは再び考える顔をした。
「彼等がそこから出入りしているとするならば必ずあるのだが」
「流石に容易には見つからないでしょうね」
「うむ」
彼等は捜索の対象をその出入り口に変更した。だが数日経っても見つけることはできず次第に消耗していった。
「どうだ？」
「駄目です、何処にも」
部下の一人が首を横に振った。
「上手く隠れているな、感心する」
ハルヴィシーはそう言ったが目は笑ってはいなかった。
「こうなったら一芝居打つとしよう」
「何をするつもりですか？」
「うん、危険だがやってみる価値はあるぞ。協力してくれるか」
「はい」
やがてハルヴィシーは数人の部下達と共に下水道の隅にへたれ込んだ。やがてそこに何者かが襲い掛かって来た。
「来たな」
彼はそれを認めてすぐに立ち上がった。それはレジスタンスの者達だった。
「クッ、はかったな！」
「こういうのは化かしあいだからな！」
ハルヴィシーは言い返すと同時に彼等を撃った。
「殺すな、出来る限り捕らえよ！」
「はい！」
部下達はレジスタンスの手や脚を狙った。素晴らしい銃の腕前で

あった。彼等は次々に手足を打ち抜かれていった。
逃げようとする。だがそこに前からも新手が出て来た。
「降伏せよ、そうすれば命まではとらん」
「・・・・・・わかった」
彼等はこうしてハルヴィシー達に捕らえられた。そして歩ける者達は道案内をさせられることになった。
「嘘ではないな」
彼等はそのうちの一人に銃を突き付けながら問うた。
「今更嘘なんかつくらよ」
レジスタンスはふてくされた顔でそう言った。
「ならいいがな。だが」
ハルヴィシーの目が剣呑な光を発した。
「もしもの時は・・・・・・。わかるな」
「あ、ああ」
その目は本気であった。それを見たレジスタンス達は背筋に寒いものを感じた。
(何て冷たい目だ)
彼等は今までそんな目をした者を見たことがなかった。もし偽りを教えたならばどうなるか・・・・・・。彼等は本能的にそれを悟った。
やがてとある曲がり角に来た。そこでレジスタンス達は壁を横に引いた。
「そうか、隠し扉か」
「そうだ」
そこから奥に続いているようだ。
「悪いが俺達はここで勘弁してくれないか」
「仲間達に見つかったら只じゃすまねえからな」
「ああ、わかった」
ハルヴィシーは部下を数人連れ彼等を送り返させた。そしてトランシーバーで暗号を送った。

「これでよし、上に残っている部隊も援軍に来るぞ」
「それは有り難いですね」
「ああ、我々はその前に中に入り橋頭堡を築くぞ」
「ハッ！」
こうしてハルヴィシー率いる部隊は中に入って行った。
暗い道は下に向けて続いていた。かなり降りただろう。出るとそこは何か廃墟のようであった。
「隊長の予想は当たったようですね」
隊員の一人が言った。
「ああ、下水道の下にこのようなものがあるのはいささか不思議だがな」
ハルヴィシーはその廃墟を見回しながら言った。地震はかなり大規模なものだったのであろう。建物は全て破壊され瓦礫の山がそこかしこに散乱している。
「まずはここに陣地を築くぞ」
「はい」
彼等はすぐに陣地を構築した。やがてレジスタンスとサラーフの特殊部隊がやって来た。
「早速来たな」
彼等はその陣地を潰そうとする。だがそれは適わなかった。ハルヴィシーの構築した陣地は堅固であり彼等を寄せ付けなかったのだ。
一日経った。上で下水道の出入り口を押さえていた部隊が到着した。
「よし、少しずつ進撃していくぞ」
ハルヴィシーは部下達を率いて前に出た。そして廃墟を一つずつ潰し攻略していった。
「焦る必要はないからな」
彼は部下達に対して言った。
「敵は既に我等の手中にある」
彼の言うとおりであった。出口は既に押さえている。レジスタン

スもサラーフの特殊部隊も袋の鼠であったのだ。
彼は敵を炙り出し少しずつ倒していった。そして徐々に包囲していった。
「ハルドゥーンは何処だ」
そして捕虜にしたレジスタンスに対し問うた。
「それは・・・・・・」
だが彼は口を割ろうとしない。
「中尉」
そこでハルヴィシーはウルドゥーンに声をかけた。
「わかりました」
ウルドゥーンは頷くと一本の注射針を取り出した。
そしてそれをその捕虜の腕に刺した。ハルヴィシーは暫く時間を空けてから問うた。
「ハルドゥーンは何処にいる」
「寺院の廃墟の地下に」
「そうか」
それは自白剤であった。拷問による尋問は最早過去のものとなっていた。今は後遺症のない自白剤が発明されておりそれを使うのだ。もっとも使っているのは秘密警察や憲兵といった特殊な組織だけであるが。
「寺院は」
ハルヴィシーは周りを見渡した。
「あそこか」
彼はその寺院の廃墟を確認した。
「行くぞ、これでここでの作戦は終わりだ」
「ハッ」
彼等は寺院を包囲した。だがそこにいあるレジスタンス及び特殊部隊の抵抗は流石に強力だった。
「流石に本丸は容易に陥とせないな」
「ええ、けれどあと一息ですよ」

ウルドゥーンはビームライフルを放ちながら言った。前にいた特殊部隊の兵士の額が撃ち抜かれた。
「何と言っても数が違いますからね」
「そうだな。それに彼等に残された場所ももうあの寺院しかない。最早逃げられん」
彼は総攻撃を命じた。バズーカや無反動砲が寺院を撃った。
これでレジスタンス達は怯んだ。それを見た彼は一斉射撃の後突入を命じた。
「今だ、一気に占領するぞ！」
「ハッ！」
これを押し留める力は最早レジスタンス達にはなかった。彼等は為す術もなく蹴散らされた。
寺院は遂に占領された。そしてハルヴィシーは地下への階段を捜し出し数人の部下と共に降りていった。
「・・・・・自身の手で決したか」
そこにあったのはハルドゥーンの亡骸だった。口から大量の血を吐き床にうつ伏せに倒れ込んでいる。服毒自殺のようだ。
「もう少し大人しくしていればこのようなことにはならなかっただろうにな」
ハルヴィシーは彼を冷たい目で見下ろしながらそう言った。
「だがそれは出来ないか。権力の為にはな」
「人間の悲しい性ですね」
ウルドゥーンが相槌をうった。
「そうだな」
こうしてレジスタンス達との戦いはハルヴィシーの勝利に終わった。オムダーマンはこれでブーシルの内憂を取り除くことに成功したのであった。

## 第二部第四章　二つの戦いその二

だが外患がまだであった。今国境にはサラーフの三個艦隊が集結していた。
それに対するはアッディーン率いる艦隊である。兵力にして一七〇万、一万七千隻、敵の約半分であった。
「さて、どう戦うかだな」
アッディーンは会議室に提督や参謀達を集めていた。
「守りを固めていれば敵の侵攻は抑えられるが」
「ですがそうはなさらないでしょう」
「確かにな」
彼はガルシャースプの言葉に口元を綻ばせた。
「守りを固めていても敵の増援が来る怖れがある。それにこちらの援軍は期待できないしな」
今オムダーマン軍はミドハドの治安安定に手が一杯でとてもブーシルまで手が回せなかった。余裕ができるには暫くの時が必要であった。
「今彼等はブーシルに向けて侵攻を開始しています。迎え撃つのなら何処でしますか」
「そうだな」
彼はラシークの言葉を聞きながら地図を見た。
「今敵は国境を越えたところらしいな」
「はい、今この辺りです」
ラシークがその場所を指し示した。するとそこに駒が浮かび上がった。
「彼等はここからブーシルに一直線に向かって来ています」
「するとブーシルに入るのはこの辺りだな」
アッディーンはブーシルの北東部を指で指し示した。
「おそらくそこから来るでしょう。偵察隊はそう読んでおります」

「そうか。ではまずは北東部に向かうぞ」
「はい」
提督と参謀達は頷いた。
「彼等の前に布陣する。そうすれば彼等は我々と正面から戦おうとするだろう」
「兵力差を考えるとそうなるでしょうな」
「だがかなり前方に布陣することにする」
「何故ですか？」
この言葉に皆顔を向けた。
「敵の動きを誘い出すつもりなのだ」
彼はそう言うとニヤリと笑った。
「いつも俺がやっていることを今度は彼等にしてもらう」
「？」
皆その言葉に首を傾げた。
「何、すぐにわかる。そして簡単なことだ」
「簡単なこと・・・・・・？」
「そうだ、諸君は二倍の兵力があったらどうするか」
「それは昔から決まっておりますが」
孫子にもある。二倍の兵力の時は挟み撃ちにすべし、と。
「見ていてくれ。彼等はその兵力故に敗れ去るだろう」
彼はそう言うと地図を叩いた。すると自軍の駒が浮き出た。
「一週間後この地図の上に浮かんでいるのは我が軍だけになるだろう」
その言葉が一同の心に深く残った。半信半疑な一同であったがここは常に勝利を収めてきたこの若き将の言葉を信じるしかなかった。

翌日アッディーン率いるオムダーマン軍とサラーフ軍はブーシル北東部で対峙した。世に言うブーシル会戦のはじまりであった。
オムダーマン軍が地形を無視して四方八方に全く障壁のない場所に布陣しているのを見てサラーフ軍の司令は驚いた。

「どういうことだ、アッディーン提督といえば常に地形を利用して戦うと聞いていたが」
サラーフ軍の司令はそれを見て不思議に思った。
「あれでは策も何も使えぬぞ。まるで挟み撃ちにしてくれと言わんばかりだ」
彼はまずアッディーンの奇略を警戒した。だがそうした気配は全く感じない。
「そもそもあの場所では何も出来ませんしね」
参謀の一人も首を傾げながら言った。
「伏兵の存在もないようです」
偵察隊からの報告が入った。
「そうか。では何も策がなくてあの場所に布陣しているのだな」
彼はその報告を聞いて頷いた。
「では兵を動かすとしよう。軍を二つに分けるぞ」
「ハッ」
兵が二つに分かれた。一個艦隊が分かれオムダーマン軍の後方に向かった。
「よいか、後方にきたところで敵を攻撃せよ。同時に主力も向かう」
「ハッ」
その一個艦隊はアッディーンに悟られぬよう慎重に迂回してその後方に向かった。
「気をつけろよ」
だが同時にアッディーンも動いた。サラーフ軍の主力が気付いた時には彼等はそれまでいた場所にはいなかった。
「まさか・・・・・・」
司令はそれを見て危機を悟った。すぐに後方に向かわせた艦隊の援軍に向かった。
だが遅かった。後方を狙わせた艦隊はオムダーマン軍の側面からの総攻撃を受けていたのだ。
「撃てっ！」

まずは一斉射撃が加えられる。無防備な側面にビームの帯が叩きつけられる。
忽ち数百の艦艇が破壊される。そして再び一斉射撃が加えられる。
これで敵艦隊の勢いは止まった。それを見過ごすアッディーンではない。すぐに突撃が指示された。
横からオムダーマン軍の艦艇が一斉に襲い掛かる。既に混乱状態に陥っていたサラーフ軍にそれを押し留めることは出来る筈もなく突入を許してしまった。
艦載機イエニチェリが襲い掛かる。そして艦と共同して敵艦を沈めていく。
敵を突っ切った。そして反転して再び襲い掛かる。
二度の突撃を受けサラーフ軍は壊走した。為す術もなく自軍の主力がいた方に逃げて行く。
「まずはこれでよし」
アッディーンは逃げて行く敵軍の背を見ながら言った。
「今度は敵の主力の番だ」
サラーフ軍は壊走してくる自軍を発見すると彼等と合流した。その数は半数にも満たなかった。
「優勢の敵に側面から急襲を受けたのだ、無理はないな」
司令はその傷付いた艦艇を見ながら悔しげに呟いた。
「どうやら下手な小細工はかえって損害を増やすだけのようだな」
「するとやはり」
参謀達が顔をこちらに向けてきた。
「うむ、正面から決戦を挑むぞ。兵力ではこちらの方がまだ上なのだしな」
「わかりました」
彼等はこうしてこちらにやって来たオムダーマン軍の正面に布陣した。アッディーンもそれに対し正面で構えた。
「さて、正面からの戦いとなったわけだが」
彼は旗艦アリーの艦橋に提督達を集めていた。

「おそらく敵は全戦力を正面にぶつけてくるだろう。かなり苦しい戦いになる」
「ハッ」
「この防衛戦の指揮官だが」
彼はそこで指を鳴らした。
「入れ」
そこで砂色の髪と鳶色の瞳を持つ男が入って来た。
「貴官は・・・・・・」
提督達はその者を見て目を見張った。
「アガヌ提督だ。諸君達も知っていよう」
「はい・・・・・・」
ミドハド軍においてアッディーンの攻撃に一人果敢に守ったあの人物である。確か捕虜になっていた筈だが。
「オムダーマン軍に入ることとなった。階級は少将だ」
「宜しくお願いします」
彼はオムダーマン式の敬礼をした。国家の興亡の激しいサハラではよくあることである。滅亡した国の軍人が征服した国に再登用されたり他国に登用されたりすることは。これはサハラの特色でもあった。
だから提督達もそれについては驚いていなかった。驚いたのはいきなり軍の指揮を任せたことであった。
「アタチュルク提督、ムーア提督、ニアメ提督は彼の指揮下に置く。異存はないな」
「はい・・・・・・」
やはり新参者の下につくというのは不満があった。だがこれも命令である。
「コリームア提督は俺と共に三千隻を率いる。これは何に使うかはわかるな」
「ハッ」
コリームアは敬礼でもって答えた。

「時が来れば動くぞ、その時に備えておけ」
「わかりました」
「諸君、勝利は我等が手にある。アッラーは偉大なり！」
サハラの主な宗教はイスラムであった。他の宗教も存在しているがアラブ系の者が多い為必然的にイスラム教徒が多くなるのである。かって原理主義者等を生み出したが今はかっての寛容さを取り戻している。
アッディーンのその言葉が合図となった。オムダーマン軍は戦闘態勢に入った。
まずは数に優るサラーフ軍が動いた。そのまま押し潰さんとする。
「来たか」
アガヌはその動きを冷静に見ていた。
「まずは動きを止めよう」
彼はそう言うと敵の最も突出している部分を指し示した。
「あのポイントに火力を集中させよ！」
すぐに砲撃が行なわれる。そして敵の進撃が阻まれる。
だがサラーフ軍は再び進撃を開始する。今度は横陣を組んで向かって来た。包囲するつもりである。
「中央に火力を集中させよ！」
再び指示が下る。敵の中央部が撃たれ陣が崩れる。
「ほう」
それを見た提督達が思わず声をあげた。
「用兵が巧みだな。守りが上手いわけだ」
彼等はすぐにアガヌの力量を認めた。
敵は次第に苛立ってきた。そして今度は次々に波状攻撃を繰り出してきた。
「ならば」
彼は前線に守りの固い戦艦を置いた。そして方陣を組みそれを防いだ。
敵が引けば押し、押さば引いた。そしてその攻撃をよく防いでい

た。
「ふむ、見事だな」
アッディーンもそれを見ていた。
「思ったよりも遥かに見事だ。兵力差をものともしていない」
彼はそれを左翼で見ていたのだ。
「司令、我等はまだ動かなくてよいのですか」
艦長を務めるムラーフが問うた。
「ああ、まだいい」
彼は鷹揚に答えた。
「今は動く時ではない。だが時が来れば」
彼はそこで表情を変えた。
「一気に動くぞ」
それは獲物を狙う猛禽の眼であった。
戦局は完全に膠着していた。サラーフ軍は数に優りながらもアガヌの巧みな用兵と防御によりその優位を活かせてはいなかった。
だがオムダーマンも数に劣り押しきれない。次第に両軍に焦りが生じてきた。
「司令、将兵が苛立ちはじめております」
それはアッディーンも承知していた。
「まだだ、まだ動いてはならない」
彼はそう言った。将兵はその言葉に従い落ち着きを取り戻した。
だがサラーフは違った。数に優っているが故に次第に苛立ちを隠せなくなってきていた。
「おい、このままでいいのか」
次第に将校達の間でもそう囁かれだした。
「機を逃すとまたアッディーンにやられるぞ」
彼等はアッディーンの軍略を怖れていた。その為一気を勝負を着けたかったのだ。
だがそれは出来ていなかった。戦いは膠着状態に陥っていた。
次第に突出する艦が出て来た。しかしアガヌはそうした艦から沈

めていった。
「段々統制がとれなくなってきたな」
アッディーンはそれを見て言った。
「もうすぐこれが全体にまで及ぶぞ」
彼の言葉は的中した。やがて敵の両翼が突如として突撃を開始した。
「よし、今だ！」
彼はそれを見て叫んだ。
「今から敵の右翼を叩く、主力部隊は左翼に備えよ！」
彼はそう言うと右手を挙げた。
「勝機は来た、この戦い我等がものだ！」
右手が振り下ろされる。同時に彼が直率左翼部隊が動いた。
「よし、遂にはじまったな」
その中にはコリームアが率いる艦隊もあった。
「司令に続くぞ、我等の動きを見せてやれ」
彼は幕僚達に言った。そして疾風の様な動きで敵に向かっていった。
アッディーンとコリームアが率いる部隊は闇雲の突撃してきた敵右翼の矛先をかわした。そしてその側面に回り込んだ。
「撃て！」
アッディーンの右腕が振り下ろされる。その攻撃により敵右翼の動きが止まった。
「今だ、突撃せよ！」
そして突撃を敢行する。彼は自らの旗艦を真っ先に突入させた。
「遅れるな、続け！」
この行動に皆奮い立った。そして彼に続き敵に向けて雪崩れ込んでいく。
サラーフの右翼は瞬時にして崩壊した。左翼はアガヌの巧みな防御の前にその動きを完全に止められていた。その動きを見逃すアガヌではなかった。

「敵左翼に火力を集中させよ！」
アガヌはすぐに攻撃を敵左翼に集中させた。それでサラーフの左翼は崩壊した。
同時にアッディーン率いるオムダーマン軍左翼が崩壊したサラーフ軍右翼を追いその脇に攻撃を仕掛けてきた。それはサラーフの左翼も同じ状況であった。
サラーフ軍は両翼から攻撃に曝されていた。統制はさらにとれなくなっていた。
「クッ、兵を少し退かせよ！」
それを見たサラーフ軍の司令は部隊を少し退かせるよう指示した。だがそれは的確には伝わらなかった。
「撤退か！？」
このような混乱した状況ではままあることであった。サラーフ軍の中にはそのまま戦場を離脱する艦もあらわれた。
「待て、逃げるな！」
それを見た司令は慌てて彼等を止めようとする。だがそれは伝わらなかった。
ようやく退き陣を再構築しようとした時には既にその数は大きく減っていた。最早オムダーマン軍の方が優勢であった。
「形勢逆転だな」
アッディーンはその敵軍を見ながら言った。そして三日月型の陣を組み攻撃を仕掛けた。
サラーフ軍も果敢に戦う。だが数を大きく減らしてしまっている為満足に対抗できない。次第に追い詰められていく。
「こうなっては仕方がない、戦いにはならん」
サラーフ軍司令は忌々しげに呟いた。
「全軍撤退だ！すぐにこの星系から退却せよ！」
退却の指示が下った。こうしてサラーフ軍は撤退を開始した。
その退却も困難を伴うものであった。オムダーマン軍の追撃を受けようやくサラーフ領に逃げ込んだ時には半分程にまで減っていた。

「これで外患は始末したな」
アッディーンはそれを見ながら満足した笑みで言った。それから間も無く彼のもとにハルドゥーンが自害したとの報告が入った。
こうしてブーシル星系会戦は終わった。結果はサラーフ軍の大敗であり彼等は参加兵力の半数近くを失い自国領に逃げ込んだ。またハルドゥーンも自害したことによりこの星系での工作も水泡に帰してしまうという致命的な痛手も被った。これへの挽回の為北方諸国への侵攻を実行に移すこととなったのである。
「よくやってくれた」
戦いが終わったあとアッディーンはアガヌに対して言った。
「今回の戦いの勝利は貴官によるところが大きい」
アッディーンは満面に笑みをたたえていた。
「いえ」
だが彼は首を横に振った。
「私の功績ではありません。私はただ指示を出していただけです。それよりも」
彼は言葉を続けた。
「兵士達を称えて下さい、今回の戦いは彼等の奮闘なくしてはありませんでしたから」
これが彼の性格であった。彼は自らの功を誇ったりはしない人物であった。これにより兵士達の間で彼の人気は不動のものとなった。
だがそれを誇るような彼ではない。それが軍内での信望をさらに高めることとなった。
「ふむ」
アッディーンはそれを黙って見ていた。
「性格もいいようだな」
彼はそれを素直に受け止めた。
アッディーンの人となりをあらわすにあたって最も特徴的なのは嫉妬や羨望とは全く縁がないことである。これは彼が自身の能力に

対して絶対の自信を持っていることと他人を素直に認めることの出来る資質からきていた。

彼等は勝利の中帰還した。そして次の戦いに備えるのであった。

# 第二部第五章　次なる戦いへの蠢動その一

## 次なる戦いへの蠢動

「日本の動きだが」
地球旧北米地区のある豪奢なホテルの一室である。その中に彼等はいた。
「皆さんはどう思いますか」
見ればスーツ姿の男達が席に座っている。人種は多岐に渡っている。しかも顔立ちから察するにかなりの混血が見られる。これも連合の特色である。その中の中心的茶色い髪の黒人が言った。
「そうですな」
アジア系であるが緑の瞳をした中年の男がまず答えた。
「正直に言わせてもらいますとまたか、という感じです」
「同感ですな」
ここで大柄な白人の男が同意した。
「全く何時までも国連だの連合だの大義名分に弱い。ああしたことは事前に我々で協議すべきだといつも言っているのに。どうしてそれがわからないのか」
「それが彼等が未だに外交慣れしていないということの証明でしょうね」
浅黒い肌をしたアジア系の男がそれに対して言った。彼等はアメリカ、中国、ロシア、オーストラリアの各政府の要人達である。他にはＡＳＥＡＮ各国やカナダ、メキシコといった北米の国もある。見ればかって環太平洋地域に位置していた国々ばかりである。
連合には一つの特徴がある。百以上の構成国があるがその中心は決まっているということである。
それは構成国の力関係である。旧環太平洋諸国とトルコやイスラエル等の国々とその他の構成国、旧中南米や旧アフリカの国々との間では大きな差があった。これは当初の宇宙進出技術の関係もあっ

たが次第に当初の参加国と中途の参加国との差が表われはじめたのである。
これは致し方のないことであった。最初から国力に差があった。しかも宇宙への進出も彼等が欧州を退けそこにアフリカや中南米の国々を入れてやったということもあり進出も環太平洋諸国が優先された。だがアフリカ諸国も中南米諸国もこれといって反論しなかった。
それはやはり宇宙進出は彼等にも大きく開かれそれによって今までとは比較にならない程の豊かな生活が手に入ったからであった。現状の不満は多いにあったがそれよりも今の豊かな生活をより豊かにする方が先であった。
しかも連合の方針は巧みであった。確かに求心力に乏しい中央政府であったがその政策はどうして中々巧みであった。連合各国は法的には全て平等としたのである。彼等の票もまた一票であった。
結果としてそれが彼等の助けになった。旧環太平洋諸国も彼等の存在は無視できなかった。とりわけ中南米諸国に対しては結果的に彼等と同じだけの開拓地等の便宜を図らなくてはならない状況であった。
そうした状況にあるので環太平洋諸国もお互いに微妙な関係であった。元々日米中露といった大国が突出していた地域である。だがＡＳＥＡＮ諸国がそれを取り纏めるといった関係にありそれはさらに複雑であった。多くの政権交代がどの国でもあったがそれは変わらなかった。
中でも日本の位置は昔から特殊であった。米中に単独で対抗出来る数少ない国であっただけでなくその人気は昔から高く何かと中南米やアフリカ諸国から頼られていた。実際に中南米諸国の地位向上には日本の存在が大きかった。
「確かに道理ではいい」
アメリカ代表が言った。
「エウロパに対抗するには連合中央政府の権限強化が何よりも望ま

しい」
「それは既に連合内の一致した考えですしね」
ベトナム代表が言葉を入れた。
「しかしだ」
ここでオーストラリア代表が苦い声を出した。
「急な権限強化はどうかというわけですな」
中国代表が言葉を入れた。
「急なことはよくありませんから」
「それは貴国の権益を考えての発言ですか」
タイ代表が一見良識的な発言をした中国代表に対して言った。
「それはどの国も同じだと思うが」
インドネシア代表がその指摘に対してさらに指摘を入れた。
「我々の今までの主導的な役割や権益が損なわれては何もならない」
銀の髪のニュージーランド代表の言葉は渋い。
「それを日本、いや伊藤首相と八条長官はわかっているのだろうか」
日本とて環太平洋諸国である。しかもその地位はかなり高い。だがここでも日本は昔から異質であった。
地球の近辺にその領土の大部分があるせいであろうか。彼等は常に連合中央政府寄りの行動や発言を繰り返してきた。そして今度もである。
「中央軍はいい。規模は定められながらもそれぞれの国が軍を持つことは了承してくれたしな」
「しかしそれで充分ではないのか。我々の主導体制を崩すことになりはしないだろうか」
マレーシア代表とフィリピン代表の危惧も同じであった。
「まだそう決めるのは早いと思うが」
ブルネイ代表が彼等を宥めるように言った。
「そうだな。一度日本の意志を確かめよう。それからでもいいではないか」
カナダ代表がそう言うと皆それに頷いた。やはり日本の存在は大

きかった。彼等の経済や技術も縁の下で日本に支えられている状況であった。
話を終えると彼等はホテルを後にした。それは伊藤の耳にも入っていた。
「如何いたしますか？」
外相である東宗久が官邸の執務室において伊藤に対して尋ねた。見れば長身痩躯の美男子である。髪も瞳も黒いが顔立ちはいささか彫が深く肌は白めだ。ルーツの一つにカナダ人があるせいか。
「また相変わらずね」
伊藤はそれを聞いて微笑んだ。知的な顔が悪戯っぽく笑った。
「我が国には我が国のやり方があるのを本当に理解しないのね、彼等は」
「はあ」
東は予想した言葉とは違うその言葉にいささか拍子抜けした。
「確かに我が国は連合中央政府に対して親密な態度をとってはいるわ」
それは事実であった。否定する理由はない。
「けれどね」
彼女は言葉を続けた。
「国益まで度外視する程愚かではないわよ」
真理はそれであった。日本もまた国益を考えていたのだ。
「連合中央政府の権限強化は日本にとって大きな利益になるわ。地位をさらに固め治安の好転により貿易や商業活動も活発になる。けれどこれは彼等も一緒なんだけれど」
「それよりもアフリカ諸国の地位向上につながり彼等の権益が脅かされることを警戒しているようです」
「あら、そんなことだったの」
彼女はそれを聞いて笑った。
「元々の取り分があれだけあるしそれが減るということはないのに」
「他の人間の取り分が多くなれば不満に思うものですから」

それも人間の性の一つである。
「じゃあ彼等に伝えて頂戴。これまで以上の開拓地や資源があれば文句はないでしょうって」
「わかりました」
東は頷いた。
「それにアフリカ諸国がもっと豊かになれば彼等もより豊かになるのだけれどね」
これは経済の循環である。時としてよく忘れられるものである。
「まあそれは後々わかることでしょう」
「そうね。それに」
「それに！？」
東は伊藤の表情が僅かに変わったことを見逃さなかった。
「すぐに彼等も連合の権限強化を諸手を挙げて喜ぶことになるわ」
「それは当然です」
（あら、東君はまだわかっていないようね）
伊藤は彼の顔を覗き込んで思った。
（筋はいいけれど。まだまだ若いわね）
彼も八条と同じく伊藤の弟子である。議員になりたての頃から側におり政治のノウハウを教わっている。
（まあすぐにわかるわ）
彼女は東にわからぬ程の微かな笑みを浮かべた。
「ところで八条君はどうしているかしら」
「長官ですか？」
今彼は地球において軍制を整えるべく辣腕を振るい続けている。
「そうよ、何でも最近は自分が任命した将軍達と常に話し合っているらしいけれど」
「はい、かなりお忙しいようですね」
「それは何より」
彼女はそれを聞いて安心したように微笑んだ。
「けれど今からもっと忙しくなるわよ」

「今よりですか」
「当然よ。何といっても連合軍はまだまだこれからですもの」
実際に連合軍は産声をあげたばかりであった。やるべきことはまだまだ山積みである。
「まあそちらは彼が上手くやってくれるでしょう。私達は別の仕事が待っているわよ」
「わかっております」
東はニコリと笑った。
「貴方が中心になるわよ。頑張ってね」
「はい」
かくして日本は環太平洋各国に自身の考えを述べ彼等の権益を保証した。これにより彼等の不満も一先は解消されたのであった。
「けれどまた不満が募るでしょうね」
「それは当然よ。不満は解消されない限り募るものよ」
伊藤は官邸に戻って来た東に対して言った。
「問題はその不満を上手く解消し爆発させないこと。人間だってストレスがたまれば駄目でしょう」
「はい」
「国家もそれと同じ。それを忘れると大変なことになるの」
何処か医者を思わせる言葉である。東はそれを教師から教えられるようにして聞いていた。
「内政でも外交でもそれは同じ。ほら、エウロパだって不満が募っているからサハラに侵攻しているじゃない」
この場合の不満とは人口問題である。
「まあ連合は人口問題は関係ないけれど」
彼等には広大な開拓地がある。その為人口や食糧、資源の問題とは無縁である。
「けれどそれなりに問題があるのよね。それをどうしていくかが政治なのよ」
「そういうものですか」

「そうよ、そう考えればやり易いでしょ」
「まあ」
東は生真面目な性質の持ち主であり何かと複雑に考える傾向がある。
「物事はわかり易いように考える。そうすれば問題について考えるのも解決するのもやり易くなるわよ。ほら、文章だってわかりにくく書いていたら駄目でしょう」
「それはそうですね」
実際に何を書いているかわからないものを有り難がっているのは愚かである。これは二十世紀の日本において実際にあったことであるが何を書いているかわからない時は思想界のリーダーであったのが普通の文章を書くと凡百の人物に過ぎなかったということが知れ渡ったことがある。いや、この人物は権力欲の塊である醜悪なテロリストを偉大な宗教家と絶賛していたので普通の人間よりも遥かに稚拙で劣悪な知性と思想の持ち主であったのだ。
この時代の文章は官庁の書類においてもわかり易いように書かれている。業務の円滑化及び誰にでもすぐに理解できるようにとの配慮からだ。
「それは徐々に身に着けていけばいいわ。私も時間がかかったことだし」
伊藤は優しい微笑みを浮かべた。この笑みだけでもかなりの支持者を集めている。
「それじゃああとは各国の情報を収集しておいてね。事態の変化があればすぐに私に知らせて」
「わかりました」
東はそう答えると部屋をあとにした。伊藤はそれを見届けるとペンを手にとった。
「さて、と。外交は彼にかなりの部分を任せていいわね」
そう言うと書類にサインをした。
「財政は今のところ問題はないし」

今日本の財政は潤っていた。貿易収支がかなりの黒字なのである。
「あとは軍事かしら」
今日本も軍制改革を行なっている最中である。連合軍に参加すると共に国軍を新たに設立したのである。
この国軍の規模は各国の人口により規制されていた。従ってその役割は治安維持及び連合軍の補助、予備戦力であった。
「これは佐藤君に頑張ってもらわないとね」
佐藤とは日本の防衛大臣である。かってラグビーで身体を鍛えていた筋骨隆々の大男である。
「本当に政治というのは問題が尽きないわね。まるで人間の身体みたい」
彼女はそう言うと今度は苦笑した。
「けれど諦めたらそれでお終いなのよね。細かく見ていかないと」
その口調はやはり医者のそれに似ていた。
彼女は書類にサインをし続けた。こうして深夜まで仕事は続いた。
官邸の私室に戻る。そこには夫が待っていた。

## 第二部第五章　次なる戦いへの蠢動その二

「お帰り」
見れば銀の髪を持つわりかし整った顔立ちの男性である。歳は彼女と同じ位か。
「ただいま、あなた」
彼女は部屋着に着替えていた。そして夫に対し笑顔を向けた。
彼女の夫は有名な法学者である。とある国立大学で教授を務めている。
「いつも御苦労様だね」
「いえ、そんなことはないわ」
伊藤は夫の言葉に対して微笑で返した。
「仕事疲れる程やわじゃないし」
「おやおや、もうそんなことを言える歳ではないだろう」
彼は安楽椅子を揺らしながら言った。
「それはお互い様でしょ。貴方だって昨日も徹夜で論文書いていたじゃない」
「ははは、確かにそうだがね」
彼は速筆で知られていた。一月もあれば論文の一つや二つは書いてしまう。そしてそれは国際的にかなり高い評価を受けていた。
「だが学問と政治はまた別だと思うのだが」
「あら、あおうじゃないというのは貴方が一番よく知っていることだと思うけれど」
伊藤は夫の言葉に反論した。
「それはそうだがね。優秀な経済理論や技術はどんどん利用されているのが現実だし」
「だったら認めるのね」
「だがそういうわけにもいかないだろう」
彼は顔を難しいものにした。

「あまり学者が政治に積極的に関わるというのもどうかと思うんだ。往々にして学者は象牙の塔に閉じこもっているから現実のことを知らない」
「それは人それぞれじゃないかしら」
「だが多くはそうだろう。まして我が国の歴史を見ると」
これも二十世紀後半のことであるがこの時代の日本の知識人及びマスメディアの腐敗ぶりはいまだに研究対象となっている。無能で無責任、かつ厚顔無恥な彼等は共産主義というこの時代では邪教の一種とさえみなされている思想に心酔しそれによる暴力革命を引き起こし彼等が権力を握る為に外国やテロリストと結託した。無論その様な卑しい行いが何時までもできるものではないく彼等はやがて裁かれることとなった。裁判の場や処刑場においても彼等は皆言い逃れや責任転嫁を繰り返しその醜さは人というものの醜悪な一面を知るうえで重要なテキストとさえなっている。今では日本の最も恥ずべき輩達として名を残している。
「あれは例外よ。あんな醜い連中はそうそう出ないわよ」
伊藤は顔を顰めさせた。今では彼等の卑しさは子供でも知っている。卑しい人間というのは何処までも卑劣になれるということの証明なのだから。
「確かにね。けれどああした事態を避けるようにはしなければならない」
「それならまともな学者の意見を政治家がとり入れればいいだけよ。違うかしら」
「問題は政治家にあり、か」
「そう、そしてその政治家を選ぶ国民にね」
それは真実であった。その醜い知識人やマスコミと結託した政治家が多くいたのもこの時代の日本であった。後に彼等は多くの劇や小説で卑しい醜悪な悪役として描かれ続けている。
「国民は自分の目を養わなくてはならない、君の著書にあったね」
「そうよ、政治家になった今では絶対に言えないことだけれど」

これは真実であろう。そうした知識人やマスコミ、政治家に踊らされないようにする為には勉強しなくてはならないのだ。だが政治家がこれを言うと問題なのも事実である。
「これは賛成するよ」
「有り難う」
彼女はそれに対しては素直に礼を言った。
「つまり学者は現実を直視して語り政治家はそれを判断しなくてはならないのか」
「国民もね」
簡単そうでかなり難しい話である。その証拠に人類は今まで何千年もこの問題を解決できていない。
「学者は現実を見なくてはいけないの」
「極端な理想主義は空虚だと」
「そうよ。理想主義もいいけれど政治は現実の世界なの。現実主義でなくては話にもならないわ」
「その現実主義だが」
彼はそこで顔を引き締めた。
「あまりにも現実とかけ離れたものである場合悲劇を生み出すわ」
それは歴史が証明していた。
「現実にそぐわない政治は悲劇しか生み出さない」
「しかしさっきから現実、現実ばかり言うが」
彼はここでまた言った。
「理想なくしては政治もないだろう。政治家は理想を求めないと駄目だ」
「それはわかってるわ」
伊藤は夫に言葉を返した。
「けれどその理想は極端なものであってはならない。そして現実にそったものでなければ」
「そういうものか」
「ええ。それは政治家になればわかるわ」

彼女は自信をもって答えた。
「政治家、か」
彼はここで言葉を濁らせた。
「私は政治家には向いていないからな。ここでこうして何かについて考える方がいい」
「あら、それは残念ね」
伊藤はそれを聞いて悪戯っぽく笑った。
「貴方はいい政治家になれるのに」
「ははは、それはよしてくれ」
彼はそれを聞いて苦笑した。
「私は単なる書生だ。一介の書生が政治に入るよりは君の弟子達がやった方がいい」
伊藤の部下達のことを言っているのだ。
「特に今中央政府にいる彼、ええと・・・・・・」
「八条君ね」
伊藤は言葉を入れた。
「そうそう、彼だ。彼の方が私なぞよりずっと政治家に向いているよ」
「謙虚なのね」
「現実を語っているのさ。君と同じようにね」
「あら、じゃあ現実主義が正しいと認めるのね」
「違うな。分をわきまえているだけだよ」
彼はそう言って笑った。そして二人はやがて休息に入った。

だがまだ休息をとらず仕事にとりかかっている者もいた。先程名前が出た八条である。
「それにしてもやるべきことが一向に減らないな」
もう真夜中になっている。だが彼はまだ書類の山に取り囲まれている。決裁を終えたその場から新しい書類がファックスで送られて来る。

「今度は憲兵本部からです」
秘書官がその書類を持って来た。
「そちらに置いてくれ」
彼はサインをしながら秘書官に指示した。
「わかりました」
彼はそれを聞くと書類を指定された場所に置いた。するとまたファックスが動きだした。
「やれやれ」
八条はファックスを見て苦笑した。
「よく壊れないな。人間でもここまで働くと過労で倒れてしまうけれどね」
「機械ですから」
「残念だけれどそれは答えにはなっていないよ」
八条はいささか的外れな返答をした秘書官に対して言った。
「ところで憲兵本部からの書類か」
彼はまたサインを終えた。まだ決裁を待つ書類は机の上に積まれているがふと声をかけた。
「はい」
秘書官は答えた。
「憲兵本部も何かと忙しいですから」
「だろうな。何しろ軍といえば荒くれ者も多いからな」
これは変わっていない。どうしても血の気が多い者が集まってしまう。その為物騒な事件も起こってしまう。そういったことを取り締まるのが憲兵だ。軍隊内の警察と言ってよい。
「まずはその書類を見たいな」
「わかりました」
秘書官はそれを聞くと憲兵本部からの書類を彼に手渡した。
「ふむ」
彼はそれを手に取ると中身を見た。
「軍律についての決裁か」

彼はそれを見て考え込んだ。
「どうなさいますか」
秘書官は読み終えた彼に対して問うた。
「これは厳しくすべきだな」
八条はやや素っ気なく言った。
「軍律は厳しくなくては。間違っても民間人に危害が及んではいけない」
そうしたこともままあることである。軍人が民間人に危害を加える怖れは戦時だけでなく平時においても常に危惧されていることである。
「そうした事件に対しては厳罰で挑め。そして徹底的にやるべきだ」
「わかりました」
「そのかわり他のところの待遇はよくする。給料も高くして厚生もよくしよう」
「はい」
「そうでないと志願者もいなくなるし士気にも関わる。金はかかるがこうしないと本末転倒だ」
「こうしたことを考えると軍というのは何かとお金がかかりますね」
「仕方ないさ。これも軍事の重要な環境整備だ」
環境整備、それは何も兵器だけではないのだ。後方のことも考えなければ軍は機能しない。
「サハラのように徴兵制にすればこうした問題もないが今更徴兵制というのもな」
「そうですね。時代遅れかと、いや」
秘書官はここで口調を変えた。
「連合の国情には合っていません」
連合はエウロパやサハラ諸国とは人口も国力も違っていた。それだけにもとの兵力も隔絶しているのである。だから特に兵を無理をしてでも集める必要はないのである。
しかもエウロパ以外とは緊張した関係にはない。宇宙海賊やテロ

リストの掃討がその主な仕事であった。
そうした作戦行動は専門的な技能が要求される。従って連合はどの国も志願制を採用していた。そして連合軍もそれを踏襲したのだ。
エウロパも志願制である。彼等はサハラに侵攻しているが断続的な侵攻であり兵力差もサハラ諸国とは開いていた。しかも貴族達は『高貴な者の義務』として軍に入ることが多く特に将校の数には困っていないのである。マウリアは連合と状況が似ていた。彼等も特に軍事的緊張はなかった。
サハラの多くの国が徴兵制なのは当然であった。彼等は四分五裂した状況であり互いに覇を競っていた。そのような状況下では少しでも多くの兵が欲しい。それだけでは足らず南方では傭兵まで存在していた。
「サハラの一部では傭兵もありますね」
「あれは止めた方がいいな」
八条は言った。
「何故ですか？」
「彼等は報酬によって動く。その額も馬鹿にはならないし忠誠心も薄いしな」
「ですね」
「それはサハラの状況を見てもわかるだろう」
傭兵はサハラにおいては嫌われていた。戦いが不利になると逃げ出し勝った場合は報酬と称して掠奪を行なう。民衆にとっては災厄そのものであった。実際にシャイターンの傭兵隊が人気が高いのは掠奪等を一切行なわないからである。
「ああした輩は使わないに限る」
「ですね。やはり市民兵に限ります」
「将兵は質が高いにこしたことはない。この場合はモラルに関してだ」
ここで彼は表情を変えた。
「いいか」

「はい」
秘書官は八条の真剣な顔に自らも神経を研ぎ澄ました。
「我々はまずモラルの高い将兵を育てなければならないのだ。強い兵士よりモラルの高い兵士だ」
「そうした意味での優れた兵士ですね」
「そうだ。我々は少なくとも兵器や数には困ってはいない。精鋭を作る必要はそれといってない」
「全体を平均的に強くすると」
「その通り。あとは後方支持と生存能力を上げる。そうすれば戦いは物量で押し切れる」
芸がないと昔から言われるがこれころ最も重要なのである。物量とそれを支えるロジスティック、それを確立した軍隊が覇権を握ってきた。ローマ帝国然りオスマン＝トルコ然り。
大兵は少兵に勝る。三十年戦争の傭兵隊長ヴァレンシュタインも常に敵よりも多くの兵を以ってあたるようにしていた。そして勝利を収めてきた。
「オーソドックスで構わない。オーソドックスにことを進めていけばいかなる場合にも対処がし易い」
「成程」
「将兵達にも伝えてくれ。まずはモラルを守ることから身に着けろ、とな」
「わかりました」
こうして今度は将兵のモラルについて指示が下された。それは徹底されたものであり違反者は些細なことでも厳罰に処された。こうして連合軍の軍規は厳粛なものとなった。
連合軍は次第にその形をなしていった。そして本格的な軍となっていった。
連合軍が産みの苦しみを味わっている時サハラ西方は再び風雲急を告げていた。

「私を上級大将にですか？」
アッディーンはカッサラ星系に呼び出されていた。
「そうだ、ブーシル星系での勝利とハルドゥーン派を一掃した功績でな」
彼に昇進を伝えたのはアジュラーンであった。二人は司令室にいた。
「しかしハルドゥーンのことはハルヴィシー中佐の功績ですが」
「無論彼も昇進したよ。今彼は大佐だ」
「そうですか」
「君の下にいる提督達の昇進も決まった。皆中将になった」
「中将ですか。それでは彼等は私の下を離れますね」
分艦隊の司令官は少将が就くのがオムダーマンの軍制である。艦隊司令は中将、若しくは大将が就く。
「彼等は新設された各艦隊の司令に着任することが決定している」
「艦隊の新設！？まさか」
「そうだ。旧ミドハド軍から成る艦隊だ。これで我が軍は十六個艦隊となる」
「壮観ですね。一気にそれだけの戦力が加わるとなると」
アッディーンはそれを聞いて思わず笑みを漏らした。
「既に艦艇も我々のものへの交代が行なわれている。もうすぐ本格的に動き出すだろう」
「それは楽しみですね」
「そしてすぐに次の戦いだ」
「サラーフですね」
ここでアッディーンの目が光った。
「そうだ、今彼等は我々と北方諸国との戦いに敗れ戦力を大きく減らしている。叩くのなら今のうちだ」
「はい」
サラーフの衰退はかなりのものであった。ブーシルで参加兵力の半分を失いハルドゥーンを死なせただけでなくシャイターンの軍略

の前に一敗地にまみれた。その痛手はそうそう容易には癒せるものではなかった。
「今彼等を倒し西方を我々のものとするのだ。これは議会でも軍議でも決定したことだ」
「そうですか。遂に」
アッディーンは口の両端で笑った。彼にとってもサラーフは宿敵であった。サラーフは常にオムダーマンを脅かしてきた強敵であったのだ。
「そしてその作戦の総司令官だが」
アジュラーンは言葉を続けた。
「君に決まった」
「光栄です」
彼はそれを聞くと軽く頷いた。
「全ては君に一任される。十四個艦隊を以って今回の侵攻作戦の指揮をとってくれ」
「わかりました」
アッディーンはそれを了承すると敬礼した。
「この戦いに勝てば我々は西方を統一したことになる。そしてハサンとも対抗できるだけの国力を身に着けることになるのだ。全ては君の双肩にかかっている」
「大きいですね」
「それだけにやりがいがあるだろう」
彼はアッディーンの性格をよく知っていた。
「はい」
アッディーンは不敵に笑って答えた。
「ならば頼むぞ。そして我々に栄光を」
「ハッ！」
これによりオムダーマンのサラーフ侵攻計画が発動された。アッディーンは総司令官に着任しその司令部をカッサラ星系に置いた。そして戦いの準備が着々と進められた。

## 第二部第五章　次なる戦いへの蠢動その三

その頃シャイターンはハルーク家の老未亡人と会っていた。
「奥様、今申し上げました様に私の心は貴女にのみ捧げられております」
シャイターンは彼女の前に跪いていた。
「その様なたわむれを・・・・・・」
その奥方は言葉ではその求愛を退けた。
見ればかなりの美貌の持ち主である。齢六十を優に越えている筈であるが三十代前半にしか見えない。皺もなく肌には艶があり髪も黒々としている。
艶かしい美貌の持ち主である。その豊満な容姿は余分な肉なぞなく髪の先から足の爪先まで妖艶な美貌を漂わせている。まるでかつてフランス王の寵妃であった伝説の美女のようであった。
「嘘だと言われるのですか、私のこの偽らぬ想いを」
シャイターンはここで顔を上げた。その黒い眼に熱意を込めさせて彼女を見上げる。
「それは・・・・・・」
彼女はそれを拒めなかった。拒むにはあまりにも美し過ぎた。
「貴女さえ手に入れることができるのならば私は他には何もいりません。アッラーに誓って」
彼女の篤い信仰心を心に入れたうえでそう言ったのだ。
「アッラーの・・・・・・」
彼女の心が揺れ動いた。そして彼はそれを見逃さなかった。
「奥様」
ここで立ち上がった。
「ここでお会いしたのも運命です。今こそその運命に従おうではありませんか」
そしてその手を握った。体温が伝わる。

「しかし・・・・・・」
まだ躊躇いがあった。
「また来ます。その時こそは私を受け入れて下さい」
彼はそう言うと踵を返した。そこでマントが風の中颯爽と翻る。
彼は自らの館に戻った。そこは漆黒と黄金で彩られた宮殿であった。新たに建築させたものである。
「如何でしたか、ハルーク家の奥様は」
館に入ると執事が尋ねてきた。古くから彼に仕えている老人である。
「悪くはないな。もう一度尋ねれば篭絡できる」
彼は妖しげな、何処か悪意を感じさせる笑みを浮かべて言った。
「それに歳を心配したがそれは要らぬ心配であった。まるで熟れた果実の様に味わいがありそうだ」
「このようにですか」
執事はここで銀の皿の上に置かれている果実の山を差し出した。
「そうだな。例えばこの無花果の様に」
彼はそう言うとその北方産の無花果を手にとった。そして口に含んだ。
「私が食するに相応しい果実だ。果実はやはり熟れたものでなければならぬ」
「青い果実は駄目でしょうか」
「それはそれで味わいがあるがな。だが熟れたものの味は一度覚えると病みつきになる」
無花果を食べ終えると執事に顔を向け言った。
「そして同時に私の立場も確固たるものにしてくれる」
「ということはやはり」
「当然だ。昔からよくあることだ」
シャイターンの笑みは何処か邪なものを秘めていた。
「ハルーク家の中で今回のことに関して何か動きはあるか」
「何人か反対している者がおります」

「そうか」
彼はここで再び邪な笑みをたたえた。
「いつものようにやれ」
「わかりました」
「それからだ」
彼は切られた梨を手に取りながら言った。
「北方諸国内で私に不満や不信を持つような勢力を調べておけ。すぐにな」
「それはもうとうに完成しております」
「早いな。ではそれを見せてもらおうか」
彼は梨を食べ終えると私室に向かった。
歩きながら周りの者が彼の服を着替えさせている。すぐに彼は豪奢な絹の服に着替えていた。
私室に入った。そこは多くの高価な装飾が為された書で囲まれた本棚であった。これは彼の私室の一つである。
「では見せてもらおうか」
彼はその中に置かれている黒檀の椅子に座ると執事に声をかけた。
「はい」
執事は一つのファイルを差し出した。
「ふむ」
彼はそれを手にとった。そしてその中をパラパラと見た。
「如何いたしますか？」
「そうだな」
彼は暫し考えたがやがて決断を下した。
「黄金を贈れ。そうでなければ・・・・・・」
その眼が剣呑に光った。
「毒だ」
「わかりました」
それもまた何処か儀式めいていた。彼等はこうした陰謀の密議も何処か儀礼のように執り行なっている。

「これでこの地における私の地位は万全のものとなるな。大衆の支持は既に得ている」
「まずはそれが最大の後ろ楯となりますな」
「そうだ、そしてハルーク家。最早この地で私に逆らえる者はいなくなる」
「出て来たらどうしますか？」
「それもいつものことだ」
彼はファイルを執事に返しながら言った。
「芽は出て来ないうちに摘み取る」
「お流石です」
「内はこれでよいな。ところで外のことだが」
彼はここで話題を変えた。
「サラーフとオムダーマンの間でまた何かあるようだな」
「はい、どうやらサラーフの力が弱まったのを好機としオムダーマンが侵攻を計画しているようです」
普通ならばオムダーマンの一部の高官しか知らない話である。議会も極秘にこれを決定している。衰えたりとはいえ西方第一の国を侵略するのである。ことは慎重にいく必要があった。
「成程な。成功すればオムダーマンは西方の覇者となる」
「そしてすぐに東方のハサンと肩を並べる勢力となるでしょう」
「ハサンとか」
彼はそれを聞いて考える目をした。
「それは何かと面白くなりそうだな」
「如何致しますか？」
執事は考える目をしている主に対して問うた。
「サラーフとオムダーマンの戦力は現時点においては拮抗しているな」
「はい。サラーフはまだ二度の敗戦から立ち直っておりませぬ」
どうやらこの執事は政治戦略のことにも長けているようだ。只の執事ではない。

「そこで我々が動けばどうなるかな」
「状況は一変しますな」
「そうだ。果たしてどちらに恩を売るべきか」
彼は悪魔的な笑みをまたしても浮かべた。
「それは御主人様が最もよくおわかりだと思いますが」
「フッ、確かにな」
シャイターンはここで口の端を歪めてみせた。
「機が来れば動くとしよう。その時まで英気を養っておく」
「わかりました」
「ところで一つ聞きたいことがある」
「何でしょうか？」
「オムダーマン軍の司令官は誰なのだ」
「オムダーマンですか」
「そうだ、今回の侵攻は勢力が拮抗しているだけに将の質が戦局を大きく左右するだろうからな」
「誰だと思われますか？」
「フッ、相変わらず底意地が悪いな」
シャイターンは意地悪そうに笑った執事の顔を見て苦笑した。
「いえいえ、もう既におわかりでしょうから尋ねているのです」
「私がオムダーマンの指導者ならば」
彼はそうことわったうえで言った。
「アッディーン提督以外の者にはしないな」
「その通りです」
執事はその答えを聞き頭を垂れた。
「アッディーン提督が今回の作戦の総司令官に任命されました」
「やはりな」
彼は楽しそうに笑った。
「面白くなるな。彼の用兵は見ていて実に鮮やかだ」
「御主人様がそう言われるのは珍しいですな」
執事は彼の性格をよく知っていた。

「誤解するなよ、私は優れた者は率直に認める」
彼は席を立った。そして執事を横目で見ながら言った。
「ただ私に比肩し得る者がいないだけでな」
彼はここでベルを鳴らした。すぐに一人のメイドが入って来た。その手には銀の杯と氷の中に入れられたワインのボトルが二本入っていた。
「ご苦労」
メイドがそれを空けようとする。だがシャイターンはそれを止めた。
「待て、久し振りにそなたが空けたのを飲みたくなった」
執事に顔を向けて言った。
「いいか」
「有り難き幸せ」
彼は微笑んで頷くとワインに向かった。そして見事な手つきでコルクを空けた。
「ふむ、相変わらず見事な手並だな」
「いえ、私などはとても」
「謙遜する必要はない。美味い酒を飲ませるのも才能だ」
彼はそう言うと杯に入れられたその紅い酒を飲み干した。よく冷えた甘美な宝玉が喉を伝わり落ちる。
「美味いな。アレクサンドリアの二年ものか」
「その通りです」
アレクサンドリアはサハラ北方にあるワインの有名な産地である。今はエウロパの領土となっている。
「いずれこのアレクサンドリアのワインを好きなだけ飲みたいものだ」
その言葉の意図するところは明白であった。彼はあることを胸に秘めていた。
「エウロパの者はエウロパのワインを飲んでいればよいのだ」
「全くです」

執事はその言葉に同意した。彼もまた同じ考えであった。
「サハラのワインを飲むことは許さん。ましてやサハラの地に足を踏み入れるなど」
杯を持つ指が微かに白くなった。
「断じて許されんことだ」
感情が少し垣間見えた。
「その通りでございます」
執事もそれに賛同した。
これはサハラの者なら大方が持っている考えであった。彼等にとってエウロパは憎むべき侵略者であり彼等をサハラ北方より放逐することがサハラの民族主義者達にとっての悲願であった。そういう意味でこのシャイターンもまたサハラの者であった。
「今は我等のはそこまでの力はない。だが力は増えるものだ」
「はい。そして力を増やしたならば」
「その時こそ動く時だ」
その黒い瞳が光った。それは大地ではなく彼の戦場である銀河を見ていた。銀河は戦乱を見守りながらその無限の輝きをたたえていた。

第二部　完

２００４・５・２８

# 第三部第一章　侵攻作戦その一

## 侵攻作戦

西方の要地であるカッサラ星系。貿易で栄え各国の争奪地となってきた場所である。

この星系を巡ってれまで多くの血が流れてきた。血を血で洗い屍が積み重ねられてきた。それがこの栄えてきた星系のもう一つの歴史であった。

それも人類の歴史の一面であった。人類は銀河に進出しても争いは止めなかった。

サハラ内、そしてエウロパとサハラの戦いだけではない。連合も内部に宇宙海賊やテロリストといった内憂を長年に渡って抱えてきた。そしてそれ相応の血を流してきた。人類の歴史において血が止まるということはなかった。

戦争さえなければ平和なのではなかった。この場合は武力における戦争である。連合内は武力を用いず経済、通商、貿易における戦争が頻発しておりそれは今も変わらない。これも平和かというと謀略が渦巻き到底そうは言えなかった。

政争は常である。何処の国でもある。結局人類の歩みはそうしたものとは切っても切れないものである。

それは何故か。神話を見ると神々も互いに争い時として血を流している。我々が信仰する神々もそうなのである。それならば我々がそれから逃れられる筈はないのではないだろうか。

だが人類が愚かであるかというとそうではない。一面に過ぎない。光もあれば影もあるのである。そうした影だけでなく光もまたそれ以上に人類の歴史を照らしているのである。

文化がある。芸術がある。愛がある。人類はそれを常に愛で追い求めてきた。そして様々な美しい話、作品が誕生し無数の美が生まれてきた。まるで銀河の星達のように。

また人類の不思議なところはその血を血で洗う戦争においてもその美を求めるところである。
かつて多くの戦場が詩となり絵画となった。トロイアの戦争は盲目の詩人ホメロスによって詠われ今も残っている。数千年経てもまだ人の心を支配しているのだ。
そしてそれを行なう武器も人類は飾ってきた。剣に斧、槍、鎧に兜。そこにも多くの美しい装飾が施されてきたのである。
それは今も変わらない銀河を進み星の戦場を駆ける艦もその姿は美しい。
今カッサラに多くの艦艇が向かっていた。流線型でスマートな外見である。これはオムダーマンの艦艇独特の形であった。
この流線型のシルエットは美しいと評判であった。軍艦に相応しくなく優美であると言われている。
「それは機能性を重視した結果なのだがな」
その中の一艦に乗る男が呟いた。
黒い髪を短く刈っている。四角い顔立ちをしており全体的にがっしりした体格をしている。彼はオムダーマンの艦隊司令官の一人ヌーフ＝ハルシメルである。
その軍歴の最初から今に至るまで空母を中心とした機動艦隊に置いていた。その為かイエニチェリの運用には定評があり空母の運用のスペシャリストとして知られている。
「空母にしろそのシルエットは流線型になっている」
これもオムダーマンの艦艇の特徴である。空母は往々にして武骨な形になり易い。
「ですね。こうしたことは珍しいでしょう」
傍らに控える参謀の一人が答えた。
「我が軍は機動性を重視していますから」
「そうだな。そして攻撃力だ」
ハルシメルは腕を組んだまま言った。
「どれも艦にとっては必要なものだ。その分防御力は弱いがな」

「それでもかなりましになりましたね」
「多少はな。まあそのままよりはずっと有り難いな」
彼は自身の艦艇をそのままの姿勢で見ていた。艦隊は整然と並び銀河を進んでいる。
その隊列は河の様であった。そして虚空の中を進む。
「防御に関してはサラーフも大体同じだがな。サハラの艦艇の特徴か」
「ですね。ところで連合の艦艇ですが」
「おい、あんな別世界のことは言ってもはじまらないぞ」
彼はそう言って苦笑した。彼等にとって連合は全くの異境であったのだ。
「それはそうですが」
参謀はそう断ったうえで話した。
「ですが参考にはなると思いますが」
「確かにな」
それは事実だった。それを否定する程ハルシメルは愚かではなかった。
「そして連合の艦艇はどういったものなのだ」
「何でも防御力を重視しているようです。そしてダメージコントロールにかなり力を入れているとか」
「生存能力を第一に置いたか」
「はい。そして艦を大型にし全体的に火力も強いようです」
「そうか。大型か」
「ええ。何でもどの艦種も我が軍の艦艇の倍の大きさはあるとか」
「そして数を頼みにして戦うのか。宇宙海賊はそれで一蹴できるな」
「ですね。海賊を相手にするにはいささか過ぎるかと思いますが」
「そういえばそうだな」
彼は参謀に言われてふとそう思った。
「そこまでの性能だと我々やエウロパの艦艇も楽に倒せそうだな」
「そうですね。まさかとは思いますが」

参謀の顔が暗くなった。
彼等サハラの者が口には出さないが一つ怖れていることがある。それは連合の侵攻であった。
今彼等は北方をエウロパに侵略されている。だが所詮数が違う。多くの者はサハラが団結すれば彼等を容易に追い出すことができると考えていた。団結できるかどうかは別として。

## 第三部第一章　侵攻作戦その二

だが連合は違った。人類の約七分の六を擁しその力は圧倒的なものがある。そしてそれをもしサハラに向ければ。彼等は持つ者である。持たざる者ではない。無限とも思える開拓地がある。だがそれに目を向けず何かしらの事情でサハラに向ければ。それは死を意味していた。

「その可能性は全くないのが救いだな」

「そうですね。とりあえず今はサラーフのことを考えましょう」

「だな」

彼の艦隊は入港した。そして彼自身も司令部に向かった。

道行くところ兵士で溢れかえっている。オムダーマンとしてはじめてと言ってもよい規模の作戦であるからそれも当然であろう。

「こうして見ると壮観だな」

彼は車の中でその将兵の姿と港に並ぶ艦艇を見ながら満足気に言った。

「はい、我が国はじまって以来の作戦に相応しいですね」

参謀もいささか頬を緩ませていた。二人はやがて司令部に到着した。

「ハルシメル中将ですね」

門を護る衛兵が身分を確かめてきた。

「そうだ」

彼は軽く微笑んで頷いた。

「身分及びボディーチェックをさせて頂きます」

「わかった」

中々厳しい。将官といえとチェックを怠らないとは。彼は数人の衛兵によりチェックを受けた。

「ハッ、失礼しました」

衛兵達を指揮する将校が彼に対して敬礼して言った。

「うむ、ご苦労」
彼は穏やかに笑って敬礼を返した。こうしたチェックに気分を害する者がいないわけでもない。だが彼はそうしたことには気をとめる人間ではなかった。むしろ自らの職務を忠実に行なう衛兵達に対して賛辞を送る人間であった。
「ああした者がいるということは有り難いな」
彼は車から出て司令部のビルに入りながら参謀に対して言った。
「ええ。多少厳し過ぎるかと思いましたが」
「それは違うな」
彼は参謀に顔を向けた。
「あれ位でなくてはいけない。さもないとこの司令部に何かあってしまうだろう」
「それはそうですが」
「ああした仕事は厳しいにこしたことはないのだ。そしてそれを忠実に執り行なう者がいる。これは我が軍にとっての宝だと思うが」
彼の言葉は謹厳なものであった。
「まあそう深く考える必要もないが」
だがここで参謀を宥めるように微笑んだ。
「そうした真面目なことがどれだけ重要か、それだけわかってくれればいい」
「はあ」
「君はまだ若い。そうしたことを知るのも軍人として必要だ」
そう話しているうちに会議室に入った。入口にいる兵士が彼を認めて敬礼した。
「暫くお待ち下さい」
彼はそう言うと会議室に入った。そしてすぐに出て来た。
「お待たせしました」
そしてハルシメルを案内する。彼は兵士に案内され部屋に入った。
部屋にはまだ誰もいなかった。彼は自分の席を見つけそこに座っ

た。
やがて他の提督達が入って来た。今回はオムダーマンの基幹戦力である宇宙艦隊十六個のうち十四個が参加する大規模な作戦である。ミドハド併合により拡充した戦力を投入するというものだ。
参加する艦隊とその指揮官は以上の通りである。
第二艦隊　ハルシメル中将
第三艦隊　マトラ中将
第四艦隊　カーシャーン中将
第五艦隊　ラーグワート中将
第六艦隊　ベニサフ中将
第七艦隊　サリール中将
第八艦隊　ナクール中将
第九艦隊　アルマザール中将
第十艦隊　カトラナ中将
第十一艦隊　アタチュルク中将
第十二艦隊　ムーア中将
第十三艦隊　コリームア中将
第十四艦隊　ニアメ中将
第十五艦隊　アガヌ中将
以上の艦隊により行なわれることとなっている。総司令官はアッディーン上級大将であり彼は既にこのカッサラにいた。なおカッサラに駐留する第一艦隊はカッサラ防衛司令官であるアジュラーン上級大将が司令を兼任しているが彼はカッサラ及び本土の防衛にあたることとなっていた。それだけでは当然足りず第十六艦隊も防衛にあたっていた。この艦隊は主にサラーフとの国境にあるブーシル星系にあった。
「これだけの艦隊を投入するというのも我が国では例を見ないな」
ハルシメルはあらためて思った。参加兵力にして五千万、艦艇は補助艦艇も入れて二十万に達した。これ程の兵力を一度に動かすのはサハラでは他にハサン、そして侵攻相手であるサラーフだけであ

った。
「だが大兵力には大兵力の問題がある」
そうであった。それだけ多くの武器、食糧、燃料の補給や調達も必要である。そしてその用兵もそれだけの苦労が伴うのだ。
「アッディーン司令は確かに今まで鮮やかな勝利を収めてきたが」
彼は言った。
「それは少ない兵力いおいてだった。大兵力の運用は違ってくる」
適正という問題もあった。少ない兵を率いる方が適している将もいるのである。
「どうなるかが問題だな。一歩間違えればオムダーマンの滅亡に直結する問題だ」
もしこの作戦で致命的な敗北を喫したならば。その時はサラーフの反撃を受け今度はオムダーマンが侵攻を受けることになるのは明白であった。
だからこそ今回の作戦は万全を期さなければならない。それはハルシメルも同じであった。
やがて各提督達が入って来た。皆真剣な顔立ちである。
そしてアッディーンが来た。提督達は彼の姿を認め一斉に席を立った。
そして敬礼する。アッディーンはそれに対し敬礼で返した。
「諸君、今日はよく集まってくれた」
彼は提督達を席に座らせた後自らも座り言った。
「今回の作戦だが」
彼もまたその顔は真摯なものであった。
「サラーフ領侵攻作戦だ。そして一気にかの国を併合する」
提督達はそれを黙して聞いていた。それはわかっていることである。
「敵は勢力を弱めているとはいえまだその戦力は侮れない。心してかかるように」
「司令」

ここで提督の一人が手をあげた。ベニサフ提督である。
「何だ」
アッディーンは彼に顔を向けた。
「敵艦隊の配置及び基地の状況はどうなっているでしょうか」
「それだが」
彼はここでブザーを鳴らした。すぐに参謀達がやって来てモニターを映し出す。そしてそこにはサラーフの地図があった。
「今我々はカッサラにいる。これは言うまでもないな」
「ハッ」
「そして彼等の予想防衛ラインだが」
彼は指揮棒を取り出した。そして地図で指し示していく。
「まず敵は我々の矛先を避ける作戦に出ると思われる」
「戦力が弱まっておりますからね」
マトラがそれを聞いて言った。見れば隻眼である。これは戦闘の際艦艇が攻撃を受けこうなったのだ。その目には機械の義眼を入れている。
「そう、そして我々の疲れを待つだろう」
「そしてその疲れが頂点に達したところで、ということですか」
マトクが問うた。
「そうだ、よくあるが極めて有効な戦略だ」
かってナポレオンがロシアに侵攻した時もそうであった。彼は冬のモスクワで冬将軍により戦力を消耗しそして退却する時にコサックに襲われその軍の多くを失った。そしてこれがナポレオン没落の直接の引き金となったのである。あまりにも有名な事件であった。
「それに対して我々はサラーフに拠点を設けることにしたい。そしてそこを足掛かりにしてサラーフを侵略していく」
「その拠点とすべき場所はどこにするのですか？」
ラーグワートが問うてきた。見れば他の将達よりも年長である。その豊富な実戦経験はオムダーマン軍においても定評がある。
「その拠点だが」

彼はここで指揮棒を動かした。
「ここに置こうと考えている」
そこはサラーフ星系の一つムスタファ星系であった。交通の要地であると共に物資の集積地でもある。
「この地を抑えることによりサラーフでの戦略はかなり優位に立てる。そしてここからはサラーフ各地に兵を送ることが可能になる」
「将に戦略上の要地ですな」
提督達がそれを見て口を揃えた。
「この地はこのカッサラからも比較的近い。距離もいい」
「確かに」
「ここで問題が一つある」
彼はここで提督達を見回した。
「おそらく彼等はここで一度目の防衛ラインを敷いてくるだろう。この地を容易に手渡さない為に」
これは充分予想できた。焦土戦術を行なうにしても守らねばならない場所や戦わねばならない時がある。先のナポレオンのロシア戦役においてはロシア軍はスモレンスク等で大きな戦いをしている。これは敵をさらに誘い込む為の戦術でもある。
「これに勝たなければならない。まあおそらく少し戦って彼等は撤退するだろうが」
「しかしそれですとムスタファ星系にある物資は」
「おそらく何もないだろう。施設も全て破壊されている筈だ」
「でしょうね」
それは焦土戦術の常識であった。
「そして戦線が延びきるのを彼等は期待している」
「それに対してお考えはありますか？」
ここでナクールが尋ねてきた。彼はまだ若い提督である。
「当然だ。その為の補助艦艇だ」
アッディーンは落ち着いた声で答えた。

## 第三部第一章　侵攻作戦その三

「この艦艇を使いすぐに基地を修復する。そして素早く基地としての機能を回復させる」
それには皆頷いた。
「そしてそこを侵攻拠点に作り変えると」
「そうだ、敵の裏をかく」
アッディーンは不敵な笑みを浮かべた。
「作戦の第一段階はそこまでだ。それから第二段階に入る」
「第二段階？」
提督達が尋ねた。
「そうだ。それは後々話そう」
彼はそう言うと指揮棒を収めた。
「何か異論はあるか？」
「いえ」
皆異存はなかった。アッディーンはそれを見て会心の笑みを浮かべた。
「ならば行くぞ、まずはムスタファ攻略だ」
「ハッ！」
皆席を立ち敬礼した。こうしてサラーフ侵攻作戦が開始された。

オムダーマン軍がサラーフに雪崩の如き侵攻を開始したとの情報はすぐにサハラ全土、いや人類全体にまで伝わった。
『どちらが勝つか』
連合においてもネットやテレビにおいてそのテーマで話が行なわれた。多くはオムダーマンの今回の侵攻は失敗に終わると見ていた。
『補給はどうするのか』
『戦力が足りないのではないか』
失敗を主張をる人々はその根拠としてそういった点を指摘した。

逆に成功すると主張する人々はその根拠を人に求めた。
『アッディーン提督ならやる』
彼等はアッディーンの卓越した能力に期待していた。
「最近サハラの動きが活発になってきているな」
八条は朝に届けられた新聞を見ながら呟いた。テーブルの上には朝食は置かれている。
彼の朝の食事は昔ながらの和食である。豆腐と若布の味噌汁にメザシ、少量の漬物に白米、そして茶である。他には納豆までついている、
「西方と北方がですね。特に西方は急激に動いております」
食事を共にする秘書官が言った。
「そうだな。では食事にしよう」
「はい」
「いただきます」
「いただきます」
二人は手を合わせると箸をとった。そして食事に入った。
「やはり朝は味噌汁がいいな」
「ですね。私はコーヒーよりこちらの方が好きです」
秘書官は味噌汁の中の豆腐を口の中に入れ飲んだあとで言った。
「我々は何かと料理の種類も多いけれどね。それでも日本人は朝は味噌汁といきたいね」
「同感です。しかし長官、そうした考えは若い女の子には好かれませんよ」
秘書官は彼に対して笑って言った。
「女の子の好みはあまり気にはしないが」
大体風の中の羽根の様に移ろい易く変わり易いものである。それに彼は元々その容姿と落ち着いた人柄により若い女の子からは人気が高かったので特にそれを気にすることもなかったのである。
「それよりも気にしなくてはいけないのは君の方だろう」
八条は笑って秘書官に対して言った。

「な、何がですか！？」
秘書官はそれを聞いて急に慌てだした。
「聞いているよ、最近妹さん達と上手くいっていないそうだね」
「ど、どうしてそれを！？」
実は彼には妹が五人もいる。美少女揃いという評判だ。
「い、いえ」
彼は急に畏まった。
「そのようなことは一切ありません」
「ではさっきの言葉は何だい？」
八条は彼をからかうように笑った。
「こ、言葉のあやです」
彼は顔を赤らめながらも謹厳な態度を必死に作った。
「たまには妹さん達にプレゼントでも買ってあげなさい。それに今日から休暇なのだろう」
「はい」
「ゆっくり休めばいい。骨休みも必要だ」
彼だけでなく秘書官も最近不眠不休で働き詰めだった。こうした休暇も必要なのだ。
「申し訳ありません。仕事に穴を空けてしまいますが」
「それは気にしなくていいよ」
八条は言った。あえて優しい口調で言った。
「これは私からのプレゼントだ」
彼はそう言うと側にあった可愛く包装された箱を取り出した。
「妹さん達にね。君からのプレゼントだと言って渡したらいい」
そこにはレターが挟んであった。『妹達へ』と書かれている。
「・・・・・・すいません、これ程までに」
「礼はいいよ。さあ、朝食が終わったらすぐに行った方がいい」
「わかりました」
こうして彼は休暇に入った。八条はそれを笑顔で見送った。
「さて、と」

彼は秘書官の姿が見えなくなると再び机に戻った。
「とりあえず私は仕事だな。休暇まで頑張るとするか」
机には山の様な書類があった。増えることはあっても減ることはない。
彼はその書類にサインを続けた。そして仕事を一つ一つ片付けていった。
連合においてはこの戦いは遠い場所のことであり特に気にかけるものではなかった。交易のあるサハラの国といえばハサン位でありそれも左程大きな交易ではなかった。今後のサハラ情勢を考えるにあたってどうか、という意見もあったがやはり戦いのシュミレーションを楽しんでいる者達の方が多かった。
だがエウロパでは事情が違った。彼等にとってはごく身近で起こる戦いでありそれによる影響を深く考察する必要があったのだ。
「どちらが勝っても国境を接することはないが」
モンサルヴァートは自身の司令室で地図を見ながら呟いた。
「この戦いにオムダーマンが勝った場合はサハラの勢力図が大きく変わることになる」
彼の前にはプロコフィエフが立っていた。
「はい、そして彼等の勢力はサハラにおける我々のそれを凌駕することになります」
彼女はいささか鋭い声で言った。
「そうだな。ただでさえハサンという大国もあるというのに。二つもそうした国が誕生すると厄介なことになる」
「既に北方においても我等の侵攻は停滞しておりますし」
「シャイターン司令か。あの男が来てからだ」
彼は顔を顰めさせた。
「サラーフの艦隊も殲滅したそうだな」
「はい、それによりオムダーマンが動いたのです」
「サラーフにとっては痛い敗北だったな。まあ自業自得だが」
彼はサラーフのホノグラフィの地図を拡げた。

「この戦い卿はどう見ている？」
彼はプロコフィエフに意見を求めた。
「そうですね」
彼女は地図を見ながら口を開いた。
「兵力はサラーフの方がまだ有利にはあります。ですがそれはあまり問題ではありません」
「では何が問題となる？」
「距離です。まずオムダーマンはサラーフの首都を陥落させなければなりません」
「アルフフーフをか」
「はい。ですがカッサラからアルフフーフの距離を考えますと一直線に向かうのは不可能です」
「そうだな。すると何処かに足掛かりを築かなければならない」
それはモンサルヴァートもわかっていた。
「問題は基地を置く場所です」
「何処がいいと思う？」
「ムスタファ星系です。カッサラにも近くまた交通の要地でもあります。ここを押さえるとオムダーマンはかなり優位に立つことができます。しかし」
「しかし？」
「サラーフも愚かではありません。何らかの手を打っているでしょう」
「そうだな。卿は彼等はどうした作戦を立てると思う？」
「そうですね」
プロコフィエフは問われ暫し考えた。
「焦土戦術ではないでしょうか」
そして表情を元に戻し答えた。
「焦土戦術か」
「はい、オムダーマンの矛先をかわし戦力を消耗させるにはそれが最も有効かと思います」

「アッディーン提督と正面から戦うのは危険だからか」
「それもあります」
アッディーンの名はエウロパにおいても広く知られるようになっていたのだ。
「ですが焦土戦術を執る理由はそれだけではないと思います」
「ほう、では何だ？」
「戦力の回復を待っているのではないかと思われます」
本来サラーフは二十四個艦隊を擁している。西方においては他を圧倒する戦力であった。だがオムダーマンがその勢力を急激に拡大させ敗戦によりその勢力は翳りを見せている。
「まずはオムダーマンの侵攻から消耗を避け彼等を兵糧攻めにしている間に兵を集めます。そしてオムダーマン軍が疲弊しきったところでその整え終えた戦力で攻撃を仕掛けるのではないかと」
「ふむ。まるでかつてのロシアの様な戦い方だな」
モンサルヴァートはそこまで聞いて口に手を当てて言った。ロシアは地球にあった頃敵が侵攻して来ると焦土戦術をとりその矛先をかわし敵の疲弊を待つのを常套手段としてきたのである。これによりナポレオンもヒトラーも敗れたのである。
「はい、雪こそありませんが戦い方はほぼ同じです」
「そうか。それではオムダーマン軍の苦戦は免れないな」
「おそらく」
「アッディーン提督は常に敵を即座に叩くのをよしとしている。おそらくそうした戦法には弱いだろうな」
「サハラの者には多いですね。かなり早急な人物かと存じます」
二人はアッディーンの今までの戦歴も考慮に入れていたのだ。そのうえで話している。
「オムダーマンにとってはかなり不利な戦いだな」
「はい、敗北した場合彼等は今度は自らが侵攻を受けることになるでしょう」
彼女の指摘は当たっていた。オムダーマン側もそれを最も怖れて

いるのだ。
「どちらにしろこれだけは言えるな」
モンサルヴァートはここで言葉を一旦とぎらせた。
「この戦いに勝った方がサハラ西方を完全に手に入れる」
「はい、それは間違いありません」
プロコフィエフはその言葉に頷いた。
彼等の指摘は当たっていた。だが一つのことを読み違え一つのことを忘れていた。
読み違えはアッディーンであった。確かに彼は早急な性格で戦いを一気に決めることを好む。だが彼は常にそれを追い求めるような頭の固い人物ではなかった。
真の名将とは臨機応変にことに応じるものである。必要とあればどのような戦い方も出来る。そうでなくては戦いに勝てはしない。アッディーンは真の名将であった。
そして忘れていたことはシャイターンの存在である。
この人物のことはまだ誰もが戦上手の傭兵隊長位にしか思っていなかった。だが彼は一介の傭兵隊長に収まるような人物ではなかったし彼自身もそのようなことは全く望んでいなかった。
「サラーフは魔王の夕食となった」
後にある劇作家が自分の作品の中で登場人物にこう言わせた。この戦いにおいてシャイターンの存在はそれ程までに重要であったのだ。
だがそれをまだ誰も知らない。シャイターンのみが無気味な笑みをたたえていた。

# 第三部第二章　緒戦その一

緒戦

アッディーンに率いられたオムダーマン軍十四個艦隊はカッサラを発った。そしてそのままサラーフ領に侵攻していった。サラーフ軍の反撃はなかった。彼等の姿は何処にもなくオムダーマン軍は無人の荒野を行くが如く進撃していた。

「今のところは何もありませんね」

ガルシャースフがアッディーンに対して言った。

「ああ、予想通りだな」

彼は順調に進む自軍を見ながら言った。

「だが問題はこれからだ」

彼は前を見て呟いた。強い声だった。

「側面及び後方は大丈夫か」

そしてガルシャースプに対して問うた。

「はい、敵影の存在は確認されておりません」

「ならばいい」

彼はそれを聞いて安堵の声を出した。

「補給路の確保だけは完全にしておけ。今度の戦いではそれが生命線になる」

「わかりました」

「それから全軍に伝えよ、敵が逃げたからといって無闇には追うなとな。血気にはやることのないよう」

彼の言葉もまた落ち着いたものであった。

「まずはムスタファ星系だ。それから全てがはじまる」

オムダーマン軍は進撃を続けた。そして惑星を一つ一つ占領し星系をその勢力圏に収めていった。

「オムダーマンの動きは順調のようだな」

その話はシャイターンのところにも届いていた。

「ハッ、既に幾つかの有人惑星をその勢力下に置いた模様です」
彼の前に立つハルシークが答えた。彼等は今シャイターンの宮殿にいた。
「速いな。流石はアッディーン提督といったところか」
シャイターンは絹の豪奢な服を着ていた。赤紫で丈の長い上着とそれと同じ色のズボンを身に着けている。
「だが今度の戦いは速さが求められるものではない」
彼は思わせぶりに言った。
「それはわかっているな」
そしてハルシークに対して問うた。
「はい」
彼はその問いに対して頷いた。
「ならばよい。それでこそ私の部下だ」
彼は微かに満足感を含んだ声で言った。
「さて、アッディーン提督にもそれはわかっているかな」
「それは何とも」
「わかっていればよし、わかっていなければ」
「敗戦ですな」
「そう、そして西方はサラーフのものとなる。彼の武名もこれまでだ」
彼は冷たい声でそう言った。
「今までの彼の戦いは見事なものであった。だが今回もそうとは限らない」
「問題はこれからですか」
「そうだ、戦いとは何も正面から激突するだけではない」
彼はここで身を翻した。
「時には逃げるのも戦いなのだ」
「はい、それが理解出来ない愚か者も多いですが」
「そうした者は敗れ去る、そして歴史にその愚かさを永遠に曝し続けることになる」

まるで氷の様に冷徹な言葉であった。そこには一変の温もりもない。だがそれでいて甘美で危険な誘惑を秘めた不思議な声であった。
「アッディーン提督もそうなるかな。それはやがてわかることだ」
彼はそこまで言うと身をハルシークの方に戻した。
「我等が動くのはそれを見極めてからだ。焦る必要はないぞ」
「ハッ」
ハルシークはその言葉を聞き姿勢を正した。
「だが動く時は・・・・・・。わかっているな」
「勿論でございます」
彼はその言葉に対し不敵に笑った。
「ならばよい。その為の備えは怠らないようにな」
「何時でも閣下が仰ればすぐにでも」
「フフフ、それでいい。優れた部下を持ち私は幸福だ」
彼はそう言うとハルシークを下がらせた。そして自室に戻って行った。
「さて、アッディーン提督よ」
彼は階段を登りながら一人妖しげな笑みを浮かべ呟いた。
「私を楽しませてくれよ」
そして部屋の扉を開けその中に入った。そのまま気配は扉の中に消えていった。

アッディーン率いるオムダーマンの大艦隊は敵と遭遇することなく迅速に兵を進めていた。そして星系を次々に占領していった。
「住民の反応はどうか」
彼は参謀の一人に問うた。
「今のところ問題はありません。援助物資を供給しその生活の安定を約束しております故」
その参謀は答えた。
「そうか、ならいい。くれぐれも彼等の生活に支障をきたすようなことは起こすな」

「わかりました」
彼は住民の反発を恐れていた。そこからレジスタンスの蜂起が起こる可能性がある。そうなれば後方が危うくなる。
「司令、一つお聞きしたいことがあるのですが」
ここでバヤズィトが尋ねてきた。
「何だ」
「この作戦において用意した補給艦及び工作艦のことですが」
「それか」
「はい、やはりこうしたことを考えてのことだったのでしょうか」
「そうだ、だがそれだけではない」
彼は答えた。
「それもすぐにわかる。すぐにな」
彼は思わせぶりに言った。
やがて彼等は目標であるムスタファ星系まだ残り僅かの場所まで到達した。
「やはりここにはいるか」
アッディーンはサラーフの艦隊がムスタファ星系の前に布陣しているとの報告を聞き思わず呟いた。
「その数は？」
「およそ十万です」
ラシークが答えた。見れば魚燐型の陣を組んでいる。
「そうか、ではすぐに叩くとしよう」
アッディーンはそう言うと右手をゆっくりとあげた。
「全軍上下左右に広く陣を組め。そして敵を三日月型に包囲せよ！」
「ハッ！」
アッディーンの指示の下オムダーマン軍は動いた。そしてその言葉に従い敵を囲むように陣を組んだ。
こうしてムスタファ星系での戦いははじまった。まずはオムダーマン軍の一斉攻撃からである。
忽ち数百の艦艇が破壊される。サラーフ軍はこれを受け一瞬怯ん

だ。
「今だ、進め！」
アッディーンがそれを見て右手を振り下ろした。オムダーマン軍はそれに従い前に進んだ。
これに対しサラーフ軍は退いた。そして陣を整え反撃に移ろうとする。
だがそんな隙を与えるアッディーンではなかった。彼はそれよりも早く彼等の前を塞ぎそこに集中攻撃を加えた。
これで戦いは決した。サラーフ軍は勝算がないと見たかすぐに退却を開始した。
「追いますか？」
ラシークがアッディーンに対し尋ねた。
「いや」
だが彼はそれに対し首を横に振った。
「追う必要はない。これで我々は第一の作戦目的は達した」
彼は静かに言った。
「まずはムスタファ星系に入ろう。そしてあの星系を確実に掌握するのだ」
「ハッ！」
オムダーマン軍は退却したサラーフ軍を追わなかった。かくしてムスタファ星系の戦いは両軍にさしたる損害を与えることなく終了した。オムダーマン軍は素早くムスタファ星系を占領した。
ムスタファ星系はサラーフ南方の交通の要所であり物資の集積地でもあった。ここには大規模な補給基地と港湾施設が存在していた。
だが今はそれはなかった。全てサラーフ軍により破壊されてしまっていた。
「・・・・・・これは厄介ですね」
アッディーンと共に惑星に降り立ったガルシャースプが顔を顰めて言った。
「そう思うか」

アッディーンはそれを聞いて尋ねた。
「当然です、これでは基地としての役割を果たせません。我々はこの星系を足掛かりにはできないのですから」
「そうだな、今のままではな」
アッディーンはそれを聞き言った。
「だがこれは予測していた」
彼はここではじめて言った。
「工作艦に伝えよ、すぐにこの星系の基地の修復に取り掛かれとな」
「では工作艦は・・・・・・」
「そうだ、この時の為に連れて来たのだ」
彼はニヤリと笑って答えた。
「敵が焦土作戦でくるなら我々はそれに対抗して基地を作る。そして敵の誘いには乗らず腰を据えることにする」
「敵が戦力を拡充させるのは構わないのですか？」
「それよりもまずは確固たる戦線、後方基地の建設だ。ましてやサラーフは広い。そうそう用意に制服できるものではない」
「成程」
ガルシャースプはそれを聞いて頷いた。
「そして補給艦にも働いてもらう。カッサラとムスタファを往復して物資をどんどん運び込んで欲しい。これから忙しくなると伝えてくれ」
「わかりました」
「その時に敵の襲撃も予想される。常に護衛の艦隊をつけておこう。これはローテーションだ」
「補給路の確保はどうしますか？」
「それにも艦隊をつける。そうだな、ラーグクート提督に頼むか」
「あの方でしたら問題はありませんね」
ラーグクートの熟練の作戦指揮はよく知られている。その慎重な用兵には定評がある。
「まずはここに万全の足掛かりを築くぞ。作戦の第二段階はそれか

らだ」
「ハッ！」
ガルシャースプはそれを聞き敬礼した。こうしてオムダーマン軍はムスタファ星系の軍事施設の修復及び基地化に取り掛かった。
これに対しサラーフ軍は予想通り補給路の襲撃を開始した。だがそれはラーグクートの的確な用兵と補給艦隊を守る護衛の艦隊によりことごとく阻まれた。
「よいか、決して深追いはするな」
ラーグクートは部下達に対し命令を下した。
「我々は補給路を確保すればよいのだ。そして敵を補給艦および勢力圏に近付けなければよいのだ」
彼は部下達に無理はさせなかった。そして敵の襲撃に対し数十隻を単位としたパトロールでもって対応した。これによりサラーフ軍はゲリラ的な襲撃を行なえなくなっていた。
そして補給艦を守る艦隊の存在も大きかった。彼等はオムダーマンの補給艦隊が通るのを指をくわえて見ているしかなかったのである。
こうしてムスタファ星系は瞬く間に基地としての機能を回復させた。そしてオムダーマン軍はこの星系に駐留しアッディーンの次の作戦指示を待った。
「ふむ、アッディーン司令も考えたな」
オムダーマンの首都アスランにおいてマナーマはサラーフ侵攻の状況を聞いて言った。
「はい、一気にサラーフ全土を席巻すると思ったのですが」
幕僚の一人が言った。
「流石にそれは無理だろう。そこまでの物量も補給も一度には持っていけない」
「はい、それにしても焦土戦術でくるとは思いもよりませんでした」
「それだけサラーフも必死なのだろう。最早存続の為にはなりふり構っていられない」

彼は考える目をして言った。
「それに対して足掛かりを建設して腰を据えて戦うとは思わなかったがな」
マナーマもこれは予想していなかった。
「彼のことだから一気に首都まで陥落させるものだと思っていたのだがな」
「確かに。アッディーン司令はいつもそうして勝利を収めてこられましたから」
「それをしないとはな。案外柔軟な思考の持ち主のようだ」
彼は地図を拡げさせた。
「これを見てもムスタファを足掛かりにしたのは大きいな」
見ればここから南方、いやサラーフの首都アルフフまでの道もある。西や東にも行くことができる。すなわちサラーフの喉元に刃を突き付けた形だ。
「しかし十四個艦隊ではいささか少ないかな」
「今新たに編成させている旧ミドハドの四個艦隊を援軍とするのはどうでしょう」
「それはいいな」
彼はその提案を受け入れることにした。
「もう一つあるのですが」
「何だ？」
「サラーフ軍内部のことですが」
彼はここでその目の光を一層強くさせた。
「ナベツーラとミツヤーンという男達をご存知でしょうか」
「いや、どのような連中だ？」
マナーマは少し不覚に思った。サラーフ軍内のことはあらかた知っているつもりであったがその者達のことは知らなかったのだ。

## 第三部第二章　緒戦その二

「ナベツーラはサラーフの高官の一人です。非常に権力欲が強くまた独善的で全く人望がありません。しかもその政治能力は皆無ときております」
「よくそれで高官になれたな」
「出自がよかったので。ですが本人はそれに満足しておりません。自分こそがサラーフを治めるに相応しい者であると自負しております」
「よくいるタイプだな。決して国の中枢には置きたくない」
「はい、そしてミツヤーンは軍の高官です。ヒステリックで小心者、貪欲で陰険、しかも非常に嫉妬深いと言われております。そのうえ賄賂には目がありません。そして兵士達からの評判も最悪です。実はナベツーラの腹心でもあります」
「ほほお、よくそんな人間がいるな。絵に描いたような無能な人物のようだな」
「その通りです、兵を率いれば私腹を肥やすことばかりに腐心し戦いなぞそっちのけです」
「そうした連中がよく国の中枢にいるな。サラーフの政府はそれ程愚かだとは思えないが」
「ナベツーラがマスコミと仲がいいので。サラーフはマスコミの力が非常に強いのです。俗にサラーフ最大の権力と言われるまでに」
「それは結構なことだな」
　マナーマはそれを聞いて苦笑した。この時代既にマスメディアが権力を持った場合の弊害はよく知られるようになっていた。その為連合やエウロパにおいてはネットが極めて発達している。サハラは国家が大小に分裂して争っている為そうしたことが時として起こすのだ。
「で、彼等のことを知ってどうするつもりなのだね」

「かの国のマスメディアに囁くのです。この国難を救うのはナベツーラとミツヤーンしかいないと」
「そして彼等に作戦の指揮を執らせるのか」
「その通りです」
彼はそう言うと言った。笑いはしない。まるで鉄仮面の様に表情を変えない。
「あの国のマスメディアはナベツーラとミツヤーンの提灯持ちに過ぎません。少し鼻薬を嗅がせてやればすぐに動き出します。当然我々の存在を疑われては駄目ですが」
「ふむ、有能な味方よりは無能な敵の方が有り難いというがな」
「ええ、古来より」
「そして彼等の取り巻きはどうした連中かね」
「それはもう。碌に補給や経理を知らない精神論だけの参謀や幼女趣味の提督、酒に酔って市民に暴行を働いた提督などばかりですよ。文官の方はナベツーラのゴマすりにしか過ぎません」
「面白そうだな、そうした連中がサラーフの中枢に入ると」
「そう思われますか」
「ああ。よし、わかった」
マナーマはそこで大きく頷いた。
「その工作を許可しよう。すぐにサラーフのマスコミに働きかけてくれ」
「ハッ」
その参謀はそれを受けて敬礼した。
「しかし面白いことを考えてくれる。ところで私からも一つ聞きたいのだが」
「何でしょうか」
「君の氏名及び階級を聞きたい。悪いがまだ覚えていないのだ」
「ムアーウィア＝タルジークです。階級は大佐です。参謀本部におります」
彼は自分の名、及び階級を答えた。静かで低い声である。それで

いてよく澄んでいた。
見れば全体的に細く血色の悪い顔立ちをしている。頬はこけ髪は多いが細い。
「そうか、タルジーク大佐か。覚えておこう」
「はい」
「では早速取り掛かろう。スタッフと費用は好きなだけ使ってな」
「わかりました」
こうしてオムダーマンの工作は開始された。これは外交部も参加する大規模なものであった。なおタルジークはその中心的な役割を担うこととなった。そして彼は准将に昇進した。

その頃ムスタファ星系はアッディーンの用意した工作艦によりその機能を急激に回復させていた。今ではその機能の五〇パーセント以上を回復させ駐留する艦もあった。
そして物資は次々と運び込まれていた。その流れは河のようであり度重なるサラーフ軍の襲撃を退け順調に集まっていた。
アッディーンはその運び込まれてくる物資を見ていた。それが自軍の生命線となるのだ。
「補給は順調に進んでいるな」
アッディーンは後ろに控えるバヤズィトに対して言った。
「ハッ、全ては滞りなく進んでおります」
彼は敬礼をして答えた。
「やはりここを補給基地にしたのは正解だったな」
彼の目の前を補給艦隊が通り過ぎていく。そして惑星に次々と降り立つ。
「はい。やはり交通の要衝だけはあります」
カッサラからここまでの距離、そして基地の規模を考えるとここは最適であったのだ。
「基地の修復状況はどうか」
「既にその機能の五〇パーセント程を回復させております。このま

まいけば一週間後にはその機能を全て回復させることになるかと」
「早いな。もう少しかかると思ったが」
「工作艦と乗組員達が頑張ってくれていますので」
「彼等には感謝せねばならないな。特別に報酬を弾むとしよう」
「わかりました」
こうした信賞必罰は軍にとっては絶対である。そうでなくては軍規は定まらず士気も上がらない。
「ところでだ」
アッディーンはここで話題を変えてきた。シンダントの方を見た。
「ミドハド方面から援軍があるそうだな」
「はい、四個艦隊が予定されております」
シンダントは敬礼をして答えた。
「四個艦隊か。指揮官は誰だ？」
「一人は決定しております。ムラーフ提督です」
「おお、懐かしいな」
かってアッディーンの旗艦アリーの艦長を勤めた男である。その将としての能力は期待できる。
「あとの三人についてはまだ聞いておりません。ですがそれなりの人物が就任するそうです」
「だろうな。かりにも艦隊司令だ。無能な人物をあてられたら困る」
彼は言った。実際に艦隊を指揮する者として実直な意見であった。
「あとサラーフ内に潜入していく工作員の数が増えているな」
「はい、どうやら何か謀り事があるようです」
情報参謀であるシャルジャーが答えた。見ればこの三人の階級章は少将のものになっている。
「そうか。それについて聞きたいのだが」
「それでしたら今外交部の者がこちらに来ておりますが」
ガルシャースプが答えた。彼は中将である。
「よし、会おう。司令室に通してくれ」
「わかりました」

アッディーンは参謀達を連れ司令室に入った。そしてすぐにスーツの男が入って来た。
「閣下、お招き頂き有り難うございます」
その外交部の者は部屋に入ると頭を下げた。
「細かい挨拶はいい、早速話を聞きたい」
アッディーンは彼に頭を上げさせ話を聞くことにした。
「近頃サラーフに対して何かと工作をしているようだな」
「はい」
彼は答えた。
「一体何をしているのだ？是非教えてくれ」
「政権交代を画策しております」
「政権交代！？」
彼はそれを聞き思わず声をあげた。
「はい、サラーフの高官であるナベツーラを首班とする内閣を組閣させる為の工作です」
「ナベツーラか」
アッディーンは彼のことを少し聞いていた。
「はい、ですが彼はやはりサラーフのマスコミの支持は高いです」
「そしてその取り巻きも無能揃いだな」
「はい、まるでヤクザかゴロツキのような者ばかりだそうです。しかしサラーフのマスコミは彼等を侠気のある豪傑と評しております」
「狂気の間違いではなく、か」
彼は珍しく皮肉を口にした。
「どうせ軍律を無視して蛮行の限りを尽くすのを英雄的行為とでも賛美しているのだろう」
「その通りです」
「・・・・・・どうやらサラーフのマスコミというのはサハラでも選り抜きの愚か者ばかり集めているようだな」
「マスコミというのは非常に狭い世界ですから。それに情報を独占して権力が集中し易いのです。しかもそれをチェックする機能がネ

ット等しかありません」
「そのネットがない場合はそうなるのか。悪夢だな」
「少なくとも一千年前はそうでした」
これは事実である。マスコミの作り出した幻想に騙されていたのが二十世紀後半の世界であったのだ。その中でも最も悪質な幻想は全体主義が理想社会であるというものえあった。これにより多くの人々が騙され血が流れた。だがマスコミは報道の自由、言論の自由を楯に責任を逃れた。後にそれが追求されマスコミの力を大きく衰えるとこになるのだ。それも道理であった。
「そういう意味ではサラーフは一千年遅れているというわけか」
「あながちそうとは言えません。単にマスコミの力が強過ぎるだけでして」
「それであのような輩共が大手を振って歩けるというのか。マスコミというのは怖ろしいな」
彼はあらためてその影響を感じた。
「はい、そして今回は彼等を利用します」
ここで外交官は口の端を歪めて笑った。
「わかったぞ、彼等にナベツーラ一味に政権、そして軍部の中枢を握るよう言わせるのだな」
「はい、サラーフの国民はマスコミに扇動されそれを支持するでしょう」
「今の政府及び軍のやり方では国が潰れる、ナベツーラやミツヤーンでないとサラーフを救えないのだ、と」
「そうです」
外交官は嬉しそうに答えた。
「おあつらえむきに選挙間近です。サラーフの世論は我々の侵攻で今沸騰しております」
「ナベツーラ達は何と主張している？まあ大体予想はつくが」
「徹底した強硬路線です。退却なぞ恥だ、すぐさま大兵力を以って討つべしと」

「そうだろうな。おそらく連中は我々のことどころか戦争のことも知らないのだろう」
「はい、ナベツーラは軍歴がありません。家の力を利用して徴兵逃れをしたようです」
「話を聞けば聞く程嫌な男だな」
アッディーンだけではなかった。その場にいた参謀達も皆顔を顰めた。
「ミツヤーンもその取り巻き達も戦場においては全くの無能です。碌に補給も経理も知らないのですから」
「それで掠奪や暴行は人並以上なのだな」
「はい」
「軍人というより人間の風上にも置けない連中だな。本当に思うがサラーフのマスコミには常識がないのか？」
アッディーンは嫌悪感で顔を歪めていた。その整った顔が歪むのはいささか奇妙である。
「マスコミには良心は不要です。自分達の存在こそが絶対であり正義なのですから」
「・・・・・・それを普通独善というのだがな」
怖ろしい話である。だが二十世紀はそれが本当の話だったのだ。サラーフにおいても本当の話である。だが人々は幻影に騙されているのだ。
「まあいい。そうした連中が権力を握るのは我々にとって好都合だ。有能な味方より無能な敵の存在の方が有り難いという言葉もある」
「それが今回の工作の趣旨です」
「そうか、では頼む」
「わかりました」
外交官はそう言って頭を垂れると司令室をあとにした。あとにはアッディーンと参謀達が残った。
「確かにいい考えだな。これを考え出した人物は政戦両略の人物のようだな」

「はい、これが成功したならばサラーフとの戦いはかなり楽になりますね」
ガルシャースプが答えた。
「そうだな。だが」
アッディーンはここでもやはり顔を歪めた。
「俺としてはあまり好きにはなれないやり方だな」
「何故ですか？」
「正々堂々と正面から戦って勝ちたい。戦争はそうそう綺麗なものではないとしてもな」
これは彼の気性そのままであった。彼は元々精悍な人間性の持ち主であり戦場での勝利を最も尊ぶ。そうした性格であるから策略を好まないのだ。
「ですがそれもオムダーマンの為です。この戦い勝たなくては意味がありません」
「ガルシャースプ参謀長の言われるとおりです」
他の参謀達も言った。
「勝利にあたってはどのような策も用いるべきです。正面からの戦いばかりでは損害も増えましょう」
「それはそうだが」
アッディーンはそれでも顔色を悪くした。
「閣下」
参謀達はそんな彼に対し言った。
「閣下のお気持ちはわかります。軍人ならば正々堂々と戦い美しい勝利を手に入れたいというのは大なり小なり殆どの者が持っております。しかし」
彼等は続けた。

## 第三部第二章　緒戦その三

「それ以上に戦場ひいる者達のことをお考え下さい。彼等は命をかけて国家の為戦場にいるのです」
「・・・・・・そうだったな」
　他のサラーフの多くの国々と同じくオムダーマンも徴兵制を敷いている。厳密には選抜徴兵制であるがそれでも義務として定められているのは事実である。
「そうした兵士達のこともお考え下さい。我々は彼等の命を預かっているのですから」
「彼等を生きて帰す義務もあるということか」
「そうです。それも指揮官の務めです」
　彼等は一様に言った。アッディーンは決して冷酷な男ではない。感情豊かであるが兵士達にとっては寛容で気前のいいことで知られている。そして体罰を厳しく取り締まり威張った行動を戒めている。よく古参兵などに見られるが部下を虐待する愚か者は何処にでもいある。アッディーンはそうした弱い立場の者をいたぶることを特に嫌った。
「弱い者虐めは自分が弱い者であるということを公言しているのに他ならない」
　彼はそう考えていた。幼年学校においても理不尽な要求をした上級生に反抗している。下級生に対しては面倒見がよく優しい先輩であった。同級生に対しては公正であった。それを兵士に対しても同じ態度で接しているのだ。こうした時に出るのが人柄である。
「個人の好き嫌いは言ってはいられないか」
「そうも言えますね」
　ガルシャースプが答えた。
「勝利を収める為にはあらゆる手段を尽くさなくてはなりません。国家の為、そしてその中にいる国民や兵士の為にも」

「多くの命の為にか」
「はい、我々が預かっているのはそれだけ大切なものなのです」
「・・・・・・・・・」
アッディーンは沈黙した。今まで彼は戦争に勝てばいいとだけ思っていた。だがそれだけではなかったのである。
戦争は一人で行なうものではない。多くの者が命をかけて争う。そしてその者達の人生もそこには内包されているのである。それを忘れた時独善となる。
だがそれを忘れる指揮官もいる。そうした者は将としても人間としても失格だ。彼はそのことを今知った。
「おそらくナベツーラもミツヤーンも他の者の命なぞ塵芥程にも思ってはいないでしょう。ですが閣下は違います。決してあの様な連中のようにはならないで下さい」
「将としてではなく人としてか」
「はい、そんな閣下でなければ我々も今までついてきませんでした」
彼等は口を揃えて言った。彼等はアッディーンの下にいるのは軍務だからである。だがそれ以上にアッディーンの人柄と将としての才に惹かれているのだ。
「そのおとは忘れないで下さい。閣下の手には多くの者の命がかかっているということを」
「・・・・・・わかった」
彼は頷いた。それを理解した彼は将としてまた一つ大きくなったのである。
「ところでだ」
アッディーンはその話が終わると話を元に戻した。
「選挙は何時行なわれるのだ？」
「あと二ヶ月後です」
「そうか、近いな」
彼はそれを聞いて少し考えを巡らせた。
「その間に援軍は到着しそうか」

「それは微妙ですね。着くか着かないかといったところでしょうか」
「そうか。もしかするとサラーフはそれまでに一度攻撃を仕掛けてくるかも知れないな」
「何故ですか？」
今度は参謀達が問うた。
「それだけナベツーラ達の追い上げがあっては今の政権も選挙前に何か功績をあげなくてはいけないだろう。さもないと選挙に敗れる」
「成程」
「ましてやナベツーラ派にはマスコミの全面的なバックアップがあるのだろう？只でさえ形勢は不利な状況にある」
「そうですね、今の政権も失脚したくはないでしょうし」
「そうだ、ならばどうして功績を挙げるか。最も手っ取り早いのは今ここにいる我々を破ることだ」
「はい、外敵を打ち破るのは最も宣伝し易い功績ですからね」
「それも大々的なものを狙ってくるだろうな。最低でも一個艦隊を殲滅といったところか」
「それはまた」
「当初は焦土戦術を執るつもりでもそうした状況では止むを得んだろう。彼等にとっては失策だがな」
その通りであった。焦土戦術は相手の疲弊を誘う戦法である。こちらから仕掛けるのはまず敵が疲弊しきってからだ。そうでなくては効果がない。
「問題は何処に攻撃を仕掛けて来るかだ」
「補給路ではないでしょうか」
「それはないな」
アッディーンはバヤズィトに答えた。
「おそらくそのような地味なものではなく宣伝になるようなものだ。確かに補給路には常時二個艦隊を配属させているが」
「ではこのムスタファに攻撃を仕掛けてくるのでしょうか」
「それも考えられるな」

彼は答えた。
「だがそれよりも効果的な方法がある」
「何でしょうか？」
「援軍を叩く。ミドハド方面からやってくる援軍をな」
彼は言った。ミドハドからカッサラを経由するのは時間と距離がかかる。それよりもブーシルからミドハド領を進む方がずっと速いのだ。しかもその道筋はすでにアッディーンが押さえている。
「二月でのここまでの到着は微妙なのだろう？だがサラーフ領に入るのは確実だ」
「はい」
「その彼等を待ち伏せする。そして叩く。戦果は期待できる」
「しかしこちらの援軍もそれなりの備えはしておりますよ」
「地の利は彼等にある。油断してはいけない」
「ハッ、そうでした」
参謀達はアッディーンの言葉に姿勢を正した。
「ブーシルからここまでの航路の偵察を強化しろ。そして時が来たら動く」
「はい」
「これは援軍を救うだけではない。サラーフを自壊させる為の戦いであるということも忘れるな」
どうやら彼は政治的なセンスも備えているようである。外交官から説明を受けただけでここまで発展させて物事が言える者はそうはいない。
「次の戦いがこの戦いの行方を左右する、それを忘れるな！」
「ハッ！」
参謀達は一斉に敬礼した。そして彼等は解散した。

アッディーンはムスタファ星系の有人惑星の一つに置かれたホテルにいた。この星系は有人惑星が二つあり同じ軌跡を一八〇度離れて動いているのだ。

彼はそのホテルの一室にいた。ロイヤルスイートである。
しかし彼はその部屋をもてあましていた。どうも過ごしにくそうである。
「閣下、何かお困りですか？」
鞭の様にしなやかな身体を持つ白い肌の男が問いかけてきた。黒い髪と鳶色の眼を持つこの青年もまた軍人である。アッディーンの秘書オマーム＝ハルダルトである。階級は大尉である。
「そういうわけではないが」
彼はやはりあまり晴れない顔で答えた。
「どうもロイヤルスイートというのは落ち着かないな」
「そうでしょうか。私には心地良い部屋に思えますが」
「それは君の感性だろう。俺はどうもこうした部屋は馴染まないんだ」
「そうなのですか？それは意外ですね」
「もっと普通の部屋はとれなかったのか？こうした豪奢な部屋は俺の性に合わない」
「そうは言いましてもこの作戦の総司令官であすから。それなりの部屋にいてもらわないと」
総司令官以上の部屋には泊まることができない。これは止むを得ないことであった。
「それはそうだが」
アッディーンはまだ不満そうである。そこでチャイムが鳴った。
「誰だ？」
ハルダルトは呼び出し鈴の前に行き部屋の前に立っている兵士達に問うた。ホテルの中とはいえその警備は厳重である。
「ホテルのボーイです。食事を持って来ております」
「そうか。ボディーチェックの後で私が行く」
彼はそう言うとアッディーンの方へ向き直った。
「閣下、食事が届きました。暫くお待ち下さい」
「ああ」

ハルダルトは敬礼し部屋をあとにした。アッディーンは一人になると窓の外に顔を向けた。
「全く、こんな無駄に贅沢なところにいて何になるというのだ」
彼は再び顔を顰めて呟いた。
「俺には似合わん。それよりもごく普通の部屋にいたいものだ」
彼は公務員の両親の下に生まれた。そしてそのままごく普通の家庭で育った。幼年学校に入ってからは隊舎で生活していた。そして今は官舎と艦内の往復である。カッサラにいた時も官舎住まいであった。そしてブーシルでは殆ど艦内で暮らしていた。
従ってこうした豪奢な部屋にいることは慣れていないのだ。それよりも艦内の居住区や官舎の方がずっと落ち着くというのが彼である。
従ってその生活は派手ではない。将官として忙しいこともあるが私服も質素であり趣味も読書やスポーツ、それも一人でもできるランニングや陸上競技といったものばかりである。オムダーマンが誇る若き名将もその私生活はごく平凡なものであった。
「せめて食事は普通のものを頼んだが」
そこで呼び鈴が鳴った。
「閣下、私です」
ハルダルトの声であった。
「入っていいぞ」
彼は言った。暫くして護衛の兵士がドアを開けハルダルトがボーイを連れて入ってきた。
「ご苦労、では食事にするとしよう」
「はい」
彼はフォークとナイフを手にとった。サハラの食事はエウロパと同じくフォークやナイフ、スプーンを使って食べる。連合のように箸も使ったりマウリアのように手で食べたりはしない。だがその作法はエウロパのものとはかなり違っている。
エウロパは料理を一つずつ出すがサハラでは一度に出す。そして

食べる順番も自由である。
「そこのボーイにチップを渡してくれ」
彼は食事前にハルダルトに対して言った。
「わかりました」
彼は兵士達に命じてボーイにチップを手渡した。普通のより多めである。
「有り難うございます」
そのボーイは笑顔で言った。彼にしても思ったより多かったらしい。
彼は上機嫌でその場をあとにした。アッディーンは食事に向かった。
料理もまたごくありふれたものであった。小麦のポタージュと香辛料をきかした若鶏の焼いたもの、野菜の炒めたものにチーズ、そしてパンとワインであった。サハラでは酒には五月蝿くない。イスラムがその信仰であるがこの時代は酒は飲み過ぎなくてはいいという教えになっている。
意外にもイスラムにおいては酒もよく飲まれている。時代により違うだけである。時代によって飲んでよい時とはばかれる時がある。ムハンマドはあくまで目標であり厳格に定めるような頭の固い男ではなかった。彼は生真面目で思慮深い反面意外な程話のよくわかる男であった。
「ではいただくとしよう」
彼はまずポタージュを口にした。それから野菜を口にし鳥を食べた。そしてチーズとバターを食べ終えたあとでワインを飲んだ。こうして食事は終わった。
「閣下は食事もあまり派手なものを好まれないのですね」
「ああ。軍での生活が長いこともあるが」
実際軍の食事は普通のレストランと比べて美味しくはない。給養員の腕もあるがこれは仕方がない。アッディーンも幼年学校から軍の食事を食べているが実家での母の食事の方がずっと美味しいと思

っている。
「あまり豪華な食事に興味はないな。俺は腹が満たされればそれでいい」
「そうですか」
「だがここの料理は美味いな」
どうやら味音痴というわけではないようだ。
「香辛料の使い方がいい。それにパンもワインも上等のものだな」
意外と細かい。舌は鋭いようだ。
「シェフに伝えてくれ。いい味だったと。流石にこれだけのホテルにいることはあると」
「わかりました」
ハルダルトは答えた。
「しかし注文されたメニューを聞いてシェフは驚いていましたよ」
「何故だ？」
「あまりにも質素だからです。以前このホテルに来たサラーフの提督とは大違いだと」
「サラーフの提督？誰だ」
「キヨハームとペタシャーン、モトキーラム、そしてエトンという連中だそうです」
「どういった者達だ？」
連中というからには碌な人物ではないだろうと思った。
「ミツヤーンの一派です。何でもこのホテルを僅か四人でいきなり借り切ったとか」
「他の客はどうなった？」
「追い出されました。反論しようとする者はキヨハームとペタシャーンが殴り飛ばしたそうです」
「まるでヤクザかゴロツキだな」
「はい、そして四人ではメイドを押し倒そうとしたりホテルのものを破壊したりして暴虐の限りを尽くしたそうです」
「軍人とは思えぬな。まるで犯罪者だ」

「まるで、ではなくそのものだとホテルの者は言っております。かなりの損害が出たそうです」
「よくそれで軍の高官をやっていられるな」
「マスコミが握り潰しますから。何度も言いますがマスコミにとって彼等は既存の軍の存在や価値観の捉われない英雄なのです」
「・・・・・・どうやらこの国のマスコミというのは狂人の集まりのようだな」
「元々マスコミというのはそうしたものですが」
ハルダルトはいささかシニカルに答えた。
「マスコミは自分達の思いのままに情報をコントロールできる状況にある場合幻影を作り出します。そしてその幻影で世界を支配するのです」
「それは一千年前の話だろう？」
それはアッディーンも知っていた。だが昔の話であった筈だ。
「それが今サラーフに甦っているのです。この国は実質的にマスコミのその幻影に支配されています」
「奴等が作り出した紛い物の英雄を崇拝してか。愚かな話だ」
「それが滅亡への道とは露程もわからずに。いえ」
彼はここで言葉をとぎらせた。そして少し考えたあとで言った。
「連中は今度は我々にでも媚び諂うかも知れませんね。解放者とでも言って」
「断る。我々は解放者ではない」
アッディーンはその言葉に憮然とした。
「同じサハラの者だ。何が解放者だ」
サハラの者の特徴として連帯意識がある。これは同じ宗教を信仰していることがもとになっているがその為にそれぞれの国に所属しているという意識と共に『サハラの者』という意識が無意識のうちにあるのだ。これはかってのアラブ人としての意識と同じである。
だからこそアッディーンはそうした言葉を胡散臭く思った。嫌悪感を露わにしたのだ。

「もしもの話ですよ」
ハルダルトはそれを見て苦笑した。
「そえでもいいそうだな、実際に」
しかしアッディーンの表情は変わらない。
「それはそうですが」
ハルダルトも顔を引き締めた。
「話を聞いているだけだが」
アッディーンはその表情のままで話を続けた。
「そうしたマスコミは何かしらで潰しておいた方がいいな。サラーフを腐らした後はオムダーマンも腐らせてしまうだろう」
「ですがそれは言論弾圧になりますよ」
「それはそうだが」
オムダーマンは共和制である。そして議会は普通選挙により選ばれる。言論や表現の自由も憲法で保障されているのである。
従って彼等はそうした言論弾圧には敏感である。無論賛成なぞしない。
「よく考えるとオムダーマンではネットも発達している。その心配はないか」
「はい、それに連中の末路は私には容易に想像がつきますし」
「というと!?」
アッディーンは尋ねた。
「それはこの戦いの最後にわかりますよ」
ハルダルトはそう言うと満面に笑みをたたえた。
「そうか」
アッディーンはそれがどういう意味かわからなかった。ただ秘書の話を聞くだけであった。
「我々が何かする必要はないということか」
「はい、連中はアッラーが裁きます」
ハルダルトの言葉は的中する。そしてアッディーンは彼の才に大きなものを見ることになる。

サラーフとオムダーマンの戦いは直接剣を交えるものではなくなっていた。だがそれは今のところではあってそれがすぐに剣を交えたものになるのは誰の目にもあきらかであった。
サハラ各国はそれを注意深く冷静に見守っていた。特に北方にいるあの男は。
「そうか、ナベツーラ派が出て来たか」
彼はその情報を訓練中の艦橋で聞いた。
「はい、今度の選挙の結果次第では政権を握りかねない勢いです」
参謀の一人がそう報告した。
「選挙の結果では、か。では今の政権担当者達は相当焦っているな」
「はい、何とかして得点を稼ごうと躍起になっているようです」
その参謀はそう言った。
「ふむ、では近いうちに会戦があるな」
シャイターンはそれを聞いて言った。
「得点を稼ぐには外敵を叩くのが最も効果的だ。そして丁度その外敵が領内にいる」
「それが一番でしょうね」
「そうだ。だがそれに失敗したら今の政権は確実に崩壊する」
シャイターンの声は冷徹であった。
「そしてナベツーラが政権を掌握する。奴のことだ、軍も自身の息のかかった者達で固めるぞ」
彼はナベツーラのことをよく知っていた。勿論いい話は聞いていない。
「そうなればこの戦いの行方は決まったも同然だ」
「つまり今度の会戦がサラーフの命運を決するのですか」
「そういうことになる」
シャイターンは答えた。
「我々が動くのはそれからでいい。まずは」
シャイターンはここで窓の外を見た。そこには幾千万の銀河の星

々が瞬いている。
「ここでの基盤を固めなければな」
訓練から帰ると彼はハルーク家の未亡人との婚約を発表した。これにより彼は北方での揺るぎない地位を手に入れることとなった。

# 第三部第三章　獅子身中の虫その一

獅子身中の虫

この時サラーフは混迷した状況にあった。オムダーマンの侵攻を受けて焦土戦術をとってはいるものの彼等がムスタファ星系に足掛かりを築いた為それが期待するような効果をあらわしていないのである。

だが彼等はオムダーマン軍と正面から戦おうとはしなかった。敵将アッディーンの将としての資質はよく知られており彼が率いるオムダーマン軍の強さも身に滲みていたからである。やはりカッサラとブーシルでのことが彼等の脳裏には強くあった。

従って彼等は焦土戦術を執り続けた。それと同時に戦力を回復させることに努めていた。要するに持久戦に持ち込んでいたのである。戦略としては間違ってはいない。

だがマスコミにそれがわかる筈もなかった。特にサラーフのマスコミは目先のことしか考えられず常に世論をミスリードしてきた。そして今もそうであった。

『何故逃げるのか』

『弱腰がもたらしたこの惨状』

『すぐにオムダーマンを叩け』

『侵略者を追放せよ』

こうした扇情的な報道が連日繰り返された。彼等はことあるごとに今の政府及び軍の首脳の弱腰を批判しナベツーラ派を持ち上げた。

これに気をよくしたのがナベツーラであった。彼はマスコミの支持を背景に口をきわめて今の政府を批判した。それを批判と呼んでいいのだろうか。最早それは罵倒そのものであったがマスコミはそれを『見事な反論』『与党を論破』などと賛美した。

そして軍ではミツヤーン派が台頭していた。彼等もまたナベツーラ派であり今の軍首脳部の戦略を批判していた。そしてさかんに強

硬策をぶちまけていた。
「どうだ、軍の方は」
ナベツーラは自らの率いる政党のビルの党首の部屋において取り巻き連中と話していた。
葉巻を吸っている。かなり高価なものなのだろう。その香りは普通のものより遥かに強い。
その目は鋭い。いや鋭いというよりは禍々しい嫌な光を放っている。マフィアの首領の目に近いだろうか。そしてブルドッグをさらに醜くしたような顔をしている。髪は黒々としているが何を考えているのかアフロにしている。当然全く似合ってはいない。
この醜悪な老人がナベツーラである。マスコミの寵児にして野党の党首である。
鋭い弁舌と確かな識見で知られている。その判断は果断にして素早く今やサラーフの次の指導者である。
というのがマスコミの評価である。だがそれは幻想に過ぎない。
実際のこの男には識見なぞ存在しない。政治家になったのは家の豊かな資金とコネの為であり政治家になってからは権力闘争にのみ執着していた。彼の政治とは権力に他ならなかった。
そしてその過程で数多くの政敵を葬ってきた。彼と党の幹部を争った議員が不審な死を遂げたこともある。そして袖の下にも極めて貪欲である。だがマスコミはそうしたことを今まで一切報道してこなかった。ただひたすら彼を褒め称えるだけであった。
そうした人物の取り巻きといえばまともな人物がいる筈もない。実際は彼の周りは腐敗しきっていた。だがマスコミは例によって全く報道しなかった。
「そちらも順調です」
彼の前にいる軍服の男もその一人であった。出っ歯で異様に大きな眼鏡をかけている。そしてその顔の形はまるでひしゃげたスプーンである。この男の名をホリーナムという。マスコミの評価では『天才軍師』である。階級は大将である。

「ミツヤーン閣下の工作は既に軍の首脳の殆どに対して成功しております」
この工作とは要するに買収である。ホリーナムは臭い息を撒き散らし下卑た笑い声を出しながら報告した。
「そうか。ではいずれ奴を元帥にしてやらなければならんな」
それを聞いたナベツーラは口の端を歪めて言った。
「オムダーマン征伐軍の総司令官には元帥が相応しいだろうしな」
「ごもっともです」
ホリーナムは諂いの言葉を出した。
「そして御前は参謀総長だ」
「有り難うございます」
彼は碌に磨いておらずオレンジになった歯を見せた。
「キヨハーム達は艦隊司令だ。これで我々が功績を独り占めすることができる」
「はい、喜ばしいことです」
「あのアッディーンという若僧だがな」
彼はここでようやくその敵であるアッディーンの名を口にした。
「俺が見たところ大した奴じゃない。どうせ運だけで勝っているような奴だろう。そんなに怖れることもない」
「はい、私もそう見ています」
これは本心からであった。彼はアッディーンのことは碌に調べてはいない。そもそも彼は机の前にある書類を自分でサインしたり目を通したりはしない。全て部下に押し付けている。仕事が上手くいけば自分の手柄であり失敗したら部下に全てを押し付けている。
「俺が政権をとったらすぐにやってもらうからな。さっさとこのサラーフから追い出してしまえ」
「そしてその勢いで奴等自体も滅ぼしてしまいましょう」
「当然だろうが。いいか、容赦はするなよ」
ナベツーラは机で葉巻の火を消して言った。
「途中何をしてもいいからな。徴収でも何でもやって勝て」

「わかりました」
要するに掠奪を認めているのである。しかも自国領で。それがナベツーラやホリーナムの戦争であった。
「徴収したやつはいつも通り俺のところへ持って来い。そして山分けだ」
「はい、勿論ですとも」
「いいか、捕虜もとるなよ。宇宙へ蹴り出してしまえ。どうせオムダーマン軍には女なんていないんだ」
これはサラーフもである。サハラでは女性は戦場には立たない。それどころか軍にすら入れないのである。これは女性差別ではなくサハラの者達の思想であった。戦争とは男がするものという考え方である。これは古来よりあったものである。とりわけイスラムでは。
「それは承知しております。キヨハーム達にもよく伝えておきます」
「もっとも奴等ならその前にやってくれるだろうがな」
ナベツーラはそう言って新しい葉巻を取り出した。そしてその先を口で切った。
「どうぞ」
ホリーナムは火を差し出した。ナベツーラはそれで火を点けた。
「ご苦労」
礼なぞ言わない。当然と考えているからである。
「じゃああとはミツヤーンとよく話せや。俺は政治の方をやっておく」
「わかりました」
ホリーナムは敬礼をすると部屋をあとにした。そして車に乗り参謀本部に向かった。
参謀本部は軍の司令部にあった。彼は司令部に着くとそのまま参謀本部に入った。
「ミツヤーン閣下は何処だ」
彼は敬礼をした若い将校に返礼することなく聞いた。
「ご自身の部屋におられます」

「そうか」
彼はそれを聞くとそのままミツヤーンの部屋に向かった。ミツヤーンは今は軍の統帥本部長をしている。
ドアをノックする。するとやたらかん高い声で入れ、という声が聞こえてきた。
「入ります」
彼はそう言って部屋に入った。そして敬礼する。
「おお、話は聞いているよ」
目の前の机には一人の男が座っていた。軍人とは思えない程肥満した小男でありその険しい目は何やら偏執狂めいている。肌の色は不自然に黄色く身体全体が脂ぎっている。まるでサハラ南方によく生息する毒蝦蟇だ。
「参謀総長になるらしいな」
あのかん高い声であった。聞いているだけで不愉快になるような耳に障る声である。
「はい、閣下が総司令官です」
「いいな、何度聞いても」
ミツヤーンはそれを聞いて目を細めた。
「ええ。今まで我々は何かと冷や飯を食わされてきましたから」
軍の首脳部は今まで彼等を要職に就けようとしなかった。何故か。簡単である。無能なうえにその職権を乱用して私腹を肥やすからである。そうした人間を好んで使う者はまずいない。
「だが遂に時が来た。これからは思うがままだ」
この男は戦争のことも祖国のことも何一つ考えてはいない。
「はい、さしあたっては前祝といきますか」
それはホリーナムも同様である。自分達のことしか考慮に入れていないのである。
「うむ。まずはこれから出撃する連中の敗北を祈ってな」
しかも友軍の敗北まで願っている。そうした連中なのである。
「では今日はハメを外しましょう」

「ああ。他の奴等も呼んでな」
二人は勤務時間だというのにその場を離れた。そして取り巻き連中と共に朝まで騒いだ。彼等の為行きつけの店ある店は甚大な被害を受けたという。

## 第三部第三章　獅子身中の虫その二

「オムダーマン軍の動きは止まっているようね」
大統領との会談の為地球に来ていた伊藤は八条と会っていた。
「はい、どうやらムスタファ星系に留まっているようです」
二人は国防省の八条の執務室にいる。そこで話し込んでいるのだ。
「ムスタファで何をしているのかしら」
「どうやらそこを拠点にするつもりのようですね」
八条は答えた。
「成程ね。アッディーン提督は今までの戦い方を見ていると迅速な動きんばかり好むと思っていたけれどそうでもないようね」
「はい、私もこれは意外でした」
八条は答えた。
「サラーフの首都アルフフーフを一気に衝くと思ったのですが」
「距離があまりにも遠いのじゃないかしら」
「彼もそれはわかっていたようです。だからムスタファに拠点を築いたのでしょう」
「焦土戦術を敷かれながらもね」
「はい、多量の工作艦及び補給艦であの星系の昨日をあっという間に戻したそうです」
「考えたわね。その話を聞くとどうやら事前にある程度サラーフの焦土戦術を予想していたみたいね」
「はい、私もそう思います」
「戦略も見事だけれど勘もいいわね。政治家になっても通用しそう」
「待って下さい、彼はサラーフの人間ですよ」
「あら、それは私もわかっているわよ」
「どうでしょうか」
微笑んだ伊藤に対して八条は苦笑で返した。
「けれどこれでサラーフの焦土戦術は頓挫したわね。このまま自国

領へ引き摺り込むつもりだったようだけれど」
「それができないですからね。必然的に今サラーフでは焦土戦術の是非を巡って意見対立があるようです」
「そうでしょうね。で、どっちが優勢なの？」
「反対派が強いですね。マスコミの支持も受けていますし」
「そうなの。だとすると今の政権も軍の上層部も焦っているでしょうね」
「はい。どうやら軍を動かすようです」
「やっぱり。まさかムスタファ星系奪還とか？」
「それは無理でしょう。今あの星系には常時十二の艦隊が駐留しておりますから」
八条はそう言うと三次元地図を机の上に広げた。
「私はサラーフが動くのは別のところにおいてだと思います」
「どこだと考えているの？」
「そうですね。どうやらオムダーマン軍はブーシル方面から援軍を送るらしいですし」
八条はそう言いながら指でブーシル星系を指し示した。
「その援軍を狙うのではないかと見ています」
「成程、それならムスタファ星系を直接攻めるより戦果は期待できるわね」
「はい、それに地の利もありますし」
彼等はサラーフの側に立って戦略を検証していた。
「それで戦果を得たら政権争いにも優位に立てます」
「そうすれば今の作戦を継続できるしね」
「はい。正直今のサラーフではオムダーマン軍の侵攻をまともに受けられはしないでしょう。勝てたとしてもそのダメージは甚大なものとなります」
「やっぱりカッサラを奪われたのと二度の敗戦が響いているわね」
「そうですね。やはりカッサラを奪われたのが全てのはじまりでした」

「そういえばあの戦いでオムダーマン軍は苦戦していたそうね」
「ええ。ですが一隻の巡洋艦の活躍により戦局は逆転したそうです」
「その巡洋艦の艦長は誰かわかるかしら」
「アッディーン中佐です」
「あら、じゃあサラーフはまた彼にやられているのね」
「そういうことになりますね」
「中々凄いわね。それにしてもまだ若いそうだけれどそこまで活躍するなんて」
「連合、いや日本にいないのが残念のようですね」
「わかるかしら」
「そのお顔を見れば」
「ふふふ」
彼女は笑っていた。学者出身であるせいか彼女は部下を育てることを好む癖がある。それは政策にも出ており教育にかける情熱は並々ならぬものがある。
「今の子達も期待しているけれどね。けれど生徒は多い方がいいわ」
「彼等は生徒ですか」
「あら、君だってそうだったじゃない」
「確かにそうですが」
八条は苦笑した。その整った顔は苦笑の表情も美しい。
「ところで日本に一度戻らない？」
「今は駄目ですよ、連合軍を作らなければなりませんから」
「嫌ね、入閣してくれとかそういうのじゃないのよ。実は陛下からお呼びがあって」
「陛下がですか？」
皇室はこの時代においても存続していた。この時代もやはり立憲君主国は存在しておりエウロパにおいても復権したハプスブルク家をはじめとしてイギリスやオランダ、スペイン等があるがこの連合においても存在している。マウリアのように藩王といったものはおらず皆その国の元首となっている。

だが皇室の位置は特殊であった。他の君主達は『王』である。『皇室』と『王室』は似て非なる部分がある。

それは格であった。皇帝は王よりも上位の存在である。中国では王は皇帝が承認するというものであった。皇族、若しくは特別な功績のある者しか王の位は与えられなかった。属国は王であった。これは皇帝の臣下であるということに他ならない。欧州でも同じである。欧州の皇帝はローマ帝国皇帝の後継者という位置付けであるが神聖ローマ帝国皇帝は王の上に君臨していた。フランス皇帝を名乗ったナポレオン＝ボナパルトも諸国の王をその足下にひれ伏させた。

だが欧州ではこうも言われる。

『皇帝には誰もがなれるが王には誰もがなれるというわけではない』

この言葉は皇帝というものを考えるうえで重要である。今だにアメリカや中国の大統領を皇帝と陰口を叩く声がある。これは当然皮肉であるがその彼等も王とは呼ばれない。それも当然である。

王はその血筋故に王となる。その血筋の者でなければ王とはなれない。ローマ皇帝は簒奪していようが推挙されようが帝位に就けば皇帝であった。神聖ローマもハプスブルク家が独占する状況においても尚選帝侯というものが存在していたことからわかるように（これは空位時代への反省であったが）選挙で選ばれるものであった。イギリス王家はインド皇帝となってもイギリス王であった。ドイツ帝国ができた時プロイセン王ヴィルヘルム一世は泣いたという。愛すべきプロイセン王の位から離れるからだ。彼は戴冠式では彼を皇帝にした決闘好きな大食漢の大男、鉄血宰相ビスマルクに声をかけることはなかったという。中国では皇帝は天命を受けた者であった。易姓革命の国である。要するに誰もが皇帝になれるのである。

そうした意味で日本の皇室は王家である。だが同時に皇帝でもあった。それは全ての国が認めている。皇帝は複数の民族及び宗教の上に立つものだという条件もあるがそれも満たしていた。日本は古来より多くの宗教が並存し民族も多岐に渡っていた。単一民族というにはあまりにも混血した歴史がありそう言うには無理もあった。

それにアイヌ系や沖縄系といった民族は銀河に進出してからも存在していた。その血はかなり混血してしまっていたが名は残っていたのである。言葉はもう文献の中にあるだけであったが。

そうした存在でありこの連合においてもその位置は複雑であった。連合は緩やかな国家連合でありその中には多くの国家が存在する。中央の力が弱かったこともあり『神聖ローマ帝国』と揶揄する声もあった。だが国家元首は明確に存在していた。大統領である。

## 第三部第三章　獅子身中の虫その三

しかし皇室を持つ国があるのだ。話というか見方が複雑になる。

『連合大統領と日本の天皇はどちらが上位にあるか』

そうした議論が長きに渡って繰り返された。

天皇は日本の国家元首であり連合政府とは関係がない。だが皇帝という位置にある。大統領より皇帝は上位という位置付けが二十世紀より為されてきた。アメリカ大統領もローマ法皇や天皇に対しては特別な対応をしてきた。中国もアメリカ大統領を皇帝としてもてなしたことがあったが日本の天皇は明確に皇帝だと認識し常に対応してきた。それは他の国々も同じであった。王と呼び失笑を買った国まであった。

だがいつもこう言われた。天皇は日本の国家元首であるが連合政府の大統領ではない。連合政府は連合を取り纏める中央政府であり全ての国家の上位にある。だが人として大統領と皇帝は対等にある、と。

これがおおむねの意見であった。だが諸国家の国家元首では天皇は第一の位置に置かれた。あとエチオピア皇帝がそれに同列となっていた。タイ、ブルネイ、マレーシアといった君主達が続く。それから大統領だ。つまり連合の中の国家の元首の一人という位置付けが為されていたのである。序列は第一であるが。

連合は確かに全ての構成国の地位も発言力も平等であると定められている。だがやはりそうした序列はある。これは国連の頃から一千年連合でもエウロパでも変わらない。幾度政権が変わってもだ。ちなみにエウロパでの序列はまずハプスブルク家ことオーストリア王家が筆頭である。その次にイギリス王家である。

「そうよ、君に是非お渡ししたいものがあるとか」

「陛下が私に。一体何だろう」

彼はふと考えた。この時代女帝は復活している。日本は元々その

神話の主神が太陽神であるアマテラスオオミノカミであったことからもわかるとおり女帝に対して抵抗のない国であった。エウロパの主要国の一つであるイギリスのジンクスとして『イギリスは女王の時に栄える』というものがある。これはエリザベス一世の頃から言われているのであるがどうも実際はそうではないようだ。エリザベス一世の頃は確かに彼女の卓越した政治手腕はあったがあまりにも内憂外患に悩まされ続けしかも財政は慢性的な危機にあった。シェークスピアという偉大な作家だけで語れるものでもない。アン女王の時は先にジェームス一世というスコットランド王兼イングランド王がいたのでその統一は既にあった。ビクトリア女王の時もその晩年には翳りがあった。エリザベス二世の頃はさらに精彩がなかった。これはマスメディアが面白おかしく書きたてたせいでもあるが元々悪人とは到底言えない人物ばかりの当時の王室ファミリーを変に思い過ぎた。元皇太子妃の謎の死もあったがこれは既に真相がわかっているということになっている。あれは事故だったということに。ただし信じている者は少ない。

その後もイギリスには女王が出てきた。十人程だろうか。しかしかっての勢いは戻らなかった。エウロパの一国として存在するだけである。それでもエウロパでの地位はかなり高いのであるが。

さて日本の女帝であるが十九世紀後半から二十一世紀前半にかけて皇室典範で皇位継承は男子のみに限るとあった。だがそれは時代の流れと共に変わった。というよりは元に戻っただけであったが。

世論は女帝を容認した。そして国会の決議もあっさりと通った。反対派は不思議な程少なかった。前例が既に十代八人もおられまた男女同権の意見にもあっていたからである。

それから女帝が何人も誕生された。宮内庁、後に宮内省となったこの頭の硬い役所もそれまでの騒ぎは何処へ行ったのやらこれまで通り儀礼を行なった。

「それは行ってみたらわかることよ」

伊藤は微笑んで彼に言った。

「何かご存知ですね」
彼は伊藤のその微笑を見て本能的に悟った。
「ええ。ただしそれは行ってからのお楽しみよ」
「そうですか」
どうやら大統領の方には話が既についていたらしい。彼はすぐに地球を発ち日本へ向かった。いや、この場合は戻ったといった方がよいのかも知れない。
日本の首都は京と名付けられていた。天皇の座す都として存在している。政治の中心は議会のある八幡、経済の中心は美原星系にある。この京は国家元首の鎮座する、そういった意味での首都であった。いや帝都と言うべきか。
不思議な風景であった。近代的なビルが立ち並ぶがそれと共に古風な、日本の平安時代や江戸時代を思わせる建物も並んでいる。これは主に儀式の際に用いられる建物だ。
「何かここへ来ると懐かしい気持ちになるな」
八条は空港を降り立って車に向かいながら思った。そして車の中からその古風な建物を見ていた。
「いつも思うけれどこうした建物を見ると心が和むね」
彼は運転手に対して言った。
「はい、何といっても我々の古来の建築様式ですから」
彼は運転しながら答えた。彼の肌はやや黒い。アフリカ系の血が入っているのだろう。だがその心は日本にあるようだ。
やがて皇居に着いた。所謂宮殿であるが他の国々の君主達の宮殿とは違う。それ程大きくはなく木造である。木は檜を使用しているようだ。そしてその装飾も極めて質素である。
「これが世界のエンペラーの家だとはな」
八条は皇居を見て心の中で呟いた。皇帝の宮殿と言うにはあまりにも小さい。別荘といってもまだ足りない程だ。装飾もなく中にいる侍従達の服装もかっての平安期の服を復活させており極めて慎ましやかである。これがこの皇室の伝統であった。

本当に歴史と伝統があるならば無闇に飾る必要はない、代々の天皇はその生活をもって無言でその意思表示をしてきた。かって明治という日本の危急存亡の時に若くして即位しその象徴であり続けた明治天皇は粗食で知られ軍服の裏が破れていても替えることなく縫ってまた着た。

その後日本の皇室の在り方を今尚指し示す天皇が即位した。

昭和天皇。明治天皇が『大帝』と称されるのに対してこの帝は『賢帝』と称されている。

若くして当時世界の政治、経済、そして文化の中心であった欧州を訪問した。そこで彼は立憲君主制に触れ生涯その立場を守り続けた。君主はどうあるべきか、それを最もよくわかっておられた方であった。

常に国民（陛下は最後まで臣民だと考えていたが）のことを案じ続けておられた。そして日本は世界においてどのようにあるべきか、そして皇室とはどうあるべきか。それを常に考えそれを行動により示し続けてこられた。その思慮深く慎重な性格と誠実な人となりが国民に愛され世界の尊敬を集めた。その彼が皇室の在り方を定めたのである。

帝の生活は質素であった。崩御の際その寝室をはじめて見た時の首相が大いに驚いたという。

帝の示された皇室の在り方はそれから皇室の範となった。そして今も残っているのだ。

「流石というか何というか。それ程偉大な方だったのだな」

彼はその昭和天皇について考えていた。前には案内役を務める侍従が歩いている。

廊下も檜である。一見火の回りが速そうであるがどうやらコーティングは為されているようだ。

## 第三部第三章　獅子身中の虫その四

「暫くお待ち下さい」
侍従は謁見の間の前の部屋に彼を案内してそう言った。
「わかりました」
彼は頷くと勧められた席に座った。ここも和風の部屋である。椅子はなく座布団が置かれている。
彼はその一つに座った。そして侍従が戻って来るのを待っていた。
「お待たせしました」
侍従が戻ってきた。そして彼を謁見の間に案内した。
そこは不思議な部屋であった。下は木であるが和洋折衷の感じがした。それ程広くない部屋の左右に侍従達が控えている。彼等もやはり昔ながらの古風な服装である。
そして中央に玉座がある。二段程高くしたところにあるその玉座はやはり質素であった。普通の黒い木造の玉座である。
『玉座はその座る者によってその価値が決まる』
誰が言ったのか八条はこの時は忘れていた。だがふとその言葉を思い出した。
その質素な玉座の上に天皇が鎮座していた。
「連合中央政府国防大臣八条義統殿でございます」
天皇のかたわらに控える侍従長が天皇に上奏した。
「はい」
天皇は答えられた。その間八条は頭を垂れたままである。
「八条殿、顔をお上げ下さい」
天皇は八条に声をかけた。静かで澄んだ若い女性の声である。
八条はそれに従い頭をゆっくりと上げた。そして天皇を見た。
玉座には一人の小柄な少女が座っておられた。
礼服を着、頭には小さな冠がある。髪は長く黒く後ろに垂らせている。化粧は薄くあまりそれを感じさせない。

幼さが残っているが非常に整った顔立ちをしている。気品が溢れ何処となく威厳も感じられる。
彼女が今の日本の天皇後明正天皇である。歳は二十二、昨年崩御した父帝の後を継ぎ即位したばかりである。天皇となってまだ日は経っておらず即位の礼もまだである。
（まだお若いというのに）
八条は彼女を見てふとそう思った。彼は彼女の歳にはよく遊んでいたものだった。
（遊びたいと思われる時もあるだろうに。けれどこうしてご自身の責務を務めておられる）
彼は皇室を深く敬愛していた。そしてこの女帝のことも敬愛していた。
「八条殿、よく来られました」
「陛下のお招きに応じまして」
彼はそう言って頭を垂れた。彼は日本人である。その心はやはり日本にあり天皇にある。だが今は連合にいる。だからこそこうしていささか他人行儀に呼ばれているのだ。
「地球はどうですか」
帝は尋ねてこられた。
「温かく過ごし易いです。ですがやはり住み慣れた場所が一番ですね」
彼は微笑んで答えた。
「そうですか。ではこの京はどうですか」
「素晴らしい星です。何と言いますか故郷に戻って来たようです」
「それは何よりです」
帝はそれを聞いてにこりと微笑んで答えられた。当然彼女も八条が日本人であることを知っている。前の国防大臣であったのだし。
「八条殿は寒いと感じられますか？」
「？いえ」
彼はその言葉に少し驚いた。

「胸が寒いとかは」
「そうは思いませんが」
「見たところその服装では胸が少し寒そうです」
彼はスーツを着ている。だが本当に寒いとは思っていない。
「陛下御言葉ですが」
彼は帝の真意がわかりかねていた。そして言おうとしたその時である。
「あれを」
帝は侍従長に対して言われた。
「わかりました」
侍従長は頷くとその場を退いた。そして黒い箱を恭しく持って姿を現わした。
「あれは・・・・・・」
漆塗りの箱であった。かなり古風である。
「これは私からの贈り物です」
帝はそう言うと玉座を立たれた。そして侍従長から箱を受け取られその中身を取り出された。
「陛下、そのようなことは」
君主は無闇に玉座を立つものではない。如何に若いといえども君主なのである。
だが帝は八条の制止にも関わらずその箱の中身を持たれ八条の方へ歩み寄られた。その手には金色の勲章があった。皇室の紋章である菊をかたどってありリボンは紫である。
「それは・・・・・・」
彼もその勲章は知っていた。日本で最も位の高い勲章である大勲位である。
「八条殿、貴方の功績を称えこれをお渡しします」
帝はそう言って八条の左胸に大勲位の菊を御自身の手で着けられた。
「陛下・・・・・・」

これには流石の八条も驚きを隠せなかった。この若さで大勲位を授けられたという話は聞いたことがない。ましてや帝御自らの手で。
「連合軍設立と今までの働きはこの連合の平和にどれだけ貢献したかわかりません。その功績を称えこれを授けます」
「しかし私はまだこのようなものを頂く程のことは・・・・・・」
「八条殿」
ここで帝は言われた。
「これからの功績もあるのです。それを考えるならば当然です」
「そうでしょうか」
「はい。連合軍の設立はそれだけの大きな意義があると聞いています。その存在が連合三兆の市民にとってどれだけ有り難いかということも」
どうやら総理が陛下に何か言上したな、と察した。
「これからも頑張って下さい、連合の平和の為に」
「わかりました」
こうした若い女性に頼まれるとやはりいささか弱い。八条は半ば条件反射的に答えた。
こうして会談は終わった。八条は帰り道に八幡の首相官邸に立ち寄った。
「あら、珍しいわね」
伊藤は彼の姿を見ると微笑んで答えた。
「何言ってるんですか、私が来るということはわかっているでしょう？」
八条はすこし苦笑して問うた。
「ふふふ、確かにね」
伊藤は笑って答えた。
「何故ここへ来たのかはわかっているわ。大勲位のことでしょう？」
「はい。陛下にそのことを言上したのは総理ですね」
「そうよ」
伊藤は答えた。

「君の今の功績を考えると当然じゃないかしら。大統領にも渡されているわよ」
「それは初耳です」
八条は言った。
「まあまだマスコミには発表していないけれどね。ネットでもまだ出ていない話だし」
「私が授けられる前にですか？」
「そうよ。大統領より先に渡される筈がないでしょう？まずは大統領、そして首相に陛下御自ら御渡しされたのよ」
「そうだったのですか。そういえば一週間前陛下が大統領と会談されていましたが」
「ええ。表向きは宮中晩餐会だったけれどね」
やはり晩餐会はこの時代でもある。とりわけ皇室の晩餐会は格式が高いことで知られている。ここで失敗した場合元首だけでなくその国自体の器も見られてしまう。それだけに気の抜けない重要なイベントである。
「その時に渡されたのですね」
「そうよ。君が地球に戻ったら発表される予定よ」
「そうだったのですか。ところで」
「何？」
八条はさらに問うた。
「何かお考えがありますね。我々に大勲位を授けるよう陛下に申し上げたのは」
「当然よ」
伊藤はその質問に対し笑みで答えた。

## 第三部第三章　獅子身中の虫その五

「どのようなお考えでしょうか」
「権威ね」
彼女は答えた。
「権威ですか」
「そうよ。この前根回しした旧太平洋諸国だけれどね」
「はい」
「やっぱりまだ不満に思っているのよ、連合軍の存在を」
「やはりそうですか。実際旧中南米やアフリカ諸国の方が連合軍には協力的でしてね。我々も手を焼いているというのが現状です」
「でしょう？だから私は陛下に申し上げたのよ。貴方達がやり易いように箔をつけようって」
「箔ですか」
実は八条はあまり箔というものが好きではない。そんなものより実力をつけることを優先させようという考えの人物なのである。軍人出身特有の考えだ。
「君はあまりそうしたものは好きではないようだけれど」
「はい」
隠す必要はない。彼は率直に答えた。
「けれどね、政治の世界はちょっと違うのよね。ほら、権威主義ってあるじゃない」
「はい」
「そういうのに弱いところがあるのよ。実際に権威に弱い人も多いし」
その通りであった。人はやはり権威があるとそれに対し身構えるところがある。権威主義を無視できる人も当然いるがそうでない人も多いのだ。
「そうした人達にはね、こうした勲章ってかなり効くのよ」

実際に日本の天皇が与える勲章は連合各国でもかなり位が高い。アメリカや中国、ロシアといった国の勲章よりもだ。やはり大統領に渡されるより古い歴史を持つ皇室からもらった方が嬉しいものだ。

「それが胸にあるだけでも引く人はいるわ。それだけでかなり違うわよ」

「そんなものですかね」

「流石にアメリカや中国の大統領には無理だけれどね。けれど提督や省の次官クラスにはかなり効果があるわ」

「はあ」

八条は珍しくわかったような、わからないような返事をした。

「そうしたクラスへの仕事がすんなりいくだけで今までとは全く違うわよ。まあこれからそれはよくわかるわ」

「そこまで仰るのでしたら」

八条は納得してみせた。そして彼は首相官邸をあとにし地球へ戻った。

すぐに大勲位を授けられたことは発表された。マスコミは殆どがそれをトップニュース扱いにした。雑誌やネットでも様々な議論が交あわされ多くの意見が出た。中にはこれは連合内での地位の向上を図る日本の深謀遠慮があると言った者もいた。

「合っているといえば合っているが」

八条は仕事の合間にネットを覗き込んで呟いた。

「そうしたことを考慮に入れない政治家はまずいないしな」

その通りであった。やはり政治家は国益を第一に考えるものだ。ごく稀に例外もいるが。

「しかし我が国の地位はもう磐石たるものだが」

そうであった。日本は連合設立以来のメンバーでありその国力も高い。アメリカ、中国、ロシア等と肩を並べる。その発言力もかなりのものであった。

「これ以上は望んでも上はない。まあ他の国を牽制する必要はあるが」

彼はそう言いながらパソコンを叩いた。
「それよりも今回は日本から連合へのプレゼントという意味が大きいな」
彼はそこで棚に置いている大勲位へ目をやった。
「総理の言われる通りだ。提督や次官クラスなら確実に言う事を聞いてくれるようになった」
実際に非協力的な人物も多きそれが悩みの種だったのである。
「これで仕事は今までよりずっと順調に進むようになった。面白いように話が進む」
「これが大勲位の力でしょうか」
側で仕事をサポートする秘書官が言った。
「だろうな。まさかこれ程までとは」
「嬉しいようですね」
「それでもこうした勲章は好きではないがな」
彼はそう言って少し表情を暗くさせた。
「胸を飾るものは好きではないし。それに」
「それに・・・・・・！？」
「私は権威主義は好きではないんだ。どうもそれで人の評価を見誤ってしまいそうだからな」
「確かにそれはありますね」
秘書官もよく話がわかっている。
「君も同じ意見か。軍人は案外権威に弱くてな。階級社会のせいだろうが」
「それは仕方ありませんよ。階級があってはじめて指揮系統が成り立つのですから」
軍とはそうしたものである。統率がとれ、的確に動くには命令系統が整っていることが前提である。そうでなければ近代国家の軍は動かない。それは一千年前に確立されたものである。
「そうした意識が権威主義へ繋がるのか。一種の職業病だな」
「ですね。閣下はやはりよくおわかりのようですね」

「ああ。仮にも軍にいたからな」
彼はそこで日本軍の将校を勤めていた頃を思い出した。
「あれで軍人というのも大変だがな。来る日も来る日も訓練と事務仕事に追われる毎日だ。気の休まる暇がない」
「案外これでデスクワークも多いですからね」
秘書官は苦笑してチェックを終えた書類を八条に手渡した。
「軍人には二つの戦争相手がいると言われるからな。一つは目の前の敵。そしてもう一つは」
「書類の山」
「そういうことだ。全く、今の我々の敵は宇宙海賊やテロリストだけじゃない。こうした書類の山も敵だ」
「どちらが厄介かは中々断定できませんね」
「ああ。あの勲章は紙の敵に対する強力な援軍となっているな」
彼はそう言うと微笑んで勲章をもう一度見た。
「では使わせてもらうか。戦いを有利に進める為に」
「はい」
以後連合軍の業務は以前に比して比較にならない程順調に進む。そして彼等はその戦力を急激に整えていった。
これを快く思わない者達も当然いる。連合国内の各国にもそうした国々は多い。だが彼等は少数で装備も劣るが独自の軍を持つことを許され経済や貿易には何ら統制を受けなかったので表面的には好意的であった。それにどの国も選挙で結果が出ていた。これが覆るにはもう一度選挙をしなければならない。だが今や連合国内の治安を大幅に向上させた連合軍の支持は高く、また時代の流れもある彼等の支持は高かった。それに連合中央政府の軍の必要性は連合設立当初より言われてきたことであった。一千年も設立されなかった方がおかしかったのである。
設立されなかった事情は各国がそれぞれ軍を持っていたからである。ことあらば彼等が一致団結すればよい、という意見も根強かったのである。またその軍の数だけでもエウロパやサハラ各国には充

分な脅威であり外敵の心配はなかった。そう、外敵の心配がなかったのである。ここに連合軍不要論の根拠があった。

「エウロパもサハラ各国も我々を攻める力はない。各国の軍があればそれでいいではないか。宇宙海賊の取り締まりもそうだ」

こうした意見であった。だが各国の軍はそれぞれの領域でしか動けなかった。連合は条約で各国の軍の相互の領域の交通を認めていたがそこで使用する設備の基準や補給の関係でトラブルが頻発した。各国はそれぞれの事情に合わせ兵器を開発していたのだ。これは当然のことであったが。

だがそれが厄介な事態を招いた。兵器の互換性がないというのは致命的であった。徐々にそれも整備していったが時間がかかった。そしてやはり各国の縄張り意識というものが影響し連合内で軍は容易に自由に通行できなかったのだ。

これが結局宇宙海賊の跳梁跋扈を許した。彼等は軍が来ればその軍の勢力圏外に逃げればよかったのである。その為海賊は中々根絶できなかった。

連合が経済や貿易を優先させるということも影響した。軍港は普通の港とは違う。まず整備は港からで軍港のそれは遅れた。経済や通商、貿易のことは迅速に解決が計られるのに対して軍事はなおざりになりやすかった。こうして一千年もの間連合国内は軍事にあまり関心を持たずにいられた。宇宙海賊やテロリストの存在はあるが連合国内は食べるものにも職にも困らなかった。一旗あげたければ開拓地に行けばそれでよかった。少なくとも大規模な農園は持てる。こうした状況が軍の整備を遅らせる原因となった。

宇宙海賊にしろ時代により増えたり減ったりする。これは当然である。事業に失敗して借金に追われたり何をしてでも大金持ちになりたいといった邪な考えを持つ者がその主流であった。もしくは他にいられる場所のない者か。そうした連中は何時でも何処でもいるものである。問題はこうした連中が正義やもっともらしい言葉を振りかざした場合である。

そこに賛同する愚か者も出てくる。市民団体の一部である。厳密には彼等は真っ当な市民ではなく海賊と結託し彼等に金を貰っている犯罪の共犯者である。テロリストと結託している者もいた。

こうした連中も連合軍の設立に反対し続けた。言う大義名分は見事なまでに美しかった。

『連合各国の自主性を汚すな』

確かにそうした意見もあった。だがそれは本心から連合の自主性を尊重した言葉であり彼等は連合のおおらかな気風を愛していた。だがこの連中が愛していたのは海賊から貰える金であり自分達が正義の味方をして世の中に出られるという虚栄心であった。こうした連中が長い間連合の中にいたのである。

その問題は長きにわたって指摘されてきた。だが彼等も狡賢く容易に尻尾は見せなかった。時として海賊が捕まり彼等との関係が暴露されることはあったが全てがそれで終わるわけではなかった。一つ潰せばまた一つ、といった具合にこうした輩は出てきた。そして潰えることがなかった。

「要は宇宙海賊がいなくなればよいのだ」

言うのは容易かった。だが連合において宇宙海賊は宿唖でありそうそうおいそれとは解決できるものではなかった。それでも次第に法整備から進められていきキロモトが大統領になった時にようやく連合軍が設立された。実に一千年の時をかけてである。

「経済や貿易に費やす努力の百分の一でも向けてくれればすぐに設立されたものを」

こう言う者もいた。だがそれもまた連合の事情をよく知らない言葉であった。

連合は各国の自治、発言力が強い。その為その調整に多大な労力を費やす。そして経済や貿易だけではないのだ。教育や保健、通信等やるべきことは多い。何しろ広大で今は二兆の市民がいる。その生活を守る為にはどうしても軍のことは後回しになってきた。治安も宇宙海賊に対してだけではない。それぞれの星の治安も重要であ

った。もっぱら宇宙海賊は通商船を狙う。星はまた別だ。星の治安も重要であったのだ。

宇宙海賊は確かに厄介だが彼等は個々の力は微々たるものだ。それに出る宙域も限られている。そこをどうにかすればよい、という発想であったのだ。

だがこの考え方では限度があった。先にも述べたが一つ潰せばまた一つである。各国が自分達のテリトリーに海賊が出没したならばこれを叩くということをしてきたのだ。それで通商は一応は守られる。経済もだ。だが根本的な解決ではない。やはり統一され迅速に動ける中央軍の必要が強く錦されるようになってきていたのである。

そして遂に連合軍が設立された。これにより海賊は連合全域において極端にその数を減らした。これには海賊の投降と連合軍への参加を呼び掛けた戦略も大きく効を為した。当然彼等は規律から厳しく叩き込まれたがそれにより彼等は海賊から軍人へと大きく変貌を遂げた。そして海賊に怯える人々は減っていった。

だがこれを快く思わない者達もいた。

「これでは我々の裏の顔がいずれ白昼の下に晒されることになるぞ」

密かにこう考える者達がいた。その海賊達と結託していた市民団体の構成員達である。

彼等は今まで口では連合の自主性だの海賊の人権だのを主張してきた。だが実は海賊と組んで私腹を肥やしていたに過ぎなかったのだ。

無論そうした連中であるからテロリストとの関係もあった。今現在テロリストの掃討も進められており彼等の勢力は大きく減少しようとしていた。

## 第三部第三章　獅子身中の虫その六

「どうすればいい？」
彼等のある者達は密室で会談していた。
「どうすると言われても」
だが誰もよい案が思い浮かばない。だがここにある者がやって来たのである。
「そういう時にはうちの力を使えよ」
見ればテレビ局に勤めている構成員の一人である。こうした団体はよくマスコミに顔を出す。何故ならマスコミにも彼等の仲間がいるからである。
「うちのテレビ局、いや系列会社を総動員してキロモトや八条を叩く。これはかなりの効果があるぞ」
「そうか、マスコミの力を使うのか」
彼等はそれを聞いて顔を明るくさせた。
「そうだ、サラーフみたいにな」
サラーフのマスコミの力は彼等も知っていた。連合のマスコミは各国ごとに分かれているがつながりはある。もっともその企業の考え方や契約によるものであり全てが同じというわけではないが。中にはセンセーショナルなスキャンダルを好むところもあればおかたいところもある。ある政党に好意的なところもあれば別の政党に好意的なところもある。スポーツのチームにしても然り。企業家向けのところや農家向け、商人向け、ビジネスマン向けと職種ごとにも分かれていたりする。こうしたふうに連合国内のマスコミは複雑に分かれ繋がっている。なかにはこうした市民団体向けのところもあるのである。だがこうした市民団体向けのマスコミの発言権はマスコミの中では強い。やはり『良識』というものを標榜しているからであろうか。人々はこの文字に弱い。だがサラーフと違うのはネットの存在も強くマスコミだけが発言し、情報を持っている

というわけではないことである。だが彼等もまたネットを使う。
ネットにおいても彼等は暗躍した。こうした謀略はお手のものである。
「八条の黒い関係」
「軍での八条」
こうした匿名の中傷記事を流し続けた。そして彼の失脚を図ろうとした。
だがそれは全て失敗した。それ等は全て根拠のない捏造であるとすぐに論破されていった。
軍の中にも八条をよく知る人物が多くいた。彼等はその人となりをよく知っていたのだ。
「あまり面白みのない男だが」
「女性の話がやけに少ない。あれ程の男前が」
「もしかして男色家ではないかと思ったことはあるが」
そうした話は出ることはあったがおおむね彼の評判はよかった。彼は軍人としても真面目で有能であったのだ。
そして黒い関係もなかった。彼は意外にも資金には困っていなかったのだ。
彼の家は名家である。代々大きな土地を持ち企業も幾つか持っている。政治活動をするうえでも一向に差し支えない程にあったのである。
それに彼は軍事畑を歩いていたのでそうした裏の世界には疎かった。軍需産業というのは技術投資の割にはあまり採算がないのである。特に日本の軍需産業というのは他の大国と比べるとあまりに勢力が小さかった。
それはよく識者達から指摘されていた。費用のわりには性能は落ちるのではないか、と。
実際は日本の兵器の質は高かった。だが少数生産でそのうえ他国に輸出もしないのであまり需要がなくほぼ手作りだったのである。今彼等は連合中央政府の受注した兵器を製造している。兵器の開発

は連合においては国防省の技術部が行なっている。統一された兵器を開発する為だ。
結局ネットによる中傷は失敗した。次に連中が仕掛けたのはマスコミによるネガティブキャンペーンである。これも実に古典的な方法である。
印象操作や記事の捏造、改竄を行い放送を編集して流した。これにより八条を不当に貶めようとしたのである。マスコミの常套手段でありサラーフのマスコミもよく行なっている。
だがこれも失敗した。その捏造や改竄が暴露され逆に糾弾されるようになったのである。
今度は彼等に疑念が降りかかってきた。
「何故ここまで八条を攻撃するのだ？」
ちなみに当の八条は意に介さず、であった。彼は元々マスコミにどう思われようが気にしない人物であった。そしてただ自分の仕事を進めていくだけであったのだ。
これが逆に効いた。マスコミだけがムキになりその異様さが浮き彫りになったのだ。
「おかしくないか？」
ネットで彼等はそう指摘された。
「八条にいられると何か不都合でもあるのか？」
そして誰かが調べはじめた。そのマスコミの構成員と人物関係を。そして驚くべきことがわかったのである。
彼等はとある市民団体と密接な関係にあった。これは以前より指摘されそれを批判されてきていた。そしてその市民団体のメンバーの交友関係もわかった。
何と彼等のメンバーの多くはテロリストのメンバーと交遊であった。これは彼等が学生時代に知り合った関係でありその資金もテロリストからによるものが多かった。テロリストはよく密輸や麻薬の密造で資金を得ていた。反権力や革命を唱える者達の正体は犯罪者であったのだ。

そして宇宙海賊ともつながりがあった。彼等の中に海賊と親戚の者がいたのだ。
「何だこりゃ、テロリストや海賊と関係があるのかよ」
そうした意見がネットに集まった。
「よくあることだ」
「むしろ充分考えられたことだろうが」
ネットでそうした意見がまじあわされることになった。そしてそのマスコミと市民団体は次第に追い詰められていった。
そして彼等は遂に警察の捜査を受けた。この時代マスコミは聖域ではなかった。そうした風潮がその権力集中と腐敗を招いたことを皆知っていたのである。
捜査の結果そのマスメディアと市民団体、そしてテロリストや海賊との関係が暴露された。彼等は裁判にかけられ実刑判決を受けた。
「私をやけに攻撃してくると思っていたら彼等が自滅したな」
八条はテレビを見ながら半ば他人事のように言った。彼にとっては歯牙にもかけない連中だったのである。
八条はテレビを見終わると仕事に取り掛かった。彼にとってはそうした輩よりも目の前にある多量の書類の決裁の方が遥かに重要だったのである。
連合はこうしてその軍を着々と整備していっていた。それをエウロパは苦々しげに見ていた。
「奴等は次にはどう動くか」
こうした議論がよくなされるようになった。そのまま連合内から動かないか、サハラに進むか。それともマウリアを併合してしまうか。
「マウリアはないだろう」
そうした意見が主流を占めた。マウリアとは長年に渡る盟友関係があり互いにその交流は深い。経済的にも密接な関係にある。それにマウリアの国力も意外と高くその地形も複雑である。連合が無理をして攻める理由も見当たらなかった。

ではサハラか。これも今のところ考えられなかった。サハラ東方の大国ハサン王国とは同盟関係にある。それに彼等を通じて三角貿易も行なっている。彼等にとってハサンは重要な相手であった。
従ってサハラも今のところ考えられなかった。サハラに連合の脅威となるような政権が誕生するか何か特別な資源が多量に発見されないかぎりは。
では残る連合が取り得る道は二つである。
まずは連合国内に留まる。今まで一千年に渡って動かなかった。今更動くとは考えられない、というものである。最も可能性の高いケースとして考えられた。連合は基本的に満ち足りており特に他国を攻める理由はない。しかしこれは確証がない。断言はできなかった。そして問題は最後のケースである。
エウロパ侵攻。その整えた戦力で以ってエウロパに侵攻を仕掛けてくるというものである。連合とエウロパの国力差は人口、経済力共に三十倍の開きがある。その差は圧倒的であった。宿敵といっても最早その差は歴然たるものであった。やはり当初の人口の差と宇宙開拓での遅れが今だに響いていた。
「しかし我々にはニーベルング要塞群があるではないか」
こう主張して安心しようとする者もいる。だがそれは不安の裏返しであった。
実際にエウロパの者達が今まで最も恐れてきたことは連合の侵攻であった。だがそれは一千年の間なかった。しかし常に潜在的な脅威としてあった。
ニーベルング要塞群がもし陥落したならば。その時はもう連合を止める手立てはなかった。エウロパの地形は平坦でありブラックホールもアステロイド帯も磁気嵐も殆どない。ただ星系が連なっているだけである。
そこを大軍が雪崩れ込んで来たならばどうなるか。それは子供でもわかることであった。
「そのことで今本土は騒然としているようだ」

マールボロは司令室においてモンサルヴァートに話した。
「当然ですね。もしそうなればエウロパは忽ち連合により蹂躙されてしまいます」
モンサルヴァートは落ち着いた声で答えた。実際彼はそうしたケースを以前より考えていた。だからこそ冷静でいられたのである。
「そうなるも最早サハラに進出どころではない。本土が危ういのだからな」
十字軍の時の欧州に似ている、モンサルヴァートはそれを聞き思った。
十字軍もアラブへ進出している時に東からモンゴルの襲来を受けた。欧州はその騎兵の前に風前の灯火となった。ドイツやポーランド、ハンガリーの騎士団は瞬く間に壊滅し東欧はモンゴルのものとなった。欧州全土がその蹄の下にひれ伏すのは時間の問題かと思われた。
だがここでモンゴルであることが起こった。モンゴルのハーンであり最高司令官でもあるオゴタイ＝ハーンが死去したのである。これによりモンゴルは兵を引き上げ二度と欧州を攻めることがなかった。あの時オゴタイが死ななければモンゴルは欧州を席巻していたことは間違いない。そうなれば歴史は大いに変わっていた。
「君はニーベルング要塞群についてどう考えているかね」
マールボロはモンサルヴァートに問うた。
「ニーベルングですか」
古の邪な小人が作り出した呪われし指輪の名を冠した要塞群である。一個の惑星を要塞としその周囲に十六の人口惑星を配置している。その防御は固く難攻不落と呼ばれている。
「確かにニーベルング要塞群の守りは固いです」
モンサルヴァートは率直に己が意見を述べた。
「ですがあまり頼り過ぎるのは問題かと思います」
「どうしてだね？」

「あの要塞群に頼りきるあまり他の防御が弱くなってしまいます。そうなれば若しニーベルング要塞群が陥落した場合エウロパを守るものはなくなります」
「つまり他の防衛力をも整備すべきであると考えているのだな」
「その通りです。何しろ連合と我等の国力差は歴然としています。そうそう簡単に守れるとは思わないほうがよろしいかと」
「そうだな。私もそう考える」
マールボロはそこまで聞いて自分の考えをようやく述べた。
「今のエウロパの備えはあの要塞群しかないのが実状だ。確かにそれだけでは心もとない」
「はい」
「他の整備もしておかなくてはならない。そしてこれは急を要する」
そうであった。連合が若し動けばどうなるか。それはもう明らかであった。
「艦隊も必要だな。その他の港湾施設や基地の整備も」
「やはりそうした整備が不可欠です」
「そうだな、あの圧倒的な国力を考えるとそれでも心もとないが」
やはり人口の差が出ていた。三十倍もの開きは覆しようもないものであった。
しかもエウロパにはこれ以上の余剰人口は養えなかった。その為にサハラに侵攻し植民をしているのだ。東にはその連合が存在する。北方と西方は星系が一つもない。人の居住可能な星系までは数十万光年もあると考えられている。おいそれと行けるものではない。
従って戦力を拡大させるにも限界がある。それをどうすべきか。
「この総督府の軍を一部本土へ戻そうかという考えも出ているのだが」
「致し方ありませんね」
モンサルヴァートもそれを考えていた。それでも守れるかどうかというと心もとないが。

## 第三部第三章　獅子身中の虫その七

「ところで私は一つのことを考えているのだが」
「何でしょうか」
モンサルヴァートは問うた。
「徴兵制を意見してみようと思うのだ」
「徴兵制ですか」
「そうだ、あれなら兵力をかなり増強できる。そうすれば連合にも何とか対抗できるのだが」
「それはあまり意味がないかと思います」
モンサルヴァートは首を横に振ってそう進言した。
「何故だ？」
「今でさえ兵力は限界にまで保持されています。徴兵してもあまり意味はない程に」
「・・・・・・そうだったな。最近は我々も傭兵を使いだしている」
「はい」
彼等はあまり嬉しそうではなかった。傭兵はサハラの傭兵達のことを知っている為あまり使いたくはなかったのだ。だがこの前連合軍の設立に危惧を覚えた中央政府と議会がそれを承認したのだ。
この時に徴兵制度の導入を主張する者もいた。だがこれはそこまでする必要はないのではないか、という多くの意見により下げられた。ここには軍務に就くのを嫌う若年層の意見もあった。今まで一千年もの間徴兵制度はなかった。今すぐそれを言ってもやはり誰も動かなかった。
「それよりもプロを使った方がいいだろう」
そうした意見により傭兵が使われるようになった。エウロパの者だけでなく連合やサハラから流れてきた者もおりその出自も言語も様々であった。
「だがやはり規律で問題がある」

「そうですね。元々戦争をビジネスと考えている者達ですから」
傭兵にとって掠奪は当然の報酬であった。シャイターンの傭兵隊が人気がある理由は将兵に極めて多額の報酬を支払いそれにより掠奪を防ぎ、かつ軍律が厳しいからである。
「我々の軍律に当てはめてはいるがな」
「隙があらば破ろうとしますね」
「その通りだ、抜け目もない」
前線の指揮官達にとって傭兵達はあまり歓迎すべきものではなかったのである。
「それにこれからの軍備増強案が具体的にどういったものになるかはまだわかりませんがおそらくエウロパの財政が許す限りのものになるでしょう。やはり徴兵制の導入による多大な兵を維持するのには無理があるかと」
戦争は兵士の数だけでするものではない。装備や基地、補給、情報通信等そうしたものの整備も必要なのである。そうしたことを整えてはじめて戦争が可能となるのである。
「選抜徴兵制も駄目か。これも意見が出ていたな」
「わりかしいい考えだとは思いますがそれも市民の反発により下げられましたね」
「うむ。こうしてみると我々の置かれた状況は苦しいものがあるな」
「はい」
今エウロパは連合、マウリアに次ぐ第三の人口を有している。確かに個々の惑星は豊かであり生活水準も高い。環境は連合よりもいいと言える。その為貴族達は優雅な生活を楽しみ市民達も落ち着いた暮らしができる。こうしたところはあくせく働いている感じの強い連合とはまるで違っていた。人口問題はあるが彼等は比較的いい生活をしていたのである。
だが人口の差は如何ともし難い。連合との差と限界に達した領土の開拓、そして余剰人口、こうした相矛盾する問題が彼等を悩ませていたのである。

「北方や西方に行けたらいいのだがな」
「流石に何十万光年も移動は出来ませんね」
「そうだな。それが出来れば最初から苦労はしない」
マールボロは半ば溜息混じりに言った。
「実はそれで君に中央政府から話が出ているのだ」
「中央政府からですか？」
「そうだ。本土に戻って来て欲しいという話だ」
「本土にですか」
「うむ、そして防衛計画の総責任者になってもらいたらしい」
「そうですか」
「異論はあるかね？今なら断ることができるが」
「いえ」
モンサルヴァートは首を横に振った。
「私はただ自分の与えられた任務を忠実に行なうのみです」
「そうか、では行ってくれるな」
「はい」
こうしてモンサルヴァートは総督府から本土へ戻ることとなった。彼の新しい肩書きはエウロパ中央軍統帥本部長であった。これは軍の作戦等を統括する組織である。
彼の移動に伴ってサハラ総督府のスタッフも大幅に変わった。各艦隊の司令や参謀本部の上層部はのきなみ本土へ移った。これはモンサルヴァートが彼等の意見を求めたからであった。
「統帥本部に来るのも久し振りですね」
ベルガンサは本部長室で部屋の中を見回しながら言った。
「そうだな。私も一度ここで勤めたことはあったが」
彼も以前ここにいたことがある。その時は大佐である部門の責任者であった。
「そしてここに戻って来られたというわけですね。栄達して」
「栄達という言葉は余計だ。私は軍の一つの職務に就いているだけに過ぎない」

彼はそうした言葉が好きではなかった。
「ところで閣下、早速ですが」
「うむ、仕事だな」
「いえ」
ベルガンサは微笑んで首を横に振った。
「私は今は書類を一枚も持っておりませんよ」
「では何だ？てっきりサインするべき書類を持って来たのかと思ったが」
「伝言がありお伝えに来たのです」
「伝言！？」
「そうです、総統からです」
「総統から」
ラフネールである。エウロパの元首である。
「はい、是非閣下にお会いしたいそうです」
「一体何の用だ」
「そこまでは。もしかすると結婚を勧められるとか」
「おい、私は既に婚約しているぞ」
ベルガンサの冗談に口を挟んだ。
「どうされますか？」
「断る道理もないな」
彼は言った。
「では行かれますね」
こうして彼はベルガンサを連れて総統官邸に向かった。
官邸は宮殿であった。ロココ様式をもととした優雅な造りとなっている。オレンジをもととしており内部には様々な装飾品や芸術品が置かれている。
「前から思っていたのだが何処かで見たようだな」
「この宮殿はサンスーシーをモデルにしているらしいですからね」
ベルガンサが答えた。サンスーシーとはプロイセンのフリードリヒ大王がポツダムに建てた宮殿である。かってのフランス語で『憂

いなき宮殿』という意味のその宮殿はロココ芸術の代表的なものである。
「サンスーシーか。そういえば似ているな」
エウロパが地球から持って来た欧州にもある。幾度か改修されているがその外観は残っている。
「そういえばサンスーシー自体はまだ見たことがないな」
「そうだったのですか？」
「うむ。忙しさにかまけて。一度見てみたいとは思っているが」
「でしたら一度欧州各地を見られてはどうですか？他にも色々とありますし」
「そうだな。暇になった時にでも」
二人はそんな話をしながら宮殿の中に入った。
宮殿の中も豪奢な装飾で彩られていた。多くの芸術品がありそれがみらびやかに飾っていた。二人は案内されながらその中を進んでいった。
「こちらです」
やがて総統の執務室の前に着いた。
「では私はここで」
ベルガンサは扉の前で立ち止まった。
「あ、大佐はこちらへ」
彼は案内役に導かれ待合室に向かった。モンサルヴァートの前で別の案内役が扉を開けた。
「モンサルヴァート上級大将が来られました」
案内役がその部屋の主に言った。
「お通ししてくれ」
ラフネールの声がした。案内役はそれを聞きモンサルヴァートに言った。
「どうぞ」
案内役に導かれ彼は部屋の中に入った。中ではラフネールが部屋の中央に立っていた。

「招きに応じよく来られました」
彼はそう言って自分の方に歩いてきたモンサルヴァートに手を差し出した。
「これはどうも」
彼も手を出した。そして握り合った。
「ご苦労。席を外してくれ」
ラフネールは握手を終えると案内役に対して言った。
「わかりました」
案内役は頷くと礼をして部屋を去った。部屋には二人だけとなった。
「今回卿を呼んだ件ですが」
「本土の防衛計画についてでしょうか？」
モンサルヴァートは早速問うた。
「はい。卿はどうお考えですか？」
「まずは艦隊を増強したいと考えております。やはり戦いの主力ですから」
「やはりまずは艦隊ですか」
「そうなるかと。それに伴い港や後方基地の整備も行ないます。当然軍事基地も各地に置きたいと考えております」
「つまり本土全土の防衛をさらに強化するのですね」
「はい。やはりニーベルング要塞群だけではいざという時心もとないですから」
「ニーベルング要塞群にはあまり信頼を置いていないように見受けられますが」
ここでラフネールはあえて尋ねてきた。
「そういうわけではありません」
モンサルヴァートはそれを否定した。
「ニーベルング要塞群は確かに強力です。エウロパ本土防衛の要であることは言うまでもありません」
それはモンサルヴァートもよくわかっていた。

「ですがそれに完全に頼りきるのはよくありません。他がおろそかになってはもしもの時に対処できません」
「成程」
ラフネールはそれを聞き頷いた。
「当然ニーベルング要塞群の増強も考えています。しかしそれだけではならないのです」
モンサルヴァートは言葉を続けた。
「この首都オリンポスを中心とした防衛システムを完成させたいと考えています。そして有事には何としても敵の侵攻を防ぎます」
「敵とは連合のことですか？」
「はい」
それは言わずもがな、であった。
「連合とは一千年もの敵対関係にあります。そして彼等と我々の国力差を考えますと最大の脅威です」
「卿は連合がこのエウロパに侵攻して来ると考えているのですか？」
「その可能性はあります。もし中央政府にそうした好戦的な政権がつく可能性が」
「あらゆるケースを考えておく必要があると」
「その通りです、そうでなくては国は守れないかと」
「成程、よくわかりました」
ラフネールはそこまで言うと大きく頷いた。
「今回の計画は貴方に一任しましょう。予算の件は議会に話しておきます。おそらくかなりの額が必要になるでしょう」
「申し訳ありませんが」
「いえ、いいです。国防の為には止むを得ません」
軍事関係はかなり金がかかるものである。しかも出費ばかりで収入はない。経営という点から考えるとこれ程不健全なものもないだろう。
だが金をかけずにはいられない。さもないと国が守れないからだ。それがわかっていない者は政治を語る資格がない。軍事不要の政治、

それは最早宗教的な話である。
「それでは期待していますよ」
「有り難うございます」
モンサルヴァートは礼を述べた。
「あともう一つお話しておきたいことがあるのですが」
「何でしょうか」
「はい」
ラフネールは机の前に向かった。そしてその上にあるものを手に取った。
「これを卿に」
そう言うと彼にそれを手渡した。
「これは・・・・・・」
それは階級章であった。元帥のものである。
エウロパの軍制度において元帥は第二位の階級である。軍においては数十人、時には百人程存在する。
「卿は統帥本部長なのです。元帥になるのも当然でしょう」
「しかし私は元帥になるにはまだ」
早いのではないか、と言おうとした。年齢的な問題である。
「いえ」
ラフネールはそれに対して首を横に振った。
「卿のこれまでの功績を考えても、今の職務を考えても当然です。これは既に私が決めたことなのです」
「総統が・・・・・・」
「はい、これからも期待していますよ」
「わかりました」
モンサルヴァートは敬礼した。そして彼は元帥の階級を有り難く受け取った。
彼の防衛計画は的確であった。これによりエウロパの国防は大きく変わることとなった。

この頃サラーフでは睨み合いが続いていた。ムスタファ星系に足掛かりを置くオムダーマン軍とサラーフ軍が対峙していたのである。
対峙といってもサラーフはいまだに焦土戦術を行なっていた。だがこれは国内のマスコミには甚だ不評であった。
「何故逃げるのか！」
「今の軍は腰抜けだ！」
こうした言葉が新聞の一面やテレビに次々と出た。
そしてそれに便乗するようにナベツーラ派が威勢のいい言葉を言う。マスコミは彼等を英雄視して政権に相応しい、とまで言った。
「マスコミの公共性はどうなったのだ」
こうしたことを言う人もいた。だがそうした心ある言葉はマスコミの大声と偏向した報道により掻き消された。最早サラーフはマスコミに完全に牛耳られていたのだ。
「馬鹿者共が」
サラーフの首相であるサレムは自身の執務室で新聞を読みながら忌々しげに呟いた。その一面には政府と軍焦土戦術を激しく非難する言葉が羅列していた。
それだけではない。そこにははっきりと書かれていた。
『ナベツーラを政権に』
と。何処までも公共性を無視していた。
「全くです。あの連中に政治や戦略がわかる筈もありませんが」
サレムの前に立つ男が同意した。軍務大臣のハルージャである。
「それはわかっているつもりだが。しかし連中はナベツーラがサラーフを救うと本気で思っているのか！？」
「どうやらそのようで」
「何もわかっとらん」
サレムはそう言って首を横に振った。
「あの連中にサラーフを救うつもりなどない。あるのは権力を手にすることだけだ」
無論彼等も権力への執着はある。だがナベツーラ達程ではなかっ

た。そして責務もあった。
「ですがマスコミの突き上げは日増しに強くなっております。しかもそれに乗じてナベツーラ達が」
「それもわかっている」
サレムの表情は晴れなかった。
「止むを得ん。兵を動かすとしよう」
「はい」
「確かムスタファに援軍が送られているそうだな」
「そのようですね。ブーシル方面からですが」
「そうか、ブーシルからか」
サレムはそれを聞くと考え込んだ。
「今どれだけの艦隊が動けるか？」
「二十個艦隊程です」
「まだまだ二十四個艦隊に戻すには時間がかかるな。動くのはそれからにしようと考えていたが」
「残念ですが」
二人は口惜しげに呟いた。
「だが仕方がない。まずは些細なものでも勝利を得る必要がある。マスコミとナベツーラ達を黙らせる程度のな」
「ですね。では七個艦隊程用いて援軍を叩くとしましょう」
「そうだな。では今すぐに動ける艦隊を選んでムスタファ星系とブーシル星系の間に向かわせよう。すぐにな」
「わかりました」
「おそらく今度の戦いで決まるな」
「我々が勝つか、ナベツーラが勝つか」
「それもあるがな」
「他にもあるのですか？」
「それは・・・・・・」
サレムは言おうとしたがそれを止めた。
「いや、ない」

そして顔を下に向けて首を横に振った。
「その話はいい。まずは勝とう。そうすれば焦土戦術を続行出来る。オムダーマン軍を疲弊させる為のな」
「ですね。やはり今回の戦いはあの戦術が最も効果があるかと。我が国の国土を考えましても」
「君の意見だったな。それは感謝している」
サラーフの領土は広い。そしてカッサラから首都アルフフーフまでかなりの距離があった。その距離を利用してハルージャは焦土戦術を提案したのだ。
これは確かに効果的であった。だがアッディーンはその意図を見抜きムスタファ星系に足掛かりを築き長期戦に入った。これは彼等の誤算であった。
「あの男が足掛かりを築くとは思わなかったしな」
「ですがそれでもアルフフーフとの距離はかなりのものがあります。それを考えますと」
「わかっている。そうして疲弊を待ち、機を見て攻勢を仕掛けるという君の考えは間違ってはいない」
「有り難うございます」
「ただそれはあの愚か者共にはわからんだけだ」
これで幾度目だろう。ハサンはまたもや顔を顰めた。
「だからこそ勝たなければならん。サラーフを救う為にもな」
「はい」
二人は頷き合った。そして数日後七個艦隊が首都アルフフーフから出撃した。オムダーマンの援軍を叩く為に。

# 第三部第四章　命運は決するその一

命運は決する

サラーフの艦隊が動いたということはすぐにムスタファ星系にいるオムダーマン軍にも伝わった。それを聞いたアッディーンはすぐに各艦隊の提督達と参謀達を集めた。

「諸君、遂にサラーフが動いた」

アッディーンが席につく提督や参謀達に対して言った。

「やはり来ましたか」

参謀達は予想通りだといった態度で答えた。彼等とて馬鹿ではない。こうしたことは考えていた。

「ブーシルから援軍に来る我が四個艦隊を叩くつもりのようだ。ブーシルとこのムスタファの間に向かっている」

「問題は何処で襲撃を仕掛けて来るか、ですね」

副司令となっているガルシャースプが言った。

「そうだ、問題はそこだ」

アッディーンはその言葉に対し頷いた。

「シンダント准将、貴官はどう見るか」

「ハッ」

主だった参謀達は皆将官に任命されていた。シンダントはアッディーンに問われ席を立った。

「おそらくはオーレフ星系の辺りで攻撃を仕掛けて来るものだと思われます」

「オーレフか」

「はい、この星系が最もアルフフーフからの交通が容易ですし。そのうえアステロイド帯も多く襲撃を仕掛け易いかと」

「アステロイド帯か」

アッディーンはそれを聞いて考え込んだ。そして言った。

「今高速艦隊はどれだけあるか」

「高速艦隊ですか？」
アステロイド帯の話をしていたのにいきなり高速艦隊の名を出されたので皆戸惑った。
「そうだ、高速艦隊だ」
アッディーンはそれに構わず問うた。コリームアがそれに多少戸惑いながら答えた。
「私の艦隊がいけますが」
「あと私もです」
マトラが名乗り出た。
「そうか、二個艦隊か。あとは俺の直率艦隊もあるな」
アッディーンはそれを聞きながら言った。
「よし、すぐに発つぞ。行き先はオーレフ星系だ」
「は、はい」
提督達はそれを聞いて答えた。
「他の者はムスタファに留まっていてくれ。その間の指揮はガルシャースプ中将が執る」
「わかりました」
ガルシャースプはそれを聞き頭を垂れた。軍帽を被っていないので敬礼はしない。
「ではすぐに行くぞ。コリームア中将、マトラ中将、いいか」
「はい」
「わかりました」
二人は答えると席を立った。
「ではこれで決定だ。おそらくこれに勝てばサラーフで大きな動きが起こる」
それは政変を指し示していることは言うまでもなかった。
「これで軍議を終わる。アッラーよ、我等に勝利を！」
「アッラーフアクバル！」
彼等もムスリムである。アッラーのことは常に心の中にある。
その名を叫んで勝利を祈った。そしてそれぞれの任務に戻った。

すぐに艦隊が動いた。アッディーンは自らの率いる艦隊とコリームア、マトラの両艦隊を率いてオーレフへ向かった。

さてサラーフであるが会戦があることはもう皆知っていた。その結果を見守るだけである。

「御前はどっちが勝つと思う？」

ナベツーラは自らの事務所に自分の取り巻き連中を集めていた。そして彼等に尋ねた。

「それは決まっているではありませんか」

醜く太り重い瞼を持つ色の黒い男が答えた。ナベツーラの狂信者と言われるトクンである。慈善家という触れ込みだがその実は福祉を利権にしている男である。

「オムダーマンが勝ちますよ」

「というかあの連中に負けてもらわなくてはね。我々が政権に就くことはできません」

スキンヘッドにした痩せたガチャメの小男が下卑た笑いを出しながら言った。この男の名はテリームという。感情的な暴論を以って反対派を罵倒することがこの男の得意技である。普通の者ならその出鱈目な論理と浅はかな思考、そして愚劣そのものの言葉に閉口するのだがマスコミでは『正義を愛する毒舌家』である。

「まあ奴等は負けてもらわなくては。何なら情報を流しましょうか？」

薄く汚い髪を持つ顔中疣だらけの男が言った。トクンやテリームも醜悪な顔立ちだがこの男の醜さは際立っている。この男の名はエジリームという。ナベツーラを賛美するマスコミ達の頂点に立つ男である。

「いいな、それは」

ナベツーラは葉巻をふかせながらその言葉に対し頷いた。

「どんどん流せ。何処に向かっているかまでな。オムダーマンの方にもよくわかるようにな」

「わかりました」
エジリームは無気味で醜い笑顔で答えた。
「選挙の方は上手くいっているのだろうな」
「はい、それはもう」
トクンが答えた。
「資金は豊富にありますし。サレムへのネガティブキャンペーンも順調です」
「そうか。ならいいんだ」
ナベツーラはそれ以上聞かなかった。どうやら選挙には自信があるようだ。
「いいか、勝つ為には手段を選ぶな」
「それはもう」
「どんな汚いことをしても構わん。スキャンダルを次々とでっち上げろ」
「はい」
それにはエジリームも頷いた。
「人を貶めるには下半身からだ。たとえ嘘でもそいつの名声は確実に落ちる」
「ですね」
「下手な汚職より効果がある。そうだな、サレムが幼女を犯しているってのはどうだ」
「それはよろしいですね」
トクンとエジリームはそれを聞いて太鼓判を押した。サラーフにおいては幼児虐待が最も忌まわしい悪行の一つと考えられている。殺人と並ぶ程である。
「そしてテリームはこれまで通りテレビで相手を攻撃しろ。容赦はするな」
「お任せ下さい」
テリームは下卑た笑いで答えた。
「どんどんやれよ、買収も怠るな。それはトクンがやれ」

「はい」
「工作はエジリームだ。マスコミを総動員しろ」
「わかりました」
「これでいい。いいか、政権についたら俺達の思うがままだぞ。その時を楽しみにしていろ」
「はい！」
こうして四人はその場をあとにした。そしていかがわしい店で朝まで過ごした。

## 第三部第四章　命運は決するその二

「何という醜い番組だ」
ムスタファ星系に残りアッディーンのかわりに指揮を執るガルシャースプはサラーフのテレビ番組を見て思わず顔を顰めてそう言った。
「あのテリームという男は頭がおかしいのか？」
そう言って側にいるシャルジャーに対して問うた。見ればテリームは下品な言葉で相手を罵倒している。
「御前等が無能だからそうなったんだよ、この屑！」
「黙れ、阿呆が！」
テリームは吠えている。ガルシャースプはそれを見てまだ顔を顰めている。
「あれがサラーフを代表する論客なのです」
シャルジャーは答えた。
「論客！？精神病院の患者ではなく、か」
「はい」
「・・・・・信じられんな。しかもさっきはハサン首相の下半身のスキャンダルまで喚いていたぞ。あれは立派な名誉毀損ではないのか！？」
「少なくともサラーフではそうではないようです」
「何故だ」
「この男がナベツーラの腹心の一人だからです」
「どうやらあの国のマスコミは相当腐敗しているようだな」
「はい、その証拠にこれを御覧下さい」
シャルジャーはそう言うと新聞をガルシャースプに手渡した。
「サラーフの新聞か」
ガルシャースプはそれを手にしながら言った。
「はい」

シャルジャーは再び答えた。
「ふむ」
ガルシャースプはそれに目を通した。するとその顔色がみるみるうちに変わっていった。
「・・・・・・何だこれは」
そしてシャルジャーに対して問うた。
「サラーフの最も質が高く売れている新聞です」
「これでか」
普段の冷静な様子とはうってかわって怒りを露わにした顔になっている。
「私は何処かの醜悪なイエローペーパーかと思ったが」
「私もそう思いましたよ」
シャルジャーは言った。
「しかし他はもっと酷いですよ。よろしければ御覧になりますか？」
「いや、いい」
ガルシャースプは首を横に振った。
「あまり不快な気分は味わいたくはない。読む価値のないものを読んでな」
そう言うと新聞を机の上に投げ捨てた。
「あながち読む価値がないとは言えませんよ」
シャルジャーはそれを手にしながら言った。
「それはどうしてだ！？」
ガルシャースプはシャルジャーの言葉に顔を向けた。
「ここを御覧下さい」
彼はそう言うと新聞の政治欄を開いた。
「これは・・・・・・」
見ればサラーフ軍の動向が書かれている。軍の今の高官の考えや発言、スケジュールまで。そして軍の展開等も。
「何故こんなものがマスコミに載るのだ！？」
どれもこれも軍事機密クラスのものであった。それを見たガルシ

ャースプは思わず目を点にした。
「ナベツーラ達が故意にマスコミにリークしているようですね」
シャルジャーは言った。
「リーク！？」
「はい。報道の自由を楯にね。政府もそれを出されて何もできないそうです」
「馬鹿な。こんなことをしたら敗戦は確定的ではないか。サラーフのマスコミは何を考えているのだ！？」
「敗戦こそが彼等の願いです」
「それはどういうことだ！？」
ガルシャースプには訳がわからなかった。自国が敗れて喜ぶ者がいるということなど信じられなかった。
「敗れればナベツーラ達が政権に就きますから」
「・・・・・・そういうことか」
ガルシャースプはそれを聞いて忌々しげに言った。
「つまり連中にとっては多くの兵士や国家のことよりも自らのことの方が大事だということか」
「ええ。少なくともナベツーラとマスコミは」
「・・・・・・わかった。どうもサラーフという国は根本から腐っているようだな」
「マスコミは少なくともそうですね」
「・・・・・・しかしわからないな」
ガルシャースプは首を傾げて言った。
「何故サラーフのマスコミはここまで腐敗しているのだ？」
「おそらく他に情報を伝える手段がないからでしょう」
「そうか、この国にはネットがなかったのだな」
「はい。情報を独占したらどういうことになるか」
「それはわかっている」
ガルシャースプも歴史のことはよく知っていた。二十世紀の世界ではそのマスコミの力が異様に増大していた。中にはその力をもっ

て思うがままに振る舞っていた者達もいた。
「まさか今ここで見るとはな」
「私も正直驚いています」
シャルジャーは言った。
「ですがこれは我が軍にとっては有利なことですね」
「そうだな。敵の動きをわざわざ教えてくれるのだからな。これ程有り難いことはない」
「ではアッディーン司令にはすぐにお伝えしましょう」
「ああ、頼む」
「ハッ」
シャルジャーは敬礼してその場をあとにした。ガルシャースプはそれを見送りながら呟いた。
「この国のマスコミは放っておいては危険だな」
再びその新聞を手にとった。
「今度はオムダーマンを腐敗させかねない。それだけは許さん」
そう言うとその新聞を部屋の脇にあるシュレッダーにかけた。新聞跡形もなく千切られた。
テレビを見る。まだテリームが喚いていた。
「消えろ」
そう言ってテレビを消した。
「この男の顔は二度と見たくはないな」
「同感です」
シャルジャーは顔を顰めて言った。
「この連中生かしておいたらどうなると思う？」
「我々がサラーフに勝ったあとでですか？」
「そうだ。貴官の考えを聞きたい」
「おわかりだと思いますが」
シャルジャーはそれに対して言った。
「それはそうだが」
ガルシャースプはそれに言葉を返した。

「碌なことにはならないでしょうね。何かしらの形で我が国に必ず害を与えるかと」
「今ああしてテレビで喚いているようにな」
「はい。消すべきですね」
「やはり」
ガルシャースプはそれを聞いて頷いた。
「ですがそれはあとでいいですね」
シャルジャーは怒りから戻って答えた。
「戦いが終わったあとの戦後処理でやればいいことです。もっともそれは我々の仕事ではないでしょうが」
「そうだな。政府に任せよう。しかし」
ガルシャースプはここで口調を変えた。
「連中がどういう者達かはよく知らしておいた方がいいな。我が国の今後の為にも」
その声は深い怒りに満ちたものであった。
「はい」
シャルジャーは頷いた。彼の声にも深い怒りがあった。

## 第三部第四章　命運は決するその三

「この連中はすぐに消す。何はともあれサラーフとの戦いが終わったらそれだけは確実にしなければならない」
「ですね」
「だがやはりそれはまだ先の話だ」
ガルシャースプは話を戻した。
「まずは戦いに勝たなくてはな。そう、奴等がサラーフの政権に就くように」
彼はそう言うとニヤリ、と笑った。
「そしてそのあとで、ですね」
シャルジャーも言った。二人はそう言うと席を立った。
「司令には事細かにお伝えするとしよう」
「ええ、サラーフのマスコミの報道を」
「それだけで今の戦いは勝てる。確実にな」
「はい、よく考えたらこれ程戦い易い戦いもありませんね」
「全くだ。それにしてもよく言ったものだ」
ガルシャースプは消したテレビに目を向けた。
「有能な味方より無能な敵の方が有り難いとはな」
「はい」
二人は頷くとその場をあとにした。
以後ムスタファ星系に駐留するオムダーマン軍はサラーフのマスコミの報道を逐一知らせていた。
「そうか、どうやらサラーフのマスコミというのは相当今の政権に負けて欲しいのだな」
それを見たアッディーンが言った。
「それにしても信じ難い。自国の軍の動きを公表するとはな」
「それが彼等の狙いなのでしょう」
コリームアが言った。

「今こちらに向かっているサラーフ軍には負けて欲しいのです」
「ナベツーラが政権に就く為にか」
「はい」
「腐っているな。これは完全な利敵行為だ」
「そうですがサラーフでは全く問題になっておりません」
「マスコミが行なうからだな」
「その通りです。サラーフではマスコミが絶対なのですから」
「・・・・・・呆れた話だ」
アッディーンはそれを聞いて嘆息した。
「しかしわからないことがある」
「何でしょうか？」
コリームアはアッディーンの問いに対して尋ねた。
「何故サラーフではこれ程マスコミの力が強いのだ？ネット等はないのか？」
「それはサラーフの建国からはじまります」
コリームアは言った。
「建国から！？」
「はい。当時サラーフでは電力不足が懸念されていまして」
「それは聞いたことがある。当初領土とした惑星のどれもが資源に乏しかったそうだな」
「はい。それの節制の為にネットを禁止したのです。そして情報にはマスメディアに一任したのです」
「だがその後資源の豊富な星系を次々と手に入れたが」
「それでもマスメディアは一度握った権益を二度と手放そうとはしませんでした。そして今に至るのです」
「そうしたことがあったのか。止むを得ない事情からだったのだな」
「はい」
こうしたことはサラーフだけでなく多くの国でもあった。連合でもそうである。だが連合は各地にネットを回線させることを積極的に推進させたのでサラーフのような事態には陥らなかった。サハラ

の他の国々の場合はそうした国は滅ぶか新領土を手に入れた時点で変わったのでそうしたことはなかった。サラーフ独特の問題であった。
「それがナベツーラの様な輩を跳梁させてしまうことになるとはな」
「マスメディアの恐ろしいところですね」
コリームアは言った。
「ああ。、情報を独占し時には捏造する。かつてそれにより多くの悲劇が起こった」
その為マスメディアに対して懐疑的な者も多いのがこの時代の人々である。
「ネット等の普及によりそれは大分抑えられるようにはなりましたが」
「ネット等がない場合には繰り返される、か」
アッディーンは噛み締めるようにして言った。
「はい、人間というのはやはり繰り返してしまいます」
「それも歴史か」
アッディーンはそれを聞いて司令室の椅子に座った。彼等は今旗艦アリーの中にいる。オーレフに向かう途中である。
「残念ながらそうですね」
コリームアは答えた。
「今回のこのサラーフのマスコミの行動もそうです。こうした自らが権力を維持する為に自国の者を陥れるということは何度も見られました」
「それにより国が潰れたことも」
アッディーンは言葉を返した。
「そうですね」
コリームアはそれを聞いて表情を暗くした。
「それを行なう連中はいつもそれがわかっていない。不思議なことだな」
「それも人間です。自分のことは案外目に入らないものなのです」

「そうだな。俺もそれはわかっているつもりだ」
アッディーンはそれを聞いて席を立った。
「皆俺をやれ若き名将だオムダーマンの獅子だの呼ぶがな」
「名誉なことではないですか」
「確かにな。他の者はそう言うだろう」
アッディーンはコリームアを横目で見ながら言った。
「だが俺はその時にどう戦えばいいか、それを考え動いているに過ぎない。確かに勝つ自信は常にある」
「それだけで充分だと思いますが」
「それはそうだ。だが俺は戦いに勝ちたいが別にそうした名声にはあまり興味がない」
「意外ですね」
コリームアはそれを聞いて思わず目を丸くさせた。
「軍人になりたくて幼年学校に入った。そしてすぐに戦場に行きたいから士官学校には進まずにそのまま軍人になったのだがな。知らなかったか」
「いえ、幼年学校を出てすぐに軍に入られたのは知っていましたが」
コリームアは答えた。これはオムダーマンの軍人では珍しいことであった。
普通幼年学校から士官学校へ進む。それから少尉に任官して軍役に就くのだ。
幼年学校からだと准尉からはじまる。そしてその昇進もやはり士官学校卒業者よりは遅い。
「それでもよかった。とにかく戦場に行きたかったのだ」
「何故ですか？」
変わっていると言えば変わっている。自ら死地に赴きたいとは。それが軍人の務めだとしても。
「幼い頃から戦争の話を見たり読んだりしていてな。それでそうしたんだ」
「そうだったのですか」

どうやら子供の頃からの夢であったらしい。
「そして戦場にはじめて来た時思った。俺の性に合っている、とな」
「ですか」
おそらく彼は軍人としての適性があったのだろう。そして元々戦場が好きだったということも幸いした。
「どんな状況でも死ぬなどということは考えられなかった。そして勝つことだけを考えていた」
「そして今まで戦ってこられたのですね」
「ああ」
アッディーンは答えた。その言葉に迷いはなかった。
「カッサラの時もそうだった。我ながら思いきったことをしたとは思うが」
「あれで戦局が変わりましたからね」
カッサラの戦いにおいてのアッディーンの行動は最早伝説にまでなっていた。側面に攻撃を仕掛けようとするサラーフ軍の部隊の前に急行し総攻撃を仕掛けたのである。一艦でその動きを止め戦いの流れを引き寄せたのだ。
「しかし死ぬとは全く思わなかった。絶対にこれで勝てると思ったのだ」
「凄いですね」
「そういうわけではない。あの時サラーフ軍は攻撃を正面から受けるなど思いもしなかった。だからそこを衝いたのだ」
「そうだったのですか」
「相手の思いもよらぬところをつく。それが戦争だ。そして勝つことがな」
「それはわかっているつもりです」
コリームアは言った。
「ですがそうそうできるものではありません」
「そういうものなのか」
「そうです。それが出来るからこそ閣下は凄いのです」

「俺はそうは思わないがな」
アッディーンはその言葉を否定した。
「俺は戦争が上手いだけだ。他には何もないぞ」
「果たしてそうでしょうか」
「それはどういう意味だ？」
アッディーンはその言葉に反応した。そしてコリームアに顔を向けた。
「人間には隠れている能力があります」
「俺にはまだその隠れている能力があると言いたいのか」
「はい。それはその時にならないとわからないものです」
「そういうものかな」
「ええ。まあ今閣下は軍人として優秀ですからそれでいいと思います。しかし」
「しかし！？」
アッディーンは問うた。
「それだけでも素晴らしいことだと思いますよ」
「そうなのか」
「ええ。それでオムダーマンに貢献されているのですから」
「ならいいがな」
アッディーンはそれを聞くとフッと微笑んだ。
「やはり役に立たないより役に立つ方がいいものだ」
それは誰もが同じである。アッディーンもそうであった。
「はい。閣下は軍人として存分に活躍して下さい。ですが」
「ですが！？」
アッディーンはコリームアの言葉に顔を向けた。

## 第三部第四章　命運は決するその四

「閣下には隠れた能力がまだあるかも知れないということはよく覚えておいて下さい」
「わかった」
話はこれで終わった。数日後アッディーン率いる高速艦隊はオーレフ星系に到着した。
そして敵軍が来るのを待った。やがてオーレフ北方にサラーフの艦隊が姿を現わしたとの報告が入って来た。
「来たか」
それを聞いたアッディーンの目が光った。
「援軍は今何処にいる？」
そして参謀の一人に対し問うた。
「今オーレフに入った頃です」
その参謀は敬礼して答えた。
「そうか」
アッディーンはそれを聞くと口に手を当てて考え込んだ。
「すぐに援軍に連絡しろ、サラーフ軍が来るとな」
「わかりました」
参謀はそれを聞き敬礼した。
「サラーフ軍をオーレフの中に誘き寄せるように伝えよ」
「はい」
「我々はそれに動きを合わせる。そして前後から挟撃するぞ」
「挟撃ですか」
「そうだ、そして一気に勝利を収める」
これはアッディーンの得意戦法であった。それは周りの者達もよくわかっていた。
「ですが敵もそれはわかっているのでは」
それを知る参謀はそう尋ねた。

「だろうな」
アッディーンは微笑んでそれに答えた。
「だが場所が違えば状況も変わってくる。挟撃といっても何通りもある」
「それはそうですが」
「見ていろ。我が軍は必ず勝つ。そして勝利を手にする」
それは強い声であった。参謀もその言葉に納得した。
「わかりました」
そして敬礼で答えた。
「わかればいい」
アッディーンはそれを見て満足気に微笑んだ。
「勝利は我が手に既にある。必ずや勝利を収めるぞ！」
「ハッ！」
周りの者達は一斉に敬礼した。アッディーンはそれを見て会心の笑みを浮かべていた。
オーレフに来たサラーフ軍であるがその士気は低かった。やはりマスコミの報道によりこちらの行動が敵にも全て筒抜けであるというのは痛かった。特に上層部のそれは深刻であった。
「敵はおそらく既にここに来ているだろうな」
サラーフ軍の司令官ハラス大将は暗澹たる表情で副官に尋ねた。
「おそらく。こちらの動きは全て敵に筒抜けです」
副官は暗い表情で答えた。
「だろうな。あれだけ報道してくれると」
ハラスは首を横に振ってそう言った。
「これで勝てという方が無理な話だ。それがあの連中にはわからないのだろうか」
彼はマスコミに対して批判の言葉を口にした。
「わからないのでしょう。連中はいつも何一つ知らないことをさも知っているかのように言うのが常ですから」
「そしていつもミスリードする。それでいて謝罪も反省もしないな」

「それがマスコミというものです」
副官の声も表情も苦々しげであった。
「連中は責任やそういう話になると言論の自由や報道の自由を楯にとります。自分達が幾ら法や人権を蹂躙してもそれさえ言えば許されると思っているのです」
「それは私もわかっているつもりだ」
ハラスはサラーフ軍においては良識派として知られている。まだ四十代だが実直で真面目であり部下を大事にする人物として評判がいい。マスコミ以外には。
マスコミの彼の評価は柔弱な将である。優柔不断で育ちがいいだけで大将になった無能な人物だという。
しかし彼は今までオムダーマンやミドハドとの戦いで功績を重ねてきている。そして後方任務においても的確にこなしその事務処理能力も高く評価されている。バランスのとれた人物である。
だからこそ彼は軍内でもミツヤーンやホリーナムの存在を許せなかった。公然と批判こそしなかったものの明らかに嫌悪していた。その為にマスコミからは嫌われたのである。
「別にマスコミに嫌われようと私自身は構わないがな」
ハラスはそうした考えの持ち主だった。彼はマスコミを心底軽蔑していた。
「だが家族のことまで中傷してくれるとはな」
そこで顔を顰めた。彼はマスコミに家族や親戚のことまで捏造され攻撃に晒されていたのである。それには流石に我慢ができなかった。
その黒幕がナベツーラやミツヤーンであることは明白であった。彼は陰に陽にナベツーラ一派の攻撃を受けていたのである。
「私もですよ」
副官が同意するように言った。
「焦土戦術を決定した会議でミツヤーンが呼ばれもしていないのにズカズカと入り込んで来たのはご存知でしょうか」

「それは聞いている。何でもすぐに全軍を以って迎撃すべし、と喚き散らしたそうだな」
「はい、私はその場に丁度いたのですがね」
彼の顔がみるみる不機嫌なものになっていく。
「滑稽な場面でしたよ。誰も相手にしないのに一人だけ狂人の様に喚き散らしているのですから」
「あの男は本当に軍人なのか、と思う時があるな」
「士官学校でもコネで入ったという噂がありましたね。ろくに勉強もせず成績も人物としての評価も士官学校開設以来最低だったそうですが」
「それは凄いな」
「はい。そのうえ前線にろくに出ず後方で私腹を肥やしてばかりいたそうです。出世したのは他でもない、ナベツーラに取り入ったからです」
「聞けば聞く程嫌になる奴だ。そんな奴が軍を掌握したらどうなると思う」
「それは閣下もよくご存知だと思いますが」
彼はあえて答えなかった。
「そうだがな」
ハラスはそこで口をつぐんだ。
「そうならない為にもこの戦い、勝たねばなりませんが」
「難しいだろうな。敵はおそらく既に迎撃態勢を整えているだろうしな」
彼等の当初の作戦計画ではムスタファ星系に向かうオムダーマン艦隊の側面を急襲し戦果が得られたならすぐに帰るというものであった。だがそれはマスコミの報道により筒抜けである。だが当初の予定通りにいくしかなかった。若し正面から戦いを挑んでも勝利は期待できなかったからである。
「敵艦隊を発見しました」
偵察に出していた部隊から連絡が入った。

「そうか」
ハラスはそれを聞いて頷いた。
「では側面に回るぞ」
「わかりました」
サラーフの艦隊はオムダーマン軍の側面に向かって動きはじめた。
オムダーマンの艦隊はオーレフの奥深くに向かおうとしていた。
それを見たハラスは危惧を覚えた。
「罠か」
だが引くわけにはいかなかった。引いたらそれがすなわち敗戦である。少なくともマスコミはそう大々的に報道するであろう。
「行くぞ」
周りの幕僚達に対して言った。
「わかりました」
幕僚達もそれに頷いた。サラーフ軍はオムダーマン軍を追った。
オムダーマン軍の動きは遅かった。そしてある惑星の輪の中に入ろうとしていた。
「今だ」
ハラスはそこで攻撃を指示した。艦隊が急行しオムダーマン軍の側面に襲い掛かろうとする。
その時だった。輪の中からオムダーマン軍の新手が姿を現わした。
「やはりいたかっ！」
ハラスはそれを見て思わず叫んだ。オムダーマン軍の新手はサラーフ軍の後方に姿を現わしてきたのだ。
「よし、そのまま進め！」
アッディーンが指示を下す。オムダーマン軍はそれに従いサラーフ軍の後方に一斉に突き進んだ。
それと同時に前方のオムダーマン軍も方向を転換した。そしてサラーフ軍に攻撃の矛先を向けて来た。
「いかん、退け！」
それを見たハラスはすぐに指示を下した。艦隊を右に動かしオム

ダーマン軍の左右からの攻撃をまずかわした。
そして態勢を建て直しこちらに向かって来るオムダーマン軍に正対する。彼等は左右から襲い掛かって来た。
「兵を二手に分けろ！」
ハラスはまた指示を下しオムダーマン軍に対してそれぞれ兵を向けた。
「サラーフの将はなかなかの男のようだな」
それを見たアッディーンが思わず言った。
「はい、少なくとも無能ではないようですね」
参謀の一人がそれに同意した。その艦隊運動と作戦指揮は確かに決して無能なものではなかった。
両軍は二つの場所で戦いをはじめた。ハラスは右側から来た軍に対し向かっていた。アッディーンが左側にいた。
ハラスはこう考えていた。まずは右側の兵を叩きそれから左側を叩こうと。兵力においては僅かに優勢であるのでそう考えたのだ。
だがその目論見は不幸にして外れた。アッディーンの率いる艦隊に向かったサラーフ軍は瞬く間に壊走したのだ。
「クッ、あの軍を率いているのはまさか・・・・・・」
ハラスはそれを見て思わず呻いた。
「ええ。アッディーン提督のようです」
副官が答えた。
「彼の旗艦アリーが確認されています」
「そうか。道理で強い筈だ」
ハラスは半ば彼を称賛する言葉を漏らした。アッディーンの艦隊はそのままこちらに向かって来ている。
「如何なさいますか？」
それを見て副官が問うた。
「ううむ」
ハラスは一瞬考え込んだ。だがすぐに顔を上げた。
「こうなっては致し方ないな。前後から攻撃を受けては到底耐えら

れん」
　それは撤退の言葉であった。
「わかりました。残念ですが」
　副官はそれを聞き敬礼した。負ければどうなるか、彼にもそれはよくわかっていた。
「すぐに撤退する。そして全軍アルフフーフに帰還するぞ」
「ハッ！」
　アッディーンの艦隊が来るより早く彼等は退却した。そしてオーレフ星系から離脱を開始した。
「追いますか？」
　それを見たコリームアがアッディーンに対して問うた。
「いや、いい」
　アッディーンは首を横に振った。
「今回は勝利を収めたこと自体が重要なのだからな」
「そうですね、これで今後かなりやり易くなりますね」
「ああ」
　アッディーンはコリームアの言葉にニヤリ、と笑った。
「ところでブーシルからの援軍は無事か」
「はい、これといった損害は受けていません」
「そうか。ならいい。ところで」
　アッディーンはここで話を変えた。
「この星系に残っているサラーフ軍はいるか」
「はい、ですがその殆どが既に投降しております」
「よし、その捕虜達を全員保護したならばすぐにムスタファ星系に戻るぞ。そして次の戦いの準備だ」
　アッディーンはムスタファ星系の方に顔を向けて言った。
「おそらく選挙の後すぐに奴等は動くだろう。それに備えなくてはな」
「はい」
「そして今度の戦いで奴等の滅亡が銀河に知れ渡る」

彼はそう言うと不敵な笑みを漏らした。
「捕虜の保護を急げ、そしてすぐにムスタファに帰還するぞ！」
「ハッ！」
コリームアだけでなくその場にいた参謀達が一斉に敬礼する。アッディーンはそれを向かい合って受けた。
オーレフ星系の戦いはこれで終わった。参加兵力はオムダーマン軍約六五〇万、約六万五千隻、サラーフ軍は約七〇〇万に七万隻であった。
サラーフは兵力において有利であったが士気の低下、そして何よりその行動が自国のマスコミによりオムダーマン側に筒抜けであったことが致命的であった。ハラスの冷静かつ的確な指揮により損害は少なかったがこの敗戦はその損害よりも遥かに甚大な影響を及ぼすことは誰の目にも明らかであった。
それからすぐにサラーフで選挙が行なわれた。結果は言うまでもなかった。

# 第三部第五章　雑軍その一

雑軍

選挙はナベツーラ派は圧倒的な勝利であった。ハサンはそれを受けて首相の座を退きナベツーラが首相となった。マスコミはこれでサラーフは救われた、と提灯記事を書き連ねた。

「これが首相の椅子か」

ナベツーラはまず官邸に入ると首相の執務室の椅子を見た。

「貧乏臭い、とっとと捨てろ」

そして別の豪華な椅子を持って来させた。

「やっぱり椅子は座り心地のいいものに限るな。そうでないと腰を痛めちまう」

彼はそう言って口を大きく開けて笑った。

後にこの行動や発言もマスコミに大いに取り上げられることはわかっていた。

『これこそ首相の在るべき姿』

『サラーフの今までの閉塞した状況を打破する改革者』

おそらくこうした記事が出て来るだろう。ナベツーラはそれを考え一人悦に入った。

「ところでだ」

彼は葉巻を吸いながら連れて来た秘書に言葉をかけた。

「閣僚はまだ決まってなかったな」

「はい」

秘書は答えた。サラーフにおいて閣僚は首相が直接任命するのである。

「よし、じゃあ決めてやる」

彼はそう言うとペンを取り出した。高級な万年筆である。

そこに紙で書き込んだ。瞬く間に二十人近くの名と職が書かれる。

「これでどうだ」

彼はそう言ってその職と名を秘書に見せた。
「素晴らしいです」
秘書はお世辞で応えた。彼は長年ナベツーラの秘書を務めている。だからこの彼の好みもよくわかっていた。
ナベツーラは媚び諂いや世辞を好む。そして袖の下はもっと好きだ。それを知らない秘書は辞めさせられただけでなくサラーフにいられないようにされた。
「そうだろう、今パッと思いついたんだ。俺は何でもすぐに決めちまうからな」
彼はあまり考えて行動する男ではない。感情で何もかも決めてしまうのである。
「それでこそサラーフの首相です。決断力がなくては勤まるものではありませんから」
「よくわかってるじゃねえか。御前もちょっとは政治がわかってきたようだな」
「お褒めに預かり光栄です」
この秘書も本心から言っているのではなかった。彼が秘書を務めているのは何もナベツーラを敬愛しているからではない。ただおこぼれにあずかりたいからである。
その閣僚の名は心ある者が見たならば眉を顰めずにはおれないものであった。トクンやテリーム、エジリームといった札付きの輩達が要職にあった。それだけでこの内閣の性質がわかる程であった。
「次は軍だな」
「はい」
秘書は頷いた。
「まあそれも大体決まっている」
「お流石です」
そして再び心にもないことを言う。
その人事も酷いものであった。ミツヤーンが元帥、宇宙艦隊司令長官となりホリーナムは上級大将で参謀総長、そしてキヨハームや

ペダシャーンといった粗暴な者達が艦隊司令となった。それを見てアッディーン達がほくそ笑んだことは言うまでもない。
「まずはオムダーマンの奴等をここから追い出すことが必要だ」
ナベツーラは所信表明演説でまずこう言った。
「その為には兵隊がいなくちゃいけねえんだ」
それは正論ではあった。
「まずは傭兵でも何でもいいから掻き集めろ。そしてそれで一気にオムダーマンを叩く」
これまでの焦土戦術を否定した。そして決戦を主張したのだ。
すぐに兵力の総動員が行なわれた。徴兵された兵だけでなく職のない者や浮浪者までもが強制的に入隊させられた。そして傭兵まで集められた。こうして瞬く間に三十個艦隊が編成された。
「どうだ、凄い数だろう」
彼はマスコミを前にしてそう豪語した。
「はい、まさかこれだけの数をすぐに集めるとは思いませんでした」
「これが首相のお力ですね」
「そうだ」
彼は葉巻を吸いながらその醜い顔を歪めて笑った。
「俺じゃなきゃここまで集めることはできねえよ。ほら、何といったかな、前の冴えない前任者だ」
「サレムですね」
記者の一人が言った。
「そうだ、サレムだ。あいつみたいなことやってたら勝てるもんも勝てやしないんだ。こうして圧倒的な兵力で一気にやらねえと戦争は勝てないんだ」
「その通りです」
なおナベツーラもこの記者達も軍事のことは全く知らない。戦艦と空母の区別すらつかないのだ。それどころか階級すらも碌に知らない。
「これで一気にいくぜ。連中のいるムスタファに一気に雪崩れ込む」

「いきなり敵の本拠地にですか。それは素晴らしい」
またもや歯の浮くようなことを言う。
「そうだ、こうしたことは徹底的にやらねえとな。その為の艦隊だしな」
「はい。ではすぐに軍を向けられるのですね」
「当然だ。おい、今から言うぞ」
「はい」
記者達は書く準備をした。
「三日後全軍を以ってムスタファを取り戻す為に出撃させる。派手にやるぞ！」
「おお！」
これはすぐに各誌の一面となった。マスコミはもうサラーフの勝利が決まった、と囃し立てた。
それを冷静に見ている者がいた。それは生憎サラーフの者ではなかった。
「成程、ここに全軍を以って向かって来るのか」
アッディーンは新聞を読んでそう言った。
「正気ですか？まさか自軍の行動をここまでおっぴらに公表するなんて」
それを見たアガヌが思わず首を傾げた。
「おそらく勝つ自信があるのだろう。兵力だけでな」
「信じられませんね。こんなことははじめて見ました」
オムダーマンもミドハドも軍の動きは非常時においては極秘である。これは当然のことであった。
「だがこれで戦い易いといえばそうなる。すぐに会戦の準備をするか」
「罠かも知れませんよ。こちらの兵をムスタファに集める為の」
アガヌはそこで言った。
「あの男が罠を張れる程高度な知能の持ち主とは思えないがな」
アッディーンはそう前置きしたうえで言った。

「ブーシル、そしてカッサラへの路にはそれぞれ一個艦隊を置こう。そしてムスタファ防衛にも一個艦隊を予備として置きたい」
「十五個艦隊で敵にあたるのですね」
「そうだ。兵力は敵の二分の一だがな。それでも絶対に勝てる」
彼は強い口調でそう言った。
「大した自信ですね」
アガヌは苦笑して言った。
「では貴官はどう見るか？」
「それは決まっていますよ」
彼はその顔を微笑みに変えて答えた。
「行く先も行動もわかっていてはこれ程楽な戦いはありません」
「そうだな。そして問題は敵の装備や兵の質、そして武装だな」
「どのようなものでしょうね」
「いきなり三十個艦隊も集めたのだ。おおよその予想はつくだろう」
「はい」
それはアガヌにもわかった。
「かなり質は酷いだろうな」
「でしょうね。おそらく単なる数合わせのガラクタばかりでしょう」
「ああ、聞いたところによると博物館から引っ張り出したりもしているらしい。動くのなら一緒だろうということでな」
「本当ですか！？」
アガヌもそれを聞いて耳を疑った。
「本当だ」
アッディーンは即答した。
「新聞にも載っていた。例によって提灯記事だが」
「よく軍の良識派が許しましたね」
「良識か」
アッディーンはそれを聞いてシニカルに笑った。
「どうやらこの国では良識はマスコミが作るらしい」
「例によって、ですね」

「ああ、あのような連中がオムダーマンにいなくて本当によかったと思うな」
「同感です」
それはアガヌも同じ意見であった。
「正気とは思えない男がテレビに出て喚き散らす。それだけでも許せんが」
「しかもその男がサラーフの良心とまで言われるのですからね」
「少なくとも我が国では即座に病院行きだろうな、あのような男は」
彼等はテリームのことを言っていた。
「ところでこちらの準備は整っているな」
「はい」
アガヌは敬礼して答えた。
「既に出撃準備は整っております」
「ならいい」
アッディーンはそれを聞いて満足気に頷いた。
「敵が来たらすぐに出撃するぞ。そして勝つ」
「はい」
それは力強い声であった。
「この勝利でサラーフは間違いなく崩壊する。あとは首都を陥落させるだけだ」
「わかりました」
「全将兵に伝えよ。出撃の指示が出次第すぐに敵を倒しに行く、とな」
「ハッ！」
アッディーンはそう言うと部屋をあとにした。そして旗艦アリーに向かって行った。

## 第三部第五章　雑軍その二

サラーフの動向はサハラ周辺各国にも知れ渡っていた。当然シャイターンの耳にもそれは入っていた。
「またナベツーラはえらく強気だな」
彼は新聞を読み終えるとそれをテーブルの上に置いて言った。
「見たところ到底勝てるようには思えないがな」
「閣下も同じお考えですか」
傍らに控えるハルシークが問うてきた。
「ああ。戦争は数だけでするものではないからな。確かに重要であるが」
彼はその細い目でハルシークを見ながら言った。
「他にも色々な要素がある。それが全て合わさらないと戦力にはならない」
流石に彼にはそれがよくわかっていた。
「今のサラーフの上層部にはそれがわかっていないようだがな」
「その通りです」
ハルシークはそれを聞いて答えた。
「まさかここまで愚かな男だとは思いませんでした」
「ナベツーラがか？」
「いえ、彼と彼に関わる者全てです」
ハルシークは答えた。
「閣僚達も軍の高官達もあまりに愚劣です。しかも相手を完全に侮っております」
「そうだな。ナベツーラはアッディーンを若僧と罵っていたな」
「それも公の場で。品性を疑います」
ハルシークはそう言って顔を顰めた。
「だがそれがサラーフのマスコミには受けているようだな」
「マスコミは盲目の荒馬ですから」

「盲目の荒馬、か」
シャイターンはその言葉を繰り返した。
「はい、彼等は何も見えません。そしてその保持する権力はあまりにも強大になり易いのです」
「情報を独占しているからな。だからこそそれを抑える為にネットが発達した」
「はい」
ネットにそういう一面があったのは事実である。それが二十一世紀以降マスコミの暴走を抑える大きな力となったのであるから。
「だがサラーフにはネットがありません」
「そうだったな。そしてこう言える」
シャイターンはそう前置きしたうえで話しはじめた。
「マスコミが暴走したらどういう事態に陥るか、サラーフは今身を以ってそれを人類の歴史に伝えようとしている、とな」
「シニカルですね」
「私は元からこうだが」
シャイターンはそう言って微笑んだ。
「「だがアッディーン提督に今回のこのマスコミの暴走は好都合だろうな」
「ええ、何せ情報は向こうが教えてくれるのですから」
「そして戦い易い相手を選んでくれた」
「これはアッディーンの勝利になりますかね」
「間違いなくそうなるだろうな」
シャイターンは言った。
「だがまずは様子を見たい」
彼は言った。
「万が一、ということもある。いや、この場合は億が一、という可能性だがな」
「アッディーン提督が敗れる怖れは、ですね」
「ああ。まさかあの様な愚劣な者達に彼が敗れるとは思わないが」

「戦争は何が起こるかわかりませんからな」
「そうだ。だがもう準備はしておいた方がいいな」
シャイターンはそう言うと席を立った。
「私の部隊だけでいい。出撃準備をしておけ」
「わかりました」
ハルシークは答えた。
「アッディーン提督が勝利を収め次第動くぞ。そしてサラーフ領内へ侵攻する」
「はい」
「おそらく敵は我々が動くとは露程にも思っていないだろうからな。しかしそれが命取りになる」
彼はそう言うとニヤリ、と笑った。
「愚か者を選んだ結末、サラーフはとくと味わうだろう」
「はい、ですがそれがわかった時には」
「あの国はこの銀河にはない」
彼はそう言うと部屋を出た。そして車を出させハルーク家の邸宅に向かった。
「ようこそ、愛しき人よ」
シャイターンは出迎えた例の未亡人に笑顔で声をかけた。
「またそのような」
彼女はそれを聞くと頬を赤らめた。
「心にもないことを仰る」
だが彼女もまんざらではないようだ。
「いえ」
シャイターンはそれを首を横に振って否定した。
「間も無く私は貴女の夫となる身。偽りを申し上げて何になりましょう」
「それは・・・・・・」
「今日は貴女に差し上げたいものがあり参上しました」
「差し上げたいもの！？」

「はい、これです」
彼はそう言うとマントの中から一つの小箱を取り出した。
「これは・・・・・・」
それは指輪であった。真紅のルビーの指輪である。
「婚礼の印に。些細なものですが」
シャイターンは跪きそれを差し出した。見ればかなり大きなルビーである。
「よろしいのですか？」
夫人は彼に対し問うた。
「何がですか？」
「見ればかなり素晴らしい指輪です。私もこれ程のものは見たことがありません」
「いえ、私はこの指輪ですら貴女には釣り合わないと思ってもります」
「またそのような・・・・・・」
彼女は世辞とは知りながらも気分をよくした。
「けれど嬉しいですわ」
やはり指輪を差し出されて悪い気はしなかった。
「お受け取りしてよろしいでしょうか」
「是非とも」
シャイターンは言った。
「勿論これだけではありません」
「まだあるのですか？」
「はい、これです」
彼は今度はサファイアのネックレスを出した。
「そしてこれも」
今度はエメラルドのブレスレットである。どれも細部まで装飾されたものである。
「他にもあります。私のものは全て貴女のものです」
「閣下・・・・・・」

「そしてこの心も」
彼は立ち上がり自分の胸に手を置いて言った。
「貴女の夫となったならば貴女の為に全てを捧げましょう。当然この命も」
サハラはイスラムの戒律を今まで守ってきている。元々柔軟な思考の宗教であるからこそ二千年以上も教えが残ったのだ。かっての原理主義のような偏執狂的な者達は姿を消していた。
そしてイスラムの特徴として独自の女性の人権への配慮である。一見女性蔑視に捉えられかねないがその実は細かい配慮が為されている。
妻は四人まで持ってもよいのはこの時代でもそうである。だがその四人を平等に愛さなければならず養わなければならない。そして戦争による未亡人や孤児を救済する意味もあった。戦争で夫を亡くした妻じはこうして救われてきたのだ。これはこの時代でも変わらない。
そして離婚も簡単にできるがその後でもその妻を養わなければならない。そうしない場合は罰を受ける。
こうした戒律が今でも生きている。そして婚礼にもそれは見られるのだ。
彼女の夫は数年前病に倒れている。もう六十に近いからという理由で再婚はせずそのままでいたのだ。子供もいなかった。彼女自身が再婚はしないと言ったので誰も声をかけようとしなかった。六十にはとても見えぬ美貌であっても。
それだからこそシャイターンも声のかけがいがあったのだろう。何度も断られながらもようやく婚姻にこぎつけたのであった。そして今こうして婚礼の印の贈り物をしている。

## 第三部第五章　雑軍その三

「これ等もお受け取り頂けますね」
「はい・・・・・・」
彼女は素直にそのネックレスとブレスレットを受け取った。そして手にした。
「よく似合っておられます」
「またそのような」
やはり世辞だとわかっている。だが悪い気はしない。
「閣下」
そして今度は彼女の方から声をかけた。
「何でしょうか」
「今度は私が貴方にお礼をする番です」
そう言うとシャイターンの手をとった。
「こちらへ」
そして彼を屋敷の中へ導いて行った。
数時間後シャイターンは屋敷から出て来た。そして一言こう呟いた。
「予想以上だな。まさかこれ程までとは」
彼は女性関係はかなり派手な方である。裕福な家に生まれ顔立ちも整っていた為昔から女性には不自由しなかった。妻を一人も持っていないのはただこれという相手がいなかったせいだ。
「まずいな。どうやら本気になってしまいそうだ」
彼は不敵に笑ってそう言った。
「だがそれも良いか。ああれだけの美貌の持ち主はそうはいない」
彼の好みでもあったようだ。
「これからが楽しみだ。婚礼の暁には彼女の全てが私のものだ」
そして屋敷の方を振り返った。
「このハルーク家もな」

そう呟くと屋敷をあとにした。そして自らの宮殿へ帰って行った。
それから暫くして彼はその未亡人と正式に結婚した。華やかで豪華な式の後二人はシャイターンの屋敷に入った。
「ここが今日から貴女の家です」
シャイターンは彼女に対して言った。
「我が妻シャハーダよ」
そして彼女の名を呼んだ。
「はい」
シャハーダは名を呼ばれ答えた。
「これから私の全ては貴女のもの。そして貴女の全ては私のものです」
「ええ。そしてそれは永遠に」
シャハーダはそう言うと彼の胸に身を預けた。
「これからは何時までもこうしていたい」
「はい。二人が共にアッラーの御前に行くその時まで」
そして固く抱き合った。そのまま二人は寝室へ消えて行った。
これによりシャイターンは北方で一番の富豪ハルーク家の当主となった。この意味は大きく彼は北方では最大の勢力を持つダルファヤ共和国の市民権を手に入れることができた。
この国では市民権を持つことの意味は大きかった。市民権を持つ者は誰でも大統領に立候補することが出来るのである。
「だがそれにはまだ時間がある」
シャイターンは言った。
「選挙までにやらねばならないことがある」
彼はそう言うと自室にあるサハラの地図を見た。
「兵を動かさなくてはならん。もうすぐな」
「はい、そろそろはじまる頃ですな」
そこにいたハルシークが言った。
「そうだ。どうやらかなり大規模な戦いになるぞ」
彼はムスタファ星系を見ていた。

「戦いの結果がわかり次第すぐに出兵するぞ」
「開戦の理由はどうしましょうか」
「理由、か」
かれはそれを聞きふと顎に右の指を当てて考えた。
「そうだな。前の北方侵攻への復讐ということにしておこう。あの時は大勝利だったがな」
「それはよろしゅうございます」
「それから選挙だ。その準備もしておこう」
「はい」
選挙は二年後の予定である。だが彼等は準備をしておく、と言った。この意味は何であろうか。
「これで私も土台を築くことが出来たな」
「はい、思えば長い道のりでありました」
ハルシークは遠いものを見る目で言った。
「長い道のりか」
彼はそれを聞きハルシークの顔を向けた。
「私はそう思ったことはないがな」
その顔は不敵な笑みに満ちていた。
「ここまでは予定通りだ。別に長いとは思わない」
「左様ですか」
「うむ。それにここで長いと言ったらどうなる」
彼はここで顔を地図に戻した。
「私の夢、それはわかっているだろう」
「はい」
ハルシークは答えた。
「このサハラを統一すること」
「そうだ。今まで我々はエウロパの侵略に為す術もなく連合やマウリアには無視される存在でしかなかった」
シャイターンの言葉には怒気が含まれていた。確かにそれは真実であった。彼等の長い歴史は戦乱の歴史であった。それが為に辺境

の開拓もろくに行なわれず人口も増えなかった。そして産業も連合のように発達しなかった。ただ軍事関係のみが異様に発達するという歪な形で発展していた。
「そうした歴史に幕を降ろす時が来たのだ」
シャイターンは言った。
「これまでの歴史は屈辱の歴史だった。それが私により変えられる」
その声には明らかに野心もあった。
「私がこのサハラの主となる。そしてこの国を連合やエウロパに比肩する国にするのだ」
「その為には及ばずながら」
「うむ。ハルシークの力、使わせてもらおう」
「有り難き幸せ」
ハルシークはそう言うと恭しく頭を垂れた。
「まずはサラーフとの戦いからだ。そして次は北だ」
「はい」
シャイターンは再び地図に目を移した。
「それからも道はある。よいな、私はその道を進んで行く」
彼はそう言うと腰の剣を抜いた。
「立ちはだかる者はこの剣で消す。手段は選ばん」
それが彼の道の進み方であった。
「全てをこの手に入れるまではな」
「はい」
シャイターンはその場を去った。そして自室に引き揚げて行った。

アッディーン率いるオムダーマン軍に対し全軍を挙げて決戦を挑むことを決定したサラーフ軍は首都アルフフーフを出撃した。総司令官はミツヤーン、参謀長はホリーナムでありその下に三十個艦隊があった。
その数約三十万隻、兵力において三千万、かつてない規模の大軍であった。

「これだけの兵があればどのような連中でも勝てんだろうな」
ミツヤーンは艦橋で自信に満ちた声で言った。
その左右には女達がいる。途中で買った娼婦達だ。何と彼は艦橋に女を引き込んでいるのだ。
「はい、最早我等の勝利は決まったも同然です」
ホリーナムもであった。それを見た軍の心ある者達はその信じられぬ行動に思わず眉を顰めた。
だがそうした常識を持つ者はこの時のサラーフ軍、とりわけ上層部においては少数派であった。多くの者が大なり小なりこうした状況であった。

## 第三部第五章　雑軍その四

キヨハームは途中寄港した星の酒場でホステスを犯した。モトキーラムも一緒であった。
エトンは女子大に車で乗りつけるとそのまま二人の学生を拉致した。そして今だに自分の艦の自室に監禁し慰み者としている。ペタシャーンは酒を飲みながら指揮を執っている。そして誰から構わず部下達を虐待していた。
こうした者達が軍を率いているのだから風紀などとうの昔に崩壊していた。元々この軍は傭兵や罪人等を入れた混成軍である。統率をとるのが困難であると予想されていた。
だがミツヤーンもホリーナムも兵士を取り締まるようなことは一切しなかった。その為彼等は寄港先でトラブルを起こし側を通る商船から通行料として金を巻き上げたりしていた。
これを批判する者はいなかった。それどころかマスコミは彼等を『勇者』として称えその行いも既存の軍の在り方を打ち破る『英雄的な行い』と評価していた。
「ところで、だ」
ミツヤーンは娼婦達の胸をまさぐりながらホリーナムに尋ねた。
「ムスタファまではあとどれ位だ」
「はい」
ホリーナムは娼婦に自分の股間をまさぐらせている。すぐにでも部屋に消えてしまいそうな勢いである。
「十日程です」
「そうか」
ミツヤーンは葡萄酒を瓶に口を当てて飲んでいた。仮にも将校とは思えない品のなさだ。
「ならばそれまではゆっくりできるな。そしてムスタファ星系を陥落させたら」

「ええ、そこで宴といきましょう」
「酒に女でな」
彼等はそう言うとそれぞれ自室に消えて行った。それを見送る心ある将兵達の目は嫌悪に満ちていた。
だが彼等はその直後とんでもない目に遭うことになった。
「何を見とるんじゃ」
そこにキヨハームが来たのである。
全身筋肉の固まりである。だがそれはおそらくウェイトトレーニングや薬で作られた筋肉だ。すぐに見ただけでわかるようなものであった。
顔はまるで犯罪者かチンピラのようである。極めて獰悪な人相である。
「御前等ミツヤーン閣下のやられることに不満でもあんのか」
そして彼は先程ミツヤーン達を嫌悪の目で見た将兵達を前に引きずり出して来た。
「とんでもない奴等だな、上官をそんな目で見ているなんて」
モトキーラムが言った。これまた軍人というよりは夜の街の男の様な格好である。軍服を着崩しそこに色々なアクセサリーを着けている。その顔は気色悪い化粧をしている。
彼は何と側に幼女を連れている。歳は五歳程であろうか。真っ裸にして首に鎖を着けて引いている。
「おい、こいつ等どうすべきじゃと思う？」
キヨハームはモトキーラムともう一人の男に対して問うた。
「潰すべき」
色の黒い大男が言った。ブランデーを瓶に口をあて飲んでいる。この男がペタシャーンである。
「ペタシャーンの言うとおりですね、キヨハームさん」
モトキーラムが言った。
「御前もそう思うか」
キヨハームは残忍な笑みを浮かべてそう言った。

「そやがこのまま普通に殴っても面白くないと思わんか」
「はい」
モトキーラムは底意地の悪そうな笑顔で応えた。
「おい、あそこ行こうか」
彼等はその将兵達をトイレに連れて行った。そして彼等の顔を大をたす便器に突っ込んだ。
「おら、これでも飲めや」
「グググ・・・・・・」
彼等はジタバタともがき苦しむ。キヨハームはその尻に思いきり蹴りを入れた。
「これでも飲んで目を覚ませや。上官の悪口言う奴は酔うとる証拠じゃ」
「そうそう、ただそれだけじゃ酔いは醒めませんよ」
モトキーラムはそう言うと箒を持って来た。
「こうでもしないとね」
そしてそれを尻の穴に突っ込んだ。
「ググッ・・・・・・！」
その兵士は思わず苦悶の声をあげた。キヨハームはそこに肘を入れた。
「黙らんかい、折角こうして酔いを醒まさせてやっとるんじゃ」
その隣ではペタシャーンが他の将兵達を殴り飛ばしている。床に顔を打ち付けるとそれを脚で踏みつける。
「おら、有り難うございます、って言わんかい」
「そうだぞ、こうして提督様達が直々に世話をしてやってるんだからな」
モトキーラムは箒をさらに突っ込んだ。その先に血が出てきた。
「礼はどうしたんじゃ、礼は」
キヨハームはその兵士の顔を便器から取り出して問うた。
「あ、あうあわあああ・・・・・・」
その兵士は最早苦痛で何も言えない。キヨハームはその兵士の顔

をまた便器に突っ込んだ。
「まあええ。今日はこれ位で許したる。酔いも醒めたやろ」
「有り難く思うんだな」
二人はその兵士の腹に最後にそれぞれ蹴りを入れて行った。
「ところでエトンはどうしとるんじゃ」
「救護船に向かいましたよ」
モトキーラムが答えた。女性兵士は原則としていないサハラ各国であるが例外もある。
通信兵には女性もいる。そして看護婦もいるのだ。
「ほう、あいつもお盛んやのお」
キヨハームはそれを聞くと下品な笑い声をあげた。
「今頃は思う存分やっているでしょうね」
モトキーラムもそれを聞いて似たような笑い声を出した。
「じゃろうな。全くあいつの趣味は変わらんわ」
その頃救護船では実際に阿鼻叫喚の地獄絵となっていた。
「わし等もそっちへ行くか」
「ええ、いいですね」
モトキーラムが頷いた。
「ペタシャーンはどないするんじゃ」
「そうだな」
彼は兵士達を脚で蹴飛ばしながら言った。
「俺は酒があればそれでいい」
「あるぜ。たっぷりと」
「なら行こう」
こうして三人も救護船へ向かった。彼等はこうした醜悪極まる行動を繰り返しつつ進軍を続けていた。
この動きはマスコミにより大々的に報道されていた。美辞麗句と媚び諂いに満ちた文章が新聞に載りテレビを賑わせていた。
「こんなに動きがわかるとかえって怖いな」

アッディーンはテレビを観ながら思わず呟いた。
「はい。それにしても今日はトクンですか」
隣に立っていたガルシャースプは顔を顰めて応えた。
「ああ。いい加減こうも毎日毎日テレビに出ていると顔を覚えるな」
「それがテレビの持つ力の怖ろしさです」
「成程な」
アッディーンはそれを聞いて頷いた。テレビではトクンが盛んにナベツーラやミツヤーンを礼讃していた。
「あのテリームの下劣さには嫌気がさしていたが」
彼は腕を組んで言った。
「この男はああしたきちがいじみた発言をしないだけだな。中身は全く一緒だ」
「ええ。そのかわり聞いていて歯の浮くような賛辞ばかり言いますね」
「これはこれで腹が立つものだな」
彼は不機嫌そのものの顔になっていた。
「はい、何の根拠もなく礼讃ばかりですから。こんなことは恥をほんの少しでも知っていれば言えないでしょう」
「この連中に恥という概念があるかどうかだな」
アッディーンの顔は顰められたままであった。
「あとエジリームというのもいるな」
「ええ。あの男がマスコミを仕切っているようです」
「それでか。サラーフのマスコミ連中の発言や文章が異様に汚いと思ったら」
サラーフのマスコミの文章や発言の汚さには定評がある。もっともそれはサラーフ以外での話でありサラーフの国民は知らない。
「読んでいてここまで不快になる文章も珍しい」
「本当ですね。まるで人間性の卑しさが滲み出ているようです」
「人間性か。それで一つ聞きたいのだが」
「何でしょうか」

「サラーフのマスコミ連中の人間性だが」
「はい」
ガルシャースプは顔を前に出した。
「どうしてあのように卑しい輩ばかりなのだ？そういえば昔、そう二十世紀のマスコミもああした人間が多かったと聞くが」
「情報と権力を独占しているからでしょう」
ガルシャースプは答えた。
「人間権力を独占し何でも意のままにしていると自然とああなります。そしてその中に溺れているうちにああいったふうになってしまうのです」
「全ては権力のせいか」
「はい。マスコミの権力は絶大なものですから」
この時代でもマスコミには権力があった。ネットが発達していた一千年前のような行動はできなくとも、である。ネットがないサラーフでは言わずもがな、であった。
「全ては権力のせいか」
「はい」
「権力は腐敗するというのは昔からのことだが」
「絶対的な権力は絶対に腐敗するとも言われますね」
「サラーフではそれがマスコミだったわけか」
アッディーンは腕を組みなおし言った。
「我々も肝に命じておかなくてはな。権力は腐敗するということを」
「はい。そしてマスメディアの危険性を」
「うむ」
二人はそのあと会議室に向かった。そして翌日サラーフ艦隊を迎撃すべく十五個艦隊をもって出撃した。

## 第三部第五章　雑軍その五

両艦隊はムスタファ星系の前で対峙した。サラーフ軍の編成を見てアッディーン達は顔を顰めた。
「・・・・・・こう思うことはここへ来て何度目かもうわからないが」
いい加減彼もうんざりした顔で言った。
「あの艦隊編成は何なのだ」
そう言って前に展開するサラーフ軍を指差した。
「あれですか」
参謀達も呆れ顔である。
「あれは最早戦陣ですらないぞ」
そこにあるサラーフ軍は最早隊列すら組んでいなかった。
ただ三十万の艦艇が無造作に並んでいるだけである。戦艦の横に補給艦があるかと思えばミサイル艦の横に掃海艇、巡洋艦と砲艦が並列し空母はバラバラである。
「戦闘力のない艦艇まで入れているとはな。あれで戦うつもりなのだろうか」
「どうやらそのようです」
「・・・・・・わからんな」
アッディーンは首を傾げた。
「あのような出鱈目な陣は今まで見たことがない。素人ですらもう少しましな陣を組むぞ」
「連中はおそらく素人以下なのでしょう」
シンダントが言った。
「なまじマスコミにおだてられているから有頂天になっているのです。そして革命的だか何だか知りませんがああした陣を組み得意になっているのです」
「そういうことか」

「はい。まあおそらく敵将はどれも愚劣な輩ばかりなのでしょう。ですから今もこうしてこんなものを送りつけてくるのです」
彼はそう言うと一枚の文書を取り出した。
「電報か」
「はい、サラーフ軍からです」
アッディーンはそれを手にとった。そして読んだ。
「馬鹿馬鹿しい」
それを読み終えたアッディーンの感想はそれであった。
「何ですか？」
参謀達がそれに対し問うた。
「読んでみるか」
「ええ」
「なら」
参謀達はアッディーンに手渡されたそれに目を通した。
「何と・・・・・・」
それを読んだ彼等も皆一様に不機嫌な顔になった。それは何と降伏勧告であった。しかもこのうえなく尊大な文章で書かれていた。
「まさか我々が降伏するとでも思っているのでしょうか」
「そのようだな」
アッディーンは参謀の一人の言葉に対して答えた。
「まさかこんなものまで送りつけてくれるとは思わなかったがな」
「如何いたしますか？」
「それは決まっている」
彼はそう言うとその降伏勧告の電報を参謀達から貰い受けた。そしてそれにライターで火を点けた。
「こうするだけだ」
紙は床に落ちた。そして燃えて消えていった。
「これはこの紙だけの運命ではない」
彼はこう言った。
「今前にいる愚か者共の運命でもある」

そう言うとそのまま前に出た。
「勝つ、それも徹底的にだ」
「はい」
参謀達はその言葉に敬礼した。そしてそれぞれの持ち場についた。こうしてムスタファ星系外の戦いがはじまった。まずはサラーフ軍の進軍である。
「どうやら敵は我等の威容に怖れをなしているようですな」
旗艦においてホリーナムはミツヤーンに対して言った。
「うむ、そのようだな」
ミツヤーンは酒を瓶にそのまま口をつけ飲みながら答えた。
「戦いは数で決まるものだ。それをあの若僧に教えてやれ」
「もう既に教えていますが」
ホリーナムは下卑た笑いを浮かべて言葉を返した。
「フフフ、確かにな」
ミツヤーンは汚れた歯を見せて笑った。
「では徹底的にやるか。折角送ってやった降伏勧告も無視したようだしな」
「はい、捕虜はとらずに」
「当然だ。ただし看護婦は例外だ。あれは戦利品とする」
「いいですな。私も何人か」
「うむ、戦いのあとが楽しみだな」
「全くです」
彼等はその薄汚い歯を見せて下卑た笑いをあげた。そしてそのまま全軍を進ませた。
「動きがバラバラですね」
サラーフ軍の動きを見た。ガルシャースプが呆れた顔で言った。
「そうだな。速度が異なる艦艇を出鱈目に組んでいるせいだろう」
アッディーンはモニターに映るサラーフ軍の陣形を見てそれに応えた。
「エネルギー反応を見ると火力もバラバラだな」

「まさかここまで酷いとは」
ガルシャースプの声は完全に呆れ果てたそれであった。
「戦術は決まったな」
アッディーンは敵の動きを見て言った。
「兵を分ける。いつも通りな」
彼はすぐに指示を下した。
「まずは火力の大きい艦艇が一斉射撃を浴びせろ。敵の突出した部分を徹底的にな」
「わかりました」
「そして機動力の高い艦艇は左右から斬り込め。そして敵の中で暴れ回ってやれ」
「はい」
「これは間違いなく勝てる。だがな」
彼はここで言葉を一旦とぎった。
「ただ勝つだけではない。ここでサラーフの戦力を完全に壊滅させるぞ」
「はい」
「ではすぐに行動に移れ。そして奴等をこの銀河の塵に変えてやれ！」
それが合図となった。オムダーマン軍はまず近付いて来るサラーフ軍に一斉射撃を浴びせた。
「そんなものが効くかい！」
キヨハームは次々に炎の塊となり消えていく自軍の艦艇を見ても臆することなく言った。
「おい、どんどんいけ。退く奴は撃ってしまえ！」
「え・・・・・・」
この指示にキヨハームの乗艦の砲術長やミサイル長達は一瞬言葉を失った。
「聞こえんかったか、今現に逃げとる艦があるな」
見れば前に損傷し戦線を離脱しようとする巡洋艦があった。

「ああいう奴を撃つんじゃ。逃げるような奴は死んでしまえ」
「しかし閣下、あれは」
周りの者はそれを止めようとする。だがキヨハームとその取り巻き達が彼等を殴り飛ばした。
「うっさいわあ！」
殴り飛ばされた彼等はそのまま足腰が立たなくなる程までリンチを受けた。そしてキヨハームとその取り巻き共が指揮権を完全に掌握した。
「やれや」
そしてキヨハームはその取り巻きの一人に対して言った。
「はい」
その取り巻きは残忍な笑みを浮かべると射撃ボタンを押した。そしてその後退しようとしている友軍の巡洋艦めがけ砲撃を加えた。

## 第三部第五章　雑軍その六

「攻撃です！」
その巡洋艦のオペレーターが悲痛な声をあげた。
「何、何処からだ！」
艦長は咄嗟に問うた。見れば彼は負傷している。彼だけでなくその他の多くの者も負傷している。どうやらかなりの損害を受けたようだ。その証拠に船足が遅い。
「味方からです、前から来ます！」
「そんな馬鹿なことがあるか！味方が撃ってくるなど・・・・・・」
「いえ、事実です。駄目です、避けられません！」
そしてその巡洋艦は真っ二つに折られた。そして忽ち火球となり宇宙の中に消えた。
キヨハームに撃たれたのはその艦だけではなかった。退こうとする艦艇は皆損傷を受けた艦艇であった。だがキヨハームはそれに構わず攻撃を仕掛けてきたのである。
「容赦すんな、どんどんやったらんかい！」
彼だけではなかった。モトキーラムやペタシャーンも友軍の艦艇に対して攻撃を加えさせた。エトンはその時は自室に引っ張り込んだ看護婦達の相手をしていて指揮などそっちのけであった。
それは督戦隊そのものであった。それを見て先に嫌悪感を露わにしたのはオムダーマンの方であった。
「あそこまで醜いとは思いませんでしたね」
参謀の一人がアッディーンに対して言った。
「そうだな。今まで多くの戦場を回ってきたがここまで酷いのははじめて見た」
アッディーンも嫌悪感を露わにしていた。
「これは個人的な考えだがな」
彼はこう前置きしたうえで話はじめた。

「あの連中だけは許せんな。この戦いで一人残らず消してやる」
「はい」
皆頷いた。それは賛同の返事であった。
「容赦するな、そして叩き潰せ！」
「ハッ！」
珍しく感情のこもった指示であった。それはオムダーマン軍全将兵の感情でもあった。
オムダーマン軍の攻撃は一層激しさを増した。サラーフ軍は容易に進めない。退く艦はキヨハーム達により容赦なく沈められていった。
「逃げる奴はまず撃て！」
ミツヤーンもそう言った。そして彼等の一派はその通りにした。作戦指揮よりもそちらを優先させた。
それが仇になった。碌に指揮する者もなく友軍に撃たれサラーフ軍は混乱状態になっていった。そこへ左右からオムダーマンの機動艦隊が突入してきた。
「行け、周りは敵しかおらん、ただ撃ちまくれ！」
アタチュルクが指示を下す。敵陣に突入したオムダーマンの将兵はそれに従い攻撃を続けた。
これによりサラーフの両翼は壊滅状態に陥った。それを見たアッディーンは次の指示を下した。
「よし、機動艦隊に敵の後方及び斜め後ろに向かうように伝えよ」
「わかりました」
すぐに伝令が飛ぶ。そして機動艦隊はそれに従いサラーフ軍の後方及び斜め後ろについた。
アッディーンはまた指示を下した。
「前方の部隊はそのまま三日月型の陣を作り前進せよ」
「ハッ」
すぐに陣が汲みかえられる。そしてサラーフ軍を包み込んだ。
これで包囲は完成した。サラーフ軍は完全に包囲された。

「フン、それで囲んだつもりか」
ミツヤーンはまだ状況を理解していなかった。酒に酔った頭でモニターを見上げた。
「そんなもの我が軍の数の前には何の役にも立たんわ。構わぬ。逆に全方向に攻撃を仕掛けよ！」
それは最早作戦の指揮ではなかった。ただ闇雲に攻撃せよ、と言ったに等しかった。
無論それがまともな攻撃に繋がる筈もなかった。サラーフ軍は囲みを崩すことが出来ず次第にその数を減らしていった。
「さて、どうするつもりかな、連中は」
包囲は上からも下からも行われていた。最早何処にも逃げ場はなかった。
「まさかまだ兵力を頼みにしているわけではあるまい」
だが彼等はまだそれを頼みにしていたのである。
「小賢しい真似をしてくれますな」
ホリーナムは完全な包囲下にあってもまだ自分達の置かれた立場をわかってはいなかった。
「そうだな。どのみち兵力では大きな差があるというのに」
ミツヤーンもである。彼等は既に泥酔しており自分達の兵力がどれだけ消耗しているのかわかっていなかった。
それはキヨハーム達も大体同じであった。彼等は部下に適当に指揮を任せ食事と称して自室で酒を飲み淫らな宴に興じていたのである。
「ここで一つお返しをしてやるか」
アッディーンは意地悪く笑ってこう言った。そして側にいるシンダントに対して顔を向けた。
「ミツヤーンの電報を送るぞ」
「電報ですか」
「そうだ。文は俺が書く。すぐに用意してくれ」
「わかりました」

そしてアッディーンはミツヤーンに宛てて電報を打った。それはすぐにミツヤーンの許にも届いた。それを見たミツヤーンは酒に酔った頭で怒り狂った。
「ふざけるにも程があるわ、若僧風情が！」
彼は酒瓶を床に叩きつけそこらじゅうを踏ん回った。そして意味のわからないことを延々と喚き散らしている。
「どうしたのですか」
ホリーナムはそんな彼に酒臭い息を出しながら尋ねた。
「これを見ろ」
ミツヤーンはその電報を見せた。それを見たホリーナムもその顔を見る見るうちに真っ赤にさせた。
「何と・・・・・・。我々を馬鹿にするにも程がある！」
その場にいた心ある者達は当然だ、と思ったが口には出さなかった。
「許さん、すぐに連中を成敗してくれる！」
「はい、総攻撃しかありません！」
それは妥当な命令であった。ただし彼等も知能ではそれも妥当なものにはできない。
彼等が下した命令は驚くべきものだった。
「奴等を瞬時に殲滅する。全方位に一斉攻撃を仕掛けよ！」
それは先程と全く同じ命令であった。それを聞いた者は皆絶望した。
だが彼等に意見を言う者はいなかった。何か言えばその場で射殺されかねなかった。実際に彼等は手に銃を持って喚いているのだ。
その命令はすぐに実行に移された。それを見たアッディーンは思わず笑ってしまった。
「馬鹿だ馬鹿だと思っていたがこれ程までとはな」
鈍重な動きでこちらに向かってくるサラーフ軍を見て嘲笑した。
「せめて一方向に攻撃を仕掛けるという考えにはならないのか」
「どうやらそのようですね。ここまでの愚か者も珍しい」

ガルシャースプが言った。
「そうだな。そもそも火力も速度もバラバラに編成された艦隊で一斉攻撃を仕掛けて来るというのも馬鹿げているが」
アッディーンはモニターから目を離さない。
「ここまでくると喜劇だな。愚劣にも程がある」
「そうですね」
ここでシンダントが前に出て来た。
「愚か者共の愚かな戦いですから」
その口調は辛辣そのものであった。
「しかし単純に喜劇と呼べないところもあります」
「それは何だ？」
アッディーンは問うた。
「我々にとっては輝かしい勝利であるということです」
「それは少しキザな言葉だな」
アッディーンはそれを聞いて苦笑した。彼はあまりそうした芝居がかった言葉は好きではない。元々演劇を観ないせいもあるだろうか。
「だが確かにそうなるでしょうね、このままですと」
ガルシャースプが言った。
「閣下のご命令一つで」
「俺のか」
アッディーンはその言葉に顔を向けた。
「はい、是非勝利の為のご命令を」
「勝利の、か。どうもそうした芝居がかった言葉は好きにはなれないが」
そう断ったが今こそ命令を下す時であるのはわかっていた。
「全軍まずは一斉射撃を浴びせよ。そしてそのあとは波状攻撃を休むことなく行え！」
「ハッ！」
ガルシャースプと参謀達が一斉に敬礼した。そしてそれはすぐに

実行に移された。
オムダーマン軍のビームとミサイル、そして魚雷が一斉に放たれる。それはサラーフ軍の前面の艦艇を激しく撃ちすえた。
「そんなものが通用するかい！」
キヨハームはすっかり泥酔した様子で艦橋に来るとその攻撃を見て言った。
「構わん、前進じゃあ！」
「しかし・・・・・・」
周りの心ある僅かの者がそれを制止しようとする。しかし。
そこに拳がきた。彼はそれを顔面にまともに受けた。
右の眼球が衝撃で飛び出る。そして壁に後頭部を叩きつけられた彼はそのまま床に崩れ落ち動かなくなった。
「わしに指図できる程の身分なんかい、御前は」
彼は血に塗れた拳を軍服で拭きながら言った。
「行くぞ、何か言う奴は今のこいつみたいになるぞ」
「はい、わかってますよ」
取り巻き達は嬉々としてそれに従った。他の者も無残な屍を見て仕方なく従った。
「おら、行けや！」
キヨハームは自身の艦を前に進ませた。
「わし一人であいつ等全部やっつけたるわあ！」
どうやら彼は臆病ではないらしい。しかしだからといってそれが戦上手とは限らない。
「前に飛び出してきた艦に攻撃を集中させろ！」
アタチュルク達各艦隊司令の指示が飛ぶ。それに従いオムダーマン軍は攻撃する。
忽ちキヨハームの乗艦は十発のミサイルを受けた。そして瞬時に炎の塊となり宇宙の塵となった。キヨハームが自身の無様な死を知ったのはジャハンナムにおいてであった。
エトンは作戦指揮などせず看護婦達を相手に淫らな行いを続けて

いた。その司令室に旗艦の若い将校達が入って来た。
「何だ貴様等、俺は忙しいのだ！」
見れば彼は全裸で看護婦を押し倒していた。それを見た将校達は黙ってビームガンの引き金を引いた。
エトンの頭をビームが貫いた。そして彼は看護婦の上に崩れ落ちた。見れば看護婦には意識がない。どうやら首を絞めて殺してそれを死姦していたようだ。
「こんな奴が指揮官だったのか・・・・・・」
彼等はエトンの屍を蹴り飛ばしながら言った。
「だがこれでお終いだな。こいつはジャハンナムへ行った」
「ああ。そもそも生まれてきたのが間違いだったがな」
彼等はそう言いながら司令室を出た。そして艦橋に戻った。

## 第三部第五章　雑軍その七

艦橋では多くの死体が横たわっている。どうやらいざこざがあったようだ。

見れば倒れているのは人相の悪い者ばかりである。どうやらエトンの部下達のようだ。

「サラーフの誇りを汚した愚か者共が」

彼等はその屍を見ながら吐き捨てるようにして言った。

「暫くそこで転がってろ。あとで処分してやる」

そう言うと電報をオムダーマン軍に対して出した。投降の電報であった。

こうした艦が次々に出て来た。そして彼等がまず行ったことはミツヤーン派の者達への攻撃であった。

モトキーラムはとりわけ無残な最期を遂げた。艦橋において彼に今まで虐待されていた兵士達が襲い掛かりまず全裸にされた。そして全艦艇に実況されながら寸刻みにされた。それはオムダーマン軍からも見られた。既に艦橋は占拠され投降が受諾されていたからこそ出来たのであった。モトキーラムの部下達は生きながらダストボックスから宇宙空間に放り出された。

それを見たペタシャーンは激昂した。すぐにモトキーラムの乗艦に攻撃を仕掛けようとしたがその前に兵士達に後ろから撃たれた。彼等もペタシャーンにはいつも些細なことで虐待を受けていたのだ。その死体はバラバラにされ晒しものにされた。

最早オムダーマン軍による攻撃よりもサラーフ軍の心ある者達がミツヤーン一派を攻撃する方が苛烈になっていた。彼等は今までその横暴を指をくわえて見ているだけしかできなかった。だが遂にそれに立ち上がったのだ。

まずオムダーマン軍に投降を打診する。そしてそれが認められるとすぐにミツヤーン派の連中に襲い掛かったのだ。こうしてこの戦

いは新たな局面を迎えた。
「何か話が変わってきたな」
次々とやってくる投降の打診にアッディーンは面食らっていた。
「はい。こうなるとは思いませんでした」
ガルシャースプが答えた。
「それだけあの連中が憎まれていたということか」
「でしょうね。まあ心ある者ならそうでしょう」
サラーフ軍にも心ある者は多かった。その代表とも言えるのがグルド＝スマラであった。
「ミツヤーンは何処だ！」
彼は自らの下にある艦隊全てを率いてオムダーマン軍に投降した。そしてミツヤーンを探して戦場を荒れ狂っていた。
彼もサラーフを愛していた。だがそれは正常なサラーフであり今のような異常なサラーフではなかった。その為サラーフを極限まで腐敗させたナベツーラ、そしてその下にいるミツヤーン達が許せなかったのだ。
彼だけではなかった。その他の多くの者がミツヤーン達を狙いオムダーマンについた。彼等はこの戦いに負ければサラーフの滅亡が確実なのはわかっていた。だがそれは最早包囲された時点で確定していた。彼等にとって第一の敵はそういう状況にしたミツヤーン達であったのだ。
次々とミツヤーンに与する者達が惨殺されていく。そしてオムダーマンに投降する者はあとを絶たなかった。オムダーマン軍は最早攻撃を加えてはいなかった。ただサラーフの投降を認めその援護をしているだけであった。
ミツヤーンは戦場を逃げ回っていた。そして軍の一部がかろうじて包囲の隙を見つけそこから逃げて行くのを見た。じつはこれはアッディーンが意図的に用意した罠であった。
「奴は必ずそこに引っ掛かる。あの男を倒せるのなら少し位の取りこぼしは構わん」

アッディーンは言った。ミツヤーンとホリーナム達はそれに気付かずそこへ突入しようとした。
その時だった。彼等の前にオムダーマンの艦隊が一斉に現われた。
「な・・・・・・」
こちらは僅か数隻しかない。まともにやって勝てる筈もない。彼等は慌てて他の逃げ道を探す。
だがそれはなかった。上も下も、右も左も塞がれていた。そして後ろからは別の者達が迫っていた。
「いたぞ、逃がすな！」
サラーフ軍の者達であった。彼等はミツヤーン達を後ろから取り囲んだ。
「もう逃げられんぞ」
そこでアッディーンの旗艦アリーからモニターで話がきた。
アッディーンはミツヤーン達の艦のモニターに顔を出した。そして彼等に対し言った。
「私はオムダーマン軍の総司令官アッディーン上級大将だ」
彼はまず自らの階級や氏名を名乗った。
「ミツヤーンとかいったな」
彼はあえて侮蔑を込めてその名を呼んだ。
「貴様とその取り巻き共のことは聞いている」
彼はあからさまに侮辱を込めていた。
「まず言っておくが降伏は認めぬ。貴様は死ぬべきなのだ」
そう言うとさらに冷酷な言葉を浴びせた。
「貴様等を裁くのは我々ではない。後ろにいる者達だ」
そこにはサラーフ軍がいる。かって自分達が顎で使い散々蔑視していた者達だ。
「死ね、私が言うことはそれだけだ」
そしてモニターの回線を切った。それを見てミツヤーンとホリーナムは怒りで身体を震わせた。
「おのれ、若僧が・・・・・・」

彼等はまだ自分達だけ助かろうと考えていた。そして周りの者達を見回した。そして自分達にほんの少しだけ似た顔立ちの者を二人程見つけた。実際には全く似ておらず彼等が酒に酔った目と頭で選んだ者達だった。
「おい、貴様等」
ミツヤーンとホリーナムはその二人を前に引き出した。
「我々の身代わりになれ。いいな」
何と彼等をかわりに人身御供にし自分達は逃げるつもりなのだ。だがその二人は冷たい声で言い返した。
「お断りします」
「何っ！？」
二人はそれを聞きさらに激昂した。
「貴様等上官の命令がきけんのかあっ！」
「そうだ、それが軍人としての勤めだろうが！」
「上官！？軍人！？」
彼等はそれを聞いて口の端を歪めて笑った。それは彼等だけではなかった。ミツヤーンやホリーナムを嫌悪する心ある者達全てがそうであった。
「一体どの口で言うやら」
彼等はミツヤーンとホリーナムを取り囲みながら言った。
「御前達が一度でも軍人らしく行動したことがあったか」
「上官！？何の敬意も払うに値しない奴をそう思ったことは一度もない」
彼等は既にミツヤーンやホリーナムの取り巻き達を拘束していた。
「そんなふざけたことを言う口はこうしてやる」
まずはその口を拳で殴った。
「アググ・・・・・・」
歯が折れていた。鮮血が飛び散る。二人は倒れ込み思わず口を押さえた。
「これだけじゃないぞ」

そう言うと今度は股間を蹴り飛ばした。流石にこれには悶絶する。
「まだだ、今までの恨み晴らしてやる」
誰かが何本かナイフを持って来た。そしてミツヤーン一派を取り囲んだ。
その様子はモニターでオムダーマン、そして投降したサラーフの将兵全てに送られた。彼等はモトキーラムやペタシャーンと同じようにゆっくりと寸刻みで処刑されていった。
この二人の処刑をもってムスタファ星系外の戦いは終わった。結果はオムダーマン軍の圧勝であった。
サラーフ軍で戦線から離脱できたのは一割程度、四割近くが戦死した。その中には味方により殺されたミツヤーン派も入っている。そしてその他は皆オムダーマン軍に投降した。何と彼等は自軍と同じ位の大規模な捕虜を得たのだ。
「まさかこんなことになるとはな」
流石にアッディーンもこの事態には閉口した。
「どうするべきかな」
そしてバヤズィトに対して問うた。彼が後方参謀であるからだ。
「そうですね」
バヤズィトもこうした事態は予想していなかった。暫し考え込んだ。
「まずは武装解除しましょう。そうすれば暴動等が起こっても心配はありません」
「うむ」
「それから」
彼はまた考え込んだ。そして言った。
「捕虜はまず後方に送りましょう。殺すわけにもいきませんし」
「そうだな。それは論外だ」
アッディーンは戦場での勝利を追及こそすれ捕虜や非戦闘員に対して危害を加えることはしない。それは彼にとっては最も卑しむべきことなのだ。

「カッサラまで送るとするか。それからは軍の上層部に任せよう」
「そうですね。おそらく上手くやってくれるでしょう。少なくともアジュラーン閣下なら悪いようにはしません」
「だな」
アジュラーンも捕虜に危害を加えるような人物ではない。その点は安心だった。
「あとはサラーフを倒したあとですかね。おそらく彼等も我が軍に編入させるでしょう」
「問題は忠誠心か」
「そうですね。しかしそれは今のサラーフに対してでしょうか」
「それはないだろう」
アッディーンは言った。
「あんな状態の国を誰が支持するというのだ。支持するのはそれこそ骨の髄まで腐り果てた者共だけだ」
「でしょうね」
バヤズィトはその言葉に頷いた。
「ですが本来のサラーフに対しては、ですね」
「そうした者は仕方ない。こちらが無理に服従を強いても無駄だろう。かえって逆効果だ」
「はい」
ここには後々火種を抱えてしまうのではないか、という危惧もあった。
「それにナベツーラは出鱈目に兵を集めたようだな。問題のある者が多いと聞く」
「そうした輩は既にあらかた死んでおりますが」
「だがまだ僅かながら生き残っているだろう。一人残らず見つけ出して軍事裁判にかけよ。そして然るべき処置をとれ」
「わかりました」
それは処刑という意味であった。
「彼等のオムダーマン軍への編入は急ぐ必要はないな」

「はい、むしろ早急に行っては危険な問題だと思います」
バヤズィトは言った。
「何しろ膨大な数です。旧ミドハド軍の編入もそれなりに手間がかかりましたし」
「今回の規模はその比ではないからな」
「その通りです」
バヤズィトはその言葉に頷いた。
「それに最早サラーフに軍を回復させることはできまい。これだけの損害を受けてはな」
「あとはアルフフーフを攻略するだけですね」
「いや、それはまだ先だ」
アッディーンはそれに対しては首を横に振った。
「急いではならない。まずは星系を一つ一つ我々のものにしていこう」
「このムスタファを拠点としてですね」
「そうだな。だがすぐに拠点を移すことになる」
彼は言った。
「その場合はアルフフーフとムスタファの中間点がいいな」
「それならいい場所がありますが」
「何処だ？」
アッディーンは問うた。
「アルマザール星系はどうでしょうか」
「アルマザールか」
その星系のことはアッディーンも知っていた。交易の中心でありアルフフーフに次ぐ人口を誇る星系である。
「あそこなら各地に兵を送ることも容易ですしね」
「そうだな。それに物資も集まりやすい」
アッディーンは考えながら言った。
「よし、まずはアルマザールに進むか」
「それがよろしいかと」

「よし、全軍に伝えよ」
アッディーンは参謀達の方を振り向いた。
「この戦いの処理が終わり次第アルマザールに進軍する。そしてそこからサラーフ各地に兵を送る」
「わかりました」
参謀達が応えた。
「そしてアルフフーフを攻略する。ナベツーラの首は最早我等が手にある！」
「ハッ！」
艦橋にいた全将兵が敬礼した。そして彼等は戦いの傷を癒し次の行動に備えるのであった。

第三部　完

２００４・７・３

# 第四部第一章　欺瞞の国その一

欺瞞の国

ムスタファ星系外の戦いでのオムダーマン軍の大勝利の情報はすぐに各国に伝わった。

それはサハラ各国だけではなかった。連合やエウロパにも知れ渡っていた。

「これでサラーフは終わりだな」

こう見る者が殆どだった。最早サラーフには戦力はなくあとはオムダーマンの侵攻に為す術もなくやられるだけだというのが大方の予想であった。

だが当のサラーフはそう思ってはいなかった。

何とこの戦いはサラーフ軍の大勝利だと報道されたのだ。

「名将ミツヤーンの知略冴えわたる」

「名軍師ホリーナム颯爽と登場」

「見よ、これが猛将キヨハームの戦いだ」

こうした歯の浮くような賛辞が全くの捏造記事と共に新聞やテレビで乱れ飛んだ。そしてサラーフの市民達はそれを信じた。

そして死んだ筈の彼等がインタビューを受ける。俳優を使ったのだ。

「今度はどうなさるおつもりですか？」

アナウンサーがテレビに出演した死んだ筈のミツヤーンに対して尋ねた。

「決まっていますよ」

彼は自信に満ちた声で言った。

「オムダーマン全土を一気に併合するまでです」

「おおっ、流石は稀代の名将です！」

そうした臭い芝居がテレビで行われた。八条はそこまで見るとテレビのスイッチを切った。

「いい加減精神衛生上悪いですね」
彼は不快感を露にしてそう言った。
「ですね。まさかこの時代にここまで酷い捏造報道が見られるとは思いませんでしたよ」
側にはチョムがいた。彼は仕事の打ち合わせで八条の官邸に来ていたのだ。
「我が国もかつてはこうしたマスメディアの弊害に悩まされたのですが」
八条はチョムの方に顔を移して言った。
「それは一千年以上も前のお話でしょう？」
「そうですけれどね。一度それで戦争に突入しそれから半世紀以上もの間彼等は専横を欲しいままにしました」
日本の歴史の汚点とも言われる。この時代の日本のマスメディアは彼等がどれだけ権力を握り易く、そして腐敗し易いかということを世に伝えている。
「ネットがなければそのままだったでしょうね」
「そんなに酷かったのですか！？」
チョムは思わず顔を顰めてしまった。
「はい。何度捏造しようが犯罪を繰り返そうが一向によくならないかったのですからね」
「それは私も歴史で学びましたが」
「結局マスメディアとはそうしたところがあります。自浄能力に欠けるのです」
「そのようですね。どうやらそれは政界や官界よりも酷いようです」
「情報を独占して密閉してしまいますからね」
八条の言うとおりであった。マスコミはこの時代においてもそうした傾向があった。
下手に警察や公権力が介入すればそれは報道の自由や言論の自由への侵害となる。また彼等はそれを常に楯にとる。なお彼等が幾らその報道の自由や言論の自由、人権等を侵害してもそれはお構いな

しである。
「彼等へのチェックは行き届きにくいです。本当にネットが発達しなければ大変なことになっていたでしょうね」
ネットはネットで問題がある。だが非常に有益なものであることは確かだ。
「少なくとも今のサラーフのようにはなりませんね」
「はい」
チャムはその言葉に対し頷いた。
「サラーフにはネットがありませんから」
「だからあのようにマスコミが権力を握ると」
「それにしても酷いものですが」
チャムも顔を顰めさせた。
「ナベツーラのような者に権力を握らせるのですから」
「おそらくあの国のマスコミとナベツーラは同じ程度の人間なのでしょうね」
八条は表情を変えずに言った。
「だからこそあのように礼賛できるのです」
「成程」
チャムは頷いた。
「人間というのは同じ程度の者しか理解できませんからな」
「残念なことに。結局それはどうしようもありませんね。それは人間の本質ですから」
八条は寂しそうな顔をして言った。
「どれだけ素晴らしい思想や宗教、哲学でも人間自体の本質を変えるかというと。残念ながらそうではないというのが現実ですね」
「はい」
「それは仕方ないです。結局それは変えようがありません。しかし」
八条はここで顔を引き締めさせた。
「律することはできますがね」
それは彼の持論であった。結局人間の本質は変えることができな

い。だが自らを律し努力することで自身を高めることができるのだ。
実際に彼は紳士として知られている。これは彼の常日頃の心がけと努力から得た評価だ。
軍においては軍律がある。八条は軍律を厳しく定めた。それは彼等が軽挙妄動に走らないようにする為であった。
「まあこの話はそれ位にしましょう」
彼はここで話を変えることにした。
「本来は別の理由でこちらに来てもらいましたし」
「おっと、そうでした」
チャムは思い出したような顔で笑った。

## 第四部第一章　欺瞞の国その二

「今開発中の艦艇のことですね」
「はい、進行状況はどうでしょうか」
「順調です」
彼は自信に満ちた声でそう言い切った。
「もうすぐ試作の艦艇が出来上がってきます。それの試験運用までもうすぐです」
「おっ、それは早いですね」
八条にとってもそれは意外だった。こうした開発はどうしても遅れがちになってしまうからだ。
「ええ。色々と試行錯誤はありましたが」
チャムは言った。
「ですが期間が長かったですしじっくりと考えることができましたから。防御力と生存能力には今までとは比較にならない程優れた艦艇になっていますよ」
「それは何よりです」
八条はその報告に満足した笑みを浮かべた。
「高速戦艦等はどうなっていますか」
そして機動部隊について尋ねた。
「こちらはあまり防御は考慮に入れませんでした」
機動力を維持する為にはどうしてもあそうなるものである。防御力より速さを優先させる用兵思想だからだ。
「ただやはり生存能力は考慮しました」
「それはいいことです」
八条は言った。
「結局将兵が死んでは何にもなりませんからね」
彼は頬に手を当ててそう言った。
「折角育てた将兵に死なれては。しかも志願兵にも影響が出ますし」

これは志願制の軍隊の悩みの一つだった。質も士気も高い兵を維持できるがその分待遇や安全性を考慮しなければならない。そうしたデメリットもあるのだ。
「そうですね。実は開発スタッフもそれを念頭に入れていました」
チャムは言った。
「肝心の将兵に何かあっては元も子もありませんから」
「全くです」
八条はそこで頷いた。
「兵器は幾らでも調達できますがね。少なくともこの連合の国力では。ですが」
そこで言葉を続けた。
「将兵はそうはいきません」
死んだ将兵は帰ってはこない。損害が大きければ先に述べたような事態が危惧される。
「結局彼等あってのものですから」
「その通りです」
チャムは満足気な声で頷いた。
「今まで連合はとかく軍を軽視する傾向にありました」
「それは仕方ないです。海賊退治が仕事でしたから。エウロパ以外にこれといって脅威もありませんでしたし」
そのエウロパも睨み合いの状況であった。そして干戈を交えた戦いはしていない。
「待遇もそれ程いいとは言えませんでしたしね、どの国も」
とかく給料だけはずめばいいという風潮が蔓延していた。それで将兵の士気が上がるかというとそうはならない。
「やはり真っ当な地位を約束するというのは重要ですね」
八条の言う通りであった。人間というのはそれ相応の尊厳が与えられないと動かないものなのだ。長い間連合各国はそれを忘れていた。
「俗に言う平和ボケというやつでしょうか」

「それはあまり好きな表現ではありませんがね」
八条はそう付け加えたうえで言った。
「残念ながらそうでしょう。我々は今まで海賊やテロリスト以外には特に脅威はありませんでした」
所詮海賊は海賊である。そしてテロリストはごく一部の狂人達である。そうした連中が世の中を変えることなどできはしない。従って彼等は良識ある市民から憎悪こそされ一大勢力にはなりえないのだ。
「開拓を進め経済を発展させることだけを考えていればよかった。ですがこれからはそれだけではやっていけないかも知れません」
「といいますと」
「こうして連合軍が出来て動きはじめたのも」
八条は落ち着いた声で話しはじめた。
「もしかするとこれから起こる銀河の潮流の一つかも知れません」
今サハラ西方ではオムダーマンが日の出の勢いで伸張している。そしてシャイターンという男も出て来た。
エウロパにおいてはサハラ総督府で勇名を馳せたモンサルヴァートが元帥になりその本土防衛計画を進めているという。明らかにこれまでとは何かが違っていた。
「こうしたことは過去にもありましたが」
エウロパがサハラの侵攻した時もそうであったしサハラで大規模な戦争が起こったことも一度や二度ではなかった。この程度のことは過去には吐いて捨てる程あった。
「しかし今回は何かが違います」
八条は顔を引き締めた。
「例えばです」
そしてそう前置きしたうえで言った。
「サハラの強力な統一政府ができたなら」
それは誰もが一度は考えるが所詮は夢物語と一笑にふしてきた話だ。

「どうなるでしょうね」
「どうと言われましても」
チャムはそれを聞き考え込んだ。
「その政府が我々に対して友好的か敵対的かで状況は異なりますが」
それは技術畑の彼にもわかることであった。技術者といっても軍人である。最低限こうしたことを考えられる戦略眼が要求される。
「いずれにしろ意識しなければならない相手になりそうです」
「ですね」
八条はそれを聞いたうえで頷いた。
「もしこちらに何かしらの武力攻撃を意図するならば」
「その時は脅威ですね」
「はい」
八条はその言葉に対し頷いた。
「その時に備えて開発を進めていきましょう」
「そうですね。そして長官が仰っていたあれのことですが」
「あれですね」
彼はそれを聞いてニヤリと笑った。
「そちらの開発はどうなっていますか」
「やはり難しいですね」
チャムはここで深刻な顔をした。
「何分あれ程までの巨大な艦艇となりますと」
どうやらかなりの大型艦を開発しているらしい。
「装備や装甲、そしてエンジン等の開発も一からはじめておりますし」
「電子関係もですね」
「はい。ですが完成した時はかなりの戦力となるでしょう」
「頼みますよ。連合軍の象徴となる艦艇なのですから」
八条は言った。
「今まで軍にはその象徴となる兵器がありました」
それは二十世紀の軍隊においてよく見られたことである。

「ドイツ軍やソ連軍は戦車を開発しました」
彼等はそれで荒野を突き進み敵を踏み潰してきたのだ。
「アメリカ軍は空母を持っておりました」
その巨大な姿と艦載機が見る者を圧倒した。それがアメリカの覇権の象徴であったのだ。
「そして今我々は超巨大戦艦を持つのです」
「それもかなりの数を」
「はい。一個艦隊に旗艦として一隻ずつ。それで問題はないでしょう」
「ですね。火力も他の艦とは比較になりません」
「主砲の開発はどうなっていますか？」
「そちらも難航しています」
「やはり」
彼はそれを聞くと頷いた。
「要塞すら攻撃できる主砲となりますと尋常なものではありませぬ故」
「難しいですか」
「はい。しかし今のところ設計だけは出来上がっています」
「どんなものですか？」
「ガンタース要塞群の巨砲をモデルにしたものです」
連合のエウロパとの境にあるガンタース要塞群は十五の要塞星により構成されている。
この要塞星には無数のビーム砲座やミサイルランチャーが装備されている。そして周りには小惑星があるがこれも完全に武装されている。将に鉄壁の要塞だ。
それだけではない。基幹戦力である十五の星には主砲が備えられている。
この破壊力は絶大なものがある。一撃で数千隻の艦を消し飛ばせる程である。
「幾ら何でもあれ程の破壊力はないでしょう」

「はい、それは流石に無理です」
チャムは笑って言った。
「ですがかなりの破壊力があることは約束できます」
「そうですか。どうやら期待できそうですね」
「数千隻を一度に倒すのは無理でしょうけれどね」
「いやいや、仮に一千隻を倒す程度の破壊力でも」
八条は言った。
「数隻で砲撃すればかなりの威力になりますから」
「そうでしたね。それが主砲の使い方でした」
チャムはそれを聞いて言った。
「その艦をそれぞれの艦隊の旗艦にしようと考えているのです」
八条はまた言った。
「それで電子関係もかなり充実したものにされたのですね」
「そうです」
八条は頷いた。
「艦隊を編成する各艦を統制するには旗艦の電子や通信関係を充実させるのが最も効果的ですからね」
勿論旗艦だけでは駄目だ。他の艦艇にもそれは欠かせない。連合の艦艇の電子及び通信の設備はかなり整っていることで知られている。これは海賊達への対策の結果だ。
「それだけにこの超巨大戦艦の役目は大きいものになります」
「艦隊の中心ですからね」
「そう、そして連合軍の象徴でもあります」
八条の目が光った。
「この戦艦こそがこれからの連合軍の象徴。国内の平和を司るものになります」
「多分に政治的な意味合いもありますね」
「はい。元々軍というのはそうしたものですから」
連合では長きに渡って忘れられていたことだ。
「これからエウロパにもガンタース要塞群だけでは心許ないですし

ね」
「エウロパだけですか？」
ここでチャムは問うた。
「おわかりのようですね」
八条はその言葉に対して微笑んだ。
「どうもサハラの動きが気になります」
八条の目が考えるものになった。
「アッディーン提督ですか。オムダーマンの」
「はい」
今や彼は連合においても知らぬ者のない程であった。
「彼によりサハラは大きく変わるかも知れません」
「少なくとも西方は大きく変わりましたね」
「はい」
最早オムダーマンは西方を掌握したも同然であった。サラーフの崩壊は最早知らないのはサラーフの者達だけであった。そして今彼等はアルマザール星系に向かっているという。
「アルマザールを陥落させれば最早サラーフ全土を併合したも同然です」
そこから各地に兵を進めることが出来る。その中には当然サラーフの首都アルフフーフも入っている。
「それがわかっていないのはサラーフの者だけですか」
「そうですね。しかし彼等もすぐにわかることになりますよ」
八条はいささか冷淡な声で言った。
「亡国と、そしてマスメディアの害毒と共に」
彼はシニカルな言葉や表情は作らない。だがそこには僅かにそれが感じられたように思えた。
二人はそれで別れた。八条は官邸を出て国防省に向かった。

## 第四部第一章　欺瞞の国その三

途中で農園が目に入った。
「また古風な農園ですね」
八条は車中からそれを見て言った。
「そうですね、どうやら趣味でやっておられるようです」
隣に座る秘書官が言った。
「昔ながらの農法ですね」
見れば鍬を使い畑を耕している。そして水田には一つ一つ手で植えられたと思われる苗が並んでいる。
この時代の農園は皆機械とコンピューターを使って作業し管理するようになっている。それだけでかなりの大規模な農場が経営できるようになっている。
そして家畜や酪農も二十世紀のものとはかなり違っている。品種改良により大型化した家畜達は放牧を中心として育てられている。かっての人口飼料は問題があり廃止されたのだ。
そして農家が個々で製造及び販売をしていることが多い。大規模なアグリビジネスを営む企業もあるが彼等もそうした農家と競合しているのである。
それが連合の農業であった。今八条が見ている農園は最早連合では稀少価値であった。
「こうした農園もいいですね」
「はい、今の大規模な農園もいいですけれど」
やはり何処か余裕がないのである。商業を意識しているせいであろうか。これは一面においては正しいがどうしても余裕をなくしてしまいがちになる。
二人はそれを見ながら国防省に向かった。そして執務室に入った。
「また山の様な仕事が待っていますね」
「それは仕方ないですよ」

そんなことを話しながら部屋に入った。そしてその山の様な仕事と向かい合うのであった。

エウロパでも仕事の山に囲まれている男がいた。モンサルヴァートである。

「予想はしていたが」

彼は書類のサインを終えると言った。

「一向に仕事が減らないな。これは一体どういうことなのか」

「それは仕方ないですよ」

前に立つ若い男が言った。

「何しろ本土の防衛を一から組みなおすのですから」

その声は高く澄んでいた。見ればその顔も細く整っている。黒い髪と瞳を持っている。

エウロパの軍服を着ている。長身である。

「そうだな。それは仕方ないか」

モンサルヴァートは少し溜息を出して言った。

「それを少しでも和らげる為に私をお呼びしたのですね」

その若者は微笑みを浮かべてモンサルヴァートに対して言った。

「お任せ下さい。私は事務仕事は得意ですから」

「タンホイザー中将」

モンサルヴァートはここでその若者の官職及び氏名を呼んだ。

「私は卿を事務の問題で呼んだのではない」

「そうだったのですか！？」

タンホイザーはそれを聞いて意外そうに言った。

「うむ。実は卿に頼みたいことがあるのだ」

モンサルヴァートは顔を上げた。そこにはタンホイザーの顔がある。

「何でしょうか」

彼は問うた。

「総督府だが」

モンサルヴァートは言った。
「実は今これといった人材がいないのだ」
モンサルヴァートと彼が指揮していたスタッフは全て本土に戻っていた。各艦隊の司令や参謀達もである。
「マールボロ閣下がおられるではありませんか」
「閣下に全て押し付けるつもりか！？」
「いえ」
流石にそれをしようという者はいなかった。
「今はシャイターンも大人しいようだが」
先の戦い以後シャイターンはエウロパにとって最も危険な男とみなされるようになっていたのだ。
「だがあの男は油断できん。我々を倒したその返す刀でサラーフ軍を壊滅させたような男だ」
「あの戦いは私も資料を読みました」
タンホイザーは言った。
「見事ですね。頭ではわかっていても中々できるものではありません」
そこには純粋な賛辞が込められていた。
「将に天才の戦い方です」
「あの男をやけに褒めるな」
「そうでしょうか」
彼はモンサルヴァートの言葉に対し笑って誤魔化した。
「例え敵とはいえ人を素直に褒められるのはいいことだがな」
モンサルヴァートはそれ自体を咎めるつもりはなかった。
「だが過大評価になるのならそれは危険だ」
「それはわかっておりますよ」
「どうだか。卿はどうも常に敵を求めるところがある」
「宿敵との絶え間ない戦いこそが騎士を育てるのですよ、閣下」
「騎士か」
エウロパには騎士道が色濃く残っている。軍人は如何に汚い策を

弄しても戦場においては常に正面から正々堂々と戦うのをよしとする。これはモンサルヴァートも強く持っている考え方である。実際に彼はアガレスとの戦いでは正面からアガレス軍と対峙した。これがとかく実利主義に走り勝利のみを求める傾向にある連合とは違う点である。

「私も騎士道は素晴らしいものだと思っている。それなくしては軍人ではない」

モンサルヴァートも幼い頃よりそれを叩き込まれていた。

「だが卿の騎士道は私の騎士道とは違う」

「どう違うのですか？」

「私の騎士道は現実を見るようにしているつもりだ。時には策略も必要だ」

だがモンサルヴァートの評価は戦術家である。戦略家ではない。このことからもわかるように彼もまた戦場での勝利を求め政治でのことは他者に任せる考えの持ち主なのだ。これは軍人特有の考えだろうか。

「政治は政治家や官僚の仕事だ」

そういう考えは特に連合に強い。だが連合の軍人がそう考えるのはそれが彼等のビジネスだからである。連合の場合は政治に参加したければ選挙に行けばいい、発言したければ文民になれ、影響を誇示したければ政治家に立候補しろ、ということである。これは民主主義国家の基本的な考えであり実際にそうして政治家になった者も多い。今の大統領であるキロモトも軍人出身である。こうした軍人出身の政治家が特に差別されるということはない。確かに連合では軍人の地位はお世辞にも高いとは言えないがそれでも軍事の専門知識は貴重なものであることは事実だからだ。マウリアにおいてもそれは同じだ。だがマウリアは僅かながらカーストの考えが残っているようだ。

だがエウロパは違う。貴族がいるが彼等は軍務は所謂『高貴なる者の責務』と考えている。だからこそ貴族が士官学校に入る例は多

い。そして彼等は軍人はすなわち騎士であると考える。
「騎士は軍事のことだけを考えよ、政治は政治家に任せておけ」
政治的な発言はことの他嫌われる。ただ政治家に転身するのはよかった。そうした柔軟性は持っていた。
だからこそ軍事における謀略も本来ならあまり好まれるところではない。プロコフィエフのような人物もいるにはいるが戦争は戦場において敵を打ち破るものであるという考えが根強い。
「戦争とはそうではないのですか？」
タンホイザーは爽やかな微笑みを浮かべて言った。
「戦争は政治の延長だという言葉は知らないのか」
モンサルヴァートは少し苦虫を噛み潰して彼に対して言った。
「政治家にとってはそうですね」
彼の言葉は相変わらずであった。
「それが将官の言葉か」
モンサルヴァートの言葉は少し呆れ気味であった。実際には将官ともなればやはり政治のことも視野に入れなければならない。そうしないと広い視野による的確な判断はできない。
「私は騎士ですから」
彼の言葉は相変わらずであった。
「確かに私はエウロパの中将の官を頂いております。しかし」
ここでその目が光った。
「それよりも騎士です。騎士は戦場で勝利を収めることだけを考えるべきかと思います」
「つまり政治や謀略には関わるつもりはないということだな」
「はい。それは他の者に任せていればいいと。どのみち私には向きません」
「そうか、わかった」
モンサルヴァートはそこまで言うと首を縦に振った。
「卿にはそうしたスタッフをつけるようマールボロ閣下にお伝えしよう」

「お願いします」
「だがシャイターンには気をつけるようにな。あの男は狡猾な男だ」
「はい」
タンホイザーの顔から笑みが消えていた。
「戦場においても手強い。戦場で戦うつもりなら覚悟しておけ」
「わかりました」
「そして私からの餞別だが」
彼は立ち上がった。そして後ろの窓のブラインドを上げた。
「見たまえ」
そこからは港が見える。その中央に一隻の戦艦があった。

## 第四部第一章　欺瞞の国その四

見ればモンサルヴァートの旗艦グラールと同じ型である。だが細部が少し違っている。
「新造艦だ。名前はグングニルという」
「グングニルですか」
かって北欧の神話において嵐と魔術、そして戦いを司った隻眼の神、今はエウロパの信仰に戦いの神の一人として知られているオーディンの持つ槍である。その名に相応しく鋭利な形をしている。
「そうだ、いい名だろう」
「はい」
タンホイザーは頷いた。
「この艦でサハラを頼むぞ。全ては卿の双肩にかかっている」
「わかりました」
「マールボロ閣下もおられるがな。だが」
ここでモンサルヴァートの顔が曇った。
「選挙の結果次第ではすぐに戻ってもらうかも知れないが」
エウロパでは総選挙の季節が近付いてきていた。今はラフネールが優勢だ。
しかし反対派が追い上げてきているのである。彼等は保守派である。だがその主張はあまり保守的とは言えなかった。
別に福祉や内政で革新なのではない。そんなものは時代と共に変わるものだ。現に今のエウロパにおいては内政は労働者優位、福祉は拡大が保守派の主張であった。革新派はそれよりも企業にも配慮した政策を執っていた。
彼等の政策で最も重要なのは軍事であった。何と彼等はサハラ侵攻を抑え、縮小させるべきであると主張しているのだ。
その根拠は東にあった。連合軍の設立を見て彼等に備えるべしと主張しているのだ。

「サハラなぞ分裂した小国の集まりに過ぎない」
彼等はそう言う。
「だが連合は違う、確かに彼等は寄り合い所帯だ」
その後に続く言葉はもう決まっていた。
「しかしその力は大きい。そして今武器を手にした！」
言うまでもなく連合軍のことである。その存在が彼等を刺激しているのだ。
「だからこそ私も本国に呼び戻されたのだがな」
モンサルヴァートは言った。
「それだけでは不十分だそうだ」
「閣下、私は政治のことには」
「ああ、さっき言ったばかりだったな、済まない」
モンサルヴァートは今しがた行われた話に対して謝罪した。
「連合か。今まで睨み合いのままいられたのが不思議な位だ」
モンサルヴァートは窓の向こうを眺めながら言った。
「いずれ彼等とも矛を交えるだろう」
そう言いながらタンホイザーに顔を戻した。
「それはすぐかも知れない」
「だと面白いですね」
「面白い、か」
モンサルヴァートは少し呆れた顔になった。
「はい、敵は強ければ強い程戦いがいがありますから」
「戦いがい、か」
「はい。軍人として生まれたのならやはり強い敵を倒したいものです」
「あっさりと言ってくれるな。相手はこちらの二十倍の国力、人口を擁しているのだぞ」
「だからいいのです」
タンホイザーの声と表情はまた朗らかなものになっていた。
「閣下もそう思われませんか？強敵と正面から戦い打ち破る喜びの

かけがえのなさを」
「戦争はスポーツではないぞ」
ここで彼は釘を刺すことにした。
「そうでしょうか」
だがタンホイザーは反論した。
「スポーツのはじまりはスパルタからですよ」
「それは知っている」
知らない者もいないだろう、内心そう思ったがそれは言わなかった。
「ですから戦争も楽しむべきなのです」
「違うのは命をかけるか、そうでないか、か」
「はい」
タンホイザーは頷いた。
「そもそもスポーツは戦争に備えて身体を鍛える為のものですし」
「それはそうだが」
だがやはりタンホイザーのいささか軽薄ともとれる考えには賛同できなかった。
「少なくとも私にとってはスポーツも戦争も同じものです」
彼はスポーツマンとしても知られている。士官学校時代はサッカーや体操で知られていた。成績も良かった。
「そういう考えだと何時か足下をすくわれるぞ」
「その時はすぐに立ち上がるだけです」
やはりあっけらかんとした態度である。
「謀略に屈するようならそれまでだったということです」
「そこまで覚悟があるのならいいがな。まあいい」
彼は話をここで止めることにした。
「すぐに総統に提案しよう、卿を総督府宇宙艦隊司令長官にするようにな」
「ハッ」
「責務は重大だ、心してかかるように」

こうしてタンホイザーは総督府に向かった。そして以後エウロパはこの若き将でもって魔王と対峙することになった。
歴史においてタンホイザーはよく便利屋だったなどと言われる。何かというと強敵と対峙させられたからだ。そしてそれが今はじまったのであった。

連合とエウロパはそれぞれの計画にむけて行動を続けていた。それはサラーフでも同じであった。
「おい、あの会社へ渡す記事は出来ているか」
首相官邸においてナベツーラはエジリームに対して問うていた。
「はい、こちらに」
エジリームは頷くと懐に持つ書類をナベツーラに手渡した。
「おう」
彼は葉巻を吸いながらそれを見た。
「よし、いいぞ。これなら問題ない」
そう言うとそれをエジリームに返した。それはサラーフ軍の大勝利を伝える内容の偽の記事であった。
「まあどのみちマスコミに関しては心配してねえがな」
「テレビではトクンとテリームが頑張っておりますし」
「おお、あいつ等は本当によくやっているよ」
アッディーンやガルシャースプが嫌悪感を露わにしたあの番組であった。それ以外にもこの二人はテレビに出てはナベツーラの歯の浮くような賛辞と敵に対しての容赦のあに罵倒を繰り返していた。良識ある僅かな人々は彼等がテレビに出るとチャンネルを替えてしまう。
「おかげでミツヤーンが勝ったと馬鹿共は思い込んでくれている」
そうであった。サラーフのマスコミはサラーフ軍が大勝利を収めムスタファ星系を奪還したと報道しているのだ。これは全くの捏造であった。
「それは御前のおかげだな」

「有り難うございます」
ナベツーラに言われエジリームは恭しく頭を垂れた。醜く黄色い歯が見える。
「総理」
ここで秘書の一人がやって来た。
「何だ」
ナベツーラはそちらに顔を向けた。
「お客様ですが」
「誰だ？」
「クマラ様です」
「おお、あの人か」
ナベツーラはその名を聞いて思わず顔を綻ばせた。
「すぐにお通ししろ。失礼のないようにな」
「わかりました」
傲慢なナベツーラとは思えない程の細かい気配りであった。
やがて秘書に案内されクマラがやって来た。小柄で腰と顔の曲がった醜い老人である。
「おお、よく来られましたな」
ナベツーラはその老人を笑顔で迎えた。
「何、親友のことを思えば」
クマラは醜悪な笑みを作って言った。
じつはこの二人は大学の頃からの同級生である。そしてナベツーラは政治家になりクマラはマスコミに入った。彼等は二人三脚で今までやってきたのだ。
これを癒着ではないのか、と言う者もいた。だがそれは黙殺された。彼等の癒着は『美しい友情』なのである。この二人がなすことはどのようなものであっても善であった。それがサラーフであった。
「ミツヤーンが死んだようですな」
「はい、あの馬鹿者は愚かにも失敗しました」
実はクマラの方が一歳上である。だからナベツーラも同級生とは

いえ低姿勢なのだ。
「まあそんなことはどうでもいい。要はそれが国民に気付かれなければな」
「はい」
ナベツーラは頷いた。
「エジリーム殿からお話は既に聞いております。こちらは任せて下され」
「お願いします」
「貴方はすぐに国会で威勢のいい演説をなさって下さい。そしてこちらにある兵力でオムダーマンを倒せばいいだけです」
「わかりました」
この二人は軍事の本なぞ読んだこともない。兵を送れば勝てると思っているのだ。
「それでオムダーマンは終わりですぞ。そしてあとは我等の思うがまま」
「そうですな。二人でこの国を骨の髄までしゃぶってやりましょうぞ」
ナベツーラも汚い笑みを浮かべた。
「その時は私共も」
ここでエジリームも出て来た。この連中は結局私利私欲によって繋がっているのだ。
「わかったえおる。そなた等にもたっぷりと与えてやろう。権力の甘い蜜をな」
「有難き幸せ」
今までもかなり甘い汁を吸ってきただろう。だがそれでも足りない。醜い人間の欲には限りがないのだ。
「では今日はこれで」
クマラは挨拶をし踵を返そうとした。
「もうお帰りですか？」
「フォフォフォ、妾の相手をせねばなりませんから」

クマラの女好きは有名である。彼は若い娘を手篭めにするのが好きなのである。家の使用人には全て手をつけ時には通り掛かりの女子学生を車の中に連れ込んだこともある。その多くは今も彼の屋敷で監禁されている。
「お若いことで」
「何、貴方も同じでしょう」
その通りであった。ナベツーラも多くの妾がいた。それを毎夜虐待し、それを無上の喜びとしているのだ。
「ではお楽しみ下さい」
「貴方も」
二人は下衆な笑みを浮かべたあとで別れた。ナベツーラはエジリームに向き直った。
「さてマスコミはこれでよし。あとはだ」
「はい」
エジリームは頷いた。
「オムダーマンの連中を倒すぞ。一気にやる」
「わかりました」
「すぐに兵を送れ、そしてあの若僧の首をとるぞ」
「はい」
二人は官邸から議会に向かった。そして出兵を密かに決定したのであった。

# 第四部第二章　愚か者の戦いその一

## 愚か者の戦い

「そうか、懲りずにまた兵を動かすか」
シャイターンは自身の屋敷の庭でサラーフの動向を密偵から聞いていた。
「はい、どうやら三万隻をもってオムダーマン軍の現在の本拠地アルマザール星系を攻撃するつもりのようです」
漆黒の服に身を包んだその密偵は片膝をついて報告した。
「三万か。兵力にして三百万といったところか」
「はい」
密偵は頷いた。
「勝てるはがない。ナベツーラもつくづく愚かだな」
「少なくとも軍事に関しては全くの素人です」
「それは知っているが」
シャイターンは密偵に顔を向けて言った。その手で真紅の薔薇を触っている。
「それでも少し考えたらわかるだろう。三万で十五万に勝てるかどうか。ましてや敗残兵で」
「それがわからないようです」
「理解できんな」
「兵を送ればそれで勝利だと思い込んでいますから」
「そうか、兵を送り込んだら、か」
シャイターンはそれを聞いて不敵に笑った。
「いいことを聞いた。他に情報はあるか」
「いえ、私が聞いたのはそれだけです」
「わかった、ではよい。下がれ」
「ハッ」
密偵は影の中に消えていった。そしてシャイターンが残った。

「ふむ」
薔薇を取りその香りをかいでいる。
「どうやら時が来たな」
そう言うと鈴を鳴らした。
「お呼びでしょうか」
程なくしてハルシークが姿を現わした。
「サラーフ軍が動いた」
「またですか。あれだけ痛めつけられておきながら」
その声はいささか呆れたといった様子であった。
「うむ。三万でオムダーマンを倒すそうだ」
「ほう、それは面白いですな」
シニカルに言った。
「我々のことには一切気付いていない」
「それはそれは。見事な戦略です」
彼はシャイターンが何を考えているのかわかっていた。
「では我々も勝てるな。兵を動かすだけでよいというのなら」
「はい」
「準備はできているな」
「閣下のご命令を待つだけです」
「よし」
シャイターンは薔薇を胸に飾りつけると妖しく笑った。
「すぐにサラーフへ向けて進軍する。三個艦隊でもってな」
「はい」
「エウロパとの国境に残る艦隊を回しておけ。どうやら新しい将が着任したようだ」
「誰ですか！？」
「私もはじめて聞く名だが」
シャイターンはそう断ったうえで言った。
「ロギ＝フォン＝タンホイザーというらしい。かなり若い人物のようだ」

「タンホイザーですか」
ハルシークはその名を聞いてふと考え込んだ。
「知っているのか！？」
シャイターンはそんな彼に対し問うた。
「タンホイザーという名は聞いたことがあります。確かエウロパにおいて代々高名な音楽家を輩出した家です」
「音楽家か」
シャイターンは音楽にもよく通じている。だがそれはサハラのものでありエウロパのものについては詳しくなかった。
「はい。軍人になる者がいるとは思いませんでしたが」
「異端児というわけか」
「そうですね、音楽家の家から見ると」
彼は答えた。
「面白い奴のようだな。最近どうも私が興味を持つに値する者が多くていい」
まるで危険を楽しむ悪魔のような笑みだった。
「楽しみなことだ。私の夢は強い者と共にあるのだからな」
「そうですな。世界は強き者によって治められるべきですし」
「いや、それは違うな」
シャイターンはそれに対して首を横に振った。
「強い者、美しい者しか生きることは許されていないのだ。歴史においてもな」
「そうでしたな、これは迂闊でした」
「わかればいい、フフフ」
シャイターンはまた妖しく笑った。
「仲間にいるもよし、敵にいるのもよし、だ」
「いずれにしろ閣下の覇道の華となるのですからな」
「そうだ。そうでなければサハラを統一しても面白くとも何ともない」
「強き者がいてこそのサハラですからな」

「その通り」
シャイターンは言った。
「行くぞ、サラーフの領土を幾らか手中に収める」
「ハッ」
「そしてそれを我等が力にする。次なる行動の為にな」
「次なる行動は」
「それはどうなるかな。東に行くもよし、北にいくもよし」
彼は面白そうに笑った。
「どちらにしても私の辿り着くところは同じだ」
「サハラの王者」
「そういうことだ。そして今まで我等を嘲ってくれたエウロパの者達に鉄槌を加える。アッラーの鉄槌をな」
彼もまたアッラーを信じていた。神を信じない者はサハラの者ではないのだ。
「その時こそ私の野望が達成される時だ。あの高慢な連中を一人残らずこの地から追い出す時がな」
「はい」
「その為にもハルシークよ」
ハルシークに言った。
「そなたの力を借りる」
「喜んで」
ハルシークは片膝を折った。シャイターンはそれを見て微笑んだ。まるで子供のように無邪気な笑みであった。
こうしてシャイターン率いる北部諸国連合軍はサラーフへ向けて進軍を開始した。これもマスコミにより隠蔽されサラーフの民衆は何一つ知らなかった。

シャイターンが兵を動かしたその時サラーフ軍三万はアルマザールに向かっていた。
「これだけ傷付いた艦を出撃させるとはな」

その艦隊を率いる司令は顔を顰めて言った。
「最早我々に死ねということでしょうか」
側にいた副司令が言った。
「だろうな。あいつにとっては我々の命なぞどうでもいいことだ」
「でしょうね」
副官は納得したように言った。
「連中の頭の中にあるのは保身と権力、そして利権のことだけですしね」
「それだけでろくでもない連中だということがわかるな」
司令は顔を顰めたまま言った。
「それがわからないのはマスコミの連中だ」
「あれがわからないのです」
副官は怪訝そうな顔をして言った。
「すぐにでもわかりそうなものですが。私は連中の人相だけでわかりましたよ」
「奴等も同じだからな」
司令は吐き捨てるようにして言った。
「奴等も権力に群がる蟻に過ぎん」
「そんな連中しかいないのですかね、我が国のマスコミは」
「残念ながらな。それに騙される方もどうかと思うが」
彼はマスコミに踊らされるがままの世論を憂えていた。
「今ここで言っても何にもならないことはわかっているがな」
「ですね」
副官も顔を暗くして言った。
「今は戦いのことを考えよう。どうするべきかな」
「はい」
彼等は会議室へ向かった。だが戦力差は明らかである。結局何の解決法もなく会議は終わった。
この時アッディーン率いるオムダーマン軍は既に布陣を終えていた。そしてサラーフ軍を待ち受けていた。

## 第四部第二章　愚か者の戦いその二

「また来るとは思わなかったな」
アッディーンは意外だと言わんばかりの顔をして言った。
「それだけあのナベツーラが無能だということでしょう」
ガルシャースプが言った。
「そう言われると納得がいくな」
アッディーンはそれを聞いて答えた。
「だがそれにしても酷い」
彼はまた言った。
「この程度のことは誰にでもわかりそうなことだが。今は到底戦える状況ではないと」
「最早まともな判断力をなくしているのでしょう」
ガルシャースプは言った。
「元々家柄とマスコミのバックだけであそこまでなった男ですから」
「それでもあそこまで酷いとな」
アッディーンは顔を顰めていた。
「最早狂人の域に達している」
「そうですね」
ガルシャースプは答えた。最初からわかっています、と言わんばかりの顔で。
「マスコミは狂気に走りやすいです。それは歴史が証明しています」
ここでもかってのマスメディアの横暴と腐敗の話が出た。
「それを後ろ楯に持つ者もまた同じです。人は自分と同じレベルの者と結び付くものです」
「確かにな」
アッディーンはそれを聞いて頷いた。
「それはどこでもそうだな」
人間は社会的な存在である。であるからグループを組む。それは

気の合う者同士によってなされる。そうでなくては不必要なトラブルが起こるからだ。
「そのような連中が支持する者などたかが知れています。だからこそあそこまで愚かなのです」
「その愚かさにも限度があるが」
アッディーンは言った。
「我々にとってはよいことだと言っても見ていると見苦しくて仕方がない」
「それは同意です」
「しかもそれによって多くの者が命を失い傷を負うというのも嫌な話だな」
彼は不必要な血を欲する男ではない。戦場で戦うことは好きだが決して残忍ではない。ましてや勝敗が決している状況では無意味な流血は許さない。
「それもまた歴史ではよくあることですけれどね」
ガルシャースプの声が沈んだものになった。
「今もそうですが」
「こんな愚かな会戦はすぐに終わらせるにかぎるな」
「ええ」
二人は頷き合った。そして敵を待ち受けた。
やがて前からサラーフ軍が来た。かなり損傷が激しいのかその動きは遅い。
「来たな」
アッディーンはそれを認めてすぐに指示を下した。
「囲め」
「わかりました」
参謀達が敬礼する。そして各艦隊に伝令が飛ぶ。
最初は重厚な陣を組んでいたオムダーマン軍は正面に来たサラーフ軍の包囲に取り掛かった。動きの遅いサラーフ軍はすぐに取り囲まれた。

「さてと」
アッディーンは完全に包囲されたサラーフ軍を見て言った。
「来てくれ」
そして参謀の一人を呼び寄せた。
「はい」
若い参謀が彼の側にやって来た。
「この電報をサラーフ軍に届けてくれ」
そう言うと一枚の紙を彼に手渡した。
「わかりました」
その参謀は頷くとすぐに通信室に向かった。
「さて、どうするかな」
アッディーンはサラーフ軍を見ながら呟いた。
その電報はすぐにサラーフ軍に伝えられた。司令はそれに目を通した。
「何ですか？」
副官が尋ねてきた。
「見たまえ」
彼はそう言うとその電報を手渡した。副官はそれを見て言った。
「降伏勧告ですか」
「どう思う？」
司令は彼に問うた。
「そうですね」
副官は考える顔をした。
「最早サラーフの命運は尽きています」
彼は言った。
「これ以上の戦闘は無意味から。未来がある若者達の命を無駄にするだけです」
「君もそう思うか」
司令はそれを聞いて言った。
「はい、閣下と同じ考えです」

彼はそこで言った。
「そうか」
司令はそれを聞き艦橋にいる者を見回した。
「君達はどう考える？」
そして全員に対して問うた。
「司令、副官と同じです」
艦橋にいる全ての者がそう言った。彼等もナベツーラ達には愛想が尽きていたのだ。
「そうか、よし」
司令はそれを見て頷いた。
「では決まりだ」
「わかりました」
副官は敬礼した。そしてサラーフ軍三百万はオムダーマン軍に降伏した。アッディーンは一兵も失うことなくこの戦いに勝利を収めたのであった。こうしてサラーフ軍の戦力は殆どなくなってしまった。アッディーンは心おきなくサラーフ領を占領することが可能になった。

## 第四部第二章　愚か者の戦いその三

三百万の捕虜を武装解除し後方へ送ったアッディーンは次の作戦を発動した。
「各地に兵を進めろ」
「わかりました」
そしてサラーフ各地に兵を送った。
兵もなく中央から切り離された形になっていたサラーフ各地は次々に陥落した。そしてオムダーマンは占領地を次々と拡大していった。
「首都アルフフーフにも兵を進めるぞ」
各地の占領状況が順調なのを見てアッディーンは言った。
「俺が直接行く」
「わかりました」
こうしてアッディーンは旗艦アリーをサラーフの首都アルフフーフに進めた。その後ろに一万隻の艦隊が続く。
「アルフフーフの防衛はどうなっているか」
アッディーンはシャルジャーに対して尋ねた。
「それですが」
問われたシャルジャーは前に出て来た。
「元々サラーフはその防衛を艦隊に頼ってきました」
彼は言った。
「従って要塞基地は殆どありません」
「首都近辺にもか？」
「いえ、首都には流石にあります」
シャルジャーは答えた。
「ブラークが」
「ムハンマドの愛馬か」
コーランにある人頭馬身の神獣である。信じられない速さで空を

駆ける。将に神の馬だ。
「はい、その名が示す通り信じられない速さで首都の周りを回っています」
「そして近付いた敵を攻撃すると」
「そうです、形は彗星に近いそうです」
「彗星か」
アッディーンはそれを聞いて考える顔をした。
「はい、首都の周りを軌道に沿って動いています。それは衛星というより彗星です」
「ふむ」
アッディーンはそれを聞いて考える顔をした。
「彗星ということは軌道は楕円状だな」
「はい、そうです」
「そして絶え間なく動きながらアルフフーフを守っていると」
「ナベツーラ達はブラークさえあれば心配はないと思っているようですが」
「相変わらずだな」
アッディーンは冷笑をもって応えた。
「要塞一つで守りきれると思うか」
「どうやらそのようですね」
シャルジャーは答えた。
「どこまでも愚かな」
その声には侮蔑があった。
「それはもうご存知だと思っておりましたが」
「あらためて知るとな。おそらく今も自分達だけは安全だと思っているのだろうが」
「そうでしょうね」
シャルジャーは言った。
「だからこそ平気なのですよ。軍が壊滅しても」
「どうやって攻めるかだな、問題は」

アッディーンは言った。
「どのみち生かしておくつもりはない」
彼もまたナベツーラ達のような輩を生理的に嫌悪していた。
「持久戦をとるか」
「兵糧攻めにするか」
アッディーンは言った。
「それはどうかも思います」
だがシャルジャーはそれに対して疑問の声を出した。
「何故だ？」
「一般市民にも犠牲が出ます故」
「そうか、そうだったな」
アッディーンはハッ、と気付いた。彼は一般市民に危害を加えることをよしとしない。
首都は一大消費地域である。その為補給路を絶てば効果はかなり期待できる。しかしそれだけ餓死者が多く出ることにもなるのだ。
「やはりブラークを陥落させるか」
「それがよろしいかと」
シャルジャーは答えた。
「だが問題はどうするか、ですね」
「ああ」
アッディーンは頷いた。口で言うのはたやすいが実行するとなれば難しい。
「問題はどうするか、だな」
彼は地図を開いた。
「これがアルフフーフのある星系の地図だな」
「はい」
シャルジャーはアッディーンの取り出した地図を見て答えた。
「見たところ攻めるのは容易いな」
「そうですね」
アルフフーフ以外に七つの惑星がある。その間にはこれといった

軍事基地はない。そしてアステロイド帯もなければ重力や磁気が複雑な場所もない。
「だからこそブラークを置いたのでしょうが」
「首都への備えとしてか」
アルフフーフのところに彗星に似た軌道上でブラークが描かれていた。それはアルフフーフを完全に包んでいる。
「これはかなり厄介なものだな」
アッディーンはその軌道を見て言った。
「そうですね」
シャルジャーも頷いた。
「アルフフーフを完全に守っていますし。それに」
彼はそこでブラークを指差した。
「動きもかなり速いです」
「そんなにか？」
アッディーンは問うた。
「はい。艦隊とほぼ同じ速さでアルフフーフの周りを回っています」
「艦隊とか」
「ええ、高速戦艦と同じ速さで」
「それ程か」
「はい、信じられないかも知れませんが」
シャルジャーは言った。
「そこまで速いとはな」
アッディーンはあらためて考え込んだ。
「火力は正面に集中しています」
「だろうな、それはわかる。おそらくスピードと火力で攻めるのだろう」
「はい」
「そして傷ついたところをさらに攻める。違うか」
「その通りです。実はブラークは無人兵器でして」
「無人兵器か」

「はい、アルフフーフから遠隔操作しているのです」
「では止まることも可能だと」
「その通りです、敵に遭遇した場合は容赦なく最後まで攻撃が可能です」
「そうか」
アッディーンはそれを聞いてまた頷いた。
「その火力はどの程度のものだ？」
「六個艦隊程だそうです」
「かなりあるな」
アッディーンはそれを聞いて言った。
「こちらから迂闊に攻めることはできない」
「ですね」
「しかし攻めないわけにもいかんしな」
それが要塞攻略戦のジレンマであった。
「どうしますか？」
シャルジャーは問うた。
「そうだな」
アッディーンは考えた。
「アルフフーフを陥落させるにはやはりブラークを陥落させるしかない」
首都を守る要塞である以上それは仕方なかった。
「しかし艦隊で攻めては下手に損害を出してしまう」
それが問題であった。損害は仕方ないが無駄に出す必要はない。
「どうするべきかな」
アッディーンは地図を見ながら考えた。この星系は複雑な地形ではない。そしてアステロイドも少ない。だがその一つ一つは大きい。
「アステロイドは大きいな」
アッディーンはその面積及び質量を見ながら言った。
「中には小さな衛星クラスのものまである」
だがそれ等は交通上あまり重要な場所にはない。だから特に問題

ではないのだ。
「こんな大きいのは滅多にないぞ」
そう、大きい。彼はここで気付いた。
「ム！？」
「どうしました！？」
シャルジャーが表情を変えたアッディーンに対して問うた。
「少将、これは使えるかも知れないぞ」
彼の表情は明るいものになっていた。
「どうされるおつもりですか！？」
「聞いてくれ」
アッディーンはそう言うと彼に対し話しはじめた。聞き終えたシャルジャーの顔も明るいものになっていた。
「それは面白いですね」
「貴官もそう思うか」
「はい、成功したらこちらの損害は皆無です」
「そうだろう、こうした戦い方もあると思う」
どうやらかなり奇抜な戦法を考えついたらしい。
「やってみる価値はあるだろう」
「ええ」
アッディーンは艦橋の前方を見たそちらはアルフフーフのある方である。
「見ていろ、ナベツーラ」
彼は自信に満ちた声で言った。
「自分だけは安全だと思うな。この世に攻略されない要塞なぞ存在しない、そう」
言葉を続ける。
「要塞とは後略される為にあるものだ。それをよく覚えておくがいい」
なおエウロパは後にこの言葉を苦悶と共に知ることになる。
「よし」

彼はここで艦橋を見渡して言った。
「全軍まずはアルフフーフまで兵を進めよ。そしてそこから作戦を発動だ」
「ハッ」
シャルジャー他参謀達が敬礼する。
「アッラーは我等に勝利を与えられる。アルフフーフは一兵も損なうことなく我々の手に落ちる！」
「ハッ！」
こうしてアッディーンの直率する艦隊はアルフフーフに向けて進撃を開始した。だがそれもサラーフのマスコミは報道せず偽りの報道ばかり繰り返していた。
かってレーニンという流血の革命家が言った。
「その国のマスメディアを占領することは十個師団を駐留させるのに匹敵する」
今風に言うと十個艦隊か。かなりの規模である。大規模な会戦が行える程の。それ程まで彼はマスメディアの力を高く評価していたのであった。
そしてそれは間違ってはいなかった。彼の建国したソ連は実際にマスメディアを使って各国に自らの宣伝を行った。
それだけではなかった。ソ連は共産主義という新しいユートピア思想により多くの国の知識人やマスコミの心を支配した。それにより彼等を自分達の陣営に取り入れたのだ。
「共産主義は全体主義に他ならない」
当時からこう指摘する者がいた。だがそれは少数であった。まだ共産主義の正体は殆どの者が知らなかった。いや、知っていてもその上で賛美する者もいた。来るべき未来に自分達が支配者になる為に。
そうした醜い輩が特に多かったのが八条の祖国である日本であった。日本は第二次世界大戦の敗北と共に連合軍の管轄に入った。この時共産主義者も牢獄から解放されたのだ。

そこで問題が起こった。マスコミや知識人が今までのイデオロギーに替わって共産主義を選んだのだ。そしてそれは麻薬の様に日本を覆った。

当時満州等でソ連軍の暴虐を知る者は多かった。彼等は軍律なぞなく犯罪者の集団であった。それがソ連軍の正体であった。

だがこれは世間、とりわけ新聞等では出なかった。何故か。この当時共産主義勢力は『平和勢力』とされていたからだ。

「この時程日本の知性が地に落ちたことはなかった」

ある歴史家はこう苦々しげに書き残している。

「奴等にとっては平和とは冒涜する為にあった」

その通りであった。この者達は平和を口では叫んでも平和を愛してなぞいなかった。ただ自分達の主張を押し通す為の道具でしかなかったのだ。

## 第四部第二章　愚か者の戦いその四

この連中の支配は四十年以上続いた。哲学やマスメディアだけでなく教育、歴史学、経済学等にもその害毒は及んだ。日本の知性はその間全く進歩しなかった。

特に経済と歴史に与えた影響は甚大であった。二十世紀末期から二十一世紀初頭にかけて日本は長い不況にあったがこれは真っ当な経済学が発達しなかったのとマスコミが不況を煽り続けたからだった。彼等にとって経済とはマルクスしかなく資本主義経済など認められるものではなかったのだ。

結果としてこの不況は長引いた。だが彼等の勢力が完全に壊滅した時この不況は終わった。

「マスコミが煽っていた部分が多かった」

当時からこう指摘はされていた。だがマスコミはそれでも煽り続けていただけであった。

結果として日本はこの不況から学んだ。マスコミに踊らされるな、と。結果として日本ではマスコミの力は極端に低くなった。知識人もそれまでのように無条件で尊敬されるようにはならなかった。

特に教師の質が改善されるようになった。当時はびこっていた無能な教師や精神異常の教師は全て教壇から追放された。そして若い有能な教師がそれにとってかわった。教育も大幅に変わった。

こうして日本は共産主義とその呪縛から解放された。だがその残照は日本だけでなく連合各国に今だに残っている。それが怪しげな市民団体である。マスコミの一部も彼等と結託している。

だが連合では比較的ましである。ネットが発達しておりマスコミの欺瞞を見破られるようになっている。だがサラーフでは違うのだ。この国ではその十個艦隊が支配を続けていた。それがサラーフの不幸であった。

「マスコミは盲目の荒馬だ」

こう言った哲学者がいた。
「それも何ら統制を受けない荒馬だ。誰も彼等を裁くことはできない」
それはサラーフで見られた。後世の者は言う。サラーフはマスコミにより滅ぼされたと。そして今その崩壊の最後の幕が開いたのであった。

サラーフの話は既に各国に伝わっていた。進軍中のシャイターンにもそれは伝わっている。
「そうか、アルフフーフまで行くのか」
彼は旗艦イズライールの艦橋でその報告を聞いていた。
「はい、もうすぐ包囲すると思われます」
若い将校が報告した。見ればシャイターンよりも少し若い。
「速いな。流石はアッディーン提督だ」
彼はそれを聞いて言った。
「おそらくもうアルフフーフの包囲がはじまっているな」
彼は言った。
「もうですか！？」
「うむ、その情報が入る頃にはな。そうしたものだ」
情報のタイムロスである。
「そうでしたか。ですが閣下、アルフフーフには」
「言いたいことはわかっている」
シャイターンは微笑んで答えた。
「ブラークだな」
「はい」
「あれは問題ない」
シャイターンは素っ気なく言った。
「この世にアッラーの定めたもうた摂理以外に絶対のものはない。コーランに書かれていることは何だ」
「真理でございます、この世で唯一の」

「そうだろう」
彼はそれを聞いて頷いた。
「だがコーラン、そして我々ムスリムは寛容を以ってこれを為す」
それは真実であった。イスラムは寛容を尊ぶ。都会の宗教、商人の宗教であるイスラムは強制を好まない。他の宗教の存在も認める。今では連合、エウロパの信仰と統合されたキリスト教や今もイスラエルに残るユダヤ教と異なり彼等はジズヤさえ納めればそれでよいとする。ただこの時にムスリムになった時の特典を提示して誘うのが彼等の賢明なところである。
またその戒律もあくまで『目標』である。占いにしろムハンマドは好まなかったが実際にはイスラムでは占星術が発達した。飲酒は時代によって異なる。飲み過ぎないようにというのが本来の教えなのだと言う人もいる。人類史上に残る古典『アラビアン＝ナイト』にしろ酒を飲む話が多い。そして非常時には豚肉を食べる場合もあったという。今は完全に食べないが。食べなかったのはこれは豚肉が傷みやすいからであった。犬の唾は狂犬病である。合理的な宗教なのである。そうでなくては広まらなかった。
そうした信仰が今尚サハラでは生きている。連合にもムスリムはいるが彼等のイスラムとサハラでのイスラムは最早同じ宗教とは思えない程変わってしまっているのが現実である。
「その寛容なる教えは無謬はない。そう、コーラン以外に無謬の存在はないのだ」
「ではブラークも」
「当然だ。今まで陥落しなかった難攻不落の要塞があったか」
「いえ」
その将校は首を横に振った。
「セバストポリもマジノ線陥落しましたし」
両方共ドイツ軍の名称マンシュタインによって陥落させられた。セバストポリは重砲の射撃で、マジノ線は戦車部隊でアルデンヌの森を突破して後方に回り込んだ。こうしてフランスとソ連の要塞は

為す術もなく陥落したのである。
「そうだ」
シャイターンはそれを聞くと満足そうに頷いた。
「ブラークなぞ飾りに過ぎない。アッディーン提督なら何なく陥落させられる。当然私にもな」
彼はここで不敵に笑った。
「あの要塞は一定の軌道を動いている」
「はい」
「その動きは非常にわかりやすい。そして攻撃方向も単純だ」
「では前方で引き付けて後方から回り込むというのはどうでしょうか」
「それは無理だろう」
シャイターンは言った。
「後方にも攻撃が可能な筈だ。そうでなくては意味がない」
「そうでしたか」
将校は残念そうに言った。
「だがいいアイディアだな。それは評価する」
「有り難うございます」
彼はそれを聞き顔を綻ばせた。
「私なら別の攻め方をする」
「どうなさるのですか？」
「要はブラークを無力化すればいいだけだ。そう考えるとやりやすい」
「といいますと」
「何かをぶつけて破壊する。そうすればいい」
「無理に艦隊を送って攻略、占領する必要はないと」
「そうだ。元々無人の人口惑星だしな」
彼は話を続けた。
「中にコントロール設備もない。だから占領してしまえばそれでいいというわけではない。むしろ破壊した方がいい。それにだ」

シャイターンはここで顔を顰めさせた。
「あのようなものを楯にして自分達だけ生き残ろうとするその考えが好きになれない」
整った顔を嫌悪感が次第に支配していく。
「ナベツーラとは一体何だ！？利権を漁り私利私欲と権力のみに生きている男ではないか。あの様な汚らわしい存在はこの世界にいる必要はない」
彼は自身の美的感覚をも出して言った。
「私の理想とする世界には卑しい者は不要だ。汚らわしい者もな」
「それは心が、ですね」
「そうだ、容姿なぞは人それぞれだ。例えば私を好きになれない顔だと言う者もいるだろう」
「はあ」
将校はそれには賛同しかねた。シャイターンの容姿は俳優顔負けであり北方諸国では下手なアイドル達よりも人気があるのだ。
「別にそれは構わない。人が私を好もうが嫌おうが」
「そういうものですか」
「いずれ私の前に跪くからだ、皆な。私はそれを黙って見下ろすだけでいい、何も言わずな」
彼は他の者を抑圧する考えを持ってはいなかった。ただ自身の能力により心服させるだけでよいと考えていた。それだけ自分自身に自信があるのだ。
「だが卑しい者は別だ。そうした連中は必ず国を食い潰す」
「サラーフのように」
「そうだ。そうした輩は必ず取り除かねばならない。獅子身中の虫はな」
彼はナベツーラ達をそう見ていた。そしてそれは当たっていた。
「かって内憂により滅亡の元を作った国は多い」
人類の歴史の常である。
「内憂を取り除いていかねば国は成り立たないのだ」

「さもないとこうなると」
そう、彼等もまたサラーフのその内憂のおかげで今こうして侵攻をすることが可能になっているのである。そうした意味では彼等は内憂を歓迎している。
「敵の内憂は好都合だ。しかし」
シャイターンの目が光った。
「こちらは絶対に許してはならない」
「それが鉄則ですね」
若い将校は顔を引き締めて言った。
「そうだ。サハラ西方一の大国サラーフもこの有り様」
アッディーンは少し遠くを見るようにして言った。
「敵の内憂は焚き付けこちらの内憂は排除する。それも戦略だ」
「はい」
「敵を滅ぼす為なら手段は厭わぬ。こちらの滅亡の芽は早いうちに摘み取る。口で言うのは簡単だが行うのは難しい」
「ですね」
「もっとも人の世はすべてそうだが」
彼は哲学を語るようにして言った。
「アルフフーフは陥落する。そしてオムダーマンは西方のほぼ全てをその手中に収めるだろう」
「アッディーン提督の手により」
「そうだ。それにしてもアッディーン提督か。まだ若いと聞くが」
「はい、閣下と同じ位の年齢だと聞いていますが」
「そうか、私と同じ位か」
彼はそれを聞くと面白そうに笑った。
「一度会ってみたいな」
「え！？」
将校はそれを聞くと思わず声をあげた。
「兵を三つに分ける。三方向にそれぞれ進軍せよ」
「三方にですか」

「そうだ、左右、そして中央だ。中央は私が率いる」
シャイターンはすぐに指示を出した。
「左右の軍は各星系を進撃しろ。そして占領していくのだ」
「わかりました」
「言っておくがその際一般市民への掠奪、暴行はその場で銃殺とする」
それがシャイターンの軍規であった。彼はことの他軍律に厳しかった。
「はい、全軍に伝えます」
「よし、あとはだ」
彼は前を見た。そこには無限の星の海が広がっている。
「アルフフーフまで進軍だ、そしてアッディーン提督と会ってみよう」
「やはりそうされるのですか」
彼は主君のそうした性格を知っていた。
「うむ。どういう人物か、一度見てみたいと思ってな」
彼は微笑んで言った。その微笑みは何処か不敵さが漂っている。
「もしかするといずれは・・・・・・」
彼は何か言おうとした。だが止めた。
「いや、止めておこう。楽しみはあとにとっておくことにしよう」
彼は笑ってそう言った。
「よし、アルフフーフへ向けて進軍だ」
「わかりました」
若い将校は敬礼をして答えた。
「ところで」
シャイターンはここでその将校に声をかけた。
「君の官職氏名を教えてくれないか」
「はい」
彼は頷いて話しはじめた。
「サンドリム連合大尉チラフト＝ラーグワートです」

「そうか、覚えておこう」
シャイターンはそれを聞いて言った。
「いずれ貴官の力を必要とする時が来る。その時は頼むぞ」
「はい」
彼は答えた。シャイターンは前に出た。
「これからさらにサハラ、いや銀河は動く」
彼は星の海を見ながら言った。
「そう、私の望んでいた世界がやって来るのだ」
彼は笑っていた。まるで獲物を見つけた狼の様な笑いであった。
北方諸国連合軍もサラーフ領を次々と占領していった。こうしてサラーフは南北から次第にその領土を失っていった。そしてそれを防ぐ手立てはもうなかった。

# 第四部第三章　愚か者の楯その一

愚か者の楯

「それにしてもだ」
カッサラにてオムダーマンの後方支持を管轄するアジュラーンは自身の執務室で思わず声を出した。
「まさかアッディーン上級大将がここまで勝つとは思わなかった」
「そうですね」
彼の側にいた秘書がその言葉に頷いた。
「ましてやこんなに捕虜を得るとは」
目の前にある書類を見て言った。
「全くだ。十個艦隊単位での捕虜なぞ見たことも聞いこともないぞ」
歴戦の将である彼でもそうであった。ましてやこの若い秘書なぞは。
「収容する施設だけでも大変だ。ましてやそこに食事や衣服まで考えなければならない。頭の痛い問題だ」
「捕虜は少しずつ故郷に帰しているのでしょう？見たところ数は次第に減っておりますが」
「それでも数が多過ぎる。到底一度にできるものじゃない」
アジュラーンは顔を曇らせた。
「だからといって殺すわけにもいかない」
「はい、それは絶対に許されません」
秘書は顔を締まらせて応えた。
「我がムスリムは捕虜に対しても寛大であらねばならない、アッラーの御教えです」
「そうだ、ましてや彼等もまた同志なのだしな」
これはサハラの特色であった。彼等は多くの国に別れ対立しているがその信仰は同じである。イスラムだ。これが実に多くの宗教が混在している連合とは違う。従って彼等にはまずムスリムとしての

意識がある。
「同じムスリムではないか」
よくこう言われる。ここにサハラ各国が集合離散する理由の一つがあるのだ。
例えどのように分裂していても彼等は同じなのである。皆アッラーの下に平等だ。時には愛国心よりも先立つ。
「ある程度の捕虜が出ることは予想していたが」
彼は首を少し横に傾げて言った。
「ここまで出ると本当に頭痛の種だな」
「それは同意します。治安も考慮せねばならないですし。行政の方は我々よりも頭を悩ませておりますよ」
「それは知っているよ」
アジュラーンはそれに対して言った。
「本当に戦争とは面倒なものだ。ただ戦うだけでは済まないからな」
「はい」
秘書は頷いた。そして彼らは休息をとることにした。
彼等はコーヒーを飲んでいた。そして蜜をたっぷりとかけた揚げ菓子を口にする。
「こうした簡単なものが美味しいな」
「はい」
彼等は軍人である。だから自然とその舌は質素なものとなるのだ。
「どうも私はエウロパのような華美な料理は好きにはなれない。連合はまた違うようだが」
「連合の料理はまた種類が多過ぎます。あそこの料理本をご存知ですか？」
「いや」
アジュラーンはそれを聞くとふと目を向けた。
「辞書位の太さの本が数冊ですよ。到底読めるものではありません」
「あそこはまた多くの国や文化があるからな」
彼はそれを聞いて言った。

「自然と料理の種類も多くなる。それに食材もこのサハラと連合では違う」
「ですね。だからといって食べたいか、といえばそうはなりませんね、不思議と」
「そうだな。チラリと連合の料理をテレビで見たことがあったがどうも我々の舌には合いそうもないな」
サハラの料理は香辛料を効かせたものが多い。連合の料理にもそうしたものが多いがやはり作り方が違うのだ。
やはり気候が大きく左右していた。サハラは乾燥した惑星が多い。それに対して連合は果てしない開拓地や鬱蒼と茂った森林にジャングル、複雑に入り組んだ水路、大草原と様々な地形がある。そういうところでは料理の様々な種類が出てくるのである。
「むしろエウロパの料理の方が我々の舌に合うかもな」
「そうですか？私はマウリアの料理の方がいいと思いますが」
マウリアの料理は昔から変わらない所謂カレーである。様々な香辛料を混ぜ合わせて作るルーをベースにしている。また彼等の宗教の関係から牛肉は食べない。
「牛が食べられないのが残念だがな」
アジュラーンはそれに言及した。彼は牛肉が好きなのである。
「そうですね。しかし羊は食べられますよ」
サハラで最もポピュラーな肉は羊である。ここでは肉といえば羊をさす。またサハラの風習として客人に出す料理にはランクがある。羊が最も上とされている。
「羊が食べられるのは殆ど全ての国でだろう」
アジュラーンは言った。
「いえ、それが」
秘書はそれに対して反論した。
「日本では今もあまり食べないそうですよ」
「そうなのか！？」
実は彼は料理には疎い。長い間軍にいるせいであろうか。

「はい、何でも魚や海老、貝を食べることが多いそうですから」
「それは聞いている。何でも生で食べるのを好むらしいな」
「刺身ですね」
この時代も刺身はある。連合ではかなりポピュラーな料理だ。日本の料理といえば天麩羅や寿司、うどん等と並ぶ有名な料理だ。
「そう、そういう名だったかな。生で魚を食べるなど私には考えられないが」
「それでも彼等はまず魚が手に入ると生で食べたがるそうです。時には肉もそうして食べます」
「肉もか！？」
彼は顔を嫌悪感で歪ませた。
「はい」
秘書は答えた。
「流石に連合内でも日本の奇習として知られていますが。馬が一番多いそうですが牛や鳥、山羊、そして豚でさえ生で食べたがります」
「信じられん。誰も止めないのか！？」
「彼等にはそれが最も美味しい食べ方だそうです。醤油というソースに漬けて食べます」
「醤油ならサハラでも使われているぞ」
醤油はサハラでも人気のある調味料である。魚料理によく使われる。
「こちらの醤油とは少し違いまして」
「違うのか！？」
「はい、こちらのは魚から作りますね」
「ああ」
所謂ナムプラーやしょっつると呼ばれるものである。
「日本の醤油は大豆から作るのです」
「大豆からか」
「はい」
サハラでは大豆はあまり食べない。米やパンが主食である。

「魚から作った醤油とまた違った味がするのです」
「そうなのか、それは知らなかったな」
「日本ではそちらの方が好まれます。美味しいらしいですよ」
「そうか、しかしそれでも豚まで生で食べるとはな。日本人というのはよくわからない。連合には変わった料理が多いとは聞いているが」
「アメリカや中国、アセアン諸国は蛙や鰐を食べますね」
「動物の内臓や血もだな」
モンゴルでは羊のあらゆる部分を食べる。
「ええ、戒律の違いで食べられるようです」
「ゲテモノが多いな。話していてあまり気分がよくない」
「しかし面白い話だとは思いますが」
「それはそうだが」
彼等はイスラムの戒律に従い鱗のない魚や動物の内臓は食べないのだ。従って地球から持ち込んだ家畜による料理をよく食べる。
「しかし幾ら何でも肉を生で食べるのは驚いたな」
「他にも色々変わった魚も平気で食べますよ。何十メートルもある鯨や海栗なんかも大好物と聞いております」
「海栗！？ああ、海にいるあの機雷みたいなやつか」
彼は海栗を踏んで痛い思いをしたことがある。大嫌いであった。
「はい、その中身を美味しそうに食べます。これも他の国の者に奇異の目で見られています」
「当然だな、ところで海栗も生で食べるのか？」
「はい、醤油で」
「わからん、本当にわからん」
アジュラーンは顔を顰めさせた。
「何故そう魚にこだわるのだ！？しかも生で食べるとは。日本人は繊細な料理を好むとは聞いているがそれは繊細ではないと思うが」
「彼等は素材のそのままの味を好むそうです」
「素材のか」

「はい」
アジュラーンはそれを聞いて再び考え込んだ。
「料理もその国によって本当に違うな。難しいものだ」
「だからこそ面白いのではないかと」
「ううむ」
彼等はそんな話をしながらコーヒーと揚げ菓子による休息の時を楽しんだ。その時連合軍のある部隊では昼食が採られていた。
「何だ、この料理は」
テーブルについたある兵士が眉を顰めた。
「アメリカ産オオツメガエルの刺身だそうだ」
別の兵士がそう説明した。
「御前確かアメリカ出身だろう？知っていると思うが」
「それは知っているけれどよ」
アメリカ出身のその兵士は眉を顰めたまま答えた。
「何で蛙が刺身で出て来るんだ！？」
「あれ、蛙ってそうやって食べるんじゃ」
日本出身の兵士がそれを聞いて声をあげた。
「おめえの国は何でもそうやって生で食べるな」
アメリカ兵はかなり呆れた顔でそう言った。
「蛙は普通塩焼きだろう？そしてそこにレモンをかけて食べるんだ」
「いや、唐揚げにすべきだ」
中国出身の兵士がそこで反論した。
「蛙といえば油で揚げるだろう、他の料理もあるがそれが一番美味しい。鶏肉に似てな」
「鶏肉に似ているというのは同意するよ」
「うん」
アメリカと日本の兵士はそれには同意した。
「だが唐揚げには同意しねえな」
アメリカの兵士はそこでまた顔を顰めた。
「油っこくなっちまう。何か違うんだよな」

「アメリカでも鳥は揚げて食べるだろう？」
中国の兵士はそれを聞いて逆に不思議だ、と言わんばかりの顔をした。
「フライドチキンか？まあな」
アメリカの兵士は答えた。
「しかし蛙はフライにはしないがな」
「いや、こっちではフライにするぞ」
別の国の兵士が言った。
「中国の料理とは違うがな」
「どう違うんだ！？」
アメリカと中国の兵士がそれに対し問うた。
「うんと辛い味付けをするんだ。香辛料をきかせてな」
「タバスコとかでか！？」
「その通り」
その兵士は得意満面の顔でそう答えた。
「一度食べると病みつきになるぜ」
「生では食べないのかい？」
そこで日本の兵士が問うた。
「悪いけどな。こっちでは肉や魚は生では食べない。あたると怖いから」
「そうなんだ」
日本の兵士はそれを聞いて少し寂しい顔をした。
「おい、何をそんなに揉めているんだ！？」
そこへ給養の古参下士官がやって来た。
「あ、いや何も」
古参下士官だけありかなりおっかない人物として知られている。
彼等はその姿を見て思わずかしこまった。
「早く食べろ、文句を言う暇があったらな」
「わかりました」
彼等はその下士官に怖い顔で言われ仕方なくその蛙を食べること

にした。日本の兵士以外は。
「これが美味しいんだよね」
日本の兵士は笑顔で箸をとりながら言った。
「どういう味覚してるんだ」
「日本人のこういうところだけは理解できん」
「これさえなければ和食は完璧なのに」
他の三人は内心そう思いながらも箸を手にした。そして醤油に漬け口に入れた。
「おや」
彼等は表情を変えた。目を皿のように丸くさせた。
「美味しいでしょ」
日本の兵士はそれを見てにんまりと笑いながら問うた。
「あ、ああ以外とな」
「何か不思議な味だ」
彼等は舌でその生の蛙を味わいながら答えた。
「刺身ははじめて食べたけれどいいな。これはいけるよ」
彼等はそう言いながら御飯に手をつけた。今日の主食は白米であった。連合の主食は米にパン、コーリャン、芋、とかなりバラエティに富んでいる。
「米にも合うな。本当に意外だ」
彼等は口々にそう言った。
「だろう？刺身ってのは米とよく合うんだ」
日本兵は得意そうに言った。
「で、また米の酒か？」
ここで他の三人がからかうようにして言う。
「そうだよ、何か悪いか？」
「いや、別に」
三人はそれに対し首を横に振った。
「俺達は米の酒を飲まないからあまりわからないがな」
そう前置きしたうえで言う。

「この蛙の刺身は美味い」
「そうだな、それには皆同意するよ」
四人は和気藹々と話をしながら食事を採った。こうした話が八条の下にも届いていた。

## 第四部第三章　愚か者の楯その二

「どうやら食事の評判はいいようだな」
彼は昼食を採りながらその話を聞いていた。
「はい、バラエティに富んだ料理が将兵に好評です」
共に食事を採る秘書官がそう報告した。
「それは何よりだ」
彼は箸を動かしながらそれを聞いていた。
「食事も将兵の士気を維持する為には欠かせないものだからな」
「そして軍の魅力をアピールすることにもなります」
「そう」
彼は何か変わった麺を食べながら言った。
「例えばこのビーフンにしろそうだな」
汁に入っているその麺は異様に細い。そして麦の麺とは何か違った感じがする。
「ビーフンは結構どの国でも食べられますがね」
「特にベトナムでは」
八条は麺を喉に流し込んでから言った。
「連合は何処にも多くの国の料理を出す店があるが軍の食事となるとそうではなかったからな」
「ですね。どうしてもその国の基本的な料理になってしまいます」
「そうだな。軍の食事はお世辞にもいいものではない」
八条も軍人であった。だから軍の食事には詳しい。
「それではあまり人気も出ないしな。こうして多くの国の料理が食べられるようにするのはいいことだと思う」
「はい」
「実際試食する方は時々驚かされるが」
彼はここで苦笑した。
「蛙の刺身はともかく羊の脳味噌には驚いたな」

「おや、食べられたことはないのですか！？」
秘書官はそれを聞いて逆に尋ねてきた。
「普通食べないだろう。少なくとも私ははじめてだった」
「そうなのですか、結構色んな店で出ていますが」
「知らないぞ」
彼は眉を顰めさせた。
「それは長官が羊料理をあまり召し上がられないからです。羊料理の店なら結構出ますよ」
「そうだったのか？私は羊といえば」
「焼肉とかジンギスカンとかそんなものでしょう」
「ああ。それもあまり食べない」
彼は実は羊よりも魚介類の方が好きなのである。
「匂いがね。どうも好きになれない」
「そうですか？あの匂いがたまらないですよ」
「オーストラリアやニュージーランドの人にもそう言われたがね」
「彼等はそれだけじゃないでしょう？」
「ああ、生の魚を喜んで食べる方が変わっていると言われたよ」
彼はここでまた苦笑した。
「そんなに変わっているかな。サハラの方では日本の奇習と言っているそうだが」
「はい、本当に言ってますよ。信じられないとまで」
「やれやれ。あんな美味しい食べ方は他にないというのに」
「肉まで生で食べるのが余程奇妙に映るようです」
「それがいいんじゃないか」
彼はここで反論した。
「馬刺しなんてかなりいいと思うのだが」
彼は珍しく強い声でそう主張した。
「生姜醤油で食べる、あれがいいんだよ」
「私は大蒜醤油ですが」
秘書官はそこで反論した。

「・・・・・・まあ生姜や大蒜はいいとしよう」
彼はその重要な問題を一時棚上げすることにした。
「馬はああして生で食べるのが一番美味しい」
「そうですね、それは同意します」
この秘書官も日本出身である。それについては同じ意見である。
「しかしそれが他の国には異様に移るのです」
「残念なことだ。連合ができて一千年、人種の垣根などとうの昔に消え去ったというのに」
「味覚はそうはいかないようで」
「そうだな。生肉がそんなに食べられないか」
「今だに刺身や寿司に抵抗を露わにする人達もいますよ」
「味の嗜好というのはそう簡単には変わらないものなのかな」
「そのようですね。アメリカ人はやはりマスタードやケチャップを好みますし」
「中国は地域によってかなり違うな」
「あの国はかなり料理には五月蝿いですからね」
中国人の料理へのこだわりはこの時代でも変わらない。なおメキシコやベトナムの料理が辛くパプワニューギニアやキューバといった国で果物が好まれるのも変わっていない。
「よく言われるな、我々は醤油の匂いがすると」
「タイ人がコリアンダーの匂いがすると言われるのと同じで」
味も香りもかなり癖のある香草である。人気はかなりある。
「私はコリアンダーは結構好きだが」
「日本では賛否両論ですね、タイ料理はよくてもあれは駄目だと」
「これも残念だな、コリアンダーこそがタイ料理を最も強く引き立てるのに」
「それでも駄目なようですね。タイ出身の財務省の役人がぼやいてましたよ。何故日本人はあの素晴らしさがわかっていないんだと」
「ああ、彼か」
八条も知っている者である。朗らかで気さくな青年である。

「そういう彼はキムチが大嫌いだったな」
「この前山葵を食べて仰天していましたよ」
秘書官は笑いながら言った。
「本人曰く辛くて食べられたものじゃないと」
「あの瞬時にくる辛さがいいのだろうに。大体辛いというのならタイ料理も相当なものだが」
「トムヤンクンとか」
「あとあちらの魚料理にしろ。山葵よりずっと辛い気がするがな」
「ところが彼等はその辛さは苦にならないのです」
「それで山葵の辛さが気になるのか。これも舌の違いかな」
「それこそ将に、でしょうね。彼等と我々では嗜好が異なるのです」
「コーヒーが好きな者と紅茶が好きな者の差よりあるな」
これもまたこの時代においても続けられている論争である。
「そうですね。ちなみに私は緑茶が一番好きです」
「裏切ってくれたな、私は麦茶だ」
八条は苦笑して言った。
「そこに答えが出ましたね」
「ああ」
二人は笑みを浮かべ合って言った。
「人によって、国によって嗜好が違います」
「当然食べ物も」
「そうですね」
秘書官は頷いた。
「どの国でもそうですが結局自分の国の食べ物が一番だと考えています」
「私もそうだしな」
八条は笑みを浮かべたまま言った。
「やはり日本の料理が一番いいと思っている」
「私もですね」
「日本に行くとやはり他の国の料理は異国の料理に過ぎない。和食

ではない」
「そう考えると和食も他の国ではそうなります」
「だろうな。だが軍では事情が違うからな」
連合軍でありそれぞれの国の軍ではないのだ。従って特定の国の料理だけ出すわけにはいかない、そういう事情もあった。

## 第四部第三章　愚か者の楯その三

「彼等には様々な国の料理も楽しんでもらおう。それが宣伝にもなるし各国の相互理解にも繋がる」
「そうですね、これは続けていくべきだと思います」
「うむ」
彼等は食事を終えた。八条はナプキンで口を拭くと秘書官に対し尋ねた。
「昼の予定はどうなっている」
「はい、アナハイム社のオーナーとの会合となっています」
「食べ物の話をしてすぐに出てくるとはな」
八条は思わず苦笑してしまった。この社長は無類の大食漢かつ大酒飲みとして知られている。
「そうですね、ここで出てくるとは思いませんでした」
秘書官も笑っていた。
「では休憩のあと向こうへ行きましょう。今このシンガポールに来ているそうですし」
「うん」
八条は頷いた。
「じゃあ少し休んでから行こう。麦茶を飲んでからな」
「私は緑茶を」
「こうした時は麦茶だと思うが」
「これこそ嗜好の問題です」
二人はそうささやかな衝突を楽しみながら食後の茶を飲んだ。そして休息のあとアナハイム社のシンガポール事務所に向かった。
アナハイム社は連合の大手造船企業の一つである。ロシアに本拠地を持ちその従業員は一千万にも及ぶ。連合でも有数の大企業である。

連合の企業の特色は各国によって多少違うが多くはオーナーの権限が強い。その収入も莫大なものである。だがエウロパと比較して従業員の給料も高い。そのかわり労働者としての権利は薄い。エウロパでは労働者としての意識及び権利が強いのとは対照的である。

連合ではあまり労働者という意識がない。オーナーと社員は使う側と使われる側の関係であるがそれは契約によるものである。オーナーは社員の能力を買って採用し社員は自分の能力を売り込む。そして雇わせる、個人主義の強い連合独特の考えである。

その企業や職種が気に入らないのなら他に行く。他にも仕事は山のようにある。極論を言えば開拓地で自分の土地を手に入れればいい。誰もそれを邪魔する者はいない。実際にこうした発想、経緯で開拓地に行き大成功を収めた者も多い。

オーナーにしろそうである。社員とはあくまで対等関係である。もし自分に不都合があれば社員に逃げられる。酷い場合には弁護士に訴えられる。流石に訴訟を仕事とするような弁護士はこの時代では警戒され殆どいないがそれでも一歩間違えれば訴訟となる。だから社員に対しても理不尽な要求はできないのだ。

それが連合の企業における考え方であった。徹底的なギブアンドテイク、そして契約の意識。かなりドライである。大金持ちになりたいか人を使いたければ企業家になれ、ただし失敗は自分持ち、理不尽な要求をすれば弁護士に追われる、だがそうした考えが今まで多くの成功者を生んできた。

アメリカン＝ドリームという言葉がこの時代にも残っている。貧しい、若しくは困難な状況から身を起こし成功を収める。実力、そして運さえあれば誰もが瞬く間に大金持ちになれる。連合ではそのアメリカン＝ドリームの思想が各国の奥底にまで浸透していた。良いか悪いかは別としてそれが連合の経済を今まで発展させてきた。

アナハイム社のオーナーであるアレクサンドル＝ベニョーコフの父もそうした人物であった。彼は一介の造船会社の従業員から一念発起して会社を立ち上げ一代で一千万を数える社員を持つ大企業の

オーナーとなった。まさしく夢の実現者であった。
かなり個性的な人物であった。港町育ちで酒が好きだった。飲むのは安い酒ばかりであった。背広よりも作業服の方が似合う男だった。だが機を見るに敏でチャンスを逃さなかった。そして精力的で常に闘志をみなぎらせていた。だからこそアナハイム社をここまで大きくすることができたのだ。
「親父はよく言ったよ、逃げるよりもまず立ち向かえ、ってな」
白髪の中年の大男が笑いながら言った。そのアレクサンドル＝ベニョーコフ本人である。
白髪はかなり多い。色が白いのはどうやら元々であるらしい。瞳は黒い。これは彼の母がアジア系の血を濃く引いていたからだ。彼の母は先代の従妹であった。幼い頃から一緒で成人に達するとすぐに結婚したのだ。
夫唱婦随の夫婦だったがこの妻は夫をよく支えた。決して美しくはなかったが肝が座っていてしっかりした女性であった。そして夫をよく支えたのだ。ロシアでは今だに母親はああなるべきだ、と言われている。
「お袋はよく言ったよ、何をするにも身体が強くなくちゃ駄目だと」
この母は自分にも息子にも贅沢はさせなかった。だが食べ物はいつも豊富にあった。そして厳しく喧嘩に負けようものなら勝つまで家には入れようとしなかった。
「親父もだったよ。おかげで見てくれ」
彼はそう言いながらよく額の傷を他の者に見せる。
「中学の時にできたものだ。他にも一杯あるぞ」
彼の武勇伝である。親の血を引き彼も喧嘩っぱやい男だ。
「だが弱い者虐めはするなと言われたな。喧嘩はしても弱い者には売るな、と」
彼はそれを忠実に守った。決してひもじい思いだけはさせなかった両親に対してはこのことも感謝している。
「親父もお袋もわしも学校は高校までしか出ていない」

彼もまたすぐに父の会社に入った。そして一緒に働いた。
「しかし経営とは何かわかっているぞ、要するに喧嘩だ」
ここでいつも豪快に笑うのであった。
「相手と競り合い勝つ、仁義も必要だ。そうでなくては何時かは絶対に負ける」
彼の両親も彼自身も喧嘩屋だが情深い人物として知られている。だからこそここまでこれたという一面がそこにある。
「わしの夢はそんな親父とお袋が大きくしたこのアナハイムを連合一の造船会社にすることだ。その為には」
ここで目を光らせる。
「このチャンスは逃さん。どんどんやるぞ」
彼は今アナハイム社のシンガポール事務所にいた。そこの視察と共にもう一つの目的があった。
八条との会談である。彼は今国防省とビジネスのことで話があるのだ。
「今までロシア政府とは客船のことで話をしたことがあったが」
ロシアの宣伝及び国力誇示の為の豪華客船の建造である。それは大成功を収めアナハイム社の株は大いに上がった。
「中央政府との話ははじめてだな。さて、どうなるか」
既に連合中に支社及び営業所を持つアナハイム社であるが連合中央政府との商談は今までなかった。彼はこれを大きなチャンスだと考えていた。
「ここで成功したらまた我が社の株があがるな」
彼はニヤリ、とい笑った。
「常に前へ向かえ、悲観的になると成功しない」
彼の父の言葉である。彼もまたポジティブな孝えの持ち主であった。彼は今それを呟いた。
「親父もいいことを言った。この考えで今まで失敗したことはない」
彼は面会室のテーブルに座っていた。そして側に立つ彼と同じ白髪の秘書官に対して言った。

「おい」
「はい」
実はこの秘書官は彼の息子である。
「八条長官は御前と同じ歳だったな」
「はい、若いですがかなりできる人のようですね」
「そうか」
彼は息子からそれを聞くとニヤリと笑った。皺一つない精悍な顔に精気がみなぎっている。
「ウラジミル」
そして息子の名を呼んだ。
「よく見ておけよ、八条長官は何かと御前にとってもいい勉強になる」
「はい」
小ベニョーコフは父からそう言われ頷いた。
「御前には親父とわしよりもさらに上に行ってもらう」
「連合一の造船業よりもですね」
蛙の子は蛙と言われる時がある。彼もまたそうであった。
「そうだ、まだまだ敵は多いがな」
父はまた笑った。
「だが御前ならばできる筈だ、このアナハイム社をしょって立つことがな」
「お任せ下さい」
息子もニヤリと笑った。自信に満ちた不敵なものであった。
「ベニョーコフファミリーの家訓には逃亡の二文字はない、それだけは忘れるな」
「はい」
そうこう話しているうちに八条が来たとの連絡があった。二人は事務所の門まで彼を出迎えに行った。
「ようこそ」
車から出て来た八条を笑顔で出迎える。明るく陰のなさそうな笑

顔だ。こういった笑顔もできるのだ。
「はじめまして、ベニョーコフ社長」
八条は右手を差し出して言った。
「連合中央政府防衛長官の八条義統です」
「こちらこそ、アナハイム社のオーナーベニョーコフです」
ベニョーコフも手を出した。そして二人は握手した。
見れば周りには狙撃できそうな場所はない。ベニョーコフはそういったところを選んでこの事務所を建てたようだ。
（豪快な人物だと聞いていたが）
八条は握手をしながら考えていた。
（こうしたところにも考えが及んでいるんだな）
その通りであった。伊達に連合でも屈指の造船企業のオーナーをやっているわけではない。彼は敵も多い。従って暗殺や暴漢に対しては細心の注意を払っている。
（ふむ）
ベニョーコフの方も八条を見ながら思うところがあった。
（噂に違わぬ男のようだな）
彼もまた八条の人となりを監察していた。
企業家という職業柄人と接する機会は多い。そこで彼は人を見抜く目を養ってきた。
八条はそのメガネに適う人物であった。彼はまず目を見ることにしている。
（まず目を見ろ、と言ったのは孟子だったか）
中国春秋時代の思想家である。性善説で有名だがその言わんとしていることは実に単純であった。
単純なのはこの場合悪いことではない。むしろ多くの者に理解しやすい為よいことである。
彼の主張の本質は『信なくば立たず』である。人も国も信頼がなければ駄目だ、その信頼を得られるようにすべし、というのである。
これは至極当然の主張であった。企業家も政治家も信頼がなくて

はならない。個々の人の付き合いもだ。
国家もである。信頼のない国家では駄目だ。例え力があっても信用のない国家はいずれ破綻する。ヒトラーやスターリンという他者を欺き陥れ、虐殺や粛清を得手とする狂気の独裁者に率いられたナチスやソ連が破綻したように、だ。
孟子は三千年以上も前にそれを主張していたのだ。ベニョーコフは高校で学んだそれをふと思い出したのだ。
（まさかこんな時に思い出すとはな）
彼はここで内心苦笑した。彼は学校教育にはあまり重点を置いていない。
『学校の教育は最低限のものさえあればいい』
彼の父の言葉だった。彼も父も高校を出てすぐに働いている。そしてアナハイム社を立ち上げ成長させてきた。彼等は学校の学士号よりも現場で得られる知識やセンスを重要視しているのだ。
（奇妙なことだ。まあ役に立つのならいいが）
そういうフランクな考えであった。二人は握手を終えた。
「どうぞこちらへ」
彼は八条を建物の中に案内した。八条と秘書官はそれについて行く。
「こちらです」
そして面会室に入った。秘書官と息子は外で待っている。

## 第四部第三章　愚か者の楯その四

二人は席に着いた。ベニョーコフは単刀直入に尋ねてきた。
「ご用件は軍艦のことですな」
「はい」
八条は臆することなく答えた。彼はベニョーコフの目から視線を外さない。
「そちらで建造して頂きたい艦艇がありまして」
「軍艦ですか」
実はアナハイム社では軍艦は建造していない。タンカーや商船、観光船等を建造している。今まで造ろうと思ったことすらないのだ。
「軍需産業は費用がかかり過ぎる」
彼の父は常にこう言っていた。
「研究に金を注ぎ込まなくちゃならんのに買ってくれるところは軍しかない。しかも高く売ったら叩かれる、政府共々な」
日本で特に顕著であった問題だが兵器の値段は高いと国民から批判がでるのだ。費用の分だけ能力があるのか、と。識者だけでなくミリタリーファンからもそうした批判が出る。彼等は趣味で語っているだけありかなり細かく詳しい知識を持っている。だから反論するのも一苦労だ。嘘などつこうものならそこを暴かれてさらに叩かれる。そうなれば社の信用にもかかわる。
「設備投資もばかにならない。しかもその設備が使えるのはその兵器だけだ」
とかく兵器の開発、製造には費用がかかる。アナハイム社はそれよりも商船等の建造を選んだのだ。
「長官、お言葉ですが」
ベニョーコフは口を開いた。
「我が社は軍需産業の開発及び製造には関わっておりませんが」
「わかっていますよ」

彼は言った。
「それであえてこちらにお伺いしたのです」
「それは何故ですか？」
彼は問うた。
「実は我々が貴社にお願いしたいのは戦艦や空母の建造ではないのです」
「そうなのですが」
彼はそれを聞きながらだとしたら何だ、と考えた。
「補給艦や工作艦の建造をお願いしたいのです」
「後方支援の艦艇ですか」
それ位は彼も知っていた。伊達に造船業をやっているわけではない。
「そうです、特に補給艦の建造についてお願いしたいのです」
「補給艦ですか」
「はい」
ベニョーコフは話を聞きながら頭の中で考えていた。補給艦なら自分の会社の技術でも開発、建造できるかも知れない。だが即答はできない。彼はもっと話を聞くことにした。
「どのようなタイプの補給艦でしょうか、まずはそのことについてお聞きしたいのですが」
「こちらです」
八条は手に持っていた封筒から書類を差し出した。
「これは」
ベニョーコフはそれを見た。
「設計図ですね」
「はい、その補給艦の設計図です。うちの技術部で設計したものです」
「もう完成していたのですか」
早い、と思った。そしてその設計図に目を通した。
「ううむ」

彼はその設計図の細部まで目を通した。彼は確かに大学は出ていない。だが会社の経営に携わる中で船のことにも精通していた。その眼でもって見ていたのだ。
「よくできていますな」
彼は言った。
「かなりの大型ですね。ここまでの大型の船はタンカー位のものでしょう」
「はい、しかしそちらのドッグで開発可能だと思います」
「う・・・・・・」
ベニョーコフはそれを聞いて思わず喉を詰まらせた。その通りであった。
「確かにそうですが」
彼は戸惑いこそ見せなかったが明らかに驚きがあった。
「おそらく何十万隻と建造されると思われます。流石に我が社だけでは」
「ええ、他の会社にもお話していますよ」
八条はここで微笑んでそう言った。
「やはり貴社だけでは全てを建造するのは無理でしょうから」
「え」
その言葉に驚いた。ベニョーコフは感情を露わにした。
「ちょっと待って下さい」
彼はここで身を乗り出した。
「そこまで言われるのでしたら」
八条はそれを見て内心笑った。
(乗ってきたな)
そしてまた言った。
「では引き受けて下さるのですね」
「当然です」
元々引き受けるつもりだったからこう言った。
「では何万隻程建造しましょうか」

「そうですね」
彼は考えるふりをした。実は既に固まっている。
「十万隻は欲しいですね。追加もあるかと」
「十万ですか」
ベニョーコフはそれを聞き内心ニヤリ、と笑った。
（これはいい）
それ位は建造できる力がある。そしてそれを理由に設備投資もできる。かなりの波及効果が期待できる。
「お任せ下さい」
彼は答えた。
「それは有り難い。では引き受けて下さいますね」
「はい」
ベニョーコフは頷いた。これで話は決まりであった。
「よし」
二人は固く握手した。そして八条は事務所をあとにした。
「何か上手く乗せられた感じだな」
彼が去ったあとベニョーコフは少し苦笑して言った。
「けれど引き受けるつもりだったんだろう」
そんな彼に息子が言葉をかけた。
「当然だ。十万隻なんて滅多にない注文だぞ」
「十万隻か。そりゃ凄いな」
「ここで話している暇はない、すぐに本社に連絡するぞ」
「ああ」
「そしてわしが陣頭指揮をとる。全社員をフル回転させろ。給料をたっぷりはずんでな」
「そうこなくちゃな」
「御前にも働いてもらうからな。そこで経営者として必要なものを学ぶんだ」
「よし」
息子は父の言葉に頷いた。

「ではロシアに戻るとしよう。これから忙しくなるぞ」
二人は電話を入れるとすぐに地球をあとにした。そしてロシアに戻った。
補給艦だけでなくその他の艦艇が次々と受注された。そして次々に出来上がっていく。
「まさかこれ程速く建造が進むとはな」
八条は次々に上がってくる建造の進行状況のデータを見ながら呟いた。その進み具合は彼の予想以上であった。
「しかし嬉しい誤算なのでは」
秘書官はそんな彼に対し笑顔で尋ねた。
「確かにな」
彼はそれを聞いて微笑んだ。
「建造してからもテストや実戦配備に時間がかかる。改良するべき点もあるだろうしな」
そうであった。船は造って終わりなのではない。それからが大変なのであった。
「建造してから少なくとも一年半はそうした時期が必要だ。全く軍というものは時間が必要なのに時間がかかるものだ」
「それは仕方ありませんね」
秘書官はそれに対して言った。
「あと陸上兵器の開発状況の報告もきていますよ」
「そちらはどうなっている？」
「こちらも順調ですね。戦車も装甲車も次々に完成されています」
「それはいい。ところで陸上兵器といえばあれはどうなっている？」
「移動式要塞ですね」
「そうだ。移動要塞はこれからの我が軍の陸上兵器の主軸になる。丁度巨大戦艦と同じように」
「そちらも順調ですよ」
「そうか」
彼はそれを聞いて安堵の笑みを浮かべた。

「テロリスト対策には何かと活躍してくれるでしょう」
「そうでなくてはな。その為に開発しているのだからな。もっとも」
八条はここで言葉を一旦とぎった。

## 第四部第三章　愚か者の楯その五

「他のことにも活躍することになるかも知れない」
「それはどういうことでしょうか？」
「うん」
八条は秘書官に問われて表情を引き締めさせた。
「将来はテロリストや宇宙海賊以外の勢力とも戦う可能性があるということだ」
「エウロパですか？」
「エウロパか」
彼はふと考える顔をした。
「確かに彼等の存在は常に気にかかるが」
八条の心には別に引っかかるものがあった。
「まさかな」
だが彼はそれは打ち消した。
「彼等と戦う理由は何もない」
「長官」
そこで秘書官の声が聞こえてきた。
「ん！？」
八条はそれで我に返った。
「ああ、済まない。少し考え事をしていた」
「しっかりして下さいよ」
秘書官はそんな彼を見て苦笑した。
「今長官にうっかりされては困りますから」
「申し訳ない。まあエウロパとは干戈を交える可能性があるな」
「やはり」
「今エウロパ強硬派が台頭してきているしな」
「モハマド氏ですね」
「そうだ。改革派のな」

今連合は二つの勢力が盛んに議論を交あわせている。キリ＝ト＝マウイ率いる保守派とランティール＝モハマド率いる改革派での間である。

保守派の主張は現状維持である。このまま適度に連合中央政府の権限を集めたまま今まで通り辺境地の開拓等を進めていくべきだという考えである。

これに対し改革派はより中央政府の力を強めるべきだという考えである。そして開拓はもうかなり進んだとして対外政策に積極的にあるべしという主張だ。

実際に開拓地は進んでいるといえば進んでいるしまだだといえばまだである。そもそもまだ何十万光年もの距離において拡がっているこの膨大な開拓地なぞ百年や二百年で開拓できるものではない。それが為に連合はエウロパのように人口や食料、資源の問題で悩むことはないのだが。入植された惑星では開拓は進んでいる。すなわち着眼点の違いの問題である。問題はこれが外交問題、そして各国の意見の相違にまでなっていることだ。

保守派は日本やアフリカ諸国に多い。彼等は連合においては中央政府の権限集中を主張したがそれ今の時点以上のものは望んでいない。連合軍が設立された時点でよし、とするものだった。

改革派はアメリカや中国、ロシア、環太平洋諸国であった。彼等は中央の権限強化には反対であったが今では主張を変えていた。彼等は今こそエウロパを倒すべし、と考えたのだ。これは歴史の問題よりも野心があった。エウロパの資源や領土も自分達のものにしたいからだ。

「そして改革派はエウロパを併合したらどするつもりなのでしょう」

秘書官が尋ねた。

「おそらくその領土や資源を分割するつもりだろうな」

「それでしたら開拓地に行けばいいだけでは」

「どうも彼等はそう考えてはいないらしい」

「わかりませんね」

秘書官はここで首を傾げた。
「わざわざ戦争してまでものを得ようとは」
「もっともそれだけではない。予防戦争という意味もある」
「予防戦争！？」
「そうだ」
八条は答えた。
「エウロパと連合には三十倍の国力差がある」
「はい」
人口比及び総生産量、国力からしてそう考えられるのだ。実際にもそれ位の開きはある。
だが生活水準はエウロパの方が高いと言われている。これは彼等の生活にゆとりがあるからだ、と一部の識者は主張する。
だがこれはまやかしだと言われる。実際には大差はない。むしろ彼等は人口問題や資源の問題に悩まされている。それに比べて連合にはその心配はない。
よく海賊やテロリストの問題があるがこれも別問題である。エウロパも戦争をしている。
それにこう主張する者は貴族達を引き合いに出す。貴族は所得が最初から大きく違う。彼等は特権階級である。連合には特権階級は存在しない。表向きだと言われようと。
連合の全ての国では教育は完全な義務教育である。そして高校、大学、若しくは専門学校へ進むのも本人の意思によるものだ。だがエウロパでは違う。
やはり貴族と平民の教育の環境の差がある。これは二十世紀でも残っていたし今でもある。むしろ今の方が昔よりもさらにそうした貴族主義的傾向が強くなっている。
高貴なる者の努め、と言われる。それを無批判に評価して連合の社会を批判する者がいる。だがそれは愚かな過ちなのである。
連合は機会均等主義である。本人が望み、運と機会、そして何よりも本人の努力で富も名誉も得られる。一介の下士官ですら連合中

央政府の大統領になれる、それが連合である。皇室や王室も多くあるが彼等はあくまで象徴である。
だがエウロパは違う。厳然とそうした貴族社会がある。彼等と平民は違うのだ。軍人や高級官僚を貴族がほぼ独占しているのもエウロパの特徴である。だが識者はそれを見ようとはしない。ただ貴族達の優雅な生活を手放しで絶賛し、連合のあくせくした生活を批判するのだ。なお彼等の多くは大学の教授や学者であり彼等のいる連合の大学や連合の国民達に自分の本を買ってもらい生計を立てている。
「おとぎ話としては面白い」
ある政治家がそのエウロパの貴族の生活について書かれた本を読んで一言そう言った。
「連合にとっては全く意味のないものだ」
その通りであった。連合の国情には全く合っていない生活習慣であったのだ。
「働いて金を稼ぎ、食べて遊ぶ。それが人生だ」
こう豪語する者もいた。連合においては優雅でゆとりのある生活なぞ不要だった。時間があれば金を稼ぎ、多量の食べ物を胃に流し込み、遊ぶ。連合の者は一千年もの間そうやって人生を楽しみ生きてきた。エウロパの生活に憧れる識者の一人もついこう漏らしている。
「しかし私はそれでも連合から離れようと思ったことはない。この雑多な雰囲気が何よりも好きだ」
彼はこう言った時軽食の店でラーメンとハンバーガーを食べ、ジャワティーを飲んでいたらしい。遊園地に行くのが大好きでよく子供とムキになってゲームをしていたそうだ。彼にとってエウロパの生活とは単なる夢物語であった。実際には連合での寸暇を惜しんで働いて遊ぶそんな生活を愛していたのだ。
すなわち連合にとってはエウロパは最早理解し難い存在であった。ファンタジーの世界そのものであった。そんな彼等に怖れを抱くの

も当然であった。
「だが我々に対し何かしてくる怖れがあるのはエウロパだ、と」
「少なくともほとんどの者がそう考えているだろうな」
「長官もですね」
「まあな」
八条は頷いた。彼もまたエウロパのそうした貴族主義は腐敗に思えるところがあった。
「今のところは、な」
「といいますと」
秘書官はそこに尋ねた。
「まあそれはいいとしてだ」
だがあえてはぐらかした。話を単純にする為だ。
「エウロパ本土にモンサルヴァート提督が帰ってきたそうだな」
彼の名は連合においても知られていた。若き名将と噂されている。
「はい、元帥、統帥本部長になったそうです」
「元帥か。あの若さで」
「エウロパにおいても前例のない昇進だそうです」
「幾ら彼が名門の出身であってもか」
「はい。イギリスやオーストリアの王家の者でもあそこまでの昇進はなかったそうです」
「それは当然だな。彼等は適度なところで軍務を離れなければならない」
そして王家の本来の職務に就く、それが王家の者の努めだった。日本では皇室に軍に就く義務はない。そのかわり生まれた時からその責務を果たさなくてはならない。日本の宮内省の頭の硬さは数千年の歴史がある。おいそれとは変わらない。国内においても批判があるが政治家がどうこうできる問題でもない。何かを言うにはあまりにも歴史の古い問題であり言えないのだ。下手に言えば失脚するのは確実だからだ。女帝にしろ以前の前例を出しただけに過ぎない。国民が言うしかないがこれも意見が分かれる。やはり伝統の重みが

あった。
『連合において絶対に破られないものが二つある』
とある野球チームの監督が銀河シリーズで負けなしの十連覇を達成した時に言った言葉である。
「そちらのチームの記録ですか」
記者の一人が問うた。
「馬鹿を言っちゃいけない」
彼は笑って言った。
「スポーツの記録は破られる為にあるのだ。二千盗塁しようがホームランを千本打とうが何時かは破られる。むしろそうでなくては面白くない」
実際にこの十連覇も後に破られることになる。
「一つはガンタース要塞群」
連合の誇る難攻不落の要塞である。
「そしてもう一つは」
「これはおそらくガンタースとは比較にならないだろうな」
彼は記者の問いに対し不敵に笑って答えた。
「それは何ですか？勿体ぶるなんて意地が悪いですよ」
「聞きたいかね？」
「是非」
記者達は答えた。
「では答えよう」
この監督はとにかくもったいぶることで有名な人物であった。
「竹のカーテンだ」
「竹のカーテン！？」
「そうだ」
彼はここでニイ、と笑った。
「伝統にはおいそれと勝てんということさ。ガンタースが破れても竹のカーテンだけは絶対だ」
その竹のカーテンとは皇室の伝統、そして宮内省の頑固さについ

て言ったのであった。前者は賞賛で、後者は皮肉で、
である。
『難攻不落』
皇室の伝統はそこまで言われていた。これは皇室について語るのが非常に困難なことも関係していた。
何千年もの歴史がある国家である。エチオピアとどちらが古いかで議論すらある。
「シバの女王の子孫ではないのか」
「ギリシア神話のアンドロメダの家ではないのか」
エチオピア王家もそう言われていた。一時断絶したがそれを悲しむエチオピア国民により復活した。その時皇室を断絶させた独裁者の一味は後に一人残らず裁判にかけられ絞首台に登った。

## 第四部第三章　愚か者の楯その六

その継承した人物も最後の皇帝の曾孫か何かだったという。正直その血筋は怪しいと言われる。だが言い換えるとエチオピア皇室の血はエチオピアの国民全員に流れている。何とでも言えるところがあった。ここまで長い歴史があると流石にそういう見方もできた。

日本もそうであった。神武天皇はやはり実在した、という主張はこの時代にもある。おそらく実在したであろうが年代は合わない、という主張もある。

やはり少なく見積もっても三千年程の歴史があるのだ。その間多くのことがあった。二つに分かれたこともある。

そうしたものについて語るのである。中途半端な学識では到底語れるものではない。単純に皇室の存在について反対するのは一千年前に終わった。今ではそのような当たらないところから石を投げて自慢しているだけの行為は論理にも何にもならない。馬鹿にされるだけである。

そうしたことがあるからおいそれとは語れないのだ。イギリスやオーストリアの王家と比べても比較にならないものがあった。日本がアメリカや中国、ロシアといった他の大国に対して国力で劣るところがあってもその権威で勝るのはその伝統を持つ皇室の存在があるからだ。そこまで伝統は強いものであった。

連合においてもそうである。貴族主義の強いエウロパではどうか。言うまでもない。

「あの権威主義者の集まりでよくそこまでなれたものです」

秘書官は皮肉を込めて言った。

「権威主義は何処にでもあるが」

「失礼、では言い替えましょう」

彼は一旦言葉を引っ込めた。

「貴族主義です」

そう言うと口の端を歪めてみせた。
「あまり変わらないと思うが」
「ふふふ」
秘書官は大のエウロパ嫌いである。それが表面に出たのだ。
「確かモンサルヴァート元帥はサハラ総督府で艦隊司令をしていたのだったな」
「はい」
「そして部下達と共に本土へ戻ったのか。本道防衛の為に。すると今の総督府にはマールボロ元帥しかいないことになるな、知られた人物は」
「いえ、新たに一人赴任したそうです」
「誰だ？」
「ロギ＝フォン＝タンホイザー上級大将です」
「知らないな」
八条にとってははじめて聞く名前であった。
「ご存知ありませんか」
「残念だが。どういう人物だ？」
「ドイツのある公爵家の嫡男だそうです」
「貴族か」
「はい」
これは八条にもわかっていた。『フォン』は貴族、それもドイツ系の者に授けられる呼称だからだ。イタリア系だと『デル』、フランス系だと『ド』になる。
「だとするとかなりの若さでそれなりの地位に就いているな」
「はい。まだ二十代前半だそうです」
「また凄い昇進の速さだな。家柄だけではないな」
「はい、軍人としての能力も卓越したものだという話です。ただ」
「ただ？」
八条はそこに突っ込みを入れた。
「かなりの夢想家だと言われています」

「どんな様子だ？」
「何でもいまだに騎士がどうとか言うようです。戦いは騎士道を見せる為の場だと公言しているようです」
「エウロパにはそうした者が多いがな」
これも連合とエウロパの端的な違いの一つであった。連合では軍人は職業の一つに過ぎない。だがエウロパの者、特に貴族達はそうは考えないのだ。
彼等は軍務に就くことを『高貴な者の責務』と考えている。青い血を持つ者として彼等は軍人となり戦場で戦う事を選ぶ。そして戦場においては卑怯、未練を卑しむ。敗れた敵に対しても寛大であるべきと考える。それこそが貴族として、いや騎士としての在るべき姿と考えているのである。
「所謂騎士道ですね。我が国にも武士道がありますが」
これはこの時代でも使われている言葉である。
「今ではスポーツの場位でしか使われないな」
八条は苦笑して答えた。だが日本の選手達の国際親善試合や国際競技、オリンピック等におけるマナーの良さ、潔さはよく知られている。それが『サムライ』だと言う人も多い。
ちなみにこの時代オリンピックは二つに分裂している。連合で行われるものとエウロパで行われるものの二つがある。連合でのオリンピックにはマウリアも参加する。かなり巨大な大会となっている。
エウロパのものはそれに比べて小規模だ。だがこちらは自分達こそ正統なオリンピックだと主張している。これは歴史に根拠がある。それにエウロパのオリンピック委員会は頑固な老貴族達が仕切っている為プロ選手や商業主義の入り込む余地はない。ここが連合と違うところであった。なお両者が分裂して一千年が経とうとしている。こんなところにも連合とエウロパの対立の構図があった。
「エウロパの連中はスポーツでもかなり五月蝿いそうですよ。フェアにやるべきだ、と」
「とするとドーピングも審判買収もないのか」

これはこの時代にも問題になっていることである。連合においては野球やバスケ、ホッケー、格闘技等で審判の誤審がもとで乱闘に至るケースが多い。つい先日中国で国内のプロ野球チームのリーグ戦においてストライクの判定を巡って乱闘が起こっている。騒ぎは球場全体に及び中国では新聞の一面を飾った。

「一つのチームに偏った判定をする審判なぞ殺してしまえ！」

あるファンは激昂してそう叫んだ。これは至極正論である。公平な判定をしない審判なぞは有害でしかない、そのような審判は自害してでも責を負うべきである。

「乱闘もなければいいな」

八条はふとそのことを思い出した。そして言った。

「残念ながらどれもあるようです」

「何だ」

やはり人間の世界ではそうしたことはつきものである。

「ただ連合に比べてずっとましなようですね」

「それはいいな。やはりスポーツはフェアにやらなければな」

「はい」

それはこの秘書官も同じ意見であった。大きく頷いた。

「そしてタンホイザー上級大将だが」

八条は彼に話を戻した。

「どのような人間だ？」

「人間的には邪気も悪意もない人物のようです」

「ふむ」

「恵まれた環境に育ったせいか欲はないようです。趣味はフェシングと乗馬、そして読書だとか」

「意外とまともな趣味だな」

「ただ読むのは中世の騎士物語や恋愛詩集、妖精の話ばかりだそうです」

「またわかりやすいな」

八条はそれを聞いて思わず笑ってしまった。

「つまり自分は騎士であると、そう考えているのだな」
「はい」
「成程、だからフェシングと乗馬をするのか。よくわかった」
八条はそれを聞き頷いた。
「戦い方も予想できるな」
「正攻法を好むようです」
「だろうな。さて、サハラに行きどんなことをするかな」
彼はここで悪戯っぽい笑みにした。
「お手並み拝見といこう」
「はい」

さて、そのタンホイザーであるが国境を接するサハラ東方の小国であるマガバーン王国の軍と対峙していた。
マガバーンはハサンの同盟国の一つである。だが実質的には属国である。
この国はこの度政権が交代しハサンに対して反旗を翻した。そしてシャイターンのいる北方諸国連合への参加を宣言したのである。
「また厄介な時に宣言してくれたものだな」
サラーフ領内でそれを聞いたシャイターンは思わず顔を顰めた。
「どうしますか？」
問うた壮年の分艦隊司令の一人に対し彼は首を横に振って答えた。
「今はどうにもできない。だが何かあったらこちらに来るように行っておけ。後々何かに使えるかも知れぬ」
「わかりました」
その分艦隊司令はそれを聞き敬礼した。シャイターンはそれを見届けると正面に向き直った。
「今は少しでも力をつけなければならない」
彼が今侵攻しているのもその力を得る為であった。
「大事の前には小事を捨てなければならない時もある」
彼は独白した。

「だが拾っておいて損はないな。これが思わぬ奇貨となる場合がある」
ここでニヤリ、と笑った。
「奇貨置くべし、か。中国の政治家が言った言葉か」
呂不偉である。春秋時代末期の政治家であり商人でもある。『呂氏春秋』を編纂させたことで知られている。
「今は奇貨を貯めておくとしよう。何かの役に立つ」
彼は顔を引き締めさせた。そして目の前に広がる銀河を見た。
「この星の大海を手に入れる為だ。多いにこしたことはない」
彼はそのまま進路をアルフフーフに向けさせた。そして退くことはなかった。

さてそのタンホイザーであるが一個艦隊を率いてマガバーン軍と対峙していた。
「向こうの兵力は？」
彼は後ろに控える参謀の一人に尋ねた。
「向こうも一個艦隊です。ただ我が軍とは編成が違いますが」
「というと」
「マガバーン軍の艦隊はあの艦隊しかないのです。従って宇宙艦隊全てが入っております」
「兵力は我が軍のそれより多いのかな」
「そうですね。若干多いようです。百三十万程かと」
「そうか、結構いるな」
タンホイザーはそれを聞いて言った。
両軍はマガバーンの国境に布陣していた。そして睨み合っている。どちらも互いの隙を窺っている。隙を見せた方がやられる、そういった状況であった。
「閣下、如何致しましょう」
その参謀が問うた。
「決まっているさ」

タンホイザーはにこやかに笑って答えた。
「全軍進撃だ、敵の正面に向けてな」
「え・・・・・・」
その参謀だけではなかった。他の者もその言葉に思わず呆然となった。
「全軍を以って敵の一点に集中攻撃を仕掛ける。そしてそのまま雪崩れ込むんだ」
「閣下」
そこで先程の参謀が進み出てまた言った。
「お言葉ですが口で言うのは容易いです。しかし」
「実行するのは困難だ、と言いたいんだね」
「はあ」
相変わらず自信に満ちた微笑みをたたえるタンホイザーを見て不安を覚えた。
「大丈夫だよ、絶対に勝てる」
「そうでしょうか」
「まあここは私に任せてくれ」
人の話を聞いているのかいないのか、彼の態度は相変わらずであった。
「では全軍進撃だ、敵陣に向けてな」
「はい」
スタッフはとりあえず頷いたが不安は隠せない。それは声にもあらわれていた。
「心配する必要はないよ、勝利は我が手にある」
そんな彼等に対して言った。
「では進め、そして勝つ！」
彼の指示によりエウロパ軍は進撃を開始した。向かうは敵の正面である。
「敵が来ました！」
それはすぐにマガバーン軍にも確認された。

「何処からだ！？」
マガバーン軍宇宙艦隊司令はそれを聞いて問うた。
「正面からです」
「おい、いい加減なことを言うな」
彼はそれを聞いてまず否定した。
「幾ら何でも正面から来る筈がないだろう」
「いえ、それが」
オペレーターの声は明らかに戸惑っていた。
「実際にモニターを御覧になられればおわかりかと思いますが」
「映せ」
「はい」
こうしてモニターのスイッチが入れられた。それを見て司令は絶句した。
「本当だったのか」
「はあ」
オペレーターの声は相変わらず戸惑ったものだった。
「全軍守りを固めよ」
司令はそれを見てすぐに指示を下した。
「数においてはこちらの方が優勢にある。守りさえ固めれば問題はない」
「はい」
こうしてマガバーン軍はすぐに防御を整えた。それは進撃するエウロパ軍からも確認された。
「閣下どうなさいますか」
参謀の一人がタンホイザーに問うた。
「決まっているよ」
彼は素っ気なく答えた。
「このまま前進だ」
「やはり」
参謀は頷いた。彼も軍人である。もう腹はくくっていた。

「射程はこちらの方がある」
「は、はい、その通りです」
タンホイザーのその言葉に周りの者は驚きながら答えた。マガバーン軍の艦艇はハサンからの旧式兵器ばかりである。やはり射程は短い。それに対してエウロポ軍は最新鋭の兵器であり射程も長い。タンホイザーはそのことを知っていたのだ。
「私が指示を下したら一斉射撃だ」
「はい」
「一点を集中してな。そこから切り込む」
「成程」
奇しくもアッディーンが得意とする戦法だ。だが彼はそれを意識してやるのではない。あくまで勘で行うのだ。
次第に間合いが詰められていく。タンホイザーはそれを見て右手をゆっくりと上げた。
「あのポイントだ、いいな」
そして敵陣の中央を指し示した。そこに指揮系統の中枢がある。
「わかりました」
周りの者は答えた。タンホイザーはそれを横目で見ながら言葉を続けた。
「射程に入るのはもうすぐだね」
「はい、あと十秒」
参謀の一人が腕の時計を見ながら答えた。
「よし」
彼は頷いた。すぐにその時が来た。
「撃て！」
右腕を振り下ろす。それと同時に光の帯がエウロパ軍から放たれた。
それはマガバーン軍の中央を撃った。あまりの衝撃に一瞬隙が生じた。
「よし、突入だ！」

タンホイザーはすぐに指示を下す。それに従いエウロパ軍は敵陣に雪崩れ込んだ。
すぐに外側に向けて一斉攻撃を行う。それが終わるとすぐに艦載機を出した。
「エインヘリャル、出撃！」
エウロパの艦載機はエインヘリャルである。攻撃力と速度が高い。
そのエインヘリャルが敵艦に群がる。そしてマガバーンの艦艇を次々と沈めていく。
エウロパ軍はマガバーン軍を突っ切った。そして反転して後方から攻撃を仕掛ける。
また突入する。これでマガバーン軍は総崩れとなった。
「今兵力はどの程度ある」
マガバーン軍司令は参謀の一人に尋ねた。
「各部で寸断されていまして・・・・・・」
問われた参謀は言葉を濁した。
「どの程度だ」
だが司令はそれでも問うた。
「今統制がとれるのは半数程ですが」
「そうか」
彼はそれを聞いて頷いた。
「降伏するしかあるまい。最早勝敗は決した」
「はい」
参謀はその言葉に頷いた。
「敵に電報を送れ。降伏したいとな」
「わかりました」
これで全ては終わりであった。

## 第四部第四章　楯砕きその一

楯砕き

アッディーンはその時アルフフーフを完全に包囲下に置いていた。
「降伏勧告への返答は？」
ガルシャースプに問うた。
「黙殺しています」
彼は首を横に振り答えた。
「やはりな。予想されたことだ」
アッディーンはそれを聞き頷いた。
「どうせ自分達だけは安全を確保できると甘い夢を見ているのだろう」
「そうでしょうね」
「だとすればその甘い夢から醒まさせてやろう。とっておきの目覚ましでな」
アッディーンはそう言うと後ろに控える参謀達に顔を向けた。
「用意はできているか」
「はい」
参謀の一人が敬礼して答えた。
「何時でも動かせる状態です」
「ならばいい」
彼はそれを聞き頷いた。
「ではすぐに作戦を実行に移すとしよう」
「わかりました」
スタッフはそれを聞くと皆それぞれの持ち場についた。
「いいか」
アッディーンはコンピューターの前についたスタッフに尋ねた。
「はい」
そのスタッフは答えた。

「よし」
アッディーンは顔に笑みを浮かべた。そして右手をゆっくりと挙げた。
「それでは作戦を発動するぞ。スイッチを入れろ」
「わかりました」
別のスタッフが頷き何かのボタンを押した。
「よし、あれの道を空けろ」
彼の指示の下艦隊は包囲の一部を解いた。
数時間後艦隊の後ろに何かが姿を現わした。
「来たな」
アッディーンはモニターを見てほくそ笑んだ。
「これでブラークは終わりだ」
やがてそれの姿が見えてきた。それは巨大な隕石であった。
「コントロールはいいな」
「はい」
スタッフの一人が答えた。
「万事抜かりなしだな」
アッディーンの声は自信に満ちていた。そこには勝利の確信があった。
「ではゆっくりと見るとしよう。これからあの愚か者共の惰眠のもとが壊れる様を」
「はい」
ガルシャースプはその言葉に頷いた。
隕石は次第に速度を速めていく。そしてそこにブラークがやって来た。
「どうやら隕石に攻撃はしないようだな」
「隕石に対しては別の防衛手段がありますからね」
これは川にある堤防のようなものだ。この時代はどの惑星にもそうした隕石に対処する為の防衛用の人工衛星が惑星の周りを回っている。危機を察したならばレーザービームですぐにその隕石を撃つ

のだ。
ブラークはそうしたものではない。あくまで敵に対するものである。それが裏目に出たのだ。
「よし」
隕石はブラークに向かっている。それを防ぐことはもうできない。
「アルフフーフの管制室の驚く様子が目に浮かぶようだ」
彼は満面に笑みをたたえながら言った。その瞬間光が発せられた。

「そうか、ブラークが破壊されたか」
その時シャイターンはアルフフーフから一日の距離にまで達していた。
「これでナベツーラも終わりだな」
「はい」
それを報告したラーグワートは頭を垂れた。
「どのみち破壊されるとは思っていたがまさか隕石を直撃させるとはな。面白いことを考えたものだ」
彼は詳細を聞くと楽しそうにそう言った。
「これでサラーフの命運は完全に終わりましたな」
「既にナベツーラが政権に就いた時にな」
シャイターンは言った。
「あのような男を選んだサラーフの者も愚かだが」
「マスコミに踊らされたせいもありますが」
ラーグワートは彼等を擁護するように言った。
「それで目が曇っては駄目なのだ」
シャイターンは冷然とした態度でそう言い切った。
「マスコミが全てを報道しているわけではない。必ず何処かに真実が転がっているのだ」
「そういうものでしょうか」
「そうだ。これを読んでみるがいい」
シャイターンはそう言うと懐にあった新聞をラーグワートに渡し

た。
「これは」
「サラーフの新聞の一つだ。ナベツーラとは対立する立場にある新聞さ」
「そんな新聞社もあったのですか」
「ナベツーラ派には徹底的に誹謗中傷を浴びていたがな。それでもサラーフ全土に発行している新聞だ」
「サラーフ全土にですか。では影響も大きいのでしょうね」
「いや、そういうわけでもない」
彼はそれに対しては首を横に振った。
「発行部数はかなり落ちているそうだからな。ナベツーラの圧力で」
「そうなのですか」
「理由は内容を読めばすぐにわかる」
そう言って彼に読むことを勧めた。ラーグワートはそれに従い新聞を拡げた。
まず一面からナベツーラへの批判だ。その政策と腐敗ぶりを徹底的に糾弾している。
続いて戦況の報告である。相次ぐ敗戦を伝えている。
「全て真実ではないですか」
「サラーフ以外の国ではな」
シャイターンはここであえて意味ありげに言った。
「サラーフでは真実ではないのだ」
「何故ですか？」
「サラーフではナベツーラの下にあるマスコミの言葉だけが真実なのだ。それ以外は虚言だ」
「何と」
ラーグワートはそれを聞き絶句した。
「驚くことはない。一千年前はそうだったのだ」
「しかし」
「サラーフはそうした状況にあるだけだ。その他は何らおかしなと

ころはない」
「マスコミのみが真実であるというだけで異常ですが」
「ネット等がないとどうしてもそうなるのだ」
シャイターンは答えた。
「情報を一部の者が独占すると怖ろしいことになる。彼等はそれを利用して権力を独占するからだ」
「そしてその情報を己の意のままに流すのですね」
「そうだ」
ラーグワートの言葉に対し頷いた。
「かってはそうやって全ての国がマスメディアの軍門の下にあった。とりわけ日本はな」
二十世紀後半の日本のマスメディアへの権力集中とその腐敗は以前に述べられた通りである。
「そうした状況を打破するのにネットは大きな役割を果した。だがこのサラーフでは違ったのだ。電力を確保する為にネットを規制したのだ」
「それがかえってマスコミの権力集中を助けたと」
「意図したわけではなかったのだがな。今はその弊害が一度に出てしまっただけだ」
「それより前からあったのですね」
「そうだ。それがナベツーラだ」
シャイターンはそこで言った。
「ナベツーラのような者が権力を握ることができるのもマスコミの力があってのことだ。日本ではテロ支援国家と結託した政党や知識人が良識派としてもてはやされていたではないか」
「はい」
マスコミの弊害を語るうえで必ず述べられることである。この時の日本では軍隊を全廃し、テロを平然と行う危険な独裁国家を民主的な平和勢力として絶賛することが良識なのであった。これを以って当時の日本の知的レベルの絶望的な低さを指摘する識者も多い。

確かにそれは一理ある。この時代日本は経済的に繁栄していたが何と日本から名の知られた経済学者は全く出ていないのである。それどころか二十一世紀になってもマルクス主義経済を教える経済学者が残っており『経済学の化石』とまで言われていた。彼等は経済は生物であるということを全く理解しておらず十九世紀中頃の古典的な経済をその時代に当てはめていただけなのだ。それでまともな経済学が発達するわけがなかった。日本は漫画がこの時から有名であったがとある漫画家は働くのが嫌でマルクスにのめり込んだ。そしてそこから見事なまでに一歩も出なかった。彼等に進歩や発展などという言葉はなかった。そのような連中に常に動く経済を理解しろと言っても無駄であった。むしろ株で食べている人間の方が経済を理解していた程であった。

それもこれもマスコミがマルクスばかり言っていたからである。当時共産主義国家であるという建前であった中国人が日本に来てまだ大学でマルクスを教えているのを聞いて驚いたという話がある。

## 第四部第四章　楯砕きその二

「これは経済史を学ぶ場ですか？」
その中国人は学生に尋ねた。
「いえ」
日本人の学生は首を横に振った。
「これからの経済について学んでいるのです」
こう言われてその中国人は開いた口が塞がらなかったという。
後には彼経済学をやめスポーツの世界に入った。そしてサッカーで名フォワードとして中国に入りオリンピックで金メダルをもたらすことになる。
その彼が金メダルをもらった時に言ったことである。
「日本では経済学は学ばなかったけれどスポーツマンシップとサッカーは学んだよ」
彼は日本のプロチームでも活躍していたのである。
こうしたことは二十一世紀前半まで尾を引いた。結局日本は二十一世紀中頃までアメリカや中国の後塵を拝することになり常に第三の勢力でしかなかったのはこうしたマスコミのマルクス的経済学や歴史観、今もなおある歪んだ市民主義によるところが大きかったのだ。
そうした歴史は今では連合だけでなくエウロパやサハラでも学ばれている。その反動だろうか、今も日本ではマスコミの力はかなり制限されネットの力が大きいのだ。
「あれと全く同じことなのだ」
「そしてそれによりサラーフは滅んだのですか」
「うん。我々にとっては好都合だったがな」
シャイターンはうっすらと笑みを浮かべて言った。
「こうして多くの領土を手に入れることができたのだから」
彼等はこの時点でサラーフ北方を中心としてその約四分の一の領

土を占領していたのだ。
「問題はこの領土をどのように各国に分配するかですね」
「それは心配ない」
シャイターンはすぐに答えた。
「どうしてですか？」
ラーグワートは怪訝そうに尋ねた。
「それもやがてわかる」
彼は不思議な笑みを浮かべて答えた。
「すぐにな」
その笑みは何処か悪魔的であった。
「話題を変えよう」
シャイターンはここで言った。
「アッディーン提督率いる艦隊との距離はどれだけある」
「あと一日です」
後ろに控える参謀の一人が答えた。
「そうか」
シャイターンはそれを聞き目を不思議な色にした。
「ではすぐにオムダーマン軍のところへ向かうとしよう」
「まさか」
彼等はシャイターンの言葉にいろめきだった。
「誤解しないでほしい」
彼はそれに対して言った。
「彼と会ってみたいだけだ」
悪戯っぽく笑ってそう答えた。
「お会いしたいだけですか」
「そうだ。オムダーマンとは何の対立関係もない。問題はないだろう」
「しかし」
それだけで済むとは思えなかった。彼等もシャイターンの性格は知っている。その彼がただ会いたいという理由だけで会談をすると

は思えなかったのである。
「いいか」
「それは」
彼等は口篭もった。
「心配は無用だ。ただ会うだけなのだからな」
笑顔でそう言った。
嘘だ、彼等は皆そう思った。だがそれは口には出さなかった。
「異論はないようだな」
「は、はあ」
彼等はそれを了承するしかなかった。結局それを決めるのは司令官であるシャイターンなのだから。
「ではオムダーマン軍に電報を打ってくれ」
「わかりました」
アリーの通信士が敬礼して答えた。
「然るべき場でアッディーン司令と会いたいとな。拒むことなきよう、と」
「はい」
彼は敬礼するとすぐに通信室に向かった。
「これでよし」
シャイターンはそれを笑顔で見送った。
「楽しみだな。オムダーマンの誇る若き名将と会えるのだから」
「はあ」
ラーグワートや幕僚達はそれを不安気な顔で見ている。
「どうした、浮かない顔をして」
シャイターンはそんな彼等に対して言った。
「私が何かするとでも思っているのか」
答えない。だがこれまでシャイターンは謀略も厭わなかった。そうして傭兵隊長を務めてきたのだ。今回ももしかしたら。
「安心しろ。私は今はよからぬことを考えてはいない」
彼はそれを打ち消すように言った。

「ただこれからの出会いに期待しているだけだ」
しかし何処か虚言に聞こえる。
「アッディーン提督」
彼は不敵に笑いながら彼の名を口にした。
「さぞかし見事な男なのだろう。この私と釣り合うようなな」
そこには戦いを求める男の顔があった。まるで狼の様な顔になっていた。

ブラーク陥落の情報は連合やエウロパにも伝わった。
「そうか、サラーフもこれで終わりだな」
連合の感想は淡々としたものであった。
「サハラ西方は完全にオムダーマンのものになったな」
皆そう見ていた。だがシャイターンの存在は過小評価していた。
「所詮一介の傭兵隊長だろう？今までの戦いも運がよかっただけだ」
「今も火事場泥棒をしているだけだ。ハルーク家に入ったにしてもそんなに大したことじゃない」
識者もネットでの意見も大体こうしたものであった。
「そのうちエウロパに潰される。もうサハラ北方はエウロパのものになることが決まっている」
こうした醒めた意見が主流を占めていた。そもそもシャイターンを知らない者すら多い状況であった。
これは連合中央政府においても各国の政府においても同じであった。
「傭兵なぞ無用の長物だ」
連合の軍制度から見ればその通りであった。
彼等は傭兵を軽蔑していた。正規兵とは違い単なる寄せ集めだと考えていた。
「それも未亡人をかき口説いてハルーク家に入ったのだろう。何か卑しい行いだ」
そうした意見もあった。彼等はシャイターンという人物に何か胡

散臭さを感じていたのだ。
「確かに胡散臭い人物ですね」
八条の執務室に二人の男が来ていた。二人共連合の軍服を着ている。
「今までの経歴を見ると不可思議な行動が多いです。それに生活も異様に華美ですし」
右にいる金髪碧眼の長身の男が言った。ローラン＝マクレーン大将である。アメリカ出身だ。
「生活はこの場合関係ないのでは」
八条は彼に言った。
「その財源が問題なのです。とある宗教団体のリーダーの息子と聞いていますが」
「その彼が何故傭兵隊長をしているか、わからないのですね」
「はい」
マクレーンは八条の言葉に頷いた。
「私もマクレーン大将と同じ考えです」
左にいる黒髪のアジア系の男が言った。劉白鳳大将である。彼は中国出身だ。
「それに何故南方からわざわざ北方にやって来たのでしょう。それがわからないのです」
「そうですか」
八条は劉の話を聞き考える顔をした。
「お二人共シャイターンという人物にはあまりいい印象を持ってはおられないようですね」
「え、ええまあ」
「そう言われればそうですが」
二人はキョトンとした顔になり答えた。
「確かに軍人から見ると好きにはなれません」
八条も軍人だったからよくわかるのだ。
「しかし非常に優れた人物であるというのは疑いようがないと思う

のですが」
「それはまあ」
二人もそれは認めた。
「二度の戦いに鮮やかな勝利を収めていますし」
「それに今回のサラーフ侵攻も見事です。まるで事前に流れを知っていたかのようです」
「流れですか」
八条は劉の言葉に眉を動かした。
「はい」
劉はそれを見て少し不思議そうな顔をした。
(長官は何かに気付かれたかな)
彼は心の中でそう呟いた。
「だとしたら戦略にも秀でているようですね。私は戦術だけを見て言ったのですが」
「戦略も、ですか」
マクレーンが言った。
「はい。それはオムダーマンとサラーフの戦いの趨勢を見極めることができないと動けなかったものです」
八条は二人を見上げた。
「それをあらかじめある程度予想して今回の準備をしていたとすると」
「シャイターンという人物、かなりの戦略眼がありますね」
「はい」
彼はここで二人に頷いた。
「彼が北方に来たのは何かの理由があるのかも知れません」
「といいますと」
今度は二人が八条に尋ねた。

## 第四部第四章　楯砕きその三

「彼が何かを得るのに容易い場所であるとか」
「そういえば」
シャイターンはここで北方諸国の危機を救いここでの支持を得た。そして北方で最も力のあると言われるハルーク家に入った。そして今回の侵攻だ。彼はまるで北方に何かを築こうとしているかのようである。
「もし彼に野心があるとすれば北方は格好の場所でした」
八条は考える顔をしたまま言った。
「そして今彼は北方どころかサハラでもとりわけ人気のある存在になろうとしている」
そうであった。二回の戦いの勝利とハルーク家との結び付きにより彼はサハラでも有数の権勢と評価を手に入れたのである。
「それにより彼はそれ以上のものを目指す地盤を手に入れることができるでしょう」
「それ以上のものといいますと」
マクレーンが問うた。
「例えばですが」
八条はそれに対してこう前置きしたうえで言った。
「サハラを統一しその元首になるとか」
「まさか」
劉はそれを聞いて思わず苦笑した。
「あのサハラが統一される筈がありませんよ」
「そうですね、私も劉大将と同じ考えです」
マクレーンもそれに同意した。
「何故そう言えるのですか？」
八条はそんな彼等に対して問うた。
「一千年もの間分裂し互いに争ってきた者達ですよ、今更統一なぞ」

「そうです、そんなことは神にだってできません」
二人はそれを頭から否定した。だが八条は違っていた。
「あながちそうとは言えませんよ」
彼は二人に対してこう言った。
「何故ですか」
二人はそんな彼に尋ねた。
「我々にしろ多くの国家の集合体ではないですか」
「それはそうですが」
それは否定できなかった。連合は中央政府こそあるものの百以上の国家がその中にある。そしてそのそれぞれが自治権及び連合内での外交権を持っているのだ。今まではそれぞれの国家が軍を持っていた程である。
かっての国際連合と似たような部分が色濃くあった。その為国家としての統制は弱く国家連合に近い面があった。エウロパと比べてもそこは大きく遅れをとっていたのだ。
それから次第に権限を中央政府に集めようという考えが実際に行動に移されたのは二〇〇年程前からであった。それまでは中央政府は構成国の貿易や開発の保証、利害調整等経済面、貿易面でも行動のみであったのだ。
外交はエウロパとは敵対関係にありマウリアとは友好関係にあった。この二国との関係のみでありそれ程重要ではなかった。サハラ各国とは何処か疎遠であった。
「それが変わったのもつい最近です」
八条は二人に言った。彼等はそれに反論することができなかった。
「我々もそうでした。彼等ももしかすると、ということがあります」
「そうでしょうか」
しかし二人はまだ懐疑的であった。
「あれ程激しい戦乱が続いていたというのに」
「しかし彼等はその反面連帯意識が強い」
そのもとがイスラムであった。

「やはり信仰しているものが同じだと団結にも変化がでてきますね」
「それはわかります。やはり信じている神を同じくするとそこに連帯意識が生じますから」
二人は八条に応えた。
「またそれだけの力がイスラムにはあるということですね」
「はい」
二人はやや渋々ながらもそれは認めた。
アメリカも中国もかってイスラムと干戈を交えた経験がある。今連合にはムスリムは少ない。トルコやインドネシアといった一千年前にイスラム教国であった国々は今は違う宗教を信仰している。それは雑多で一概には言えない。連合の宗教は多様であり多くの宗教団体が存在する。キリスト教の流れを汲むものもあれば仏教もヒンズーも入っている。ゾロアスターもあるしそこから無数に派生している。それぞれの国にかってあった土着の宗教もいまだに存在している。シャーマニズムもそこにはある。エウロパのように北欧とケルト、そしてギリシアの神々が混ざり合った信仰とはまた違うのだ。だが一神教は少ない。あるにはあるがそれは厳密には一神教ではない。キリスト教がそうであったように。
サハラは違った。ムハンマドがガブリエルから授けられたコーランの教えを今も信じているのだ。コーランに誤謬はなく文字はアラビア文字である。当然文化や生活も全てそこからはじまる。
「彼等の全てがイスラムにあります」
アラブの時代からそれは変わっていなかった。
「戦いもまたそうです。彼等はジハードを戦っているのでしょう」
「でしょうね。だからあれだけ勇敢なのかも」
マクレーンが言った。彼はサハラに行ったことはないがその戦いについてはよく研究していた。
「そして敵に対しては団結する」
「この場合はエウロパがまさにそうですね」
八条は劉の言葉に乗った。

「そこにシャイターンの大義名分もあったのでしょう。同じムスリムとしてサハラを脅かすエウロパを許すことはできない、と」
「やはりそれですか」
劉はそれを聞いて言った。
「大義名分としてはいいものだと思いますよ」
八条は応えた。
「少なくとも反対意見は出にくい。それに兵士も集め易い」
「でしょうね、何しろジハードなのですから」
これのもとにムスリムは団結する。シャイターンはそれを利用したのだ。
「そう考えるとシャイターンという男はかなり頭が切れますな」
「でしょうね」
八条はマクレーンの言葉にも頷いた。
「しかしそれだけではないでしょう」
「といいますと」
今度は二人が尋ねた。
「それだけであそこまでの人気はありません」
「カリスマですか」
流石にこの巨大な連合軍で大将を務めるだけはある。彼等はカリスマの重要性も理解していた。
ちなみに連合の軍制度においては艦長は中佐が努める。十隻規模の部隊は大佐が率いる。百隻だと准将、千隻だと少将。一万隻で一個艦隊となるがこれは中将が率いる。連合軍の基本的な軍の単位は艦隊からなる。そして大将はそれをまとめた十個艦隊を統括する。すなわち大将にはそれだけの権限があるのだ。そしてその上には元帥しかない。だが連合の軍制度では元帥はあまり置かないようにしている。元帥に与えられる権限は大きいがそれだけにシビリアン＝コントロールに支障をきたしかねないからだ。連合軍はあくまで文民統制下の軍隊であるのだ。
しかしそれでも大将に求められるものは大きい。その程度のこと

はわかっていなければならないことであるのだ。
「そうです、どうも彼にはそのカリスマ性が備わっているようなのです」
「写真を見るかぎりかなり整った顔立ちですしな」
マクレーンが言った。シャイターンの写真や映像は連合にも出回っている。女性からの評価はかなり高かった。
「確かに。サハラの男性にしてはやや線が細いですが」
八条も彼の顔立ちについては知っていた。
「それがかえって人気を集めているようですね、我が軍の女性兵の間でも評判ですぞ」
「それはまた」
劉の言葉に他の二人は苦笑した。
「由々しき問題ですね。連合軍の誇る女戦士達が敵に惚れるなどとは」
「一応達は出しておきました。彼は所帯持ちだと」
この劉という男は案外洒落のわかる人物のようだ。
「それは何より。しかしそれでもいいという情熱的な娘がいたら考えものですな」
マクレーンもその洒落に乗った。
「長官のお国では彼はかなりの人気なのではないですか？大和撫子のお気に入りの優男ですぞ」
日本の女性の好みはこの時代よく知られていた。彼女達は筋肉質の大男や精悍な男性をあまり好まないのだ。それよりも中性的な顔立ちや色白の美少年を好む傾向がある。これはどうも平安時代からのようだ。日本においては在原業平や光源氏といった貴公子や弁天小僧、白井権八といった女装の似合う少年や美少年を好む傾向がある。これは日本の文化においてごく普通のことであった男色とも関係があるのだが女性も嗜好もそれと同じであった。従って他国の男性にとっては日本の女性の趣味は不可思議なものにうつる時がある。伝統的に男権社会で筋肉質の男や大柄な男が好まれるアメリカや中

国の男性にとってはそれが少し残念なのだ。何故か、日本の女性は可愛いので有名だからである。ちなみに八条も日本の女性の間でかなり人気がある。そのスラリとした長身と整った貴公子然とした顔立ちが女の子達に人気なのだ。もっともアイドルに比べれば落ちるが。ちなみに日本のアイドルや俳優達も他の国から見ればひょろっとした優男ばかりだ。弱々しい、という意見もある。

「それはどうでしょうか」

八条は二人のそんなからかい半分のジョークに苦笑して右手を横に振った。

「少なくとも私はそのような話を聞いていませんが」

「そうですか！？」

二人はそんな彼に対してさらに突っ込んだ。

「もてないとはとても思えませんが」

「いや、これが全然もてないのですよ」

彼も女性に興味がないわけではない。

「しかし変な噂がたっていましてね」

「どのような噂ですか？」

「いや、私が男色家だと。そのような趣味はないのですが」

彼は苦笑して言った。

これも日本の変わった習慣の一つである。どうも美男子は男色家でもあるという設定がつけられることがままあるのだ。確かに八条は外見的にそうした噂を立てられかねないところがあるが。

「それは厄介ですな」

「また変な噂を」

二人はそれに対しては顔を顰めた。この時代同性愛にはどの国も昔に比べてはかなり寛容になっている。だが個人としての嗜好であり嫌悪感を持つ者も多い。だからといって法律的、社会的に差別なぞはされないがそれでも嫌な者は嫌なのである。二人は嫌悪感を持つ派であった。

「気にしなければいいだけですが」

彼は困ったような顔をした。
「我が国はそうしたことには昔から寛容なのですがね」
日本の歴史において同性愛で咎を受けた者は一人もいない。歴史上でも織田信長はじめ多くの男色家がいたが彼等がそれで批判されたことはない。ごく普通のこととして歴史に書き残されている。平安時代の貴族には日記に自身のその恋愛のことが書かれている。無論同性とのだ。彼もそれを読む者もそれが異常なことだとは全く思っていない。それもまた日本の風俗文化の特色であった。先に述べた歌舞伎のそうした少年役もそうした同性愛が根幹にあるのだ。時として風俗を乱すとして幕府に取り締まりの対象となっても男色自体が取り締まりの対象となることはなかった。
こういう話がある。かって日本にキリスト教を伝えたフランシスコ＝ザビエルは中国地方の多くの領地を治めていた大内義長に対してこう言った。
「この国は非常に素晴らしい国です。しかし一つだけ恐るべき悪徳がはびこっています」
「それは何か」
悪徳と言われ大内は狼狽した。そして慌てて彼に問うた。
「それは男色です。この様な恐るべき悪徳は早急に根絶しなければなりません」
ザビエルは力説した。しかしそれを聞いた大内の顔は急に紅潮していった。
彼は激怒した。何故か、彼はこの時とある美少年を寵愛していたからだ。彼にとって男色は恋愛であった。それを悪徳とまで罵られ怒らない筈がなかった。
江戸時代も同じである。そうした土壌があるからこそそうした話も出るのだ。
「女の子達のおもしろおかしい作り話ですが」
「大和撫子にはそうした想像をする趣味があるのですか」
「それはまた妙な趣味ですな」

二人はこれは理解できなかった。
「これも昔からあることですが」
一千年前からある。そうした同性愛の小説や漫画が日本ではそれなりに人気があったりする。なお女性同士のものも人気がある。
「ごく一部ですよ、皆がそうではありません」
「それはわかっています」
だが往々にしてそれが全体だと思われるものである。人の世の中とはそうしたものだ。
「それにしても日本の漫画やアニメですが」
「はい」
マクレーンの言葉に顔をあげた。
「どうも線が繊細ですな。私にはそれがいささか物足りません」
「私もそれは感じました」
劉もマクレーンの言葉に同意した。
「全体的に綺麗さを求め迫力を重視していない漫画家が多いように思えます」
「一千年前から言われていることですね」
八条もその評価は知っていた。
「はい」
マクレーンはそこで頷いた。
「あくまで私個人の趣味ですが」
そう断ったうえで話しはじめた。
「もっと派手に、かつ豪快な絵柄の方がいいですね。効果音も痛快に」
「マクレーン大将、それは貴国の漫画ではないですか」
「ははは、確かにそうですが」
彼は劉の指摘に思わず笑った。
「では劉大将はどうお考えですか、漫画やアニメに対して」
「私は筆で描いたものがいいですな」
劉は得意顔で応えた。

「あれこそが本当の漫画であると思います」
「つまり貴国の漫画がいいと」
「否定はしません」
マクレーンに答えた。
「私は昔からそうした画風の漫画で育ってきました故」
「結局二人共自分の国の漫画が一番だと仰りたいのですね」
八条がそれを聞き終えて言った。

## 第四部第四章　楯砕きその四

「はい」
「とどのつまりは」
「やれやれ」
八条はここで今日何度目かの苦笑をした。
「まあ文化とはそうしたものかも知れませんね。自分のものが一番だと思う。しかし他国の文化も意識する」
「食べ物なんかは特にそうですね」
ここで劉が言った。流石に中国人だけはある。料理には五月蝿いようだ。
「私は上海料理が好きですが広東料理も食べます。そして刺身やハンバーガーも好きです」
「この前トムヤンクンを美味しそうに食べてましたな」
ここでマクレーンが言った。
「マクレーン大将もホットドッグと四川料理を同時に食べていたことがありましたな。サラサもお好きなようで」
「そうですな。タコスも好きですぞ」
マクレーンはあっさりとそれに対し切り返した。
連合ではこうした食べ物の混雑もよくある。確かに自国の料理を最もよく食べるのだが他の国の料理も互いによく食べる。しかしエスニック料理として区別はされている。人によっては全然食べない。
「私もハンバーガーやラーメンは好きですが」
八条はここで話に入ろうとした。だが二人はここで彼に対し共同戦線を張った。
「お言葉ですが長官の食べられているものは本物のラーメンではありません」
劉がそう言うとマクレーンが続いた。
「ハンバーガーもあれでは本当のハンバーガーと言えません」

「そうなのですか！？」
八条はその言葉にキョトンとした。
「日本人はどうも他の国の料理を自分の国の感じにアレンジしてしてしまいます。それでは本当にその料理を食べたとは言えません」
「私はそうは思いませんが」
八条は劉に反論した。これも昔から日本人が言われていることである。
「日本の料理は味が薄い。しかも繊細さにこだわるあまりその料理を極端に変えてしまうことがままあります」
「それは貴国の料理の味付けが全体的に濃いせいではないですか？」
今度はマクレーンに反論した。
「違いますな。日本人はその舌にこだわるあまり味を変えすぎなのです」
「それが悪いとは言いませんがそれで本当のラーメンやハンバーガーを食べているとは言いがたいですね」
八条はどうも納得がいかなかった。そしてこう言った。
「では日本人は和食のハンバーガーやラーメンを食べている、と。お二人はそう言いたいのですね」
「ええ」
二人はそれに対し同時に頷いた。
「我々から見たあれはアメリカのハンバーガーではありません」
「同じく中国のラーメンではありません」
「そうなのですか。よく考えたらこれも昔から言われていることですね。そういえば我が国の料理も他の国ではかなりアレンジされている」
「私は寿司が好きですな」
マクレーンはここで胸を張った。
「アメリカのスシは日本の寿司とは違いますね」
八条はここで反撃に転じた。
「う・・・・・・」

マクレーンはそれに対し対抗することができなかった。
「私はうどんを良く食べますが」
「劉大将、うどんとは鰹や昆布からだしをとるものです。豚骨やトリガラでだしをとるものではありません」
「それはそうですが」
劉もバツが悪そうな顔をした。
「どの国も同じですね。他の国の料理を食べたつもりでも自分の国の料理にしてしまっている」
「どうもそのようで」
二人は渋々ながらそれを認めた。
「けれどそこから新しい料理が出てきますからね。スシにしろトリガラのうどんにしろその中の一つです」
「はい」
「これが連合らしいといえばらしいですね。互いに影響し合って新しいものができあがる。こうして一千年もの間我々は多くのものを生み出してきました」
「単に雑多でまとまりのないだけとも言われますがな」
マクレーンがここでややシニカルに言った。
「食べ物にしたら雑多に煮たスープというところでしょう」
劉は料理にたとえた。
「しかし中々味わいが深く底の知れないスープです」
八条はそれに合わせた。
「今はそのスープの味をまとめる段階ですね」
「はい」
二人はここで真摯な顔をした。
「お二人は軍のスープをまとめる調理師になって下さい」
「長官がチーフとなり」
「ええ、それはわかっています」
八条も真剣な顔でそれに頷いた。
「連合軍は本当の意味で一つになる段階になりました。制度ではな

く心で」
すなわち一人一人が連合軍の将兵である、という意識だ。今はまだそこまで達していない。
「そうでないとエウロパにも遅れをとります。そして・・・・・・」
何故かここで八条の脳裏にシャイターン、そしてアッディーンのことが浮かんだ。
「そして！？」
二人はここで突っ込んだ。
「いえ、何も」
だが八条はそれを打ち消した。首を横に振った。
「今は連合軍の心を一つにまとめましょう。守るべきものを定めて」
「連合の国土ですね」
「はい、連合の国防軍であるべきだと私は考えます」
八条はここで言った。
「国防軍ですか」
「そうです、元々国内の宇宙海賊やテロリストへの対策に重点が置かれていますしね」
八条は二人に答えた。
「どう思われますか」
そしてあらためて尋ねた。
「いいと思いますよ」
「極めて妥当だと思います」
二人は答えた。
「ただそれだけではないでしょう」
ここでマクレーンが尋ねてきた。
「どうしてですか」
八条はそれに対して尋ねた。
「装備を見ますとね。単なる国防軍とは思えません」
「私もそう思います。海賊やテロリストに対処するにはあまりにも重装備ではないですか」

劉も言った。
「どうしてそう思われますか」
八条はあえてとぼけてみせた。
「連合の各艦隊の旗艦になるという超巨大戦艦ですよ」
二人はここは口が揃った。いまだその全貌は明らかになっていないが噂になっているのだ。
「あれですか」
八条はそれに対ししれっとした態度で答えた。
「あれではありません」
二人はそれに対して言った。
「何でも今までにない、そう要塞のような艦だと聞いていますが」
「それはまた大袈裟な」
八条は笑ったが大袈裟ではなかった。だが全貌はまだ八条もスタッフの計画を聞いただけである。それでもその巨大さは途方もないものであった。
「あれだけの戦艦をどうして海賊やテロリストに使うというのです」
「抑止力ですよ」
「マスコミや知識人、ネットではそう言われているようですが」
そこでも抑止力としてはあまりにも巨大なものではあった。噂でもそこまで広まっていたのだ。
「要塞を一撃を破壊するような主砲を装備しているそうですね」
「艦載機は一万をゆうに越えるとか」
空母で艦載機は百を越えるか越えないかである。それを考えると桁外れである。
「そこまでの艦は私は聞いたことがありませんが」
「しかし今それが出来上がろうとしている」
「長官、隠し事はよくありませんよ」
二人は八条に対し半ば詰め寄るようにして言った。
「まあまあ」
だが八条はそんな二人を宥めるようにして言った。

「確かに連合軍は国防軍ですが」
彼は反論をはじめた。
「そこには外敵への対処もあります」
「エウロパですか」
「はい」
彼は二人の問いに対して答えた。
「警戒するにこしたことはありません。それに仮想敵国は国防にあたって不可欠なものです」
「それはそうですね」
それには納得した。
「しかしエウロパだけを仮想敵国とするのはあまりにも近視眼的です」
「といいますと？」
「どういう意味ですか？」
今度は二人が八条に問うた。
「マウリアやサハラのことも考えておかなくてはなりませんね」
「マウリアをですか？」
「ええ。これも当然でしょう」
八条の言葉は二人にとっては思いもよらぬものであった。今まで連合とマウリアは盟友関係にあった。まさかここで仮想敵国として考えるとは。
「マクレーン大将のお国にあったカラープランを参考にしようと考えています」
「カラープランをですか」
「はい」
八条はマクレーンに対して頷いた。

## 第四部第四章　楯砕きその五

カラープランとはかつてアメリカが他の国との戦いを想定してシュミレーションした戦略計画である。アメリカをブルーとして他の国をブラックやゴールド、パープルと色をあらわす暗号で呼び計画を考えた。なお日本のもありオレンジ＝プランと呼ばれていた。

「サハラの場合は各国になりますね。そして」

彼は言葉を続けた。

「統一されたサハラに対する戦略も計画しておきましょう」

「わかりました」

二人はそれに対して頷いた。

「長官がそう言われるのなら」

彼等も文民統制下の軍人である。長官の命には喜んで従う。

「頼みますよ」

八条は二人を見上げて言った。

「お二人にはそれをお伝えする為にここへ来てもらいました」

「そうだったのですか」

「はい」

彼は真摯な顔で頷いた。

「マクレーン大将にはエウロパを、劉大将にはマウリアをお願いします」

「了解」

「わかりました」

二人は敬礼して答えた。

「サハラはどうするのです？」

そしてそのうえでこう尋ねた。

「サハラには各国ごとにスタッフを割り当てます」

八条は静かに言った。

「そのスタッフとは？」

「一体誰ですか？」
二人はそれに対して尋ねた。
「ハサンにはシンドル＝チャクラーン大将、オムダーマンにはプラシド＝アラガル大将のスタッフにやってもらいます」
二人共連合軍において切れ者で知られている。
「北方諸国連合にはアルバート＝オーエル大将、そしてエウロパの総督府にはキリト＝コアトル大将です」
「エウロパの総督府にもあてるのですか」
「ええ。彼等がサハラをさらに侵略した場合に備えまして」
劉の問いに応えた。
「そしてサハラが統一された場合のケースですが」
「はい」
二人は固唾を飲んだ。
「私自らがあたります」
「長官がですか！？」
二人はそれを聞いて思わず声をあげた。
「そうです。何かおかしいところはありますか」
「いえ」
二人は八条の意を決した目に息を飲まされた。
「サハラが統一された場合二千億の人口を擁する大国が誕生します。それは我が連合にとって最大の脅威となるでしょう」
「エウロパといえど一千億ですからね」
劉が言った。
「問題はその統一サハラがどのような外交戦略を採るかのよって変わりますが」
八条はあくまでサハラが統一された場合を考えていた。
「我々と敵対関係になった場合、エウロパ以上の強敵となります」
「それは兵力において、だけではありませんね」
「はい、サハラの指導者によっても変わります。もし指導者が・・・・・・」

彼は言おうとしたが止めた。
「いえ、それはまだわかりませんね。そもそもサハラが統一されるということもまだわかりませんし」
「あくまで国防計画のシュミレーションですしね」
「しかしそうした計画を考えておくというのはいいことだと思います」
二人はフォローするように言った。
「しかし統一サハラですか」
だが劉はここで顎に手を当てて考えた。
「何か」
八条は問うた。
「いや、おそらく統一されたとしても敵が多く前途は多難だろうな、と」
「確かにそうですな」
マクレーンもそれに同意した。
「エウロパとは相変わらずでしょうし、それにマウリアもどうなるかわかりません。おまけに我々がもし敵対政策を採ると」
「かなり難しそうですね」
それは八条にもわかった。
「しかし統一できるだけの人物だとそれを乗り越え怖ろしい国家を築き上げるかも知れません」
「ですね」
二人にもそれはわかった。
「しかしそれには少なくともあと数年かかります。それまでには我々の軍備も整っています。いえ」
彼はここで言葉を一旦おtぎった。
「終わらせなければなりません」
「はい」
二人は頷いた。そして彼等はそれぞれの仕事に戻った。

ブラークを破壊されたサラーフの首都アルフフーフだがナベツーラ達はまだそのことを知らなかった。
「おい、あれは何処だ」
ナベツーラは自分の屋敷でプールの中にいた。
プールといってもそこに水が入っているわけではない。そこにはコインや札束が入れられている。
「あれですね」
トクンもいた。彼はプールから上がるとテーブルの上にあるものを持って来た。
「こちらに」
「おお」
ナベツーラは上機嫌でそれを受け取った。
それは葡萄だった。だが普通の葡萄ではない。
黄金色をしている。どうやら遺伝子操作で作った特別な葡萄のようだ。
この時代多くの国で遺伝子操作による作物が植えられている。特に連合では多い。
遺伝子操作は二十世紀に問題になった。倫理や宗教の面からだ。だがこれまでの作物もそうではないのか、という意見によりある程度は認められた。野菜や果物、穀物には大幅に認められた。なお動物に対するそれは厳しかった。ある程度の大型化や乳、卵を多くする等はあったがそれ以上はなかった。やはり危険だからである。
ナベツーラが今食べているのはそうして作られた葡萄だ。どうやらかなり味がいいようだ。
「美味いな」
その証拠に彼はそれを満足そうに食べている。
「左様ですか」
見ればトクンの他にエジリーム、テリーン、ヨネスーケ、クマラ等もいる。
「クマラさんもどうかね」

ナベツーラはクマラにも薦めた。
「いや、私は」
ビーチに寝転ぶ彼はそれを断った。
「それよりもこっちがいい」
そう言いながら傍らにいる幼い少女の胸を貪る。
腹が大きい。孕んでいるのがすぐにわかる。
「フフフ、相変わらず精が出ますな」
ナベツーラは下卑た笑みで彼に言った。
「何、この程度。どうせ慰めものですしな」
彼等にとって少女なぞその程度だ。
「閣下」
ヨネスーケがプールの中を泳ぎながらナベツーラに言った。
「我々もその葡萄を相伴に預かりたいのですが」
「いいとも」
彼はその葡萄のうち一房を彼等に与えた。彼等はそれを争うようにして手にとった。
「では」
彼等はそれを口に含む。そしてとろけそうな顔になった。
「美味いですなあ。信じられない位です」
「ははは、どうだ、凄いだろう」
ナベツーラは満足そうに言った。
「これは俺が特別に作らせたんだ。選ばれた人間しか食べられないものだ」
彼はその葡萄を食べながら語った。
「他にもあるぞ、見ろ」
彼が手を叩くと淫らな格好をした女達が現われた。その手には銀の盆がある。
そこには黄金が乗っていた。いや、黄金ではない。黄金色の果物であった。
見れば葡萄の他に林檎もある。オレンジもだ。どうやら全て遺伝

子操作で作らせたもののようだ。
「たんと食え、伝説の食べ物だ」
「おお！」
見れば古代のギリシアや北欧の神話にも出てくる食べ物である。
彼等はビーチにあがると女達を押し倒しながらそれにむしゃぶりついた。
「美味いだろう」
「ええ」
彼等は女達の上に乗っかりながら答えた。
「これを作るのには結構金がかかったからな」
遺伝子操作による作物の改良はこの時代でも国家機密レベルである。費用も莫大でとても個人ができるものではない。倫理的にもそれは危険視されている。
だがナベツーラはあえてそれをやった。これはこの男の倫理観のなさと資産の莫大さを示すものであった。
「他にも色々と作るつもりだ」
「流石はナベツーラ様」
彼等は女達を味わいながら追従を言う。
「御前達は幸せ者だ、俺の下にいるから思う存分いい目を見られる」
「全くです」
「これからもだ。永遠に楽しませてやるからな」
高らかに笑った。その時だった。
「！？」
彼等はハッとして周りを見回した。すると屋敷の外から怒号が聞こえて来る。
「出て来い！」
「殺してやる！」
何やら殺気だった声である。
「何事だ」
ナベツーラは使用人の一人を呼びつけて問い質した。

「はい、何でも一般市民の暴動だそうです」
「民草のか」
彼は市民をこう呼んでいた。無礼千万の呼称であるがマスコミにかかるとこれも豪放磊落ということになる。
「はい、今回の責任をとれ、と騒いでいます」
「馬鹿者共が」
ナベツーラはその醜い顔をさらに歪めて言った。
「俺の責任だと！？そんなものを問うて何になるというのだ」
彼には責任感というものがない。
「俺は連中にも分け前を与えただろうが。それで何が不満なんだ」
「ブラークが陥落したのはどういうことだ、と言っております」
「フン、陥ちたのか。では首都防衛軍を敵に向けろ」
彼は事情がわかっているのか、いないのか的外れなことを言った。
「あの、既にアルフフーフはオムダーマン軍に包囲されていますが」
使用人もそれは知っている。恐る恐る意見を申し上げた。
「だから何だというんだ、連中が戦っているうちに俺は逃げる。金を持ってな」
「国民を捨てて逃げられるのですか！？」
使用人は弱々しい声で尋ねた。
「当たり前だ。俺は自分の身が助かればそれでいい」
心の中で思っていてもそうそう口には出せないことを平然と言ってのけた。それだけでも信じられないことであった。
「あの、それはあまりにも」
その使用人が呆れながら言った。
「俺が間違ってるというのか、ああ！？」
ナベツーラはそんな彼に対し凄んでみせた。
「俺に逆らうとどうなるかわかってるのだろうな」
「ですが」
「ですがも糞もねえ！わかったらとっとと金とか用意して逃げる準備をしろ！さもないと連れて行ってやらねえぞ！」

「あの、御主人様」
「何だ！？」
彼は荒々しい声で問うた。
「お言葉ですが私は」
「そうか、ならいい。ここで屋敷の外で騒いでいる連中の相手をしていろ」
ナベツーラはプイ、と後ろを向いて言った。その後ろで何が起こっているか一切知ろうともしないで。
不意に銃声がした。それはナベツーラの脳天を撃ち抜いていた。
「な・・・・・・」
トクンやヨネスーケ達はそれを見て絶句した。その使用人が発砲したのだ。
「今まで我慢してきたがもう限界だ」
彼は怒りに震える声で言った。
「貴様等も死ね」
そしてまだ全裸で女達の上にいる彼等を次々に撃ち殺していった。皆死んだ。女達は血塗れになった彼等の屍の下で恐怖におののいている。
「君達には申し訳ないことをした」
使用人は彼女達に謝罪の言葉を述べた。
「だがこうしなくてはならなかった。この連中を消す為にはな」
彼はそう言うと人を呼んだ。
「ゴミを始末してくれ」
「え・・・・・・」
呼ばれた男は血の海の中に息絶えた主を見て絶句した。だが使用人は彼に対してまた言った。
「ゴミを始末してくれ」
「わかりました」
男もこれでようやく納得した。彼等もまたナベツーラに時として虐待されていたのだ。彼は使用人に対しても暴君であったのだ。

「ゴミはどうしますか」
男は問うた。
「そうだな」
使用人は問われ暫し考え込んだ。
「道にでも捨てて置け。丁度いい」
「わかりました」
そしてナベツーラ達の死体は怒り狂った群集の前に放り出された。彼等に処断が任されたのだ。
群集は彼等の死体を切り刻んだ。バラバラになり細切れになった死体が辺りに散乱し、それはビデオに撮られた。そして彼等はそれを持ってマスコミに殴り込んだ。
「あいつ等が全部悪いんだ！」
ようやく彼等は全てを理解した。そして国を滅ぼした連中に鉄槌を加えに行ったのだ。
マスコミは逃げることができなかった。彼等はもうほぼ全ての市民を敵に回していたのであった。
新聞社もテレビ局の虐殺の場と化した。首や胴が窓から放り捨てられ今まで特権を欲しいままにしていた者達が八つ裂きにされていく。それ程までに彼等の怒りは凄まじかったのだ。
全てが終わり、彼等が落ち着いた時にオムダーマン軍がアルフフーフに降下してきた。国王はそれを聞くと全軍に武装解除を伝え降伏を伝えた。アッディーンはそれを快く受け入れた。こうしてサラーフはオムダーマンの前に滅亡したのであった。処罰されるべきナベツーラ達がもういないこともあり、戦後処理は穏やかであった。国王は財産の保護を約束され彼等は大人しく国外に立ち去った。そしてそのまま連合へ亡命したのであった。
この戦いの勝利でオムダーマンは遂に西方を統一した。そしてサハラにおいても東のハサンに比肩し得る大国となったのであった。

# 第四部第五章　英雄と梟雄その一

## 英雄と梟雄

サラーフが滅亡したこの時、エウロパでは大規模な祭典が行われていた。

復活祭である。キリスト教の時代からある祭りであり、かつてはイエス＝キリストが十字架にかけられ、そこから復活したことを祝う祭りだと言われてきた。

だがこれはキリスト教以前からあった祭りである。太陽の復活を祝う祭りなのである。

こうしたことはエウロパでは昔からよくあった。クリスマスにしろそうである。

クリスマスでは巨大なモミの木を飾る。ここに一つの矛盾があるのだ。

キリスト教はシオンの地で生まれた。裁くと岩山に覆われた荒涼とした大地で、である。

ここには緑豊かな木は少ない。しかもモミの木なぞあろう筈がない。だが何故クリスマスでモミの木を飾るのだろうか。

これは北欧の信仰からきている。そうした説があるのだ。

世界を支える大樹ユグドラシル。あのモミの木こそそうなのだと言われているのだ。

そしてツリーに飾られている多くのもの。これは世界にある様々なものを現わしていると言われている。このようにかってのキリスト教の世界にも北欧やその他の神々への信仰の名残が生き残っていたのだ。

「それに完全に気付くまでは長くかかったな」

オペラを観終わったラフネールは同席していた閣僚の一人である財務長官ウォルター＝ローズマンに言った。

「そうですね。私は神話のことにはあまり詳しくはないですが」

彼はその青灰色の目をしばたたせて答えた。彼は財務官僚出身で何かと倹約に五月蝿いことで知られている。特に軍部とはギクシャクしていることで有名だ。
「君は少し財政のことだけを考え過ぎだ」
ラフネールはそんな彼をたしなめた。
「私の仕事ですので」
だが彼はそれを悪いとは思っていない。むしろ誇りだと感じている。プロ意識の強い男なのだ。
「やれやれ、相変わらず堅苦しい」
ラフネールはそんな彼に苦笑した。
「まあいい。だがそうしたことを知っていて損はないと思うぞ」
「子供の頃から聞かされた分は知っていますが」
「それだけの知識があれば充分だ」
「ですが閣下はそれ以上をお求めになられる」
「私が！？」
彼はそれを聞き驚いたような顔になった。
「はい。いつも神話の解釈やオペラの演出についてお話っされますがこれは専門知識のない者にはいささか苦しいです」
「そうだったのか。どうもそういうことには気付かなかったな」
「どうも閣下は趣味にのめり込まれるようですな」
「否定はしない」
彼は言った。
「私は趣味の多い人間だしな」
「私も趣味にはのめり込むほうですが」
「君の趣味は何だ」
「サッカーの観戦と」
彼は実は熱心なサッカーファンとしても知られている。
「仕事です」
「そうか、だからいつもあれ程熱中しているのか」
「はい、数字を数えるのも中々楽しいものですよ」

ローズマンは笑顔でそう言った。
「私はあまり好きではないが」
彼は財政的なことはあまり得意とはしない。だからこそ所属する政党の中で最も財政に明るいと言われるこのローズマンを財務長官にしたのだ。
「だが君の手腕は高く評価しているつもりだ」
「有り難うございます」
彼は頭を垂れた。
「で、戻ったらまた仕事かね」
「いえ、今日はサッカーの試合がありますので」
「復活祭での親善試合だな」
「はい。イングランド対スコットランドです。これは目が離せません」
彼はイングランド出身である。
「そうか。私はラグビーを観るとしゅ。フランスの試合があるからな」
「それもいいですな」
「うむ。では今日はこれでお別れだな」
「はい。よい試合を」
二人は挨拶をして別れた。そのサッカーとラグビーの試合はどれも手に汗握る名勝負であった。
サッカーはモンサルヴァートも観戦していた。彼は競技場へ行って観戦した。
「いい試合でしたね」
「はい」
彼は婚約者と共に観戦していた。見れば小柄で金髪碧眼の可愛らしい女性である。小柄だが年相応の顔をしている。見ればモンサルヴァートと同じ位の年齢のようだ。
「これから貴女の家にお邪魔してよろしいですか？」
「喜んで」

彼女は微笑んで答えた。
「ではフロイライン」
彼はここで古いドイツ語の呼称を使った。この時代もドイツ系の貴族達の間ではこの呼称が使われている。『お嬢様』という意味だ。
「こちらの車へ。私が送らせて頂きます」
彼は自分の車へ彼女を案内した。
「では」
彼女はそれに乗った。続いてモンサルヴァートも乗った。
「ヴァンフリート家へ」
モンサルヴァートは運転手に言った。
「わかりました」
その運転手は頷くと車を発進させた。手馴れたものである。彼は代々モンサルヴァート家に使えているお抱えの運転手である。
三十分程進むと庶民の住宅街を抜け高級住宅街に来た。そこも抜けると城の様に巨大な屋敷がポツポツと立っていた。その中の一つの白い屋敷の前に来た。まずは左右にユニコーンを飾っている正門を潜り抜けた。
そして庭を左右に分ける道を進む。庭は綺麗に整えられ左右対称となっている。
広い庭だ。色とりどりの花が夜の中にも栄えている。
屋敷の前に来た。運転手はそこに停めた。
「ご苦労、帰っていいよ」
モンサルヴァートは車を降りると運転手に優しい声で語りかけた。軍服を着ている時とは全く違う声だった。
「お迎えは明日の朝でよろしいでしょうか」
「うん。まずは朝食を採ってからね」
「わかりました」
運転手は頷くと車に戻った。そしてそのまま去って行った。
「お帰りなさいませ、お嬢様」
門の前に数人のメイドが来ていた。

「ただいま」
彼女はそれに笑顔で答えた。
「ようこそ、モンサルヴァート閣下」
「うん」
モンサルヴァートも微笑んで彼女達に応えた。どうやら顔見知りらしい。その物腰には慣れたものがあった。
二人はメイド達に案内され屋敷の中に入った。中は何処か十九世紀のドイツの建築を思わせる。
そして奥の部屋に入った。そこは食堂だった。
「お帰り、エルザ」
その中央にいる口髭を生やした上品な風貌の初老の男性が彼女の姿を認めて声をかけた。
「只今、御父様」
エルザは頭を垂れて挨拶をした。
「お邪魔しております」
モンサルヴァートも頭を垂れた。背広なので敬礼はしない。
「ようこそ、婿殿」
その男性は微笑んでモンサルヴァートに言った。
「婿殿とはご冗談を」
モンサルヴァートはそれに苦笑した。
「冗談ではありませんよ、閣下」
その男性の隣にいた気品のある老婦人が笑って彼に言った。見れば男性と同じ位の年齢だ。
「婚約してもう二十年も経っているではありませんか」
「それはそうですが」
モンサルヴァートはその言葉に少し顔を赤くさせた。エウロパにおいては婚約についての年齢制限はない。結婚は男女共に二十歳からと定められている。従って貴族達の間ではまだ幼いうちから親達が婚約を結ぶということがよくある。所謂政略結婚である。
実はモンサルヴァートとエルザもそうである。エルザの家も由緒

ある家柄である。彼の父は伯爵の称号を持ち彼女の兄が後継者となっている。彼女の家ヴァンフリート家は芸術家の家系であり幾つかのオペラハウス等を経営している。彼女の父であり今目の前にいるヴィーラント＝フォン＝ヴァンフリートはオペラハウスを経営しながら作曲も手がけている。育ちのよい温厚な人物として知られている。今はバイオリン奏者でもあり演出家でもあるエルザの兄ヴォルフガングに会社の経営を任せ悠々自適の生活を送っているのだ。

何故軍人の家と音楽家の家が結ぶかというとモンサルヴァート家も音楽に造詣が深いからだ。モンサルヴァートの妹はピアノ奏者でありヴァンフリート家の企業からＣＤを出し、コンサートを開いているのだ。実はモンサルヴァートの母はソプラノ歌手であり軍人である彼の父が見初めたことから結婚となったのである。彼はたまたま婚約者が事故で死んでおり結婚することができたのだ。そうでなければとても結婚なぞできない関係だった。

「母上も貴族出身だったが」

モンサルヴァートはその話を思い出しながら心の中で呟いた。彼の母はさる男爵家の末娘であった。だからその家との結び付きの意味でも結婚することができたのだ。

「こうした家のしがらみの中で生きるのも貴族の務めか」

彼はそう思っていた。貴族には貴族の責務があるのだと思っていた。

## 第四部第五章　英雄と梟雄その二

だが彼はエルザを嫌いではなかった。むしろ幼い頃からの馴染みでありかっては同じクラスで学んだこともある。だから悪感情はない。

そしてこの家の人々にも。彼等はおっとりした人柄の人物ばかりで芸術家によくある風変わりなところもない。いたって温厚で穏やかな人達ばかりなのである。

「これがこの家の家風なのかも知れないな」

モンサルヴァートはいつも思うのである。そして彼はこの家の感じが気に入っていた。

「閣下、ではお座り下さい」

「はい」

主人に促され彼は席に着いた。エルザがその隣に席に座る。

食事はシャリアピンステーキをメインにしたメニューだった。シャリアピンステーキとはロシアの伝説的なバス歌手シャリアピンの名を冠したステーキである。細かく刻んだオニオンの中に入れて柔らかくしたものである。

デザートはピーチ＝メルバだった。これはソプラノ歌手メルバとワーグナーの楽劇ローエングリンをイメージしたものである。

「如何ですかな、今夜のメニューは」

食事を終えると主人はワインを手にモンサルヴァートに尋ねてきた。

「面白い趣向ですね」

彼は紅いワインを入れたグラスを前に応えた。

「音楽家らしいというか」

「ハハハ、復活祭ですから」

主人は笑って答えた。

「あえてああした料理にしたのです」

二十世紀から復活祭には音楽の祭典も行われるようになっている。音楽史にその名を残す天才モーツァルト生誕の地ザルツブルグが有名であった。
今でもエウロパでは復活祭にオペラやコンサートが開かれる。そして神々を祝うのである。
「音楽家達に敬意をあらわして、ですね」
「はい」
彼は微笑んで言った。
「かなり古いメニューを出してしまいましたが」
「いえ、美味しかったですよ。シャリアピンステーキは少し砕けた感じでしたが」
「ええ、あれはかなり砕けた料理でしてね。本来はどのようなソースをかけてもよい程なのです」
「それはまた凄いですね」
「こうした場には不向きかな、と思ったのですがソースをあえて凝って作らせてみました。どうやらそれは成功だったようですね」
「ええ、そう思います」
ヴァンフリートのこの当主は美食家として有名である。
「ただオニオンがやはり強いかな」
味覚はかなり鋭い。
「しかしシェフは頑張ってくれてますね。ここまでのステーキはそうそうありません」
彼は自分の家のシェフを褒めた。
「それではあとはゆっくりとくつろぐとしましょう。音楽は何がよろしいですか」
「そうですね」
モンサルヴァートは問われて考えた。
「ピアノをお願いします」
妹の関係から彼もピアノをよく聞くのだ。
「わかりました」

彼は頷くとベルを鳴らした。すると一人の若い男性が姿を現わした。
「我がアカデミーの期待の星です」
彼はアカデミーも持っているのだ。
「はじめまして。エフゲニー＝コズイレフ＝ブーニンです」
その白髪で長身の若者は頭を垂れた。
「ではブーニン君、あの曲を」
「わかりました」
ブーニンは主人に促され席に着いた。そして手に持っていた楽譜をピアノに置きめくった。
曲を弾きはじめる。それはゆったりした優雅な曲であった。
「これは」
モンサルヴァートも知っている曲であった。
「マリーの金婚式ですね」
「はい」
主人はその言葉に答えた。ある老貴族の夫婦の金婚式を祝って作られた曲である。
モンサルヴァートは静かな様子でその曲を聞いていた。彼はこうした曲が好きであった。
「お気に入りの曲のようですね」
「はい」
それを否定しなかった。
「それはよかった。実はこの曲は彼の得意とする曲なのですよ」
「そうなのですか」
「はい。他にもありますよ」
「今日聴くことができますか」
「ええ。よろしければ」
金婚式が終わるとブーニンは楽譜をめくった。そして次の曲を弾きはじめた。
今度はベートーベンの曲であった。田園である。

それからも続いた。彼の曲は中々に多彩でかつ繊細であった。
全ての曲の演奏が終わると彼は席を立った。そして拍手に応え頭を垂れた。
「お見事です」
モンサルヴァートも拍手をしていた。彼もこうした場には慣れている。
「特に最後がいい。やはり締めが肝心です」
「有り難うございます」
ブーニンは恭しく頭を垂れた。
「音楽は常に気を張り詰めていなければなりません」
ブーニンは言った。
「最後で気を抜いては何にもなりません」
「その通りです」
モンサルヴァートもそれには同意した。
「何事においてもそれは言えます」
「戦いにおいてもそうですね」
ブーニンは彼に対して言った。
「え、ええ」
意外な言葉に少し戸惑った。
「最後で油断して敗れた事例は何度もありますから」
「そうですね」
モンサルヴァートは少し驚いていた。まさかこのようなことを言うとは。
「音楽もそれは同じなのです。音楽もまた戦いなのですから」
「ほほう」
彼はそれを聞き眉を少し上げた。
「面白いお考えですね」
「そう思われますか」
ブーニンもここで微笑んだ。
「はい。かってそうした考えの人物が多くおりました。音楽もまた

戦いである。それに同意します」
「そうです。最近そうした考えの者が少なくなりまして」
ブーニンにはそれが不満なようである。どうやら外見や得意とする音楽に似合わずかなり激しい音楽的思考の持ち主であるようだ。
「いささか残念に思っているのです。しかし」
彼はここで言葉を明るくさせた。
「閣下が私と同じお考えの持ち主だったとは。嬉しいかぎりです」
「そうでしたか」
モンサルヴァートは内心戸惑っていた。彼は実際にはそこまで強い考えを音楽には持っていない。音楽家でもないしそこまで持たなくていいと思っていた。
だがそれは軍人だから言えることであり音楽家となると話は別だ。彼にもそれはわかっていた。
「どうやらかなり激しいお考えを持たれているようですね」
「否定はしません」
彼は言った。
「そうでなくてはピアノは弾けません。そして音楽を愛することは出来ません」
「そうですか」
「どうです、かなり激しい気性の持ち主でしょう」
ここで主が笑いながら言った。
「それが彼のいいところです。普段は至って物静かな若者なのですが」
「音楽になると別というわけですか」
「はい」
モンサルヴァートに答えた。
「それがいい方向に向かっていますので私はそれを否定しません。時として他の者とも激論を展開します」
「それは」
やはりその外見からは思いもよらないものであった。

「意外ですか」
ブーニンは優しい目をして言った。
「そうですね。私が見る限りとてもそうは」
「音楽は私にとっての全てですから」
彼は言った。
「全てを捧げるもの、それには一切の妥協もありません」
強い炎が彼の灰色の瞳に宿った。
「そしてそれは閣下も同じだと思います」
「はい」
モンサルヴァートはそれに頷いた。
「私はまた違う道ですが」
「はい」
彼は軍人である。軍人は音楽家とは違うものに命を捧げるものだ。
「ですが私と閣下はあるものに命を捧げるということで同じだと思います」
「そういう考え方もできますね」
それを否定する程彼は狭量ではなかった。
「私もそれに同意します」
「それは有り難い」
ブーニンはその言葉に顔を綻ばせた。
「では同志に会うことができた喜びに」
彼はここで右腕を差し出した。

## 第四部第五章　英雄と梟雄その三

「はい」
モンサルヴァートもそれにならった。二人は固く手を握り合った。
「如何ですか、あの若者は」
宴も終わり主は屋敷のテラスでモンサルヴァートに話しかけた。夜の空に満月の黄金色の光が輝いている。
「そうですね」
モンサルヴァートはエルザと同じテーブルに座っていた。主も一緒だ。
「面白い人物だと思います。それに」
「それに！？」
「私に近いものを感じました」
「閣下にですか」
「はい」
「ふむ」
主はそれを聞き考える顔をした。
「昔から戦いはよく音楽にもなっています」
「はい」
それは事実である。十九世紀のイタリアの作曲家ヴェルディは特にそうであるが昔から戦いは音楽に多大な影響を与えてきた。行進曲なぞは特にそうである。
「そう考えると音楽と戦いは似ているところがあるのかも知れません」
「そうなのですか」
「そして当然音楽家と軍人も」
変わったことを言う、と思った。今までそういうふうに考えたことは一度もなかった。
「変なことを言う、と思われているでしょう」

「えっ」
やはり鋭い。モンサルヴァートはその心の中を見透かされていた。
「これはあくまで私の私見ですがね」
主はそう言って悪戯っぽく微笑んだ。
「音楽は芸術です、命を賭けるもの」
「そう言われていますね」
「そして戦いも命を賭けるものです。その意味で両者は同じと言えます」
「成程」
「それだけ言えばおわかりだと思います」
「はい」
主はそう言うと杯を手にした。
「堅苦しい話はこれ位にしましょう。ではこの美酒を」
「はい」
モンサルヴァートとエルザも杯を手にした。
「ディオニュソス産のロゼです。それも年代物の」
ディオニュソスはギリシア神話の酒の神である。中世的な美少年に描かれることが多い。今はエウロパにおいてギリシアの時と同じように酒の神として信仰されている。その神の名を冠した星系はやはり酒造りが盛んであった。
「それは素晴らしい」
モンサルヴァートも葡萄酒は好きだ。それも年代物とくれば尚更である。
「ではどうぞ」
彼は乾杯の音頭をとった。そして三人は美酒を味わった。

翌日朝食を馳走になるとモンサルヴァートはヴァンフリート家をあとにした。丁度運転手が迎えに来た。
「お待たせしました」
運転手は車から出ると恭しく挨拶をした。

「いや、待ってはいないよ」
モンサルヴァートはそんな彼に対し優しい声で言った。
「丁度いい時間だ」
「そうでしたか」
モンサルヴァートは運転手が開けるドアに入った。そして車に乗車した。
「では行きましょう」
「うん」
こうして彼は自宅に戻った。
彼の自宅もかなり大きい。やはり城のようである。
彼は自室に入った。そこは静かな作りの書斎であった。
「さてと」
彼は一冊の本を取り出した。
「たまには音楽の本でも読むか」
そう言うと読書に耽った。そして数時間が過ぎると昼食になった。
昼食は質素なものであった。鳥をサッと焼いたものとボイルドベジタブルにパン、そしてデザートのフルーツである。酒は白ワインであった。
食事を終えると今度はスポーツをはじめた。乗馬に使用人達を相手にテニスを楽しむ。
「もう一セット頼む」
彼はテニスが好きであった。使用人達が汗だくになり立てなくなるまで続けた。
そしてシャワーを浴びると今度は夕食だ。ディナーは今度は魚が主体だ。
「父上と母上は」
モンサルヴァートは側に控える執事に問うた。
「今は旅行中でございます」
彼はいささか機械的な動作で答えた。
「そうか。今度は何処へ行かれたんだい」

「フレイアまでです」
「フレイアか。前にも行っていたね」
「はい。これで四度目でございます」
「そうか。余程気に入られたのだろうな」
フライア星系はエウロパの保養地の一つである。観光で栄えている。
「暫くぶりに帰ってきたら誰もいないとはな」
彼は普段は官舎に住んでいる。妹は独立して高級アパートにいる。
「残念ですが」
「いや、残念とは思っていないよ」
執事の言葉に微笑んで応えた。
「仕方ないさ。今は復活祭なのだし」
エウロパでは復活祭になると各地で祭典が開かれる。当然フライアでも大規模な祭典がある。
「それよりも明日からまた仕事だ。今日は早く寝ないとな」
「既にお部屋の用意はできております」
「相変わらず手際がいいね」
彼も自宅ではやはりくだけた調子である。
「それが私の仕事でございますから」
やはり執事は機械的な声で答えた。
「では食事を終えたらすぐに休むとしよう。爺達もゆっくり休むようにね」
「畏まりました」
彼は家の使用人には優しくいい若様であった。彼は目下の者や使用人を虐める趣味はない。それは貴族達においては最も嫌われることなのである。
彼もそれはよくわきまえていた。幼い頃より貴族としての在り方を厳しく教えられてきたのだ。
「高貴なる者の義務と礼儀を忘れるな」
それは物心ついた時から言われる。もし貴族が平民に何かした場

合その処罰は平民同士、貴族同士に対するものより重いのだ。
だから皆それを守る。不心得者もやはりいる。そうした者を取り締まるにはそうしたことも必要であった。これは軍において将校への処罰が下士官や兵士に対するのより重いのと同じだ。なおエウロパでは貴族は皆将校となる。
モンサルヴァートは程なく天幕のベッドに入った。そしてすぐに眠りに落ちた。
朝になると彼は乗馬で汗を流した後シャワーを浴び身支度を整え朝食を採ったあとで仕事に向かった。こうしてまた激務と戦うのであった。

連合では復活祭はない。キリスト教を信仰していた国でも今ではそれは廃れている。そのかわりにクリスマスや新年の催しが有名である。
連合で有名な祭典はバレンタインである。これは二月一四日に行われる祭りである。
最初はこれもキリスト教関連であった。聖バレンタインが殉教した日である。
だがこれが日本で変わった。何故か女の子が好きな男の子にチョコレートをプレゼントする日になったのだ。これは菓子メーカーの宣伝のせいだという。だがそれでもよく考えたものである。
それがやがて大規模な祭りになった。連合ではこの日は女の子が男の子にチョコレートを贈る。男の子はその見返りとして女の子をデートに誘うのだ。かってはホワイトデーもあったが統一された。ただし、女の子は昔よりもいい目を見る。何故ならその日一日チョコレートの見返りに好きな男の子にちやほやしてもらえるからだ。
「私にはそうした経験はないが」
八条はいつも通り執務室で仕事をしながら言った。
「またご冗談を」
そしていつものように周りにいる者がやっかみを多少入れて声を

かける。
「いや、本当に」
八条はいつものようにそれに対して反論する。
「実は貰うチョコレートは多かったのですが」
「それは何より」
「しかし本命ではないそうなのです」
「どういうことですか！？」
「もっといい人がいるんじゃないか、一人でいるなんて嘘でしょう、と」
八条程の美男子が彼女も一人もいないというのが誰も信じられなかったのだ。
「それはそれは」
周りにいる者達は面白そうに声を出した。
「またご冗談を。私でも毎年貰っておりましたのに」
日に焼けた顔の屈託のない顔立ちの男が笑って言った。
「チャクラーン大将は幼馴染みの方がおられましたね」
八条は言った。彼こそランドル＝チャクラーン大将その人であった。
「ええ。今は私の妻ですが」
彼は愛妻家として有名である。
「しかし毎年チョコレートを貰っていたことは事実ですぞ」
そう言って胸を張った。
「けれどチャクラーン大将はお一人にしか貰っておりませんな」
隣にいる男が言った。
「一人だけで充分ではないですか」
チャクラーンは彼に反論した。
「私は妻の他にも多くの美女から貰っておりますよ」
彼は自慢して言った。
「アラガル大将、それは貴方の娘さん達でしょう」
チャクラーンは突っ込みを入れた。

「私の自慢の娘達です」
プラシド＝アラガルは子沢山で知られている。妻との間に八人の子供がいるが、その八人全員が女の子である。
「私はバレンタインデーになると九人の美女からチョコレートを貰えるのです」
彼は回りに思う存分自慢した。
「ただ」
「ただ！？」
ふと落ち込んだ顔をしたアラガルを見て周りの者は問うた。
「九人から一向に増えないのです。残念なことに」
「それはまあ」
実は彼の娘達は既に何人か結婚している。そして孫も何人かいるが、皆男の子なのである。
「私になついてくれるのはいいですがチョコレートはくれない。これだけは寂しいですな」
「九つも貰えたら充分でしょう」
チャクラーンが言った。
「そうですな、それ以上食べたら糖尿病の危険があります」
周りの者は面白そうに言った。
「私は常に健康に気をつけておりますので」
アラガルは不満そうな顔をした。
「糖尿病にも気をつけて糖分控えめのチョコレートにしてもらっています」
「ブラックですか？」
「ええ。それが一番チョコレートの本来の味でしょうし」
「確かに。ただ、それは本当のチョコレートの味を知っているとは言えません」
今度はアラガルと似た肌の色の眼鏡をかけた男が言葉を出した。
「私の薦めるのはやはり砂糖も入っていない本来の味のチョコレートです」

「それはちょっと・・・・・・」
周りの者はそれにはいささか閉口した。
「コアトル大将、昔はそうだったらしいですが」
「ええ、私の国では今それが復活しているのです」
キリト＝コアトルの出身地ペルーではかってチョコレートは飲み物であった。そして砂糖を入れずに飲んでいた。かつてアンデスに栄えたインカ帝国での風習である。
「美味しいのですか？」
他の者にとってはそれが気懸りであった。
「ええ。なかなか」
コアトルは答えた。
「最初は苦くて仕方ないですが慣れるとこれがまた」
「そうなのですか」
「あお苦味が忘れられなくなりますよ。皆さんもどうですか」
「いえ、我々は」
他の者は首を横に振った。
「長官はどうですか？」
それを見ていささか困ったコアトルは八条に話を振った。
「私もちょっと」
八条もやんわりと断った。彼は甘いものは好きだが苦いものは好きではないのだ。
「日本人は色々と食べるものへの開拓が盛んだと聞いていますが」
「それはそうですが」
八条は内心よく知っているな、と思った。
「しかしチョコレートはやはり甘い方がいいです。それに慣れ親しんできましたし」
「確かに。甘いものは一度味あうと忘れられませんからな」
銀髪に黒い肌の男が言った。
「私はチョコレートも好きですがもう一つ好きなものがありますぞ」
「ミツアリですか？」

チャクラーンが問うた。
「はい」
銀髪の男は答えた。
「あれはかなりの美味です」
「確かにあれはなかなかいけます」
周りの者はそう言って頷いた。実は連合では虫もよく食べる。アメリカでは菓子に入れたりするし、中国ではゲンゴロウを食べる。チャクラーンのタイでは蠍の唐揚げまである。八条の国日本でもイナゴを食べる。実は案外ポピュラーな料理の一つであったりする。
従ってミツアリも不自然な食べ物ではないのだ。むしろかなり有名な料理である。
オーストラリアの先住民族であったアボリジニーの食べ物であった。ちなみにこの銀髪の男アルバート＝オーエル大将はアボリジニーの血を濃く受け継いでいる。

## 第四部第五章　英雄と梟雄その四

「そうでしょう、けれど私もチョコレートは好きですぞ」
「やはり」
「可愛い女の子にもらえるものなら何でも、ですが」
オーエルは笑顔で言った。
「私は妻と妹達から貰っています」
「それはいい」
姉妹からももらえるのだ。こういう時は姉妹は有り難い。
「私はそうしたことが本当にありませんね」
「失礼ですが長官」
ここで四人が同時に尋ねた。
「本当にチョコレートを貰えないもですか？」
「ええ、義理チョコ以外は」
「その義理チョコが何百もあるとか」
「それはそうですが」
「ならばよいではありませんか」
「そうそう、世の中その義理チョコでさえ一つも貰えない男もいますし」
これは悲しい事実である。中には貰えなくても平気だという本当の意味での変人もいるが。
「それを思えばずっといいのではないですか？」
「それはそうですけれどね」
八条は何処か不満そうである。やはり彼も本命のチョコレートが欲しいのだろうか。
「けれど、たまには。そう、アイドルやスポーツ選手のような立場でチョコレートを貰えるのも非常に有り難いことですが」
彼はいささか物憂げな顔をして言った。
「本命だというチョコレートが欲しいのも事実です」

「それはそうですが」
贅沢な悩みといえばそうなる。
「まあ何時かいい人が出て来ますよ」
四人はそう言って慰めるしかなかった。
「そうそう、長官でしたらきっと見つかりますよ」
「そうだといいのですけれど」
彼はいささか不安であった。
「バレンタインだけではないですからね、他のことでもどうもそういう話はないのです」
「それは縁ですよ」
ここでチャクラーンが言った。
「いい人が見つかればもらえるようになります。これは運命ですよ」
「若し見つからなかったら」
「その時はその時ですね。残念ですが」
「そうですか」
八条は暗い顔になった。
「そんなに落ち込まれることはありませんよ」
オーエルが言った。
「私は顔相を見ることができるのですが」
「ほう」
これには他の者も思わず声をあげた。
「長官の相は非常にいいです。特に女性に関しては」
「そうですか！？」
八条はその言葉に声を明るくさせた。
「はい。近いうちに素晴らしい女性と巡り合うことでしょう。いや」
ここで言葉を一旦とぎった。
「既に巡り合っているかも知れません。長官が気付いておられないだけで」
「そうだといいのですけれどね」
その声は明るいものだった。まるで高校生のものである。

「待っていればすぐに吉兆が長官のことろに舞い込んで来ますよ。楽しみにしておいて下さい」
「はい」
これでバレンタインの話は終わった。やがてその運命の日がやって来た。
八条はその日相も変わらず仕事に励んでいた。四人と話したことはその時には既に忘れていた。
「長官」
執務室で一人仕事する彼のところに秘書官が入って来た。
「何だい、新しい書類かい？」
八条は彼の姿を認めるとそう言った。彼は部屋に入ってくる度に新しい仕事を持って来るからだ。
「いえ、今日は違います」
「その脇にあるのは違うのかい？」
八条は彼が持つケースに目を向けて言った。
「これは私の仕事ですので」
彼は微笑んで答えた。
「珍しいな。君が新しい仕事なしでこの部屋に来るなんて」
「そうですか？仕事は最近それ程多くはありませんよ」
「一時期に比べればね」
八条はややシニカルな香料を言葉に含んだ。
「それでも多いことに変わりはない。中央政府の省庁で最も多いのはここなんだよ」
「それでも中央軍設立当初に比べれば」
「あの時のことは思い出したくないな」
二人は顔を見合わせて笑った。あの時は連日徹夜の状態だった。幾ら仕事をしても終わらなかった。今思えばよく身体がもったものだ。
「まあ話を戻そう」
「はい」

秘書官は八条に言われそちらに戻った。
「それで用件は何だね」
「はい、実は」
秘書官は一呼吸置いてから口をまた開いた。
「今日は何の日かご存知ですね」
「今日！？」
そう言われて八条は壁にかけてあるカレンダーに目を向けた。
「ああ、二月一四日か。バレンタインだね」
「はい」
「こう言ったら何だが」
八条は秘書官に顔を戻すと少し顰めさせた。
「今は仕事中だ。そういう話は後にした方がいい」
「私も最初はそう思っていました」
秘書は断りの言葉を述べた。
「ではそうするべきではないのかな。君らしくもない」
この秘書官の真面目さは彼もよく知っている。だから今の行動は軽率に過ぎると思った。
「それが」
「どうやら特別な事情があるようだね」
秘書官の態度が妙なのにようやく気付いた。
「はい。チョコレートですが」
「誰か特別な方からのかい？」
「はい」
「誰だい？」
彼は秘書官に問いながら自分も頭の中で考えた。
（一体誰か）
今カナダで話題のあの美人女優だろうか。パーティーで話をしたことはある。
それとも台湾のアイドルか。日本で人気があり自分のファンだと公言している。

（違うな）
だが彼はすぐにそれを打ち消した。それ位でこの秘書官がこれ程狼狽する筈がない。仕事の後で持って来て冷やかしはするだろうが。
（企業家や大農園の主の令嬢・・・・・。これもないな）
それも同じだ。仕事の後で済む話だ。
（既婚者にしろ同じだ）
彼は人妻に言い寄る趣味はない。大体それなら義理チョコになる。例え何処かの大統領夫人からのチョコレートでもやはりこの秘書官はここまで驚かない。やはり義理チョコに入れるだろう。
「わからないな。一体誰なんだい？」
幾ら考えてもわからなかったので彼は再び問うた。
「驚かないで下さいね」
「うん」
彼はまだわけがわからなかったが頷いた。
「まさか総理じゃないだろうね」
彼女からは毎年義理チョコを貰っていた。
「それでこれだけ驚いたりはしませんよ」
「それはそうだね」
大体毎年貰っている。
「では誰なんだい？私にはちょっとわからないが」
「はい、実は」
「実は！？」
ここに至っても八条は誰からのものかよくわからなかった。
「陛下からです」
「マレーシアの？それともタイ？」
「両方共国王陛下ですよ」
「御免、そうだった」
ぼけてしまった。確かにこの時代男が男に、女が女にチョコレートを渡すことはあってもまさか国家元首がするとは思えない。だがこれで数が限られてきた。

「だが今連合に女王は」
いないのだ。女王といってもエウロパにも数える程しかいない。
（今のイギリスも国王だったな。先代の女王の息子で）
ビクトリア四世の後をウィリアム一二世が継いでいる。
（大体エウロパの者が連合の人間にチョコレートを渡す筈もないか）
それもそうであった。
「一人おられるではありませんか」
女王のことを口にした彼に秘書官は言った。
「一人！？」
彼はその言葉にハッとした。
「まさかとは思うけれど」
彼の言葉もいささか震えてきた。
「はい、そのまさかです」
秘書官は言った。
「馬鹿を言ってはいけないよ」
だが八条は彼の言葉を否定した。
「幾ら何でもそんな作り話」
「信じておられないようですね」
「当然だよ」
八条は複雑な顔をした。怒りもあったし苦笑もあった。どういう顔をしていいかよくわからなかったのもある。
「君は冗談の下手な男だと思っていたがセンスがなさ過ぎる」
「そう思われますか？」
「当たり前だよ。現実に考えればわかるだろう」
顔を顰めさせた。
「陛下がチョコレートを下さるなぞ」
そう、天皇からのチョコレートだったのだ。
「有り得ないだろうに」
「御覧になられますか？それでしたら」
「是非見たいね」

彼はたかをくくってそう言った。
「もし本当になるのなら」
「わかりました」
彼はベルを鳴らした。すると一人の男が入って来た。
「え・・・・・・」
その男の姿を診て八条は絶句した。何と宮内省の侍従の一人が入って来たのだ。
「長官、お邪魔します」
彼は優雅な仕草で挨拶をした。宮内省の仕事は祭り事である。他の省庁は行政が仕事だが、彼等は違う。昔から皇室の祭り事を補佐していたのだ。
かっては政と祭は同じであった。だが近代国家の発展と共にそれは分離していった。政治は議会や政治家が行い、僧侶はそこから排除されていった。こうした動きは欧州からはじまったが、その背景にはローマ＝カトリック教会の腐敗があったのだ。
そして各国の王室もその役割を変えていった。彼等は政治から遠ざかるようになり、国家の象徴となっていった。この動きはイギリスの清教徒革命、名誉革命からはじまり、そしてナポレオン以降劇的に変わった。一次大戦までは自ら政治を見ようとする国王や皇帝もいたドイツのヴィルヘルム二世やロシアのニコライ二世等である。日本の明治天皇もこれに入れることができるが明治天皇は少し違う。明治憲法では意外と天皇の権限を制限していた。昭和天皇はこの時代においても理想的な立憲君主として名を残しているが、その下地が明治憲法において既にあったのだ。ドイツの憲法を参考にしていてもこの憲法は少し違っていたのだ。
そのドイツもロシアも滅んだ。二次大戦以降は共産主義という怪物の跳梁跋扈により王室、皇室の滅亡が多かった。だが共産主義が崩壊すると彼等の中には再び象徴としての王家を持とうとする国もあらわれた。
欧州第一の名門ハプスブルグ家を戴いていたオーストリアがそう

であったし、世界最古とすら言われるエチオピア皇室もそうであった。なおエチオピア国王は時には皇帝と呼ばれる時もある。日本の天皇と並んで連合内のニ帝とされる。各国の序列においてはこのニ皇室は第一とされている。

主にこの運動は欧州で起こった。国家としての権威、象徴はやはり必要だとみなされたのだ。

だが彼等はかってのように政治を見るわけではない。あくまで儀礼のみを行う存在であるのだ。祭り事を行う、それが王室の仕事となっていた。

従ってその祭り事を補佐し、場を整える宮内省の者の動きも自然とそれに添うものとなる。彼等の動きはあくまで優雅であり、穏やかであった。

「あれだけどうしようもない石頭が揃っているんだ、動き位優雅でなくては話にもならん」

国民からのこうした意見もある。とかく彼等の守旧主義、頑固さは有名である。伊達に『竹のカーテン』を守っているわけではないのだ。だが、それだけに儀礼的なものには強かった。

(おそらくこれだけの動きをできる者はエウロパの貴族達にもそうそういないだろうな)

八条はその侍従の動きを見ながら思った。

(私もそれなりに幼い頃から教えられたが)

彼はかっての華族からはじまる家柄である。摂関家の血を引く名家だったという。

(それでもここまでには至らないな)

最早彼等の動きは完全に自分達のものとなっている。儀礼はそこまでならないと駄目なのだという。

「ようこそ」

八条も彼を迎えた。

「今回はどのようなご用件でしょうか」

わかっていたがこれも儀礼にあるのでこう問うた。

「陛下から長官にお渡しして欲しいというものがありまして」
「陛下からですか」
聞いていたがやはり顔が強張るのを感じた。
「はい」
侍従は頷いた。
「ここでは何ですね」
やはりやんごとない方からの贈り物は執務室で受け取ることはできない。
「場所を変えましょう」
「はい」
彼等はこうして応接室に向かった。国防省で最も格式のある部屋で他国の国家元首達との会談に使われる部屋だ。

## 第四部第五章　英雄と梟雄その五

見れば二十世紀の派手なつくりとはまた違う豪奢なつくりである。金や銀で飾られ、床は白亜である。

（あまり好きではないのだけれどな）

そのつくりは八条の好みではなかった。だが彼の一存でこの部屋が決定されたわけではないのだ。

多分に建築家に任せた。連合で特に名の知られた建築家であった。彼は豪奢な建築を得意としていたのだ。

（しかしそれにしてもやり過ぎだ）

八条は金や銀で飾り立てるようなことはあまり好きではない。

「ベルサイユやサンスーシーではないのだし。もう少し今の連合に合った建築にできなかったのだろうか）

実はこの建築家は昔の欧州の建築に深い影響を受けていたのだ。

「とにかく豪奢にしないと駄目だ」

そう言ってこの部屋をつくった。とにかく彼はかっての西欧の建築をこよなく愛していたのだ。

だが家はアメリカ風であったりする。そして着物を着て中華料理を食べる。

「芸術と生活は別だよ」

彼はこう公言している。これもまた連合の芸術に対する考え方であった。

（この部屋だけだからいいが）

その建築家が国防省で担当したのはこの部屋だけであった。他の部屋は軍が造った。やはり軍の建物なので機密保持や安全上の都合があったのだ。

ともあれこの部屋で侍従と正対した。天皇からの授かり物を持っているので侍従が上座になった。

「では陛下から長官へのお渡しものです」

「はい」
わかってはいるがやはり緊張する。
（まさか陛下から頂くとは）
まだ信じられない。
（こうして各国の元首にお配りしているのだろうか）
だがそんな話は聞いたことがない。
（何故私なぞに下さるのだろう。それがわからない）
頭を垂れながらもそう考え続けていた。頭を上げてもまだ考えていた。
「あの、長官」
ここで侍従の声がした。
「あ、はい」
見れば侍従は既にチョコレートを彼に差し出している。見れば深紅の絹に覆われ、ピンク色の同じく絹のリボンで飾られている。
（何か思ったより少女趣味だな）
天皇の趣味はあまり知られていない。世間ではよく若いながらしっかりした方だと言われている。だが、これを見る限りやはり年相応の方のようだ。
「どうかお受け取り下さい」
「はい」
八条はそれを謹んで受け取った。
「ではとくとご賞味下さい。陛下の手作りです故」
「手作りですか」
これを聞いて余計わからなくなった。当然ながら天皇のみにならず王というものは自分で料理をする必要はない。出された料理を食べるのも彼等の仕事である。
（陛下はそもそも料理をされたことがあるのだろうか）
儀礼としてあるだろうがあくまで儀礼である。ましてやチョコレートなぞ作られるとは思えなかった。だが、それを顔に出すわけにもいかない。

「謹んで食べさせて頂きます」
「わかりました、陛下にはそうお伝え致します」
「お願いします」
こうしてチョコレートの拝領は済んだ。八条はまずそれを冷蔵庫に入れさせた。
「丁重にな。陛下からの授かり物だ」
「またそんな」
受け取った官僚の一人は笑って言った。
「本当なのだが」
「はいはい、わかりました」
彼はまだ信じてはいなかった。そして冷蔵庫に入れた。
仕事が終わると彼はそれを取り出させた。そして会食の間でそれを待った。
「こちらです」
「うん」
やがて秘書官がそのチョコレートを運んで来た。八条は銀の皿に置かれたそれのリボンを解いた。
「中身はどのようなものか」
赤い絹を拡げると一個の箱が出て来た。木製である。
それを開けると中には白と黒の珠が二十個近く入っていた。どうやらホワイトチョコもあるようだ。
「これは意外だな」
黒いチョコレートだけだと思っていたらまさかホワイトもあるとは。彼はまずはホワイトを一つ手に取った。
「ふむ」
どうやら手作りらしい。これも信じられない。
「陛下は料理を嗜まれるのか？」
「初耳ですが」
秘書官は答えた。
「そうだな。私もそんな話は聞いたことがない」

儀礼では別の料理を作る。こうしたお菓子は作らない筈だ。
「だがこれはシェフに作らせたものではない」
その証拠に形が不揃いだ。まるで小さい女の子の作ったもののように。
「これは」
八条はそれを見て思わず苦笑した。本当にぎこちない作りだ。
「まさか手作りとは」
常識で考えて一国の君主が手作りの菓子を渡すなぞ考えられない。八条はそれにおおいに驚いていた。
「そう思うと私は本当に幸せ者だな」
彼はそう言ってチョコを口に入れた。
中にはチェリーが入っていた。ほんのりとした甘さが口の中を包み込む。
「これは」
かなり上等のチェリーだ。シロップが芯にまで浸かっている。そしてチョコも。
「ふむ」
美味かった。八条は今度は黒のチョコを口に入れた。
今度はブランデーが入っていた。ボンボンである。
「細かいな」
ここまでやるとは思っていなかった。ブランデーにも甘さが残っていた。
あとは夢中で食べた。気が付くと全て食べ終えていた。
「御馳走様」
「お味は如何でした？」
秘書官が食べ終えた八条に問うた。
「いい。まかさここまでとは」
「満足されたようですね」
「うん。お世辞ではなく本当に美味しかったよ」
彼は真顔で語った。

実は彼は隠し事が苦手だ。政治家は駆け引きに時と場合によっては隠し事をしなければならない。だが彼はどうもそれができなかった。
顔に出るのだ。こうした政治家も案外多い。
「八条長官は何かあったらすぐわかるな」
マスコミでは日本の議員であった頃からよくそう言われた。
『八条切れる』
別に切れてもいないのにネットの掲示板でこう書かれた時もある。顔色が変わるとそう書かれるのだ。
『また八条か』
『あいつもこんなことじゃ大成しないな。いい加減それ位できるようになれよ』
そう無責任に書かれる。八条はそれを見て苦笑するのであった。
「本当に好き勝手言ってくれるな」
だが彼はこれが案外楽しみであったりする。
「いい、八条君」
伊藤はよく彼に言った。
「政治家は書かれてナンボよ」
「書かれてですか」
「そうよ」
伊藤はここでいつもニコリと笑った。
「話にも出ない、漫画にも描かれないっていうのはそれだけ知られていないことでしょ」
「ええ、まあ」
しかし何かタレントみたいだと思った。
「そういうところではタレントと似ているわね」
伊藤は彼のそうした考えを見透かしたように言った。
「結局は人気がないと駄目なのよ」
彼女はそう言って微笑んだ。
「幾ら口ではいいことを言ってもそれが口だけじゃ人気が出ない。

動かなくても一緒」
「それはわかっているつもりですが」
「皆シビアよ。君が政治家として何をしているか。ちゃんと見ているわ」
「それもわかっていますよ」
「わかってたらそれが人気に繋がるというのもわかるわね」
「はい」
八条はその言葉に頷いた。
「そういうことですね」
「そうよ」
伊藤も頷いた。
「そういうことが話になったち漫画になったりするのよ。けれど人気がないと書かれもしないし見向きもされないわよ」
「はあ」
幾ら地盤があってもそれだけでは駄目なのだ。選挙民はシビアである。駄目だとすぐに落選する。
「それをよくわかって行動しなさい。いい、書かれない、描かれない政治家は駄目よ。幾らそれが格好悪くてもね」
「はい」
「もっとも」
彼女はここで八条を見上げて微笑んだ。
「君ならそうそう格好悪くは描かれないか」
そう言って八条の容姿を褒めた。
そうした経緯があり彼は実は書かれるのも、描かれるのも好きである。だが癖はそうそう容易にはなおらない。
「そもそも私は別に隠し事をしなくてもいいと思っているんだよ」
彼は自分のスタッフにこう言ったことがある。
「といいますと」
スタッフ達はそれに問うた。
「いやね」

彼は話した。
「そうした策略とかよりも正々堂々と正攻法でいけばいいと思うんだよ。特に私が今やっているのは軍事行政だ」
「はい」
「それは別に隠し事は必要ない。それに隠す必要もない」
「それはそうですが」
「無論軍事機密は別だよ。ただ私が言っているのは策略においての隠し事だ」
彼が嫌うのはそれであった。
「策略はあまり必要ないのではないかと思う。もっとも必要な場合もあるけれど」
その程度のことはわきまえていた。彼も政治家である。
「必要でない場合は無闇やたらに使うべきじゃない。それはかえって自らにとってもよくない」
「といいますと」
「策士策に溺れる、だよ」
彼は一言そう言ったという。
そうした考えも持っており、彼は別に感情が表に出ることを気にはしていなかった。ただ、無闇に激昂するのはよしとしていなかった。今回も感情が表に出ていた。
「ここまで美味しいとは思わなかったよ。陛下は料理上手であらせられる」
「羨ましいですね」
「君にも彼女がいるだろう？今年も貰える筈だが」
「私の彼女はボンボンよりもケーキが好きでして」
秘書官は少し恥ずかしそうに言った。
「それでバレンタインはいつもチョコレートケーキなのです」
「それもいいね」
「まあボンボンとどちらがいいかは趣味の分かれるところですけれど」

「私はどちらも好きだよ」
八条も秘書官もチョコレートケーキもまた好きであった。
「私もです。ただ」
「ただ？」
「陛下の手作りを頂くとは。それだけでも羨ましい限りです」
天皇は美貌でも知られていた。気品だけでなく容姿も併せ持っていたのだ。
「手紙も入っているな」
箱は二重になっていた。下には手紙があった。
「どれ」
八条はその手紙を開いた。文は万年筆で書かれていた。
「陛下が自らお書きになられたのか」
見れば若い女性らしい繊細な文字であった。
「ふむ」
八条は読んだ。そこにはこう書いてあった。
『親愛なる八条殿へ』
「何と」
八条も秘書官もまた驚かされた。
「長官、先程から思っていたことですが」
「有り難い、陛下にここまで気遣ってもらえるとは」
八条は感激したように言った。
「え！？」
秘書官は『ハア！？』とした顔になった。
「あの、長官」
「陛下は私のことを気遣って頂いておられるのだ。これは異国にいる私に対しての励ましなのだ」
「・・・・・・・・・」
秘書官は沈黙してしまった。そして何故彼が今までチョコレートを貰えなかったのかよくわかった。
（この人はもてなかったんじゃない）

普通い考えて八条程なら寄って来る女の子は大勢いるだろう。
（ただ、鈍感なだけだ）
そうとしか思えなかった。ここまで鈍感なのも珍しかった。
「陛下のお気持ち、しかと受け取りました」
八条はそんなことを知りもせず満足したように言った。
「これからはより一層精進していきます」
「これはかなり遠い道のようだな」
秘書官はふと呟いた。
「こればかりはどうしようもない。まあ誰にでも不得意な分野はある」
八条にとっては恋愛がそのようである。どうやら天皇の心が彼に届くにはかなりの時間と努力が必要だと思った。

連合やエウロパでそうした話が進んでいた前後である。アッディーンはアルフフーフに入城していた。
将兵達が彼を出迎える。彼はその列の中央を司令や参謀達と共に進んで行く。
「降伏の調印は終わっているな」
「はい」
ガルシャースプが答えた。
「ならいい」
アッディーンはそれを聞いて頷いた。
「これでサラーフの大部分は我々の手に落ちた」
「全てといかなかったのが残念です」
「仕方ないな」
それは諦めざるを得なかった。
「とりあえずはサハラ西方をほぼ手中に収めたところでよしとしなければならないだろう。議会も政府も同じ考えのようだ」
「はい」
オムダーマンは議会制である。大統領と首相のいる政府、そして

裁判所との三権分立により運営されている。大統領も選挙で選ばれ、その大統領が閣僚を任命する。比較的オーソドックスなスタイルにより国家が運営されている。
「僅かな間でミドハドもサラーフも滅ぼすことができたのだ。これで満足するのも悪くはないだろう。それに行政の関係もあるしな」
「そうでした」
西方をほぼ掌握したことにより彼等の行政はかなり肥大化することになった。今はそれを整備するだけでも大変であった。
「まずはそれからだ」
アッディーンは言った。
「軍の編成もある。当分は大きな戦争もない。そう、当分はな」
「ということはお受けになるのですね」
「断る理由もないだろう」
彼は言った。
「向こうから提案してきたのだしな」
「では行きますか」
「うん、俺としても興味があるしな」
アッディーンはそこで好奇心を目に宿らせた。
「シャイターンか。以前から噂を聞いていたが」
「あまりいい噂ではありませんね」
ガルシャースプは顔を曇らせた。
「策士というか何というか。そうした話はよく聞きます」
「俺はそうは思わないがな」
アッディーンはそんな彼に対して言った。
「逆に凄いと思うぞ。異国にやって来て二度の戦いに勝利をおさめてあそこまでなったのだからな」
「そういう考えもありますか」
「少なくとも俺はそう思う」
アッディーンは不思議と彼に悪い感情は持っていなかった。

「時として策略も必要だ。彼はそれを使う時が多かったのだろう」
シャイターンは傭兵隊長時代暗殺や謀略も駆使していた。
「政略結婚を批判する声もあるがそれも今まで多くの者が行ってきた。彼だけが責められる筋合いではない」
「はあ」
「そして将として彼を見るとだ」
アッディーンの目の光がさらに強くなった。
「素晴らしいものがあるのは事実だ。俺でもあそこまではできない」
「そうですか」
「ああ、将としても人としても興味がある。是非会いたい」
これで決まりだった。翌日サラーフの旧首相官邸にて二人は会うことになった。
「悪趣味な建物だな」
アッディーンは官邸を見てまずそう言った。
「ナベツーラという男は美的感覚もなかったようだな」
アッディーンも芸術には詳しくない。だがそんな彼でもこの建物の無気味さはよくわかった。
「大体何だ、この極彩色の壁は」
壁はどれもラメが入った様々な色で塗られていた。
「よくもこんな色に塗ったものだ。普通はしない」
「そうですね」
シャルジャーもそれに同意した。
「あの男は単に悪趣味だっただけではありませんでした」
「それは聞いている。心底軽蔑に値する下衆だったようだな」
アッディーンも彼のことは聞いていた。
「はい、その取り巻き連中も酷いものでした」
「あのような連中を国政の中心にしたサラーフの者は何を考えていたのだろうな」
「マスコミに操られていましたから」
「だがそれにも限度があるだろう」

「マスコミのかっての通称をご存知ですか」
「盲目の荒馬か」
「はい。制御ができないものなのです。しかも極めて腐敗し易い」
「それは知っているつもりだが」
アッディーンもマスメディアの危険性については知っていた。オムダーマンにもネットがある。これでマスコミの弊害はかなり和らげられている。
「かっての日本と同じことが起こっていたのは知っている」
やはりここでも一千年前の日本のことが出て来た。マスコミの腐敗を語るうえで欠かせないのだ。
ただ腐敗していただけではなかったのがこの時代の日本のマスコミであった。呆れたことに他国と結託し祖国を滅亡させようとすら考えていたのだ。
『ソ連は平和勢力だ』
『北朝鮮は地上の楽園だ』
こうした事実とは全くかけ離れたことを言ってきた。あげくの果てには北朝鮮が自国民を拉致していたという犯罪行為すら隠蔽していた。あろうことかその犯罪国家と手を組む犯罪政党を良識と評してきたのだ。
その犯罪国家が崩壊した時に犯罪政党は一斉に逮捕された。同時にマスコミにもメスが入れられた。
「言論弾圧だ」
彼等は叫んだ。だが国民はそれに耳を貸さなかった。狼少年を信じる者はいない。ましてやその狼を導き入れ、村を滅亡させようとした者なぞは。
マスコミ関係者は芋蔓式に捕まった。そして外患誘致罪により次々と死刑となった。ここまでなるのに六〇年以上かかっていた。この時代日本の知性は目を覆いたくなる程であったという。何しろ教師までが北朝鮮という人類の歴史に永遠に名を残す汚らわしい恥を礼賛していたのだから。

そのことは一千年経ってもよく知られていた。マスコミの危険性を教えることとして。
「あの時日本はかろうじて助かった。だが」
「サラーフでは駄目だった。そしてこの様な呆れた行いが平然と行われていたのです」
ナベツーラ一派の腐敗を支えたのはマスコミであった。だがそのマスコミももうない。全てサラーフの市民によって殺されてしまったからだ。
「もうあのマスコミ連中は残っていないな」
アッディーンはそれに言及した。
「はい、皆リンチにより惨殺されました」
「そうか、自業自得だな」
アッディーンは素っ気なく言った。
「リンチは認められないが」
「そちらは犯人は全くわからないそうです」
「多過ぎてだな」
「はい」
いささかシニカルな言葉だがその通りであった。
「永久に犯人が見つかることはないだろう。それに警察も本気で捜すつもりもないだろうし」
「でしょうね。この国のマスコミは警察に対しても誹謗中傷を繰り返していましたから」
その大義名分は『警察は権力の犬だ』である。これもあの時の日本と同じであった。
何故このような批判、いや誹謗中傷をするか。理由は簡単である。警察の存在、力が邪魔だからだ。
マスコミは権力をその手に集中させようとする。だがそれは公の権力ではない。公をコントロールすることができても。
警察は公の権力である。それも取り締まる側である。マスコミが『何か』をすれば彼等を取り締まる。これは警察の当然の仕事であ

る。『何か』をするには彼等の存在は邪魔なのだ。
当時の日本ではマスコミが贔屓する、若しくは裏で手を結んでいた北朝鮮の様な犯罪国家、犯罪政党、テロリスト達にとって警察は邪魔である。だからその権力を弱めようとしていたのだ。実際に犯罪政党の『人権派』弁護士出身の党首はテロリストと結託していた。怖ろしい話であるがこの時代の日本にはテロリスト出身の弁護士もいた。市民活動家もその正体がテロリストであるのは今の連合でも見られる話だ。

## 第四部第五章　英雄と梟雄その六

サラーフにおいても同じだった。マスコミの犯罪行為、ナベツーラ一派の腐敗を隠す為に警察の弱体化を計ってきた。そしてそれはかなりの成功を収めていたのだ。
「そうしたことがあるからな。警察も真面目に捜査したりしないだろう」
「権限もかなり制限されていますからね」
「それが格好の理由になる」
「はい」
ここでもややシニカルであった。
アッディーンは官邸の応接室に来た。そしてそこで立ったまま待った。
「そろそろか」
「はい」
シャルジャーは腕の時計を見て答えた。
「閣下」
そこに若い将校が入って来た。
「シャイターン司令が来られました」
「わかった」
アッディーンはそれを聞き頷いた。
「では出迎えに行こう」
彼は周りの者を従え官邸の正門に向かった。
「お待ちしておりました」
彼等はシャイターンの前に来た。
「はい」
シャイターンはそこにいた。赤い軍服に黒いマントを身に着けている。
（これがシャイターンか）

アッディーンは彼を見てまずその全身を上から下まで一瞥した。
（噂に違わぬ美男子だな）
見ればまるで十九世紀の欧州の彫刻の様である。整った顔に身体をしている。
（だが）
アッディーンは他のことに気付いた。
（神や英雄の彫刻ではないな）
そう言うにはあまりにも陰があった。シャイターンは確かに美しい。だがその美貌は夜の世界の美貌であるように彼には感じられた。例えればルネサンス時代きっての策略家チェーザレ＝ボルジアであろうか。彼もまた陰のある美男子として知られていた。
シャイターンもまたアッディーンを見ていた。
（成程な）
彼はアッディーンの持つ気まで見ていた。
（流石に若くしてここまでなったわけはある）
均整のとれた身体に覇気のある顔立ち。まるで若獅子のようであった。
（獅子のようだな。その身体も心も）
アッディーンの精悍な気性をも一目で見抜いていた。
（あくまで正道の人物のようだな。才覚はあるが）
彼にはそれしか道はない。だがシャイターンは違う。
（だが今はそこまで考えなくともよいな）
そう、少なくとも今は。
（とりあえず今この男とは何もない。こちらから牙を剥く必要もないな）
彼はそう考えた。そしてあえてにこやかな顔で言った。
「以前よりお会いしたいと思っておりました」
「こちらこそ」
アッディーンも笑顔になった。二人共社交辞令であった。
「この度の戦い振り、お見事でした」

「いえ、それ程では」
アッディーンは謙遜の言葉を出した。
「それよりも貴殿のエウロパ、サラーフとの戦いですが」
「あれはアッラーが味方して下されたのです」
シャイターンは何事でもないように言った。
「アッラーのご加護があれば何でもありません」
「アッラーのご加護ですか」
「はい、他に何がありましょうか」
「いえ」
アッディーンもムスリムである。それを否定するつもりはない。
「貴方にもそれはありますね」
「私にもですか」
アッディーンは驚いたように言った。
「はい、だからこそ勝ち続けることができるのです」
「そういうものでしょうか」
アッディーンはシャイターンの言葉に少し首をかしげそうになったが公の会見の場であるのでやめた。
「人それぞれの資質もありますが」
なおこれに重点を置くのが連合である。
「ですがそれだけで勝利を収め続けることはできません」
「アッラーの加護なくしては勝てないということですか」
「その通りです」
連合やエウロパではそれを『運』と呼ぶことも多い。だがサハラではそうした考えはあまりない。運も全てアッラーの思惑によるものなのだ。
こうした考えはムスリムに昔からあある。この世の全てはアッラーの考えるところによる。その人の一生も。天国へ行くか、ジャハンナムへ行くか、それすらもアッラーが決めていることだ。だが戦い、聖戦で死んだ者は必ず天国へ行くことができると教えている。
「アッディーン司令にもまたアッラーの加護があるのですよ」

「そういう考えは今までありませんでしたが」
彼はイスラムは信じていたが、戦いにおいてはアッラーの加護を願ってはいなかった。
「アッラーは自ら動く者を導かれる」
そうした考えであった。
だがこのシャイターンという男は違うようだ。彼はあくまでアッラーが全てを司っているという。
（それは間違いではない）
アッディーンもそれには同意する。
（だが戦いに勝つのはそれによるものではない。それはあらゆる要因が加わる）
彼の考えはそうであった。
「司令の仰りたいこともわかりますよ」
だがシャイターンはその思いを察したように言った。
「ん！？」
まさか自分の考えが読まれているのでは、そう思わざるを得なかった。
「ですがそうした要因をもアッラーは決められているのです」
「そうした意味でこの世の全てを司っている、と」
「はい」
何処か宗教家めいた言葉である。そういえば彼はある宗派の家の出である。
本来いイスラムでは僧侶といったものは存在しない。法学者がいるだけである。
「私は預言者に過ぎない」
ムハンマドはこう言った。
「イスラムには僧侶や神官は不要だ。あくまで市井の宗教なのだ」
これは僧侶や神官達の腐敗と特権を知っていたからだ。この時代キリスト教世界では早々と腐敗の兆候が見られていた。後にはその腐敗が極限にまで達し様々な問題を起こした。法皇にしろ宗教家と

いうよりは封建君主であり、政治家であった。何しろ神を信じず、この世の酒と美食、栄華と美女こそが天国であると言った法皇すらいた位なのだ。
イスラムがそれを禁じたのは正解であった。この宗教はそうした厄介な問題から解放されていたのだから。
それでも宗派によっては僧侶が存在する。それでも他の宗教に比べればその腐敗も特権もかなりましである。ムハンマドのこうした考えが生きているからだ。
シャイターンはそうしたある宗派の僧侶の子である。今では父はリーダーとなっているらしい。
(何でもあの宗派は南方に大きな勢力を持つというが)
彼の家のことはアッディーンも聞いたことがある。
彼の父はその宗派で長い間要職を歴任し、今では法皇だという。
(かなりのやり手だと聞くが)
宗教家でもあるが謀略家としても南方では有名であった。『右手に奸智、左手に謀略』というのがそのもっぱらの評価である。
その調子がこのシャイターンである。話によるとその父の気質を最も色濃く受け継いでいるらしい。
(それだけではないようだがな)
アッディーンは確かにシャイターンに宗教家めいたものを感じていた。だが、彼にはそれ以外のものが明らかにあった。
(例えていうのなら)
彼は言葉を捜した。
(梟雄の匂いがするな)
その外見からは考えられないが、彼には確かにその風格が感じられた。
実際に彼の経歴を見ているとそれは当てはまった。
まず父の宗派の要職に就いた。今でもそれに就いたままである。そして父の力と宗派の財力を背景に傭兵団を作りそれで南方で戦いを続けた。悪魔的に冴え渡る謀略で鮮やかな勝利を収め続け北方に

風のようにやって来た。そしてエウロパとサラーフを退け、権門ハルーク家に入った。鮮やかでいて、そこには常に謀略の香りが漂う。
アッディーンはすぐにそこに考えを巡らせた。そして彼に言った。
「つまりアッラーの御意志により我々は戦いに勝ち続けていると」
「はい、我々が今ここで会っているのもそうです」
シャイターンは落ち着いた声で言った。
「私と貴方は今日ここで会う運命だったのです」
「そうだったのですか」
これにはあまり賛同できなかった。
「ではこれからの私達の運命も既に決まっていることでしょうか」
「当然です」
彼はアッディーンの言葉に対しさも当たり前のように答えた。
「それも既にアッラーが決められていますよ。そう」
彼の整った彫刻の様な唇が微かに歪んだ。
（ん！？）
アッディーンはそこに何か邪な気配を感じた。だがそれは顔には出さなかった。
「これからの私の歩む運命も。貴方の運命も」
「そうなのですか」
どうもこれはアッディーンにはどうしても馴染めない考えであった。
「おわかりになられませんか」
「残念ながら」
「まあいいです。これはそのうちおわかりになると思います」
シャイターンは不敵に笑った。
「ところで旧サラーフ領ですが」
「はい」
本題に入ったな、と思った。

## 第四部第五章　英雄と梟雄その七

「現時点の互いの占領地で分割というのはどうでしょう」
「私の一存ではそれはわかりませんが」
アッディーンはまずそう断った。
「ですが暫定的にはそれでいいと思います」
司令官としての権限においてそう答えた。
「わかりました」
シャイターンはそれを聞くと満足したように頷いた。
「これで私のこの会談での責務は果されました」
(それだけではないな)
アッディーンはその笑みの裏に何かを感じたがやはりそれは口には出さなかった。
「ではお話を変えましょう」
(来たか)
そう思った。
「実はこれからの北方諸国連合の在り方ですが」
「はい」
アッディーンは内心警戒を強めた。
(このサラーフ領のことか)
まずはそれを考えた。だが違った。
「今エウロパと隣接しておりまして」
「既に北方の七割が侵略されていますね」
「はい、これは由々しき事態です」
シャイターンはここで深刻な顔を作った。
「エウロパの勢力はこのサハラより完全に駆逐しなければなりません」
「それは私も同じ考えです」
これは彼の本心であった。

「あれは十字軍だ」
こう言う者もいる。サハラにとってこのエウロパの侵攻はかっての十字軍と全く同質のものであった。
（十字軍か）
サハラ、いやこの銀河にいる全ての者が知る忌々しい歴史である。
二百年に渡るイスラム教とキリスト教の戦いであった。聖地エルサレムの奪還を大義名分としてアラブに雪崩れ込んで来たキリスト教徒達は悪逆の限りを尽くした。中には人を食う者すらいた。
「十字軍は悪魔の集団だった」
この言葉に頷く者は今も多い。彼等はまさにその言葉の通り破壊と掠奪、そして虐殺を行く先々で繰り広げた。
虐殺されたその中には同じキリスト教徒もいた。彼等にとってはイスラム教徒の中にいるだけで罪であったのだ。当然ユダヤ教徒も例外ではなかった。
『啓典の民は特別に扱え』
ムハンマドの教えである。イスラムはユダヤ教、キリスト教と同じ流れをくむ一神教だか当然である。コーランにおいてはモーゼもキリストもムハンマドと同じ預言者であった。
「私は最後にして最高の預言者である」
ムハンマドはこう言った。彼は自分自身をモーゼやキリストと同じ存在だと言っていたのだ。
異教徒であっても認める、そうした考えがイスラムにはあった。今もそうである。
『ジズヤさえ納めれば信仰は許す』
それがイスラムの教えである。だがキリスト教は違っていた。
『いい異教徒は死んだ異教徒だけだ』
こうした考えがあった。そしてその言葉の通りに異教徒は殺戮された。同じキリスト教徒ですら。
これに対してイスラムはあくまで文明的であった。エルサレムを奪還した時彼等はエルサレムの者達の命を保証した。

「無闇に血を流してはならない」
エルサレム奪還の英雄サラーフ＝アッディーンは言った。サラディンの名で知られるクルド人出身の男である。
彼は軍人、政治家として優れていただけではなかった。その人格もまた優れていた。策略は使っても約束は絶対に破らなかった。
だが十字軍は違った。あろうことか、ジェノバの商人達に唆され同胞である筈のビザンツ帝国まで攻め、ラテン帝国という背信の国まで作る程であった。
「連中はただ欲に目がくらんだ悪党の群れに過ぎなかった」
こうした意見まであった。そしてそれは真実であった。
今のエウロパのサハラ侵攻はまさにその十字軍であった。サハラの民の命や財産こそ奪わないがその地から追放する。彼等は難民となり、サハラ各国や連合に逃れていく。その数は百億を越えていた。
「確かにエウロパには止むに止まれぬ事情があるのだろう」
それはわかる。だが。
「だからといって我々の地に足を踏み入れることは許さん」
サハラの者の考えはそうであった。従って彼等への敵愾心は頂点に達していた。
「これを一刻も早く何とかしなければなりません」
シャイターンは言った。
「それはわかりますが」
アッディーンは一先ずそれに賛同した。特に反対する理由はなかった。
「ですが容易ではありませんよ。彼等もまたかなりの戦力がありますし」
「十字軍はどうなりました」
シャイターンはここで思わせぶりに言った。
「十字軍ですか」
アッディーンはまたか、と思った。
「はい。彼等の最後はどうなりましたか」

「欧州に追い返されました。二百年余の戦いの後」
「ですね。十九世紀、二十世紀にも彼等は来ました」
アラブ世界を支配していたオスマン＝トルコの衰退に乗じて彼等はまた来た。そしてアラブの植民地化を進めていったのである。その後は石油を狙ってアメリカが来た。中国やロシアも介入してきた。
「ですが彼等も最後には帰らざるをえなかった」
「はい」
「それと同じです。ただ」
「ただ！？」
「彼等はすぐに帰ってもらう運命にありますが」
「運命ですか」
「そうです、それがアッラーの思し召しです」
ここでもアッラーの名を口にした。
イスラムにおいては神の名をどれだけ口にしても構わない。ユダヤ教のようにみだりに口にするなかれ、とは言われないのだ。
「それは私の手によって為されます」
「閣下の手によって」
「はい、確実にね」
彼はここでにこりと笑った。
（かなりの自信があるようだな）
アッディーンは思った。確かに彼の将としての力量だと普通の軍ならば破るのはたやすいだろう。だが。
（それは普通の軍であるならばだ）
エウロパにはモンサルヴァートがいる。今はエウロパ本土にいるが何かあればすぐにこちらにやって来るだろう。そしてもう一人、怖ろしい男が今サハラにいた。
（確かロギ＝フォン＝タンホイザーといったな。マガバーンとの戦いにおいて鮮やかな勝利を収めたそうだが）
彼の耳にもそれは入っていた。
アッディーンはこのタンホイザーという男にも只ならぬものを感

じていた。モンサルヴァートとはまた違ったタイプの名将であるようだ。
モンサルヴァートはどちらかというと戦術家である。戦略眼も備えているようだが前線での指揮を執ることを好む。そして要塞よりこ艦隊運営、用兵を好む。これは彼がサハラにいる時でのことを見ればわかることであった。
タンホイザーは戦略眼はないようだ。だがその戦い方を見る限り天才的なものがある。
（天性の戦術家というやつか）
中国漢代の霍去病や日本の源平の戦いにおいての源義経、同じく日本の戦国時代の上杉謙信、三十年戦争の時のスウェーデン国王グスタフ＝アドルフ等がそれにあたる。時としてこうした特異な人物が出て来るものだ。
彼等の特色は生まれながらにして戦争のやり方を知っているということだ。兵法や軍事に関する書なぞ碌に読んでいない者すらいた。
そして怖れるものがない。上杉謙信は鎧兜を身に着けず僅か四四騎を連れ一万を優に超える敵軍に突入した。敵はそれに恐れをなし自然と道を開けたという。
源義経は何と馬で崖を下った。鹿で行けるのならば馬でも行ける、という理屈でである。ここには戦争の常識はなかった。ただ天才的な勘だけがあった。
そうした者に勝つのは容易なことではない。戦争の常識が通用しないのだから。だがシャイターンはそれでも尚余裕を見せている。
「これはどういうことだ」
彼はそれを不思議に思った。
「司令」
ここで彼が声をかけてきた。
「はい」
アッディーンはそれを聞き考えるのを一旦止めた。
「我々の願いですが」

「何でしょうか」
本題に入ったと思った。
「実は我々北方諸国連合はオムダーマンと友好条約を結びたいのですが」
「友好条約ですか」
「はい」
シャイターンは穏やかな顔をしてみせた。
これが後方の安全を計るものであることは自明の理であった。それにしても軍の総司令官であるが外交のことにまで話ができるとは。
（ハルーク家との婚姻がそれだけの効果があるということか）
シャイターンは今や北方で最大の権勢を誇る。しかも圧倒的な支持もあった。最早英雄といってよい程であった。
（その二つを上手く利用しているな）
アッディーンはすぐにそう見抜いた。
「詳しいことは互いの政府によるものですが」
シャイターンはそう前置きを置いた。
「しかし北方は大体その方向で話がつくと思われます。各国の首脳には私からも話をしておきますので」
これこそ今の北方における彼の力を示す言葉であった。
「そうですか。では私も政府に話をしておきましょう」
断る理由もなかった。オムダーマンと北方はこれといって利害関係もないからだ。
「ではお願いしますね。サハラの平和の為に」
「はい」
これで会談は終わった。あとは二人での個人的な話になった。
「ところで司令」
シャイターンは花園に場所を移していた。
「何でしょうか」
当然アッディーンもそれについている。
「今後サハラはどうなっていくと考えておられますか」

「サハラですか」
「はい」
シャイターンはここで頷いた。
「難しい質問ですね」
流石にこれには答えに窮した。
「西方は我々の手により統一されましたが」
「まだ流動的だと仰りたいのですね」
「はい。何しろ一千年に渡って戦乱が続いておりますし」
「そうですね。ですがこれまでとはかなり違う流れになっていると思われませんか」
「といいますと」
アッディーンはその言葉に顔を上げた。
「今まで西方が一つの勢力の下にほぼ統一されたことはありません。いえ」
シャイターンはここで思わせぶりな口調にあえてした。
「そもそもサハラにおいては一つの勢力に一つの地域が統一されているのは東方だけです」
「はい」
サハラは北方、西方、南方、そして東方の大きく四つの地域に分けられている。そのうち人口が最も多いのが東方である。従ってハサンはサハラで最大の勢力を擁しているのだ。
「他の地域は多くの小国家に分裂して互いに争っていました。そう」
彼は言葉を続けた。
「この西方のようにね」
「否定はしません」
オムダーマンもこれまで多くの戦いを経ている。その中心にいたのが他ならぬアッディーンである。
「それがこのようにハサンの様に一つの地域をまとめる国家が誕生した。それだけでも大きな流れです」
「西方だけの問題ではないのですか」

「はい。これはサハラ全域に影響を及ぼすでしょう。そしてそれのもとが」
シャイターンの目がここで不思議な光を発した。
（むっ）
アッディーンはその光を認めた。まるで夜の空に輝く赤い星のようであった。
（赤い星は凶兆だと言われるな）
アッディーンは幼い頃に言われた話を思い出した。
銀河を行く時でも言われることであるが星には人の運命を司る力があるという。これは古代の占星術なのであるがイスラムにも占星術はあった。
「占いは当たらない」
ムハンマドはこう言ったがイスラム世界においても占星術は発展した。やはりそうそう容易には禁止できるものではなかった。そもそも占星術はそれだけで成り立っているものではないからだ。
魔術とも関係付けられていた。イスラム世界では魔術はこれといって迫害の対象ではなかった。むしろ錬金術などは奨励されていた程だ。
「金を生み出すことの何が悪いのか」
という論理であった。これにより科学が大いに発展した。
そうした中で占星術も学ばれていた。それは当時のキリスト教世界の占星術よりも遥かに進歩していたものであった。
「占いもまた科学である」
この時代にもこう主張する者がいるがこれもまた真実である。占いはいうものはどの時代にもあるものなのだ。
アッディーンはそれをシャイターンの目の中に見ていた。彼はこれを不思議に思わなかった。
（目の光はしばしば星の瞬きに例えられるが）
それが根幹にあった。だがそれだけではない。
何故かこのシャイターンの目に禍々しいものを感じたからだ。こ

れは先程から気になっていたことだ。
（梟雄か）
さっき彼を見て思ったことを思い出した。
（この目の光を見るとそうかも知れないな）
ここでシャイターンがまた声をかけてきた。
「司令」
「はい」
アッディーンは考えることを止めて彼に目を向けた。どうやら暫く目が泳いでいたようだ。
「そのもとですが」
「はい」
どうやらシャイターンも話を暫く中断させていたようだ。見れば右手にダリアの花をまさぐっている。赤い、まるで炎の様なダリアである。
「貴方なのです」
「まさか」
アッディーンは笑ってそれを否定した。
「私はただ命令に従い戦っていただけです」
「それは違います」
シャイターンは言った。
「今回のオムダーマンの西方統一は全て貴方がいたからこそなのです。それはサハラどころか連合やエウロパの者も認めていることでしょう」
「皆私を買い被っているだけです」
「ですが貴方は自分の軍人としての能力には自信がある」
「否定はしません」
「そうですか」
「しかしですね」
彼はまた言った。
「私は単なる一軍人に過ぎません。それ以外の何者でもありません」

「今のところは」
シャイターンはまた思わせぶりに言った。
「しかし人には多くの隠された能力があるものです。それに気付いていない時があまりに多過ぎる」
「私は少なくとも自分の力はわきまえております」
「いえ、貴方はまだご自身の力を完全には把握してはおられない。失礼なことを言うようですが」
「では私にはどのような力があると」
「それは追々わかることです。すぐにでも」
「まあそれは期待しましょう」
いささか社交辞令的に言った。
「貴方がそれに気付いた時また動きますよ」
「サハラがですか」
「はい」
シャイターンは頷いた。
「そしてこのサハラが大きく変わります」
ここで一陣の風が吹いた。風が花々を揺らした。
アッディーンとシャイターンにも吹きつけた。二人の髪と軍服が風で揺れ動いた。
「今まで我々は戦乱と侵略の中に喘いでおりました」
シャイターンはここで透き通る様な赤い光をその目に宿らせた。
「しかしそれも終わろうとしています」
彼は言葉を続けた。
「今までの散り散りになったサハラではなくなるのです。そう」
言葉に何やら妖しげな力が宿ったように感じられた。
「ムハンマドの時以来長らく分裂していた我がアラブの民が一つになるのです」
イスラム世界はごく初期、そうアッバース朝と後ウマイア朝に分裂して以来一つにまとめられることはなかった。セルジュク朝やオスマン朝のような強大な勢力は誕生したが彼等もイスラム世界を一

つにまとめることは出来なかった。彼等もそこまでは考えていなかったふしがある。

## 第四部第五章　英雄と梟雄その八

「それが誰の手によって為されるか」
アッディーンはそれを聞き思わず息を呑んだ。シャイターンの言葉はまるで麻薬の様に彼の耳に残った。
「それは私だけが知っています」
「貴方だけが」
「ふふふ」
シャイターンは不敵な笑みを漏らした。
「これはほんの戯れ言ですが」
だがすぐにそれを否定した。だがアッディーンはそう思わなかった。
（おそらく本気だ）
彼にもその程度は察知できる勘があった。伊達にここまで戦いに勝利を収めてきたわけではない。
「ただ時代は確実に変化してきているということはご了承下さい」
「わかりました」
アッディーンはとりあえずは頷いた。
「では夕食なぞ一緒にしませんか」
「では好意に甘えまして」
べつに断る理由もなかった。
夕食はエウロパ風のメニューであった。二人は食事を終えると別れた。
「また会える日を」
「楽しみにしておきます」
こうして二人は別れた。後日オムダーマンと北方諸国連合の間で正式に話し合いの場が持たれ両国は互いの勢力圏を定めた条約を結んだ。こうしてオムダーマンは旧サラーフの大部分をその領土とした。

すぐさまサラーフ各星系に対してオムダーマンの法及び行政区分が施行された。そしてサラーフの軍もオムダーマン軍に新たに編入されることとなった。
「これでまた我が国の勢力が強くなったな」
カッサラ星系に帰る途中でアッディーンは艦橋の中にいながら呟いた。
「はい。これで我が国はハサンに対抗できる大国となりました」
傍らにいるガルシャースプがそれに応えた。
「しかしハサンはまだまだわが国とは比較にならない力を持っている」
「はい」
ガルシャースプはアッディーンのその言葉に頷いた。
これでオムダーマンの人口は五百億を超えた。だがハサンは九百を優に越えている。
それだけではない。連合やマウリアとの貿易によりかあんりの利益を得ている。その国力はオムダーマンとは比較にならないものであった。
「およそ二倍の国力差がある」
アッディーンは言った。
「今連戦で疲れきった我が国にとっては辛い相手だな。ましてや彼等は連合やマウリアとの関係も深い」
「彼等が介入してくると」
「その可能性は否定できないだろう」
アッディーンは率直に言った。
「ハサンとことを構えるにしてももう少し先のことになるだろう。政府が今後東方に進出しようとしてもな」
「政府はそこまでは今のところ考えていないようですね」
オムダーマンの国家目標は西方の統一であった。今はそれがようやく果されたところである。
「数年はこのままだと思います」

「そうだろうな。その間に為すべきことはかなりある」
アッディーンの言う通りであった。オムダーマンはミドハド、サラーフをようやく倒したばかりでありその為に国力もかなり使っていた。
それだけではなかった。西方をオムダーマンの統治方式でまとめなくてはならない。比較的地方分権を執っているオムダーマンにしろこれは厄介な問題であった。
「当初からわかっていたことにしろだ」
アッディーンはそのことを考えながら言った。
「やはり実行する段階になると多くの問題が出て来る。予想していなかった問題も含めてな」
「そうですね。げんに軍の編成でも多くの問題が起きることが予想されています」
「軍の規模はどうなるのだ」
「かなり増強されると聞いています」
「そうか。大体四十個艦隊といったところかな。暫定的には」
「ええ、大体それ位だと聞いています」
「そうか。ハサンと比べるとかなり少ないな」
ハサンはおよそ七〇の艦隊を擁している。兵力においてサハラ随一である。
「それは仕方ありませんね。しかし兵や艦艇の数だけで戦争をやるわけではありませんし」
「それはわかっている」
アッディーンも補給や通信の重要性については熟知していた。
「国力に合った規模の軍でなければ何にもならんしな」
そしてこのこともよくわきまえていた。
「まあ暫くは大きな戦争もないでしょうね」
「そうだろうな」
アッディーンは頷いて答えた。
「その間に軍を整備しておかなくてはな」

「それですが閣下」
「どうした」
彼はガルシャースプに顔を向けた。
「どうやら閣下にかなり重要な役職が任されるという話が出ております」
「重要な役職！？」
「はい、宇宙艦隊総司令官の役職です」
「まさか、それはないだろう」
アッディーンはそれを全面的に否定した。
「あれは上級大将がなれる役職ではない」
宇宙歓待司令長官はオムダーマンにおいては国防大臣、統合作戦本部長、参謀総長等に並ぶ要職である。軍の基幹戦力である宇宙艦隊を統括し、その指揮を執る言わば実戦部隊の長とも言える役職である。その為責務も大きく、オムダーマンにおいては元帥でないと就くことができない。なお国防大臣は原則として文民が就くことになっている。制服組では統合作戦本部長、その参謀総長に並ぶナンバー3の要職であった。
「はい、どうやら今回の功績で閣下は元帥に任命されるそうです」
「元帥か」
彼はそう聞いても今一つピンとこなかった。
「夢のような話だな。ついこの前まで大佐だったのに」
「サラーフ攻略の功績によるものかと」
「サラーフのか」
「はい、どちらにしろ正当な武勲で手に入れたものです。誇りに思われてよろしいかと」
「うむ」
アッディーンはとりあえず頷いた。
「しかし二十代で元帥というのはそうそうない話だぞ」
「昔なら高貴な出身でなければ有り得ない話でしたな」
オムダーマンには貴族はいない。

「それは特に思わないがこうも昇進が早いと流石に自分でも信じられない」
「ミドハドとサラーフを倒したことを考えると当然だと思いますが」
「それでもだ」
ガルシャースプに言われてもまだ戸惑っていた。
「喜んで受けられるべきだと思いますよ、私は」
ここでラシークが口を挟んできた。
「ラシーク少将」
アッディーンは彼に顔を向けた。
「自らの功績によるものは喜んで受けるべきです。それが邪なことにより得たものでない限り」
彼は言った。
「アッラーもそれを否定したりはしません。それに閣下にはまだやるべきことが山のようにあります。元帥になるのはまだその途中の些細なことに過ぎません」
「やるべきことか」
「はい、これは私の予想に過ぎませんが」
ラシークはそう断ったうえで言葉を続けた。
「閣下はこれからも戦い続けることでしょう。このサハラにおいて」
「それは俺も望むところだ」
やはり彼は戦いを愛していた。
「元帥になったからといって戦場に立つのを止めるつもりはない。それぞれの考えがあるだろうが俺はやはり戦場にいたいのだ」
「それはわかっております」
ラシークも上司のこうした性格は熟知していた。
「そうでなくては閣下は閣下たりえませんから」
「よくわかっているな」
アッディーンはそれを嬉しそうに聞いた。
「やはり俺にはそれが性に合っている。戦場にいることがな」
彼は機嫌をよくした。

「それはわかります。しかし」
ラシークは言葉を続けた。
「それだけでは何時かは駄目になってしまうこともご承知下さいね」
「それもわかっているつもりだが」
アッディーンは少し不機嫌な顔になった。
「ナポレオン然り」
ラシークはここで十九世紀のフランスに現われた英雄の名を出した。彼はコルシカの貧乏貴族に生まれフランス軍の士官学校に入った。ここではごく平凡な学生であった。だが数学と歴史には強かったという。
砲兵将校になり革命の中で頭角をあらわした。そして遂に皇帝にまで登りつめたのだ。
皇帝になってからも彼は戦争を続けた。彼にそって戦場とは己の名誉と栄光を手に入れる場所であった。
だが最後には負けた。ロシア遠征で、ライプヒチで、ワーテルローで。そしてセント＝ヘレナ島で遂に死んだ。一代の風雲児としては寂しい最後であった。
「ナポレオンのことは知っているが。しかし」
アッディーンは口を少し尖らせた。
「俺はナポレオンとは違う。ましてや皇帝なぞではない。一介の軍人だ」
「それは私もわかっております」
ラシークは言葉を返した。
「しかし要職に就くとそうそう軽率な行動もとれないのも事実です」
「それもわかっているつもりだ」
アッディーンは反論した。
「だが戦場のことは戦場にいないとわからないものだ。それはわかっているだろう」
「はい」
「ならいい。俺は必要な時には戦場に出る。それはいいだろう」

「ええ。ただしご自身の責務はよくお考え下さい」
「ああ」
やはりアッディーンは不機嫌な顔で答えた。こうした話は好きではない。
彼はやはり戦場に身を置くことが好きだ。そしてそれを最後まで続けたかった。だがそれも時と場合を選ばなくてはならないようだ。
「難しいものだな。役職というものは」
彼は言った。
「仕方ありませんよ。職務には責任が伴うものです」
「それを理解するのもまた難しいものだな」
「しかし閣下は今それがおわかりになったようですね」
「恥ずかしい話だが」
そう言って苦笑した。
「しかし遅い話ではありません」
ガルシャースプが言った。
「それを何時までも理解できない者も多いのですから」
「ナベツーラ達のような連中か」
「例えとしては最悪ですが」
しかしガルシャースプはその言葉を肯定した。
「ですが格好の反面教師ではあります」
「そうだな。そうそうあの様な輩はいないと思うが」
アッディーンは最後までナベツーラ一派を嫌悪していた。
「だが副司令の言う通りだな。俺もあのようになっては駄目だ」
「はい」
アッディーンは前を見た。そこには星の大海が拡がっている。
「この大海を進むにはまだ俺は学ばなければならないことが多い。それも心に留めておかなければならない」
ガルシャースプとラシークはその言葉に頷いた。
アリーは彼等を載せたままカッサラに戻る。そしえ新たな戦いに備えその翼を休めるのであった。

第四部　完

2004・8・22

# 設定資料集一

星河の覇皇　設定資料集

## 星間国家連合

人類最大の勢力。人口にして三兆を誇りその国数は三百に達する。中央政府や議会、裁判所の他に各国の政府や議会も存在している。保有星系は三百国、そして中央政府で数百万に達する。

中央政府は大統領制を敷き、その下に内閣が存在する。また議会は上下二院であるが実質的には三院である。上に各国の国家元首達の議会がある。

全体的に中央政府の力は弱く長い間各国の政府や各国政府の権限を重視する地方分権派と中央集権派との意見対立が存在している。これは連合の宿命的な悩みである。

三百の国が存在するがその国力の差は大きい。伝統的に大国の力が強く日米中露の他にブラジルやトルコ、オーストラリア、旧ＡＳＥＡＮ各国、メキシコ等の発言力が強い。この為小国は常に合従連衡し彼等に対処する傾向がある。また大国同士に対立があればそれぞれの利益に従って動く。武力衝突こそないが貿易や通商、経済における摩擦は頻繁にある。これを調整するのが中央政府の大きな仕事となっている。なおバランサー的な国も存在する。

長い間中央警察や中央軍といったものは存在しなかったがキロモト政権下において遂に誕生する。これはこの二百年あまりの中央政府の不断の努力と宇宙海賊やテロリストの行動が活発化しだしたことがその理由である。

設立は国際連合が母体になっており、ＡＰＥＣやＡＳＥＡＮ地域フォーラムに参加していた環太平洋諸国に中南米諸国を軸としており、そこにロシア圏の国々やサハラ以南のブラックアフリカ諸国等を加えたものである。トルコやイスラエルといった中東の国の一部も参加している。これ等の国々は法的には平等であるとされている。

人種構成はアジア系やヨーロッパ系、アフリカ系だけでなくアボリジニー達も存在する。極めて混血が進み肌の色が黒かったり黄色かったりしていても目や髪の色が様々だったりする。また違う国の間であろうとも婚姻は多い。そうした意味で人種問題はかなり解決している。

それぞれの国の独自性、自主性が強く、文化もまた各国で持っているがそれはどちらかというと地域性といったものに近い。料理や服装、風俗といったものにそれが現れている。また言語も公用語として銀河語が存在するが方言のようなものが存在する。食事や箸とフォーク、ナイフ、スプーンを同時に使う。

設立以来惑星開発に力を入れてきておりそれにより力を大きくつけている。北と東、そして南に何処までも続くのではとも思える果てしない開拓地があり、そこに向かって開発を行っている。

元々大国の存在等を考慮した領域の割り当てが行われており、設立当初の国はそれぞれ相応の領域を持っている。例としては第一の人口を持つ中国は十兆を養える領域を持っている。その他の大国にもまず優先的に広大な領域を当てたができるだけ辺境に置いている。これは当時の連合中央政府の英断であり、これにより大国が中央において発言力を増すのを抑えている。だがこれにより辺境において小国を抱き込もうとそれぞれ工作を繰り返してきた歴史があり、痛し痒しの状況である。

設立と同時に経済及び貿易は自由化されており関税や市場の統合も為されている。通貨はテラ。地球からとられている名前である。

風土的に個人主義的風潮が強く各人の自立心も強い。開拓者精神も強く何処かで成功すればよいという考えがある。また各種産業において活発な企業活動もありアグリビジネスや資源のビジネスも盛んである。資源は極めて豊富な状況にある。その為か各人はそれぞれの得たいものを求める。それは各人によって違うが自主性が強いのは変わらない。また階級社会ではなく、スタート地点が公平であればよいという考えである。生まれや経歴はそれ程問題ではない。

また宗教も多彩である。宗教人口は十三兆に達し、古代の神々も信仰されている。ケルトやメソポタミア、エジプト、中南米の神々が復権している。またそれと同時にフェニキアやアッシリア、インカ、ヒッタイトといった古代の民族の国家もある。イスラム教やキリスト教もある。だが戒律は厳しくない。特にイスラムは酒や豚もまあ許されている。だがユダヤ教はこうはいかない。

ユダヤ教徒だけは他の宗教も同時に信仰もせず、戒律も厳しいままである。これは彼等の末裔だと主張する者達が建国しているのである。他にはアイヌや琉球、チベット等の国も存在する。またブルボン家が王家を務める国まである。それぞれの国は大統領制だけでなく君主制の国もある。国家元首の席次は細かく、まずは皇帝、王、そして大統領等となっている。皇帝は二人おり日本の天皇とエチオピア皇帝である。両者は互角とされているがエチオピア皇室は途中断絶していた時期があることから日本の皇室の方が上とされる場合が多い。

文化的には大掛かりでかつワイルドなものが好まれるが日本のように繊細な文化も存在する。実際はかなり多様であると言っていい状況である。食文化や音楽、服装も極めて多様。またファーストフードも多い。酒はよく飲まれる。ワインやビール、ブランデー、ウイスキー等の他にカクテルも好まれる。他に馬乳酒も。主食は米と麦、芋、コーリャン。他には大豆もよく食べられる。野菜や果物も実によく食べられる。宗教的なタブーが少ない為か肉類は牛や豚、羊、山羊、馬の他には魚等の魚介類、鯨等。その他には鳥や爬虫類、両生類、昆虫も好まれる。特に爬虫類は人気が高く鰐や蜥蜴、蛇、恐竜も食べられる。煮たり焼いたりとメニューも豊富であり各国のそれぞれの料理方法で食べられる。その為連合全体の食文化は極めて発達している。香辛料や調味料も実に豊富である。嗜好品としてコーヒーや茶、煙草が多い。麻薬は全ての国において禁止されている。だが犯罪組織が密売していることが多い。ネットはかなり発達しマスメディア以上の発言力を持っている一面もある。そのマスコ

ミも複雑に分かれており各種の業種ごとのメディアもある。また同性愛に関しては極めて寛容な土壌がある。

軍は設立間もないがかなりシビリアン＝コントロールが念頭に置かれている。だが政府による一方的な統制ではなくそこには議会の意見も入る。議会が軍の意見を聞き、政府をチェックするという形になっている。またそれぞれの国も小規模ながら軍を持っている。主に治安維持用でありこれは国軍と呼ばれている。

議会は基本的に二大政党制であるが出身国の意向がそれぞれの議員に影響することも多い。設立から中央集権か、地方分権かで対立がある。双方の綱引きが連合の歴史であると言える。だがここで重要なのはこれは開拓にも大きく影響しているということである。開拓にも波があり、積極的に行われる場合とそうでない場合がある。時代によってこれは大きく違ってきているのである。

流さの尺はメートル、キログラムである。これは全ての国で共通である。

法律は中央政府の方と各国の法があるが中央の法が優位であるとされている。

外交は中央政府に外務省が存在し各国と交渉を行っているが各国政府もそれぞれ外務省を持っている。だがこれは連合内の国々の間で行われている外交である。中央政府は時としてこれの調整も行う。なお連合は時として神聖ローマ帝国と揶揄されるがこれは中央の力が弱く諸国の力が強い為である。

連合の者の体格は他の勢力と比してかなり大きい傾向にある。これは彼等が豊富な食べ物がある中におり、かつ多量に栄養をとる為である。その為全体として一メートル九十を越す者が多い。

スポーツは様々なものが執り行われており野球も盛んである。だが競技人口が多い為野球やサッカー、バスケ、バレー、ラグビー、アメフト等のプロスポーツリーグは実に多くの団体が存在する。また格闘技も盛んである。剣道や柔道といった武道もある。オリンピックは連合だけで行われている。エウロパの国々は除外され、エウ

ロパはエウロパで行っているのである。マウリアは参加している。だがサハラ各国は参加していない。戦争中だからである。

軍隊も含めてその技術力、科学力は高い。これはその豊かな国力と人材が背景にあると言っていい。これにおいてエウロパは大きく劣っている。

## 設定資料集二

### 連合中央政府

議会、裁判所と三権分立の関係にある。特徴としては議会とは緊張関係を保ち、その政策をチェックされるというところである。大統領が閣僚及び主要なスタッフを任命するスポイルズ＝システムをかなり採用している。これは連合全体に顕著である。だが同時にメリット＝システムも採用しバランスを保っている。

閣僚は総理府にいる首相の他に厚生省、商務省、財務省、国防省、外務省、内務省、開拓省、交通省、労働省、教育省、エネルギー省、科学省、農業省、環境省がある。省庁もこれに准ずる。なお大統領府も存在する。このうち国防省は新設である。席次も決められている。国防省の位置はその中でも高い。

### 連合議会

二院制である。だが実質的には参加各国の首脳会議が上にある為3院制となっている。下院は二千人、上院は一千人となっている。各国から選挙により選ばれる。下院は人口により、上院はそれぞれの国から一定の割合で区分され選ばれる。保守派と改革派の二大政党があり、その中でも細かい勢力区分が存在する。そこに参加各国の思惑も入りかなり複雑な状況が続いている。ロビー活動も盛んである。

### 中央裁判所

連合中央政府の裁判所である。その法は中央法と呼ばれ各国それぞれの法に優越する。権威は各国の裁判所より上位であるとされている。また連合の刑罰はかなり厳格である。とりわけ凶悪犯に対する処刑は酸鼻を極めることで知られている。過失犯には寛大だが確信犯に対しては容赦がない。死刑も極めて多く公開処刑や実況中継

も普通である。

中央軍

新たに設立された連合政府直轄の中央軍である。その規模は九十億人、三千個艦隊を擁する人類史上最大の軍隊である。各国の軍隊を合併して作られたものであり急激な各種の整備が急がれている。最高司令官は大統領であり極めて厳格なシビリアン＝コントロールに置かれている。だがそこには議会のチェック等政府の暴走を止める機能も備わっている。また軍人の地位も保証されており給料や各種の保険、保養も整っている。また艦内や営内での設備も充実が図られている。これは人材を確保する為の魅力化対策である。完全な志願制である為そうしたことに気配りをしなくてはならないのである。制服は兵士は黒地のセーラー服、下士官は黒いスーツにネクタイ、白いカッターと帽子、将校は下士官の軍服に裾に金色のモールが付き帽子の顎止めが黒から金色になる。また戦闘中は戦闘服を着る。これは兵士及び下士官は青、将校は紫である。言うならば作業服であり動き易くなっている。兵士及び下士官のものはつなぎのものも存在する。

この軍服及び戦闘服は連合軍設立以前より殆どの国で採用されていたものである。軍服のデザイン自体は連合各国の間でそれ程変わりはなかった。ただ階級やそれを表す階級章の違いがあった。だが細部以外の違いはそれ程なかった。ただし日本等数国はそのデザインも大きく違った。かっての日本軍は黒に金であったが詰襟であった。これは君主制の国家ばかりでありこれで共和制と君主制を分けることもできた。なお連合各国において上級大将がいた国はない。そうした意味でおおむね連合各国は統合できる土壌があったと言える。なお連合軍設立の際今の軍服に統一された。詰襟の軍服はこの時になくなった。

連合軍の階級

兵士
三等兵
二等兵
一等兵
上等兵
兵長

下士官

伍長（四等～一等）
軍曹（四等～一等）
第一軍曹（四等～一等）
曹長（通常、上級、最上級、連合軍付最上級）

将校

准尉（士官候補生はこの階級に遇せられる）
少尉
中尉
大尉
準佐
少佐
中佐
大佐
准将
少将
中将
大将
元帥

特徴としては下士官の階級が細かい。また上級大将は存在しない。元帥は非常に少なく三十人程と定められている。

艦隊編成及び艦種

ティアマト級巨大戦艦がそれぞれの艦隊の旗艦を務める。その下にそれぞれの艦艇が配属されている。一万隻を基準として編成されている。

戦艦、高速戦艦、空母、重巡、軽巡、砲艦、ミサイル艦、護衛艦、駆逐艦、パトロール艦が戦闘用である。このうちパトロール艦は艦隊には組み込まれず領域の巡回や護衛が任務である。補助艦艇としては以下のようなものがある。

掃海艇、掃海母艦、揚陸艦、補給艦、輸送船、病院船、工作艦等がある。艦載機は他の国のそれに比べて多い。

艦載機は戦闘機、攻撃機、爆撃機、そして無人の偵察機がある。全体的に連合軍の艦艇及び艦載機は攻撃力、防御力、生存力、ダメージコントロール、電子設備等に重点が置かれている。艦載機はこれに加えて運動性能も重視されている。船足は速くはない。これは陸上戦力にも言える。

陸上戦力は装甲車、戦車、砲、ミサイル車等がある。これを率いるのが移動要塞である。

軍の教育体系

士官学校は各国にあったものをそのまま使っている。よって無数に存在する。また入隊経路は士官学校の他に一般大学から入る幹部候補生、二年で下士官になれる各種専門下士官候補生、三年から七年で下士官になれる下士官補、一般兵士等がある。なおパイロット候補生は士官に任命される。

軍の単位

一個艦隊約一万隻を基準とする。それぞれの艦の艦長はおおむね

中佐が務める。大佐は十隻からなる部隊の指揮官、准将はそれが十個集まった百隻からなる小艦隊の指揮官、少将はそれが十個、すなわち千隻の分艦隊司令官である。中将が艦隊司令を務める。

艦隊が十個集まったものを軍団という。これは大将が指揮する。これが十個で軍、百個艦隊である。これも指揮は大将である。大将といっても順位があり、これに基づく。それが三つで一個の区の軍となる。三百個艦隊でその単位となる。これの総指揮官は元帥である。

連合軍はその防衛区分を十個に分けておりそれぞれに三百個艦隊を配している。そしてそれぞれの地区に艦隊司令長官と各軍管区の司令を置いている。これの階級は共に元帥である。

連合軍の元帥は制服組のナンバーワンである統合作戦本部長をその第一とする。それから宇宙艦隊司令長官、参謀総長、統合作戦本部次長、後方支持部長、情報部長、教育総監、技術部長、陸戦総監、航空総監と各軍管区の艦隊司令長官と司令が任じられる。計三十人と決められている。大将の数に比して元帥の数は少ない。その為ここでも大国の強引な人事への介入が見られる。

また連合軍の元帥は単なる階級なのであり特に特典等はない。エウロパの様に腰に剣を帯びたり元帥府を開いたりできるようなものではない。

連合軍の軍律

かなり厳格なものとなっている。違反者にはそれなりの罰が待っている。だがそれ以外は往々にしてゆるやかである。また訓練も何処かのどかであると言われることが多い。ここでも志願制の軍隊ということが影響し激しい罵声や体罰といったものは禁止されている。軍律以外はかなりゆるやかであると言っていい。だが規律のとれた軍隊であり、一般市民への不心得な行動は殆どないと言っていい。

だが武士道や騎士道といったものはない。あくまで職業倫理である。連合では軍人は職業の一つに過ぎないとの考えが強い。

また食事は兵士も提督も同じものを同じ食堂で食べている。こうした面での差別化はない。食事は無料である。また食べ放題でもある。営内及び艦内は禁酒である。また一人一人に個室も用意されている。居住環境にも気を使っている。ただし三等兵と元帥ではその部屋にはそれなりの差がある。また若い兵士は士官室係をやらされる場合もある。だがこれは原則としてそのマークが存在する。人が少ない場合の当番のようなものである。先任下士官室といったものもある。

参加国

アメリカ、中国、日本、ロシア、カナダ、メキシコ、オーストラリア、ニュージーランド、タイ、ベトナム、インドネシア、フィリピン、マレーシア、シンガポール、ブルネイ、ミャンマー、カンボジア、ラオス、パラオ、モンゴル、ウクライナ、リトアニア、ラトビア、エストニア、ブラジル、アルゼンチン、チリ、ペルー、ベネズエラ、キューバ、南アフリカ、エチオピア、イスラエル、トルコ、韓国、台湾、ツバル、二ジェール等三百国。

中央警察

内務省の管轄下にある。各国に立ち入り捜査が可能である。

連合の学校制度

各国で義務教育が施されている。幼稚園は義務教育ではないが小学校から高校までが義務教育とされている。大学と大学院がその上にある。大学院に通うのは研究者が多い。また各種の専門学校も存在する。軍の士官学校は大学扱いとなっている。学制は国によって異なる。六・三・三の国もあれば六・五・三の国も存在する。その辺りは国によって違う。一年のはじまりも国や星によって違う。識字率は一〇〇となっている。これはエウロパやサハラ各国でも同じである。だが大学進学率は五〇にいくかいかないか位である。大学

の学費は決して高くはないがそれぞれの進路の選択によって行くか行かないかが決められるのである。

連合の人種構成

かなり雑多でありかつ混血が進んでいる。純粋な白人や黒人、黄色人種といったものは殆ど見られない。その為目の色が青いアジア系の者や肌が黒くとも白人の顔を持つ者も普通にいる。フェニキアやヒッタイトといった古の国家の末裔であると主張する人々もかなり混血が確かなのも事実である。そうした意味で人種差別の問題はクリアーされている。というよりも差別のしようがないまでに混血が進んでいるのが現状である。

連合の家族制度

一夫一妻制が原則。イスラム教徒も存在するが諸般の事情で一夫一妻の場合が殆どである。これにはイスラム社会独特の結納の豪奢さや現実的に公平に複数の妻を愛することの困難さ等がある。

離婚もある。また共働きもある。この辺りはその家庭による。ただし二十世紀と比べてかなり男女同権の意識がはっきりとしており法整備も整っている。ただしそれは女尊男卑でなければ男尊女卑でもない。これにクレームをつける女尊主義者や男尊主義者もいるにはいるが。

それぞれの家庭には子供が数人いることが多い。恋愛結婚や見合い結婚が殆ど。核家族である場合が多いがそれでも子供は多くなっている。育児費は二十世紀のそれと比べると産業の発展等でかなり安くなっている。その為子供を多く持つことも可能になっている。共働きでもベビーシッター等に任せる場合が多い。これもまた産業となっている。連合は多産が多く各国で多産に対して奨励が為されている。これは開拓地への開拓や国力の伸張の為の政策の一環である。なお社会保険制度は二十一世紀からのそれをさらに発展させた形となっておりそれを主とする企業も多い。

例外的に連合内の王室は恋愛結婚や見合い結婚は殆どない。とりわけ日本のように歴史が長く宮内関係が堅い国では毎回それで揉め事となっている。結婚相手にも困るのである。多くはそれぞれの王家や名家から迎える。

連合の娯楽・風俗

実に多い。各種スポーツの他テレビゲーム、音楽、遊園地等のレジャー施設、スポーツ観戦、そしてギャンブルや風俗等もある。女性や同性愛者向けの風俗も存在する。他には漫画や小説等も多い。インターネットもかなり発達している。なおマウリアの映画も入ってはいるがカルトな評価に留まっている。理解不能という意見が多い。

音楽は多彩である。クラシックもあればロックやバラード、パンク、ヘビメタ、ジャズもある。またそれぞれの国の音楽もよく知られている。古楽器を使ったものもある。

治安

宇宙海賊やテロリストに悩まされている。またこれ等の犯罪組織を一部市民団体やマスメディアが擁護していたり、最悪の場合結託していたりという事態が起こっている。これへの対処が連合中央警察や連合中央軍設立の理由ともなった。この為惑星それぞれの防衛は堅いものとなっている。人工衛星や基地等である。宇宙空間の航行に際しては中央軍設立までは用心棒を雇うことすらあった。危ない宙域は徹底的に危なかった。これは時代によっても、場所によっても違っており一概には言えないことではあった。

中央警察と連合軍の設立以後は治安がかなりよくなったと言える。やはりそれぞれの国家の警察や軍だけでは治安の維持に限界があったということになる。また災害救助等にも軍は役に立っている。

# 設定資料集三

エウロパ

かってのＥＵ諸国をそのはじまりとする。欧州諸国により結成されておりその人口は一千億となっている。人種構成はその全てが白人となっている。ハンガリーやフィンランドはアジア系にルーツがあるがそれでももうその骨格等がコーカロイドのものとなっている。ただしかってのソ連圏の国々、バルカン半島の多くの国、そしてフィンランドは参加していない。理由は後述。

建国以来連合とは激しい対立関係にありブラウベルグ回廊を挟んで対立関係にある。だがバチカンがエウロパにあることから連合への工作は続けている。またこれにより多大な成果も挙げている。

そのはじまりはハインリッヒ＝フォン＝ブラウベルグにある。オーストリア生まれのこの人物によりそれまで環太平洋諸国に押されっぱなしであった欧州は息を吹き返した。そしてかっての自信を取り戻したのである。彼はＥＵを根本から作り変え、それまでの合議制の強いものから国家元首への権力が強いものへと変えさせた。これによりそれぞれの国々の政府は形だけのものとなり国家元首である総統の力が強くなった。同時に貴族制度もそれまで弱まっていたのが復活していった。これには元々根強く残っていた貴族主義がかなり影響している。首都はオリンポス、かってギリシアの神々がいた山の名をその首都に冠したのであった。なお議会は二院制である。平民の庶民院と貴族の貴族院である。

宗教はキリスト教がある。カトリックとプロテスタント、そしてギリシア正教がある。ギリシア正教の一派であるロシア正教はロシアが連合に参加している為存在しない。そしてギリシアと北欧の神々が復権し同時に信仰されている。バチカンはこの時代も存在する。勢力はやはりと言うべきかかなり大きく政治的な地位もある。

信仰であるがギリシアと北欧の神々への信仰はわりかしはっきり

としている。ゲルマン系が北欧の神々を信仰し、ラテン系がギリシアの神々である。星系の多くもこの神々の名が冠されている。スラブ系はその人によって違う。ゲルマンの血が濃い者は北欧の神々を信仰していたりする。ユダヤ系はイスラエルが連合に入った時に全員そちらに行ってしまっている。それまでの差別や迫害を考えるとこちらの方がよかったという考えもないわけではない。だがロマニは存在している。彼等の国は連合に存在している。

オーストリア等にかっての国王が復権しているが皇帝はいない。強いて言うならばエウロパ総統が皇帝か。連合の皇帝とエウロパの皇帝はまた違うのである。彼等は自分達をローマ帝国の復権者と任じているふしがある。その為皇帝は存在しないのである。エウロパにおいて皇帝とはローマ帝国の継承者なのである。連合のように二人もいていいものではないという考えである。そうした意味で西ローマ、東ローマといった概念は消えている。正確な意味での欧州の後継者となっているのである。

生活は豊かであると言っていい。ただし貴族と平民では食べるものが違っている。その為平均寿命等は同じでも体格が違っている。貴族の方が大きい。食べるものは二十世紀の欧州のそれからあまり変わってはいない。連合のように昆虫や爬虫類、両生類等は食べない。ただし魚類はよく食べられる。食事はフォークとナイフ、スプーンを使って食べる。

資源も豊かであるがその領域が限られている為常に資源や人口の問題に頭を悩まされている。サハラ北方への侵攻もこうした問題を解決する為である。

北と西は何十万光年も続く果てしない空間地帯である。従ってそちらへの進出は不可能となっている。そして東にはブラウベルグ回廊を挟んで連合がある。南はサハラとなっている。そこに総督府を築き進出を進めている。そこにいるサハラの者達を追い出しエウロパの者を移住させる。これにより難民問題も起こっておりサハラ各国からは目の敵にされ、連合からは批判の口実とされている。

法治主義国家であるがその刑罰は連合のそれと比べるとかなり穏やかである。死刑も縛り首か電気椅子となっている。死刑廃止論も起こっている。これを根拠に連合を批判する場合も多い。

科学力、技術力は連合と比べるとかなり劣っている。それが彼等のコンプレックスの一つともなっている。だが極端なレベルではない。しかしそれが兵器にも表われているのも事実である。

## 貴族制

エウロパの特色の一つである。各国の王室等が爵位を与えている。大公から公爵になり候伯子男の五つの爵位がある。その下に騎士や紳士等も存在する。他には辺境伯といった爵位もある。

元々ヨーロッパであった時代から貴族主義は根強く残っていたがそれが復活したのである。イギリスではサー、フランスではド、イタリアではデル、スペインではドン、ドイツではフォン、オランダではファン等とそれぞれの貴族を現わす冠称がある。

貴族には身分の他にも特典があるが彼等に対しては法はより厳しく適用される等の処置がある。また彼等は平民に対して法の根拠なくして危害を加えることは許されていない。法治主義は徹底している。

そして貴族が貴族である所以として『高貴なる者の義務』『騎士道』という考えがある。どちらも貴族達に厳しく教育されているものであり彼等はこれを以って貴族となっている。

## 政治制度

連合と同じく議会制民主主義であるが貴族制と混ざりいささか独特のものとなっている。また総統の権限が強く中央政府の閣僚は総統が任命する。そして総統の発言力が非常に大きい。時として議会を超える場合もないわけではない。

各国にも政府があるが連合程強くはない。また軍は中央政府に直轄している。最高司令官は総統であり軍務大臣は文官がなる場合も

あれば武官がなる場合もある。だが現役武官が閣僚となれるのはエウロパの大きな特色の一つとなっている。

エウロパ軍

その数は通常は二百個艦隊、人員にして三億かその程度となっている。将官の階級が多いのが特色である。貴族は必ず将校となっている。また士官学校も貴族が多い。だが平民に対して門が閉ざされているというわけではない。エウロパにおいては責任ある仕事は貴族がその責を負うべしという考えがある。それに従っているだけである。

総督府にも軍が派遣されており常に戦っている状態である。また騎士団も存在する。

軍服は兵士や下士官は黒地に赤い軽い装飾が入ったものである。将校は黒地に赤と銀の装飾が入っている。詰襟型であり首をカラーで守る形となっている。貴族のそれはどちらかというと外見を重視していると言っていい。これは階級によって大きく変わる。尉官の間でも変化があり、佐官、そして将官になるにつれ豪奢になっていく。とりわけ元帥、エウロパ元帥のそれは極めて豪奢なものとなっている。

エウロパ軍の階級

兵士
三等兵
二等兵
一等兵
上等兵
兵長

下士官
伍長

軍曹
曹長

将校
准尉
少尉
中尉
大尉
準佐
少佐
中佐
大佐
准将
少将
中将
大将
上級大将
元帥
エウロパ元帥

将官の階級が連合よりも多い。また将官はケープが着用される。大将以上はこれがマントになり元帥以上には腰に剣を帯びることも許される。元帥は連合と比べてかなり多く時として百人近くいる場合もある。これも貴族制故である。だがエウロパ元帥は数人しか存在しない。

軍の単位

連合軍と同じく約一万隻を以って一個艦隊とする。艦種は戦艦、高速戦艦、空母、駆逐艦、巡洋艦等。連合と比べるとあまり多くはない。そして輸送艦や揚陸艦等も連合のそれと比べるとかなり小型

である。全体的に艦艇は連合のそれと比べるとかなり小さい。これは連合の艦艇がかなり大型であり駆逐艦でエウロパの軽巡と同じ位の大きさと装備を持っているせいでもある。攻撃力や防御力、電子設備等でも連合が圧倒している。だが速度だけはエウロパ軍の方が勝っている。また陸上戦力として戦車や装甲車もあるがこれも連合のそれと比べると攻撃力、防御力、生存能力でかなり劣っている。

艦長は連合と同じく中佐が務めることが基準である。十隻単位であると大佐、百隻で准将、以後は連合とおおよそ同じとなっている。

上級大将及び元帥がかなり多く彼等が複数の艦隊を指揮する場合も多い。エウロパは元帥が多くそれだけ将官も多い。ここが連合とはかなり違う点である。

エウロパ軍の軍律

騎士道をその規範としている。主に将校を念頭に置いたものであるが兵士にも当然ながら適用される。だがエウロパ軍は貴族の軍隊であり彼等が主役である。彼等はあくまで騎士道をその心の拠り所としているのである。

治安

連合等と比較してかなりいいと言える。宇宙海賊やテロリストもいるにはいるがその数はかなり少ない。社会的には熟成しており、また中央政府の権限が強いせいでもある。少なくともこの面においては他の勢力にひけをとらない。

バルカン問題と連合による買収事件

共に連合とエウロパにとってその仲がさらに険悪化した事件である。かってバルカン半島、とりわけ旧ユーゴスラビア地域の扱いに苦慮していた欧州各国であったが、それを太平洋各国が取り仕切り瞬く間に収めてしまった。そしてなおかつアルバニアやブルガリア、トルコまでをその勢力圏に組み入れてしまったのである。また当時

のフィンランドが連合寄りであったのを見て彼等を買収して連合に取り込んでいる。これに対して欧州は何もできなかった。その結果がブラウベルグの誕生と連合とエウロパの対立となったのである。またこの際マルタやキプロス等の地中海の島国も連合に入った。そしてロシアの自治共和国がそれぞれ名目上は独立して国連に入りその数で欧州をさらに追い込んでいっていた。

# 設定資料集四

マウリア

かってのインドを母体とする。極めて独特な文化と文明を持っている。その人口は二千億と公表されているが実際はこれより三百億は多いと言われている。これはこの国が人口統計等にあまりとらわれていないせいでもある。インドの頃からあまり変わっていない考えではある。

人種構成は一応は白人ということになってはいるがこれもインドの頃から変わらずアジア系との混血が見られる。だがその骨格や顔立ちは白人のそれである。ただし肌や目、髪の色は違っている。黒くなっている。服装もインド時代の頃から変わってはいない。食事もそうである。やはりカリーと言われる香辛料を大量に使った独特の味付けである。ただしこの時代はスプーンやフォーク、ナイフ等を使う。牛肉はあまり食べられない。マウリアに多いヒンズー教徒達が牛を聖なる動物としているからである。ただし水牛は食べてもよい。乳製品も多い。その他にはジャイナ教徒は完全なベジタリアンであり、イスラム教徒は豚を食べない。そうした戒律は連合と比べると厳しい。だが基本的には戒律に触れないものは食べてもよいとされる。その為カンガルーや爬虫類、両生類、魚類等といったものもよく食べられる。だが味付けはマウリアのカレーである。また鶏肉が好まれる。

国家形態は大統領制であり二院制の議会もあるが藩王もおり、それぞれの部族の長といったものも存在する。連合やエウロパと比べるとかなり複雑になっている。またカースト制は廃止はされたがそれでも影響は残っている。その為軍人になるのはクシャトリア階級にあるとされる者がなる場合が多い。言語はヒンズー語。ただし他の言語もある。

カースト制が残っているのは事実であるがこれが秩序の維持にも

ある程度は役立っている一面がある。職業等の分化といった側面である。おおよそ連合やエウロパとは全く違った概念が動いている。また彼等の時間の概念もかなり特殊と言えば特殊である。その為か連合の者の多くはマウリアを異次元空間のように思っている。

宗教はヒンズー教が多い。だがイスラム教もあればジャイナ教、ゾロアスター教もある。なおゾロアスター教は連合においても存在する。マウリアにおいては神々は連合やエウロパのそれよりもかなり身近にある存在と考えられている。そして信仰心も篤い。といってもやはり連合やエウロパから見れば特殊に映る。

礼装はドーティ。女性はサリー。また動物の皮は不浄とみなされることが多い。マウリアは穢れの思想が強く、様々な宗教的制約が存在する。

領土は広いがあまり積極的に惑星開発等は行ってはいない。南方に広大な未開発の宙域があるがそこへの進出もそれ程積極的ではない。発展は連合と比べると緩やかなものである。だが人口は多く人類の国家では最大である。この為マウリアを人類社会で最大の国と評価する者もいる。実際に国力では連合のどの国よりも高い。また軍事力も一国家としては最も高い。ただし技術では連合にやや劣る。ただしエウロパよりは上である。

マウリアは連合との境を無数のアステロイド帯や磁器嵐、超惑星等によりその道の多くを阻まれている。この為通商はそれぞれの道を使って行われる。だがここには海賊も出ておりそれで問題も起こっている。またサハラ各国との国境も大体同じようなものである。この為防衛にはあまり警戒を払ってい及び主要な官僚は主席が選ぶ。ただし連合中央政府や各国と比べるとメリットシステムが強い傾向にある。とりあえずはカーストにとらわれない人材登用を心がけてはいるがそれでも偏りがあるのもまた事実である。

カースト制

マウリアの象徴の一つとも言われている独特の制度である。二十

世紀から否定されてはいるが今でもその名残は残っている。バラモン、ヴァイシャ、クシャトリア、シュードラ、そしてアウトカーストであるダーリット、所謂ハリジャンの五つから成る。バラモンが僧侶、ヴァイシャが騎士、クシャトリアが商人、シュードラが平民と考えるとよいと言われている。だが実際には三千ものカーストがありかなり複雑となっている。またこれにより職業の分化、棲み分けも行われており一概に悪とは言えないのが実情である。

マウリア軍

総兵力にして二百個艦隊、そして四億人と人口比から見れば決して多くはない。これはマウリアの治安が比較的安定しているせいでもある。最高司令官は国家主席であり国防省の下にある。やはりシビリアン＝コントロールが為されており国防相は文民、そして制服組のトップは統合作戦本部長である。これは連合軍と同じである。志願制であるがカースト制の影響で旧クシャトリア階級からの志願が多い。その為士官にはクシャトリアの者が、下士官及び兵士にはその従者達といった状況になっている。ただし志願制であるのは事実であり他の階級の者も軍に入ることは可能である。だが主流ではないのもまた現実である。

施設や設備は連合程ではないが整備が計られている。しかし連合のように派手ではない。ここには文明的な相違というバックボーンの違いが存在している。

制服は緑のツーピースにネクタイである。将校には腕に白いモールが巻かれる。これにより階級も示される。これは下士官も兵士も同じツーピースとなっている。また戦闘服も存在するがこれは将校も下士官、兵士も同じダークグリーンとなっている。当然のように񎼣ぎのものも存在する。

マウリア軍の階級

兵士
三等兵
二等兵
一等兵
兵長

下士官
伍長
軍曹
第一軍曹
曹長

将校
准尉
少尉
中尉
大尉
準佐
少佐
中佐
大佐
准将
少将
中将
大将
元帥

おおむね連合と同じである。ただし下士官は細分化されていない。
元帥は数人程度である。やはり数はそれ程多くはない。

艦隊編成及び艦種

おおむね連合と同じであるが巨大戦艦といったものは存在しない。これは技術や戦術思想の相違故である。艦隊の旗艦は戦艦や高速戦艦が務めることが常である。

編成はやはり一万隻からなる艦隊を基準とし、十個艦隊で軍団、十個軍団で軍となる。軍は二つ存在するということになる。連合と違うのは軍司令官が元帥であるということである。

陸上戦力の兵器の種類も連合と同じであるがやはり移動要塞は存在しない。

軍の教育体系

やはり士官学校が各地に存在する。入るのはクシャトリア階級が多い。また各種学校も存在している。幹部候補生や下士官候補生、下士官候補士、一般兵士といった区分も存在している。やはりパイロットは士官候補生となっているのも同じである。士官学校は上級のクシャトリア出身者が多く、下士官候補生や下士官補、そして一般の兵士になるにつれカーストが低くなっていくといったことが見られる。無理強いはないがここでもしきたりが生きていると言っていい。

マウリア軍の軍律

おおむね連合軍と同じなようだが根幹となるものが違う。マウリア軍はクシャトリアとしての意識がある為武人としての考えが連合と比べて強い。またそこには宗教的な色彩も強いものとなっている。この場合ヒンズーとしてのクシャトリアの意識とムスリムのアッラーの戦士としての意識等実に多くの意識が見られる。多宗教国家であるマウリアならではの事態となっている。連合も多くの宗教があるが彼等と比較して宗教意識が強い為にこうした状況となっているのである。

食事は将校も下士官兵士も同じものを同じ食堂で採る。ただし営

内飲酒は不可である。ただ先任下士官の力はそれ程ではなく士官室はあっても先任下士官室はない。

中央政府と地方政府

統一国家であるが実質的に連邦制となっている。国家主席と二院制による議会からなる中央政府の他にも地方政府が多数存在する。ただしそれぞれの地方政府は権限は連合各国程ではない。また中央警察も存在している。連合中央政府よりも中央政府の統制は強い。特色としてはマハラジャという藩王がいる政府と知事がいる政府があることである。また部族の長もいる。そうした意味で非常に多彩な地方政府を多数持っている。

学校制度

全体的にエウロパのものに似ている。ただし貴族制度は存在しない。これは十九世紀から二十世紀にかけてイギリス統治にあったのと宇宙進出期に連合のものをモデルにしようとしたがどうにも多様でありどれを学んでよいのかわからず、仕方なくしたとも言われている。ただし誰でも学校に入られる。そうした意味では連合とエウロパの折衷であると言える。学校ではカーストは存在しない。だがこれも建前であり実際にはやはり残っていたりする。

識字率は一応は一〇〇パーセントとされているがこれはあくまで統計上の人口においてである。統計にのっていない者のことまではわかってはいない。

家族制度

大家族が多い。家で最年長の者を頂点とする大家族主義である。一応一夫一妻制とはなっている。だがムスリムはまた別の場合もある。宗教によって違う場合もある。基本的に法律では一夫一妻とはなっているがマウリアでは宗教の戒律が法よりも優先される場合が多くあながちには言えない状況となっている。

結婚は家同士のものであるという意識が強い。また婚姻の際の妻の家から夫の家への結納もある。ただしこの時代では夫の家から妻の家にも結納が贈られる習わしとなっている。お互い様というわけである。離婚は連合やエウロパと比べて少ない。共働きは多い。

宗教的な理由からか連合から見れば男尊女卑な面が多い。しかしこれもやはり連合から見た一方的な視点である場合が多く連合から来たフェミニズムの団体の発言や行動が問題となる場合も多い。これは一見すると連合側が正しいが実際には一概には言えない状況となっている。連合側のマウリアの文化や文明への無理解が顕著に見られることの一環でもある。何もわからない者達が自分達の狭い価値観で騒いでいるということも見られる。ここに異文化との接触の難しさの一つが現れていると言ってもよい。

マウリアの婚姻の特色として同じカーストの間でしか婚姻は許されていないという考えがまだ根強いということである。これもまたマウリアの特色である。交際も許されてはいない。法律ではこれも否定されているがやはり残っているのである。そうした意味でカースト制度は根深いものがあると言える。

社会保障制度は連合より少し落ちる程度である。それを専門に扱うカーストもまた存在する。

治安

連合と比べるといい。やはり安定している社会であると言える。宇宙海賊もかなり少ない。だが連合との境にあるアステロイド帯等に多くの海賊が潜伏しておりこれが問題となっている。サハラとの境にも多少の兵が置かれているがそれ以外は極めて落ち着いている。

警察組織

中央警察と各地方政府の管轄下にある地方警察から成る。かなり効率的に機能しておりその治安維持に大きく貢献している。警察官にもカースト制が大きく影響しており世襲的なところがあるのもま

た事実である。

# 設定資料集五

## サハラ

かってのアラブ諸国がそのはじまりである。だがこの地域は地球にあった頃から戦乱が絶えず、宇宙に進出してもそれが続いていた。結果最初にあった国々は姿を消し多くの国が割拠し興亡する戦乱の歴史を歩んできた。

この結果惑星の開拓や産業の発展は他の地域と比べやや歪な形になっている。軍事関連が突出し、戦争に関する技術ばかりが発展してしまっている。人口は二千億である。だが長く続く戦乱の為人口は伸び悩んでいる。

人種構成はかってのアラブ人達そのままである。彫の深い顔立ちに黒い髪と瞳、そして浅黒い肌である。連合やエウロパから見ればそれは美貌に見えないこともない。精悍な顔立ちの者が多いとされている。身体つきは連合のそれと比べると低いがエウロパと同じ位と言ってもいい。決して体格では劣ってはいない。

服はアラブのものが残っている。そして同時に軍服や背広もある。女性は国によってはヴェールを被っている場合もあるが大抵はスーツ等普通の服を着ている。礼服としてはヴェールは残っている。宗教は言うまでもなくイスラム教である。だが連合のそれと比べるといささか原理主義的であり厳格なものとなっている。長い歴史の間でそれぞれ変質が見られる。しかしサハラのイスラムは本来のイスラムの正統後継者と思っていい。ただし様々な派がある。おおまかにスンニー派とシーア派があるが一概には言えなくなっている。だがムスリムであることには変わりがない。

国家は無数にあり、その数は時代によって違う。主に戦争の勝敗と権力闘争により国家が増減してきた歴史を持っている。それが一千年続き終わる気配はない。大国と小国の差は大きく、大抵大国が小国を属国としたり、武力併合したりしている。連合のそれと比べ

て小国の立場は遥かに過酷である。だがその大国も決して油断、安心できる状況にはないのがサハラなのである。あくまで弱肉強食の世界となっている。

国家形態は共和制の国家もあれば王制の国家もある。だがサハラを統一したものは皇帝、スルタン＝カリフになることが半ば暗黙の了解となっている。これはある預言者の言葉である。だがこれはムハンマド以前の名もない預言者の言葉でありその信憑性は薄い。だがそれでもサハラをまとめる者は皇帝になるべきと考えられている。

地理的には東西南北の四つのエリアに分けられている。東部はオムダーマンやミドハド等七つの国により構成されている。南部は小国が割拠している。東部が最も安定しておりサハラきっての大国ハサン王国が治めている。その下に多くの属国が存在している。北部は小国が割拠しており、そこにエウロパが侵攻し総督府を築いている。これはサハラにとって由々しき問題となっている。

文化、風俗はイスラムのままである。だがこの時代は飲酒は認められている。そしてナイフやフォークを使って食べる。食事は羊が最も高級なものとされ、豚は食べられない。連合各国のムスリムの多くがアッラーに謝罪してから食べるという形をとるのに対してサハラではそれはない。またコーランにないものは食べない。その為昔ながらの料理が残っている。香辛料をふんだんに使った料理で知られており、シーフードはあまり使われない。特に鱗のない魚は見向きもされない。こうしたところはユダヤ教と通じるものがある。なおユダヤ教徒は連合にいるが彼等との交流もある。ファーストフードやそうした食事は一般ではない。スローフードの風潮があると言える。そして動物の内臓は決して食べない。嗜好品は酒の他は煙草やコーヒーである。時としてこれ等に関して法学者達の間で論争が起こることもある。酒はワインが多い。

なおサハラでは同性愛はタブーとされている。これはイスラムの戒律による。その為連合やエウロパの同性愛を見て卒倒する者すらいる。

娯楽や風俗は基本的には連合やマウリアと変わりはない。だが他の文明圏に比べてストイックな傾向がある。スポーツも盛んだが商業化はそれ程ではない。

法律もイスラムのものが基調となっている。全てはイスラムにその規範がある。法学者も存在している。だが聖職者は多くの宗派で存在しない。シーア派の一派には存在する。

憲法はそれぞれの国によって異なる。その為一概には言えない。だがイスラム教の教義が根本にあるので基本は変わりはしない。王制であっても共和制であってもまずアッラーが存在するのである。

経済活動や貿易、開拓等は戦乱の為進んではいない。サハラは豊かな資源と土地に恵まれており、その潜在力は高いとされているが戦争のせいでそれを生かしていない。東部はハサンが比較的安定し、連合やマウリアとも交易を行い、サハラ各国との中継貿易で栄えているがこれは例外と言ってもいい。技術力や科学力は軍事にのみ突出せざるを得ない状況となっている。

言語はアラビア語である。これは全ての国で使用されている。その為意思の疎通は容易な状況となっている。これとイスラム教が彼等の文明の象徴となっているのである。

また連合やエウロパ等と比べて宇宙地理は複雑な状況となっている。アステロイド帯やブラックホール、磁気嵐、超新星等がひしめいている。その為航行には非常な危険を伴う場合がある。その為サハラの宇宙船乗り達はかなりの技量を持っているのである。

# 設定資料集六

## 軍隊

サハラにおいては軍は非常に大きな意味と存在を持つ。戦乱に明け暮れるサハラにおいては軍こそが最も重要な存在なのであり、その質と量こそが最も重要とされる。その為軍部が政権を担うこともある。多くの国で最高司令官は国家元首と定められている。だが中には軍を私物化している輩もいる。

軍服は各国によって異なる。詰襟のものもあればスーツのものもある。そして装飾がある軍隊も存在している。殆どの国で徴兵制が敷かれており、その数を維持する為に多大な努力が費やされている。だが実質的には選抜徴兵制である。優秀な人材はまず軍へ、というのがサハラの思想である。

そしてその訓練も連合と比べるとかなり厳しく、居住環境や待遇もかなり劣る。これは義務と考えられているからである。また軍に優秀な人材が集まり、そして発言力が大きいことからここから身を立てる者も多い。軍はそうした意味で登竜門ともなっている。

兵制自体は連合やエウロパと変わりがない。やはり一個艦隊、一万隻を基軸とし、そこから軍が考えられている。軍の力が強い国が多いせいか軍国主義的風潮も強い。これは全てサハラの置かれた事情からの必然であった。

また兵を求めるあまり傭兵が存在する。彼等は金で雇われており、その忠誠やモラルには疑問点が多い。その為時として掠奪や虐殺に走る。これが戦乱をさらに陰惨なものとしている。また宇宙海賊を兵に取り入れる場合もある。

## 軍の階級

国によって違いがある為一概にこれであるとは言えない。ここではオムダーマン共和国軍の階級を載せるものとする。

兵士
三等兵
二等兵
一等兵
上等兵
兵長

下士官
伍長
軍曹
上級軍曹
曹長

将校
准尉
少尉
中尉
大尉
準佐
少佐
中佐
大佐
准将
少将
中将
大将
上級大将
元帥

階級制度はどちらかと言えばエウロパのものに近い形となっている。オムダーマンは西方にある国でありそこでは第三勢力であった。だが近年アッディーン元帥の活躍によりその国力を著しく伸張させ、今では西方と南方を掌握している。サハラにおいてかなりの勢力を持つに至り、その動向が注目されている。

軍の教育体系

士官学校や教育隊、各技術学校等をその規範とする。その規律はイスラム教の教えが根本にある。そしてそこから軍人としての教育が行われている。

またか士官候補生や下士官補士といったものがある国もある。幼年学校がある場合も多い。これは多くの国で連合等と同じである。だが中にはそうした教育機関をあえて置かず、皆一兵卒からはじめ、そこから優秀な者を選抜していく国家もある。これもまた国によって違う。

軍規

コーランからはじまる。それに相応しくない行動はどの国でも厳罰の対象となる。戦乱が続く為かその軍律もまた厳格なものとなっている。それは連合のものと比べても遜色ない程である。むしろより過酷であるとすら言える。職業倫理というよりはかってのマムルークの様な武人としての意識が強い。ただしこれはイスラム世界独特のものであり、連合やエウロパにおいてはあまり理解されてはいない。

軍人としてのモラルは高い国が多い。だが傭兵隊はそうではない場合が多い。これが戦争における問題の一つともなっている。とりわけ傭兵の多い南部では深刻な問題を引き起こしている。

イスラム教

サハラをサハラたらしめていると言っていいものである。ムハン

マドによってはじめられた宗教でありこの時代においてもアラブをルーツとする者達の全てとなっている。

ユダヤ教、キリスト教とルーツを同じにする一神教でありその信仰形態は先の二つよりさらに純粋になったものと言っていい。アッラーを全ての中心に置き、コーランを絶対なものとしている。信仰は生活に順応したものであり、他の宗教の存在も認めている。だがイスラム教徒になった時の特典も示しており、ここで信者を増やしてきた。

戒律は正確には目標と言っていいものであり、決して厳格ではない。飲酒や豚肉に対してもである。豚肉が食べられないのは傷み易い為、犬の唾は狂犬病への恐れとその根拠は存在している。また妻は四人まで持ってもいいがこれは公平に愛さなければならず、また同時に戦災未亡人や孤児への救済策であった。妻を離婚することも容易であるが別れた妻の面倒は一生見なければならない。ムハンマドは女性の権利も認めていた。

連合においてもムスリムは多いが彼等はかなり寛容で、悪く言うならば本来の教えとはかなり世俗的でいい加減になってしまっているとも言われている。その証拠にムスリムであるが他の宗教の信者にもなっていたりする。キリスト教徒でもこれは見られるがこの場合は『最も信じている宗教』『第一に思う宗教』『心に本当にある宗教』と方便が取られている。サハラではこれはまず認められない。こうした連合の宗教観はサハラにおいては異常なものと映っている。だが一応神は信じているということで認められている。サハラで最も恐れられているのは無神論者である。最低限宗教を信仰していればよいとされている。

暦もムスリムのものが使われている。その為銀河暦よりもイスラム暦が使われる。

偶像崇拝はない。そしてメッカはハサン王国領に移されている。そこに一生に一度礼拝するのがムスリムの夢とされているのはこの時代でも同じである。

法律や刑法もコーランが基準である。死刑もコーランに乗っ取って行われる。その為古風な処刑が多いが連合のそれの様に意図的に残虐なものではない。連合の処刑はサハラから見てもやり過ぎとの意見がある。少なくともコーランのものではないとされている。

暦

サハラではヒジュラ暦が使われている。連合では銀河暦である。銀河暦は連合の他にマウリアでも使われている。エウロパでも銀河暦である。長さや重量はメートル法となっている。

学校制度

これも各国によって違う。ただ階級制度は無い為基本的に連合のものと似ている。小学校から高校までが義務教育であり、そこから大学、大学院となる。だが大学進学率は連合のそれ程高くはない。兵役に就く場合も多く、そこで技能を身に着けて職に就く者もいる。また士官学校や幼年学校が立身出世の登竜門とされている。

基本的に連合のそれと似ておりあまり際立った特徴はないと言える。だが学校で軍事教育が行われるケースが多く、それが大きな違いとなっている。

人種構成

アラビア人である。二十世紀のまま保たれている。これは彼等が独自で世界を築いてきたからである。連合に入った者もいるが連合から入った者はほぼいない。マウリアも同じである。その為アラブの血がそのまま残っているのである。黒い髪と瞳、彫の深い顔に浅黒い肌がその特徴である。

治安

残念なことに決してよくはない。これは戦乱のせいである。長引く戦乱がサハラ全体の治安を悪化させてしまっている。宇宙海賊が

跳梁跋扈し、傭兵達が掠奪を働き、それに便乗する輩もいる。彼等がサハラ全体の治安を著しく悪化させてしまっているのである。

また時と場所によっては異常な独裁者が出現していた国もある。そうした国では治安以前に異常な状況となっている場合が多かった。圧政や弾圧といったことも見られた時も多い。サハラはそうした意味で非常に不安定な状況が続いていると言って過言ではない。

家族制度

イスラムの教えに基づく大家族制である。妻は四人まで持ってもよいとされている。だが実際は富の関係で一夫一妻である場合が多い。だが夫のない者はすぐに妻に勧められるのがサハラのしきたりである。とりわけ戦災未亡人はその対象となっている。

夫を中心とする家族であるが、妻の存在は思った以上に大きい。四人いる場合はそれが公平となっているのである。嫡子は何番目の妻の子供かという問題ではなくその夫の何番目かの子供かという場合が多い。この時代は長子が家を継ぐ場合が多い。

育児は連合程産業化されていない。昔ながらの家族がマウリアと共に色濃く残っている社会である。

結婚は個人と個人のものというよりは家と家のūがりであるとみなされている。これもまたかってのアラブの部族社会やイスラム社会の名残である。

地理

サハラの宇宙地理は独特のものがあり、大きく四つに分かれている。東西南北の四つである。それぞれに地域性と言うべきものが存在している。

東部はサハラ第一の大国であるハサン王国が多くの属国を従えて治めている。サハラにおいては最も安定した地域であり、地形も他のエリアに比べて穏やかである。その為交易も盛んなのである。サハラでは豊かな地域でもある。

西部は大小七つの国家に分かれている。だが今はオムダーマンが大きく勢力を伸ばし統一せんとする勢いである。地形は東部よりは険しい。オムダーマン西方に広大な未開発の星系が多数存在している。だが戦乱によりそれには手がつけられてはいない状況である。

南部は最も地形が複雑となっている。まるで迷路の如くアステロイド帯等が入り組み、そしてブラックホールや超新星、超惑星がひしめいている。小国が乱立し、群雄割拠と言っていい。ゲリラ戦も盛んでここに攻め込んだ小国はその多くが地形とゲリラに悩まされ撤退している。南部には豊富な鉱産資源が眠っているがやはり戦乱により手がつけられてはいない状況となっている。やはり戦乱はサハラ全体の正常な成長の妨げになっていると言える。

北部はエウロパと境を接している。また地形も東部程ではないが比較的穏やかであり、そして小国が林立していた。エウロパはそこを衝いて侵攻し、総督府を築いて植民を行っている。これに対してサハラ各国は有効な手段を打てないでいる。サハラにとって深刻な問題となっている。

# 設定資料集七

## 連合、エウロパ構成国一覧

### 連合構成国

旧太平洋圏　六十四国

アメリカ　モンゴル　インドネシア　メキシコ
パナマ　アルゼンチン　ドミニカ　中国
ベトナム　フィリピン　グアテマラ
コロンビア　チリ　グレナダ
ロシア　タイ　シンガポール　サンサルバドル
ベネズエラ　ブラジル　バハマ　日本
ラオス　ブルネイ　ホンジュラス
ボリビア　キューバ　スリナム　韓国
カンボジア　マレーシア　ニカラグア　エクアドル
ハイチ　ガイアナ　台湾　ミャンマー
カナダ　コスタリカ　パラグアイ　ジャマイカ
ベリーズ　オーストラリア　キリバス　ソロモン
ツバル　トンガ　ナウル　サモア
ニュージーランド　バヌアツ　パプワニューギニア　フィジー
マーシャル　ミクロネシア　パラオ　アンチグア＝バーブーダ　セントクエリストファー＝ネイビス　セントビンセント及びグレナディーン　セントルシア　バルバドス
ドミニカ共和国　トリニダード＝トバゴ　バルバドス

アフリカ・中近東・インド圏　六十国

トルコ　イスラエル　モルジブ　モーリシャス
セイシェル　マダガスカル　コモロ　ジンバ

ブエ　キプロス　スリランカ　バングラデシュ　アンゴラ　ウガンダ　エチオピア　ガーナ　スーダン　カーボベルデ　ガボン　カメルーン　ガンビア　ギニア　ギニアザビオ　ケニア　スワジランド　コートジボアール　コンゴ　ザイール　サントメ＝プリンシペ　ザンビア　シエラレオネ　ジブチ　赤道ギニア　セネガル　ソマリア　タンザニア　チャド　中央アフリカ　チュニジア　トーゴ　ナミビア　ニジェール　ブルキナファソ　ブルンジ　ベナン　マラウイ　マリ　南アフリカ　モザンビーク　ボツワナ　モーリタリア　リベリア　ルワンダ　リソト　モロッコ　エリトリア　コンゴ民主共和国　セーシェル　ネパール　ブータン　西サハラ

ロシア圏・中国圏・アメリカ圏・日本圏　四十二国

ケベック王国　ビッグリバー連邦　チェチェン連邦　アステカ＝マヤ連合王国　ウイグル回教共和国　チベット教国　満州王国　アイヌ連邦　沖縄王国　イロコイ共和国　プエルトリコ　リトアニア　ラトビア　エストニア　ウクライナ　カザフ　ウズベク　トルクメン　カレリア　モルダビア　白ロシア　アゼルバイジャン　グルジア　アルメニア　キルギス　タジク　ロマノフ公国　ヤクート　ブリヤート　ツバン　コミ　バシキール　タタール　モルドバ　ウドムルト　マリー　カルミク　タゲスタン　コワンシー共和国　スー王国　ケルト合衆国　シャイアン共和国

バルカン・欧州系国家　十一国

フィンランド　ブルガリア　マルタ　アルバニア　マケドニア　コソボ　セルビアクロアチア　ボスニア＝ヘルツェゴビナ　モンテネグロ　スロベニア

上記の国で君主制の国家　二十一国

日本・タイ・マレーシア・ブルネイ・カンボジア・トンガ・エチオピア・レソト・モロッコ・スワジランド・ウガンダ・ブータン・ネパール・スー・ロマノフ・琉球・満州・ケベック・チベット・アステカ＝マヤ

新興国家

ビッグリバー連邦　アッシリア連邦　ヒッタイト王国　フェニキア　アルム王国　パルミラ連邦　カルタゴ共和国　他多数

かっての古の民族の末裔を自称する者達の国や完全な新興国家もある。

これ等の国々から編成される。合計三百国。

エウロパ構成国　二十八国

アイスランド　アイルランド　スコットランド　イタリア　オーストリア　オランダ　ギリシア　イギリス　サンマリノ　スイス　スペイン　チェコスロバキア　デンマーク　ドイツ　ノルウェー　ハンガリー　ウェールズ　フランス　ルク

センブルグ　ベルギー　ポーランド　ポルトガル　マルタ
モナコ　リヒテンシュタイン　ルーマニア　スウェーデン

王国
イギリス　スコットランド　オーストリア　オランダ　スペイン　デンマーク　ノルウェー　ルクセンブルグ　ベルギー　モナコ　リヒテンシュタイン　スウェーデン

連合、エウロパは以上の国々から構成される。マウリアは一国からなり、サハラは多くの国家が出来ては滅んでいっている。戦国の世の習いであろうか。

# 設定資料集八

第一部設定資料

人物編

アクバル＝アッディーン
　オムダーマン軍の若き軍人。黒い髪と瞳を持つ凛々しい顔立ちの青年。幼年学校卒業から軍に入りそこで頭角を現わしていく。後にサハラ、そしてアラブ人の歴史において最大の英雄の一人となる。

ムスタファ＝アジュラーン
　オムダーマン軍の将官。オムダーマンの宿将の一人。白い髪と口髭を持っている。バランスのとれた優秀な軍人。また人望も篤い。

イマーム＝ガルシャースプ
　アッディーンの副官。長身に茶色がかった髪と茶色の瞳を持つ美青年。安定感のある常識派。アッディーンの幕僚の首座として一同をまとめている。士官学校卒業。

ルクマーン＝ハイデラバート
　オムダーマン技術大将。彼の技術長官就任によりオムダーマンの軍事技術は飛躍的に上昇した。

フランソワ＝ド＝ラフネール
　欧州総統。フランス出身。弁護士出身の革新政党からの政治家。何処か宗教家を思わせる外見の持ち主。政治家として事務処理能力

に定評がある。ただし独創性には乏しい。

八条義統

連合初代国防長官。日本出身。純粋なアジア系の顔立ちの美男子。スラリとした長身の持ち主でもある。名門の出身であり軍人から日本の政界において活躍し若くして国防相となっていた。だが中央政府に招かれそこで初代長官に就任する。戦略と財政、政治的配慮と気配りに長けた政治家。ただし女性関係には疎い。歴史学を学んでいた。

ラゴス＝キロモト

連合大統領。下士官候補生から軍に入り政治家、そして連合中央政府大統領にまでなった人物。豪放磊落であり懐の大きい人物として知られている。筋骨隆々の黒人の巨人であり歳よりも若く見える。連合軍を設立し、八条を招いた張本人である。妻とは死に別れ家族は姉からもらった義理の娘だけである。

伊藤佐知子

日本首相。学者出身の政治家。小柄で黒く長い髪を持つ美人。学者出身ながら優れた実務処理能力と判断力を持っており連合内では『女狐』とさえ言われている。八条の師にあたり弟子を育てることを得意としている。政治家としてはかなり強かだが人間としては温和であり潔癖な人物である。

ソホラープ＝ムラーフ

アリー艦長。黒く濃い髪と頬髯を持っている。武骨な武人。

イマーム＝ハルドゥーン

ミドハド連合主席。六十過ぎの白髪の老人。老獪な政治家で権謀術数を得意とする。しかし軍人出身ではないので軍事には疎い。

スールフ
　ミドハド連合の提督の一人。

ヴォルフガング＝フォン＝モンサルヴァート
　ドイツの貴族の家の嫡男。金髪に青い湖の様な目、ギリシア彫刻の様に整った顔立ちの持ち主。エウロパ軍の若き名将。戦略家というよりは戦術家であり正面からの戦いを好む傾向にある。自らを軍人であり騎士であると考えるタイプの人物である。性格はプライドが高く高潔。よい意味で貴族主義者である。

マールボロ
　イギリス出身。エウロパ軍元帥。禿げ上がり、皺の多い顔立ちの人物。温和調整型の軍人である。軍人としての能力はどちらかというと軍政家のそれである。

ラフディ＝アッチャラーン
　タイ人。連合中央政府首相。実務派の政治家。痩せた小柄な人物。性格は温厚であるが時として峻厳な手段を用いることも厭わない。

マガバーン＝クリシュナータ
　マウリア国家主席。経営者から政治家になった壮年の男。浅黒い肌に彫の深い顔の持ち主。政治家としてはかなりしたたかであり自国の位置を認識したうえで動いている。

ヘンリー＝マックリーフ
　アメリカ合衆国大統領。金髪碧眼の黒人。弁護士出身であり革新政党から政治家となり副大統領を経て大統領となった。その顔と身体つきから容易に察することのできる行動型の政治家である。

李金雲
　中国大統領。白い髪にやや広い額、そして四角い顔をしている。学者出身であるが現実主義者として知られている。性格は親分肌で人望が篤い。

キリト＝マウイ
　ニュージーランド出身の連合中央議会議員。ベンチャー企業の経営者であった。ポリネシア系の血が入った白人である。夫はニュージーランド議会議員。保守派の指導者の一人。

ランティール＝モハマド
　マレーシア出身。連合中央議会改革派の中心人物の一人。少し黒い肌のアジア系の人物。強硬な意見を得意とするがその実はかなり柔軟でもあり連合きっての寝業師とも呼ばれている。

ヴォルフガング＝クライスト
　モンサルヴァート指揮下の提督の一人。蜂蜜色の髪に青灰色の目を持っている。機動戦を得意としている。

ルチアーノ＝ステファーノ
　モンサルヴァート指揮下の提督の一人。黒い髪と瞳のやや小柄な人物。その身体に似合わず勇敢でありエウロパ軍では勇将として知られている。

プラシド＝ベルガンサ
　モンサルヴァートの後方参謀。赤い髪に蒼い瞳の美男子。補給の運営及び管理に秀でている。

メフメト＝ラシーク
　アッディーンの艦隊の主席参謀。

スライマン＝アタチュルク
　アッディーン配下の提督。濃い顎鬚を生やした筋骨隆々の大男。歴戦の武人。

ハルーン＝ムーア
　アッディーン配下の提督。痩せた顔付きの男。切れ者。

ユースフ＝コリームア
　アッディーン配下の提督。やや小柄で筋肉質の男。用兵が速い。

バイバルス＝ニアメ
　アッディーン配下の提督。整った口髭の美男子。若き名将。

フラーク＝アガヌ
　元ミドハド軍。後にアッディーン配下となる。砂色の髪に鳶色の瞳。退却戦、防御戦が上手い。

シンダント
　アッディーン配下の作戦参謀。鋭利な顔立ちの男。セリム＝ハルヴィシーとは士官学校において同期であった。

シャルジャー
　アッディーン配下の情報参謀。痩せて学者の様な風貌をしている。

バヤズィト
　アッディーン配下の後方参謀。少し太めの大男。

メフメット＝マナーマ
　オムダーマン軍の司令官の一人。参謀畑出身であり後に参謀総長

となる。髪が薄い。

地理・国家編

オムダーマン共和国

アッディーンの所属するサハラの国家。西方において第三勢力であったがアッディーンの活躍によりサハラにおいて強大な勢力を誇る国家へと成長していく。

大統領を国家元首とする共和制であるが軍の力は強い。徴兵制が敷かれているが実質的には選抜徴兵制である。

サハラにおいては中級の国家であったが幾多の戦いを経て強大な国家へとなっていく。

サラーフ王国

サハラ西方において最大勢力を誇る。勢力こそ大きいがマスメディアが歪な程力を持っておりその害悪に悩まされている。その為マスコミが後押しする無能で下劣な人物が権力を握っていたりする。

勢力こそ大きいがそうした問題を抱える国家である。

カッサラ星系

サハラ西方の要地の一つ。ここを巡っての争いでアッディーンが勇名を馳せた。後にオムダーマン軍の重要な軍事拠点となる。土地も豊かでありかねてより各国の争奪地となっていた。また交易の中心地でもある。

ミドハド連合

サハラ西方の国家の一つ。第二勢力であり戦争よりも謀略や外交を好む傾向にある。カッサラを巡ってオムダーマンと激しい戦いを演じる。

ニーベルング要塞群

エウロパが連合との境、ブラウベルグ回廊の出入り口に築いた要塞群。惑星ニーベルングを要塞化し、その周囲に十六の軍事用人工衛星を置いたもの。

ブラウベルグ回廊
連合とエウロパの境となっている長大な回廊。エウロパの者達はここを越えて移住した。広く長大であるが連合とエウロパを繋ぐ道はここしかない。十個艦隊が並んで通れる程の広さである。だがその周りは様々な障害がありとても通ることができない。ワープも危険なのでできない程である。

ガンタース要塞群
エウロパとの境にあるブラウベルグ回廊の出入り口に連合が築いた要塞群。ガンタース星系の十五の惑星全てを軍事要塞化したもの。恐るべき防衛力を持っている。また軍事基地としても隔絶したものである。

シンガポール
地球の一都市。かってここで太平洋諸国とＥＵの条約が結ばれた。今はここに大統領府や国防省が置かれている。連合中央政府の首都地球のさらに心臓部である。

サハラ北方
エウロパの侵略により設けられた総督府とそれに対抗する多くの小国からなる。だがサハラ諸国はエウロパの国力と巧みな謀略により劣勢を強いられている。

アガデス連邦
サハラ北方の国家の一つ。共和制であり大統領と首相の争いに付け込まれる形でエウロパの侵略を招き滅亡する。その国民は放逐さ

れ難民となった。

ブラフマー星系
　マウリアの首都。マウリアの心臓部である。その名はヒンズー神話の創造神からとられている。

ヴィシュヌ星系
　マウリアの星系の一つ。マウリアの人口密集地帯の一つで最大の人口を誇る。クリシュナータの出身地でもある。

カジュール公国
　サハラ西方の国家の一つ。西方においては最も小さな国でありミドハドの属国の様な立場にある。アッディーンの軍の急襲により滅ぼされる。

サダム星系
　カジュール領の一つ。サダム要塞が置かれ堅固な宙形となっている。

リクード要塞
　カジュールの首都の手前にある。長大な壁を持っている。

ビクスラ星系
　ミドハドの星系の一つ。ミドハドにおいては交通上の要地の一つでありここでオムダーマン軍との戦いが行われた。結果はアッディーンの活躍によりオムダーマンの勝利であった。

サルチェス星系
　ミドハド領。ここにおいてアッディーン率いるオムダーマン軍とミドハド軍の交戦があった。かなり大規模な後方基地も置かれてい

る。

ケルマーン星系
　ミドハド領の星系の一つ。ここにおいてもアッディーン率いるオムダーマン軍とミドハド軍の戦闘があった。アッディーンはここを通過しビクスラに向かった。

イェニチェリ
　オムダーマン軍の艦載機。

バンプール星系
　ミドハド領。そのすぐ後ろにミドハドの首都ジャーハバードがある。ミドハドの最終防衛ラインとなっている。ミドハド軍はここにおいてもオムダーマン軍に敗戦してしまいその滅亡を確実なものとした。

ジャーハバード星系
　ミドハド連合の首都。

ブーシル星系
　サラーフとの境にあるミドハド連合の星系。ハルドゥーンがここに逃れ再起を期す。

# 第五部第一章　新たなる幕開けその一

新たなる幕開け

サラーフを滅ぼし西方をほぼその手中に収めたオムダーマンはその矛を収め内政に専念することにした。この度の一連の戦いの最大の功労者アッディーンは元帥に昇進すると共に宇宙艦隊司令長官に任命された。そして彼は首都アスランに戻りその職務にあたった。

「久し振りに戻って来たな」

彼はアスランに降り立つとまずこう言った。

「思えばカッサラの戦い以降戻ってはいなかった」

彼は車に乗り込んで辺りを見回しながら話している。

「そうですね。ミドハド、サラーフとの戦いが続きましたから」

隣に座るハルダルトが言った。

「そうだったな。気がつけばかなりの時間が経っている」

彼はいささか感慨を込めた言葉を口にした。

「だがこのアスランはそれ程変わってはいないようだな」

「そうですね」

ハルダルトも周りを見回した。

「街が変わる程の時間ではなかったということでしょうか」

「そうかもな。サハラでは街はあまり姿を変えない。連合では違うようだが」

エウロパもそうだがサハラでは街の建築物はそう頻繁に建て替えたり、新たな建物を建てたりはしない。ここがどちらかと言うと発展を優先させる連合各国との違いだ。

「それがいいか悪いかは別として俺はこちらの方がいいな。やはり街の姿が頻繁に変わるのはどうも好きになれない」

こう言うと保守的になるが彼は産業に対しては自由な考えの持ち主である。ただ連合の様にあまりにも急激かつ産業を優先させるのが好きではないだけだ。

「やはりバランスが大事だ」
彼は産業についてはこう考えていた。
「急激な発展もいい。時と場合によっては。だがそれにより歪が出る。それを直すのは簡単じゃない」
あまり産業のことには詳しくないがそうした考えであった。
連合においては貧富の差や労使関係は少ない。契約の概念や敗者復活の思想が強いからだ。今貧しくとも何処かで成功を収めて大金持ちになる、そうした考えが強かった。
「ああした生命力は尊敬すべきだが」
彼はそれは素直に認めていた。
「だがあまりにも余裕がないな。戦争と変わらん」
こう思ったところでいつも苦笑するのであった。
「軍人も同じか」
と。確かにそれはある意味において真理であった。
軍人は命を賭ける。彼等は金を賭ける。命と金は違う、と言われそうだが連合の人間とっては違う。金は命と同じ位大事なものなのだ。
「拝金主義!?上等だ」
ある農園のオーナーはエウロパの時の総統が連合をそう批判したのを聞いて平然とこう言ったという。
「金がなくては何もできない。そして無意味に貯め込むこともできないのだ」
彼はそう言った。
「金ができる。そしてそれをまた投資に使う。そうしなければそれ以上の発展はないんだ」
そうして彼は新たな農園の開拓及び肥料、器具の購入に金を回した。
そして彼は農園をさらに拡大させた。その時にはエウロパの総統は代わっていた。次の総統はこう言った。
「連合の人間は金を人生を愉しむ為には使わない。ただ働く為に使

うだけだ」
と。そのオーナーは今度はそれを冷笑を以って迎えた。
「俺達だって人生を愉しんでいるさ」
そして自分の後ろにある広大な農園を指差した。
「俺の生きがいはこれだよ。この農園は俺が一代で切り開いたものだ」
そしてその隣の葡萄園を次に指差した。
「これには苦労させられたがな。だが遂に成功したよ。ここでワインを造っている」
そして彼は言った。
「こうして農園を開拓することが俺の人生の愉しみなんだ。お貴族様にはわかりもしないだろうがな。それに」
彼は言葉を続けた。
「余裕だのゆとりだの言っている暇があったらその時間に遊ぶさ。俺だって働きづめじゃない。それにな」
次第にその言葉が荒くなる。
「人それぞれの人生の愉しみ方、金の使い方があるんだ。それもわからないでよく総統なんてやってられるもんだな。エウロパが何で俺達に勝てねえかよくわかったよ」
そして最後は痛烈にそう言い返したのであった。
これは連合の人間の考え方をあらわした有名な話である。アッディーンはそれを思い出していた。
「それも一つの考え方だ」
彼はそれは認めていた。
「少なくともエウロパの貴族達よりは遥かにいい」
エウロパではやはり貴族達の方が全てにおいて恵まれていた。屋敷に住み特権を与えられている。それは紛れもない事実であった。
アッディーンはそれを嫌悪していた。特権なぞ人を腐敗させるだけのものと考えていた。
「そんなものは何にもならない。ましてや産業にとっては有害以外

の何者でもない」
それが彼の考えであった。彼もまた一市民の出身であるから当然といえば当然である。だがここでもイスラムの教えがあった。
「人はアッラーの前では全て同じである」
これは彼だけでなくサハラの者全てにある考えだ。
連合における機会平等主義とはまた違う。イスラムでは人の力をあまり高く評価はしていない。
「人の力はアッラーのそれと比して微々たるものである」
こう考える。そして全てはアッラーの思う処に拠るのである。
シャイターンはそうした考えが特に強い。アッディーンにもやはりある。
「そう考えるとこれからのサハラの命運もアッラーの思われる処に拠る」
それもまた一つの考えである。だが彼の考えは少し違っていた。
「アッラーは自ら動く者を導かれる」
そう考えていた。だから彼は動くのだ。
「産業もそれは同じ」
そしてこうも考える。
「急激なものはよくないが発展はアッラーの望まれることである」
イスラムは商人の宗教である。従って富は悪いことではない。
彼もまたそれは理解していた。経済には明るくなくとも。
今オムダーマン軍は大規模な軍拡を行っている。併合したサラーフの軍を組み入れているのだ。
その数はかなりの規模になる。これで四十個の艦隊を持つことになった。
「最初の頃と比べると五倍か」
彼はその数を見て呟いた。
「増えたものだ。かっては一個艦隊ですら動かすのに苦労していたというのに」
オムダーマンはそこまで勢力を大きくさせていた。だが急激に大

きくなった為多くの問題もまた抱えていた。
「これが歪か」
アッディーンはそう思った。
「だが軍の歪は直さなくてはな」
そうでなければまともな編成、運営なぞできはしない。
「とりあえずは艦艇か」
今は便宜上サラーフの艦艇も使っている。だがそれでは正常な運営はできない。
オムダーマンの艦艇とは火力も機動力も航続距離も違うのだ。とても同じ艦隊に入れることなぞできはしない。
アッディーンは電話を手にした。そして誰かを呼び出した。
「はい」
バヤズィトが出た。彼は宇宙艦隊後方参謀長に任命されていたのだ。
「俺だ」
アッディーンは彼に対して名乗った。
「少し聞きたいのだが今艦艇の補充はどうなっている」
彼は単刀直入に尋ねた。
「全ては順調です」
彼は答えた。
「サラーフの艦艇は次々に退役させその替わりにオムダーマンの艦艇を入れております」
「それ位かかる？」
「全て交代させるには一年程かと」
「そうか」
妥当だと思った。それ位なら問題はない。
「遅いでしょうか」
「いや」
アッディーンはそれを否定した。
「丁度いいと思う。それならいい」

「わかりました」
「あともう一つ聞きたいのだが」
彼はまた尋ねた。

## 第五部第一章　新たなる幕開けその二

「はい、何でしょうか」
「後方基地の建設だが」
これも艦隊運営及び戦略には欠かせないものである。
「これはどういう計画が出ている？」
彼はそのことについて尋ねた。
「はい、それでしたらまずカッサラを中心に置くことが既に決定しております」
「やはりな」
当然この星系を外すことは出来ない。ミドハド及びサラーフとオムダーマンを繋ぐ場所にあるからだ。
「ミドハドはそこからサルチェスに伸びます。そしてサラーフですが」
「あそこが重要だな」
「はい、北方やハサンと国境を接していますから」
バヤズィトは電話で答えた。
「二つ置こうと考えているのです」
「二つか。まずは何処だ」
「はい、まずはムスタファ星系です」
かってアッディーン率いるオムダーマン軍がサラーフ侵略の拠点とした場所だ。今も交通の要地であることに変わりはない。むしろその重要性は高まっている。
「ここにまず置きたいと考えています。それもカッサラに匹敵する大規模なものを」
「あの星系にか」
「そうです。如何でしょうか」
「いいと思う」
アッディーンは答えた。

「やはりムスタファに置くのが一番いいだろうな」
「閣下もそう思われますか」
「ああ。サラーフとの戦いでそれはよくわかった。是非ともそれで進めてくれ」
「わかりました」
「そしてあと一つは何処だ」
「あと一つですか」
「そうだ。まだ計画にもあがっていないか？」
「いえ、既に一つ挙がっています」
バヤズィトはすぐに答えた。
「何処だ？」
「アルフフーフを考えています」
言うまでもなくかってサラーフの首都であった場所だ。
「あの星系もまた交通の要地ですし。それに」
「それに？」
「軍の施設にはこと欠きませんし。どうでしょうか」
「そうだな」
アッディーンはそれを聞いて暫し考え込んだ。
「アルフフーフは少し北方、ハサンとの国境に遠い気がする。それではいざという時の補給に難が生じるのではないか」
「そうでしょうか」
「そう思う。もう少し東にあった方がいいと思う。ただアルフフーフにも基地は置いておくべきだな。用心にこしたことはない」
「わかりました」
バヤズィトは答えた。
「では第二の後方基地は暫く検討します」
「頼むぞ。そして前線基地も置いておきたいな」
「それなら既に候補が挙がっております」
「早いな。何処だ？」
アッディーンは尋ねた。

「スルが宜しいかと」
「スルか」
彼はそれを聞き言葉を出した。
スルは北方と東方を結ぶ位置にある星系である。鉱産資源にも恵まれサラーフにおいても重要な工業地帯の一つであった。そして交通の便もよかった。
「はい、あの星系なら宜しいかと」
「確かに」
アッディーンはそれを聞いて頷いた。
「ではそれは国防省に話をしておこう。おそらく通る筈だ」
「有り難うございます」
バヤズィトは敬礼して応えた。
「ただ一つ気になることがある」
「何でしょうか」
「アスランからの距離だ」
アッディーンは言った。
「かなり離れているな」
「それは否定できませんね」
「首都から離れているとそれだけで問題が起こる。補給も通信も」
首都はその国の中心である。言うまでもなく行政、軍事の中枢が集中し、そこから主な命令が出される。これは何時の時代でもあまり変わらない。
「我が国もかなり大きくなった。アスランはその国土と比べて西に寄り過ぎている」
「今となってはそうですね」
元々オムダーマンは西方においても最も西にあった。その為首都も西方においてはかなり西にあるのだ。
「今まではカッサラを前線基地にしていたがあの星系はアスランからそれ程離れてはいなかった」
「はい、ですから前線基地として絶好でした」

「アルフフーフにしろスルにしろアスランどころかカッサラからも離れ過ぎている」
距離はそれだけで問題であった。
「今後東方や北方とことを構えるとなると首都がアルフフーフのままでは何かと支障をきたしかねないな」
「それは我々も危惧していることです」
「だが首都はアスランのままでいくつもりのようだな、政府としては」
「首都機能の移転にはまだ時期尚早ですし」
西方を統一したばかりである。ミドハド、サラーフの新たな領土はまだ完全に治まってはいない。
「少なくとも落ち着くまではアスランのままでいくでしょう」
「そうだろうな。だが時期が来れば議論して欲しいな、国会には」
「そうですね」
二人はそんな話をしていた。首都の位置はそれだけ重要だからである。
これは連合やエウロパにおいても変わらない。特に多くの国が互いに対立しているサハラや各国の権限が大きい連合と比べてエウロパの首都の重要性は大きい。これはこの勢力が他の勢力に比べて中央集権的傾向が強いせいでもあるのだ。
「オリンポスの防衛計画が完成しました」
プロコフィエフはモンサルヴァートに分厚い計画書を差し出して報告した。
「そうか、遂にか」
彼はそれを手にとって言った。
「首都が陥落しては何もならないからな」
「はい、ましてや我々の防衛計画は首都を基軸にしておりますし」
「そう、だからこそまずは首都の防衛を万全にしておかなければな」
ここが連合とエウロパの違いであった。連合は広大な国土のせいもあり各地に行政機能が拡散している。首都機能にしろ各国が持っ

ているといっても過言ではないのだ。
だがエウロパは違う。構成国それぞれに首都があろうとも彼等にとって首都とはオリンポス星系のガイアただ一つであった。このガイアに何かあればそれだけでエウロパにとっては致命傷である。
「まずはガイアの周辺に人工の防衛用小型衛星を置きましょう」
「小型衛星か。どのようなものだ」
「直径にして五キロのものを考えております。それは二十四個。常にガイアの周辺を回らせます。コントロールはガイアから行います」
「中々いいな」
「そしてオリンポス星系の全ての惑星にこれを置きます」
「全ての惑星にか」
「はい、もし一つでも惑星を陥落されたらそこを足掛かりにすることが考えられますので」
彼女の声は冷静であった。
「それを考えると当然の処置かと存じます」
「そうだな。他にはあるか」
「駐留艦隊をこれまでの一個艦隊から三個艦隊に増員します。西方の部隊から移動させようと考えております」
「西方か」
モンサルヴァートはそれを聞き壁にかけてある立体地図を見た。
「確かに西方はそれ程の脅威はないな」
連合からもサハラからも遠い。精々治安維持が妥当かと思われた。
「ならばそれで宜しいでしょうか」
「いいと思う。兵員も多いにこしたことはない」
「有り難うございます」
プロコフィエフはそれが了承されて安堵した息を漏らした。
「そして次に星系全体の防衛ですが」
そして次の説明に移った。
「それぞれの惑星の砲座、ミサイル発射基地を増加させます」
「どれ位だ」

「今までの二倍を考えております。今ガイアにはそれぞれ一万の砲座、ミサイル発射基地がありますが」
「それでは不十分なのだな」
「そう思います」
プロコフィエフは率直に答えた。
「連合が中央軍を設立したことを考えますとこれまでの防衛では心もとないと言わざるを得ません」
今回の本土防衛計画もそれが根幹にあった。エウロパにとって連合はそれだけ脅威であるのだ。
「今までニーベルング要塞群にだけ頼っていましたが若しそれが破られたら」
「今までだと終わりだったな」
「はい」
頷く彼女の顔はいささか蒼ざめていた。
「それを考えますとそうした備えも必要かと存じます」
「同意する。だが二倍で足りるかな」
「と言いますと」
「連合は三千の艦隊を持っているという。我が軍の三十倍だ」
「はい」
そのことはエウロパにも伝わっていた。それを聞いた者の多くは青くなった。
「若し彼等がエウロパに侵攻してきたら。そしてニーベルング要塞群を攻略したならば」
モンサルヴァートは言葉を続けた。
「すぐにでもこのオリンポスに向かって来るだろう。もっともそれを防ぐ為に今防衛計画を立てているのだが」
「首都以外の各星系、宙域の防衛計画も進めなければいけませんね」
「そうだ。だがやはりまずは首都の防衛を完了させてからだ」
中央集権的なエウロパの軍人らしい考えであった。
「そこから四方八方に伸びていく防衛を考えているのだが」

彼は自身の考えを述べた。
「宜しいと思います」
プロコフィエフはそれに対して言った。
「それを考えてまずは首都の防衛計画を持って来たのですから」
「そうだったのか」
モンサルヴァートはそれを聞きやはり切れる、と思った。
「首都から拡がる防衛計画なら何事もやり易いですね」
「そう思うか」
彼はそれを聞き微笑んだ。
「はい、それに理に適っておりますし」
少なくともエウロパには合っていた。
「それではまずこの計画を練りましょう。全てはここからはじまります」
「そうだな。では各部の長を呼んでくれ」
「わかりました」
こうして各部門のリーダーが召集された。ベルガンサやモナコ等がやって来た。
「よく来てくれた」
モンサルヴァートは彼等が来たのを見て席を立って迎えた。
「いえ、その様な」
ベルガンサもモナコもそれを受けて謙遜した。
「閣下に呼ばれたのですから当然です」
だが彼等も悪い気はしなかった。
「では話をはじめましょうか、早速ですが」
モナコが言った。彼等はそれを受けてモンサルヴァートの席の前に集まった。
「卿等を呼んだのは他でもない。首都の防衛計画だが」
「プロコフィエフ参謀総長のですね」
「そうだ」
モンサルヴァートは頷いた。

「参謀総長」
彼はプロコフィエフに顔を向けた。
「それでは説明を頼む」
「わかりました」
そして彼女は先程モンサルヴァートに話したことを今度は彼等に話した。話が終わるとモンサルヴァートは彼等に問うた。
「どう思うか」
参謀達は暫し考えていた。だがやがて口を開いた。
「非常にいいと考えます」
「流石といったところでしょうか」
ベルガンサもモナコも口々に言った。モンサルヴァートはそれを見て納得した様に軽く頷いた。
「そうか、ならいい」
「そして話は全てここからはじめるのですね」
「そうだ」
モンサルヴァートは答えた。
「首都ガイアを中心に全土を防衛する。何か考えがあれば遠慮なく言ってくれ」
「そうですね」
ベルガンサはその言葉に口を開いた。
「各地にも補給基地等を充実させたらどうでしょうか。中央に重点を置くのもよいですが」
やはり後方参謀らしい考えであった。
「そうだな」
モンサルヴァートはそれに対し頷いた。
「そうすれば何かあった時に物資に困ることもありませんし」
「よし、それも計画に入れよう。参謀総長、それでいいな」
「はい」
プロコフィエフもそれに頷いた。
「私の考えですが」

今度はモナコが口を開いた。
「通信も重要ですね。防衛には情報の伝達も欠かせません」
「よし、ではそれも検討しよう。それにしてもだ」
モンサルヴァートはここでエウロパの立体地図に目をやった。
「どうも今までニーベルング要塞群にばかり防衛を集中させ過ぎていた様だな」
「それは否定できませんね」
他の者もそれに頷いた。
「確かにあの要塞群は堅固ですが」
プロコフィエフがまず言った。
「もし破られたならば以後は為す術がありません」
「少なくとも今は」
アッディーンはここで応えた。
「はい」
彼女はそれに頷いた。
「防衛上それでは非常に不安です。そうしたことを考えますとやはり国土全体を守れる様にしなければなりません」
「うむ」
アッディーンも頷いた。
「今まではそれでも大丈夫でしたが」
「これからは違うな」
やはりここには連合軍の存在があった。
「若しあの膨大な戦力がこちらに向けられたならば。そして要塞群が破られたならば」
「そう考えると怖ろしいものがある」
これはエウロパにいる全ての者が思っていることであった。
「それを考えますと明らかに今のままでは問題があります」
「わかっている、その為のこの防衛計画だからな」
これは他の者も同じ考えである。
「本土の方は全土を要塞化するつもりでないと駄目だな。かなりの

戦費の負担になるが」
「はい、今までの三倍以上になるかと思われます」
「凄いな。だがやらないわけにはいかない。財務省の者達が嫌な顔をするだろうが」
「それは総統次第ですね。あとは選挙の結果です」
エウロパも民主制である。やはりこうしたことは選挙にかなりの影響を与える。
「市民はこの計画をどう思っているのだ」
モンサルヴァートはここでプロコフィエフに問うた。

## 第五部第一章　新たなる幕開けその三

「はい」
彼女はすぐに答えた。
「おおむね好意的です。やはり連合の脅威を感じているからだと思われます」
「そうか、それならいい」
モンサルヴァートはそれを聞いて安心したように首を縦に振った。
「支持があるに越したことはないからな」
「ですがそれによりサハラ北方に割り当てられる国費はかなり削られそうです」
「サハラ北方のか」
「はい、やはりこの計画を進めるには費用が幾らあっても足りませんので」
「そこまで話が進んでいうのか、財政面では」
「軍事費自体が今までの三倍以上になりますから。当然かと」
「その費用は他にどうして調達している」
「増税が予想されます。そして他には」
「他には？」
「足りない部分は他の費用を削って割り当てられます」
これが現実であった。
「我々の考えでは仕方ないことだが」
モンサルヴァートは溜息混じりに言った。
「多くの者に負担がかかっているな」
「そうですね。今後暫くはかなりの緊縮財政になるかと」
「サハラ北方の侵攻計画もかなりの遅れが予想されます」
モナコが言った。
「おそらくは当面は現状維持かと」
「シャイターンは油断ならない男だが」

モンサルヴァートはここで彼に言及した。
「ここはマールボロ閣下とタンホイザー上級大将に任せるしかありませんね」
ベルガンサが苦い顔で言った。
「あの二人なら問題はないでしょう」
プロコフィエフも納得した様に言った。
「タンホイザーは少し性格的に難があるがな」
「いえ」
プロコフィエフはモンサルヴァートの言葉を否定した。
「シャイターンの様な人物に対抗するにはあれ位の性格の方が必要かと思います」
「能力の問題か」
「それもありますが個性もあります」
「個性か」
「はい」
プロコフィエフは頷いた。
「少なくともタンホイザー上級大将はシャイターンに勝るとも劣らぬカリスマも併せ持っております」
「言い得て妙だな」
モンサルヴァートはカリスマという言葉に反応した。そして苦笑いを浮かべた。
「だが彼の軍事的才覚は期待できる」
すぐに顔を引き締めさせた。
「あのシャイターンに対抗できることは事実だ」
「はい」
プロコフィエフもそれはわかっていた。
「もしかすると連合の大軍を前にしても・・・・・・いや」
モンサルヴァートはここで言葉を一旦句切った。
「何でもない」
「そうですか」

だがプロコフィエフはその言葉を聞き逃してはいなかった。そして心の中で考えた。
（タンホイザー上級大将はいざという時の切り札になるわね）
彼女は今後のことにも思いを馳せていたのだ。
「北方はあの二人に任せるとしよう。マールボロ閣下なら少ない予算でも問題なくやって下さる筈だ」
「はい」
マールボロの軍人、総督としての能力は誰も疑ってはいなかった。それだけ彼は信頼があった。
「とりあえずは防衛の話はここまでにしよう」
モンサルヴァートは話を終わらせることにした。
「それぞれの仕事に戻ってくれ」
「わかりました」
参謀達は答えた。
「第一の敵を連合とする。それを念頭に進めてくれ」
「ハッ」
彼等は一斉に敬礼をした。そしてそれぞれの仕事に戻って行った。
部屋にはモンサルヴァート一人となった。彼はふと後ろの窓の外を見た。
「問題はこれからだな」
おそらく実際に話を進めるとこれまでとは比較にならない程問題が起こってくるだろう。だがそうだからといってそれを止めることはできなかった。
「やるしかない、このエウロパを守る為には」
彼もまたこの国を深く愛していた。
「連合の者達も来るなら来るがいい。追い返してやる。そして」
その目を細くさせた。強い光が宿った。
「一千年に渡る因縁を断ち切ってやる」
彼は何時の日か連合を超えることを考えていた。そしてその為に何をしなければならないのかもわかっていた。

「まずは奴等に攻め込まれても防げるようになることだ」
やはりエウロパと連合の国力差は絶望的なものがある。しかしそれに屈するつもりはなかった。
「必ず勝つ。そしてかっての栄光を取り戻す」
十九世紀の。この時代欧州は世界そのものだった。二十世紀になると翳りが見え、そして二十一世紀には環太平洋諸国に完全に主役を奪われていた。
「日米中枢軸か」
彼等はそれぞれの意図を含み、太平洋の覇権を意識しながらもロシアや欧州に対しては協力していた。欧州に対してはそれぞれ関係を持ちながらもその心の奥底にあるものを彼等はよくわかっていた。
「我々をあの時代から過去の遺跡だと考えていた。舐めてくれる」
モンサルヴァートにはそれが我慢できなかった。そして三国を中心とした太平洋諸国と欧州月等の資源を巡って激しく対立するようになった。
だがそれはロシアが太平洋に入ったことで変わった。それだけロシアの存在は大きく、また三国の宿敵と思われたこの国が太平洋諸国についたことはそれだけ衝撃的だったのだ。
「あれは迂闊だったな。ロシアと彼等の経済的結びつきを考慮に入れていなかった」
ソ連崩壊後ロシアはそれまでの欧州一辺倒の外交から徐々にアジアにシフトさせていた。これはロシアの伝統として軍事力も伴っていた為三国との対立を引き起こしたのだが一方でその交易は今までとは比較にならない程盛んになった。
これによりロシアの極東地区、そしてシベリアは発展した。欧州はそれを見過ごしていたのだ。
「情報戦においても負けていた。我等はあの時井の中の蛙だった」
そうであった。やはりここでも国力差が出てしまった。気がついた時には三国と関係の深い東南アジアやオセアニア、中南米諸国の他にアラブ以外のアフリカ諸国まで三国の側にいた。

「・・・・・・まさかトルコやイスラエルまでつくとは思わなかったが」
これは三国の切り崩しによるものであった。それまで欧州の一員だったトルコまで彼等についたのは欧州にとって深刻な事態であった。
三国とロシアはその数と国力を背景に欧州に迫った。宇宙の資源の配分を彼等に圧倒的に有利にすることを。欧州はそれを飲むしかなかった。
「それが屈辱のはじまりだった」
そして彼等は宇宙進出に遅れをとることになった。そしてこのエウロパに逃げ込む様にして移住した。
最初は思いの他豊かなこの一連の星系に満足した。だが気付けばここはあまりにも狭かった。
「それにひきかえあの者達には無限とも思える広大な銀河が与えられた」
それが連合とエウロパの決定的な差となってしまった。
エウロパはやがて人口抑制政策を採るしかなくなった。そしてそれでも間に合わなくなった。それがサハラ北方への侵攻と移住になったのだ。
「北と西には何もない」
何万光年も星一つない暗黒の宇宙が拡がっている。そこを越える技術はない。到底無理だと考えられていた。
東には連合がある。問題外だ。
そして南に向かったのだ。そこにいたサハラの者を追い出し彼等は移住した。当然サハラの憎しみを買った。連合はここぞとばかりに非難した。
「わかってたまるか、無限の土地と資源を持つ者達に」
これはエウロパの者の本音であった。
「それをしなければ今の暮らしを捨てなければならない。それは絶対にできない」

人はその生活水準を下げることはできない。上げることはできても。連合においてはプラスに考えられることでもエウロパでは全く逆になるのだ。
「それができていれば苦労はしない」
スペースコロニーは一つ作るだけでもかなりの費用がかかる。甚だ不経済なのだ。そのうえ収容できる人数も少ない。
だからこれはもう作っていない。それでも百億人程がここに住んでいる。
サハラ北方には二百億人が住んでいる。エウロパの人口はそこも含めてよくやく一千億に達するのだ。
「エウロパの人口は一千億が限度」
本土でそれなのだ。それはすぐに越えることは誰の目にも明らかだった。幾ら人口を抑制しても増えるものは増えるのだ。エウロパの人口は一千年で二〇〇倍に増えている。連合の六〇〇倍と比べると遥かにましだがこれはエウロパも初期には人口を抑制していなかったせいだ。迂闊だった。
「その時はわかっていなかった。この地の全てを」
これは迂闊だった。それに資源の問題もあった。
「新たな星系の開拓はもうできない。そうなれば運命は決まっている」
エウロパにとってそれも恐怖であった。もし資源が枯渇したならば。それを作り出す技術もあるのはあるがこれも費用がかかる。
結局彼等はこのままいけば枯死する運命なのだ。それが何時かはわからないが運命はそう決まっていた。
「座して死を待つよりは」
こう考えるのは当然であった。彼等も生きなければならないのだ。
貿易をしようにも連合とはできない。サハラともそれ以前から関係が悪かった。北方の諸国とは以前から領域等において度々衝突していた。
結果として侵攻になった。そうするしかなかったのだ。彼等の論

理では。
　それにより何が起こるかもわかっていた。しかし生きる為にそうしたのだ。
「連合に屈するよりは」
　そうした考えもあった。エウロパが枯死したならばそこに連合が我が物顔で乗り込んでくることは確実であった。
　それも我慢できなかった。彼等にも意地があった。
「あの者達は元々我等の使用人だったのだ」
　エウロパの者は連合の者を見下してよくこう言う。十七世紀から二十世紀前半までの歴史を言うのだ。
　アメリカはイギリスの植民地であった。中国は阿片戦争以後列強の草刈場となっていた。日本に技術や文化を教えたのは彼等だった。ロシアにしてもそうであった。ピョートル大帝の欧化政策がその発展のはじまりであったのだ。だがそれが今はこの状況であった。最早彼等はエウロパなぞ取るに足らぬ存在だと考えていた。東南アジアや中南米、アフリカの国々もだ。殆どがかって欧州の植民地であった国々だ。
「使用人の分際で」
　エウロパの者達はそう思ってもどうにもならなかった。最早力関係は変わっていたのだから。だがエウロパにとってはそれは認めたくとも認めざるを得ない忌まわしい現実であった。
「そう思っているから駄目なのだ」
　モンサルヴァートはそうした考えには賛同していなかった。彼には差別思想はない。
　貴族出身であるが幼い頃から両親にそうした考えを否定されて育ってきた。『高貴なる者の勤め』は教えられたが。だからこそ連合の者だからといって差別はしなかった。
「連合に多くの分野で負けていることは事実だ。悔しかろうがな」
　まずそれを認めることが重要だと考えていた。
「敵は強い。それを見誤ると大変なことになる」

彼はエウロパの地図に目をやった。
「エウロパの領土よりも遥かに広大な領土と資源を彼等は持っている。そしてそれを使ってくるのは間違いない」
連合の勢力はエウロパのそれとは比較にならなかった。
「果たしてどの様な攻め方でくるかだ。だがどの様な攻め方でも防いでやる」
その目に強い光が宿った。
「このエウロパは渡さん、絶対にな」
そして彼は机に戻った。また仕事をはじめた。

その連合は今加盟各国の代表者会議が開かれていた。場所はアメリカの首都ニューワシントンである。
実は連合の意思決定はかなり複雑である。中央議会の上下二院だけでなくこうした各国の代表者会議もその意思決定に深く関わる。彼等の会議は上下二院の話し合いの後で行われることから実質的には三院制のようなものである。
巨大な円卓が置かれている。そこのそれぞれの席に各国の首脳が座っていた。中央には連合中央政府大統領もいる。一目でこの会議が連合政府主導であるとわかる。
「先程のマックリーフ大統領の見解ですが」
大柄で金髪の男がアメリカの席に座る金髪碧眼の黒人に目をやった。
「私はそれには賛同できません」
「それはどういうことでしょうか、グリーニスキー大統領」
その黒人は席にいるだけでわかる程の長身だった。彼はグリーニスキーに顔を向けて尋ねた。
アレクサンドル＝グリーニスキー。ロシアの大統領になって二期目である。豪放磊落で酒好きな人物として知られている。もう連合各国の首脳達の間ではそこそこの古株になっている。選挙等による政権交代で入れ替わりが激しいせいだ。

尚この会議には皇室や王室は呼ばれない。それが置かれている国は首相が替わりに出席している。日本からは伊藤が出席している。
「あまりにもアメリカの利益のみを優先させているからです」
グリーニスキーは素っ気無い様子で答えた。
「こうしたことは各国それぞれに利益がいくようにしなければなりません」
「利益ですか」
マックリーフは眉をピクリ、と動かした。
「我々は常に各国の利益を考えて行動しておりますが」
「それは初耳ですな」
グリーニスキーは少し皮肉を込めて言った。
「今回の軍港の配分にしてもアメリカが一番多いのはどういうことですかな」
今回の議題は中央軍の軍施設の配分等であった。これは中央政府の招集で行われている。当然全ての国が参加している。
今は軍港の話をしていや。これはかなり紛糾していた。
それは当然であった。港の建設でかなりの金が動く。そしてそこに軍人が入れば安定した収益が得られる。各国が誘致するのも当然であった。
だがここで問題が生じていた。参加各国がそれぞれに都合のいい意見を出し、一向にまとまる気配を見せていなかったのだ。
「我々としましてはアメリカにはそれだけの軍港は不要だと考えています」
「ではどうなさるおつもりですか？」
マックリーフは先程の皮肉に返した。だがグリーニスキーの方が皮肉は一枚上であった。
「まさか貴国に優先的に建設して欲しいとおっしゃるつもりではないでしょうな」
「それはどうですかね」
意外にもマックリーフも皮肉は上手い。グリーニスキーは顔を顰

めさせた。
「どちらともお止めなさい」
中国の席から声がした。中国大統領李金雲である。
「その様なことで争っていても何の意味もありません。ここは我が国の提案が一番かと」
「ほお」
グリーニスキーは彼に対しても皮肉の目を向けた。ロシアはこの時代でも中国とは相性が良くない。
「中国に最も港が多い案ですかな」
「だとしたらどうなのでしょうか」
李も顔を顰めさせた。
「ですがこの案は連合全体の利益に適うと思います」
「確かに中国は多くの人口をお持ちだ」
中国の人口は連合で最も多い。それに次ぐのがアメリカ、ロシア、インドネシア、日本、メキシコ等だ。やはり旧太平洋諸国ばかりである。
「しかしだからといって港の施設の優先を決めていいものではない」
「確かに」
ここでタイやベトナムの首相及び国家元首が出て来た。
「そもそも三国ばかりで利害を決めて欲しくはありませんな」
旧東南アジア諸国はこの時代でもまとまり、大国の利害への監視及び調整を行っている。
「大体そうやって自分達の利益ばかり言っていては他の国にとってはたまったものではありません」
「うっ」
三国の首脳はこれで言葉をとぎらせた。もう一つの大国日本の伊藤はその様子を黙って見ていた。
（ここは何も言わない方がいいわね）
彼女は冷静にその場の状況を観察していた。とりあえず日本の案は懐に閉まっていた。

中南米諸国は東南アジア諸国に賛同した。それを見てアフリカも従った。これで三国の自国に有利な案は引っ込められた。
「止むを得ないな」
彼等は仕方なくそれを抑えた。ここでマレーシアの首相サラーヌ＝モハマドが伊藤に話を振ってきた。
「日本はどうお考えですか？」
実は彼は日本と関係を深めている。それは自国の利益になるからであった。
それは伊藤も承知だ。しかし友好国があるというのはそれだけで有り難いものである。
「そうですね」
伊藤はその時出番が来たわね、と心の中で呟いた。
「我が国の考えとしましては」
ここで彼女は日本の案を発表した。それは意外にも各国にバランスよく港を配置している案であった。三国にも満足のいくようにしてある。
だが日本には少なかった。これには理由があった。
日本はそれ程軍需産業には力を入れていない。そして港にできる星系も少なかったのだ。それ等の星系には既に普通の港を置いている。軍港を作れる場所はそれ程空いていなかったのだ。
（我が国とってはこれで充分だわ）
彼女はそれがわかっているからそうした案が出せたのだ。実際に国民の支持も高かった。これはやはり日本の軍需産業が盛んでないことも関係していた。
「ふむ」
東南アジア各国の首脳達はそれを見て歓心した様に首を振った。

## 第五部第一章　新たなる幕開けその四

「よくできておられます」
これはいささか社交辞令であった。
「有り難うございます」
彼女もそれで返した。
「我々としてはこれが一番いいと思いますが」
モハマドはここでキロモトに顔を向けた。
「中央政府大統領はどう思われますか」
「そうですな」
彼はここでにこりと笑って応えた。いい笑顔である。よく『最高の微笑』と言われる。
「私も日本の案でいいと思います」
これで決まりであった。残る一つの大国が公平な案を出せばそれで決まるものだ。ここには力関係も大きく存在しているのは言うまでもなかった。
かくして採決となった。三国の自案を放棄し日本の支持に回った。これ以上頑なに主張しても何も利益がないことがわかっていたからだ。
こうして満場一致で日本の案が認められた。日本と伊藤にとっては大きな得点となった。
「よくあの状況であっさりとまとまりましたね」
その会議のあと伊藤は八条と会食をとっていた。その席で八条が言った。
「あれはあらかじめシナリオが決まっていたのよ」
伊藤は微笑んで答えた。二人は懐石料理を食べていた。見れば日本風の座敷の間であった。いささか二十世紀の政治家の話し合いであった。
「シナリオがですか！？」

八条はその言葉の真意が掴めなかった。
「そうよ」
伊藤は悪戯っぽく笑って言った。
「あらかじめああなるってことは世論でもわかっていたでしょ」
「はい」
既に連合の世論では使えそうな港等の調査が終わっており、大体の配置は予想されていた。日本はそれを出しただけに過ぎないのだった。
「それはあの三国の首脳もわかっていた筈よ」
それも当然であった。その程度を認識できていなければ到底国家の元首なぞ務まらない。
「けれどね。国内世論もある程度ああした場で言わなければ駄目なのよ」
「それはわかっておりますが」
八条もそれは理解していた。
「しかしそれはあまり多数派ではなかったような。少なくとも三国においても日本の案と大体同じ様な提案が支持されていた筈ですが」
「けれどその少数派が問題なのよ。わかるでしょ」
「あっ」
伊藤に言われハッとした。
「わかったようね」
伊藤はようやく気付いた八条を見て微笑んだ。
三国においてそれぞれの利益を強硬に主張していたのは急進的な組合や一部の大企業であた。彼等にとってみれば雇用や利潤をあげるにあたって絶好のものだったからだ。
「けれど一国の一部の人だけではそうそう動かないものなのよ、政治は」
政治は様々な要因が重なり合うものである。陰謀史観のように一部の黒幕の様な存在だけで話が進むものではない。フィクサーがいても彼等もアクター、アクトレスの一人に過ぎないのである。

「けれど彼等の意見も代弁しておかなくちゃいけない、国際的な場でね」
「例えそれで自分が恥をかいてもですか」
「あら、それも政治家の務めよ」
国家の利益を考えるにあたって泥をかぶることも時には必要なのだ。
「私だって時と場合によってはそうするわ。八条君もでしょ」
「はい」
彼にもその覚悟はある。今は連合中央政府の政治家であるが中央政府の為なら喜んでそうするつもりである。
「そして最後には日本の意見に賛同したわね。これは三国も連合の一員であることをアピールしたのよ」
「本当にそう考えると映画の様ですね」
「面白いこと言うわね」
彼女はその言葉に微笑んだ。
「けれど案外そんなものかもね。人の世界なんて」
いささか哲学的な言葉を口にした。
「映画も人がつくるものだし。政治も人が行うものなのだから。ある意味漫画も映画もそうした意味では現実なのかも知れないわね」
「そうですね。昔夢の世界こそ現実だと言った作家もおりましたし」
探偵と多くの顔を持つ怪盗の攻防を書いた作家である。その探偵ものは今では連合の多くの子供達に読まれている。何度もテレビになり演じる役者達も代替わりを重ねている。
「ある意味真実ね」
伊藤はその言葉に頷いた。
「だから政治の場も何処かそうしたものになるわ。そう考えると別の意味で面白いわね」
「はい」
八条もそれに同意した。
「人間の世界なんてそんなものかも知れないわね。皆何かを演じて

いる。そう」
伊藤は言葉を続けた。
「私は政治家、学者を演じているのかも知れないわね。その考えだと」
「じゃあ私は軍人から政治家に役を変えたというわけですね」
「そうなるわね。その人ぞれぞれの役があってそれを演じる」
「役者の数は多いですけれどね。この連合だけでも三兆の役者がいます」
「そうね、ふふふ」
二人はこうした話をしながら食事を終えた。そして食事が終わるとその場で別れた。
この二人の師弟関係は有名である。だが二人の間を話の種にする者はいなかった。
それは伊藤は男女関係に極めて厳格だったからである。元々彼女は潔癖症の気質を有しておりそれも大いに関係していたのだ。
また八条は祖国の女の子達に冗談半分で男色家にされそれが結構噂になっていた。誰もが真相はわかっていたがそれを止める者はいなかった。話として面白いからだ。美男子が同性愛者だと絵になると考えている者もこの時代には多い。こうした同性愛を受け入れるのも日本からであった。
「何度同性愛に興味はないと言ってもわかってくれないな」
八条はそうした話を聞く度に顔を顰めさせた。
「この前バーで飲んでいたらそちらの筋にお兄さんに声をかけられた。一晩付き合わないか、とね」
「それはまた」
秘書官はそれを聞いて破顔していた。
「貴重な経験ですね」
「笑い事じゃない」
だが八条の顔は笑ってはいなかった。
「同性愛についての知識はあるつもりだがだからといって好きなわ

けじゃない」
「長官はノーマルなのですね」
「そうでなければチョコレートをもらって喜ばないだろう」
「それはそうですね」
秘書官は少し彼をいじっているのだ。こうしてみると本当にそうしたことに疎いのがわかる。
「そうした無駄話はそれ位にしておこう。続きはお茶の時間にだ」
「はい」
秘書官はそう言われて姿勢を正した。
「各艦艇の試作型が全て完成したそうだな」
「はい」
秘書官は頷いた。
「資料は何処にある。見てみたい」
「こちらに」
秘書官は懐に持っていた厚いファイルを八条に差し出した。
「これか」
八条はそれを受け取った。そしてすぐにそれを開いた。
「ふむ」
そこにはまず戦艦の図面とデータが載っていた。写真もある。
戦艦だけではない。高速戦艦や重巡、軽巡、砲艦、空母、ミサイル艦、駆逐艦の他に揚陸艦や補給艦、工作艦等の補助艦艇のものもある。護衛艦やパトロール艦等防衛を主体にした艦艇のものまである。艦載機のデータもある。
「かなり充実しているな」
「はい、技術部ではこれを決定にしたいようです」
「ふむ」
八条は秘書官の説明を聞きながらデータに目を通し続けた。
「これでいいと思う。あとは次の段階に移ろう」
「わかりました」
「まずはテスト運用を行う。そしてそれが終わったら」

「観艦式ですね」
「そうだ」
八条は口だけで笑った。
「大々的にやらないとな。連合軍の戦力をこの銀河に知らしめる為に」
「はい」
軍の強さを誇示するのもまた政治である。彼等はそれで連合の力を見せておこうと考えていたのだ。
「あと陸上兵器はどうなっているかな」
「そちらは明日完成するそうです」
「ならいい。では観艦式と同時にパレードも行おう」
「わかりました」
「そしてだ」
八条はそれまでの満足した顔を変えた。
「あれの開発はどうなっている」
「あれですか」
「そうだ」
二人の目が光った。
「御心配なく。あちらも順調に進んでおります」
「ならいい」
八条はそれを聞いて頷いた。
「連合軍を象徴するものだ。あれは絶対に出さなければいけない」
「わかっております」
秘書官は何時になく真面目な物腰で答えた。
「その日を楽しみにしておいて下さい。観艦式のその日を」
「うん。これは連合だけに見せるものじゃない。銀河全土に見せるものだ」
この国威を見せるのである。古代からよくあることだ。パレードやこうした式は自国の勢威を見せる意味が強いのである。
「議会には予算でもう通過している。艦艇の内容もおおよそ伝わっ

ている」
予算の関係は既に終わっていたのだ。
「あれの予算もですか」
「そうだ。重装備の指揮艦艇と伝えてある。詳しいことは軍事機密だが」
ここに軍事関係の難しさがある。国家機密に関わることであり議員といえどそうおいそれとは教える時ではまだない場合があるのだ。これもある程度は致し方ないことであった。
「ではそのれに向けての調整を進めていこう。各国の首脳も出席することが決まっているしな」
「マスメディアも」
「あとは知識人だな。他にもこうしたことに興味のある市民の席も用意しておこう」
「はい」
所謂マニアである。軍事に興味を持つ者は連合においても多い。特に彼等は今まで連合の兵器といえば各国にそれぞれある小規模なものばかりだったので不満だった。戦術戦略に興味のある者も含めてその目はどうしてもサハラに向いていたのだ。これは戦争や新兵器がサハラで多いことに関係している。
「あとはだ」
彼は考え込んだ。

## 第五部第一章　新たなる幕開けその五

「テロリストへの対策は十二分にしておこう。連中の存在が最も怖い」
「ですね」
秘書官もそれに頷いた。各国の首脳が勢揃いし、そのうえ重要な艦艇が次々に現われるのだ。テロリストが狙わない筈はなかった。
各国の首脳を狙う者だけではない。こうした軍事を忌み嫌う者達もいるのだ。
「兵器なぞ必要ない。そんなものがあるから戦争が起こるのだ」
というのが彼等の主張だ。だがこれは大きな誤りである。
国際社会においては各国が軍を持っていなければとても侵略やテロに対処なぞできない。特に連合では宇宙海賊やテロリストへの対策を考慮して軍が編成されている。これは今の連合軍もそうであるし、かっての各国の軍や今のそれぞれの国の軍も同じである。侵略戦争がなくともそうした戦乱の火種は常にあるものなのだ。
それをわかっていない者もいる。所謂平和教徒だ。彼等はまだいい。
問題はそれをわかっていて主張している者達である。彼等には別の意図がある。
それは何か。至って簡単である。彼等はテロリストや宇宙海賊の行動をやり易くする為にそうした主張をしているのだ。
実際に連合軍が設立されてから宇宙海賊、テロリストの行動は激減した。まだ仮の港に停泊し、艦艇も兵器もバラバラの状況でこれなのである。それが正規の港を持ち、決まった艦艇を持てばどうなるか。結果は見えている。
だからこそこうした団体は主張するのだ。彼等は海賊やテロリストと思想的、若しくは利益によって繋がっている。もしそれが公になれば当然彼等は犯罪者として裁判にかけられる。

実際に前のとあるマスコミ企業が怪しげな市民団体と結託した事件もあった。そしてついこの前にも同じ様な事件が起こっている。
キューバのとある自称正義派の女性国会議員である。彼女は何でも市民の為の政治家であり、汚職や腐敗を絶対に許さない、そして民主主義の為に戦っているという触れ込みだった。キューバの一部メディアには女神の如く崇められていた。
だが実像はそれとは全く逆であった。当初から市民団体にいたことが看板となっていたがネットではよくこの団体の胡散臭さが言われていた。海賊と関係があるのでは、と。
そして彼女自身もこの団体を自身の錬金術の道具にしていたのだ。人は良い行いをしたいものだ。従ってそういうことをする団体に資金援助をする者も多かった。団体の広告には子供達と楽しく談笑したり、地震等の災害が起こった場所で積極的に働くこの女の写真があった。
しかしそれは嘘であった。この女は震災地ではまず自らの団体の宣伝を行った。そして救助活動をする軍を侮辱する発言を繰り返し、その施設に無断で入り込むと避妊具や酒を見つけて救助活動なぞせずに遊んでばかりいる、と中傷した。
この時の酒は被災した市民達に無料で送る為のものだった。人はパンと水のみで生きるのではない、せめて心を安らげてもらう為に、というキューバ軍高官達の心配りだったのだ。
避妊具なぞ誰でも持っている。財布にはまず入っているだろう。何とこの女は兵士の財布をひったくり、そこから抜き出していたのだ。
これを批判する者も多かった。当然である。だが一部マスコミの報道によりそれは隠されていた。話はどうしてもネットにしか出回らなかった。
だが収賄で捕まったのを機に話は動いた。この女の今までの悪行が白日の下に曝される時が来たのだ。
悪事は次々と出て来た。学生時代から海賊の恋人がおり、また市

民団体の船も海賊のものだった。そしてその政策は常に海賊達のことを考慮してのものだった。
特に軍の力を弱める様な法案を立て続けに出したのはそれが狙いであった。軍よりも社会保障に回すべし、と主張したのはこの女が社会保障にも黒い利益を持っていたからであった。
この女は当然裁判にかけられた。そして海賊を使って政敵を暗殺したことがわかり遂に死刑を宣告された。ネットでは大騒ぎとなった。
こうした事件も起こっていた。それだけ連合においては海賊やテロリストの根が深いのだ。
それを考えるととても安心はできなかった。警備は極めて厳重でなければならない。
「この地球、いや太陽系全体を警護しなくてはな」
「はい」
秘書官はその言葉に頷いた。
「それだけでは足りないかも知れません。既にこの地球にテロリストが潜り込んでいる可能性もあります」
「地下にか」
「はい。見つけ出すのは困難かと思われますが」
「だが必ず見つけ出さなくてはならないな。何かあってからでは遅い」
「憲兵隊にも話をしておきましょうか」
「憲兵だけでは足りないな。特殊部隊も動員しよう」
「わかりました」
連合の特殊部隊は各国の特殊部隊から入った者が多い。アメリカでグリーンベレーと呼ばれる特殊部隊はこの時代においても存在していたが彼等を参考にしている。
その他にもテロリスト専門の対策チームがある。彼等は言わば連合軍のテロリストへの切り札であった。
「各部隊を総動員することになるな。そうでないととても心もとな

い」
「ですね。用心に用心を重ねないと」
二人は何時になく真摯な顔で話し合っていた。
「海賊は流石に来ない。テロリストに専念した警備にしよう」
「特に危険な組織のリストアップは既にできております」
秘書官はそう言って一枚のディスクを差し出した。
「こちらに。暗号を入力すると開きます」
「ほう」
八条はそのディスクを受け取った。
「では早速見せてもらう。そしてすぐに行動に移ろう」
「わかりました」
秘書官はまた頷いた。
「まずは太陽系への出入をチェックしよう。そしてそこから太陽系内の大掃除だ」
「かなり大掛かりなものになりますね」
「なるな。しかしそうでもしないと連中は防げない」
これがテロの怖ろしいところである。完全に抑えないと駄目なのだ。一人でも逃がしたらその逃げた者がテロを行うからである。
八条はそれはよくわかっていた。軍にいた時に叩き込まれたことだ。
「では今からその話をしよう。ところで」
八条は自分のパソコンにディスクを入れていた。
「暗号のパスワードは何だい？」
顔を上げ秘書官に尋ねた。
「私の一番下の妹の生年月日です」
彼は微笑んで答えた。
「そうか。教えてくれないか」
「わかりました」
彼はそれを伝えた。八条はそれに従って入力する。そしてディスクの中を開いた。

「ふむ」
そこにはテロリスト達のデータが細かく書かれていた。八条はそれに目を通していった。
「こうしてみると多いな」
「一人一人、組織を一つずつ載せているからそう思われるだけですよ。実際はそれ程多くはありません」
テロリストは常に少数派である。何故か、彼等は人に受け入れられることのない思想や信条を掲げていることが多いからである。
そして反対派は絶対に排除する。例え誰であろうと。そうした者達が幅広く支持を集められる筈がなかった。だからこそ卑劣なテロに走るのだ。
「だが少数であっても危険であることには変わらない」
八条の顔は硬いままだ。
「テロは一人でも成功させればいい。それで目的が達成される。それに対して」
「はい、我々は彼等全員を防がなくてはなりません。この差は大きいです」
それが昔から変わらぬテロの恐ろしさであった。守る方はテロは全て防がなければならない。だが彼等は一人でも成功させられればそれでいいのだ。
「これについても話し合いたいな。特殊部隊と対策チームの長官を呼んでくれ」
「わかりました」
特殊部隊は幾つかある。その中でも地球に駐屯する部隊は精鋭で知られている。彼等はかってのアメリカの特殊部隊グリーンベレーの名を受け継いでいる。グリーンベレーといっても緑の帽子は被っていない。これはあくまで部隊名に過ぎないのだ。
その隊長はアサム＝ンガバである。ケニア出身で中肉中背の黒人である。だが髪は赤い。これは彼の父方の祖母がカナダ出身の白人だったからである。

今の階級は大佐である。ケニア軍でも特殊部隊におり、その冷静沈着さと卓越した戦闘能力及び統率力には高い評価がある。
「入ります」
彼は敬礼をして部屋に入った。中には既に一人の男が座っていた。
「どうも」
男は席を立って応えた。やや小柄なラテン系の男である。
だが肌はあまり白くない。彼もやはり混血しているのだ。
「これが連合だ」
昔ある作家が連合の人間の肌や髪、目の色が人種に関わらず様々なのを誇らしげに言った。連合はかってのアメリカ大陸、アジア、アフリカ、そしてオセアニアの国々から構成される。人類の大部分を占め、かつ多くの人種で構成されている。従ってその恋愛も多岐に渡るのだ。
かっては白人と黒人の結婚なぞ考えられはしなかった。差別があったからだ。
しかしそれは二十世紀の人種差別撤廃の動きから大きく変わった。そして二十一世紀以降は人種に関わらず開かれた恋愛が行われるようになった。
しかしこれに国際社会の対立がいささか関係したのは残念なことであった。連合とエウロパは激しい対立関係に入り、マウリアは連合と協調路線をとりながらも独自の道を歩んだ。サハラはそのどこにも属さず、彼等同士で争っていた。従ってそうした恋愛が進んだのは連合に限られたことになってしまった。
その結果が混血であった。日本人の父とオーストラリアのアボリジニーの母を持つある歌手は終生自分の黄色い肌と銀の髪を自慢していた。それが彼女の人気の秘密でもあったからだ。
その他にも国に捉われず恋愛と結婚が進んだ。こうして連合では昔には考えられなかった様々な容姿の者が現われたのであった。
ンガバもそうであるしアラガルもだ。あの鉄壁のガードを誇り頭の硬いことでは連合一とまで言われる日本の宮内庁も皇室の他の国

々の者との婚姻は認めている。彼等の主張ではかっての皇室は他の王室、皇室との婚姻を認めていた、というのがそれである。これは事実であった。といっても併合した琉球王家や満州皇室との婚姻である。あまり例はない。だが彼等は前例には従うのを基としているので問題はなかった。その婚姻は当然の様に結婚されるご本人達の御意志は尊重されない。やはりそれなりに由緒正しいい者でないと婚姻は認められなかった。なおこの時代でもご成婚は議論の対象になっている。しかも今では日本国内に留まらず連合全体を巻き込む話になってしまっている。今の天皇陛下のご成婚も既にどうなるかという話が為されている。

「どうせ宮内庁が押し切るさ」

という者もいる。彼等は宮内庁を好ましく思っていない。伝統や格式にこだわらない連合らしくないというのだ。だがこれにはでは他の王家はどうなのだ、という反論が用意されている。王家というものは伝統と格式の象徴であり、こうしたことは守らなければならないものであるのだ。

こう言う者もいる。

「いや、陛下がご自身の意思を通されるだろう」

実際にこうしてご成婚が決まったことも多い。現在の日本の皇室について考えるうえで非常に重要な天皇である昭和天皇にしてもそうであった。以後もそうしたご成婚が実に多い。

だがこれは宮内庁にとって思わしくないのである。皇室に由緒正しくない者や考えを入れたくはないのだ。

「あそこの宮内庁の石頭は一千年の間全く変わらなかったな」

誰かが宮内庁を揶揄した。すると宮内庁から反論が来た。

「我々は常に皇室の在り方を考え、皇室をお守りしているのです」

と。彼等も彼等で皇室のことを真剣に考えているのだ。独善が入っているにしろ。

これには言った者も苦笑した。だがこれで宮内庁が変わるかというとそうではない。彼等はこれで闘志をさらに燃やし、皇室の伝統

と格式を守ろうと奮闘するのであった。
　これを見て連合の多くの者は思った。
「連合にも一つ位こういうものがあってもいい」
　彼等はこうした考えも受け入れることにしたのだ。結局伝統と格式も必要なのものであるからだ。なおエチオピア皇室も事情は大体同じである。この皇室は一度断絶しているがそれでも気の遠くなるような歴史がある為それを守らなければならないからだ。
「エチオピア皇室の歴史は何千年か」
　これは今だにはっきりしていない。今では連合の多くの宗教の一つであり、また影響を与えているキリスト教の経典によるとシバの女王の子孫だという。だがギリシア神話にも名前が出ている。これはシバの女王よりも前ではないのか、という説がある。なおこの家も混血している。何代か前の皇帝は日本の皇室から皇后を迎えている。それ以前にも例はあった。
　こうした国々である。今更肌や髪、目の色で誰も驚いたりはしない。気にもとめない。ただ、容姿の人気には多いに関係する。アメリカ大統領のマックリーフはその容姿でも人気があった。肌は黒いがその顔は白人のもので金髪碧眼であったからだ。
　ここにいるンガバやアラガルも同じであった。彼等はそれにこだわることなく挨拶を交わした。
「長官はまだですか」
　ンガバはアラガルに尋ねた。
「もう少ししたら来られると思います」
　彼は隙を見せない声でそう答えた。
「そうですか」
　ンガバはそれを聞いて納得したように頷いた。そして自分の席に着いた。アラガルの向かい側の席だ。
　ンガバには軍人としてだけでなく、何か野生動物の様な独特のしなやかな動きが備わっていた。例えるなら虎に似ているだろうか。動作はしっかりとしているがその中にしなやかさを含んでいた。

それに対してアラガルは豹に似ている。だがその顔は常ににこにこと微笑んでいる。
（いつも思うが不思議な男だ）
ンガバはアラガルを見て心の中で呟いた。彼とは何度も会っているが常にそう思う。
かっては探偵としていたという。それもよくある浮気調査といったものではない。
凶悪犯罪の捜査をその仕事としていたという。それも時には犯人を自身の銃で射殺することもあったらしい。
「まるでドラマに出てくる探偵だな」
誰かがそれを聞いて言った。アラガルはそれに対して言った。
「ドラマではなく事実だ」
まるで二十世紀後半に流行ったハードボイルドの主人公であった。今でもこのジャンルは健在だが彼の様に実際にそうした人生を送っている者はいない。
テロリストの捜査にも協力するようになった。そこでも常人とはかけ離れた勘と運動能力を発揮して捜査を進めていった。そして連合軍が設立されると国防省のスタッフに招かれたのだ。当然テロ対策チームとして。
そうしたかなり変わった経歴を持っていた。彼がかもし出す雰囲気はそれも関係しちえるのだろうとンガバが見ていた。
「どうやら我々を今回ここに呼んだのは観艦式の警護についてでしょうね」
ンガバが口を開いた。
「そうでしょうね」
アラガルは笑みをたたえたまま答えた。とてもそうした激しい人生を歩んできた男には見えなかった。まるでコーヒーショップの気のいい親父である。
（経歴は本当なのだろうか）
この笑顔を見てンガバだけでなく多くの者がそう思う。だがそれ

は問わない。
「やはりテロリストですか」
「おそらく。この地球に潜伏しているか、やって来る者達についてでしょう」
「ふむ」
ンガバがそれを聞き考えるように腕を組んだ。
「要人暗殺を狙ったものでしょうか」
「他にもあります。連合軍自体に反対する組織とか」
彼等の反対する理由は平和を害するというものだ。
『戦争が起こるのは軍隊があるせいだ』
こうした主張はかっての二十世紀の日本を思わせる。当時の日本は『平和憲法』と呼ばれるものがあった。ここには軍隊や戦争の放棄が謳われていた。
かなり理想的な理念ではあった。だが空想的でもあった。国家や国民を自らの手で守ることを放棄しているからだ。その様な国家は今まで存在していなかった。崇高な理念を持っていなかったのではない。常識を持っていたからだ。その様なことをしたらどうなるか、誰でもわかることであった。
結果としてこの憲法は全く何の役にも立たなかった。むしろ当時の日本の政治、外交にとって足かせに過ぎなかった。だが意外とその寿命は長かった。
これにはやはり理由があった。この憲法を狂信的なまでに信奉する者達がいたのである。
「この憲法は日本が世界に誇るものだ」
「この憲法さえ守っていれば平和は守れる」
この憲法を作ったのはアメリカ人である。当時戦争に敗れた日本に対しアメリカの都合がいい憲法を押し付けたに過ぎない。だがそれには目を閉じていた。
そしてこの憲法が平和を守るというのは単なる信仰に過ぎなかった。実際にはこの憲法に制約を受け当時の日本は政治外交に大きな

障壁を持っていた。その弊害は無視できるものではなかった。だが信奉者達はそれにはまたもや目を閉じていた。
凶悪なテロ支援国家に自国民を拉致されてもろくに手出しができなかった。これは普通なら戦争に至る極めて非道な行為であることは言うまでもない。
信奉者達はあろうことかこの拉致は嘘だと主張した。何のことはない。彼等の言う平和とはその程度のものであったのだ。しかもこのテロ支援国家と結託までしていた。結局彼等もテロリストの一派であったのだ。
この連中は最後はこのテロ支援国家が崩壊した時に道連れになる形で裁判にかけられた。そして外患誘致罪で殆どは死刑になった。同時に日本もこの憲法の呪縛から解き放たれたのであった。
平和主義を唱えているからといってその者が平和を愛しているとは限らないのだ。中世のローマ＝カトリック教会の僧侶達も口では神への信仰を唱えていても、やっていることは神への冒涜であったことからもこれはわかる。
これは連合にとって大きな教訓となっていた。『平和を唱えるテロリスト』それは連合の内憂そのものであった。
「あの者達も当然やって来るでしょう」
「やはり」
ンガバはアラガルの話を聞き顔を曇らせた。
「いつも思いますが連中は自分の主張と行為の矛盾について何も思わないのでしょうか」
「思わないでしょうね」
アラガルはやや素っ気無く言った。

## 第五部第一章　新たなる幕開けその六

「彼等にとっては自分達こそ正義なのですから。そう」
ここでややシニカルな笑みを浮かべた。
「彼等だけが絶対の正義なのですから」
「独裁者と変わりありませんね」
「本質的には全く同じでしょう。独裁者もテロによる支配を行いますから」
ナチスやソ連等がいい例である。彼等は虐殺による恐怖でも支配を狙っていたのだ。
恐怖は人の心を萎縮させる。気の弱い生徒が暴力教師に何もできないのと同じである。
ナチスもソ連もそれがよくわかっていた。これはロベスピエールに倣ったものであった。ギロチンによる支配を二十世紀に再現したのであった。
だがこれができるには一つの条件がある。当の独裁者に力があるか否か、である。
力、とりわけ人を屈服させ、崇拝すらさせるカリスマがなければできないことである。ヒトラー、スターリンにはそれがあった。なければ失脚する。ロベスピエールが最後に失脚し、自らもギロチンに送られたのもそれがあったかも知れない。彼もカリスマは備えていたがヒトラーやスターリン程のものではなかった。後のナポレオンの方がこのロベスピエールよりも遥かに強烈なカリスマ性を持っていたと言えるだろう。
カリスマのない独裁者は失脚する。他の政治力や指導力もない場合はテロリストになる。結局テロリストは独裁者の尻尾に過ぎないのだ。
「だからこそ彼等は危険なのです。世界は自分の世界だけですから」
「他の世界は破壊しても構わない」

「そういうことです。連中にとっては他の人間の生命や人生なぞ塵と同じものなのです」
ンガバはここでもアラガルに違和感を覚えた。
（どうも経歴とは合わないな）
また思った。
話を聞く限り彼はハードボイルドだ。しかし今彼が話していることはハードボイルドではない。どちらかというとかなり理知的だ。しかもシニカルな香料も含んでいる。
どちらかというとシャーロック＝ホームズか。
（違うな）
ンガバは推理小説が好きである。古典的な作品は大体読んでいる。
（バージル＝ティッブスかな）
黒人の刑事である。当時の差別のあるアメリカ社会において颯爽と活躍した誇り高き刑事だ。理知的で教養のある人物であった。
（これも違うかも知れないな）
かといってマイク＝ハマーでは決してない。剥き出しの猛々しさなぞ何処にもなかった。
それに明るい。これはラテン特有のものであろうか。ちなみに彼はウルグアイ出身である。
元々陽気なカラーが好まれる連合においてもやはりラテン系の明るさは際立っていた。これは一千年前から変わらない。特に音楽の世界ではそうであった。
そう考えると非常にユニークな人物であった。ンガバはアラガルにあらためて興味を持った。
「さて」
アラガルはここでまた腕時計を見た。
「そろそろ長官が来られる頃ですね」
「そろそろですか」
ンガバがそう言った時だった。部屋の扉が開いた。
「ハッ」

二人は同時に席を立った。ンガバは敬礼し、アラガルは頭を垂れた。武官の礼と文官の礼であった。
八条も礼を返した。こちらは文官の礼であった。かって軍人であっても今の役職は文官のものであるからだ。
（成程）
八条は二人の礼を見てあることに気付いた。
武官と文官の違いではない。それならばとうの昔にわかっている。彼が気付いたのは二人の動きの違いであった。
やはり動きが違うのだ。ンガバの動きは噂通り虎のそれを思わせる。そしてアラガルは豹だ。
（とすると私は何かな）
彼はふと思った。
（猛獣使いと言えばこの二人に悪いな）
確かにいささか失礼だがこの二人にとっては猛獣に例えられるのは悪いことではなかった。むしろ勲章と考えていた。
八条は席に着いた。二人はそれを確かめて八条に促され席に着いた。
「今日君達二人をここに招いたのは理由がある」
彼は静かに切り出した。
「これから行われる観艦式の警護についてだ」
二人はそれを聞きやはり、と思った。
「各国の首脳が一斉に集まるだけありその警護は重要だ。特に注意すべきは」
「テロリストですね」
「そうだ」
アラガルの言葉に頷いた。ここまでの話は何処か台本の様に進んでいる。
「外から来るものと既に潜んでいると思われるものの二つが考えられる。この際彼等の主義主張はいい」
「やることは同じですから」

「そういうことだね」
アラガルの言葉に苦笑した。
「ではすぐに本題に入ろう。そのテロ対策だが」
八条はまずンガバに顔を向けた。
「外から来るぶんについてはンガバ大佐にお願いしたいのですが」
「グリーンベレーにですね」
「はい。できますか」
「お任せ下さい」
ンガバはにこりと微笑んで言った。
「連中を一人たりとも入れはしません故」
「ではお願いしますね」
八条は次にアラガルに顔を向けた。
「既に潜伏している者達についてはアラガル部長にお任せしたいのですが」
「わかりました」
アラガルもまた微笑んだ。こちらはいささか朗らかであった。
「では一人残らず捜し出すとしましょう」
なお連合中央政府の法においてはテロ行為と死刑となる。連合構成国各国の国内法においてもそれは同じである。テロリストの人権を擁護するような愚か者もいるが常識としてテロリストを許すような者は普通はいない。
ただし裁判は行われる。抵抗した場合以外は逮捕することが求められる。そう、抵抗した場合以外は。実はこのアラガルは探偵時代テロリストを数多く殺しているという。理由は抵抗したからだという。
（本当なのか）
誰もがそれを聞いて一度はそう思った。当然といえば当然である。何しろ時には捕まえたその場で射殺したこともあるという。理由はそこに同僚の死体があったからだ。
「仇は取る主義でね」

彼は射殺した理由を聞かれ涼しい顔でこう言ったという。この笑顔とはまた違った顔である。
彼が国防省に入ったのはその手腕を買われてのことだが性格的なものもあった。テロリストには徹底的に冷酷でなければならない、そうした面で彼は適任であった。
「頼みますよ」
八条は彼に声をかけた。
「潜伏しているテロリスト達はアラガル部長のチームにやってもらいますから」
「はい」
彼は相変わらずにこにことして返す。だがそれは一面に過ぎないのだ。
「では決まりですね。外から来るものについてはグリーンベレー、中にいるものはテロ対策チームにそれぞれ対処してもらうことにします。それでよろしいですね」
「はい」
「お任せ下さい」
二人は頷いた。
「では細部は専門家である貴方達に全て委任します。責任は私が請け負います」
こうした場合責任を引き受けることが必要だ。そうでないと部下は安心して仕事ができないからだ。
「頼みましたよ。テロリストを一人残らず掃討して下さい」
こうして会議は終わった。ンガバとアラガルはすぐに行動に移った。
「これでテロリストへの対策は万全ですね」
そのことを八条に報告した秘書官は安心しきった顔でこう言った。
「それはどうだろうか」
だが当の八条は今一つ安心しきった顔をしていなかった。それが秘書官には不思議だった。

「まだ心配なことでも？」
「うん」
彼はその問いに頷いた。
「テロリストはこちらの裏をかこうと常に考えている。だからこそ危険なんだ」
二十一世紀初年のアメリカニューヨークで起こったテロには全世界が驚愕した。あの様な方法があったのか、と。
それからもテロリスト達はあの手この手でテロを行ってきた。ガードをかいくぐりテロを遂行する為にだ。
「今回も何をしてくるかわからない。出入国の管理や太陽系での調査だけで足りるかどうか」
「警護の兵士も今までの三倍に増やしておりますが」
「だからといって完全に防げる保証はない」
「はい」
秘書官はそう指摘され顔を俯けさせた。
「市民の身元は全てわかっているね」
「それは最初に調べました。住民台帳等で」
連合やエウロパでは住民台帳や戸籍等で国民の住所や職業がある程度までわかるようになっている。これによりそれぞれの国の人口が容易にわかるのだ。
「怪しい人物もやはり何人かいました」
「そうだろうな」
テロリストの侵入の手口の一つとして『成りすまし』がある。ある人物の個人情報を入手し、その者になり替わるのだ。時にはその為に顔や指紋を整形までする。なお成りすまされた方は暗殺されたり誘拐されたりしていることが多いが時には成りすまされた本人が全く別の場所で働いており、偽者がいることを知らない場合もある。
「そうした人物は既にアラガル部長の極秘捜査により正体を突き止められ、場合によっては逮捕されているそうです」
「早いな」

「はい」
「しかし部長には彼の任務に専念してもらおう。そちらは・・・・・・そうだな」
八条は暫し考え込んだあとで言った。
「警察にやってもらうか。そうした細かい仕事は得意だからな」
「わかりました。では警察にはそのように要請しておきましょう」
「頼むよ」
「はい」
秘書官は八条の言葉に頭を垂れた。これで警察への件は決定した。
八条は話を続けた。
「とりあえず手は打てるだけ打たないと話にならないな」
「そうですね。抜かりは許されません」
「他には・・・・・民間にも頼むか」
「アラガル部長のかっての同業者にですか？」
「それはちょっと」
八条はそれには苦笑した。
「幾ら何でもテロリストと戦う探偵は滅多にいるものじゃない。ガードマンも使おうかと思ってね」
「それはいいですね」
「そう思うか。ではそれで決定だ」
「はい」
こうして民間のガードマンを雇うことも決定した。
話は次々に進められていった。こうして彼等は来るべき観艦式に備えていたのであった。
「連合は最近何かと警備が厳重らしいな」
シャイターンはこの時選挙戦の最中であった。マヤムーク王国の首相選に出ているのだ。マヤムークでは首相は選挙により選ばれる。大統領のそれに似たシステムとなっているのだ。
この選挙においてシャイターンは妻の家であるハルーク家の力と民衆の圧倒的な支持を背景にしている。対抗する候補は既に半ば戦

いを諦めており勝利は確実だと言われている。
その為選挙活動も比較的大人しかった。彼はそちらは主に部下達に任せ各国の情報収集に力を入れていた。
「ハッ、観艦式を行うと聞いております」
ハルシークが敬礼をした後そう報告した。
「観艦式か」
シャイターンはそれを聞いて一言漏らした。
「それにしては警護が厳重過ぎるな」
サハラ各国においても観艦式は時々行われる。確かにその警護は厳重だがここまでではない。
「何か別の意図があるのではないか」
「意図といいますと」
「わかっていると思うが」
シャイターンはここでハルシークに微笑んだ。
「はい」
ハルシークも微笑んでそれに返した。
「どうやら連合中央政府はここで何かを見せたいようですね」
「それも銀河全土にな」
シャイターンは笑みをたたえたままそう言った。
「それが何かまではわからないがな。おそらく連合独自の兵器なのだろう」
「主要艦艇が考えられますが」
「それだけではないだろうな、絶対に」
「ですな」
ハルシークはまた頷いた。
「一体何を出してくるのか」
「それは楽しみにしておくとするか。何を出してくるか。もっともどの様な兵器でも私の前には敗れ去る運命だが」
シャイターンの笑みが自信に満ちたものになった。
「完全な兵器なぞこの世に現われたことは一度もない。必ず弱点が

あるのだ」
　これはこの世の揺るがぬ摂理であった。今まで多くの戦いが繰り広げられそれと同じ位多くの武器や兵器が姿を現わした。だがそれ等は全て人間の作り出したものであり、必ず何処かに弱点があった。それは何故かと言われるとそれを作り出した他ならぬ人間が不完全で弱点を多く持っているからである。
「連合がそれをわかっているかどうかは知らぬがな」
「わかっていなければ敗れるだけです」
「どの道私に敗れる運命にある。若しこのサハラに来たならばな」
　彼は不敵な声を口にした。
「このサハラはサハラの者だけのものだ。他の国の者が入ることは許されない」
　これは侵略という意味である。シャイターンは貿易や交流を否定する程愚かではない。
　サハラはイスラム教が支配している。そのイスラムは商人の宗教とさえ呼ばれている。その彼等が貿易や交流を否定することは自らの否定に他ならないのだ。
　だからこそシャイターンもそれは大いに奨励うべきことであると考えている。だが侵略者に対しては別だ。侵略を許しては自らの命を守れないからだ。
「連合もこのサハラに侵攻してくるということでしょうか」
　ハルシークは少し戸惑いながら言った。
「私にはとても考えられませんが」
「今の時点ではな」
　シャイターンは彼に対し言った。
「ただ今後はわからない。ただ用心はしておくべきだ」
「用心ですか」
「そうだ。例えばの話だが」
　彼は話をはじめた。
「このサハラのレアメタルが多量に発見されたらどうなる？」

「レアメタルですか」
「うむ」
シャイターンはハルシークに頷いた。
「かっての石油の様なものがな」
「それはないでしょう」
ハルシークは微笑んで言った。
「そう言い切れるか？」
「はい、連合は資源には全く困っておりません。他の勢力に比べその点でも遥かに恵まれています」
「確かにな」
やはりここでも国土の広さがものを言った。連合は資源にも非常に恵まれているのだ。
「特にワープに使用する資源については」
ワープには様々な資源が使われる。純濃度のウランやプルトニウムも使用されるが他の資源も使用される。その多くは放射性物質だ。
その中でも特に多く使用されているのがプルトニウムである。やはりこの時代においてもそのエネルギーは重宝されていた。この時代のプルトニウムは一千年前と比較して遥かに安全でかつ合理的に使用されている。その為僅かな量で銀河を航行し、ワープすることも可能なのだ。
「プルトニウム以上に効率のいい資源が発見されたとしたらどうだ」
「その様なものがあるのでしょうか」
「あるかも知れない」
シャイターンは言った。
「こればかりはわからないが」
「あくまで仮定の話ですか」
「ああ。連合は確かに全てにおいて満ち足りている。嫉妬の対象となる程にな」
これは事実であった。やはり広大な勢力圏がものを言っていた。内部にはそれなりの諸問題を抱えていても連合においては人口問題

も戦乱もなかった。
「だがもしこのサハラで彼等が持っていない資源が発見されたなら」
「結果は火を見るより明らかですね」
「仮定だがな」
シャイターンはここでもまだ仮定であることを強調した。
「連合には野心的な国も多い」
「アメリカに中国、ロシアが特に」
この時代においてもこれ等の国々のスタンスに大きな変わりはない。連合内部においてもことあるごとに自分達の主張を押し通そうとする。国力が高い分だけ始末に終えないのだ。これを抑えるのが日本やＡＳＥＡＮ諸国の役割であった。
「連中は言うまでもないな。二十世紀の頃から全く変わっていない」
「あそこまで変化がないというのも見事ですな」
「そんな連中だ。それで一千年の間やっていけたのだから特に変えるつもりもないのだろう」
「周りにいる国々にとっては迷惑な話ですが」
「そうだな。連合内部に留まっていてくれればそれに越したことはない」
「はい」
「だがこちらに来た場合を考えておかなければならないのは事実だ」
仮定のケースとしてそうした戦略を立てておくのも戦略の常である。シャイターンはそれを忠実に守っているに過ぎない。
「エウロパだけではなく」
「そうだ。今まで思いもよらぬ敵に攻め込まれ滅亡した国は多い」
敵とは思わぬところから現われるものである。それも世の摂理であろうか。思えば皮肉な節理である。
「だからこそ警戒を怠ってはならない。ましてや連合は銀河の七分の六を占める巨大な勢力だ」
「はい」
「彼等がもし動いたなら・・・・・・わかるだろう」

「・・・・・・・・・」
ハルシークはその問いには沈黙した。それは言われずともわかっていることであった。
連合とサハラでは例えサハラ全土を糾合しても国力差があり過ぎる。人口だけでも十五倍の開きがある。資源も経済力も比較にならない程である。
「対立は避けなければならない、可能な限り」
シャイターンは連合とことを構えるつもりはなかった。彼の敵はまずはあくまでエウロパであった。
「だが対立した時は我々も戦わなければならない。絶対にな」
「このサハラはサハラの者だけのものですから」
彼等は多くの国々に分裂し、争っていてもそうした意識はあった。彼等はまずサハラの民であるのだ。ここが連合たエウロパとは違うところだ。
エウロパではエウロパ市民であると考える。各国の市民であるという考えはその次だ。
連合では逆だ。連合は各国の主権が強い為まずそれぞれの国の国民と考える。市民ではなく国民なのである。そしてその次に連合市民であると考える。彼等はそれぞれの国への帰属意識が強いのだ。
サハラはサハラの民だ。それ以外でもそれ以上でもない。アッラーの経典を信じるサハラの民なのである。それぞれの国ことは認識しているが彼等はそれでもサハラの民なのである。
マウリアになるとこれがかなり厄介になる。彼等はあまりにも独特の考えを持っており他の国の者にとっては極めて理解し難い。彼等にとっては常識であってもだ。
こうした意識は当然ながらシャイターンにもあった。彼もまたサハラの民なのであるから。
「そうだ。だからこそエウロパも取り除かなければならない。絶対にな」
「はい」

ハルシークはまた頷いた。
「選挙が終わり、他の国々とあの条約を結び次第動くぞ」
「遂にですな」
「うむ、長い時がかかってしまったが」
シャイターンは不敵な笑みを浮かべた。
「まずは私がこの北方諸国を完全に掌握しなければならないがな」
「そしてそれからですな」
「そうだ。だが動くとなればすぐに動くぞ」
それがシャイターンであった。
「エウロパの貴族達よ、精々今のうちに贅沢を楽しんでいるがいい」
彼等の総督府における優雅な暮らしぶりはサハラにおいてはよく知られていた。それが彼等に対する反発をさらに強めていた。
「すぐに祖国に逃げ帰らなければならなくなるのだからな。身一つで」
「そしてあの者達の汚した地は全て我等のものに」
「そう、サハラは全て我が手に帰する運命なのだ。この手にな」
シャイターンはまだ不敵な笑みを浮かべていた。そして右手を掲げた。
「この手の中にサハラが入る。麗わしのサハラよ、そなたは私のものとなるのだ」
そう言うとマントを翻しその場から去った。あとにはハルシークが続いた。

## 第五部第二章　狩りその一

狩り

マウリアはその独特の文化を長年に渡って保持している。文明は受け入れてもその根幹となるものに変化はない。それはかってのインドの文化をそのまま残しているのだ。

マウリアの文化は他の国々の文化とは大きく違う。香辛料を多量に使った料理に独特の化粧や服装、丸みのある建物が有名であるがそれだけではないのだ。

マウリア文化もまた宗教と密接な関係がある。多くの文化がそうであるように。

インドで最も勢力の大きな宗教はヒンズー教であった。かつてのバラモン教にインドの風習等を取り入れたこの宗教は極めて独特な宗教観を持っている。

輪廻転生の思想に想像、調和、破壊のサイクル。多くの神々に魔族。それ等が混在しているのだ。

かっては仏教にも影響を及ぼした。仏教はこの時代においてもマウリアでは大きな勢力ではない。連合においては大きな勢力であり続けてもだ。

このヒンズー教は今も残っている。そしてマウリアの主要な宗教であり続けているのだ。

所々に神々を祭った寺院がある。その中にはそれぞれの神の像が置かれている。

その中の一つヴィシュヌの寺院。マウリアにおいては三大神の一人であり創造神ブラフマー、破壊神シヴァと共に篤く信仰されている神である。

ヒンズーの教えはそのまま残っているが細部はやはり時代と共に変わっている。それは神々への信仰にも関係している。

このヴィシュヌに対する信仰でもだ。かつては最も広く信仰され

ていたが今は違う。この時代で最も信仰されているのはこのヴィシュヌでもシヴァでもない。ブラフマーなのである。
かってはその創造神という位置から理解され難く半ば忘れられた存在となっていた。時にはヴィシュヌやシヴァよりも下位に考えられていたこともある。だが教理が深く研究されるにつれその信仰が復活したのだ。
今ではブラフマーの地位は回復された。それどころかヴィシュヌやシヴァよりも上位であるという考えまであった。
この三柱の神々への考えは複雑である。創造、調和、破壊、この三つのいずれかに重点を置くかで考え方が大きく変わってくるのだ。かってのヴィシュヌとシヴァの勢力争いもここにあった。
どの神がより高位にあるか、という問題はどの神話でもある。ギリシア神話においてはゼウスとポセイドン、ハーデスは兄弟でありそれぞれ天界、海界、冥界を支配している。世界を三分しているのだ。だが兄弟であり、世界を分割統治しているからといって仲が良いわけではない。むしろその逆だ。
北欧神話においてもそれは同じである。今では違うが雷神であり農耕の神であるトールは嵐と戦の神オーディンの息子とされていた。これはオーディンを信仰する戦士階級によるものであった。かってトールは北欧において主神であり、またオーディンの正妻フリッカの兄であった。その為この二人の神もあまり仲が良くない。ここに謀略と炎の神ローゲも加わるから余計話が複雑になる。
こうしたように多くの神話においてこうしたことがある。だがインドではこの三柱の神々が基本的に同位にあるところが独特でもある。
「インドは一つの世界である」
よくこう言われる。事実そうであった。インドはそれで一つの完全な世界であった。
このマウリアにおいてもそれは変わらなかった。その為に彼等は連合にも参加しなかったし、当然サハラやエウロパとも違っていた。

「マウリアだけは全く理解できない。あそこは完全に別世界だ」
「この世には二つの世界がある。マウリアとそれ以外だ」
こうした言葉まで出て来る程である。古代よりインド世界は他の世界とは全く異なっていた。そしてそれはこの時代においても変わらない。
ビジネスで来た連合のある企業家は言った。
「何か時間の流れが別のようだ」
『悠久の時』と呼ばれることもある。マウリアの者にとって時間は他の者の時間とは違う。
時は永遠に流れる。例え死んでも次の転生までの休息に過ぎない。その為今の人生での時間はほんの些細なことなのである。
これには誰もが面食らう。特に寸暇を惜しんで働き、遊ぶことを人生と認識している連合の者にとっては理解できないことであった。
「あれだけは理解できない」
一体どれだけの者がマウリアをこう評したであろうか。
マウリアに魅かれる者は多い。だがそれ以上に理解できないと言う者は多い。
マウリアの映画もまた独特である。異様に長く登場人物も多い。アクションもラブロマンスもコメディーも何でも入れる。一つの作品にだ。しかもそれだけではない。
「何故いきなり踊りがはじまるのか」
マウリア映画を見て戸惑うのはまずこれだ。
何の予兆もなしにいきなり人々が踊りをはじめる。人が何処からともなく現われる。
音楽はいい。だがそこには確実にマウリア人以外には理解できないものがある。
踊りが終わる。すると話は何事もなかったかのように再開する。しかもそれで話は終わらないのだ。
映画の途中で出て来た悪者が先回りをしようとする。彼の出番はそれで終わりだ。最後まで出て来ない。

「あの悪役は何処に行った」
そういう議論まで出て来る。アメリカの壮大なスペースオペラや中国の雄大な歴史もの、日本の繊細な人間ドラマ、タイやベトナムの派手なアクションとはまた別だ。そんなものは既に全て一つの映画にまとめて入れている。
つまり銀河の真ん中で戦争をしつつ格闘をし、歴史の中で繊細な恋愛をしつつ皆で踊るのだ。連合の映画ファンにとってこれは流石に斬新であった。だがそれは大きな誤認であった。
一千年前からそうであったのだ。インド映画は昔から変わってはいない。少なくとも踊りも一つの作品に全てのジャンルを入れることもその頃から変わってはいない。
だからといって一千年前からポピュラーであったかというと決して違う。その頃から異彩を放っていた。
そして今もである。これがマウリアの文化の特徴の一つでもあった。雑多さと独特の色彩である。
銀河の時代になり宇宙に移っても彼等は変わらない。むしろその独特の世界観は宇宙に行き更に磨きがかかった。これはマウリア人の宗教観が宇宙のそれを意識したものであったからでもある。
その中心である首都ブラフマーにおいてもそれは同じである。むしろ創造の神の名を冠したこの星にこそその真理はあると言ってもよかった。
この日ブラフマーでは祭典が開かれていた。商業の神ガネーシャを祭るものである。
ガネーシャとは象の頭に四本の手を持つ神である。その親しみ易い外見と神格から今でも人気が高い。彼は破壊神シヴァの長子でもある。
シヴァの子の祭典が創造の神の名を冠した星で開かれるのに違和感を覚える者も多いかというとそうではない。むしろそれは喜ばしいことであった。
何故か。それはブラフマーの度量を示すものでもあるからだ。

確かに司るものは異なる。だがブラフマーもシヴァも同じサイクルを司る神である。その長子であるガネーシャの祭典を妨害する理由は彼等にとってはなかった。

このブラフマーにはブラフマーの信仰者だけがいるのではない。ヴィシュヌやシヴァの信者も多くいる。ガネーシャの信者の他にも多くの神々の信者がいる。それを排他することは決してないのだ。

ヒンドゥーの神々は連合でいうと日本の神々に似ているかも知れない。多くの神々がいて並存している。だからといって特に争うことはないのだ。

「日本人の考えは比較的理解できる」

マウリア人はそういうことも踏まえてかよくこう言う。だが日本人は全く逆のことを言う。

「マウリアの人達の考えていることは理解しにくい」

これは文化の違いよりも複雑な事情があった。マウリアはマウリアで一千年、いや何千年もの間その独自の文化の中にいた。日本も日本であったが彼等は日本独自の思想、宗教の他にも多くのものを受け入れて来た。

仏教だけではない。道鏡や儒学、キリスト教もだ。日本人の哲学はそれ等をミックスさせたものであるのだ。

だからマウリアの思想を理解し難いのだ。彼等のそれとは違っているからだ。同じ多くの神々を信仰していてもそれは似て非なるどころか全く異なるものであった。

こうした差違がある。それが結局マウリアが連合に入らなかった理由だ。彼等はそれにより独自の世界を宇宙でも築いていったのである。

「近頃連合の動きが活発だな」

クリシュナータは主席官邸で休憩をとっていた。昼食の後の束の間の休息である。スーツではなくマウリアの白い服を着ている。

「はい、どうやら大規模な観艦式を執り行なうそうです」

口髭を生やした長身の男が答えた。マウリア国防省のクマラ＝ラ

ーンチである。見れば彼もマウリアの服を着ている。だが彼の服は白ではなく青である。特に服装によって何かあるわけではない。ただ個人の好みでそうした服を着ているのである。
「それは聞いている」
クリシュナータは答えた。
「かって連合では頻繁に行われていたが」
「はい」
ラーンチは頷いた。確かに連合では今まで数多くそうした観艦式やパレードが執り行われてきた。
「だがそれはそれぞれの国で行われてきた。中央政府が行ってきたのではない」
クリシュナータの言う通りであった。問題はそこであった。
「今回の観艦式は今までのとは全く異なったものだ。どうやら連合が各勢力に自分達の力を誇示するつもりのようだな」
「といいますとやはりかなりのものを見せるつもりですね」
「確実にな」
クリシュナータはその言葉に頷いた。
「今まで連合はそうしたことはしなかった。いや、出来なかったと言うべきだろう」
「内部のまとまりに欠けておりましたからな」
「それが違うということも見せたいのだろう。中央軍の存在だけではない」
「はい」
ラーンチもそれはよくわかっていた。
「確かに連合はここ暫く中央政府の権限を強化させてきました」
暫くといっても二三百年程である。やはり時間のスタンスが違う。
「そうだな。だがそれでもエウロパはおろか我々程にも中央政府の力は強くはなかった」
「それが中央軍の出現で大きく変わりましたね」
「軍の存在はそれだけ大きいということだ」

それでも各国の権限は大きい。それを否定するつもりは当の連合政府にもないが。
「今や中央政府は連合各国を指導する力も身に着けだしております」
これはキロモトの政治力、統率力もあった。やはり彼はそう言った意味でも優れた人物であった。並の政治家ではないことは確かである。
「それは大きいな。実際にそれにより行政はかなり順調に進んでいると聞いている」
「治安はかなりよくなったようです」
「そのようだな」
それまで連合各国の内憂であった海賊やテロリストは激減した。それだけでも連合軍は価値のあるものであった。
「もっとも彼等の思惑はそれだけではないだろう」
「と言いますと」
異星人の存在はこの時は考慮になかった。
この銀河の向こう何十万光年に渡って人類以外の知的生命体の存在はいないことが確認されている。おそらくこれより遥か彼方には存在するであろうが彼等と遭遇するのはどう考えても今よりずっと後のことである。これはマウリアの者の時間においても同じである。
「軍のもう一つの役割だ」
「侵略ですね」
「うむ」
ラーンチの言葉に頷いた。
「今まで連合は動くことはなかったがな」
「それは我々もですね」
「そうだ。精々国内の犯罪組織を掃討する位しかなかった」
それは連合もマウリアも侵略戦争を行う必要がなかったからである。
連合は北、東、南に何処までも拡がる広大な開拓地があった。資源が必要になったり、人口が多くなればそこに移住し開拓すればよ

いのである。土地も資源も無限と思える程ある。領土問題も新たな領土を開拓すればそれで帳消しになった。各国での星系の取り合いはあったが、それは中央政府の仲介でどうとでもなった。またこういう話にはアメリカや中国、ロシアは積極的に介入した。分け前が得られるからである。

大国の存在も結局必要なのだ。発言力の強い存在がいないと話は進まないものだからだ。

領土問題で敗れたら別の星系に進出すればいいいだけだ。こうした考えが連合を多くの問題があるにしろ爆発的な人口増加と発展、そして少なくとも国家同士による武力衝突、紛争は避けていたのだ。

マウリアは南方に開拓地がある。だが彼等は連合とは違いその進出はゆっくりとしたものであった。

「急ぐ必要はない」

彼等はそう考えていた。これはやはり彼等の独特の思想によるものであろうか。

マウリアの開拓地もかなり広い。だが彼等は連合の様に積極的に進出することはなかった。人口の増加もゆるやかであった。その人口は一応二千億となっているが昔からマウリアの人口統計は全くあてにならない。もう三百億程いるのではないのかとも言われている。

「それは大した問題ではない」

マウリアの者のこの発言には連合もエウロパもサハラ各国も耳を疑う。どの国もかなり正確な範囲で人口は把握している。少なくとも三百億もの漏れはない。

これもマウリアの世界観によるものであった。かつてインドは二十世紀一説には世界最大の人口を擁しているとも言われていた。二十一世紀にはそれが現実のものとなった。だが正確な人口は誰も知らなかったのだ。インド政府ですら、である。

人口統計すらするつもりはなかった。納税者は全人口の僅か一パーセントだという説もあれば、裏のＧＮＰは表のそれの三倍あるという説もあった。そしてそのまま宇宙開拓に進出したのだ。そして

マウリアとなった。
「インドを一言で言い表せると言う者は一度あの国へ行ってみるといい。確実にその考えは変わる」
誰かがこう言った。その通りであった。
まさに混沌であった。そこには全てがあった。
戦車の横を牛が通り掛かる。マハラジャが優雅な生活を楽しんでいるその側で先祖代々由緒正しいと言われているれっきとした立派な身分である乞食がにこにこしながら質素な食事に舌づつみを打つ。これは皮肉でも差別でもない。このマハラジャも乞食も彼等の人生を楽しんでいるのだ。
だから今もその人口統計はアバウトなところが多かった。それを彼等は悪いこととは誰も認識していない。
「マウリアは国家を無事経営することができている。何の問題があろうか」
彼等の主張に首を傾げながらも他の国の者は頷く。やはり彼等と他の国の者の間には理解できないものが存在しているのだ。
その動きが緩やかなのもそれが為である。連合の進出はおそらく他の知的生命体の勢力と遭遇しない限り続くだろう。その知的生命体の勢力が存在する可能性がある星系まではまだ気の遠くなる距離がある。おそらくそれは一千年は大丈夫だった。
マウリアはそこまで進出はしていない。一つずつ、確かに進んでいた。彼等は決して焦らない。そうしてこの一千年歩んできているのだ。これは外敵がいないからでもあった。
「ですが連合は内部に深刻な矛盾も特に存在しておりませんが」
ラーンチが言った。内部の矛盾を外部に向けるのはよくあることだ。そもそもエウロパのサハラ侵攻も内部の人口や資源の問題の解消があった。
「そもそも連合はその矛盾を解消することにかけては他の勢力よりも遥かに有利であります」
やはり開拓地の存在が大きかった。

「確かにそうだ」
「では何故侵略の可能性を指摘されるのですか？」
「資源だ」
「資源なら連合は星屑よりも多く持っておりますが」
「今わかっている資源はな」
クリシュナータは思わせぶりに言った。
「だがまだ知られていない資源もある筈だ。それがどの様なもので何処に姿を現わすかで話が大きく変わる」
「かっての石油の様に」
「わかり易く言うとそうなる」
二十世紀の戦争はこれの争奪によるものが多かった。この時代文明は石油なしでは成り立たなかったからだ。
今は常温核融合まで使われている。だがこれでも流石に広大な銀河や超空間通信の様な膨大なエネルギーを使用するものの前では無限ではなかった。星系の電気等をかなりの長期に渡って維持できてもだ。
「より効率のいいものに魅かれるのは人の習性だ」
クリシュナータは目の色を知的なものにさせた。
「かって石炭から石油、そして原子力にシフトしたように」
人類はそうして進歩してきたのを知っているからこそ言える言葉であった。
「そうでなければ我々は今もあの地球にいただろうな」
「そうでしょうな」
ラーンチはその言葉に頷いた。

## 第五部第二章　狩りその二

「ですが今の常温核融合よりも更に効率のいいものといいますと」
常温核融合は人類を救ったとまで言われている。これにより銀河の進出が飛躍的に伸び、そしてエネルギー問題もかなり解決されたのだ。今では改良に改良を重ね平均して初期のそれの三十倍のエネルギーを誇るまでになっている。それ以上のものとなると少し創造がつかなかった。
「それはわからない」
クリシュナータは言った。
「私でもそこまでは読めない。だが」
「だが！？」
「それが出るとしたら何処で出るかだ。連合の中で出るのなら問題はない。おそらく中央政府が直轄して話は済むだろう」
「そうでしょうな。下手に各国に預けたならば内戦につながります」
「問題はそれが他の勢力で発見された場合だ。おそらく彼等はその国力を背景にそれを渡すよう要求してくる」
「それは容易に想像がつきますな」
連合がどれだけ資源を持っていようともだ。より多くのものを欲するのも人間の性であった。
「当然その勢力もそれは断る。そうすれば連合は武力に訴えるだろう」
今までの人類の歴史でよくあったことである。
「それが問題なのだ。もしこのマウリアに出たならば我々は彼等に膝を屈するか干戈を交えるしかない」
「主席はそれについてどうお考えですか」
ラーンチはここであえて尋ねた。
「私か」
クリシュナータはその言葉に対し顔を向けた。

「はい」
ラーンチは頷いた。
「決まっている」
クリシュナータはそこで表情を硬いものにさせた。
「例え長年の盟友であっても渡せないものもある」
「そうですな。国家の誇りにも関わります」
ラーンチはそれを聞いて安心した様に頷いた。
「国民を巻き込むことだけは避けなければならないが」
「彼等の支持があれば、ということもありますね」
「ああ」
マウリアも民主制である。内部にマハラジャや多くの半ば独立したような勢力を持っていてもマウリアもまた民主国家なのである。民主制においては国民の意思が非常に大きな役割を果すのは言うまでもない。
「その場合彼等がどう判断するかだ」
「それによって大きく変わりますね」
「だが連合については今からある程度考えておいた方がよいな」
「はい」
丁度そこで休憩時間が終わった。クリシュナータは席を立った。
「そろそろ行くか。充分休憩にはなった」
「はい。では午後は丁度国防問題について話し合う予定となっておりますし」
「それについても話し合おうか。いい機会だしな」
「それが宜しいかと」
「よし」
こうして二人は部屋を出た。そして閣議室に向かった。
閣議室では既に他の閣僚達が待っていた。彼等はクリシュナータとラーンチが入室すると席を立った。
「うん」

彼はそれに手で応えた。そして座らせると自身の席に着いた。ラーンチもである。
「この閣議で話したいことだが」
彼は閣僚達を見回しながら言った。
「連合の観艦式についてだが」
一同はそれを聞きやはり、という顔をした。彼等もそれについて考えていたのだ。
「諸君はこれについてどう思うか。これで連合はおそらく彼等の力をこの銀河に誇示するであろうが」
「それだけではないでしょう」
クリシュナータの側に座る男が言った。見れば頭にターバンを巻いた老人である。マウリア首相クベーラ＝ムルワーラである。
「おそらく彼等は今後その力を背景に対外政策を積極的に行っていくものと思われます」
「何故そう思う？」
クリシュナータはあえて彼に尋ねた。
「彼等の国力を考えますと。やはり連合の力は強大です。伊達に人類の約八割を擁しているわけではありません。それで以って一気に銀河を制圧することも考えられます」
「それはどうでしょうか」
だがここで異を唱える者が現われた。
「ん！？」
妙齢の女性である。マウリアの服に身を包んでいる。その容姿は艶やかでありまるで古代の女神の彫刻の様である。マウリア外相ヴァティ＝エルールである。
「連合は今頃銀河を統一しようと考えているとは思えませんが」
「外相がそう考えられる根拠は何ですかな」
ムルワーラは問うた。
「若しそうならば今までにそうした動きがあってもおかしくはありませんでした。一千年もの時間があったのですから」

「それまで連合は内部でのまとまりに欠けましたからな」
ムルワーラはそれに対して答えた。
「ですからしなかったのです。言い換えるならば出来なかった」
「それは軍事においてですね。少なくとも経済や政治においては違いました」
「それはそうですが」
ムルワーラは反論されてやや顔を曇らせた。
「その証拠に我々は今もこうして独自の勢力を持っております」
「文化や風習の違いも大きかったな。それに考え方も」
ここでクリシュナータが言った。
「はい。ですがそれだけではないでしょう。実際に連合は今まで我々に対して自由貿易協定も連合への参加も呼び掛けたことはありません。連合内での会談にも一度も呼ばれたことはありません」
「サハラの会合には何度か出席していたがな」
「はい」
クリシュナータに答えた。
「それよりも彼等の関心は国内でのことでした。そしてそれは基本的に今後も変わらないでしょう」
「外相はそう見ているか」
「はい。ですが例外もあります」
「例外!?」
そこにいた全ての閣僚が彼女の言葉に目を向けさせた。
「はい。まずはエウロパに対してです。彼等の間には長年に渡る敵対関係があります」
それが為に人類はこの銀河で多くの勢力に分裂したようなものであった。連合とエウロパの対立は国連を瓦解させ、そして今の人類の勢力地図を作ることになったのだ。そして武力衝突こそないもののその対立は今も続いている。彼等の間には交易なぞ全く無く、あるのは対峙と批判の応酬だけであった。
「まずはエウロパに対して大規模な武力侵攻に出ることが予想され

ます。そしてそこでかなりの成果を狙うでしょう」
「エウロパの滅亡をか」
「そこまではわかりません」
エルールはそれに対しては首を横に振った。
「ですがエウロパに対してそれなりのことはすると思われます」
それなりのこととは何か、それまでは言おうとしなかった。だがそれだけで閣僚達は顔を引き締めさせた。それ程重要な話であった。
「そうか、まずはエウロパか」
ムルワーラはそれを聞き腕を組んで考えた。
「その時の連合の政権の政策にもよりますが」
「ふむ」
エルールの前置きにも彼等は顔を暗くさせたままであった。
「そしてもう一つは」
閣僚達はさらに尋ねた。
「連合はまだ何かする可能性があるのですね」
「はい」
彼女はそれに対し頷いた。
「今度は資源の問題です」
クリシュナータとラーンチはそれを聞きやはり、という顔をした。
「仮定の話ですが若し他の勢力において何かしらのレア＝メタルが多量に発見された場合です」
「レア＝メタルですか」
「そうです。それの用途によっては連合はそれを手に入れる為に動くでしょう」
クリシュナータはそれを黙って聞いていた。そして自分と同じ考えなのに驚愕していた。
（まさか私と同じ考えとはな）
だがそれは顔には出さない。ただ話を聞いている。
エルールは話を続ける。真摯なものであった。
「それによっては我々も連合と戦わなくてはなりません。その準備

はしておくべきであると思います」
彼女はそう言うと他の閣僚達を見回した。
「皆さんはどう思われるでしょうか」
彼等は何も語らない。連合と対峙するにはそれなり以上の覚悟が必要だからだ。クリシュナータはそれを見ながら憮然としていた。
（ここで誰か言って欲しいが）
彼自身が言うのには抵抗があった。ここは他の者を立てたいからだ。
（いないか）
それが残念だった。彼はそれを見て意を決した。
（やはり私が言おう）
だがここで一人の男が口を開いた。
「外相」
それはラーンチであった。
「国防相、何かお考えが」
「はい」
彼は微笑んで答えた。クリシュナータはそれを見て内心会心の笑みを浮かべていた。
（よくぞ言ってくれた）
ラーンチはそれを知ってか知らずか言葉を続ける。

## 第五部第二章　狩りその三

「外相の御意見ですが」
「はい」
一同彼の次の言葉を待ち固唾を飲む。
「私は賛成致します」
（よし）
クリシュナータはそれを聞き内心笑った。
「我がマウリアでそうしたものが発見された場合連合はすぐに力づくでも手に入れようと行動に移すでしょう。そうなった場合今のままでは到底対処できるものではありません」
「国防相もそうお考えですね」
「当然です。これは国防省の総意と受け取って頂いてもいいです」
そう言い切った。
「すぐに新たな防衛計画、戦略計画を立案すべきです。対連合用の。外相もそうお考えでしょう」
「はい」
エルールは笑顔で頷いた。
「首相はどうお考えでしょうか」
二人は同時にムルワーラに尋ねた。見れば彼は腕を組んで考えている。
「私ですか」
「はい」
「そうですな」
彼は腕を組みながらまだ考え続けた。そして口を開いた。
「私も外相と国防省に賛成致します」
これで決まりであった。マウリアは国防計画の見直しとマウリアへの備えを決定して午後の閣議を終えた。クリシュナータはそれから自身の執務室に戻った。

ペンを取りデスクワークに取り掛かっている。暫くして電話に手をかけた。
「情報本部に頼む」
そして情報本部長に電話をかけた。やがて本人が出て来た。
「まだ残っていてくれたか。もう帰ったかと思ったが」
「何かあるかな、と思いましたので」
本部長は答えた。彼は勘がいいことで知られている。
「そうか。では私が言いたいこともわかるな」
「はい」
本部長は答えた。
「情報部員を何人か出してくれ。いけるか」
「はい、すぐにでも」
「そうか」
クリシュナータはそれを聞き微笑んだ。
「では早速出そう」
「今度はオムダーマンですか」
マウリアの情報部員の活動先はサハラである。やはり隣の戦乱に明け暮れる地域からは目が離せなかった。だが今回は違った。
「いや、連合だ」
彼は言った。
「連合ですか。やはり例の観艦式で」
本部長は特に驚かなかった。情報に携わる者として各国に情報部員を送り込むのは常識だからだ。
「それもあるがそれだけではない」
クリシュナータは答えた。
「恒常的に送っておきたいのだ。そうだな、できれば連合の主要各国にもだ」
「それはまた大掛かりですな」
本部長もそれには驚いていた。だが声には出さない。
「何かあったのですか」

「何かあってからでは遅い。そうではないか」
「確かに」
事前に防ぐに越したことはない。何事も。
「では頼むぞ。中央政府に重点を置く」
「はい」
「そして日米中露だ。あとは旧太平洋諸国、そしてブラジルやアルゼンチンだ」
送る先を次々に言っていく。
「他にはイスラエルにトルコ、とりあえずはそれでいいな」
「わかりました」
本部長は答えた。電話越しに頷く。
「気付かれないようにな、くれぐれも」
「それは心得ております」
「ならいい。頼むぞ」
「はい」
こうしてマウリアの連合への諜報活動が開始された。それは迅速にして徹底したものであった。
「友好関係にあるからといって油断してはいけない」
クリシュナータはそう考えていた。
「この銀河は生き馬の目をくり抜いてでも生きていく世界だ。とりわけ政治は」
極めて現実的な視点からそう見ていた。
彼はそういう意味で現実主義者であった。そしてそこに妥協はなかった。
「これからどうなるか誰にもわからない。神々以外は」
そう考えていた。そしてその考えのもとに動いているのだ。
「だが我々は我々のできる限りのことをしなければならないのだ。それが今の人生でするべきことだ」
彼もまた輪廻転生を信じていた。それはマウリアの者にとって永久不変のものである。

夜になっている。街の灯りが見える。
「美しいな」
クリシュナータは夜景が好きだった。それを見て仕事の疲れを癒すのが常だった。
「この夜景を守る為にもな。手を尽くさなくてはならない」
そしてまた仕事に戻った。彼はそうして深夜まで仕事を続けた。

マウリアの諜報部員が入ってきているという情報は連合中央政府にも入っていた。八条はキロモトからそれを聞いた。
「マウリアからですか」
「そうだ。おそらく今回の観艦式の件でだろう」
キロモトは電話で彼に対して言った。
「彼等にとっても今回の観艦式は関心があるのだ。当然といえば当然だが」
「そうでしょうね。元々そうした宣伝も兼ねていますから。他の勢力への」
「うむ。だが彼等が諜報部員を送り込んできたのはおそらくそれだけではないだろう」
「といいますと」
八条は問うた。
「我々の今後の行動も監視したいようだ」
「まさか我々がマウリアに侵攻するとでも考えているのでしょうか」
「おそらくな。我々の軍事力を警戒しているようだ」
「それは当然ですが」
「しかし我々には彼等に対して武力行使を行う意図はない、と言いたいのだろう」
「はい」
「だが彼等はそう考えないこともわかっているね」
「はい」
それがわからぬ八条ではなかった。

隣により国力の高い国があった場合それを警戒するのは常である。連合内でも政治的経済的にそうしたことはある。言うならば国際情勢の常識である。
「そういうことだ。だからこそ彼等は動いた」
「どうなさるおつもりですか」
「とりあえずは彼等にある程度の警戒をしておこう。だが緩めにしておくべきだ」
「何故ですか」
「特に警戒する必要もない。国家機密に触れるならばその時点で捕らえるなりしたらいい。そして送り返す」
「送り返すということは荒立てるつもりはないということですね」
「そうだ。私は彼等に対して何かするつもりはない。例えマウリアに何があろうとな」
「それは何故ですか」
「そこまでして手に入れるものがあるかね。我々は今でも資源には困ってはいない」
「私もそう考えます」
「少なくともマウリアに対しては」
「マウリアには、ですか」
「そうだ。マウリアの地形は複雑だ。それに彼等との交易で得られている利益も大きい」
連合各国にとっても中央政府にとってもマウリアは重要な交易相手である。そこから得られる利益は無視できない。
だからこそ彼等は今まで友好関係を維持できたのだ。貿易摩擦は起こってもそれが深刻な問題に発展することはなかった。
これが重要であった。利益が得られる相手に戦争を仕掛ける国はない。だからキロモトもそう言ったのだ。
「もし資源が必要なら交易で手に入れればいい。マウリアに対してはそれができる」
「はい」

「だがエウロパやサハラ各国に対してはどうかわからないがな」
「ですね。特にエウロパは」
ここでも仇敵関係が深く影響していた。
「そうだな。だがエウロパには出ないだろう。ただでさえ資源の問題でも悩んでいるというのに」
「ええ」
「サハラだとわからないな。彼等の行動次第だ」
サハラについては連合はエウロパやマウリアのそれ程詳しくはない。ハサンとは交易を行い友好関係にあるがそれ以外とは疎遠である。オムダーマンについても対岸のこととしか考えてはいないのが実状だ。
「マウリアの諜報部員のことが出たが我々もマウリアには既に送り込んでいる」
「はい」
「エウロパにもな」
これはハサンからのルートで入っている。宗教家や企業家等と身分を隠して入るのだ。
「ただエウロパに送り込むのは人を選ばなくてはならないから大変だ」
「そうですね。我々が人種で悩むのは皮肉なことです」
エウロパは白人の勢力である。これは彼等が欧州をルーツとしているから当然といえば当然である。
連合は極めて多くの国家、民族にそのルーツがある。アジア系にヨーロッパ系、アフリカ系、アボリジニーと人種は全てのようなものである。そしてそれに加えて混血が進んでいる。純粋な白人は極めて少ない。その格好の例がアメリカである。今の大統領マックリーフは金髪碧眼の黒人である。他の国々も事情は同じである。青や緑の目を持つアジア系もいれば黒い縮れた髪の白人もいる。連合らしいと言えばそれまでだが時として問題も生じる。
それがこのスパイの人選である。サハラたマウリアに送り込むの

には比較的困らないがエウロパに対しては困る。純粋なヨーロッパ系の者が極めて少ないのだ。
「ロシアも違いますしね、どうも」
「そうだな。彼等も今ではかなり混血が進んでいる」
「歴史的にそういうところがありましたし」
ロシア人がモンゴル人の血が入っていることを言っているのである。
「おかげで一人潜り込ませるにもまずは人選で四苦八苦だ」
「整形も限度がありますし」
例え肌や目の色を変えても限度がある。純粋な白人ではないのだ。
またこれがエウロパの機密保持に大いに役立っていた。何しろスパイが限られるのだから。
「あちらの人間をダブルスパイにするのも難しいな」
「それも順調には進んでおりません」
エウロパ中央政府や各国の官僚や軍人を買収したりしてこちらに取り込むこともしている。だが上手くはいっていない。警戒が強いのだ。
「もっとも彼等もこちらに仕掛けておりますが」
「わかっている」
キロモトは答えた。
「そちらの調査も調べるよう指示を出している」
「内務省にですね」
各国の権限が強くとも内務省は一応ある。その役割は限られたものであるが。
「向こうもそれはわかっているがな。しかしこうしたことはどうしてもイタチゴッコになってしまう」
「仕方ありませんよ。向こうも必死ですから」
「ははは、それはそうだな」
キロモトはそれを聞いて笑った。
「そう考えると何かスパイ小説のようだな」

「あそこまで激しくはないですが。しかしスパイ戦というのはこうしたものでしょう」
「確かに。まあ今のところは破壊工作までは考えていないようだがな」
「だとすれば脅威は少ないです。テロリストよりは」
「そうだな。ところでそのテロリストの方はどうなっているかね」
ここでテロリストに話を向けた。
「はい、それですが」
八条は応えた。
「二つの部署に対策を命じました。今活動中です」
「二つか。何処と何処かね」
「グリーンベレーと国防省のテロ対策チームです」
「テロ対策チーム・・・・・。確かアラガル長官の」
「はい。既にこの太陽系に潜伏していると思われる者達には彼を当たらせます」
「そして外部から来る者にはグリーンベレーを当てるというわけだね」
「そうです。二段の備えでいきます」
「そして首都の防衛、警護にあたる軍の数を大幅に増やす」
「その通りです」
彼は答えた。
「これなら問題はないと思います。どう思われますか」
「それもいいと思うよ」
キロモトはそれを了承した。
「元々国防のことは君に殆ど任せているからな」
「はい」
これがキロモトのやり方であった。彼は部下に仕事を任せるのだ。そして自身はそれを監督し余程のことがない限り口は出さない。それが彼の大統領としてのあり方だった。
「仕事を任せてもらわないと人は働かない」

彼は自著でそう書いている。
「だが上司は放任すればいいのではない。常に見守り、危ない時には助けることが必要である」
そしてその持論通りにやっているのである。責任は彼が負う。部下にいい仕事をしてもらう為に。それが部下達の厚い信頼のもとにもなっていた。
八条もそれは同じであった。生真面目で学者肌の伊藤とはまた違いおおらかで度量の広い彼の下につけたことを彼は幸運に思っていた。
「よろしく頼むよ。私が言うことはそれだけだ」
「はい」
失敗は許されない。今回の観艦式は連合の威信がかかっているのだ。
「何としても成功させなければならない」
中央政府の誰もがそう考えていた。そして彼等はその為に働いているのだ。
キロモトとの話を終えた彼は国防省に戻った。そしてグリーンベレーの本部に電話をかけた。
「ンガバ大佐はどうしていますか」
彼は電話に出た将校にそう問うた。
「隊長は今作戦会議室におられます」
その将校はそう答えた。
「作戦会議か。どれだけかかります？」
「そうですね」
おそらく時計に目をやったのだろう。暫く間があいた。
「あと一時間程だと思います」
「そうですか。では会議が終わったら私に電話するよう伝えて下さい」
「わかりました」
それで電話を切った。次に対策チームに電話をかける。

アラガルはいなかった。出た事務員がこう言った。
「長官は既に自ら調査に当たっておられます」
「長官自らか」
彼が実戦派なのは知っていた。だが今回動くとは思わなかったのだ。
長官という役職のせいであった。普通は中央に留まりそこから指示を出すものだからだ。
「陣頭指揮か」
「はい。そちらの方がやり易いということで」
「そうか」
「何かお考えですか。宜しければお伝えしますが」
「あ、いや」
意外と勘のいい事務員である。八条はその言葉に少し戸惑いを感じた。
「いいです。長官にお任せします。専門ですし」
「わかりました」
「くれぐれもね」
「何でしょうか」
八条はここでその事務員に伝言を頼んだ。
「必ずやテロリスト達を一掃してくれ。だが無茶な行動はしないでくれと」
「それについては長官から伝言があります」
「私に！？」
八条は思いもよらぬその伝言に思わず声をあげた。
「はい、実は長官は国防相が電話されることをもう予想しておられました」
「そうだったのか」
流石に探偵をやっていただけはある、そう思わざるをえなかった。
「そして私に伝言を残して下さいました」
「何と」

「テロリストは一人残らず絶対に捕らえると。ただし荒っぽい行動は目を瞑って下さいと」
「何と」
先程彼が伝えるように言った伝言に対する答えそのままであった。彼はそれを聞いて思わず苦笑した。
「どうやら長官は私が何を考えて何を言うかわかっていたようだね」
「そのようで」
事務官も笑っていた。案外面白い者のようだ。
「ではここは長官に全てを任せるとしよう。私が口を挟むとかえってよくない。長官に伝えて下さい」
「はい」
「全て任せると。責任は私持ちです」
「わかりました」
「よろしく頼みますよ」
こうして電話は終わった。そして八条は時間を空けてグリーンベレーに電話をかけた。
「はい」
出て来たのは若い士官であった。先程の者とは違っていた。
「ンガバ隊長はいるかな」
「はい、こちらに」
見ればもう一時間経っている。暫くしてンガバが出て来た。
「お待たせしました」
その力強い声で言った。
「いやいや。ところでそちらの作戦の進行状況はどうですか」
「はい、かなり順調に進んでおります」
「そうか。それはよかった」
「ただ一つ気になることがあります」
ここで彼の声が曇った。
「気になることとは」
「はい、それですが」

彼は話をはじめた。それによるとどうやらテロリスト達は市民団体を装って入ろうとしているらしい。
「いつもの手口か」
「はい。彼等とつながりのある団体が協力しているようです」
「協力ではないですね。おそらく彼等の表向きの名前が違うだけです。中身は同じだ」
「そうのようですね」
「懲りない連中だ。そんなものに騙されると思っているのか」
「少なくともマスコミの一部は騙せているようです」
「ごく少数だけでしょう。それにそのマスコミとやらも連中と結託している」
今だそういった市民団体やマスコミは存在していた。彼等も多くの利権を持ち、それを背景にして動いているのだ。
「そういった怪しげな団体には前もってマークはつけていますが」
「はい、それをもとに今現在かなりの数のテロリストを拘束しております」
「しかしそれでもまだ足りないかも知れませんね」
「そうですね。連中も整形したり身分を偽造したりしています。実際にそうした者も捕らえております」
「指紋や手形もやっていますね」
連合においては指紋や手形で照合することが多い。それで空港の出入のチェックも行っているのだ。
「はい、それはもう。ただそれも整形している場合がありました」
「それでよくわかったね、その者がテロリストだと」
「犬が教えてくれました」
「犬が」
連合軍も軍用犬を使っている。ドーベルマンとシェパードから品種改良した犬だ。黒く引き締まった大型犬である。賢くかなりの体力と瞬発力を誇る。嗅覚も優れている。
「匂いで感じたようです。そしてそのテロリストを拘束しました」

「匂いか」
「はい、調べてみたところ小型の爆弾を携帯しておりました。危ないところでした」
「そうですか。だが捕まって何よりです」
「それもあり犬の数を増やしました。すると検挙数が飛躍的に上がりました」
「それは何よだ。まさか犬が活躍するとは思いませんでした」
「ええ。ですが嬉しい誤算でした」
「嬉しい誤算ですか」
軍事においても時としてこういうことがある。思わぬところから成果が現われたりするものなのだ。
無論これには逆もある。事前にそれに気付くか、気付かないかという問題は所謂センスが大きく関わってくる。それはどのジャンルでも同じことかも知れない。
「今では科学面と合わせて使っています。その結果テロリストの中には諦めた者もいるようです」
「ふむ、それはいいことです。だが彼等はまた来るでしょうね、隙を見て」
「その時こそ捕らえてやります。こちらも逃がすつもりはありません」
「よし、頼みますよ」
八条はそれを聞いて強く頷いた。

## 第五部第二章　狩りその四

「ところで」
ここで話題を少し変えた。
「既に侵入してしまったテロリストに対してはどうしていますか」
監視網をかいくぐった者について言及した。
「ハッ、それですが」
ンガバはここで言葉を厳しくさせた。
「首都防衛部隊及び警察と密接に関係をとり人員を回しております。こちらでも軍用犬を使いかなりの成果を挙げています」
「そうか。それならいいですが」
八条はそれでも言葉を付け加えた。
「だが油断をしてはいけないと言わせてもらいます。我々は彼等を一人残らず捕らえなければならない。しかし彼等は一人でも逃れることが出来れば目的を達成することができます」
「わかっております」
テロの怖ろしさは彼が最もよく知ることであった。そうでなければ特殊部隊の隊長は務まらない。
だからこそテロは脅威なのだ。そして対策には万全の注意を払わなくてはならない。
八条もそれはわかっている。ンガバに慎重に話をするのもそのせいだ。
「一人残らず捕らえて下さい。さもないと大変なことになりかねません」
「はい」
ンガバが電話の向こうで頷いた。
「観艦式を狙う者は一人残らず捕らえます。必ずや」
「頼むよ」
「お任せ下さい」

こうして電話による話し合いは終わった。八条は電話を切るとまず一息ついた。
「さてと」
彼は前を見た。
「大変なのはこれからだな。おそらく敵もこれまでよりも多くなる。そして」
彼の目が怪訝の色を宿した。
「何をしてくるかわからない。だが絶対に防がなければならない」
彼は次には首都防衛軍に電話をかけた。こうして担当部局全てに対策を打った。これも国防相の任務であった。

アラガルは自らテロリストの摘発に当たっていた。黒いスーツの上にクリーム色のコートを着て雨の夜の街を歩いている。
彼は一人だった。周りに人の気配は全くない。
狭い道だ。左右には古いコンクリートの建物がある。アスファルトの端からは雑草が顔を出している。
「こんなところにも生えるのか」
アラガルをそれを見て呟いた。
「信じられない生命力だな。人間より上だ」
素直に賞賛の言葉をかけた。
「だが私もこの草と似たようなものだな」
自嘲を込めてそう呟いた。
「何度倒されても立ち上がらなくてはならない。この草と違うところは自分の意志でそうしなければならないことか。いや」
言葉を替えた。
「この草も同じだな。自分でアスファルトを突き破らなくては顔を出して生きることもできない」
その通りであった。草は陽の光を浴びて生きている。生きる為には陽を見なければならない。
だがこうしたところではそれは容易ではない。固い舗装された壁

を突き破らなくてはならないのだ。
「人の一生も同じだ。前の壁を突き破らなくては生きていけない。そのうえそれで自分で食べる方法を見つけなくちゃいけない」
ドライな言葉であった。彼はそうした言葉を呟きながら道を進む。雨は決して強くはない。だが降り続け彼の肩を濡らしていた。
それに構わず進む。そしてあるビルの前に来た。
「ここか」
彼はそのビルを見上げて言った。見れば上の方に光が灯っている。弱い光だ。
ビルの周りを調べる。すぐに入口が見つかった。上に続く階段がある。
アラガルはそこに足をかけた。そして上に昇っていく。
思ったより高いビルである。だが彼は息一つ切らさず一歩一歩進んでいく。
コツーン、コツーンという音がする。そして扉の前に来た。そこには看板がかけてあった。こう書いている。
『連合の平和と人権を守る会』
「絵に描いた様に胡散臭い名前だな」
アラガルはそれを見て思わずそう言った。まさにその通りであった。
こうした団体の特徴としてもっともな名前をつけるものだ。その実態がどれだけあやしげなものであってもだ。
アラガルは扉を叩くようなことはしなかった。まずは扉に耳を近付けた。
何やら話をしている。ヒソヒソと声が聞こえる。
「どうするのだ」
「やはりすぐに動くべきか」
扉の向こうがどういう構造になっているかわからない。だが扉のすぐ向こうにいるのは確かだ。
「よし」

アラガルはまずは身体を引いた。そして銃を取り出した。レーザーガンだ。
それを放つ。扉は瞬時にして破壊された。
「！」
中にいた者達の気配がした。どうやらかなり焦っているようだ。
アラガルは破壊された扉をくぐった。そして中にいる者達に発砲した。
「うわっ！」
頭の禿た中年の男だった。彼は胸を撃ち抜かれその場に崩れ落ちた。
部屋の中は事務所だった。簡素な部屋に幾つかの椅子と机がある。そしてその中央にはソファーが置かれている。
禿た男はそのソファーのところにいた。側にも何人かいる。
「中央政府の者か！」
その男の側にいた若い男が懐から銃を取り出そうとする。だがアラガルはそれより前に彼の額を撃ち抜いた。
「答える必要はない」
彼は言った。そして奥に逃げようとした男の背中を撃った。
「テロリストは一人残らず消す。それだけだ」
「我々が行うのはテロではない！」
机に座っていた。髭面の男がそう叫んだ。
「我々が行うのは連合を正しい道に導くことだ！」
ヒステリックに叫ぶ。どうやらこの男なりの理想を持っているようだ。
「我々は連合軍に反対する。それは連合の平和を願ってのことだ！」
だがアラガルはそれには耳を貸さない。演説をよそにライフルを持って来た女を射殺した。彼にとってテロリストの性別は関係ない。テロリストは皆倒すべき敵なのだ。
「連合軍は強大な力だ。その力は各国を圧するものに他ならない！」
髭の男は同志達が次々とアラガルに撃ち殺されているというのに

逃げるわけでも戦うわけでもなく一人演説を続けている。その様子が正常でないことは誰にもわかった。どうやら何か麻薬を打っているらしい。その証拠に目の光が異常だった。狂気が見てとれた。
「そして連合軍は各国に侵略を開始するだろう。サハラにもマウリアにも。そしてエウロパにも」
「エウロパ」
アラガルは逃げようとした中年の女の後頭部を撃ちながらその言葉を呟いた。
「そうか、そういうことか」
そして彼は全てを理解した。
「我々はそれを食い止めるものである。断固として連合軍の観艦式を阻止する！」
「もう言い。黙れ」
アラガルはそう言うと彼に銃を向けた。そしてその胸を撃った。男は心臓から血を噴きだしながら後ろに倒れた。即死であった。
「この者達の後ろにはエウロパがいるようだな」
そして事務所の中を探った。もう誰も残ってはいない。皆彼に射殺されていた。
机の中や金庫を調べる。金庫を開けるのは慣れていた。これもテロリストを相手にする探偵の仕事の一つである。彼等の秘密を探る為だ。時にはこうした一歩間違えれば盗賊の様なこともする。
「ふむ」
金庫の中には金の他にも幾つかの書類があった。彼はそれを開いた。
そこにはこれからの計画のことが書かれていた。観艦式の最中に空港でテロを起こすというものであった。
「やはりな何が平和と人権だ」
アラガルは顔を顰めてそう呟いた。やはり看板は偽りであった。
他にも調べる。死体も調べた。その結果書類や手紙が幾つか見つかった。

その殆どがこれからの計画に関するものであった。だがそれだけではなかった。
その中に驚くべきものがあった。それは彼等の資金源であった。
麻薬もあった。髭の男を見てもそれはわかる。だがそれだけではない。
何とエウロパの諜報部員の名前もあった。ミカエラ＝ステッラという名だ。
「あの女か」
アラガルもその名は知っていた。当然これは偽名であろうがそれでも連合の諜報関係者の間では非常によく知られた名前であった。
何故彼女の名が知られているか。数年前連合内で各国や中央政府の情報が漏洩しているのではないかという嫌疑が出て来た。
調べてみると一人の連合中央政府の職員に当たった。その女の名がミカエラ＝ステッラだったのである。
連合諜報部は極秘に彼女の身辺を洗った。だが彼女はそれより前に姿を消してしまったのだ。
姿を消した後彼女が住んでいたマンジョンに行くと誰もいなかった。そして何も残っていなかった。コンピューターにも記録は一切残っていなかった。
だが綿密な調査の結果彼女が各国や中央政府の情報を巧みにハッキングしてそれをエウロパに流していたことがわかった。そして彼女がエウロパの諜報部員であることもわかった。
彼女は実は成りすまされていたのだ。本物のミカエラ＝ステッラはニカラグアの農場にいた。夫と共に牛や馬の相手をする大柄で立派な体格の女性であった。
「あたしが中央政府の職員だったって？嫌だねえ、そんなの」
彼女はその話を聞いて豪快に笑い飛ばした。
「あたしの柄じゃないよ。あたしはこうやって畑仕事をしているのが一番性に合ってるんだよ」
そう言ってその話を否定した。調べると血液型やデータ上での出

身地は一緒だったがあまりにも顔立ちや体格が違っていた。中央政府のステッラは小柄でほっそりとしていた。そして赤い髪を持つ美女であった。
「その赤い髪も本当の髪かどうかわからないが」
染めることも可能だ。今では染髪料もかなり進歩している。ごく自然に、しかも髪や頭皮を傷めることもなく染めることができる。昔の様に髪を染めたからといって後々禿ることを心配しなくてもよいのだ。
眼の色もだ。データでは緑となっていたがこれもカラーコンタクトや整形で変えることが可能だ。
ステッラの正体はここまでであった。それ以上は何もわからなかった。だがその名だけは連合内において残り続けたのだ。
「まさかな」
アラガルはその名を見てそれまで以上に顔を曇らせた。まさかとは思うが。
「これは調べる必要があるな」
全ての書類を収めるとそこから立ち去った。そしてビルを出た。雨はまだ降っていた。だが彼はそれに構わず道を歩いていった。
この話はすぐに八条やキロモトにも伝わった。彼等はそれを聞いて顔色を変えた。
「あの女が今回の件にも関わっているのか」
まだ連合にるということですら信じられない。とうの昔にエウロパに脱出したと誰もが思っていたのだ。
「断定は出来ませんが」
アラガルは八条の執務室で彼に対して言った。
「しかしこの名前が出たのは事実です」
「そうですか」
八条はそれを聞いて頷いた。
「テロリストを裏で操っているというのか、今度は」
「可能性は否定できません。エウロパも今回の観艦式を快く思って

はいないでしょうし」
「そうでしょうね。彼等にとっては腹立たしいことです。連合の権威を見せつけられるというのは」
「それを妨害、あわよくば潰す為の行動でしょうか」
「今の状況では何とも言えませんね。だが」
彼はここでそれまでアラガルの持って来た手紙に目を通していたがそこから顔を上げた。
「可能性はあります」
「はい」
それには彼も頷いた。
「どうやら今回はさらに厳重な捜査と防衛が必要なようですね」
「そうですね、あの女が関わっているとなると」
「これはさらに捜査の手を拡げるか」
「それには反対です」
ここでアラガルは反論した。
「何故ですか？」
八条はそれに対して問うた。
「ここは私にお任せ下さい。既に主立った者は殆ど始末しています。残るはあと僅かです」
「その僅かの中に彼女がいるかも知れないですね」
「それはわかっております」
彼は言った。
「むしろそれを願っています」
「強気ですね」
「強気ではありません」
ここで彼は言った。
「私にとっては獲物なのです。テロリストや敵のスパイは」
そしてニヤリ、と不敵に笑った。
「言うならば私は狩人です。獲物を狩る」
「そしてステッラもその中の一人」

「はい、美しき獲物です」
彼はそう答えた。
「彼女は私が仕留めます。例え何があろうと」
「他のテロリスト達もですね」
「そうです。連合のテロリストは私の獲物です。何があろうと捕らえます」
「そうか」
八条はそれを聞き終えて納得した様に頷いた。
「ならば彼女のことも貴方に任せるとしましょう。実は他の部署を当たらせることも考えていましたが」
「有り難き幸せです」
彼はここでもまた笑った。
「必ずやステッラを捕らえて御覧に入れましょう」
こうして彼はエウロパの謎の女スパイ狩りに身を投じた。
彼は単身怪しいと思われる場所を虱潰しに探していった。その間部下達と共に既に太陽系に潜伏しているテロリストや胡散臭い市民団体を潰していった。そして徐々にステッラの影を掴んでいった。
「どうやら木星にいるようだな」
「はい、その様ですね」
本部に戻ったアラガルに対して部下の一人がそう答えた。彼等もまたステッラを探しているのだ。
最早ステッラの捜索とテロリストの掃討は同じになっていた。彼等は太陽系中を探し回っていた。
木星はこの時代は既にその役割をあらかた終えていた。宇宙開拓初期にはその豊富な資源の発見及び発掘で賑わっていたが今ではその資源はあらかた掘り尽くしてしまっている。リングの小惑星群の資源もである。今ではごく少数の者が残っているだけだ。
「本当に木星にいるのでしょうか」
その部下が不思議そうな顔をしてアラガルに言った。ダークブラウンの髪を七三に分けている。黒い瞳の銀行員の様な外見の男だ。

趙虎という。台湾出身である。ダークブラウンの髪はイスラエル出身の母方の祖母からきている。
「普通に考えて有り得ませんが」
とても人の住める環境ではない。ましてや潜伏するなどとは。
「いや、有り得るぞ」
だがアラガルはそれに対して言った。

## 第五部第二章　狩りその五

「むしろ隠れるには好都合だ」
「そうなのですか」
「ああ。木星にいるのはごく少数の監視員等だけだな」
「はい」
彼等は中央政府から派遣されている。木星に逃げ込んだ犯罪者に対処する為である。
他にも任務はある。気候や災害への監視もある。だがおおむね仕事は少ない。ここに派遣された者は往々にして一日の大半をコンピューターゲームやカード、読書、スポーツジム等において時間を費やす。そうしたことが好きな者にはいい職場と言える。
「その中にいる可能性が高い」
「またですか」
以前も彼女はそうして潜り込んでいる。彼はそれについて言及したのだ。
「そうだ。いや、言い換えるか」
アラガルはここで言葉を変えた。
「それしかない。木星に隠れるには」
「それはそうですが」
「芸がない、と言いたいな。あれだけのことをした大物スパイにしては」
「はい」
「趙君」
アラガルは彼の名を呼んだ。
「人は一度したことはあまりしようとしない。この場合は」
「はい。やり方が知れ渡っていますから」
「だがそこに盲点がある」
「といいますと」

アラガルにはもうわけがわからなかった。上司が何を言いたいのかわかりかねていた。
「発想の転換だよ。それはしそうにない。ならば人はそこには注意を払わない」
「ステッラはそこに目をつけたのですか」
「そういうことだ。こう言うと何だか推理小説のようだがね」
「確かに」
「ただし普通の推理小説と違うのは我々が直接手を下さなくてはならないことだ。探偵は謎を解くだけだけれどね」
「長官、お言葉ですが」
ここで趙は突っ込みを入れた。
「何だい」
「そうした推理小説もありますよ。ハードボイルドで」
「おっと、そうだった」
アラガルは自分の迂闊さに思わず苦笑した。
「それに長官もご自身で手を下されているではありませんか。探偵の頃から」
「そうだったな、どうも自分のことは棚に上げてしまう」
「それはよくないですよ。特に女性関係においては」
「そういえば最近そうした店にも言っていないな。また行きたいな」
「長官」
趙虎がそこで怖い顔をした。
「そうしたことは任務が無事終わってから仰って下さい。不謹慎ですよ」
「済まん済まん。まあ話はそれ位にして」
彼は趙虎を宥めたあとで言った。
「早速木星に向かうか。そして今度こそステッラを捕らえよう」
「はい」
何はともあれアラガル達は木星に向かった。表向きは監視員の研修としてだ。

「あれ、そんなの聞いていないよ」
木星監視の責任者はそれを聞いてすっとんきょうな声をあげた。
「中央政府の突然の決定でして」
アラガルはそう作り話をした。
「そうだったの。じゃあいいや」
「よろしくお願いします。期間は二週間です」
「うん。短い間だけれど宜しくね」
「はい」
彼等はすぐに捜査を開始した。まずは関心全員の身元を洗った。これは案外楽であった。
木星の監視員は総員で百人程だ。その中で女性は四割程。僅か四十人程の中から探し出せばいいのだ。
「さて、誰かな」
アラガルは趙虎の叩くコンピューターを覗き込みながら言った。
「思ったより早く見つかりそうですね」
「そうだな。今回は隠れ場所を発見したことが大きかった。木星だということをな」
「それが彼女にとって失態でしたかね。いい隠れ場所だとは思いますが」
「木の枝を隠すには森がいいとはよく言ったものだ」
ここでアラガルは古い言葉を口にした。
「潜伏うるには人の多い場所の方がいいな」
「そうですね。確かに木星は誰もがまさかと思いますが」
「しかし一度察知されたらそれで終わりだ。人が少ないのが仇になる」
「そのうえ身元もわかりやすいですし」
「そういうことだ。ステッラもドジを踏んだな」
「かも知れませんね。けれどこれは我々んとっては大きいですよ」
「ああ。遂にあの女を捕らえられる」
二人はそんな話をしながらコンピューターで検索していく。そし

て遂に彼女と思われる者を断定した。
「こいつだな」
「はい」
そこには眼鏡をかけた黒髪の地味な女の写真があった。名をローザ＝オーティスという。ジャマイカ出身の黒人だ。
「まさか黒人とはな」
「肌の手術でも行ったのでしょうか」
「かもな。いや、違うな」
アラガルはホノグラフィー写真を見ながら言った。
「何か塗料を使っているな。それもかなり特殊な」
「成程、それなら問題ありませんね。塗るのが大変そうですが」
「変装にはよく使われる。よくあることだ」
アラガル自身も使ったことがある。だからそう言えるのだ。
「ともかくこれでステッラの尻尾を掴むことができた」
「はい。後は捕まえるだけです」
「慎重に行こう。あの女は悪賢い」
「そうですね。ここで取り逃したら今までの苦労が水の泡です」
「そうだ。絶対に逃がさん」
アラガルは強い声でそう言った。そして彼等は部屋を出た。
すぐにステッラに網を張り巡らせる。そして彼女を少しずつ包囲していく。
「逃がすなよ」
「はい」
彼等は次第に彼女を追い詰めていく。彼女の知らないところで。
そう考えていた。
三日後彼等は彼女の部屋の前にいた。その手には銃がある。
「出来るだけ生かして捕まえたいな」
「自白させる為ですね」
趙が問うた。
「そうだ。エウロパのことを聞き出したい」

スパイに対する当然の処置であった。この時代では拷問による自白は行われない。自白剤を使う。自白剤も進歩し、脳等への悪影響はなくなった。そしてその効果はより強くなったのだ。
「ことと次第によっては今後エウロパと揉めるな」
「今更という気もしますがね」
彼等は小声で囁いている。当然ステッラに気付かれないようにする為である。
一際大きな男が扉の前に来た。そしてその扉を思いきり蹴った。
「動くな！」
彼等は一斉に部屋に入った。そして銃を構える。
「連合テロ対策チームだ。これだけ言えばわかるだろう！」
「ステッラ逃げられないぞ。覚悟しろ！」
口々に叫ぶ。だがその部屋には人の気配は全くなかった。
「！？」
彼等はそれを見て不思議に思った。いぶかしみながら部屋の中を探る。
調べてみたが彼女は何処にもいなかった。どうやら逃げてしまったらしい。
後でわかったことだが車とシャトルが一つずつなくなっていた。何故なのか言うまでもない。
「逃げられましたね」
調べ終わり趙は渋い顔でアラガルに言った。
「そうだな。相変わらず足が速い女だ」
アラガルも渋い顔をしていた。朗らかな普段の表情はそこにはなかった。
「今もこの太陽系の何処かにいるでしょうね」
「そうだな。だがもうテロリスト達を裏で操ることは出来ない。当分身を隠さなくてはならないからな」
「ですね。とりあえずはあの女の今回の観艦式への攻撃を防いだということでいいのでは」

「そういう考えもできるか」
アラガルはそれを聞いて表情を和らげた。
「そうです。それだけでも大きいですよ。他のテロ組織は既にその殆どを潰していますし」
「あの女の手が切れたならその関連の組織も終わる」
「はい。後は小さな組織だけです。それはもう全て首に縄をかけてあります」
「その連中を捕らえていけばいいか。これで観艦式はとりあえずは無事に行えそうだな」
「ええ。しかしその為には苦労しましたよ」
「そういうものだ」
アラガルは言った。
「一つの行事を行うにあたって色々と準備が必要だ。我々はそのうちの一つを行ったのだ。仕事として」
「大変な仕事でした」
「そうか？」
アラガルはそれに対して不敵に笑ってみせた。
「私にとては実にいいゲームだったが。多くの獲物を狩ることができた」
「長官にとってはテロリストは獲物でしたね」
「そうだ。最高の獲物だ」
その顔にいつもの笑みが戻っていた。
「これは止められない。一度覚えると癖になる」
「狩りの愉しみですね」
「ああ。私はこれからもこの狩りを続ける。テロリストとスパイを狩ることをな」
ニヤリと笑う。そしてボルサリーノをかぶる。
「では戻るか、シンガポールに。ここの所長には既に事情を話してある」
「驚いていたでしょう。まさかここにステッラがいたとは夢には思

いませんから」
「呆然としていたよ。まあ当然か」
これは無理のないことであった。
「とりあえず扉の修理費を国防省の会計部に話をしておきましょう」
「そうだな。かなり骨が折れるが」
会計部はかなりのしまり屋で知られている。軍や国防省の一般会計を取り扱っている。とかく出費の多い軍にあってはそれも当然であった。
「それが一番辛い戦いになりそうだな」
「狩りではないのですね」
趙がここで突っ込んだ。
「残念だがな。私はそうしたお金の話は苦手だ。只でさえ無駄な出費が多いとあちらからは言われている」
「長官は何事も派手にやり過ぎるからですよ」
「だがそうでなくては狩りは面白くない」
彼は不平を露にして言った。
「地味にやるのは私の性に合わないんだ。やはり派手にやらなければ」
「かといって不必要に火器を使うのは」
「私にとっては不必要じゃないんだ」
「それは会計部に言って下さい。私に言わずに」
「趙君」
彼はしかめっ面で趙に顔を向けた。
「君も案外冷たいな」
「今頃気付かれたのですか」
彼はそれをあっさりと受け流した。
「ですがこれは冷たいのではありませんよ」
「では何だ？」
「ごく当たり前のことを申しているだけです。常識を」
「常識をふりかざすのは嫌いだ」

「長官は度が過ぎます」
「やれやれ。では君は私が直接会計部と話をするべきだと思っているのか」
「はい」
「その結果対策チームが不利益を被ってもいいのだね」
「チームは不利益なぞ被りませんよ。長官が始末書を書かれて扉のお金を払わされるだけで」
「それが対策チームの不利益なのだが」
「長官とチームはまた別です。責任はご自身でどうぞ」
「ではいつも通りか」
「はい。始末書を書かれるのはもう慣れておられる筈です」
「ふう」
アラガルはそれを聞き溜息をついた。
「何か作戦の度にこうして始末書を書いている気がするな」
「自業自得です」
趙の言葉が締めとなった。彼等は観測所を後にした。そして地球へと戻っていった。
何はともあれ彼等とグリーンベレーの活躍によりテロ組織は今回の観艦式への妨害を防がれた。そして観艦式は無事行われることとなった。

# 第五部第三章　巨大戦艦その一

巨大戦艦

「ステッラ！？」
モンサルヴァートは連合で起こったスパイ事件を聞き思わずそのヒロインの名を言った。
「ご存知ですか」
それを報告したプロコフィエフは表情を変えることなく問うた。
「一応はな」
その名は彼も知っていた。以前の連合の事件のことは彼も聞いていた。
「私は諜報部にはこれといて知り合いもいないので詳しくは知らないが」
「かなりの腕を持つエージェントなのは間違いないようですね」
「そうだな。それはまだ連合にいたことでもわかる。よく今まで捕まらずに済んだものだ」
彼は感心したように言った。
「ただテロを操るというのはあまり褒められたことではないが」
「確かにそうですが」
二人はあくまで軍人である。そうしたことは好まない。
「結局それは失敗したようだがな」
「はい」
「問題はそれが誰の指示で行われたか、ということだが」
「おそらくは彼女の独断でしょう」
「何故そう断定できる？」
モンサルヴァートはプロコフィエフの言葉に思わず顔を上げた。
「私が聞いたところによると彼女は本部から連合内部の活動には全て委任されているそうです」
「そうだったのか」

「前の中央政府及び各国に対する行動が高く評価されたそうです」
「ふむ」
モンサルヴァートはそれを聞き考え込んだ。
「だがそれだけではないだろう」
「といいますと」
「それだけで全権を任されるとは思えない。ましてや相手は連合だ」
彼の疑念は当然と言えた。三兆の人口と圧倒的な国力を擁する連合である。そこにおける諜報活動の全権を任されるには相当なことがない限り難しいのは言うまでもないからだ。
「他にも功績があったのではないか。我々の知らないところで」
「確かに」
プロコフィエフもそれを聞いて頷いた。
「諜報部の活動は表には出ない。出たら困るものだ」
「はい」
これは昔から変わらない。情報を収集、分析にるにあたってそれが外部に漏れたら何の意味もないからだ。それにより敗北した国家は星の数程ある。
だからこそどの国もそれの隠蔽、保持には細心を払ってきた。それを漏洩することは万死に値するのは言うまでもないことである。
「それは我々に対してもだ。何処に目や耳があるかわからないからな」
「連合の手の者ですか」
「他にもいるがな。だが彼等が我等の中に最も入り込み易い」
人種の問題でだ。サハラ各国やマウリアは肌や髪、目の色があまりにも違い過ぎる。彼等のルーツがアラブ、インドであるからそれは仕方のないことであった。かなりの多民族から構成された連合とはここが違うのだ。
「それでも比較的少数だろうが」
「変装はやはり限界がありますから」
ステッラ程上手く変装できる者はそうそういないものである。そ

れが現実だ。
「その点では我々の方が恵まれているな」
「ええ。実際にかなりの数の諜報部員を送り込むことに成功しているようですし」
エウロパから連合にスパイを入り込ませるルートは総督府を使う。そこからサハラ東方のハサン王国を経由して入り込むのだ。当然観光客やビジネスマン、企業家等身分を偽ってである。
もう一つルートがある。宗教を使ったものだ。
この時代もバチカンは健在である。今では他の宗教、ギリシアや北欧の神々も復活しているがキリスト教の存在が忘れられたわけではない。エウロパの者もこの時代では複数の宗教を同時に信仰するようになっている。
すなわち古代ギリシアや北欧の神々への信仰とキリスト教への信仰を並立させているのだ。中にはカトリックとプロテスタントの一派を同時に信仰する者もいる。信徒の人口だけで見るとエウロパは三千億になる。連合は十三兆だ。これは宗教の数が異なるからである。
そのキリスト教の最大勢力はこの時代においてもカトリックである。ローマ＝カトリック教会はローマからエウロパに拠点を移してもその権威は変わることがなかった。
流石に軍隊は持ってはいない。かってのように。バチカンに誤謬はない、とも言わない。これは言う必要がないからであるが。だがその権勢は二十世紀から衰えてはいなかった。
やはりキリスト教はエウロパにとっては絶対のものであった。古代の神々が無意識下にある存在とすればキリスト教は意識の存在である。彼等の信仰と精神は二段になっているのだ。
そのバチカンの武器は信者である。彼等は聖書や聖歌の売り上げや信者達の浄財で生きている。その収入は途方もないものだ。バチカンが財政に困ることなど有り得ないことであった。
「バチカンは永遠に絶対の存在である」

連合の国の一つカナダのある哲学者がこう言った。彼もまたキリスト教徒でもあった。でもあったとするのは彼が仏教徒でもあったからだ。連合においてもキリスト教徒は多い。当然イスラム教徒も存在する。連合の宗教は極めて難解なパズルとなっている。

ここが極めて重要である。連合にはカトリックの信者もいるのである。極めて多くの国家、人種、民族から構成されている連合において宗教を規制することなぞできはしない。中央政府も各国も信仰の自由は認めている。何度かこれについて規制の意見も出たがその度に強烈な反対に遭っている。その中には怪しげな宗教が存在していても、である。

エウロパはそこにも目をつけた。カトリックの信者が存在する以上司教達も行かざるを得ない。連合にも神父や枢機卿が存在する。実際にはエウロパにいるカトリックの宗教家より連合各国にいる彼等の方が圧倒的に多い位である。

エウロパ本土からカトリックの司祭達の往来もある。この場合に限りガンタース要塞群とニーベルング要塞群の堅い門は開かれる。時には法皇自ら行くこともある。

そうした宗教家達の中にスパイを紛れ込ませるのである。相手が宗教家であるならば敵もチェックが緩やかになる。下手に厳しくしようものならば信者達から何を言われるかわかったものではない。実際にとある枢機卿の法衣に触れてチェックしたガンタースの兵士が後で連合内部のカトリック信者達の吊るし上げに遭った。これはこの兵士がプロテスタントでありメソポタミアの神々と道教を信仰していたことから事態はさらに深刻化した。

「カトリックの枢機卿だから厳しくチェックしたのではないか」

こうした意見もあった。だが多くは枢機卿様を侮辱した、ということであった。紅の法衣の権威は変わることがなかった。ましてや法皇なぞ触れたならばその場で信者達に処刑されそうなものであった。やはりバチカンは触れてはならない絶対的な存在であった。

ましてや彼等は対立を謳ったりはしない。最早政治のことには介

入しない方針となっている。ただ信仰の世界に生きているのだ。だが影響力があるのは否定できない。
そして信頼もあった。権威と信頼は時として同じものだ。バチカンはエウロパにありながら連合からも信頼されている唯一の存在であった。
だからこそ連合各国も表だっては行動できなかった。そこに工作員が紛れ込んでいることがわかっていてもだ。自然と戦いは陰にこもったものになっていた。
だが表立って行えない以上行動には制限がある。結果としてこちらのルートがエウロパのスパイにとっては最も安全で効率のいい道であった。
「あまりバチカンを利用するのは感心しないが」
「手段を選んでいいものではありません」
「それはわかっている」
だがそれが好きだということにはならない。モンサルヴァートは不快感を露わにしていた。
「バチカンは何も言わないがな」
「連合と我々の関係も熟知しているでしょうし」
バチカンが政治について発言しなくなったのはこれも関係していた。言及するにはあまりにも危険だからである。それ程までに連合とエウロパの対立は深刻であった。
「知っていて黙認するしかないということか」
「でしょうね。連合も表立って批判はできませんし」
バチカンを批判すればそれだけで失脚は確実である。例えどの国の政治家であっても。中には命を狙われた者すらいる。信者の中には過激な者もいる。バチカンこそ絶対の正義であると確信する者もいるのだ。
「それを諜報部は利用しているところもあるな」
「はい。そしてそれは比較的上手くいっています」
ただし連合側もこれは利用している。お互い様と言えた。

「ステッラはどのルートで入ったのだ」
「それはわかりません」
「そうだったな。そんなことを言う愚か者はいない」
彼は自分の言葉を引っ込めた。
「話を変えよう。彼女は今姿を隠しているのだな」
「はい。テロの扇動が失敗に終わりましたから」
「ふむ。今回の観艦式にはもう動けないか」
「そのようです。今は追っ手から逃れるだけで手が一杯でしょうし」
プロコフィエフは冷静な声で答えた。
「捕まる様な者ではないみたいだがな」
「はい」
モンサルヴァートもプロコフィエフもそう見ていた。
「彼女はおそらく逃げ切れるでしょう。ただ」
「ただ!?」
「連合が今回のことで警戒を強めるのは確実かと思われます。何らかの手を打ってくるかと」
「そうだろうな」
それはモンサルヴァートも察していた。
「どういう手を打ってくるかだな」
「まずは彼女が使用した侵入ルートを調べると思われます」
「それによって対策が変わってくるか」
「はい。サハラからのルートだとおそらくそちらの監視が強まるだけでしょうが」
「バチカンのルートだと下手をすれば厄介なことになりかねないな」
「私はそれを危惧しています」
プロコフィエフは答えた。
「特にこれは宗教が絡んでおりますし」
「そう、それが問題だ」
軍人であるモンサルヴァートもそれを心配していた。宗教に関わると如何に厄介な話になるかは彼もよくわかっていた。その程度の

政治感覚がなければ元帥にはなれない。
「バチカンに文句は言えない。責任はこちらの諜報部にある」
「はい。バチカンに隠れて諜報部員を送り込んだということになりますから」
バチカンの責任は問えない。彼等は政治には表向きは関わっていないのだから。どれだけ影響力があろうとも。
「完全にエウロパの責任になってしまう」
「それを連合がどう口実にして来るかですね」
「そうだ。卿はどう見るか」
モンサルヴァートはここでプロコフィエフに問うた。
「はい」
彼女は一呼吸置いて答えた。
「少なくとも聖職者へのチェックは今までのようにほぼノータッチというわけにはいかないでしょう」
「それは最低限だな」
「はい。これでは済まないと思います」
彼女はそうなった場合に予想される事態をより深刻なものだと予想していた。

## 第五部第三章　巨大戦艦その二

「最悪の場合バチカンの本拠地を連合に移すよう要求してくるものと思われます」
「教皇のバビロン捕囚か」
「はい。その再現もあるかと」
かってフランスカペー朝が行った事件である。教皇ボニファティウス八世との対立に際してフランスの美顔王フィリップ四世は兵を送り教皇を捕らえた。これによりボニファティウス八世は憤死している。
だからといってこの教皇に同情する者はいなかった。ボニファティウス八世は教皇にありながら無神論者であり強烈な権力欲と物欲を持っていた。そして好色であり天国はこの世にこそあるのだと主張し、貧困や病気を地獄だと言った。気の弱い政敵を謀略で蹴落とし法皇になった札付きの人物である。もっとも当時の教会においてはこうした宗教家というよりは政治家というべき人物が数えきれぬ程存在した。枢機卿位になるとそうでなければやっていけなかった。紅の法衣は一国の君主に匹敵する名誉と権威があった。それを手に入れるのは容易ではなかったのだ。
それだけ当時の教会の力は強かった。今尚連合とエウロパに影響力を持っていることからもそれは容易に窺える。教会に逆らうことは死を意味した。
だがフィリップ四世はあえてそれをした。フランスでは王権が強かったからこそ出来たことであった。そして自国の領内に教皇庁を置いた。彼はあくまで強気であった。教会に勝ったことは国内における彼の権威を知らしめることにもなった。
だがデメリットも存在した。これに対しフランスの宿敵であるイングランドと神聖ローマ帝国が反対したのだ。彼等も彼等で教皇を置いた。教会の大分裂である。

それは長い交渉によりようやく収まった。教皇は一人となりローマに戻った。だがｓこれにより教会の力はかなり落ちた。それでもルネサンス期においても依然として最大の封建君主であり、神聖ローマ帝国や富豪でありメディチ家、フッガー家と結び付き権勢を欲しいままにした。教会の力はやはり絶大なものがあった。なおフィリップ四世であるが彼は実に奇妙な最期を遂げている。テンプル騎士団の莫大な経済力に目をつけた彼はこれをフランスのものにしようと画策した。彼もかなり狡猾であった。

様々な謀略や捏造によりテンプル騎士団を陥れた。そして拷問と処刑により彼等を抹殺しその財産を手に入れた。だが彼はその頃から何者かに怯えるようになった。

そして衰弱死した。一説には騎士団員達の呪いだとも言われているが真相は一切不明である。それは誰にもわからない。だが誰もそれを不思議には思わなかった。こうして梟雄フィリップ四世は死んだ。悪名と業績の双方が彼には残った。歴史においては法皇との対立は結局はよくある権力争いであると言われている。

そうしたことは過去にあった。サルディニア王国も普墺戦争のどさくさに紛れる形で教皇領に進駐しローマを強引に自らの首都としている。これでイタリア半島は統一されたのだ。

法皇はそれに強硬に反対した。だがどうにもなるものではない。この時代教皇は『バチカンの囚人』と呼ばれた。これはカトリックが特に多いイタリアにとってはかなり頭の痛い問題であった。この問題はムッソリーニの登場まで解決しなかった。彼は確かに多くの問題はあったがヒトラーやスターリンとはまた違っていた。ユダヤ人を守り、カトリックのことにも配慮していた。少なくとも指導力や政治力は備えていた。決して無能ではなかった。ただ自国の軍隊の力を全く把握してはいなかったのが問題であった。

「歴史上何度かそうしたことはあったが」

「あくまで最悪の場合です」

プロコフィエフはそう断ったうえで言った。

「その場合は深刻な問題に発展するかと」
「確実にな」
それはモンサルヴァートにもよくわかっていた。
「そこから戦争に発展する可能性もあるな」
「はい。スパイを送り込まれる禍根を断つ為にも」
「それだけではない。バチカンを向こうに持っていくことは彼等にとって大きな意味がある。カトリックの権威を彼等がその手に収めるのだからな」
今までそれはエウロパにあった。それが連合にとってはいささか不満であった。
連合にもカトリックの信者は多い。フィリピンや中南米諸国を中心としているがその他の国々にもいる。彼等はバチカンに行くことは出来ない。連合とエウロパの対立がそれを許さない。行くにはかなり高位の司祭にでもなるしかない。これは熱心な信者にとっては長い間不満の種であった。
だがそれはどうにもなるものではない。バチカンを動かすことはできない。エウロパにあることは動かないのだ。
信者はバチカンに詣でることを望む。それが連合にあるとどうなるか。
「金が動く」
如何にも連合らしい考えだがその通りだ。
まず信者達の旅でのシャトルや宇宙船の移動。その中継地となる多くの街での宿や食事。途中の遊興。旅はそれだけで大きな産業になるのは昔から変わらない。連合は宇宙海賊という悩みの種も抱えているがこれの問題は今はかなり減少している。テロリストはその前に信者達にやられる。法皇を傷つけるなどという行為は将に悪魔の所業であるからだ。流石にこれは容易ではない。法皇は信者により護られているのだ。
「そうしたことを考えるともしその経緯で入ってきたならばそれを口実に何かとこちらに圧力をかけてくるかと」

「全ては利権か」
それから起こる戦争は実に多い。これも昔からだ。
「連合はそうしたことには特に敏感だが」
「今までバチカンにも何度か連合に来るよう誘ってはいますね」
「信者も向こうの方が多いことだしな。そういえばだ」
彼はここで話を変えた。
「信者の数だが連合の宗教人口は十兆を超えているらしいな」
「はい、連合の宗教は多岐に渡っておりますから」
「あれだけの多様な文化や人種を擁していれば当然か」
そこが連合とエウロパの違いであった。
「連合らしいといえばらしいな」
プロコフィエフはあらためて言った。
「実は今回私がここに来たのは閣下にお知らせしたいことがあり参ったのです」
「はい。それだけでも充分脅威ですが」
「何だ。言ってみてくれ」
モンサルヴァートもただならぬものを感じていた。
「連合の艦艇ですが」
「最近新型を一斉に開発しているというのは聞いている」
今までは各国の艦艇をそれぞれ使用していたがそれを統一したのだ。
「はい。その中に恐るべきものがありました」
「それは諜報部からの報告か」
「はい。ステッラとは別の」
「そうか。そしてどのようなものだ」
モンサルヴァートの顔も暗くなってきた。
「戦艦か空母か。だがそれならばそれ程顔を暗くはさせないな、卿は」
「はい」
彼女は暗い顔のまま頷いた。

「問題は彼等の旗艦となるべき艦です」
「普通の戦艦や空母ではないのだな」
艦隊の旗艦は戦艦や空母が務めることが多い。そうした艦は電子や通信を特に強化しているのが通例だ。
「どの様な艦だ」
「これを御覧下さい」
プロコフィエフはここで一枚のディスクを取り出した。
「そこにデータはあります」
「ふむ」
モンサルヴァートはそれをすぐに自分の机の上のコンピューターに入れた。そしてその中身を見た。
「・・・・・何だこれは」
それを見た最初の一言はそれであった。
「これは本当に艦か」
「はい」
プロコフィエフは頷いた。
「人口要塞ではないのだな」
「大きさだけを見ればそうかも知れませんが」
「よく見れば形が異なるな。れっきとした艦艇の形だ」
「おわかりいただけましたか」
「ああ」
モンサルヴァートは頷いた。
「これは一隻ではないな」
「はい」
「見たところこれ一隻だけで我が軍の一個艦隊に匹敵する戦力を持っていそうだな」
「おそらくその程度の戦力は擁しているでしょう、実際にはまだ戦っていないのでよくわかりませんが」
「由々しき事態だな。国防計画を根本から見直す必要がある」
「はい。どうやら連合軍は我々が当初考えていたよりも遥かに強大

なようです」
二人の顔はさらに暗くなった。
「早急に手を打たなければな。最悪の場合総督府の戦力を本土防衛に回さなければならないかもな」
「それはあくまで非常時ですが」
「わかっている。だが本土を失っては何にもならない。エウロパ一千億の市民の命を守らなくてはならない」
彼の顔は強張っていた。自らの責務の重さを痛感していた。
「参謀総長」
そしてあらためてプロコフィエフに顔を向けた。
「すぐに計画の全面的な見直しを開始せよ。そしてこの艦の詳細なデータを送るよう諜報部に伝えてくれ」
「わかりました」
プロコフィエフは敬礼して答えた。
「早くしなくてはな。もし彼等がその矛先を我等に向けてきたならば」
「今のままでは忽ち全土が蹂躙されてしまうでしょう」
二人はそれで沈黙した。モンサルヴァートは敬礼し部屋を後にした。
「では私はこれで。プランが整い次第すぐに参上いたします」
「うむ」
モンサルヴァートも返礼した。そして彼女が部屋の扉を閉めると彼一人になった。
彼は机に座していた。そして連合のその艦艇のデータを詳しく見ていた。
「まさかこれ程の艦艇を開発するとはな。つくづく連合の国力は底知れぬ」
その顔はやはり強張ったままであった。
「これに対するにはどうするかが問題だが今の状態では情報がなさ過ぎる」

そうであった。やはり情報がなくては何にもできない。しかもこの艦艇の詳しい情報はこのディスクだけでも全くわからないのである。まだ入ったばかりの情報であり不確かなものも多いであろう。
「だがそれでもこの艦が恐るべき力を持っていることがわかる」
見れば各部に無数の砲台、ミサイルランチャーがある。そして飛行甲板までであった。
「戦闘空母の様だがまるで要塞だな」
先程モンサルヴァートが言った言葉は決して誇張ではなかった。彼は思うところを言っただけであった。
それ程までにこの艦は巨大であった。そしてその装備は信じられないものであった。
「特に艦首部分だな」
そこには一門の巨砲が備え付けられていた。
「この巨砲がどれだけの力を持っているのか今はわからないがこの大きさからすると」
それは要塞の主砲に匹敵する巨大さであった。要塞の主砲は一撃で一千隻を撃沈することが可能だ。ニーベルング要塞群の十二の人工衛星のそれはそれ位の破壊力が備わっている。連合のガンタース要塞群のものはもとが惑星であるだけにそれより破壊力は遥かに大きいようであるが。
「やはり相当な破壊力を備えているな。安心はできない」
彼の顔は硬くなる一方であった。
モンサルヴァートはここで電話をとった。そして秘書官を呼び出した。

## 第五部第三章　巨大戦艦その三

「すぐに来てくれ」
「わかりました」
やがて秘書官のベニチャコヴァー大尉が入って来た。モンサルヴァートの秘書官である。茶の髪に青い瞳を持つ美青年である。高い鼻が印象的だ。
「閣下、お呼びでしょうか」
彼は部屋に入ると敬礼した。
「うむ」
モンサルヴァートは返礼して頷いた。
「すぐに今ここに来られる艦隊司令を集めてくれ」
「全員ですか」
「全員だ」
彼は言った。
「わかりました。それでは」
こうして各艦隊司令に召集がかけられた。彼等は会議室に集められた。
「閣下、何か緊急の事態でも」
ゴドゥノフが問うた。
「緊急の事態ではないが諸君等に見てもらいたいものがありここに来てもらった」
モンサルヴァートは長の席に座り彼に対して言った。
「見てもらいたいもの？」
「それは何でしょうか」
司令達は首を傾げた。
「まずはこれだ」
「といいますと」
「これを見てくれ」

モンサルヴァートはここでベニチャコヴァーに合図をした。彼はそれを受けてモニターを切り換えた。
それは三次元モニターであった。それを見た司令達は思わず絶句した。
「どうやら信じられないようだな」
「はい」
誰もが肝を潰していた。
「見たところ艦艇の様ですが」
「そうだ」
「それにしてはあまりにも大き過ぎませんか。側にあるのは見たところ戦艦と空母ですが」
戦艦や空母が他の艦艇に比べて大型なのはこの時代でもそうである。火力や艦載機を考えるとどうしても大型になってしまうのである。
大体エウロパの今までの戦艦で四〇〇メートル程である。これでもかなり大型だ。空母も大体それ位である。
「戦艦の優に三十倍はあります」
「最早これは艦艇の大きさではありません。小型の人口惑星です」
「信じられないだろうがこれは事実だ。どうやら連合はこれを量産しているらしい」
「これを」
流石にそれには絶句した。
「益々信じられません」
「幾ら連合の国力があるとはいえそれでもこの様な巨艦を量産するなどとは」
「本当だ。私の予想では各艦隊に一隻ずつ配備する。それも旗艦としてな」
「各艦隊にですか」
「あくまで予想だが」
モンサルヴァートはそう断った。だがそれは確実だと予想してい

た。
「連合はそこまでの力がある。我等のそれとは比較にならない」
「確かに」
残念だがそれは事実だった。否定しようがなかった。
「問題はこれが我々に向けられた時だ」
モンサルヴァートは本題に入った。
「その人口による圧倒的な兵力とこの巨艦、これ等をどのようにして防ぐかだ」
「難しいですね」
ターフェルが言った。
「ただでさえ圧倒的な差があるというのに。これを防ぐのは困難であると言わざるを得ません」
歴戦の将である彼の言葉はそれだけに重みがあった。
「しかしやらなければならない」
だが彼はこう言った。
「本部長もその為に我等をここへ集められたのでしょう」
「その通りだ」
モンサルヴァートはその問いに対し頷いた。
「まだ詳しい情報は入っていない。だが卿等には前もって知らせておきたいと思ってな。事前にある程度知っておいた方が今後何かとやり易い」
「確かに」
司令達は彼の言葉に頷いた。
「今後この艦の詳しい情報が入るだろう。それまでにこの艦について考えてくれ」
「どの様な能力を持っているか、どの様に運用されるか、ですね」
「そうだ。これだけは言える」
ここで彼は声を引き絞らせた。
「どの様な強大な艦でも絶対に沈められないということはない。人間が作ったものにおいて完璧なものはこの世に一つもないのだ」

それは真理であった。不完全な存在でしかない人間の作りしものが完全な筈がないのである。神々ですら欠点がある。ましてや人間なぞ言うまでもない。

それはどの時代においても変わることがない。宇宙に進出しても人間は不完全なままであった。そしてそれが為に日々を努力して生きるという面もあった。だからこそ人間は進歩するのである。思えば人間は不完全だからこそ進歩し、そして宇宙に進出したのだ。今の人間の姿があるのは彼等が不完全な存在だからだ。完全な存在ならばオリンポスからも楽園からも出る必要はないのだ。

これは古代より論じられてきたことである。そしてこの時代も。エウロパでは特に哲学が発達している為こうした話には花が咲く。モンサルヴァートも嫌いではなかった。実学を重んじる連合とはここで違いがあった。

「だからこそ考えて欲しい。この艦の姿を。そして弱点を」

「わかりました」

提督達は頷いた。

「必ずやこの怪物の弱みを掴んでみせましょう」

「頼むぞ」

「ハッ！」

こうして会議は終わった。エウロパはまだその全貌すら現わさぬ巨大な怪物の影に警戒していたのであった。

この巨艦の情報はエウロパだけではなかった。連合内部においても囁かれていた。

『今回の観艦式の目玉か！？』

『この巨大な艦の正体は』

マスコミにおいてもネットにおいても話題になっていた。そして例によって軍事専門家やファンの議論の的となっていた。中にはこれは人口惑星だと言う変わった意見もあった。だが大抵はこれは軍艦だと見ていた。

しかしこれに対して中央政府は一切コメントしなかった。観艦式まで一切秘密としていた。議会からの要求に対してはキロモトが答えた。彼は戦艦の一種とだけしか答えなかった。他は一切語らなかったがそれでとりあえずの説明にはなった。だがそれ以外はわからなかった。

「焦らすつもりか？」

「キロモトも八条も案外狸だな」

ネットではこうした言葉が出た。面白半分で書く者もいて議論は白熱した。そして観艦式を首を長くして楽しみに待っていた。連合においてはそうであった。だが他の国々もそうだとは限らない。

エウロパではかなりの危機を持たれていた。他の国々でもそれは変わらずやはり警戒されていた。

マウリアは友好関係にある為それ程問題にはならなかった。だがその三兆もの人口とそれに基く国力は問題視されていた。

サハラにおいてはより深刻であった。それでもエウロパ程ではなかったが。それでも脅威として受け止められていた。

「ハサンではとても食い止められるものではない」

東方に覇を唱えるハサンですらそう思われていた。ハサンですらその人口は一千億には遠く及ばない。ましてや兵力は言うまでもない。だが彼等の救いは連合とは同盟関係にあるということだ。

「この同盟がある限りとりあえずは安心だ」

「連合は満ち足りている。おそらくサハラには積極的に出ることはないだろう」

そうした意見が大勢を占めていた。だが安心はできなかった。

もし彼等が野心を持ったならば、その時はひとたまりもない。それは誰もがわかっていることであった。

西方のオムダーマンにおいてもそれについては色々と話されていた。彼等にとっても重要な懸念であったのだ。

「詳しいデータはまだ出ていないというのにもうこれだ」

アッディーンも司令室において顔を顰めていた。

「連合と我々は今のところこれといって関わりがないというのにな」
「そうですね」
秘書官であるハルダルトが応えた。
「国境と接しているわけでも経済的に密接な関係にあるわけでもありませんし」
「そうだな。だから今のところは騒ぐ必要もあるまいと思うが」
アッディーンはここで手許にある例の巨大戦艦の写真を見た。
「俺も興味がないと言えば嘘になるな。ここまでの巨艦は今まで見たことも聞いたこともない」
「はい」
それはハルダルトも同じであった。
「ここまでの艦は今までありませんでしたから」
「まるで小さな惑星だ。しかも外観からすると極めて重装備だ」
「おそらく要塞並の装備を持っていると思われます」
「だろうな。こんなものを量産出来る連合の力というのはつくづく恐ろしいものがある。だが」
ここで口調を少し変えた。驚嘆から確信のそれに変わった。
「どれだけ強大な艦でも弱点は必ずある。それだけは確かだ」
「そうですが」
ハルダルトはそれには表情が暗かった。
「まあ今のうちに情報は色々と確保しておくべきだな。話はそこからだ」
「では今はこれといって対策を立てなくてよいと」
「オムダーマンと連合には利害関係はない」
「それはそうですが」
「あくまで今のところは、だがな」
アッディーンはここで釘を刺した。
「今後はどうなるかわからないが」
サハラ各国と連合の関係は殆どが中立にある。ハサンの様にその地理的関係から有効を保っている国もあるがその殆どの国にとって

は何の関係もない異国であった。連合の方も彼等には特に何の感情もなかった。
「それに今はそれよりも優先させるべきことがある」
「はい」
「まずは我が軍の編成だが」
今のオムダーマン軍は四十の艦隊を基幹戦力としていた。それを整備中であった。
これはサハラにおいては第二の勢力であった。第一はハサンであり七十の艦隊を擁している。兵力に大きな差があるのは否定できなかった。
「これでハサンと衝突した時勝利を収めることができると思うか」
「それは」
困難であるということはハルダルトにもよくわかることであった。
「難しいな。例えハサンに勝てたとしても後が問題だ。ダメージを受け過ぎているだろう」
「はい」
「その回復の為に余計な力を使ってしまう。それにそこを他国に付け入られる」
「その時に連合の介入があるかも知れませんね」
「それも考えられるが可能性は少ない。むしろエウロパだ」
「エウロパですか」
「そうだ。連中はサハラ全土を自分のものにしようと考えている。そのサハラで最大の勢力を持つハサンが倒れ、そして我々が深刻なダメージを受けていたならどうする。すぐに行動に移るぞ」
「そうですね。奴等は狡猾です」
サハラの者にとってはエウロパとは狡猾な侵略者であった。連合の者が思うエウロパとはまた違う姿であった。
「そうだ、こういう時には抜け目なく動く。いや」
アッディーンはここで目を細くして考え込んだ。
「むしろそうなるように煽るだろうな、奴等の今までのやり方から

すると」
「そして我々が疲れたところで攻撃に出る、ですか。変わりませんね」
「要はそれには乗らないことだ」
「はい。しかし連中もそう簡単には尻尾を出しませんよ」
「今言えることはハサンとは衝突しないことだな。後でいい」

## 第五部第三章　巨大戦艦その四

「軍の編成が終わった後で宜しいということでしょうか」
「いや、それでもまだ駄目だ」
アッディーンは首を横に振った。
「それから別のところに動くべきだ」
「何処にですか？」
「南方だ。まずはあの地域を併合するべきだ」
「南方ですか」
「そうだ。そしてそこで勢力を増強する。東に向かうのはそれからでいい」
「閣下のお考えは南方ですか」
「ああ。それが最も労少なく功多いと思うがな。貴官はどう考える」
「私個人の考えですか」
「そうだ。遠慮はいらん、言ってくれ」
アッディーンは部下に対して奢らない。率直に意見を求める。そしてそれがいいと思ったなら躊躇することなく受け入れる。思考の柔らかい男であった。
「それでは」
ハルダルドはそう言われ自分の考えを述べることにした。
「南方もいいですが私はそれよりもまず北を何とかするべきかと」
「北か」
アッディーンはそれを聞き眉をピクリ、と動かせた。
「はい。南方は小勢力が分裂しており外交や占領後の統治が困難であります。それに地形が複雑であり地の利を心得る現地の勢力に思いも寄らぬ損害を受ける恐れがあります」
「攻めるには適していないと」
「はい。ですが北方はサハラにおいては比較的地形が単純です。ブラックホールやアステロイド帯も少ないです」

「確かにな」
「それに北方の勢力は小規模です。彼等を破ったならば後はエウロパの総督府だけです」
彼は話を続けた。
「奴等は我々にとっては不倶戴天の敵。戦うにあたっては大義名分が手に入ります」
「かっての十字軍に対した時のようにか」
「はい。奴等をこのサハラから追い出したならば我々の評価はさらに上がるでしょう」
「そうしたことを考えても北を攻めるべきというのだな」
「そうです。総督府は十個艦隊、それに北の諸国もようやくシャイターンの手で一つになったところです。それに兵力も少ないです」
「確かにな。だが一つ問題がある」
「？何でしょうか」
「あのシャイターンという男だ。貴官はどう見るか」
彼はここで尋ねた。
「シャイターンですか」
「そうだ。俺はあの男は只者ではないと思うが」
「確かに今までは見事なまでに勝利を収めていますが」
「それも圧倒的な勝利をな。エウロパもサラーフも彼の前に敗れた。特にサラーフは兵力の六分の五を失っている。凡将ではないことだけは確かだ。いや」
彼はここで言葉を変えた。
「名将だ。それも政戦両略のな。北方の権力を一手に握ったことからもそれはわかる」
「ハルーク家と結びついていますし」
「あの家の当主であった未亡人と結婚してな。そこに目をつけたことからもそれは窺える。俺はあまり好きなやり方ではないがな」
「はい」
アッディーンは婚姻政策などといったは好まない。彼はそれより

力を重視するタイプであった。この場合の力とはオーソドックスな外交戦術による交渉術等である。オムダーマンの外交はそれに基づくものであるからそれは当然と言えるものであった。
「だが非常に有効なものであるのは確かだな」
アッディーンもそれは素直に認めた。
「それにより国家同士の結びつきを強めたり勢力を持つことができる。それにより泣く者がいたとしてもそれ以上の利益をもたらす」
「はい」
婚姻政策は人質の意味もある場合が多い。乱世においては特にそれが顕著である。日本の戦国時代や中世の欧州等でもそうであった。
「その泣く者のことを考えるといたたまれないというのは少し甘いかな」
ここでアッディーンは少し自嘲するように笑った。
「俺はそうしたことを考えると婚姻政策は好きにはなれないのだ」
「お気持ちはわかります。やはり軍人好みのものではありません」
ハルダルトもそれに同意した。
「ですが外交ということを考えるとこれ程ローリスクハイリターンなものもありません。ハプスブルグ家を御覧下さい」
現オーストリア王家である。二十世紀初頭の戦争により一度は王位を失っていたが復活を願う声により約一世紀の空白の時を経て王冠を再び戴くことになった歴史を持つ。家である。かって神聖ローマ帝国皇帝として権勢を奮ったこの家が勢力を伸ばしたのは婚姻政策によるものであった。
「戦争は他国の者にやらせておけ。幸運なるハプスブルグ、汝は結婚せよ」
そうした言葉が残っている。ハプスブルグ家は戦争は不得手であった。度々惨敗し、その度に窮地に陥っている。だがそれでも彼等はしぶとく生き残り敵が去るか死ぬとすぐに外交政策で権勢を取り戻している。その根幹が婚姻政策であったのだ。
もっともハプスブルグ家は欧州きっての名門である。その権勢は

長い間揺るぎないものであった。しかし権勢は一つとは限らない。複数ある場合がある。

ハプスブルグのライバルはフランスであった。ヴァロア家でありブルボン家であった。フランスの王冠を戴くこの家はことあるごとにハプスブルグと衝突した。フランス王家もまた伝統的に外交に長けていた。

ここに他の勢力が介入する。イングランド、統一された後はイギリスであり、ロシアであり、オランダであった。オランダは独立の歴史から最初はハプスブルグ家と激しく対立していたが後にはフランスとも対立した。ロシアはオスマン＝トルコとの関係もありオーストリアとは盟友関係にあった。その反面フランス文化に心酔し、貴族達はフランス風の服を着てフランス風の建物に住み、フランス語を話していた。特にロシア最高の名君の一人エカテリーナ二世はフランスの思想家ヴォルテールとも親交がある程であった。

このエカテリーナ二世と同じ時代に生きていたのがオーストリア中興の名君マリア＝テレジアである。冷徹でありながら革新的な思想も持っていたエカテリーナに対してマリア＝テレジアは寛容であり保守的な一面があった。だがこの二人はタイプこそ違えその政治家としての力量は傑出したものであった。この二人は互いを意識することもあっただろう。だがそれは表には出さなかった。エカテリーナ二世はドイツのしがない侯爵家出身であり本来は女帝にはなれなかった。例え皇帝の縁者であったとしても。それに対してマリア＝テレジアは名門の直系である。欧州においてこの差は大きい。しかし

エカテリーナもマリア＝テレジアも互いについてこれといって言うことはなかった。非常に興味深いことであるが両者共極めてスケールの大きい人物なのでそうした話はない。

問題はイギリスである。だがこの国の伝統は反仏であった。ドーバー海峡を挟んで睨み合う両者もまたことあるごとに対立していた。フランスは東と北に二つの不倶戴天の敵を持っていたのだ。

だがフランスは欧州屈指の農業国でありその国力も高い。やはり一筋縄ではいかない相手である。
これに対してハプスブルグは搦め手で対処した。フランスの周辺の国や自国の側にある勢力を次々と取り込んでいくことにしたのだ。それが婚姻政策であった。
そして生まれた子がそこの主となる。そうしてこの家は欧州にその血脈を築いていったのだ。そして欧州全土に影響力を誇示することになった。復活を果すことができたのもそれが大きかった。
「日本の皇室もそうしたことが多いな」
「そうですね。他の王家との婚姻が」
皇室の御成婚の特色となっていた。かってはその度に宮内省、一時は宮内庁が対応に追われ揉め事の種となっていたことだが他の家との婚姻を進めることによりそれはある程度は解消された。ある程度は、である。
特にエチオピア皇室との結び付きが強い。やはり同じ皇帝の待遇を受ける家として&#３２３６３;がりは深いものになっていったのである。
「俺は日本の皇室もエチオピアの帝室のこともよくは知らないのだが」
アッディーンも歴史を知らないわけではない。日本のこともエチオピアのこともそれなりに知っている。その皇室のこともある程度は知っている。だがあくまである程度である。
「あれだけ長いと流石に勉強するのも一苦労ですから」
「コーランの成立より遥か前からある。一体何千年前から存在しているのだ！？」
「日本の皇室は実際は三千年位だと聞いております」
「確か最初の方の皇帝は実在しないのだったな」
サハラにおいては天皇とはあまり呼ばれない。皇帝と呼ばれる。連合には皇帝が二人いるという認識である。
「そのようです。これも諸説ありはっきりはしませんが」

ハルダルトも詳しいことはよく知らないのだ。何しろあまりにも古い家の為学ぶべきことが多過ぎるのだ。
「それでも三千年か。俺が知っているのは明治という皇帝と昭和という皇帝位だが」
「十九世紀、二十世紀の皇帝でしたね」
「そうだ。偉大な帝王だったと聞いているが」
「そのようですね、タイプこそ違いますが」
「ああした君主はそうそう出るものではない。肝心な時期にそうした君主を戴くことができた日本は幸福だ」
「あの国の皇室への教育は極めて厳格ですからね」
これについては一千年前から批判がある。時代にそぐわないだの閉鎖的だの皇室の方々のお考えを無視しているだの色々ある。だがスキャンダルにまみれるよりは遥かにいい、という意見もあるうえにそれを確固たるものとしたのがこの二人の天皇である為に反論は乏しかった。結果として竹のカーテンは連合において最も堅固なバリアーとなっていた。これを切り開くことの出来る人物はいなかった。挑むとそこから果てしない皇室についての議論がはじまる。政治家も官僚もそれだけは避けたかったのだ。もしそれに足を踏み込むと下手をしたら一生そｒねいついて学び、議論しなくてはならない。それに入って政治家から歴史学者に転向した者もいる位だ。彼は四十代で政治家を辞め学究の道に入り九十で死ぬまで遂にそこから出ることはなかった。彼は死の間際にこう言い残した。
「皇室について学ぶことは日本史を学ぶことだ」
と。確かにそうした一面がある。だがここまで深く入り込んでも答えはなかったのだ。そもそも歴史学自体がそうであるが彼はそこに深入りし過ぎたのかも知れない。
こうした例もある。下手をすればそこで不見識を責められる恐れもある。従って学者以外は誰もこの問題に積極的に踏み込もうとはしなかった。火傷で済まないことはわかっているからだ。これはエチオピア帝室にも言えることであった。

「教育は厳しい方がいいな、やはり」
「そうですね。私もよく親に叱られたものです」
サハラ各国は子供の教育は厳しい部類に入る。どちらかというと放任的で子供の頃から自立、自身の考えを求められる傾向にある連合ややもすれば過保護なエウロパとはここが違っていた。彼等はアッラーとコーランの教えに基づき教育を行っているのだ。
「それは俺も賛成だ。連合の者は少し考えをあらためた方がいい。ましてや一国の君主ともなれば立場というものがあるからな」
「はい」
「それはエチオピア帝室も同じだったな」
「その様ですね。あの家はさらに歴史が深いですが」
「コーランにも出ている程だからな」
「スレイマーンの話ですね」
聖書でいうソロモンである。彼の性格や役柄は聖書のそれとは少し異なる。これはコーラン独自のものである。コーランにおいてはキリストも死んではいないのだ。サハラの者は聖書においてキリストが処刑され、甦ったのを誤ったことであると認識している。
「その前から存在していたような気もするがな」
「確かギリシア神話にも出ていましたね」
「ああ」
アンドロメダの話である。かってエチオピアにはペルセウスが石にした巨鯨が残っていたという伝説がある。
「ここまでくると本当の話か伝説かわからないな」
「ローマ帝国の時代も我々がアラブにいた時も存在していましたから」
エチオピアの歴史はそこまで古いのだ。この帝室が悪辣で愚劣な独裁者によって廃されながらも復活した理由はその存在そのものが歴史であり、文化遺産であったからだ。なくなるには非常に惜しい家であったからだ。
「それを考えるとあの断絶はほんの一時だったな」

「ですね。一族も何とか残っていましたし」
遠縁の者が帝位に就いて復活している。これは世界から祝福された。
「そうした古い家が存在するのも連合か。そして婚姻政策も行われる」
「その中は我々が思っているよりも遥かに複雑なものがありますね」
「そうだな。我々は何だかんだといって同じサハラの民だ」
そうした意識を支えているのがコーランとイスラムの教えであるのは言うまでもない。
「それでいて一千年もの間互いに争っている。皮肉なものだな」
「ウマイヤ朝が崩壊してからアラブが統一されたことはありませんが」
「そうだったな。それまで入れると非常に長い」
「はい。我々は二千年以上もの間互いに争ってきました。十字軍との戦いの時においてすら一つではありませんでした」
「嘆かわしいといえば嘆かわしい。同じアッラーの使徒である筈なのに」
サハラにはその二つの考えがあった。ムスリムであるということとそれぞれの国への帰属意識。それにより一千年前からモザイクの様に分裂しているのがサハラの者の意識である。
これは今尚続いている。彼等は同じムスリムという強固な同胞意識を持ちながら、こうして互いに争い続けているのである。
「仕方ないですね。やはり国益を最優先して考えるものですから」
「俺達もだな」
「はい」
それはオムダーマンも同じことであった。
「むしろ国益を求めない軍人や政治家などいる必要はありませんが」
「確かにな」
そうした意味で二十世紀の日本の自称リベラルと称していた政治家とその賛同者達は奇怪な存在であった。もっとも彼等は悪名高き

テロ支援国家と結託していたのであるから彼等の国益を追求していたと言えばそうなる。それにより彼等は裁かれ、後世に汚名を永遠に残すことになったが。
「国益を考えるという当然のことをしない政治家なぞ有害でしかありません。ナベツーラ達がその絶好の例ではありませんか」
「そうだったな。あの連中は酷いものだった」
ナベツーラ一派は自らの私利私欲しか考えようとしなかった。今彼等は怒り狂った大衆に制裁を受けた後も批判を受け続けている。墓すらない程だ。
「反面教師とすべきです」
「反面教師か」
「そうです。他に何の用途がありましょう、彼等に」
「ないな。おそらく連中はこれからも人類の歴史が続く限り汚名を残すだろうな」
「腐敗した醜悪な一派として」
それがナベツーラ達の評価であった。サラーフはマスコミの腐敗によって滅びた、とまで言われている。
「ところで旧サラーフ領だが」
「はい」
アッディーンはサラーフの名が出たところで政治の話に戻した。
「かなり落ち着いてきたようだな」
「そうですね。一時はマスコミの残党がかなり騒いでいましたが」
「軍で鎮圧したのは正解だったか」
「ええ。あの資金でもってテロでもされたら適いませんでした」
「連中は自分達では決してテロに走らないがな」
彼等はそれよりも陰で煽ることが本業である。
「主立った者は全て銃殺となった様です」
「そううか。それならいい。自由や平和を標榜しておきながらそれと正反対のことを平然と行っている連中だ。処刑にしても問題はない」

軍人の論理であった。学者や知識人なら別の意見であろうが彼はそう考えていた。
「そしてその陰には誰がいるのだ」
実はアッディーンはこの残党掃討には関わってはいない。これは新たに統合参謀本部長となったアジュラーンの立てた作戦であった。
オムダーマン軍においては要職は三つある。一つは参謀総長、一つはアッディーンが今就いている宇宙艦隊司令長官、そして統合作戦本部長である。特に統合作戦本部長は制服組のナンバーワンであり先の二つの役職をまとめる極めて重要な職にある。
アジュラーンがそれに就任したのは今までの軍務が評価されたからである。彼は今やオムダーマン軍にとってかけがえのない歴戦の将であった。
「アジュラーン長官の予想では単なる残党に過ぎないそうです」
「ならいいのだがな。ここにハサンやエウロパの陰があると問題はかなり厄介になる」
「ハサンやエウロパですか」
「そうだ。彼等ならやる。それ以上に危険な存在もいるかも知れないがな」
彼はそう言いながら脳裏にある男のことを思いY化ベタ。
「む」
彼はそこで不思議に思った。
(何故あの男のことが思い浮かぶ)
魔王の名を冠したあの男。何も関係ない筈なのに不意に思い出した。
(考え過ぎか)
アッディーンはその男の姿を脳裏から打ち消した。そして再びハルダルトに顔を戻した。
「早いうちに今後のことを長官及び参謀総長と話をした方がいいな」
「はい、御二人共それを望んでおられるようです」
「ならばいい。早いうちに戦略を決めておかなければな。国内が安

定したならばすぐに動けるように」
「閣下のお考えでは南方ですね」
「そうだ。それが最も功多いだろう」
「まだハサンとは戦うおつもりはありませんね」
「俺はな。御二人がどう考えておられるかは知らないが」
宇宙艦隊司令長官は席次としては三番目である。他の二つの役職よりは下である。実戦部隊の最高指揮官にあたるが総合的な視点からそう定められているのだ。なお軍を統括するのは国防大臣であり最高司令官は大統領である。これは他の国と一緒である。
「とりあえず今度の最高会議ではそれを話してみる。今後の我が国に関わる重要な話だ」
「はい」
最高会議とは国防大臣を議長に三長官が揃うオムダーマン軍にとっては極めて重要な会議である。これで軍の戦略が決定され、それを大統領が承認するという形である。軍の力が強いオムダーマンにおいてもやはりシビリアン＝コントロールが行き届いているのである。
「しかしおそらくはハサンとの今の時点での戦いはないだろうな。国力が違い過ぎる」
「そうですね。やはりあの国は強大ですから」
ハサンは貿易により潤っている。その財を軍にも回しているのだ。それがサハラにおいて最大の兵力を保持する源となっているのである。
「北か南か、だな」
「やはりそうなりますか」
「そこからハサンとの戦いだ。だがこれはかなり後になる。まずはどちらに進むのか決めなければならない」
「ですね。戦略なくして軍はありません」
これもまた政治の基本である。将となれば政治の知識も求められる。昔からそうであるがこの時代では軍人は政治への参加は選挙以

外の活動は、例えば政党の設立や個人的なコメントは認められていないがそうした知識はかっての時代よりも遥かに求められるようになっている。そうでなければ広範囲な戦略を考えることができないからだ。もっとも軍を退けば文民であるから政党を設立しても個人的なコメントもよい。

「北方も問題は多いが南方も南方で進出するにはかなりの問題点がありますね」

「そうだな。何といっても南方は地形が複雑だ」

サハラにおいても南方の複雑な地形は特筆に値した。大小無数のブラックホールや磁気嵐、超惑星と多くの難所が存在していた。それは軍の進撃において重大な懸念材料となっていた。

それが為に南方では小国が乱立した。そして互いに小競り合いを続けていたのだ。

「むしろ外交で少しずつ抱き込んでいった方がいいかも知れませんね」

「それも話すつもりだ」

「そうですか、それはいい」

ハルダルトはそれを聞いて顔を明るくさせた。

## 第五部第三章　巨大戦艦その五

「我が国の外交官は腕利き揃いですからかなりの効果が期待できますよ」
「それを考えると今度の最高会議には外務省の参加も必要かもな」
これは時々あった。外務省はそれだけ戦略においても重要な位置を占めているのだ。
「有能な外交官程有り難いものはない。無能な外交官程有害なものはない」
オムダーマンではよくこう言われる。
「一方に進出している間もう一方への備えも必要ですね」
「そうだな。それについても話し合うとしよう」
アッディーンはそれを頭の中に入れていった。彼はあまりメモ等をとらない。それよりもそのズバ抜けた記憶力で頭の中に叩き込む。そして決して外部には漏らさないのだ。
「南方にはあまり艦隊は必要ないのではないかと思います」
「地形のせいでか」
「はい。むしろ少数精鋭でいくべきであると私は考えます」
「そうだな。南方進出案が通ったならばそれについても上奏するか」
「そのかわり北方には多くの兵が必要です」
これも地形のせいであった。
「そういうことを考えてもやはり南方に行くべきだな、今の我々の国力からしても」
「そうですね、北方諸国を併合してサハラの総督府を攻撃した時にはエウロパ本国から援軍が来る可能性がありますし」
「そう、それが問題だ」
アッディーンの懸念はそこにあった。
「エウロパ本土には五十個艦隊がある。それだけで我々の兵力を上回っている」

「それが向けられたらまずいですね。今の我々では勝てません」
アッディーンもそれがよくわかっていた。だから警戒しているのだ。
「今はエウロパとの衝突は避けるべきだ。それには我々の力はまだ足りない」
「そうですね。それを考えるとやはり南方に進むべきです」
「そうだ。だから俺もそれを主張するつもりだ。だが」
彼はここで一呼吸置いた。
「問題は会議の他の参加者がどういう考えを持っておられるかだ」
「長官に参謀総長ですか。御二人共識見も確かですから大丈夫でしょう」
「御二人には俺も信頼している。必ず俺の案に賛同して下さるだろう。だが問題は」
「国防大臣と首相、そして大統領ですね」
この会議には首相も参加するのである。
「そうなのだ。どうしても政治家は軍事の知識が疎い人が多い。仕方ないことだがな」
ある程度は知っていても専門的なことまでは詳しくないのだ。軍事のことだけに注意を払ってはいられないのだから当然といえば当然であるが。
「首相も国防大臣もそれ程軍事に疎いとは思いませんが。当然大統領も」
「そうだな。だが政治家の考えとして一つのことがある」
「一つのこと!?」
「そうだ、これは政治家ならば仕方のないことだがな」
アッディーンは暫く間を置いた。
「戦略よりも時として政治的効果を優先させるのだ」
「政治的なものですか」
「そうだ、もし政治的効果が北によりあると判断された場合には厄介なことになるぞ」

「そうですね、確かに北には絶好の宣伝材料がありますし」
それが総督府であるのは言うまでもない。
「南方よりも遥かにそうした意味で効果は大きい。だがエウロパ正規軍には勝つのは困難だ。勝てたとしてもその後のダメージを受けた状態でハサンに後ろからやられかねない」
「はい。そうなっては元も子もありません」
「どう判断するかだな、大統領が。とりあえず会議がはじまってからだ」
「期待しています」
二人はそれから話題をデスクワークの方に変えた。実はアッディーンはデスクワークは好きではない。だがそれも軍人、しかも高官にとっては避けて通れない仕事であった。
「書類がまるで山の様だな」
彼はサインをしながらぼやいた。
「宇宙艦隊司令長官ともなれば当然ですよ」
ハルダルトもそれを手伝っている。秘書の仕事も大変だ。
「これも仕事か」
「そういうことです、指揮を執るだけが軍人の仕事ではありませんよ」
「それはわかっているつもりだが」
それでも彼は面白くなさそうであった。
「俺がこうした仕事を好きじゃないのはわかっているだろう」
「好き嫌いを仰っては仕事はできませんよ、閣下」
「それはわかっているつもりだが」
「わかっているなら仕事です、仕事」
「ああ」
彼は嫌々ながらデスクワークに取り掛かった。そして一枚一枚確実に書類にサインをしていくのであった。
連合には実に多くの国が存在する。元々アジア、アメリカ、アフ

リカの国々から構成されている為その数も多いのだ。
彼等はかっての国際連合の後継者を自認していた。事実連合の設立母体は国連であった。
この国際連合はあまり力のない組織であった。常任理事国の専横が目立ち、それに小国は振り回されることが多かった。
常任理事国の数は後にアメリカ、ロシア、中国、イギリス、フランスの五カ国から増やされることになった。日本、ドイツ、インド、エジプト、ブラジルの五カ国が新たに加わった。
これで多少変わるかというと事態は更に悪化した。宇宙に進出して資源を巡って太平洋諸国とＥＵが対立すると完全に二つに別れた。
まずはアメリカ、中国、日本、ブラジルの太平洋側の国とイギリス、フランス、ドイツのＥＵ側。インドはどちらかというと太平洋に寄っておりエジプトは中立であった。当初ロシアはＥＵの側にいた。
ここで太平洋側は常任理事国以外の他の国々にも働きかけた。これによりアフリカ諸国が彼等に賛同した。そしてイスラエルやトルコもそれに加わった。
ロシアはそれでもＥＵの方に近かった。だがウクライナやベラルーシ等かって自らの勢力圏にあった国々が太平洋側に加わったのを見て次第にＥＵと距離を置くようになった。そして遂には太平洋側についたのだ。
これでＥＵの劣勢は決定的となった。既に欧州以外の国々は太平洋側についていた。あとはアラブ諸国だけだが彼等はあくまで自分達の路線を貫いていた。ましてやかっての長い対立関係があるので彼等に協力を期待することなぞできはしなかった。
それが欧州諸国の孤立と国連の分裂を決定付けた。彼等は追われるように今のエウロパの地に向かった。アラブ各国もまた国連から離れ今のサハラに移った。インドは国連に留まっていたがやがて距離を置き今のマウリアとなった。
こうした歴史からもわかるように連合は国際連合の後継的な存在

であった。だがその権限はやや強化され、中央政府として作り替えられた。それが今の連合であった。
だがその統制力は弱かった。各国の発言力が強く中央政府は調整役に過ぎなかった。
そうした状況が長く続いた。その間連合各国は周辺の星系への開拓を進め国力を伸張させていった。連合の一千年の歴史は開拓と発展、そして利害調整の歴史であった。多くの者は中央政府に調整役以外の役割を期待していなかったのだ。
攻め込んでくる勢力はない。異星人はいるとしてもまだまだ遥か彼方である。エウロパにはガンタース要塞群がある。マウリアとは友好関係にあり、サハラは各国で争っている。とてもこちらにまで攻め込んでくる余裕はない。だからこそ彼等は今まで気兼ねなく開拓に専念してきたのだ。
だが宇宙海賊やテロリストの存在が次第に問題になってきた。それに対処する為もあり中央政府の権限を強化するべきだという声が徐々に大きくなっていったのだ。
その声を受けて中央政府はその権限を少しずつ拡大していった。それは長くかかった。だが確実にそれを進めていき遂に軍を持つに至ったのである。
これにより長年連合の頭痛の種であった海賊やテロリストは大幅に減った。そして今遂に観艦式が行われることになったのである。
「長かったな、本当に」
観艦式は太陽系で行われる。キロモトは月に設けられた席で隣にいるアッチャラーンに対して言った。
「まず中央警察が設立され、そこから二百年ですからな。今まで中央軍の設立に必要性はよく言われてきたことですが」
「そうだ、だが設立されるまでに二百年もかかった」
「連合の歴史も考えると一千年、まあその間は各国の軍がありましたが」
だが彼等は協定により他国には許可なく入られない。そこに海賊

達が付け込んだのは言うまでもないことであった。だから今まで彼等は頭痛の種だったのだ。
彼等はその機動力を使い商船等を襲撃する。そして軍が来たならば素早くそこから逃げる。他の国のところに逃げ込んでしまえばそれでもう安心だ。
連合は各国の所有する星系が複雑に入り組んでいる。その為彼等が逃げるのには適していたのだ。こうして彼等は海賊行為を繰り返していた。
これに対処するには中央軍しかなかった。中央警察も効果がないわけではなかったが、彼等は犯罪者に対するものであり海賊を相手にするにはいささか武装が弱かった。やはり軍が必要だったのだ。
だがそれには各国が反対した。その様な得体の知れない軍に自国を通過されたくはなかったし、防衛の不安もあった。自らを守るべき軍がなくてどうして防衛ができようか。彼等は連合に属していながらもやはりそれぞれの国に属していた。連合では連合市民という言葉は必ず二番目に来る。まずはそれぞれの国の国民と呼称する。それだけ各国への帰属意識が強いのである。
「アメリカ国民であり、連合市民である」
「中国国民であり、連合市民である」
ここを日本に替えてもベトナムに替えても同じである。連合はやはり各国の権限が強かった。そしてその個性もまた強烈なものであった。
そうしたこともあり中央軍は中々話が進まなかったのだ。だがキロモトの手によりようやく設立された。
「大国程ごねてくれたな、本当に」
彼はその時のことを思い出して苦笑した。
「あの時日本が参加を表明してくれたのは大きかった」
そう言って貴賓席にいる日本の天皇と首相である伊藤を見る。日本だけでなく連合にいる全ての国の元首や主席閣僚が揃っている。
「さて、連合軍の全容が遂に公開されるな」

「はい、まずは地上兵器ですね」
「ああ、ではじっくり見させてもらうとしよう」

## 第五部第三章　巨大戦艦その六

まずは歩兵部隊の行進である。迷彩服に特殊プラスチックによるヘルメットを着用している。このヘルメットは軽量ながら極めて硬質であり、ビームコーティングまで施されている。これと同じプラスチックで作られた宇宙や真空状態での戦闘の為の戦闘服もあるが今回はそれは着用していない。

連合軍の行進は大なしめであることで知られている。エウロパの様に手足を大きくあげいかにもキビキビとした動作の行進とは違う。かってのアメリカ軍の行進に近い。

迷彩服であるがこれは特殊な塗装が施されている。周囲に隠れ、体温を消す。姿を消すことに長けている。また赤外線や紫外線に対する耐性も強い。

そのビームライフルは連射と射程に優れている。連合軍らしく集団戦を想定して考えられている。

続いて狙撃兵部隊だ。服装は歩兵と同じであるがライフルが違う。狙撃用に開発された命中と射程をより重要視された銃である。

ミサイル兵、ロケット兵も来た。その装備は他の国々よりも遥かに秀でていた。

「歩兵達だけでこれか」

「では主力兵器はどうなるのだ」

こうした声が漏れてきた。来賓席にいる各国の首脳達も驚きを隠せなかった。

装甲車が来た。六輪で主砲は一門だ。左右にそれぞれ四門ずつミサイルポッドを装着している。空陸両用のミサイルだ。

この装甲車は底辺に防水処理が施されている。またタイヤも特別仕様だ。実は水陸両用なのである。

その主砲も違っていた。まるで戦車の主砲の様であった。ビームガンである。

対空砲、自走砲、ミサイル車、兵員輸送車等が来た。どれも大型で重装備であった。見たところ装甲もかなり厚いようである。
「どうやら火力と生存能力にかなりの重点を置いているみたいだな」
「ああ、それも今までになくな。あんなのははじめて見た」
特別にチケットを手に入れて観戦に来ていたマニア達も噂していた。彼等にとっては一生に一度あるかないかという程の大イベントであるからこれも当然であった。
大砲部隊も来た。軽砲、中砲、重砲、どれをとっても他の国々のそれよりも遥かに重口径であった。まるで怪物の様な大きさであった、それ等は軍用トラックに引かれやって来た。
そしていよいよ陸上部隊の主力戦車である。キャタピラの音を立て巨象の群れがやって来た。
「何だあれは」
皆その異様な姿を見て絶句した。
巨大なだけではなかった。主砲は何と二門あったのだ。それだけではない。副砲として車体の左右に一門ずつ備えられていた。
「おい、あの主砲って」
観衆達がそれを見てヒソヒソと話をした。
「ああ、間違いない。さっきの装甲車の主砲だ」
何と装甲車の主砲を副砲にしているのである。
見れば前方と砲塔の上にはビームマシンガン、砲塔の左右にはミサイルポッド、まるで要塞の様な装備であった。二十世紀後半の戦車を思わせる角張ったデザインにその武装はよく合っていた。違うのはその頃の戦車よりも二倍以上の大きさを持っているということであろう。
そして指揮用の移動要塞が来た。巨大な砲と無数のミサイルランチャー、機銃で装備したとてつもなく巨大な戦車であった。いや、戦車の様なものであった。
全高は優に二十メートルはあった。重砲の二倍はあろうかという巨大な主砲を二門砲塔に搭載している。砲塔の四角にはそれぞれ対

空砲座が設けられている。
そして車体の左右は三段になっている。一番上には対空砲座と対空ミサイルランチャー、二段目にはビーム砲座、三段目には戦車のものと思われる砲塔がそれぞれ四つずつ備えられていた。対空砲座とミサイルランチャーは二つずつ交互であった。何とも言えぬ威圧的な姿であった。
「あれが指揮用の兵器か」
「ネットで噂には出ていたがあれ程とはな」
マニア達は必死に写真を撮っていた。それを中央政府の高官達は満足そうに眺めていた。
「やはりこうしたことに興味のある人達の反応は素直だな」
「そうですね、こうした反応が一番わかりやすくていいです」
キロモトとアッチャラーンはにこやかに笑っていた。
「ただ財政的にはかなり悩まされましたけれどね」
財務大臣であるケマル＝トラブゾンが苦笑しながら言った。彼はトルコ出身であるが珍しく髭を生やしてはいない。トルコでは昔から口髭を生やす風習であったが最近それが変わってきているのだ。
「髭なんてもう古い」
「これからは古いしきたりにとらわれてはいけない」
こうした意見からだ。こうした事は過去何度もあった。人々はその度に髭を剃り、時が経てばまた生やす。要するに流行という一面が非常に強いのである。
このトラブゾンもそれは同じである、かというとそうではない。彼は当初この運動にどちらかというと否定的であった。
「髭がないと寒くて仕方ない。私は寒いのは嫌いだ」
と言うのである。実は彼は温かい星系の出身であった。
だがある日急に髭がなくなっていた。彼は真相を話そうとしなかった。
「気分が変わっただけだ」
憮然としてそう言うだけであった。それ以上は話そうともしない。

話そうとしないと噂になる。人々は色々と話をした。
「煙草で焦がしたのじゃないか」
「髭を剃る時に間違ってザックリといっちまったか」
だが真相はわからず終いであった。結局彼の髭はなくなった。それは今でもそうである。
「疑惑の髭」
こう笑い話にされていたが彼は財務相としては有能であった。無駄な出費を省き、効果的な運用をすることで知られていた。
「髭と私の能力に関係はないだろう」
マスコミのインタビューに対しては苦笑いしてこう答えるのが常であった。
「ですが急に髭がなくなったので」
「一体何故でしょうか」
こうした質問に対しても言葉を濁した。結局真相本人以外にはわからなかった。
「しかし八条君やレイミー中将とよく話し合ったのだろう」
「はい、それでも色々と苦労しましたよ」
キロモトの言葉にも苦笑して答えた。彼はよく苦笑することでも有名である。
「まあ財務省と国防省は何処でも仲が悪いものですが」
この言葉はいささかシニカルであるがその通りであった。財務省は出費を嫌う。国防省は出費しかしない。これで仲が良くなる筈がないのだ。
ちなみに彼と八条は特に仲が悪いわけでもない。個々のスタッフもそうである。友人としての付き合いを持っている者も多い。だが職務上よく意見が対立するのである。
「まあそれでこれだけの兵器が開発されたのならよしとしよう。財政的な制約も色々とクリアーしたのだろう？」
「はい。まあ細かいお話はここでは出来ませんが」
やはり周囲の目や耳が気になった。何処にそれ等があるかわかっ

たものではない。
「とりあえずそういった幾度かの激論がこれ等の兵器の開発に至ったということだけはおわかり下さい」
「うん。いずれその話を聞くことを楽しみにしているよ」
キロモトは笑ってそう応えた。次は飛行機である。

## 第五部第三章　巨大戦艦その七

まずは花形の戦闘機だ。連合の戦闘機は汎用性が高い。大気圏内でも外でも全く同じように使用出来る。当然宇宙空母の艦載機にも使う事が出来る。

やはり大型であった。そしてエンジンは二つある。機体の後ろに備え付けられている。

武装はビームガトリングガン二門とミサイル十発である。大型ながら翼の大きな可変翼からするとどうやらスピードよりも運動性能を重要視した設計であるようだ。

「あのミサイルが主要武器の様だな」

「それの射程次第で戦い方が違ってくるな」

マニア達はそう話し込んでいた。

「チョム大将、レイミー中将」

八条は中央政府の高官達の席にいた。そこで技術部のリーダーの二人に声をかけた。

「あの戦闘機、タイガーキャットのミサイルですが」

「はい」

二人はその言葉に頷いた。

「射程はどれ位ですか」

「今までのミサイルの六倍程です」

二人は答えた。

「六倍か」

「はい。そして十発同時に発射出来るようにしました」

開発は主にチョムのチームが行った。宇宙のことを考えると彼のチームが主体になるのは当然であった。

「十発・・・・・・。そのコントロールはどうなっていますか」

「それは搭載されているコンピューターで制御されます。標的に狙いを定めるとコンピューターの誘導に従い敵を捕捉、追撃します」

「運用は」
「当然大編隊です。それで押し切ります」
「ふむ」
八条はそれを聞いて暫し考え込んだ。
「一機の敵機を無数のミサイルで狙い、撃墜していくのですね」
「はい」
彼等は答えた。
「一発のミサイルでは逃げられる可能性が高いですが無数のミサイルで狙うとそれは容易にはいきません」
「確かに。おそらくそれはかなりの腕利きでも不可能でしょうね」
彼は考えながら言った。
「やはり数ですか」
「そうですね。戦闘機もそれがまず肝心です」
チョムが答えた。
「これは他の機種にも言えることですが」
「攻撃機や爆撃機もですか」
「はい」
「それもこれから説明させて頂きます」
チョムとレイミーが言った。するとパレードは戦闘機から攻撃機に移っていた。
攻撃機はそれ程大型ではなかった。だが攻撃機として見た場合であり、先程のタイガーキャットと同じ位の大きさがあった。
攻撃機は翼が十字であった。そしてあちこちに武装を備えていた。
「また重武装だな、大きさの割に」
「それを考えました。艦艇や基地を攻撃する為です」
「名前は何といいますか」
「炎龍です。こちらは中国風の名前にしました」
「何故中国風に」
それを少し不思議に思った。
「戦闘機がアメリカ風なので。趣向を変えまして」

「それ程悪い名ではないと思いますが」
「まあ。結構いいと思いますよ」
少なくとも攻撃機には合う名前だと思った。
「かなり攻撃時間が長そうだな」
八条はやはりその重装備に注目せざるを得なかった。それは今まで見たことがない程のものであった。
「はい、それを念頭に置き開発しました」
今度はレイミーが発言した。
「そして装甲、コーティングを特に強化しました。戦車の様にね」
彼はそう言って不敵に笑った。
「まさか。それは言い過ぎでしょう」
流石に八条もそれは本気にしなかった。
「いえ」
だがここでチョムが首を横に振った。
「それは本当です。おそらくビーム高角砲の直撃を受けてもそうそう墜ちはしません」
「本当ですか、それは」
彼はそれを聞き思わず声をあげた。
「はい、実際に試してみました」
テスト飛行や耐久のチェックはパレード前に入念に行われた。その結果この炎龍は予想を上回る防御力を持っていることがわかったのだ。
「我々もこれ程までとは思いませんでした」
「そうか。それだけパイロットの生存が高まりますね」
「はい。それに長く戦うこともできますよ」
「うん」
続いて爆撃機であった。
爆撃機は二十世紀にあったような大型ではない。艦載機としても運用される為小型である。戦闘機や攻撃機と同じだ。
ややずんぐりした形で翼が鴎のそれの様になっている。どうやら

その胴に兵器を搭載するようだ。
「これは一撃離脱を考えました」
チョムが言った。
「まず敵に急接近し、攻撃を仕掛けます。そして高速で離脱します」
「では速度はかなり速いのですね」
「はい、戦闘機に匹敵するものにしました」
「成程。ところで一つ聞きたいことができたのですが」
「何でしょうか」
「戦闘機と攻撃機、爆撃機の巡航速度は同じなのでしょうか」
「当然です」
二人はそれに対して胸を張って答えた。
「それは設計当初から考えていたことです」
「そうでなくては何の意味もありません」
「それはよかった」
八条もそれを聞いて安心した。護衛がなくては攻撃機も爆撃機も満足に敵に接近することはできない。それを考えるとこれは戦術として当然のことであった。
そして偵察機や電子機等も来た。これも今までの機体より電子装備や偵察機能が格段に上昇しているようだ。そして大きさも艦載機に相応しかった。
「それにしても数が多いな」
それはもうパレードの数ではなかった。空を覆わんばかりの数であった。
「これも宣伝ですけれどね」
八条は笑って言った。数を多くしたのは彼であった。それにより連合の物量を多く見せる為なのだ。
「はい。我々の物量を知らしめる意味でもこれは大きいですよ」
ここでサルラムーンが言った。彼もこのパレードに列席していたのだ。
「我々がどれだけ膨大な物量を誇っているか、他国はそれを見ただ

けで考えるでしょう」
「国内の不穏な勢力も」
「はい、これはそうした宣伝では実にいいですな」
彼は満面に笑みをたたえて言った。
「さて」
ここで一同姿勢を正した。
「いよいよ艦艇ですな」
「そうですね」
八条は顔を上にあげて頷いた。そして彼は来るであろう連合の新型艦船を待っていた。
「来たぞ！」
観客達が声をあげた。

## 第五部第三章　巨大戦艦その八

「まずは駆逐艦だな」
何処か魚を思わせる形であった。艦腹にそれぞれ小さな翼を持ち艦橋は小型である。そして砲塔は前に三つ、後ろに二つ、そして下部に一つ同じ口径のものが備えられている。前方には左右四門ずつの魚雷発射口があり艦橋の左右には対空砲座やミサイルランチャーが備えられている。
「大きいな」
それを見た観衆の中の一人が呟いた。
確かに駆逐艦とは思えぬ大きさであった。軽巡と言っても差し支えなかった。それは装備においても言えることであった。
「駆逐艦にはそれぞれ無人機を一機配備させています」
チョムが八条に対して言った。
「露払いにか」
「はい。敵の艦載機や海賊の小型の船に対処する為です」
「それならもう少し艦を小型にした方がよかったのではないですか」
「いえ、あれで丁度よい大きさです」
「やはり運用でですか」
「その通りです。この駆逐艦も一隻では行動しません」
「艦隊か」
「はい。一隻では限度があります故」
「しかし一隻でも中規模の海賊程度なら楽に壊滅させられる火力がありそうですね」
「いざという時にはそれも可能ですが」
だがそれは本来の運用目的でないのはすぐにわかることであった。
「海賊に対しても複数で対処することを前提に設計されています」
よく見れば運動性能にも秀でているのがわかる。左右の翼はその為である。

それに装甲やビームコーティングもあった。これは駆逐艦には本来ないものだ。
駆逐艦は機動力と運動性を最も重要視する。その為に装甲やコーティングはないのだ。それ等が弱まるからだ。
「あくまで集団で戦う為にですか」
「はい。それに速度や運動性自体も今までの駆逐艦と変わりがありません」
「それは画期的な設計だな」
八条はそれを聞き素直に自分の考えを述べた。駆逐艦という主力艦艇とは言えない艦種なのであまり目立たないがこれは確かに画期的なことであった。
「駆逐艦でこれだと他の艦艇はどうなるのかな」
「それはすぐにおわかりになることです」
チャムとレイミーはやはり自信に満ちた声でそう言った。見ればもう次の艦達が姿を現わしていた。
「護衛艦です」
今度は細長いタイプの艦が姿を現わした。見たところこの艦は機動力に優れているようだ。
「先の駆逐艦とセットでお考え下さい」
「セットとは？」
八条はそれを聞き眉を少し動かした。
「駆逐艦は攻撃用ですがこの護衛艦は防御用です」
「防御用」
「はい。この二種の艦は巡洋艦と並び艦隊の主軸となります」
「どういう使われ方をするのですか」
「駆逐艦は敵を攻撃に当たります。しかし護衛艦は空母や補給艦を護衛する任務に当たります」
「成程」
「その為索敵能力やコーティング、バリアーは駆逐艦より充実させたものにしました。そして武装も対空砲やミサイルを多くしました」

対空とは敵の艦載機や小型艦艇に対することを差す。二十世紀に使用されていた言葉をそのまま使っているのだ。
「そうか、だから護衛艦には魚雷発射口はないのですね」
「はい。その分を対空に回しました。ただし主砲は同じ口径です」
その主砲の形もかなり違う。駆逐艦のそれが円形で砲身がなかったのに対し護衛艦は砲身が備えられている。三連砲である。前に三つ、後ろに二つ。そして下部に一つある。魚雷発射口は左右に一門ずつしかないがその分を対空砲座やミサイルランチャーを装備していた。全体的に武装の高さは変わってはいないようだ。
「やはり攻撃力はかなりありそうですね」
「火力がなくては例え防衛用といっても話にはなりませんから。この二つは艦隊において運用されます」
「補助戦力もかなり整っていますね」
「ええ。これだけでエウロパやサハラ各国の巡洋艦程度なら楽に相手に出来る程には」
彼等は笑った。次には先の二種に比べてやや軽装備の艦が来た。
「あれはパトロール艦ですね」
「はい」
二人は答えた。
「これは速度と機動力を重視しました。十隻程で決められた宙域をパトロールします」
「戦場の後方や連合の領内をですね」
「はい。それを考え機動力や運動性、そして各種電子能力を駆逐艦や護衛艦よりもアップさせました。ただしその分装備や防御は弱いです」
「それでいいのでは。艦隊に入って戦うのではないですし」
「はい」
当然ながら海賊やゲリラと正規軍では装備がまるで違う。また戦い方も違う。この艦が海賊やテロリストを相手にすることを念頭に考えられていることは明らかであった。

「海賊を相手にする時はそれなりの艦隊を組むこともあるでしょうがとりあえずは十隻程を一単位として運用することを考えて設計しました」
「あくまで前線に立つ為ではないもです。だがそれもいいでしょう」
「有り難うございます」
「こうした補助艦艇なくしては戦いにならない。よくこれだけのものを開発してくれました」
そしてミサイル艦が来た。円盤に近い形をしている。艦橋は小型で主砲は前方と後方、下部に一門ずつあるだけだ。
だが各部にミサイルポッドやランチャー、左右に魚雷発射口を装備している。対空砲座もあるが主な武器はあくまでミサイルである。
「またえらく極端だな」
「はい。これは集中攻撃用です」
「集中攻撃か」
「敵艦隊、若しくは惑星に対して。その最大の武器があれです」
チャムはそう言うと艦首を指差した。
「艦首がか」
見たところ縦ニ列に艦首がなっている。変わっている形といえばそうなる。
「あれは二つのミサイルです」
「あれが」
「はい。敵のところに行くとそれだけで爆発を起こします。一撃で巡洋艦十隻程は撃沈出来ます」
「それを一度に打つ」
「はい。使いようによっては敵艦隊を瞬時にして殲滅することも可能です」
「そうですか。だがあまり長期戦に向いているとは思えませんね。あくまで集中攻撃用ですか」
「それは我々もわかっております」
「そういうことは長期戦用の艦も用意してありますね」

「はい。あれです」
次に入って来たのは艦首が巨大な砲となっている細長い艦であった。それを中心にし艦橋は後方にある。そして前方に三連の砲塔を四つ、下部にも四つ備えている。対空砲座やミサイルも備えている。
「砲艦ですね」
「ええ」
レイミーが答えた。
「あの艦首の主砲が主な武器です。あれで一斉射撃を加えます」
「そこに駆逐艦や巡洋艦が雪崩れ込むことも可能ですね」
「そうです。それも運用に考えました」
昔からある基本的な戦術である。砲撃による射撃の後で突撃を敢行する。それは宇宙でも行われているのだ。
「ですがその火力が今までとは格段に違います」
「一撃で敵に致命的なダメージを与えることを考えております」
「砲撃だけで」
「はい。言わばこの艦は重砲です。その一斉射撃はミサイル艦のそれに匹敵します」
「だが短期決戦には向いていませんね」
見たところ船足は遅い。ミサイル艦の方がかなり速そうだ。
「ミサイル艦と併せて少し考えた方がいいですね」
「といいますと」
「両方共艦隊で使うのでしょう。砲艦の機動力もそうだがミサイル艦の装備をもう少し考えて下さい。やはりミサイル艦も長期戦に使えるようにするべきです」
「わかりました」
二人は答えた。
「理想としては両方を同時に使いたいです。それでもう一度考えて下さい」
「ハッ」
今回観艦式で進んでいるのはテスト艦艇である。その為これから

訂正がきくのだ。それを踏まえての観艦式でもあるのだ。観艦式は軍の威容を誇示するだけが目的ではない。
そして軽巡が来た。葉巻にやや近い形をしているが全体的に細長めだ。艦首の下方に巨大なビーム砲を搭載し前方に三門、後方に二門、そして下方に三門三連の砲塔がある。
艦橋の周りはやはり対空砲座があり魚雷発射口は艦の艦首に近い部分に左右五門計十門備えられている。そのすぐ後ろにはミサイルランチャーもある。これは左右に二つずつだ。
「一つは対艦、一つは対空です」
「ふむ」
八条はそれを黙って聞いていた。
「この艦は装甲やビームコーティングよりも機動力を優先させました」
「軽騎兵といったところか」
「そうですね。そうした使い方がいいと思います」
「後方や側方に回り込むとか機動力で撹乱するとか」
「そうした使い方が合っていると思います」
「そうですか。だがそれにしてもこの艦も大きいですね」
見ればとても軽巡という大きさではなかった。かなり大型の重巡と言っても差し支えなかった。
「それだけエンジンは高出力のものを搭載しております故」
「武装も」
「ふむ」
確かに駆逐艦、護衛艦もこの軽巡も装備は凄い。口径も他国の同じ型のものより大きく武装も砲塔にして前も後ろも下もかなり程違っている。細かい武装は言うまでもない。そのうえ防御まで違うのだ。これはかなりの戦力と言って差し支えなかった。
次はその重巡だ。形は先の砲艦に似ていなくもない。艦橋はやや後方にある。だがその大きさと装備は砲艦よりもさらに上であった。
艦首には砲艦のものよりやや小型の砲と魚雷発射口が左右にそれ

ぞれ五門ずつある。主砲は軽巡のそれよりも二回り程大きいであろう。それの三連の主砲が前方に三門、後方に二門あった。下部には三門だ。
ミサイルランチャーも対空ビーム砲座も軽巡よりも多かった。装甲もビームコーティングも堅そうだ。
「軽巡が軽騎兵ならこちらは重騎兵といったところでしょうか」
チャムが言った。
「こちらは正面への攻撃をメインに考えました。言うならば打撃戦力です」
「主戦力の一つですね」
「はい、戦艦と共に」
「速度は軽巡程ではないですがいざという時にはかなりものが出せます」
レイミーも説明に加わった。
確かに速度は先の軽巡よりは遅そうであった。だがその巨体と武装は異様な程であった。これが戦艦と言ってもおそらく誰も疑わないであろう。
「それにしてもどの艦もかなりの大型だな。駆逐艦ですらかなり大きかったが」
「あえてそういう設計にしました」
「ほう」
八条はチャムの言葉に顔を向けた。
「大きめの方が後々装備を新たに備え易いですから。乗組員の居住の関係もありますし」
「居住ですか」
「はい、これだけは充実させませんと。士気にも関わります」
連合は志願制である。エウロパもマウリアも志願制であるが連合のそれは他の二国とは軍に対する考え方がかなり異なっているのだ。
エウロパには『高貴なる者の義務』という言葉がある。貴族等高い身分にある者はそれなりの責務を果さなければならない。彼等は

それに従い軍に入るのだ。当然将校であるがそれにより少なくとも軍の指揮官は確保できている。下士官や兵士は彼等に仕える者も多い。主が入るなら自分も、である。中世の騎士のそれに似ていると言えばそうなる。

マウリアはインド文化であるせいか何処かにカーストの思想の名残があった。かってクシャトリアと呼ばれていた戦士階級の者にあったとされる者が軍に入る傾向がある。彼等も軍の維持にはさ程困ってはいなかった。カーストの名残は確かに困ったものであるが軍の維持という点では役には立っていた。

連合には貴族もカーストもない。軍人は職業の一つとして捉えられている。だから待遇が悪ければ来ない。他に職業は幾らでもある。大金持ちになりたければ企業を興すか株でもうけるか大農園を開くか。はたまた鉱山を掘り当てるか。そうした考えである。普通に暮らしてもよい。軍での扱いが悪ければそれはすぐに人手不足に直結する。志願制の軍隊の難しいところであった。

従って艦内の居住設備も充実したものにしなければならなかった。娯楽の為のテレビゲームや書斎、スポーツジム等も備え居住区もこれまでのものより良くした。シャワールームもトイレも設計の段階から一新し数も多くした。これは将兵の健康の維持の為でもあった。

「それは当然ですね。将兵を確保する為に」

「はい。少なくとも大航海時代の様なことはありません」

「あんなふうにしたら志願者は一人もいないでしょうね」

八条はそれを聞き思わず苦笑した。あの頃の船乗りは餓えや疫病と常に隣合わせであった。

「はい。それは極論ですが陸上にいる時と変わりない状況に近づけるようにはしました」

「なら問題ありません。将兵の士気の維持は不可欠ですから」

「はい」

チャムは頷いた。それを考えるとそれぞれの艦の大きさは納得がいった。

「ところで乗組員の数ですが」
彼はそこで将兵の数に対して問うた。
「はい」
レイミーが応えた。
「これまで通りやはり一隻にあたり多い艦で百人程でしょうか」
「ええ」
どうやらこれは変わらないようである。
「そうか。それは変わらないですか」
「ですね。いざとなればどの艦も五十人程でも動けるようにコンピューターによるコントロールを強化しておりますが」
「そうか、用意がいいですね」
「何が起こるかわかりませんから」
「確かに」
不測の事態が起こるのが戦争である。あらゆるケースを想定しておくのは当然と言えた。
「それにしてもどれも大きな艦だ。これが百人で動くのですか」
「もっと大きい艦もありますよ」
ここでチャムが微笑んで言った。
「いよいよですね」
「はい」
会場がざわめきだした。いよいよマニア達が最も待ち望んでいた艦達が姿を現わすのだ。

## 第五部第三章　巨大戦艦その九

「まずは空母です」
チャムが自信に満ちた様な声で述べた。それが姿を現わすと歓声が起こった。
「おお！」
それはこれまでの空母とは違っていた。あまりにも独特の姿をしていた。
長方形をしている。空母だけあって他の艦よりも大きい。だが違いは他のところにあった。
何と飛行甲板が四つあるのだ。上中下と縦に四段並んでいる。
艦橋は右側にある。武装は左右にミサイルランチャーと対空砲座が少しある程度である。どうやら武装よりも艦載機の搭載に主眼を置いているようだ。
「まさか多段の甲板を持つとは」
これには八条もいささか驚いていた。
「ちょっと趣向を変えてみまして」
レイミーが答えた。
「今までは空母は着艦と発艦を同じ甲板でしておりましたね」
「ああ」
「それを増やしてみました。これですと一度に多くの艦載機の発進と帰還が可能です」
「だが大変そうですね」
「いえ、そうでもありません」
レイミーは笑顔で答えた。
「甲板はそれぞれ着艦、若しくは発艦に専念できますから。今までの様に片方をやりながらもう片方、とやる必要はなくなったのです」
「そうですか」
八条はその言葉にハッとした。

「それなら艦載機の運用がかなり楽になりますね」
「はい」
今まで艦載機の離着陸はかなり面倒なものであった。艦隊同士が接近した時に艦載機は活躍するがその離着陸はかなり危険が伴うものであった。
その瞬間には多くの神経を使う。そしてその時は艦は無防備になり易い。それを護るのも大変であった。
従って接近戦は一瞬の油断が命取りであった。艦載機を使おうとしてその隙を衝かれ敗北した例も多い。
ましてや着艦と発艦を同じ甲板でやるのは恐ろしく危険な仕事であった。一歩間違えばそこで衝突し事故を引き起こす。そうなれば死者が出るだけでなく甲板も使用不能になる。その間その空母は行動が全くとれなくなる。そして艦載機は下手をすればエネルギー切れで宇宙空間を漂う羽目になる。
このことを連合の技術班は深刻に受け止めていた。そしてそれを解消するのがこの四段空母であった。
「これなら一度に多くの作業がこなせますよ」
レイミーはまた言った。
「着艦は二つ、離艦は二つで。今までとは比較にならない程効率は上がっています」
「それに安全性も。飛行甲板の間もそれを考慮に入れて設計しました」
チャムも言った。
「奇抜な外見だけではないのですね」
「当然ですよ」
二人は笑顔で答えた。
「どの艦もあくまで機能を追及した結果です。それでこうした外見になったのです」
「そうなのですか、それにしてはまた変わっているな」
「まあ確かに」

苦笑した。それは二人も認めざるを得なかった。
「けれどこれから出て来る艦はデザインはこの空母程ではありませんよ」
「そうなのですか」
「はい、まあそれもゆっくりと御覧下さい」
観衆の歓声がさらに大きくなった。最も人気の高い戦艦が来たのだ。
戦艦は二種類ある。通常の戦艦と高速戦艦だ。まずは高速戦艦が来た。
高速戦艦はエンジンの強化により速度を通常の戦艦より更に速めたものである。その分装甲等はやや弱いが火力は変わらない。機動戦に使用する。
先端は流線型になっている。その先にはやはりビーム砲がある。重巡のそれよりも大きい。だが砲艦のそれ程ではない。そして艦首にはそれと並んで魚雷発射口が左右に六門ずつ並んでいる。主砲はやはり重巡のそれよりもさらに大きい。砲塔も四連になっている。
それが前に四っつ、後ろに三つある。下にも三つ存在する。
対空砲座やミサイルランチャーもあるが思ったより少ない。重巡と同じ位である。
「やはり機動力を意識してか」
「はい。防衛よりも急襲を念頭に置いた艦ですから」
チャムが答えた。高速戦艦は普通の戦艦とは運用が違う。正面から戦うことは少ないのである。
それよりも迅速な行動による機動戦の方が主であった。敵の後方や側方に回り込み攻撃を仕掛けるのだ。普通の艦隊の運用とは少し離れる場合が多い。
「それを考えますと対空砲座等はそれ程要らないものかと思いまして。防御も軽巡のそれよりもやや上の程度で抑えました」
「その分を機動力に回したのですね」
「その通りです。それによりかなりのスピードが出ました。それは

保障します」
「よし」
高速戦艦は汎用性はやや落ちる。軽巡が通常の艦隊においても空母の護衛や主戦力の補助に使われるのとは異なるのだ。従ってその数もあまり多くはない。だが必要不可欠な艦であることに変わりはない。
「いよいよだな」
場は一旦静かになった。
「ああ、遂に出て来るぞ」
マニア達はカメラを構えた。そしてその艦がやって来るのを待った。
「来たな」
そしてその威容が遂に明らかとなった。
戦艦が姿を現わした。言うまでもなく艦隊の主幹戦力である。
「おお！」
誰もがその姿を見て思わず声をあげた。その姿は巨大であり、そして美しさすらあった。
艦首の下方に巨大な砲が横に二門備えられていた。先の高速戦艦のそれと同じものであった。
「横に二門かよ」
「ありゃかなりの破壊力があるぞ」
彼等は口々にそう言った。そして武器はそれだけではなかった。
主砲はやあｈり四連であった。装備の構造は高速戦艦のそれと変わらない。やはり戦艦だけあってそれなり以上の装備が求められる。魚雷発射口も同じ数であった。
だが対空砲座やミサイルランチャーの数は違っていた。重巡や高速戦艦のそれよりも五割程多かった。そしてその分姿も大きくなっていた。
「また凄い数だな」
「主戦力ですからね」

チャムは微笑んで答えた。
「やはり戦艦は装備が充実しておりませんと。話になりません」
「それはそうですが」
だがその姿はそれまでの艦の常識を覆すものであった。
あまりにも大きかった。これまでの戦艦の倍はあるのではないか、と思える程である。
そして装備もだ。主砲だけでなく艦の左右には副砲まであった。これは前後に向けて一つずつ、計四つあった。それは軽巡の砲塔であった。
「まるで一隻で星を破壊しそうな装備ですね」
「ははは、それは言い過ぎですよ」
チャムはそれには声を出して笑った。
「いや、本当にかなり凄い装備です。これは画期的ですよ」
「そうですかね」
彼は少しとぼけてみせた。
「防御はどうなっていますか」
「それもご安心下さい。かなりの堅固さを持っていますから」
「そうですか」
八条はそれを聞きさらに機嫌をよくさせた。
「かってドレッドノートや大和という画期的な戦艦がありましたが」
ドレッドノートは日本海海戦を見てイギリス海軍が建造した戦艦である。それまでの戦艦のあり方を根本から変えた革命的な艦であった。大和は日本海軍が第二次世界大戦直前に建造した巨艦である。大戦中の日本海軍の象徴とも言える艦であった。最後の戦艦と言ってもよい程であった。
チャムは今それ等の艦に匹敵するとまで言っているのである。その自信の程が伺い知れた。
「まあこれからわかることですよ。それに」
「それに」
八条はそこに突っ込んだ。

「これからもっと凄い艦が姿を現わすのですから」
「そうでしたね」
これには彼も不敵に笑った。二人だけでなくレイミーもそれに加わっていた。
「凄い艦だな」
「ああ、全くだ」
マニア達は感激すら覚えていた。彼等もこれだけの艦を見たことは今までなかったのだ。
その後は揚陸艦や輸送艦、補給艦、工作艦等の補助艦艇が続く。掃海艇もある。
「また滅茶苦茶大きいな」
ここで注目を集めたのが輸送艦であった。以前八条がアナハイム社に直接発注したものだ。
「アナハイム社製らしいな、あれは」
情報に詳しいマニアの一人が言った。
「だからか。あんなに大きいのは」
アナハイム社の艦の大きさはよく知られていた。彼等はそれに大いに納得した。
その艦は戦艦よりもまだ遥かに大きかった。各部にタンクを搭載し艦橋は後方に四角く巨大なものがある。どうやら輸送力に極端に比重を置いたらしい。
「フフフ、どうやら皆わしの社の船に驚いているようだな」
ベニョーコフもそこにいた。そしてどの者も驚いているのを見て満足そうに笑っている。
「苦労したからな、ここまでのものを開発するのに」
「その苦労の分だけはありましたね」
隣には息子もいた。
「ああ、だがいい仕事になる」
「はい、最終チェックが通り次第すぐに量産に入りましょう」
二人はこれからの仕事について話し合った。その間にも艦はやっ

て来ていた。
掃海艇は四角い構造をしていた。どうやらこれは防御の比重を置いているらしい。
「機雷の撤去だからな」
機雷は極めて有効な兵器である。コストも安く足止めにもなる。そしてその撤去は危険で手間暇もかかるのだ。
連合もそれには悩まされてきた。海賊達が機雷を撒くのだ。従って各国では掃海作業は極めて重要な任務の一つであった。
「これも戦争です」
レイミーが言った。
「機雷も満足に処理できずに何が軍ですか。そう思い開発しました」
「そうですか」
八条もそれはよくわかった。彼も軍にいた頃は機雷に悩まされたからだ。
「防御とコーティングに重点を置きました。そして作業用のロボットをこれまでの倍搭載しました」
「念入りですね、また」
「はい。その為大きさはやはり大きくなってしまいましたが。あと母艦もあります」
「あれですね」
「はい」
そこに先の輸送艦に匹敵する巨大な艦が姿を現わした。形は輸送艦に似ていなくもないがタンク等はない。
「あの母艦を中心に十隻単位でチームを作って行動します」
「そうか」
掃海作業の基本は守っている。彼はそれを聞いて大いに納得した。
「これで海賊の機雷への対処は飛躍的に上昇しますよ」
「よし、これで宙域の安全は更に上がりますね」
「はい」
病院船もあった。やはりこれも大型であった。

「こうして見ると戦闘以外の艦艇が多いな」
「はい、それは当初から念頭に入れました」
「当初からですか」
「そうです、戦闘は後方で決まるものですから」
「確かに」
これは連合各国に共通した考えであった。海賊やテロリストとの戦いにおいては実戦部隊は少ない。それよりも情報や補給、通信がどれだけ充実しているかが勝負の分かれ目であった。
「私もそれを考え開発を命じましたが」
「それ程までとは思わなかった、ですね」
「はい」
チャムに自身の言葉を言われ少し苦笑した。

## 第五部第三章　巨大戦艦その十

「だがこれは頼もしい。いざという時にはこれ等の艦艇が力になってくれるでしょう」
「ええ、それを期待しています」
「ところで」
彼はここで話題を変えた。
「先程空母が出ましたが」
「はい」
艦載機と聞き二人は顔を引き締めさせた。
「あの空母は一体どれだけの艦載機を搭載できるのですか。あの巨体からするとかなりの数を期待できますが」
大体駆逐艦や護衛艦、パトロール艦が三〇〇メートル超であった。軽巡や砲艦、ミサイル艦が四〇〇近く。重巡で五五〇程か。それで普通の国の戦艦よりもずっと大型であった。掃海艇は二〇〇位である。戦艦で七〇〇程だった。高速戦艦も同じだ。
だが空母はそれよりもさらに大きかった。優に一〇〇〇には達していた。ちなみに輸送艦や病院船、揚陸艦や工作艦等は特別であり三五〇〇を超えている。だがこれは戦闘用ではない。多くの人員や陸上兵器を収容する為である。後方にいる為装備といったものもない。
「はい、二〇〇機です」
レイミーが答えた。
「二〇〇ですか」
それは今までの空母の倍程の数だった。
「それだけではありません、他の艦種の艦載機の搭載量も多くしました」
「どの位ですか」
「はい、まずは駆逐艦や護衛艦で三機、ミサイル艦や砲艦も同じで

す」
「駆逐艦等にも搭載しているのですか」
「はい、大きめに設計したのはそれもあります」
「また凄いですね」
これには素直に驚きを覚えた。まさかここまでとは思わなかったからだ。これも彼の予想以上であった。
「軽巡で六機、重巡で九機、戦艦で十二機です」
「かなり多いですね。接近戦で活躍してくれそうです」
「元々我々は数で戦うことを念頭に置いていますから。これ位は当然かと」
「そうです、それに驚かれるのはまだ早いですよ。あれがありますから」
「そうでしたね」
八条はそれを聞き表情を一旦元に戻した。そしてあらためて笑った。
「いよいよあれが来ますよ」
チャムは彼に笑って言葉をかけた。
「我が連合軍の象徴とも言える艦が」
「もうすぐ姿を現わします」
レイミーの声はいささか興奮したものであった。彼もまた緊張と喜びを隠せなかった。
「いよいよか」
八条もそれは同じであった。上を見上げそれを待っている。
「さあ来い」
彼等は呟いた。
「そしてその巨体を見せるんだ」
だが観衆や中央政府及び各国の首脳達は観艦式はもう終わったものと思っていた。
「帰るか」
「ああ、よかったな」

帰り支度をはじめている者もいた。その彼等の上に何やら巨大な影がやって来た。
「！？」
ふと上を見上げた。その瞬間彼等の顔は凍りついた。
「な、何だあれは！」
それを見た誰かが叫んだ。
それは艦とは思えない程巨大なものであった。輸送艦なぞ問題にならないものであった。
優に十キロは超えていた。艦体は六つあり中央に巨大なメインと思われる艦体がある。その左右にそれぞれ戦艦のそれを思わせる艦体があり、そのすぐ下に重なる形でに四段の巨大な艦体がある。これは空母のものであった。上に三つ、下に三つつ並ぶ形になっていた。重なっている為一番上の甲板はなくなっており三段になっている。中央のメインと思われる艦体は他のそれよりも遥かに大きく段になっていた。艦橋は上の三つは上部にあったが空母のそれには下にあった。上のそれがまるで城塞の様に聳え立っているのに対して下のそれは比較的小さく、艦体の端にあった。
艦首の部分にはやはり巨砲があった。それは砲艦のそれと比するのが馬鹿馬鹿しくなる程の大きさであった。
「化け物か」
それは上の艦体に一つずつあった。その他にも装備は恐るべきものであった。見ればそれを意識してか甲板は巨砲よりもずっと奥にあり上下の距離もあった。おそらく互いに影響があるのを避けたのであろう。
おそらく砲艦の巨砲をそのまま使っているのだろうか。いや、それよりも遥かに巨大なものであった。主砲は三つの艦体の上と横、そして空母体の下にあった。しかもそれは六連であり前に八つ、後ろに七つずつあった。下の空母体のそれも同じであった。なお中央のそれには前に十、後ろに九あった。そしてその体が一際大きい為砲塔は回転が可能であった。

副砲もあった。それは他の五つの艦体の左右にあった。見れば戦艦の砲塔である。それは主砲の優に倍の数が備え付けられている。
見れば艦の各部に監視塔があった。それで巨大な艦の見張りをするのだろう。その周りには夥しい対空ビーム砲座とミサイルランチャーがあった。
主砲、副砲の上にもあった。他にも各部にビーム砲座やランチャーは備え付けられている。最早艦というよりは要塞であった。
「何なんだあれは」
「要塞じゃないのか」
実際にそうした声も聞こえていた。
「いや、あれは艦だろう。姿形を見る限り」
「そうか？それにしては大き過ぎると思うが」
「いや、間違いない。あれは艦だ。ただ巨大なだけで」
観衆も各国の首脳達もそれをようやく認識できるようになった。それでもまだ信じられなかった。
「長官」
中国の李大統領が八条を呼んだ。チャムとレイミーを従えるように彼はキロモトのところへ行った。
「何でしょうか」
「あの艦だが」
豪放磊落な気質の李も驚きを隠せないでいた。
「一体何なのかね。あれ程の艦は今まで見たことがないが」
「あれですか」
八条はあえて悪戯っぽく笑ってみせた。
「ああ。どうやら要塞ではないようだが」
「はい、あれは艦艇です」
「そうか。一体何という艦かね。見たところ戦艦の様だが。いや」
李はその艦の下の空母の部分を見て考えを改めた。
「空母かな。それにしては装備が凄いが」
「閣下、あれは超巨大戦艦です」

「超巨大戦艦」
李はその小説で聞く様な言葉に一瞬だが表情を変えた。見たことも聞いたこともないようなことをはじめて感じた様な顔であった。
「はい、あれは連合の象徴とも言える艦です」
「そうか。私は戦艦がそうだと思っていたが」
彼も事前に話を聞いていた。連合軍の象徴とも言える艦を開発しているというのは聞いていた。だがそれは大型の戦艦であり、これ程のものとは夢にも思わなかったのだ。
それも当然であった。この艦の開発は連合大統領であるキロモトと八条、財務長官トラブゾン、そして一部の軍の高官しか知らなかったのだから。
「それにしても凄い装備だな。艦載機だけでもどれ位あるのやら」
「一万機程です」
レイミーが答えた。
「そうか、それ位はあるだろうな」
普通なら一笑に付す話だが今回は信じることができた。それだけの大きさがあったからだ。
「それだけでかなりの戦力だが」
「それで終わりではありませんよ」
「そうだろうな。これ程までの武装だと嫌でもわかる」
巨大戦艦は威容を見せ付ける様に空を飛んでいた。そしてその姿を連合、いや全銀河の者達に焼き付けたのであった。
観艦式は成功に終わった。連合はその目論見通り連合軍の力を内外に誇示することができた。その多くの艦、特に巨大戦艦は各国の注目を集めることとなった。

# 第五部第四章　神の名その一

## 神の名

連合の観艦式がエウロパ等各国に与えた衝撃はかなりのものであった。特に巨大戦艦の存在は大きかった。

今までは一部の者だけの話であったがこの式により全ての者が知ることになったのだ。話はそれで持ちきりとなった。

「あの戦艦は一体どれだけの力があるか」

「どれだけ建造されるか」

数はすぐにわかった。連合中央政府が各艦隊の旗艦とすることを発表したからだ。

連合の艦隊数は三千、すなわち三千隻建造されるのだ。

「あれが三千隻か」

それだけで他国、とりわけエウロパの者にとっては脅威であった。脅威に感じたのは彼等だけではなかった。連合軍の設立以降急激に沈静化していた連合国内の海賊達だがそれを聞いてさらに弱体化した。更に投降する者が増加したのである。

こうしてこの戦艦はその存在だけで連合国内の治安に役立った。それだけでも恐るべき存在であった。

「連合の治安が良くなると厄介だ」

エウロパにはこうした意見を持つ者もいた。

「その分国力を向けなくて済む。そして治安の好転により経済活動が更に活発になる」

連合にとっていいことづくめだがエウロパにとっては違う。彼等にとっては宿敵の伸張程腹が立ち、なおかつ危険なものはないからだ。

この一千年何時連合が攻めてくるか、それが何よりの恐怖であった。彼等と連合の国力差はあまりにも大きいからだ。

一千億対三兆、領土も資源も比較にならない。それだけでも脅威であったが今までは連合内のまとまりがないので助かっていた。中央軍すらなかっらのだ。
だがそれが設立され、今こうして巨大戦艦が姿を現わした。エウロパは最早恐慌状態であった。
「予想していたが」
モンサルヴァートは首都オリンポスに残っている各艦隊の司令達を集めて軍議を開いていた。
「やはり混乱状態になってしまったか」
巨大戦艦の情報を手に入れた時からそれは予想していた。だが実際に起こってみるとそれは彼の予想を上回っていた。
「あれ程の巨大なものですからな」
まずターフェルが口を開いた。
「致し方ないかと。やはり目に見える脅威ですから」
「確かにな。数字で見るのよりも遥かに効果的だ。連合の狙いはそれもあるのだろう」
モンサルヴァートにもそれはわかっていた。だからこそ彼等はあえてあれ程までの巨大な艦にしたのだ。
「あの姿だけで連合内の海賊達は雪崩を打って投降しているようです。そして彼等のうち罪の比較的軽い者は軍に編入されているそうです」
「それだけではありません」
今度はジャースクが口を開いた。
「それまで商船を護衛していた用心棒といった治安の好転で存在も仕事がなくなったので連合軍に入っているそうです。彼等もまた大きな戦力増強になっているそうです」
「彼等にとっては将にいいことづくめだな」
モンサルヴァートは面白くなさそうに小さな声で言った。
「こちらにとっては脅威以外の何者でもないというのに」
「全くです」

これはこの場にいる全ての者の意見であった。
「ただすぐにこちらに侵攻してくるかというと疑問ですが」
マトクが自分の考えを述べた。
「それは何故だ」
実はモンサルヴァートもそう考えていたがそれはここでは出さなかった。あえて彼に問うた。今エウロパでは連合の大艦隊があの巨大戦艦を筆頭を雪崩を打ってエウロパに侵攻してくるのではないか、とまことしやかに話されていた。その恐怖で一千億の市民は震え上がっていた。
「まずあの戦艦だけでなく軍備が整っておりません。まだ観艦式によりお披露目が終わっただけです」
「そうか。それで」
彼はマトクにさらに言うよう促した。
「まずそれが整わなければ。三千個の艦隊とあの巨艦を三千隻建造するにはかなりの時間と労力が必要です」
「ふむ」
それは彼も同じ意見であった。しかしやはりそれは口には出さない。
「そこから議会で話し合う。それに連合はエウロパと比べてもかなり各国の発言力が大きいです」
「各国の意見調整等も必要だというのだな」
「そうです、侵攻してくるのならばそれ等の手順を全て済ませてからでしょう。今すぐにということは有り得ません」
「だが無理をして攻め込んで来る可能性もあるのではないか。やはり彼等には数がある」
ゴドゥノフが言った。
「数ですが」
マトクはゴドゥノフの言葉に正対するようにして言った。
「数にはそれなりの費用がかかります。兵士それぞれを動かす為だけでも。それに燃料や食糧、兵器等も必要です」

「補給の問題か」
「そうです。彼等は大軍であるだけにそれが大きな課題になりましょう。それの整備もしなければなりません」
マトクはモンサルヴァートに答えた。
「連合領内を動かすだけでもかなりの設備、費用が必要です。彼等はそれはまだ整備中だと聞いております」
「確かにな」
それは軍事を知っている者なら容易に想像がつくことであった。連合は今軍港や航路等の整備を急激に進めているという情報も入っていた。
「そうしたことを全て終えてから行動に移るでしょう。そうですね」
マトクは考えながら意見を述べた。
「まずは設備の整備を補給及び通新体制の確立、そして軍備を整える。それからどうするか連合内での議論でしょうね」
「それだけでもかなりかかるな」
「はい、時間はまだまだあります。我々はその間に防衛体制を整えておけばいいのです」
「彼等が動かないうちに、か」
「そうですね。彼等が動く頃には我々は既に防衛体制を整えていなければなりません。逆に言いますと」
「油断はできないと」
「ええ。何しろ三十倍の敵と戦うのですから」
それが最大の問題であることに変わりはなかった。
「では今は軍備に専念することにするか」
「はい、それが賢明です。下手に彼等を刺激すればそれこそ問題です。彼等も整備をより早めようとするでしょう」
「その分我等にとって危機になる」
「それを防ぐ為には今は無視しておくべきです。表面上は」
「よし」
マトクの言葉に大きく頷いた。

「では諸卿はこれまで通りそれぞれの任務に専念してくれ。私もそうすることにする」
「ハッ」
司令達はその言葉に敬礼した。
「今は将兵の動揺を抑えてくれ。そして然るべき時に備えるのだ」
こうして軍議は終わった。モンサルヴァートは軍議が終わるとその足ですぐに総統官邸に向かった。
「そうか、軍でも動揺があるか」
ラフネールはモンサルヴァートからの話を聞きそう呟いた。
「あえて名は出しませんが高官の中にも連合の侵攻を恐れている者がおります」
彼は軍の内部の動揺を伝えた。
「やはりあの巨大戦艦の存在は大きいな」
「はい、やはりあの存在が決定的だと思います。今までは単に物量差の問題でしたが」
「それでもかなりの脅威だったというのに」
エウロパはやはり数が少なかった。そんな彼等にとって連合の数は脅威であることはこの一千年の間変わることはなかった。

## 第五部第四章　神の名その二

その脅威はエウロパの者にとっては無意識下にまで染み込んでいた。だがやはり直接目に見えるものではなかった。あくまで数字上のことであり直接見たものではなかった。ましてや連合とエウロパに交流はなかった。全くの異世界と言えばそうであった。宗教家やスパイのみが連合に行き来したり、潜伏し情報を収集するだけであった。だから脅威とはいっても実際に目に見えるものではなかった。無意識下にまで浸透していてもそれはいささか宗教的な漠然としたものであった。中世の人間の地獄の様なものと言えばわかり易いか。ネットや報道で見てもそれ程感じなかった。少なくとも巨大には見えなかったからだ。

「目に見える存在というのがこれ程大きいとはな」

ラフネールの言葉がそれを見事に現わしていた。

「そうですね、今までは映像では我々の世界とあまり変わりはなかったですが」

「そこであのような巨大戦艦を見せられてはな。混乱が起こるのも当然か」

「はい、残念ながら。ただ連合が動くのはまだまだ先だということをわかっている者もいます」

「そうか、それは私も同じ考えだ」

ラフネールはその言葉に頷いた。

「連合はまだまだやらなければならないことが多い。それに我々に攻め入るにしろ事前に色々と議論が行われる筈だ。彼等とて民主制なのだからな」

「その国よって形態は違いますがね」

連合には王国、共和国、連邦国家等色々な国家形態がある。そしてそれをまとめる形で中央政府と中央議会があるのだ。

エウロパは個々の政府の力は弱い。象徴に過ぎない。エウロパ政

府が全てを司っているのである。ここには国家規模の関係もあった。
「それを考えると彼等とことを構えるのは暫く先だ。だが」
「だからといって軍備を怠ってはなりませんね」
「そういうことだ」
ラフネールはその言葉に対し頷いた。
「私は今の艦隊を大幅に増やそうと考えているのだが」
「防衛計画とは別にですか」
「うん。今は八十個だったな、総督府のものも入れて」
「はい」
エウロパは原則的に少数精鋭である。これはニーベルング要塞群に守られているせいもあった。
「それを二百個に拡大しようと考えているのだが」
「二百個ですか」
「そうだ。だが徴兵制は施行するつもりはない。質は維持したいからな」
「成程」
徴兵制は兵士を安定して確保できる。だがその質は志願制と比べて落ちる。士気の低い兵士も混ざってしまうからだ。
だからこそ連合もエウロパもマウリアも志願制なのだ。サハラ各国の様に常に戦乱に明け暮れ、ている地域ではないからそれも当然であった。だがサハラはこれ等の国々とは事情が違っていた。
国々が乱立し互いに争う状況が続いていた。そしてイスラムでは何よりジハードの思想がある。その為徴兵制であっても兵士の士気は高いことが期待できる。
その為彼等は強かった。そしてモラルもまた高いのである。徴兵制にした場合モラルの低い兵士が来る場合がある。入隊の際あまりそうしたことが厳密に調査されない場合があるからである。
「それで将兵は集まるだろうか」
「そうですね」
モンサルヴァートはラフネールに問われ暫し考え込んだ。

「予備役に回っている者もおりますし彼等も復帰させましょう」
「うむ」
エウロパでは予備役の者が多い。少数精鋭の軍であるからポストは少ない。その為退役して予備役に回る者も結構多いのである。
「そして志願を募りましょう。それでかなりの貴族がやって来る筈です」
「そうか。それによりどれ程集まるかな」
「予備役が結構いますからね。それだけでもかなり」
「だが二百個には届かないだろう」
「そうですね、予備役を全て戻して百七十個でしょうか」
「志願を募るしかないか」
「はい、今何もすることもなく暇と金を持てあましている貴族達も多いですから彼等にも来てもらいましょう」
「大丈夫かな」
「大丈夫でしょう、彼等の多くもかっては軍人だったのですし」
エウロパでは貴族が一度は軍務に就くことは半ば義務となっているところがあった。その為士官学校も貴族出身者が圧倒的に多いのである。連合の者はこれを階級社会の証左だとこれ見よがしに批判することが多いのだが。
「そこに彼等に従う者が入りますから。それで将兵は維持できます」
「そうか。それでだ」
「はい」
ラフネールは話を変えてきた。
「防衛計画は順調にいっているな」
「はい」
モンサルヴァートは率直に答えた。
「そうか、ならばいい。だがそこに付け加えてくれ」
「何をでしょうか」
「二百個艦隊を的確に運用できるようにしたい。その為の整備だ。いいかね」

「はい」
それは当然であった。二百個艦隊あればそのニ百個艦隊を運用しなければならない。その為の整備は不可欠である。
「それで国防はかなり違ってくると思う。少なくとも連合を食い止めなければ成らない」
「やはり彼等ですか」
「うむ。衝突は先にしてもだ」
連合の存在なくして彼等の国防計画は有り得ないのもまた事実であった。
「すぐに取り掛かってくれ。そして一刻も早い防衛システムの完成を」
「ハッ」
モンサルヴァートは敬礼した。そして部屋を出るとすぐに参謀達を集め軍議を開くのであった。

エウロパは次第に落ち着いていった。マスコミも比較的冷静でありネットでも連合との衝突はあるにしてもまだかなり先の話だということで決着がついたからだった。エウロパでは幸いなことにこうした事態を扇動する悪質なマスコミは少なかったのだ。
「それは彼等にとって幸いだな」
アッディーンはエウロパのマスコミのことを聞きそう言った。
「マスコミの弊害は時として国を滅ぼす」
それは彼がサラーフとの戦いで知ったことである。彼はそれ以来マスコミというものに不審を抱くようになっていた。
「歴史で学よりも実際に目で見た方がわかるものだ」
彼は現場主義でり見たものをまず第一に信じる男であるが今回は特にそれを痛感していた。
「サラーフはマスコミにより滅びた。その報道と腐敗によりな」
マスコミとは腐敗し易いものだ。情報を独占する。そしてそれを思うがままに捏造し、隠蔽することができるからだ。

それによる弊害の酷さは二十世紀以来のものであった。やはりこうしたことを語る場合日本は外せなかった。
「だが一つ疑問があるのだ」
アッディーンはここで首を傾げた。
「何故日本ではそこまでマスコミが特権を握り腐敗したのだ？これではあまりにも極端だ」
「それですか」
そこにいたガルシャースプが答えた。
「おそらく敗戦が原因でしょうね」
「敗戦」
「はい、第二次世界大戦はご存知ですね」
「うむ」
この時代ではこの戦争は二十世紀の時程あまり重要視されていない。後の資源を巡る対立の方が遥かに重要視されている。この対立により今の人類の構図が出来上がったのだから当然といえば当然であった。
第二次世界大戦はアジアやアフリカが独立するきっかけとなった戦争ととらえられている。日本がそうした旗印を掲げたせいもあるが実際にそれにより植民地を持っていた国々がその力を弱めたからであった。民族自立という観点においては第一次世界大戦と並ぶ戦いである。
だがそれよりも歴史においてはやはり月等における資源を巡る争いの方が重要であった。あれがなくては連合も誕生せずエウロパも誕生しなかったのだから。当然サハラもどうなっていたかわからない。
だが第二次世界大戦のことは歴史によく残っている。ヒトラーやスターリンといった人類史に名を残す独裁者のことでも出て来るからである。
「あの敗戦により日本のそれまでの指導者達は皆失脚しました」
「極東軍事裁判でか」

「はい」
この裁判は悪名高い裁判である。事後立法であり、しかも戦争犯罪を人道に関する罪で裁くという全く的外れな法の適用をし、尚且つ罪状を捏造し、弁護側の意見をほぼ退けた法律的には異常な裁判であった。今ではこの裁判は単なるリンチとして認識されている。
「そういえばあの裁判を支持した日本人の法学者とやらがいたな」
「横田喜三郎ですね」
「ああ。その男はそれから栄達し勲章まで貰ったそうだな」
「はい。そして天寿をまっとうしました」
「信じられん話だ。普通ならば碌な死に方をせずにジャハンナムへ行くところだ」
おそらくサハラ各国ならば間違いなくそうなるであろう。怒り狂った群集が許さないからだ。
だがこの時代の日本では違っていた。この男は進駐軍の威光を考慮してこの様な発言を続けたのだ。
「結果としてこの裁判で多くの者が無実の罪で処刑されました」
「裁くべき法がないのに有罪も無罪もないだろう」
このことは後々に大きな問題となった。この裁判による被告人達はすぐに名誉が回復されたがこの裁判が非合法なものでありそれが認められたのは二十一世紀半ばのことであった。百年近くも認められなかったのだ。
「むしろ戦争よりもその後の裁判の方が問題だった」
以後こう言われるようになった。確かに戦争はあった。だがそれとは全く関係のないことで戦争の際に起こることを裁くというのはあまりにも出鱈目であった。これを理解できる知識人はこの時代の日本には殆どいなかったというのはある意味で驚くべきことである。二十世紀後半の日本には思想家や歴史学者、教育者、経済学者といったものは今では業績とは全く異なることで歴史に残っている。そのあまりにも卑しい発言と性格で歴史に残っているのだ。
「シェークスピアですらこの様に卑しい連中は書くことはできなか

っただろう」
後にとある詩人が彼等を評してこう書いた。そこまでこの連中は卑しかった。
「あの時代の日本は明らかに異常だったな」
「少なくとも知識人は」
「彼等は今でもそれを恥だと思っているそうだが」
「当然ですね。よくもあんな連中が長い間大手を振って歩けたものです。敗戦よりもそちらの方が遥かに問題です」
戦争があれば勝者と敗者が必ず出る。オムダーマンもその歴史において幾度も敗れている。それ自体はどうということはない。問題はやはりその後なのだ。
「当時の日本の価値観と今の我々の価値観は違うにしろ、だ」
その時の話を今の価値観で語ることはできない。それはアッディーンにもわかっていた。だが嫌悪感を拭い去ることとはまた別である。
「それにしても人間とは卑しくなろうとすれば何処までも卑しくなるものだな」
「残念ながら」
ガルシャースプもそれに頷いた。これも人間の残念な一面であった。
「日本というのはそうしたイメージはあまりないがな」
サハラ各国においては日本はそれ程悪いイメージはない。連合においては米中露に対して穏健派という印象がある。実際に日本の外交は彼等とＡＳＥＡＮ諸国、その他の国々の間に立つことが多い。立場上そうせざるを得ない事情もあるにしろだ。
そして国民性もサハラからは好かれていた。温厚で控えめというイメージがある。
「どの国にも例外はいるものです。卑しい者もどの国にもいます」
「そうだな」
よくよく考えればそうである。サハラにもナベツーラの様な者が

いるからだ。
「そういえば日本は連合軍の設立にはかなり積極的だったな」
「はい、彼等の参加が連合軍の設立を決定的なものにしました。日本の全軍を挙げての参加がなければ今の連合軍はなかったでしょう」
「そうだな。それを考えるとあの巨大な戦艦は彼等が作ったと言える」
「ですね。あれが三千隻ですか」
連合軍の規模は彼等も知っていた。そして計画も聞いていた。
「今のところ我々とは衝突することはないだろうがな。それでも連合の存在が今までよりも更に強くなったのは間違いない」
「それは間違いありませんね。彼等とは特に利害関係のない我々ですら意識せざるを得ないですから」
「うむ」
アッディーンはそこで頷いた。

## 第五部第四章　神の名その三

「エウロパはかなりの軍拡に踏み切るようだしな」
「それが総督府にも影響しそうですね」
「そうだな。本土と総督府の移動もさらに用意なものにするらしい」
「やはりいざという時の為にですか」
「だろうな。そうでないと守りきれるものではない。何しろエウロパと連合の差はかなりのものだ」
三十倍の差はやはり大きかった。
「それに連合の第一の敵ですからね。一千年に渡る」
「そうだ。連合がことを興すとすればまず彼等に対してだろうな」
それは誰もが予想していることであった。
「マウリアや我々に対しても行動に出る可能性もないわけではないがな」
「ですがそれはまだ先のことでしょうね」
「ああ」
この認識はエウロパと同じであった。こうしたことについてはサハラ各国はエウロパよりも鋭い。彼等は長い間戦ってきているからそうしたことには敏感なのである。
「今は彼等のことはそれ程考える必要はあるまい。それよりもやはり目先のことだ」
「はい」
アッディーンはそこでカレンダーに目をやった。
「会議までもうすぐだ。意見の調整も進めておかなくてはな」
今オムダーマンは今後の戦略を巡って軍内で色々と議論がある。それで彼も忙しいのだ。
「今はどちらが優勢だ」
「南進派です」
「やはりな」

彼はそれを聞いて頷いた。彼はその先頭にいると言ってよい。
「まだ北方に進むのは早いからな」
彼はそう考えていた。エウロパの総督府があるオムダーマンの国力を考えると北への進出はまだまだリスクが高かった。
それよりも小国が乱立している南方に兵を進めるべきだというのが彼の考えである。そしてそこで力を蓄えるべきだと主張している。
「それからだな、北に進むのは。いや」
ここで脳裏にある男の顔が浮かんだ。
「北に行くのは最後になるかも知れないな」
「どうしてですか」
ガルシャースプはそれに問うた。
「根拠はないが。ただそんな気がするだけだ」
「そうですか」
「ああ」
現実に考えて南の次は北だ。ハサンはそれ程積極的に動く国ではない。これは彼等がかなりの規模を持つ国であるだけでなく交易を第一に考えている為ことを荒だてるのを好まないからだ。
「とりあえずは南方に進みたいな。各個撃破していきながら」
「外交も重要になってきますね」
「そうだな。おそらく南方では外交がこれまでよりも大きな意味を持つだろうな」
それはわかっていることであった。小国が多くある為調略も必要になる。おそらく外交の成否がことを決することになる。
「やはり外交部には出てもらうことになるかな」
「大統領や首相はそれについてはどうお考えでしょうね」
「今のところはわからない。だが外交部には出てもらうよう要請しておくか」
「そうですね。それがよろしいかと」
「よし。では外交部には後で俺から電話しておこう」
「はい」

オムダーマンでは次の行動に向けて話が進んでいた。その頃北方においてもあの男が次の行動に考えを巡らせていた。
シャイターンは北方諸国を統合する主席に就任することが決定した。彼はその就任式に出ていた。
「シャイターン万歳！シャイターン万歳！」
「アッラーの加護があらんことを！」
彼は絶大な人気を誇っていた。北方の危機を二回も救ったから当然であった。そしてハルーク家との結びつきがそれに加わっていた。
この家はサハラにおいても屈指の権門である。やはりそうした存在はどの国にもある。そうした家と関係があるということは大きな後ろ楯であるのは事実であった。
シャイターンはそれを大いに活用した。各国の実力者達に呼び掛け彼に協力を要請した。その際ハルークの財が絶大な効果を発揮した。
彼がこの国々をまとめる主席に就任することができたのもこれがあったからなのは言うまでもない。そもそも主席という存在を言い出すことも出来なかっただろう。
シャイターンはそれを全て踏まえた上でハルーク家に接近したのだ。そしてその当主である未亡人と結婚した。これにはイスラムの考えも役立った。
イスラムでは妻は四人まで持ってもよい。この時代でもそうだ。ただし公平に愛さなくてはならないが。
これは戦災未亡人への救済の為にムハンマドが考えたことであった。彼は実は結構なフェミニストであり女性の権利も大切なものとして認められていた。あくまで当時の人間としてだがそうしたことからもこの預言者が一時期キリスト教世界で言われていた様な人物ではないことがわかる。
未亡人はあまり好ましくはない。すぐに妻に迎える方がよい。シャイターンにはそうした宗教的な大義名分もあったのだ。
そして彼は彼女と結婚した。歳よりずっと若く美しかったので容

姿では不満はなかった。それに穏やかな性格も気に入っていた。
「私はああした女性は好きだ」
彼はよくこう言った。実際に彼は彼女を大事にしている。妻として信頼に足る存在だと認識していた。
彼はその容姿から女性に不自由したことはない。容姿に加えて地位も財産もあるから余計だ。それなりにその道には精通している。これはどちらかというと朴念仁と見られがちなアッディーンとは違う点である。
今は妻はいない。だがこれまでに多くの女性と浮名を流している。彼はそうしたことでも知られていた。
「だがアッラーの戒律は破ってはいない。私とてムスリムだ」
彼はそれについて指摘されるといつもこう反論する。その通りであった。彼はイスラムの戒律には何ら反することはしていないのである。
だからこそ彼には人望があった。強烈なカリスマが備わっていた。そして誰もがそれを、認めていた。
シャイターンは今や北方の雄であった。その勢いは誰にも止めることはできなかった。
「諸君」
シャイターンは赤い軍服と黒のマントに身を包んでいた。今ではこの服が北方諸国連合軍最高司令官の服であった。
「私は今ここに宣言しよう。北のサハラの民の幸福と安全を」
その声を聞くと熱狂的な歓声が聞こえてきた。
「そしてこのサハラの永遠の繁栄を。今我々は危機に瀕している」
それを聞き皆顔を引き締めた。
「エウロパという異教を信じる者達が来ている。彼等はあの二千年前の十字軍の悪行を再び繰り返している」
それは多くの者が主張していた。エウロパの侵攻は彼等にとってみれば十字軍そのものであった。この狂信者達により多くのムスリムが殺され、食われた。そして聖都エルサレムは血で膝まで塗れた。

それが十字軍の正体であった。彼等は殺戮集団であったのだ。少なくともイスラム世界ではそう考えられている。
「我々はそれを阻止しなくてはならない。そうでなければサハラは滅ぶだろう」
重みのある言葉だった。皆沈黙していた。
「その為に私は誓おう。エウロパの者達をこのサハラから一人残らず追放することを」
次第に民衆がざわめきだした。
「それこそが私の最初の使命だ。私はサハラをサハラの者の手に完全に返そう！」
自信に満ちた言葉であった。他の者が言ったならばここまでの重みはなかったであろう。
だがシャイターンの言葉にはその重みがあった。高いテノールであるのに信じられない位の重みがあった。声域を超えた、人間としての重みを感じさせる言葉であった。
民衆は暫くザワザワとしていた。だがそれはやがて熱狂的な歓声に変わった。
「シャイターン万歳！シャイターン万歳！」
「サハラに栄光あれ！」
彼等は口々に叫んでいた。シャイターンはそれに対して手を振って答える。こうして彼は北方諸国の民衆の支持を完全に得た。
それは北方諸国だけには留まらなかった。サハラ全土で彼に対する支持が集まりだしていた。
『北方に英傑現わる』
『シャイターン、エウロパとの対決を決意』
『天才が今立ち上がった』
そうした記事や報道がマスコミに氾濫した。マスコミだけでなくネットでもやはり大きな反響を呼んでいた。
『果たして本物か』
『本気でエウロパと戦うつもりか』

『勝算はあるのか』

ネットはマスコミよりも率直な意見が交じあわされる。誰もが己の考えをストレートに述べていた。

それだけに中には品のない表現や誹謗中傷もある。当然シャイターンへの誹謗中傷もあった。

だがそれは無視される。それは彼を語ることにはなっていないからだ。

こうした事はマスコミにもよくあった。いや、むしろマスコミこのその本家本元であった。ナベツーラの手の者達がその見事な証明であった。この者達はナベツーラの力の秘密は一食だけで途方もない費用がかかる食事にあるとかホリーナムを天才軍師とかミツヤーンを史上最強名将などと書き連ねたのだ。恥も外聞もなければ到底書けない様な文章であった。およそ人間が書くものではなかった。

マスコミ、とりわけその最下層には卑しい人間が集まる。権力者に媚びる存在はやはり卑しいものであるがこの者達はとりわけそうであった。

マスコミは権力である。これは誰もが認めることである。情報が集まり、かつてはそれを独占することができた。今でもそれが可能である。

だがその分だけ腐敗し易いのだ。報道の自由や言論の自由を楯に何をしても良い、という風潮さえ生まれる場合がある。秘密厳守として情報を隠蔽することも可能だ。それを捏造してもよい。ばれた時はシラを切る。政治家や官僚には『筆誅』と称して圧力をかける。弱味すら握る。民衆は騙し放題だ。これで腐敗しない方が不思議である。マスコミはこの世で最も腐敗し易く、それでいて自浄能力が全くない存在なのだ。

だからこそこの時代ではマスコミにはかなりの責任が問われるようになっている。

まず捏造記事が発覚した場合には上層部は逮捕、多額の罰金が課せられる。スポーツや文化には資金援助のみ許される。間違っても

チームを持つことは許されない。一方的な偏向報道をするに決まっているからだ。恐喝には厳罰、汚職に対してもそうである。マスコミはネットによっても常に監視されている。マスコミもネットに注意を払っている。こうしてマスコミは常に監視されるようになっているのだ。

連合やエウロパにおいてはそれが特に顕著である。連合ではやはり二十世紀後半以降の日本におけるマスメディアの弊害が参考になっていた。エウロパはイギリスの所謂パパラッチが問題となった。こうした反面教師があれば実に対処はし易い。とりわけ日本のマスコミの腐敗ぶりは歴史に残っている。今尚研究する者達は人間とはここまで卑しく、愚かな存在になれるものかと嘆息する程である。

それがない場合はサラーフの様になる。だからこそ多くの国はマスコミに注意を払っているのである。彼等は決して偉い存在ではない。むしろとりわけ卑しい者が集まり易い場所なのだ。それはよく肝に命じておかなければならないとこの時代では認識されている。当然そうした者達ばかりではないが。

それでシャイターンの人気は確かなものであった。彼のもとには各地から援助が集まり資金で国庫は満ちた。そして志願兵が殺到した。こうして北方諸国は急激に国力を拡大していくのであった。

それに合わせてシャイターンは次々と政策を打ち出した。北方諸国の間の経済障壁を撤廃し、関税をなくした。そして各地の港湾や航路を整備し流通を強化した。権限を自分に集中させ、行政を簡略化させた。それにより政策をスムーズなものとした。そのうえで福祉や労働の権利をより確固たるものにした。彼は政治家としてはかなりバランスのとれた男であった。これは誰もが予想しなかったことであった。こうして彼は北方の国力を急激に高めていった。

それはエウロパ総督府にもサハラ各国にも伝わっていた。彼等はそれぞれ違う反応を示した。

エウロパは当然の様に警戒した。彼が総督府を公然と敵だと宣言しているからこれは当然であった。彼等は軍備を固めその侵攻に備

えることにした。これは本土防衛計画ともリンクしていた。そして総督であるマールボロを中心に軍備が整えられていった。
サハラ各国においてはとりあえずは歓迎するところであった。彼等が強くなりエウロパの侵攻を食い止めてくれればそれだけで有り難い。エウロパの脅威を感じなくて済むからだ。民衆はまた彼のカリスマに心酔するようになっていた。
ハサンはとりあえずは歓迎した。どうなるかわからないにしろエウロパの勢力伸張は彼等にとっても憂慮すべき問題であるからだ。若し北方が全て彼等の手中に落ちたならハサンの身も危険になってくる。
南方諸国にとってはこれといって関心を持てる話ではなかった。やはり遠い場所での話でしかなかった。だがシャイターンに共感する者が資金援助し、志願兵となって馳せ参じるのはあった。
そしてオムダーマンであるがこれを聞いて安堵する男が一人いた。
「これで北へ進むことはできなくなったな」
アッディーンであった。彼はシャイターンの演説と政策により北方が強くなるのをことの他喜んでいた。
「これでいい。これで我々の進む道が決まった」
彼はそう考えていた。そして今後の戦略を確かなものにしていた。
「やはりまずは南だ」
その考えに変わりはなかった。
「だがそれだけではまだ不十分だな」
彼は会議室に向かいながら一人そう考えていた。
「今は北方と手を結んだ方がよいな。何かと」
そこには彼自身の戦略があった。
「それも主張するか。今が絶好の機会だ」
大統領や首相にも言うつもりであった。そして会議室の前に来た。
「お待ちしておりました」
扉の左右にはそれぞれ衛兵が一人ずつ立っていた。彼等はアッディーンの姿を認めるとサッと敬礼した。

「ご苦労」
彼もそれに対して敬礼で返した。そして左右に開かれた自動扉をくぐり部屋の中に入った。
「おお、暫くだな」
そこには既に人がいた。統合作戦本部長に就任したアジュラーンである。
「お久し振りです、閣下」
アッディーンは彼に敬礼して答えた。馴染みの間柄なので挨拶も何処かいつもとは違い柔らかかった。
「そうだな。暫く会う機会がなかったからな」
「同じ場所にいるのにそれはそれで奇妙なことですね」
「それは仕方ない。仕事が重ならなかったからな。それでは会う機会も減る筈だ」
「ははは、確かに」
アッディーンは彼の言葉に笑った。
「宇宙艦隊の方はどうかね。かなり厄介な仕事だろう」
宇宙艦隊司令長官の仕事が激務であるのはつとに有名である。基幹戦力のトップであるだけにその仕事の量はかなり多い。それは統合作戦本部長や参謀総長のそれよりも多いとまで言われている程だ。
「いえ、それ程でも」
だがアッディーンはそれには悪戯っぽく答えてみせた。
「それが責務ですから」
「ははは、デスクワークに苦労していると聞いているが」
「ご存知でしたか」
アッディーンはそれを言われてバツの悪い顔をした。どうも彼がデスクワークを好まないというのは結構知られていることのようだ。
「まあな。色々と聞いているよ」
「そうでしたか」
いささか面白くなかった。事実だがそれが知れ渡っているとあまりいい気はしない。

「まあ君は確かにそうした仕事への適正は少ないが」
「はあ」
これはすぐにわかることであった。彼はあくまで実戦向きなのである。デスクワークを好まないのはすぐにわかることではあった。
「だが避けては通れないものであることは確かだ」
「はい」
それはアッディーンもよくわかっていた。
「戦争は机の上でも行われるものだ」
そうであった。単に戦場で戦い勝利を収めるだけではないのだ。それは古代の戦争である。

## 第五部第四章　神の名その四

近代以降戦争の在り方は大きく変わった。戦場以外での作戦及び行動が非常に重要になっているのだ。
後方の通信、補給、整備。それ等がなくては戦えない。
そして資金。そういったものを全て処理する事務も考えなくてはならなかった。
それにとりわけ力を入れているのは今では連合である。彼等は新設軍ながら大軍を効率的に運用する為にそうしたことにも力を注いでいるのである。
あの巨大戦艦や輸送艦もその一環である。あの戦艦には最新鋭の通信及び電子設備が満載されている。輸送艦の巨大さは収容量を多くする為である。
その他にも後方の基地や港湾の整備にも全力を注いでいる。そして事務も大幅に増やしていた。連合軍は前線部隊よりも後方部隊の方が遥かに充実しているという見方すらある程である。
「我々もそれなりに充実しているとは思うが」
「ええ、それは確かに」
実際オムダーマン軍は補給や通信には困ったことはない。ミドハドやサラーフとの戦いにおいてもオムダーマン軍は補給路を上手く確保し、中継基地を効率的に使用していた。これはアッディーンの戦略やカッサラ星系の存在が大きかったからもあるにしろだ。
「幾ら何でも食糧や燃料、弾薬がなくては話にならない」
「そうです、まずはそれを充実させないと。幼年学校でも言われました」
オムダーマンではまず補給と通信を教える。この時代の軍の教育においてはどの国もそれは変わらない。それ程重要視されているのだ。
だが連合のそれは彼等の遥か上をいっていた。流石にオムダーマ

ンも彼等には遠く及ばなかった。
「山の様な食糧と弾薬が常にある。それだけでも有り難い」
海賊達との戦いにおいてある艦隊司令がこう漏らしたという。それだけ連合の補給システムは万全のものであった。そしてその後方支持により彼等は海賊を殲滅していった。連合軍は海賊達との戦いにおいては物量戦を常としているがそれを支えているのは後方であるのは言うまでもないことであった。
「そうでなくては彼等は兵が集まらないのだろうな。後ろがしっかりしているという保障もないと」
「それもあるでしょうね」
これにはやはり連合軍が完全志願制という事情も関係していた。
連合においては様々な職業がある。学びたければ学者になればいい。学者で食べるのが困難なら教師も兼業する。金持ちになりたければ会社を興すか開拓地で資源でも掘り当てる。運がよければ一発でもレアメタルが手に入る。大きな牧場や農場が欲しければ開けばいい。あまり資金がなくとも強靭な肉体と根性があれば何とかなるかも知れない。探検家になりたければ好きなだけなれる。ただし未開地で恐竜やわけのわからない位に不思議な進化を遂げた獣と死闘を繰り広げるリスクはある。これはこれで冒険になる。そうした話は連合においてはつとに人気のある話である。普通の暮らしがしたければサラリーマンになればいいい。公務員もある。目立ちたければ歌手や芸能人でもいい。異性にもてたければ散髪やコーディネーターという道もある。コックもあれば個人商店もある。要するに連合では他に職は幾らでもあるのだ。好きなのになればいいという考えが強い。自分のなりたい職業で成功すればいい、連合はそうした意味で極めて活発な国々であるのだ。
つまりこれは軍に魅力がなければ入る者が少なくなるということであった。
それは困る。徴兵制なぞ誰も支持しない。そもそもそこまでやる必然性すらない。無駄に金がかかり、各産業を無意味に圧迫するだ

けである。
連合の国情には志願制こそ相応しい。軍人になりたい者はなればいい、そこでまた連合独自の考えが出て来るのだ。
そういう状況で将兵が来るにはどうすればいいか。軍に魅力があればいいのだ。
その為にはまず生きることが出来る状況になければ駄目である。死ぬ可能性の高い軍にはそうそう誰も入らない。中には愛国心の強い者もいるだろうがそれは連合ではあまり期待できないところがある。
「まずはその国の国民である。それから連合市民という考えが出る」
連合においてはそうであった。連合市民という考えはあくまで二番目である。まずは所属している国々への帰属意識があるのだ。
だからこそ問題なのである。エウロパの様に高貴なる者の義務といった考えは最初からない。そもそも連合においては貴族程馬鹿にされるものはない。
「特権階級なぞいざという時には何の役にも立たない」
「エウロパの御貴族様は精々狭い場所で閉じこもってろ。その間に俺達は銀河系全てを開拓してやるさ」
こう言うのが常であった。実際連合は銀河のかなりの部分を開拓してはいる。
サハラの様に戦いにおける宗教的な意識も希薄である。連合においてはかなり多くの宗教が存在する。それだけ信仰されている神は多い。中には戦いの神も存在する。
キリスト教の天使から発展した炎の翼神ミカエル、太陽神ラーの護衛でもある剛力の神セト、かっては豪傑であった大柄な関羽、荒ぶる神スサノオ、巨人の血を引く美しき神ブレス、血に酔う女神アナト、ジャガーの姿をしたテスカトリポカと実に多い。連合においてはかっての神々も復権しているのである。
メソポタミアやエジプトの神々も彼等に受け入れられた。ケルトの神も受け入れられたのは主要国の一つであるアメリカにケルト系

の者が多いからである。
アメリカは当初はアングロサクソンと言われていたが実際は一概に言えないところがあった。最初からアイルランドやスコットランドからの移民も多かったのである。
例えば第二次世界大戦で活躍したマッカーサーである。陸軍士官学校はじまって以来の秀才と謳われた彼は傲岸不遜でありながら人種的偏見はないといった二面性のある人物であった。彼は終生自分がスコットランドからの移民の子孫であることを誇りにしていた。
大統領ではケネディ、ニクソン、レーガン、クリントン等がそうである。彼等はむしろアメリカにいる方が多かった程であった。
彼等はカトリックを信仰していた。だがその心の奥底には古の神々が宿っていたのであった。
それが長い歳月を経て復権したのだ。エジプトやメソポタミア、中南米の神々と共に復活した。そして再び人々に信仰されるようになったのだ。
ここにギリシアや北欧、インドの神々がいないのはギリシアや北欧の神々はエウロパで信仰されているからである。インドの神々はその後継国家であるマウリアにそのまま生きている。さしもの連合においてもマウリアのあの独特の宗教観と思想を受け入れることは困難であった。
「前世のことまで知っている筈がないだろう」
連合の者がマウリアの者と話をしてよく言う言葉はこれである。マウリアの者にとって今生きているこの人生は輪廻転生の中の一つに過ぎないのだ。
それはこの宇宙ですらそうである。世界は全てその創造、調和、破壊のサイクルの中で動き人間はその中のほんの一つに過ぎないのだ。
こうした考えにはあまりなれないのが連合の者である。彼等は現実的である。神々を信じていてもそこまでスケールの大きい話にはどうしても及びつきにくいのだ。

それが結局連合の者がマウリアを『敬して遠ざける』状況の要因となっていた。幸か不幸かそれが両国の友好関係にも関わっていた。理解し難い相手とは互いに距離をおきたがるものだ。衝突もその分少なくなるからだ。

そう、連合の者の信仰心はマウリアやサハラ各国のそれと比べて実に稀薄なのである。連合から見れば彼等こそが異常に見えるかも知れないが。ユダヤ教を今でも信仰するイスラエルの様な国もあるが概して連合の者は信仰心はそれ程篤くはない。エウロパの方が遥かに高いであろう。

それは戦争に対する考え方にも深く関わっていた。つまり軍人はあくまで多くの仕事の中の一つに過ぎないのだ。

だから魅力がなければ来ない、死ぬ可能性が高いと来ない。待遇が悪いと尚更だ。従ってそうしたことに注意を払わなくてはならないのだ。

それが将兵の居住設備及び福祉の充実、高い給料等に繋がっている。娯楽施設にまで注意を払っている。

そして生存能力の強化にも力を入れる要因ともなっていた。連合軍の兵器の防御の高さもそこに理由があった。そして今話のもととなっている後方の充実にもだ。

こうしたことは全て連合の国情が要求しているものなのだ。そして八条もキロモトもそれを十二分の考慮したうえで政策を進めているのだ。

「国情の違いがやはり大きいな」

「ええ。彼等はまず人気が必要です、軍自体の」

オムダーマンの後方の充実は単に作戦進行の円滑化と将兵と兵器の無駄な損傷を防ぐ為からであった。ここが連合とは少し異なる点だ。

「軍に入れるのにも人気が必要か」

「そこが我々と彼等の異なる点ですね」

「そうだな。確かにサハラとはそこが違う」

サハラでは兵はわりかし容易く手に入る。徴兵制のせいもあるにしろだ。

オムダーマンも徴兵制だがその査定は厳しい。実際にはかなり厳密な選抜徴兵制である。これは将兵の数よりも質を重要視しているからだ。

## 第五部第四章　神の名その五

「それで彼等の艦の防御力もかなり高くなっているのはまた皮肉なことだが」
それは思わぬことではあった。だがよくよく考えれば予想できることであるのだ。
「あの巨大戦艦はその中でも最大の脅威だろうな」
アジュラーンもあの戦艦のことは脳裏に焼き付く程の衝撃を感じていた。
「あんなものは今まで見たことがない」
「はい」
アッディーンもそれは同じであった。
「本音を言わせてもらうと彼等とは戦いたくはないな」
「同感です」
戦いを避けるのもまた戦略である。彼等はそれをよくわかっていた。
「今のところ彼等とは特に利害関係はない。国境を接していないから当然だが」
「戦うとなれば徹底的にやるしかありませんけれどね」
「そうだな。その時は。しかし」
アジュラーンはここで言葉を変えた。
「もしそうなるにしてもかなり先のことになるだろう。連合はまだまだ遠い」
彼等はサハラ西方である。連合どころかマウリアとも境を接していないのだ。東方のハサンのみ彼等と境を接している。
これが彼等が連合について然程考える必要のない要因となっていた。彼等はとりあえずは今やるべきことに専念すべきでありそう考えていた。
「やはりまずはこれからだな。どうするかだ」

「はい」
それを今から話し合うのである。ここで新たな人物が入って来た。
「どうも」
マナーマである。彼はこの度参謀総長に就任したのだ。本来参謀畑を歩いて来た彼にとっては適任と言ってもよい職であった。
制服組のトップはまずは統合作戦本部長だ。そして参謀総長。宇宙艦隊司令長官は三番目だ。元帥といってもその役職には階級があるのだ。
見ればマナーマはアジュラーンには敬礼をしている。アジュラーンはそれに対して返礼した。アッディーンは彼の後ろにいる形になっているので敬礼はしていなかった。
「他の方はまだのようですね」
「はい」
アッディーンが答えた。二人はミドハドとの戦いで共に戦っている。知らない仲ではない。
「まあ今は待つとしましょう」
マナーマは席に着いてゆっくりとした声でそう言った。彼は穏やかな人柄で知られている。鋭利な人物の多いオムダーマンの参謀本部においては珍しいと言えた。
彼は手に持っていた鞄から何やら書類を取り出した。見ればサハラ全土の立体地図とファイルである。
「これだけはないと話になりませんね」
彼は地図を拡げながら二人の方を向いて笑いながら言った。
「確かに」
二人はそれに対して応えた。やはり顔は穏やかなものになっていた。
三人は地図に目を移した。見ればオムダーマンの首都アスランはサハラのかなり西の端に位置している。
「ふむ」
アッディーンはそれを見て思うところがあった。

（こうして見るとアスランは西に寄り過ぎているな）
それがまず思ったところであった。これまではそう感じたことはなかったのだが。
それには理由があった。ミドハドやサラーフを滅ぼし彼等を併合したからである。
これにより領土は大幅に増えた。そして東に大きく進出した形になったのだ。
その結果首都も西に位置するようになった。こうして見るとかなり偏っている。
（これは問題があるな）
彼はそう考えた。首都はあまり一方に偏った位置では不都合が起こる場合がある。それは首都は行政や経済、交通の中心地であるからだ。
その為に首都を自国の中央に置く例もこれまで多々あった。オムダーマン自身もアスランに首都を置いたのはその地が領土の丁度中心にあったからであった。
アッディーンはこの時これからの首都としてのアスランに疑問を覚えた。実際彼はミドハドやサラーフと戦う時にはカッサラ星系を拠点としていた。それはカッサラが両国に対して侵攻することが可能な地理的に優れた場所であったからに他ならない。
今まで多くの戦いを経てきた。それによりそうした地理的な重要性も深く認識している。アスランはその考えに基づくとこれからの戦略にいささか困難な首都であった。
（だがこれはそうそう容易には言えないな）
流石に首都の移転は一軍人がおいそれと言えるものではなかった。
首都の移転といった重要なことは国家元首の思いつきで決められるものでもない。何しろその国の中枢である。それを別の場所に移すということは言わば頭脳を移すことである。かなりの時間をかけた議論が必要であるしその為のチェックも欠かせない。非常に慎重に行うべき問題なのである。

だが首都としての機能に限界がきつつあることはわかってきた。それはよく認識した。
（これもいずれ議題にあがるだろうな）
アッディーンはそう考えていた。これからのオムダーマンを考えるとそれは避けて通れぬことであると確信していた。
ここで大統領達が入って来た。アッディーン達はすぐに席を立ち敬礼した。
「うん」
先頭に立つ濃紺のスーツの男性はそれに対し手で応えた。中肉中背の壮年の男性である。彼がオムダーマンの大統領シャービル＝ブワイフであった。
この国の大統領に就任して五年になる。政権政党のリーダーでもある。彼は若い頃は農園で働いていた。
だが思うところあって都会に出た。そしてそこで農産物の商いをはじめとある政治家のお得意様となった。
この政治家は若く溌剌とした彼をえらく気に入った。そして彼を一人娘の婿にしたのだ。これが彼の運命の分かれ道であった。
程かく彼は養父の跡を継ぎ政治家となった。ここでもその前向きさと体力を武器に活動していった。
彼はまた努力家でもあった。活動的な彼は学ぶことを厭わなかった。そして次第に政治家としての力量を磨いていった。やがて彼は所属する政党の若手議員の中でもホープと目されるようになった。
彼にしてみればただ今目の前あることをひたむきにやるだけであった。それが彼の生き方であり考え方であった。それが結果として彼を成長させていったのである。
次第に頭角を現わしていった。遂には政党の領袖達にそれを見込まれ閣僚を任されるまでになった。そしてそこでも持ち前の活動力と学んできた識見を発揮した。
こうして彼は次第に国民にもその名を知られるようになった。能力的にも容姿にも派手さはないがその活発さと意外な程のそつのな

さを知られるようになったのだ。そして彼は大統領に立候補した。
そして当選した。対立候補はもう八十近い老齢であり年齢や体力の点で彼が有利に立てたのだ。彼はこうしてオムダーマンの大統領となった。
大統領となっても彼の動きは変わらなかった。やはり活発に動き回り政策を立てていった。彼の任期中のミドハドやサラーフとの戦いとその併合、戦後処理もそつなくこなしている。単に元気のいいだけの人物ではないのである。
そんな彼だがブレーンとなるスタッフは落ち着いた参謀タイプの者が多い。首相であるメガワティ＝ハラーイブや外相であるウダイ＝アッバース等がそうである。見れば二人共ブワイフの後ろにいる。
「おお」
アッディーンは二人の姿を認めて思わず小声をあげた。彼等が来ることを何よりも期待していたのは彼であるからだ。
ハラーイブは国立大学を主席で卒業した才媛として知られている。黒い髪と瞳が似合う鋭利な顔立ちの美人である。まだ三十代になったばかりであるが国際法の権威として知られその知識は多くの分野に及んでいる。博士号を三つ持っている。法学と文学、経済学だ。
これで現実に疎いのであればおそらく首相にもならなかっただろうが彼女の指摘はあくまで現実的でありシビアであった。それを見たブワイフが彼女をわざわざ自ら出向き首相にしたのだ。それ程の人物であった。
黒い眼鏡の奥の瞳は何も語らない。彼女は感情を表に出すことはない。鉄の女とも呼ばれている。
彼女は誰に対しても臆することがない。言うべきことは容赦なく言う。軍部に対してもそうであるし大統領に対してもだ。これにはブワイフも苦笑するしかなかった。
「いやはや、うちの妻よりも手強い」
彼は実は恐妻家でもある。その彼をしてこう言わしめるのである。
「言うべき時に言い、やるべき時にやる。そうでなくては何が首相

でしょうか」
彼女はよくこう言う。首相はナンバー2である。ナンバー2としてどうあるべきか、彼女はよく認識してもいた。
だからこそ言うのだ。そこに妥協はない。彼女は妥協を徹底的に嫌った。
「あくまで最後まで話をしてそこから結論を出さなくてはなりません」
そう主張する。とかく手強い女性であった。
そのせいか彼女を敬遠する者は多い。幾ら美しくともあまりにも隙がないからだ。
案外完璧過ぎる人間というのは人気がないものだ。そのせいかまだ独身である。
「私は結婚したいわけではありませんから」
一説によると同性愛だともいう。これは特に驚くことではない。この時代ではごくありふれたことである。
実際に年下の学生と同棲している。彼女の従妹だ。こういうとさらにあやしい。
だがこれも単なる風聞の様だ。彼女は同性愛でもないらしい。
潔癖症なせいかそうしたことには抵抗があるらしい。何でも口説こうとしたそうした趣味の女性がこう言われたという。
「私はそういった趣味はありませんのだ」
実に固い。まさに鉄の女であった。浮いた話もなくただ仕事を完璧にこなすのである。
だが不思議と嫌う者はいなかった。それは彼女はあくまで公平だからだ。
「公平でなければ首相をやる資格なぞありません」
そう言いたげだが流石にそうは言わない。ただ仕事でそれは示している。
こうした女性であるから信頼はされているし頼りにされている。オムダーマンの政治は彼女のその優れた事務処理能力と広く、かつ

冷静なビジョンがあってのものであることは言うまでもないことであった。
「お久し振りです、アッディーン元帥」
彼女は不意にアッディーンに声をかけてきた。
「は、はい」
思いも寄らぬ挨拶にさしもの彼も一瞬戸惑った。
「あの書類は届きましたか」
だがそれは仕事のうえでの話であった。
（やっぱりな）
そうであった。彼女が仕事のこと以外で彼に話しかけることなぞないのだ。そしてその話といえば。
「届いていますよね」
「ええと」
だが彼には思い出せない。宇宙艦隊司令部には書類が山の様に送られているのだ。一日に決裁する書類だけで優に普通の艦隊司令の三倍以上はある。
「艦隊編成に関する報告要請の書類です」
「ああ、あれでしたか」
アッディーンは実際に言われてハッ、と気がついた。そういえば昨日受け取った。
「届いていますね」
「はい。まあ」
彼はいささか力ない声で答えた。
「まあとは」
だが相手は鉄の女である。早速そこを突っ込まれた。
「一体どういう意味ですか」
「まあその」
「はい」
誤魔化しは全く通用しない。さらにまずいことになりかねない。
アッディーンはここで腹をくくった。

「もう暫くお待ち下さい。今日中に終わらせますので」
「そうですか」
ハラーイブはそれを聞いてようやく視線を下にした。見ればそれ程背は高くはない。むしろ小柄と言ってよい。軍人であり体格には不自由していないアッディーンから見ると頭の頂上まで見えてしまう程である。
しかし迫力があった。えも言われぬ強い気が彼女にはあった。
だからこそアッディーンも押されたのだ。彼ですら引かせる強いオーラがあった。
「明日には必ずお願いしますね」
「はい」
どうも彼女には勝てない。宇宙艦隊司令長官に就任した時にもまずこう言われていた。
「首相は厳しいぞ」
と。噂には確かに聞いていたがこれ程とは流石に思わなかったのだ。
おかげで好きではないデスクワークにも励まなくてはならなかった。もっともそのせいか事務処理能力は以前より上達しているが。
(好きで身に着けたわけではないのだが)
それでも役には立った。おかげで宇宙艦隊司令部の事務の遅延はなかった。これもこの鉄の女の狙いではないのかとさえ思える。
そう考えているうちに彼女はアッディーンから視線を離し自分の席へ移った。そしてアッバースもそれに続いた。
やや太めの男である。背はそれ程高くはないがそのせいか実際より大きく見える。ブワーイフとはまた違った意味で大きく見えるのだ。
彼は元々外交官である。オムダーマンの外交官は全て同じ試験を受けて選ばれる。高級官僚になるのは全て実績に基づき選ばれるようになっている。これは他の国とはまた違う点だ。
エウロパではやはり貴族が高級官僚、外交官となる。やはりここ

でも階級社会となる。平民もなれるがまず貴族が優先されるのだ。

## 第五部第四章　神の名その六

連合は二つに分けられる。まず高級官僚登用の試験。だがこの時代ではそうでなくとも能力があればなれる。その前に転職する者も多いし中途採用も多いが。

試験による登用は日本等だが実はかなり少数派だ。連合ではそれよりもその国のトップが直々に任命する場合の方が目立つ。所謂スポイルズ＝システムだ。ちなみに試験による登用はメリット＝システムという。こちらはアメリカや中国、ＡＳＥＡＮやアフリカ諸国等だ。つまり連合の殆どの国で主流である。

これは官僚の硬直化や専横を防ぐにはいいが問題もある。トップの人選なので時として適任でないポストに就任することもある。それによる事務の停滞の可能性も否定出来ない。そしてトップの独裁や腐敗を引き起こす可能性もある。実際にはメリット＝システムも併用している。どちらかというとスポイルズ＝システムの方に重点を置いているという意味だ。なお日本等もスポイルズ＝システムは採り入れている。

サハラはメリット＝システムが主流である。その中身はそれぞれの国によって異なりこそすれだ。

オムダーマンでは高級官僚採用のシステムはあまり採りいれてはいない。強いて言うのなら士官学校がそうであるがこれにしろやはり叩き上げの軍人も多い。アジュラーンは実は下士官あがりだ。アッディーンも幼年学校しか出ていない。結局は本人の実力次第なのである。これは乱世の中で得た経験からこうなったのだ。

戦いにおいてはその経歴なぞ何の役にも立たない。生きるか死ぬか。勝つか負けるか。それしかないのだ。それを考えるとどうしても能力主義になるのだ。

それがオムダーマンを支えている。そして勝利を収めてきた。ア

ッディーンの率いる精兵達にしろそうした思想がなければとても育たなかったであろう。
それはアッディーンもよく認識していた。彼はこの考えに深く賛同していた。なおマウリアはカースト的な思想が今尚ないわけではない。流石に三〇〇〇も分かれてはいないにしろだ。これは一概に悪いとは言えず各国はそれについては何も言わない。言うと内政干渉になるし言っても話が複雑になるだけだからだ。
そうした中で外交部長にまでなった。その能力は確かである。
オムダーマンの外交は昔から定評がある。だがその中でもこのアッバースの能力は傑出していると言われている。
ミドハドやサラーフとの戦いの際他の勢力の介入が噂されたりもした。だが彼はそうした動きを察知し事前にそうしたことがないように動いたのだ。その結果オムダーマン軍は後顧の憂いなく戦いを進めることができたのである。
それは陰の仕事であった。しかしそれがなくてはこれ程容易には勢力を拡充させることはできなかった。外交部の働きは実に大きいものであった。
アッディーンはアッバースを見た。彼はいつもそれを知らないといった顔である。陽気で人なつっこい顔である。
「何か私は場違いですかね」
彼は席に着いてもそう言ってにこにこと微笑んでいた。
「いえ」
ここでアッディーンが言った。
「長官には是非出席して頂きたいと考えておりました」
彼は言った。強い声であった。
「何ともはや」
そう言われたアッバースは困った様な顔をした。
「私なんかが役に立てればいいですが」
そう謙遜する。しかしアッディーンはそれとは全く別の意見であった。

（彼が来てくれただけでもこの会議は意義がある）
そこまで思っている程であった。
それ程彼はアッバースの能力を高く買っている。そしてその発言がこの会議、そして今後のオムダーマンの戦略を決するとさえ読んでいた。
「さて」
これで会議の出席者は全て席に着いた。議長でもあるブワイフはそれを確かめてからまず一同を見渡した。
「これからこれからの我が国の軍事戦略についての会議をはじめるとするか」
「はい」
ハラーイブが答えた。それがはじまりの言葉となった。
「まずは我が国の現状だな」
彼はそれから話に入ることにした。
「首相」
会議がはじまった。こうしてオムダーマンの今後の戦略を決する運命の舞台が開いた。

観艦式を終えた連合はとりあえずは安堵の息に包まれていた。式は大成功であり、また収穫も多かった。
だが八条に休息はなかった。次の仕事が早速やって来ていたのである。
「ふむ」
彼は会議室にいた。そこで将官達に囲まれていたのである。
「そういえばこのことについては全く考えていなかったな」
彼は腕を組みそう呟いた。今彼の前には各兵器及び艦艇の写真、データが並べられていた。
今彼はこれ等の兵器、艦艇の名を決めるべくこの席にいるのである。これはこれで重要なことであった。
「普通に戦艦とか戦車とかしておくのも味気ないことだし」

「その通りですな」
同席していたマクレーンが言った。
「そのまま戦艦と呼んでも迫力も何もあったものではありません」
「そうです、やはりそれに相応しい名がないと。士気にも関わります」
劉もそれに同意した。二人はこうしたことにはよく意見が合う。
「そうですね。しかし」
「しかし？」
レイミーもいた。チャムと共に開発部を代表して出席しているのだ。
「いざ名付けるとなると。どうも思いつく名がありませんね」
「ははは、それなら」
チャクラーンが笑いながら言った。
「閣下のお好きな名をつけられればよろしいのでは」
「そうですな。あまりにもおかしなものだと我等が止めますので」
コアトルも言った。どうやら彼に一任されそうである。
「それでしたら」
八条はそれを聞いて頷いた。
「私が今から名付けさせてもらいます」
「異議なし」
「それが長官の仕事ですから」
諸将は口を揃えてそう言った。こうして命名者は決定した。
「ですが」
そこで八条はふと思ったことを口にせずにはいられなかった。
「何か私のネーミングセンスに疑問があるようですね」
苦笑しながら皆にそう問うたのだ。
「何故ですか」
だが彼等はそうは思っていない。
「私共は別にその様なことは思っておりませんが」
アラガルが言った。何やら意外そうな顔をしている。

「いえ」
八条はそれに対して口を開いた。
「何か皆さん不安そうで。気のせいならいいのですが」
「ははは、それは気のせいですよ」
「そうです。閣下はまずご自身で決められて下さい。我等はそれをサポートするだけに徹しますから」
「そうですか。それなら」
八条はこれでようやく納得した。そして名前を決める作業に入った。
実は諸将は不安であったのだ。それは日本人のネーミングセンスに対する偏見から来ていた。
（まさかとは思うが）
彼等は皆同じことを思っていた。
（古典からたおやめぶりとかいう言葉は用いられぬよな）
八条が日本の古典に詳しいことはよく知られている。特に古今和歌集や源氏物語を愛読していると聞き彼等はかなりの不安を覚えているのだ。
（平家物語や太平記という書からならまだよいが）
それでも何だか不安である。
（間違っても戦艦に光源氏などとつけられたら恥ずかしいぞ）
要らぬ節介であったが彼等は本当にそう考えていた。

## 第五部第四章　神の名その七

日本人のネーミングセンスには定評があった。漢字と平仮名を上手くミックスさせ日本独自の雅びさを出していると言われている。

それは艦艇にも現われていた。かっての日本軍では日本古来の地名や川の名前を使ったりしていた。少なくとも源氏物語の主人公の名なぞはそれ等には付けない。だが彼等がそこまで日本文化に詳しいかというと流石にそこまでは至らない。そもそも日本文化は難解なことで有名である。おいそれと学べるものではない。これはどの文化にも等しく言えることであるのだが。だが日本文化が多くの種類の文字を使い、その変遷も複雑で多くの他文化の影響を受けていることから学ぶのは特に困難なのは事実であった。

そういうこともあり彼等は何処か日本文化に対して誤解していた。これは当の八条にとってみれば少し残念なことではあったが。

「この宇宙で最も理解するのが困難なもの」

こういう議題があがると連合ではいつも日本文化とマウリアの文化が挙げられる。最早マウリアのそれは別世界のものと認識されているところがあるが日本は連合の一員である。しかも誰もが知っているような国だ。

それでこうした言われ方をするのだから不思議といえば不思議である。だがそれも日本の魅力からくるものと言えばそうなのであるが。事情はかなり複雑である。

「では」

そうしたことを脳裏に思い浮かべながら八条はその兵器や艦艇の写真、そして諸将と正対していた。いよいよ運命の決する時である。

「まずは陸上兵器からいきますか」

「はい」

諸将は頷いた。最初は装甲車からであった。

「これは大虎とします」

中国の名を使った。これには諸将は少し意外に思った。
（日本風の名ではないのだな）
これは八条の気遣いであった。連合は百以上の国々から成る。一国の名から選んではそれ等の国から来た兵士の士気に関わるからであった。
その為そうして各国の名を採り入れることにした。これは政治的な意味合いも含んでいることは言うまでもない。
「戦車はイーゴリとします」
ロシアの名将の名である。ロシアの長年の宿敵である東の騎馬民族と果敢に戦った男だ。将に戦車に相応しい名に思われた。八条の命名は続いた。対空砲も決められた。
「対空砲はヨーク、そして移動要塞は富嶽とします」
「富嶽ですか」
「はい」
かって地球に人類がいた頃日本を代表する山であった。この名はやはり日本人に心に今でも残っていた。彼等は今でも大きく立派な山にはこの山の名を冠するのである。
「この巨大な要塞にはこれこそ相応しいと思いますが」
「確かに」
皆妙に納得できた。だから余計不思議であった。この山の名にはそれだけのものがあるのだ。
こうして陸上兵器は全て名付け終わった。重砲や自走砲には～～式という名が付けられた。これは各国の大砲の伝統に即したものであった。
次は各艦艇である。まずは駆逐艦からだ。
「これはミレトス級とします」
トルコの都市から名付けた。以後駆逐艦の名は都市から付けられることになった。
護衛艦はロブソン。カナダの山だ。護衛艦は山からである。パトロール艦は川からである。メナム級だ。

「砲艦とミサイル艦は」
まず砲艦は港湾からである。トミニ級だ。
ミサイル艦は島から。タスマニア級となった。
軽巡は平野や盆地から付けられることとなった。コラート級である。
重巡は山脈や高原からである。アンデス級となった。
「空母は広いですからね。やはりこれでしょう」
海からつけられた。カスピ級がその名となった。
次はいよいよ戦艦である。これは各国の州や郡、省の名が冠されることとなった。
「高速戦艦は流星にしますか」
「流星ですか」
「はい。それが相応しいかと思いますが」
「ううむ」
言われてみればそうである。
「それでよろしいですか」
「はい」
皆異論はなかった。こうして戦艦と高速戦艦も決まった。それぞれベリーズ級、ケフラー級となった。
「さてと」
ここで彼は一息ついた。
「いよいよ巨大戦艦だな」
「はい」
諸将もそれに対して頷いた。
「これの名前はどうするべきかな」
「何といっても我が軍の象徴とも言える存在ですから。それなりの名前でないといけませんね」
オーエルが言った。
「そうですね。あの巨体に相応しい名でないと誰も納得しないでしょう」

コアトルもそれに同意した。見れば他の者も同じ意見である。
「そうか。ではどういったものにするべきかな」
八条はそれを聞いて考え込んだ。
「そうだな」
暫し考えた。そして口を開いた。
「これは私の考えですが」
「はい」
諸将は彼に視線を集中させた。視線だけでなく思考も。
「神々の名を冠するというのはどうでしょうか。伝説や歴史上の英雄などもいいかと」
「神や英雄ですか」
諸将はそれを聞いて皆考える顔をした。
「どうでしょうか。いいと思うのですが」
あくまで今の段階では提案である。こういったことは実は長官の一存でどうにかなる。連合中央政府においては各長官の権限は大きい。少なくとも兵器や艦艇の名は彼が一存できる。
だが八条はあえてそれをしなかった。それはこの話は独断で決めるには繊細な話だと認識したからだ。
「名前は命を授けるのと同じことだ」
かって日本のある作家がこう言った。言葉には力がある、これは日本独自の思想かも知れない。
彼はそれが念頭になったかも知れない。だから今こうして諸将と話し合い名前を決めているのだ。
「よろしいのでは」
最初に言ったのは劉であった。
「我々の象徴に相応しいかと」
「確かに」
マクレーンも続いた。
「出来るだけよく知られ、かつ格好のいい名前にこしたことはありませんからな」

「ははは、確かに」
他の将達がそれを聞いて笑い声をあげた。
「あれだけの巨艦には将に神や英雄の名こそ相応しいでしょう。それに彼等に率いられていると思うと実に気分がいい」
「そうですな。我が軍の威容にも大きく影響するでしょう」
技術系であるチャムとレイミーも賛同した。
「そうですか」
八条はそれ等の発言を聞き終えて頷いた。
「ではそれでいいでしょうか。異論はありますか」
「いえ」
皆首を横に振った。
「長官のお考えに賛同致します」
「わかりました」
彼はそれを聞き微笑んでそう言った。
「では神々や英雄の名を冠することに決定します」
「異議なし」
こうしておおよそのことは決定した。次は最初の艦の名である。これで殆どのことが決する。
「どの様な名にするべきか」
八条は考えた。
連合で信仰されている神々や英雄は多い。ゾロアスター教のものもあれば道教、仏教、ケルト、エジプト、メソポタミア、中南米、日本、アボリジニー、そしてスラブやキリスト教の天使や聖人と実に多岐に渡る。
ないのはエウロパやマウリアで信仰されている神々だけであった。ギリシアや北欧、ヒンドゥーの神々は信仰されてはいない。尚連合にもムスリムはいるがサハラ各国のそれとはかなりかけ離れたものとなっている。イスラムといっても多様なのだ。
「ここは一つ強大な神の名にするべきだな」
彼はそう考えた。そしてここでとある神の名が脳裏に浮かんだ。

「これだな」
彼は思った。そして諸将に対してその神の名を言った。
「いい名が見つかりました」
「何ですか」
諸将は彼の言葉に耳を傾けた。
「この艦に相応しい名です」
「それは」
彼等は思わず息を飲んだ。
「はい、それは」
八条はその名を言った。普通の速さである筈なのに異様にゆっくりとした口調に聞こえた。
「ティアマトです」
メソポタミアの神である。海を象徴する神々の母である。巨大な竜がその正体であり、その身体から世界が作られた。連合の宗教においては慈愛に満ちながらも時として厳しい神々の祖である。夫アプスーと共にその宗教の主神として篤い信仰を受けている。
「あの神ですか」
その名を知らぬ者は連合にはいない。それ程名の知られた神であった。
「はい。これならばあの艦にも相応しいかと思います」
八条は自信をもった声でそう言った。
「あの艦の威容を考えるとあの巨神の名は相応しい」
「どの者も納得するでしょう。これ以上の名はありません」
諸将も頷いていた。これで巨大戦艦の名が決定した。
ティアマト級巨大戦艦。その存在は連合だけでなく銀河全体に響き渡るのにそう時間はかからなかった。

# 第五部第五章　次なる戦いの幕開けその一

## 次なる戦いの幕開け

連合が巨大戦艦の名を正式に決定したその頃マウリアでは一つの問題が沸き起こっていた。不況に陥ろうとしていたのであった。

この時代も不況というものはやはりある。これは経済のシステム上での問題である場合もあれば経済の循環上で起こる場合もある。マウリアの今回の場合は後者であった。

これはある程度致し方のないことであった。経済は生き物だと言われる。それが為に好不況の波があるのだ。かってはこれは神の見えざる手に委ねられているとさえ言われていた。

これに対するアンチテーゼ的な存在であったのがマルクス主義的経済学である。だがこれは無残な失敗に終わった。経済はそうそう容易にはコントロールできはしなかった。むしろ下手に手を加えてしまったことにより共産主義国家の経済はどこも破綻してしまったのである。

そもそも経済は人間の欲望からはじまることが多い。それを考慮に入れないことが問題であった。人はパンと水のみで生きているのではなにのだから。人は良しにつれ悪きにつれ心を持っているのである。

二十世紀はむしろケインズの経済学が好評であった。しかしそれもやはり限度がある。経済学というのは予想が難しいものだ。やはりある程度はコントロールできてもそれ以上はできなかった。

連合の経済は積極的な開拓地への投資による金の循環をよく利用していた。過去幾度も経済危機にみまわれかけながらもその度に開拓地への進出を盛んにし、失業者のコントロール及び資金の循環をよくしてそれを乗り切っていた。だがこれは連合だからこそできることであった。無論他の対策を採った場合もある。緊縮財政や市場のコントロール。為替の変更等がそれであった。だがおおむね連合

はそうした進出により不況をかわすことが多いのだ。
マウリアも南方に開拓すべき星系が多くあるが積極的に進出したりはしていない。自然とゆっくりと進出していたのだ。
「焦る必要はないのだ」
彼等は常にそう認識していた。
「星はまだmだある。それに今ここにいる場所を確かにしてからでも遅くはない」
それが彼等の考えであった。よって彼等は不況の際には連合の様な方法はあまりとらなかった。
ではどうしていたか。やはり彼等も指を咥えて見る様なことはしない。その都度対策を講じてきた。
設備投資や財政の緊縮及び拡大。その都度行ってきた。むしろそれは連合のやり方よりも更に多岐に渡ったのである。
今回はどうするべきか。それについて今閣僚会議が開かれていた。
「今回の不況の兆候ですが」
財務省であるアナンタ＝アジメールがクリシュナータをはじめとする閣僚達に対して話をしていた。見れば浅黒い肌に白い口髭を生やした三十代前半の男である。まだ若いのに髭もターバンから覗く髪も全て白かった。だがそれがかえって彼を知的に見せていた。
「好況であった時期が長かっただけありその期間は長い可能性があります。対策を誤ると恐慌の危険すらあるでしょう」
「そうだな。それが問題だ」
クリシュナータもそれはよく認識していた。だからこそ今この場で深刻な顔をしているのだ。
「どういった対策を採るかだな」
「それですが」
アジメールが言った。
「今回は設備投資等で資金を活性化させるのがよろしいかと思います」
「ケインズ的にか」

「はい。今回の不況の兆候は主に失業率の増加と購買の冷え込みにあります」
「それで金を動かすのか」
「そうです。そうすれば今回の不況は乗り切れると思います」
「ふむ」
クリシュナータはアジメールの言葉を聞き暫し考え込んだ。そして口を開いた。
「わかった、それでいこう」
「はい」
「だが問題はまだあるな」
彼は言葉を続けた。
「一体何処に資金と人材を投入するかだ。それを見誤ると結果は同じだ」
「それでしたら」
ここで国防省であるラーンチが出て来た。
「丁度軍備の整備を行っておりますしこちらに投資しては如何でしょうか。今艦艇の建造及び防衛ラインの設立に人手が足りない状況でして」
「おお、そうだったな」
マウリアは今軍備の拡大を行っていたのである。これは連合軍の拡充を受けてのことであるがこれは誰も言わない。
クリシュナータはそれを聞き再び腕を組んで考え込んだ。そして決断の言葉を出した。
「よし、軍備に回そう。まずはそれで金を動かす」
「ハッ」
閣僚達は一礼した。
「そしてそこで景気が上向いてきたならばそこから別の方面に人材を振り当てていく。そしてこの不況を乗り切るぞ」
「わかりました」
これで景気対策の話は終わった。だがまだ話すべきことがあった。

「ところで連合だが」
クリシュナータは首相であるムルワーラと外相エルールに顔を向けた。
「今どういった動きになっている」
「それですが」
それに対してムルワーラが口を開いた。
「今は兵器の生産、製造及び軍港、後方基地の整備に忙しいようです。また中央議会も各国政府もとりあえずは今はこれといった動きはありません」
「そうか」
クリシュナータはそれを聞き頷いた。
「やはり動くにはまだまだ時間がかかりそうだな」
「そうですね、まずは兵備を整えてからでしょう」
「そしてそれから意思決定か。そこからまた時間がかかるな」
連合中央政府はまだ行政府の権限は強くはない。この二百年でそれなりに強くはなっているものの他の国や連合内の各国のそれと比べるとまだまだ弱いのが実状だ。
そうなるとどうしても意思決定及び行動に時間がかかってしまう。連合は一人のリーダーの決断ですぐに動くことのできる国ではないのだ。
まずチェックシステムが多い。立法府である議会もあれば中央裁判所もある。だが連合はそれだけではないのだ。各国も中央政府の力が過度に強くなるのを好まなかった歴史がある。各国も中央政府を常にチェックしていると言っても過言ではない。
また各国の意見調整もある。これをどうにかしないと連合は動くことが出来ないのだ。それぞれの国々の領域がまたモザイク状に入り組んでいることが事情をさらに複雑にさせている。
議会にしても上下の二院制であるがその上に各国の国家元首達による会議があるような状況である。また最近では現状を維持し、辺境星系の開拓をさらに推し進めていくべきだとする保守派と開拓は

程々にして中央政府の権限を強化すべきという改革派の二つに分かれてきているが中央議会も各国の思惑が複雑に絡み合っていた。それで中々動くことができなかったのだ。
「中央政府は弱い方がいい」
こうした意見も多かったのも事実である。それよりも所属しているそれぞれの国々の利益の方を優先して考えていた。中央政府はあくまで調整機関としてあればよい、というのが長い間連合において支配的な考えであった。
その名残は今でも強く残っている。だからこそ連合はそうおいそれと迅速に動くことはできないのだ。
「話が出てから動いても遅くはないだろうな」
「そうですね」
だが彼等も連合がその圧倒的な力を使う危険性を忘れたわけではなかった。やはり警戒は怠ることはできなかった。
「ですが事前にそういったことを見せておくと向こうも考えるかと」
「そうした考えもできるな」
クリシュナータはムルワーラの言葉に再び頷いた。
「どのみち軍備の整備は必要か。そうでないといざという時に困る」
「はい」
これはやはり避けられぬ道であった。彼等はそれをよく認識していた。
「だが連合だけではない」
クリシュナータはここで言った。
「やはり西も気になるな」
「はい」
それはサハラ各国のことであった。
「今あちらの動きはどうなっている」
クリシュナータはそれをエルールに問うた。
「はい、それですが」
彼女は高い声で話しはじめた。

「まず東方のハサンですがやはりこれといった動きはありません。いつも通り連合や我が国とサハラ各国、そして陰では総督府との中継貿易で得られる利益を最優先させて考えているようです」
「そうか」
それは予想していた通りであった。
「南方も変わりはありません」
エルールは報告を続けた。
「相変わらず各国は集合離散を繰り返しております。統一などといった動きは全く見られません。ただ」
「ただ！？」
クリシュナータはその言葉に対し突っ込みを入れた。
「西方を統一したオムダーマンが南方への進出を考えているという情報もあります。彼等の動き次第で何か起こる可能性があります」
「ふむ」
クリシュナータはそれを聞き顎に手を当てて考える顔をした。
「これは今のところ即断はできませんが」
エルールはとりあえずはそう断った。
「ですが今のサハラの情勢を見てこれは充分に考えられることです」
「そうだろうな。東のハサンはやはり強大だ。それに北方は」
「はい、総督府とシャイターン主席がおります」
シャイターンが北方諸国を統合しその元首となったことは既にマウリアにも伝わっていた。彼等は当然のように彼が非凡な人物であると見抜いていた。
「彼等の存在を考えると北にも行くことはできないな」
「そうだと思われます」
これはエルールも考えていた。
「おそらくオムダーマンが次に動くとすれば南方であると思います」
「南方か」
「はい、あの地は小国が乱立し外交戦略次第ではかなり進出が容易です」

「だがかなり複雑な地形の様だな」
「そのようですね」
全体的にサハラは地形が複雑なことで知られている。ブラックホールやアステロイド帯、磁気嵐、超新星等があちこちに存在している。その中でも南方は特に複雑なことで知られている。だからこそ小国が乱立する状況となっているのだ。
ここでは正規軍同士による戦いは少ない。それよりも地形を利用したゲリラ戦が圧倒的に多いのである。
「だからこそ今まで大国の侵入も少なかったのです」
「侵入してもすぐに退けられていたな。地形を利用した戦いの前に」
「はい」
そして各国の集合離散が続いた。南方はサハラの中でも異質の場所であったのだ。
「そこに進出するのか。オムダーマンは苦労しそうだな」
「ですがハサンや北に進むよりは楽かと」
「それはどうかな」
マウリアとしては即断のしようがなかった。正直どうなるか全く読めない。
「また彼等のお手並み拝見といくか。ミドハドやサラーフを滅ぼした時のように鮮やかにいくか」
「それとも失敗するかだ」
彼等は口々に言った。こうしてサハラに関しては様子を見るということで落ち着いた。
会議は終わった。この時の会議で決定された経済政策によりマウリアは不況を免れた。だがまだ予断を許さない経済状況が続いているのも事実であった。
連合はこの時艦艇及び兵器の大量生産に入っていた。莫大な予算が投入され各地で建造、生産されていた。
その状況は逐一中央政府にも報告されていた。キロモトも八条も

それに一喜一憂する状況であった。
だがそれについての議論も為されていた。中央議会である。
「あの艦は流石に不要ではないのか」
こうした意見が相次いでいた。主に保守派からである。見ればティアマト級巨大戦艦についての議論が為されていた。
「要は海賊やテロリストを相手にすればいいのであろう。あれ程の巨大な戦艦はそうそう必要ないと思うが」
保守派の領袖ランティール＝モハマドもそうした意見であった。彼は議会の中央でそう演説していた。
「私は連合軍の存在には賛成だ。しかし過度な軍備には反対だ」
彼はそう主張する。
「あの様な巨艦まではいらないと思うのだが」
「いや、それは違う」
議員達の中からそうした声が挙がった。
「指揮艦としてはあの艦は必要ではなかろうか」
見れば改革派の議員の一人であった。
「あの艦が巨大なのは装備や艦載機の理由からだけではない」
「それはわかっているつもりだ」
モハマドはそれに対して切り返した。
「だが通信や電子ならばそうした艦で事足りるのではないか。何もあそこまでの艦は」
「財政的には問題もない筈ですが」
ここで別の改革派の議員を口を挟んできた。

## 第五部第五章　次なる戦いの幕開けその二

「確か軍事費の決定の際にはモハマド氏も賛成されていましたね」
「確かに」
モハマドはそれは認めた。
「指揮艦を建造するというのもご存知だった筈ですが」
「それも認めます」
どうやら彼はそれについては認めるらしい。
「それでもあの艦は好ましいとは思っておりません」
「何故ですか」
「確かに今は建造するだけの費用はクリアーしました。ですがこれからあの艦を維持するのにもかなりの費用がかかりますし果たしてそれだけの費用に見合うだけの役割が果せるか。それが疑問なのです」
「必要か不要か、それとは別の意味でですね」
「そうです」
彼は答えた。
「兵器も艦艇もすべからくそれを考えなければなりません」
彼も軍事について知らないわけではない。むしろかなり詳しい方と言ってよいかも知れない。だからこそ今ティアマト級について自説を主張しているのである。
「あれだけ大きいと狙いを定められ易い。指揮艦を潰されては話にもならないでしょう」
「確かに」
皆それに対しては頷いた。
「あの様に巨大な艦は不要なのです。それよりも各艦の充実に費用を当てる方が宜しいのではないでしょうか」
彼の意見はそうしたティアマト級不要論であった。これはすぐに連合全土に流れあの巨艦についての議論が為されるようになった。

「あの戦艦は使えるのか」
そうした議論が主流であった。だが中には他のものもあった。
「維持費は大丈夫か」
だがこれは国防省の発表ですぐに消えた。既にそれは考慮に入れられていたのである。
だが役に立つかどうかという議論は続いた。流石にあそこまでの巨艦だと防御も難しいだろう。揚陸艦で内部に突入すればすぐに陥とすことができるのではないか、いやそれはあの巨艦の装備の前に防がれるだろうと多くの議論が飛び交かった。だが結論は出なかった。
結局この艦はまだ実戦に投入されていないのである。ようやく各艦隊に配備されだしたところであった。これはどの艦も同じであったがやはりこの巨艦はかなりの注目を浴びていた。
「話題になっているようね」
伊藤は電話で八条にこの艦について話をしていた。
「ええ、まあこれは予想通りです」
八条にとってはこれは予想されたことであった。そして歓迎すべきことでもあった。
「ここまで議論が為されているとは嬉しいですね」
「あら、どうして」
伊藤はそれに対して問うた。
「いえ、ここから何かと改善策が考えられますから」
「ふふふ、成程ね」
電話越しであるが笑っているのがわかった。
今二人は超高速通信の電話で話をしている。テレビ電話もあるがそれは使用していなかった。
「考えたわね。そうして改善策を出していくなんて」
「我々だけで出すと限りがありますから」
「じゃあこれからもあの巨艦の建造は色々と考えていくのね」
「はい、三千隻のティアマト級はこれからも進化していきますよ」

艦の建造とはそうしたものであった。そうして次に建造される艦は更によくなる。そうでなければ建造される意味もないのである。
「そしてそこからもありますから」
「あら、まだ何か考えているのね」
「おっと、これは失言でした」
八条は苦笑して答えた。
「今の言葉は忘れて下さい」
「ふふふ、いいわ」
伊藤は笑って答えた。
「ところで話は戻るけれど」
「はい」
八条は思わず身構えた。
「あの艦にはかなり自信があるようね」
「当然です」
彼は珍しく不敵な声を出した。
「そうでなくてはそもそも建造しませんし」
「そうなの」
「はい、あの艦はかなりの力がありますよ」
彼は自信に満ちた声で言った。
「あの艦一隻で一個艦隊に匹敵する戦力はあるでしょう」
「それはオーバーじゃなくて？」
「いえ」
だが彼はその言葉に対して首を横に振った。
「決して誇張ではありません。それだけの破壊力を持っています」
「日本にも一隻来ているけれど」
「はい」
既に配備ははじまっているのである。
「確かに大きいわね。あんなに大きな艦は本当にはじめてだわ」
伊藤も観艦式に出席していた。だがその彼女ですら間近に見るとその巨大さをあらためて実感したのであ す。

「日本でも色々と話題になってるわよ」
「そうでしょうね」
やはり彼の声は自信に満ちたものであった。そして面白そうであった。
「まあ賛否両論だけれど」
「結構なことです」
「まるで要塞だ、っていう人も多いわね」
「要塞ですか」
「ええ。まああの巨体じゃ当然でしょうけれどね」
「そうですね」
それは彼も認めるところであった。
「そうした意図もありますから」
「単に指揮艦としてだけでなく」
「はい、あの艦は我が軍の象徴でもあります」
彼は落ち着いた声で語った。
「それだけにその役割も重要なのです」
「戦力としても」
「はい。それは近いうちにおわかりになるでしょう」
「海賊にでも投入するのかしら」
「その予定はあります」
彼は言った。
「それにはやり過ぎだと思われるかも知れませんが」
「私はそうは思わないけれどね」
だが伊藤はそれに賛同する言葉を述べた。
「海賊には容赦してはいけないわよ。彼等は凶悪犯なんだから」
連合においては宇宙海賊はテロリストと同じ犯罪者として扱われる。掃討や取締りの際殺害してもよい。彼等も頑強に抵抗することが予想されるからだ。
それだけでなく逮捕、若しくは投降した者に対しても厳重な処罰が下される。厳密な取調べの末罪がなければよい。だが有罪であっ

た場合は基本的に死刑である。連合の死刑は極めて酸鼻なことで知られている。
これは凶悪犯への見せしめの意味がある。そして悪行への報いだ。テレビやネットによる実況中継の下機械でゆっくりと切り刻まれたり全身を粉々に砕かれたりする。獣の餌や生体実験に使われるのもよくあることだ。
人の人権や命を踏み躙る者に対してはそれは一切保障しない、そうしたシビアな考えも根底にあった。これはかっての行き過ぎた人道主義への反動でもあった。
連合ではこの処置は広い支持を得ていた。エウロパでは死刑廃止論が起こる時も多い。サハラ各国はあくまでコーランに乗っ取った処刑が行われる。彼等は過度に残酷なことを好まない。殺す時はできるだけ苦しまないようにするべしという考えがある。ナベツーラやミツヤーンへのリンチはあくまで例外的なことである。
連合は人権に対する考えが彼等とは違うのである。罪は罰を以って償うべし、これはどの国でも同じであるが連合は悪事を決して許しはしないのだ。
過失犯に対しては温情が示される。むしろこれはエウロパやサハラよりも遥かに甘い。間違いは誰にもあるからだ。だが確信犯に対しては別なのである。
そうした考えから海賊も罪を犯していれば容赦なく血も凍る様な恐ろしい刑に処される。ついこの前もさる海賊のドンが獣に生きながら貪り食われ八つ裂きにされる有様がテレビで中継されたばかりである。
「連合は血を好む」
「人としての在り方を忘れている」
これは主にサハラ各国からの批判である。だがここで一つ奇妙な問題が起こる。連合もまたサハラの人権意識について快く思っていないのである。
「サハラの考えは古い」

という言葉もよく出る。
他には女性への配慮だ。サハラでは女性が軍に入ることのできない国も多いのだ。中には今もヴェールに顔を覆う女性もいる。連合はそれを指摘するのだ。
だがこれはサハラの女性への配慮である。軍に入ることができない国があるのは彼等が子供を産むのでそれで激しい軍務で身体も胎児も壊さないようにとの配慮からだ。ヴェールで覆うのは暑さへの対策である。サハラには砂と暑い日差しに支配された星も多いからだ。
連合の酸鼻な死刑もこれと同じかも知れない。凶悪犯をそうして処罰することによりこれ以上の凶悪犯罪を防ぐ。罪への報いの恐ろしさと悪は必ず裁かれるということを教える為に。実際こうした刑罰が適用されるのは凶悪犯に対してのみでありその凶悪犯罪も割合でいえばエウロパよりずっと少ないのだ。
人権は一括りにしてはとても語れない問題である。連合とサハラの意見対立にはそうした複雑な事情もあった。
そうした事情がある。連合では海賊の掃討に対しては徹底的にやる。だが人権派団体もあるから話はまた複雑になる。
「死刑廃止」
「海賊も人間だ」
彼等が海賊と結託している者も多いのはもう言うまでもないが中には狂信的な者達もいる。彼等は実際は極めて少数派であるが声が大きいので目立つ。一部のマスコミも取り上げる。
だが連合市民の殆どは海賊に対しては徹底的やるべきでると考えている。だからこそ厳罰が容認されているのである。
海賊も凶悪犯罪を過去に行っているならば当然そうなる。戦いにおいては降伏するか、死しか認められてはいない。だが降伏して凶悪犯罪を行っていない場合は改悛の見込みありとして軽い処罰で許されるのが普通だ。
だからこそ投降した海賊が軍に入ることができるのである。これ

により連合軍が人員を増やしたことも事実である。
「まあ投降した者で罪を犯していない場合は軽い処罰の後軍に編入していますが」
「かなり多いそうね」
「はい。彼等は彼等で中々役に立ちます」
操鑑技術や地理に詳しいからである。中には今まで公にされていなかった航路まであった。
「これで治安もかなり良くなりましたし」
「そうでしょうね」
海賊退治は何も力だけでするものではない。頭も使うことが必要だ。

## 第五部第五章　次なる戦いの幕開けその三

連合は対立関係にある海賊達がいる場合は互いを煽って戦わせたりして勢力を弱めさせたり海賊の中から内通者を出して彼等から情報を提供してもらい海賊を討つこともよくしていた。八条はこうした策を好まないが投降した者達から内部事情や航路を聞いてそれを作戦に反映させることはよくしていた。これは戦略の常識であった。

こうして海賊のやり方を学びそれに対処していく。連合の治安は海賊の知恵を借りることで大幅に回復したというのも因縁めいたことであった。

「ですが一つ大きな勢力が残っていまして」

「彼等ね」

「はい。海賊といっていいのかどうかすらわかりませんが」

連合の広大な領域の端に彼等はいた。マウリアとの境である。

彼等は自らを解放軍と名乗っていた。連合に反対するレジスタンスだという。

だがその実状は単なる犯罪者の吹き溜まりであった。連合、そしてマウリアで罪を犯した者達が逃げ込む場所であった。

両勢力の境にある複雑なアステロイドと磁気嵐のある場所に彼等は潜んでいた。そしてそこに立て篭もり連合とマウリアの交易路を隙があれば狙っていた。

その数は一千万、艦艇は十万を超えていた。長い年月を経てそこにいる言わば独立勢力であった。

今では殆ど国となっている。首領である存在はリーダーと呼ばれ彼等を取り纏めていた。

「一人も投降しなかったそうね」

「全員その罪はかなり重いですから」

投降すれば惨たらしい死が待っているのは明らかだったからだ。

「これまでの討伐隊は全く歯が立たなかったし」

連合も各国の政府、とりわけマウリアと深い関係にある国々にとっては解放軍は忌々しい存在であった。思い出したようにその交易路を狙って来るからだ。彼等の存在を嫌い中にはハサンまで回りこんで交易を行う場合もあった。かれはマウリアにとっても頭の痛い問題であった。

その為幾度も連合、マウリア双方から討伐隊が派遣された。だが成果をあげることはできなかった。

理由は三つあった。彼等がよくまとまっておりその兵も装備も良かったことだ。普通の海賊とは思えぬ程のその装備は幾度も討伐隊を撃退しているうちに分捕ったものや横流しのものばかりであった。彼等は資源も持っておりそれで闇商人達と交易もしていたのである。

兵がまとまっているのは彼等の組織が代々強力なリーダーに恵まれ他に居場所もなかったからだ。凶悪犯達ばかりである彼等は投降しても死が待っているだけである。ならばここにいるしかないのだ。

そして二つ目の理由は彼等の勢力圏の地形の複雑させである。その地形を利用して彼等は戦う。その地形の前に攻めあぐねているのだ。

三つ目の理由は両勢力の境にあること。下手に動けば連合もマウリアも互いの勢力圏を侵害することになる。その為自由に動くことができなかったのだ。

彼等はこうした条件をフルに活用した。そして連合とマウリアの境に独自の勢力を保っていたのだ。

「どのみちいずれは取り除かなければならない存在でした」

「そうね」

「今討伐しても問題はないでしょう」

「ということはすぐにでも取り掛かるのね」

「プランは出来ています」

八条は強い声でそう言った。

「ですがまだ準備がありますので」

「後方基地ね」

「はい、そちらの整備はまだまだ途上にあります」
八条も補給の重要性はよく認識していた。
「国境に近いだけあってマウリアを刺激しないようにはしていますが」
「賢明な判断ね」
「はい」
「幾ら同盟国でも下手に刺激するとあとが厄介よ」
「それはわかっています」
その程度がわからぬ八条ではなかった。
「今彼等は我々の軍備に警戒しているようですし」
「そのようね」
マウリアの軍備拡大は連合にも伝わっていた。そしてその目的もおおよその想像がついていたのだ。
「それで補給はどうなっているの」
「今整備しているところです。主に各国のそれまでの基地を整備拡大することをメインにしています」
「それ等の基地を繋いでいくのかしら」
「それもあります」
彼はそれを認めた。
「ですがそれだけではありません」
「というと」
「航路の整備も進めています。港湾や基地を効率的に繋ぐことができるように」
「軍の進行や補給を円滑にする為ね」
「はい。解放軍を討つのはそれが整え終わってからだと考えています。今回の作戦はまずこうした補給や航路の整備を見る意味もありと思います」
「成程ね」
電話越しに頷いているのがわかった。
「かなり先のことになりそうね」

「はい。焦ってはかえって逆効果かと」
彼は急ぐあまり全てが失敗に終わることを恐れているのだ。
「それよりはまず全てを整えてからにしたいのです。その間マウリアとの道が脅かされるのは残念ですが」
「仕方ないわね。解放軍は連合の喉元に突き刺さった棘だし」
何よりもマウリアとの道を脅かしているのが脅威であった。これをどうにかするのが今までの中央政府の課題であったが上手くはいっていないのが実状である。
「抜かなくてはならないけれど複雑に突き刺さっている」
「はい。抜くのには慎重を期さなければいけません」
それを誰よりもよくわかっていた。
「そして抜いたからには永遠に突き刺さらないようにしなければ」
「その為の手術ね」
「そうですね」
八条は手術と言われそれに頷いた。
「今はその為の準備の段階です」
「さしづめ君は医者ね。オペを担当する」
「ははは、言われてみれば」
そうも捉えられる。彼は笑って応えた。
「けれど私はブラックジャックではないですよ」
一千年以上前の日本の漫画のキャラクターである。異才と言われた手塚治虫が描いた漫画の主人公であり免許を持たないが天才的な腕を持っている。法外な報酬を要求するがその心は温かい。一千年以上も残っている不朽の名作だ。他に残っているのはドラえもん等位である。今では古典とさえなっている。
「まあ君はあんなにクールでも斜に構えてもいないからね」
「はい」
「タイプも違うわね。残念だけれど」
「どういう意味ですか」
「あら、私はブラックジャックのファンなのよ。あんな男の人に何

時か巡り合えたら、って思っていたけれど」
「初耳ですよ」
「当然よ。今初めて話すんだから」
何となく八条をからかうような声であった。実際彼女は八条の対応を楽しんでいるのだ。
こうしたことはよくあった。八条はスマートな美男子であるが女性には疎い。その為よく高校生やこうした少し年のいった女性からからかわれるのだ。
「そうだったんですか」
流石にからかわれ慣れているので落ち着いて対応した。
「ええ。けれどああしたタイプは実際にいないものね」
「だからこそ漫画の主人公になるんですよ」
「それはそうだけれど」
「どうせ私は面白みや陰には欠ける人間ですから」
「確かにね」
伊藤は笑いながら言った。
「けれど面白みはあると思うわ」
「そうですけね」
八条はいささか憮然として言った。
「少なくとも私はそう思うわ。だから今回も頑張りなさい」
「はい」
逃げられた、と思った。流石にそれなりの人生経験を積み学者として政治家として成功を収めているだけはある。やはり手強かった。実際彼女は各国の首脳からは手強い女だと認識されている。『女狐』だとか『御局様』だとか呼ばれることもある。御局様とは江戸時代初期の大奥を取り仕切り三代将軍徳川家光の乳母であった春日局からとられている。近世まで日本でのみ知られていたが日本の歴史の研究が広まるにつれその女傑ぶりと切れが知られるようになった。タイプは全く違うが日本の女性の権力者としてそう呼ばれるのだ。
「幾ら何でも他にいい呼び方はないのか」

だが日本人はいささか不満であった。
「じゃあどう呼べというんだ」
他の国の者はそれに対して決まってこう返す。これ以上インパクトのある言葉を思いつかないのだ。
「そう言われても」
実際困ってしまうのが実状だ。
こうして彼女の通り名は決まってしまった。だが当の本人はそれを聞いて至って上機嫌だったという。
「結構なことじゃない。御局様なんて」
何処となく意地の悪そうなこの仇名を笑って受け入れていた。
「仇名がないよりある方がいいわ。名前が知られている証拠なんですもの」
政治家は名前が知られてないとまず話にならない。それを知っているからこその言葉であった。
こうして彼女の通り名は決まった。もう一方の女狐も使われないわけではないが実際は後者の方が使われることが圧倒的に多いのだ。
「それじゃあね。活躍期待してるわ」
「はい」
伊藤はそれで電話を切った。受話器を置いた八条はあらためて考え込んだ。
「さて」
彼は腕を組んでいた。
「どうしたものか」
まずはやらなければならないことが山の様にある。
「それを何とかしてからだな」
彼はそう言って仕事にとりかかった。まずは机の上の書類を決裁することだ。
「仕事は増えることはあっても減ることはないな」
それは世の摂理であった。
「文句を言ってもはじまらない。一つずつ終わらせていくか」

彼はこうして仕事に没頭した。後の為に今やらなければならないからだ。

サハラ最高会議は意外な展開を見せていた。

「宇宙艦隊司令長官の御意見ですが」

首相であるハラーイブはアッディーンに視線を集中させていた。

「はい」

アッディーンも彼女から視線を外さない。だがハラーイブの方が優勢にあるのは誰の目から見ても明らかであった。

彼は彼女が苦手である。それも隠しようがない事実であった。

「一体どの様な根拠がおありなのでしょうか」

「根拠ですか」

彼はここで南方への進出を提案した。そこで彼女に突っ込みを入れられたのだ。

予想していたこととはいえ緊張する。頭の切れのいい彼女だ。少しでも問題があったならば大変なことになるだろう。

(それにしてもだ)

アッディーンはハラーイフから視線を外すことができなかった。

(何故自分の意見をここで言わないのか)

それが不思議でならなかったのだ。

(普段はあれ程主張しているというのに)

ハラーイフは言うべきことは言わなければならないと考えているタイプである。またその主張が強くそれが彼女をさらに潔癖かつ完ぺき主義に見せているのだ。

(さて)

アッディーンは彼女を見た。

(一体何を考えているのか)

「はい、根拠です」

ハラーイブは言った。

「どの様なお考えで南方への進出を述べられているのでしょうか。

お答え下さい」
（ほう）
アッディーンはそれを聞いて心の中で眉を吊り上げた。
（説明させる気か）
再びハラーイフを見る。その目は何も語ってはいない。だが何かを考えていることは確実だ。
「わかりました」
アッディーンは答えた。
「では私の考えを説明致しましょう」
「はい」
そこでまたもやハラーイフを見た。やはり表情は変わってはいない。
（腹の底は見せないつもりか）
やはり食えない女だと思った。もっともそうでないと首相は務まらないが。
「それでは」
彼は立ち上がった。そして説明をはじめた。
「まず今の我々は四つの道があります。現状維持か東に進むか北に進むか。そして南に進むか。この四つの道があります」
彼は言った。
「そのうち現状維持ですがその時はもう終わりました。ミドハド、サラーフの旧領の併合及び再編成は済んでおり兵も既に充分な状況になっております」
「ですな。装備も軍の編成ももうかなり整っている」
「あとは動かすだけだ」
参謀総長であるマナーマと統合作戦本部長アジュラーンがそれに対し言った。ハラーイフはその時二人をチラリ、と見た。
「そこで進出案ですがまずは東について述べさせてもらいます」
「ハサンか」
国防相であるヤシーム＝シカールがそれに反応した。当然この会

議には国防相も出席している。
「はい」
アッディーンはそれに頷いた。
「今のところ我が国とハサンの国力差は大きいと言わざるを得ません」
「艦隊にして向こうは七十。それに対してこちらは四十でしたね」
「はい」
外相アッバースに答えた。
「戦力はかなり差があります。今彼等と事を構えるのは得策ではないと考えます」
「確かにな。サラーフの時の様に内部に問題があるわけではないしな」
大統領ブワイフも言った。
「おそらく内部からの自壊は期待できないかと思われます」
「少なくとも今のところは難しいでしょう」
アッバースの目が一瞬光ったように見えた。
「それを考えると今のハサンと戦うべきではありませんね」
「はい、私もそう考えます」
アッバースの助け舟の様な言葉に頷いた。
「皆さんはどうお考えでしょうか」
ここでブワイフを見た。だがその直前に一瞬だがハラーイブを見た。
(どうでる)
彼女の反応を窺ったのだ。目が合った。
「大統領」
だが彼女はそれに気付かないふりをしてブワイフに顔を向けた。
「司令のお話についてどう思われますか」
「うむ」
彼はそれにまず頷いてから口を開いた。
「私も司令の意見に賛成だ。少なくとも今は現状維持もハサンとの

衝突も避けるべきだ」
「わかりました」
ハラーイブはその言葉に頭を垂れた。見れば他の者もそれに頷いている。これでハサンとの戦いはなくなった。
（よし）
彼は次の話に移った。
「そして次の案ですが」
「北か南かだね」
アジュラーンが言った。
「はい。まずは北ですが」
アッディーンは説明を開始した。
「北はこの度諸国が統一されました。シャイターン主席の下に」
「あの男ですか」
アッバースが言った。
「はい。彼はこれまでの戦いを見ているとかなりの戦術眼の持ち主です。そして政戦両略も備えていると聞いています」
「彼のもので北方の国力は急成長しているそうだね」
「はい。これは見過ごすことができないでしょう」
ブワイフに答えた。
「艦隊にして十個規模だがな。だが彼は数をものとしてこなかった」
シカールも言った。
「その彼の力ですが今は有効に使うべきであると思います」
「というと」
それまで資料に目を通していたマナーマが顔を上げた。
「今も北にはエウロパの総督府があります。彼等への防波堤となってもらうのです」
「防波堤か」
「はい。エウロパの勢力をサハラから放逐するのは我等の悲願ですが」
「それは今ではないのだな」

「私はそう思います」
アッディーンはブワイフに対して述べた。
「それは是非我がオムダーマンの手で成し遂げるべきですがそれにはまだ力不足です。それに北方諸国連合との戦いでダメージを受けている状況が予想されますので」
「とてもじゃないが不可能だな」
「はい、その時をハサンに衝かれる恐れがあります。そうなってしまっては何にもなりません」
戦略の常道であった。アッディーンはサハラの情勢を冷静に認識していた。そのうえで述べているのだ。
だからこそ説得力があった。皆彼の言葉に耳を傾けていた。

## 第五部第五章　次なる戦いの幕開けその四

「こうした理由から北への進出も止めるべきであると考えます」
「わかった」
ブワイフはそれを聞いて言った。
「では北方への進出もない」
そしてこう言った。これで北への進出もなくなった。
「それで残る南方ですが」
アッディーンはそれを受けて再び説明を開始した。
「今南方は多くの小勢力に分かれております。個々の力は我が国と比べて極めて脆弱です」
「それを各個撃破していくということか」
アジュラーンが言った。
「それが基本ですがむしろ他の方法で各国を取り込んでいくべきかと存じます」
「というと」
アジュラーンは不思議そうに眉を動かした。
「それがこの会議に外相をお招きした理由です」
アッディーンはそう言ってアッバースに顔を向けた。
「私ですか」
当の本人はいささかキョトンとした仕草をしていた。だがそれはよく見るとあくまで仕草だけであった。少なくともアッディーンはそれを見抜いていた。
「はい」
「今回の作戦は外交の駆け引きが大きく関わることが予想されますので」
「何故ですか」
アッバースはあえて問うた。
「南方は小国が乱立しているからです。そうした地域に進出するに

は各国の協調を防ぎ各個に併呑していくことが必要だからです」
「軍の動きと合わせてですね」
「はい。当然武力による侵攻も必要ですがそれだけでは損害も無闇に大きくなります。それを防ぎたいのです」
「成程」
アッバースはここで頷いた。
「時には武力で、時には外交戦略で南方の各国を併合していくわけですね。一つずつゆっくりと」
「その通りです」
アッディーンは答えた。
「それには外交部の力が何としても必要なのです。ご協力して頂けますか」
「そうですな」
アッバースは暫し考え込んだ。だがその答えはもう決まっていた。
「わかりました。外交部は今回の作戦において軍部への協力を約束しましょう」
彼は微笑んで答えた。
「有り難うございます」
アッディーンも礼を返した。これで次の作戦の進路は決まった。
「大統領」
ここでハラーイブがブワイフに顔を向けた。
「そろそろ決裁をとるべきだと思うのですが」
「そうだな」
ブワイフはその言葉に対して頷いた。
「諸君」
そして会議に出席する者全てに対して言った。
「宇宙艦隊司令長官の提案した今回の作戦について議決をとりたい。賛成ならが手を挙げてくれ」
「わかりました」
一同は答えた。こうして裁決がはじまった。

まずはアッディーンが手を挙げた。これは当然であった。
続いてアジュラーンとマナーマも。彼等はアッディーンの提案は戦略のうえからも当然と考えていた。
国防相であるシカールもだ。彼は元々南進論であったから当然だ。
そして協力を約束したアッバースも。これで絶対的な数は確保した。
「だがまだ決まったわけではない」
アッディーンは残る二人を見た。
首相であるハラーイブと大統領であるブワイフ。特にハラーイブの動向を注視した。
「どう判断するかな」
それが問題であった。彼女はオムダーマンきっての切れ者である。その彼女が異議を唱えれば話はまた大きく変わる可能性がある。
彼女が動いた。その手がゆっくりと動く。
手を挙げた。何と賛成である。
「長官の話された提案に賛同します」
彼女はその硬質の声で言った。どうやら彼女は元々アッディーンの提案した作戦に同意だったようである。
(だからあの時俺に話をさせたのか)
彼はこの時ようやくそれを悟った。
(だが首相という立場上語ることはできない。それで俺に話させる)
彼女の深謀遠慮について思いを馳せた。
(伊達に鉄の女と呼ばれているわけではないか)
彼女はどうも苦手だがその能力は認めるとこりである。アッディーンは一人心の中で頷いた。
「大統領」
彼女は彼のその様な考えを知ってか知らずかブワイフに顔を向けた。
「大統領はどうお考えですか」
「私か」

彼はいささか鷹揚ともとれる声で答えた。
「はい。残るは大統領だけですが」
「うん。もう決まっているよ」
彼は微笑んで答えた。
「賛成だ。南方の勢力を併合して力をつけるのが最善の道だな」
彼は手を挙げた。こうして全員が賛成した。
「これで決まりですね」
ハラーイブは場を見渡して言った。
「では今回の作戦を了承したとみなします。以後この作戦の責任者をアッディーン宇宙歓待司令長官とすることで宜しいでしょうか」
「はい」
一同はそれに答えた。
「ではこれで議決しました。長官は以後アッバース外相と協議のうえ作戦の細部を決定して大統領府及び首相府、そして国防省に概要をお送り下さい」
「わかりました」
アッディーンは答えた。これで会議は終了した。
会議が終わり彼は一人自分の執務室でくつろいでいた。束の間の休息である。
「これからすぐに忙しくなるな」
それはわかっていた。だから今のうちにくつろいでおきたかった。
「アッバース外相とのお話していかなくてはならないし本部長や参謀総長とも色々打ち合わせがある。国防相にもお話しておかなければならない部分があるな」
これまでは精々一方面軍の司令官に過ぎなかった。命令に従うだけといえばそうなる。だが今は違った。
宇宙艦隊司令長官である。命令する立場なのだ。将校は本来そうしたものであるが本当に命令する立場というのは限られているものなのだ。
「元帥ともなれば当然だが」

オムダーマン軍に三人しかいない階級である。言うまでもなく軍を動かす立場にある。
そうした役職に就くとこれまでにはない仕事が出来る。少なくとも艦隊司令や司令官の比ではない。
「デスクワークにも慣れてきたからいいか」
今ではそう割り切って考える時もある。そして一つずつ仕事をこなしていく。
「さてと」
予定表を見る。とりあえず今日は何もない。
「早いうちに帰ることができるのも今のうちか。もっとも官舎に帰ってもすることもないが」
彼は基本的にあまり趣味を持たないタイプである。読書とスポーツはラクロスや乗馬を好むがそれ以外はこれといってない。
本は何処でも読める。歴史関係の本が好きだ。乗馬の他にも身体を動かすことは好きだが格闘技はあまりしない。軍にいるならば最低限のものは身に着ける。彼はボクシングをする。だがその他はこれといってしない。
「連合は何やら色々とあるようだがな」
やはりここでも連合の多様性が出るのだ。連合軍の格闘技は柔道に空手、古武術、拳法、マーシャルアーツ、ムエタイ等と多岐に渡る。そのスポーツも多い。だがアッディーンはそれをさして羨ましいとも思わない。
「やるものは一つだ。それができればいい」
彼にとってはそれは乗馬でありラクロスであった。ポロもすることはあるがあくまで乗馬の一貫であった。
他には軍人の義務としてのトレーニングだ。これは毎日やらされることなのでまた別だ。
音楽も聴かないわけではない。だがあまり激しい曲は苦手だ。
「結局俺は戦場にいる時が最も楽しいのかもな」
そう思うと自然に頬笑みが出た。どうやら自分は根っからの軍人

であるようだ。
「それもよいか」
彼はそうしたことに不満はなかった。むしろ満足している。
「俺はあくまで軍人だ。それ以外の何者でもない」
それでいいと思っている。だから不満もないのだ。
だがこれからはそれだけでは駄目なのもわかっていた。やはり元帥となると責務が違う。
政治的な判断もこれまでより要求される。将校には政治感覚も要求され、それは士官候補生どころか幼年学校の頃から言われ同時に広い視野も要求されるがどうしても軍人にとっては政治感覚を身に着けることは難しい問題であった。
やはり軍人であり専門職なのだ。そこから抜け出ることは非常に難しい。また軍人である以上政治に介入することも憚れる。だが意見を具申しなくてはならないのも事実だから話は余計複雑なのである。
サハラにおいては文民統制を採っていない国も多い。だがオムダーマンはそれには比較的厳格である。
「それが本当に厄介だな」
先程の会議のように会議にも参加することができ裁決にも加わることができる。だがそれも憚れるところがあるし具申しなくてはならないという矛盾もある。
それが極めて難しい問題であった。その為アッディーンも何かと考えることが多いのである。
「軍人としての限界か」
最近はそれについて思うこともある。
やはり軍人としての権限で何かをするには限度があった。元帥になりそれがようやくわかってきた。
「政治家とはやはり違うな」
そうであった。首相や国防大臣の権限とはやはり比較にならない。今回も説明にかなりの気力を割くこととなった。

これ以上の作戦や戦略の提案には限度がある。彼は軍人としてこのまま終えるのに疑問を感じだしていたのだ。
「どうするべきか」
軍人を辞して政界に転身するか。確かにそれはいい。
だが問題があった。彼はあくまで軍人であり政治家となるには人脈がなかったのだ。
これでは選挙に勝つことができてもそれで終わりである。ただの議員では何の意味もないのだ。
「やはりこのまま軍人で留まるべきか」
そうも考える。考えているとドアをノックする音が聞こえてきた。
「どうぞ」
彼は入るように言った。すると一人の女性が入って来た。
「ここで休んでいたのね」
それはハラーイブであった。
「首相」
アッディーンは彼女の姿を認めて思わず立った。そして敬礼をした。
「どうしてここに」
「一つお話したいことがありまして」
「お話」
アッディーンはその言葉に目を向けた。
「はい。長官に内密にお話したいことがあるのですが」
「内密にですか」
アッディーンはその言葉と口調にただならぬものを感じた。そしてすぐに机の上にあるスイッチでドアの鍵を閉めた。
「これでよし」
アッディーンはドアがロックされたのを確認して言った。
「どうぞ」
彼は続いてハラーイブに席を勧めた。
「どうも」

彼女はそれに従い席に着いた。アッディーンと向かいになるように座った。
「それでですね」
座ったのを確認すると言葉をかけた。
「そのお話とは何でしょうか」
「はい」
ここでハラーイブの目が光った。
「長官は南方での作戦が終わったらどうなさるおつもりですか」
彼女はそう問うてきた。
「ははは、何を言われるかと思えば」
アッディーンはそれには笑って言葉を返した。
「何も変わりませんよ。もしかすると今のとは別の役に就くかも知れませんが」
「そうですか」
彼女はここで一息置いた。
「では軍人を続けられるのですね」
（ムッ）
彼はそれを聞き目を一瞬だけだが光らせた。
「それはどういう意味ですか」
そして逆にこちらから尋ね返した。
「政界に進出されるおつもりはありませんか」
「政界にですか」
丁度今さっきまで考えていたことだ。彼はそれを聞き内心驚きを隠せないでいた。
（まさかそれを尋ねてくるとはな）
それだけでも驚くべきことであった。だが彼女はさらに言った。
「長官には我が内閣で重要なポストに就いて頂きたいのですが」
「ご冗談を」
だが彼はまたそれを笑って否定した。
「私はその様な器ではありません。戦うだけが取り得の男ですよ」

「いえ」
だがハラーイブはそれを否定した。
「長官にはまだまだ秘められたお力があります。それはまだ使われていないだけです」
「秘められた力」
「そうです。先程の会議ですが」
「はい」
「南方進出の戦略は軍人としての戦略ではありませんでした。高度に政治的なセンスも感じられる戦略でした」
「まさか。買い被り過ぎですよ」
彼は笑って言った。
「私はただ最も効果があるであろう方法を主張したまでです」
「それです」
ハラーイブはそれを指摘した。
「そこで武力のみならず外交まで駆使した戦略をそうそう主張できるものではありません。その能力をこのオムダーマンの為により効果的に使いたいとは思いませんか」
「オムダーマンの為に」
「ひてはサハラの為にです」
「サハラの」
それを聞いたアッディーンの顔が考えるものになった。やはりサハラの者としてそれを出されると心が動く。
「無論ご返事は今でなくともいいです」
彼女は静かな、低い声で言った。
「ですが何れはお答えを頂きたいです」
「そうですか」
彼はそれを聞いてまた考える顔をした。
「長官には国防相をまず用意しましょう」
「しかしそれは」
「御安心を。シカール長官は副首相になって頂くので。それについ

ては御心配は無用です」
オムダーマンにおいては副首相は常に置かれるものではない。時と場合により置かれることもあるポストだ。
「いや」
だがここでハラーイブは考え直した。
「長官に副首相になって頂くのも悪くはありませんね」
ここで口元が微かに笑ったように感じられた。
「まさか、またそんな」
「私は冗談を言わないことはご存知の筈ですが」
一転して強い声になった。
「長官には是非我が国の為に働いて頂きたいのです。そしてこのサハラの為にも」
アッディーンは答えることができなかった。確かに彼女は冗談なぞ言わない。そしてその目が今の言葉が本気であることを教えていた。
「よろしいでしょうか」
「・・・・・・・・・」
彼は考えた。だが到底即答できるものではなかった。
「考える時間を下さい」
そう言うだけで一杯であった。ハラーイブはそれを聞くと頷いた。
「わかりました」
そして席を立った。
「それでは失礼しました」
「はい」
こうして彼女は部屋を後にした。アッディーンは一人部屋に残った。
「まさか首相から声がかかるとはな」
彼は笑ってはいなかった。その顔は悩むものであった。
「どうするべきか」
深く考えてみる。だが結論は出ない。

いざ話が出て来るとやはり考えてしまう。軍にも愛着はある。
「じっくり考えるしかないか」
彼にしては珍しい結論であった。だがそうするしかないのも事実であった。
「それに今は作戦の方が重要だ」
そうであった。まずはそれを何とかしないとは話にもならない。
「よし」
彼は外交部に電話をかけた。思うと即座に動く。
「宇宙艦隊司令長官だが」
そしてすぐに話を切り出した。こうして作戦がはじまった。

第五部　完

２００４・１０・２１

# 第六部第一章　星河の海その一

## 星河の海

人類が銀河に進出してから長い年月が経った。その間それぞれが歩んだ歴史は実に対象的であった。

まず連合であるがその歴史は開拓の歴史であった。

彼等は新たな土地を目指してより遠くへ進んだ。そしてそこに根を張り開墾していく。産業を興す。そうして発展していったのである。

人口が増加すると別の星系に進出する。そしてそこを開拓する。それが連合の歴史であった。

加盟諸国の間で星系を巡る争いが生じた場合は連合中央政府が仲介する。それは主にどちらが先にそこに辿り着いたかで決めた。

負けた国には別の星系への進出を約束する。その場合他の国々はそこへの進出はできない。こうしてバランスをとってきたのだ。

彼等は宇宙海賊やテロリストといった問題がありながらもかなり順調に発展を成し遂げてきたと言ってよいであろう。それは人口の増加にもはっきりと見てとれた。

二十世紀終わりには全人類で五十億であった。二十一世紀には百億に達した。その人口増加を解消する為に宇宙進出が進められたのである。

それを考えると人口の増加がさらに促進されるのは当然であった。宇宙に出れば新たな土地が手に入る。そしてそこに人が住む。こうして人は増えていった。

連合はそれが極めて顕著であった。新たな開拓地は無限と思える程広がっていた。彼等はそこに進めばいいのである。

こうして二十世紀の終わりには今現在の連合の加盟国の総人口は三十五億程であったがそれが三兆にまで達した。爆発的と呼ぶべき増加であった。

それはやはり順調な発展、そして戦乱がなかったからである。彼等は懸念された他の知的生命体の存在もなく外敵もなかった。星系の領有を巡る争いはあってもそれは別の星系に行くことで紛争や戦争は程無く回避されてきた。こうして彼等は順調に国力を発展させてきたのだ。

これが今の連合を形作っていた。彼等はまとまりにこそ欠ける寄り合い所帯ながらも人類で最大の勢力を誇っていた。

それを取り纏める中央政府であるがこれの母体は国連であった。

第二次世界大戦の後設立された国連であるがその力はあってないが如きであった。

最高の権限を持つ常任理事国の思うがままでありその運営は遅々として進まなかった。それを改善すべく改革が決定されたのは二十一世紀初頭のことであった。

これによりまずは常任理事国が増やされた。新たに日本、ドイツ、ブラジル、インド、そしてエジプトが加わった。特にエジプトの参加が大きかったと後の歴史家は言う。

そして同時に各機関の強化も推し進められた。まだまだ甚だ不充分ながらこれで国連はかなり権限が強化された。これでよいかと思われた。だがそれが大きな誤解であることは人類がまず月に進出してから起こった。シンガポール条約にまで至る一連の動きである。

これにより人類社会の分裂は決定的なものとなり欧州は太平洋諸国と袂を分かった。そこにはアフリカ諸国や南米の諸国も含まれていた。

アラブもまた独自の道を歩むことにした。インドも。国連は太平洋諸国及びアフリカ、中南米の国々のものとなった。

ここで国連の権限のなさを痛感した各国はその権限を強化することにした。再びこうしたことが起きないようにする為である。それは全く別のものに作り変えるようなものであった。

まず常任理事国を廃止し大統領制に移行させた。そして各国の理事会ではなく議会を置いた。ここで話し合いをするようにした。

そして行政府、裁判所も設置した。こうして各国の上に置く中央政府というふうにしたのであった。
これにより権限は大きく拡大された。だがそれでもまだまだその力は弱く今まで長い間そうした中央の力が弱い状況が続いてきた。良く言えば各国の自由が強いことになるがそれが結果としてまとまりを欠くこととなった。そして今の長い権限強化への動きに繋がるのである。
連合はこうして中央の力が弱いながらも極めて順調に発展した。だが他の国々は違った。
マウリアは落ち着いた発展をした。連合やサハラ各国と友好関係を続けつつ徐々に進出していった。そしてその国力の伸張も緩やかであった。
彼等が連合に加わらなかったのは多くの事情があった。連合の中心となる国家であるアメリカや中国と疎遠だったせいもある。アフリカ諸国は国連に依存し、また過去の植民地時代のことから欧州に反対したのだが彼等はまた事情が違っていたのだ。
日本やロシアは参加を促した。マウリアの方もそれに賛同するかと思われたが結局選挙でそれは否決された。そして彼等は独自の勢力となったのである。
欧州はエウロパと名を変え連合から離れた場所に移った。西欧及び東欧の諸国から成る彼等は連合との衝突を忘れたことはなかった。そして何時の日か彼等を凌駕することを誓って当時の銀河の果てに来た。後にブラウベルグ回廊と呼ばれる細長い道をくぐって。
ここが連合と彼等の境となった。連合は彼等が一人残らずそこに渡ったのを確認すると即座に連合の境界をブラウベルグ回廊の入口とすると一方的に決定した。事実上のエウロパの締め出しであった。
こうして彼等は最初の惑星に降り立った。最初の首都は回廊の出口近くに置かれた。それはエリュシオンと名付けられた。
その惑星は地球よりも豊かな惑星であった。これに幸先のよさを感じた彼等はすぐに開拓を開始した。そしてめざましい発展を遂げ

た。だがそれはすぐに終わった。
一帯を調査してみると彼等の勢力となる領域はそれ程広くなかった。南にはもうアラブ人達が進出していた。今彼等と戦うことはできなかった。人口が違っていた。
従ってまず彼等と協議の末国境を定めた。黒い色をした衛星の上で調印されたのでダークムーン条約と名付けられた。これでまずは開拓するべき土地が決まった。北と西は何十万光年も何もない空間だけが広がっていた。そこを踏破することはどう考えても不可能であった。
調べてみるとその領域で養うことができるのは精々三百億程であった。それなりに惑星の数はあり住むことのできる星系は極めて豊かな星ばかりであった。だが数があまりにも少なかった。
その後必死の努力により一千億まで養えるようになった。血の滲むような食物の研究と進歩、惑星の開発の結果であった。スペースコロニー等も作られた。だがそれが限度であった。
それが今のサハラ侵攻に繋がったのだ。これを連合は待っていたかのように批判する。だがこれは彼等にとってみれば生きる為に仕方のないことであった。
エウロパは豪奢な貴族文化で知られる。だがそれも富があってのものだ。それがなくなった時彼等は死ぬしかない。それが分かっているからこその侵攻なのであった。
それは無論サハラ各国にとっては災厄以外の何物でもない。実際に多くの難民が発生しその問題で各国は頭を悩ませている。だがこれはサハラの事情もそうさせていた。
アラブはムワイア朝以降統一されたことはなかった。
今もであった。まとめるような強力な国家が出たことはあったがそれでも統一されたことはなかったのだ。
それが戦乱を招くこととなった。サハラでは最も多い時で百近い国に別れ争ってきた。栄枯盛衰と集合離散を繰り返してきたのであった。

そして戦雲が絶えることはなかった。その為人口も容易には増えなかった。
産業も連合程発展することはなかった。エウロパの様に先が見えているものではなかったが彼等は落ち着いてそれを作り上げることはできなかったのだ。
まずは兵器が造られる。それに多くの費用と人材を回さなくてはならない。軍事関係は発展するがそれが民間に回されるのは後回しであった。こうして各国は互いに争っていた。
エウロパもそこに付け込んだのである。とりわけ北部が戦乱が激しかったのを見てそれに介入していった。そしてそこに総督府を置いたのである。
サハラの者はそれに対して激しい怒りを覚えたがそれを退けることは不可能であった。だがいずれは退けることを心から願っていた。
だがそれにはまずそれが出来るだけの勢力を築かなければならない。今はそれが可能な勢力がようやく姿を現わしだしたところであった。
それは三つあった。まずは東のハサン王国。連合やマウリアとの貿易で栄えるこの国は早くから東方を掌握し、サハラでも最大の勢力となっていた。
そして北方諸国連合。傭兵隊長であったシャイターンによりまとめられたこの国々は今ではサハラでひとかどの勢力となっていた。まだその国力は総督府に対して不利であったが主席に就任したシャイターンの天才的な軍事及び政治の手腕によって鮮やかな程の発展を遂げていた。
そして西方のオムダーマンであった。かっては西方で第三勢力であった彼等だがミドハド、そしてサラーフとの戦いに勝利し西方を統一した。それによる勢力の拡大は目を瞠るものがあり今最もサハラで活発な勢力といえた。
今彼等は新たな動きをはじめていた。それは南方に向けられようとしていた。

そのオムダーマンの首都アスラン。今ここで多くの艦艇が出撃準備に入っていた。
「各艦隊の状況はどうか」
アッディーンは国防省の玄関に置かれている車に乗り込みながら傍らにいる者に問うた。
「ハッ、全て順調であります」
その者は敬礼をして答えた。
「そうか」
アッディーンはその言葉を聞き頷いた。
「では問題はない。すぐにでも兵を進めることができるな」
「はい。そして外交部のスタッフも既に軍港へ」
「用意がいいな」
「そうでなくては外交はできないでしょう。今回は特に政治的な駆け引きも要求される作戦ですから」
「そうするようにしたのは俺だがな」
彼は言った。
「力で攻めるのもいいが技で攻めるのも一つの方法だ。違うか」
「いえ」
出迎えの将校はそれに対して頷いた。
「私は政治のことはよくわかりませんが」
そう断ったうえで話をはじめた。
「確か昔の軍事の本であった言葉でしたね。人を責めるのが上で国を攻めるのが下だと」
「孫子だったな」
「はい」
実は彼は知っていた。孫子を知らずして軍事は語れない。
「それを考えますと今回の作戦は非常によろしいかと思います。損害も少なくて済みますし占領地のダメージも最低限にすることが可能です」
「そうだな」

アッディーンはそれに頷いた。
「俺の考えは間違ってなかったということか」
「それはどうでしょうか」
だが彼はそれには否定的であった。
「ん！？」
アッディーンはそれに反応した。
「全ては作戦が全て成功してからです。今それを仰るのは早急かと。いえ」
「いえ！？」
今度はアッディーンが問う番になっていた。部下の言葉を無闇に退けるようなアッディーンではないがこの将校の言葉にはどうしても反応してしまうのであった。

## 第六部第一章　星河の海その二

「それだけでもわからない場合があります。政治にしろ本当の成果がわかるのは政策が施行されてから数年後の場合もあります」
「うむ」
アッディーンはそれに頷いた。
「そうだな。だからこそ難しいのだが」
「はい。それを見極めていかなければなりません。作戦も政治も」
「よくわかっているな。ところで」
アッディーンは問うた。
「貴官の官職氏名を知りたいのだが。なかなかいいことを言うからな」
「ハッ」
彼は敬礼をして答えた。
「参謀本部付将校ウスマーン＝ハワージャ大佐です」
「ウスマーン＝ハワージャ大佐か」
「はい、ついこの間まで連合中央政府大使館に駐在武官として赴任しておりました」
「成程、だからか」
アッディーンは納得するものがあった。
「政治的な感覚が備わっているのは」
連合はその内部でも複雑な外交の駆け引きが存在する。銃を突き付けあってはおらず、紛争も衝突もないが彼等は別の戦争を常に行っているのである。
それは銃弾の代わりにコインが飛び交い、要塞ではなく札束のシェルターがある戦いである。経済や流通を巡って常に激しいやりとりがあるのだ。
「連合は常に内戦状態にある。経済ではあそこは全ての国が敵同士だ」

かってサハラのある経済学者がこう評した。そもそも開拓と発展こそが連合の一千年前から変わらぬ国是であり、それを求めて各国が経済的に衝突するのは当然であった。そしてそれを仲裁するのが中央政府の仕事である。

そこには外交の駆け引きもある。どの国も自分達の経済がかかっているから必死だ。武力こそ使えないが時には経済制裁を含めた恫喝もある。実際にそれが発動されるのは稀だがそうした剣呑な事態も存在するのだ。

それを見てきたからであろうか。このハワージャの考えはかなり政治的なセンスが備わっており、かつドライであった。

「大佐」

アッディーンは彼に声をかけた。

「貴官も来るか、南方へ」

「私もですか」

「そうだ、今は参謀本部付だろう。マナーマ参謀総長には俺から話をしておくが」

「それは私の一存では」

「そうだな。では参謀総長には俺から話をしておく。その結果次第で頼むぞ」

「はい」

ハワージャは頷いた。いや、頷くしかなかったと言うべきか。

「ではな。まあどうなるかはわからないが」

だが半ば決まったようなものであった。マナーマにとっても断る話ではないからだ。

「南方で会おう。先に待っている」

そう言って敬礼をした。ハワージャもそれに返す形で敬礼した。アッディーンの方が上官であるがこの場合は仕方がなかった。

アッディーンは車に乗った。そして軍港に向かった。

軍港では既に多くの者が集結していた。そして次々と船に乗り込んで行く。

「活気があるな」
アッディーンはそれを見て満足そうに笑った。
見れば家族や恋人との別れを惜しむ者もいる。彼等は抱き合い、そして別れ言葉を口にしている。
実際に彼等のうち幾らかは生きて帰っては来れないだろう。それが戦争だからだ。
その中にはアッディーンも当然入っている。彼も戦場に立つからだ。
だが彼を出迎える者はいない。両親には来ないように言っている。何かあったら親にとって辛いことになるからだ。
少なくとも彼はそう考えている。だが他の者が別れの挨拶をしていてもそれについてはとやかく言うつもりはない。人それぞれだからだ。
アリーの前に来た。既に幕僚達が総員で立っていた。
「お待ちしておりました」
ガルシャースプが彼等を代表して敬礼をして言った。アッディーンはそれに返礼した。
「外交部のスタッフは来ているか」
「ハッ、既に艦内に全員入っております」
「そうか」
「もうこれからのことについて仕事をはじめているようです。私が朝来た時にはもう全員いました」
「アッバース外相もか」
「ええ。外相は昨夜のうちに来られたそうです。当直士官から聞きました」
「またえらく気合が入っているな」
アッディーンもこれには少し驚かされた。
「外交部も真剣だという証拠でしょう。いいことだと思いますよ」
「そうだな」
「では漢へ。もうすぐ出港の時間ですよ」

「わかった」
彼は幕僚達を連れ艦内に入った。艦内では既に船員達が各自の持ち場についていた。
「司令が乗艦されました」
「わかった」
艦橋に報告が入る。艦長はそれを聞いて了承して首を縦に振った。
アッディーン達が艦橋に入ると持ち場に就いている者以外が総員で敬礼をした。アッディーンも機敏な動作でそれに返した。
「では今から南方に向けて兵を進める」
アッディーンは言った。
「ハッ」
幕僚達がそれに答える。
「全軍まずはカッサラに向かう。そしてそこから南方に侵攻する。いいな」
「わかりました」
「よし」
アッディーンは了承したように頷いた。そして言った。
「南方侵攻作戦、ハッティーン作戦発動！」
これが戦いを告げる笛の音となった。こうしてアッディーンに率いるオムダーマン軍は南方に向けて侵攻を開始した。三十個艦隊、総兵力五千万による一大侵攻作戦のはじまりであった。

## 第六部第一章　星河の海その三

オムダーマンが南方への兵を進めている頃北方では別の動きがあった。
彼等は今大規模な軍事訓練を行っていた。場所は首都星系から近いある宙域である。
そこには北方の主な将官が集まっていた。当然そこにはシャイターンもいる。
彼等はそれを軍事用宇宙ステーションから見ていた。特にシャイターンは最もよい場所から見ていた。
「ふむ」
彼はその訓練の光景を見て一言言った。
「悪くはないな」
見れば各艦の動きも流れもスムーズである。そしてその攻撃も迅速である。
「だが」
しかしシャイターンはその顔に不満の色を宿らせた。
「まだ足りないな」
「足りないといいますよ」
傍らにいたハルシークが問うた。
「うむ。兵士個人個人の動きはいい」
「ハッ」
「それは艦の動きでわかる」
「問題はそこではないと」
「そうだ。一隻一隻の動きはいいのだが全体の動きが悪い」
「そうでしょうか」
ハルシークにはそうは思えなかった。だがシャイターンは違う考えであった。
「艦隊運動がまだ未熟だ。攻撃に移る動作もやや鈍い。指揮官に問

題があるとも思えないな」
「では何でしょうか」
「通信だな。旧式化していないか確かめてくれ」
「わかりました」
ハルシークはその言葉に敬礼で答えた。
「通信がなくては戦争にはならない。旧式化していたならばすぐに換装するようにな」
「ハッ」
彼は再び答えた。そして後ろに下がった。
シャイターンは訓練を見守り続けていた。そして一隻一隻の動きを緻密に見ていた。
「連度は上がっているな」
彼はそれは認めていた。
「だがまだ足りない」
しかしそれで満足してはいなかった。
「これからの戦いにおいては強い兵でなければならない。このサハラを手中にする為にはな。そして」
ここで北を見た。
「彼等をこの地から追い出す為にもな。まずはこのサハラをサハラの者だけのものとしなければならない」
彼はあくまで総督府に対して激しい敵意を抱いていた。それはサハラの者ならば当然であった。
彼は艦隊に目を戻した。陣を組んでいる。
そして互いに攻撃を仕掛ける動作に入る。やはりその動きは彼にとってみればやや緩慢だ。
「やはり通信だろうな」
彼はそれを見て呟いた。そしてそれは的中していた。
この訓練の後北方はすぐに全艦の通信機能を換装することになる。シャイターンの目は確かであったのだ。
やがて訓練は終わった。彼は首都の自身の官邸に戻った。

「今後の予定はどうなっている」
彼は旗艦イズライールの司令室でハルシークに問うた。
「ハッ」
彼はそれに敬礼をした後で答えた。
「まずはこの度のこの連合国家の正式名称を決める会議となります」
「国名か」
「はい、今までは単に北方諸国連合と呼ばれていましたがそれでは収まりが悪いかと」
「そうだな」
彼はそれに同意した。
「それについて閣下のお考えはどうでしょうか」
この国では主席の発言権が大きい。シャイターン自身がそうしたのであるがこれは隣にエウロパという強大な勢力が控えている為の必要な処置であると説明させていた。実際にそうであったがシャイターン自身が己が政策を実行し易いようにという意図もあった。
「私の考えは既に決まっている」
彼はそれに対して答えた。
「それはどうしたものでしょうか」
ハルシークは問うた。
「ティムール連合というのはどうだ」
「ティムール連合」
ティムールとはかってサハラを席巻した一大勢力の名将の名である。この北方出身で知られている。
「あの英雄の名を冠する。悪くないと思うが」
「そうですね」
ハルシークはそれについて反論はなかった。
「ではそれを会議で最初に伝えますか」
「そうするように頼む」
「わかりました」
ハルシークは頷いた。これが北方の正式名称となった。

「予定はそれだけか」
シャイターンはここでまた問うた。
「いえ、あとは今後の戦略についてですが」
「それはもう大体決めてある」
シャイターンは言った。
「まずは勢力を蓄える。今主な敵は総督府だ」
「総督府ですか」
「そうだ、何か問題はあるか」
「問題といえば」
ハルシークはそれに考える顔をした。
「やはりハサンとオムダーマンでしょうか」
「あの二国か」
「はい。とりわけオムダーマンは動きが活発ですし」
それは彼等にとっても頭に入れておくべきことであった。
「オムダーマンは今南方に進出しゆとしている。問題はないと思うが」
こえはシャイターンの耳にも入っていた。

## 第六部第一章　星河の海その四

「それはそうですが」
「今彼等は残った艦隊だけで国防の任を果たしていかなければならない。とても我が国に攻め入る余裕はないだろう」
「そうですか」
「うむ。あとはハサンだな」
「既に不可侵条約を結んでおりますな」
「そうだ。これがあれば当分はハサンとは何もあるまい。少なくとも当面はな」
「はい」
ハルシークはそれに頷いた。
「では後方は今のところ大丈夫ですね」
「そういうことだ。安心して総督府と対峙できる。だが」
「だが！？」
「やはり今はまだ彼等を倒すには力不足だ」
国力が足りないことは彼も認識していた。
「我々だけでは彼等を倒すのは容易ではない」
「それは私も同じ考えです」
ハルシークもそれに対して言った。
「やはり国力にも兵力にも大きな開きがあります」
「そうだ。それをどうするしかないが」
シャイターンは考える顔をした。
「やはりすぐには覆せるものではない」
「はい」
ハルシークは再び頷いた。
「エウロパで何かあれば話は変わってくるがな」
「何かとは」
ハルシークはまた問うた。

「そうだな。さしあたっては連合との衝突か」
「まさか」
ハルシークはそれには否定的だった。
「幾ら対立しているといっても今衝突する危険はありません」
「それはどうかな」
シャイターンはそんな彼に対して言った。
「何が起こるかはわからない。確かに今まで連合とエウロパは対立しながらも直接的な衝突はなかった」
「月での資源争奪の時もそうでしたね」
「あれは直前でロシアが寝返ったせいもあるがな」
「しかし武力衝突をしてもどちらにもメリットはないでしょう。特にエウロパにとっては自殺行為です」
「エウロパにとってはな。だが連合は少し事情が違う」
「といいますと」
ハルシークはまた問うた。
「連合には一つの厄介ごとがある。法皇だ」
「バチカンですか」
「そうだ。その存在が彼等にとっては一つのネックになっている」
宗教家の父を持つだけあってそれはよくわかっていた。
「連合とエウロパを行き来することができるのはバチカンの司教だけだ」
「はい」
ブラウベルグ回廊は常時連合とエウロパ、二つの勢力によって常に厳しい監視下に置かれており、その通行は禁止されている。だがバチカンの司祭達の船だけは通行が可能なのである。
これは連合にも多いバチカンの信者達の為であった。如何に両勢力の対立が厳しくともバチカンだけは断ることができなかったのだ。
「だがここに問題がある」
シャイターンは言った。
「行き来できるのは宗教家だけだな」

「はい」
「その中に宗教家の皮を被った密偵が入り込んでいたらどうなる」
「エウロパがよくやっていることですな」
これはかなり有名な話であった。サハラでもよく知られている。
「ほぼ素通りだな。ましてや司祭のチェックなどは」
「恐れ多くてできないでしょうな。やはり」
「そうだ」
これはサハラの多くの者には理解し難いことであった。何故ならイスラムは原則的に聖職者を置かないからだ。いるのは法学者等市井の者だけである。ムハンマドですら市場を歩き回り妻子を持ち、食事を採る一人の人間に過ぎなかったのだ。ただし中には例外もある。シャイターンの家の宗派等がそれである。
「彼等はそれを利用している。そうして連合内の情報収集や工作を行っているのだ」
「それは知っていますが」
「今までは知りながらもそれに中々対処することができなかった。やはり彼等を捉える機会もなく、そしてそうしたことに有効な機関もなかったからだ」
「ですが今は連合軍がありますな。そして連邦警察も」
「そうだ」
連邦警察は連合領全ての地域で調査が可能な警察組織である。各国の警察とはまた違う連合中央政府直属の組織である。
「今実際にエウロパのスパイの摘発を大規模に行っているというな。その調査結果次第では」
「エウロパに対して何らかの制裁に出る、ということですか。しかし連合とエウロパは経済的には何の関係もありませんし
また両勢力の間にはガンタース、ニーベルングのそれぞれの要塞群があります」
「武力衝突も考えられない、と言いたいのだな」
「はい。連合がスパイのその侵入ルートを消す為にバチカンを連合

内に移転させようとすることも考えられますがそれも不可能でしょう。バチカンはそれに気付きながらも政治のことですので表立っては口にしませんしエウロパもそれは否定するに決まっています。例え確かな証拠が出ても。バチカンを移転させるのならばエウロパに侵攻するしかないでしょう」
「だがそれは要塞群により不可能だと言いたいのだな」
「はい。ニーベルング要塞群は難攻不落です。抜くのは無理でしょう」
「それはどうかな」
シャイターンはそれに対して笑みで応えた。
「連合のあの巨大戦艦ならば可能かも知れないぞ」
「まさか」
ハルシークはそれを否定した。
「確かに恐ろしい艦ですが流石に要塞までは無理でしょう」
「一隻では無理だな、確かに」
彼はここでまた笑った。
「だがそれが増えてはどうだ。如何にニーベルングといえど陥落するのではないか」
「・・・・・・・・・」
ハルシークは沈黙した。言われてみればその可能性はある。あの巨大戦艦の巨砲ままるで要塞の主砲であったからだ。
「もっとも今エウロパは全土の防衛計画を見直している。連合が要塞を抜いて領内に侵攻してきても滅亡までには至らないだろう」
「そうでしょうか。領内に雪崩れ込まれたらもう終わりだと思うのですが」
「それは国力の差を考えてのことだな」
「はい」
ハルシークは頷いた。
「三十倍もあると流石に。無理でしょう」
「兵力や経済力だけではな。だが戦争はそれだけでするのではない」

「ゲリラ戦ですか」
「そうだ。エウロパの市民全員が敵に回ったならどうなる。最早対処しきれまい」
「蜂起した惑星ごと掃滅するわけにもいきませんからね」
一般市民への攻撃は国際法により厳しく禁じられていた。ゲリラと認められる場合は例外であるがそれでも都市やスペースコロニー、惑星等に攻撃を仕掛けるというのは流石に無理がある。
ましてや連合は民主制である。その様なことをしては軍や政府が支持を失う。連合においては凶悪犯の処罰は極めて酸鼻であるべきだがそうした無差別攻撃や罪のない者に対する蛮行は最も忌み嫌われることなのである。これはエウロパやサハラにおいても同じである。
「それはエウロパもわかっている。そうして連合軍をジレンマに追い込む可能性がある」
「ゲリラ戦の基本ですね」
「そうだ。それをとられたならば連合も戦いを続けることは出来ない。連合軍は九十億」
各国の国軍を入れると百億を超える。
「エウロパの総人口は一千億。勝負は見えておりますな」
「そうだ。おそらく両勢力が戦ってもエウロパの敗北に終わるだろうがその滅亡までには至らない。その勢力は大きく減退してもな」
「バチカンは連合に渡るでしょうね」
「そうだな。それが戦略目的の場合」
シャイターンは冷徹な声で答えた。
「スパイの進入ルートも消すことができるし領内の信者の支持も得られる。それに」
「それに！？」
「バチカンへの巡礼により金も動く。連合にとってはかなりの利益になるな」
「それを聞くと今にも問題を起こしそうですね」

「物騒なことを言う」
シャイターンの顔は笑っていたが目は笑っていなかった。
「確かに何かきっかけがあれば動くかもな。きっかけがあれば、だ」
「それがスパイの摘発でしょうか」
「かもな。だが彼等はことを構えるのはおそらく先だ。攻めるのは連合だが彼等はまだ軍備が整っていない」
「かなりの速さで進めているらしいですけれどね」
「それでもあれだけの大艦隊だ。まだ時間がかかる。連合の軍需産業を総動員してもな」
「はい」
「それからだな。動くのは。その頃にはエウロパの防衛計画も整備し終えている。我々はそれまでに兵を整えておけばよい」
「焦る必要はないと」
「そうだ、時間はある。今は将兵の練度を整えその数を増やす。そして装備の質を上げることだ」
「わかりました」
ハルシークは答えた。
「では今後の方針はそれでいくことにします」
「うん」
シャイターンはそれを了承した。
「頼むぞ。時間はあるが確実に行っていかなければならないからな」
「はい」
彼等はすぐにそれに取り掛かった。そして牙を磨くのであった。

## 第六部第一章　星河の海その五

かって城は国に例えられた。これは古代の中国での話だが欧州においてもそうであった。

これ等の地域の城は街そのものであった。城壁で取り囲まれ防御され、兵士がそこを守った。古代には都市国家がありそうした意味でも城は国家そのものであると言えた。

だが火器の発達により城壁が意味をなくしそれはかっての街の歴史を教えるものとなった。それも人類が宇宙へ進出するとまた変わった。

進出は当然ながら星に対して行われる。人は星に住み、そこで生活をする。こうなると星が国となる。

実際に連合でもエウロパでも一つの星系は一つの国家が所有することとしている。領土問題を避ける為である。

こうして星はかっての城と同じ存在となった。従って防衛も為されるようになった。

当然守備兵が駐屯し、軍事衛星が星の周りを飛ぶ。まさに宇宙の城であった。

それを攻めるとなるとかなりの苦労が必要となる。アッディーンがサラーフの首都攻略の際ブラークを撃破したのもその一つであった。

首都だけありその防衛が堅固であったのだが他の惑星も大体において同じである。防衛を施していない惑星はないと言って過言ではない。

その為正規軍ですら苦戦することがままある。これが海賊ならどうか。言うまでもない。

連合での大きな問題となっていた宇宙海賊であるが一つ一つだと比較的小規模な存在であるのは否定できない。星一つを攻められるような組織は滅多にない。

防衛がまだ整っていない辺境の惑星が狙われることはよくあるがそこにも大抵軍が一緒にいるものである。彼等も馬鹿ではない。それ位のことはわかっている。その為星にいると比較的安全なのだ。

スペースコロニーは連合には居住用のものはない。だが資源開発用のものがある。これが狙われる場合が比較的ある。各国軍も連合軍もその警戒を怠らない。

そして商船だがこれが問題であった。星やコロニーが難しいならば比較的容易な存在に向かうのが常である。だが商船の方も用心棒を雇ったり軍に守ってもらう。時として大きな問題になることがあり、常に頭を悩ませる存在ではあったが実害は少ないのであった。これは彼等の数も結局は極めて少数であったこともあるが。国家単位でこうした行為をしない限りそうそう多くはならない。

だが被害はゼロでなくてはならないのだ。一つでもあればそれが問題となる。テロリストの問題と全く同じ問題であった。

だから頭を抱えるのだ。そして彼等は時には怪しげな団体と結託する。そして政治や社会を混乱させようとする。こうして話は複雑になっていたのだ。

連合中央政府の断固たる処置、そして中央軍、中央警察の設立によりそれはかなり減った。だが連合において最大の勢力がまだ存在していた。

それが解放軍であった。解放軍と名前だけはよいがその実態は単なる凶悪犯の集まりである。連合各国、そしてマウリアで罪を犯した者や海賊が集まってできた組織でありその数は一千万に達する。

彼等は連合とマウリアの境に勢力を持っていた。この辺りは複雑な地形であり攻めるに難しい。そして通商の要地である為に見入りもある。噂によると独自の資源発掘も行っているという。闇商人との関係もあり無視できない存在であった。

彼等をどうするかは連合中央政府にとって厄介な問題であった。今までは取り除くことが困難でありまさに喉元に突き刺さった棘であった。それが連合とマウリアの交易に重大な影響を及ぼしている

ことは言うまでもなかった。
彼等は解放軍を避ける為ハサンを仲介するルートをとることが多かった。これがハサンにとっては莫大な利益のもとでもあった。
「ハサンが彼等の黒幕だったら面白いな」
不意にこうしたことが言われることもあるが実際には有り得ない話である。ハサンはそれ以外にも確かな収入源があり連合とマウリアを敵に回すようなことはしない。ハサンとて馬鹿ではないのだ。
だがこのハサンの首都ブルジルトのあるホテルに今何人かの外国人達が来ていた。交易の盛んなこの国では特に珍しくもないことなのでこれ自体は驚くことではない。問題は彼等が何者なのか、である。
見ればマウリアの服を着た者達とスーツ姿の者達二つの種類の者達に分かれている。彼等はホテルの最上階にあるロイヤルスイートに入って行った。

## 第六部第一章　星河の海その六

その豪奢な部屋の中に今二つの服の者達が互いに分かれて位置していた。見事なまでに対照的である。
対照的なのは服装だけではなかった。彼等の髪や瞳の色、顔立ちもであった。
マウリアの服の者達は褐色の肌に黒い髪と瞳、そして彫のある顔立ちをしていた。それに対してスーツの者達は褐色の肌もあれば黄色い肌も白い肌もある。黒い肌の者も当然いる。髪や瞳の色はまちまちであるし顔立ちも一人一人まるで違う。これを見て彼等の互いの属している組織がわかった。
一方はマウリアである。そしてもう一方は連合。連合の多民族さがここでもわかることとなった。
「そちらの方はまだでしょうか」
マウリアの者達の中央にいる口髭の男が連合の者達に対して問い掛けた。マウリア国防相であるラーンチである。
「ハッ、それですが」
見れば八条の秘書官もいた。彼がそれに応える。
「間も無く来られます。今しばらくお待ち下さい」
「わかりました。それでは」
ここでラーンチは隣にいるエルールに顔を向けた。
「外相、お茶でも飲みながらゆっくりと待つとしましょうか」
「はい」
エルールは優雅な笑みでそれに答えた。マウリアの要人が二人も来ているのだ。これはすぐに只事ではないとわかった。
「それでは紅茶でも飲みながら」
「そうするとしましょう」
彼等は怒るわけでもなく待っていた。実際に茶を飲むわけではないが。

「ところで。ええと」
エルールは秘書官の名を言おうとした。だが記憶に思い浮かばない。
「水口です。水口賢雄と申します」
彼は自らの名を名乗った。
「国防相の秘書官を務めております」
ここで微笑んだ。いい笑みであった。
「そうでした、申し訳ありません」
エルールは謝罪の言葉を述べた。
「名前を忘れてしまいまして」
「ははは、それはいいですよ」
水口はそれを笑ってないことにした。
「私は一つの特徴がありまして」
「それは何でしょうか」
エルールだけでなくラーンチもそれに問うた。
「よく忘れられるということです。どうにも存在感がないものでした」
「ふふ、ははははは」
これには彼等だけでなくそこにいた者全てが笑った。自分をネタにこの場でこうしたことを言えるとはまた凄いことではあった。
「中々面白い方だ」
「日本人はよくジョークに疎いと言われますので」
水口はそこでまた言った。これは悲しきかな事実であった。
「少しでもこの場を盛り上げようとしたわけです」
「それにしてはまた強烈なジョークですな」
「本当に」
ラーンチもエルールもまだ笑っていた。そこで扉を開ける音がした。
「カバリエ外相と八条国防相が来られました」
「おお」

彼等はそれを聞いて声をあげた。
程無くしてその二人が入って来た。
一人はでっぷりと太った中年の女性であった。黒い髪と瞳で彫の深い顔をしている。太ってはいるがその顔立ちは整っている。メリハリのある目鼻立ちに高い鼻と切れ長の瞳をしている。彼女が連合中央政府外相の二キータ＝カバリエであった。メキシコ出身でメキシコの外交官出身である。白いスーツとスカートに身を包んでいる。
その後ろには長身でスラリとした容姿を持つ美青年がいた。切れ長の黒い瞳が印象的である。一目でアジア系であるとわかる。ライトグレーのスーツに身を包んでおり一目で女性の関心を引き付けずにはいられない。まるで映画スターかトップモデルの様であった。
（彼が八条ね）
エルールもまず彼に目を向けた。
（噂に違わぬ容姿ね。マウリアでも話題になる程だわ）
彼の女性人気は彼女も知っていた。彼女自身彼の容姿を一目で気に入っていた。
（貴公子と言うのかしら。連合では貴族はいないけれど）
連合の特色として貴族的なものを徹底的に嫌う傾向がある。これはエウロパに対する対抗意識からくるものであるがその他にも理由はある。やはり連合独自の活力に溢れる機会均等主義がそれを好まないのだ。
連合側では特に思うことはなかった。八条も女性には疎いのでそれ程思うことはない。
「ではまず食事にしましょうか」
カバリエが提案した。
「はい」
「よろしいかと」
マウリア側もそれに賛成した。あらかじめ予定されていたことなので断ることもなかった。
彼等は程なく食事のテーブルに着いた。当然外交交渉は既にはじ

まっている。
サハラの料理が運ばれてくる。最初はポタージュだ。
「これは何処でも同じですね。最初はまずスープから」
カバリエは笑いながら言った。彼女は連合では健啖家として知られ料理の腕もいいことで知られている。その本も何冊か出している程である。ちなみにその内容はどうしたら美味しくなるか、そして何が美味しいか、が実に細かく書かれている。美味しさをあくまで追求し、美容等には一切触れないのが彼女の本の特徴である。従ってこう言われている。
「カバリエの本を読むな。あんな体型になるぞ」
かなり失礼な言葉である。だが彼女はその言葉をいたく気に入っている。
「つまり私みたいな体型になりたければ私の本を読めばいいのです」
彼女の自慢はその体型である。従ってそれについて言われることは実に喜ばしいことなのである。
こうしたことから彼女は今テーブルに運ばれてくる料理一つ一つに注意を払っていた。ポタージュの次はピスタチオの入った若鶏の丸焼きである。
フォークとナイフで切る。するとそこから肉汁が溢れ出てくる。そしてそれを口に運ぶ。口の中全体に鶏の肉と皮の味、そして香辛料の風味が漂う。
「これは中々」
カバリエは目を細めて感想を述べた。彼女の舌に合ったようである。
「連合でも鶏はよく食べられるそうですね」
ここでエルールが彼女に尋ねた。
「はい」
カバリエは笑顔で答えた。
「かなりポピュラーな食材ですね」
「そうですか」

「マウリアでもそうだとお聞きしておりますが」
彼女はここでマウリアに聞き返した。
「ええ、まあ」
彼等はそれに答えた。
「我が国では一番食べられることの多い肉でしょうね」
「そうらしいですね」
カバリエは当然の様に各国で何が食べられているかよく知っている。マウリアでは鳥がメインの肉料理なのも当然知っている。ヒンズー教徒が多いこの国では牛肉の類は食べられない。無論この席にも牛類のメニューはない。
八条はそのカバリエの横で黙々と食事を採っている。フォーク一つ扱う仕草にも気品と優雅さが感じられた。
(絵になるわね)
エルールは彼を見て心の中で思った。
(我が国にいたら今頃どれだけ人気が出たかしら)
実際彼は連合でも若い女の子や主婦、そして老婦人にまで人気が高かった。東洋的な洗練された美貌と理知的でバランスのとれた能力、そして穏やかな性格で女性の人気の的なのであった。だがやはり当の本人はそれには興味があまりない。むしろ男色家とのいわれなき噂がついていささか辟易している程である。
鶉の料理に三角のドーナツにした揚げパンが続く。ここでマウリアの側が一つのことに気付いた。
「そういえば内臓を取り扱った料理がありませんね」
「サハラでは動物の内臓は食べないのですよ」
カバリエはそれに対して言った。
「イスラムでは動物の血や内臓は食べませんので」
「それが少しわからないのです」
ラーンチは怪訝そうな様子で言った。
「確かイスラムは遊牧民の宗教であった筈ですが。商人の宗教であると共に」

ヒンズーでは元々肉料理よりも野菜類が多い。これはインドが農耕主体であるせいであったが、アラブは彼等とはまた事情が違うのである。そうなれば当然その戒律も違ってくる。
「確か連合では動物の内臓は極めてポピュラーな料理でしたね」
「ええ」
カバリエはラーンチの言葉に答えた。
「蹄も耳も尻尾も食べますよ」
「魚の内臓も良く食べられるそうですね」
エルールは八条に対して問うた。八条は彼女に話しかけられ一瞬戸惑ったようだがすぐに答えた。
「はい。海鼠の内臓も人気がありますよ」
「海鼠？」
これにはラーンチも目を丸くさせた。
「海に住む軟体動物です。固い歯触りがいいですよ」
「そうなのですか」
二人はそれが一体どういう生き物なのか、そしてどういう食べ方をするのかわからなかった。ただ首を傾げるだけであった。
「日本では生でよく食べます。内臓はこのわたといって珍味として人気があります」
「はあ」
二人にはやはりわからなかった。八条の説明にもただ首を傾げるだけだ。
「どうも日本の料理はわからないところが多いですね」
「そうですか？」
今度は八条が首を傾げる番であった。
「私はそうは思いませんが」
「マウリアでは生のものは食べませんし」
ラーンチが言った。
「それに内臓もあまり食べることはないですしね」
「はあ」

八条もそれはわかっているつもりだ。だが海鼠を不思議がられるのは少し以外であった。
「長官」
鶉を食べ終えたカバリエが八条に声を向けた。
「海鼠は連合でしか食べられませんよ」
実に楽しそうな顔であった。彼女は食べ物の話になると目の色が変わるのである。
「それもわかっているつもりですけれどね」
だが八条はどうしても納得できないようである。
「連合でも結構苦手な人が多いですし。そもそも生物を駄目だという人も案外多いですし」
「私は違いますけれどね」
カバリエはまずそう断ってから話をはじめた。
「それはそれぞれの風習なのですよ。日本では昔から海の幸をよく食べていましたね」
「はい」
八条は答えた。和食はそれで知られている。刺身にしろ寿司にしろそうだ。海の幸を使わない和食もあるがやはりメインであるのは事実だ。
「だから生物を食べることが多かったのです。けれど海から少し離れた場所だとそうはいきません。長官も日本人ならば鱧のことはご存知でしょう」
「ええ」
鱧は昔は京都でよく食べられた。夏の名物料理であり京都の有名な祭り祇園祭りは通称鱧祭りと呼ばれていた。歯が鋭く、獰猛な魚であるがその味はあっさりとしていて食べ易い。
「京都で何故鱧が食べられていたのかもご存知ですね」
「はい」
八条は答えた。京都は山の中にある。従って海の幸はない。これは京料理の弱点であった。

だが鱧は瀬戸内から運んでくることができる唯一の魚であった。だからこそ京都では鱧が人気であったのだ。
海から離れていると生物は食べられない。海の幸は当然海の側でしか食べることが出来ない。自明の理であるがこの時代ではそれが中々わからない。他の星の食べ物も容易に手に入る時代なのだから。
「それでおわかりだと思います」
「だから海鼠も生物もあまり食べられなかったということですね」
ラーンチがカバリエに尋ねた。
「そういうことです」
彼女はそれに対してコメントした。
「内臓や血もそれと同じでしょうね」
「傷み易いからですね」
「おそらく」
やはり彼女は食べ物にはかなり詳しい。伊達に食べているわけではなかった。
「そういえばそちらのカレーですが」
「はい」
八条はエルールの問いに顔を向けた。
「いつも思うのですがあれは一体どういう和食なのでしょうか」
「和食ですか」
「はい。何でも私共の料理だとそちらでは考えられているそうですが」
「ええ」
八条は答えた。
「そちらの国の料理ではないのですか？」
一千年以上も前から続いている議論がここでも起こった。

## 第六部第一章　星河の海その七

カレーというのは実に不思議な料理である。インドで食べられていた米にかける多くの香辛料を使った汁だがこれがイギリスに伝わったものである。

この時将兵に健康にいいものを食べさせようと必死になって考えていた日本海軍がこれに目をつけた。その時イギリス海軍はパンにこの汁、即ちルーをかけていたのだ。

だが日本では米である。パンにつけるものは汁気が多い。この汁気を減らして日本の米に合うようにしたのがカレーである。カレーは海軍から広まったものである。

日本人はこのカレーをインド料理だと信じて疑わない。だがインド人が実際にそのカレーを食べて評した言葉は次のようなものであった。

「変わった和食ですね」

これを聞いた日本人は目が点になったという。インド人はこれが自分達の料理だとは全く思わなかったのである。

同じことは日本人の料理においては実によく起こる。ハンバーガーにしろラーメンにしろだ。アメリカ人や中国人は日本で食べられるこれ等の料理を和食をみなしているのである。

(彼等と同じことを言うな)

八条はそれを聞きながら思った。マクレーンも劉もかって彼に殆ど同じことを言っていたのを思い出したのだ。

「少なくとも私はそう考えていますが」

八条は心の中で色々と考えながらエルールに答えた。それを聞いたエルールはまた実に不思議そうな顔をした。

「そうなのですか」

「はい」

「私にはちょっとそうは考えられないのですが。いえ」

彼女は言葉を続けた。
「マウリアの者でそう考えている者は多いと思いますよ」
「はあ」
八条にはこれが不思議でならなかった。ハンバーガーには海老や烏賊を、ラーメンも鰹節でダシをとるものがある。だからこれを和食としてもまだ説明がいく。だがカレーは流石に違うのではないかと考えているのである。
「私にはそれがどうしてもよくわからないのです」
八条は答えた。
「あれは確かにマウリアの料理だと考えていますので」
「そうなのですか」
エルールはやはり納得がいかなかった。首を傾げながらカバリエに顔を向けた。
「外相はどうお考えですか」
「私ですか」
話を振られたカバリエはフォークとナイフを止めた。
「ここは外相のお考えをお聞きしたいのですが」
「そうですね」
彼女は暫し考え込んだ。そして口を開いた。
「八条長官の言われることもエルール外相の言われることも真実であると思います」
「といいますと」
八条もエルールも彼女の次の言葉に注目した。
「確かにあれはインドの料理です。あのルーは」
「はい、その通りです」
八条はそのコメントに大きく頷いた。彼も幼い頃よりカレーを食べてきている。だからそれについての考えには譲れないものもあるのだ。
「ですが日本のアレンジも到底無視できない程入っているのも事実です」

「仰るとおりです」
エルールは満足したように頷いた。
「それ等を考えますとあのカレーは二つの見方ができるのです」
「二つの見方」
「はい。即ち日本のアレンジが入ったマウリア料理、そしてもう一つはマウリア風の和食です」
「どちらがどちらとは言えないわけですね」
八条もエルールもそれを聞きわかったようなわからないような顔をした。
「そういうことになりますね」
カバリエはそれに対して答えた。
「これはカレー自体のその時の調理の仕方によっても大きく変わります。実際にかなりマウリアのカリーに近い、若しくはそのもののカレーもあります」
「はい」
これには八条が頷いた。
「逆に極めて日本的なカレーもあります。汁気が少なく大豆から作られた醤油を使っているものです」
「はい」
これにはエルールが頷いた。
「そうしたふうに一概には言えないと私は考えます。そうして一括りに出来る程料理というものは簡単ではありません」
カバリエは優しい笑みを浮かべながら言った。
「それに私はどちらに寄っていても好きですよ、カレーは」
「成程」
二人はそこまで聞いて大いに頷いた。
「そうですね。目から鱗が落ちました」
八条は頷きながら言った。
「私もです。そう考えると分かり易いですね」
エルールもであった。彼女はようやくカレーとカリーについて悟

ったようである。
「カレーとは奥が深いものです。いえ、料理自体がそうですね」
カバリエはここで真理を語った。これがこの食事の決まりの言葉となった。
こうして食事は終わった。流れはカバリエが料理、とりわけカレーの話題でまとめたこともあり連合に流れていた。
（こうした流れの作り方もあるのだな）
八条は会議がはじまるとその場の空気を読みながら思った。
（軍や国防省ではこうしたことはないな）
彼等は戦場、そして閉じられた会議室で全てを決める。だからこうした話の流れの持って行き方は新鮮なものであった。
軍事においてはまずは知識だ。そしてそこから識見である。流れはそれをぶつけ合ってそこから生まれるものだ。
だが外交の交渉は違う。正規のテーブルに着くその前から既にはじまっているのである。
「我々の考えですが」
カバリエが口を開いた。
「この度の海賊の掃討に際してそちらの領域を通過する権限を頂きたいのです」
解放軍の掃討に関してであるのは言うまでもない。
「我が国のですか」
ラーンチがその言葉に眉を少し動かした。
「はい、彼等は貴国の領域も侵犯する場合もありますし」
「それは確認しています」
彼は答えた。
「ですが我等との間には相互の領域に軍を進める場合には多くの制約があるのですが」
「それはわかっております」
カバリエは答えた。連合とマウリアは昔から軍事条約を多く結んでいた。

例えば通過する際には常に識別信号や通信を発さなくてはならない。そして事前に何時何処に来るかも通報しておかなければならない。これは国際法の常識に添って決められていた。
「しかし軍事行動となるとそれ等は不可能でしょうね」
「はい」
それには八条が答えた。
「残念ながらそれは出来ません。ですから今回こうして交渉の場を設けさせてもらったのです」
「ふむ」
ラーンチはそれを聞き考え込んだ。既にわかっていたことだが実際に交渉の場で話を聞くとやはり考えてしまう。
「つまり今回は特例として認めて欲しいということですね」
「はい」
カバリエと八条はほぼ同時にそれに答えた。
「あの解放軍と称する海賊達は連合、マウリア双方にとって害となっております故」
「一時的なもので宜しいのです」
「ふむ」
二人はそれを聞いて考え込んだ。そしてそれから口を開いた。
「期限付きということでどうでしょうか」
「期限ですか」
カバリエはエルールの提案に反応した。
「はい。三ヶ月程なら宜しいと思います。あくまで私見ですが」
「三ヶ月」
カバリエはそれを聞き八条に顔を向けた。
「長官はこれについてどうお考えですか」
「三ヶ月ですか」
八条も考えていた。確かに期限としては悪くはない。だが若し海賊を掃討できなかった場合は問題が残る。彼等に逃げられてしまうからだ。

「そうですね」
「私としてはこの期間で問題はないと思いますが」
そう言うカバリエの目が光った。彼女はどうやらそれが手の打ち所だと思っているようである。
それは八条にもわかった。彼はそれを見て内心思った。
（それがいいかも知れないな）
彼もそれに傾いた。
（三ヶ月は海賊の掃討としては充分過ぎる時間だ。それにそれ以上の期間をかけると人員や費用の無駄だ）
戦いは起こったならば早急に終わらせるべし、この時代も変わることのない兵法の鉄則であった。
八条が国防長官に就任して以降海賊の掃討は迅速に行われていた。作戦発動から一ヶ月をかけたものはない。事前に準備を整え補給を万全にしてから大軍を以って一気に決めていた。彼は作戦発動までにそれよりも遙かに多くの時間をかけていた。
戦争は一朝一夕で為すものではない。その前に多くの動きがある。軍事行動を起こすにあたっては一人の兵士、一隻の艦艇が動くのにそれ以上の人員、艦艇、そして費用が必要なのである。古代の戦争にしろ為政者の思いつきで起こるわけでは決してないのである。無論例外もあるが。
それを考えると三ヶ月は充分過ぎる期間であった。だが今回の敵は今までの海賊達と比べるとかなり強力である。果たして三ヶ月でことを収めることができるのか。八条は実際には長期戦も覚悟していたのだ。
「ふむ」
彼は考え続けた。そしてようやく決意した。
「わかりました。それでいいと思います」
「ご理解していただき有り難うございます」
それを聞いたラーンチとエルールは笑みを浮かべた。
「作戦発動から三ヶ月でよろしいですね」

「はい、それでよろしいかと」
「わかりました。ならばこちらにも問題はありません」
彼はここで決めた。今後の作戦のおおよその予定を。彼は既に頭の中で幾つかのプランを考えていたのだ。スタッフと話し合い幾つか案を出させていたのだ。

## 第六部第一章　星河の海その八

ならばこの期間で終わらせるに相応しい作戦がある。彼はそれを実行に移すことにした。

それから細部の詰めに入った。マウリア領内を連合の艦艇が自由に通過する権限、基地の借用、行動に対する機密の保持等が決められた。ただし連合軍がマウリア領内で犯罪行為を犯せばすぐにマウリア軍に引き渡されることとなった。これはやはり同盟国に対する配慮であった。これはカバリエも八条も当然のこととして認識していた。

「あとお聞きしたいのですが」

一通り話が終わったあとでラーンチが口を開いた。

「何でしょうか」

八条がそれに尋ねた。

「今回は連合軍だけで動くようですが我が軍の直接の協力は必要ありませんか」

すなわち共同作戦である。八条もカバリエもそれを聞き表情を変えた。

「そうですね」

八条が答えることになった。やはりここは軍事のトップの出番であった。

「先程のお話で決めた後方支援だけでいいです。彼等は元々連合の領域にいますし」

「しかし我が国の領域にも侵犯しますし我が国からも構成員が入っているようですしね。それで言わせて頂いたのですが」

「そうなのですか」

実はこれは駆け引きであった。八条はある程度これを読んでいた。

そして次の言葉も用意していた。彼はその言葉を出した。

「では陽動の兵をお願いします。彼等が逃げ込むような場所に布陣

させて頂くだけでいいです」
「彼等を追い詰める為にですね」
「はい、その際の指揮権ですが」
「それはニューデリー条約に倣うことにしましょう」
「そうですね。それが一番問題がないでしょう」
ニューデリー条約とは連合とマウリアが同盟を結び共に宇宙に進出する際に結ばれた軍事条約である。主に指揮権について定められたもので両軍が共同作戦を実施する際は階級、任期が上の者が指揮を執ることとなっていた。これは両軍の関係が対等であることを示していた。
「我が軍は中将クラスの人物を派遣するつもりです」
ラーンチは言った。
「わかりました」
八条はそれを了承した。連合においては艦隊司令は大将である。その上で総指揮を執るのは元帥しかいない。連合においては上級大将は存在しない。元帥は巨大な軍であるが案外少ない。これは連合の兵制の関係である。連合軍設立の前は国ごとに少し違っていたがそれをまとめたのだ。上級大将はサハラやエウロパに存在する。サハラとはまた兵制が異なる。エウロパは貴族が存在するので彼等のポストを考慮して必然的に将官の階級が多くなるのだ。
連合各国の特徴としては下士官の階級が非常に多いことであった。エウロパやサハラ各国においては伍長、軍曹、曹長と三階級しかない場合が多いが連合は違うのだ。これはやはり彼等の軍隊が皆一般市民による志願制であるせいであった。
将校が尉官、佐官、将官それぞれ準、少、中、大の四つである。それは袖の金モールで現わされる。これはかっての海軍のものを踏襲している。
准尉は二つある。准尉と准尉長。准尉長になるのは准尉の中でも古い者がなる。
下士官であるがかなりややこしい。兵士が二等兵、一等兵、兵長

の三つだけであるのに対して何と伍長だけで四階級存在する。一等から四等までである。軍曹もだ。その上に第一軍曹がある。その十二階級の上に曹長が存在する。これも四つある。

まずは普通の曹長。そして上級、最上級と上がっていく。最上級で終わりかというとそうではない。何と連合軍付最上級曹長というものまであるのだ。ここまで達する者は流石に僅かである。軍内においては主の様な存在であった。

そうした事情があるが元帥は少ないのだ。エウロパと比して三十倍程の差がある規模であるのにその数はむしろエウロパのそれより少ない。エウロパが五十人を超えるのに対して連合は三十人程である。貴族の有無も大いに関わっているのは言うまでもないにしろかなりの差があるのは歴然としていた。

それぞれの国によって軍の在り方は違う。連合の軍編成はそれが最も顕著に出ていた。

ちなみにマウリアは下士官は四つである。伍長と軍曹、一曹、そして曹長である。将校は大中小三つずつに准将が存在する。元帥もあるが四人までと定められている。

「これで決まりですね」

「はい」

会議は終わった。こうして連合は解放軍掃討に対して作戦発動から三ヶ月のマウリア領内での通行の自由と基地の使用、そしてマウリア軍の支援を得られた。彼等にとって満足すべき結果であった。

双方はホテルから撤収にかかった。席を立ち部屋を後にしようとする八条に後ろから声をかける者がいた。女性の声であった。

見ればエルールであった。彼女はにこやかな顔で八条を見ている。

「どうしました」

八条は穏やかな物腰で彼女に言葉をかけた。

「いえ」

彼女はまだ笑っている。何やら思わせぶりな笑みであった。

「お時間はおりでしょうか」

「ええ、まあ」
彼は答えた。実際に時間はある。ハサンを発つのは明日の夕刻だからだ。
「少しお話をしたのですが。宜しいでしょうか」
「はい」
彼は彼女の笑みが何故なのかよくわからなかったがそれを了承した。エルールはそれを受けるとまた笑った。そして二人は別室でお茶を飲みながら話をはじめた。
二人は紅茶を飲んでいた。サハラではコーヒーが主流だが茶も飲まれないわけではないのだ。ハサン北方のある星原産の高級茶であるらしい。
それにミルクを入れて飲む。熱いミルクである。
「ロイヤルミルクティーですね」
「はい」
エルールは答えた。
「本来はイギリスの飲み物ですが気に入っておりまして」
「ほう」
「朝や休憩の時にはいつもこれなんです」
「中々いいご趣味ですね」
「長官もお好きですか？」
「紅茶はどれも好きです。連合でも紅茶はよく飲まれていますよ」
「そうなのですか」
「まあ我々は他にも色々と飲みますが。コーヒーも飲みますし」
「そういえば日本ではお茶は昔からよく飲まれていますね」
「ええ。緑茶ですけれどね」
八条もお茶は好きである。話に身が入ってきた。
「紅茶とはまた違った美味しさがありますよ」
「そうなのですか」
マウリアでは緑茶は飲まれない。料理に合わないせいだ。
お茶は案外食べ物を選ぶ。緑茶には和菓子が合うが紅茶にはケー

キが合う。とりわけ菓子は選ばれる。何故なら菓子は茶と共に発展してきたからだ。
「他にも麦茶や玄米茶もありますよ」
「何か色々とありますね」
「我が国だけでもかなりありますね。中国やインドネシアもかなりの種類のお茶がありますよ」
「そうなのですか」
話を聞くエルールの目が輝いていた。
「一度全部じっくりと飲んでみたいものですね」
「輸入はされていないのですか？」
「ええ。我が国は食べ物や飲み物に関しては非常に保守的で」
「ほう」
連合ですら他の国の料理はエスニック料理と考える傾向がある。これも当然であった。
「そうしたものは輸入してもあまり売れないのです。貴方達にとっては残念なことかも知れませんが」
「ははは、確かに」
八条はそれを聞いて笑い声をあげた。
「各国の通商部や商務部はかなり頭を抱えていますよ。マウリアには食べ物が売れないと」
「そうでしょうね」
これで交渉にあたっても上手くはいかないのだ。連合とマウリアではあまりにも価値観が違い過ぎるのだ。
これはその中のほんの一例であるがチリの企業家がマウリアに発注した商品の納品が一年遅れた。流石にたまりかねた彼はその受注先の企業に抗議したのだ。だが彼はこう言い返された。
「期日があっていますからよいのではないですか？」
見れば品物が届いたのは予定された月日であった。一年遅れていただけであった。
「一年も遅れて何が期日だ！」

彼は当然の様に烈火の如く怒った。だがそのマウリアの企業家は平然として答えた。
「一年なぞ大したことではありませんよ」
「一年の何処が大したことがない！」
彼はさらに怒った。だがそのマウリア人は全く焦ることなくこう言った。
「宇宙の時の流れに比べれば些細なことです」
流石にそのチリの企業家も言葉をなくしたもう怒る気も失せてしまった。
マウリア人にとって時間は悠久のものである。今生きている時間もだ。輪廻する為時間は永遠のものであると考えているのだ。
「私と貴方は前世の巡り合わせが悪かったからこうなったのです。気にしてはいけませんよ」
マウリア人はよくこう言う。そして連合の者の怒りを宥めるのだ。だがそれは宥めるというよりも呆然とさせる類のものであった。そして連合ではマウリアは完全に異文化地域であった。
「異種人と大して変わらないのじゃないか」
こうした意見もある程だ。無論冗談であるが。
「異種の知的生命体の方がわかりあえるのではないか」
そしてこういう意見も出る。彼等と連合はそれ程かけ離れているのだ。だからこそ彼等は連合に加わることがなかったのである。連合とマウリアが同盟を保ちながらも何処か疎遠なのはこうした事情があるのだ。
それが食べ物にも出るのだ。彼はそれについて言ったのである。
「代表的な例では牛類は駄目ですね」
「ええ」
ヒンズーの教えである。牛は神の使いなのだ。だから食べてはいけない。日本のカレーが何故マウリアの者に自分達の料理とみなされないかというと牛肉が入っているからというのもその理由の一つであった。

「他にも色々と戒律がありまして」
「はい、それは知っています」
アッディーンは答えた。
「私もよくは知りませんが」
「けれどミルクを飲むのはいいのですよ」
「そうなのですか」
「神聖な飲み物です」
マウリアでは紀元前よりミルクを飲んでいた。釈迦もミルクで味付けをした粥で命を永らえている。
「日本では食事に対するタブーはあまりありませんね」
「ええ、昔は肉食は基本的に禁じられていましたから」
「それで大豆を食べていたのですね」
「ええ」
豆腐やそういったものである。肉食も禁じられているとはいえ鳥や魚はよかった。四足のものも色々と抜け道があった。牡丹鍋なぞがその例である。かって猪はモモンガの仲間とされていた。モモンガは空を飛ぶので獣とは認識されていなかったのである。
「まあそれでも食べていましたけれどね」
八条もそれに言及した。
「ただその影響で羊は食べられませんでしたね。山羊は沖縄で食べていましたが」
「羊ですか」
「ええ。今ではかなりポピュラーになっていますけれどね。昔は匂いがするといって好かれていなかったそうです」
「あの匂いがいいという人が多いのに」
「私もそう思います。他の国の料理ではよく使いますね、特にモンゴルやオーストラリアで」
モンゴルは主に煮る、そしてオーストラリアは焼く。オーストラリアのラガーマンはその巨体は羊の肉でできている、とまで言われている。実際に彼等は練習でも羊を使う。両脇にそれぞれ一匹ずつ

抱えそれでダッシュをするのだ。これはかなりハードな練習である。
「私はラムが好きですね」
「匂いもきつくないし」
「いえ、柔らかいからです」
彼は微笑んで答えた。
「それに刺身にもできますし」
「えっ」
エルールはそれを聞き一瞬言葉を詰まらせた。
「刺身でですか」
「ええ。美味しいですよ」
「魚だけでなく」
「はい。他にも蛙もそうして食べますが」
彼は別段変わったところはなく話した。
「美味しいですよ、豚もそうして食べますし」
「豚は流石に危ないのでは？」
「新鮮なものだけです。古いのは食べられませんよ」
「それはそうでしょうけれど」
彼女は言葉を失っていた。あらためて日本人の食生活に驚きを覚えていた。
「和食というのは奥が深いですね」
「そうでしょうか」
八条はそう言われいささか意外だというような表情を作った。
「よく言われますが他の国の料理と変わりませんよ」
「はあ」
だが彼女の驚きは収まらなかった。やはり信じられなかった。マウリアでは生の肉は食べない。ましてやそれを喜んで食べるとは。彼女の理解の範囲を超えていた。
「まあ飲みましょう」
だがそれは心に納めた。そして八条に茶を勧めた。
二人は茶とケーキを楽しみながら談笑を続けた。そして話を終え

別れた。
エルールはマウリアに帰る時ふとランチに漏らした。
「外相、日本人というのは変わったものを食べますね」
「！？」
不意に言われた彼は戸惑いを覚えるのであった。
何はともあれ両国の交渉は終わった。連合はマウリア領の航行の自由と後方支援を受けることになり解放軍征伐の準備を着々と整えるのであった。

# 第六部第二章　害虫その一

害虫

マウリアとの交渉を含め解放軍と討つ準備を着々と進める八条であったが彼には今一つの悩みが生じていた。

「またあの男か」

中央政府議会の放送を見ながら苦い顔をした。そこには一人のアジア系の男が演説をしていた。

「何故今中央政府はこの様に性急な軍備拡大を執り行うのか私は深い疑念を覚える」

かん高い声でまるで喚く様に言っている。アジア系の顔だが肌は白い。髪は灰色だ。ドブ鼠の色そのままのスーツに身を包み、卑しそうな顔立ちに血の気のない顔色をしている。

この男の名を山口義彦という。日本出身の中央政府議員である。所属する政党はない。

おそらくこの男程評判の悪い男もいないであろう。金融業を営んでいるがその本質は闇金融である。規格外の利子で貸し付け、暴利を貪っているらしい。裏での話なのでそれは誰にもわからない。あくまで噂である。だがこれで多くの者が首を吊ったと言われている。他にも色々と営んでいるがどれも極めて汚い商売で知られている。職業ではない、やり方が汚いのだ。金の亡者とまで言われている。

手癖も悪く採用したばかりの女性の秘書を個室で押し倒したとも言われている。社員へのセクハラの日常茶飯事だという。

議員になったのも金を使ったと言われている。以前から買収や癒着の噂が耐えなかった。今も闇商人の大元締めとまで言われている。

そうした男だが今どういうわけか八条の解放軍への掃討作戦を批判している。しかも軍備拡張まで叩いているのだ。

「この男は確か裏で武器の密売もしているのだろう？」

後ろに立っている秘書の木口に問うた。

「あくまで噂ですよ」
木口は答えた。
「証拠はありません」
「そうだったね、証拠はない」
八条は不機嫌そのものの顔で言った。
「限り無く黒でも黒だという証拠はない。悔しいことだが」
「ただ一つ不思議なことがあります」
「何だい？」
「彼は何故解放軍との戦いをここまで頑強に反対するのでしょう。理由がわかりません」
「そうだな」
八条はそう言われ考え込んだ。
「その解放軍とでもつながりがあるのじゃないかな。これも証拠がないが」
「まあそんなところでしょうね。しかしそれでよくもまあ正義面ができるものです」
「悪人程正義の仮面を被りたがるというけれどね」
八条は憮然とした顔で述べた。
「それも卑しい悪人程」
彼はこの男が嫌いであった。同じ日本人であるがそれだからこそ許せないと考えていた。
「第二次世界大戦の後日本には卑しい人物が知識人やマスコミ、社会主義政党に雨後の筍の様に姿を現わしたそうだけれど」
「はい」
木口もそれは知っている。
「恥ずべき歴史ですね。敗戦はどの国でもあることですが」
「うん」
八条はその言葉に頷いた。
「むしろあした輩共の跳梁跋扈を許した方が問題です。おかげで我が国は今だにマスメディアの横暴と腐敗、知識人の危険性につい

て語られるうえで不可欠の存在になっています」
「それはおそらく今後も続くだろうね。人類の歴史がある限り」
「残念なことです」
「だがその時はそうは思われなかった。マスコミは正義で政府は悪だった」
「またえらく単純な二元論ですね。そんなもの子供でも笑い飛ばしますよ」
「マスコミとは本来そうしたものだろう。自分達に絶対の正義があると確信して報道する。しかし」
「それが腐敗のもとなのですね」
「そういうことになるね」
八条は答えた。
「彼等は自分を疑うことがない。そうすればそこに驕りが生じる。しかも情報を独占し、僅かな者達の間に金が集中する。そのうえそれをチェックする存在はない」
「腐敗しない方が不思議ですね」
「我が国のあの時のマスコミは特にそうだった」
彼はさらに苦い顔になった。
「しかもリーダーは老害と化していたしね」
「確か独裁者とまで揶揄されていたそうですね」
「仇名まで貰ってね」
本来民主主義の砦である筈のマスコミの、しかもそのトップが独裁者とまで揶揄されていたのである。ある異常な独裁国家の国家元首と比較され『将軍様』とまで呼ばれていた者もいた。この男はあらゆる分野に介入し、己の私利私欲に邁進した。最後は真の意味で正義に燃える者達に裁かれ、生きたまま八つ裂きにされた。そして死体は曝され、彼の汚い仲間共も同じようにされた。国民はこの男の死を祝い、大規模な祝賀会を開いた程であった。それまでに犯した星の数よりも多い罪をそうして償わされたのである。
「私はそれについて読む度に不思議に思います」

「何故だい？」
「いえ、確かに敗戦の反動という事情があるにしろ何故マスコミや知識人がここまで権力を握ったかです。彼等に力や権威があるのは事実ですがあまりにも肥大化し過ぎです」
「それだけ当時の我が国は民主主義として未熟だったのかな。いや、違うな」
八条は考えをあらためた。
「当時はそうした状況だったんだ。情報を彼等だけが独占する。知識もね」
「神の様な存在だったのですか」
「権力はね。だがそれだけの権力を持つとどうなるか。神ならざる我々が」
「それに溺れます」
「そういうことだね。だから彼等は腐敗した。そしてそれは何時の時代でも言えることだ」
「はい」
木口は頷いた。実際に今でも力のある場所には腐敗がつきまとう。これは人間の悲しむべき宿命の一つである。
「当然我々もね。それは人それぞれだけれど」
少なくとも八条にはそうした腐敗はない。元々裕福な名家に生まれ軍人として育ったせいだろうか。そうしたこととは無縁であった。
「中には彼のような者もいるのも事実だ」
そう言ってテレビに映る山口を指差した。
「それも世の中だ。だからといって彼が許される存在ではないとは思うが」
「その通りです」
木口もそれに同意した。
「まあ今は彼は無視していよう。それよりも彼が嫌う作戦を進めなくてはね」
「はい」

「マウリアとの交渉も終わった。そして議会だが」
「彼とその一派を除いて殆どが賛成しそうですね」
「ああ。それと並行して補給、後方支援の準備を整えておこう。どのみちそちらは整備しておかなくてはならない」
「そうですね、これからのことを考えると」
「火急の際に連合内のあらゆる場所で即座に対応できる、そうでなくては駄目だ。だからこその整備だ」
「はい」
「戦いは戦場だけで行われるものじゃない。後方でも行われるものだから」
「常に万全の状況で戦うことのできる状況を確立しておかなくてはなりませんね」
「うん。これからそのことでまた会議だよ」
「後方支持部長達とですね」
「ああ。また頭の痛い問題ができるかもね」
「それはわかっていることでしょう」
「確かにね」
その笑みは苦笑が混じっていた。
「これも国防長官の務めなのかな」
「その通りです」
木口は素っ気無い声で答えた。
「またあっさりと答えてくれたね」
「当然のお話ですからね」
「まあそれもそうだが」
八条の苦笑は止まなかった。
「時間になったら行くか」
「はい。それにしても」
「それにしても・・・・・何だい？」
「いえ、我が軍も色々と役職があるものだと思いまして」
「軍隊とはそういうものさ」

今度は八条が素っ気無い声で答えた。

## 第六部第二章　害虫その二

連合軍の役職はまずトップとして統合作戦本部長がある。制服組のトップだけではなく連合軍の最高司令官である大統領、そしてその代理を務めることもある首相や実質的な権限者である国防長官を補佐する。

連合の特色としては文民統制であることである。各艦隊や軍管区、そして統合作戦本部にもかなりの権限が与えられてはいるが最終的な決断は彼等が下す。軍人はそれから動くのである。

統合作戦本部長は当然ながら元帥が務める。連合における元帥はあくまで軍の階級の最高位のものであり特権等はない。エウロパの様に元帥府を開き幕僚達を集めることは出来ないのである。

統合作戦本部次長も存在する。これは本部長を補佐し、非常時には本部長代理を務める。やはり階級は元帥である。

そして参謀総長、宇宙艦隊司令長官が存在する。彼等は幕僚、実戦部隊の総指揮にあたる。彼等の階級も元帥である。

他に元帥が就任する役職は各軍管区の総監である。全部で十の軍管区に分けられその下に三百の艦隊が存在する。彼等はその軍管区の艦隊及びその他の部隊を統括する。その他にその三百の艦隊をそれぞれ指揮する司令もいるがこれも元帥である。

そして後方支持部長、教育総監、情報部長、技術部長等後方を司る役職にも置かれている。他の国ではそれ程重要視されていないこれ等の役職だが連合においては元帥が置かれる程重要視されている。これが連合軍の特色であった。

最後に陸戦部隊、航空部隊の総監がいる。連合軍の最高幹部は三十人の元帥で構成されているのだ。

軍の巨大さを考えるとそれ程多くはない。むしろかなり少ない。これは連合軍の特色であった。

エウロパは連合軍より遙かに多い。これはエウロパの国家元首で

ある総統の権限が大きく、各国の王室との関係、そして貴族達の存在から元帥が多くなるのだ。元帥府があるのも貴族制の故であるが流石に軍閥化を防ぐ為文民統制、移動はある。
連合とエウロパはその国家システムの違いから軍の編成までまるで異なっていた。これは彼等が互いを蔑視する原因の一つともなっていた。こんなところまで彼等は互いを批判する材料になっていた。
連合はエウロパを貴族主義の弊害の集大成だと言う。それに対してエウロパは連合こそ大統領や国防長官ばかりが権限を握る硬直化した軍だと言う。両方共そういった見方ができるのも事実であるし否定することもできない。それもまた事実であった。
「結局我々は単にエウロパを批判したいだけなのだ」
軍の幹部の一人がこう言ったこともある。
「我々にだって問題はある。それは否定できない」
彼は続けてこうも言った。
「しかしな」
だがここで何故か不敵に笑った。そしてこう言った。
「エウロパを批判することは止められないな。我々にとって彼等は批判する材料なのだから。常に存在する反面教師だ」
それが結論であった。連合とエウロパは互いを批判しながらも学び合い、そこから何もかもを作っているのだ。彼等はまさしく双子であった。そういう意味からは。
「我々と彼等は案外似ているのかもな」
八条もそう考える時がある。彼は連合においては非常に珍しい貴族的な雰囲気を持つ人物とされていた。連合においては多くの王国、そして所謂帝国が存在するが貴族的な感じを残しているのは日本位である。
ロシアもそうした雰囲気を残せたのだが二十世紀の共産革命で妙な方向に流れた。今ロシアは力自慢の国とみなされている。ロシアのそうした一面が異様にクローズアップされる状況となってそのまま定着してしまった。アメリカや中国にはその様なものはない。他

の国にでもある。元々欧州から独立した国や苦しめられた国が殆どである。彼等にとって貴族とはそうした意味でも忌まわしいものであった。

だが日本は違う。欧州の勢力の支配下にあったことはない。そして皇室の存在があり、独特の文化があった。その為貴族的な文化も僅かながら継承されたのである。

二十世紀後半から二十一世紀初頭には絶滅寸前であったがそれが見直されたのだ。それが今の日本の文化風俗に影響したのだ。

それが日本をして連合内でも一種独特な雰囲気を持つ国にしていた。その為時には『連合の中のエウロパ』と呼ばれたり『連合の異端児』と揶揄されることもあった。当然爵位などというものは存在しないがそうした雰囲気だけでも連合においては異様なものなのである。

その象徴が皇室である。だがあまりにも一言で語るには複雑なのでこれについて言及する者はあまりいない。八条は今では日本のそうした一面の代表者の様に言われていた。

「そんな貴族的かな」

八条はそうしたことを聞くと時々そう思ってしまう。

「私はそうは思っていないのだけれど」

だが他の者、特に異性からはそう認識されているのだ。これも難しい問題であった。

しかしそれが彼の評判に影響しているかというとそうではなかった。連合内でもエウロパの貴族的なものを真似てみたりそのゆるやかな生活に何処か憧れを持つ者もいた。その底ではやはり連合市民であっても。人は時としてそうした異質なものに憧れるものなのである。

そう、異質であった。日本も八条もそうした意味で何処か異質であった。だが連合においては異質な存在は実に多い。個性を重要視するこの勢力においてはそうでないと目立つことはできないし自己主張もままならないのだ。その視点から考えると八条の貴族的な外

見は有利であり、日本の異質さもいいことであった。話はそうそう単純なものではないのである。
「さて」
彼は考えを止め席を立った。時間が来たのだ。
「行って来るよ。連絡があったらよろしく」
「わかりました」
木口は答えた。そして彼は会議室に向かった。
「ようこそ」
会議室に入ると既に他の者は皆来ていた。統合作戦本部長並びに今回の作戦に関係のある軍の最高幹部達である。
「長官、お待ちしておりました」
青い目に蜂蜜色の髪をした中背ながらがっしりとした筋肉質の男が彼に声をかけた。連合軍統合作戦本部長であるスブタイ＝バール元帥である。モンゴル出身である。
本来遊牧民であるモンゴル人は姓だけで名はなかった。だが宇宙に進出し、他の国々の文化を知るにあたって姓を持つべきであるという考えが定着した。そしてモンゴル人達も姓を持ったのである。
スブタイが名でバールが姓である。アジア系だが名前の付け方は西洋風となった。これはロシアの影響もあった。
彼はモンゴルにおいて海賊との戦いで功をあげた実戦派である。連合軍設立にあたって八条が彼を統合作戦本部長に任命したのだ。アメリカや中国、そしてロシアとの意見調整が大変であったが彼はあくまで自分の考えを押し通した。ここで退いてはこれからのことにも影響があるのは明白であったからだ。
彼はあくまで能力や適正を考えて人事を行った。そうでなくては本当に意味で強い軍隊になれず、今後も何かと各国の介入を受けるからだ。
そして彼の人選は正解であった。バールは統合作戦本部長として実に有能であった。
鷹揚で人に驕らず、決断力も状況判断力も戦略眼も備えていた。

彼にとって優秀な補佐役でもあった。
そして参謀総長。これは劉が就いた。宇宙艦隊司令長官はマクレーンであった。これも適正を考慮してのことである。彼等も連合軍元帥に昇進していた。
彼等もこの席にいた。そして統合作戦本部次長、後方支持部長も出席していた。
後方支持部長はコアトルが就任していた。彼は補給関係の専門家でもあるからだ。
そして次長であるが黒い日に焼けた肌に小柄な身体の男である。彼の名はスワラム＝マナドという。インドネシア出身である。彼もまた八条が選んだ。
そして最後に情報部長であるスティーブン＝ディカプリオである。この会議の出席者の中では八条を除けば最も若い。まだ三十代後半である。

## 第六部第二章　害虫その三

連合軍の役職はまずトップとして統合作戦本部長がある。制服組のトップだけではなく連合軍の最高司令官である大統領、そしてその代理を務めることもある首相や実質的な権限者である国防長官を補佐する。

連合の特色としては文民統制であることである。各艦隊や軍管区、そして統合作戦本部にもかなりの権限が与えられてはいるが最終的な決断は彼等が下す。軍人はそれから動くのである。

統合作戦本部長は当然ながら元帥が務める。連合における元帥はあくまで軍の階級の最高位のものであり特権等はない。エウロパの様に元帥府を開き幕僚達を集めることは出来ないのである。

統合作戦本部次長も存在する。これは本部長を補佐し、非常時には本部長代理を務める。やはり階級は元帥である。

そして参謀総長、宇宙艦隊司令長官が存在する。彼等は幕僚、実戦部隊の総指揮にあたる。彼等の階級も元帥である。

他に元帥が就任する役職は各軍管区の総監である。全部で十の軍管区に分けられその下に三百の艦隊が存在する。彼等はその軍管区の艦隊及びその他の部隊を統括する。その他にその三百の艦隊をそれぞれ指揮する司令もいるがこれも元帥である。

そして後方支持部長、教育総監、情報部長、技術部長等後方を司る役職にも置かれている。他の国ではそれ程重要視されていないこれ等の役職だが連合においては元帥が置かれる程重要視されている。これが連合軍の特色であった。

最後に陸戦部隊、航空部隊の総監がいる。連合軍の最高幹部は三十人の元帥で構成されているのだ。

軍の巨大さを考えるとそれ程多くはない。むしろかなり少ない。これは連合軍の特色であった。

エウロパは連合軍より遙かに多い。これはエウロパの国家元首で

ある総統の権限が大きく、各国の王室との関係、そして貴族達の存在から元帥が多くなるのだ。元帥府があるのも貴族制の故であるが流石に軍閥化を防ぐ為文民統制、移動はある。
連合とエウロパはその国家システムの違いから軍の編成までまるで異なっていた。これは彼等が互いを蔑視する原因の一つともなっていた。こんなところまで彼等は互いを批判する材料になっていた。
連合はエウロパを貴族主義の弊害の集大成だと言う。それに対してエウロパは連合こそ大統領や国防長官ばかりが権限を握る硬直化した軍だと言う。両方共そういった見方ができるのも事実であるし否定することもできない。それもまた事実であった。
「結局我々は単にエウロパを批判したいだけなのだ」
軍の幹部の一人がこう言ったこともある。
「我々にだって問題はある。それは否定できない」
彼は続けてこうも言った。
「しかしな」
だがここで何故か不敵に笑った。そしてこう言った。
「エウロパを批判することは止められないな。我々にとって彼等は批判する材料なのだから。常に存在する反面教師だ」
それが結論であった。連合とエウロパは互いを批判しながらも学び合い、そこから何もかもを作っているのだ。彼等はまさしく双子であった。そういう意味からは。
「我々と彼等は案外似ているのかもな」
八条もそう考える時がある。彼は連合においては非常に珍しい貴族的な雰囲気を持つ人物とされていた。連合においては多くの王国、そして所謂帝国が存在するが貴族的な感じを残しているのは日本位である。
ロシアもそうした雰囲気を残せたのだが二十世紀の共産革命で妙な方向に流れた。今ロシアは力自慢の国とみなされている。ロシアのそうした一面が異様にクローズアップされる状況となってそのまま定着してしまった。アメリカや中国にはその様なものはない。他

の国にでもある。元々欧州から独立した国や苦しめられた国が殆どである。彼等にとって貴族とはそうした意味でも忌まわしいものであった。

だが日本は違う。欧州の勢力の支配下にあったことはない。そして皇室の存在があり、独特の文化があった。その為貴族的な文化も僅かながら継承されたのである。

二十世紀後半から二十一世紀初頭には絶滅寸前であったがそれが見直されたのだ。それが今の日本の文化風俗に影響したのだ。

それが日本をして連合内でも一種独特な雰囲気を持つ国にしていた。その為時には『連合の中のエウロパ』と呼ばれたり『連合の異端児』と揶揄されることもあった。当然爵位などというものは存在しないがそうした雰囲気だけでも連合においては異様なものなのである。

その象徴が皇室である。だがあまりにも一言で語るには複雑なのでこれについて言及する者はあまりいない。八条は今では日本のそうした一面の代表者の様に言われていた。

「そんな貴族的かな」

八条はそうしたことを聞くと時々そう思ってしまう。

「私はそうは思っていないのだけれど」

だが他の者、特に異性からはそう認識されているのだ。これも難しい問題であった。

しかしそれが彼の評判に影響しているかというとそうではなかった。連合内でもエウロパの貴族的なものを真似てみたりそのゆるやかな生活に何処か憧れを持つ者もいた。その底ではやはり連合市民であっても。人は時としてそうした異質なものに憧れるものなのである。

そう、異質であった。日本も八条もそうした意味で何処か異質であった。だが連合においては異質な存在は実に多い。個性を重要視するこの勢力においてはそうでないと目立つことはできないし自己主張もままならないのだ。その視点から考えると八条の貴族的な外

見は有利であり、日本の異質さもいいことであった。話はそうそう単純なものではないのである。
「さて」
彼は考えを止め席を立った。時間が来たのだ。
「行って来るよ。連絡があったらよろしく」
「わかりました」
木口は答えた。そして彼は会議室に向かった。
「ようこそ」
会議室に入ると既に他の者は皆来ていた。統合作戦本部長並びに今回の作戦に関係のある軍の最高幹部達である。
「長官、お待ちしておりました」
青い目に蜂蜜色の髪をした中背ながらがっしりとした筋肉質の男が彼に声をかけた。連合軍統合作戦本部長であるスブタイ＝バール元帥である。モンゴル出身である。
本来遊牧民であるモンゴル人は姓だけで名はなかった。だが宇宙に進出し、他の国々の文化を知るにあたって姓を持つべきであるという考えが定着した。そしてモンゴル人達も姓を持ったのである。
スブタイが名でバールが姓である。アジア系だが名前の付け方は西洋風となった。これはロシアの影響もあった。
彼はモンゴルにおいて海賊との戦いで功をあげた実戦派である。連合軍設立にあたって八条が彼を統合作戦本部長に任命したのだ。アメリカや中国、そしてロシアとの意見調整が大変であったが彼はあくまで自分の考えを押し通した。ここで退いてはこれからのことにも影響があるのは明白であったからだ。
彼はあくまで能力や適正を考えて人事を行った。そうでなくては本当に意味で強い軍隊になれず、今後も何かと各国の介入を受けるからだ。
そして彼の人選は正解であった。バールは統合作戦本部長として実に有能であった。
鷹揚で人に驕らず、決断力も状況判断力も戦略眼も備えていた。

彼にとって優秀な補佐役でもあった。
そして参謀総長。これは劉が就いた。宇宙艦隊司令長官はマクレーンであった。これも適正を考慮してのことである。彼等も連合軍元帥に昇進していた。
彼等もこの席にいた。そして統合作戦本部次長、後方支持部長も出席していた。
後方支持部長はコアトルが就任していた。彼は補給関係の専門家でもあるからだ。
そして次長であるが黒い日に焼けた肌に小柄な身体の男である。彼の名はスワラム＝マナドという。インドネシア出身である。彼もまた八条が選んだ。
そして最後に情報部長であるスティーブン＝ディカプリオである。この会議の出席者の中では八条を除けば最も若い。まだ三十代後半である。

## 第六部第二章　害虫その四

彫刻を思わせる整った顔立ちをしている。鼻は高く、彫りが深い。口元もきりっとしており見事な金髪も豊かであった。だが彼の特徴はそれだけではなかった。

彼の最大の特徴はその眼であった。左右で色が違うのだ。

右目は青で左が緑であった。ごくごくまれにいるフェアリー＝アイズであった。それが彼の美貌を更に引き出していた。

「右目は父の、左目は母のものです」

彼はそれについて聞かれるといつもこう言う。彼の両親はカナダ人であり彼の国籍もそうである。

確かに彼の父の目は青かった。そして母の目は緑であった。二人共コーカロイドに血が強く、彼の肌も白く、顔立ちもそれであった。だがやはりアジア系の雰囲気もあった。体毛が薄いのである。連合の者はエウロパの者と違い微妙に肌の色が濃かったり、体毛が薄かったりする。これも混血の影響であった。

そのせいか連合においては毛深い男はあまり好まれない傾向にある。中にはそれがいいという人もいるがどちらかというと好まれない。それが不服な者もいるが。

彼はその混血の成功といってもよかった。整った顔にその二つの眼は異性の心をとらえずにはいられなかった。彼もそれを拒まず色々と浮名も多い。

「カナダ人というのは大人しいイメージがあるが」

軍の中では彼の派手な女性遍歴に戸惑っている者が多かった。

「あれではまるでエウロパのイタリア人じゃないか。よくもまああれだけ続くものだ」

「未婚の女性としか付き合っていないからいいじゃないですか」

ディカプリオはしれっとしてこう反論する。ちなみに彼の父方のルーツはイタリアにあるという。この姓はそこから来ているのであ

る。
「イタリア人か」
八条も彼等の気質については知っていた。
「羨ましいな。ああした生き方も」
女性には極めて奥手な彼はそう思う時もある。だがそうはなれないのが人間というものだ。急に変わることは極めて難しいのだ。
だから今も独身であった。人気があるのに、だ。パーティーでも常に女優やモデルが側にやって来る。だがそんな花達にも何もしない。ディカプリオとは正反対であった。
「情報部長には情報部長の付き合い方があるな。私には私の」
そしてこう結論付ける。結局話はそれで終わってしまうのだ。
彼は席に就いた。そして一同を見回した。
「さて皆さん」
その場に集まった連合軍の最高幹部達の目が彼に集中する。彼はそれを感じながら言葉を続けた。
「今回集まって頂いたのは他でもありません。解放軍と自称する海賊達についてです」
「はい」
元帥達は一様に頷いた。
「先の閣僚会議で彼等に対する対処が決定しました」
彼はあえてゆっくりとした声で言う。
「それは」
そしてその調子のまま言葉を発する。
「征伐です。彼等を除くことになりました」
「はい」
皆驚くことなくそれに頷いた。それは既にわかっていたことであった。
「そしてそれについての戦略ですが」
八条は話を続ける。
「百個艦隊を派遣することになりました。その際マウリアの全面的

な協力も得られます」
「全面的にですか」
後方支持部長であるコアトルが問うた。
「はい。領域内の航行の自由、作戦行動の許可、補給の援助、そして軍の派遣の約束を得ました」
「そうですか。それはまた」
「大きな協力ですな」
マナドも声を発した。彼等の予想を越える協力であった。彼等はマウリア領内の航行の自由が得られれば御の字だと考えていたのだ。
「しかしこれで作戦の幅が大きくなりましたね」
「ええ。私もそう考えています」
八条はマナマに答えた。
「カバリエ外相が頑張ってくれましたから」
「おお、あの方が」
皆それを聞いて微笑を浮かべた。だが完全に喜んではいない。何処か苦笑があった。
「あの人ならやってくれるでしょう」
「女傑ですから」
カバリエは豪腕としても知られているのだ。いいと思った考えはあくまで通そうとする。時として妥協すらしない。その巨体を生かして一直線に突き進むのだ。
「さぞかしマウリア側も困ったことでしょう」
「まあそれは置いておきまして」
流石に食べ物から入ったとは言い出せなかった。彼もあれには驚いているのだ。
「しかしこれで彼等をマウリア側からも攻めることが可能になりました。これは大きいですな」
「ええ。今までは何かというとあちらに逃げられましたから」
バールの言葉に劉が答えた。
「そしてマウリアが攻めるとこちら側に逃げる。実に巧妙でした」

マクレーンも言った。苦虫を噛み潰した顔になっていた。
「ずるい連中です。だからこそ海賊なのでしょうが」
「しかし今回でそれも終わりですね」
マクレーンの言葉が終わるとディカプリオが口を開いた。
「既に彼等の動向は掴んでおりますし」
「もうですか」
八条だけでなく他の者も皆それに声をあげた。
「はい。これを御覧下さい」
彼はす言いながら会議室の三次元モニターのスイッチを入れた。
するとそこに解放軍の潜んでいる連合とマウリアの国境が映し出された。
「ここが彼等の本拠地です」
彼はレーザーでアステロイド帯の中の大きな星を指し示した。
「そしてこの辺りが彼等の行動範囲です」
そして次にその周りに拡がる円を指し示した。
「彼等はこの一帯で活動しております。連合とマウリアにまたがって」
その円はかなり大きかった。中には星系も幾つか入っている程である。時としてこれ等の星系に出没することもあった。流石に防御が堅く星が狙われることはなかったがコロニーへの襲撃はあった。
「その規模は一千万、艦艇にして約十万です」
それは連合内の海賊でも飛び抜けて多いものであった。
「そしてその地形もまた厄介なものであると言わざるを得ません」
彼の説明は続く。確かに彼の言う通りであった。
だからこそ今まで彼等の征伐を果せなかったのだ。複雑な地形に隠れてゲリラ戦を展開して来る。地の利は彼等にありとても相手にならなかったのだ。
大軍を差し向けてもそれは同じであった。そして連合もマウリアも悪戯に損害を出していたのだ。
「彼等は比較的小規模の艦隊に分かれて行動します」

「多くても五十隻程度のな」
「はい。外に出れば大艦隊を組みますがこの中の戦いではそうしてゲリラ戦を展開します」
彼はバールに答えた。

## 第六部第二章　害虫その五

「それがこの地形に合っているのです。大艦隊はこの中では容易に展開できません」
「例え百個艦隊でも」
「はい。恐れながら」
八条にも臆することなく答えた。その端正な顔は彫刻の様に動かない。
「しかしそれ位の規模でないと彼等を討つこともできないのは事実であると考えます」
ディカプリオはここで言った。
「彼等は強力です。その操艦技術は極めて高いものがあります。そして戦い方もこの地形に適したものです」
「少兵では相手になれず、多兵では戦えず、ですか。難しいですね」
八条はそれを聞いて言った。
「ですがその小規模で行動する艦隊ですが」
「はい」
「我々もそれを採用するべきだと考えますが。今回は」
「我々もですか」
元帥達はそれを聞いて声をあげた。
「はい。戦艦、空母を中心に置き巡洋艦、護衛艦、駆逐艦でチームを編成しまして。そして砲艦やミサイル艦はアステロイドの外に配置します」
彼は言葉を続けた。
「そして主力部隊の後方にはパトロール艦を展開させます。そうすれば後方を脅かされることもありません」
「成程」
彼等はそれを聞いて頷いた。
「そしてパトロールには高速戦艦等も使います。機動力を活かして

早急に対応がとれるように」
「慎重ですな」
彼等はそれを聞いて言った。
「その円の外から四方八方から徐々に進めていこうと考えています。こうすれば彼等を逃がすこともありません」
「そして追い詰めていくのですね」
「はい。かなり大規模な包囲作戦を考えています」
八条はここではじめて包囲を口にした。
「この際問題となるのは後方の連絡及び補給です」
そう言いながらコアトルへ目を見た。
「後方支持部長」
「はい」
コアトルはそれに答えた。
「それについてお考えはありますか」
「はい」
かれは即答した。
「本来ならば補給艦や輸送艦を使いたいところですがこれは今回は困難であります」
「地形のせいですか」
「はい。これが問題です」
コアトルは眉間に皺を寄せた。
「何しろ我が軍の艦艇は大型です。とりわけ後方の艦艇は」
「揚陸艦もですね」
「ええ。敵の本拠地への降下の際も問題になるでしょうが」
「その前の補給でかなりの困難が予想されると」
「はい。おそらく小規模ならば航行も可能ですが」
「それだと敵に狙われる」
「そうです。何しろ地の利は彼等にありますから」
コアトルの不安はそれであった。彼は補給の途絶を何よりも危惧していたのだ。そして問題はそれで終わりではなかった。

「他にも問題はありますね」
今度はマクレーンが口を開いた。
「他にも」
八条は彼に顔を向けた。
「そうです。この地形を利用して彼等が機雷を撒くことです。これはかなり厄介です」
「それは充分考えられますな。これは掃海艇を使うしかありませんが」
劉も口を開いた。
「やはりそこを狙われると」
「はい」
二人は八条に答えた。
「無駄に損害を出す怖れがあります。それだけはあってはなりません」
「そうです。今後の我が軍の在り方にも大きく関わってきますし」
マクレーンと劉はとあることに指摘した。これは円業軍が抱える宿唖とも言うべき問題であった。
それは戦死者の増加により志願者の減少である。連合軍はその為に兵器の防御や生存能力を十二分に考慮しているのである。戦死者が多い軍隊に志願する者なぞいないからだ。
これは彼等にとって最も恐ろしいことであった。下手をすると軍そのものの存在にも関わるものであった。
「包囲をしたところで彼等の運命はもう決まったものです。後は日干しになるのを待てばよいかと」
「私も参謀総長の御意見に賛同します」
劉とマクレーンは言った。コアトルもそれに同意した。
「私もです。囲んでおけばいずれ彼等は自滅するでしょう。これも戦略かと」
「そうですね。それも確かに」
所謂兵糧攻めである。その有効性がわからぬ八条ではなかった。

彼はそれに傾いた。そして頷こうとしたその時であった。
「ただこれを何かという外野が出てきそうですね」
ふとマナドが思い出したように言った。
「例えば市民団体とか」
「それもありますが今一番厄介なのが一人いますな」
バールがそう言いながら顔を顰めさせた。
「残念なことに長官の御国の者ですが」
「ああ、彼ですね」
八条おその整った顔を顰めさせた。
「あの男は何かと黒い噂が絶えませんが」
「しかし尻尾は出さない。中々」
当然山口のことである。彼は今回の作戦についてことあるごとに反対の立場をとっていたのだ。
「しかし妙なのです」
ここでバールがまた言った。
「何故彼はあそこまで今回の作戦に反対するのですか？確か金融業である筈なのに」
「裏で繋がっているという噂があります」
ディカプリオがそれに答えた。
「軍の調査外ですので何もわかりませんがそういう噂は私も聞いております」
「ふむ」
八条はそれを聞いて考え込んだ。口に左手をあてている。

## 第六部第二章　害虫その六

「だとするとまずは彼を何とかしないといけませんね。彼が解放軍と結託しているとなると問題は複雑になります」
「しかし証拠がない」
ディカプリオ以外の元帥達は口惜しそうに言った。
「ですから何も出来ません」
「今のところは」
八条はそれに対して言った。
「ですが今後はわかりません」
「といいますと」
「国務省に協力を仰ぎますか」
「国務省ですか」
「はい。彼等ならこうしたことは得意でしょうし」
中央政府内務省のことである。連合内の自治や領域を調整するのがその業務である。連合は各国の自治権が強いがそれでもその調整をする機関として必要なのである。そうした連合の内政を司る機関としては他に厚生省、商務省等が存在する。
連合中央政府は大統領の下に首相が存在し、そして各省がある。八条が長官を務めるこの国防省の他にカバリエがその巨体でもって統括する外務省、髭のないお洒落なトラブゾンのいる財務省、その他に法務省、厚生省、商務省、内務省、教育省、科学省、環境省、農業省、エネルギー省、労働省、交通省、開拓省、そして大統領府と首相府がある。二府十五省である。連合独特の省として開拓省がある。これは各国の開拓の調整やその星系の事前調査等を担当する。連合にとって極めて重要な省庁である。
連合は各国の権限が大きく、個人主義的傾向が強い為各省庁の権限は小さい。自由主義に基づき、基本として監督するだけである。流石に国防省は少し違うが。

「あの内相ですか」
八条は顔を曇らせた。
「骨が折れますね」
「ご愁傷様と言いたいところですが」
マナドは少し苦笑しながら声をかけた。
「これも長官のお仕事です。頑張って下さい」
「はい」
八条はそれには力なく答えた。
「これも仕事ですから」
「そういうことです」
元帥達は口々に言った。八条はそれを溜息を心の中で出しながら聞いていた。
「それはいいですが」
彼は話を元に戻すことにした。
「とりあえず作戦は長期戦でいくということで宜しいでしょうか」
「はい」
今度は全員が頷いた。
「それが一番宜しいかと」
「損害も少なくて済みますし」
「決定ですね」
彼はそれを見て再び頷いた。
「では解放軍掃討作戦は包囲し、彼等の疲弊を待つこととします。そしてその疲弊と合わせて少しずつ包囲の輪を狭めていくこととします。異存はありますか？」
「いえ」
誰も反対しなかった。戦略として間違いはなかった。
「では事前の準備が全て整い次第兵を動かします。そして彼等を一人残らず捕らえます」
「ハッ」
元帥達は頷いた。作戦了承の頷きであった。

「作戦の総司令官はマクレーン宇宙艦隊司令長官とします。よろしいですか？」
「はい」
マクレーンはそれを受けた。
「そして副責任者として劉参謀総長。二人には前線で指揮を執ってもらいます」
「わかりました」
こうした作戦において宇宙艦隊司令長官及び参謀総長が前線の指揮を執るのは当然であった。彼等は実戦部隊の最高責任者でもあるからだ。
「それではこの会議を終わります。皆さん今回はお疲れ様でした」
「ハッ」
元帥達は一斉に席を立ち八条に対して敬礼した。これで会議は終わった。

八条は会議室を出た後自室に戻った。既に木口がそこにいた。
「お疲れ様でした」
彼は頭を垂れて彼を出迎えた。
「作戦の方針は決まりましたか」
「うん。そちらはね。ただ」
「ただ？」
「内務省と少し話をしなくてはならなくなった。はっきり言って憂鬱だよ」
「憂鬱ですか」
「それ以外に言う言葉がないね」
彼はあからさまに顔色を暗くさせていた。どうやらかなり嫌なようである。
「どうも私は彼女には好かれていなくてね」
「あの人はいつもそうですよ」
「いつもかな」

「ええ。誰に対しても」
「それも凄いな」
彼はそれを聞いて溜息混じりに言った。
「私だけじゃなかったのか」
「長官に対しては特に厳しいようですね」
「それがわからないんだ」
八条は表情を変えた。顰めさせた。
「私は国防省に入るまで彼女とは面識がなかった。はじめて会ったのも私が国防長官となって最初の閣僚会議からだったというのに」
「確かその会議でいきなり言われたのですね」
「うん。何故だか今でもわからない」
「今でもですか」
「当然だよ。会議で口を開いたらいきなり私の態度を批判しだしたんだよ」
「長官のですか？」
八条は育ちがいいせいか動作に気品が漂っていることで知られている。礼儀作法等で褒められたことはあっても批判されたことはない。
「何でも女性より先に席に座るのは何事かと。同時に座るのがああした会議でのマナーだろう」
まず大統領が座りそれから閣僚達が一斉に座る。それがマナーであった。
「それで文句をつけてきたのですか」
「うん。それからもことあるごとに。それは知っているだろう？」
「ええ」
「たまらないな。何故私に対しては特にああなのか。全くわからない」
「国の関係ではないでしょうか」
「国の。ああ、確かにね」
八条はそれを聞いて大いに頷いた。

「一千年以上前から変わらないな、我々の関係は」
「全くです。普通は政権が変わったら変わるものですが」
「それが彼等なのかもな。ライバル視されてもこちらは困るのだが」
「向こうはそうは思ってはおりませんよ」
「やれやれ」
八条はまた溜息をついた。ふう、と息を出す。
「そう言われても困るな。我々は彼等とは特に利害関係もない。第一同じ連合の一員だというのにいがみ合ってどうするのだ」
「ですから彼等にとってはそういう問題ではないのでしょう」
「貿易赤字や力関係なぞは言っても仕方ないぞ」
「彼等にそれを言っても仕方ないです」
「歴史のこともカタがついている筈だが」
「それはもう宗教のようなものですから」
「余計にわからなくなってきたな。彼等が何故我々をあまで嫌悪するか。おかげで閣僚会議の度に困っているのだが」
「傍目にはカップルの痴話喧嘩に見えるようですよ。長官も彼女も独身ですし」
「悪い冗談だね」
彼の顔がいよいよ暗くなった。
「向こうもそれを聞いたら本気で怒るだろう。誰がそんなことを言っているんだい？」
「日本スポーツ新聞です」
「あの新聞は一面で堂々と嘘を書く新聞だよ」
八条は少し笑みを戻した。苦笑ではあったが。
「何かというと宇宙人だの未知の知的生命体だのタレントの有り得ないスキャンダルだの。膨大な資料を綿密なチェックと考証により笑い話を書いているところじゃないか。読むとかなり面白いけれどあの新聞はあくまでその嘘を楽しむ為のものだよ。これは君も知っているだろう」
「長官はあの新聞の最も恐ろしいことをご存知ないようで」

木口はニヤリ、と笑った。場違いな程自信に満ちた笑いであった。

## 第六部第二章　害虫その七

「それは一体？」
八条も気になった。そして彼に問うた。
「たまに当たるのです。それもとんでもない内容で」
「馬鹿馬鹿しい。あの新聞は日付まで次の日のものだから全部作り話なんだよ」
「それがそうも言えないようでして」
「それが私と彼女の話だって！？冗談じゃないよ」
彼はいささかムキになっていた。
「閣議でも話す時以外はそっぽを向いているし会っても無視してくれる。挨拶にも返さない。それでよくそんなことが言えるものだね」
「話としては面白いからでは」
「話としてはね。可能性はないけれど」
彼は渋い顔で言った。
「よりによって私と彼女が。何故そうなったのか不思議だ」
「ゴシップですから」
「そう言ってしまうと楽だね」
「まあ。面白おかしく書くものですから」
「やれやれだ」
彼は溜息をついた。
「私にとっては迷惑以外の何者でもないな」
「しかしそうもばかりは言っていられないのでしょう？」
「そうだった」
彼はさらに顔色を悪くさせた。
「内務省に要望があるのだった。すぐに先方に電話をかけてくれないか」
「わかりました」
木口は頷き電話を手にした。そしてすぐに電話をかけた。

「あ、内務省でしょうか」
彼は話を続けた。そして暫くして頷き挨拶をして電話を切った。
「わかりました。では後程」
「どう言っているんだい？」
八条はすぐに彼に尋ねた。
「今すぐお会いできるとのことです」
「内務大臣直々に、か」
「はい。そう言っておられました」
「やれやれ。あの人と卵豆腐は勘弁してもらいたいな」
彼は卵豆腐が食べられなかったのだ。昔から好きではない。
「卵豆腐は食べなくてもいいがあの人とは会わなくてはいけませんよ」
「わかっているよ」
木口に対して苦い顔で答えた。
「だから嫌なんだよ」
「それにしてもいつも思うのですが」
「何だい？」
「長官がそこまで嫌がられるのも珍しいですね」
「向こうも私を嫌っているからね」
「はあ」
木口は八条の顔を見て応えた。
「それにしてもあの人のあれは異常ですね」
八条は少なくとも女性からは嫌われるタイプではない。それでここまで嫌われるというのも木口にとっては実に不思議なことであったのだ。
「人には好みというものがあるけれど」
「でしたら運がなかったというだけですね。たまたま相性が悪い人が側にいたということで」
「そう思うことにするよ」
「それが宜しいかと」

こうしたやりとりの後八条は国防省を後にした。そして車で内務省に向かった。
内務省は国防省から少し離れている。その距離が彼をかえって彼を憂鬱にさせた。
「何か会うまでの時間がかかるというのも嫌なものだ」
運転手に気付かれないような小声で言った。
「仕事とはいえ気が進まない」
「？長官、何か仰いましたか」
隣にいた秘書が声をかける。彼の秘書は一人ではないのだ。
今横にいるのは由良美一という。大柄で筋骨隆々の身体をしている。だが顔は眼鏡をかけ知的な印象を与えている。
「あ、何も」
八条はそれに対して打ち消しの言葉を述べた。彼は木口とは違い秘書になってから日が浅い。ここは慎重に対応した。
「そうですか」
彼はそれを受け安心したように微笑んだ。大柄だが怖い印象はない。むしろ優しい印象である。
そして内務省に着いた。彼は車から降りると由良を伴ってその中に入っていった。
入口で向こうの者の出迎えに遭う。そしてそれに案内され中を進む。エレベーターに乗り上へ昇る。辿り着いた階の奥にその部屋はあった。
「こちらです」
そこが内務長官の部屋であった。八条はそこまで来ると息を飲んだ。
「では私共はこれで」
案内してくれた役人は後ろにさがる。由良もである。
「はい。御案内有り難うございます」
彼は礼を言うと扉の前に来た。そしてその扉をゆっくりと開けた。内務省では扉は怪我等の事情がない限り自分で開けるものと決まっ

ている。これも長官が決めたことであった。
（地獄への扉だな）
彼はその扉を開けながら思った。そして中に入った。
「入ります」
部屋に入る時そう言った。
「はい」
そこはあまり広くないオフィスルームであった。こじんまりとして内装はあくまで機能的なものであった。冷暖房やコンピューターの他に目立つものはない。机も極めて質素なものであった。とても三兆の人口を擁する勢力の中央政府の閣僚とは思えないものであった。
そこに一人の女性が座っていた。黒い髪を後ろで束ね背中の中央まで垂らしている。黒い瞳は大きくまるで琥珀の様である。それは銀縁の眼鏡により知的な印象を与えていた。その顔は面長で白く二重の瞳とあって実に美しかった。知的な印象がその顔からも伺えた。だが何処か余裕がなく刺々しい印象も与えていた。
薄い紫にさらに白を混ぜた様な大人しい色のスーツを着ている。それは堅苦しく、一目で動きにくいとわかる。だがその堅苦しいスーツも彼女にはよく似合っていた。
だがやはりきつい印象は否定できなかった。身体全体から刺々しい印象を与えているのである。
彼女の名は金桃姫。韓国出身である。祖国では女性達の希望の星だという。
韓国で最も権威があるという国立大学の政治学部を主席で卒業している。そして韓国内務省に入り忽ち頭角を表わす。特に風紀に厳しく彼女の手で首を切られた汚職役人やセクハラをした者は男女問わず実に多かった。
風紀だけでなく政策にも長けていた。次々と政策を立案し、それを内相に上奏する。受け入れられない場合はあくまで説き伏せる。その粘り強さと気迫に内相も認めざるを得なかったという。事務処

理能力も卓越しており他の追随を許さなかった。韓国においては百年に一度の逸材とまで謳われた。内務省に入って二年で事務次官になり、そして翌年には内相に抜擢された。韓国では大統領が自分の政権の閣僚を自由に任命できる。スポイルズ＝システムが最も顕著な国だからこそ出来ることであった。

そしてそこでも辣腕を振るった。緩んでいた韓国の内政を完全に復活させ首相にも匹敵する力を見せた。このままいけば韓国の長い歴史でも最年少の大統領になるのは確実と思われた。

だが内相就任後一年程で彼女はキロモトにスカウトされたのだ。この時前任者が急な病で政界を退いたのだ。困った彼が金に白羽の矢を立てたのだ。だが韓国政府もそれだけの逸材をむざむざ手放すわけにはいかない。結果として韓国政府と中央政府の間で激しいやりとりがあったが結局キロモトが韓国政府を説き伏せた。そして彼女は連合中央政府内相に就任した。八条とほぼ同時期であった。実は年齢も近い。彼女の方が一つ上であるが。

中央政府内相に就任してもその仕事は変わらなかった。的確な分析と判断により政策を立案、決定し実行に移す。風紀にはことの他厳しく汚職やセクハラには極めて厳しい。これは連合においては実に珍しいことであった。

連合はセクハラには厳しい。この時代のセクハラは異性に対してのものだけでなく同性間のものも含まれる。女性が男性に対して行うものも当然入る。

だが汚職等にはエウロパと比べると比較的ルーズだ。当然罰則はあるがある程度までは容認される風潮があった。これは別に政治家や企業家だけでなく個人同士の付き合いでも見られることであった。贈り物等そうしたお目こぼし的なものが多かった。そうしたことには連合は寛容なのである。それが個人の能力と関係あるか、というとそうではない。もらえるものなら受け取るのは本人の自由だ。あくまで贈り物や謝礼なら良いだろうと殆どの者が考えている。政治や経営、業務に差し支えなければいいのだ。流石に極端な腐敗は批

判されるが程度というものがある連合においてはその程度を見極めることも重要なのだ。これをエウロパは腐敗と批判するがここでも連合は反論する。
「エウロパではそうしたことがないのか」
と。当然ある。それで逮捕される話も多い。エウロパの自慢は『綺麗な政治』だが元々特権を認められている貴族達が多いのでこれは説得力がなかった。連合においてはそうした特権階級は一切存在しないからだ。
こうした風潮があり連合ではそうした話にはあまり過敏ではないのだ。八条はそうしたことはないがこれは彼の家が裕福であり、そうしたことをする必要がないからである。
だが金は違った。彼女はあくまで潔癖さを追及していたのだ。
その為内務省はいつもピリピリとしていた。部下虐めなぞはしないが極めて厳格であった。彼女はどの様な役職の者にも等しく接していた。厳格に、ではあるが。
八条に対しても厳しかった。それが為に彼等は中央政府内でことあるごとに対立しているのだ。最も金が一方的に攻撃を加えているのであるが。
「ようこそ、長官」
金は立ち上がって彼を出迎えた。
「わざわざ来ていただき感謝しております」
高く、澄んでいるがやはり硬い声であった。何処か機械的な響きすらある。
「いえ、こちらも重要な用件でお伺いしたので」
八条は言葉を返した。そして立ったまま話を続けた。
「実はこの度マウリアとの境に勢力を持つ解放軍を討伐することになったのですが」
「その様ですね。それは聞いております」
「そのことで内務省にお願いしたいことがありまして」
「こちらに」

金の細く整った形の眉がピクリ、と動いた。
（まずいか）
八条は危険を感じた。だがそれは杞憂であった。
「内務省の管轄のお話のようですね。先程のお電話ですと」
「はい、そうなります」
彼は言った。
「どうやら彼等と繋がっている闇商人がいるらしくて」
「闇商人」
「はい。既にこれは商務省にも話をしています」
「早いですね」
「ええ、まあ」
「そしてあちらからは何と言っていますか」
「既に関係があると思われる組織のリストアップに入っているようです。ただそれに内務省の協力が必要だと」
「というと連邦警察ですか」
「はい。今日はそれをお願いに来たのです」
八条はあらためて言った。
「解放軍と結託しているであろう組織の調査をお願いしたいのです」
「そうしたルートからも彼等を攻めるわけですね」
金も戦略を知らないわけではなかった。
「ええ」
八条はそれを認めた。
「彼等の存在を考えるとそれも一つの戦略かと思いますが」
「確かに」
金はそれに頷いた。
「では協力して頂けますね」
「はい」
彼女はそれを了承した。
「解放軍と関係のある組織の調査を連邦警察に命ずることにします」
「それは有り難い」

本音からの言葉だった。思ったより遙かに順調に進み安心していた。何か言われるかと内心ヒヤヒヤしていたのだ。
「では早速お願いします」
「ただし条件があります」
ここで金の声が急に険しいものとなった。
（来たか！？）
八条は心の中で呟いた。
「何でしょうか」
「シビリアン＝コントロールの原則をお忘れなく。彼等のこの作戦における指揮は貴方に委任致しますがそれだけは忘れないで下さい」
「わかりました」
軍に対して釘を刺してきた。だがこれは予想されていたことなので驚きはなかった。
ただこれで終わるとは思えなかった。
（どうでる）
次の言葉を待った。だが彼女の言葉はそれで終わりであった。
「御用件はそれだけでしょうか」
「！？」
流石に声には出さなかったがこれにはいささか驚いた。
「他にはありませんね」
「え、ええ」
これには頷くしかなかった。
「では私からのお話はこれで終わりです。長官からはありませんか」
「私もこれで」
それだけで話は終わりであった。後は商務省等との調整だがそれはまた別であった。
「ではお話は終わりですね。御苦労様でした」
「は、はい」
八条は頷いた。そして半ば追い出される様な感じで内務省を後にした。

「意外と呆気なく終わりましたね」
車内で由良が彼に対して言葉をかけてきた。
「ああ、意外とね」
八条自身が最も驚いていた。
「まさかあの金内相が殆ど何も言わないとは」
「何かあったのでしょうか」
「そうだな。もしかすると既に何か掴んでいるのかも知れない」
「何かとは？」
由良はそれについて問うた。
「解放軍と関係のある組織をだよ。既にある程度察しているのかも知れない」
「だとしたら流石ですね」
「うん。だとしたらだけれどね。今はあくまで仮定の段階だ」
「はい」
由良はそれに頷いた。
「だとするとどういった組織が関係があるかだ」
「また自称市民団体では」
「いや、彼等ではないだろう」
八条はその考えを否定した。
「もっと力のある存在だろうね」
「では何でしょうか。普通の闇商人でもないですね」
「うん。おそらく連合でも特に黒い者達だな」
「それは一体」
「そうだな。例えば」
ここで彼の脳裏にある男の姿が浮かんだ。
「・・・・・・有り得るな、大いに」
彼は一人呟いた。
「何かおわかりなのですか！？」
由良はその独り言に気を向けた。
「うん、まだ断定はできないが可能性は高い」

八条はそれに対して答えた。
「帰ったらすぐに連邦警察のスタッフを招き会議を開こう。いいね」
「はい」
由良は頷いた。そして次の会議が早速開かれることとなった。

## 第六部第二章　害虫その八

連合において次の作戦行動が進められている頃サハラ南方ではアッディーンが兵を進めていた。

まずは隣接しているアイユーブ王国に向けて兵を進めた。これを見たアイユーブは忽ち恐慌状態に陥った。

彼等にオムダーマンに対抗できる力はなかった。オムダーマンが三十個艦隊を派遣してきているのに対してアイユーブは二個艦隊しかない。戦力差は歴然としていた。

戦っても勝ち目はなかった。ましてや相手はアッディーンである。完膚なきにまで叩き潰されるのは誰が見ても明らかであった。

彼等はどうすべきかわからなかった。降伏しても命の保障はない。やはり戦うべきなのか。議会も紛糾したが結論は出ない。そこにオムダーマン外交部から使者がやって来た。

「オムダーマンから？」

アイユーブの議員、閣僚達はそれに顔を向けた。そしてすぐにその使者を招き入れた。

使者はアッバースであった。彼はオムダーマン側の提案を持って来たのだ。

それはアイユーブへの無条件降伏であった。そして王族及び全市民の身の安全を保障するものであった。当然財産も安全が保障されていた。つまりオムダーマンに組み込むということであった。

アイユーブにとってはどのみち勝ち目はない。それに身の安全が保障されるのならばそれでよかった。一部徹底抗戦を主張する者もいたがそれはごく僅かであった。

そしてアイユーブはオムダーマンの軍門に降った。すぐにオムダーマン領に編入され王族は一市民となった。だがその財産は保障されアイユーブ市民もオムダーマン市民として公平に迎え入れられた。

アッディーンは何なくその旧アイユーブ領に兵を進めた。そして

そこを足掛かりとし次の作戦行動に備えた。
「次はどこに兵を進めるかだ」
だがここでアイユーブ周辺の国々で動きがあった。
何と数ヶ国がオムダーマンへの帰順を願い出てきたのである。条件としてその安全の保障とオムダーマンの市民権であった。
「またえらく急な動きだな」
アッディーンはこれには戸惑った。
「いえ、予想された展開ですよ」
傍らにいたアッバースはにこやかに笑って彼に言った。
「長官」
アッディーンはそれを受け彼に顔を向けた。
「それは一体どういうことですか」
「はい、アイユーブはこの辺りでは大国でした」
「はい」
それはアッディーンも把握していた。そしてこの国は言うならば南方への入口であった。侵攻するならばここから攻めるものと当初から決まっている程であった。
「その国を一兵も失うことなく降したとしたらどうなりますか。しかもその際身の安全、今後の権利を完全に保障する」
「他の国々もそれに惹かれますね」
「そういうことです。ですから私は今回の長官のアイユーブ侵攻に賛成したのです」
「そうだったのですか」
実は作戦前の会議において最初の侵攻対象及び外交交渉の対象としていささか議論があった。外交部の一部がアイユーブの周辺国から外交を展開すべきであると考えていたのだ。
だがそれに対してあくまでアイユーブからの交渉を主張したのがアッバースであった。丁度アッディーンもアイユーブからの侵攻を考えていただけにこれは両者にとって都合のいいことであった。
「これでまず第一段階は終了ですね」

「はい。橋頭堡を築くことができました。次の段階です」
アッディーンはそう言いながら机の上に地図を拡げた。それはサハラ南方の地図であった。
「我々はまだ南方の入口に来たに過ぎませんから」
見ればアイユーブは南方の入口である。そして今回帰参した国々もその入口にあるに過ぎない。
「次の侵攻予定地はここですね」
アッディーンが指差したのは今彼等が手中に収めた範囲の南にある場所であった。
「ムワッハド連合ですか」
「はい」
彼は答えた。丁度ここから各地に進める交通の要地であった。
「ここを勢力圏に収めるのが次の作戦です」
「はい。それは私も同じ意見です」
アッバースは言った。
「ですが中々手強そうですよ」
「それはわかっています」
ムワッハドは南方においては屈指の強国である。五個艦隊を擁しその地形は南方でも特に複雑である。そして彼等はゲリラ戦に秀でていた。
「私が行きます」
アッディーンは言った。
「長官自ら」
「はい。十個艦隊を率います。留守はガルシャースプ副司令に任せます」
彼は既に上級大将に就任していた。そしてアッディーンの副将として揺るぎない信頼を得ていたのだ。
「十個艦隊ですか」
「ええ。外相はその間他国との交渉に当たって下さい。おそらく彼等は我々とムワッハドの戦いの動向を見守っているでしょうが」

「わかりました」
彼は答えた。
「ではそのようにしましょう」
「お願いします」
アッディーンはそう言うと席を立った。そして後ろにかけてあるマントを手にとった。
「すぐに軍事会議を開きます。長官も出席をお願いします」
「はい」
彼はそれを了承した。そして部屋を出ようとしたその時であった。
「入ります」
誰かが部屋の扉を開けた。
「ん！？」
するとオムダーマンの制服を着た男が入って来た。
「貴官は」
「ハッ」
見ればアスランを発つ時に話をしたあの将校である。
「ウスマーン＝ハワージャ少将です。この度宇宙艦隊司令部に配属されました。宜しくお願いします」
彼は敬礼してそう答えた。
「おお、来たのか」
アッディーンはあの時の話を思い出した。
「それにしても早いな。まさかもう来るとは」
「マナーマ参謀総長が動かしてくれました」
「そうか、総長には礼を言わないとな」
「そうですね。総長らしいと言えばそうですが」
アッバースもそれに同意した。
「しかし貴官が来てくれると有り難い。早速働いてもらうぞ」
「はい」
「本日付けで宇宙艦隊首席参謀だ。いいな」
「わかりました」

ハワージャはそれに応え再び敬礼した。
「では会議に行こう。長官、行きましょう」
「はい」
こうして彼等は次の作戦に向かった。戦雲が南方を支配していた。

## 第六部第三章　奸物その一

奸物

アッディーンとアッバースはすぐに会議を招集した。そしてそこにはスタッフ及び各艦隊司令が集められた。

二人とハワージャが部屋に入るとそこには既に他の者達が揃っていた。彼等はアッディーンが入室すると一斉に席をたって敬礼した。

アッディーンはそれに返礼すると自らの席に着いた。外交部長であるアッバースが首席であり彼は次席であった。

「さて今回の臨時会議だが」

アッディーンは席に着いた。参加者を見渡しながら言った。

「作戦の第二段階についてだ」

「はい」

諸将はそれに対して頷いた。

「侵攻対象は南のムワッハド連合としたい。それについて意見を聞きたい」

「それで問題はないかと思います」

ラシークが言った。

「彼の国は交通の要所です。次にあの地域を抑えると今後の作戦行動がかなり楽になります」

「そうですな。私もラシーク准将の考えに賛成です」

シンダントも口を開いた。見れば彼も階級はラシークのものと同じになっていた。

「あの地域は四方八方に行くことができます。あそこを抑えれば次の作戦にかなり有利になります」

「ふむ、貴官達はそう思うか」

アッディーンはそれを聞いて考えながら言った。

「他の者はどう思う」

彼は他の将達の意見を求めた。見れば彼等の目は泳いではいなか

った。
　アッディーンはそれを見て決まりか、と思った。誰もそれには反論はなかった。
「では二人の言葉通りムワッハドを攻める。それでいいな」
「はい」
　皆それに頷いた。これでムワッハド侵攻が決定した。
「それでは次の話に移ろう」
　アッディーンは言った。
「ムワッハド侵攻には十個艦隊を以って当たりたい。指揮官は私だ」
「長官がですか」
　ムーアがそれを聞き口を開いた。
「そうだ。何か不都合があるか」
「いえ、ただ」
「ただ、何だ？」
「はい、今回は敵のゲリラ戦が予想されます。それには各艦隊に指揮を委ね閣下はこのアイユーブから指揮を執って頂きたいと考えているのですが」
「各艦隊の裁量を優先させるのだな」
「はい、これが普通の正規戦なら問題はないですが何しろゲリラ戦です。正面から戦うのではありません」
「成程、確かにな」
　アッディーンは彼の言葉に頷いた。
「おそらく敵は比較的小規模の軍で我々を奇襲したり後方を脅かしたりしてくるでしょう。それに対しては今までの様な指揮系統では支障が出ます。やはりここは臨時にそうした処置をとるべきだと考えます」
「ふむ」
　彼はそれを聞いて腕を組み考え込んだ。そして口を開いた。
「他の者はどう思うか」
「そうですね」

まず口を開いたのはナクールであった。
「ムーア中将のお考えに賛成です。やはりゲリラ戦に対してはそうした特殊な処置が必要だと考えます」
「そうですな。それに占領していく惑星に対しても対応は慎重にする必要があります」
カーシャーンも口を開いた。
「おそらくそこでもゲリラ戦を仕掛けてくるでしょうし」
「古典的なゲリラ戦だな」
アッディーンはそれを聞いて呟いた。十九世紀にスペインがナポレオン率いるフランス軍に対して行った戦いであり以後大国の侵攻に対して小国が行う戦い方の一つとなった。ベトナムが有名である。
強大な敵に対しては確かに有効である。これに対しては徹底的な掃滅戦しかない。だがそれは敵国の感情をさらに刺激しかねない。一般市民も巻き添えにするからだ。
「これは武器の解除を進めていくしかありません」
「地味だがそれが一番か」
「はい。銃火器は全て没収させます。そして軍に対しては降伏したならば寛大な処置を約束させます」
「降伏しなかったならば容赦なく処刑だな」
「ええ。それしかないでしょう」
カーシャーンは言った。
「そもそも制服を着ていない者は降伏することすら許されないのですから」
これはこの時代の戦時法でも同じであった。国際法でも定められている。
「それを考えると彼等にとってもかなり都合のいい考えだと思いますが」
「そうだな」
アッディーンはそれを聞きながら答えた。
「では地上のゲリラに対してはこんごもそれで行こう」

「はい」
諸将がそれに頷いた。
「そして宇宙でのゲリラ戦だが」
「閣下は十個艦隊で進まれると仰いましたね」
ハワージャが問うてきた。
「ああ」
「それではあまりにも少ないと思います」
「少ないか」
「はい。単に前線を進むだけならばよいのですが相手がゲリラ戦を仕掛けてくるとなりますと。後方を守る艦隊も必要です」
「敵の後方への襲撃に備えてか」
「はい」
彼は答えた。
「地の利はあちらにあります。おそらく我々の予想もしない場所から攻撃を仕掛けて来るでしょう」
「それに備えてだな」
「はい」
ハワージャは答えた。
「少なくとも十個艦隊では足りません。二十個艦隊は送るべきかと」
「倍か」
「はい。すなわち前線を進み占領していく艦隊と後方を固める艦隊を置きます。そして少しずつ占領していくべきかと」
「ふむ」
アッディーンはそれを聞き腕を組んで考え込んだ。
「閣下、どう思われますか」
「そうだな」
彼は考え続けた。そして口を開いた。
「それでいくか。今回の作戦は二十個艦隊を送ろう」
「ハッ」
ハルージャはそれを聞き頷いた。

「指揮は私が執る。だが今回は後方で執りたい」
「ゲリラへの対策ですね」
「そうだ。普段の戦いならば前線に出るのだが」
ここで渋い顔をした。彼は本来前線で指揮を執るのが好きなのである。だがそれも時と場合による。
「今回は事情が違う。後方から全体を見たい」
「わかりました」
諸将はそれに頷いた。
「ではこれより作戦を開始する」
全てが決まりアッディーンは立ち上がって宣言した。
「第一艦隊から第二十艦隊までは進撃する、そして第二十一艦隊から第三十艦隊はここに残り予備兵力とする。そして外交部には引き続きここで各国との外交交渉に当たってもらいたい。よろしいでしょうか」
「はい」
アッバースは微笑んでそれに頷いた。
「そちらはお任せ下さい」
「はい」
これで全ては整った。後はアッディーンの言葉だけである。
「今回の作戦名をハッティーンとする。それは今から発動される」
「ハッ」
諸将も立ち上がった。そしてアッディーンに顔を向けた。
「ではここに宣言する。ハッティーン作戦、発動！」
「ハッ！」
諸将がそれに敬礼した。こうしてムワッハドとの戦いの火蓋が切って落とされたのであった。
オムダーマン軍はすぐにムワッハドに向けて進撃を開始した。それは普段のアッディーンの用兵とは違い慎重でかつ静かなものであった。

## 第六部第三章　奸物その二

「南方ではかなりの動きがあるな」
シャイターンの宮殿の豪奢な一室で一人の老人がシャイターンに対して語っていた。
「はい、そのようですね」
赤と黒の絹の豪奢な服を身に纏った彼が答えた。見ればその老人も豪奢な服を着ている。金と黒の丈の長い服だ。
「どうやら知っているようだな」
その老人は低い声でシャイターンに対して言った。見れば皺こそあるが端整な顔立ちをしている。髪と目はシャイターンのそれと同じ色である。その顔立ちも何処かシャイターンに似ている。いや、シャイターンが彼に似ているというべきか。背丈も体型もそっくりであった。
「父上」
シャイターンはその男を父と呼んだ。
「父上は今回のオムダーマンの南方侵攻をどのようにお考えですか」
「そうだな」
彼は邪な雰囲気の漂う微笑みを浮かべてからシャイターンに語った。
彼の名をムシュタ＝シャイターンという。イスラムのシーア派に属する宗派の法皇にある男でありサハラにおいてはかなり名の知られた男である。
彼は宗教家としてより政治家として知られていた。
『右手に奸智、左手に謀略』
かってローマ法皇としてルネサンスにその悪名を轟かせたアレクサンドル六世という法皇がいた。法皇でありながら愛人を持ち子供までいた。そのうちの一人がルネサンスのイタリアにおいて最大の梟雄と謳われたチェーザレ＝ボルジアである。彼等はその奸智と謀

略によりイタリアを支配せんとしていた。毒殺も巧みでありカンタレラという毒薬を使って多くの政敵を暗殺してきたと言われている。
婚姻政策でも彼等は奸智を駆使した。その美貌で知られた妹ルクレィツア＝ボルジアは何度か結婚している。その中の夫の一人は政局が変わりチェーザレに用済みとみなされ消されている。彼は妹すら己が野心の道具としていたのである。あくまで冷酷な男であった。
その父もまた同じであった。彼はボローニャ大学創設以来の天才と言われており哲学、法学、神学の三つの博士号を持っていた。しかしその心は野望に燃えていたのである。当時のバチカンはそうしたところであった。宗教よりも政治の場であったのだ。そう、彼は法皇という名の一級の政治家であった。
このムシュタはそのアレクサンドル六世と同じだと言われている。謀略を好み、それにより今の地位を得た。彼の政敵は原因不明の死を遂げた者が多い。暗殺が噂されているがそれを確かめる術はない。
多くの政敵を葬り法皇となったがそれからも彼は陰謀を駆使した。そうして着々と力をつけていったのだ。長子であるメフメットも彼の力を後ろ楯の一つにしていた。だからこそ傭兵隊長になることができたのである。そのことから彼は時として『法衣を纏った軍人』と称されることもある。
「あのオムダーマンの将は若いながら優れた人物のようだな」
「アッディーン元帥ですね」
「ああ。今までの戦いを見ても見事なものだ」
その陰のある瞳が光った。
「メフメット、そなたに匹敵するかも知れぬな」
「ふふふ」
メフメットはそれを受けて笑った。
「私に比肩し得る者ですか」
「そうだ。まさかこの世にいるとは思わなかったがな」
ムシュタは自らの子を見ながら言った。
「我が子よ、これはどう思うか」

「そうですね」
メフメットは不敵に笑った。
「面白いことだと思いますよ」
「ほう、面白いか」
「ええ。私はこのサハラを統一する為にこの世にいますがライバルがいないとつまらない」
「余裕があるな。つまらない、か」
「そうです。このままだと何もなくサハラを手中に収めてしまいます。全ては予定通りですが」
「ハプニングも必要ということか」
「そういうことです」
彼はまた笑った。あくまで余裕に満ちた笑みであった。
「ところでそちらはどうなっていますか」
「法皇庁の方か」
「はい」
彼等の宗派はイズライール派というシーア派の一派である。イスラムであるが聖職者が存在しローマ＝カトリック教会のそれに酷似した体制となっている。
「フラームは元気ですか」
「うむ、そちらは心配無用だ」
ムシュタはニヤリとした顔で答えた。
「法皇になったばかりだが無事にやっておる。あれで中々大した男だ」
「それを聞いて安心しました」
メフメットは答えた。
「しかしフラームにお伝え下さい。法皇たる者一時たりとも気を緩めてはならないと」
「宗教家に対する言葉ではないな、それは」
「何を仰いますやら」
彼は父に悪戯っぽく笑ってそう言った。

「法皇が一体どういう存在か、父上が最もよくご存知の筈ですが」
「そうだったかな」
彼はそれに対してはとぼけてみせた。
「確かに人々の心を救わなくてはならないからな。そうした意味ではそうかも知れん」
「ご冗談を」
「法皇としての当然の勤めを言っただけだが」
「法皇としてですか」
「そうだ。違うかな」
「ふふふ」
メフメットはそれに対しては笑うだけで答えなかった。心の中ではそれに対する答えは出ているが。
「父上も人が悪い」
「そなた程ではない。ところでだ」
「はい」
二人はここでまた話題を変えることにした。
「そろそろマルヤムも年頃だが」
「おお、そうでしたか」
メフメットはその言葉に声をあげた。
「何処かによい婿がおらぬかな」
「婿ですか」
「そうだ、我々にとって都合のいい婿だ」
「そうですね」
メフメットはそれを聞き暫し考え込んだ。
「どうしたものか」
だがやがて顔を上げた。そして父に対して言った。
「いい考えがありますよ」
「それは何だ」
ムシュタはそれに顔を向けた。
「アッディーン元帥と結ばせるというのはどうでしょうか」

「またおかしなことを言うな」
そう言うムシュタの顔は何故か笑っていた。
「今そなたのライバルだと言っていたではないか」
「だからですよ」
メフメットは楽しそうに笑って答えた。
「面白いではありませんか。妹の夫と覇を競うというのも。まるでエウロパの小説の様で」
「シェークスピアか」
「少し違いますがね。実際に彼とは今のところ結んでおくのは得策だと存じますが」
「確かにな。それでオムダーマンも無視はできないだろうし」
サハラは連合よりも遙かに血の繋がりが重視される。それはアラブの頃から変わらない。
「今我等は力不足です。このサハラを手中に収めるには」
「だがそれもそなたの考え通りだろう」
「ええ」
彼は答えた。
「どのみちこの辺りで有力な勢力と婚姻で結ぶつもりでした」
「では決まりだな」
「はい」
メフメットは頷いた。
「可愛いあの娘を嫁に出すのは父として心が痛むがな」
「父上、それは私も同じです」
「だがそなたは私のそれとは少し違うな」
「おわかりでしたか」
「当然だ。私はそなたの父でもあるのだぞ」
「ふふふ」
シャイターンはその言葉を受け再び笑った。
「確かにマルヤムは可愛いです。しかし」
彼はここで言った。

「役に立つからこそ可愛いのです。クイーンだからこそです」
「我が子とはいえ恐ろしいな、そなたは」
ムシュタは表情を消してそう言った。
「だがその冷酷さと頭脳があればこそだ。シャイターン家がこのサハラを手中に収めることができるのは」
「フフフフフ」
彼は笑い続けていた。その背にあるマントはまるで悪魔の翼の様に彼の動きに合わせてなびいていた。

## 第六部第三章　奸物その三

連合では解放軍征伐に向けて国防省が動き続けていた。その一方で商務省もまた仕事に追われていた。

「遂に彼等が来るのか」

連合商務相はシギット＝フンプスという。インドネシア出身である。金色というよりは黄色に近い髪に灰色の瞳を持つ五十代の男である。インドネシアの富豪の家に生まれ大学を卒業後父の企業の重役を務めた後中央政府の議会に立候補した。そしてキロモトの政党で貿易において力量を発揮し商務長官に任命された。ちなみに彼が家の総帥とならなかったのは彼が次男であったからである。今家は兄が継いでいる。ちなみに母はユダヤ系であり髪と瞳は彼女から受け継いで

いる。そして肌の色は父から受け継いでいる。褐色の肌に不思議と黄色い髪が合っていた。

「何かえらく深刻そうですね」

側に控える秘書官がそれを見て怪訝そうに尋ねた。

「彼等を知っているだろう」

「ええ」

上司の問いに答えた。

「しかしいつものことですし。特にそう警戒することはないでしょう」

「それは普通の企業家が相手だった場合だ」

彼は言った。

「彼等は普通の経営者ではないのだ。言うならば巨人だ」

「しかし閣下のご実家もそうなのでしょう？」

「それはそうだが」

彼の家のことはもう誰でも知っている話であった。

「だが規模が違い過ぎる。それに」

「それに？」
「彼等の人としての器だ。とても私なぞの及ぶところではないのだ」
「またえらく弱気ですね。閣下らしくもない」
「君にもすぐにわかる」
彼は憮然としてそう言った。
「この連合の真の企業家達というものがどの様なものかをな」
「真の企業家ですか」
「そうだ。案外少ないがな」
「はあ」
そういった話をしているうちに三台の車がやって来た。
「来ました」
官僚の一人がフンプスに伝えに来た。
「そうか」
彼は頷いた後でその官僚に対して指示を下した。
「応接室に案内するように」
「わかりました。ただ」
「ただ？」
フンプスはその言葉に問いを入れた。
「思ったよりずっと質素な車でした。アメリカのノース＝ウエスト社の高級車にでも乗って来るかと思ったのですが」
「普通の企業家ならな」
フンプスは彼に言った。
「だが彼等は普通の企業家ではない。さっき君にも言ったな」
「はい」
傍らに控える秘書官が答えた。
「彼等は真の企業家だ。あれは自身の会社の車なのだ」
「そうだったのですか」
「それも標準モデルの車だ。彼等はいつもそれに乗っている。時には自分で運転することもある」
「それはまた」

「そうでないと何処が良くて何処が悪いかわからないだろう。彼等はそこまで見ているのだ」
「何と」
これには秘書官も官僚も驚いた。
「さて」
ここでフンプスは立ち上がった。
「行くか。彼等より先に部屋に入っておきたい」
「わかりました」
二人はそれに従った。そして執務室を出た。
「君達もかなり多くの企業を見てきただろう」
フンプスは歩きながら後ろについて来る二人に対して話し掛けていた。
「はい」
二人はそれに答えた。
「だがまだ若い。時にはその中に巨人もいる」
「巨人ですか」
「そうだ。一度それを見ておくといい。アナハイムのベニョーコフ社長も凄いがまだ若い」
「ベニョーコフ社長ですらですか」
「そうだ。かって二十世紀のアメリカにはロックフェラーという大企業家がいた」
「ええ、それは知っています」
一代でアメリカ最大のグループを築いた男である。慈善家としても知られその存在は生前から伝説的存在となっていた。
「そして日本の松下幸之助」
「彼も有名ですね」
「うむ」
丁稚奉公から身を起こし、やはり一代で日本を代表するグループを築き上げた。『経営の神様』と呼ばれ奇跡とまで言われた第二次世界大戦後の日本の復興の象徴の一人であった。

「そうした伝説的存在に匹敵すると言ってもいいな。そう、あのリー＝チャクラーンに近いかもな」
「チャクラーンにですか」
一介の商店街の店長から身を起こし瞬く間に連合最大の財閥を築いた男である。やはり伝説的な経営手腕で知られ今でもその築き上げた財閥は連合の財界において大きな力を持つ。彼の祖国タイにおいては英雄視されている程である。経営者もまた英雄なのが連合である。まさに立志伝中の人物であった。
「それだけの人物達だ。本当に見ておくといい」
「わかりました」
二人は答えた。そしてフンプスに従い応接室に入った。南方調の暖かそうな配色の部屋である。
やがて三人の老人達が入って来た。彼等は皆スーツに身を包んでいた。
一人は面長で一重瞼と厚い唇を持つ男であった。姿勢はよく、威風堂々としていた。彼の名はフェリペ＝カレーラス。フィリピン出身で船舶会社を中心にホテル、旅行、レジャー各産業で知られるバイソングループの総帥である。一度低迷していたこのグループを連合屈指のグループに戻した中興の祖として知られている。
次に入って来たのは豊かな白髪を持つ黒人の老人であった。大柄で筋骨隆々とした身体を持っている。彼はチバチ＝マウムという。カメルーンにおいて偉人とすら讃えられる人物である。やはり彼も船舶会社を中心にしているが演劇や百貨店で有名である。彼の持つグループはファランクスグループという。彼は演劇の世界で特に知られその世界でも讃えられている。
そして最後に来たのは眼鏡をかけた小柄な男であった。彼は白人であったが少し顔立ちが違う。肌も少し黒い。彼はパプワニューギニア出身であり父がニュージーランド人なのだ。マオリ＝ポートという。姓は父のものである。彼の企業はイーグルグループといいやはり船舶会社中心だ。だが彼はレジャーに力を入れている。やはり

その世界で大いに名を知られている。
「ようこそ」
フンプスは笑顔で彼等を迎えた。彼等はそれに対して笑顔で返した。
「いやいや」
彼等もそれに対して笑顔で返した。そして手を差し出してきた。
フンプスは彼等の手をそれぞれ握った。どれも歳の割に温かく、力強い手であった。
握手を終えると彼等は席に着いた。見れば椅子に座るその姿も堂々としていた。
「ところで」
フンプスは雑談から入ることにした。まずは雰囲気をほぐしておきたかったからだ。
「カレーラスさんのところの野球チームは昨年は凄かったですね」
「ははは」
カレーラスはそれを聞くと上機嫌に笑った。
「いや、これが。マウムさんのところと最後までもつれましたからな、前期は」
「そして後期はポートさんところと」
「はい」
実は彼等はそれぞれ野球チームも持っているのだ。しかも同じリーグでグループで、である。
「両方共実に強いですからな。けれど何とか勝つことができました」
連合におけるスポーツで人気がある球技は野球、サッカー、バスケットボール、アメフト、バレーボール、ソフトボール、ポロ、ホッケーと極めて多彩だ。他にも色々ある。どれもプロリーグがありそれぞれのリーグ、グループに分かれている。これはあまりにも競技人口、そして地域が広い為とても一つに出来ないからだ。おおむね半年かそれ前後の期間でペナントを行い、そしてそこの優勝チームが地球に集まりそこで総当り戦をする。そしてそこで上位のチー

ムがさらに争いようやく連合一のチームが決まるのである。もっともそれも複数の系列があるのでそこからまた戦いがある。連合はスポーツにおいても極めて競争が激しいのである。そして実は企業といえどそのチームを簡単に手放すことはできない。合併は許されていない。それぞれの地域にチームがなければならないとの考えからだ。最悪でも身売りしなければならない。間違ってもオーナー達の都合で縮小なぞ許されないのだ。若し企んだ場合は死ぬ。これは冗談ではない。以前とあるマスコミの大企業の総帥がそれを企んだところ忽ち義憤に燃える民衆により会社ごと虐殺された。これ以降マスコミがスポーツ経営に関わることは連合中央政府及び各国政府の法律で厳禁とされた。マスコミの腐敗し易さと自浄能力のなさを考えるとこれは極めて当然であった。

ちなみにコミッショナーと言われる存在も一つのスポーツで一人ではない。複数の系列があり、そこにそれぞれいるのである。一人の筈がなかった。

流石に三兆もの人口がいるとそれだけの競技人口が存在する。だからこそかなりの規模になるのだ。

大体一リーグの一グループで八チームである。彼等はその中の一つに存在しているのである。

## 第六部第三章　奸物その四

「うちのチームが勝ったのはやはりウェスト君を監督にしたからだな」
カレーラスは誇らしげにそう言った。
「おっとカレーラスさん」
今まではカレーラスの独壇場であったがここでマウムが入って来た。
「ウェスト君は元々うちの監督でしたぞ」
「おっと、そうでしたな」
このウェストという監督は連合においても知られた監督である。闘将として知られシンガポール出身の白髪の男である。選手育成でとりわけ有名である。
「あの時はかなり苦しめられました」
「ふふふ」
マウムはそれを聞き満面に笑みを浮かべた。
「彼でうちはようやく連合一になれましたからな」
「うちも遂にそれを達成しましたぞ」
だがここでカレーラスが反撃に出た。
「これからは野球でも負けはしませんぞ」
「望むところです」
「そういうことはうちに勝ってから言いなさい、野球においては特に」
ここでポートも入ってきた。
「うちはこと野球に関しては連合で一番ですぞ」
「それは確かに」
「今年も苦しめられました」
二人は思わずポートに頭を下げるようにして言った。
「ふふふ」

ポートはそれを受けて誇らしげに笑った。
「我がチームの監督は連合一の名将ですからな」
「ドン＝ファチリーニ監督ですね」
フンプスが尋ねた。
「左様」
ポートは胸を冗談めかして思いきりふんぞりかえらせた。
「彼には全てを任せてある程です」
「しかしですな」
ここでマウムが口を挟んできた。
「幾ら何でも乗船の際お金は払うべきでしょう、彼の場合は」
ファチリーニは堂々たる風格の人物であり下手なヤクザ者ですら逆らえない程の男である。移動の際は当然イーグルグループの船等を使用するが彼はここではフリーパスであった。アメリカ出身で現役時代はサードであった。ちなみにウェストはファーストである。
「よう、御苦労さん」
その挨拶だけで船員が通してくれるのである。これは彼の力がそれだけ大きいということであった。
「おかしいですかな」
ポートはそれに対して平然と返した。
「そちらの上監督も同じだった筈ですが」
そうマウムに返した。ファランクスの監督は上春利という中国出身の監督である。元々はキャッチャーであり知将として有名である。
「彼の場合はフリーカードを提供しているだけです」
「しかし彼にはそれだけの価値はあると認めておられますな」
「はい」
マウムはそれに答えた。
「彼程の知将はいないでしょうからな」
「知将もいいですが」
ここでカレーラスも入ってきた。
「やはり闘将が一番ですぞ」

「カレーラスさん」
だがここでマウムは反撃に出た。
「ウェスト君は元々こちらの監督でしたぞ」
実はウェストはかってファランクスの監督を務めていた。その育成能力でもってチームを建て直し、五回の連合制覇を果たしている。そして今バイソンで連合制覇も果したのである。
「おっと、そうでしたな」
カレーラスはそれにとぼけてみせた。
「ですが今は我がチームの監督です」
「むうう」
マウムはそれに対して苦い顔を作るしかなかった。
「まあ来年も楽しくやりましょう。カレーラスさん」
ポートが言った。
「今年はそちらに花を差し上げる形になりましたが来年はそうはいきませんぞ」
「それはこっちもです」
マウムもである。
「この雪辱、晴らさせてもらいますからな」
「それは有り難い」
カレーラスは二人を前に悠然と微笑んでいる。
「では喜んで受けて立ちましょう。野球で勝つことがころ程楽しいとは思いませんでしたからな」
「ふふふ、これは病みつきになりますからな」
「その通り、どうやら我々はやっとカレーラスさんにその愉しみを教えることができたようですな」
マウムとポートは笑った。こうして野球の話はつつがなく終わった。
「さて」
彼等は一息置いてフンプスに顔を向けた。
「本日我々が長官に御会いする為にここへ来た事情ですが」

「はい」
フンプスはそれを受けて顔を引き締めさせた。
「連合軍と航路の関係です」
船舶会社といっても色々ある。アナハイム社の様に造る会社もあれば流通を扱う会社もある。彼等は造ってもいるが流通に重点を置いているのである。
「連合軍とですか」
あらかじめそれはわかっていた。彼は三人に顔を向けた。
「我々の航路は今まで民間用のものばかりでした。これは御存知だと思います」
「ええ、それはわかっております」
カレーラスにそう答えた。
「我々は船舶会社ですが軍用のものは取り扱ってはおりません。ですから軍用の港湾施設も航路も用意はしていないのです」
「はい」
マウムにも答えた。
「おわかりだと思いますが間違っても軍艦が交通できるような状況ではないのです。それはおわかりですね」
「無論です」
ポートにも返した。
「それを聞いて安心致しました。では我々が最近懸念していることですが」
彼等はいよいよ本題に入ってきた。
「連合軍の港湾施設が最近急激に整備されておりますがこれは我々の施設や航路とは何も関係はないのでしょうか」
「もし重なったりした場合は何かと不都合が生じますので」
「それを長官にお伺いしたいのです」
「それですか」
フンプスは一呼吸置いて彼等に言葉を返した。
「それは問題ないと思います」

「何故でしょうか」
「ティアマト級巨大戦艦は御存知ですね」
「はい」
「あの化け物の様な艦ですな」
「国防省は今あの艦を使用することが可能な港湾施設及び航路を整備していると聞いております。あの艦は民間の港湾や航路では支障が出るでしょう」
「確かに」
「航路はともかくあの艦を収めることのできる施設は民間では無理です」
軍艦と民間の艦船では構造が根本から異なる。彼等にとってみればあの巨大戦艦は全く未知の部類の存在と言ってよいものであった。
「それでは港湾施設は問題ありませんな」
「それを聞いて安心致しました」
彼等はそれを聞いて納得した様に頷いた。
「そして次の問題ですが」
すぐに別の話題に入った。
「航路ですね」
フンプスがそれについて問うた。
「はい」
彼等はそれに対して頷いた。
「我々も連合軍の航路を拝見させて頂いたのですが」
「それまでの各国の軍の航路を整備し、より効率的な航路に整備していっておりますな」
「そのようですね」
それはフンプスも知っていた。だからすぐに答えることができた。
「そちらも順調に進んでいるようです」
「それは何より」
三人はそれに対して満足した様に頷いた。
「ですがまだまだですな」

「といいますと」
「合理的な交通にはまだ至っていないということです」
「少なくとも交通の視点から見るとそうなります」
「交通からですか」
「はい」
　三人はそれに答えた。流石にこの世界での巨人達と言われるだけはあった。確かな眼であった。
「これは意図的だと思われますが民間の交通ルートと混ざるのを避けておりますな」
「はい、それは八条長官からもお聞きしております」
　フンプスはそれに答えた。
「何でも民間人に迷惑がかからないようにと」
「はて迷惑とは」
「連合軍は少なくともかなり規律正しい軍ですが」
　これは八条が軍律を徹底させているからである。精々飲酒でのトラブルや風俗店での金銭でのトラブル位だがそれに対してもかなり厳しく対処している程である。その為彼等に対する市民の信頼は高い。
『まずは紳士であるように』
　そういった訓示も出されている。当然ながら将校に対しては特に厳しい。
「それとはまた別の問題です」
「別の問題ですか」
「はい、交通の邪魔になりかはしないかと。八条長官はそれをいたく気にしておられますな」
　そのことについて実際に八条とフンプスの間で色々と議論があった。結果として軍用の航路と民間用の航路は完全に分けられた。これは戦略としてはまずい場合も多々あったが民間人への配慮を重視した為こうなったのである。

## 第六部第三章　奸物その五

「またえらく大袈裟ですな」
三人はそれが不思議でないようであった。
「軍事のことは国家の一大事といいますぞ」
「それではいざという時に支障が出るのではないですかな」
「多少の支障は致し方ないと考えておられますね、国防省は」
フンプスはそれにも答えた。
「やはりまずはトラブルを避けておられるようです」
「トラブルトラブルといいますが憲兵もいるでしょうに」
「それに連合軍の将兵はかなりの数。その移動に支障があってはあちらも困るでしょう」
それがわからぬ彼等ではなかった。話はさらに続いた。
「それはあちらもよくわかっておられるようですが」
「それでもできないと。ふむ」
「政治の難しいところですな」
彼等は瞑目し頷いてこう言った。それはまるで哲学者のようであった。
「ですが民間から要請があったらどうですかな」
「民間から」
フンプスがカレーラスのその言葉に顔を上げた。
「そうです。それならば軍としても問題はないでしょう」
「港湾施設や航路の利用はやはり難しいですが中継地の相互利用ならできるのではないですかな」
マウムもそれに続いた。
「一時停泊してそこで休憩するなり。それでかなり違うと思いますぞ」
「ということは」
「ええ、おわかりだと思いますが」

ポートがフンプスに対して答えた。
「中継の港への停泊ならば我々も喜んで協力させて頂きたいのです。今回はそれを申し上げに来たのです」
「そうだったのですか」
「ええ。我等とて連合の者」
「その軍の効率的な運用を心から願っております故」
だが彼等もやはり経営者である。ここには港湾施設に停泊っすることによるその料金、そして将兵が落とす金等も考慮に入っていた。これを求めるのは経営者として至極当然のことであった。
「それを商務長官にまずお話しておきたいと思いまして」
「そうだったのですか」
「はい。当然これは八条長官にもお話する予定です」
「商務省としてはそれでよろしいですかな」
「はい」
フンプスには断る理由がなかった。だがもう一つ話をしておくべき場所があった。
「それは交通省にはお話していますか？」
「勿論」
三人はそれに対して即答した。
「既にナル＝サン交通相にはお話してあります」
「あちらは快諾してくれました」
「そうですか」
ナル＝サンは現中央政府の閣僚の中では長老格に当たる。ミャンマーでは大統領も務めたことのある大物政治家である。老練の政治家として知られている。
「それでは産業の世界では問題はありません。交易にもいいでしょう」
「はい、何しろ九十億の市場ですからな」
「軍事に携わっていなくともこれは見逃せません」
「ははは、流石ですね」

フンプスはそれを聞いて思わず笑ってしまった。わかっていたこととはいえやはり彼等は一代の経営者であった。それには素直に感心せざるをえなかった。
「では承諾を頂きたいのですが」
「わかりました」
フンプスは笑顔で三人が差し出した書類にサインをした。それは交通省のものであった。
「これでよし」
「御苦労様でした」
こうして三人とフンプスのここでの仕事は終わった。その後暫し茶を楽しみながら談笑もしたがそれで四人は別れた。
「終わりましたか」
秘書官は三人を見送った後でフンプスに対して話し掛けた。
「いや、これからだよ」
だが彼はそれに対してはこう答えた。
「これからとは」
「仕事はサインをして終わりじゃないということだよ。全てはそこからはじまるんだ」
「そこからですか」
「そうだよ。まあそれもすぐわかる」
彼はそう言うと踵を返して省庁の中に入った。
「行こう、早速仕事が待っているだろう」
「ええ、それはもう」
秘書官である彼が最もよくわかっていることであった。
「山の様になっておりますよ。すぐにはじめないと日が暮れてしまいます」
「そうだな。最近家族サービスも怠っているしたまには早く帰らないとな」
彼は子沢山で知られている。何と九人の子供がいるのだ。それでよく野球チームの監督になれるだの次はサッカーの監督だの言われ

ている。既に上の子供の何人かは結婚して孫がいる。それももう何人もいるのである。
「下の子はまだ小学校に入ったばかりなんだ」
「それはまた」
難しい年頃であった。もっとも子供で難しくない年頃なぞないのであるが。
「だから余計に顔を見せておかないとな。うちのにも言われているんだ」
「それはそうでしょうね」
「だからはじめよう、すぐに」
「わかりました」
「夕食には皆帰られるようにするぞ。さあ仕事仕事」
「はい」
こうして彼等は事務室に向かった。そしてその言葉通り仕事に励むのであった。

程無くして彼等は国防省にも訪れた。そして八条との話し合いの場が設けられた。
「本当ですか！？」
彼はそれを聞いた時思わず声をあげた。
「ははは、こんなことで嘘は言いませんぞ」
「是非協力させて下さい」
三人は笑顔で彼に対して言った。
「しかしそちらにも迷惑が」
「いやいや」
だが彼等はここで首を横に振った。
「実際我々もこの商売柄色々なお客様がおりまして」
「その中にはやはりマナーのよろしくない方もおられます」
「はい」
これは事実であった。マナーの悪い客はどこにでもいるものであ

る。犯罪を犯す者もやはりいる。
「そうしたお客様と比べたら軍人さんはかなり紳士的です」
「常に外の目を意識しておりますからな」
「ええ、それはもう」
八条自身元軍人であるからそれは当然であると考えていたが実際はそうではない。やはり外の目を意識していると人の物腰は変わるものなのである。
「ですから我々としては構わないのです」
「長官は少しそれを意識し過ぎではないですかな」
「そうでしょうか」
「ええ。少なくとも我々はそう思います」
実は八条の出身である日本は軍人の数がかなり少なかった。比較的治安もよく、海賊も少ない為それで充分であったのだ。そしてその規律は極めて厳しく連合一であった。とりわけ民間人とのトラブルは警戒されていたのである。それも彼の意識にはあったのは否定できない。
「ですから我々は反対しません」
「むしろお願いしたい位です」
「わかりました」
彼はそれを受けて頷いた。
「ではあらためて国防省としてもお願いできますか」
「はい」
「喜んで」
こうして話は決まった。連合軍はこの三グループの港への停泊が認められたのであった。
「これは他の会社にも影響しますな」
三人はそれを見計らったように言った。
「これで連合軍の動きもより効率的になるでしょう」
「はい、有り難うございます」
八条はそれに答えた。実際にこれは連合軍にとって実に有り難い

ことであった。そして有り難いことはもう一つあった。
「ところで」
三人の老人達は口調を変えてきた。
「今連合軍は解放軍を討とうとしておられますな」
「はい」
「どうやら軍をそちらに向けようとしておられるようですが」
「否定はしません」
彼はそれに対しそう返した。
「ですがこれ以上は機密に関することなので」
「おっと、そうでしたな」
三人はそれを受けて応えた。
「ですが彼等はそうそう容易には倒せませんぞ」
「それもわかっております」
「何しろ闇商人とも結託しておりますからな」
「残念なことに。今それについて調査中です」
「その闇商人ですが」
彼等はここで目を光らせた。
「実は一人大物がいるのです」
「大物！？」
「はい」
彼等は思わず顔を上げてきた八条に答えた。
「山口義彦です」
「あの男が」
「はい。あの男が裏でかなりのことをしているというのは聞いておりますな」
「はい」
「我々も商売柄それなりに裏の話も聞きます」
これだけ巨大なグループを持っていると当然ながら色々と情報を手に入れる。それで彼等は知ったのである。
「そこで聞いたのです」

「それは本当ですか。山口が彼等と結託しているとは」
「ええ。マウリア方面への闇商人の元締めが彼ですから」
「それはあの男の出身地からもおわかりでしょう」
「確かに」
山口は日本国籍だがその生まれは日本ではない。南アフリカの辺境の星系出身である。マウリアのすぐ側の星系であった。

## 第六部第三章　奸物その六

「そして実は解放軍にも南アフリカ出身が多いのです」
「それは聞いております」
「その仲介のブローカーもまた南アフリカ出身のムノウム＝ネゴロツキーです」
「確か人権派弁護士でしたね」
「そういう経歴の者が一番怪しいのは連合では常識ですが」
「それはよくわかっております」
八条は少し苦い顔をした。それを最もよくわかっている連合中央政府の部署の一つが他ならぬ国防省であるからだ。
「その裏の顔はやはり海賊と結託して私腹を肥やす悪徳弁護士なのです」
「そのうえで山口と海賊の仲介をしているのです。実際に彼は山口の顧問弁護士でもあります」
「そうだったのですか」
「これは洗っておいた方がよろしいかと」
「おそらくとんでもない話が出て来ますぞ」
「わかりました」
八条は話を聞いたうえであらためて頷いた。
「では連合警察に話をしておきます」
既にこの作戦における指揮権は彼に委ねられている。安心して指示を出すことができた。
「そうするべきでしょう。何しろ我々は内務省が苦手でして」
「長官程ではありませんが我々はあの大臣にどうも嫌われておりましてな」
「おや、そうなのですか」
「はい、幸か不幸か」
彼等は少し悲しそうな顔を作って答えた。

「どうも我々の港にいかがわしい店があると。何かと目をつけられているのです」
「それはまた」
八条はそれを聞いて苦笑した。
「確かに風俗関係の店もありますがな。ですがこれはその」
「人の世というものは清濁あるものでして。我々はそうした方面には手をつけてはおりませんが」
それはまた別系統の産業である。
「それでも関係はやはりあると」
「それを否定したら嘘になりますな」
彼等は苦笑してそう言った。
「実際にあるものはあるのですから」
「はあ」
八条はそうした方面には疎い。元々興味がないのだ。
「言うならば社会の必要悪でしょうか。だからといって蔑視もできぬものでしょう」
「それはわかっているつもりですが」
八条でもそれはわかる。世の中というものは決して杓子定規にはいかないものである。
「ところがあのお人は違いまして」
「そうしたものも決して許すことは出来ないと考えておられるのです」
「そうでしょうね」
金桃姫はそういう女性であった。彼女はそうしたいかがわしいものの存在を決して許しはしないのだ。内務省として議会に風俗の厳格かつ大がかりな規制及び取り締まりの強化を定めた法案を提出したこともある。流石にこれは厳し過ぎるとして通過しなかった。この時は連合を巻き込んだ論争となっていた。
ここで一つ複雑な問題が議論になった。風俗というと男性の為のものというイメージが強いが実際はそうともばかり言えないのであ

る。女性が利用するものもあるし同性愛のものも存在するのだ。一概にはとても言えない。
だから議論になったのである。純粋に不要なものならばこの世からとうの昔になくなっているものだ。だがこうした産業は人類の歴史ある限り存在するものだ。男性だけでなく女性も利用する。多くの趣味の人間が利用する。連合においては十八歳以下の者はそうした産業には就くことはできないが裏にはやはりそうした幼女や少年を対象としたものもある。だがこれは当然ながら厳しく取り締まられている。
問題は金はそれを異常に厳しくしようとしたのである。最早それは連合の風俗産業に止めを差しかねない程のものであった。だがそれをしてしまうとやはりまずい。
「普通の恋愛さえあれば不要な筈です」
彼女のそれに対するコメントはこのようなものであった。あくまで『良識的な意見』を主張した。確かに正論である。だが世の中は正論だけで動くものではない。
その為にこの法案は否決された。かなり薄められたうえで裏の風俗への取り締まりを強化する法案に替えられ議会に送られ通過した。実際にこれでよかったという意見が主流であった。
「非常に残念なことです。まだ連合には良識が足りないということでしょうか」
金はその結果に対して憮然とした顔でそう答えるだけであった。そうした彼女を世間では『鉄の処女』とまで揶揄した。だが彼女はそれを受けても怯まなかったのは言うまでもない。
「ですから我々に対しても実に厳しいです」
「彼女ならそうでしょうね」
「困ったことですが。我々は直接は関係ないというのに」
「間接に関係があるというのが問題なのでしょう、彼女にとっては」
「それを言ったらお終いですぞ」
三人は相変わらず顔を苦いものにさせていた。

「そもそもこうしたことに全く縁のない者も殆どいないでしょうからな」
「そうしたものですか」
実は彼はその全く縁のない例外である。
「少なくとも我々自身はそうです」
彼等は若い頃はそちらでも名を知られている。今では流石に衰えてはいるが。
「ですからあの方には少し寛容になって頂きたいですな」
「折角綺麗な顔をしておられるのに」
「綺麗な薔薇には棘があるといっても」
「棘しかありませんね」
八条は彼にしては珍しくジョークで返した。
「仰るとおりです。長官は話がわかっておられますな」
「軍には縁の深い話ですから」
軍とこうした産業は切っても切れない関係にある。かっては軍と一緒に娼婦が同行していたりもしていた。第二次世界大戦の頃の日本軍でも同じである。当時は公娼制度があったので問題はなかった。間違ってもごく普通の少女を強制的に娼婦にするようなことはなかった。そうする必要すらないのであった。
この時代でもそうである。軍の高官は将兵がそうした犯罪を犯さないように気を配らなくてはならない。従ってそうした産業が発達する。丁度男の多い江戸で吉原が栄えたように。
本質的に男社会であるからそうした問題は必ずついて回るものなのだ。連合軍は女性もかなりいるがやはり少数である。
もっとも中には同性愛もあるがこれは少し例外といってよいだろう。
「少なくとも軍がそちらの港を利用させて頂く場合にはそうした産業をあって欲しいですね」
これは軍を預かる者としての意見であった。
「さもないと不安なのは事実です」
「わかりました」

彼等はそれを受けて頷いた。
「それは御安心下さい。ありますので」
「我々も何処にそれがあるかは把握しております」
「それはつまり貴方達も関係があるということでは？」
八条はそれを聞いて思わず問うた。
「先程も言いましたが」
だが三人はそれに対してはしれっとした顔で返してきた。
「あくまで間接的に、です。おわかりでしょうか」
「はい、まあ」
やはり金に目をつけられるのも当然だと思わずにはいられなかった。清濁併せ呑むとはいうがこれは少しやり過ぎという気もしないではなかった。
だがこの話もつつがなく終わった。そして三人は国防省を後にした。
「まさかあの御三方がここまで来られるとは思いませんでしたね」
木口は執務室に帰ってきた八条を出迎えて言った。
「まあ私は予想していたけれどね、ある程度は」
八条はそれを受けながら言った。
「ただ思いもよらぬ話も聞けたよ」
「思いもよらぬとは」
「解放軍のことでね。これついて今から話をしたい」
「わかりました」
八条は自分の執務用ディスクについた。木口はその前に椅子を持って来てそこに座った。
「解放軍と闇商人と繋がっていることは聞いているね」
「はい」
木口はその言葉に対して頷いた。
「その元締めについての情報を聞くことが出来たんだ」
「誰ですか」
「山口だ。山口義彦」

「あの男ですか。胡散臭い男だと思っていたらやはり」
「そしてその仲介ブローカーがネゴロツキーという男だ」
「ネゴロツキー、申し訳ないですがその男は知りません」
「山口の顧問弁護士だよ。これだけでわかるね」
「ああ、成程」
木口はそれを聞いて頷いた。
「大体はわかりました」
「うん。彼等は裏で彼等と繋がっているらしい。それで巨万の利を得ているという」
「いかにも、という話ですね、本当に」
「そう思うか、君も。ではこれからの対策はわかっているな」
「勿論です」
木口は即答した。迷ってはいなかった。
「よし、ではすぐにスタッフを集めようか」
「アラガル長官とンガバ准将ですね」
ンガバは前のテロリスト掃討の功績を受け准将に昇進していたのであった。
「そう、そして連合警察長官も呼ぼう」
「わかりました」
こうして二人はすぐに行動を開始した。そして捜査がはじまったのであった。

連合中央政府内務省は常にピリピリとした空気が漂っていると言われている。それは長官である金桃姫のせいであるのは言うまでもない。
多くの者は彼女のそのあまりもの融通の利かなさと厳格さに辟易している。だが上司としては有能かつ公平で清潔な為彼女を嫌う者は皆無であった。畏怖すら受けていた。
それでもその厳格さに馴染めるものではなかった。人には限度というものがある。彼女はその限度を遙かに越えた存在であったのだ。

だがここに一人その空気をも適用させている男がいた。
黒い髪を持つ長身の男であった。日に焼けた肌に紫の瞳をしている。その顔付きは険しくまるで猛禽の様である。そして漆黒のスーツに身を包んでいる。
彼の名をフィデル＝ドトールという。キューバ出身であり今は連合警察長官を務めている。
彼はまるで猫科の生物の様に足音を立てることなく進んでいく。硬い床に皮の靴なので音がする筈だが不思議な程それはなかった。
そしてそのまま進んでいく。やがて彼は長官部屋に辿り着いた。
その扉をノックする。すると中から返事が返ってきた。
「どうぞ」
それを受けてドアに手をかけた。
「入ります」
そう言って中に入る。そこには金が待っていた。
「只今戻りました」
「はい」
金は頭を下げて報告する金に対して返礼した。
「御苦労様でした」
「はい」
ドトールはそれに対して言葉を返した。低く重い声であった。
「今後連合警察はどう動くことになりましたか」
「特別対策チームが作られることになりました。国防省のスタッフと協同です」
「国防省とですか」
「はい、そしてその責任者は私になりました」
「長官ご自身がですか」
「はい。今回は規模が違います故」
ドトールは淡々とした口調で語った。
「私が陣頭指揮を執らないとならないでしょう。少なくとも連合警察のチームに関しては」

「しかしドトール長官が陣頭指揮を執られるとなると暫く連合警察も人手が足らなくなりますね」
「そのことに関しては御心配なく。既に副長官に全権を全て委任しております」
「副長官に」
「はい」
「彼なら問題はないでしょう」
連合警察副長官はベニョーコフ＝コレイスキーという。実務派の人物として知られ、その安定感のある仕事ぶりには定評がある。
「そうですか、それならいいです」
金はそれを認めた。
「あの方なら問題はないでしょう」
「はい」
「ではお願いしますね。容赦する必要はありませんから」
「それはわかっております」
彼はことは徹底的にやる人物として知られていた。
「それでは早速取り掛からせて頂きます」
「はい」
金はそれを了承した。
「では宜しくお願いします」
それからドトールはその足で国防省に入った。そしてすぐに八条等と会談し対策チームを編成した。スタッフも連合警察から何人か連れて来ていた。
仕事が一段落つくと国防省をあとにした。そして酒場に向かった。
「どうも」
そこに赤い髪に濃い青の瞳を持つ男が待っていた。
「では早速一杯やりますか」
「うむ」
ドトールはそれに頷いた。そして二人は酒場のカウンターに向かった。

「では乾杯」
ドトールが音頭をとった。二人は杯を打ちつけあった。
そして杯の中の酒を飲む。見ればオレンジの色をした酒である。
「スクリュードライバーはやはりいいな」
ドトールは酒を飲み終えてにこやかな顔で言った。
「そうですね。私もこれは好きです」
「コレイスキー君はウォッカが好きだったな、確か」
「ええ。他の酒もいける方ですけれどね」
彼がコレイスキーであった。
「ただ一番好きなのはやはりウォッカです。これが一番馴染みがあります」
彼はもう顔が赤くなってきていた。どうやらこのスクリュードライバーはウォッカの割合がかなり多いらしい。
「長官もお好きでしょう」
「うん、確かに」
ドトールの口調も普段とは違い明るいものとなっていた。
「ただ今は長官じゃない。ドトールという一人の男だ」
「おっと、そうでした」
コレイスキーはそう指摘され思わず恐縮してしまった。
「申し訳ありません」
「いや、わかってくれればいいさ。それよりも」
彼はここで朗らかな笑みを作った。
「今日は飲もう。心ゆくまでな」
「はい」
すぐに次の酒が来た。今度はジントニックだ。
「これもいいな」
ドトールはそれを一気に飲み干した。
「スクリューとはまた違った味がある。柑橘類を使っていても」
「そうですね」
コレイスキーもそれに同意した。

## 第六部第三章　奸物その七

「カクテルとはいいものです。こうしてカウンターでゆっくりと語らいながら飲めるのですから」
「そうだな、我々はどうも酒の場となると大勢でガヤガヤと飲むのが多いが」
「たまにはこうして落ち着いた雰囲気でゆっくりと飲むのもいいものです」
ここでジャズの音楽が聴こえてきた。
「こうした場所にはジャズが一番だな」
「ええ」
二人はそちらに顔を向けた。
「私はどちらかというとラテンミュージックが好きだけれどな」
そう言う彼の顔は見事に綻んでいた。
「だがしっとりと飲む時の音楽はやっぱりこれだよ」
どうも音楽にはわりかし造詣が深いらしい。人は外見によらない。
ここでサックスの演奏がはじまった。彼の目はさらに細くなった。
「いいな、一見地味だけれど確かな演奏だ」
「ピアノと息がよく合っていますね」
「そうだな。あの二人の奏者は見ればよく似ているな」
「兄弟ですかね」
黒人の二人であった。確かによく似ている。
二人は見事なまでに息の合った演奏をきかしていた。そして演奏が終わった時彼等に対して客から惜しみない拍手が与えられた。
「うん、それだけの価値はある」
ドトールはその拍手を聞きながら頷いていた。
「それだけでは足りない位だ」
そう言いながらカウンターにいるバーテンに声をかけた。
「あの二人だけれど」

「はい」
バーテンはそれを受けて顔を近づけてきた。
「何というグループ名かな」
「ミッチェルブラザースといいます」
「ミッチェルブラザース」
「はい」
バーテンはそれに答えた。
「最近売り出し中のジャズのグループですよ」
「そうだったのか」
「ええ。アメリカ出身の従兄弟のコンビです」
「兄弟じゃなくて」
「はい。彼等自身がそう言っています」
「ふん」
ドトールはそれを聞いてふと考えた。
「ちょっとあの二人を呼んでくれないか」
「カウンターにですか」
「ああ。演奏が終わってからでいいから。いいかな」
「はい。それでしたら」
そして暫くして演奏は終わった。ミッチェルブラザースはバーテンに案内されてカウンターに呼ばれてきた。
「こちらのお客様からです」
見ればカウンターに二つの杯が置かれていた。それはブラッディマリーであった。
「これは」
「先程の演奏へのお代です」
その隣にいるドトールが彼等に対して言った。
「お代」
「ええ」
彼はにこやかに笑って答えた。もう顔が真っ赤になっている。かなり酒が入っている。

「素晴らしい演奏でした。そのお礼です」
「そうなのですか。ところで貴方達は」
「私達ですか」
「はい。見たところサラリーマンの様ですが」
ここでドトールとコレイスキーは一瞬目を合わせて合図をした。
そして決めた。
「ええ、証券会社に勤めております」
「証券会社ですか」
「はい。中々休みがとれなくて。この仕事も大変です」
「そうらしいですね」
二人はコレイスキーの説明を疑うことなく聞いていた。二人が連合警察の長官と副長官であるとは夢にも思ってはいない。
「僕達はそちらの世界には詳しくないですが。元々そうした世界には無縁の世界で暮らしていましたし」
「そうなのですか」
「ええ。僕達はアメリカの労働者の家に生まれましてね」
「僕の親父もこいつの親父も工場に勤めていたんですよ」
「工場に」
「はい。何だったかな。確か自転車を造る工場で」
「バイクじゃなかったか」
二人は従兄弟同士で話をはじめた。
「確か自転車だったと思うけれど」
「そうだったかなあ」
二人は互いに以前の職場について話をはじめた。だがそれはすぐに打ち切られた。ドトール達がいたからだ。
「あ、すいません」
「いえいえ」
ドトールとコレイスキーは温厚な表情で返した。
「アメリカ出身なのですか」
「はい、シカゴ星系出身です」

アメリカ有数の工業地帯として知られている星系である。
「そこで小さい頃から楽器を演奏するのが好きでして」
「僕がサックス、そしてトニーがピアノでした」
「トニーと仰るのですか」
ドトールは二人のうち奏者を紹介した方に問うた。
「はい、僕はサミュエルといいます」
「御二人共よい御名前ですね」
「そうですか？」
二人はそれを聞いて照れ臭そうに笑った。
「名前なんて皆同じだと思いますけれど」
「まあこの名前が連合の皆が知っている名前になればいいですけれどね」
「ミッチェルブラザースとしてですね」
「はい」
ドトールの問いに笑顔で答えた。
「今にやりますよ。今度コンサートがあるんです」
「ほう」
「ここで」
そしてチケットを二枚取り出して二人に渡した。
「是非来て下さいね。お待ちしていますから」
「わかりました」
この後四人は心ゆくまで杯を交わし合った。そしてそれから店を何件か回り酒を飲み続けた。
翌朝ドトールは普段と全く変わらない様子で国防省に向かった。
昨日の大酒の影響は全くない。どうやら酒にはかなり強いらしい。
「八条長官は来られているかな」
彼は入口に立つ衛兵に問うた。
「はい、今しがた来られたばかりです」
「わかった」
彼はそれに頷くと中に入った。そしてそのまま八条の執務室に向

かった。
そして二人は話をはじめた。全ては戦いの為であった。
連合とマウリアの国境にあるアステロイド帯に彼等はいた。解放軍である。
解放軍と名前だけはいいが実際は海賊そのものである。彼等は連合の中でもとりわけ大きな勢力を持つ宇宙海賊である。
その数は一千万、艦艇は十万程である。殆どが連合各国やマウリアの旧式艦や改造した艦艇であるがその複雑な地形に適応したものであり彼等もまた地の利を心得ていた。そしてその操艦技術も優れたものであった。
彼等の首領は田代勝広という。南アフリカ出身だが日本に不法入国してそこから人権派を自称する悪徳弁護士と結託して日本人国籍を習得した。この弁護士こそネゴロツキーであった。
黒い髪に卑しい顔立ちの小柄な男である。原色を適当にまぶした悪趣味な軍服を着ている。彼は今本拠地であるアステロイド帯の中の一際大きな星の中にいた。
「連合軍が来るのか」
「はい、どうやらそうのようで」
傍らに控える柄の悪い男が答えた。
「規模はどの位だ」
「そこまではわかりやせんがかなりの数を送り込んでくるようですぜ」
「フン、性懲りもなく」
田代は下卑た笑いを浮かべながら言った。
「なあ、小泉さんよお」
そして隣にいる薄汚い蛸の様な顔をした頭の禿た中年の男に声をかけた。
「山口さんのルートさえ知られてなきゃどうとでもなるんだが」
「それは安心しろ。知られる筈がない」

その男は酒瓶を口から離して答えた。彼の名は小泉哲也、山口の腹心である。
「あのルートは誰にもわかる筈がない、例え連合軍でもな」
「それならいいんだ」
田代はそれを聞いて安心したようである。
「いざとなったらそこから逃げればいいだけだしな」
「その後は任せておけ」
小林は空になった酒瓶を床に放り投げて言った。
「山口先生が全てフォローして下さるからな」
「持つべきものは友達だな。山口には昔から世話になっている」
彼等は同郷出身であり昔から交遊がある。山口の悪事の実行部隊を率いていたのが彼であり山口の裏の仕事を斡旋したのも彼であった。二人は持ちつ持たれるの関係なのである。
「ネゴロツキーもいるしな」
「ああ。あいつはこうしたことには本当に頭が回る」
彼は山口だけでなくこの解放軍のブレーンでもあるのだ。
「とりあえず考えることはあいつに任せておこう」
「ああ。俺達は動けばいいだけだからな。ところで」
田代は小泉に顔を向けた。
「まだ飲み足りないだろう。一緒に飲まねえか？ブランデーのいいのが入ったんだ」
「ブランデーか」
「ああ、密輸でな。とびきりの上等のやつだぜ」
「美味いか？」
「この前一本飲んだがいける。御前も飲んでみたらいい」
「わかった。じゃあ飲ませてもらうか」
「おう、遠慮する必要はねえぞ」
そして彼等は奥に入って行った。そして二人でそのブランデーを楽しむのであった。
飲んでいると手下が一人入ってきた。

「どうした」
二人は赤い顔でその手下に顔を向けた。
「山口社長からです」
「社長から」
小泉がそれにすぐに反応した。
「はい。どうやらこちらに向けられてくる連合軍のことでお話があるとか。すぐに指令室に来て下さい」
「わかった」
二人はすぐに指令室に向かった。そこには各種の通信機器が揃っており、巨大なモニターも置かれていた。そのモニターに山口の姿が映っていた。
目付きの悪い男であった。白い肌がまるで病人の様である。そして歯並びの悪い口を見せていた。その歯には煙草のヤニまで付いている。
彼が山口義彦であった。表向きは正義派の連合議員であり連合政府の暴走に目を光らせている、と言われているがその素性は闇金である。それで巨大な利益を貪っているのだ。
また土地転がしも得意である。そして株を操作し、そこからまた利益を手に入れる。手癖も悪く新入社員に手をつけたり裏の風俗で幼女を相手にしたりと非道の限りを尽くしている男である。
「おう、久し振りだな」
田代は彼に対して声をかけた。
「そうだな。暫くそっちにも行っていないが元気そうじゃないか」
山口はそれに返事を返した。
「おかげさまでな。ところで話ってのは」
「ああ、わかってるとは思うが連合軍のことだ」
「やっぱりな」
田代はそれを聞いて酒で赤い顔を歪めさせた。
「それでどうなんだ？奴等の動きは」
「どうやら連合警察まで動かしているらしい」

「あそこなら怖くはないだろう。金が八条に手を貸す筈がねえ」
八条と金の関係は連合においては誰でも知っているとこであった。
「確かにな。まあそれは大丈夫だろうが」
山口もそう信じ込んでいた。彼はそのことには全く疑いを持っていない。
「ただ連合軍はそちらにはかなりの数を送り込んでくるようだぞ」
「フン、どれだけ来ても同じだよ」
田代はあくまで強気だった。
「ここは俺達の庭だ。他の奴等には戦うことすらできねえよ」
「ほう、自信があるようだな」
「勿論だ。それはあんただって同じだろう」
「フフフ、確かに」
山口はその下卑た顔をさらに下品なものにさせて笑った。実に卑しい顔であった。
「そう簡単には捕まるつもりはないからな」
「それは俺もだ」
田代はそれに応えた。
「もっともっと楽しまなければな。折角生きていることだしな」
「それは私も同じだ」
山口はそれに対して言った。
「金が欲しい、今よりもな」
「それだけ儲けていてまだ欲しいのかい、御前さんは」
「それは君も同じだと思うが」
「違いねえ。だが俺はちょっと違うぜ」
「女か」
「まあな。それもあるし酒もある。やりたい放題やれりゃあいいんだよ」
「他の者がどうなろうとな」
「おう、これからもそうやって生きようぜ、楽しくな」
「うむ」

二人はモニターを通じて下品な笑みを浮かべ続けていた。そして品のない笑いが部屋の中に木霊していた。

# 第六部第四章　ゲリラその一

ゲリラ

オムダーマンの南方侵攻は続いていた。今彼等は予定通りムワッハド連合に侵攻していた。

その数は二十個艦隊、アッディーン自ら指揮を執っていた。

だが彼はいつものように前線にはいなかった。後方で全軍の指揮を執っているのだ。

「ムワッハド軍の動きはどうだ」

彼は旗艦アリーの艦橋でタルジークに問うた。

「今のところこれといった動きはありません」

彼はそれに応えた。

「前線でも目立った動きはないようです」

「そうか」

アッディーンはそれを聞いて頷いた。

「やはりゲリラ戦を考えているとみてよいな、前線でそれだと」

「はい」

タルジークはそれに同意する返事を返した。

「おそらく彼等は我々のすぐ側に潜んでいるでしょう」

「側にか」

「はい。この地図を御覧下さい」

彼はここで艦橋のモニターのスイッチを入れた。そこにムワッハド星系の立体地図が映し出された。

「今我々がいるのはここです」

彼は軍服のポケットからレーザーを出して説明をはじめた。

「御覧の様に周囲は極めて複雑な状況となっております」

「うむ」

見れば上下左右にアステロイドが存在している。そして道が複雑に入り組んでいる。

「今我々はこの中を細長い列で進んでおります」
「進むだけでもえらく苦労させられているな」
「はい、そしてその周りには敵が潜むに適した場所が多々あります」
その為今彼等は慎重に哨戒を続けながら進んでいるのだ。
「彼等は間違いなく我等の動きを監視しています。それを忘れてはなりません」
「そうだな。何時何処から来るかわからない」
アッディーンはそれを受けて頷いた。
「彼等は彼等だけが知る道を持っているだろうからな」
「そうです。おそらくそれを使って攻撃を仕掛けてくるでしょう。そしてそれを使って逃げるでしょう」
「そして我々の消耗を待つ」
「はい、今までは首都を陥落させるなりして戦争は終わりましたが今回は違います」
「彼等がいる限り戦いは続くということだな」
「彼等が諦めない限りは」
「ふむ」
アッディーンはそれを聞いて考え込んだ。
「ムワッハド政府との交渉はどうなっている」
「相変わらずです。徹底抗戦を主張しています。外交部も困っています」
「そうだろうな。彼等とて必死だ」
政府との交渉で戦いを避けることは期待できなかった。あくまで戦いによって併合するしかないようである。
「市民の反応はどうだ」
「ムワッハドのですか？」
「そうだ。彼等は今どう考えている」
「それ程強硬ではないようです」
「穏健なのか？」
「どちらかというと、ですが」

タルジークは答えた。
「市民としては戦いで自らの生活が脅かされるのだけは避けたいようです。彼等もムワッハドの市民でありそれなりに抗戦の意志はあるようですが」
「それでも生活が最も大事か。そうだろうな」
人として当然であった。そしてゲリラ戦はその市民の生活を巻き込む可能性が高いのだ。
「では手段はあるな」
アッディーンは言った。
「それは」
「すぐに全軍に伝えよ。一般市民に対しては何があろうとムスリムとしての誇りを忘れるな、同じムスリムとして扱え、とな」
「ムスリムとして、ですか」
「そうだ。それなら文句はあるまい」
彼はそう言いながら言葉を続けた。
「そして何があろうとも市民の生活を保護せよとな。絶対に危害を加えてはならん。もし加えたならば軍法会議にかけ、階級を剥奪したうえで銃殺にする」
極めて厳しい処罰であった。オムダーマン軍での最も重い処罰であった。
「階級を剥奪したうえでですか」
それは軍人にとって最も残酷な刑罰の一つである。
「そうだ、それだけの重罪だということだ」
アッディーンは真剣な顔でそう言った。彼は元々軍律には厳しかったが今回はとりわけそうであった。
「よいな、市民には何があろうと危害を加えるな。そして今まで通りの生活を保護せよ」
「わかりました」
「それから全軍に伝えよ。投降した将兵はこれまで通り武装解除したうえで迎え入れよと。捕虜として丁重に扱え」

「ハッ」
タルジークはそれを受けて敬礼した。
「そして進撃は急ぐ必要はない。宙域を一つ一つ完全に掌握していくようにな。哨戒及び防衛を怠るな」
「そして補給路の確保もですね」
「そうだ。決して急ぐ必要はないからな。急いては事を仕損じる」
「わかりました。では全軍に伝えます」
「頼むぞ。ムワッハドを陥落させれば後の戦いがかなり楽になる」
ムワッハドは南方の要地の一つである。この地から東、西、南と三方に向かうことができるのだ。
「では進撃を続けよ。宙域を完全に掌握するまでは決して動くことのないようにな」
「ハッ！」
こうしてオムダーマンの作戦は決定した。彼等は何時になく慎重に軍を進めていった。そしてアッディーンの言葉に従い宙域を確実に掌握していった。それはこれまでの迅速な用兵からは考えられないものであった。
それは北のシャイターンにも伝わった。
「これは考えたな」
彼はその侵攻状況を資料で見て言った。
「どうやら彼は迅速に兵を進めるだけではないらしい。実に的確な用兵だ」
「的確ですか」
側にいた若い将校がそれを聞いて言った。
「うむ、実にな。御前もこれを見て思うことは多いだろう」
「はい」
その若い将校は彼の言葉に頷いた。
「兄上もそれは同じでしょう」
「否定はしない」
シャイターンは弟に対して答えた。

「だが御前にはかなり学ぶべきことが多い筈だ」
「それはわかっております」
見れば黒い髪と瞳の中性的な顔立ちの美少年である。背は高い方でありスラリとしている。
「あのアッディーンという方には只ならぬものを感じますから」
「御前もそれはわかっているか」
「ええ。今までの戦いを見ていると」
「ならばよい」
シャイターンはそれを聞き微笑んだ。
「それならば言うことはない。兄としてはな」
「有り難うございます」
「だがアブーよ」
「はい」
「御前はまだ若い。学ぶべきことはまだまだある」
見れば彼はまだ十代の後半といったところである。シャイターンの言うことはそれから見ても妥当と言えるものであった。
「このシャイターン家の三男としてやるべきことはわかっているな」
「無論です」
彼はそう言って頭を垂れた。
「私はシャイターン家の剣となる定めですから。兄上がシャイターン家の主」
「そしてフラームが法」
法皇である彼には当初からそれが求められていた。
「最もあの男は宗教家や政治家にしか向いていないか。戦場には立てぬ」
「人には向き不向きがあるということでしょうか」
「そうだな。私に法衣が似合わないように」
「私が軍服しか着ることができないように」
「そうだ。我々はそれぞれの果すべき役割がある。御前には私の下で思う存分働いてもらう」

「ハッ」
アブーはそれを受けて敬礼した。
「シャイターン家の剣として」
「では姉上は」
「マルヤムか」
「はい」
アブーはシャイターン家の末弟であった。彼と次兄フラームの間に姉がいるのである。
「そうだな」
メフメットはそれを受けて暫し考えた。そして答えた。
「クイーンといったところか」
「クイーンですか」
「そうだ、クイーンだ」
メフメットは笑いながら答えた。その笑みは妹に対して語る場合の笑みではなかった。
「わかるな、その意味が」
「はい」
「問題はこのクイーンを何時使うかだ」
「もう既にそれは決められておられるのでしょうか」
「いや、まだだ」
彼は弟の言葉に首を横に振った。
「父上とフラームにも話をしておかねばな。クイーンは大事な宝だ」
「はい」
「使い方を誤れば我等にとっても危うい。いや、誤ってもそれはそれで面白くなるかもな」
「といいますと」
「何でもない。こちらの話だ。忘れろ」
「わかりました」
「ところで話は変わるが」
メフメットは話題を変えてきた。

「はい」
「エウロパの軍拡はかなり大規模なもののようだな」
「はい、これまでの兵の倍以上を集めているようです。目標は二百個艦隊、そして三億を超える兵を揃えているとか」
「またかなり大規模だな。一度に二倍以上にするとは」
「おそらく連合を意識したものかと」
「そうだろうな。それ以外は考えられぬ」
それはメフメットにはすぐにわかった。
「だがそれだけではないだろうな」
「はい」
「総督府の軍もかなり増強しているそうだな」
「ええ、これまでの十個艦隊から二十個艦隊になりました。そして本土との航路を整備しております」
「いざとなったらその航路で一挙にこちらへの侵攻も可能だ」
「動くでしょうか」
「いや、それはないだろう」
だがメフメットは弟の危惧を否定した。
「そこまでの余裕は今の彼等にはない」
「そうでしょうか」
「国力の問題ではない。精神的な問題でだ」
彼は弟に対して語った。
「今彼等の目と心は連合に向けられている。とても我々に向ける余裕はないだろう」
「そうでしょうか」
「その証拠に最近総督府の目立った軍事行動はないだろう」
「それはそうですが」
「今はそれどころではないのだ、彼等も。だが我々がそれで気を抜いていいわけではないぞ」
「はい」
「わかっているな、軍備は常に備えておかなければならない。そし

ていざという時に動かすのだ」
「わかっております。既に傭兵の募集に当たっております」
アブーはにこやかに笑って答えた。
「早いな。だがそれでいい」
「はい」
「だがそれだけでは足りない。徴兵の方はどうなっているか」
「そちらも順調に集まっております。このままいけば二十個艦隊は組めるようになるかと」
「そうか。ではあとは艦艇だな。そちらはハルシークに任せてあるが」
「参謀総長には私からお話しておきましょうか」
「いや、それには及ばない」
メフメットはアブーを制止した。
「私が話そう。だがその場には御前も同席するようにな」
「わかりました」
「これも勉強だ。近い将来の為にな」
「ハッ」
アブーは再び頭を垂れた。
「やることはまだまだある。事を進めるのはそれからだ。その時にはアブー」
メフメットは弟をその黒い目で見た。琥珀の様でいてその中に深い闇をたたえた瞳であった。
「御前には十二分に働いてもらうぞ。我が軍の将の一人として」
「承知」
彼は兄の前に片膝を折った。
「この命、我がシャイターン家に捧げましょう」
そして頭を垂れる。メフメットはその弟を琥珀の瞳で見下ろしていた。

## 第六部第四章　ゲリラその二

連合の首都地球に近い日本の播磨星系の惑星の一つ神戸に彼等はいた。
この星系は日本の中では重工業及び商業で知られている。各国の船や人が行き交い、そして工場から活気が聞こえてくる。そうした賑やかな星系であった。その繁栄は日本においては美原星系に次ぐものであった。
その中で神戸はこの星系に複数ある人の居住している星の中では商業都市として有名であった。連合でも屈指の交易都市であり、多くの企業の本社もここにある。
その中には山口の会社である『ニアー＝オリエント社』もある。表向きは厚生や金融を取り扱っている企業だがその実は闇金である。
社員は暴力団出身かそれに近い者が多い。山口自身もその経歴は胡散臭いものだという噂がある。
今そこに入ろうとする男がいた。白髪に異様に醜悪な顔をしている。人のものとは思えない。まるで仮面劇の悪役の仮面の様な顔だ。警衛の柄の悪い男が彼に頭を下げる。
「うむ」
彼はそれをふんぞりかえって受ける。そしてビルの中に入っていく。
エレベーターを使い上にあがる。そして最上階に来た。
「ようこそ」
いきなり銃で武装した男達に呼び止められた。
「山口さんはいるか」
男は彼等に問うた。
「はい。お待ちしております」
彼等はそれに答えた。男はそれを受けると彼等に言った。
「よし、じゃあ案内しろ」

「はい」
そして武装した男達に案内されて社長室に来た。武装した男の一人がそのドアを開ける。
「ネゴロツキー弁護士が来られました」
「おう」
中から男の声が気負えてきた。
「お通ししろ」
「わかりました」
男はそれを受けて来訪者、すなわちネゴロツキーに顔を向けて言った。
「どうぞ」
「おお」
彼はそれに鷹揚に頷き部屋の中に入った。そこは下品に装飾された執務室であった。
悪趣味な部屋であった。やたらと金で飾り置かれている彫刻も裸婦の淫らな格好のものばかりでおよそ品性とは無縁であった。おまけに後ろにはヌードポスターまで貼られている。女性が見たらすぐに胸を悪くしそうな部屋であった。
その奥にある金で作られた机に彼はいた。言わずと知れた山口である。
「来てくれたか、久し振りだな」
「地球はどうだった」
ネゴロツキーは彼に尋ねた。
「おう、まあまあといったところだな」
「そうか」
「ただ田代から連絡があってな」
「何と言っていた？」
彼はそれに尋ねた。
「連合軍は安心して任せろといったことを言っていたな。今までと変わりがないと」

「だといいのだがな。今までの討伐軍と同じだと」
「ああ。どうやら八条は本気なようだからな。百個艦隊を差し向けるらしいぞ」
「海賊相手に百個艦隊か」
エウロパの全艦隊に匹敵する戦力である。それを海賊討伐に使うなぞ前代未聞であった。
「俺は下院の軍事委員も兼ねているのだがな」
「先月なったんだったな」
「ああ。それによるとマウリア軍と共同して包囲するつもりらしい」
「兵糧攻めか」
「そのつもりらしいな。そしてゆっくりと消耗を待つつもりらしい」
「そうか。それなら問題はない」
ネゴロツキーはそれを聞いて安心したように笑った。
「あの道があるからな」
「ああ。俺もそう考えている」
山口もそれに頷いた。
「あの道がある限り幾ら他の道を塞いでも同じことだ」
「そういうことだ。奴等はどうやらそれには気付いていないらしいな」
「連合軍にはわからねえだろうな。俺達が秘密の道を通って動いていることには」
「それはそうだろう。奴等の領内でないしな」
その道はどうやらマウリア側にあるらしい。
「マウリアにしてもその道は知らないしな」
「海賊だけの道だ。思いきり利用させてもらおう」
「うむ。では別の話に入るか」
「おう。何だ」
「今度の商談だがな」
二人は今度は裏の世界の商談に入った。そっれについて話す二人の顔は極めて醜悪なものであった。彼等は話が終わるとさらに下卑

た笑いを浮かべた。
話を終えるとネゴロツキーはニアー＝オリエント社を後にした。
その時にはもう日が暮れていた。
彼はそのまま夜の街に向かった。そしていかがわしいバーに向かった。そこは山口の直営店である。
「おう、今日は俺の奢りだ」
彼はホステス達に囲まれてご満悦であった。
「どんどん飲め、そして踊れ！」
ホステスの胸に札束を押し込んだり太腿にむしゃぶりついたりしている。店は貸切なので彼の他には客はいない。それをいいことにやりたい放題であった。
たらふく飲み食いした後で店を後にする。彼はもう骨まで酔っていた。
「ふうう、随分飲んだな」
泥酔しきっていた。迎えを呼ぼうと携帯を取り出す。
「ん！？」
だが携帯のバッテリーは壊れていた。つかない。
「ちっ、やっぱり安物は駄目だな」
彼は舌打ちをしてその携帯を地面に投げつける。そしてそれを足で砕いた。
「大丈夫ですか？」
そこに制服を着た警官が姿を現わした。日本の警察の制服であった。
「ああ、大丈夫だよ」
彼は赤い顔でいささかロレツが回らなくなってきた声で答えた。
「いいから放っておいてくれ」
「いえ、そういうわけにはいきませんから」
だがその警官は彼を無視しなかった。
「酔いを醒ます為にこちらへ」
「おい、待て何処へ連れて行くつもりだ」

トラバコに連れて行かれるのでは、と酔った頭で思った。だが実は違っていた。
「いいですからこちらへ」
「おい、離せよ。俺を誰だと思ってるんだ」
そして彼は交番に連れ込まれた。
「さあ、ここに入って下さいね」
「おい、出せよこの野郎」
彼はまだ喚いていた。だが警官は彼を部屋に入れるとそこに鍵をかけた。そしてその場を後にした。
それから交番の奥に向かった。そこには一人の男が座っていた。
「ネゴロツキーの身柄を確保しました」
彼は敬礼してその男に報告した。
「御苦労」
それはドトールであった。彼は制服の警官に答えると立ち上がった。
「では水を与えよ。自白剤を入れたものをな」
「ハッ」
この時代では拷問はない。う二十世紀のそれとは比較にならない程の性能を持つうそ発見器や後遺症のない自白剤が開発された為それを使用するのだ。これにより冤罪も殆どなくなりスパイの摘発も楽になっている。
「それから待機しているスタッフ全員に集合をかけろ。アラガル長官とンガモ准将にも連絡してな」
「わかりました」
彼はキビキビとした動作で次々と指示を出す。
「自白剤はとりわけ強力なのをな。あの男程の悪党になると容易には口を割らないだろうから」
「はい」
「ではすぐに尋問を開始しよう。用意はいいな」
「今準備しているところです」

「よし。ではそれが整い次第すぐに取り掛かるぞ」
こうしてネゴロツキーへの尋問が開始された。彼は自分でも気付かないうちに全てを告白してしまっていたのだ。
「これでよし」
「はい。ところで」
警官がドトールに尋ねた。
「何だ」
「今この男はどうしますか」
「そうだな。今は離しておこう」
「わかりました」
そして酔いが醒めたところを見て放された。彼は悪態をつきながら交番を後にした。
「何も疑ってはいませんね」
警官はそれを見送りながらドトールに対して言った。
「そうだな。愚かな奴だ」
ドトールはその後ろ姿を見送りながら笑っていた。
「自分のこれからの末路も知らないで」
「はい。ですがこれであの男も山口も終わりですね」
「ああ。では早速明日から強制捜査に入るぞ。証拠は全てここにある」
彼はそう言いながら手に持っているメモを警官に見せた。
「はい、思う存分やりましょう」
そして夜が明けた。ネゴロツキーは二日酔いの頭で自分のオフィスに向かった。
「まだ頭が痛みますか？」
机に頭を抱えながら座り込むネゴロツキーに秘書が尋ねた。見れば如何にも、といった感じの柄の悪い男であった。
「ああ、薬と水を持って来い」
彼はそれに対してこう答えた。すぐに秘書は薬と水を持って来た。
それを飲む。次第に頭の痛みがとれてくる。そして冴えてきた。

「ふう」
彼は大きく息を吐き出して自分のオフィスを見回す。そこは何処から持って来たのか悪趣味な飾り物で埋め尽くされていた。あの山口の執務室と全く同じであった。
「今日も金が入る仕事をしないとな」
彼はそう呟いた。そして電話を手にした。取引先に電話をかける。そこは山口と関係のある貿易会社だ。裏では麻薬を取り扱っている。
「俺だ」
顔見知りなので気軽な言葉をかけた。だが返事をしようとしたその声が急に消えた。
「!?どうしたんだ!?」
彼はそれを聞いて一瞬向こうで何が起こったのかわからなかった。だが次の瞬間には自分の身でもって何が起こったのかわかった。

## 第六部第四章　ゲリラその三

「動くな！」
何者かがオフィスに入って来た。それも一人ではない。
彼等はすぐにオフィスを占領した。そして一斉にネゴロツキーに銃を突きつける。
「ネゴロツキーだな」
その中央にいるやや小柄な男が彼に対して問うた。
「そ、そうだが」
彼はいささか怖気づきながらも返答した。
「貴様等は何者だ！？マフィアか！？」
「私達がそう見えるか」
だがその小柄な男は彼に不敵に返した。
「クッ、じゃあ」
「そうだ。予想通りだ」
男はそれに答えた。そして名乗った。
「連合国防省テロ対策部部長アラガルだ。この名は知っているだろう」
「国防省が何故俺のところに」
「連合警察と共同作戦を採っていると答えようか。これだけ言えばわかるな」
「クソッ・・・・・」
ネゴロツキーはそれを聞いて歯噛みせずにはいられなかった。だがそうしたところで今更どうにでもなるものではない。
「既に貴様も山口もその一派のところにも全て手は回っている。観念するんだな」
ネゴロツキーはそれには答えられなかった。後ろでは秘書達が連行されている。
「よし、これより捜査を開始する。すぐに取り掛かれ」

「ハッ」
アラガルの指示が下る。周りの者達はそれを受けて動きを開始した。
これは山口のところも一緒であった。ニアー＝オリエント社及びその関連企業は一斉に連合警察の一斉捜査を受けた。罪状は詐欺、密売、密造、偽造、違法取引と様々であった。特に解放軍のとの&#３２３６３;がりを重点的に捜査された。
これを受けてニアー＝オリエント社の株は暴落した。そして捜査開始から三日後には関連企業、傘下の企業も含めて上場廃止となった。
山口はこれまでの罪状を徹底的に捜査された。そして議員としての資格を全て剥奪され留置所に入ることになった。そしてネゴロツキーや小林共々裁判にかけられることとなった。死刑は確実と言われていた。
また解放軍の秘密の道も発見された。連合軍は早速その道を押さえた。これにより彼等は完全に袋の鼠となった。
「これでよし、といったところかしら」
伊藤は電話で八条に対して言った。
「いえ、まだです」
だが彼はそれに慎重な様子で答えた。
「まだこれからですよ」
「あら、慎重ね」
伊藤はそれを聞いて笑って返した。
「まだ彼等は健在ですから。一千万もいると流石に対処に困ります」
「サハラだとちょっとした国の軍程の規模だからね」
「はい。今のところマウリア軍と共同して兵糧攻めにしていますが」
「それでいいと思うわ」
「そう思われますか」
彼は電話の向こうで彼女の言葉を受けて微笑んだ。
「ならばいいのですが」

「攻め込むつもりはないのね」
「はい。当初は少しずつ攻め込むつもりでしたが」
「地形を考えて止めたのね」
「ええ。地の利は彼等にありますから。このまま彼等が疲弊するのを待つことにします」
「けれどそれで市民が納得するかしら」
「市民が」
「そうよ。彼等はいつも戦いが早く終わることを願っているわ。特にマウリアとの交易をしている人達はね」
「それはわかっております」
八条は答えた。それがわからぬ彼ではなかった。
実はこの解放軍の討伐はマウリアとの交易を行っている貿易商や企業からの要望もあったのだ。中にはそれで生計を立てている者も多い。彼等にとってはマウリアとの通商の回復は命そのものである。
だが今は交戦中である。これでは通商も交易も不可能である。それは彼等にとっては死活問題である。
彼等にしてみれば生活がかかっている。家族や従業員のこともある。だからこそ早期の解決を望んでいるのだ。
「ですが下手に攻め込んで損害を出すのもどうかと思いますし。企業や貿易商には中央政府から補償金を出しておりますし」
「それでも限度があるでしょう？中央政府だってそんなに潤沢ではないし」
「はい」
中央政府の収益は黒字である。だが楽観視できないのが国家の財政だ。今は潤沢でもすぐにそれは赤字に転落するものなのである。
「そうそう長い間交戦状態にあって通商をできなくしていてはまずいのじゃないかしら」
「はい」
八条はそれに頷いた。
「ではそれを今からの会議で話し合うことにします」

「それがいいわね。けれど無理は駄目よ」
伊藤はそう忠告することも忘れなかった。
「損害を出しても同じだから」
「難しいですね」
「戦争はそういったものよ。特に民主主義国家の戦争はね」
他の政治形態の国家よりも市民の支持や声を意識しなくてはならない。一歩間違えればそれが作戦の失敗や敗戦にも繋がる。そうして敗戦した例もある。また無益な戦争に走る怖れもあるのだ。有権者の声は時として危険な刃にも成り得ることの証左の一つでもある。
「けれどそれを巧く処理してこそ政治家というものよ」
「はい」
「だからこそ面白いと言えば暴論かしら」
「そうでしょうね」
八条はその言葉に苦笑せざるをえなかった。
「民主政治では戦争は難しいものだけれど」
「海賊との戦いも戦争ですか」
「そうね。戦闘ではあるわね」
戦争と戦闘はまた違うものではあるが。
「どちらにしろ損害を出すのは好まれないわね」
「はい、それが難しいところです」
「時間をかけるのも駄目、さあどうするつもり？」
「何とかするしかないですね。このまま時間をかけてもマウリアとの通商が滞り支障をきたしますから」
「そうね。けれど貴方なら何とかできると思っているわ」
「それは買い被りですよ」
「そうじゃないと思うわ、うふふ」
「また。からかわないで下さいよ」
こうして二人の電話での会話は終わった。暫くして木口が入って来た。
「会議のお時間です」

「うん」
彼はそれに頷き立ち上がった。そして部屋を出て会議室に向かった。
「今回は南西地区の艦隊司令も来ているのだったな」
「はい、作戦の実行段階の詰めの会議ですから。特別に来てもらいました」
「よし。あの地区の艦隊司令はカーロス＝クラウス元帥だったな」
「はい」
カーロス＝クラウスはベネズエラ出身である。背はそれ程大きくはないが茶色の髪を整え口髭をたくわえた気品のある老紳士である。ベネズエラ出身であるが名がラテン系でないのは彼の祖先のルーツがオーストリアにあるからだ。そのせいか彼はよく『老貴族元帥』と仇名されるが彼は自らがベネズエラ国民、そして連合市民であることに対して強い誇りを持っている。
「あと地区司令もお呼びしています」
「ハリアム＝モハマド元帥か」
「はい、あの方も出席されています」
「そうか。ううむ」
八条は彼の名を聞いて難しい顔をした。
「どうかされたのですか？」
「いや、あの人は難しい人だから」
「ああ、成程」
木口はそれを聞いて納得したように頷いた。
「確かに。昔の我が国でいう薩摩隼人といった方ですからね」
「マレーシア人というのはそうした人が多いな。剛直というか何というか」
「昔からですね。二十世紀の終わりからでしたか」
「ああ。あの頃からアメリカにも中国にも強硬に主張する。当然我が国にも」
「東外相もぼやいておられたそうで」

「この前マレーシア首相と会談したそうだな」
「はい、そこで日本との貿易を巡ってかなり激しいやりとりがあったとか」
「で、東外相はどうされたのだ」
「何とか踏み止まられたそうですがかなり譲歩されたそうです。あんなに手強いのはアメリカにも中国にもいないと仰っていたそうです」
「まああの人は元々中南米各国との交渉にあたっていた人だからな。中南米にはああいったタイプはあまりいない」
「いや、他の国にもいませんよ」
「そう言えばそうだけれど。それにしてもマレーシア人、特にモハマドという姓にはそうした人が多いような気がするな」
ただしこの二人のモハマドには血縁関係はない。マレーシアには多い姓であるだけである。
「そういえばそうですね」
「連合にいる元帥の中であの人が一番頑固だ」
「頑固ですか」
「それだけじゃない。剛直だしそれでいてバランス感覚もとれている。手強いよ」
「長官でも苦手な方がおられるのですね」
「いや、あの人は特別だよ」
こうした話をしながら廊下を進んでいく。そして会議室の前に来た。
「どうぞ」
衛兵が敬礼をした後扉を開ける。木口は入口に残り彼を見送る。八条はそれを受けて会議室に入った。

## 第六部第四章　ゲリラその四

すぐに中にいる制服の男達が席を立ち彼に敬礼する。彼はそれを受けて返礼すると彼等を席を着けさせた。
それから自分の席に着く。そして言った。
「今回の会議ですが」
「はい」
元帥達が彼に顔を向ける。
「新たに発見された解放軍の秘密の道です」
ここで彼は三次元モニターのところにいる士官に合図を送る。すると彼はモニターのスイッチを入れた。
そこに解放軍の勢力圏のアステロイド帯の地図が映し出される。そこには新たにマウリア側から続く一つの道が書き込まれていた。
「この道が新たに発見されたことは大きな意味を持つと言っていいでしょう」
「そうですね。やはりまず山口達を押さえたことは大きいと思います」
マナドが言った。
「そうでなければその道を発見することはできなかったでしょうから」
「はい。これには連合警察との共同作戦が功を奏しました」
「ドトール長官ですね」
「ええ。あの方の独自の捜査から発見されました」
「流石ですね」
ドトールの捜査能力は有名である。
「流石は敏腕刑事で鳴らしたことはある」
バールが称賛の言葉を述べた。
「確かかっては名刑事だったそうですね」
「そうらしいですね」

八条がそれに応えた。ドトールは刑事として名を馳せそこからキューバ警察長官となり、連合中央警察長官に抜擢されたのである。あくまで刑事であったのだ。
「おそらくその能力を生かされたのでしょう。しかしそのおかげでこうしてこの道を見つけることができました」
「はい」
元帥達は頷いた。だが内心では別のことを考えていた。
(内相との話し合いでは相当苦労されただろうな)
(よく話がまとまったものだ、あの鉄の女と)
彼等も自分達の長官と内務省の女教皇の仲は知っていた。金はそのあまりもの潔癖さと厳格さから『内務省の女教皇』とまで呼ばれていた。タロットカードからとられているが実際のカードの意味とは全く違っている。ちなみに八条は若き皇帝とされている。こちらは例によって若い娘達によって名付けられている。
「さて、問題はこの道をどう使うかです」
八条は彼等の心の中はおおよそわかっていたがとりあえずはそれを置いておいた。そして話を続けた。
「今までの作戦計画に倣うと封鎖するのが妥当ですが」
既に連合軍はマウリア軍と協同して解放軍の包囲に取り掛かっていた。この道はマウリア側にその入口がある。
「それについては皆さんはどう思われますか」
「はい」
まずはモハマド元帥が手を挙げた。
「それについて考えがあります」
「はい」
八条は彼が手を挙げたのを見て内心やはり、と思わずにはいられなかった。
「地の利は彼等にあります。それを考えるとこの道を封鎖し長期に渡って兵糧攻めにするべきであると思います」
「つまり現状の作戦通りにするべきだと」

「はい、私はそう考えます」
彼はそれを受けて頷いた。
「時間こそかかりますがこれが最も確実な方法ではないでしょうか」
「ふむ」
八条はそれを受けて考える顔をした。
「わかりました。ではまずはこの意見を第一案と致します」
彼は元帥達を見回してそう伝えた。
「他に意見はありますか」
「はい」
ここでクラウスが手を挙げた。
「私はモハマド司令とは別の考えです」
「といいますと」
「はい。発言して宜しいでしょうか」
「どうぞ」
他の者の発言を禁じるような八条ではない。当然それを認めた。
「では」
クラウスはそれを受けて席を立った。そして口を開いた。
「まずは兵を増やして頂きたい」
「現在の百個艦隊よりもですか」
「はい。倍は欲しいです。それをまずお願いしたいのですが」
「ふむ」
八条はそれを聞いて口に手を当てた。
「まずはその理由をお聞かせ下さい。それ次第です」
「はい」
クラウスはそれを受けて話をはじめた。
「攻め込む為です。まずは今回発見された道に主力を向けます」
「はい」
「そして他の道からも軍を向けます。道を確保しながら少しずつ兵を進めていきます」
「当初の侵攻計画と同じですね」

「はい。ですが主力をマウリア側からの道に向けていると事情がかなり違ってくると思います」
「といいますと」
「解放軍の目がそちらに向かわざるを得ないからです。そして彼等はその道に多くの伏兵を配するでしょう」
「そうでしょうね」
これは当然予想される事態であった。ここにいる全ての者が容易にそれを予想できた。
「そこで他の道からも兵を向けるのです。ですがそれは今までの百個艦隊では不十分であると考えます」
「それは何故でしょうか」
八条はそこでまた問うた。
「地の利は彼等にあります。おそらく後方の撹乱に出て来るでしょうから。その為に兵はより多く欲しいのです」
「成程」
これは奇しくも今南方でアッディーンが採っている戦略と同じであった。だが彼等はそれは知らない。
「そしてジワリジワリと進んで行きます。そして彼等を包囲の中に包み込むのです」
「心理的にも圧迫を加えていくのですね」
「はい、それも考えています。そうすれば内部分裂も誘うことができましょう」
「そうなれば討伐はより容易になりますね」
「そうですね。そしてこちらに向けられる兵も減ります」
「ふむ」
八条はその整った眉を微かに動かした。
「長官はどう思われるでしょうか」
クラウスはその眉の動きを見て彼に問うた。八条はそれに答えた。
「悪くはないと思います。ですが中には狭い道も多い。ティアマト級戦艦が通過出来ないような道もありますね」

「はい、そこは他の艦艇で押さえていかなければなりません。また後方の航路確保にはパトロール艦も有効であると考えます」
「元々そうした任務の為の艦ですからね」
「後は個々のアステロイドに配備されている砲座やミサイルに注意して進めていけばよろしいかと。そして彼等の本拠地を目指すのです。それでどうでしょうか」
「私としてはそれで反論はありませんね」
八条は落ち着いた声で答えた。
「他の方はどうでしょうか」
ここで彼は列席者見回した。見たところ反論する者はいない。
「モハマド元帥もそれでよろしいでしょうか」
「はい」
ここで一同は反論が出るものと思っていたがその予想は外れた。意外にも彼はそれに同意したのだ。
「私もクラウス元帥の考えに賛成致します」
「そうですか」
八条はそれを聞いて頷いた。
「では裁決をとります」
彼は立ち上がって一同に言った。
「今回の解放軍討伐はクラウス元帥の案に基づいて進めていくことにします。それで宜しいでしょうか」
「ハッ！」
皆一斉に席を発った。そして八条に向けて敬礼をする。これは反論んし、ということであった。
「わかりました」
彼はそれを受けて頷いた。
「ではそれで進めていくことにします。作戦の総司令官はクラウス元帥」
「ハッ」
彼はそれを受けて敬礼した。

「スタッフは南西地区の者よりクラウス元帥が選ぶものとします。参加兵力は二百個艦隊、四億」
これだけでマウリアの全兵力に匹敵する。連合軍の巨大さがわかるものであった。
「攻撃目標は解放軍及びその本拠地、目的は海賊掃討」
あくまで正規戦ではないと規定した。これには政治的意味合いもあった。
海賊を正規軍と認めるわけにはいかないのだ。そこにまたゲリラ等とみなしてもいない。あくまで犯罪者として取り扱う必要があるのである。これはそこに付け込もうとする怪しげな団体の介入を排除する為でもあった。現に彼等は山口率いるニアー＝オリエント社と結託していたのであるから当然であった。
「では作戦発動は三ヵ月後とします」
「はい」
時刻も決定された。いよいよ全てが整ってきた。
「ではこれで会議を終わります。勝利を我等が手に」
「ハッ！」
元帥達が最後に再び一斉に敬礼した。こうして会議は終わった。
会議が終わった後モハマドとクラウスは二人で食事を採っていた。場所は国防省の食堂である。
連合軍においては食堂は一つになっている。将校も下士官も兵士も関係ない。皆一つの場所で同じような食事を採っている。時には八条もここで食事を採る。
これも連合軍の特徴の一つであった。連合軍には階級は確かに存在するがその居住や食事には区別はなされてはいないのだ。
ここには一つの事情がある。やはり待遇であった。
「連合軍では一兵士も昔の将校と同じ待遇が得られる」
そう宣伝しているからにはこうしたことになるのも当然であった。またここには断絶しがちな将校と兵士の関係を結び付けるという意味もあった。

## 第六部第四章　ゲリラその五

元々連合は階級社会ではない。だからこうしたこともすぐに受け入れられた。エウロパとは根本から違う。

エウロパでは将校と下士官、兵士の差は極めて顕著である。食事も居住環境もまるで違う。当然給与もだ。連合も将校と下士官、兵士ではかなり違うがエウロパはその比ではない。連合においては新兵と大学、若しくは士官学校を卒業し研修を終えて少尉となった者の給与は二倍程度である。責務が違うからこれは当然であると考えられていた。そもそもその新兵の給与も他の職の給与と比べればかなり高く設定されている。そうしなければ人が来ないという志願制のジレンマもあるが。

だがエウロパでは何と五倍になる。当然将校には貴族が多い。連合の将校が士官学校や大学だけでなく下士官候補生や少年兵出身者、叩き上げのベテラン等から幅広く登用しているのとはかなり事情が違う。連合軍設立前であるがキロモトは下士官候補生から将校になり、八条も一般大学から日本軍の少尉になったのとは違うのである。貴族は兵士になることはない。平民とは違うのである。

そしてその待遇もやはり違ったものになる。他の職や社会よりも軍ではそれが顕著になっている。軍は階級社会の象徴そのものであるからだ。

これが連合にとっては格好の批判材料になる。彼等は口々にこう言う。

「差別そのものの象徴に他ならない」

「軍を支える連帯意識の放棄だ」

と。だがエウロパの将校の質はかなり高いので昔から定評がある。これは連合の者も渋々ながら認めている。

連合軍では将校も下士官も兵士もバランスよく能力を整える考えだ。軍律は非常に厳しいが教育や訓練は比較的穏やかなものとなっ

ている。特殊部隊は別にしても鉄拳制裁も禁止されているし罵声も極めて少ない。やはり志願制である、そして紳士を育てる為でもあった。

精兵を育てる必要はないというのが連合軍、そして八条の考えであった。バランスのとれた平均的な将兵を必要と考えているのだ。連合軍で必要とされているのは一人の名将や僅かな精兵ではなく多くのバランスのとれた普通の将兵であった。それ以外は求めてはいなかった。

だがエウロパでは違うのである。下士官や兵士よりも彼等を指揮する将校に重きを置く。そしてその求められる責務や能力も非常に大きい。従ってその給与や待遇も違ってくるのである。

「その立場に相応しい能力や行動を持て」

これがエウロパの考えである。所謂高貴な者の責務であった。だからこそ彼等は積極的に軍に入り、そして死地にも赴く。考え方が連合のそれとは違うのであった。

連合では軍人はあくまで職業の一つである。これは将校も兵士も変わりはない。だがエウロパでは軍人になることは高貴な者の責務と考えられている。貴族はそこで正しき行動をとり、部下を指揮することが求められる。従って求められるものも大きくなっていく。

軍人は職業であるから食堂も食べているものも同じになるのが連合である。だがエウロパでは職業とは認識されてはおらず言わば騎士なのである。彼等はこの時代においても騎士であるのだ。

連合とエウロパの軍人に対する考え方はこのようにかなり違う。サハラはさらに異なる。多くの国は徴兵制を採り、そして士官学校がなく全て一兵卒からはじまるかってのイスラエルの様な軍制の国家もある。絶えず戦争が行われている為一兵卒から提督になるケースも多い。また彼等は信仰によってその意義が認められている。彼等は軍人である前にアッラーの戦士であるのだ。

マウリアは連合と似た感じである。ただしカーストの名残が見られる。このように各国でかなり違っているのだ。

二人はこの時アドボとシニガン、そしてヒープンギザドに米を食べていた。どれもフィリピンの料理でありアドボは鳥に大蒜やローリエを入れた煮込み、シニガンは酸味を効かせた玉葱やトマト、魚のスープ、ヒープンギザドは海老のココナッツ煮である。二人は向かい合って食事を採っていた。

「ふむ」

モハマドはアドボの鳥肉を口にしながら呟いた。

「柔らかいな。よく煮込まれている」

彼はイスラム教徒なので豚肉の入っていないアドボを食べていた。

「そうだな。ここの給養員は腕がいい」

クラウスもアドボを口にしていた。見れば彼等の隣には私服の少年達がいる。見学の学生らしい。

「美味しいね、これ」

「うん」

見れば彼等もこの料理に舌づつみを打っている。二人はそれを横目で見た。

「子供にも評判がいいな。これはいいことだ」

「そうだな。軍の食事はまずいという認識が何処かになるからな。これはいいことだ」

クラウスは箸を手にした。そして白い飯を口に入れる。

「この米もいい。あっさりしていてな」

「そうだな。米はやはりあっさりしたのがいい。こうした料理には特にな」

二人はどちらかというと細長い米が好きである。八条とは趣向がまた違っている。

「長官はどうやらあの粘りのある米がお好きなようだがな」

「そうか。流石は日本人だな」

モハマドはそれを聞いて思わず苦笑した。

「日本人の趣向は昔から変わらないな。生の肉や魚を好んで食べるし粘りのある米が好きだ」

「食べてみるとあれも案外美味いがな」
「だが最初見た時は驚いたぞ。寿司にしろな」
「外国でも魚を食べたがる。この前のことを覚えているな」
「ああ、あの時のことだな」
モハマドはそれを聞いて端を止めた。
「あれは凄かったな。まさか生で食べるとは思わなかった」
「レシフェ星系産のピラルク。食べられるとは思わなかったな」
レシフェ星系は北西地区にある星系である。ブラジル領でありその中の惑星の一つは熱帯雨林の星である。ピラルクはそこにいる。
地球のピラルクよりも遙かに大きく十メートルを超える。だがその性質は大人しくこの星の者には親しまれている魚である。
「寄生虫の心配がなく、しかも食べてもいいと聞いたらすぐに鱗を落として包丁で切りだしたからな。私も相伴したが」
クラウスがあの時のことを思い出しながら語る。
「私は食べていないんだ。美味しかったのか？」
「ああ。癖がなくてな。醤油とよく合った。その日本人が持って来た山葵と一緒に食べた」
「そうか」
「早速店が出来たからな。あれは繁盛するな」
クラウスの予想は当たった。それから暫くしてこのピラルクの刺身はレシフェ名物となる。
彼等はそうした話をしながら食事を採った。そしてそれを終えると席を立ち国防省を出た。それから車中の人となり空港に向かった。
そこの一室に入った。予約していた部屋だ。彼等はそこに入ると向かい合って座った。
「ところでだ」
今度はクラウスが口火を切った。
「私の案通りに行くことになったがそれでいいのだな」
「無論だ」
モハマドはそれに応えた。

「それが一番だと思っている」
「では何故あの時持久策を出したのだ？確かに今までだとあれが一番だが」
「貴官の次の案が受け入れられ易いようにと思って出したのだが」
「私の！？」
クラウスはそれを聞いて眉を動かした。
「そうだ。私の案に対抗する形で出せばそれだけ通り易いだろう。そう考えたのだが」
「成程な。そういう考えがあったのか」
「そうだ。解放軍の急所が見つかった以上そこを衝かない手はない。最早彼等の命運は尽きているのだ。ならばすぐにその命を絶つべきだ」
「そしてマウリアとの航路を回復させる、か」
「そうしないと色々とまずいからな。今回の作戦は迅速さが要求される状況になってきた」
「財界から要求があるからな、南西地区の」
「私のところにもその話は届いていたからな。おそらく中央にも来ているだろう。それに財界だけの問題でもない」
「労働界にもか。話は複雑だ」
連合では労働組合の力は比較的弱い。だが個々の労働者の権利は保障されなければならないのは言うまでもない。マウリアとの航路の回復は彼等にとっても早急に果されるべき事柄であるのだ。
「だからな。あえて貴官の案が通り易いようにあの案を出したのだ。今この時期に慎重案を出しても受け入れられないのはわかっているからな」
「そうだったのか」
「後は貴官が前線で指揮を執るだけだな。後方支持は私に任せてくれ」
「わかった、頼むぞ」
「うむ、任せてくれ」

二人は話を終えると部屋を後にした。そして乗艦し南西地区に戻った。戦場に赴く為に。

それからすぐにクラウスの指揮の下解放軍への全面攻撃が開始された。その侵攻は着実に彼等を追い詰めていった。

連合、マウリア共同軍の損害は全くと言っていい程なかった。彼等は防御に徹しながら兵を進め宙域を確保していく。それに対して解放軍の損害は増える一方であった。

## 第六部第四章　ゲリラその六

「おい、昨日出した連中はどうなった」
旗艦の艦橋で田代は吠えていた。既にこの艦も何度かの戦闘で激しく傷ついている。
「駄目です、連絡がありません」
側にいた部下が首を振って答えた。
「どうやらやられたようです」
「そうか。で、今敵は何処にいる」
「前の宙域に進出を開始しています。かなり多いようです」
「そうか。あの道にはあの化け物みてえな戦艦がウヨウヨいやがるしな」
「ティアマト級戦艦ですね」
「ああ、あれはどうしようもねえ。何であんなのがいやがるんだ」
彼は苦渋に満ちた顔で言葉を吐き出した。
「あれ一隻でこっちの艦隊一個分の戦力がありやがる。おまけに索敵能力もハンパじゃねえ」
「昨日も奇襲を仕掛けた部隊が返り討ちに遭っていますからね」
「千隻のな。あれはいけると思ったんだが」
彼の顔はさらに苦渋で歪んでいく。
「全滅しちまいやがった。あの戦艦の巨砲の前にな」
「あれは凄いですね」
部下の顔も苦渋に満ちたものになっていた。
「あの一撃で百隻単位で消えますからね」
「それも三つもついていやがる。何なんだあれは」
「しかも他の装備も艦載機も多いですからね。手に負えません」
「だが何とかしねえとこっちが危ないぞ」
「はい、今それが一斉にこちらに向けてやって来ていますから。何とか対処法を考えないと」

「前からも来るんだろうな」
「おそらく。あっ」
そこで彼等はモニターに映る艦影を見た。
見ればそこには連合軍の艦艇があった。かなりの数である。そしてその中にあの艦もあった。
「チッ、あの化け物もいやがるか。やっぱりな」
「どうしますか？」
「おい、今ここにはどれだけいる」
彼はそこで部下に問うた。
「二個艦隊程ですが」
「そうか、殆ど残存戦力全てだな」
「はい」
「で、向こうも同じ位か」
「どうしますか？」
「決まってるだろうが。もう逃げることもできねえ」
彼は覚悟を決めていた。
「イチかバチかやってやる。こうなりゃやけっぱちだ」
「わかりました」
彼は全艦隊に攻撃を命じた。その二個艦隊はそれを受けてすぐに陣を整えた。それは連合軍からも確認された。
「来ますね」
その艦隊を指揮する二隻のティアマト級戦艦のうち一隻の艦橋で艦隊司令と参謀が話をしていた。
「ああ、もう破れかぶれになっているようだな」
司令はそれを見ながら言った。
「すぐに攻撃に移れ、巨砲の射撃準備はできているか」
「ハッ、何時でも」
艦長がそれに答えた。見れば普通の艦の艦橋よりも遙かに大きい。百人以上のスタッフがそれぞれの場所で任務にあたっている。
「そうか。では巨砲射撃用意」

「了解」
戦艦はそれを受けて前に出る。他の艦は後ろに下がる。
もう一隻の艦も前に出て来た。巨砲に光が集まる。
「射撃用意完了」
「目標捕捉」
「照準セットしました」
次々と報告が届く。司令はそれを聞いて頷いていた。
「よし、前方に友軍はいないな」
「はい、確認済みです」
再び報告が入る。司令はまた頷いた。
「巨砲発射」
「巨砲発射」
命令が繰り返される。艦橋内の動きがさらに活発になる。
司令がゆっくりと右手を掲げた。場を緊張が支配する。
「撃て！」
そして振り下ろされた。
「ファイアーーーーッ！」
三つの巨砲から光が一斉に放たれた。それは巨大な光となり解放軍に襲い掛かる。
そして艦隊を貫いた。その直撃を受けた艦艇が消える。そしてその周りの艦も衝撃により次々と爆発していく。
「巨砲掃射終了！敵の損害は甚大です！」
「どれだけだ！？」
「一千隻程です！僚艦の斉射と合わせて敵の一割程が消失しました！」
「よし、次は砲艦及びミサイル艦の攻撃だ！敵に隙を与えるな！」
「はい！」
再び指示を下す。それを受けて二隻のティアマト級戦艦が後ろに下がる。そしてまず砲艦が前に出て来た。
「撃て！」

その艦首の巨砲、そして前面の主砲が火を噴く。それにより先程の攻撃でダメージを受けていた解放軍の陣にさらなる攻撃が加えられる。
それが終わると次はミサイルであった。この三段の攻撃により解放軍の戦力は四割近く減少していた。だが連合軍の攻撃はこれで終わりではなかった。
「戦艦及び巡洋艦、駆逐艦を前に！」
「戦艦及び巡洋艦、駆逐艦を前に！」
今度は主力艦艇が前に出る。そしてまずは主砲の斉射を加える。そのまま前に突き進む。そして陣を崩していた解放軍にさらに攻撃を与える。
解放軍も反撃を加える。だが三度の一斉射撃でかなりのダメージを受けているうえにこの主力艦艇の攻撃で戦力を失っており組織的な反撃にはなっていなかった。そして連合軍の艦艇の防御力の前にその攻撃も殆ど功を奏していない状況であった。
突撃を許した。連合軍の艦艇は戦艦を先頭にそのまま敵陣に雪崩れ込んだ。
「艦載機発進！」
次の指示が下される。それを受けて護衛艦を周りに従えた空母の甲板から艦載機が発進する。空母のものだけでなく他の艦艇からも発進している。
艦載機は主力艦のミサイルや砲座と連動して敵艦に襲い掛かる。一隻の艦に一個中隊、十二機を単位として四方八方から襲い掛かり一隻ずつ的確に沈めていく。解放軍の戦力が殆ど消滅するまでに然程時間はかからなかった。
やがて降伏勧告が出された。最早彼等にそれを拒むことはできなかった。こうして解放軍の最後の主力は壊滅した。その損害は九割を越えていた。
連合軍はそのまま進んだ。そして小規模な戦闘や掃討戦を行いながら敵の本拠地に達した。ここでもまずティアマト級戦艦が前に出

て来た。
「あの中に一般市民はいるか」
司令はまずそれを問うてきた。
「奴等に拉致された人々がいるようですが」
情報参謀の一人がそれに答えた。
「そうか、ならば巨砲の使用は控えよう。巻き込むわけにはいかないからな」
「はい」
「揚陸艦を前に出せ。他の艦はミサイル砲座等を狙え」
「わかりました」
「護衛として空母、護衛艦も同行させよ。この艦も行くぞ」
「はい」
この戦艦には揚陸能力も備わっている。中には揚陸部隊もいるのである。
「では攻撃開始。一気に攻め落とすぞ」
「ハッ！」
こうして惑星への攻撃が開始された。まずは主力艦によるミサイル、ビーム砲座への集中攻撃が行われた。
黒い星が光に覆われる。そして砲座が次々と爆発していく。
それが終わると揚陸部隊等が前に出て来た。それを迎撃する為に惑星から僅かな航宙機が出撃する。
しかしそれは連合軍の艦載機により次々と撃ち落とされる。数があまりにも違い過ぎた。
その中でも活躍するパイロットが何人かいた。彼等は次々に解放軍の航宙機を撃墜していく。
「こりゃ七面鳥撃ちだな！」
一機のタイガーキャットが他の十一機のタイガーキャットを率いて暴れ回っている。見ればそのタイガーキャットの翼には星のマークが描かれている。それもかなり多い。

## 第六部第四章　ゲリラその七

その操縦席にいるパイロットは黒い髪に藤色の目をした若い白人の男であった。ただし顔立ちは白人でも肌は黒い。彼はヘンリー＝スタンフォードという。アメリカ軍で戦闘機のパイロットをしていた。その頃から名うてのトップガンであった。それは連合軍に編入されてからも変わらない。連合でも屈指のエースパイロットである。

「隊長、待って下さい！」

後ろの機から通信が入る。だがそのタイガーキャットは止まらない。

「黙って俺について来い！戦場で待つ奴なんているか！」

彼はそう言ってさらに突き進む。その前に六機の解放軍の戦闘機が姿を現わした。

「来たな」

その敵機を見てニヤリと笑う。すぐに操縦席のコンピューターのあるスイッチを入れた。

『ミサイル発射用意完了』

コンピューターから音声が発せられた。彼は右手でコンピューターのキーワードを入力する。左手は操縦桿を握っている。

モニターの六機の敵機にそれぞれ照準が当てられる。そこでコンピューターがまた音声を発した。

『照準完了。射撃準備完了』

「よし」

彼はそれを受けて頷いた。そして右手を元に戻しボタンの一つに指をやる。

「いけ！」

そのボタンを押す。するとまた声が聴こえてきた。

『ミサイル発射！』

すると左右の翼からミサイルが放たれる。それは炎を発しながらその六機の敵機に襲い掛かった。
敵はそれを見て逃げようとする。だがそれは間に合わず全てミサイルの餌食となった。
六つの爆発が起こる。彼のタイガーキャットはその中を潜り抜けた。
その後を部下達がついて来る。彼等の前にも敵機が姿を現わした。
「よし」
スタンフォードは操縦桿を大きく動かした。そしてその敵機の後方に回り込む。
敵はそれに気をとられた。そこで動きが乱れた。
「かかったな！」
スタンフォードはそれを見てニヤリと笑った。そこに部下達の機の攻撃が仕掛けられる。
敵機は全てミサイルに撃たれた。そして爆発となり消えた。
「これでよし」
彼はその爆発を見て呟いた。そこに通信が入る。
「隊長」
「何だ」
部下達からの通信である。彼はそれに応えた。
「有り難うございます」
それは感謝の言葉であった。だが彼はそれには特に表情を変えてはいなかった。
「気にするな」
それだけであった。そして敵を探し彼等を引き連れ戦場を駆けるのであった。
揚陸艦がついた。そしてその入口が開く。
「よし、行け！」
そこから陸戦部隊が雪崩れ込む。歩兵だけでなく戦車等もある。
すぐに解放軍の者が銃を手に迎撃に出て来る。しかし圧倒的な数

と装備の前に相手にならない。忽ち追い詰められていく。
全ての地域が連合軍の手に落ちるのに大して時間はかからなかった。こうして解放軍は壊滅した。
終わってみれば彼等の約九割が戦死していた。生き残った者は全て逮捕され裁判にかけられることとなった。そこには山口や小泉、ネゴロツキーもいた。
連合の刑法は凶悪犯に対しては極めて厳格である。過失犯に対しては寛容であるが確信犯には厳しい。死刑もかなり多い。これは刑務所の収容人数も考慮されてのことである。
連合においては強制労働といったものはない。通常の犯罪者に対しては人権も考慮されているのである。
だが人としての道をあきらかに誤った輩に対しては何処までも厳しいのだ。その為死刑も多い。
死刑といってもサハラ各国の様にすぐに殺すものではない。時間をかけて、それも酸鼻を極めるやり方で殺していくのだ。
車裂きや八つ裂きもあるし火炙りもある。中には鋸引きや生きたまま内臓を取り出すといったものまである。猛獣に生きながら食われることもある。
これはその時の状況によって違う。コンピューターが選ぶのだ。そして刑が施行される。無論それまでには有罪か無罪か極めて厳密な裁判が行われる。無罪であればよい。だが有罪ならば刑が施行されるのは言うまでもない。
その処刑は実況中継される。そしてその死に様を晒されるのである。
これは連合独自の人権に対する考え方に基づくものである。他の者の人権を侵害する者にはそれに相応しい刑罰が与えられる。加害者の人権なぞといったものは連合においては存在しないのだ。当然ながら少年法も存在しない。
死刑執行人も職業として認められている。彼等は悪人を成敗する存在とみなされている。中にはその酸鼻な処刑を批判する者もいる

がおおむね彼等は尊敬される立場にある。悪人を成敗するのは当然だからである。
今回は極めて厳しい判決が予想されていた。解放軍の今までの悪行は有名である。そして山口やネゴロツキーの汚さも知れ渡ることとなっていた。よって死刑執行人もかなりの数が予想されていた。
「裁判はどうなるかしら」
金は作戦終了を報告しに来たドトールに対して語った。
「どう考えても有罪です。証拠が揃い過ぎていますから」
ドトールは落ち着いた様子で答えた。彼女の前に姿勢を正して立っている。
「そうね。どうやらかなり大掛かりな裁判になるようだけれど」
「その後も大掛かりなものになるかと」
「でしょうね」
それはもう言うまでもなかった。
「死刑執行人の方から志願者がかなり来ているらしいわね」
「はい、そのようですね」
これは司法の話なのでまだ彼等にも詳しい話は伝わってはいない。だがおおよその情報は入っていた。
「自業自得ね。この中継はまた騒ぎになるわよ」
「そうですね。エウロパがまた批判して来るでしょうが」
「彼等が何と言おうと気にはしていないでしょう、誰も」
金の目が一瞬細くなり光った。
「どうせ遠くでさえずっていることしかできないのだから。御貴族様というのは気楽でいいわね」
彼女の声はシニカルなものではなかった。そのかわりに辛辣なものであった。
「自分達もサハラで侵略して住民を追い出しているというのに。人権ならそちらの方が問題でしょうね」
「同意です」
これはドトールも同じ考えであった。

「今の様子だと大丈夫でしょうけれど、今まで通り」
「状況が変われば」
「その時はわからないわね」
金の目が光った。
「例えばサハラで何かしらの貴重な金属や資源が発見された場合は違うかも知れないわ」
「かっての石油の様に」
「ええ」
金はその言葉に頷いた。
「ましてやこの連合には色々とそうしたことに熱心な国もあることだし」
「彼等ですか」
ここでドトールの顔が少し歪んだ。
「彼等のあれは本当に昔からですから」
「貴方の国も苦労しているわね」
金もそれは同じであった。
「はい。全くあれだけ持っているのにまだ欲しいと言う。満足することを知らないのでしょう」
「だから大きくなれたのでしょうけれどね」
ドトールはキューバ、金は韓国出身である。いずれも連合内ではそれ程大きな国ではない。韓国は二十番目位に大きな勢力であるとされているがそれでも存在感が薄い。やはり他の国の後塵を拝する状況なのは変わりがない。
「アメリカ、中国、ロシア」
ドトールはそれ等の国々の名を挙げる。
「困ったものです、本当に」
「日本もよ」
ここで金が言った。
「日本ですか」
だがドトールはここで意外そうな顔をした。

「あの国は少し違うような。他の国に対しても色々と便宜を図ってくれますし」
「それは外見だけよ」
金は露骨に嫌悪感を露にしてそう言った。
「私はそう思うけれど」
「はあ」
彼はここで彼女が韓国人であることを心の底から認識した。
「彼等はああ見えてしたたかよ。それで何度も煮え湯を飲まされていているし」
「我々にはそうではありませんが」
「キューバはね。中央政府も」
日本は中央政府には受けがいい。大国の中で最も中央政府に忠実な国であるからだ。
「けれど我が国に対しては違うわ」
「そうでしょうか」
少なくともドトールにはそうは思えないのだ。韓国も日本との通商によりかなりの利益を挙げているからだ。それは連合の誰もが知っていることである。
「どうやら長官はそれに関しては私と違う御考えのようですね」
「残念ですが」
「それならいいです。ではこのお話は終わりにしましょう」
「はい」
話が気に入らなかったようである。だからといって遠ざけるような金ではない。彼女は確かに厳格で潔癖症の気質を有してはいるが私情で人事を行ったり差別したりする人物ではないのだ。そうでなくてはこの若さで中央政府の閣僚に就任なぞしない。
「それに時間になりましたので」
「時間ですか」
「はい、次の仕事の時間です」
「といいますと」

「会談です」
ここで金の唇の端が微かに揺るんだのをドトールは確認した。
「その日本の方とです」
「わかりました」
それが誰かは最早言うまでもない。
「では私はこれで」
「はい。私も出発しなければなりませんので」
「長官が行かれるのですか」
「はい、そうですが」
金は問われて意外そうな顔をした。
「それが何か」
「いえ、別に」
ドトールはそれには答えなかった。心中思うことはあったがそれは伏せておいた。
「ではこれで」
「はい」
一礼して部屋を去った。そして彼は警察本部に戻った。

## 第六部第四章　ゲリラその八

国防省に一台の車が到着した。そこから一人の美しい女性が姿を現わした。
「遂に来たか」
国防省の者は彼女の姿を認めて戦慄を覚えずにはいられなかった。
「ゴミはないな」
「整理整頓は済んでいるな」
彼等は彼女が来る直前まであれこれと動き回っていた。国防省でも彼女の厳格さと潔癖症は知られているのだ。
「しかし大丈夫ですかね」
ここで若いスタッフが年配の同僚に言った。
「何がだ」
「いえ、内相ってうちの長官と仲が悪いですし。また批判されるんじゃないかと」
彼女は的外れな批判や誹謗中傷なぞは一切しない。あくまで実際のことを指摘するのだ。だがそれがあまりにも辛辣なだけである。とりわけ国防省への批判が多い。
「確かにその危険はあるな」
彼は後輩の考えに頷いた。
「あの人はまた特別だからな」
「ですね。本当に思いますよ」
彼はここで言った。
「あの人が国防相でなくてよかったって」
「俺もだよ」
またここで同意した。
「八条長官は穏やかでおおらかな方だからな。我々にも優しいし」
「はい。それに対して内務省は大変なようですね」
内務省は現在胃潰瘍等をわずらっている者が多いので有名となっ

ている。金は決して部下虐めなぞはしないがその厳しさから部下達が参っているのだ。
「そうらしいな。実は内務省に知り合いがいるんだが」
「はい」
「凄いらしいぞ。規則から仕事まで何から何まで。日本の宮内庁に匹敵する程チェックが厳しいらしい」
「あの域にまでですか」
日本の宮内庁の頑固さは連合でつとに知られている。そしてそのチェックの厳しさも有名である。これはやはり色々な事情があるのだがこれにより『竹のカーテン』が維持されているのは事実である。
「それにひきかえ我が国防省は」
「まるで天国でしょうね」
「そういうことだ。天国と地獄だな、まさに」
「はい」
金は国防省の中を進んで行く。行く先々でも周囲への目を怠らない。
「成程」
彼女は廊下等を見ながら考えていた。
「風紀がまだまだですね」
「といいますと」
後ろにいる女性の秘書官がそれに気付き声をかけた。小柄で赤い髪と濃い青の瞳の美しい女性である。全体的に丸い顔立ちをしている。歳は二十代後半といったところか。だが実際の年齢よりも若く見える。
「待ちなさい」
ここで金は彼女に厳しい声を浴びせた。
「は、はい」
「ミスハルーシャ」
金は彼女の名を呼んだ。
「はい」

「まずは少し速く歩きなさい。いいですね」
「は、はい」
「宜しい」
金は歩く際の位置にも厳しい。
金にハルーシャと呼ばれた秘書官は本名をサリー＝ハルーシャという。ブルネイ出身で内務省では将来を期待されている若き才媛である。
「では風紀についてです」
「はい」
金は話をはじめた。
「どうやら私が来る前に清掃等を必死にやっていたようですね」
「そうなのでしょうか」
彼女にはそれはわからなかった。
「御覧なさい」
金はここで廊下の片隅を指差した。
「ゴミが落ちていますね」
「はい」
言われてみれば確かに落ちている。だがほんの小さなものである。
「そしてゴミ箱はどれも綺麗になっています。これはゴミを捨ててすぐだからです」
「そういえば」
「そして慌てて掃除をした為にゴミを見落としています。これが何よりの証拠です」
「そうなのですか」
「はい。仮にも連合中央政府の省庁がこれではいけません」
彼女は強い口調でそう言い切った。
「いつも言っていますね。僅かな気の緩みから全てがほつれていくと」
「はい」
これが彼女の持論である。

「そして腐敗は全て上からはじまっていくのです。これは常に念頭に置いておかなければなりません」
彼女にとって汚職なぞは論外である。意外とそうしたことには無頓着な傾向がある連合であるが彼女は例外と言える程厳しい。内務省では汚職も腐敗もない。彼女に見つからない筈がないからだ。
「国防省でそうしたことがあるとは聞いていませんが」
八条は汚職やスキャンダルとは無縁な存在である。彼の場合は実家が裕福なので政治資金にも困らないのと女性に疎いせいである。後者はその為に同性愛説が流れているが。
連合の汚職は実は複雑な事情があるのだ。厳密に言うと汚職と言ってよいかも微妙なものもある。
とりあえず女性問題や男性問題は本人の下半身の事情なので詳しく触れても仕方がない。その人それぞれの嗜好というものもある。同性愛者や俗に言う変態趣味の者もいる。それを何から何まであげつらっていくのは魔女狩りのようなものである。
汚職というと賄賂等が真っ先に出る。これにしろあいまいなものと言えばあいまいである。謝礼や贈り物もこれに含まれる場合もあるからだ。
政治家への資金援助は認められている。問題はその透明性だとされる。そもそも政治家の選挙には金がかかる。運動の為の資金だけでなくスタッフへの給料もある。政治家は自分の力だけで政治家にはなれないのだ。
そこで資金が必要となる。金のかからない選挙が理想なのは事実だが宣伝等に使うのでなかなかそうはいかない。ましてや連合の様な膨大な人口を擁し複雑な社会構成だとなおさらである。惑星の一都市の議員になるにも色々と動かなくてはならないのだ。本を読んでいて選挙活動もせずに当選する程連合は甘い世界ではない。
ここで支持者や支援団体から資金援助が行われる。これが汚職と言えばそうなる。だがこれは結局政治家一人の責任ではない。支援者や支持団体の責任でもある。ましてや連合は企業や特定の政治団

体のみで動く世界ではない。企業にしろ多くの職域がありその範囲も様々である。個人の大農園の主もかなりの発言力があるケースがある。弁護士もいれば医者や職人もいる。伝統工業等零細ながら重要なものもある。日本の様に古い国に行けばそうしたものは実に多い。

そして政治家の経歴も様々である。キロモトのように中流の農民の家に生まれ下士官から大統領にまでなった者もいれば八条の様に裕福な名家に生まれ若くして栄達した者もいる。金の様に官僚からなった者もいる。当然組合出身者もいるし元の職業が弁護士であったり労働者であったりする。その収入や置かれている状況も実に様々である。エウロパのように貴族が大半を占める世界ではないのだ。

従って複雑な事情が生じるのだ。政治家もそうしなければ破産する。政治資金を調達できないからだ。政治資金も調達できず破産するような政治家では話にもならない。これはどの職業でも言えることである。

結局は透明性でないか、という結論に至り易い。だがそれでも話は簡単にまとまらない。そうそう簡単な問題ではないのである。

無論エウロパ等から金を貰うのは論外である。サハラ各国にしてもだ。そうした勢力圏外の国や勢力からのものは厳しく禁じられている。

そしてそうした献金で私腹を肥やせるかというとそうでもない。それはすぐに選挙活動や宣伝、スタッフへの給料、謝礼や贈り物となる。政治家の手許に残るのはまずない。結局彼等は議員の給料で食べるか、それが足りなければ本を書くなりテレビに出るなりしてお金を稼ぐしかない。だが政治家としての活動もしなければならないのは言うまでもない。

その点金は困ってはいない。本も出せばテレビにも出る。厳格かつ辛辣でそれでいて間違いのない彼女の主張はわりかし受け入れられている。また美人なのでそれも幸いしている。彼女に言わせれば人を容姿で選ぶのは失格なのだそうであるが。

こうした事情があるから連合では汚職にはわりかしおおらかである。見つかれば相応の責任が待っているにしろ。そうしたやり方で彼等は少なくとも一千年以上の間それなりに安定した政治を各国、中央政府共行ってきている。
「八条長官は本当にお甘い」
金はまた言った。
「部下の風紀も完璧にしてこそです。国防相ともあろう人が」
これにはハルーシャは何も言えなかった。
「しかし国防省の風紀が乱れているとは聞いたことがありませんが」
「今のところは」
金はそこでそう反論した。
「しかしそれでは駄目なのです。まずはその芽を摘んでおかなければ。腐敗は何時でもはじまる可能性があるのです」
「そうしたものなのですか」
「貴女はまだそれがわかっていないようですね」
「申し訳ありません」
「謝る必要はありません。人はそう簡単に謝ってはなりません」
これも金の哲学であった。
「日本人は比較的よく謝りますが」
「そういえばそうですね」
「しかしそれでは駄目なのです。人は常に毅然とした態度をとっていなくてはなりません」
彼女の場合はそれが過ぎているとも批判されている。だが批判するとその三倍もの反論が返ってくるので面と向かって批判する者は少ない。
「八条長官も然り」
「長官もですか」
「はい。今からそれについてもお話しなければなりませんね。長官には」
「はあ」

八条と金の関係は内務省でも有名である。と言っても金が一方的に八条に対して言うだけである。当事者同士である国防省と内務省にとってはいささか頭が痛い問題である。
「お待ちしていました」
やがて長官の執務室の前に辿り着いた。木口が彼等を出迎えた。
「はい」
金は彼を少し見上げて返礼した。
「御苦労様です。長官はおられますか」
「はい、八条は中で待っています」
「そうですか。では」
金はそのままドアの前に向かう。そしてその扉を自分の手で開けた。
木口は横でそれを見るだけである。以前開けようとして叱責された経験があるのだ。金は扉は自分の手で開けなくてはならない、という考えの持ち主であるからだ。これも内務省では徹底されている。
(厳しい人だからな)
木口は内心そう思った。彼も金の厳しさは身を以って知っている。
金は一人で入った。ハルーシャと木口は控え室で待つことになっている。
「じゃあ行きますか」
「はい」
「たまにはゆっくりとお茶でも飲みませんか?」
「いいですね」
二人はこうして束の間の安らぎの時に向かった。ハルーシャにとっても金は実に厳しい上司であるのだ。
そして金であるが八条の執務室の扉を閉めた。そして机の前に立ち自分を待っている青年と正対した。
「お待ちしておりました」
八条は手を差し出して彼女に挨拶をする。
「はい」

金も手を出す。そして二人は握手をした。
それから席に着き話をはじめる。まずは金が口を開いた。
「この執務室に来るまでに国防省の中を拝見させて頂きましたが」
「はい」
八条は話を聞きながら小言が待っているのを予感していた。そしてそれは当たった。
中身は国防省の風紀のことであった。彼女は実に細かいことまで指摘したうえその責任は長である八条にあると批判した。
「長官には一刻も早い的確な善処をお願いします」
彼女は最後にそう締めくくった。これで暫くの間国防省はいささか堅苦しくならざるを得ない。彼女が来たところは常にそうした状況になるのだ。
当然八条もだ。彼自身は風紀には特に乱れた点はないがそれでも注意しなければならないのは事実である。長官といえどそれを怠ってはならないのは言うまでもない。
「そして話の本題ですが」
「はい」
そして本題に入った。二人の間に緊張が走った。

## 第六部第五章　処刑その一

処刑

八条と金は国防省の八条の執務室で正対して座っていた。二人はまずは風紀について話をした後金が本題を切り出した。

「そしてその本題とは」

「はい」

金は一呼吸置いて口を再び開いた。

「先の解放軍との戦いで逮捕した海賊達の引渡しですが」

「それならすぐにでも」

「それならば問題ありません」

今のところ彼等は軍が拘束している。そして今地球に向けて護送中である。

「今回の作戦成功おめでとうございます」

「いえ、それは軍人達の活躍です」

八条はそう言葉を返した。

「祝福の言葉は彼等にお願いします。私は何もしておりません」

彼は部下達へ言葉を向けてくれるよう言った。

「わかりました」

「はい。それでは海賊達は地球に到着し次第引き渡しますので」

「はい。ではドトール長官にはそう伝えます」

「お願いします」

こうして犯人引渡しの件は終了した。

「次の話ですが」

だが金はまた言った。

「次の話とは」

「そちらの警察権のことです」

「そちらというと軍のですか」

「はい。そちらには憲兵がおりますね」

「ええ」
憲兵とは言うならば軍の警察である。軍内の風紀や治安を取り締まる。時として嫌悪されることもある職種である。
「彼等の警察権ですが確か今のところは軍の中でしたね」
「はい。特例ということになっています」
「やはりそうでしたか」
金はそれを聞いてあらためて頷いた。
「ではそのとこについて提案があるのですが」
「はい」
八条は話を聞きながら何を言い出すのかと思っていた。
（この人は間違ったことは言わないのだが）
しかし非常に手厳しいことを平然として言う。中には劇薬もある。と言うよりは彼女自身が劇薬なのでそれはもう今更といった感じである。
「その憲兵隊の警察権ですが」
「はい」
「あくまで非常時に限ってのことですが警察権を通常においても適用されることにしたいのですが」
「よろしいのですか？」
「はい。いざという時は軍の力が最後の砦になるますから」
「ふむ」
八条はそれを聞いて考え込んだ。確かに非常時には軍の存在は頼りになる。金の言うとおり最後の砦だ。だがそれに対しては問題もある。
「しかしそれを理由にして中央政府の横暴などと批判もされかねませんし」
「あくまで非常時と申し上げましたが。例えば大規模な自然災害が起こった時などです」
「それですか」
「はい。これは戦争よりも頻発して起こり、かつ深刻な被害をもた

らします。地震や台風はどの星でも起こりますし」
「地震ですか」
八条はその言葉に反応した。日本の所有する惑星はどれも地震が多いので知られているからだ。彼も震災に遭ったことがある。
「そうした時にすぐに行動をとれるのは軍だけです。そして治安にもあたれるのも」
「つまりそうした時に限って警察権を適用されるようにしたい、ということですね」
「そうです。それならば問題はないでしょう。元々テロリスト等にも適用されていましたし」
「彼等とは戦闘という形でしたがね」
「ですが今後はそれでは何かと制約があるかと思いますが」
「それはまあ」
八条はそれを認めた。
「少なくとも災害派遣には。実際にそれで支障をきたした例がありますし」
「やはり」
「先のバロン星系の地震においてもそうでした」
「あの地震ですね。確か被災者が百万を越えたとか」
「はい、あの時は法律的な制約がある為何かと行動に問題があったと反省しています。すぐに要請がありそれで行動に移せたのは幸いでしたが」
「そうした際に最も役に立つのが軍ですからね」
「はい」
それはもう言うまでもないことであった。

## 第六部第五章　処刑その二

「そうした時に備えても必要だと私は思いますが」
「それは私もです」
八条は金の言葉に同意した。
「そうした際により迅速かつ的確に行動出来るよう法整備を進めていくべきだと考えています」
「しかしそれには内務省との調整も必要ですね」
金はここで自らの省の名を出してきた。
「お願いできますか」
「長官」
金はここで手厳しい声を出した。
（まずったか）
八条はそれを聞いて内心舌打ちした。
（まさか今の発言が逆鱗に触れたか）
しかしそれは杞憂であった。
「私はそれについてお話する為にここへ来たのですよ。そう、実現の為に」
「といいますと」
「はい、私もそれに賛成です。よろしければ協力させて頂きませんか」
「よろしいのですか」
「はい、全ては連合の市民の安全の為です。喜んで協力させてもらいましょう」
「それでは」
「ええ。では今からその法整備についてお話をしましょう。それから」
「大統領とも話を進めていかなければなりませんね」
「そうですね。しかしまずは」

「おおよその構想を立ててておきましょう」
こうして二人は会談の入った。それから内務省と国防省の者の密接な会合が行われた。そしてキロモトや他の閣僚達との話し合いの末この非常時における軍の行動を規定する法案は金の名で議会に提出された。
「この法案は連合軍及び中央政府の権限を強化するものではないのか。これでは連合各国の自主性が侵害される怖れがある」
こうした意見もあった。だが大半はこの法案に賛成であった。連合軍創設以来そうした法案の制定が求められていたからである。今までは各国の軍が行っていたが連合軍の創設によりそうしたこともなおざりになっていたのだ。従ってこの法案は程無く議会を通過して制定されることとなった。
「これでいいですね」
金は八条の執務室に来ていた。そして法案の制定を祝っていた。
「はい。これで今夜は美味しい酒が飲めますね」
八条はにこやかに笑ってそう言った。だが金はやはり笑ってはいなかった。
「私はお酒は飲まないのですが」
「そうなのですか」
これは少し意外であった。韓国人は連合の中では酒好きで知られているからである。ちなみに最も酒が好きなのはロシア人である。
「体質ですか」
「はい。それよりも甘いものの方が好きです」
「そうですか」
八条はそれを聞いて顔を少し綻ばせた。
「ではケーキなぞはどうでしょうか。丁度おやつの時間ですし」
「ケーキですか」
それを聞いた金の目が一瞬光った。
「ええ。チーズケーキですよ。そして飲み物はウィンナーコーヒー」
「いいですね」

目がまた光った。どうやらケーキやコーヒーには目がないようだ。
「よろしければどうでしょうか。私も一緒に食べる人が欲しいですし」
「よろしいのですか？」
「喜んで。如何でしょうか」
「では御言葉に甘えまして」
その仮面の様な顔が一瞬であるが綻んだ様に見えた。そしてケーキが運ばれるまで彼女は何処かそわそわしているように感じられた。
（これは意外だな。あの金内相が）
八条はそれを見て内心驚いていた。それ程までに衝撃的なことであったのだ。
そしてケーキとコーヒーが運ばれてきた。彼女はそのケーキを見て確かに微笑んでいた。
「お砂糖はいりますか」
八条は彼女に尋ねた。
「あの」
彼女はここで言った。
「宜しければシロップとクリームもお願いします」
「シロップもですか」
「はい」
見ればある。八条はシロップとクリームも彼女に手渡した。
「どうぞ」
「有り難うございます」
そして彼女はまずシロップをケーキにかけた。それもケーキ全体が濡れる程である。
（えっ）
八条はそれを見て思わず心の中で叫んでしまった。かろうじて口には出さなかったが驚かずにはいられなかった。
そしてそれだけではなかった。ウィンナーコーヒーの上のクリームを食べた後でその残りのクリームだけでなく手許のクリームまで

コーヒーに入れた。それもかなりの量をである。
それに飽き足らず砂糖も入れる。角砂糖を十個も入れた。
（ううむ）
八条はそれを見て内心唖然とする他なかった。甘党の者はそれなりに見てきたが彼女程のものは今まで見たことがなかったからだ。
「どうしました？」
金は八条が驚いた顔をしているのを見て尋ねてきた。
「コーヒーもケーキもとても美味しいですよ。ただ」
「ただ！？」
「少し甘みが足りないような気がします。上品に仕上げているようですね」
「はあ」
さらに驚かずにはいられなかった。どうやら彼女は普通の甘党ではないようである。
そしてそのケーキもコーヒーも何事もないように食べ終えた。それから残りの話を終え彼女は内務省に帰った。
「木口君」
八条は彼女が帰った後木口に尋ねた。
「はい」
「女性のことだがね」
「何でしょうか」
「甘いものが好きな人が多いとは聞いているが本当のところはどうなんだろうね」
「甘いものですか」
彼は上司の思いも寄らぬ問いに少し面食らった。だがすぐに答えた。
「まあ世間ではそう言われていますね、確かに」
「そのようだね。ところで」
「はい」
何か変な質問だと思わざるを得なかったが答えた。

「コーヒーに角砂糖を十個も入れたりケーキをシロップ漬けにして食べるのは最近では普通なのかな」
「まさか」
彼はそれを笑って否定した。
「それだけ食べたら糖尿病になりますよ」
「そうだよね」
八条も頷いた。わかっていることではあった。
(だが金長官は至って健康だ)
それどころか内務省では健康維持の為に毎日の適度な運動まで求められている程である。
(では他で調整をしているのであろうが。ううむ)
どちらにしろ彼にはもう一つ謎ができた。これは女体の神秘というものであろうか。

## 第六部第五章　処刑その三

その頃地球では一つの儀式が行われていた。解放軍への処罰である。

解放軍の今までの罪状は事細かに調べ上げられた。そしてそのかなりの数が死刑を宣告された。

連合においては凶悪犯に対する処罰は極めて厳格である。特に山口や小泉、田代、ネゴロツキーには極刑が宣告された。

その内容に市民達は噂話をしだした。

「猛獣の餌にされるんじゃないか」

「いや、串刺しだろう」

「逆鋸引きかも知れないぞ」

いずれも凶悪犯に対して行われる処刑方法である。これ等の処刑は公開で行われるのである。

判決は当然死刑であった。そして裁判官は彼等に対して全財産没収の末稜遅刑を宣告した。稜遅刑とは少しずつ寸刻みにしていく刑罰である。古代中国において最も過酷な処刑方法であった。

処刑はまずは下っ端からはじめられた。彼等は串刺しや猛獣の餌にされた。断末魔の叫びが刑場に木霊した。山口達はまずはそれをまじまじと見せつけられた。

それが全て終わってから彼等の番であった。まずは彼等の財産を没収する光景からはじめられた。

「お、俺達の金が」

彼等は自分達の今まで溜め込んだ金が没収されていく様を見て涙を流した。何よりも大事なものを奪われる苦しみを今味あわされていた。

それで終わりではなかった。彼等の家や会社のビルも爆破された。悪行への処罰は徹底されなければならない。連合はそれを忠実に守っているのだ。

爆破された後はすぐに片付けられ後には空き地だけとなった。それから彼等への処刑執行であった。
数人の刀を持った男達が姿を現わす。そしてそれぞれの罪人につきおもうぞんぶん刀を振るう。連合においては死刑執行人は大切な職である。悪人を成敗する職業として尊敬されている程だ。
後には細切れになり八つ裂きにされた山口、小泉、田代、ネゴロツキー達の屍が転がっていた。彼等は最後まで命乞いをし、互いの責任を擦り付け合ったあげくこうして処刑された。悪人に相応しい末路であった。
その屍は糞尿と共にゴミ箱に入れられブラックホールに捨てられた。悪人に墓なぞ必要ないからだ。
こうして連合の中に巣食う悪虫達は成敗された。その光景は全て実況中継された。連合市民達はそれを見て悪が成敗されたことを喜び喝采を送った。

「連合の処刑は何時見てもすごいな」
それは他の勢力、国々からも見ることができる。エウロパはこれを連合の残虐性、異常性だとして批判する。マウリアは特に何も言わない。
サハラにおいてもそれは同じである。だが彼等はそこに自分達とは相容れぬものを感じていた。
「処刑はコーランにのっとってするべし」
それがサハラの考えであった。彼等は極端に残酷な処刑を好まないのだ。
「だが俺にはどうもわからない」
アッディーンはそれを旗艦アリーの司令室で見ていた。
「何がでしょうか」
そこにいたラシークが尋ねた。
「いやな」
そして彼はそれに応えた。

「ここまでする必要があるのかと。幾ら何でもやり過ぎではないかと思うのだが」
「それはサハラの者殆どの考えだと思います」
ラシークはその言葉に賛同した。
「私もそうした考えです」
「やはりな」
アッディーンはそれが当然のように感じられた。
「俺も同じ意見だ」
「そうですね。彼等があそこまで徹底的にやるのか私にはよくわからないです」
「犯罪を減らす為だというがな。実際に連合の凶悪犯罪は少ない」
「そのようですね」
「つまり見せしめなのだろう。それがいいか悪いかは別としてな」
「それも治安の為ですか」
「少なくとも彼等はそう考えているようだな」
「そうなのですか」
「そしてそれは成功しているようだ」
「一概にどれがよくてどれが悪いかは言えませんね」
「そうだな。一つの事柄に対しての対処の仕方も人それぞれだ。そしてその結果もな」
「言い換えると対処を誤ると大変なことになりかねない」
「何事も。それは今の俺達もそうだ」
アッディーンはここで目の光を変えた。
「今の戦況はかなり有利なようだがな」
「はい」
ラシークはそれに頷いた。
「今我が軍はさしたる戦闘もなく敵の首都に向けて順調に進んでおります。そして外務省も彼等と交渉をはじめております」
「降伏のか」
「はい。地位や財産は保障し、オムダーマンの市民の権利を約束す

るとのことで交渉を行っているようです」
「そうか。それで話が進めばいいな」
「進むでしょう。実際に彼等の戦力の大部分が我等に投降しているのですから」
「そうだったな。やはり俺の採った方法は正解だったようだな」
「同じサハラの者ですから。それで充分だと思います」
「ふふふ」
アッディーンはそこで笑った。

## 第六部第五章　処刑その四

「それを考えるとゲリラとは戦うよりもいい方法があるのだな」
「はい。ですがそれは同じサハラの者に対してだけですね」
ラシークはここで口調を変えた。
「他の勢力に対してはまた別の方法を採らなければならないでしょう」
「そうだな」
それはアッディーンもわかっていることであった。
「例えばエウロパですが」
「彼等はあまりそうした戦い方を採るとは思えないがな」
「ですが一般市民はわかりませんよ」
「一般市民か。惑星においてだな」
「はい。そうした場合の対処も考えておきませんと」
「だが一般市民に銃を向けるのは駄目だぞ」
それは言うまでもないことであった。アッディーンはそうしたことを事の他嫌う。
「それはわかっております。ここでやったように全市民の武装解除等を進めていくのがいいかも知れませんね。占領地において」
「そうした地道なやり方が一番か」
「本来戦争とはそうしたものです」
彼はここで苦笑混じりに微笑んだ。
「緻密でなければ戦争は務まりませんよ」
「確かにな。それは俺も同意見だ」
彼もそれに同意した。
「それではそれは今後の対策案に入れておこうか。ゲリラ戦に備えてな」
「はい。それがいいと思います」
そうした話をしながら彼等は進撃を続けた。そして遂に敵の首都

を包囲した。
　それまでに受けた損害は微々たるものであった。オムダーマン軍はほぼ完全な戦力でムワッハド連合の首都星系を包囲した。
　すぐに外務省と彼等の政府の間で交渉が詰めに入った。そして彼等の降伏が正式に決まった。
　これでムワッハド連合との戦いは終わった。アッディーンは時間こそかけたが何ら損害を被ることなく一つの国を占領することに成功した。
　それは彼等に大きな成果をもたらした。それによりムワッハドの周辺諸国が彼等に帰参を申し出てきたからである。
　そしてそれは全て受け入れられた。
「アイユーブの時と同じですね」
「はい」
　アッバースがアッディーンに答えた。彼は今アリーの艦橋にいた。
「まさかここまで上手くいくとは思いませんでした」
「そうですね。それは私も同じ考えです」
　アッディーンが言葉を述べた。
「最初はかなりの損害も覚悟していたのですが」
「そうだったのですか」
「ええ。ゲリラ戦は他の戦いとは違いますから。何かと厄介なのです」
「それは知っているつもりでしたが」
　彼も軍事に関して全くの素人ではない。兵役の経験もあるのだ。
「しかしそれ程まで損害を覚悟しておられたのですか」
「ええ。二割は覚悟していました」
「二割」
　軍の損害としては致命的なレベルである。三割で全滅とされている。
「まさかそれ程までの損害は」
「有り得ます」

アッディーンはそこで言った。
「軍の損害はそれだけではないですから」
「といいますと」
「はい、後方での補給の途絶や市民の蜂起等も考えられますから」
「あっ」
アッバースはここで思わず言葉を出した。
「そうでしたね、それがありました」
「はい」
アッディーンはそれに対して頷いた。
「そうしたことを考えると二割は有り得ると思っていました。ですから兵力も倍に増やしたのです」
「そうだったのですか」
「そして政戦両略で攻めることにしたのです」
「だから侵攻もこれまでと比べて遙かに遅かったのですか」
「はい、まずは宙域の確保を優先させました。そして防備を固めながら進みました」
「成程」
「補給路も確保しながら。それはどうやら正解だったようですね」
「そのようですね。それが結果としてこのムワッハドをほぼ無傷で手に入れられることになりました」
「はい。成功して何よりです。正直この戦いは疲れました」
「ほう」
アッバースはそれを聞いて意外といったような声を出した。
「それは何故ですか。さしたる損害もなかったというのに」
「損害の問題ではないです。ゲリラ戦には撹乱の他にそうした心理戦もあるのです」
「心理戦ですか」
「はい。これはまた厄介でして。例えば敵が何処から来るかわからないと恐怖を感じますね」
「ええ」

それはアッバースにもよくわかることであった。
「そして誰が敵かもわからない。市民や商船がいきなり襲い掛かってきたらやはり怖いでしょう」
「確かに。普通はそのようなケースは考えていませんから」
「だからです。私は今回の戦いで将兵のそうした不安を取り除こうと腐心していました」
「だから疲れられたのですね」
「はい、それに私もはじめてでしたし。苦労しましたよ」
「そうだったのですか。そして苦労のかいはありましたか」
「そのようですね。おかげでムワッハドだけでなく多くの国がオムダーマンに帰参してきました。これで我が国の力はさらに強くなりました」
「そして貴方の地位も」
「それは関係ありませんよ」
だが彼はそれについては笑って否定した。
「私はもう元帥です。これ以上望むものはありませんよ」
「そうですか」
「はい。それに私は戦場にたいですし。もうこれで満足です」
「国民、いえサハラの者がそれ以上を望んだとしても」
「サハラの者が！？」
彼はその言葉にキョトンとした。
「何を私に望むというのですか」
「いや」
アッバースはここで言葉を濁した。
「サハラが一つになるか、それが確実となった時にわかるかも知れませんね」
「？お話の意味がよくわかりませんが」
アッディーンはそれを聞きながら首を横に振った。
「大統領になるというのならお門違いですよ」
やはりアッディーンは笑って否定した。

「私はそうしたことに興味はありませんから。あくまで軍人でしかありません」
「貴方が望まれなくとも」
アッバースはここで小声で呟く様に言った。
「サハラがそれを望んでいるのなら違うでしょうね」
「何かおっしゃいましたか」
それはアッディーンにはよく聞こえなかった。思わず問うた。
「いえ、何も」
アッバースはそこで誤魔化した。
「独り言です。気にしないで下さい」
「そうですか」
彼はそれ以上聞こうとしなかった。そして話を変えた。
「では今後についてお話しましょうか」
話を戦いに向けることにした。アッバースもそれを受けた。
「はい。次の侵攻計画ですね」
「ええ。まずはここに全艦隊を移動させようと考えているのですが」
「戦える全ての艦隊をですね」
「そうです。それから軍を然るべき勢力に進めようと考えております」
彼はここで三次元地図を開いた。開かれた地図から惑星達が浮かんできた。
「まずはここに戦力を集中しまして」
ムワッハドの首都星系を指差す。
「それからですね。兵を実際に向けるのは」
「何処に向けるべきと御考えですか」
「ううむ、まずは」
アッディーンは地図を見ながら考え込んだ。それから口を開いた。
「ここでしょうか。そしてそこから」
「ふむふむ」
アッバースは頷きながらその話を聞いていた。そして彼等は今後

のオムダーマンの南方侵攻計画について軍事及び外交の両面から話を進めていった。

「南方でオムダーマン軍の動きが顕著なようだな」

その話はサハラ全土に伝わっていた。それはエウロパが占拠、移住を進めている北方でも同じであった。

総督であるマールボロはそれを執務室で聞いていた。秘書官が報告を続ける。

「はい、彼等はムワッハド連合及びその周辺国をその勢力圏に収めました。そしてその国々はオムダーマンに併合されることが決定しております」

男の若い秘書官である。彼はいささか機械的な口調で報告を続ける。

「そうか。ではオムダーマンは南方にかなり攻め込んでいるな」

「はい。既に三分の一程をその領土としました。そしてその間の損害は皆無に等しいです」

「多大なる戦果だな。普通に戦っていてはこうはいかない」

マールボロは顎に手を当ててそう答えた。

「外交もかなり駆使しているようだな。まずは軍を向けてそれで戦意を萎えさせそこで外交交渉を開始する」

「はい、最初はそれで南方に侵攻しました」

「ゲリラ戦には政戦両略で攻めるか。それも慎重に進みながら。巧みとしか言いようがないな」

素直に賞賛の言葉を述べた。

「そうですね。確かに普通に軍事力のみで攻めるとかなりの損害を出しているでしょう」

秘書官はやはり機械的な口調であった。

「そして彼等は今どうしている」

「ムワッハド連合の首都星系に戦力を集結させているようです。その数は三十個艦隊です」

「防備はどうなっているかな」
「本土から増援の艦隊が向かっているようです。その数は詳しくはわかりませんが」
「オムダーマンによくそこまでの余裕があったな」
「再編成し旧ミドハド、サラーフの兵にも艦艇を回せるようになったかと。その兵力を向けていると思われます」
「そうか。それなら納得がいく」
彼は頷いてそれに応えた。
「それを考えるとオムダーマンの軍事力はかなりのものになっているな」
「はい」
秘書官はそれに対して頷いた。
「それは間違いないでしょう。今の時点でオムダーマンには五十個艦隊を動員できる国力が備わりつつあります」
「五十個かい」
「はい、そして南方を制圧したならば七十、いえ八十に達するかと」
「ついこの前まで八個艦隊程だったがな。国力の伸張が鰻上りだ」
マールボロは素直に感嘆の言葉を漏らした。
「このままいくと南方はほぼ間違いなく完全に掌握するだろうな。問題はそれからだ」
「といいますと」
「それによりサハラの勢力は完全に三つに統合されるということだ」
マールボロはここで壁にかけられているサハラ全土の立体地図に目をやった。
「まずはそのオムダーマンだ。西方と南方を掌握する、な」
「はい」
「そして東方のハサン。その属国も合わせるとやはりサハラで最大の勢力となるな」
「そうですね。ただ彼等は現状に満足しておりますから積極的には動いておりませんが」

これはハサンが連合やマウリアとサハラ各国の交易の中継により多大な利益をあげているからである。むざむざ利益のもとを潰すような者もいない。オムダーマンや北方も彼等を仲介として連合やサハラと交易を行っている。本音では彼等と直接交易をしたいが地理的な状況がそれを許してはいない。

## 第六部第五章　処刑その五

「そして我々ですか」
「いや」
だがマールボロはここで首を横に振った。
「我々はその勢力には入らない」
「何故ですか」
「今わしが言っているのはサハラの者の間でのことだ。我々は彼等から見れば異邦者、そして侵略者だ」
「それはそうですね」
秘書官はやはり機械的な声で答えた。
「第三勢力は北方だ。ティムール連合だ」
「ティムールですか」
「うむ、彼等がその第三の勢力だ」
「今の国力ではとても第三の勢力と言える状況ではないと思いますが」
「確かにな、今のところは」
マールボロはここで思わせぶりに言った。
「だがこれからはわからないぞ」
「国力の発展ですか」
「それもあるがな。今彼等は大規模な軍拡を行っているそうだな」
「はい」
それは事実であった。
「規模としては倍程度に増やすようです。現在の十個艦隊から二十個艦隊に増設するつもりかと」
「徴兵だけでなく傭兵達まで集めているようだな」
「はい、シャイターン主席が彼の実家や妻の実家の力も使ってそれを行っています」
「シャイターン家か」

「そうです、彼の弟である法皇フラームが信者達にも呼びかけているようです。北に集えと」
「信仰まで使うか」
マールボロはここでやや不快な顔をした。彼は信仰と政治を一緒にすることを好まないのだ。
「ですがそれによりかなりの義勇兵がティムールに集まっております」
「そして急激な軍拡を支えている、か」
「元々北方の艦艇は優秀です。そしてそこに精兵が加わればかなりの戦力になるかと」
「そうだな。彼等にはこれまで以上の警戒が必要だ。ハサンやオムダーマンが控えている今の状況で動くとは思えぬがな」
「はい」
それは大方の者が予想していることであった。そしてそれは事実であった。
「他に何か報告することはあるか」
「いえ」
秘書官は首を横に振った。
「ならばいい。休んでくれ」
「わかりました」
彼は敬礼をして部屋を後にした。彼が立ち去った後マールボロは執務室の豪華なソファーに座る男に顔を向けた。
「どう思うか」
「ティムールのことですか」
その男タンホイザーは彼に顔を向けて応えた。
「うむ。私は彼等を油断ならない存在と見ているがな。先程の話でもそれはわかると思うが」
「そうですね」
彼は考えながらそれに答えた。
「私は政治のことはあまり興味はないですが軍事のことだけを見る

とあのシャイターンという人にはかなりの能力を感じますね」
「卿もそう思うか」
「はい、あのモンサルヴァート閣下ですら勝利を収められることができませんでした。その能力はかなりのものかと」
「そうだな、それはわしも同じ考えだ」
マールボロは我が意を得たと思い頷いた。
「これからのあの国を考えるとかなりの脅威になるだろうな」
「少なくともシャイターン主席の軍事的才能は脅威ですね」
「倒せるか」
マールボロはここでタンホイザーに問うた。
「あの男を。いざという時には卿の力を借りなければならん」
「私にとっては目の前の敵を倒す、それだけです」
彼は笑って答えた。この場に相応しくない程清々しい笑みであった。
「そうか」
マールボロはそれを受けて首を縦に振った。
「では期待しているぞ。丁度この総督府の兵も増強されてきているしな」
「はい。ですが今は積極的にこちらから動くことはできませんね」
「サハラ各国も勢力を伸ばしてきているからな」
「それに彼等の存在もあります」
ここでタンホイザーの目の色が変わった。
「うむ」
そしてそれはマールボロも同じであった。
「ただ彼等も今のところは動く気配はないがな。この一千年の間外には兵を向けてはいない」
「あくまで勢力圏内の海賊やテロリストに対してだけでしたが」
「それでもあれだけの兵力を持っているのは脅威ではあるな」
それが連合であるのは言うまでもないことであった。
「これは正直に聞きたいが」

マールボロの顔が深刻なものとなった。
「今の我々の国力で彼等に勝つことができると思うか。いや、こう言っては語弊があるな」
彼はここで言い直した。
「彼等が攻めて来た時防ぎきれると思うか」
「難しいかと」
タンホイザーはそれに答えた。
「力の差は歴然としています。それに彼等の軍備もかなりのものです」
「あの巨大戦艦か」
「それだけではありませんがね。他の艦艇や艦載機、陸上兵器もかなりのものです。それ等だけで我が軍の艦艇の質をかなり凌駕していると思います」
「攻撃力と防御力はかなりのようだな。先の海賊との戦いにおいても損害は殆どなかったそうだが」
「そのようですね」
解放軍との戦いである。その戦いの詳細は彼等にも伝わっている。
「ただ機動力はそれ程でもないようです。それについては我が軍の方が上かと」
「ふむ」
「ただ閣下も仰ったように攻撃力と防御力は我等の艦艇等と比較にならない程ですが」
「そして数もな。それが最も問題だ」
「はい」
タンホイザーはそれに頷いた。
「三十倍の差は流石に如何ともし難いかと思います」
「そうだな。正面から当たって勝てる相手ではないか」
「いえ、それでもそれは違うかと」
「どういう意味だ」
タンホイザーの言葉に俯きかけていた顔をあげた。

「要は戦い方ということです。沈まない戦艦なぞ今までこの世にはなかったでしょう」
「それはそうだが」
「もし連合と戦う時になったらですが」
「うむ」
「その時はお任せ下さい。必ずや彼等を退けるなりしてみせましょう」
「頼めるか」
彼の力はよく知っている。だからこそこう言えた。
「はい」
そしてタンホイザーはそれに応えた。その顔には不安な様子なぞ欠片もなかった。
「おそらく彼等はこちらとは比較にならない程の物量で攻め込んで来る。今までの戦いとはまるで違うぞ」
「はい」
それはタンホイザーもよくわかっている。
「だがそれでもあえて正面から戦うというその気概も必要だ。エウロパの騎士の力見せてやろうぞ」
マールボロはここで騎士と言った。これは彼だけでなく他のエウロパの軍人も同じ考えである。彼等は自分達をまず戦う騎士だと考えている。実際にそうした爵位もある。だがこれは他の爵位においても同じ認識である。
「連合の軍人達がどういう者達かはよく知りませんが」
タンホイザーは言った。
「我等の剣裁きを彼等に心ゆくまで披露してあげましょう。エウロパの騎士の剣を」
「うむ」
マールボロは頷いた。そして窓を見る。
「雨か」
見れば外は雨が降っていた。しとしとと静かに降っている。

「珍しいですね。こんな雨は」
「ああ」
サハラでは雨自体が少ない。降る時は一度に降ることが多い。だからこの様に静かに降る雨は珍しいのである。
二人は別れた。タンホイザーは部屋を出る。後にはマールボロだけが残った。
「戦いの前の雨かな」
彼は窓から見える雨を見て呟いた。雨はそんな彼に対して何も語らずただ降り注いでいた。

第六部　　完

２００４・１２・９

# 第七部第一章　流浪の民その一

## 流浪の民

エウロパのサハラ侵攻は多くの影響を各勢力に与えていた。まずエウロパ自身にとっては植民活動を起こしていた。住むべき場所がなくなりつつあった彼等はこのサハラ北方に積極的に移住し、そこに生活圏を築いていた。今サハラ北方に住むエウロパの者は二百億人近くにまでなっていた。エウロパの人口は一千億程でありその約五分の一が移住していたのである。彼等にとってはこのサハラへの進出は最早死活問題であったのだ。これにより彼等は救われたと言っても過言ではない。彼等にとっては生きる為にはこうするしかなかった。

だがこれはサハラの者にとっては憎むべき侵略であった。これによりその地に住んでいた者達は追い出され難民となったからだ。その数はかなりの数に達していた。

彼等の多くはサハラ各地に散った。難民としてである。彼等はそこで難民として自分達が生まれ育った地に帰ることを訴える者もいる。中にはその為に傭兵になった者もいる。そしてその国に入りそこで生きる者もいる。それはそれぞれであった。そして連合に流れていった者達もいた。

連合中央政府及び各国の政府は彼等を受け入れた。そして辺境の惑星に移住させ、そこで各国の国民、連合市民としての地位を保証した。彼等は法律上では連合市民であった。だがその心は違っていた。

彼等はあくまでサハラの民であった。無論中には連合に入る者もいた。だがその多くは何時の日かサハラの入る日を夢見ていた。そしてその運動も行っていた。

これは連合政府の支援もあった。エウロパとは長きに渡って対立関係にある。そのエウロパにより祖国を失い、追われた者達を助け

るということは彼等にとって格好の政治的な宣伝であるからだ。
だが実際にどうにかできるわけではなかった。まず彼等はエウロパに攻め込むつもりはない。そしてサハラに干渉する気もなかった。だからその援助もあくまで表面的なものだけに過ぎなかったのだ。
それを批判する者もいた。難民達の急進派と彼等を支援する者達だ。だがどうにもならないのは彼等にもわかっていた。従って彼等は日々を悶々として過ごすだけであった。この世に万能の者なぞいはしない。三兆の人口を擁し圧倒的な力を誇る連合もどうにもならない問題があるのだ。
そうした日々を何とかしたい者達の中に彼はいた。彼はその時は多くの難民の中の一人に過ぎなかった。
彼の名はロスタム＝グーダルズという。かってはアガデス軍に所属する軍人であった。士官学校を卒業してすぐにエウロパとの戦いに参加した。そしてそこでモンサルヴァート率いるエウロパ軍により敗北する自軍と滅亡する祖国、そして故国を追われる自分達を見せられた。それは今もはっきり覚えている。
彼は家族と共に難民となった。そして連合に流れ着き辺境の惑星に移り住んだ。そしてそこ連合の市民として生活していた。今は農場で雇われて働いている。
「御苦労さん」
働いているとたまたまそこを通り掛かったオーナーに声をかけられる。
「どうも」
彼は顔を上げて挨拶を返した。黒い髪に瞳を持つ精悍な顔立ちをしている。痩せていてかつ筋肉が発達している。そしてその黒い髪は直毛であり太い。その浅黒い肌と合わせて何処か黒獅子を思わせる外見をしている。
「今日も頑張っているね」
オーナーは笑いながら彼に声をかける。このオーナーの名はナルサス＝ハルドゥーンという。彼もまたかっては難民であった。だが

今は完全に連合の市民となっている。二ジェール籍である。これはグーダルズも同じである。よく太った気さくな人物として知られている。
「有り難うございます」
グーダルズはそれに対して挨拶を返した。表情はあまり変わらない。
「うん、君がいるおかげでうちの農場は大助かりだよ」
「いえ、私だけではありません。他の皆があってこそです」
「それはそうだね」
ハルドゥーンはそれを受けて頷いた。にこやかな顔であった。
「ではその謝礼をしたいのだが」
「それは」
「いや何、大したことじゃないけれどね。もうすぐお昼だし今日は私が皆のお昼をご馳走させてもらうよ。大したものは出せないけれどね」
「いえ、そんなことはないです」
彼はそう言って謙遜した。ハルドゥーンは気前のいいオーナーであった。よくこうして従業員達にご馳走したりするのだ。
「オーナーにはいつもお世話になっていますから」
「ははは、褒めたって何も出ないよ」
彼はそう言って笑った。
「この腹からはね」
そして腹をさすりながらそう言った。
「まあお昼は任せてくれ。今うちの奴に作らせているから」
「はい」
「ではお昼にまた合おう。皆にもそう伝えておいてくれ」
「わかりました」
ハルドゥーンは車に乗るとその場を後にした。そしてグーダルズがそこに残った。
「もうそんな時間か」

彼は上を見上げてそう呟いた。見れば日はかなり高くなっていた。
それから辺りを見回す。周りには人参や大根の畑が広がっている。そこに彼の他に多くの者が働いていた。彼等もまた難民達である。
「難民といっても職もあるし食べ物もある。そして市民権もある」
彼は自分と同じ境遇の者達を見てそう呟いた。
「それを考えると我々は恵まれているか。少なくとものたれ死ぬ心配はない」
サハラ各地に散った者達は彼等のように恵まれているとは限らない。中にはその地の戦乱に巻き込まれる場合もある。日々の生きることすらままならぬ者達もいるのだ。それを考えると彼等は天国にいるようである。こうして職も食べ物も家もある。当然グーダルズも家はある。彼は両親や兄弟達と共に一軒家に住んでいる。質素だが困ってはいない。
そして連合市民として完全に生きる道もあった。彼等は実際に法律上では連合の者である。だから溶け込もうとすれば何時でもできるおだ。そうして連合に根付こうという者もいる。
「だがそれでもサハラに戻りたい」
彼はそう考えていた。この地はあくまで彼にとっては故郷ではない。彼等が住むべき場所は故郷であるアガデスなのだ。それ以外の何処なのであろうか。

## 第七部第一章　流浪の民その二

かってシオンの地を追われたイスラエルの者達は気の遠くなる程の歳月を経て祖国を取り戻した。そしてこの宇宙の時代においても彼等はシオンの地を愛しているのだ。それは彼等も同じであった。

「サハラに戻るにはどうすればいいいか」

彼はいつもそのことを考えていた。だがどうしたらよいかはまだわからない。結局今は働くしかなかった。そして日々の糧を得るのだ。

「おっと」

彼はここで先程のハルドゥーンとの会話を思い出した。

「皆に言っておかないとな」

お昼のことを話しておかなければならない。そして彼は実際にそれを皆に話した。そして他の者も皆ハルドゥーンのところに集まった。

「おう、皆来てくれたな」

「はい」

グーダルズ達は出迎えてきたハルドゥーンに答えた。

「じゃあ中に入ってくれ。早速食べよう」

そしてハルドゥーンは彼等を快く中に入れた。彼等はそれに従って中に入った。

中は室内バーベキュー場であった。そこではもう肉が焼かれていた。

「バーベキューですか」

「ああ。羊のな」

ハルドゥーンは答えた。

「うちの牧場の羊だ。どんどんやってくれ」

彼は牧場も経営しているのである。

「はい」

「喜んで」
彼等は喜んでそれに従った。そしてそれぞれの焼き場に着くと肉を食べはじめた。
肉だけでなく野菜も焼かれていた。玉葱やキャベツがいい匂いを出している。
「どうだ、美味いだろう」
「はい」
彼等はハルドゥーンの言葉に頷いた。
「こうした料理もいいですね」
「そうだろう、連合ではよくこうして食べるからな。ちょっとやってみたんだ」
「成程」
「このソースもいいですね。玉葱のソースですか」
「ああ、そうだ」
「そしてパンもありますね。中々豪勢だ」
「そうだろう、肉はたっぷりあるからな。皆思う存分食べたらいい」
「いいんですか？」
「当たり前だ。その為に用意したんだからな。それもこれもよく働いてもらう為だ」
ハルドゥーンはにこやかに笑いながらそう言った。
「午後からまた仕事だ。頑張ろうな」
「はい」
彼等はハルドゥーンの言葉に従い心ゆくまでそのバーベキューを楽しんだ。そして午後も働き夕刻になるとそれぞれの家に帰った。
「只今」
グータルズは家の扉を開けた。そして家の中に入った。
「まだ誰も帰っていないのか」
家の中は静まり返っていた。テレビの音も料理を用意する音もしない。
彼はリビングに向かうと椅子に腰を落とした。固い木の椅子であ

る。
テーブルの上にあるポットを手に取った。そして茶を飲む。日本風の玄米茶である。
玄米茶はアガデスにいた頃は名前も知らなかった。連合に来てはじめて知ったものである。最初は何かと思ったが飲んでみると中々良かった。今ではいつも飲んでいる。
一息ついた。それからトレーニングウェアに着替えた。準備体操の後でトレーニングをはじめた。
トレーニングといっても器械を使ったものではない。腕立て伏せや腹筋等そのままで出来るものであった。それで軽く汗を流した後でランニングに向かった。
一時間程走ったであろうか。家に帰る時にはもう日が暮れていた。
「おかえりなさい」
家には彼の姉が帰っていた。名をビルギースという。彼に似た細い顔に長く黒い髪を持っている。
「只今姉さん」
グータルズは彼女に挨拶を返した。
「早かったのね、今日は」
「いつもこんな時間だよ」
「そうだったかしら」
「うん。まあ今日は走る時間が少し短かったからね。そう思えるのかな」
「そうなの。じゃあ夕食の支度はじめるわね」
「わかったよ。じゃあ僕はお風呂を用意しておくよ。今から入るし」
「お願いね」
彼は風呂場に向かった。そして入口のボタンを押す。するとすぐに浴槽に湯が入った。
身体を洗った後で湯舟に浸かる。身体の疲れが一気にとれていく。
「只今」
入っていると外からまた声がした。それも一人や二人ではない。

家族が次々と帰ってきているのである。
彼の家族は多い。両親と姉の他にも弟や妹が二人ずついる。上にももう一人姉がおり一番上の兄はここに来てから結婚して今は独立している。八人兄弟の四番目というわりかし複雑な環境にいるのである。
軍に入ったのは士官学校からだ。兄も軍人でありそれについていくような形で軍人となった。卒業してすぐに巡洋艦に航海士として配属されたが配属後一週間目で戦闘に参加することとなった。エウロパとの戦いである。なお航海士とは艦の航行にあたる士官である。かっての海の名残でこう呼ばれているのである。航宙とあらわす場合もあるにはある。
そこでモンサルヴァート率いるエウロパ軍に敗北した。そして祖国が滅亡すると難民となり連合にまで逃れたのだ。
それまでの路は大変なものであった。餓えの危険もあった。海賊にも怯えていた。それでも難民同士で固まり団結して乗り切った。何とか連合に辿り着くとこの星に案内された。そして今ここにいるのだ。
風呂からあがる。するともう弟や妹達、そして両親が帰ってきてテーブルに着いていた。
「じゃあ食べるか」
「うん」
大柄で白髪の初老の男が彼に声をかけてきた。彼の父である。
テーブルに着く。魚の煮物であった。
「魚なんだね、今日は」
「ええ」
ビルギースは答えた。
「鯉よ。それを中華風にやってみたの」
「ふうん」
見れば確かにあんかけであり生姜や人参も入っている。もう湯気と香りに負けそうになる。

だがグータルズはそれを抑えた。そして食事の前のいただきますを終えてから食べはじめた。
食事を終えると自分の部屋に帰った。そしてパソコンのスイッチを入れる。
「メールは来ていないかな」
何通か来ていた。どれも商品の宣伝やキャンペーンばかりであった。
そんなものはどうでもよかった。軽く見た後で全部消した。
だが一通それ等とは違うものがあった。募集案内であった。
「？何だこれは」
それは軍の募集であった。どうやら難民達を対象にしたものであるらしい。
「連合軍からか」
連合軍のことは知っている。これまでにない数と装備を持っているということは聞いている。だが今の彼にとっては関係のないことだと思っていた。
今の彼は軍人ではない。農業で働く一介の労働者に過ぎない。少なくとも自分ではそう思っている。そして将来は土地を買って自分も農場を経営するつもりであるのだ。
消そうかと思った。だが心に引っ掛かるものがあり詳しく見てみた。
「待遇はかなりいいな」
給与はかなりのものだ。そして身分もかっての所属の階級をそのまま保証するとある。住居も提供してくれる。アガデス軍とはかなり違っていた。
これは志願制の為であった。徴兵制であったアガデスでは軍に就くことは義務であった。従って軍も彼等の待遇はそれ程考慮しなくてよかった。数は確保できるからだ。
だが志願制だとこうはいかない。待遇がよくなければ人材が来ないのだ。そしてその確保も常に念頭に置かなければならない。そう

した事情の違いがあったのだ。
「こんなことまで」
見れば有給休暇まである。アガデスにはなかったものだ。

## 第七部第一章　流浪の民その三

軍服のデザインも気に入った。黒のスーツの様なものに金のモールがある。どちらも彼の好きな色であった。
「元帥までの昇進もあるのか。だがこれはどうでもいいな」
所詮自分達は難民である。しかも連合にとっては余所者だ。どれだけ昇進しても中枢に就くことができないのはわかっている。言うならば傭兵であるからだ。
だがそのアガデス軍とは比較にならない程の給与と待遇が気になった。これについては考えさせられた。
「入ってみるのも悪くないか」
そう思った。だが今は決断を下すのはやめた。
見れば募集の期限はまだまだ先だ。ゆっくり考えてもいいと思った。
その日はそれからネットをした後でベッドに入った。翌日の仕事に備えて早めに眠りに入った。
起きて朝食、そして身支度を整えて仕事場に向かった。作業服に着替えて早速仕事に入る。
「おうい」
今日の仕事場であるオリーブ畑に来ると後ろから誰かが声をかけてきた。
「おお、あんたか」
見れば同僚の一人である。彼はまた別の国の軍人であった。やはり難民である。やけに大きな武骨な感じの男だ。
「昨日メールが来なかったか？」
「あんたもか。こっちもだよ」
グータルズは答えた。
「連合軍の募集のやつだな」
「ああ、かなり待遇はいいな」

彼もそちらに目がいったようである。
「連合軍ってのは太っ腹だ。あれだけもらえるなんて俺のいた国じゃ夢みたいな話だ」
「こっちでもだ。普通軍人ってのは財布は軽いものだからな」
これはサハラ各国の特徴である。軍人は名誉を食べて生きていると言われている。生活に必要なだけあればよいという考えもある。
「で、どうするんだ？」
彼はここで尋ねてきた。
「どうする、というのは？」
「いや、志願するかどうかだよ。例えば俺だと軍曹になるがあんたは少尉からだろ、階級は」
「ああ」
「軍曹でもかなりいい暮らしができる。ここでの生活も悪くないがな」
「そうだな。少なくとも今の生活に不満はない。難民とは思えない位だ。だがな」
グータルズはここで目の色を変えた。
「待遇よりも銃を持ちたい理由がある」
「それは俺も同じだ」
彼はここで頷いた。
「あいつ等に復讐して祖国に帰る為にな」
「そうだ」
グータルズはそれに頷いた。
「サムディさん」
「ああ」
彼はここで目の前の同僚の名を呼んだ。
「あんたは確かマラケシ共和国の出身だったな」
「ああ、そうだ」
彼はそれを認めた。
「陸戦部隊にいた。この体格を買われてな」

「そうらしいな」
「俺の祖国もモンサルヴァートの軍にやられたよ。ある時急に攻め込まれてな」
「こっちは謀略で内戦を起こされてからだ。どちらにしろ同じだが」
「そうだな。俺達は奴等に国を追われた。それは同じだ」
その大男トゥース＝サムディは言った。
「そしてここまで流れ着いた。死ぬような目に遭ってな」
「ここにいる者は皆そうだな」
「連中のせいでな」
サムディは吐き捨てるようにして言った。
「その恨みは忘れられるもんじゃない。それは国に帰るまで変わらないだろうな」
「こっちもだ」
グータルズはそれに同意した。
「帰りたいな、サハラに」
「そうだな。その為なら何だってするぜ、俺は」
「こっちもだ」
これはここにいる者の多くが同じ考えであった。
彼等はやはりサハラの者であった。連合にいても心はここにはなかった。やはりサハラで生き、サハラで死にたいと思っているのだ。
「だが入ったからといって帰れるとは限らないな」
「それはわかっている」
グータルズは答えた。
「これは多分連合の宣伝だろう、エウロパ向けの。そして何らかの理由でより多くの兵が欲しい」
「正規軍とはまた違った意味でか」
「そうだろうな。言うならば正規軍が楯や鎧、兜で剣となる軍が欲しいのかもな」
「つまり使い捨ての部隊ということか」
「悪く言うとな。何かあったら先頭に行ったり後詰をしたりする。

そうした部隊が欲しいのだろう」
「あの長官はそうしたのを求めるタイプだとは思わないがな」
「八条長官か。日本出身の」
「ああ」
彼のことは彼等も聞いていた。悪い印象はない。
「確かにあの人にはそうした考えはないだろう。だが軍としてはどうだ」
「成程、そういう意味か」
サムディはそれを聞いて頷いた。
「軍としてはそうした部隊も必要ということか」
「言うならば二十世紀のアメリカの海兵隊みたいな存在なのかもな」
「海兵隊か。あの」
アメリカ海兵隊は連合軍の統合まで存在していた。また今も海兵部隊は存在する。独自の機動力と豊富な火力を誇り有事の際には最初に動く部隊である。常時戦闘状態にある精鋭部隊だ。
「そうした部隊が欲しいのだろう、何かあった場合に」
「それを俺達に任せるということか」
「そういうことなのかもな。これはあくまで予想だが」
グータルズはそう語った。
「だからこそそうした話を我々に持って来たのだろうな」
「そうか。宣伝の他にもそうした狙いがあってか」
「俺はそう考えるがな。普通に宣伝だけでやるとは思えない」
「ふうむ」
サムディはそこで考え込んだ。
「入ったからといって国に帰れるというわけでもない」
それは彼にもよくわかることであった。
「だが奴等に一泡吹かせることはできるかも知れないんだな」
「これからの状況次第ではな。殆ど可能性はないにしろ」
「待遇はいい」
「それも魅力ではあるな」

「どうするかだな。ここでの生活も悪くはないが」
二人はそう話し合い考え込んだ。そうしているうちに昼になった。食堂に向かう。そして同僚達と食事を採る。
「おい、そっちにも来たのか」
「ああ」
どうやらここにいる者全てにメールが送られてきたようである。連合軍はどうやら本気のようだ。
「間違いないな」
「ああ」
グータルズとサムディはそれを横目で見ながら頷き合った。そして連合の考えがわかった。
午後の仕事も終わり家に帰る途中で二人は喫茶店に入った。コーヒーを飲みながら話をする。
「どうする、これから」
グータルズが話を切り出した。
「どうするか、か」
「そうだ。入るのか入らないのか」
彼は単刀直入に入ってきた。
「ここで平和に生きるか、それともまた銃を手にするか」
「二つに一つか」
「今サハラではシャイターンという男が北で勢力を築いている。彼ならエウロパの連中をサハラから追い出せるかも知れない」
「そうしたら俺達は国に帰ることができる」
「そうだ。だがそれは自分達の手で勝ち取りたい」
「つまりエウロパを倒したいということか」
「さっきも言ったが可能性は殆どないにしろな」
彼はそこで言った。
「この手でサハラに帰りたい、その気持ちはあるだろう」
「当然だ」
サムディは強い声で答えた。

「一日たりとも忘れたことはない」
「それは俺も同じだ」
タルジークは言った。
「それならばサハラに帰るか」
サムディは問うてきた。実際にそうする者もいる。そして傭兵になるのだ。難民は傭兵の供給源でもあるのだ。
「悪くはないな」
タルジークは答えた。
「しかし俺は別の方法を取りたい。そちらの方が明るい気がする」
「つまり連合軍に入るということか」
「そうだ。そちらの方がエウロパに確実に復讐を果せる気がするからな」
「気がする、か」
「あくまで直感でしかないがな」
「ふむ」
サムディはそこで考え込んだ。この様な外見であるが彼は思慮深いのである。
「ではそうすればいい。俺も入ろうと考えていたところだしな」
「そうか」
「ああ、今のサハラではエウロパと正面きって戦える国はない。ハサンでも役不足だ」
「エウロパに対抗したいのだな」
「そうだ、あの時にはっきりそう思った」
彼はここでアガデスにいた頃を思い出した。あの時彼は為す術もなく敗れ国を追われた。その屈辱は今でも忘れてはいない。
「何時の日かこの連中を倒してやると。連合ならばそれが可能だ」
「確かにな。連合の力ならば」
連合とエウロパの力の差は歴然としていた。圧倒的なものでありタルジーク達もそれはよく認識していた。
「では志願するか」

「ああ」
タルジークは頷いた。
「連合軍に入る」
「よし」
これで決まりであった。後日彼等は連合軍に志願した。そして連合は彼等を受け入れた。こうして多くの難民達が連合軍に参加したのであった。

## 第七部第一章　流浪の民その四

「難民達の志願状況はどうなっていますか」
八条は統合作戦本部長室に行き本部長であるバール元帥と話していた。
「順調に進んでおります」
バールはその問いに対して快く答えた。
「このままいけば目標である百個艦隊は楽に到達できるかと思われます」
「それは何より」
八条はその答えに満足した声を出した。
「最初話を聞いた時はどうかと思ったのですが」
「どういうことですか」
「いえ。所謂外人部隊というのはどうかと思いまして」
彼はここでその整った顔をやや曇らせた。
「そうした部隊は軍の差別化を招くのではないかと思ったのですよ」
「確かにそれはありますな」
バールはそこでこう言った。
「実際に彼等にはかなり過酷な任務が向けられるでしょうし」
「やはり」
それは充分予想されたことであった。これは八条の好むと好まざるによらず。
「元々そうした任務を請け負う部隊を欲しての募集でしたから」
「そうそう奇麗事ばかりではいかないということですか」
「長官には申し訳ありませんが」
バールはやや表情に影をさせた。
「ですが軍とはこうした一面もあることはご承知だと思います」
「それは確かに」
八条もかっては軍人であった。だからそうしたこともよくわかる。

だからこそ頷かざるを得なかった。
「具体的には有事の際の先遣隊や後詰ですが」
「戦いの際にはなくてはならないものですね」
「そうですね。だからこそ彼等の訓練もかなり過酷なものとなるでしょう」
「それは教育総監のお仕事ですね」
「はい」
そこでソファに座っていた黒い肌に東南アジア系の顔をした男が声をあげた。連合軍教育総監ハイメ＝ラビルヘン元帥である。コスタリカ軍の士官学校の校長を務めていた人物である。祖国では教育者として有名である。むしろそちらの方で名が知られている程だ。
「彼等の教育メニューは普通の将兵達とは異なるものになるでしょう」
「具体的にどういったものですか」
「まずは戦闘向けの訓練が多くなります」
八条の問いに答えた。
「そしてその内容もかなりハードなものに。彼等は常時戦闘態勢に置かれますからね」
「常時ですか」
「はい。何かあった場合はすぐに彼等が向かいます。今までの宇宙海賊達への対処もかなり楽になるかと思われます」
「そしてテロリストに対してもですね」
「はい」
ラビルヘンはまた頷いた。
「そうした対テロリストへの訓練も行っていかなくてはならないでしょう。既にそうした訓練メニューもスタッフに考えさせています」
「そして装備や補給はどうなりますか」
「補給は他の正規軍と同じでよいでしょう」
ラビルヘンと同じくソファーに座っていたコアトルが答えた。
「ただその装備は考えていなかくてはなりませんね」

「はい」
八条にもそれはよくわかっていた。
「やはり戦闘に強い装備でいかなくてはなりませんね、普通の軍と比べても」
「はい」
三人の元帥はそれに頷いた。
「通常の艦艇をさらに強化させたものにしていくべきですね」
ここでバールが提案した。
「とりわけ機動力を強化させたものに」
「機動力ですか」
「はい、彼等は常に他の軍と比べて迅速な動きを要求されます。それを考えますと機動力かと」
「ふむ」
八条はそれを聞いてまた考え込んだ。
「攻撃力や防御力も必要なのではないですか」
「それも当然考慮されなければなりません」
バールは答えた。
「今使っている艦艇のそうした部分を改造した強化タイプを使用していけばいいと思います」
「わかりました、ではチョム総監に伝えておきましょう」
「お願いします」
チョムは技術総監に就任していた。その階級も元帥に昇進している。
「各艦隊の旗艦はティアマト級でよろしいですね」
「それしかないでしょう」
これは既に決まっていることであった。
「やはりあの艦の存在は大きいです。それに能力も相応しい」
「火力も防御力も隔絶しています。何よりも通信能力が違います」
「それが一番大きいですね」
コアトルが答えた。

「あの艦の通信能力や内臓されているコンピューター等電子関係は他の艦のそれとは比較になりません。あの艦だけで一個艦隊に匹敵する力があります」
「それは少し言い過ぎでは」
八条はその言葉には少し苦笑した。
「いえ、必ずしもそうとは言えませんよ」
バールがそこで言った。
「この前の解放軍との戦いでも絶大な力を示しましたし。あの艦は我が軍の象徴ともなりつつあります」
「そこまでですか」
「ええ。少なくとも将兵にはそう認識されつつあります。もっともそれは最初からの狙いでしたが」
「確かに」
彼はそれに頷いた。
「これからもあの艦が主軸になっていきますか」
「それは間違いないでしょうね。難民達で構成される部隊にも配属させるべきです」
「当然ですね」
これは八条も最初から考えていた。
「では百隻新たに用意しますか」
「はい」
「彼等には何かあれば働いてもらわなければなりません。その装備も充実したものでなければ」
コアトルは考えながらそう言った。
「また悩みが増えますな」
「しかし戦力は整ってきています」
ラビルヘンがそこでこう答えた。
「既に艦艇は全て配属し終えました。ティアマト級も三千隻の建造を終えましたし」
「遂にですか」

八条はそれを聞いて顔を引き締めさせた。
「観艦式からようやくといった感じですね」
「軍備は一朝一夕にはできませんからな」
バールが答えた。
「ええ。だからこそ難しい。しかし整えておかなければならない」
「はい」
それは彼等自身が最もよくわかっていることであった。
「では彼等の部隊の整備の計画も進めていきましょう。そして同時に部隊の配属も」
「はい」
八条はここでふと気付いた。
「そうだ、部隊名を考えておかなくてはなりませんね」
「何にしますか」
「そうですね」
彼は三人の元帥に問われて考え込んだ。
「そうだ」
ここでふと思いついた。
「義勇軍にしましょう。サハラ義勇軍。これならいいでしょう」
「いいですね」
「悪くないかと」
三人はそれに対しておおむね賛成であった。
「では決まりですね。早速計画を進めていきましょう」
「はい」
三人はそれに頷いた。
こうして新たな動きが進みはじめた。連合はまた新たな力を加えていくことにしたのであった。

## 第七部第一章　流浪の民その五

連合が利用しようとしている難民達であるがこれはサハラのとっては深刻な社会問題の一つであった。それは最早どうしようもないのではないかとすら思われていた。

彼等はサハラにおいては主に北方の残りの国々、そしてハサンに亡命していた。そこでコロニーを形成しかろうじて生きていた。

そうした彼等を各国の為政者達はもてあましていた。確かに何とかしなければならないがすぐにどうにかできるものではなかった。それにはまずエウロパ総督府を何とかしなければならないからだ。

だが彼等の力は強大であった。二十個艦隊が駐留し守っていた。守っているどころかつい最近までは逆に彼等の侵攻に怯える状態であった。

それはシャイターンの登場によって終わった。彼が北を統一したことによりその侵攻は進められなくなっていた。だがそれでも脅威であることに変わりはなかった。

この時東方の覇者ハサンはこれといった動きを示していなかった。彼等は西方での戦いにも介入しようとせずただ現状を維持することにだけ努めているようであった。

ハサンは言うまでもなく東方を支配する大国である。その勢力はサハラ随一でありオムダーマンやティムールをも凌駕するものである。

この国の歴史は古い。七百年前にワシード家によって建国させ中継貿易によって力を蓄えた。そして軍備を整え主に傭兵の力で勝利を収めてきた。彼等は最初はそれ程人口は多くなく軍備については不安があったが傭兵を雇うことによりそれを補ったのである。

勢力が大きくなると徴兵に切り替えた。そして小国を次々と併呑し東方の大国となった。そして遂には東方を統一したのである。

その軍備は百個艦隊に達していた。これはサハラでは最大であり

他の追随を許さない。だが彼等は東方を統一するとそれ以上動こうとはしなかった。むしろ防衛に回るようになった。

これは彼等の要である中継貿易の為であった。彼等は東方を抑えるとそこから連合、マウリアとサハラ各国との中継貿易を中心とし富を蓄えることに専念した。従ってそれを害されなければよく積極的に戦争を行う必要はなかったのである。彼等はサハラ統一を考えていなかったからそれでもよかったのである。

そのハサンの首都はブルジルトである。この中央に一際大きな黄金色の宮殿がある。そこが王家であるワシード家の宮殿であった。

この家の歴史は古い。それだけに多くの逸話がある。

その逸話の多くは血生臭いものである。特に王位継承では何かと陰惨な話が多い。

王妃が王の寵愛する侍女を虐殺したという話もある。そしてその侍女の霊は夜な夜な宮殿を徘徊するという。それを見た王妃が狂死したと言われている。

兄が弟を殺す。その遺体は地下に埋められた。だがそこから地の底に入り込み魔物と化したという伝説もある。

こうした話は古い家には多い。とりわけ王家というものは王の座や王の寵愛を巡って多くの争いが起こってきた。従ってそうした話も多くなるのである。これはイギリス王家の幽霊話を見ればすぐにわかることである。連合においてもとりわけ長い歴史を誇る日本の皇室にそうした話がある。怨霊の存在をことの他怖れてきた歴史があるのだ。

そうしたことからこの黄金色の宮殿は『血塗られた宮殿』と仇名されていた。今その王座には一人の年老いた男が座っていた。

長く白い髭と髪を持っている。彼はハルジャ五世という。齢七十に達する老人であり四十年に渡ってこの国の王を務めている。

彼は先王である父の長子として生まれた。母は王妃であったので珍しく何の波風もなく王太子となった。そして父王の崩御により程なく王となった。

それからは特に何もするわけではなかった。国政は議会に任せ彼はただ宮殿にいて儀礼にのみ専念していた。彼は国政はあくまで家臣が行うべきであると考えていたのだ。
「王の仕事はより重要なものがある」
彼はそう考えていた。それこそが儀礼なのであった。
それは王でしかできないことであった。王はその政事によって成り立っているのではない。祭事によって成り立っているのだ。連合やエウロパの各皇室及び王室を見ればそれはわかることであった。
ハサンは複雑な政治システムにある。王の権限が強いが議会にも内閣にもそれなりの力が存在する。国王がその気になれば国政を司ることができる。だが彼はそうした考えではなかったのだ。
彼はあくまで儀礼にのに携わった。政治は内閣及び議会が行った。それでさして支障はなかった。
だが王族の存在もあった。ハサン摂政であるルクマーン＝ワシードである。彼はハルジャ五世の長子であり王位継承者第一位である。ようやく三十になったばかりの美男子であるが彼の指導によりハサンは的確に動いているのである。彼と内閣、そして議会によりこの国の政治は安定していた。
「連合の動きがまた激しくなってきたな」
彼は政治についての話は自身の書斎においてすることが多い。ここで彼は首相であるシャービル＝ラージーと話をしていた。
「どうやら難民達を兵に迎え入れているようです」
痩せた小柄な男がそう答えた。顔も痩せておりその目はくぼんでいる。だがその光は強かった。
「そうか。どういうつもりなのか」
ルクマーンはそう言いながら自身の形のよい顎を撫でた。見れば舞台俳優の様に整った顔立ちをしている。
「あれだけの軍備でまだ足りないというのか」
「どうやら精鋭部隊を欲しているようですが」
「精鋭部隊」

ルクマーンはそれを聞いて首を少し傾げた。
「それを難民達に求めるというのか」
「どうやら有事の際に火急に動ける部隊を求めているようですが」
「そうか、それなら納得がいく」
彼はそれを聞いて頷いた。
「今連合にはそうした部隊はなかった筈だからな」
「はい」
シャービルはそれに頷いて答えた。
「連合も連合で色々と問題がありますからな」
「うむ」
「ただとりあえずは我々に対しては動いては来ないかと」
「何故そう思う」
ここで問うてきた。
「どうも火急の際に動ける部隊を置いただけのようですから。さしあたっての脅威となる可能性は低いと思われます」
「そうか。では国境の部隊も増強する必要はないな」
「かえって連合を警戒させるだけでしょうな」
「よし、では連合に対しては今まで通りでいこう」
「ハッ」
シャービルは頭を垂れた。
「次はエウロパだが彼等は今大人しいようだな」
「そうですな。ただ諜報部の動きが活発になってきております」
「諜報部か」
「はい。ただ我等の領内に入り込んではおりません」
「ティムールか」
「そちらもありますが」
「オムダーマンか？今も戦争状態にあるが」
「そちらにも入り込んでいるようです」
「我等の領内を経由してか。御苦労なことだ」
それで問題にもなっている。エウロパは総督府からハサンを経由

して諜報部の者を各国に潜入させているのだ。とりわけ連合がこれに対して警戒している。
「取り締まりを強化しておくか」
「そうですな。では憲兵隊にはそう伝えておきます。そしてまたエウロパの諜報部ですが」
「まだ何かあるのか」
「ステッラですが」
「あの女がどうかしたか」
彼女の名は二人も知っていた。
「また動きはじめたようです」
「連合の領内でか」
「はい。既にその諜報網を完全に修復し連合の情報を収集に入っているようです」
「流石だな。一時は自身の命まで危うかったというのに。もう整えるとは」
「そうですね。最初はエウロパに帰ったと思っていたのですが連合に留まっておりましたし」
「連合は隠れる場所が多い」
「それを利用したようですな。それで連合は彼女を捉えようと躍起になっているようです」
「捕らえられるかな、果たして」
「それで我が国にも要請が出ております。国境に向かう者に対して注意してくれと」
「出口を塞ぐか」
「そのようで。それからあの女を追い詰めていくつもりのようです」
「ステッラをか。難しいだろうな」
「ドトールやアラガル、ンガモといった人材を使うと思われますが」
「ふむ。警察に軍のそうした部隊をか」
「それに憲兵隊かと。大掛かりな捜査になりそうですな」
「狐狩りだな」

ルクマーンは微笑みながらそう呟いた。
「女狐狩りだ。連合全土を狩猟場にした狩りだ」
「獲物は一匹ですかな」
「一匹とは限らないな」
彼はそこでこう言った。
「他にもかかるかも知れない」
「女狐の持つ目と耳」
「それもあるがな」
「他にも」
「そうだ。女狐を操る皇帝が捕まるかもな」
「皇帝とは」
シャービルはそこで首を捻った。
「皇帝とは一体」
「いずれわかることだ」
彼はそこで微笑みの形を変えた。
「いずれな。皇帝と教皇が捕まるかも知れないぞ」
「教皇」
シャービルはそこで眉を顰めさせた。
「それはバチカンのことでしょうか」
「さてな」
だがルクマーンはそれには答えなかった。
「だが面白いことになるかも知れないぞ、今後の連合とエウロパは」
「戦争でしょうか」
「可能性はある」
彼はそう答えた。
「その場合エウロパにとっては国家存亡の危機となるでしょうな」
「そうだな。だがそれは我等にとっては好機だ」
彼はここでそう言った。
「彼等の力が弱くなるということはそれだけで利益となる」
「はい」

「その為に手を打っておくとするか」
「具体的にはどのようなものを」
「そうだな。とりあえずは総督府との国境の兵を増強しろ。いざという時の為にな」
「わかりました」
「時が動くかも知れないな」
彼はここで部屋を出た。そしてテラスに向かう。シャービルもそれに従う。
「見ろ」
彼は空を指差した。空には星が瞬いていた。
「この星達を」
そうシャービルに対して言った。
「この星達が教えてくれる。これからの我々の進むべき道を」
「はい」
「そしてこの星達、サハラの星は全てサハラの者のものだ。他の誰のものでもない」
「そう、そしてその東は我等がものですな」
「そうだ。だが首相はそれで満足か」
彼はここでこう言った。
「といいますと」
「サハラは一つになるべきだと思わないか」
笑いながら彼に顔を向けてきた。
「我等のことは我等で決めるべきではないのか。そしてそれは一つの勢力の下にまとまるべきだ」
「それは」
シャービルはやや口篭もったが答えた。
「私も同じ考えでございます。ですが今オムダーマンやティムールとの衝突は避けるべきかと」
「わかっている。それはな」
今のサハラの事情は彼にもわかっていた。

「今オムダーマンを攻めるとティムールやエウロパが何かしてくる危険があるな」
「はい。あのシャイターンという男には警戒すべきかと」
「そうだな。ティムールを攻めても同じだ。むしろ彼等をエウロパに向けさせるべきか」
「それが得策かと」
「ではあちらに話を持ちかけるか」
「総督府への攻撃ですか」
「そこまでは考えていない。軍事同盟程度だ」
「わかりました」
彼はそれを聞き答えた。
「ではあちらにはそう使者を送っておきます」
「うむ、頼むぞ」
「はい」
「だが今後のことはよく考えておかなければな」
「兵を動かしますか、やはり」
「そうだな。さしあたっては邪魔者の排除から進めていこう」
「ハッ」
彼等は星の海の下で話を続けた。黄金色の宮殿は星達の光の中で輝いていた。

## 第七部第一章　流浪の民その六

ハサン上層部の予想は当たっていた。エウロパはこの時確かに連合に対する諜報を強化させていた。

「ステッラからの報告があがってきているか」

総統官邸でラフネールは情報部長であるチェーザレ＝デ＝シリアーニと会っていた。

「はい。ハサンを経由して届いております」

アイスブルーの瞳に金色の髪を持つエウロパの将官の軍服を着た男が敬礼の後そう報告した。

顔立ちはまるでルネサンス時代の絵画の戦士の様に整っている。背も高いがそれ程筋肉質ではない。均整のとれた身体をしている。

彼の名はチェーザレ＝デ＝シリアーニという。三十代の若さにしてエウロパの情報部を統括する男である。その能力はエウロパだけでなく連合やサハラ各国においてもよく知られている。

「アイスブルーの悪魔」

それが彼の通り名であった。これは連合のある国の情報部の者が名付けたものである。

士官学校を卒業後情報部に入った。そしてすぐにサハラ担当に配置されたのだ。

サハラ北方のある国に潜入するとそこの軍の上層部の一人を買収して軍事機密を次々に入手していった。そしてそれをそのままエウロパ総督府に回し軍の侵攻を促した。これによりこの国はエウロパに滅ぼされた。一人で一国を滅ぼしたのである。

それを伝え聞いた連合の情報部員がそう言ったのだ。その他にも彼は多くの功績を挙げ今に至る。時として姦計も用いる油断ならない男とされている。だがそれは情報戦においてだけであり普段の彼は乗馬やポロを愛するごく普通の貴族の男であった。子爵の爵位を持ち裕福な暮らしを送っている。妻や子供達に対しては良い夫であ

り優しい父であった。部下や使用人達に対しても寛容であり穏やかな良い上司であり主人である。教養も高く公平な人物としても知られている。その姦計はあくまで軍人としての責務であり本人の人格とはまた別であったのだ。
「今現在彼女は地球に潜入しているようです」
「地球にか。また大胆だな」
ラフネールはそれを聞いて思わず声をあげた。
「彼女の行動は我々をよく驚かせるな」
「本当に優秀な情報部員とは死地に入っても落ち着いたものです。彼女もそうです」
シリアーニはここでこう言った。
「ですからそれについては特に驚かれることもないかと思いますが」
「そういうものか」
ラフネールはそれについては今一つ納得できなかった。彼は情報部に勤めたことはないのである。
「だがここは彼女に任せるか」
しかし本当に能力があるかどうかを見抜く目は持っていた。そしてその者に思い切って任せることもできた。その時彼はそうした。
「そして卿にも」
ここでシリアーニにも声をかけた。
「ハッ」
シリアーニはそれに敬礼でもって返した。
「それではお任せ下さい。必ずや連合の細部まで調べて参りましょう」
「頼むぞ。ところで今のところ連合軍のことでわかっているのはこの数枚のディスクにあるだけか」
彼の机の上には数枚のディスクが置かれていた。ステッラの入手した連合軍の情報が入っているのは言うまでもない。
「はい」
シリアーニはそれに答えた。

「ですがそこにかなりの情報が入っております」
「どの程度だ」
「どの艦隊が何処に配置されているか。その艦隊の編成と艦長クラスまで」
「またえらく細かいな」
「それでもまだ足りないかと。連合軍の規模は何しろ巨大ですから」
「そうだな。今の時点で我が軍の二十倍だ。軍備を急がなくては」
モンサルヴァートの進める軍備増強は認めていた。今エウロパはそれにならい急激な軍備増強を行っているのだ。
「そうですね。ですが幾ら増強してもやはり限界があります。三百個艦隊程が限度かと」
「そうだな。財政を考えてもそれが限度だ。それ以上は」
「はい」
軍にだけ金を回すことはできなかった。福祉や教育、インフラにも回さなくてはならないのは言うまでもないことであった。今の時点でエウロパの財政はそれ等に加えて軍備の増強がかかり余裕のない有様であった。財相であるローズマンが頑張っている為赤字だけは避けられているが余裕のないことは変わらなかった。
「十倍の敵に如何にして対抗するかだ。普通に戦ってはとても太刀打ちはできない」
「連合軍は装備もかなりのものですし」
「とりわけあの巨大戦艦だ」
「ええ。やはりあの艦はかなりの脅威です」
ティアマト級巨大戦艦のことは彼等も念頭にあった。
「あれだけではない。艦艇や艦載機、陸上兵器の質は我々のものより遙かに上のようだな」
「そうですね。それは前の報告の通りです」
「あれは見た。あそこまで強力な兵器を造るとは思っていなかった」
「特に攻撃力と防御力に優れています。通信及び探索能力も我が軍のものより遙かに上です」

「我が軍の艦艇や兵器が勝っているのはどうやら機動力だけしかないな」
「そのようです。これ等は将兵の質でカバーするしかないと思われます」
「連合の将兵の質はどうか」
「そちらはごく普通のようです。訓練もさして厳しくはないようです。軍律は極めて厳しいですが」
「そうか」
「彼等にとって軍人というのはあくまで職業の一つに過ぎないものですから」
「それは昔からだな。我々とは違う」
「はい」
連合においては『高貴なる者の義務』として考えられている。従って貴族は軍に入ることが多いのだ。このシリアーニもそうであった。

## 第七部第一章　流浪の民その七

「軍そのものに対する考え方が根本から違います。それに状況も」
「最低限の守りだけ整えておけばよいからな、連合は」
「はい。それが何よりも大きいかと。その最低限の数だけであれですから」
連合は外敵は存在しない。エウロパに対してはガンタース要塞群があり守りは万全である。マウリアや国境を接するハサンとは友好関係にある。だからこそ一千年の間開拓に専念していられたのである。
だがエウロパは違う。人口問題を解決する為にサハラに侵攻しているからだ。
「だが彼等のその最低限の数だけで我々にとっては恐るべき脅威となっていることも事実だ」
「だからこそ情報部も何かと忙しい状況です」
「卿等には苦労をかけるな」
「いえ、これが仕事ですから」
「それはステッラも同じか」
「はい」
シリアーニはそう答えた。
「義務であります故」
「そうだったな。そして私の義務はエウロパを守り繁栄させることだ」
彼はそう言った。
「その為にはどの様な苦労も厭わなくてはならない。出来ているかどうかは疑問だが」
彼はそれなりに評価を得ている。高慢なところがあり今一つ芸術のセンスが欠けていると批判されることもあるが総統としては悪い評価を受けてはいなかった。

「連合への備えもしておかなくてはな。卿もこれからも何かと頼むぞ」
「ハッ」
シリアーニはここでまた敬礼した。
「お任せ下さい。と言っても私はこの件に関してはステッラからの報告を受けるだけですが」
「いや、今の情報部があるのは卿の功績だ。これからも頼むぞ」
「わかりました」
「ではこれからも頼むぞ宜しくな」
こうしてシリアーニとの話を終えた。シリアーニは下がりラフネールは一人となった。
「さて」
彼は自分の机のパソコンのスイッチを入れた。そしてそこにディスクを入れた。
「連合軍のことについてのデータを見るとするか。敵のことも知っておかなくてはな」
パスワードを入れ開く。そしてデータを見はじめた。
「ふむ」
彼はそれを見て腕を組んで考えはじめた。
「中々考えて配置されているな。隙がない」
どの場所にもすぐに兵が向けられるような配置となっていた。補給基地等の場所も的確であった。
彼はそれを見終わった後で電話を手にした。そして出て来た者に対して言った。
「統帥本部長を頼む」
そう言うと切った。やがてモンサルヴァートが部屋に入って来た。
「御呼びですか、総統」
「うむ」
入って来て敬礼したモンサルヴァートに対して答えた。
「以前より進めてもらっている本土防衛計画だが進行状況はどうか

ね」
「順調に進んでおります」
彼は即答した。
「既に防衛システムは全て整いました。このオリンポスを中心に各星系の防衛体制が整いました」
「そうか」
「そして補給体制、艦隊の編成も順調です。二百個艦隊への移行も進んでおります」
「それは何よりだ。だが一つ問題がある」
「何でしょうか」
モンサルヴァートはそう言いながらも彼が次に言う言葉はわかっていた。
「防衛計画が全て整ったとしてそれで連合との戦いに勝てるだろうか」
「総統」
そして彼はそれに対して用意していた反論を述べた。
「勝たなければならないのではないでしょうか」
「そうなるか」
ラフネールはそれを聞いて難しい顔をした。
「もし戦いとなったら苦しいものになるだろうな」
「はい」
彼はそれに答えた。
「戦力差は圧倒的です。おそらく」
「うん」
さらに難しい顔になった。
「やはりな。ここで言うまでもないことだったな」
顎に手をやる。そして歩きながら考える。
「その連合だが新たな軍を編成しているのは聞いているな」
「それはもう」
既にモンサルヴァートの耳にも入っていた。

「かなり強力な部隊のようだがやはり我等との戦いがあった場合は動かしてくるだろうか」
「軍の先頭に立ってくると思いますが」
「それはどうしてだ？」
「彼等は厳密には連合の市民ではありません。そうした者達をまず戦場に送ることは昔からありましたから」
「確かにな。それは昔からあった」
正規軍以外の外人部隊や傭兵達を自分の軍の先頭に立てることは古来よりあった。自軍の正規軍の消耗を防ぐと共に不穏分子の勢力を削ぐ為だ。連合の今回の場合は前者にあたる。後者の意味合いはなかった。
こうしたことをよくしたのはモンゴル帝国であった。彼等は占領地の民を軍の先頭に立て生きた楯としてきたのだ。非道と言えば非道なやり方だが有効であるのは事実であった。
「おそらく彼等は他の連合軍とはまた違った部隊になるでしょう」
「精鋭部隊になるかも知れないな」
「それは充分考えられます。ただでさえ兵力差があります。注意すべきかと」
「わかった」
ラフネールはその言葉に対して頷いた。
「では二百個艦隊ではまだ足りないな。予備兵力も用意しておくか」
「それが宜しいかと。いざという時には志願兵達が期待できますが」
「うむ。それでも兵力差は覆せそうにないがな」
「今ある戦力で戦うしかないでしょうね。ですがそれでも負けるわけにはいきません」
「そうだな。いざという時は」
「どうなさるおつもりですか」
モンサルヴァートはラフネールのその語調に辛い決断を見た。
「総督府を捨てる覚悟も必要かもな。総督府の兵を本土への救援に向かわせることもな」

「残念ですが」
それは彼も考えていた。だがその際懸念すべきことがあった。
「総督府の市民達の安全のこともありますが」
彼等はサハラにとっては侵略者である。侵略者に対して容赦しないのが常識である。守ってくれる軍がいなくなったなら彼等はどうなるか、それは火を見るより明らかであった。
「まずは彼等か」
「はい」
「だが火急の場合に迅速な行動が可能だろうか」
「それでも果たさなければならない問題です」
「そうだな。そうした事態も考えておこう」
「そうされる方がよいかと。それに連合は大軍です。その移動はどうしても目立ったものになります」
「つまり彼等が動いてから総督府の軍や市民を動かしても間に合うか」
「問題は彼等を収容する施設ですが。流石に二百万もの市民を収容するのは困難かと」
「廃棄してあるコロニー等はどうだろう」
「それも使用すべきですね。ですがそれだけではとても足りません」
「そうだな。他にも必要だな」
彼はそう言いながら再び考え込んだ。
「居住性の低さから移住が進んでいない惑星への収容も考えるか。色々あるが」
「そうですね。それも必要かと思います。費用は莫大なものになりますが」
「収容施設だけでなく居住の整備もあるからな。だが市民の命にはかえられない」
「はい、その通りです」
モンサルヴァートはその言葉に応えた。
「市民達の安全の確保をまず優先させましょう。話はそれからです」

「そうだな」
ラフネールはここで顔を意を決したものにさせた。
「ではそちらの計画も進めておこう。これは内務省や開発省にすぐに回しておく」
「お願いします」
「連合との戦い、何としても負けるわけにはいかない。そして市民の安全も何としても守らなければならない。我々にかかっている責任は極めて重いな」
「ですがそれから逃げることはできません」
「うん。これからも宜しく頼むぞ」
「ハッ」
モンサルヴァートはそれを受けて敬礼した。そして話は終わった。
ラフネールは一人になった。そこでふと窓の外を見た。
「この美しい大地も空も全てエウロパのものだ」
彼は強い声でそう呟いた。
「連合には渡しはせぬ。他の者にもな」
表情も強いものになっていた。そして一歩前に出た。
「負けはせん。例え何があろうとな」
彼はそのまま窓から目を離さなかった。そして強い表情のまま窓の外に見える美しい庭園を見ていた。

# 第七部第二章　老将その一

老将

アッディーン率いるオムダーマン軍は順調に南方侵攻を進めていた。ムワッハドを降伏させた彼等はまずムワッハドに集結し、そこから新たな侵攻を計画していた。

「作戦は次の段階に移った」

彼は各艦隊の司令及び中枢の幕僚達を集めて話をしていた。

「ムワッハドを降伏させた今我々は南方のかなりの地域をその手中に収めたことになった」

「ハッ」

その場に居合わせている提督や幕僚達がそれに頷いた。

「だがまだ作戦は終わってはいない。進むべき場所はかなり残っている」

彼は言葉を続ける。

「今後我等はさらに南下を続けていくことになる。そしてその最大の目標は既に決まっている」

ここで後ろのモニターのスイッチが入れられた。そこに南方の地図が浮かび上がる。

「我が軍が次に戦うべき相手は」

彼は指揮棒を手に地図のある部分を指差した。

「ここだ」

そしてムワッハドに隣接するある星系をそれで指差した。そこは青く塗られていた。

「リヤド王国だ。言うまでもなくこの南方で最大の勢力を持つ国だ」

彼の言葉は落ち着いているが強いものとなっていた。

「この国を攻略することがこの南方進出で最大の目標であることはもうわかっていることだと思う」

「はい」

提督達も幕僚達もそれに同意する返事を返した。実際にこの国は南方で最大の国家でありその攻略は南方侵攻における最大の課題であるのだ。
リヤド王国の歴史は古い。八百年を超える歴史を誇りその産業や資源も南方では随一である。そして地形も複雑であり兵力も南方では最も多い。
「この戦いに勝つかどうかで今回の作戦の如何が決定するのだ」
「わかっております」
「ならば話は早いな」
アッディーンは提督達の声を聞いてそう頷いた。
「これよりリヤド王国への侵攻を開始する。参加兵力は二十五個艦隊とする、参加する艦隊はおって指示するものとする。全軍次の戦闘に備えるように！」
「ハッ！」
その場にいた全ての者が起立した。そしてアッディーンに敬礼した。
こうして会議は終了した。アッディーンはその足でアッバースの部屋に向かった。
「閣下」
後ろに控えるハルダルトが声をかけてきた。
「何だ」
彼はそれを受けて後ろを振り向いた。
「二つ程お知らせしたいことがあるのですが」
「俺にか」
「はい。宜しいでしょうか」
「ああ。秘密の話でなければな」
「わかりました。まずは連合のことです」
「連合の？」
「ええ。難民を軍に編入しているのです」
「難民をか。外人部隊や傭兵みたいなものかな」

「どうやらそのようです。既に募集を行っているそうです」
このことは既にオムダーマンにも伝わっていた。そしてその数に彼等もいささか驚嘆していた。
「これも連合の人口故か。恐ろしいな」
「はい」
この時代においても人口というものはその国の国力の重要な要素の一つであった。エウロパのように問題を引き起こすケースがあるのも事実であるがやはり多いとそれだけの力となるのは事実であった。三兆の人口は彼等にとっては夢の様な話であった。
「彼等はその部隊を有事に即座に動かすべき存在としていくようです」
「将に外人部隊に対する扱いそのものだな。それだけを言うと」
アッディーンはそれを聞いてこう答えた。サハラでは外人部隊も多いのである。
「そうですね。ただ待遇等は他の将兵と変わらないようです。彼等もまた志願により入ってきておりますから」
「連合の志願制はまた徹底しているな」
「戦争というものがありませんからね。必然的にそうなるのでしょう」
「そして徴兵をしなくとも兵力は他の勢力と比べて圧倒的だからな。他にも理由はあるが」
「はい」
アッディーンはこの時軍人の目から見て語っていた。
「そして装備もいい。連合と戦う場合には存亡をかけたものになるな」
「連合と戦うことが有り得るのでしょうか」
「可能性はゼロではない」
彼はここでそう答えた。
「これから何があるかわからない。そうした意味ではな」
「そうですか」

「だから連合の情報は常に手に入れておきたいな。情報部にもそう要請してくれ」
「わかりました」
「話の一つは終わったな。そしてもう一つは」
「はい。マウリアのことです」
「マウリアの。何かあったのか」
「解放軍が連合に倒されたことにより連合との交易がさらに活発になったようです。そしてそれによりかなりの利益を得ているそうです」
「交易でか」
「それに伴いハサンとの間で行っていた三角貿易は減少しております。ハサンはそれを受けて連合及びマウリアとのそれぞれ個別の交易に切り換えていっているようです」
「ハサンも馬鹿ではない。それ位は考えるか」
「はい」
「ところでそのハサンだが」
彼はここで逆に問うてきた。
「軍の動きはどうなっている」
「特に派手に動かしてはいません。エウロパ総督府との国境の兵を増強させただけです」
「そうか」
「それにこれは今までと変わりありません。やはり積極的に動くつもりはないようです」
「いつもと同じか。だがそれはかえって好都合だな」
「そうですね」
ハルダルトはそれに頷いた。
「この作戦に専念できますから。彼等の介入があったならばここまで順調にはいかなかったでしょう」
「うむ」
「しかし油断はできないのも事実です。アジュラーン閣下もマナー

マ閣下も増強した兵は次々とハサンとの国境に送っておられます」
「いざという時の為だな」
「はい。ですから我々もそれは考慮に入れなくてはならないかと」
「腰を据えてやるのもよいが、というわけだな」
「そう受け取って頂いても構いません」
彼はここであえてこう答えた。
「先程閣下が仰った通り何が起こるかわかりませんから」
「確かにな」
アッディーンは微笑んでそう言った。
「だが南方の地形は知っての通り複雑だ。敗れては何もならない」
「はい」
「ここは慎重にいきたい。我が軍の勝利の為にもな」
「勝利の為に」
「そういうことだ。勝利を得る方法は一つではないしな」
「わかりました」
ハルダルトはそう答えた。そして二人はアッバースの部屋に着いた。
そして中に入る。部屋の中央にあるテーブルに彼は座っていた。
「どうも」
アッバースはアッディーンの姿を認めてすぐに立ち上がった。そして礼をした。
「はい」
いつもなら制するところだが間に合わなかった。アッディーンはそれをいささか残念に思いながら彼に声をかけた。
「長官、そちらの方の会議はどうでしたか」
そして彼に外交部の会議のことを尋ねた。
「おおよそのことは決まりました」
彼はそう答えた。
「まずは残る各国との交渉を進めます」
「はい」

「当然リヤドにも」
「あの国にもですか」
「一応は。ただあの国は首を縦に振るとは思えませんね」
「そうでしょうね。私もそう考えて作戦を立てています」
「それはよかった。では今までと同じようにいけますね」
「はい」
外交交渉と並行させ、従わない場合に攻め込む。南方侵攻の際のパターンであった。
「ではまず交渉をスタートさせましょう」
「私はその間に戦いの準備に取り掛かります」
「目標はリヤドですね」
「はい、何にしろあの国を抑えなくてはなりませんから」
「そうなりますか。ではあの国の周辺を抑えていきましょう。その方が確実です」
「是非お願いします」
「わかりました。ところで」
「はい」
アッバースは表情を変えてきた。
「ティムールが何やら動いているようですよ」
「ティムールが」
「ええ。北の総督府に向けて色々とやっているようです」
「そうですか」
彼はそれを聞いて暫く考え込んだ。
「我が国に対してではないのですね」
「はい」
「とりあえずそちらは様子見ということでいいでしょうか」
「そうですね。我々もそういう方針で進めていこうかと思っています」
「ではお願いします」
アッディーンはそれで話を終わらせた。

「ところで」
そして話を別の方向へ持って行った。
「そろそろ昼食の時間です。ご一緒しませんか」
「いいですね」
アッバースはその言葉を聞いて顔を綻ばせた。
「丁度お腹がすいてきたところですし」
「では行きますか」
「ええ」
アッバースはそう答えて席を立った。
「今日のメニューは何でしょうか」
「確かムワッハドの牛の料理だった筈ですよ」
「ああ、確か味がいいということで評判でしたね、ムワッハドの牛は」
「ええ。牛はお好きですか」
「勿論。では行きましょう。牛が私達を待っていますよ」
「面白い言い方ですね。本当に牛が待っているかも知れませんよ、そんなことを仰ると」
「それも面白いですね」
「見たら見たで皆驚くでしょうけれどね」
「ははは」
二人はそんな話をしながら士官室に向かった。そしてそこで食事を採るのであった。

## 第七部第二章　老将その二

その頃シャイターンはティムールの首都アレキサンドリアにいた。この星系は建国と同時に彼が首都と定めた場所でありかなり北東に位置さひている。総督府とも隣接している。

当初ここに首都を置くことについて多くの反対意見があった。だがシャイターンはそれを全て跳ね除けここに首都を置いたのである。

反対する理由には根拠があった。やはり敵に近いからであった。防衛上これは非常に由々しき問題であるからだ。

だがそれでもシャイターンはここに首都を置いた。そしてそこから政治及び軍事の指揮にあたっていた。

今この星系では防衛計画が進められている。惑星ごとに防衛衛星が配置され艦隊基地が建造されていた。そして前線基地としての役割もつけられようとしていた。

「エウロパはどうしている」

シャイターンは乗艦であるイズライールの艦橋においてハルシークに問うた。彼は今艦に乗りながら防衛基地や前線基地の建造状況を見ているのだ。

「今のところ彼等は本土の防衛計画だけで手が一杯のようです」

「そうか」

彼はそれを聞いて頷いた。

「それだけ連合の存在が脅威ということか」

「はい。また新たに百個艦隊を新設するそうですし」

「難民達を使ってな。恐ろしい数ではある」

「人類の歴史史上最大規模の軍ですな」

「そうだな。だがそれだけではない」

「といいますと」

「連合軍の怖ろしさはそれだけではないのだ。だからこそエウロパもあそこまで警戒している」

「装備でしょうか」
「それもある。だがそれだけではない」
「補給、そして情報でしょうか」
「鋭いな。その三つは確かに連合軍の脅威の一つだ」
やはり彼等もティアマト級巨大戦艦のことはよく知っていた。彼等もあの艦を脅威とみなしていた。
「そして人」
ハルシークはここでこう答えた。
「その通りだ」
シャイターンはそれを聞いてニヤリと笑った。
「この場合は数としての人ではない。個人としての人だ」
「といいますとやはり」
「そうだ。国防長官である八条義統。彼の存在が大きい」
「彼なくしては連合軍はなかったでしょうからな」
「そうだな。そして今彼の手により連合内の海賊やテロリスト達は次々と潰されていっている。国内での脅威は残り僅かだ」
「問題はそれからどう動くか、ですな。しかし」
ハルシークはここで言葉を続けようとした。だがシャイターンはそれより前に言った。
「何が起こるかはわからないな、これから」
「はい」
ハルシークはそれに頷いた。
「当然そこにはエウロパとの戦争も入るかと思われます」
「そうだな。それは否定できない」
「エウロパはそれを恐れているのですね」
「長年の対立関係があるからな。なおさらだ」
「戦争になればやはりエウロパ本土での戦いになりますな」
「そうだ。その時には動くかも知れないな」
「動く」
「そうだ」

シャイターンはここでニヤリと笑った。
「我々も同時に動く」
「北にですね」
「そうだ。ここに首都を置いた理由はわかるな」
「はい」
「そういうことだ。その時に備えておけ。どのみちいずれは動くからな」
「わかりました。それでは」
ハルシークはそう答えて頭を垂れた。
「引き続き軍備を整えておきましょう」
「そうだ。そしてすぐに動けるようにしておけ」
「わかりました。ところで」
ハルシークはここで口調を変えてきた。
「何だ」
シャイターンはそれに気付き問うた。
「マルヤム様がこちらに来られておりますが」
「マルヤムが」
シャイターンはそれを聞いて眉を少し上げた。
「はい。御会いになられますか」
「そうだな」
彼はそれを聞いて頷いた。
「通してくれ」
「わかりました」
ハルシークはそう言って敬礼して返した。彼は退き暫くして小柄で美しい女性を連れて来た。

## 第七部第二章　老将その三

歳の程は二十を少し越えた程であろうか。豊かな黒い髪と黒檀の様な澄んだ瞳を持っている。その眉は細く、まるで虹の様に美しい線を描いている。肌はマウリアの者とはとても思えぬ程白くまるでエウロパの者のようである。そして身体つきは小柄ながら胸は大きくまるで桃の様である。爪と唇は薔薇の色をしておりその手足も長い。顔立ちといいその身体といいまるで天界にいる天使のようであった。

「お兄様、ごきげんよう」

彼女、マルヤム＝シャイターンはそう言って頭を垂れた。

「うむ」

シャイターンは妹の挨拶を受けて頷いた。

「元気そうで何よりだ。今日は一体どの様な了見でここに来たのだ」

「はい、単なる顔見せなのですが」

「顔見せか」

「御父様に言われましたので。たまには顔を見せて来いと」

「父上がな」

彼はそれを聞いてすっと笑った。

「一体何を考えておられるのやら」

「何かあったのですか？」

「いや」

だが彼は妹にその心の裏をあかしはしなかった。

「何でもない。これは御前の問題ではない」

「左様ですか」

「うむ。ところでだ」

「はい」

「父上はお元気か」

「それはもう」

マルヤムは朗らかな笑顔でそう答えた。
「何時にも増してお元気です、この頃は」
「そうか」
彼はそれを聞いて満足そうに頷いた。
「先日はオムダーマンに行かれました。何でも旅行とかで」
「オムダーマンに」
それを聞いた彼の瞳が光った。鋭い光であった。
「はい。そして楽しそうに帰って来られましたよ」
「そうか」
彼は表情が険しいものになっていくのを止められなかった。考えるものになっていく。
「そしてオムダーマンの何処に行かれたのだ」
「首都であるアスランだとか。とても嬉しそうでしたよ」
「そうか、アスランか」
彼はさらに考える顔をした。
「お兄様」
ここでマルヤムが言葉をかけてきた。
「ん？何だ」
「どうしたのですか、そんなに怖い顔をなさって」
「ムッ」
彼はここでようやく自分がどんな顔をしているのか気付いた。そして慌てて顔を戻した。
「いや、何でもない。気にするな」
「そうですか」
「そして父上は今何処におられる」
「お屋敷におられますよ」
「屋敷か」
「はい」
シャイターン家はこの宮殿の他に屋敷や多くの別荘を持っている。中には隠れ家的なものもある。政敵に備えてのものであることは言

うまでもない。その屋敷は本来の彼等の邸宅だがいつもそこにいるとは限らないのである。無論暗殺や襲撃に備えてのことである。
「わかった。それさえわかればいい」
「はい」
「他に何かあるか」
「いえ」
「そうか。ならば丁度食事の時間だ。久し振りに一緒に食べよう」
「わかりました」
こうして二人は二人で食事を採ることになった。メニューは牛肉を主体としたものであった。やはり三十程の料理がテーブルに並べられる。
「牛肉ですのね」
「ああ」
シャイターンはそれに答えた。
「ジェルファ星系の産だ」
「ジェルファの」
「そうだ」
ジェルファは農業や放牧で有名な星系である。ここにいる牛は長い角を持ち大きいことで知られている。そしてその肉は極めて美味なことで知られている。
その牛の肉を煮込み、そこにトマトと香辛料をきかしたソースをかけている。添え物には同じくジェルファ星系で採れた野菜がある。
「一度食べてみたらいい。さあ早く」
「はい」
マルヤムは兄に言われるままフォークとナイフを使いその牛の肉を口に入れた。
噛む。柔らかい。そして肉汁が口の中に満ちる。これまで食べたどの肉よりも味わいが濃かった。
「どうだ」
シャイターンは肉を一口食べ終えた妹に対して問うた。

「美味しいですわ」
彼女はすぐにそう答えた。
「こんな美味しいお肉ははじめてです。柔らかくて肉汁が多くて」
「そうだろう」
シャイターンはそれを聞いて頷いた。
「味も凄くいいですし。他の牛肉とは比較にならない程ですね」
「私も最初食べた時には驚かされた」
彼は微笑んでそう言った。
「これは煮ているが焼いてもいい」
「そうなのですか」
「ソーセージにしてもハムにしてもな。丁度今ここにもある」
彼はここでテーブルの上にあるハムとソーセージを指差した。
「食べてみるといい。他のものとは全く違う」
「はい」
彼女は兄に薦められるままそれ等を口に入れた。やはり味は他の牛のそれとは全く違っていた。
「美味いだろう」
「はい。本当に他のものとは全く違いますね」
彼女はもうその整った目元を綻ばせていた。本当に美味しそうであった。
「こんなに美味しいハムやソーセージははじめてです」
「そうか。それはよかった」
シャイターンも妹の喜ぶ顔を見て満足そうであった。
「フラームもアブーもこれを食べて満足そうだった。御前も気に入ってくれたようで何よりだ」
「はい」
「オムダーマンにもこんな美味いものがあればいいがな」
彼はここでふとそう呟いた。
「オムダーマンに！？」
彼女はそれを聞いてふと顔を上げた。

「あ、いや何でもない」
だがシャイターンはその言葉を打ち消した。
「まあ食事を続けよう。この星系は他にもいいものが多くあってな」
「そうなのですか」
「このキノコのスープもいいぞ。どんどん食べたらいい」
「わかりました」
こうして二人は食事を心ゆくまで楽しんだ。マルヤムはその後で満足な顔で兄のもとを去った。
「どう思うか」
食事を終え妹と別れたシャイターンは執務室で再びハルシークと話をはじめた。赤を基調とし、絨毯や絹のカーテンで飾られた豪奢な部屋であった。
「御父上のことですか」
「そうだ」
彼はそれに頷いた。
「ただ旅行だけでわざわざオムダーマンに行ったとは誰も思わないだろう」
「はい」
これはハルシークにもわかっていることであった。
「何かお考えがあってのことだと思います」
「そうか。やはりな」
彼はそれを聞いて頷いた。
「何かあるな、絶対に」
「そう思われるのが普通ですな」
ハルシークもそれに同意した。
「ふむ」
換えはまた考え込んだ。そして口を開いた。
「父上に御会いしたい。今はあちらにおられるのだな」
「はい」
「では今すぐ屋敷に向かうじ。とにかくお話をお聞きしたい」

「わかりました。それでは留守の間はお任せ下さい」
「ああ、頼む」
こうして彼は父のもとへ向かった。その心の中には様々な考えが混ざっていた。

## 第七部第二章　老将その四

連合は多くの国家から成り立っている。設立当初には百四十程であったがそれぞれの事情により増加し、今では三百に達する。連合においては星系は一つの国家が完全に掌握するものと定められており、新規の星系に降り立った者達がそこに新国家を興すこともある。実際にそうして独立する者もいた。

この際彼等が元いた国家とのトラブルが起こる場合もある。その星系が豊かであった場合は尚更だ。だがそうしたさいに仲裁するのが連合中央政府であり、その機能はとりあえずは維持されてきていた。そうした場合には旧国家に新しい星系の開拓と領有を優遇するのが常であった。やはり新国家設立にはそれなりのデメリットも存在していた。

中には一つの星系のみの国家もある。それは連合の国家のかなりの割合になる。新国家も最初はそこからはじまり、そこでとりあえずは満足する場合もあるのだ。

大国は星系の開拓を次々と進めていく。とりわけアメリカ、中国、ロシアといった国々は積極的である。日本は所有している星系が豊かなものばかりであるのでそれにはあまり積極的ではない。だが開拓をしていないというわけではない。

こういった状況で連合は続いてきた。だがこの百年程は新国家の設立はなかった。やはり三百もあると自分の考えに近い国家もある。また生まれた国への愛着もある。定住するにしろ移り住むにしろそれだけ選択肢があれば悩むこともなかったのである。

そんな中で特殊なのがやはり難民達である。彼等はその殆どがどの国家に入ることもなくあくまで独自のテリトリーを持っていた。そしてそのまま生活していた。

それは今軍に組み入れられても変わることはなかった。彼等はその星系において生活し、訓練を受けていたのだ。

その訓練は過酷であった。他の連合軍のそれとは比較にならなかった。だが彼等はそれに不平を言うことなく黙々と訓練を受けていた。
「今日の訓練も凄かったな」
夕方、ようやく訓練を終えた難民達はシャワーを浴びた後食堂で自分達の訓練について話をしていた。
「あの教官の野郎思い切りやってくれやがって」
陸戦部隊の迷彩服を着たサムディが顎をさすりながらそう呟いた。見ればそこに青い痣がある。
「折角将校になったと思ってもこれだ。容赦ってのがねえな」
見れば階級は少尉のものである。彼は任官した時にその能力を買われ将校にされていたのだ。
「連合じゃあ将校はライフルを持たずにピストルだけだと聞いていたしな。それが普通の兵隊と全く変わらない装備だ。何か違うぜ、ここは」
「俺達がそれだけやばい仕事をやるってことだろ」
サムディの向かいにいる顔中髭だらけの男がここでこう言った。
「俺だって今かなりしごかれてんだぜ」
「おやっさんもかい」
彼はここでこの髭の男をこう呼んだ。
「ああ、炎龍のパイロットとしてな。ついさっきもどやされたばかりだ」
「それはまた。おやっさんでもそうかい」
「そうだよ。下手クソってな」
「おやっさんが下手なら誰が上手いんだよ」
「わからねえな。俺もかっては腕利きだったんだぜ、こう見えても。それで下手ときたもんだ」
彼は笑いながらそう言った。彼の名はイブン＝ウダイ。サムディと同じマラケシ出身でありかっては攻撃機のパイロットとして名を知られていた男である。

「これでも戦車や敵艦をかなりやっつけてきたんだがなあ」
「それは知ってるよ。見事な活躍だったよ、あれは」
彼はエウロパとの戦いで侵攻して来る敵の地上部隊に向かいその戦車や装甲車を次々と撃破していった。その功により大尉から大佐にまでなった程である。だがそれは敗戦前のほんの仇花に過ぎなかったのだ。
敗戦し国を追われた彼はここまで逃げ延びてきた。彼の家族と共にここまで来たのだ。
「それでも負けたら意味はねえな。こうして異国で訓練を受けるだけだ」
「そうだな」
サムディはそれを聞いて急にしんみりとしだした。だがそれはほんの一瞬のことであった。
「そういえば」
「どうした」
ウダイは彼が顔を上げたのを見てそれにすぐに反応した。６０
「グーダルズの奴がいねえな。何処へ行ったんだ」
「あいつなら今地球に向かっているぜ」
「地球に！？」
サムディはそれを聞いて思わず声をあげた。
「ああ。今この部隊には司令官クラスの将校がかなり少ないのは知っているな」
「おお」
サムディはそれに答えた。連合に落ち延びてきた者にはかって将軍であったりした者がかなり少ないのだ。その他にも行政を司っていた者も少なかった。その為彼等が今いる行政はここを管轄する国がスタッフを派遣しているのが現状である。
「だからその司令官候補を探しているらしい。あいつはその中の一人に選ばれたのさ」
「それはまた意外だな」

「意外か？あいつなら選ばれるだろう」
グーダルズの能力は二人もよく知っていた。だからウダイはそう言ったのだ。
「いや、あいつが選ばれたことが意外なんじゃない」
「じゃあ何だ？」
「俺達の中から司令官を選ぶってのがな。ほら、普通は違うだろ」
「まあな」
こうした外人部隊や傭兵部隊は通常正規軍より一段下に見られる。その為司令官や高級将校等は正規軍から派遣され彼等はあくまで消耗品として扱われるのだ。
「それが俺達の中からってことは。やはり俺達は正式に連合軍に入っているってことだよな」
「それはまだわからねえぞ」
彼はここでこう釘を刺した。
「ポーズだけってこともあるからな。名前だけは正規軍でも扱いは違うとかな。実際に訓練は他の奴等と全然違うだろ」
「それはそうだな」
「どのみち俺達は火事場に飛び込む為にいるのは変わらねえよ。それはよく覚えておけ」
「わかってるさ。ただ」
「ただ。何だ！？」
ウダイはサムディの言葉をとらえて問うた。
「それでも俺達の部隊を俺達に任せてくれるってのは有り難いなって思ってな。この軍にいたくなってきたよ」
「まあな」
それはウダイも同じであった。やはり自分達の軍は自分達で動かしたいものであるからだ。
「軍服も連合のものだしな。地位や待遇もだ」
「それだけでもよしとすべきだがそうしたことにまで気を配ってくれるとはな。ほら、何つったっけな。中央政府の国防長官」

「八条とかいったな。日本の」
「おお、あの兄ちゃんだ。いいのは顔だけじゃないようだな」
「おいおい、おやっさんはあんな優男がいいのかよ。男はやっぱり筋肉だぜ」
彼はここで腕に力瘤を作ってみせた。
「あん！？それなら俺にだってあるぞ」
ウダイもそれに負けずに作った。そしてそれを見せつける。
「中々すげえな、おやっさんも」
「フン、若いモンには負けねえぞ。こっちもな」
「けれど頑張り過ぎて神経痛ぶりかえさないようにな」
「そんなもんねえと言ってるだろうが。俺はまだ四十だ」
「おっとそうだった、ははは」
「年寄り扱いもいい加減にしろってんだ」
彼等はそんな話をしながら羊のハンバーグにカレー、サラダにミルクといった夕食を楽しんでいた。グーダルズはその頃一隻のティアマト級巨大戦艦に乗り宇宙にいた。
「まさか地球に行くとはな」
彼は窓から星の大海を眺めながらそう呟いた。そこには無数の星達が瞬いている。
「どうしました」
それを聞いた兵士の一人が問うた。見れば水兵の服を着たまだ十代の兵士だ。グーダルズ達を迎えに来たこの艦の乗組員である。
「ああ、ちょっとな」
彼はそれには答えず言葉を濁して誤魔化した。
「凄い艦だと思ってな」
「ははは、そうでしょう」
その水兵はそれを聞いて大いに笑った。
「こう言っては何ですがこれ以上の艦はありませんよ。連合の誇りですから」
「誇りか」

「ええ。この前の海賊との戦いですけれどね」
「解放軍とのか」
「はい。その戦いにおいても大活躍しましたから」
彼は上機嫌でそう語った。
「一隻も沈むことなく。どんな攻撃にもびくともしませんでしたよ」
「そうだろうな。ここまで巨大だと。それに」
「それに！？」
水兵は彼のその言葉に突っ込んだ。
「装備も凄い。それに艦載機の数も半端じゃないな」
彼は飛行甲板や巨砲、そして主砲を見てそう言ったのだ。
「これだけの装備があると多少の敵が相手でも心配ないな」
「そうですね。あの海賊との戦いでも一隻で一千隻の敵を殲滅させていますから」
「一千隻を！？」
「はい。移動中に側面より狙われまして。それを撃退したのですよ」
「そうなのか。一千隻を」
サハラにおいては無視できない戦力である。特に彼のいた北方では人口や国力の関係からそうであった。連合とはここでも違うのだ。
「砲撃とミサイルで。あっという間だったそうですよ」
「あっという間か」
彼はその言葉を聞き問い直した。流石に信じ難かった。

## 第七部第二章　老将その五

「一千隻を瞬時に破ったというのか」
それだけの力は確かにこの艦には備わっているだろう。だが彼にはやはり信じられない話であった。連合の国力、そして技術に感嘆する他なかった。
「俺には夢のような話だ」
「そういうものですか」
水兵はそれを聞き不思議そうに問うた。彼はドミニカ出身でありサハラのことはよく知らない。あくまで連合を基準として考え、話をしているのだ。
「俺にとってはな。この艦の存在自体がまだ信じられない」
「はあ」
彼はそれを少し呆然となって聞いていた。
「だがこの艦があれば出来るな」
グーダルズは満面に笑みをたたえて口調を変えながらそう言った。
「何をでしょうか」
「決まっている」
彼はその水兵に対して答えた。
「あの連中を倒すことをだ。エウロパの奴等を」
「エウロパですか。恐らく敵ではないでしょうね」
水兵はやはり楽観的な言葉を述べた。
「我々にとっては赤子の手をひねるようなものですよ」
「いや、それはどうかな」
だがグーダルズはそれに対してやや慎重であった。
「君はまだエウロパと戦ったことはないだろう」
「はい。実はついこの前教育隊を出たばかりでして」
見れば初等兵の階級である。セーラーにまだ着られているという感じからしてもそれには納得できるものであった。

「航宙も今回がはじめてです。旅行でならありますが」
「そうか」
グーダルズはそれを聞いて頷いた。
「では当然戦争というものは知らないな」
「具体的には。子供の頃の本や教育では聞きましたが」
「現実には知らないか。だが知っていると思う」
「何をでしょうか」
彼は問うた。
「本や話の中の戦争と現実の戦争の違いを。これはわかっているな」
「はい」
「ならいい。それならばな」
彼はここで一瞬遠い目をした。
「現実の戦争は違う。そしてエウロパもだ」
「違うのですか」
「今後エウロパと戦うことになるかも知れない。その時に私の言葉を思い出してくれればいい」
「はい」
「エウロパは強い、ということをな。ただ強いだけではない」
「といいますと」
「本当の意味での戦士達だ。戦いを知っている。そういうことだ」
「はあ」
水兵はそれに対してやはり少し呆然と答えることしかできなかった。
「我々も宇宙海賊やテロリストとの戦いならかなり経験していますが」
「それが違うのだ」
彼はここでこう言葉を返した。
「正規軍と海賊達とはな。私も海賊とは何度も戦ってきた」
「そうだったのですか」
「そうだ。そして正規軍ともな。やはり全く違う。そう」

ここで一旦間を置いた。
「エウロパの軍は騎士の軍だ。海賊は所詮海賊、テロリストは単なる犯罪者共だ。これでわかるだろうか」
「騎士！？」
水兵はその言葉に目をパチクリさせた。
「騎士といいますとあの」
彼は騎士というと小説や漫画、ゲームの世界の中だけの話だと思っている。連合においてはファンタジー小説もそれなりに流行っているが騎士はその中でも重要なキャラクターの一つなのである。それ以上でもなくそれ以外の何者でもない。
「小説やゲームではなく」
「騎士団と言うとわかり易いか」
「はあ、まあ」
彼はそういわれてようやく納得したような気分になった。
「つまり円卓の騎士の様なものではなく中世の騎士団のようなものなのですね」
「そうだ。よく知っているな」
「まあ。これでもそうした小説とかはよく読む方でして」
彼は右手を頭の後ろに置き苦笑しながらそう答えた。
「アーサー王だけでなくローランの詩なんかもよく読みました」
「連合でもエウロパの話が読めるとは思わなかったな」
「エウロパの話といいますか古典ですね」
彼はここでこう答えた。
「少なくとも我々はそう考えています。白人も多いですし。私自身その血が入っています」
見れば彼の顔はやや白い。髪はパーマで黒人のものだが顔立ちはポリネシア系である。
「母方の祖母がエストニア出身でしたので」
「ほお、エストニアか」
「はい。父方の祖父がドミニカ出身でして。それで私の国籍もドミ

ニカなのです」
「ご両親はドミニカの方か」
「そうです。ただ母は先祖にポリネシア系の血が入っておりまして。それが顔に出ました」
彼はそう言いながら笑みを屈託のないものにした。
「ふむ、それは面白いな」
これはグーダルズにとっても興味深い話であった。サハラにいた彼にとってそうした様々な混血というのは非常に関心をそそられるものであったのだ。
「そして君も今後結婚すると他の国の者となる可能性があるな」
「それは否定しません」
「また血が混じるのだな」
「ええ」
「そうして連合は一千年の間交流してきたのか。我々とは違うな」
「違うのですか」
「ああ。我々はムスリムとしか結婚しない。それが戒律だからな」
「そういうものなのですか」
「ああ」
連合にもイスラム教は存在する。だがそれはサハラのそれのように厳格なものではなくあくまで緩やかなものである。そして異なる宗教の者とも結婚が可能である。
「そして元々我々はルーツが同じだ。従ってそうした白人や黒人との混血といったこともない」
「はあ」
水兵はその話を興味深そうに聞いていた。
「そういうものなのですか」
「そうだ。そこが連合と違う。もっとも混血はタブーとはされてはないが」
サハラの世界においては宗教が同じならばよいのである。価値観はあくまでムスリムのものであり、ムスリムであるかどうかが問題

なのである。二十世紀までの人種主義は少なくとも存在しない。
「しかしそもそも我々はアラブの民だけであり彼等は少ないがな」
「あ、それは聞いています。サハラの人達はアラビアがルーツだと」
「そうだ」
彼は答えた。実際にサハラの者は中近東の者達が進出したのがそのはじまりである。そして一千年の間彼等は独自の文化や宗教を守って生きてきているのだ。
「私もだ。私の身体にはそうした意味でアラブの血が今も流れている」
「そうなのですか」
「君達連合の者にはわからないだろうがな。これは侮辱ではないが」
「はい」
これは彼にもわかった。
「我々には我々の、君達には君達の世界があるということだ」
「それなら話はわかりますね」
「ほお」
グーダルズはそれを聞いて眉を上げた。
「では連合にもそれぞれの世界があるということだな」
「ええ、その通りです」
水兵はそう答えた。
「ご承知の通り連合は多くの国家がありまして。それだけ独自の世界も存在します」
「そうなのか」
「はい。例えば日本がありますね」
「ああ、何でも天皇という皇帝が存在しその下に昔からの文化と最新の科学技術が存在しているという国だな。確かこの連合においてもかなりの発言力と国力を持っている筈だが」
「はい。しかし日本だけが連合に存在するのではないのです」
「というと」
「アメリカもあれば中国もあります」

「また派手な国を出したな」
グーダルズはその二国の名を聞いて思わず苦笑した。この二国の羽振りは彼もよく知っている。
「そしてロシアも」
「バレエや音楽はあまり詳しくはないがやること為すこと大雑把な印象があるな」
「タイやベトナムのような国もあります」
「バランサーとしてか。彼等の文化もそれぞれ独特だな」
「はい。そしてアフリカにルーツのある国々もありますしその中にはエチオピアもあります」
「エチオピア・・・・・。ああ、何でも人類の歴史で最古の皇帝家があるのだったな。コーランにも出て来る」
「そうです、そして私の祖国のような中南米諸国も存在します」
「そうなのか。実に多いな」
「おわかりになりましたか。連合はその中に実に多くの世界を内包しているのです」
「しかし連合はそれを全て包み込んでいるのだな」
「そういうことになりますね。連合自体も宇宙ですから」
「そういうことか。サハラとはそこが違うな。サハラは多くの国に分かれていてもサハラだ。これは変わらない」
「連合とはどう違うのですか？」
水兵にはその言葉の意味がよくわからなかった。
「御言葉ですが連合とはあまり変わらないように思えるのですが」
「中にそれぞれ独自の世界を持っていないと言えばわかるかな」
彼はここでこう言った。
「我々はあくまでサハラの中にいるのだ。サハラという巨大な世界に」
「ううむ」
水兵はそれを聞いてさらに考え込んだ。
「私にはまだよくわかりませんが」

「それならそれでいい。考えてみることもな」
「そうでしょうか」
「そうだ。考えればそれを解きたいと思うだろう。そしてそこから何かが生まれる」
「はあ」
「今私が君に言えるのはそれだけだな。人生の先輩としては」
「人生の先輩としてですか」
「祖国を追われたしがない難民でもいいぞ」
グーダルズは自嘲した笑いをここで浮かべた。
「いえ、そのような」
水兵はその言葉を聞いて口ごもった。
「いいさ。事実なのだからな」
だがグーダルズの自嘲は終わらなかった。
「ところで君の名は何というのかな。まだ聞いてはいないが」
「ハッ」
彼はここで姿勢を正し敬礼した。やはち軍人としての身のこなしはつこうとしていた。
「ビバーチェ＝オセアノ初等兵であります」
「そうか。オセアノ初等兵」
「はい」
「君はこれから何になりたい」
「はい・・・・・・」
彼はそれを受けて語りはじめた。
「まずは軍でお金を貯めてそれから農場を買おうかと考えております」
「農場をか」
「ええ。家は農家でして。果樹を栽培しています」
「葡萄や林檎をか」
「ちょっと違います。グレープフルーツやパイナップルをです」
「ああ、暑いところのものをか。そういえばドミニカはそういう場

所が多いそうだな」
「はい。昔からの家業でして。一家全員でやってきました」
「ならばそれに入ればいいのではないのかな。私はそう思うが」
彼はここで疑念をふと漏らした。
「別のことをやってみたくなりまして」
オセアノはここでにこやかに笑ってこう返した。
「別のこと」
「何しろ子供の頃からパイナップルやグレープフルーツばかり見てきましたので。他の新しいものを栽培しようと思っているのです。それが高くて。その資金を調達する為に軍に入隊したのです」
「そうなのか。そういった理由で入隊することもあるのだな」
「ええ。実入りがいいですからね、軍は」
「確かにな。待遇もいいしあっという間に金は貯まるだろうな」
「はい。それが狙いですから」
「そういうものなのか。ううむ」
グーダルズはそれを聞いて考えずにはいられなかった。こういった話もサハラにおいては考えられぬことであった。
「軍とはあくまで職業の一つでしかないのだな」
「少なくとも私のような者はそうですね。ですから任期制の兵士として入ったのです」

## 第七部第二章　老将その六

連合の将兵の採用は全て志願制だが色々な門が存在する。士官学校もあれば大学で単位をとり、そこから将校になる場合もある。パイロットや陸戦部隊の専門課程に入る者もいれば下士官候補生から入る者も存在する。だがやはり一般兵士への募集が最も多く採用人数も多い。彼等は言うならば臨時雇いである。三年の任期で入隊し、任期終了の都度続けるか辞めるかする。その度に退職金ももらえる制度である。

「収入はかなりいいですよ」

「そうしたものなのか。そしてその金で何を買うつもりかな」

「花です」

彼は笑顔でそう答えた。

「花！？」

「はい。かなり特殊な花でして。私の住んでいる星にしか咲かないんです」

「どんな花なのかね」

「巨大な薔薇の様なやつでして。大きさはラフレシア位で」

「ラフレシア！？ああ、あれか」

グーダルズはそれが何なのか最初わからなかった。だがそれが連合にある巨大な花だと思い出した。サハラにはその花はないのである。

「あの花みたいなものか」

「ええ。茎とかはありますがね。花自体がかなり巨大なのです。花びらが虹色で人気があるんです」

「その花を栽培したいと。だが難しそうだな」

「そうなんです。おまけにすごく高くて。けれどとても綺麗なんですよ」

彼はにこりと笑ってそう言った。

「子供の頃から絶対にこれをいつも側で見たいと思っているんです」
「成程。それにその花で商売したら売れると」
「まあそれもあります」
その笑みがはにかんだものとなった。
「けれど本当に綺麗ですから。是非一度御覧になって下さい」
「面白そうだな」
これは彼の本音の言葉であった。花は嫌いではない。薔薇は好きな方だ。興味がある。
「では機会があったら一度見せてくれ。私の名はロスタム＝グーダルズ。階級は少尉だ」
「グーダルズ少尉ですね。わかりました」
「君の花、是非見せてもらおう。いいな」
「喜んで」
彼は満面に笑みを作って答えた。

そのティアマト級巨大戦艦ブリージットは順調に地球に向かっていた。この巨大戦艦は神々や英雄の名がつけられる。
一番艦であるティアマトを筆頭としてそれぞれ神々や英雄の名を持っている。それはこの巨艦に相応しい威厳のある名前となっていた。
そして予定通り地球に辿り着いた。その巨体は地球の中央議会からも見られていた。
「相変わらず怖ろしい巨大さだな」
金髪碧眼の黒人の男がそれを見て呟いた。アメリカ大統領ヘンリー＝マックリーフである。
「あれ程の巨艦は我が合衆国ですら想像しなかったものだ」
「それは我が国でも同じですぞ」
見れば彼は円卓に座っていた。その隣にいるアジア系の男がそれに合わせるようにして言った。中国大統領李金雲である。
「かって始皇帝が万里の長城を作り煬帝が大運河を作りました。しかしあれ程の巨艦を作ったという話は寡聞にして知りません」

「幾ら大きいといっても限度がありますからな」
マックリーフはそこでこう言った。
「それは貴国でも同じでしょう」
そして彼はロシア大統領アレクサンドル＝グリーニスキーに話を振った。
「おや」
グリーニスキーは話を振られてその薄い唇を一瞬歪めさせた。それから口を開いた。
「それは我が国への皮肉ですかな」
ロシアは何でも巨大なものを好む傾向にある。この国で建造される車にしろ船にしろそうであった。そしてそれは邸宅や電化製品においても同じであった。それは連合においては非常によく知られている。時としてこれは大雑把だのロシア人気質だのと言われる。無論良い意味ではない。
「いえいえ」
マックリーフはそこで言葉をはぐらかしてきた。
「そう受け取られたのなら謝罪致しますが」
「謝罪は結構」
グリーニスキーはそれに対してすぐにそう返した。
「それよりもバーボンのいいものを欲しいですな」
「おやおや」
マックリーフはそれを聞いて思わず肩をすかした。
「ウォッカ専門ではなかったのですか」
「ロシア人は博愛精神の持ち主ですぞ」
グリーニスキーはここでこう言った。
「とりわけ酒には。勿論老酒も好きです」
「桂花陳酒はどうですかな」
李は笑いながらそう問うた。
「悪くないですな。ただアルコール度が低いのが難点です」
「ではテキーラはどうですかな」

同じく円卓に座る髭を生やした筋肉質の大男がここでにこやかな笑みと共にグリーニスキーに言葉をかけてきた。メキシコ大統領ファン＝クーラである。
「テキーラですか」
「はい。飲まれたことはあるでしょう」
「勿論。悪くはないですな」
彼は笑いながらそう答えた。
「味は非常に素晴らしいです。ですが飲んでいると身体が冷えます」
「冷えますか」
「はい。やはりあれでも私、いやロシア人にとってはアルコールが足りないのです」
「あれでですか」
これにはクーラも絶句した。テキーラは強い酒であるから無理もないことであった。
「ウォッカと比べますと。あれをストレートで飲むのがロシア流です」
「ストレートで」
これには誰もが言葉を失った。
「少なくとも私はそうしておりますが。カクテルもいいですがそれが一番美味い」
「そういうものですか」
「はい。一度やって御覧下さい。病み付きになりますよ」
「いえ」
だが誰もそれに賛同しなかった。
ウォッカのアルコール濃度は九〇パーセントを超える。それをストレートで飲むなぞ普通では中々できるものではないのだ。何せ火を点ければ炎となるのであるから。
「誰も飲まれないのですか？是非一度飲まれてはいいのに」
「それは・・・・・・」
「遠慮させて頂きます」

その場にいた各国の首脳は皆謹んでそれを辞退した。これも当然のことであった。

## 第七部第二章　老将その七

「それは残念ですな」
彼は何時になく落胆した顔でそう言った。
「総理はどうですか」
ここで総理とは日本の総理のことを指す。首相と呼ばれることもあるがこうした場では日本の首相は総理と呼ばれることが多いのである。
「はい」
伊藤はそれを受けてにこやかに笑ってから答えた。
「私はやはり日本酒が一番好きですが」
「ほう」
実はこのグリーニスキーは和食が好きなので有名である。寿司がとりわけ好きで柔道も嗜んでいるのだ。それで日本酒のＣＭに出たこともある。ロシアの国でだが。
「それはいい。私はあれも好きでしてな」
やはりその目の輝きが変わってきた。
「ではウォッカはどうですかな」
「やはりそうきたか」
その場にいた者は皆内心でそう呟いた。
「ええ」
伊藤はそれに対してやはりにこやかに答えた。
「あれはやはりストレートでしょう」
「何っ！？」
それを聞いたグリーニスキー以外の全ての者が内心絶句した。
「身体が冷えた時にはあれが一番だと思います」
「全く。同感です」
彼は満面の笑みをもってこれに同意した。
「まさか総理がこれ程お酒に造詣が深いとは思いませんでした」

「主人の実家が造り酒屋ですので」
「何と羨ましい。一度紹介して頂けませんか。是非作りたての日本酒を飲ませて頂きたいです」
「はい。宜しければ次の訪日には」
「楽しみにしていますぞ」
これは心からの言葉であった。その証拠に目の光が違っていた。グリーニスキーは何時になく楽しい気持ちとなっていたのであった。
「さて」
ここで議長役を勤めるシンガポールの第一首相ゴー＝シェイロンがそこにいる全ての者に対して声をかけてきた。ふくよかな外見の老人である。
「皆さんお酒のお話はそれ位にしましょう。会議に入ろうではありませんか」
「おっと、そうでしたな」
まずはグリーニスキーが話に戻ってきた。
「いかんいかん、酒の話になるとつい」
「グリーニスキー閣下の悪い癖ですな」
「全く。お恥ずかしい」
彼は照れ臭そうにそう答えた。他の者もその間に席に戻っていた。
「ではよろしいですな」
ゴーはそれを見届けて一同に再び言った。
「はい」
彼等はそれを受けて答えた。見ればアジア太平洋各国の首脳達が一同に会していた。それだけ見ても何やら重要な会議であることは一目瞭然であった。
「さて、今あのティアマト級巨大戦艦に乗ってこの地球にやって来たサハラの兵士達ですが」
「はい」
皆ゴーの言葉を受けて頷く。
「彼等についての皆さんのお考えをお聞きしたいのですが」

「それは各国の考えと認識してよろしいのですか？」
モハマドがそれに問うた。
「ええ、勿論」
ゴーはそれに答えた。
「皆さんもそのおつもりでしょう」
「確かに」
これは彼等もあらかじめわかっていることではあった。念を押す為に聞いたのである。
「ではあらためて各国の御意見をお聞きしましょうか」
ゴーはここで再度こう言った。そして円卓に座る各国の首脳達を見る。見れば大統領や首相等その国を代表する者達ばかりである。だが彼はそれでも臆するところはなかった。
「我が国としましては」
まずはマックリーフが口を開いた。
「彼等の存在は賛成です。連合軍の先鋒として思う存分活躍してもらいたいです」
「そうですな。いざという時の為の精鋭部隊というのは必要であるかと存じます。連合軍にはそれがない」
李もそれに同意した。アメリカと中国がまず賛成の意を唱えた。
「しかしですな」
だがここでタイの首相ティアン＝ホア＝チャクラーンが手を上げた。見れば長身の痩せた男である。元軍人でありかってはタイ軍の大将を務めていた。
「彼等は異国の兵士達です。その彼等を兵士にするというのはどうかと思いますが」
「彼等の国籍は連合のものですよ」
オーストラリア大統領ダグラス＝ワイルドが彼にそう言った。黒い髪にアジア系の肌の色をしておりその青い目はかなり大きい。この人物は連合においてはかなり有名である。
何故有名であるかと言うとまずオーストラリアという国の存在が

大きい。この国はかってはイギリスの植民地であり長い間イギリス連邦の一員として存在していた。そういった意味ではカナダも同じである。
だが二十一世紀中頃にイギリス連邦から脱退し、正式に独立国となった。それまでにかなり激しい議論があったのである。カナダはそれにならってイギリス連邦から脱退している。
そしてそれからは日本等と協力してそれまでの地位をさらに強固なものにしていった。元々南太平洋の盟主的存在であり、その地位は高かった。だがイギリス連邦からの脱退によりそれをさらに顕著なものにしたのだ。
それからは環太平洋諸国のメンバーとして重要な役割を果たしてきた。連合においてはそれがさらに高まり、今ではバランサー的な存在となっているのだ。
このワイルドという男も有名であった。他の国の首脳に対しても言いたい事を思う存分言い、それでいて内政及び外交に大きな成果をあげており連合においてもかなり有名な人物となっていた。その彼が今口を開いたのだ。各国の首脳達は彼の意見に注目した。
「彼等は連合市民として待遇を受けております。何ら問題はない筈ですが」
「しかしですな」
チャクラーンも大将まで務め、一国の宰相になっている男である。だからといって引き下がるつもりもなければ彼の考えも持っていた。
「彼等はあくまで難民です。そうした者を軍に入れるというのは少し後ろめたいのではないかと思うのですが」
「道義的にはそうですね」
ワイルドはそれを受けてこう言った。
「ですがそれだけでは国は成り立ちません。そして軍にはそうした部隊も必要です。それはチャクラーン首相が最もよく御存知の筈ですが」
「確かに」

チャクラーンはそれを渋々ならがも認めた。
「あまり好きではないですがな」
「ですが必要なのは認めておられますね」
「はい」
彼はあくまで道義といった視点から見てそう言ったのである。そして政治には時としてそうした道義といったものを捨てなければならないのもわかっていた。そして彼は軍人として視点からこうした部隊が必要なのはよく認識していたのだ。所謂正規軍の前に立つべき部隊をである。
「問題は彼等が果たして望みどおりの活躍をしてくれるかどうかですね」
ここでゴーがこう言った。
「チャクラーン首相はそれも御心配なのではないでしょうか」
「ええ、その通りです」
そしてチャクラーンはそれを認めた。
「彼等はやはりサハラの者です。果たして我々の為に戦うかどうか。それも不安なのです」
「ならば彼等が戦う状況にすればいいのですな」
ワイルドはやはり突き放した様子でこう語った。
「色々と方法はありますが」
「それは一体何でしょうか」
ゴーがそれに質問した。
「例えば彼等の待遇をさらに良くするとか。給料を上げるのがその最たる例でしょうね」
「しかしそれだと他の将兵との間に溝ができますぞ」
チャクラーンはそれに反論した。
「そうなれば元も子もありません」
「危険な任務に対する当然の報酬です。パイロットや特殊部隊がその分の報酬を別に受けているのと同じではないですか」
やはりワイルドは落ち着いてそう返した。

「むう」
チャクラーンはそれを受けて考え込んだ。彼も頑迷なわけではないのだ。
「そういう考えもありますな、確かに」
「そうでしょう、こう考えるとやりやすいのではないですかな」
「そうですな。ただ彼等にはその分頑張ってもらわなければならなくなりますが」
彼等が火事場に飛び込むのは最早規定路線であった。それを踏まえての発言であった。
「その分の装備は充実させる予定らしいですがね」
「まあそれは当然でしょう」
彼には彼等も納得した。
「損害は軽微に抑えなくてはなりませんからな。それで連合国防省も動いているようです」
「それは何よりですな。ところで」
ここでゴーは話題を変えにかかった。話が大体済んだと見たからだ。
「近頃またあの女が動き出したようですぞ」
彼の目の光が変わった。先程までの温厚なものとは違っていた。
「あの女ですか」
それを聞いた一同もすぐに態度を変えた。
「やはりエウロパに逃げ帰ってはいなかったのですな」
「はい。どうやらそのようで」
ゴーは暗い声でそう答えた。
「この連合領内で再び活動を活発化させようとしております」
「懲りませんね、あの女も」
李は不快感を露にしてそう言った。
「今度は何をしてくるやら」
「それですが」
ここでゴーは机の下から何か取り出した。それはファイルであっ

た。丁度人数分あった。
「これを御覧下さい」
そしてそれを円卓にいる一同に渡させた。皆それに目を回した。
「ふうむ」
彼等はそれを見て考え込んだ。深刻な顔であった。
「これは本当ですか！？ここまで調べているとは」
「ええ。本当です」
ゴーは答えた。それは連合軍の細かい配備状況、部隊状況等であった。主要な指揮官の名前まで記載されている。それがエウロパに渡ったという証拠であった。
「まさか」
と誰もが思った。しかしこれは事実であった。
「あの女らしいと言えばそうなりますが」
「しかしそれでも信じられませんな」
「はい。私もそう思います」
ゴーはこれに答えた。
「問題はまだ調べられているということです。このデータは中南米の他の国々やアフリカ諸国、新興諸国にも渡す予定です」
「そうですな。それがいい」
これには誰もが賛成した。
「しかしステッラが動いているということをよく見つけられましたね。一体どのようにして」
「ふふふ」
マックリーフの言葉にゴーは微笑んでみせた。
「シンガポールの司祭からお聞きしたのですよ」
「司祭から」
「ええ、カトリックの。これだけ言えばおわかりでしょう」
「確かに」
そうであった。カトリックの本拠地バチカンはエウロパにある。連合にはないのだ。司祭等高位の聖職者の任命はバチカンが行う。

そして連合とエウロパの間の直接の移動は司祭のみが行える。その為カトリックの関係者に化けて連合に潜り込む者が多いのだ。
「その司祭様が仰ったのでう。とある人の懺悔として」
「まさかその人物がステッラと関わっていたと」
「そのようで。司祭様が私に仰ったのですよ。彼女が動いている、とね。それで私は捜査を命じまして。結果としてこれだけのことがわかったのです」
「左様でしたか」
「はい。残念ながらその懺悔をした者が誰かはわかりませんが」
「そうでしょうな。その者自身が何かある可能性がありませ」
「それは否定できません。ですがこれだけのことがわかったのは事実です」
「はい」
「最早放ってはおけないでしょう。至急にステッラを排除すべきです」
「ええ」
「そうですね」
皆それに賛成した。これで彼等の考えはまとまった。
「我が国のＦＢＩやＣＩＡを使うべきでしょうか」
マックリーフはここでふと呟いた。
「彼等ならあの女を捕らえることができますよ」
「それなら我が国の中央警察でしょう」
李がまるで対抗するようにこう言った。
「数も違いますし」
「それは有り難いですが」
だがゴーはそれには賛同はしなかった。
「それだけではあの女を捕らえることはできないでしょう」
「何故ですかな」
マックリーフも李もこの言葉に不快感を少し見せた。
「今まで各国の警察や軍が彼女を追跡しました。ですが一度たりと

してその影すら掴むことはできませんでした」
「はい」
それを聞いた各国の首脳達は苦虫を噛み潰した顔になった。事実だからである。
「これは中央政府に協力しましょう。それでいいですね」
「わかりました」
それを言われるとこう言うしかなかった。ゴーはそれを見てにこやかな笑みを戻した。
「それではこれで決まりですね。皆さん宜しいでしょうか」
「はい」
彼等は答えた。これで会議は終了した。

## 第七部第三章　狐狩りその一

狐狩り

環太平洋各国の会議の結果はすぐにその他の諸国の首脳達にも伝えられた。これを受けて中南米やアフリカ各国も会議を開いた。そして義勇軍の地位の承認とステッラの排除が決定された。

義勇軍のことは中央議会でも可決された。だがステッラのことはあくまで極秘であった。

「それも当然だな」

話を聞いたキロモトは迷うことなくそう答えた。

「スパイの排除をわざわざ議会で言うような者はいない」

「はい」

隣に座るアッチャラーンがそれに同意した。

「自らの行動を伝えていては何にもなりませんからな」

「そういうことだな。だがかなり厄介な獲物だな」

「そうですね。今まで捕まえるどころか尻尾すら中々掴ませなかった女です。いや、そもそも女であるかどうかすら疑問ですぞ」

「変装、か」

「その可能性はあるかと。変装にも長けておりますから」

「ますます厄介だな。どうやって捕まえるか」

「それはもう内務省と国防省の話になりますな。総理府としても出来る限りのことはしますが」

「そうか。では今回のことは首相に任せたいのだがいいか」

「喜んで」

アッチャラーンは鋭い目をしてこう答えた。

「ステッラには我が祖国も痛い目に遭っておりましてね」

彼の目はさらに険しいものとなった。

「何としても捕らえたいと思っていたのですよ」

タイはかってステッラに潜入されていたことがある。国家の中枢

にまで入り込まれ国王の側にまで近寄られたことがある。そしてタイの機密を全て掴まれたのだ。
気がついた時には逃げられていた。自分の側にまでいたことを聞いた国王は絶句し、時の政権は責任をとって総辞職した。タイの政界は暫く混乱状態に陥ったのは言うまでもない。
その時のことが彼の脳裏にあった。だからこそこう言ったのである。
「では頼むぞ」
「お任せ下さい」
アッチャラーンは頭を下げた。そして部屋から退出し総理府に帰った。
「お帰りなさいませ」
「おう」
出迎えた職員に彼はにこやかに手を振って応えた。彼は上司としては気さくで飾らない、鷹揚な人物として知られている。部下には優しいことで有名である。
執務室に入るとすぐに電話を手にした。まずは内務省、そして国防省にかけた。
暫くして二台の車がほぼ同時に総理府に到着した。そして一台からは八条が、もう一台からは金が出て来た。
「また来たよ」
総理府の者は金が来たのを見て溜息をついた。総理府の者にとっても彼女は厳格で融通の利かない人物であった。彼等の怖れる未来として彼女が総理になることであった。
「大統領になるよりましだろ」
こうした意見もある。それも恐怖である。だが大統領府は総理府ではない。これだけで充分であった。総理府に彼女が降臨したならばそれだけで総理府は鉄の城になってしまうと言われているのだ。
金は車から降りると挨拶を受け中に進んだ。やはり案内役はいなかった。彼女自身がそれを拒否するのだ。

「一人でできることは一人でしなければなりません」
これが彼女の持論であるのは言うまでもない。従って内務省ではお茶にしろコピーにしろ雑用はそれを必要とする者がするようになっている。それは彼女自身もである。
その彼女が総理府に入ったらどうなるか、言わずとも知れたことであった。そして誰もがそれを恐れていたのだ。
「八条長官ならいいのだが」
これは全ての者の統一見解であった。
八条は自分自身の服装や行動はしっかりとしているが周りの者には多くを求めない。最低限のことだけしていれば服装や行動には文句を言わないのだ。その為国防省の空気は比較的穏やかなものであった。無論それは金の批判材料であった。
「八条長官は甘過ぎます」
それが彼女の意見であった。だが宗教家ですら辟易するような厳格な彼女の基準なのでこれはあまり納得できるものではないのが多くの者の意見であった。
だからといって彼女が嫌われているわけではない。彼女自身の人間性は清潔であり、公平であった。そして人を褒める時は褒める。それもあくまで公正であった。その為嫌われるということはなかったのである。ただ怖れられているだけである。
「あれで結婚できるのだろうか」
「旦那さんは大変だな」
そう噂されることもあった。とかく彼女はそうして厳格な女性として見られていた。無論甘いものには目がないことも有名であった。連合でもう一人甘党といえばグリーニスキーであったが彼は菓子を酒のつまみとするだけであるので少し違っていた。彼の場合は近いうちに成人病になるという説もあった。
金はそれに対して均整のとれた身体をしていた。常に地味で面白みのないスーツを着ているが彼女の美貌は確かなものであった。それはどちらかというと女性に好かれる容姿でありそれにまつわる噂

もあった。だが実際には彼女は同性愛者ではない。これについても彼女はコメントしている。
「噂は噂、真実ではありません」
それだけであった。あまりにも生真面目と言えば生真面目であった。これがかえって女性達の支持を受けているのである。
これに対して八条の人気は違っていた。連合らしくないと言えばらしくない貴族的な容姿と物腰に加えてその穏やかな性格である。そして次々に仕事を的確にこなしていることからも高い評価を受けていた。金がロシアの女帝エカテリーナや女裁判官だとすれば彼は光源氏や貴公子であった。
「あれは貴族だよ」
誰かがこう言った。するとすぐにこうした反論がやって来た。

## 第七部第三章　狐狩りその二

「貴族！？馬鹿を言え」
その者はシニカルにそう言った。連合では貴族は存在しない。エウロパの階級社会の象徴、特権階級として批判と侮蔑の的であるのだ。連合においては貴族はエウロパの象徴であり、それ自体を忌み嫌う者も多かった。その生活に憧れる者がいてもそれはあくまで憧れであり、そうした者自身も連合の様々な文化や食事に骨の髄まで漬かっていた。
「この場合は違う」
彼はそれに対してこう言葉を返した。そして答えた。
「日本の昔の貴族だよ、彼は」
「華族か！？」
明治から戦前に存在したものである。ただ爵位を持っているだけで特権はこれといってない。あくまで飾りの存在であった。その証拠に欧州では殆ど上がらない爵位が頻繁に上がった。とりたてて特筆すべきものではなかった。
「違う、もっと昔だ」
「大名か！？」
その者は日本の長い歴史を完全に把握してはいなかった。だからこう言ったのである。
「あれは武士だろう。そうではなくて」
「では何だ」
「公家は知らないか」
「知っているぞ、一応」
「それだ。光源氏がそれだっただろう」
「うむ」
彼もそれは知っていた。だが完全に読んだことはない。あまりにも長く複雑な話だからだ。

「ああした貴族なんだよ。こう言えばわかるだろう」
「成程、確かに」
その男はこう言われてようやく納得した。だが一つ問題があった。
「光源氏というわりには浮いた話が少ないな」
「そういえばそうだな」
光源氏は名うてのプレイボーイである。側にいる女性は全て陥落させる。そうした男であった。だが八条に浮いた話がないのは誰もが知っていることである。とある週刊誌などは彼が同性愛者であると決めつけている程である。
しかし八条自身はそれを知っていてもコメントしたりはしなかった。結局彼の意中の相手は誰かでも議論があるがそれは今だにわかってはいない。いるのかどうかさえ不明であった。これについては金も一緒であった。
「金内相と八条長官だとどうかな」
「馬鹿を言え」
こうした話にはすぐに反論が来る。
「完全に水と油だぞ。しかも二人の国を見ろ」
「あっ」
彼はそれを聞いてはっとした。日本と韓国の関係は連合において何かと問題になる関係であった。と言っても韓国が日本を一方的に意識しているのである。
過去の歴史ではなかった。その真相は既にわかっている。ただ韓国人は何かと日本、そして日本人を見なければ気が済まないのだ。
「連合で最もよくわからない関係」
こう評する者もいた。とかく両国の関係は妙であった。
韓国はことあるごとに日本を批判する。経済や教育、文化の何から何までであった。だがこれはかえって他の国の人間から見れば驚嘆すべき日本への研究であった。
「何であんなことまで知っているんだ!?」
そう驚く者も多い。韓国は日本のことを非常によく知っているの

だ。
　そのうえ本屋には日本関係や日本の本が立ち並び日本の服を着て日本の歌手の音楽を聴き、何が何でも日本の出席する会議には出ようとする。韓国は連合においては二〇位程の国である。日本はアメリカ、中国、ロシア等と並んで連合の頂点にいると言って過言ではない。連合におけるトップ一〇はこの四国とオーストラリア、カナダ、ブラジル、トルコ、そして新興国であるケベックとコンゴロ共和国であった。ケベックはカナダにいたフランス系の者が建国した国であり王国である。建国時に大統領制か王制かで議論となり、王制となったのである。その国王はかってフランス王家であったブルボン家の流れの者であった。何とブルボン家の傍流がケベックに移住していたのだ。今の国王はルイ三十五世。芸術を愛し、健啖家として知られている。そしてゴンゴロ共和国は豊かな資源と土地を持つ国である。建国してからまだ二百年程であるがその成長は著しい。黒人が多い国である。
　韓国は残念ながらこれ等の国々程恵まれた立場にはない。だからこそトップになれないと言えばそれまでである。それでもかなり上の方であるが彼等の目指すものはあくまで『日本より上』なのである。
「それは幾ら何でも無理だ」
　韓国人以外の誰もがこう言う。トップといっても日米中露と他の国々では差があった。そして韓国と日本の差も当然ながら同じであった。
「国力差はどれだけあるのかわかっているのか」
　そうした反論に対して彼等は言う。
「絶対に乗り越えてみせる！」
　と。しかしそれは誰が見ても不可能であった。
　そして彼等は現況を何とかしようと動いている。だがそれはやはり困難であった。実際には差は縮まってはいない。それが彼等のジレンマとなっていた。

そうした状況を見て他の国々の者は言う。彼等が日本ばかり見ているのは日本が嫌いだからではないと。むしろ好きだからそうしているのだと。

「しかし彼等はそれにはこれからも気付かないだろう」

実際に韓国人にそれを言うと本気で怒る。韓国人が感情的なのは連合随一である。怒ると手がつけられないのだ。

それ程頑強に否定する。しかしそれでも日本を見ることは止めない。そしてアピールは常に日本向けであった。何と大統領自ら自国の観光産業のＣＭに出るのだ。それも日本向けに対してのみである。

## 第七部第三章　狐狩りその三

これ程日本、いや他国の特定の国ばかり見ている国はない。これは明らかに韓国の国益に影響しているが彼等はそれでも止めようとしない。そういう関係が一千年も続いているのだ。

最初は金と八条もそうした関係であると誰もが思っていた。だがどうやら事情が違うのだ。

「金内相は誰かを特定して批判するような方ではありませんよ」

内務省の金専属秘書はこう語る。彼女は日本出身でありその側に常にいるからこそ言える言葉であった。

「むしろ個人としましては本当に公平で潔癖な方です」

流石に厳格だの融通が利かないだのは言わない。しかしそれは真実であった。八条に対して色々と言ったのもやはり中央政府に入って間がなかったのと国防省の雰囲気がいささかまとまりを欠いているように見えたからである。だがそうではないとわかると批判は減った。それでもあることにはあるが。

金はとりたてて日本に対する感情はない。八条をどう思っているかどうかは不明であるが。彼女自身が言う筈もない。結局この二人のことは憶測、いや妄想のうえで語られるだけであった。

八条も中を進む。彼は案内を穏やかに断り首相の執務室に向かっていた。

扉をノックする。そして中には入った。

「おお、来たか」

アッチャラーンは彼を笑顔で出迎えてきた。その微笑は穏やかでありこれに魅かれる者も多い。

「でははじめるとするか」

見れば金は既に来ていた。彼が来ると腕時計をチラリと見た。時間通りだ、と見たようであり何も言わなかった。

三人はテーブルに着いた。ここでアッチャラーンは二人に言った。

「ステッラのことは覚えているね」
「はい」
「ええ」
金と八条はそれぞれ答えた。
「なら話は早い。彼女がまた動いているという話が各国の首脳から出ているんだ。これも聞いているだろうか」
「小耳には挟んでいます」
「私のところにも来ています」
少し金の方が返答が早かった。
「どうもまた動きを開始しているらしい。何を企んでいるかまでは詳しくはわからないが」
「やはりあの時取り逃したのが痛かったですね」
八条は観艦式の前の捜査及び追跡で彼女を取り逃したことを悔やんだ。
「だがあの時は仕方がない」
しかしアッチャラーンはそれを宥めた。
「あの時はそれよりも式を成功させることを優先させるべきだったし彼女を追い払うことには成功したからよしとすべきだ」
「有り難うございます」
「だが今回は事情が違う。そろそろ彼女を捉えたいのだ」
「そしてエウロパのスパイ網も一掃するのですね」
金はアッチャラーンが次に言うであろう言葉を先にとってこう問うた。
「そういうことになるな」
そして彼はそれを肯定した。
「今のエウロパのスパイ網に彼女の存在が大きいことはもうわかっていると思う」
「はい」
今度は二人同時に答えた。
「頭を潰さないと何度でも甦るからな。今回はその頭を潰す」

「頭をですか」
八条はそれを聞いてふと呟いた。
「そうだ」
アッチャラーンはそれに答えた。
「君の国の神話にあるヤマタノオロチの話と同じようにな。まずは頭を切る」
「今度はその頭が一つであるのが救いですね」
八条はそう言って微笑んだ。
「もっとも本当に一つなのかどうかはわかりませんが」
ただしここでこう付け加えた。ステッラは変装の名人である。そしてその影武者もいる可能性も否定できなかった。全てが謎の存在であるからだ。
「そうだな。しかもその頭は恐ろしく狡猾だ。それもヤマタノオロチとは違うな」
「はい、その通りです」
八条はそう答えた。
「しかも今回はオロチを誘き出す酒もありません」
「グリーニスキー大統領ならすぐに来るだろうがな」
アッチャラーンはそれに合わせてこう言った。顔は笑っていたが目はあまり笑えなかった。
「それに彼女は蛇というよりは」
ここで金が話に入ってきた。
「狐ですね。これも八条長官のお国に出ていますね」
「はい」
八条はそれに頷いた。
「九尾の狐ですね。あれは本来中国の妖怪ですが」
「そうらしいですね。何でも王に取り憑き惑わしたとか」
「それから我が国に来て帝を惑わしたのです。恐ろしい妖怪だったと言われています」
殷、そして周を滅亡、そして衰退に導きインドを混乱に陥れたと

言われている伝説の九尾の狐である。我が国においては鳥羽天皇に憑いたと言われている。帝の御身体が悪くなられたのを見た周りの者はそれに対して陰陽道等を使い彼女の影を突き止めた。そして武士の力により遂に討ち滅ぼしたのだ。だがそれでもその魔力は残り石となってその上を飛ぶ鳥を落としたと言われている。

「狐か。ならばさらに厄介だな」

「そういうわけでもありません」

しかし金は平然としてこう答えた。

「狐にしろ弱点はあります」

「それは何だね」

「蛇と同じです」

「蛇と！？それは一体」

アッチャラーンと八条はそれを聞いて首を傾げさせた。

「まさかとは思うが酒ではないだろうね」

「はい、それではありません」

金は微笑みもせずそう答えた。そして言った。

「狐もまた好物がありますね」

「狐の！？それは一体。鳥とでも言うのかね」

アッチャラーンには言葉の意味がよくわからなかった。タイは地球にあった頃からあまり狐とは親しくはないのである。どちらかというと温帯や寒帯に住む生き物だ。今もタイの領有する星系はどちらかと言うと暑い星ばかりである。従って狐やそういった類の生き物にはあまり縁がない。

「いえ、違います」

「ううむ、わからないな。狐というと何だ」

「それは八条長官ならよくお解りだと思いますが」

ここで八条に話を振った。嫌味のない口調であった。

「成程」

彼はここで頷いた。そしてそれから微笑んだ。

「それならわかりました。揚げですね」

「はい」
金はその問いに頷いた。アッチャラーンはそれを聞きようやく理解した。
「揚げ！？ああ、あれか」
和食の一つである。豆腐を油で揚げたものだ。非常にポピュラーな和食の一つとして知られている。
「あれは狐の好物だったのか」
「はい。日本では狐はあれに目がないと言われています」
八条はここで説明した。
「これがあると聞くと他のものは目に入らなくなｒます。それでの失敗する話や笑いものにされる話は数多くありますよ」
どちらかと言うと日本の狐は恐ろしい存在ではない。頭の回転が早くよく悪戯をするが何処か間が抜けていて愛される存在である。これは狸も同じであるが彼等は人間に勝てずよく懲らしめられるのである。
「ふむ、そうだったのか」
アッチャラーンはそうした話は知らなかった。狐にあまり縁がないのでこれは無理もないことであった。
「それにしても金長官はよくこんな話を知っていたな」
「いえ」
「どうしてこの話を知ったのかね。よかったら教えてくれないか」
「子供の頃本で読んだのです」
「本でか」
アッチャラーンは金の言葉に頷いた。
「はい、日本の話だとはその時は知りませんでしたが」
ここで二人に気付かれないようにちらり、と八条を横目で見た。
「面白い話だと思いましてよく覚えているのです」
「そうだったのか。だがこれでやり方が決まったな」
「といいますと」
二人はここで同時に尋ねた。

「誘い出すんだ。その揚げでな」
「揚げで」
「そうだ。スパイが最も好きなものは何だ」
「機密」
「そう、それも新しくて大きなものをな。これだけ言えばわかるだろう」
「はい」
二人はそれに頷いた。
「ではすぐにその揚げを作ってくれ。そして猟師も用意してくれ。狐に悟られないようにな」
「わかりました。それでは」
八条と金はここで互いを見やった。
「すぐに取り掛かりましょう」
「うむ、頼むぞ」
こうして三人の会談がはじまった。それによりおおよその計画が決められた。
だがこれで終わりではなかった。今後もアッチャラーンを中心として話し合いが進められることとなり総理府と内務省、そして国防省はステッラに対して特別捜査チームを作ることも決められた。アッチャラーンが責任者となり、内務省からはドトールが、国防省からはアラガルとンガバが派遣されることも決められた。こうしてステッラを捕らえる猟師達も決められたのであった。

## 第七部第三章　狐狩りその四

「さて」
話が終わるとアッチャラーンは二人に顔を向けた。
「今夜は何か予定がありますかな」
「ええ」
二人はそれに対してほぼ同時に答えた。
「今夜はパーティーに出席しなければいけませんので」
「私もです」
「おや、二人共」
「あっ」
二人はアッチャラーンの言葉を聞き互いに顔を見合わせた。
「もしかして場所も同じだとかはないですな」
「ええと」
二人はそれを受けてそれぞれ場所を言うことにした。
「船の上です。ガルーダという船で」
「おお、あの豪華客船ですね」
アッチャラーンは八条の言葉を聞いて思わず声をあげた。地球で有名な客船である。所有者はバイソングループである。
「私もです」
金も答えた。何と同じ場所であった。
「おお」
それを聞いたアッチャラーンは思わず声を漏らさずにいられなかった。
「これはまた。同じ船の上とは」
「私もはじめて知りました」
「私もです」
二人はやはりほぼ同時にそう答えた。
「何でも環太平洋諸国の親睦の為のパーティーらしくて。首相は出

席されないのですか」
「私ですか」
彼はそれを受けてまずはにこやかに微笑んだ。
「とりあえずは招待券が来ておりますが」
「では参加されますね」
「そうしたいのですがね。料理が気になります」
「またその様な」
八条はそれを聞いて苦笑した。金の顔はやはり変わらない。
「うんと辛いタイの料理があるといいのですがね」
「あの船はバイソングループの所有ですからね。フィリピンの料理がメインになるのでは」
「ううむ」
アッチャラーンはそれを聞いてまず考え込んだ。
「ただ太平洋諸国の親睦パーティーですからタイの料理も出ると思いますよ」
「それならいいですけれどね。ただ」
「ただ!?」
「味まで美味くやってくれているかどうか。タイの料理もまた独特ですから」
「そういうものですか」
「ええ。八条長官は和食についてはよく御存知ですね」
「ええ、まあ」
知らない筈もなかった。
「では日本以外の国の和食がかなり違っているのも御存知ですね」
「はい。それはよく」
日本の方もよく言われることである。だからこそわかることであった。
「そういうことです。私にとって他の国のタイ料理はあまり舌に合わないことが時々あるのです。言わせて頂きますとあくまで『タイ風の料理』なわけでして」

「成程」
「あれはあまり好きになれないのです。味はともかくとして」
「そのお気持ちはよくわかります」
「そうでしょう。ですがここはカレーラス会長の御顔を立てなくてはなりませんし。行きますか」
「そうされた方がよろしいでしょうね」
ここで金が言った。
「やはり」
「はい。それに料理も悪くないと思いますよ」
「それは何故ですかな」
「バイソングループの誇るお菓子が出るからです」
「お菓子」
「はい」
金はすぐに答えた。
「あのグループの系列のお菓子はどれも美味しいのですよ」
「そうだったのですか」
これにはアッチャラーンも少し驚いた。まさか金がお菓子の話をするとは思わなかったからだ。
「ですから楽しみにして頂いて宜しいかと思います」
「わかりました」
まだ驚きが残っているがそれに答えた。
「では今夜のパーティーに出席することにしましょう」
「はい、それが宜しいかと」
こうしてアッチャラーンのパーティーへの出席が決まった。そして夜になった。
「ふむ」
アッチャラーンはまずはパーティーの場にあるタイ料理を食べた。無論その服はタキシードである。
「如何ですか」
それを同じくタキシードを着た八条が問う。

「いいですな」
その声と顔は喜びの中にあるものであった。
「よく再現されている。いやはや、これは美味しい」
「それはよかったですね」
「うん、流石はバイソングループの総帥といったところですかな」
「カレーラス会長がそれを聞かれたら喜びますよ」
「ははは、確かに」
見ればカレーラスもこの場にいた。そしてマウムやポート等と何やら話をしている。その関係かアフリカ各国の重要人物達もいる。
「また野球の話でもしているのかな」
皆三人が何やら話をしているのを見てふとそう思った。何故ならそれぞれの監督達もいたからだ。
だがそれは違っていた。今は演劇について話をしていた。
「やはり演劇ならば我がファランクスのものですな」
マウムは得意気に他の二人にそう語っていた。
「連合でもその素晴らしさは知られています。女優の登竜門としても」
「いやいや」
だがポートはそれをやんわりと否定した。
「我がイーグルグループも負けてはおりませんぞ。我が緑鷲歌劇場は御存知ですな」
「ええ」
「あれがある限りファランクスさんの一番は容易ではないですぞ」
「おやおや、イーグルさんの悪い癖がはじまりましたな」
ここでこの船のオーナーであるカレーラスが口を開いた。

## 第七部第三章　狐狩りその五

「我がバイソングループはそちらでも名を知られておりますが」
「初耳ですな、それは」
だが他の二人はそれに対して皮肉で返した。
「まあ大きさだけは認めて差し上げますが」
「お客さんの入りも上々ですが」
だからといってカレーラスも負けてはいない。こう切り返してきた。
「しかし演劇の質が。この前の上演は酷評されてませんでしたかな」
「さあ」
カレーラスはこれには少しムッとした顔になった。
「私はそうした批評の類は読みませんので。知りませんな」
「ほう、それは」
やはりマウムの目が笑った。
「私のところは専門の雑誌まで出してもらっておりますし。批評もあれでいいものですよ」
「そうですかな」
「ええ。役者の育成にも力を注いでおりますしね。おっと、これはバイソンさんもイーグルさんも同じでしたな」
「そうですがね。まあいずれはこちらが勝ちますぞ。野球と同じように」
「望むところです。昨年もバイソンさんには痛い目に遭っておりますからな」
「ふふふ」
これを聞いてカレーラスはようやく機嫌を戻してきた。
「来年も連合一を目指しますか」
「おっと、それはどうですかな」
だがここでポートも入って来た。

「我がチームも力をつけてきております。来年は暫くぶりに勝ってみせますぞ」
「それはどうですかな」
だが二人はそれに対抗してきた。
「そちらの投手陣を我がチームは今年結構打っていますぞ」
「こちらも」
バイソンのチームとファランクスのチームはそれぞれ打線のチームとして知られている。だがイーグルのチームは投手を主体とするチームである。攻撃力に乏しそれがここぞという時での敗戦に繋がっているのだ。
「ところが今とびきりのキャッチャーが育っておりましてな」
「ほう」
「初耳ですな」
二人はキャッチャーと聞いて顔色を少し変えた。
「バイソンさんの二人のキャッチャーよりも上でしょうな」
「おや、うちのキャッチャーよりも上だと。ウェスト監督が手ずから育て上げた我がチームもキャッチャーが」
「自信を持ってそう言えますぞ」
彼は胸を張ってこう答えた。
「リードだけでなくバッティングも凄いですぞ。近いうちに三冠王を獲得するでしょう」
「では楽しみに見せてもらいましょう、その時を」
「同じく」
マウムはここではあまり話に乗って来なかった。彼のチームはキャッチャーが弱点と言われているからである。
「打線は軸があればかなり変わりますからな」
「来年のイーグルさんに期待するとしましょう」
「是非とも」
「また野球の話をやっているみたいですね」
八条はそれを遠くから見ながらアッチャラーンに囁いた。

「そのようだね。本当に好きなんだな」
アッチャラーンはどちらかと言うと球技より格闘技の方が好きである。特に打撃系の格闘技が好きだ。
「私も見ないわけではないがね。それにしてもあの三人の野球好きは少し凄過ぎる」
「ですが本当に好きなのがわかります」
「それでも度が過ぎているが。グループ同士の宣伝合戦の意味合いもあると思うが」
実際にそれぞれのグループの広告には選手達が頻繁に出る。劇団の役者達と並んで重要な看板であるのだ。これを無視することは出来ない。そうした宣伝効果も見ているのが彼等が真の経営者であるということの証でもあるのだ。
「ですがそう考えるとわかりますね」
「ふうむ」
アッチャラーンは自らの発言を受けて考え込んだ。
「そういうものかな」
「確かにそうした一面はありますね」
ここで若い女の声がした。
「その声は」
二人は声がした方に顔をやった。するとそこには金がいた。
「おお」
アッチャラーンは彼女の姿を見て思わず声を漏らした。白いドレスに身を包み、黒い髪を上げて整えた彼女は普段のそれよりもさらに美しく見えたからであった。
化粧はやはり薄くドレスも背中も肩も見せないガードの固いものであった。だがそれがかえって気品を醸し出し、えも言われぬ美しさをあらわしていた。
「ですがそれでもあの方々が野球、そして御自身のチームを心から愛しておられることには変わりはありませんよ」
「それはそうですね」

八条は金の言葉を受けてそう答えた。
「それは長官に同意します」
「有り難うございます」
金もそれを受けて感謝の言葉を述べた。
「私も野球はよく見ますから」
「おや、そうだったのですか」
アッチャラーンはそれを聞いて意外そうな顔をした。
「はい」
金はそれに普段と変わらない物腰で答えた。
「あの方々のリーグとはまた違ったリーグのチームですけれどね」
「そうなのですか」
「ええ。野球も面白いものです。感動もそこにありますから」
「ふむ」
アッチャラーンはそれを聞いて再び考え込んだ。
「では一度私も野球の試合をよく観てみることにしますか。そう言われると観たくなりました」
「ええ、どうぞ」
二人は同時にそう薦めた。
「やはり球場で直に観るのはいいですよ」
「テレビでゆっくりと観戦なさるのがよろしいと思います」
だがここでは考えが違っていた。八条は球場を、金はテレビを主張したのだ。
「むっ」
二人はここに思うところがあったがそれはとりあえずは収めた。
そして金はテーブルの上にある料理に目を移した。そこには菓子や果物が置かれていた。
「首相」
そしてアッチャラーンに問うた。
「はい」
彼はすぐにそれに答えた。

「テーブルの上の料理ですが」
「おや、これですか」
アッチャラーンはそれを受けてテーブルの上に置かれている菓子や果物に目を移した。
「はい。宜しければ頂いてもよろしいでしょうか」
金は何時に無く物欲しそうな声であった。見ればその目も普段のそれとは違っていた。
「ええ、どうぞ」
元々パーティーの会食である。止めるいわれもない。アッチャラーンは笑顔でそれを薦めた。
「有り難うございます。では」
金は皿とフォークを手にした。そして菓子や果物を皿に入れ口に運ぶ。まるで子供の様に屈託のない朗らかな顔になった。
「やはりここのお菓子は美味しいですね。それに果物も」
「え、ええ」
はじめて見るその顔にアッチャラーンはいささか驚いていた。
「私もそう思います」
「そうですね。果物も新鮮で」
そう言いながら洋梨をかじっていた。
「本当によく選んでありますわ。それにこのアイスクリームも」
バニラのアイスクリームも皿に入れられていた。
「とてもよろしいです。カバリエ外相も褒められていただけはあります」
「はあ」
アッチャラーンは肝を抜かれた様な声を漏らした。だが金はそれに気付かずお菓子や果物を食べていた。
「八条長官」
彼はそれを横目に見ながら八条に囁いた。
「はい」
「彼女はもしかして甘党なのか。何時になく楽しそうに食べている

が」
「ええ、そのようですね」
そして彼はそれに答えた。
「ケーキもお好きなようですよ。この前も美味しそうに食べておられましたから」
「それはまた意外だな」
アッチャラーンはそれを聞いて言った。
「だがいいな」
「宜しいのですか」
「うむ。こういったところに人間味が出て来るからな。いいことだ」
「はあ」
「首相、長官」
菓子を食べ終えた金はここで二人に声をかけてきた。
「ん、何だね」
これを受けてアッチャラーンはすぐに顔を向けた。当然話は中断となった。
「シェフはどちらにおられるでしょうか」
「シェフ！？ええと」
問われた彼はすぐに辺りを見回した。だが会場にシェフがいる筈もなかった。
「キッチンだと思うが」
「わかりました。では暫く席を外します」
「あ、うん。どうぞ」
アッチャラーンにそう言われると彼女は席を外した。そして何処かへ向かった。
「何処に行くのかな」
「キッチンでしょう」
八条はそれに答えた。
「まさか」
「いえ、本当に。あの人は自分で出来ることは何でもしなければな

らないと考えておられるのは御存知でしょう」
「ああ」
「だからこそです。御自身で謝礼を述べに行かれたのですよ」
「それはまた」
普通はないことであった。今は休憩中とはいえこうしたパーティーの席での食事でシェフに直接謝礼を述べるとは。しかも本人が行ってである。
「それが違うのでしょうね。あの人は他人を呼びつけることは好まれません」
「それは聞いているが」
「自分から行かれるのです。それだからこそあの厳格さでも多くの人に慕われるのでしょう」
「成程」
アッチャラーンはそれを受けて頷いた。
「だからか。ふむ、納得した」
「でしょう。私も驚いていますよ。少なくとも傲慢ではありません」
「そうだな。しかしだ」
「はい」
アッチャラーンの声の色が変わったのを聞いて八条もその声の色を変えた。
「その几帳面さと気配りがかえって彼女にとってマイナスになるかも知れないぞ、今後は」
「何故ですか」
「あくまでそういうケースもあるということだがな」
アッチャラーンはそう前置きしたうえで話しはじめた。
「それを付け込まれかねないということだ」
「ですがあの人にはこれとってスキャンダルもありませんし。付け込まれる要素は」
「そういう話ではない。また別だ」
「と言いますと」

「そのうちわかるかも知れない。それを逆手にとられかねないということだ」
「はあ」
「だがもっとも」
彼はここでにやりと笑ってみせた。
「あの彼女に付け込むというのは相当な能力があっても無理だろうがな。そんな人間はそうそういない」
「ですね。あのステッラでさえ」
「そうだな、あの女でさえ。ところで」
「はい」
アッチャラーンの声の色がまた変わった。今度は仕事の時の色になった。
「あの女のことは宜しく頼むぞ。そこから何が出て来るかわからないからな」
「わかりました」
八条は答えた。そしてそれからはパーティーを心ゆくまで楽しんだ。金はキッチンに姿を現わしシェフ達を驚かせた。そしてこの話は女性誌でも話題になった。

## 第七部第三章　狐狩りその六

連合がそうして一人のスパイの捜査に躍起になろうとしている頃サハラではオムダーマンの南方進出が最後の段階に入ろうとしていた。

リヤド王国。南方で最大の勢力を誇る国であり、南方の最深部に位置している。この国の攻略なくしてはオムダーマンの南方制圧は終わらなかった。

今オムダーマン軍はアッディーンの指揮の下この国へ攻め込もうとしていた。それはリヤド側も察知しており既に迎撃態勢を整えようとしていた。

首都カブール。今ここにリヤドの主力艦隊十個艦隊が集結していた。彼等は今王宮に程近い軍港に集結していた。

「果たして勝てるだろうか」

王宮のテラスからそれを見る二人の老人がいた。二人共リヤドの濃緑の軍服を身に纏っている。そのうちの前に立つ白髪の男が後ろの男に対して問うていた。

「陛下」

後ろに控えるその男が口を開いた。

「勝てるだろうかではありません。勝つのです」

彼は強い声でそう答えた。

「勝つか」

リヤド国王コサイン七世はそれを聞いて呟いた。目はやはり軍港を向いている。

「はい、勝つのです。必ず」

彼はまた強い声でそう答えた。

「勝たなければ何も守れません」

「国もか」

「その通りです。このままオムダーマンに屈することはできません」

「そうだな。あの国から国土と民を守らなければならない」
「はい」
その老将はまた答えた。
「オムダーマンの侵略から国と民を守りましょう。それこそが我等の使命」
「それはわかっている。だが」
ここでコサイン七世の顔色が急に悪くなった。
「私は最早戦場に立てぬ。いや」
彼は顔色が悪いまま言葉を続けた。
「最早長くもないだろう。あとどれだけ生きていられるか」
「陛下」
「そなたが案ずることはない。だが」
「はい」
「ソホラーズ＝ハイヤーンよ」
そして彼の名を呼んだ。
「そなたにこの国のことを託した。頼むぞ」
「わかりました」
彼はそれに頷いた。そして再び顔を上げた。
「必ずやオムダーマン軍を退けて御覧に入れましょうぞ」
「頼むぞ」
その声も土気色になっていくようであった。二人はそのままテラスから軍港に集結する艦艇を眺めていた。その艦艇が出撃したのはそれから数日後のことであった。攻撃目標はもう言うまでもなかった。

「リヤド軍が動いたか」
それはオムダーマン軍にも伝わった。アッディーンはその時リヤドの国境に入ろうとしているところであった。
「はい、今十個艦隊を率いて首都星系を発ったそうです」
ハルダルトが報告する。彼等は今艦橋にいた。

「そうか、遂にか」
アッディーンはそれを聞いて腕を組んだ。そしてまた問うた。
「そして今彼等は何処に向かっているのだ。攻撃目標は間違いなく我々だろうが」
「はい」
今度はハルシークが答えた。
「ですが彼等は我々に攻撃を仕掛けるのではなく迎え撃つつもりのようです」
「何処でだ」
アッディーンは問うた。
「今彼等はフェルダウス星系に向かっております」
「フェルダウス星系か。一体どの様な場所だ」
「はい、ブラックホールや超新星、赤色巨星等が入り混じったかなり複雑な星系です。地形の複雑さ、危険さではこの南方でも随一と言われています」
「つまり地形を利用して戦うつもりだと」
「そのようで」
「そうか」
アッディーンはそれを聞いて考え込んだ。
「わかった。すぐに各艦隊司令と参謀達を集めてくれ」
「わかりました」
こうしてアッディーンの指示通り司令と参謀達が集められた。艦隊司令はシャトルで来た。通信も出来るが盗聴を恐れて集めたのである。
「よく来てくれた」
アッディーンは旗艦アリーの作戦会議室で彼等を迎えた。
「ではすぐに会議に入るとしよう」
「はい」
提督と参謀達は頷いた。こうして話がはじまった。
「いよいよこの南方における作戦も最終段階に入った」

アッディーンはまずこう切り出した。
「リヤド王国が外交ではなく軍事による解決を選んだことはもう聞いていると思う」
「はい」
彼等はそれに頷いた。これはもう知っていることである。
「既にこちらに十個艦隊を派遣してきている。リヤドの主力と言っても過言ではない」
「ではその十個艦隊を退ければ南方における作戦は全て終わることになりますな」
ここでナクールが言った。
「そうだ」
アッディーンはそれに答えた。
「後は外交交渉に入るだろう。そして我がオムダーマンは南方を完全に手中に収めることになる」
「おお」
それを聞いた一同が声をあげる。
「だがそれには勝たなければならない」
アッディーンは声を引き締めた。
「そう、勝たなければな」
「はい」
皆それに首を縦に振った。彼等の顔も引き締まった。
「兵力においては我が軍は彼等の三倍だ。しかし」
アッディーンは言葉を続けた。
「彼等は戦場を選んできた。フェルダウス星系だ」
「フェルダウス星系」
それを聞いた何人かが声をあげた。
「そうだ。かない厄介な場所だそうだが。知っている者はいるか」
「いえ」
「かなり複雑な地形だとは聞いておりますがそれ以外は」
皆首を横に振った。西方にいる彼等がこの南方の奥のことを詳し

く知っている筈もなかった。
「そうか。ならば仕方がない」
アッディーンはそれを受けてこう言った。
「既にリヤド軍はフェルダウスに向かっている。我々よりも先に到着することは明らかだ」
「はい」
「地の利は彼等にある。そして防衛態勢も整えているだろう。だがわかっているな」
「無論です」
アッディーンの言わんとすることはわかっていた。それがわからぬ彼等ではなかった。
「退くわけにはいかない。そしてだ」
彼の目が光った。
「まずは先に到着するのを彼等にしてはならない」
「はい」
彼等はその言葉に頷いた。
「進撃速度を速める。いいな」
「わかりました」
「そして彼等より先にフェルダウス星系に到着する。コリームア中将」
「ハッ」
名を呼ばれたコリームアが席を立つ。
「貴官はその艦隊を率いて先発せよ。そしてフェルダウスを抑えるのだ」
「わかりました」
「後のことは気にするな。あの星系に到着することだけをまず考えよ。いいな」
「了解」
「ベニサフ中将」
続いてベニサフの名が呼ばれた。彼も席を立った。

## 第七部第三章　狐狩りその七

「貴官は別行動をとってくれ」
「といいますと」
「陽動を行うのだ。情報戦を仕掛けてくれ。細部は任せる」
「わかりました」
彼はそれを受けて敬礼した。
「我が軍の動きが複数あるように思わせてくれ。よいな」
「ハッ」
「マトラ中将とアタチュルク中将も先にフェルダウスに向かうように。よいな」
「わかりました」
二人はそれを受けて席を立って答えた。
「他の艦隊は私と共にフェルダウスに向かう。だが進軍は通常のそれよりも速くする。よいな」
「わかりました」
皆それを受けて答えた。
「この戦いで全てを終わらせる。諸君の奮闘を期待するぞ！」
「ハッ！」
全ての者が席を立ち敬礼して答えた。こうして南方における最後の決戦がはじまった。
アッディーンの作戦通りまずはコリームア達の三艦隊が先発した。彼等は一路フェルダウスに向かった。
そしてベニサフとその艦隊は本隊とは別行動をとった。彼等は別のルートからフェルダウスに向かいその途中様々な情報を流した。
これによりリヤド軍の下に入るオムダーマン軍の動きに関する情報は膨大なものになった。彼等はそれに少なからず混乱した。
「どうした、そんなに多いのか」
それは総司令官であるハイヤーンにも伝わっていた。

「はい」
情報参謀は苦い顔でそれに答えた。
「通信妨害も多く。彼等の正確な動きが掴めない程です」
「それ程までか」
「はい、中には撤退をはじめているだの外交交渉を再開したというものもありまして。将兵の士気にも影響が出ております」
「そうか、それはまずいな」
彼はそれを受けてそう答えた。
「だが両方共今の時点では有り得ない話だ」
「はい」
これはわかっていることであった。オムダーマン軍が南方を完全に制圧するにはリヤド軍を破るしかないからであった。
「彼等は間違いなくフェルダウスに向かっている。それはわかるな」
「はい」
「その状況がわからないのが問題だ。しかし」
彼は言葉を続けた。
「先に到着するのは我々だ。ならば勝機は我々にある」
「はい」
彼等には地の利があった。それがある限り負ける気はしなかった。
「フェルダウスに入ったらすぐに迎撃態勢を整えるぞ。よいな」
「わかりました」
参謀は敬礼した。そしてその場の話は終わりリヤド軍は進軍を続けていた。だがここで新たな問題が起こった。
「それは本当か！？」
ハイヤーンは思わず問うた。
「はい、残念ながら」
副官が答える。今度は後方で民衆の反乱や特殊部隊の工作活動が見られるというのだ。
「如何致しますか」
「ううむ」

彼は暫し考えた。そして決断を下した。
「止むを得ん。まずは情報を集めよ」
「ハッ」
「それから決める。まずは進軍速度を緩めよ」
「わかりました」
こうしてすぐに情報収集が開始された。結果民衆の反乱も特殊部隊の工作もなかった。
「虚報であったか」
それが完全にわかったのは二日後であった。ハイヤーンはそれを知り落胆を覚えた。
「これはオムダーマンの情報工作でしょうか」
「有り得るな」
彼は参謀の疑念に答えた。
「だとしたら一杯食わされたわけだ。この二日のロスは大きいかもな」
「はい」
「だがまだ取り戻せる。進軍速度をさらに速めるぞ」
「わかりました」
こうしてリヤド軍は進撃速度をさらに速めた。だが二日のロスはやはり大きかった。そしてそれだけではなかった。
進撃する彼等に新たな情報が入った。同盟を結んでいたエクバル王国がオムダーマンに降ったのである。そしてその全軍がオムダーマン軍に組み入れられることとなったのだ。
「予想はしていたが」
それでも厄介な話に変わりはなかった。何故なら彼等は今の彼等の進行路の側方に位置していたからだ。そこを衝かれる怖れもあった。
そしてその危惧は当たった。エクバル軍はオムダーマン軍としてリヤド領に侵攻を開始したのだ。その数は僅か二個艦隊であったがそれでも侵攻して来たのに変わりはなかった。

それを見たハイヤーンはすぐに動いた。兵をすぐさまエクバル方面に差し向けたのである。
戦闘かと思われたが旧エクバル軍はすぐに兵を退いた。ハイヤーンはそれを見て兵を戻した。しかしこれは更なる時間の浪費となった。これが致命傷になった。
「閣下、大変です」
フェルダウス星系に進行を再開したリヤド軍にさらに都合の悪い情報が入って来たのだ。
「何だ」
ハイヤーンはそれでも落ち着いていた。静かに報告に来た若い士官に顔を向けた。
「オムダーマン軍がフェルダウス星系に来ました」
「そうか」
しかしそれでも彼は落ち着いていた。静かにそう答えた。
「その数は」
そしてそう問うた。
「三個艦隊。約三万です」
「先遣部隊か。どうやら全速力で来たな」
「どうやらそのようで。如何致しましょう」
彼等はこの時フェルダウスの入口にいた。星系への到着はもうすぐであった。
「決まっている。行くぞ」
彼はそう答えた。そうするしかなかった。
「わかりました。そしてオムダーマン軍は如何致しましょうか」
「攻撃するかどうかか」
「はい。我が軍は十個艦隊、対してあちらは三個艦隊です。勝算は充分にありますが」
「そうだな。今彼等はどうしている」
「第十三惑星ハイヤッドにて守りを固めに入っている模様です」
「そうか。では決まりだ」

「といいますと」
「放っておけ。今彼等に手出ししても無意味に損害を出すだけだ」
「左様ですか」
「そうだ。おそらく彼等は守りに徹するだろう。そうなれば我等も彼等の殲滅に時間を食う」
「はい」
「そしてそこに彼等の本隊が来る。そうなればどうなるか・・・・・・言うまでもないだろう」
「はい」
若い士官は頷いた。それは彼にもわかることであった。

## 第七部第三章　狐狩りその八

「ここは我等も守りを固める。よいな」
「わかりました」
「場所は第十惑星ハルーンだ。ここに集結するぞ」
「ハッ」
ハルーンはフェルダウス星系においては最も大きな惑星である。軍事基地も充実しておりこの星系では人の居住も可能である。その為それなりに人口も多い。そして今現在の位置はハイヤッドと正反対の場所にあった。それが最も大きな要因であった。
「そしてそこから彼等の動向を注視する。よいな」
ハイヤーンは言葉を続けた。
「先に到着されたとはいえ地の利は我等のものだ。案ずる必要はない」
彼はここで部下の不安を取り除くことにした。
「時が来れば攻める。よいな」
「わかりました」
その若い士官は再び答えた。
「では進軍を再開する。目標はハルーンとする」
「ハッ！」
士官だけでなくその場にいた者全員が敬礼した。こうして彼等の方針は決定した。
翌日彼等はフェルダウス星系に入った。そしてすぐにハルーンに向かいそこに集結した。そしてオムダーマン軍の先遣隊と睨み合いをはじめた。
「彼等は動かないか」
それを見たコリームアは同僚の提督達と共に自らの乗艦マムルークの司令室で話し合っていた。
「そのようだな。どうやら無理な攻撃は避けているらしい」

マトラがそれに応える。
「流石は歴戦の将と言うべきかな」
アタチュルクは賞賛も含んでいた。
「だがこのままで行くとは思えんな」
「それはそうだな」
コリームアはマトラの言葉に答えた。
「おそらく機を見て攻撃を仕掛けようとするだろう。だがそれが何時かだ」
「とりあえず今の攻撃はないと」
「それは間違いないだろう」
今度はアタチュルクに答えた。
「我々は今は守りを固めているだけでいい」
「ああ」
「それはわかっている」
アタチュルクだけでなくマトラもそれに頷いた。勇猛で知られる彼であるが攻撃するべきかどうかということはわきまえている。ただ勇猛なだけでは一軍の将は務まらないのだ。
「では今は長官が来られるのを待つしかないな」
「そうだな」
マトラとアタチュルクはコリームアの言葉に頷いた。
「では今はこの星の陣を固めよう」
「ああ、わかった。分担してな」
「よし」
こうして三人は守りを固めた。そして彼等はアッディーン率いる本軍の到着を待った。そのアッディーン率いる本軍が到着したのはそれから一週間後であった。その時には陣はある程度完成していた。
「来たか」
ハイヤーンはそれを聞いて一言そう呟いた。
「そして今彼等はどうしている」
「集結後徐々にこちらに向かって来ております」

副官がそう報告した。
「動いたか」
「はい」
「まさかとは思ったがな」
彼の呟きは少々驚きが入っていた。地の利がない以上今動くとは思わなかったからだ。
「だがそれならかえって好都合だな」
「好都合ですか」
「そうだ。こちらもすぐに動くぞ」
そう副官に言った。
「一個艦隊をここの守り、そして予備兵力として置く。九個艦隊で攻める」
「わかりました」
「彼等から目を離すな。隙を衝いて一気に撃破するぞ」
「ハッ」
副官は敬礼で応えた。そして彼等もまた行動を開始した。これはアッディーンにも伝わった。
「やはり動いたか」
彼はそれを聞いて笑った。
「ハッ、予想通りですな」
後ろに控えるシンダントが彼に対して言った。
「ああ、これでいい」
アッディーンはモニターに映し出される三次元地図を見ていた。それはこのフェルダウスの地図であった。ハイヤッド占拠の際に入手したものである。
「確かに我が軍には地の利はない」
「はい」
「だがそれならそれで戦い方があるのだ。今それを彼等に見せよう」
そう言いながら目はモニターから離れない。
「予定の場所に到着したならば待機する。よいな」

「わかりました」
シンダントはそれを受けて敬礼した。
「では全軍進撃だ。作戦通りに行くぞ」
「ハッ！」
シンダントだけでなくその場にいた全ての者が敬礼した。そして彼等は勝利を目指し進軍を続けるのであった。

南方で最後の戦いがはじまろうとしていた頃八条は自らの執務室においてディカプリオ元帥と話し合っていた。
「長官、その揚げですが」
ディカプリオは彼の机の前に立ち報告をしていた。揚げとはステッラを誘い出す情報のことに他ならない。既に彼等の間でもそうした呼び方となっているのだ。
「これならどうでしょうか」
そして彼は懐にあるファイルを差し出した。八条はそれを受け取り中を見る。
「ふむ」
読みながら一言漏らした。それから顔を上げた。
「面白い揚げですね」
「はい」
ディカプリオはそれに答えニヤリと笑った。
「これならあの女狐は絶対に来ますよ」
「そうでしょうね。何しろ以前躍起になって調査していたものの流れを汲んでいるのですから」
見ればそのファイルは艦艇のものであった。しかもかなり大型のものである。
「そこを捕らえると。ンガバ少将とアラガル部長にもお話しましょう」
「是非とも。猟師にも知ってもらいたいですから」
「囮のことは」

「そういうことです。そしてドトール長官にも。ただあちらは内務省の管轄なので私からは何も言えませんが」
「それなら私からお伝えしておきますよ」
「お願いします」
「あと首相と内相にも。それはこちらでやりますから」
「はい」
「そして彼女の動きはまだ掴めていませんか」
「残念ながら」
彼はここでその彫刻の様に整った顔を顰めさせた。するとその顔がまるで苦悶に歪む古代ギリシア彫刻の様になった。
「今何処にいるのかさえ。この連合にいるのはわかっているのですが」
青と緑のその目からも苦悶の光が出されている。情報部長である彼にとっては悔しくて仕方がないことのようだ。
「仕方ないですね」
彼のそうした感情は八条にもわかっている。彼はここでは宥めることにした。
「とりあえず今は彼女を捕らえることを考えましょう」
「はい」
ディカプリオはそれを受けて頷いた。
「ではそうさせて頂きます」
「はい」
今度は八条が頷いた。
「ではこれで失礼します。すぐにンガバ少将、アラガル部長と作戦会議に移ります」
「お願いしますよ」
「わかりました」
彼は敬礼して部屋を後にした。そして八条だけが残った。
「とにかく今はステッラを捕らえることを優先させないとね」
そう呟きながら先程ディカプリオから手渡されたファイルを再び

手に取った。
「このままでは我が国の内情が全てエウロパに筒抜けだ。それだけは何とかしないと」
呟きながらファイルの中を再び見る。そしてそこにある戦艦のデータに目を通す。
「ふむ」
それはかなり精巧なものであった。技術部の協力を得て作り上げたものであるらしい。ティアマト級巨大戦艦の没になった設計図を改良して作り上げたものだという。ただしサイズはその巨大戦艦のそれも遥かに凌駕している。
「ここまで大きいと一見御伽話だな」
その巨大さは八条も苦笑する程であった。
「しかしそれだからこそまさか、と思ってしまう。そうしたスパイの心理を読むのは流石と言うべきか」
ディカプリオも伊達に情報部長を務めているわけではない。そうしたことも考えているのだ。
八条はそのファイルを読み続ける。そしてある考えが浮かんだ。
「いや」
だがここではそれを打ち消した。そしてファイルは自分の机の中にしまった。
そして彼は仕事に戻った。ここでは彼はその戦艦のことを脳裏から消したのであった。

# 第七部第四章　名将と老将その一

名将と老将

ディカプリオが技術部と協同して作成したその偽の戦艦に関するデータは意図的に流された。それは何時しかエウロパの上層部にも届いていた。

「あのティアマト級をも凌駕する巨大戦艦だと」

ラフネールはそれを最初に聞いた時思わず眉を顰めさせた。

「本当の話か」

「はい、ステッラからの報告です。間違いはないかと」

豪奢な軍服とマントに身を包んだ白いものが混じった黒髪に豊かな頬髯をたくわえた姿勢のいい初老の男が彼に答えた。エウロパ国防相であるルードヴィッヒ＝ヨアヒム＝フォン＝シュヴァルツブルグである。階級は元帥である。エウロパでは現役の軍人であっても大臣に就任することができるのである。ここが連合と違う点である。連合はあくまでもシビリアン＝コントロールの中にある。従って国防長官も大統領も文民である。

「そうか」

ラフネールはそれを受けて頷いた。

「ならば確かな話だな」

彼はステッラを完全に信頼していた。だからこそこう言ったのである。

「如何致しますか」

シュヴァルツブルグはここでまた問うた。

「調査させますか」

「無論だ」

ラフネールの言葉に迷いはなかった。

「すぐに指示を出すようにな」

「わかりました」
「そしてこれは彼女だけではない」
「と言いますと」
「今連合に入っている殆どの情報部員にも伝えるようにな。この巨大戦艦に対して全力で以って情報を収集せよと」
「わかりました」
シュヴァルツブルグはそれを受けて頷いた。
「連合がまだ巨大戦艦を建造にかかるとは思わなかったがな」
「はい」
それはシュヴァルツブルグも同じ考えであった。
「一体何の目的で建造するか、その真意まではわからない。しかしそれが我々にとって脅威であることには変わりがない」
脅威である、それこそが問題であった。やはりそこには連合とエウロパの如何ともし難い国力差があった。彼等はそれを嫌という程感じ取っていた。
「出来れば建造途中に破壊したいが」
「それではそう伝えますか」
「うん、頼むぞ」
ラフネールはそれを認めた。
「それでは決定だ。すぐにステッラ他全ての連合内に潜伏している諜報部員に指令を出すように」
「ハッ」
巨大戦艦についての調査を行えと。そして必要とあらば破壊せよ、とな」
「わかりました」
シュヴァルツブルグは敬礼した。こうして彼等の方針は決定した。すぐにステッラ達に指示が下された。
それを受けたステッラ達はすぐに行動に移った。そして調査を開始した。
「最近国防省へのハッキングが多いそうですね」

八条は統合作戦本部長の執務室でバールに問うていた。
「はい」
バールはそれを認めた。
「ハッキング元はわかりませんが」
「そうでしょうね」
それは至極当然のことであった。八条はそれには驚かなかった。
「しかしこれで一つはっきりとわかったことがあります」
「はい」
バールはそれに応える。
「エウロパの工作員達が行動を開始したということです」
「我々の超巨大戦艦の建造計画についての調査ですね」
「そうです。どうやら揚げの香りに誘われたようですね」
「確かに」
バールはその言葉を聞いて笑みを浮かべた。
「狐が揚げを好むというのは本当だったんですね」
「日本の狐は。エウロパの狐はむしろ鳥だと思っていましたが」
「ははは、確かに」
バールはまた笑った。
「しかし狐は頭がいい。そう簡単には捕まえることはできませんよ」
「わかっておりますよ」
八条はにこやかに笑ってそれに応えた。
「だからこそ優秀な猟師達を用意したのですよ」
「成程」
「それだけではありませんがね。トラップも用意してあります」
「狩りには細心の準備が必要ですからね」
バールはここで感慨深そうに言った。
「そういえば」
八条はここで気付いた。
「本部長はモンゴルでは昔ながらの遊牧生活をしてられたそうですね」

「ええ」
バールはそれに頷いた。
「昔ながらといっても学校なんかには通っていましたが」
「そうですか」
「ただ基本的な生活は昔ながらのものでした。遊牧民の」
モンゴルはやはり遊牧民であった。遊牧民の生活は昔から変わらない。馬に乗り羊達と共に生きる。宇宙に進出していてもそうした昔ながらの生活を送る者もいるのだ。
「いいものですよ。馬に乗り羊達と共に生きる。そして草原が家なのですよ」
「本当に昔ながらですね」
「学校といってもコンピューターでの通信でしたね。おかげで軍に入った時には驚きましたよ」
「宿舎にですか」
「はい。何から何まで生活様式が違いましたからね。けれどすぐに慣れました」
「そうですか」
彼は通信教育で大学まで出ている。そして軍に入隊したのだ。入隊したのに深い理由はない。彼は長男なので家を出て独立しなくてはならない。モンゴルでは末っ子が家を継ぐ習わしである。兄達は次々に家を出て独立する。だが末っ子は残る。従って家を継ぐのは彼となるのである。
家を出るにあたって彼は深くは考えていなかった。遊牧生活を送ろうかとも考えていた。だが通信教育先の大学の教授に他の職も薦められ軍はその中の一つにあったのである。
受けたら合格した。元々連合では人気のある職業とは言えないので競争率は低かった。流石に名前を書いたら合格するということはなかったがそれでも彼は無事軍の入隊試験に合格したのである。それも幹部候補生としてであった。やはり大学卒業者ということが大きかった。

「そのまま遊牧民になってもよかったのですが」
「それでは何故軍に」
「いやあ」
彼はここでまた笑った。
「星の中を動くのもいいかと思いまして。深い理由はなかったのです」
「そうだったのですか」
そして彼は実際に星の海を進むことになった。モンゴル軍の艦艇に将校として乗り込むことになったのだ。

## 第七部第四章　名将と老将その二

「そうしたらその生活が合っていまして。軍隊というものが私に合っていたのでしょう」
「それは何より」
どうしても適性というものがある。軍というものは特にそれが大きい。彼が軍に合っていたというのはそれだけで幸運なことであった。
「気がついたら今ここにいるわけです。いやあ、運がよかった」
彼は軍人としては有能であった。海賊退治で功を挙げこうして連合軍統合作戦本部長にまで昇り詰めたのであるから。もっとも彼をその職に就けたのは八条であるが。各国の軍人達を調べている時にモンゴル軍元帥である彼のことを聞きすぐに統合作戦本部長に決定したのだ。
「運ですか」
「ええ」
彼は答えた。
「何事も運がないと。実力だけではどうにもならない時があります」
「それは確かにありますね」
八条もそれはわかっていた。
「しかし運に頼るつもりはありません」
「ほう」
バールの言葉に目の光を変えた。
「運はあくまでプラスアルファです。それ以外のものではありません」
「つまり重要なのは実力であると」
「そう、そこにその運が加わるのですよ。少なくとも私はそうしたものだと考えています」
「それはわかります」

「ですが長官の御考えは少し違うようですね」
「わかりますか」
「ええ」
それはバールにもわかっていた。
「どの様な状況においても必ず勝てる、そして損害は最小限に。そうした戦いを望まれているようですな」
「はい」
八条はそれを肯定した。
「その通りです」
「やはり」
バールはそれを聞いて納得したように頷いた。
「軍の編成や後方支援、兵器等を見るとそうですね」
「確かに戦争において運は大きな要素ですが」
八条は自説を述べはじめた。
「それは不運もあります。その不運がこちらに来ても勝てる状況にしておかなくてはなりません」
「それは私も同意です」
だが二人は根本で何かが違うようである。それは何か。
「ただ、いざという時に運がないと大変なことになる場合もあります」
これであった。バールはあくまで戦場を見ている。そして八条は政治のうえでの戦争を見ているのだ。これはバールが軍人であり、八条が政治家となっていたからである。軍人と文民では戦争に対する見方も違ってくるのである。
その為バールは運を重要視する。戦場において欠かせないものであるから。
八条はそうした要素があまりかからないような状況を目指す。それが政治家の考えであった。だが八条は元々は軍人でありそのこともわかっていた。それが他の政治家とは一味違っていた。
「それはわかります」

ここで同意する言葉を述べた。
「その辺りは本部長にお任せします」
「はい」
バールはそれを受けて微笑んで応えた。精悍な笑みであった。
「ステッラへの作戦ですがあの二人で大丈夫だと思います」
「運という点から見ても」
「そういうことです」
「わかりました。それでは安心して取り掛かるとしましょう」
「ただステッラの悪運もかなりのものでしょうからね」
「彼女自身も」
「だからこそ今まで生きてこられたのではないかと思います」
「ふむ」
「それについても用心しておくべきかと」
「わかりました。それでは」
「はい」
こうして二人の話し合いは終わった。八条は本部長室を去り自らの執務室に戻った。そして彼はアラガル及びンガモに指示を出した。そして彼等はまた動くのであった。
「国防省の動きはかなり速いな」
それはアッチャラーンにも伝えられていた。
「そのようですね」
そこには金がいた。彼女はそれに頷いた。
「我々は彼等に協力するという形をとっておりますが。作戦等はドトール長官にかなり委任しております」
「長官にですか」
「はい、やはり専門家ですから。問題はないかと思いますが」
「それは私も同じですぞ」
アッチャラーンはそれには反対しなかった。
「ただ連携が上手くいっているかどうか不安なのは確かです」
「それは御安心下さい」

金はそんな彼に対して言った。
「長官は肩肘を貼る様な人ではありません。そしてスタッフもそうした者を選びましたから」
「ほう、それは」
これはアッチャラーンも意外であった。
「そこまで考えておられたのですか」
「当然です」
彼女は少しきつい声でそう答えた。
「今回の作戦は細心の注意を払わなければなりませんから。ステッラだけではありません」
「はい」
「エウロパが持つ連合内の諜報網を完全に破壊する。その為には用心し過ぎるということはないかと思いますが」
「それは私も同じ考えです」
「そうですか」
「ただ一つ気になることがあるのです」
アッチャラーンはここで深刻な顔を作った。
「それは何でしょうか」
「彼等の侵入元です。それも何とかしないと話になりません」
「侵入ルートですか」
「左様です。おおまかに二つありますが」
「サハラやマウリアを経由するルート」
まずは総督府に入り、そこからサハラに潜伏して潜入するのである。中にはサハラやマウリアの者に変装している場合もある。だがこちらは入国チェックを厳格化させて対処している。これによりこちらの侵入ルートはかなり押さえられている。しかしそれだけではないのである。
「そしてもう一つ」
アッチャラーンはそれについて言及した。
「こちらの方がより問題ですな」

「はい」
金もそれを受けて顔を険しくさせた。
「バチカンです」
アッチャラーンの顔と声も金のそれと同じものになっていた。
「これを何とかしたいのですが」
「ですが今までは何もできませんでした」
彼女のその声は暗ささえ帯びていた。
「流石に宗教に手を出すのは憚れますから」
「貴女もそう御考えですか」
「はい。人の心には容易に手をつけることはできません」
そう答えた。
「これは信教の自由だけでなく思想の自由にも大きく関わりますから」
「そうです。彼等がテロ活動等をしていない限りは」
この時代にもカルト教団というものは存在する。連合においては今まで多くのカルト教団が出現している。彼等の中には反社会的行動をとる者達も多い。そうした団体との戦いも今まで多くあった。宗教や思想がとりわけ問題なのではない。問題なのは彼等の行動である。如何に素晴らしい思想であろうがそれを実現する行動がテロであるならば彼等はテロリストとなる。これは他の市民団体等も同じである。
「そうです。ましてやバチカンとなると」
「テロなどする必要もありませんから」
「諜報員が紛れ込んでいるといってもそれは今の時点では憶測に過ぎません」
「バチカンには諜報員のことを伝えてるのですが」
これはかなり前から行われている。連合にとっても由々しき事態であるからだ。
「効果がないでしょう」
「残念なことに」

金は悔しそうな声でそう答えた。
「やはりバチカンは一筋縄ではいきません」
「伊達に長い歴史を歩んでいるわけではありませんからな」
「権謀術数の歴史という点では我々より上かもしれませんから」
連合も各国の間で色々と綱引き、駆け引きがある。ちなみにアッチャラーンの祖国タイはそうしたことにかけてはベトナムと並んで連合屈指とされている。だがバチカンのそれは別格であった。

## 第七部第四章　名将と老将その三

宗教の世界は政治の世界と密接な関わりがあった。とりわけ中世の欧州においてはそうであった。その中心であったのがバチカンである。法皇だけでなく枢機卿にもかなりの権威が存在し、緋色の法衣には一国の君主に匹敵する栄華と名誉があった。それだけにその座を巡る争いも熾烈であったし法皇や枢機卿になってからの政治への影響もかなりのものであった。彼等は聖職者という名の政治家であったのだ。その謀略は宗教が絡んでいるだけにより陰惨で血生臭いものとなっていた。

そうした歴史があった。流石に二十世紀以降そうした表立った話はないが今だにバチカンといえば権威であった。欧州総統ですら無下には出来ず、永遠の存在であった。

「誰もバチカンに意見を言うことは許されません」

アッチャラーンはここでこう言った。

「はい。バチカンには誤謬はありませんから」

「そういうことです」

「だから彼等はエウロパのスパイとは直接関係はない。表向きは」

「そうですね。証拠を前に出しても彼等は認めないでしょう」

「対策はないものですかな。こちらは」

「対策ですか」

「そうです。聖職者の移動を禁ずるわけにもいかないですぞ」

アッチャラーンは困った顔をしていた。

「ありますが」

だが金はここできっぱりとした口調でそう答えた。

「何とっ」

それを聞いたアッチャラーンは驚かずにはいられなかった。

「内相、それは本当ですか！？」

「はい」

彼女はやはり素っ気無い声で返答した。
「問題はバチカンがエウロパにあるということですね」
「ええ」
「でしたら」
ここで一呼吸置いた。
「バチカンがこちらにあればよいのです」
「ということは」
「過去に歴史でありましたね」
金は語りはじめた。
「教皇のバビロン捕囚です」
「バビロン捕囚」
「そうです」
彼女の声は強いものとなった。
かってフランス国王フィリップ四世と教皇ボニファティウス八世が聖職者の課税問題において衝突した時フランス王は兵を送り教皇を捉えた。その際三部会を開き国民の支持を取り付けているのが狡猾ながら優れた政治手腕を持っていた彼ならではであった。テンプル騎士団を陥れたことからもわかるように彼は目的の為なら手段を選ばない人物であった。だがそれはフランスにとって幸運であった。
教皇はローマ郊外のアナーニにおいて捉えられた。老齢であった彼はそこで憤死した。彼自身狡猾で貪欲な人物であり、前任者を陥れて幽閉したうえで教皇になった人物であり左程同情することもなかった。
だが問題は教皇を捉えたことである。中世において絶対の権限を持っていた教皇を捉えるということは当時の欧州においては天地がひっくり返るような話であった。フランス王は教皇を自国領のアヴィニョンに移した。これが教皇のバビロン捕囚である。以後教皇はフランス王の干渉を常に受ける状態となった。話はそれで終わりではなかった。
それに反発したフランスと敵対するイングランド、そして神聖ロ

ーマ帝国がローマにも教皇を立てたのである。所謂シスマ＝教会大分裂である。この状態は百年以上続き教会の権威は地に落ちた。中世の終わりのはじまりと言うべき話であった。
「それを行えばよいのです。元々カトリックの信者は連合の方が多いですし」
「確かにそうですが」
だがアッチャラーンはあまりもの話にまだ戸惑っていた。
「教皇をこちらに移すというのは不可能です」
「いえ、可能です」
だが金はそれに反論にかかった。
「外交交渉という手段があります。エウロパがバチカンを通じて諜報員を送り込んでいるということがわかれば」
「ステッラを捕まえてからの話ですね」
「ええ。それからの話ですが」
「そしてその交渉ですが」
「はい」
「若し彼等がそれを認めなかったとしたらどうすべきでしょうか」
あえて問うてみた。
「彼等が認めなかったならば」
「当然考えられる事態です」
それは考えられる事態というよりは規定事項のようなものであった。
「その時も決まっております」
金はやはりすぐに答えを返してきた。
「といいますと」
「戦争です」
その声はさらに強いものとなった。
「スパイの侵入を許してはなりません。彼等がそれを認めないというのならこちらも武力に訴えるまでです」
「戦争ですか」

それを聞いたアッチャラーンの顔色が変わった。
連合は設立当初から内部では海賊やテロリストとの戦闘があった。だが国同士の戦争は久しく絶えていた。利害が衝突した場合は速やかに他国、とりわけ連合中央政府の仲裁があり代替のものが与えられたからである。そうしたことができたのはやはり連合が果てしない開拓地を抱えているからであった。奪い合う必要がなければ人も国家も衝突することはかなり減少するのであった。
だからこそ彼等は戦争をすることがなかった。中央軍設立までは各国が軍隊を所有していたが、これは自衛の色彩が強かった。エウロパやサハラに兵を送ることもなかった。エウロパとは睨み合いが続いていたがそれでも彼等と武力衝突することはなかったのだ。
「はい」
金は頷いた。

## 第七部第四章　名将と老将その四

「既にこれは二十世紀までですと充分に宣戦布告の理由となります」
「確かにそうですが」
ちなみに連合内においては産業スパイが主流である。各国は自由貿易協定や通貨統合の中で互いの科学や産業に対して水面下で情報収集を行っている。発見された場合には当然多額の賠償金等の重いペナルティが課せられる。だが大国はこうした事態には知らぬ存ぜぬを貫く例が多い。そうした産業スパイを好むのが大国であるので話はより困難なものとなっているのが現状ではある。
しかしエウロパのスパイはまた話が違う。彼等は敵対勢力のスパイであり、連合内部の問題ではない。到底賠償金等で済む話ではないのだ。
「勿論彼等も頑強に抵抗するでしょう」
「それはそうでしょうな」
バチカンといえば絶対の権威である。それはこの時代においても変わることがない。連合と比して圧倒的な国力差があるエウロパの誇りの一つでもあるのだ。連合のカトリック教徒達はその総本山に行くことが出来ない。そうした状態は連合にとっては歯軋りすべきことの一つであったのだ。
「ですがバチカンを連合内に移動させることができれば」
「少なくともエウロパはその諜報員を侵入させるルートを確実に失います」
「そして連合内のカトリック教徒達は満足する結果を得られる。そして彼等の移動で観光、旅行業界も盛況することでしょう」
「そこまで考えておられたのですか」
これにはアッチャラーンも目を瞠った。
「はい、当然です」
彼女の様子は相変わらずであったが。

「彼等もその後で独自に教皇を立てるでしょうがそれはあちらの問題です。それについては我等は関知することはできはしません」
「はい」
「ただエウロパとの戦争になっても彼等を滅ぼすことは得策ではありません」
「それは何故ですか」
「彼等とは長い対立の歴史があります。最早互いに相容れぬ仲となっております。今彼等を連合に組み入れたところで」
「一千億の不穏分子を抱え込む結果になると」
「そういうことです。そうなれば問題は容易ではありません。勝利を収めたとしてもエウロパの領土は一寸たりとも手に入れるべきではありません」
「わかりました。そういうことでしたら」
彼はそれに同意した。実は彼も彼女と同じ考えであったがここはあえて彼女の聞き役に徹したのである。それも彼のやり方の一つであった。
「ステッラの後の計画も考えておきますか」
「是非とも」
金はそれに同意した。
「お願いします」
「わかりました」
アッチャラーンは快諾した。これで話は大体終わった。
「それではこれで」
「あ、お待ち下さい」
彼はここで呼び止めた。
「何でしょうか」
「そろそろ三時ですが。如何なさいますか」
「そうですので帰らせて頂きます」
金はそう切り返した。

「帰って内務省のスタッフとお茶をしなければならないので」
「そうでしたか」
「はい。今日はパンケーキだとか。これでも楽しみにしております」
やはり甘いものには目がないようである。答える声が普段のそれとは全く違っていた。
「それでしたら」
アッチャラーンも引き止めることはしなかった。
「はい」
そして金は別れの挨拶を済ませ内務省に戻った。やはり甘い物となると様子が変わるのであった。

## 第七部第四章　名将と老将その五

連合がステッラを捕らえる用意とその後の国家戦略を練っている頃サハラ南方ではいよいよ最後の戦いが行われようとしていた。
戦っているのはアッディーン率いるオムダーマン軍とハイヤーン率いるリヤド軍であった。彼等は陣を置いた互いの惑星からの睨み合いを止めそれぞれ軍を動かしていた。
「オムダーマン軍の動きはどうなっているか」
ハイヤーンは乗艦であるホラズムの艦橋において周りの者に問うた。
「ハッ」
参謀の一人がそれに答える。
「今はハイヤッドからかなり離れているようです。一路こちらに向かって来ております」
「そうか」
彼はそれを聞くと頷いた。
「ではこのまま決戦を挑むつもりのようだな」
「そのようで」
「ふむ」
それを聞き終えると暫し考え込んだ。
「数のうえでは我が軍は圧倒的に不利だ」
「はい」
今彼等は九個艦隊である。一個はハルーンに置いている。
「敵はおそらく我等の三倍近くはいるだろう」
「三倍ですか」
「そうだ。幾ら地の利があるといっても正面から戦っては勝ち目は薄い。オムダーマンの兵は強く、しかもアッディーン司令の力量も確かだという」
彼は今までのアッディーンの戦いについて知っていた。何も学ぼ

うともせず数を頼んで戦場に向かったサラーフの愚かな提督達とは明らかに違っていた。
「やはりここは地の利を生かした機動戦を仕掛けるとしよう」
「はい」
これで彼の考えは決まった。
「各艦隊に伝えよ。それぞれ独自のルートを通り敵に攻撃を仕掛けよと」
「ハッ」
「敵が反撃して来たならばすぐに退却せよ。そしてそれを繰り返せ」
「わかりました」
その参謀はそれを受けて敬礼した。
「そして彼等が戦力を消耗した後に全面攻撃を仕掛ける、よいな」
「はい」
これは彼のいつもの戦い方であった。まず敵に戦力、精神両面から消耗を強い、そしてそれが極限に達した時に攻勢に出て破る。そうして今まで勝利を収めてきたのである。
「それでは作戦を開始する。我々も行くぞ」
「はい」
「敵が誰であろうと負けるわけにはいかぬ。負けるわけにはな」
その声には強い決意が宿っていた。そしてその言葉が兵を動かしたのである。
対するオムダーマン軍の動きはあまり速くはなかった。彼等は周囲に警戒を払いながら慎重に動いていた。
「まさに迷路だな」
アッディーンは旗艦アリーの作戦室で三次元地図を眺めながらそう呟いた。
「今はここか」
そして地図のある部分を指差した。
「随分な場所にある。近くにはブラックホールと赤色巨星が存在している。少しでも艦隊の動きを誤ると大変なことになるな」

「はい」
それに同席しているハリージャが頷いた。
「将に迷宮です。我々はその中を進んでいるのです」
「そう、迷路だ」
彼はそれを受けてこう言った。
「エウロパの神話であったな。ラビリンスだ」
古代ギリシアに実在した地下迷宮である。そこには牛頭人身の怪物ミノタウロスが棲んでいたという。この怪物は人を喰らい、毎年多くの若者がこの怪物の生け贄となっていた。クレタにある話である。
「我が軍はその中にいるのだ」
「ではミノタウロスがリヤド軍ですね」
「そういうことになるな」
彼はそれに応えた。
「だが一つ違う点がある」
「といいますと」
「我々は生け贄の若者達ではないということだ」
そして続けてこう言った。
「テーセウスなのだ」
そのミノタウロスを倒した英雄である。糸を使い迷宮を潜り抜けた知恵者でもある。ギリシア神話においてはヘラクレスやペルセウス等と並ぶ英雄である。
「ミノタウロスを倒したあの英雄だ」
「成程」
「そしてその為の剣もある」
「それは」
「これを見てくれ」
彼はそこで地図のある部分を指し示した。今彼等がいる場所から少し行った地点である。そこは珍しく何もない平坦な空間であった。だが四方八方に路がある。言うならば交差点である。

「ここには我々が先に辿り着くことは間違いない」
「はい」
既に目と鼻の先である。リヤド軍の予想現在地点からはかなり離れている。
「まずはここを押さえる」
「それからまた動くのですね」
「そうだ。各艦隊をそれぞれ分散して各地に派遣する」
「えっ！？」
それを聞いたハリージャは思わず声をあげた。
「各艦隊をですか」
「そうだ」
アッディーンは微笑んでそれに頷いた。
「各方面にな。だが私と数個艦隊はその地点に留まる」
「何故ですか？」
「囮だ」
彼はいささか素っ気ない声でそれに答えた。
「囮」
「そう、囮だ。我等がここにいるとなると敵はどう動く」
「勿論集中して攻撃を仕掛けるでしょう」
「それを迎え撃つ。そしてここで各艦隊を呼び戻す。これならどうだ」
「面白いことになるでしょうな」
ハリージャも彼の作戦を理解した。
「わかったようだな。では各艦隊の提督達と参謀達を集めてくれ」
「はい」
「会議を行う。そして作戦を開始するぞ」
「ハッ！」
こうしてアッディーンはリヤド軍を斬る剣をその手に握った。そして程なくその予定された地点に到着し、そこから各方面に向けて移動を開始した。アッディーンと数個の艦隊がそこに残った。偽の

情報を流しながら。
「オムダーマン軍も動いたか」
それはハイヤーンの下にも届いていた。
「それも各方面に向けてか。おそらく我々のゲリラ戦術に対抗してのようだな」
「そうやらそのようですね」
副官がそれに応えた。
「数個艦隊ずつ行動しております。ただ船足は遅いですが」
「そうだろうな。我等の動きを警戒しているのだからな」
ハイヤーンはそう睨んでいた。
「そして司令部は残っていると」
「はい」
副官はまた答えた。
「そうだ。これはどういうことだと思う」
「そうですね」
彼はハイヤーンに問われて考え込んだ。
「統制をとっているのではないでしょうか」
「統制か」
「ええ。あの場所は丁度四方八方に道が開けていますから。それぞれのルートを通る艦隊へ指示を出すには好都合だと思われます」
「ふうむ」
ハイヤーンも考え込んだ。
「これはチャンスだと思いますが」
副官はここで気付いていなかったが彼は勝利に焦っていた。
「オムダーマン軍を討つ」
「はい」
それはハイヤーンも一緒であった。従ってオムダーマン側の意図には気付かなかったのだ。
「すぐさま攻撃を仕掛けるべきです。奇襲で」
「ここにいる全ての艦隊でか」

「はい、勿論です。頭さえ潰せば後はどうにでもなります」
「そうだな。アッディーン司令を倒せば彼等の指揮系統は崩壊する」
これは事実であった。
「では攻撃を仕掛けるとするか」
「ええ、そうなさるべきです」
「よし、わかった」
彼は意を決した。
「すぐに各艦隊司令及び参謀達を集めよ。そして作戦を決定するぞ」
「ハッ」
「それからすぐに動く。よいな」
「わかりました」
副官は敬礼した。そしてすぐに艦隊司令と参謀達が招集された。
彼等も異論はなかった。やはり焦っているか、ハイヤーンに絶対の信頼を置いていたのだ。
「ハイヤーン提督なら問題はない」
彼等はそう信じて疑わなかった。その信頼はよい。ハイヤーンもそれを嬉しく思っていた。だがそれが仇となる時もあるのだ。そして今がそれであった。

## 第七部第四章　名将と老将その六

アッディーンは数個艦隊を置きその開けた地点に留まっていた。一見統制をとっているように見える。だが実際の活動は違っていた。
「リヤド軍はまだか」
彼は情報参謀であるシャルジャーに問うた。
「ハッ」
彼は敬礼をしてから答えた。
「後方に何やら多くのエネルギー反応が確認されております」
「後ろからか」
アッディーンはそれを受けて頷いた。
「得意のゲリラ戦術、そして奇襲を仕掛けてくるつもりのようだな」
「そのようです」
「彼等は何日後にこちらに来るか」
「速度が速いです。おそらく二日後には」
「よし」
アッディーンはそこで意を決した。
「各艦隊に伝えよ。二日後だと」
「わかりました」
「そして我等も備えるぞ」
彼は続けて指示を出した。
「彼等から見て奥に陣を敷く。守りを固めてな」
「はい」
「敵をこの空間に深く誘い込め。そしてその背と腹を撃つのだ。予定通りな」
「わかりました」
彼は再び敬礼した。
「この戦いで南方が手に入る」
アッディーンは言葉を続けた。

「一気にいくぞ。そして勝利を手にするのだ！」
「ハッ！」
そこにいた全ての者が敬礼した。こうして彼等はアッディーンの言葉通り兵を動かした。
二日後リヤド軍は来た。そしてアッディーン率いるオムダーマン軍を発見した。
「敵艦隊発見」
彼等は通信を遮断し隠密行動をとっていた。これだけの規模の艦隊の動きを隠密裏に済ませることができるのもハイヤーンの将としての力量故であった。この報告も参謀の一人の言葉だけであった。
「規模は」
ハイヤーンは問うた。
「四個艦隊程です」
「わかった」
彼はそれに頷いた。
「では全軍攻撃開始だ。よいな」
「わかりました」
そして彼等はそのままオムダーマン軍に向かう。発見されていないと信じて疑わなかった。
「来たな」
だがそれは違っていた。アッディーンは彼等の位置を正確に掴んでいたのだ。そのうえで陣を整えていた。しかし今は彼等はリヤド軍に背を向けていた。
「よいな、全ては予定通りだ」
彼は周りにいる参謀達にこう言った。
「はい」
「わかっております」
彼等は皆それ答えた。そしてアッディーンの次の指示を待っていた。
「敵艦隊、間も無く我等の攻撃範囲に入ります」

「よし」
アッディーンの目が光った。
「全軍反転！そして攻撃を開始せよ！」
「ハッ！」
アッディーンの指示に従いオムダーマン軍は一斉に艦首を回した。
そしてそこから攻撃を仕掛けた。
「ムッ！」
それを見たハイヤーンは思わず声をあげた。
「いかん、全軍弾幕を張れ！」
「ハッ！」
すぐに指示を下す。それに従いリヤド軍は隠れるのを止めビームを斉射した。そしてそれでオムダーマン軍の攻撃を凌いだ。
「気付かれていたか」
ハイヤーンは敵の攻撃を防ぎきったのを見てそう呟いた。
「どうやらそのようですね」
参謀の一人が苦渋に満ちた顔をしていた。彼にとっても思いもよらぬことであった。
「だが負けたわけではない」
しかしだからといって戦意を喪失するハイヤーンではなかった。
「数において我等の方が有利にある。わかるな」
「はい」
「全軍攻撃を仕掛けよ！そして押し潰せ！」
「ハッ！」
すぐさまリヤド軍は進撃を再開した。数に劣るオムダーマン軍を包み込むような形で攻め立てる。それを見たアッディーンは全軍に指示を出した。
「退け」
「ハッ」
そしてオムダーマン軍はその言葉に従い後ろに退いた。
「逃げるのか？」

ハイヤーンはそれを見てまずそう考えた。だが様子が違っていた。
艦首はこちらに向いている。そして間合いを見計らって動いているのがわかった。
「有利な場所で戦うつもりか」
ここで地図を見る。彼等の真後ろに道の一つがある。そこに入れば取り囲まれることはない。だがそれを許すハイヤーンではなかった。
「そうはさせんぞ」
彼はすぐに指示を出した。高速部隊に命令を出す。
「オムダーマン軍の後ろに回れ」
「わかりました」
それを受けて一個艦隊が離れる。そしてオムダーマン軍の後方に回ろうとする。それはアッディーンにもわかっていた。
「来たな」
アッディーンはそれを見て呟いた。敵の意図はわかっていた。
彼等は迂回しつつ左からオムダーマン軍の後方に回ろうとする。そしてその時道の前に出る。
「あちらはどうなっている」
彼はシンダントに問うた。
「ハッ」
シンダントは答えた。
「そろそろかと」
「そうか」
アッディーンはそれを聞いてニヤリと笑った。それは勝利を確信した笑みであった。
リヤド軍別働隊はそのようなことは知る由もない。彼等はただオムダーマン軍の後方を目指していた。
「さあ、どう出る！？」
ハイヤーンはアッディーンの動きに注視した。このまま動かないとは思えなかったからだ。

必ず動く、そう確信していた。だが彼はアッディーンの脳裏までは知らなかった。それが問題であった。

別働隊が道の前に来た。その時であった。

## 第七部第四章　名将と老将その七

「撃て！」
カーシャーンの声が轟く。それと同時に道から無数のミサイルが放たれた。
「ヌッ！」
次の瞬間にはそのミサイル達は別働隊に向けて襲い掛かって来た。そして別働隊の艦を火球に変えていた。
「伏兵か！」
ハイヤーンはそれを見て思わず叫んだ。別働隊は側面から思わぬ攻撃を受け混乱状態に陥っていた。
「如何致しますか」
副官が青い顔をして問うてきた。
「別働隊をすぐに退かせよ。彼等の援護に回るぞ」
「ハッ」
友軍を見捨てることはできなかった。リヤド軍は彼の指示の下に別働隊の援護に向かった。そして攻撃を終えカーシャーンと合流したオムダーマン軍の左に来る。オムダーマン軍は彼等の艦首を向ける。
ここでリヤド軍はカーシャーン達が出て来た別の道の前を通ろうとする。しかしそれが間違いであった。
「今だ！」
そこにはラーグワート達の艦隊がいた。後方からその一斉射撃を受ける。
「うわっ！」
至近弾がホラズムを襲う。それにより艦が大きく揺れた。
ハイヤーンはそれでバランスを崩した。艦橋の壁に叩き付けられる。そして床に崩れ落ちた。
「ウググ・・・・・・」

「司令、御無事ですか！」
副官が駆け寄ってくる。彼もまた打ったのか頭部から血を流していた。
「大丈夫だ」
ハイヤーンはそう答えてゆっくりと立ち上がった。そして問うた。
「被害状況を知らせよ」
彼は司令である。この場合は艦隊全体の被害である。
「ハッ」
すぐに報告が入った。そしてそれが伝えられる。
「五千隻程が撃沈、もしくは大破された模様です」
「そうか」
彼はそれを聞いて頷いた。
「敵はどうしているか」
「我が軍への攻撃を終えた後そのまま突撃を仕掛けようとしております。如何致しますか」
「すぐに退け」
ハイヤーンは指示を下した。
「一個艦隊でその後方の敵を食い止めよ。そしてその間に主力は退き態勢を整える。それからその一個艦隊も合流せよ」
「わかりました」
その指示に従い動く。そしてオムダーマン軍主力から見て左斜め上に移る。ここで新手が姿を現わした。それは一つではなかった。
「何と！」
全ての道からオムダーマン軍の艦隊が姿を現わした。ハイヤーン達が通ってきた道以外の全ての道から姿を現わす。そしてそのままリヤド軍に向かって来る。
「下方よりエネルギー反応多数！」
「上からも来ます！」
敵からの攻撃が矢次早に伝えられる。そしてその直後に艦艇が炎に変わる。

「後方を敵が塞ぎました！」
「右もです！」
そして敵の動きも。それは包囲の形であった。
「司令、如何なさいましょうか！」
ハイヤーンに決断を問う声が艦橋にまで伝えられる。彼の目から見ても戦局は明らかであった。
「こうなっては致し方ない」
彼は苦渋に満ちた声でそう語った。
「撤退だ。後方の敵を突破するぞ」
「はい」
皆それに頷く。
「先鋒、そして後詰は私が務める。よいな」
「わかりました」
「では行くぞ。そして態勢を整え再び戦いを挑む！」
「ハッ！」
ハイヤーンの言葉はすぐに全軍に伝えられた。そしてそれに従い軍が動く。
ハイヤーンの直率する艦隊を先頭にリヤド軍は後方にいたオムダーマン軍に突撃する。そこにいたのはカトラナとラーグワートの艦隊であった。
「これはいかんな」
ラーグワートはその突撃を見て呟いた。
「道を開けよ。そして逃がしてやれ」
「退却させるのですか」
艦橋にいる参謀の一人が問うた。
「そうだ。勝敗は既に決した。今無駄に損害を出す必要はない」
見ればリヤド軍は全軍決死である。彼等の前に立ち塞がればどういうことになるか明らかであった。
「わかりました」
参謀はそれに頷いた。そしてラーグワートの艦隊はわざと道を開

けた。
「あの場所だ！」
それを見たハイヤーンは全軍に再び指示を下した。そこにリヤド軍は雪崩れ込むようにして入る。そこから敵陣を突破する。
「全速力だ！一気に突っ切れ！」
「はい！」
ハイヤーンの指示が再び下る。リヤド軍は陣を突破してからもなお突き進む。そして彼等が来た道に入った。
後方にはオムダーマンの大軍が迫る。勝敗が決し、無駄な損害を防ぐ為に道は開けた。だが、だからといって追撃戦を止めるというわけではない。
少しでも敵を減らす、それは戦争において常識であった。追撃戦こそはその絶好の好機なのである。
「来たな」
この時既にハイヤーンは軍の最後尾に回っていた。
「よいか」
そして残る艦艇に指示を出す。
「最後まで彼等を止める。そして機を見て我等も退くぞ」
「わかりました」
残る数千隻の艦から了解の言葉が返って来る。
「我等の命、司令にお預けしました。存分に使って下さい」
「すまんな」
ハイヤーンはそれを聞き目を伏せた。
「だが命を粗末にはするな。生きて帰るのだ、カブールまでな」
「わかっております」
「ならばよい。ではやるぞ！」
「はい！」
彼等は入口に陣取る。そして後方に下がる友軍の状況を見つつオムダーマンの大軍に立ちはだかった。
「撃て！」

両軍のビームが放たれる。二つの光の束がぶつかり合い、そして戦場を彩る。
オムダーマン軍の攻撃も数を背景に激しいものであった。だが死兵と化していたリヤド軍の士気はそれにも勝っていた。彼等はオムダーマン軍を寄せ付けなかった。
それでもやはり限界があった。オムダーマン軍はその激しい抵抗にもかかわらず次第に距離を詰めてきた。
「司令、このままでは」
「わかっている」
ハイヤーンにもわかっていた。今どうするべきかを。
そして彼は動いた。一斉射撃を仕掛けたのだ。
「撃てっ！」
そこに留まる全艦に攻撃を仕掛けた。そしてそれでオムダーマン軍を退かせた。
「ムッ！」
オムダーマン軍はそれに動きを止めてしまった。そしてそれを見たリヤド軍は行動に出た。
「全艦撤退！」
急速反転を仕掛ける。そしてそれで戦線を離脱する。
その中にはハイヤーンもいた。だが彼は指揮官の務めか最後尾に陣取り指揮にあたっていた。そしてそれが裏目に出た。
オムダーマン軍が攻撃を再開する。そしてその中の一撃がホラズムを直撃した。
「グワッ！」
艦内に衝撃が走る。エンジンにダメージはなく、損傷こそ受けたが機動力は落ちてはいなかった。だが別のダメージを受けてしまっていた。
衝撃は艦橋も襲っていた。そしてハイヤーンはそこで再び全身を激しく打ちつけられてしまっていたのだ。
「グウウ・・・・・・」

「司令！」
艦橋の中は爆撃を受けたようになっていた。多くの負傷者が転がっていた。
副官がやはり来た。彼も右腕を骨折していた。
「大丈夫ですか！？」
「と言いたいのだがな」
ハイヤーンは口の端を歪めて笑ってそう答えた。
「残念だがそうもいかないようだ」
「えっ・・・・・・・」
「これを見てくれ」
見れば破片が彼の胸に突き刺さっていた。そしてそれは左胸にあった。
「心臓だ。もうどうしようもない」
「司令・・・・・・」
「指揮権を副司令に委ねる。よいな」
「わかりました」
「私の最後の指示だ。是非頼むぞ」
「はい・・・・・・」
「そして陛下にお伝えしてくれ」
そこで大きく血を吐いた。だが彼は話を続けた。
「申し訳ありませんと」
「わかりました」
副官は頭を垂れていた。ハイヤーンはそれを見届けるとゆっくりと目を閉じた。そしてそのままゆっくりと息を引き取った。
こうしてリヤドの古将はこの世を去り天界へ旅立った。フェルダウス星系の戦いはそれで幕を降ろした。
ハイヤーンの死によりリヤド軍はこの星系から撤退した。三割程減らし、そしてそのまま兵を退いた。
勝利を収めたオムダーマン軍はそのまま兵を進めた。そして遂にその途上でリヤド側からの降伏の使者を受け入れたのであった。

# 第七部第五章　新たなる戦雲その一

新たなる戦雲

「そうか、やはりな」
シャイターンは自身の宮殿のテラスにおいて南方でのオムダーマンの勝利の報告を聞き頷いた。
「予想通りだったということですか」
ハルシークがその側にいる。そしてそう問うた。
「そうだ」
彼は黄色の薔薇を手にしながら答えた。
「負ける筈がない」
「どうしてでしょうか」
「戦力も確かにある」
彼は言った。
「そしてもう一つ重要な要素がある」
「アッディーン提督ですか」
「彼の存在が最も大きい」
そこでこう言った。
「いや、むしろ彼でなければ出来なかったと言うべきかな」
「やはりそうですか」
「そしてその功績はこれまでにも増して大きくなった」
シャイターンはまた言った。
「今後どうなるか楽しみだと思わないか」
「といいますと」
「彼の今後だ。最早一国の宇宙艦隊司令長官に収まる状況ではあるまい」
「それはそうですが」
それはハルシークにもよくわかっていた。
「それでは彼はその功績によりさらに上にあがると」

「そうだ」
「ですが彼にはあれ以上の野心はないようですが。元々そうした意識が稀薄な人物のようですし」
「彼自身はな」
シャイターンはそれにはそう答えた。
「しかしアッラーがそれを御許しにはならない」
「御導きがあるということですか」
「どういう形になるのかまではわからないがな」
彼は答えた。
「今の地位に留まってはいないというのはまず間違いない」
「そうですか」
シャイターンはここで薔薇の一つを手にとった。そしてそれを胸にさした。白い服によく似合っていた。
椅子に座る。そしてそこに置かれているワインを一口飲んだ。白であった。
「ふむ」
彼はそれを飲んだ後で呟いた。
「白はあまり飲まないのだが」
「そういえばそうでしたね」
彼がよく飲むワインは赤、そしてロゼである。白は普段から飲むことが少ない。魚介類に合うのだがサハラではそれはあまり食べられない。とりわけ鱗のない魚は食べない。だから彼も白ワインはあまり飲むことがないのだ。これはサハラ全体で言えるかも知れないことであった。
「だがこうして飲むと美味いものだな」
「はい」
ハルシークもそれに同意した。彼も白ワインは嫌いではない。
「どこの産だ」
「エウロパ総督府のハッサン星系のものだそうです」
彼はラベルを見てそう答えた。

「商人達の献上品と思われますが」
「そうか」
彼はそれを聞いて頷いた。
「この様な酒を造れる場所があちらにはあるのだな」
「はい」
「そこを我等の地にしたいものだな」
シャイターンはそう呟いて微笑んだ。悪魔的な匂いのする笑みだった。
「いや、違うな」
言葉を言い換えた。
「我等の土地を奪回しようか」
「そうですな」
ハルシークもその言葉に笑った。
「本来は我がサハラの土地なのですから」
「そういうことだ」
彼は頷いた。
「返してもらうだけだな。それを拒めば」
「力づくで」
「そういうことになる」
彼は不敵な笑みに変えた。
「どちらにしろ機が熟せばこちらから出向こう」
「はい」
「その時は近い。整えておくようにな」
「わかりました」
ハルシークはそう答えて敬礼した。
「総督府は今も手強いがな」
「マールボロ元帥が健在ですし」
「それだけではない。タンホイザー司令もいる」
「彼ですか」
ハルシークはそれを聞き意外そうな顔をした。

「どうした、何か思わしくないことでもあるのか」
「いえ」
とりあえずは首を横に振った。それから答えた。
「モンサルヴァート提督と比べるとやや落ちるかと」
「少なくとも彼には政治的なことはない」
シャイターンはそれを聞きそう語った。
「そういったことには一切興味がないようだな」
「そのようで」
「だが軍人としてはまた違う。タイプこそ違うが彼も有能であることに変わりはない」
「はい」
「むしろその才はモンサルヴァート元帥より上かも知れないな。軍人としては」
「軍人としてはですか」
「私はそう思う、彼の軍事的才能は天才の域にあると思う」
「天才ですか」
「あれは独特のものだ。まさに軍事的才覚だけで戦っている。正面から戦っては私も勝てはしないだろう」
「それ程ですか」
「ああ」
シャイターンはそこで頷いた。
「だから彼が総督府にいる間は攻撃は控えたい」
「左様ですか」
「彼を相手にせずに他の戦線で勝利を収めることも可能だがな。だがやはり彼の存在が大きい」
シャイターンはタンホイザーの将としての力量を正確に把握していた。だからこそこう言えた。そしてそれを純粋に脅威と受け止めていた。
「では以後は牙を研ぎつつ待ちますか」
「そうだな」

彼はまたワインを一口飲んだ。
「この美酒を味わうのに焦りは禁物だ」
「はい」
「今は待とう。そして機が来たならば」
「来たならば」
「動く。その時までは雌伏だ」
「わかりました」
「総督府はこれでよいな。ところで」
「はい」
「アッディーン提督は今どうしているか」
彼は質問を変えてきた。
「アッディーン提督ですか」
「そうだ」
シャイターンの目が光った。
「まだ南方に留まっているのか」
「彼でしたらもう本国への帰路についていると思います。戦いは終わり南方は完全に併合されたのですから」
「そうか」
「戦後処理には多くのスタッフが派遣されているようです。これから本国と南方の一体化が推し進められていくことだと思われます」
「ミドハドやサラーフの時と同じようにか」
「はい」
「これでオムダーマンはこの西方でハサンと比肩する大国になったな」
「はい」
そうであった。西方と南方を完全に掌握した今オムダーマンはサハラにおいて屈指の国家になったのである。
気がつけばサハラは三国となっていた。オムダーマンとハサン、そしてこのティムールである。ついこの間まで多くの国家に分裂していたサハラが三国にまとめられてきたのだ。

「これからどうなると思う」
シャイターンはまた質問を変えた。
「これからですか」
「そうだ。面白くなると感じないか」
「面白くですか」
「これから時代が動く感覚があるのだ」
シャイターンの笑みが凄みを増してきている。何かを楽しんでいるようであった。
「だが私が動くのはまだ先だ。そしてサハラが大きく動くのもな」
「全ては閣下の思われる次第」
「そうなる。そして動く時は・・・・・・わかっているな」
「はい」
ハルシークは頷いた。シャイターンはそれを聞き終えるとまたワインを飲んだ。そしてボトルを一本完全にあけた。
「実に美味かった。勝利の際にはより美味いのだろうな」
「勝利の美酒ですか」
「勝利の際に飲もう。そしてそれは」
言葉を続けた。
「次への勝利への迎え酒となる」
その整った顔がまるで悪魔の様な顔になる。邪悪ではなかった。知性を感じる。しかしその知性こそが悪魔的なものであった。
彼等はその場から去った。後には黄色い薔薇と空けられたボトルが日の光を浴びて輝いていた。

## 第七部第五章　新たなる戦雲その二

連合の首都太陽系の地球では今不穏な空気が流れていた。
街中を制服姿の警官達が動き回る。そして何かを探していた。
「あっちにはいたか！？」
「いや」
そうしたやりとりが展開されている。
「ではそちらに回ろう」
「うむ」
そして別の道に向かう。その顔は険しいものであり明らかに普段の警官達ではなかった。
首相官邸では三人が集まっていた。そして何やら話し込んでいる。
それが終わると離れた。そしてそれぞれの場所に帰って行った。
その中の一人が帰って来た。すぐに出迎えの者が来た。
「お疲れ様でした」
「有り難う」
それは金であった。彼女は出迎えたスタッフの一人に感謝の声を送った。
「すぐに仕事に戻るわよ」
「はい」
そしていつも通り足早に執務室に向かう。中に入りディスクに着く。
「総理から御聞きした話だけれど」
彼女は共に部屋に入って来たスタッフに声をかける。そのスタッフは男である。蜂蜜色に灰を混ぜたような色の髪をした白人の若い男であった。
「あ、座って」
ここで彼に座るように言った。
「はい」

彼はそれに従い椅子に座った。金は相手を立たせて自分は座って話をすることは好まないのだ。
「では話を再開するわね」
「はい」
彼女はその言葉を受けて話を再開した。
「エウロパのスパイのことだけれど」
「どうなりましたか？」
彼は問うた。
「おおよその居場所はわかったわ。ドトール長官にも後で私から伝えるわ」
「そうですか。そしてそこは」
「ステッラの居る場所ね」
「はい」
彼は頷いた。
「この地球よ。北米エリアにいるらしいわ」
「詳しい場所は」
「そこまではわからないわ。けれど彼女の他のエウロパの情報部員をかなり抑えたわ。最後の大物ね」
「最後の。ですがその最後が」
「捕まえられないわね」
ここで扉をノックする音がした。
「どうぞ」
金は入るように促した。するとドトールが入って来た。
「長官」
彼だけではなかった。八条もいた。
「国防長官も」
彼は二人の男を引き連れていた。アラガルとンガモである。ンガモは連合の将校の服を身に纏っていた。
「急のお邪魔で申し訳ありません」
八条は彼女にそう言って頭を垂れた。

「いえ」
金は突然頭を下げられていささか謙遜した。彼に頭を上げるように言った。
「顔をお上げ下さい。如何なさったのですか」
「状況が変わりまして」
八条は答えた。
「状況が」
「はい。ステッラの詳しい居場所が掴めました」
「本当ですか」
こんな時でも彼女の冷静さは変わってはいなかった。
「はい。ニューヨークです」
「ニューヨーク」
かってアメリカが地球にあった頃に最も繁栄した都市の一つであった。今では地球のごく普通の一都市という位置に置かれている。道が複雑に入り組み迷路の様になっている。隠れるにはもってこいの場所と言えた。
「そこに潜伏している模様です」
「我々の捜査により判明しました」
ドトール達三人がそう答えた。
「今あの街の奥深くに潜伏している模様です」
「そうですか」
そこまで聞いて金の目が光った。
「それではいよいよ最後の詰めに入りますか」
「はい」
八条は声を合わせた。
「チェックメイトです」
ドトールが言った。まるで岩の様に表情を変えない。彼はチェスを嗜むことでも知られているのだ。
「では最後の詰めはドトール長官達にお任せしましょう」
「はい」

三人は金の言葉に頷いた。
「お任せ下さい」
「わかりました」
金と八条はそれを認めた。こうして狐狩りの最後の一手が打たれた。

エウロパの諜報員はその数を大幅に減らしていた。そして彼等はドトール達の捜査通りニューヨークに集結していた。
「あの戦艦の情報は一体何だったのだ」
古ぼけたビルの地下室でヒソヒソと囁く声が響いている。
「偽りだったというのか」
「まさか」
裸の豆電球の下に数人いた。彼等はそれぞれ異なった服を着ており顔もそれぞれであった。だが皆白人でありそれだけが一致していた。連合ではあまり見られない光景である。
「いや、今思うと充分考えられる話だったな」
その中の一人がこう言った。
「そうだな」
そして別の者がそれに同意した。
「おそらく我々を誘き寄せる罠だったのだろう。撒き餌だ」
「撒き餌か」
他の者がその言葉を繰り返す。
「我々、そして特に貴女を狙ったものだったのでしょうね」
彼等はそこで奥に座る一人の女性を見た。そこには金色の髪に黒い瞳を持つ中年の女がいた。特に美しいわけでもないが細面で凛とした顔である。その顔は何処か狐に似ている。服は地味で動き易いズボンであった。
「私を」
彼女はそう言われて一言ポツリと漏らした。
「今まで彼等に地団駄を踏ませてきましたからね」

「はい」
皆その言葉に頷いた。
「ステッラ大佐、これからどうしますか」
その中の一人が彼女の名を呼んだ。彼女がステッラであった。噂の女狐である。
「これから」
「はい、どうしますか」
「逃げますか」
「情報部員が追い詰められた時にすることは一つ」
ステッラは静かな声で語った。
「姿を隠すだけ」
「わかりました」
彼等はそれを聞いて首を縦に振った。
「ではここを去りますか」
「すぐにも」
「了解」
こうして彼等はその場から姿を消した。そしてビルを出た。
外はもう夜であった。底冷えしていた。
「寒いな」
「ああ」
そう話しながら外に出る。辺りへの警戒は怠らない。
「待て」
一人があることに気付いた。
「どうした！？」
「気をつけろ」
先頭の男が小声で仲間に囁いた。
「何かおかしい」
「何か」
周りを見回す。だが何もなかった。
「いつもと変わりはないが」

「いや」
ここでステッラが出て来た。
「気をつけろ。いるぞ」
「いますか」
「いる、それもかなりの数だ」
ステッラには周りの真の姿が見えていた。彼女は先頭に出てこう言った。
「散開してここを去る。いいな」
「はい」
「落ち合う場所はわかっているな」
「無論です」
彼等は答えた。
「ではいいな」
「はい」
そして彼等は散った。それを上から見る一人の男がいた。ンガモであった。
「散ったか」
彼はそれを見下ろしながら呟いた。そしてトランシーバーを手にした。
「私だ」
彼は電源を入れた後でこう言った。
「散った。それぞれの配置で待ち伏せしろ」
「了解」
「わかりました」
トランシーバーの奥からそれぞれ声がした。ンガモはそれを聞くとトランシーバーを切った。
「よし。私も行くか」
彼はそこから姿を消した。その目は獲物を狙う狩人の目であった。
諜報員達はそれぞれ別れ何処かへ向かっていた。その足取りは走

ってはいなかったが、速く、そして目や耳は周囲への警戒を怠ってはいなかった。
何も語らない。二、三人でそれぞれ道を行き、歩く。彼等はある場所へ向かっていた。
その中の一人がニューヨークにある一つの教会の前まで来た。そして辺りを見回した後でその中に入った。
「俺だけか」
彼は礼拝堂の中で周りを見回して呟いた。だが彼は一人ではなかった。
「違いますよ」
奥から声がした。そして年老いた神父が姿を現わした。そう、神父である。
「貴方でしたか」
彼は神父の姿を見て胸を撫で下ろした。
「まさか奴等にここを知られたかと思いますよ」
「それは御安心下さい」
神父は優しい微笑みを浮かべてそれに答えた。
「彼等もここには手出し出来ませんよ」
「そうでしたね」
彼はそれを聞き緊張を解いた。
「教会でした、ここは」
「はい、教会です」
神父は思わせぶりにそう答えた。
「連合が手出しを出来ない唯一のエウロパの組織です」
ローマ＝カトリック教会は長い間特殊な位置にあった。エウロパにあり、多くの信者を擁しているが、連合にもその信者を多く抱えていた。むしろ連合の方が遥かに多い程であった。宗教人口は十兆に達すると言われる連合であるがその中でもカトリックの信者は多い。当然彼等にも教え導く役割を担う聖職者が必要である。だが、それは連合の中では選ぶことはできないのだ。

彼等の総本山はエウロパにある。従ってエウロパで選ばれた者が連合に派遣されるという形になる。神父等は実際には連合にいる者が選ばれるのだが枢機卿クラスになるとそうはいかない。緋色の法衣はかっては一国の君主に匹敵するとまで言われた権勢があった。彼等はエウロパで教皇自身により選ばれ、そして派遣される。事前に派遣される場所について調べられるのは言うまでもない。こうしたことからバチカンは連合に最も詳しいエウロパの中の勢力となっていた。当然彼等は信仰の保護等を理由にあくまで表向きはエウロパ政府にそうしたことを伝えはしない。だがそれは派遣される聖職者の中に諜報員を紛れ込ませれば済むことであった。バチカンはそれに気付きながら言わなかった。下手に政治的な問題を避ける為なのが表向きの理由であるが実際には多くの政治的な理由があった。バチカンは中世においては極めて世俗的、政治的な組織であった。この時代にもそれは残っていたのだ。

「そうでしたね」

「はい。ですから彼等もここには入っては来れませんよ」

教会に公の組織が入ることはやはり好まれなかった。政教分離もあるが信仰は人の心である。だからエウロパから連合に入る聖職者のチェックも緩くなるし教会にも監視が向かわなくなるのだ。エウロパがそこに付け込んでいるのはもう言うまでもないことであった。

「ところでロマーニ枢機卿はおられますか」

「はい、こちらに」

奥からもう一人姿を現わした。いや、二人であった。

一人は緋色の法衣を着た白人の老人であった。そしてもう一人は彼に従う形でやって来た。シスターであった。

「シスターミカエラに今案内されて来ました」

緋色の法衣の男はにこやかに笑ってそう答えた。

「シスターに感謝致します」

「いえ」

その尼僧はにこやかに微笑んだ。見ればステッラであった。

## 第七部第五章　新たなる戦雲その三

「私が案内したのではありません。神が導かれたのです」
「ふふふ、そうでした」
枢機卿は腹に何かあるような笑みを浮かべた。
「我々が今ここにいるのも神の御導きですな」
「そういうことになりますね」
神父はそれに応えた。
「もうすぐここに神に導かれた僕達がやって来ますよ」
そう言うと扉がまた開いた。
「ほら」
神父はそちらに顔を向けた。するとそこにはエウロパの諜報員の一人が立っていた。
彼等は次々にやって来る。そして中に入って来た。やがてかなりの数が集まって来た。
「これで全員ですか」
「はい」
ステッラは教会に入った者達の顔を見回してから枢機卿に答えた。
「これで全員です」
「ならばよろしい」
やはり腹に何かあるような笑みであった。
「さて皆さん」
枢機卿は彼等に語りかけた。
「全てはよろしいでしょうか。箱舟に乗ることは出来ますね」
「はい」
彼等はそれに頷いた。
「その為にここに来ました」
「ならばよろしい」
枢機卿はまた微笑んだ。

「それでは行きましょう。いいですね」
「はい」
彼等は枢機卿に導かれ奥に向かおうとする。だがその時であった。
「何処に行くのですか？」
誰かが問うた。
「はて、おかしなことを」
枢機卿はそれを聞きおかしそうに答えた。
「我等の行く場所は決まっております。そう、それは」
「エウロパだと言いたいのだな」
その声は急に険しいものとなった。その時であった。
教会の扉が開いた。そしてそこから多くの制服及び軍服に身を包んだ男達が入って来た。
「なっ・・・・・・！」
エウロパの諜報員も枢機卿達もそれを見て驚きの声をあげた。彼等の先頭にはあの男がいたのだ。
「ドトール長官！」
「私がここにいる理由はわかっているな」
彼は冷静な声で彼等にそう語った。その顔も冷静であった。
「ウヌヌ・・・・・・」
それに対してエウロパの者達は冷静さを失おうとしていた。その顔が歪んできた。
「さあ、答えてもらおうか」
ドトールはまた彼等に言った。
「ここに枢機卿殿と諸君がいる理由をな」
「クッ・・・・・・」
「逃げようとしても無駄だ」
彼は枢機卿と諜報員達に対してそう言った。奥から今度は軍服の一団が出て来た。ンガバとアラガルである。
「これで逃げ道はない」
ドトールは詰めるように前に出る。

「さあ、どうする」
「どうするか」
彼等は血走った目をドトールに向けた。
「もう逃げる場所はない。大人しく手を上げれば捕虜として扱う」
「枢機卿、貴方も聖職者として扱わせて頂きます。よろしいでしょうか」
「・・・・・・わかりました」
彼は止むを得ず頷いた。そして手を預けた。
「行くか」
「はい」
ドトールの指示に従い出ようとする。だがここでステッラは手錠をかけられる寸前で逃げた。
「しまった！」
彼女はすぐに逃げる。囲みを突破して裏から逃げる。
「追え！」
「逃がすな！」
すぐに追う。だが彼女の足は速い。そう簡単には捕まりそうにもなかった。
彼女は教会を出た。追う連合の警官や軍人達もだ。その先頭にはンガモがいた。
捕まりそうになる。だがステッラはここで法衣を脱ぎ捨てた。そしてそれを警官や軍人達に投げつける。
「うわっ！」
ンガモは咄嗟にそれを避けた。だが他の者は違っていた。それいとらわれ足が鈍った。ステッラはその間に逃げ去っていく。信じられない速さであった。
「まずいな」
ンガモはそれを見て呟いた。
「こうなったら切り札を出すか」
彼はそう言った。そして走りながら腰のトランシーバーを取り出

した。
「私だ」
トランシーバーを口元にあてる。
「今ステッラが逃げている。わかっているな」
「はい」
トランシーバーの向こうから返事が返って来た。
「丁度そちらに向かっている。いけるか」
「お任せ下さい」
トランシーバーの向こうの声が答えた。ンガモはそれを聞いて締まった顔で頷いた。
「頼むぞ」
「はい」
これでトランシーバーを元に戻した。そして前に目を戻す。
「どうなる」
ステッラはやはり速い。そのまま彼等を引き離すかと思われた。こちらの銃撃は照準が定まらない。それを見越して彼女は道をジグザクに歩いていた。
そのまま逃げられるかと思われた。しかしその時であった。
不意にその動きが止まった。そして前に転がり倒れた。
「やったか」
ンガモはそれを見て言った。それから後ろにいる者達に顔を向けた。
「捕まえるぞ」
「はい」
彼等はそれに従い前に出た。そして倒れるステッラを取り囲んだ。だが彼女はもう事切れていた。
「死んでいます」
「何っ！？」
ンガモはそれを聞いて声をあげた。
「どういうことだ」

彼はステッラの側に来た。見れば銃撃を受けたのか負傷している。しかしそれは右足であった。急所は外れている。
警官達が警戒しつつステッラを見る。口を開ける。そこには黒い液体があった。
「毒のようですね。おそらく口の中にカプセルがあったのでしょう」
「カプセルか」
「はい。よくある話です。諜報員には」
「そうだな」
彼もそれはよく知っていた。二十世紀にはとりわけよくあった話である。
「おそらくこれからの取調べで情報が漏れるのを怖れたのでしょう」
「そして自ら死を選んだのか」
「そのようです」
「ふむ」
ンガモはその精悍な顔を考える顔にさせた。
「敵ながら見事という他はないな。自らの命を絶って情報を守るとは」
「はい」
警官や軍人達もそれに頷く。
「だが既に他の諜報部員達は抑えている。これでかなりの情報がわかるぞ」
「そうですね」
周りの者はそれに答えた。
「苦労した介はありました。今まで」
「ああ」
ンガモはその言葉に頷いた。
「これでとりあえずは終わりだ。だが」
彼は言葉を続けた。
「次のはじまりなのだろうな。軍人の仕事はいつもそうだ」
そう言うと教会に戻った。ステッラの亡骸は部下達により教会に

運び込まれた。
　こうして戦艦の調査を行ったエウロパの諜報員達はその全てが捕らえられた。また、それに協力にしていたロマーニ枢機卿も拘束され、取調べを受けることになった。その結果恐るべきことがわかった。

## 第七部第五章　新たなる戦雲その四

エウロパはやはり連合にバチカンのルートで諜報員を送り込んでいたのだ。そしてそれには枢機卿までが関わっていた。これは一大政治スキャンダルであった。

連合の者の多くはこれに激昂した。そしてエウロパへの敵愾心をさらに高くした。エウロパはそれを事実無根だと主張したが証拠はあった。それにバチカンは口をつぐんだ。結果としてエウロパが連合と対立する関係となってしまった。

元々犬猿の仲であった両国の関係はさらに悪化した。今までは対峙する程度であったが最早それは一触即発の状態であった。今にも戦争が起こりそうな状況となっていた。

「大変な状況になりましたね」

八条は電話で伊藤と話をしていた。当然各国も安穏としている状況ではなくなっていた。

「そうね。中央議会は凄いことになっているでしょう」

「ええ、それはもう」

八条は答えた。

「強硬派が勢力を持っています。エウロパを討つべしと。政党に関係なく」

「そうなの、それはこっちもよ」

伊藤はそう答えた。

「閣僚の間でも強硬派の意見が強いわね。私はそれを抑えているけれど」

「抑えておられるのですか」

「ええ。まだ準備も何もできていない状況だし」

「準備が」

「そうよ。戦争準備はまだ何もしていないでしょう？」

「ええ」

八条はそれを認めた。
「まだ何も決まってはおりません」
「そうでしょうね。けれどそっちでも強硬的な意見が強いでしょう」
「はい。特に金内相が強く主張しておられます。エウロパと戦うべきだと」
「彼女が」
「そうなのです。これは由々しき事態だと。エウロパを討つべきだと主張していますよ」
「金内相が考えもなしにそんなことを言うとは思えないわね」
「はい。おそらく何か考えがあってのことでしょう。おそらく連合にとって何かメリットがあることかと」
「メリット」
伊藤はそれを聞いて暫し考え込んだ。
「こう言っては何だけれどエウロパと連合の戦力差はかなりのものがあるわよ」
「はい」
彼は答えた。
「それで得られるものといえば何かあったかしら」
「彼女はバチカンについて色々と話していますね」
「バチカン！？」
「はい、教皇がエウロパにあるから今回の事件は起こったのだと。それをなくすにはどうすればいいか」
「バチカンをこちらに持って来るしかないわね」
「はい。内相はそれを強く主張しています。まずは外交交渉を行うべきだと言っていますが」
「エウロパがそんな要求飲む筈もないわね」
「それはわかっております。その時に軍を動かすべきだと」
「そちらではそれに対しての支持あどうなの？金内相の考えには」
「高いですね」
八条は答えた。

「バチカンが利用されたのは事実ですし。閣僚の殆どが彼女に賛同しています」
「君はどうなの？」
「私ですか」
「ええ、そうよ」
伊藤は電話の向こうで頷いた。
「この件についてはどう考えているのかしら」
「そうですね」
八条は一呼吸置いてから話をはじめた。
「私はやはり今回の件は由々しき事態だと受け止めています。至急に何らかの対策を講ずるべきです」
「じゃあ金長官とは大体同じなのかしら」
「それは少し違います」
しかし彼はそれには首を横に振った。
「私は彼女とは少し考えが違います」
「というと」
伊藤はここで問うた。
「戦争は避けたいと考えております」
「あら、意外ね」
金はそれを聞いてくすりと笑った。
「国防相が穏健派だなんて」
「職務は関係ありませんよ」
八条はそう返した。
「これは私個人の考えです」
彼はそう断ったうえで話をはじめた。
「今我々にはエウロパに関する情報があまりにも少な過ぎます」
「エウロパの地理や内情に情報が少ないということね」
「はい。例え幾ら国力差があろうともこのまま侵攻しても苦戦は免れません。地の利は彼等にありますし」
「当然彼等もそれを利用してくるでしょうね」

「ええ。ですから外交交渉が決裂してすぐの開戦は止めるべきです」
「わかったわ」
彼女はそれを聞いてまた頷いた。
「君の考えはよくわかったわ」
「有り難うございます」
「ただね」
だが伊藤はここでまた言った。
「情報は集め方が色々あるわよ。確かに私達はエウロパについての知識は少ないけれど」
「何か御考えが」
「ないわけじゃないわね」
伊藤はここで微笑んだ。
「エウロパに近い国なら結構知っているんじゃないかしら」
電話の向こうでそう言って微笑んでいたのだ。

## 第七部第五章　新たなる戦雲その五

「これだけ言えばわかるでしょ？」
「はい」
八条にはよくわかった。彼も笑みを作った。
「ではあちらに使者を送るよう首相や外相にお願いしてみます」
「そうね、それがいいわ」
伊藤は彼が自分の意を汲んだのを聞いて喜んだ。
「けれど話はそれからが全てのはじまりよ」
「はい」
「気をつけてね。何といっても連合にとってこうしたことははじめてだから」
「はい」
八条はまた頷いた。
連合は設立当初から戦争というものがなかった。各国間の利害の衝突は別の土地への進出等で防いでいた。資源や食糧、場所があれば人は戦争にまでは至らないということであった。エウロパは遮断していた。対外的にも対内的にもそうした面では安定していたのである。確かに海賊やテロリストには悩まされてきたが、戦争とは無縁の歴史を歩んできたのである。従ってその兵器も海賊やテロリストに対処したものであった。
「失敗は許されないわよ」
「わかっております」
八条は伊藤の言葉に強い声で返した。
「その時は見ていて下さい。必ずやり遂げてみせましょう」
「頼むわよ」
伊藤はそう言葉を返した。
「連合にとってもね。貴方にかかっているのよ」
「はい」

八条はまた頷いた。
「まずはあちらからの情報ですね」
「ええ、そうよ」
「わかりました。それでは」
「健闘を祈るわ」
それで電話は終わりであった。電話が切れると八条はすぐに顔を上げた。そしてまた電話を手にした。
「私です」
彼はアッチャラーンに電話をかけていた。
「はい、すぐにお願いします」
彼は何やら話をしていた。
「ええ、わかりました」
話は順調に進んでいるようである。
「ではそれで」
そして切った。だが電話はまだ終わりではない。
「どうも」
今度はカバリエのところであった。また話をする。そして彼は少しずつ準備を進めていった。連合とエウロパの間の浪が高くなろうとしていた。

南方を完全に掌握したアッディーンは首都アスランに戻っていた。彼はそれまでの道のりを長く感じていた。
「長かったな」
久し振りに司令室に戻るとそう呟いて席に着いた。
「長かったですか」
「ああ」
ハルダルトにそう答えた。
「アスランがこんな端の方にあるとは思わなかったな」
そう言いながら後ろにある三次元地図を見る。そこにはサハラ全土の地図がある。

見ればオムダーマンはサハラの西の端である。こうして見ると僻地にあると言ってよい。アスランはその中でもさらに西の方にあるのである。
「瞬く間に広くなったが」
「はい」
「その分首都は端に行った感じがあるな。何かと不都合だ」
「そうでしょうか」
だがハルダルトはそれには懐疑的であった。
「私はそうは思いませんが」
「それはアスランに慣れているからだろう」
アッディーンは彼にそう反論した。
「こうして見るとわかる。そろそろ首都機能についても考えなくてはな」
「はあ」
「だがそれは今すぐでなくてもよい」
しかし彼は焦ってはいなかった。
「これからどうなるかわからないところもあるしな」
「といいますと」
「とりあえずは首都はオムダーマンの奥にあるな」
「はい」
「言い換えるとそれだけ安全な場所にあるということになる。戦争の時にはな」
「成程」
ハルダルトはそれに大いに納得した。
「それは確かに防衛上有り難い話ですね」
「政務を行ううえでは支障が出る怖れもあるが。今だとギリギリといったところか」
「ギリギリですか」
「そうだ、これ以上領土が増えると考えなくてはいけないかも知れないが」

その目は単に軍事のみを見ている目ではなかった。何時しかより広いものを見ていた。
「今の国土だとな。そこまでは至ってはいない。だがこれ以上広くなると真剣に検討する必要があるな」
「わかりました」
「この話はよく考えていてくれ。意見を求める機会があるかも知れない」
「はい」
「そしてだ」
彼はまだ考えていた。
「次の敵だな、問題は」
「次ですか」
「そうだ。流れは大きく変わってきている」
アッディーンはそう語りはじめた。
「サハラは今まで多くの国に別れていたな」
「はい」
「だが今ではそれは三国にまでなった。ここまでくると自然と流れも変わる」
「といいますと」
「統一だ」
アッディーンはそう言い切った。
「今まで願っていても果たせなかったことだ、我々がな」
「統一ですか」
「ああ」
彼は答えた。それはサハラの者達が一千年に渡って求めながら果たせなかったものだ。それが成しえるのはアッラーだけとさえ言われていた。
「遂にそれを考える時に来たのかもな」
「それは我々の手で」
「それはわからない」

だがアッディーンはそんな彼を制した。
「ハサンかティムールか。それはわからない」
彼は決して過信してはいなかった。オムダーマンの国力も冷静に見ていたのだ。それに基づいてハルダルトにそう語った。

## 第七部第五章　新たなる戦雲その六

その声も顔も落ち着いたものであった。
「だが我々がやらなければどうなるかはわかるな」
「はい」
それは容易にわかることであった。オムダーマンがサハラを統一しなければ滅亡しかないのだ。最早生き残りの意味も含んでいた。
「生き残りたいな」
「はい」
それを否定する者もいなかった。
「無論です」
「よし」
アッディーンはそれを聞いて満足そうに頷いた。
「それならばよいのだ。近いうちにまた戦う時が来る」
彼は静かな口調でそう語った。
「サハラを統一するのは我等だ。わかっているな」
「はい」
「その為に私がするべきことは」
彼は言葉を続けた。
「勝つことだけだ。それ以外には何も必要はない」
軍人として語った。彼はあくまで軍人であった。しかし最早それだけではなくなってきていた。最早アッラーは彼に軍人以上のものを求めていたのである。
「憲法の改正案はどうなっているか」
ブワイフは自身の執務室においてハラーイブに質問していた。
「はい」
ハラーイブは一呼吸置いたうえで話しはじめた。
「国民の世論調査によりますとかなりの高支持率であります。七割を優に越えております」

「そうか」
彼はそれを聞いて満足そうに頷いた。
「ならば問題はないな」
「はい」
ハラーイブはまた頷いた。
「この副大統領制ですが」
「現役武官にも道を開く。非常時の為にな」
ブワイフはそう語った。
「だがそれはあくまで非常時の為だ」
だがその口調は普段のそれとは違っていた。
「これからはハサン、そしてティムールが相手だ。これまでの相手とは違う」
「はい」
「強国だ。油断はできない、決してな」
険しい声であった。どちらかというとざっくばらんな普段の様子は何処にもなかった。
「その為の補佐官の意味もあるのだ」
「そうだったのですか」
「うむ」
ブワイフは頷いた。
「シビリアン＝コントロールは確かに優れたシステムだと思う」
彼は文民統制について語りはじめた。
「しかし硬直させていいものではないのだ。軍人の考えも取り入れなくてはな」
「はい」
ハラーイブもそれには賛成であった。だが彼女の考えは少し違う。
「しかし軍人はあくまで専門職です。軍人だけでは偏りが生じるかと」
彼女の懸念はそれであった。だがブワイフはまだ考えがあった。
「わかっている」

すぐにそう答えを返した。
「副大統領はもう一人置く。二人だ」
「二人ですか」
「そうだ。もう一人は」
ここでブワイフはハラーイブを見据えた。強い視線であった。
「君だ」
そしてその強い視線を浴びせながら彼女にそう言った。
「私ですか」
「そうだ」
彼はそう答えた。
「首相には副大統領も兼任してもらう。席次は軍人より上とする」
「わかりました」
「それならば問題はあるまい。政治と軍事、両方の意見が出る。大統領はそれをまとめるのだ」
「成程」
「そして軍事の副大統領だが」
ブワイフは視線を動かさせた。
「誰がいいと思うか」
そして再びハラーイブを見据えた。問う目であった。
「それはもう答えが出ているかと思います」
彼女はそれに対してそう返した。
「彼しかいないでしょう」
「そうか」
ブワイフはそれを聞いて頷いた。
「やはりそう思うか」
「はい」
ハラーイブは答えた。
「他に適任者は思い当たらない程です」
「わかった」
彼は答えた。

「では法案が通過したらすぐ彼に要請するとしよう」
「それが宜しいかと」
彼女は薦めた。
「全てはこれからのオムダーマンの為です」
「オムダーマンの為だけではない」
だがブワイフはここでそう反論した。
「といいますと」
ハラーイブはその言葉に少し疑念を感じた。
「サハラの為になるかもな。彼の力は」
「サハラですか」
「そうだ」
彼は答えた。
「最早一司令官に留まっていいものではなくなっているからな。存分に活躍してもらおう」
「わかりました」
「どのみち私はそろそろ引退だ」
ブワイフは悟った声で呟くようにして言った。
「後を受け継いでくれる者も必要だ」
「はい」
「それは君にとも思ったのだが」
「残念ですが」
だがハラーイブはそれを拒絶した。
「私は国家元首には向いてはいないかと存じます」
「そうなのだ」
ブワイフは残念そうに答えた。
「君は確かに優秀だ。しかしそれだけではないのだ」
「はい」
国家元首には政治家としての能力以外のことが求められる。それはハラーイブ自身が最もよくわかっていた。
「何かあったら彼が」

「うむ」
ブワイフはまた頷いた。
「彼の補佐を頼むぞ」
「わかりました」
二人はこうして来たるべき時に備えていた。やがて新しい憲法が出された。副大統領を二人置くといったものであった。それは国会及び国民の投票を経て通過した。そして施行されることになった。
アッディーンは副大統領に任命された。軍の最高司令官は大統領、そしてその代理が国防長官であるのには変わりはなかったがその権限は国防長官に次ぐものとなった。そしてその地位はオムダーマンにおいては第二となった。遂に彼は政治家にもなったのである。
「難しいな」
新しく設けられた副大統領に執務室に座るとこう言った。服装は軍服のままである。
「軍事担当の副大統領とはな。今まで聞いたことがない」
「そうでもありませんぞ」
参謀総長であるマナーマは彼に対して笑いながらそう言った。
「中世には結構そういった官職がありました」
「しかし今は」
時代が違うのでは、と言おうとした。しかしマナーマの方が先であった。
「いや」
彼は言った。
「根幹は同じです。人の作ったものなのですから」
「そうでしょうか」
今ではアッディーンの方が役職は上である。だがそれでも対応は変えることはなかった。マナーマに敬意を払っているのだ。これはアジュラーンに対しても同じである。なお彼は宇宙艦隊司令長官の役職をそのまま兼任している。その権限はかなりのものであった。
「それに指揮権は大統領、国防長官の下になっていますね」

「系統上では」
「シビリアン＝コントロールは徹底されています」
そうであった。確かにその権限も地位も高いがそれはあくまで文民統制の中においてであった。むしろオブザーバーといったところであった。
「ですからそれについては特に気にやまれることはありません」
「はあ」
アッディーンはそれに頷いた。まだいささか納得していなかった。
「そういうものですかね」
「それはすぐにわかってきますよ」
マナーマはまた笑った。
「さて、今閣下が為されることは」
「はい」
「お仕事です。山の様な書類が閣下の決裁を待っておりますぞ」
「やはり」
それを聞いて顔を顰めた。デスクワークは好きではないのだ。
「早速取り掛かって下さい。よろしいでしょうか」
「わかりました」
宇宙艦隊司令長官の頃からデスクワークには奔走していた。だが今執務室に運ばれてくる書類はその時よりさらに多かった。しかも宇宙艦隊司令長官の仕事はそのままであった。
「これも仕事ですね」
「そういうことです」
彼は溜息はつかなかった。ただ目の前に次々と運ばれて来る書類に目を通しサインをはじめた。彼には休んでいる暇はなかったのである。そして彼の休息は何時訪れるのかわかったものではなかった。

第七部　　完

2005.1.22

# 第八部第一章　軍人と騎士その一

軍人と騎士

エウロパがバチカンを利用して諜報部員を連合内に送り込んでいた事件が明るみになって以降双方の関係はさらに悪化していた。それは最早開戦前夜であった。

そうした中で双方は互いに準備を整えていた。それは幾つかあった。

まずは戦争の回避である。これは双方共無駄な被害を嫌ったからである。ハサンを通じてその交渉は密かに行われていた。だがそれは期待薄であった。

そして情報収集。これは連合が顕著であった。彼等は戦争の準備を整えながらエウロパの情報収集を行っていたのである。

だがそれは容易ではなかった。元々エウロパに潜伏している連合の諜報部員の数は少なかった。これは人種が関係していた。混血が進んでいる連合においてはエウロパの様に比較的純粋な白人は非常に少なかったのである。整形や変装により潜伏することもあったが、それにも限界があった。結局そうした理由でエウロパに潜伏している連合の諜報部員はごく僅かであった。逆はあってもそれはなかったのである。

こうしたことから連合に入るエウロパの情報は少なかった。地形はおおよそのことがわかっているだけであり、各惑星や軍事基地等についての知識は絶望的な程であった。これは深刻なことであった。

それを打開する為に彼等はサハラ各国に情報の提供を依頼していた。ハサン、そしてティムールがその対象であった。

「連合がか」

ハサン国王ハルジャ五世にもそのことは耳に入っていた。それを息子であるクシードから聞いていた。

「はい」
クシードは答えた。彼は人柄はよいが国王としては凡庸と評される父の補佐役としてこの国においては絶大な権限を持っているのである。
「既に使者が来ておりますが」
「そうか」
父王はそれを受けて頷いた。
「どうするべきだと思う」
彼は息子に相談してきた。
「連合に我等が持っている情報を渡すべきかどうか」
「それは決まっております」
クシードは即答した。
「連合と我等の関係を考えますと」
連合とハサンは密接な交易を結んでいる。それによってこの国は莫大な利益を得ているのだ。それだけではない。連合と国境を接している。何かあれば連合の脅威をまともに受ける状況なのだ。そうした状況では答えも決まっていた。
「喜んで提供するべきです」
「そうか」
彼等は今王の寝室にいる。ここには誰も入ることができない。実質的に密室での会談であった。
「ただし条件を提示するべきです」
「条件」
それを聞いた父王の目が動いた。
「それは一体何だ」
「貿易で優遇処置をとってもらうなり技術提供なり。連合には優れたものが多くあります故」
「ふむ」
父王はそれを聞いて考え込んだ。彼は今ベッドの側の椅子に座っている。クシードはその横に立っている。

「交渉は私が行いますが」
「頼めるか」
「はい」
彼はそれに頷いた。
「お任せ下さい」
「では頼むぞ」
それで決まりであった。王は彼の提案をよしとした。これはいつも通りであった。彼は息子にその権限のかなりを委ねていた。ただ祭務だけは違っていたが。
クシードは父王に挨拶を済ませた後その場を退いた。そして王太子宮に入った。ここは今やハサンの実質的な最高意思決定機関であった。
「お帰りなさいませ」
従官達が彼を出迎えた。彼は愛想のよい笑顔でそれに応えた。
「うむ」
彼の笑顔には定評がある。ハサン一の笑顔とさえ言われる程である。その笑顔が今こぼれた。それだけで従官達は心を癒された。
「殿下」
そのうえで彼に声をかけた。
「どうした」
「実は」
従官達の中の一人がそっと彼に耳打ちをした。
「連合の使者が来ております」
「そうか」
彼はそれを受けて頷いた。
「何処だ」
「宮殿の奥です」
彼は答えた。
「どうぞこちらに」
そしてクシードを案内した。やがて彼は王太子宮の奥にある応接

室の一つにやって来た。そこには連合の軍服を着た男が一人いた。
「どうも」
左右の瞳の色が異なる美男子である。彼は立ってクシードを迎えた。敬礼をする。

## 第八部第一章　軍人と騎士その二

「連合のディカプリオです」
「貴方が」
「はい」
ディカプリオは答えた。彼は連合の元帥の一人としてその名を知られているのだ。
「今回は連合の使者として参りました」
「武官がですね」
「はい」
その返答には複雑な意味があった。
連合はシビリアン＝コントロールが常識である。どの国においてもそれは変わらない。最高司令官は国家元首である場合が殆どであるがそれは文民である。国王や大統領は軍人ではない。国王は多分に儀礼的な一面が強いがそれでもやはり軍人ではないのだ。尚連合の二人の皇帝であるがエチオピア皇帝は軍の最高司令官である。だが日本においては天皇は軍の最高司令官ではない。首相が務めている。これもまた文民であるのは言うまでもない。そして国防相等軍事を統括する閣僚もまた文民である。時として軍事には全く不向きな人物が就任する場合もある。これもまた政治の複雑な事情の一つである。なお八条は元軍人であるが文民にあたる。彼はもう軍を退役しているからだ。軍を離れればもう文民なのである。
従って武官が使者に来ることは普通はない。通常は外務官僚がその任を果たす。それは例え元帥であっても同じことである。
だが今はディカプリオが目の前にいた。それだけでかなり異様なことであった。
「今回は特別な任務で参りました」
彼はそう答えた。
「それは何でしょうか」

「はい」
クシードの問いにキビキビと答える。
「そちらにあるエウロパの情報ですが」
「はい」
来た、と思った。予想通りである。
「どうなっているのでしょうか」
「はい」
クシードはそれを受けて答えた。
「お知りになりたいのですね」
「勿論です」
その為に来たのであるから当然であった。
「成程」
これは心の中の言葉であった。何故彼が今ここに使者として来たのかよくわかる。情報部長を。
「どういったものでしょうか」
「はい」
クシードはそれを受けて頷いた。
「かなりの情報が集まっております」
「ほう」
ディカプリオの二色の目が光った。
「どのような」
「まず地図ですが」
彼は話しはじめた。
「エウロパの星系及びその惑星の細かい部分までわかったものを持っております」
「ほう」
その目がさらに光った。
「そして国力ですが」
「ある程度までは認識しておりますが」
「それだけではありません」

彼はここでこう言った。駆け引きである。
「兵力がどのようなものかまでは御存知でしょうか」
「二百個艦隊程でしたな」
「ええ」
クシードは頷いた。
「しかしそれは通常戦力のみです」
「まだあるのですか」
「予備の兵力が。彼等は貴族制ですから」
貴族について言及した。
「彼等の持つ兵力も入るのです」
「それがありましたか」
貴族の中にはかなりの財産を持つ者もいる。そしてその財により私兵を持っているのである。その兵力もかなりのものとなっていた。
「それだけではないのです」
「といいますと」
ディカプリオは完全に聞き役に回っていた。
「志願兵もあります。危急の際の」
「志願兵」
「はい」
彼は答えた。
「貴族達には独特の意識がありまして」
「高貴なる者の義務ですね」
「はい」
この時ディカプリオの顔が微かに嫌悪感に歪んだ。これは連合の者の特色であった。
「エウロパの貴族達はかなりの特権を持っております」
「そうですね」
声にも嫌悪感が出ていた。
「何の為なのかは理解し難いですが」
「それはまあ」

クシードはここで言葉を濁した。
「しかしそれには義務が生じます」
「当然のことです」
ディカプリオは辛辣に答えた。
「特権に貪っている者など連合においてはおりません」
特権があればそれを活かすべし。それは色々ある。何も権力だけではないのだ。様々な状況に応じて優遇処置等もある。それもまた特権なのである。連合においてはそうしたことも複雑にあった。
「それは彼等も同じ考えなのです」
「そうなのですか」
やはりその彫刻の様な顔が微かに歪んだままであった。
「それに基づいて彼等は志願するでしょう」
「どれ程になりますか」
「そうですね」
クシードは考えた。
「おおよそですが十個艦隊程には」
「そうですか」
「少なくとも、ですよ」
そう付け加えた。
「かなりの戦力が集まると思われます。総勢で三百個艦隊は優に越えるでしょう」
「そこまで」
「ええ。彼等も必死ですからね。それでも少ない程でしょう」
「わかりました」
ディカプリオの顔は嫌悪感から真剣なものになっていた。
「それで話は戻りますが」
「はい」
「地図は何処にありますか」
「ええ。それは」
彼はそれについての話をはじめた。こうして連合はエウロパの地

図及び軍事基地の情報を入手したのであった。

## 第八部第一章　軍人と騎士その三

使者はシャイターンのところにも来ていた。それは参謀総長である劉と宇宙艦隊司令長官マクレーンであった。ここには二人が来ていた。

「ようこそ」

シャイターンは自ら二人を出迎えた。だがあくまで非公式の会合である。

「はい」

二人は敬礼した。それで答礼とした。

「お話はわかっております」

シャイターンはすぐにそう切り出した。

「エウロパのことですね」

「はい」

二人はまた答えた。

「既に地形及び軍事基地のことはわかっているのですが」

「ほう」

それを聞いたシャイターンの目が微かに細くなった。

「それは凄い」

「まあ色々とありまして」

ハサンから入手したことは伏せている。だがシャイターンはそれを知っていた。だがあえてここでは口には出さないことにしたのである。

「我々からは何を欲しいのでしょうか」

「人についてです」

劉が答えた。

「人」

「はい。エウロパのどの艦隊が何処にあるのか。そしてその編成及び高官達の配置等です。それについての情報を欲しいのですが」

「かなり細かいですね」
「はい。ですが」
マクレーンが言う。
「必要な情報であります。我々にとっては」
「わかりました」
シャイターンは頷いた。
「ですが一つ疑問に思います」
「と言いますと」
密室で二人の声が響いた。
「それを我々が持っていると思っておられるのですか」
シャイターンは二人を見据えながら問うた。
「このティムールが」
「はい」
二人は即答した。
「そう確信しているからここに来たのです」
「シャイターン主席」
二人は言った。
「貴国の情報網については知っているつもりです。そしてその殆どがエウロパに向けられていることも」
「ふむ」
シャイターンは答えなかった。否定はしなかった。だがここで三人は互いにあることを隠していた。シャイターンは確かにその諜報網をエウロパにかなり向けている。だがそれはエウロパだけでなくハサンやオムダーマンに対してもである。連合やマウリアにはまだ必要がない故向けていないだけなのである。
「では知っている限りのことをそちらにお伝えしましょう」
「おお」
二人はそれを聞いて喜びの声をあげた。だがシャイターンはまだ笑ってはいなかった。
「ですが一つ条件があります」

「条件」
「はい」
彼は答えた。
「その条件とは」
ハサンは交易に際するさらなる優遇処置であった。これはハサンにとって至極当然な要求であった。交易国家たる所以である。
「同盟です」
「同盟」
「はい。連合と不可侵条約を結びたいのですが」
「不可侵条約ですか」
「そうです。我々は連合に対して非常に好意を持っておりまして」
外交上でのリップサービスである。
「それで今後共友好関係を結びたいのです」
「そうなのですか」
「お願いできますか」
「お待ち下さい」
だが二人はこの場ではそれを断った。
「何故でしょうか」
「我々の一存でできるものではありません」
「左様ですか」
「はい。これは国防省及び外務省と話をしてからになります。暫くお時間を頂きたい」
「確かハサンとの交易に関する条約はすぐに済んでおりますが」
「ええ、それは」
流石によく知っていると思った。だが二人はそれを顔には出さなかった。
「あの時は事前にそうした話もありましたので」
「そして使者の中に外務省や商務省の者もいたのです。それと合わせての話でした」
「そうだったのですか」

「はい。ですから今ここで条約を結ぶことを約束は出来ません」
二人はそう答えた。
「わかりました」
シャイターンはそれに頷いた。
「それではとりあえずはそちらの返答待ちということで」
「ええ、それで」
二人はそれに頷いた。
「それでは情報の提供もそれまで保留ということで」
情報を持っているということを告白した。撒き餌であった。
「よろしいですね」
「はい」
二人の答えは決まっていた。そして彼等はこの話をまず八条にあげた。マクレーンが電話をした。
「そうだったのですか」
遠距離用通信電話でそれを受けた彼は頷いた。
「はい。これは政治的な話になるものと思いまして」
極秘の情報用電話である。持っているのはごく一部の者達だけだ。彼等はそれを使って話をしていた。
「長官にお話しました」
「わかりました」
彼はそれを受けて答えた。
「よい判断だったと思いますよ」
「有り難うございます」
「条約となると一存ではできませんからね」
「はい」
「後は私が大統領や外相にお話をしておきます。御苦労様でした」
「といいますと我々はこれで帰国ですか」
「そうなりますね」
彼は答えた。
「政治的な問題です。それに」

「それに・・・・・・？」
「シャイターン主席が何を考えておられるのか、見極めたいと思います」
「彼がですか」
それを聞いたマクレーンの目の色も変わった。
「どういった印象を受けられました？」
八条はマクレーンに問うた。
「危険な香りがしますね」
マクレーンはそう答えた。
「一見美男子ですが」
「はい」
「それはあくまで仮面の様な気がします。その裏にはとんでもない野望があるものかと」
「野望ですか」
「はい。おそらく我々との同盟もそれが為でしょう」
「わかりました」
八条はそう答えた。
「それではこちらも対処の方法があります」
「どうなさるおつもりですか？」
「それは御二人が帰られてからお話します」
そしてこう語った。
「宜しいですね」
「異存はありません」
マクレーンはそう言うしかなかった。彼も軍人である。上官の命令には従う。
「それではお待ちしています。ハンバーガーでも食べながらお話しましょう」
「豆腐バーガーは駄目ですよ」
「わかっております」
最後は軽い話で締めた。そして八条は電話を切った。

「どうでしたかな」
電話の向こうにいた劉がマクレーンに話の結果を問うてきた。
「やはり大統領にまでいきますな、この話は」
「当然でしょうな」
これはわかることであった。
「では我々は後は本国で詳細を報告するだけですね」
「ええ」
マクレーンはそれに頷いた。
「ではすぐにここを経ちますか」
「長官がハンバーガーを用意して待っておられるそうですよ」
「ほう」
それを聞いた劉の目が変わった。
「私は豚肉のハンバーガーが宜しいですね」
「少なくとも長官のお好きな豆腐のハンバーガーは勘弁して欲しいと申し上げておきましたぞ」
「それは何より」
劉はそれを聞いて笑みを浮かべた。
「私もあれは少し・・・・・・ですからな」
「全くです」
特にマクレーンは遠慮したいようである。
「日本人はいつも思わぬアイディアを出しますが」
「それが他の者にもいいとは限らないのです」
そういうことであった。彼等は豆腐のハンバーガーは好きではないのだ。ただ八条は好きである。これも好みの問題であった。

## 第八部第一章　軍人と騎士その四

二人は地球に帰るとすぐに国防省に来た。そして八条の前に来た。
「只今帰りました」
「はい」
八条は執務室で二人の敬礼を受けた。
「サハラはどうでしたか」
「はい」
二人はそれを受けて説明をはじめた。
「やはり砂の星が多いですね。独特の風景です」
「しかも星系自体が複雑な地形です。ブラックホールや磁気嵐等が連合よりも遥かに多いです」
「そうですか」
八条はそれを聞いて思うところがあった。
「話には聞いていましたがかなり険しい場所のようですね」
「そうですね」
二人はそれに答えた。
「少なくとも連合の比ではありません。ハサンはまだましでしたがティムールに入りますと」
「より険しくなっていったというのですね」
「その通りです」
「ハサンは私も行ったことがありますが」
「はい」
「その時もかなり険しい場所が多いと思いましたが。それ以上だとは」
「南方はさらに凄いようですね」
ついこの前アッディーンが併合した場所である。
「通るのは困難かと思われます。まあ我々がサハラに兵を送ることは殆どないでしょうが」

「ですね」
少なくとも彼等はこの時点ではそう考えていた。
「ただ何かと参考にはなりました」
「それは何より」
八条にとってはそれもよいことであった。
「そして条約ですが」
ここで話を本題に持って来た。
「はい」
「シャイターン主席が申し出て来たのですね」
「その通りです」
二人は答えた。
「おそらく何かしらの思惑があるものと思われます」
「ふむ」
それを聞いて考え込む。
「シャイターン主席についても少し聞いたことがありますが」
天才的な戦術と政治、そしてカリスマ性。若き英雄というのが連合における彼の評価である。アッディーンと並んで人気のあるサハラの者であった。
「ただそれだけではないと」
「そうですね」
二人は答えた。
「少なくとも我々はそう思いました。彼と会って」
「わかりました」
八条はそれに頷いた。
「シャイターン主席についてもよく調べておきましょう」
「お願いします」
「そして条約は電話でお話した通りです」
「はい」
「ただ、シャイターン主席ですが」
ここで二人の目の色が再び変わった。

「彼が？」
「はい。近い将来ですが」
「何かありそうですか」
「おそらく。彼は今後サハラにとって最も重要な人物の一人となっていくのではないかと思います」
「その根拠は」
「勘でしかありませんが」
マクレーンが答えた。
「私もそれは同じです」
劉も同じ意見であった。
「ただそれに値する能力はあります」
「そうですか」
八条もそれはわかっているつもりであった。
「では今後のサハラは彼を注視していきますか」
「それが宜しいかと。それにティムールの国力の伸張は目覚しいものがあります故」
「そうですね」
これは既に連合でも伝わっていることであった。
「今はまだ第三の勢力ですが」
「これからもそうとは限りません」
「それでは今後はサハラにも目を向けていくのがいいのですね。サハラがこれ以上動くとなれば我々にも影響があります」
「それが宜しいかと」
「わかりました。それではそちらも」
「はい」
サハラへの政策も決められていった。これも当然の流れであった。
条約の話はすぐにキロモトにあげられた。彼はそれを聞くとすぐにアッチャラーンとカバリエを集めた。そしてそこには八条も呼んだ。
「今の我々のサハラにおける状況だが」

「はい」
三人は一室で四つの椅子にそれぞれ向かい合って座っていた。そして互いに顔を見合わせていた。
「承知の通りハサンと不可侵及び通商条約を結んでいる。これは皆知っていると思う」
「はい」
他の三人は答えた。これは常識の範疇であった。
「そして今ティムールから条約を結びたいとの話が出て来た。エウロパの情報と見返りでな。これにはやはり何かしらの意図があると思う」
「そうでしょうな」
アッチャラーンがそれを聞いて怪訝そうな顔をした。

## 第八部第一章　軍人と騎士その五

「只善意で条約を結びたいと申し出るとは思えません。やはり何か思うところがあるのでしょう」
「私もそう思います」
カバリエもアッチャラーンに同意した。
「条約を結んだ場合今後それをバネに何らかの動きを起こすものと思います」
「それが何か、だな。問題は」
「はい」
キロモトの言葉に二人は頷いた。
「国防長官」
ここでキロモトは八条に話を振ってきた。
「はい」
「君はこれについてはどう考えているかね」
「私は」
彼はそれを受けて自説を述べはじめた。
「おそらく我々と条約を結んだ後で軍事行動に移るものと思います」
「相手は」
「まずはエウロパの総督府でしょうか。しかしそれで終わりとは思えません」
「というと」
「ハサンかオムダーマンを狙うものと思います」
「まさか」
それを聞いたアッチャラーンとカバリエが声をあげた。
「ティムールにはそんな国力は」
「北方を統一したとしてもそこまでは」
「だからこそです」
八条は二人に対して述べた。

「彼は自国の国力をよく認識しています。それ故我々との同盟を望んでいるのです」
「遠交近攻というわけだな」
「はい」
キロモトに答えた。
「外交で言えば常道かと」
「成程」
「確かに」
アッチャラーンとカバリエもそれを聞いて納得した。二人も伊達に首相や外相を務めているわけではないのだ。
「しかしだ」
だがここでキロモトが懐疑的な顔になった。
「我々はサハラには介入するつもりはないぞ」
「ですがその確証はありません」
「それはそうだが」
「確証を得られるだけで大きいかと思いますが」
「例えばです。ハサンとの戦いをはじめるにあたり我々がティムールと友好関係にあればどうなりますか」
「当然我々は介入は出来ない。ハサンとも不可侵条約があるしな」
「それかと。彼等はまずこれからの戦略において我々の勢力が及ぶことを避けたいようです」
「そしてそれからのこともね」
「ええ」
カバリエに答えた。
「ハサンとオムダーマン、どちらかを倒すと残る一方も討つのは当然の成り行きでしょう。そして統一した後も我々との条約を出すでしょう」
「不可侵だと」
「そうです。彼はそうして我々がサハラに介入するのを防ぎつつ、独自の勢力を維持する考えだと思われます。無論交易等についても

考えているでしょうが」
「深いわね」
「ですがそれだけの考えがあるかと」
「そうだな。シャイターン主席ならな」
アッチャラーンも頷いた。
「大統領はどう考えられますか」
「私か」
「はい」
三人はその目をキロモトに集中させた。裁決する権利は彼にあるのであるから当然であった。
「そうだな」
彼はそれを受けて暫し考え込んだ。
「どちらにしろ我々はサハラに介入するつもりはない」
「はい」
議会にもそうした主張をする者はいなかった。彼等にとっては開拓地やこれから起こるであろうエウロパとの衝突、そして連合内における通商や経済等が優先課題である。サハラは遠い異国のことという認識が強かった。少なくとも文化も何もかもが全く違い、かつ地形も複雑なこともあり興味の対象外であった。少なくとも一千年に渡りサハラに兵を送った国はなかった。
「条約を結んでもデメリットはない。メリットはあるがな」
「ですね」
ティムールが統一した際の保険であった。
「ただ彼等が条約を破った場合はどうするか」
万が一連合に宣戦布告してきた場合である。
「その時はこちらも迎え撃つまでです」
八条は即答した。
「その為に国境に兵を置いているのですから」
「確かにな」
「だがあちらには彼等を置いておきたかったな」

「はい」
サハラ義勇軍のことである。
「まあいいか。彼等にはこれから働いてもらうかも知れないからな」
「そうですな、その為にも鍛えておりますし」
アッチャラーンもそれに同意した。
「ですがその話はまだ先に致しましょう。問題は条約です」
「ティムールとの」
「はい」
カバリエは話を出した後で頷いた。
「締結して問題はないかと思いますが」
「そうだな」
キロモトはそれを認めた。これで決まりであった。
「条約を結ぼう。すぐに議会にも話をしよう」
「はい」
こうして話し合いは終わった。議会としても同盟に反対する理由はなかった。ハサンやオムダーマンが内心どう思っていようが表向きには反対することはできない。こうして連合とティムールは同盟を結んだ。これはエウロパにも伝わった。

## 第八部第一章　軍人と騎士その六

「彼等が手を結んだか」
シュヴァルツブルグはそれを軍務省において聞いた。とある大貴族から寄贈された宮殿を利用したものであり、その壮麗さはエウロパにおいてもよく知られている。
「はい」
モンサルヴァートはその前に立っていた。そしてそれを報告して頷いた。
「これで我々は東と南から包囲された形となりました」
「そうだな。表面上は不戦同盟であるようだが」
「実質的には軍事同盟と見て宜しいかと思います」
少なくともエウロパにとってはそうであった。
「司令」
ここでシュヴァルツブルグはモンサルヴァートの横にいるマントを羽織った男に声をかけた。彼の名はキーン＝バルバロッサ＝ローズという。栗色の髪に緑の瞳を持つ細面の美男子である。イギリスにおいて公爵の爵位を持つ大貴族であり、代々名のある軍人を輩出している武門の家の嫡男である。彼もまた騎士道精神を尊び、能力にも恵まれた人物でありまだ三十代半ばながら宇宙艦隊司令長官という要職に就いている。階級は元帥である。
「はい」
ローズはそれを受けて応えた。
「艦隊の方はどうなっているか」
「ハッ」
敬礼をした後で答える。
「既に三百個の艦隊の配置は終えております」
「そうか」
「その武装も整っております。連度、士気もかなりのレベルにまで

達しております」
「何時でも戦うことができるということか」
「はい」
「ならばそちらはよいな。統帥本部長」
今度はモンサルヴァートに声をかけてきた。
「ハッ」
「防衛計画の進展はどうなっているか」
「全てを整え終えました」
「そうか」
「首都を中心として。迎撃態勢は万全です」
「それではそちらも問題はないな」
「はい」
彼は力強い声でそう答えた。
「それでは迎え撃つ態勢は整ったということだ。だが」
シュバルツブルグの声はここで変わった。
「彼我の戦力差はよく認識しているな」
「無論です」
「はい」
二人はそれぞれの言葉でそれに頷いた。
「手強い相手であることに変わりはありません。ですが」
「我等もエウロパの武人、逃げるわけにはいきません」
「そうだ」
シュヴァルツブルグは強い声で頷いた。
「わかっているならいい。若し彼等がブラウベルグ回廊を越えここに来たならば」
「はい」
「私も戦場に向かう。よいな」
「わかりました」
エウロパでは国防相が現役の軍人である場合も多い。だからこそ認められることであった。連合においては文民である。こういった

ことは出来ない。
「この度の戦いはエウロパの存亡を決する」
シュヴァルツブルグの声はやはり強いものであった。
「だからこそ卿等にも一層の奮闘を期待する」
「はい」
「頼んだぞ」
「お任せ下さい」
二人の声も強いものとなっていた。双方は来たるべき戦いの日に備えて着々と矛を磨いているのであった。
モンサルヴァートはシュヴァルツブルグの部屋を出ると自身の執務室に戻った。暫くするとプロコフィエフが入って来た。彼女は敬礼をした後で答えた。
「連合の者がハサンとティムールにいたようです」
「やはりな」
これはモンサルヴァートも予想していた。
「それも軍人が行っていたようです」
「連合にしては珍しいな」
「はい。しかも元帥クラスが行っていたとか」
「誰かわかるか？」
連合には元帥は二十人しかいない。容易に特定できるのだ。
「そこまでは」
だがプロコフィエフにもそれはわからなかった。
「ただそれにより我々の情報が彼等に伝えられた可能性があります」
「だろうな」
「それには防衛計画も入っていると思われますが」
「それは計算済みだ」
だが彼は落ち着いていた。
「連合も馬鹿ではない。その程度は掴んでくるだろう」
「ですね」
「問題はそれでも彼等を防ぐことだ」

その声が強くなった。
「わかるな」
「はい」
プロコフィエフもそれは同じであった。
「では計画の最終段階も予定通り進めて宜しいですね」
「うむ」
「タンホイザー上級大将は何と言っていますか」
彼女は元帥に昇進していた。タンホイザーとは階級が上になったのである。
「不平はないらしいな。マールボロ元帥も」
「それは何より」
「だがこれはいざという時の切り札だ。わかるな」
「はい」
彼女は答えた。
「それまでに防がなくてはいけない」
「それはわかっております」
「では他の部分を詰めていこう。いいな」
「はい」
彼女は頷いた。そして彼女は部屋を後にしようとする。だがここでモンサルヴァートが呼び止めた。
「待ってくれ」
「何でしょうか」
彼女はそれを受けて振り向いた。
「式は何時だったかな」
「一週間後です」
彼女は既に婚約者がいるのである。貴族の家らしく幼い頃から決められていた許婚である。
「そうか。相手は確か」
「ヤゲロー家です」
「そう、ヤゲロー家だったな」

ポーランドの名家の一つである。侯爵の爵位を持ち学問の分野に大きな影響を持っている。
「夫君は確か学者だったな」
「はい。大学の教授です」
彼女は答えた。
「そうか。幸せにな」
「はい」
また答えた。いささか事務的と言えば事務的な返答であった。
プロコフィエフも部屋を出た。モンサルヴァートはそれを見ながら考えた。
「私もそろそろだが」
彼もまた婚約者がいるのである。
「だがどうなるかな」
それが問題であった。戦争が近いのだ。
「終わらせてからだな、全ては」
彼は式の延期を申し出ていた。理由は明白である。
「避けられないとすれば」
彼は呟いた。
「勝つまでだ」
そう呟くと机に向かった。そして仕事を再開するのであった。

エウロパ軍はこの時全軍激しい訓練を行っていた。それは総督府においても同じであった。
「よし、行け！」
タンホイザーは自ら陣頭に立ち訓練にあたっている。今は艦載機による攻撃の訓練だ。
二つのチームに分かれそれぞれを攻撃する。だが実際に攻撃をするわけではなく、あくまで訓練である。だがその内容はかなり激しいものであった。
艦載機が入り乱れる。そして互いに動く。その中で一際素晴らし

い動きをする機があった。
「ムッ」
タンホイザーはすぐそれに気付いた。
「あれに乗っているのは誰だい？」
そして傍らにいる参謀の一人に尋ねた。
「あれは」
問われたその参謀はモニターに映る赤いエインヘリャルを見ながら答えた。
「あれはエリザベート＝デア＝アルプ少佐の機ですね」
「エリザベート＝デア＝アルプ」
それを聞いたタンホイザーの顔が考えるものになった。
「彼女がか」
そしてこう呟いた。彼女のことを知らない者はエウロパ軍にはいなかった。
エウロパ軍での伝説的なエースである。赤いエインヘリャルを駆り、多くの戦場で活躍してきた。まだ若いながらその撃墜機数は既に百を越えている。総督府軍においても右に出る者はいないとまで言われるパイロットである。
「はい。そういえばこの訓練に彼女の乗る母艦が参加しておりましたな」
「そうだったのか」
タンホイザーはそれを聞いて頷いた。
「本人がエインヘリャルを駆るのははじめて見るな」
「そうなのですか」
「うん。こうして見ると」
アルプの機の動きに目をやる。まるで流星の様である。
「素晴らしいな。まるで芸術だ」
「芸術ですか」
「うん。彼女の様なパイロットが増えることを期待するよ」
「わかりました」

訓練は順調に進み終わった。タンホイザーは自室に戻りそこで一人くつろいでいた。そこに扉をノックする音がした。
「どうぞ」
彼は素っ気無い声でそれに応えた。それに応えて一人のエウロパの軍服を着た女性が入って来た。
「んっ」
それを見たタンホイザーは思わず声をあげた。小柄で金髪碧眼の美しい女性であった。金髪は長く後ろに波打っていた。
「エリザベート＝デア＝アルプ少佐です」
彼女は敬礼をしてそう名乗った。
「この度司令の呼び出しに応じ参りました」
「呼び出し？」
彼はそれを聞いて一瞬不思議そうな顔をした。だがすぐ元に戻した。
「ああ、うん。よく来てくれたね」
彼は席を立ってそう答えた。
「では座って。話したいことがあってね」
「はい」
彼女はそれに従った。タンホイザーに薦められるまま席に座った。
「今日の訓練のことだが」
「はい」
「凄かったね。いつもああなのかい？」
「今日ですか」
だがアルプはそれを聞いて急に不機嫌になった。
「今日のあれは全く駄目です」
「全く！？」
「はい」
彼女は素っ気なく答えた。
「あれでは戦死してしまうでしょう」
「戦死か」

「はい。パイロットは常に死と隣り合わせです」
「死か」
だがタンホイザーはその言葉に反応した。
「それは戦場に立っていれば誰でも同じではないかい」
「はい」
彼女もそれは認めた。
「ですがパイロットはそれが一際高いのも事実です」
「確かにね」
彼もそれは認めた。
「では聞きたい」
「はい」
「卿は何故パイロットになろうと思ったんだい？」
タンホイザーは事前にアルプについてある程度調べていた。その結果彼女は志願してパイロットになったという。それを知ったうえで問うたのだ。
「私の家は代々軍人でした」
「それも知っているよ」
エウロパの貴族の家ではよくある話である。
「そしてその家訓にあります」
「家訓」
「はい。アルプ家の者は戦場においてっは常に死地に赴け、と」
「それがパイロットだったということか」
「それもあります。ですが他にもう一つ理由があります」
「それは」
「私の宿命だと思うからです。エインヘリャルに乗ることこそが私に定められた宿命だったと」
「宿命か」
「はい。これははじめて乗った時に感じました。私は乗るべくして乗ったのだと」
「そして戦場にいる、と」

「少なくとも私自身はそう考えます」
彼はそう返した。
「私はワルキューレの生まれ変わりだとも思っています」
「ワルキューレか」
タンホイザーはワルキューレという言葉を聞いて微かに笑った。
エウロパの神話にある戦を司る乙女達である。嵐の神オーディンに付き従い、共に戦い、死者を運ぶ者達だ。
「それはいい。では卿は我が軍にとってのブリュンヒルデか」
「そうなりたいと考えております」
そのワルキューレ達の中でも一際名のある者である。
「ではこれからも奮闘を期待する。近いうちに我がエウロパは未曾有の戦いに入る」
「はい」
「その時には」
彼は言葉を続けた。
「加護を頼むよ。敵を思う存分屠ってくれ」
「期待通りに」
彼女はそう答えて敬礼した。こうして話は終わった。
エウロパもまた牙を研いでいた。そして連合にその牙を向けようとしていたのであった。

## 第八部第二章　議会その一

議会

連合とエウロパの対立が激化の一途を辿る中連合の中央議会においても対立が深まっていた。この議会は各国から選出された議員達によって構成されている。二院制である。

ただ連合議会はエウロパとのことにおいて紛糾していたのではない。それは既に意見がまとまっていた。開戦しかないというのが結論であった。

では何に対して紛糾していたのか。それは難民のことであった。今彼等に新たな国家を新設させてはどうかという意見が出ているのだ。問題はその場所である。

候補となる星系は多い。だが何処にするかでもめていた。そしてそれより前に彼等に国家を新設させてよいものかという意見もあったのだ。

「彼等の多くはサハラに故郷がある」

まずこうした意見が出た。

「彼等の多くの本意はやはり帰国である。それよりも帰国の際に協力するべきではないのか」

「エウロパが相手ならそれは不可能だ」

反論はこうであった。

「エウロパは彼等を追い出した。迎える筈がない。それならば新たな場所を提供するべきではないのか」

そしてこう主張するのである。

「彼等の中にも連合への帰属を望んでいる者もいるではないか」

それが根拠であった。しかしこれに対しても反論があった。

「それならば今までそれぞれの国で受け入れてきたではないか」

こう反論されるのである。

「だがもう数が多過ぎる」
しかしすぐにこう返ってくる。
「難民達は既に十億を越えている。彼等にはもう新しい国家を建設する力もある」
「それは否定しない。だが」
「だが、何だ！？」
「これはサハラの問題だ。我々が深入りすることではない。難民を受け入れるだけで充分ではないのか」
「それでは人道上に問題があるのではないか」
「人道ということでは連合は責務を果たしているのではないのか」
「まだ不十分だ」
「私は決してそうは思わない」
二つに別れてそう議論し合っている。だが結論は出てはいなかった。こうした状況がもう何日も経っている。それでも話は解決するめどがたたなかった。
「やれやれといったところだな」
それをナウルの政治学者キンム＝ペリはテレビで見ていた。その顔は苦笑したものであった。
「話はそうそう単純にはいかないのが政治じゃな」
見れば黒い肌に銀色の髪に紫がかった青の瞳を持つ老人であった。その目は穏やかな光を放っている。
「サハラのことはサハラの者に任せればいいというのが連合の方針じゃったが」
これは一千年の間変わることがなかった。そうして彼等はサハラとは距離を置いて交流してきたのである。そしてそれは上手くいっていた。
「これからどうなるかの。そもそも」
彼はここで自室の窓の向こうに目をやった。そこには青い海と緑の木々がある。彼の星は熱帯で豊かな海と緑があるのだ。
「サハラにはこういったものがあるのかという話もあるからのう」

連合にあってサハラにないもの、逆にサハラにあって連合にないものもある。だが連合は今まで不足に思ったことはない。サハラもそれは同じである。

それを不足に感じた時にどうなるのか、彼はその時それについて考えた。

「争い、かの」

そしてそう呟いた。それから彼は席を立ちキッチンに向かった。それからそこで彼の住む星の魚料理を楽しむのであった。

中央議会の紛糾は各国の間でも同じであった。彼等もまた難民と彼等により新国家設立に議論を重ねていた。まずはその場所についてである。

「何処にするのか」

それは辺境の星系の中から選ばれることになっていた。しかし大国はここで彼等に影響力を行使するべきかどうかをまず考えたのだ。

彼等に影響力を行使しようと考えているのは彼等と同じ宗教を信仰する者が多いインドネシアやマレーシアであった。連合のイスラム教はサハラのイスラム教徒はかなり変質し、同じ宗教とは思えない程にまでかけ離れてしまっているがそれでも同じムスリムであった。彼等は宗教を利用して彼等を自分達の勢力に取り込もうとすら考えていたのだ。だがこれには当然のように反対する意見があった。

同じアセアンのメンバーであるタイやベトナムがこれに反対したのだ。彼等の多くは仏教徒である。またそれだけでなくインドネシアやマレーシアがこの新国家を抱き込むことによって勢力伸張を狙っていることを見抜いていたのである。彼等にしてみればそれは面白くはない。反対するのも当然であった。アセアンもまた一枚岩ではないのである。

しかもこれに別の大国が肩入れをはじめた。まるで規定事項であるかのようにアメリカや中国も出て来たのである。彼等はタイやベトナムの方についた。彼等の国にはムスリムはあまりいないのであ

る。そしてインドネシアやマレーシアにはカザフスタンやウイグル等ムスリムの多い国がついた。こうしてまず何処に国を置くべきかという段階で早速衝突がはじまった。
「そもそも建国するかどうかすら決まっていないというのに」
実際にはそうであったが話はもう進んでいた。問題は何処に国を置くかという段階にまでなっていたのだ。少なくとも連合の各国の間ではそうなっていた。中央議会よりもそれについては進んでいた。
それが為に話は紛糾していた。結論は容易には出そうにもなかった。だがここで思わぬ仲介者が出て来た。
「それならば我々の側に置いてはもらえないだろうか」
こう申し出て来た国が出たのである。それは何処か。
日本はこの件については積極的に動かなかった。中立であった。ロシアはアメリカ等に近い立場であった。オーストラリアもそうであった。では何処か。
ブラジルであった。旧中南米諸国の間では随一の大国であるこの国が仲介に乗り出したのである。同時にその新国家に対して恩を売ったのだ。これにはどの国も納得した。
「ブラジルなら」
ムスリム側とも仏教側とも関係が少なかった。大国もそれに同意した。こうして新国家は建国された場合ブラジルのすぐ側の星系にその領土が置かれることが決まった。あくまで非公式にではあるが。
「あとは議会の仕事となるな」
それを見て誰かが言った。後はその新国家の建設を認めるかどうかであった。しかしこれはそう簡単にはいかなかった。
「わかった、認めよう」
反対派の領袖達が頷いた時話は終わったと誰もが思った。しかしそれはやや早計であった。
「しかし条件がある」
彼等はここで条件を提示してきたのだ。
「それは」

皆それに対して問うた。

## 第八部第二章　議会その二

「問題は彼等が連合市民かどうかだ」
「それならもう問題はない筈だ」
既に彼等は連合の市民権を得ていた。だが反対派の領袖達はここでこう答えた。
「我々が今言っているのはそういう簡単な問題ではない」
「どういうことだ？」
「見方を変えればより単純な話だが」
「それは」
こう言われて賛成派は思わず首を傾げた。
「彼等が連合の市民というならば」
「いうならば？」
「その証を見せてもらいたいのだ」
彼等はこう主張したのだ。
「証拠といっても」
それに困惑する者も多かった。
「一体何を見せろというのか」
今までは連合の市民権を得ればそれでよかった。そしてそれで連合の市民となった。だがそれだけではないというのだ。それは国を興すからである。
「国を作るのは連合の者に限る」
これは連合の不文律であった。連合においては連合の者が国を作る。そう決められていたのである。
だが彼等は市民権こそ持っているとはいえ難民である。サハラの者なのだ。サハラの者が連合において国を作ってよいのかという問題であった。
「別に国なぞ欲しくはない」
難民達にはそう主張する者もいた。

「俺達はサハラに帰られればそれでいい」
彼等は問題はなかった。だが問題はそう単純ではなかった。やはりそれと異なる考えの者達も多かったのだ。これが問題であった。
「ここにいたい」
「ここに俺達の国を作りたい」
そう考えるようになった者達もいたのである。それはサハラ義勇軍の中にもいた。
「もう生活の基盤はこちらにある」
それが第一の理由であった。それに連合自体を気に入っていたのである。
連合のそのおおらかな空気に彼等は魅せられた。そしてそこに住みたいと考えるようになってきていたのだ。
そうした者達をどうするかということであった。彼等は国も欲していた。だがそれには連合の者であるという証が必要だと言われたのだ。
「ならば見せてやればいい」
サハラ義勇軍にいるある将校がこう言った。
「場所はもう決められている。ならば後はその証を見せるだけだ」
「どうやってだ」
これに異論も出た。当然である。
「戦いで見せるんだ。俺達は軍人だ」
彼はそう主張した。そう、彼等は軍人であった。軍人ならばそうする他ないのだ。
「戦いが来る。俺達はその時に見せればいい」
「そうだな」
他の者もそれに頷いた。彼等はエウロパとの戦いがはじまるのを待つようになっていた。それは八条にも伝わっていた。
八条はそれを聞いて考え込んでいた。
「そうですか」
サハラ義勇軍がその為に連日激しい訓練を行っているということ

も聞いていた。
「ならば彼等には戦ってもらいましょう」
「はい」
木口はその言葉に頷いた。
「それでは彼等を先鋒にしますか」
「そうだね」
「戦いの際には」
まだ戦うと正式に決まったわけではないのだ。あくまでそういったことも考慮される、ということになっていた。
「少なくとも彼等には参加してもらわなくてはならなくなったよ」
「ですね」
「そして外交の方はどうなっているかな」
密かに水面下でエウロパとも交渉を行っているのである。
「そちらの方は進展がありません」
木口は首を横に振った。
「向こうも態度を硬化させています」
「そうだろうね」
予想されたことであった。
「議会はもう開戦が大勢らしいですね」
「うんん」
「では後は議決されるだけですか」
「兵の集結等はまだこれからだけれどね」
連合は広くその兵も多い。だから兵を集めるのも大仕事なのである。
「それをどうするかだよ、これからの我々の仕事は」
「どれだけの兵力を参加させるおつもりですか」
「そうだねえ」
彼はここで自分の考えを述べた。
「二千個艦隊程か」
「総兵力の三分の二ですか」

「それにサハラ義勇軍百個艦隊。計二千百個艦隊だ」
「今までそれ程の戦力を動員した例はありませんよ」
「わかっているよ」
彼は答えた。
「だからこそやるんだよ」
そしてそう答えて笑った。
「兵力でまず彼等に心理的プレッシャーを与えていきたいんだ」
「そういう御考えでしたか」
「勿論それだけじゃない。彼等も兵力を総動員してくるだろう」
「はい」
「ならばこちらもそれ相応の兵力が必要だ。違うかな」
「いえ」
「それだけでも足りない可能性もある。油断はできないよ」
「二千個艦隊でもですか」
「対外戦争だしね。敵はエウロパ軍だけじゃない。市民達も敵になる可能性がある」
「ゲリラ戦ですか」
「その危険もある。これは占領地での政策如何だが」
「それについても何か御考えですか」
「そうだね。とりあえずは彼等の武装解除と治安の維持、そしてこちらの風紀の徹底だね。それだけやればかなりましだと思う」
「わかりました」
「後は宣戦布告が行われてからだな。それまでにおおよその作戦を立てておかないと」
「はい。それですが」
「もう会議が予定されているんだね」
「ええ」
木口は答えた。八条はそれを見て苦笑した。
「この仕事は次から次に仕事が来るな」
「閣僚はどれもそうですよ」

「そう言われればそれまでだけど。それにしても」
「ぼやいている暇はありませんよ、長官」
「わかったよ」
彼はそれに答えて席を立った。そして会議室に向かうのであった。
そこにはもう軍の高官達が集まっていた。彼等は八条が入ると一斉に席を立ち敬礼した。八条はそれに応えて返礼した。
「それではじめましょうか」
「はい」
高官達を席に座らせた。それから話をはじめた。

## 第八部第二章　議会その三

「今日の会議はエウロパとの戦争におけるおおよその計画です」
「はい」
軍服だけでなく背広を着た男達も八条の言葉に頷いた。
「まずはどのルートで侵攻するかですね」
「それですが」
まず参謀総長である劉が席を立った。
「やはりブラウベルグ回廊からの侵攻が望ましいと思います。そしてそこからオリンポスを目指します」
敵の首都攻略に重点を置いたものであった。
「あの回廊からですか」
「はい」
彼は頷いた。
「やはりここからの侵攻が最もよいと考えます」
「距離や補給を考えるとそうですね」
「はい」
だがここで異論が出て来た。
「それですが」
一人の長身の浅黒い肌のアジア系の男が立った。目は緑である。
階級は大将であった。
「ボブ＝フィアート大将」
劉は彼を見てその名を呼んだ。
「はい」
彼はそれに答えた。
「その作戦について異論を述べさせて頂きます」
「それは」
八条だけでなくそこにいた全ての者が彼に注目した。
「どの様なものかね」

「はい」
彼は話しはじめた。
「まずブラウベルグ回廊からの侵攻ですが多くの問題があります」
「問題」
「はい。道が狭く大軍の行動には不向きです。それに出口で敵が待ち構えていることが予想されます」
「ふむ」
「それだけでなくエウロパに入った後も補給路を狙われる可能性も高いです。それを考えるとブラウベルグ回廊からの侵攻は多くの問題をはらんでいると言ってもよいでしょう」
「成程な」
「補給が途絶えては勝てるものも勝てません。それについては十二分に考慮されるべきかと思いますが」
「では貴官に聞きたい」
「はい」
「それに対して何か対策はあるのかね」
「二つあります」
彼は答えた。
「二つ」
「はい。まずは侵攻路自体を変えること」
「ふむ」
「ブラウベルグ回廊ではなくサハラから侵攻するのです。ハサン、ティムールに道を借りて」
「そして総督府から侵攻するのだね」
「そうです。そしてもう一つあります」
「それは」
「劉参謀総長と同じですがブラウベルグ回廊からの侵攻です」
「それならば異論ではないのではないか？」
「お話は最後まで御聞き下さい」
どうやらわりかし鼻っ柱の強い者のようである。

「確かに道は同じです。ですが」
「ですが」
「まずは先遣部隊を派遣します。そして彼等にニーベルング要塞群を陥落させます」
「ふむ」
「そのすぐ後ろに後続部隊を置いておきます。そして彼等はニーベルング要塞群陥落後にエウロパの各方面に展開します」
「成程な。首都を積極的には狙わないと」
「最初は。それよりも補給路の確保の方が重要です」
「だがそれでは戦力が分散するのではないか」
こう反論があった。だがフィアートの答えは淀みがなかった。
「それについても考えています」
「ほう」
「エウロパの北から南まで達するのです。そしてそこから西へ進む」
「オーソドックスといえばオーソドックスだな」
古来よりある戦略である。第一次世界大戦の西部戦線や第二次世界大戦の東部戦線と似たものであろうか。
「ですがこれならば補給路も守れます。それに戦力も均等になります。我々と彼等の戦力差を考えるとかなりの効果があると思いますが」
「確かにな」
これには多くの者が頷いた。
「ではそれでいくとするか。どちらかを選んでな」
「はい」
フィアートはそれを聞いて満足気に頷いた。
「長官」
皆八条に顔を向けてきた。
「決裁をお願いします。どれを採用されますか」
「そうですね」
まずはブラウブルグからオリンポスを一直線に狙うルート、そし

てサハラから侵攻するルート。最後はブラウベルグから侵攻し、じわりじわりと進んでいくルート。この三つである。判断は八条に委ねられた。
「それでは第三の案でいきましょう」
ブラウベルグからの侵攻ルートであった。
「オリンポスをすぐに狙うのは確かに危険です。サハラのルートは外交上さらに複雑な問題に発展する恐れがあります」
「はい」
他国の軍が入るのをよしとしない者も多い。それに後でどのような要求をされるかわかったものではないからだ。
「ですからサハラのルートも現実的ではないと思います」
「わかりました」
「それを考えると」
ここで一呼吸置いた。
「やはり第三の案しかないと思います」
「わかりました」
一同それに頷いた。
「今回の最高責任者は」
「はい」
「マクレーン元帥とします。宜しいですか」
「ハッ」
マクレーンは席を立って敬礼して応えた。
「次席として劉元帥。二人には侵攻作戦の指揮も執ってもらいます」
「ハッ」
劉も席を立った。そして敬礼する。ちなみに軍の席次においては宇宙艦隊司令長官の方が上である。
「参加兵力は二千個艦隊、六十億を計画したいと思います」
「六十億」
それを聞いて息を飲まない者はいなかった。人類史上かってない規模の参加兵力であった。

「はい。それにサハラ義勇軍百個艦隊を加えたいのですが」
「彼等を」
「そうです。彼等を先鋒として。その方針で戦略を計画して頂きたい」
「わかりました」
「合わせて二千百個艦隊程になります。宣戦布告が為されたならばすぐに動員をかけます」
「はい」
これだけの規模である。宣戦布告と同時に侵攻を仕掛けるのには無理があった。
「ですが今からもう準備だけは整えておかなくてはなりません」
「はい」
「全軍に第二種警戒態勢を発動して下さい。宜しいですね」
「了解」
次々に指示が下る。
「以後は参加する艦隊の選定、そして作戦計画の詳細を詰めていくこととします。そして時が来たならば兵力を集結させ侵攻します。いいですね」
「ハッ」
軍人達も文民達も皆一斉に立ってそれぞれ返礼した。こうして彼等の方針はおおよそが決定した。

## 第八部第二章　議会その四

また同じ頃に連合とティムールの条約も締結された。これにより連合とティムールは同盟関係となった。そして連合にエウロパの情報が渡されたのであった。

「兄上」

中性的な顔立ちの美しい少年が宮殿の鏡がちりばめられた豪奢な一室でシャイターンに声をかけていた。彼の末弟であるアブー＝シャイターンである。

「どうした」

彼はそれを受けて弟に顔を向けた。

「連合が作戦方針を決定したそうです」

「そうか」

彼はそれを聞いてまず頷いた。

「だが実際に動くのはまだだな」

「はい」

「議会において議決すらしていない。それまでにはまだ時間がある」

「そのようですね」

「だが方針が決定したというのは大きいな」

鏡に映る無数のシャイターンがそう言った。

「連合は本気でエウロパと戦争をするつもりだということだ」

「本気ですか」

「本気だ。だがこれは前からわかっていたことだな」

「ええ」

「ならば」

彼はまた言った。

「我々も動く時が来たということだ。その時のことはもうわかっているな」

「無論です」

アブーは強い声でそう答えた。
「ですが彼等も動くかどうかですね」
「動く」
シャイターンの声が鋭くなった。
「必ず動く。さもないと彼等は滅びる」
そこには確かな洞察があった。
「滅びたくなければ動くしかないのだ」
「それしかありませんか」
「そうだ。おそらく彼等の中には我々の動きに気付いている者もいるだろう」
「はい」
「だがそれでも動かさなければならなにのだ。我々はその時を待っていればよい。そして」
笑った。
「果実はその時に手に入る。熟れた果実がな」
そう言ってニヤリと笑った。
「しかし我等が動いた時が問題です」
「それなら心配はない」
彼は弟に対してそう答えた。
「あの者達は動かぬさ」
「動きませんか」
「あの者達は基本的に現状さえ維持できればそれでいい。現状さえな」
「それではもう一方は」
「既に手は考えてある」
シャイターンはそれにも答えた。
「手を」
「そうだ。マルヤムはいるか」
「姉上ですか」
アブーにとっては姉にあたるのである。

「今この宮殿にいるか」
「はい」
彼は兄の問いに答えた。
「ならばここへ呼んでくれ」
「わかりました」
アブーはその場を去った。そして程なくして姉であるマルヤムを鏡の部屋に連れて来た。
「御呼び致しました」
「御苦労」
彼は弟に対して礼を述べた。
「下がってよいぞ」
「ハッ」
そして下がらせた。後にはシャイターンとマルヤムだけとなった。
「兄上、どの様な御用件でしょうか」
「うむ」
彼は妹に問われて口を開いた。
「御前ももう結婚してもいい歳になったな」
「はい」
「ならば縁談があるのだが。いいか」
「兄上の望まれるままに」
そう答えるしかなかったと言えばそれが事実となる。シャイターン家は婚姻によっても勢力を伸張させてきた。それを考えると彼女だけがそれから逃れられるわけもなかった。
「そうか。ならばいい」
そう答えがくるのをわかったうえで兄も答えた。
「それでは御前の嫁ぎ先だが」
「はい」
「アッディーンという男を知っているな」
「名前だけでしたら」
「知っていればそれでいい」

彼はそれを聞いて頷いた。
「彼と縁談を進めたい。いいな」
「はい」
「アッディーン提督は立派な男だと聞く。若いながら一軍を任せられ多くの武勲をたてている」
「はい」
「御前の婿として問題はない。安心して嫁いでくれ」
「わかりました」
形式的にではあるが了承を得た。これでマルヤムの方は決まった。
「ならばよい。あとは」
シャイターンは考えていた。
「あの男に話を持ちかけるだけだ。さて、どうするべきか」
笑っていた。その笑みはやはり何処か悪魔的であった。その笑みが無数の鏡に映っていた。それはまるで地獄の中に浮かぶ魔王の笑みのようであった。

連合とエウロパの間がキナ臭くなっているその頃オムダーマンにおいても大きな動きがあった。
憲法が改正されたのである。これによって副大統領が置かれることが認められた。そしてそこには現役の軍人の就任も認められていた。
「そこでだ」
ブワイフは官邸の自室にアッディーンを呼んでいた。
「貴官に副大統領に就任してもらいたいのだ」
「私がですか」
彼はそれを聞いて意外といった顔をした。
「そうだ。頼めるか」
「私には」
だが彼はそれには乗り気ではなかった。
「そこまでの力量はありません」

「それは違うな」
しかしブワイフはそれを否定した。
「貴官はまだ自分の力を全てわかってはいない」
「そうでしょうか」
「そうだ。貴官は一軍人で終わるにはあまりにも惜しい。その力はよりオムダーマン、そしてサハラの為に使われるべきだと私は考えている」
「買い被りですよ、それは」
アッディーンはそれを聞いて苦笑せずにはいられなかった。
「私はそこまでの器ではありません」
「今言ったな」
しかしブワイフも引かなかった。
「それは貴官が自分のことをわかっていないだけだ」
「またそのような」
「いや、この際だ。言わせてもらおう」
ブワイフは口調を変えてきた。
「アッディーン元帥」
「はい」
「貴官はその若さで元帥となった」
「アッラーの御加護です」
「そう、アッラーの御加護だ」
ブワイフはそこに言及した。
「そこに全てがある。貴官の実力も」
「そうでしょうか」
「少なくとも私はそう考える。貴官はアッラーにある使命を頂いているのだとな」
「それがサハラの為なのでしょうか」
「違うだろうか」
ブワイフはここで問うた。
「だからこそ貴官はここにいる」

「はい」
答えはしたがあまり強くはない答えであった。
「そしてその使命を果たしてもらいたい。それが貴官の運命なのだからな」
「・・・・・・・・・」
アッディーンはそれを聞いて暫し考え込んだ。それからおもむろに口を開いた。
「私などで宜しいでしょうか」
「無論」
ブワイフは強い声で応えた。
「是非とも頼む」
「わかりました」
もう断ることもなかた。彼は頷いた。
「是非ともお願いします。やらせて頂きたい」
「よし」
ブワイフは満面に笑みを浮かべた。こうしてアッディーンの副大統領就任が決まった。これがサハラにとって実に大きな出来事であるとわかったのはこれからかなり経ってからであった。

## 第八部第二章　議会その五

「連合が騒がしいな」
連合、エウロパ、そしてサハラにおいてそれぞれの動きがあったその頃マウリアでは特にこれといった動きはなかった。言うならば傍観者であった。クリシュナータはラーンチと共に夕食を採っていた。カレーであった。
マウリアのカレーは連合で食べられるカレーとは違う。連合のカレーは十九世紀にイギリス海軍が食べていたパンにつけて食べるルーを見た日本海軍の者が米に合うように改良したものがもととなっている。そしてそれは日本においてかなりの人気となりすっかり国民食となった。それとインドネシア等のスパイスを効かせた赤や緑のカレーである。マウリアのカレーとはかなり異なっている。
「そのようですな」
ラーンチはカレーを食べながら落ち着いた顔で答えた。
「まあそれも当然でしょう」
「うむ」
クリシュナータはそれを受けて頷いた。
「君は今後どう見ているかね」
「連合のことでしょうか。それともエウロパのことでしょうか」
「両方だ」
クリシュナータはカレーを一口食べ終えた後で答えた。
「この一千年の間実際に衝突こそなかったが対立してきた双方がどうなるか、面白くなりそうだと思わないか」
「確かに」
ラーンチもそれは彼と同じ考えであった。
「双方共最早引くに引けない状況だと思います」
「言葉が少し違うのではないかな」
「ふふふ」

ラーンチはクリシュナータの指摘を否定しなかった。
「では言い替えましょうか」
「うむ」
「双方共引くつもりはない、と」
「そういうことだな。そして起こるのは」
「戦争です。今までかってない規模の戦乱となるでしょう」
「そうだな。だが力の差があり過ぎる」
連合の国力はエウロパの三十倍である。やはりそれが最も大きかった。
「それに連合にはあの巨大戦艦がある」
ティアマト級のことだ。
「それだけではない。連合の艦艇はどれも大型で火力、防御力に優れているな」
「はい」
解放軍との戦いでそれは立証されていた。哨戒能力も相当なものである。
「エウロパの艦艇のことは詳しくは知らないが」
「火力、防御力共連合のものには遥かに及びません」
「そうか。やはりな」
「はい」
「では彼等が勝っているのは何だね」
「機動力でしょうか。これだけは連合のそれとは比較になりません」
「ふむ」
「これを生かせればあるいは」
「そして兵力差を何とかすればな」
「ええ」
彼は答えた。
「ただ士気と実戦経験は彼等の方が上です」
「サハラとの戦いと祖国防衛の為か」
「それに軍人としての意識です」

「そういえば連合とエウロパではかなり違うな」
「はい」
ラーンチは答えた。
「それもかなりのものです」
「そうだな。連合では軍人はあくまで職業の一つに過ぎないが」
これは連合らしいビジネスライク考えであった。彼等は軍人とはあくまで給料を得て生活する為の職業としか考えていないのである。
「エウロパでは騎士です」
「騎士か。確かにな」
「はい」
エウロパでは軍人は貴族にとっては誇りであり義務であった。代々軍人という家も実に多い。彼等にとってはそれこそが貴族としての務め、そして誇りなのであった。
「軍人と騎士か。どちらが正しいと言うべきかわからないが士気にかなりの差があるのは事実だな」
「そうですね。連合の軍人達は命を惜しみますが」
それは兵器の設計においても如実に現われている。彼等はとかく戦死者を出すのを嫌う。これは戦死者が増加することによって志願者が減るのを怖れる国防省や支持率の低下や責任を問われることを避けたい政治家の思惑、そして何よりも高給を約束されて入隊したというのにむざむざ死にたくはないという軍人達の本能、そこに軍人の人権や生活を主張する市民団体の主張によりそうなるのである。しかもここにはそうした生活環境を取り扱う企業も入るのだ。事情は複雑なものであった。連合はとかく一つのことを為すのに実に様々な勢力が顔を出すが軍事においてもそれは全く変わらなかった。
だがエウロパはこの点においては違っていた。軍人であるということは誇りであり義務である。それならば命を捧げることも問題とはならないのである。これは実に大きな差であった。
「後一つ面白いことがわかりました」
「それは何だね」

「これでございます」
ラーンチはここで今自分自身が食べているカレーを指差した。
「ほう」
それを見たクリシュナータは面白そうに眉を上げた。
「連合においては実に色々な食べ物があります」
そこにも国力差が現われていた。
「それは軍においても変わりません」
これもまた志願者を集める為の待遇であった。
「我々も大してかわらないかも知れませんがね」
「いや、それは違うな」
クリシュナータはそれは否定した。
「我々はこれを食べているではないか。普段でも戦場でも」
そう言ってカレーを指差した。
「ははは、確かに」
これにはラーンチも笑った。
「まあカレーにも色々ありますけれど」
「そうだな」
実際一口にカレーといっても多くの種類がある。インド料理全般をさしているという指摘まである程である。
「明日は何のカレーだったかな。今日はチキンだったが」
「羊のカレーらしいですよ」
「そうか、それはいい」
それを聞いたクリシュナータは頬をほころばせた。
「私は羊が好きでな」
「私もです」
ラーンチもそれに答えた。
「あの匂いも消えますしね」
「うむ」
どうやら彼は羊の匂いが好きではないらしい。
「では明日のカレーも楽しみにしていよう」

「はい」
こうして二人は食事を終えるとそれぞれの職場に戻った。そして来たるべき日に備えるのであった。

## 第八部第三章　異邦人その一

異邦人

連合とエウロパの対立が深刻化している頃連合軍においては何時になく訓練が激しくなっていた。これは全ての部隊においてそうであったがとりわけこの部隊ではそうであった。

「まだだ、遅いぞ！」

司令の叱咤が飛ぶ。

「敵は待ってはくれん。それを忘れるな！」

「はい！」

それに応える声が響く。彼等サハラ義勇軍は今彼等の管轄する宙域において激しい訓練を繰り返していたのであった。

「やれやれ、司令もよく続くぜ」

その中で展開する一機の炎龍で呟く男がいた。ウダイである。

「まあそうでなくちゃ戦いはできねえんだがな。訓練をしないと強くはならねえ」

彼にもそれはよくわかっていた。歴戦の猛者としてそれは当然のことであった。

「ウダイ大尉」

ここで通信が入った。

「おう」

彼はそれに応えた。

「貴官の部隊は今どんな状況か」

「当然だが全機いるぜ。訓練で死んだりはしねえよ」

「そうか。それならいい」

オペレーターはそれを聞いて安心した。

「おい、待ってくれ」

その言葉にウダイは妙なものを感じた。

「訓練で死んだりはしねえだろ、普通」
「普通はな」
オペレーターは答えた。
「だが今我々が行っている訓練は普通の訓練ではない。限り無く実戦に近い訓練だ」
「それはわかってるよ」
確かにかなり激しい訓練であった。実弾こそ使わないもののそれに準ずるものであった。
「だから気は抜いちゃいねえ」
「よし、流石だな」
オペレーターはそれを聞いて満足した。
「ではこれからも頼むぞ」
「おうよ」
彼は力強い声で答えた。
「任せとけ。サハラの男のやり方を見せてやろうぜ」
「ああ」
そのオペレーターも当然サハラ出身である。難民であったのも同じだ。この部隊は皆サハラの者であるのだ。
ウダイ率いる炎龍の部隊が宙を飛翔する。そして彼等は次の標的に向かうのであった。
この時グーダルズも訓練に参加していた。彼はティアマト級巨大戦艦の中の一隻に砲術士官として乗り込んでいた。
「よし、撃て！」
艦長の命令に従い指示を下す。それに従いティアマト級巨大戦艦の主砲が一斉に火を吹く。
「どうなった！？」
彼はもう初老に達している先任下士官に問うた。見れば最上級曹長の階級章を着けている。
「ハッ」
問われたその最上級曹長は返答した。

「全弾命中しました」
モニターを見てそう報告した。
「そうか。それは何よりだ」
彼はそれを受けて微笑んだ。彼等も訓練中であるから作業服を着ている。連合軍においては兵士や下士官は青、将校は紫の作業服となっている。
「それにしてもこの艦の主砲は凄いな」
「そうでうね」
曹長はそれに頷いた。
「まるで要塞の主砲ですよ。巨砲なんか見たこともない程です」
「そうだな」
グータルズも頷いた。
「こんな巨艦を建造するだけでも信じられないが一隻だけじゃないしな」
「はい」
「一個艦隊ごとに一隻ずつ旗艦としてか。サハラでは考えられない話だ」
「全くですな」
「ところでこの艦の名前は司令が決められたのだったな」
「ええ」
曹長は答えた。
「メフメットといいましたな、確か」
「ああ、メフメットだったな。この艦は」
実は名前がついてまだ数日しか経っていないのである。ティアマト級の中でも新造艦であった。かってコンスタンチノープルを占拠したオスマン＝トルコの名君の名である。
「この艦の名にちなんでいきたいものだな」
「全くです」
「狙うはわかっているな」
「無論」

曹長は頷いた。
「コンスタンチノープルではなく」
グーダルズはニヤリと笑った。
「オリンポスです。憎きエウロパの首都」
「ああ」
それこそが彼等の目標であった。彼等の目は遥かな敵の首都を見据えていたのであった。
「ふむ」
サハラ義勇軍の資料を読みながらラビルヘンは考えていた。
「思ったよりもずっといいな」
「左様ですか」
傍らに控える副官のリー＝ミケンズがそれに問うた。大佐の階級を持つ黒人である。ハイチ出身である。
「うん。実は彼等の士気について懸念していたのだ」
「士気ですか」
「そうだ。果たしてサハラの彼等が我が軍に馴染めるかと思ってな」
「それでしたら面白いことになっています」
「面白いこと」
「はい」
ミケンズは答えた。
「サハラ義勇軍に独特の風潮が生まれつつあります」
「ほう」
それを聞いたラビルヘンは顔を上げた。
「一体どのようなものかね」
「はい。仲間意識ですが」
「サハラの者同士からくる」
「そうですね。互いに助け合い連帯意識が強まっております」
本来軍にはそうしたものを育む土壌がある。そうでなくては戦争はできない。だが連合軍は軍そのものをビジネスであると考える風潮が強く、そのうえ連合の個人主義もありそれは弱かったのだ。

「それをもとにどのような困難な訓練にも励んでおります」
「それはいいことだ」
ラビルヘンはそれを聞き頬を緩めた。
「本来はそうでなくてはならないのだがな」
「はい」
ミケンズもまた連合軍のいささかドライな考えには不安を持っていたのだ。
「それでは彼等をより鍛え上げることもできる」
「はい」
「将に精鋭だな。我が軍にとって最大の」
「そうですね。そして極論を言えば」
「火事場に飛び込んでくれる存在です」
少なくともそう見られてはいるのがサハラ義勇軍であった。彼等は連合の者ではないのだから。だがその装備や待遇は連合のものであり事情は複雑である。
「いざ戦いとなるとそうした部隊も必要だからな」
「はい」
「彼等がそれを果たしてくれるというのなら有り難い」
「そうですね。ただでさえエウロパ軍に比べて我が軍は将兵の質や士気では不安があります」
「うむ」
「物量においては圧倒的にあり、艦艇の火力や防御力、情報収集能力において勝っているといっても」
「そうだな。それだけで勝てるとは思わないことだ。それに我々は勝つことよりも優先させなければならないことがある」
「わかっております」
ミケンズは答えた。連合特有の問題であるが戦死者を出さないことであった。戦死者を出せばそれだけ多くの批判が軍に来る。それだけではない。志願者も減れば今まで手塩にかけて育てた貴重な人材もいなくなる。それに遺族への補償もある。連合はとかく軍人の

命が高い国であった。
「それだけは避けなければならないぞ」
「はい」
ミケンズは頷いた。
「それだけにやはり彼等の存在は貴重なものとなりますね」
「そうだな。それだけに彼等の人材登用は大胆にやりたい」
「はい」
「彼等には通常の軍よりもさらに実力主義でいこう。まずは」
彼はここで先の訓練のデータに目をやった。
「艦長クラスだが。まだティアマト級の艦長に空きがあったな」
「はい」
「それに人材を抜擢したいな。そうだな」
ラビルヘンはそう言いながら資料を見ていた。
「このグータルズ少佐だが」
「はい」
「砲術士官としての能力が凄いな。全弾命中させているではないか」
「ええ。それにより中佐に昇進しております」
「早いな。だがそれではまだ不十分だ」
「と言いますと」
「もう一階級昇進だ。大佐になってもらう」
「大佐に」
「そしてティアマト級の艦長を務めてもらおうか。どう思うか」
「幾ら何でもそれは」
「早いかな」
彼はそう言いながら副官に目をやった。
「そうではないでしょうか」
ミケンズは上官のその問いに遠慮がちにそう答えた。

## 第八部第三章　異邦人その二

「彼はまだ二十代です。その若さで艦長というのは」
「さっき言ったように義勇軍は能力主義だ」
「はい」
「もっともこれは連合軍自体がそうなのだがな。少なくとも建前は」
実際には完全にはいってはいない。ある程度年功序列もあれば各国の利害の衝突もある。どうしてもポストや階級が大国出身の軍人のものになってしまうのだ。大将、艦隊司令クラスまでは艦隊が多く、ポストもまた多い為それは顕著ではないが元帥となると違う。八条はそうしたことを嫌い、あくまで能力主義に徹しているのが救いであるがそれでもやはり限度というものがあった。特に連合においては二十人までと定められている元帥においてはそれが顕著に出る。アメリカ出身のマクレーンや中国出身の劉が元帥となっているのは彼等の能力故だが祖国の影響もやはりあるのである。アフリカ諸国や新興諸国に元帥のポストが少なく、太平洋諸国に多いのはやはり偶然ではないのである。日本人の元帥がいないのは長官である八条が日本人であるというのもやはり関係していた。ここにも連合の持つ複雑な利害関係があった。
「だが実際にはそうそう建前のようにはいかないものだ。何事もな」
「全くです」
「エウロパはエウロパで貴族主義でいっているがな。ああした階級社会とどちらがましなのかはわからんが」
「それはもうわかっていることです」
だがミケンズはここでこう答えた。
「わかっていることか」
「はい。総監は確か猟師の家に生まれられたのですね」
「ああ。恐竜相手のな。かなり大変だぞ」
それはもうさながら軍の攻撃のような狩りであった。巨大な恐竜

を追い、そしてそれを仕留めるのである。重装備で動くかなりのハードな仕事であった。
「見入りがよくてな。代々それを営んでいる。親父も妹の夫婦も今もやっているよ」
「そうですか。私の家は銀行員です」
「ほう」
「一介のサラリーマンといったところです。父はようやく支店長になりましたが」
「いいのではないか。そちらの銀行のことを知っているわけではないが」
「まあ順調な出世ですね。しかし軍に入ると言ったらあまりいい顔はされませんでした」
「何故だね」
「サラリーマンになって欲しかったそうで。けれど私はたまたま大学の軍学部に合格しまして」
「それで軍に進んだと」
「はい。親は一浪して他に進んではどうかと言ったのですが。浪人するのも嫌でしたし」
「そして軍人になったか。人の人生はわからないな」
「全くです。しかし言い換えると誰でも軍人になれるのです」
「うむ」
それは同意であった。
「そして将校になれる。無論他の職業にも就ける。エウロパにはないものでしょうね」
「階級社会ではな。どうしても制限される」
「そうした制限がないだけ連合はエウロパよりも遥かにいと思いますが」
「各国の衝突があってもか」
「エウロパでもありますし、それは」
これは事実であった。エウロパも多くの国家で構成されており、

それぞれの国の間での利害の衝突がやはりある。だが中央政府の権限が強い為連合のそれ程顕著ではない。だがあるのは事実である。
「各国の衝突があるといっても実力がやはり影響するのも事実です」
「それはそうだな」
「エウロパでは貴族以外の高級将校なぞ殆どいないではありませんか」
「政治家や高級官僚にもな」
「はい。それを考えるとやはり我が連合の方が何かとよろしいかと。少なくとも道は遥かに開けております」
「道か」
「はい」
「それが多くあり、開けているからこそよいのだとは限らないかも知れないがな」
「といいますと」
「いや、何でもない」
だがラビルヘンはそれには答えなかった。
「まあ義勇軍は徹底的に実力主義でいこう。いいな」
「そうするのですか」
「そうだ。火事場に飛び込む部隊だ。精鋭主義でいくぞ」
「それならば」
ミケンズも同意した。
「私には異論はありません」
「わかった」
彼はそれを受けて頷いた。こうしてサハラ義勇軍はそれまでとは違った軍となるのであった。そして能力のある者は各国の利害関係や年功序列に関係なく取り立ててられていったのであった。それはグータルズもそうであった。
「まさかこの艦を与えられるとは思わなかったな」
彼は新造されたティアマト級巨大戦艦の艦橋に入るとそう呟いた。
「感慨深そうですね」

「艦長になるとは夢だからな」
艦艇に乗り込む将校にとっては皆そうである。
「やはり思うところああるさ」
「そうですか」
傍らにいる部下はそれに応えた。
「ですがこれだけの巨艦となると動かすのはかなり難しそうですね」
「そうだな。それは今から実感している」
艦橋だけでもかなり違っていた。まるでホールの様な巨大さであった。
「だからこそやりがいがあるが」
「この艦が動かしにくいか」
ここで後ろから声がした。
「？」
グータルズと部下は後ろを振り向いた。そこにはレイミーがいた。
「あ、閣下」
「この艦は特別でね」
レイミーはにこにこしながら二人に語った。
「操艦にもコンピューターの技術をこれまでよりも使っているんだ」
「そうなのですか」
「そうだ。だから操艦もこれまでの艦とは全く違うよ。もっともこれは他の艦艇にも言えることだが」
操艦も重要であった。それが容易ならば作戦や戦術がたて易いからである。
「だから艦艇の乗組員も連合のものはサハラやエウロパより少ないのですね」
「よくわかってるね」
レイミーはそれについて問われさらに機嫌をよくした。
「そのそれだけ乗組員の居住についても考慮できる」
「居住ですか」
「そうだ。何か不都合があるかね」

「え、いえ」
「それは」
二人はレイミーの不思議だと言わんばかりの言葉に言葉を詰まらせた。徴兵制であった彼等の祖国においては居住なぞは考慮されていなかったのだ。あくまで実戦の為である。兵役は義務なのであるから当然であった。
「貴官達も居住に対して不満はないかね」
「不満ですか」
「それは特に」
「そうか。それならばいいんだ」
「はあ」
「居住に問題があっては士気やモラルにも関わるからね。それには配慮しているつもりだ」
「そういうことにも配慮が為されているのですか」
「そうだ。貴官達も劣悪な状況に長くはいたくはないだろう」
「はい」
「誰だって同じだ。そういうことだ」
「わかりました」
答えながらも別世界にいるようであった。やはり彼等にとっては全く次元の違う話であった。
「次にこの艦のことだが」
「はい」
「グータルズ大佐、貴官は前は砲術士官だったね」
「はい」
グータルズはそれに答えた。
「これと同じ型の艦に乗っていたという。実際に砲を取り扱ってどう思ったかね」
「そうですね。コントロールが容易でした」
「ほう」
「そしてその火力に驚きました。まるで要塞です」

「要塞か。これはいい」
「しかも艦載機まで多いですし。あちらについては詳しいことは知りませんが」
そちらは航空士官が取り扱っているのである。知らないのも当然であった。
「だがどれだけの数が搭載されているかは知っているね」
「はい」
「この艦は空母の側面もある。それはよく認識してくれ」
「わかりました」
「そして通信や電子も違うのだ」
「それもですか」
「この艦は艦隊の旗艦となる。通信技術も最新のものを多量に取り入れている」
「はあ」
「一個艦隊を統率する能力は優にある。だがそれだけではない」
「といいますと」
「相互に連絡を取り合うことが出来るのだ。それにより艦隊ごとで連携がとり易い」
「そこまで」
「どうだ、凄い艦だろう」
「はい」
グータルズは感銘すら覚えていた。
「こんな艦は聞いたことがありません」
「それだけに造るのには苦労したよ」
レイミーは感慨深そうにそう呟いた。
「しかしそれだけの介があった」
「はあ」
「これからも頼むよ。そしてこの艦を使って戦いに勝って欲しい」
「わかりました」
グータルズはそれを受けて敬礼した。そして彼等はまた訓練の場

に戻るのであった。
　レイミーは艦を降り地球に戻った。彼にもまた仕事があるのである。
「さてと」
　グータルズは艦長の椅子に座りあらためて艦橋全体を見渡した。
「この椅子を暖めている暇はないだろうな」
「はい」
　部下はそれに答えた。
「ところで貴官の官職氏名は何というか」
「ハッ」
　問われたその部下は敬礼をして答えた。
「ラシード＝ウッディームです。階級は少佐であります」
「そうか。どの国の出身か」
「アガデスです。残念ながら今はもうありませんが」
「アガデスか」
「はい」
　モンサルヴァートにより滅ぼされた国の一つである。
「私もだ。立場は同じだな」
「はい」
「ならば共に戦おう。そして」
「彼等に復讐を」
「うむ」
　グータルズの目の光は強くなっていた。そしてその目は遥かなエウロパを見据えているのであった。

## 第八部第三章　異邦人その三

「やれやれ、忙しい」
連合の交通路は数多くある。その中でも地球への航路はとりわけ交通が多い。だが最近は事情が少し異なっているのである。
「今までここはそんなに人の往来が激しくなかったけれどなあ」
宇宙ステーションの駅員がそうぼやいていた。彼は宇宙船の入港及び出港の業務でもう目が回りそうだったのである。見れば痩せたひょろ長い若い男であった。白人であるが肌はやや黒い。
「折角暇な場所に来たと思ったのに。災難だなあ」
「何を言っとるんだ、君は」
ここで壮年の男の声がした。
「忙しいのは駅員として冥利に尽きるだろうが」
「あ、駅長」
若い駅員は彼に声をかけた。見れば壮年で白い頬髯の男がそこに立っていた。
「わしの若い頃はそれは凄かったのだぞ」
「それはもう何度も聞いていますよ」
彼はうんざりした顔でそう答えた。
「けれど私は忙しいのが苦手なんですよ」
「軟弱なことを言うなあ」
駅長はその言葉に呆れてしまった。
「忙しいとそれだけ働いたという意識があるだろう」
「給料は一緒ですよ」
「やれやれ」
駅長は駅員のそんな言葉を聞いて溜息をついた。
「どうやら君は根本から鍛えなおさんといかんな」
「別にそうしてもらわなくて結構ですけれど」
「どやらそうしても無駄なようだな」

「はあ」
もう完全に呆れてしまっていた。
「まあいい。それで今日の船は何処に向かっているのが多いかね」
「ガンタース星系ですね」
「ほう」
駅長はそれを聞いて声をあげた。
「ガンタースにか」
「はい。これがそのデータです」
駅員はここでその日入港した船の出港先を書いたデータを差し出した。
「その殆どがガンタースに向かっております」
「本当だな」
どうやらこの若い駅員は怠け者ではあるが仕事はそれなりにできるようである。最もやる気は微塵も見られないが。
「そして貨物船ばかりでしたね。客船はありませんでした」
「そうだろうな」
ガンタースが要塞群であることは連合にいる者ならば誰でも知っていた。
「戦艦等はなかったか」
「そうした艦はありませんね。もっとも別の航路はわかりませんが」
「ふむ」
そちらは彼等の勤めている会社とはまた違った会社の航路である。だから彼等もすぐには知ることは出来ないのである。
「乗り入れはあったか」
「ありました。かなり多いです」
「それも全てガンタース行きなんだな」
「はい」
「そうか。どうやらかなりの物資が集められているようだな」
「そのようですね。けれど我々にはそんなことは関係ありませんよ」
「それはそうだ」

彼等はあくまで駅員である。民間企業である。軍事関係だとしてもそれに首を突っ込む理由はない。少なくとも彼等の様な一宇宙港の駅員達の仕事ではない。
「わし等は船の出入港を満足にしておればよいからな」
「そういうことです」
若い駅員の言葉は妙に説得力があった。
「自分の仕事をしていればいいんですよ。俺はそう思いますよ」
「じゃあ真面目にやれ。いいな」
「はいはい」
「はいは一回だ」
「はい」
「・・・・・本当に不真面目な奴だな、君は」
二人はそんなやりとりをしていた。とりあえず彼等の仕事は気楽なものであった。だが中にはそうそう気楽ではない者もいるのである。
「やれやれといったところだな」
連合軍後方支持部長コアトル元帥は連日自分の下に送られてくる書類の山にいささか辟易していた。
「書類だけでもこれだけあるのか」
「残念ながら」
背広を着た男がそれに応える。
「これからまだまだ増えますよ」
「勘弁してくれ」
思わずそう言った。
「このままだと執務室が書類で埋まってしまうぞ」
「既にガンターズは物資で埋まっていますが」
「それでもまだまだこれからだそうだな」
「はい」
背広の男は答えた。
「まだ艦隊の集結も為されておりませんし。話はこれからです」

「それに宣戦布告もまだだ」
「はい」
「それでこれか。実際に戦争になったら後が思いやられるな」
「それはそうですが」
「二千個艦隊の物資となるとまさに天文学的数字だな。その書類にサインするだけでも大変だ」
「企業ではそのおかげで潤っているところもありますけれどね」
「これだけの物資が調達されて動くのだ。それも当然だろう」
「保険業界が軍人に色々とアプローチをかけているそうですよ」
「何という奴等だ」
　これにはコアトルも呆れた。
「死ぬのを楽しみに待っているようだな」
「彼等にしてみればそれが仕事ですから。一概に悪いとは言えませんよ」
「それはわかっているつもりだ。そんなことを言ったら葬儀屋は全員極悪人だ」
「その葬儀屋も色々楽しみにしているそうですよ」
「我々が死ぬのがそんなに嬉しいのか」
「ですからそれが仕事なのです」
「そうだったな」
　コアトルは顔を苦くさせた。
「そのかわり彼等の無事を祈る者もいますよ」
「家族か」
「あと医者です」
「・・・・・・そうだろうな」
　彼等にとっては仕事が増えるからである。患者も多過ぎてはたまったものではない。
「あと宗教家。将兵のところに来てその心の平穏を導いているそうです」
「それはいいことだな」

「占い師も繁盛していますね。そうした関係のグッズが売れているとか」
「それは面白いな。だが国の財政は大変だ」
「国防費はもう火の車ですからね」
「ああ」
国防省の財政も無限ではないのだ。予算の配分は厳しく決められているのだ。
「あれだけではとても足りないだろうな」
「それで長官も頭を悩ませておられるようです」
「当然だな。戦争は資金がなくては何もできない」
「はい。それは経営でも同じですが」
「全くだ。変なところだけ一緒だ」
コアトルはそう言って溜息をついた。
「それで次官はかなり動いておられるようだな」
「そのようですね」
彼等はここで国防次官について言及した。
「予算の獲得に必死になっておられるそうですね。最近あちこちを飛んでおられるようです」
「次官も次官で大変なのだろうな。それでどうなると思う」
「予算ですか」
「そうだ。獲得できないとなればえらいことだぞ」
「私からは何とも言えません」
そう答えるしかなかった。
「そうか」
それはコアトルもわかっていることであった。
「次官に期待するしかないか」
「はい」
八条はこうした予算の獲得といった仕事は得意ではなかった。温厚で淡白な性格故か粘りに欠けるのだ。しかも育ちの良さ故か金といったものに対する執着もない。これは彼の基盤と実家がしっかり

しており、選挙においても資金には困っていないからでもあった。普通連合の政治家といえば選挙資金の確保やスタッフへの給料等に常に頭を悩ませなければならない程なのである。利益を代弁している企業や市民団体、組合等から援助を受けたり支持者からの援助や自分の副業で得た金やそうしたものを使って何とかやりくりしている場合が多い。政治には何かと金がかかるものなのはやはり民主政治においては宿唖と言うべきものであるが連合においてはそれが顕著であった。だが八条はそれについては考慮する必要がないという極めて恵まれた立場にいたのだ。

## 第八部第三章　異邦人その四

「長官の唯一の欠点だろうな」
「本当に。まあ仕方ないですが」
八条は得た資金をどう活用するかは上手い。しかしその資金の獲得の方法を知らないのである。それこそが問題なのであった。政治というものはやはり何をするにあたっても資金が必要なのであるから。
「そうした汚れ仕事を引き受けるのは次官しかいないか」
「そうですね。ここはあの人に全てを任せましょう」
「うむ。そうするしかないだろうな」
「はい」
「あと貴官に一つ言っておくことがある」
コアトルはここで話題を変えた。
「何でしょうか」
「長官の欠点はもう一つあった」
「ありましたか？」
ミケンズは怪訝そうな顔をした。
「ああ。女性の心理を読めないということだ」
「確かに」
ミケンズはそれを聞いて頷いた。
「それもかなり極端にですね」
「本当にな。よくあれだけ鈍感でいられるものだ」
「何でも長官の母国の陛下からチョコレートを賜ってもそれが何故か今一つわかっておられなかったそうですから」
「そういう人なのだ、あの人は」
「最近ではもう一人ライバルが出たそうですよ」
「聞いているよ」
コアトルはそう答えて笑った。

「あの甘いものが何よりも好きな才媛だろう」
「はい。相変わらず長官は気付いておられないようですが」
「不思議なものだ。あれだけのルックスであれだとは。普通美男子といえばプレイボーイなのだが」
「長官の母国の古典のように」
源氏物語のことであるのは言うまでもない。連合においてはかなり知られた古典である。ただ原本は文章があまりにも難解なので現代語訳されたものが読まれる。それに古代の日本語を解読できる者は学者でもない限りいないのである。
「何でもかなりの漁色家の話だったな」
「ええ。総監は読まれたことはないのですか」
「平家物語と太平記ならあるが」
軍記ものとして有名な二作である。
「特に平家物語はいいな。実は恋愛ものは読まないのだ」
「左様でしたか」
「そのかわり妻が好きだ。この前は源氏物語の舞台に付き合わされた」
「それはまた」
「何日も続くあれをな。通しというのか」
「はい」
歌舞伎の用語である。一つの演劇の最初から最後までを一通り上演するのである。歌舞伎は一つの場を上演することが多いことからそういう呼び方となったのである。
「最初から最後まで付き合わされた。かなり疲れたぞ」
「ニーベルングの指輪みたいなものでしょうか」
ドイツの音楽家ワーグナーの作り上げた大作である。四日かけて上演する。全十五時間にも及ぶ壮大な楽劇である。
「あれよりずっと長い」
「はあ、あれよりですか」
これにはミケンズも面食らった。

「疲れた。それで休暇は消えてしまったよ。これも家族サービスだと諦めているが」
実は彼は愛妻家としても知られているのである。
「それに少しは知識がついたかな、とも思っている」
「ですね」
「要するに一代の好色貴公子の話だ」
「一言で言うとそうなるかも知れませんが」
これにはミケンズは異論があった。
「名作でありますよ」
「ふむ」
それを聞いてコアトルは腕を組んで考え込んだ。
「そうなのだろうがやはり好きにはなれなかったわ。妻には済まないが」
「そうですか」
「まあ長官とは全く違う主人公だと思ったがな。さて、その長官だが」
「はい」
「予算の獲得はまた別の仕事だ。だがそれでも頑張ってもらわないとは」
「そうですね」
これにはコアトルも同意した。やはりトップがしっかりとしていないと駄目であるのだ。

国防省の次官はイリア＝シャリアピンという。金の髪に黒い瞳の地味な外見の白人の男である。中肉中背で容姿もこれといって目立たない。黒ブチ眼鏡がよく似合っている。髪型も七三分けにしておりよく銀行員と間違われる。リトアニア出身でありかっては財務省にいた。だが国防省が設立されるとそこに移籍したのである。これは財政面を担当するスタッフが必要であるという大統領の決断からであった。財務省としても特に拒む理由もなく国防省にすんなりと

移ることとなったのである。
彼は次官となった。そして八条の仕事をサポートする立場となった。所謂裏方であり目立たないが彼はそれを不満とは思っていないようであった。
「人間色々な人生がある」
よくこう言われる。
「中には日陰で裏方として生きている者もいるだろう」
そしてこうも言われる。そうした者は実際に多い。
「しかしそうした者がいないと世間は動かない。そうした者もまた必要なのだ。そして裏方であることにはかなんではならない。何時か彼等にも日が差すのだから」
あくまで理想であり空虚にも聞こえるがこれもまた真実の一面であろう。カレーラスが持っているバイソングループの野球チームの監督であるウェストが優勝する前にそう言ったがこれにより多くの者が元気付けられたものであった。
次官は所謂裏方である。長官では出来ないような仕事も担当する。その中には長官の不得意な分野もある。それこそが予算の獲得であったのだ。
「ふむ」
彼は次官室で一人資料に目を通しながら呟いていた。
「やはりこのままでは作戦の発動及び継続は不可能だな」
低く抑制のきいた声であった。ややもすれば無機質に聞こえる。
彼は電話を手にした。すぐに相手が出て来た。
「国防省のシャリアピンですが」
彼は相手にまず名乗った。
「今からそちらにお伺いしても宜しいでしょうか」
返事はすぐに返ってきた。
「わかりました。それでは後程」
そして頷くと電話を置いた。だがすぐに電話をまた手にした。
「次官です」

彼はそう相手に対して言った。
「ええ、すぐに出ます」
口調はやはり変わらなかった。
「はい、もう準備はできていますか。それは何より」
頷いていた。その頷き方は事務的なものがあった。
「それでは。今からそちらに向かいます」
そして電話を切った。彼は立ち上がると席を立った。そして部屋を出て扉の札を外出中にしてから国防省を出た。
駐車場に行くと車が一台待機していた。彼はそちらに向かった。
「行きますか」
「はい」
運転手は頷いた。彼は後部座席ではなく助手席に座ると車を発進させた。扉も自分で開けた。
「財務省で宜しいですね」
運転手は彼に行く先を尋ねた。
「はい」
彼は答えた。その目は前のみを見ている。
「そちらにお願いします」
「わかりました」
こうしてシャリアピンは財務省に向かった。彼は財務省に入ると長官室には向かわなかった。次官室に向かったのである。扉の前に来るとノックをした。
「どうぞ」
中に入ると黒い髪の紳士が立っていた。
「お久し振りですね」
「はい」
シャリアピンはそれに答えた。
「ご用件はわかっておりますよ」
「やはり」
シャリアピンはそれを聞いてもさして驚かなかったようである。

「それでは話が早い。早速話に入りましょうか」
「少し待って下さい」
だが紳士はここで彼を制止した。
「何故ですか」
「食事の時間です」
「おや」
そう言われたシャリアピンは壁にかかっている時計に目をやった。見ればもう十二時である。
「そういえばそういう時間ですね」
「どうです、ご一緒しませんか」
「お話をしながらなら」
「いいでしょう。ではここで食事を採ることにしましょう」
「はい」
こうして二人は次官室のテーブルに座った。紳士は電話で食事を部屋に持って来るように伝えた。
「メニューはどうしますか」
「今日のお勧めを」
彼はそう答えた。そしてすぐにシャリアピンとの話に入った。
「さてと」
紳士はまず前置きをした。
「財務省ではかなり予算に困っているようですね」
「否定はしません」
シャリアピンはそう答えた。
「エウロパと戦端を開くとなるとかなりの戦費が必要です。しかし」
「戦争を継続するだけの予算がないと」
「そういうことです。まずは動員される艦隊等の移動やその補給でもかなりの費用がかかります」
「ふむ」
「そして戦うとなると。その戦費は途方もないものとなります」
「そうでしょうね。艦を一隻を動かすだけでも金がかかります」

「はい」
「宇宙海賊を征伐するだけでもかなりの費用がかかります。ましてや他国との全面戦争になると」
「おわかりですね」
「はい」
紳士は答えた。
「私も以前は軍需産業におりましたから」
「そうでしたね」
この紳士の名はロンド＝サックスという。ビッグリバー連邦出身でありかっては祖国のとある軍需産業において経理部門のトップを務めていた。だが財務省からスカウトを受け出向という形で次官に就任したのだ。
「ですからそれなりには理解しているつもりです」
「はい」
「八条長官は何と仰っておますか」
「長官は何も仰いませんね」
「そうですか、やはり」
そうしたことには一切不平等を口にはしないのが八条である。
「それは私の仕事です。ですからこちらに参りました」
ここで扉をノックする音がした。
「どうぞ」
サックスは入るように言った。そして料理が二人の前に並べられた。メニューはベトナム料理であった。

## 第八部第三章　異邦人その五

「ほう」
二人はそれを見て思わず声をあげた。生春巻きとビーフンに大蒜を効かせた肉団子、ベトナム風のお好み焼きであった。それに白い御飯もある。米は細長い米であった。
「この米とは有り難いですね」
シャリアピンはその米を目にして目を細めた。
「長官は日本の方でして」
「それは知っていますよ。ならば」
「はい。長官は日本の米がお好きでしてね。私の舌には今一つ合わないのです」
「私もですよ」
サックスはそれに相槌を打った。
「どうもベタベタしているような気がしますね」
「そうです。それがどうも苦手でして」
彼はその顔を微かに苦いものにさせた。
「長官や秘書官の木口君はそれがいいのですけれどね。私は生憎」
「カレーなんかでもあの米ですよね」
「ええ。よく御存知ですね」
「日本に行ったことがありますから」
サックスはここでそう答えた。
「あそこで日本のカレーを食べたことがあります。やっぱりあの米でしたよ」
「そうでしょうね」
「ところがあのルーにはあの米が合ったりします」
「そうなのですか」
「はい。まあ料理に合ったということでしょうね」
「そうですか」

「ベトナム料理にはこの米が一番ですが」
「はい」
「和食にはあの米です。国防次官もそうは思われませんか」
「言われみれば」
彼はここで八条や木口達と共に食べた和食を思い出した。煮魚や野菜の煮付け等である。
「そうかも知れませんね。やはりあの米は今一つ好きにはなれませんが」
「米も料理を選ぶということですよ。では今は」
「このベトナム料理を楽しむとしますか」
「はい」
二人は箸を手にした。そして料理を口にしながら予算の話を再開した。
「この話八条長官は御存知ですよね」
「当然です」
シャリアピンはそう答えた。
「ですからここに来たのです」
「ですか。ならいいです」
サックスはそれを聞いて納得したようである。答えながら生春巻きを口に入れた。口の中に生野菜と海老の味が拡がっていく。
「私から提案して通してもらいました。とにかく今後エウロパと戦えるだけの戦費を調達しなければならないと。直訴でしたよ」
「直訴ですか」
それを聞いたサックスの箸が一瞬止まった。
「はい」
シャリアピンは眉一つ動かさずそれに答えた。
「直接申し上げなければ意味がないでしょう」
「確かにそうですが」
「長官は話のわかる方ですから。すぐに認めて下さいましたよ」
「よかったですね」

やはりワンマンな上司やリーダーはいるものである。サックスは企業におりそうした者を多くみてきた。そしてそれに反論する者が更迭されたり追い出されたりするのを見てきたのである。
「言われましたよ。それならお願いがありますと」
「お願い」
「充分な予算を貰って来て下さいとね」
「成程」
ここでサックスは肉団子を口に入れた。
「鳥、いや違うな」
「雉ですね」
シャリアピンがそれに答えた。
「雉」
「ええ、この味は」
シャリアピンも肉団子を口に入れていた。そして味わっていた。
「鳥と少し違うでしょう」
「確かに」
「そしてこれはカウナス星系の雉です」
「よくそこまでおわかりですね」
「私の出身地ですから。それに雉は好きで子供の頃からよく食べていました」
「そうだったのですか」
「はい」
彼は淀むことなくそう答えた。
「他にも鴨や鶉等もよく食べました。何しろ鳥が多い星でしたから」
「そうだったのですか。道理で」
「次官の故郷でも鳥はよく食べられますね」
「ええ」
彼はそれに答えた。
「鶏が主流ですけれどね」
「鶏ですか」

「はい。私はその中で軍鶏が好きですね」
「軍鶏。ああ、闘鶏で使われる」
日本やタイにおいてよく行われる競技である。鶏同士を戦わせるのだ。当然のようにそこでは賭けも行われる。競馬や競輪、同じジャンルで言うと闘犬と同じである。
「はい。年をとり引退した軍鶏の肉が好きですね。少し固いですが」
「固い肉はヨーグルトに漬けてくとよいですよ」
「そうなのですか」
「はい。これはマウリアでよく行われることですけれどね。そうすれば肉がかなり柔らかくなります」
「ふむふむ」
彼はまた団子を食べながら頷いていた。
「よい勉強になりました、それは」
「牛ならパパイアの酵素がいいそうです。アメリカ人でもなければ食べられないようなゴムの様な肉もそれで食べられるようになります」
「ゴムですか、アメリカ人の食べる肉は」
「私の顎にとってはそうです」
どうやらこのシャリアピンという人物は外見に似合わず意外と食道楽のようである。
「もっとも私が一番お勧めの肉料理はパパイアを使ったものではありませんが」
「といいますと」
「私の名を冠したステーキです」
「あれですか」
そう言われてサックスもすぐに気付いた。
「はい」
シャリアピンは頷いた。それはシャリアピン＝ステーキである。二十世紀初頭に活躍したロシアのバス歌手フョードル＝シャリアピンは美食家としても知られ、彼が日本に来た際とある料理人が彼を

唸らせる為に作ったという。玉葱を利かせたワイルドなステーキである。
「あれは最高ですね」
「そうですね、確かに肉と玉葱は合う」
「はい。玉葱の辛みと実によく合って」
「そう言われると食べたくなってきましたよ」
「ははは」
二人はそんな話をしながら食事を進めていたが食べるものが少なくなってくると話をまた仕事の方に戻した。
「ところで予算の方ですが」
「わかっておりますよ」
サックスはそれに答えた。
「そちらも大変でしょう。ましてや今回は国家の大事」
「ならば」
「私としては予算を回すことにやぶさかではありません。議会もおそらく承認するでしょう」
「左様ですか」
「長官もおおむね了承して下さるでしょう。後は大統領と首相の裁決だけです」
「ならば大丈夫ですね」
「ところがまだ問題がありますよ。額です」
「額」
「それの如何によっては認められない場合もあります」
「国民にも、ですね」
「そうですね。今は開戦すべきだという意見が支配的ですしそれにより予算も通ると思いますが」
「予算の額によってはそれも変わると」
「はい。ですから私としてはあまり多くの額を要求されることはお勧めしません」
これは当然であった。国家の予算は軍事費だけに使われるもので

はない。連合のように多くの国家、市民で構成される国家において軍事費だけに予算を集中させるということは今までなかったことである。これは連合が長い間他国との戦争を行ってこなかったことも要因であるがやはり開拓やインフラ、植民、福祉に多くの資金を割く必要があるからである。それは連合にとって軍事より遥かに重要な事柄であるのだ。そしてシャリアピンも連合にいるからこそそれはよくわかっていた。

## 第八部第三章　異邦人その六

「そうですね。やはり見積もりではエウロパ全土を占領、維持できるだけの額が必要だとのことですが」
「膨大なものになりますね、それは」
「実際に全土を制圧しなくともそれだけの資金は必要だとの見積もりです」
「そこまで出せるかどうかといいますと」
「難しいですか」
「残念ですが」
サックスはそう言って断った。
「それの八割程ならいけると思いますが」
「八割ですか」
「そうです。それで妥協して頂けないでしょうか。申し訳ありませんが」
「そこを何とか」
「いや、しかし」
ここから静かであるが熾烈なやりとりがはじまった。財務省にも財務省の計画があるし、国防省にも国防省の計画がある。従って双方共退くわけにはいかなかった。
やがて話は終わった。双方は妥協案を出し合った。
「では要求の予算の九割ということでどうでしょうか」
二人はほぼ同時に同じ提案を切り出した。
「ムッ」
それを聞いてお互い眉を上げた。
「決まりですね」
「はい」
二人は頷き合った。こうしてシャリアピンは予算を何とかかくとくしたのであった。そしてそれはすぐに八条に報告された。

「九割ですか」
八条は執務室でその報告をシャリアピン本人から直接聞いた。
「はい、申し訳ありませんが」
「何、それだけあれば充分です」
しかし彼はそれを咎めようとしなかった。
「むしろ私が予想したより遥かに多い額で嬉しい限りです」
「そうなのですか」
「ええ。私が以前日本軍にいたことは知っていますね」
「はい」
「治安がいいせいか軍にはあまり予算を回してくれなくて。やりくりにはかなり苦労していたのですよ」
「そうらしいですね」
日本の軍事費にかける割合の少なさは連合においても有名であった。少数精鋭、清貧と言えば聞こえがいいが歴代政権が軍事に対していささか手を抜いていたという側面は否定出来ない。実際に予算は少ないのに兵器は全て国産にこだわり輸出もせず、少しずつ作っていくので異常に高い兵器となっていた。その皺寄せはしっかりと他の分野に及んでいた。
「時には要求した額の三割程しか貰えなかった時もあります」
「それで何か出来るのですか？」
「やらなければ仕方ないので。いつも何かしていましたよ」
「そうなのですか」
彼はそれを聞いて何故八条が予算の配分に長けているかを知った。過去の経験からだったのだ。
「私は大尉で退官しましたがね」
「はい」
「それでも色々とやりくりには苦労しました。しかも補給担当でしたので」
「補給担当でしたか」
「ええ。経理とね。これは以前お話しなかったでしょうか」

「いえ」
これは流石に初耳であった。
「そうですか。なら仕方ないですね。それで船の会計等を担当していたのですが」
「大変でしたか」
「ええ、それはもう。とにかく予算がなくて」
「しかしそうしたことはある程度裏帳簿があるものでしょう」
軍にもそうしたものは存在する。褒められたものではないがそれを持っており、上手く使うのもまた補給関係の人間としての力量の一つであった。
「それが我が国の会計はそうしたことへの監視が厳しくて」
「できませんか」
「はい。それにそれは邪道ですよ」
ここで八条の潔癖症が出て来た。
「そういうことをしても結局は同じですよ」
「そういうものですか」
「はい。そうした努力をするよりやはり限られた予算を上手く使うことですね」
それは正論であった。
「それが出来ないと同じことですから」
「それはそうですが」
だが彼のそうした生真面目さにやはり戸惑いを覚えずにはいられなかった。よくないことは事実であるがそれを上手くするのもステータスと見られる風潮が確かにあるからだ。
「それで私はそういう考えで補給長をやってきました」
「上手くいきましたか」
「何とか。やろうと思えばやれるものですよ」
「左様ですか」
だが相当な苦労があっただろうと予想できた。しかも容易に。だがあえてそれを選んだのはやはり金銭に困ったことがないという彼

の独特の金銭に対する考えからくるものであろうと思った。そして同時にやはり彼はそうした裏の道を歩くことはできない人間だと思った。
「九割もあれば充分ですよ。ここは私に任せて下さい」
「充分ですか」
これは彼にとっては致命的なリスクであったが八条はそうは考えていなかった。
「充分過ぎる程です。まあお任せ下さい」
「わかりました」
シャリアピンは頷くしかなかった。彼のその微笑を見てしまったからだ。
八条の魅力の一つとしてその微笑みがある。整った顔で優美に微笑むのだ。これにより多くの者の心を捉え選挙にも有利に進めてきた。政策や演説以外にもそうした魅力も政治家にとって必要なのだ。彼はごく自然にそうしたことができる人間であったのだ。
「それではお願いします」
「はい」
これでこの話は終わった。ここでディカプリオが部屋に入って来た。
「あ、次官もおられましたか。これは都合がいい」
「私も？」
「はい」
ディカプリオは彼に対しそう答えた。
「今しがた面白い情報が入りました」
「面白い情報」
「それは一体」
八条もそれに興味を覚えた。
「宜しければお話してくれませんか」
「勿論です。その為にここに来たのですから」
彼はそう答えて二人に話をはじめた。

「ティムール連合のシャイターン主席に妹がいるのは知っていますね」
「そうらしいですね」
「しかも絶世の美女だとか」
二人はそれに答えた。
「しかしそれが一体」
「あちらの芸能界にデビューでもしたのですか」
確かにそうなっても不思議ではない美貌ではあった。
「残念ですが違います」
だがディカプリオはその問いを笑って否定した。
「もっと面白いお話です」
「もっと」
「はい。何だと思われますか」
「ううむ」
二人はそれを受けて考え込んだ。
「婚約したとか」
八条はポツリと呟いた。
「だとしたら婚約された御仁はかなりの幸せ者ですね。あれだけの美人はそうそうおりませんよ。私の妻程ではないでしょうが」
ここでさりげなくのろけているがこれは他の二人になかったこととされた。実際に彼の細君は中々の美人として知られている。
「ご名答」
ディカプリオはまた微笑んでそれに答えた。

## 第八部第三章　異邦人その七

「婚約の話が出ております」
「それはそれは」
シャリアピンはその話に目を細めた。
「よいお話ですね。そして相手は」
「アッディーン元帥です」
今度は悪戯っぽく笑ってそれに答えた。
「えっ！？」
それを聞いて二人は思わず声をあげた。
「それは本当ですか！？」
「驚くことがありますか」
ディカプリオはわざとおどけた様子でそれに答えた。
「ムスリムと結婚できるのはムスリムのみですよ。しかし同じムスリムであれば相手はどの様な立場や身分であってもよいのです」
「しかしそれでも」
相手が相手であった。驚かずにはいられなかった。
「御二人の仰りたいことはわかっております」
ディカプリオはそれに答えた。
「この婚約が本当だとすると何かあるのではないかと仰りたいのですね」
「ええ」
「そう考えるのが普通でしょう」
二人は彼にそう答えた。
「そして何かあるのですか」
シャリアピンが尋ねた。
「婚姻政策とか」
「私はそれだと考えております」
八条にそう答えた。その顔は真摯なものとなっていた。

「オムダーマンのナンバー2となったアッディーン元帥と結び付きを深める為だと思います。そして同時にオムダーマンとの関係を深める。かってはよくあった話です」
「それはそうですが」
実際にはこの時代でもあることであった。エウロパの王家や上流貴族達は最早互いに親戚同士であるような状況であったし連合においても皇室や王家同士での婚姻がある。他にも有力者の家でもあったりすることである。これは少なくなってもどの時代でもどの国家でもあることであった。
「とりわけサハラでは多い話ではないでしょうか」
「はい」
二人は頷いた。実際に一族の結束や&#3236３;がりの深いサハラではそうした婚姻により互いの一族の結び付きを深めることがよくあるのである。尚この時代においても妻は四人まで持ってもよいことになっている。だがそれに多額の結納が必要であり、しかも複数の妻を公平に愛さなければならないのもまた同じであった。世の中というものは男に都合よくできてばかりいるものではないのだ。
「しかし一つ気になることがあります」
だが八条はあえてここでこう言った。
「何でしょうか」
「シャイターン主席の御家のことは知っているつもりです」
「はい」
彼等とてサハラのことに関して全く無知なのではない。国防省の要職にある者としてそれは許されないことである。当然シャイターン家が教団の法皇がおり、その財力と権謀により勢力を強めていった家であることも知っていた。
「当然アッディーン元帥のことも」
そしてアッディーンのことも知っていた。彼がごく普通の公務員の家に生まれ幼年学校から軍人になったことも知っていた。オムダ

ーマンには権門の家がサハラの他の国に比べて少ないことも知っているのである。
「それを考えるとアッディーン元帥との婚姻は今一つわかりませんね」
「私も長官と同じ考えです」
シャリアピンもであった。
「どうせならハサンの権門の家との婚姻の方がよいのではないかと思うのですが」
「私もそう思います」
ディカプリオもそう述べた。
「アッディーン元帥は確かに一代の名将と呼ぶべき人物ですが」
「ええ」
「それだけで婚姻を容易に結ぶとは思えません」
「というと他に何かがあるのですね」
「私にはそう思えてなりません」
ディカプリオはそう言って顔に疑念を漂わせた。
「それが何かまではまだ結論は出ておりませんが」
「それでも何かあると」
「はい」
彼は二人の上司にそう答えた。
「むしろ何かないと思う方が不思議ではないでしょうか。シャイターン主席の心の中までは到底読めませんが」
彼とて神ではない。神ならざる者がそこまで出来る筈もなかった。
「ましてやマルヤム嬢は彼等にとっては大切なクイーンです。それ程重要な存在を容易に嫁がせるとは思えません」
「そうですね」
二人はディカプリオの言葉に同意した。ここでディカプリオはチェスの駒を例えに出していた。
「だとするとどういう意図か」
「さしあたって考えられるのはハサンに対して何かするつもりなの

でしょうが」
「ハサンに」
「はい。彼等がより勢力を伸張させるというのならハサンを滅ぼすでしょう。まずはエウロパの総督府ですが」
「エウロパの総督府ですらどうこうも出来そうになりませんが」
「それは我々の今後次第ですね」
ディカプリオのその言葉を聞いた二人の目の色が変わった。
「成程」
そして頷き合った。
「だからこそ同盟を結びたがったということですか」
八条は状況を理解しだした。
「どうやらシャイターン主席は並々ならぬ野心を持たれているようですね」
「そのようですね。それもかなりの」
シャリアピンも理解した。
「まずは我々とエウロパとの戦いで漁夫の利を得る。そしてそれから」
「大魚を捕らえる。周到ではありますな」
「しかしそう上手くいきますかね」
ディカプリオがここで言った。
「まず我々自体がまだエウロパと戦うと正式に決まったわけではありませんから」
確定的である、としてもだ。まだ流動的な要素が入る余地があった。
「ならば争わせるように仕向けるでしょうね」
八条は冷徹にそう述べた。
「彼にとっては起こってもらわなくてはならない戦争なのですから」
「戦争を作るのですか」
「そういうことになります」
普段とは表情が変わっていた。貴公子から冷徹な分析者となって

いた。
「ただ、彼は我々が彼自身をどう見ているのかもわかっていると思います」
「そのうえでも必要とあらばやる、と」
「それがシャイターン家なのでしょうね」
そうでなければあそこまでなれる筈もなかった。一介の傭兵隊長が瞬く間に一つの国家の元首にまでなったのだ。これは運だけで到底なれるものではなかった。
「目的の為には手段も選ばない。権謀も使う」
「そしてそれがサハラにおいて生きるに正しい道でした」
ディカプリオの言葉にそう付け加えた。サハラは連合とは違う。多くの国家に分かれ互いに争ってきたのだ。一千年もの間彼等は争いを繰り広げてきた。それ故そうした権謀術数も発達したのであった。これもまた生きる方法であった。連合において開拓や産業が発達したのとベクトルこそ違うが同じなのである。
「悪いことではありませんよ、少なくともサハラでは」
「そうですね。そうした世界なのですから」
シャリアピンが八条の言葉にそう応えた。
「ですが我々がそれに乗る必要はありません」
「はい」
八条はそれに頷いた。
「今後ティムールには注意が必要です。一体何をするか」
「はい」
今度は他の二人が頷いた。
「カバリエ外相にお話しておきましょう。今後サハラにおける情報収集を強化して欲しいと」
「そうですね。これは外務省にとっても重要な仕事です」
他国の情報収集は国防省の諜報員だけで出来るものではない。外務省の協力も必要であった。無論それだけではなく他の省庁の協力も必要なのであるが。

「どうやらエウロパとの戦いの後も色々とあるようですね」
「さしあたっては我々はサハラには介入する理由もないのですけれどね」
「難民が出ず交易さえ保障されればですが」
「それは彼等次第です」
「はい」
三人はそう頷き合った。そしてこの場での話は終わった。そしてそれぞれの仕事に戻るのであった。時は確実に動く。そして彼等はその中で果たさねばならないことを山の様に抱えている立場にあるのであるから。

# 第八部第四章　総動員令その一

## 総動員令

連合が戦争への準備を着々と進めているその頃エウロパにおいても戦争への準備が進められていた。むしろそれは彼等の方が進めていたといっても過言ではなかった。

なぜならば彼等の国力は連合とは比較にならないからだ。人口、経済力、軍事力においてそれぞれ三十倍の差がある。軍事力は今のところそこまで開いてはいないがそれでも大きな差があるのは事実であった。やはりそれが彼等の心理に大きな影響を与えていた。

「どうすれば連合を防げるか」

彼等はそれだけを考えていた。

「少ない国力や兵力で防げるか」

それが課題であった。そしてそれをどう為すかどうか考えていた。しかしそれが容易ではないことは言うまでもないことであった。だからこそ彼等は苦悩していた。

中央の総統政府だけでなく地方政府といってよい各国の政府も苦悩していた。そしてそれは国民も同じであった。彼等は貴族も平民も皆如何にして連合と戦うべきかを考えていた。

「開戦は避けられない状況となっているな」

ラフネールは自身の官邸の執務室でシュヴァルツブルグ及びモンサルヴァートを前にしてそう切り出した。

「我々と彼等の戦力差は最早取り繕えるものではない。だが戦わなくてはならない」

「はい」

二人はラフネールの言葉に頷いた。

「今のところ戦力はどれ位集まっているか」

「志願兵も入れて三百個艦隊程です」

シュヴァルツブルグがそれに答えた。

「宇宙艦隊司令長官が彼等を訓練中です。練度は順調に上がっております」
「そうか。それは何よりだ。やはり彼を長官にしたのは正解だったようだな」
「はい」
シュヴァルツブルグはそれに頷いた。今のエウロパの宇宙艦隊司令長官はキーン＝バルバロッサ＝ローズのことを言っているのだ。なお彼はエウロパ元帥に昇進した。これもシュヴァルツブルグやモンサルヴァートと同じである。
「艦隊の練度を上げるのは彼に任せていればいいな。だが」
「はい。やはり数がとても足りません」
シュヴァルツブルグはそう言った。彼等にとって最大の懸念はやはりそこであった。
「三百個艦隊、五億ではまだとても足りない」
「おそらく連合は六十億を優に越える兵を送り込んでくるでしょう。それを考えますと」
「より多くの兵が必要だな。だがどうして集めるかだ」
ラフネールは眉を歪めてそう言った。
「彼等に対抗できるような兵力を揃えることは不可能としてもだ。戦えるだけの兵が必要だ。今ではとてもその域まで達してはいないだろう」
「はい」
「どうするかだ。志願を募るのももう限界だ。他に何かあるといえば」
「徴兵制ですか」
ここでモンサルヴァートがそれを口にした。
「これならば兵をより集めることも可能ですが」
「それしかないか、やはり」
ラフネールの顔に苦渋が浮かんだ。
「非常時とはいえとりたくはなかったが」

「仕方ないかと。ただその兵は精鋭でなければなりません」
「選抜徴兵制にするということか」
「実質的には。技術者や身体能力の高い者を兵士にすればいいかと思います。これによりより多くの兵が入ることでしょう」
「そうだな。ではそうするか」
「それが宜しいかと」
ラフネールにもそれはわかっていた。そして何よりも逡巡している時ではないことがわかっていた。ならばそうするしかなかったのである。
「よし。議会に徴兵制の法案を提出しよう。すぐにそれの書類作りにかかってくれ」
「ハッ」
モンサルヴァートはそれを受けて敬礼した。
「だが徴兵制だけではまだ不完全ですな」
ここでシュヴァルツブルグが口を開いた。
「といいますと」
モンサルヴァートがそれに問うた。
「兵士だけでは戦争は出来ないということです」
「成程。そういうことですか」
彼はそれを聞いてこの老齢の軍務大臣が何を言いたいのか即座に理解した。そして答えた。
「それでは産業の方もそれに合わせるべきですね。国の全てを戦争に向けなければならない」
「総動員か」
ラフネールがそれを聞いて呟くように言葉を漏らした。
「そういうことになりますな」
シュヴァルツブルグはそれに低い声で答えた。
「やはりそれだけしないと連合と戦うのは不可能であると存じます」
「問題は間に合うかだな、戦いまでに」
「間に合わせるのです」

シュヴァルツブルグの声が強くなった。
「そうでなければ我々は滅びます。むざむざ滅んでよいものでしょうか」
「まさか」
ラフネールはその言葉に首を横に振った。
「そう考えているならば今この場に君達二人を呼んだりなぞはしないさ」
「それを聞いて安心しました。では決まりですな」
「うむ」
ラフネールは強く頷いた。
「総動員令も発しよう。すぐにな」
「はい」
「エウロパは一千年の歴史がある。だが今まで外敵に侵攻されたことはなかった」
ラフネールはここで語りはじめた。
「そしてこれ程までの危機に瀕したこともなかった。増え過ぎた人口に悩まされることはあっても連合の脅威を隣に置いていてもここまではなかった」
「はい」
二人はその言葉に頷いた。
「だが今その危機にある。そしてその危機を乗り越えなくてはならない」
「わかっております」
それに答えた。
「その為にはどんなことでもしよう。例えこの命をゼウスやヴォータンに捧げようともな。それは卿等の命もだ」
「もとよりそれは承知のこと」
シュヴァルツブルグがそれに答えた。
「エウロパの武人として当然のことです」
「私もです」

モンサルヴァートもそれに答えた。
「この命、喜んで戦の神々に捧げましょう。エウロパの為に」
エウロパにおける戦いの神は何人か存在する。アテナにアーレス、ヴォータンにティール等である。とりわけアテナとヴォータンが篤い信仰を受けている。イタリアやフランス、スペインの者はアテナを信仰することが多くドイツやスウェーデンの者はヴォータンを信仰する。かってのギリシアと北欧の神話体系の名残であった。
「では頼む。私もいざという時にはこのオリンポスを枕に討ち死にする覚悟だ」
「総統もですか」
「私とてエウロパの者だ。その誇りはあるさ」
そう答えて微笑んだ。彼はフランスの子爵家に生まれたあまり大きくない貴族の家の者である。代々学者であり歴史学において知られた人物であった。政治家になっのは偶然の産物であった。かっての生徒が政治家になった折にスタッフとして迎え入れられたのであった。その学識を買われてのことであった。そこで政党の党首に見込まれて彼自身も政治家となることになった。そして遂にはエウロパの総統に就任したのである。
「武器を手にしたことはないがね。ペン以上に重いものを持ったことはないにしろだ」
そう自嘲めかして言うがその目の光は違っていた。

## 第八部第四章　総動員令その二

「逃げたりなぞはしない。それは理解してくれ」
「わかりました」
二人は彼の覚悟を受けて応えるしかなかった。
「それでは我々は仕事に取り掛かります」
「うむ、頼むぞ」
ラフネールはそれに応えた。
「エウロパは卿等にかかっているからな」
「ハッ」
二人は敬礼してそに応えた。そして部屋を後にした。
官邸の廊下を進む。壮麗な装飾が所々に見られる。その中に溶け込むようにしてエウロパの美麗な軍服が見られる。連合の軍服が機能性を重視しているのに対してエウロパのそれは華麗さを強調しているのである。これはとりわけ将官の軍服がそうである。
准将以上の者の軍服は丈が長くなっている。くるぶしまでかかる程長く赤と黒だけでなく金や銀も入っている。そして大将以上になると身に纏うのは軍服だけではなくなる。マントも羽織るのである。大将は白、上級大将は黒、そして元帥は赤となっている。シュヴァルツブルグもモンサルヴァートも華麗な軍服の上にマントを羽織っている。
見れば官邸にも最近軍服の者が増えていた。それも丈の長い軍服の者が。マントを羽織っている者もやはりいた。
二人は彼等の敬礼を受けながら廊下を進んだ。そして車の中に入った。モンサルヴァートはそれからシュヴァルツブルグに対して言った。
「軍服の者が多くなりましたね」
「そうだな」
彼はそれに答えた。

「今の状況だとな。致し方あるまい」
「はい。それだけエウロパが困難な状況に置かれているということです」
「ところで前の情報部長のことは聞いているか」
「フィレンツォ＝ディ＝シリアーニ大将ですか。確かステッラの件の責任をとり辞任したのでしたね」
「そうだ。彼はその後故郷に帰っていたが」
「はい」
「今日自ら命を絶った。朝にその報告を受けた」
「そうですか」
モンサルヴァートはそれを聞いて暗い顔になった。
「優秀な人物でしたが」
「自責の念に負けたのだろう。気の毒だが」
「誰よりも責任感の強い者でしたからね」
モンサルヴァートも彼をよく知っていた。
「後日彼の送別式が執り行われる。だが参加者は身内の一部の者だけに限るらしい」
「密葬ですか」
「本人の生前からの願いでな」
「そういうことですか。ですが我々も」
「わかっている。何時ヴァルハラに行くかわからないからな。その覚悟はしておいてくれ」
「はい」
ここで軍務省に着いた。二人は車を降りた。
「さて」
出迎えを受け中に入る。そして軍務相の執務室に入った。
「総動員令だが。一体どれだけの兵が集まるかな」
「無駄に徴兵しても意味がありませんからね」
「そうだ。一千年前ならともかくな」
世界大戦の折には学徒動員や果てには中学生にまで銃を持たせて

戦場に送った。ナチスやソ連などは中学生にまで銃を持たせていたのだ。無論女性の兵士もいた。そういった極限の状況であったのだ。
これに対して総動員令を出しながら窮地に陥るまで学生や子供を戦場に送るのに躊躇していた国があった。日本であった。アメリカですら開戦と同時に学徒動員を行ったのだが日本は躊躇った。学生や子供を戦場に送りたくはないという考えが確かにそこにはあった。甘いと言えば甘い。日本軍も決して鬼ではなかったのだ。その甘さは常に何処かに現われていた。それが為に敗れることとなっても。
「今何も知らない若者を戦場に送ることは出来ない。ましてや平民達を」
「はい」
ここで平民と言ったがシュヴァルツブルグには平民に対する差別意識はなかった。ここでは彼はそうした者達を守ることこそが貴族の務めであり一般市民を戦場に出したくはないという思いがあったのだ。
「産業は確かにそう移行されるべきだが。それでも人となるとな」
「無駄に数が多くとも戦力になるとは限りませんしね」
「そういうことだ。兵士になることができるのはやはり限られた者達だけか」
「でしょうね。そちらは実質的には選抜徴兵制になります」
「うむ。技術者やとりわけ屈強な者達だけを選ぶとしよう。それでどれだけ集まるか」
「五百個艦隊規模程かと」
「あとは地の利を生かすか。これで何とか守りきるしかない」
「はい。非常時には総督府の兵を本土に向けられるようにしておきましょう」
「それもあるな。いざという時にはな」
「動かさねばならない。これはマールボロ元帥の仕事だな」
「あの人ならそれについては心配ないですが」
マールボロは温厚ながら冷静沈着な指揮bホならない。これはマ

ールボロ元帥の仕事だな」
「あの人ならそれについては心配ないですが」
マールボロは温厚ながら冷静沈着な指揮で知られていた。だからこそ総督府を任されているのである。伊達に元帥になったわけではないのだ。
「タンホイザー上級大将もいる。だが要塞の防衛も強化しておかなければならないぞ」
「やはりあの要塞群が最初の防衛ラインとなりますからね」
「サハラ方面から来ない限りはな」
シュヴァルツブルグもそれを考えないではなかった。ハサンを通過し総督府から攻め入るルートだ。だがこれはいささか非現実的なのはもう言うまでもないことであった。
「あの要塞群には兵も集められるだけ集めておきたいな」
「はい。百個艦隊程が宜しいかと」
「うむ。それは卿に任せよう」
「ハッ」
モンサルヴァートは敬礼してそれに応えた。
「まずはそこで食い止める。そしてだ」
「はい」
「その間に一般市民を安全な場所に避難させながら我々が戦う。そして最終的には然るべき場所で決戦を行いたい」
「それまでに出来るだけ敵に出血を強いていきたいですな」
「そうだな。決戦の場が何処になるかだ」
「そうですね。それはおそらくオリンポスの前になります」
「首都の前になるか。やはりな」
「このオリンポスだけは敵に譲り渡すわけにはいきませんから」
「その際は私も出撃する」
「はい」
「そしてそこで彼等を倒すぞ。よいな」
「わかりました」

彼はそれを受けて再び敬礼した。
「無論私も戦場に赴きますので」
「そうでなくてはな」
「はい」
彼はまた応えた。
「その前に卿はしなければならないことがあるな」
「それは」
「卿はまだ結婚していなかったな」
「それですか」
「うむ。戦場に行く前に式を挙げてはどうかと思うのだが」
「それには及びません」
しかし彼はそれをやわらかに拒否した。
「何故かね」
「戦いが終わってからにしようと考えておりますから」
「戦いの後でか」
「はい。勝利の女神に祝福されながら式を挙げるのがよいかと思いまして」
「わかった。ならばそうするがいい」
「はい」
彼は答えた。彼はこの戦いに勝つ自信があった。そして生きる自信があったからこそこう言えるのであった。
「敵は数で押してくるだろうな」
「それはわかっております」
「あとは敵の国防長官である八条義統だが」
「かなり優秀な男であるようですね」
「元々は軍人だったそうだな。それも補給担当の」
「そうだったのですか」
「だから戦略も補給を重視したものになるだろう」
「補給路を攻撃するのはあまり効果がないかも知れませんね」
「それはあるな。まして八条長官は慎重な男だと聞く」

彼等も八条についてはおおよそのことは調べていた。
「侵攻は速度自体は緩やかなものとなるだろうがな」
「しかし的確に進んでくるでしょうね」
「うむ。その間に何度か攻撃を仕掛けるぞ」
「はい」
「もう一つ問題もあるが」
「彼等の装備ですか」
「かなりの重装備だそうだからな。とりわけ」
「ティアマト級巨大戦艦」
「それだ。我が軍の将兵達にもかなりの脅威を与えているのがわかるな」
「はい」
これはモンサルヴァートもよくわかっていた。
「あの戦艦を何とかしたいのだが」
「一隻沈めることができれば違うのでしょうが」
「それすらも可能かどうかわからないな」
「はい。ですがやらなければなりません」
「うむ」
その言葉には悲壮な決意すら漂っていた。
「あの戦艦は連合軍の象徴なのですから」
「それを沈めることが出来れば士気も大きく変わるということだな」
「はい。その通りです」
彼は答えた。
「だができるか」
「やらねばなりませんが」
モンサルヴァートの顔は深刻なものであった。
「要塞の主砲で何とかなるといったものでしょうか」
「ううむ」
「それを考えるとかなり難しいかと思います。後はコロニーレーザーで撃つ位です」

「将に要塞だな」
「はい」
「それが千隻単位で来る。よくもまあそんなことができるものだと感心すらするが」
「それを何とかしなければならないのも事実です」
「そうだ」
シュヴァルツブルグも顔も深刻なものであった。
「我が軍の戦艦は連合の戦艦に比して小さい。いや」
彼は言葉をあらためた。
「軽巡と同程度か、向こうの」
「少なくとも火力や防御力、艦載機のデータ上ではそうなっております」
「敵は速度よりも攻撃力、防御力に重点を置いた設計をしている。おそらく生存能力に重きを置いたのでしょう」
「だろうな。我が軍のそれとは設計思想が異なる」
「はい」
エウロパの艦艇は速度、すなわち機動戦に重点を置いている。その為か艦艇の形も連合のそれのように武骨なものではない。優美なものとなっている。宇宙空間においては空気抵抗なぞなく形は関係ないのであるが速度を重んじるのが形になって現われたのであろうか。
「我々としては機動力で挑むか。そして」
「兵士それぞれの強さで対抗しましょう。最低限戦意を保ちながら」
「口では簡単でも言うには難し、だな」
「はい」
それはモンサルヴァート自身が最もよくわかっていることであった。
「戦意は本土防衛ということもあり高いのが救いですが」
「それが何時まで続くかはわからないな」
「ですね。それに連合がどのような工作をしてくるかわかったもの

ではありません」
「工作は彼等は得意ではなかった筈だが」
「今までは。これからはわかりません」
「連合内部では産業の分野において各国で熾烈な工作があるというがな」
連合においては武力の衝突は絶えてないことである。設立当初から参加国間での武力衝突や紛争はなかった。だがそれは武力の面においてだけであり、産業や外交においては熾烈な争いが常にあった。裏では足を引っ張り合い、陥れ合うのもよくあることであった。これを調整するのもまた中央政府の仕事であった。連合は決して一枚岩の組織ではないのだ。とりわけ大国の間ではそうである。日米中露、トルコ、ブラジル等の大国の間では常に激しいやりとりが行われる。大抵は二国間の争いに他の国が仲裁し、その見返りを受けるという形になる。これは小国の間でも頻繁にある。とかく一つの絶対的な権力というものが強いて言うならば中央政府以外にないということが大きく関係していた。その中央政府にしろ設立からかなり長い間はそれ程権限が強くはなかった。それでもここまで連合がもったのはやはり紛争が起こっても当事者達を納得させられるものが連合にはあったからである。それこそが開拓地であった。領土や資源、産業、経済での問題は新たな開拓地を負けた側に提供することで収まるからだ。これはサハラやエウロパにはないものであった。そういう意味では連合は非常に恵まれているのだ。人というものは物が手に入ればそれで矛を収めるものであるからだ。

## 第八部第四章　総動員令その三

「それをこちらに向けたら何が起こるか予想がつきませんよ」
「そうだな。彼等は一千年の間それで互いに争ってきたのだからな」
「武器を手に取らない戦争もあるということですね」
「それは我々も行ってきたことだが」
「はい」
　諜報戦であった。戦争というものは武器だけで行うものではないのだ。産業自体もそうであろう。戦争は政治の延長であり政治自体が戦争であるとも言えるのだ。これは産業にも言える。
「八条長官はあまりそうしたことは使わない正統派と見るが」
「他の人物はわかりません。とりわけ連合の情報部長は」
「ディカプリオ元帥か」
　ここで二人の脳裏に資料で見た二色の目を持つ男の顔が浮かんだ。それは何故か猫を連想させた。二色の目を持つ不思議な猫であった。
「はい。彼はどうやらかなりの策士のようですが」
「あの若さで元帥となったのだ。それはあるな」
「はい。ましてやカナダは連合においては地味な存在です。その国の出身で元帥になっただけでもかなりのものだと思われますし」
　カナダは連合においてはその国力はかなり高い方である。しかしこれといった個性もない為に目立たない印象が強い。人口も少なく地位は高いが発言力も小さいのである。カナダが地球にあった頃から残念なことに変わらないことであった。なおこの国はアメリカ建国当初にはアメリカのある政治家や学者達に併合しようとも狙われていた。これはアメリカという国の建国当初からの並々ならぬ野心や侵略性を表すエピソードの一つとなっている。この時代においてもアメリカは連合において最大勢力の国の一つであると共に最も横暴で独善的な国として知られている。宇宙においてもそうした国としての性格は変わらなかったのである。

「連合の元帥は大国出身が多いからな。小国出身の者もいるが」
「カナダは大国の部類ですがそれでも発言力等は弱いです」
彼等は連合各国のことはかなり細かく知っていた。これも諜報の故である。
「そこまで考えると彼には警戒すべきと思われます」
「よし。ではそうした工作にも注意を払おう。よいな」
「ハッ」
モンサルヴァートはその言葉に対し敬礼した。
「それには情報部及び憲兵隊に厳命するべきであると考えます」
「よし。ではそれはそれで決まりだ」
「はい」
「そしてだ。あとはニーベルング要塞群だが」
「はい」
話がまた移った。
「あの要塞群の防衛はどうなっているか」
「整備は終了しました。そして艦隊の駐留も進めております」
「どれ程だ」
「五十個艦隊程です」
「それでは足りないと思うが」
「はい、もう五十個艦隊を派遣する予定であります」
「百個艦隊か。それで第一防衛ラインを築く必要があるな」
「はい。まずはあそこで敵にかなりの出血を強いましょう」
「防げたらそこで、防げなかった場合は徐々に内地へ誘い込むか」
「市民を避難させながら。そして敵を少しずつ減らしながらオリンポスの前で決戦を挑みましょう」
「勝たねばならん。それはわかっていると思う」
「無論です」
彼は頷いた。
「その為に今ここにいるのですから」
「よし」

シュヴァルツブルグもそれを聴いて頷いた。
「勝つぞ。それだけは頼む」
「はい」
こうして二人の会談も終わった。それからも彼等の激務は続いた。そしてエウロパにおいて遂に総動員令が発動された。これによりエウロパは本格的に戦時体制に入ったのであった。

「そうか、エウロパがか」
それはすぐに連合にも伝わった。キロモトはそれを昼食の場において聞いた。
「近いうちにくると思ったが」
「左様ですか」
話を伝えた大統領府のスタッフは意外といった顔でそれに応えた。
「うむ。彼等も必死だ。ましてや我々とは国力差がある」
「はい」
「それを考えると充分考えられる話だ。まあ我々がそれを行う必要はないが」
「我々は総動員令を発する必要はないと」
「私はそう考える」
彼はそう答えてフォークを置いた。見ればシーフードとトマトソースのスパゲティを食べている。パスタは連合においても比較的よく食べられるポピュラーな料理である。スパゲティだけでなくマカロニやフェットチーネ、ラザニア等もよく食べられる。そのソースは国によって違いかなりのレパートリーがある。
「これは彼等を侮っているのではない。国力を考えるとだ。市民は今まで通り普通の生活を送れることを約束する」
「はい」
「そして将兵達には無事に故郷に帰られることも約束しておこうか」
「わかりました」
これは戦争が既に決まっていることを意味していた。だがこれは

非公式の場でありキロモトとスタッフの他には誰もいないので知られることはなかった。
「少なくともスパゲティを普通に食べることはできる」
ここでフォークを再び手にした。
「はい」
「ただ軍は第一種警戒態勢を続けるように。よいな」
「わかりました」
これは至極当然のことであった。戦争に突入する寸前であるからだ。
「それ以外はこれといって戦争のことを気にかけることはないと思う。産業においてはな」
「はい」
「我々は戦争だけをしているわけではない。それはわかっていると思う」
「無論です」
「それならばだ。産業活動はこれまで通りでよい。軍需産業が動いて活性化しているようだしな」
今連合では好景気となっている。軍需産業が動き他の産業にまで影響しているのだ。産業は生物であり互いにリンクしているからこそであった。
「あとは兵士達の安全だけだな」
「そうですね。それは八条長官が考えておられます」
「それについて彼と話がしたいが」
ここでスパゲティを食べ終えた。そしてサラダが出される。アメリカ風のダイナミックなサラダだ。キロモトはフォークを手にしてそれを食べる。なおフォークは持ち替えている。
「後で時間をとれるか」
「はい。国防省と話をしてみます」
「頼むよ」
彼はそれに答えてサラダを口にした。

「エウロパでは生野菜は食べるのかな」
ふとそう質問をした。
「生野菜をですか」
「そうだ。エウロパと我々では食べるものがかなり違うようだからな。そこはどうなのか」
「食べると思いますよ」
スタッフはそう答えた。
「元々サラダはあちらの料理ですし」
「おお、そうだったな。忘れていた」
今食べているのはアメリカ風のサラダである。連合においてはサラダはアメリカの料理と考えられているのである。

## 第八部第四章　総動員令その四

「そういえばそうだったな」
「はい」
「ステーキ等もそうだったと記憶しているが」
「ええ、確かそうだったと思います」
イギリス等ではわりかし昔から食べられていた料理である。スチューダー朝のヘンリー八世はとある司祭とステーキを食べていた時に司祭にこう言われた。
「見事な健啖家ぶりで羨ましいです」
「ほう」
王はそれを聞いて興味深そうに顔を上げた。
「見ればあまり食べてはいないな」
「胃の調子が思わしくなくて。出来れば陛下の胃を買いたい位です」
「よし、では売ろう」
「えっ！？」
司祭は思わぬ返答に驚いた。そして次の瞬間には問答無用でいきなり牢獄に叩き込まれたのだ。金は勿論取られた。王はその後でステーキに剣を当ててこう言った。
「美味かったうえに儲けさせてもらった。その褒美にそなたを騎士に任じよう」
これがサーロインステーキの名の由来である。家臣や妻を次々と断頭台に送った問題の多い王であるがいささか面白いエピソードといえばそうなる。
アメリカでは比較的よく食べられてきた料理である。シンプルであるがだからこそ美味い。連合においては牛肉だけでなく羊や豚、鳥、蜥蜴、鰐等のステーキがよく食べられる。星によっては恐竜をステーキにしたりする。この場合草食恐竜が人気だがティラノサウルスのような肉食恐竜も食べられないわけではない。イクチオサウ

ルスやモササウルス、エラスモサウルスといった海の恐竜も食べられる場合もある。また魚のステーキもある。
そして今キロモトのテーブルにもステーキが運ばれてきた。だがそれは肉のステーキではなかった。
「これは何の肉だね」
「肉ではありません」
ステーキを運んで来たボーイがそう答えた。
「サボテンのステーキです」
「サボテンのか」
「はい。メキシコの料理ですが」
メキシコではサボテンのステーキもあるのだ。テキーラもサボテンから作られる。
「これはまた面白いな。実はメキシコ料理はタコス以外あまり食べたことがなくてな」
「そうだったのですか」
「ああ。だから食べるのが楽しみだ」
彼は目の前の湯気を出しているサボテンを見ながらそう言った。
「さて、どんな味かな」
フォークで押さえてナイフで切る。そして口に入れた。そして食べる。
「ふむ」
「如何ですか」
周りの者が尋ねる。
「美味いな」
彼はそう答えた。満足していた。
「肉以外でもステーキができるだけでも意外だが。そのうえ美味いときてはな。これは嬉しい話だ」
「左様ですか」
ボーイはそれを聞いて喜んだ。
「シェフも喜ぶと思います」

「うむ。ところでだ」
「はい」
キロモトはここで話を移してきた。
「戦場に行く兵士達もこうしたものが食べられるのだろうな」
「勿論です」
彼等はその質問の意味がよくわかっていた。キロモトは補給について聞いているのだ。
「八条長官ともよくお話下さい」
「わかった」
ステーキを食べ終えた。そしてパン、デザートに移る。最後は抹茶アイスであった。
「そういうお話を」
キロモトはこの時外の料理店で寿司を食べていた。所謂寿司バーである。
「はい。サボテンのステーキを食べながら仰っていましたよ」
「成程」
彼は今しがた国防省に戻ってきたところである。
「そして長官と是非お話したいそうですが」
「喜んで」
彼はそれを快諾した。
「こちらも色々とお話したいと思っておりました」
「左様ですか」
「ええ。ではすぐにこちらから電話するとしましょう」
そして電話を手にとろうとする。だがそれより前に電話が鳴った。
「おや」
それを受けて電話を手にした。そして出た。
「はい」
「私だ」
それはキロモトの声であった。
「閣下」

「何故私が電話したかわかっているね」
「はい」
八条はそれに答えた。
「この度の戦争のことについてですね」
「そうだ。聞いていたか」
「はい。それも補給のことで」
「うむ。今のところ補給は問題なさそうか」
「はい。予算についても。充分であると考えます」
彼にとっては九割あればそれで充分であった。
「補給もその予算の中で充分やっていけますから」
「そうか」
「はい。お任せ下さい」
「わかった。だが一つ気になることがあってな」
「何でしょうか」
「将兵の食事だ。我々はエウロパの食べ物を知らない」
「はい」
「現地のものを下手に食べて身体を壊すようなことはあってはならない」
「それもわかっております」
八条はすぐにそう答えた。
「連合のものを補給し食べさせることとなっております」
「そうか」
将兵の食べる食糧は非常に大きな問題であるのは言うまでもなかった。慣れないものを口に入れて身体を壊したりすることは多い。そしてそれは将兵の士気を大きく損なうのである。古来これによる戦力を落とした例もある。二十世紀後半に八条の祖国である日本の軍隊、当時の呼称で自衛隊が海外に派遣された時レトルト食品やインスタント食品を主に食べていたのを見て軍事マニア達の中には彼等の健康を心配する者もいた。それに士気も心配された。そんなものを食べていて大丈夫なのか、と。だがそれでも現地の合わないも

のを食べて健康を害されるよりはいいという判断からこうされたのである。結果としてそれは正解であった。なおこの時その日本の平和団体の中には彼等のテントに無断で入り込みビールを盗んだり無礼千万な質問をしていた者もいた。この当時の日本ではこの様な心根の卑しい輩でも平和団体と自称すれば尊敬される場合もあったのである。なおこの団体の代表は女性国会議員になったが汚職で捕まっている。自分自身は汚職を厳しく追求し糾弾していたが正体はこれであった。なおかつこの団体は麻薬の使用やテロリスト、凶悪な犯罪国家との癒着も当時から噂されていた。平和の美名の下にある下劣な素顔はこの時代ではもうはっきりとしている。

「基本的にエウロパのものに触れることがあってはならないでしょう。掠奪を防ぐ為にも」

「そうだな。監督も頼むぞ」

「お任せ下さい」

八条はまた答えた。

「エウロパの一般市民に対しては決して危害を加えません。それは特に御安心下さい」

「信じているぞ」

「はい」

八条にも誇りがある。それだけは許すつもりはなかった。

「連合の誇りにかけて」

「うむ」

こうして電話による会談は終わった。そして八条は仕事に戻った。すぐに憲兵隊に指示が下ったのは言うまでもないことであった。

連合とエウロパがそれぞれ矛を磨いている頃サハラにおいては一つの事件が起ころうとしていた。

「閣下、どうなさるおつもりですかな」

ブワイフが面白そうな顔でアッディーンに問うていた。

「そう言われましても」

問われたアッディーンは珍しく困惑した顔をしていた。
「私も悩んでいるところなのです」
「貴官がそうした答えをするのははじめてだな」
「はあ」
彼は弱い声でそれに答えた。
「晴天の霹靂ですから」
そしてはじめて口にする言葉を出した。彼にとってシャイターンからの縁談は思いもよらぬ話であったのだ。しかもそれが彼の妹であるからだ。
「貴官はどう考えているのかね」
「私ですか」
「そうだ。まずはそれだろう」
「そう言われましても」
やはり返答に窮していた。
「そうした年齢だ。全く考えていなかったわけではあるまい」
「それはそうですが」
「では答え給え。どう考えているのかね」
「正直悩んでおります」
困った顔でそう答えた。
「こんな話はまだまだ先だと考えていましたから」
「ははは、そうしたものだ」
ブワイフはそれを聞いてそう言った。
「こうした話はよく突然降ってわいてくるものなのだ」
「そういうものですか」
「そうだ。だが一つ問題がある」
「はい」
アッディーンが悩んでいる理由は一つではなかった。もう一つあったのだ。

## 第八部第四章　総動員令その五

「これが普通の婚約話なら何の問題もない」
「そうなのです」
「相手が相手だな。まさかシャイターン主席の妹君だとは」
「どうするべきでしょうか。やはり何かしらの政治的意図があると思いますが」
「間違いなくな」
ブワイフは言った。
「おそらく彼は我々と手を結びたいのだろうな」
「我々とですか」
「おそらくな。今連合とエウロパが緊張状態にある」
「間違いなく戦争になるでしょうね」
アッディーンにはそれが読めていた。だからこそそれに答えることができたのだ。
「そうなったらどうなる。エウロパの総督府は」
「戦局によりますが兵を本土に向けなければならない状況も起こり得るでしょう」
「そこが彼にとって狙い目だ。総督府をサハラから追い出しサハラを完全に回復する。我等にとって永遠の悲願を彼が果たすのだ」
「それだけで彼の評価は著しく上がるでしょう」
「それだけではないな。その広大な領土を手に入れることができる。そしてそこに難民達を戻し開拓させる。それで国力は飛躍的に上昇する」
「はい」
「彼にとっては悪いことは何一つない。ティムールにとってもだ」
「ティムールはそれによって我々やハサンと肩を並べる勢力になるでしょう。ですがそれをハサンが許すとは思えません」
「それだ」

ブワイフはアッディーンを指差して言った。
「彼等にとっての最大の脅威はハサンなのだ、今はな」
「はい」
「彼等を牽制できる存在が必要だ。しかもサハラにおいて」
「連合ではなく」
彼等は連合とティムールが接触しているとの情報も掴んでいたのだ。だがその詳しい内容までは知らなかった。
「連合はエウロパと全面戦争に入る。牽制は期待出来ないだろう」
「はい」
「だとすればだ。やはりサハラしかあるまい」
「それで我々を選んだのですか」
「私はそう思うが。貴官はどう思うか」
「戦略としては妥当だと思います」
アッディーンはそう答えた。
「後顧の憂いを断つのは戦略において常識であります」
「そうだな。では彼が貴官に妹との婚姻を申し出た理由がわかるな」
「はい」
「それをどうするかだ。これは今後の我が国にも大きく関わってきかねない問題だ。悪いが貴官だけの問題ではない」
「はい」
「返答を聞きたい。どうする」
彼は詰め寄るようにして問うた。
「婚姻を承諾するか否か。どうするかね」
「そうですね」
彼は暫し悩んだうえで答えた。
「まだ暫く考えさせて下さい。即答するにはまだ」
「そうか」
ブワイフは彼の目の色を見ていた。
「ではゆっくり考え給え。私は基本的に貴官の意思を尊重したい」
「有り難うございます」

「よい結論を期待する。頼むぞ」
「はい」
そのよい結論が何かは彼にはよくわからなかった。だがいずれにしろ結論を下さねばならない問題であることはわかってはいた。
「さて」
彼は官邸には帰らずに別の場所に車を向かわせた。そこはアスランにある彼の実家であった。

彼の家はごく普通のありふれた公務員の家であった。それも中流の。彼の少年時代はいたってごくありふれた市井の少年であった。学校に通い、遊び、学ぶ。どこも変わったところはなかった。
そうした中で彼は育ち将来は兵役の後は普通の市民として生活を送る筈だった。だが幼年学校に合格したことが彼の人生を大きく変えたのであった。
彼は軍人に向いていた。成績はそれまでとは比較にならずトップクラスで卒業した。そして士官学校に上がらずすぐに軍に入った。そしてそこから武勲をあげ続け遂には元帥にまでなった。思えば信じられない話であった。
「今もここで仕事場に通っていたのかもな」
彼は道を眺めながらそう思った。
「だが今は官邸住いか。人の一生とはわからないものだ」
「全てはアッラーの思し召しですから」
隣に座るハリージャがそう答えた。
「アッラーか」
「はい。人の一生なんてわからないものですよ。少なくとも人の力でどうこうできるものではありません」
「そうかもな」
アッディーンは不思議とその言葉に納得した。彼もアッラーを信仰していないわけではないのである。

「では私が軍人になったのもそうか」
「でしょうね」
「そして今度の婚礼も。全てはアッラーの思し召しか」
「はい。ですが閣下のことはアッラーもよく御存知です」
アッラーは万能の神である。知らぬことも不可能もないのだ。
「そうか。ならば」
それを聞いて彼は何か思ったことがあるようであった。
「いや、まだ早いか」
「？何か」
「あ、何でもない。さて」
ここで彼は見慣れた道を眺めながらハリージャに言った。
「貴官もハルダルト中佐も残っていてくれ」
「宜しいのですか？」
「護衛は」
「護衛はいらない。実家に帰るだけだからな」
彼は笑ってそう答えた。
「諸君等は何処かで時間を潰してくれればいい。喫茶店でも行ったらどうか。実はこの辺りの店は何処もなかなかいいコーヒーを入れてくれるのだ」
「そうなのですか」
「だからだ。まあ堅苦しいことはこの町では似合わない。ゆっくりしてくれ」
「わかりました」
こうしてアッディーンは実家に着くと彼等にほんの一時の有給休暇を与えた。そして彼は一人実家に向かった。見ればごく普通の市井の家である。大きくはない。むしろ小さい方か。何も変わりはない。
彼は家のベルを鳴らした。するとすぐに返事が返ってきた。
「はい」
「僕だよ」

彼は微笑んでそれに応えた。するとすぐに返事がまた返って来た。
「おや、御前かい。早くおあがりよ」
それは初老の女の声であった。アッディーンに家に入るように促していた。
「うん」
彼はそれに従い家に入った。玄関の扉を開け中に入る。そこには先程の声の主と思われる初老の白髪が混じった女性がいた。
「お帰り」
「うん。只今」
彼は笑みと共に挨拶を返した。そしてその初老の女にさらに声をかけた。
「母さん、元気そうだね」
それは彼の母であった。見れば顔付きは彼に似ていた。いや、彼が母親似だったということだろう。だが髪の質は違っていた。彼女の髪は縮れているのにアッディーンの髪はストレートであるからだ。
「おかげでね。悪いところは何もないよ」
「それはよかった。父さんは？」
「奥にいるよ。会うのかい？」
「勿論だよ。その為に来たんだからね」
彼はそれに答えて中に入った。そしてそのまま母と共に奥に入った。奥の部屋ではテーブルに座る黒いストレートの髪の初老の男がいた。彫の深い顔をしておりとりわけ高い鼻が目につく。サハラの男独特の顔であった。
「只今、父さん」
アッディーンは初老の男にそう声をかけた。男はそれに応えて微笑んだ。
「おかえり、アクバル」
息子の名を呼んだ。それは久し振りに呼ぶ名であった。アッディーン自身にとっても自分の名を呼ばれることは久し振りであった。サハラにおいては姓で呼ばれることが多い。名で呼ぶのは親やごく

近い親戚だけである。
「何年ぶりかな、ここに帰って来たのは」
「悪いね、本当は毎年帰って来るべきなんだけれど」
「仕方ないよ、御前は仕事があるんだから」
母はそう言って息子をいたわった。
「さあお座り。久し振りに美味しいものを作ってあげるよ。何がいい」
「そうだね」
アッディーンはそれに応えて考え込んだ。
「カブサがいいな。あとサローナ。他にはサラタも」
カブサは肉入りピラフ、サローナはサハラの野菜煮である。そしてサラタはサラダのことである。
「それでいいんだね」
「うん。三人で食べようよ。久し振りに」
「いいな。一過団欒といこう」
「うん」
こうして母は台所に向かった。アッディーンは父と共にテーブルの上で色々と話をしていた。
「ここに来るのは中佐の時以来か」
「そうだろうね。確かカッサラでの戦いの前に帰ってきてからずっとだったから」
「思えばかなり長い間だったな。その間にまさか元帥にまでなるとはな」
「アッラーの思し召しだよ」
さっき部下に言われたことを親に言った。
「僕はアッラーの御加護があったからここまでなれただけさ。全てはアッラーの思し召しだよ」
「やけに謙虚だな」
「そうかな」
「まあいいさ。確かにアッラーが御前を導いて下さったのだろう」

彼もその妻も信仰は篤い方である。サハラにおいてはイスラムは絶対的なものでありその信仰心は連合などとは比較にならないものであるが彼等はその中においても信仰の篤い方であったのだ。
「僕は僕だよ。何時までも」
確かにその通りであった。彼の生活は今も変わらず質素なままであった。軍人だから当然なのであるが。
だが確かにその通りであった。彼の生活は今も変わらず質素なままであった。軍人だから当然なのであるが官舎に住み食事も兵士と同じものであった。エウロパの貴族達とは大きく違っていた。
「だから今もこうして父さんと話をしているんじゃないか。この家で」
「ははは、そうだな」
父はそれを聞いて顔を大きく崩して笑った。
「その通りだ。わしもこの家から離れようとは思わんしな」
「この家でいいのかい？」
彼はここで父に問うた。
「前も言ったけれど父さんや母さんに家を買ってあげる位の金はあるよ」
「何馬鹿なことを言っとる」
しかし父はそんな息子の言葉を一笑に伏した。

## 第八部第四章　総動員令その六

「サハラでは子供は養うものだ。養われるものではない」
「それはそうだけれど」
「アクバル」
そしてまた息子の名を呼んだ。
「わしも母さんもな、その気持ちだけで充分だ。家を買うとなれば自分で買う」
「そうなんだ」
「そうだ。だから御前は何も気遣う必要はないぞ。その気持ちだけで充分だからな」
「わかったよ。けれど何かったら何時でも言ってね」
「おう、まあ絶対にないことだがな」
彼はそう言ってまた笑った。どうやら息子に対する考え方は一つ筋が通っているらしい。
「わし等はこの家が気に入っているんだ」
そしてまた言った。
「それは御前もだろう」
「まあね」
アッディーンは笑みを浮かべてそれに頷いた。
「生まれた時から暮らしている家だからね、ここは」
「それはわしも同じだ」
父もそれに応えた。
「わしの曽祖父さんの頃に建てた家だからな、ここは」
「それは聞いたよ」
「そうだろ、これは御前が子供の頃から何かと話していたな」
「ああ」
「小さいながらもな。いい家だ、ここは」
「僕もそう思うよ」

ここで母親が料理を運んできた。そのカブサとサローナ、サラタである。まずカブサがそれぞれ三人の前に置かれサローナとサラタがテーブルの中央に置かれた。そしてスプーンも出された。
サハラでは本来は手で食べる習慣であった。だが宇宙進出と共に他の文化圏の影響を受けそれが一種の流行となってフォークやスプーンを使うこととなった。最初はイスラムの伝統を破壊するとして抵抗があったが徐々に浸透し、やがて定着した。これはかって欧州において手で食べる習慣がフォークやナイフを使うものに変わっていったのと同じであった。なおマウリアでは今も手で食べることも多い。フォークやナイフ、スプーンが普及していてもだ。長い間続いてきた風習はそうは消えないことの証明の一つであると言えた。なお欧州にしろ十八世紀頃までは手で食べるのが一般的であった。ピョートル大帝は焼肉を手掴みで食べていたしルイ十四世もフォークやナイフを使うよりは手を使って食べるのを好んだ。ナポレオンに至っては殆どそうしたものを使わなかった。驚くべき速さで手掴みで食べ、食べ終えた骨等は床に投げ捨てていたという。貴族の出であっても少し田舎とされる地域ならこうした具合であった。
彼等はまずカブサを口にした。国の中に米と肉の味が広がる。
「どうだい」
母は息子にカブサの味を問うた。
「美味しいよ」
息子は笑顔でそれに応えた。
「やっぱり母さんの作るカブサは美味いね」
「そうかい、それはよかった」
彼女もそれを聞いて顔を綻ばせた。三人はサローナやサラタも口にした。そして食事をしながら話を再開した。
「ところでだ」
まず父が切り出した。
「うん」
それにアッディーンが応える。

「今日ここに来たのは単に顔を見せに来たわけじゃないだろ」
「わかってるんだね」
「当たり前だ、わし等を何だと思っている」
彼は息子に対してそう言った。
「御前の親だぞ、親が子供のことをわからないでどうするんだ」
実際には全くわからない親もいるのだが彼等は違っていた。少なくとも無責任な親ではなかった。
「あれだろ、結婚の話」
「うん」
アッディーンは父に対しそう頷いた。
「新聞とかで見たぞ。何でもティムールのお嬢さんと結婚する話が出ているのだな」
「ああ。それをどうしたらいいかと思ってね」
「それでうちに帰ってきたんだね。私達に相談する為に」
「その通りさ。どのみち結婚するとなったら父さんや母さんに話をしておかなくちゃいけないしね」
サハラでは結婚は個人同士というよりは家同士の結び付きを強める意味合いが強い。これはエウロパの貴族達と似ているといえば似ているかも知れない。なお妻はイスラムの戒律に従い四人まで持ってもよい。だが公平に愛さなくてはならないのはこれも同じである。昔から何かと批判されてきたこの戒律であるが実は戦争による未亡人とその家族に対する救済策である。だからこそムハンマドが定めたのである。実際にはムハンマドは女性に対しては当時としては極めて公平な考えの持ち主であった。フェミニストであったと言っても過言ではないだろう。少なくともイスラム以前の部族社会の様に女の子ならば殺すということはなかった。彼はそれを厳しく禁じていた。男であろうと女であろうと子供は殺してはならない。彼はそう教えたのである。
「その通りだがな。だが」
「相手が普通の家の女の子だったらよかったんだけれどねえ」

「ああ」
それが彼等にとって最大の悩みであった。シャイターン家は確かに悪名高いがサハラにおいては屈指の名門である。それに対してアッディーンの家はごく普通の市井の市民の家である。資産など最早比べることすら馬鹿馬鹿しい程であった。何もかもが違っていた。そもそも住む世界が違うのである。
「結納等は何とかなるのか」
「それはね」
アッディーンは答えた。
「僕も給料はかなりもらっているし」
「そうか」
元帥、副大統領ともなればその給与はかなりのものである。ましてやアッディーンは官舎住いであり贅沢はしていない。趣味も読書や映画鑑賞等でありこれといって金のかかる趣味は持っていない。だからその貯蓄はかなりのものとなっているのである。株や土地等資産を増やすことに興味はないが元帥だけあってその給与はかなりのものである。それで充分過ぎる程の資産があったのだ。だがそれでもシャイターン家のそれとは比較にもならないものであったが。
「それで結納の方は何とかなるよ」
「じゃあそっちは心配しなくていいんだね」
「うん。何とかやれるよ」
サハラでは結婚する男の家が女の家に結納を送る習わしである。それはかなり豪華なものとなっているのである。
「だがまだ問題はあるぞ」
「そうなんだ。やっぱり普通の結婚じゃないからね、これは」
それであった。相手はティムールを統治する家の者である。それに対してアッディーンはオムダーマンの副大統領。これはかなり政治的な意味合いの強い結婚であるのだ。この時代においてもそうした政治的意味合いを持つ結婚はあった。とりわけサハラにおいては。ムハンマド、いやそれ以前の部族社会からの伝統である。

「大統領ともお話したんだろ」
「うん」
「それで何て」
「僕の考えを尊重したいってことだけれど」
「そうか」
二人は息子の言葉を受けて頷いた。
「わし等としては御前の結婚は心から嬉しいんだ」
「けれどね、この結婚はよく考えた方がいいね」
「うん」
「こういっては何だがな、一度その娘さんと御会いしてみたらどうだ。政治とかそういうのを抜きにしてだ」
「そういうわけにもいかないだろうけれどね」
「直接会ってどういう人か確かめろってことだね」
「ああ」
二人はそれに頷いた。
「それから結論を出しても遅くはないよ」
「わしも母さんと同じ意見だ」
「うん」
それを受けて彼は決心した。
「じゃあそうさせてもらうよ。一度会ってみる」
「ああ、そうした方がいい」
これはやはり政治的な意味合いもあった。直接彼女、そしてこの婚姻を持ち出してきたシャイターン家の者と会う為である。やはり政治の問題であるのは変わらなかった。
「ではこれで決まりだな、うちでは」
「うん」
「行っておいで、ティムールに。そしてそれから決めるんだよ」
「わかったよ」
食事は終った。それで彼は席をたち家を出た。両親はそんな彼を見送った。これまでになく優しい顔であった。

「じゃあね。また帰ってくるから」
「ああ。今度はすぐに帰ってこいよ」
「それはわからないけれどね」
苦笑してそれに応えた。
「けれどまた何かあったら連絡するよ」
「おう」
「きっとだよ」
二人はそれを聞いて息子に対して声をかけた。
「気をつけてね、何事にも」
「そしてしっかりとな」
「わかってるさ」
親にかかっては常勝提督も唯の息子であった。結局人間とはそうしたふうにちっぽけなものなのかも知れない。少なくとも親から見れば。永遠に自分の子供なのであるから。
「心配しないで、とは言えないけれど」
アッディーンもやはり人の子であった。
「きっとまた帰ってくるから、ね」
「ああ」
こうして彼は家を出た。そして携帯に電話を入れた。
「私だ。話は終わったぞ」
「おお」
ハルダルトが電話に出た。
「では今からそちらに戻ります」
「うむ。そして副大統領府に戻ろう。色々と話したいことがある」
「はい」
こうして彼は戻った。そして自らティムールに赴くことになった。

# 第八部第五章　宣戦布告その一

宣戦布告

連合とエウロパの戦いが最早避けられぬものであることは誰の目にも明らかであった。双方は互いに矛を磨き戦いの準備を整えていた。

だがまだ正式に戦いになると決まったわけではなかった。それには手続きが必要であった。

「中央議会では明日審議にかけられるそうですね」

「はい」

八条にバールが答えた。彼等は今会議室で作戦会議を行っていた。エウロパ侵攻計画の最終的な確認の作戦会議である。

「可決は確実かと」

「そうでしょうね」

彼はバールの言葉に頷いた。そして言った。

「反対意見はほぼないようですし。全会一致に近い形で可決されるでしょうね」

「そうでしょうね。上下両院だけでなく各国の首脳達も同じ意見のようですし」

「はい」

八条はそれに頷いた。連合は上下両院だけでなくその上に各国の首脳会議まで設けられているのだ。実質的には三院制である。これは各国の利害も調整する為だ。参加刻々のそれぞれの力及び発言力の強い連合ならではの制度であった。

連合は人口が多いだけあってその議員の数も多い。下院は二千人である。上院は一千人。彼等の過半数、若しくは三分の二の賛成を以って可決するという制度である。

それから大統領の裁断が行われる。一度は拒否できるが二度目で

三分の二以上の賛成があればそれは拒否できないことと定められている。連合は議会と大統領の行政府を明確に区分しているのである。
それは当然ながら八条も知っている。それを踏まえたうえで言った。
「大統領は今回の戦いについて賛成です」
「はい」
バールはその言葉に頷いた。
「では後はサインするだけですね」
「ははは、それはまだですよ」
「おっと、そうでした」
バールはそう答えて謝罪した。
「これは申し訳ありません」
「いえいえ」
八条はそれを手で宥めた。そして本題に入ることにした。
「エウロパの侵攻計画についてですが」
「はい」
バールだけでなく今回の作戦に関わる全ての高官達がそこに集まっていた。彼等は円卓を囲みその中央に映し出されるホノグラフィーの映像を見ながら会議を行っていた。
「まずはニーベルング要塞群を陥落させることからはじまります」
「はい」
一同八条の言葉に頷いた。
「そうでないと何事もはじまりません」
「確かに」
それは最早言わずもがな、であった。
「エウロパはそこに百個艦隊を配置しようとしていると聞いております」
ここでディカプリオが口を開いた。
「百個艦隊」
「はい。それで以って第一の防衛ラインとするようです」

「そうですか」
八条はそれを聞いて頷いた。
「やはりそれが常道ですね」
「はい」
ディカプリオはそれに応えた。
「そして首都オリンポスまで何重にも防衛ラインを張り巡らせております。そのうえオリンポスを中心とした縦深な防衛システムも完成させております」
「すなわち全土が要塞と化しているということですね」
「ええ。ですがこれはもう何度も会議の俎上にあげられていますので今更言うことはないと思ったのですが」
「そういうわけではありませんよ」
だが八条はディカプリオの発言を否定した。
「今は最終的な確認の会議なのですから」
「はい」
「むしろ言って頂かなくてはなりませんでした」
「そうですか」
「はい。ただそれへの対抗策は既に出されています」
「はい」
ここで参謀総長である劉が頭を下げた。彼はそれから発言した。
「ニーベルング要塞群を陥落させた後一気にエウロパの南北及び上下に展開します。それから徐々にオリンポスを目指します」
「はい」
連合の圧倒的な物量を利用した戦略であった。その物量で以ってエウロパ軍を押し潰すつもりなのだ。
「おおまかにはそうなっておりますね」
「はい」
劉は頷いた。
「まずは要塞群の陥落とその周辺星域の速やかな確保が課題でありましたが」

「あれの準備はできていますか」
八条は劉だけでなくマクレーンにも顔を向けた。
「はい」
今度はマクレーンが彼に応えた。
「既に準備は整っております。あらかた集結を終えました」
「それは何より」
八条はそれを受けてまた頷いた。
「ではそちらは開戦と同時に発動しましょう」
「はい」
マクレーンと劉が首を縦に振った。
「それから先遣部隊ですが」
「サハラ義勇軍ですね」
「はい。彼等にまず要塞群の陥落と後続の主力部隊が来るまでの戦域の確保を任せたいですね」
「かなり困難な任務ではありますが」
「ですがやってもらわなくてはなりません。そして本格的な侵攻の折には」
「彼等がその先陣を務める」
「そういうことになります」
八条はそれを認めた。
「彼等は今ガンタース要塞群に集結していましたね」
「はい」
マクレーンがそれに応える。
「戦いがはじまるのを心待ちにしているようです」
「そうですか」
「彼等にとってエウロパは祖国の仇ですから。戦意は否応なしに上がっております」
「ふむ」
「まずは例の作戦の後十個艦隊単位でブラウベルグ回廊を通過します」

ブラウベルグ回廊はかなり広い。十個艦隊単位で円のスペースを確保できる程である。
「そしてニーベルング要塞群を上下左右から攻撃します。それにより陥落させます」
「一気に」
「無論です」
マクレーンの声は強いものであった。
「あの要塞群だけは一気呵成にいきたいところです」
「ただそれからは的確に、ですね」
「はい」
「兵は神速を尊ぶといいますが地の利はあちらにあります」
「それを考えますと的確にいきたいですね」
「はい」
八条はまた頷いた。
「まずはエウロパの南北と上下を押さえまして」
「はい」
「そこからジワリとオリンポスに向かって進む作戦でしたが」
「それで間違いはないと思いますが」
「大筋においては。問題は補給です」
「今のところ計画において不備はありませんが」
「一つ問題があります」
「それは」
「彼等の行動です。焦土戦術を執る可能性があります」
「それですか」
「はい」
八条はあらためて頷いた。
「それに対しては一体どうするかです。我が軍の補給に関しては問題はないでしょう。ですが占領地の市民のことを考えますとそれが問題になります」
「エウロパの市民のことですか」

「そうです。他に何がありますか」
「それは」
皆返答に窮した。何故なら彼等はエウロパの市民のことまで考えてはいなかったからである。占領し、その武装を解除すればそれでよいと考えていたのだ。焦土戦術は何も食糧だけを持って逃げるだけではない。それは古代の戦術である。この時代の焦土戦術は工場や通信、そして電力等も全て破壊して撤退するというものである。その効果はかなり大きなものとなっている。

## 第八部第五章　宣戦布告その二

「食糧は何とかなるでしょう。ですが」
「他の生活必需品が問題ですね」
「それです。それについては一つ私案があるのですが」
「それは」
「工作艦です。そして陸上部隊の工兵隊です」
そしてその二つを出してきた。
「彼等を使えばそれで市民達の生活をすみやかに回復させることが可能であると思います」
「成程」
「それだけではまだまだ足りないでしょうが。最低限のことは可能だと思います」
「わかりました」
高官達はそれを受けて頷いた。
「それでは焦土戦術の際にはそのように」
「お願いしますよ」
「はい」
こうしてこの話はこれで終わった。それでおおむねのことは終った。そして会議は終了した。
八条は自室に戻った。そしてテレビのスイッチを入れた。連邦中央議会下院の審議会の実況中継である。
「さて」
彼は今何について議論が行われているのかよくわかっていた。だからこそ見ているのだ。
「どうなるか楽しみだな」
「既に結果はわかっておりませんか」
木口が彼に対してそう言った。
「それはそうだけれど」

八条はその言葉に思わず苦笑した。
「それでも見ておきたいじゃないか。一体どうなるのかをね」
「そうですか」
「うん。いよいよ審議が終わったな」
そして裁決が行われた。それぞれの議員の席のボタンが押される。それにより裁決が行われるのである。
結果はすぐにわかった。それによりエウロパに対する宣戦布告が下院において可決された。八条はそれを見て何かを思ったような顔になった。
「後は上院、そして各国の首脳の裁決だけれど」
「はい」
「この結果と話を照合する限りまず開戦だね」
「そうですね」
木口もそれを聞いて頷いた。
「ただこういう結果になるとは思いませんでしたね」
「何が」
「いえ、全会一致だったじゃないですか」
「確かに」
「それが意外でした。反対派も僅かにいると思っていたのですが。個人的には」
「議決まで時間があったからね」
八条は言った。
「意見調整もできたろうね。けれどそれだけじゃない」
「といいますと」
「やはり歴史的なものがあるね。我々は一千年もの間いがみ合ってきた」
「それですか」
「やはりそれが一番だろう。何時かはこうなることがわかっていたと思うよ、皆」
「それを言われますと」

木口も実はそう思っていた。
「私もいずれ連合とエウロパは戦う日が来るものと思っていましたが」
実際にそれをテーマにした小説が連合においてもエウロパにおいても昔から多量にあった。面白いのはどちらも自分達が勝つというシナリオであったことだ。
「まさかそれが自分達の時代だとは思わなかった」
「はい」
「私もだよ。あと問題は」
「何でしょうか」
「オリンポスを陥落させるかその前の戦いに勝利してからだな。外交交渉に入ることになると思う」
「外交ですか」
「エウロパを滅ぼすことは問題外だ。そんなことをしたら大変なことになってしまう」
「そうでしょうね」
それは容易にわかることであった。エウロパを滅ぼし併合した場合その一千億の市民が新たに連合市民となる。彼等がすみやかに連合市民となるとは誰も思ってはいないし歓迎もしていなかった。一千年の対立関係故だが問題はそれだけではない。彼等はこの一千年の間に文化どころか文明レベルで大きく異なる存在となってしまっていたのだ。それは貴族主義やそうした話だけではなかった。最早根本から異なる存在となってしまっていたのだ。
それはとりわけ言語にあらわれていた。連合においては銀河語を使用している。英語と中国語、スペイン語、日本語、そしてその他の言語が合わさった言語である。当初は英語を公用語としていたのだが自然と出来上がった言語である。二十一世紀までの言語は残ってはいるが最早研究の対象でしかない。連合はそれを使い生活を送っているのである。それに対してエウロパでは公用語はラテン語とされている。だがそれぞれの国の出身者の名を見ればわかるように

英語やフランス語、ドイツ語も残っている。これはラテン語自体が各国の言語の母体であるから残せたのである。言うならば方言である。

貴族は称号をつける。例えばドイツでは『フォン』をつける。フランスでは『ド』、イタリアでは『デル』となる。モンサルヴァートが『フォン』という称号をつけているのは彼がドイツの貴族であるからに他ならないのである。これは各国で共通していることである。

その他にも様々な問題があった。分裂し、戦争状態にあっても同じ文化、文明を共有するサハラとは全く異なっているのである。その為無理に併合しては深刻な問題を引き起こす危険すらあるのだ。それは八条にもよくわかっていることであった。

「今回の戦争の発端はバチカンだったね」

八条は言った。

「バチカン経由でエウロパの諜報員が入って来ましたからね」

「それだ。それが問題となったことにより起こったことだった。では解決する方法としては」

「バチカンをどうするか、ですか」

「そういうことになるね」

八条は我が意を得たように頷いた。

「しかしバチカンに対しては何もできませんよ」

「というと」

「法皇には誰も手をつけられないでしょう。影響を考えますと」

「そういうわけでもないよ」

だが八条はそれに対して落ち着いて返した。

「教皇のバビロン捕囚は知っているね」

「ああ、あれですか」

木口はそれを聞いて頷いた。

フランス王フィリップ四世と教皇ボニファティウス八世との間で聖職者の課税問題で衝突があった。フランス王はそれに対して兵を

派遣して教皇を捕らえた。『アナーニの屈辱』である。教皇はこれにより憤死した。一見教皇が被害者に見えるがあながちそうとも言えない。当時教会の腐敗は目を覆わんばかりでありこの教皇も政敵を次々と追い落としている。そして神を否定し快楽や富こそ正義であると説いていたのだ。これが教会の実態であった。言うならば教皇もフランス王も同じ穴の狢なのであった。フランス王の方が何枚も上手であったが。

フランスはそれだけでなく法王庁を自国領であるアヴィニョンに移した。これが『教皇のバビロン捕囚』であった。さらにイギリスと神聖ローマ帝国がバチカンに教皇を立てたので教会は分裂してしまった。『シスマ』である。

それは八条達も知っている。だからこそここで話を出したのだ。

「しかしあれは」

「問題があると言いたいのだな」

「そうです。宗教に政治が関わるのはどうかと思うのですが」

「確かにな。だが今回は話が別だ」

彼は木口に対してそう言った。

「バチカンを放置しておくとまた諜報員が入って来る。バチカンの意思とは関係なくな」

「はあ」

「それを防がなくてはならない。ならば方法は一つだ」

「連合にバチカンを移動させるのがそれですか。それを行ったらどうなるでしょうか」

「まず連合内のカトリック信者は大喜びだろうな。自分達のところに教皇が来るのだから」

まずはこう言った。

「今までは連合のカトリック信者達はバチカンに行くことができなかった。一千年もの間彼等は唯バチカンから派遣される聖職者達の声を聞くだけだった」

「はい」

「それが変わる。これからは彼等は直接バチカンに行くことができる。そしてそれにより人が動く」
「交通や他の産業にも影響すると」
「そうした話も出ているね。実際はどうなるかわからないけれど」
「それでもかなりの人や金が動くのは事実でしょうね。特に旅行産業が」
「彼等が一番躍起になっているという話は実際に出ているよ」
八条はここでそう言った。

## 第八部第五章　宣戦布告その三

「バチカンの誘致にね。戦争そのものには何も言わないけれど」
「ぞれでも賛成のようですね。というか」
「連合の者は殆ど賛成しているのが実情だな。世論においても」
「はい」
賛成派は実に九割を優に越えていた。エウロパでもそれは同じであった。
「それを考えますと。やはり彼等も賛成なのでしょう」
「そうだろうね。しかし」
「しかし。何でしょうか」
「さっき政治と宗教の話が出たけれど」
「はい」
「難しい話だ、本当に。連合は政教分離がかなり確立されているけれど」
連合には実に多くの宗教が存在する。信教の自由が保障されている。政治が宗教に介入することは中央政府及び各国の法により禁じられているのだ。これはエウロパも同じである。これはそもそもキリスト教世界からはじまった。宗教が政治に介入するのを防ぐ為だ。近代国家はここから成立したとの見方もできるが確かに特定の宗教が政治に深く関わっていれば民主的な政治は行われにくい。そして幅広い政策もできなくなる。
「バチカンが相手となるとね。彼等は国でもある」
「はい」
バチカンは国家でもあるのだ。これは教皇領かってからあるが今のバチカンが形成されたのはバチカン市国からである。教皇領をイタリア王国に奪われローマにおいて『バチカンの囚人』となったがムッソリーニによりバチカン市国となりイタリアとも和解した。ムッソリーニは確かに独裁者であり自軍の強さを考慮に入れず戦争を

して惨敗続きであったが政治家としては優秀であったのだ。そうでなければあそこまではならなかった。弾圧や虐待もナチスやソ連に比べて遥かにましではあった。少なくともヒトラーやスターリンよりは人間味のある人物ではあった。
「彼等の承諾も必要だ」
「戦いの後ではそれが何処まで本意であるかどうかはわかりませんがね」
「確かにな。だが一応はそういう形になる」
「はい」
外交においては表向きが非常に重要なのは何時でも変わらないことである。なおバチカンは歴史においては極めて外交が巧い。情報収集が優れており、謀略にも長けているからである。バチカンはその権力闘争故か謀略が絶えない一面があった。
「国の移籍ですか。連合はじまって以来ですね」
「人類の歴史でもなかったのじゃないかな」
八条は木口の言葉に首を傾げながらそう答えた。
「私は記憶にないな」
「私もです」
「戦いに勝った場合エウロパにはバチカンの移籍と賠償金を求めることになると思う。他はこれといって要求するつもりがないというのが外務省の方針だ」
「カバリエ外相の」
「外相だけではなく省全体でそういう考えのようだね」
「そうなのですか」
「エウロパを併合するつもりはない。だからその辺りが妥当だと思うよ、現実には」
「それもそうですね」
木口はそれを聞いて納得した。
「やはりそうしたところで妥協ですが。ただ」
「ただ！？」

「賠償金をどれだけ手に入れられるかですね。問題はそこです」
「それか」
八条はそこで考える顔をした。
「最低で我が軍が今回の戦いで使った軍事費位は勝ち取ってもらいたいな」
「はい」
「そうでないと話にならない」
「ですね。戦いには多額の費用がかかるもの」
「だからおいそれとはできないものだがやるとなればやるしかない」
「はい」
木口はまた頷いた。
「私もそう思います」
「サイはまずは一つ投げられた」
八条はここでまたテレビに目をやった。
「あと二つ投げられるが既に結果はわかっている」
「ですね」
「ならば我々がやるべきことは一つ」
「戦争に勝つことです」
「うむ」
八条はここでテレビを切った。そして木口にあらためて言った。
「これからだが」
「はい」
彼等は話をはじめた。落葉が見える窓を眺めながら二人は話を続けた。

アッディーンは自身の婚約について決断を迫られていた。マルヤムと結婚するかどうかである。これは彼にとって深刻な問題であった。
何故なら彼だけの問題ではないからだ。これによりオムダーマンとティムールの関係が大きく変わる。だからこそ彼は悩んでいたの

だ。
大統領も両親も、そして外務省も彼に預けた。やはり彼の問題であるからだがもう一つ理由があった。それは彼の判断を皆信頼していたからだ。
「どうするかだ」
彼はシャイターン家の者との会談の場を設けることをとりあえずは決めた。シャイターン家に打診したところ快諾の返事があった。会談場所はこちらで指定して欲しいとのことであった。
それを受けて彼は会談の場をオムダーマンとティムールの境にあるカタール星系とした。ここは風光明媚な観光名所である。会談の場としては相応しいと思ったからである。
彼はアリーに乗りそこへ向かった。そして入ると会談の場であるカタール宮殿に入った。ここは元々サラーフ領であり王室の別荘もあった。宮殿はその別荘であったものである。
古風な作りの宮殿であった。円形のドームに白い大理石。モザイクで彩られ豪奢な絨毯が敷かれている。別荘だけありそれ程大きくはないが見事な宮殿であった。
「ナベツーラのあの宮殿とは大違いだな」
アッディーンは中に入り周囲を見渡しながらそう言った。
「あの趣味の悪さは一体何だったのだ」
「人間としての品性が出たのでしょうね」
すぐ後ろにいたハリージャがそれに答えた。
「あの男の品性たるや目をそむけたくなる程でしたから」
「確かにな」
アッディーンもぞれに同意した。
「よくもあれだけ下劣な輩がいたものだ」
「全くです。その下にいた連中も」
「酷いものだったな。あの時の戦いのことは今でも覚えている」
サラーフとの戦いのことはアッディーンの脳裏に焼きついていた。自軍を撃つ卑劣な者達のことを。それを見て呆れた

アッディーンは彼等をこそ攻撃したものであった。
「そして自分達は安全な場所に篭っておりました」
「そうした連中だったのだろう。あの時はティムールも参戦した」
「そうでしたね」
「あの時がはじめてだったな。シャイターン主席と会ったのは」
「主席もここに来られるですね」
「そう聞いているがな」
アッディーン達は宮殿の謁見の間に入った。そしてそこでティムールの者達を待つことにした。やがて一人の将校がアッディーン達の下にやって来た。
「シャイターン主席御一行が来られました」
「そうか」
それを聞いて姿勢を正す。そして彼等が来るのを待った。やがて赤い軍服に身を包んだシャイターンを先頭にシャイターン家の者達がやって来た。赤い壮麗な軍服のシャイターンの他にも皆それぞれみらびやかな服に身を包んでいる。その先頭にいるシャイターンがアッディーンに対してまず挨拶をした。
「どうも。サラーフとの戦い以来ですね」
「はい」
アッディーンはそれに応えた。
「お久し振りです。お元気そうで何よりです」
「いや、貴公こそ」
シャイターンはアッディーンの言葉に返事を返した。
「相変わらずのご活躍のようですね」
「私の力ではありません」
彼はサハラの儀礼で返した。
「全てはアッラーの御意志です」
「はい」
これがサハラの儀礼であった。自分の力ではなくアッラーの加護をまず言うのだ。シャイターンはそれを受けて間の中央に来た。そ

してアッディーンにあらためて言った。
「閣下」
「はい」
「今回ここでお話することはもう御存知だと思います」
「はい」
アッディーンは頷いた。
「貴方と我が妹マルヤムとの婚姻のことですが」
シャイターンはそれを受けて話をはじめた。
「これについてどう御考えでしょうか。それをまず御聞きしたいのですが」
「私の考えですか」
「はい」
シャイターンも頷いた。

## 第八部第五章　宣戦布告その四

「全ては貴方次第なのですから」
「私次第」
「そうです。何故ならマルヤムの心はもう決まっております」
「決まっているとは」
「貴方が望まれるなら喜んで妻になるとのことです」
サハラにおいては恋愛結婚はあまりない。家と家との結び付きを強める為、未亡人の救済の為といった色合いが強いのだ。なおサハラにおいては寡婦は非常に少ない。理由は言わずもがな、である。妻を四人まで持ってよいからだ。元々そうした寡婦を救う為の戒律なのであるから当然であった。ちなみにムハンマドは十一人の妻がいた。妻が四人までとなったのは彼がその十一人の妻の調停に苦労したからだというジョークもある。
「そうなのですか」
「ええ。では返答を」
シャイターンは詰め寄るようにしてアッディーンに対して言った。アッディーンはそれを受けてシャイターンの目を見た。何処となく赤さが混じった漆黒の瞳であった。それを見ているだけで彼に魅入られそうであった。不思議な目であった。
「待って下さい」
だが彼はここで踏み止まった。
「何故でしょうか」
シャイターンは顔を離してアッディーンに問うた。
「そのマルヤム殿ですが」
「はい」
「一度御会いしたいのですが。写真は見せて頂いておりますが」
「本人と会ってお話をしたいと」
「そういうことです」

彼はそれに頷いた。
「私は彼女が一体どの様な方かまだ御存知ないですし」
「はい」
「それに一度御会いしたいと思っておりました。宜しいでしょうか」
「勿論です」
シャイターンは微笑んでそれに答えた。
「そう仰ると思いこちらにも呼んでありますよ」
「そうなのですか」
「はい。これ」
彼はここで傍らにいる将校の一人に声をかけた。
「マルヤムをここに」
「ハッ」
その将校は敬礼で応えた後部屋を後にした。そして暫くしてマルヤムが部屋に入って来た。
「おお」
アッディーンは彼女を見て思わず息を飲んだ。その髪も顔も姿もまるで絵画の様であった。幻想的な美女がそこにいた。
「閣下」
シャイターンはあらためてアッディーンに声をかけてきた。
「我々は暫く席を外します。マルヤムと二人でお話下さい」
「はい」
「邪魔者は去らなければ。それでは」
彼はそう言うと他の者を連れて部屋を後にした。アッディーンに従う者達も部屋を後にした。そしてアッディーンとマルヤムだけが残った。
「あの」
アッディーンが最初に口を開いた。マルヤムに声をかける。
「はい」
彼女はそれを受けて顔を上げた。見上げたその顔はまるで天界のペリのようである。ペリとはイスラム教でいう天使のことである。

アッラーに光から作られたと言われている。なお人は土から、そしてジンは火から作られたとされている。
「何と言えばいいのか」
アッディーンは言葉に詰まった。歴戦の名将も女性には決して強くはなかったのである。今まで軍務ばかりでこれといった交際はなかったのである。この点は何処か八条と似ているかも知れない。だが大きく違うのは八条は女性が周りにいて何をしても全く気付かないのに対してアッディーンはおそらくそこまで鈍感ではないということである。連合軍には女性の将兵も多く四割を越えているがオムダーマン軍には一人もいないのだ。サハラはムスリムの国々である為その将兵は皆男なのであった。女は戦場に出ることはまずない。そして軍服を着ることも稀だ。アラブにおいては女はヴェールでその身体を包まなければならない、ムハンマドの頃からある戒律だがこれを忠実に守っている国もまだ多くあるのである。サハラにおいてはイスラムの戒律は連合各国、そしてマウリアにいるムスリム達と比して遥かに厳格に守られている。豚肉が連合各国ではアッラーに許しを乞えばまあ食べられるのに対してサハラではそうそううまくはいかないのもこれの一つである。
「貴女の兄君が仰ったことですが」
アッディーンはマルヤムに対して言った。
「はい」
「私との婚礼についてですが」
話が何処かぎこちなかった。アッディーンは自分でも緊張しているのがよくわかっていた。だがそれでもそれをほぐすことができなかったのだ。
「貴女の御考えですが」
「それは兄上がもう申されたと思いますが」
「はい」
それは事実であった。彼女はそれを承諾しているのである。儀礼であっても。

「貴女の妻になりたくここまで参りました」
「そうですか」
アッディーンはそれを聞いて頷いた。そしてまた口を開いた。
「それでは」
「はい」
「とりあえず外に出ませんか？ここでは何かとお話しづらいですし」
「外にですか」
「はい。この宮殿は庭園でも有名でして」
アッディーンは彼女に説明をはじめた。
「そこを歩きながらお話したのですが。宜しいでしょうか」
「わかりました」
マルヤムは頷いた。そして彼等は庭に出た。そこは左右均等に揃えられた緑の豊かな優美な庭園であった。何処か欧州の庭園を思わせる。
連合とエウロパの庭園にはある程度違いがある。エウロパの庭園は左右対称である。これは常にそうである。イギリスの貴族もフランスの貴族もそれにおいては同じであった。かってフランスにあったベルサイユ宮殿なども庭園は左右対称であった。これに対し連合の庭園は必ずしもそうではないのである。
中国や欧州からの移民が多いアメリカ等では確かに左右対称である。これは都市の設計にも現われている。だが日本では全く違う。そして日本文化の影響を受け連合では庭園も左右対称ではない場合が多いのだ。これも連合の文化の多様性であった。
サハラにおいては元々アラブが砂漠が多いということもあり庭園自体があまりない。またサハラにある惑星は砂や岩の惑星が。その為庭園といったものが少ないのだ。だがこの宮殿には庭園があった。この宮殿を作らせた当時のサラーフ王カリム二世がエウロパ趣味であったせいである。その当時はエウロパとサハラは対立関係にはなかったのである。
二人はその中を歩いていた。暫くは何も話さず庭園を見回ってい

た。だがここでアッディーンが口を開いた。
「あの」
「はい」
マルヤムは何処かぎこちない彼をフォローするようにそれに合わせた。
「それでお話ですが」
「はい」
「貴女は宜しいのですよね」
「ええ。それは先程申し上げた通りです」
「そうですか」
アッディーンはそれを聞いて頷いた。
「だとしたら」
「何か」
「いえ」
だがアッディーンはここで言葉を打ち消した。
「それは」
「それは？」
彼は何かを言おうとしているが言えないようであった。何かしら少し戸惑っているようであった。
「貴女の写真が私のところに送られてきました」
「はい」
だが勇気を振り絞るようにしてそう言った。マルヤムはそれに応える。

## 第八部第五章　宣戦布告その五

「その時思ったことですが」
アッディーンは戸惑いながらも言葉を続ける。
「何と美しい方なのだろうと。そして今貴女を目の前にして」
「目の前にして」
「私の目は曇っていたことがわかりました」
アッディーンは何かしら場違いに近い言葉を出してきた。
「貴女を直接目にしまして。写真というのは所詮写真に過ぎないと思い知らされました」
「どういうことでしょうか」
「ええと」
また言葉に詰まった。
「貴女御自身の方が」
「私の方が」
「写真なぞより余程お美しかった。そう言いたいのですが。すいません、どうもこうしたことは苦手でして」
言葉がよく出なかった。こうしたことを言うのははじめてであるからだった。女性には疎いのは今までの人生で戦場にばかりいたせいであろうか。
「それでも言いたいのです」
慎重に言葉を選びはじめた。
「それで私は今ここで言いたいのですが」
「はい」
「私は貴女を」
「私を」
一瞬時が止まった。アッディーンはまず一呼吸置いた。マルヤムは彼の次の言葉を待った。
「妻としたいのですが。宜しいでしょうか」

「喜んで」
それに対して微笑んで応えた。それで決まりであった。
こうしてアッディーンとマルヤムの婚姻が決定した。そして同時にオムダーマンとティムールとの同盟も決定した。これによりティムールは後顧の憂いをなくしたことになった。

「これでよし」
シャイターンは自国に戻り自身の宮殿においてそう言った。
「これで後ろは問題ない。ハサンもな」
「ハサンもですか」
それを傍らで聞くハルシークが問うた。彼の後ろにはやはりシャイターンの近衛の仮面を被った六人の将校達がいた。
「そうだ。我等とオムダーマンは同盟を結んだ」
「はい」
「それがあるからだ。若しハサンが動けば」
シャイターンは椅子に座った。象牙の白い椅子である。前のテーブルは水晶でできている。
「オムダーマンも動く。相互防衛関係だからな」
「確かに」
「ハサンも馬鹿ではない。その程度はわかっているだろう。そうなればダメージが大きい。今はおそらく軍備を増強させにかかるだろう」
「来たるべき時の為に」
「だろうな」
彼は答えた。
「だがそれまでに時間がある。その間に我々は」
「総督府を叩く。それで宜しいですな」
「そうだ。総督府だ」
彼はここで総督府のある方に顔を向けた。
「全てはそれからだ。まずはエウロパをこのサハラから排除する」

「はい」
「それからだ。何もかもな」
彼はやはり総督府を見据えていた。その目が赤く光ったように見えた。

シャイターンが見据える総督府、そしてエウロパにおいても動きがあった。連合に対する宣戦布告の決議案が議会において可決されたのである。上下の両院において満場一致で可決されたのであった。ネットの世界やマスコミの意識的な調査による満場一致ではなかった。ネットの世界において皆が、圧倒的多数がそう思っていると言えるのは他人の意見を認められない醜悪な全体主義者か狂人、若しくは工作を行える者である。どちらにしろ精神、人格共にこの世には存在してはならないレベルの存在であるので意に介するべきではない。なおこの世の中は実に奇妙なものでありそうした精神異常者共が大手を振って歩いていたりする場合もある。その末路は例外なくそれに相応しいものではあるが。猿は猿、人は人である。猿が人の真似をしてもいずれボロが出る。そして猿に相応しい処刑が待っている。それだけである。
「遂にと言うべきか、やはりと言うべきか」
ラフネールはその可決された議案の書類を前にそう呟いた。
「はい。後は閣下のサインを待つだけです」
書類を持って来た秘書官がそれに応える。
「ふむ」
彼はそれを受けてペンを手にした。そして言った。
「それでは私が今この書類にサインすれば全ては決まるな」
「はい」
「それでは」
彼はその書類にペンをつけた。そして自身の名を書き終えた。
「これでよし」
「はい」

こうしてエウロパは連合に宣戦布告することになった。書類のうえでは。
「ところでだ」
ラフネールはサインを終えると秘書官に問うた。
「何でしょうか」
「総動員令をかけたが。どれだけの戦力が集まっているか」
「はい、既に五百個艦隊が集結し終えております」
彼はそう報告した。
「そしてニーベルング要塞群には既に百個艦隊が集結し終えております」
「ふむ」
彼はそれを受けて満足そうに頷いた。
「まずはそれで第一の防衛ラインとする」
「はい。ですがそれだけではありませんね」
秘書官はそう言った。
「まだありますから」
「ふむ」
ラフネールはそれを聞いて頷いた。
「ローゼンラインだな」
「はい」
秘書官はそれに答える。
「それでもって第二の防衛ラインとします」
ローゼンラインとはモンサルヴァートが作ったラインである。エウロパの東方に設けたものでありこれにより連合の侵攻を防ぐ予定であった。
「だがそれが破られた場合はどうなる」
「その時は決戦でしょうね」
秘書官の声が強くなった。
「このオリンポスをかけて」
「まさに最後の戦いになるな」

「ええ。ですが敗れるわけにはいきません」
秘書官の声はやはり強いままであった。
「このエウロパを守る為にはね」
「うむ」
ラフネールはあらためて頷いた。こうしてエウロパの連合に対する宣戦布告が発布された。これによりエウロパは正式に戦時体制に入った。それまでは戦時体制に準ずるという状況だったのである。形式上は。
モンサルヴァートはこれを統帥本部長官邸で聞いていた。部屋には宇宙艦隊司令長官であるローズもいた。
「遂にはじまりましたな」
まずローズがモンサルヴァートに対して言った。
「はい」
モンサルヴァートがそれに応える。その目はいつものものとは違っていた。決意が宿っていた。それは実に強い決意であった。
「既に総動員令も発されています。エウロパは国を挙げて戦闘体制に入りました」
「はい。既にニーベルング要塞群には百個艦隊を集結させております。これでまずは彼等を迎え撃ちましょう」
「そうですね。おそらく連合は精鋭を送り込んでくるでしょうが」
「何としても防がなければなりません。どの様な者が来ようとも」
ローズの言葉も熱がこもっていた。
「このエウロパを守る為に」
「はい」
ここでモンサルヴァートが頷いた。
「我等は数で劣りますがそれならそれで戦い方があります」
「そうです。そして」
ローズは言葉を続けた。
「勝ちましょう、絶対に」
「はい」

彼等もまた戦いを決意していた。そしてある者は戦場に赴き、ある者は銃後でそれぞれの任に就くのであった。皆それぞれの手段で国難にあたろうとしていたのであった。

エウロパが連合に宣戦布告をした同じ時に連合もまたエウロパに宣戦を布告していた。そして既に連合においてもその軍が動員されていた。

「本部長」

「はい」

「ガンタース要塞群はどうなっていますか」

八条は宣戦布告に関する閣議決定が終わるとすぐに統合作戦本部長室に向かった。そして統合作戦本部長であり制服組のナンバーワンであるバールに尋ねた。

「既にガンタース星系及びその周辺星系に艦隊の集結を終えております。後は大統領及び長官の御指示だけです」

「そうですか」

八条はそれを聞いて頷いた。

「では大統領と私の命令が出た後はお願いしますよ。おそらく明日にでも出されるでしょう」

「はい」

バールもまたそれを聞いて頷いた。

「既に全軍に待機命令が出されています。攻め込むのを待っております」

「はい。そしてあれの用意はできていますね」

「無論です」

バールは微笑んでそれに答えた。モンゴル人特有の屈託のない笑みであった。草原の匂いが漂う様な笑みであった。

「あれも御命令を待つだけです。何時でもいけますよ」

「それは何よりです」

八条はそれを受けて安心したように笑った。

「それではそれでもってまずは攻撃を仕掛けまして」
「はい」
「次に本格的にいきましょう。義勇軍も攻撃の準備はできていますね」
「勿論です」
「彼等には先陣を務めてもらいましょう」
エウロパ側の予想は当たっていた。やはり連合は先陣に精鋭部隊を派遣するつもりであった。だがこれは戦争の常道を考えればすぐわかることであった。
「そして目指すは」
「はい」
「決まっていますね」
「無論」
「ならbそこは」
「オリンポスです」
その言葉が何よりも連合の意志を現わしていた。こうして連合もエウロパも軍を動かした。遂に双方の戦いがはじまったのであった。
一千年の対立が本格的な戦いにまで発展した。今までなかったことが現実になる。だがそれが現実であった。小説なぞよりも遥かに奇怪で何が起こるかわからない、それが現実であるのだから。

第八部　　完

０５・３・１　　２０

# 第九部第一章　星の大海にてその一

星の大海にて

連合とエウロパの関係は実に根深い対立関係にある。それは一千年以上前、そう連合とエウロパが正式に発足する前にまで遡る。

かって地球には太平洋連合と欧州連合の二つの大きな勢力があった。他にもインドやアフリカ連合などがあったがインドは中立でありアフリカ連合は太平洋連合についていた。アラブはやはり四分五裂であり群雄割拠と言ってもいい状況にあった。その中で人類は穏やかな対立関係にあった。太平洋連合にはオセアニアや中南米諸国も入っていた。当時の人類の人口の大部分を占めていたのである。太平洋と欧州は経済や国際情勢において二つの軸としてあった。軸が二つならばどうなるかというのは言うまでもないことであり双方はすぐに対立関係に入った。両者の関係は次第に悪化しやがて敵対関係にまで発展した。

人口においては太平洋側が欧州を圧倒していた。しかしその加盟各国の間の国力差が大きく、また同盟関係にあるアフリカ諸国もまた貧しい国が多く先進国のみばかりで構成されているといってもよい欧州とは差があった。そしてアメリカや中国、日本といった大国の発言力が極めて強く、小国がそれにそれぞれ手を結び合って対抗するといった状況であり連携も上手くいってはいなかった。まとまりに欠けるのはこの頃からであった。そうした点においても欧州に遅れをとっておりそこを付け込まれることも多かった。太平洋はまず欧州に対して何か言う前にまず自分達の中をどうにかしなければならなかったのだ。その為欧州は人口、そして総合の国力においては大きく差があろうとも太平洋と対抗していたのである。欧州は何かあると大国を煽った。それにより大国同士をいがみ合わせ自分達の方に矛先がいかぬようにしていたのだ。欧州の巧妙な外交の前に太平洋は翻弄されるといった情勢が長く続いていた。

しかしここで大きな転換点が訪れた。月での開発である。太平洋は太平洋で、欧州は欧州で開発を行った。これが対立のはじまりとなった。

月の資源の配分で太平洋と欧州は真っ向から対立した。太平洋側は自分達の人口の多さから月の資源の殆どを要求してきた。だが欧州にとってそれを認めるわけにはいかなかった。太平洋は月の資源の九割以上を要求してきたのだ。そんなものはとても飲めなかったのだ。両者は激しく対立し月では武力衝突も懸念されるような一触即発の雰囲気となっていた。だがここで一つの国が動いた。

ロシアである。ユーラシアのかなりの部分を国土に持つこの国はアジア、ヨーロッパにまたがって国土を有していた。この国は太平洋連合にありながら欧州とも太いパイプを持つ特異な立場にある国であった。その為に太平洋にあってはいささか異端の立場にあり欧州にとっては有り難い存在でもあった。時として欧州寄りの発言をすることもあった。

この時ロシアは完全に太平洋の側に入った。ここには情勢が太平洋に有利なのと後の資源の配分でロシアにかなりのものが約束されたからであった。それを勝ち取ったのは当時のロシア大統領イワノフ＝グルーチンと外相であるセルゲイ＝コリーニスキーである。彼等はロシア特有の力に頼った外交ではなく機を見て敏に動く外交を得意としていた。その為にこれができたのであった。

ロシアが完全に太平洋側になったことで欧州の劣勢は明らかとなった。太平洋連合の本部があるシンガポールにおいて月の資源の配分を取り決めたシンガポール条約を結ばされた。これは太平洋の要求がそのまま条約となった欧州にとっては甚だ不公平なものであった。そもそも敵の本拠地で結ばされた条約であるというのがこの条約の性質をあらわしていた。欧州は敗れたのであった。

暫くは太平洋にとって有利な状況が続いた。彼等は月だけではなく火星や水星、金星等でもその資源をほぼ独占した。インドは彼等についたので資源を得ることができた。欧州は僅かなものしか手に

入れることができなかった。自然と国力に差ができそれは最早どうしようもないものになるかと思われた。だがこの時に欧州に一人の英雄が姿を現わしたのであった。

彼こそブラウベルグであった。彼は欧州議長に就任するとすぐに精力的に動いた。まずは宇宙開発をこれまでの惑星ではなく小惑星に重点を置いたのであった。これはシンガポール条約の盲点をつくものであった。これにより欧州は小惑星からかなりの資源を手に入れることができた。

これを太平洋側が快く思わないのは当然であった。彼等は何とかしてこのブラウベルグを排除しようと考えた。スキャンダルを調べたがなかった。最終的には暗殺が計画された。

だがこれは失敗した。狙撃、毒殺、いずれも失敗した。そして逆に暗殺を計画したアメリカ、中国、ロシアの責任が問われた。これによりそれ等の国で政変が置き欧州に多額の賠償金が支払われた。これにより太平洋は彼に対して何もできなくなった。

しかし彼等は欧州に対する対抗を諦めたわけではなかった。むしろその対抗心をさらに強め連合を形成した。国際連合を基とするこの組織は太平洋、ブラックアフリカ、旧ソ連諸国等から構成され全人類の殆どを占めていた。彼等はまずその数の力を以って欧州を排除しようとした。

結果的にそれは成功した。彼等は宇宙開発のかなりの部分を獲得することに成功し、欧州を僻地に追いやることに成功した。そして彼等は今の連合を形成していったのである。

これに対して欧州はエウロパと名を変えた。こちらはＥＵを基礎としている。ギリシア神話の少女の名を冠したこの国と連合は一千年の長きに渡って互いに睨み合ってきた。だがそれが武力衝突になることはなかった。それは彼等の国境がブラウベルグ回廊という一つの回廊によってのみ隔てられていたからであった。

この回廊のそれぞれの出入り口に連合もエウロパもそれぞれ要塞を置いた。連合はガンタース要塞群、エウロパはニーベルング要塞

群である。彼等はこの要塞群を以って守りとした。十個艦隊が上下に固まって通行が可能なこの回廊は双方にとって防衛上極めて重要であった。今この回廊を激しい緊張が支配していた。
「あちらからまだ反応はないか」
「はい」
エウロパ側の出入り口にあるニーベルング要塞群。ニーベルング星系にあるこの要塞群は一個の惑星を中心として十六の人工衛星から構成されている。中心にあるニーベルング要塞は惑星を一つまるごと要塞としたものであり巨大な主砲と無数のビーム砲座、ミサイルランチャー、魚雷口を持っておりその周辺に攻撃用衛星十六個を配備している。そして星系全体が武装され百個艦隊の駐留が可能である。連合のガンタース要塞群には劣るがそれでも難攻不落の要塞として知られていた。
「ニーベルング要塞群がある限りエウロパに入ることは不可能である」
数百年前のエウロパ軍務相ルチアーノ＝デル＝ライモンディはそう豪語した。この人物は多分に大言壮語癖があったが連合の者は誰もそれを否定することができなかった。実際にこの要塞の堅固なことは誰もが知っており、そして当時は連合には連合軍はなかった。各国で軍を持っている時代だったのだ。
だからこそこのライモンディはこう豪語したのである。だが彼は決してこちらから攻め込もうとしなかった。連合が動かないのでよしとしていた。それはエウロパと連合の国力の差をやはり知っていたからであった。大言壮語癖の人物ながらそうしたことは冷静に見ることができたのだ。
ガンタース要塞群はニーベルング要塞群の比ではなかった。連合側の回廊の出入り口にあるガンタース星系の十五の惑星全てを要塞としたものでありその衛星も全て要塞化していた。全ての惑星が主砲を持ち、その周辺には十二個ずつ人口の武装衛星があった。衛星にまでそれぞれ六つずつの武装衛星がある程であった。艦隊の駐留

可能数もかなりのもので今ここに連合の艦隊の大部分が集結しているのだ。エウロパはこのガンタース要塞群から片時たりとも目を離すことができなかった。
「もう一度聞く」
ニーベルング要塞群の防衛司令官であるドン＝ファブリチーニ元帥は指揮所にてスタッフに問うていた。太い眉に彫の深い顔立ちの男であった。
「まだあちらは動いてはいないな」
「はい」
そのスタッフはレーダーを見ながらそれに応えた。彼もまた真剣な顔であた。
「そうか。ならばいい」
彼はそれを聞いてとりあえずは胸を撫で下ろした。だが彼はまだ完全に安心してはいなかった。
「だが来るのはわかっている」
「そうですね」
スタッフの一人がそれに答えた。
「彼等は既にガンタース要塞群に集結しているのですから」
「ああ。だからこそここから離れることはできない」
ファブリチーニはそう言いながら回廊に目をやる。その向こうには連合軍が集結して出撃を待っている。それは彼にもわかっていた。
「司令」
ここで若い士官が指揮所に入って来た。
「どうした」
「シュヴァルツブルグ閣下からお電話です」
「軍務相から」
「はい。如何なされますか」
「出よう。さて」
彼はここで隣にいる副司令官であるエレク＝ヴァン＝フランド上級大将に顔を向けた。

「暫く指揮を頼むぞ」
「ハッ」
彼は敬礼してそれに応えた。今ニーベルング要塞群は二十四時間態勢で配置についていた。ファブリチーニもそれは同じであり三交替で配置についていた。彼がいない間は副司令やそれに次ぐ者が指揮にあたっていた。
ファブリチーニは隣の部屋に入った。ここは通信室となっていた。彼はそこに置かれている電話を手に取った。そして出た。
「はい」
「私だ」
電話の向こうからシュヴァルツブルグの声がした。低く重い声であった。
「連合軍はまだ来てはいないか」
「はい」
彼はそれに答えた。
「既にガンタース要塞群に二千個以上の艦隊が集結しているようですが」
「そうか」
シュヴァルツブルグはそれを聞いて電話の向こうで頷いた。
「それでは近いうちに来るな」
「それは間違いないかと」
「ふむ」
シュヴァルツブルグはあらためて考えた。
「そちらの艦隊は戦闘態勢に入っているな」
「無論です」
「ならばいい。何かあったならすぐに援軍を送る」
「はい」
「ニーベルング要塞群が要だ。何としてもそこで防いでくれ、いいな」
「ハッ」

ファブリチーニはそれを受けて敬礼した。そして言った。
「この命にかけても」
「頼むぞ」
シュヴァルツブルグはそう言うと電話を切った。受話器を置いたファブリチーニは指揮所に戻った。そして指揮を再開するのであった。

## 第九部第一章　星の大海にてその二

「ニーベルング要塞群は既にかなりの緊張状態に入っております」
プロコフィエフが作戦会議においてモンサルヴァートにそう報告していた。ここには彼だけでなくそのスタッフや艦隊司令達も集まっていた。
「そして連合の動きは」
モンサルヴァートは会議室の円卓において立体地図を指し示しながら立って説明するプロコフィエフに問うた。その顔も目も完全に戦場にあるものとなっていた。
「まだ何もありません」
彼女はそれに対してそう答えた。
「ただガンタース要塞群に二千個以上の艦隊が駐留しております」
「そうか」
彼はそれを受けて頷いた。
「それではニーベルングから攻め込んでくるのは間違いないな」
「はい」
「本部長」
ここでゴドゥノフが口を開いた。
「他から攻めてくる可能性も考えておられたのですか」
「うむ」
彼はそれに対して頷いて肯定した。
「道は何もニーベルングだけではない」
「といいますと」
「サハラもある。私はそれを考えていたのだが」
「あっ」
彼はここで気がついた。連合とハサンは同盟関係なのである。そしてティムールとも同盟を結んでいたのだ。これが何を意味するかわからない者はいなかった。

「あのルートも有り得ると思ったのだがな。どうやらそれはないらしい」
「それはまずシャイターン主席が許さないでしょう」
プロコフィエフがそれに答えた。
「ほう、何故だ」
「狩人は自らの獲物を他の者に渡したりはしません」
彼女はモンサルヴァートの問いにそう答えた。その声はやはり落ち着いたものであった。
「おそらくティムールは総督府を狙っているでしょう」
「うむ」
「サハラ北方を解放したことによる功績を今後に利用する腹づもりだと思われます。そしてあの地の多くのものをその手に入れるつもりかと」
「それは全て自分の手で為さなければならない」
「はい。彼にとってはそうでなければなりません」
「それは何故でしょうか」
ジャークスが彼女に問うた。ジャースク達かってアッディーンの下にいた艦隊司令達は皆上級大将に昇進していた。じきに戦時処置として元帥に任じられる予定である。だが今は上級大将であるので元帥であるプロコフィエフに対してそうした口調なのである。
「これはあくまで私の推測ですが」
彼女はそう断ったうえで話しはじめた。
「彼は今後サハラにおいて大きな勢力を持つことを望んでおります。少なくとも今の北方の一部だけでは満足してはいないでしょう」
「ふむ」
「そしてその為には今の総督府を手に入れることが必要なのです。今のティムールでは限界があります」
「確かにな」
モンサルヴァートはそれを聞いて頷いた。
「今サハラには三つの勢力が存在する。ハサンにオムダーマン、そ

してティムールだ」
「はい」
「その中でティムールは最も勢力が小さい。これは動かせない事実だ。そしてそれを最もよく認識しているのは他でもない。シャイターン主席本人だ。そう言いたいのだろう」
「その通りです」
プロコフィエフはモンサルヴァートの言葉に頷いた。
「それを打破する為に最も近いのは総督府を手に入れることです」
「ですがそれは」
アローニカが入ってきた。
「我が総督府軍全軍を相手にするということですね。ティムールの国力では無理があるでしょう」
「今の時点ではな」
モンサルヴァートはアローニカに対してまずそう前置きした。
「だがこれからはわからない。今の戦いの戦局次第では」
「戦局が危うくなった場合総督府軍を本土に向かわせなければならない場合も考えられます」
プロコフィエフも言った。
「そうなった場合彼はすぐに動くと思われます。現にティムール軍は何時でも出撃できる態勢に入っているという報告が入っております」
「何と」
これにはモンサルヴァートも驚いた。
「もうか」
「はい。やはり連合との同盟はそれが狙いであったと思われます」
プロコフィエフはそれに答えた。
「彼は総督府に狙いを定めているのは間違いありません。そして総督府を解放したことにより」
「彼の名声は否が応にも高まるな」
「そうなるでしょう。彼が得る物はサハラにおいて限り無く大きい

ものとなります」
「そしてサハラでの英雄となるか。彼にとって悪いことは何一つない」
ターフェルが言う。
「しかし我々を手をこまねているわけにはいかない」
モンサルヴァートがここでこう述べた。
「参謀総長」
「はい」
プロコフィエフは答えた。
「総督府も既に戦闘態勢に入っている。すぐに彼等にも知らせてくれ」
「わかりました」
「だがいざという時には・・・・・・わかるな」
「無論です。致し方ありません、その時は」
「うむ。だが市民は保護しなければならないぞ」
「わかっております」
彼女は答えた。その顔は何時になく暗いものがさしていた。しかしモンサルヴァートはそれに気付きながらあえて気付かないふりをした。これも考えあってのことであった。
「それで連合軍だが」
「はい」
一同話を変えた彼に顔を向けた。
「近いうちにニーベルング要塞群に攻撃を仕掛けてくる。おそらく最初から我が軍にとっては総力戦になる」
「でしょうな」
マトクが言った。
「そうでなくては我等にとって勝利はありません」
「そうだ。今我が軍は五百個艦隊。それに対して連合は二千個艦隊、そこにサハラ義勇軍百個艦隊が加わる」
「計二千百個艦隊。口で言うと一口ですが」

「今までそれだけの規模の軍を動員した例はなかった。人類史上最大規模だ」
「ですね。それを迎え撃たなければなりません。例えどれだけの数であっても」
「うむ。それでは卿等には命を捧げてもらう。オーディン、そしてアテナに」
「はい」
オーディンはエウロパで崇拝されている戦と嵐の神である。帽子を目深に被った隻眼の老人でありその手には神の槍グングニルがある。常に二羽の烏と二匹の狼を連れており魔術を使う。不和と争いを好み戦場で活躍する戦士達に加護を与える。だがそれは気紛れであり戦士達は何時彼の加護を失い命を落とすかわからないのである。戦場で命を落とした戦士達は彼の館に招かれる。そしてそこで最後の戦いに備えて腕を磨くのである。
アテナもやはりエウロパで信仰されている神である。知恵と戦いの女神であり長身を鎧兜と楯、そして剣や槍で武装している。天空と雷の神ゼウスの長女であり気高く、それでいて慈悲深い心を持っている。戦いにおいては攻めるよりも守るのを得意としている。エウロパにおいてとりわけ人気のある女神でもある。
本来オーディンとアテナは違う神話系列の神でありここでモンサルヴァートが同時に出したのは理由があった。それはエウロパの者はそれぞれの神を信仰しているからである。ここにいる者ではモンサルヴァートはオーディンを信仰している。プロコフィエフはアテナを信仰しているのである。またその他にカトリックとプロテスタントの区分もある。エウロパの信仰もかなり複雑であった。
「無論私もだ。それでは行こう、戦場に」
彼はそう言うと立ち上がった。他の者もそれに続く。
「ヴァルハラ、そして神々の宮殿で会おう。我が軍に勝利を！」
「我が軍に勝利を！」
皆一斉に敬礼した。こうして彼等も戦場に向かうのであった。

## 第九部第一章　星の大海にてその三

「連合は今どうしているか」
アッディーンと妹マルヤムとの婚姻の約束を済ませたシャイターンは自身の宮殿に戻りそこで末弟アブーに問うていた。アブーは兄に一礼してから報告した。
「ガンタース要塞群にて集結した後はこれといって動きはありません」
「そうか」
彼は弟からの報告を聞いて頷いた。
「思ったより動きが遅いな。そろそろ動いてもいい頃だが」
「彼等にも考えがあるのでしょう」
「御前もそう思うか」
「はい。連合の国防長官八条義統ですが」
兄に対し話しはじめる。
「かなりの切れ者です。やはりここは何か考えがあってのことと思われます」
「それは御前の考えか」
しかしシャイターンはここで彼にそう問うてきた。
「といいますと」
「それは御前の考えかと聞いたのだが。聞こえなかったか」
「いえ」
アブーは兄の言葉に首を横に振った。
「これは私の考えです。如何でしょうか」
「ふむ。いいと思う」
兄は弟に対してそう述べた。
「かなりわかってきているな」
「有難うございます」
「御前を側に置いている介があるというものだ」

シャイターンはそう弟に語った。
「近いうちに御前には先陣を務めてもらうことになる」
「はい」
「攻撃目標はわかっているな」
「無論です」
彼は答えた。
「その大任、見事に果たして御覧に入れましょう」
「頼むぞ。そして」
シャイターンはさらに言う。
「このサハラを我がシャイターン家の手中に収めるのだ。私は頭脳となりフラームは心となる」
「そして私は剣となる」
「そういうことだ。全ては我等がものだ。よいな」
「ハッ」
アブーは兄に対して敬礼して答えた。
「そして姉上は」
「マルヤムか」
「はい」
「そうだな、あれは」
シャイターンは考える目をしながら言葉を出す。
「国母になるか」
「国母に」
「そうだ。国母にだ」
弟に対してそう語る。
「どちらにしろサハラはシャイターン家のものだ。よいな」
「はい」
アブーは兄の言葉を最後まで理解できなかった。しかし兄が何かを考えていることはよくわかった。運命の輪は常に回っている。それはこのサハラにおいてもそうであった。

連合とエウロパが戦争状態に入ったことは当然ながらマウリアにも伝わっていた。マウリアは連合と同盟関係にあるが彼等はこの戦争に関して中立を宣言していた。

これには理由があった。マウリアは連合と国境を接してはおらず遠く離れていた。そしてかってイギリスに支配された歴史があるとはいえエウロパとはこれといって交流がなかった。その為彼等はエウロパに宣戦布告する理由もなかった。また連合も領内に他国の軍を入れることを好まず、また彼等に貸しを作りたくはないという政治的な配慮から彼等に協力を要請することもなかった。こうして彼等はこの戦争とはほぼ無関係であった。だが完全に無関係とはいかないのが政治というものであった。

「観戦武官の選定はどうなっている」

クリシュナータは官邸の一室でラーンチにそう問うていた。彼等もこの戦争に関して全くの傍観者でいることはなかった。むしろ深い関心を持っていたのである。

「はっ」

ラーンチはそれに答えた。

「既に選定は終えております」

「そうか。ならいい」

クリシュナータはそれを聞いて満足そうに頷いた。

「それではすぐに送ってくれ。よいな」

「わかりました」

「彼等がどう戦うかだな、この戦いは」

「はい。おそらく彼等はその物量でもって戦うでしょうが」

「それだけではないだろうな」

クリシュナータは言った。

「彼等の艦艇を見る限り独特の戦い方を意識している。それはあの海賊との時でもそうだった」

「はい」

解放軍との戦いである。クリシュナータはあの戦いの後すぐに国

防省に指示して資料を集めさせ研究を命じた。その結果多くのことがわかったのである。
「連携が上手い。だがそれだけではない」
「はい」
「装備もいい。とりわけあの戦艦がな」
「ティアマト級ですか」
「そうだ。あの戦艦は間違いなくあの軍の要だ」
その目の光が鋭くなっていく。
「連携にしろあの艦に秘密があるな」
「はい。あの艦の電子設備はかなりのもののようです」
ラーンチは彼にそう説明した。
「それだけに艦隊の旗艦ともなっているのでしょう」
「あの戦艦に観戦武官達を乗り込ませたいが」
「それは既に手配済みです」
「そうか、ならいい」
クリシュナータはそれを聞いて満足したように頷いた。

## 第九部第一章　星の大海にてその四

「あの艦については色々と知りたいからな。だが多くは見られないだろう」
「でしょうね」
軍事機密をそうおいそれと渡すことは有り得ない。例え同盟国の関係であってもだ。
「装備だけでないからな、兵器というのは」
「はい」
「そうした電子設備等も重要だ。それに」
「それに」
「構造もだ。観戦武官の中に技術者は入れているか」
「いえ」
彼は首を横に振った。そこまで考えは至らなかったのだ。
「それではすぐに入れておけ。それもかなりの数をな」
「わかりました」
将校といってもその職種は色々あるのだ。パイロットもいれば技術者もいる。ただ戦場において指揮をするだけが将校の仕事ではないのである。
「彼等にはあの艦の技術について詳しく見てもらう。よいな」
「はい」
「そしてだ」
クリシュナータの言葉は続く。
「補給についてもよく研究するようにな。これはとりわけ重視したい」
「補給ですか」
「あれだけの規模の軍を動かすとなるとかなりのものとなる。連合軍がそれをどうするのか。興味がある」
「そうなのですか」

「今後の我が軍の補給についても参考になるかも知れん。よいな」
「はい。ではそちらも」
「うむ」
クリシュナータはラーンチの返礼を受けて頷いた。
「それにしてもだ」
しかしまだ終わりではなかった。彼の言葉は続く。
「何でしょうか」
「連合では軍の人気はあまりないというが」
「職業としてはそうですね。他にも多くの職がありますから」
「それだ。彼等はカーストによって職が決まっているわけではない」
「はい」
「我々とはそこが大きく違うのだな」
「その通りです」
ラーンチはそれに答えた。マウリアはインド文明を受け継ぐ国家であり、カースト制もまだ残っている。人の職業はそれによっておおむね決まるのである。軍人となるのはクシャトリアというカーストに属する者達である。カーストは大きく分けて司祭階級であるバラモン、貴族や軍人の階級であるクシャトリア、商人の階級であるヴァイシャ、そして奴隷とされるシュードラである。ここで奴隷となっているが実際には平民といった意味である。異なるカーストの間では結婚や交際が認められていなかった。だがそれは流石に今ではない。またその下にある不可触民であるアウトカーストの者達もいるが彼等も存在している。だがこれはヒンズー教での話でありマウリアにも多くの宗教が存在する。ジャイナ教やシーク教もあるのだ。だがその多くがヒンズー教徒でありクリシュナータ達もそうである。だから彼等はここではヒンズーのカーストに沿った考えをしているのである。
「彼等は完全な志願制です」
「我等もそうだがな」
しかしマウリアのそれはクシャトリア階級に限定されたものであ

るのだ。ヴァイシャやシュードラも志願することは可能であり、無論バラモンもアウトカーストもそうであるが彼等は大抵志願しない。カーストの関係でだ。
「ですが彼等の社会にはカーストがありません」
「そういうことだ」
クリシュナータはそれがわかってあえてそう言ったのであった。
「それがいいか悪いかまではわからんがな」
「はい」
ラーンチは頷いた。そして言葉を続けた。
「そういうことも見ていかなければならないと思いますが」
「そうだな。しかし」
「しかし・・・・・何でしょうか」
「膨大な数だ。連合の人口を考えると当然だが」
「はい」
「六〇億にも達する。それだけの数を相手にエウロパは何処までやれるかな」
「おそらく負けるでしょう」
ラーンチは冷徹な声でそう答えた。
「敗れるか」
「戦力差は歴然としております。エウロパは今総動員令を敷き戦力を拡充しておりますが」
「それでも限度があるな」
「そうです。連合とエウロパの人口を考えましても。やはり限度があります」
「エウロパにとってはやはりそれが最も問題になるな。これは前から言われてきたことだが」
「戦争は兵士だけでやるものではありませんから。国と国の戦争なのです」
「国力差は如何ともしがたい。これは我々にも言えるな」
「はい」

マウリアの人口は公表で二千億である。これは一つの国家としては最も多い。連合は多くの国家の連合であり、エウロパもまたそうである。連合において中国の人口は一千五百億、アメリカは八百億、ロシアは六百億、日本が三百億となっている。インドネシアやメキシコで四百億である。人口がすぐに国力となるわけではないが彼等でも人口はその程度である。中国の人口はかっては世界人口の約五分の一程であった。だが二十世紀後半から二十一世紀の人口抑制政策等でそれが変わり今では一千五百億となっている。アメリカやロシアは逆に多産を奨励し、人口が増加したのだ。とりわけアメリカは多くの移民を受け入れたことも大きかった。日本も二十一世紀は少子化に悩んだが今ではそれは解消された。これには子供の多い家庭に何かと経済的な便宜を図る政策と開拓により多産が奨励されたからである。連合において多産が奨励されるのは開拓政策の為多くの人手が必要なせいでもあった。エウロパがその領土の狭さ故に人口抑制政策をとらざるを得なかったのとは対象的であった。

マウリアは二十一世紀に世界人口のトップとなった。それからも世界人口においては第一であり続け、それは今でも変わりはしない。今では実際の人口は二千億どころかそれに三百億、人によっては五百億は多いのではないかという説もある。正確な人口はわからないのである。

「一つの国家として我等が最も国力も人口も多いとしても」

「連合自体には到底適いません」

「そうだ。だからこそ我々は彼等と同盟を結んできた。今までな」

「そしてこれからも」

「それはどうかな」

だがクリシュナータはそれには首を縦に振らなかった。

「それはどういうことですか」

「同盟とは双方の合意において為されるものだ」

「はい」

「我々が望んでいても彼等が望んでいなくてはどうなる」

「それは・・・・・・」
ラーンチはその言葉に声を失った。答えることができなかった。
「これは逆も言える。我々が同盟を望んでいないならば。彼等が同盟を望んでいても。それでも同じことになる」
「はい・・・・・・」
「最もそれは今のところ有り得ないがな。両方共」
クリシュナータはそう言って微笑んでみせた。
「彼等もまず我々と対立する道は選ぶまい。エウロパですら併合するのは無理だ」
「はい」
連合の三十分の一といっても一千億もいるのである。一千億もの全く文化も風習も異なり、しかも長い間敵対関係にあった者達を組み入れるとそれによる社会的混乱は深刻なものとなるのが確実であった。それを考慮するとなると併合は無理であった。

## 第九部第一章　星の大海にてその五

エウロパですらそうなのである。連合が二千億以上も何もかもが違う者達を組み入れるとは到底考えられなかった。ましてやマウリアは文明であった。全く異なる文明を受け入れることはやはり不可能であったのだ。
「それでは我々は連合との関係を維持していけばいいですな」
「そういうことだ。だが彼等を下手に刺激してはならない」
「それはわかっております」
ラーンチはそう言って頷いた。
「攻め込まれてはやはり相手にはなりませんからな」
「そうだ。だが連合の兵は強いのか」
「それはこれからわかることです。ただ」
「ただ、何だ？」
「個人的な見解ですが彼等は個々の強さはそれ程ではないと思います」
「何故だ」
「極限の状態にないからです。そして彼等はあくまでも生きて帰ることを前提としています」
「うむ」
「そうした兵はやはり強くはないでしょう。ですが」
彼は言葉を続ける。
「戦争は強兵だけで勝てるものではありませんから。それを考えますと連合軍は強い軍と言えましょう」
「数と装備においてな」
「そしてもう一つ。補給です」
「補給ですか」
「そうです。それも見ていきましょう。先程お話したように」
「ああ」

マウリアから観戦武官が多数送られたのはそれから数日後のことであった。連合はそれを快く受け入れることにした。そこには同盟関係の他にも理由があった。
「マウリアにも我々の力を見せておこう」
こうした考えもあった。言葉には出さないが。同盟関係にあるとはいえ他国である。それを考えると安心はできない。そしてその力も見せておかなければならないのであった。
彼等はすぐにガンタース要塞群に向かった。そしてそこでティアマト級巨大戦艦にそれぞれ乗り込んだ。彼等は客人として厚待遇を受けた。マウリアの緑と白の軍服が連合の黒と金の軍服に
だが彼等は悩みがあった。それは連合の文化、風習との異質性であった。それはあまりにも大きかった。
「これは何という食べ物ですか？」
ある日観戦武官の一人が食堂で連合の接待役の士官に尋ねた。その士官はそれを聞いて不思議そうな顔をした。
「カレーですが」
「カレー？ああ、カリーのことですか」
「はい」
士官はやはり不思議そうな顔でそれに答えた。
「そちらの料理だと思いますが」
「はい、カリーは確かにそうです」
彼はそれに答えた。
「ですがこれはカリーなのですか？本当に」
「はい。そうですが」
「そうなのですか」
彼は首を傾げながらそのカレーを見ていた。それからまた言った。
「これで食べるのですよね」
「はい」
スプーンを指して言う。士官はまた頷く。
「マウリアでは手で食べられるのでしたよね」

「はい、右手で」
彼は答えた。
「しかしカレーはスプーンで食べるのですか。ふむ」
彼はまだ首を傾げていた。だがそれを止めカレーを食べはじめた。
「如何ですか」
接待役の士官は彼に尋ねた。
「美味しいですね」
「それは何より」
「ただ」
「ただ・・・・・・？」
マウリアの士官の表情がよいものではないことに彼は危惧を感じずにはいられなかった。そして問うた。
「これはやはりカレーですね。カリーではないです」
「そうですか」
それを聞いて少しガッカリした。ある程度覚悟していたとはいえそう言われるとやはり残念であった。
給養員もそれは同じであった。カレーは連合においても人気のある料理であり彼等もその作り方には自信があったのだ。だがそれがあまりよい評価ではなかったので彼等も残念であった。
「ただ嬉しいことがあります」
「それは何でしょうか」
マウリアの士官がここで顔を綻ばせたので連合の士官はまた尋ねた。
「このカレーは牛を使ってはおりませんね」
「はい、それはもう」
これは当然であった。マウリアの者の多くはヒンズー教である。ヒンズー教では牛は食べないのだ。元々は農耕に使うからだったという。だが今では神の使いとして崇められている。ムスリム達は豚を食べないがこれは豚肉は傷み易く食中毒になることを懸念したからである。犬の唾が狂犬病のもとだから不浄としたのと同じである。

だがヒンズーの牛はそれとは違う。彼等にとっては牛は聖なる存在であるのだ。
「鶏肉なのが有り難いです」
「それはよく気をつけていましたから」
連合の士官はにこやかに微笑んでそれに応えた。
「全体的に野菜を多くしましたが。それで宜しいですね」
「はい。大変有り難いです」
マウリアの士官は頷いた。
「ヒンズー教徒だけではありませんからね」
「はい」
実は連合軍の食事には制限がある。それは豚肉を使う場合はムスリム用に羊を使ったものと分けることである。連合においてもムスリム達は多い。インドネシアやマレーシア、そしてトルコ等である。彼等のことを考慮して豚肉を使う場合は別に羊を使ったものを用意するのである。麺類においてもその際はスープに豚骨などは使われない。トリガラのみのものとなる。チャーシューも入らないのだ。またイスラエルのユダヤ教徒達も存在する。彼等はさらに難しい。そうした者達のことも考慮に入れられ食事が作られるのである。これがかなり難しいのだ。従ってこうしたことには色々と配慮が行き届くのである。
「ジャイナ教徒達は肉は一切口にしません」
「所謂ベジタリアンですね」
「そうです。彼等のことにも配慮して頂いているのですね」
「無論です。そうでないと連合はやっていけませんから」
彼はそう答えた。
「私はカトリックですがね」
「ほう」
「同時に禅宗も信仰しておりまして。おっと、マウリアでそうしたことはないですね」
「そうですね」

マウリアの士官はそれに答えた。
「一つの宗教のみですね、信仰するのは。それでカトリックと禅宗には何かあるのですか」
「カトリックはこれといってないのですよ。ですが禅宗の方は」
「何かあるのですね」
「はい。極めて禁欲的な宗派でして。仏教の一派ですが」
「あ、それは御聞きしています」
元々仏教はインド発祥である。だから知っているのだ。
「何かと制約があるのですよ。まあそれはお坊さんだけと言ってもいいですが」
「では問題はないのでは」
「私の実家がその禅宗のお寺だったのですよ、これが」
「それはまた」
「それで子供の頃から色々とね。とりわけ食べ物のことでは苦労しました」
「かなり厳格な菜食主義らしいですね」
「そうなのです。玄米のお粥が多かったですね」
「それだけでやっていけるのですか」
「それはそれです」
ところが彼はここで微笑んでみせた。
「今では意外とバリエーションがありましてね。蒟蒻や野菜のカレーとか」
「面白そうですね。蒟蒻とは昨日出たあの柔らかい食べ物ですね」
「はい。美味しかったでしょう」
「ええ。あれはおでんに入っていましたね」
「そうです。カロリーがなくてダイエットにも丁度いいですよ」
「成程。それでその蒟蒻カレーの他は」
「それなりにありますけれどね。ただ軍に入るまでは肉は食べたことがありませんでした」
「そうだったのですか」

「ええ。それで最初は苦労しましたね。今では平気で食べられますが」
彼はにこやかに笑ってそう答えた。
「カトリックの方の戒律に従っています、そちらは」
「ところで何故カトリックになられたのですか。それを御聞きしたいのですが」
「妻の家がそうだからです」
彼はそう答えた。
「私は台湾出身なのですが妻はブラジル出身でして」
「ふむ」
「それでそうなったのです。妻も禅宗の信者でもありますよ」
「そうなのですか」
「最初は結構色々ありましたけれどね。今では仲良くやっていますよ」
「それは何よりです。しかし」
「しかし。何でしょうか」
「いえ、複数の宗教を信仰するというのも面白いですな。マウリアではないことですが」
「はい」
「面白いお話を聞かせて頂きました。参考にさせて頂きます」
「はい」
こうした朗らかな雰囲気でマウリアの観戦武官達は迎え入れられていることが多かった。だが人はそれぞれでありやはりトラブルもあった。人間性によるものならまだしも中には文化や宗教による摩擦もありこれがまたかなり複雑なこととなっていたのだ。
例えばマウリアの者と連合の者では時間の感覚が違う。連合の者はその日の時間で考えるのだがマウリアの者は凄い場合には『その時の魂』の感覚で時間を考えるのである。これにより途方もないことが起こったりしていた。

## 第九部第一章　星の大海にてその六

「あの、十時と言いましたよね」
「はい」
　ティアマト級巨大戦艦の一つバールにおいてそうした話が行われていた。バールとはメソポタミアで信仰されていた神の一人である。今では連合においてわりかし人気のある神となっている。その神の名を冠した艦の艦橋において連合の接待役の士官とマウリアの観戦武官との間で衝突があったのだ。
「ですから十時に来たのですが」
　マウリアの武官は落ち着いた顔でそう答えた。
「それは朝の十時だったのですが」
「そうだったのですか」
「そうだったって・・・・・・。あの、何時だと思っておられたのですか」
「夜の十時かと」
「はあ」
　これには流石に呆然とした。こうした時間の感覚であったのだ。マウリアの者は時間の感覚が違うのであった。彼等にとって今の一生は輪廻転生の一つでしかなく時間は悠久のものであった。一日のズレ等考慮するまでもないことであったのだ。
「私と貴方は前世の巡り合わせが悪かったからこうなてしまったのです。気にしてはいけませんよ」
　トラブルが起こり逆にこう窘められた者もいた。些細なトラブルで怒ろうとしたら逆にこう諭されたのである。諭された者は以後マウリアの者と喧嘩をすることはなかったらしい。マウリアはとかく連合にとっては全く異質の存在であるということも色々とわかってきだしていたのである。
「さてさて」

この戦いの現場の総指揮官となったマクレーンは要塞の司令室において色々と話を聞きながら苦笑いしていた。
「マウリアとはここまで凄い存在だたっとはな。流石の思わなかった」
「同感ですな」
劉がそれに同意する。彼もまたこの作戦に参加していたのだ。
「そもそもの根本が違いますからな」
「全くですな」
マクレーンはアメリカ、劉は中国出身である。彼等はそれぞれ連合において多大な影響を持つ国の者であるがあくまで連合の中においてである。やはり連合という一つの大きな囲いの中におり、その中での思考に留まっているのである。
「文明の違いとも申しましょうか」
「はい」
「異質であり過ぎますな。ですがこれは」
「彼等も全く同じことを感じている筈ですな」
「そういうことです」
劉はマクレーンの言葉に頷いた。
「しかしこれはマウリアだけではないでしょうな」
「エウロパもまた」
「はい。彼等との交流も一千年もの間ほぼなかったといってよいです。彼等の社会についてはある程度知ってはおりますが」
エウロパといえば貴族社会、階級社会であった。貴族が優雅で満ち足りた生活を送っているというイメージが連合の者にはあった。だが当然それだけではないのだ。
「無闇な衝突は避けたいですが。戦闘以外の」
「少なくとも一般市民に関してはそうですな」
「はい」
彼等の危惧はそこであった。市民に対して銃を向けるわけにはいかないのだ。相手がゲリラならまだしも一般市民を戦争に巻き込む

ことに彼等は強い抵抗があった。それは彼等が連合の軍人だからであった。
連合において軍人の仕事とは海賊やテロリストに対するものであるのが今までであった。他には治安維持、そして災害救助であった。どれも一般市民を守るものであり時には暴徒に対して威圧行動をとることはあっても市民に銃を向けるということはなかったのである。そもそもの発想の時点でないものであった。
だからこそ彼等もそうした事態を考えて苦慮しているのである。そして今話し合っているのだ。
「長官から指示がありまして」
「どのようなものですか」
「占領した惑星、基地は全て武装解除せよ、と。そして所属や籍の調査を全て把握せよ、とのことです」
「武装解除と所属、籍の把握ですか」
「はい。それによりゲリラ活動を防ぐようです」
「成程」
マクレーンはそれを聞いて八条の考えがわかった。
「いない者を警戒すればいいのですからな」
「そういうことでしょう。そして武装の解除は拳銃一丁、弾丸一つに至るまで徹底的に行うようにと」
「ふむ」
「軍人は捕虜収容所に、一般市民にはこれまで通りの生活を。しかし捕虜収容所での待遇は一般市民に対するのと同じようにせよ、とのことです」
「何故ですかな」
「彼等は敵国の軍人でありあくまで犯罪者ではないからとのことです。犯罪者でないならば普通に扱われるべきだと」
「ふむ」
「それが長官の御考えです」
「長官らしいですな。確かにエウロパの軍人は確かに敵ではありま

すが罪人ではない」
「やはりこの処遇が当然でありますな」
「はい。私もそう思います」
「それではこれをすぐに全軍に達しましょう」
「はい」
こうして八条の指示が全軍に伝えられた。これはとりわけ厳しく伝えられた。八条はそれを地球の国防省執務室にて聞いていた。そして満足したように頷いた。
「マクレーン長官も劉参謀総長もわかっておられるようで何よりです」
「はい」
彼の前に立つシャリアピンがそれを受けて応える。
「あの御二人なら問題はないと私も思っておりましたが」
「ただそれが全ての将兵が従うかというと問題が違います」
「ですね」
シャリアピンはそれを聞いて暗い顔をした。
「どの国、どの組織にも不心得者はいますから」
「そうです。そうした者に対しては厳罰で挑みましょう」
「厳罰とは」
「死罪も含めた。それでいってはどうかと思うのですが」
「厳しいですね」
「そうでもしないと軍律、そして軍の信頼は得られません。それが為に連合軍の軍律は厳しいものに定めたのです」
「それは私も知っております」
「ならばそれで問題はないかと思います。一般市民に危害を加えることもその財産に手をつけることも死罪とします」
「はい」
軍のことに関しては国防省が統括する。だから本来ならば法務省の管轄になるようなことでも軍のことに関することならば国防省の管轄となるのである。

「捕虜に対してもそれは同じです。よいですね」
「わかりました」
シャリアピンはそれを受けて頷いた。
「後方の部隊にもそれは徹底させましょう」
「無論です」
八条の声は何時になく強いものであった。そこには決意が見てとられた。
「軍人としての誇りを忘れないようにね」
「わかりました」
連合はこうして規律に至るまで細心の注意が張られていた。だがそれだけで戦争に勝てるかというと当然ながらそうではない。八条はまだ話を続けていた。
「そしてあれの準備はどうなっていますか」
「あれですか」
「はい」
八条はシャリアピンの言葉に頷いた。
「まずはあれを成功させなければなりませんからね」
「それの準備はもうできております」
彼はそう答えた。
「既に全艦ニーベルング要塞群に向かうように定められております」
「そうですか」
「はい。こちらはもう長官の御指示を待つだけですが。如何なされますか」
「サインは」
「今長官の目の前に」
見れば八条の前に一枚の書類が置かれていた。サインする欄の一番上だけがあいている。それが何を意味するのかは言うまでもないことであった。
「わかりました」
八条は頷くとペンを手にした。そしてそれでもって書類にサイン

をした。
「これでいいですね」
「はい」
シャリアピンはそれを確認して応えた。
「ではこれにてエウロパへの侵攻作戦が発動されました」
「はい。作戦名は」
八条は言葉を続ける。
「ハンニバルとします。よいですね」
「はい」
かってローマと戦ったカルタゴの名将の名である。これはローマをエウロパに見立てて名付けたものであろうか。シャリアピンは作戦名を聞きながらそう考えていた。
「それでは全軍進撃用意」
八条はさらに言葉を続ける。
「第一攻撃目標はニーベルング要塞群、攻略後はすみやかに作戦通りの行動をとるべし。よいですね」
「はい」
シャリアピンは文官であるので敬礼はしない。言葉で頷いた。
こうして軍の出撃が発動された。連合軍はニーベルング要塞群に向けて兵を進めはじめた。
「そうか、遂にか」
ファブリチーニはその話を司令室で聞いていた。そしてすぐに指示を下した。
「総員戦闘用意、よいな」
「ハッ」
報告に来た将校がそれを受けて敬礼した。
両軍は本格的な戦闘に入った。遂に一千年の対立が現実に刃を交えるものとなったのであった。

# 第九部第二章　虚の兵士達その一

虚の兵士達

連合軍は遂に兵を動かした。そしてブラウベルグ回廊を通り一路ニーベルング要塞を目指していた。

だがその先陣を行くのはサハラ義勇軍ではなかった。彼等はまだガンタース要塞群に留まっており、出撃準備をしているだけであった。

それはエウロパの方からも確認された。彼等はそれを見て妙に感じていた。

「これは一体どういうことだ」

ファブリチーニはそれを聞いて作戦会議室において腹心の部下であるゴンガーザ少将に問うていた。

「何故サハラ義勇軍を出さない。あれは彼等にとってこうした時に真っ先に来る軍ではなかったのか」

「何か事情があるのでしょう」

ゴンガーザはそれに対してこう答えた。

「事情」

「はい。彼等はサハラの者です」

それは最早言うまでもないことであった。だが彼はあえてそれを言った。

「それを考えますと何かったのかも」

「何か」

「そうです。軍の内部で彼等に対する運用で問題があったとか」

「問題が」

「暴動が起こり動かせない等。それで今は出て来ないのかも知れません」

「そうかな」

だがファブリチーニはそれに対して懐疑的であった。

「連合軍は何か企んでいるのではないか」
「それは」
「今のところ私にもわからない」
彼にもそれが何かまではわかってはいなかった。
「だがやはり何かあるだろう」
「はい」
「どちらにしろ兵がこちらに来ているのは事実だ。これは何とかしなくてはならないことに変わりはない」
「それはわかっております」
ゴンガーザはそう答えた。
「既に前面に機雷を配置しておきました」
「早いな」
「これでまずは彼等の動きを止めましょう。そして彼等がそれを避けて回り込んだところを艦隊で叩くのです」
「その際の指揮はジェラール元帥だな」
「はい」
フィリップ＝ド＝ジェラール、フランスの子爵家の出身であり階級は元帥である。このニーベルング要塞群の艦隊司令である。
「彼に任せるか。だが」
ファブリチーニは自分で話をしながらふと考え込んだ。
「彼に直接話を聞きたいな。今から行くぞ」
「どちらにですか」
「彼のところへだ。決まっているだろう」
「わかりました」
こうして二人はジェラールのいる港の艦隊司令部に向かった。彼はそこに待機している筈なのである。事前に確認の電話をとったところいるとのことであった。彼等はそれを受けてこちらに来た。
「司令はいるな」
「はい」
出迎えに来た若い将校がそれに応えた。

「こちらです」
「うむ」
二人は司令室に案内された。そこには黒い髪にやや黄色い瞳の中年の男がいた。綺麗に切り揃えられた口髭が印象的であった。
「ようこそ、我が司令部に」
ジェラールは二人が部屋に来ると敬礼をして出迎えた。
「司令、お待ちしておりましたぞ」
エウロパにおいてはニーベルング要塞群の司令はその駐留艦隊司令よりも地位が高い。同じ元帥の階級であるが席次によりそう決められているのだ。
「うむ」
ファブリチーニはそれを受けて返礼した。後ろにいるゴンガーザは礼はしない。上官が返礼をしたからであった。これは連合でも変わらない敬礼の仕方であった。
「ゴンガーザ少将」
ファブリチーニは彼に顔を向けた。
「はい」
「卿は少し席を外してくれ。いいな」
「わかりました」
彼はそれを受けて敬礼した。そして部屋を後にした。二人の元帥が残った。
「さてと」
ファブリチーニは二人になったところでいささかリラックスした声を出した。
「これで話し易くなったな」
「ああ」
ジェラールもであった。彼等は和んだ顔になってまずは応接のソファーに向かい合って座った。
「コーヒーはいるか」
「そうだな」

ファブリチーニはジェラールに問われて考え込んだ。
「お茶菓子によるな」
「クッキーがあるぞ」
「お、いいな」
彼はそれを聞いて顔を綻ばせた。
「私の好みを覚えておいてくれたか」
「残念だが卿の好みに合わせたのじゃないぞ」
「というと」
「妻の好みだ」
「では私の好みと同じようなものだな」
「全く、兄と妹でそうした好みまで似るとは思わなかったぞ」
「そういうものだ。一緒のものを食べていたからな、子供の頃は」
ファブリチーニは笑いながらそう言った。
「あれの焼いたクッキーは美味いだろう」
「それがこれだ」
ジェラールはそのクッキーを見せながらファブリチーニに対して言う。
「わざわざこっちまで持って来たんだ。まあゆっくり話をしながら食べよう」
「ああ」
実は二人は士官学校において同級生であった。同じ寄宿舎の同じ部屋で暮らしていたこともある。昔馴染みの戦友であったのだ。
それだけではない。ファブリチーニ家とジェラール家は縁戚関係にあった。ジェラールの妻はファブリチーニの妹であるのだ。エウロパ貴族の特徴である婚姻により互いの結び付きを強めるというものであった。だがこれは双方の若き主達が互いに戦友であることも大きく関係していることから普通の貴族の婚姻ではなかったのである。それは二人の会話からも伺い知れることであった。
二人はジェラールが入れたブラックに砂糖とクリームを入れ、それからクッキーを口にした。固い歯触りと甘い味が口の中全体に漂

う。
「どうだ」
「うむ」
ファブリチーニはクッキーを味わいながら答える。

## 第九部第二章　虚の兵士達その二

「また腕を上げているようだな」
「そうだろう」
ジェラールはそれを聞いて微笑んだ。
「他にもケーキやパイなんかも美味くなったぞ」
「それは何よりだ」
ファブリチーニはそれを聞いて顔を綻ばせた。
「あいつは子供の頃からお菓子を作りのが好きだったからな。あの頃から上手かったが」
「最近ではさらに磨きがかかってきているな」
「そう思う」
ファブリチーニはそう言いながらクッキーをまた一つつまんだ。それをまた味わう。
「願うことならまた食べたいな」
「そうだな」
ジェラールもその言葉に同意した。
「奴等が来ている。もう知っていると思うが」
「既にそれはこっちでも聞いている」
「ならば話が早い」
ファブリチーニはそれを聞いてから頷いた。
「艦隊を率いて奴等を退けてくれ」
「ああ」
「何かあったらすぐにこの要塞に入れ。そして援軍が来るまで持ち堪える」
「全てはこれをまた食べる為だな」
「そうなるな」
二人はここでもう一切れクッキーを口に入れた。そして甘みを味わう。

「だがそれが適わない時は」
「あの時に誓ったな」
「うむ」
二人は士官学校を出る時に誓ったことがある。彼等はそれを受けて頷き合った。
「ヴァルハラで会おう」
彼等の信仰する神はオーディンであった。二人共イタリア出身であるがオーディンを信仰していたのであった。これは戦を生業とする武人の家であるからであった。
「では奴等が回廊から出て来たならばすぐに出る」
「頼むぞ」
「任せておけ。そして」
「シャンパンを用意しておこう」
「あとクッキーもな」
「ふふふ」
こうして二人の戦友達は挨拶を交わした後別れた。彼等は連合軍が回廊から出て来るのを今か、今かと待ち構えていたのであった。
これに対して連合軍は落ち着いたものであった。ガンタース要塞群に集結する全軍に出撃命令が出ていたがそれでも彼等の殆どはまだ動いてすらいなかった。多くは艦に乗り込んでいたがそこで準備をしているだけであった。
「先に出撃した部隊は何なんだ」
とある巡洋艦で乗組員達が昼食のスパゲティを食べながら話をしていた。ミートソースである。
「サハラ義勇軍じゃないのか」
同僚がそれに応える。彼もフォークを手にパスタを口に入れていた。
「あれ、まだ出ていないと聞いたぜ」
別の者がそれを聞いて言う。そう言った後で茶を口に入れた。紅茶、それもレモンティーであった。

連合軍においては艦内での飲酒は禁じられている。エウロパ軍が艦内でも好きなだけ飲んでもいいのとは対象的であった。ここにも文化の相違があった。これは昔からの食文化の違いであった。

エウロパではかって済んでいた欧州は水が悪かった。その為酒を水の替わりに飲んでいたのであった。ビールやワイン等がよく飲まれた。朝からビールに入れたパンを食べることもあった。

こうしたことから今でも彼等は普通に水の替わりとしてワインを飲んでいるのである。これに対して連合では水が欧州程悪くはなかった国が多かった為酒を平時に飲む風習はなかった。よって今でも艦内では酒を飲むことはないのである。だがこれは原則的にであって時には内密に飲まれることもある。

「もうすぐ出るとは聞いているがな」

「そうなのか」

三等伍長の階級章をつけた若い男がそれを聞いて頷いた。見ればアジア系の顔に金色の髪をしていた。やはり混血が見られる。

「じゃあ先に出た艦隊は一体何なんだ」

「偵察の艦隊じゃないのか」

「その割に規模が大きかったみたいだぜ」

先程紅茶を飲んでいた男がそれに対して言う。

「そういえばそうね」

女の兵士がそれを聞いて頷いた。連合軍にも女性の兵士はいる。連合軍において女性兵士の割合は大体四割を越えている。こうして前線部隊にも普通の配置されているのだ。

「何か通信室でも偵察みたいな話は出てはいなかったわよ」

「そうなのか」

この女性兵士も三等伍長の階級章を身に着けている。マークは通信であった。

「じゃあ何なんだろうな」

「待った」

ここで彼等の席の後ろから声がした。

「艦内とはいえそうした話をするのはよくないな」
「あ、申し訳ありません」
「うむ」
見ればそこには連合軍の軍服を着た中年の女性がいた。赤い髪の緑の瞳をした浅黒い肌の女であった。階級は中佐のものであった。
「わかってくれればいい」
「はい」
「ところで席は空いているか」
「こちらに」
「そうか」
彼女はそれを受けて示された席に座った。その手にはスパゲティがあった。やはりミートソースであった。
「何処に目や耳があるかわからないからな」
「そうですね」
「マスコミや市民の目や耳がある。そうした話は最低限出撃してから部屋でこっそりとやってもらいたい」
「わかりました」
「ならいい。さて」
彼女はここでスパゲティを口に入れた。
「ふうむ」
「どうですか」
「何というか」
彼女はパスタを口に入れながら答えた。
「味が薄くはないかな」
「えっ、そうですか？」
それを聞いた黒い髪のアジア系の若者が声をあげた。
「丁度いいですよ」
「そうか」
彼女はそれを聞いて納得したような、しないような顔をした。
「私はそうは思わないが」

「艦長は確かツバル出身であられましたよね」
「そうだが」
「あちらでは料理は濃い味付けなのでしょうか」
「別にそうではないが」
「では何故」
「それは御前が日本人だからだろ」
ここで金髪の三等伍長が黒い髪の男に対して言った。
「日本人は薄い味付けを好むからな」
「別にそうは思わないけれど」
「俺から見たらそうなるぜ」
「同感」
女の伍長もそれに同意した。
「和食って全体的に味が薄いのよね」
「そうだよな。何でも素材の味を楽しむってことで。単に調味料をケチっているだけなんじゃねえか、って思うんだけれどな」
「おい、それは暴言だぞ」
黒い髪の男はそれを聞いて口を尖らせた。
「和食のよさがわからないからといってな」
「確かに美味いことは美味いよ。うどんも蕎麦も好きだよ」
「けれど薄味ってのは否めないでしょ」
「確かに」
「このスパゲティに関しては少し辛さが足りないな」
「どうぞ」
「あ、すまない」
艦長はここで差し出されたタバスコを受け取った。そしてそれをかけてから食べる。
「如何ですか」
「これなら問題ないな」
彼女は微笑んでそう答えた。
「どうも辛さが少し足りないと思っていたからな」

「左様ですか」
「といっても私個人の好みを艦全体に押し付けるわけにもいかない」
「はい」
「こうして味は自分で調整すればいいからな」
「艦長」
ここで艦内放送が入った。
「艦橋にお戻り下さい」
「何だ」
彼女はそれを受けてスパゲティを素早く腹の中に収めた。そして席を立ち皿を洗台に入れた。自動で洗われるのである。
そして艦橋に向かった。階段と廊下を進み艦橋に着いた。そこでは士官達が既に何人か集まっていた。
「出撃か」
彼女は艦橋に着くとまずこう問うた。しかしその答えは違っていた。
「いえ、違います」
「そうか。では何があった」
「艦隊司令からの達がありました」
「司令から」
「はい。出撃に関することで。一週間以内に出撃するとのことです」
「そうか、一週間か」
彼女はそれを聞いて考える顔をした。
「思ったより長いな」
「その間に出撃すると思いますが」
「うむ。しかしだ」
彼女は言葉を続けた。
「それでも遅いとは思わないか。サハラ義勇軍はどうしている」
「明日にも出撃するようです」
「そうか」
「しかしそれよりも前に百個艦隊規模で出撃しておりますね」

「うむ」
「あれは一体何なのでしょうか」
「あれか」
それを聞いて顔を向けた。
「私にもわからない。どうやらかなり上の方で極秘にやっているらしいが」
「そうなのですか」
連合軍のように巨大な組織ともなると艦長では末端に過ぎない。将官ですら軍のことを全て把握できているわけではないのだ。それだけ巨大な組織であった。
「しかし近いうちにわからことだ」
「はい」
「何が行なわれているのかはな。そして我々がやっておくことは」
「わかっております」
士官達はそれに応えた。
「既に全て整っております」
「よし」
彼女はそれを聞いて満足そうに頷いた。
「ならばいい。それでは艦長命令だ」
「はい」
「総員艦内にて出撃命令があるまで待機。各自英気を養っておくようにな」
「ハッ」
彼等はそれを受けて敬礼した。そしてその命令に従い総員英気を養うのであった。

## 第九部第二章　虚の兵士達その三

敵軍が迫っているのはエウロパも既に感知していることであった。駐留艦隊は出撃し敵に向かって移動していた。機雷が置かれている部分を左に迂回し敵の側面を叩く予定であった。

「連合軍は今何処にいる」

旗艦ガリバルディの艦橋に彼はいた。ジェラールはそこに立ちスタッフである参謀達に問うていた。

「まだ回廊の出口付近だと思われます」

参謀の一人がそう答える。見れば中将の軍服を身に着けている。金髪碧眼で端整な顔立ちの美青年であった。

「そうか」

ジェラールはそれを聞いて頷いた。

「ならば少し足を緩めるぞ」

「はい」

それに従い艦隊は速度を抑えた。そして回廊の出入り口に向かうのであった。

「この機雷源が我等の命綱だな」

ジェラールは右手に拡がる機雷源を見ながらふとそう呟いた。

「これで防がなくてはならない」

「はい」

参謀達はその言葉に頷いた。

「これは連合軍も突破出来ないでしょう」

「そうだな。しかし百億の機雷を撒くのには苦労したな」

「全くです」

彼等はそれに同意した。

「しかしそれだけに壮観ではあります。そして今も捲かれています」

「うむ」

「これを抜くことはおそらく誰にもできないでしょうね」

「そうだな。だが油断はできないぞ」
「はい」
「彼等の最大の武器はその物量だ。それで一気に押し切るやも知れぬ」
「数でですか」
「そうだ。我等は総動員令をかけたとはいえその数は彼等には遠く及ばない」
「はい」
「それは認めなくてはならない。そのうえで作戦を立てているのだからな」
「わかっております」
「ブライベルグ回廊が広いといっても一度に通過できる艦隊の数は決まっている」
「はい」
「それが我等の付け入る隙だ。ならば」
彼はさらに言う。
「それで入口を塞いでおけばよい。この要塞の本来の機能だ」
「本来の機能ですか」
「そういうことだ。ここから一歩も引いてはならないぞ。よいな」
「はい」
「それにはまず」
彼はここで前を見据えた。
「今来ている敵を倒す。よいな」
「ハッ」
皆それに頷いた。ジェラールは経験豊富な将として知られている。かってはサハラにおいて活躍し、数々の武勲をたてているのだ。だからこそ部下からの信頼を篤いのだ。
機雷源と回廊の出口の間に隠れるようにして艦隊を置いた。そして敵を待った。暫くして敵艦隊が回廊から出て来たのを確認した。
「来たか」

「はい」
部下達もそれに頷いた。すぐに動こうと提案する者がいた。しかしジェラールはそれを手で制した。
「まだだ」
「何故ですか」
「まだ早い」
彼はそう答えた。
「敵が完全に回廊から出てからだ。よいな」
「はい」
皆その言葉に従った。エウロパ軍はそれを受けて息を殺して連合軍が全て回廊を通り抜けるのを待った。やがて全ての艦隊が回廊を通り抜けた。それを見てジェラールはまた言った。
「機は熟した」
「わかりました」
それを受けてエウロパ軍は動いた。そして連合軍の後方に回る。それまで連合軍の反応は一切なかった。
「？」
ジェラールはそれを見て違和感を覚えた。
「司令、どうなされました？」
「おかしいとは思わないか」
彼はそう参謀達に言った。
「おかしいですか」
「ああ。今まで何の反応もない。どういうことだ」
「そういえば」
彼等もそれを受けて頷いた。
「幾ら我等が通信を切って隠密行動に徹しているとはいえ」
「確か連合軍の索敵能力はかなりのものだったな」
「はい、そう聞いております」
「それを考えるとな。おかしい」
「ううむ」

「そういえば彼等の艦艇も」
「そうだな」
ジェラールはモニターに映し出される連合軍の艦艇を見てそれに応えた。
「やけに古いものだな。そうは思わんか」
「はい」
「それにティアマト級戦艦もない。どういうことだ」
「確か各艦隊の旗艦でしたね」
「そうだった筈だ。しかも全艦隊にある筈だ」
「はい」
「それを思うとな。おかしことだらけだ」
「まさか」
その時彼等は回廊の出入り口の前を通過していた。ジェラールはそれを確認した後で艦隊を動かした。
「敵が後ろから来る怖れがあるな」
「はい」
それは皆よくわかっていることであった。それを踏まえて彼等はさらに前に出た。そして敵艦隊の左斜め後ろに出た。それから攻撃を仕掛けるつもりであった。
「全艦砲門開け」
「了解」
それを受けて砲門を開く。
「砲撃用意」
「砲撃用意」
命令が繰り返される。そして距離がさらに詰められる。ジェラールはゆっくりと手をあげた。
「撃て！」
そしてその手が振り下ろされる。一斉に砲撃が放たれる。
砲撃を受けた連合軍が炎に包まれる。しかしそれでも反転等をして攻撃を仕掛けてはこなかった。それを見てジェラールはさらに不

思議に思った。
「どういうことだ」
そこで回廊の出口から敵が来た。それを見て彼はすぐに動いた。
「回廊付近にも兵を回せ！」
「はい！」
それを受けて艦隊が派遣される。見れば回廊から出て来たのも古い艦であった。かって各国がそれぞれ軍を持っていた頃の古い艦であった。
「どういうことだ」
ジェラールはそれを見てさらに首を傾げた。
「司令、前方の敵艦隊ですが」
ここで先程の青年の参謀が彼に対し声をかけてきた。
「どうした」
「我が軍の攻撃を受けながらもそのまま要塞に向かっているのですが」
「何！？」
見ればその通りであった。艦隊はそのまま前に進んでいる。どう見ても妙であった。
「奴等、どういうつもりだ」
「司令」
ここでまた情報が入ってきた。
「先程回廊に出た艦隊ですが」
「どうしたのだ」
「我等の攻撃を無視してそのまま右手に迂回し要塞群に向かっております」
「何！？」
「後続艦隊もです。どうしますか」
「ううむ」
この時彼の頭の中で一帯の地図が浮かんだ。今の自分達がいる位置と敵がいる位置が。それを見て彼は決断を下さざるを得なかった。

「止むを得んな」
彼は言った。
「回廊の出口に向かっている艦隊を呼び戻せ。兵を一つにする」
「はい」
それを受けて艦隊が呼び戻された。そして今要塞群の左手にいる連合軍に攻撃が集中された。
「ニーベルング要塞群に伝えよ」
「はい」
またもやジェラールの指示が下った。
「右手は頼むとな」
「わかりました」
こうして指示がまた下る。それを受けたファブリチーニは要塞群の砲やミサイルを回廊から見て右手、要塞群から見て左手に集中的に向けた。そして指示を下した。
「敵艦隊に攻撃を集中させよ！」
「ハッ！」
それを受けて無数のビームやミサイルが放たれる。そしてそれが連合軍を撃つ。その間にファブリチーニは管制室に電話を入れた。
「あれの用意は出来ているか」
「はい」
電話に出た管制室長がそれに答える。
「何時でも可能です」
「よし」
ファブリチーニはそれを受けて頷いた。
「ならばすぐに撃つぞ。いいな」
「わかりました」
室長はそれを了承した。そして彼に対して言った。
「発射は司令御自身の手で宜しいですね」
「うむ」
それに頷く。

「是非ともな。それでいこう」
「はい」
ファブリチーニは前に出た。そして司令の席に来た。そこにある一つのボタンに目をやる。
「これを実際に戦闘で押すのははじめてだな」
「はい」
隣にいるゴンガーザがそれに応える。
「今まで演習やテストで撃ったことはありますが」
「戦闘でははじめてだったな。だがこれは運命のようなものだな」
「はい」
「連合を倒す為にはな。その為だけの為に今まで温存されていた」
彼は言葉を続ける。
「それを今放つ。そして連合軍を退けるぞ！」
「ハッ！」
「発射！」
ボタンが押された。そしてニーベルング要塞群の中央の惑星から巨大な光が放たれた。それは一直線に連合軍に向かっていく。
光が連合軍を貫いた。そして光の周りを無数の炎が覆う。それはまるで神の裁きの炎であった。
「やったか！」
管制室の士官がそれを見て叫ぶ。ファブリチーニも会心の笑みを浮かべていた。

## 第九部第二章　虚の兵士達その四

「これで左翼は安全だな。敵の動きも止まる」
「はい」
主砲の威力を見せたうえでそう言った。これで動きを止める狙いもあったのだ。
しかしそれでも動きは止まらなかった。連合軍はまだ進撃を続けていた。
「なっ」
「どういうことだ！」
ファブリチーニもゴンガーザもそれを見て思わず叫んだ。まさかまだ進んでくるとは夢にも思わなかったのだ。
「司令、如何なさいますか！？」
「決まっている」
だがそれでもファブリチーニはまだ冷静さを失ってはいなかった。指示をさらに下す。
「攻撃を続けよ！」
「ハッ！」
それに従い攻撃が続けられる。そして無数のビームやミサイルが連合軍を撃つ。そして次々と薙ぎ倒していく。だがそれでも連合軍は止まらなかった。
「どういうことだ」
「連合軍は兵士の命を粗末にできない筈ではなかったのか」
連合軍が志願制であり志願者の確保の為に苦心していることは彼等も知っていた。だからこそ今の彼等の進軍が異様に見えたのだ。そしてそこにまた報告が入った。
「回廊にまた敵軍が現われました！」
「またか！」
モニターを見ればまた敵が現われていた。それはそのまま機雷源

に向かっていく。
「今度はどういうつもりだ」
「まさかそのまま機雷源に突っ込むつもりでは」
「それは有り得ない」
ファブリチーニは幕僚の言葉を即座に否定した。
「我が軍ですら出来ないことだ」
「常識で考えるとそうですが」
「常識外の行動をとるとどうなるか、だな」
「はい」
「まさかとは思いますが」
「ううむ」
連合軍のその艦隊はそのまま機雷源に突っ込んでいった。そして砲撃を開始した。
「機雷源に砲撃！？」
「奴等、何を考えているのだ」
だがそれにより機雷源は次々に破壊されていった。そしてそれにより大きな穴が開いた。その後ろにまた連合軍が姿を現わした。そして彼等も機雷源を攻撃する。
「何故機雷が砲撃で破壊されるのだ！？」
「まさかとは思いますが」
ゴンガーザがそれを見ながらファブリチーニに答える。
「あれは普通のビーム砲ではないのでは」
「どういうことだ」
「機雷のスイッチを触発するものだと思われます」
「機雷の」
「はい。機雷処理に使われる粒子砲だと思われます」
「あれか」
「どうやら」
ファブリチーニも掃海艇のこともよく知っていた。かっては掃海艦隊の司令も務めていたことがある。だからこそゴンガーザの話は

よく理解できた。
「まさかそれを主力艦の主砲に置くとは思いませんでしたが」
「この時の為に改造したのかもな」
「そのようです」
彼はそう答えた。
「そしてそれだけではないようです」
彼は戦局を見ながらそう答えた。
「というと」
「あれを御覧下さい」
見れば回廊付近にまた艦隊が現われていた。しかしそれは戦艦や空母ではなかった。掃海艇であった。
それはすぐに機雷源に来た。そして機雷を次々と処理していく。先程機雷源に攻撃をしていた艦隊も同じく機雷を破壊していた。こうして機雷源は次々と破壊されていた。
「まずいな」
ファブリチーニはそれを見てそう呟いた。
「すぐに艦隊を向けよ！」
「ハッ！」
それを受けて要塞群に残されていた艦隊が機雷源に向けられた。そして機雷源を破壊している連合軍に攻撃を仕掛ける。だがそれでも連合軍は攻撃を止めなかった。
それは要塞群の右翼でも同じであった。ジェラールの艦隊に攻撃を受けながらも彼等は要塞群の右翼に展開していた。そして攻撃を仕掛けてきている。
左翼も同じであった。要塞群からの攻撃を受けながらも向かって来る。そして徐々に距離を詰めてきていた。
「何故だ」
それを見てファブリチーニは呻いた。
「何故彼等は死を恐れないのだ。これはどういうことだ」
「もう一つ不思議なことがあるのですが」

「何だ」
ゴンガーザの声を受けて顔を向けた。
「動きが妙ではないですか」
彼は迫り来る連合軍の動きを見ながらそう語った。
「動きが」
「そうです。人の動きではないようなのですが」
「むっ」
ファブリチーニはそれを受けて連合軍の動きを注視した。見れば確かにそうも見える。
「機械のようだな」
「司令もそう思われますか」
「うむ。まるでロボットの様だ。しかも出ているのは全てかっての旧式艦ばかりだ」
「はい」
「確か連合軍は新型艦に全て換えているのだったな」
「そうです。そしてそのうえであの巨大戦艦を配備しているのですが」
「その巨大戦艦も一隻もいない」
「それどころか指揮艦すらいないようですが」
「おかしなことばかりだな。やはり何かあるか」
「そう考えるのが妥当かと」
彼等の間に疑念が漂いはじめていた。その日はそのまま戦争に明け暮れた。そしてそれは翌日も続いていた。連合軍は疲れを知らないかのように攻撃を続けていた。
「まだ攻撃を続けているというのか」
それを見てファブリチーニは苦い顔をした。
「連中は疲れを知らないのか」
「やはりおかしいですな」
それを見てゴンガーザはまた言った。そしてそこで艦隊から通信が入った。

「どうした」
「うむ」
モニターにジェラールが出る。彼はいささか憔悴した顔であった。
「何かおかしいとは思わないか」
「卿もそう思うか」
「連合軍の動きが機械的だ。しかもそれだけではない」
「うむ」
「疲れを知らない。本当に人間が乗っているのか」
「それだな」
ファブリチーニはその言葉に対して頷いた。
「一度調べてみる必要があるな」
彼はここで機雷源に向かっている艦隊に通信を入れさせた。すぐに指揮官であるグリルパルツァーが出て来た。見れば機雷源は既にかなり破壊されていた。連合軍もかなりの損害を受けていたが機雷源はそれ以上であった。ここでまた敵が現われた。
「またか！」
今度はジェラールの艦隊に向かって来た。そして攻撃を開始しようとした。
「司令！」
「わかっている！」
ジェラールはここで思い切った戦術に出た。つい先程まで攻撃を仕掛けていた連合軍への攻撃を止め新手に兵を向けた。そして彼等を押しはじめた。ジェラールの艦隊は六十個艦隊、それに対して敵はその半分程であった。数では有利にあった。それだけではなかった。やはり連合軍の動きは機械的であった。それを見たジェラールは動きを読みさらに攻撃を仕掛けた。そして彼等を回廊の出口まで押していった。
「他愛ないな」
ジェラールは笑っていた。だがそれはあくまで表面的なものであった。将兵の士気を鼓舞する為にあえて笑っていたのであった。

（おかしいな）
内心ではそう考えていた。
（やはり動きが単調だ。何かあるな）
彼はここで破壊された連合軍の艦艇を一隻拿捕させた。そしてその中を調べさせた。暫くして部下から報告が入った。
「どうだった」
「中に人は全くおりませんでした」
部下はそう報告した。

## 第九部第二章　虚の兵士達その五

「代わりにＡＩによる自動操縦が為されていました」
「そうか、やはりな」
彼はそれを受けてそう呟いた。
「中に将兵は乗り込んでいなかったか。道理で動きが単調な筈だ」
「はい。他の連合軍の艦艇もそうでしょうか」
「おそらくな。試しに数隻調べてみる必要がある」
「わかりました」
それを受けて連合軍の艦艇の調査がはじまった。そしてやはり結果は同じであった。連合軍の艦艇には人は全く乗っておらず、ＡＩで操縦が為されていた。
「無人の旧式艦か」
「囮と考えて問題はありませんね」
「そうだな。だがそれは一体何の為にだ」
「おそらくは」
ここであの青年将校が口を開いた。
「我等の消耗を狙っているのではないでしょうか」
「消耗をか」
「はい」
彼はそれに頷いた。
「それから本軍が来るのではないでしょうか」
「ううむ」
ジェラールはその言葉を受けて考え込んだ。
「ならば危険だな」
「はい」
「わかった、すぐに退くぞ。囮ならば相手をしてはならない」
「はい」
「全軍後退」

ジェラールはすぐに全軍に指示を下した。
「以後我等は要塞群の防衛に徹する」
「了解！」
それを受けてジェラールの軍は退きはじめた。そして要塞群右翼に展開する連合軍を叩くとそのまま要塞群に入った。その連合軍は後方からジェラールの軍が迫ると呆気なく道を開けた。
「やはりな」
「はい」
ジェラールと青年将校はそれを横目で見ながら頷き合った。
「連中は我々と戦うようにはインプットされていない。あくまで要塞群への攻撃が目的だ」
「ですね」
「ところでだ」
「はい」
ジェラールはここで問いを変えた。
「卿の官職氏名を聞きたいのだが。確か新着だったな、この前に」
「はい」
「一体何というのかな」
「マリオ＝ディ＝シリアーニです。階級は中将であります」
彼は敬礼をしてそう答えた。
「シリアーニ」
「はい」
「まさかとは思うが卿は」
「はい。先の情報部長フィレンツォ＝ディ＝シリアーニは私の父です」
「そうだったのか、やはりな」
ジェラールはそれを聞いて暗い顔になった。
「御父上は」
「わかっておりますよ」
彼はそれだけ言っただけであった。

「父のことは残念でした」
「うむ」
「ですがそれでも父を尊敬しております。父は立派な武人でした」
「そうだな。私もかって卿の御父上と共に戦場にいた」
「そうだったのですか」
「素晴らしい軍人だった。卿もそれに負けない軍人となってくれ」
「はい」
彼等はそう話をしながら要塞群に入った。そしてファブリチーニに連合軍のことについて話をした。ファブリチーニはフランドに防衛の指揮を任せジェラールとの話し合いに入った。
「それは本当か」
「ああ、これを見てくれ」
そして部下に命じて作らせた資料を彼に手渡した。
「部下が作ったものだが」
「うむ」
「連合軍の艦艇には誰も乗ってはいない。動きもあらかじめインプットされている」
「そうだったのか、やはりな」
「思うところがあったようだな、卿も」
「うむ。道理で動きが単調な筈だ。しかも死を恐れないからな」
「それだな」
ジェラールはその言葉を指摘した。
「それがまずおかしいと思った」
「そうか」
「連合軍は将兵の命を最優先させなければならない筈だ。だが彼等の用兵はそれを全く無視していた」
「ああ」
「それだけで変だと思っていた。こういう理由があったか」
「どうする、奴等は囮だ」
「それはわかっている」

「今は適当にあしらっていればいい。消耗は避けるべきだと思うが」
「そうだな」
ファブリチーニはそれを受けて答えた。
「それでは卿の艦隊は要塞防衛に徹してくれ」
「うむ」
「要塞群はこれより専守に徹する。そして無駄な消耗は避けよう」
「そうだな。それがいい」
こうして彼等は要塞群に入り込み専守に徹することにした。そして連合軍の単調な攻撃をしのいでいた。やはり連合軍の艦艇はどれも無人であり、動きもありきたりなものであった。エウロパ軍にとっては他愛もないものであった。
「楽な戦争ですね」
「今のところはな」
ジェラールは部下にそう応えた。
「しかしこれからはわからん」
「と言いますと」
「見ろ」
彼はここでモニターに映る要塞群の出入り口を指差した。そこには新たな敵が姿を現わした。
「また来たのですか」
「そうだ」
ウンザリとした顔の部下に対して言う。
「おそらくまた無人艦隊だろうがな」
「そうでしょうね」
「機雷源はもう殆ど破壊されてしまっている。そして戦線は要塞群に縮小されている」
「はい」
「おそらく彼等は数でこの要塞群を消耗させるつもりだ。数でな」
「しかしそれは予想通りなのでは」
「中に人間がいた場合ではな」

「人間が」
「そうだ。今彼等は傷ついてはいない。だが我々はどうだ」
「・・・・・・司令と同じ考えです」
彼はその言葉に対してそう答えた。
「今の損害は艦隊にして十パーセントに達しようとしている。要塞群のダメージも無視できなくなってきた」
「はい」
「それに対して敵は一兵も損なってはいない。この差は大きいぞ」
「ですね」
「だがそれに対して我々はあくまで受け身だ。敵であるのに変わりはないからな」
「それにこれは連合軍にとってもう一つの理由があると思います」
シリアーニがここで言った。
「それは何だ」
「不要となった艦艇の処理です。おそらく連合軍には相当数の不要な艦艇があったのでしょう」
「だろうな」
今要塞群に来ているのは全てかって各国の軍に分かれていた頃の艦艇であった。その為艦種はまちまちであった。奇妙といえば奇妙な艦隊であった。
「スクラップにされたものもあったでしょう。ですが何らかの事情でそれが不可能な艦艇も多々あったと思います」
「うむ」
「それの廃棄の意味もあるのでしょう、これは」
「だとしたら考えたものだな、本当に」
「はい」
「我々は廃棄の手伝いまでさせられているのだからな」
「そういうことになりますな」
「連合軍も案外策士がいるようだな」
「そうですね」

「その策に嵌ってしまったな。どうするべきか」
「今となっては戦うしかないですね、このまま」
「消耗を防ぐしかないか」
「そのようです」
「わかった。ならば我々はより防御に徹しよう」
「それしかないでしょうな」
「そして耐えるのだ。機が来るのを待とう」
「はい」
結局彼等は守りを固めるだけであった。そして戦いを続けていた。やはり戦局はそのままであった。連合軍の無人艦隊はさらに数を増やしニーベルング要塞群に攻撃を仕掛ける。そして彼等を包囲していた。そして戦闘開始後二日が過ぎた。
連合軍は艦艇をまた送って来た。その数は二百個艦隊に達していた。
「主砲、発射！」
「ハッ！」
ファブリチーニの指示が下る。そして連合軍の艦艇を炎の変える。だがそれでも連合軍は要塞群に肉薄してきた。
「撃て！」
「了解！」
それをジェラールの艦隊が防ぐ。一斉射撃でその敵艦隊を退ける。そしてさらに接近しエインヘリャルを出す連合軍も旧式の艦載機を出してきた。
「そんな旧式機で！」
「しかも人が乗っていないで来るか！」
旧式なうえ動きも単調であった。エウロパのパイロット達の敵ではなかった。連合軍の艦載機は為す術もなく倒され、そして艦艇も攻撃を受けた。
一隻、また一隻を沈められていく。そして連合軍の艦隊はその数を大きく減らしている。だがそれでも彼等は前に進んできた。だが

それを見てももうエウロパ軍は驚いてはいなかった。冷静に対処していた。
「所詮は機械か」
「そうですな」
そう言葉を交わすだけであった。そして攻撃を続ける。こうして三日目の戦いも進んでいた。連合軍の損害は参加戦力の七割に達していた。だがエウロパ軍の損害もかなりのものであった。一割を遂に越え、そして将兵にも疲れが見えだしていたのだ。

## 第九部第二章　虚の兵士達その六

「何時まで続くんだ、一体」
「わからん」
流石に士気にも影響が出はじめていた。それはファブリチーニやジェラールの耳にも入っていた。彼等はそれを深刻に受け止めていた。
「まずいことになってきたな」
「ああ」
二人は要塞群防衛司令官の司令室で互いにそう話をしていた。座らずに立ったままであった。その余裕も最早なかったのであった。
顔には焦燥が漂っている。この三日ろくに寝てはいないのだ。休めてすらいない。髭が顔を覆おうとしていた。エウロパの者は純粋なコーカロイドなのでそれはかなり濃い者が多いのである。
「燃料や武器、弾薬はまだ大丈夫だろうな」
「今のところはな」
ファブリチーニはジェラールの問いにそう答えた。
「あと一月は満足に戦えるぞ」
「ならそちらは問題はないか」
「しかし将兵はそうはいかない」
「その通りだ」
ジェラールが言いたいのではそれであった。彼は大きく頷いた。
「援軍は来るのだろうな」
「一週間先だ」
「そうか」
ジェラールはそれを聞いて少し暗い顔になった。
「長い一週間になりそうだな」
「このままではその一週間すら危ういぞ」
「そうだな」

それを認めるしかなかった。
「また敵が来たらしいしな」
「こちらの戦力は限られている。だが敵は無尽蔵か。ハンデはかなりのものだな」
「それは最初からわかっていたと思うが」
「フン、確かにな」
戦友のその言葉に苦笑した。それからまた言った。
「だがゴーレムを相手にするとは思わなかった」
「ゴーレムか、連中は」
「そうだ。ゴーレムだ、奴等は」
ジェラールはいささかシニカルな言葉尻でそう言った。ゴーレムとはユダヤ教徒達に伝わる土の巨人である。彼等を守る為に戦う古代のロボットであった。迫害を受け続けたユダヤ人達の心の支えの一つであったのだ。だが本当にあったかどうかは不明である。かってプラハに出たという話はあった。二十世紀にイスラエルが建国され、そして連合に参加してからはそうした話はなくなった。だがイスラエルの市民達もゴーレムの存在は忘れず、兵器の名に冠したりしていたのであった。
「ただし、守る程弱い相手ではないがな」
「それは言えるな」
「それに無人艦隊だけでこの要塞群を陥落させられると彼等が思っているとは思えない」
「うむ」
「必ず出て来る筈だ、敵の主力が」
「それを退けなければならないな」
「ああ」
彼等が最もよくわかっていることであった。このまま無人の戦力だけで連合軍が戦う筈がないということは。
「また敵の援軍だ」
「旧式の無人艦隊だな」

「そうだ。これで今までで三百個艦隊を送り込んできている」
「ふむ」
ジェラールはそれを聞いて顎に手を当てて考え込んだ。
「そろそろ・・・・・・かな」
「だろうな」
「主砲はまだ使えるな」
「何発でもいけるぞ」
「要塞群のビーム砲やミサイルは」
「かなり損傷を受けてはいるがまだいける」
「そちらの損害はどれ位だ」
「二割といったところか」
「そうか。まだ大丈夫か」
「おそらくな」
「それではこの一週間を耐え切るとしよう。事態はそれで好転する筈だ」
「うむ」
苦境に耐えてこその勝利だと彼等は考えていた。それが為にここは踏み止まることを選択したのだ。彼等にもエウロパの軍人としての矜持があった。
連合軍の援軍はそのまま要塞群に向かって来た。それを受けて他の連合軍の艦艇も動きをはじめた。要塞群に向けて突っ込んで来たのだ。
「！？何をするつもりだ」
それを見たファブリチーニもジェラールも首を傾げた。連合軍の艦艇はエウロパ軍の攻撃にもかかわらずそのまま突撃してきたのだ。
「火力を集中させよ！」
ファブリチーニもジェラールもすぐに指示を出した。そして連合軍の艦艇を次々に沈める。しかしそれでも連合軍の突撃は止まらなかった。
艦艇はそのまま要塞群の惑星に肉迫するとそのまま体当たりを敢

行した。そして艦をそのまま爆弾にして要塞群を破壊しにかかってきた。
「クッ、今度はそうきたか！」
「司令、如何なさいますか」
ファブリチーニにゴンガーザが問うてきた。彼はそれにすぐに答えた。
「決まっている。攻撃を続けよ」
それしかなかった。そして逡巡している暇もなかった。
「衛星の被害は」
「第一衛星が表面装甲及び砲座に損傷、ですが人員にはそれ程の損害はありません」
「そうか」
「第二衛星は表面装甲のみです。人員には損害はありません」
「今のところは大したことはないな」
「はい」
「ではこのまま攻撃を強めよ。よいな」
「わかりました」
ゴンガーザはその指示に頷いた。
「それではこのまま攻撃を続行致します」
「うむ」
「あと敵の動きですが」
「まだ何かあるのか」
「はい。何かブラウブルグ回廊でエネルギー反応がありました」
「エネルギー反応がか」
「敵が動いているものと思われますが」
「本隊か」
「そこまではわかりませんが。如何為されますか」
「今の我が軍に彼等にまで兵を向ける余裕はない」
ファブリチーニは苦い顔をしながらもそう答えるしかなかった。
「とりあえずは今攻撃を仕掛けている敵を退ける。よいな」

「わかりました」
ゴンガーザはその言葉に頷いた。
「それではまずは敵の無人艦隊を何とか致しましょう」
「それしかないな」
「はい」
この判断は正しかった。エウロパ軍は今目の前にいる敵に対処することで精一杯であった。彼等は兵力分散を避ける意味でも回廊にいる連合軍をさしあたって放置した。彼等がどれ程危険な存在であるのかを薄々ながら知りながらもであった。結果としてそれが命取りとなるのであるが。

## 第九部第二章　虚の兵士達その七

連合軍の無人艦艇は体当たりを続けていた。十二の衛星全てがダメージを受け惑星にもダメージが及んでいた。だがそれでもエウロパ軍は戦闘を続けていた。

「グッ！」

司令部がある惑星に連合軍の艦艇が百隻単位で体当たりを敢行してきた。司令部の側であった。それを受けて司令部が揺れた。

「うろたえるな！」

ファブリチーニはその中踏み止まって周りにいる将兵達を叱咤していた。彼もバランスを崩そうとしていたがそれでも踏み止まったのだ。そして指示を出した。

「主砲の射撃を止めよ！」

「ハッ！」

「そして攻撃要員はビーム砲座及びミサイルに集中せよ。迫り来る敵艦隊を防げ！」

「了解！」

接近してくる敵艦艇を撃破する戦術に切り替えた。そして次々に敵を沈めていく。それでも体当たりを敢行する艦艇はあったが大幅に減っていた。何とか凌げるかと思われた。だがそれはほんの僅かな間そう思われただけであった。

「第一衛星が戦闘不能に陥りました！」

「何っ！」

見れば第一衛星が沈黙していた。とりわけ攻撃が激しく完全に戦闘能力を失ってしまっていたのであった。

第二衛星も危険な状態であった。他の衛星も少なからずダメージを受けている。惑星への攻撃は衛星への攻撃への目を逸らす為のカモフラージュでもあったのだ。

「第一衛星のエリアには艦隊を向けよ」

しかしそれでもファブリチーニは冷静に指示を出した。そして第一衛星の分の防衛を艦隊で埋めることにしたのであった。
「了解しました」
それを受けてジェラール率いる艦隊が第一衛星のエリアに向かう。何とかそのエリアの防衛を維持した。しかしその分遊撃戦力がなくなってしまった。結果としてそれが全体の防衛の弱体化に直結してしまった。
連合軍の攻撃はさらに激しくなってきていた。残る十一の衛星への体当たりもさらに多くなってきた。遂に第二衛星も沈黙してしまった。
「第二衛星を放棄」
ファブリチーニはそう指示を出した。
「人員は第三衛星に入れ」
「ハッ」
戦線がまた縮小された。残る十の衛星のダメージもさらに激しくなってきていた。機雷源は既に破壊され突破されている。要塞群は内部に深く入られようとしていた。
そこに回廊から大軍が姿を現わした。連合軍の援軍であった。
「遂に来たか！」
その先頭にはあの巨大戦艦が何隻もあった。見れば艦を漆黒に塗っていた。黒い艦隊であった。
「黒騎士か！？」
「どうやらそのつもりのようですな」
シリアーニがジェラールにそう答えた。
「しかし連合軍にあのような独特のカラーリングの艦隊が存在していたか」
「正規軍ではありません」
「成程、正規軍ではか」
「はい」
ジェラールにはその言葉の意味がよくわかっていた。

「やはり彼等が出て来たな」
「ですね」
今姿を現わした漆黒の艦隊、それはサハラ義勇軍であったのだ。彼等は要塞群に向かって進んできた。その後ろからも黒い艦隊が続いていた。
「ふむ」
その黒い艦隊の先頭にいるティアマト級巨大戦艦の艦橋に一人の老人がいた。連合軍の戦闘服を着ている。連合軍は戦闘中や作業中は戦闘服で活動する。将校は紫、下士官及び兵士は青い戦闘服となっている。階級は元帥のものであった。
黒い肌に白い髭を顔中に生やしている。顔立ちからサハラ出身の者であるということがわかる。
「思ったより効果があるようだな」
「はい」
隣にいる口髭の男が頷く。彼も同じく連合軍の戦闘服を着ていた。階級は中将である。
「あの要塞は難攻不落と呼ばれている」
白い髭の男は言葉を続ける。
「だが今その名が終わる時が来ているのだ。我々の手によってな」
「我がサハラ義勇軍の手によってであります」
口髭の男はそれに頷いた。
「そうだ。それでは我々がとるべき作戦はわかっているな」
「はい」
「全軍突撃、そして一気に陥落させる。それだけだ」
「ハッ」
中将はその言葉に敬礼した。
「それでは閣下、お下がり下さい」
「下がるだと」
「はい。軍の先頭にいては指揮も執りづらいでしょうから」
「わしはそうは思わん」

しかし彼はそれを断った。
「サハラにおいてもわしは常にこうして戦っておったぞ」
「はあ」
「ジャービル＝ワフラ中将」
そして今度は彼の官職氏名を呼んだ。
「はい」
「貴官はどの国にいたのか」
「マラケシですが」
「そうか」
彼はそれを聞いてまずは頷いた。それから言った。
「貴官の国の軍人達は皆勇敢だったと聞いているが」
「はい、その通りです」
それにすぐに答えた。
「我等にとって臆病、弱気とは最大の侮辱でありました」
「それはわしの国でもそうだった」
白い髭の男は静かにそう言葉を返した。
「アッバース共和国でもな」
「それはよく存じているつもりです」
アッバースもマラケシもかってはサハラ北方にあった国である。
だがエウロパにより滅ぼされてしまったのだ。彼等もまた難民出身であったのだ。

## 第九部第二章　虚の兵士達その八

「アッバース共和国軍の奮戦は最早伝説になっております」
「マラケシのものもな」
「有り難うございます」
「エウロパの大軍を相手に一歩も引かず戦い抜いたと聞いている」
「その通りです」
　ワフラは誇らしげにそう答えた。
「あの時エウロパ軍は我が軍の十倍の数でもって攻めて来ました」
「うむ」
「しかし我々は祖国を背に一歩も退かず果敢に戦いました。それこそが誇りです」
「それはアッバースもだ。我等にもサハラの誇りがあった」
「サハラの誇りですか」
「アッラーの使徒としての誇りがな。侵略者、いや十字軍に敗れるわけにはいかなかったのだ」
「十字軍」
「違うか」
「いえ」
　ワフラは彼の言葉に首を横に振った。
「言われてみればその通りです」
「そうだろう」
　それを聞いて満足そうに首を縦に動かした。
　十字軍とはエルサレム奪還を名目に欧州各国が中東に侵攻したものである。ことの発端はビザンツ帝国がイスラム勢力との戦いに西欧各国に傭兵を依頼したことであった。それにローマ＝カトリック教会が乗ったのだ。
　この時のローマ教皇がウルバヌス二世であった。優れた政治家であった彼はすぐにこれを大規模なものに発展されクレルモンの公会

議で十字軍を送ることを決定した。こうして西欧各国から大軍が送られた。だが中東に向かったのは兵士達だけではなかった。

移民や商人達もいた。これこそが十字軍の本質であった。領主達も中東に居座るとそこに国を築いていった。エルサレム奪還は名目に過ぎず、移民や利権、領地の獲得こそが本来の目的であったのだ。

彼等は正義を旗印にしていた。それも名目に過ぎなかった。彼等が中東で行ったことは正義とは全くの正反対であったのだ。

ムスリム達を虐殺し、その肉を食らった。カニバリズムであった。人肉食はよく中国の歴史書に出て来る。飢饉の際や戦乱において行われるのだ。城を包囲すると死人や自分の妻子を食べていくのだ。また猟奇的な嗜好により人を食らう場合や薬として食らう場合もある。処刑された者の血を饅頭に浸して食べたり切り刻まれた肉を食べるといったことがあったがこれは結核や吹き出物の薬になると言われたからであった。実はフランスの貴族達にも全く同じ話があった。彼等は人の血は強精の薬になると信じていた。その為夜遊びの後には処刑場で殺されたばかりの死刑囚の血を飲んでいたのであった。このことからも欧州でもカニバリズムがあったことがわかる。

中国では歴史書にそれが載っている。だが欧州においては童話にそれが隠されている。中国よりもさらに貧しい地域であった欧州では飢饉が頻発した。その為人が人を食らうこともあったのである。一説にはアメリカ開拓史においても原住民達が食われていたともいう。

グリム童話には人を食らう魔女の話がある。ヘンゼルとグレーテルだ。そしてキリストの聖餅の儀式にもそれが隠されている。赤いワインはキリストの血、パンはキリストの肉なのだ。古代にも欧州においてはカニバリズムの風習があったのである。ギリシア神話にもそれがある。

そうした世界にいる十字軍の兵士達が人を食らうのは当然であったのであろうか。元々異教徒であるから人だと思わなくてもよかった。だからこそさらに残虐になったのだ。しかし彼等の残虐性はム

スリムだけに向けられたのではなかった。
彼等は同じキリスト教徒達も虐殺した。エルサレム陥落の折街は血で膝まで浸かったという。彼等はその際ムスリムだけを殺したのではなかった。同胞も殺戮の対象としたのである。当時中東にはイスラム教徒達に混じってキリスト教徒達もいた。イスラムは異なる宗教の存在を認めていた。税さえ納めれば彼等はその信仰を許した。この際ムスリムになった場合の様々な特典を啓示していたことが巧妙であったのだが。信仰は強制であっては何にもならないというムハンマドの考えであった。そして同じ啓典の民であるユダヤ教徒、キリスト教徒達を優遇した。その為エルサレムにおいてもキリスト教徒達がいたのであった。
「異教徒と混じっていることこそ罪だ」
十字軍の考えはこうであった。それが為に彼等も殺された。そして後には同じキリスト教国のビザンツ帝国にも攻撃を仕掛けた。帝都コンスタンチノープルは陥落し三日に渡って掠奪が行われた。これこそが十字軍の本質であった。彼等は単なる野蛮で残虐な侵略者に過ぎなかったのだ。これに対してイスラムの英雄サラディンはエルサレム奪還の折キリスト教徒達の安全も保障している。彼等とは全く正反対の人物であったのだ。
それを今この老人は口にしていた。確かに彼等にとってはそうであった。
「流石に掠奪や虐殺はなかったがな」
「はい」
「だが奴等が国を奪ったことは事実だ」
「そうですね」
「このハサン＝マシュハド」
そして自らの名を口にした。
「あの時のことは一日たりとも忘れたことはない」
「アッバースとエウロパの戦いは壮絶なものでしたから」
「そうだ」

彼はそれに応える。
「わしはその時も戦場に立っていた。一歩も退かずにな」
「ええ」
「その結果がこれだ」
そこで自らの左手を見せた。それは義手であった。

## 第九部第二章　虚の兵士達その九

「乗艦が撃沈された折左手が吹き飛んでしまった」
「機械の腕となってしまったのですね」
「まあそういうことだ。あの若者との戦いだったな」
「モンサルヴァート提督ですね」
「あの時あの若者は中将だった。わしは大将だった」
「そうだったのですか」
「今では両方共元帥になった。わしは客員だがな」
連合とエウロパでは元帥というものの存在が異なる。連合においては軍人の最高階級である。エウロパ元帥というさらに上の階級があるにしろエウロパもそれは同じであるがそれと共に権限が大きく異なっているのだ。
エウロパでは元帥府も開くことができる。そこで幕僚を集めることができる。エウロパは貴族制国家である為そうしたことが可能であるのだ。
「客員といっても元帥は元帥ですよ」
ワフラはここでそう言った。
「私も中将ですし」
「そうだったな」
彼はそれに頷いた。
「これはそれ程気にすることはないか」
「はい」
「それにしてもあの時は酷くやられた」
「そうらしいですね」
「我々は正面からぶつかった。そして見事に負けた」
そう語る彼の脳裏にその時の戦いのことが思い浮かぶ。
「勝敗は戦の常といえどもな。国はそれでなくなった」
「我々もでした」

「だが今その恨みを晴らす時が来た」
マシュハドはここで意を決した声を口にした。
「全軍このまま突撃だ。そしてあの要塞群を一気に制圧する。よいな」
「ハッ！」
サハラ義勇軍は一直線に進撃を開始してきた。だがここで無人の艦艇達が一斉に動いた。
「邪魔をするか！」
ジェラールはその動きを見て激昂した。そしてすぐに攻撃の指示を下した。
「蹴散らせ！」
「ハッ！」
それを受けてエウロパ軍の艦艇が総攻撃を開始した。それにより連合軍の無人艦艇達を次々と沈める。だがそれでもやはり彼等は動きを止めない。
衛星に体当たりを敢行していく。それにより衛星のダメージはさらに大きくなってきた。
惑星にも損害が増えてきた。沈められることを恐れない彼等にとって敵の攻撃は何程のものでもなかったからだ。これによりエウロパ軍のダメージはさらに大きなものとなった。
「まだだ、まだ終わったわけではない！」
ファブリチーニはそう叫んで全軍を叱咤する。そして踏み止まり作戦指揮を続けた。
「敵を惑星に近付けるな！」
「了解！」
またもや攻撃が加えられる。連合軍の艦艇はその前に炎となって消えていく。しかしそれでも攻撃をかいくぐり体当たりを続けていた。それにより要塞群のダメージは蓄積されていった。
「まずいな、このままでは」
ジェラールもファブリチーニも苦渋に満ちた顔でそう呟いた。

「損害は今どの位だ」
「はい」
ジェラールにシリアーニが答える。
「艦隊の損害は二割を越えました」
「遂にか」
「はい。要塞群のダメージはさらに深刻です。三割近くになり、第二衛星及び第三衛星が停止しました」
「そうか」
彼はそれを沈んだ顔で聞いていた。
「そして艦隊司令にも戦死者が出ております。またグリルパルツァー提督が重傷を負われました」
「無事か」
「命には別状はない模様です。ですが作戦指揮は不可能とのことで後方に下がられました」
「そうか。大事がないようにな」
「はい」
「他には何かあるか」
「機雷源が消滅しました。そして」
「そして・・・・・・？」
「惑星の主砲が使用不能になったとのことです」
「何かあったのか！？」
それを聞くと流石に平静ではいられなかった。惑星の主砲は要塞群の防衛の要であるからだ。
「主砲の攻撃は止めておりましたね」
「ああ」
これは接近してくる敵の無人艦艇に対してのものであったからだ。戦術としてはごく当然のことであった。
「そこを衝かれました」
「どういうことだ」
「主砲の中に敵の艦艇が入り込みまして」

「うむ」
「そして爆発したのです。そしてそれにより主砲が使用不能となりました」
「それが奴等の狙いだったのか」
「おそらく。また残りの衛星のダメージも深刻になってきております」
「そして今連合軍の本軍が来ようとしている」
「はい」
「一体どうするかだな」
「ここは戦線をさらに縮小させるべきだと思いますが」
「縮小か」
「はい」
シリアーニは頷いた。
「惑星にのみ戦力を集中させるべきだと思いますが」
「惑星にか」
「既に衛星はどれもダメージが深刻です。機能を失うのも時間の問題かと。如何されますか」
「・・・・・・・・・」
ジェラールはそれを聞いて考え込んだ。元帥とはいえ彼の一存ではそこまでは決められない。だがシリアーニの言葉に理があるのもわかっていることであった。
「わかった。暫く待ってくれ」
「はい」
彼はここで艦の司令室に戻った。そしてファブリチーニに通信を入れた。
「何かあったのか」
「うむ」
通信に出て来た僚友に声を向けた。
「今こちらの艦隊の参謀が提案してきたことだが」
「戦線の縮小だな」

彼は言われる前にそう答えた。
「わかっていたか」
「戦局を考えるとな」
「そうか」
「卿もそれを考えはじめていたのではないかな」
「いや」
しかし彼はその言葉には首を横に振った。
「戦局が劣勢になってきていることはわかっていたがな」
「そうか」
「だが戦線の縮小は理に適っているな」
「そうだな。ではそれで決まりだな」
「うむ。衛星に残っている戦力を引き揚げるのだな。援護はこちらでする」
「頼む」
ファブリチーニは友にそう頼んだ。
「そちらも何かと大変だろうがな」
「何、それが仕事だ」
ジェラールは疲れた顔に笑みを浮かべてそう答えた。
「それに大変なのはそちらもだろう」
声だけでもファブリチーニがかなり疲れていることがわかっていた。だからこそそう声をかけたのであった。
「それはお互い様だ」
「済まないな」
こうしてエウロパ軍は戦線を縮小させた。そして惑星に戦力を集中させてきたのだ。
「ほう」
それを見てマシュハドは微かに笑った。
「戦力を一つにしてきたようだな」
「そのようですな」
ワフラもそれに頷いた。

「それだけ追い詰められているということです」
「うむ」
マシュハドもそう見ていた。そのうえで彼に同意した。
「それでは動くとするか」
「はい」
ワフラはまた頷いた。
「それでは行きましょう」
「そうだな。だがその前に」
「わかっております」
ワフラはそれに答え笑った。
「彼等に最後の働きをしてもらいましょう」
「そういうことだ」
それを受けて無人の艦艇が一斉に動いた。そして惑星に急行する。
「フン、そうきたか」
戦力の集中を終えたエウロパ軍はそれを見て不敵にそう呟いた。
「ならばそれを倒すまでだ、最初にな」
「ああ」
彼等はそれぞれの配置に着いた。そして照準を定めた。
「撃て！」
「おう！」
一斉に無人艦隊に攻撃を仕掛ける。それにより連合軍の艦艇がさらにダメージを受ける。だがそれでも突撃してくるのは変わらなかった。
「中に人がいないとなりゃ遠慮はしねえ！」
「後腐れがないってもんよ！」
エインヘリャルも出撃していた。そして艦艇を次々と沈めていく。無人である為か反撃も単調であった。元々のＡＩの性能もよくないようであった。

## 第九部第二章　虚の兵士達その十

こうして連合軍の無人艦隊はさらに数を減らした。だが完璧に防ぐというのは不可能である。やはり防衛網をかいくぐって惑星に激突してくる艦艇もあった。

「グッ！」

激突を受けた部分に衝撃が走る。そしてまた人員、兵器にダメージを受けた。

「まだだ、まだやれる！」

司令部のすぐ側に突撃を受ける。それにより司令部にも衝撃が及ぶがファブリチーニはそれでも立って指揮にあたっていた。

「敵はまだいるのだ、それを忘れるな！」

「はい！」

彼が立っているのを見て周りの者も踏み止まった。彼はそれを見て内心頷いていた。

（こうでなければならない）

彼はそう考えていた。

（指揮官が立っていなくてどうする。我等がいなくてどうする）

彼はあくまで指揮官としての義務を果たさんとしていた。そしてそこにはもう一つの理念があった。それこそがエウロパ独特の『高貴なる者の義務』であった。

エウロパは貴族社会である。各国の王や大公を頂点として公候伯子男の五つの爵位があり、その下に騎士や紳士といった階級が存在する。かなり複雑な構造になっているのである。

エウロパにおいては教育も連合のそれとは異なり平民と貴族に別けられている。連合においてはそもそも階級といったものがなく各国によって多少の違いがあるとはいえ高校までの義務教育を受け、それからは本人の意志や状況等により就職したり進学したりする。

だがエウロパでは貴族はまず大学に行く。士官学校も入れてである。平民は行く者もいれば行かない者もいる。そして義務教育での学校も平民と貴族では異なっているのである。そうした中で彼等は独特の貴族としての意識を育てていく。それこそが『高貴なる者の義務』であった。

「貴族ならばその責務を果たせ」

そう教えられるのだ。そして今ファブリチーニはそれに従っていた。

「よいか」

彼は司令部にいる者達に声をかけた。

「はい」

「我等はまだまだ戦うことができる。それはわかっているな」

「はい」

皆それに応えた。

「ならばよい。敵がどれだけ来ようともこのニーベルング要塞群は陥落なぞしない」

「そうですね」

「ニーベルングは難攻不落でした」

「それは何故かわかるか」

「この装甲と装備があるからです」

「違う」

だがファブリチーニはその言葉を否定した。

「残念だがそうではない」

「違うのですか」

「そうだ。何故このニーベルング要塞群が難攻不落かというと」

「はい」

「我等がいるからだ。エウロパ軍がいるからだ」

昂然と胸を張りそう言った。あえて胸を張ることで彼等を奮い立たせる為であった。

「我等が」

「そうだ。エウロパ軍とは何だ」
「最強の軍です」
彼等はファブリチーニの問いにそう答えた。
「最強の軍は負けることはあるか」
「いえ」
その問いに首を横に振った。
「そしてこの戦い、負けると思ってはいるか」
「思っておりません」
皆強い声でそう答えた。
「何故だ」
「我等の方が敵より強いからであります」
「そういうことだ」
そこまで聞いてファブリチーニは満足したように頷いた。
「ではわかるな」
「はい」
「連合軍を退けよ、そしてこの要塞を守り抜け！」
「ハッ！」
瞬く間に戦意が上がった。エウロパ軍の戦意は最早天を衝かんばかりであった。
「ほう」
エウロパ軍の動きがよくなったのは義勇軍からも確認されていた。マシュハドはそれを見て笑った。
「どうやら気合が入ったようだな」
「そのようで」
ワフラがそれに応える。
「ここが連合軍とは違うな。彼等は戦いというものを知っている」
「はい」
連合軍は海賊やテロリストとの戦闘はあった。だが実際に他国の軍との戦争はなかったのである。これは連合軍設立以前の各国の軍に分かれていた頃からであった。

「戦争は違うのだ。海賊やテロリストを相手にするのとはな」
「そうですね」
「生憎我が戦友達はそれをまだ知らぬ。しかしな」
マシュハドは言葉を続けた。
「我等は知っておるぞ。それもよくな」
そう言ってニヤリ、と笑った。不敵な笑みであった。
「よいか」
ここで指示を下した。
「まずはティアマト級を前に出せ」
「ハッ」
言われるままティアマト級巨大戦艦を前に出してきた。百隻程であった。
そのまま進む。そしてある距離に来るとマシュハドは叫んだ。
「撃て！」
巨砲が一斉に火を噴く。そして惑星を攻撃した。
無人の艦艇も炎の中に包む。そしてそのまま惑星を撃った。
「ぬう！」
「連合軍の攻撃か！」
「はい！」
フランドに参謀の一人が答える。今ファブリチーニは港で将兵の士気の鼓舞にあたっていたのだ。
「どうやらあの黒い艦隊の攻撃です」
「あれか」
フランドはそれを受けてモニターに目をやる。見ればその前にはティアマト級巨大戦艦が列を作っていた。
「こちらの射程外から撃ってくるとはな」
「本来なら連中を主砲で撃つところですが」
「使えないとあってはな。仕方がない」
「はい」
参謀は苦い顔でそれに応えた。

「この為の作戦だったのでしょうか」
「おそらくな」
フランドはそれに頷いた。
「考えたものだ。まあそうでなくともこちらの主砲は使用不能にしようとしていただろうがな」
「そうでしょうね」
「艦隊の損害はどうか」
彼はここで艦隊について問うた。
「今の攻撃でダメージを受けてはいないか」
そこで通信が入って来た。艦隊からのものであった。
「どうだ」
「こちらの損害は軽微」
「そうか」
それを聞いてとりあえずは安心した。だがそれはほんの一瞬のことであった。
また砲撃が加えられてきた。それにより惑星全体が大きく揺れた。
「またか！」
「はい！」
地震の様に揺れる司令室の中で彼等はそれでも立っていた。そしてモニターを見た。
「少しずつ近付いて来るな」
「ええ」
フランドはここで辺りを見回した。既に負傷している者も多かった。
「司令は御無事か」
「お待ち下さい」
それを受けて将校の一人が港に確認を入れた。暫くして彼はフランドに答えた。
「御無事です。しかし港にもかなりの損害が出ております」
「そうか。すぐに応急班を向かわせよ」

「はい」
指示が下される。それを受けて応急部隊が動く場面がモニターに映し出された。
彼等はすぐに港の消火及び復旧にあたった。だがそれは遅々として進まないようであった。
「司令は現場で指揮を執っておられるのか」
「そのようです」
フランドに先程連絡を入れた将校の一人がそう答えた。
「まずいな」
「まずいですか」
「そうだ」
フランドの声は深刻なものとなっていた。
「司令にはすぐにこちらに戻って頂きたい。港には私が行く」
「何故ですか」
「司令には全体の指揮を執って頂きたいからだ。港は確かに重要だ」
「はい」
「だがそこだけではないのだ。他にも重要な場所はある。いや」
ここで言葉を換えた。
「この惑星全てが重要なのだ。わかるな」
「はい」
「そういうことだ。司令には全体の指揮を執って頂きたい」
「わかりました」
それを受けて港と司令部の指揮が交代した。結果的にこれがこの要塞における戦いに大きく影響することになるとは誰も知らなかった。知る由もなかった。
艦隊は迫り来る連合軍に向かおうとしていた。既に無人艦隊は彼等の攻撃と先程の砲撃により殆どいなくなっていた。ジェラールはそれを受けて攻撃目標を連合軍の本軍に変えたのだ。
「よいか」
彼は全軍の動きを見ながら指示を下していた。

「あまり前には出るな。惑星からの援護がある範囲で迎え撃つ」
「はい」
全軍彼の指示に従い慎重に動いていた。徐々に間合いを詰めようとする。
連合軍はそれに対してティアマト級を後ろに下げ砲艦とミサイル艦を出してきた。そしてそれで一斉攻撃を仕掛けてきた。
「来ました！」
「散開、そして前面にバリアーを集中させよ！」
「ハッ！」
ジェラールの指示に従い全艦動く。そしてそれにより損害を最小限に抑えようとした。だが連合軍の攻撃は彼等が予想している以上のものであった。

## 第九部第二章　虚の兵士達その十一

多くの艦が直撃を受けた。そして炎と化して銀河の中に消える。ジェラールの乗艦であるポンペイウスも攻撃を受けていた。艦が大きく揺れた。
「うわっ！」
「うろたえる必要はない」
ジェラールは動揺する周りの者に対してそう言った。
「この程度でこの艦は沈みはしない。安心しろ」
「わかりました」
皆それを受けて落ち着きを取り戻す。そして冷静さを取り戻した。
「救護班と応急班を損傷箇所に向かわせよ」
艦長であるダミヤーノが指示を下す。それに従い救護班と応急班がすぐに動いた。
「これでとりあえずは安心かと」
「済まないな、艦長」
ジェラールはそれを聞きダミヤーノに対して礼を述べた。
「卿にも何かと苦労をかける」
「いえ」
だが彼はその言葉には首を横に振った。
「戦争ですから。当然のことです」
「そうか」
「それよりも司令」
彼はここでモニターを指差した。
「敵はまだ来ますぞ。ご注意下さい」
「そうだな」
見れば砲艦とミサイル艦は攻撃を終え後ろに下がっていた。今度は戦艦と巡洋艦が出て来ていた。
「いよいよ本格的に戦いを仕掛けるつもりか」

「まるでこれまでがほんの剣合わせに過ぎなかったような御言葉ですね」
シリアーニがそれを聞いて答えた。
「そうだ、これからのことを思えばな」
ジェラールはそう答えながらも笑っていた。
「それはこのニーベルングの戦いだけのことではないぞ」
「これからもですか」
「そうだ」
彼はそれに応えた。
「まだ序の口だぞ」
「少なくとも数においては」
「数だけではない。数だけではな」
「といいますと」
「いずれわかるさ」
そう言うと顔を前に戻した。
「全軍迎撃用意」
「了解」
シリアーニはそれ以上問わなかった。そのまま顔をジェラールと同じく正面に戻していた。
「奴等を何としても惑星には近付けるな」
「ハッ」
連合軍の戦艦の主砲が火を噴いた。その後ろから砲艦とミサイル艦の援護射撃も来た。そして駆逐艦や巡洋艦も攻撃に参加する。そして高速戦艦が側面に回ってきた。
「これが奴等の攻撃のやり方か」
「そのようですね」
しかしそれでも逃げるつもりはなかった。彼等は黒い艦隊を前にしてもそれでも怯んではいなかったのだ。
砲撃が艦隊に撃ちつけられた。それでエウロパ軍にはかなりの数の損害が出た。それでも彼等は背を向けようとはしない。

「側方に来る敵を防げ！」
ジェラールがまた指示を下した。それに従い艦隊の一部が彼等に向かう。
「まだ来るぞ、油断するな！」
ジェラールはまた指示を下した。それに従いエウロパ軍は迎撃態勢にまた入った。
今度は巡洋艦と駆逐艦が接近してきた。その先頭には戦艦がいる。
「火力を集中させよ！」
「ハッ！」
指示に従う。まずは戦艦を集中的に狙った。だがビームもミサイルもあまり効果がなかった。
「クッ、何という防御力だ！」
「落ち着け、沈まない艦はない。集中して攻めよ！」
その防御力に怯む部下達を叱咤して戦場に留まらせる。そして戦線を維持させた。だがそれも怪物が姿を現わすまでであった。
「旗艦を突入させよ！」
マシュハドの指示が下る。それに従いティアマト級巨大戦艦が敵の中に踊り込んだ。そしてその主砲を放つ。それは一直線に敵陣を切り裂き無数の光を作り出した。
「またあの怪物か！」
「司令、どうしますか！」
「ううむ」
陣の中に踊り込み暴れはじめた巨艦を前にジェラールは唸った。だがそれでも彼は冷静さを失ってはいなかった。
「まずはあの巨艦を沈めよ。よいな」
「了解」
「あの巨艦はそれぞれの艦隊の旗艦だ。それぞ沈めれば艦隊の統制も効かなくなる。よいな」
「はい」
それに従い今度はティアマト級に攻撃が集中される。だがそれは

まるで効果がなかった。
厚いバリアーと装甲の前に阻まれてしまうのだ。そして逆にティアマト級の攻撃でエウロパ軍は次々に倒されていく。圧倒的な力の差であった。
彼等を先頭にして陣を切り裂いていく。だがそれを防ぐ手立てはなかった。
「このままではまずいな」
「ですね」
それは彼等もわかっていた。だがどうすることもできなかった。彼等が目の前の敵を相手にしている間に連合軍は兵を二つに分けようとしていた。
「まさか」
それを見たジェラールもファブリチーニも彼等が何を考えているのかすぐに察した。
「いかん、奴等を止めよ！」
すぐに双方から指示が下る。だがそれは遅かった。連合軍の別働隊が惑星に集中攻撃を仕掛けてきたのだ。まずはティアマト級の巨砲が火を噴く。
「グワッ！」
既に無人艦隊の攻撃によりかなりのダメージを受けていた惑星にそれを防ぐことはできなかった。それにより穴が開いた。連合軍はそこに入らんとしていた。
「艦隊を戻せ！」
ジェラールの指示が下る。だがそれは適わなかった。
「敵の艦載機が来ました！」
連合軍の空母、そして他の艦艇から艦載機が発進する。彼等は編隊を組んでエウロパ軍の艦艇に襲い掛かってきた。エウロパ軍も艦載機を出してきた。しかし数があまりにも違い過ぎた。
「来たな」
黒いタイガーキャットに乗る一人の青年がエインヘリャルを見て

笑った。浅黒い肌に黒い切れ長の目をした青年であった。彼の名をシマル＝ザーヒダンという。やはりかってエウロパ軍と戦い、そして敗れたことのあるサハラの軍人の一人である。彼は今エインヘリャルを見て笑っていた。

## 第九部第二章　虚の兵士達その十二

「さて、やってやるか」
彼は目の前にいる六機のエインヘリャルに照準をロックオンさせた。複数の照準が動き、そして固定される。
「いけっ！」
ミサイルが放たれた。それは複雑な動きを示しつつそれぞれの標的に向かう。そして全て撃墜した。
「あの時の借りは返させてもらうぜ！」
彼はサハラにおいてもパイロットであった。そしてその時は七十七機を撃墜したエースであった。だが戦いには敗れた。そして連合に難民として流れてきたのだ。その際年老いた両親や幼い兄弟達も一緒であった。
「あいつ等の分までやってやるか」
彼は今度は三機をビームで撃墜してそう呟いた。彼等は生きている。だが連合に辿り着くまでにかなりの辛酸を舐めてきているのだ。
弟や妹達は常に腹を空かせていた。両親は身体を壊していた。彼はそれに対して何も出来なかったのだ。出来る筈もなかったのだ。
彼は軍人であった。戦うことしか知らなかった。そんな彼が彼等に対して何かをできる筈がなかったのだ。ただ餓え、病に苦しむ姿を見るだけであった。彼はその中で敗戦の軍人としての自らの無力さを呪った。そしてエウロパへの復讐を誓っていたのだ。
彼は連合に着くとダイアモンドの採掘に携わった。実際に現場で働いた。そうして糧を得ていた。弟や妹達は飢えから解放され、両親の病も治った。だがそれでも彼は忘れてはいなかった。自身の無力さと復讐を。そして彼はその機会を待っていたのだ。
遂にその時が来た。彼にとって今この瞬間は待ち望んでいたものであったのだ。彼は今目の前にいるエウロパ軍を前に興奮していた。
「まだだ！」

また敵を一機撃墜した。そして次の敵に襲い掛かる。
「貴様等に受けた恨み、まだ晴れん！」
叫びながら攻撃を続ける。それはさながら戦場に舞う死の天使の様であった。黒い翼を持つ天使であった。
タイガーキャットだけではなかった。炎龍もマトロフもいた。炎龍にはウダイもいた。
「さてと」
彼はビーム砲のスイッチに手を向けて敵の戦艦を見た。
「悪いが死んでもらずぜ。これが戦争だからな」
そう言うとミサイルを放った。そしてその戦艦のエンジンを破壊した。的確な攻撃であった。
それでその戦艦は動きを止めた。そこから爆発が生じる。炎と変わるのに左程時間はかからなかった。
やはり数であった。連合軍の艦載機の数はエウロパ軍のそれを遥かに凌駕していた。やはり元々の艦載数の違いが大きかった。エインヘリャルはその数を次第に減らし、艦艇も損傷を受けていた。
惑星もそれは同じであった。艦載機の攻撃も受けその攻撃能力を大幅に低下させていた。最早組織立った攻撃は不可能な程であった。
「よし、揚陸艦を出せ」
マシュハドは惑星の抵抗は弱まったのを見てそう指示を出した。
「了解」
ワフラが頷く。それに従い揚陸艦が前に出て来た。
揚陸艦達が惑星に貼りつく。それを連合軍の他の艦艇が援護する。もうエウロパ軍からの反撃はないに等しかった。
陸上部隊が突入を開始する。そこには戦車や装甲車もいた。歩兵と共にまずは周辺を制圧していく。それから進撃をはじめた。
「敵の陸上部隊が来ました！」
それは惑星の司令部にもすぐに報告された。ファブリチーニはそれでもまだ冷静さを失ってはいなかった。
「こちらも陸上部隊を差し向けよ」

「わかりました」
すぐに地上部隊が動員される。そして惑星でも戦いがはじまった。
「重砲隊、一斉射撃！」
こちらにやって来たエウロパ軍に連合軍の重砲が火を噴く。そしてエウロパ軍を叩いた。
「まだだ、怯むな！」
地上部隊を率いるクリス＝ローズマン大将が敵の攻撃の中でも怖気づくことなく部下達を叱咤激励していた。そして指示を下す。
「こちらもやりかえせ、撃て！」
「はい！」
それを受けてエウロパ軍も攻撃を開始する。だがそれよりも前に敵の二撃目が来た。それでエウロパ軍の重砲部隊は壊滅した。
「空からも来ます！」
兵士の一人がそう叫ぶ。すると空に連合軍の攻撃機及び爆撃機が来ていた。
「対空砲、ミサイル車前へ！」
ローズマンは爆風の中ずれたヘルメットをなおしてまた指示を出した。そして彼自身も上を見上げていた。
「こちらの航空機はどうした」
「それが・・・・・・」
問われた参謀は口ごもっていた。
「何かあったのか」
「はい。既に先の無人艦艇の攻撃でかなりの数を減らしておりまして」
「まことか」
「ええ。今残っているのは三割程です」
「ううむ」
彼はそれを聞いて顔を歪めた。
「僅か三割か」
「はい。戦闘機に至っては一割を切っております」

「それでは制空権がなくなるぞ。対空砲やミサイル車だけでは防ぐことはできん」
「それはわかっておりますが」
「わかっている、いないの問題ではない」
ローズマンはそれを聞いて吐き捨てるように言った。
「勝つか、負けるかの問題なのだ」
「はい」
参謀は力なくそれに応えた。
「もっともそれを卿に今ここで言っても仕方のないことだが」
「はあ」
「だがこれはよく覚えておくことだ。よいな」
彼は言い聞かせるようにしてそう語った。
「わかりました」
その参謀は言われるままに頷いた。だがよくはわかってはいないようであった。
「卿は何時軍人になった？」
ローズマンはその参謀にまた尋ねた。
「三ヶ月前です」
彼はそう答えた。
「総動員令により召集されました」
「そうか。今までは何処にいたのだ」
「フランスのプロヴァンス大学の研究室におりました。そこで歴史を学んでおりました」
「ふむ、学者か」
「はい」
「見たところ確かにそう見えるな」
ローズマンは彼を見ながらそう言った。見れば細身で背もそれ程高くはない。金がかかった赤い髪に緑の目をしている。ソバカスが顔にあった。
「階級は」

ローズマンはまた問うた。
「少尉であります。名はエル＝ド＝ベルジュラックと申します」
「ベルジュラック・・・・・・何処かで聞いたな」
「父はブランデンブルグ大学で教授を務めております。機械工学です」
「そう、そうだったな。確かノーベル賞を受賞した」
この時代にもノーベル賞はあった。だがそれはエウロパだけのことであり、連合やサハラにはない。サハラは国ごとにそうした賞がある。ない国もある。連合は連合中央政府主催にでそうした賞が設けられている。これにはマウリアも同盟国として参加している。
「はい」
「それで聞いたことがあるのだった。そして卿も学究の身となったのか」
「部門こそは違いますが。父の影響を受けたのは事実です」
「ふむ」
「私は将来歴史学において父を越える学者となりたいと考えております」
「それは何よりだ」
ローズマンは目を輝かせてそう語るベルジュラックにそう応えた。
「だがそれにはまずやらなければならないことがあるぞ」
「それは何でしょうか」
「この戦いに勝つことだ。いや」
彼はここで言葉を変えた。
「生きることだ。いいな」
「生きることですか」
「そうだ。何事も命があってのものだ。卿は元々軍人ではない」
「はあ」
ベルジュラックは問われるがままに応えた。

## 第九部第二章　虚の兵士達その十三

「戦わなければならんがな。それでも生きなければならん」
「矛盾していますね」
「何を言っているのだ」
　ローズマンはそれを聞いて笑った。不敵な笑みであった。
「何も矛盾はしておらんぞ。勝てばいいだけだからな」
「そうなのですか」
「そうだ。だからこそ戦え、よいな」
「わかりました」
「全軍前進、こうなれば空からの攻撃は対空砲とミサイル車で防ぐしかない」
「ハッ」
　ベルジュラックだけでなく他の将兵達もそれに頷く。見ればまだ軍服に着られている者が多い。
「そして敵をニーベルングから退ける、よいな」
「了解」
　皆それに頷いた。ローズマンはそれを見届けると指揮車に乗った。その隣にはベルジュラックが乗った。
「攻撃目標はあの化け物だ、よいな」
　ローズマンが指差した場所に巨大な獣がいた。連合の移動要塞であった。見れば揚陸艦からそれが次々と出て来ている。一両や二両ではなかった。
「陛下には丁度よい武勲の証になるな」
「陛下ですか」
「うむ」
　ローズマンはベルジュラックの問いに答えた。
「我が主ウィリアム十二世陛下へのな」
「閣下は確かイングランド出身でしたね」

「そうだ」
彼は答えた。
「代々王家に剣を捧げてきた。生憎ロイヤル＝ネービーではないがな」
「陸軍だったのですね」
「戦争は宇宙だけでするものではない」
ローズマンはベルジュラックに対してそう述べた。
「陸や空でも行われるものだ。それは今も変わらない」
「はい」
「我がローズマン家は海軍には進まないと定められているのだ。家訓でな」
「代々ですか」
「それが定めなのだ。何故かわかるか」
「いえ」
「陛下は何処におられるか」
彼はここで逆にベルジュラックにそう問うてきた。ベルジュラックは最初それに戸惑っていたがやがて答えた。
「城におられます」
「そうだ。城は陸にあるな」
「はい」
「我が家はその城を守ることを決めたのだ。だから今もここにいる」
「ニーベルング要塞群に」
「要塞は城だ。そこを守ることこそがエウロパ、そして国王陛下を御守りすることだ。違うか」
「いえ」
ベルジュラックはその言葉に首を横に振った。
「私としては閣下の御考えが間違っているとは思えません」
「いささか学者の様な話し方だな」
「まだ卵ですが」
「ふふふ」

それを聞いてまた笑った。
「ならば大成するんだ。いいな」
「はい」
「その為には生き残れ、よいな」
「了解」
ベルジュラックは頷いた。ローズマンはそれを見届けると部隊に指示を出した。
「では行くぞ。そして敵を退ける！」
「ハッ！」
それを受けて全軍進撃を再開した。連合軍に向かって行った。だがやはり連合軍の優勢は変わらなかった。物量、そして装備に勝る彼等は制空権も得て戦局を有利に進めていた。惑星の表面は刻一刻と連合軍のものとなっていた。そしてそれは内部にも浸透しようとしていた。
「地下の第十七エリアが敵の手に落ちました」
ゴンガーザがファブリチーニにそう報告した。ファブリチーニはそれを聞いて暗い顔をした。
「あそこがか」
「はい。将兵は全員戦死、若しくは捕虜になったようです」
「そうか。あそこには私の甥がいた」
「はい」
「立派に戦ったのだろうな」
「マラケシ＝デ＝ファブリチーニ中佐は最後まで戦い名誉の負傷だということです」
「生きているのか」
「捕虜になったことが確認されておりますが」
「ふむ」
それを聞いて僅かだがファブリチーニの顔色がよくなった。
「生きておればよい。また戦う時が来るだろう」
「はい」

「だがそれは我々にも言えることだ」
「そうですね」
ゴンガーザはその言葉に対して頷いた。
「勝たなければなりませんが」
「それが不可能ならば・・・・・。わかるな」
「無論です」
彼はここでそう答えた。
「それならば我々のとるべき方法は一つです」
「うむ」
「それを決断するのなら今をおいて他にはないと思いますが」
「艦隊は今どうなっている」
「艦隊ですか」
「そうだ」
ファブリチーニはゴンガーザに顔を向けてきた。
「今どれだけの戦力が残っているか」
「六割程です」
ゴンガーザはすぐにそう答えた。
「撃沈及び損傷していない艦艇はそれ程です」
「そうか」
彼はそれを聞いて頷いた。
「かなり手痛くやられたな」
「残念ながら」
「ジェラール司令は無事だな」
「はい。乗艦であるダミヤーノは被弾こそしとえりますが行動に問題はないそうです」
「そうか。それならばいい」
彼はそれを聞いて安心した顔をした。暗いままであったが。
「艦隊の援護を受けられるならばそれにこしたことはないからな」
「ですね」
「そして我等の戦力はどれだけ残っているか」

「地上部隊は七割程、その他の部隊は八割程となっております」
「そうか。思ったより多いな」
「まだ戦闘がはじまったばかりですから。しかしこれ以上戦いが進みますと」
「それはわかっている」
ファブリチーニはそれに応えて頷いた。
「やはり今決めなければならんな」
「はい」
「全軍撤退だ。損害の激しい部隊から先に港に向かうぞ」
「わかりました」
「港の防衛はフランド副司令が続けていたな」
「はい」
「それでは彼に伝えてくれ。そこを死守してくれ、とな」
「死守ですか」
「そうだ。今あの港を失うわけにはいかない」
ファブリチーニの顔と声に漂う深刻さが増した。
「失えば我々は一人残らずこの星で死ななければならない」
「一人残らず、ですか」
「若しくは捕虜になるか、だ。どちらがいい」
「捕虜になった方がいいのは事実ですが」
問われたゴンガーザはそれに答えた。
「ですがまだ戦いたいですね。それが本音です」
「そうだろう。私も同じ考えだ」
「それならば決まりですな」
「ああ。港に援軍を送れ。精鋭をな」
「はい」
「そして最後の兵士が宇宙に出るまで守り抜くように伝えよ。よいな」
「ハッ！」
それを受けてエウロパ軍は動きはじめた。まずは損害の酷い部隊

から撤退をはじめた。無傷な部隊、損害の軽微な部隊は彼等の援護に回った。そして港に向かった。
連合軍は当然ながらそれを追撃にかかる。各地で戦闘がさらに激しくなった。
「敵なぞ踏み潰してしまえ！」
前線で指揮を執る顔中髭だらけの男がそう叫ぶ。サハラ義勇軍陸戦部隊総監マジュワーン＝サチフ大将である。彼は移動要塞の艦橋から全軍にそう檄を飛ばしていた。身体だけでなく声も大きかった。
「一人残らずこの移動要塞で踏み潰すのだ。そしてエウロパの貴族達の血と肉でこのニーベルング要塞群を舗装しなおせ！」
「閣下、幾ら何でもそれは不可能かと」
隣にいる若い将校が苦笑して彼にそう言った。この移動要塞の砲術長であるハルーン＝ジナール少佐であった。
「砲術長」
サチフはそれを受けてジナールに顔を向けた。

## 第九部第二章　虚の兵士達その十四

「はい」
「それでは言い方を変えよう。この移動要塞の主砲で一人残らず吹き飛ばせ、よいな」
「そういうことでしたら」
それに関しては彼も賛成であった。喜んでそれに応えた。
「主砲、発射用意」
「了解」
艦長が言う。ジナールはそれを受けて指示を下す。
「主砲、発射用意」
「目標は前方の敵主力部隊、よいな」
「はい」
サチフの言葉に従う。そして主砲がそれに従い向けられる。艦長の指示がまた下った。
「主砲発射」
「主砲発射」
ジナールは言葉を繰り返す。そして主砲にエネルギーが充填される。
「後は貴官に任せる」
サチフはここでジナールに対してそう言った。
「了解しました」
ジナールは頷いた。やや事務的な受け答えであった。
「撃て！」
彼がボタンを押した。それにより二条の光が放たれた。それが敵を撃った。
「やったか！」
皆光が直撃した方に目をやった。そこにはまるで原子雲の様な爆発が起こっていた。そしてそれが消えるとそこには何もなかった。

「よし！」
「やったぞ！」
皆それを見て喜びの声をあげた。ジナールはその中で会心の笑みを浮かべていた。
「凄い威力だな」
「はい」
サチフにそう答えた。彼も同じ考えであった。
「だがこれで終わりではない。この星はまだ連中のものだ」
「それはわかっております」
ジナールはその言葉に頷いた。
「それでは進撃ですね、引き続き」
「うむ」
艦長の言葉に頷く。それはもう最初から決まっていることであった。
「それでは全軍進撃」
「ハッ」
「目の前に立ちはだかる敵は全て踏み潰せ。よいな」
「司令、ですからそれは」
「おお、そうだったな」
彼はそれを受けて笑った。その大きな口を開けて笑った。
「それでは蹴散らせ。よいな」
「了解」
それは可能であった。彼の指示に従い戦車、そして装甲車が一斉に攻撃をはじめ動きだした。

「撃て！そして我等の勝利をもたらすのだ！」
それはサチフだけの言葉ではなかった。サハラ義勇軍全体の言葉であった。そして彼等は突き進んだ。目の前にいるエウロパ軍を文字通り蹴散らしながら。

エウロパ軍はそのサハラ義勇軍の猛攻を耐えながら撤退を進めていた。そして港に少しずつ逃れてきていた。
「動きが遅いな」
フランドは港に入って来る部隊を見ながらそう呟いた。何日にも渡る戦闘でその顔は憔悴しきったものとなっていた。戦闘がはじまってから殆ど休息をとっていないのである。
「仕方ありません、負傷者はダメージを受けた兵器が多いのですから」
隣にいるゴンガーザがそう答えた。彼もここで移ってきていたのだ。
「それだけ激しい戦闘を行っているということです」
「それはわかっているが」
それはフランド自身が最もよくわかっていることであった。彼もこの港に迫り来る敵を退けるので何度も激闘を繰り広げてきているのだ。
「それでもな。この動きの遅さは致命的になりかねない」
「焦っておられますか」
ゴンガーザはそれを聞いて彼に問うた。
「それは禁物ですぞ」
「わかっている」
フランドも馬鹿ではない。焦りが戦闘においてどれだけ危険なものかはよくわかっていた。だが焦りが心の中にあるのも事実であった。それもよくわかっていた。
「わかってはいるがな」
「ならば御気をつけ下さい。お気持ちはわかりますが」
「うむ」
彼は頷いた。
「ここは抑えて。宜しいですね」
「そうだな。私が焦ってはどうにもならない」
「そうです」

ゴンガーザはここでは彼の焦りを取り除くことに力を注ぐことにした。だが今の戦局が彼等にとって深刻なものであることには全く変わりがなかった。いや、それは刻一刻と悪化していた。それは痛い程よくわかっていた。だがそれをどうすることもできないのも事実であった。

「このまま撤退させていくしかないが」

フランドはここで呟いた。

「はい」

「だがそれはあまりにも困難だな。敵の攻撃がここまで激しいと」

「ですがやらなければなりません。これからのことを考えますと」

「うむ」

彼はそれに頷いた。

「ファブリチーニ司令は今どうしておられる」

「司令部で指揮を執っておられます。そしてダメージの多い部隊から撤退させておられます」

「そうか。だが司令部も安全なのか」

「難しいですね。あのエリアの損害も馬鹿にならないものになっておりますし」

「だろうな。制空権もない。当然のことだ」

「はい。ですが司令はまだ留まっておられます。そして指揮を執っておられます」

「流石と言いたいが無理は禁物だな」

「禁物ですか」

「そうだ。頃合いを見てして司令部も撤退されるように申し上げてくれ。よいな」

「わかりました」

彼はそれに頷いた。そしてフランドの側を離れた。

「行くのか」

「はい。元々こちらには伝令で来ましたし」

「そうか。ならば行ってくれ。ただし気をつけてな」

「わかっておらります。それでは」
「うむ」
こうしてゴンガーザは司令部に戻った。そこでは揺れながらも指揮を執るファブリチーニが待っていた。
「む、早かったな」
彼はゴンガーザを出迎えてそう言った。やはり彼の顔にも疲れが見えていた。だがそれについてはおくびも出すまいとしていた。それは態度でわかった。だがゴンガーザはそれについては何も言わなかった。
「港はどうなっていた」
「今のところは無事です」
「そうか、それは何よりだ」
ファブリチーニはそれを聞いてとりあえずは安心した。
「だが今のところは、だな」
「はい」
残念ながらそれに頷くしかなかった。
「そして部隊の動きも今一つだな」
「そうですね。やはりダメージの影響で思うようにはいっておりません」
「仕方ないな。だがそうも言ってはおられない」
「はい」
「撤退を急がせよ。ただ負傷者を優先させてな」
「わかりました」
ゴンガーザだけでなく司令部にいた者がそれを受けて敬礼した。
「それではそう指示を出しましょう」
「うむ、頼むぞ」
ファブリチーニはそれを受けて頷いた。
「そしてだ」
「はい」
彼の指示は続いた。

「ここを引き払うのも考慮に入れた方がいい頃になってきたな」
「そうですね」
それはゴンガーザが港でフランドに言われたことと同じであった。
「そろそろ頃合いだと思います」
「うむ。前線の将兵の状況次第だがな」
「はい」
「撤退の準備を進めておけ」
「了解」
それを受けて司令部も撤退の準備をはじめた。だがそこにまた震動が来た。
「どうやら急いだ方がよさそうだな」
「はい」
彼等は粛々と準備をはじめた。そこにまた震動が来る。彼等はその中動いていた。
「惑星での戦いはどうか」
マシュハドは旗艦の艦橋においてワフラに問うた。既に宇宙での戦いは趨勢が決していた。連合軍の有利は最早動かぬものとなっていた。

## 第九部第二章　虚の兵士達その十五

「既にあちらも決しているようです」
ワフラはそう答えた。それから言葉を続ける。
「彼等はもう撤退を続けています。そして港に向かっているようです」
「そうか」
マシュハドはそれを聞いて頷いた。
「それではそろそろ詰めだな」
「詰めですか」
「うむ」
彼はまた頷いた。
「おそらくエウロパ軍は撤退する為に必死になるだろう」
「はい」
「そこを叩く。陣を三日月形にせよ」
「了解」
それを受けて陣が組まれる。そしてエウロパ軍を半包囲状態に置いた。それはエウロパ軍からも確認されていた。
「どうやら我々の意図を察したようだな」
ジェラールはそれを見て呟いた。
「さて、どうするか」
「ここは守りに徹しましょう」
シリアーニはそう意見を述べた。
「今は我が軍は惑星にいる将兵の撤退の援護をしなければなりません」
「うむ」
それがわからぬジェラールではなかった。一言発して頷いた。
「それが完了するまで持ち堪えなくてはなりません」
「できると思うか」

「この場合できるか、ではありません。やらねばなりません。そして」
彼はここでジェラールを見据えた。
「それは閣下が最も御存知でしょう」
「確かにな」
彼はそれを聞いて不敵に笑った。疲れた顔であったがまだ笑うことはできた。そして彼はそれを受けて全軍に指示を出した。
「よいか」
「ハッ」
「艦隊はこれより撤退する味方の楯となる。だが命を粗末にはするな」
「いささか困難な命令ですね」
「それはわかっている。だがそうしなければならない」
彼の言葉はさらに強くなった。
「全将兵に奮闘を期待する。そして生きて帰れ」
「ハッ！」
エウロパ軍はそれを受けて半月形の連合軍の陣に対し長方形の密度の薄めの陣を敷いた。そしてそれでもって彼等に正対した。
「あの巨大戦艦には気をつけろよ」
再びジェラールの指示が下った。
「了解」
皆それを受けて頷く。そして敵を見据えた。
「前面に防御を集中、攻撃より防御に専念せよ」
「わかりました」
「敵を後ろには送るな、一兵だりとも」
「それ位なら死んでみせますよ」
「その意気だ。だがな」
ジェラールはそれを聞いて顔を綻ばせた。だがそれでも一言言った。
「死ぬな。いいな」

「はい」
皆それに頷いた。そして宇宙においても連合軍とエウロパ軍の命をかけたこの要塞群における最後の戦いが開始された。
地上ではそれは既にはじまっていた。連合軍は撤退するエウロパ軍を火が点いたように攻め立てていた。
「撃て！撃ちまくれ！」
指揮官の指示が下ると重砲、そして戦車の砲撃が炸裂する。それによりエウロパ軍の前線は破壊された。そしてそこに穴が開いた。
「今だ！」
突撃命令が下る。戦車と装甲車が斬り込む。その先頭には移動要塞がいた。文字通りエウロパ軍を踏み潰していく。対するエウロパ軍はそれに対し為す術もないようであった。
「引け！引け！」
それを受けてエウロパ軍は撤退を開始する。そして彼等は後方へ退いていく。だがそれは連合軍に追撃されている。こうして損害は増える一方であった。
だがそれでもエウロパ軍は的確に撤退を進めていた。そして彼等は徐々に港へ集まっていた。そこには輸送船が停泊している。まずは負傷者から乗り込んでいく。
「やはり怪我人が多いな」
輸送船の中で手当てする医師がそうぼやいていた。
「それだけ敵の攻撃が激しいということか」
「そうですね」
傍らにいる看護婦がそれに同意する。彼女の白衣はもう血で真っ赤になっていた。
「私達も戦場にいるようなものです」
「その通り」
医師はそれを聞いて応えた。
「我々は戦場にいるのだよ。ここは決して安全な場所ではない」
「ですね」

「実際に艦艇に乗り込んでいれば撃沈される怖れもある。野戦病院が爆撃されないという保障はあくまで戦時法のうえでの話だ。間違いは起こるものだ」
「はい」
「時には確信犯で攻撃する者もいる。全く何の保障も無い話だ」
「確信犯で、ですか」
看護婦はそれを聞いて顔を青くさせた。彼女にとってそれは信じられない話であった。
「戦争とはそういうものだ。サハラ各国の軍は元々非戦闘員をあまり攻撃の対象とはしない」
それは事実であった。彼等には彼等のモラルがある。刃を持たぬ者を手にかけるのは彼等の間では恥とされているのである。だが輸送船等を攻撃するのは戦争の常道でありそれは構わないことであった。彼等はおおむね戦時法に対して忠実であった。
「連合軍はどうかな」
「今のところそうしたことはない」
手当てを受けている将校がそれに応えた。彼は頭と左手に包帯を巻かれていた。その包帯はもう血が滲んできていた。階級は中佐であった。
「思ったより紳士的な軍隊だ。非戦闘員やそうした施設には一切攻撃を仕掛けてはいない」
「そうですか」
医師はそれを聞いて安心した顔になった。
「それは何よりです」
「だが安心はできないぞ」
その将校はここで顔を真摯なものとした。
「戦争だからな。間違いは本当に起こるものだ。不心得者もいる」
「はい」
「戦場において絶対ということはない。そして安全なぞ何処にもないということはわかっておいた方がいい」

「そうですね」
それは看護婦に向けた言葉であった。彼女はそれを聞いて頷いた。
「わかってくれればいい。戦いはまだはいｚまったばかりだ」
彼はここで自分の傷付いた左手を見た。血は何とか止まったが痛みはまだあった。
「この傷が癒えれば私もまた」
「戦場に復帰されるおつもりですね」
「ああ」
彼は静かに頷いた。肯定であった。
「私は騎士の家に生まれたからな」
「騎士だったのですか」
「そうだ」
彼は誇りを含んだ声でそれに答えた。
エウロパは貴族制社会であるが騎士はその中ではあまり高い位にはない。公侯伯子男の五つの爵位がありその上に大公というものがある。大公は王族等にしか授けられない特別なものであり各国の王家に連なる者でしかなってはいない別格である。そして爵位を持つ貴族の下に騎士階級が存在する。その下には細かく分類されている。そして平民階級となる。流石に奴隷といったものは存在しない。エウロパはこのように貴族の階級が細かく決められている。騎士はその中で貴族社会の根本にあたるものである。彼等は位こそそれ程高くはないものの身分は貴族である。従ってその誇りも持っているのである。
「連合の者達に敗れるわけにはいかない」
「そのお気持ちわかります」
医師はそれに応えて頷いた。
「私もエウロパの者ですから。生憎平民ですが」
「戦場にあっては雄々しく、そして卑怯な振る舞いをしない者こそが貴族だ」
だが中佐はここで彼に対してそう言った。

「そうした振る舞いをする者は例え爵位があったとしても貴族ではない」
「そうなのですか」
「私はそう考えている。だからこそ卿と呼びたい」
「有り難うございます」
医師はそれを受けて頭を垂れた。
「その御言葉謹んで御受け致します」
「感謝する」
中佐はその言葉を聞いて微笑んだ。
「ところで卿の名を知りたいのだが」
それからあらためて彼の名を問うた。
「よければ官職氏名を教えてくれないか」
「喜んで」
彼は微笑んでそれに応えた。
「エルネスト＝リストと申します。階級は大尉です」
「そうか。ドイツ出身か」
「はい」
「私はオーストリアだ」
中佐はそれを受けて自身も名乗りはじめた。
「カール＝グラッセ＝フォン＝マグデブルグという。覚えておいてくれ」
「わかりました」
リストはそれを受けて頷いた。
「それではマグデブルグ中佐」
「うむ」
「手当ては終わりました。これから如何為されますか」
「そうだな」
問われた彼は暫し考え込んだ。それから話しはじめた。
「傷はそれ程酷くはない。これで休ませてもらう」
「そうですか」

「ベッドは要らない。他の傷の深い者に回してくれ」
「わかりました」
「この程度なら立っていても大丈夫だからな」
「はい」
「私は軽傷で済んだがしかし」
彼はここで周りを見回した。
「負傷者が多いな。当然のことだが」
「そうですね」
「この戦い・・・・・・」
「この戦い！？」
「いや、いい」
マグデブルグはここで言葉を止めた。そしてリストに対して顔を戻した。

## 第九部第二章　虚の兵士達その十六

「大尉、他の怪我人も頼む。今彼等は手当てを待っている」
「わかりました」
「それではな。縁があったらまた会おう」
「はい」
「といっても当分この輸送船の中で一緒だが」
彼はそう言って微笑んだ。リストもそれにつられて笑った。
「そうですね。それでは暫くの間ご一緒しましょう」
「ああ」
彼等を乗せた輸送船も出港した。そして宇宙に出る。それを要塞群に駐留していた艦隊が護衛する。彼等はそれを受けて戦線を離脱していった。
連合軍の攻撃は宇宙においても惑星においてもさらに激しくなっていた。とりわけ惑星のそれは熾烈なものであり彼等はもう司令部のあったエリアを制圧し港にも迫っていた。
「港を制圧せよ、あそこを陥落させれば勝敗は決する！」
サチフの声が戦場に響く。義勇軍の将兵はそれを受けて港に向けて進撃する。だがそれをエウロパ軍の幾重もの防衛ラインが阻む。指揮はファブリチーニが執っていた。
「ここは何としても通すな！」
「はい！」
バリケードを組み施設を利用した防衛ラインを組んでいた。道の要所に戦車や大砲を置き敵を待ち構えている。施設の窓には大勢の将兵が銃を向けて待っていた。
ファブリチーニはそれを陣頭で指揮を執っていた。彼も銃を持っていた。
「司令も戦われるのですか」
「当然だ」

彼はゴンガーザにそう答えた。
「私も軍人だ。それは当然だろう」
「それはそうですが」
「どうした、何か不都合があるのか」
「いえ」
そう言うゴンガーザも手に銃を持っていた。それはライフルであった。ファブリチーニもライフルを持っていた。これはエウロパの将校では珍しいことであった。
エウロパでは将校はライフルを持たない。拳銃を持つのである。ライフルを持つのは下士官及び兵士であった。これは将校は指揮を執るからであった。これは連合やマウリアでも同じである。
「まさかライフルを持つようになるとは思いませんでしたので」
「仕方ないことだ」
彼はゴンガーザにそう言った。
「今のような事態だとな。これだけ逼迫していると」
「ですね」
「まだ武器があるだけましだ。エネルギーは大丈夫か」
「はい」
ゴンガーザはそれに答えた。
「さっき充填しましたから。心配ありません」
「そうか、それは何よりだ」
ファブリチーニはそれを聞いて微笑んだ。
「戦えるな。一人でも多くの連合の者を倒すぞ」
「はい」
ゴンガーザの頷きは強いものであった。彼も前線で戦う覚悟はできていた。
「港は何としても死守しましょう。フランド副司令も同じ御考えです」
「副司令は今何処にいる」
「港の防衛を固めておられます。もうすぐ前線に来られるかと」

「そうか」
彼はその報告を聞いて頷いた。それから考える顔をした。
「彼は引き続き港の防衛に回ってもらいたい」
「港のですか」
「そうだ。おそらくこの防衛ラインは単なる時間稼ぎにしかならない」
「時間稼ぎですか」
「それは卿もわかっていると思う」
「はい」
「だがなくてはならないものなのだ。戦争にとって時間こそが命だ」
ここで彼はそう断言した。
「今は撤退する将兵達の為の時間を稼がなくてはならない」
「それには今ここにいる彼等も入りますね」
「当然だ。その際の撤退の指揮は私が責任を以って執り行う。今は」
そう言うと目の前にる敵を見据えた。移動要塞を主軸にこちらにやって来ている。
「彼等の足を止める。何があってもな」
「ですね」
ゴンガーザも頷いた。彼も銃を構えた。
「私も共に」
「感謝する」
ファブリチーニはそう応えて笑った。彼もまた銃を手にしていた。
「後ろにいる者達はどうしているか」
「既に安全な場所にまで撤退した者達もいます」
「上手くいっているといっていいな」
「そうですね。もう一踏ん張りです」
「そうだな。ならばやるぞ」
「はい」
彼等は連合軍を戦闘に入った。銃声とビームが交差する。それは連合軍のものの方が遥かに多かった。やはりエウロパ軍は劣勢であ

った。しかしそれはファブリチーニにとっては計算内のことであった。

## 第九部第二章　虚の兵士達その十七

「よし」
彼は頃合いと見るや頷いた。そして指示を下した。
「次のラインまで下がれ」
「ハッ」
それを受けてエウロパ軍の防衛隊は戦線を下がる。そしてそこでまた連合軍を迎え撃つ。
「港まで維持するぞ。いいな」
「了解」
エウロパ軍は彼の指示の下戦線を縮小して戦っていく。その都度放棄した陣地にトラップを仕掛けておくことも忘れていなかった。これは連合軍への足止めの為であった。それは一定の効果を出していた。
「フン、小賢しい真似をしてくれるわ」
サチフはトラップの報告を聞いて忌々しげにそう呟いた。
「そこまでするとはな。まあ奴等らしいと言えばそうだが」
「ですがそれが確実に効果を表しています」
ここでジナールが言った。
「我が軍は足止めを受けております。如何致しますか」
「そうだな」
サチフはそれを受けて考えた。豪放に見えるが彼も考える時は考えるのである。
「この移動要塞を使うぞ」
「移動要塞をですか」
「そうだ。これを使うのだ」
彼はニイ、と笑ってそれに頷いた。
「前に出せ。突っ込むぞ」
「トラップはどうするのですか」

「知れたこと。これで踏み潰すのだ」
彼はおくびもなくそう答えた。
「それだけだ。何か言いたいことはあるか」
「勿論です」
ジナールは言うまいと思ったがやはりそう言った。彼にとってそれはあまりにも危険なことに思えたからだ。
「幾ら移動要塞といっても危険ではないですが」
「この移動要塞が敵のトラップでやられると思うのか。地雷など効かぬというのに」
「それはそうですが」
「安心しろ。よいな」
サチフはそう言ってジナールを静かにさせた。そして指示を出した。
「移動要塞、前へ！そして敵の陣地を突破せよ！」
すぐに指示が出された。それを受けて連合軍が突進する。エウロパ軍の放棄された前線が巨大なキャタピラによって踏み潰されていく。その中にはトラップもあった。だがそれも踏み潰されていった。移動要塞の前には何の効果もなかったのであった。
「どうだ、わしの考えは正しかっただろう」
「ですね」
ジナールはサチフにそう応えた。見ればサチフの顔は満面の笑みであった。
「わしにはわかっておったのだ。エウロパ軍のトラップの威力がな」
「そうだったのですか」
「ジナール少佐だったな」
彼はここでジナールの官職氏名を問うた。
「はい」
「卿はまだ若い。だからあえて言っておこう」
そして彼は言った。
「敵の兵器とこちらの兵器をよく見ておくのだ、常にな」

「はい」
それはわかっているつもりであったがまだ視野が狭いということであろうか。ジナールは彼の話を聞きながらそう考えていた。そしてどうやらその通りであるようだった。
「ここに来るまでもエウロパ軍のトラップは多くあったな」
「はい」
「わしはそれを見ていたのだ。そしてそれを見ていけると思ったのだ。移動要塞で突破できるとな」
「そうだったのですか」
「それを受けて進んだのだ。それでは行くぞ」
「はい」
ジナールは頷いた。サチフはそれを受けて再度指示を出した。
「このまま進め。そしてエウロパの奴等の小賢しい罠を全て踏み潰せ。よいな！」
「ハッ！」
それを受けて義勇軍の進撃の足は速まった。その先頭には移動要塞があった。それはまさに巨大な獣であった。神が創造した大地の獣ベヒーモスにも似ていた。
「ここでも化け物を前に出してきたか」
その進撃はファブリチーニにも見えていた。彼はそれを見て顔を顰めさせた。
「連合軍というのはつくづく大きなものが好きなようだな。それで勝てると思っているようだが」
「ですがあれにより我が軍のトラップは全て破壊されてしまっております」
「わかっている」
幕僚の一人にそう答えた。
「どうやら今の我が軍では止めることは困難だな。無駄な損害を出すだけだ」
「はい」

それは幕僚達にもわかっていた。その言葉に頷いた。
「それでは戦線を縮小させますか」
「うむ。港まで撤退する。あれを前に出されては止むを得ない」
「了解しました」
幕僚達はその言葉に頷いた。そしてすぐに指示を出した。
「全軍港まで下がれ。そしてそこで戦う」
「了解」
全軍それに従い退きはじめた。ファブリチーニはそれを見ながら別の幕僚に問うた。
「撤退はどうなっているか」
「既に七割以上がニーベルングから撤退しております」
その幕僚はそれを受けてそう答えた。
「そして残り三割近くも港に入ろうとしております。あともう少しです」
「そうか、ならばよい」
彼はそれを聞いて安心したように頷いた。
「だがまだ時間が必要だな」
「まだですか」
「そうだ」
ファブリチーニはここでそう答えた。
「我々が撤退する時間も必要だからな。それはわかっているな」
「はい」
若い幕僚がそれに頷いた。
「死んではならないぞ。戦いはまだ続く」
「続きますか」
「そうだ。最後まで戦わなくてはならない。その為には」
「生きろ、ということですね」
「その通りだ」
ファブリチーニはそう答えて頷いた。
「敵が来ました」

ここで報告が入って来た。ファブリチーニ達は前を見た。そこに敵がいた。
「奴等を退けるぞ」
「はい」
「そしてそれが終わったならば我々も撤退する。よいな」
「了解」
惑星における最後の戦いがはじまった。炎が燃えて大地を焦がす。戦いは火力と制空権において圧倒的な有利に立つ連合軍有利となっていた。
「司令、このままでは！」
「怖気づくな！」
ファブリチーニはそう言って部下を叱咤した。
「最後の攻撃だ、火力を集中させよ！」
「ハッ！」
それを受けて最後の総攻撃が開始された。それで連合軍は一瞬怯んだ。ファブリチーニはその一瞬を見逃さなかった。
「よし！煙幕を張れ！敵の通信を妨害せよ！」
「了解！」
その指示に従い煙幕と妨害電波が流された。これで連合軍の動きを止めた。
「全軍撤退！」
ファブリチーニの指示がまた飛んだ。それを受けてエウロパ軍は一斉に退いた。後にはもぬけの殻となったエウロパ軍の陣だけが残った。連合軍はまだ煙幕と妨害電波に悩まされていた。
「最後の最後にやってくれたようだな」
サチフは艦橋の前に広がる煙幕を見て忌々しげにそう呟いた。
「だが効果はあるな。しかしだ」
それでも彼は目の前にある港から目を離さなかった。そこそが彼の獲物だからだ。
「逃さぬぞ。全軍に伝えよ」

彼は幕僚の一人に顔を向けてそう言った。
「進撃を続けよ、とな」
「了解」
それを受けて連合軍は港への進撃を再開した。だがここで問題が残っていた。
「この煙幕と妨害電波はすぐに除去せよ、鬱陶しい」
「ハッ」
「電子車両があったな。あれを使え」
「わかりました」
サチフも伊達に軍を率いているわけではない。戦いが前進のみでは成り立たないことはわかっている。彼はここで障害を取り除くことを優先させた。そしてそれを取り除くとあらためて進撃を開始した。目指す目標は言うまでもなかった。
港から輸送船が次々と出港する。そして今ファブリチーニ達も港に到着した。彼をフランドが出迎えた。
「お待ちしておりました」
「今までよくこの港を守ってくれたな」
ファブリチーニはまずフランドにそう礼を述べた。
「おかげでここに入ることができた」
「いえ、司令の御苦労に比べれば」
彼はそう応えて微笑んだ。
「大したことはありませんから」
「言ってくれるな」
ファブリチーニもそう応えて微笑んだ。
「それでは我々も撤退するか」
「はい、既に最後の輸送船の出港準備が整っております。行きますか」
「うむ」
彼はそれに頷いた。既に最後の将兵達がその輸送船に乗り込んでいた。

「急げよ、敵はすぐ側にまで迫っている」
「はい」
彼等はファブリチーニのその言葉に頷いた。そして次々に乗り込む。最後にファブリチーニとフランドが乗り込んだ。ここで桟橋が落ちた。
「残っている者はもういないな」
「はい」
「ならばよい。それでは出港せよ、よいな」
「了解」
最後の輸送船が出港した。だがそこに連合軍がやって来た。彼等は宇宙に向かう輸送船に殺到する。見れば空にもいた。空を埋め尽くさんばかりである。
「あの輸送船を沈めよ！あれには敵の司令が乗り込んでいるぞ！」
「あれを撃沈した者には報償が出るぞ！」
そう激励が飛ぶ。それを受けて輸送船に向かう。だがそれは一瞬であるが遅かった。輸送船は宇宙へと旅立ってしまったのである。
「フン、悪運の強い奴だ」
サチフは宇宙へと消えた輸送船を見上げてそう呟いた。
「だが戦いはまだ続く。奴を仕留める機会はまだまだあるな」
「ですね」
ジナールがそれを受けて頷いた。
「とりあえず我々の今の仕事は次の段階に入った。港を完全に占領するぞ」
「はい」
「そしてそれからだ」
彼は言葉を続けた。
「惑星を完全に掌握する。残敵がいれば掃討する。よいな」
「わかりました」
「まだまだやるべきことは多い。いや、むしろ」
彼はここで考える目をした。

「戦争というものは戦闘が終わってからだな、本当に忙しいのは」
「そうですね」
それはジナールもわかっていた。彼もまたこれまで多くの戦いを経てきたからわかっているのである。これは勝ち戦でも負け戦でも同じであった。

## 第九部第二章　虚の兵士達その十八

「少佐、君にも色々と仕事が回ってくるぞ」
「はい」
「当然わしにもだ。山の様な書類が来るだろうな。わしは書類なぞ見るのも嫌だが」
「そうも言ってはいられませんよ」
「それもわかっている。残念なことだが」
「残念ですか」
「戦いたくて軍人になったのだからな。事務仕事をする為に軍人になったのではないつもりだ」
「ですが実際にはそうした事務仕事も多かった、と」
「そうだ」
サチフの顔は不機嫌なものとなっていた。
「それに連合軍は事務仕事が変に多くないか。前から気になっていたのだが」
「そういえばそうですね」
それはジナールも気付いていたことであった。実は彼も事務仕事は好きではない。
「私のいた国では事務仕事はそれ程多くはありませんでした」
「わしの国もだ。ここへ来て書類の量が一気に三倍に増えた」
「私もそれ位ですね」
「これが連合軍なのか。我々は軍人であり官僚ではないのだがな」
「どうやら連合では軍人は特別な存在ではありませんからね」
「そうなのか」
「はい。現に連合軍は志願制です」
「うむ」
「求人にはいつも苦労しておりますね。募集が大変だとか」
「そのようだな。サハラでは考えられぬことだが」

「我々の多くは徴兵制でしたし。その違いもあるでしょう」
「そもそも何故徴兵制ではないのか不思議なのだがな」
「連合の置かれた状況でしょうね、彼等は人口が多い」
三兆の人口はやはり巨大であった。全人類の七分の六に達し今戦っているエウロパとは三十倍もの差がある。この差は実に大きかった。
他国より多くの将兵を集めるのに徴兵制を採る必要なぞないのである。ここがサハラ各国とは事情が違うところであった。だが海賊やテロリストを相手にするには一定の数が必要である。その一定の数を集めるのに彼等は苦心しているのである。
「そういえば連合軍の主な仕事は災害派遣でしたな」
「そうだ。わしもこの前行ったぞ」
サチフはそれにそう答えた。
「ヤルカンド星系の第七惑星でな。あそこで津波が起こったのだ」
「ああ、あれですね」
「大津波でな。万単位の被災者が出た。死者も百人を越えた」
「大きな被害が出たとは聞いておりましたがそこまで」
「行った時は酷かったな。あらためて津波の怖ろしさを知った」
サチフはその髭だらけの顔を岩の様にさせてそう言った。その時彼の目にはあの時の破壊された街や災害から投げ出されてしまった被災者の姿が浮かんでいた。それは彼の脳裏からも離れなかった。
「わしがサハラでいた星は穏やかな海が広がっていてな」
「はい」
「あそこまでの津波は見たことがなかった。わしが来た時にも津波が起こった」
「そしてどうなりました」
「それは止めることが出来たがな。事前に堤防を作っておいたので」
「それはよかったですね」
ジナールはそれを聞いて少し安心した顔になった。
「やはり被災者は少ない方がいいです」

「うむ。そして災害救助だが」
「はい」
「その時は上手くいった。わし等より連合軍の正規軍の方がそうした活動には慣れているようだったな」
「今までそれが彼等の主な仕事でしたからね」
ジナールはそう答えた。連合軍は設立以前から災害に関しては各国であたっていたのである。中央政府の要請で災害派遣に赴くことが多かった。連合軍設立前から彼等は中央政府のある程度の統制下には置かれていたのである。だがそれは中央政府に属してはおらず国防省もなかった。そうした意味で彼等は連合軍ではなかったのである。
「そうだな」
サチフはここでまた頷いた。
「やはり慣れということか」
「はい。あと宇宙海賊の征伐も彼等は慣れておりますね」
「そうだな。軍とは戦争の為以外にあるのではないのだな」
「そういうことですね。それにしても」
ジナールはここでややうんざりした顔を作った。
「書類の多さには確かに参りますが」
「そうだな、本当に」
彼等はそう言って顔を見合わせた。そして港に入った。既に占拠がはじまっていた。これで惑星は完全に連合軍のものとなったのであった。
惑星は完全に連合軍のものとなったが宇宙はそうではなかった。連合軍はなおもエウロパ軍と戦闘を続けていた。
「しぶとい奴等だ」
マシュハドは前にいるエウロパ軍を見てそう呟いた。顔に苦味が走っている。
「そうですね。ですがあと一押しかと思います」
ワフラが彼に対してそう言った。見ればエウロパ軍はその数を大

きく減らしている。まともに戦闘に参加できる艦艇は全体の半数程にまでなっていた。

## 第九部第二章　虚の兵士達その十九

「そうだな」
マシュハドはそれを聞いて頷いた。彼にも今のエウロパ軍がどのような状況にあるかよくわかっているのである。
「それではケリをつけよう」
「はい」
ワフラはその言葉に頷いた。
「ティアマト級巨大戦艦前に出よ」
「了解」
それを受けて百隻のティアマト級巨大戦艦が一斉に前に出た。そしてエウロパ軍に狙いを定める。
「巨砲の一斉射撃に入る」
「了解、巨砲発射用意」
指示が繰り返される。それを受けて巨砲の照準が定められる。
「撃て！」
マシュハドの手が振り下ろされた。彼はここでアラビア語で叫んだ。それは彼等にとってごく自然な言葉であった。やはり彼等はサハラの者であるということであろうか。
巨大なビームがエウロパ軍を襲う。そしてズタズタに切り裂いた。それによりエウロパ軍はその数をさらに減らした。
「クッ、まだだ！」
しかしそれでもジェラールは怯まなかった。ダミヤーノもダメージを受けたがそれでも彼はまだ立っていた。
「後方の輸送艦隊はどうなっているか」
「ハッ」
それを受けてシリアーニが報告した。
「既にその殆どが安全な場所まで撤退しました」
「そうか」

ジェラールはその報告を受けて頷いた。
「そしてファブリチーニ司令はどうしたか」
「司令の乗っておられる輸送船も今しがた安全な場所まで退かれました。最早この星域に残っているエウロパ軍は我等だけです」
「そうか、わかった」
彼はそれを聞いてまた頷いた。
「それでは我々もそろそろ潮時だな」
「はい」
「卿等も今まで御苦労だった」
彼はここで周りの者、そして各艦の将兵達に対してこう言った。
「後は撤退だけだ。よいな」
「はい」
彼等はそれに頷いた。そして前を見据えた。
「ですが今敵がすぐ側にまで来ております」
「わかっている」
ジェラールはその言葉にも頷いた。
「ここが踏ん張り所だぞ、よいな」
「ええ」
彼等は既に配置についていた。そのうえでジェラールの次の指示を待つ。
ジェラールは動いた。迫り来る連合軍を見据えながら命令を下した。
「全軍一斉射撃！」
「はい！」
それを受けてエウロパ軍の艦艇の主砲、ビーム砲が一斉に火を噴いた。それにより連合軍の動きは止まった。だがそれは止まっただけであった。
「無駄なことだ！」
マシュハドは得意気にそう言った。先頭に立つティアマト級巨大戦艦、そして連合軍の戦艦の厚い防御の前にはそれは殆ど効果がな

かったのだ。特にティアマト級には全く効果がなく一隻も沈んではいなかった。
「この艦を沈めたくばコロニーレーザーでも持って来るがいい」
彼はニヤリと笑ってそう語った。そしてそのまま進撃を再開するように命令した。
「この程度何ということはない、行くぞ！」
彼自身の乗る艦を前に出させた。その後に黒い艦隊が続く。それはまるで死の翼のようであった。
だが一瞬といてどもその動きを停止させたのはエウロパ軍にとって大きかった。彼等にとって何よりも貴重な時間ができたからだ。
「全軍撤退！」
ジェラールはすぐに指示を下した。それを受けてエウロパ軍は一斉に反転し全速力で戦線を離脱しにかかった。最早攻撃などは考えていなかった。
「追え」
マシュハドの今度の指示は短かった。そして静かなものであった。彼は最早戦いが最終段階に達していることがわかっていたのである。
連合軍は追撃にかかった。だが速度はエウロパ軍の方が速かった。連合軍の艦艇はどれも火力と防御力に重点を置いている為速度はあまり速くはないのである。それはサハラ義勇軍のものも同じであった。彼等も連合軍の艦艇を使用しているのだ。
元々エウロパ軍の艦艇は速度が速かった。彼等はここでその速度をフルに使ったのである。脇目も振らず戦場を離脱しにかかった。そしてそれが功を為した。
エウロパ軍は無事戦場から離脱することができた。連合軍の追撃は間に合わず振り切られる形となった。それを見たマシュハドは全軍に指示を下した。
「この宙域を確保せよ」
「了解」
それを受けて連合軍はニーベルング星系の宙域を掌握しにかかっ

た。その際残っている敵を探すのも忘れてはいなかった。そこには大勢の負傷兵もいた。連合軍は彼等をまず保護した。
「どうしますか」
参謀の一人がマシュハドに尋ねた。
「エウロパ軍の捕虜がかなり拘束されておりますが」
「保護せよ」
彼は一言そう言った。
「連合軍の軍律にあるな。捕虜は武装を解除した後丁重に扱うようにと。決して非人道的な行為を加えてはならない、とな」
「はい」
「そういうことだ。まずは身柄を確保して傷の手当て等をしてやれ。そして頃合いを見て安全な場所にまで送るようにな」
「わかりました」
その参謀は頷いた。これでエウロパ軍の捕虜の処遇は決定した。
その時彼等の後ろに影が現われた。
「やっと来ましたな」
「ああ」
サチフとマシュハドはモニターを見上げてそう話し合った。そこには友軍が映っていた。彼等は今ブラウベルグ回廊を出てこちらに向かっていたのである。銀河を埋め尽くさんばかりの大軍がそこにいた。
「戦いが終わった時に来るとはな。運のいい奴等だ」
「ですね。まあこの戦いにおける功績は全て我々のものとなりますからいいですが」
「彼等に伝えておけ。既にニーベルング星系は完全に掌握した、と。よいな」
「ハッ」
サチフは敬礼してそれに応えた。それを受けて連合軍の本軍はニーベルング星系に入った。これも以ってニーベルング星系における戦いは集結した。連合軍とエウロパ軍のはじめての戦いは連合軍の

勝利に終わった。だがそれはサハラの者の手によるといういささか複雑なものであった。

参加兵力は連合軍百個艦隊、無人艦隊は三百個、人員にして一億五千万、その全てがサハラ義勇軍であった。対するエウロパ軍は百個艦隊、参加兵力は艦隊、惑星合わせて一億八千万であった。俗にニーベルング要塞群攻防戦と呼ばれるこの戦いはエウロパ軍の完全敗北であった。エウロパ軍は要塞群から撤退しただけでなく兵力の四割近くを失った。そして連合軍はエウロパ侵攻の足掛かりを手に入れたのであった。彼等はニーベルング要塞群に進駐するとその機能を修復させ、そこに物資を集結させた。そしてそこからエウロパの各方面への侵攻を開始したのであった。全ては予定通りであった。

## 第九部第三章　進撃その一

### 進撃

ニーベルング要塞群を確保した連合軍はそこから進撃を開始した。彼等はそこから半円を描く様にしてエウロパ領内に進撃を行った。その先頭にはサハラ義勇軍がいた。

「前方に敵艦隊発見！」

すぐに報告が入る。すると黒い艦隊は一直線に進むのであった。

「攻撃開始！」

「了解！」

それを受けてティアマト級巨大戦艦の巨砲が火を噴く。そして砲艦、ミサイル艦の一斉射撃が続く。これによりエウロパ軍はその数を大きく減らした。だがそれで終わりではないのだ。

「戦艦、前へ！」

戦艦や巡洋艦が前に出る。そして一斉射撃の後砲艦、ミサイル艦の援護を受けながら進む。駆逐艦も一緒である。

エウロパ軍の攻撃は殆ど通用しない。先の攻撃で数を減らしており、また連合軍の艦艇のバリアーを貫けないでいた。そして彼等は為す術もなく突撃を受けたのであった。

駆逐艦の魚雷が放たれる。空母から艦載機が出る。そしてエウロパ軍は総崩れとなった。

「反撃だ！こちらも艦載機を出せ！」

「ハッ！」

その艦隊の司令の言葉を受けてエインヘリャルが発進される。だがそれは連合軍の圧倒的な数のタイガーキャットに阻まれる。彼等は同時に複数の目標にミサイルを放つことが可能なのだ。

「いけ！」

ミサイルが放たれる。それで一度に複数の機が炎と変わる。それをかいくぐっても運命は同じであった。護衛艦が彼等の前にいた。

「対空射撃、はじめ！」
護衛艦の対空ビーム、そしてミサイルが敵を撃つ。そして彼等はまたもや炎と変わった。そして気付いた時には彼等は全滅していたのであった。残る艦艇も次々と撃破されていく。連合軍の攻撃は執拗であった。エウロパ軍の艦隊は最早艦隊と呼べるものではなくなっていた。
「旗艦を狙え！頭を潰せば敵は混乱するぞ！」
それでも諦めない司令は攻撃の指示を下し続ける。そして目の前にいる巨大戦艦に対し集中攻撃を命じた。
「撃て！」
残った僅かの艦艇からビームが放たれる。少なくなったとはいえまだそれなりの数が残っていた。それがティアマト級に向けて攻撃を開始したのだ。これならいけると誰もが思った。だがそれは思っただけに終わった。
「なっ！」
その攻撃は全て弾き返された。ティアマト級巨大戦艦のバリアー、そして装甲はあまりにも厚かったのだ。そして戸惑っている間に反撃が加えられた。
「今度はこちらの番だな」
「はい」
その巨大戦艦の艦長が副長に対して言う。副長は微笑んでそれに応えた。凄みのある笑みであった。
「主砲、一斉発射！」
艦長の指示が下る。艦のことに関しては艦長に一任される。基本的に司令は艦隊のことを司るのであるからこれは当然であった。
その主砲が一斉にエウロパ軍に襲い掛かった。まるで光の帯の様であった。それがエウロパ軍を直撃した。
「うわあっ！」
一撃で殆どの艦が消え去った。攻撃を命令した司令も光の中に消え去った。その艦も乗組員も皆消え去った。全ては巨大戦艦の攻撃

に拠るものであった。
「引け！引け！」
僅かに残った艦はそれを見て一斉に逃走を開始した。それは最早形のある撤退ではなく逃走であった。彼等は算を乱して戦場から逃げ出した。
「敵が逃げております。如何なさいますか」
「追え」
先程攻撃を加えた巨大戦艦に乗っていた司令は幕僚の言葉にそう答えた。その顔には満面の笑みがあった。
それを受けて追撃が開始される。彼等はすぐに全艦拿捕されてしまった。
「捕まえましたな」
「うむ」
司令は鷹揚に頷いた。そして言った。
「連合軍大将マフメット＝アッサルームの名において彼等に伝えよ」
「はい」
「降伏せよ、とな。よいか」
「わかりました」
それを受けて降伏勧告が下される。それを受ける形でエウロパ軍は彼等に対し降伏した。それを見てアッサルームはまた笑った。
「これでよし。しかし」
「しかし？」
若い幕僚が彼に尋ねた。
「エウロパの貴族というのも不甲斐無いな」
アッサルームはそう言って勝利の笑みを浮かべていた。若い幕僚もそれを受けて笑った。
「全くです」
彼等は難民となった恨みを忘れてはいなかった。それを今戦場で晴らしているのであった。彼等はエウロパの貴族達を追って戦場を駆け巡っていた。戦いは彼等の獅子奮迅の活躍ばかりが伝えられた。

エウロパ軍はただ敗北を重ねるだけであった。
「義勇軍の活躍はいいことですが」
八条はその報告をアメリカ領アラスカ星系で聞いていた。今ここで各国の首脳会議が行われているのだ。議題はエウロパとの戦争に関してであるので彼は中央政府の代表の一人として出席しているのである。キロモトも一緒であった。
彼は今アラスカ星系の第四惑星の海岸にいた。この星系は人が住める惑星が三つある。そのうちの一つに彼は今いるのである。
海には何やら巨大な海棲生物がいた。白っぽい背中を出してぷかぷかと浮かんでいる。時折鼻を出して呼吸をする。海岸にはペンギンに似た鳥が大勢動き回っていた。
「正規軍はあまり戦ってはいないようですね」
「どうやらそうみたいね」
その隣には伊藤がいた。彼女も日本の首相として列席していたのだ。彼女は八条にそう答えながら海とそこにいる生物達を見ていた。
「ところでここにいる動物だけれど」
「はい」
「珍しい生き物ね。どれも地球ではもういないのに」
「そうですね」
八条はその言葉に頷いた。
「どれもね。残念な話ですが」
「そうね」
八条も伊藤も寂しい顔をした。
「あれは残念な話だわ」
「はい」
今彼等の目の前にいるのはステラーカイギュウとオオウミガラスであった。どれもかっては地球にいたものと同じ種類である。星によっては地球と酷似している星もある。そういった星では地球にいる生物と同じ進化を遂げ、同じ種類の動物がいる場合もあるのだ。
このアラスカ星系第四惑星は地球の寒帯、冷帯に生息する生物が多

い。正式な名称は当然地球のそれとは異なるが生物の種類としては同じなのである。連合にはこの他にも恐竜がいる惑星や両生類ばかりの惑星もある。巨大な昆虫がいる惑星、マンモスやオオツノシカ等古い種類の哺乳類がいる惑星もある。当然アノマロカリスやそういった古代の生物がいる惑星もあるのである。

このステラーカイギュウは十八世紀にロシアの探検隊がベーリング海峡付近で発見した海牛類の仲間である。普通海牛類といえば熱帯、若しくは亜熱帯の海や川に住むがステラーカイギュウは北方の冷たい海に棲む非常に珍しい種類の海牛であった。かなり大きく八メートルを超えるものまでいた。だが性質は極めて大人しく海岸に近い場所で藻を食べて暮らしていた。仲間意識が強く互いに助け合う性質も持っていた。そして人間も恐れなかった。人間というものに対して知らなかったせいであろうか。

だがそれが禍いした。その肉と皮に目をつけた人々によって乱獲された。そして発見から僅か二十七年で絶滅してしまったのだ。だがそれ以後も発見は続いた。そして二十一世紀にはようやく生存が確認されたが彼等はすぐに全て水族館に送られてしまった。こうして野性のステラーカイギュウはいなくなってしまったのだ。

オオウミガラスはより悲惨であった。その肉と卵に目をつけられ乱獲された。このかってはペンギンと呼ばれた愛嬌のある生き物もまた食料とされたのだ。そして個体数が減ると貴族や博物館にその剥製が求められた。希少だからという理由である。オオウミガラスは北氷洋近辺にいたがその当時のヨーロッパ人にはまだ環境保護という概念がなかったのである。人間とは経験してはじめて何かを知るものである。時には失ってからようやく気付く時もある。それを愚かと断言して終わるのは至極簡単なことだが人間はそれだけでは終わらないのである。愚かではあるが考え、常に前に進もうとするのもまた人間である。この当時のヨーロッパ人も同じであった。所詮その時の価値観で過去の人間を批判することは自らを優位に置き他者を貶める行為に他ならないのだ。

話をオオウミガラスに戻す。この生き物の絶滅が確認されたのは十九世紀の中頃であった。人々が環境、生態系の保護について真剣に考え取り組むようになるのはそれからかなり後のことであった。あと一世紀遅ければ彼等は僅かながら生き残っていたかも知れないのだ。

「さっきあそこでイッカクがいましたよ」

「まあ」

鯨の仲間で寒い海に棲む。オスは牙が発達した長い角を持っているのである。

「ここの海はいいですね。もう地球では滅多に見られない、もういない生き物がいるんですから」

「そうね」

伊藤は八条のその言葉に頷いた。

「絶滅が確認されるとおもういなくなったって諦めるんだけれど」

「けれど別の星にいた。再会ってやつでしょうか」

「そうでしょうね。再会だわ」

伊藤は前でのんびりと食事を採っているステラーカイギュウと前をヒョコヒョコと歩くオオウミガラスを見ながら静かに言った。普段の知的な様子はなく穏やかで優しい顔をしていた。そうした顔も持っているということである。

## 第九部第三章　進撃その二

「地球にいる間は思いもしなかったことだけれどね」
「はい」
「また会うことができた彼等を今度は失いたくはないわね」
「そうですね」
八条はそれに同意した。
「ただやはりバランスというものがありまして」
「バランス？」
「はい。数が増え過ぎたら他の場所に移動させたりはしていますね。ここにはシャチもいますからそういった心配はあまりありませんが」
「シャチもいるの」
「ええ。地球のものと同じものがね」
シャチは鯨の仲間である。鯨科の中ではとりわけ獰猛な種類であり様々な海の生物の天敵である。イルカやクジラ、そして当然ステラーカイギュウやオオウミガラスも食べる。アシカやオットセイも食べる悪食な生物である。さらに鯨科なので頭もいいという厄介な生物である。身体も大きく、これで人間も食料とみなしていたならば海はより危険な場所となっていたであろう。だが鯨は人を襲わない。それが鮫や恐竜とは違う点である。
「それでかなりの数の調整ができています」
「それはいいことね。自然のサイクルは崩れては駄目だから」
「ですね。あと我々もそれに一役買っています」
「わかるわ」
伊藤はそれを聞いてにこりと笑った。
「そろそろお昼だしね」
「はい」
「じゃあ行きましょうか。あそこのレストランだったわね」
伊藤は遠くに見えるレストランを指差した。岩場の上にあった。

「ええ。予約しておりますので」
「それじゃあ行きましょ。あ、そうそう」
「何でしょうか」
八条は伊藤の言葉に反応して声を送った。
「佐藤君の一緒だけれどいいかしら」
「ええ」
八条はそれに頷いた。
「私の方は構いませんよ。将来の日本の首相との同席は」
「ふふふ」
伊藤はそれを聞いて面白そうに笑った。
「マスコミやネットじゃ君達はライバルになってるわよ。将来の首相候補としてね」
「首相ですか」
八条はそれを聞いておかしそうに笑った。
「私は柄ではないと自分では思っていますが」
「どうしてかしら」
「私はどちらかというと官房長官に向いていると思うのですよ。佐藤防衛相は首相向きで」
「あら」
佐藤は強力なリーダーシップの持ち主として知られている。アバウトなところもないわけではないが決断力に富み、そして行動的である。まず行動ありきという人物なのである。
それに対して八条は考えるタイプであり、また慎重だ。そして事務仕事が得意である。安定感もかなり高い。二人はそうした意味で全く異なるタイプの政治家であるのだ。
「首相はどう思われますか」
「八条君に山下さんみたいなことが出来るかしら」
「官房長官みたいにですか」
「そうよ」
伊藤はそれに対して答えた。現在の日本の官房長官は山下実盛と

いう。銀行員に似た生真面目そうな外見の男であり
一見地味である。だが実際はかなり性格が悪いことで各国では有名な男である。
他の国が経済や通商のことで日本に抗議をしてきたとする。そうした場合に出て来るのがこの男なのである。
「おや、またいつもの御言葉ですか」
実際に会見でそう言うのである。口調はあくまで穏やかであるがその態度は馬鹿にしきったものであるのは言うまでもない。
「いつも飽きませんね、全く」
そして鼻で笑う。こうして他国の抗議を一笑に付すのだ。そうしたあしらいの巧さで知られている。国民には人気があるが他国からは嫌われている。マックリーフは彼のそうした行動を見てこう言ったという。
「うちの特別補佐官に欲しいな」
「全くです」
それに答えたのは当の大統領補佐官であった。彼ですらそう思ったのである。
歳は伊藤よりやや上である。その為伊藤も敬意を払ってさん付けしているのである。政党の中でも重鎮として知られている。
「出来ないでしょ、あそこまでは」
「確かに」
八条はその言葉は認めた。だが反論は忘れなかった。
「しかし官房長官にも多くのタイプがありますね」
「ええ」
「それでは私は私の官房長官を目指しますよ。なりましたらね」
「期待しているわ」
伊藤はそれを聞いて微笑んでそう言った。その時風が吹いた。
「冷たい風ね」
「ええ」
伊藤の黒く長い髪がそれに吹かれて動いた。八条はそれを見て黒

い絹のようだと思った。
「総理」
「何かしら」
「もう行きませんか。そろそろ時間ですし」
「あら」
伊藤はそれを受けて腕時計を見た。見れば確かにそうした時間であった。
「そうね。じゃあ行こうかしら」
「行きましょう。ここのメニューは面白いですよ」
「面白い・・・・・・。何が出るのかしら」
「ここでしか味わえない特別な料理だそうです」
「それは楽しみね」
「はい」
こうして二人はレストランへ向かった。そこへ丁度佐藤も来た。当然彼等は車でありガードも一緒である。
「どうも、長官殿」
「こちらこそ、閣下」
佐藤と八条は互いに笑みを浮かべて挨拶を交わした。二人は同じ歳であり政治家になったのも同じ選挙においてであった。そうした意味でも二人はライバルといえた。だがその関係は険悪といったものではない。言うならば同級生同士といったところであろうか。二人の笑みはそうした友人との挨拶の笑みであった。
「それでは行きますか」
「ええ」
三人は個室に入った。これも警備の為である。そうした警備が必要なのは残念ながら事実であった。世の中にはよからぬことを考える輩もいないわけではないからである。こうした国際会議の場においてはとりわけそうであった。

## 第九部第三章　進撃その三

三人はテーブルに着く。そして店のマスターが直々に出て来た。そしてメニューを紹介した。
「ところで御聞きしたいのですが」
白いアメリカ風の造りのレストランであった。カーテンやテーブルもそうである。やはりアメリカの星系でありそれは当然と言えば当然であった。伊藤はそのテーブルでマスターに尋ねた。
「何でしょうか」
白い髪を後ろに撫で付けたダンディな風采の男であった。鼻は高く肌はやや黒い。目は鳶色であった。
「ここでは面白いメニューがあるそうですが」
「はい、あれですね」
彼はそれを聞いて答えた。
「ステラーカイギュウのステーキとオオウミガラスのテリーヌですね」
「ステラーカイギュウの」
「ええ」
マスターはにこりと笑ってそれに頷いた。
「このレストランの人気メニューですが。如何でしょうか」
「ええと」
つい先程海に浮かび足下を歩いていた生き物の料理である。流石にそれを聞いて驚かずにはいられなかった。
八条はそれを知っていたようである。驚く伊藤を見て微かに笑っていた。
「それは本当でしょうか」
「ええ」
少し的外れな質問をしてしまった伊藤に対してマスターはやはりにこやかに笑って応えた。

「ステラーカイギュウは子牛に似た味です。そしてオオウミガラスは卵も人気がありますよ」
「そうなのですか」
「ええ。どうされますか」
「ええよ」
伊藤は珍しく困った顔をしていた。メニューを見せられたがやはり戸惑っていた。だがここですぐにいつもの冷静さを取り戻した。
「待って下さい」
「何でしょうか」
「このジャコウウシのステーキですけれど」
「はい。それもここにいるものです」
マスターはそう答えた。
「これはどうなのでしょうか」
「肉は固いと言われますし癖のある匂いですがいけますよ」
「そうなのですか」
「どう為されますか。今でしたらTボーンステーキもできますよ」
「そうですね」
伊藤は問われて考え込んだ。そして八条と佐藤に尋ねた。
「貴方達はどう思うかしら」
「私達ですか」
「ええ」
伊藤は答えた。
「どちらがいいと思うかしら。ステラーカイギュウやオオウミガラスとジャコウウシと」
「難しい質問ですね」
まず佐藤がそう言った。
「実はどれも食べたことがありませんでして。ちょっとお答えかねます」
「そう。じゃあ八条君はどう思うかしら」
「私ですか」

「ええ」
「そうですね」
八条は問われて考え込んだ。そして言った。
「私はシーフードは好きですが」
実際に彼は海にあるものは好きである。海老や烏賊、魚も好きである。とりわけ刺身や寿司は好物だ。天麩羅も嫌いではない。
「ただ今はステーキを食べたいと思っております」
「どうしてかしら」
「その時の気分ですよ。それに」
「それに？」
「このステーキのサイズを御覧下さい」
彼はここで伊藤と佐藤にステーキのメニューを詳しく見せた。そこにはサイズまで書かれている。
「まあ」
「これは凄い」
二人はそれを見て声をあげた。何と六百グラムもあるのだ。
「たまにはこうした厚い肉を食べてみたいですからね」
「そうん。日本ではあまりそうした肉は食べられないからね」
「どちらかというと上品ですな」
日本においてはあまり量の多い食事が出ることはない。どちらかというと一つ一つの料理は少なく、数が出るのである。肉料理にしてもそれは同じであった。
「たまにはこうしたワイルドなものもいいと思うのですが」
「そうね」
「ではそれにしますか。当然Tボーンで」
「畏まりました。それではソースは如何致しますか」
三人はそれぞれ別々のソースを頼んだ。伊藤は和風ソースを、八条はアメリカンソースを。そして佐藤はオニオンソースを頼んだのであった。
「三人共違うソースとはね」

「そうしたものですよ」
伊藤に対して佐藤は笑ってそう応えた。
「けれどそちらの方がいいでしょう。シェフは大変ですが」
「そうね。個性が出て面白いかもね」
「そういうことです。それにしてもジャコウウシのステーキを食べることになるとは思いませんでしたね」
「まあ私はこうなるとは思っていましたけれど」
「何故かしら」
伊藤は八条に問うた。
「いえ、あの時総理はステラーカイギュウとオオウミガラスを御覧になっておられましたね」
「ええ」
「その時に思ったのですよ。おそらくレストランではこのメニューは頼まないだろうな、と」
「読んでいたのね」
「僭越ですが。けれど当たってますね」
「私にとっては残念なことだけれどね」
伊藤は今度は苦笑いをして言った。
「読まれるなんて。まさかとは思うわ」
「そうでしたか」
「ええ、そうよ」
伊藤はそう答えた。
三人はジャコウウシのステーキを食べた。ステーキを食べ終わると今度はデザートが出た。薔薇のプティングだった。
「薔薇の」
「そうみたいですね」
三人はそれを見て互いにそう言った。それは深紅のプティングであった。
スプーンでとり口に入れる。甘みと香りが口の中を支配した。三人はそれを味わい目を細めた。

「美味しいわね」
「ええ」
彼等は口々にそう言い合った。そしてそれをまた口に入れた。
「プティングもいいわね。実はあまり食べたことがなかったのよ」
「そうなのですか」
八条と佐藤はそれを聞いて言った。
「ええ。実はお菓子はあまり好きじゃなくて」
「そうでしたっけ」
「果物は好きだけれどね。お菓子はあまり好きじゃないのよ」
「けれど和菓子はよく食べられますよね」
「それはね」
伊藤はそれに答えた。
「和菓子は別なのよ。何故かわからないけど」
「そういうものですか」
佐藤はいささかわからないといた感じであった。
「私は和菓子もこうしたお菓子も好きですけれどね」
「好みってやつかしら。八条君はどうかしら」
「私ですか」
「ええ」
伊藤はここで八条に話を振ってきた。彼はそれに応えた。
「和菓子はよく食べるわよね」
「はい」
「じゃあこうしたプティングとかはどうかしら。好き？」
「そうですね」
彼はそれを受けて答えた。
「嫌いではありません。どちらかというと好きですね」
「そう」
伊藤はそれを受けて頷いた。
「意外ね。そういえば君はあまり日本酒は飲まないわね」
「はい」

「ワイン派だったかしら」
「あとビールですね」
彼はそう答えた。
「実は日本酒は口に合わなくて」
「そうみたいね」
「はい。ですから和食の時は白ワインですね」
「それって合うのかい？」
佐藤が彼に尋ねた。
「和食には日本酒だろう」
「いや、これが結構合うのです」
八条はそう返した。
「一度試されてはどうですか。いけますよ」
「ふむ」
佐藤はそう言われ考え込んだ。そして答えた。
「わかった。一度やってみよう」
「是非どうぞ」
そうこう話している間にプティングを食べ終えた。そして彼等はレストランを後にした。そこには薔薇と肉の香りがたちこめ漂っていた。

## 第九部第三章　進撃その四

三人はそのまま会議場に向かった。そこはアラスカ星系議会の会議室であった。彼等はそこでそれぞれ首脳、そして閣僚に別れて話をすることになっていたのだ。八条は連合中央政府の代表として首脳会議に列席した。そこには連合三百国の首脳達が集まっていた。

「さて」

今年の連合議長国であるザイール共和国の国家主席であるムワミ＝サガモが最初に口を開いた。赤い髪の中肉中背の黒人である。彼は高い声で言った。

「それでは会議をはじめたいと思います」

「はい」

一同それに頷いた。伊藤は円卓の中の一つ、そして八条はサガモの横にいた。彼は中央政府の代表として敬意を払われての席の場であった。

「まず議題について説明致します」

サガモは説明を続ける。

「今回の会議の議題はエウロパとの戦争についてであります」

「はい」

皆それに頷いた。

「只今戦争の流れはこうなっております」

ここで円卓の中に立体映像が映し出される。それはエウロパの三次元立体地図であった。

「まず」

サガモは席を立った。そしてレーザーでエウロパのある部分を指し示した。

「我が軍は最初にニーベルング要塞群を陥落させました」

「サハラ義勇軍と無人艦隊の力で、ですね」

「はい」

サガモはアメリカ大統領マックリーフの言葉に答えた。見ればマックリーフの青い目が彼と八条を見据えていた。
「連合軍の本隊は戦いに参加しなかったのですか」
「彼等が戦場に到達した時にはもう戦闘は終了しておりました」
八条がそれに答えた。
「それ故戦闘には参加することがなかったのです」
「それは聞いております」
マックリーフはそう答えた。
「ですが一つ御聞きしたい」
「はい」
やはり弁護士出身だけあってその質問は鋭いようである。また執拗であった。
「今回の作戦はかなりの部分を長官が立案されておられるそうですが」
「はい」
八条はそれを素直に認めた。内心ではそこまで調べているアメリカの調査能力とそれを各国の首脳達の前で堂々という力の誇示にいささか思うところがあったがそれは言わなかった。
「それでは無人艦隊もサハラ義勇軍を軍の先頭に出すことを考えられたのも長官でしょうか」
「少なくとも決定したのは私です」
彼はそう答えた。
「私がその作戦の方針を決定しました。これは事実です」
「そうですか」
マックリーフはそれを聞いて頷いた。だが質問はそれで終わりではなかった。
「長官はサハラ義勇軍を連合軍正規部隊の楯にされているのですか」
「楯」
「はい」
マックリーフは答えた。

「今も進撃の先陣を務めていますね、彼等は」
「ええ」
「そして主に戦っているのは義勇軍です。当然その損害は正規軍に比してかなり大きいものになります」
「実際にそうですな」
李がここで言った。
「正規軍には今のところこれといった損害は出ておりません」
これは事実であった。正規軍二千個艦隊は進撃を続けているがその前には義勇軍がいる。彼等は戦闘を殆どすることがなく実際の戦闘は義勇軍が行っていたのである。彼等は占領地の確保と後方支持が主な任務となっていた。
「それは本来喜ばしいことなのですが」
「ですね」
李の言葉に隣にいたハシム＝ジャネンドラ首相が頷いた。黒い肌の青年であった。
「連合の若者の血が最小限で済むに越したことはありません」
「それでは問題ないではありませんか」
チェチェン連邦執政コリアノフ＝ジリノフがそれに対して言った。
「戦争をしているといえど損害が出ないならば」
「ところがです」
マックリーフはここで言った。
「損害は出ているのです。今のところ連合軍本隊には出ておりませんが」
「成程」
皆彼の言葉を聞いて頷いた。マックリーフが何を言いたいのかよくわかっているのだ。
「彼等ですね」
「はい」
マックリーフも頷いた。
「彼等の損害は既にかなりのものになっております」

「それは本当ですか？」
彼等はそれを聞いて八条に顔を向けてきた。八条はそれを受けて答えた。
「はい」
そしてそれを認めた。
「ふむ」
それを聴いてまずはサガモが頷いた。
「そしてそれはどの程度の規模なのでしょうか」
「既に五パーセントに達しております」
八条は静かにそう答えた。
「五パーセントですか」
「はい。艦艇の損傷はその程度です」
「人員は」
「それを少し下回る程度ですが。戦死者は多くはありません」
「ならばよいのですけれどね」
サガモはそれでよしとした。
「戦死者が出なければ」
「いや、それは違いますな」
だがそれに李がクレームをつけてきた。
「戦死者の問題ではないのです」
「では何なのでしょうか」
伊藤が彼に問うてきた。李は彼女を見た。
「義勇軍に損害が集中していることです」
「それは致し方ないのでは」
ロシア大統領グリーニスキーがここで出て来た。彼はここは日本につくことにしたようである。それを見て各国の首脳達のうち何人かが目の色を変えた。
「致し方ないと」
「はい」
グリーニスキーは李にそう答えた。

「彼等は義勇軍ですね」
「ええ」
「ならば自ら進んで戦場に赴いているのです。それならば当然でしょう」
「それは違いますな」
しかしマックリーフがここでグリーニスキーにクレームをつけてきた。首脳達はそれを見てまた目を動かさせた。
「違うと」
「そうです」
マックリーフは頷いた。
「連合軍は志願制ですな」
「はい」
これは各国の軍に分かれていた頃からであった。連合では海賊やテロリストへの対処、災害救助等が主な仕事であった為にそれ程数は必要なかったのである。その為に志願制でも充分であったのだ。それよりも個々の将兵の質を重要視したというのはお題目ではあるが。
「それならば正規軍も前線に立たなくてはならないのではないですかな」
「ふむ」
だがグリーニスキーはそれを受けても平然としていた。
「違いますかな」
「残念ですが」
まず彼はそう前置きをした。
「私はマックリーフ大統領とは異なる考えです」
「どういった御考えですかな」
マックリーフはそう言ってグリーニスキーを見据えた。
「宜しければお答え願えますかな」
「はい」
彼はそれを受けて答えた。

「志願制と義勇軍は違うのです。確かに彼等は連合の市民権を持っております」
「はい」
「ですが難民であることに変わりはありません。それは厳然たる事実ですね」
「否定はしません」
それを否定することはできなかった。マックリーフは頷いた。

## 第九部第三章　進撃その五

「彼等が本当の意味で市民権を手に入れるのはそれなりの業績が必要ではないかと思います」
「その為に血を流すべきだと仰るのですか？」
「そう受け取られても構いません」
グリーニスキーは自分の言葉を否定しようとはしなかった。
「ですがこれは事実です」
「それだけではないでしょう」
ここでイスラエル大統領ヨブ＝フェレスが口を開いた。
「彼等は進んで前線に赴いているのですね」
「はい」
八条がそれに答えた。
「事前に本人達に確証をとております。義勇軍は常に臨戦態勢にある、と。そして有事には最初に敵に向かうということも」
「そうですか」
フェレスはそれを聞いて頷いた。
「御存知とは思いますが」
それから話をはじめた。
「イスラエルはかって彼等と長い戦いにありました」
「ですね」
それを聞く首脳達が頷いた。その中にはムスリムの国もあるが彼等も同じであった。ムスリムだからといって必ずしもイスラエルと矛を交えてきたわけではないのである。
「その時の記録はまだ我々の中にあります」
「中東での戦いの記録ですね」
「そうです。その時彼等は勇敢でした。少なくとも臆病ではなかった」
フェレスは話を続ける。

「何故なら戦いは聖なるものであるからです、彼等にとって」
「ジハードですね」
「はい。彼等は戦死したその時に天界へと行けるのです」
「それは知っています」
皆それに頷いた。
「だからこそですね。戦場に赴くのは」
「そうです。ここにもイスラムの方はおられます」
「はい」
インドネシアやマレーシアの首脳達がそれに頷いた。
「ならばおわかりだと思います」
「生憎我々は戦争とは離れておりましたがね」
「それはわかっております」
フェレスはそれでも言った。
「我々とて同じですから」
そう言ってニヤリと笑った。イスラエルはユダヤ人の国である。彼等は長い放浪と迫害を経て二十世紀にようやく国を持つことができた。だがそれが彼等の長い戦いのはじまりであったのだ。
元々はイギリスに問題があった。彼等は第一次世界大戦の時にユダヤ人の国を作ることを約束しておきながらアラブ人の自治も約束していたのである。第一次世界大戦に勝利する為の方便であったのだがそれが元凶となった。第二次世界大戦の後でユダヤ人達はシオンの地にイスラエルを建国した。それが問題であったのだ。
エルサレムはユダヤ人達にとって聖地である。だがそれはアラブ人達にとってもそうだったのだ。イスラム教はそのルーツがキリスト教、そしてユダヤ教にある。モーゼもキリストもコーランに出て来るのだ。ただしキリストは十字架にはかけられない。生きているのだ。
だからこそ彼等もエルサレムにこだわった。そしてイスラエルの建国を認めるわけにはいかなかったのだ。そしてそこにはパレスチナの民達がいたのだ。

ユダヤ人達は国を持つことができた。だが彼等のことはどうなるのか。それを見て憤ったアラブの者達は一斉に立ちあがった。そして中東戦争がはじまったのである。

この戦いは幾度も行われたが結局イスラエルはシオンの地に残った。そして彼等は宇宙の時代になっても国を持っている。だがこの戦いを経てパレスチナも国を持つことが許されることとなった。サハラには彼等の末裔もいるのである。

「あの地はかねてより色々とありましたがな」

アッシリア連邦執政ナブッコ＝サドムがそれを聞いて言った。彼はかってメソポタミアにおいて一大帝国を築いた者の末裔である。その彼が言う事には説得力があった。

アッシリアは古代に滅んでいるがその民は生き残っていたのである。二十世紀後半にはアメリカにも三万程のアッシリア系がいたのである。民族の命は時として非常に長いのである。

「ですが今我々は戦いというものを忘れてしまっているのは事実です」

「そう、それこそが問題なのです」

フェレスはそれに頷いた。

「私は軍にいたことはありません。それはここにおられる殆どの方がそうだと思います」

それは事実であった。連合において徴兵制の国はなかった。キロモトや八条のように軍人から政治家になる者もいるにはいるがそれはごく少数であった。

「ですから戦争というものを肌で知っているわけではありません」

「それは私も同じですよ、残念ながら」

ここで八条がこう言った。

「私も実戦に参加した経験はあまりありません」

「そうでしたか」

「軍歴が短いのと経補将校でしたから」

「ほう」

フェレスはそれを聴いて眉を少し動かした。
「ですが補給等のことはおわかりですね」
「ええ、まあ」
それはわかっている。だからこそ今回の戦いにおいても色々と必要なものや予算の配分がわかるのである。
「専門分野でしたから」
「そう、専門分野です」
フェレスが頷く。
「軍隊というものはとりわけそうした専門的な知識や技術が多いですな」
「ええ」
「だからこそどうしても不得意な分野になり易い。そして実戦の経験は特にそうです。実際に戦争がなければ経験も積めませんからな」
「海賊やテロリストを相手にするのとは違いますから」
ジャネンドラがそれに応えた。
「結局は経験ということですか。それなら向こうの方が遥かに上です」
「それはそうですね」
「しかし」
だがここでフェレスは顔を引き締めさせた。
「戦争は勝たなければならないし損害も出してはなりません」
「はい」
そこにいる全ての者がその言葉に頷いた。
「矛盾しますが。どちらかを優先させるとならば損害を出さないようにしたいですね」
「全くです」
「そうした意味でサハラ義勇軍の存在は大きい」
「はい」
「やはり彼等にはそうした意味での先陣を切ってもらいますか」
「彼等がそれを希望する限りはね」

「そういうことですな」
それをまとめるようにサガモが言った。
「ただ私は少し違う考えです」
「それは」
「彼等の今後です。今彼等は連合にとって多大な貢献を果たしております。それは否定できないでしょう」
「ですね。今戦局が有利なのも彼等のおかげです」
「そう。それは認められるべきです」
サガモは静かにそう述べた。
「問題はその貢献に対して我々がどう報いるかです。これは戦いの勝敗に関係なく」
「サハラへの帰還をこちらで全てまかなうというのはどうでしょうか」
それを受けてマックリーフが述べた。
「難民達を祖国へ帰すのですか」
「ええ。当然希望者だけですが。彼等の中にはサハラに帰りたい者も多いでしょうから」
「それはいいですね。ただ一つ問題があります」
「それは」
マックリーフはグリーニスキーに顔を向けた。

## 第九部第三章　進撃その六

「帰還を希望しない者に対してはどうするか、です。それを望まない者も当然いるでしょう」
「確かに」
それは予想されることであった。皆それに顔を向けた。
「彼等は既に市民権は持っています」
「はい」
「ですが今所属している国にそのまま留まるかどうかはわかりません。難民であるのは事実ですから」
「そうですね。全ては彼等が決めることです」
「そしてそれを我々は表立っては拒めないようですな。功績があるだけに」
「ふむ」
それを聞いていた李がここで言った。
「一つ考えがあるのですが」
「何でしょうか」
皆それを聞いて彼に顔を向けた。
「まだ我々には開拓されていない、若しくは開拓が進んでいない星系が多量にありますな」
「ええ、そうですが」
連合の勢力圏は広い。そこに三兆もの人間がいる。だがそれでもまだ銀河を全て開拓してはいないのだ。銀河はあまりにも広大であり人々がまだ到達してはいない星系も多いのである。そして到達はしていても開拓が為されていない星系も多いのである。
「その中の一つを彼等に譲るというのはどうでしょう」
「新たな国家を築いてもらうということでしょうか」
「そうとられても結構です」
李はジリノフに対してそう答えた。

「彼等にしても悪い条件ではないですが」
「ふむ」
それを聞いて各国の首脳達は思案に入った。そしてまずは伊藤が述べた。
「李大統領」
「はい」
「その星系は何処がいいと思われますか」
「何処か、ですか」
「はい。何か候補地として相応しい場所は知っておられるでしょうか」
「それでしたら」
ここでグリーニスキーが出て来た。だがそれを見たマックリーフ、李、そして伊藤の顔色が少し変わった。それを見た他国の首脳達も眉を動かした。
「ロシアに一つ相応しい星系があるのですが」
「何処ですかな」
マックリーフと李がそれにすぐに反応した。
「オルシャ星系です」
グリーニスキーはそう答えた。
「オルシャ星系」
「確か最近貴国の開拓地に指定さえた星系ですな」
「はい」
彼はそれに頷いた。
「まだ入植も開発も行われてはおりませんがかなり良好な星系です」
「ふむ」
マックリーフと李はそれを聞いて目を動かした。
「そこならばいいと思うのですがね」
「私はそうは思いませんな」
だがマックリーフはそれを否定した。
「何故ですかな」

「理由は簡単です。オルシャが彼等には合わないと思うからです」
「ほう」
それを聞いたグリーニスキーは内心どう思っているかわからないが眉を動かした。
「合わないと。何故なのか私にはわかりません」
「サハラは砂や岩の惑星が多いです」
「それは知っております」
「それです。あの星系は確か緑の多い星系でしたな」
「はい」
調査によればオルシャは温帯の地域が多く、そして緑も多い。開拓も容易だとの見方が出ているのである。
「素晴らしい場所ですが」
「それは我々の感覚です」
マックリーフはここでこう述べた。
「彼等がそう思うとは限らないのです」
「妙なことを仰いますな」
グリーニスキーは今度はやや不快感を表に出してきた。
「まるでロシアが移住先を提示したのが気に入られないようだ」
「まさか」
根幹を突かれはしたがマックリーフは全く動じてはいなかった。それをあっさりと聞き流した。
「そのようなことは考えておりません」
「ならば宜しいですがな」
「まあ御二人共落ち着かれてはどうですかな」
李が間に入るふりをしてきた。
「私もオルシャは彼等に合わないと考えております」
「貴方もですか」
マックリーフはそれを聞いて目の端だけで笑った。
「はい」
李もそれは同じであった。彼も目の端だけで笑った。

「それでは御二人は何処がよいと考えておられるのですかな」
グリーニスキーは彼等に尋ねた。
「そうですな」
二人は互いに目配せをし合いながら話をはじめた。ここでオーストラリア首相エレナ＝オーウェルに目をやった。彼は銀色の髪に青灰色の目、そして黒い肌を持つアボリジニーの血の濃い中年の女性であった。姓がアイルランド系なのは彼女の父方の祖父、そして名がスラブ系なのは母方の祖母のせいである。アボリジニーの血が強くとも彼女もかなり混血しているのである。
「オーストラリアに素晴らしい星系があるそうですな」
「はい」
オーウェルはそれを受けて微笑んだ。オーストラリアは最近アメリカや中国と仲がよく、日本やロシアとは少し距離を置いているのである。それはグリーニスキーもよく知っていた。彼はオーウェルを見て少し不機嫌そうな顔を一瞬だけ見せた。
「パームバレー星系のことですね」
「そうです」
マックリーフと李は彼女の言葉に頷いた。
「あそこはサハラの多くの星に酷似した気候にありますね」
「はい」
彼女はそれに応えた。
「それでいて過ごし易いそうですから」
それを聞いた各国の首脳達がまた動いた。伊藤以外の者が米中豪の三ヶ国の首脳達の方に顔を向けたのだ。しかし伊藤はそれを見てもまだ冷静なままであった。
「面白いジョークですな」
そしてグリーニスキーはそれを一笑に付した。そしてこう言った。
「要はていのいい彼等の隔離ですな」
「おやおや」
だがそれを受けてもマックリーフと李は冷静なままであった。こ

れにオーウェルも加わっていた。
「隔離とはまた妙な言葉を使われますね」
「パームバレー星系が何処にあるかは御存知ですな」
「無論です」
三人はグリーニスキーの言葉に対して頷いた。
「連合の領土の北東の端ですな。それも開拓地の中でもとりわけ僻地にあります。しかも北東の数十万光年向こうにはかなり高度な知的生命体の勢力があるという話もあります」
「ええ」
「そこに彼等を押し込めたいだけにしか思えないのですよ、それを考えますと」
「確かに今は僻地ですな」
「それは認められますね」
「はい」
李はグリーニスキーの言葉に対して頷いた。
「ですが僻地なのは今の時点では、です」
そしてこう言った。
「それに知的生命体にしろ言われているだけで本当にいるかどうかすらわかりませんな」
「それはそうですが」
「我々はあくまで彼等の生活、文化に適合した場所を提示しただけです。閣下もそうは思われませんか」
「むむむ」
返答に窮した。これで決まったと殆どの者が思った。三人はそれを見て内心ニヤリと笑った。だがここで三人はもう一人いることを忘れていた。

## 第九部第三章　進撃その七

「お待ち下さい」
ここで伊藤が口を開いた。
「伊藤首相」
「御三方の言われることはわかります」
彼女は静かな声でそう語った。各国の首脳達の目が彼女に集中した。三人はそれを見て流れが変わるのではないか、と思った。そして危惧を覚えた。
（しまったな）
（彼女の存在を忘れていた）
「ですがこれは強制になるのではないでしょうか」
「強制」
「はい」
伊藤はその言葉に対して頷いた。
「彼等のことは彼等が決めるべきではないでしょうか」
「彼等がですか」
「そうです。彼等は確かに難民です」
彼女はここであらためて彼等が難民であｒことについて言及した。
「ですが同時に連合の市民権も持っております」
「はい」
「連合においては連合市民である限りその移動は自由な筈です。これは中央憲法においても定められていることであります」
「確かに」
それは連合憲法第九十七条に明記されていることであった。伊藤は政治学者出身であるが法についても明るいのである。
「それに従いますと彼等の建国先をこちらで勝手に決めるのはよくはありません。今まで新国家の建国は彼等がそれそれまだ誰もいな

い星系において行われてきましたね」
「ええ」
その通りであった。連合においては新国家が建国される時はまず発見された星系でどの国も領有を宣言していない星系を指定してそこと中央議会において建国を宣言するのである。それが中央議会、そして各国の首脳の間で認められ建国となるのである。手続きはかなり複雑で根回しも必要な部分があるがそもそもそうしたこともクリアーできなくては国家の運営自体がままならないのである。だが何処に国を置くかどうかは彼等に任されるのである。それが連合のやり方であった。
「今回もそうすべきではないでしょうか」
「今回もですか」
「はい」
伊藤は頷いた。
「そうした意味で私はグリーニスキー大統領にも御三方にも賛成することはできません」
「ふむ」
各国の首脳達はそれを聞いて考え込んだ。
「ただ一つ問題があります」
だがここでサドムが口を開いた。
「何でしょうか」
伊藤はそれに対して問うた。
「今まで新国家が建国されたのは連合の中においてでした」
「それはわかっていますが」
それを聞いて中にはサドムが何を言いたいのかわからない者もいた。それは連合にとっては至極当然のことであり最早言うまでもないことであったからだ。
「今回は少し事情が異なります」
「といいますと」
「はい。今までは連合市民が建国しておりましたが今回は少し事情

が違います。彼等は難民なのですぞ」
「今までとは違うと仰りたいのですね」
「その通りです。今までは国家経営のノウハウも知っている者が国を興し、そして立ててきたということもありますが」
ビジョンなくして国家の建国、そして経営はできない。それは企業においてもそうであるしどんな組織においてもそうであった。それは最早常識と言ってもよいことであった。
「果たして彼等にそうしたノウハウを持っているかどうか。それが問題です」
「軍人はおりますがね」
「軍人だけでは国家は経営できませんよ」
「おられますよ」
だがここで伊藤が言った。
「それは！？」
首脳達はそれを聞いて一斉に彼女に顔を向けた。
「伊藤総理、それは本当ですか！？」
「はい」
伊藤は知的な笑みをたたえてその問いに頷いた。
「彼等の中一人建国のリーダーに相応しい方を知っております」
「それは誰なのですか」
「是非教えて下さい」
彼等は口々にそう言った。そして伊藤に詰め寄らんばかりであった。八条はそれを見て心の中でふと思った。それは一体誰なのだろうと。彼にも心当たりはなかった。だが彼は伊藤がはったりを言うような者ではないことをよく知っていた。彼女が言うからには必ず何かしらの根拠があるのだ。だがその根拠が何か彼はわからないのである。
「宜しければ我々に教えて頂きませんか」
「わかりました」
伊藤はそれに応えて頷いた。それから言った。

「ハールーン＝マーシャル氏です」
「ハールーン＝マーシャル氏」
「はい」
殆どの者はその名を聞いても首を傾げていた。だがマックリーフ、李、そしてグリーニスキーの三人は違っていた。その名を聞いた時三人の目が微かに動いた。
（彼を担ぎ出すか）
（まさかとは思ったが）
三人はそれぞれ同じことを考えていた。そしてそれを聞きながら伊藤に顔を向けた。
「それは一体誰なのですか」
オーウェルが伊藤に尋ねていた。それを見て三人はそれぞれ頷いた。彼等自身が尋ねるとこの時は何かと不都合がありそうだからである。よい時に尋ねてくれたと思った。
「かってカリム王国で内務省におられた方です」
「内務省で」
「はい。連合ではあまり知られてはおりませんでしたがカリムにおいては名のある方でした」
「そうだったのですか」
だがオーウェルはそれを聞いてもまだ首を傾げていた。彼女もよくは知らない名前であったからだ。そもそもカリムと連合はこれといって深い関係にはなかったのである。連合と関係の深いサハラの国はハサンとその属国達、つまり東方の諸国に集中しているのである。だから北方については知識が乏しいのだ。
「それでその方はカリムの内務省において何をしておられたのですか」
「内務官僚として務めておられました。的確な判断と事務処理で将来を渇望されておりました。しかし」
「カリムが滅亡してしまたと」
「そういうことになります」

伊藤はここで沈んだ声を出した。カリムもまたエウロパによって滅ぼされた国の一つであったのだ。
「そして彼もまたサハラを出ることとなりました。そして連合に流れてきたのです」
「その方を新国家の指導者に推されるのですね」
「はい」
伊藤は答えた。
「私はマーシャル氏こそ相応しいと思いますが」
「ふむ」
首脳達はそれを聞いて考え込んだ。考えると同時に伊藤とマックリーフ、李、グリーニスキーの四人をそれぞれ見た。見れば彼等は互いに表情を消していた。明らかに何か考えていた。
だがそれは暫くして終わった。まずはグリーニスキーが口を開いた。
「伊藤総理」
「はい」
「そのマーシャル氏ですが」
「御存知でしょうか」
「いえ、残念ながら」
彼はここであえてとぼけた。知らないふりをすることにしたのだ。これは伊藤へ探りを入れる為であった。八条はそれを見て目を光らせた。
「生憎サハラの北のことは詳しくありませんので」
「そうだったのですか」
伊藤はそれに頷いたがそれが嘘であることはわかっていた。ロシアは北方各国と関係を深めていた時期があったのである。よく力技のみと言われ器用さに著しく欠ける外交を展開するロシアだが時折そうした細かい外交をできる人物が出て来るのである。だがそれは大抵一代限りであり殆どは力技のみの外交を展開する。尚このグリーニスキーも力を好むことで知られている。

「ですがあえて御聞きしたい。そのマーシャル氏は建国のリーダーに相応しいのでしょうか」
「私はそう見ております」
「そうですか」
「はい」
伊藤は優雅に笑ってそれに応えた。知的な印象の強い彼女であるが優雅に笑うこともできるのだ。

## 第九部第三章　進撃その八

「わかりました。それでは貴女を信じることにしましょう」
「有り難うございます」
こうしてロシアは日本につくことにした。それを見てマックリーフと李の目の色が少し変わった。首脳達はそれを見て動きがあると見た。これで連合の四大国が完全に二つに分かれたのだ。だが大国はまだある。マックリーフと李はすぐに動いた。
「ロベルト大統領」
マックリーフはブラジル大統領プラシド＝ロベルトに声をかけた。
「何でしょうか」
黒い髪に瞳、そして低い鼻の白人がそれに応えた。彼の髪や鼻はアジア系のものであった。
「貴方はこれについてどう考えておられるでしょうか」
「私がですか」
「はい」
マックリーフはそれに頷いた。
「何か御考えがあると思いますが」
「そうですな」
彼はそれを受けて考えはじめた。ブラジルはロベルトの政権ではアメリカと関係が深いのである。マックリーフはだからこそ彼に声をかけたのである。そしてロベルトはここはマックリーフに応えることにした。恩を売っておくつもりなのだ。
「私はそのマーシャル氏という人物をよく知りませんからな。いきなりここで指導者に相応しいと言われても考えてしまいます」
「そうですか」
「はい」
それを聞いたマックリーフの顔に笑みが浮かんだ。
「私もそれに同意です。どうもそのマーシャル氏という人物を知ら

ないものでして」
「お知りになりませんか」
「はい」
伊藤に対しそう答えた。
「残念なことですが」
「そうですか。ですがそれは今の時点では、ですね」
「はい」
問われたマックリーフの顔色が変わった。
「それが何か」
「閣下はマーシャル氏を御存知ないだけだということを知り安心したのです」
伊藤はそう答えた。実は彼等がマーシャルを知っているといことは気付いてはいる。
「違いますか」
「いえ」
マックリーフはそれを否定してみせた。
「これは新たな国家の建設に関わることですので重要なお話だと考えております」
伊藤はここで言った。
「ですからあらためてお話したいと考えております」
「何をでしょうか」
皆伊藤の口調が変わったことを察していた。それを受けて話を聞く。
「マーシャル氏を連合中央政府に紹介したいと思います」
「その人物をですか」
「当然です。一国の首脳になられるかも知れない方なのですから」
「確かに」
李がそれを聞いて呟いた。
「ですがそれは何処ででしょうか」
「中央議会です」

伊藤はすぐにそれに答えた。
「そこで彼に演説をしてもらいたいと考えているのですが」
「我々の前でもですね」
「はい」
「ならば問題はありませんな」
グリーニスキーがここでマックリーフや李より先に口を開いた。
「むっ」
それを受けて二人は顔を一瞬顰めさせた。
「それでいきましょう。議長、それでよろしいでしょうか」
「私はそれで問題ないと考えております」
サガモはグリーニスキーに対してそう答えた。ザイールは日本との関係がわりかし深いことも関係していた。それを知っているマックリーフ達は内心舌打ちしていた。
「それではこれで決まりです」
グリーニスキーが議長を代弁するかのようにあえて大きな声で言った。
「この戦いが終わった後マーシャル氏の演説を連合中央議会そして各国の首脳達の前で行う。それで宜しいでしょうか」
「異議なし」
アメリカ、中国と彼等と関係の深い国以外はそれに賛成した。それだけで過半数はあった。しかしグリーニスキーはそこでまた突っ込んだ。
「閣下」
彼はマックリーフ達に顔を向けて来た。

「それで宜しいでしょうか」
「はい」
何とか感情を押し殺してそれに答える。内心では思うところがあ

ってもやはり出すわけにはいかなかったのだ。それは李も同じであった。
「わかりました」
李も頷いた。彼等が頷けば他の者も頷くしかなかった。こうしてマーシャルの件は満場一致という形で決定した。伊藤はそれを見て優雅に微笑んでいた。
会議はそれからも続いた。だが先の二つに比べるとそれ程重要なものではなかった。エウロパとの戦いにおける戦局とこれからの流れについての確認等であった。こうして会議は終わり皆その場から離れた。
「総理」
八条は会議が終わると伊藤に声をかけた。
「何かしら」
「先程のお話についてですが」
彼はそのマーシャルという男について聞くつもりだった。そして伊藤もそれを察していた。
「ここでは何だから場所を変えましょう」
「はい」
誰かに聞かれる恐れもある。八条はそれを受けて伊藤と二人でホテルに戻った。それは伊藤が借りていたホテルの一室であった。
「ここで二人でいると不倫と思われても仕方ないわね」
伊藤はホテルに戻るとそう呟いた。ロイヤルスイートルームであった。
「まさか」
だが八条はそれを一笑に付した。
「考え過ぎです。そんなことありませんよ」
「確かに君の場合はそうした話がないけれどね」
伊藤は少し苦笑しながらそう言った。
「けれど普通はそう勘ぐられるから。だからここで話すのも結構危ないことなのだけれどね」

「はい」
「まあいいわ。ここには主人もいるし」
「御主人もですか」
「そうよ。丁度学会があってね」
伊藤は夫のことについても話をした。
「それで一緒のホテルに泊まってるのよ。おかげでここは自費よ」
「それはまた」
「本当はお金がかかるからロイヤルスイートは避けたかったのだけれど。ほら、私も一国の首相でしょ」
「はい」
「体裁ってものがあってね。ここにするしかなかったのよ」
「それはわかります」
八条はそれを聞いて頷いた。
「私もそうしたことがありますから」
「あら、けれど八条君はいつも結構なホテルにいるのじゃないの」
「まあそれはそうですが」
裕福な育ちなのでそれは当然であった。伊藤のような学者出身とは違っていたのである。

## 第九部第三章　進撃その九

「まあそれはいいわ。結局このホテルのホテル代でかなりの出費なのよね」
「どれ位ですか」
「首相としてお給料の半月分位かしら。痛いわよ」
「はあ」
「選挙資金なんかは本の印税でどうにかなるのだけれど。これはね、どうにも」
「大変なのですね、総理も」
「お金に困ってない政治家なんてそうそういないわよ」
伊藤は少し厳しい声でそう語った。
「それは私の本にも書いていたわね」
「ええ」
伊藤の著作は実に多い。彼女は現実主義の学者でありその主張も現実に沿ったものである。彼女は著作の中で政治にどれだけの金が必要なのかを書いているのである。政治家はふんぞりかえっているだけでは政治家になれないのである。まず当選しなければならない。その際の宣伝費用や活動資金、そしてスタッフへの給与等もある。中には破産しかねないような窮状の政治家もいたりする。汚職をする政治家も当然いるが発覚すれば罰せられるのは言うまでもない。資金の調達も政治家の力量の一つなのはよいか悪いかは別にしてこの時代においても変わらないのである。
「確か『民主政治の現実』でしたね」
「そうよ」
伊藤は頷いた。
「あれを書いた時は本当に資金繰りに困っていてね」
「はい」
「それも踏まえて書いたのよ。あれで数冊分の印税が消えたわ」

「大変だったのですね」
「さっきのアメリカや中国のやりとりでもそうだたけれど政治は奇麗事では済まないところもあるしね」
「はい」
八条もそれを知らないわけではない。中央政府国防長官として色々とあった。とりわけ人事においては様々な圧力や工作も経験しているのである。
「結局政治も人間が行うものだから。人間にそうした部分があると言えばそれまでだけれどね」
「人間ですか」
「そうよ。例えば今回の戦争にしろそうだけれど」
「今の戦争に何か」
「バチカン経由のスパイからだったわよね、発端は」
「はい」
「宗教にしろドロドロとしたものはあるわね」
「とりわけあの教会はそうですね」
「わかってるわね」
伊藤は八条のその言葉を聞いて嬉しそうに笑った。
ローマ＝カトリック教会程陰惨かつ凄惨な裏の歴史を持つ存在もない。よく完全に潔白な人間なぞいないと言われるがそれはこの教会においてはとりわけそうであった。この教会は長い歴史と揺るぎない権勢を誇っているだけあってその裏では多くの闇を持っているのである。
教皇になるには今でもそうであるがかなりの陰謀と流血がある。枢機卿同士での殺し合いや陥れ合いもあった。あの赤い法衣は血の色でもあるのだ。
お世辞にも正しい信仰を持っているとは言えない教皇も多かった。ルネサンスの時代に君臨したアレクサンドル六世もシスマの原因となったボニファティウス八世にしろそうである。彼等は教皇である以前に政治家であったのだ。宗教家と政治家は両立するものである。

少なくとも人類の歴史においては長い間、そして今もそうであった。教皇は完全に政治とは離れられない存在なのだ。何故なら教会の影響力はきわめて大きいものだからである。
「教皇は絡んでいないにしろ枢機卿が絡んでいたからね」
「しかしあれは予想通りでした」
八条は冷静にそう答えた。
「あの枢機卿は昔から何かと言われていましたから」
「そうね」
伊藤はそれに頷いた。
「教会は資金には困らないけれどね。思うところもあるのでしょう」
「知らないふしをするのもあそこはよくやってきていますが」
「それはこちらもよ」
それにはこう答えた。
「だってそれも政治でしょ」
「否定はできませんね」
八条はそれを肯定した。彼もそうすることがあるからだ。
「所謂隠し球というやつですね」
「そうよ。まあ野球ではあまり褒められた方法じゃないかも知れないけれど」
「あれは騙される方が悪いですよ」
「あら、そうかしら」
伊藤はそれを聞いてまた笑った。
「人によってはやると嫌われるわよね」
「彼はね」
ここで八条は口を苦くさせた。
「他にも色々やってくれていますから。所詮小手先だけの三流のプレーヤーですよ」
「確かに彼は三流ね」
伊藤はそれを認めた。
「けれどそんな選手がレギュラーだということは否定できないわよ」

「あれは監督が悪いのですよ」
彼はなおも言う。
「選手時代はどれだけ素晴らしい活躍をしたか知りませんが監督としては無能もいいところです」
彼はタイタンズのことを言っているのである。タイタンズとは連合のプロ野球チームの一つである。かっては人気チームであったが様々なスキャンダルとオーナー会社の悪事により今では連合でも最もアンチの多い球団となっている。
「ブリックス監督が嫌いみたいね」
「はい」
それを認めた。
「そしてリョンも。足が遅くて守備範囲が狭い、チームプレイをしないショートなんていりませんよ」
「それは一理あるわね」
伊藤も野球を観ないわけではない。だが彼女はどちらかというとラグビーやバスケットの方が好きなのである。これもプロリーグが存在する。
「あそこのオーナーも嫌いですしね」
「だからといってアンケートの嫌いな人の項目に堂々と書くのは褒められたものじゃないわよ」
「あれは学生の頃の話ですよ」
八条はその話を出されると困った顔をした。

## 第九部第三章　進撃その十

「まさかテレビでそれが出るとは思いませんでした」
「テレビはそうしたものよ」
伊藤は笑いながら言った。
「面白い話があれば飛びつくものなの。マスコミ自体がそうだけれどね」
「はあ」
彼自身もそれでインタヴューを受けて返答に窮したのである。いきなり話を出されて最初はえらく戸惑ったのである。その映像を見て彼はその日はずっと憮然とした顔だったという。
「イメージは落ちてはいないわよ」
「あれで落ちるものでしょうか」
「場合によってはね。けれど笑い話で済んだからいいじゃない」
「ですね。これも政治家としては名が売れたということでしょうか」
「そう思えば安い宣伝だったでしょう」
「はい」
「政治家は結局名前が第一なのよ。まず人に知ってもらわないと駄目」
「ですね」
「それからお金。政策やビジョンも大事だけれどそれは名前と同時に知ってもらわなくてはなわないから。名前と政策は同じものなのよ」
「それは本当によくわかりました」
彼は頷いてそう答えた。
「ただ君は地盤があるからね」
「はい」
彼は裕福な家の出であり日本では名が知れていた。それが政治家となるのに大きかったのである。

「それは幸運だったわね」
「有り難うございます」
「それからは君の能力と努力の賜物だったけれど。育てた介があったわ」
「育てた介、ですか」
「他に何て言えばいいかしら」
「そう言われますと」
「ただ、一つ気になることがあるのだけれど」
「何でしょうか」
ここで伊藤の目の色が少し変わった。八条はそれを見逃さなかった。
「そろそろ結婚したらどうかしら」
「結婚、ですか」
「ええ。まだ一人で暮らしているそうね」
「はい」
彼は地球にある官邸で暮らしている。気ままな一人暮らしを楽しんでいると言えばそうなる。
「もういい年頃だと思うけれど。それに前に言ったわよね」
「政治家はよい家族を持つことが大事、ですね」
「ええ。まあどんな人にも言えることだけど」
彼女の声が考えるものとなった。
「わかるでしょ。家庭がどれだけ大事かは」
「はあ」
実際に家庭を持ってはいないせいかそれはあまりよくわからなかった。八条の父はいつも帰りが遅く母も華道の家元をしておりいつも女の弟子達に囲まれていた。そのせいか父にも母にも同性愛者の噂があったがそれはあくまで噂であった。八条の下にも弟や妹が何人もいるのである。会社はすぐ下の弟が継ぎ、華道の方は一番上の妹が継ぐことになっている。彼は弟が二人、妹が三人いるのである。家族の仲は決して悪くはない。だが家も広かったせいかあまり顔を

会わせた記憶はない。よく使用人や執事と話をしていた記憶がある。
今は一人暮らしであるから余計にそうである。彼はまだ家庭というものがどんなものか実感していないのである。これは無理もないことであった。
「中央政府の閣僚では君と金内相だけだったわね、独身なのは」
「はい」
「内相もそろそろいい年頃だと思うのだけれど」
「金内相は色々と考えておられるようですが」
「そうなの」
伊藤はそれを聞いて意外といった顔をした。
「あれで料理や家事もお得意だとか」
「本当に意外ね」
「ただ」
しかしここで八条はバツの悪い顔をした。
「ただ・・・・・どうしたの？」
「料理の方の味付けが」
「辛いとか？」
韓国料理といえば唐辛子をふんだんに使うことで有名である。連合においては韓国料理といえばかなりの辛さであることで有名なのである。
「いえ、その逆です」
「甘いということ？」
「はい」
八条は答えた。
「一度内相にご馳走して頂いたのですが」
「あら、それは光栄ね」
伊藤はそれを聞いて面白そうに笑った。
「女性の手料理をご馳走して頂けるなんて。よかったじゃない」
「それはそうですが」
「そこで味わったのね」

「そういうことです」
彼はそう答えた。
「蜂蜜や砂糖をこれでもかという程使っておりまして。しかも最後のデザートが」
「異様に甘かったとか？」
「それもありますが量も。それまでの料理と同じだけ出て来るのですよ」
「聞いているだけで糖尿病になりそうね」
「食べている時にそう思いました。フルーツも山盛りでしたし」
「けれど内相は太ってはおられないし特に病気だとも聞いてはいないわよ」
「体質なのでしょうね」
八条は言った。
「体質」
「はい。太らない体質なのでしょう。そして糖尿病にもなりにくい、と」
「羨ましい体質ね」
「そうでなければとても説明できません。普段から内相のお菓子好きは知っていましたが」
「お菓子だけではないかも知れないわよ」
「といいますと？」
それを聞いてキョトンとした顔になった。
「わからないかしら」
「何がでしょうか」
「じゃあいいわ」
伊藤はそれを聞いて話を止めた。
「わからないなら」
「はあ」
やはり伊藤が何を言いたいのかよくわからなかった。伊藤はそんな彼に対して話を続けた。

## 第九部第三章　進撃その十一

「エウロパとの戦いは順調みたいね」
「ええ、それは」
八条は明るい顔でそれに答えた。
「先程会議の場でお話した通りです」
「それならいいわ」
伊藤はそれを聞いて笑みを作った。
「第一の攻撃目標はオリンポスね」
「はい」
八条は頷いた。
「それも会議でお話した通りです」
「ただ戦線はエウロパの北から南まで、そして上から下まで広げているわね」
「戦線に穴を作らない為です」
彼はそう答えた。
「そこから戦線に乱れが生じると危険ですので。サハラ義勇軍を先陣に少しずつ進撃させております」
「それでいいと思うわ。けれど地の利は向こうにあるということを忘れないでね」
「はい」
彼はまた頷いた。
「それはわかっているつもりです」
「ならいいわ。ただ南方のあの要塞には気をつけてね」
「モントローズ要塞ですね。勿論です」
モントローズ要塞とはエウロパ本土と総督府を結ぶモントローズ星系にある要塞である。サハラ北方侵攻の足掛かりになった場所だけでなく今も中継地として重要な場所となっている。エウロパの重要な軍事拠点の一つであるのだ。

「あの星系へは精鋭を向かわせております」
「義勇軍の中でもとりわけ精強な部隊のようね」
「はい。彼等ならやってくれるでしょう」
八条は自身に満ちた声でそう言った。
「言い換えるならばやってもらわねば困ります」
「期待しているようね、彼等に」
「そうでなければ向けませんよ。ただ気になることがあります」
「何かしら」
「エウロパ総督府軍のことですね。彼等がどう動くか、です。今のところは総督府に駐留しているようですが」
「エウロパにとって貴重な戦力であることは事実ね」
「はい。彼等の行動が今後の戦局に大きく左右します。動いた時の事を考えておかなければ」
「ティムールはどうなのかしら」
「ティムールですか」
「ええ」
伊藤は答えた。
「彼等の動きはまだ何も見られません。用意はしているようですが」
「そう、やっぱりね」
「やっぱり」
「そうよ。あのシャイターン主席だけれど私はあまり信用しない方がいいと思うわ」
「それは何故でしょうか」
「彼の今までの行動を見ているとね。確かに優れた政治家であり軍人であると思うけれど」
「それだけではない、と」
「そうよ。彼は天性のマキャベリストよ。目的の為ならば手段を選ばない」
「歴史では時折見られるタイプですね」
「ただ、彼の違う点はそれを正当化できることかしら。アッラーの

名の下に」
「アッラーの名の下に」
「そう。嘉美が後ろにいるとね。強いわよ」
「あまりよくはわかりませんが」
八条はそれを聞いて首を傾げた。
「そういうものでしょうか」
「君は確か仏教と神道を信仰していたわね」
「はい、それと天理教です」
「けれどイスラムのことは知っているでしょう」
「連合でのイスラムとサハラでのイスラムはかなり違うということは知っております」
「だったら話が早いわ。いい？」
「はい」
連合のイスラムはかなり寛容なものである。一応豚肉や鱗のない魚、酒はご法度ということになっており軍においても分けられているが実際にはユダヤ教徒の方がそれに対して厳格であったりする。連合のイスラム教徒はアッラーに謝罪をしたならば食べたりもする。当然厳格な考えの持ち主もおりそうした者は口には入れないが多くは食べていたりするのである。連合は比較的そうした戒律には寛容な考えなのである。
だがサハラでは豚肉も鱗のない魚も食べられない。酒は飲めるがそれだけである。そもそも砂漠において発展し、傷み易いという理由から遠ざけていたのであるから砂の多いサハラ各国においてはそれも当然であった。
「彼等は強烈な運命論者でもあるの」
「全てはアッラーが定めたこと」
「そう。だからシャイターン主席の行動も全てアッラーが定めたことなのよ」
「都合がよいと言えば都合がよいですね」
「確かにそうだけれどね。けれど自己を正当化するには都合がいい

わね」
「ですね。ただ彼はそれでもかなりアッラーへの信仰は篤いように思えます」
「どうしてそう言えるのかしら」
「いえ、条約締結の時ですけれどね」
八条は言った。
「話を聞くところによると礼拝を欠かさないそうです。そして常にコーランを側に置き読んでいるとか」
「連合ではあまりいないタイプね」
「ええ。だからこそ余計そう見えたのかも知れませんが」
「サハラの信仰心の篤さは今更ではないけれど。けれどそれでも印象的ね」
「はい。彼の実家のこともあるでしょうが。それでも意外と言えば意外ですね」
「人間はそうしたところもあるけれど」
伊藤は考えていた。
「けれど彼の考えを読んでいくうえで重要になるかもね、これから」
「はい」
「さしあたっては今回の戦争にどう動くか、ね。問題はそこよ」
「ええ。信用はできませんがね」
二人は話を終えると分かれた。そして八条は自分のホテルに戻った。そこでは木口が待っていた。
「お帰りなさい」
「待っていたかな」
「いえ、そうでもありません」
「そうかな。予定より三時間も遅れてしまっているのに」
「何、その間こちらも楽しませてもらいましたから」
見ればテレビにゲーム機がついている。彼はテレビゲームを趣味としているのだ。
「かなり進みましたよ」

「今は何のゲームをしているんだい？」
「ロールプレイニングですね。宇宙を舞台にした」
「宇宙を」
　それを聞いて首を傾げた。普通ロールプレイニングといえば架空のヨーロッパやそうした世界を舞台とするからである。連合においてはそれぞれの国を舞台とした作品が多い。日本を舞台にしたものも西部を舞台にしたものも唐を舞台にしたものもある。中には核戦争後の世界を舞台とした荒涼としたゲームも存在する。
「またえらく変わっているな」
「そうでしょう、未来の連合を舞台にしたものです」
「未来の？」
「はい。千年後のです。宇宙人との戦いですよ」
「面白いかい、それ」
「ええ。一度やると病みつきになりますよ。シリーズで八作目まで出ていますし」
「九部作とかそういったものになりそうだね」
「ええ、この前九部の発売が決定しました。ただそれで完結ではないようですが」
「そうだろうね」
　八条はそれを聞いて納得した。
「ゲームは売れるだけ続くからね。売れるとなれば何時までも続編が出るものさ」
「クールですね」
「それなりにゲームも好きだからね。ネットのゲームもやるよ」
「そうなのですか」
「ああ。けれどね」
　八条の顔が少し曇った。
「ネットのゲームはね。マナーの悪い人がちらほらしているのが」
「それは仕方ありませんよ」
「わかってはいるけれど。この前やっていたら闇討ちを受けたよ。

宝物を取る為にね」
「まるで夜盗ですね」
「ああ。それも十人、二十人で。あれには参ったよ」
「それがネットゲームの醍醐味でもありますけれどね。何が起こるかわからない」
「だから私はテレビゲームの方がいいね。最近はそればかりしているよ」
「長官はどんなゲームがお好きですか」
「そうだな」
問われて暫し考えてから口を開いた。
「スポーツのゲームはよくやるね」
「成程」
「野球にしろサッカーにしろアメフトにしろ。それも育成ゲームが多いかな」
「面白いですか？」
「面白いよ。自分が育てた選手が活躍するんだ。見ていて飽きないよ」
「一度やってみようかな」
「やってみたらいいよ。何かと仕事の参考にもなるだろうし」
「仕事の、ですか」
「そうだね。それで今の仕事にも役立てているし。ゲームも色々と使えるものだね」
「確かに」
「けれどもう闇討ちには遭いたくはないな」
「ははは」
二人はそうした話をしながら今度は野球ゲームをはじめた。対戦であり互いにチームを選んではじめた。
「野球はやはり攻撃と守備だね。特に守備のいいチームが勝つ」
「いやいや、戦術を駆使して勝つのが面白いんですよ」
そう話をしながらゲームを続けた。ほんの一時の息抜きの時間で

あった。

# 第九部第四章　婚礼その一

婚礼

連合とエウロパの戦いがはじまって二月が経過しようとしていた。その間連合の進撃は止まらずエウロパの星系を次々と掌握していった。数において劣るエウロパは押され撤退を続けていた。そしてジリジリと西へと退いていっていた。

こうした状況を打開しようとあらゆる手段が講じられた。だがそれはどれも有効なものとはならずエウロパ軍は敗退を続けていた。そして損害ばかりが増えていたのである。

「参ったことになったな」

ラフネールは自分の執務室にかけてあるエウロパの三次元地図を見てそう呟いた。

「また一つ星系が陥落してしまった」

「はい」

彼の前に立つモンサルヴァートがそれに対して頷いた。

「由々しき事態なのは承知しております」

「それは私もだ」

ラフネールは苦い声でそう言葉を出した。

「やはり物量の差は如何ともし難いか」

「それだけではありません」

「というと」

モンサルヴァートの言葉に顔を向けさせた。

「兵器の質がこちらと比較してかなりの違いがありまして」

「技術はそれ程差はない筈だが」

「おそらく下地となる国力の差が出ているのでしょう。我が軍の兵器と比較しまして攻撃力、防御力がまるで違います」

「どれだけ違うのだ」

「敵の駆逐艦や護衛艦が我が軍の軽巡程だと言えばお解りになるで

しょうか」
「そんなに違うのか」
「はい。陸上兵器もかなりの武装と防御力を持っております。その為一隻一隻、一両一両の撃破が困難な状況です。それが我が軍と比して圧倒的な差でやって来るのです」
「速度等はどうかね」
「それは我が軍の方が勝っております。ですが電子や哨戒においても大きく差がありまして」
「そこまでくると話にもならないな。どうやら連合の力は我々が思っていた以上だったようだ」
「残念ながら」
「それにあの巨大戦艦もいる。相当な力を持っているようだな」
「はい。先日のことですが」
「何かあったのか」
「先日補給の為に後方に退いていたあの巨大戦艦一隻をこちらの一個艦隊で急襲したのですが」
「その話詳しく聞かせてくれ」
「わかりました」
彼はそれを受けて話をはじめた。それはこうしたものであった。
連合軍の攻撃が続く中一隻のティアマト級巨大戦艦が後方に退いた。それは補給を受ける為であるその艦はその補給基地のある惑星へと向かった。その途中でそれを察知したエウロパ軍の一個艦隊が急襲を仕掛けたのである。
その数およそ一万隻。対するは巨大戦艦とはいえ僅か一隻である。誰もがこれならば容易に沈めることができると思った。思っただけであった。
一隻だけしかいないのを見たエウロパ軍の司令官はすぐに攻撃を命令した。すぐに一万隻の艦艇が巨大戦艦を包囲しようとした。しかしここでその巨大戦艦が動いたのであった。
この艦の名をダーザといった。ケルト神話に出て来る神の名であ

る。ケルトにおける神々の父とも言われる好色でありながら強力をも併せ持つ魅力な神である。オートミールを愛し様々な神の道具を持つ。この神が持つオートミールを出す釜がキリスト教、とりわけアーサー王等の騎士物語やワーグナーの楽劇に出る聖杯のもととなったと言われている。そのダーザの巨砲がまず火を噴いた。

それによりまず一千隻近くの艦艇が破壊された。そして主砲の一斉射撃によりさらにダメージを受けた。それでもエウロパ軍の艦艇は進んできたがそれはブレスのミサイルと副砲により阻まれてしまった。そしてさらに近付くと艦載機の攻撃を受けた。一万隻の艦艇が一隻の戦艦により動きを阻まれてしまったのだ。

そこに連合軍の援軍が来た。それを受けてエウロパ軍はやむなく撤退を開始した。巨大戦艦一隻で一個艦隊を退けたのであった。このことは連合においては広く宣伝されていた。

「ティアマト級巨大戦艦は一個艦隊に匹敵するとさえ言われているそうです」

「成程な」

ラフネールは話を聞き終えて頷いた。

「いい宣伝になっているな、向こうにとっては」

「はい」

モンサルヴァートは頷いた。

「結局その戦艦には傷一つつけることはできませんでしたから。今まであの艦の戦闘力は知っていたつもりでしたが」

「それでもやられたのか」

「そういうことになります。単なる局地戦では済まない衝撃を我が軍に与えております」

「しかし不沈戦艦なぞこの世には存在し得ない」

「はい」

「必ず沈める方法がある筈だが。一隻でも沈めることができればいいのだがな」

「あの艦の巨砲はコロニーレーザー以上の射程を持っておりまして。

それによりコロニーレーザーも破壊されてしまっております」
「それはまた厄介だな」
「はい。我々もそれに頭を悩ましております。あの艦は完全に連合軍の象徴として存在しております」
「強力な連合軍のな、彼等にとってはよいことだ」
「ですね。しかし我々にとっては」
「言うまでもない。一隻でも沈められれば我が軍の意識も変わるだろうがな」
「今では彼等はあの巨大戦艦を先頭に軍を進めてきております。我が軍は退くことはありませんが」
「劣勢なのだな」
「否定しません。その通りです」
「わかった。それで今彼等は今北ではヴァルハラ、中央ではブレシア、そして南ではモントローズ要塞に迫ってきているな」
「はい。とりわけモントローズ要塞への進撃が迅速であります」
地図を見ながら問うラフネールに対しそう答えた。
「その先頭にはやはりサハラ義勇軍がおります」
「全ては彼等が先陣か」
「そうです。彼等は正規軍と比べてもかなりの強さです。まあ連合軍正規軍は今のところ彼等に露払いを任せておりましてそれ程前線には出ては来ないのですが」
「だろうな。私でもそうする」
ラフネールはそれを聞いて呟いた。

## 第九部第四章　婚礼その二

「卿もそうだろう」
「実際にはそうせざるを得ないと思います、連合軍というものを考えますと」
彼は問いに対してそう答えた。
「連合軍は完全志願制です。これが大きいです」
「うむ」
ラフネールはそれを聞いて頷いた。
「しかも我々とは違い貴族制ではありません。高貴なる者の義務もなく彼等にとって軍とは職業の一種に過ぎません」
「つまり危険が多ければ志願者が減るということになるな」
「ですね。それを考えると正規軍の損害をあまり出さない作戦を立てるのは当然だと思います。あの連合中央政府国防長官の八条という人物ですが」
「彼がどうかしたのか」
「かなりの戦略家であるようです。そして連合軍というものを完全に把握しております」
「だからこそ義勇軍を前面に出しているのか」
「そういうことになります。彼自身があまり好まない方法だとしても軍としてはそうせざるを得ないのです」
「ふむ」
ラフネールはそれを聞いて考え込んだ。深く果てしない考えであった。
「それで義勇軍の将兵の損害ばかりが多いのか」
「でしょうね」
モンサルヴァートも答えた。
「前線に出て、最初に攻撃を仕掛けるのですから。しかし戦死者は少ないようです」

「それだけ彼等の艦艇の防御力、生存力が高いということだな」
「はい、実際に一隻撃沈するのにもかなり苦労しております。あれだけしぶとい艦は見たことがありません」
「わかった。そして今彼等の攻撃はさらに強まっているのだな」
「先程申し上げた三つの星系を中心に」
「それが破られたなら脅威だな。特にモントローズ要塞だが」
「はい」
「あそこだけは渡すわけにはいかない。それはわかっているな」
「勿論です。あそこを奪われたなら総督府の運命が決まってしまいます」
「そうだ。総督府は我等にとって生命線だ。あそこがなくなれば我等はより困難な状況に追い込まれてしまう」
「それだけは避けねばなりませんが。しかし」
「しかし・・・・・・。何だ」
「最悪の事態も考えておかなければならないでしょう」
モンサルヴァートは暗い顔でそう言った。
「最悪の事態、か」
「はい。総督府と本土、どちらをとるかも考慮すべきかと思います」
「辛いな」
ラフネールはそれを聞いて一言そう漏らした。苦しむような声であった。
「お気持ちはわかります。ですが」
「わかっている」
彼はそう答えた。
「当然そうなったならば本土を優先させる。しかしその為にもモントローズを彼等に渡してはならない。ところでティムールの方はどうなっているか」
「今のところ動きはないようです。ただ気になることがあります」
「何だ」
「あの国に潜入させている情報部員が次々と行方を絶っているので

す」
「それは本当か」
「残念ながら」
モンサルヴァートは答えた。
「それを考えますと何か考えがあるようですが」
「あのシャイターンという男のことは私も知っている」
「はい」
「今は静かでもおそらく待っている筈だ。動く時をな」
「その時総督府をどうするか、ですね」
「市民達のこともある。決断は早いうちにした方がいいだろうな」
モンサルヴァートはそれには答えなかった。彼も総督府にいた。だからこそあの地のことはよく知っているのである。
総督府には二百億のエウロパの市民がいる。彼等は皆本土から移住した者である。人口増加を受けて移住したのであるがその彼等の安全を保障するのも軍人の務めであった。軍人、そして騎士の職務はまず武器を持たぬ者を守ること、彼等はこうした騎士道の基本もわきまえていた。そうした意味で軍人、そして騎士としては高潔であった。残念だがそれは勝利には直結はしないが。人格の良し悪しは軍人としての評価には関係しても勝利には直結しないのである。時として人間としては劣悪極まる輩が名将となることもあるのである。
「今は総督府には二十個艦隊が駐留しております」
モンサルヴァートは言った。
「そしてマールボロ総督とタンホイザー上級大将がいます。そう簡単に彼等が敗れることはないと思いますが」
ここではラフネールを安心させる為にそう言った。内心では最悪の事態も考えていた。
「彼等を信頼すべきか」
「私はそう思います」
「ふむ」

ラフネールはそれを受けて考え込んだ。
「だが決断は早い方がいいな」
「はい」
「今この時期に二十個艦隊は貴重な戦力だ」
彼は総督府を見ていた。
「だがそれを引き抜くとなるとティムールはすぐに動くだろうな」
「火を見るより明らかです」
「そうだな。だがその二十個艦隊を動かさないばかりに本土がなくなってしまえば本末転倒だ。それでは何の意味もない。違うだろうか」
「いえ」
「そうだな。では結論は出ている」
ラフネールはここでこう言った。
「撤退だ。だが市民達も総督府から避難させる。それでよいな」
「致し方ありません」
モンサルヴァートもそう答えるしかなかった。
「ですが問題があります」
「市民達の安全の確保か」
「はい。シャイターンは市民に危害を及ぼすようなことはありませんが」
「連合軍はわからないな」
「今のところ彼等は占領地においては比較的穏やかな態度ではあります。ですが」
「これからもそうだとは限らないな」
「八条という男は市民に害を及ぼすような男ではないようですが」
「末端の将兵になるとわからないな。ましてや彼等の先陣である義勇軍は我々を深く恨んでいる」
「はい」
「それが問題だ。二百億の市民達の安全をどう確保すえるかだ」
「モントローズには私が向かおうかと考えているのですが」

「卿がか」
「はい」
　モンサルヴァートは答えた。
「シュヴァルツブルグ閣下はブレシアに向かわれるおつもりです」
「今はその二つを優先させるか」
「ヴァルハラは一時放棄しても止むを得ないと考えますが」
「ううむ」
「閣下、どう考えられますか」
「今我が軍の艦隊はどれ位か」
「四百五十程です。やはりニーベルングでの損害が大きいです」
　全艦隊のおよそ一割を失ったということである。これは緒戦においてはかなり大きなダメージであると言えた。
「そうか。それでもそれだけいるか」
「はい。対する連合は正規軍二千個艦隊は健在です。ほぼ無傷に等しい状況です」
「そしてサハラ義勇軍の損害もそれ程ではなかったな。特にあの巨大戦艦は一隻も沈められてはいない」
「残念ながら」
「ここまで絶望的な戦いはないな。かっての独ソ戦の初期のソ連軍のようだ」
「閣下、それは違います」
　だがここでモンサルヴァートはラフネールに対してそう言った。
「どう違うのだ」
「我等にはソ連軍のような支援する勢力も国力もありません。今の連合にはありますが」
　マウリアのことであるのは言うまでもなかった。彼等も連合とマウリアの関係は知っていた。だがここで認識違いがあった。マウリアは同盟国ではあったが何処までも独自勢力である。これが後にこの戦争に大いに影響することをこの時は誰も知らなかった。
「さらにハンデがついたか。何処までも絶望的だな」

「それでも勝たなければなりません」
「勝てると思うか」
「はい」
強い声でそれに応えた。
「エウロパの為に。違うでしょうか」
「どうやらエウロパは卿等そこ誇りに思わなければならないようだな」
ラフネールは微笑んだ。
「それではモントローズと二百億の市民は卿に委ねよう。よいか」
「ハッ」
敬礼してそれに応える。
「そしてブレシアはシュヴァルツブルグ元帥に任せる。私が行くことができないのが残念だが」
「閣下はこのオリンポスをお願いします」
「オリンポスをか」
「はい。最悪の場合ここも戦場となるでしょう。ですがその際は一歩も退かれないで頂きたいのです」
「首都と共に死んでくれということだな」
「いえ、それは」
「構わない。最初からそのつもりだ」
彼は笑ってそう語った。
「総統になった時、いや議員になった時からその覚悟はできている。存亡の時にはこのオリンポスを最後まで守ろうとな。そしてそれが適わない時はヴァルハラに潔く行く。私は軍人ではないがな」
ヴァルハラは戦と嵐の神ヴォータンの宮殿である。この城には戦場において勇敢に戦い、そして勇敢な戦士として死んだ者しか行くことができないとされている。戦士達はそこで最後の戦いラグナロク、即ち神々の黄昏に備えてまた武器を手にし、永遠とも思える長い時間を戦い続けるのである。それが彼等のとっての真の幸福なのである。かって冬と雪、そして氷が支配していた北欧ならではの過

酷な、そして尚武の考えであった。

## 第九部第四章　婚礼その三

「閣下」
モンサルヴァートはラフネールに対して言った。
「ヴァルハラへは軍人だけが行くものではありません」
「そうだったのか」
「戦い、名誉の戦死を遂げた者ならば誰でも行くことができるのです。例え軍服を着ていなくとも」
「それでは私でもいいのだな」
「はい。ですからそれは御安心下さい」
「わかった」
彼はまた微笑んだ。
「それでは安心して戦おう。ピストル位しか扱えないがな」
「それで充分です。あとは心だけです」
「心か。戦う心だな」
「ええ」
「卿等にはその戦う心を期待するぞ。よいな」
「お任せ下さい。そして連合軍を必ずやエウロパの領土から退けてみせます」
「うむ、頼むぞ」
「ハッ」
モンサルヴァートはまた敬礼した。そして総統の執務室を後にした。そしてその足で統帥本部へと戻った。そこには提督達とプロコフィエフ達が待っていた。
「もう皆揃っていたか」
「はい」
プロコフィエフが一同を代表して彼に答える。
「ヴァルハラへの進軍の準備は整っております」
「生憎それは違う」

モンサルヴァートはプロコフィエフに対して言った。
「違いますか」
「そうだ。我々は勝利の為に進軍する。そして」
言葉を続ける。
「勝利を収めるのだ。いいな」
「わかりました」
プロコフィエフはそれに頷いた。
「そうでなければ我々は今ここで全員閣下の下を去っていたでしょう」
「私を試したのだな」
「いえ」
しかしその言葉には首を横に振った。
「閣下がそう仰ることはもうわかっておりました。それを確かめたかったのです」
「そうだったのか。ではわかっているな」
「無論です」
今度はゴドゥノフが答えた。
「閣下、行く先はどちらでしょうか」
「モントローズだ」
一言そう答えた。
「そして二百億の市民を救う。いいな」
「ハッ」
皆一斉に敬礼した。
「既に全艦出撃態勢に入っております」
「もうか」
「我々も今エウロパがどういった状況にあるのか知っているつもりですので」
「有り難いな」
モンサルヴァートの頬が緩んだ。
「どうやらエウロパは優れた人材に恵まれているようだ」

「勿体ない御言葉。ですが今は」
「そうだな。話している時間はない。では行くぞ。そしてモントローズを死守する。よいな」
「ハッ！」
こうしてモンサルヴァートはモントローズ要塞に向かった。その兵は三十個艦隊、それが星の大海を渡り戦場に赴くのであった。

連合とエウロパの戦いは激しさをさらに増していった。だがその間サハラは平穏な状態に置かれていた。今までは最も戦火の多い地域であったのが今では逆となっていた。だがそれでも歴史の針は動いていた。この時サハラにおいては極めて重要な出来事が二つ起ころうとしていたのである。そのどちらにも深く関わっている人物がいた。その者は今オムダーマンの首都アスランに豪奢な礼服を着て立っていた。その者こそメフメット＝シャイターンその者であった。彼は今妹であるマルヤムの婚礼の儀に立ち会っていたのである。彼は今宿泊先のホテルで一人たたずんでいるのであった。
「兄上」
そんなシャイターンに次弟であるフラームが声をかけてきた。彼は僧侶の服を着ている。法皇だけあって彼もかなり豪奢な服を身に纏っていた。
「いよいよですね」
「ああ」
シャイターンは弟に顔を向けて頷いた。
「だがこれは我々の布石の一つに過ぎないのはわかっているな」
「はい」
フラームはそれに対して頷いた。
「勿論です。そしてマルヤムは我等にとってはクイーン」
「御前はビショップといったところか」
「ではアブーはナイトですかな、ははは」
「御前もチェスというものがわかってきたようだな。昔はいつも私

に負けていたが」
「私はああした戦事は苦手なものでして」
彼は笑って兄にそう答えた。
「ですからこの道に入ったのです」
「どうやらそれは正解だったようだな」
「そうですね。最初はこの服は好きではなかったのですが」
「その割には上手く着こなしているな」
「慣れというものです」
微笑んでそう答えた。
「私もひとかどの聖職者になったということでしょう」
「聖職者、か」
だがシャイターンはその言葉を聞いて笑った。
「どちらかというと法皇という名の政治家だな」
「おや、それは手厳しい。ですが歴史においてはそうだったのではないですか」
「バチカンのことを言いたいのだな」
「はい」
また頷いた。
「宗教と政治は本来同じものでしたから。私は今それを心から感じております」
「アッラーの思われる通りに銀河が動くならばな。それは当然だ」
「はい」
彼等は深くアッラーを信仰していることで知られている。法皇の家に生まれ物心ついた時からモスクにいたからそれも当然のことであった。だがその信仰は他の者の目からは決して純粋なものではないのもまた事実であった。
「そしてこのサハラはアッラーが我がシャイターン家に与えて下さったものだ」
「わかっております」
「それでは御前にはビショップとしての役割を期待する」

「はい」
「私はキングといったところかな」
「そうですね。いや、案外違うかも知れません」
「ボーンではないことは事実だと思うが」
「それはわかっております。ただ兄上だけがキングではないかも知れないと思いまして」
「？」
シャイターンはフラームの言葉に眉を動かせた。
「それはどういう意味だ」
「兄上を黒のキングとしたならば」
「うむ」
「白のキングもいる筈です。チェスには相手がおりますね」
「そうだが。その白のキングとは」
「ハサンか。若しくは」
「彼か。だがその為の婚姻なのだぞ」
「それは承知のうえで申し上げたのです」
「マルヤムというクイーンが動いてくれるだろう」
「将棋というものを御存知ですか」
だがフラームはそれでも言った。
「将棋・・・・・。日本のチェスだな」
「言うならばそうです。これには独特のルールがありまして」
「知っている。獲った駒を自分の駒として使えるのだな」
「はい」
「御前の言いたいことはわかった。だがそれは安心していい」
「何故でしょうか」
「マルヤムもシャイターン家の者だからだ。シャイターン家の者は身内を決して裏切ったりはしない。そうだろう」
「確かにそうです」
「わかっているならいい。一体何を心配しているのだ」
「その身内です」

フラームはまた言った。
「マルヤムにとって身内がどうなるか、です」
「私達ではないのか」
「今のところは私達です。ですが彼と結ばれることによりそれが変わるかも知れません」
「マルヤムを信用していないのだな」
「いえ、それは」
兄にそう言われて狼狽を見せた。
「決してそうではありません。しかし」
「言いたいことはわかっているつもりだ。そう慌てるな」
シャイターンはまずは弟を宥めた。
「だがな」
「はい」
また言った。
「あの娘は御前が思っている以上にしっかりしている。安心していい」
「そうならばいいのですが」
「私もアッディーン副大統領のことは知っているつもりだ。一度会ったこともある」
「サラーフとの戦いの時ですね」
「ああ。やはりあれだけの功績をあげた人物だけはある。見事なものだ」
「そうですか」
「だがマルヤムの心をシャイターンから変えさせることは誰にもできはしない。御前はそれを見落としている」
「はい」
思うところはまだあったがここは頷いた。
「私の取りこし苦労でしたか」
「私はそう思う。だがそれは考慮に入れておく」
「有り難うございます」

「もっとも」
ここで彼はふと呟いた。
「そうなったらそうなったらで面白いかも知れないな」
「？今何と」
「いや、何でもない」
だがシャイターンはそれを打ち消した。
「それよりも時間だ」
「あっ」
時計を見ればもういい時間であった。フラームはそれを見てはっとした。

## 第九部第四章　婚礼その四

「行くか。マルヤムと婿殿が待っている」
「そうですね。では行きますか」
「ああ、行こう。父上とアブーはどうしているかな」
「父上はずっとマルヤムの側におられますよ。アブーは式場の警護も兼ねているので向こうにもうおります」
「そうか、ならいい。しかし父上も余程マルヤムが可愛いようだな」
「昔からですね、それは」
フラームは言った。
「父上はマルヤムを子供の頃から本当に可愛がっておられましたから」
「そうだな。私達の中で最もな」
「はい。やはり父親にとって娘とは特別なものなのでしょう。それはわかります」
「そうしたものか」
「私には息子しかおりませんがね」
まずはそう断った。
「ですが傍目で見ているだけで何となくわかるような気がします。それは兄上とて同じではないですか」
「私がか？」
「ええ。兄上にもおられるではありませんか」
「確かにな」
シャイターンはあのハルーク家の夫人の他に三人の妻がいる。イスラムの戒律においてそれは認められているので問題はない。一人はまだ十代の娘、一人はかって彼の側にいた侍女の一人、そして最後は政略により結婚した良家の子女である。この良家の子女は北の有力者の家の娘である。それぞれの間に子をもうけている。五人おり侍女あがりの妻は双子を産んでいる。まだ赤子であり一方が娘な

のである。
「この間産まれたばかりだ」
「でしたね。ようやく半年といったところでしょうか」
「確かに息子に対する感情とは異なるな」
「やはり」
「だがシャイターン家の娘の運命は決まっているからな。それはわかっているつもりだ」
「はい」
フラームはそれを聞いて顔を引き締めさせた。
「それは私に娘が産まれた場合もですね。当然アブーにも」
「言うまでもないな」
「ええ」
フラームは頷いた。
「アブーにもこの前息子が産まれましたが。どうもシャイターン家は男がよく産まれるようですね」
「男は男で使い道がある」
彼はそれを聞いて一言そう言った。
「だが女はそれ以上だ。単に子供を産むだけではないのだ」
「はい」
「色々とやってもらうことはある。当然マルヤムにもな」
「シャイターン家に産まれた女は不幸ですね」
「不幸？それは違うな」
弟の言葉を打ち消した。
「これは時代の宿命だ。アッラーが定められたことだ」
「時代の宿命ですか」
「そうだ。戦いの中にあっては男は武器を手にして戦う。だが女もまた戦わなければならないのだ」
「だからこそですか」
「うむ」
シャイターンはここで頷いた。

「マルヤムにも戦ってもらう。シャイターン家の為にな」
かって政略結婚は単なる家と家、国と国の結び付きを強めるだけではなかった。嫁いだ先への外交官でもあり時にはスパイでもあった。欧州においてはハプスブルク家が婚姻政策を多用したが彼等は婚姻先の王位等を継承することが多かった。不思議にその先の後継者達が世を去りハプスブルク家の者が後を継ぐのである。そこには謀略もあったかも知れないが婚姻政策の成功例である。
日本においては織田信長がよく使った。彼は浅井長政に美貌で知られる妹のお市を嫁がせたが彼女は兄の危急を知らせたこともある。兄に似て頭の回転が早く、信長もそれを知って彼女を浅井家に嫁がせたのである。彼女も幸福とは言い難い一生を送ったがそれも戦国の世であったからであろうか。それは当然シャイターンも知っている。
「もっともシャイターン家の誰かの為に戦うかも知れぬがな」
「？それはどういうことですか。またそのようなことを」
「口が過ぎたな。これも忘れてくれ」
「はい」
また言葉を打ち消した。
「話が過ぎたな。本当にもうこれで行こう」
「わかりました。それでは」
「うむ」
こうしてシャイターンとフラームはマルヤムの婚礼の式場に向かった。だがその頃当のマルヤムはまだ動いてはいなかったのであった。
彼女は自身の部屋で侍女と父に囲まれていた。父ムシュタは妹の純白の婚礼の礼装を見て顔全体を緩ませていた。
「おお、何という美しさだ」
彼は娘を前にして感嘆の声を漏らした。
「御前の母にも見せてやりたかったぞ」

「そんな、御父様」
マルヤムは父にそう言われて頬を赤らめさせた。見れば彼女は白いダイヤが飾られた礼装に身を包みヴェールを被っている。その姿はまるで天界のペリのようであった。
「残念だった、本当に」
ムシュタは口惜しそうに呟いた。
「あれがここにおればな」
マルヤムの母はシャイターンやフラーム、アブー達の母でもある。ムシュタにも四人の妻がいたが子が産まれたのはこの妻だけであった。彼女は元々身体が弱く四人の子を産んだ後暫くしてこの世を去った。ムシュタはそれを今でも惜しんでいるのである。
「本当に母にそっくりになってきたな」
「またそんな」
「いや、本当だ」
ムシュタは首を横に振って言った。
「私はずっとあれの顔を覚えている。一時たりとも忘れたことはない」
「御父様」
「御前は覚えてはいないだろうな。それも仕方ないか」
「はい」
それに頷くしかなかった。母キョセムはマルヤムが幼い頃に亡くなっている。その顔は写真等でしか知らない。温もりも知らないのである。
「あれは本当に美しい女だった。今の御前のようにな」
「そうだったのですか。けれど私なんかはとても」
「マルヤム」
ムシュタはここで娘の名を呼んだ。
「はい」
「御前はその美貌と才知には自信を持ってよいのだ。それはアッラーが授けられたものなのだからな」

「そうなのですか」
「そうだ。だから御前は今ここにいる。そしてアッラーが御前に婿を授けて下さる。それを心から感謝するように」
「わかりました」
マルヤムはそれを受けて頷いた。
「御父様の御言葉に従います」
「うむ。そうしてくれ。そして」
彼は言葉を続けた。
「幸せになってくれ。よいな」
「はい」
見ればムシュタは今は完全な父親の顔であった。奸智と謀略を駆使してきた男とは思えない顔であった。これも彼の顔の一つであったのだ。
「それでは行こうか。いや、待ってくれ」
「どうしたのですか？」
「これを忘れていた」
彼はそう言うと懐から一つのダイヤを取り出した。白い大きなダイヤであった。
「これを御前に渡そう」
「そのダイヤは一体」
「これはな、かって御前の母が持っていたダイヤだ。私が婚礼の時に渡したものだ」
「そうだったのですか」
「うむ」
ムシュタはマルヤムにそれを受け渡しながら言った。
「御守り代わりに持っておくといい。これには御前の母の思いがこもっている」
「お母様の」
「そうだ。御前は一人ではない。常にアッラーと母がいることを忘れるな」

「はい」
「はっきり言えば私やメフメット達のことは忘れてもいい」
彼は優しい声で娘に対してそう言った。本当に優しい声であった。

## 第九部第四章　婚礼その五

「だがな。母のことは決して忘れるな。御前にとってはアッラーの次に大切なものだ」
「アッラーの次に」
「そうだ。御前のアッラーへの信仰はわかっているつもりだ。それであえて言うのだ」
「わかりました」
マルヤムは頷いた。
「それでは受け取らせて頂きます」
「頼むぞ」
彼は娘に渡して頷いた。
「では行こうか。そして幸せになるのだ」
「はい」
こうしてマルヤムは父と共に婚礼の場へ向かった。そこではもう彼が待っているのである。
アッディーンもまた婚礼の準備を整え終えていた。彼はオムダーマン軍の元帥の軍服を身に纏っていた。そしてその上に普段とは違うマントを羽織っていた。礼装用のマントであった。
「このマントを羽織るのは久し振りだな」
「そうですか」
隣にいるハルダルトがそれに応えた。彼も軍服を着ている。
「ああ。普段のマントはまだ動き易いな。色も地味だし」
「はい」
オムダーマンの今の軍服は青い。そして上級の将官のみに着用が許されるマントは赤である。だが礼装の時はそのマントは白になる。そして赤いマントよりそれは大きなものとなるのである。
「ただこちらの方が見栄えがいいのは事実だな」
「そうですね。まあ普通の礼装よりもいいでしょう」

「ああ」
アッディーンはその言葉に頷いた。
「確かにな。俺としてもこの服の方が好きだ」
「やはり」
「背広とかタキシードはな。どうも気苦しいものがある」
「普段からこの服を着ていますとね。そちらの方がよくなります」
「まあ慣れというものか」
アッディーンは言った。
「だがな、それだけではないのだ」
「といいますと」
「軍服を着ていると常に戦場に身を置いている気持ちになる。引き締まるというかな」
「成程」
「それがいい。だから俺は軍服を着るのが好きだ。それは貴官もではないか」
「確かにそうですね」
ハルダルトはそれを認めた。
「私も軍服を着ていると気持ちが違います」
「そうだろう。だがそれだけではない」
アッディーンは言った。
「やはりな。これは我々にとっては特別なものだ」
「はい」
「誇りの象徴の一つと言うべきか。軍人にとって軍服とは誇りだな」
「そうですね。それを着て婚礼の儀に向かうというのはどうですか」
「悪くはない」
彼は答えた。
「戦場に赴くと言うべきか。だが少し違うな」
「はい」
「これからの道を切り開く為に行くのだな。そう思うとまた気持ちが違う」

「気持ちがですか」
「そうだ。では行くか。道を切り開く為に」
「ですね。では行きましょう」
「うむ」
アッディーンも向かった。そして婚礼の主役がそれぞれその場に向かった。こうして婚礼の儀がはじまった。
アッディーンとマルヤムはそれぞれアッラーに婚礼を報告した。式はつつがなく行われその後は宴となった。
サハラにおける婚礼の儀は華やかなものである。宴も当然華やかでありそこでは多くの者が列席していた。そして豪華な食事や音楽に支配された場で皆踊りに興じるのだ。その主役は当然アッディーンとマルヤムである。
「おお」
皆マルヤムに注目した。その踊りがあまりにも美しいからである。
「これは」
「まるでペリのようだ」
皆心の中でそう思う。口で褒めることはしない。いや、できなかった。サハラにおいては他人の妻を褒めることは失礼にあたると考えられているのだ。マルヤムがアッディーンの妻となった今ではそれは憚れるものであったのだ。彼等は心の中で彼女をたたえた。
マルヤムの舞いは相手を務めるアッディーンを的確にリードしていた。生粋の軍人である彼はあまりパーティー等に興味がなく出席することは少なかった。その為ダンスにも通じてはいないのである。だがそれでも彼はそれをあまり感じさせない程度には踊っていた。彼はマルヤムに合わせて踊っていた。
「ほう」
シャイターンは宴の場の端でそれを見て眉を動かした。
「マルヤムの動きに上手く合わせているな」
「はい」
フラームがそれに頷いた。

「マルヤムの踊りに上手く合わせるとは。中々どうして」
「どうやらそちらの素質もあるようですな。いや、それだけではありませんね」
「そうだ」
「どういうことですか？」
アブーが二人の兄に尋ねた。
「あの踊りに何かあるのでしょうか」
「アブー」
シャイターンが末の弟の名を呼んだ。
「はい」
「御前はまだ若いな。あの踊りから何かわからないのか」
「？何でしょうか」
それでも彼は首を傾げていた。
「私にはちょっと。申し訳ありませんが」
「そうか。それでは今よく見ておくがいい」
「貴方の姉と新しい兄の踊りをね」
「はい」
何が何だかよくわからないままアブーは頷いた。そして踊りに目をやった。見ればマルヤムはアッディーンを上手く導いていた。そしてアッディーンは上手くそれに合わせていた。彼等は互いに息のあった踊りをしていたのである。
「どうやら我々はクイーンを動かした意味があったようだな」
「ですね」
シャイターンとフラームはまた囁いた。
「これで彼は我々の中に入りました」
フラームは言った。
「マルヤムの手の中落ちました」
「それはどうかな」
しかしシャイターンは弟の言葉に対して疑問を呈した。
「どういうことですか」

「見ているといい」
彼はそう言って踊りにさらに目をやらせた。
「はて」
兄に言われて見てみるがやはりわからない。フラームは首を傾げたままであった。シャイターンはそれを見て心の中で思った。
（フラームですらわからないか）
アブーを見る。やはり彼もわかってはいなかった。理解しているのは自分だけだとわかりシャイターンは少し眉を顰めさせた。だが宴の場でありそれも一瞬のことであった。
（彼と渡り合えるのはどうやら私だけのようだな。シャイターン家においても）
そう思いながらアッディーンを見ていた。彼はマルヤムの踊りに合わせ、何時しか彼がリードするようになっていた。それはマルヤムも気付いてはいなかった。
踊りが終わった。それを見計らってシャイターンはアッディーンとマルヤムの方に歩み寄ってきた。

## 第九部第四章　婚礼その六

「お兄様」
「シャイターン主席」
二人は彼に顔を向けてそれぞれ言った。彼はその言葉を受けて微笑んだ。
「踊りを楽しんだばかりのところ申し訳ない」
「いえ、そんな」
マルヤムは兄のその言葉に首を横に振った。
「お兄様が来られたのにどうしてそのようなことが言えましょう」
「そうです」
アッディーンもそれに同意した。
「私の兄となられた方が来られたのです。嬉しくない筈がありません」
「そうか。それは何よりだ」
彼はそう言ってまた笑った。だが今度の笑みは先程の笑みとは異なっていた。妖しさを漂わせた笑みであった。
「！？」
アッディーンはその笑みを見て妙に感じた。婚礼の場で見せるような笑みではないからである。
（どういうことだ）
彼は内心その笑みについて探らざるを得なかった。だがそれより前にシャイターンが先手を打つように言葉をかけてきたのであった。
「婿殿」
「はい」
アッディーンはそれに応えた。
「妹を頼むぞ」
「わかりました」
その言葉に頷いた。

「必ずや幸せにします」
「それは問題ではない」
「といいますと」
「それは貴方ならば確実にできることだ」
「またそのような」
そう言って謙遜しようとする。だがシャイターンはやはり先手を打つようにして言った。
「いや、私は信頼している。私が言いたいのは別のことだ」
「別のこと」
「そうだ。だがそれは今ここでは言わないでおこう」
「？」
それを聞いて首を傾げた。
「貴方もそのうちわかる筈だ。私がここで何を言いたかったのかをな」
「そうでしょうか」
「私はそう思っている。そしてマルヤム」
「はい」
今度はマルヤムに声をかけてきた。彼女はそれに応えた。
「これからは私達ではなく彼に夫として共にあるようにな」
「わかりました」
彼女はそれを受けて慎んで頭を垂れた。シャイターンはそれを確かめてからまた言った。
「それでいい。これから御前は婿殿と共に二人で支え合って生きるのだ。よいな」
「はい」
彼女は応えた。シャイターンはそれを聞いて満足そうに笑った。
「それでは私はこれで」
「はい」
シャイターンは礼を済ませると優雅に踵を返してその場を後にした。アッディーンとマルヤムはそれを見送った。そこに別の者の声

がかけられてきた。
「アッディーン副大統領」
今度はオムダーマンの者達からであった。ブワイフやアッバース等もこの式に参加していたのである。彼等も声をかけてきたのであった。
「閣下、外相」
アッディーンは彼等に顔を向けた。当然マルヤムも一緒である。
「おめでとう。これでようやく君も一人前だ」
「はあ」
「人間は結婚してはじめて一人前になれる。この時を待っていたよ」
「結婚して、ですか」
「そうだ」
ブワイフは大きな口を開いて笑ってそう述べた。
「人間というものは男と女があるな」
「はい」
「それは互いに支え合って生きていくものなのだよ。私はそう考えている」
イスラムは決して女性を差別したりはしないのである。妻を四人まで持ってもよいというのは戦争等により生じた未亡人への救済策である。そしてそれぞれの妻を公平に愛さなければならない。イスラムにおいて寡婦を放置するのは許されないことなのである。ムハンマドはそうした者達への配慮を怠らなかった。彼は女性に対して極めて真面目で公平な考えを持つ男であったのだ。そして彼自身多くの妻を持っていた。だがそれは彼の好色を示すのではなく公平さと実直さを示すものであると言えた。何故なら彼はその多くの妻達に対して優しく、誠実でかつ公平な夫であったからだ。逆境に強く、生真面目であると同時に女性には紳士であったのだ。それが今でも彼がムスリム達の尊敬を集めている理由である。ただし銅像や絵画といったものはないが。イスラムでは偶像崇拝はとりわけ戒められているからである。

それだけではない。離婚する時もその妻を離婚する、と三回言えばよいのであるがその元妻の面倒を一生みなければならない。そしてその権利も保障しなければならないのだ。また他人の妻へ色気を出すことはムスリムにとって最も恥ずべきことである。独身の女性ならばよいが他人の妻への色気はイスラム社会では他の文化圏よりもさらに罪深いこととされているのである。イスラムにおいては女性の権利についても厳しく保障されているのである。これは二千年以上も前に確立された考えであるが当時においては極めて先進的な考えであった。そしてこの時代においても女性達を守っていた。やはりムハンマドは偉大であった。

「私も妻がいるがね」

「はい」

「二人でいてよかったと心から思っているよ。残念だが今はここにはいないがね」

「ですね。一刻も早い回復を祈ります」

「有り難う」

ブワイフはアッディーンにそう言われ頷いた。彼の妻は今病気で入院しているのである。

「副大統領もこれで何かと忙しくなりますな」

今度はアッバースが言った。

「忙しく」

「結婚すると自分だけのことに携わってはいられなくなりますから」

「それは聞いていますがそんなにですか」

「はい。まあそれはおいおいわかりますよ。少なくとも今のように官舎に気軽に住んではいられなくなります」

「家、ですか」

「そうですね。今も官舎で御住まいでしたね」

「ええ」

「それはできなくなりますよ。家も建てないと」

「どうも実感が沸きませんね」

彼はまた首を傾げてそう答えた。
「家を建てるというのは」
「ははは、私だってそうでしたよ」
アッバースはそれには笑ってそう答えた。
「けれどすぐにおわかりになられると思いますよ。家が必要だと」
「そういうものですか」
「少なくとも官舎では駄目ですね」
ここでこう言った。
「私も結婚して狭い部屋から出ましたから。閣下もそうなりますよ」
「わかりました」
彼は首を捻りながらもそれに答えた。
「それではそれも考えておきます」
「是非そうされるべきかと。何でしたらよい不動産を紹介致しましょうか」
「いや、それには及びません」
だがそれは断った。
「自分で選ぼうと考えております」

## 第九部第四章　婚礼その七

「左様ですか」
「はい。まあそんなに贅沢なものはいらないかな、と考えてはいるのですが」
「いや、それはできないでしょう」
しかしアッバースはそれには疑問を呈した。
「どうしてですか？」
「元帥、そして副大統領ともなるとそれなりの家に住まなければならないということですよ」
「そうなのですか」
「ええ」
アッバースは頷いてみせた。
「まあそれはよく御考え下さい。そういえば副大統領の官邸もありませんでしたね」
「はい」
「それを建てるということもありますし。それは閣下がお決めになることです」
「わかりました」
今度はアッディーンが頷いた。
「それでは考えておきます」
「はい」
こうしてアッディーンとブワイフ、アッバースの話は終わった。そうこうしている間に式は終わった。そしてアッディーンとマルヤムは晴れて夫婦となったのであった。
「さて」
アッディーンは部屋に入るとマルヤムに声をかけた。
「これから宜しくな。一生を共にしよう」
「はい」

マルヤムはその言葉に頷いた。
「これから私は貴方の妻になりましょう」
「ああ」
今度はアッディーンが首を縦に振った。
「まさかこんな形で妻を迎えるとは思わなかったな」
「それはどういう意味でしょうか」
「いや」
ここで彼は言葉を変えた。
「私はね。元々は普通の公務員の家の息子だったのだ」
「それは御聞きしております」
式にはアッディーンの両親も列席していた。だが二人はこうした場には慣れてはいないので端の方で大人しくしていたのである。やはり生まれや育ちの違いは彼等にとっては大きなことであったのであろう。
「それがな。まさかシャイターン家の者を妻に迎えることになるとは。数年前には思いもしなかったことだ」
「あの」
それに対してマルヤムが口を開いた。
「全てはアッラーの決められたことですからそう思われることはないのではないでしょうか」
「アッラーの」
「はい」
マルヤムはまた頷いた。
「貴方と私が今結ばれることはアッラーが定められていたことなのではないでしょうか」
「ううむ」
それを聞いて考え込んだ。
「それは確かに」
認めた。
「この世の全てのことはアッラーが定められているのだから」

「はい」
「しかしそれでも不思議なものだ。思えば数年前まで私はほんの一士官に過ぎなかったのだ。ようやく戦艦の艦長になったばかりの。オムダーマンのな」
「それが今では副大統領にまでなられております」
「そうだ。これからどうなるのかはわからない。それもまたアッラーの御意志なのだろうか」
「そうです」
マルヤムは答えた。
「その通りでございます」
「そうなのか。それはわかっていたつもりだが」
彼は言った。
「それでも不思議な気分だな。アッラーにここまで導かれていたとは」
「これからもそうですよ」
彼女はここでこう言った。
「これからもか。そうだな」
アッディーンはその言葉に応えた。
「アッラーの思われるままだ。だがそれは貴女に対してもだ」
「はい」
マルヤムの返事はそれが当然であるかのようなものであった。
「私はそうであると思いますが」
「そうだな。それでは貴女が私を助け、私が貴女を守るのもまたアッラーの決められたことか」
「ええ」
彼女は答えた。
「ですが貴方は一つ大切なことを忘れられております」
「それは」
アッディーンは問うた。
「何なのでしょうか」

「心です」
マルヤムはそう答えた。
「心か」
「はい。人は心を持っているが故に人なのです」
「ああ」
「私もまた心を持っております。そしてその心は今貴方に向けられています」
「私にか」
「はい。それは貴方も同じなのではないでしょうか」
「・・・・・・・・・・」
アッディーンはそれを受けて暫し沈黙した。だがやがて口を開いた。
「そうだ」
そう答えた。
「私は今貴女を見ている。それが何よりの証拠だ」
「私も今貴方を見ています」
マルヤムはそう返した。
「そしてこれからも見ていたいです」
「私は軍人だ」
アッディーンはここでこう言った。
「戦場で倒れるかも知れない。それでもいいか」
「ええ」
マルヤムは答えた。
「それで私の貴方への心が薄れると思われますか」
「わからない」
素直にそう答えた。
「だが今はそうではないと思う。そしてそれが永遠に続いて欲しい」
「私もです」
マルヤムはまた言った。
「貴方の目が常に私に向いていてくれることを祈ります」

「わかった」
アッディーンは頷いた。
「それではこれからの長い旅を共に歩もう」
「はい」
二人の心が結ばれた。こうしてアッディーンとマルヤムは本当の意味で夫婦になったのであった。
副大統領の婚姻をオムダーマンの国民は祝った。彼等にとって自分達の若き英雄の婚礼は祝福すべきことであったのだ。皆アッディーンを讃えた。
「さて」
それはティムールでも同じであった。自分達の愛しの姫の婚礼を心から喜んでいたのである。シャイターンはそれを見て会心の笑みを浮かべていた。
「これでオムダーマンとの結びつきは万全だな」
シャイターンは官邸の自身の部屋で座りそう呟いていた。絹の豪奢なデザインの服に身を包んでいる。
「はい」
それにハルシークが応えた。
「次の段階に進む用意は整いましたな」
「そう、次だ」
シャイターンの目が光った。
「エウロパは今どうしているか」
「連合との戦いに全力をつぎ込んでいるようです。戦力は全て連合との戦いに向けております」
「そうか」
それを聞いて頷いた。
「総督府の兵も動かしているそうだな」
「はい」
ハルシークが頷いた。
「二百億の市民も避難をはじめております。既に国境では無人の星

系も出ております」
「時が来たようだな」
それを聞いてまた言った。
「それでは動くか。兵はどうなっている」
「何時でも」
彼は答えた。
「後は閣下の御命令を待つだけです」
「よし。では行くぞ」
そう言って立ち上がった。
「北を手に入れる。そして難民達をそこに受け入れる」
「はい」
「迅速にな。だが我等はあくまで北を手に入れることだけを考える。エウロパ本土には手をつけるな」
「わかっております。それではモントローズは放置で宜しいですね」
「モントローズか」
それを聞いて目の色を変えた。考える目になった。
「あれは連合のものではなかったのか」
そう言って笑った。ハルシークはそれを見て目で頷いた。
「はい」
そしてそれに答えた。
「そうでありましたな」
「よし」
それこそがシャイターンの望んでいた返事であった。彼はそれを聞いてから言葉を続けた。
「北を回復する。よいな」
「ハッ」
すぐにティムール軍が動いた。そして北に向けて進撃をはじめた。その行く先には彼の野心が広がっているのであった。そしてそれを阻むものは最早何も存在しなかった。

# 第九部第五章　戦いの意義その一

## 戦いの意義

エウロパ軍はブレシア、そしてモントローズに主力を向けていた。彼等はそこで連合軍と対峙するつもりであった。彼等は同時に決戦の覚悟を決めていた。

ブレシアには軍務大臣であるシュヴァルツブルグ自ら向かっていた。その下にはエウロパ軍の精鋭である多くの艦隊があった。それ等の艦隊は全てそれぞれの色により艦艇を塗装されていた。赤い艦隊もあれば青い艦隊もあった。彼等は『竜騎士団』と呼ばれていた。この名には由来があった。

竜は多くの種類があると言われている。赤い竜もいれば青い竜もいる。彼等はその色と吐く息により種類が分けられているのである。

赤い竜は炎を吐き青い竜は雷を吐く。そうしたふうに分けられているのである。彼等はその竜のように勇敢に、誇り高く戦うことを意識してそうした色にし、名乗っているのである。彼等もまた武人でありその心意気を見せているのである。

彼等が出撃するということはそれだけこの戦いがエウロパにとって重要なものであるということであった。シュヴァルツブルグは今決戦を挑むつもりであったのだ。

「閣下はあの場所に竜騎士団を送られた」

モンサルヴァートはモントローズに向かう途中乗艦であるリェンツィにてそう語っていた。その周りには参謀達や彼自身が率いている艦隊の司令達が並んでいた。

「それが意味するものは決戦だ」

「はい」

皆彼の言葉に頷いた。

「おそらくブレシアでの戦いは激しいものになるだろう。だがそれはモントローズでも同じことだ」

「今モントローズ要塞は連合軍の大軍が向かっております」
クライストが口を開いた。
「その数四百個艦隊、そしてサハラ義勇軍が四十個艦隊です」
「合計四百四十個艦隊か」
「はい」
「それでも方面軍としては一番少ないのか」
「そうです」
クライストは答えた。
「ですがそれでも」
「うむ」
彼は呟く。
「それでも我等の優に八倍はいるな」
モンサルヴァートはこう呟いた。そこには明るいものは感じられなかった。
「我が軍は今五十個艦隊だ。それで相手になると思うか」
「・・・・・・・・・・」
それを聞いて皆沈黙してしまった。相手になるとは誰にも思えなかった。それはもう言うまでもないことであった。だから沈黙してしまったのだ。
「モントローズ要塞には二十個艦隊程いたな」
「はい」
ニルソンが答える。
「そして総督府軍として二十個艦隊です」
「合わせて九十個艦隊か。周辺にいる部隊を全て集めても百をかろうじて越えるといったところだ」
「数においての劣勢は否定できません」
マトクの声は沈痛なものであった。
「ですがそれでも我等は目的を達成しなければなりません」
「目的と言ったな」
「はい」

マトクはモンサルヴァートに対して応えた。
「今回は目的を達成することこそが重要なのです。違うでしょうか」
「いや」
モンサルヴァートはそれに対して首を横に振った。
「その通りだ。この戦いは勝利を収めることが重要ではないのだ」
「どういうことでしょうか」
ゴドゥノフが尋ねた。
「勝利を収める必要がないのですか」
「そうだ」
モンサルヴァートは彼に顔を向けてそう答えた。
「要は総督府にいる二百億の市民を安全な場所にまで避難させればよいのだ」
「市民達をですか」
「そうだ。私の言わんとしていることがわかっただろうか」
「はい」
ゴドゥノフはそれに答えた。
「ですがそれにはまず敵を何とかしなければなりません」
「それだ」
モンサルヴァートはそこに言葉を入れた。
「時間もあまりないだろうからな」
「時間もですか」
「今サハラではティムールがいる」
「はい」
「彼等が動いてからでは遅いのだ。だから市民達はもう避難を開始しているのだ」
「その市民達の避難ですが」
プロコフィエフがここで言った。
「今彼等は皆それまでいた星を離れました。そして随時モントローズに向かっております」
「そうか。思ったより早いな」

「総督府の艦隊はそれを護衛しております。彼等も徐々に北に逃れております」
「二百億の市民全てがモントローズを通過するまであとどれ位かかるか」
「二ヶ月程かと」
「二ヶ月程か」
彼はそれを聞いて考える顔をした。
「難しいな、今の戦局だと」
「残念ながら」
それはプロコフィエフだけの意見ではなかった。ここにる多くの者も同じ考えであった。
「連合軍がモントローズに到着するまであと一週間程ですから」
「我等が到着するのとほぼ同時になるな」
「はい」
彼女は答えた。
「ですから戦いと援護を同時に行うことになるでしょう」
「問題は市民の安全だ」
モンサルヴァートの目の光が変わった。深刻なものとなる。
「それは何としても確保しなければならない」
「はい」
プロコフィエフだけでなく諸将がそれに頷いた。
「ですが困難ですな」
「いや、そういう問題ではない」
腕を組み考え込むアローニカに対してターフェルが言った。
「例え我々の命がどうなろうと彼等だけは保護しなくてはならないのだ」
「ターフェル提督の言う通りだ」
モンサルヴァートはそれをよしとした。
「閣下」
「諸君、我々は何だ」

そしてそのうえで彼等に問うた。

## 第九部第五章　戦いの意義その二

「軍人だ。いや、騎士だな」
「はい」
「騎士の務めは何だ。武器を持たない者を守ることではないのか」
「仰る通りです」
それがわからない者はこの場にはいなかった。
エウロパの軍人意識は連合やサハラのそれとは大きく異なる。連合は職業の一つとしか考えられていない。彼等は他によい仕事があればそこに就職する場合もある。彼等にとっては軍人とは特別な存在ではないのである。それは彼等が外敵を特に気にせずに済み、そして開拓や開発にのみ専念していればよかったからである。そうした意味で連合は非常に満ち足りた状況にあった。外敵への備えにそれ程気を配らずに済むということはそれだけで大きな幸福なのである。マウリアとの同盟、ブラウベルグ回廊、そしてサハラの戦乱は彼等にとって大きな祝福であったのである。
サハラはイスラムのジハードという思想が大きく影響していた。彼等にとって戦うことは時として聖なることであった。とりわけ異教徒との戦いはそうであった。だがそれはサハラ各国間においても時としてそうなった。彼等にとっては戦いは天界へ行くことのできる最も確実な方法である。だから彼等の多くは戦いを聖なるものとして認識しているのである。これはムハンマドの頃から変わらないことであった。
エウロパは彼等とは違う。エウロパの高級軍人の殆どは貴族で占められている。彼等は『高貴なる者の義務』を常に念頭に置いている。そしてそれに基づき行動する。彼等にとっては市民を守る為に戦うことこそそれであった。それが連合やサハラと違う点であった。彼等は騎士として、貴族としての意識が大きいのである。武器を持たない者を守るというのは昔から騎士に許された責務であり誇りで

あると考えているからこそであった。
「それでは結論は出ているな」
「はい」
皆それに頷いた。
「二百億の市民達には指一本触れさせない。よいな」
「ハッ」
それに敬礼して応える。
「例え我々がどうなろうともだ」
その声には決意の色が出ていた。彼もまた覚悟を決めていたのだ。
「そして」
話を続けようとする。だがここで若い士官が部屋に入って来た。
「どうした」
「オリンポスから電報です」
若い士官は一言そう言った。
「オリンポスからの電報」
「はい。こちらです」
一枚の紙を受け取る。そしてモンサルヴァートはそれに目を通した。
「何っ」
「どうしたのですか」
諸将は眉を顰めた彼に問うた。
「連合中央政府外務省から申し出があったらしい」
「申し出！？」
「それは一体何でしょうか」
「うむ」
彼は一呼吸置いてから答えた。
「総督府の市民に関してのことだ」
「総督府の市民達」
「今我々が保護しようとしている者達ですね」
「そうだ」

彼は頷いた。
「彼等の身の安全について連合から申し出があったらしい。聞きたいか」
「是非」
身こそ乗り出さなかったが是非共聞きたい話であった。皆モンサルヴァートに目を向けた。
「お願いします」
「うむ」
それを受けて口を開く。モンサルヴァートは言った。
「総督府の市民達が安全な場所に避難するまでモントローズ要塞周辺では停戦したいとのことだ」
「停戦ですか」
「そうだ。信じられると思うか」
「それはどうでしょうか」
まずマトクがそれに疑問の声をあげた。
「連合は内部でも様々な権謀術数が交差していると聞いております。彼等は経済や貿易を巡って常に内部の国家同士で抗争を繰り広げているではありませんか」
「それは知っている」
連合のそれぞれの国の外務省の仕事は連合内の国々との外交である。それは連合に加盟していながら互いに敵同士であるように熾烈な場合もあるのだ。連合は決して一枚板ではない。それどころかそれぞれの国々、それぞれの組織が外交戦争や貿易戦争、経済戦争を繰り広げている複雑な世界なのである。銃による戦争をしていなくとも連合はその内部で常に激しい戦争が行われている勢力なのである。だがそれは消耗ではなく生産の戦争であり国力伸張に役立っているのであるが。戦争は一つではないということの証左でもあった。
これはエウロパにも多少はある。エウロパも多くの国家からなる連合だからである。しかしそれは連合のものとは様子が違っている。言うならば地方政権同士のトラブルといったレベルである。連合の

それがまさしく戦争であるのに対してエウロパのそれはトラブルに過ぎない。それに強力な中央集権的である中央政府の力によりそれは速やかに抑えられるようになっている。エウロパと連合ではそうしたところも違っているのである。
「その彼等が、です。にわかにそんなことを言っても信じられません」
「それはどうでしょうか」
だがベルガンサがそれに反論した。
「ベルガンサ中将」
「私はこの申し出は信頼してよいと思います」
「何故だ？」
「これには連合中央政府、そして連合軍の威信がかかっているからです」
彼女は落ち着いた声でそう答えた。
「威信、か」
「はい。彼等がこう申し出をしてきてそれを破ったらどうなるでしょうか」
「当然信頼は地に落ちるな。もう誰も彼等を信用しなくなる」
「そうです。それは彼等にとっては著しい不利益です。ですからこの申し出は守られるでしょう」
「それでは信じてよいのだな」
「私はそう思います」
そう答えた。
「違うでしょうか」
「いや」
モンサルヴァートはそれに対して首を横に振った。
「私もそう思う。プロコフィエフ参謀総長の意見に賛成だ」
「有り難うございます」
「それでは連合のこの申し出を受け入れるのですね？」
「うむ」

ゴドゥノフの言葉に応えた。
「ラフネール閣下にお伝えしてくれ。私はこの申し出を受け入れると」
「ハッ」
モンサルヴァートの横に控えていたベニチャコヴァーがそれに敬礼で以って応えた。
「それでは電報を送らせて頂きます」
「頼むぞ」
モンサルヴァートは彼にそう声をかけた。
「それで異論はないか」
「ううむ」
提督や参謀達は考えた。だがここはモンサルヴァートの判断を信じることにした。
「わかりました。閣下の判断に従います」
「有り難う」
彼はそれを聞いて礼を述べた。
「それでは我等はこのままモントローズに入ろう。そしてそこで停戦を見守る」
「はい」
こうして彼等はモントローズに向かった。だがそれでも連合を完全に信用してはいなかった。敵をそう容易に信用する程彼等も愚かではなかったのである。

その頃連合においてはこの停戦についての話が行われていた。八条とカバリエ、そして統合作戦本部長であるバール等が列席していた。そしてそこにはアッチャラーンもいた。
「さて」
まずはアッチャラーンが口を開いた。
「モントローズでの一時停戦ですが」
「はい」

それを受けて八条が口を開いた。
「国防長官の提案によるもので間違いはありませんな」
「ええ」
それに対して頷く。
「間違いはありません。私が提案しました」
「わかりました」
アッチャラーンはそれを聞いて頷いた。
「それでは何故提案したのか御聞きしたいのですが」
「では」
そして話をはじめる。彼は丁寧に言葉を続ける。
「今エウロパは総督府から市民を避難させております」
「はい」
それは知っている。アッチャラーンもカバリエもバールもそれを受けて頷く。
「その数約二百億。少ないとは言えないでしょう」
「連合においても二百億といえばかなりの数になりますからね」
「はい、その通りです」
カバリエの言葉に応える。

## 第九部第五章　戦いの意義その三

「それだけの数を安全な場所にまで避難させるとなるとかなりの時間と労力が必要になります。それを受けて提案したのです」
「それはその二百億の市民の為ですね」
「はい」
アッチャラーンに応える。
「彼等は武器を持ってはおりません。あくまで我々の相手はエウロパ軍なのですから」
「それはどうでしょうか」
だがバールはそれに疑問の声を呈してきた。
「何かありますか？」
「はい。我々はエウロパと戦争をしております」
「はい」
「それならば市民も敵であります。今は武器を持ってはおりませんが今後はわかりません。それは理解しておられるのでしょうか」
「勿論です」
彼はそれにすぐに答えた。
「それならば何故」
バールは問うた。
「彼等の安全を保障するのですか。そのままモントローズを攻略してしまえばよいではありませんか」
「戦時法もあります」
八条はここで戦時法を出してきた。
「我々はこれを遵守しなければならないのは言うまでもありません」
「それは私も理解しております」
今度はバールがそれに答えた。
「ですがそれは攻撃しなければいいだけのこと。言うならば彼等の逃げ道を塞いでもそれは我々の責任ではないのです」

「はい」
「それは長官もおわかりのようですが。それでは何故」
「彼等とサハラの関係は御存知ですね」
「ええ」
　それを知らない者はここにはいなかった。バールだけでなくカバリエもアッチャラーンもそれに頷いた。
「ティムールは今総督府に向けて進軍をはじめたそうです。彼等の中にはエウロパに対して深い憎しみを抱いている者も多いでしょう。彼等がその二百億の市民に対して何をするかわかったものではありません」
「しかしそれは我等の責任ではありませんぞ」
「ですね」
　それは認めた。
「直接は」
「ならば構わないではありませんか。そもそもサハラに侵攻したのは彼等です。極論すれば自業自得です」
「そうだな」
　アッチャラーンもそれに同意した。
「サハラへの侵攻は我々も常に批判してきた」
「私も批判を言ったことがあります」
　カバリエが言った。
「何度言ったかわからない程に。どれだけ言ったやら」
「それは私もだ」
　連合とエウロパの関係は戦争になる前、いや宇宙への進出の頃から険悪なものであった。今では全く別の存在となってさえいる。お互いに最早決して相容れないものとなっていたのである。
　アッチャラーンもエウロパを批判したことがある。それも何度も。それは連合中央政府の閣僚にとって仕事の一つともなっていた。無論これはエウロパの方でも同じである。彼等は事あるごとに互いを批判し合い、対立していたのである。

「実は私もバール本部長と同じ考えなのだ」
「そうですか」
「長官、やはり彼等にとっては自業自得ではないか。そもそも彼等は連合の市民ではない」
「はい」
「彼等に対して危害を加えることはあってはならないが彼等がティムール軍に何をされようがそれは彼等の蒔いた種であって我々が手を差し伸べることではないと思うのだが。違うかね」
「確かにサハラへの侵攻は褒められたものではありません」
八条はそれに対して述べた。
「ですが市民には直接の責任はないではないですか」
「決めた政治家を選んだのは彼等だが。それでも責任はないというのかね」
「ですから直接の、です」
八条は反論した。
「それに彼等は今危機に瀕しています。それを放置しておくのは人道的に見て如何でしょうか」
「人道、か」
アッチャラーンは表情こそ変えなかった。だがその声はいささかシニカルであった。
「政治には不要なものの一つかもな」
それはある意味真実であった。政治の世界ではそれは時として無視されるべきものであるからだ。
「それを今言うのはどういうことか」
「総理、これは昔の中国の言葉ですが」
「中国の」
それを聞いてアッチャラーンは八条に目を向けた。目を向けながら彼は考えていた。彼が何を言うのかを。
「信なくば立たず、です」
「その言葉は知っている」

すぐに答えた。
「だが今使うべき言葉ではないと思うが」
「私は今使うべき言葉であると思いますが」
「わからないな。ではそれとエウロパの市民を救うことがどう関係があるのだ」
「そうです。むざむざ敵を増やすだけではないでしょうか。前線の兵士達のことを考えますと」
「兵士達にとってもようことだと思いますが」
「それは何故かしら」
カバリエが問うてきた。
「彼等にとっては敵が増えること程嫌なことはないと思うけれど」
「これによって敵は増えません」
八条はそう言い切った。
「むしろ減るものと思われます」
「それは何故だ」
アッチャラーンは問うた。
「エウロパの市民の命を救ったとなれば彼等も表立って反抗する理由が減るからです」
「つまり現地でのゲリラ化等も防ぐのだな」
「ええ」
それも八条の狙いであった。
「それに連合軍の信用を高める為にも。如何でしょうか」
「そうだな」
アッチャラーンは考えながらバールに目をやった。見れば彼も考えていた。ここで彼はそのバールに声をかけることにした。
「本部長はどう考えるかね」
「私ですか」
「うむ」
アッチャラーンは頷いてみせた。
バールは彼の目を見た。彼もアッチャラーンが自分に意見を代弁

させようとしているのがわかっていた。そして彼はここではそれに応えることにした。
「そうですね」
一言置いてから彼は答えた。
「連合軍の損害、負担が減るのならばいいと思います」
「そうか」
アッチャラーンはそれを聞いてまた頷いた。
「君はそう考えるのだな。そしてそれは軍部の意見と受け取ってよいのかな」
「軍部の、ですか」
「言い方を変えるか」
そう言いながら八条を横目で見た。
「制服組の意見だ」
「それでしたらその通りです」
バールも八条をチラリと見た。連合はシビリアン＝コントロールが徹底している。連合軍設立前からそれはありどの国においても軍は文民統制の下に置かれていたのである。八条もそれはよくわかっていた。彼は日本の軍務大臣の時軍服を着ることもあったがあれは日本独自のものであり軍務大臣も時と場合に応じて軍服を着ることもあったのである。だが階級はなくあくまで儀礼的なものである。軍を統制する立場としての着用であった。なお首相にはない。また天皇も着られることはなかった。
「私はあくまで制服組として意見させて頂きます」
「そうか」
それが賢明な返答であった。彼は統合作戦本部長、すなわち制服組のトップである。その彼の発言がかなり大きいのは言うまでもない。だが彼はあくまで制服組であり軍のトップではないのである。
「それでは本部長は長官の考えに賛成ということだな」
「はい」
はっきりとそう断言した。これで決まりであった。

## 第九部第五章　戦いの意義その四

「さて」
それを受けてアッチャラーンは八条に顔を向けた。
「長官はそれでいいか」
「ええ」
八条はそれに応えた。
「後は外相だけか」
「私は最初から長官の御考えに賛成です」
「そうか。なら問題はないな」
アッチャラーンはそれを聞いてまた頷いた。
「それでは停戦するとしよう。だが条件が欲しいな」
「それはもう考えてあります」
八条は即答した。
「モントローズ要塞を。これで宜しいでしょうか」
「そうだな。それならば問題ない」
アッチャラーンもそれを聞いて満足した。
「それではすぐに交渉に入りたい。外相には交渉にあたるスタッフを選んでもらいたいが」
「わかりました」
カバリエはそれに応えた。
「それではすぐに人選に入ります」
「うむ」
アッチャラーンはそれを認めた。
「それではそちらは頼むぞ」
「わかりました」
こうしてスタッフの人選もはじめられた。彼等は同時に動きはじめた。
連合はエウロパと南方において一時停戦することとなった。すぐ

に交渉にあたる外務省のスタッフが南方に派遣されることとなった。そこには八条も参加していた。
「長官も行かれるのですか？」
「はい」
彼はエウロパに向かうティアマト級巨大戦艦の一つテスカトリポカの艦橋において外務省のスタッフの声に応えた。そこには艦長達軍部の者も当然いた。
「交渉ならば我々がしますのに」
「まあ色々とやっておきたいことがありまして」
彼は微笑んでそう答えた。
「視察もありますしやはり軍事のことですから私が行かなくてはならないでしょうし」
「はあ」
「それに。彼にも会ってみたいです」
「彼とは？」
「おっと」
八条はここで言葉を引っ込めた。
「何でもありません。失礼しました」
「そうですか」
外務省のスタッフはそれ以上聞こうとはしなかった。何かあると思ったが今それを聞くつもりはなかった。
「わかりました。それではお願いします」
「ええ」
彼等の乗るテスカトリポカは太陽系を出た。冥王星が彼方に見える。かっては太陽系において最も離れた場所にあると言われていた。だが今は違う。
「雷王星も遠くなりましたな」
「はい」
八条はテスカトリポカの艦長である金青虎大佐に応えた。彼は韓国出身である。基本的にアジア系の顔立ちだが髪がやや縮れている。

そこからアフリカ系の血が入っていることがわかる。
「そろそろワープに入るとしますか」
「ですね」
「よし」
金はここで艦橋の制服の者達に声をかけた。
「副長、航海長」
「ハッ」
隣にいる二人の軍人がそれに応えた。
「ワープに入る。準備はいいか」
「わかりました」
こうして彼等もそれぞれの持ち場についた。そして指示を下した。
「本艦はこれよりワープに入る」
「ワープ航行開始準備」
次々に指示が下る。そしてワープに入った。艦橋の前のモニターが暗黒に包まれた。異空間に入ったのであった。
「これから長い旅になりますね」
八条はその暗闇を見ながらそう呟いた。
「宜しくお願いします。これから何かと大変でしょうか」
「いえ、そのような」
金は長官のそんな言葉を聞いてかえって恐縮してしまった。
「むしろ長官の方が。艦内でも仕事があるのですよね」
「ええ」
仕事は逃がしてはくれない。彼はここでも仕事に追われているのである。パソコンからメールで山の様に送られているのである。彼に休みはなかった。
「それでは少し部屋に行かせて頂きます」
「はい」
八条は用意された自分の部屋に向かった。艦長他一同がそれを敬礼で送る。そして艦橋を出た。一人の士官に部屋まで案内される。女性の士官であった。階級は中尉である。

「こちらです」
「どうも」
彼はその女性中尉に応えた。
「有り難うございます。案内して頂いて」
「いえ、これが任務ですから」
彼女はそれにこやかに答えた。見れば金色の髪をした白人の女性である。目は青灰色であり背も高い。モデルとしても通用する顔立ちとプロポーションを持っていた。それは連合の軍服で包んでいた。
連合の軍服はスーツ型である。黒い上着とズボンである。そして黒い靴を履く。ネクタイも黒である。そしてシャツは白だ。これは下士官及び将校のものとなっている。兵士は水兵の軍服である。やはり黒のセーラーである。連合軍においては男性も女性もズボンを履く。その方が動き易いからである。
下士官と将校の軍服は大体同じだが違いがある。それはまず帽子にある。
下士官のものにある徽章と将校の徽章は違う。そして顎紐は下士官は黒であるが将校は金色である。靴も下士官のものは動き易いものであるが将校のものは事務用のものとなっている。そして軍服の両腕の部分に金モールがある。これが最大の差であった。
まず少尉は細いものが一本ある。中尉になると太いものが一本つく。大尉になるとその太いものが二本になる。こうして徐々に増えていくのである。それが階級を現わしているのだ。下士官、兵士は肩に近い部分に階級章を縫い付ける。連合軍は軍服ですぐに階級がわかるようにしているのだ。エウロパ軍が肩に階級章を付けているのとはかなり違っている。そしてさらに大きな違いがあった。それは機能性である。
エウロパ軍のそれは儀礼を重視している。とりわけ将校、特に将官のそれはそうであった。これは彼等が貴族であるからであった。赤と黒に豪奢な装飾が施された軍服にはネクタイはない。胸は締め

られている。そしてマントもある。佐官はケープを着ける場合もある。それに対して連合軍のそれはマントなぞない。そしてデザインもまず動き易いかどうかを考慮されている。そして戦闘中には戦闘服を着る。エウロパではそれがない。両軍は軍服に至るまでその考え方が異なっていたのである。

「任務ですか」

八条はそれを聞いて声を出した。

「お疲れ様です。何かと大変だと思いますが」

「いえいえ」

だが彼女はそれに対して笑みで返した。

「甲板士官としては当然のことです」

「甲板士官ですか。懐かしい言葉ですね」

八条はそれを聞いて目を細めた。甲板士官とは艦の風紀や雑用を統括する士官である。若いなりたての士官が勉強の為になることが多い。

「私もやりましたよ」

「長官もですか」

「はい。日本軍にいた時に。あの時は寝る暇もなかったですね。これは今もですが」

「おや」

彼女はそれを聞いてまた笑った。

「私はまだ寝る暇がありますけれど」

「士官の数がそれなりにいますからね。それにこの艦ですと甲板士官も一人ではないでしょう」

「ええ」

それは事実であった。

## 第九部第五章　戦いの意義その五

「私の他にも何人か。私が親甲板ですが」
「いいですね。日本軍ではそこまで人手がありませんでした」
「そんなに人手不足だったのですか？」
「ええと」
八条はそれを受けて彼女に尋ねた。
「貴方はどの国の生まれでしょうか」
「私ですか？」
「はい」
彼は応えた。
「宜しければお答えして欲しいのですが」
「わかりました」
彼女は高い声で答えた。ドラマティック＝ソプラノであった。
「私はサロメ＝クレンペラー中尉です。出身地はイスラエルです」
「イスラエルですか」
「はい」
クレンペラーは頷いた。
「それならわかります。イスラエルは士官の充足率が我が国よりずっと高かったですからね」
「日本はそれ程士官の充足率が低かったのですか？」
「士官だけではないです」
彼はそう答えた。
「将兵全体が。日本においては軍人はとりわけ人気のない職業の一つでしたから」
「何故ですか？確かに他に職業が多くあるのは事実ですが」
「産業のあり方ですかね。それにそれ程必要とされていませんでしたし」
日本は連合の中ではとりわけ豊かな星系に恵まれ、そして治安も

よかった。その為軍人はあまり必要とされていなかったのである。だが尊敬はされていた。しかし多少歪な尊敬ではあった。
軍人が軍服でいるとマニアが来る。日本軍の軍服はそのデザイン性の秀逸さからマニア達には評判がよかったのだ。その兵器のデザインもであった。
知り合いの軍人が街にいると声がかかる。その声は温かいものではあったが叱咤激励であった。
「こら！こんなところで遊んでいていいのか！」
「訓練せんか！訓練を！」
「その軍服が泣くような真似はするな！」
スポーツ選手に送られるそれに近いものであった。彼等はそれを受けていささかスゴスゴとしていたのであった。
「兵器よりも人員の充足に気を配って欲しかったな、と。それに何故か士官にばかり仕事を集中させていましたし」
「それは大変ですね」
「実際の権限はそれで先任下士官に集中しているのは他の軍と同じでした。大変でしたよ」
「何か割に合いませんね」
「本当に好きでもない限りできない仕事でしたよ。何でも昔からそうだったといいますが」
「イスラエルではそんなことはありませんでしたね」
クレンペラーは八条の話が終わるとそう答えた。
「確かに仕事は下士官や兵士に比べて多いですが」
「はい」
「そこまではありませんでした。充足率もほぼ百パーセントでした」
「本来はそれが理想です。まあ人気不人気の職業は国によって違いますから。そんな街を歩いていたら訓練はどうした、とまで言われるような仕事はちょっと、ね」
「それだけ市民の期待の目が高いとプラス評価されてはどうでしょうか」

クレンペラーは笑いながらそう言った。
「だといいですが。何故かマニアが訓練の結果まで知っていてそれをネットで批評されるのは。あの国にこれで負けるのは許されないとか。うかうか合同訓練もできませんでした」
「何か日本の軍事マニアというのは深いですね」
「凝り性の国民性故でしょうね」
八条の返答はそうであった。
「日本人の凝り性は私も聞いております」
「やはり」
「それが多くの発明を生み出したということも。それは有名ですね」
「プラスの方向に働けば」
いささかシニカルな口調でそう述べた。
「ところが偏執さを帯びますと。確かに愛情があるのはわかるのですが」
「本当にスポーツのあれみたいですね」
「似たようなものかも知れませんね、彼等にとっては。ファンというものはそうなってしまうことが多いです」
「私もバレーボールは好きですよ。けれどそこまではいきませんね」
「バレーですか」
「ええ」
「どのチームのファンですか？」
「現地のチームですが。まああまり強くはないですけれど」
「そうですか」
そんな話をしながら二人は部屋に向かった。そして八条は自分の部屋の前に来た。
「ここですか」
「はい」
クレンペラーが答えた。
「どうぞおくつろぎ下さい」
「わかりました」

軍艦の中でくつろぐも何もないものだと思ったがそれは口には出さなかった。そして彼は部屋に入った。士官室の一つであり中々居住性はいい。連合の艦艇では全ての者に個室が与えられている。士官室は兵士や下士官のものと大体同じであるが中身が少し豪華になっている。

「それでは私はこれで」

「あっ、ちょっと待って下さい」

八条はここでクレンペラーを呼び止めた。

「何か」

「いえ、一つ気になることがあるのですが」

「気になること」

「はい。私の秘書官のことですが」

「秘書官といいますと彼のことでしょうか」

「はい」

八条はそれに応えた。

「木口君の部屋はどうなっているでしょうか」

「彼でしたら隣に」

クレンペラーはそう答えた。

「隣の部屋も空いておりましたから。それで宜しいでしょうか」

「ええ」

八条はそれを聞いて安心したように頷いた。

「それならば問題はありません。やはり何かと仕事のことで話をすることになりますからね」

「大変ですね、長官も」

「何、それが仕事ですから」

それはあっさりと受けた。

「デスクワークには慣れておりますから」

「そうですか。それでは」

「はい」

「あ、そうでした。一つ重要なことを申し上げ忘れていました」

ここでクレンペラーは一つのことに気付いた。
「私の部屋は向かい側にありますので。何かあれば是非おいで下さい」
「向かい側ですか」
「はい。長官さえ宜しければ」
「残念ですがそれは辞退させて頂きます」
しかし八条は彼女に対して微笑んでそう応えた。
「何故ですか？私の方は構いませんが」
「女性の部屋にそのまま入るのはどうかと思いますので」
彼はそう言葉を返した。
「ですから何かあればお伝えさせて頂きますので。御心配は無用です」
「そうですか」
クレンペラーはそれを聞いていささか残念そうであった。だがそれは顔には出さなかった。
「それでは」
「はい」
こうして彼女は部屋を後にした。後にしながらふう、と溜息をついた。
「光源氏は女性には目がなかったけれど」
溜息をつきながら呟く。
「今の源氏の君は女性よりお仕事の方が大事みたいね。残念だわ」
呟き終えるとその場を後にした。そしてその場を去った。
テスカトリポカはそのままエウロパに向かった。向かうはモントローズであった。

## 第九部第五章　戦いの意義その六

連合軍とエウロパ軍の戦いはそのまま続いていた。圧倒的な物量を誇る連合軍は北、中央、南の三方において果敢に攻撃を仕掛けていた。そしてエウロパ軍を徐々に追い詰めていたのであった。

北ではヴァルハラ星系に向かって進撃が続いていた。彼等の行く先に立ちはだかるエウロパ軍は最早おらず連合軍は快進撃を続けていた。

それは総司令部にも伝わっていた。彼等はニーベルング要塞群に総司令部を置きそこから戦線全体を統括していた。総司令官は宇宙艦隊司令長官であるマクレーン、副司令官は参謀総長である劉が務めていた。彼等は惑星において報告を受け取っていた。

「北が最も順調に進んでいますな」

マクレーンはかってファブリチーニがいた司令室において劉と話をしていた。二人はファブリチーニ達が使っていた豪奢な椅子に座っている。

「そうですな。しかしこれは予定通りです」

劉はそう答えた。彼の声は冷静なものであった。

「北は戦略的な価値は乏しいですから。占領していくだけで宜しいかと」

「ですな」

マクレーンはそれに同意して頷いた。

「あの地域のエウロパ軍はそれ程多くはないですし。精々五十個艦隊程でしたな。旧式の装備の艦艇ばかりで」

「はい」

劉はそれに答えた。

「それに対して我が軍は二百個艦隊。相手にはなりません」

「ヴァルハラ包囲は間も無くでしょうか」

「それについてはリバーグ司令次第ですね」
リバーグとはコロンビア出身の連合の軍人である。本名をネルソン＝リバーグといい北方方面軍の司令官を務めている。階級は元帥、慎重でかつ無駄な指揮のない人物として知られている。人間としても上司には忠実で部下の意をよく汲み、そして心優しいことで知られている。
「彼ならやってくれるでしょうが」
「ただやり過ぎてはいけないですが。彼の場合」
「敵を倒すにはいいでしょう」
「ふふふ」
マクレーンはそれを受けて面白そうに笑った。どうやら二人は北方については何ら心配はしていないようである。
「南は停戦ということで長官御自身が行かれておりますが」
「まあ今は様子見ですね、南方も」
「ええ。それでは問題は」
「わかっておりますよ」
二人はここで壁に掛けられている地図に目をやった。エウロパの地図であった。
「中央ですね」
「ええ」
二人は頷き合った。
「あそこには軍務大臣であるシュヴァルツブルグエウロパ元帥自ら向かっております」
「軍務大臣自ら陣頭指揮を執るとは。エウロパもいよいよ追い詰められたというべきか」
「それはどうでしょうか」
多少楽観的な見方をしようとしたマクレーンを劉が嗜めた。
「彼等はまだ力があります。そしてオリンポスへの守りはまだあります」
「それでは何故今」

軍務大臣自ら兵を率いてやって来たか。マクレーンは問うた。
「それだけあのブレシアが重要な地であるということですが」
ブレシアはオリンポスと北、中央、そして南を結ぶ重要な場所にあった。この地を抑えられるということは彼等にとって喉元に刃を突き付けられるということであった。
「あの星系だけはおいそれと渡すわけにはいかないのでしょう」
「それは私もわかっているつもりです」
マクレーンはそう答えた。
「しかし軍務大臣自ら戦場に出て来るとは。普通は有り得ないでしょう」
「連合の考えではそうでしょう」
劉はそれに対してはそう答えた。シュヴァルツブルグは元帥である。だが彼は普通の元帥ではないのだ。普通の元帥の上位にいるエウロパ元帥である。これはエウロパにおいても数人しかいない特別な階級であった。
エウロパは貴族制である。軍においては将校は貴族が占める場合が多い。その階級も連合のそれと比べると将官のそれが多くなっている。これは貴族のポストの為でもあった。
エウロパにおいて元帥が多いのもその為であった。連合では二十人と定められているがエウロパでは五十人以上存在する。エウロパ元帥とはその上に存在する階級である。軍の事実上の最高の階級であった。
エウロパ元帥は三人しかいない。シュヴァルツブルグと宇宙艦隊司令長官であるローズ、そしてモンサルヴァートの三人である。彼等は軍の頂点にいるのである。
彼等は軍人である。文官ではない。従って彼等が戦場に出るのは当然とも言えた。
「ですがエウロパでは違うのです」
劉はそれについて言及したのであった。
「エウロパでは現役の武官でも閣僚になれますな」

「ええ」
それはマクレーンも知っている。軍務大臣だけであるが。時には文官が軍務大臣になる場合もある。
「それで彼等は前線に立つのです。軍人なのですから」
「ふむ」
彼はそれを聞いてあることに気がついた。
「我々も軍人であります」
「はい」
「それでは彼等の相手は我々がしても問題はないということですな」
「ええ」
彼はそれを待っていたかのようであった。
「私はそう考えますが」
「わかりました」
マクレーンは我が意を得たとばかりに頷いた。
「それでは我々も中央に向かいますか」
「シュヴァルツブルグ元帥と戦いに、ですね」
「はい」
彼は答えた。
「今かれはエウロパの精鋭を率いております」
「その精鋭こそがエウロパの切り札」
「それを叩けば彼等の戦力は大きく減少します。やるべきかと」
「どうやら長官も御理解して頂けたようですね」
「いやいや」
マクレーンは手を振って笑ってそれに応える。
「参謀総長に教えて頂くまでは。それでは行きますか」
「はい」
こうしてマクレーンと劉は中央に向かった。そして彼等も戦場に赴くのであった。

中央が緊迫し、北方での戦いが連合有利となっていく中南方では

ある種の平穏が訪れていた。だがそれは厳密には平穏ではなかったかも知れない。
「目を離すな」
「了解」
モントローズ要塞に立て篭もる将兵達はそう言い合いながら目の前に布陣する連合軍を監視していた。彼等は今武器を持って対峙していたのである。これには変わりがなかった。
「連合軍の動きはどうなっているか」
モンサルヴァートはモントローズ要塞に入っていた。そしてベルガンサにそう問うていた。
「ハッ」
ベルガンサは敬礼をした後でそれに答えた。
「今彼等はこの要塞を半円状に包囲しております」
「そうか」
モンサルヴァートはまずそれを聞いて頷いた。
「彼等は臨戦態勢にあります」
「戦う気はなくしてはいないということか」
「そのようです」
ベルガンサはまた答えた。
「ですが避難している市民達に対しては攻撃を仕掛ける素振りは一切見せておりません」
「ふむ」
モンサルヴァートはそれを聞いて頷いた。
「それでは彼等は約束を今のところ守っているということか」
「そう判断されて宜しいかと」
「連合軍の軍律は厳しいと聞くが」
「そうですね」
ベルガンサは今度はそれについて答えた。
「規律は確かにいいようですね」
「ふむ」

「今まで掠奪や一般市民、捕虜への暴行は殆どありません。あってもすぐに厳罰の処されております」
「それもあの男の考えなのだろうか」
モンサルヴァートはそれを聞いてふとそう呟いた。
「あの男といいますと」
「彼だ」
それに対して一言そう述べた。

## 第九部第五章　戦いの意義その七

「八条義統だ。彼の他に誰がいる」
「今こちらに向かっている連合の国防長官ですね」
「うむ」
彼はまた頷いた。
「どうやら軍律にはかなり厳しい考えのようだな」
「それ以外は至ってのどかな状況だと聞いておりますが、連合軍は」
「守ることさえ守っていればいい、か」
「そう言うと案外寛容ですね」
「連合だからか。やはり我々とはかなり違うようだな」
「ええ」
エウロパ軍も軍律は厳しい。サハラにおいても一般市民に対して危害を加えたり略奪等は厳しく禁じられていた。これは武人、いや騎士としての誇り故であった。
だが連合のそれは彼等とは考え方の根本が異なるのである。
「連合のそれは職業倫理だと思われます」
「つまり基本としては軍人としての考えではないのか」
「ですが彼等は軍人です。ただそもそも軍人に対する考え方が我々とは異なるのです」
「何でも彼等にとって軍人は職業の一つに過ぎないそうだな」
「はい」
ベルガンサは答えた。
「それが彼等と我々の大きな差です」
「わからないな、そう言われると」
モンサルヴァートは首を傾げさせた。
「軍人とは我等にとっては義務の一つでもある」
「はい」
所謂高貴なる者の義務だ。

「だが彼等はそもそも貴族というものが存在しないな」
「彼等にとって我々は特権に胡坐をかく卑しい連中ですから」
「好きなことを言ってくれる」
それに対してモンサルヴァートの返答は一言それだけであった。
「我々の考えはどうやら彼等には理解できないもののようだな」
「所詮は連合です」
ベルガンサはシニカルにそう答えた。
「彼等は貴族ではありませから。当然エウロパを知ってはおりません」
「そうだ」
そこにモンサルヴァートの答えがあった。
「彼等は結局我がエウロパのことは何一つ知らないだろう」
「はい」
「その彼等が何を言っても。やはり容易に信じられるものではない」
「それでは今回の停戦も」
「深く信用してはいない」
モンサルヴァートはそう答えた。
「少なくとも私はな」
「そうですか」
「大体軍人というものが職業の一つに過ぎないという考えがわからない。我等は騎士だ」
「はい」
「エウロパを、そしてエウロパの力のない者達を守る、な。そうではないのか」
「いえ」
ベルガンサはそれに対して首を横に振った。
「私もそう考えております」
「そうだな。それが我々の考えだ」
モンサルヴァートは言葉を続けた。
「だが価値観は一つではない」

それが理解出来ない程彼は愚かでもなかった。
「彼等には彼等の価値観がある」
「はい」
「それに従えば彼等も正しいのだ」
「そういうことになりますか」
「うむ。ただ理解できるかできないかは別だ」
それはまた別の問題であった。
「私には彼等のそうした価値観が理解できない」
「戦場に赴くというのが職業の一つに過ぎないということがですか」
「彼等は傭兵ではないのだろう」
「はい」
「我々と同じ国の兵士だ。それは同じだ」
連合軍とエウロパ軍はそうした意味においては同じであった。
「だが根本が違う」
「騎士とは違うと」
「あくまで我々は騎士だ。タンホイザー元帥の言葉を借りるようだがな」
タンホイザーも元帥に昇進していた。彼もまた貴族であるので昇進は早いのであった。無論そこには彼の天才的な戦術の才が第一であるのは言うまでもないが。
「彼等は軍人ということか」
「そういうことになるでしょうね」
「我々の考える軍人とは違う意味で」
「はい」
「やはり理解できない部分が多い」
異なる世界のものに対して人間はえてしてそうである。これはモンサルヴァートも同じであった。
「如何ともし難いことだがな」
「残念なことですが」
「だが彼等が約束を守るのならばそれでよい。今はな」

「ですね」
ベルガンサはその言葉に頷いた。
「彼等にも彼等の誇りがある」
そう言って前にいる連合軍の大艦隊を見据えた。
「それは見てみたいものだ」
モンサルヴァートはそうした意味においても騎士であった。彼は相手を軽く扱うつもりはなかった。
「敵の国防長官、一体どのような者か」
「会うのが楽しみではありますね」
「うむ」
彼等は戦場を見据えながら話を続けた。そして来るべき男のことを考えるのであった。

連合軍は占領地においては極めて規律正しく真面目であった。一般市民への暴行等は厳しく禁じられていたのでそれは当然であったがそれを考慮しても彼等の行動は賞賛に値するものであったと言えよう。
「連合の軍隊だからどんなとんでもない連中かと思ったが」
エウロパのジャーナリストの一人が取材において驚きの声をあげた。彼の会社のあった星系は占領されており連合軍の取材をせざるをえない状況であったのだ。
「こんな規律正しい軍隊はエウロパ軍の他にはない。いや、彼等以上か」
そう評価した。母国の軍隊よりも規律が上だとまで言ったのであった。そこまで連合軍の規律は正しいものであった。
掠奪や暴行はないと言っても等しかった。あることにはあったがそこには法が行き届き見逃されることはなかった。彼等は占領地においてあくまで戦場の紳士であり続けたのであった。
占領された地域の国の首脳や王室には危害は一切加えられなかった。これまで通りの政務を認められた。ただ軍事施設は接収されて

いたがこうしたことも手続きを踏まえて行われていた。
財産や安全も保障されていた。貴族の邸宅に土足で上がりこんだりすることはなく美術館や博物館から絵画や彫刻品、宝石といったものが持ち去られることもなかった。これには博物館員達が胸を撫で下ろした。彼等は占領されたならば全て持ち去られると思っていたからである。
また連合軍は一般市民に対して親切に接するようにしていた。これは八条の直々の指示で行われていた。これは彼の考えによるものであった。こうして連合軍のエウロパにおいける評価はさらに高まった。敵の軍隊であるという現実は確かにあったがそれでも彼等の評価は高いものであった。
だがそうしたこととは別の面で色々な問題が起こっていた。
「まずい」
連合の兵士達はドイツのレストランに入って注文したメニューを食べて一言そう言った。
「味が薄い」
「いや、ない」
それが彼等の評価であった。彼等にとってエウロパの料理はあまりに味が薄く感じられるものであったのだ。これはドイツ以外の国においても同じであった。
連合の料理は味付けが濃い場合が多い。そして香辛料も多く使う。唐辛子や胡椒、そして多くの香草を使う。調味料もだ。その種類もまたエウロパのそれとは比較にならない程多い。そうした意味で連合の兵士達はエウロパの料理を味気ないものと感じたのであった。
「しかも量が少ない」
そうした言葉もあった。連合においてはレストランでも家庭でも料理の量が多い。エウロパのそれと比べると倍程も違っていたのである。
それは庶民の使うレストランだけで言えることではなかった。貴族達の店においてもそうであった。

「こんなのじゃ食べたうちには入らない」
エウロパの料理は彼等にとっては甚だ不評であった。味も量も彼等を満足させることはできなかった。そして彼等はエウロパにおいて驚いたことがまだあった。
貴族と庶民では食べるものが全く違うのである。連合においては金さえ出せば誰でも同じものが食べられるからこれは彼等にとっては考えられないことであった。
庶民がザワークラフトやソーセージ、オムレツ、ポトフ等を食べる。それに対して貴族達は聞いたこともないような料理を食べる。基本的に貴族は庶民の、庶民は貴族のものを口にはしない。幾ら金があってもそうであった。
「何故貴方達は貴族の食事を食べないのですか？」
「お金はあるのでしょう？」
連合の兵士達はエウロパの市民にそう尋ねた。尋ねられたのは一人の老人であった。
「連合では違うのですかな？」
「ええ」
「お金さえ払えば誰が何を食べようと構わない。まあ国によって食べ物はかなり違ったりしますが」
「連合ではそうなのですか」
その老人はそれを聞いて逆にそう呟いた。
「貴方達にとってはそれが当然のことでしょう」
「勿論」
「誰が何を食べようと構わないのではないですか？食べても罰せられるわけではありませんし」
エウロパにおいてもそうした自由はある。誰が何を食べてもよい、悪いということを定める法はエウロパにはないのである。なおサハラでは豚等を食べず、マウリアでは牛を食べないのは宗教的な理由である。エウロパにおいても連合においてのその信条からベジタリアンであったりする場合があるがこれもまた別である。

## 第九部第五章　戦いの意義その八

「身の程、というやつです」
「身の程？」
「はい」
老人は静かに答えた。
「平民には平民の、貴族には貴族の身の程があります」
「そんなものがあるのですか」
「はい」
「ううむ」
兵士達はそれを聞いて首を傾げて考え込んだ。
「私達はお互いにそれぞれの社会には入り込まないようにしているのです。まあ使用人として使われることもありますがそこでもお互いのことには入り込まないですね」
「貴族が平民を搾取しているとかそういうことはないのですか？」
「搾取？」
老人は兵士の一人のその言葉に目を丸くさせた。
「私達が搾取されているのですか？」
「ええ」
その兵士は答えた。
「貴族は自分達の為だけに貴方達を色々と使ったりしているのでしょう？」
「その財産まで取り上げることもあるとか」
「まさか」
老人はその言葉を笑い飛ばした。口を大きく開く。
「そんなことは有り得ませんよ」
「本当ですか！？何でも貴族達は横暴で独善的で」
「貴方達を平民と蔑んでいるとか」
「確かに私達は平民です」

老人は率直に答えた。
「ですがこれはちゃんとした身分ですよ。別に蔑まれているわけじゃありません」
「そうなのですか」
兵士達はそれを聞いて意外といった顔をした。彼等は今まで貴族は悪そのものと思っていたのだ。そう考える連合の者も多かったのである。
「確かに身分があるのは事実です。連合にはありませんね」
「ええ」
「人間は皆能力とかそうしたもの以外は同じですから」
これは連合の考えであった。あくまで連合の考えである。
「それは我々もわかっています」
「それでは何故」
「まあ国のあり方の違いですね」
老人はそう答えた。
「国の？」
「はい」
「それはどういうことでしょうか」
兵士達はそれを聞いてさらにわからなくなった。
「貴方達は二十世紀に建国された国が多いですね」
「ええ、まあ」
「中にはそうではない国もありますが」
しかしそれは日本やエチオピア、タイ等少数である。かって植民地だった国、宇宙進出以後に建国された国が連合の大勢であった。
「そこに答えがあります」
「そこに！？」
「ますますわからないのですが」
「つまり貴方達の国のスタートはそこからですね」
「はい」
「価値観もそこからです。ですが我々はそれより前に価値観がある

のです」
「フランス革命の時ですか？」
「残念ですが違います」
老人は兵士の一人の問いに首を横に振った。
「あの時から価値観が戻りまして」
「はあ」
「議会政治はそのままでね。これは御存知ですね」
「勿論です」
これは彼等も知っていた。エウロパにも議会があり選挙が行われる。ここでは平民出身の議員も大勢いるのである。
「貴族というのは決して悪ではないのです」
「そうでしょうか」
「ほら、人間の社会はやはりある程度はピラミッドになりますね」
「はい」
彼等は軍にいる。だからこれはよくわかった。軍は大統領を最高司令官にその下に国防長官がおり、そして制服組の階級が続く。完全にピラミッド型の社会なのである。
「秩序を維持する為に」
「そう、秩序です」
老人はその言葉を指摘した。
「秩序？」
「我々にとって貴族は指導し、守ってくれる存在なのです」
「そうなのですか」
「貴族に対する法と処罰は我々に対するものより遥かに重いのは何故だかおわかりでしょうか」
「何故でしょうか」
「それは彼等が責任ある立場にいるからです」
「責任ある立場」
「言い換えると高貴な者だからでしょうか」
「高貴な者だと刑罰なんかも重くなるのですか」

「はい」
老人は言い切った。
「責任ある立場ですから。軍でも将校と下士官、兵士では処罰が違うでしょう」
「ええ」
連合においてもサハラ各国の軍においてもこれは同じである。同じ不祥事が起こっても将校と下士官及び兵士とでは処罰が違うのである。下士官や兵士に対しては手心が加えられたりするが将校にはそれが一切ないのである。
「それと同じです。こう言うとわかり易いでしょうか」
「まあ」
「そう言って頂けると」
「確かに分けられていますしね。学校の教育の段階から」
「そうみたいですね」
エウロパにおいては平民の学校と貴族の学校で分けられている。流石に大学ではそうではないがそもそも大学に入るのも色々と子供の頃から検定がある。テストに受かれば誰でもどんな大学に入れる連合とは違うのである。なお連合においてはどの国にいても連合にあるどんな大学もテストを受けることができる。条件は高校を卒業しているかどうかだけである。ちなみに連合もエウロパも市民ならば移動は自由であるし選挙権もある。連合内、エウロパ内にある全ての国への移動、選挙の自由が保障されているのである。
「そして納税とかも。貴族と平民では違うのですよ」
「やはり貴族の方が色々と多いのですか」
「はい。そうしたことに特権はありません」
「意外と貴族にも厳しいのですね」
「当然ですよ。貴族には責任がありますから。あと一番厳しいのは私達に対することですね」
「それですか」
「間違っても貴族は平民に害を及ぼしてはならない。これはエウロ

パにおいては最も恥ずべきこととされています」
「例えばですが」
兵士の一人が尋ねた。
「貴族が平民を殺した場合はどうなりますか？」
「爵位や貴族としての身分、財産等を全て没収されたうえで死刑です」
「厳しいですね」
「当然ですよ。貴族は平民を守るのが仕事なのですから」
「はあ」
「高貴なる者には責務が伴うということです」
「それを聞くと本当に連合とは違いますね」
「食べるものが違うというのもそうした事情からでしょうか」
「そうでしょうね」
老人は答えた。
「例えば軍においては貴族、すなわち将校は食費も服も全て自分持ちです」
「えっ、それは本当ですか！？」
連合の兵士達はそれを聞いて皆驚きの声をあげた。
「ええ」
老人は彼等が驚いたのを見て少しキョトンとしながら答えた。
「連合では違うのですか」
「勿論ですよ」
彼等はそう答えた。
「それは国が支給してくれるものでしょう？」
連合では兵士も下士官も将校も同じ食堂で同じものを食べる。従って食費も国の費用で、ということになるのだ。軍服も同じである。ただ官給品であるので質が今一つということで業者がいる。彼等は将兵に軍服や靴、階級章等を売ることでかなりの利益をあげているのだ。中には特注する者もいる。
「貴族に関しては違うのですよ」

「はあ」
「そもそも食べているものがまるで違いますし」
「そんなにですか」
「戦艦等では音楽を奏でながらの食事となりますよ。ワイン付で」
「贅沢ですね、それは」
「その演奏者の費用も彼等が負担します。かなりの高給で」
「何か放送かければいいような」
「ははは、それでは雰囲気は出ませんよ」
老人はそこでまた笑った。

## 第九部第五章　戦いの意義その九

「生の演奏だからこそいいのです。違いますか？」
「それはそうですが」
「コンサートも生の演奏だからこそ行われるのでしょう？」
「はい」
兵士達はそれに答えた。
「それだからですよ」
「しかし贅沢と言えば贅沢ですね」
「我々では考えられない」
「あくまで軍艦のみですよ」
「軍艦といいますと」
「巡洋艦、空母、して戦艦ですね」
「あれ」
それを聞いて連合の兵士達はあることに気付いた。
「あの」
「何でしょうか」
「駆逐艦や護衛艦、砲艦といったものはそちらでは軍艦には含まれないのですか？」
「はい」
老人は当然といったようにそれに答えた。
「連合では違うのですか？」
「ええ」
「軍属にあるのは全て軍艦ですから。補給艦や揚陸艦も含めて」
「艦長は皆中佐待遇以上になります。まあ色々とありますが」
「そうなのですか」
「はい。どうもそこにも違いがありますね」
「そのようですね。私達も貴方達を見て色々と驚いていますよ」
「私達をですか？」

「ええ。何しろ大きい」
「大きい」
ここで彼等は自分達を互いに見合った。見れば連合の兵士達とその老人とでは頭一つ違った。
「連合の兵隊さんは皆そんなに大きいのですか？」
「え、いや」
彼等はそれを聞いて少しキョトンとした。
「これで連合では普通位ですよ」
「はい、まあ個人差は当然ありますけれどね」
「そうなのですか」
「見たところ我々と貴方達では背がかなり違いますね」
「それにエウロパの中でも。貴族と平民では頭一つ程違うような」
「やはりこれも個人差がありますが」
「食べているものの違いでしょうか」
「食べているものの」
「ここでもですか」
「そうですね。貴方達はやはり色々なものを食べられますね」
「ええ、まあ」
彼等はまた答えた。
「恐竜なんかも食べますし」
「マンモスも」
「美味しいのですか？」
「美味しいですよ」
「恐竜は鳥に似ていますね。そしてマンモスは案外柔らかい」
「はあ」
これには老人も驚いていた。
「そんなものまで」
「はい」
「意外とね。美味しいものですよ」
「他には鯨も。もっとも特定の国だけですが。これを食べるのは」

「ちなみに日本人は恐竜も鯨も刺身にして食べます」
「恐竜の刺身」
「これも美味しいそうです。日本の名物料理の一つです」
「アメリカだとフライドサウルス、中国だと唐揚げになりますよ」
「あとはカレーに入れたり。ブロントサウルスとティラノサウルスでまた味が違います」
「しかしそれでもモササウルスの刺身には驚いたな」
「ああ、あれはな。日本人の考えることはわからん」
「韓国だとキムチと一緒に鍋にしていたな。あれはあれでいい」
「そうか？タイ風の方があれには合っている」
「それは御前がタイ人だからだろ」
「まあそうだがな、ははは」
「ふうむ」
老人はそれを聞きながら冷静さを次第に取り戻してきていた。だがまだ信じられなかった。
「我々はそうしたものはあまり食べませんで」
「そのようですね」
「エウロパの下士官や兵士の食事ですが」
「はい」
「あれがそちらでは標準的な食事でしょうか」
エウロパの下士官及び兵士達の食事は彼等も知るようになっていた。これまでの戦いで捕虜を得ている。そこから彼等も情報を手に入れているのである。
その食事の内容は極めて質素なものであった。朝はソーセージにパン、ジャガイモのバター煮と黒パンだけであった。それに対して将校は朝から多くの肉や果物に囲まれているのだ。そしてワインまでついている。
昼も大体同じだ。ザワークラフトやオムレツ、パスタ等である。量こそはそれなりだが。そして将校達はフルコースである。音楽の中で食事を楽しむ。側には従兵までいる。

夜は少しましになる。ハンバーグや肉料理である。だがそれも連合の者から見ればやはり質素である。彼等はそれを聞いて大いに驚いたのである。
「あれは軍隊だからですよ」
「そうですか」
「多分食べているものの内容の水準はそちらと変わりがありません」
「では何故体格に差が」
「混血もあるでしょうが」
連合は言わずと知れた混血勢力である。アジア系もヨーロッパ系もアフリカ系も関係なく混血している。アメリカ大統領マックリーフのように金髪碧眼の黒人というのも多い程である。
「あとは食べている量。貴方達のあの食べる量には驚かされました」
「栄養の差、ですか。量における」
「ええ」
「そしてその内容ですね。恐竜とかマンモスとかそういうものを食べているせいでしょうか」
「動物性タンパク質、ということでしょうか」
「それはそちらも」
「同じ動物性タンパク質でも牛と鳥では栄養が違いますね」
「ええ」
「全く別物です」
「貴方達は我々のように羊や牛、豚等だけを召し上がられているわけではありません」
「はい」
「色々と召し上がられる。だからではないですか」
「ではそちらの貴族の方々は」
「もう我々と貴族は別の存在ですので。我々は決して混血しないのです」
「それはそちらになりますか」
「そう考えられています。まあ元々そうでしたから」

欧州の貴族と平民は基本的に異なる民族である。イギリスにおいては平民はケルトの末裔やアングロサクソンであった。それに対して貴族達はノルマンであったのだ。
貴族と平民は混血しない。そのまま民族的には異なるままであるのだ。
「あれは食べ物の問題はそれ程ではないかと」
「そうですか」
「我々もワインをいつも飲んでいますし。質こそは違えど」
「そう、それです」
ここで兵士の一人が老人に対してそう言った。
「エウロパではごく普通に酒を飲んでいますね」
「どういう意味でしょうか」
老人はそれに問うた。酒は連合でも広く飲まれているからだ。サハラにおいても今は同じである。
「それはそちらも同じ筈ですが」
「いや、これは失敬」
彼はそれを受けてまずは謝罪した。
「朝や昼に、という意味です。将兵の食事にもついておりますね」
「はい」
ただし下士官及び兵士はビール、将校はワインが普通である。
「あれはいいのでしょうか」
「何か悪いのですか？」
老人は逆にそう問うてきた。
「私は別にそうは思いませんが」
「あの」
話を聞きながら別の兵士が尋ねてきた。
「エウロパでは飲酒運転とかはないのですか」
「飲酒運転ですか」
「はい。連合ではアルコールを帯びて車に乗ってはいけないのですが」

「それはありませんね」
老人はそう答えた。
「我々にとっては酒は飲み物の一つでしかありませんから」
「それもエウロパの伝統でしょうか」
「そうでしょうね。我々は昔からごく普通に酒を水の替わりとして飲んできましたから。それは今でも変わりがありません」
「だからですか。艦内でも酒をおおっぴらに飲めるのは」
「連合では違うのですね」
「勿論ですよ」
兵士達は口を揃えてそう答えた。
「酒を飲みながら戦える筈がないじゃないですか」
「それはまた窮屈な」
「そう言われるとそうですが」
ロシア出身の兵士がそれに同意した。
「何分快く飲むことができないのが連合軍でして」
「おい」
それに他の兵士達が突っ込みを入れた。
「ロシアはまた特別だろうが」
「御前の国はまた飲み過ぎだ」
ロシアは連合きっての酒の産出国として知られている。ロシア伝統のウォッカだけでなく今ではワインやビールもよく製造されている。そしてそれを真っ先に消費するのがロシアなのである。ロシア人の一人当たりのアルコール消費量は連合一であった。エウロパのどの国よりもそれは上であった。マウリアやサハラ各国よりも上なので実際には人類一のアルコール消費量であった。
「酒を飲めるのは健康な証拠だ」
ロシアの兵士はそう反論した。
「御前等だってかなりいける方じゃないか」
「御前程じゃないぞ」
「一緒にするな」

彼は同僚達にそう反論された。ロシア人は気が長く忍耐強いことでつとに知られているが酒がなくなれば即座に暴動を起こすとまで言われている。彼等にとって酒はそれ程にまで大切なものであるのだ。

「まあロシアのことは私も聞いております」

「おお」

ロシアの兵士は老人の言葉を聞いて機嫌をよくさせた。

## 第九部第五章　戦いの意義その十

「ご老人は本当に話がよくわかっておられる」
「ですが我々とロシアの方々のお酒の飲み方はかなり違いますな」
「そうなのですか」
「はい。ロシアの方々は食後に飲まれますな」
「ええ」
ロシアの兵士はそれを認めた。
「我々は食事と一緒ですから。そこが違うのです」
「そうなのですか」
「ええ。あくまで酒は飲み物なのですから」
「ジュースと同じなのですね」
「簡単に言うとそうですね」
「ふむ。よくわかりました」
兵士達はそこまで聞き頷いた。
「どうも連合とエウロパは本当に何から何まで違っていますね」
「そうですね。それは私も感じました」
老人はそう言葉を返した。
「まさかここまで違うとは。いや、いい勉強になりました」
「ご老人」
兵士の一人があらためて彼に尋ねた。
「かなり博識と見受けられますがそれだけの知識を何処で見に着けられました？」
「いえ、仕事で」
「仕事で」
「はい。学校の教師をしておりましてね。それで色々と勉強したのですよ」
「ふむ、学校の先生でしたか」
「今は校長をしておりますよ。ヘンリー＝テューダー校でね」

「ヘンリー＝テューダー校」
「はい。公立の学校でして。その地区の名前をそのまま学校の名前としたのです」
「そうなのですか。公立ではよくある話ですね」
「実は私も同じ名前です」
老人は笑いながらそう答えた。
「えっ、それは本当ですか？」
「はい」
彼は頷いた。
「両親が一番覚え易い名前がいいということで。それでつけられたのです」
「それはまた」
「両親には感謝していますよ。おかげですぐに名前を覚えましたし」
「そうでしょうな」
自分の住んでいる街と一緒なのであるからそれは当然であった。
「また宜しければ学校においで下さい。また色々とお話しましょう」
「はい」
それからも兵士達とテューダーの話は続いた。そしてこの戦いの後このテューダー先生は兵士達との話を一冊の本にまとめた。そしてそれは連合とエウロパの文化を比較研究するうえで重要な資料となったのであった。

だがそうしたやりとりの中でも戦争は続いていた。連合とエウロパはエウロパの領土内で激しい戦闘を続けていたのである。だが南方だけは今は例外であった。
「敵の国防長官が到着したそうです」
モントローズ要塞にいるモンサルヴァートにそう報告が入った。
「遂にか」
モンサルヴァートはそれを受けて頷いた。
「はい」

報告をした若い将校がそれに答える。見れば彼の顔は表情がなく締まったものとなっていた。
「それではいよいよ交渉の開始だな」
「停戦及び総督府の市民達の安全についてですね」
「そうだ。今総督府では遂にティムールが侵攻を開始した」
「シャイターン主席自ら兵を率いているそうですね」
「そのようだな。それを見ても彼等が本気で総督府を全て手中に収めようとしているのがわかる」
「はい。そして今我等は彼等を抑えることができません。それ故に総督府を放棄したのですから」
「残念だがな。その通りだ」
「今重要なのは市民の安全です」
将校はそれを受けてそう述べた。
「私はそう考えますが」
「私も同じだ」
モンサルヴァートもそれに同意した。
「それがわかっているから彼等も停戦を申し出てきたのだろう。しかし」
「しかし？」
「相手からその話が出て来たのがな。どうにも気に入らない」
「我等から出るべき話だったということでしょうか」
「我々からか」
「はい」
その士官は頷いた。
「違うでしょうか」
「我々がそれを言い出すことができると思うか？」
モンサルヴァートは答えるかわりにそう問うた。
「それは・・・・・・」
「言えないだろう」
口篭もるその士官に対してそう述べた。

「そういうことだ。自国の市民の安全を他国、しかも敵国に要請する国が何処にある。それだけは何があってもできない」
「そうでした」
「だが敵からそれを申し出た時には受けることもできる。それは彼等が最もよくわかっていることだ」
「だからこそ申し出てきたのでしょうか」
「だろうな。これは連合、そして連合軍にとっては実にいい手だ」
「よいのですか」
「悪いと思うか？」
モンサルヴァートは彼にそう問うた。
「市民に銃を向けない軍ということを宣伝できるのだ。そして連合中央政府は敵国の者といえど銃を持たない者に対しては決して危害を加えないということの宣伝なのだぞ」
「それだけで彼等にとっては大きな宣伝ということでしょうか」
「そうだ。そしておそらくそれだけではない」
モンサルヴァートは言葉を続けた。
「彼等は取引も要求してくるだろうな」
「取引ですか」
「丁度格好の材料がここにはある」
「この要塞ですか」
「そうだ。これ以上の取引材料はないだろう。彼等はそれをどうするか、だ」
「それですか。困ったことになりますね」
士官は暗い顔になった。
「この要塞を彼等に明け渡すことになれば。南方の戦いは実質的に敗戦です」
「実質的に、か」
「はい」
士官は答えた。
「違うでしょうか」

「半分は正解だ」
モンサルヴァートはそれに対してそう答えた。
「だが半分抜けている」
「どういうことでしょうか」
「確かにモントローズを明け渡すだけで南方の戦いは我等の敗北になると思っていい」
「はい」
「だがそれでも我々はこの戦いには負けたことにはまだならないのだ」
「あっ」
士官はそれを言われてハッとした。
「成程、そういうことでしたか」
「そうだ」
彼は頷いた。
「南方を失うのは確かに痛手だ。総督府もな」
「はい」
「だがそれだけで戦いは終わったのではないのだ。それはよくわかってくれ」
「わかりました」
彼はそれに答えた。
「そうなると問題は中央でしょうか」
「だろうな」
モンサルヴァートは口に手を当てて考えながらそう述べた。
「今中央にはシュヴァルツブルグ閣下が精鋭部隊を率いて展開しておられる。だが連合軍もそこに主力を向かわせている。戦いは熾烈なものになるだろう」
「はい」
「既に北でも我等は撤退をはじめている。残念なことだがな」
「ヴァルハラ星系はやはり放棄せざるを得ないでしょうか」
「既に放棄は規定事項だ。これも止むを得ない」

「無念です」
「無念だと思うか」
「はい」
彼は感情を隠そうとはしなかった。はっきりとモンサルヴァートに対してそう言った。

## 第九部第五章　戦いの意義その十一

「私もエウロパの軍人です。それは否定しません」
「そうか」
モンサルヴァートはそれを黙って聞いていた。
「それは閣下も同じではないでしょうか」
「否定はしない」
一言そう答えた。
「私もエウロパの軍人だからな」
「ならば」
「臥薪嘗胆という言葉を知っているか」
「臥薪嘗胆？」
士官はそれを聞いてキョトンとした。
「知らないか。中国の言葉だが」
「申し訳ありません」
「連合のことを知っている者は少ないな。だからこそ」
モンサルヴァートはそれを聞いて顔を暗くさせた。だがそれは一瞬で消してその士官に対してまた言った。
「いや、いい」
「はあ」
「わかりやすく言おう。ブラウベルグのことだ」
「彼のことですか」
「そうだ」
言わずとしれた今のエウロパの建国者であった。エウロパにおいては国父とさえ謳われている。
「彼が欧州のリーダーになった時欧州は完全に彼等の後塵を拝していた」
「彼等は力と数をものに横暴の限りを尽くしていました」
これはエウロパから見方である。連合から見れば狡猾なエウロパ

に力を合わせて勝利したことになる。正義というものも立場によって変わるし勝利ならば尚更であった。
「それに対して彼は最初は耐えた」
「はい」
「何故だかわかるな」
「無論です」
士官は強い声でそれに答えた。
「機を待っていたのです。力を蓄え、そして彼等に対抗できるようになるまで」
「そういうことだ」
モンサルヴァートはそれに合格を出した。
「そしてヘンリー＝スチュワートも」
「はい」
「彼もまた同じだった。その想いを胸にここに辿り着いたのだ。このエウロパの地にな」
「何時の日か彼等に打ち勝つ為に」
「勝つ為には時として耐えなければならない。辛くともな」
「それが臥薪嘗胆の意味だったのですか」
「そうだ。エウロパではもう使われなくなりだしている言葉だがな」
モンサルヴァートはそう述べた。
「連合の諺だからといって忌避することはない。覚えておいて損はないぞ」
「はい」
「今が耐える時ならば耐える。それも軍人だ。屈辱にも忍ばなくてはならない時もある」
言葉には血が滲んでいるようであった。モンサルヴァートも今の状況には不満がある。だがそれでも言わざるを得ない状況であったのだ。
「今は、だ」
彼は続けた。

「耐える時だということはわかってくれればいい。機が来るのを待て」
「わかりました」
士官はそれに応えて敬礼した。
「それでは閣下の御言葉に従います」
「うむ。ところでだ」
話題を変えた。
「彼等は交渉の場を何処でしたいか、だ」
「我々が提案してもいいですね」
「そうだな」
モンサルヴァートはそれに同意した。
「こうしたことも駆け引きだ。場所を何処に設けるかでまた異なってくる」
「はい」
「すぐにそれについて話そう。幕僚達を呼んでくれ」
「わかりました」
士官が敬礼したその時にモナコが部屋に入って来た。
「閣下」
「どうした」
「今しがた連合の方から電報が入りましたが」
「連合から？」
「はい」
モナコは頷いた。
「御覧になられますか」
「うむ」
見ないではおられなかった。モンサルヴァートはそれに同意した。
「行こう。司令室だな」
「はい」
モナコは頷いた。そしてモンサルヴァートに対して述べた。
「それではすぐに」

「うむ」
こうしてモンサルヴァートはモナコとその若い士官を伴って要塞の司令室に向かった。そこには彼の幕僚達と要塞司令官であるオランケ＝ヴァン＝ホーリック元帥がいた。彼はオランダ貴族出身である。
「ようこそ、閣下」
「はい」
かって彼はモンサルヴァートの上官であった。彼が軍務省にいた時の直接の上司であったのだ。そしてモンサルヴァートは伯爵家であるが彼は侯爵家である。国は違えど爵位は関係がある。だから彼もホーリックに対してはいささか腰が低いのである。エウロパの貴族社会では爵位は大きな意味を持っているのである。
「連合から電報が届いているそうですか」
「はい」
それにはプロコフィエフが応えた。彼女もここに来ていたのである。
「こちらです」
「うむ」
プロコフィエフから一枚の紙を受け取った。そこにはラテン語で文が書かれていた。
「ラテン語か」
モンサルヴァートは最初にそれに気付いた。
「はい」
プロコフィエフとベルガンサがそれに頷いた。
「どうやら我々に配慮したものであるようですが」
「結構なことだな」
モンサルヴァートはそれに苦笑した。
「我々も銀河語は読めるが」
「それはそうですが」
だがそれに対してターフェルが苦い顔をした。

「何分複雑な言語ですから。文字を覚えるのだけで苦労します」
「あれはな」
それにはモンサルヴァートも同意した。
「アルファベットだけではない。漢字や平仮名まで使われている。キリル文字やヘブライ文字も入っていたな」
「ハングルやアラビア文字もありますよ」
「他にも」
「そうだ。一体どれだけの文字があるのかわからないが。不思議な言葉だ」
「どうもかっての日本語のように複数の文字を組み合わせた結果のようですね。長い歴史のうちにああなったのだとか」
「確かかっては英語を使っていたのだな」
「はい」
プロコフィエフがそれに答えた。

## 第九部第五章　戦いの意義その十二

「英語と中国語を。最初は連合の公用語はこの二つ程だったといいます」
「そうだったな、確か」
　これは普及に基づいて決められた。最初はそれをもとにそれぞれの国の言葉が使われていた。だが交流が進むにつれてそうした言葉も英語と中国語に混ざったのである。なお連合の英語はアメリカ英語である。エウロパでは英語と呼んでいたが連合においては米語と呼んでいた。カナダやオーストラリアの英語とはまた違う言葉であった。所謂キングス＝イングリッシュとは違い砕けており、またスラングも多い。だがかってロンドンのダウンタウンで話されていたコックニーとも全く違う。そうした独特の言葉であった。文法や単語の殆どが同じであっても発音や表現が全く異なっているのである。
　この米語と中国語も融合した。そして遂には一つの言葉となった。話し手の多い日本語やロシア語も入った。こうして今の銀河語が誕生したのである。彼等にとってはこれが普通の言葉であった。エウロパのラテン語やマウリアのヒンドゥー語と同じものであった。彼等にとっては。
「それがあそこまで変わるか」
「歴史が変わるとね。そうなります」
「我々はまだ英語やドイツ語を使っているというのにな。わからないものだ」
　エウロパの各言語はラテン語から派生している。だから残ったのである。
「それで今ラテン語で送ってきた。ふむ」
　そう言いながら文章を読む。見ればかなり綺麗な文章である。
「連合の者のラテン語とは思えないな。いい文章だ」
　モンサルヴァートはそれを見ながら呟いた。

「よく勉強している。連合にここまで見事なラテン語を書くことのできる者がいたとはな」
「そして何と書いてありますか」
アローニカが問うた。
「まあ落ち着いてくれ」
モンサルヴァートは彼を嗜めながら読み続けた。
「もうすぐ読み終わるからな」
「はい」
彼はそれを受けて気を鎮めさせた。そしてそれからすぐにモンサルヴァートはその電報を読み終えた。
「成程な」
「どのような内容でしたでしょうか」
「交渉についてだ」
彼は一言でそう述べた。
「交渉の」
「そうだ。八条長官から直々にな。停戦について交渉したいと申し出の電報だった」
「八条長官からですか」
「どうもこの電報自体が彼が直接打ったもののようだ。文章もな」
「ううむ」
エウロパの将達はそれを聞いて考え込んだ。
「敵の将自ら申し出てきたのですか」
「何かあるのでしょうか」
「いや、それはないだろう」
モンサルヴァートは企みの可能性を一蹴した。
「何かあるのならわざわざ自分の手で電報の文章まで書いたりはしない」
「はい」
「だが駆け引きはある。それも踏まえて自分の手で電報を打ったのだろう」

「駆け引きですか」
「そうだ」
モンサルヴァートは応えた。
「これが一士官が打った電報ならば問題はない」
「しかし連合中央政府の国防長官ともなれば話が違う、と」
「そういうことだ。だからこそ彼はあえて自分の手で打った」
モンサルヴァートはそう述べた。
「そういうことですか。そして交渉の場は」
「彼等の艦においてだ」
「彼等の」
「ティアマト級巨大戦艦テスカトリポカにおいて行いたいそうだ。私に対して来て欲しいと書いてある」
「閣下に」
「そうだ。見てくれ」
ここで周りの者にその電報を見せた。そこにははっきりと新ラテン語でヴォルフガング＝フォン＝モンサルヴァートの名が書かれていた。そして確かに彼に来るように書いてあった。
「ここに確かに書いてあるな」
「はい」
皆それを見て頷いた。
「確かに私に来て欲しいと書いてある。さて、これについてどう思うか」
あらためて問うてきた。
「どう思うか、ですか」
「そうだ。これに対してどうするべきか」
「それですが」
意見を求めてきたのである。それに対してゴドゥノフが答えようとする。だがそれよりも先にプロコフィエフが述べた。
「行かれるべきだと思います」
「参謀総長はそう思うか」

「はい。彼等も呼んだからにはそうそう無体なことはしないでしょう。ましてやそれは国防長官の直筆の電報です」
「うむ」
「何かあればそれがすぐに彼等の信用に関わります。おそらく彼等は何があっても閣下の御身を守るでしょう」
「そうか。確かにな」
モンサルヴァートはそれを聞いて頷いた。
「その通りだ。よし」
これで意を決した。
「それでは彼等の招待に応えよう。それでは行くぞ」
「はい」
まずはプロコフィエフが頷いた。そして他の者も頷いた。
「それでは参りましょう。我等も御供致します」
「有り難う。それではその間の要塞の防衛はホーリック元帥にお願いしたいですが」
「わかりました」
ホーリックはそれを受けて敬礼した。こうしてモンサルヴァートは敵陣に赴くこととなった。彼に従う多くの幕僚達が彼の周りを固め同行した。

彼は乗艦であるリェンツィに乗り込み出港した。そしてモントローズ要塞を離れ敵陣に向かった。前には星の大海を埋め尽くさんばかりの大軍が展開していた。
「ふむ」
モンサルヴァートはそれを見て目の光を変えた。
「見事な布陣だな。理に適っている」
「はい」
傍らにいたモンサルヴァートがそれに同意した。
「敵ながら見事です。寸分の隙もありません」
「確かにな。そして艦がどれも大きい。見よ」

そう言いながら目の前に映る駆逐艦を指差した。
「あれは駆逐艦だな」
「はい」
ベルガンサがそれに応える。
「我が軍の軽巡程はある。武装もなl。我が軍ではあれは駆逐艦とは言わない」
「それだけではありませんな」
アローニカが言った。
「あれは空母ですが」
「うむ」
彼は四段の独特の形をした空母を指差した。
「あれには我が軍の二倍もの艦載機が搭載されております」
「そして一度に出撃させるそうだな」
「ええ。そしてその艦載機もかなりの強さです。特に火力と防御力に秀でております」
「それは連合の艦艇にも言えます」
ゴドゥノフが述べた。
「恐ろしいまでのしぶとさです。あの駆逐艦にしろ戦艦の主砲の一撃だけでは沈みません」
「まさか」
それを聞いた幕僚の一人が驚きの声をあげた。
「嘘だと思うか」
「駆逐艦がそこまでの生存力を持っているとは」
「あれは我が軍では軽巡だな」
「はい」
「ならばわかるだろう。そういうことだ」
「むむむ」
その幕僚はそれを聞いて唸った。実際に見てみなければわからないがあの駆逐艦がエウロパにおいては到底駆逐艦とは言えるような代物ではないことはよくわかるからだ。

「砲艦やミサイル艦もあるな」
「あれの一斉攻撃には苦しめられました」
ターフェルが述べた。
「まずは巨大戦艦の攻撃とあれ等の一斉攻撃からはしまりまして」
「そうらしいな」
連合軍の攻撃はかなりオーソドックスなものである。まずはティアマト級巨大戦艦の巨砲の射撃からはじまり、そして砲艦とミサイル艦が攻撃を仕掛ける。その後戦艦と重巡が主砲で攻撃し軽巡や駆逐艦を伴って突撃する。この時砲艦やミサイル艦は援護射撃に徹する。そして側面や後方には高速戦艦の部隊が周り込む。敵を陽動すると共に彼等を挟撃するのである。こうしてかなりのダメージを与えたところで止めをさす。
空母のそれを主とした艦載機を出撃させるのである。それで徹底的に叩く。彼等の戦術はある意味機械化されておりセオリーに従ったものでしかない。だがそれだからこそ威力があった。連合軍の艦艇の性能及び物量を考慮したものであり、最良の戦術だからである。それに対処できるような数はエウロパにはなく、だからこそ彼等は敗北を重ねていたのである。
「そして最後に空母が。ですが我が軍にとっての最大の脅威はそれではないです」
「それは精神的な意味で、だな」
「はい」
ジャースクが答えた。
「やはりあの巨大戦艦が問題です」
そう言いながら目の前にいる巨大戦艦を指差した。そこにいるティアマト級巨大戦艦はその巨体を宙に浮かべていた。それだけで周囲を圧していた。
「あれの巨砲及び主砲の威力もさることながら」
彼は言葉を続けた。
「存在だけで脅威となっております。あの威容が将兵に与える影響

はかなりのものです」
「そのようだな」
それはモンサルヴァートも聞いていた。

## 第九部第五章　戦いの意義その十三

「あの巨大戦艦一隻で一個艦隊に匹敵する戦力もあるとも聞いている」
「はい」
ジャースクは答えた。確かにそれだけの戦力があの巨大戦艦にはあった。一個艦隊が退けられたこともあった。それ程までにあの巨大戦艦の戦闘力は大きなものであるのだ。
「そして精神的な影響は一個艦隊の比ではありません」
「そう、それこそが問題でして」
マトクも述べた。
「あの巨大戦艦が姿を現わしただけで戦意を喪失するような者まで出ております。おそらくそれも考えてあれを開発したのでしょうが」
「だとすれば連合軍もさるものだな」
モンサルヴァートはそう呟いた。
「最初情報部からの報告を聞いた時にはまさかと思ったが」
「こうした心理的な効果も狙ったものだったとは。ですがそれを何とかしませんと」
「我等に勝利はない」
一言そう言った。そして唇を固く引き締めさせた。
そうした話をしているうちに八条が乗艦するテスカトリポカのいる陣の最深部に辿り着いた。そこにも連合軍の艦艇が集結していた。
「やはりな」
モンサルヴァートはその艦艇を見て呟いた。
「ここに巨大戦艦を集結させている」
「はい」
見ればここにティアマト級が特に多かった。そしてその中央に一隻あった。それがテスカトリポカであるのは言うまでもないことだった。

「確かアステカの戦いの神だったな」
「え！？」
皆モンサルヴァートのその言葉を聞いて声をあげた。
「いや八条長官の乗る艦の名のもとになっている神のことだ」
モンサルヴァートは諸将が何のことかわからないのを見てそう説明した。
「ああ、それのことですか」
皆それを聞いて納得する。だが中にはまだよくわかっていない者もいた。
「あの」
その中の一人ニルソンがモンサルヴァートに問うてきた。
「神ですか」
「そうだ」
モンサルヴァートはそれに答えた。
「アステカというのはかって中南米にあった文明の一つだ」
「それは知っていますが」
「その文明にも神話があり神々がいた。テスカトリポカはその神の一人だ」
そう説明した。
アステカ文明は中南米に発展した文明の一つである。マヤ文明と時として並び称されかなり高度な文明であった。その特徴としては高度な数学や天文への知識であった。残念なことにスペインの侵略でそれはかなり破壊されてしまったが今ではそれでもかなりのことがわかっている。破壊されても残るべきものは残り、何時の日か人々の前に姿を現わすのである。
テスカトリポカはその中の神の一人である。時として魔神と呼ばれる。戦いの神であると共に恵みを台風に飼え人々に与える。生け贄を好む等残虐な一面もあるが七面鳥の変装を好み全ての階層に対して親しかった。主に戦士階級に信仰されていた神であるが他の階級にも信仰されていた。アステカの神々の中ではとりわけ有名な神

であり今の連合においては戦いと台風の神として信仰されている。
「そして今連合では戦いと台風の神とされている。アステカの神々の中でな」
モンサルヴァートもそれについて言及した。
「そうなのですか」
「うむ」
そして頷いた。
「連合では信仰されている神も多い」
そしてまた言った。
「アステカだけでなくエジプトやケルト、スラブのかっての神々も信仰されている。当然日本や中国の神々もその中にはある」
「多いですね」
「それだけ多様な文化を持っているからな。ゾロアスター教も信仰されているしな」
「あ、それは知っております」
ニルソンが声をあげた。
「ツァラトゥストラですね。ニーチェの本に出ていた」
「そう。音楽にもなっていたな」
「はい」
ニルソンは頷いた。楽劇『薔薇の騎士』で知られるリヒャルト＝シュトラウスが作曲したものである。彼は楽劇で有名であるがこうした曲も残しているのである。
「誰かが死ななくても常に何かが死んでいく、か」
ここでモンサルヴァートはふとそう呟いた。
「？それはどういう意味ですか」
また周りの者がそれに問うた。
「ああ。これは何時か指揮者の一人が言ったことだ」
彼はそう説明をした。
「エーリッヒ＝クナッパーツというのだが」
「ああ、彼ですね」

ニルソンはすぐにそれが誰かわかった。
「彼の指揮は実にいいですね」
「知っているのか」
「はい。ただ滅多に指揮棒を持たないのが欠点ですが」
「そうだな。おかげで私も直接聴いたのは数える程しかない。後はテレビかＤＶＤだ」
「私もそれは同じです」
ニルソンもそうであった。
「あれだけの才能を持ちながらあれでは。残念なことです」
「そうだな。だが音楽家というものはえてしてそうした独特の考えを持つ者が多い。これは音楽家に限ったことではないのかも知れないが」
「そうかも知れませんね」
それには皆同意した。
「だからああしたものが生み出せるのかも知れない。だがそれも命があればこそ、だ」
そしてそこで顔を引き締めさせた。
「また彼の指揮する曲が聴きたい。ならば」
そう言いながら前を見据える。
「行こう。そして話をしなければならない」
「はい」
皆頷いた。そして目の前にある巨大戦艦に向かった。戦いの魔神は周りに無数の艦艇を従えてそこにいた。その姿はまさに魔神そのものであった。

リェンツィはテスカトリポカの横に接舷した。そして艦内に入った。
「ようこそ」
そこに一人の妙齢の女性の士官が姿を現わした。
「連合軍のサロメ＝クレンペラー中尉です。案内役を仰せつかって

おります」
「うむ」
モンサルヴァートはそれに対し鷹揚に頷いた。皆礼装になっている。モンサルヴァートも新しいマントに身を包んでいた。
「それでは案内してもらいたい」
「わかりました」
クレンペラーはそれを受けて連合の敬礼をした。
モンサルヴァートも返礼する。それはエウロパ式の敬礼であった。
そして中を進む。艦内は白く塗装されていた。
一向はその白い艦内を進む。モンサルヴァートは進みながらあることに気付いた。
（やはりな）
それは彼にとって当然のことであった。
（重要な場所は通らないな。道も考えているらしい）
これは当然であった。重要な部分は敵に対しては見せるわけにはいかないからだ。所謂軍事機密というものである。
廊下には連合の将兵が整列していた。やはり彼等も礼装になっていた。皆軍服に身を包んでいる。黒い軍服が立ち並んでいる。その中には金も混じっていた。それが将校であるのは彼も知っていた。
モンサルヴァートはその中を進んでいく。かなり長い道であった。それも当然だと思った。これだけの巨艦である。元々軍艦というものは外見からは想像もつかない程その内部は複雑で広いのである。ならばこの艦も外見以上に内部が広いのは当然であった。
どれだけ歩いただろうか。いい加減足に疲れを感じた時に前を進むクレンペラーが立ち止まった。その前には一つの扉があった。
「お待たせしました」
そして振り向いてモンサルヴァート達に対してそう述べた。見れば宴会室銀河語で書かれている。長い従軍の間に将兵の心を慰める為に宴が設けられることもある。その為の部屋である。
「こちらです」

どうやらこの扉の向こうに八条がいるらしい。モンサルヴァートはそれを受けて一度息を飲んでから答えた。
「ここか」
「はい」
クレンペラーは頷いた。
「ではどうぞ」
そして扉を開ける。そこに彼がいる筈だった。
扉はクレンペラーの手によって開かれた。するとモンサルヴァートの目の前にまず赤い世界が入ってきた。
それは赤絨毯であった。その周りには多くの者が並んでいた。皆連合の軍服に身を包んでいる。
「ようこそ、テスカトリポカへ」
男の声がした。澄んで高い声だ。それに目を向けると広く豪奢な部屋の奥に一人の若者が立っていた。

## 第九部第五章　戦いの意義その十四

若者は気品のある眉目秀麗な顔立ちのアジア系の若者であった。黒い髪に黒い瞳をしており、そしてスーツに身を包んでいた。それで彼が文官であるとわかった。

モンサルヴァート達は赤絨毯の中を進んだ。そしてその若者の前に来た。左右には軍服を着た男達が立ち並んでいる。八条の周りにもいた。彼等の腕を見ると彼等が連合の将官であることがわかる。

連合においては将校の階級は腕の金色のモールからわかる。これはかってイギリス海軍が将校の軍服に実際に金モールを巻いていたことからはじまったのであるが連合軍はこれをそのまま使っているのである。エウロパ起源のものであるがそれが連合で生きているのである。これはかって世界の海軍がイギリス海軍に倣ったものがそのまま生きているからである。宇宙の時代になり、エウロパと連合が敵対関係になっても連合にはこれが残った。思えば因果な話であった。

まず准尉は細いモールが一本ある。士官候補生も同じだ。そして少尉はそれが太くなる。中尉にはその細いモールが一本つく。大尉は太いモールが二本になる。少佐にはまた細いモールがつく。中佐は太いモールが三本である。大佐になると四本になる。

佐官まではこうなっている。だが将官になると違ってくる。まずはその太いモールを二本合わせた太さのモールが付く。これが准将である。

少将には准尉の細いモールがそこに一本つく。中将になるとそれが少尉のものになる。大将はそれが二本になる。そして元帥は准将の太いモールが二本である。見れば若者の側にも一人いた。どうやら彼がこの方面の作戦の総指揮にあたっているらしい。

「連合中央政府国防長官八条義統です」

若者はそう名乗った。

「どうぞお見知りおきを」
「連合軍ホー＝ウェン＝チョムです。階級は元帥です」
その元帥の男が連合の敬礼してモンサルヴァートに対して言った。カンボジア人である。
「エウロパ元帥ヴォルフガング＝フォン＝モンサルヴァート閣下ですね」
「はい」
モンサルヴァートはそれに答えた。
「私がそのモンサルヴァートです」
「わかりました」
ホーはそれを聞いて豊かな頬を引き締めさせて頷いた。
「招きに応じて頂き感謝しております」
「はい」
モンサルヴァートはそれに頷いた。
「今回おいで頂いた理由ですが」
八条が話しはじめた。
「わかっております」
それにモンサルヴァートが答える。
「停戦のことでしたね」
「はい。それでは早速お話に移りたいのですが宜しいでしょうか」
「ええ」
こうして彼等は会談の場に向かった。そこはテスカトリポカの会議室であった。そこに連合の者とエウロパの者が向かい合って座った。見れば連合側には背広の者もいる。だがエウロパの者は全て軍服であった。それに両者の大きな違いが見られた。
（ふむ）
モンサルヴァートはそれを見てふと思った。
（これが連合というものか）
それが思ったことであった。連合についてはシビリアン＝コントロールが徹底していることで知られている。だがそれを実感したこ

とはなかった。しかし今この目で見てそれが実感できた。
しかし八条は何処か違っていた。背広を着てはいてもその動きは軍人のものと同じであったからだ。
（そういえば）
ここで彼は思い出した。
（彼は元々は軍人であったな）
そうであった。そこに秘密があったのだ。
文官と武官では動きが異なってくる。武官は独自の訓練を受けているからそれは当然であった。見れば彼の動きは武官のそれであった。
会談がはじまろうとしていた。連合とエウロパは断交状態にあったので今回の会談は実質的に両者がはじめて話し合いの席を設けた歴史的な会談でもあった。モンサルヴァートはそれを受けていささか緊張していた。そして機を待った。まずは何を言うべきか。そしてそれを決めて口を開こうとした。その時だった。
「さて」
八条が口を開いた。その時の口調も姿勢もやはり軍人のものであった。
「それではお話をはじめましょうか」
「はい」
モンサルヴァートがそれに頷く。そして会談がはじまった。八条が最初に口を開いたことがまず重要であった。エウロパの者の中にはこれに気付いている者もいた。モンサルヴァートもそうであった。
（しまった）
彼は心の中でそう呟き舌打ちした。
（先手をとられたか）
八条に目をやる。彼は穏やかな笑みを浮かべていた。だがそこに余裕が見られた。先手をとったことを彼自身もよくわかっていたのである。それ故の余裕であった。
八条は話を続けにきた。そしてまた言う。

「今我々は南方においては停戦状態にあります」
「はい」
モンサルヴァートはそれに対して頷いた。
「これは我々が申し出たものでした。市民達の安全を確保する為に」
「はい」
モンサルヴァートはまた頷いた。八条のペースに入ろうとしていることがわかった。
（まずいな）
これを感じて危惧を覚えた。このままでは一方的にやられてしまう。そう思い反撃に転じることにした。
「そのことですが」
「はい」
八条はそれを受けて応えてきた。
「妙なことがあります」
「何でしょうか」
八条はそれを聞き首を少し傾げさせた。
「彼等はエウロパの者です。それを何故」
「彼等は武器を持っているでしょうか」
八条はそう答えてきた。
「武器を」
「はい。連合軍の敵はあくまで武器を持っている者達だけです」
八条は毅然としてそう答えた。その声には重みがあった。彼の歳からは信じられない程の重みがった。モンサルヴァートはそれを受けて一瞬怯んでしまった。

## 第九部第五章　戦いの意義その十五

（むっ）
見れば彼と同じ程の歳である。それでここまでの重みのある言葉を出せるとは。それが不思議ですらあった。
「我々は市民に銃を向けることは決してありません」
「決して、ですか」
「はい。例えそれがエウロパの市民であってもです。それは軍人のすることではありません」
「軍人の、ですか」
「はい」
「少し妙なことですね」
モンサルヴァートはややシニカルにそう返した。
「といいますと」
「軍人というのは敵を倒すものです」
「ええ」
それは八条も同じ考えであった。
「我々は敵です。それをどうして助けられるというのでしょうか」
「それは先程申し上げた通りです」
八条はそう返した。
「彼等は我々にとって敵ではないからです。武器を持っておりませんから」
「それでは市民は敵ではないと」
「はい。我々の敵はあくまで貴方達エウロパの軍人だけです」
そしてそう言い切った。
「市民は最初から攻撃の対象とは考えていないのです」
「そうだったのですか」
「はい」
八条は答えた。ここでモンサルヴァートはあることに気付いた。

それは八条の使っている言葉である。それは流暢なラテン語であった。
流暢なだけではない。実に丁寧な表現であった。そこからは気品や優雅さも感じられた。
（ふむ）
彼はそれを聞きながら思った。
（連合にもこうした者がいたのか）
それは彼にとっては意外なことであった。彼は今まで連合といえば粗雑なイメージがあったのだ。これは連合の多様性と表裏一体と言えるものであり確かに連合にはそうした印象が強い。だがそれはあくまで一面的なものではある。だが彼にとってはそれが連合に抱いている第一の印象であった。
だからこそ八条のような者は意外であった。何故なら彼はどちらかというとモンサルヴァート達連合の貴族に近いものも感じるからだ。
だがそれだけではなかった。やはりそこには連合の者の空気があった。八条は連合の香りの中に微かにエウロパの貴族に似たものを漂わせた、そんな男であるように感じられた。
（確か日本の由緒正しい家に生まれたそうだな）
それは当たっていた。八条は日本の名家の出身である。だがそれを鼻にかけるところはなかった。ごく自然な姿であった。それがまた彼の魅力でもあるのだ。
「長官」
モンサルヴァートは彼に対して言った。
「何でしょうか」
「市民に対しては感謝致します」
「はい」
「彼等の安全を保障するという貴方達の武人としての心意気は深く感じ入りました。それは本当に深く感謝致します」
まずはそう礼を述べた。

「これは総督府の全ての市民が安全な場所に避難するまで続けます。ですから御安心下さい」
「はい」
今度はモンサルヴァートが頷いた。
「しかし」
だがここで彼は突っ込みを入れた。
「それだけではないでしょう」
「といいますと」
「いえ」
ここで一呼吸置いた。
「我々は交戦中である。これは揺るがしようのない事実です」
「はい」
「それ故に。貴方達は我々に何かしらの見返りを欲しているのではないか、と思いまして」
「見返りですか」
「はい。違いますか」
そう言いながらモンサルヴァートを直視した。彼の反応を待った。
「ふむ」
八条は少し間を置いてから答えた。
「モントローズ要塞ですが」
「はい」
「市民達が全員避難した後に譲り受けたいのですが」
「モントローズをですか」
「ええ」
八条はにこやかに笑ってそう答えた。
「宜しいでしょうか」
「・・・・・・・・・」
これにはエウロパの全ての者が沈黙した。連合が全くの善意で市民の安全を保障しているとは流石に誰も考えてはいなかった。だがそれは彼等にとってはあまりに大きな取引材料であった。

「ただ一つ述べさせてもらいます」
ここで八条はまた言った。
「エウロパの市民の安全はこれまで通り保障します。それは御安心下さい」
「そうですか」
これは八条の本心であった。だがそれと同時に彼はこの言葉がこうした場合圧力にもなるということがわかっていた。暗に市民を人質にとっているということになるからだ。これも計算のうちであった。
「そのうえでお話をしたいのです」
「わかりました」
エウロパの者達は頷きながらも内心では警戒を強めていた。
「それで」
「お待ち下さい」
八条の言葉を遮るようにしてモンサルヴァートが言った。彼はここで反撃に転じることにしたのだ。
「モントローズのことですが」
「はい」
「それは割譲ということでしょうか」
「割譲ですか」
「はい」
その目は八条を見据えていた。一歩も退くつもりはなかった。
「違いますか」
「それは違います」
八条はそれに対してそう答えた。
「違うのですか」
「はい。言うならば一時占拠です。戦いが終わるまでの」
「ではモントローズは貴方達の領土ではない、と」
「ええ。従ってそこにいる市民に対しても危害を加えないことを約束します」

モントローズ要塞にも市民達はいる。将兵を相手にした商いを扱っている者達や将兵の家族達である。彼等の数もかなりのものになるのだ。
「そして貴方達に対しても」
「我々に対しても、ですか」
「はい」
八条はそう答えた。
「モントローズは平和裏に占拠させてもらいあちのですが。宜しいでしょうか」
そう語る八条の顔を見た。やはり邪な気配はなかった。モンサルヴァートはそれを見ながら考えていた。
「暫く時間を頂きたいのですが。宜しいでしょうか」
「勿論です」
八条はその申し出を快諾した。
「よく御考え下さい。よい決断をお待ちしておりますよ」
「わかりました」
彼はそう答えて頷いた。
「それではこちらの艦に一時戻らせて頂きます。それも宜しいでしょうか」
「ええ」
八条はそれも認めた。
「どうぞ。我々は何時でもお待ちしておりますよ」
「はい」
こうして会談は一時休会となった。そしてモンサルヴァート達はリェンツィに戻った。モンサルヴァートは艦に戻るとすぐに司令室に同席していた将官達を入れて話をはじめた。
「先程の交渉のことだが」
「はい」
彼等はそれに頷いて答えた。
「モントローズを要求してきた。これについてはどう思うか」

「予想通りではないかと思います」
プロコフィエフがそう答えた。
「予想通りか」
「はい。彼等も戦争をしております。それだけのものを要求するのも当然ではないかと思います」
「当然か。確かにな」
モンサルヴァートはその言葉に見るべきものを見出していた。
「その通りだ。だがそう易々とモントローズを明け渡すわけにもいかない」
モントローズは南方の要衝である。ここを失うということをエウロパにとって南方での戦いにおいて敗北したということを意味しているのだ。それだけは認めるわけにはいかなかった。
「我が軍の威信に関わることだからな」
「はい」
それは皆わかっていた。だからこそ退くわけにはいかなかったのだ。
「要塞を守り抜く自信はある」
モンサルヴァートはここでこう述べた。
「敵の兵力がどれだけあろうとな。だがそれだけではない」
「市民のことですか」
「そうだ。彼等のことがある。あの八条という男市民を人質にとるような男ではないと思うが」
「それでも完全に信用はできませんね。彼が敵であることに変わりはないのですから」
「そういうことだ。さて、どうするかだ」
モンサルヴァートはここでまた言った。

## 第九部第五章　戦いの意義その十六

「退くわけにはいかない。だが戦うとなると」
それは容易に結論が出そうにはなかった。皆沈黙してしまった。だがその沈黙を破る者が姿を現わしたのであった。
ドアをノックする音がした。モンサルヴァートも諸将もそれに顔を向けた。
「入れ」
「はい」
それに従い一人の士官が入って来た。それはタンホイザーであった。
「タンホイザー提督」
モンサルヴァートも諸将も彼の姿を認めて驚きの声をあげた。
「何故卿がここに」
彼はまだサハラにいる筈であったのだから。誰もが驚くのも当然であった。
「おや、驚かれているようですね」
「それはそうでしょう」
クライストが彼に対してそう述べた。クライストは上級大将、タンホイザーは元帥となっていたのだ。
「確かまだサハラにおられる筈ですから」
「市民の避難及び誘導が容易にいきましてね」
彼はにこやかに笑ってそう答えた。
「皆安全な場所に避難させることができましたよ」
「もうか」
それを聞いてモンサルヴァートが声をあげた。
「二百億の市民をか。何時の間に」
「戦闘が行われていませんでしたから」
タンホイザーはそれに対して涼しげな言葉でそう答えた。

「ですから容易でした。狼に襲い掛かられる心配のない羊の群れを誘導するのは容易いことです」
「ううむ」
口で言うのは容易い。だが実際に行動し、それを実現させるのは容易ではない。諸将はタンホイザーの言葉を聞きながら内心その能力に驚嘆していた。
「皆モントローズを越え安全な場所にまで避難させました。これでサハラに残っているエウロパの者は一人もおりません」
「そうか。一人もか」
「はい」
タンホイザーは答えた。
「マールボロ閣下もモントローズに入られております。総督府の軍隊も全て撤退を完了しました」
「そうか。ならいい」
「はい」
タンホイザーはモンサルヴァートの言葉に頷いた。
「だがもう一つ気になることがある」
「何でしょうか」
「よく卿がここに来れたな」
「火急の用件でしたので」
彼は険しい声になった。
「火急の？」
「はい。北方と中央のことですが」
「押されているのか」
モンサルヴァートには出る前に何の話のことなのか予想がついていた。
「はい」
そしてタンホイザーはそれに頷いた。
「北方ではヴァルハラを明け渡しそのまま撤退を続けております。連合軍の勢いを止めることができないでおります」

「そうか。やはりな」
　これはモンサルヴァートにとっては想定の範囲内のことであった。深刻な顔で応えながらも予想していたことなので特に驚きはしなかった。
「そして中央部ですが」
「そこはどうなっているのだ」
「危機的な状況となっております」
「それはまことか」
「はい」
　タンホイザーは頷いた。
「連合軍は宇宙艦隊司令長官であるマクレーン元帥と参謀総長である劉元帥が前線で指揮にあたっております。その数約千四百個艦隊」
「義勇軍も合わせてか」
「はい。それにより一気に攻勢を仕掛けてきたのです」
「まずいな」
　それを聞いてゴドゥノフが呻くような声を漏らした。
「そこまでの数だと。如何に我が精鋭達といえど」
「はい。今シュヴァルツブルグ閣下は危機的な戦場を何とか立て直そうと必死です。ですが」
「それもままならないのだな」
「はい」
　それが問題の本質であった。タンホイザーの顔にもいつもの明るさは弱まっていた。
「我が軍は彼等に対して二百個艦隊。数においては大きく離されております。それが大きな影響を与えております」
「そうだ」
　それを聞いたモンサルヴァートが頷いた。
「全ては数なのだ。彼等の攻勢はな」
「はい」
「数は力だ。だがその数を押し留めなければ」

彼は言葉を続ける。
「我等に勝利はない。違うだろうか」
「その通りです」
プロコフィエフがそれに応えた。
「閣下、中央での我が軍の壊滅は今後の戦局に大きな影響を与えるものかと思われます」
「うむ」
それはわかっていた。中央にいるエウロパ軍は精鋭騎士団も擁し、その数もエウロパ軍の主力と言えた連合軍が彼等の殲滅も考えているのはわかっていた。そしてそれにより一気に首都であるオリンポスを衝こうと考えていることも。中央での敗北はそのままエウロパの敗北に直結するのだ。
「今我々の総戦力は総督府の艦隊を入れて百五十程になっております」
「うむ」
「今向かえば中央の戦線を立て直すことも可能ですが」
「選択の余地はないか」
「そう思います」
プロコフィエフはそう述べた。
「南方を明け渡してもそのまま首都に向かうにはまだ距離がありますが」
「中央は違うな。彼等もそれがわかっている」
中央にはエウロパの交通の要地であるブレシア星系があった。そこを抑えられると首都への道が確保されると共に北方、南方も抑えられる。そこを渡すのだけはならなかった。
「おそらくシュヴァルツブルグ閣下の艦隊はブレシアに向けて撤退をしておられると思います」
「北方の艦隊もな」
「はい。ですから我々も急がなくてはなりません。ただブレシアに入るのではなく」

「わかっている」
モンサルヴァートは答えた。
「ブラショブ星系に向かうべきだな」
「はい」
それがプロコフィエフの考えであった。
ブラショブ星系はブレシアの前方にある星系である。多くの惑星と衛星を持つ星系として知られている。
「おそらくあそこで合流できると思います」
「ふむ」
モンサルヴァートはそれを聞いて再び考え込んだ。
「向かうとしたらそこか」
「はい」
「それでは閣下」
「こうなっては致し方あるまい」
モンサルヴァートはマトクにそう答えた。
「モントローズを明け渡す。よいな」
「はい」
中央での敗北はそのままエウロパの危機となる。それは何としても避けなければならなかった。モンサルヴァートは決断したのであった。
「おそらくそれは連合の方もわかっている筈だ」
「でしょうね」
それはも全ての者がわかっていることであった。
「それならば行きますか」
「ああ」
モンサルヴァートは頷いた。こうして彼等は再び会談の席に着くことを決意した。その頃八条はテスカトリポカの艦橋にいた。
「ふむ」
彼は艦橋において戦争全体の流れを聞いていた。
「どうやら流れは我が軍に傾いているようですね」

「はい」
それにホーが応えた。

## 第九部第五章　戦いの意義その十七

「北方はヴァルハラ星系を占領しました。そして敵軍を追撃中です」
「この南方では停戦中ですが中央では」
「はい」
ホーはまた応えた。
「いよいよ我が軍の攻勢がはじまります」
「はい」
八条はそれに頷いた。
「そのままオリンポスを目指すとしますか」
「そうですね。しかしそれだけではないです」
ホーは言った。
「北からもこの南からも攻め上がりたいものです。予定通り」
「ええ。しかしそれにはまだ問題があります」
彼は前方のモントローズ要塞を見ながら言った。
「まずはあの要塞を何とかしないければ」
「はい」
「それこそがこの南方の戦いの意義。あの要塞を手中に収めることこそが南方の戦いにおける勝利なのです」
「問題は彼等ですね」
ここでホーはエウロパの者達について言及した。
「彼等がどういった反応を示すか、です」
「それですか」
それを聞いた八条の顔が笑みとなった。
「彼等の動きならばわかりますよ」
「といいますと」
「今しがたまた艦艇が一隻こちらにやって来ましたね」
「タンホイザー元帥のものですね」
艦長である金がそれに応えた。

「はい。彼が来たのはおそらくどうしても伝えなければならないことがあるからでしょう」
「それはまさか」
「そのまさかだと思いますよ」
八条はホーにそう答えた。
「今重巡ロッキーの艦長であるメアリー＝ボニング中佐が彼の接待にあたっておりますが」
「メアリー＝ボニング中佐ですか」
「はい。御存知ですか？」
「ええ。ツバル出身の女性艦長でしたよね」
「はい」
金が答えた。
「何でもここまでの戦いでかなりの武勲をあげたとか」
かって食堂で自分の艦の乗組員達とスパゲティについて話していた女艦長である。彼女はこの戦いにおいて今までエウロパの七隻の艦を沈めているのだ。
「はい。彼女はかなり優秀な艦長ですよ」
「女性とは思えない程の勇敢さでして」
「そうですか」
八条はそれを聞きながら思索に入った。
「女性といっても軍人に向かないわけではありません」
「はい」
これはこの時代においては言うまでもないことではあった。連合においてもエウロパにおいても女性の軍人はかなりの割合になっている。女性の将官も珍しくはないのだ。
「ですから優れた人材もおります」
「はあ」
ホーも金も八条が何を言いたいのか今一つわからなかった。首を傾げざるを得なかった。
「そうした人材を有効に使うことこそが重要ですね」

「そういうことですか」
それを聞いて納得した。
「はい。ボニング中佐にお伝えして下さい」
彼は言った。
「この戦いに生き残ったならばよいことがあると」
「わかりました」
二人はそれに頷いた。そして話を元に戻した。
「そしてタンホイザー元帥の来訪ですが」
「はい」
二人はそれに応えた。
「彼が伝えたい話しはおそらく戦局のことでしょう」
「中央のことですね」
「おそらく。我等にとっての好機は彼等にとってはそのまま危機ですから」
彼は言った。
「それをどうするべきか。おそらく答えは一つしかありません」
「成程」
彼等にもその答えが何であるのかよくわかった。
「それでは彼等はすぐにでも」
「ええ」
八条は頷いた。
「すぐにでも会談の申し入れがありますよ」
そう言ったその時だった。艦橋にクレンペラー中尉が入って来た。
「長官」
「はい」
八条は彼女の声を聞いて来た、と思った。だがそれは顔には出さなかった。
「モンサルヴァートエウロパ元帥から会談の申し入れがあるのですが」
「わかりました」

彼はそれに頷いた。そして言った。
「それではこちらも。喜んでその申し出をお受けするとお伝え下さい」
「わかりました」
クレンペラーは敬礼で応えた。そして彼等は再び交渉の席に着くことになった。
「再びこうしてお話する機会が得られて嬉しく思います」
まず八条がそう述べた。これは儀礼的な挨拶であった。
「いえ」
モンサルヴァートがそれに返した。そして彼も言った。
「こちらこそ。それではまた宜しくお願いします」
「はい」
こうして会談が再開された。両者は互いに向かい合った。
「さて」
八条が再び口を開いた。
「これからのことですが」
「そちらの仰りたいことはわかります」
モンサルヴァートはそう述べた。
「モントローズのことですね」
「そうです」
八条は答えた。
「どういった御考えでしょうか」
「はい」
モンサルヴァートは一呼吸置いてから答えた。
「市民の安全と引き換えです。喜んで」
「そうですか」
八条はそれを受けて頷いた。
「それではそれで宜しいですね」
「はい」
モンサルヴァートはまた頷いた。

「それではそれで」
こうしてサインがされた。そしてモントローズ要塞は連合のものとなった。彼等は南方の要衝に無血入城を果たしたのであった。
「これは一時のものだ。あくまでな」
モンサルヴァートはモントローズを去り、彼等の入城をリェンツィの艦橋から見ながら呟いた。
「いずれ返してもらう」
「はい」
傍らに控えるベニチャコヴァーがそれに応えた。
「ですがそれより先に我等は勝利を収めなければなりません」
「うむ」
それはモンサルヴァート自身が最もよくわかっていることであった。
「中央部だな。問題は」
「はい」
そこにいるのはベニチャコヴァーだけではなかった。プロコフィエフもいた。彼女が口を開いた。
「あの地域での戦いを何とかしなければなりません。その為に我等は退くのですから」
「そうだな」
モンサルヴァートの声は重くなった。
「それだからこそ何とかしなければならない」
「はい」
プロコフィエフも頷いた。
「その策はあります」
「期待しているぞ」
「お任せ下さい」
答えるプロコフィエフの目が光った。
「必ずや中央の友軍を救ってみせます。そして」
言葉を続けた。

「エウロパも。負けるわけにはいきません」
「うむ」
モンサルヴァートもそれは同じであった。彼はモントローズから中央に目を移した。
「この撤退は一時の撤退に過ぎない。だが今度の戦いは」
「はい」
プロコフィエフもベニチャコヴァーもそれに応えた。
「退くわけにはいかない。そして負けるわけにはいかないのだ。頼むぞ」
「お任せ下さい」
二人は敬礼をして応えた。それで決まりであった。
「一時の別れだ」
モンサルヴァートはまたモントローズ要塞を見た。既にそこには連合軍が入ってきている。
「だが必ず我々は帰って来る。それまで待っていてくれ」
エウロパ軍はその場から姿を消した。そして次の戦場に向かうのであった。
彼等が姿を消したモントローズはもう連合軍が完全に掌握していた。最後にテスカトリポカが入城してきた。その巨体が要塞に入る。
「中々見事な港ですね」
八条は艦から降り港を見回してそう言った。
「そうですね」
艦長である金もそれに同行していた。そして同意する。
「もっと小さな港かと思っていましたが。これは中々」
「やはりここがサハラ侵攻の拠点のせいでしょうね」
八条は一言そう言った。
「ですね」
金はそれに頷いた。
「それだけに設備もいいのでしょう。連合の港にも劣りません」
「はい」

「ダメージコントロールにも優れているようです。その証拠にドックも立派です」
そう言いながら向こう側を指差す。そこには見事なドックが並んでいた。
「見事なものですね」
それは八条も認めた。
「まさかこれだけのものをエウロパが持っているとは」
「はい」
金は頷いた。
「意外でしたね。しかしこれは使えますね」
「ええ」
それが主題であった。
「今後の戦いにおいて有効に使わせてもらいましょう。ただ気になることがあります」
「何でしょうか」
「ティムールのことです」
八条は述べた。
「ティムールですか」
「はい。彼等もこのモントローズのことに目を向けている筈です」
彼は答えた。
「使用を求めて来る可能性もあります」
「ですね」
それは充分考えられることであった。金は頷いた。
「それについてはどうなされますか」
「我々の手の中にあるうちはよいでしょう」
八条はとりあえずはそれを認めた。
「この戦いの間は。ただ」
「ただ？」
「それ以後はわかりません。あくまで今後次第です」
「そうですか」

「それも当然だと思いますが」
「ですね。ただこの要塞はモントローズも渡したくはないでしょうね」
「それはそうでしょうね。本来ならどのような犠牲を払ってでも守り抜くつもりだったのですから」
彼は言った。
「しかしそれよりも重要な戦いに向かわざるを得なかったのですから」
「中央ですか。今あの地域での戦いはかなりのものとなっているようですね」
「我が軍の主力が向けられていますから」
八条は述べた。
「当然それは激しい戦いになるでしょう。また彼等も精鋭を向けております」
「はい」
「戦いも激しくなるのは当然です。ただ」
「ただ？」
金はそれに問うた。
「数においては我が軍の方が上です。冷静に作戦を進めていけば問題はないでしょう」
「ですね」
ホーがそれに同意した。
「それでも油断してはなりませんが。彼等も必死です」
八条はそう言いながら銀河を見る。
「この星の大海においては真理はありません。ましてや絶対ということも」
「はい」
それがわからぬホーではなかった。それにも頷いた。
「我々は我々の戦いをしましょう。そして勝利を」
八条は最後にそう言うと銀河から目を離した。そして次の行動に

移るのであった。

第九部　完

2005・5・17

# 第十部第一章　神々の銀河その一

## 神々の銀河

人類が銀河に進出して以降その歴史は地球から銀河に舞台を移した。だがそれでもその基本的なものは変わりはしなかった。

それも当然であった。人間というものの本質が変わらないからであり、そしてそれは所詮一千年やそこらで変わるものではないからである。人類は銀河においても地球にいた頃と同じ歴史の歩みを続けていた。

サハラでは飽くなき戦いが続きエウロパがそれに介入していた。連合やマウリアにおいても戦いがないというわけではなかった。結局人類は戦いというものから離れることはできなかったのだ。

ここでいう戦いとは決して武力を用いてのものだけではない。連合においては銃やミサイルではなくコインや札束が乱れ飛ぶ戦いが一千年に渡って繰り広げられてきた。そしてそれにマウリアが入っていたのである。連合内では互いに激しい貿易や開拓競争が各国で行われていた。そしてそれが外交に発展するのである。

それにより連合では常に国同士の対立があった。そしてそれを調停するのが中央政府の役目であった。彼等はこうしてその一千年の歴史の殆どをそうした激しい経済戦争で彩っていたのである。

そうした中で彼等は独自の文化を歩んできた。そしてそれはかなりの成熟を見せていたのである。それは最早一つの文明と言える程のものであった。

だがそれはエウロパにおいても同じであった。一千年の対立を経て遂に武力衝突に至った両者の戦いはある意味文明の衝突でもあったのである。

これは戦いがはじまった時から言われていることであった。そしてそれについて連合、エウロパ双方から様々な意見及び考えが出されていたのである。

「これは文明の衝突というだけではない」
連合ヒッタイト王国の文化人類学者であるサラム＝フットがこう述べた。尚ヒッタイト王国は自分達を古のヒッタイト人の末裔と考える者達が建国した国である。鉄器を使い、強盛を誇りながらも海の民という謎の民族により瞬く間に滅亡してしまった彼等だが長い時を経て彼等の末裔が姿を現わしたのである。その真相はともかく末裔が人類の歴史に姿を現わしたのは事実であった。そして彼等は国を作ったのである。サラム＝フットはそのヒッタイト王国の中でもとりわけ有名な学者の一人であった。博識なことで知られている。
「異なる存在同士の戦いでもある」
彼はそう述べた。最早連合とエウロパはあまりにも何もかもが違う存在となっていた。彼はそれを踏まえてそうした発言をしたのであった。これに対してエウロパではこれとはまた異なった意見が出た。
「宗教の対決なのだ」
と。これを言ったのはハンガリーにいるフス＝サント枢機卿である。ハンガリーはマジャール人のの国家でありその民族性はルーツ的にはアジアでありその名もアジア風である。すなわちフスが姓でサントが名である。彼はその為フス枢機卿と呼ばれている。彼はバチカンの重鎮の一人として知られている。
彼は宗教家としての立場からこう発言したのである。連合とエウロパのそれぞれの宗教の衝突なのだと。
「神と神の戦いだ」
彼はそしてこう述べた。エウロパの神はキリストの神だけではない。ゼウスやオーディンもそうであった。かってギリシアや北欧で信仰されていた神々が彼等の神であった。長きに渡ってヨーロッパ人の無意識下に幽閉されていた神々が復権を果たしたのであった。そしてエウロパ各地にゼウスやトールを祀る神殿があった。これは教会と共にエウロパの者達の信仰の象徴であったのだ。中には炎の神ローゲを信仰する者達もいる。ローゲはかっての名をロキといい

巨人族の血を引く北欧神話のトリックスターであった。特にこれといった司るものはないとされていたが十九世紀の音楽家ワーグナーが作り上げた壮大な楽劇、舞台祝典劇『ニーベルングの指輪』で炎の神とされてからこれが定着した。

連合においても多くの宗教、そして神々が存在する。それはエウロパのそれと比してかなり多かった。

彼等の信仰は多岐に渡った。キリスト教やイスラム教だけではなかった。ユダヤ教もあれば仏教、道教、ヒンドゥー教もあった。そしてそれ以外にもあるのである。

古代のケルトやエジプトの神々も信仰されていた。ケルトはアメリカやカナダにかってアイルランドやスコットランドからの移民が多かった為である。彼等もまた心の奥底に彼等の神々を幽閉していたのである。その彼等が神々を思い出したのである。

エジプトはこれとはまた違っていた。エジプトの神々は言うならば移住であった。イスラム圏となっていたエジプトから移ってきたのである。連合においてはオシリスやホルスが深く信仰されている。なお彼等の敵とされていたセトは本来の任務である太陽神ラーの護衛とされている。彼はトトと共に日々太陽神を守り暗闇の象徴である邪蛇アピスと戦っているとされている。連合においてはセトも復権していたのである。この他には猫の頭を持つ女神バステトやオシリスの妻でありホルスの母であるイシス、そして太陽神ラーも広く信仰されている。

ケルトやエジプトだけではなかった。彼等の他にも多くの神々がいた。

道教の神々もいれば日本の神々もいる。そしてマヤやアステカの神々もいるのである。例えば八条がエウロパに赴く時に乗艦していたテスカトリポカはアステカの戦いの神の名である。彼の神殿もまた連合にはあった。

その他にも北米でかって信仰されていた神々やメソポタミア、ブラックアフリカの神々もいた。スラブの神々もあった。連合はその

巨大な勢力と同じくあまりにも多岐な信仰を持っていたのである。
フス枢機卿はその連合とエウロパの神々の戦いだと評したのである。そしてそれはある意味において事実であった。
連合はその巨大戦艦に彼等の神々の名を冠していた。この艦がティアマト級とされていることからもそれがわかる。そしてエウロパもそれは同じであった。彼等もまたそれぞれの戦艦等に彼等の神々の名を冠していたのである。それからも両者の神々の戦いであることがわかった。
「そういえばこのテスカトリポカはかってスペイン人達に滅ぼされたアステカの神々の名前でしたね」
モンサルヴァートとの会談を終えた八条は帰路艦橋において銀河の星達を眺めながらふとそう呟いた。
「あ、そうでしたね」
それにクレンペラーが気付いた。

## 第十部第一章　神々の銀河その二

「私はユダヤ教徒ですが」
「はい」
イスラエルは今もなおユダヤ教を信仰していた。ユダヤ人とはユダヤ教を信仰する者達のことであり彼等はそれを以って自分達のアイデンティティとしていたのである。それはクレンペラーも同じであり彼女は幼い頃から旧約聖書を読みその戒律に忠実に従って生きてきたのである。そうした意味で彼女はユダヤ人であった。
「それはかって学校の授業で学びました」
「スペイン人達はあの時全てを破壊しました」
「そうでしたね」
八条の言葉に頷く。
「しかしそれでも神々は生き残った。そして今銀河の時代になって復活しました」
「それがわからないのです」
クレンペラーは言った。
「何故彼等は復活できたのでしょうか」
「心の中にいたからでしょうね」
「心の中に」
「ええ」
八条は答えた後でそう頷いた。
「それはユダヤにおいても同じでしょう」
「ユダヤにおいても」
「貴方達はかって二千年の間放浪されておられましたね」
「はい」
クレンペラーの顔が硬くなった。
「あれは我々にとっては忘れることのできない苦難の道でした」
そしてこう言った。彼等はローマ帝国にエルサレムを陥落させら

れた後でヨーロッパ各地に散った。そしてそこで彼等は様々な迫害を受けてきたのである。
それはナチスやソ連だけではなかった。彼等はことあるごとに迫害され、虐殺されてきた。そしてそれが彼等の歴史であったのだ。
「かって我々は金融業を主な生業としてきました」
クレンペラーは言った。
「それもまた迫害の為だったのです」
教会が彼等にそうした職以外に就くことを禁じていた為である。当時金融業はキリスト教の世界においては卑しいものとして蔑まれていた。スコラ哲学を大成させたトマス＝アクィナスは商業は容認しながらも金融業に対しては極めて強く反対していた。それが現実であった。また彼は同時に強烈な反ユダヤ主義者でもあった。彼の金融業批判はこれとも密接に関わっていた可能性が高いと言えよう。
彼等だけではなかった。多くの者達がユダヤ人を迫害し、差別していた。それがヨーロッパの歴史の一面であった。人類の歴史においてこうしたことは多々あったがこれもまたその一部であったのだ。
「そして苦難は国を持ってからも変わりませんでした」
クレンペラーはまた言った。彼等はイスラエルという国を持ってもまだ苦難の道を歩まなければならなかったのである。
中東戦争であった。イギリスの二重外交により起こった問題によって彼等は周りのイスラム諸国と長きに渡って戦いを繰り広げなければならなかったのである。この戦いは何度も起こり多くの血が流れた。最終的に戦いが終わったのはイスラエルという国が銀河に移った時であった。これを無駄な血だったという者もいる。だが歴史は彼等にそれだけのものを要求しただけかも知れない。これは誰にも断言できないものであった。
「あの時は全ての者が銃を持たなければなりませんでした」
唇を噛んでそう言った。
「我々はこの銀河に出るまでに多くの犠牲を払わなければなりませんでした。それでもヤハウェを忘れはしませんでした。決して」

「それだからこそです」
そこで八条が述べた。
「貴方達は神を忘れなかったのですね」
「はい」
そしてクレンペラーはそれに答えた。
「少なくとも我々はそうでした」
それからこう述べた。
「そうですね」
八条はそれに頷く。
「ユダヤにおいては神は一人」
ヤハウェしかいない。何故一神教になったかというと彼等は荒野の放牧民であった。周りには身を守るものは乏しく、獣や異民族達が多くいる。荒涼した地に彼等はいたのだ。その彼等が生き残るには強力なリーダーシップが必要であった。それにより一神教となったのである。
「ですが連合には多くの神が存在します」
この時代においては流石に連合やエウロパにおいては複数の宗教が認められていた。だがユダヤ教徒達はユダヤ教とヤハウェ以外は信じなかった。それこそが彼等をしてユダヤ人たらしめているからであった。これは一部のキリスト教原理主義者も同じであった。かっての異端審問の時代と比べてかなり寛容になったキリスト教は他の宗教の神々を聖人に入れて一応はその存在を認めるようになっていた。天使に入れる場合もある。これはキリスト教の独自性の一つであった。とりわけローマ＝カトリック教会はそうした傾向が強かったがこれは仏教や日本の神道を見て学んだことである。
ローマ＝カトリック教会はかって自らをこう言っていた。
『バチカンは決して過ちを犯さない』
と。バチカンには誤謬はない、と言っていたのだ。だが過ちを犯すことは彼等自身が最もよくわかっていた。何故ならバチカンは陰惨な政争の場でもあったからだ。とりわけ中世、そしてルネサンス

期はそうした宗教家というよりは政治家と言うべき教皇が多かった。中には信じられないことに神すら信じぬ教皇までいた程である。

ローマ教皇はキリスト教の最高指導者であり最高の司祭であるだけではなかったのである。多くの領地を持ち、そして軍まで持っていた。ローマにサン＝タンジェロ城という城があったがこれは教皇の要塞であった。教皇達は危機に陥った時にここに逃れて難を避けたりしていた。スイス人の傭兵達も多く雇っていた。すなわち教皇とは封建領主でもあったのだ。そこに宗教という衣を被ったに過ぎない時代もあったのだ。これが現実であった。

贅沢と女色に耽り、寺院には背徳と陰謀がはびこっていた。教皇といえど娼婦や貴婦人達と関係を持ち、多くの子をもうけていたのだ。そして毒や刃により邪魔な者を始末していく。消された方には一方的に神の敵というレッテルが貼られる。教会を批判する者にはこの上ない惨たらしい結末が待っている。それは何故か。無謬であるバチカンを汚した異端だからである。だが彼等もわかっていた。バチカンといえど過ちを犯すということが。

そうした時は何時の間にかそれを訂正しているのである。だが過ちは認めない。ヨハネ＝パウロ二世という革命的な教皇の誕生までバチカンは自らの過ちは公には認めなかった。それがバチカンであったのだ。

今のバチカンは過ちを認める。そして非常に寛容なものとなっていた。彼等もまた暗黒時代、そして中世までの長い狂気から目覚めていたのである。かっての異端審問の時代ではなかったのだ。だからこそ八条もこう述べたのだ。聖人や天使は神の従者、半神とみなすことも可能である。現に彼等と対立する悪魔達は魔神と称されることもある。これは余談であるがキリスト教でいう悪魔達も信仰の対象となっている宗教が連合には存在する。だがこれは決して異端なのではない。

彼等はキリスト教徒は根本から異なる宗教となっていた。そもそものはじまりがキリスト教における悪魔、とりわけサタンは本当に

悪なのか、という問いからはじまってはいるが。

## 第十部第一章　神々の銀河その三

正義とは複数あるものである。また悪も複数あるものだ。人それぞれの正義があり悪がある。そして自らに敵対する者が悪とみなされる場合が多い。それが世界であった。

それを踏まえて悪魔達を見る。とりわけミルトンの失楽園が検証された。これはアダムとイブが楽園を追われた話である。しかし実際はサタンが主役といってもいいものである。この中でサタンは蛇に化け人間に林檎を食べさせる。知恵の実だ。これが問題なのである。

「サタンは人類に知恵と自分で考えることを教えたのではないのか」

ある者がこう考えたのである。それは文明のはじまりに他ならなかった。

「それならばサタンはギリシア神話でいうプロメテウス、アステカでいうケツアルカトルと同じだ」

ケツアルカトルとはアステカの神の一人である。知恵や農耕を司り、翼を持った白い蛇の姿で描かれる。時には長い髭を生やした白い肌の男になる時もある。その者は最初にこう考えたのである。

彼の名はイサム＝アリトウ。日系アメリカ人であった。彼はプロテスタントの牧師であったが神について考えるうちにそうした考えに至ったのであった。

それから彼はさらに悪魔に対して研究を続けた。そして遂にキリスト教とは異なる結論に達した。それは悪魔とは単に異なる立場の神なのだ、と。それが彼の結論であった。

すなわち彼等は神なのだ。そして彼等の考えもまた正義なのである。彼等の価値観や考え方も実際はキリスト教の神と同じものであり立場が違うだけだ。そして何よりも人類に知恵を与えた。つまり今の人類はサタンがいなくては何もならなかったのだ。彼はそう考えたのだ。

それから彼は牧師を辞し、キリスト教の信仰を捨てた。自らの考えがキリスト教のそれとは大きく離れていることを自覚したからに他にならなかったからだ。そして彼は新たに宗教を起こした。これを異神教という。連合においてはそれなりの勢力を持つ宗教団体である。教義自体は友愛や知恵を尊ぶものであり他の宗教の価値観とは変わりはしない。これは失楽園等におけるサタンや悪魔達があまりに人間的であり、かつ勇敢で信念を持って行動しているからであった。彼等もまた善なのである。

最高神はサタンである。彼は知恵の神であり神々のリーダーとされる。そしてその下に同志達が揃っている。彼等は翼を持つ美男子達でそれぞれの責務を担っている。皆勇敢であり正義感が強い。そして人間に対して正面から向かい合う神々であった。

「連合だからこそ生まれた宗教だ」

ある者が異神教を評してこう言った。その通りであった。様々な価値観が存在する連合だからこそ生まれた宗教であった。キリスト教原理主義者からは嫌われていたが大筋において間違ってはいないので連合の宗教として認められた。バチカンも彼等に対しては何も言わなかった。それはアリトウがキリスト教から離れることを宣言していた為異端と定義もできずまた確かにそういう解釈も可能だと心の中でわかっていたからだ。だが彼等は決して異神教とは交じろうとはしなかった。これは仕方のないことであった。

彼等もまた連合の神々の中にあった。現にティアマト級巨大戦艦に名付けられてもいる。サタンやベルゼブブ、ベリアル、アスモデウス、モロク、アモンといった神々の名が冠されている。しかしこれに少し疑問を呈する宗教学者も存在するのが連合の複雑なところであった。

「そもそもベルゼブブはバール神であった筈だが」

フェニキアの豊穣神である。連合にはフェニキア人の国も存在しており彼等の神もまた存在しているのである。フェニキア人だけでなく他の国の人々にも彼等は信仰されている。バールもその一人で

あり連合においてはよく知られている神の一人でもあった。それをふまえて言ったのだ。これは事実でありベルゼブブは元々はこのバール神であったのである。キリスト教が彼を悪魔にしていたのだ。

「そういえばそうだな」

それに他の学者も頷いた。またアモンやモロクもそうであった。アスモデウスも同じである。ベリアルやサタンといったルーツが天使である異神教の神の方が少なかった。しかもこの異神教においては他の悪魔達まで信仰の対象とされていた。ソロモン王のレメゲトンに書かれている七十二柱の魔神達がそれである。ここではミルトンだけでなくソロモンの系列の悪魔学までが混同していた。アスタロトは科学の、ベールは剣の神である。なおベリアルは炎の、アスモデウスは芸能の、モロクは力の、そしてアモンは金の神とそれぞれ位置すけられている。ベルゼブブは豊穣の神だ。なおベールが剣、即ち武術の神であるのは彼が魔界においては随一の剣の達人であるとされていたからである。これがさらに話を複雑にさせた。

「ベルゼブブとバールは元々同じ神なのだしどちからの名の艦はなくてもよいのではないのか」

その宗教学者はそうした考えを述べたのであった。これが軍の上の方にも届いたのだ。この宗教学者の名をベリサル＝コワッカという。チャド人であり宗教的にはアニミズムに位置している。精霊の信仰者であった。こうしたキリスト教やメソポタミアの神々についての専門家であった。自身の宗教とは離れているだけにそうした客観的な意見となったのであった。また彼は言った。

「それにアスタロトもまた元の姿はイシュタルであった。これはイシスもそうだが」

エジプトの女神であるイシスにも言及した。これは事実でありアスタロトもイシスも元の姿はイシュタルであったのだ。イシュタルがエジプトに入りイシスとなり、キリスト教に悪魔であるアスタロトとされたのだ。キリスト教においては男になっており性別まで変わっていたが。

「また剣の神ベールもまたベルゼブブと同じであった筈だ」
これも事実であった。ベールはキリスト教においては蜘蛛の身体に人、猫、蛙の三つの顔を持つ異様な姿の悪魔として描かれている。だが異神教においては剣を持つ年老いた天使となっている。宗教が異なれば姿も変わるのであった。
「ベールもまたどうか」
これに対して異神教の方から反論があった。既にイサム＝アリトウはこの世を去り数百年が経っており今は当然ながら別の者が代表となっていた。マサモ＝イブランというニジェール出身の男であり白い肌に黒人の短い髪を持っていた。その髪をさらにアフロにしていた為アフロの宗教家と呼ばれ親しまれていた。彼はコワッカに対して反論した。
「そのことは知っている」
と。まずはそう前置きした。
「だが最早異なる神になっている」
次にこう述べた。彼は主張した。
「神話においてそうしたことは多々見られる。ギリシアのアフロディーテもそうであった」
ヴェーヌスとも呼ばれ古来より人気のあったこの神もまたそのルーツはフェニキア、バビロニアの金星と愛の女神イシュタルにあったのだ。彼はそれについてまず言及したのだ。

## 第十部第一章　神々の銀河その四

「だが彼等はエウロパにおいては普通に戦艦に名を冠されている」
そしてこう反論したのだ。
「アフロディーテとイシュタルは最早異なる神となっている。イシスとイシュタルも同じだ。従ってコワッカ氏の意見には賛成することはできない」
彼はそう主張したのだ。これにより連合の宗教界も巻き込んだ論争が起こった。連合の宗教誌、宗教関連のサイト、そして総合雑誌までもがこれに話題を独占された。そうした話が数ヶ月続いた。
軍の上層部にもその影響があった。艦艇の名に関わっていたからである。だがこちらはすぐに解決だれた。
解決したのは八条であった。彼が一言こう言ったのだ。
「宗教が異なれば違う神でしょう。宗教的にはともかく艦艇の名においてはそうです」
彼は一言そう述べたのだ。これで決まりであった。
軍においてはそれで決まりであった。少なくとも命名権者である八条がそう判断を下したのであるから。だが宗教界の方は論争が続き結局結論が出ないまま両者は和解した。こうした宗教論議というものは複雑であり、しかも信仰が絡む為結論が容易に出ない。従ってそういう結果になることがままあるのだ。
これが連合の宗教界であった。神は数えられない程存在するのだ。ましてや八条の祖国である日本なぞ八百万の神と言われる。神の数で言えば最も多いのではないかとさえ言われているのだ。
「ですが神の数はここではあまり問題とするべきではありませんね」
「はい」
クレンペラーはそれに頷いた。
「問題は敵の神に勝利を収めることです」
「そうですね。敵の神は我等が神でもありますが」

「ヤハウェですね」
「ええ」
クレンペラーはまた頷いた。
「私にとってはそうです」
そしてこう答えた。ユダヤの神はヤハウェでありキリスト教の神もそうである。しかし八条はそれに対して言った。
「信じる神が同じでも戦いは起こります」
それは歴史が証明していることであった。欧州ではキリスト教徒同士で血生臭い戦いを繰り広げてきた。カトリックとプロテスタントの戦いであった三十年戦争がその例に挙げられるかも知れないがこの戦いは最終的にはカトリックである神聖ローマ帝国と同じくカトリックであるフランスとの戦いになってしまっていた。これは欧州の覇権争いとなっていたからでありフランスは覇権を手に入れる為に神聖ローマ帝国に戦争を挑んだのである。参戦するまでにも陰に日向にプロテスタント諸国を援助してきており、彼等は最初から欧州の覇権を狙っていたのだ。またこの戦いはハプスブルク家とブルボン家の伝統的な対立も背景にあった。宗教よりも覇権、権益であったのだ。とりわけハプスブルク家のオーストリアとブルボン家のフランスの対立は当時の、いやそれ以前、そうマクシミリアン一世の頃からの対立関係であり欧州の政治の一つの軸となっていた。フランスはヴァロア家の頃からハプスブルク家を仇敵としていたのである。フランスの宿敵と言えばよくイギリスが挙げられるが実際にはこのハプスブルク家の神聖ローマ帝国、そしてオーストリアとの関係もそれに勝るとも劣らぬ程深刻な状況が気の遠くなる程続いていたのである。
こうしたことは事例が多い。イギリスも同じプロテスタントの一派のオランダと戦い海の覇権を手に入れており後には新生ローマ帝国皇帝家ハプスブルク家が勢力を伸ばしてきたプロイセンのホーエンツォレルン家を封じ込める為に長年の宿敵であったフランスのブルボン家と同盟を結び、同時にロシア正教であるロシアのロマノフ

家と同盟を結んでいる。この対プロイセン三国同盟を『三枚のペチコート』という。これは当時それぞれの国の実権を握るのが女性であったからだ。オーストリアはハプスブルク家の女帝マリア＝テレジアであった。彼女は夫に神聖ローマ帝国皇帝フランツを持っていたが実質的には彼女がオーストリアを統治していた。この夫は善良であり経済的な手腕もあったが皇帝というにはいささか荷が重かった。広範囲な意味での政治、そして軍事の才能は備わっていたとは言えなかったのだ。それ故にその実権はマリア＝テレジアが握っていたのだ。そのうえ彼女はハプスブルク家の実質的な当主であった。直系は彼女しかいなかったのであるから。

「ハプスブルク家とは妻と子供達であり朕は余所者に過ぎないのだ」

この皇帝は親しい者に対して笑いながらそう言ったという。彼は自分の立場をよくわかっていた。そしてそのうえでマリア＝テレジアの夫であり飾り物の神聖ローマ帝国皇帝となったのであった。意外にもこの夫婦はおしどり夫婦として知られている。だが実態はこの優れた妻は夫のことなら何でも知っており浮気心を起こしてもそれを夫に知られないうちに、そして恥をかかせぬようにそっと浮気を防いでいたのであるが。極めて優れた君主であった。

フランスはポンバドゥール侯爵夫人であった。彼女は国王ルイ十五世の愛人であった。端整でかつ流麗な顔を持ち幼少から晩年までフランス一の美男と讃えられたルイ十五世であるが国王としての資質には欠けていた。

「その性は善だが責任を取ろうとはしない。不正を知っていたが正そうとはしなかった」

こうした評価がある。彼は政治家としての技量に欠け、また遊興を好んだ。とりわけ女色に溺れていたのだ。

その国王を篭絡したのが彼女であった。彼女は平民出身ながらその政治手腕を発揮しフランスの実権を握った。そしてそのうえでプロイセンと対抗してオーストリアと同盟を結ぶことを決意したのであった。

「女なぞ子供を産ませる道具でしかない」
プロイセン王フリードリヒの言葉である。彼は大王とも称された人物であるが冷徹で女性に対して冷たかった。そんな彼を彼女が好む筈もなかった。唯でさえプロイセンはフランスにとって厄介な存在になろうとしているのに彼はこの侯爵夫人の最も嫌う言葉を口にしたのだ。それは何故か。
彼女は不感症であった。それ故か国王との間に子供はいなかった。ルイ十五世は正妻や多くの愛人達だけでは飽き足らず彼女がその一部を用意した鹿の苑というハーレムにおいて美少女達の何人かに子を産ませているというのに。子供を産むしか価値がないのなら自分はどうなるのか。彼女がこの王を許せる筈がなかったのだ。
またこのプロイセン王はマリア＝テレジアにも激しく嫌われていた。カトリックの擁護者であるハプスブルク家の者らしく心からカトリックを深く信仰するマリア＝テレジアに対して彼は無神論者であった。そもそもの価値観が違い過ぎたのであった。そしてこれはさらに悪いことにロシアのエリザベータ女帝もそうであった。
このエリザベータ女帝のプロイセン王嫌いは徹底していた。元々彼女は父であるピョートル大帝が西欧文化を取り入れた時にフランス文化を大幅に取り入れた影響からかフランス語を愛し、フランスの詩を口ずさみ、フランスの宮廷料理を食べ、フランスのファッションを常に追っている程のフランス贔屓であった。またオーストリアとは伝統的に友好関係になったせいか最初からプロイセンが好きではなかった。そのうえでこの人物が王なのである。嫌わない方が不思議であった。
彼女は自分の前で彼の話を出すことさえ嫌っていたのだ。それはタブーであった。そして死ぬその瞬間までこのプロイセン王を討つべしと主張していた。この戦いはプロイセンという国を倒す為に宗派を越えて三国が、また言い換えるならばこの女性嫌いの王を滅ぼす為に三人の女性が手を結んだのである。これが欧州であった。
「人間というのは結局そうした一面もあります」

「否定はしません」
八条はクレンペラーの言葉を否定はしなかった。
「それも歴史ですからね」
「そうですね。ただ同じ神を信じている方が憎しみは深いような気もします」
「それはそうでしょう」
八条は言った。
「近親憎悪というものですよ」
「近親憎悪ですか」
「はい」
八条は答えた。
「同じ神を信仰していますからね。余計に」
「あまりいい話ではありませんね」
「それもまた歴史なのです」
八条はまた歴史を口にした。
「人間というのはね。嫌な部分もあります」
艦橋の向こうの銀河を見ながらそう言う。銀河は漆黒の世界の中に色取り取りの星達の光をたたえてそこに広がっていた。人の世界の醜さなぞ知らぬように。
「しかしそれから目を離していてはね。どうにもならないのですよ」
「そういうものですか」
「中尉」
「はい」
顔を向けてきた八条に応える。思わずドキリとした。
「貴女はまだお若い。といっても私とあまり離れてはいないようですが」
実際十も離れてはいないであろう。
「は、はい」
そう言う八条も政治家としては信じられない程若いのであるが。
「まだ知るべきことは山程ありますよ。その中には知りたくはない

ものもあるでしょう」
「はい」
「それでも知らなければなりません。それが人というものですからね」
「そうなのですか」
彼女にはそれはまだよくはわからなかった。だが八条は言った。
「それもいずれわかると思いますよ」
「はい」
クレンペラーはまた頷いた。そして八条に連絡が入った。
「大統領からです」
「わかりました」
彼は頷いた。そして自室に戻った。
「それでは」
「はい」
彼は自室まで八条を送った。それからまた艦橋に戻った。
艦橋までの廊下を歩きながら思った。自分自身について。
「諦めた方がいいわね」
それは八条に関してであった。
「どうやら私はあの人にはまだ」
自分自身の力量を知った時であった。これはこうしたことにおいてもあるのだ。
そして彼女は艦橋に戻り勤務に戻った。何事もなかったように。
そう見せるだけの分別には彼女にはあった。これは軍人というよりは女性としての分別であった。

## 第十部第一章　神々の銀河その五

テスカトリポカは地球に戻った。八条はエウロパから無事帰還したのであった。
「地球に帰るのも久し振りだな」
「はい」
木口がそれに答える。
「帰ったらまた仕事ですよ。楽しみにしておいて下さい」
「仕事ならテスカトリポカでもかなりあっただろうに」
それを聞いて苦笑した。
「新しい仕事ですよ」
彼はそう答えた。
「山のように来ていますよ」
「やれやれだ」
それを聞いたうんざりとした顔をしたふりをした。
「どうやら仕事というものは何処に行ってもあるみたいだな」
「その通りです」
木口は答えた。
「ですから仕事を。さあ早く」
「やれやれ」
うんざりしたふりを続けながら国防省に向かうことにした。見ればもう迎えの車が来ている。
「行くか」
「はい」
こうして彼等は車中の人となった。車は一路国防省に向かうのであった。
車の後部座席にいる時八条の携帯に電話がかかってきた。すぐに出る。
「私ですが」

「おや」
その声を聞いて心の中で少し驚いた。金内相の声であったのだ。
「今地球に戻られたところでしょうか」
「はい」
八条はそれに正直に答えた。
「今車の中でして。国防省に向かっております」
「そうですか。それでは都合がいいですね」
「都合？」
「ええ」
金は応えた。
「今からそちらにお伺いさせて頂きたいのですが。宜しいでしょうか」
「こちらにですか。何か都合でも？」
「少し」
一言そう答えた。
「お話したいことがありまして」
「ふむ」
彼はそれを受けて考える顔をした。だが携帯ではそれは金にはわからない。
「わかりました。どうぞおいで下さい」
「はい」
金は電話の向こうで頷いた。そして電話を切った。
「内相からですか」
隣にいる木口が尋ねてきた。
「ああ。何か話したいことがあるらしい」
「また何かあったのですかね。我々が地球にいない間に」
「だろうな」
彼はそれに応えた。
「何かまではわからないが。だが重要な用件なのは間違いないだろう」

「そう思われますか」
「そうでないと内相が直接来られることもないだろう。違うか」
「いえ」
木口は表面上はそれに同意した。だが心の中では違っていた。
(この人は)
八条に呆れるところがあったのだ。
(何故わからないのだろうな)
それが木口にとって不思議でならなかった。とにかくこの八条は異性に関してはあまりにも朴念仁であった。悪く言うと鈍かった。金が何故自ら国防省に赴くのかわかっていなかったのだ。金も妙齢の女性でありそうそう国防省に自分から出向くのもないのだ。それが何故出向くか。八条はそうしたことに気付かないのだ。政治や軍事においては鋭い彼だがこと異性のこととなるとそうでもないらしい。
「長官」
木口はそんな八条に対して再び声をかけた。
「何だい」
「急ぎますか。内相が来られますし」
「そうだな。お菓子を用意しなくてはいけないし」
金が無類の甘党であることは連合の誰もが知っていることであった。辛いことで有名な韓国料理であるが彼女はその中において比類なき甘党であったのだ。彼女の手料理は食べたならば普通の者はすぐに糖尿病で倒れる、とまで言われている。医学が進歩しているとはいえやはり糖尿病はまだあるのだ。当然痛風もある。何でも食べ過ぎ飲み過ぎはよくないのである。
「お菓子だけでしょうか」
「?ああ、紅茶もか」
八条は気付いた顔をした。金は紅茶やコーヒーも大好きなのである。当然そこにも砂糖やクリームを信じられない程入れる。クリームの方が多かったり砂糖が底でザラザラ音を立てる場合もある。そ

れでも金はそれを美味しそうに飲むのである。時にはホットミルクも飲むがやはり砂糖を多量に入れる。緑茶にも当然入れる。飲み物ならば何でも砂糖やクリーム、そしてシロップを入れる。これを見て腰を抜かしたお茶の師匠すらいる程である。

「内相は飲み物もお好きだから」

「いえ、そうではなくて」

「他に何かあったか？シロップは」

「いえ、いいです」

そこまで聞いて木口は言うのを諦めた。今の八条にはわからないことだからだ。

（参ったな）

木口は困った顔をした。

（これだからうちの長官は）

連合の女の子達、とりわけ日本の漫画やアニメを愛する少女達に普通とは少し違った意味で人気が出てしまうのだ。ボーイズラブ、つまり同性愛の雑誌では彼がモデルと思われる登場人物が出ている作品もあるのだ。貴公子と美少年の恋愛ものであり彼がモデルと思われるその貴公子は美少年を愛でる耽美な人物となっている。

これは当然八条の耳にも入っている。だが彼はそれを一笑に付しているのだ。そんなことを過剰に意識するような八条ではなかったのだ。

実は同じようなことが金にも起こっている。彼女もまた連合のそうした女性達に人気があるのだ。抱かれたい大人の女の人で一位に輝いている。なお選んだのは皆うら若き女性達である。金は潔癖症であり女性の権利についても厳しい。そのうえ頭の回転が早く切れる。そのうえ頼りになる。そうしたところが女性達に好かれているのだ。

八条と金は連合中央政府においては水と油とされている。彼等はそれぞれそうしたことが好きな者達の話の種にもなっているのだ。中にはゲイやレズの雑誌にも取り上げられている。そこでも人気が

あるのだ。
木口にはそうした趣味はない。ノーマルである。女性の好みは小柄で清楚な女性だ。この前幼馴染みと会ったがその雰囲気に心を奪われたばかりであった。
（まあ仕方ないか）
とりあえずは諦めることにした。そして八条にまた言った。
「とりあえずお菓子は何にされるのですか」
「そうだな」
彼は少し考えてから述べた。
「今日は和菓子がいいかな、と考えているのだけれど」
「じゃあそれでいきましょう」
彼はそれに同意した。
「それでは飲み物は緑茶ですね」
「ああ」
「砂糖は和風のやつでいきましょう。普通の砂糖は緑茶には合いません」
「そうだね。そうしよう」
これには八条も同意した。
「それでは帰ったらすぐ用意しましょう」
「頼むよ」
そうした話をしているうちに国防省に戻って来た。程なくして金がやって来た。
「早いな」
「流石ですね。すぐに用意していてよかったです」
木口は彼女が来たのを聞いてそう言った。
「それではすぐに」
「うん」
こうして八条と金は八条の執務室のソファーで向かい合って話をはじめた。和菓子を前にして話をはじめる。
「これは」

金は目の前にある和菓子について八条に問うてきた。見れば柿を寒天で包んだものであった。
「我が国のお菓子でして」
八条はそれについて説明をはじめた。
「和菓子ですね」
「はい」
八条は答えた。
「柿を寒天で包んだものです。見たままですが」
「そうなのですか」
見れば金の目は物珍しそうなものであった。どうやらはじめて見るらしい。
「和菓子はお嫌いですか」
「いえ」
金に限ってそれはなかった。首を少し横に振って否定する。
「まさか。好きなお菓子の一つですよ」
「それはよかった」
八条はそれを聞いて顔を綻ばせた。
「どうぞ。他のお菓子に比べて甘みはないと思いますが」
「ええ」
金は楊枝で菓子を切りながら答えた。
「和菓子はそうですよね」
「はい」
「甘みはそれ程出さずに素材の味を生かしています」
「そうですね。大体和食はそうですが」
彼は言った。
「砂糖もそれ程使ってはいないのです。それよりも素材の味です」
「ですね」
答えながら一口口に入れた。柿の甘みとその中の微かな苦味が口の中を支配した。金はそれをゆっくりと味わった。
「これは」

「如何でしょうか」
金はそれを飲み込んでから答えた。
「いいですね。柿の甘みと苦みをよく生かしています」
「それはよかった」
八条はそれを聞いて満足した。
「私は甘いものが好きでして」
「ええ」
それはもう言うまでもないことであった。八条はそれでも頷いた。
「甘ければ甘いだけ好きなのですが果物の甘さも好きです」
「そうですね。内相は果物もお好きと聞いております」
実際にパーティーの場で果物を喜んで食べているのを見ている。
「はい、そうですね」
そして彼女はそれを認めた。また一口食べた。
彼女はただの菓子好きではなかったのである。果物もよく食べる。彼女の食事にはお菓子の他に果物も多量に出るのだ。梨も林檎もバナナも食べる。柑橘類も好きなようだ。
「ライチなんかが特に」
「ライチですか」
「はい」
彼女は答えた。かって地球において中国の名産であった果物だ。固く赤黒い皮の中に白くみずみずしい果肉がある。これがかなり甘く美味いのである。世界史にその名を残す美女である楊貴妃の好物としても知られている。今は連合においてはポピュラーな果物の一つである。
「あれはいいですね」
「ですね」
八条もライチは嫌いではなかった。それに頷く。
「あとイチゴやスイカも好きです。野菜ですけれど」
「ほう」
それを聞いて興味深そうに声を出した。

「イチゴもですか」
「はい。やはりあれは外せないでしょう」
「まあそうですね」
菓子にもよく使われる。イチゴはこの時代においても代表的な甘物であるのだ。
「スイカは夏に限りますが」
「通ですね」
これは八条も同意であった。この時代はスイカも一年中食べることができるがやはり夏のスイカが最も美味しいのである。これはもう言うまでもないことであった。
二人はそんな話をしながらその柿の菓子を食べ終えた。そして最後に緑茶を飲んだ。
「結構なお味でした」
「はい」
金の言葉に頷く。
「こうした素材を生かしたお菓子もいいものですね」
彼女は甘いものならどれだけ甘くても平気なのである。シロップで色まで変わったパンケーキも喜んで食べる。それが彼女であった。八条もそれは知っていた。
「それでですね」
だが菓子の話はそれまでにすることにした。八条は話題を変えてきた。
「はい」
金もそれに顔を向けてきた。
「今回のご来訪ですが。何かあったのですか」
「ええ」
彼女はそれに答えた。
「占領地のことですが」
「占領地ですか」
エウロパとの戦いでは既にかなりのエウロパ領を占領している。

そのことについて話をしに来たようである。
「今我々はエウロパ領のかなりの部分を占領しております」
「はい」
彼はそれに応えた。
「その治安は軍だけで大丈夫でしょうか」
要するに軍の独善や暴走を危惧しているのである。これは文民統制下の軍においても懸念されることであった。金はそれを考慮しているのであった。

## 第十部第一章　神々の銀河その六

「あ、いや」
だがここで少し言葉を穏やかにすることにした。まずは一呼吸置いた。
「軍や長官を信頼していないというわけではありませんよ」
「はい」
それはわかっていた。不機嫌になることもなくそれに頷いた。
「ただ中には不心得物もいますね」
「ですね」
それは当然ながらあった。どれだけ規律正しい組織にあってもその規律を守ろうとしない者はいるのである。どれだけいい林檎や蜜柑の箱にも必ず一個は腐ったものがあるのと同じである。
「そうした輩への対処です。そして占領地自体の治安です」
「今のところそれは良好ですが」
「軍だけで大丈夫でしょうか」
「そう言われますとね」
八条は少し眉を動かせた。
「占領地より気になる地域があるのですが」
「連合の領内ですか」
「はい」
流石に金は切れ者であった。それにすぐに気付いてそう答えてきた。
「今連合軍はその約三分の二がエウロパに出ております」
「はい」
「その為領内のことが。宇宙海賊等は大丈夫でしょうか」
「そちらは今我々で責任を以って対処しております」
金はそう答えた。
「ドトール長官がおりますので。彼が奮闘しております」

「彼がですか。では大丈夫ですかね」
「さしあたっては大きな問題は起こってはおりません。連合領内においては」
「ですね」
それは八条も知っていた。今連合領内は戦争をしているとはいえ彼等の領内自体はきわめて平穏であったのだ。
「それでは内地はこちらに今まで通りそちらにお任せします」
「はい」
「ですがエウロパは我々で。それで宜しいでしょうか」
「そうなりますか」
「占領地ですので」
彼は言った。
「やはり軍が戦争中は管轄することになります。それで宜しいでしょうか」
「ううん」
だがそれを聞いて金は考える顔をした。
「つまりそちらの憲兵隊を信頼してくれと」
「はい」
八条は答えた。
「駄目でしょうか」
「やはりチェックが欲しいです」
金はそう言った。治安を預かる者としてこれは当然の考えと言えばそうであった。
「そうですね」
八条はそれを受けて再び考え込んだ。
「それでしたら私に考えがあります」
「何でしょうか」
「ええ。これは以前から考えていたことですが」
八条は言った。
「相互の人間の交流を深める意味でもお互いに人員を派遣し合いま

せんか」
「相互にですか」
「はい。これならそちらの御考えも通りますね」
「ええ」
金は頷いた。内務省と国防省でそれぞれスタッフを交換派遣するというものである。これならば金の要求も通る。そして八条にはもう一つの目的があった。
「そして私からもお願いしたいことがあります」
「何でしょうか」
金はそれに顔を向けた。
「軍の憲兵のことです」
「彼等のことですか」
「彼等も警察に派遣したいのですが。研修の為に」
「今後の軍の治安、秩序の維持の為ですね」
「はい」
八条は答えた。
「その通りです。宜しいでしょうか」
「ええ、こちらは」
金はそれを認めた。
「ドトール長官と話し合って正式に決めたいと思います。ですが通ると思いますよ」
「それは何よりです」
八条はそれを聞いて顔を綻ばせた。
「それでは宜しくお願いします」
「はい、こちらこそ」
金も応えた。こうして国防省と内務省の人材交流が決められた。これは後にキロモトに話が為され正式に決定した。後には各省でそれが行われることとなった。

## 第十部第一章　神々の銀河その七

すぐに内務省から派遣された文官達がエウロパに派遣された。治安の維持と将兵の監視が目的であることは言うまでもなかった。これは将兵にはいささか不評であった。

「軍のことは軍がやる」

これが彼等の考えであった。要するに余所者に何か言われたりしたくはないのである。これは大体どの世界でも同じである。そして連合軍もそうした考えがあったのは事実である。それが出たのである。

だがそれはもう決められたことであった。これにより連合軍の監視はさらに厳しくなり、規律はさらによいものとなった。これは事実であったのだ。

ただ八条は内務省の者には規律のことに口は出させてもそれ以外のことには決して介入させようとはしなかった。作戦やそういったことに彼等は全く触れることができなかったのである。これは当然と言えば当然であった。かってソ連にあったような政治将校のような存在になることがないように配慮したのである。これは金も同じ考えであった。内務省の者達は言うならば警察官であった。あくまでそれに専念するだけであったのだ。これは金も了承していた。

「慧眼と言うべきかな」

ドトールはそれを聞き自身の執務室でそう呟いた。

「流石は八条長官と言うべきか」

「珍しいですね」

それを聞いた前に立っているコレイスキーが言った。

「長官がお酒が入っていない時に人を褒められるなんて」

「そうかな」

ドトールはそれを聞いて微かに笑った。

「私はそうは思わないが」

「そうなのですか」
「自分ではな。他の者がどう思っているかは知らない。ただ君がそう思っていることだけはわかった」
「ははは」
「まあいいことだ。だがこれは妥当だな」
「はい」
それに関してはコレイスキーも同意であった。
「政治将校はな。軍にとって害毒だったのだ。それは知っているな」
「はい」
コレイスキーは頷いた。それは彼も歴史で学んだことであった。
政治将校は元々フランス革命の時にジャコバン派が設けたものであった。当時は委員であった。当初からかなり政治的な存在であり軍の指揮官達の目付けであった。彼等の造反を防ぐのがその目的であったのだ。同時に思想や発言のチェックも行う。そして彼等に何か思わしくないところがあればすぐに上層部に報告する。将軍といえど彼等の機嫌を損ねることはできなかった。非常に厄介な存在であったのだ。
ナチスと並んで彼等の正統な後継者と言えるソ連にもこれはあった。そしてその役割は同じであった。それによりソ連軍は指揮官の行動が制限され硬直し、腐敗した組織になってしまった。政治将校の発言権が肥大化し、彼等に利権が集中した為であった。八条はそれを知っており最初からそうしたのであった。
「シビリアン＝コントロールというな」
「はい」
これはもう今更言うまでもないことであった。
「あれは単に文民が威張っていればいいというものではないのだ」
「それはわかっているつもりですが」
「君はわかっていても多くの者がわかっているとは限らない。残念なことだがな」
ドトールはそう述べた。

「軍人は政治家や官僚の奴隷ではないのだ」
「勿論です」
選挙で選ばれた市民の代表である政治家が地位的に軍人よりも優位に立ち、そして暴力機関である軍部をコントロールする。簡単に言うとそれだけである。
政治家、そして政府は彼等をコントロールすることが重要であり、軍人はそれに従わなくてはならない。だが国防や作戦に関しては彼等の地位、発言権はあくまで対等なのである。それがシビリアン＝コントロールであった。そしてそれぞれの専門分野には介入はしないのである。それも重要なことであった。
「連合においては軍人の地位は決して高くはない」
ドトールの言葉は事実であった。連合において軍人とは数多い職業の一つでしかなかった。連合は他に多くの収入を得られる職業も社会的地位が高いとされる職業も極めて多い。軍人の地位は低くは思われてはいないし尊敬もされていることはされているが高くもなかった。あくまで職業の一つであった。マニアには好かれているがそれだけであった。今ではかっての日本軍のように街を歩いていれば訓練はどうした、だの真面目にやれ、だの厳しい愛の鞭の言葉を受けることもなかった。だがそれでも国防における発言権も立場も軍人と文民は差がなかったのである。そういうことであった。
「ナチスやソ連のことだが」
「はい」
「あれは軍のせいだと思うか。お互いの戦争でのあの異常な損害は」
独ソ戦は人類の歴史に残る凄惨な戦いであった。双方共夥しい犠牲者を出した。ドイツは敗れ国家は分断された。勝ったソ連は半ば国の運命が決したとさえ言える程の損害であった。そうなってしまった原因は何故か。
「ヒトラーもスターリンも文民だったのだ」
ドトールはそう言った。
「そうでしたね」

コレイスキーはその言葉にハッとした。
「彼等は軍服こそ着ていましたが」
「そもそもヒトラーは伍長だった。スターリンも革命に参加するまで、そして参加してからもそれ程軍に精通していたわけではなかった。彼等はあくまで政治家であったのだ」
彼等は軍人であるよりも政治家であった。そして軍事的なものよりも政治的な配慮を優先させて戦略を立てた。反対する軍人は罷免、粛清すらあった。彼等は独自の暴力組織をも持っていた。秘密警察に党の私軍とも言える親衛隊であった。彼等に逆らうことは死を意味していたのだ。
「結果があれだ」
ドトールはまた言った。
「彼等が軍人であればあそこまで損害は出なかったかも知れないな」
「はい」
「誰もヒトラーやスターリンを止めることはできなかった。だが連合では違う。政府が軍をコントロールしているが」
「その政府は議会のチェックを受けておりますね」
「そういうことだ」
ドトールはコレイスキーのその言葉に対して頷いた。
「これが重要なのだ」
彼はそう言った。
「シビリアン＝コントロールと言うのは容易い」
「はい」
「要するに軍服を着ない者が軍を統制する。それだけだ」
「一言で言うとそうなりますね」
その通りであった。ただそれだけではないのである。それが現実であった。
「しかし政府だけがそれを行うものではないのだ」
その為にも議会があるのだ。
かってアメリカ等で問題となったことであるが政府が軍を統制す

る。悪く言うならば政府が軍を恣意的に動かすのである。人事や作戦も統括したのだ。これによりベトナム戦争が長期化し、そしてアメリカの敗北に繋がった。そうした経緯からシビリアン＝コントロールは政府だけでなく議会も入るようになったのである。

政府が軍部をコントロールする。そして議会が軍の考えを聞きその政府をチェックする。こうしてシビリアン＝コントロールは軍部だけでなく政府もチェックされるようになったのだ。問題は軍部だけのものではなかったのである。

「確かに軍人は文民の統制下にある」

「はい」

ドトールはまた言った。そしてコレイスキーは頷いた。

「だがその人としての身分は対等だ。ましてや」

口調がきつくなった。

「一方的に見下されるようなことはあってはならないのだ」

「難しいですね」

「そもそも民主政治というもの自体が難しい」

彼はそう答えた。

「この軍事にしろまず基礎がある」

「文民も軍事をよく知らなければならないということですね」

「そうだ」

彼は答えた。

## 第十部第一章　神々の銀河その八

「そしてこれは政治にも言える」
「市民がまず政治を知らなくてはならない」
「知らなくては衆愚政治に堕してしまう。これは何も単なる汚職やそういったものだけではない」
政治の腐敗は汚職だけを言うのではないのだ。政治家や市民の劣化こそ本当の意味での腐敗なのである。
極論を言うならば汚職や収賄はどの国にもあるのだ。だがこれは極端にならない限りは国の運営に支障はない。問題とすべきは極端な利権や特定の勢力の専横、そしてそれに対して誰も何も異常と思わなくなった時である。また政治家や市民がその能力を著しく低下させた場合が特にそうである。
「かって連合も幾度となくそういったことがあった」
連合は中央政府も多くの国も高級官僚の登用の主流はスポイルズ＝システムである場合が多い。これは選挙で選ばれたトップが閣僚や高級官僚を任命するというものである。閣僚は基本的に大統領や首相が任命するものでありこれは問題ないと言えば問題ない。かというとそうでもないのだ。
とりわけ高級官僚はそうである。トップが自分の腹心や身内を任命するケースもあるのである。スタッフを任命するという視点から言えばこれは問題ではない。だがそれが適材適所か、また任命された者に能力があるかどうかはまた別の問題であるのだ。
もし任命された者に能力がなかったり人間的に問題があればどうなるか。言うまでもないことであった。そしてそれにより腐敗が生じる。これが問題なのであった。
官吏の登用にはもう一つある。メリット＝システムである。これは試験により官僚を登用するというものだ。だがこれも行き過ぎると問題なのである。結局連合はスポイルズ＝システムとメリット＝

システムを併用しているがどうしても各国も中央政府もスポイルズ＝システムが優勢になってしまう。ここでもシビリアン＝コントロールと同じ問題が生じるのである。

官僚は政府の統制下にある。だがその政府のチェックを議会が行う。議会は官僚の答弁を聞く。こうした相互のチェックが生じている。だがそれでも問題があるのだ。これは軍に対するものより深刻であった。

このスポイルズ＝システムの問題である。官僚主義を抑える効果があるのは事実だが選ばれる人間によって問題が生じてしまうのである。そのバランスが大きく崩れた時に腐敗が生じる。実に複雑な問題であった。

「連合というものを考えたならば」

「はい」

ドトールの話はまだ続いていた。

「政治家の力が大きくなるのは当然だ」

「ですね。我々はエウロパのそれとは根本が違いますから」

「そうだ。我々は一から全てを作った国が多い。アメリカ然りな」

アメリカはイギリスから独立した。他の国々も植民地や欧州の侵略から脱した国が多い。そうした意味では中国も同じであった。中国もかって欧州諸国の侵略を受けたことがある。また北方の異民族の征服王朝もあった。決して漢民族だけの国ではないのである。その漢民族という定義もかなりあいまいなものであり以前より様々な人種との混血が見られていた。アメリカ人という概念と似ている。漢民族もアメリカ人も人工的な要素の強い民族概念である。すなわちアメリカや中国はかなり人工的に作られた国家なのである。自然に熟成された要素は少なくとも最初はなかったのだ。これはまた連合の多くの国家にも共通していた。アッシリアやフェニキア、ヒッタイトといったかっての古の民族の復活国家は実際にはかなり強引に主張している一面があるからである。連合は全体としては人工的な要素の強い勢力なのである。

長い歴史を持ち人工的な色彩の弱い古い国といえば日本やタイ等であろうか。連合においてはごく少数であった。また宇宙に進出してから建国された国もまた多いのである。またこうした国には王政が多いのも特色である。
それに対してエウロパは古来の伝統を受け継ぐ国家が多い。そもそもの基盤が違うのである。
独立し、そこから何かをはじめるにあたってはリーダーが必要である。星の開拓にしろ。民主政治においてはそれは選挙で選ばれた政治家が司る。こうして政治家の権限が官僚のそれに比して強くなったのである。あくまで政治に限ってのことであるが。連合は他にも企業等多くの権力が存在するので政治家だけで全てが行えるものではないのであるが。
「官僚が儀礼的にやっていては駄目な場合もある。それが最も出るのが連合において最も重要な開拓だな」
「はい」
「今も続いている。しかしバランスが重要だ」
それが崩れた場合が問題なのである。
「その都度議会や選挙によって抑えられてきたな。議会が危ない場合は選挙で」
連合もチェック機能は存在している。それによりあらゆる問題を防ぐことができているのは事実なのである。
「問題はあることは事実ですが」
コレイスキーがここで言った。
「とりあえずは機能しておりますね、一千年の間」
「そう言っていいだろうな」
ドトールはそれを認めた。
「だが」
しかし言葉をつけくわえた。
「完全というわけではないな」
「はい」

今度はコレイスキーが頷いた。
「そもそも政治に完全というものはないのだが」
「いえ」
コレイスキーが反論した。
「何かあるのか」
「はい。完全というものはないのは政治だけではないかと」
「そういえば君はグノーシス主義を信じていたな」
「ええ」
彼はそれを認めた。グノーシス主義には世界は完全ではない神が創造したものであるからその世界も決して完全ではないというものがあった。キリスト教から見ればかなり異端でありその為に迫害されてきた歴史も持っている。
「世界自体がそうなのですから」
「否定はしない、いやできないな」
ドトールは呟いた。
「私はグノーシス主義には詳しくはないが」
彼はケツアルコアトルの信者である。他にもコアトリクエも信仰している。どれもかって中南米で信仰されていた蛇の神である。彼は蛇の神の信者であるのだ。
「何事も完全ではないのですから。政治もまた」
「だが少しでもましなものを目指さなくてはならない」
「はい」
「努力はしなくては。結局何にもならないのだ」
ドトールの目の光が強くなった。
「それはわかっていると思うが」
「勿論です」
「ならいい。そうでないと警官は務まらないからな」
「はい」
彼等は警官である。それは忘れたことはない。
「さて」

ドトールは一呼吸置いてから言った。
「この戦いは何かと色々あってからはじまったな」
「そうですね。ステッラのあれから」
「あれには随分手こずったな。そしてそれから戦争がはじまった」
ドトールは少し感慨を込めてそう述べた。
「戦争というのははじめるのは容易いが終わらせるのは難しい」
そしてこう言った。
「落としどころなのだ、問題は」
「エウロパを併合するのが目的ではありませんからね」
「それはかえってマイナスだな」
彼はそう述べた。
「一千億もの不穏分子を抱え込むのはどうか。それに彼等とは今後もサハラと噛み合ってもらいたい。そうすればお互いの目がこちらに行かずにしかも漁夫の利も狙えるしな」
「はい」
コレイスキーは頷いた。これは政治家としての見方であり警官である二人にはそぐわないものである。だが政治的な見方としては正しいと言えた。対立する二つの勢力を争わせてその矛先を逸らし、尚且つ漁夫の利を狙うのは古来政治の世界においてはよく見られたことである。連合においては貿易や金融でこうした駆け引きが多く行われている。とりわけこれを得意とするのがＡＳＥＡＮ各国でありイスラエルであった。とりわけイスラエルの卓越した手腕には定評があり連合でも突出していた。
「そういったことを考えますとやはりエウロパには賠償金と他に幾らかのものを貰うだけで宜しいですね」
「そうだな」
ドトールは答えた。
「問題はその権益だ。まあ戦争の原因を考えると求めるものははっきりしているか」
「信仰ですか」

「そうだな」
彼はあらためて頷いた。
「彼等が信仰を利用したのだ。ならば我々もそれを獲らせてもらおう」
「はい」
彼等は話をしながら夕刻を過ごした。仕事が終わり帰路につくまでのほんの一時の話であった。だがそこから得られたものは多かった。そして彼等は帰路につき警官から普通の家庭人になるのであった。彼等も制服を着ていない時はごく普通の人間であった。ドトールは妻と共に二人で作った自家製カクテルを飲み、コレイスキーは子供達におみやげをプレゼントするのであった。そしてそれぞれ次の仕事に向けて英気を養うのであった。

## 第十部第二章　北の戦いその一

北の戦い

モンサルヴァートがモントローズ要塞を明け渡し中央へ急行していた頃北方でも決定的な出来事が起こっていた。それは連合の勝利とエウロパの敗北であった。彼等は南方も北方も失うことになったのである。

事は一つの戦いであった。ヴァルハラ星系の南方にあるイバロ星系で起こった戦いであった。これに敗れたことによりエウロパは北方から退かざるを得なくなったのである。これはその戦いの経緯である。

ヴァルハラを引き渡したエウロパ軍はそのまま撤退を続けていた。彼等は五十個艦隊、対する連合は二百個艦隊である。戦力差は歴然としており彼等に対することは困難であったからだ。

そして地の利も彼等には味方しなかった。エウロパは元々障害の少ない地形でありブラックホールや小惑星群もない。そうした場所で戦うこともまた困難であったのだ。

エウロパ軍の司令官は宇宙艦隊司令長官であるローズエウロパ元帥であった。彼は五十個の艦隊と共に連合に対して反撃の機会を狙っていた。だがそれは中々見つからなかった。

「参ったな」

イバロ星系の第七惑星であるニンゲにて彼はそうぼやいた。ここはイバロ星系の代表的な軍事基地であるのだ。

「このままでは機を逸してしまう」

彼は会議室で幕僚達を前にしてそう言った。

「どうしたものか」

「戦うしかないでしょう」

彼のすぐ側にいた赤と黒の軍服の女がそれに応えた。赤い髪を後ろで束ねている。白く鼻の高い顔を持っている。その目は茶色であ

る。そして細い長身である。何処か男性的な印象を受ける。エウロパの軍服が似合っていた。それはプロコフィエフとはまた違った意味での美しさであった。
「確かに撤退を重要ですが」
彼女は言った。ローズはそれに顔を向けた。
「うむ」
「それでも機を見なければなりません。これ以上彼等の進撃を許してはならないでしょう」
「そうだな」
彼はあらためて頷いた。
「それではイデラ＝カーネルキン上級大将」
「はい」
その軍服の女は名を呼ばれて頷いた。
「卿には何か考えがあるのか」
「無論です」
カーネルキンはそれに応えた。
「今彼等は全軍を挙げてこちらに向かってきております」
「うむ」
「それを叩くのです。彼等をひきつけて」
「このニンゲに立て篭もるというのか」
「そうです。これは彼等を引き留めることも同時にできます」
「連合の二百個艦隊をか」
「そして義勇軍の十個艦隊も。彼等を引き留めることができれば戦局に大きな影響が出るでしょう」
「確かにな」
ローズはそれに頷いた。
「彼等をこちらに足止めできれば大きい。だが」
「だが？」
「果たして彼等がそれに乗るかだ。ここには足止めの戦力だけ置き彼等はそのまま南下してもいいわけだ」

「それは有り得ますね」
それを聞き一人の男が声をあげた。見れば赤がかった蜂蜜色の髪に紫の瞳をしている。その瞳から見るにケルト系らしい。紫の瞳はケルト人に見られるものである。もっともケルト人でも紫の目はそれ程多くはないのであるが。かなり特殊な目の色であった。少なくともエウロパではそうである。連合では混血の結果結構ありきたりに見られる目の色ではある。だがエウロパでは連合と比して混血の度合いが遥かに薄いせいかケルト人特有の目の色となっているのだ。ローズはその紫の瞳の男を見た。見ればまだ若い。二十代後半であろうか。美男子といってもよい風貌であった。
「ジョージ＝ウェリントン中将か」
「はい」
ウェリントンはそれに頷いた。ローズは彼を見て少し複雑な顔をした。
実はこの二人は縁戚関係にあるのである。ローズはイギリスの侯爵家の当主である。代々続く名門の出身であり彼もまたその中に生きてきた。ウェリントン家もまたそうであった。ウェリントン家はアイルランドの侯爵家であり爵位も同じであった。そしてローズ家はそもそものルーツがスコットランドにあった。イングランドの北にあるこの国はイングランドに比べてケルトの血が濃い。当然ローズ家もそうであった。彼等のルーツはケルトであったのだ。
ローズの母はウェリントン家の者である。同じケルト系の貴族ということで両家は昔から代々婚姻を繰り返してきたのである。その結果両家は濃い縁戚関係になったのである。
ローズとウェリントンは従兄弟の関係にある。二人は幼い頃から付き合いがありローズにとってウェリントンは弟のようなものであった。それ程仲がよかったのである。
だが今は上司と部下の関係であった。従兄弟でありながら上下関係になるという状況が彼の顔を少し複雑なものとしたのである。
「そうした場合はどうすべきでると考えるか」

「はい」
ウェリントンはそれに答えた。
「打って出るべきだと思います」
「出撃すべきか」
「はい」
彼はまた答えた。
「だがそれだと勝てるかどうか」
カーネルキンがそれに疑問の声を呈した。
「数が違い過ぎる」
「それはわかっております」
ウェリントンはそれに反論した。
「それをわかったうえで申し上げているのですから」
「戦力差はわかっているのだな」
「はい」
彼はローズにも答えた。その声と顔は従兄弟の間のものではなかった。
「確かに敵の数は圧倒的です」
「うむ」
「ですがそれは一つになっている場合です。分散させればよいでしょう」
「分散させるのか」
「そのうえで個々に撃破すればよいのです。それならば私に策があります」
「策が」
「はい」
「言ってみてくれ。どのような策だ」
「はい。それでは」
彼はあらためて自説を述べた。それを聞き終えた時ローズも他の者達は頷いていた。
「成程な」

「成功すればかなり効果が期待できる」
「如何でしょうか」
「悪くはない」
ローズもそれに頷いた。
「だが問題がある」
「何でしょうか」
「危険が多い。それを実行するとならばな」
「ですから提案したのです」
「どういうことだ」
胸を張ってそう言うウェリントンに問うた。

## 第十部第二章　北の戦いその二

「危険な作戦さからこそ敵もまさかと思うでしょう」
「うむ」
「それにこの戦力差です。生半可な方法では対処できないかと」
「確かにな。しかし」
「しかし？」
「その作戦を行うには実行部隊はかなり危険な状況に追いやられる。それはどうする」
「私がやります」
ウェリントンは胸を張ってそう答えた。
「卿が」
「はい」
彼は頷いた。
「自分が提案したならばそれは当然だと思いますが」
「そうだが」
「命をかけることになる。それでもよいのか」
カーネルキンもそれに問うた。
「はい」
ウェリントンは彼女にもそう答えた。
「もとよりそのつもりです」
「そうか」
「それならば問題はないでしょう。将兵も志願者のみを募ります。命を捨ててもいいという者達ばかりを」
「決死隊か」
ローズはそれを聞いてそう呟いた。その名こそ今の彼等の置かれた状況をよくあらわしていた。まさに決死であったのだ。
「はい。如何でしょうか」
「断ってもやるだろう」

ローズはウェリントンを見据えてそう言った。
「卿は昔から・・・・・・いや」
言いかけたところで止めた。今は従兄弟同士ではないのだ。
「今はおそらくそれしかないだろうからな」
「はい」
「それでは頼む。すぐに将兵を選んでくれ」
「わかりました」
こうして将兵が集められた。そしてすぐに選抜された。
まずは年老いた親や幼い兄弟、妻子のある者達は外された。これは平民、貴族に関わらずその対象とされた。
そしてその中からさらに志願者だけを募った。結果としてウェリントンには一個艦隊規模の将兵と艦艇が集められたのであった。
「これだけあれば充分ですね」
ウェリントンは港に集まった将兵達を見てそう言った。
「充分か」
「はい」
彼はローズに対してそう答えた。
「だがよいのか。これは本当に命を落とす可能性が高いのだぞ」
「司令」
ウェリントンはあらためてローズに顔を向けた。
「戦争においては命なぞ何時消えるかわかりません」
「確かにそうだが」
「ですから今更。何を恐れることがありましょう」
「それではいいのだな」
「はい」
彼は頷いた。
「元より覚悟のうえです。それに私も身内はおりませんし」
彼の両親はまだ若い。妻子もいない。そして兄弟も皆成長している。条件は充分に満たしているのである。
「そうだったな」

ローズもそれは知っていた。頷くしかなかった。
「憂いはないということか」
「ええ。ですから行けるのです、死地に」
「わかった。だが一つだけ言っておく」
「何でしょうか」
「死ぬなよ、いいな」
「死ぬな、ですか」
ウェリントンはそれを聞いて意外そうな顔をした。
「軍人であるというのに、我々は」
「命を粗末にするなと言っているのだ」
ローズはそう反論した。
「軍人だからこそだな。命を粗末にしてはならないのは」
「軍人だから、ですか」
「そうだ」
彼は答えた。
「生きていればまた戦える時もある。死ぬべき時も確かにある」
言葉を続けた。
「だが生きなければならない時もある。その時は」
「生きろ、ということですか」
「そうだ」
そして頷いた。
「いいな、この戦いは北方だけで終わるものではない」
「はい」
「おそらくまだ続くだろう。いいな、まだ死ぬ時でないのなら生きろ」
「わかりました」
ウェリントンもまた頷いた。
「その御言葉、肝に命じておきます」
「うむ」
「ですが思う存分戦ってみせましょう。エウロパの騎士の力、見せ

てやります」
「頼むぞ」
それはローズも同じであった。
「戦わなければならないのは事実だからな」
「はい」
「戦え。だが死ぬな。私が言うのはそれだけだ」
「ハッ」
それを受けて敬礼した。
「それでは行って参ります」
「うむ」
こうしてウェリントンは出撃した。ローズはそれを見送った。
「相変わらずだな」
彼は港を出て姿を消すウェリントンの艦隊を見送ってそう呟いた。
「子供の頃からだ。あの蛮勇は」
彼等は幼い頃から互いを知っていた。その頃からウェリントンはよく言えば勇猛、悪く言えば無鉄砲であった。そして今はそれがどうでるかが問題であった。
子供の頃ウェリントンはそれがいい方向に出た場合は弱い者を助けたり仲間内から讃えられるような勇敢な結果になった。だが悪い方向に出れば大怪我をしていた。決闘においても彼はそれを拒むことなく受けた。そして無数の決闘をくぐり抜けた結果その身体は傷だらけとなっているのである。それは幼い頃からの彼の生き方の証明でもあった。
「私もあいつとは色々あったな」
彼の昔のことを思い出していると自分のことも思い出した。そしてそう呟いた。
「本当にな。あいつには色々と困らせられた」
苦笑した。幼い頃の思い出は色々とある。だがどれをとっても今ではいい思い出だ。
付き合って山の猪を捕まえようとしたことがある。何とか捕まえ

ることができたが結果として大怪我を負ってしまった。住んでいる街の不良グループと喧嘩したこともある。その時はローズが仲裁に入ろうとしたが結局彼も騒動に巻き込まれることとなった。だがウェリントンは最後はその不良グループを一人で潰してしまった。

他にも色々とあった。どれも危険なものでありそれをくぐり抜けてきた。結果としてローズも身体に多くの傷を負ってしまっていた。

だがそれでもこの従兄弟を憎むことも嫌うこともなかった。彼等はそれだけ深い繫がりがあり、強い絆で結ばれていたからだ。それを最もよくわかっているのは他でもない彼等自身であるからだ。

それを悪く言うつもりはない。そして批判するつもりもなかった。彼等にとっての繫がりはそんな弱いものではなかったからである。

ローズは港を離れた。そして自身の司令室に戻った。そして後は自らの仕事の準備に取り掛かった。彼もまた戦いに備えるのであった。

## 第十部第二章　北の戦いその三

北方の連合軍を率いるのはネルソン＝リバーグ元帥である。南アフリカ出身であり黒い肌と金褐色の髪に藍色の瞳を持っている。鼻はやや低い。やはり混血が見られている容姿である。

中背で痩せた身体をしている。綺麗に切り揃えた口髭が印象的である。

彼は連合軍において一ニを争う清廉な人物として知られている。生活は質素で不正を激しく憎む。そして将兵の生活の向上に常に腐心しているのである。

「軍人だからといって生活環境が劣悪であってはならない。それは士気にも大きく関わる」

彼は常々こう主張していた。そして南アフリカ軍に所属していた頃は自ら歩き回って視察し生活環境の改善に大きく貢献してきた。南アフリカ軍は彼の活躍により飛躍的に環境がよくなったと言われている。

それは連合軍になってからも変わらず彼は積極的に動き回った。そして連合軍の環境整備に貢献していた。

そしてそれだけではなかった。彼は精錬な人物であり軍律にも厳しかった。彼の名を聞いただけで不真面目な兵士は襟を正したと言われている。とかく真面目であった。連合軍の良心とも言える存在であった。

だが将としては面白みに欠ける凡将というのが一般の評価であった。可もなければ不可もない。作戦指揮はあくまでオーソドックスなものでありこれといって目立ったものはなかった。そのかわり部下の意をよく用いることで知られていた。だがいささか狭量なところもあると言われている。これは几帳面さの裏返しであった。リバーグとはそういった人物であった。

彼は今北方方面軍の旗艦アンマにいた。これはアフリカのとある

部族の神話に出てくる神の名である。今はアフリカ系の国々に創造神として深く信仰されている神である。アフリカの神話もまた連合においては信仰されているのである。
その艦橋において彼は前方を見ていた。そして見ながら考え事をしていた。
「そろそろだな」
そしてポツリとこう言った。
「何がでしょうか」
それを聞いた参謀の一人が彼に声をかけてきた。
「いや、イバロ星系に入るのがだ」
リバーグはそれに対してそう述べた。
「あそこは北方のエウロパ軍が集結していたな」
「はい」
その参謀はそれに答えた。
「北方のほぼ全ての艦隊がそこに集結しているようです」
「そうか」
それを聞いてあらためて頷いた。
「そこで決戦を挑むつもりかも知れないな」
「ですね」
参謀も頷いた。
「それは充分考えられることです」
「それでだ」
リバーグはそれを受けて話を進めさせた。
「我が軍とすればどうすべきだと思うか」
「決まっているのではないでしょうか」
別の参謀がそう答えた。
「戦うだけです。他に何がありましょうか」
「一言で言えばそうなるな」
リバーグはそれを聞いてそう述べた。
「今我等は二百個艦隊の戦力を擁している」

「はい」
「戦力だけでは彼等の四倍だ。だがそれで油断してはならないな」
「仰る通りです」
「圧倒的な戦力を持ちながらも敗れた例もある。そしてそれは実に多い」
　ベトナム戦争においてはアメリカ軍は圧倒的な戦力を誇りながらもベトナムのゲリラに負けた。フランス軍も中国軍もだ。彼等は外交においてベトナムに大きく遅れをとり、それにより侵略者のレッテルを貼られてしまったことが大きいがそれと共にやはり戦場で彼等に負けていたのである。彼等は粗末な武装しかないベトナム軍に敗れ続けた。そして結果として敗れたのであった。こうしてことは戦史にも非常に多い。
「地の利は彼等にある」
「はい」
　参謀達は頷いた。
「それが最大の問題だな。一応は事前に調べてあったな」
「はい」
　地理参謀が敬礼をして応えた。
「既にイバロ星系の地形は全て掌握しております」
「だがそれだけでは不充分だ」
　それでもリバーグは首を縦には振らなかった。
「といいますと」
「実際に人が入っているのかね」
「それは」
　地理参謀は口篭もった。
「占領の過程で手に入れた地図があるだけでして」
「そうだろう」
　彼はそれを聞いて見当がついたように頷いた。
「それでは完全とは言えない。実際に中が見られないとな」
「はあ」

「無人の偵察艇を派遣するように」
彼はそう命じた。
「多量にな。そして細部まで調査するように」
「わかりました」
如何にもリバーグらしい指示であった。あくまでオーソドックスである。
「それが終わるまでは我が軍は星系には入らない。そしてそれが終わったならば入る」
「戦いですか」
「それもまだわからないな」
彼はそう答えた。
「相手が退くならそれでいい」
「はあ」
「我々は今は彼等と戦う必要はないのだからな」
実際にバールはまず占領を優先させるように指示を出していた。敵に対しては向かってくるならば迎撃せよと命じただけである。その他には取り立てて命じてはいなかった。リバーグはそれに従っただけである。

## 第十部第二章　北の戦いその四

「どちらにしろ最後は戦うことになるでしょうが」
「だがこの北方ではそうだとは限らない」
言葉を返した。
「戦わないのならばそれだけ戦死者が減る。それに越したことはない」
連合軍が最も嫌うのは戦死であった。これが多くなれば志願者、そして軍の人員に大きく影響するからであった。これは連合軍の悩みの一つであった。戦争をしながらも少しでも戦死者を抑えなければいけないからである。
「違うだろうか」
「いえ」
参謀達は首を横に振った。
「その通りです」
彼等にもそれはよくわかっていた。
「そういうことだ」
リバーグもそれに頷いた。
「何時までも義勇軍に頼るわけにもいかないからな」
「はい」
サハラ義勇軍はこの北方においても活躍していた。彼等の獅子奮迅の戦いぶりにより連合軍はその戦いを優位に進めていたのである。そしてその損害もまた義勇軍に集中していたのも事実であった。彼等は常に先頭にいたからである。言うならば先鋒であった。
「といっても彼等にはまだ活躍してもらわなければな」
「ですね」
だが彼等の力が必要なのも事実であった。戦力であると共に正規軍ではない。だから思い切って使えるという一面があるからだ。これもまた事実であった。

「今彼等の状況はどうなっているか」
「変わりありません」
参謀の一人がそう答えた。
「損害も今のところ軽微であります」
「そうか。それは何よりだ」
リバーグはそれを聞いて頷いた。
「では今度の作戦行動に参加させることも可能だな」
「はい」
参謀達はそれに頷いた。
「だがまずは情報が必要だ」
そこでリバーグは目を細くさせた。
「偵察艇は普段より多く出せ。いいな」
「ハッ」
「それと同時に・・・・・機雷は置いておくか」
彼は考えながらそう言った。
「後で使うかも知れないからな」
連合の偵察艇は機雷を撒くことも可能なのである。これは撹乱の為の能力であった。
「まずはイバロの地理を完全に把握するぞ」
「はい」
「それから動く。それまでは各員英気を養っておくように。いいな」
「わかりました」
皆それに対して敬礼する。
「それではこの場は解散。当直士官以外は休んでよし」
リバーグはそう周りの者に言い渡すと自らも部屋に戻った。司令室である。
司令室といっても他の者の部屋と何ら変わりはない。身の周りにあるものも見れば全て官給品ばかりであった。彼は贅沢を好まなかったのだ。
自分のノートパソコンを開いて打ちはじめる。何やら文章を書い

ているようだ。
『親愛なる我が娘よ』
文章はそこからはじまっていた。どうやら家族にあてた手紙であるらしい。
彼もまた家族がいる。見合いで結婚した妻との間に息子が一人、娘が三人いる。息子が産まれた後は娘ばかり三人続いた。彼はこの娘達をいたく可愛がっていたのだ。
「子供は大事にしなければならない。特に娘は」
これは彼が常々周りの者に対して言っていることであった。彼は家庭的にもよき夫であり優しい父であった。とりわけ娘達に対しては優しい父であった。
手紙は三通書いた。娘達それぞれにあてたものであった。彼はそれを書き終えるとまずは一息つくことにした。丁度そこで扉をノックする音が聞こえた。
「どうぞ」
彼は入るように言った。するとセーラー服の少年がそこにいた。士官室係の少年兵であった。
「おお、君か」
彼はその少年兵に顔を向けるとにこりと笑った。優しいが何処か神経質そうな笑みであった。
「今日の私の受け持ちは君だったのか」
「はい」
その少年兵はリバーグの言葉に頷いた。
「閣下、失礼致します」
「うむ」
そして部屋に入る。だがリバーグは兵士に対して言った。
「掃除等はいいぞ」
「えっ」
「もう自分でしてある。他のこともな」
「そうなのですか」

「自分で出来ることは自分でしておくのが私の流儀だ。だからいい」
「わかりました」
「私のことはいい。他の仕事に向い給え」
「はい」
少年兵は敬礼してその場を後にした。士官室係は若い兵士の持ち回りである。これは当番制となっているのだ。リバーグは彼等にとってはいい上官であった。何でも自分で済ませるので彼等の仕事がなくなるからである。その分休むこともできるし他の仕事に行くこともできる。リバーグはそう言った意味で非常にいい上官であったのだ。
実際に彼は部下に対しては気配りを欠かさず親切であった。上官に対しても忠実でありそうしたことでも評判が高かった。だがやはり細かいとの評価を受けていた。そして何処か器が小さかった。評価としては大人物ではなかったのである。
それは彼自身もよくわかっていた。だから彼は連合軍の元帥の中ではあまり評価が高くないのも自覚し分をわきまえていた。八条の命には静かに従っていた。
「兵士なら元気がいいで済ませられることも提督がやると造反になる」
こういう言葉がある。彼はそれを踏まえて八条の言葉には忠実に従った。そしてそれ以上に軍規に従うのであった。それが彼であった。
彼はいつも仕事をしていた。その事務処理能力は極めて高い。だがやはり独創性がなかった。
「これでよし」
彼はメールを娘達に送り終えるとそう呟いた。それから自分の机の前にある写真を見た。そこには彼と家族達の二次元写真があった。
「待っていてくれ」
彼はその写真に対してそう語りかけた。
「帰ってくるからな。そしてまた皆で楽しく食事を採ろう」

それが彼にとって最大の贅沢であった。他のことは望んではいない。ただそれだけが彼の望みであった。

彼は仕事にとりかかった。デスクワークである。それを次々と終わらせていく。司令しかも元帥ともなるとその仕事は膨大なものであるのは言うまでもない。

そしてそれが終わってから眠った。束の間の休息である。戦いの前のほんの休息であった。

## 第十部第二章　北の戦いその五

ウェリントン率いるエウロパ軍は連合軍が何処にいるかを把握していた。そしてどういった状態になっているのかもわかっていた。そのうえで動きを決定した。

「引き込むぞ」

彼は部下達に対して一言そう述べた。

「イバロにな」

「引き込むのですか」

「そうだ」

彼は答えた。

「奥深くにな。それから倒す」

そしてそう言った。強い声であった。

「その為に我等は命を捨てるのだ。よいな」

「勿論です」

部下達もまた強い声で頷いた。

「我等もまたその為に志願したのですから」

「そうだったな」

ウェリントンも部下達も皆目から強い光を放っていた。そしてその光は鋭かった。

「頼りにしているぞ」

「お任せ下さい」

彼等は答えた。

「この戦い、必ず勝ちましょう」

「その為に命を捨てることがあってもな」

「はい」

「では行くぞ。よいな」

ウェリントン率いる艦隊はまた動きはじめた。そしてイバロ星系を出て連合軍の前に姿を現わしたのであった。

「敵艦隊が出現しました」
それはすぐにリバーグに報告された。
「数は」
彼はまず数を問うてきた。
「一個艦隊規模です」
報告した若い士官がそう答えた。リバーグはそれを聞くと一言こう言った。
「守りを固めるように」
それだけであった。そしてそれは忠実に実行された。
連合軍は守りを固めた。そして動きはしなかった。
それを受けてウェリントンは動きを変えた。イバロに引き返したのである。
「追いますか」
参謀達がリバーグに問う。だが彼の返答はこうであった。
「まだだ」
彼は偵察が終わっていないことをその理由とした。そしてやはり動きはしなかった。
偵察艇は次第に戻ってきた。それによりイバロ星系の事情はおおよそがわかってきた。彼はそれを聞きながら地図を見ていた。そこに答えがあるからである。
「敵はイバロで何をしているか」
「ハッ」
情報参謀が答える。
「あの一個艦隊でしきりに我々を挑発しております」
「相変わらずか」
「はい」
彼はそれに答えた。
「そして敵の主力はどうしているか」
今度は敵の主力部隊について問うた。
「只今イバロの第七惑星であるレンゲから出たようです」

「出たか」
リバーグの目の光が変わった。
「そして何処に向かっているか」
そう言いながら地図を情報参謀に見せた。その参謀はそれを見た。
「今ここにいます」
彼はそう言って指差した。そこはイバロの恒星のすぐ北であった。
「そしてここに向かうと思われます」
そのまま指を動かす。そこはイバロの西にある磁力嵐の一帯であった。リバーグはそれを見てふと呟いた。
「地の利を利用して迎撃するつもりか」
「どうやらそうだと思われます」
彼はそれに頷いた。
「数は我等が圧倒的に優勢です。それを考えますと」
「道理だな」
そしてリバーグはこう答えた。
「数において劣るのならば策を用いる。これは戦いの基本だ」
あくまで士官学校で習った言葉を復唱しているに過ぎない。彼はやはりマニュアルを重視する人間でありそこから離れることはあまりないのだ。
「それでは彼等はここに何らかの策を用意しているな」
「おそらくは」
参謀はまた答えた。
「あの辺りの偵察艇が戻ってきてからにするか。詳しい作戦の立案は」
「はい」
こうして作戦の立案はとりあえずは見送られた。だがすぐにそれを立てる時がやって来たのだ。
そこに向かわせている偵察艇は一隻も帰って来なかった。他の宙域に向かわせている偵察艇は帰ってきているのに、である。これで何かがないと思わない方が不思議であった。

「どう思うか」
リバーグは今度は主だった参謀達を会議室に集めたうえで問うた。
「あの宙域に向かわせた偵察艇だけが戻って来ないのだが」
「やはり何かあるのでしょう」
主席参謀であるフェリペ＝ジェリオ大将がそれに答えた。白い肌に低い鼻を持っている。彼はアルゼンチンの農家の生まれでありそれを思わせるがっしりとした体格が印象的である。鼻が低いのは彼の母方の祖母と父がそれぞれアジア系であるからである。母方の祖母は日本人、父はインディオの血を引いている。
「そこに罠があると考えるのが妥当です」
「そうだな」
リバーグはそれを受けて頷いた。
「それではその宙域には向かわないでおこう。それでいいな」
「ハッ」
皆それに異存はなかった。頷くだけであった。
「だがどちらにしろ彼等は我々と一戦交えるつもりのようだな。そこまで用意しているとなると」
「そうでしょうね」
またジェリオが答えた。
「おそらく彼等は乾坤一擲の勝負を挑んでくると思われます」
「決死戦か」
「ですからあの一個艦隊を出したのでしょう」
ウェリントンが率いるあの艦隊のことである。だが彼等は今はその艦隊を率いるのがウェリントンであるとは知らない。
「我等を誘い出す為に」
「はい」
ジェリオは頷いた。
「ですが我々はそのような挑発に乗る必要もありません」
「うむ」
「むしろこちらが仕掛けてもよいと思っております」

そう言ってニヤリと笑った。リバーグはそれを見て彼にさらに問うた。
「何か考えがあるな」
「はい」
その通りであった。彼はニヤリと笑ったままその問いに答えた。
「閣下、兵を二つに分けられてはどうでしょうか」
「兵をか」
「はい。それでまず一方をイバロの東に回らせます」
彼は言った。
「そしてもう一方はそのまま南下します。そして等距離になったところで同時にこの場所に向かいます」
「そこか」
「はい」
そこはイバロに入って暫く経った場所であった。そこには障害となるものが何もなくただ開けた宙域が広がっているだけであった。
「ここに向かうのです」
「言い換えるとそこに敵を誘き寄せるのだな」
「はい」
ジェリオは答えた。
「ただ東に向かわせる艦隊の行動が問題です」
「どうするのだ」
「彼等にはレンゲに向かってもらいます」
「レンゲにか」
「はい。それならば彼等も引き返さざるを得ないでしょう。そして我等の誘いに乗ります」
「そう簡単にいくかな」
「問題はあの場所に彼等を向かわせないことです」
ジェリオはリバーグの問いに対してそう答えた。
「あの場所に入られてはおそらく厄介なことになるでしょう」
「だろうな」

それは彼にも容易に想像がついていることであった。
「それだけは何としても避けなければならない」
「はい。若し他の宙域で戦闘になるとしても」
彼は言った。
「それぞれ戦い方があります。そしてそれは」
ここで自分の頭を指差した。
「ここにあります。お任せ下さい」
「期待しているぞ」
リバーグはそれを見て笑った。彼を信頼している微笑みであった。
「それではすぐに作戦立案に移るか」
「はい」
ジェリオだけでなく他の参謀達もそれに頷いた。
そして彼等は会議に入った。こうして連合軍の作戦は決定した。
連合軍はこうして動きをはじめた。
連合軍の動きはすぐにエウロパ軍にも伝わった。それを聞いたローズの目の色が変わった。
「レンゲにか」
「はい」
カーネルキンがそれに答えた。
「百個艦隊が向かっているようです」
「敵の戦力の半分か」
ローズはそれを聞き考えに入った。

## 第十部第二章　北の戦いその六

「まずいな」
「如何なされますか」
カーネルキンはそこで問うた。
「今あの星に残っているのは僅かな戦力しかない」
ローズの声が深刻なものとなっていく。
「答えは決まっているな」
「はい。それでは」
「うむ。すぐに引き返す。いいな」
「わかりました。ところで」
カーネルキンはさらに問うた。
「ウェリントン中将に関してはどうなされますか」
「彼か」
「はい」
やはりここでも上官としての顔であった。あくまで従兄弟としての顔ではなかった。
「呼び寄せよう。今は少しでも戦力が必要だ」
「わかりました」
こうして方針が決まった。エウロパ軍はレンゲに向けて引き返した。ウェリントンにもそれが伝えられた。
「引き返すのか」
彼はそれを聞いて不満そうな顔になった。
「何か不都合でも？」
部下の一人が彼に尋ねた。
「あくまで個人的な見解だがな」
そう断ったうえで述べる。
「今連合軍に対して勝利を収める方法は限られている」
その声は大きいが苦渋が見られた。まるで振り絞るようにして言

う。
「戦力差があり過ぎる。それをカバーするには色々としなければならない」
「はい」
「その為に動いたのだがな。だがこれは」
「危険ですか」
「これもあくまで個人的な見解だ」
またそう断った。それからまた言った。
「敵の罠かも知れないな。もしそうだとすれば」
「数において大きく劣る我々の劣勢は否めませんね」
「うむ」
ここで頷いた。
「だが決まってしまったことは仕方がない。行くしかないな」
「流石にレンゲが狙われましては」
「おそらく彼等は我等が来ない場合レンゲをそのまま陥落させるだろうな」
「それは考えられますね」
「だからだ。やはり行かなければならない。しかし」
「しかし？」
「いや。やはり数の差というのは大きいな」
彼は一言そう言った。
「それをどうするかだったのだが。どうしようもなかったな」
「後は出来るだけ我々の有利な場所に敵を誘い込むだけですね」
「それが今出来れば、な」
ウェリントンの声はいささか沈んだものとなりそうであった。
「出来ると思うか」
「やらねかればならないでしょう」
その部下の答えはそれであった。
「勝利の為には」
「そうだな。だがそれは敵も同じだ」

一言そう言った。
「彼等もな。それは覚えておけ」
「わかりました」
ウェリントンも胸に思うところがありながら呼び掛けに応じた。
そしてエウロパ軍はレンゲに向かった。レンゲに近付くと連合軍が動いたとの報告があった。
「レンゲから離れた！？」
ローズはそれを聞いて声をあげた。
「それは本当か」
「はい」
カーネルキンがそれに頷いた。
「それでは何処に」
「彼等は今こちらに向かっております」
「我々にか」
「如何なされますか」
「決まっている」
ローズの返答は簡潔なものであった。
「我々を狙っているのならばこちらも受けて立つしかあるまい」
「ですね。それでは場所を移りましょう」
「そうだな。よし」
ローズはここで参謀の一人を呼んだ。彼はその手に地図を持っていた。
それを受け取る。そしてそれを開き言った。
「ここに移動しよう」
そこは第一惑星と第二惑星の間であった。この間はかなり拡がっており、アステロイド帯もあったのである。アステロイド帯を使えば防御はかなり容易であることが考えられる。戦うには容易であった。
「わかりました」
カーネルキンにもそれがわかっていた。それに頷く。

「それではそこに」
「うむ」
彼等は決めた。そしてすぐに移動を開始した。それは連合軍にもわかっていた。
「動いたか」
リバーグはそれをイバロ星系の外で報告を受けていた。
「予想通りだな」
「はい」
ジェリオがそれに応えた。
「それでは我々も予定通り動きましょう」
「よし。別働隊にもそれを伝えてくれ」
「わかりました」
これは彼等にとっては予想通りであったようである。リバーグは特に慌てたところはなく冷静に艦隊を動かした。興味深いのはその際の連絡役が帰って来た時である。
「御苦労さん」
わざわざ自ら出向き連絡役の将校に対して声をかけた。優しい声であった。
「は、はい」
その将校は若い黒人の女性であった。赤い髪に緑の目をしている。何でも大学を出て入隊したばかりだという。彼女はまさか司令に自ら声をかけてもらえるとは夢にも思っていなかったのである。
彼女は感激した。だがリバーグはそれだけではなかった。
「暫くゆっくり休みなさい。疲れているだろうからな」
さらにいたわりの言葉を述べたのだ。一言ではなかった。
彼はそうした人物であった。部下に対する気配りも忘れてはいない。そうしたところにも繊細であった。
部下の家族に対しても心配する。そうした男であった。器が小さい、芸がないといった声もあるがこうした気配りが彼の人望の秘密であった。

将は一つのタイプだけではない。こうしたリバーグのような者がおり、そして充分に活躍できるのもまた連合軍であった。それだけ懐が深い組織であった。
その女性士官はリバーグの言葉を忘れたことはなかった。後に彼女は連合軍大将となるがその時にこう述べている。
「私の理想とする軍人はリバーグ閣下です」
と。彼女は軍人としては几帳面であり堅実であった。そしてその根底にはやはりリバーグへの敬愛の念があったのは言うまでもないことであった。
人として尊敬される人物であった。軍人としても。彼の幸運は連合軍にいたそのことであろうか。リバーグはそうした意味で幸運な人物であった。
そのリバーグが率いる艦隊のイバロに入った。そしてそのまま南下する。
ローズはそれを聞いた時顔を顰めさせた。そして言った。
「ここではまずいな」
彼等は既に予定の場所に移動していた。それをまずいと言ったのである。
「何故でしょうか」
若い参謀がそれに尋ねた。
「まず敵の数だ」
彼は言った。
「四倍だ。これは生半可な戦力差ではないぞ」
「ですね」
その参謀にもそれはわかったいた。頷く。
「ですがそれで何故場所を変えられるのでしょうか」
「ここでは四倍の敵の相手をすることはできない」
「できませんか」
「おそらく彼等は数で押し立ててくる」
ローズは言った。

「それを正面から受けるにはこの場所では駄目だ。よりよい場所がある」
「それは何処でしょうか」
「ここだ」
彼はその問いに対してある地点を指差すことで答えた。そこはレンゲのすぐ側であった。
「閣下、ここは」
「ここならば四倍の敵を相手にすることが可能だ」
彼はそう答えた。
「レンゲの援護も期待できる。そしてこの場所は我々の防衛施設も多い。損傷を受けてもその都度修復が可能だ」
「つまり長期戦を挑むと」
「おそらく敵は短期決戦を考えている」
「でしょうね」
カーネルキンがそれに同意した。
「だからこそ彼等はここへ入って来たのでしょう」
「うむ」
ローズはそれに頷いた。
「敵将はリバーグ元帥だったな」
「はい」
「彼はオーソドックスな戦術を使う。今までそうだったな」
「そういえば」
北方での戦いの総指揮はリバーグが執っていた。彼の指揮については彼等もよく知っていた。確かに彼の戦い方はオーソドックスなものであった。それしかないと言っても過言ではない。
「だからだ。まず情報を集める」
「はい」
「そして戦闘となれば早く終わらせることを好む。戦術の基本だな」
「ですね」
それも多量の物量を使ってである。これが彼の戦い方であった。

やはり定石通りである。だからこそ読み易くもあり、そして手強かった。オーソドックスだからこそ隙がないのだ。
「今回もそうだろう。ならば腰を据えたいのだが」
「私はそうは思いません」
だがカーネルキンはそれに反論した。
「何故だ」
「彼が長期戦を嫌っているのは無駄な損害を出さないようにする為です」
そしてこう述べた。
「確かに長期戦になれば敵の損害は増えるでしょう」
「うむ」
「ですがそれは我等も同じこと。元々の戦力が違い過ぎることを考えますと」
彼女は考えながら述べる。
「結果的には我等にとって不利な状況となります。私はそう考えますが」
「言われてみればそうだな」
ローズもそれに頷いた。

## 第十部第二章　北の戦いその七

「それではレンゲの近くで戦うのは止めた方がいいかと」
「私はそう考えます」
「レンゲの市民にも無用な損害が出る怖れがありますし」
別の参謀がそれに付け加えた。市民の安全も守らなければならないのだ。
「そうだったな。市民のこともある」
「はい。それを考慮しますとやはりレンゲの側での戦いは止めましょう」
「うむ」
それによりローズはレンゲ近辺での戦いを止めた。そのうえで別の場所を求めた。
「それでは何処に誘い込むか」
「それが重要です」
「閣下」
ここで若い情報将校が司令室に入って来た。
「どうした」
「二手に別れていた連合軍が集結を開始しております」
「そうか」
彼はそれを聞いて頷いた。これもまた予想されたことであった。
「そしてその場所は」
それこそが重要であった。そしてローズはそれについて問うた。
「北西部のアステロイド帯の前方です」
その参謀はそう述べた。
「北西の！？」
「はい」
「馬鹿な。あそこは」
只のアステロイド帯ではなかった。そこは複雑な磁気嵐もありか

なり厄介な場所であった。本来の航路から外されている程であった。場所は広いがお世辞にも彼等にとって戦いに適しているとは言えない場所であった。
「何故あの場所に」
「ですが我々にとっては好機ですね」
カーネルキンが述べた。
「我々は戦力においては大きく劣っているのはもう言うまでもありません。ですが彼等があの場所にいるならば」
「地の利を利用して勝つことも可能だな」
「はい。閣下、どうなされますか」
「うむ」
ローズはその問いに対してまず頷いた。そして答えた。
「行こう。そして雌雄を決する」
「はい」
カーネルキンだけではなかった。他の者達もそれに頷いた。こうして彼等はそこへ向かうこととなった。すぐに艦隊が行動を開始した。
その中にはウェリントンもいた。だが彼はそれを聞いた時あまり浮かない顔をした。
「あの場所か」
「何かあるのですか」
部下の一人が浮かない顔をする彼に対して問うた。
「何かあると思わないか」
彼はそれに対してこう答えた。
「わざわざ自分達にとって戦いにくい場所に布陣するとは。一体どういうことだ」
「そうでしょうか」
「リバーグ元帥は今までつとに芸のない戦いをしてきたな」
「はい」
悪く言えばそうなる。実際にリバーグは芸がない、華がないとよ

く言われる。戦いにそのようなものが必要かどうかは別の問題としてだ。
「それが何故急に。何かあると思わないか」
「そうでしょうか」
だが彼はそれには懐疑的であった。
「連合軍はこれといって策を弄する必要もないかと思いますが」
「むしろその必要があるのは我々だな」
「私はそう思います」
部下はそう答えた。
「戦うとなるとかなり厄介なものになると思います」
「正面からぶつかった場合はな」
「それは避けた方がいいでしょうね」
「うむ」
ウェリントンはここで頷いた。
「さて、どうするか、だな」
「策はおありですか」
「残念だが今のところはな」
彼は首を横に振った。
「何も思い浮かばない。どうしたものか」
「私に一案があるのですが」
ここでその部下は言った。ウェリントンはそれに顔を向けた。
「何だ」
「敵を後方から狙うというのはどうでしょうか」
「後ろからか」
「はい。急襲して。それも敵が移動している時にです。連合軍の進行速度は遅いですし」
「確かにな」
実際に連合軍の進行速度は遅かった。彼等の艦艇は索敵及び攻撃防御においてはエウロパ軍のそれを遥かに上回っていたがその船足は遅かった。高速戦艦や巡洋艦にしろエウロパ軍のそれと比べると

かなり遅いものであった。彼はそれについて言及したのだ。
「そこを衝くのです。如何でしょうか」
「いいな。だが一つ問題がある」
「何でしょうか」
「連合軍の索敵能力だ」
ウェリントンが心配していたのはそれであった。
「彼等の偵察艇は優秀だ。それにその数も多い」
「はい」
「そのうえ個々の艦艇の索敵能力もな。そして電子能力も彼等の方が上だ。それをどうする」
「こちらも徹底して隠密行動に徹するしかないでしょう」
彼はそう答えた。
「見つかれば全てが終わりですから」
「まさに賭けだな」
ウェリントンはそれを聞いて言った。
「乾坤一擲だ。だがそうするしかない」
「はい。我等が劣勢にあるのは事実です。それを考えますと」
彼はそれでも言った。
「私には他には思い浮かびませんが。如何でしょうか」
「ううむ」
ウェリントンは腕を組み考えた。そして暫くして言った。
「わかった。一度ローズ司令に具申してみる。それでいいな」
「有り難うございます」
「勝利を収めるには時として賭けも必要だ」
本来ならばあってはならないことである。だが今のエウロパ軍にはそんな悠長なことを言っていられる余裕はなかったのである。致し方のないことであった。
「ところでだ」
ウェリントンはさらに問うた。
「何でしょうか」

「卿の官職氏名を知りたいのだが」
「私のですか」
「そうだ。つい最近私の下に赴任してきたな」
「はい。それまではオリンポスにおりました」
彼は答えた。
「参謀本部におりまして。そこからこちらに赴任しました」
「参謀本部からだったか」
「はい」
彼はまた答えた。
「道理で。センスがあると思った」
「有り難うございます」
「それであらためて聞きたいのだが。いいか」
「はい」
彼は一呼吸置いて答えた。
「ミヒャエル＝フォン＝カイザーリングです。階級は大佐です」
「カイザーリング大佐か。よし、覚えたぞ」
「有り難うございます」
「今回の戦い、卿の作戦が通るといいな」
「そして勝利を収めることができれば」
「うむ」
こうしてウェリントンはカイザーリングの提案をローズに上奏した。
「卿の部下の策か」
「はい」
ローズの旗艦フッドの司令室にて彼等は向かい合っていた。そして話をしていた。
「カイザーリング大佐のものです」
「カイザーリング大佐」
ローズはその名を呟いた。
「はじめて聞くな。どうやら貴族のようだが」

「デンマーク出身だそうです。子爵だとか」
「ふむ。そしてそのカイザーリング子爵の策だが」
「はい」
「悪くはない。むしろこれでやってみたいな」
「それでは」
「待て」
だがローズはここでウェリントンを嗜めた。
「まだ決定したわけではない。私の一存では決められない」
「はい」
「艦長や参謀達と話し合おう。全てを決めるのはそれからだ」
「わかりました。それではお願いします」
ウェリントンはあらためて頷いた。
こうしてカイザーリングの策は作戦会議にかけられた。ローズはまずはカーネルキンに問うた。
「どう思うか」
「そうですね」
問われた彼女は少し考えた後で答えた。

## 第十部第二章　北の戦いその八

「いいと思います」
「そうか」
「今我が軍が劣勢にあるのは事実です」
「うむ」
「それを打開するには思い切ったことをしなければなりません。今はその時ではないかと思います」
「では卿はこの案を指示するのだな」
「荒削りな部分もあると思いますが大筋においてよいと思います」
「わかった。他の者はどうか」
「私も異存はありません」
艦隊司令の一人がそう答えた。
「私もです。やはり勝利を収めるには時として奇襲も必要です」
参謀の一人もそう述べた。見れば多くの者が彼と同じ意見であるようであった。
「他にはないか」
誰もいなかった。こうして大筋は決まった。カイザーリングの案は採用されることになった。
その後で細部に検証や訂正が加えられた。だが実質的にカイザーリングのものとなった。こうして彼の作戦は採用されることとなった。エウロパ軍はすぐに行動を開始した。その際通信等を一切遮断し素早い動きでその場から消えた。そして連合軍の方へ向かったのであった。
「エウロパ軍が消えたと」
それはリバーグの許にも耳に入っていた。彼はそれを聞いてまずは地図を開いた。
「ふむ」
「何かありますか」

「今我々はここにいるな」
尋ねたジェリオに地図の一地点を指差しながら問うた。
「はい」
「敵が今までいた場所はここだった」
そして別の場所を指差した。
「おそらく彼等は何かをしてくる筈だ」
「ですね」
姿を消す。それが何を意味するのかわからない程彼等は軍人として無能ではなかった。
「こちらも場所を変えるとしよう。何処がいいと思うか」
「そうですね」
ジェリオはそれを受けて考え込んだ。そしてある地点を指差した。
「ここがいいでしょう」
そこは今彼等がいる場所と程近い場所であった。四方が開けている。
「そこか」
「そこならば索敵も用意です。それに」
さらに言う。
「敵を誘い込むには適していると思いますが」
「ふむ」
リバーグはそれを聞いて笑みも浮かべず顎に手を当てた。それから言った。
「誘い込むのか」
「はい。そこにいればおそらく彼等も攻撃を仕掛けてくるでしょう。そこを叩くのです」
「成程な。それではそれでいくか」
「はい」
こうして連合軍はまた動いた。彼等はジェリオの言う場所に移動してそこに布陣した。まずは上下と後方に機雷を施設させた。そのうえで前方に向けていた。

「機雷を撒いているのか」
それはエウロパ軍にも見られていた。ローズはそれを聞いてあらためて地図を見た。
「上下と後方に撒いているそうだな」
「はい」
カーネルキンがそれに答える。
「移動するのを止めるとはな。誘い込もうとしているのか」
「おそらくは。機雷を撒いたのもその為でしょう」
「我々を防ぐ為にか。だがそれならそれでやり方がある」
「はい」
既に連合軍の陣は掴めている。彼等はすぐに動いた。

二手に別れた。左右から奇襲を仕掛けるつもりだったのだ。だが彼等の作戦は既にカイザーリングの提案したものとはかなり離れていた。それが仇となりかねない状況であったがそうも言っていられない程彼等に余裕がないのも事実であった。戦局は彼等に味方してはいなかったのだから。
それに対して連合軍には余裕があった。まだ一戦も交えておらず弾薬にも余裕があった。食糧もまだ充分にあった。
しかしそれでもリバーグは食糧の減り方にいささか不満であった。彼はこっそりとゴミ箱を覗き込んで補給参謀達にぽつりと漏らしていた。
「どうにも無駄が多いな」
「多いですか」
「うむ。何というか。林檎の芯にもまだ食べられる部分があったりする」
「はあ」
「肉もな。そうそう捨てるのはどうかと思うのだが」
「しかし我が軍は補給路も確保しておりますし。食糧はまだ大丈夫だと思いますが」

「それは油断だ」
リバーグはそう言ってその参謀を嗜めた。
「もう少しきちんと無駄なく使うように言っておいてくれ。全将兵にな」
「はい」
参謀達は少し弱い声で頷く。
「第一我々の食事にしろ市民の税金から出ているのだぞ」
「あっ」
彼等はそれを言われてハッとした。
「それを頭に入れていればそうそう無駄使いはできないものだと思うが」
「は、はい」
「覚えていてくれ。それだけはな」
「わかりました」
ここであらためて敬礼した。目から鱗が落ちたような気分であった。
こうしてリバーグ指揮下の連合軍にあらためて達が出された。食べ物を粗末に扱うな、とのことであった。
これは賛否両論あった。リバーグの生真面目さと細かさを褒める声もあれば狭量さや司令としての仕事を逸脱しているとの批判もあった。結局これに関しては色々と話がありネットにおいてもマスコミにおいても彼を擁護する声や批判する声が交あわされた。だが結局は結論は出なかった。
後でこの話を聞いた八条もそれは同じであった。
「リバーグ元帥らしいですが」
彼の感想はまずはそれであった。
「ただ、何と言いますかね。些細なことです」
それだけであったが結論は出さなかった。国防長官として妥当な判断ではあった。敗戦ならば批判も多かったであろうが。リバーグはそういう意味でも幸運ではあった。

戦局はそうした食べ物の話が行われている中でも動いていた。二手に分かれたエウロパ軍はそのまま連合軍に向かっていたのである。
「そろそろだな」
ローズは目の前に布陣する連合軍の大軍を見据えて言った。
「彼等を倒す時が来た」
「そうですね」
カーネルキンがそれに頷く。
「かなり色々と動きましたが。それもここまでです」
「うむ。それでは行くぞ」
「はい」
「別働隊もいいな」
「そちらも大丈夫だと思います。それでは」
彼等はほぼ同時に動いていた。そして連合軍に接近する。
連合軍は相変わらず正面を向いて布陣していた。エウロパ軍に気付いている感じはない。だが防御は固めているようであった。
「今のところは気付いてはいないな」
ウェリントンは敵軍を見てそう言った。
「大丈夫か、今のところは」
「いえ、油断はなりません」
だがカイザーリングは上司の言葉に首を横に振ってみせた。
「まだ干戈すら交えていないのですから」
「そうだったな」
彼はそれを聞いてあらためて気を引き締めさせた。
「油断は禁物だ。特に我々は」
「はい」
戦力に劣る方がさらに失態を防がなければならないのは常識であった。そして今の彼等がまさにそれであった。そう、それであった。

## 第十部第二章　北の戦いその九

別働隊の艦隊のうちの一隻であった。急にエンジンの調子がおかしくなったのだ。それはスポレッタ中将の乗艦であった。彼は一艦隊の司令官であった。

「エンジンの調子がおかしいのか」

「はい」

「参ったな」

彼はその報告を受けて顔を曇らせた。

「今は大変な時だというのにな」

「どうされますか」

「とりあえずは機関科員に頑張ってもらおう」

彼は自力で何とかすることを判断した。

「何とかまともに動ける状態を維持してくれるように言ってくれ。この戦いが終わるまでな」

「わかりました」

妥当な判断と言えた。今は停止するわけにはいかなかったからだ。しかしそれが裏目に出てしまった。ここは停止してゆっくりと修理するべきであったのだろう。だが今はそうも言ってはいられない戦局であった。戦争というものはまことに複雑なものであるから。そうした意味でエウロパ軍には運がなかったと言えよう。

エンジンが暴走した。そしてスポレッタ提督の艦は突如として奇妙な動きをはじめた。

「何事だ！？」

「エンジンが暴走しました！」

艦長が報告する。

「エンジンが」

「はい」

艦は隠密行動をとている艦隊から離れようとしていた。スポレッ

タはそれを見て顔を青くさせた。
「何とかならないか」
「今しておりますが」
艦長の顔も蒼白となっていた。
「今がどういう状況かわかっているな。頼む」
「はい」
機関科員達が必死に修復にあたる。だがそれでもそれは適わなかった。
エンジンが暴走をはじめた。そして艦隊から離れた。
そして今まで制御していたエンジンのエネルギー反応に連合軍の偵察艇が気付いた。それはすぐにリバーグの下へと届けられた。
「エウロパ軍の艦艇が」
「はい」
ジェリオが応えた。
「どう思われますか」
「奇襲するつもりか」
やはり最初に考えたのはそれであった。
「ただ一方向だけとは限らないな」
「はい」
それはジェリオも同じ考えであった。
「おそらく前からは来ないでしょう。後ろも上下も機雷を施設し防いでおりますし」
「側面か。左右同時に来る可能性があるな」
「如何為されますか」
「左右に護衛艦を集中的に配置させよ」
リバーグはまずはそう命じた。護衛艦の索敵能力は連合の艦艇の中で最も高いからである。同時にティアマト級巨大戦艦も配された。この巨大戦艦は実は索敵能力も高いのである。
それにより情報が収集された。結果としてあることがわかった。
「いいか、敵には決して悟られるな」

リバーグの声は小声になっていた。
密かに連合軍の艦艇の主砲が動いた。そしてそれを側面に向ける。
「距離は」
「そろそろかと」
ジェリオがリバーグにそう報告する。
「よし。それでは全艦砲撃用意」
「全艦砲撃用意」
全艦の主砲にエネルギーが装填される。
「あと十秒だ」
リバーグはここで時計を取り出した。自分で測る。
「十、九、八、七」
数も数える。艦橋を緊張が支配する。
その中で連合軍の将兵達は息をこらしていた。攻撃する直前に力を溜めているようであった。
「六、五、四、三」
沈黙が支配する艦橋にリバーグの声だけが響く。その声もまた緊張そのものであった。
「二、一」
いよいよその時が来た。リバーグの目を光が一閃した。
「撃て！」
「撃て！」
命令が繰り返される。そして連合軍の主砲が左右に向けてそれぞれ火を噴いた。
「うわっ！」
それは隠密行動をとっていたエウロパ軍の艦艇を打ち据えた。そしてそれによりえうろぱ軍の艦隊の先頭が次々に火球と化して宇宙の闇の中に消えていった。
「クッ、気付かれたか！」
「何故だ、何故わかった！」
「私のせいか」

驚愕が支配する中スポレッタは一人愕然として呟いた。
「エンジンの暴走を止められなかったからか」
「司令」
そんな彼に艦長が声をかけてきた。
「今はそんなことを言っている場合ではありません。ご指示を」
「指示を」
「はい。戦いはもうはじまっております」
「そうか。そうだったな」
その言葉に我に返る。そして冷静さを取り戻した。
「全艦迎撃態勢に入れ」
「ハッ」
参謀達がそれを受けて敬礼した。
「我が艦隊はこれより敵の攻撃に対して反撃を開始する」
「わかりました」
すぐに指示が通達される。そして艦艇が動きはじめた。
スポレッタは普段は冷静な指揮官として知られている。今彼はその冷静な指揮官に戻ったのであった。
艦隊は守りを固めながら進む。彼はここで艦長に問うた。
「エンジンはどうなっているか」
「何とか復旧しました」
「そうか」
彼はそれを聞いて硬い顔で頷いた。
「災厄だとしか思えないな」
「はい」
それは将に災厄であった。彼等だけでなくエウロパ全軍にとっても。
「だが今はその災厄の分を取り戻そう。連合軍の動きに気をつけろ」
「はっ」
「数だけでは勝てないということを教えてやる。行くぞ」
こうしてスポレッタは普段通りの指揮を開始した。彼は決して無

能な人物ではない。彼の艦隊は的確な動きにより統制を取り戻していた。
エウロパ軍は最初の一撃の後は素早く陣を整え連合軍の攻撃を防ぎにかかった。連合軍はそれに対してまずは右翼に戦力を集中させた。ここにはローズがいた。左翼は最低限の艦艇を置き防衛に専念させている。
砲艦及びミサイル艦が一斉射撃を加える。それがエウロパ軍のビームの壁やバリアーを突き抜けて彼等を打ち据えた。
「うわあっ！」
それにより無数の命が銀河の闇の中に永遠に消えた。残骸すらも残らない艦もあった。
次は戦艦と重巡が前に出る。その攻撃により浮き足立っていたエウロパ軍はさらにダメージを受ける。
駆逐艦の水雷攻撃の直後に多くの護衛艦を伴った空母艦隊が接近する。艦載機が次々と出て来てエウロパ軍をさらに痛めつける。そして彼等の先頭にはあの巨大戦艦が常にいた。
その主砲が敵陣を切り裂く。光の帯の周りでさらに無数の光の球が生じる。それはエウロパの将兵達の命の光でもあった。

## 第十部第二章　北の戦いその十

ティアマト級巨大戦艦の攻撃の威力は圧倒的であった。その一隻で一個艦隊、即ち一万隻に匹敵するというのはあながち嘘ではなかった。巨砲と主砲によるその砲撃によりエウロパ軍はさらに戦力を減らしていた。

「まずいな、このままでは」

ローズは連合軍の攻勢を見て唇を噛んだ。

「すぐに陣を再編成せよ」

「どうなさるのですか」

カーネルキンがそれに問うた。

「方陣だ」

ローズはすぐにそう答えた。

「方陣」

「そうだ、まずは守りをさらに固める。そして攻撃を凌げ」

「わかりました」

エウロパ軍はそれに従い守りを固めはじめた。これに対して連合軍は固める前の方陣を集中的な攻撃により潰していったが完成した方陣についてはまずは攻撃を控えた。

「さて、どうしたものか」

リバーグはそれを見て顎に左手をあてて考え込んだ。

「考えている時間もあまりないようだがな。どうすべきか」

「巨大戦艦及び砲艦による集中攻撃です」

ジェリオがそう提案した。

「守りを固めているのならばそれを崩せばよいのです。敵の手の届かない場所から」

「成程な。ではそれでいこう」

「有り難うございます」

すぐにティアマト級巨大戦艦及び砲艦が前に出た。そして砲撃を

開始する。
一つ一つの光が合わさり巨大な柱となっているように見えた。そしてその柱がエウロパ軍の方陣一つ一つに向かっていく。
エウロパ軍の艦艇がその圧倒的な光の柱の前に消え去っていく。火球となり消え失せ、真っ二つになり銀河の塵と化していった。
美しいといえば美しい光景であった。だがそれは破滅の美であった。多くの将兵達の死を伴うものであった。ヴァルハラの光であった。まるでワルキューレ達が見せる様に。
「そうきたか」
ローズはその攻撃を見て苦い顔をした。
「これでは我が軍も抑え切れぬか」
「まだ諦めるには早いかと」
ローズは焦りを覚えはじめていた。だがカーネルキンはそんな彼を思い止まらせた。
「ここは策があります」
「どうする気だ。敵はあの数と火力だぞ」
「我が軍が唯一勝っている機動力を使いましょう」
「機動力か」
「はい」
カーネルキンはそれに頷いた。
「まずは的と化している方陣を解きましょう」
「うむ」
方陣が解かれた。そしてすぐに一つの陣にされた。魚燐形の陣であった。
「今度は機動戦を挑むつもりのようですな」
「考えてはいるな」
リバーグはジェリオの言葉に応えた。
「だがそれでも数は覆せません。今度は我等が守りを固めましょう」
「うむ」
連合軍はここでそれぞれ方陣を敷いた。それぞれの方陣が互いに

連携をとれるように配置された連合軍独特の方陣である。十個艦隊、すなわち一個軍団を基準としていた。
そこにエウロパ軍の魚燐が襲い掛かる。それは獲物を狙う鮫の様に見えた。
鮫は多くの星に生息している。連合のある星にはメガロドンまでいる。四十メートルに達する巨大な鮫である。鯨でさえ食らってしまう程である。
その他にも鮫には凶暴な種類のものが多い。人食い鮫はこの時代においても海水浴客等の脅威であった。鮫は恐るべき存在であった。星系によってはあのメガロドンやカルカロドンすらいた。メガロドンとか四十メートルを越える怪物の様な鮫である。かっては地球にも生息していた。それが星系によってはまだまだ生息しているのである。恐竜やアロマロカリスがいる星系もあるからこれは当然のことであった。
だが一つ弱点があった。鮫は止まることができないのだ。これも種類によるが凶暴な種類の鮫は殆どがそうである。その巨大さを誇る凶暴な鮫メガロドンにしろ止まることはできない。動きが止まったならばそれで死んでしまうのである。
鮫は止まったその時が終わりだ。そしてこの時もそうであった。
「前面にバリアーを集中させよ！」
リバーグがエウロパ軍が襲い掛かって来た方陣にそう指示を下す。その方陣の指揮官はそれに従いバリアーを前面に集中させた。そこにエウロパ軍の攻撃が来る。だが連合軍のバリアーと弾幕の前に殆ど効果はなかった。
そこへ周りの方陣から攻撃が来る。それによりエウロパ軍は動きを止め、逆に攻撃を受ける立場となった。
少しずつその数を減らしていく。ローズはそれを見て一人呻いていた。
「またしてもか」
そしてカーネルキンに顔を向けた。

「どうやら彼等は我々が思っていた以上のようだな」
「はい」
カーネルキンも硬い顔でそれを認めた。
「残念なことですが」
「だがそれはいい。問題はこれからだ」
ローズはとりあえずはそれを不問にした。
「どうする」
「はい」
カーネルキンはその問いに対して答えた。
「撤退すべきかと」
「そうか」
ローズもそれはわかっていた。沈んだ声で応える。
「それでは一刻も早い方がいいな。被害が大きくならないうちに」
「別働隊にも連絡しますか」
「当然だ。それではすぐに撤退に移るぞ」
「はい」
まずは損害の大きな艦艇から戦場を離脱していく。その間無傷な艦が足止めをする。そしてダメージを受けた艦艇から少しずつ戦場から退いていく。

## 第十部第二章　北の戦いその十一

「撤退戦が上手いな」
リバーグにもそれは見えていた。彼は素直にそれを認めた。
「だがそう易々と退かせるわけにはいかんな」
「はい」
戦いであった。撤退する敵を掃討するのはその常道であった。そしてリバーグはそれに従った。
追撃を仕掛ける。圧倒的な火力で攻撃を仕掛ける。だがここはエウロパ軍の機動力が勝った。
「よし、最後に全てのミサイルを放て！主砲も一斉発射だ！」
「ハッ！」
ローズの指示が下る。エウロパ軍の艦艇はそれに従い最後の攻撃を仕掛ける。
それを素早く終わらせると艦首を返して戦場を離脱した。その際機雷を撒くことも忘れてはいなかった。
「ここまで理想通りやってくれるとはな」
リバーグは機雷を見て思わず苦笑した。
「かえって見事にすら感じる。それでは我々もそれに従おう」
そう言いながら掃海部隊を派遣した。そして機雷の処理に当たらせた。
その間に反転してもう一方の敵軍に向かう。見ればそこでの戦闘も終わろうとしていた。戦局は思ったより早く動いていると言ってよかった。
こちらの部隊は義勇軍を主な戦力にしていた。北方にいるサハラ義勇軍は十個艦隊だがそれを全てこちらに向けたのである。
正規軍は二十個艦隊であった。リバーグは一方を精鋭部隊で抑えると共に主力でもう一方をまず叩くという作戦を執ったのだ。これもまた戦いの常道であった。彼はあくまで戦いの常道だけを採って

いたのである。
義勇軍の強さは軍を抜いていた。エウロパ軍もそれに太刀打ちすることができず押される一方であった。
「司令」
その中の一人ウェリントンのもとに参謀の一人が報告にやって来た。
「どうした」
「ローズ閣下より指令です。即座に撤退せよと」
「わかった。致し方あるまい」
戦局を見れば充分に考えられることであった。彼はそれに従った。
次第に連合軍の主力部隊が近付いてきていた。これはエウロパ軍にとっては死が近付いてきているということであった。彼等はそれを前にしては決断するしかなかった。
こちらのエウロパ軍も撤退を開始した。だがただ一隻だけ戦場に残る艦があった。
「あれは！？」
見ればスポレッタの艦である。彼の同僚でもあるウェリントンは驚いて彼に声をかけた。
「スポレッタ提督、卿も撤退しろ！」
「そういうわけにはいかない」
だが彼は首を横に振った。
「この戦いの責任は私にある」
「違う」
ウェリントンはそれを否定した。
「勝敗は戦の常だ。何を言っている」
「私の艦の暴走のせいでこうなってしまった」
それでも彼はこう答えた。
「こうなっては是非もなし。この命を以って責を負う。他の者は既に退艦させた」
「馬鹿な」

「愚か者にはこうした死こそ相応しい。それではな」
「誰かいるか」
ウェリントンは左右の者に言葉を振った。
「スポレッタ提督を救出するんだ、早く」
「閣下」
だが皆それに首を横に振った。
「もう間に合いません。それに」
「スポレッタ提督もそれを望んではおられないでしょう」
「クッ」
それは彼にもわかっていた。歯噛みするしかなかった。
「閣下、致し方ありません」
別の部下もそう言った。
「このままでは我等の兵も」
「わかった」
ウェリントンは苦い決断を下した。そして彼も戦場を後にした。
「凄い数だな」
スポレッタは前にいる連合軍の大軍を見て一人そう呟いた。
「これだけの戦力を揃えるとは。連合の国力は素晴らしい」
「確かに」
ここで誰かの声がした。
「誰だ」
「私です」
後ろからこの艦の艦長が出て来た。シャルオーネ大佐であった。
「総員退艦を命じた筈だが」
「後は副長に任せましたので」
「ならん。これは命令だ」
「ロイヤル＝ネービーのかっての伝統を御存知ですか」
「あれか」
船に乗る者ならば知らぬ者はいなかった。かって世界にその名を馳せたあのロイヤル＝ネービー、すなわち大英帝国海軍では艦が沈

む時は艦長はその艦と運命を共にする。この時代において伝説とさえなっている強さを発揮した日本海軍もそれに倣っていた。今では廃れてしまった伝統である。エウロパでもそうであるし連合ではもってのほかの考えである。

八条は国防長官として将兵に対して命を粗末にすることのないよう厳命していた。戦場において死ぬなとは言えない。だが無駄に死ななくてもいい状況においてはそういったことがあってはならないのである。これには将兵の生命の重視と共に志願制故に彼等の死をできるだけ避けたいという考えもあった。連合はとかく志願制の軍隊故のジレンマに悩まされていた。エウロパにおいても今はこうした考えは殆どない。イギリスにおいてもである。

「古い伝統だな」

「はい。それに今回の失態は艦長である私の責任でもあります」

エンジンの暴走のことを言っているのである。

「卿だけの責ではないが」

「艦のことは全て艦長の責任ですから」

その通りであった。だからこそ艦長の責務は重要なのである。

「もう一度言うぞ」

「はい」

「本当によいのだな」

「無論です。だからこそ残りました」

「わかった。ならいい」

それ以上言うつもりはなかった。それで話は終わった。

二人は並んで艦橋に立った。誰もいないがらんとした状況であった。

「こうなるとかえって清々しいな」

「ですね」

シャルオーネはスポレッタの言葉に苦笑した。その前には連合軍の無数の艦がいた。

「一撃だろうな。全てはそれで終わる」

「はい」
これまでの戦いで連合軍のそれぞれの艦の攻撃力はよくわかっていた。たとえ戦艦といえども一撃であった。
「どうだ」
スポレッタは懐から煙草を取り出しシャルオーネに薦めた。

## 第十部第二章　北の戦いその十二

「最後にな」
「有り難うございます」
シャルオーネはそれを受け取った。そして豪奢な装飾が為された古風なライターで火を点ける。
「いい煙草ですね」
「プロヴァンス産だ」
エウロパでの煙草の名産地として知られている。
「私はここのが気に入っていてな。美味いだろう」
「はい」
シャルオーネもその煙草を美味そうに吸っていた。
「生まれ変わったらここの煙草を贔屓にしたいですね」
「そうだな。私もまた吸うとしよう」
連合軍が近付いてきた。いよいよであった。
「さて」
煙草を消した。覚悟を決めた。
もうすぐ無数の光の柱が迫ってくる。それで全ては終わる筈だ。筈であった。
「ムッ！？」
だが光は来なかった。かわりに光の信号が彼等に放たれてきた。
「これは」
見れば降伏勧告であった。連合軍北方方面軍の総司令官であるリバーグ元帥の名義となっていた。
「降伏勧告か」
「どう為されますか」
「・・・・・・・・・」
スポレッタは暫し考え込んだ。ふと胸に収めてある拳銃の存在に気付いた。

「拳銃は持っているな」
「はい」
それはシャルオーネも同じであった。この場合拳銃は何の為に使うものなのか言うまでもなかった。
「それならばそれで天界へ旅立つことができるが」
「どうされますか」
「そうだな」
二人はまだ考えていた。だがその間にも連合軍は近付いてきている。
「攻撃をするつもりはないようだな」
「はい」
「エウロパの騎士は攻撃を仕掛けて来る気のない者に対して剣は向けない」
そしてこう言った。
「彼等が攻撃して来ないのならば戦う必要もない」
「では」
「そうだ。ここは素直に彼等に従うとしよう。運命を彼等に任せる」
「わかりました」
彼等は頷いた。こうして二人は連合軍の捕虜となった。そしてこの将二人の投降を象徴としてイバロの戦いは終わったのであった。

この戦いを振り返るとやはり戦力の差が如実に現われたと言えよう。エウロパ軍はしきりに連合軍を誘い込もうと策を弄したが戦力に勝る連合軍はオーソドックスな戦術戦略で以って話を進めた。主導権を握ろうにも握ることができず結局は連合軍に引き摺られる形で戦いに入った。そして些細な失策により敗北した。戦力の二割近くを失いこの敗戦と中央の戦局悪化により北方から撤退せざるを得なかったがそもそも連合軍にまともに対抗し得る戦力があればこうしたことにはならなかったと思われる。戦力差はそこまで影響していたのであった。

勝利を収めた連合軍はすぐにイバロ星系の完全掌握に取り掛かった。そしてリバーグは戦後処理をはじめた。
「今回の戦いでは多くの捕虜を得たそうだな」
「はい」
ジェリオがそれに答える。
「貴族出身者と平民出身者がおりますが」
「いつも通りだな」
既に何回か捕虜を手に入れたことはあった。リバーグは特に困った顔を見せなかった。
「それではいつも通り後方の捕虜収容所に送れ。よいな」
「ハッ」
「貴族は貴族用の、平民は平民用のな」
「わかりました」
「しかし」
ここでリバーグは言った。
「こうして分けるというのがよくわからないのだ。将校や平民だけの差ではないのだな」
「それがエウロパの特徴といえば特徴ですね」
ジェリオはそう答えた。エウロパ軍においては貴族の士官はいても貴族の下士官や兵士はいない。逆に平民の士官はいても、である。高級軍人になるとその違いはもっと顕著である。その殆どが名門とされる貴族達なのだ。元帥、そしてエウロパ元帥等は特にそうであった。
「それが階級社会というものです」
「最初普通に一緒に扱って問題になったそうだな」
「はい。貴族と平民双方から抗議の声が出ました」
それは事実であった。平民は平民で貴族と同じ部屋にいて、貴族と同じものを食べるのに違和感を覚えた。貴族もである。双方それに大いに戸惑ったのである。そして連合軍の担当者達に対して双方が抗議したのである。

「貴族と同じものが食べられるということを嫌がるのが意外だった」
「はい」
「それ程彼等の間には垣根があるということか」
「閣下」
ジェリオはここであることについて言った。
「征服王朝というものを御存知ですね」
「中国の北方の遊牧民族が立てた王朝だな」
「はい」
中国の北方には伝統的に遊牧民族達がいた。馬を駆り生活をする彼等は時として南下し中国に脅威を与え続けていた。これは春秋戦国時代、いやそれ以前からであり漢民族は常に彼等の対処に追われていた。秦の始皇帝が万里の長城を作らせたのも彼等に備えてであった。秦は漢民族の血が薄いと言われてきたがその彼等ですらこの遊牧民族の存在を脅威と感じていたのだ。この長城を作り上げる為に多大な費用と労働力を必要とした。以前からあったものを繋ぎ合わせてものであったがそれでも多大な費用と労力を要したのであった。
次の漢王朝では高祖劉邦自ら出陣したが勝つことはできなかった。そして彼等にとって屈辱的な条約を結ばざるを得なかった。彼等に対して反撃に転じるには武帝の登場を待たなければならなかった。
この時代の遊牧民族は匈奴という。時代が下がり突厥になってもそれは変わらない。漢民族とはいっても鮮卑という遊牧民族の一つをルーツとする唐も彼等には悩まされていた。宋になるとさらにそうであった。この時代は北の遊牧民族の力がとりわけ強く彼等は漢民族を支配して王朝となるようになった。これを征服王朝というのである。
漢民族は支配される立場であり遊牧民族が支配する。異民族支配そのものであった。モンゴル民族の元や満州民族の清もこれにあたる。清は後に皇族ですら満州語を忘れ漢民族に同化してしまったがそれでも満州民族であることに変わりはなかった。そのシンボルが

辮髪であった。これは遊牧民族の風習であった。
　こういったことは欧州ではさらに顕著であった。漢民族にしろ遊牧民族にしろ混血するが彼等は決してしようとはしなかった。平民と貴族の間の婚姻がないのは昔からであった。血を維持する為であったのであろうか。
　イギリスの貴族はノルマン人達である。ヴァイキングの血を引く。そしてフランク王国はゲルマン人の国である。彼等の下にあったケルト人やアングロサクソン、そしてラテン人等は支配される立場であった。それが欧州の貴族の現実であった。元々民族が違うのである。
「あれと同じ理由ですよ」
「そう言われるとわかりやすいな」
　リバーグもそれに納得した。
「だが彼等はあくまで混ざり合おうとはしないな」
「はい」
「それが違う点か。征服王朝とは」
　そして連合と欧州の違いであった。それが何よりの違いであった。
「だがそれはよく頭に入れておこう」
「ですね。これからの捕虜の取り扱いについて考慮する点においては」
「最初私は人道上問題のない取り扱いをしていればそれでいいと思っていた」
　リバーグはそう述べた。
「だがそれだけでは駄目なようだな」
「ええ、私もそれを実感しております」
　ジェリオもそれに同意した。
「我々は三〇〇程の国で構成され民族といったものはそれより遥かに多い」
「ええ」
　アメリカ、中国、ロシアや東南アジア諸国だけではなかった。ア

フリカ諸国にもかなりの民族が存在する。彼等は適度に住み分けたりして生活している。中には新たに国を興して独立する民族もある。新興国家はその殆どがそうである。アッシリアやフェニキアにしろそうである。ケベックもだ。

連合の民族はそれこそ星の数程存在する。そうしたことにあまり縁がないとされる日本においてもアイヌ系や沖縄系といった存在がある。両方共国も持っている。アイヌ連邦と沖縄王国である。アイヌ連邦はアイヌ人による国であり沖縄はかって琉球王家であった尚氏の末裔を国家元首とする国である。双方共日本と友好関係にあることで有名である。独立しても彼等は元の日本のことを決して忘れてはいないのだ。経済的関係も深い。とりわけ沖縄王国は王室自体がかって日本の皇室に組み込まれかなり高い地位にいたということもあり今でも皇室との関係が深い。両家の間では婚姻も盛んである。他にもイヌイットやチベット、ネィティブアメリカン、満州人の国もある。この時代は独立しようと思えば新たな星系で独立を宣言し、それを中央政府に報告したうえでそれが認められれば可能なのである。後の国家経営はかなり大変なものではあるが。だがかってのように独立する為に銃をとり血みどろの戦いを繰り広げなければならない時代ではなかったのである。それが連合であった。

## 第十部第二章　北の戦いその十三

また彼等も連合の中にありその中で生きている。そして他の民族との混血もやはり多かった。血という意味では連合は民族的なものは薄かった。少なくともエウロパのそれとは比較しようのないものであった。

「だが混血は多い。私にしろそうだ」

リバーグは肌は黒いが髪は金褐色で目は藍色だ。混血の何よりの証拠であった。

「私は南アフリカの黒人の生まれということになっている」

その黒い肌を指し示しながら言う。

「だが髪は違う。曾祖母かその辺りにアジア系もいた記憶がある」

「私もですよ」

ジェリオも言った。

「肌が少し黄色いでしょう」

「うむ」

「これが証拠です。一応スペインからの移民がルーツになってますがね。祖父はアステカ＝マヤ連合王国の人間でした」

インカ人の末裔達の国だ。アステカやマヤといった失われた国の文化を受け継ぐ立場の国である。彼等もまた混血しているがそれでも彼等の心はアステカ、マヤのものであった。

「かっての滅ぼした者と滅ぼされた者の血だな」

「そうですね。祖父と祖母は恋愛結婚でした。今でも祖母は祖父と喧嘩する際箒を持って追い掛け回すような仲ですよ」

「また随分と元気のいい祖母殿だな」

「ははは、矍鑠たるものですよ。曾孫どころか曾々孫までいるのに」

「ううむ。またそれは」

「祖父もね。この前アイドルのビデオに見入っていましたから。かなり熱心なファンですよ」

「老いてなおさかん、か。いいものだ」
「いやいや、そういうわけでも。そのアイドルというのが日本の十代のアイドルでして」
「まさかあの黒いショートヘアの娘か？」
神崎亜矢という。今人気急上昇中のアイドルである。日本ではデビューしてすぐに人気アイドルになった。そして今では連合にその名を知られようとしている。
この時代でもアイドルは存在する。日本のアイドルは小柄で可愛らしい子が多いとよく言われる。混血が進んでいても日本では小柄な女の子が人気がある傾向にある。もっと簡単に言えば何処にでもいる感じの女の子が人気がある。金の様にある意味現実離れした女性が人気がある韓国とは正反対とされている。だが面白いことに韓国の若者が一番好きなのは日本のアイドルである。建前と本音の違いであろうか。
「はい」
ジェリオは答えた。
「最近売り出し中の。確かに可愛いですが」
「あれは十代には少し見えないな」
「閣下もそう思われますか」
「こんなことを言うと娘達によく思われないがな。女の子の年を言うのはよくないとな」
そう断ったうえであえて言う。
「やはり十代ではないだろう、どう見ても」
「はい」
「話し方といい服の着こなしといい。写真集が出ていたな」
「水着のあれですね」
「息子が持っていたのを覗いたが。どうも、な」
「私もそう思います。ですが祖父はその娘が出る番組から離れません。それで家事もしないので祖母が怒ったのです」
「そうした事情があったか」

「はい。まあその話はそれ位にしまして」
「うむ」
「とにかく捕虜の扱いですね。私もこれ程厄介になるとは思いませんでした」
連合においては将校も下士官も兵士も同じ材質の軍服を着て同じ場所で同じものを食べている。そして部屋も同じ構造となっている。しかしエウロパは違うのだ。貴族と平民の歴然たる差がそこにあった。
「だがよくあれで平民達は不満を持たないな」
「その分彼等には負担はありませんから」
「負担か」
「はい。貴族に求められるものと平民に求められるものはかなりの差があります」
ジェリオはそう述べた。
「我々とはそれが大きく違うかと思います。貴族は平民を守り、正しく指導しなくてはならないとされています」
「お題目ではなく、か」
「ですね。少なくともそれは彼等の戦いから見てもわかります」
エウロパ軍は勇敢であった。とりわけ貴族達は如何に戦力差があろうと果敢に立ち向かってきた。今回の戦いでもそうであった。まずは自分達が先陣を切って戦う、それがエウロパの貴族達であった。戦死者、負傷者の割合を見ても平民達よりも貴族のそれは遥かに高かった。息子達を全員戦場に送り、その全員が負傷した貴族がいた。彼はその命だけはもらった息子達に対してこう言ったのである。
「傷がなおったら全員すぐに戦場に戻って死んで来い」
と。これがエウロパの貴族であった。
「それに彼等の殆どは潔い。そして平民達に対しても危害を加えようとはしない」
「はい」
「それだけを見ると彼等は自分達の責務を果たしていると言えるな」

「だからこそエウロパは今までエウロパでいられたのでしょう」
ジェリオの答えはそうであった。
「そうでなければとっくの昔に革命でも起こっています」
「フランス革命みたいなものがか」
「あそこまで極端なものは起こらないでしょうけれどね。今は食べ物がありますから」
「そうだな」
フランス革命の原因はアンシャン＝レジームへの不満ではなかったのである。寒波によりセーヌ河が凍り、麦の運搬が困難になったのがその発端であった。
当時のフランスは欧州において最大の農業国であった。だからこそブルボン王家の途方もない職道楽を支えることができたのだ。だがそれでもフランスの豊作の時と日本の凶作の時ではフランスの方が餓死者が多かったという。そしてその時は寒波で麦をパリに運べなくなった。これでは不穏な情勢になるのも当然のことであったのだ。なおその時の日本の将軍家の食事はブルボンいえと比べると比較にならない程質素なものである。その上呆れる程食事の規制も多かった。
「人間は衣食住があれば大抵のことが我慢できます」
パンのみによって生きるのではないがパンがなければ生きることができない。ジェリオのこの言葉はそういった意味で正しいと言えた。
「ですがあまりもの横暴には耐えられません」
これはどの組織でも言えることであった。いじめを苦にして自殺する者もいる。時として異常なまでの暴力によって生徒を支配しようとする教師もいるがこれもまた同じである。何時の日か報いがあるものだ。実際にこの時代でも生徒を虐待して教育委員会や警察にメールで通報されて報いを受ける愚かな教師が存在している。教師になってはならない輩が教師になるからこうなったと言えば簡潔に過ぎるであろうか。だが実際にこうした愚か者はこの時代でも存在

するのである。ある意味教師という職業は最も難しい職業である。
「それは少なくともないようですね。それどころか彼等は節度を保っています」
「支配する者としての節度だな」
「はい。どうやら我々はそれを認めなければなりませんね」
ジェリオの言葉はかなり哲学的な雰囲気を漂わせるものとなっていた。
「そうだな」
リバーグもそれに頷いた。
「これまで我々は彼等を特権の上にあぐらをかくだけの腐敗した連中だと考えていましたが」
連合には貴族に対してそうした認識を持つ者も少なくはない。やはり革命直前のフランスやロシアの貴族達の誤った姿が伝わっているせいだ。それにしろかなり脚色されたものであり彼等の多くも自らの責務を知り、信念に基づいて行動していたのであるが。だが後の歴史書や当時の『革命の兵士達』『民衆の闘士』達の手により口により変えられてしまった部分がある。連合もそれに多少なりとも影響を受けているということであろうか。実際にはその貴族達を滅ぼしたジャコバン派や共産党の方が遥かに恐ろしい組織であった。フーシェは平然と都市の人口の一割を数値目標を定めて殺戮した。その中には当然ながら革命に反対しない者達もいた。だが彼はそれをあえてした。この時代のフランスにおいてタレーランと並ぶ怪物でありある意味ナポレオンよりも恐ろしい男であった。タレーランもそうであるが上司にも部下にも持ちたくはない男、それがフーシェであった。ただ彼は賄賂を貪り、好色でもあったタレーランとは違い私人としては尊敬される教師でありよき夫であった。だが革命下、そしてナポレオン以後の政治家、革命家としての彼は魔物であった。恐るべき魔王であったのだ。
「違うようですね。それはよく覚えておかなければならないと思います」

「うむ」
リバーグは頷いた。そして彼は捕虜への待遇を決定した。
貴族と平民を分けた。そしてそのうえで彼等の待遇を決めた。貴族も平民もそれに対して不平は言わなかった。何故ならそれが彼等にとって当然のことであったからだ。これが連合とエウロパの違いであった。連合の者達にとっては常識ではなくともエウロパの者達にとっては常識であったのだ。とりわけ平民達にとっては。これもまた文明の違いと言うべきであろうか。

# 第十部第三章　苦悩その一

苦悩

連合軍は南方を無血占領し、北方においても決定的な勝利を収めていた。戦局は彼等にとって圧倒的に有利な状況となっていた。彼等はさしたる損害もなく進撃を続けていた。最早憂いは何もないようであった。

だがそれは裏返すとエウロパ軍の苦悩であった。連合にとって憂いがなければ彼等にとっては苦悩しかないのである。状況というものは立場によって変わるものなのである。

とりわけエウロパ首脳部にとっては深刻な状況であった。オリンポスにおいて全てを統括している彼等のもとに届けられるのは破滅的な報告ばかりであり彼等は眠れぬ日々を過ごしていた。ラフネールの部屋の灯りも消えることはなかった。彼もまた眠れぬ日々を過ごしていたのであった。

「総統はまだお休みになられぬのか」

それを聞き深刻な顔で前にいる部下の一人に問う男がいた。

「はい」

その部下は頷いて答えた。

「そうか。それも当然だな」

彼はそれを聞いて自身も頷いた。

「私もそうなのだからな」

見ればかなり憔悴した顔をしていた。茶の髪は乱れようとしているのを整髪料で誤魔化している。肌は土気色になりまるで蝋の様な状況となっている。濃い緑の目の光も消えようとしている。まるで死人のような姿であった。

「閣下」

部下は彼に対して言った。

「閣下も少し休まれては如何でしょうか」

「それはできないさ」
彼は力のない笑みでそれに応えた。
「今がどういう時かわかっているだろう」
「ですが」
「今はな。いい」
声にも生気がない。今にも倒れそうな声であった。
「ところで今日の報告はそれで全てだね」
「はい」
「ならいい。下がってくれ」
「わかりました」
部下はそれを受けて退室した。彼はそれを見届けた後質素な椅子に一人崩れ落ちる様に座りなおした。
「一体どうすればよいのだ」
彼はその崩れ落ちたままの姿でそう呟いた。
「このままではエウロパは滅んでしまう。何とかしなけてば。だが」
彼はここで目の前にある書類の山を見た。
「ここにあるのは全て我々にとって破滅的な報告ばかりだ。全てが」
そうであった。今彼のもとに送られてくるのは全て彼等にとってよくないものばかりであった。それが彼の神経をさらに消耗させていたのである。
彼はエウロパ首相の地位にある。名をクルシラ＝ペーチという。ハンガリーの子爵の家の嫡男である。彼の家は代々政治家を出す名門であった。子爵であってもその声望はかなり高いものであった。
彼もまた政治家となった。だが政治家としては凡庸だと評されていた。血筋だけで政治家になったと言われ個性に乏しいとさえ言われていた。要職を歴任しても地味だと常に言われてきた。
だが彼はそれをとりあえずは気にしないように務めてきた。そして地道に仕事をこなしてきた。それがラフネールの目には好意的に映ったのである。
ラフネールは政権に就くと彼を首相に任命した。これには多くの

者が驚いた。
「単なるイエスマンではないのか」
「調整役としての首相か」
「実際の職務は全て総統が統括するのか」
どれもペーチの政治家としての能力について言ったものではなかった。だが彼はそれも笑ってすませた。
「家柄と人柄で政治家になったからね」
そう言うと黙って自分の執務室に入った。そして早速仕事に取り掛かった。これがペーチという男であった。
そして今まで黙々と仕事をこなしてきた。存在感がない、影だの言われながらも首相としての仕事を続けた。そんな彼が急に脚光を浴びたのは連合との戦いからであった。
連合と一触即発の事態になるとすぐに軍備の整備に取り掛かった。これはモンサルヴァートやシュヴァルツブルグが提案したものだが実際の事務の殆どは彼が取り仕切った。そして恐るべき速さで五百個の艦隊とそれを維持する後方支援体制を整えたのであった。
これには多くの者が驚いた。今まで稀薄な存在と言われていたのが嘘のようであった。今では彼をただ家柄や人柄だけで政治家になったという者はいなかった。今更ながらにラフネールの慧眼に驚くばかりであった。
「首相は優れた方だ」
モンサルヴァートは常々そう部下に対して言っていた。
「あの方が首相であってくれて本当に有り難いと思っている」
「本当ですか！？」
だが部下達はそれによくそう疑問の声を呈したのであった。それだけペーチが軽く見られていたのである。しかし彼は違っていたのである。
「それがわかる時が何時か来る」
モンサルヴァートの返答はいつもこれであった。
「それが何時かはわからないがな」

「そうですか」
その言葉を信じる者はいなかった。少なくとも平時においては。だが今その言葉を噛み締める者は多かった。
今ではペーチの下に仕事が山の様にやって来る。彼はそれを黙々とこなしていた。今ではエウロパにとってなくてはならない人物となっていた。
「ふう」
彼は机の上にある書類を全て処理し終えてから一息ついた。
「今日はこれで終わりかな」
そう言いながら時計を見る。もう朝方近くになっていた。
ふと電話を手にする。そしてかけた。
「はい」
「私だけれど」
総統官邸にかけた。若い男の官吏が電話に出て来た。

## 第十部第三章　苦悩その二

「総統はお休みになられたかな」
「いえ、まだです」
彼はそう答えた。
「そうか。では一刻も早く休まれるよう伝えてくれ。まだ先は長い」
「ですが」
「私でできる仕事は私に回してくれ。今後もな」
「宜しいのですか？」
「私は首相だ」
彼はここでこう言った。
「首相は総統を補佐するものだ。違うかね」
「確かにそうですが」
「そういうことだ。総統が何か言われたら私に言われたと答えればいい。わかったね」
「はい」
「それでは頼むよ。総統にはできるだけ身体を大事にされて欲しいからね」
「わかりました」
電話を切った。そして彼は再び正面を見た。そして考え事に耽っていた。
「まだ長い、か」
自分の言葉を噛み締めていた。苦い味がした。
苦みを味わいながら考え続けていた。だが答えは出ない。そしてそのまま夜が明けた。そしてまた仕事に取り掛かるのであった。彼は一日の殆どをこうして過ごしていた。殆ど休んではいなかった。
次の日も仕事であった。山の様な書類が彼のもとに送られてくる。それに一つずつ目を通し決裁をしていく。
「まだあるか」

彼は書類を持って来た部下の一人に問うた。昨夜の部下とは違う部下であった。
「いえ、今日はこれだけです」
その部下はそう答えた。
「そうか。珍しいな、これだけで済むとは」
「はあ」
「だがそれでもやらなければならないことはある。今の戦局だが」
「はい」
「どういう状況になっているのか詳しく知りたい。いいか」
「それでしたら軍務省に御聞き下さい」
その部下はそう答えた。
「残念ですが我々には詳しいことはわかりかねますので」
「わかった」
それを聞いて頷いた。そしてその部下を下がらせた後まずは机の上にある書類を全て処理した。それから軍務省に電話をかけた。彼は非常にこまめに多くの者に対して電話をすることでも知られていた。彼の仇名の一つに電話魔というものがある。これは彼の電話の多さを揶揄したものであった。
軍務省にかける。すぐに誰か出て来た。
「はい、軍務省ですが」
すぐにモニターに軍服の男が出て来た。大佐の服を着ていた。
「首相だが」
まず彼から名乗った。
「首相」
大佐はそちらのモニターに映るペーチの姿を認めてすぐに敬礼した。
「堅苦しい挨拶はいい。それよりだ」
「はい」
「今の戦局を詳しく知りたい。そちらに行っていいか」
「こちらにですか」

「そうだ」
彼は答えた。
「何か不都合でもあるのか」
「いえ」
大佐は一息置いてから述べた。
「こちらからお伺いしようかと思うのですが」
「今一番忙しいのは卿等だ」
彼はここでこう言った。実際に軍務省は戦争がはじまってから昼も夜もない状況となっている。戦争の作戦指揮から艦隊運用、後方支持まで何もかもを立案、実行しているのだからそれも当然であった。むしろそうでないならばそちらの方が異常であろう。戦時に何もしていない軍務省なぞ常識では考えられない。
「それならばこっちから出向いた方がいい」
「はあ」
これもペーチの気配りであった。
「参謀本部の作戦参謀を一人手配してくれ。その参謀から話を聞きたい」
「わかりました」
こうして彼は軍務省に向かった。そしてすぐに会議室の一つに入った。そこではもう少将の軍服を着た男が待っていた。
少将はサッと敬礼した。それに周りにいる者達が続く。ペーチもそれに返礼した。
「それでは早速はじめてくれ」
「はい」
ペーチが席に着くとすぐに説明がはじまった。まずはモニターにエウロパの三次元地図が浮かび上がる。
「今の戦局ですが」
「うん」
「首相も御存知の通り我が軍にとって芳しくはありません」
それは否定できなかった。芳しいという段階ではないというのも

わかっていた。
　それでも話は続く。ペーチはそれを黙って聞いていた。
「今我が軍は南方、そして北方から完全撤退せざるを得ない状況となっております」
「そうだね」
　ペーチはその言葉に頷いた。
「それについては私も知っているよ。書類での決裁をしたばかりだ」
「はい」
「南方はともかく北方ではかなりの損害が出たようだが」
「十個艦隊程です」
　少将はそう答えた。
「参加戦力の五分の一を失いました」
「そうか」
「今までの戦いで我が軍の戦力はかなりの数が消耗しております」
「それだ」
　ペーチはここで問うた。
「もう四百個艦隊程しかないね」
「はい」
「それで大丈夫だと思うかい？」
「残念ですが」
　少将は首を横に振った。
「ニーベルング要塞群での戦いからもわかる通り連合軍は大規模な戦力で以って向かって来ます」
「うん」
「しかもその先頭には常にサハラ義勇軍がおります。彼等の強さは圧倒的なものです」
「申し訳ないが私は実際の戦場についてはよく知らないのだが」
「はい」
　そう断ったうえで言う。
「彼等の戦いぶりはそれ程凄いのか。話には聞いているが」

「私も何度か前線に出ておりますが」
少将はまずこう言った。
「彼等は死を恐れません。その攻撃はまるで炎の様です」
「炎か」
「はい、黒い炎です。彼等の艦艇は全て黒く塗装されていますから」
「黒い艦隊か」
「かって我等に倒された時の怨みを表わした色だそうです」
「そうか」
ペーチにも納得がいった。サハラ義勇軍の将兵は皆難民出身である。エウロパのサハラ侵攻により追い出され、連合にまで逃げ延びてきた者達なのである。それはペーチもよく知っていた。
「それで黒なのか」
「はい。彼等は正規軍よりも遥かに強力です」
「そういえば敵は正規軍を危険な場所に出さないそうだね」
「はい」
「そうした場面では義勇軍を使っているのか」
「その通りです。言うならば彼等は火事場に飛び込む役です」
少将はそう述べた。
「まずは彼等が突入し道を切り開きます」
「そして次に正規軍が入るのか。正規軍にとっては非常に都合のいい存在だな」
「そうですね。しかしそれは彼等自身が望んだことです」
「義勇軍の将兵がか？」
「はい。彼等は連合において自らの立場を確固たるものにする為に必死です」
少将は言った。
「少なくとも今は戦うことしかできません」
「自らが生きる為に、か」
「はい」
その通りであった。サハラ義勇軍の将兵は難民であった。持って

いるものは自分達の命しかない。何かをするにはその命を以ってするしかないのである。
今彼等の故郷であるサハラ北方はシャイターンによって解放されつつある。だがそれでも遠い連合にいる彼等にはそこに帰る手段はない。帰る為には彼等自身が功績をあげ、それを連合に認めさせてそれでもって帰るしかない。彼等の立場は実に弱いものであるのだ。難民故の悲しさであった。
「生きる為に戦う、皮肉なものだ」
「傭兵にしろそうです。そうした立場の者もおります」
「今の私達もだな」
ペーチはここでポツリと漏らした。
「といいますと」
「生き残る為には連合と戦い、勝つしかない。違うか」
「いえ」
その通りであった。それに頷くしかなかった。
「その通りです」
「そうだ。それならば答えははっきりしている」
「はい」
「勝つしかない。そうだな」
「ええ」
少将は答えた。そしてあらためて地図を見た。
「今戦局は中央に集中しようとしていますが」
「うむ」
「その中央でも大規模な攻勢がはじまろうとしております」
「あそこには連合軍の主力が展開しているのだったな」
「そうです。その数約一四〇〇個艦隊、義勇軍はそのうちの五十個艦隊です」
「空前絶後の規模というべきか」
「それが中央の我等の主力部隊に対して一斉に攻撃に転じようとしています。サハラ義勇軍を先頭に」

「サハラ義勇軍を先頭にか。そしてこちらの艦隊数は」
「約二五〇です」
少将は答えた。
「戦力差は六倍近いか。どうしたものか」
「今南方からモンサルヴァート本部長、北方からローズ司令の艦隊が向かっておりますが」
「間に合えば何とかなるな。いや、間に合わせよう」
「はい」
「それでは総統には私から申し上げておく」
彼は少将に対して言った。
「中央に戦力を集結させようとな。それでいいな」
「お願いします」
こうしてエウロパ軍の方針について総統であるラフネールに上奏することとなった。ペーチは軍務省を離れるとすぐにその足で総統官邸に向かった。少なくとも彼は怠け者ではなかった。

## 第十部第三章　苦悩その三

ラフネールは官邸にいた。そして自身の執務室にいるとのことだった。

彼はすぐに執務室に向かった。そこでは憔悴した顔のラフネールが待っていた。

「よく来てくれたな」

「はい」

頬はこけ目だけが突き出ている。肌は荒れ髪も乱れ気味である。あのスマートでダンディな普段の印象は何処にもなかった。一見すると幽鬼のように見える。

ペーチはそれを見て心を痛めたが彼自身はさらに凄い姿になっているのには気付いていなかった。彼は今ではすぐにでも死ぬのではないのか、と言われる程疲れきった姿であったからだ。

「総統」

彼は挨拶の後ラフネールに対して言った。

「お話したいことがあり参上致しました」

「それは何だね」

彼はその土気色の顔を向けてペーチに問うた。

「どうやら火急の用件のようだが」

「戦局のことです」

「やはりそれか」

ラフネールはそれを聞いて小さな声で応えた。声は小さかったが目の光は違っていた。爛々と輝いていた。ペーチはそれを見て少し安堵した。目の光が強いうちは大丈夫だからである。とりあえずは、であるが。

「知っているよ。中央で敵の大規模な攻勢がはじまろうとしているのだな」

「はい」

「それについてどうするべきか。答えは出ている」
「では北と南の兵を」
「そうだ。ローズ司令は敗戦の直後で申し訳ないがね。そうも言っていられないだろう」
「ですね。それではそう指示を出しますか」
「そうしよう。ところで首相」
「何でしょうか」
ラフネールに問われ顔を向けてきた。
「最近休めてはいるか」
「・・・・・・・・・」
答えることはできなかった。彼は嘘がつけない性分であったからだ。政治家であってもそうした者はいるのである。それが彼であった。
「答えられないか。実は私もそうだ」
「ですが」
「言いたいことはわかっているさ。だがね」
彼はうっすらと笑った。唇にも血の気はない。
「今はね。どうしても休めない」
「ですが休まなければならないでしょう、少しは」
「そう思うか」
「ですから昨日も電話したのです。総統に何かあっては困りますから」
「有り難いな」
やはり力のない笑みを浮かべた。
「だが今はそう言っていられる状況なのだろうか」
「総統」
ペーチはあえてラフネールに対して言った。
「総統に何かあってはどうされるのですか」
「私がか」
「国家元首というものはそう容易に自身を粗末にするものではあり

ません」
「確かにその通りだが」
「ですからご自重下さい。私はそう思います」
「そうか」
「はい。お願いできますか」
「卿にそう言われるとな。聞かないわけにもいくまい」
「有り難うございます」
彼は今や政府の重鎮であった。その彼の言葉にかなりの重みがあるのを最もよく知っているのは他ならぬこのラフネールであったのだ。頷くしかなかったのだ。
「それでは後で睡眠薬でも」
「そうだな。だが用心してくれよ」
「何がでしょうか」
「それで卿が私を暗殺しようとしているのでは、と邪推する者もいるからな」
「まさか」
「いや、わからんぞ」
ラフネールは笑いながら言った。
「ここにも潜んでいるかも知れぬ」
「連合の者がでしょうか」
「若しくは私が死んで得をする者だな。まあ卿ではないことは確かだ」
「はあ」
「それは安心している。だがな」
「何でしょうか」
ラフネールの言葉に顔を向けさせた。
「きょうの場合はそれ以前かも知れん。大丈夫か」
「といいますと」
「身体がだ。見たところ私より疲れているようだが」
「まさか」

否定しようとしたができなかった。彼の顔はすぐにわかる程痩せこけていたからである。それだけではなく妙に生気がなかった。疲れが極限にきているのは明らかであった。
「責任感が強いのはわかる」
「はい」
「だがそれ以前の問題もある。無理をしてはいかんぞ」
「無理と仰いましても」
彼は笑いながらそれに応えた。その笑いにも生気がなかった。
「私は今までこうでしたから。無理なぞしてはいませんよ」
「そうかな」
しかしラフネールはそれには疑問の言葉を呈した。
「少なくとも他の者はそうは見てはいないが」
「他の者は他の者です」
言い返しはあまり上手くはなかった。ペーチはお世辞にも弁の立つ政治家としては知られてはいなかったのである。
「私は私です」
「ならばいいがな」
しかしラフネールの言葉はあくまで彼の言葉を信じたものではなかった。しかし言葉にそのまま出したりはしない。
「少なくとも私にはそうは思えない、そう仰りたいのですね」
「わかるか」
ラフネールはここでペーチを見据えた。
「その通りだ。それで大丈夫なのか。また問うぞ」
「大丈夫です」
ペーチの答えも二度目であった。
「ですから今こうやって総統の前にいるのです」
「あくまでそう言うか。ならばよい」
彼はそれ以上言おうとはしなかった。
「好きなようにするがいい。だが一つ言っておく」
「何でしょうか」

「ご家族や他の者を悲しませるような真似はしゅるな。死んでも何にもならないからな」
「心得ておきます」
だがその言葉も何処か空虚なものであった。彼の言葉自体が半ば生気を失ったものとなりつつあったのだ。それに気付かないのは当人だけであった。
「頼むぞ。戦いを進めるには卿の力が必要だ」
「はい」
「そして終わらせるのもな。はじまるのは容易だが終わらせるのはそうではない」
人間の世界における全てがそうであった。開幕はよくても結末がお粗末な劇は幾らでもある。そしてそれは戦争においてもそうであった。人間の歴史を彩るものの一つであるからにはそれも当然であった。
「それはわかっているな」
「はい」
「ならばいい。では帰ってくれ。そして自分の仕事に取り掛かってくれ」
「わかりました」
こうしてペーチは総統官邸を後にした。彼を見送った後でラフネールは側にいる者の一人に問うた。若い官僚であった。
「どう思うか」
「といいますと」
「あの顔だ。どうなると思う」
「残念ですが」
彼は首を横に振ってそう答えた。
「この戦いが終わるまで大丈夫かどうか」
「そうか、やはりな」
ラフネールはそれを聞いて表情のない硬い顔を作って頷いた。
「今更言ってももう無駄だとは思ったが」

「どうされるのですか」
側の者はラフネールに問うてきた。
「というと」
「首相に休養を命じられては如何でしょうか」
「それはもう以前考えたことがある」
彼はそう答えた。
「だがな、それを言えると思うか」
「いえ」
彼はまた首を横に振った。今度は別の用途に対してだ。
「そうだろう。そういうことだ。今の彼を止めることは私にはできない」
「ではこのまま」
「見守るしかあるまい」
血を吐き出すような声でそう答えた。
「このままではな。彼もそれを望んでいるだろう」
「ですが」
「言うな」
ラフネールは彼には似つかわしくない沈痛な声でそう言葉を告げた。普段の彼はいささかシニカルで思わせぶりな言葉が多いことで知られているのである。皮肉屋の総統とも揶揄される。フランス人らしいとも言われる。最も彼や彼等に言わせれば違うそうである。ラフネールはともかくフランス人達は言う。それはイギリス人のことだろうと。当然ながらイギリス人はこれに対して全く正反対のことを言って返すのである。つまりフランス人こそが最も皮肉屋で口が悪いと。他にもイギリスとアイルランドだのフランスとスペインだのがある。どちらにしろ身内同士で言い合っているのである。これもこの時代においても健在であった。なお連合はエウロパよりさらにきつくなっている。悪口の質量では銀河語はこれまであった言語の中で最も多いとも言われている程である。

## 第十部第三章　苦悩その四

「軍人が死ぬのは戦場だな」
「はい」
「では政治家は何処で死ぬか。考えたことはあるか」
「政治家の死に場所ですか」
「そうだ。それは何処だ」
「政治の場でしょうか。例えば議会」
「うむ」
「そして交渉の場。政治家の戦場はそういったところでしょうか」
「他にも選挙や演説もあるがな。政治家という職業が経験する戦場は多いぞ」
　いつものシニカルな言葉でそう告げた。戦場とは何も銃やビームが飛び交う場所だけではないということだ。戦争もまた一つの場所だけで行われるものではない。
「だがそれでわかるな。彼は今戦場にいるのだ」
「あっ・・・・・・」
　彼はラフネールに言われて思わずハッとした。
「そうでしたか」
「やっとわかったようだな。だがこれでわかっただろう」
「はい」
「彼は今戦場にいる。そして戦っているのだ」
「だからだったのですか。それで」
「そうだ。だがそれは我々も同じだ」
　ラフネールの目の光と声が強いものになった。
「我々も戦場にいるということを忘れてもらっては困るぞ」
「は、はい」
　彼はゼンマイ仕掛けの人形のような動きで頷いた。いささか機械的で形式ばったものである。貴族の礼ではあり様式美はある。だが

それ以上のもののない礼であった。
「そうでした。迂闊でした」
「わかってくれればいいがな。だが彼はその中でも違う」
再びペーチについて述べる。
「本当に全てを賭けている。自分自身の命までもな」
「命までも」
「賭けたいと思うか」
彼はまた問うてきた。
「覚悟が必要です」
「その覚悟はあるか。もっともこういった場合は普通はあると答えるものだが」
「ええ」
その通りであった。そして彼は頷いた。
「それでいい。だが首相にはまだ及ばないな」
「あの人程にはやはり」
「いい。実は私もだ」
ラフネールはそう語った。
「私も彼程にはいけない。とてもな」
「正直驚くものがあります。あれ程だったとは」
「そうだな。特にそれまでの姿しか知らない者はな」
かってペーチは凡人と評されていた。政治家としての力量はなくカリスマ性にも乏しいと評価されていた。確かに地味な外見であるしこれまで派手で目立つような貢献もなかった。だがそれでもラフネールは首相に抜擢したのであった。それまでも所属政党の重役や閣僚を難度か経験してはいるが首相になるとは当のペーチですら夢にも思わなかったことだ。当然この人事はエウロパにおいて大きな騒動となった。本命が他にいたこともありそれを差し置いて首相に任命されたからである。
「単なる調整役だ」
こう言い切る者もいれば他の意見もあった。

「飾りに過ぎないだろう」
酷評そのものであるがそれもまた意見の一つであった。とかく彼はそう言われ易い人物であった。言い易いという見方も可能ではあるが。
連合各国はとりわけ酷評した。エウロパにとって悪いこと、不利なことならことさらに騒ぐのが彼等であるが今回もそれは同じであった。彼等は嬉々としてこう囃し立てた。
『エウロパの失敗人事』
『何の面白みもない人事』
『所詮家柄のみによって人を選ぶ連中だ』
『貴族の実態がまた明らかに』
連合の書き方もまた偏見があるのは事実である。彼等は自分の目に映るエウロパしか見てはいない。このペーチに対しても同じであった。彼等の目にはペーチ首相は失敗にしか見えなかった。なお彼等は強敵が出ると人格攻撃まで行う傾向がないわけではない。そうなると卑劣だの狡猾だのいった言葉がイエローペーパーに載る。この時代もイエローペーパーは存在する。そして時として害毒を垂れ流している。
とかくそうした評価であった。ラフネールにも記者等から様々な質問があった。だが彼はそれに対して胸を張ってこう答えたものである。これは自信家である彼らしいと言えば彼らしいといえる行動であった。だがここには常に根拠があるのもまた彼の特徴である。少なくとも彼は虚栄を張る様な人物ではない。
「私の人事に失敗はないのだよ」
自信家の彼らしいが今回ばかりは誰も信じなかった。ペーチにそんな力量があるとは誰も思わなかった。思えなかったと言ってもよかった。結局それが彼への世間の評価であった。温厚で人柄はよいがそれだけである、こまめに働くだけの事務処理だけの人間だと思われていたのだ。つまり凡人というのが彼のこれまでの評価であった。だがそれはここにきて大きく変わろうとしていた。何がそうさ

せたのか、やはり時代であろう。時代が彼の隠された能力を引き出したのであった。
　ラフネール以外は戸惑った人事であった。そして当のペーチも。彼は最初これを固辞しようとした。しかしラフネールはそれを頑として認めなかった。
「まあ一度やってみたまえ」
「しかし」
「ペーチ君」
　彼はそれでもなお引き下がろうとするペーチを強い目で見据えて言った。
「君はあまりにも自分を知らなさ過ぎるな」
「私はそうは思いません」
　彼はそう答えた。
「自分のことは自分が最も知っていますから」
「それは自惚れだ」
　ラフネールはそう返した。
「人間というものは案外自分の事は知らなかったりするものなのだ」
「そうも言いますが」
「私から見れば君はまさにそれだ。だからあえて言おう」
「はい」
「君は首相になるべきだ。そしていずれはなっていただろう。それが今なのだ」
「今、ですか」
「そうだ。私は君の力を必要としている。いや、私だけではない」
　彼は言った。
「エウロパが必要としているのだ。どうだ、受けてくれるか」
「エウロパ、がですか」
「そうだ。その命をエウロパに捧げて欲しい。どうだ」
「・・・・・・・・・・」
　彼は暫し沈黙した。そして間を置いてから答えた。

「わかりました。この命喜んでエウロパに捧げましょう」
「有り難う」
ラフネールはそれを聞いてにこりと笑った。それで全てが決まった。彼はエウロパの首相となった。
だが首相になってからも評価は変わりはしなかった。やはり影が薄いと言われてきた。しかし彼はただ己が責務をまっとうし、仕事に専念していた。そして連合との戦争がはじまると急に八面六臂の活躍を見せるようになったのであった。これには誰もが驚いていた。ラフネール以外は。
「だがあの時の言葉は言ってはならなかった」
後日彼はこう回想した。ペーチを慰留した時の言葉である。
「命を捧げるというのは容易には使ってはならない言葉なのだ」
自伝にもそう書いた。彼の自伝は連合とエウロパの戦いについて研究するうえで非常に価値のあるものとされた。一方の、しかも敗戦の元首でありながら冷静かつ流麗な文体で書かれたそれは文学的評価も高かった。エウロパにおける名著の一つとされている。
その自伝の中でこう回想しているのである。彼はその時の言葉を一生後悔していたのだ。
だが今はそれを知る由もない。過去のことはどう影響していくのか、こればかりは人間という限られた存在にはわからないものなのである。時の糸を紡ぐノルン達でないとわからないものなのだ。人の力には限界があるのもまた事実であるのだから。だから人間なのである。人間は決して神ではない。
ペーチは官邸に戻るとすぐに仕事に取り掛かった。既に机の上には書類の山が置かれていた。
それを一枚ずつ的確に処理していく。そしてそれが終わるとすぐに次の仕事に取り掛かった。電話機を手にとったのである。
「私だけれどね」
彼は前線に電話をかけていたのだ。高級将校の一人がその電話に出て驚きの声をあげていた。

「首相ですか」
「そうだよ。何をそんなに驚いているんだい」
「いえ、それは」
彼は声だけで笑ったペーチの言葉を聞き少し冷静さを取り戻した。それから答えた。
「まさかこのような場所にまでご自身が電話をかけられるとは夢にも思いませんでしたので。何のご用件でしょうか」
「督励と言ったら困るかな」
「督励ですか」
「うん。今戦局は思わしくないのは事実だ」
「はい」
その高級将校は沈痛な声で頷いた。否定はできなかった。
「だがそれでも卿等には頑張ってもらいたいんだ。前線に出ていない私が言えた義理ではないがね」
「いえ、そんな」
かえって畏まってしまった。
「首相には首相のお仕事がありますから」
その程度のことがわからなくては将校は務まらない。政治家には政治家の軍事に関する仕事があるのである。
「わざわざこうしてお電話をかけて頂くだけでも」
「それでは簡潔に済ませたい」
「はい」
「頑張ってくれ。そして特別に前線にいる将兵全てにボーナスを支給しよう」
「ボーナスですか」
「一人の月収の三ヶ月分だ。少ないかな」
「ま、まさか」
また恐縮してしまった。
「そこまでして頂くとは」
「これは当然のことだからね」

彼はそう述べた。
「当然のこと」
「そうだ。君たちは前線でエウロパの為に戦っている。そんな君達に何の報償もなしでは酷い話だろう」
「・・・・・・・・・」
彼等にとってはそれが義務である。貴族達はエウロパの危機には自ら銃をとってエウロパの為に戦う。それが貴族の務めであると考えている。だがそれにねぎらいの言葉と報償を与えてくれるような人物がいてくれるとは思わなかったのである。これは義務だから当然だとも考えていた。だがそれでもねぎらいの言葉と報償は嬉しいことに変わりはないのである。
「どうかな。命と金は替えられるものではないが」
「滅相もありません」
その高級将校は少し大きな声でそう答えた。
「これは将兵にとって大きな励みになるでしょう」
「そうか。だったらいいけれどね」
そう答えるペーチの声が明るいものになった。
「だけれどね」
「はい」
彼はまた言った。

## 第十部第三章　苦悩その五

「命を賭けているのはわかっている。だが粗末にはしないで欲しい」
「粗末には、ですか」
「そうだ。命がある限り何度でも戦うことができる」
「何度でも、ですか」
「だが死んではそうはいかないな。一度死ねば全てが終わる」
　この時代平均寿命は九十を越えている。医学の進歩は目覚しいものがある。これが連合の人口増加を支えてきたという一面もある。それでも人は不老不死、不死身には今のところなることはできないでいた。それはやはり夢物語なのではないかという意見も多い。所詮人間もまたこの世にある存在である。この世にあるものは全て壊れ、死ぬ運命である。人間もまたその一つである以上何時かは必ず死ぬ。それから逃れることは出来ないのだというのはマウリア的な考えであるがやはり連合やエウロパにもある。
「そうではないかな」
「はあ」
　高級将校はそれに応えた。
「言われてみるとそうですが」
　軍人としては少しどうかという発言ではあった。だがそれは本音であった。
「そうだろう。どうしても戦死者は出る」
「はい」
「しかし少しでもそれを抑えることはできる筈だ」
　正論であった。ペーチは軍歴がない。一般の大学を卒業した後で政界に入った。彼の家は代々文官の家であるのだ。こうした文官の家、武官の家といったのもエウロパの貴族の一つの考えであった。
「そうではないかい」
「否定はしません」

将校の答えはそれであった。
「我々は連合より数において大きく劣ります」
「うむ」
「それならばなおさら将兵の命を粗末にはできません。それは我々も同じ考えであります」
「そうか、ならいい」
ペーチはそれを聞いて目を細めた。それは将校からも見られた。
「今我が軍の損傷はかなりのものになっているな」
「はい」
彼はそれを認めた。
「既に全軍の二割近くを失っております」
「二割か」
「はい。今は四〇〇個艦隊程にまでなっております」
「四〇〇か」
全兵力の約五分の一を失ったことになる。深刻と言わずしてどう言うのか、という程のダメージであった。
「先の北方の敗戦でも兵を失いましたし。中央の戦いも激化しております」
「敵の損害は殆どないそうだね」
「残念ながら。どうやら全滅した艦隊は一つもないようです」
「それも数所以か」
「そして武装ですね。彼等の艦艇も艦載機も陸上戦力もその攻撃力と防御力はかなりのものです」
「それは聞いているよ」
彼のもとにも報告が山の様に来ていたのだ。連合軍の艦艇の強さはとりわけ凄いものであったのだ。一隻一隻で既にエウロパ軍の個々の艦艇を凌駕していた。連合の駆逐艦は最早エウロパの軽巡に匹敵するものであり、連合のその軽巡はエウロパの戦艦に匹敵する攻撃力及び防御力であったのである。艦艇一隻でそこまでの差がひらいていた。巨大戦艦に至ってはそれ一隻で一個艦隊に匹敵するとい

うのもあながち誇張でなかったのだ。
「技術力の差か」
「おそらくは」
将校は言葉を返した。
「国力の差がここでも出ているかと思います」
「そうだな。ひとえに国力の差だ」
それはペーチ自身が最もよくわかっていることであった。彼は首相の席にいる為多くのことを見ることができる。その中には当然連合とエウロパの違いもあった。三十倍という圧倒的ともいえる国力差は科学力、技術力にも現われていたのである。それが連合の艦艇を作り上げていたのだ。艦艇は単に一つのことだけで決まるものではないのである。建造され、完成に至るまでに実に多くの事柄が関わるのである。
「ただたんに人口の問題ではない」
「はい」
「それが嫌になる程出ているな」
「そうですね。駆逐艦や護衛艦ですら我が軍の巡洋艦に匹敵する力を持っています」
「巡洋艦は戦艦に匹敵するそうだな」
「少なくとも攻撃力と防御力では。そして索敵能力、電子能力も高いです」
「それも聞いているよ。厄介なことばかりだ」
ペーチの声が苦いものとなった。軍人ではないがそれでもわかることであった。
「国力差というものは全てにおいて出て来るものだな」
「ですね。将兵の訓練度は我が軍と比べてそれ程ではないですが」
「そうなのか」
「はい。ただ彼等は数とその艦艇の性能が高いですから。それで戦っている部分が大きいです」
「戦術自体はオーソドックスと聞いているが」

「オーソドックスですか」
「それ故に苦しいとも聞いているよ」
「ですね」
その通りであった。
「だからこそ怖いです。こちらのミスには容赦なく付け込まれますから」
「数に差があるだけにそれは辛いな」
「はい。それで我が軍は何度も敗戦しております」
これもまた事実であった。エウロパ軍の些細なミスに付け込む。そして一気に数で潰す。こうして連合軍は戦いを有利に進めてきたのである。圧倒的な物量差がその前にある。そのうえで攻め込んで来るのだ。勝つのはやはり容易なことではないのである。
「悔しいことですが」
「今までは、ね」
ペーチはここでこう言った。
「だがこれからはどうだ」
「えっ！？」
将校はそう言われて思わず声をあげた。
「これからはどうかと聞いているのだけれど」
「は、はい」
それで我に返った。
「無論これからはそうしたことはありません、決して」
それが答えであった。
「必ずや祖国の危機を救ってみせましょう」
「うん、頼むよ」
それがペーチの待っていた言葉であった。彼はそれを聞いた時心の中で笑っていた。流石にこれは顔に出すわけにはいかなかった。彼も政治家でありその程度のことはわかっていたのである。もっともこれは政治の世界にいるのならば身に着けていて当然のことであるが。

「エウロパは卿等にかかっている」
「はい」
「だからこそ命を大事にし、戦ってもらいたい。全ては卿等の双肩にかかっているのだからな」
「わかりました」
将校はここで敬礼した。
「必ずやご期待に添います」
「頼むよ。エウロパの為に」
「ハッ」
彼は答えた。
「エウロパの為に」
こうしてモニターから彼の姿は消えた。ペーチは消えたモニターを見ながら一人微笑んでいた。
「命を大事にしろ、か」
だがその笑みは力のない笑みであった。生気に乏しかった。まるで冥界にいるかのようであった。
「私自身以外は、だな」
ここで腹や胸に鈍い痛みが走った。
「うっ」
右手で押さえる。だがそれはまだ続いていた。鈍いが確かな痛みであった。まるで命を削り取るような。
「もう少しもってくれよ」
彼は自分の腹を見下ろしながらそう呟いた。
「もう少しでいいからな」
言いながら必死に痛みに耐える。そして机から錠剤を取り出した。それが何か。言うまでもないことであった。
それを口に放り込む。水もなしに飲み込む。暫らくして痛みがひいてきた。例えそれが一時的なものであっても。
「ふう」
落ち着いた。だがそれが一時的なもので凌ぎにしかなっていない

のは彼自身がもっともよくわかっていた。
前を見る。何故か人以外の存在が見えるような気がした。
「まだだ、まだいなくてはならない」
小さいが強い声でそう言った。そこに彼の秘められたものが見えたがそれは人には見えはしないものであった。
「この戦いが終わってからほんの少しまでいいからな。頼むぞ」
そしてまた仕事を再開した。彼もまた戦っていたのであった。孤独な戦いであった。しかし逃れることはできなかったし彼もまた逃れるつもりはなかった。それが彼の戦場であり死に場所であるとわかっていたからであった。

# 第十部第四章　観客達の舞踏その一

観客達の舞踏

連合とエウロパの戦いは他の者達に対しても影響を与えていた。これはマウリアやサハラ各国においても同じであった。彼等もまたこの戦いに注目していたのである。

まずマウリアであるが彼等はこの戦いに関してはいちはやく中立と同時に大筋において連合支持を宣言した。宗教を利用して諜報員を送り込んでいたエウロパに非があるというものである。これは道理であった。

外交や政治において道理とは建前に過ぎないものである。今回もそうであった。だがそれを上手く使うこともまた政治である。この時のマウリアはそれを上手く使ったといえる。

「今回のことでエウロパを支持するのはエウロパの人間だけだろうな」

クリシュナータの言葉である。彼は今回の戦いは全てにおいて連合に分があると見ていた。そのうえでの判断と言葉なのであった。

「今戦いは連合軍に有利となっております」

隣に立つラーンチがそう言及した。彼等は今国家主席の執務室にいた。そして立って窓の外を眺めながら話をしていたのである。

「当然だな」

クリシュナータはラーンチのその言葉を聞いて頷いた。彼にとってそれはもう言うまでもないことであった。だがあえて聞いたのである。

「あの戦力差ではな。確か最初の時点で四倍だったな」

「はい」

「それだけではないしな」

「双方の国力差も大きく影響しております」

「それだ」

クリシュナータはラーンチのその言葉に反応した。
「連合とエウロパの国力差は三十倍だ」
「はい」
「それは単に人口の差だけではないのだ」
人口の差は確かに大きい。だが国力差というのはそれだけではないのである。
資源や施設、経済規模、産業、そうした様々なものにそれは出て来る。そして科学力や技術力、人材にもそれは出るのである。
それは連合とエウロパにおいてもそうであった。科学力、技術力がこの戦いにも大きな影響を与えていたのである。その最たるものが艦艇であった。
「やはり艦艇の質も大きいかと思います」
「特にあの巨大戦艦か」
「はい」
ティアマト級のことであるのは言うまでもない。
「あれ一隻で一個艦隊に匹敵する戦力がありますから」
「実際に一個艦隊を退けたこともあったな」
「ええ」
「エウロパにとっては忌々しい話だろうな。連合にとっては正反対になるが」
「そうなりますね」
対立する双方において一方が有利ならばもう一方は不利となる。これは自明の理であった。
「他の艦艇もかなりのもののようだが」
「はい。エウロパ軍が勝っているのは速度だけです」
「それだけか」
「連合軍の艦艇は重装備、重装甲である為か速度は遅めです」
「どの程度だ」
「艦によって多少の差はありますが」
ラーンチはそう述べたうえで説明をはじめた。

「大体エウロパの艦艇の七割か八割程の速度のようです」
「高速戦艦や巡洋艦もか」
「はい」
「そうか。確かに速いとは言えないな」
「彼等は速度よりも攻撃力や防御力に重点を置いているようです」
「それはわかる」
クリシュナータはそれに頷いた。
「彼等の軍ではな。それも当然だ」
「といいますとやはり志願制だからですか」
「そうだ。我等もそうだが我等と連合では国のあり方が違うからな」
カーストはなくなったとはいえ多少の残滓はあった。その為マウリアでは軍人になるのは旧クシャトリア階級にある者が多いのである。だが連合にはそもそもカーストというものがない。その為に志願制といってもかなりの違いが出ているのである。
「彼等は様々な出自の者からなる」
「はい」
「国が違うのは常識だ。そして職も連合には実に多くのものがある」
これはマウリアも同じであるがやはりカーストの影響が残っているのである。その為職というものは先祖代々といったことが多い。バラモン、クシャトリア、ヴァイシャ、シュードラといった四つのおおまかな階級がある。司祭、武士、平民、そして奴隷と訳されることが多い。だが実際にはヴァイシャは商人と認識していい。シュードラは平民である。彼等はカーストの中にある存在だ。だがその下にもいる。所謂不可触民である。二十世紀の独立運動家であり民族の指導者でもあったマホトマ＝ガンジーは彼等をハリジャンと呼んだ。神に祝福された者達という意味だ。これは差別を否定したいせいであったが所詮名前だけで差別意識なぞ変わりはしないのだ。そえは何故か。
これには穢れの思想があるという。日本の神道において実に重要なキーワードの一つになっているこれはインドにもあるのだ。それ

がこのハリジャンというものである。日本でも被差別部落の問題があった。流石にそれはこの銀河の時代ではもうなくなってしまっているが。
だがこの時代でもハリジャンの残照はある。そして今もマウリアの社会的問題となっている。あまり表には出ないが根は深く深刻な問題であった。
「軍というのは命をかけるものだ」
「はい」
「だがそう易々と命をかける者がいるだろうか」
クリシュナータはそう問うてきた。
「どう思うか」
「少なくとも彼等の宗教ではそれ程多くはないと思います」
「そうだな」
それに頷いた。
「仏教もあったと思うが」
古代インド発祥の宗教である。今でもマウリアにそれなりの信者がいるが彼等の中では少数派である。むしろ連合のタイ等に多い。日本でも様々な宗派が存在する。
「はい」
ラーンチはそれに答えた。だが一言付け加えた。
「ですが他にも色々とあります」
キリスト教にしろ実に多くのものがある。道教や神道もある。天理教もある。そしてケルトやアステカ、メソポタミア、エジプト、旧ネィティブアメリカン、オセアニア、アフリカといった国々の神々も信仰されている。連合の宗教は極めて多彩なのである。ユダヤ教やイスラム教もあるのだ。とかく数が多いのだ。
「彼等の宗教の多さは尋常ではありません」
「我々が言えた義理ではないがな」
「それはそうですね」
クリシュナータもラーンチもそう言って互いに笑い合った。

「我々の宗教も多彩ですから」
「そうだな」
ヒンズー教や仏教だけではない。ジャイナ教やシーク教、拝火教もある。なお拝火教は連合にも存在する。ゾロアスター教のことである。火を崇拝しこの世界と光の神アフラ＝マツダと闇の神アンリ＝マンユとの対立の世界と認識している。このアフラ＝マツダは連合にて復活しているミトラ教では主神だるミトラとなり、仏教では弥勒菩薩となっている。だがヒンズー教ではアスラとなり神の敵とされている。アスラは厳格で生真面目な性格であるがそれが故にヒンズーの神々であるディーヴァ達と対立しているのである。言うならば異なる系統の神々なのだ。
なおこのゾロアスターは西洋にも大きな影響を与えている。ニーチェの代表作である『ツァラトゥストアはこう語った』であるがこれはこのツァラトゥストアはゾロアスターのドイツ語読みである。キリスト教的価値観が崩壊していく中でこうした異教の存在も注目されたのである。音楽家リヒャルト＝シュトラウスも曲を残している。
「だがその根本にあるものは連合のそれとは違う」
「はい」
「彼等の多くはこの世も我々も何度も転生するとは認識していないのだな」
「仏教徒は違うようですけれどね」
ラーンチはそう答えた。
「あれは元々我々の世界で出来上がったものだからな」
「はい」
「違うのも道理だ。だが彼等はあまりこの世について理解してはいないようだな」
「理解していないというより認識の違いでしょうね」
「認識か」
「はい。彼等の認識している世界と我々の認識している世界の違い

です」
ラーンチの見解はそれであった。
「我々は世界を創造、調和、破壊のサイクルの中で考えております」
「うむ」
これがインド哲学の根幹であった。万物は一つのサイクルの中にある。それぞれを三柱の最高神達が司る。ブラフマー、ヴィシュヌ、シヴァの三柱である。彼等の活動により世界は動くのである。
「それは永遠に続くものである。少なくとも我々の時間においては」
「果てしない時間だがな」
「そうです。ですが彼等の時間の捉え方はその多くが異なるのです」
「つまりだ」
クリシュナータは答えた。
「一つのサイクルで全てだと思っているのだな」
「どうやらそのようです」
彼はそう答えた。
「彼等は時間を輪廻転生するものだとは思ってはいないのです」
「やはりそうなのか」
クリシュナータはそれを聞いて頷いた。
「道理で彼等の言う世界と我々の言う世界に差があると思っていた」
「はい」
「どうやら私は我々の世界を基準に考え過ぎていたようだな。これでは彼等の一面しか見えない」
「そうなりますね」
「それでは視野に問題が出て来るな。これではいかん」
「それを考慮に入れられるといいですよ」
だがラーンチはそう言って彼をフォローした。
「彼等のことを宗教面から知ることもよいことです」
「うむ」
クリシュナータはまた頷いた。だがその頷きは先程のものとは異なっていた。

「どうやらそのようだな。よくわかった」
「それでは主席」
「そうだな。やはり彼等は一つではない」
「はい」
「一つではあるがその中に多くのものがある」
「それはマウリアとて同じ」
「だな。それをよく認識しておかなければならないな」
「その通りです。ですがエウロパは少し違います」
「我々や連合と比べて中にあるものが多様ではないな」
「ええ。そこが連合とエウロパの大きな差であると思います」
「おおまかには言えないが」
クリシュナータは考え込みながら述べた。

## 第十部第四章　観客達の舞踏その二

「多様性と同一性ということか」
「そうなりますね」
ラーンチはそれに頷いた。
「この場合連合はその多様性を上手く利用したのではないでしょうか」
「異なる個性同士が上手く衝突し合い影響し合った」
「ええ」
「だからこそ連合はあそこまでなれたのかもな」
「紆余曲折は多かったですが。そうなります」
彼等はこの数年ではなく千年単位で語っていた。これがマウリアの者の時間の感覚であった。彼等の時の感覚、認識は連合やエウロパのそれとは大きく違っているのだ。
「幸運もあったが」
「はい」
広大な開拓地のことを示している。
「エウロパにはそれがなかったということか」
「技術や科学に関しては確かにそうでしょう」
ラーンチはそう述べた。
「彼等には影響し合い、衝突し合う存在は連合しかありませんでした」
「うむ」
「しかもその連合は一つの連合でした。中にある多くのものを見てはいませんでした」
「彼等を一つの存在として認識していたということだな」
「そういうことです。政策としては彼等の中にある多くのものを利用していましたが」
時として構成国同士を謀略により仲違いさせてきた。こうしてエ

ウロパは圧倒的な力を持つ連合に対してきたのである。力に差があれば知を使うのは常識であった。
「彼等は中にあるものが連合と比べて乏しかった」
「うん」
人的資源の差もここにはあった。
「影響し合うものが連合に比べて乏しかった。その結果として技術や科学に差が出てしまったのです」
ベニョーコフのアナハイム社にしろそうであった。彼等は連合内の激しい競争に勝ち抜く為に絶えまぬ努力を続けてきた。その結果があの艦艇なのである。そこまでなるのに競争と影響があるのはもう言うまでもないことであった。これも連合の特性の一つであった。
「皮肉なものだな」
クリシュナータの感想はそれであった。
「エウロパは連合と比べてまとまりが強い」
「はい」
「それが裏目に出るとはな。それも今になって」
「裏目はここぞという時にこそ出るものです」
ラーンチはそれに対してこう答えた。
「それが運命なのですから」
「運命か」
「ええ」
「神々というものは時として残酷なことをするな。エウロパはどうなるか」
「負けるでしょう」
「というと滅びるか」
「いえ、そこまではならないでしょう」
しかしラーンチはエウロパの滅亡は否定した。
「何故だ」
「連合は確かに多様的です」
「うむ」

「しかしその多様性はエウロパとは決して相容れないものなのです」
「どういうことだ」
「連合は市民社会です」
「それはエウロパもだな」
　実はクリシュナータは話がわかっていた。しかしあえてこう答えたのだ。ラーンチの次の言葉を引き出す為であった。これもまた話のテクニックであった。
「ですが連合になくエウロパにあるものがあります」
「貴族か」
「その通りです」
　その言葉が強いものとなった。
「連合はあくまで階級のない社会です。職や国籍、経歴といったものはありますが」
　エウロパと同じく王もいる。またエウロパにはない皇帝と言うべき存在も日本とエチオピアにある。だが階級はないのである。それが連合の社会の特色であった。
「階級はありません。彼等はその身分は全て市民なのです」
「だがエウロパは違うな。それも大きく」
「はい」
　ラーンチは答えた。
「彼等は大きく分けて貴族と平民となります。これは歴然たるものです」
「連合にそれが受け入れられないと」
「はい」
　やはりその答えは同じであった。実はクリシュナータの予想通りである。
「彼等にとって貴族社会とはあまりに異質な存在であり過ぎます」
「連合の中に入られないものか」
「そうですね。少なくとも彼等にとっては理解の範疇にありません」
「そうか。ではどうするかな」

「おそらく多額の賠償金と他に何かを手に入れて終わりでしょう。併合も領土の割譲もないかと」
「領土もか」
「ええ」
ラーンチの見解はそれであった。
「私はそう見ております」
「そうか」
だがクリシュナータはどうやら違う意見であるようだ。
「私はそうは思わないが」
「閣下はどうお考えですか」
「ニーベルング要塞群の割譲位はあるだろう」
彼の予想はそうであった。
「後周辺の星系か。そういったところか」
「それでは彼等との接点ができてしまいますが」
「接点が」
「はい。連合とエウロパは今まで直接に接することはありませんでした」
実際はそうであった。彼等はブラウベルグ回廊を挟んで対峙しているだけであった。諜報や工作はあったがそれ以外はなかったのであった。ただ睨み合いを続けていただけであったのだ。
「今はこうして戦争になっておりますが」
「戦争が終わればそれが元に戻るというのか」
「連合の多くの者もエウロパの領土を幾らかは欲しいと思っているかも知れません」
「それは当然だろう」
戦いに勝った側が負けた側から領土を得る。戦争の常識の一つであった。
「ですがそれにより災厄を招く結果になれば」
「災厄」
「はい。接点ができればそれからエウロパは動くでしょう」

「工作か」
「今まではブラウベルグ回廊がありましたが」
ラーンチの答えはそれであった。
「それがなくなり直接対峙することになるのです。侵入はし易くなりますね」
「成程な」
クリシュナータはその言葉に頷いた。
「確かにそうだな。そうなれば連合にとって厄介なことになる」
「問題はそれに連合、エウロパの者達が気付いているかです」
「エウロパがか」
彼はそれに疑問の声を呈した。
「彼等が気付く必要があるというのか」
「それはおいおいおわかりになられると思います」
そう思わせぶりに答えた。
「彼等が気付いていれば、ですが」
「後のお楽しみといったところか」
クリシュナータはそれを聞いてとりあえずはそこまでとした。
「では待つとしよう。どうやらこの戦いは終わってからも色々とあるようだからな」
「戦いは矛を収めてそれで終わりではありませんから」
ラーンチは今度はそう述べた。
「それからもまた戦いなのです。武器を手にするだけが戦いではありません」
「それはわかっているつもりだ」
「ではお楽しみを」
「うむ」
「舞台はまだまだ続きます故」
「これで踊りがあれば完璧なのだがな」
「ははは、確かに」
ラーンチはクリシュナータのその言葉を聞いて大笑した。マウリ

アの映画は踊りも入ることで有名なのである。他の文明圏の者達にとっては何の脈絡もなく踊りがはじまるように見える。いきなり何処からともなく人々が現われ主人公達と共に踊りをはじめる。他にもアクションもロマンスも何でも入れなければならないのだ。そしてハッピーエンドが常である。ちなみに時間は平均して七時間程ある。連合のある映画評論家はこう評している。

「マウリア人そのものだ。我々の理解の外にある」

それがマウリア映画であった。それでもカルトな人気を博している。キラリと白く輝く歯がいいという人もいる。敵役が先回りしようとしてそのままいなくなるのもまたマウリアの映画ではよくあることなのである。そのようなことは彼等にとっては些細なことなのである。

「いや、最後にあるな」

「といいますと」

「会議は踊る、だな」

「おお」

ラーンチはそれを聞いてさらに笑った。

「いや、その通りでした」

「大切なことを忘れていたな」

「はい、全くです」

二人はそう言って話を続けていた。彼等にとってはある程度蚊帳の外の話であり気楽といえば気楽であった。当事者でないという強みであろうか。

## 第十部第四章　観客達の舞踏その三

しかしこれはサハラになると少し違う。とりわけティムールでは事情が大きく違っていた。
彼等は連合と呼応する形でエウロパの総督府に進撃していた。既にそこは無人地帯であった。
「素早い動きだったな」
シャイターンは旗艦イズライールの艦橋にいた。そして目の前に拡がる無数の星達を見てそう呟いたのであった。今それは彼のものになろうとしていた。
「エウロパ軍もあながち無能ではないらしい」
「はい」
それに彼の末弟であるアブーが頷いた。彼もまたこの作戦に参加しているのである。
「撤退こそが最も難しいとされていますから」
「その通りだ」
兄は弟のその言葉に正解を出した。
「それがわかるとはな。よく勉強しているな」
「有り難うございます」
「彼等は既にエウロパ領に全員避難しているようだな」
「はい」
今度はハラーイブがそれに答えた。
「モントローズ要塞の無血開城を条件に連合に市民達の安全を保障してもらったうえで」
「連合にか」
「はい」
「彼等にとっては屈辱だろうな。敵に情をかけられるとは」
「ですがそうせざるを得なかったでしょう」
ハラーイブは冷淡にそう返した。

「さもなければ市民達は我等に捕らえられるか連合との戦いに巻き込まれておりましたから」
「連合もそれを知っていたからこそ話し合いを申し出てきた」
「最初はエウロパも戸惑っていましたが」
しかし事情が突如として変わってしまったのだ。中央部で連合軍主力の大攻勢がはじまったからであった。戦局の変化は全てを変える時もあるのだ。
「しかし結局は無血開城に同意致しました」
「それにより南方は完全に連合のものとなった」
「はい」
「そしてサハラ北方もな。まさかこれ程容易に話が進むとは思わなかったが」
「閣下」
しかしここでハラーイブは気を引き締めた声を出した。
「好事魔多しといいますぞ」
「おっと、そうだったな」
それに応えて笑った。
「こうした時こそ気を引き締めなければな」
「そうです。少なくとも我等はまだ北方に兵を進めている段階です」
「うむ」
「まだこの広大な宙域が我々の手中に収まったわけではないのはご了承下さい」
「そうだったな。油断大敵だ」
シャイターンはその言葉に従い気を引き締めさせた。
「オムダーマンは既に手を打っているがな」
「はい」
アッディーンとマルヤムの婚姻のことである。彼等はその他にもオムダーマンに対して有利な条約を結んでいるのである。シャイターンの巧妙な外交の一つであった。
「ハサンはこれといって有効な手を打ってはいない」

「それです」
アブーはそこで問うた。
「何だ」
「何故ハサンとは条約を結ばなかったのですか？我等にとって彼等こそが最大の脅威であるというのに」
ハサンはサハラで第一の大国である。オムダーマンもティムールも彼等と比してその国力は大きく劣るのが現実であった。アブーはそれについて言及しているのである。
「それか」
「はい。何故でしょうか」
「アブー」
彼はここで弟の名を呼んだ。
「獲物に餌をやる狩人がいるだろうか」
「獲物にですか」
「そうだ。罠以外にな。どうだ」
「それは」
彼はその問いに躊躇した。
「少なくとも私はそのようなことはしません」
「そうだろう。それが答えだ」
彼はそれに対してそう答えた。
「私もそれは同じだ。我々はまだ目的を完全に達してはいないのを忘れるな」
「は、はい」
それを聞いて慌てて答えた。
「我がシャイターン家の目的は何だ」
そして兄は弟に対してそう問うた。
「言ってみよ。それは何だ」
「サハラの統一にございます」
アブーは頭を垂れてそう答えた。
「このサハラを我がシャイターン家のものとすることです」

「そうだ」
兄はそれに答えた。
「それを忘れるな。サハラ、いやウマイアより一つになることはなかったアッラーの民を一つにまとめるのは我々なのだ」
「はい」
これは事実であった。イスラムが興り正統カリフ時代を経てウマイア朝になった。だがこれがアッバース朝によって倒されるとウマイア朝の生き残りはイベリアにまで逃れてそこでウマイア朝を再興した。これ以後イスラム世界は一つになることはなかった。アッバース朝の極盛期もかなりの強大さと富裕を誇ったが一つではなかったのだ。サラディンもバイバルスも一つにすることはできなかった。あのオスマン＝トルコですらイスラムを一つにすることはできなかったのである。そして二十世紀はイスラエルを前にして団結したがそれは真の団結ではなかった。その証拠に彼等は敗れイスラエルは残った。そして宇宙の時代にも今も彼等は一つではなかった。
「思えば長い分裂だった」
「はい」
「我等は一つになることを望んでいた。だが今も一つではない。それは何故だ」
「それを統べる者がいなかったからです」
「そうだ」
シャイターンはそれに答えた。
「アッラーに選ばれたその資格がある者がな」
「はい」
「だがそれが遂に現われたのだ。それこそが我がシャイターン家だ」
「そしてその指導者こそが兄上」
「うむ」
「全ては運命でございました」
ハラーイブもシャイターンに対して言った。
「これを言ったのはどの預言者かはわかりませんが」

イスラムの預言者はムハンマドで最後である。だが彼の前に無数の無名の預言者達がいたのである。知られているのはその僅かな者だけであるのが現実である。
「啓典の民は一度分かれる。バビロンの塔の様に」
「うむ」
「だがそれは必ず一つになる。英雄の名を冠した男によって」
「そう、それが私なのだ」
シャイターンは自信に満ちた声でそう言った。
「私の名はメフメット」
「はい」
「かってキリスト教徒達の都を陥落させた偉大なる帝王の名だ」
オスマン＝トルコのスルタンメフメット二世である。彼はビザンツ帝国の都コンスタンチノープルを陥落させそこをオスマン帝国の新たな都としたのである。これには他ならぬムハンマドが一つの予言を残していることでも知られている。
「キリスト教徒の偉大な都は一人の預言者の名の男により陥落させられるだろう」
と。そしてメフメットこそがそうだったのである。
そしてシャイターンの名はその英雄の名であった。それが彼の野心を決定付けているといっても過言ではない。
「私以外にこのサハラを統一できる者はいるか」
「いえ」
「私の名がそれを教えている。だがそれだけではない」
彼は遥かな銀河を見据えていた。
「私のこの力。アッラーより授けられたこの力もまたその証なのだ」
彼は自身の能力にも絶対の自信を持っていたのだ。
「アッラーは全てを司っておられる」
「はい」
唯一の神にして絶対の存在、それこそがアッラーなのである。
「そのアッラーは私にイスラムの民を一つにする運命を委ねられた。

そしてシャイターン家に」
「そう。全ては閣下の御手の中に」
「兄上の下に」
「それが達成される日は近い。アブーにハラーイブよ」
「ハッ」
二人はシャイターンに対して頭を垂れた。
「その為にはそなた等の力も必要だ。頼むぞ」
「ハッ」
そして敬礼した。彼等はその星の大海を順調に一つずつ自分達のものとしていった。無人の野を阻む者は結局いそうにもなかった。

## 第十部第四章　観客達の舞踏その四

これに対してハサンもオムダーマンも傍観しているだけであった。それには事情があった。

オムダーマンには彼等との条約があった。それを見越したシャイターンの外交的勝利といえた。馬上からだけでは天下を手に入れることはできはしないのである。

だがそれだけではなかった。それはハサンも同じであった。彼等は一つの事情によりティムールに対して手出しができない状況であったのだ。それは一体何であったのだろうか。

それは難民であった。エウロパの侵攻により住む場所を追われたサハラ北方の民達であった。彼等の声がオムダーマンもハサンも縛っていたのである。

「遂に我々は帰ることができるのだ」

「シャイターンこそがその救世主だ」

皆シャイターンの行動を絶賛していた。そしてそれは難民達だけではなかったのである。

ハサンにいる者達もオムダーマンの者達もシャイターンの北方解放を熱狂的に指示していた。失地回復、それがもたらす名声は計り知れないものであったのだ。

「これがシャイターンの狙いか」

アッディーンは副大統領の執務室でニュースを聞きながらそう呟いた。そのニュースキャスターの声もうわずっていた。シャイターンの人気は最早サハラ全土に及んでいた。

「まるで英雄だな」

「そうですね」

部屋にいたガルシャースプがそれに頷いた。

「我々にとってもエウロパは不倶戴天の敵ですから」

「うむ」

「彼等を倒した者が英雄なのは十字軍の頃と同じでしょうね」
「だがシャイターンはエウロパを倒したわけではない」
アッディーンはここでは簡潔に事実のみを述べた。
「エウロパは連合との戦いで戦局が悪化した」
「はい」
「それで総督府を放棄し兵と市民を引き揚げた。つまりシャイターンはエウロパに対しては一兵も用いてはいないと思うのだが。違うか」
「その通りです」
ガルシャースプはその言葉に同意した。
「閣下の申される通りですが」
「そうだな。だが彼はエウロパを倒したように言われる。それは何故だ」
「一つは宣伝です」
「宣伝」
「はい。今シャイターン主席は北方の解放を大々的に宣伝しております。マスコミやネットを駆使して」
「そういえばあちこちの掲示板にシャイターン主席を讃える書き込みがあるな」
「はい。その中のある程度はおそらく彼の手の者によるものでしょう」
「工作か」
「まあそういうことになります。ですが見事な宣伝だと思います」
「それは否定しない」
アッディーンはそうしたことは好まないが有効な手段であることは認識していた。宣伝というものは政治にとって極めて重要なものであるのだ。これは今も昔も変わらない。ジュリアス＝シーザーは己の宣伝の為に途方もない借金をした。女性を口説く為や服、本にも使ったがそれ以上に宣伝に金を使っていたのだ。彼は借金を恐れない特異な思考回路の持ち主であったが宣伝の効果は当時のローマ

において誰よりも熟知していたのだ。
　そしてナチスやソ連も。二十世紀の全体主義国家が例え一時期にしろ世界を席巻したのはその宣伝によるところが大きいのもまた事実であった。彼等もまた宣伝の重要性と効果を熟知していたのだ。それを最も理解していたのがゲッペルスであった。文学博士でもある彼はナチスにおいて宣伝相として辣腕を振った。ヒトラーの政策の最大のブレーンの一人として貢献した。ヒトラーという稀に見るカリスマ性と独裁者としての天性の政治センスもあったがそれでも彼の宣伝なくしては彼はあそこまでなれなかっただろうと言われている。天才を支えたのもまた天才であったのだ。彼等が何を為したかは別として。それ程宣伝は重要なものであるのだ。
「シャイターン主席はそうしたことが得意なようだな」
「そのようで」
「あれは彼のブレーンによるものだおるか。それとも彼自身の手によるものだろうか」
「おそらくは主席自身の手によるものだと思います」
「彼の手か」
「はい。こうした政策的なものはかなりの部分が主席のものであるという報告もあります」
「政治的な才能もあるようだな」
「それも天才的な」
「うむ。政戦両略の人物だとは聞いていたが。私の想像以上か」
「だからこそ今彼は英雄となっているのです」
「そうか。ところで」
「はい」
　アッディーンはここで問うてきた。
「先程一つは、と言ったな」
「はい」
「他にもまだあるのか。あれば言ってくれ」
「わかりました」

ガルシャースプはそれを受けて応えた。そして言った。
「シャイターン主席が今英雄となっているもう一つの理由」
「もう一つの理由」
「それは願望です」
「願望！？」
「はい」
ガルシャースプは答えた。
「それが彼を英雄としているのです」
「それは彼自身の願望か」
「いえ」
それには首を横に振った。
「サハラの者達の願望です」
「英雄を望んでいる、ということか」
「その通りです」
それこそが答えであったのだ。
「サハラは長い間分裂しておりました」
「うむ」
「アラブの頃から。そしてエウロパの侵略もありました」
「それが大きいか」
「ですね。十字軍の頃と同じです。我々は今三度目の苦難の時代にあると言われておりました」
「一度目は十字軍の時」
「はい」
「そしてオスマン＝トルコが衰え彼等の勢力圏に組み入れられた時」
「はい」
「そして今か。どれもエウロパの者達の手によるものだった」
「アメリカの介入があった時代もありましたが。しかし我等の敵はそれ以上にエウロパでした」
「モンゴル以上にな」
中国もロシアもイスラエルも敵であった時代があった。アラブは

二十世紀もそれ以後も長きに渡って戦乱の中にあったのだ。そしてそれが今のサハラを作るもととなっているのだ。彼等にとって戦乱とは切っても切れないものであった。それを止めるのは誰にもできないと思われていた。
「そうした時に人は頼られるものを望みます」
「それが英雄か」
「そうです。そしてシャイターン主席こそがそうなのです」
「少なくともそう思われている」
「既にサラディンやバイバルスと比較される程に。ですが私は彼には異質なものを感じます」
「英雄と呼ぶにはか？」
「はい。閣下は何度かシャイターン主席と御会いしましたね」
「ああ」
サラーフとの戦いの時とこの前の婚姻の時であった。今やシャイターンはアッディーンにとって義理の兄にあたるのである。複雑といえば複雑な関係であった。
「どういった印象を受けられましたか」
「そうだな」
そう問われて暫く考え込んだ。それから答えた。
「一言で言うと鋭いな」
「鋭いですか」
「それに相手を魅了するカリスマ性を持っている。一目見ただけで優れた人物であるのがわかる。そうした者だったな。だが」
「だが！？」
「陰がある。その陰が妙に気になる」」
「陰、ですか」
「そうだ。それは目の光にも見える。あの目の光は何か妖しいものを感じるのだ」
「それこそが異質なものです」
そこで彼はそう述べた。

## 第十部第四章　観客達の舞踏その五

「異質なもの」
「シャイターン主席は猛禽に近いと思います」
「猛禽か」
「そう。獲物を遠くから狙う。そして奸智も持っております」
「油断ならないということか」
「少なくとも彼は獅子ではないです」
「だから猛禽か」
「はい。彼はおそらく北方だけを狙ってはいないでしょう」
「より大きいものか」
「私の予想が正しいならば」
その声が硬くなっていた。
「彼はサハラを狙っています」
「サハラを」
「今まで誰もなし得なかったサハラの統一」
「それを考えているというのか」
「当然その中にはこのオムダーマンのことも入っております」
「当然だろうな」
それはもう言うまでもないことであった。
「彼がサハラを手に入れることを願うのならばな。では私と妻の結婚はその為の布石だったというのか」
「おそらくは」
彼はそれにも答えた。
「それならば納得がいきます。政略結婚だったのです」
「薄々はそうだと思っていたが」
サハラにおいては婚姻は家と家の結びつきを強めるという意味合いが強い。これは何処でも婚姻というものに見られるものであるがサハラにおいてはとりわけそうした意味合いが強いのである。

「私はしがない公務員の家の出だ」
「はい」
「だがシャイターン家は違う。代々宗派の指導者を務めてきた。家柄も富も我々とはまるで違っている」
「やはりそれについて不思議に思われましたか」
「というよりは誰でもそう思うのではないのか」
「ですね」
これは彼も同じであった。
「シャイターン家はそうした婚姻政策も得意ですから」
「彼自身がそうしているしな」
「はい」
彼とハルーク家の未亡人との結婚について言っているのである。ムスリムは四人まで妻を持つことができる。それを有効に活用してもいた。そして彼の非凡なところはその妻達を公平に愛さなければならないというコーランの教えを忠実に守っていることであった。彼はそうしたことにおいても非凡であったのだ。
「これも政略としては妥当なものか」
「ええ。かってハプスブルク家が得意としたやり方です。非常に有効なものです」
「そうだな」
「ですが彼は他のことも考えていると思います」
「それは何だ」
「剣です」
彼はまた硬い言葉を口にした。
「剣」
「はい。彼は我々とも戦うことを念頭に入れていると思われます」
「そうか」
アッディーンはそれを聞いて顎に手を当てた。考える姿勢であった。
「そうしたことも考えているか。彼らしいな」

「そう思われますか」
「ああ。というよりは常識だろう」
「ええ、まあ」
ガルシャースプはそれに答えた。
「あらゆるケースを考えておくのが政治ですから。最悪のケースはとりわけ」
「そうだな」
「彼は軍人である以前に政治家です。この程度のことはもう考えているでしょう」
「その場合我々とハサン、どちらを先に攻めると思うか」
「ハサンでしょう」
ガルシャースプの見解はそれであった。
「ハサンか」
「はい。ハサンは彼等にとって非常に攻め易い場所にあります。国境も接しておりますし」
「それも南北に長く、な」
「そのうえハサンは兵をティムールにだけ回せばいいのではありません。我々にも回さなければなりません。連合は大丈夫なようですが」
ハサンは広大な勢力を誇っている。サハラ随一である。だがそれだけに国境も長いのだ。東には連合が、南にはオムダーマンが、そして北西にはそのティムールが控えているのである。
「我々にもか」
アッディーンはそれを聞いて目を光らせた。
「確かにな。今我々は西方と南方を押さえている」
「はい」
その殆どが彼の手によるものであった。西方の一国に過ぎなかったこの国をサハラ屈指の大国にしたのは彼が戦いで勝利を収め続けてきたことが大きいのである。オムダーマンにおいて彼は英雄であった。彼もまたサハラにおいて英雄の一人とされているのである。

「だからこそ彼等も警戒しているのか」
「サハラの歴史は戦争の歴史です」
ガルシャースプはまた言った。
「今まで無数の戦いがありました。そして多くの国家が滅んでいきました」
地球にいた頃からそれは変わらない。アッラーの民は長い間戦いの中にあった。連合が正規の戦争はエウロパとの戦争まで絶えてなかったのに対して彼等は今まで戦乱の中に身を置いていたのである。ガルシャースプはそれについて言及したのであった。
「同盟を結んでいても戦争がありました。それも日常的に」
裏切りもまた多かった。戦国の常であった。
「ましてやそれもないとなると。警戒するのも当然でしょう」
「我々も南方に攻め込んだしな」
「はい」

## 第十部第四章　観客達の舞踏その六

オムダーマンは南方の各国とは条約や同盟を結んではいなかった。そうだからこそ彼等は南方に攻め込むことができたのである。
「ハサンもまた同じです。彼等はそれを警戒しているのです」
「おそらくいずれは戦うことになるだろう」
アッディーンの見解はそれであった。
「それは貴官も同じではないのか」
「否定はしません」
「やはりな。だが一つ問題がある」
「それは」
「連合だ」
それを言うアッディーンの目の色が変わった。警戒するものとなった。
「連合」
「そうだ。ハサンは彼等と同盟を結んでいるな」
「はい」
「それが問題だ。これは影響があるのではないのか」
「そうですね」
ガルシャースプは考え込んだ後でそれに対して答えた。
「ただ、彼等はサハラに対してはこれといって関心はありません」
「それはわかっているが」
「エウロパとの戦いは諜報員の問題と今までの対立がありました。いずれは起こったことでしょう」
「起こるべくして起こったことだというのか」
「はい。少なくとも私はそう思います」
「では我々とはどうなのだ」
「彼等はサハラに対しては長い間無関心でした」
連合は建国以来サハラに対しては我関せず、という態度であった。

移住者は拒むことはなかったが彼等の抗争や対立には始終無関心、不介入であった。彼等にとってサハラとはまさに化外の地でありどうでもいい場所であったのだ。ただ境だけはしっかりとさせ、そこに関する条約だけは歴代の国境を隣接する国と結んでいた。彼等にとってはサハラの者が攻め込んでこなければいいだけであった。そうした存在でしかなかったのである。各国と条約や通商はあっても平和的なものであった。やはり関心の沸かない対象であったのだ。

「今も基本的にそれは変わりません」

「そうなのか」

「少なくともハサンとの間で何があっても彼等は中立を守るでしょう。ハサンも彼等の兵を入れるような条約は結んではいない筈です」

「国境に関する条約だけか」

「でしょうね。そして連合もそれを守るでしょう」

「我々かティムールと国境を接した場合は我々と条約を結ぶ」

「所詮それだけです。今のところはね」

「今のところ！？」

アッディーンはその言葉に疑念を覚えた。

「今後はどうなるか全くわかりません」

「そうだな」

それがわからぬアッディーンではなかった。

「しかしだ」

それでも彼は言った。

「彼等が我々に関心を持つ要素は今のところはないが。我々は少なくとも彼等には特に悪感情はない。それは向こうも同じだろう」

「歴史においてはかってはありましたがね」

「それはそれ、これはこれだ」

アッディーンはそれについてはそう述べた。

アメリカは二十一世紀にイスラム原理主義者と泥沼の戦いを繰り広げた。中国は唐代に衝突し、アメリカと同じく二十一世紀に原理主義者達とウイグルを巡って全面衝突があった。これによりそれま

で東を向いていた中国の対外政策が一変し、政権交代とウイグルの独立が起こった。それでも戦いは終わらず二十一世紀における中国のアキレス腱となっていた。
これはアメリカも同じでこの二国はその世紀は始終イスラム教徒と衝突していた。アメリカはニューヨークだけでなく他の都市までテロ攻撃を受けてもいた。なおこの際チベットとウイグルが独立している。チベット教国とウイグル回教共和国の二国である。この二国は今も連合の構成国となっている。
　ロシアも同じであった。彼等はチェチェンで衝突した。彼等もまた原理主義者と戦いを行っていた。トルコはイスラム教国であるが原理主義者達から目をつけられやはりテロに手を焼いた。そして東南アジア各国もそうであった。インドネシアやマレーシアといったイスラム教国ですら例外ではなかった。日本も標的にされいた。イスラエルは言うに及ばず。連合の構成国の多くがイスラム原理主義者達と対立した過去があり。だがこれはもう歴史の遥かな過去の話であった。
「今更彼等にそれを言っても仕方あるまい」
「はい」
「原理主義者なぞ過去の話だ。今そのような者達はいない」
　多少はいるがごく少数であるのが事実だ。彼等は少数で世捨て人として暮らしている場合が多い。そして独自でイスラムの教えを守り、学んでいるのである。
「それは彼等とて同じだろう」
「イスラエルはどうかわかりませんが」
「彼等でもだ」
　イスラエルはユダヤ教徒の国である。ユダヤ人達の歴史に対する考えの長さは尋常なものではない。彼等は今も旧約聖書の原罪と迫害、そして苦難の歴史を歩んでいると考えているのだ。その中にはイスラム教徒との戦いもあった。
「彼等とて我々にはもう何も言ってはきていないではないか」

「彼等も忙しいですからな」
「うむ」
　連合におけるイスラエルの位置は特殊なものであった。人口こそ少ないがそのユダヤ人脈と金脈はまだ健在であった。それどころか連合においては一千年以上昔より遥かにそれが確固たるものとなっていた。日米中露ＡＳＥＡＮ豪州中南米アフリカ諸国に新興諸国家との間でいずれにも与さず時と場合によって的確に動く。そして問題を処理していく。連合の陰の実力者とも言うべき国であるのだ。日本も米国も中国も露国も彼等の意向を無視はできなかった。連合は大国の力が強いのが現実だがその大国の力のみで動いているわけではないのだ。連合はそれ程単純な勢力ではない。こうしたバランサーの存在もあるのである。連合軍設立もエウロパとの宣戦布告も難民への対応も彼等の存在と発言が影響しているのは事実である。だがそれはあまり表には出ないだけである。だからこそイスラエルは無気味な国家であった。少なくとも連合においてはそうであった。アッディーン達もそれは知っている。
「人間というものは近くのことに目がいくものです。そういうふうに作られているのでしょう」
「アッラーによってな。所詮我々は人間に過ぎない」
「はい」
「人間の力なぞ限られたものだな」
「ですからこそ側にあるものしか見えないのです」
「だがアッラーは違う」
「その通りです」
「全てのものを御覧になられる。だからこそアッラーは偉大なのだ」
「しかし人間もまた近くだけを見ていいものではありません」
「ああ」
「閣下は連合という勢力についてはどう御考えですか」
「連合についてか」
「はい」

ガルシャースプはここで質問を変えてきた。連合について問うてきたのだ。

## 第十部第四章　観客達の舞踏その七

「そうだな」
彼はまた考えはじめた。
「私の印象では豊かな勢力だな」
「豊かですか」
「そうだ。三兆の人口だけではない。その力は絶大なものがある」
「そうですね。市民の生活も派手で活力があるものです」
連合においては派手なことが好まれる風潮がある。そして活力が重要視される。だがそうでなくともよい。多様性もまたそうした活力と同時に重要視されている。それが彼等を支えているのだ。言い方を変えると多様な生活や生き方が許される程豊かな社会であるということだ。
「我々ではああはいかない。軍の食事一つをとっても」
「はい」
オムダーマンにしろ将兵の食事は質素なものである。サハラの多くの国もまた将校と兵士は同じものを食べている。だがその食べられているものが連合とサハラ各国では決定的に違うのである。
サハラ各国の軍での食事は質素なものである。量は多いがメニュー等は少ない。味よりも栄養価を考慮して作られている。だが連合ではメニューは実に多い。そして味についてもうるさい。これは志願制であるが故の人気取りの一環でもあるがここにも連合の豊かさが出ていた。
「彼等はそれこそ何でも食べられるそうだな」
「はい」
「そうしたところにも違いが多く出ているな」
「仰る通りです」
ガルシャースプはそれに同意した。
「我々は彼等程豊かではありません。それは事実です」

「うむ」
「しかしそれでも彼等にはなく、我々にはあるものもあります」
「そのようなものがあるだろうか」
アッディーンの声に疑問の色が漂った。
「彼等の勢力圏は広大だ。そして何でもあるが」
「今のところは」
「またそれか」
「はい。全ては現時点では、です。我々がわかるのは過去と現在だけです」
「その二つですら完全に把握できているとは言い難いな」
「ええ。そして未来のことはアッラー以外にわかりません」
「今更言うまでもないことだと思うが」
「そうですね。ですが彼等が欲するようなものがこのサハラのみで出たならばどうなります？かっての石油のように」
「石油か」
アッディーンの眉が少し歪んだ。かって人間達は火に点けると燃えるこの不思議な水を巡って果てしない戦いを続けた。そしてそれがアラブで多量に眠っていた為それを巡って大国が介入を続けてきた。イスラム原理主義者の行動もこれに原因の一つがある程だ。
「言うまでもないな」
「その通りです」
「だが連合はそれ程好戦的な勢力ではないと思うが」
「どうしてそう言えるのですか？」
「これもまた歴史からだ」
アッディーンの答えはそうであった。
「連合は今のエウロパとの戦いまで建国以来内外で干戈を交えたことはない」
「はい」
「好戦的とは言えないと思うが。刑罰は酸鼻を極めるがこれは我々と彼等の刑罰の認識への差だ。それとこれとは別だと思う」

サハラ各国ではコーランに基づく刑罰である。連合各国のように凶悪犯に対する報復、みせしめ、劫罰としての刑罰ではないのである。
「ですね。それは彼等が今まで戦う必要がなかったからです」
「そうなのか」
「彼等が好戦的でないのは望んだものが得られるからです」
「何でもか」
「今までは。彼等は土地も資源も食糧も開拓すれば無限に手に入れることができます」
「そうだな。我々はそれがあっても今は開拓どころではない。エウロパはそれすらない」
「だからこそ彼等は攻め込んできたのですから」
人間は必要にかられて行動する。エウロパにとってはサハラ侵攻は必然であった。それだけである。それがサハラにとっては災厄であったとしてもだ。
「ものがあればそれでいい。人間というものはすべからく食べられないと生きてはいけない」
「それは何時まで経っても変わりませんね。食べ、生きる為には何かをしなければならないのです」
「戦争になろうともな」
それが戦争が起こる要因の一つなのである。人間とは決して好戦的な生き物ではない。宇宙にいる他の生き物とさして変わりはしない。ただ自分が生きたいだけである。だからこそ戦争を行うのだ。全ては生きる為に。連合とエウロパの戦いもおおまかに言えばそうなる。連合は自分達の安全を守る為にエウロパに宣戦を布告した。諜報員の害を取り除く為に。それが彼等の戦いであった。
「人間というものは因果なものだ。生きる為に戦わなくてはならない」
「戦いにはもう一つありますが」
「ジハードか」

「はい」
　言わずと知れた聖戦である。イスラム教徒達にとって戦い、イスラムに命を捧げる戦い程尊いものはない。これはこの時代においても同じである。戦死した者は天国へと行くことができる。それも確実にだ。人が天国へ行くか地獄へ行くかはアッラーのみが決めることだが聖戦で死んだ者はアッラーに選ばれているからである。今では戦い全てがそう位置づけられている。それがサハラの戦いであった。
「彼等にジハードはないようですが」
「エウロパは高貴なる者の義務と考えているようだがな」
　あくまで貴族達の考えではあるが。
「所詮は職業としての軍人か」
「はい」
「まず命が大事だ。そうした考えで本当に戦いができるのか」
「少なくとも今は戦っておりますが」
「できるだけ損害を出さないようにな。正規軍の戦死者は極端に少ないようだな」
「ええ」
「それに対してサハラ義勇軍はどうだ」
「やはりその損害は正規軍のそれと比して大きいようです」
「だろうな」
　これはアッディーンの予想通りであった。
「彼等は言うならば消耗品だ」
「そうなのでしょうか」
「意地の悪い見方をするとな。正規軍の将兵を消耗するわけにはいくまい。下手な損害はそのまま軍の維持に関わる。それが連合軍なのだろう？」
「ええ、確かに」
「ならばだ。損害を恐れることのない部隊があるなら使う」
「それが彼等ですか」

「正規軍ではないからな。義勇軍だ」
この差は大きかった。
難民達は連合の市民権は持っている。だが難民であることに変わりはない。連合の者ではないのだ。そうだからこそ好きに使えるのだ。こうした部隊は歴史においても多くあった。そして活用されてきているのである。これもまた歴史の事実である。
「先頭に立たせてもいいし危険な戦場に送ってもいい」
「ですが彼等は奮戦しております。おそらくエウロパとの戦いも彼等なくしてはここまで連合にとって有利には進まなかったと思われます」
「そうだな。彼等なくして連合軍の今はない」
アッディーンの見方は冷徹なものであった。

## 第十部第四章　観客達の舞踏その八

「しかしだ」
「しかし」
「問題はこの後だな。義勇軍は」
「といいますと」
「彼等は今後どうなるのだ。サハラに帰るのか」
「そういう者もいるでしょう」
ガルシャースプはそう答えた。
「何しろサハラは彼等にとって故郷です。帰ることができるのならば帰るでしょう」
「そうだな。では義勇軍は解散か。だがそうはならないな」
「連合に残る者も出ると」
「そうした者もいる。彼等はそのまま連合に入るのか。どういう形で」
「そこまでは何とも」
彼もそこまでは答えることができなかった。思わず首を捻った。
「彼等で国を作るのならともかく」
「それだ」
アッディーンは国という言葉にすぐに反応した。
「国！？」
「そうだ。彼等が国を作ったらどうなるか。連合に新国家を」
「兵士としてですか」
「連合には多くの国家があるな」
「はい」
連合の構成国は三〇〇に及ぶ。その内実は多種多彩であり多くの国家が存在する。その産業もまた多岐に渡る。これもまた連合の多様性であった。
「そうした国家が一つあっても面白いな」

「兵士による国家ですか」
「傭兵だな、所謂」
「ふうむ」
ガルシャースプはそれを聞いて考え込んだ。
「確かに連合には多くの国家がありますが」
「うむ」
「そうした国家はありませんね」
元々軍に対してあまり関心のない勢力である。それも当然と言えた。
「ですがそうした国が一つあっても面白いですね」
「問題は連合がそうした国を受け入れるかだ」
「兵士による国家をですか」
「そうだ。確かに連合は多様だ。だが相容れないものもある」
エウロパの貴族主義もその一つである。これは彼等にとっては理解不能なものである。連合は階級社会を否定している。国家元首としての君主は存在していてもだ。連合の教育ではエウロパの貴族制は忌むべきものとして教えられているのである。
「兵士による国家もそうではないだろうか」
「それも彼等は元々異邦人ですし」
「異邦人はどの社会においても阻害されやすい」
これもまた事実であった。カミュという作家がいた。彼はユダヤ人であった。ユダヤ人は欧州の社会において異邦人であった。それ故に様々な迫害を受けてきた。そしてそれが彼の代表作である『変身』を書かせた。この一見すると奇怪な作品は彼がユダヤ人であるが故に書くことができた作品と言えよう。異邦人はそうした特殊な存在なのである。ワーグナーの楽劇に登場するヘルデン＝テノール然り。彼等はその作品ごとに異なる人間として登場している。だがヘルデン＝テノールであることとその存在する位置によって彼等は異邦人となっている。異邦人故の主人公であり英雄であるのだ。そして究極的に言うならば彼等は一つの人格であった。それぞれの作

品の中で生き、死んでいくがその人格は一つなのである。英雄、そして異邦人であるのだから。彼等もまた異邦人であるのだ。
「そうならない場合もあるがな」
アッディーンはそれについても言及した。
「迫害されるか、英雄となるかはわからない。だが最初は異邦人であることに変わりはないだろう」
「はい」
「彼等はそれに耐えなければならない。そしてその先にあるものを掴まなければならない」
「連合における位置ですか。生きる為の」
「そうだ。話は戻るな」
「はい」
「生きる為の戦いか。連合に残る者はそれを覚悟しなければならない」
「ジハードになりますか」
「そこまではわからないが。だが彼等にとって苦しい戦いとなる」
アッディーンの目が遠くを見ていた。
「生きる場所を掴む為にな。それを掴めるかどうか」
「それもまたアッラーのみがお知りですね」
「ああ」
アッディーンは頷いた。
「それが我々との戦いにならなければいいがな」
「石油が見つかった時に」
「その時か。彼等の生きる道が確かになるのは」
「サハラに帰るか、連合に入るか」
「辛い選択になるだろうな。願わくば石油がないことを祈るだけだ」
「はい」
これは彼等にとっても問題となることであるのだ。サハラにレアメタルか何かが出るとする。そして連合がそれを欲する。それで戦争になる可能性があるのだ。そうなれば彼等の立場はさらに微妙な

ものとなるのは必定であるからだ。
「しかしそれも全てアッラーが決められることです」
「結局はそうなるか。だが一つ付け加えておくことがあるな」
「それは」
「アッラーは自ら立つ者を天界に選ばれる。そうではないのか」
「ですね」
ガルシャースプも軍人であるそれがわからないわけではなかった。
「それでは我々も自分の道は自分で切り開くとしますか」
「そうだな。では会議の時間になったら行こう。今後のことを話し合う為にな」
「はい」
こうして彼等も彼等の舞台に向かった。俳優達は主な舞台の外においてもそれぞれの役を演じていた。そこにはスポットライトは今はあたってはいない。それでも彼等は自分の役を演じているのであった。

# 第十部第五章　攻勢その一

攻勢

連合軍の中央部における攻勢は熾烈なものであった。そこには連合軍の主力である一四〇〇個艦隊が展開しておりシュヴァルツブルグエウロパ元帥率いるエウロパ軍の主力に対して全面攻撃を仕掛けていたのだ。その火力と物量は最早圧倒的なものであった。

「撃て！」

前面に連合軍の砲艦の一斉射撃が撃ち込まれる。それだけでエウロパ軍の艦艇が薙ぎ払われていく。そして続いてミサイルが襲い掛かる。エウロパ軍の戦力はこの二つの攻撃だけで三割近く失われていた。

続いて戦艦、巡洋艦が出る。主砲の一斉射撃の後で駆逐艦が魚雷を放つ。そして護衛艦の護衛を受けた空母が雪崩れ込む。その時点でエウロパ軍は崩壊してしまっていた。

連合軍の攻撃は一定の法則があった。それを物量で支えているのだ。この物量にエウロパ軍は敗れているといっても過言ではなかったのだ。

「また前線が破られました」

後方基地の一つアルテミスにシュヴァルツブルグはいた。そしてそこで報告を受けていた。

アルテミスはアルテミス星系にある。エウロパ軍の後方基地の一つでありモンサルヴァートが整理した基地の一つである。きたるべき連合との戦いに備えて整備していたのだ。それが今役に立っているのだ。

「そうか」

シュヴァルツブルグは沈痛な顔でその報告を聞いていた。

「物量の差がものと言っているな」

「確かに」

報告をした参謀がそれに応えた。
「彼等の戦力は巨大です」
「一四〇〇個艦隊だ。それだけで我が軍の最盛期の三倍近くだ」
「そして今我が軍は消耗しております」
ニーベルング要塞群での攻防以後エウロパ軍は敗北を重ねていた。それにより彼等はその数を大きく減らしていた。今ではようやく四三〇あるといったところであった。
そのうちわけは南方に百、北方に五〇であった。そしてオリンポスに予備戦力として三〇。この中央部には二五十程があった。これがエウロパ軍の全戦力であった。
全ての戦域で連合軍と比して圧倒的な差があった。地の利もこの物量の前には効果がないようであった。彼等は戦う度に敗戦を重ねるといった形であった。そしてそれはこの中央部でも同じであった。
シュヴァルツブルグの下にある中央方面軍は連合軍の攻勢の前に敗戦と退却を続けていた。そして今また戦線が破られたとの報告が入ったのであった。
「我が軍の損害は」
シュヴァルツブルグはまた問うた。
「一体どの程度だ」
「何とか艦隊の全滅は防ぎました。そして戦線にいた全戦力の撤退を成功させました」
「そうか、それは何よりだ」
不幸中の幸いと言えることであった。だがそれで笑えない程今の彼等の置かれた状況は危機的なものであった。そしてそれはこのシュヴァルツブルグが最もよくわかっていることであった。
「敵の損害はまた微々たるものだな」
「はい」
この報告はエウロパ軍ではありきたりのものとなっていた。
「おそらく参加兵力の一パーセントもないものかと思います」
「またか」

「そしてその損害の殆どが義勇軍です。いつも通りです」
「そして我等の損害は彼等のそれと比べて天と地程の差がある。それもいつも通りだ」
「残念ながら」
「そのいつも通りの戦いにより我々は多くの戦線を破られてきた。そして今もだ」
「どうすべきでしょうか」
「一つしかない」
シュヴァルツブルグの言葉は沈痛なものであった。
「勝利を収めるしかない。それだけだ」
「ですね」
それは参謀も同じ考えであった。だがその手段が見当たらない。だがシュヴァルツブルグはここで言った。
「各騎士団は今どうしているか」
「騎士団ですか」
「そうだ」
シュヴァルツブルグの目の光が変わった。強くなった。
「竜騎士団だ。彼等はまだ無事だな」
「はい」
参謀はそれに答えた。
「彼等はよくやってくれております。今回の戦いも敵に包囲されようとしていた友軍を救い出しております」
「有り難いことだ」
「今まで我が軍は敗走を続けながらも捕虜も戦死者もごく僅かで済んでおります。それは彼等の活躍があったからこそです」
「そうだな。中央にいる二五〇の艦隊、そして二億の将兵の救世主だ」
「全くです」
参謀の声も強いものとなった。
「彼等こそ我が軍の切り札です。本当にそう思います」

「そう、切り札だ」
シュヴァルツブルグはここで声も強くさせた。
「君はポーカーをするかね」
そして参謀に対してそう問うてきた。
「ポーカーですか」
「そうだ。やるかね」
「嫌いではありません」
彼はそう答えた。
「少なくともあまり負けた記憶はありません。一晩中やっていたこともあります」
「何だ、それでは好きなのじゃないか」
シュヴァルツブルグはそれを聞いてそう言葉を返した。
「なら話は早い。そのポーカーの切り札だが」
「はい」
「君は一体どういった時に使うかね」
「決まっております」
彼は答えた。
「勝負を決める時です。そこで使わなくてどうするというのですか」
「そうだな」
シュヴァルツブルグはそれを聞いて頷いた。
「では私が言いたいこともわかるだろう」
「はい」
彼も頷いた。
「ではいよいよ彼等を本格的に使われるのですね」
「前線にな。今まではそれ程前線には出していない。予備兵力という扱いだった」
「ですね。確かに」
「しかしこれ以上敗れるわけにはいかない」
それ程までに彼等は追い詰められていたのであった。

## 第十部第五章　攻勢その二

「中央での敗北はエウロパの敗北に等しい」
　エウロパ軍のうちのかなりの数がいると共に中央で敗れるとそのまま首都であるオリンポスに向かわれる。そうなれば彼等の敗北は決定的だからだ。そうだからこそ軍務大臣である彼自身が指揮を執っているのである。それ程までに重要な戦場であるのだ。
「それだけはならん。今は勝負をかける時なのだ」
「それでは」
「すぐに各騎士団の騎士団長達を集めよ」
　シュヴァルツブルグはそう指示を出した。こうして各竜騎士団の団長達がシュヴァルツブルグのもとに召集されたのであった。
　この竜騎士団はそれぞれ五個艦隊から成る。元帥の階級にある者がその指揮にあたっている。この名の由来はエウロパのラドン星系に生息する竜達にある。この竜は中世の騎士物語に登場するように長い首と翼を持っている巨大な生き物である。だがあのように凶暴なものではなく大人しく知能が高い。エウロパでは人気の高い生物の一つである。なお連合にも生息している。エウロパではラドン星系にしかいない。
　この竜の特徴は鱗の色が種類によって異なっているということである。赤いものもいれば青、黄色、緑、紫、黒、白、赤銅、灰、青銅、真鍮、銀、金、白金とある。物語のように炎等は吐かないがその力は強大である。だからこそ騎士団の名に冠されたのである。
　それぞれの騎士団を名のある者達が指揮している。それはこのような状況になっている。

赤騎士団　　リチャード＝オーティス元帥
青騎士団　　シャルル＝モンフェラート元帥
黄騎士団　　エリオット＝スチュワート元帥

緑騎士団　ロドリーゴ＝アビラ元帥、
紫騎士団　グラド＝プロエシュチ元帥
黒騎士団　ルードヴィッヒ＝シュヴァイク元帥
白騎士団　グスタフ＝ゼーダーシュトレーム元帥
灰騎士団　ヨーツン＝テールベルク元帥
青銅騎士団　チャールズ＝プール元帥
赤銅騎士団　フリッツ＝エルハルト元帥
真鍮騎士団　ジル＝アシャン元帥
銀騎士団　カルロ＝タファリア元帥
金騎士団　エルナーニ＝コレッリ元帥
白金騎士団　ヨセフ＝ダム元帥

以上となっている。いずれも歴戦の勇者達である。彼等がエウロパ軍の精鋭部隊の指揮官であるのだ。その艦艇はそれぞれの色で塗装されている。そして今アルテミスにその様々な色の艦艇が降り立っていた。そして港に整列している。見事な光景であった。

壮麗な軍服に身を包んだ男達がその艦艇の中から出て来た。そして将兵の出迎えを受ける。

「お待ちしておりました」

「うむ」

赤い艦から降り立った男が出迎えの将兵達に対して返礼をする。彼がオーティス元帥である。

「そちらこそな出迎え御苦労である」

「はい」

「そして閣下は何処におられるか」

彼は先頭にいるマントを羽織った男に対して問うた。それから彼もまた軍の高級士官であることがわかる。エウロパにおいてマントの着用は将官のみに許されている。見ればそれは黒い。大将のマントであった。

「既に会議室におられます」

「そうか」
オーティスはそれを聞いて頷いた。
「では我々も行こう。道案内を頼む」
「それは私が」
若い将校が前に出る。中尉の階級章を身に着けている。その若さから彼が貴族にあることがわかる。エウロパにおいては若い将校の殆どが貴族出身なのである。これも爵位が関係しているのは言うまでもない。
「では頼むぞ」
「はい」
見ればそれぞれの元帥達にそれぞれ案内役がついていた。彼等はその案内について港を出た。そしてシュヴァルツブルグが待つ会議室に向かうのであった。
車に乗る。彼等の隣に案内役が座る形となった。その中の一台のことである。
「君は軍に入ってどれ程経つか」
「私ですか」
案内役がそれを聞いて驚いた声をあげた。問うたのはエルフルトであった。赤銅騎士団長である。
「そうだ」
エルフルトは鋭い目を案内役に向けながら答えた。見ればその案内役は女性であった。まだ若い。二十代前半といったところだろうか。蜂蜜色の髪に青灰色の目をしている。
「見たところまだ日が浅いようだが」
「はい」
彼女はそれを受けて答えた。
「まだ三ヶ月です」
「そうか」
エルフルトはそれを聞いてまた頷いた。
「見たところ正規の軍人ではないな」

「はい」
彼女はそれに答えた。
「志願しました。エウロパの危機ですので」
「危機にか。エウロパの貴族としての義務だな」
「はい」
彼女はまた答えた。
「私も父からそう教えられてきました。そして戦場に向かおうと決意しました」
「女だというのにか」
「御言葉ですが」
だがその案内役はエルフルトのその言葉にキッとなった。
「閣下、女といえど今では銃を手にすることができます」
「ほう」
それを聞いたエルフルトが面白そうに笑った。
「昔もそうでした。ジャンヌ＝ダルクも。そしてカテリーナ＝スフォルツァも」
「ジャンヌ＝ダルクはわかるがな」
彼はそれを聞いてそう言葉を返した。言うまでもなく百年戦争の英雄である。神の使徒の声を聞きフランスを救う為に立ち上がったとされるオルレアンの少女である。かってはただの農民の少女だと言われていたが後の研究でかなり裕福な家に生まれたと結論付けられている。王族のご落胤ではないかという説もある。そして火刑に処されたとされているが生きていたという話もある。この時代でも伝説の中の人物であった。
「カテリーナ＝スフォルツァが出るとはな」
ルネサンスの女傑である。傭兵を生業としてきたスフォルツァ家の女であり領主であった。そして軍人であった。敵に対して臆することなく子供を人質にとられ脅迫された時にこう言い返した。
「馬鹿者共が！子供なぞこれで何人でも産めるということを知らないのか！」

この時カテリーナは城壁の上にいた。そしてスカートをめくり上げてこう言ったのだ。なお彼女は美貌でも知られていたがその美貌の女領主がそこいらの下品な娼婦が酒場ですら言わないような言葉を口にしたのだ。これには敵も唖然としたと言われている。なお人質になっていた子供達は何とか釈放された。カテリーナはこの時は勝ったのである。そう、この時は。

彼女の戦いは続いた。この時代のイタリアは多くの国家に分裂していた。そしてこの半島を統一せんとする男が現われた。それがチェーザレ＝ボルジアであったのだ。

最初チェーザレは平和的な手段で彼女の領土を手に入れようとした。だがカテリーナはそれを拒絶した。欲しければ剣によって取れ、ということである。

こうして両者の戦いははじまった。だが多勢に無勢であった。善戦空しく彼女は捉えられた。それより前にチェーザレは傭兵隊長達にこう言っている。

「見ていたまえ、伯爵夫人は火曜日には私のものだ」

彼女は伯爵夫人であったのだ。そしてその言葉通りか彼女はチェーザレに捉えられた。だがルネサンスの闇の貴公子を向こうに回して果敢に戦ったことにより彼女の名は歴史に残った。彼女は今その名を口にしたのであった。

「これは面白い」

「そうでしょうか」

だが彼女はそれを不思議としなかった。

「私の家は代々軍人なのです。不思議ではないと思いますが」

「それでは卿の家は女でも戦場に立つのか」

「はい」

毅然としてそう答えた。

「それが我が家の家訓ですから。戦争にならなくとも大学を出たならば軍に入るつもりでした」

「そうか」

エルハルトはそれを聞いたまた頷いた。
「それでは一つ聞きたい」
「はい」
「卿の家は何処か」
彼の問いはそれであった。
「よかったら教えてくれまいか」
「わかりました」
彼女はそれを受けて名乗りはじめた。

## 第十部第五章　攻勢その三

「私の名はエヴァ＝プロコフィエフと申します」
「エヴァ＝プロコフィエフ」
「はい、それが何か」
「もしかするとだ」
彼はその名を受けてあらためて問うた。
「君はあのプロコフィエフ参謀総長の縁者なのか」
「参謀総長は私の姉にあたります」
エヴァはそれに対しそう答えた。
「そうか、妹君だったか」
「姉は士官学校に進みましたが私は法学部に進みました」
「そうだったのか」
「裁判官になるつもりでした。ですが戦争がはじまってしまい」
「軍に入ったというわけだな」
「はい。ですが戦争が終わり生きていたならば学校に戻るつもりです」
「裁判官になる為だな」
「ええ。裁判官は子供の頃からの夢でしたから」
「裁判官か」
エルハルトはそれを聞いて考え込んだ。
「何故裁判官なのだね」
「私の母の家は裁判官の家でした」
「ほう」
「既に後を継ぐ者がおりますが。ですが私もなりたいと思ったのです」
「それでいいのかね」
「何がでしょうか」
「いや」

エルハルトは問われてあらためて答えた。
「プロコフィエフ家は武門の家だ」
「はい」
「それも代々連なるな。そこで卿が裁判官になっていいのかね」
「既に両親、そして母の実家とも話はしております」
エヴァはすぐにそう返した。
「もうか」
「ですから問題はありません。私は気兼ねなく裁判官になれるのです」
「だが」
これは言葉には出さなかった。エルハルトの心の中だけの言葉だ。彼はふと疑問に思ったのである。
「何故こんなに裁判官になりたいのだろう」
それも聞こうと思ったが止めた。そこまで聞くのはどうかと思ったからである。彼はそれ以上それについて聞こうとはしなかった。
「それではだ」
「はい」
彼は話題を変えることにした。
「閣下はお元気か」
「シュヴァルツブルグ閣下ですね」
「そうだ。今のところ戦局は芳しくはないが。お身体に影響がなければいいが」
「お元気ですよ」
エヴァは淀みのない声を返した。
「色々と考えておられるようですが」
「だろうな」
これはわかる。彼も同じだからだ。今の戦局はエウロパにとって思わしくないのは誰でも知っていることであるからだ。
「だが何とかしなくてはならないのだ。その為に我等は呼ばれた」
「はい」

「卿の力も借りることになるぞ。この戦いは敗れるわけにはいかない。もし敗れれば」
その顔に陰が差した。
「わかるな」
「ええ」
エヴァの顔にも陰が差した。彼女にもそれはわかった。
「何としても。その為に来られたのですから」
「うむ」
エルハルトは陰を消し今度は引き締めさせた。そして車は進んだ。
車は壮麗な宮殿に向かっていた。青い、まるで海の様な色の宮殿であった。
これはこのアルテミスの宮殿である。ギリシアの薬の神キルケーの神殿でもある。このキルケーという神はティターン神族の血を引く神であり魔力を持っている。美しいが邪な心を併せ持つ神である。彼女はポセイドンの下におり海の神の一人となっている。だからこの神殿も青い色をしているのである。
「ポセイドンは宇宙を司ってはいなかったな」
エルハルトはもうすぐ到着するというところでエヴァに対しそう言った。
「そういえばそうですね」
「宇宙は彼の下にはない。かといってゼウスのものでもハーデスのものでもないが」
ゼウスは天の神である。それぞれの星達の天空の神とされている。ハーデスは冥界の神である。彼等はそれぞれの世界を治めている神なのである。だが大地と宇宙は彼等の下にはない。しかし影響を行使することはできる。そう考えられているのである。
「三人の神々の相互の下にあると言えますね」
「そうだな。ポセイドンの加護もあるだろうか」
「それでしたらモンフェラート閣下がお願いするのが一番ですね」

「いや、それは違うな」
エヴァはモンフェラートが青騎士団の団長だからそう述べたのである。だがエルハルトの考えはそれとは異なっていたのである。
「青竜は何処に棲んでいるか知らないのか」
「あ、はい」
エヴァはそれに答えた。
「水辺ではないのですか」
「残念だが違う」
エルハルトはそれに対しそう述べた。
「青竜は砂漠に棲んでいるのだ」
「そうなのですか」
「実は黄竜が水辺に棲んでいる。意外だろう」
「はい」
「これは案外知られていないのだ。だが覚えておいた方がいい」
エルハルトはニヤリと笑ってそう述べた。
「外見だけではそう容易に判断はできないものだからね、世の中は」
「わかりました」
そんな話をしているうちに彼等は宮殿に着いた。そして車から降りる。かなり広い駐車場であった。
そこから宮殿の中に入る。装飾はサファイアやブルーダイアによるものであった。青い世界が全体に拡がっていた。絵画や彫刻も海をモチーフにしたものばかりである。
「これはエーギルですね」
「うむ」
エヴァの問いに対して頷く。エーギルとは北欧神話の海の神である。巨人族の生まれでありアスガルドの神々とは別に暮らしている。巨大な屋敷に住んでいることで知られている。かって北欧では海で死んだ者はその巨大な屋敷に行くとされていた。
「そしてこれがポセイドン」
三叉の矛を持った濃い髭の神の彫刻が立っていた。

「この矛で我等を守ってくれるとよいのですが」
「神々の加護があらんことを、だな」
「ええ」
二人はそんな話をしながら宮殿に向かう。エヴァは絵画や彫刻には詳しくはないが道には詳しかった。エルハルトを的確に案内していく。そして宮殿の奥の一室に辿り着いた。
「こちらです」
「ここに閣下がおられるのだな」
「そうです」
エヴァは頷いた。
「どうぞ。閣下がお待ちです」
「うむ」
左右にいる兵士達により扉が開かれる。彼はゆっくりとその中に入っていった。入りながらエヴァに顔を向けた。
「卿はそこに留まるか」
「はい」
「そうか。では待っていてくれ。だが」
「だが？」
エルハルトはここで言った。
「戦場では敵は待ってはくれないぞ。いいな」
「わかりました」
思わせぶりな言葉が多い。これは彼の騎士団のせいであろうか。赤竜とは竜の中では知能の高い種族とされている。音楽を好むことで知られているのだ。短気だがそうした一面も持っているのである。そうした種族であった。
そしてエルハルトは部屋に入った。既にそこには各騎士団の団長が数人いた。そしてシュバルツブルグもそこにいた。彼等は皆それぞれの椅子に座っていた。そしてエルハルトに目を向けた。
「ようこそ」
「ハッ」

エルハルトはそれを受けて敬礼した。シュヴァルツブルグもそれに応える。
彼も椅子に座した。それからシュヴァルツブルグに顔を向けた。
「お待たせしました」
「いや、いい」
シュヴァルツブルグはそれにはこだわらなかった。
「まだ来ていない者もいるしな」
「そのようですね」
見れば空席がまだある。それはエルハルトにもわかった。
「確か戦死者はいない筈ですが」
「色々とあって遅れているらしい」
それにアシャンが答えた。真鍮騎士団の団長である。
「そうか」
「だがもうすぐ来る」
今度はプールが言った。青銅騎士団団長だ。
「時間だからな」
軍人にとって時間程貴重なものはない。それで全てが決まるからだ。
「そうか」
「そう言っている間に来たぞ」
扉が開いた。そしてマントを羽織った軍人がまた入って来た。
「どうも」
「うむ」
それはダムであった。金騎士団の団長を務めている。
「他の者はどうしているか」
「もうすぐ来ます」
ダムはそれに答えた。
「ですからもう暫くお待ち下さい」
「わかった」
シュヴァルツブルグはそれに頷いた。それから間も無くして数人

入って来た。それで全員であった。
　これで全ての騎士団の団長が揃った。シュヴァルツブルグはそれを受けてあらためて口を開いた。
「今回諸君に集まってもらったのは他でもない」
「はい」
　皆それに頷く。
「この中央部での戦いだ。また戦線が突破された」
「連合軍の攻勢は激しさを増しております」
　白騎士団を率いるゼーダーシュトレームが苦しそうな声でそう述べた。
「その圧倒的な物量を使って。それに対して我々は劣勢に追い込まれております」
「それはわかっている」
　シュヴァルツブルグはその言葉に対して応えた。
「だが何とかしなくてはならないのはわかっているな」
「はい」
　ゼーダーシュトレームだけではなかった。他の者も頷いた。
「エウロパの為に」
「そうだ。卿等にエウロパと一千億の市民がかかっているのだ。だからこそ言おう」
　シュヴァルツブルグの目の色が変わった。そして言った。
「卿等の命、私とヴォータンに預けてくれるか」
「命を」

## 第十部第五章　攻勢その四

「そうだ。アーレスでもアテナでもいい。とにかく預けてくれるか」
「喜んで」
まずは最年長であるラールベルグがそれに応えた。
「我々は戦う為に生きております。ならばこの命」
「喜んで捧げましょう」
今度はモンフェラートが言った。彼は最年少であった。
「我々も」
他の団長達もそれに応えた。
「喜んでこの命捧げましょう」
「わかった。ならば頼む」
「はい」
彼等は皆シュヴァルツブルグの言葉に頷いた。
「ではあらためて言おう。連合に対し反撃に転じる」
「反撃に」
「そうだ。攻撃的防衛というものだ。一度連合に対し攻撃を仕掛けそれからまた防御に入りたい」
彼はそう述べた。
「それに対して卿等の力を借りたいのだ。いいか」
「閣下」
タファリアがそれに問うた。
「一体どのような作戦を御考えですか」
「今連合軍は一斉攻撃に出ているな」
「はい」
今連合軍は一四〇〇個艦隊を以って総攻撃を仕掛けてきている。その攻撃力は圧倒的なものであった。しかも先鋒にサハラ義勇軍を擁している。彼等の力もまた絶大なものがあった。これがさらにエウロパ軍を苦境に立たせていたのだ。

「彼等の攻撃は確かに激しい」
シュヴァルツブルグはそれに対し言及を続けた。
「だが何時かは終わりが来るな。そこを叩く」
「つまり攻勢の終着点を狙うというわけですな」
「そうだ」
今度はコレッリの言葉に頷いた。
「その際攻撃の主力には卿等に務めてもらいたいのだが。いいか」
「勿論です」
スチュワートがそれに頷いた。
「先程申し上げましたね。我等の命は閣下と戦いの神々に捧げたと」
「やってくれるか」
「我等とて軍人です。そして」
ここで皆言葉を揃えた。
「エウロパの騎士です。騎士は忠誠の対象にその命を捧げるものです」
「済まないな」
シュヴァルツブルグはその言葉に心を打たれるのを感じていた。
「この戦い、辛いものだが」
「それは覚悟のうえ」
プロエシュチが言った。
「いえ、覚悟のうちにも入りません」
「我等の力、連合の者達に思う存分見せてやりましょう」
「そしてエウロパから彼等を叩き出しましょう。閣下、是非我等の命、お使い下さい」
「わかった」
シュヴァルツブルグはまた頷いた。そしてそれから言った。
「では行こう。そして勝つ、よいな」
「ハッ」
ここで皆一斉に席を立った。シュヴァルツブルグが音頭をとる。
「戦いの神々よ」

「戦いの神々よ」
シュヴァルツブルグの言葉を騎士団長達が復唱する。
「我等に勝利と栄光を！」
「我等に勝利と栄光を！」
これがエウロパの出撃の際の儀式であった。出撃前にこう叫んで出る。そして戦場に向かうのだ。
様々な色の艦艇が戦場に向かう。その中心にシュヴァルツブルグの旗艦であるワレンシュタインもあった。エウロパ元帥、軍務大臣の乗艦に相応しい見事な艦であった。彼はその艦橋にいた。その脇を幕僚達が固めている。彼等も戦場に赴くいているのであった。

この中部戦線における連合軍の指揮は宇宙艦隊司令長官であるマクレーンが執っていた。そして副司令的位置に参謀総長である劉がいた。連合軍にとってもそれだけ重要な場所であるということであった。その彼等のもとには両軍の動きが逐一報告されていた。今日もまた彼等のもとに戦況が報告されている。
「ふむ」
マクレーンは今日の報告を聞いて一言呻いた。彼の乗艦であるブレスの司令室である。この艦もティアマト級巨大戦艦である。またこの司令室には劉もいた。
「どうしました」
見ればマクレーンは自分の机の上にあるパソコンを覗いていた。そこに送られてくるメールを見ていたのである。劉はその彼に声をかけてきたのだ。
「いえね」
マクレーンはそれを受けて劉に顔を向けてきた。
「エウロパ軍で動きがあったようです。今それを知らせるメールが来ました」
「ほう」
劉もまたそれを聞いて声をあげた。

「また戦線を構築するつもりですかな」
「いえ、そうでもないようです」
マクレーンはそう答えた。
「まあこれを御覧下さい」
「はい」
劉はそれを受けて彼のパソコンを覗き込んだ。アメリカ製のノートパソコンであった。アメリカ製のパソコンは連合においては定評がある。だが細かい部品や日本や台湾、中国等で作られている。連合ではこうしたことは非常によくあることだ。中国の自動車のエンジンがベトナムで作られたものであったりする。彼等は互いに依存しあっている一面も確かにあるのである。これもまた連合である。
「成程」
「どう思われますか」
メールを見終えた劉に対して問う。
「ここはどうすべきか」
「そうですな」
劉はそれを受けて考え込んだ。
「ここは我等も動きますか」
「動くのですか」
「はい」
劉は答えた。
「彼等が動くのならば、です。あの竜騎士団達が出ていますね」
「はい」
「彼等には我々も何かと煮え湯を飲まされていますし」
エウロパ軍にとっての救世主は連合軍にとっては強敵となる。劉もマクレーンも彼等を強敵と認識していた。
「ここで一度叩いておくのもいいですな」
「策がおありですか」
「ないと言えば嘘になります」
劉はニヤリと笑ってそう答えた。

「ここで味方に対して嘘をつく必要性はありません」
「ですね」
アメリカも中国も謀略を得意としているとされている。彼等の謀略にしてやられた国も多い。謀略に不得手とされている日本やロシアを筆頭としてだ。日本は正攻法を好む傾向があり謀略といったものには疎いのである。伊藤はそうでもないようであるが。またロシアは力技を得手としている。無造作に情報を掻き集めるのは得意だが謀略よりも力技を好む。従って彼等にしてやられることも度々なのである。なお米中はこうした謀略により連合各国の間では今一つ信用がない。人間の社会とはそうしたものである。信なくば立たず、である。
「すぐに各地区の司令官達を集めましょう」
連合軍は巨大である。この中央部の戦いにおいては一四〇〇個艦隊を動員している。百個艦隊ごとに戦域を決め作戦行動をとらしている。今そのそれぞれの戦域の司令達を集めようというのだ。
「宜しいでしょうか」
「私に異存はありません」
劉の考えは理解していた。だからこそ言える言葉であった。
「では宜しいですね。早速司令達を招集しましょう」
「はい」
こうして各戦域の司令達が召集された。彼等はそれぞれの巨大戦艦ではなく巡洋艦でやって来た。巨大戦艦は作戦指揮を執るにあたり必要な為そううかうかと動かすことはできないのであった。巨大戦艦はただ戦力としてだけでなく作戦指揮においても重要な役割を果たしているのである。
彼等はブレスの第一会議室に入った。皆戦闘服ではなく軍服に着替えている。黒と金の連合軍の軍服であった。どれも大将の軍服であった。
「大将が雁首揃えてやって来たぜ」
それを見た若い兵士がそれを見てこう呟いた。

「珍しいこともあるもんだ」
「何言ってるんだよ」
それに対して同僚の兵士が言葉を返す。
「この艦には元帥閣下が二人もおられるだろうが。元帥と大将どっちが上なんだよ」
「元帥に決まってるだろ」
若い兵士は同僚の兵士に対してそう答えた。
「今更何言ってるんだ」
「わかってるじゃねえか」
「何がだよ」
「軍隊ってやつがよ。御前は軍に金を貯める為に入ったんだよな」
「ああ」
若い兵士は臆面もなくそう答えた。
「任期制でな。金が貯まったら辞めるさ。それで故郷のマレーシアで貯めた金で車買って事業をはじめるんだ」
「車でね」
「トラックでな。悪かないだろ」
「いいんじゃねえの？御前に向いてる」
見ればその若い兵士は大柄でがっしりとした身体をしていた。それだけ見ればトラックの運転手には向いていた。
「そうかい。じゃあ安心してトラックの兄ちゃんになれるな」
「それかタクシーの運転手か。どっちでもいいな」
「俺はタクシーよりトラックだな」
「おやおや」
「あれは男のロマンだぞ」
「男のロマンは違うだろ」
同僚の兵士は若い兵士に対してそう言った。
「男のロマンは牧場だろうが。でっかい牧場をやるんだよ」
「そういえば御前の家は牧場だったな」
「ああ、アルゼンチンでな」

彼はニヤリと笑ってそう答えた。

## 第十部第五章　攻勢その五

「親父がな、でっかいのを持ってるんだ。そこで牛や羊の相手をする。最高だぜ」
「何でその牧場に行かずにここにいるんだ？矛盾してねえか」
「これはうちの決まりなんだよ」
「決まり？」
「そうさ。牧場をやる前に修業をしろっていうな。それで俺はここに入ったんだ」
「そうだったのか」
「任期が終われば牧場に帰るさ。それで大牧場のオーナーだ」
「いいな」
「アルゼンチンに来たら俺の牧場にも寄ってくれ。でっかいステーキを御馳走するぜ」
「じゃあマレーシアに来たら俺のトラックの横に乗せてやるぜ。楽しみにしてな」
「おう」
　これもまた連合であった。彼等はそれぞれの道で才能を発揮せんとする。そして自分の力で稼ぎ富を築く。そして生きるのであった。
　その若い兵士達が話をしている間に司令達は第一会議室に入った。暫くしてマクレーンと劉が部屋に入って来た。それを受けて司令達は一斉に席を立った。そして敬礼をした。
　マクレーンはそれに対して返礼し一同を座らせた。そして自らも座り会議に入った。
「今回来てもらったのは他でもない」
「はい」
　司令達はそれに頷く。
「先日我々はエウロパ軍の戦線をまた一つ突破した」
　マクレーンはまず先日の戦局について述べた。

「それによりエウロパ軍は後退した。だがその戦力はかなり温存されている」
劉はその話をマクレーンの隣で黙って聞いていた。彼は一言も発しない。
「つまり我々に対してまだ対抗できる戦力が残っているということだ」
「少なくとも我等がそう認識しているということですね」
「うむ」
高い鼻を持つ黒人の大将に対してそう答える。ニカワ＝ザレボという。彼はトーゴ出身である。一つの戦域と百個の艦隊を委ねられている司令の一人であった。
「だからこそ彼等は動いたのだ」
「ほう」
それを聞いてザレボだけでなく他の司令達も眉を動かした。ただ劉だけが表情を変えなかった。
（ふむ）
そんな劉を見て何人かは気付いた。彼には考えがあると。
（ではそれを見せてもらうとするか）
（参謀総長の知略をな）
劉は中国軍にいた頃は切れ者として知られていた。中国軍の至宝とさえ呼ばれいずれは中国軍の制服組のトップである作戦本部長になるとまで言われていた。それ程の人物であった。なおマクレーンはアメリカ軍のホープとされアメリカ軍宇宙艦隊司令長官候補の筆頭であった。彼等はそれぞれの国においても将来を期待される逸材であったのだ。だからこそ八条も彼等を信頼し要職に就けているのである。
「前にな。それについてどう思うか」
だが言うのはマクレーンである。参謀は決して表には出ない。言うのは司令である。彼等はこの役割分担を見事にこなしていた。
「前にですか」

「うむ」
マクレーンは頷いた。
「どうやら我々に対して攻勢に出ようとしているようだ」
「お待ち下さい」
だがそれに異を唱える者が出て来た。マクレーンは彼に顔を向けた。
「貴官か」
「はい」
見れば司令の一人であった。やや褐色のアジア系の南方の肌に黒人の低い鼻にまるっこい顔立ちをしている。だが髪は白く目は黒い。連合ならではの顔の一つであった。彼の名はエルドラ＝ポンス、エクアドル出身であった。
「エウロパ軍が出て来ているのですね」
「そうだが」
「ならば我々は前に出る必要はないのではないですか」
「それは一体何故だ」
マクレーンはあえて問うた。
「ここは守るべきではないでしょうか」
ポンスの返答はそれであった。
「敵が出て来ているのならば守ればよいかと。そしてその数を減らすのです」
「ほう」
「それが常道かと思いますが」
「積極的に打って出るという方法もあるが」
マクレーンの答えはそれであった。
「これについてはどう思うか」
「確かに数において我等は優勢にあります」
ポンスはそう答えた。
「今まで通り攻勢に出たとしても勝利を収められるでしょう」
「うむ」

マクレーンは話を聞きながら当然といった顔をした。
「そうだな」
「ですが損害が無駄に出る怖れがあります。それについてはどう御考えでしょうか」
「このままではそうだな」
マクレーンの答えは今度はいささか他人事であった。
「損害が出るだろう」
「では何故」
「まあ待て」
彼はここでポンスを制止した。
「それは彼等がこのまま前に出た場合だ。だがこのまま前に出ると思うか」
「彼等がですか」
「そうだ。数において大きく劣っているのは彼等が最もよく知っている」
マクレーンはそう語った。
「それで何故今攻勢に出るか。何故だと思う」
「それは」
ポンスはそれを聞いて考え込んだ。
「何かあると考えた方がいいかと」
「そうだな」
マクレーンはまた頷いた。
「彼等がこのまま我々に対し攻勢に出ると思うか」
「いえ」
こにはポンスだけでなく他の者も答えた。
「むざむざ全滅するようなものです。有り得ません」
「そうだな」
これはマクレーンも同じ考えであった。
「では適度なところで退く。そして我々はさらなる攻撃に移る」
「はい」

これは戦の常道であった。最早言うまでもない。
「そのまま攻撃を続ける。だがいずれ攻撃は終わるな」
「はい」
言うまでもない話が続く。司令達はそれをもどかしく感じはじめていた。だがマクレーンは話を続ける。そして劉は沈黙を守っていた。
「その時我々の動きは一瞬だが止まるな。そこだ」
「あっ」
皆それを聞いて一斉に驚きの声をあげた。
「それですか」
「そうだ」
マクレーンが応える。その隣にいる劉の目が光った。
「そこで我々を叩くつもりのようだ。所謂後手打ちだ」
かって第二次世界大戦においてドイツ軍の知将マンシュタインが得意とした作戦である。圧倒的な物量を誇るソ連軍の攻撃に対してまずは退き攻撃の臨界点でこちらの攻撃に転じる。そして相手を叩くという戦術である。
「今の彼等には最適な作戦だな」
「そうですか、後手打ちですか」
それを聞いて一人の赤い髪に褐色の目のアジア系の男が頷いた。ミハエル＝ゴリュチャコワ大将である。リトアニア出身である。
「それならば我等に対して勝利を収められることができますね」
「そうだ」
「その為に精鋭である竜騎士団を前に出したのですか。まさに決戦ですね」
「言い換えると彼等には後がないことになる」
マクレーンはそう述べた。
「違うだろうか」
「そうでしょうね」
これにザレボが答えた。

「だからこそ切り札を使ってきたのです。切り札はとっておきの場で使うもの」
「ポーカーだな」
「はい。彼等にとっては今はロイヤルストレートフラッシュを狙う時なのです。そして今彼等はそうしています」
「ロイヤルストレートフラッシュか」
マクレーンはそれを聞いて口の端を歪ませて笑った。劉もほんの一瞬だが同じように笑った。
「いちかばちかだな。だが果たしてそう上手くいくかな」
「シュヴァルツブルグエウロパ元帥は歴戦の将です」
今度はプミトル＝チャンカが答えた。タイ出身である。日に焼けた褐色の肌に白人の顔をしている。やはり大将である。
「既にカードを手に入れる手筈は整えていると思いますが」
「ならば我々もカードを選ぼう」
ここではじめて劉が口を開いた。それを見て司令達は彼に視線を集中させた。だがマクレーンは笑っていた。それは不敵な笑みであった。まるで全てを知っているかのように。
「彼等がロイヤルストレートフラッシュを狙っているのなら」
「はい」
皆次の言葉を待った。マクレーン以外は。
「我々はそれをさせなければいいだけではないかね。既にカードが何処にあるのかは知っている」
「御存知なのですか」
「そうだ。これ程楽な勝負はない」
彼は簡潔にそう述べた。
「我々はワンペアでも勝てる状況にある」
「ええ」
それはもう言うまでもないことであった。
「だが彼等は違うのだ。わざわざロイヤルストレートフラッシュを狙わなければならない。言い換えるとそこまで追い詰められている。

もう一押しだな」
「その一押しですが」
「これからだ。いいな」
「何をされるおつもりですか」
「まずは彼等に攻めさせる」
劉はそう述べた。淡々とした言葉であった。
「そしてこちらが反撃に転じる。まずはこれでカードが二枚揃う」
「敵の」
「うむ。だがまだ三枚ある」
劉はこの時エウロパ軍の側に立って話をしていた。それは一種異様な光景であった。
「あと三枚。慎重に選ばなければならないな」
「はい」
ポーカーとはそういうものだ。カードを選ばなくてはならない。少しでも間違えるとそれでカードが揃わず負けてしまう。ある意味非常にシビアな戦いなのである。
「そして彼等が退く。これで三枚目だ」
「あと二枚ですか」
「そう。そして我々が一気に攻勢に転じる。その到達点に獲物を置いておくとさらに効果があるか」
「獲物」
「何でもあるな」
劉の言葉がさらに客観的なものとなった。

## 第十部第五章　攻勢その六

「基地然り物資然り。戦利品なら何でもいいか」
「それで我々の臨界点を調整すると」
「そういうことだな。そしてこれで四枚だ」
「四枚」
「では最後の一枚は」
「その獲物だ」
劉はそう言った。
「それこそが彼等の最後のカードだ。そこで彼等は動くだろう」
「成程」
「彼等はカードを止める。カードが全部揃ったからだ。だが」
ここで劉の目がまた光った。
「我々もまたカードを切っているな。それも彼等に気付かれないうちに」
「はい」
「ロイヤルストレートフラッシュは一枚でも抜けると駄目だ」
「では」
「我々はその一枚だけ崩せばいいのだ。それも」
はじめて劉が笑ったように見えた。マクレーン以外には勝利を確信した笑みであった。
「最後を崩すのが最もいい。これでわかるな」
「そういうことですか」
「うむ。言うならばここが肝心だ」
だがここで劉は笑いを一瞬で消しすぐに元の冷静沈着そのものの顔に戻った。
「最後の最後でカードを崩すのだからな。それはわかるな」
「はい」
「では言おう。まずは」

劉とマクレーンは司令達に対して作戦を伝えた。彼等はそれを聞いて最初は驚いたがすぐに冷静さを取り戻した。そして彼等はそれぞれの持ち場に戻った。戦場に向かう為に。

マクレーンの言葉通りエウロパ軍は攻撃に転じてきた。連合軍に対して果敢に攻撃を仕掛ける。

「行け、撃て！」

黒騎士団のシュバイクの指示が銀河に木霊する。彼は竜騎士団きっての猛将として知られている。

「敵の数に怯むな。数がどうした！」

「沈める敵艦が増えているだけでございます」

傍らにいる参謀の一人が不敵に笑ってそう答えた。

「もしくは撃墜する敵機が増えたか。違いますか」

「その通りだ」

シュヴァイクもそれを聞いてニヤリと笑った。

「よくわかっているな。ではどうするべきかわかるな」

「はい」

「全軍攻撃の手を緩めるな。そして連合軍をブラウベルグ回廊の向こうまで追い返せ！」

「ハッ！」

指揮官が勇敢ならば部下達も勇敢であった。虎が虎を育てる。その典型的な例であった。彼等は今虎となり敵に襲い掛かっていたのだ。

だが連合軍も為す術もなくやられる羊ではない。爪も牙も持っていた。そして鱗も。

「エネルギーをバリアーに集中させよ」

「はっ」

各艦隊の司令達がそう指示を下す。それにより連合軍の艦艇は防御力を高めた。そして密集陣を組んだ。これによりバリアーの効力をさらに高めた。

これでエウロパ軍の攻撃を凌ぐ。そして逆にその圧倒的な火力で反撃を浴びせる。それだけでエウロパ軍の艦艇のうちかなりの数がダメージを受けた。
「この程度！」
だが彼等は怯んではいなかった。それでも果敢に突き進む。
「何程のことでもないわ！」
「大した勇気だな」
ラテン語のその言葉を通信傍受で聞いたエウロパのある艦の通信士が思わずそう呟いた。彼はラテン語が理解できたのである。
「これが騎士というものか」
「凄いと言えば凄いですね」
「そうだな」
側にいた下士官の一人にそう答える。若い下士官だった。見ればその階級は四等伍長である。連合軍においては駆け出しの下士官である。年齢から見ればそれも妥当であった。
「兵力においても艦艇の質においても大きく劣っているのに正面から来るからな。見事と言うべきか」
「はい」
「まさにアーサー王の円卓の騎士達だ。その勇気は賞賛に値するな」
「アーサー王ですか」
その四等伍長はそれを聞いておかしそうに笑った。
「また面白い例えですね」
「君はあれを読んだことがあるのか」
「アニメや漫画で」
伍長はそう答えた。
「それですと面白いですね。原作はどんなものか知りませんが」
「一言で言うと騎士道の模範書だな」
「やっぱり」
彼は通信士からそれを聞いて当然だと思った。
「面白いのは事実だ」

「そうですか」
これは本当のことであった。イギリス文学の曙といってもよいし彼等のアイデンティティの中核にもなっている。昔からイギリスはどれだけ汚い策を弄しても約束は絶対に守る。そして戦いにおいては正面から相手と正対する。それがかっての大英帝国の青い血の者達であり今もそうである。アーサー王と円卓の騎士達は今も彼等の心の中に生きているのである。これは宇宙に出ても変わりはなかった。
「色々と勉強になる。少なくとも作者の人となりは気にはならない」
「作者のですか」
「あれはお世辞にもいいとは言えない」
「ほう」
伍長はそれを聞いて興味深そうな声を漏らした。アーサー王の物語を書いたトーマス＝マロリーは色々と罪を犯している。殺人さえ犯している。人間的には実に問題の多い男であった。

## 第十部第五章　攻勢その七

「騎士道というのも悪くはないものだと思う。少なくとも心を律するのには役に立つ」
「そうですか」
「ああ。だがな」
しかし彼はここで口調を一変させた。
「今更という気がしないにでもないな」
「それを言ったらお終いですよ」
伍長は笑ってそう返した。
「彼等は俺達とは違うんですからね」
「確かにな」
これは通信士も同じ考えであった。
「しかも我々に対して騎士道か。そんなもの我々にとってはどうでもいいことだが」
「所詮は仕事ですからね」
これが連合における軍人に対しての考えであった。
「騎士道とか言っても腹は膨れませんよ。財布が重くなるわけでもない」
「また辛辣だな」
「そりゃ当然ですよ」
伍長はまた言った。
「俺が何で軍に入ったら知ってますよね」
「ああ」
二人は階級こそ違えど互いに知った仲である。互いのことをよく知っていた。
「食べるものも着るものもただでくれるからだったな。そして住むところも」
「ええ」

彼は満足そうに笑って頷いた。
「おまけに住むところも。官舎ですがいいですよ」
「それはどうかな」
だが通信士は住むところにはいささか懐疑的であった。
「この艦はいいが」
「はい」
「官舎はな。どうも古くてな」
「それは古い場所に住んでいるからですよ」
伍長は笑ってそう言った。
「新しくできた官舎に移ってみればいいですよ。凄いですよ」
「そうなのか」
「何でもありますしね。不自由はしません。トレーニングルームもサウナも何でもありますよ」
「バーもあるかな」
「勿論」
「そうか」
それを聞いたその目が細くなった。
「それはいいな」
「どうですか、移りたくなりましたか？」
「この戦争が終わってからな」
通信士はそう答えた。
「是非移りたいな。今住んでいる官舎ではバーがないんだ」
「おやおや」
「酒を飲もうと思ったら外で飲むか買って来て飲むかだ。不便といえば不便かな」
「そうですね。バーには独特の楽しさがありますからね」
「そうなんだ、私はあれが好きで」
どうやらこの通信士はかなりの酒好きのようである。
「カクテルを飲むのがいい。ゆっくりとな」
「通ですね」

「君はどちらかというと量をよく飲む方だったな」
「ええ」
伍長はそれに頷いた。
「ワインでしたらボトル五本はいけます」
「おお」
「ビールでしたらあるだけね。俺も酒は好きですよ」
「そうだったのか。じゃあ今度一緒に飲もうか」
「いいですね、通信士のおごりで」
「おい、将校の財布は軽いぞ」
「そうでしたっけ、あはは」
実際には軽くはない。人を集める為に軍人の給料は高いのが連合である。当然将校の収入も安定していて高い。やはり彼等は連合の軍人であった。騎士ではない。彼等には彼等の考え、そして戦い方があるのであった。
「損害を最小限に抑えるようにな」
「はっ」
マクレーンの指示に参謀達が頷く。彼の横には劉がいた。
「それをまず心がけなければな。死んではどうにもならない」
「戦場においてもですか」
「そうだ」
マクレーンは参謀の一人の言葉に対して頷いた。
「死んでは元も子もないだろう」
「ですがエウロパ軍は死兵となって来ておりますが」
「だからこそだ」
彼はあえてそう言葉を返した。
「エウロパ軍はそれだけ焦っているのだな」
「はい」
「それならば尚更だ。我々は命を大事にしなければならない」
「だからこそ今は防御を固めているのですね」
「そうだ」

マクレーンの返答はそれであった。
「それについては既に述べているが。異論はあるか」
「いえ」
他の参謀もこれには意見が同じであった。彼等も連合の軍人だからだ。
「こちらは最低限の損害で敵に対しては最大の損害を与える」
マクレーンは言った。
「それが我が軍の戦い方だったな」
「はい」
言うのは容易いが行うのは難しい。戦争の常識ではあるが。
「今回もそれを考えての作戦だ」
「ではどうするのでしょうか」
その参謀は尋ねた。
「これからの作戦は」
「それについてはもう考えがまとまっている」
「まとまっていますか」
「うむ」
マクレーンは答えた。
「防御を固め、そして機を見て攻撃に移る。敵の攻撃が止まったところでな」
奇しくもエウロパ軍の作戦と同じである。
「その際の攻撃はサハラ義勇軍を先頭に立てる。いつもと同じようにな」
「そうですか」
「それはまだはじまりに過ぎないがな」
マクレーンは言葉を続けた。
「全てはそれからだ」
「それから」
「そう。言うならば」
ここで言葉を変えた。

「カードを切る。エウロパにはカードを切らせない」
「カードを」
「そうだ」
マクレーンがそう言うと劉が笑った。参謀達はそれを見ておおよそのことを悟った。
「成程、そういうことですか」
「貴官達もわかったようだな」
「はい」
彼等は笑顔で頷いた。マクレーンも笑っていた。
「この戦いに勝てれば敵の首都が見えてくるぞ」
「オリンポスが」
「神々の山にこの艦で乗り込んでみたいとは思わないか」
「はい」
皆それに応えた。
「是非共。その為にここまで来たのですから」
「オリンポスを脅かしたのはギガンテスとテュポーンだけだったな」
ギガンテスとはギリシア神話に出て来る巨人達である。天を衝く様な巨大な姿であり顔は髭に覆われ鎧と槍で武装している。そしてその足は蛇の身体である。二本のとぐろを巻く足となっているのである。彼等はオリンポスの神々に反感を抱いた大地の母神ガイアによって生み出された。生まれながらにしてオリンポスの神々と戦う宿命だったのである。
テュポーンは彼等よりさらに恐ろしい姿をしていた。その身体はギガンテスより大きく、頭は百の蛇であり両脚はやはり蛇の身体であった。そして身体中に羽毛まで生え暴風の様に荒れ狂っていた。彼は台風を妖怪として現わしたものであり、その名は台風のもととともなっている。
「はい」
参謀達はそれに答えた。
「それでは我々はギガンテスといったところか。中々面白いな」

「ですがこの艦はテュポーンではありません」
「わかっている」
マクレーンは得意気な顔のまま頷いた。
「ブレス、ケルトにおいては複雑な神だ」
ケルト神話においてこの神は神と神の敵対勢力であるフォモールとの間において生まれた神である。神とフォモールの間で揺れ動いた。その容姿は美しく、『麗しのブレス』とまで呼ばれた。生真面目で勇敢だった。英雄ではあるが陰のある神であった。北欧のロキとはまた違った意味で微妙な位置にいる神なのである。
「だが私はこの神が好きだ」
「そうなのですか」
彼はケルトの神々の間では戦いの神とされている。厳格で、規律に厳しい神とされている。
「精悍だからな。厳し過ぎるとも思うが」
「そういえば閣下は前の乗艦にはダーザとつけられていましたな」
「ああ」
彼はそれを認めた。ダーザはケルトにおける主神である。禁欲的で厳格なブレスに対して彼は包容力のある神として知られている。野暮ったい外見だが中々のプレイボーイでもある。ケルトの神の中では彼は豊穣の神とされている。

## 第十部第五章　攻勢その八

「厳しいだけでは嫌だろう。楽しみがないとやっていけない」
「はい」
マクレーンはアメリカ人であり、かつ連合の市民である。だからこそ生活を大いに楽しむ傾向がある。そんな彼が厳格一辺倒なだけのブレスだけを信仰するとはやはり思えないのである。なおマクレーンが自身の乗艦にダーザと名付けていたのはアメリカ軍にいた頃の話である。
「私は両方共好きだな。都合のいい部分だけだが」
「ははは、そうなのですか」
「そうだ。別に悪くはないだろう」
「まあ」
これが連合の考えであった。だからこそ多くの神々が信仰されているのである。
「私もこれでも多くの神を信仰していますしな」
劉も話に入って来た。
「参謀総長もですか」
「うむ」
参謀の一人の問いに対してあえて鷹揚な仕草で答える。
「関帝と太公望を。あとエジプトの神ではトトを」
「ほう」
「参謀総長はトト神を信仰されていたのですか」
それを聞いたマクレーンが興味深そうな声をあげる。
「ええ、それが何か」
「私もエジプトの神を信仰しておりまして」
「誰をですか」
「イシスです」
彼はそう答えた。イシスはエジプトの女神の中で最も重要な神で

ある。主神とされるホルスの母でもあるのだ。トトは知恵の神である。なおトトの頭は人のものではなくコウノトリのそれである。これはエジプトの神ではごく普通のことである。力や武芸を司るセトは一説にはジャッカルのものとされる動物の頭を持っている。セクメトという女神は獅子の頭である。これがエジプトの神々の特色であった。

「イシスなのですか。それは興味深いですな」

「そう思われますか」

「はい。あの神の話は面白いものがありますし」

夫であり兄でもあるオシリスを甦らせる話のことである。これhエジプト神話のうちで最も有名な話の一つである。これにおいてはセトは悪役となっている。彼にとっては不名誉な話であるかも知れない。

「意外といえば意外ですな」

「そうですかな」

「ええ。長官はケルトの神を信仰されているイメージが強いですしな」

「否定はしません」

これは彼の名前を見ればわかることであった。彼の名であるマクレーンとはケルト人の名前であるのだ。『マク』というのは『〇〇家の息子』という意味である。従って彼は『レーン家の息子』となるのだ。他にもオーがついていたりするのがケルト人の名前の特徴の一つである。なおアメリカ人にはケルト人が多い。これは昔からでありまだ地球にアメリカがあった頃から、建国の頃からである。二十世紀の将軍であるマッカーサーもそうである。彼はスコットランドに自分のルーツを持つことを誇りにしていた。彼は正式に当時の発音をすると『マックアーサー』という名前になる。『アーサー家の息子』という意味だ。そうした意味で当時アメリカの主流であったワスプ、白人でありアングロサクソンでありプロテスタントである者達とは違っていた。その為か彼は今一つ主流になれなかった。

陸軍士官学校において抜群の成績を修めながら、である。
　話を戻すとアメリカは今ではかなりケルトの色彩を強くした国家となっている。大統領であるマックリーフもまた黒人であるがその名からわかる通りルーツの一つにケルトを持っている。彼は母とその両親、そして父方の祖母が黒人なのである。母はアメリカ人であるが父方の祖母と母方の祖父は違う。前者はザイール人であり後者はコンゴロ出身である。彼の金色の髪と青い目はスコットランド系である父のものだがその肌は母や他の血縁者のものなのである。なお彼の特徴はそのうえで顔立ちが白人のものとなっていることである。その為彼は『メン＝イン＝ブラック』とも仇名されている。これは二十世紀の怪奇作家ラグクラフトの作品に出て来る異形の者である。漆黒の肌を持ちながらその顔は白人のものとなっている。ラグクラフトは当時のアメリカ人にあった有色人種、極端に言うとワスプ以外の者に対する偏見があったがそれも影響していたかも知れない。だが今のマックリーフのこの仇名はその整った外見を正当に評価するものであった。時代が変われば言葉の持つ意味も変わるのである。
「ですがエジプトの神を信仰して悪いということはない筈ですが」
「その通りです」
　劉も中国人でありながらエジプトの神を信仰している。それと同じであった。
「それを考えるとこの艦の名をブレスにしない方がよかったかも知れませんな」
「ではどんな名が」
「そうですな」
　マクレーンは考えながら述べた。
「といっても名前が思い浮かびませんな。やはりこの艦はブレスという名が似合っているのか」
「そうですか」
「はい。思えばこの名もいい」

実は彼はこのブレスという名前をつけたことを密かに自慢していた。自分で満足していた。
「敵は違いますがこれでオリンポスに乗り込むのも一興ですかな」
「ですな。では今は守りに徹しましょう」
「はい」
「これからの為に。神々の山の乗り込む為に」
「ですな」
こうして彼等は守りを固めることにした。そしてエウロパ軍の攻撃を受け止めるのであった。
連合軍の艦艇の防御力はかなりのものである。バリアーだけでなく磁気や電波を出して敵の攻撃を妨害する。彼等はそれでエウロパ軍の攻撃を殆ど防いでいたのである。
「相変わらず信じられない守りだな」
シュヴァルツブルグは前線にいた。そしてそこで直接指揮にあたっていたのである。
「まるでダメージを与えられぬとはな。だがこれは予想通りだ」
「ですな」
モニターに現われた男がそれに頷いた。白騎士団長であるゼータシュトレームであった。その率いる騎士団の名に相応しくその神は白であった。
「ではそろそろ次の行動に移りますか」
「うむ」
シュヴァルツブルグは彼の言葉に対して頷いた。
「機は熟したな。ではやるか」
「はい」
モニターにゼーダーシュトレームだけでなく各騎士団の団長達が姿を現わした。そして彼の言葉に頷いた。
こうしてエウロパ軍の次の行動は決定した。彼等はまずは表向きの攻撃を止めた。
それからであった。彼等は待った。敵の行動を。そして連合軍は

乗った。と彼等は見た。
「攻撃開始」
マクレーンが指示を下す。そして攻撃を仕掛ける。それを受けたエウロパ軍は退きはじめた。
「やはりな」
マクレーンはそれを見てひそかに呟いた。
「どうやら参謀総長の予想通りですな」
「ええ」
劉がその問いに対して頷いた。
「どうやら。では我々も行きますか」
「はい」
彼等も前に出た。そして退くエウロパ軍を追撃に掛かる。だが速度に勝るエウロパ軍はそれを振り切ろうとする。彼等の艦艇は速度においては連合軍のそれよりも勝っているのである。
「これもまた予想通りです」
劉はまた言った。
「彼等の艦艇の速度はもう計算済みです」
「ですな。では行きますか」
「はい」
彼等はそのまま前に出る。前面にはサハラ義勇軍がいる。その中にはグータルズもいた。彼はこの戦いにおいて武勲をあげ続け今では大佐にまでなっていた。サハラ義勇軍は連合軍にありながら連合軍とは違う。従って昇進も早い。彼はもう戦艦の艦長にまでなっていた。
彼の乗る艦はアブラヒム。預言者である。やはりイスラムの名であった。
「艦長」
その彼にアブラヒムの航海長が声をかけてきた。見れば若い。彼もまた武勲をあげ航海長になったのである。階級は中尉であった。
連合軍の昇進は大学を出て軍に入ったならば通常は一年程の教育

の後少尉に任官する。そして二年ごとに中尉、大尉と昇進していく。少佐からは勤務の状況等が影響し個人差がある。だが大佐までには誰でもなれる。士官学校卒であるとやはり彼等より若干昇進が早い傾向にある。そして将官にもなり易い。大将までは多いが元帥は非常に少ない。ここまでくると大国の利害もからむ。連合の悪い部分ではある。

高校等であると下士官候補生、パイロット候補生等の各種技術候補生、下士官補士、そして一般の任期制の兵士達を色々ある。これ等は当然大学卒業者でも志願できるが大抵は勧誘の方で薦められない。士官学校や一般大学卒業でもパイロットになれる。軍隊は入り口が今後に大きく影響するものである。そうした意味で士官学校出身者は有利となっている。

といっても一般大学を卒業している元帥もいる。実際は色々あったりするが。

だが義勇軍は違う。あくまで武勲により全てが決まる。彼等は連合軍でありながら連合軍ではない。当初国防省も中央政府も連合方式でいこうと思っていたが当の彼等がサハラ式に武勲を優先させて欲しいと主張したのでこうなった。これによりグータルズも瞬く間に大佐となったのである。

「どうした」

その彼が航海長に問うた。

## 第十部第五章　攻勢その九

「進撃命令か」
「はい」
航海長はそれに頷いた。
「敵を追えとのことです」
「そうか」
グータルズはそれを聞いてその目の光を鋭くさせた。
「今が好機ということか。だがそれはどうかな」
「といいますと」
「今までエウロパ軍は敗北続きだったな」
「はい」
「そろそろ策を弄してくる頃だと思う。この退却には何かがある」
「我々を誘い込んでいるということでしょうか」
「あくまで可能性だがな」
そう答えながらも目の光は鋭いままであった。
「しかしこれは戦いの常道ではある」
「はい」
「これに対して我が軍の上層部はどう考えているかだな」
「我々を捨石にした作戦を考えているのかも知れません」
「有り得るな」
彼はそう考えていた。
「我々は所詮正規軍ではない」
「はい」
「連合の中でも余所者だ。言うならば惜しくはない者達だ」
「だからこそ常に最前線にいるのでしょうね」
「武勲をあげるにはいいがな。だがそれもまた事実だな」
「はい」
これは他ならぬ彼等自身が最もよくわかっていることであった。

グータルズも航海長も頷き合った。そのうえで話を続けた。
「だが捨石にするのならばここではないだろう」
「そうでしょうか」
「我が軍の最終目的地は何処だ」
彼は航海長に対してそう問うてきた。
「わかっているか」
「はい」
航海長もそれはよくわかっていた。確かな顔で頷く。
「オリンポスでございます」
「その通りだ。あそここそが最後の目標だ。陥落させるまでに戦争が終わるかも知れないがな」
「はい」
「やるとしたらその時だな。我々を捨石にするのは」
「そういえばニーベルングを陥落させる時も我々を温存しましたね」
「彼等にとって我々はそうした存在だ」
グータルズは醒めた声でそう述べた。
「そうした存在とは」
「強力な戦力だ。正規軍を温存できる程強力な、な。常に危険な場所にいるな」
「ええ」
「そういうことだ。所詮は我々はていのいい駒だ。だがな」
彼はここで目の光をさらに鋭くさせた。
「単なる駒で終わってもいけないがな。いずれ掴むべきものを掴むぞ」
「安住の地ですか」
「サハラに帰りたいか。そこにならあるぞ」
「かってはそう思っていました」
彼はニヤリと笑ってそう答えた。
「かっては」
「ほう」

グータルズはそれを聞いて目の光を変えた。何かを探る目となった。
「では今はどう考えているのだ」
「国を作りたいですね、連合に。我々の国を」
「悪くはないな」
「そう思われますか。そしてそこで全く新しい国を作りたいです」
「同感だ。俺もかってはサハラに帰りたいと思っていた」
彼はこの時銀河の彼方を見据えていた。そこには彼等の故郷も見えている筈である。
「何といっても我々の故郷だからな」
「はい」
「しかし今は違う」
そして次にこう述べた。
「連合が気に入った。皮肉なものだな」
「難民でありながら」
「今ではここにいたい。こう思っているのは俺だけかな」
「私もです」
彼はにこやかに笑ってグータルズに対してそう述べた。
「連合に愛着を感じますね。それなりに長い間いますし」
「そうだな」
グータルズもまた連合に着いて長い時間を経ている。身の周りのものは全て連合のものとなっている程である。
「住めば都というが。本当だな」
「ええ」
「ここにいたい。そして国を作りたい。その為には」
銀河を見据えるその目が決した。
「勝つぞ。そして生きる。全てはそれからだ」
「はい」
「前へ進め」
彼は指示を下した。

「目の前の敵は全て蹴散らせ。一隻も残さずな」
「ハッ！」
艦橋のクルー達が皆頷く。こうしてアブラヒムは全速で進みはじめた。
アブラヒムだけではなかった。他の義勇軍の艦艇も前進していた。その中心には漆黒の巨大戦艦があった。そこにマシュハドがいた。彼は艦橋において敵の動きを冷静に見据えていた。
「妙だな」
それを見て一言そう言った。
「おかしな動きをしている」
「はい」
隣に控えるワフラがそれに同意した。
「何かありますな」
「うむ」
これはグータルズと同じ見方であった。だがグータルズが直感によりそれを見抜いた感があるのに対してマシュハドは歴戦の経験によりそれを見ていた。どちらが優れているかはこの際問題ではない。
「おそらく我々の攻撃臨海点で来るな」
「でしょうね。それには用心しておきますか」
「マクレーン司令はどう思っておられるかな。それに劉参謀総長も」
「それですね。どうやら正規軍には話がいっているようですが」
「こちらには何もなしか。と思っているだろう」
「違うのですか」
「二人から聞いている。それは安心してくれ」
「ならいいですけれどね」
ワフラはそれを聞いて安心した。
「敵は後手打ちを狙っているようだな」
「日本の剣道のあれでしょうか」
敵の動きの後で攻撃を仕掛けるというものである。剣道の極意的な技の一つとさえ言われている。

「日本の武道については詳しくはないのですが」
「あれではない」
マシュハドはそう言って再び安心させた。
「二十世紀の東部戦線のあれだ」
「マンシュタインの」
それは彼も知っていた。
「あれを狙っているというのですか」
「おそらくな」
彼はそう答えた。
「我々を攻めさせ、その攻撃の臨界点で反撃に転じるつもりらしいな」
「戦力に劣る彼等にしてみればうってつけの戦法ですね」
「そうだろう。だがそれは敵に手の内を読まれていなくてはじめて有効だ」
「ですね」
これは全ての作戦に言えることであるが。

## 第十部第五章　攻勢その十

「しかしこちらも無闇と進んではいけないのではないですか」
「当然そうなるな」
「しかし今我々は全速で前進を命じられております」
「うむ」
「それでは矛盾しないでしょうか。これでは我々を囮にしていると勘ぐられても仕方ありませんぞ」
「だからそれは策がない場合だ」
マシュハドはそう言って笑った。
「それはわかっているだろう」
「無論です」
「では言おう。敵はおそらくアルテミスの後方にまで退く」
「アルテミスまで」
「月の女神を我等に捧げるつもりのようだな」
「あまり嬉しくはありませんな」
だがワフラはそれに対してはよい顔をしなかった。
「何故だ」
「我等の神はアッラーだけです」
「それは言うまでもないな」
彼等はサハラの者である。従ってその神も一柱しかないのである。アッラーただ一人である。
「アルテミスは我等の神ではありません故」
「しかしそれだけではないだろう」
「ええ」
彼はそれに対して頷いた。そして答えた。
「アルテミスは処女神の筈ですが」
「そうだな」
マシュハドはそれを聞きたかったのだ。事実それを聞いてニヤリ

と笑った。
「処女を敵にむざむざ捧げるような者はそうはいないでしょう」
「いるとしたら何か魂胆がある」
「はい。処女神は囮です。そしてその後ろには」
「彼女の兄であるアポロンがいるな」
「はい」
アポロンとアルテミスは双子である。時にはそれぞれ太陽と月を司るとされている。エウロパではそう言われる場合もあるが別に太陽神ヘリオスと月神ヘレネも存在する。彼等は主に芸術、そして狩猟の神とされているのだ。兄であるアポロンが芸術を、妹であるアルテミスが狩猟を司っている。
この双子は共通の得意分野を持っている。それは弓である。彼等は弓の名手として知られているのだ。
アポロンはギリシア系の神々の間ではとりわけ人気が高い。そしてアルテミスにとっては頼りになるが同時に口やかましい兄であった。先に生まれたのはアルテミスとされている場合もあるが双子なのでこの場合も妹とされている。彼女は先に生まれていようが後に生まれていようが何故か彼の妹となっている。そしてこの兄は処女神である妹に男が言い寄るのを決して許しはしないのだ。

オリオンという英雄がいた。彼は巨人であり神々の血を引く美しい若者であった。狩猟に秀でておりアルテミスと親しくなった。二人は次第に惹かれ合うようになった。
だがアポロンはそれを許しはしなかった。ゼウスは許したかも知れない。オリオンは兄弟であり同格の神でもある海神ポセイドンの息子であったからだ。だが彼はゼウスとは違っていたのだ。
「悪い虫だな」
彼はオリオンをそう見ていた。そして何とか排除しようと考えていた。ある時オリオンは海で泳いでいた。それを見た彼は好機と見た。

「アルテミス」
彼は内心の邪な考えを隠して妹に声をかけた。
「御前は狩猟の神だったな」
「？今更何を言っているの、兄さん」
彼女は兄の言葉に首を傾げざるを得なかった。
「では弓が得意だな」
「言うまでもないことじゃない。それは兄さんが一番よく知ってる筈でしょ」
「わかった。では御前に聞きたい」
「何？」
「あそこに光っているものがあるな」
「ええ」
遠くの海に金色に光っているものがあったのだ。実はそれはオリオンの頭であった。神の血を引く彼は光を放っていたのである。それはその光であったのだ。
「あそこに弓を命中させることができるかな」
アポロンは妹をからかうようにして問うてきたのだ。誇り高く少女らしい心を持つ妹はそれを聞いて唇を尖らせた。
「私を馬鹿にしているの？」
「まさか」
だがアポロンはからかうように笑ったままであった。
「どうしてそう思うんだい？」
「そうとしか思えないわ」
アルテミスはそう答えた。
「つまり私にあの金色の的を射抜けるかどうか試したいのね」
「如何にも。できるかい？」
「勿論よ」
そう言いながら背中から弓と矢を取り出した。
「そこで見ていて頂戴。射抜いてみせるから」
「わかった」

恋人をね、と同時に心の中で呟いた。そして妹が弓を構えるのを見守った。
弓が放たれた。それは一直線に的に向かう。そして見事に射抜いたのであった。
「どうかしら」
「お見事」
アポロンはにこやかに笑って妹を祝福した。
「やはり御前は弓の名人だな。女では一番か」
「有り難う」
「私よりも上かな。少なくともオリオンは越えたな」
「あの人は」
彼の名を聞いて顔を赤らめさせた。
「特別じゃないかしら。ほら、ポセイドン叔父様の息子だし」
「いや、御前は彼を越えたよ」
「どうしてそれがわかるの？」
「さて、どうしてかな」
彼はあえて悪戯っぽく笑ってそれをはぐらかした。
「まあいいさ。それではな」
「え、ええ」
兄の態度に違和感を覚えながらも頷いた。そして兄が立ち去るのを見送った。彼女が真相を知ったのは翌日の朝のことであった。海岸を散歩していた時であった。
「これは私の矢・・・・・・」
海岸にオリオンの遺体が流れついていた。彼は既に事切れていた。頭を射抜かれたのが致命傷であったようだ。そしてその矢は彼女のものであったのだ。
「オリオン・・・・・・」
呼び掛けても声は返ってはこなかった。彼は兄の姦計により彼女自身の手によって命を奪われてしまった。そして二度と彼女に笑顔を向けることはなかったのだ。

それを悲しんだ彼女はオリオンの遺体を夜の空に掲げた。それがオリオン座である。ギリシアの古い話である。
「今度はオリオンではなく我々を狙っているのだ」
「我々は間男ですか」
ワフラはそう言って苦笑した。
「また面白いことを。しかし我々はオリオンではありませんぞ」
「うむ」
それはマシュハドも同じであった。もっとも彼はオリオンと呼ぶにはいささか武骨な外見であったが。
「ではアポロンの弓を逆に折ってやるとしようか」
「いえ、それでは足りません」
「どうするつもりだ？」
「弓に対抗するのは弓でいきましょう。かわすのではなく反撃です」
「そうだな。では弓を用意しておけ」
「はっ」
そうしたやりとりの後進撃に入った。エウロパ軍は彼等の予想通りそのまま進んでいく。シュヴァルツブルグは退く自軍から目を離してはいなかった。
「アルテミスはどうなっているか」
彼は傍らにいる参謀に一人に問うた。
「既に撤退準備を整えています」
「そうか。だがまだだぞ」
「まだですか」
「そうだ。気付かれては何もならないからな」
これは彼もわかっていることであった。
「我々は敵の反撃を受け壊走しているのだ。違うか」
「あ、そうでした」
それを言われてハッとした。
「ではできるだけ慌てて退かなくてはなりませんね」
「うむ。頼むぞ」

「わかりました」
エウロパ軍は算を乱して壊走していた。少なくともそう見せていた。だがそれを見るマクレーンと劉の目は醒めたものであった。
「相手も演技が巧いですな」
「ええ」
劉の言葉にマクレーンが頷く。
「しかし演技はあくまで演技でしかありませんな。何処か現実とは違います」
「そういうものですか」
「閣下は京劇は御覧になられますか」
「少しは」
彼は答えた。
「どちらかというとミュージカルが好きですが」
「そうですか。両方共演技がありますな」
「ええ」
「歌や演舞の間に。時としてそれは真のものに見える時があります」
「題材を変えませんか」
マクレーンが付け加えた。

# 第十部第五章　攻勢その十一

「ミュージカルにしろ京劇にしろいささか誇張が多いですから」
「おっと、そうでしたな」
劉はそれを受けて笑った。
「かといって八条長官の御国の歌舞伎でもよろしくない」
「あれはまだ独特過ぎますぞ」
マクレーンも笑っていた。
「異常に生き別れが多い。しかも死ぬまでの時間は途方もなく長い。いやあ、人間とは中々死なないものです」
「銀河で乗艦を沈められるとすぐだというのに」
「全くです」
「まあそれは置いておきまして」
「はい。歌舞伎はどうもよくわかりませんからな」
「それは私もです。長官には悪いですが」
八条は歌舞伎が好きなことでも知られている。もっともこれは彼の師である伊藤の方が遥かに上であるが。俗に芋、蛸、南京、蒟蒻に最後に芝居が女性の好きなものだと日本においては言われている。だが伊藤はそれでもかなりの芝居好きであった。何しろ芝居、特に歌舞伎に関する本も何冊も出しているのだから。とりわけ幕末から明治初期の歌舞伎に関する研究、論表は連合において随一とされていた。
『八代目市川団十郎』
『三代目澤村田之助の光と影』
こうした書が知られていた。現代の歌舞伎につても詳しい。歌舞伎役者達の中には彼女の論評をとりわけ気にする者もいた。それ程彼女の論評は優れていた。同時に辛辣でもあるのだが。
「劇やドラマに話を移しましょう」
「そうしますか」

「マーガレット＝カラスの演技ですが」
「はい」
フェニキアの女優である。鼻と背が高いので知られている。連合においてよく知られた女優である。
「あの演技は見事です」
「ですな」
マクレーンもそれを認めた。
「鬼気迫るものがあります。しかし演技は演技なのです」
「現実のものではないと」
「はい。演技は現実とは別の世界にあります」
彼はそう述べた。
「演技の世界は演技の神が司る世界ですな。現実の世界の神のそれとは違います」
「そういうことですか。では今エウロパ軍を支配しているのは」
「彼等の演技の神です。残念ながら戦の神ではありません」
「はい」
「戦の神に従っていたならばわからなかったでしょうが」
意味深い言葉であった。戦いとは戦の神の下で行われるものであるからだ。時として演技もあるだろう。だがそれは戦の神の下で行わなければならないのだ。それが戦争であるからだ。
「彼等はそれをわかっていないようですな。しかし我々は違う」
「では演じるとしますか」
「はい」
二人は頷き合った。
「戦の神の下で」
「ブレス、そして関帝の下で」
それぞれの戦の神に対して誓った。なお連合において演技の神といえばイシュタルもそうだとされるし異神教のアスモデウスもそうである。道教では玄宗とされている。中国唐代の皇帝であるが演劇を好み、楽器にも秀でていたのでこう位置付けられたのだ。日本で

は歌舞伎の役の一つである助六や伝説の名優初代市川団十郎が演技の神とされている。
彼等は義勇軍を先頭にそのまま進み続けた。そして遂にアルテミスに到着したのであった。
「さてと」
マシュハドはこの星を前にして一呼吸置いた。
「占領するとするか」
「ハッ」
ワフラがそれに応えた。こうしてアルテミスの占領がはじまった。これはエウロパ軍にも知られていた。
「予定通りですな」
モニターでダムとシュヴァルツブルグが話をしていた。
「うむ」
シュヴァルツブルグはダムの言葉に頷いていた。
「ではそろそろ最後の詰めに入るか」
「はい」
今度はダムが頷いた。
エウロパ軍は突如として反転を開始した。そしてそのままアルテミスに入っている連合軍に襲撃を仕掛けてきた。
アルテミス星系には既に千個以上の艦隊が入っていた。連合軍の主力といってもよかった。
「エウロパ軍が来ました！」
ブレスのオペレーターが叫ぶ。
「数は」
マクレーンと劉はそれに対して冷静に聞き返した。
「二五〇です。敵の全艦隊です」
「そうか」
「やはり来ましたな」
二人は当然であるかのような態度であった。そしてまた問うた。
「敵の陣形は」

「包囲陣形です」
オペレーターはまた答えた。
「このアルテミス星系を包み込もうとしております。如何なさいましょう」
「うろたえる必要はない」
マクレーンは落ち着いた声でそう返した。
「アルテミス星系に入っている各軍の司令達に伝えよ」
「はい」
連合軍の軍編成の基準は艦隊である。これは一万隻程から成る。これが十個集まって軍団になる。軍団が十個集まって軍となるのである。つまり軍は百個艦隊から成るのである。
「時が来たとな。それだけでいい」
「それだけですか」
「そうだ」
やはり落ち着いた様子であった。
「わかったな。それだけでいいぞ」
「わかりました」
オペレーターは戸惑いながらもそれに答えた。そして通信長がそれに従い各軍の司令達に通信を送った。それを見届けてからマクレーンはまた言った。
「星系の外にいる軍だが」
「はい」
「暫くは待機と伝えよ」
「わかりました」
「だが時が来たならば」
「これもお伝えするのですね」
「無論」
マクレーンはそれを認めた。
「いいな」
「わかりました」

「では続けるぞ」
「はい」
マクレーンは言葉を再開させた。オペレーターはそれを聞く。通信長もだ。
「動けと。よいな」
「わかりました」
こうして全軍に指示が下された。連合軍は外見上はせわしくアルテミス星系の占領に奔走していた。それが演技であるとはエウロパ軍には気付かせないように腐心しながら。
「敵が次第に近付いております」
「うむ」
マクレーンに再び報告が入った。
「我等を包み込む様に来ております」
「半月状にだな」
「はい。時が来たのでしょうか」
「そうだな。まずは敵を入れてやれ」
「はい」
「それからだ。祭りはな」
そう言うとニヤリと笑った。
「徹底的にやるぞ。よいな」
「ハッ」
連合軍は機会を待った。そして敵が来るのを待ち構えていた。それにつられるかのようにエウロパ軍は連合軍へと近付いていく。通信を断ち、姿を消している。その動きが察知されているとは知らない。
「いよいよだな」
シュヴァルツブルグは目の前の連合軍の大軍を見据えて一言こう述べた。
「彼等を倒す時は」
「はい」

傍らにいる幕僚の一人がそれに頷いた。
「それではいよいよ」
「うむ。行くぞ、まずは竜騎士団からだ」
「はい」
「そして一気に倒す。それから星系の外に展開する敵もだ。よいな」
「わかりました」
その幕僚はまた頷いた。それからぽつりと呟いた。
「それにしても」
「何だ」
彼はそれに問うた。
「大掛かりな包囲戦ですね。相手が一千個艦隊とは」
「それだけではないぞ。我々の狙いは外にいる四〇〇の艦隊もだ。それはわかっているな」
「はい」
幕僚は三度頷いた。
「敵の主力を殲滅して今度の戦いの主導権を握り返す。その為には勝たねばならん」
「ですね」
「この戦い、敗北は許されんのだ。何としてもな」
「それはわかっております」
彼等だけではなかった。ここにいる全エウロパ軍の将兵がそれをわかっていた。だからこそここにいるのだ。
「通信を繋げろ」
シュヴァルツブルグはまた言った。
「了解」
「よし、全軍一斉攻撃！」
彼は通信が繋がると同時にそう叫んだ。
「攻撃目標、連合軍一千個艦隊、一隻たりとも逃すな！」
「ハッ！」
その声を聞くと共にエウロパ軍の全将兵が突進した。そして攻撃

に入る。ミサイル、そしてビームが一斉に放たれる。だがその瞬間であった。
「なっ！」
ミサイルが次々と破壊される。そしてビームの光の帯をそれ以上の光の帯が襲う。それによりエウロパ軍の光の帯は次第に押し返されていく。
「まさか・・・・・・」
「いや、そのまさかだ」
艦橋にいる若い将校の言葉にシュヴァルツブルグが答えた。
「見抜かれていたわ」
「まさか・・・・・・」
「戦場にまさかはない」
シュヴァルツブルグの言葉はこの場に似合わぬ程落ち着いたものであった。
「連合軍は我々の動きを察知していたのだ。何時攻撃を仕掛けてくるかまでをな」
「それでは我々は」
「敗北だ。今それが決定した」
光の帯が押される。そしてそれは次第にエウロパ軍に近付いていく。
「全艦衝撃に備えよ」
シュヴァルツブルグは指示を下した。
「敵の攻撃が来る。覚悟しておけ」
「はっ」
連合軍の光の帯がエウロパ軍を襲う。それは連合軍を中心に放射状に拡がっていた。
「上手くいったな」
エウロパ軍の艦艇が瞬く間に光の帯に飲み込まれていく。帯の周りでも爆発が巻き起こる。マクレーンはそれを見て会心の笑みを浮かべていた。

「これでロイヤルストレートフラッシュではなくなった」
「はい」
劉がその言葉を聞いて頷いた。見れば彼も会心の笑みを浮かべている。
「そして我々はフォーカードとなりました」
「えらく謙虚ですな」
「そうでしょうか」
劉はその言葉には悪戯っぽく笑っただkであった。
「ロイヤルストレートフラッシュと比べますと」
「相手は何もなし。ではフォーカードでも充分過ぎる程です」
「それはそうですが」
「これでエウロパ軍の勝利はなくなりました。後は」
「後は・・・・・・わかっておりますよ」
「それでは全軍に伝えて下さい。全軍総攻撃です」
「了解」
「勝負とはこういうものです」
劉は前に進みはじめた自軍を見てそう呟いた。
「カードを選ぶ駆け引きのようなもの。そしてそれをしくじった者が」
「敗れる」
最後にマクレーンがそう言った。彼等の前でエウロパ軍が為す術もなく崩壊していた。そしてそれは次第に本物の壊走へと移ろうとしていた。

第十部　完

２００５・７・７

# 第十一部第一章　死と生とその一

死と生と

連合軍とエウロパ軍の戦いは遂に中央部での両軍の主力同士の全面戦争となった。これは敵の動きを察していた連合軍の強烈な先制攻撃からはじまっていた。

「攻撃の手を緩めるな！」

各艦隊の司令達の声が木霊する。

「一気に叩き潰せ、よいな！」

「ハッ！」

その先陣にはやはりサハラ義勇軍がいた。彼等は壊走するエウロパ軍に踊り込んでいた。

「ヘッ、逃げようたってそうはいかねえぜ」

敵艦の中を潜り抜けるタイガーキャットのコクピットで一人の浅黒い肌の男が不敵な笑みを浮かべてこう言った。サハラ義勇軍きってのエースパイロットであるイスファーン＝ラバトである。彼の機体は漆黒であった。これはサハラ義勇軍の艦艇と艦載機全てに共通した色である。

「今まで俺達を散々追い立ててくれたんだ」

その目に憎悪が宿る。彼もまた難民出身であるのだ。

「そう簡単にゃ逃がしはしねえぜ」

目の前にエウロパ軍のエインヘリャルが数機来ていた。彼はそのエインヘリャル達をロックオンした。

「行け！」

そしてミサイルを放つ。それ等は的確にエインヘリャル達を狙っていた。そして次々と撃墜していった。ラバトの目の前でエインヘリャルの数と同じだけの火の玉が生じた。

ラバトの漆黒のタイガーキャットはその火の玉の間を潜り抜けた。

そしてまた別のエインヘリャルと交差すると同時に操縦桿の射撃ボタンを押した。
二機の戦闘機が交差した。一瞬両者の動きが止まったかに見えた。だがそれはほんの一瞬のことでありエインヘリャルは脱出ポッドをかろうじて吐き出した後火の中に消えた。こうして彼はまた一機撃墜したのであった。
「運がいい野郎だ」
彼はそれを見た後でニヤリと笑った。それからまた叫んだ。
「どんどん来やがれ！まとめて叩き落してやらあ！」
「おいラバト」
そこで通信が入って来た。
「ん！？」
「撃墜もいいが俺達の援護も宜しく頼むぜ」
コクピットのモニターにパイロットスーツを着たむさくるしい外見の男が出て来た。ウダイであった。
「何だおっさんか」
「おっさんはねえだろ」
「だからこうして援護してるんじゃねえか」
「何言ってやがる、勝手に先に進みやがって」
「だからそれが援護なんだよ」
「どういうことだ？」
「俺は先に行って敵を撃墜してるんだぜ。それは援護とは言わねえのかよ」
「だったら俺達を置いてけぼりにするな。敵が来たらどうするんだ」
「そん時はそっちに行くさ。安心してくれ」
「じゃあ今来てくれ」
「おっ、来たのかい？」
「ああ」
ウダイは答えた。
「レーダーに反応があった。早く来い」

「了解」
彼はそれを受けて操縦桿を動かした。そして上に上がる。
そのまま反転し元来た道に戻る。少し行くとそこにはエウロパ軍のエインヘリャル達がいた。見れば連合軍の攻撃機や爆撃機の編隊に向かっている。流石にこれを見逃すわけにはいかなかった。戦闘機乗りとして彼等を守ることが仕事であるからだ。
「おい旦那」
ラバトはそれを見てウダイに声をかけた。
「何だ？」
「今俺の目の前にいる連中がそれかい？」
「ああそうだ。丁度そっちに向かって来ているだろう」
「ああ」
その通りであった。彼等はラバトの機に気付きこちらに向かって反転してきていた。
「で、こいつ等全部やっちまっていいんだな？」
「それが御前の仕事だろうが」
「わかってるさ。聞いてみただけだ」
彼はそう答えてニヤリと笑った。戦場の笑みであった。
「ならやらせてもらうぜ。心おきなくな」
「頼むぜ。俺達はその間に船を沈めていくからよ」
「ああ。そっちは任せた。それじゃあ」
彼はタイガーキャットのスピードを速めた。
「またやらせてもらうぜ！」
突き進みながら機首を複雑に動かす。それと同時にビームを乱射する。それはエウロパ軍のエインヘリャル達の動きよりも遥かに速かった。
ラバト機の前で爆発が続けて起こる。彼はビームのみで敵機を撃墜したのだ。だが二機程残っていた。
「チッ、まだ残っていやがったか」
彼はそれを見て舌打ちした。

「仕方ねえ、この連中もやっちまうか」
再び機首を動かそうとする。だがそれより前にこの二機のエインヘリャルは炎と化してしまっていた。

## 第十一部第一章　死と生とその二

「ムッ！？」
ラバトが声をあげた瞬間であった。上から一機のタイガーキャットが舞い降りてきた。それは義勇軍の漆黒のタイガーキャットではなかった。正規軍のものであった。
「黒虎じゃねえのか」
ラバトはそれを見て呟いた。そして言った。
「おいあんた」
彼はアラビア語ではなく銀河語でそのタイガーキャットに対して問うた。
「一体何者なんだ？俺の獲物を横取りするとはいい度胸じゃねえか」
「戦場にいる敵は誰の獲物かなんて決まっていない筈だぜ」
それに対しそのタイガーキャットのパイロットが答えた。
「違うのかい？」
「ヘッ、言われてみればそうだな」
ラバトはその言葉を聞くと口の端を歪めてそう返した。
「言ってくれるな、あんたも」
「そういうことだ。あんたには悪いがな」
「まあいいさ。別のやつを落せばすむしな、今思うと」
「話がわかるね。あんた何ていうんだい？」
「俺か？」
「ああ」
正規軍のパイロットはそう答えた。
「よかったら教えてくれ、興味がある」
「わかった」
彼はそれに答えた。そして名乗った。
「イスファーン＝ラバトっていうんだ。階級は大尉だ」
「いいねえ、同じ階級か」

向こうのパイロットはそれを聞いて嬉しそうな声をあげた。
「あれ、あんたも大尉かい」
「ああ」
「名前は何ていうんだ？」
「スタンフォード。ヘンリー＝スタンフォードっていうんだ。宜しくな」
「ああ、あんたがか」
ラバトはそれを聞いて声をあげた。
「連合のエースパイロットの。名前は聞いてるぜ」
「光栄だね」
「だがこれからは違うぜ」
「そりゃどういう意味だ？」
スタンフォードは不敵な声で尋ねた。
「これから連合軍のエースパイロットは俺になるってことさ」
「あんた面白い奴だよ」
それを聞いてもスタンフォードの不敵さは変わらなかった。
「じゃあ見せてもらおうか、あんたのやり方ってやつをよ」
「おう、じゃあ来い！」
「どっちがより多く撃墜するか勝負だ！」
こうして彼等は競争に入った。そして敵機を次々に撃破していくのであった。

戦局は連合軍のものとなっていた。エウロパ軍は壊走状態になり、最早撤退するのに精一杯といった状況であった。
「我が軍はどうなっているか」
シュヴァルツブルグは混乱する戦場において周りの者に問うた。
「今どれだけ残っている」
「全くわかりません」
傍らにいる部下の一人がそう報告した。
「ただわかることは相当な損害を被っているということだけです」

「そうか」
彼はそれを聞いて沈痛な顔で頷いた。
「軍の統制もきかなくなっています。このままではより多くの損害が生じてしまいます」
「わかっている」
彼は別の部下の言葉にも応えた。
「こうなっては致し方あるまい。軍が崩壊する前に決断を下さなくてはな」
「はい」
「如何為さいますか」
「ホズ星系にまで退く」
「ホズまでですか」
「そうだ」
彼は頷いた。ホズ星系とはアルテミス星系の後方にある星系である。北方、そして南方との接点の一つでもある。なおホズとは北欧神話の神々の一人でありオーディン、すなわちヴォータンとその正妻であるフリッカの間の子供の一人である。一説には盲目であると言われている。だがその一方では彼等アース神族とはまた違った神々の一人であり、勇敢な戦士であるともされている。この時代においては父の影響であろうか隻眼の戦士だとされることもある。だが大抵は盲目の神であるとされている。彼はラグナロクの後で復活する数少ない神々の一人でもある。なお彼はワーグナーの楽劇には登場しない。
「伝えられる艦艇全てに伝えよ、ホズまで退くと」
「わかりました」
「伝えた艦艇にはさらに伝えよ。これを伝えられる全ての艦艇に伝えよとな。そしてそれを繰り返せ」
「そうして全ての艦をホズまで退かせるおつもりですね」
「それしかあるまい」
彼の顔は沈痛なままであった。

「では伝えよ。よいな」
この際連合軍に通信が傍受される危険は承知していた。だが今はそんなことを気にしている場合ではなかったのである。そして彼等は通信を送った。
「ホズまでか」
それを聞いたエウロパ軍の将兵達が頷いた。
「わかった、すぐに退くぞ」
「はい」
艦長達がそれに応える。そして次々に全速力で戦場を離脱しにかかった。それはすぐにエウロパ軍全体に伝わっていた。
しかしそれは当然のことながら連合軍に知られていた。それを聞いたマクレーンと劉はすぐにあらたな指示を下した。
「全軍追撃せよ！」
「ハッ！」
この指示は当然のものであった。連合軍はそれを受けてすぐに動いた。エウロパ軍の追撃に取り掛かったのである。
だがここでエウロパ軍の連合軍に対する唯一の長所が役に立った。彼等はその速度を活かして連合軍を振り切りにかかったのである。
「高速戦艦を出せ！」
それを受けてまたもやマクレーンと劉の指示が下る。だがその高速戦艦よりもエウロパ軍の艦艇の速度は速かった。こればかりはどうしようもないものであった。
「足だけは敵の方がどうしようもなく速いか」
「致し方ありませんな」
残念がるマクレーンに対して劉はあくまで冷静であった。
「元々速度はあまり考慮に入れておりませんでしたから、我が軍の艦艇は」
「はい」
これは連合軍の艦艇の特徴であった。火力、防御力、居住性、そして索敵能力に重点を置いた結果彼等は速度をある程度犠牲にした

のである。艦艇にとって最も重要なものなのは機動力である。それは彼等もわかていたがそれでも犠牲にしたのには理由があった。それだけのものを先に挙げた四つに振り分けたからであった。だからこそ連合軍の艦艇はエウロパ軍やマウリア軍、そしてサハラ各国のそれぞれの軍と比べて速度は速くはないのである。それよりも生きることを優先させたといっても過言ではない。これもまた志願制、そして連合の軍隊故であった。彼等は死ぬことを望まれてはいないのだ。国防省からも政治家からも。
「これについてはどうしようもありません」
「では諦めますか」
「それは早計」
しかし劉はそれは否定した。
「追うべきです。彼等が足を使うのなら」
「はい」
「我等はその足を止めるだけです。ここは搦め手でいきましょう」
「搦め手」
「何、簡単なことですよ」
劉は笑っていた。
「海賊に対するのと同じです」
「海賊と」
マクレーンはそれを聞いても最初は何が何なのかわからなかった。思わず首を傾げた。
「海賊といいましても」
「彼等の動きを混乱させるには」
「通信妨害ですね。それが効果的です」
「それですよ」
「あっ」
彼はそれを聞いてようやくハッとした。
「それで彼等を混乱させるのですね」
「そういうことです」

二人はここで同じ笑みを浮かべ合った。
「成程、基本ですな。大切なことを忘れていました」
「それでは早速取り掛かりましょう」
「はい」
今度の指示は通信妨害であった。連合軍はすぐにエウロパ軍に対して電子妨害を仕掛けてきた。
「むっ」
それはすぐに効果を現わした。撤退するエウロパ軍の動きが鈍くなった。
「何かおかしいな」
「はい」
彼等は艦橋で口々にそう言い合った。
「通信が急に途絶えた。撤退を続けてもいいのだな」
「そうは思いますが」
「確信がもてないか。他の艦と連絡を取りたいな」
「はい」
そう話をしていた。これにより速度が緩んだ。その時であった。
「そこの艦」
ラテン語で通信が入って来た。
「！？」
「我々は連合軍である」
「その連合軍がどうした」
艦長は不機嫌な声でそう返した。
「我々と卿等は敵同士の筈。どうして通信を入れてきた」
「話す前にまず訂正を願いたい」
「何！？」
「連合に貴族はいない。従って卿等という言葉は我々に対して使わないでもらいたい」
「わかった」
艦長はまずはそれに頷くことにした。それから言った。

「では貴官等としよう。それでいいか」
「了解」
連合軍の声はそれを了承した。
「それではあらためて言おう」
「何をだ」
「貴官等は既に包囲されているということをだ。今それを伝えよう」
「馬鹿なことを言ってくれるな」
エウロパ軍のその艦長は思わず笑った。
「何故私が降伏しなければならないのか。それに包囲されているだと。連合のジョークか、それは」
「貴官等にとってジョークならばよいことかも知れない」
「ふっ」
今度は鼻で笑った。
「面白いジョークだ。どうやら連合のジョークというのも面白いようだ」
「どうやら信じてもらえないようだな」
「どう信じるというのか」
艦長はそう答えて笑った。
「貴官等にとって残念なことに艦艇の速度はこちらの方が速い」
「それはわかっている」
「ではどうしてそんなことが言えるのか。よかったｒそれを証明してもらいたいのだが」
「証明か」
「そうだ。それができるかな」
「今しよう」
「何！？」
ここで艦橋の扉が開いた。そして戦闘服の男達が姿を現わしてきた。見れば連合軍の者達である。
「な・・・・・・」
「これでわかったかな」

その先頭にいる男がニヤリと笑ってそう述べた。驚いたことにその声は通信の声と同じであった。

## 第十一部第一章　死と生とその三

「まさか卿が」
「また言わせてもらうが」
彼は笑みを保ったまま言葉を続ける。
「連合に貴族はいない。それはわかってもらおう」
「クッ」
今度は舌打ちになってしまっていた。彼だけでなく艦橋にいる全ての者に銃が突きつけられていた。こうなってはもうどうしようもなかった。降伏か死か、まさにそれであった。
「もう一度聞こう」
「今度は何だ」
「我が軍に降伏するか。どうだ」
「この状況でか」
艦長はシニカルに笑った。
「あえて問うとはな。意地が悪い」
「それが国際法なのでね」
通信の男は笑みをたたえたままそう答える。実にシニカル、かつ不敵な笑みであった。だからこそであろうか。戦士の笑みとも言えるものであった。
「その部隊の降伏を受諾する権限はまず指揮官にある。違うかな」
「その通りだ」
艦長は答えた。
「ではわかるな。降伏するか、否か」
「こうなっては致し方あるまい」
彼はまず一言そう述べた。
「降伏しよう。だが一つ聞きたい」
「何か」
「一体何時の間に我々を包囲して乗り込んだのか。それを聞きたい」

「簡単なことだ。通信を妨害してな」
「それだけなのか？」
「当然それだけではない。貴官は他の艦艇からの連絡をとろうとして盛んに通信を流して動きも遅くなったな」
「うむ」
「その間に我々は包囲したのだ。高速戦艦を使ってな。そういうことだ」
「成程、そういうことか」
どうやら納得したようであった。
「では私以外にもこうして捕らえられているということだな」
「他の艦については知らないが」
一言そう断ったうえで述べる。
「おそらくな。だが命が助かっただけでもよかったのではないかな」
「そうかな」
だが彼はそれにはシニカルに返答を送った。
「卿・・・・・いや貴官も軍人だな」
「うむ」
「ならわかるだろう。軍人にとっても最も辛いものが」
「食べられなくなるというものではないようだな」
「それが本物の連合のジョークなのか？」
「これは本物だ」
そう言葉を返した。
「面白いか」
「少なくともエウロパの者の感性には合わないな」
「おやおや」
「だが私は気に入った。しかしそれだけではないだろう」
「その通りだ。言いたいことはわかっている」
「なら言わせてもらおう。それは敗北だ」
「そうだな」
それは彼も同意した。

「それを見るのは耐え難いがな。だがここは甘んじて受けよう。そしてまた聞きたい」
「今度は」
「貴官のことだ」
彼はそう答えた。
「私を捕らえた者だ。是非聞きたいまずはこちらから名乗らせてもらおう」
「どうぞ」
彼はそれを促した。それを受けて答える。
「ジェームス＝サンドイッチだ。階級は大佐、騎士だ」
「騎士なのか」
「正式にはサー＝ジェームス＝サンドイッチとなる。国王陛下の家臣だ」
どうやらイギリスの貴族であるらしい。サーというのはイギリス特有の爵位だからである。これは騎士のことを指している。代々受け継ぐ爵位である。
「そうか、国王陛下のか」
「それでは貴官の名を聞きたい。あらためてな」
「私も陛下の下にいる」
彼はそう答えた。
「ほう、それは面白い」
サンドイッチはそれを聞いて興味深そうな声をあげた。
「連合には国家元首としての君主は大勢いるというが」
「そうだな。かなりの数なのは事実だ」
「では聞こう。貴官の君主は」
「皇帝陛下だ」
「皇帝」
サンドイッチはその言葉に反応した。
「連合には二人の皇帝がいるそうだな」
「ああ」

日本、そしてエチオピアである。日本は天皇であるが他の国にとっては皇帝なのである。彼等は連合の国家元首達の中ではとりわけ特殊な位置にいる。皇帝は王や大統領等よりも上位とされているのだ。連合中央政府大統領はこの二人の皇帝に対しては最上の礼を払うこととなっているのである。なおこれがアメリカや中国、ロシアといった国々とっては不満の種の一つでもある。日本に一つ敗れている部分だからである。なお彼等はいずれも大統領を国家元首に置いている。これは彼等の誇りではあるが同時にコンプレックスのもともなっているのだ。大統領は皇帝はもとより国王よりも下位に置かれているのである。連合第一勢力であるアメリカも第二勢力である中国も、そして第三勢力であるロシアも第四勢力である日本はもとより第十五勢力であるタイや十八勢力であるマレーシアよりも儀礼においては下の位なのである。だがそれを主張するのは面子に関わる。だからこそコンプレックスでありジレンマであったのだ。

「貴官はどちらの皇帝の家臣なのか」

「家臣ではないがな」

彼はそれには苦笑で返した。

「連合は市民なのでな」

「おっとそうか」

「だが答えさせてもらおう。私はエチオピアの者だ」

「エチオピアか」

なおエチオピアは勢力ではそれ程高い位置にはいない。連合の中では小国の部類に属する。だが皇帝がいるというだけで連合においてはとりわけ高位に置かれているのである。

「そうだ。ギリシア神話、そして聖書の時代より続くエチオピア帝国の者だ」

「それは面白い。では聞こう」

「うむ」

「貴官の名は」

「ハルシャ＝アスマラ」

彼はそう答えた。

## 第十一部第一章　死と生とその四

「階級は少佐だ」
「ほう、少佐なのか」
「それがどうかしたのか」
「いや、別にな。気にしないでいい」
「そうか」
「それにしても、だ」
サンドイッチはここで溜息をついた。
「何かあったのか」
「この戦い、我等は負けっぱなしだな。これからどうなるのか。それだけが気になる」
「それはもう先程貴官が自分で言ったが」
「確かにな」
またもや苦笑してしまった。
「どうやら貴官には完敗のようだ。だが」
ここで反撃に出た。
「だが。何だ？」
「私は完敗したがエウロパはまだ敗れたわけではないと言っておこう。それだけだ」
そう言った後彼は捕虜として拘束され収容所まで連行されることになった。見れば捕虜となったエウロパ軍の将兵はかなりの数にのぼっていた。
だがエウロパ軍のかなりの数が戦場から離脱することに成功していた。彼等はそのままホズへ向かっていた。その中にはシュヴァルツブルグの旗艦であるワレンシュタインもあった。彼も何とか戦場を離脱することに成功していたのだ。
彼の周りに次第にエウロパ軍の艦艇が集まってくる。その中には様々な色の艦艇もあった。騎士団の艦艇である。

「どうやら思った以上の艦が脱出できたようだな」
「はい」
彼の言葉に幕僚の一人が頷く。
「不幸中の幸いというものでしょうか。どうやら損害は思ったより少ないようです」
「どの位だ？」
「この中央部の戦力の三割程です」
「三割か」
シュヴァルツブルグはそれを聞いて顔を暗くさせた。
「七十個艦隊規模でか。一回の会戦では人類史上かってない損害だな」
「仕方ありません」
答える幕僚の言葉も暗いものであった。
「我が軍は一千を優に越える敵を相手にしたのです。そして敗れた」
「それでこの損害というのは軽いということか」
「そうではないでしょうか。ヴァルハラに旅立った者達のことを言うのは気が引けますが」
「戦闘に参加していた連合軍はどの程度であった。
「中盤からほぼ全軍が参加しておりました」
別の幕僚が報告する。
「彼等はその全戦力を以って我等に攻勢を仕掛けてきたのです」
「一四〇〇個艦隊でか」
「はい」
その幕僚が頷いた。
「彼等も全軍を以って攻撃を仕掛けてきたのです」
「そうか、道理でな」
彼はそれを聞いて頷いた。
「攻撃が激しかった筈だ。よくあの状態でこの程度の損害で済んだというべきか」
「それは閣下の咄嗟の判断のおかげです」

「残念だがそれは違うな」
しかしシュヴァルツブルグはそれを否定した。
「私は今回の作戦の失敗を招いてしまった。無能な男に過ぎない」
「いえ、それは」
「よい。これは紛れもない事実だ」
声に力がなくなっていた。
「その為に多くの将兵を失ってしまった。どうすればいいかな」
「勝てばいいだけです」
そう答える幕僚がいた。
「誰だ」
「ハッ」
その幕僚はシュヴァルツブルグの問いに対して敬礼で以って答えた。
「私です。マリオ＝デ＝シリアーニです」
「ほう、卿だったか」
シュヴァルツブルグはそれを聞いて顔を彼に向けた。
「では策があるというのか」
「今敵軍は勝ちに乗じ我が軍の追撃に取り掛かっております」
「うむ」
「それを引き付けるのです。ホズに」
「だが我等は今かなりのダメージを受けている。数においては最早話にもならない状況だ。それをわかったうえで言っているのだな」
「無論です」
その声に迷いはなかった。
「ですがこのまま退き続けていては何にもならないのではないでしょうか」
「撤退もまた戦略だが」
「御言葉ですが」
鼻っ柱が強かった。エウロパ元帥に対しても毅然として反論する。
「今撤退して何になるというのでしょうか。しかもホズは交通の要

地」
「それは言うまでもないことだが」
「ええ。ならばそこで北方、そして南方の友軍と合流すべきであると思います。今退いてはなりません」
「つまりだ」
彼はシリアーニの策がわかった。
「戦力を集結させたうえで再度決戦を挑むというのだな」
「その通りです」
答えるその顔が明るくなった。
「最早それしかないのではないでしょうか。彼等に勝つには」
「ふむ」
シュヴァルツブルグはそれを聞いて口に手をあてて考え込んだ。
「確かにな。中央部での趨勢は決した」
「残念ながら」
「北方でもだ。そして南方もまた敵の手に落ちた」
「はい」
「こうなってはそれしかあるまい。だがな」
シュヴァルツブルグの声は深刻なものと転じていっていた。

## 第十一部第一章　死と生とその五

「北と南から友軍が来るまでどれだけの時間があるのかわかっているな」
「どちらも二週間程だと思います」
シリアーニはそう答えた。
「南方の軍は総督府からの難民達の避難を終えようやくこちらに向かったところです」
「うむ」
「そして北方の軍はまだ遠いです。かなりの距離があります」
「それを踏まえて二週間と言ったのだな」
「はい」
彼はまた答えた。
「大体そのようなところではないでしょうか。どうでしょうか」
「そうだな」
シュヴァルツブルグは言った。
「そんなところだろう。だが二週間だ」
「はい」
「連合軍は我等がホズに入って数日後に来るだろう。遅くとも一週間後にはやって来る。アルテミスや他の星系の占領を進めながらな」
これはもう規定路線であった。アルテミスでの敗北は彼等にとって一つの星系と多くの兵力を失うだけではなかったのであった。大きな戦略的敗北でもあったのだ。
「彼等が到着して一週間、守りきれるとでもいうのか」
「ホズは中央の最後の要です」
シリアーニはそれに答えるようにして言う。
「ここで踏み止まらなければ同じだと思いますが。違うでしょうか」
「その通りではある」
シュヴァルツブルグはあえて言葉に余韻を持たせてきた。

「だが守りきれない場合はどうなるか、だ。我が軍が全滅すればどうなるか。エウロパ軍は連合軍に対抗できる戦力を完全になくしてしまう。北方と南方の戦力を中央に送る道はまだある」
「はい」
航路は一つではないということである。
「だが戦力がなければどうなるか。これはかなり危険な賭けになるぞ。それはわかっているな」
「最早賭けをどうとか言っている場合ではないでしょう」
シリアーニはそう述べた。
「我が軍はアルテミスにおいて完敗しました」
「うむ」
「これは決戦に負けたといっても過言ではありません。両軍の主力同士が激突したのですから。違うでしょうか」
シュヴァルツブルグはそれには答えはしなかった。それもまた彼自身が最もよくわかっていることなのであるからである。シリアーニは続けた。
「我が軍は戦力の三割を失いながら敵に損害は殆どないでしょう。そして多くの基地と星系を失っております。今それをすぐに回復するのはもう不可能でしょう」
「またえらくはっきりと言ってくれますな」
他の幕僚達は絶句するしかなかった。だがそれでも彼は続けた。
「それならそれで戦うしかないのではないでしょうか」
「それが現実ですか」
「はい」
「わかってはいますが。辛い現実ですな」
「そして勝つ算段は」
「少なくとも負けないことはできます」
それが彼の返答であった。
「これ以上ね。如何でしょうか」
「そうだな」

それを黙って聞いていたシュヴァルツブルグが声をあげた。
「負けない、か」
「はい」
「ホズ星系だったな。そこで凌ぐか」
「どうでしょうか。やりますか」
「やるしかあるまい」
それが彼の答えであった。
「どのみち我々には残された手段は少ない。違うか」
「いえ」
誰もが今のエウロパ軍のことをわかっていた。だからこその返答であった。
「その通りです、残念ながら」
「こうなってはホズで凌ぐしかないと思います、今は」
「そうだな」
彼はそれを認識したうえで述べた。
「まずは北方と南方に伝令を送れ」
「ハッ」
「すぐにホズ星系に向かって欲しいとな。いいな」
「わかりました」
「最もモンサルヴァート本部長もローズ長官も勘がいい。既に察しているかも知れぬがな」
「だといいのですが」
「最悪のケースを想定しておいて損はない。よいな」
「わかりました。では」
「うむ」
こうして伝令が送られることが決定した。すぐに二隻の高速戦艦が南北に送られた。これはとりあえずは済んだ。だが話はまだ済んではいなかった。彼等は依然として話を続けた。
「それでだ」
「はい」

「敵も迫ってきているのだな、それも南北からも」
「はい。これに対してもまた対処しなければならないでしょう。いずれも手強い相手です」
「ほぼ無傷のまま雪崩れ込んで来る大軍に対してこちらは寡兵。しかも傷ついている。絶望的といった方がいいな」
「ですが何としてもやらなければなりません」
シリアーニはそう述べた。
「何としても」
「それはもう決めている」
シュヴァルツブルグの声もまた決意したものであった。
「まずはホズに入る。よいな」
「ハッ」
こうして彼等はホズ星系に向かうのであった。戦いはまだ終わってはいない。むしろ彼等にとってはこれからこそが本当の戦いであった。
対する連合軍は勝利の美酒に酔う暇はなかった。今彼等はアルテミスとその周辺の星系の占領に奔走していたのであった。これもまた戦いの一環である。
「占領の状況はどうなっているか」
マクレーンはブレスの艦橋において参謀の一人に問うた。
「ハッ」
それに対して三十代と思われるまだ若い参謀が応えた。階級は准将であった。
「既に我が軍はアルテミスとその周辺の星系の掌握を八割方済ませております」
「そうか」
彼はそれを聞いて満足そうな声を出した。
「順調といっていいか。ではそちらは心配ないか」
「はい」
「ではエウロパ軍はどうしているか」

「ホズ星系に向かっているようです」
「ホズに」
「はい」
「ふむ」
彼はそれを聞いて顎に手をあてた。
「あそこに入るのか。考えたな」
「考えておりますか」
「あそこがどんな場所か聞いてはいるな」
「エウロパにおける交通の要衝でしたな。そしてオリンポスを守る最大の軍事基地の一つです」
「そうだ」
彼はその答えにまたもや満足そうな声で応えた。
「ニーベルング要塞群程ではないがな。モンサルヴァート元帥が整備した軍事基地の一つがあの星系にはあるのだ。その護りは最早鉄壁だという」
「鉄壁」
「それも鋼のな。それだけの堅さだということだ」
「ですがそれはエウロパの鋼ですな」
「強気だな」
無謀と言えるかも知れない。だがかえってその無謀さが気に入った。
「エウロパの鋼は我等の鋼とは違います故」
「どちらが上か」
「言うまでもないかと」
「言ってくれるな。その根拠が知りたいのだが」
「今までの戦いの結果です」
彼はそう答えた。
「それで充分ではないでしょうか」
「今までのか」
「少なくとも私はそう思いますが」

彼はあくまで強気であった。さらに言う。
「鋼にしろ決して破れないわけではありません」
「うむ」
「むしろかえって脆いものでございます。違うでしょうか」
「鋼が脆いか」
それは意外な言葉であった。マクレーンはそれを聞いて眉を動かした。
「また変わったことを言うな」
「鋼は荒れ狂う炎に対しては強いです」
「そうだな。赤く変色してもな」
「ですが水に対してはどうでしょうか」
「水に」
「はい。水を一点に集中して浴びせれば鋼は簡単に両断されます。それです」
「貴官の言いたいことはわかった」
「有り難うございます」
「そういうことか。ではホズの攻略は決まったな」
「はい」
「だがその前にやるべきことがある。今はそれを進めるべきだ」
「わかっております」
「ではそれを着々と進めよう。よいな」
「ハッ」
彼は敬礼してそれに応えた。マクレーンはそんな彼に対してまた問うた。
「確か貴官はパラオ出身だったな」
「はい」
見れば顔が赤い。それでいながらアジア系の顔立ちをしていた。髪も目も黒である。
「フランシス＝サワムラと申します。階級は准将です」
「そうか。サワムラ准将だったな」

「はい」
「というと君は日系人か」
サワムラという名は日系人に多い名前である。漢字では沢村、若しくは澤村と書く。そうした名前であった。わりかし多い名前と言える。
パラオは日系人が多いことで知られている。二十世紀に日本領であったことがそのせいだと言われている。その旗もまた日本のそれに酷似している。この国は日本に対して非常に好意的な国として知られているのである。
「はい」
彼はそれを認めた。
「私のルーツは日本にあります。これは事実です」
「そうか」
「キョウトという場所が先祖の故郷だといいます。地理には詳しくはないのでそれはあまりよくわかりませんが」
「キョウトか。聞いたことがないな」
「かって地球にあった頃の街だそうです。何でも由緒正しい街だとか」
「若しかしてかっての首都ではないのか」
「あ、そうだったのですか」
「それなら歴史で学んだ。中世の頃の歴史だったか」
「その通りです」
劉も話に入って来た。
「京都は日本の首都でありました。八世紀から十九世紀まで」
「かなり長い間ですな」
「その間色々とありましたが。戦乱も飢饉も。ですがそれでも日本の都であり続けたのです」
「？少し待って下さい」
だがマクレーンは劉のその言葉に疑念を覚えた。
「鎌倉や江戸は違ったのですが」

「はい」
劉は微笑んでその問いに頷いた。
「政権があろうとも。彼等は国家元首ではありませんから」
「そうでしたな」
マクレーンはそれを聞いて納得した。

## 第十一部第一章　死と生とその六

「思えば我々もそうでしたな」
「そういうことです」
　アメリカの首都はニューワシントン、中国の首都は星京にある。だがそこはあまり人口の多くない静かな場所である。経済の中心地はそれぞれ違っている。アメリカはグレートバーン、中国は神江という星系にあるのである。これは彼等の勢力圏の広さのせいもあった。だが彼等は元々そうした考えであった。政治と経済の中心地をそれぞれ分けるという。これもまた国家運営の方法の一つである。
「そう考えるとわかり易いですな」
「ですな」
「それでサワムラ准将」
「はい」
「話を貴官の考えに移すが」
「ええ」
「つまり一点集中攻撃により敵の防衛線を破るという考えだな」
「はい」
　彼はその問いに対して頷いた。
「それではどうでしょうか。効果が期待できると思うのですが」
「確かにな」
　マクレーンはそれを認めた。
「だがそれでいいのかとも思う。我々の今までの戦いは炎だった」
「はい」
「広範囲でローラーの様に攻撃を仕掛けるというな。それは採らないのだな、今回は」
「既にこの戦術は我が軍のオーソドックスとなっております」
　サワムラはそう述べた。
「敵も学んでいるでしょう。今回はその裏をかくべきかと」

「それがこの一点集中攻撃か」
「同じ方法ばかりではいずれ読まれます」
彼はまた言った。
「ここは違う方法を使ってみるのも手だと思いますが。如何でしょうか」
「そうだな」
マクレーンはそれをよしとした。
「ではそれでいくか。参謀総長はどう思われますか」
そしてもう一人の決定権者に尋ねてきた。劉は考える目をした。
「そうですな」
サワムラは述べる彼から目を離そうとしなかった。ゴクリ、と喉が鳴った。
「悪くはないと思いますな」
（よし）
それを聞いて心の中で会心の笑みを浮かべた。
（これでいける）
「ですが」
（何っ）
だがそれを聞いて一瞬焦ってしまった。
「少し手直しも必要かと。それでどうでしょうか」
「そうですな」
話を振られたマクレーンもまた考える目をした。
「それでいいと思います。ただ大筋においてはサワムラ准将の提案通りでいいですな」
「ええ。私もそれには反対しません」
そこまで聞いてようやく胸を撫で下ろした。正直狼狽してしまった。
「ではこれで」
「はい」
こうして連合軍の次の作戦は決まった。彼等はアルテミスとその

周辺の星系の占領を終えた後でホズ星系に向かうこととなった。彼等は盲目の神の下へと向かうことになった。

この頃南方のモンサルヴァート達はようやく難民達を安全な場所に避難させ終えていた。そして危機が伝えられる中央へと向かっていた。彼は今グラールの司令室にいた。

「果たして間に合うかな」

「間に合うかな、ではありませんな」

それを聞いてゴドゥノフが言った。

「閣下」

「むっ」

「間に合わせるのです。違いますか」

「ふっ、そうだったな」

彼はその野太い声を聞いて微笑んだ。

「ゴドゥノフ上級大将の言う通りだ。これでは弱気と言われても仕方ないな」

「はい」

「では間に合わせよう。いいな」

「わかりました。では船足を進めましょう。行く先は」

「そうだな」

彼は壁に掛けられている三次元地図を見ながら考えた。

「中央の本拠地は今アルテミス星系だったな」

「はい」

ゴドゥノフはそれに頷いた。

「ですが連合軍の攻勢は熾烈さを増しております。アルテミスに入るのも間も無くかと」

「かもな」

モンサルヴァートはそれを聞いて頷いた。

「動きは遅いが。だが確実だ」

「はい」

「このままではアルテミスに到達するのも時間の問題か。ではどうするべきか」
「何処かで合流すべきですが」
「問題は何処か、だな。さて」
彼は地図を見ながら言葉を続けた。
「どうするべきか。上級大将、考えはあるか」
「ううむ」
彼もまだ決断を下しかねていた。正直まだこれだという判断の根拠がない。これでは迂闊に判断を下せないのであった。だからこそ困っていたのだ。だがここでその根拠が自分の方からやって来たのであった。
「閣下」
ベルガンサが部屋に入って来た。彼はまずは敬礼してから述べた。
「中央のシュヴァルツブルグ閣下から伝令です」
「閣下から。何と」
「今後の戦局についてです。如何なされますか」
「合わないわけにはいかないだろう」
彼の答えはそれであった。
「すぐに使者をこちらまで通せ。いいな」
「わかりました」
こうして使者が通されることになった。モンサルヴァートはベルガンサが退室した後で再びゴドゥノフに顔を向けてきた。
「司令」
今度は役職で呼んできた。
「はい」
「どう思うか」
言葉が簡潔なものとなっていた。声の質も硬いものとなっていた。
「どう思うか、ですか」
「そうだ。何があったと思う」
「敗戦です」

彼ははっきりとそう述べた。
「おそらく中央の我が軍は連合軍との戦いにおいて決定的な敗北を喫したのでしょう」
「やはりそう思うか」
「それ以外にはないかと」
彼はまた述べた。
「そうでなければ伝令がわざわざこんな所にまで来ません」
「そうだな」
彼もまた同じ考えであった。
「これはまずいかも知れませんな」
「そうだな」
彼は硬い顔のまま頷いた。それから述べた。
「タンホイザー元帥はいるか」
「タンホイザー元帥ですか」
「そうだ。彼に伝えてくれ。今すぐに会いたいと」
「わかりました」
こうしてタンホイザーが呼ばれた。彼はグングニルからシャトルでグラールまでやって来た。
「御呼び頂き感謝します」
「うん」
モンサルヴァートはそれに応えて頷いた。
「よく来てくれた。実は卿と一緒に考えたくてな」
「私とですか」
「そうだ。ゴドゥノフ司令」
「はい」
二人の横に立っていたゴドゥノフに声をかける。すると彼はすぐにそれに応えた。
「使者をこちらに」
「わかりました」
程無くして部屋に一人の男が連れられてきた。細面のやけに背の

高い男であった。
「彼は」
「中央軍に所属しているシュトラウス大佐だ」
「中央から」
それを聞いたタンホイザーの目の色が一変した。すぐに何かを悟ったようである。
「そうですか」
モンサルヴァートはそれを見て彼が事情を察したことを見抜いていた。
「それではシュトラウス大佐」
モンサルヴァートは彼に声をかけてきた。
「話を聞きたい。いいか」
「わかりました」
彼はそれを受けて話をはじめた。
「中央での我が軍ですが」
「うむ」
モンサルヴァートは頷いた。
「アルテミスでの戦いに敗北いたしました。かなりの損害を被りました」
「やはりな」
これは予想の範囲内であった。モンサルヴァートもタンホイザーもそれを聞いて驚きはしなかった。
「あの」
逆にシュトラウスが驚いていた。彼等が冷静だったからだ。彼はモンサルヴァートに問うてきた。
「何だ」
「話を続けてよろしいでしょうか」
「ああ、いいぞ」
彼はそれを促した。
「続けてくれ。いいな」

「わかりました。それでは」
彼はそれを受けて話を再開した。

## 第十一部第一章　死と生とその七

「我が軍はアルテミスからホズへと向かうことを決定しました」
「ホズに」
「はい」
シュトラウスはまた答えた。
「そしてそこで南方及び北方の軍と合流すべきだという話が出ているのですが。どう思われるでしょうか」
「私に異存はない」
モンサルヴァートはそう答えた。
「むしろこちらから向かおうと思っていたところだ。是非向かわせてもらう」
「それは何よりです」
「それでだ。どれだけかかればいい」
「どれだけといいますと？」
「ホズまでの時間だ。どの程度で到着すればいいか」
「二週間程と見越していますが」
「それはシュヴァルツブルグ閣下がか」
「はい」
シュトラウスはまた答えた。
「そうですが。如何でしょうか」
「わかった」
だがそれに対してモンサルヴァートは答えただけであった。
「それ以上はない。下がっていいぞ」
「ハッ」
「誰かいるか」
モンサルヴァートはここで人を呼んだ。すぐに従兵が一人入って来た。若い整った顔立ちの少年兵であった。
「御呼びでしょうか、閣下」

「シュトラウス大佐を休める場所に案内してくれ。いいな」
「わかりました。それでは大佐、こちらへ」
「うむ」
彼はそれを受けて従兵に案内されて部屋を後にした。そしてゴドゥノフも去った。後にはモンサルヴァートとタンホイザーだけが残された。
「二週間だ」
モンサルヴァートはまずそう述べた。
「長いか短いか」
「長いですね」
タンホイザーの返答はそれであった。
「二週間ですとホズが陥落している可能性があります」
「陥落か」
「そして中央軍は崩壊です。これだけは避けなければなりません」
「わかっている」
これについてはモンサルヴァートも同意であった。
「だが問題は間に合うかどうかだ。いけると思うか」
「いけます」
彼の答えは簡潔であった。
「私にお任せ下さい。必ずやホズを救って御覧にいれましょう」
「そうか」
モンサルヴァートはそれを聞いて頼もしいといった様子であった。
「では今回の進軍は卿に任せたい。いいか」
「はい」
タンホイザーはその問いに対して自信に満ちた声で頷いた。
「是非共お任せ下さい。ホズも中央軍も我等の手にあるままです」
「では期待する。それでは行くぞ」
「ホズに」
「うむ」
こうして彼等はホズに急行することになった。光なぞ問題にならら

ぬ速さで彼等は向かっていた。
「一隻たりとも遅れるな」
その先頭をいく戦艦グングニルの艦橋にてタンホイザーは全軍に向けてそう声をかけていた。
「そしてホズ、友軍を救うのだ。いいな」
「ハッ」
それに対してモニターに現われた各司令達が敬礼で応える。そこにはゴドゥノフだけでなく他の者達もいた。ニルソンやマトク、アローニカといった歴戦の将達であった。
「それは全て卿等の双肩にかかっている。いいな」
「わかりました」
彼等はそれに応えた。そして一斉に言う。
「エウロパの為に」
「うむ」
タンホイザーもそれに頷いた。そして彼も言った。
「エウロパの為に」
そしてホズに向かった。彼等もまた戦場に向かうのであった。

だがホズに向かうのは彼等だけではなかった。連合軍南方方面軍、そして北方方面軍も向かっていたのである。
「エウロパ軍の南下速度はどうなっているか」
リバーグは艦橋でジェリオにそう尋ねてきた。
「イバロで破った北方の軍のことですね」
「無論」
彼は簡潔にそう答えた。
「あの戦いの後南に逃れているが。確か中央の友軍との合流を目指しているのだな」
「はい」
彼はそれに答えた。
「その通りです。どうやらホズに向かっているようです」

「ホズか」
彼はそれを聞き目を少し動かせた。
「何か」
「いや、あの星系はエウロパにおいて交通の要地であったな」
「はい」
「中央のエウロパ軍の戦局についてはまだ新しい情報が入ってきていないが」
「閣下」
ここで参謀の一人が艦橋に入って来た。情報参謀の一人である。
「どうした」
「中央での戦局ですが」
「言っている側からか」
「好都合ですな」
ジェリオはそれを聞いてにんまりと笑った。だがリバーグは面食らった顔のままであった。
「まさか早速話が飛び込んでくるとは」
「うむ。それでだ」
リバーグはその情報参謀に尋ねてきた。
「はい」
「どういった情報だ。何かあったのか」
「アルテミス星系ですが」
情報参謀は答えた。
「うむ」
「陥落しました。そして我が軍は敵の主力に対してかなりの損害を与えました。しかもこちらの損害は極めて軽微とのことです。完勝です」
「それは何よりだ」
彼はそれを聞いて頬を緩ませた。
「そして敵はどうなったか」
「ホズ星系に向けて退却しているようです」

「そうか、ホズか」
「閣下」
それを聞いたジェリオがリバーグに声をかけてきた。
「おそらく北の敵も」
「それが常道だな」
それは彼にもわかっていた。一言そう述べて頷いた。
「それでは我が軍の目標が決まったな」
「はい」
ジェリオも他の者達もそれを聞いて頷いた。
「我が軍はこれよりホズ星系に向かう。そして中央部の友軍と合流するぞ」
「ハッ」
「そして一気に敵を殲滅する。よいな」
「わかりました。それではホズに進路を変えます」
「うむ、頼むぞ」
「ハッ」
彼等もまたホズに向かうのであった。これは南方の連合軍も同じであった。こうして両軍の全軍が一同に会そうとしていた。決戦の時は近づこうとしていた。

# 第十一部第二章　バランサーその一

バランサー

エウロパとの戦いが続いている連合であるが彼等の中でも戦いがあった。だがそれは武器を使っての戦いではなかった。この戦いは他のものを使った戦いであった。

連合の経済関係の閣僚達が一同に会していた。そしてあることについて話し会っていた。それは連合内の貿易についてであった。

連合において貿易、そして経済は極めて重要な分野であった。これはどの勢力においても変わらないが連合においてはそれが特に顕著であった。彼等は銃で戦争はしないがコインや札束で戦争をしているのであった。連合の中にあってもこうした意味で戦争が行われているのである。

今回は輸出品目ごとの貿易赤字についての議論であった。主役はある程度予想されたことであるがやはり日米中露、トルコ、ブラジル、オーストラリア、そしてＡＳＥＡＮ諸国であった。彼等が一人たりとして出ない連合の国際会議などというものはなかった。しかもオーストラリアには必ず兄弟国としてニュージーランドも参加する。日本には韓国がいつもついていた。これはニュージーランドとは違った意味であったが。そしてもう一つの国も。

それはイスラエルであった。この国は連合においては極めて特殊な位置にいる国であった。

バランサーとでも言うべきであろうか。この国は連合においては然程国力が高いわけではない。それは人口が少ないせいであった。

それには理由があった。イスラエルはユダヤ人の国である。彼等はユダヤ教を信じる者達のことである。それ以外はユダヤ人ではない。だからこそ人口が少ないのであった。

だが彼等はそれでも連合において隠然たる勢力を有していた。そ

れは何故か。彼等が連合の政界や財界において有力者を代々出していることと各国にユダヤ系の者達がいたからである。彼等は数こそ少ないが知識人や資産家も多く、そして選挙における票も資金援助も集中豪雨的なものであった。だからこそ彼等は力を持っていたのである。力は暴力だけではないということである。もっとも彼等はそうした世界にも通じているのであるが。

この会議においては日米中露それぞれが複雑に衝突していた。この四国の関係はモザイクであり時として協力し合うこともあればいがみ合うことも多い。アメリカと中国が日本に対抗すればロシアが日本につく場合もある。中国とロシアが日本とアメリカに挑戦することもあればアメリカとロシアに対して日本と中国が手を結ぶこともあった。四国が協同して何かをする場合もある。大国の思惑であるが彼等は彼等の国益を追及しているが故の行動であった。

彼等を中心にＡＳＥＡＮ諸国が動く。だが彼等は実際には第五の勢力であり彼等もまた利害の中心にいた。そこに中南米諸国やアフリカ諸国、オセアニアの諸国が参加するのである。新興国家達もである。そんな彼等の利害を調整するのがイスラエルであった。

『イスラエルが動く時に連合は動く』

古来より言われてきたことである。イスラエルはそこまで怖れられていたのだ。そして今も。今は四国が互いにいがみ合う状況となっていた。

この会議はパプワニューギニアのバニモ星系において行われていた。俗にバニモ会談と呼ばれていた。

「我々としましてはおおいに不満がありますな」

まずは中国の通商相である李白梅が口火を切った。花の名が名前にあるが彼は男である。筋骨隆々の大男であった。かってはボディビルダーとしても知られていた。

「アメリカに対しては鉄鋼において大幅な赤字です」

「何を仰るのか」

それを聞いたポール＝バトルがシニカルな笑みを浮かべた。彼は

アメリカ商務相である。ヒスパニックとウェールズ系のハーフである。
「我が国は中国との貿易では衣料においてかなりの赤字ですが」
「鉄鋼と衣料は別です」
李はそう返した。
「それに赤字の総額はこちらの方が多い」
「それは数字のトリックですな」
バトルはそう反論した。
「トリック？」
「そうです。計算の仕方によってある程度は変わりますね、そうしたことは」
「むっ」
「新聞によってデータも違う。李通商相、貴方は御自身に都合のいいデータを述べられているのではないですかな」
「それはそちらも同じでしょう」
「ほう」
バトルはそれを聞いてその目を細めてきた。
「では私は何のデータをもとにしているのですかな」
「ウォール＝ピープルでしょう。貴方はこの前あの雑誌に寄稿されいましたね」
「確かに」
彼はそれを認めた。
「中々好評でした」
「あの論文は私も拝見させてもらいました」
「どうでしたか」
「素晴らしい論文です。感服致しました」
「有り難うございます」
「いえいえ」
そんなやりとりの中でも彼等の目は笑ってはいなかった。互いの隙を窺っていた。

「ですがあえて言わせて頂きましょう」
李は当然のように反撃に転じてきた。
「何を」
「そのデータのことです。あの雑誌はあまりにもアメリカにとって都合のよいデータばかりが書かれています。あれではまるで中国はアメリカとの貿易により一方的に得をしているようではないですか」
「違うのですかな」
バトルはここでとぼけてみせた。
「違います」
そして李は毅然としてそう返した。
「私は北安新報のデータですが」
「そちらの御国のものですが」
「それが何か」
「それには貴方の記事が昨日載っていましたね。子供に身体を動かすことの大切さを教えることの素晴らしさを説いておられましたが」
「ええ」
彼はそれを認めた。
「それが何か」
「あれはいい記事でした。全面的に賛成です」
「有り難うございます」
「ですがね」
やはり二人の目は笑ってはいない。バトルはここで刃を抜いた。
「経済面では信用ができませんね」
「何故ですかな」
李はそれを聞いてバトルに問うてきた。
「米中の貿易ではアメリカが利益を得ているとありましたね」
「事実だと思いますが」
「とんでもない。我々は貴国にかなり利益を譲っているのですぞ」
「これはまたご冗談を」
「私は冗談は言わない主義でして」

「ではジョークですかな」
「冗談とジョークは違うものでしたか」
「さて」
そんな応酬が続く中別室では日本とロシアが激しいやりとりを演じていた。あちらが男の対決ならばこちらは女の対決であった。

## 第十一部第二章　バランサーその二

「お久し振りですね、小柳さん」
「そうですね、コズイレフさん」
大柄な金髪の美女が胸を張って小柄な黒い髪の女性を見下ろしていた。だがその黒髪の女性も臆してはいなかった。
「この前のお話ですが」
「はい」
大柄な金髪の女、カーチャ＝コズイレフがまず口を開いた。彼女はロシアの商業相である。鉄の女とも言われるロシアきっての才媛であった。
対するは日本の小さな巨人小柳真理であった。彼女は日本の通産相である。ショートヘアの可愛らしい顔立ちながら毅然とし、優れた事務処理能力で知られていた。
「受けて頂けるでしょうか」
「残念ながら」
即答された。
「日本としてはお受けするわけにはいきません」
「何とまあ」
コズイレフは落ち着いた様子でそれに逆に返した。
「我が国の宝石は連合一だといいますのに」
「ですがそれを研磨し、加工しているのは我が国ですね」
「むっ」
それを聞いたコズイレフの左の眉が歪んだ。
「違うでしょうか」
「生憎我が国は功績の加工には通じておりませんので」
「はい」
これはこの時代においても独特の技術が必要なのである。連合においては日本と数ヶ国が有名であった。

「確かに日本の加工技術は素晴らしいです」
「有り難うございます」
「ですがそれは我が国の原石があってはじめて光るのではないですか」
「御言葉ですが」
小柳はやんわりと反撃に出てきた。
「はい」
「宝石は他にもありますので」
「クッ」
これにはさしものコズイレフも沈黙してしまった。だがそれは一瞬のことであり彼女はすぐに逆襲に転じてきたのであった。
「それは心外です」
「何がでしょうか」
「いえ、我が国は豊かな資源で知られております」
「それは私も知っています」
ロシアは様々な鉱産資源を算出する惑星を多く持っていることで知られている。連合において最大の鉱産資源を擁しているとまでされている。コズイレフはそれについて言及してきたのだ。
「ですが」
小柳はそのうえであえて反撃に転じてきたのだ。
「ムッ」
コズイレフも身構えた。そして両者は再び対峙した。
「我が国にも宝石はありますから」
「真壁星系ですね」
「はい」
真壁星系は日本の鉱産資源の産地の一つである。良質の宝石を多量に有していることでも知られている。この時代においても宝石は人口のものより天然のものがいいとされているのだ。
「私が仰りたいことはわかりますね」
「はい」

コズイレフは不機嫌さを押し殺してそれに答えた。
「ですが我が国の宝石程ではないかと。御言葉ですが」
ロシア外交は直線的なことで知られている。小細工はあまり弄しない。ロシア外交は情報を収集するがそれだけだとも言われている。彼等はその国力を背景にした力技を好むのだ。それだけだという意見もある。これが策も好むアメリカや中国、そして国力がありながらそれを背景にはあまりせず、交渉い重点を置く日本とは違うのである。ロシア外交は四国の中では比較的わかり易いとさえ言われている。この場合これはあまりいい意見ではないのであるが。
「ロシアの宝石は連合一です」
彼女は胸を張ってそう言った。
「これは多くの雑誌でもそう評されていますね」
「そうだったのですか」
小柳はそれでも揺るがなかった。その名にある柳のような動きであった。
「日本ではそうではないようですが」
「そうだったのですか。それは残念です」
だがコズイレフも同じだ。その前に突き出た胸をさらに前に出してきた。
「それは我が国の宝石の素晴らしさを御存知ないということです」
「残念ですがそうではありません」
「といいますと」
「単なる嗜好の問題ではないでしょうか。我が国の嗜好が貴国の嗜好と合わないのかと。貴国で我が国の料理である寿司や天麩羅はあまり人気がないようですね」
「私は好きですけれどね」
実は彼女は日本に留学経験があるのだ。
「我が国の米はそちらの米とは違いますから」
「はい」
日本の米は日本人の好きなジャポニカ米の改良種である場合が多

い。だがロシアの米はインディカ米の改良種なのである。こちらの方が連合においては主流であり日本の方が特殊なのであるが。
「それは仕方のないことでしょう。スキヤキは人気がありますけれどね」
「そういうことです」
それこそが小柳の衝いた点であった。
「我が国ではロシアのお酒はアルコール度が強過ぎて飲める者はあまりおりません。逆にこちらのお酒はロシアではアルコールが弱いと不評ですね」
「お酒は強ければ強い程いいのです」
コズイレフもそれは同じであった。彼女はロシアの閣僚の中でも酒豪として知られている。なお酒癖の悪さも有名なのであるが。
「ですが我が国ではそうではありませんので」
「ふむ」
アメリカや中国が相手ならばいい加減小柳のこの長ったらしいと認識されても仕方のない話に苛立ちを覚えはじめていただろう。だが彼女はロシア人である。ロシア人は気が長いのだ。
「そういうことです。具体的に申し上げますとロシアの宝石は我々にとってはあまりにも大きいのです」
「大きければ大きい程いいではないですか」
「それが違うのです。我が国の宝石の加工は小さいものを好みます」
「そのようですね」
これは事実であった。日本の宝石は小さい中に様々な装飾を施しているので知られている。今度はそれについて言及してきたのである。
「ですから。どうも我が国には合わないとだけ申し上げておきます」
「それはそちらの理解不足ですね」
それでもコズイレフは引き下がらない。
「我が国の宝石の素晴らしさをおわかりになられないとは。それでもあえて言わせて頂きます」

「はい」
「もう少し我が国の宝石を御覧下さればおわかりだと思いますが」
「ではまず宣伝をされてはどうでしょうか。少なくとも今ではお受けいたしかねます」
「むむっ」
　こうして議論は平行線を辿った。力で押そうとするコズイレフに対して小柳は受け流しで対抗する。二人の美女は互いに譲らず対峙していた。他の国々はそれを離れた場所で見ていることしかできなかった。これはアメリカと中国についても同じであった。さらに悪いことにアメリカと日本、アメリカとロシア、中国と日本、中国とロシアの間でもそれぞれ交渉が行われ紛糾していた。連合の四大国が互いに衝突し合うという困った状況になっていたのだ。
『四大国全面衝突』
　連合の各紙にはそうした一面が飾られた。そしてネットにおいても話題になっていた。彼等は互いに譲らず話は大変なこととなっていた。ＡＳＥＡＮ諸国も今回は同じ分野で四国と対立しておりここでの調停者はいなかった。四つ巴どころか五つ巴とさえなっていた。他の国々は迂闊に動けない状況であった。誰も仲介する者はいないように思われた。ただ一国を除いて。
「話が混乱しているようだな」
　イスラエル代表が宿泊しているホテルである。そこにイスラエル通商相であるヨセフ＝シャイエックがいた。白髪に黒く鋭い目、そして痩せた顔と身体を持っている。全体的に鷲に似ている。彼もまたイスラエル代表としてここに来ていたのである。
「四国がそれぞれ対立するとはな。滅多にないことだ」
　彼は淡いクリーム色のスーツを着てソファーに座っていた。ロイヤルスートルームでありかなり豪華なものだった。このホテルは彼の同胞が経営するホテルでもある。
「それにＡＳＥＡＮまで加わるとはな。エウロパとの戦争より面白い見世物ではないかな」

「傍目から見たらそうですね」
彼の前に立つ紺色のスーツを着た若い男がそれに頷いた。イスラエル通商省の官僚である。今はシャイエックの公式の秘書を務めているのだ。
「議論は紛糾するのはいいことだ。だがな」
彼はその鋭い目を光らせた。
「長く続くとよくはない。違うだろうか」
「その通りです」
秘書はそれに頷いた。
「ここは我々が動く時ではないかと思うのですが」
「そうだな」
彼は静かにそれに応えた。
「だが焦ってはならないぞ」
「はい」
「急いては事を仕損じるからな。落ち着いて見よう」
「どうなさいますか」
「今はな。事前の工作だ」
彼は静かにそう言った。
「各国についての細かいデータはあるな」
「はい、こちらに」
秘書はここで一枚のディスクを差し出した。
「四国、そしてＡＳＥＡＮ諸国のそれぞれの貿易に関するデータはこちらにあります」
「うむ」
シャイエックは静かにそれを受け取った。だがその動きは何処か狩りめいていた。
「では早速見せてもらおう。いいかな」
「是非共お願いします」
彼はそれに賛成した。そして言葉を続ける。
「そこに全てがあると思いますから」

「そうだな。だが全てではない」
「といいますと」
「物事というのはデータだけではないのだ」
これはシャイエックの持論でもあった。
「今各国の閣僚達についても調べさせている。データは国のものだな」
「はい」
「だが人のものはないだろう。違うか」
「その通りです」
秘書はそれを認めた。
「人もまた必要なのですか」
「交渉は人が行うものだからな」
彼はまた言った。
「人のものも必要だ。むしろそちらの方が重要か」
「そうなのですか」
「君はまだ若いな」
彼はそう言って秘書を見上げた。若く整った顔立ちをしている。

## 第十一部第二章　バランサーその三

「だが若いということはそれだけ知る機会が多いということだ」
「はい」
「学べばいい。そして知るのだ」
「わかりました」
「まずはバトル、李、小柳、そしてコズイレフ各氏についての資料が必要だな」
シャイエックはまた言う。
「全てはそれからでいい。我々が動くのは」
「動くのは」
「それからだ。いいな」
「はい」
こうして彼等はまずは動きはしなかった。そして情報収集に努めた。やがてその情報が集まってきた。
「ふむ」
シャイエックはノートパソコンを前にしてそれ等の資料を見ていた。パソコンの画面には秘書から渡されたデータがある。そして両手には書類がある。携帯も側にあった。
「成程な。そういうことか」
「何かおわかりでしょうか」
「色々とな」
傍らに立つ秘書にそう答えた。
「面白いものだ。思ったより簡単に済みそうだな」
「簡単ですか」
「私が思ったよりはな」
彼はそう答えた。
「これなら楽に対処できる。問題はどうするかだ」
「どうしますか」

「まずは人を呼ぶ」
「人を」
「そうだ。手土産を持たせてな」
それが何であるかは言うまでもなかった。この時代においてもそうしたディベートはこうした裏からの交渉においては不可欠なものであった。
「ですがあの四人はそれ程そうしたことには執着はないようですが。ＡＳＥＡＮ各国の担当者達も」
「何もそれだけではない」
シャイエックは彼にそう答えた。
「金だけでものは解決はしない」
「はあ」
「彼等の立場を考えるといい。彼等は何だ」
「各国の閣僚です」
「閣僚はそれぞれの国の利益の為に動いているな」
「はい」
中には例外もいるかも知れないがその通りであった。彼等も同じであるからだ。
「それだ。ディベートはそれを持って行けばいい」
「それで各国の矛を収めるということですね」
「そうだ。それで話は済む。それでも駄目だというのなら最後の手段を使えばいい」
「あれですね」
秘書はそれを聞いて思わせぶりに笑った。彼もイスラエルの者である。自国のやり方はよくわかっていた。
「そういうことだ。いいな」
「わかりました。それでは」
「うむ、頼むぞ」
秘書は応えると忽然と姿を消した。シャイエックはそれを背中で見ながら資料に顔を戻していた。

「さてと」
彼は資料を見ながら携帯に手をやった。そして電話を入れる。
「私だ」
あちこちに電話をかける。それで以って何かをしようとしていた。
数日前まで紛糾していた交渉は突如として収まった。そして奇跡的に平和的な形でそれぞれの議論が収まった。四国もＡＳＥＡＮ各国も仲良く最後の記念撮影に登場した。これを見て不思議に思わない者はいなかった。
「何故あそこまで紛糾していた話がこうも簡単に収まるのか」
彼等の主張はそれであった。
「何かあるだろ」
「写真を見てみろ」
とあるネットの掲示板で誰かがあることに気付いた。こうした書き込みがあった。
「何かあったのか？」
「中央に誰がいるか見てみろ」
見ればそこにはシャイエックがいた。彼は何故か微笑んでそこに立っていた。その周りを日露、そして米中の閣僚達が取り囲んでいる。まるで彼等がシャイエックに従うような姿であった。そしてシャイエックの後ろにＡＳＥＡＮ各国の閣僚達が入る。あまりにもあからさまといえばあからさまな姿であった。
「これは」
「わかるよな、この写真」
彼等は口々にそう議論していた。
「また連中か」
誰かの書き込みがあった。するとそれに対してこういった書き込みがあった。
「御前その書き込みから情報集められるぞ」
「まさか」

すぐにそう反論があったがこれは否定された。
「連中を甘くみるなよ」
「そうだったな」
これは単なる書き込みであるので何もない。だがここにその『連中』が連合においてどう思われているかの根拠があった。これが実態であった。
イスラエルはそうした国だと認識されていた。連合においては人口は多くはない。といっても人口においても巨大な四大国から一億もいない小国まである連合においては決して少なくはない。十億は優に越えている。イスラエルの国民は、である。ユダヤ系はそれよりもずっと多い。彼等はその独自のコネクションと団結、資金、そして情報収集能力を以って連合の影の実力者になっていたのだ。
「ねえカーチャ」
会議が終わりコズイレフと小柳はバーで二人で飲んでいた。実は二人は大学時代からの友人である。コズイレフが日本の大学に留学した時にルームメイトであったのだ。二人は同じ大学で同じ学部にいた。二人は教育学部にいたのである。仕事が終われば二人はこうして昔の関係に戻れるのである。
「何？」
コズイレフは旧友の言葉に顔を向けてきた。見ればウォッカをストレートで飲んでいる。
「そっちにあの国から話が来なかったかしら」
「真理のところと同じよ」
それだけで充分であった。彼女はウォッカを飲みながらそれに応えた。
「そう」
小柳はアドニス＝カクテルを飲みながら頷いた。これはワインをベースとした甘いカクテルである。彼女は甘い酒が好きなのである。
「やっぱりね。こっちにも来たわ」
「悪い条件じゃなかったでしょ。お互いに」

「ええ」
小柳はまた頷いた。

## 第十一部第二章　バランサーその四

「私の国にとっても貴女の国にとってもね。おまけにアメリカや中国、ＡＳＥＡＮ各国とのことまでまとめていてくれていたわ。おかげで助かったけれど」
「借りを作ったつもりなのよ」
　コズイレフはウォッカを飲み終えてそう言った。そして別の酒を頼んだ。
「マスター、もう一つお願い」
「何にしましょうか」
「そうね」
　彼女は暫し考えた後それに答えた。
「ロシアン＝カクテルを。いいかしら」
「ええ、ではそれで」
「お願いするわ」
「はい」
　暫くしてロシアン＝カクテルが運ばれて来た。オレンジの酒であった。
「また凄いのを頼むわね」
　小柳はそのカクテルを見て呆れた声を出した。ロシアン＝カクテルはウォッカとドライ＝ジンを合わせてクレーム＝ド＝カカオを入れたものである。甘く口当たりもいいが極めて強い。レディ＝キラーとも言われている。
「あら、これ位普通よ」
　コズイレフは彼女に笑って応えた。
「ロシアではね。こんな軽いお酒で倒れる女はいないわ」
「少なくとも貴女はね」
「ええ」
　コズイレフは笑っていた。

「こんなのお酒のうちに入らないわよ。それは貴女だってそうでしょ」
「カーシャが悪いのよ」
彼女は口を尖らせてそう言った。
「毎日無理矢理飲ませたから。最初は死ぬかと思ったわ」
「お酒はね、何度も倒れる位飲まなきゃ駄目なの」
そう言って笑っていた。
「おかげで飲めるようになったじゃない。最初はビールでも駄目だったのに」
「日本人はお酒にあまり強くないの」
小柳は不機嫌な顔を作ってそう述べる。
「貴女とは違うのよ。わかる？」
「わからないわね」
コズイレフはそのロシアン＝カクテルを一気に飲み干してそう言った。
「お酒なんて幾らでも飲めるから。強くないと駄目なものの一つね」
「ロシアではそうでしょうけど日本では違うのよ」
そう言う小柳ももうかなり飲んでいた。
「それが違いだっていうのよ」
「うふふ」
何だかんだ言って二人は仲が良かった。そんなやりとりを楽しんでいた。
「けれど彼等はそこも突いてきたわね」
「ええ」
二人は酒を続けながら同時に話も続ける。コズイレフも小柳も新しいカクテルを頼んでいた。
「正直驚いたわ。あんなに詳しく知っているなんて」
「それが彼等の怖いところよ。私のプライベートまで知っていたのよ」
「私もよ」

二人は不機嫌な顔で見合わせた。
「息子が学校でどんな悪さをしているかまで知っていたのよ」
「こっちも。主人の来年の仕事まで。何で知っているのかしら」
コズイレフも小柳も三十代後半である。結婚して子供もいる。コズイレフの夫はソムリエであり、小柳の夫は俳優である。イスラエルはこうしたことも調査済みであったのだ。
「それで脅しもかけているのでしょうね」
「彼等らしいわね」
連合の政界にいればわかることであった。他の国々にとってイスラエルとはそうした存在なのであった。
「けれど条件はよかったわね。おかげで丸く収まったわ、本当に」
「全ての国がね。とりあえずは彼等に満足すべきかしら」
「それは甘いわ」
小柳はコズイレフを窘めにかかってきた。
「あのイスラエルよ。ただ恩だけを売ると思う？」
「そう言われると疑問ね」
「そういうことよ。ただ彼等は私達に対しては面を向かって来ないでしょうね」
「どうしてそう言えるのかしら」
「それが彼等のやり方なのよ」
小柳は一言そう言った。
「やり方」
「そう、バランサーとしてね。いいかしら」
「ええ」
コズイレフも頷いた。
「彼等は人口も少ないわね。そして国力もそれ程ではない」
「我がロシアや貴女の国日本と比べたらずっとね」
「だからよ。彼等は私達に対抗できる程の国力はない。ただし表向きね」
「裏があるのね」

「それが彼等の強さなのよ。これは結構色々と言われているわね」
「確証はないけれどね」
コズイレフはここはこう述べるに留まった。実は彼女はその立場から普通の市民より多くの裏の情報を知っている。例えばネットに氾濫する情報の中のどれが真実であるかをだ。それを知る立場であるからあえてこう述べるに留まったのである。これも処世術である。迂闊に言えば自身の身にも危険が迫るのがわかっているのだ。
「連合各地にいるユダヤの同志達もね。彼等にとっては力なのよ」
「それね。我が国でも隠然たる力を持っているわ」
「日本でもね。流石に宮内省にはいないけれど」
宮内省は日本の、いや連合でも特にガードの高い場所として知られている。流石のユダヤ系ですら宮内省と皇室にまで影響を及ぼすことはできなかったのである。
「あそこは流石にないでしょう。けれど言い換えると」
「ええ。やっぱり何処かに目と耳があるでしょうね。それはわかるわ」
「そういうことね。辛いわ」
彼女はそう言って目を下に向けた。
「ロシアもよ。アメリカも中国もそれで苦労しているみたいね」
「連合のどの国もでしょう。けれど証拠はない」
証拠がなければ動くことができない。彼等はそこまで見越して行動をとっているのである。これがイスラエルの恐ろしいところであった。そして彼等が持っているのは目と耳だけではないのである。
「そしてそれから動く」
「ええ」
「貴女の国でイスラエルと距離を置こうとした大物政治家のスキャンダルがあったそうね」
「ああ、あれね」
コズイレフはそれを聞いて頷いた。
「ちょっとね。女性問題で」

「よくある話ね」
「普通の女性問題ならね。まさかその大物政治家の嗜好まで暴露されていたとしたら？」
「どうした話だったのかしら。詳しくは知らないけれど」
「ＳＭクラブに出入りする写真が週刊誌に掲載されたのよ御丁寧に中で何をやっているかという写真や文章、証言まで載せてね」
「徹底してるわね」
「おかげでその人は一回落選したわ。この前の補欠選挙で復活したけれど」
「大変だったのね。やっぱりあれで？」
「だから証拠がないのよ」
コズイレフは不快な顔でカクテルを飲み干してからそう述べた。
「彼等がやったっていうね。お金が動いているかも知れないし」
「足がついていないのね」
「そういうこと。けれどこうした話は貴女の国でもある筈よ」
「否定はしないわ」
その通りであった。
「日本でもね、イスラエル寄りと思われないと落選したりすることがあるから。こうしたことは連合のどの国でもあることよね」
「そしてイスラエルやユダヤ系に好意的だと集中豪雨のような票と資金、様々な援助が得られる。わかり易いわね」
「そうね。私は中立だけれど」
「私もよ。今のところ彼等は私には何もないみたい。これからはどうかわからないけれど」
「カーチャは力があるから」
「真理は頭かしら。貴女なら彼等を向こうに回しても大丈夫よ」
「それは無理よ」
小柳は旧友のその言葉にくすりと笑って応えた。
「私だって政治家だから。それ位はわかるわ」
彼女もまた伊藤の弟子の一人である。父が政治家でありその跡を

継ぐ形で政治家となったのである。彼の父は何度か日本において閣僚になったこともある日本政界の実力者であった。懐が広く統率力のある人物であった。だが上の子供三人が政治家になりたがらずそれぞれサラリーマンやラーメン屋、散髪屋になった為に彼女が政治家になったのである。なお彼女は四人兄弟の末っ子であり上に兄が三人いるのである。上の兄三人は政治には興味がなくそれぞれの人生を歩むことを望んだ。そして父はそれを認めたのであった。

「御前達の人生だ、御前達で決めろ」

それが彼の言葉であった。政治家になったところで懐にはあまり入らないのは彼も兄達もよくわかっていた。その殆どが政治資金やスタッフへの給与に消えてしまうのではそれも当然であった。そして彼は真理にも尋ねてきた。彼女は当時高校生であった。小柄ながら容姿端麗、眉目秀麗な美少女として知られていた。

「御前はどうするのだ？」

「私？」

「そうだ」

学生服に身を包んだ娘に尋ねてきた。高校生らしい清楚な制服姿であった。青地のブレザーにタイ、そしてチェックのスカートがよく似合っていた。

## 第十一部第二章　バランサーその五

「御前の人生だ。好きにしろ」
「そうね」
彼女はそう問われて考え込んだ。そして数日後こう答えた。
「政治家になりたいのだけれど」
「わしの跡を継ぐとかそういうのではないな」
「ええ」
彼女は答えた。
「前に政治に興味があったし。いいかな」
「そうか、わかった」
父はそれを聞いて頷いた。
「では大学を出たらすぐにわしのところに来い。秘書になれ」
「わかったわ」
「大学は何処でもいい。好きなところに入れ」
「何処でもいいの？法学部じゃなくて」
「政治家にも色々なタイプがある」
彼はここでこう言った。
「わしみたいなのもいれば几帳面なのもいる。政治というものに一つのスタイルはないのだ」
「そうなの」
「それを勉強する為にもな。法学部だけでは面白くとも何ともない。そうだな」
彼は娘を見ながら述べた。
「御前は教育学部なんかが向いているかもしれんな」
「教育学部」
「そうだ。学校の先生は好きか」
「嫌いじゃないわ」
中学校で立派な女の先生に会っていた。それ以来悪い印象はない。

「そうか。わしは嫌いだ」
彼は娘に対して笑ってそう言った。豪快な笑顔であった。またその笑顔が実に似合っていた。
「わしは勉強が嫌いでな」
「そうだったの」
「学生時代は柔道ばかりしておった。大学にもそれで入った」
「それは聞いたわ」
「それでも政治家になれた。わしの政治というものは柔道で培ったものなのだ」
「柔道からも政治は学べるのね」
「結論から言えばな。だが御前はわしとは違う。教師というものから政治を学ぶのもいい」
「そうなのかしら」
「何時かわかる。いいな、それで」
「ええ」
そして彼女は教育学部を出て、教員免許を習得した後で父の秘書となりこうして政治家になった。豪気な父精三の娘として最初はどんな猛女かと言われていたが実際は小柄なまだ幼さの残る女性だったので多くの者は面食らった。そして伊藤の下で育てられ今があるのだ。
「それなりにね。我が国の政界の裏でも動いているみたいね」
「そうでしょうね」
どの国でも同じであった。
「ただ彼等は自分達がどういった存在なのかもわかっている」
「ええ」
小柳はそれに頷いた。
「そこがまたね。正面からでは私達には勝てはしない」
「そして本気で怒らせても」
「それよ」
コズイレフの顔が変わった。

「彼等は私達を怒らせないように動いている。完全にはね」
「そうして自分達の地位を維持しているのね。それが本当に厄介だわ」
「そんな彼等をどうするかね。まあ彼等が私達を利用するというのなら」
「私達も彼等を利用すればいい。バランサーとしてね」
「そういうことね」
そんな話をしながら飲み続けた。彼等もまた政治の世界におり、国際情勢というものを理解していた。だからこそ互いに利用し合うということもわかっていたのだ。

この会議の結果は当然ながらイスラエル政府の最上層部にも伝わっていた。結果を聞いたイスラエル大統領ヨブ＝フェレスは満足そうに笑った。一見温厚そうな老人であるがかなりの策士であり、連合各国の間では要注意人物とされている。ただしイスラエル市民の間では評判がよい。
「上手くいったな」
「はい」
前にいるシャイエックがそれに応えた。
「いつも通りでした」
「いつも通りか」
「はい。我々のバランサーとしての役目がまたもや無事果たされました」
彼もまた満足そうに笑っていた。
「実に喜ばしいことです」
「そうだな。だがアフターケアは充分だろうな」
「勿論でございます」
シャイエックはそれにも笑っていた。
「関係各国及び関係者には根回しを済ませております。抜かりはありません」

「ならいい。これは基本だからな」
「はい」
「我々は今までこうやって生きてきた」
そう語る顔に何か暗いものがさした。
「長い気の遠くなるような放浪の末に」
「ローマによりシオンの地を追われたその日、いえ十二支族の古より我等は迫害を受けてきました」
「苦しみは何でも知っている。本当に何でもな」
彼等はかっての苦難の歴史を忘れてはいなかった。今は十二支族も見つかりシオンの民は揃ったことになっている。だがそれまで二千年の間国もなく、欧州では命の危険すらある迫害をことあるごとに受けてきた。そしてようやく国を持ったかと思えばそこには果てしない戦いがあった。そしてようやく消え去っていたとされていた残りの十支族を見つけ、十二支族となり宇宙において真の意味でのユダヤ人の国家イスラエルを建国した。あまりにも長い苦難の歴史、だがそれこそが彼等の全てなのであるから。
「そして今もだ。人口にも国力にも劣る我々が連合で生きていくには」
「バランサーしかありません。どんな大国も逆らえないような」
「そういうことだな。では今後も頼むぞ」
「はい」
彼等もまた生きる為に必死だった。その為のバランサーであった。
連合は決して一枚岩ではない。三百の国家に中央政府、そして三兆の市民に数多くの宗教や団体。そしてその中にはこうした存在もいるのだ。だがそれでも彼等は連合にとって必要な存在であった。何故ならそれもまた神の配剤であるからであった。
「また彼等が動いたのね」
伊藤は官邸の自己の執務室で小柳からの報告を聞いていた。
「はい」

そして小柳もそれを認めた。
「そのせいか会議は無事に収まりましたが」
「我が国は損はしていないわね」
「ええ」
「むしろ得をしているといっていいかしら」
「そうなりますね」
「他の国も。まさかここまで話が上手くいくとはね。私もこの会議は長く続くものになるだろうと思っていたのよ、実はね」
「そうだったのですか」
「相手が相手でしょ」
彼女はそう述べた。
「ロシアだけじゃなくアメリカや中国、そしてＡＳＥＡＮ各国と揉めていた」
「はい」
「そうした状況じゃね。今回は流石に彼等も動かないかも、とも考えていたのよ」
「それは私もです」
小柳はそう述べた。
「貴女も」
「はい。今回は事情が複雑でしたから。そう思ったんです」
「ところが彼等は動いた。そして私達が思っていたより遥かに簡単に話を収めたわね」
「意外でした」
「それを読めなかったのは私もまだまだ甘いということかしら」
そう言ってくすりと笑った。
「よりによって彼等の力量を見誤るなんてね。これでは首相の荷はまだ私には重いということね」
「私はそうは思いませんが」
小柳はそれには異を呈した。
「総理はよくやっておられると思います」

「よくやってるじゃ駄目なのよ」
そう述べて苦笑した。
「この仕事はね。国益がかかってるのだから」
「そ、そうでした」
小柳はそれを聞いて恐縮した。いつもの凛とした知的でクールさ
さえ感じられる物腰は今は何処にもなかった。これもまた彼女の顔
であった。人にはそれぞれ色々な顔があるということであろうか。
「申し訳ありません。私の勉強不足でした」
「いいのよ、わかってくれれば」
伊藤は笑ってそう言った。
「ただ、今回のことはよく覚えておくといいわ」
「彼等のことでしょうか」
「それだけじゃなくてね。色んなことよ」
「色んなこと」
「政治ってのはね、一つの力で動いているんじゃないってことよ。
多くの力で成り立っているのよ」
伊藤は静かにそう言った。
「私達だけじゃなくてね。ああしたバランサーの存在もあるわけ。
他にも一杯あるわね。政治的な勢力だけじゃなく」
「そうですね」
小柳は伊藤が何を言っているのか理解した。そしてそのうえで頷
く。
「企業や組合もありますし。多くのフィクサーがあります」
「そうしたことを頭に入れておくといいわ。今後の為に」
「わかりました」
「貴女は筋がいいわ。これからも勉強しなさい」
「はい」
「そして」
伊藤は言葉を続けた。
「いずれは私を越えなさい。いいわね」

「はい」
師弟関係そのものであった。弟子は何時か師を越えなくてはならない。伊藤はそう小柳に促していたのであった。それが伊藤にとっての弟子であり、伊藤式の教育であった。彼女は自分以上のものになってもらう為に教育を行っているのであった。
様々な役者達が連合の内部においてそれぞれの役を演じていた。それは今は歴史の主な舞台ではない。だがそれでも確実に動いていた。そして話は進むのであった。

# 第十一部第三章　野望への階段その一

野望への階段

エウロパが撤退したサハラ北方は程なくしてティムールの手に落ちた。シャイターンはそれを確認して満足の笑みを浮かべていた。
「これでよし」
「はい」
彼は今旗艦イズライールの艦橋にいた。傍らに控えるハルシークがそれに応える。
「これで私はサハラの歴史において永遠に名の残る英雄となったな」
「あのサラディンやバイバルス以上の」
「ふふふ、彼等より上か」
それを聞いてさらに上機嫌になる。
「悪くはない。だがその彼等よりも上に立つぞ」
「わかっております」
ハルシークは今度は恭しく頭を垂れた。
「今度はサハラ全土ですな」
「この北のことが収まればな。よいな」
「ハッ」
「すぐにサハラ全土に知らせよ。この北方はシャイターンが解放したと」
「はい」
「難民達には特にな。諸君等の故郷はこの私により諸君等の手に戻ったと。よいな」
「わかっております。これでこの北方は完全に我等のものとなりました」
「うむ。事実上サハラはこれで三分とされたわけだ」
「北の我々と東のハサン、そして」

「西と南を押さえるオムダーマンか。既にオムダーマンには手を打っている」
「はい」
「問題はハサンだな。どう出るか、だ」
「彼等はこれといって動いておりませんが」
「相変わらずか」
「はい、自分達の権益と地位が保たれればそれでよいようです。相も変わらず安穏としております」
「気楽なものだ」
シャイターンはそれを聞いて失望したような声を漏らした。
「サハラにいながら。ハルシークよ」
「はい」
「そなたに問いたい。サハラの男にとって求めるべきものは何だ」
「信仰と力でございます」
「そうだ。そしてそれを彩るものは何だ」
「謀略と・・・・・戦いでございます。ムハンマドの緑、そして血の赤こそがサハラの色でございます」
「その通りだ。ではそれを見ようともせず安穏としている者達にサハラにいる資格はあるか？」
「いえ」
彼は答えた。
「そうだな。では野望を持たない男は？」
「サハラの男ではありません。サハラにおいて生きる価値のない者です」
「そこまでは言わぬがな。だがおおむねその通りだ」
彼はその問いに満足した。
「それではわかるな。私の次の進む先が」
「はい」
「東の大国か。果たしてどれ程のものか。だが」
彼は不敵に笑いながら言った。酔っていた。だがそれは酒の酔い

ではなかった。
「私の前にどれだけの力があるか。それを是非見せてもらおう」
そう言いながら星の大海原を進んでいた。彼は星と血に酔っていたのであった。

シャイターンとその艦隊はティムールの首都アレキサンドリアに帰還してきた。市民達はイズライールから降り立ってきた彼を歓喜の声で出迎えた。
「シャイターン万歳！シャイターン万歳！」
「これでサハラは再び我等のものに！」
中には涙を流す者までいた。彼はそれを見て満足そうに笑っていた。
「どうやら彼等も満足しているようだな」
「当然でしょう」
ハルシークがそれに応えた。
「サハラ北方の解放は我等にとって長い間の悲願だったのですから」
「そうだな」
彼はそれも満足そうに聞いていた。
「彼等はそれで満足しているのだろうな」
「はい」
「だが私にとってはこれからなのだ」
彼はハルシーク以外に聞こえないような小さな声でそう述べた。
「全てがな。ハサンに送り込んだ者達はどうしているか」
「全ては順調です」
「ならよい」
彼はそれを聞いて頷いた。
「機が来ればまた動く」
「はい」
「その時まで爪と牙を隠しておくとするか」
そんな話を二人でしながら市民達の歓呼の声の中宮殿に辿り着い

た。そしてバルコニーに姿を現わす。
「シャイターン！シャイターン！」
彼の名を叫んでいる。彼はそんな市民達を見下ろしながら言った。颯爽と、そして傲然と。さながら王者であるかの様に。
「諸君！」
まずは市民達を差して言う。
「遂にサハラは完全に我々アッラーの民のもとに戻った。エウロパの邪な侵略者共は退き、今は一人としてこのサハラにはいない！」
「おおーーーーーーーっ！」
「思えば長い苦難であった」
彼はここで苦難と表現した。
「かっての十字軍のそれのように。だがあの時も我々はそれを乗り越えた！」
十字軍について言及する。これには計算がった。
「あの時はサラディン、そしてバイバルスがいた。だが今は誰がいたか！」
「シャイターン！」
市民達は叫んだ。
「そう、私だ！」
彼は力強い声でそれに応えた。これが計算であった。
「私がサハラを完全に取り戻した！これは事実である！」
「そうだ！」
確かに事実であった。彼は戦ってはいないが取り戻した。それだけで充分なのであった。
連合はエウロパと戦った。エウロパはその戦いに際して総督府の兵を引き上げてそれにあたろうとした。シャイターンはそこに付け入っただけと言えばそうなる。だが北方をサハラの手に取り戻したのもまた事実であったのだ。揺ぎ無い事実であった。そして彼はそれを利用していたのであった。
「そのうえで私は今ここで宣言する！」

「何を！」
市民達は問うた。
「サハラはサハラの者達のものであると！二度とエウロパの者達を入れてはならない！」
「その通り！」
ある意味過激なナショナリズムであった。サハラの者達は多くの国家に分裂していてもその血は同じであると考えていた。いや、血ではなく信仰において。そうした意味で彼等は同じであった。従ってナショナリズムもまた二十世紀にかって存在していたものとは違っていたのである。こうしたものも時代によって変わるものであった。
「二度と！」
シャイターンは繰り返した。
「二度と！」
市民達もそれに続く。
「サハラはサハラの者達だけのものだ！違うだろうか！」
「いや、違わない！」
市民達の熱狂の度合いが高まっていく。それこそがシャイターンの狙いであった。
「その通りだ！」
「そう、その通りだ！」
シャイターンが待っていたのはその言葉であった。それを聞いた彼は心の中で笑った。
「では我々はこれからどうするべきか！」
「強くなるべきだ！」
彼等はまた言った。
「今以上に！」
「そう、今以上に！」
市民達は気付いていただろうか。シャイターンの目が英雄のそれではなく魔王のものに近いということに。彼の身体からは黄金色の

オーラではなく紫の妖しいオーラが漂っていた。見るものにはわかる。それは英雄のオーラではなく魔性の世界の者のオーラであった。姦雄の放つそれであると言えた。
「では我々が次に為すべきことはなんだ！」
「力をつけることだ！」
「それはバラバラになっていてできるものか！」
「否！」
一斉にそれを否定した。
「そう、否だ！」
これもまたシャイターンが待っていた言葉であった。彼は市民達を上手く誘導していた。自分の世界へと。
「指導者が必要だと思わないか！」
「指導者」
市民達はそれを聞いて一瞬戸惑った。シャイターンはそんな彼等に対して問うた。
「そう、指導者だ。我々はエウロパ、そして連合に対して劣っているだろうか。だからこそ今まで分裂し、侵略に晒されてきたのだろうか」
「それは違う」
市民達はそうではないと言った。シャイターンはそんな彼等に問うた。
「では何故分裂し、侵略に晒されてきたのか。考えて欲しい。何故かを」
「それは」
「優れた指導者がいなかったからではないのか」
ここで彼は言った。
「違うだろうか。先に私はサラディンやバイバルスについて述べた」
「そうだ」
「あの時もそうだった。十字軍を許したのは何故か。あの時我々には指導者がいなかった。アラブを救うような」

シャイターンの目が光っていた。紫のオーラに合わせるかのように赤く光っている。不気味な姿であった。
「だがサラディン、そしてバイバルスが現われたならば我々は救われた。これで私が言いたいことはわかるだろう。違うだろうか」
「いや」
「そうだな。では今も同じではないだろうか。サハラに必要なものは優れた指導者だ。そしてそれは」
「貴方だ！」
誰かが叫んだ。

## 第十一部第三章　野望への階段その二

「貴方をおいて他にはいない！」
これはサクラがいたのだろうか。あまりにもできすぎていた。しかし彼が推されたのは事実であった。
「今我々に必要なのはサラディンでもバイバルスでもない！」
誰かがまた叫んだ。
「シャイターン、貴方なのだ！」
「諸君」
彼はそれを受ける形で市民達に対して問うた。
「どう思うだろうか」
「それは我々に対して問うているのか」
「そうだ」
彼は答えた。
「諸君等は私を必要としているか。今それを聞きたい」
「それは」
「そうなのか」
ここでまた目が光った。まるで彼等を操るかのように。黒い光が群集を見据えていた。魔性の光であった。
「答えてくれ」
そしてこう尋ねてきた。誰もがその目を見た。そして心を奪われてしまった。
「貴方だ」
また誰かが言った。
「我々は貴方を必要とする」
「そう、貴方しかいない」
皆口々に言う。
「我々には貴方しかいないのだ」
「では私を信頼してくれるか」

「当然だ」
彼等は誘われるままに答えた。
「シャイターンよ」
彼等は口々にその名を呼ぶ。
「我々を導いて欲しい」
「サハラ、そして我々の為に」
「また聞きたい」
彼はそれを受ける形でまた尋ねた。
「本当に私でいいのだな」
「そうだ」
彼等はまた答えた。
「貴方を。サハラの為に」
「わかった」
シャイターンはそれを聞いて頷いた。
「では私は今ここに誓おう。サハラの栄光を。そして諸君等の永遠の繁栄を」
それこそが彼等の願いであった。シャイターンは今完全に彼等の心を掴んでいた。
「今サハラはここに本来の姿となる。ムハンマドが目指した偉大なるアラブの者達のものとして」
「アラブの」
彼等のルーツはアラブにある。その頃から彼等は一つではなかったのだ。ムハンマドとその後の僅かな間だけを除いて。それが真実であった。正統カリフ時代が終わりウマイヤ朝の時代になったがそこでウマイヤ朝に反発するイラン系やシーア派がアッバース朝を立てた。だがウマイヤ朝の者達はイベリア半島、後のスペインに逃れてそこで後ウマイヤ朝を立てたのである。これ以降このアッバース朝にしろセルジュク朝にしろアイユーブ朝にしろあのオスマン＝トルコにしろアラブ世界を統一することは適わなかった。英雄サラディンも風雲児バイバルスにしろチンギス＝ハーンの後継者ティムー

ルにしろ、そして世界帝国となでなったオスマン＝トルコにしろ。彼等は今に至るまで統一されたことはなかったのである。
　銀河の時代においても幾度も英雄、そして大国が現われた。だがそのいずれも砂と銀河の中に消えていった。さながら蜃気楼の様に儚く。全ては星達の夢の様であった。サハラの統一は誰もが望んでいたが誰も為し得なかったものであった。
「そうだ、アラブの」
　シャイターンは誘うようにして言う。
「長い苦難の末に我々は今ようやく光に辿り着こうとしている。私はその光に諸君等を導くであろう」
「我々を」
「そうだ、光にだ」
　シャイターンは続ける。
「それは緑の光だ。あの緑の」
「緑の」
　群集達はその緑という言葉に反応を示した。
　緑はムハンマドを象徴する色である。アラブでは砂と岩が多く緑は少なかった。彼等にとって緑は救いの色でもあったのだ。緑は月と共にイスラムにおいて重要なものとされているのは銀河の時代においても変わりはしなかった。
「私はそこへ諸君を導いていこう。ついてきてくれるか」
「当然だ！」
　またしても誰かが叫んだ。それはサクラではなかった。心からシャイターンに打たれた結果であった。そしてそれを打たせたのはシャイターンの計算であった。彼はそこまで読んでいたのである。見事な慧眼であった。
「我々は貴方と共にいこう！貴方を信じる！」
「貴方こそ我々にとっての英雄だ！どうか我々を！」
「その光に！」
「よし、誓おう！」

彼はこれまでになく大きな声でそう言った。
「諸君等を、そしてサハラを栄光へ！それこそが私の為さねばならない仕事であると！」
「おおーーーーーーーーっ！」
「シャイターン万歳！シャイターン万歳！」
「ティムール、そしてサハラに栄光あれ！」
皆彼を熱狂的な声で讃えていた。そこに一人の英雄がいた。
この演説は長く歴史に残ることになった。サハラを席巻した一代の姦雄メフメット＝シャイターン、今将にその全容を現わしたのであった。

それは全人類の社会に放送されていた。そして多くの者が観た。アッディーンもその中の一人であった。
「英雄か」
彼はそれを見てまずはそう呟いた。
「サラディンやバイバルスに匹敵する、か。大きく出たな」
「私はそうは思いませんが」
いつもとは違う女の声が返ってきた。彼は今官邸のリビングにいたのだ。そしてその隣には妻であるマルヤムが座っていたのである。
「兄ならばこの位のことは当然のことです」
「つまり最初から英雄の素質があるということか」
「はい」
マルヤムはそれに頷いた。
「兄ならば。こうした人々の熱狂的な支持を集めることは造作もないことです」
「そうかもな」
彼も妻のその言葉を聞いて頷いた。
「私が貴女の兄と最初に会った時のことだ」
「サラーフとの戦いの時ですね」
彼はあの時はまだ一司令官に過ぎなかった。その時に彼と既に会

っていたのである。
「そうだ。あの時に実は感じていた」
「そうなのですか」
「只ならないものをな。そして今同じものを感じている」
「では兄が英雄とお認めになるのですね」
「ああ」
彼はそれを認めた。
「貴女の兄は英雄だ。おそらく歴史に永遠に名を残す英雄だろうな。これからどうなっていくのかわからないが」
「そうですね。ところで」
マルヤムはここで話を変えにかかってきた。
「何だい？」
「英雄は一人だとお思いですか？」
「また変わったことを聞くな」
彼はそれを聞いて少し戸惑ったような顔をした。
「英雄が一人か、か」
「はい。どうでしょうか」
「そうだな」
彼はそれを受けて考え込んだ。
「英雄は中々出るものではない。天才がそうであるように」
「はい」
「その時代に一人出て来るかどうかさえわからない。だが出た時には全てを変える」
アレキサンダー然り、チンギス＝ハーン然り、ナポレオン然り、である。彼等は英雄であり一代の風雲児であった。彼等の登場が全てを変えたといっても過言ではない。ワシントンもジュリアス＝シーザーもそうした意味では英雄であった。彼等は常人とは明らかに何かが違っていた。
「サラディンもバイバルスもそうだったな。そしてムハンマドも」
「ですね。しかし彼等と同じ時代に別の英雄が出る可能性はあるで

しょうか」
「殆どないだろうな」
彼はまずそう答えた。
「英雄は滅多に出ない。だからこそ英雄だ」
「はい」
「一人出る可能性も殆どない。だがアッラーの思し召しにより」
アッラーのことを言ったうえであらためて言う。
「もう一人出る場合もあるだろう。だがそうした場合は新たな戦乱を呼ぶかもな」
項羽と劉邦がそうであった。二人はタイプこそ違うが互いに英雄であった。だからこそ覇を競ったのである。そしてそれに勝った劉邦が天下を取ったのである。
「天下に二日はないという言葉があったな」
中国の古い言葉である。まだ地球にあった頃の言葉だ。天下を治める君主は一人しかいないという意味である。その言葉に従い今まで多くの戦乱が起こっている。サハラとて例外ではない。
「強烈な個性と才能は互いに潰し合う」
アッディーンの言葉には何時にもなく深い思索が漂っていた。
「そして生き残るのは一人だ」
「そうなのですか」
マルヤムはそれを聞いてようやく再び口を開いた。
「では兄とは別の英雄が現われる可能性はないわけではないのですね」
「そうだな」
「そしてその英雄は兄と戦う宿命にあるのですか」
「結果としてはそうなるだろうな」
彼は妻に対してそう答えた。
「しかしそれがどうかしたのか」
「いえ」
彼女はそれには言葉を濁した。

「ただ・・・・・・聞いただけです。気になさらないで下さい」
「そうか」
「そして一つ申し上げたいことがございます」
「何だ」
「私は貴方の妻ですね」
「何を今更」
彼はそれを聞いて苦笑した。
「それはアッラーに誓った。それ以上に確かでないものがあるか」
「いえ、それならばよいのです」
彼女は思わせぶりにそう答えた。
「妻は生涯夫と共に生きていくもの」
「そう教えられているな」
一応はそうはなっている。実際にはそうそう上手くはいかないが。人間の世界とは何時の時代も色々とあるものであるからだ。これ程複雑なものもないのだ。
「それでは私は何時でも、そして何時までも貴方の側にいなければなりません」
「申し訳ないが頼むよ」
彼は笑ってそう言った。
「つまらない男だが」
「私はそうは思いません」
しかしマルヤムは夫のその言葉を否定した。首を横に振る。
「貴方は私の夫、そして私のもう一つの身体」
「それは私もだ」
アッディーンも言った。
「何があろうと離れはしません」
「頼むよ」
二人はそう言って唇を重ねた。そしてすぐに離れた。

## 第十一部第三章　野望への階段その三

「これからまた色々とあるだろうが」
「戦場に行かれるのでしょうか」
「そうかもな」
否定はしなかった。
「私は軍人だ。戦場に行くのが仕事だ」
「はい」
「貴女の兄とは少し似ているのかもな。あの人もまた戦場に出る」
「私は同じだと思います」
彼女はここでこう言った。
「貴方と兄は。同じです」
「同じ、か」
「はい」
マルヤムは頷いた。
「それでも、いえ、だからこそ私は貴方に寄り添います。生涯かけて」
「わかった。それでは頼むよ」
「はい」
彼はこの時妻の言葉の意味をわからなかった。これには深い意味があった。だが彼は今はそれに気付きはしなかったのであった。ただ額面通りに受け取っていただけであった。
二人はそのまま休息に入った。そして朝になった。それから朝食を執ることになった。妻の手料理であった。メニューは羊のクスクスであった。
「美味いね」
アッディーンはそのクスクスを一口食べてからそう述べた。
「味付けも手頃だし。全体のバランスもいい」
「有り難うございます」

向かい側に座るマルヤムはそう言われて微笑んだ。
「これも勉強しましたから」
「シャイターン家は名のある家だというのに」
これは最初アッディーンが妻が料理を作るのを見た時思ったことである。
「自分で料理を作るとは。変わっているな」
普通は専属の料理人に作らせるものである。彼女の父や兄弟はそうしているという。だが彼女は昔から自分の料理は自分で作っていたという。それも幼い頃から。非常に珍しいことであった。
「料理が趣味なのです」
彼女はそう答えた。そして実際にそれは美味かった。彼は食べてみても驚いたのであった。
「ううむ」
これが彼女の料理をはじめて口にして出した言葉であった。それ程意外だったのである。
元々普通の家庭に育っている。贅沢な食べ物には慣れていない。彼女の料理はそれに合わせたかのように質素なものが多い。それがさらに彼を喜ばせた。
「それじゃ」
クスクスを食べ最後にミルクを飲む。羊のミルクだ。
「行って来るよ」
「はい」
家を出るともうそこには車が待っていた。これは司令の頃から変わらない。
「お待ちしておりました」
「ご苦労、じゃあ行こうか」
「はい」
車を運転する下士官と秘書であるハルダルトに挨拶をして副大統領府に向かう。着いてみるともう仕事が待っていた。

「朝から会議か」
彼はそう言って苦笑した。
「会議は朝に行われるものですよ」
ハルダルトはそれを受けてこう答えてきた。
「朝廷といいますね」
「ああ」
今ではない言葉ではある。連合やエウロパなる皇室や王室はどれも象徴、儀礼的な存在となっている。政務をとる君主はいなくなっている。だからこれももう死語と言っていい。少なくとも実際の政治においてはそうであった。
この名の由来は古代の中国の王朝では文武百官は朝に皇帝の前に参列し政治について話し合ったからである。こうした由来があったのである。
「それを考えると当然ではないでしょうか」
ハルダルトはそれについて言及してきたのであった。
「そういうものかな」
だがアッディーンには今一つ実感が湧かない。
「私はよく昼に会議を開くからな」
「そういえばそうですね」
ハルダルトはその言葉に応えた。
「それは何故でしょうか」
「何となくかな」
実は根拠がなかった。
「時間が空いた時にな。そういうものではないのか」
「閣下はそう御考えですか」
「そうだ。それで何か不都合があるか」
「いえ」
だが彼はそれを否定したりはしなかった。
「それも一つの考えだと思います」
「そうか、ならいい」

アッディーンはそれに頷いた。
「だが朝から会議とは。何か重要な用件でも急に入ったか」
「そういうわけでもないですが」
ハルダルトはそう答え懐から手帳を出す。そしてスケジュールを見た。
「大統領府の方で予定変更があったようですね。是非今日の午前のうちに話して欲しいと」
「そうだったのか」
彼はそれを聞いて納得した。
「何でもマウリアからの使者が急に来訪しまして。それで軍事についても少し話し合って欲しいとのことです」
「用件は何だ」
「軍事交流についてです」
「軍事交流」
「はい」
ハルダルトは答えた。
「今彼等は同盟関係にある連合と積極的に交流を深めていますね」
「そういえばそうだったな」
それはアッディーンも知っていた。彼等の関係は近年特に深いものとなっていることも知っていた。
「あの巨大戦艦でも入れるつもりかどうかは知らないが」
「流石にそれはないでしょうけれどね」
ハルダルトはそう答えて苦笑した。
「あの巨大戦艦は連合独自のものです」
「うむ」
「マウリアにとっては必要のないものでしょう。おそらく彼等はあした巨大兵器は開発、若しくは購入しないものと思われます」
「必要もないしな」
「はい。あの巨大戦艦にしろ最初は議論になっていましたし」
「そうだったな」

ティアマト級巨大戦艦は開発当初議会でも問題になっていた。これ程までのものが果たして必要なのかどうか。連合軍のこの時の主な相手は連合内の海賊やテロリスト達であった。そうした連中相手に果たして必要なのかどうか。だが解放軍征伐においてそれは必要だとわかったのであった。
「マウリアはこれといって治安も悪くないしな」
「ですね」
「それを考慮すると彼等には無用の長物になる」
「そういうことです。あれは連合だからこそ必要だということです」
「それはわかった。では本題に戻りたい」
「はい」
「そのマウリアからの交流にすいての話だったな」
「どう思われますか」
問うハルダルトの目の光が鋭くなった。
「それについては会議で話そう」
アッディーンの目の光も変わった。こうして彼等は会議室に入るのであった。
会議室に入ると軍の高官達が既に集まっていた。マナーマやアジュラーン、そして国防相であるシカールまでいた。勢揃いといってもよかった。
「それでははじめるか」
「はい」
彼等はアッディーンの言葉に頷いた。今や副大統領である彼は彼等の上官であった。階級は元帥のままで副大統領となっているのである。
「話は聞いている」
「はい」
彼等はアッディーンの言葉に頷いた。

## 第十一部第三章　野望への階段その四

「マウリア軍との交流だな。これについてどう思うか」
「そうですね」
まずはマナーマが口を開いた。首を傾げながら。
「私はあまりお勧めしません」
「それは何故だ」
アッディーンはそれに問うた。
「他の軍との交流は。情報の漏洩をきたす怖れがあります」
「私も参謀総長と同じ考えです」
アジュラーンもそう述べた。
「元帥も」
「はい。それにマウリア軍と我々は軍の形態や方針があまりにも違います。交流しても得られるものはないかと考えます」
「そうか。二人はそうした理由で反対だな」
「はい」
二人はそれを肯定して頷いた。
「これは断るべきかと思います」
「よし、貴官等の考えはわかった」
アッディーンはそれを聞いて頷いた。
「では他に意見はあるか」
「はい」
今度はシカールが口を開いた。
「私は賛成致します」
「それは何故だ」
「これは参謀総長の考えの裏返しになりますが」
「うむ」
「それだけの違いがあるからこそ交流すべきだと思うのですが。如何でしょうか」

「他の軍についても学ぶということだな」
「はい」
シカールはそれに頷いた。
「如何でしょうか。私は悪いことではないと思いますが」
「そうだな」
彼はそこまで聞いてあらためて考え込んだ。
「参謀総長の考えにも一理ある。情報漏洩はあってはならない」
「はい」
「だが国防相の考えもまた同じ。違うことを知るのはいいことだ」
「ではどうなさるおつもりなのでしょうか」
マナーマは問うてきた。
「相互を同時に為すのは困難であると考えますが」
「方法はある」
アッディーンは言った。
「方法が」
「そうだ。交流にもやり方があるな。ただ我々が彼等を受け入れるだけではない」
「はい」
「彼等にも我々を受け入れてもらおう。これならよいのではないか」
「そういう考えもありますな」
「成程」
マナーマもアジュラーンもそれを聞いて大いに頷いた。
「そしてマウリアから学べるのはマウリアのことだけではない」
「といいますと」
「連合のことも知ることができる」
そう答えるアッディーンの目の光が変わった。先程ハルダルトと話していた時の目であった。
「連合の」
「そうだ」
彼は他の者に対してそう答えた。

「連合の情報も知っておきたい。これからの為にな」
「成程」
皆それを聞いて頷いた。
「今連合とエウロパの間で激しい戦いが繰り広げられている。それを見ているだけでもかなりの資料になる。だが」
彼は付け加えた。
「やはり実際の彼等についても知りたい。戦いの経緯を知るだけではわからないことも多い」
「そういうことですか」
「ですがそれならもっと踏み込まれてはどうでしょうか」
「というと」
シカールの言葉に顔を向けた。
「どういうことかな」
「連合とも交流を深められてはどうでしょうか」
彼はそれを申し出てきたのである。
「連合ともか」
「マウリアだけではなく彼等との交流も深めていいと思いますが」
「ふむ」
アッディーンはそう言われまた考え込んだ。
「確かにな。悪くはないか」
「私はそう思います。アジュラーン閣下とマナーマ閣下はどう思われるでしょうか」
「そうですな」
問われた二人も暫し考えた後で答えた。
「悪くはないと思います」
「連合に関しては色々と興味深いものがありますから。兵器だけでなく」
「私は特に補給に興味がある」
アッディーンは補給について言及してきた。
「補給ですか」

「そうだ。かってサラーフとの戦いでは我々は補給路の確保に腐心してきた」
ムスタファ星系を掌握した時である。アッディーンはここを拠点にサラーフとの戦いの第一段階を進めてきた。その際補給路を常に一個艦隊以上の戦力によって守らせてきた。その経験から言っているのであった。
「戦争はものがなければ行えない」
「はい」
これは最早言うまでもないことであった。
「そして戦闘の度にその物資を多量に消費する。いや、軍はその存在だけで消費するものだな」
「否定は致しません」
その通りであった。皆それに頷いた。
「だからこそ補給が重要になってくる」
「ですが閣下」
ここでマナーマが申し出てきた。
「何だ」
「我々の補給はそれ程脆弱なものとは思えませんが」
「確かにな」
彼はそれは肯定した。
「私も今まで多くの戦いを経てきた」
「はい」
「だが物資の不足を感じたことは一度もない。これも事実だ」
「ですね。ならば特に気にすることもないのではないでしょうか」
「しかしだ」
だがアッディーンはここでまた言った。
「物事に完全ということはない。我がオムダーマンの補給にも欠点がある筈だ」
「はい」
「連合の補給を見てみたい。彼等の動員戦力は我々のそれとは比較

にならない」
　これは人口、国力の差が影響していた。オムダーマンをはじめとしてサハラでは今まで人口が一千億を越えた国が誕生したことはない。彼等は人口においてもエウロパに大きく負けていたのだ。二千億のサハラの民とはいってもそれは分裂していた。国力は連合と比してあまりにも脆弱なのも事実であった。
「彼等は補給には全く困ってはいないようだな」
「そのようですね」
　シカールがそれに答えた。

## 第十一部第三章　野望への階段その五

「ガンタース要塞群を最大の補給基地として戦いを進めているようです。彼等の物量戦はエウロパ軍を圧倒しております」
「二千個艦隊だったな。そしてサハラ義勇軍が百個艦隊」
「はい」
「それだけの大軍を他国の領土深くに送り込み、そして物資の不足をさせないだけの補給だ。相当なものだとは思わないか」
「連合の国力があればこそ、ですね」
　またシカールが答えた。
「その国力で以って戦う。それが連合だ」
「我々とはまた違った戦い方です。やはり我々は何処か軍のみで戦っています」
「彼等は戦争と同時に政治もしているな。エウロパの領土を着々と占拠している。そしてそれでもってもエウロパに対して圧力をかけていっている」
「エウロパはそれに対して為す術がないように思える程です」
「今のところはな。だが連合軍はエウロパの市民達から徴収等は全く行っていないそうだな。彼等の産業活動も保障していると聞く」
「それだけ物資があるということでしょう」
「同時に彼等の宣伝だな。寛大さをアピールする」
「何もかも政治ですね。憎らしい程です」
「全てはあの国防長官の考えか」
　八条について言及した。アッディーンも八条を知らないわけではないのである。ニュース等で度々その名を目にしていた。
「補給のことといい。どうやらかなりの戦略家のようだな」
「かっては日本軍で将校を務めていたそうです」
「元軍人か。道理で」

それを聞いて納得した。
「あれは軍人の考えだな。それから派生している」
「そして経補将校だったといいます」
「繋がったな」
アッディーンはそれを聞いてまた言った。
「連合軍の補給に関しても。ここで聞きたいことがある」
「何でしょうか」
「連合軍の物量だ。一体どれだけのものなのだ」
「それは」
「私が持っております」
ここで情報部長であるマーシャー＝マスルールが資料を出してきた。痩せた浅黒い肌の男である。階級は大将であった。
「貴官が」
「はい。エウロパの諜報にあたっていたハルヴィシー准将からの報告です」
「ハルヴィシー准将？ああ、特殊部隊の」
その名前は覚えていた。ミドハドとの戦いにおいて相手の国家元首であるハルドゥーンの潜伏先の探索を行った人物である。あの時は彼にかなり助けられた。
「はい。今は情報部におりまして」
「ふむ」
「その彼からの報告です。御覧になりますか」
「勿論」
彼は答えた。そしてその資料を受け取り目をやった。そこには彼にとって信じられないものがあった。
「物凄いな」
彼はそれを見て呟いた。
「兵士一人の携行食品だけでこれか」
「はい」
そこにはキャンディーやチョコレートといった菓子類、肉の燻製、

コールドさせたフルーツ、乾パン、ビスケット、缶詰、インスタント食品等が書かれていた。数も量もオムダーマン軍の倍程ある。手を拭くティッシュまで彼等の倍程あった。かなりの量であった。
「艦艇に搭載されている兵器のストックも凄いな」
「それを考えてのあの巨大さなのでしょう」
連合軍の艦艇はオムダーマン軍のそれより遥かに大きい。駆逐艦でオムダーマン軍の軽巡と同じ位である。そしてアッディーンは他にも注目していた。
「補給艦のデータもあるな」
「はい」
マスルールは頷いた。
「我が軍の補給艦なぞ比較にならない。化け物のような大きさだ」
連合軍の補給艦は巨大である。優に二キロ以上あるのである。
「これが一体どれだけあるのだ」
「五百万以上だといいます」
「一個艦隊にして二千隻以上か」
「はい」
「だからこそか。これだけの物資を補給できるのは」
「それだけではありませんね」
マスルールは付け加えた。
「後方基地を整備する能力も。連合軍のそうした技術はかなりのものようです」
「ニーベルング要塞群のことだな」
「はい。あれだけ破壊した施設を後方支持に限り瞬く間に修復してしまったのです。それは驚くべきものです」
「あれはな。私も驚かされた」
彼はそう答えた。
「そうしたことを総合しての補給だな」
「そういうことになるかと」
「連合の国力故のことだが。それにしても凄まじい」

彼は素直に感嘆の言葉を漏らしていた。
「そうしたことも踏まえて交流を進めていくべきだと思うが」
「つまりは実際の戦闘関係にはあまり重点を置かないということですね」
「連合にはな。おそらくあの巨大戦艦にしろ我が軍には不要のものだ」
彼は言った。
「それに戦争というものは戦場だけでするものではない」
「はい」
「後方でも行われる。戦争というものは国家全てを巻き込むものだ」
だからこそ存亡をかけたものになるのである。彼の言葉は的を得ていた。
「だからこそ後方についてもう一度考えるうえでも連合についても知りたい。いいだろうか」
「わかりました。それでは」
「うむ」
こうして連合軍とも交流を行うことになった。連合としては特に断る理由も表向きはなかった。従ってそれを快諾することとした。こうしてオムダーマンは連合とも交流することになったのであった。それは当然ながらマウリアにも伝えられた。クリシュナータはそれを観艦式の会場で聞いた。マウリア軍の重要なイベントの一つである。彼等の威容をアピールする為であった。
「そうか、連合ともか」
彼は控え室でその報告を聞いていた。
「それはオムダーマン大統領の考えか」
「いえ、副大統領の考えです」
報告する官僚はそう答えた。

## 第十一部第三章　野望への階段その六

「アッディーン副大統領の」
「そうか」
クリシュナータはそれを聞いて頷いた。
「彼は軍人だったな」
「はい」
「そして軍関係の為の副大統領だったな。その彼が言ったのか」
「そして通りました」
「そうだな。どうやら彼は思ったより視野が広いらしいな」
「といいますと」
官僚はそれを聞いてその黒い目を少し大きくさせた。
「どういうことでしょうか」
「これは軍人の一つの悪い癖の一つだが」
クリシュナータは言った。
「生真面目なのだ。アスラと同じくな」
アスラとはヒンズーの教えで神々に敵対する種族の一つである。敵対関係にあるといっても彼等もまた神でありその力は強大である。彼等はクリシュナータの言う通り生真面目な性格であり厳格で禁欲的だ。そして悪を憎み徹底的に許さない。そうした意味では邪神ではなくむしろ善神である。その為か彼等の頂点に位置するヴィローチャナは密教では大日如来として信仰されている。そしてアスラ達も阿修羅として仏教の守護神の一人となっている。三面六臂の姿を持ち尋常ではない強さを誇るとされている。八部衆の一人阿修羅である。
「それは悪いことではないのでは」
「多くの場合はそうだ」
官僚に対してそう答えた。
「だが常にそれでいいというわけではないな」

「はあ」
彼はクリシュナータが何を言いたいのかよくわからなくなってきていた。
「確かにそうかもしれませんが」
「あまりに生真面目だと他のことに目がいかなくなる」
「はい」
それに熱中し過ぎるからである。
「それが問題なのだ。一概には言えないが軍人には一つのことに没頭し過ぎるという一面がある」
「はい」
「だからこそ彼等をコントロールしなければならない理由の一つがあるのだ。シビリアン＝コントロールだな」
文民の方が広い視野を持っていないとできないことではある。だがこれは文民の方が一つのことに熱中してしまいがちな軍人よりも多岐な人材がおり、そして広い視野を身に着けているという考えもあってのことである。軍人は専門職なのであるから。だが中には広い視野を持つ軍人もいたりする。あながち軍人だから駄目だというわけでもない。要はその人物の資質である。
「それですか」
「そうだ。あれにはこうした意味もあったのだ」
クリシュナータは語った。
「当然軍人出身の政治家もいるし必要だがな」
「はい」
これは言うまでもないことであった。連合でもエウロパでもそうした軍人出身の政治家はいる。マウリアでもだ。八条もまたその一人である。これは連合においてはあまり考慮に入れられていないことであるが。軍人出身の政治家は狭い視野が危惧される一方でその専門的な知識が重宝されたりするのは古来からある。その人材にもよるのだが。
「しかしそれだけではない。政治というものは軍事だけでできるも

のではない。軍隊にばかり金を使うことなぞできはしないのはわかるな」
「はい」
軍とは消費するだけである。生産はしない。そうした部門に多大に金を投資するということは必要性がなければ到底できないことである。
「それがわからないと政治はできない。軍人は軍事のことばかり考えそれがわからなくなる場合が多い。特に戦闘のことだけをな。他のことを考えられなくなる場合もある」
「過去にそうした軍隊もありましたね」
「うむ」
クリシュナータはそれを受けてまた頷いた。
第二次世界大戦前の日本軍がそうであった。彼等は実戦を想定した訓練は恐ろしいまでに積んでいた。それが実際にあの伝説的な強さのもととなったのである。この時代においても日本軍といえば恐ろしさと共に語られる存在であった。勇猛にして精強、厳格にして鉄の規律を持つ、真の精鋭部隊であった。だがそんな彼等にも欠点はあったのだ。それが補給であったのだ。その無敵とさえ言われた日本軍が敗れた要因の一つとして補給の脆弱性があった。彼等は実戦を重視するあまり補給のことを忘れてしまっていたのであった。
「だが彼は違うようだな」
「はい」
「補給のことも考えているようだ。だからこそ連合とも交流を進めるつもりなのだろう」
「少なくとも視野の狭い人物ではないようですね」
「あの若さでな。いや、若さは関係ないな」
クリシュナータは自分の言葉を訂正した。
「若くとも才ある者はいる。彼もまたその一人か」
そして官僚に問うた。
「彼は軍事以外にも携わっているのか」

「軍事以外にですか」
「そうだ。そちらはどうなのだ。少し知りたくなってきた」
「それは今はわかりませんが。何分彼は軍事担当ですので」
「ということは軍政にも関わっているな。そちらはどうだ」
「同じです。やはり後方にも力を入れております。オムダーマン軍の整備は彼が大統領に就任してから急激に整おうとしております」
「彼等の軍制は我々や連合と比べると少し古い部分も多い」
クリシュナータはそう述べた。事実彼等のそれは何処か一時代前を思わせるものであった。連合軍が設立されるより少し前の。徴兵制もそう言われるとそうなる。なお徴兵制を採用しているのはサハラ各国だけである。
「今までの数を集めるだけの徴兵制から実質的にはかなり厳格な選抜徴兵制にシフトさせているとも聞いております」
「選抜徴兵制か」
「はい」
国民の中からとりわけ身体能力に秀でた者だけを選び、その者を兵士にするのである。少数精鋭を目指すのならば適した方法である。
「それによりオムダーマン軍の数は減りましたがより精強な軍になったと聞いております」
「無意味に多くの兵を求めないということか。ただ強さのみを求めた」
「そういうことになりますね」
「それで今オムダーマン軍はどれだけの規模となっているのだ」
「基幹戦力である宇宙艦隊は九十を越えていたのは今では七十程です」
「減ったな」
「なおティムールは今は三十程、そしてハサンは属国のそれを入れると一六〇を優に越える艦隊を持っております」
「ここにきてあえて少数精鋭を選ぶか。いや、だからこそか」
クリシュナータは考えながら呟いた。

「勝利を収める為にな」
「またサハラで戦乱が起こるでしょうか」
「それは間違いない」
クリシュナータはそう見ていた。
「彼等は今までそれぞれ統一を目指して戦ってきた」
「ええ」
「そして三国になった。ここまでくればもう統一は間違いない。問題はどの国によりそれが為されるかだ」
「では三国の間で近いうちに戦争が」
「そうだな。その中心の一つは間違いなくオムダーマンだ」
彼は言った。

## 第十一部第三章　野望への階段その七

「アッディーン副大統領もそれは当然考慮に入れているだろうな」
「にしても信じられません」
官僚はいぶかしげにそう述べた。
「何がだ」
「サハラは今まで一つになったことはありません」
彼はそう述べた。
「それが一つになるとは。果たして本当にそれが成るのでしょうか」
「何事も最初はそうだ」
クリシュナータは彼の疑問に対して落ち着いた声でそう答えた。
「最初はな。民主主義にしろどの国も最初はどの国でもそう言われるものだ」
「はい」
「このマウリアにしてもだ。違うか」
「いえ」
官僚は首を横に振った。彼もまたマウリアの者である。だからこそ知っていた。マウリアは地球においてインドと呼ばれた時代その古いカースト制故に民主主義は決して根付かないと言われていたのだ。だが一千年経った。民主主義は根付いていた。カースト制もその残照が残ってはいるが。
「そういうことだ。何事も最初はそうだ。創造神ブラフマーがそれを作るまではな」
「ではブラフマーは今度はサハラに統一を作る」
「サハラではブラフマーはいない。アッラーだ」
クリシュナータはそれを訂正させた。
「だがアッラーが遂にそれを認めたということになるのかもな」
「サハラの統一を」
「我々に匹敵する国家が誕生するということだ」

ここで思わせぶりにそう言った。
「我が国に」
「それも考えておいた方がいいな」
「はあ」
官僚はまだ実感が掴めないでいた。だがクリシュナータはそれを掴んでいた。そしてそれを掴んだまま笑うのであった。
観艦式は終わった。クリシュナータは首都ブラフマーへ戻った。そこにはもう次の仕事が待っていた。
「アグニ＝バシュト様がお見えです」
「ほう」
彼はそれを聞いて笑顔を作った。
「久しいな。そして今何処にいるか」
「もう官邸に来られていますが。御会いになられますか」
「勿論だ。すぐに応接の間に通してくれ」
「わかりました」
公設の秘書はそれに頷いた。そして暫くしてクリシュナータが移動した応接の間に口髭と顎鬚をたくわえ、立派な服に身を包んだ長身の男が姿を現わした。
「ようこそ、官邸へ」
「いやいや」
その髭の男バシュトは笑顔でそれに応えた。クリシュナータも笑っていた。
「お久し振りですな。どうしているか心配していましたぞ」
「まあこちらにも色々とありまして」
バシュトはそう答えた。
「父の跡を継いでからというもの。急に忙しくなりました」
「そうでしょうな」
クリシュナータはそれに同意して頷いた。
「マハラジャというものはあれで中々大変だと聞いております」
「私もそれは父の側にいて知っているつもりでしたが」

バシュトも言葉を返した。
「いざ実際になってみると。本当に大変でした」
「寝ている暇もないとか」
「いえ、それはあります」
それは否定した。
「ただ自分の時間がなくなっただけで。スポーツも食事もその睡眠もどれも仕事となってしまいまして」
「それは私も同じですよ」
クリシュナータはそれにはこう述べた。
「国家元首や君主になるとね。生活自体が仕事になります」
「全くです」
二人はまずそんなやりとりをした後で席に着いた。そして本格的に話に入ろうとした。
マハラジャとはインド独自の存在である。俗に藩王とも称される。マウリアにいながら半ば独立した君主として遇されている。世襲制が多く、中には裕福な暮らしを楽しむ者もいる。マウリア中央政府からは知事と同じ権限を与えられている。国家元首ではないが君主であるのだ。かなり特殊な存在であった。マウリアに百人近く存在する。このバシュトはその中の一人であるのだ。彼はハサンとの境に自分の領地を持っている。ハサンとの交易で栄え豊かなマハラジャの部類である。
「最近サハラの話を聞きますか」
クリシュナータは彼にそう尋ねてきた。
「あまり聞きませんね」
バシュトはそれに対してそう返した。
「北も完全に解放されましたし。今のところは平和です」
「少なくともハサンは、ですね」
「ええ」
彼は答えた。
「あの国は変わりませんね。いつも通りです」

「そうですか」
クリシュナータはそこまで聞いて頷いた。
「ハサンは相変わらず、ですか。ふむ」
「それが何か」
「いえね」
クリシュナータはここで表情を少し変えた。顔は笑ったままであったが目から笑みを消したのであった。
「実はオムダーマンと軍事交流をすることになりまして」
「そうなのですか」
「それで相互に武官を招き入れることになったのです。いずれそちらにもアッラーの戦士達が来ますよ」
「アッラーの戦士がですか」
バシュトはそれを聞いて困った顔をした。
「それはどれ位ですか」
「そちらには数人程ですか」
「それ位ならいいですね。こちらにも事情がありまして」
「そちらの星系のことですか」
「あ、それは違います」
バシュトはそれは否定した。彼の領地はヒンズー教徒とシーク教徒が多い。イスラム教徒はいないのである。いるにはいるがハサンの企業家等だけである。マウリアはイスラム教徒は少ないのだ。二十世紀にインドとパキスタンに分裂して以来のことである。イスラム教徒達はパキスタンとなりそのままサハラに入ったのである。
「彼等はオムダーマンの軍人ですね」
「ええ、勿論」
「ハサンがそれを憂慮しなければいいのですが」
「それではそちらにはオムダーマンの武官達は送らないようにしましょうか」
クリシュナータは提案してきた。

## 第十一部第三章　野望への階段その八

「その分別の星系に向けるということで」
「お願いできますか」
それこそがバシュトの願いであった。
「その方がマウリアとハサンにとってもいいと思います」
「わかりました。それでは」
「はい」
こうしてバシュトの領地にはオムダーマンの武官は送られないこととなった。そして話は別のものへと移っていった。今度はバシュトが口を開いた。
「ハサンの宮廷では少し動きがあるようです」
「ほう」
クリシュナータはそれを聞いて目の色を変えさせた。ハサンの宮廷は昔から血生臭いことで知られているのだ。
「何が起こっているのですか」
「ルクマーン王太子がおられますね」
「ええ」
ハサンの王太子であり現国王であるハルジャ五世の長子である。文句なしの次期王位継承者の筆頭候補であった。能力にも人望にも恵まれているというのが評判である。
「彼が何か」
「どうも最近父である王との仲がうまくいっていないようなのです」
「何故でしょうか」
「政策を巡ってです。あの国は王室の発言力が議会等に比べて大きいですね」
「はい」
「今のハサンの現状維持主義はハルシャ王の政策です。ですがそれに太子が異を唱えだしているのです」

「それは何故でしょうか」
「やはりオムダーマンとティムールに刺激されたようです」
バシュトはそう答えた。
「あの二国にですか」
「ハサンが現状を維持している間に両国は華々しい飛躍を遂げました。太子はそれを見て危機感を覚えているようなのです」
「次の標的は自分達だと」
「そう。そして彼自身も思うところができたようなのです。軍を増強し外に出るべきだと考えはじめているようです」
「つまり二国と矛を交えると」
「交えなくとも対抗する気があるのは確かです。だが王はそれを認めようとしない。軍備増強案には反対しているそうです」
「それは当然でしょうね」
クリシュナータはそれには頷いた。
「現状維持ではありませんから。それに王から見て余分な金が出る」
ハルシャ五世は貿易や経済を重視している。そしてそれにより国を繁栄させてきた。軍備については最低限のものさえあればいいという考えの持ち主なのである。だが太子は違うのだ。
「それは彼にとっては喜ばしいことではないですね」
「そういうことになりますね」
バシュトはそう述べた。
「そしてそれにより宮廷では対立が起こっているようです」
「国王と王太子の」
「はい、そしてそれが次第に政府の間でも拡がっているようです。経済官僚や穏健派は王につき、軍部や強硬派は太子についているようです」
「二分しているようですね」
「そしてそれが世論にも影響しています。ハサンは今二つに分かれようとしております」
「ハサンにとっては危険ですね」

クリシュナータは今度はそう述べた。
「今この時期にそれとは。かなりまずいのではないかと思うのですが」
「オムダーマン、そしてティムールが力をつけようとしているこの時期に」
「まあ今後どうなるかまではわかりませんがね。ただそれがハサンだけでなくサハラ全体にも影響していくのは間違いないでしょう」
「でしょうね」
これは同意であった。
「ハサンはサハラ一の大国、その影響が大きいのは間違いありません」
「今後これがどうなるかですね。転び方によってはサハラがまた大きく変わります」
「ええ。もしかすると」
「もしかすると」
今度はクリシュナータが問うた。
「我々の商売相手が変わるかもしれません」
「そうですね」
「次の商売相手が話がわかればいいのですが」
「わからない場合は」
「こちらにも考えがあります」
バシュトの声と顔が剣呑なものを含んだ。
「そうした場合は何らかの手を打たなければなりません、我々としても」
「わかりました」
そしてクリシュナータはそれに頷いた。
「その際は私も及ばずながら力を御貸ししましょう、陰ながら」
「お願いしますね。出来ることならこういうことは避けたいですが」
「しかし最悪の事態も考えなくてはならない」
彼はここでこう述べた。

「それが我々の仕事なのですから」
「はい」
こうした話をしながらマウリアもまた動いていた。銀河の歯車はそこにいる全ての者を巻き込んで動き続けていた。だが星の大海はそれを知らぬとでもいうように紫苑の闇と無数の星達の煌きをたたえていた。そしてそれは何時までも続くようであった。

# 第十一部第四章　軍規その一

軍規

連合とエウロパの戦いは続いていた。ホズ星系に逃げ込んだエウロパ軍であったが連合軍はとりあえずはそれを追わずにアルテミスからホズへと至る各星系の占領を先に行っていた。

この辺りはエウロパの人口密集地帯の一つであった。従って占領を執り行う連合軍の行動は慎重を極めていた。

「市民達に対して危害は加えるな」

「軍事以外の産業を破壊するな」

「市民達の生活を保障せよ」

「捕虜の虐待は厳禁とする」

これ等はこのハンニバル作戦発動と同時にエウロパへ出征する全将兵に伝えられたものである。連合軍の軍規を正し、そして無用な蛮行を避ける為であったが八条はこれを徹底させた。布告すると同時にこれを破った場合の処罰も定められていたのである。

「全財産没収のうえ稜遅刑、若しくはそれに匹敵する厳罰を公開にて執り行う」

これであった。連合の死刑は酸鼻を極めることで知られているが八条はこれを布告したのであった。無論本気である。これにより連合軍のエウロパでの行動は極めて規律正しいものとなっていたのである。

だがそれでも不心得者はいる。八条はそうした輩には容赦なく刑罰を与えた。

今そうした一人の兵士が処罰されていた。エウロパの少女を襲い暴行を加えた兵士である。彼は今全裸にされ公衆の面前に引き出されていた。

「カスム＝コイケットだな」

処刑に立ち会う憲兵隊の将校が彼に名を尋ねてきた。

「ふん」
だがその全裸の男は答えようとしない。見れば頭は丸刈りにされ身体全体に彼を批判する文字が刻み込まれていた。連合において他者を害するような輩に対しては人権は全く保障されない。死刑も極めて多く、その内容もまた実に多彩で残虐なものとなっているのだ。
「御前は一週間前道で出会った一人の少女に襲い掛かり、彼女に暴行を加えた。間違いはないな」
「それは取調べの時に言っただろうが」
コイケットはふてくされてそう言った。
「あんたにな」
「質問に答えろ」
その将校はコイケットの腹を蹴ってそう述べた。
「凶悪犯に人権なぞ一切ない。それが連合の法だということを忘れるな」
「グググ・・・・・・」
腹を蹴られうずくまり、胃の中のものを吐き出すコイケットの顔をさらに蹴ってそう言う。鞭まで出してきた。
「答えろ」
そう言いながら鞭を振るう。犯罪者用の電気鞭である。通常の鞭と比べて相手に与えるダメージは比較にならない。これは犯罪者に対してのみ使われる特殊な鞭である。
連合の犯罪者の取調べはまずはその人物が本当に犯罪を犯したのかどうか徹底的に調べられる。その際副作用のない強力な自白剤も使われる。同時に複数の科学的な方法でアリバイが検証される。犯罪者に人権がなく、その処罰が過酷なものならば冤罪があってはならないからだ。もっともこうした拷問的処刑が加えられるのは殺人や強盗等凶悪犯罪に対してのみである。通常の犯罪に対しては何も行われない。そうした意味で連合の人権は確かなものなのである。
「答えないのか」
その将校はさらに攻撃を加えた。連合軍の将兵はうずくまるコイ

ケットを冷たい目で嘲笑しているだけである。むしろそれを見るエウロパの市民達の方が蒼ざめていた。
「どうなんだ」
将校の攻撃は続く。彼は足でコイケットをひっくり返して問うてきた。そして同時に腹を思い切り踏んだ。
「ゲッ」
「答えろ」
「わ、わかったよ」
コイケットは息も絶え絶えになって答えた。既に全身傷だらけでありそれはかなり深かった。何本か歯が折れた口で答えた。
「答える。だから止めてくれ」
「御前が答えるまで止めるつもりはない」
将校はこう言って今度は脇腹を蹴った。
「早く答えろ」
「わかった、答える」
彼は答えた。そして自らの罪を認めた。
「自分の罪を認めるな」
「あ、ああ」
執拗な攻撃に耐えられず答えた。
「俺がやったよ。あの女の子を手篭めにしたよ」
「本当だな」
「自白剤とアリバイの通りだ。俺がやった」
「そうか、わかった」
将校はそれを聞いて頷いた。そして後ろに控える兵士達に顔を向けた。
「おい」
「はい」
彼等は頷いた。そしてその中の何人かが後ろに下がった。暫くして檻に入れられた巨大な獣が姿を現わした。
「ヒッ」

それを見て市民達の何人かが声をあげた。それは恐竜であったのだ。背丈にして三メートルはある。肉食の恐竜にしてはそれ程大きくはない。まだ若いものであろうか。だがその目は飢えで爛々と輝き、牙には涎が滴っていた。そして爪は禍々しい光をたたえていた。

「まさか・・・・・」

その恐竜を見たエウロパの市民達の顔に恐怖の色が浮かんだ。コイケットは観念したのか俯いていた。そこで将校がまた指示を下した。

「この愚か者をその檻の中に入れろ」

「わかりました」

それに従いコイケットが檻の前に連れられる。そして扉が開かれるとその中に蹴り込まれた。

「死んで来い」

彼に贈られた最後の贈り物であった。こうして彼は餓えた恐竜の前に差し出されたのであった。

その後の光景を見てエウロパの多くの市民は気を失ったり、嘔吐したりした。まず手足を引き裂かれ、腹を切られる。生きたまま内臓を貪り食われ首を食い千切られる。断末魔の表情を残したその頭から脳を取り出しそれを啜る。コイケットが骨と肉片だけの残骸となり果てるのに然程時間はかからなかった。この時の為にこの恐竜を餓えさせていたのである。これもまた当然であった。

この光景は連合全土、そしてエウロパの占領地で放送された。卑劣な犯罪者に相応しい末路を公開したのである。少なくとも連合の価値観ではそうであった。

だがエウロパの市民達の考えは違っていた。あまりに酷い、やり過ぎだという意見が相次いだ。だが連合の者はそれが不思議でならなかった。

「悪人を処刑して何が悪い」

それが彼等の言い分であった。

「罪を犯せばそれに相応しい処罰がある。それを受けるだけだ」

「それが嫌なら最初から罪を犯すな」
彼等はそう主張する。だがエウロパの者でそれを納得する者はそうはいなかった。
「残酷だ」
「人としての行いではない」
それがエウロパの主張であった。だがこれは連合の者達にとっては不思議でならなかった。彼等にとってみればごく当然のことであるからだ。
ここに連合とエウロパの価値観の差があった。これは八条のところにも届いていた。
「これは予想されたことですが」
八条はそれを聞いてまずこう述べた。
「だからといって止めることはありませんね」
「ですな」
その時彼は中央政府法務省にいた。そして法務相であるロト＝フナフチと話をしていた。彼は四十代後半の厳しい顔付きの男でありツバル出身である。かっては母国で裁判官をしていた。ツバルから中央政府議会に入り、今は政府の法務相となっている。堅実で厳格な人物として知られている。
「これは連合の法です」
「はい」
「自軍においては連合の法が適用される。言うまでもないことです」
「我々の処刑もまた当然のことですね」
「勿論です」
フナフチは自信に満ちた声でそう答えた。

## 第十一部第四章　軍規その二

「彼等には彼等の価値観、倫理観がありますが」
「ええ」
「我々には我々の価値観、倫理観があります。エウロパの市民達に対してはエウロパの法で、しかもエウロパの警察に任せている筈ですが」
「警察の武装解除はさせていますがね」
八条はそう答えた。
「反乱防止の為に」
「それは結構なことです」
フナフチはそれをよしとした。
「裁判等もエウロパの裁判所で行われていますね」
「勿論です。彼等の生活は保障していますから」
「なら問題はありませんね。少なくとも我々は彼等の法を侵害してはいない」
「はい」
「気にすることはないかと。このまま続けていくべきです」
どちらにしろ二人は連合の法で以って連合軍の規律を維持する気であった。エウロパのことを気にする義理も何もなかったのである。
「我々は我々の法を徹底させましょう。それこそが秩序の維持です」
「わかりました」
これでこの件の話は終わった。後は穏やかな会談となった。彼等はまずは食卓を囲んだ。メニューは魚を主体としたものであった。
サラダもスープもシーフードであった。海草や海老が入っている。
「これは伊勢海老ですね」
「はい」
フナフチは八条の問いに答えた
「丁度いい海老が入りまして。如何でしょうか」

「いやあ、これはいい」
彼は伊勢海老も好きである。スープの中にあるそれを掬い取った。
「この歯ざわりがね。たまらないのですよ」
「最初見た時は驚きましたけれどね」
フナフチは笑いながらそう言った。先程までのいかめしい顔は消えていた。
「こんな大きなゴツゴツした海老がいるのかと」
「オマール海老もそうですが」
「私の住んでいたツバルの漁村はあまり大きな海老がいなかったのですよ」
彼はそう答えた。
「それで中学生になって一人旅をしましたら。船旅をね」
「はい」
「そこで見たのですよ。この海老を。いやあ、驚きました」
「そうだったのですか」
「こんな大きな海老がいるのかってね。食べてみたらもっと驚きました」
「何故ですか？」
「美味しかったからですよ」
満面に笑みをたたえてそう言う。
「他の海老より美味しい。これはもう病みつきになりますよ」
「でしょうね」
八条は相槌を打ちながらまたスープを飲んだ。
「昔我が国では海老といえばこれでしたから」
「そうだったのですか」
「伊勢という場所の名物でしてね。だから伊勢海老なのです」
「ふむ」
「けれど海老としては位が高いのですが海の幸全体ではそうともされていないのです」
「それはまた意外ですね」

フナフチもそう言いながらスープを飲んでいた。
「こんなに美味しいというのに」
「海の幸の第一位は鯛とされていたのです」
「鯛ですか」
「はい、海老で鯛と釣るという諺もあります」
彼はここで自国の古い諺を出してきた。
「それだけ鯛は位の高いものとされてきたのです」
「なら丁度いい」
フナフチはそれを聞いてまた笑った。
「次のメニューは鯛ですよ」
「おお」
八条もそれを聞いて笑みを作った。思わず顔を上げていた。
「鯛茶漬けですが」
「それはいい」
「これも日本の料理でしたね」
「はい。私はあれも好きでして」
どうやらそれは事実のようである。八条の目の色を見ればそれがわかる。
「ですがその前にスモークサーモンでも如何ですか」
「いいですね」
程なくしてスモークサーモンが運ばれてきた。塊で、である。
それから鮪のステーキである。それが終わってから鯛茶漬けであった。
二人は箸でそれを食べた。口の中に鯛と茶の味が漂う。えも言われぬ美味であった。
「ほう、ジャポニカ米ですか」
「ええ、お口に合うかどうかわかりませんが」
「いや、これは中々。美味しいですよ」
「どうやら気に入ってもらえたようですね」
フナフチは彼の様子を見て安心してそう述べた。

「お茶漬けというのは我々が考えているより日本人にとっては特別な食事のようですから」
「そういうわけでもないですけれどね」
八条はそれは否定した。
「ごくありふれた食事ですよ。料理と言う程のものでもありませんし」
「そうなのですか」
「ただお酒を飲んだ後や朝に食べたいものではありますね。サラサラと」
「そういうものですか」
「そうですね。そうした意味で日本人のソウルフードかも知れません」
「ソウルフード」
「どれだけ豊かになってもこれだけは忘れられません。時として食べたくなるものです」
「不思議ですね」
フナフチには今一つわからない話ではあった。
「日本人というと魚ばかり食べているイメージがあるのですが」
「否定はしませんね。ある程度は事実ですし」
この時代においても日本人の魚好きは有名であった。とりわけ生の魚を好むことで知られているのも同じである。彼等は何時でも生の魚を食べたがる、とまで言われえている。
「お茶漬けも特別なものだったのですね」
「意外と我々にそうした特別なものは多いですよ」
「例えば」
「味噌汁にしろそうですね」
「ああ、あれですか」
「ええ」
味噌汁は連合においても広く知られた料理である。健康食品としても知られている。白味噌もあれば赤味噌もある。多くの国で飲ま

れている。
「日本人にとっては朝に欠かせないものの一つですね」
「ふむ」
「米もね。ジャポニカ米でないと駄目でしょうか」
「やはり」
「インディカ米はね。どうも口に合わない場合が多いです」
「それがよくわからないのですよ」
フナフチは首を傾げながらそう言った。
「何故ですか」
「いえ、連合の多くの国ではインディカ米が主流ですね」
「はい」
「それで日本だけがジャポニカ米です。他にもあの米を食べている国はありますがジャポニカ米にこだわるのは貴国だけではないかと思うのですが」
「そうかも知れませんね」
またしても否定はしなかった。
「あの米もまた我々にとっては特別なものですから」
「そういうことですか」
「そういうことですね。まあ味覚の違いでしょう」
「わかりました。他にはありますか」
「漬物でしょうか」
彼は次は漬物について言及した。
「漬物」
「はい。梅干もこれに含みましょうか」
「あの赤い梅を漬けたものですね。かなり酸っぱい」
「あの酸っぱさも慣れるとね。病み付きになります」
「案外質素な食べ物と思いますが」
「その質素さがね、いいんですよ。お茶漬けにも合いますし」
「そこでお茶漬けが出て来ますか」
それを聞いて思わず笑ってしまった。

「日本人にとって本当に特別なものなのですね、あれは」
「おわかりになられましたか」
八条はここでニヤリと笑った。ここで茶漬けを食べ終える。そしてデザートとなった。
デザートはフルーツであった。皮を剥いた柿であった。
「お茶漬けがなくては日本人は死んでしまう程です」
「そこまで」
「何処へ行っても食べたくなるものなのは事実です。そして他にもあります」
「今度は」
「豆腐」
「あれは私も好きです」
「そのままでも煮てもいいでしょう」
「湯豆腐ですね。あれは白ワインによく合います」
「日本酒にも」
「私はそのお酒は飲めないので。それでワインなのです」
「そうでしたか」
「あれはね、癖が強くて」
「あのお酒もまた日本人にとっては離せないものですが」
「それでも。まあ日本人でないということで勘弁して下さい」
「わかりました」
そして食後の酒が運ばれてきた。やはり白ワインであった。

## 第十一部第四章　軍規その三

二人はそれを飲む。辛い味が口の中に漂う。
「他にもありますか」
フナフチはその辛口のワインを飲み終えて尋ねてきた。
「ありますよ」
「それは」
「これは他の国にも知られたものですが」
「何でしょうか」
フナフチにはそれが何か今一つ掴めないでいた。もう和食でポピュラーなものはあらかた語り尽くしたかと思った。だがどうやら違うようなのである。
「わかりませんか」
「はあ」
「日本以外の国ではあまり人気のないものですが」
「まさか」
それを聞いてピクリ、と眉を動かした。
「はい、納豆です」
「やはり」
彼はそれを聞いて顔を苦いものにさせた。
「あれは私もちょっと」
「栄養がありますよ」
「それはわかっていますが」
「案外癖もなくて美味しいですし。葱とも合います」
「しかし豆腐で充分ではないでしょうか。豆乳もありますし」
連合においては大豆はよく食べられる。米に混ぜて食べたり煮豆にしたりもする。大豆から作る酒もある。中でも豆乳はよく飲まれる。
「それでも美味しいですから」

「御言葉ですが」
彼はそう断ったうえで八条に対して言った。
「はい」
「美味しいというのは。私にはあの匂いが」
「匂いの強い食べ物は他にも多くありますが。チーズも匂いがきついですね」
「はあ」
とりわけモンゴルにおいてよく食べられる。長い間遊牧生活を続け、今でもそうした生活を送る者が多いあの国においては乳製品は欠かせないものである。馬の乳がとりわけ好まれる。それと茶を混ぜて飲むことも多い。またその乳から酒を作ったりもする。所謂馬乳酒である。
「匂いはどの食べ物にもありますよ。少なくとも私は納豆の匂いには食欲をそそられます」
「そういうものですか」
「ええ。慣れるといいものではないでしょうか」
「あの糸を引いているのが。腐っているのですよね」
「腐ってはいませんよ」
八条はそれを否定した。
「あれは発酵させているのです。ヨーグルトと同じですよ」
「科学的に言えばそうなりますね」
「はい。法務長官もヨーグルトはお好きですね」
「嫌いではありませんね」
彼はそう答えた。
「身体にもいいですし。あれは非常に優れた食品です」
「そういうことです。納豆もそれは同じです」
「いや、それはわかっていても」
「食べられませんか」
「私はね。あれだけはどうしても」
「それなら仕方ないですね。無理強いはしません」

「はあ」
「ただ納豆が日本人のソウルフードの一つであるということは知っておいて下さい。これなら何かと役に立つと思います」
「そうですかね」
「まあ和食にも色々あるということです」
彼はそう言った。
「そうした意味で知っておいて損はないでしょう」
「わかりました」
フナフチはそれを聞いて頷いた。
「ただ、納豆だけは勘弁を」
「はい」
八条はそれを聞いて微笑んだ。こうして二人の会談は終わったのであった。
とりあえずフナフチは納豆を食べずに済んだ。だがそうはいかなかった者達もいるのであった。
「ちぇっ、今日のおかずは納豆もあるのかよ」
エウロパに出征中のベリーズ級戦艦アンナンの食堂でそうぼやく兵士がいた。彼は今朝食を採っているところであった。
「俺これ嫌いなんだよな。どうにかならねえのかよ」
「じゃあ俺にくれるか」
そのすぐ後ろにいた同僚がそう声をかけてきた。
「夜勤明けで疲れていてな。少しでも食べたいんだ」
「おいおい、いいのかよ」
彼はそれを聞いて笑った。
「こんなとんでもないもん食ってよ。腹壊しても知らねえぞ」
「納豆食って腹は壊さないだろ」
同僚の兵士は彼にそう言って納豆を彼の分まで受け取った。そして二人は側のテーブルに向かい合って座った。今日の朝は和食であった。納豆の他に御飯と卵焼き、焼き魚、若布の味噌汁、青菜の漬物、梅干、そして納豆であった。朝から豪勢なメニューといえた。

連合軍はバイキング方式なので好きなだけ食べられる。彼等もそれぞれ好きな食べ物をふんだんに盛り入れていた。
その同僚の兵士は納豆をかなり入れていた。他には焼き魚も。彼は卵焼きと味噌汁であった。それぞれ好きな食べ物がわかって興味深かった。
同僚の兵士は納豆に醤油と辛子、そして葱を入れてかき混ぜる。彼はそれを見て嫌そうな顔をしていた。
「何時見ても気分のいいもんじゃねえな」
「そうか？」
同僚はそれを聞いて不思議そうに首を傾げた。
「俺はこれ見たら食欲が出るけれどな」
「御前はな」
彼はそれを当然のように言った。
「確かあっちの血が入っているんだよな」
「といっても十代位前だぞ」
彼はそう言いながらその納豆を御飯にかけた。そして食べはじめる。彼も卵焼きで御飯を食べはじめた。味噌汁も飲んでいる。
「殆ど入っちゃいねえぞ」
「けれど入っているのは事実だ」
彼はそう言った。
「俺はケベックの生まれだからな。納豆には縁がなかったんだよ」
「卵焼きや味噌汁は好きでもかよ」
「これはガキの頃に和食のレストランで食ったんだよ」
彼はそう答えた。
「モーニングでな。たまたま休日で親父とお袋に連れられてな」
「で、それ以来病みつきになったと」
「ああ」
「そこに納豆はなかったのかよ」
「あったさ」
彼は憮然とした顔になった。

「じゃあ知っていたんじゃないか」
「一目見て嫌になった」
本当に嫌そうな顔になった。
「あんな食い物があること自体がとんでもねえと思った。あんなの食い物じゃねえ」
「只の食わず嫌いかよ」
「じゃあ美味いのかよ、それ」
「俺は美味いと思うぞ」
同僚はそう答えた。
「騙されたと思って食ってみな」
「親父とお袋の遺言でな。食っちゃいけねえことになっている」
「親父さんとお袋さんってのは昨日メールくれた人達か？」
「何でそれ知ってるんだよ」
「昨日言ってたじゃねえか」
同僚はそう突っ込みを入れた。
「違うってんなら昨日のあれは何だったんだよ」
「チッ」
「まあ食わないのならいいさ。別に納豆を食わなくても死なないしな」
「そういうことだな」
「癖の強い外見だしな。味はそうでもないが」
「そうなのかよ」
「ああ。案外あっさりとしてるぜ。知らなかったのかよ」
「食ったことがないんでな」
味噌汁を飲み干して憮然とした顔でそう答えた。

## 第十一部第四章　軍規その四

「生憎な」
「そうか」
「それでもういいだろ。俺はこれ食ったら仕事なんだ。行かせてもらうぜ」
「おい、ちょっと待ってくれよ」
同僚はそれを聞いて食べるのを早くさせた。
「何だよ」
「申し継ぎがあるんだ。御前に言っておくことがある」
「？何だ」
「通信士に伝えてくれ。中央の友軍から電報だってな」
「おう、わかった。早くしろよ」
「ああ」
彼等は朝食を終え仕事に戻った。戦場は常に動いている。その中のほんの一コマであった。

連合軍は順調にエウロパの星系を占拠していった。そしてホズにじわじわと近付いていた。
その途中にやはりエウロパの風習について知る機会があった。彼等はそれを聞いてまた驚かされていたのであった。
「本当だったとはな」
それを聞いた将兵達の最初の感想であった。
「まさか今もそんなことをしているとは」
「あれ、連合では違うのですか？」
その貴族の領主、子爵は連合軍の将兵達のその様子を見て不思議そうに目をパチクリとさせていた。
「まさか」
彼等はそれを完全に否定した。

「そんなことは考えもつかないことです」
「そうそう」
誰もがそれを否定した。子爵にはそれがどうしてもわからなかった。
「変ですね」
「そうでしょうか」
「では宴会の時なんかはどうされているのですか」
「どうと言われても」
子爵の屋敷に招かれている兵士達は戸惑いながらも答えた。
「お腹いっぱい食べたらそれで終わりですが」
「エウロパではそうではないと聞いてこっちが驚いているのです」
「それは変わっていますね」
「いや、そうでしょうか」
連合の兵士達はまだわかっていなかった。
「満腹になったらそれで満足でしょう」
「それからですよ」
子爵はそう言った。
「満腹になればそれで終わりですね」
「はあ」
「だからこそ吐くんですよ。そして胃を空にしてまた食べる」
「それがよくわからないのです」
将兵達はそこに突っ込みを入れた。
「そこが」
「そうです。吐いて、また食べる。そこまでする必要はないでしょう」
「私もそう思いますね」
見れば連合の者は皆同じ考えであった。
「満腹になればそれで充分、そうではないのですか」
「まだ料理があれば食べなければならないでしょう」
「それはそうですが」

子爵の言葉はある意味正論ではあった。だが連合の将兵達には理解できない部分が多い。
「余ったものは持ち帰るなりすればいいですし」
「なあ」
「持ち帰るのですか！？」
今度は子爵が驚く番であった。
「そして後で食べるのでしょうか」
「勿論ですよ」
「そうではないのですか」
「まさか」
子爵はそれを否定した。
「そこで出されたものはそこで食べるのが礼儀でしょう」
「我々は違うのですよ」
彼等はそれを否定した。
「何時食べてもいい。腐らなければ」
「それよりも吐いてばかりでは辛くないですか」
「慣れますから」
子爵はにこやかに笑ってそれも否定した。
「慣れればそうでもないです」
「そうなのですか」
「ええ、まあ」
彼は頷いた。
「ガチョウの羽根を喉の奥に突っ込んでね。それで吐き出すのです」
「奥を刺激するのですね」
「はい。そして吐きます。そしてまた食べて飲む。それがエウロパのやり方です」
「そういうものですか」
「そして最後まで食べる。それが我々のやり方です」
「我々とは全く違いますね」
何処までも彼等のやり方は違っていた。

「満腹になればそれで終わりではないのがまず驚きです」
「はあ」
「これは貴族だけでしょうか」
「まあそうですね、一応は」
子爵はそれを認めた。
「やはり」
それを聞いた連合の将兵の中には頷く者もいた。やはり彼等はエウロパの貴族に対して大なり小なり反感を抱いているのである。
「ただ平民達も食べる時はそうします」
「吐くのですか？」
「ええ、まあ。ただ我々は常にやっておりますが」
「ふむ」
「彼等は宴会の時だけです。普段から吐いたりはしないので慣れておりません」
「そうでしょうな」
それには大いに頷くものがあった。やはり貴族と平民では富の差が歴然としているからである。
この子爵の家も立派な屋敷であった。豪奢な門をくぐると左右対称の緑の庭があり、青と白を基調とした四階建ての屋敷がある。それはまるで城のようであった。
「ただ、吐くのはエウロパの風習の一つですね」
「そうなりますね」
子爵はそれを認めた。
「貴族、平民関係なく」
「はい」
「これはエウロパに昔からあるものでしょうか」
「ローマ帝国の時代からだそうです」
「ローマ帝国」
連合の将兵達はそれを聞いて少し目をパチクリとさせた。彼等にとってみればローマとは遠い歴史の話である。今一つピンとこない

ものがあった。
「そんな昔からですか」
「彼等は寝そべって食事を採り、そして満腹になれば吐いてまた食べていたそうです」
「何と」
堕落していたのか、と思ったがそれは口には出さなかった。彼等連合の者にとってそこまでするのは堕落としか思えなかったのである。ローマが滅びたのも道理だ、とも思った。
「そしてバロック、ロココ期の貴族達です」
「フランスのルイ十四世の頃でしょうか」
「そうですね。大体フランスの食事はヴァロアの頃から変わりだしまして」
どうやらこの子爵はかなり食の歴史に詳しいようである。
フランス料理はかって世界に名を知られ、今もエウロパの料理の重要なルーツの一つとなっているがそうなったのは案外新しい。ルネサンスまでフランスは欧州においては田舎に過ぎず、そうした分野での先進地域はイタリア半島であった。彼等は長い間手掴みで食事を採っていた。もっともこれに関していえばそれ以後も同じで太陽王ルイ十四世にしても手で食べることが多かったし、ナポレオンもまた手掴みで食べていた。ナポレオンの食事のマナーはかなり悪く上流階級の者は眉を顰めたという。
そんなフランスの食事が変わったのはフィレンツェのメディチ家から妻を迎えてからであった。カトリーヌ＝ド＝メディチ。サン＝バルテルミーの虐殺を引き起こしてしまったことと謀略により有名であり、悪名高い彼女がフランスの料理の発展に大きく寄与したのである。
彼女は妻としては不遇であった。夫であるアンリ二世は既に愛人がいた。それも二十も年上の愛人をだる。その愛人の名はディアヌ＝ド＝ポワティエ。月の女神ダイアナとさえ讃えられた絶世の美女であり、彼は幼い頃にディアヌと会ってからただ彼女だけを想って

いたのである。

## 第十一部第四章　軍規その五

彼女の美貌は特別であった。老け込まず、王を魅了し続けた。そして妻であったカトリーヌは歯牙にもかけられなかった。妻としてこれ以上の屈辱はなかった。

そんな中で彼女は自らの欲求を食べ物に求めたのであろうか。故郷フィレンツェから料理人を連れて来、連日連夜食事会を催した。その中でフォークも広まった。それまで手掴みであったフランス人達にフォークを教えたのも彼女であったのだ。

それからフランスの食事は変わった。ヴァロワからブルボンになるとさらに変わった。ブルボン朝の始祖であるアンリ四世はニンニクを好むことで有名で常にその匂いを漂わせていたというがその孫のルイ十四世になり遂に開花した。小柄ながら類稀な健啖家である彼によってフランス料理はその大輪の花を咲かせた。様々なことで評価の分かれるこの太陽王であるがこと料理に関しては素直に賞賛されるべきであった。

それからフランス料理が変わった。豪華絢爛な料理となったのである。そして世界の三大料理の一つとなった。それが今のエウロパの料理やテーブルマナーに深く影響しているのである。

「我々はその時の貴族達に倣っているのです」

「そうだったのですか」

「はい」

将兵達はそれを聞きながらもやはり不機嫌そうであった。

「何か御不満でも」

それは子爵も気付いていた。こう尋ねてきた。

「いえね」

彼等はその顔のまま答えてきた。

「フランスの貴族というとあまりいいイメージはなくて」

「連合ではそうでしょうね」

子爵は澄ました顔でそう答えた。
「民衆を搾取し、贅を極めたと思われているのでしょう」
「その通りです」
連合ではそう教えられている。貴族とはそうした者達であると。彼等にとって貴族主義とはあまりいいイメージがないのである。エウロパの生活を評価している者達にしろまず第一に連合での生活を見る。彼等は連合の生活を批判しながら連合のテレビゲームや映画、ネットを楽しみ、連合の料理や飲み物に耽溺する。そして最後はやはり連合の生活がいいと締め括るのが常であった。彼等にとってエウロパとは戦いが起こるまでおとぎ話の世界の一つに過ぎなかった。
「確かにそうした者達もいたでしょうね」
「はい」
ここに二つの真実があった。連合とエウロパの。
「ですがそれが全てではありません」
「それはわかります」
理知的な顔の兵士がそれに答えた。
「人それぞれですしね」
「はい」
「しかしそうした者がいたのも事実」
理知的な兵士はそれに付け加えた。
「だからこそそう思われているのです、我々に」
「これは手厳しい」
子爵は苦笑せずにいられなかった。
「確かにね。ルイ十四世にしろ贅を極めた」
「はい」
ベルサイユ宮殿はその象徴とも言える存在であった。二百年をかけて建築されたというこの巨大な宮殿は贅を極めていた。フランスの豊作の時でさえ日本の凶作の時よりも餓死者が多かったという。これが当時のフランスの実態であった。江戸幕府が江戸城以外はさしてこれといった建築をせず、その江戸城の建築にしろ諸大名、そ

して幕府自体が金を出したのに対してこの王は所謂搾取から金を調達した。税によって建てたのだが途方もない国力をこの宮殿に注ぎ込んだのは事実であった。何しろ厳寒のベルサイユにオレンジまで植えようとしたのだ。熱帯のオレンジは厳しい冬を持つフランス北部では育ちにくい。結果として多大な費用がかかった。

この王は派手好きであった。しかも万事に。この宮殿だけではなかった。衣装にも趣向を凝らしていた。料理は言うまでもない。なおネクタイは彼がクロアチアの兵士達の服を見て考案したという説もある。そうした芸術を見る目はあったのも確かである。コルネイユやラシーヌ、モリエールといった作家達も彼に愛された。これについて彼はこう言い残している。

「余は王であるから貴族は一時間もあれば何十人も作ることができる。だが芸術家はそうはいかないのだ」

その通りであった。彼は芸術家の才を素直に認めていた。そしてそれを愛していた。だが同時にこの発言の前半部分もよく行っていた。無用な役職や貴族を多量に作り出したのである。

「陛下が官職をお作りになれば神がそれを買う馬鹿をお作りになる」

ある大臣の言葉である。つまり売官である。これは宮廷の費用を調達する為に為されたことであった。困窮する一般市民からの税だけでは足りなくなっていたのである。彼はそれ程にまで贅を愛していた。

宮殿や衣装、料理だけではなかった。そして芸術だけでも。彼は快楽追求主義者であり、それは女性にも向けられていた。宮廷に出入りする女性は全て彼のものであったといっても過言ではない。女達も自らの富や権力の為に彼に身体を捧げた。彼は小柄ながら美男子といってもよい容姿であったが歯が全ての病の根源であると主張する奇怪な医師の言葉に従い何と麻酔等一切なしで自分の歯を全て抜かせた。これも先端の医術を広めなければならない国王としての責務であった。どんなに快楽の中に身を置いても彼は王の責務だけは忘れはしなかったのだ。

しかしこれは彼にとって不幸なことであった。歯がないことにより碌に噛めない。消化不良になりそれは胃腸にも影響した。食べたものは殆どそのまま出てしまい、しかもそれが頻繁になった。顎も外れ、鼻からものを出し、悪臭が全身を覆った。そんな彼でも権力の座にある限り女達は集まってきた。そして王は彼女達を愛し、贈り物をふんだんに与え続けた。
この贈り物もまた高価なものであり財政を圧迫したのだ。彼の贅は一人の贅ではなかったのである。彼に群がる者達の贅でもあったのだ。
なお彼は戦争もよく行った。これもまた金がかかる。それにより当時欧州第一の大国であったフランスの財政は悪化していく。それがやがて革命へと繋がっていくのだ。
「彼は特別ですが」
「連合だと清の乾隆帝ですかね」
理知的な兵士は考えながら答えた。
「あの人も凄かったようですが」
「そうなのか」
それを聞いた同僚の兵士が目をパチクリとさせた。
「しかし彼は財政をそこまで悪化はさせなかった」
「はい」
子爵は頷いた。
「彼は太陽王程ではありませんね」
「はい。食を愛し度々広東に巡幸していたようですが」
「広東料理か」
それを聞いて連合の将兵のうちかなりの数の者が目を輝かせた。
「あれは確かにいいな」
「麺もな。海の幸も食えるし」
「清王朝はかなり繁栄していましたからね。フランスなぞ比較にならない」
「それであれだけの贅をするから我々もそう考えるのです」

理知的な兵士は子爵に対してそう述べた。
「彼はかなりの大食漢でした」
「はい」
一説には太陽王の腹の中には数匹の巨大な寄生虫がいたという。その為に満腹にならなかったという話もある。そのせいか肖像画や彫刻の彼は食事量の割には極端に肥満はしていない。
「あれだけ食べて、吐いてでは誤解もされますよ」
「残念なことです」
「それが文化の違いといえばそれまでですが」
「貴方達はそうは思われないでしょうね」
「はい」
将兵達はそれに頷いた。
「残念なことですね」
「ですがそちらから見た我々はどうなのですか」
ここで理知的な兵士が尋ねてきた。

## 第十一部第四章　軍規その六

「貴方達ですか」
「ええ。そちらから見て我々に思うところもあるでしょう」
「そうですね」
子爵は考えながら答えた。
「まず貴方達は身体が大きい」
「むっ」
大体においてエウロパの者より連合の者も方が十センチ以上高かった。連合においては二メートルを超える者も多い。これは混血と食事のせいであった。エウロパの者はそこまで大きくはないのが普通であった。
「そして食べる量も大変なものですね」
「そうですかね」
理知的な兵士ですら首を傾げざるを得なかった。
「我々はそんなに食べているつもりはありませんが」
「貴方達はそう思っていてもね」
子爵は付け加えた。
「我々から見ればそうなのですよ。はじめて見た時には驚きました」
「はあ」
連合の兵士達は力なく答えた。
「あるレストランの話ですが」
子爵は一つの事例を出してきた。
「一ダースの連合の兵士によってその日は閉店に追い込まれたそうですよ。午前中で」
「また極端な」
「私は嘘は言いませんよ」
子爵の声と顔がつっけんどんになった。
「今その証拠を見せてもらいましたから」

「証拠！？」
「ええ」
彼は頷いた。そして言う。
「貴方達のここでの食事」
「俺達の」
「それが何よりも雄弁に物語っています。まるでバイキングです」
「大袈裟な」
「ですから私は嘘は言いません」
彼はまた付け加えた。
「正直驚かされましたよ」
「さて」
連合の将兵達はまだ自分達のことがよくわかっていなかった。
「お一人辺り平均して四種類のスープを飲まれ」
「はい」
「大皿に一杯のサラダとハムの塊二つ」
「朝食ではその位ですね」
「鶏と鶉をそれぞれ一羽ずつに羊の脛肉三切れずつ、そして最後に山のようなパンと菓子、そして果物を召し上がられていたでしょう」
「それ位普通なのでは？」
理知的な兵士が首を傾げながら言う。
「あれは連合の者にとっては平均的な夕食の量ですよ」
「ええ、全く」
他の者達もそれに同意した。
「驚くことはないかと」
「そこですよ」
子爵はここで反撃に出た。
「我々と貴方達では根本的に食べる量が違う」
「はあ」
「我々ならもう途中で吐いています。そこが大きな差です」
「といわれてもなあ」

連合の兵士達はそう言われて困った顔になった。
「子供の頃からそれだけ食べていたし」
「食べなきゃもたないもんな」
「連合とはそんなに生きるのにエネルギーを使うのですか？」
「そうですね」
理知的な兵士が答えた。
「少なくともエウロパよりは忙しいですね」
「やはり」
「働くのにも遊ぶのにも。我々はゆったりしたことはあまり好みませんので」
「遊ぶのにも必死です」
別の兵士が言った。
「ですからね。必然的に食べないともたないのですよ」
「おかげでこんなに大きくなりました」
「身体はまた別なのでは」
子爵は苦笑しながら話に乗ってきた。
「いや、違いますかな。食べるから大きくなった」
「そうした一面はありますね」
彼等もそれをようやく認めた。
「けれど連合の食い物って美味しいですから」
「エウロパのはどうですか」
「そうですね」
彼等は暫く考えた後でその質問に答えた。
「味付けが薄いかな」
「チーズや牛乳の味ばかりですね」
「ほう」
「何か弱いんですよね。香辛料とか調味料あまり使っていないのでは？」
「繊細な味とは思われないのですか」
「繊細な味、ですか」

それを聞いてさらに考え込んだ。
「連合で繊細な味といえば日本の料理ですかね」
「あれも醤油にかなり頼っています」
「日本の食事については私も知っていますよ」
子爵はまたしても知識を発揮してきた。
「何でも生物を食べるそうですね」
「ええ、まあ」
「そして醤油や山葵を使う」
「醤油は連合ではポピュラーな調味料ですけれどね」
ただし日本のように大豆から作るものではない。大抵は魚や肉等から作る。所謂ナムプラーである。日本においてはしょっつると呼ばれるものである。
「それでしたらエウロパにもありますよ」
「本当ですか！？」
それを聞いて皆驚きの声をあげた。
「エウロパにも醤油があったのですか」
「はい」
子爵は頷いた。
「連合のそれとは違い高価ですが。隠し味に使います」
「そうだったのですか」
流石に驚きを隠せなかった。これには理知的な兵士も驚いていた。
「それは知りませんでした」
「ローマ時代にあったものを復活させたのですよ」
「へえ、ローマも醤油を使っていたのですか」
「はい」
彼は答えた。
「ローマでも魚介類を食べることが多かったですからね。作り方は貴方達の醤油と同じだと思いますよ」
「ナムプラーですか。魚から作る」
「はい、そうです」

「匂いが凄いでしょう」
「慣れるとあれがいいと思いますよ」
「おや、それは我々と同じですね」
理知的な兵士はそれを聞いて面白そうに笑った。
「意外なところで味覚が共通していますね」
「ですね」
「今までエウロパでは魚はムニエルにしたり、ブイヤベースにしたりするのが主流だと思っていました。生はまあカルパッチョがありますが」
「あれは肉でもそうするしな」
「ああ」
連合においてもカルパッチョはよく食べられる。生の肉や魚をオリーブオイル、そして香辛料で味付けしたものである。オリーブを使っている為あっさりとしていて美味しい。酒の肴としても人気がある。

## 第十一部第四章　軍規その七

「まさか醤油を使っているとは思いませんでした」
「そんなに意外でしたか。実は昔も使っていましたよ」
「昔とは」
「和食を食べる時ではなく他にも」
「はい。フランス料理でね」
「おい、それは本当か」
兵士達は同僚である理知的な兵士に尋ねてきた。
「フランス料理に醤油だって？」
「嘘だろう、それは」
「僕に言われてもな」
理知的な兵士も困っていた。
「それはないだろうとは思うが」
「使っていたのは太陽王ですよ」
子爵は彼等の驚いた様子を楽しみながら答えを言った。
「またですか」
この話においてあまりにもよく出る名前である。彼等はもうその名を聞くのに慣れてしまっていた。
「はい、彼の料理人が隠し味として使っていたのですよ。日本から輸入したものをね」
「成程、今のそちらと同じ使い方ですね」
「はい、その通りです」
つまり隠し味としてである。それなら幾分か納得がいった。
「王はそれがお好きだったそうですよ。非常に美味だと」
「そうだったのですか」
「ただちょっと気になるところがありますね」
理知的な兵士がここであることに気付いた。
「何がですか？」

「日本から輸入していたと仰いましたよね」
「はい」
「本当に日本からですよね、中国ではなく」
「ええ、それが何か」
「おかしいですね」
「何かあるのか？」
同僚達もそれを聞いて彼に尋ねてきた。
「あるよ。鎖国だよ」
「鎖国」
「フランスがルイ十四世の時代日本は江戸時代だった」
「そういえばそうだっけか」
同僚達はそれを聞いてそうだったかな、という何気無い反応を示した。
「で、それがどうしたんだよ」
「何かあるのか？」
「あるね。その時代日本は鎖国をしていた」
「よく御存知ですね」
子爵はそれを聞いて何かしらの意を得たかのように微笑んだ。
「勿論ですよ。これでも学者志望でね」
「ほう」
「任期が明けたら大学に進むつもりなんですから。軍には入学金を稼ぐ為に入っているんです」
「それは感心」
「こいつは努力家でしてね」
側にいる仲間達が彼の肩に手を当てて子爵に言う。
「大学に入る金は全部自分で稼ぐつもりなんですよ。親に金を出させるわけにはいかないって考えでして」
「立派ですね」
「生真面目な奴でしてね。部隊でもしっかり者で通ってます」
彼等はそう言ってその兵士を口々に褒めた。

「まあ融通が利かないところもありますがね。俺達にとっちゃこいつはなくちゃならない存在なんですよ」
「おい、そうやっておだてるなよ」
理知的な兵士はそう言って苦笑した。
「気味が悪いな。そうやって褒められると」
「そうか？」
「何かな。後でまた仕事を押し付けられそうだ」
「別にそんなことしねえよ」
「御前等のしないってのはするのと同じだからな。信用できないよ」
「おいおい、俺達ゃ戦友だろ」
「信じてくれよ」
「まあいいか」
彼もそれ以上言うつもりはなかった。それはここで終わらせた。
そして話を元に戻した。
「鎖国していたのに醤油を輸入していたのですか」
「はい」
子爵はまた頷いた。
「それが何か」
「おかしいですね」
彼はそう言って首を傾げた。
「あの時日本は出島で清やオランダとだけ貿易していたのでしたね」
「そういうことになっていますね」
「それで輸入していたのですか。日本は鎖国していたのに」
「醤油だけではありませんよ」
「他にもあるのですか」
「その後のマリー＝アントワネットとルイ十六世の結婚の際にも日本は祝いの品を贈っていますよ」
「本当ですか！？」
「ええ、幕府がね」
「そうだったのですか」

それを聞いて彼は何やら狐につままれたような顔になった。
「それは知りませんでした」
「他にも三代目の将軍ですが」
「ああ、家光公」
理知的な兵士は彼の名を聞いてすぐに反応を示した。
「彼が一体何か」
この家光の代にこそ鎖国が確立されたとされているのである。そうした意味で彼の評判は一時期あまりよくはなかったのである。徳川幕府の評判自体がよくなかった時期もある。これは幕藩体制が所謂マルクス主義史観の批判の対象となったからである。マルクス主義者達にとってみれば幕藩体制、すなわち封建制は打倒されるべき搾取のシステムであるからだ。なおそのマルクス主義者達とされる者達が作った北朝鮮という国家は徳川幕府なぞ比較にならない程の身分制度が確立され、搾取も甚だしかった。徳川幕府は諸藩の範になろうと税を軽くしていたことで知られている。四公六民とさえ言われていた。そして法制度も当時としては極めて人道的かつ公平なものであった。日本という国ができてこの時代で三千八百年程とされているが徳川幕府を越える政権は今だに出ていないという評価すらあるのだ。そうした意味で非常に完成された政権であった。
「当時中国で王朝が交代しましたね」
「はい」
明が農民反乱で滅び、満州民族の清が入ったのである。
「あの時日本は明の援軍要請を断った筈ですが」
「ところが家光公は清に攻め入ることを考えていたとも言われています」
「そうだったのですか」
これには彼だけでなく他の将兵達も驚かされた。
「それは意外ですね」
「彼等は我々でいう騎士の階級にいましたね」
「ええ」

武士のことをさしているのは言うまでもない。この時代の日本においてはスポーツの世界に僅かに残っている程度の武士道であるが歴史においては有名である。

## 第十一部第四章　軍規その八

「だからこそ戦いのことも念頭に置いていたのでしょうね」
「そうだったのですか」
「案外幕府の側としては鎖国しているという意識はなかったのかも知れません。単に渡航を制限して貿易港を限っていただけで」
「そうした考え方もありますね」
　実際その当時の日本人にとっては鎖国はどうでもいいことだったのかも知れない。彼等は日本国内で満足していたのであろう。自給自足が可能であったし旅行も国内で大いに発達した。
「案外日本人というものはしたたかですから」
　理知的な兵士はこう言ったがこれは連合においてはかなり一般的な評価であった。日本人は温厚だが柳の様にしなやかで粘り強い。中央政府に極めて忠実であるが時としてその中央政府を錦の御旗にして他の国に対抗したりもする。こうしたところがそう評価されているのだ。
「案外そうかも知れませんね」
「まあ日本人のことまでは知りませんが」
　子爵はそう答えながら言葉を続けた。
「しかし当時の日本が欧州と交流があったことはおわかりになられましたね」
「はい」
「歴史というものは面白いものです。色々なところから学ことができるのですから」
「ところで子爵」
　理知的な兵士は彼に尋ねてきた。
「何でしょうか」
「かなりの知識と教養がおありのようですが普段は何をしておられます」

「何といわれましても」
彼は笑いながらそれに答えた。
「一族で経営している出版社の株主をしておりますよ」
「そうですか」
「他にも執筆なぞを。まあこれは手慰みです」
「いえいえ、そうではないと思いますよ」
理知的な兵士は彼の謙遜をそう言って否定した。
「かなりの学識を見受けられますよ」
「それは貴方も」
子爵も彼に対してそう返した。
「任期が終わられたら大学に入られるのでしたね」
「ええ」
「大成されることをお祈りしますよ。本来ならばこう言ってはいけないのですが」
「お互いにね」
兵士はそう言って苦笑した。彼等が敵同士であることには変わりがないのだ。連合軍はエウロパの市民達と積極的に交流を行ってはいるが。
「ですが貴方は大学で大成されることと思います
「そうなるように努力します」
「おい」
ここで呼び掛ける声がした。将校の黒と金の軍服を着た男が連合軍の将兵に声をかけてきていた。見れば連合軍の大尉であった。
「補給長」
どうやら彼等の艦の補給長であるらしい。
「そろそろ時間だぞ」
「えっ、もうですか」
彼等はそれを聞いて驚きの声をあげた。艦に戻る時間のようだ。
「ああ。そこの子爵殿に挨拶して艦に戻ろう」
「わかりました。では子爵」

「はい」
彼等は子爵と向かい合った。補給長の大尉が一番前に出た。そして彼が言った。
「これで失礼します」
敬礼した。子爵もそれに返礼した。こうして彼等は子爵と別れた。
後にこの子爵はエウロパのアカデミーにおいて名を知られるようになる。その優れた学識と教養でエウロパ屈指の学者とさえ言われるようになった。
兵士は大学に進み学校の教師となった。そして校長になり多くの生徒に慕われるのであった。シュタイナー子爵とメッケン先生の若き日の交流であった。

連合軍はそうしたのどかな場面をも抱えながら戦いを着々と進めていた。そして遂にホズにまであと僅かの距離にまで迫ったのであった。
「ホズ星系の防衛はどうなっているか」
ホズに近付くとマクレーンは参謀達にそう尋ねた。
「ハッ」
参謀達は敬礼をした後で彼に答えた。
「コロニーレーザー等を多数配置し我々の侵攻に備えているようです」
「そうか」
「それも全軍を以って。先頭には竜騎士団の姿も確認されております」
「竜騎士団、彼等のことか」
マクレーンはそれを聞いて頷いた。
「彼等も前線に出ているのか。アルテミスの時と同じように」
「アルテミスの時彼等は目立った働きをしておりませんでしたが」
「だからといって今回もそうだとは限らない」
マクレーンの言葉は厳しいものであった。

「彼等はエウロパ軍の精鋭として知られている。油断してはならない」
「はい」
「警戒を怠らぬようにな」
「わかりました」
「しかし」
だがここで参謀総長である劉が話に入ってきた。ゆっくりとした動作であった。
「彼等が出て来ているということはエウロパ軍は彼等をそれだけ信頼しているということです」
「ですね」
参謀達はそれに応えながら不思議に思った。今頃言うことではないからである。
「そう、彼等に頼っている」
「それが何か」
参謀の一人が焦れたのか彼に尋ねてきた。
「何かあるのでしょうか」
「ないと言えば嘘になるな」
劉はそれに対して謎めいた笑みを返した。
「それではそれを御聞きしたいですね」
マクレーンも笑った。そして劉に対して問うてきた。
「彼等は騎士団を頼りにしています。戦力として」
「はい」
「ならば彼等とは戦ってはこちらの損害が増えます。それを避けていきましょう」
「ふむ」
マクレーンはそれを聞いてまた頷いた。
「それではそうしますか」
「はい」
劉もまた頷いた。

「ホズ星系の戦いは強敵を避けていくべきだと思います」
「わかりました。ではそれでいきましょう」
「はい。それでは」
こうして連合軍の次の戦いの方針が決定した。彼等はその主力をホズに向けてきた。シュヴァルツブルグはそれを受けて彼等を待っていた。
「遂に来るか」
「いよいよですな」
シュヴァルツブルグはこの時旗艦であるワレンシュタインの会議室にいた。そこには各騎士団の団長達が集まっていた。軍議を開いているところで敵の動きに関する報告を受けたのだ。これにダムが声をかけてきたのだ。
「うむ」
シュヴァルツブルグはそれに頷いた。
「既に用意はできている。行くぞ」
「ハッ」
騎士団の長達が一斉に敬礼した。
「ここに北と南の軍が来るまで持ち堪える」
「そして再び決戦を」
「その為にも・・・・・・頼むぞ」
「お任せ下さい」
彼等は口々に誓いの言葉を述べた。
彼等も戦いの配置に着いた。そして迫り来る連合軍を待ち受けた。盲目の神を巡る戦いの火蓋が今切られようとしているのであった。

# 第十一部第五章　持久戦その一

持久戦

ホズ星系における戦いの時が迫ってきていた。連合軍の接近に対してエウロパ軍は前線に戦力を集中させてそれに対抗しようとしていた。

「これで配置は終えたな」

「はい」

参謀の一人がシュヴァルツブルグの問いに答えた。

「既に全戦力の配置を終えております」

「そうか、ならいい」

彼はそれを聞いて頷いた。

「ならば後は敵を待つだけだ。よいな」

そして全軍に対して言った。

「今は耐えることだけ、凌ぐことだけを考えよ。命を粗末にするな」

「はい」

「連合軍の攻撃を凌げ。そして北と南の友軍を迎えるのだ」

「わかりました」

「今はまだ死兵となるべき時ではない。いいな」

その言葉には苦渋の決断があった。

「耐えるのだ、何としても」

「何としても」

「そうだ。そして時を待つ」

搾り出すようにして言う。

「時とな」

その目の前に連合の大軍が姿を現わした。巨大戦艦を前面に出して進撃してくるその陣容は銀河を埋め尽くさんばかりであった。彼等の登場が戦いのはじまりを告げるものであった。

北方、そして南方のエウロパ軍は一路ホズに向かっていた。モンサルヴァートも南方に展開していた全軍を以ってそこに向かっていた。
「戦いはもうはじまっているかな」
「おそらくは」
リェンツィの艦橋にいた。そこでプロコフィエフが彼にそう答えた。
「連合軍は総力をあげて攻撃を仕掛けていることでしょう」
「だろうな」
それは彼にも容易に想像がつくことであった。こくりと頷いた。
「持ち堪えてくれればいいが」
「彼等は持ち堪えます」
ここでプロコフィエフはそう述べた。
「何故そう言える？」
「まずは地の利です」
「それだけではないだろう」
「無論。そして我等の戦意です。戦意は衰えてはいません」
「それは我々も同じだな」
「はい」
彼女は頷いた。その通りであった。
「我々は祖国をかけて戦っております」
「うむ」
「敗れるわけにはいきませんから。だからこそ戦意も高いのです」
「いささか皮肉なことだがな。だが戦意が高いにこしたことはない」
彼は前に顔を向けてそう言った。
「連合の大軍を相手にするのにはな。南方の彼等は今どうしているか」
「モントローズを占領後我々を追撃する形で北上しております。どうやら我々と同じくホズを目指しているようです」
「そうか」

モンサルヴァートはそれを聞いてまた頷いた。
「やはりな。だが我々に追い付きそうか」
「それはないかと。速度が違い過ぎますし。それに彼等は各星系を占領中ですから」
「ゆっくりと北上しているのだな」
「はい」
プロコフィエフはまた答えた。
「ですから彼等のことは今はあまり考慮に入れる必要はないかと思います」
「わかった」
「それよりやはり目の前です」
プロコフィエフも前を向いた。
「ホズの戦いに敗れたならば我等はそれで終わりです」
「終わりか」
「はい。その前に我々が到着しなければなりません」
「いけるか」
「彼等は持ち堪えます、何があっても」
強い声でそう述べた。
「彼等を信じましょう」
「そうだな」
「一路北へ。それしかありません」
その言葉に従い彼等は北へ全速力で向かっていた。その先頭にはタンホイザーの乗艦であるグングニルがいた。彼がこの軍の先陣を務めていたのである。
「まだ星しか見えないな」
彼は艦橋においてそう呟いた。
「星しか、ですか」
「ああ」
問うた部下の一人にそう答えた。
「今はな。美しい光景だがこの世で最も美しいものではない」

「では最も美しい光景は」
「決まっている。戦場だ」
微笑んでそう答えた。
「星の大海での戦場こそが最も美しい場所だ。これは人間の歴史において常にそうだった」
「そうでしょうか」
「私にとってはそうだ。卿は違うのか」
「私は地上部隊にいましたので」
口篭もりながらそう答える。
「銀河での戦いについてはあまり知らないのですが」
「では陸上での戦いはどうだ」
「悪くはないですね」
不敵に笑ってそう答えた。
「光と光が交差して。そして血と硝煙の香りが立ち込めます。それが陸の戦場です」
「殺伐としているな」
「それこそが戦いです。そしてその中にこそ真の騎士が生まれるのです」
「騎士か」
タンホイザーはそれを聞いて満足そうに笑った。
「私も騎士だ」
「はい」
「エウロパの軍人はまず騎士だ。それはわかるな」
「無論です」
部下はそう答えた。
「エウロパが騎士ならば連合は一体何なのでしょうか」
「連合か」
タンホイザーはその質問に少し言葉を止まらせた。
「何だろうな」
「規律正しさは我々より上かも知れませんが」

連合軍のエウロパにおける軍規の正しさ、厳しさについては彼等も知っていた。それについも言及したのであった。
「ですが彼等は騎士ではありません」
「うむ」
「サハラはアッラーの戦士、そしてマウリアはクシャトリアだと聞きます」
それぞれ依って立つものがあるのである。軍人とはそうしたものである。エウロパの騎士道と同じようなものがサハラやマウリアにもあるのである。
「ですが連合にはそれはあるおでしょうか」
「これは私の考えだが」
「はい」
タンホイザーは私見を述べた。
「彼等にはそうしたものはないと思う」
「そうですか」
「少なくとも我々のようなものは持ってはいないだろう。彼等にはそうした精神的な拠り所はない」
騎士道は古来よりエウロパにあったものである。中世に確立され、アーサー王やローランの物語において謳われてきた。キリスト教だけでなくゲルマンやケルトの考えも入ってきている。これがエウロパの軍人達の精神的な背骨となっているのである。
サハラは信仰が背骨となっている。ムハンマドの頃よりジハードを行う戦士としての考えがあった。彼等は信仰にそれを求めているのである。それが彼等を律してもいる。
マウリアは古来よりの階級だ。しかしそこには独自の規律がある。彼等もまたそうした意味においてエウロパやサハラと同じであると言えた。
だが連合はどうか。元々多くの国家の連合体である。いささか人工的なものである。信仰も多岐に渡り統一されたものはない。そして階級などといったものはない。他の三つの地域とは根本的に異な

るのである。
「彼等はあくまで軍人に過ぎない」
彼はそう述べた。
「我々も軍人だが彼等とは違う」
「はい」
「彼等はあくまで職業の一つとしての軍人なのだろうな」
「職業の一つ」
そう言われても今一つピンとこなかった。

## 第十一部第五章　持久戦その二

「どういうことでしょうか」
「平民達はそれぞれ職を選んだりすることがあるな」
「はあ」
　エウロパは階級社会であり親の職を継ぐことが多い。だが時にはそれに反発したりして親のそれとは違う職に就くこともある。基本的に職業選択の自由は認められている。貴族でもそうであるが彼等はその身分故の社会的制約の為にそうおいそれとはできないのであるがそれでも認められていることは認められている。
「連合で自由に職を選べないのは国王か皇帝だけだ」
　各国の国王と日本、そしてエチオピアの天皇、皇帝を指しているのは言うまでもない。流石に王族や皇族は職を選べはしない。彼等は既にその家に生まれたことが仕事となっている部分がある。
「皇室の仕事とは生きていること、そして伝統を守ることである」
　とある連合の学者の言葉である。日本の皇室を指して言った言葉である。日本の皇室は伝説の時代も入れれば四千年近い。その伝統を守るのは並大抵のことではない。皇室の竹のカーテンと宮内省だけが守っているのではなく伝統も皇室を守っていた。そして皇室はその中でその責務を果たされているのである。
「それと同じことだ」
「つまり彼等にとっては仕事でしかないのですか」
「そうだ」
　タンホイザーはそう答えた。
「我々にとっては義務だが彼等にとっては仕事なのだ」
「どうもよくわかりませんね」
「価値観がそれだけ違うということだからな」
　価値観という言葉も出してきた。
「彼等は階級というものが存在しない。これが第一の要因だ」

「はあ」
「そして職業を自由に選べる。これが第二の要因」
貴族とは違うということで第一の要因と表裏一体にあるものであった。
「第三の要因は・・・・・・。我々やサハラ程軍人を必要としない社会だからだな」
「軍人を必要としない」
「そうだ」
タンホイザーはそれに頷いた。
「連合は豊かだ。内部では経済や貿易を巡る対立はあってもそれが武力衝突にまで至る心配はなかった」
「はい」
「宇宙海賊やテロリスト達だけが脅威だった。その脅威に的確に対処する為に連合軍が設立されたな」
「はい」
まだ設立されて間もない連合軍であるが予想以上の責務を果たしていると言えた。
「その際中央軍の設立に反対する意見も多かった。これは何故かわかるか」
「必要ないと考える者が多かったからでしょう」
「そうだ」
タンホイザーはその答えを正解とした。
「それまでのそれぞれの国の軍でもある程度対処できたということだ。彼等にとっての敵は海賊やテロリストしかなかった」
「我々やサハラとは大きな違いですね」
外部勢力との戦争とは違う。所詮国内の犯罪勢力との戦いである。これではあまり戦力を必要としない。治安維持さえできればいいのであるからだ。
「今でも彼等はその人口比に対して軍の数は少ない」
これは事実であった。彼等は三兆の人口を擁する。人類において

最大の勢力である。その軍もまたそうであるが実際にはその人口比では他の勢力より少ないのだ。
　連合軍は三千個艦隊を基幹戦力として百億以上の将兵を擁する。これはエウロパやサハラと比べると圧倒的なものであるがそれでも連合の人口三兆の中ではごく僅かである。彼等はあくまで彼等の規模の範疇において最低限の戦力しか擁してはいないということなのである。だがその身体があまりにも大きいが為にこうなっているのだ。
「あまり戦うことを必要とはしなかった。少なくとも今までは」
「我々と干戈を交えるまでは外部勢力との衝突もありませんでしたしな」
「それも大きかったな。彼等は武よりも他の分野に重点を置いて発展してきた。それが今の連合を形成している」
「そうなりますか」
「彼等にとって軍人とは名誉ではないのだ。そう考える者もいるだろうが連合の風潮としては違う」
「だから職業なのですね」
「食べる為のな」
　彼等は貴族である。タンホイザーにしろ一族が経営しているワイン工場等の収入で食べるのには困らない。軍人となっているのは言わば彼自身の責務を果たそうという気持ちが大きかった。そして己が騎士道を貫徹する場として。彼にとって軍人とは職業ではないのである。
「何となくわかってきたような気がします」
　その部下はここまで聞いてようやく納得したようであった。
「えらく困難ですが」
「それが異文化というものだろうな」
　タンホイザーは微笑んでそう答えた。まるで少年のように屈託のない笑みであった。
「いや、文明か」

「文明」
「我々はこのエウロパにおいて一つの社会を形成してきた」
「はい」
「独自のな。他の勢力とは全く違う社会だ」
エウロパの社会はよく貴族社会、階級社会と言われるがこれは他の勢力にはないものである。エウロパ独自のものであると言えた。
「最早文明といっていい。エウロパ文明か」
「エウロパ文明」
「連合もまた同じだ。彼等もまた一つの文明なのだ」
「そうなりますか」
「そうだ。だからこそ理解するのは困難なのだ。彼等とは住んでいる世界があまりにも違い過ぎる」
「はあ」
「同じ人間でもな。理解し易いことと理解しにくいことがある」
考える目をしてそう述べた。
「そのうちの一つが異なる文明への理解なのだ。私はそう思う」
「そうなのですか」
「私も今までそれについてよくわからなかった。だが彼等について調べているうちにようやく理解した」
彼は言葉を続けた。
「我々とは異なる世界に住む者達もいる。サハラもそうだが」
「サハラも」
部下はそれを聞き何やら悟ったようである。
「そう仰られるとわかり易いですね」
「そうか」
「私も総督府におりましたので。彼等とも何度も戦いました」
「戦術も戦略も我々のそれとは大きく違っていたな」
「はい」
戦術も戦略もその今住んでいる場所が大きく影響するものである。エウロパとサハラではそれが大きく異なるのもまた道理であった。

「それもまた同じだな。連合と我々の違いもまた」
「ですね」
「それを踏まえて掛かろう。敵は手強い」
タンホイザーはそう言って己が心の手綱を引き締めさせた。
「気を引き締めて掛かるぞ」
「はい」
彼等もまたホズに向かう。そこで自分達とは異なる者達と戦う為に。

ホズでは既に戦いがはじまっていた。連合軍とエウロパ軍は星系の入口で戦闘に突入していた。
「撃て！」
巨大戦艦の艦長が命令を下す。すると三門の巨砲から光の帯が放たれた。
それが前方のエウロパ軍に向かう。そして彼等を薙ぎ倒すのであった。
薙ぎ倒されたのは艦艇だけではなかった。コロニーレーザー等の防御兵器もまた破壊されていた。
「何っ、コロニーレーザーの射程外から！」
それを見たエウロパの防衛司令官は絶句した。
「何という射程だ！」
「フン、どうやら驚いているようだな」
それを見て連合軍の指揮官の一人アウン＝ホア＝ケントゥン大将がその白い顔をニヤリと笑わせて言った。彼は東南アジア系の顔に白い肌を持っていた。肌はコーカロイドの父のものである。両親は共にミャンマー人であり彼もまたミャンマーにその国籍を持っている。
「このティアマト級の恐ろしさをまだ完全に理解していないと見える」
「全くです」

隣にいる副官であるボリス＝タラーソワ大佐が頷いた。彼はリトアニア系ホンジュラス人である。スラブ系といってもその肌は赤いものである。

「巨砲の射程は彼等のコロニーレーザーより遥かに長いのですから」

「威力もな」

ケントゥンはそう言って腕を組んだ。艦橋で仁王立ちとなった。

## 第十一部第五章　持久戦その三

「要塞の主砲程がある。それをまた浴びせてやるか」
「それはお待ち下さい」
だがタラーソワはそれを制止した。
「何故だ」
「見たところ敵のコロニーレーザーは先程の我等の巨砲の斉射でその数をかなり減らしております」
「ふむ」
見ればその通りであった。動けるものもかなりのダメージを受けていた。もうコロニーレーザーの脅威はないと見てよい程であった。
「後は砲艦及びミサイル艦の攻撃に移ってもいいかと思います」
「わかった」
ケントゥンは副官の言葉をよしとした。
「それではそうしよう。砲艦及びミサイル艦前へ」
「はい」
「攻撃目標は敵艦隊。一斉射撃だ」
「一斉射撃用意」
それを受けてオペレーターが彼の言葉をその指揮下の全ての艦艇に伝える。そして砲艦とミサイル艦の部隊がゆっくりと前に出て来た。
「撃て！」
「撃て！」
オペレーターが復唱した。それと同時に無数の巨大な光の帯とミサイルが放たれた。そしてエウロパ軍の艦艇を打ち据えた。
エウロパ軍の艦艇が次々に破壊されていく。その中で連合軍は次の手を打ってきた。
「戦艦及び重巡を前に」
「はい」

連合軍の常勝戦術の第三段階であった。まず巨大戦艦でダメージを与え、次に砲艦及びミサイル艦の斉射を加える。そして次に戦艦及び重巡を出す。だがここでエウロパ軍は突如として持ち直した。
赤い艦隊がこちらに急行してきた。赤騎士団であった。
「急げ！何としても彼等を救え！」
オーティスの指示が下る。赤い艦艇がまるで火の玉に見えた。それが連合軍に向けて突き進んで来たのだ。
「赤騎士団か」
「如何為されますか」
タラーソワがケントゥンに尋ねた。
「参謀総長は彼等との戦いを避けよと言われていたな」
「はい」
「ならばここは退こう。彼等が来る前にな」
「わかりました」
こうしてケントゥンの軍は赤騎士団が来る前に戦場を退いた。こうしてこの戦線は何とかエウロパにとって有利に保たれた。しかしそのダメージは決して軽微ではなかった。今後の戦いを考えるうえで極めて深刻なレベルであった。
こうしたことが各戦線で続いていた。連合軍は騎士団が姿を現わすと退く。そして彼等がいる戦線では積極的にダメージを与えようとはしない。彼等はそういった戦いを続けていた。
「騎士団を避けているか」
シュヴァルツブルグはそれを聞いて一言呟いた。
「はい」
報告した若い将校が敬礼をしてそれに応えた。
「結果としてそれにより騎士団の戦力は温存されております」
「だろうな」
彼はそれを聞いて表情を変えずに頷いた。
「だがそれ以外の艦隊はどうなっているか」
「その損害は決して無視できない段階にまで達しています」

将校は静かにそう答えた。
「だろうな。これは危険だ」
「如何為さいますか」
「騎士団を中心に置いても必ず何処かに綻びが生じる」
「では対策がありません」
「そうではない」
しかし彼はそれを否定した。
「戦線を縮小しろ」
「縮小させるのですか」
「そうだ。今は星系の入口付近で戦っているな」
「はい」
「一歩退け。そして彼等を少し中に招き入れる」
それを聞いて将校は何かを悟ったようであった。
「地の利を生かすのですか」
「そうだ」
その通りであった。彼は頷いた。
「この戦い何としても敗れるわけにはいかぬ。よいな」
「わかりました」
これを受けてエウロパ軍は退きはじめた。連合軍はそれを静かに見ていた。
「どういうつもりだ」
マクレーンは作戦会議室にて円卓の中央に映し出された三次元地図を見ながら呟いた。
「退くとは。いささか早いな」
いずれは退くと見ていた。しかしそれはまだ後のことだと思っていたのである。
「おそらく我々を引き込むつもりなのでしょう」
それを受けて劉が言った。彼は地図に映し出される敵の駒の動きを冷静に見ていた。
「引き込むつもりですか」

「はい。そして我々に消耗を強いる。それが狙いでしょう」
「ふむ」
マクレーンはこの時敵の駒から目を離さなかった。特に色のついたそれぞれの光る駒達を見ていた。それは騎士団を現わしていた。
「騎士団の動きが気になりますね」
彼は劉に対してそう述べた。
「司令もですか」
「はい。彼等が前面に出ようとしているように思えます。今後はさらに彼等に主軸を担わせるつもりでしょうか」
「おそらく」
この時の劉の返答は簡潔なものであった。
「今まで我等は彼等との戦いを避けていました」
「はい」
「それにより敵全体にダメージを強いてきましたが。どうやらそれにも気付いたようです」
「やはり」
「彼等を前に出してそれを防ぐという考えもあるのでしょう。敵もまた必死です」
「ですがこちらも必死です」
マクレーンの言葉も簡潔になった。
「勝たなければなりませんから。彼等は負けなければいい」
「いえ、それは違います」
しかし劉は彼のその言葉を否定した。
「何故ですか」
「負けなくていいのは我々も同じです」
「そうでしょうか」
マクレーンはその言葉には半信半疑であった。いや、完全に疑っていた。
「今ここで戦いを決めるべき時だと思いますが」
「最初は私もそう思っていました」

劉はそう語った。
「ですがどうやら違うようです」
「そうなのですか」
しかしまだよくわからなかった。
「私はそうは思いませんが」
「彼等を倒してもまだ三方に敵がいます」
「三方に」
それが何なのか、マクレーンはすぐにわかった。
「成程」
「彼等も何とかしなければなりません。ですがここで一気に倒す必要はありません」
「ふむ」
「一つにまとめて倒せばいいでしょう。如何ですか」
「わかりました」
マクレーンはようやく頷いた。
「それではここは我等もまた持久戦に入りますか」
「はい。ただし敵への損害は与え続け、圧迫を加えていきましょう」
「わかりました」
こうして彼等の新しい作戦方針が決定した。連合軍は新たに陣地を築いたエウロパ軍とは適度に距離を保つこととした。そして遠距離から攻撃を仕掛けて少しずつにしろダメージを加えていった。やはり連合軍の艦艇の攻撃距離の長さが功を奏していた。
「どうやら我々の考えが読まれたか」
シュヴァルツブルグはそれを見てまた呟いた。
「連合軍もあながち馬鹿ではないらしい。敵将はマクレーン元帥だったな」
「はい」
情報参謀の一人がそれに答えた。
「アメリカ軍においてホープと言われていた人物です」
「だけはあるな」

シュヴァルツブルグはそれを聞いて頷いた。

## 第十一部第五章　持久戦その四

「そして参謀総長もいたな」
「はい」
「劉元帥だったか」
「中国軍では稀に見る逸材だったそうです」
「その二人が来ていたか。道理で手強い筈だ」
彼は感嘆の言葉さえ漏らしていた。
「敵には損害は増えずに我々の損害だけが増える。敗戦のパターンだな」
「残念ながら」
「打開しようにもこれ以上星系に入れるわけにはいかぬ。どうすればいいと思うか」
「閣下、私に考えがありますが」
ここで蜂蜜色の髪をした若い女性の士官が前に出て来た。
「卿は」
「エヴァ＝プロコフィエフです」
彼女は青灰色の目を光らせてそう名乗った。
「参謀総長の妹君か」
「はい」
「それはどうした考えだ」
シュヴァルツブルグもまた目を向けた。歳の割りに強い光を放っていた。
「ここはさらに奥深くに退くべきだと思います」
「何っ！？」
それを聞いて多くの者が驚きの声をあげた。
「馬鹿な、そんなことができる筈がない」
「今退けば我々の敗北は決定的だぞ」
彼等は口々にそう言った。だが彼女は落ち着いたままそれに返し

た。
「もうすぐ磁気嵐がここに起こりますね」
「うむ」
シュヴァルツブルグがそれに頷いた。
この星系は一定の時期に磁気嵐が起こることで知られている。それは星系の中央近くで起こり、かなりの広範囲に渡る。エウロパ軍はそれを知っている為陣を入口近くに置いていたのだ。
「それを使いましょう」
「つまり退けということか」
「はい。磁気嵐の後方に。それで守りを固めてはどうでしょうか」
「消極的だな」
それを聞いたシュヴァルツブルグの言葉であった。
「磁気嵐に頼らなければならぬとは」
「しかしそれしかないのではないでしょうか」
エヴァはなおも言った。
「今の我が軍のことを考えますと。如何でしょうか」
「ふむ」
彼はそれを受けてまた考えた。
「閣下、御決断を」
「・・・・・・・・・・」
だがシュヴァルツブルグは沈黙していた。目を固く閉じ、腕を組んで考えている。だがやがてそれ等を解き周りの者に対して問うた。
「プロコフィエフ中佐の考えに対してどう思うか」
彼女は中佐にまで昇進していたのだ。実はパイロットとしても優秀でありその功績が認められたのである。
「はい」
幕僚達はそれについて答えた。
「それでよいかと思われます」
「磁気嵐の流れる時は一週間近く」
彼等は口々に言う。

「それだけあれば凌ぎきることができると思います。ここは消極的だの言っている場合ではないと思いますが」
「私は中佐の案に賛成です」
「閣下、御再考下さい」
「わかった」
シュヴァルツブルグはそれを聞いて遂に決断した。
「では下がろう。よいな」
「はっ」
「全軍星系の西方にまで下がる。それでいいな」
「了解」
「速やかに動くぞ。敵に悟られぬうちに」
「わかりました」
こうして彼等は磁気嵐の向こうにまで退くこととなった。方針が決定すると幕僚達はすぐに下がった。そしてその場に残っているのはシュヴァルツブルグとエヴァだけになった。
「これでよいのか」
「はい」
エヴァは上官に対して頷いた。
「有り難うございます、拙策を受け入れて下さって」
「よい。これも我が軍の為だ」
シュヴァルツブルグは重厚な声でそう答えた。
「それよりも卿も大変だな」
「何がでしょうか」
「こうして幕僚としてだけでなくパイロットも務めているのだからな。我が軍がこのような状況でなければもっと楽ができたであろうに」
「構いませんよ」
彼女は微笑んでそう答えた。
「これも運命ですから。私の」
「運命か」

「はい。若しヴァルハラに行くことになっても。それが戦いというものでしょう」
「確かにそうだが。だがよいのか」
「何がでしょうか」
「卿の夢のことだ。確か裁判官になりたいのだろう」
「はい」
エヴァは答えた。
「ここで命を失うことになれば夢は適わないのだぞ。これは当然のことだが」
「それもまた運命です」
彼女は自分自身のことでありながら極めて客観的にそう述べた。
「私がここで死ねばそれまでの人間だったということです」
「クールだな」
「いえ、ヴァルハラに行くのもまたよしだと思っているからです」
ヴァルハラは戦いで命を落した戦士達が集オーディンの館である。戦死した者のうち半分は彼の許へ行くこととなっているのだ。そしてそこで戦いと宴に明け暮れる。それが古の北欧の戦士達の理想とする天界だったのである。荒涼とした雪の世界ならではの世界観であった。
「今では女でもヴァルハラに行くことができますから」
「そしてエインヘリャルになるか」
「はい」
「それだけの覚悟があるのならいい。私は止めない」
「有り難うございます」
「だがな」
しかしシュヴァルツブルグはここで一言漏らした。
「だがな・・・・・何でしょうか」
「いや、これは私の個人的な意見だが」
彼はエヴァを見てそう延べはじめた。
「卿はエインヘリャルになるよりワルキューレになった方がいいか

も知れないな」
「ワルキューレですか」
「そうだ。卿はどちらかというとその方が似合っているのかもな」
口元に笑みを浮かべながらそう述べた。その顔はまるで娘を見て微笑む父の顔のようであった。なお彼は家庭においては四人の娘の父として知られている。娘達にとっては極めて甘い父であるというのがもっぱらの評判だ。だがそれぞれの婿には厳しい。だが孫達にはその娘達よりまだ甘い。何をどうしたらそこまで甘やかすことができるのか、という程甘い御爺ちゃんであるらしいのだ。
「ブリュンヒルテ・・・・・。と言えば褒め過ぎか」
「御言葉ですが」
エヴァも苦笑してしまった。ワーグナーの楽劇にも出て来る最も有名なワルキューレである。なおこの楽劇においてはワルキューレは九人であるが実際はそれよりも遥かに多いのである。
「しかし今卿は我が軍の守り神になろうとしている」
「またそのような」
「いや、今回のことがそれだ」
彼は言った。
「頼むぞ。我が軍の為に」
「・・・・・・はい」
そう言われて気を引き締めさせた。そして頷く。
「我が軍には今ワルキューレが必要なのは本当のことだ」
「それを私に」
「卿がそれを望むのならな。頼むぞ」
「はい」
それに応えて敬礼した。そして彼女はその場を後にした。パイロットスーツに着替え格納庫に向かう。既にエインヘリャルが出撃準備を整えていた。
「あ、中佐」
整備兵の一人が彼女の姿を確認して目礼した。見ればパイロット

スーツの上からでも体型がはっきりわかる。見事なプロポーションであった。

## 第十一部第五章　持久戦その五

「私の機はどうなっているか」
彼女はその整備兵に尋ねた。
「何時でも出撃できますが」
「わかった」
彼女はそれを聞いて頷いた。
「では行こう。敵は来ているか」
「今のところは斥候のような部隊だけですが」
「そうか」
彼女はそれを聞いて了承した。
「ならばその斥候を討ち取るとしよう。いいな」
「はい」
周りにいるパイロット達がそれに従った。今この場に彼女より階級の上の者はいなかった。
「連合の者達に我等の戦いを見せる。いいな」
そう言うとエインヘリャルに乗った。そしてそのまま出撃した。
その後に無数のエインヘリャルが続く。彼等は銀河の戦場に向かって行った。

連合軍のエースパイロットで名のあるのはまずはヘンリー＝スタンフォードであった。彼は連合軍きってのエースパイロットとして知られていた。だが当然であるが彼以外にも名のあるエースはいた。
続いては中国軍出身の曹黒蛟。漆黒の肌を持つアジア系の男であり敵の意表を衝く攻撃が得意である。彼は中国軍において最高のエースと言われていた。それは連合軍になってからも変わらず順調に撃墜奇数を増やしている。
三番目に出て来るのはオーストラリア出身のジャック＝ボニング。イギリス系とフランス系をルーツに持つ若者であり最近とみに名を

知られるようになった。理知的な容姿と穏やかな性格で有名だ。一見では音楽家、若しくは学者に見える程である。
次にリャム＝トワンキン。彼女はラオス人である。女ながらと言わせない程の名パイロットである。素顔は小柄な美人でありそうした面からも人気が高い。彼女は無類の音楽好きでありバンドも組んでいる。ヴォーカル、そして作詞を担当している。小柄な身体でパワフルに歌う。その姿が観客達の人気を集めていた。
小柄な女性の次は大柄な男である。モーリタニアのネルソン＝アクジュジト。二メートルを越える黒人の偉丈夫であり、豪快な戦法で有名である。宇宙海賊達との戦い、そして今回のエウロパとの戦いにおいても過去何度も撃墜されながらもその度に無傷で生き残ってきたので『不死身のアクジュジト』とすら呼ばれている。
そして伝説とすら言われる男がいた。彼は今その斥候と称された艦隊に参加し、戦場に赴いていた。
「そちらには何もないな」
「はい」
数機のタイガーキャットが虚空を舞っていた。彼等はダイアモンドの編隊を組みそこに飛んでいた。その先頭にいる男が部下に問うたのであった。
「どうやら奴等は何か考えているようですね」
「だろうな」
その先頭の男はそれを聞いて頷いた。
「また退くつもりじゃないだろうな」
「まさか」
「いや、有り得る」
男は部下にそう答えた。
「アルテミスでも退いたしここまでも退いた。そしてここでも退いたな」
「それはそうですが」
「彼等は要するに負けなければいい。だから退くことはまだ有り得

るぞ」
「そうなりますか」
「少なくとも俺はそう見る」
男はそう答えた。その黒い目が光る。
見れば独特な顔立ちであった。アジア系の顔であるが肌は白い。そして黒い髪は直毛ではなくやや縮れている。どうやらそれぞれの人種の血脈を受け継いでいるらしい。
「後藤大尉」
ここで彼の名が呼ばれた。
「何だ」
「Cエリアにおいて作戦行動中の部隊から連絡です。損害が出たとのことです」
「誰だ？」
「アクジュクト大尉です。撃墜されたそうです」
「またか」
後藤はそれを聞いて苦い顔をさせた。
「この戦いが入って四回目か、撃墜されたのは」
「いえ、五回です」
「なお悪い」
彼はそう答えさらに苦い顔を作った。
「それで無事なのか？」
「はい。怪我一つなく収容されたそうです。今母艦に帰還中とのことです」
「それは何よりだ。だがいい加減機体も大事にするように伝えてくれ」
「わかりました」
「後藤秀昭の名でな。わかったな」
「了解」
そこで通信は切れた。後藤はそれを受けて自身の編隊のメンバーに通信を入れた。

「聞いたな」
「はい」
彼等は口々に答える。彼の機以外に四機いた。合計五機である。連合軍の艦載機は五機を一個小隊として編成する。五個小隊で一個中隊となる。五個中隊で一個大隊。他の勢力に比べて数が多いのが特徴である。
エウロパもマウリアも、そしてサハラ各国の殆どの国でも艦載機の編成は四機を一個小隊としている。四個小隊で一個中隊、四個中隊で一個大隊だ。連合はそれより一個ずつ大きい。こうしたところにも連合軍の巨大さが現われていた。
「我が連合軍の誇るエースパイロットの一人が撃墜された。その仇は取らなければならない」
「はい」
部下達はそれに頷いた。
「すぐにCエリアに向かう。いいな」
「ですがここは」
「ここはまた別のチームが来る。俺達はそこに向かえばいい。わかったな」
「はあ」
「長々と話している暇はない。行くぞ」
そう言って彼が先陣を切って旋回をはじめた。他の四機もそれに続く。こうして彼等は戦場に向かうのであった。
Cエリアに到着した。だがそこには誰もいなかった。
「アクジュクトの小隊はどうした」
「既に撤退した模様です」
部下の一人がそう答えた。
「リーダーが撃墜されては当然でしょう」
「そうか。だがいささか意気地がないな」
後藤は苦々しげにそう述べた。
「そうでしょうか」

「せめてリーダーの仇討ちといって欲しいものだ」
「まさか。あのアクジュクト大尉を撃墜したんですよ。一〇〇機撃墜のエースを」
「それに大尉の救出もあったでしょうし。それは仕方ないでしょう」
「そうかな」
そう言われても後藤はまだ不満そうであった。
「まあいい。レーダーに反応はあったか」
「いえ、まだです」
部下の一人がそう報告する。

## 第十一部第五章　持久戦その六

「私の機体では反応がありません」
「こっちもです」
別の部下もそう報告した。
「今のところは何も」
「だが油断するな」
後藤はそれを聞いたうえであらためて彼等にそう言った。
「何時何処からやって来るかわからないからな」
「はい」
彼等は周囲に警戒を払いながらそのCエリアを哨戒した。やがてレーダーに反応があった。
「むっ」
五人がほど同時に声をあげた。
「敵ですね」
「ああ」
後藤がそれに頷いた。
「だが一機か。妙だな」
「はぐれたのでしょうか」
「そこまではまだわからん。だがこちらに向かって来るな」
「はい」
「エインヘリャルだ。こちらが劣っている部分はない。安心して向かえばいい」
「わかりました」
彼等にとって最早エインヘリャルはさして恐ろしい相手ではなかった。性能ではこちらのタイガーキャットの方が断然上だとわかっているからである。
五機のタイガーキャットは上に大きく旋回してそのエインヘリャルの方に向かった。レーダーを見ればそのエインヘリャルもこちら

へ向かってきていた。
「やるつもりか」
後藤はレーダーに映るエインヘリャルの動きを見てそう呟いた。
「一機でか。面白い」
「どうしますか？」
「そうだな」
彼は部下の一人の言葉に応えた。
「俺一人でやる。御前達は手を出すな」
「えっ」
「聞こえなかったか。俺一人でやると言ったんだ」
「しかし」
「何、心配はいらないさ」
彼は不敵に笑ってそう言った。
「俺は今まで一対一で敗れたことはない。もっとも相手がどれだけいても敗れたことはないがな」
「それでは」
「ああ。やってやる。御前達は高見の見物でもしていろ」
「わかりました。それでは」
「ああ」
四機のタイガーキャットは上に上がった。そのままさらに上がり、そこから後藤機を見守る場所に位置した。その命令通り彼等はそこで見守り続けていた。
「さてと」
後藤はそれを確認してから前に視線を戻した。
「どう来る？正面からか。それとも」
正面からであった。そのエインヘリャルは一直線にこちらに向かって来ていた。
「そのまま来るか。面白い」
彼はそれを確認してまた笑った。
「来い。一撃で仕留めてやる」

そう言うとスピードを上げた。それに合わせて彼もそのまま突っ込んだ。
エインヘリャルが前に出て来た。それは一瞬のことであった。
擦れ違った。その際攻撃を加えるのを忘れなかった。
ビームガトリングガンのトリガーを引いた筈だった。普通ならこれで撃墜している筈である。だが今通り過ぎたエインヘリャルはダメージ一つ負っているようには見えなかった。レーダーにはそのままのスピードで通り過ぎるその姿が映し出されていた。
「何だと！？」
後藤はそれを見て驚きの声をあげた。
「俺の攻撃をかわしたというのか。あの距離で」
このようなことははじめてであった。驚かずにはいられなかった。
レーダーに映るエインヘリャルは反転していた。そしてこちらに向かって来ていた。
「上からか」
後藤は本能的にそれを悟った。
「ならば！」
レバーを思いきり引いた。そして彼のタイガーキャットも上に上がった。
二機の戦闘機が反転したまま再び向かい合う。後藤はその時エインヘリャルのコクピットにいる敵のパイロットに気付いた。
「！？」
それは女であった。彼の勘がそう教えていた。その女を見て彼は一瞬だが動きを揺らしてしまった。
「しまった！」
バランスが崩れた。相手はそれを衝くかのようにミサイルを放ってきた。一直線に二本のミサイルがこちらに向かって来た。
「まずい！」
だが彼はそれをすんでのところでかわした。そのミサイルをまるで木の葉の様な動きでかわしたのであった。タイガーキャットの巨

体を考えると信じられないような驚くべき軽やかな身のこなしであった。
しかしそれはほぼ奇跡のような動きであった。その動きをした彼本人もパイロットスーツの中で冷や汗をかいていた。
「危ないところだったな」
見れば敵のエインヘリャルは平然と動き続けている。その動きを見た。見ればまたこちらに向かってきた。
「どうやら俺とドッグファイトをやるつもりらしいな」
面白くなってきた、と思った。彼は連合軍屈指のドッグファイトの達人とされているのだ。タイガーキャットを小さく旋回させ相手に向かった。
「やってやるぜ」
互いに旋回し合い隙を窺う。一瞬だった。敵の動きが少し鈍くなったのを見て一気に動いた。
「今だ！」
「！」
敵はそれに驚いたようであった。彼はそこに突っ込んだ。
こうした戦いは一瞬で決まる。その一瞬で生と死が決定するのだ。それが戦闘機の戦いであった。
「御前等の天国に行くんだな！」
後藤はそう叫んだ。そしてビームガトリングガンのボタンを押す。今度こそ仕留める筈だった。
だがそのエインヘリャルは消えた。そのまま前に出た。そして何処かへ去って行ったのであった。
「逃げたのか？」
「大尉」
ここで部下達から通信が入ってきた。
「何だ？」
「今母艦から連絡が入りまして」
「母艦から？」

「はい」
彼等の母艦はマリアナという空母である。連合軍独特の四段の空母であった。やはりエウロパの空母と比較してかなり大きい。そのうえ同時に発艦と着艦が二回行われる。四段の甲板がそれを可能にしていたのだ。無論四段全てを着艦、若しくは着艦にも使える。極めて能率的な空母と言えるものであった。
「エウロパ軍が撤退に入ったようだとのことです。すぐに哨戒を強化して欲しいとのことです」
「そうだったのか」
彼はそれを聞いて納得した。ならばあのエインヘリャルが去ったのもわかる。
「如何致しますか」
「命令ならば従わないわけにはいかないだろう」
それが彼の返事であった。
「引き続きこのエリアの哨戒を続ける。いいな」
「ハッ」
「敵を発見次第母艦に報告し、迎撃に向かうぞ。いいな」
「わかりました」
後藤は部下達と合流した。そして再び五機となり哨戒にあたるのであった。
エウロパ軍は撤退に入ろうとしていた。エヴァはその中でヴァレンシュタインの中に戻っていた。
「中佐、お帰りなさいませ」
「ああ」
彼女はコクピットから降りヘルメットを取り外して整備兵に応えた。蜂蜜色の髪が外に溢れ出た。
「一機撃墜させたそうで」
「腕の立つ者だった」
彼女はそれに答えた。
「一機は撃墜できたがもう一機は駄目だった」

「左様ですか」
「あのタイガーキャット・・・・・・。かなりの腕だったがな」
「連合軍にも腕利きのパイロットは多くいるようですね」
「むしろ彼等の方がエースは多いかもな」
それがエヴァの答えであった。
「機体性能と数に差があり過ぎる。これでは生き残るのすら難しい」
その戦場の女神の様な整った顔が曇った。連合とエウロパの艦載機の撃墜差は何と二十対一にまで達していた。これは数に劣るエウロパ軍にとって深刻な事態であった。
さらに連合軍の艦載機は撃墜されてもすぐに脱出できるようになっていた。脱出機能、そして生存機能はエウロパのエインヘリャルより遥かに上であった。その為パイロットの消耗が極めて少ない。だからこそアクジェジトの様な者も現われるのであった。

## 第十一部第五章　持久戦その七

「全ては数、ですか」
「こればかりはどうしようもない」
ぼやいていた。
「数はな。だが今それを言ってもはじまらない」
「ですね」
「全軍磁気嵐に向けて後退をはじめているな」
「私はそれは知りませんが」
「そうか」
一介の兵士がそのようなことを知る由もなかった。これは彼女のミスであった。
「それではいい。艦橋に戻らせてもらう」
「わかりました」
彼女は更衣室に入った。そしてパイロットスーツを脱ぎその整った肢体を豪奢な軍服で覆った。赤と黒、そして金のその軍服に着替えるとすぐに艦橋に向かった。
「おお、戻ってきたか」
艦橋にはシュヴァルツブルグがいた。彼はエヴァに顔を向けてきた。
「お待たせして申し訳ありません」
「いや、いい」
敬礼をして答えるエヴァに対してそう言う。
「それよりも御苦労だったな」
「いえ、これも任務ですから」
エインヘリャルでの戦闘のことであるのは言うまでもない。
「ところでそろそろ撤退に入るようですが」
「わかるか」
「はい。急に呼ばれましたから」

彼女はそう応えた。
「磁気嵐の向こう側まででですね」
「うむ」
「そこまで下がればおそらく連合軍は手出しできないでしょう。これで時間が稼げます」
「その間に北と南から友軍が来ればいいがな」
「時間を考えれば来る頃ですが」
そう答える彼女の頭の中で緻密な計算が行われていた。
「何はともあれ今は磁気嵐の向こうまで下がりましょう。そして時を待ちましょう」
「そうだな」
シュヴァルツブルグはそれに頷いた。
「本来ならばより積極的にいきたいのだがな」
「それは私も同じです」
彼等は貴族である。それが彼等をして彼等たらしめている。エウロパの貴族には騎士道精神がある。これはそのエウロパ貴族達をエウロパ貴族たらしめているものだ。騎士道なくしてエウロパ貴族ではない。即ち彼等ではなくなるのだ。彼等にしてみれば正々堂々と戦いたかったのだ。しかしそう悠長に言っていられる状況でないことは彼等が最もよくわかっていることであった。彼等はここでは騎士道精神よりも耐えること、負けないこをを選んだのであった。
「後詰は各騎士団が務めることになった」
「はい」
「まずは他の軍が退いてから彼等が退く。私もその中に入る」
「わかりました」
「卿にはまた戦ってもらう。悪いがな」
「いえ」
だがエヴァはその言葉には首を横に振った。
「戦いですから」
「そうか、悪いな」

それだけだった。それ以上言うこともなかった。シュヴァルツブルグは言葉を止めた。
エウロパ軍は後退をはじめた。その後詰はシュヴァルツブルグの言葉通り各騎士団が務めたのであった。
騎士団は撤退する中よく戦った。彼等が得意なのは攻めるだけではなかったのだ。撤退戦も得意としていたのだ。戦争は攻めるだけではない。退くのもまた戦争である。彼等はそれをよくわかっていた。
「見事と言うべきか」
マクレーンはそれを見て一言そう呟いた。
「上手く守っている。ここはあまり手を出すべきではないな」
「はい」
劉をはじめ参謀達がそれに頷く。
「下がらせてやれ。彼等を叩く機会はまだある」
「わかりました」
連合軍は積極的に攻撃を仕掛けることを止めた。仕方なくではあるがエウロパ軍を下がらせることにしたのであった。
そのせいかエウロパ軍は彼等が思っていたよりもスムーズに予定の場所にまで退くことに成功した。磁気嵐は彼等にとって将に救世主であった。その後ろにおいて再び守りを固めはじめた。
連合軍は間合いを詰めようとした。マクレーンはここで遂に攻勢に出るつもりであった。だがそれは適わなかった。
「全軍前進用意」
「お待ち下さい」
航海参謀がそこで彼を制止した。
「どうした？」
「磁気嵐が近付いております」
「何だと」
それを聞いたマクレーンの表情が変わった。
「どれだけの規模だ」

「艦隊の航行に支障をきたすレベルです。しかもかなりの広範囲です」
「場所は」
「我等とエウロパ軍の間です。丁度河の様に塞ぐ形となっています」
「何ということだ」
マクレーンはそれを聞いて顔を顰めさせた。
「彼等はそれを知っていたのか」
「おそらくは」
「そのうえでか。考えたものだ」
「どうしますか」
「どうしますかと言われてもどうにもならないだろう」
マクレーンはそう言葉を返した。
「下手にそのまま進んでも磁気嵐に動きをとられる」
「はい」
「そこを狙われては無駄に損害が出る。それは避けるべきだ」
「わかりました。ではここは様子見ですね」
「致し方あるまい」
それが答えであった。
「磁気嵐が過ぎるのを待つ。いいわ」
「わかりました」
こうして連合軍は歯噛みしつつも磁気嵐が収まるのを待った。両軍はそれを挟んで対峙する形となった。
「上手くいったか」
シュヴァルツブルグは磁気嵐の向こうに見える連合軍を見据えて呟いた。今彼はこの戦いがはじまって以来ようやくエウロパが何かに成功したような気になった。
「とりあえずはこれでいい」
「はい」
傍らに控えるエヴァがそれに頷いた。
「ですがこれで終わりではありません」

「そうだな」
「この磁気嵐が去った後です、本当に問題なのは」
「磁気嵐が去るまでどれ位かかるか」
シュヴァルツブルグはそれを受けて参謀の一人に尋ねた。
「三日位かと」
「それだけか」
「それだけあれば充分ではないでしょうか」
不快さを示そうとしたところでエヴァがこう言った。
「僅か三日だぞ。まだ北と南の軍が到着するには時間がかかる」
「いえ、丁度いい頃です」
だがエヴァはそれを否定した。
「友軍が到着するには。適度かと思いますが」
「かなりの自信があるようだな」
「はい」
苦笑する軍務相に対して臆することなくそう返した。
「私にはわかります。彼等が間も無くここに来るのが」
「その言葉、信じてよいのか」
「信じられないと仰るのなら」
エヴァは凛とした声で返す。
「今ここで私を銃殺にして下さって結構です。それがお嫌でしたら自ら命を絶ちましょう」
そう言って懐から銃を取り出した。古風な実弾の拳銃であった。護身用の自分で持っている銃らしい。その持つ部分にはプロコフィエフの家の紋章が彫られていた。
「わかった」
そこまで言うからには信じたくなったのだろうか。シュヴァルツブルグは頷いた。
「卿の言葉を信じよう」
「有り難うございます」
「三日か。ではそれだけ待とう。どのみち三日後に敵は総攻撃を仕

掛けてくるだろう」
「はい」
「それを凌がなければならん。その為の用意はしておこう」
「わかりました。それでは」
「うむ」
彼等は三日後に備え動きはじめた。これは連合軍も同じであった。
空母マリアナのパイロット控え室であった。今ここに連合の名立たるエース達が集結していた。

## 第十一部第五章　持久戦その八

「おい聞いたか」
まずはスタンフォードが口を開いた。
「今俺達の目の前を塞いでくれている鬱陶しい嵐が三日後に消え去るってよ」
「それは本当か？」
それを聞いた曹が疑問そうに顔と声を向けてきた。
「あれだけの嵐が三日程で消えるとは思えないが」
「気象班はそう見ているぜ」
スタンフォードはそんな彼にそう述べた。
「確かな調査だそうだ」
そう言ってコーラを啜る。氷でかなり冷えていた。
「三日か」
「だから俺達がここに集められたんだろ。三日後に備えておきなって。上からの有り難い指示だ」
「あんたは単に戦いたいだけだろ」
ボニングが呆れたようにスタンフォードに対して言った。
「敵を撃墜したいだおるからな、一機でも余計に」
「それが戦闘機乗りってやつさ」
スタンフォードはそれに怯むことなく声を返した。
「それは御前さんだって同じだろう？ボニングさんよ」
「否定はできないな」
ボニングは渋い顔でそれを認めた。
「僕だって戦闘機乗りだ。一機でも多く撃墜したい」
「ほら見ろ」
「だがあんたみたいにいつも敵を撃墜することばかり考えているわけじゃない。ましてあんたの戦い方は派手過ぎる」
「ほお」

それを聞いてスタンフォードは面白そうに眉を動かせた。
「そりゃ一体どういうことだい？」
「あんたはミサイルを使い過ぎるんだよ。いつもミサイルをぶっ放してるよな」
「まあな」
「ミサイルは派手に使うものじゃない。ここぞという時に使うものなんだ。あんたはそれをわかっちゃいない」
「ボニングの言う通りね」
これにトワンキンが同意した。
「おい、あんたもかよ」
「ええ。私はスマートに戦う主義だから。貴方みたいに無駄な動きはしないわ」
「派手なのが俺の信条なんだよ」
「それよ。そうしたことやってると何時かえらい目に遭うわよ」
「そんなのいつものことさ」
スタンフォードはいささか悪びれた様子で彼女にも返した。
「戦闘機乗りってのはなあ、危険を楽しむもんなんだよ。それは御前さん達だって同じだろうが」
「あんただけだ」
ボニングは顔を顰めてそう答えた。
「戦闘機乗りは無茶が多いがあんたはやり過ぎだ。家族が心配するぞ」
「家族ね」
どういうわけかそれを聞いたスタンフォードの顔がシニカルに歪んだ。
「そんなもんいやしねえよ」
「えっ」
「親父もお袋も俺が士官学校にいた時に死んじまったさ、事故でな」
「そうだったの」
トワンキンがそれを聞いて申し訳なさそうに俯く。

「御免なさい、それは知らなかったわ」
「家には犬や猫がいるがな。まあそれ以外はいねえ。ヘッ、官舎で動物と一緒さ」
「そうだったのか」
曹もそれを聞いて頷いた。
「色々あったようだな」
「人間誰だって色々あるものさ」
そう語るスタンフォードの声は少し乾いていた。
「俺だけじゃねえ。あんた等だってそうだろ」
「否定はしない」
曹が言った。
「私も子供の頃母が病気で死んでいる」
「人間誰だって一度は死ぬさ」
スタンフォードはそれを聞いてまた言った。
「戦場で死ぬのも病院で死ぬのも一緒さ。何時かは死ぬしその場所が違うだけさ」
「確かにそうだけれど」
ボニングは言葉を濁らせてしまっていた。
「もう少しね、落ち着いた方がいいよ」
「きっかけがあればそうなるかもな」
そう言ってコーラを飲み干した。
「けれど今はこのスタイルでやらせてもらうさ。今の俺はこのやり方が気に入ってるんでね」
「それじゃあいいわ」
トワンキンも諦めたように言った。
「貴方の人生だし。私が言うことじゃないしね」
「そういうことだな」
「しかし一つ注意しておく」
「何だい？」
曹の言葉に顔を向けさせた。

「氷をそのまま食べるのはいささか無作法だと思うぞ」
「これがまた上手いんだよ」
スタンフォードはコーラの容器の中に残った氷を噛み砕きながらそれに返した。
「コーラの味がしてな。ジンジャエールの時でもいいがな」
「氷は別の食べ方があるだろう」
アクジェクトがそう呟いた。
「カキ氷はいいぞ。日本の」
「甘ったる過ぎるんだよ、あれは」
スタンフォードはそう言ってそれは拒絶した。
「苺ミルクなんか甘過ぎて舌がおかしくなっちまわあ」
「あの甘さがいいと思うが」
しかしアクジュクトはそれに反論した。
「一度食べると病みつきになる」
「そうだな」
最後に残っていた後藤が遂に口を開いた。
「あれはいい」
「げっ、後藤大尉」
他の五人は彼が口を開いたのを見て引いていた。
「いたんですか」
「俺は最初からここにいたぞ」
彼は苦笑して五人にそう言葉を返す。
「最初からな。それにのマリアナは俺のいる艦だが」
「そういえばそうだったわね」
トワンキンがそれを聞いて頷いた。
「話を最初に戻すけれど」
「ああ」
「後藤大尉はこの磁気嵐についてどう思っているのかしら。三日で終わると思う？」
「俺もそう見ている」

彼はこう答えた。
「三日後、奴等を叩く。確実にな」
「そういきたいわね」
「この前撃墜してくれた奴に借りを返したいしな」
「あんたは無理だろ」
「どうしてだ？」
「撃墜されたら暫くは出撃できないだろう？それにこれで何回目だ、墜とされたの」
「五回目だったかな」
「六回目ではなかったか」
「まあそんなことはどうでもいいさ。だが残念だな」
「出撃できないのがか？」
「ああ」
アクジュクトは曹にそう頷いた。
「暇になるな。折角あのパイロットにリターンマッチできるというのに」
「あの女は俺に任せてくれ」
「えっ、女！？」
「そうだ」
ボニングに答えた。
「あれは女だった。美人かも知れないな」
「そうだったのか」
「意外だな」
「意外？どうしてだ」
後藤は彼等の言葉には疑問の声を呈した。
「トワンキンも女だがパイロットだぞ。しかもエースだ」
「まあそうだけれどね」
「連合軍にも女性のパイロットは多い。ならばエウロパ軍にいてもおかしくないだろう」
「その通りだけれど」

正論であるが驚かずにはいられなかったのである。
「やっぱり驚かされるな」
「そうだね。まさかあのアクジュクト大尉を撃墜したのが女だったなんて」
「俺は別にそうは思わないが。それともアクジュクトは違うのか？」
「？俺か？」
「そうだ」
後藤は頷いた。
「男のパイロットもいれば女のパイロットもいる。撃墜されても不思議ではないだろう」
「まあ何度も撃墜されてるしな」
そう言って苦笑した。
「俺にとっちゃ男に撃墜されるのも女に撃墜されるのも同じことだな。生きていたらそれでいい」
「そういうことだな」
後藤はそれを聞いて頷いた。
「あの女パイロットは俺がやらせてもらう。それでいいか」
「ああ、別にいいぜ」
「異論はない」
他の者達はそれに答えた。
「三日後、女の首をここに持って来る」
「おいおい、それは勘弁してくれ」
「ぞっとしないわよ」
他のエース達はそれを聞いて苦笑した。だがよく見れば後藤の顔は本気であった。
「楽しみにしておいてくれ」
「ああ」
当然ながら本当に首を持って来るわけではない。撃墜するという意味だ。彼等もそれがわかっているから苦笑したのであった。
後藤以外のパイロット達はそれぞれの艦に戻った。後藤は彼等を

見送ると自室に戻った。一人になるとほっとした顔になった。暫く落ち着いた後で茶を入れた。梅茶である。日本古来の茶だ。

それを啜る。啜りながら考えを戦場に巡らせていた。

「やってやるか」

その目には強い決意があった。戦場を見据える男の目であった。

## 第十一部第五章　持久戦その九

連合軍は磁気嵐に前方を塞がれていた。その磁気嵐は横に厚く、上下にも広く伸びていた。彼等の行く手を完全に阻んでいたのであった。

しかしそれをただ歯噛みして見ているだけにはいかなかった。彼等は気象班の報告を聞き、三日後に嵐が消えることを見越して陣を整えていた。広く大きな陣を組んでいた。

「嵐が過ぎたら一気に押し潰すつもりのようだな」

「そのようですね」

シュヴァルツブルグは磁気嵐の彼方の陣を見据えていた。その隣にはエヴァがいた。

「上下左右からか。その兵力を総動員するつもりのようだな」

「常道ですね。隙がありません」

「彼等にはな。彼等には敗れる要素はない」

「ええ」

「彼等自身には。だが三日ある。その時間を我等の味方にしたいものだ」

「ノルンは我々の神々です」

エヴァはここでふとこう言った。

「必ずや我々に味方してくれるでしょう」

「それはどうかな」

しかしシュヴァルツブルグはこれには懐疑的であった。

「時の女神達は気紛れだぞ。そして力が強い」

彼女達にはオーディンすら逆らうことができない。時の糸はヴァルハラとはまた別の摂理で動いているのである。その糸は彼女達にしか触れることができないのであった。ノルンの三柱の女神達は北欧神話では特別な存在であるのだ。時は彼等にしか操ることは出来ない。例えそれがオーディンであろうともトールであろうとも。神

々で一番の知恵者であるローゲでもそれは適わないのである。
「果たして我等に味方してくれるかな」
「神は自ら動く者を救われます」
それに対してエヴァの反論はこれであった。
「それはノルンも同じことです」
「そうかな」
「そうです。我等は我等の為すべきことを成し遂げましょう。そうすれば光が見えます」
「わかった。ではそうするか」
「はい」
彼等は対峙を続けた。連合軍は一日で陣を組み終えていた。
「これで全てはいいな」
「はい」
マクレーンの言葉に部下達が頷く。
「義勇軍には先鋒を務めてもらう。まずは彼等に徹底的に打撃を与えてもらう」
「それから正規軍の総攻撃。果たして彼等にそれが防げるでしょうか」
「防がせたら駄目だ」
マクレーンは部下の一人にそう答えた。
「一気に押し潰す。数でな」
「それがいいです」
劉がそれに同意した。
「兵力に圧倒的な差があれば押し潰すだけで済みます。大兵に戦術は不要です」
「そういうことですな」
「うかうかしていると北と南から敵の援軍が来ます。そうなれば厄介です」
「その前に敵の主力を殲滅しましょう」
「はい」

「そして勝利を」
彼等はここで連合の勝利を決定的にするつもりであった。その為の布陣であった。彼等は勝利の時を待ち望んでいた。
嵐は吹き荒れ続ける。二日目も同じであった。そして三日目も。
「これで終わりか」
連合軍の将兵は目の前の嵐を見てそう呟いた。彼等は宇宙気象士達の予想を信じていた。連合の気象士の予想はエウロパのそれよりも遥かに正確なことで知られているからだ。ここでもその技術が大きく影響していた。国力がそのまま技術に直結している例の一つと言えた。
「いよいよ」
腕が鳴る。だが嵐は収まる気配がない。それを見て不安にもなっていた。
三日目が終わろうとしていた。その時であった。
「司令」
気象参謀長がマクレーンに声をかけてきた。
「どうした」
「前を御覧下さい」
彼は自信に満ちた声でそう言い前を指差した。そこにはまだ嵐が吹き荒れている。
「我等の勝利の時が近付いて来ました」
「遂にか」
マクレーンはそれを聞いて会心の笑みを浮かべた。見れば嵐が突如として止んだ。つい先程までの荒れようが嘘のように鎮まっていた。これは連合軍にとっては攻勢の、エウロパ軍にとっては守勢のはじまりであった。片方にとっては勝利の、もう片方にとっては苦戦の合図ともなるものであった。今戦場はその二つの絵の具により彩られようとしていた。
「全軍に通達しろ」
「はい」

「予定通り総攻撃を行うとな」
「了解」
「巨大戦艦前に」
マクレーンは指示を下した。
「巨大戦艦前に」
オペレーターがそれを復唱する。それに従い巨大戦艦達が一斉に前に出た。
「巨砲斉射」
「巨砲斉射」
その三門の巨砲にエネルギーが充填される。それは前方のエウロパ軍に向けられていた。
エウロパ軍も身構えていた。既に戦闘態勢に入っていた。

## 第十一部第五章　持久戦その十

「全艦迎撃用意」
「全艦迎撃用意」
シュヴァルツブルグの指示もまた復唱された。
「衝撃に備えよ。よいな」
「了解」
ティアマト級巨大戦艦の攻撃距離は彼等のそれを遥かに凌駕している。それを考えるとまずは守りを固めなくてはならない。シュヴァルツブルグの指示は当然であった。今までそれにより多くの損害を被り、多数の死傷者を出してきているからだ。損害は何よりも教訓を生むのだ。
連合軍の陣地から幾千もの光の帯が放たれた。巨砲からの砲撃だった。それがエウロパ軍を打ち据えた。
「怯むな！」
多くの艦が撃破され炎となり銀河に消えていく中シュヴァルツブルグはそう言って全軍を叱咤した。戦いはまだはじまったばかりであった。
「まだ戦いはこれからだ。怖気づくな！」
「はい！」
皆それに応えた。そしてすぐに態勢を建て直した。エウロパ軍は崩れるかと思われたがすぐに立ち直った。それを確認したシュヴァルツブルグはまた指示を下した。
「全軍散開！」
「全軍散開！」
砲艦及びミサイル艦の攻撃をそれで避けた。ダメージを最小限に食い止めるのに成功した。
「まさかここで散開するとはな」
マクレーンは散開して一斉射撃のダメージを緩めたエウロパ軍を

見て呟いた。
「敵ながら見事というべきか」
「しかしそれはそれでやり方があります」
劉が言った。
「司令、再び砲艦及びミサイル艦の斉射を」
「再びですか」
「はい」
彼は答えた。
「目標は定めず広範囲に攻撃させて下さい」
「散開しているその場所全体にですね」
「はい。それでダメージを与えましょう」
「わかりました。それでは」
彼はそれを受け入れて攻撃の指示を下した。絨毯の様な攻撃がエウロパ軍を撃った。だが彼等はそれも耐え凌いだ。
「まだだ、怯むなよ」
シュヴァルツブルグは艦橋に仁王立ちしていた。その姿はまるで天界に君臨し、雷を振るうゼウスのようであった。
「敵が接近して来た時に一気に集結する。それまで待て」
「はい」
周りの者がそれに頷く。戦艦、重巡の攻撃も耐え凌いだ。
「来ます！」
「来たか！」
駆逐艦の魚雷攻撃の後で突進してきた。空母が前に出る。
「全艦総攻撃に入れ！」
シュヴァルツブルグはここで右手を大きく掲げた。
「敵を粉砕せよ。まずは先鋒に対し総攻撃を仕掛ける！」
「はい！」
目の前に漆黒の艦隊がいた。サハラ義勇軍であった。
「彼等を打ち破り、敵の司令部まで突き進むぞ！諸君等の健闘を祈る！」

そう言うとワレンシュタインを突っ込ませた。こうして両軍は激突した。
「フン、総攻撃か」
義勇軍の司令官マシュハドは突っ込んでくる彼等を見てまずは笑った。
「御苦労なことだ。その闘志は認めよう」
そしてその戦意を褒めた。無論それだけではなかった。敵を褒めるだけでは済まさないのが義勇軍のならわしであった。
「だがそれだけでは勝てはせぬ。全軍に告ぐ」
彼は義勇軍全てに指示を下した。
「我等が故郷を奪った不逞の輩共を一人残らず消し去れ。それがアッラーの思し召しだ」
「アッラーの」
「そうだ。これは聖戦だ」
そしてこう言った。
「憎むべきエウロパの者達をここで完全に打ち破れ！そしてサハラの恨みを晴らすのだ！」
「はい！」
義勇軍の戦士達がそれに奮い立った。
「この戦い、我々の手によって決めるぞ！アッラーフアクバル！」
「アッラーフアクバル！」
サハラの言葉が飛び交う。黒い軍が今炎となり突き進んだ。そしてエウロパ軍とぶつかった。
「撃て！」
エウロパ軍の先頭には騎士団がいた。彼等がまず敢然と突っ込む。
「敵を粉砕せよ！一歩も退くな！」
「はい！」
オーティスをはじめとした団長達の声が戦場に木霊する。彼等は自ら陣頭に立ち部下の指揮を鼓舞していた。
それに義勇軍の炎龍やマトロフが殺到する。あまりもの数に星達

が見えなくなる程だった。だがそれでも彼等騎士団は怖れはしなかった。
「敵機が来ます！」
「撃ち落とせ！」
それだけであった。また騎士団の者達もそれに従いエインヘリャルで、ビーム砲座やミサイルで立ち向かう。その見事な戦術で義勇軍の艦載機と五分に渡り合っていた。
数においてはエウロパ軍の方が上である。元々その数に倍以上があり、その全軍を以って立ち向かっているからであった。だがそれでも多くの戦いを経験してきており、連合においても想像を絶する訓練を受けてきた義勇軍は崩れはしなかった。
「我等にこの程度の数で挑むとは愚かだな」
「全くです」
マシュハドの言葉にワフラが頷いた。
「我等を倒したければ十倍必要だ。その程度では勝てはせぬ」
そう言うと艦長に顔を向けた。
「主砲を浴びせてやれ」
「了解」
艦長は頷いた。それを受けてマシュハドの乗艦ロスタムの主砲が動いた。これもティアマト級巨大戦艦であった。
「撃て！」
「撃て！」
ロスタムの主砲が火を噴いた。光がエウロパ軍を打ち据える。かなりの数がそれにより光と化した。
「まだだ、撃て！」
マシュハドはさらに斉射を命じた。他の巨大戦艦もそれに続く。これによりエウロパ軍はその進撃を止められてしまった。
「ぬうう、またしてもあの巨大戦艦か」
モンフェラートは眼前の怪物を見て歯噛みしていた。
「あの戦艦をまず何とかせねば我が軍に勝利はないか」

そう言いながら艦長に声をかけた。
「こちらも主砲を使うぞ」
「はい」
艦長はそれに頷いた。
「一斉射撃だ。よいな」
「了解」
それを受けてモンフェラートの乗艦ブルードラゴンは動いた。騎士団の団長達は自身の乗艦にそれぞれの竜の名を冠しているのである。赤騎士団ならばレッドドラゴン、銀騎士団ならばシルバードラゴンというふうに。青騎士団なだら当然ブルードラゴンだ。カラーリングもそれぞれの竜にならっている。青い艦がその主砲をロスタムに向けた。
「撃て！」
ブルードラゴン艦長の指示が下る。幾条もの光の帯がロスタムを襲った。だがロスタムはそれを受けてもびくともしていなかった。

## 第十一部第五章　持久戦その十一

「何っ、戦艦の主砲を」
モンフェラートはそれを見て絶句した。
「無傷だというのか」
「今何か受けたか？」
マシュハドは艦橋から見える青い艦を見て余裕の笑みを浮かべていた。
「あの青い艦が何かしたようですな」
ワフラもであった。ロスタムはその斉射を受けても平然として戦場にその巨体を見せつけていた。
「見たところ巡洋艦のようだな」
「閣下、あれは戦艦です」
「そうだったか。小さいので見間違えたわ」
彼はそううそぶいた。歴戦の強者特有のうそぶきである。うそぶくのを終えると艦長に言った。
「虫を払え」
「はい」
艦長はそれに従い副砲を放たせた。副砲といっても戦艦の主砲そのままである。威力は相当なものであるのは言うまでもない。エウロパ軍の艦艇ならば駆逐艦だと一撃で消し飛んでしまう。それの一撃を受けてブルードラゴンは中破してしまった。
「ウワッ！」
「司令！」
モンフェラートの身体が宙に舞った。まるで映画のスローモーションの様にゆっくりした動きだ。コマ送りの様にゆったりと、だが確実に壁に叩きつけられる。
「お怪我は」
「大丈夫とは言い難いな」

口の中に苦い味が広がる。頭から流れる血が口の中に入ってきたのだ。
「艦は無事か」
「残念ながら」
それは艦長が最もよくわかっていた。先程のロスタムの攻撃でかなりのダメージを受けていた。
「そうか。なら仕方ないな」
「はい」
「とりあえず後方に退かせてもらおう。残念だがな」
ブルードラゴンは修理を受ける為に後方に退いた。指揮権は副団長が受け継いだ。だが指揮の要に他ならない団長が戦線を離脱したことにより青騎士団の指揮は落ちざるを得なかった。
騎士団の要である青騎士団の指揮力の低下、それが最初の歪であった。エウロパ軍はそこから徐々に損害を増やしていった。
エウロパ軍の動きが止まりその損害を増やしている間に連合軍正規軍もまた動いていた。彼等はエウロパ軍を包囲しにかかっていたのだ。
「これで詰み、か」
マクレーンは軍を動かしながらそう言った。
「さて、どうするかな。彼等は」
「このまま詰まされるわけにはいかないでしょうが」
隣にいる劉が呟いた。
「我々の動きは彼等も気付いているでしょうし」
「しかしそれだけではどうにもなりません」
マクレーンは必勝の笑みを浮かべたままこう言った。
「この状況を打開しなくては。彼等にそれができるかどうか」
「それはこれからわかることですな」
「はい」
エウロパ軍としてはどうにもならなかった。退こうにも義勇軍の前方からの攻撃が激しくとても動けはしなかった。彼等が身動きを

とれないその間にも連合軍は包囲の輪を完成させようとしていた。
「これで終わりか」
シュヴァルツブルグは連合軍の動きを見てそう呻いた。
「何もかも」
「・・・・・・・・・」
エヴァも答えることができなかった。彼女も覚悟を決めていた。
連合軍の包囲の話が彼等を覆おうとしていた。それはまるで食虫花が獲物を包み込むかのようであった。さながら義勇軍はそれを捉えた罠であろうか。
「終わりだな」
マシュハドも会心の笑みを浮かべていた。しかしここで彼等の前に何者かの一団が姿を現わした。
「全速で突入しながら撃て！」
突如として光の帯が義勇軍を襲った。そしてしたたかに打ち据える。
「エウロパ軍の反撃か！」
「まさか！」
口々に驚きの声をあげる。それが何なのか認識できる者はすぐにはいなかった。
「誰だ！？」
それはエウロパ軍もであった。彼等は自分達の上から降り注いだ光の槍を見て義勇軍と同じように驚きの声をあげていたのであった。
「閣下、御無事ですか！？」
シュヴァルツブルグの乗るワレンシュタインに通信が入ってきた。彼はその声の主を知っていた。
「本部長か」
「はい」
声は笑った。それはモンサルヴァートのものであった。
「お助けに参りました。何とか間に合ったようですな」
「そうか、間に合ったか」

シュヴァルツブルグはそれを聞いて安堵した笑みを浮かべた。
「遅れて申し訳ありません。ですが何とかなりそうですね」
「卿等のおかげだ」
シュヴァルツブルグはそれにこう答えた。
「よく来てくれた。礼を言う」
「私達だけではありませんよ」
「彼等もか」
それが誰であるか彼にもわかっていた。
「はい。今後方から来ております。何とかここまで辿り着けたようです」
「それは何よりだ」
「では閣下」
「うむ」
シュヴァルツブルグは頷いた。
「今のうちに。後詰は我々が引き受けます」
「かたじけない」
エウロパ軍中央軍は南方軍の援護を受けながら全速力で後退を開始した。それにより連合軍の巨大な花の罠からすんでのところで逃れた。
「逃がすな！撃て！」
マクレーンをはじめとして連合の諸将が彼等を追うように指示を下す。だがエウロパ軍はそれよりも速く戦場から離脱していた。
「時間を稼ぐぞ」
モンサルヴァートは連合軍を振り切りながらそう言った。そして機雷を撒きはじめた。これにより連合軍の動きを止めるつもりであった。
「司令、機雷です」
それは連合軍にもすぐに知られた。マクレーンはそれを見て舌打ちした。

## 第十一部第五章　持久戦その十二

「クッ」
「どうしますか」
「致し方あるまい」
そう答えるしかなかった。彼は前方に掃海艇を出させた。護衛艦の援護をつけてである。
「逃げられるな」
「残念ながら」
部下の一人がそれに答える。
「しかし見事な退却劇でしたな」
「疾風のようだったな」
マクレーンは前方で活動する自軍の掃海部隊を眺めながらそれに答えた。
「憎たらしい程な」
「これによりエウロパ軍は一つになりました」
劉が呟いた。
「我等が何としても阻止しようとした合流が適ったのです」
「失態ですな、私の」
「いえ、これはこれで好都合」
「といいますと」
マクレーンだけでなく他の者達もそれに問うた。
「どういうことですか」
「我々も軍を集結できるからです」
それに対する劉の答えはこうであった。
「南北の軍を合流させましょう。そして彼等に対抗するのです」
「全軍を以って決戦ですか」
「はい」
劉は頷いた。

「それで決着を着けます。場所は」
「場所は」
「おそらくオリンポスの前」
彼は言った。
「そこで雌雄を決することになるでしょうな」
彼はそう言って前を見た。今彼は銀河を見てはいなかった。今そこにある戦場を見据えていたのであった。

虎口を脱したエウロパ軍はホズから撤退していた。そして撤退しながら軍の集結を行なっていた。
「また手酷くやられたな」
シュヴァルツブルグは自軍を見てそう言った。
「サハラ義勇軍恐るべしといったところか」
「彼等は我々に対して他の連合の者とは違う感情を持っていますから」
エヴァがそれに応えた。
「しかも連度がまるで違います。連合軍にとって切り札と言うべき存在でしょう」
「消耗してもそれを憂慮する必要のない、な」
シュヴァルツブルグの声はいささかシニカルなものであった。
「彼等は連合では異邦人だ。だからこそ矢面に立たせることができる」
「そうなりますか」
「戦争とは奇麗事だけではない」
彼は噛み締めるようにして言った。
「騎士だけで戦争をするわけではないのだ。そして損害も覚悟しなくてはならない」
「彼等は連合にとってはその損害を担当する役割ですか」
「だからこそ常に先鋒を務める」
彼は言った。

「違うだろうか」
「彼等は連合の市民でありますが」
「法律的にはそうかも知れない。しかし連合の者ではない」
シュヴァルツブルグの言葉は突き放すようであった。
「彼等はサハラの者だ。これはどうやっても変わりはしない」
「法の問題ではないということですか」
「そうだ、心の問題だ」
エヴァは若さ故かそこまでは考えがつかなかった。しかし歳相応の人生経験を積んでいるシュヴァルツブルグにはわかったのである。
「差別という問題があるな」
「はい」
エヴァはそれに頷いた。
「かって民族間の差別が問題になっていた。男女間の差別もあった」
この時代においても男女間の差別は残っている。民族間の差別は流石に今はない。連合は混血が進み、エウロパもアラブもまたそれぞれの間で混血が行われているからである。ヨーロッパ人、アラブ人という間であるが。
男女間の差別はやはり完全にはなくなってはいない。こればかりはどうしようもないところがあった。
「宗教の問題もあった」
「はい」
これは歴史が教えていた。キリスト教とユダヤ教、キリスト教とイスラム教の問題がその代表であろうか。二十一世紀にはイスラム世界は他の世界と激しい衝突を繰り返した。その為か一時期イスラム教徒に対する差別がアメリカ等で問題になったのであった。
「人間というものは弱い一面がある。自分とは異なる存在を異端視するのだ」
「今においてもそうですか」
「我々にしても連合から見れば差別社会だ」
貴族制についてのことであるのは言うまでもない。

「階級社会も見方によれば差別だな」
「そうなのですか」
「中からはわからないものなのだろうな」
彼はそう答えた。
「職業の差別もある」
これも残念ながらどの社会にもあった。人間という不完全な存在がその心の中に偏見というものを持っている限り差別というものはなくならないのだろう。
「彼等に関して言えばかなり古い種類の問題だ」
「民族ということになるでしょうか」
「そうだ。連合とサハラではあらゆるものが異なるがな。まず民族が違う」
連合はそれこそ星の数程の民族と言うべき存在がある。そもそも最初の構成国達にしろ極めて雑多な多民族国家ばかりであった。アメリカ然り、中国然り、ＡＳＥＡＮ各国然り、である。日本も例外ではなかった。それが三〇〇もの国家を形成している。全ての民族やそれに類するものを入れると優に万を超えるとまで言われている。
だがサハラは違う。多くの国家に分かれていても彼等はアラブ人なのである。
『国は違えど神と血は同じ』
これはサハラを現わすとされる言葉の一つである。彼等は連合とは違っていた。民族は一つであった。アラブ人なのである。
しかし彼等は連合には最近までいなかった。難民となるまでは。そう、いなかったのだ。
「他の場所から来たのだ、彼等は」
連合の誰かが言った。
「そうした意味で彼等は連合の者ではない」
こういうことになる。連合にしてみれば法的にはどうであれ、あくまで異邦人なのであった。連合の者ではないのである。
「だから彼等は前面に立たせられるのだ」

シュヴァルツブルグはまた言った。
「これは彼等が精鋭である為もあるがな」
「そうなのですか」
「あえてそうした部隊に育てたようだがな」
シュヴァルツブルグの言葉は真実であった。
「連合軍は志願制だ」
「はい」
「志願者を確保する為にも損害は避けたい。そうした理由から義勇軍が作られた」
「被害担当として」
「あと最初に火事場に飛び込む為にな。彼等の役割は大きい」
「しかしそれは彼等が納得してのことでしょうか」
「彼等にしてみれば連合軍の待遇はサハラのそれに比べると破格のようだ。連合軍は人間を確保する為に必死だからな」
「左様ですか」
「ああした勢力の軍隊は難しいのだ。何かとな」
「我々とはそうした点でも違いますね」
「国が違えば何もかも違う」
ここでこう述べた。
「軍隊も然り」
「そのようで」
「それは覚えておいて損はない」
「ハッ」
「だが彼等が我々にとって強敵であるのは事実」
今度は被差別者としてではなく敵として見た。
「今回はモンサルヴァート統帥本部長の尽力で助かったが」
「はい」
「次は保障はない。勝たなければな」
「了解」
そう答えて敬礼した。彼等は既に次の戦場に思いを馳せていた。

## 第十一部第五章　持久戦その十三

モンサルヴァートの軍は彼等と同行していた。その中には当然ながら彼の旗艦であるリェンツィの姿もあった。
「何とか間に合ったな」
モンサルヴァートはそのリェンツィの艦橋においてプロコフィエフに対して語っていた。
「危ないところだったようだが」
「あと半時間でも到着が遅れていれば我が軍の敗北だったでしょう」
プロコフィエフはそれに対して淡々とした口調でそう語った。
「包囲殲滅されて。そうなれば我々も救援どころではありませんでした」
「そうだな」
モンサルヴァートはそれに頷いた。
「今回は本当に将兵に感謝したい。見事な働きだった」
「はい」
「卿もな。まさかあそこで突入を進言するとは思わなかった」
「それが最もよい方法だと思いましたので」
どうやらモンサルヴァートの軍の突入は彼女の案であるらしい。冷静な彼女からしてみれば信じられない程過激な作戦であった。
「最もよい方法か」
「友軍を救う為には。そして今後のことを考えますと」
「そうだな。これは卿の功績だ」
「有り難うございます」
「卿の妹君も無事だったようだしな。それも何よりだ」
「妹もですか」
しかしそれを聞いても様子は変わるところがなかった。
「妹は今何処にいるのでしょうか」
「閣下の側にいるらしい。参謀役として」

「そうだったのですか」
「一度会いに行ってはどうか」
モンサルヴァートはそう勧めてきた。
「戦場に身を置いているとはいえ実の姉妹だ。顔を合わせるのもいいぞ」
「御言葉ですが」
だが彼女はそれには首を縦に振らなかった。
「合わないのか」
「はい。今はその時ではありません」
やはり変わらない淡々とした言葉であった。まるで感情がないかのようであった。
「戦場において情は不要です」
「厳しいな」
「全ては勝利を収める為。それ以外のものは不要です」
「そうか」
それもまた一つの考えである。モンサルヴァートはそれを咎める気にはなれなかった。ただ頷くだけであった。
「わかった。それではいい」
「はい」
「今は休もう。すぐにまた忙しくなるだろうからな」
「わかりました。それではこれで」
「うむ」
彼等はそれぞれの部屋に戻った。プロコフィエフもまた自室に入った。
意外と殺風景な部屋であった。エウロパでは将校、しかも元帥ともなるとかなり豪奢な部屋になるものだが彼女の部屋は質素なものであった。階級を考えると異様ですらあった。
その質素な部屋に相応しい机があった。そこには一枚の写真が置かれていた。二人の美しい女性が並んでいる。
「只今、エヴァ」

プロコフィエフは部屋に入るとその写真に対してそう声をかけた。
「元気にしているようね。何よりだわ」
それまでとはうって変わって穏やかな顔になっていた。優しげな笑みすら浮かべている。
それから椅子に座った。写真を間近で見る。
「戦争が終わったらまた会いましょう。二人でね」
二人は幼い頃はいつも一緒であった。彼女が士官学校に入ってからも時間があれば会っていた。仲睦まじい姉妹であった。
今はそのことを思い出していた。遠い過去のことである。しかし彼女にとってはそうではなかった。今も生きている、また続いていることであった。

ホズ星系の戦いもまたエウロパ軍の敗北に終わった。参加艦艇は連合軍一四〇〇個艦隊に対してエウロパ軍はモンサルヴァートの援軍を入れて三三〇個艦隊、人員は連合軍四十億に対してエウロパ軍は十五億程であった。
エウロパ軍は五十個近い艦隊を失い、そのダメージが更に深刻なものとなったのに対して連合軍は全滅した艦隊は義勇軍においても皆無であった。その損害率は一パーセント程であった。それを踏まえると連合軍の圧倒的勝利と言えるものであった。
この戦いの結果ホズ星系もまた連合軍の手に落ちた。戦略的な意味から言ってもエウロパ軍にとって大きな敗北であった。だが彼等は南北の友軍と合流することによりかろうじて最悪の事態は免れた。その全軍を以って次の防衛にあたることが可能となったからであった。
しかし連合軍もまた同じであった。彼等は占領したホズ星系において南北の友軍と合流した。その戦力は二〇〇〇個艦隊近く。人類の歴史史上空前絶後の規模の大軍であった。その大軍が今次の進撃に向けて牙を研いでいた。
連合とエウロパの戦いは最後の局面を迎えようとしていた。首都

オリンポスを前にしての戦いである。エウロパの興亡、そして双方の浮沈をかけた最後の戦いが幕を開けようとしていた。

第十一部　完

２００５・７・２６

## 第十二部第一章　それぞれの歴史その一

それぞれの歴史

連合とエウロパ、人類の歴史においてその関係を知られている不俱戴天の敵同士である。そうした関係に至ったのはまだ人類が地球にいた千年前の月の開発とそれに基づくシンガポール条約からであった。

「あれこそが全てのはじまりであった。我々の屈辱のはじまりであった」

ブラウベルグはかってある演説においてそう語った。これは欧州の者達の心の言葉でもあった。

彼等にとってシンガポール条約程の屈辱はなかった。かっての植民地に膝を屈しただけでなく、宇宙における夢を絶たれたに等しいものであったからだ。だが欧州の復権と宇宙開発の再開はブラウベルグによって為された。

シンガポール条約で許された僅かな開発の技術と資源を有効に活用した。それにより欧州は再び力を取り戻した。そして環太平洋諸国、日米中露ＡＳＥＡＮといった諸国に対抗できる力を見せるようにまで復活したのであった。

これに対して太平洋諸国は対抗策を練った。米中露がまず考えたのはブラウベルグを消すことであった。それが最も簡単で且効果的だと判断したからであった。すぐに暗殺計画が練られ実行に移された。

だがそれは失敗した。一度目はアメリカが計画した。時の大統領ケネスは豪語した。

「我がＣＩＡの手にかかればブラウベルグの命なぞ風の前のキャンドルの火のようなものだ」

と。だがそれは見事に失敗したのであった。

ＣＩＡはスナイパーを雇った。しかし銃弾は彼を逸れ、スナイパーは拘束された。拘束後数日でスナイパーは謎の死を遂げたがアメリカの仕業であることは明らかであった。欧州の諜報部がそれを事前に察知していたのである。銃弾が逸れたのは彼等が銃に細工をしていたからであった。ＣＩＡはそこまで見抜かれていたのだ。

これでアメリカは失敗した。ケネス政権はこの嫌疑で崩壊した。彼はアメリカ史上二人目の辞任した大統領となった。そうした意味でニクソン以来の政治家と揶揄されている。

次は中国であった。彼等は秘書官を暗殺し、そこに職業凶手を送り込むことにした。職業凶手とは中国の殺し屋のことである。多くは暗黒街にいるがこの場合は専門の工作員であった。それは暗器の使い手であった。

秘書官は暗殺され、職業凶手が入れ替わった。これで上手くいくかと思われた。

「暗殺というものは古典的なものなのだ」

当時の中国の大統領である當の言葉である。彼もまた成功に絶対の自信を持っていた。だがこれも失敗に終わった。

入れ替わってから僅か二日後に職業凶手は発覚した。彼は拘束されそうなところで自ら毒を飲み死んだ。しかしその経歴を調査され中国の工作員であることが判明した。當はそれを政敵に責められ、彼もまた失脚した。こうして中国も失敗した。

ロシアが最後に動いた。毒を盛ることにした。なまじ人であるから失敗するのだと。彼等はブラウベルグのディナーに遅効性の猛毒を混ぜることを考えた。身体に入ってから数日で効果を発揮する特殊な毒である。これならば確実だとロシアは思った。時のロシア大統領ゴワシチョフは特にそうであった。

しかしこれも失敗した。またもや察知されブラウベルグは事前に解毒剤を飲んでおり無事であった。そして彼はパーティーの場であるパフォーマンスを見せた。

「これがロシアから私への贈り物だ」

そう言うと水槽を持って来させた。そこには数匹の熱帯魚が泳いでいた。
「魚ですか？」
「残念だが違う」
彼は客達に対してニヤリと笑ってそう返した。そして彼等に言った。
「見ておいてくれ」
「！？」
それからすぐであった。魚達が突然動きを止め浮かび上がってきたのは。皆腹を上にして死んでいた。
「な・・・・・・」
「毒！？」
「そうだ」
彼は答えた。
「これがロシアからの贈り物だ。私に対するな」
確かにその魚はロシアから彼個人への贈り物であった。それにあえて毒を入れて暗殺計画を知らしめたのだ。同時に諜報部による調査結果を発表した。これによりロシアも失敗し政権交代が起こった。
こうして彼への暗殺計画はどれも失敗に終わった。米中露はそれぞれ国家的な信頼を失墜させ、以後欧州に対して不利な立場に追い込まれた。三大国がこうではＡＳＥＡＮ諸国やオセアニア諸国といった後の連合の主要構成国となる他の国も満足に対抗できなかった。後は穏健派の日本だけであるが日本は元々欧州との極端な衝突は避ける方針であったので期待はできなかった。ブラウベルグと欧州は危機を脱したのであった。

## 第十二部第一章　それぞれの歴史その二

欧州は名をエウロパと変えた。ギリシア神話においてゼウスに言い寄られた美女のことであり欧州の語源になった娘である。これは一つの欧州に完全に回帰したということであった。

「我々はかって世界を指導してきた」

ブラウベルグはこれを宣言した時の演説においてこう言った。

「だが今ではアメリカや中国、ロシア、そして日本の後塵を排している。かって我々が指導してきた者達に屈辱的な立場に追いやられている。これでいいのか」

「よくない！」

民衆達は叫んだ。これは彼が期待した言葉であった。

「そう、よくはない。ではどうすればいいか」

彼は民衆に対してそう問うた。民衆はそれに答えた。

「力だ！」

と。それが答えであった。

「もっと力を！」

「彼等に負けない力を！」

「その力を手に入れるにはどうすればいいか」

ブラウベルグはまた問うた。

「さしあたっては宇宙開発を進めるべきではないのか」

「そうだ！」

民衆達は叫んだ。

「だが今それは連合により独占されている。あの忌まわしいシンガポール条約により」

「シンガポール条約」

エウロパの者にとっては聞きたくもない名詞であった。これにより彼等の屈辱的な立場が決定的となっているのであるからだ。これは当然と言えた。

「だが条約は条約だ。我々は彼等とは違う」
露骨にいざとなれば条約を反故にしたり、好き勝手に変えてきたアメリカや中国を批判した。
「破るわけにはいかない。だが克服することはできる」
「どうやって」
「私がそれを克服しよう」
「貴方が」
「そうだ、私が」
彼は自信に満ちた声で彼等に対し答えた。
「私の手によりこの欧州は生まれ変わる。シンガポール条約を乗り越える。それには欧州、いやエウロパは完全に一つにならなければならない」
「一つに」
「そうだ、一つに！」
ブラウベルグはあえて叫んだ。
「我がエウロパが彼等に勝つにはそれしかない！今こそ本当の意味での偉大なるエウロパは復活する！」
「彼等に勝てつのか！」
「勝てる！」
ブラウベルグはまた叫んだ。
「彼等は烏合の衆だ！数だけは多いが所詮はそれだけだ！」
これは一面においてその通りであった。太平洋諸国もアフリカ諸国もそれぞれの利害が複雑に絡み合っていた。その為まとまった行動がとれていなかったのだ。ブラウベルグはそこを突くことにしたのだ。
「だが我々は違う！我々が一つになれば彼等なぞものの数ではない！」
「そしてそれをまとめるのは」
民衆の中の誰かが言った。
「貴方だ！」

「そう、私だ！」
彼はそれに応えた。
「エウロパは私が必ずや築き上げる！諸君はそれについてきて欲しい。いいか！」
「勿論だ！」
「よし！」
彼はそれに頷いた。
「では行こう！エウロパの栄光は今ここからはじまる！」
「ブラウベルグ万歳！ブラウベルグ万歳！」
エウロパ各国の中央政府の権限はこの時を境に急激に弱まりほぼ象徴のような存在になってしまった。それにかわってブラウベルグが君臨する中央政府の権限が強くなった。彼はエウロパ初代総統に就任し、中央集権的な政策によりエウロパをまとめていった。そしてエウロパは実際に一つになりかっての栄光を取り戻したのであった。
「英雄だな、まさに」
それを見ていたウクライナのあるジャーナリストの言葉である。
「エウロパは英雄を手に入れた。彼等の今までの歴史において屈指のな」
「ジュリアス＝シーザーやナポレオン＝ボナパルトに匹敵するかな」
彼の同僚がそれに言葉を入れてきた。
「シーザーやナポレオンか」
「ああ。最早それに匹敵する名声だと思うが」
「そうだな」
彼はそれを受けて考え込んだ。そして私見を述べた。
「彼等以上かもな」
「おい、そんなにか」
同僚はそれを聞いて驚きの声をあげた。
「彼等のカリスマ性は実際にこの目で見たわけではないから本等で読むだけだ」

「ああ」
「しかしブラウベルグのカリスマは今実際にこの目で見ている。相当なものだな」
「これだけのカリスマ性の持ち主は我々の方にはいないな、残念なことだが」
「そうだな」
同僚は頷いた。それからまた言った。
「どちらにしろ彼の手でこれからの欧州は大きく変わるな」
「欧州ではなくエウロパだな」
「おっと、そうか」
彼は同僚の誤りを指摘した。
「これからどうなるかだな、一つになったエウロパが」
「ブラウベルグはかなり徹底した中央集権的政治でいくつもりらしいな」
「それが今の彼等には合っているな」
それをよしとした。
「我々に対抗するつもりならな。だがそれに対して我々は」
「ああ」
同僚も彼が何を言いたいのかわかっていた。また頷いた。
「相変わらずバラバラだ。このままでよいのかな」
「いいことはないがな。だがどうしようもない」
あまりに身体が大き過ぎた太平洋諸国とその賛同国、後の連合の問題点はこの頃からあったのだ。そのまとまりのなさであった。
「時が来れば解決するだろう」
「どれだけ先の話だろうな、それは」
「三十年後かもしれないし、千年後かも知れない」
「それまでウクライナも太平洋諸国もあるか」
彼はそれを聞いて思わず苦笑した。
「政権は違っても国名位は残っているだろう、人間がいる限り」
「そういうものか」

「人間がいる限り国はあるさ」
同僚はそう述べた。
「どんな形になっているかまでは流石にわからないがな」
「そうか。それにしても」
「それにしても・・・・・。何だ？」
「千年後も相変わらずだったら凄いな」
「まあな。しかし人間というものは案外進歩がないものだからな」
同僚の人間観はいささかシニカルなものであった。
「千年後も同じことを繰り返しているのかもな、我々は」
「かもな」
彼はそれに賛同する言葉を出した。それから立体テレビに視線を戻した。
「彼等もそうかもな」
「可能性はあるな」
そしてそれはある程度は的中することになる。人間というものはそうしたものである。
ブラウベルグはエウロパの英雄となった。彼はまさに救世主であったのだ。

## 第十二部第一章　それぞれの歴史その三

「奴等にはもう負けはしない！」
「再び我々の時代だ！」
口々にそう言いエウロパの青地に構成国だけの数の星をちりばめた旗を振りかざす。彼等はかっての繁栄した欧州を取り戻したかに見えた。しかしブラウベルグはそうは考えていなかった。
「我々は確かにかっては世界を主導した」
彼はある時部下の一人に対してそう述べた。
「かっては、な」
「これからもです」
部下の一人はそれに対してこう言葉を返した。
「我々はそれが可能な力を取り戻しましたから」
「それはどうかな」
だが彼はそれには懐疑的であった。
「太平洋諸国のことでしょうか」
「それもある」
彼は落ち着いた様子でそう答えた。
「彼等の力は侮れないぞ。アメリカもあれば中国もある」
「はい」
「それに日本もだ。ロシアもいるな」
「怖るるに足りないかと」
「彼等それぞれの力が我々よりも大きくともか？」
ブラウベルグの目の光は明るくはなかった。どういうわけか警戒するものであった。
「力の差はまだ歴然としているのだぞ」
「しかし烏合の衆です」
「烏合の衆か」
彼はそれを聞いて笑った。

「私が以前言った言葉だったな、彼等に対して」
「はい。彼等は力こそ大きいですが所詮は烏合の衆に過ぎません」
部下はそう述べた。
「我々は違います。幾ら力があれど烏合の衆では。何を恐れる必要がありましょうか」
「確かに彼等は烏合の衆だ」
ブラウベルグはまた言った。
「しかし力がある。我々より遥かにな」
「しかし」
「しかしでもだ」
その声が強いものとなった。
「彼等を侮るな。我々の今の力では一時的に彼等に脅威を感じさせることはできるだろう」
「はい」
「だがそれまでだ。勝つことは不可能だ。今はまだ耐える時なのだ」
「耐える時ですか」
「まだエウロパは一つになったばかりだ。先は長い」
彼はこう述べた。
「彼等に対抗できる力を得るのはまだ先の話だ」
「どれだけ先のことでしょうか、それは」
「それはわからないな」
大空を見上げた。彼はそこにある無限の銀河を見ていた。
「これからどうなるかはわからない。しかし」
「しかし」
「我々はもう一つの世界を築こうとしている。それは何としても守りたいな」
「はい」
ブラウベルグはあえて太平洋との全面衝突を避けた。それは正解であった。太平洋諸国はアフリカや中南米の諸国等を入れて連合を設立した。これにより彼等もまた外見上は統一の勢力となった。エ

ウロパとの勢力差はあまりにも歴然としていたからであった。その彼等との全面衝突を避けたのは正解であった。
ブラウベルグは長きに渡ってエウロパを指導してきたがやがてこの世を去った。その後継者達が地球を去り、新天地へ追い出されるようにして去る時彼等は連合を睨みつけていたという。
こうして今のエウロパがあった。貴族制はエウロパになってから暫くして制定されたものである。元々欧州では根強くあったものであり、あらたな指導者を設ける為でもあった。
エウロパが形成されるまでに実に様々なことがあった。そして作り上げられた。彼等は彼等で一つの世界となっていたのであった。そしてこれは連合も同じであった。
連合は確かにまとまりに欠けていた。それぞれの国家、とりわけ大国の力が強く中央政府の力は弱かった。それでも一定の力を持ち、調停者として存在しておりかっての国際連盟、国際連合よりは役には立っていた。これはこの二つの組織への反省点と協力してくれる大国があったからである。その大国は日本であった。
「中央政府の第一の下僕」
こう揶揄する声さえあった。彼等はあくまで中央政府に忠実でありその言葉に従った。結果としてこれが連合の秩序の維持に貢献していたのである。
幸いにして武力衝突はなかった。これはあらかじめそれぞれの国の所有する惑星をかなり広く制定したのが功を奏した。その制定には一人の天才がいた。

## 第十二部第一章　それぞれの歴史その四

ブワイフ＝アクルク。インドネシアに生まれたこの人物は外見は冴えない小男であった。だがその頭脳は明晰であり宇宙進出にあたって構成国の人口、国力等を完全に考慮に入れたうえでその国境を制定したのである。これにより連合の運命は決まったといっても過言ではなかった。

米中露といった厄介な大国は地球から離れた場所にそれぞれ置かれていた。そしてそこに巨大な領土を置いた。彼等が満足しても有り余る程の広大さと豊かさであった。

他の大国に対してもそうであった。ただし日本は地球の側に置いた。小国は小国で満足のいく形になった。広大な銀河においてあらかじめそうした勢力圏を設けさせたことは正解であった。そのうえで新興国の設立も認めた。彼のこうした計画に基づき連合はその領土を決めた。銀河の大半が彼の考えにより線引きされたのであった。

最大の人口を誇る中国には十兆を優に養えるだけの領土が与えられた。アメリカにも同等である。それぞれの星系の許容人口を平均して十億としたならば彼等は無人のものを含めると数万程の星系があった。ロシアにも日本にもかなりの数の星系が割り当てられ、それだけで連合が確認した星系のかなりの数を占めた。やはりこの四国の意向を無視するわけにもいかないからだ。しかもＡＳＥＡＮの存在もあった。だがアクルクはそれを成し遂げたのであった。

当時あった数十万以上の星系の割り当てを驚くべき速さで進めた。こうして連合の初期の領土は決まった。そのうえで飛び地も認めた。モザイク上ではあったがそこにも秩序をつけたのであった。

端の星系から一定の距離までを領土とした。間は中立地帯でありどこの領土でもない。こうして制定していったのである。領土を巡る衝突があったならば主にそれにかわる場所を中央政府が提供していく。こうして争いを防いでいった。中央政府はそうした意味で実

に重要なバランサーであった。そうした時代が五百年近く続いた。そうすると次第に問題点が出て来た。
　中央政府の財政難である。確固たる土地も人もない彼等は言わば神輿であった。次第に大国を制御しづらくなってきたのである。この時で既に新興国もかなりの数になってきていた。連合自体がそのシステムを見直す時期に来ていたのであった。ここで一人の傑物が連合に出た。
　グレゴール＝ホロトフスキー。ロシアにルーツを持つこの人物はカナダ人であった。
「カナダ？ああ、あそこか」
　連合においてカナダはさして目立った国ではなかった。元々地球にあった頃からカナダはアメリカの影に隠れ地味な存在であった。宇宙に進出してからは国力こそ高いが人口も少なくやはり地味な存在であった。大国の部類だがよく忘れられる存在であった。そのカナダから中央政府の大統領候補が出た時多くの者はこう言った。
「ホロトフスキー？ロシア人か？」
　だがロシアからはもう候補が一人出ていた。一つの国から候補者は一人という決まりであった。
「じゃあウクライナか？」
「ウクライナからは今回出ていないぞ」
「じゃあ誰だ？」
　最初彼がカナダ人であるということは誰もわからなかった。遂にたまりかねた彼自身が言ったのであった。
「私はカナダ人です」
　と。驚いたことに彼はカナダ以外では殆ど知られていなかったのだ。カナダにおいては剛直でかつ清廉な政治家として知られていたが。
「どうなんだ、あれは」
　彼がカナダ人と知ってからの連合の者達の態度はそれまでとあまり変わりがなかった。

「カナダか、どうもな」
「一体どんな人なんだ？」
カナダにもホロトフスキーにも話題が少なかった。だがここで彼等は他の大統領候補達も見た。
その時大統領候補を出していたのは米中露とＡＳＥＡＮ諸国、そして南アフリカであった。いずれも大国である。これではまずいと思ったのが小国の者達だ。
「また大国主導でやられてはかなわん」
「俺達の話を聞いてくれる人でないとな」
カナダも大国の部類であるがそのあまりもの影の薄さが功を為した。彼にはそうした理由で小国から票が集まったのであった。
二回の選挙の末彼は中央政府大統領となった。これには誰もが驚いた。
「わしが大統領か」
彼は当選したと聞いた時まずはそのへの字に結んだ口をおかしそうにほころばせた。
「実力ではともかく知名度でなれるとは思わんかったな。これも運かのう」
「そういうことではないでしょうか」
長い間彼に仕えている年配の秘書がそれに応えた。
「後はこの運を上手く活かすだけですね」
「そうだな」
彼は頷いた。大統領に就任すると早速動きはじめた。まずは人事の一新である。
それまで大国の影響が大きかったスタッフの顔触れを実力本意に変えた。そして小国出身であろうが能力のある者を登用した。これにより大国の影響を削ぎ、そのうえで有能な人材を集めたのである。
次に中央政府の権限を拡大した。中央の省庁の権限をこれまでになく拡大させた。
「大きな政府ですね」

「そうだ」
彼はジャーナリストの問いに答えた。
「今までは政府の権限が弱かったからな。だから強めていく」
「そうなのですか」
「そうでないとこれからの連合は駄目だ。何時までも大国の機嫌を伺ってあかりでは駄目だ」
そう言って次々に改革を進めていった。そして財政にも改革を振るった。
それまでは各国家からの税収で成り立っていた。だがそれだけではとても足りないのが実情であった。そこで彼は中立地帯の開発を進めたのであった。
「中央政府は土地も人もない。だが財源を作ることはできる」
彼はこう言った。
「これからは自分で金を作る、いいな」
「はい」
これにより彼は連合の財源も確保した。そしてマウリアやサハラ各国とも積極的に貿易を開始したのであった。それまで連合は連合内だけで動いており、他の勢力との交易はあまり行ってこなかったのである。
中央政府は彼により生まれ変わった。こうして連合は再び本来の姿に立ち戻った。大国の批判もあったがホロトフスキーはそれにも立ち向かっていた。
「政治において敵は外敵だけではない」
こう評する者がいる。政治の世界とは複雑である。政権争いなぞは日常茶飯事のことである。そしてそれによる政争もまた多い。これもまた歴史においては常であった。
ホロトフスキーも何度も命を狙われた。その数は一千を越えるとさえ言われている。だが彼は幸運故か、それとも用心の介あってか生き残った。不死身とさえ言われた。
「よく生きていたものだ、あの時は」

ホロトフスキーが政治家を退いた時に言った言葉だ。それは彼のことを何よりも語ることであった。
彼は生き抜いた。それにより連合の改革を推し進めた。そして連合、中央政府は生まれ変わった。彼は後に連合中興の祖とまで言われるようになった。
彼の後中央政府はその力をつけ連合はある程度まとまるようになった。人口も増加し、安定してきたとさえ言われてきた。その頃エウロパでは人口問題が気になりだしていた。ここからエウロパのサハラ侵攻の芽が生まれようとしていたのであった。
それから二百年後エウロパにおいて大きな出来事が起こった。それはエウロパのサハラ侵攻であった。
この当時エウロパは八百億人の人口を数えようとしていた。それはエウロパの許容人口の限界に達しようとしていた。事前にエウロパ側もスペースコロニーや惑星開発を進めていたがそれでも足りなかった。結果として統一されておらず、進出が容易なサハラに入ったのであった。
「これはエウロパの本性を人類社会に見せつけるものに他ならない」
「あれが今の時代にあっていいものか」
「貴族の正体は侵略者だ」
「所詮エウロパなぞあんな連中だ」
連合中央政府も各国政府もそう主張した。だがエウロパにとってそれは聞く耳持たないことであった。彼等にとってみればこれは生きる為に止むを得ないことである。狭いエウロパはこれ以上人が住めないからであった。それはエウロパの者達が最もわかっていることであった。

## 第十二部第一章　それぞれの歴史その五

それから二百年経った。連合中央政府の権限はさらに拡大し、中央政府軍も設立された。エウロパはサハラから撤退し、連合とエウロパは戦闘状態に入った。その戦いは今でも続いていた。

「ようやくここまで来ましたか」

八条は壁にかけられているエウロパの地図を見て一言そう呟いた。地図では連合軍はホズにおいて合流し、エウロパの首都オリンポスにまであと僅かの距離にまで迫っていた。

「あともう少しと言いたいところですが」

「そうは上手くはいかないでしょう」

バールがそれに応えた。

「でしょうね」

そして八条はそれに頷いた。

「彼等とて必死です。何とかしようと」

「ホズからは撤退しましたがね」

「はい」

「ですがそれだけでは。まだまだ戦う力は残っています」

「それをどうすべきか、ですね」

彼は言った。

「おそらく最後の戦いになると思いますが」

「しかも彼等の戦意は全く衰えてはいない」

「はい」

「最後の戦いはかなり激しいものになるでしょうね」

「しかしここまできたらあと僅かです。現場の者に任せたいのですが」

「現場の、ですか」

「細かく言うとマクレーン宇宙艦隊司令長官と劉参謀総長にですね。彼等は今まで本当によくやってくれています」

「そうですね」
それは八条もバールも認めるところであった。
「彼等に任せておけば大丈夫でしょうね」
「前線のことは」
バールは前線に話を限った。
「しかし銃後はまた違います」
「ええ」
八条はそれを聞いてまた頷いた。
「それはわかっています」
「これは我々の仕事になりますね。物資の補給のことですが」
「はい」
どうやらバールが八条のところに来たのはそれについて話すつもりだったからしい。
「後方支持部長のコアトル元帥と話をしたのですが」
「後方支持部長は何と」
「今はニーベルング要塞群をエウロパ領内における最大の補給基地としていますがそれを移動させてはどうかという考えです」
「場所は」
「アルテミスです」
バールはそう答えた。
「アルテミスですか」
「長官はどう思われますか」
バールは場所を答えたうえで問うてきた。
「私ですか」
「はい」
バールは答えた。
「私はそれでいいと思いますが」
決定権者である八条に問うてきたのだ。その青い目が彼を見ていた。
「そうですね」

八条は一呼吸置いたうえでそれに答えた。
「私もそれでいいと思います。アルテミスは軍事基地としても、地理的にも最適でしょう」
「はい」
バールはそれを聞いて会心の笑みを浮かべた。それこそが彼の待っていた言葉であったのだ。
「ではそれでいきますか」
「はい」
八条はそれをよしとした。
「それではすぐにそれに取り掛かるように指示を出しましょう。ここ暫くニーベルングから距離があり過ぎると思っていましたので」
「それで補給には齟齬は出ていましたか」
「そこまではいっていませんでしたが」
「事前に、ということですね」
「はい」
バールはまた答えた。
「そうなる以前に手を打っておくべきだと思いましたので」
「わかりました。それでは後方支持部長にもそう伝えておいて下さい」
「了解」
「二千個近い艦隊の運営を維持していかなくてはなりませんからね。確かなものとしておかないと」
「ええ」
「それではそういうことで。アルテミスに物資、施設を集結させましょう」
「ハッ」
こうしてかってエウロパ軍の最大の防衛拠点であったアルテミスは今度は連合軍の補給基地、そして首都攻略への足掛かりとなった。彼等はすぐにアルテミスの基地の建設に取り掛かることになった。しかしこれについては連合中央議会において論争の的となった。

## 第十二部第一章　それぞれの歴史その六

中央議会には二つの派閥がある。キリト＝マウイが率いる保守派とランティール＝モハマドが領袖を務める改革派である。彼等はこのアルテミスへの基地建設について予算の面でそれぞれ異なる意見を述べていたのであった。

「アルテミスへの基地建設には莫大な軍事費がかかるのではないか」

マウイの保守派はそう述べていた。

「これ以上の軍事費の増加は考えものだが」

「だがそれは勝利の為だ」

モハマドの改革派はそれに対してこう反論した。

「勝利の為には基地の一つや二つ当然ではないのか」

「それは確かに一理ある」

保守派はそう意見を述べた。

「しかし今まであまりにも金がかかり過ぎている。これ以上軍事費が増えると他の分野にまで影響が及びかねない」

「中央政府の財政は今はそれ程苦しくはないが」

「少なくとも赤字ではない」

「だがこれ以上の増加は赤字にもなりかねない」

保守派はそう反論した。

「既に今までの軍事費の何年分かを消費している。これは憂慮すべきことだ」

「戦争とは金がかかるものだ」

その通りであった。戦争とは財政面、経済的に言えば莫大な消費に他ならない。支出だけで他には何も生み出さない。経済的な視点から言えばこれ程割に合わないものもないのだ。

「ならばそれは当然ではないのか」

改革派はそれを当然のことだと主張しているのである。これは戦争というものを語るうえではその通りではあった。だが保守派はま

た違う意見であった。
「物事には限度がある」
それが彼等の意見であった。
「幾ら何でも消費が過ぎる」
「人も兵器もそれ程損害は出てはいないが」
少なくとも正規軍は、である。
「そうした問題ではない、全体的な問題だ」
改革派はそう述べた。
「戦争で消費するのは兵器だけではない」
当然のことであった。
「他の物資もだ。その消費が常識外れの数字となっている」
「数が多いからそれも当然だろう」
「そう、数だ」
保守派はそれについて言及してきた。
「これだけの数を戦場に送ると費用も莫大だ。これ以上は財政に負担を生じかねさせない」
「それは既に開戦の時点で言われていたことではないのか」
改革派はそれに対して反論する。
「今更言うとは道理にかなわないと思うが如何か」
「状況が変わった」
保守派はそう答えた。
「当初の予想よりも物資の消費が激しい。これでは駄目だ」
「だからこそ損害が少なく済んでいるのではないのか」
ニーベルング要塞群での戦いがその最たるものであった。連合軍は旧式の艦艇を自動操縦にして要塞群に攻撃を仕掛けた。これにより要塞群はかなりのダメージを受け、それがひいては要塞群攻略に繋がったのだ。
「それは否定しない」
保守派もそれは認めた。
「特にニーベルングのあれはな」

そしてニーベルング要塞群についても言及した。
「あれはよかったと思っている」
「ではいいではないか」
「しかしその他が問題だ」
彼等も引けないところがあった。
「燃料にしろ弾薬にしろ食糧にしろ無駄な浪費が多い。三割程減らしてもどうにかなるのではないのか」
「その統計はあるのか」
「ある」
彼等はここでデータを出してきた。分厚いファイルである。
「ここに答えがある。これは我等が今回の戦いに関して調査したものだ」
「そして何がわかったのだ」
「我が軍はとかく無駄な使用が多い。食糧にしろ食べ過ぎではないのか」
「腹が減っては戦ができぬというぞ」
「パスタを一人当たり十皿食べてもか」
こういう話があった。とある艦で催しとしてパスタの早食い競争があった。スパゲティだけでなくマカロニ、フェットチーネ、ペンネ、ラザニア等を将兵がそれぞれ競って食べたのである。これにはノルマが決められていて一人最低十皿は食べなければならなかった。そして参加者はそれをクリアーしていたのだ。
「幾ら何でもそれは無駄ではないのか。確かに将兵の食事は万全でなければならない」
保守派とて軍事に対して無知ではない。軍人出身の政治家もおりそのアドバイスも受けている。
「だが食べ過ぎもかえってよくないのではないのか。我々はバイキングではない」
バイキングの食事量は壮絶なものだったと言われている。羊一匹や木に生えている果物全てを食べたとさえ言われている。もっとも

これはイギリスの作家シェークスピアの作品の中で言われていることなのでいささか眉唾ものであるが。彼の作品はかなり大袈裟な表現を使うことで知られているからだ。
「節制を持ってやってもらいたいものだ」
「そしてその軍事費の節制についてだが」
改革派はそれを聞き終えてから保守派の議員達に尋ねた。

## 第十二部第一章　それぞれの歴史その七

「三割と一口に言ってもかなりの額だ。それを減らして満足にやっていけるのか」
「可能だ」
保守派はそう答えた。
「この統計ではそう出ている」
「ふむ」
改革派の中にはそれを聞いて考え込む者達もいた。
「だが」
しかしモハマドはあえてここで口を開いた。
「議題を最初に戻したい。まずはそちらの資料は見させてもらう」
「最初に」
「そうだ。確かに無駄な浪費は慎まれるべきだ。しかしそれと後方基地の建設とはまた無問題だ。話が変わってはどうにもならない」
「そうですな」
改革派の議員の一人がそれに賛同した。
「問題はアルテミスの基地化が我が軍にとって有効かどうか、です。財政的な面も含めて」
「これについてはどう思われますか」
「我々は有効だとは思っていません」
「それは何故」
モハマドは答えたマウイに対して問うた。
「理由をお聞かせ下さい」
「既に後方基地としてはニーベルング要塞群がありますね」
「はい」
「あの要塞群は基地としてはかなりのものです。そこを中心として今まで満足にやってきたではありませんか。これ以上基地を築く必要はないと思います」

「オリンポス攻略に関してもですか」
「はい」
マウイは答えた。
「今まで通りでやっていけると思います。我が軍の輸送及び補給を考えますと」
「それが貴女の御考えですね」
「そうです」
彼女はそれを認めた。
「我が軍は数も多いですし。このまま勝てると思いますが」
「確かに勝てるでしょうね」
モハマドにもそれはわかっていた。
「ですが損害は多くなるでしょう」
「むっ」
マウイはそれを聞いて眉を少し歪めさせた。
「それでは何もなりません。ましてやオリンポスはエウロパの首都」
彼は敵の首都について言及した。
「物資も豊富です。そして予備兵力も全て投入してくるでしょう」
「それは考えられますね」
それはマウイも認めた。
「そうなればこちらもかなりの物資が必要となります。だからこそアルテミスに基地を置かなければならないと思いますが」
「首都攻略の為にも」
「はい」
モハマドは答えた。
「その為にもアルテミスの基地化は必須だと思いますが如何ですかな」
「そうですね」
マウイは考える目をした。
「考えさせてもらいましょう。ですがそれだけでは駄目です」
「わかっておりますよ」

モハマドはそれに答えた。
「軍事費のことですね。それについてはこちらも考えさせてもらいましょう」
「はい」
所謂交換であった。政治においてはよくある取引であった。ここから妥協なり折衷案なりを生み出していくものである。往々にして極論では政治は動かない。だからこうして話し合うことにより妥当な案を見出していくものである。議論をするのが政治である。駄目なものは駄目、というのは政治ではないのだ。それは観念論でしかない。そうしたことを主張していれば政治は停滞する。政治とは観念論では破綻する世界なのである。
こうして保守派と改革派の議論は終わった。それについての話は八条の耳にも入っていた。財政のことは彼にとってはかなり意外なことであった。
「財政はかなり考えていたつもりなのだがな」
「軍人から見ればそうなのでしょう」
木口がそれに答えた。
「国防省の人間は文民であっても軍に関係していますね」
「ああ」
「長官も。軍人の視点で予算を組まれましたね」
「当然だと思うが。だが無駄は省いたのは事実だぞ」
「それは否定しません」
木口はそれは認めた。
「ですがそれはあくまで軍人の視点からです。日本軍はかっては極めて少ない軍事費からやりくりしていましたね」
「苦労したよ」
八条の声と顔も苦いものとなった。
「どれだけ少なくても費用は一定のものはかかるからな。維持費なりなんなりで」
彼は補給長であった。だからこそわかる苦労であった。

「それだけでもかなり割かれるのに他のことにも金を回さなくてはならない。それを踏まえて予算を組んだのだが」
「ですが政治家や国防省以外から見ればそうではないのです」
「まだ無駄があると」
「はい。だからこそ保守派が問題にしているのです」
「ふむ」
それを聞いて腕を組んで考え込んだ。
「そういうものか。軍人と文民の視点の違いか」
「長官は文民であっても軍人出身ですから。考え方が軍人のものなのです」
「それは認める」
「はい」
「だからこそ悩むな。私の組んだ予算でも無駄が多いのか」
「具体的なことは保守派の出してきたファイルにありますが」
「これだな」
手許にあるディスクを取り出した。
「ここに全てが書かれている」
「保守派の主張では」
なお八条は改革派である。キロモトもそうである。今の中央政府は改革派の政権なのである。
「とりあえず見てみるか。それから考えよう」
「はい」
八条はディスクを自分のノートパソコンに入れた。そしてファイルを開いた。そこには実に細かいデータが如実に書かれていた。
「成程な」
八条はそれを見てまずは一言発した。
「彼等も勉強している」
「ですね」
木口はそれを端から覗き込んでいた。それから八条に答えた。
「彼等とて軍事に無知というわけではないですから。軍人出身もい

ますし」
「だからこそか。よく見ている」
八条はとりわけ予算に関する資料を見ていた。そこには彼の組んだ予算と保守派の主張する無駄、そして彼等の予算案までが書かれていた。
「一理はあるな」
それを見た八条の言葉であった。
「よく勉強している」
「ですね」
木口も同じ意見であった。
「参考になる。確かに軍人の視点だけでは何かと問題もあるな」
「どうしても専門的になりがちですからね」
「ああ」
軍人の欠点の一つとして知識が専門的になり易いということであろうか。その為にヴィジョンが狭くなってしまうのだ。軍人という職業を考えると致し方ないがそれを防ぐ為にも将兵の教育につとに広範囲な知識と見方が要求されているのである。だがこれは容易ではない。
八条はかなり広い視野と見識を持っていることで知られているがそれでも限界があったようである。少なくとも彼自身はそう感じていた。

## 第十二部第一章　それぞれの歴史その八

「これは素直に参考にさせてもらうことにする」
「わかりました」
木口もそれに頷いた。
「保守派もあながち何でも反対というわけではないからな。だがアルテミスに基地は置いておきたい」
「はい」
「あの場所を拠点にしてオリンポスを攻略したいからな。だが」
彼はここで言った。
「オリンポスは巨大な要塞だ。どうやって攻略するか」
「攻略する前に戦争を終わらせることも考慮した方がいいかも知れませんね」
「それは考えている」
彼はそれを認めた。
「次の会戦で勝利を収めることができればそれも可能だろう」
「負ければ」
「その時は戦いがさらに続くだろうな」
彼はそれにはそう述べた。
「エウロパも勢いに乗るだろうしな。そうなれば損害も増える」
「やはり勝ちたいですね、それも考えると」
「誰もがそう思っていることだ。保守派もな」
彼等とて戦いを妨害したいわけではないのだ。利敵行為は往々にして歴史において散見されるが今回の連合についてはそれはなかった。これはエウロパも同じであった。
「まずは議会で承認してもらうことにしよう。アルテミスについては」
「はい」
「それからだ。それが適わなかった場合も考えよう」

「わかりました」
八条はオリンポス攻略、そしてその前の戦いについて考察をはじめた。その間も議会では議論が続いていた。だがやがて裁決をとることになった。
投票が行われた。その結果改革派の主張が通りアルテミスに基地が設けられることとなった。
「これでよし、と言うべきか」
八条は三次元テレビでそれを見て呟いた。
「アルテミスに基地を置くことができたのは何よりだ」
「はい」
木口も側にいた。彼はそれを聞いて頷いた。
「今艦隊はホズに集結していたな」
「ええ。二千個艦隊がそこに集結しております」
「二千個艦隊か。その補給を満たすのは厄介だぞ」
「わかっておりますよ。既に書類が山の様に届いていますよ」
「えっ、もうか！？」
八条はそれを聞いて驚きの声をあげた。
「早いな、また」
「仕事というものは待ってはくれませんよ」
「それはわかっているが。それでどれ位だ」
「とりあえずはこれだけです」
木口は右手に持つケースから数枚のディスクを取り出した。八条はそれを見て露骨に嫌そうな顔をした。
「これだけではないだろうな、多分」
「勿論。まずはこの中にある事柄について全て裁決をお願いします。それからまだありますよ」
「やれやれだ」
「この戦いがはじまってから何かと大変ですね」
「設立の時よりはましだがな」
今度は苦笑した。

「それでもな。何か毎日パソコンと書類ばかり見ている気がする」
軍もまた官僚組織の一つである。官僚組織というのは全て書類で決裁する。紙の文化とさえ言われてきた。その中でも軍隊というものはその傾向が強いのである。上位下達が特にしっかりした組織であり命令がなくては誰も何も動きはしないからである。
「それが長官の仕事ですよ」
「君もな。まあとやかく話してもはじまりはしない。早速はじめるか」
「はい」
こうして彼は早速仕事に取り掛かった。ディスクをパソコンに入れキーボードを叩く。そして仕事を進めるのであった。彼もまた多忙であった。しかし彼は勝っている軍の指導者であり気は楽といえば楽であった。少なくとも負けている軍の指導者よりは。

## 第十二部第一章　それぞれの歴史その九

「・・・・・・そうか」
ポートはホズでのことを首相官邸の執務室で聞いていた。その顔は土気色となっていた。
「それでも合流はできたのだな」
「はい」
報告をした首相補佐官がそれに応えた。
「何とか全滅だけは避けられました。北と南の軍も無事です」
「不幸中の幸いと言うべきかな」
「損害は甚大ですが」
「そのようだな」
彼は机の上にある資料に目を通して言った。
「これだけの損害はエウロパ建国以来ないことだ」
「はい」
「それだけでも深刻なことだが。尚且つオリンポスまで危機に晒されようとしている」
「大変なことです」
補佐官の顔色もまた深刻なものとなっていた。
「オリンポスは既に要塞化を完了させてはいますが」
「連合の大軍の前にはどれだけの効果があるかな」
彼はあまり効果がないと見ていた。それがわかる言葉であった。
「それでも何とかしなければならないな。首都防衛軍はどうしているか」
「何時でも戦闘に入れる態勢にありますが」
「そうか」
それを聞いたポートの顔が引き締まった。何かを決心したように。
「防衛軍司令官のアレクサンドル＝ドボルスキー元帥に伝えてくれ。すぐにシュヴァルツブルグ元帥の軍と合流するようにとな」

「彼等を向かわせるのですか」
「そうだ」
ペーチはそれに答えた。ドボルスキーはスロバキア出身の貴族であり冷静沈着な将として知られている。地味だが堅実な用兵と人柄で知られている。
「次の戦いはおそらく決戦になる。予備兵力を投入するのならば今しかないだろう」
「それはそうですが」
「どのみち次の戦いで敗れてはオリンポスは危うくなる。今は決断の時だ」
「わかりました。それでは」
「頼むぞ」
首都防衛軍の出撃も決定された。だがそれでもポートの顔は晴れなかった。彼はこれでも勝利を得るのは難しいと考えていたのだ。
「ところでだ」
彼は補佐官に問うてきた。
「はい」
「前線の将兵達はかなり善戦していると聞いているが」
「タンホイザー元帥を中心に今は遊撃戦を展開しています」
補佐官はそう答えた。
「ある程度の戦果を挙げているようですが」
「戦意はまだ衰えてはいないようだな」
「はい。少なくとも勇敢であり戦術もあります」
「ならいい。戦争というものは自暴自棄になると駄目だというからな」
「はい」
「指導者もな。ラフネール閣下はどうされておられるか」
ここ三日彼のところには顔を出していないのである。ずっとこの首相官邸で仕事をしている。最近では食事や睡眠もここでとっている。当然ながらまともなものではなくインスタント食品であり、仮

眠であった。疲れは否応なしに蓄積していた。
「閣下もまたお忙しいです。昨日は前線に向かわれました」
「視察にか」
「そして将兵の士気の鼓舞に。かなりお疲れのようでしたよ」
「そうだろうな。それも当然だ」
ポートはそれを聞いて一言そう呟いた。
「閣下もお辛いだろう。だがそれは今のエウロパ一千億の市民全てがだ」
「連合に占領されている地域の市民達もですね」
彼等は連合軍が規律正しいこともあり比較的穏やかなこれまでの生活を営んでいた。だがそれでも戦時下にあることには変わらない。やはり深刻な中にいたのである。
「彼等も何とかしたいが。今はそれどころではないな」
「まずは次の戦いをどうにかしなければなりませんね」
「そうだ。その為には私もここで頑張らなければならない。仕事はどれ位だ」
「もうすぐ来る予定です」
「そうか」
程なくして山の様な書類が何段も運び込まれてきた。ポートはそれを落ち着いた、だが生気のまるでない顔で見ていた。八条のように困った顔をして、声を出す余裕はなかった。
「では取り掛かるとするか」
「はい」
黙々と仕事に取り掛かった。書類を一枚ずつ的確に処理していく。かなり事務的な動きであった。
その間一言も発することはない。途中食事を採ったりはしていたがその間にも書類には目を通している。そして食事が終わるとまた仕事に戻る。休む暇もなかった。
その日の仕事が終わった。もう真夜中を過ぎていた。時計の針は朝に近い程になっていた。

既に補佐官は帰っている。別の部屋で仮眠をとっているだけだが。だがポートは執務室に残っていた。仕事を終えた彼は一言呟いた。
「寝るとするか、私も」
そして椅子に座ったまま眠った。だがすぐに朝の勤務にやって来た官僚に起こされる。
「首相」
「うむ」
起きるとそこにはまた書類があった。彼はすぐにまた仕事に取り掛かる。ここ数日風呂にすら入ってはいない。服も替えてはいない。そんな暇もなかった。当然下着もだ。なおこの時代連合もエウロパも男ものの下着はトランクス、若しくはボクサーパンツとなっている。女性はブラとショーツだ。下着はこれが一番機能的で清潔だということで一千年以上前から定着しているのだ。特に女性のそれはそちらの方がセクシーだという男性側からの意見もあった。何時の時代でも女性の下着というものは男性の興味の的なのである。
「早速仕事だな」
「はい」
その官僚もまた書類の山を持って来ていた。ポートはすぐにそれに目を通しはじめた。
「ふむ」
それは戦死者名簿と遺族への補償についてであった。ポートはそれに目を通しながら官僚に対して言った。
「先のホズの戦いの時のものか」
「後アルテミスでの戦いのものもです」
「そうか」
彼はそれを聞いて頷いた。
「道理で。かなりの数になっている」
「既に法に従い補償を的確に行うということで話が進んでいます。サインだけをお願いします」
「わかった」

それを受けてサインに取り掛かる。時計はまだ朝早くである。少なくとも朝食の時間ですらない。彼はサインをしながら官僚に対して声をかけてきた。
「朝食は食べたかね」
「あ、いえ」
彼はそれに答えた。
「まだですが」
「少し早いが」
ポートは時計を見ながら言った。
「食べてくるといい。食堂はもうあいている筈だ」
「しかし」
「食べられるうちに食べないと後悔するぞ。私みたいにな」
苦笑を浮かべてそう言った。
「だから言った方がいい。いいね」
「わかりました。それでは」
「うむ」
官僚は一礼して退室した。ポートはそれに返礼した後ですぐにまた仕事に戻った。黙々とサインを続ける。だがその中で突如として異変を感じた。
「うっ」
腹が痛みだした。これまでにない痛みであった。
「これは」
苦しくなってきた。腹だけではなく胸まで痛みはじめた。相当な痛みであった。座っていられない程である。
しかし彼はそれでも仕事を続けた。幸い血等までは吐きそうにはなかった。そのままサインを続ける。
痛みが少し収まると机から薬を取り出した。そしてそれをすぐに口の中に入れて飲み込む。ほんの少しずつだが痛みが引いていく感じがした。
「ふう」

それで少し落ち着いた。しかしそれがその場凌ぎでしかないことは彼が最もよくわかっていた。
「まだもってくれよ」
彼は自分の身体にそう言い聞かせた。
「まだだ、頼むぞ」
話を聞いたかのように痛みが引いていく。それを感じてとりあえずは安堵した。
そして仕事に戻った。やはりサインを続ける。
彼もまた戦っていたのだ。孤独な戦いであった。皆それぞれの戦場に身を置いていた。それはラフネールも同じであった。
「そうか。ではすぐにそれに取り掛かってくれ」
「はい」
彼はシュヴァルツブルグと会談していたのだ。そして彼の案をよしとした。
「何としてもオリンポスへの侵入は防ぎますので」
「頼むぞ」
ホズが陥落した。全滅は免れたがそれは動かし難い事実である。これにより連合軍はまたオリンポスに近付いたのも事実であった。
「敵は今ホズに集結しているな」
「はい」
シュヴァルツブルグはそれに答えた。
「彼等に対しては強襲等で対抗しております。今のところか」
「強襲か」
ラフネールはそれ程軍事に明るいわけではない。だがそれがどんなことかは容易にわかる。彼はそれを聞いたうえであらためてシュヴァルツブルグに対して問うた。
「一体どれだけの規模でだ」
まずはそこを尋ねた。

## 第十二部第一章　それぞれの歴史その十

「数個艦隊規模です。少ない時で一個艦隊です」
「ゲリラ戦術か」
「言い換えるとそうなります」
「そうか。今はそれしかないのかもな」
それを聞いて頷いた。
「今はできるだけ無駄な損害を抑えなくてはならない。しかし敵を消耗させることもまた必要だ」
「はい」
「頼むぞ。おそらく次の戦いでエウロパが決まる」
「わかっております」
答えるシュヴァルツブルグの顔が険しくなった。
「必ずや。敵を防いでみせます」
「うむ」
両者の会談は終わった。ラフネールはそれが終わると前線の視察に戻った。見れば士気は衰えてはいなかった。皆真剣な顔で軍務にあたっていた。
出撃する艦隊を見た。彼はそれを見て傍らにいる将校に対して問うた。見れば大将であった。
「あれは」
「タンホイザー元帥の艦隊です。今から連合軍にかけて攻撃を仕掛けに行かれます」
「タンホイザー元帥のか」
「はい。あとあちらの艦隊にはイギリスの太子も乗っておられます」
「プリンス＝オブ＝ウェールズがか」
「はい」
大将は答えた。この時代もイギリスの王太子はプリンス＝オブ＝ウェールズと称されるのである。ウェールズはブリテンにあった国

の一つである。イギリスは元々一つの国ではなかった。イングランド、スコットランド、アイルランド、そしてこのウェールズを統合して連合王国となったのである。国旗であるユニオン＝ジャックがその象徴だ。イギリスと一口に言ってもその歴史は複雑なのである。
「ジョージ中佐です」
「ああ、それは知っている」
エウロパ総統がイギリスの太子の官職氏名を知らない筈もなかった。それに答えた。
「誰か止めなかったのか。流石に一国の太子が最前線に出るのは」
「いえ、殿下は自ら志願されて出撃されました」
大将はそう答えた。
「自身の御意志でか」
「はい。我々は止めたかったのですが。それが王家の者の務めだと。臣民が敵の侵略に対して苦汁を嘗めさせられているのに自分だけ安全な場所にどうしておれようかと」
「見上げた心意気だな」
ラフネールはそれを聞いて一言そう言った。
「流石はイギリス王家といったところか。高貴なる者の義務は忘れてはいないようだ。殿下はよい王になられるだろう」
「はい」
ラフネールの言葉は後で見事に的中することになる。
「御無事を祈るだけか。イギリス国王には私から申し上げておく」
「お願いします」
「今度の戦い、各国の王家と貴族は真っ先に戦場に駆けつけたな」
「はい」
「高貴なる者の義務だけは忘れられてはいない。エウロパの騎士道もな」
「当然です」
大将は胸を張ってそれに応えた。
「そうでなくては何が貴族ですか」

「そうだな」
それはラフネールも同じであった。彼も貴族であるからだ。フランス等の共和国でも貴族は存在するのである。宮廷歌手という称号も残っている。エウロパはそうした意味で連合各国と比べると非常に古いものが残っているのであった。これもまた一つの文化であった。
「殿下の武勲を期待する。そう申し伝えておいてくれ」
「わかりました」
艦隊は空を飛びたち銀河の大海に消えていった。ラフネールはそれを見上げて思った。
「旅立つのは容易だ」
艦艇は次々と消えていく。その中の幾らかは確実にここには帰ってはこないだろう。彼はそれについて思ったのである。
「しかし戻ってくるのは容易ではない」
そういうことであった。彼は全ての艦艇が銀河の中に消えると顔を大将の方に戻した。
「視察は明日まであったな」
「はい」
「まだ見たいものがある。案内を頼めるか」
「わかりました。それでは」
「うむ」
見ればラフネールもかなりやつれていた。足取りも重い。だが彼はそれでも歩いていた。それを止めることは今はできないのであった。
戦いはエウロパにとって深刻な方向に更に傾いているのは誰でもわかっていることであった。それでも戦いは続けなければならなかった。例えどれだけ辛いものであろうと。少なくとも今は。ラフネールの戦いもまた孤独であった。それが国家元首の戦いであった。

## 第十二部第二章　強襲その一

強襲

連合とエウロパは今は大規模な戦いはなくなっていた。しかしそれでも戦闘は起こっていた。ホズに集結する連合軍に対してエウロパ軍が攻撃を仕掛けているのであった。

「哨戒は怠るな」

それは連合軍の方も承知していた。警戒を怠ってはいない。今ホズの外縁にいる艦隊の一つ第二四七艦隊もそのうちの一つであった。

この艦隊の司令官はエーリッヒ＝シコースキー中将であった。ロシア出身の四十代後半の軍人であった。細い長身の金髪碧眼の白人である。白人といってもそのルーツはいささか複雑であり父はスラブ系であるが母はゲルマン系である。名前がドイツ系なのはその為である。何代か前の祖先にはモンゴルやウイグル出身者もいる。つまりアジア系の血も混じっていたりするのである。宗教はスラブの神々とロシア正教を信仰している。ロシア人にしては酒をあまり飲まず、短気な性格で知られている。

彼は今艦橋にいた。乗っている艦はイーゴリ、かってタタールと戦った英雄の名を冠していた。言うまでもなくティアマト級巨大戦艦である。

このシコースキー中将は連合軍においては有名人であった。ロシア人ながらそのいささか短気であり酒を好まないからだ。そして派手な身振りで知られていた。

「敵は何処から来るかわからないぞ」

大きく手を動かしながらそう言う。

「油断するな」

「はい」

部下達がそれに頷く。短気ではあるが采配や指揮自体は冷静なも

のなので皆それについては安心しているのである。
「司令、一つ気になることがあるのですが」
「何だ」
幕僚の一人に顔を向ける。
「エウロパ軍がまた出撃してきた模様です。先程無人偵察艇から連絡が入りました」
「そうか」
それを聞いて頷いた。
「誰が出て来たのだ、今度は」
「タンホイザー元帥のようです。規模は一個艦隊です」
「そうか」
彼はそれを聞いて頷いた。
「こちらに来る可能性もあるな」
「ないわけではないですね」
部下はそう答えた。
「わかった。では警戒レベルを上げよう。敵のスピードに注意しろ」
「はい」
「敵影を発見したならばすぐに攻撃に移る。一斉射撃の用意はしておけ」
「わかりました」
こうして第二四七艦隊は警戒態勢を強めた。他の外縁の艦隊も同じであった。索敵能力、哨戒能力、そして通信能力は連合軍の方が遥かに高い。彼等はそれを利用したのである。
無論それはエウロパ軍もわかっていた。タンホイザーはホズに向かいながら部下達に対して言っていた。
「既に我々の姿は敵に確認されていると見ていい」
「はい」
彼等はそれに頷いた。
「それはよく心に留めておけ。行動は読まれているとな」
「そのうえでの強襲ですか。厄介ですね」

「うむ」
タンホイザーはそれに応えた。
「だがやっておかなければな。敵に侮られる」
「ただ御言葉ですが」
「何だ」
部下の一人に顔を向けた。
「戦力の温存の為にもこうした強襲は避けた方がいいとも思うのですが。如何でしょうか」
「それは考慮されたことだ」
タンホイザーはそれに対してそう答えた。
「確かに無駄な損害を出す怖れはある」
「はい」
「しかしそれ以上に士気が心配になる。我が軍はこの戦いがはじまってからまともな戦果は挙げてはいない」
「ですね。残念ながら」
それは彼等が最もよくわかっていることであった。痛感しているといってもいい。
「それを考慮するとな。こうしたゲリラ的な強襲を採ったのだ」
「敵軍を精神的に追い詰める為にもですね」
「うむ」
タンホイザーはそれにも頷いた。
「そのうえでだ。そしてそのうちに戦力を立て直す」
「はい」
「決戦までの時間稼ぎの意味もある。これでも必然性があるのだ」
「わかりました」
彼等はそれに納得した。これで話は終わった。

## 第十二部第二章　強襲その二

タンホイザーは副司令に指揮権を委譲し、艦長に艦のことを任せると艦橋を後にした。そして自室へ向かおうとした。だがここで気付いたことがあった。
「ウィンザー中佐は何処だ」
「ウィンザー中佐ですか」
秘書を務める若い将校がそれに応えた。
「そうだ。このグングニルの配属になっているが。姿が見えないな」
「グンナルに行っております」
「グンナルに」
「はい」
グンナルとはエウロパ軍の戦艦の一つである。タンホイザーの艦隊の下にある戦艦である。この名は北欧神話に出て来る領主の名である。英雄シグルドの物語にも出て来る。
「これからの強襲作戦の打ち合わせに。如何しましたか」
「少し話をしたいことがあってな」
「お話を」
「そうだ。グンナルから何時戻る」
「もう暫くしたらだと思いますが」
秘書はそう答えた。
「如何為されますか」
「戻ったらすぐに私の部屋に来るように言ってくれ」
タンホイザーはそう言った。
「すぐにな。いいな」
「わかりました」
こうしてウィンザー中佐という人物がタンホイザーの下に呼ばれることとなった。タンホイザーはそれを伝えるとそのまま自室に入った。程なくして秘書が部屋に入って来た。

「ウィンザー中佐をお連れしました」
「ご苦労」
入って来たのは見事な金髪に青い目をした長身の美男子であった。エウロパは貴族制だがそれを考慮しても中佐というには若かった。見ればまだ二十かそこそこであった。それだけに美しさが際立っていた。
「ようこそおいで下さいました、殿下」
タンホイザーは中佐に対して恭しく敬礼をする。これは明らかに立場が上の者に対する敬礼であった。
「いえ、そのような」
だがウィンザー中佐はそれに慌てて返礼する。彼の方はタンホイザーを上官と認識しているからだ。妙な挨拶であった。
「殿下、まずはお座り下さい」
「はい」
秘書は既に部屋を後にしていた。タンホイザーが下がらせたのだ。彼はウィンザー中佐に対して席を勧めた。自分で椅子を引いた。
「どうぞ」
「申し訳ありません。それでは」
「はい」
こうして中佐は席に座った。彼はそれからタンホイザーに対して言った。
「閣下も。どうぞ」
「それでは御言葉に甘えまして」
「はい」
儀礼的ではあったがこうして二人は向かい合って座った。まずは中佐が口を開いた。
「一体何の御用件でしょうか」
「用件というのは他でもありません」
タンホイザーは言った。
「今度の作戦のことですが」

「連合軍に対する強襲作戦ですね」
「はい。我が艦隊は全ての戦力を以ってホズに展開している連合軍に対して一撃離脱で強襲を仕掛けます」
「はい」
「それに関して決死隊を先陣にするつもりなのですが。指揮は私が執ります」
「閣下が」
「それが私のやり方ですから。戦いは指揮官が先頭にいないとはじまりません」
「しかし」
「大丈夫ですよ。今までそれで傷をおったことはありません」
タンホイザーは心配そうな中佐に対してそう答えた。
「殿下はこの強襲に志願されて来られましたね」
「はい」
中佐はそれに頷いた。
「それがイギリス王家の者としての義務です。戦いとなればまず戦場に立つ」
澄んだ目でそう言った。
「かって七つの海を支配した時、いえ獅子心王の頃からそうでした」
「はい」
プランタジネット朝の王であるリチャード一世だ。彼は国王としてよりも軍人として優秀であり戦場を駆け巡っていた。とりわけ十字軍での戦いの武勇は今でも伝えられている。問題は非常に多いが戦場においては勇猛で打算のない人物であった為今でも人気の高い王の一人である。
イギリスが地球の七つの海を支配していたのはハノーヴァー朝、後のウィンザー朝の時代である。この王朝は二十世紀後半にエリザベス二世という女王が即位していたが彼の夫であるエジンバラ公の名から後にウィンザー＝エジンバラ朝となった。なおこのエジンバラ公はイギリス陸空海軍の元帥でもあり女王の夫ということもあり

ロイヤル＝ファミリーの中ではとりわけ大きな発言力を持っていた。特に子供達に対してのそれは絶対のものがあり長男であり後のチャールズ三世であるチャールズ皇太子は彼に逆らうことができなかった。そのせいか彼は自分の子供達に対してはかなり寛容な父であった。国王としての資質にはその当時からいささか疑問を持たれ、また女性問題もあった彼ではあるが人間的には善良であり質素な生活を好んだ。そして子供達にとってはよき父親であった。これはそのエジンバラ公への反発の現われであるとも言われている。

　そのウィンザー＝エジンバラ朝であるが王朝名は変わっても血筋は変わらなかった。そして今はまたウィンザーに名前が変わっていた。ウィンザー公爵家から国王が出たからである。二百年前のウィンザー公爵は当時の国王の次男であったが長男である王太子が即位して暫くしてから健康を害して退位した為彼が国王となったのである。それが今のウィンザー朝であった。俗に後ウィンザー朝と呼ばれている。

　その次期王位継承者がこのウィンザー中佐、ジョージ王太子であった。彼は今タンホイザーの艦隊に配属となっていたのである。タンホイザーは王族である彼に対して敬意を払っているのであった。

「我が王家は戦場において臣民達の前に立たなければならないのです」

「それはよく存じております」

　タンホイザーはそれに言葉を返した。

「では今回の決死隊にも参加されますね」

「当然です」

　これもまた予想された返答であった。

「その為に戦場に来たのですから」

　胸を張ってそう答えた。

「左様ですか」

「はい。何としても行きます」

「わかりました。そこまで仰るというのなら」

タンホイザーも頷いた。
「行きましょう」
「はい」
ウィンザーは決死隊に参加することとなった。こうしてエウロパ軍は剣を磨きはじめたのであった。

## 第十二部第二章　強襲その三

連合軍第二四七艦隊は哨戒活動を続けていた。シコースキーはその中で艦橋に立ち指揮を続けていた。
「司令」
そんな彼に参謀の一人が声をかけてきた。
「どうした」
「敵です」
「そうか」
彼はそれを聞いて頷いた。
「どれだけの数だ」
「一個艦隊程です」
「ふむ」
それを聞いて考える顔をした。
「こちらに向かってきているのか」
「はい。如何致しましょう」
「第一種警戒態勢をとれ」
「ハッ」
最初の指示はそれであった。
「そして攻撃用意だ。目の前に来たならば総攻撃を仕掛ける。周辺の艦隊にも連絡をとれ」
「わかりました」
次々と指示が下る。それを見ると指揮官として決して無能ではないことがわかる。
「敵は今何処にいるかわかるか」
「少しお待ち下さい」
別の参謀がそれに応える。そしてモニターを映す。
「こちらです」
三次元モニターにエウロパ軍と自軍の位置が映し出される。シコ

ースキーはそれを見てまた言った。
「よし、これならば勝てる」
「勝てますか」
「陣を半月状に編成しろ。そして各艦の主砲を敵に向ける」
「主砲を」
「そうだ。後方のものもな」
そう言って不敵に笑った。
「空母以外の艦を敵に対して横に向けよ」
「はい」
「ただしこのイーゴリだけは最初は正面を向く。よいな」
「わかりました」
それが何故なのか参謀達にはよくわかった。
「それでは陣を組みましょう」
「うむ」
艦隊が動きはじめた。そして迫り来るであろうエウロパ軍に備えた。巨大な艦艇が一斉に動くさまは壮観ですらあった。だがシコースキーは今はそれを黙って見ているだけであった。
タンホイザー率いるエウロパ軍は真っ直ぐに敵に向かっていた。この場合は第二四七艦隊である。
「さてと」
タンホイザーは冷静にモニターに映る自軍と敵軍を見ていた。
「敵は既に陣を組んでいるな」
「はい」
部下の一人がそれに頷く。
「今行っても集中砲火に遭うだけだ。敵もまたそれを狙っている」
「ですね」
「しかしまずは敵に近付こう」
「接近するのですか」
「そうだ。あの巨大戦艦の射程はわかるな」
「はい」

部下はそれに頷いた。
「既に計算して出しております。こちらです」
「うむ」
出されたデータを見た。それを見たうえで頷いた。
「わかった。直前になったならばまた指示を出そう」
「直前になれば？」
「そうだ。今はまだいい。そのまま前に進むぞ」
「わかりました。それでは」
「うむ」
彼等は前進を続けた。シコースキーは腕を組んだそれを見ている。
「敵軍が来ました」
「わかっている」
彼はそれに応えた。
「では手筈通りいくぞ」
「はい」
「艦長」
彼はイーゴリの艦長であるアントニア＝ローレンガー准将に声をかけた。チリ出身の女性艦長である。
「はい」
「巨砲の用意はできているな」
「勿論です」
彼女はそれに頷いた。
「今すぐにでも射撃可能です」
「わかった。それでは射撃用意」
「巨砲射撃用意」
シコースキーの指示に従いローレンガーも指示を下す。
「あとのこの艦のことは貴官に任せる」
「ハッ」
敬礼で応える。そしてローレンガーはまた指示を下した。
「目標敵艦隊」

「目標敵艦隊」
オペレーターが繰り返す。巨大な艦艇がゆっくりと動いた。
それはタンホイザーも見ていた。彼は艦隊を前に進ませながら時を待っていた。
「そろそろだな」
「距離がでしょうか」
「そうだ。全艦停止」
「ここでですか！？」
「何か不都合でもあるか？ただ停止するだけではないぞ」
「といいますと」
「ゆっくりと後ろに下がれ。よいな」
「わかりました」
イーゴリの巨砲にエネルギーが充填されている。今まさに攻撃が加えられようとしていたその時であった。
エウロパ軍が動きを止めた。そして艦首をこちらに向けたままジリジリと退きはじめたのであった。
「後退するのか！？」
シコースキーはそれを見て思わず声をあげた。
「ここまできて」
「何かあったのでしょうか」
「ううむ」
彼にはわからなかった。敵の意図が読めなかったのだ。
「どういうことなのだ、これは」
「司令、如何致しましょう」
ローレンガーが彼に問うてきた。
「巨砲の射撃を停止致しましょうか」
「いや、それは待て」
だが彼はそれを認めなかった。
「敵の動きが読めない。今は何時でも射撃できるようにしておけ」
「わかりました」

「とりあえず防衛に徹しておけ。どうした動きをするかわからん」
「了解」
第二四七艦隊は動きを停止した。エウロパ軍の動きを見る為に防御に徹することにしたのであった。それはタンホイザーからも確認された。
「戸惑っているな、彼等は」
「はい」
傍らにいる参謀の一人がそれに応えた。
「好都合だ。他の敵艦隊はどうしている」
「やはり防御に徹しています」
第二四七艦隊の左右を見る。見れば彼等も動きを停止していた。
「そうか。どうやら彼等も戸惑っているようだな」
タンホイザーはそれを見てまた笑った。だが部下はそれを見て彼に問うた。
「司令」
「どうした」
「我等は強襲に出たのですね」
「その通りだが。今更何を言っている」
「それではこのまま突っ込むべきではなかったのではないでしょうか。多少の損害を省みずに」
「確かに強襲を考えるとそうするべきだ」
タンホイザーはそれを認めた。
「それでは」
普段の彼ならそうしていた。部下はそれもまた不思議でならなかったのだ。今の彼の戦術は普段の彼の戦術とは違っていたからであった。
「まあ待て」
だが彼はそう言ってそれを制した。

## 第十二部第二章　強襲その四

「進むのはこれからだ」
「これから」
「そうだ。まずは彼等の動きを待つ」
「動きを。どういうことでしょうか」
部下は問うた。
「必ず彼等は前に出る。その瞬間を狙う」
タンホイザーは言った。
「いいな」
「わかりました」
とりあえずは頷いた。エウロパ軍はジリジリと退く。連合軍はそれを見て不審さを感じていた。
「どういうことでしょうか」
「誘っているのかもな」
シコースキーはそう見ていた。
「誘う」
「そうだ。かかって来い、とな。面白い」
そして不敵に笑った。
「行くぞ。誘いは受ける」
「行きますか」
「周囲の友軍にも連絡してくれ」
彼は言った。
「攻撃を仕掛ける。前に出てくれ、と」
「了解」
すぐに通信を入れる。周囲の友軍はそれを了承した。
連合軍が動きはじめた。タンホイザーはそれを確認してすぐに動いた。
「行くぞ」

「ハッ」
突進する。そしてそのまま突き進む。
「敵艦隊、動きました」
「来たか」
連合軍もそれを確認して身構えた。
「イーゴリの巨砲を発射せよ」
「了解」
エネルギーは充填させたままである。巨砲を放とうとする。しかしそれよりも先にエウロパ軍は動いていた。
「散開！」
タンホイザーの指示が下る。そして巨砲をまずは避けた。
「ムッ！」
「読まれていたか。だがよい！」
シコースキーはそれに怯まずに次の指示に移った。
「一斉攻撃！」
「了解！」
一斉攻撃を仕掛けようとする。だがそれも間に合わなかった。
エウロパ軍の動きが速かったのだ。彼等は攻撃船速ではなかったのだ。
何と通常の最高速度で突っ込んで来る。連合軍はそれに対して戸惑ってしまった。
「司令、どうしますか！？」
「クッ！」
シコースキーも逡巡した。一斉攻撃は不可能だ。距離を詰められてしまった。それならば艦載機を出すしかない。だが準備はまだできていない。どうするべきか。
「艦載機を出せ！」
それでも言った。迷っている暇はないのは事実であった。彼は指示を下した。
艦載機が出されようとする。しかしそれには間に合わない。何と

エウロパ軍はそのまま第二四七艦隊に突っ込んできたのであった。
「敵艦隊、雪崩れ込んで来ました！」
「奴等、どういうつもりだ」
これにはさしものシコースキーも驚きの声をあげた。艦載機が次々に発艦する。だがエウロパ軍はそれよりも先に連合軍の艦艇に強制的にくいついてきていたのだ。
「よし、今だ！」
タンホイザーがまた言った。
「敵艦艇に切り込め！」
「了解！」
それに従いエウロパ軍の将兵が連合軍の艦艇の中に雪崩れ込んでいく。太古の戦いであった敵艦艇への切り込み戦術であった。それを見て連合軍の将兵は驚かずにはいられなかった。
「まさか今頃あんな戦術を執るとは」
「どうする！？」
第二四七艦隊の周囲にいる連合軍の艦隊も戸惑っていた。どうするべきかわからなかった。艦載機も下手に攻撃しては友軍の艦艇も巻き添えにしてしまう。迂闊に手出しできなかった。
「まずいな」
彼等はそう思った。どうしようもなかった。しかしシコースキーはその中で不敵に笑っていた。
「面白い」
「司令、今何と」
それを聞いた参謀達が首を傾げさせた。
「面白いと言ったのだ。聞こえなかったのか」
「それは」
「こちらも陸戦部隊を動員する。後方から呼び寄せろ」
「揚陸艦の部隊も使うのですか」
「無論」
彼は答えた。

「相手がそうくるのならこうした戦い方もある。行くぞ」
「了解しました」
「その間はそれぞれの艦艇の艦員達で持ち堪えよ。よいな」
「ハッ！」
シコースキーの命令はこの場合的確であった。彼は格闘戦を選んだのであった。各艦で激しい艦内戦がはじまった。
それはイーゴリにおいても同じであった。この巨艦に入って来たのはグングニルの者達であった。
「行くぞ！」
「はい！」
タンホイザーに率いられたバトルスーツの男達が艦内に雪崩れ込む。その手には銃や武器があった。
だがタンホイザーは軍服のままであった。赤と黒のエウロパ軍元帥の軍服のままであった。マントまでたなびかせていた。
「閣下、宜しいのですか？」
「何がだ？」
心配そうに声をかける部下の一人に楽しげな笑みを返した。まるでこれからの戦いに胸を躍らせているようであった。
「いえ、そのままの服装で」
「心配無用だ」
その笑みのまま答えた。
「死ぬ時は死ぬ。それにこの服の方がわかり易いだろう、私が何処にいるか」
「しかし」
「案ずるな、私は決して死にはしない」
そう言いながら腰から長剣を抜いた。
「この銀河に私を倒せる者なぞいないのだからな」
構えた。その構えには寸分の隙もなかった。
「では行くぞ」
「わかりました」

部下もそれ以上言うことはなかった。それ程の自信があるのならば見てみたいとも思ったからだ。ただ彼を守る気はあった。指揮官として、上官として敬愛していたからだ。

「では行くか」

「はい」

まずは出入り口を確保した。そのまま廊下を進んでいく。左右から連合軍の兵士達が現われた。銃で攻撃を仕掛けて来た。

## 第十二部第二章　強襲その五

「撃て！ここから先へは進ませるな！」
将校の指示が下る。だがタンホイザーはそれでも前に出た。
「航海士、そのまま突っ込んで来ます！」
「何だと！」
それを見た連合軍のやや年配の士官が驚きの声をあげた。見ればタンホイザーは銃撃をものともせずそのまま突き進んできたのだ。
「しかもバトルスーツもなしで！」
「一体誰だ、あれは！」
「ロギ＝フォン＝タンホイザー」
タンホイザーは突き進みながら笑みを浮かべてそう答えた。
「ロギ＝フォン＝タンホイザー。まさか」
「そうだ、ヴァルハラでその名を思い出すがいい」
彼の剣が振り下ろされた。それにより航海士は両断された。その後ろからエウロパ軍の将兵達が雪崩れ込んで来る。背後に友軍の援護射撃を受けながら。
タンホイザー率いるグングニルの将兵達は第一の関門を突破した。そしてそこを確保したうえでまた進む。
「いいか」
彼は部下達に対して言った。
「この艦は巨大だ」
「はい」
「慎重に進むぞ。下手に道に迷えばそれだけで命取りだ」
「わかりました」
彼等の攻撃は苛烈であったがその動き自体は慎重なものであった。シコースキーは艦橋でその報告を聞きながら考えていた。
「タンホイザー元帥が来ているのだな」
「はい」

部下の一人がそれに答えた。彼等はもうバトルスーツに身を包んでいる。
「まさかエウロパ軍元帥が自ら切り込んでくるとは思いませんでした。それも軍服のまま」
「絵にはなるな」
彼はそれを聞いてそう呟いた。
「剣を手に敵の中に切り込む、か。まるで中世の騎士だ」
「この銀河の時代に、ですか」
「美意識というのはある意味独特なものだ」
シコースキーは部下に対してそう答えた。
「彼には彼の美意識があるのだろう」
「では我々は忌まわしき異教徒になりますか」
「そのものだ」
笑いながらそれに応えた。
「ローランでいうイスラム教徒になるな」
「私は仏教徒ですが」
「それはあまり関係ない。彼等にとってはな。しかしな」
彼はここで言った。
「だからといって我々も手をこまねいてやられるわけにはいかないな」
「では」
「うむ。最低限の者だけを残して迎撃に向かうぞ。いいな」
「ハッ」
こうしてイーゴリの乗員達も向かった。艦内での戦いも熾烈さを増してきていた。
タンホイザーはその中で剣を振るっていた。その捌きはまるで流れるようであった。
「退くな！」
目の前の敵を斬り倒しながら叫ぶ。彼の剣は既に朱に染まっていた。

「退いたならばそれで終わりだ！」
「はい！」
将兵達もそれに頷く。彼等は銃を放ち、武器を振るって戦いに赴いていた。それに対して連合軍の将兵達は数と地の利を頼りにそれを防がんとする。しかしそれはタンホイザーの戦術指揮と剣により凌がれていた。
「この程度で！」
「ぬうっ！」
また一人の兵士がタンホイザーの剣の前に倒れた。彼等の腕ではタンホイザーを倒せそうにもなかった。
「連合の軍人というのはこの程度なのでしょうか」
傍らにいるウィンザー中佐が言った。彼はバトルスーツに身を包み、剣を持っている。彼もまた軍の先頭で戦っていたのであった。
「油断はなりませんぞ」
しかしタンホイザーはウィンザーのその言葉を嗜めた。
「彼等とて剣を手にする者、手強い者もいるでしょう」
「そうでしょうか」
「連合には多くの武術があります」
タンホイザーは言った。
「それは相当な数でして。その中には伝説の武道というものもあります」
「武道！？」
ウィンザーはそれを聞いて首を傾げさせた。

## 第十二部第二章　強襲その六

「御存知ではないですか」
「はい。それは何なのでしょうか。武術の一種でしょうか」
「一言で言えばそうなりますね。ですが少し違います」
「といいますと」
「連合には日本がありますね」
「はい。古い歴史を持つ皇帝が元首である国でしたね」
「その通りです」
「かっては我が英国とも関係が深かったと聞いていますが」
もうかなり昔の話である。十九世紀の開国から日本は西欧の文化を取り入れてきた。その中で皇室は当時世界第一の国家であった。イギリスの王室をモデルとしていたのであった。
儀礼等にも一部取り入れた。食事に関してもである。実は明治帝は肉を好まれなかった。甘いものを好まれ、アンパンやカステラ、羊羹、そしてアイスクリームを好まれたが肉はお好きではなかった。だがイギリスの儀礼を取り入れる為と肉を食べることが当時奨励されていた為その範となるべく肉を食されたのであった。質素を好まれ、常に威厳を正されていた方であったが、食事に関してもそうであった。
昭和帝になるとそれはさらに深まった。皇太子時代に西欧を視察された昭和帝はより積極的に西欧、そしてイギリスの文化を取り入れられた。途中イギリスとは剣を交え、彼等の誇るロイヤル＝ネービーを太平洋から追い出したがその後で関係は修復され、皇族のイギリス留学も行われるようになった。連合においてはエチオピア皇室と並ぶ名門とされ各国の王族の留学先となっている日本もこの時代は送る立場だったのであった。
二十世紀後半から二十一世紀にかけて日本の皇室とイギリスの王室の関係はよかった。人類社会が連合とエウロパに分かれるとその

関係も自然と消えてしまったが。だがそれは歴史にしっかりと残っていた。
「はい」
タンホイザーもそれは知っていた。そのうえで頷いた。
「その国にあるものなのですか」
「今では連合全体で結構行われているそうですけれどね」
「どんなものですか」
「身体を鍛えるだけでなく心も鍛える」
「心も」
「そういうものだそうです。私も詳しいことは知らないですが」
「そうなのですか」
「この艦にもいるかも知れません」
彼は言った。
「日本のその武道を身に着けた者が」
彼等はエレベーターの前に来た。するとそのエレベーターの扉が左右に開いた。そこから連合軍の軍服を来たアジア系の金髪の男が姿を現わした。その手には不思議な形の刀を持っていた。
「むっ」
タンホイザーはその男を見て目を光らせた。見ればその手に持つ刀は細長く、それでいて婉曲的に曲がっていた。見たこともない、エウロパには少なくともない形のものであった。
「その刀は」
「日本刀という」
男は静かにそう答えた。
「剣道で使われるものだ」
「剣道」
タンホイザーはそれを聞いて目を光らせた。
「武道だな」
「如何にも」
「話をしていたら早速か。面白い」

「貴官等がどんな話をしていかた知らないが」
彼はエレベーターから出てきながら言葉を続けた。
「私の役目は貴官等をこれ以上先には行かせないことだ。覚悟はいいな」
「無論」
タンホイザーは答えた。答えながらマントを取った。バサリ、と音を立てて床に落ちる。
「その勝負受けて立とう。だがその前に聞きたい」
「何をだ」
「卿のことをだ。名は何という」
「ムラコシ」
彼は名乗った。
「ユウイチ＝ムラコシだ」
「日本人か」
「ルーツはそうだ。だが国は違う」
「ほう」
どうやら日系人であるらしい。
「キリバスの生まれだ。この髪は曾祖母のもの」
白人もルーツに入っているのがそれでわかる。
「連合軍大佐。この艦の副長でもある」
「副長としての責務で我々を防ぐつもりか」
「それもある」
彼はそれを認めた。
「だがそれだけではない。私は強い者と戦うことが好きだ」
「それは私も同じだ」
「それ故にここに来た。これでおわかり頂けたと思う」
「うむ」
タンホイザーはそれに答えて頷いた。そして剣を構えた。
「それではムラコシ大佐」
「ロギ＝フォン＝タンホイザー元帥であられますな」

「如何にも」
彼は頷いた。
「貴官が軍服で来られていると御聞きしてこちらも軍服で来ました」
「礼儀というものですかな」
「はい」
彼は答えた。
「武士として」
「では私は騎士として」
彼等は言い合った。
「共に死合いましょう」
「はい」
対峙しはじめた。ウィンザーがその立会人となる形となった。連合とエウロパの剣士の戦いが巨大な艦の中で幕を開けたのであった。
「そうか、副長がか」
シコースキーはムラコシがタンホイザーと対峙したという話を聞いて頷いた。
「面白いな。できるなら私も行きたいが」
彼はコマンド＝サンボとフェシングの達人であった。特にコマンド＝サンボでは生まれ故郷ロシアのある都市の大会で優勝したこともある。かなりの使い手であるのだ。
「司令、御言葉ですがそれは」
「わかっているさ」
彼はニヤリと笑いながらローレンガーにそう答えた。
「ここは副長に任せておこう。司令自ら言ってはまずいからな」
「はい」
「ところでだ」
シコースキーはローレンガーに問うた。
「ムラコシ副長の剣の腕前はどうなのかね」
「全連合の戦いで何度も優勝しておりますが」
「ほう」

それを聞いて声をあげた。
「それなら安心か。きっとやってくれる」
「ではタンホイザー元帥は彼に任せるということで」
「うむ」
「他の者達への攻撃を強めましょう。火力を総動員して」
「頼むぞ。そうだ、地上兵器は使えるか」
「地上兵器をですか？」
「そうだ、戦車なり装甲車なりな。ティアマト級の廊下なら使えないか」
「そうですね」
ローレンガーはそれを聞いて考え込んだ。確かにティアマト級の廊下は広い。装甲車でも通れそうな場所が実に多い。それは艦長である彼女が最もよくわかっていた。

## 第十二部第二章　強襲その七

「装甲車なら大丈夫だと思いますが」
「よし」
シコースキーはそれを聞いて頷いた。ティアマト級巨大戦艦は甲板を守る為に戦車や装甲車も配備しているのである。それを艦内に持って来ることにしたのであった。
「ではそうしよう」
「はい」
こうして艦内に装甲車が入れられることになった。廊下を巨大な車両が音を軋ませながら入って来た。
「これでエウロパの貴族共を轢き潰してやるぜ」
装甲車に乗る兵士が砲塔から顔を出して言った。
「おい、それは止めてくれよ」
「どうしてだよ」
だがそれは側を進んでいた友軍の兵士に窘められた。
「轢き殺した後で誰が処理すると思ってるんだよ」
「？俺達だな」
「そんなミンチになった死体を処理したいか？よく考えろよ」
「そうだな。じゃあ機関砲で派手に撃ってやるか」
「それでも結局バラバラになっちまいそうだがな」
「まあそれは仕方ないだろ」
そんな話をしながら戦闘ポイントに向かった。そこでは激しい戦闘が行われていた。
連合軍の将兵はバリケードを築いて戦っている。それに対してエウロパ軍もバリケードを築いていた。連合軍の圧倒的な火力の前に進撃を止められていたのだ。
「むう」
その地点のエウロパ軍の指揮官は困った顔をしていた。迅速な攻

撃により突破するつもりだったがそれができず、こうして停滞していたからだ。
「参ったな、進むに進めない」
「どうしますか」
部下の一人が彼に尋ねた。
「このままでは埒があきませんよ」
「そうは言ってもな」
タンホイザーなら自ら剣を持って切り込み、戦線を突破するだろう。しかし彼はタンホイザーではない。それは到底不可能なことであったのだ。
「敵の守りは固い。迂闊には手を出せない」
「ですね」
問うた部下にもそれはわかった。連合軍は数だけでなく銃火器の性能も、防御服の能力も高かったからであった。これが大きく関係していた。
「どうすべきでしょうか」
「今は耐えるしかない」
指揮官はそう答えた。
「司令が戻られるか、援軍が来るまでな」
「わかりました」
「そこか！」
ここで後ろから声がした。ラテン語であった。
「来たか！」
エウロパ軍の将兵達はそれを聞いて一斉に後ろを振り向いた。そこには友軍の将兵達がいた。
「助けに来たぞ！」
「すまん！」
援軍を受けて彼等は攻勢に転ずることにした。すぐにバリケードをどけ、突撃に入ろうとする。しかしそれは適わぬことであった。
「な・・・・・・」

前を見て絶句した。そこに信じられない光景が映っていたからであった。
「そんな馬鹿な・・・・・・」
「どういうことだ・・・・・・」
それを見て絶句した。艦内とは思えない光景だったからだ。
「フン、どうやら驚いているようだな」
装甲車に乗る兵士が呆然とするエウロパ軍の将兵達を見て得意気に笑っていた。
「貴様等の価値観だけで判断しているとえらいめに遭うということを教えてやる」
「そもそもこんなこと普通は考えつかないな」
側にいる同僚の兵士がまた言った。
「そうか？」
「というか前代未聞だぞ、艦内で装甲車を使うなんてな」
「そうかな。探せば一回位前例があるんじゃねえか？」
「ないよ」
同僚はややふてくされた感じでそう言葉を返した。
「狭い船の中でどうしてこんなデカブツが使えるんだよ、よく考えろ」
「それもそうか」
「おい」
ここで前を行く将校が彼等に声をかけてきた。
「話はいいから攻撃に移れ。折角敵が動揺しているんだからな」
「おっと、そうだった」
「じゃあ攻撃に移りますか」
「ああ。機銃掃射を仕掛けろ」
「了解」
前方の連合軍の将兵達が一斉に下がる。バリケードを踏み潰しながら装甲車が前に出て来た。そして戸惑うエウロパ軍の将兵達に対して攻撃を仕掛けた。これにより戦いは大きく変わった。

この頃タンホイザーはムラコシと一騎打ちを続けていた。互いに剣と刀を振るい、戦いを繰り広げる。
「ムンッ！」
タンホイザーの剣が唸り声をあげながら前に突き出される。ムラコシの胸に突き刺さるかに見えた。しかしそれは見えただけであった。
「なっ！？」
何と剣がムラコシの身体をすり抜けたのであった。そして今度はムラコシの突きがタンホイザーを襲った。
「クッ！」
タンホイザーはそれを後ろに跳んでかわした。軍服をかすめるところであった。だが彼はそれは間一髪でかわしたのであった。
「これはどういうことだ」
「見切りだ」
ムラコシは言った。
「見切り？」
「そうだ。武道の極意の一つだ」
彼はそう述べた。
「敵の攻撃を寸前で、最小限の動きでかわす。これは武道を極めた者にしかできないことだ」
「だから残像が残ったのか」
「その通り」
ムラコシは答えた。
「長い修業によって身に着けたものだ。一朝一夕で身に着けられるものではない」
「そうなのか」
「そして武道にはまだ極意がある」
「それは・・・・・・何だ」
「今それを貴官に見せよう」

そう言いながら構えをとった。右上段に構える。
その全身を白い光が包んだように見えた。ウィンザーはそれを見てプレッシャーを感じずにはいられなかった。
「何だ、このオーラは」
「オーラか」
ムラコシはそれを聞いて呟いた。表情は変わってはいない。
「そう、これは気だ」
「気！？」
タンホイザーもウィンザーもそれを聞いて驚きの声をあげた。
「何だ、それは」
「武道は身体だけでなく心も鍛える」
ムラコシは言った。
「それにより気も使えるようになるのだ」
「そもそもその気というものは何だ？」
「人が皆持っているものだ。さっきオーラといったな」
「ああ」
ウィンザーの問いに答えた。
「それと同じものだ。武道を極めるとそれを自由に使いこなすことも可能なのだ」
「ではそれをどうやって使うのだ？」
タンホイザーは剣を構えながら問うてきた。
「それを見せてもらいたいが」
「無論こちらもそのつもりだ」
ムラコシの目が光った。
「今それを見せよう。行くぞ！」
そう言うと刀を振り下ろした。一瞬その刀身が白く光ったように見えた。
「覇ああああああああァァァ

に襲い掛かってきた。
「何だとっ！」
「司令！」
ウィンザーもそれを見て驚きの声をあげた。
「よけて下さい！」
「クッ！」
だがよけられそうにもなかった。彼は咄嗟に飛ぼうとしたがそれでも避けられないと判断し、剣を構えた。
「どうするつもりだ！？」
「刀から出て来たのならば」
タンホイザーは構えをとりながら言った。
「これで消せる筈っ！タアッ！」
剣を上から下に一閃させた。それで鎌を斬った。斬られた鎌はこれにより消え失せてしまった。咄嗟の剣撃により難を避けた形となった。
「まさかそれで気を打ち消すとはな」
「危ないところだったよ」
タンホイザーは不敵に笑ってそう言葉を返した。
「こんな剣ははじめて見た」
「かっては使える者も多かったという」
ムラコシはそう述べた。
「かっては無数の剣豪達がいたという」
「どういうことだ？」
「剣を手に戦っていた時代、その頃はこれで生死をかけていた」
彼は語った。

## 第十二部第二章　強襲その八

「生きる為、そして後には道を極める為に剣を振っていた。その頃は使える者も多かったのだ」
「それだけ剣の道を極めた者が多かったのだ」
「今では連合三兆の者の中でも使える者は僅か。その中の一人が私だ」
「では光栄と言うべきだな」
そこまで聞いて言った。
「奥儀を見れたのだから」
「そう、そしてこの奥儀を見た者は必ず死ぬ」
「何！？」
「我が秘奥儀の前に敵はいないということだ。行くぞ」
「タンホイザー家の家訓にある」
タンホイザーもそれを受けて剣を構えなおした。
「敵がどれ程強くとも決闘からは逃れるな、とな。決して背を見せるな、と」
「面白い。それが騎士道か」
「そうだ。連合にはあるかな」
「騎士道はないが別のものがある」
「何だ、それは」
「武士道だ」
彼は言った。
「日本にあったものだ。今ではスポーツの世界に残っているだけだが」
「それは聞いたことがある」
「どのようなものですか」
「話すと長くなるがな」
タンホイザーはそう前置きしたうえでウィンザーに対して語った。

「武人として己を律するという意味においては我々の騎士道と同じだ。だが大きく違う点がある」
「それは」
「命よりも名誉、そして忠義を重んじることだ。今では名誉か」
「足りないがそうだ」
ムラコシもそれを認めた。
「名誉、そして誇りの為ならば死をも厭わない。だがそれにより己を律しているのだ」
「厳しいですね」
「道はどれでも険しいものだ」
それがムラコシの答えであった。
「武士道とてそれは同じ。騎士道もそうではないのか」
「否定はしない」
タンホイザーも答えた。
「今その険しさを卿にも見せて差し上げよう」
「面白い。では私は武士道を」
「うむ」
両者は全身に気を込めた。そして互いに攻撃に入ろうとした。
「ハァッ！」
まずはムラコシが攻撃を仕掛けた。刀を横に一閃させ、気を繰り出した。横になった巨大な鎌が一直線にタンホイザーに襲い掛かった。
「司令！」
ウィンザーはそれを見て声をあげた。横になっている鎌は先の縦の鎌よりもかわしづらい。タンホイザーにとって絶体絶命の危機に見えた。
しかしタンホイザーはそれには焦ってはいなかった。彼は冷静にその鎌を見ていた。
「どうするつもりだ？」
ムラコシは身構えているタンホイザーを見て心の中で思った。こ

のままでは両断されてしまうだろう。だが彼は構えたままである。それを見て不思議にすら思った。
タンホイザーとてただ構えているだけではなかった。狙っていたのである。それは何を狙っていたのか。
「・・・・・・・・・」
鎌を見据えていた。それは一直線にこちらに来る。死の牙を光らせながら。
「まだだ」
彼は鎌を見て呟いた。
「まだ早い」
何をするつもりか。ムラコシもウィンザーも固唾を飲んでいた。
鎌が遂に胴のすぐ側まで来た。そこでタンホイザーは遂に動いた。
「今だっ！」
「ムッ！」
ムラコシは彼の動きを見て思わず声をあげた。タンホイザーが動いたのであった。
跳んだ。それで鎌をかわした。一瞬でも遅れていればそれで真っ二つになるところであった。だが彼はそれをかわしてみせた。そして空中で一回転した。
態勢を立て直し、ムラコシの懐に飛び込む。それで剣を一閃させた。
「何のっ！」
だがそれは受け止められた。ムラコシはタンホイザーの稲妻の様な剣撃を刀で受け止めたのであった。
タンホイザーは着地した。それと同時に後ろに跳ねた。それでまた間合いを置いた。
「まさか跳んでかわすとはな」
「寸前までどうしようかと思っていた」
タンホイザーはそう答えた。
「また剣で払おうとも思ったがな。だがそれよりも効果的な方法を

選んだのだ」
「攻撃をかわしながら、私に攻撃を仕掛ける方法か」
「その通り」
彼はそう答えた。
「一瞬の判断だったがな。上手くはいったようだ」
「そうだな。どうやら貴官には気は通用しないようだな」
「今度はどうするつもりだ？」
「別の技を御見せしよう」
そう言いながら再び構えた。
「今度は神技だ」
「神技！？」
「この剣、よけられるかな」
ムラコシの全身を再び気が覆った。先程までのそれよりも遥かに強い。それはまるでこの巨艦を覆わんとする程であった。
「この気は」
「この技、人にはかわせん」
「神技だからか」
「それもある。しかし神とてかわせはできまい」
その技に絶対の自信があるようであった。それは言葉だけでなく気からもわかった。
「しれが貴官にかわせるかな」
「私は今まで数多くの戦いを経てきた」
タンホイザーも言った。
「だが、今まで敗れたことはない。一騎打ちでもだ」
「面白い、自信があるのだな」
「そうだ」
「ではかわしてみせよ。ヌンッ！」
気合を発しながら前に出て来た。そして突きを繰り出してきた。
「ムッ！」
それは一回ではなかった。タンホイザーがそれをかわすとすぐに

次のものが来た。だがタンホイザーはそれも何とかかわすことができた。
「何という速さだ」
目では見えなかった。気配でかわしていた。あやうく首をかすめるところであった。風圧が首筋を打った。それだけで血が滲んできた。

## 第十二部第二章　強襲その九

しかしそれで終わりではなかった。もう一回来た。タンホイザーの喉を寸分も違わず狙っている。まるで彼の動きを読んでいるようであった。

「チッ！」

それも何とかかわすことができた。寸前で横に身を捻った。稲妻が彼がその直前までいた場所を通り過ぎる。それでも攻撃は来た。

何と四回目だ。彼が身を捻ったそこに来た。流石に今度は駄目かと思われた。ムラコシもその目に勝利を見た。

タンホイザーの喉が貫かれる、そう思われた。だが刀は彼の喉を突き抜けていった。

「何とっ！？」

逆にタンホイザーの剣が彼を襲ってきた。攻撃に集中し、防御が遅れていたがかろうじて間に合った。突きを右にかわした。しかし左肩をかすった。

「クッ」

「驚いたな。まさか四段の攻撃とはな」

「かって三段突きという技があった」

ムラコシは左肩の傷を見ながら言った。

「常人の動きを超越した恐るべき技だったと言われている。これができた者は話によると一人だけだ」

「誰だ、それは」

「沖田。沖田総司という」

日本の幕末に活躍した若き剣客である。新撰組に入り、その重要なメンバーの一人として剣を振るった。彼の技はその当時から伝説的であり、この三段突きもまたその技の一つであった。若くして胸の病でこの世を去ったがそれでも剣の世界において今でも名が残っている存在であった。

「彼が編み出したとされる技だ」
「だが今のは四段だった」
「私はそれにさらに改良を加えたのだ。そして長い修業の末にこの技を編み出した」
「つまりその沖田という男を越えたわけだな」
「そこまではわからないがな」
その言葉にはあえて答えはしなかった。先人を尊重しているのであろうか。
「だが私の技が三段よりも上なのは事実だ。それをかわすとはな」
「危ないところだったがな」
「しかも見切りで。何時の間にそれを」
「先程卿に見せてもらったのでな」
「私に」
「そうだ。卿が見切りを使っただろう」
「一度見ただけで武道の極意を会得したというのか」
「少なくとも剣の戦いにおいては原理は同じだ」
タンホイザーはそう語った。
「だから私もその見切りとやらを使えたのだろう」
「成程な。そういうことか」
「それは卿も同じこと。私の技を使える筈だ」
「生憎剣と刀では技が違う」
彼はそう答えた。
「私は剣を持ったことはない。使えるかどうかはわからんな」
「そうか。ではそろそろ」
「うむ」
二人はまた構えた。
「決着をつけるとするか」
「のぞむところ」
再びその場を気迫が占領した。しかしそこに水が入った。

## 第十二部第二章　強襲その十

「司令！」
若い兵士がそこに駆けてきた。
「そこにおられたのですか」
「どうした」
死合は一時中断された。そしてタンホイザーはその兵士に顔を向けた。
「大変です、我が軍が大規模な攻勢を受けております」
「敵の援軍か！？」
「いえ、装甲車です」
「装甲車！？」
「はい。敵は艦内に装甲車を持って来ました。それにより我が軍は総崩れとなっております」
「まことか！？」
「はい」
兵士は答えた。これはタンホイザーですら予想し得なかったことであった。まさか艦内にそのようなものを持ち込んでくるとは。考えも及ばなかった。
「いや」
だが彼はここで考えた。今いる廊下を見回す。
「この広さならそれも可能か」
「どうしますか！？」
「損害はどれだけになっているか」
「装甲車から必死に逃れていますので。それでも三割近く」
「わかった」
彼はそれを聞いて頷いた。
「すぐにこの艦から撤退する。相手が装甲車では相手にならん」
「ハッ」

「そういうことだ。ムラコシ大佐よ」
今度はムラコシに顔を向けた。
「勝負はお預けだ。また会おう」
「うむ」
「それではな。ウィンザー中佐」
「はい」
ウィンザーにも声をかけた。
「行きましょう。これ以上ここにいても無駄な損害を出すだけです」
「わかりました」
「ふむ」
ムラコシはそれを見てあることに気付いた。元帥が中佐にわざわざ敬語を使っている。ラテン語であったがそれはよくわかった。それを見るとどうやらこの中佐はかなり身分の高い者だと思われた。
タンホイザー達はムラコシに剣や銃で一礼するとその場を後にした。ムラコシはそれに対して刀を収め、頭を下げて礼をした。剣道で古くから伝わる礼である。
「言ったか」
彼はタンホイザー達が姿を消したのを確認してそう呟いた。
「タンホイザー元帥か。指揮官としてだけでなく剣士、そして騎士として非常に素晴らしい人物のようだな」
敵であるが彼をけなすことはなかった。敵であろうとも強い者、優れた者は率直に褒める。それが武士であるからだ。
「また機会があれば手合わせしたいものだ」
そう言って笑った。
「その時こそ勝ちたいものだがな」
そしてエレベーターの中に入った。艦内で続いている戦闘の指揮に戻る為に。
タンホイザーはウィンザーとその若い兵士を連れて廊下を駆けていた。次第に銃撃の音が近くなっているのがわかる。
「これは我が軍のものではないな」

「残念ながら」
兵士はそう答えた。兵士の持つ銃にしてはやけに大きく、連続しているからだ。
「敵の装甲車のものです」
「だろうな」
彼はそれを聞いて頷いた。その間にも銃撃の音は激しくなってきていた。
「大丈夫でしょうか、我が軍は」
「中佐」
タンホイザーはそれを聞いてウィンザーに顔を向けた。
「大丈夫です。まだ我が軍の銃声も多いです」
「はい」
「今は彼等のもとへ合流しましょう。そしてこの艦から逃れるのです」
「わかりました。それでは」
「はい」
彼等は進んだ。そして前に敵軍を見た。そこに装甲車もいた。
装甲車だけではない。多くの兵士達もいた。五十人はいる。彼等はおそらく前にいるのであろうエウロパ軍の将兵達に休みなく攻撃を仕掛けていた。
「行け！そのまま押し切れ！」
指揮官と思われる男がそう指示を出していた。
「エウロパの貴族達を一人残らず倒してしまえ！特権に胡坐をかいているだけの連中に負ける筈がない！」
「言ってくれるな」
タンホイザーはそれを聞いて苦笑した。
「誤解してくれる。ここまで見事な誤解だとかえって笑ってしまう」
「そうですね」
それはウィンザーも同じであった。
「突破するぞ」

タンホイザーは一言そう言った。そして剣を抜く。
「見たところ数は少ない。抜けるのは簡単だ」
「本気ですか！？」
兵士はそれを聞いて驚きの声をあげた。
「敵は五十人程いますよ。それに装甲車まで」
「僅か五十人だ」
タンホイザーの答えはそれであった。
「それに彼等は今我々に気付いてはいない。大丈夫だ」
「しかし」
「私の後について来るだけでいい。道は私が開く」
「本気ですか！？」
「自分ができないことを言う趣味はない。私にはこれもあるからな」
剣を構えた。
「時間がない。行くぞ」
「あっ、司令」
タンホイザーは駆けだした。ウィンザーがそれに続く。兵士も止むを得なくそれに続いた。三人は一直線に連合軍の一団に向かって行った。
連合軍はタンホイザー達には気付いていなかった。そのまま目の前にいるエウロパ軍に対して容赦ない攻撃を仕掛け続けていた。
「やはり装甲車を持って来たのは大きいな」
「はい」
指揮官に対して副官と思われる男が頷いた。
「まさか艦内でこのようなものを使うとは思いませんでしたが」
「発想を変えたということか。船の中で装甲車を使ってはいけないということはない」
「ええ」
「だがこれ程までの効果があるとはな。敵は総崩れだ」
見れば装甲車の前に為す術もなく倒されていっている。機銃掃射の威力が凄まじく碌に対処もできないようであった。

「このまま押し切るぞ」
指揮官は言った。
「貴族達をミンチにしてしまえ」
「了解」
装甲車はそれに従い前に出ようとした。だがそこで最後尾の後ろの兵士の一人が驚きの声をあげた。
「分隊長！」
艦の人員の編成は艦長、そして副長を中心として行われる。各受け持ち部署ごとに分隊を置いているのだ。それぞれの最上級士官が分隊長を務める。かっての海軍の編成を踏襲しているのである。この指揮官もこの艦の何らかの部署の最上級士官であるらしい。
「どうした！？」
彼はその声を聞いて後ろを振り向いた。
「後ろから三人程来ます！」
「援軍なら聞いていないぞ」
「いえ、違いますあれは」
その兵士は後ろを見ながら言う。
「エウロパ軍です！」
「何っ！」
それを聞いた連合軍の将兵達の動きが止まった。そして一斉に後ろを振り返る。そこには赤と黒の疾風がいた。
タンホイザーは二人を引き連れそのまま駆けていた。立ち止まることはない。剣を構えて一直線に向かう。
「分隊長、どうしますか！？」
「敵は僅か三人だな」
「はい」
副官がそれに答えた。
「どうやらそのようですが。それに先頭の者は剣だけしか持っておりません」
「ううむ」

見ればその通りであった。軍服を着た男は剣を構えてこちらに突進して来る。
「ならば容易い。一斉射撃を」
「はい」
連合軍の将兵はそれに従いタンホイザー達に攻撃を仕掛けようとする。だがそれはできなかった。
タンホイザーはそのまま突っ込んできた。剣が銀色に輝く。そしてその目も爛々と光っていた。連合軍の将兵はその目を見て動きを止めてしまった。
「！！」
タンホイザーはそのまま来る。剣の光が強くなった。その光により道が開いた。

## 第十二部第二章　強襲その十一

連合軍の将兵達は気おされた。思わず左右に退いてしまったのだ。殺られる、そう感じたからだ。道を開けた彼等を見てもタンホイザーは動きを止めなかった。まるでモーゼの紅海を渡った時のように連合軍の将兵の間を駆け抜けた。後の二人もそれに続く。

装甲車に足を掛け跳んだ。驚くべきことに砲塔から顔を出していた兵士の頭上を跳んだ。

「ひいっ！」

兵士はそれを見て思わず身を隠してしまった。タンホイザーはそれに構わず着地して駆けていった。こうして自身の軍と合流を果たしたのであった。

「撤退するぞ」

部下達に対して言った。

「全軍な。もうやることはない」

「わかりました」

彼等はそれに従いその場を後にした。呆然とする連合軍の将兵を残して。

「何という男だ」

連合軍の将兵達はそれを見て呆然としたまま声を漏らした。

「まさか我々の中に突っ込んでくるとは」

「それも銃も持たずに」

信じられない光景であった。銃を持ち、完全武装する連合軍の将兵と装甲車の中に僅か三人で入ってきたのだ。彼等は気迫で道を開けさせ、突破した。まるで神話のような話であった。

この話は長い間両軍の将兵達によって言い伝えられた。タンホイザーの武勇を示す話として。彼の伝説は数多いがこのイーゴリにおける逸話はその中でも最も有名なものとなったのである。

「発艦！」

タンホイザーはグングニルに乗り、生存者が全て乗り込んだのを確認するとそう指示した。すぐにイーゴリから離れた。それに従う形で他のエウロパの艦も次々と敵艦から離れていく。すみやかに撤退をはじめた。
「逃がすな！」
シコースキーはそれを見て叫んだ。すぐさま追撃を指示する。
「左右の友軍に協力を要請しろ！」
「はい！」
「上下左右から取り囲んで殲滅する！一隻たりとも逃すな！」
「了解！」
それに従い連合軍の艦隊が動く。全速力で戦場を離脱しようとするタンホイザーの艦隊を追う。だが船足はエウロパ軍の方が速かった。そして撤退の際に工作をすることも忘れなかった。
「本来はあまりこうしたことは好きではないのだが」
タンホイザーはその際あまりいい顔をしなかったという。
「仕方ありませんよ。これもまた戦術です」
「うむ」
幕僚の一人にそう言われてもまだ顔は硬かったという。それは機雷を散布することであった。
エウロパ軍が機雷を撒いたのを見て連合軍の動きは止まった。彼等はそこを避け追撃を続けようとした。しかしエウロパ軍はそれより速く戦場を離脱した。彼等の機動力が勝った形となったのであった。
「足だけはかなわないな」
シコースキーはそれを見て忌々しげに呟いた。
「他のものでは勝ててもこれだけは無理か」
「仕方ありませんね」
ローレンガーも同じ気持ちであったが彼程感情を露わにはしていなかった。
「元々そういう設計なのですから」

「言ってもはじまらないということか。まあいい」
彼は頭を切り替えた。
「機雷を除去せよ。いいな」
「了解」
彼等は機雷除去に取り掛かった。エウロパ軍はその間に安全な場所まで撤退していた。こうして彼等の強襲は損害を出しながらも何とか成功したのであった。

# 第十二部第二章　強襲その十二

帰還したタンホイザーは歓呼の声で迎えられた。敗戦続きの彼等にとっては実に心地良い快挙であったからだ。彼のもとには早速マスコミが殺到した。敵の陣に突入し、その巨艦に切り込んで暴れ回った英雄として。注目を集める立場となっていた。

「あの巨大戦艦の中に侵入したそうですね」

「はい」

インタヴューするジャーナリストに対してそう答える。

「剣を振るって群がる敵兵を切って切って切りまくったとか。感服致しました」

「それはちょっと大袈裟ですけれどね」

苦笑したが今の発言は報道されないだろうと思った。こうした戦果はプロパガンダとして宣伝されるのが常だ。謙遜や事実はあまり考慮されない。誇張されるのが普通であるのだ。

「しかも敵の装甲車を一刀両断だとか」

「いえ、それはないです」

流石にそれは否定した。

「それはできないですよ。幾ら何でも」

「そうですか」

「ですからこれだけは報道しないで下さい。いいですね」

「わかりました」

だがこれも後に伝説となって一人歩きする。以後数百年に渡って彼は装甲車を叩き斬った男として言い伝えられることとなった。これもまた戦場の与太話であるがそうした話こそ残るのも事実である。理由は何故か。話として面白いからである。

「それでもう一つ御聞きしたいことがあるのですが」

「何でしょうか」

「連合のサムライと対峙されたとか」

「サムライ！？」
「武士のことですよ。かって日本にいた」
「ああ、彼のことですね」
そう言われると彼にも事情がわかった。
「連合軍のムラコシ大佐ですか」
「ムラコシ大佐というのですか、そのサムライは」
「はい」
彼は答えた。
「一体どのような人物でしたか。壮絶な一騎打ちを演じられたと聞いておりますが」
「あんな手強い男ははじめてでしたね」
真剣な目でそう答える。
「強かっただけではなかったです。人間的にも立派でした」
「人間的にもですか」
「はい。もう武士道は過去のものと思っていましたがね。しかしまだ残っていたのです」
「我々の騎士道と同じように」
「そうですね。騎士道とも似ています」
彼はそう答えた。
「ですがかなり違うようですね」
「そうなのですか」
「ええ。それに彼は剣を使いませんでした」
それについても言及した。
「細長い刀を使っていました」
「そうなのですか」
「それでも恐ろしい威力でしたね。こちらは逃れるだけで必死でした」
「閣下が」
インタヴューする記者はそれを聞いて驚きの声をあげた。タンホイザーはエウロパにおいてかなり名の知られた剣士でもあるからだ。

「はい。応戦するだけで精一杯でしたよ」
「けれど倒されたのですよね。だからここにおられる」
「いえ、引き分けでした」
彼はそれは否定した。
「倒すことなぞ到底できませんでした。正直あれ程の強さの男は倒すことはできません」
「はあ」
記者はまた驚きの声をあげた。
「閣下と互角の相手ですか」
おそらく報道の際には彼がその武士を圧倒して騎士道を見せて命を救ったということになるだろう。だがそこまで文句を言うつもりにはなれなかった。流石にじかに聞かれたら否定するつもりだが。
「恐ろしいサムライですね。けれど次に会われたら倒されますよね」
「勿論です」
他に言うべき言葉なぞなかった。
「今度こそあの男を倒して御覧に入れます。そして私はエウロパに勝利をもたらすでしょう」
「頼もしい御言葉です。期待していますよ」
「はい」
こうしたインタヴューが行われた。後にこれはタンホイザーの予想通りかなり誇張されて報道された。さながらスポーツの記事のようである。
「やはりな」
当の本人はその記事を基地のレストランで見て苦笑せざるを得なかった。
「派手に書いてくれる。私はこんなことは言っていないが」
何と百人の敵兵を切り伏せたとなっていた。しかも最後は横に真っ二つにして。彼はその際一度に三人斬ったと自分で言ったということになっていた。

## 第十二部第二章　強襲その十三

「幾ら何でも一度に三人も切れはしない。ましてや百人などと」
「それが戦争の報道ですよ」
「ん！？」
見ればそこにシリアーニがいた。
「シリアーニ中将」
「本日付でこちらに配属となりました。宜しくお願いします」
「そうか。卿もこの戦線に回されることとなったか」
彼等は顔見知りであった。以前同じ艦隊にいたことがあるのだ。
「ええ。艦隊はそちらではないですがね。宜しくお願いします」
そう言いながら隣の席に座った。従兵が引いた椅子に座る。
「そうか。宜しくな」
「こちらこそ」
二人は握手をした。それからまた話をした。
「私も経験があります」
「ニーベルングでの戦いか」
「そうです。何故か実際の十倍の戦果を挙げたことになっています」
「十倍か。それはまた派手だな」
「そういうものです、宣伝というのは。二十世紀、いやそれ以前から」
ナチス＝ドイツやソ連の宣伝は有名である。全体主義国家においてプロパガンダは極めて重要な意味を持っている。とりわけナチスのゲッペルスのそれはプロパガンダという意味においては白眉であった。彼はヒトラーの懐刀として辣腕を振るうだけでなく、そうした部分でもナチスを支えていたのだ。ヒトラーというある意味天才的な政治家、独裁者を支えていたのであった。
「重要なものですから」
「我々のような民主主義社会でもか」

「はい」
シリアーニは答えた。エウロパも普通選挙はある。平民出身の議員もいれば、総統が誕生したこともある。貴族は確かにいるが平民の権利も保障されているのである。
「連合でもそうではないでしょうか」
「そうなのか」
連合のことはよくわからない。それには首を傾げるしかなかった。
「だとすればこれについても色々と面白いだろうな」
「ええ」
彼は頷いた。
「もしかすると連合の方では閣下は戦死されていることになっているかもしれませんよ」
「ははは、それはいい」
彼はそれを聞いて笑った。
「では今度は幽霊騎士が連合の武士達の前に現われよう」
「それは面白いですね」
そんな話をしているうちに朝食となった。シリアーニのそれはクロワッサンとベーコンエッグ、そしてコーヒーであった。コーヒーにはクリームがたっぷりと入っている。
タンホイザーは黒パンにソーセージ、ホットミルクであった。
ホットミルクに口をつけた。温かさとまろやかな甘みが漂ってきた。
ホットミルクを飲み干すと仕事に戻った。金はミルクから目を離すとその日の新聞について言及した。
「宣伝もいいけれど」
「はい」
部下達がそれに応えた。
「少しやり過ぎじゃないかしら。幾ら何でもこれは有り得ないわ」
見ればそこにはムラコシについて書かれていた。刀を手に四十人のエウロパの兵士を切り伏せ、敵将タンホイザーと壮絶な一騎打ち

を演じたというのだ。
「日本の時代劇じゃないんだから。あれでもそこまではしていないわね」
「よく御存知ですね」
「子供の頃よく見たから」
彼女はそう答えた。金の国韓国では日本の番組が異様に多いのだ。日本の番組を見て、日本の歌を聴き、日本の服を着て、日本の流行を追う。韓国人にとっては長い間、もう一千年もそれがトップモードであった。彼等にとって日本は気になって仕方のない存在であるのだ。口を開けば追い越すだの乗り越えるだの言い批判ばかりするがそれでも彼等が日本に対して異様に関心があるのは事実であった。その為極めて異常な二国間関係だと連合でも有名であった。金も幼い頃から日本の番組はよく見ていたのだ。
「勧善懲悪ものだけれどね」
日本の時代劇や特撮ものの特徴であった。
「いつも同じパターンなのよ。決まった時間になると主役が悪役を成敗する。面白いわよ」
「所謂形式美というやつですね」
「ええ」
彼女は答えた。

## 第十二部第二章　強襲その十四

「それで観たのよ。刀で四十人も斬れないわ」
「それはドラマだからではないですか？」
「あら、実際にそうよ」
彼女は部下にもそう述べた。
「精々二人か三人だそうだわ。それも突くのよ」
「突く」
「突いてね、引き抜く。そうでないととても戦えないわ」
「案外日本の刀というものは使い勝手が悪いですね」
「斬れ味は物凄いけれどね。私も見せてもらったけれど」
「はあ」
「鉄でさえ斬るのよ。技術はかなり必要だけれど」
「何か日本のものはとんでもないものが多いですね。そんなものまで斬るなんて」
「そうね。だからこそ今も連合で大国にいる」
ホットミルクをお替りした。角砂糖を次々に入れる。十個程入れてかき混ぜる。ザラザラという音が聞こえてきた。もしそこに二日酔いや糖尿病の者がいたならば卒倒しそうなミルクになっていた。
「そうした底力があるので」
「左様ですか。そしてこの新聞ですが」
その新聞をもう一度見た。
「どうしましょうか。誇大な宣伝は慎むようクレームをつけましょうか」
「こちらでやると言論弾圧と言われかねないわね」
それは金が最も警戒することであった。下手にそうしたクレームをつければ批判の対象となる。それは避けたかったのだ。
「軍の方でそうした宣伝を止めてくれるようお願いしてくれたらいいのだけれどね。報道関係者に」

「軍がですか」
「だからこれは国防省の仕事になるわね。八条長官の」
「長官は今多忙で手が回らないのでは」
「そうも言っていられないのが長官なのよ」
金の言葉は厳しいものであった。
「だからここは八条長官にお願いするわ」
「わかりました。それでは」
「ええ」
こうした内務省の朝の打ち合わせの一つは終わった。続いて別の議題に移ったがそれは軍事とは関係のないものであった。
金から八条に話がいきそれで過大な宣伝は控えられる方針となった。ムラコシはそれを戦場において聞いていたが彼は思うところがあった。
「そんなものは元々不要です」
「どうしてかしら」
それにローレンガーが尋ねた。彼等は艦長室で今後の艦の運営について話をしていたのだ。その合間の話であった。
「軍の宣伝というのはそのままありのままをやればいいのです」
「それでは面白くないというのがマスコミ側の意見よ」
「それが駄目なのです。スポーツ新聞にしてもあまりに誇大な記事は目を疑い、失笑してしまいますね」
「私の祖国の新聞でも凄いのがあるけれどね。マタドールっていう新聞だけれど」
「確か宇宙人が出て来るのでしたね、一面に」
「他にもあるわよ。うちの長官が男色家で老人の家に入り浸りだとか」
「それは幾ら何でも嘘でしょう、長官にそうした噂があるのは知っていますが」
「美少年趣味だという設定になっていた時もあるわ」
「また凄いですね」

ムラコシはそれを聞いて絶句した。八条は確かにそうした噂もある。事実無根であるが。彼はスマートな美男子であり、気品のある容姿をしている。その為にそうした話も出るのだ。祖国日本ではどういうわけか彼をモデルにしたと思われる同性愛の漫画もある。美少年達と次々に愛を繰り広げていく美貌の貴公子の話だ。
「出まかせというのを遥かに越えた記事ばかりだけれどね」
「そこまでいくと笑い話ですね」
「それがウリなのよ。そうした新聞もあるの」
「そうなのですか」
「面白いのよ、実際に。けれど君はそうした新聞は好きじゃないのね」
「ただ事実だけを伝えればいいと思います」
率直にそう答えた。
「マスコミの役割というのは本来そうなのですから」
「そうはいかないのが現実だけれどね」
「しかしそれを目指さなくてはならないでしょう」
「厳しいわね」
そこまで聞いて苦笑した。
「君の記事もかなり凄いことになっているけれど」
「知っています」
内務省で話になっていた四十人なぞまだ甘い程であった。新聞によっては百人に達しているものもあったのだ。流石にタンホイザーを討ち取ったということにはなっていなかったが。
「私は今回一人も倒してはおりません」
「それは知ってるわ、皆」
「では何故」
「けれど一騎打ちだけじゃ面白くないでしょ。それでそう書かれるのよ」
「それですぐにクレームをつけたのですが」
「早いわね」

「本人が言うのが一番だと思いまして。それでやりました」
「それでどうなったのかしら」
「すぐに記事の誤りを訂正するとのことです。あちらも納得してくれました」
「質のいい会社だったみたいね、どこも」
「はい」
マスコミも悪質なものともなればそうした誇大記事どころか捏造記事を書いても平然と居直る場合がある。二十世紀に深刻な問題となったことの一つである。実は全体主義を支えた一つとしてマスコミが存在する。ある国の新聞社の社長なぞはまるで独裁国家の腐敗しきった独裁者だとまで言われていた程だったのだ。
「今後こうした記事が減ればいいのですが」
「長官次第ね。上手くやってくれると思うけれど」
八条は制服組からの評判はよかった。温厚で話のわかる長官と言われていた。これは背広組からもそうであるが。いい上司として知られていた。
「期待しますか」
「ああ」
彼等の声は八条も知っていた。すぐに対策が練られることになった。彼は仕事を新たに作ってそれに取り掛かった。
「さてと」
彼は会議室の机の前に広げられた新聞紙を前にして呟いた。
「これをどうするか、だな」
「そうした報道を自粛するようマスコミ各社に通達するべきですかね」
「それもな」
木口の言葉に首を捻った。
「弾圧だの言われかねない。だがあまり誇大な宣伝が好ましくないのも事実だ」
「はい」

「当の制服組からも言ってもらうか。我々からもお願いしたいということで」
「彼等が言うのが一番ですかね。当事者ですし」
「そうだな。ではバール本部長に伝えておこう」
「わかりました」
こうして方針はおおよそ決まった。制服組を中心とする形でマスコミ各社にそう願いが送られた。だがそっれでもネットの方はどうしようもなかった。しかしそちらは互いに検証され合っていたので大事にはならなかった。こうして誇大な宣伝は連合においてはかなり解消された。
戦いの宣伝も良し悪しであった。八条はそれを遅まきながら理解したと思った。戦いとは単に銃や補給だけでするものではないのだ。それは国家全体でするものである。そこには宣伝も含まれているのである。

# 第十二部第三章　様々な大地その一

様々な大地

連合軍とエウロパ軍の戦いには熾烈なものであった。だが連合軍の勢いは留まるところがなく、そのまま一直線に首都オリンポスに迫る勢いであった。その中でもう一つの戦争が行われていた。

連合軍の占領地はエウロパのそれのかなりの部分を占めるようになっていた。占領地の治安はおおむね良好であり、連合軍の軍律も厳しく守られていた。だがそこでもう一つの戦いが行われていたのである。

連合はエウロパの占領地に学者達を送り込んでいた。生物学者に地理学者等理系の学者達をである。彼等は彼等の戦いの為にそこに来ていたのだ。

動き易い服装の者達がエウロパのアトラス星系の第七惑星アトラスに来ていた。星系の名をそのまま冠していることからもわかるようにこの星系の最も重要な惑星であった。気候は温暖で人間の居住に適している。彼等は今そこにやって来ていたのだ。

「博士」

若い黒人の女性が中心にいる顔を髭で覆った肌の黒いアジア系の顔立ちの男に声をかけてきた。

「あちらにいるようです」

双眼鏡で遠くを見ながらそう述べる。見渡す限りの大平原がそこにあった。

「あそこか」

「はい」

その黒人の女性はそれに頷いた。そして遠くを指し示す。

「行ってみますか」

「行かなくてはならないだろう。彼等はいるのなら」

「わかりました。それでは」

「うむ、では皆行こう」
「はい」
他の者達はその髭の男に言われ側にあったジープにそれぞれ乗車した。車に乗り双眼鏡に映っていたその場所に向かったのであった。
そこもまた大平原であった。何処まで続くのか全くわからない程だ。彼等はそのど真ん中に立っていた。周りには馬達がいる。
「シマウマか？」
「エウロパにもいるんだな」
彼等はその馬達を見てそう言い合った。連合では多くの惑星にシマウマは存在する。草原にいることが多い。彼等は草原ではポピュラーな生き物の一つであった。
「後で食べるか」
「そうだな」
そして別の意味でも彼等を見ていた。連合においては馬も食べられる。シマウマとて例外ではない。脂身が少なく、栄養価の高い肉として人気があるのである。
「駝鳥もいるぞ」
「それも食っちまうか」
「そうするか」
駝鳥を見てもそう言い合った。連合においては養殖もされ、ふんだんに食べられている鳥の一つである。巨大な卵も人気がある。これで作ったオムレツもまた連合の多くの国で人気メニューとなっている。朝にケチャップ等をかけて食べるのである。
「とりあえずは食べ物には困りそうにないな」
「願ったりかなったりだ」
「食べることもいいがな」
彼等の話を聞いて髭の男が苦笑しながら彼等に声をかけてきた。
「我々の本来の仕事を忘れてはならないぞ」
「わかってますよ」
彼等はそれにはにこりと笑ってそう応えた。

「研究第一ですから」
「そうそう」
「わかってるならいいが。それではタウデニ君」
「はい」
その若い黒人女性の学者に声をかけてきた。
「あれだね」
「ええ、そうですリンゲル隊長」
タウデニはリンゲルが指差した方にいる生物を見て頷いた。そこにはライオンとアナグマを合わせたような外見のいささか変わった生物がいた。大きさは高さが大体一メートル程であった。
「あれです」
「あれか」
「リュークロコッタであると思われますが」
「ふむ」
リンゲルはそこに寝そべる生き物を見て首を傾げさせた。
「確かに見た目はそうだな」
「ですが確証はないと」
「それは今から調べよう。あれを持って来てくれ」
「はい」
それに従い一人の青年が麻酔銃を持って前に出て来た。赤い髪の灰藍色の目をした褐色の肌の青年であった。
彼は銃の狙いを定めると早速発砲した。そしてその獣を撃った。撃たれた獣はそこに倒れた。彼等はそれを確認するとその場に集まった。そして獣を調べはじめた。
まずは歯を見た。耳まで裂けた巨大な口に一つになった歯がそこにあった。他の動物のように分かれてはおらず、一つになっているのだ。まるで骨のようであった。
彼等はそれを見て互いに頷き合った。それを見て確信したのだ。
「間違いないな」
「ええ」

それでこの獣がどんな生物かわかった。リンゲルは言った。
「リュークロコッタだ」
「はい」
かっては伝説の生物とされていた。だが宇宙の他の惑星には存在していたのであった。彼等は今こうしてここにそのリュークロコッタをエウロパの異境にて発見していたのだ。
「ここにもいるとはな」
「流石に驚きましたね」
リュークロコッタは連合の星にもいる。だがエウロパにはいないと思われていたのだ。彼等はエウロパの各惑星のことはよく知らなかった。だからこそ今こうして調査を行っているのである。

## 第十二部第三章　様々な大地その二

彼等はそのままリュークロコッタを調べ、夕刻となるとテントを築いてその中に入った。テントは機械で作られるかなり大型なものでありまるでコテージのようであった。彼等はその中で捕らえたシマウマや駝鳥の肉を食べながら色々と話をしていた。

「美味いですね、このシマウマ」

「ああ、味はキロクスのそれと変わらないな」

彼等は連合にいるシマウマとも話をしていた。

「馬の味は同じか」

「駝鳥もよ」

タウデニが駝鳥の肉を食べながらそう言った。炙った骨付きの部分を噛み千切った。

「同じ味がするわよ」

「まあそれは当然だな」

リンゲルがそれに頷いた。彼は粥を食べていた。米に駝鳥の肉と卵を入れたものである。それをスプーンで口に入れていた。湯気が立ち、かなり熱いであろうが彼はそれを美味そうに食べていた。

「種類が全く同じなのだから」

「そういえば草も連合の多くの惑星のサバンナにあるのと同じようですね」

「そのようだな」

リンゲルはリュークロコッタを撃った赤髪の男の言葉にも頷いた。

「植物学者のチームからそれは聞いているよ」

「はい」

「それでは味が一緒なのも道理だ。食べているものが同じなのだからな」

「そうですね」

赤髪の男だけでなく他の者もそれに頷いた。

「ただ意外なのはエウロパにもこうした場所があるということですね。エウロパというと子供の頃は森ばかりだと思っていたのですが」
「それと凍てついたフィヨルド。まさかこんなサバンナがあるなんて」
「エウロパといっても色々あるものだ」
リンゲルの言葉は冷静であった。
「何もそうした場所だけがエウロパではない」
「そうですよね」
「何故そう思えたのだろう」
「それはエウロパに対する情報が少なかったからだ」
リンゲルの答えはそれであった。
「エウロパの」
「そうだ。君達はかって地球にあったヨーロッパのイメージで考えていたな」
「ええ、まあ」
「否定はしません」
彼等はそれぞれそう答えた。
「だからだ。連合といっても多くの惑星と気候があるな」
「はい」
「規模こそ違うがエウロパもそれは同じなのだ。彼等もまた多くの惑星を持っている」
「そして多くの気候を」
「そういうことになる。だからエウロパにも駝鳥やシマウマがいる」
「はい」
「リュークロコッタもな。それは覚えておいた方がいいな」
「わかりました。ただ一つ以外なことがあります」
「何だね」
彼はタウデニの言葉に顔を向けさせた。
「エウロパの人間はシマウマや駝鳥を食べないようなのですが」
「ほう」

彼はそれを聞いて眉を動かせた。
「それは知らなかったな」
「我々が食べると聞いてかなり驚いていましたよ」
「ワコイ君、そうなのか」
赤い髪の青年にも顔を向けさせた。
「はい」
ワコイと呼ばれたその青年は灰藍色の目を動かせてそう答えた。
「どうもエウロパではどの国も馬や駝鳥を食べないようなのです。食文化の違いで」
「そうなのか」
彼はそれを聞いて不思議そうな顔をした。
「残念だな。こんなに美味いのに」
「それでも嫌だそうですね。どういうわけかわかりませんが」
「元々ヨーロッパでは馬は食べられなかったですから」
タウデニがそう答えた。
「ましてや生の馬を刺身で食べるということは有り得ません」
「おい、あれは私だって苦手だよ」
リンゲルはそれを聞いて苦笑した。
「あんな料理があると聞いて最初は驚いたものだ」
馬刺しのことである。日本の料理の一つだ。生の馬の肉を刺身にし、醤油と生姜、若しくは大蒜で食べる。肉の味が濃くて美味いのである。
「まさか肉を生で食べるとは思わないからな」
「彼等は牛や鶏も生で食べますよ」
「ああ」
「山羊もね」
誰かが言った。これは沖縄の料理である。日本の兄弟国である琉球王国の名物料理の一つであるが日本でも食べられるのである。なお琉球では他には海蛇等も食べる。豚が最もポピュラーであるが。
「あげくの果てには豚まで」

「おいおい、それはないだろう」
メンバーの中の誰かがそれを聞いて言った。
「あんな傷み易いものを」
「いや、本当のことだ」
ワコイがそれに対してそう言った。
「見たよ、日本に行った時にな」
「そうなのか」
「他にも色々生で食べるぞ。日本人を甘く見てはいけない」
「ううむ」
豚の刺身の存在に疑問を呈した男は思わず唸ってしまった。
「そういえばピラルクやピラニアさえ生で食べると聞くが」
「ああ」
多くの惑星の熱帯にいる魚である。ピラルクは四メートルにも達し、ピラニアは小型ながら獰猛な肉食魚として知られている。いずれもかなり知られた魚である。
「養殖もしているぞ」
「八条長官もそれを食べるのかしら」
「それどころか刺身はあの人の大好物だ」
リンゲルがタウデニにそう答えた。
「他には寿司や天麩羅が好きらしいがな。全体的に和食が好きだそうだ」
「そうなんですか」
「あんな綺麗な顔をして生の肉や魚を。わからないわね」
タウデニとは別の女性のメンバーがそれを聞いて率直な感想を述べた。
「連合の中でもこうだな。やはり食文化の違いは歴然としている」
リンゲルはここで話をまとめるようにして言った。
「エウロパとでは尚更だ。取り立てて驚く程のものではないか」
「ですね」
皆それに頷いた。そして食事を終えると後片付けをし、それぞれ

の部屋に入って休んだ。タウデニは部屋のシャワーを使った後で私服に着替えてリビングに出た。赤いシャツに青いジーンズというラフな格好であった。それが彼女の黒い肌と琥珀の様な瞳によく合っていた。

リビングに行くとワコイがいた。彼は黒のティーシャツに同じ色のジーンズという組み合わせであった。くつろぎながら煙草を吸っていた。

「ここにいたの」

「おや」

彼はタウデニの声に気付き彼女の方に顔を向けた。

「どうしてここに？」

「気が向いてね」

彼女はそう答えた。

「部屋に篭ってノートパソコン打つだけっていうのも嫌だし」

「独身は寂しいね。彼氏はいないの？」

「別れたわ」

苦笑してそう答えた。

## 第十二部第三章　様々な大地その三

「赤茶色の髪のハンサムさんだったけれどね」
「そうなんだ」
「理由は彼の浮気。何でも私は気が強過ぎるって。気の弱そうな可愛い娘と付き合ってたわ」
「それで彼はどうしたの？」
「決まってるじゃない。ギッタンギッタンにしてやったわ」
長いウェーブがかかった髪を払いながらそう答えた。
「浮気は許すな、ってね。マリじゃ女にはそう教えられているの」
「あまりマリの女の人とは付き合いたくはないな、それを聞くと」
「あら、それは間違いよ」
笑いながらワコイの向かい側のソファーに向かった。そしてそこに座った。
「マリの女は情が深いわよ。それに美人も多いわ」
「そうなんだ」
「私のママなんて若い頃かなりもてたそうだから。パパが自慢していたわ」
彼女の父は中国系である。その彼が多くのライバル達を退け、そしてプロポーズして結ばれたのだという。彼女の母を手に入れる為に標高数千メートルの山をロッククライミングしたりまでして競争して勝ち取ったのだ。かなりワイルドな話として現地では残っている。
彼女の名はその父が名付けた。チェンカという名がそれである。彼女だけでなく彼女の二人の兄に三人の妹、そして一人の弟の名もまた中国系なのはその為であった。
「それを勝ち取ったって。ママはそんなパパを今でも愛しているわ」
「いい家庭だね」
彼はそれを聞いてそう応えた。

「俺はそういうのはないな。俺が小さい頃に親が離婚してね」
「あら」
「弟や妹はお袋に、俺は親父に引き取られてな。ずっと男手一つで荒っぽく育てられたよ」
屈託のない笑いを浮かべながらそう言った。
「喧嘩は勝つまでやれ、とかな。何が何でも負けるなって教えられたよ」
「厳しいのね」
「それがティモールの男だってな。国は小さくても心は強く、そして大きくあれっていつも言われたものさ」
「それで今があるのね」
「ああ。よく殴られたけれどな。今では感謝しているよ」
笑ったまま述べる。
「今の俺があるのは親父のおかげだからな。今では珍しい頑固親父だけれどな」
「そういう父親がいないわね、本当に」
「ティモールでもな。あんたの親父さんはどうなんだ？聞くだけだとかなり厳しそうだが」
「自分の奥さんや子供には凄く甘いのよ。もう舐める程に」
「そうなのか」
「猫を可愛がるようにね。だから私も甘やかされたわけ」
「まあそうだろうな」
彼はそれを聞いて頷いた。
「子供ってのは別に甘やかしていいさ」
「そうなの」
「俺もガキがいるがな。どうにも甘やかしちまう」
「あら、結婚していたのね」
「幼馴染みとな。腐れ縁ってやつさ」
笑いが苦笑いに変わった。
「結婚する前はスパゲティだったのが今じゃフェットチーネだ」

「あらあら」
「ガキもな。男の子だがもうまんまるだよ」
「子供さん幾つなの？」
「もう三才だ」
彼は答えた。
「写真もあるぜ。見るかい？」
「いえ、それはいいわ」
タウデニはそれは笑って断った。
「何か話が長くなりそうだから」
「わかってるのかよ。まあこうした話はな」
残念さを漂わせながら言う。
「長くなっちまう。仕方ねえさ」
「そういうものなの」
「あんたも結婚すればわかるんじゃないかな」
「そうかしら」
彼女はそれを聞いて首を傾げさせた。
「私はそうは思わないけれど」
「結婚する前は皆そう言うさ」
彼はそう答えた。
「結婚するとな、皆変わるんだよ」
「わからないわね」
「結婚すればいいさ。ただし俺は駄目だぜ」
「わかってるわよ」
苦笑してそう言った。
「もう結婚してるじゃない」
「生憎イスラム教徒でもないんでな。それは無理だ」
「思ったよりジョークが上手いわね。意外だわ」
「気分次第でな。言う時もあるさ」
煙草を灰皿の中で消しながらそう答えた。
「酒を飲むともっと言えるぜ」

「飲めるのね」
「ああ。今もウィスキーがあるけれど飲むかい？」
「私も持ってるわよ。ブランデーだけれど。飲む？」
「ああ」
彼はそれに頷いた。
「じゃあ飲むか。寝る前にな」
「ええ」
そんな話をしながら夜を過ごした。翌朝テントを機械で畳み、また調査をはじめた。そのままサバンナの調査を続けるのであった。
この星のサバンナは連合にあるサバンナとさして変わりはしなかった。調査は順調に進みデータも集められた。結果として彼等の調査は成功に終わった。
「ふむ」
リンゲルは宇宙船の中で自分のノートパソコンに入れられた資料を見ながら考えていた。
「どうかしましたか？」
そこにワコイがやってきて尋ねてきた。
「いやな、面白いことがわかってな」
「面白いこと」
「そうだ。エウロパのサバンナも連合のサバンナも全く変わりがなくてな。実に面白い」
「確かにそうですね」
ワコイもそれに頷いた。
「これは多くの星で見られることです。惑星の条件が同じならば自然もまた同じだということですね」
「少し考えれば自明の理なのだがな」
彼はそう答えた。
「それでもだ。エウロパと連合のサバンナが同じというのは面白い」
「生えている草まで同じですからね」
これは別の調査チームが行った調査によりわかったことであった。

彼等は生物だけでなく植物や地質まで調査していたのである。それはまた植物学者のチームがあり、半ば別個に調査、研究を行っていたが。地質も同様である。
「生物的にも植物的にも面白いことですね」
「そうだな」
リンゲルはまた頷いた。
「惑星と一つに言っても多くがあるがな。だが一つのモデルにはなる」
「はい」
「今後惑星の調査をするにあたって参考になるな。他の惑星に向かったチームの調査結果も楽しみだ」
「そうですね、吉報を待ちましょう」
「うむ」
彼等はそんな話をしながら連合へ帰って行った。そして調査結果は学会に発表され、政治家達の目にも届いた。それにとりわけ関心を示したのは保守派の領袖キリ＝ト＝マウイであった。

## 第十二部第三章　様々な大地その四

不思議な顔立ちをしている。白人とアボリジニーが混ざった顔をした美人である。黒がかった金髪をショートにし、黒い目を輝かせている。彼女は生粋のニュージーランド人であるがその容姿から彼女もまた連合独特の複数のルーツを持つ者であることがわかる。

彼女の父はアボリジニーである。ニュージーランドに古くからおり、今も残っているマオリ族の者である。そこの名家の出であり、広大な土地を持つ資産家として知られている。

母はイギリスにルーツを持つヨーロッパ系ニュージーランド人である。父の秘書を務めているうちに恋仲となり結婚したのだ。彼女はこの両親の六番目の子、五番目の娘として生まれたのである。

「私は次男だったのよ」

彼女はよく笑ってそんな話をした。両親はまずは男の子が生まれた。それから娘が続いた。いい加減娘ばかり続いてうんざりしてきたところに彼女が母親の中に宿ったのだ。父はそれを聞いてこう言ったという。

「今度こそ男の子だ！」

だが検査の結果違うことがわかった。またもや女の子だったのだ。彼はそれを聞いて大いに落胆したのである。

理由はあった。彼は本当に息子が欲しかった。それだけである。それだけでも重要なことであった。少なくとも彼にとってはそうであった。

「もう一人作ってバレーボールのチームでも作るか」

自嘲めかしてこう言ったこともある。とにかく落胆した。だがすぐに気を取り直しこう言い出した。

「今度生まれてきた娘は男のように育てるぞ」

こうして彼女は生まれてから暫くは本当に男のように育てられた。乗馬や陸上競技に精を出し、中学までは一見したら彼が女性出ると

は誰も思えなかった。背もあり常にズボンを履いていた為そう思われたのだ。
だがそれも終わる時が来た。ある日牧場で馬を駆っていた時に見た美しい顔立ちの少年を見た時に胸のときめきを感じたからであった。この時から彼女は女になった。
髪はショートのままであったが服装が変わった。それまでのジーンズからタートンチェックのスカートに変わった。そして女性らしい仕草をするようになりその少年の側に行った。彼女は告白したのだ。
一度は断られた。だが何度もアタックして遂に彼を射止めた。それからさらに女性らしくなり大学ではミスに選ばれる程にまでなった。政治家になってからも美人として知られ、二児の母としても有名である。夫は牧場を経営している。実家は兄が継いでいる。兄弟は兄と四人の姉、四人の弟達である。何と娘は彼女で打ち止めで後は男ばかりであった。両親は今度は娘が欲しくなったという。
その彼女は今自分のオフィスで資料に目を通していた。冷静な顔で見ている。
「成程ね」
学者達の調査結果を見て頷いている。どうやら思うところがあるようだ。
電話を手にとった。そしてかける。程なくして相手が出て来た。
「私だけれど」
「あ、これは総裁」
電話の向こうの男は彼女の声を聞いて挨拶をした。
「こんにちわ。お元気そうですね」
「おかげさまでね。ところでそちらにエウロパの各惑星の調査結果の資料はいっているかしら」
「エウロパのですか」
「そうよ。いっている？」
「ええ、勿論」

彼はそれに答えた。
「今現在占領している各惑星の。膨大な数ですね」
「そうね。けれど面白いことがわかったわ」
「面白いことですか」
奇しくもリンゲル達と同じような会話になっていた。
「連合とエウロパの多くの惑星が同じような気候条件なのよ」
「そのようですね」
「面白いことね。今後の参考になるわ」
「開拓のですか」
「ええ」
彼女は電話の向こうで頷いた。
「どちらにしろ開拓は今後も続けられるから。それはわかっているわね」
「はい」
保守派にとって開拓のさらなる促進は重要政策の一つであった。改革派がそれよりも内部の充実を優先させているのに対して彼等は開拓に重点を置いているのである。
「同時に今後の開拓予定惑星の資料も必要ね」
「そうですね。ではそちらの研究資料も集めますか」
「ええ。今日話がしたいけれどいいかしら」
「では事務所で向かわせてもらいます」
「事務所じゃ何ね」
だが彼女はそれにはいい顔をしなかった。
「党の本部で話をしましょう。いいわね」
「わかりました」
こうして彼女は保守派の本部に向かった。それは地球のオセアニア地区にある。キャンベラという古い都市にありそこに巨大なビルを構えていた。
そこに車を乗りつけ中に入った。挨拶を交わしながらエレベーターに向かい上へと上がる。そしてエレベーターを降りると赤紫の絨

毯を踏んで奥へと進む。党首の執務室に入りそこで秘書に対して声をかける。程なくして数人の男女が部屋に入って来た。
「御呼びですか」
「ええ」
彼女はそれに応えた。
「用件はわかっているわね」
「はい。開拓のことですね」
「そうよ。まずはそこに座って」
広く、豪華な装飾で飾られているオフィスのソファーに彼等を座らせた。見れば執務室はそれ程贅沢ではないが机やソファーは贅沢なものであった。何処かマオリ族のそれを思わせる。どうやら彼女が実家から取り寄せたものらしい。
「コーヒーがいいかしら。それともお茶が」
「お茶がいいです。麦茶を」
「わかったわ。じゃあお願いするわ」
「はい」
若い女性の事務員の一人がそれを受けて執務室の奥に入る。そして麦茶をコップに入れて持って来た。
「お待たせしました」
「有り難う」
彼女はお茶を受けて事務員に対して優しい笑みを向けた。実は彼女は穏やかな女性として知られている。論戦の際は一歩も退かず、粘り強いことで知られているが彼女自身は温厚なのである。
「麦茶に砂糖は入れてないでしょうね」
「それはないですよ」
事務員は笑ってそれを否定した。
「麦茶はそのままが一番美味しいですから」
「そうよね」
彼女もそれに同意した。
「それが普通なのよ、本当は。この前はえらいめに遭ったわ」

「内務省にでも行かれたのですか？」
「ええ」
目の前に座る男の一人にそう答えた。

## 第十二部第三章　様々な大地その五

「貴方飲み物に砂糖やシロップは入れるかしら」
「ほんの少しは」
彼はそう答えた。
「私はどちらかというと辛党なのであまり入れはしませんけれどね」
「まあそれは人それぞれね」
「はい」
「けれど麦茶にシロップをコップ一杯になるまで入れたりはしないわよね」
「勿論ですよ」
彼はそれを聞いて嫌そうな顔をした。
「幾ら何でもそれはやり過ぎでしょう」
「糖尿病になりますよ」
「そうよね。けれどあの人は平気だったのよ」
「あの人は特別ですよ」
別の男が言った。
「あれだけ甘いものを好まれる人はそうはいません」
「甘いものが好きでも言っていることとやっていることは祖国の料理と同じなのに」
金が韓国人であることを皮肉っているのだ。韓国料理は連合で最も辛い料理とされているのだ。その辛さはマウリアの料理を遥かに凌駕するとさえ言われている。
その韓国にいながら金の甘党ぶりは際立ったものであった。彼女は辛いものは苦手である。それがまた韓国人にしてみれば不自然といえば不自然であった。だが厳しさは連合でも屈指であった。潔癖症としても知られている。
「あの辛口ぶりは唐辛子とは違う気もするけれどね」
「といいますと」

皆マウイの言葉に顔を向けさせた。
「あれはドライアイスね。食べ物じゃないわ」
「ドライアイスですか」
「ええ。あそこまで冷徹だとね。けれど人間の心は通っている」
「はい」
彼等はそれに頷いた。
「そこが他の単に冷たいだけの人間とは違うわね。そうした意味で本当に凄い人だとは思うわ」
「そうですね」
それは彼等も知っていた。
「ただ彼女の相手は本当に疲れます」
「とにかく手強いですから」
「彼女については私がやるわ」
マウイがそれを引き受けるようなことを言った。
「多分私じゃないと相手にならないでしょうから」
「お願いできますか」
「ええ、任せて」
「内務省は今何かと五月蝿いですからね。お願いします」
今内務省は連合内の充実を目指している。新たな開拓地をあまり歓迎してはいないのである。これは今政権にある改革派の政策でもあり、開拓地を拡げるべきだとする保守派とは真っ向から対立していたのである。こうした開拓と内部充実に関する議論は連合設立以来のものであり、一千年の長きに渡って続いている。ある程度一定のサイクルで開拓と内部充実が変遷している。これは連合の歴史全体でそういう動きであったのだ。
「政党内での意見調整は済んでいるし」
「はい」
保守派の中でも今の時期の開拓に消極的な議員もいるのである。マウイはまず彼等の説得にあたった。外に向かって議論するよりもまず中を整えることが先決だからである。まずは彼等を説得して政

党内の意見を統一させたのである。これは彼女の卓越した政治力の一つのあらわれであった。
そしてそれから外に向けての議論に取り掛かった。彼等は今それに関して動いているのである。
「ランティール＝モハマドがまず出て来るでしょうね」
「そうね」
右端の男がそう言った。マウイもそれに頷いた。
「絶対に彼が出て来るでしょうね」
議会の改革派の領袖である。マウイにとっては最大のライバルでもあった。
「彼も私がやるわ」
「大丈夫ですか！？」
それを聞いて多くの者が驚きの声をあげた。
「金内相だけでも大変だというのに」
「任せておいて」
だがマウイはそう答えて笑った。
「私は彼についてはよく知っているから。長い付き合いだからね」
これは本当のことであった。彼女とモハマドは中央議会に入ったのは同じ選挙においてであった。そして彼等は常に違う立場にいて論戦を繰り広げてきた。雑誌やテレビにおいて激しい攻防を行ったことも二度や三度ではない。そうしたこともありマウイは彼のことをよく知っているのである。
「いえ、それはどうでしょうか」
「あら」
ここで一人の男が名乗り出てきた。見ればマウイの前にいる者の中では最も若い。四十代前半といったところか。黒い縮れた髪に丸い黄色い顔をしている。目はやや吊り上がり、切れ長だ。かなり肥満しているが筋肉はありまるで日本の力士のような体格をしている。彼の名はセチフ＝ハンニバル。保守派のホープとされている新進気鋭の政治家であった。行動力と鋭い論理性で知られている。祖国フ

ェニキアでは評判の人物であった。
「彼と戦いみたいね、ハンニバル君は」
「はい」
ハンニバルはそれに頷いた。
「是非共お願いできますか」
「勝てる自信はあるの？」
「勿論です」
彼は自信に満ちた笑みでそれに応えた。

## 第十二部第三章　様々な大地その六

「そうでなければどうして名乗りをあげましょうか」
「わかったわ。じゃあお願いするわね」
「はい、お任せ下さい」
「総裁」
だが一人の男がそれに疑問の声を呈した。保守派の幹事長アサド＝アッカラムである。黒い肌をした白人であった。茶色の髪も青い目も白人のものであったが肌は黒い。彼はアルム王国の出身である。古代に栄えたアルム人達の末裔が作り上げた国とされている。連合においてはアッシリア、フェニキア、このアルムといった古代の国や民族が復活したケースも多い。彼等は長い歴史の中に埋没してしまたっと言われていたがこうして復活してきたのであった。古代の神々が連合において復活したのと同じように。無論その血はかなり混血してしまっており、彼等が本当にアッシリアやフェニキアの者かどうかは甚だ疑問であるが。だが二十世紀のアメリカにおいてすらまだ三万人程のアッシリア人がいたのだ。そしてユダヤ人達は長い間己のアイディンティティを守ってきた。こうしたこともままあるのである。古代インカもまた連合では復活している。そうした多様性がまた連合そのものであった。
「今ハンニバル君をモハマド下院院内総務に向けるのはどうかと思いますが」
「どうしてかしら」
「確かにハンニバル君は優秀です。ですがまだ若い」
「若い、ね」
マウイはそれを聞いて眉を少し動かせた。彼女も政治家としては壮年といっていい歳であった。だがアッカラムはもう七十に達しようとしていた。政治家としては翳りが見えはじめる歳である。その彼から見れば確かにハンニバルは若いかもしれない。だがそれはマ

ウイも同じだからだ。
「ここで彼にもしものことがあれば将来に影響するのでは、と思うのですが」
「幹事長、御言葉ですが」
それを聞いたハンニバルが反撃に出た。
「私は彼に勝てる絶対の自信があります」
「絶対か」
「はい」
この時ハンニバルは若さ故であろうか。アッカラムの目の動きに気付いてはいなかった。
「一つ言っておくことがある」
「何でしょうか」
「政治の世界には絶対ということはない。よく覚えておきたまえ」
「では私が彼に敗れる可能性があるということですか」
「そうだ」
彼は断言した。
「そうなれば君の経歴にも傷がつく。それは進められん」
「幹事長、御言葉ですが」
彼はそれを聞いてさらに食い下がった。
「そのようなこと私は恐れてはいません」
「どうしてだね」
「正面から論戦を挑んで敗れたとしても本望だからです。それで経歴に傷がつくでしょうか」
「そうなれば君自身が後で苦しむだけだが。傷により」
実際に論戦で敗れた政治家は軽く見られるものだ。後々までそのことをネットやマスコミで愚痴愚痴と言われたりする。アッカラムはそれを心配しているのだ。
「それでもいいのか」
「傷も勲章のうちです」
しかしそれでも彼は引かなかった。

「正面からの傷は誇りとするのが私の考えです」
「誇りにか」
「はい」
彼は答えた。なおアッカラムは実務派とされ論戦はあまり得意ではない。今まで地味で堅実な仕事を着々とこなして今の地位に就いたのである。母国では地方の知事を務めていた。そこでその惑星の財政を建て直し、インフラの再整備をしたことが評価されている。そして中央政界に入ってからも細かい仕事をこなしてきた。保守派が政権に就いた時には環境相や開拓省にいた。そしてそこでも着々と仕事をしてきたのであった。だからハンニバルのように論戦で正面から挑むという姿勢はなかったのである。それよりも堅実な仕事であった。
「それもまた政治だと思いますが」
強い声でそう締め括りにかかった。
「一理はある」
アッカラムは一応はそれを認めはした。
「だがそれでも私はそれには賛成できない」
「どうしてですか」
「若い政治家はまだまだ育てなければならない。若いうちに傷をしてはいずれそれが古傷になり何かあると痛むようになる場合もある。私はそうして大きくなりそこねた政治家を多く知っている」
彼は年季からそう言っていた。
「君にもそれは言える。その覚悟はいいか」
「そうなったらそれまでのことです」
それでもハンニバルの鼻っ柱は折れはしなかった。
「こっちもそれは承知のうえです」
「強いな」
ここには皮肉も込められていた。だがハンニバルは意に介してはいない。

## 第十二部第三章　様々な大地その七

「当たって砕けろですよ、あくまで」
「わかったわ」
マウイはそれを聞いて頷いた。
「じゃあモハマド院内総務にはハンニバル君をあたらせるわ。いいわね」
「有り難うございます」
「総裁、それは」
ハンニバルはニヤリと不敵な笑みを浮かべた。それに対してアッカラムはその顔に狼狽の色を浮き上がらせた。
「あまりに危険なのでは」
「それは承知のうえよ」
そう答えて笑った。その顔は何故か日本の首相伊藤のそれに似ているように思えた。
「政治家はね、傷の一つや二つ恐れていては何もできないわ」
「その通りです」
ハンニバルは我が意を得たとばかりにそう言った。
「ではお任せ下さい」
「ええ。幹事長もそれでいいかしら」
「わかりました」
彼は憮然としながらもそれに賛成した。
「ただ、君だけにやってもらうのはどうかと思うわ」
「といいますと」
「貴女にもお願いしたいけれど。いいかしら」
マウイはここで前にいた一人の女に顔を向けた。そこにはアジア系の切れ長の緑の目に黒い髪を持った美しい女性がいた。無論彼女も保守派の者である。コヤル＝アトルという。
「私ですか」

「ええ。貴女もモハマド院内総務にあたって欲しいけれど。いいかしら」
「わかりました」
彼女は断ることもなくそれに頷いた。
「ではお願いですわね」
「はい」
「これでとりあえずは決まりね。今回のエウロパのデータは今後貴重なものになっていくわ」
「はい」
三人はそれに頷いた。
「開拓を進める為には色々と資料が必要」
「ですね。有効に使いましょう」
「ええ」
こうして執務室での話は終わった。三人は退き後にはマウイだけが残った。彼女は先程麦茶を入れてくれた事務員が部屋に入って来たのを確かめて声をかけてきた。
「さっきの麦茶のことだけれど」
「はい」
彼女はそれに応えて顔をマウイに向けてきた。
「美味しかったわ。いい入れ方をしたわね」
「有り難うございます」
「ただ、冷やし過ぎじゃなかったかしら」
「そうでしょうか」
「私はそう思うけれどね。まあこれは人それぞれね」
「はい」
「味やそうした感覚はね、本当に人によって違うわ」
「そうですね」
「それは政治にも言えるのよ」
そして政治についても言及した。
「人によって思想や政治についてのヴィジョンは異なるわ。それは

わかっているわね」
「はい」
彼女はそれに頷いた。
「これが難しいものでね。それをまとめて政治の意見に反映させて、それを政策に完成させる。そこまでしないと駄目なのよ、これが」
「それが政治ですね」
「そうね。保守派でも意見の食い違いはあるわね」
「はい」
「それをまとめるだけでも大変なのよ」
そう言って苦笑した。党首ともなればかなりの苦労が伴う。彼女は今それを実感しているのである。政党政治の難しさもまた味わっていた。
「面白いと言えば面白いけれどね」
「面白い、ですか」
「そうよ」
彼女は言った。
「まあわかってくると思うわ。ここにいるとね。貴女はここに入って何年かしら」
「二年になります」
素直にそう答えた。
「専門学校を出てアルバイトで入りまして。それからですから」
「そう、二年になるの」
それを聞いてマウイも頷いた。
「少しは政治のことがわかったかしら」
「いえ、まだです」
しかしそれには首を横に振った。
「事務員ですし。私がやっているのは書類のほんの些細なことだけですから」
「そうよね、そう言うと思ったわ」
これはマウイの予想範囲であった。

「政治ってのは深い世界なのよ。まあ二年でわかるっていう人は余程の自信家かよっぽどの馬鹿ね」
「はあ」
「二十年経ってもわからないことが多いわ。そして一つじゃない」
「一つじゃないんですか」
「人がいればね、それだけの政治があるのよ」
マウイは言った。
「それが政党政治なのよ。人の数だけ政治がある」
「政党だけじゃないんですね」
「政党にいるのは人間だからね。人間ってのはそれだけで一つの宇宙なの」
哲学的な意味も含んでいた。これは彼女独特の言葉であった。
「宇宙をまとめていくのよ。大変なのはわかるかしら」
「今一つピンと来ないですけれど」
「まあ勉強しなさい」
そしてこう声をかけた。
「そうしたら何時かわかるようになるから」
「はい」
こうして事務員との話も終わった。彼女は自分の仕事に戻りそれを着々と済ませていた。ある程度の事務処理能力も党首には必要なのである。さもないと他の者が困ってしまうのだ。

## 第十二部第三章　様々な大地その八

保守派がこうして改革派との論争に備えているその頃火星のレストランの一室で二人の男が食事を採っていた。一人は肌の浅黒い口髭の男、そしてもう一人は金髪碧眼の白人であった。だが鼻が白人にしてはやや低かった。それを見ると彼がアジア系の血も受け継いでいることがわかる。

口髭の男が中央議会の改革派下院院内総務であるランティール＝モハマドであり、向かいに座る白人もまた改革派の者であった。アントニオ＝ドミンゴ。ブラジル出身の下院議員であり改革派の重鎮の一人とされている。今まで多くの委員会の委員長を務め、改革派の政策の実現に尽力してきた。また策士としても知られており寝業師の異名もとっている。保守派にとっては難敵の一人であった。

彼等は個室にいた。個室といってもかなり高級なレストランなのか広い。そこでフォークやナイフを手にしながら食事を採っていた。無論食事だけではない。

「私のところに面白い話が入ってきました」

「何だね」

モハマドはナイフで肉を切りながらドミンゴに声を送った。

「今度の議会ですが」

「うむ」

「保守派はエウロパで収集した各惑星の調査結果を提出するつもりのようです」

「開拓地への参考の為だな」

「そのようで。そして自分達の開拓案を政府に提出するつもりのようです」

「今は開拓よりも優先させることがあると思うのだがな」

フォークで肉をとる。そしてそれを口に入れた後でそう言った。肉の味が口の中全体に広がる。羊の肉だ。

「どう思うかね」
「そうですね」
ドミンゴはワインのグラスを手にとった。そしてそれを口に寄せながらそれに応えた。
「私も総務と同じ考えだと思います」
「そうか」
モハマドはそれを聞いて頷いた。
「では今は開拓より今の領土の充実だな」
「それが賢明だと思います」
ワインを一口飲んだ後でそう言った。赤ワインである。肉には赤である。
「今はそちらに人や金を回せる国もあまりないでしょうしね」
「今行えるのは大国だけだ」
モハマドの口髭が微かに歪んだ。
「只でさえ彼等の専横に頭を悩まされているというのに。今の時点でこれ以上星や資源を与えるわけにはいかない」
「総務、御言葉ですが」
ドミンゴはそれを聞いて苦笑した。
「大国といってもそれぞれですよ。少なくともこの件に関して私の祖国は消極的です」
「そうだったな、済まない」
モハマドもそれを聞いて苦笑した。
「そういえば今はアメリカや中国は開拓を推し進めてはいないな」
「あれだけ広大な土地と豊富な資源を持っていれば当然と言えば当然ですが」
「それでもだ。あの貪欲な連中がな」
モハマドはマレーシア出身である。マレーシアはこの二国とはあまり仲が良くない。だからこそ必然的に彼等への視線も厳しいものになるのだ。
「ここぞとばかりに来るものだが、いつもは」

「彼等にも彼等の都合があるのでしょう」
ドミンゴはそう言って二国を庇う立場に立った。
「色々とね」
「まあ今は彼等の都合はいい」
ここでそこまで深入りするつもりはなかった。
「問題はだ。今回はどういうわけか日本がかなり乗り気だ」
「そうですね。それが意外です」
ドミンゴもそれに頷いた。
「普段はそれ程強硬なことも言わないのに」
「ましてや彼等の勢力圏も広い。そこにあるのも恵まれた星系ばかりだ」
「それでどうして今回は開拓に乗り気なのでしょうか」
日本の勢力圏は太陽系のすぐ側にある。かなり広い部分を割り当てられており、そこにある星系も資源においても自然においても恵まれた星系ばかりであった。宇宙進出の際の割り当てでえこひいきだという声すらあがった程である。これは中央政府に当時より忠実であったが為の御褒美のようなものであった。今も日本といえば中央政府に最も好意的な大国として知られている。
「わからん。彼等にも彼等の都合があるのだろうがな」
「他の大国は今回は何処も消極的なのが救いですね」
「だが日本に賛成している小国も多いぞ」
モハマドはそう言って苦い顔を作った。
「それが問題なのだ。彼等にとってみれば少しでも余裕があれば開拓を行いたいのだからな」
「ですね。難しい問題です」
そう言ってグラスを置いた。
「ただ、彼等も彼等でそうである国とそうでない国がありますね」
「そうだな」
「今回日本に賛成しているのはあまり多くはないようですけれど」
「ソロモンやツバルといｔった旧南洋の国々やガーナ等だな」

「はい」
「ただ、彼等が望むのは精々一個の星系程だ」
「ですね」
これは国家の規模からいっても当然のことであった。これ等の国々はそれ程国力も人口も高くはなく、それ程広大な場所を開拓する必要はないのである。
「しかし日本となると話が違う。規模もまた膨大なものになってくる」
「ええ」
「今回どうして彼等が開拓に躍起になっているのかはわからないが。何か理由があるのか」
「どうも資源の問題のようですね」
「資源」
モハマドはそれを聞いてフォークとナイフを止めた。

## 第十二部第三章　様々な大地その九

「彼等は資源には困っていない筈だが」
日本の勢力圏にある星系は何処も豊かな星系ばかりである。農産物も資源も何もかもが恵まれているのである。それが為に他の国々からやっかみを受ける程であった。
「何故ここで」
「レアメタルを欲しているようです」
「レアメタル」
「ええ。何でもニッケルやクロムを大量に埋蔵してある星系への開拓を考えているらしくて。それを他の国々への輸出に回そうと考えているようなのです」
「ふむ」
モハマドはそれを聞いて考え込んだ。
「鉱産物の輸出か。美味い話だな」
「日本にとっては。どう思われますか」
「彼等にとってはいい話だ。だがな」
彼はフォークとナイフの動きを再開させながら言った。
「それで市場が大幅に変わるかもしれないな。そこの規模はどの程度だ」
「ニッケルだけで日本が今保有している量の二倍だとか」
「二倍か」
「当然それだけではないです。他のレアメタルもかなりの埋蔵量だそうですが」
「まずいな」
彼はそれを聞いてこう呟いた。
「それだけの量のレアメタルが出ると相場に大きな影響が出る」
「止めますか」
「当然だ。だがあの女狐のことだ。替わりに何か要求してくるかも

な」
「それは有り得ますね、彼女なら」
二人は頷き合った。彼等も伊藤のことはよく知っている。中央政府にとっても議会にとっても多くの場合よい味方だがそれはあくまで日本の国益の関係でそうなっているだけである。敵に回すとどれだけ厄介な存在なのかは彼等もよくわかっていたことである。
「何を交換材料にしてくるだろうな、その場合は」
「わかりませんね」
ドミンゴはまたワインを口に含んだ。
「それを匂わせるようになるのはこちらとの交渉がはじまってからでしょう。若しかすると保守派ともう交渉を行っているかもしれないです」
「そうだな」
モハマドはそれに頷いた。
「それについての情報も収集しておいてくれ。そうなっていた場合厄介なことになる」
「わかりました」
「後は・・・・・・そうだな」
彼は考えながら述べた。
「保守派が今回の議会でこれを出してくるな。論争の用意もしなければ」
「私が出ましょうか」
ドミンゴはここで名乗り出た。彼は改革派においては論客として知られているのである。
「いや、それは待ってくれ」
しかしモハマドはそれを制止した。
「おそらく彼等は私を狙っている。まずは将の首だ」
「はあ」
「ここは私に任せてくれないか。何、勝てる自信はある」
「相手はマウイ自身が出て来るかもしれないですよ」

「いや、それはないな」
それは否定された。
「何故ですか」
「まずはあちらの若手を出してくるだろう。彼女が出るのはそれからだ」
「論戦の経験を積ませる為ですか」
「そうだな。それで私を退けられれば大きい」
この読みは当たっていた。保守派はそうした意味で読まれていた。
「まあそうさせるつもりはないがな。私に任せてくれ」
「わかりました。それでは」
「うむ」
話が終わるとデザートが運ばれてきた。緑色のアイスクリームであった。
「このアイスは」
「抹茶アイスでございます」
ウェイトレスがそれに答えた。
「日本で考え出されたデザートです。アイスに抹茶を入れたものです」
「また変わったものですね」
ドミンゴはそれを見て首を傾げさせた。
「御覧になられたことはないですが」
「話には聞いていましたがね。見たこともありますが」
彼はそう答えた。
「実際にこうして食べる為に目の前に出されたのははじめてです。私の国では日系人は多いですがこうした料理はあまり作られていませんでした」
ブラジルにはかって日本から多くの移民がやって来た過去がある。その名残で今でもブラジルでは日系人が多い。彼等は勤勉で誠実であり、評判がいい。
「そうなのか！？」

モハマドがそれを聞いて驚きの声をあげた。
「かなりポピュラーなデザートだと思うが」
「食べたことはないんですよ」
「美味いぞ、あの女狐も好きらしい」
「それを聞くと急に食欲がなくなりますね。あんなのが好きな食べ物だと」
「まあ敵の好きな食べ物を口にするのも一興だ」
「はあ」
「食べてみればいい。きっと好きになるぞ」
「わかりました。それでは」
「うむ」
ドミンゴは勧めに従い抹茶アイスを口にした。そしてすぐに驚いたような顔になった。
「どうだね」
「美味いですね」
彼は率直にそう答えた。
「抹茶の味がアイスによく合っています。意外です」
「そうだろう。私も最初この緑のアイスを見た時は驚いたものだ」
彼はそう答えた。
「また日本人が変な食べ物を作ったのか、と思ったよ」
「確かに」
ドミンゴは緑のアイスを見下ろしながらそれに応えた。
「一見するとそうですね、確かに」
「だがな、食べてみると美味い。本当に意外なことにな」
「そうですね。ただ、あの狐を攻略するのはこれでは無理でしょうね」
「どういうことだね」
「狐の好物は普通は鳥ですよね」
「ああ」
「しかし日本の狐だけは違いましたね。揚げです」

「揚げが何処にあるか見つけたのかね」
「はい」
彼は頷いた。
「日本については私が当たらせてもらって宜しいでしょうか」
「そうだな。ではそちらは頼む」
「わかりました。ただ」
「ただ。何だね」
「この抹茶アイスはいいですね。気に入りましたよ」
「そうだろう。一度覚えると忘れられないぞ」
「そう言うと麻薬のようですね」
「ははは、甘いものは麻薬だ」
モハマドはそれを聞いて大いに笑った。
「一度舌が覚えると忘れられないからな」
「はい」
こうして彼等は抹茶アイスを食べながら話を続けた。政治の話から食べ物の話に移ろうとしていた。彼等はそれを楽しみつつデザートを食べていた。

## 第十二部第三章　様々な大地その十

その揚げとは何か。伊藤のいる日本の首相官邸に一通のメールが届けられてきた。手紙ではなく電子メールであった。
「あら」
伊藤はそれを見て開封した。するとそこには日本の貿易収支と関係各国の経済に関する細かい資料が添えられていた。無論それだけではない。
日本に潜伏している各種産業スパイの名簿まであった。彼女はそれを見ながら考えに耽りはじめた。
「美味しそうな揚げね」
そしてこう呟いて笑った。自分が周りから何と仇名されているか認識したうえでの言葉であった。
「どうやらこれで今回は収めてくれ、ということかしら」
まだあった。各国への借款に関しての調停案だ。実は日本は多くの国に借款を行っているがそれへの支払いはあまり進んでいないのである。それへの調停案であった。
「しかもおまけつきで。これなら表でも裏でもおつりが来る、と」
悪い条件ではなかった。むしろ彼女が欲していたのはこれ等であった。それを見て会心の笑みを浮かべていた。そこに総理府の官僚がやって来た。
「何かしら」
「総理に御会いしたいという話が来ておりますが」
「私に」
「はい」
伊藤は受け答えをしながら誰からの話か悟っていた。
「誰からかしら」
「中央議会の方ですが。改革派のアッカラム幹事長です」
「アッカラム幹事長」

それを聞いて自分の予想が正しいということを確信した。しかしそれは心の中に留め、何も知らないふりをして話を続けることにした。芝居である。
「それで何時かしら」
「十七日です」
「十七日」
壁に懸けてあるカレンダーに目をやった。あくまで見るふりだけである。これもまた芝居だ。
「如何なさいますか」
「その日は無理のようね。忙しいわ」
「そうですか」
この官僚は実は伊藤のスケジュールを知っていた。その上でそれに合わせた。彼もまた伊藤がどういう考えなのかをその言葉から悟ったのである。
「わかりました。ではアッカラム幹事長にはそのようにお伝えします」
「お願いね。あと財務大臣と産業通産大臣、外務大臣そして開拓大臣を呼んできてくれるかしら」
「はい。それでは」
「お願いね」
こうして伊藤は早速手を打ってきた。日本は開拓を中止し、そのかわりに各国と日本が非常に有利な形で借款の調整を行った。これには中央政府の仲介があったが日本にとっては非常にいい形であった。そしてどういうわけか日本に赴任している外国のビジネスマンの多くが転勤となった。
「迂闊だったわね」
マウイは日本に関する一連の話を聞いてそう呻いた。
「まさか先に彼等が動いているなんて」
「伊藤首相に私がもう少し早く会談を申し出ていれば」
「幹事長のせいじゃないわ」

マウイは苦い顔をしているアッカラムをそう言って慰めた。
「彼等の動きが早過ぎたのよ。それにしても伊藤首相は流石ね」
「流石ですか」
「伊達に女狐と呼ばれていないわ。煮ても焼いても食えないとはこのことね」
「狐は食べても美味しくはありませんしな」
「あら、本来の幹事長に戻ったわね」
マウイは幹事長のそのジョークを聞いて笑った。
「日本はね、意外としたたかだから」
「表向きは柔弱ですが。いざという時は何をするかわかりませんね」
「そうね。腹芸は得意ね。おかげで今回も彼等にしてやられたわ」
「日本に賛同していた小国も日本が開拓を中止したと聞いてすぐにそれぞれの開拓案を廃案にしたそうです。そのかわりに別の経済政策の立案に取り掛かっているとか」
「早いわね」
「彼等も彼等で国がかかっておりますから。そこでも日本が動いているようです」
「また日本なのね。こうした時には動きがいいわね、本当に」
「狐ですからな。揚げに関することなら素早いようです。化けることもしますし」
「そういえば狐は旧アジア地域では変化することもできるって言われていたわね」
「はい」
アッカラムはマウイにそう答えた。
「人間と結婚したという話もありますよ」
「そうなの」
日本には陰陽道と言われるものが存在していた。長い歴史を誇り、今尚皇室の奥深くにおいて皇室の方々を御守りしているとさえ言われている。その詳しい実体は謎のままであるが平安期にはもう存在していた。式神という紙に魔術を入れて鳥や鬼にしたものを自在に

操り、占いも行う。平安期には安倍清明という伝説的な陰陽師が存在していた。彼の母は伝説では狐とされているのである。
「日本の歌舞伎でもそういう話があります」
「歌舞伎は見ないから知らなかったわ」
「あれはあれで癖がありますからな」
「オペラね、私は」
「はあ」
「日本のものなら相撲が好きだけれど」
そう言って笑った。歌舞伎においても安倍清明は題材に扱われていた。狐である母との別れの話である。葛の葉子別れという。歌舞伎ではかなり有名な作品である。二十世紀末から二十一世紀初頭に活躍した上方歌舞伎の名優坂田藤十郎もまたこの役を得意にしていたことで知られている。なお相撲もまた日本の伝統的な格闘技として有名である。裸の力士達が身体をぶつけ合って戦うのがいいという者もいる。
「私は雷丸が好きよ」
「雷丸ですか」
「ええ。グルジア出身のね。強いし格好いいし」
「確かに」
この雷丸は横綱である。圧倒的な強さで知られている。この時代ではどの国の者でも力士になれる。肌の黒い力士もいれば、青い目の力士もいるのである。ただし、髷は必須だ。
「また優勝したわね」
「ええ。五場所連続で。強いですね」
「政治も雷丸みたいにいきたいわね」
「強く、ですか」
「そうよ。確かに日本は押さえられたけれどまだ手はあるわ」
「予定通り行かれるおつもりですか」
「それが一番と思うのだけれど。どうかしら」
「ふむ」

アッカラムはそれを聞いて腕を組んだ。それから目を閉じて考え込んだ。
「ハンニバル君とアトル君をモハマド院内総務にあてて。どうかしら」
「二人だと大丈夫かも知れないですな」
彼は閉じた目を開けてそう答えた。
「ですが相手は手強い」
「けれど勝てれば大きいわよ」
「それはそうですが」
「正面からはそれでいくわ。けれど裏手は」
ここでくすりと笑った。
「わかってるわね」
「勿論です」
アッカラムもそれに合わせて笑った。
「政治だけでなく何事も表からだけではありませんから」
「そういうことね」
保守派もまた手を打ってきた。そして議会での戦いがはじまった。

## 第十二部第三章　様々な大地その十一

結果として双方の折衷案となった。モハマドとハンニバル、アトルの論戦はモハマド優勢ではあったが引き分けとなり、それは連合全土に伝わった。劣勢ながらもモハマド相手に善戦したハンニバル、そしてアトルの株が上がる形となった。保守派の開拓案も大幅な修正を余儀なくされたが、通ることは通った。そのかわりに改革派の案も通り、双方痛み分けと言ってもいい形となった。政治の世界においてはこうした妥協的な事柄もままあることであった。

「勝った、とは言い難いですね」

ドミンゴは今度は中華料理店にいた。そこでまたもや個室においてモハマドと話をしていた。どうやらこの二人は食べながら話をするのが好きらしい。

「まあこんなものだろうな」

モハマドは箸で麺を啜りながらそれに応えた。麺のスープはとろみがあり、具は海老や貝と野菜であった。海鮮麺であるらしい。

「政治において完全な勝利は難しいものだしな」

「それは私もわかりますよ」

ドミンゴは海老蒸し餃子を食べていた。見れば二人は麺と飲茶、そして炒飯を食べている。種類は実に多い。メニューを見ると広東料理らしい。中国においては大きく四つの料理の体系があると言われている。大体二十世紀に確立され、そこから発展したものだ。広東料理は海の幸をふんだんに使うことで知られている。中華料理の中でもとりわけ評価の高い料理である。かっては食は広東にあり、とまで言われていた。清の乾隆帝は度々広東に巡幸に言っていたがこれは単なる旅行ではなかった。広東の料理を楽しむ為であったのだ。中国において最後の専制君主であり、深い学識も併せ持った名君であったが同時に稀代の美食家でもあった。その彼ですら認めた

のが広東の料理であったのだ。
「伊達に長い間政治の世界におりませんから」
「それはわかっている。だからこそ頼りにしている」
モハマドは今度は酒を飲んだ。桂花陳酒である。白ワインに花びらを入れたものである。彼はムスリムである。だが酒も豚も食べる。連合では軍で食事を分ける等の配慮が為されているのは事実だがサハラとは違いこうしたところに特に五月蝿くはない。ただ事前にアッラーに謝らなくてはならないが。実際は軍でもこうして豚や酒を口に入れるケースが多かったりする。むしろ食の戒律は連合においてはユダヤ教徒の方が厳格である。
「今回も君のおかげだ。アッカラム幹事長の工作によく対処してくれた」
「あの人の工作はパターンがありまして」
今度は炒飯を食べていた。中には卵と海の幸がある。
「金をよく使うのですよね」
「常套手段だな、政治の」
「はい。ですからこちらはより多くの金を使いました。おかげでうちの金庫は空ですよ」
「大丈夫なのか？選挙等の資金は」
「ええ、まあ。調達先は確保していますから」
「ならいいがな。政治にはやはり資金が必要だ」
「そうですね。私もいつもスタッフへの給料にすら困っていますよ。何かと大変です」
「金に困っていない政治家なぞそうそういないだろうな」
モハマドの顔が苦くなった。揚げた後であんかけで味付けした鯉を食べながらも顔が苦くなった。彼にとっては鯉の味よりもそっちの方が味があったのだ。
「選挙だけではないしな」
「はい」
「保守派も同じだと思うが。アッカラム幹事長も思い切ったことを

する」
「それだけ向こうも必死なのでしょう」
ドミンゴも鯉を食べはじめた。地球の北米で採れた鯉である。
「これは戦争なのですから」
「そうだな」
モハマドは戦争という言葉に頷いた。
「銃弾は飛び交わないがな」
「そのかわりに言葉と金が飛び交います。戦争は武器だけを使ってするものではありませんから」
「うむ」
「政治の世界もまた戦場です。そうした意味で戦場は何処にでもありますね」
「ただ、実際に戦場で戦う軍人達のそれとは比較にならないがな」
「それはわかっております」
ドミンゴは真摯な顔で頷いた。
「戦死者とその遺族への救済も対策を講じなければなりませんね」
「それは保守派も賛成だしな」
「はい」
反対する理由もなかった。戦死者とその遺族への対処は国家として基本的なことであるからだ。ましてや連合は志願制である。それを万全にしておかなければ志願者が来ない。そして政府への批判へと直結する。支持しない政党に対してもである。軍人もまた職業の一つであり、連合市民であるから当然だ。なおこれには義勇軍の将兵達も含まれるのは言うまでもない。彼等も連合の市民権を持っているからである。
「今回の国会も色々と話すべきことは多いな」
「ですが落ち着いていきましょう」
「うむ」
彼等は麺も点心も食べ終え、デザートに取り掛かった。杏仁豆腐である。

「いつも思うのですがゼリーに似ていますね」
「味は全然違うがな」
モハマドは笑いながらそう言葉を返した。彼の笑顔が明るくなっていた。どうやら彼は杏仁豆腐が好きらしい。
「明日また話そう。他のメンバーも交えてな」
「はい」
「今度は・・・・・・。そうだな。お好み焼きでも食べながらな」
「わかりました」
次に食べるものまで決めていた。彼等は最後のデザートを食べながらも政治についての話を続けていた。連合の政治は美味な料理を食べながらも続けられていたのであった。

# 第十二部第四章　青い薔薇その一

青い薔薇

人の世とは全ての事柄が複雑に絡み合っている。何事も一つではないのだ。何もかもが絡み合い、そして影響し合っている。それは銀河に進出したこの時代においても同じであった。

連合とエウロパの戦いはサハラにおいても影響を与えていた。まずはティムールに対して。

戦局の悪化に伴いサハラ北方の総督府は放棄された。そしてそこにシャイターンは兵を進めた。空白地となったこの地域を占拠したのである。これによりサハラ北方は完全にティムールのものとなった。シャイターンはこの功績により英雄となったのであった。

サハラ北方を掌中に収めると彼は次に逃れていた移民達を呼び戻しにかかった。サハラは本来彼等のものであると宣言をしつつ。

「私は彼等の住むべき場所をエウロパの侵略者達から解放した！」

彼はそう宣言した。

「彼等は本来の場所に戻るべきである！そうではないのか！」

「その通りだ！」

サハラの者達は一斉にそう叫んだ。

「サハラは我等のもの！」

「アッラーを信じる者達のものだ！」

「そう、だが今まで異教徒達がそれを不法に占拠してきた。だがそれは終わった」

彼は言った。

「彼等に追い出された者は戻るべきである！彼等の家に！」

「家に！」

「難民として苦汁を舐めていた者達よ、戻るのだ！あの懐かしい家々が諸君等を待っているぞ！」

これはテレビやラジオ、ネット、新聞等を通じて伝えられた。当然難民達の耳にも入っていたし目にも映っていた。彼等はそれを見て当然のように心を動かされたのであった。
「どうする？」
彼等は各国に与えられた難民キャンプや粗末な家で話し合った。
「戻るか、俺達の家に」
「戻りたくないのか、御前は」
誰かが尋ねてきたその者に対して問うた。
「自分の家に」
「いや」
彼は首を横に振った。
「戻りたい」
「そうだろう、じゃあ答えはわかっているな」
「ああ」
彼は頷いた。
「戻ろう、俺達の家に」
「そしてかっての生活を取り戻そう」
シャイターンの呼び掛けはかなりの効果があった。ハサン、そしてオムダーマンにいた難民達は次々にサハラ北方に向かっていった。そして家に戻る。各種設備はエウロパがそのまま残しており、またシャイターンはそれへの復興、維持を行っていた。彼等はすぐに元の生活に戻ることができたのであった。
これによりティムールの人口は急激に増加した。何十億も一度に流入したのであるから当然であった。そしてそれに伴い軍備も急激に拡大されていこうとしていた。志願兵が殺到した為である。
「嬉しい悩みだな、これは」
シャイターンは志願者が殺到していることを聞いてそう呟いた。
「難民達が戻って来るだけでなく志願兵まで来るとは」
「艦艇の数が足りませんね」
「そちらは昨日命じておいた」

次弟であるフラームの言葉にそう応えた。
「大規模な建造をな。だが完成するのはまだまだ先だ」
「はい」
「国力の充実も同じだ。まだ先のことになるだろう」
「では今は彼等の生活の向上に努めるのですね」
「それしかあるまい。今は動けはしない」
「それを聞いて安心しました」
「フラーム」
シャイターンはここで弟の名を呼んだ。
「はい」
「私が今まで判断を誤ったことがあるか？」
「いえ」
今までの記憶においてそれはなかった。弟だからこそ最もよくわかることであった。
「それはありませんでした」
「そうだろう。では今もそうだ」
「ですね」
「我々が次に動くのはまだ先だ。国が大きくなってからだ」
「今ハサンとオムダーマンから難民達が次々も戻っています。それが国を大きくしております。ですが一つ気になることがあります」
「何だ」
「連合に行った難民達のことです」
フラームはそれに関して言及してきた。
「彼等の動きが今一つ鈍いようですが」
「連合に行った難民達はそれ程多くはなかったな」
「はい」
「だが中には連合軍に参加している者もいる。彼等のことを知るうえでも戻って来て欲しいものだが」
「ですが無理強いはできません」
「仕方ないことだ。無理強いをしては外交問題にもなる」

「そうですね」
「我々はそうした意味では待つ身だな。だが連合からも戻って来ていることは来ているのだろう」
「多くはありませんが」
「待とう。それしかない」
「わかりました」
フラームは頷いた。シャイターンはそれを確認すると席を立った。

## 第十二部第四章　青い薔薇その二

「少し休まないか」
「はい」
こうして二人はシャイターンの執務室を後にした。そして庭園に出た。そこでは満開の薔薇やチューリップが咲き誇っていた。その中には青い薔薇やチューリップもあった。かっては存在しなかった花達である。青い薔薇とは有り得ないことの例えともなっていた。だが長きに渡る品種改良により誕生した。その青い花々を二人は眺めていた。
「いい色だな」
「はい」
フラームは青い薔薇を眺めながらそれに頷いた。
「兄上は薔薇がお好きですね」
「薔薇だけではない、花は全て好きだ」
彼はそう答えた。
「青い花もな」
そう言いながら青い薔薇を一輪手にとった。そしてそれを胸に飾る。
「似合うか」
「はい」
シャイターンは今白い絹の服を着ていた。銀の豪奢な装飾まである。その胸に青い薔薇を飾る。それは実によく映えていた。青と白はよく合うのである。
「ならいい。どうも青い薔薇を飾るのには慣れていなくてな」
「よく似合っていますが」
「そうかな。今まで私は赤い薔薇を愛していた」
「そうでしたか！？」
フラームはそれを聞いて首を傾げさせた。

「白いものや黒いものもお好きだったと記憶しておりますが」
「好きなことは好きだ」
彼はそれを認めた。
「だが赤いものが最も好きだった」
「そうだったのですか」
「しかし青もいいものだな」
「はい」
「この薔薇はかってはこの世界に存在してはいなかった」
彼は語った。
「だが今こうして作り上げられた。思えば色々あったな」
「ええ」
神学論争まで起こった。アッラーの作りたもうたものでないものを作ってよいのかと。そしてそれは神に背く行為ではないのかと。かってキリスト教世界で起こったものと全く同じ論争が起こったのである。
「全てはアッラーが決められること」
誰かが言った。
「青い薔薇が実現したのならばそれがアッラーの御意志ではないのか」
それでおおよそは決まった。彼等はこうして青い薔薇を作り上げた。そして今シャイターンの胸にこの薔薇があった。彼は胸にある薔薇を誇らしげに弟に見せていた。
「国も同じだ」
「国も」
「そうだ」
彼は言った。
「最初から存在した国なぞない。日本やエチオピアの様な古い国もな」
エチオピアはソロモン王とシバの女王の間に生まれた者がそのはじまりだとされており、日本は高天原から降り立った神武帝がその

はじまりとされている。双方共伝説の話なので信憑性はない。それでも両国の皇室が気の遠くなる程長い歴史を歩んでいることは事実であるが。
「この薔薇と同じだ。私の言わんとしていることがわかるな」
「国を作られるのですね」
「そうだ、このサハラを一つにした国をな」
彼の笑みが変わった。
「アッラーはこの青い薔薇をお認めになられた。そして今まで国が興るのも認められた。ならば私が国を興すのも同じだと思わないか。それもアッラーの民を一つにすることだ」
「それはアッラーの思し召しに他なりません」
フラームもそれを認めた。
「シャイターン様のお役目はサハラを一つにすること」
「うむ」
「そしてムスリム達をかっての繁栄に導かれることです。かってのバグダットやイスタンプールの様な繁栄を」
「それは違うな」
かってイスラム世界において繁栄を極めた二つの都市の名を出されたが彼はそれを否定した。
「アッバース朝もオスマン＝トルコもイスラムを統一してはいなかった」
「あ、失礼」
アッバース朝には後ウマイヤ朝という宿敵がイベリア半島に存在していた。クーデターにより政権を奪取したアッバース朝であったがこの時ウマイア朝の者を一人取り逃がしてしまっていたのである。このウマイア朝最後の生き残りは物乞いにまで身をやつしながら逃げ延び、そしてイベリア半島において復活したのであった。まるで御伽噺のような話であったがアラビアン＝ナイトを生んだ世界だけはある夢の様な話であった。

## 第十二部第四章　青い薔薇その三

オスマン＝トルコの勢力圏は極盛期にはハンガリー、黒海沿岸、地中海南岸、バグダットまでを勢力圏に置いた強大な国家であった。皇帝直属の親衛隊であるイェニチェリを筆頭として武威を誇り、陸でも海でも敵はいなかった。ユーラシアの通商とナイル、チグリス＝ユーフラテスの二つの文明を生んだ河をその手の中に収め、繁栄を謳歌していた。だが彼等ですらイスラム世界を一つにはできなかった。東に宿敵ペルシアが控えていたのだ。

「それぞれ偉大な国家ではあったがな」

「そうですな」

「ハールーン＝アル＝ラシードはあまり大したことはなかったようだがスレイマン大帝は偉大だった」

アラビアン＝ナイトにも登場するハールーン＝アル＝ラシードはアラビアン＝ナイトにおいては偉大な王として書かれているが実際はそうではなかった。何かあると宰相ジャアファルに責任を被せようとした。これはアラビアン＝ナイトにもある。

彼には悪い癖があった。短気であり癇癪持ちで気に入らない者はすぐに打ち首とした。遂にはジャアファルまでそうなってしまった。失政が相次ぎ各地で反乱が起こった。だが勇敢ではあり、強敵ビザンツ帝国とも果敢に戦った。だから今でも人気は高い。

スレイマンの時代がオスマン＝トルコの黄金時代であった。彼はその帝王として君臨した。教養豊かで語学に長け、そのうえでさらに仁愛も持っていた。名君であると言えた。

「私はそれ以上の国家を築く」

シャイターンは宣言した。

「このサハラを一つにしてな」

「わかりました」

「その為にはフラームよ」

あらためて彼に顔を向けた。
「そなたの力を借りたい。よいな」
「御意」
彼は頷いた。それこそが彼の使命なのであるから。
「この青い薔薇をサハラにおいて咲かせる」
また言った。
「そしてアッラーの名の下サハラは一つになるのだ」
そう言い終えると立ち上がった。そして側にいた侍従に対して声をかける。
「ワインを」
「畏まりました」
すぐにワインが運ばれてきた。二つの銀の杯も。シャイターンはそれを確認してまた座した。
「面白いワインだな」
彼はボトルを見ながらそう述べた。
「青いワインか」
「デマーヴァント産です」
侍従がそう述べた。
「そこで品種改良された葡萄を使って作られたものです。デマーヴァントの名物です」
「確かあの星系は今までエウロパに占拠されていたな」
「はい」
「だがまた我々の手に戻った。そして今この青い酒をもたらしてくれた」
その青いワインが銀の杯に注がれる。銀と青が見事なコントラストを形作っていた。
「フラーム」
それが二つの杯に注がれるとシャイターンはフラームに声をかけた。
「そなたも飲むがいい」

「有り難き幸せ」
彼はそれを受けた。そしてシャイターンの向かいの席に座り、杯を手にした。彼はそれを口に含んだ。
「辛口ですね」
「そうだな」
シャイターンはニヤリと笑ってそれに応えた。
「青いワインには相応しい。そうは思わないか」
「はあ」
「青というのは不思議な色だ」
彼は言った。
「よくある色のようであまりない。あるのは空と海位か」
「花や生き物にはあまりありませんな」
「陸にはな。海はまた違うが」
その通りであった。青い花といっても実際は紫がかかっていたりする場合が多いのである。自然の世界においては純粋な青というのは少ないのだ。
「さっきも言ったが国も同じだ。一つになっている国というのは多いようで少ない」
「はい」
「それを為し得る者が少ないからだ。だからこそサハラは今まで乱れていた」
一千年の間戦乱が絶えることはなかった。サハラの歴史とはそのまま戦争の歴史であった。彼等は互いに覇を競い、争っていた。統一出来る者が現われたことはなかった。出来そうな者は何人か出たことはあったが結局はそれを為し得なかったのであった。
「だが私は違う」
その声が強くなった。
「私の手でサハラは一つになる。これは運命だ」
青いワインを口にする。口にまるで青い血が着いたように見えた。
「よいな。機が来ればまた動く」

「ハッ」
「アッラーの御意志のままに」
青い薔薇が庭に咲き誇っていた。それはまるでシャイターンを取り囲むようであった。海、いやそれよりも強かった。まるで青い炎のようであった。彼はその中で野心に満ちた笑みを浮かべていた。

## 第十二部第四章　青い薔薇その四

青い薔薇がマルヤムのもとに贈られて来た。シャイターンからのものであった。
「青い薔薇か」
それはアッディーンも見た。彼はそれを見て少し戸惑っているようであった。
「何かありまして？」
「いや」
彼は妻の問いにも返答に窮していた。
「また変わったものを贈ってくれたな、と思って」
「シャイターン家では薔薇が好まれていまして」
彼女は語った。
「青い薔薇も庭にありますの。中には青い薔薇だけで飾られた邸宅もあります」
「そうなのか」
彼はそれを聞いて意外といった顔をした。
「青い薔薇だけで」
「何かおかしな点でも？」
「いや」
言われてみると決しておかしくはない。青い薔薇が誕生してもう千年以上経つ。青い花自体が人工的に作られて多くの場所に咲き誇っている。自然の世界にはなくとも作ることは可能なのであった。
「決してそうではないが」
「そういえばオムダーマンには青い薔薇は少ないですね」
「そういえばそうだな」
言われてはじめて気付いた。オムダーマンでは青い薔薇はあることにはあるがポピュラーではない。国民にあまり好まれていないせいであろうか。

「私も実際にはあまり見たことはないな」
「私は今までそれが不思議でした」
マルヤムはそう述べた。
「何故この国には青い薔薇が少ないのだろうと。あんなに綺麗なのに」
「好みの問題があるからな」
アッディーンはそれに理由を求めることにした。
「貴女が好きでも他の者もまたそうであるとは限らない」
「はい」
「そういうことだと思う。青が好きな者もいればそうでない者もいる。そういうものだ」
「貴方はどうですか？」
「私！？」
ここで自分自身について問われまた戸惑ってしまった。
「私か」
「はい。貴方はどうなのでしょうか」
「青は好きだ」
彼はそう答えた。
「オムダーマンの軍服の色でもあるしな」
見ればこの薔薇はコバルト＝ブルーであった。オムダーマンの軍服と同じ色であった。
「親しみがある。私にとって青とはそういう意味で好きだ」
「そうなのですか」
「どちらかというと空かな、私にとっては」
「薔薇の青ではないのですね」
「残念ながら。少なくとも今まではな」
「わかりました。ではこれからはどうでしょうか」
「これからか」
彼はそれを聞いて考える目をした。
「これからはわからない」

「そうなのですか」
「私の考えが変わるかもしれないしな。先のことがわかるのはアッラーだけだ」
「はい」
「だがこの薔薇は気に入ったな」
「有り難うございます」
「後で造花にして飾っておきたい。いいかな」
「わかりました。それでは後で作っておきます」
「造花もできるのか？」
「ええ。ドライフラワーなら」
マルヤムは答えた。
「子供の頃からやっておりましたので」
「そうだったのか」
それを聞いてあらためて感心した。
「では宜しく頼む。いいかな」
「はい」
マルヤムは頷いた。
「では今日中に取り掛かりますので」
「ああ、頼む」
アッディーンはそれを認めた。こうして青い薔薇はドライフラワーとなることが決まった。アッディーンはそこであらためて腰を落ち着けた。
「最近お仕事の方はどうですか」
「これといって変わりはないな」
妻の問いにそう答えた。
「大きな戦争もないしな。だからといって気楽ではないが」
彼は副大統領であった。軍務全般を管轄している。従って軍のことは全て彼に責任があるのだ。それで気楽な筈もなかったのである。
「だが暫くはここに留まることができる」
「そうなのですか」

「アスランにな」
しかしこのアスランに関して一つの問題が起こっていた。首都としての位置である。
アスランはオムダーマンがサハラ西方にあった頃からの首都である。従ってサハラ西方にある。しかし今やオムダーマンはサハラ西方と南方を完全に掌握している。西方、しかも端の方にあるこの場所ではいささか不便ではないかという意見が出ているのである。
それはアッディーンも感じていた。彼は軍を率い、オムダーマンから出撃する立場であるから当然であった。彼はカッサラを拠点として戦っていた時実はアスランから出撃するより便がいいと思っていたのである。だからこそアスランの首都機能に限界を感じはじめていたのだ。

## 第十二部第四章　青い薔薇その五

しかし首都を移転するとなれば話は大きくなる。慎重に議論していかなければならない。だから彼は今は口を開かなかった。そして状況を見守っていた。

「また動くことになると思うが」

「はい」

それはマルヤムもわかっていることであった。

「留守は頼むぞ」

「留守を守るのは妻達の務めですから」

マルヤムもまたサハラの女である。彼女はその言葉に対して頷いた。

「お任せ下さい」

「わかった。ではその時は頼む」

「はい」

その件についての話が終わると今度は別の話になった。アッディーンは妻と他愛のない話に移った。こうして二人は夜を静かに過ごしたのであった。

青い薔薇はサハラにだけあるのではない。当然のように人類社会の至る場所に存在する。エウロパにもあれば連合にもある。そしてマウリアにも存在するのだ。

薔薇はマウリアにおいてはヴィシュヌの花とされている。三大神の一人であり調和を司る神である。彼はかってブラフマーと口論したことがある。どの花が最も美しいか、ということで。

ブラフマーは言った。

「蓮こそが最も美しい」

と。蓮は彼の花であった。だがヴィシュヌはそうではないと主張した。

「薔薇こそが最も美しい」

と。二人はかなり長い間議論をしていたがやがてそれぞれの花を見て結論を下すことにした。まずはブラフマーが自分の花を見せた。自身の宮殿にある池を見せたのであった。
「どうだい、この蓮は」
彼は誇らしげに蓮を見せた。そこには赤や白の無数の花々が咲き誇っていた。ブラフマーは得意になって胸を張った。これ以上のものはないという絶対の自信からであった。
だがヴィシュヌは落ち着いていた。彼はその蓮を見ても平然としていた。
「確かにこの蓮は美しい」
「そうだろう」
「だが私の薔薇の方が美しい」
「貴方はまだそれを認めないのか」
ブラフマーはそれを聞いて四つの顔を顰めさせた。
「強情を張るのは貴方らしくないぞ。シヴァでもそんなことはしない」
「ははは」
ヴィシュヌはここでシヴァの名が出たので思わず笑ってしまった。
「彼は確かに頑固なところがありますが強情ではありませんな」
「しかし今の貴方は強情だ」
一説にはこのブラフマー、ヴィシュヌ、シヴァは同一の神だとされている。彼等はそれぞれの役割に応じてその姿を変えているに過ぎないのだと。
「違うだろうか」
「私は自分を強情な者だと思ったことはないよ、友よ」
「ではそれだけ自信があるということだな」
「そうだ。では今度は私の宮殿に来てくれ。綺麗な花を見せてくれて有り難う」
「ああ」
こうして二人の神は今度はヴィシュヌの宮殿に向かった。目的は

決まっていた。ヴィシュヌの勧めるその花を見る為であった。彼は道中自信に満ちた笑みを浮かべ続けていた。
「これだ」
ヴィシュヌは宮殿の庭に着くと一本の木を指し示した。それは薔薇の木であった。
「これが」
見ればごく普通の木であった。棘がある以外は何の変わりもない、何処にでもあるような木であった。ブラフマーはそれを見て四つの顔を怪訝そうな顔に変えた。
「ヴィシュヌ」
「言いたいことはわかっているよ」
ヴィシュヌはそう言って笑った。
「だが少し待っていてくれ。貴方に見せたいのだから」
「私にか」
「そうだ。いいかな」
「わかった」
ブラフマーはそれに従い待った。すると香りが漂ってきた。芳しい、薔薇の香りであった。その香りを嗅ぐだけでブラフマーは不思議な気持ちになった。
「何と素晴らしい香りだ」
「香りだけではないよ」
恍惚とするブラフマーに対してにこりと微笑む。
「見るんだ、あれを」
また木を指し示した。
「じっくりと」
ブラフマーはそれに従う形で薔薇の木に注目した。すると蕾が次々に出て来た。様々な色をした蕾達であった。
それ等が徐々に咲く。そして夜空の月の様に白い薔薇や紅の薔薇が咲き誇った。木だけではなかった。庭全体が、二人の周りも薔薇達に囲まれていた。

「どうかな、薔薇は」
「素晴らしい」
ブラフマーは思わず感嘆の声を漏らした。
「この世で最も美しい」
「やっとわかってくれたか。薔薇の美しさが」
「ああ。蓮も綺麗だが薔薇はさらに綺麗だ。この世で最もな」
「これが薔薇の美しさだ。薔薇は一つの場所にだけ咲くのではないのだ」
ヴィシュヌは語った。
「この世のあらゆる場所に咲く。そしてその美しさと香りで世を覆うのだ」
「そうだな」
二人の神は何時までもその薔薇達を眺めていた。マウリアに伝わる薔薇の話である。
この話から薔薇がマウリアにおいても愛されていることがわかる。古い時代からマウリアにおいては重要な花の一つであったのだ。

## 第十二部第四章　青い薔薇その六

なお薔薇は食用としても知られている。古代ローマにおいては水や酒に薔薇の香りが入れられた。ネロは薔薇をこよなく愛し、常に薔薇を側に置いていた。そして薔薇のデザートを食べていたのだ。

今でも薔薇は食べられている。このマウリアにおいても同じだ。今クリシュナータの前に一つの紅い菓子が置かれていた。

「ふむ」

彼はその紅い菓子を見下ろしていた。小さく四角に切られている。それが数個皿の上にあった。

「また変わった菓子だね」

「ソアン＝パディですが」

給仕の一人がそれに答えた。

「召し上がられたことはある筈ですが」

ミルクと砂糖をふんだんに使った菓子である。マウリアにおいてはポピュラーな菓子の一つである。当然クリシュナータもマウリアの主席になってから食事の後のデザートとして何回か口にしている。

「確かにな」

そして彼はそれを認めた。

「だが紅いパディははじめてだ」

「薔薇を入れているそうです」

給仕はそう述べた。

「薔薇をか」

「はい。シェフが趣向を変えまして。それで薔薇を入れてみたようなのです」

「そうだったのか。それで」

彼はそれを聞いて納得した。

「紅いのか。成程な」

「赤薔薇を使ったそうですから」

「別に白薔薇でもよかったのではないのかね」
「それが趣向を変えたということらしいです」
給仕はそう答えた。
「パディは白いものですね」
「ああ」
ミルクを使っているからそれは当然であった。
「ですがこのパディはミルクを抑えまして」
「そのかわりに薔薇を使ったのだな」
「そういうことです」
給仕はそう言って頷いた。
「ミルクのそれとはまた違った、独特の味わいだそうです」
「美味しいのかね」
「シェフは胸を張っています。どうぞお召し上がり下さい」
「わかった。それでは」
彼はそれを受けてフォークを手に取った。そしてそれを口に含んだ。
「如何ですか」
「ふむ」
彼は噛み、味わい、喉の中に通した後で応えた。昔のマウリアならばこれで指の感触も味わうところであろう。かってのインドにおいては指で食べていた。そしてそこでも味わっていたのだ。
「美味しいな」
「左様ですか」
給仕はそれを聞いて満足した笑顔を浮かべた。彼はシェフとは個人的に親しい関係にある。だから友人が褒められたことは素直に嬉しいのである。
「ミルクだと何だ」
クリシュナータは言った。
「入れ過ぎると甘ったるくなってしまうな。だがこれは違う」
「はい」

「薔薇の味が支配している。その甘みも感じられるな」
「砂糖の甘みだけではなく」
「そうだ。そして薔薇の香りもする」
デザートは甘みだけではない。香りも必要なのだ。彼はそれがよくわかっていた。だからこそそれについても言及したのであった。
「非常にいい。合格だ」
「それを聞くとシェフも喜びましょう」
「ただ一つ気になることがあるな」
「それは」
給仕はそれを聞いて少し不安な顔になった。
「いや、このパディは紅い薔薇を使っているな」
「はい」
「だから紅い。だが他の薔薇を使ったらどうなるかな」
「そうですね」
彼はそれを受けて考え込んだ。
「当然黄色い薔薇ですと黄色く、白い薔薇ですと白くなります」
「面白いのは白い薔薇を使った場合だな」
クリシュナータはそれを聞いてそう述べた。
「それでは一見すればミルクを使った場合と変わりがないな」
「あっ、そうですね」
給仕はそれを聞いて顔を上げた。
「それはそれで面白いかも」
「一見すると見分けがつかない。食べてみないとわからないということだ」
後にここからマウリアであることわざが誕生する。
『ミルクのパディと白薔薇のパディを間違える者は嫁選びも間違える』
と。外見だけではわからないということである。
実際に作ってみて、本当にそうであった。だが味は全く異なる。だからこそことわざになったのだ。ミルクと薔薇では味も香りも異

なる。非常に印象的なことわざであった。
「今度は白薔薇のパディも食べてみたいな」
「はい」
「シェフに伝えてくれ。ミルクのパディと一緒に頼むと」
「わかりました」
食事の後のほんの一場面であったが、これでことわざが一つ誕生した。こうしたものは思わぬ場所で生まれたりするものである。
食事が済むとクリシュナータは執務に戻った。既に重要な情報が一つ彼のところに届いていた。
「ふむ」
見ればサハラに関することである。シャイターンの動きが水面下で活発化しているらしいとのことである。
「シャイターン主席がか」
彼はそれを見て呟いた。電子メールはマウリアの諜報部からのものであった。彼等はかなりの数の諜報員をサハラ各国に送り込んでいるのだ。当然内密に、であるが。
「まだ戦える時ではないと思うが」
それはシャイターン自身が最もよくわかっている筈だと思っていた。だがこの時に何故。クリシュナータは首を捻った。そしてテレビ電話のスイッチを入れた。それから諜報部に電話を入れた。

# 第十二部第四章　青い薔薇その七

「何でしょうか」
すぐに諜報部長のシータ＝サーガルが出て来た。マウリアの緑の軍服に身を包んだ妙齢の女性である。浅黒い肌に彫の深い顔立ちがよく似合っている。長い髪を後ろに束ねており、その細長い顔がさらに映えていた。階級は中将、マウリアの士官学校で最高峰と言われるクリシュナ士官学校を優秀な成績で卒業した才媛である。マウリア軍のホープの一人と言われている。仇名はドゥルガー。破壊神シヴァの妃パールヴァティーの化身の一つとも言われる十本の腕を持つ美しき戦いの女神である。彼女は聡明であり、美しいが戦場においては果敢な指揮で知られていた。諜報部においては冷静かつ慎重な部長として知られていた。そうしたことからこの気高き戦いの女神の名が冠されたのである。
「サーガル長官、今私にメールが届いたのだが」
「ティムールに関することですね」
「知っていたか」
「はい。私のところにも今サハラに潜伏させているスタッフから連絡がありました」
「同じ内容でだな」
「その通りです。主席からお電話があることは予想していました」
「それは何よりだ」
「これについて私見を述べさせてもらいたいのですが。宜しいでしょうか」
「是非共お願いしたい」
彼をそれを促した。
「君の考えを聞きたいと思い電話したのだからな。頼む」
「わかりました。それでは」
サーガルはそれを受けて話をはじめた。

「元々シャイターン主席は諜報活動を得意としております」
「うむ」
「平時においてもそれは変わりません」
「だが普段のそれより多いようだが」
クリシュナータはメールの報告文を見ながら言った。
「通常よりも二割も多いと書いているが」
「はい」
サーガルは頷いた。
「その通りです。これには秘密があると思います」
「どのようなだ？」
彼はまた問うた。
「どうやら何かしらの工作活動を考えているようなのです。通常の諜報員に混じってヒットマン等も見受けられます」
「ヒットマン」
それを聞いたクリシュナータの顔色が変わった。シャイターンの周りでは何かと不審なことが多い。彼と敵対する者や障壁になりそうな者は次々と原因不明の死を遂げたり、思いも寄らぬスキャンダルで失脚したりするのだ。中にはどういうわけかいきなり彼の軍門に下る者もいるのだ。クリシュナータはそういったことがある度にシャイターンの工作を疑う。工作の方法は色々とある。彼は相手によってそれを使い分けているのだろうと考えていた。
「またえらく物騒だな」
「当然出所の知れない金の動きも多々あります」
「そうか」
「中には地下組織に流入しているものもあるようです。それも犯罪組織に」
「元々彼はそうした組織とも縁が深いしな」
「はい」
今度はサーガルが頷いた。サハラの者が知るシャイターンはあくまで表の顔のシャイターンに過ぎない。クリシュナータが知るシャ

イターンには二つの顔がある。裏の顔も、である。
　裏のシャイターンは陰謀を好む。父の教団の力を背景に裏社会にも絶大な権力を持っているのだ。傭兵隊長であった時はここからも資金を得ていたという。どんな犯罪組織でも宗教の力に抵抗することは困難であった。日本ではヤクザはよく寺や神社に場所を提供してもらい、そこで賭場等を開いていた。サハラでは多くの国が賭博を特に取り締まっていない為そうしたことでの影響はないが教団が何かをする場合の斡旋等もしていた。中には宗教家を隠れ蓑としている者もいた。シャイターン家は実際に宗教家の家であるが代々裏社会と関係が深かった。そうでなければあれ程までの巨大な教団とはなれなかった。力とは表の力だけではないのである。
「彼等を使うことも慣れているか」
「問題はそれで何をするかですね」
「そこだ」
　クリシュナータは言った。
「私が聞きたい部分はそこだ」
「はい」
「長官はどう考えているか」
「要人暗殺ではないかと思われます」
「それか」
　ある程度予想していた答えであった。クリシュナータはそれを聞いて顔を引き締めさせた。
「誰だと思うか」
「オムダーマン、そしてハサンにそれぞれ多くの者が潜伏しております」
　サーガルはまた言った。
「両方で行う可能性もありますので」
「ハサンだと王族かその側近か」
「オムダーマンですと」
　そこでクリシュナータの脳裏にある者の顔が浮かんだ。

「まさか」
「いえ、それはないでしょう」
サーガルの脳裏にも浮かんだ。だが彼女はそれを否定した。
「彼は今や主席の血縁者ですから」
「それはどうかな」
だがクリシュナータはそれに疑問を述べた。
「歴史を見たまえ。血縁にある者達こそ危ないのだ」
「それはそうですが」
「中国の宋という帝国のことだが」
「はい」
彼は中国の歴史について言及してきた。
「二代皇帝である太宗は兄である太祖の後を継いで皇帝になった後兄のその息子達と自分の弟を殺しているな」
「そう言われていますね」
諸説ある。この三人についてはそれぞれ自殺、暗殺、怪死、衰弱死、様々な説があるのだ。だがいずれにしても不審な死であったことにはかわりはない。こうしたことはどの国でもある。
「それは肝に命じておけ」
「ではアッディーン副大統領も」
「可能性はある」
クリシュナータは言い切った。
「完全には否定はできないだろう」
「それはそうですが」
「だが・・・・・・否定したいようだな」
「はい」
サーガルはその言葉に頷いた。
「まさかと思いますから」
「妹の夫であっても不要となれば排除する。シャイターン主席はそうした人物だと私は見ている」
その言葉が辛辣なものに聞こえた。

「彼は冷徹だ。そして」
「そして現実主義者だ。極めて鋭利な、な」
「鋭利ですか」
「言葉を替えると低温の現実主義だ。氷の様な」
「またえらく難解な言葉に聞こえますが」
「彼にとっては道徳も倫理観も良心も関係ない。その目的の為ならばな。全てはアッラーの前に許されるのだ」
「神を利用しているのですか？」
「それもまた違う」
クリシュナータはそれも否定した。
「ムスリム達にとってアッラーは絶対の存在だな」
「はい」
それは知っていた。マウリアにもイスラム教徒は存在する。マウリアという国はヒンズー教が主流であるがその他にも多くの宗教が存在する。イスラム教もあればシーク教、ゾロアスター教、仏教、拝火教、キリスト教と実に多岐に渡る。だからこそ彼等はイスラムという宗教を知っているのだ。政治において宗教のことを配慮せずにはいられないからだ。宗教は人の心である。決して否定できないものの一つである。

## 第十二部第四章　青い薔薇その八

「アッラーはあくまで絶対、そして無謬の存在とされている。その意志によって全ての事柄が決められているのだ」
「天界に行くのも地獄に落ちるのも」
「そうだ」
彼は頷いた。
「プロテスタントだったか、キリスト教の」
彼は今度はキリスト教について言及しはじめた。
「予定説というものがあったな」
「カルヴァンでしたね、確か」
「ああ」
プロテスタントの創始者の一人である。新教を創始したのはドイツのルターであったがカルヴァンは彼よりもさらに過激であった。ルターは宗教的には極めて過激であり、当時あまりにも絶対的な権勢を誇っていたバチカン、そしてそれを支える神聖ローマ帝国、その皇帝家であるハプスブルク家を向こうに回しても臆することはなかったが、意外と世話焼きで人間味のある人物であった。修道院のシスター達の結婚相手を見つけるのに躍起になり、残った最後の一人と結婚したりしている。売れ残りは可哀想だからである。このシスターとの間にはかなり多くの子供がおり、子煩悩な父でもあった。
またビールの害毒について何時間も講義しながらその直後に美味そうにビールをゴクゴクと飲んでいた。堅物のイメージが強いがそれは宗教に関してのみであった。実際にはそうした人間としては柔らかさも持っていた人物であったのだ。
それに対してカルヴァンは過激そのものであった。禁欲的であり、スイスにて新教の教えに基づく半ば独裁的な都市を作り、そこで教えを広めていった。そこには一切の妥協がなかった。予定説はそうした彼ならではの説であったのだ。

『神に救われる者は既に定められている。神の力は絶対だ』
『人間の運命は神が全て決めている。それに対して何もできはしない』
そうした考えであった。では人は救われないのだろうか。カルヴァンはそうではない、と言った。
神から与えられた天職に励むのがいいと言ったのである。それに励めば天国に行けるだろう、と。それが運命であるならば。なおここで彼は商業を奨励した。働いて金を儲けるのはよいことだとしたのである。
実はこれはキリスト教社会においては画期的なことであった。キリスト教では金を貯め込むことを罪悪とする思想があったのである。富める者が天国に行くことは駱駝が針の穴を通るより難しい。
スコラ哲学を大成したトマス＝アクィナスは商業を罪悪視してはいなかった。生きる為に必要だからだ。彼はキリスト教においてその名を残す偉大な学者であったがその彼程でないとそう断言できなかった。それでも最低限の必要悪という考えが根底にはあった。カルヴァンはそれをよいことだと言ったのである。これは実に大きなことであった。
これを支持する者達が現われた。手工業者と商人達である。こうして彼の教えは広まっていったのであった。
「彼が言ったことはイスラム世界では常識だった」
「アッラーが絶対のものですから」
「そうだ。そこから言えることだが」
彼は言葉を続けた。
「人の行動はアッラーの前では些細なことなのだ。一人の悪事なぞアッラーにとっては些細なことだ」
「そういうものでしょうか」
「少なくとも我々が考えているものより罪悪に対する意識は変わっているな」
「はあ」

「そして悪人でもジハードに身を捧げれば許される。またアッラーの忠実な僕である限りはな」
「そういうものでしょうか」
「少なくともシャイターンはムスリムとしては立派だ。彼の信仰心の篤さは知っているな」
「はい」
「そして勇敢だ。彼はアッラーの戦士でもある。それだけで充分だろう」
「そういうものなのですか」
「我々とは考えが根底から違うということだ」
彼はそう言い切った。
「宗教が異なればな」
「そういうものなのですね、結局は」
「シャイターンという人物は二面性も強い」
今度は宗教ではなく、シャイターンそのものについて言及した。
「まるで神と悪魔が同居しているようだ」
「神と悪魔、ですか」
「そうだな。同時にかなり鋭い」
これは先程も言った。
「だからだ。何をしてもおかしくはない」
「目的の為には手段を選ばず、そしてそれを平然と正当化できる」
「そうだ」
「非常に厄介な人種ですね」
「だからこそ動きを注視しておいてくれ。いいな」
「わかりました」
サーガルは頷いた。だがまだ考える顔をしていた。
「ただ・・・・・・一つ気になることがあります」
「何だ？」
「そのシャイターン主席の密偵ですが」
「うむ」

「連合や我が国にも潜伏しているという情報も入っているのですが」
「何っ」
それを聞いたクリシュナータの顔色が一変した。
「それは本当か！？」
「はい。まだ未確認の段階ですが」
「そうか」
落ち着いてきたがそれでも表情は晴れなかった。
「まずいな、それが本当だと」
「如何為されますか」
「決まっている」
しかしその声は冷静なままであった。
「すぐに調査を開始してくれ。何かあってからでは遅い」
「わかりました」
サーガルは電話の向こうで敬礼してそれに応えた。

## 第十二部第四章　青い薔薇その九

「連合にも伝えますか」
「そこまではしなくていいだろう」
彼はそれには動こうとはしなかった。
「彼等は彼等でやるだろう。それに既に知っている可能性もある」
「知らなかったならば」
「それはそれだ」
それでも彼は動けとは言わなかった。
「他国の動きも掴めないような諜報部ではどのみち存在していても何の意味もない」
「そうですね」
それは諜報部長である彼女が最もよくわかっていることであった。敵の動きを掴めなくては何もできない。だからこそ諜報部は優秀でなければならないのだ。
「それに彼等もそこまで無能ではないだろう。安心していい」
「了解しました」
「だが問題は彼等が何をしようとしているかだ」
「ティムールの諜報員達がですか」
「そうだ。我がマウリアや連合にまで潜伏しているとなると」
「これはあくまで私の憶測ですが」
「うむ」
クリシュナータは彼女の言葉に耳を傾けさせた。
「今度の為に色々と内部を見ようとしているのではないでしょうか」
「内部を」
「はい。それが人を見ているのか、国を見ているのかまではまだ断定できませんが」
「味方になるか、敵になるか、かな」
「その可能性もあるでしょう」

彼女はその言葉に頷いた。
「今の時点ではまだ我々に暗殺やその他の工作をしてくるとは思えません」
「しかし泳がせておくわけにもいかない」
「それはわかっております」
「ならいい」
それは彼が望んでいた答えであった。
「頼むぞ」
「はい」
それで話は終わった。サーガルは姿を消した。そして後にはクリシュナータだけとなった。彼は真っ黒になったモニターの映像を見ながら考えていた。
「シャイターンという男」
ふと呟いた。
「やはり油断はできないか」
そう言い終えると仕事に戻った。仕事は山の様にある。それを一つずつ確実に処理していかなければならなかった。マウリア主席とは決して暇な仕事ではないのである。
すぐに別の者から電話がかかってきた。それに出る。そしてまた仕事に取り掛かる。こうして彼の一日は過ぎていた。仕事が彼を呼んでいるのであった。
諜報員の件がマウリアに漏れていることはシャイターンにも察知されていた。彼はそれを官邸においてティムール情報部長であるムアー＝ギルギット大将から受け取っていた。彼は鋭い黒い目をした美男子であった。年齢は三十代半ば程に見受けられる。
「そうか、マウリアに」
「既にマウリアの諜報員達は皆撤収させました」
彼は剣の様な鋭い声でそう述べた。
「早いな」
「危険が来る前にと思いまして。不都合でしょうか」

「いや、それでいい」
彼は執務室の机の上で少し動きながらそう応えた。
「どのみち情報収集だけだ。それならば別の手段を考えよう」
「わかりました」
「ダブルスパイを育成してはどうか」
「ダブルスパイですか」
「そうだ」
彼は言った。ダブルスパイとは敵国の諜報員やその他の有益と思われる人物を買収するなりしてこちら側の人間に引き込み、諜報員として活用することである。孫子にもある昔からよく使われているものである。
「どうだ、悪くはないと思うが」
「そうですね」
ギルギットはそれを聞いて考え込んだ。
「悪くはないと思いますが」
「あまり乗り気ではないようだな」
「リスクを考えますと。マウリアとの外交問題として表面化する危険性があります」
「それは承知のうえだが」
ダブルスパイは有効なものであるが問題もある。それは他国の人間を引き込むものであるから若しそれが公にされた場合その国との関係が決定的に悪化する怖れがあるのだ。
「これはと思う者のリストアップからやっていくか」
「慎重に、ですね」
「ああ」
シャイターンは頷いた。

## 第十二部第四章　青い薔薇その十

「高官や諜報員の中から先ず選んでいきたいのだが」
「やはり実行に移すおつもりですか」
「悪くはないと思うが」
あまり乗り気ではないギルギットに対してシャイターンは乗り気であった。彼はそうした方法を好む傾向がある。影の世界にあるとされるやり方にも抵抗はないのである。
「少なくともマウリアの高官や諜報員の情報収集にはなると思うが」
「それも兼ねるというわけですか」
「これでは悪い条件ではないだろう」
「わかりました。それでは」
「うむ。頼むぞ」
こうしてダブルスパイの選別が決定された。そして連合に対しても同じ方法が採られることになった。そして話はもう一つの工作の方に移った。
「先日オムダーマンに潜伏している諜報員から報告がありました」
「遂にか」
シャイターンはそれを受けて顔を上げた。
「そして何と」
「要人のスケジュール、そして住所や家族構成まで完全に掌握したとのことです」
「そうか」
それを聞いて笑った。悪魔的な、酷薄な笑みであった。
「それは何よりだ」
「後は閣下の御指示だけですが」
「それにはまだ早いな」
しかしシャイターンはここでは動こうとはしなかった。
「まだな。わかるな」

「はい」
「今は我々も動く時ではない。このまま諜報活動を続けよと言っておけ」
「わかりました」
「ハサンの方はどうか」
「そちらの方も抜かりはありません」
彼はそう答えた。
「既にオムダーマンと同じように」
「なおよし」
それを聞いて再び悪魔的な笑みを浮かべた。
「時が来れば指示を出す。それまでこれまで通りの活動をしておくように伝えよ」
「ハッ」
「これで次の行動への準備は全て終わったな」
「少なくとも裏においては」
「裏こそが肝心なのだ」
シャイターンはそう言い切った。
「裏こそがな。重要なのだ」
思わせぶりな言葉であった。少なくともアッディーンの様な人物ならば決して言わないような言葉であった。だからこそ印象に残る言葉であった。シャイターンだからこそ口にする言葉であると言えた。
「だからこそ今まで手を打ってきた。違うか」
「いえ」
ギルギットはそれを否定はしなかった。彼も情報部長である。それはわかっていた。
「だが今のところ裏はこれだけでいいな」
「表ですか」
「サハラ北方は完全に我が手に落ちたしな。これからが大変だ」
「また何か御考えでも」

「うむ」
シャイターンは再び悪魔的な笑みを浮かべた。
「首相を呼んでくれ。いいな」
「わかりました。それでは」
ギルギットはその場を後にした。そして次にティムール首相であるオサム＝ウーアンザが入って来た。頭の禿げ上がった小柄な老人である。シャイターンの周りにいる人物としては珍しく軍服ではなくスーツを身に纏っている。そのことからも彼が文官であることがわかる。
ティムールは武断政治と言ってもよく、軍部の発言力が強い。これは他ならぬシャイターン自身が戦争による勝利で今のティムールを作り上げたことも大きいがやはり今のサハラの情勢から見てもそれが妥当であるからだ。戦乱の地において軍が強くなるのは当然と言えた。だがそれでも文官が不要というわけではないのである。
武官と文官ではそれぞれ得意とする分野が違う。武官が不得手な分野においては文官が活躍するものだ。行政や経理等がそれである。そしてこのウーアンザはティムールにおける文官の頂点にあると言ってもよかった。ティムールにおいては主席の力が大きく半ば独裁的である。しかしそんな立場においても補佐する者は必要である。ウーアンザはシャイターンを行政の分野において補佐する者であった。
「御呼びでしょうか」
ウーアンザは一礼してからシャイターンに対して問うた。
「よく来てくれた、首相」
シャイターンはそれを受けてこう述べた。
「話というのは他でもない。旧総督府のことだ」
「既に各種インフラ等の復興等の手配、難民達の移住先の手配等は終わっておりますが」
彼は淡々とそう述べた。
「まだ何かおありでしょうか」

「総督府に仕えていた者達が残っているな」
「はい、僅かに」
彼は答えた。エウロパは北方各国を滅亡させた後はそこにいたサハラの者達を強制的に退去させてきた。だが僅かに残った者達もいた。そしてエウロパに仕えていた。サハラの者達にとっては裏切り者に他ならない。事実中にはエウロパに取り入る不心得者もいた。今彼等は戻って来た難民達や他のサハラの同胞達の批判の目に晒されているのである。
「彼等のことだが」
「如何為されますか」
「今彼等はサハラの者にとって共通の敵となっている」
「はい」
今までその役を担っていたエウロパは去った。ならばそれに媚びていたと思われる者達がその替わりになるのは自然と言えた。
「粛清しますか」
「いや、それは待て」
彼はそれを制止した。
「ですが主席」
「言いたいことはわかっている」
彼はそう答えて笑った。
「このままでは不穏分子を抱える可能性がある、だな」
「それだけではありません」
彼の危惧はそれだけではなかった。
「放置していてはティムール、そして閣下にも悪影響が出ますが」
「私にか」
「はい。何故裏切り者を放っておくのかと。ここは断固たる処置を執られるべきだと思います」
「それはどうかな」
しかし彼はそれでも首を縦には振らなかった。
「彼等にも彼等の止むを得ない事情があったのではないのか。それ

ぞれに」
「ですがだからといって裏切りを許してはなりません」
「アッラーがお許しになられてもか」
「それは」
その名を出されると返答に窮してしまった。彼もムスリムだからである。
「私の口からは何とも」
「アッラーは寛容であれと言われた。それだけ言えばわかるな」
「ですが主席」
「首相、もう一つ言いたいことがある」
シャイターンはまだ何か言おうとするウーアンザを制するようにしてそう言った。
「？何でしょうか」
「彼等を許した場合彼等はどうした行動に出るかな」
「それはある程度予想できます」
彼は視線を上にして考えながら述べた。
「おそらく主席に感謝することでしょう」
「それだけかな」
「無論それだけではありません。主席の為によく働き、そして戦場にも喜んで馳せ参じることでしょう。・・・・・・成程」
そこまで言ってようやく合点した。
「そういうことですか」
「そうだ。わかったようだな」
「では主席は彼等を今後のティムールの力として使われるおつもりなのですね」
「その通りだ。そしてサハラにヒビを入れてはならない」
「ヒビと言いますと」
「彼等を処罰したならばどうなる。陰惨な事態が予想されるな」
「はい」
裏切り者への制裁は陰惨なものとなるのが歴史の常である。かっ

てフランスが第二次世界大戦において緒戦でドイツに敗北しビジー政権が誕生した。これは実質的にナチス＝ドイツの傀儡政権であった。戦局の推移によりフランスが連合国の手に落ちるとこのビジー政権の者達やナチスの協力者達はフランス国民、ナチスに反対していた者達により過酷な処罰と迫害を受けた。それは今ではやり過ぎだという批判が多い。彼等の中には止むに止まれずそうした者達も多かったのであるからだ。人にはそれぞれの事情がある。それを忘れてはならない。

「ただ、私利私欲の為に協力していた者達は別だがな」

「はい」

「そうした輩には厳密な取調べを行った後で処罰せよ。国外追放だ」

「わかりました」

「だが止むを得ない者は許す。よいな」

「はい」

「彼等にはこれから思う存分働いてもらうことになるからな」

「わかりました。それではその様に配慮致します」

「議会にも伝えておいてくれ」

「はい」

ウーアンザはまた頷いた。ティムールにも議会は存在する。政党も複数存在する。だがシャイターンはそれに超越する存在としてティムールにあった。彼は立法、行政、司法の全権を握り、文武両官を完全に掌握していた。内閣は彼が指名した閣僚により組閣されていた。そうした意味で彼はティムールの独裁者であったのだ。

「内閣にもな。わかったな」

「わかりました。それでは」

「うむ」

こうしてエウロパへの協力者への対処が決定した。これは後にシャイターンの寛大さと政治能力の高さの証しの一つとして歴史に残ることとなった。彼は軍事だけでなく政治においても優れていたのであった。

今はサハラの歴史の動きはたゆやかなものであった。だが確実に動いていた。急激な流れに向けて。今はそのほんの休息の時に過ぎなかったのであった。

# 第十二部第五章　憂いの雨その一

憂いの雨

連合軍はアルテミスに基地を置くとそこを中心に戦力の補充に務めていた。この場合は戦力とは補給物資であった。彼等はここに集結し、そしてエウロパにおける決戦に備えていた。その中心にはマクレーンと劉がいた。

「いよいよですな」

「はい」

彼等はブレスの会議室にいた。そして話をしていた。

「エウロパ側も全戦力を投入して来るでしょう」

「既に首都防衛軍が出撃したとの報告がありました」

「そうですか」

マクレーンはそれを聞いて頷いた。

「遂に」

「驚かれることはないと思いますが」

しかし劉は冷静であった。

「予想されたことでしょう」

「ええ、まあ」

マクレーンはそれに応えてまた首をこくり、と動かした。

「実際はそうですが」

「では何故驚かれたのですか？」

「いや、実は驚いたのではないです」

「では何故」

「いえ、この時が来たのだと思いまして。エウロパとの最後の戦いの時が」

「はじまりがあれば必ず終わりがあるもの」

劉はまた冷静な声でそう述べた。

「ならば最後が来るのも道理ではないですかな」

「まあそうなりますが」
「既に二千個艦隊がこのアルテミス周辺に集結しております」
劉の声は淡々とさえしていた。
「その全ての補給が整えば作戦開始です」
「ハンニバル作戦の最終段階ですね」
「はい。これでエウロパは終わりです」
言葉を続けた。
「チェック＝メイト。詰みです」
「わかりました」
二人は向かい合って笑った。彼等はその目に勝利を見据えていた。

連合軍の主力が異郷の奥深くにおいて最後の戦いに備えている時地球においては八条とバールが色々と打ち合わせを行っていた。
「先程マクレーン長官と劉参謀総長から連絡がありました」
「何と言っておられますか」
八条はバールに対して問うた。
「今現在アルテミス星系において補給を実施中。順調だそうです」
「それは何よりです」
彼はそれを聞いて微笑んだ。
「決戦の時は近付いていますね」
「はい」
バールはその言葉に頷いた。
「できればそれに参加したかったのですが。残念ですね」
「仕方ありませんね」
八条は少し口惜しそうなバールに対してそう声をかけた。統合作戦本部長は制服組のトップである。流石にそうした立場であると戦場に立つことはできない。後方において軍全体を監視、統率せねばならないからだ。
「ですが仕事は山の様にありますよ」
「私にとってはそちらが戦場ですね」

「それは私も同じことです」
「お互い辛いですね」
「まあ好きでやっている仕事ですから。そうも言えないでしょう」
「まあ確かに」
「本部長は志願されて軍に入られたのでしたね」
「はい」
彼は率直な声で答えた。
「もう三十年以上経ちますね、入隊してから」
「その間艦隊や陸上部隊での勤務が長かったのですか？」
「はい」
彼はそれに頷いた。
「モンゴル軍ではずっと艦隊勤務でした。艦長を務めていたこともあります」
「そうなのですか」
「これは血なのでしょうかね」
そしてこう言いながら笑った。
「血！？」
「はい、モンゴル民族のね」
その笑みが屈託のないものとなっていた。まるで少年の様な笑みであった。

## 第十二部第五章　憂いの雨その二

「我がモンゴル民族はかって馬を自在に操っていました」
「はい」
これは宇宙に出てからも変わらない。彼等は草原の多い星を好む。そしてそこでパオを作り、羊を追う生活を送るのだ。それが彼等の理想の生活であったのだ。
「モンゴル民族は草原で生き、草原に死す」
「我等は馬なくして生きてはいられない。馬は身体の一部だ」
今でもそう言われている。彼等にとって草原の生活程素晴らしいものはないのだ。
「私も。生まれた頃から馬に乗っていました」
「生まれた頃からですか」
「長官も乗馬はされますね」
「はい」
八条はそれに頷いた。
「嗜み程度には」
「馬はいいものでしょう」
「ですね。目が優しいですし賢い」
「そうです。馬は人間にとって友達なのですよ。何処までも続く草原をね。馬と共に歩むのですよ」
遠くを見る目となっていた。彼はこの時草原を駆けていた時のことを思い出していた。
「軍に入ってからも時間があれば乗っていますよ」
「オリンピックでは見事でしたね」
「何、あれは」
今度は顔が赤くなった。照れ隠しのようであった。
「生まれた時から乗っていましたから。当然ですよ」
「いやいや、素晴らしかったですよ」

八条は笑ってそう声をかけた。
「金メダルを四大回連続とは」
「馬はもう手足ですから」
それがモンゴル民族であった。かって世界を席巻した覇王の子孫達は今でも馬から離れてはいない。それは銀河を駆けたバールも同じであったのだ。
「あれ位はモンゴルの者なら出来る者は大勢いますよ」
「まさか」
「私の祖父も優れた馬の乗り手でして」
彼は自分の祖父について言及した。
「今も乗っていますが。祖父なら今でも金メダルを獲れますよ」
「失礼ですが本部長の御祖父様はお幾つですか？」
「今年九十二なります」
「それでですか」
連合の平均寿命は男で九十二歳、そして女性で九十五歳となっている。医学の進歩が平均寿命を大幅に伸ばしたのであった。
「まだまだ矍鑠たるものですよ」
「凄いですね」
「生まれた時から草原で生きてきましたからね」
「いや、それでも」
「モンゴル人は頑強さが取り得ですし」
「はあ」
それでも八条は驚嘆する他なかった。だがこれにはモンゴルの食生活も大いに関係があったのだ。
モンゴル人は羊、そして馬と共に生きている。食べるものは草原にいる者達は昔から変わらない。羊の肉を食べ、馬の乳を飲む。馬や羊の乳から作ったチーズやヨーグルトを口にする。そして今まで生きてきたのである。
厳しい草原の自然に耐え、そして世界を席巻した彼等は草原とこの食べ物により育てられてきた。彼等はそのままモンゴル人となっ

たのではなかった。自然が彼等をモンゴル人としたのであった。
「祖父の他にもそうした者は大勢いますよ」
「オリンピックに出たら面白いでしょうね、そうした人達が一斉に」
「いや、それはないでしょう」
だがバールはそれを笑って否定した。
「何故ですか」
「我々は無欲でして」
「そうなのですか」
「必要以上の財産や名誉は欲しないのですよ。草原で生きるのに必要はありませんから」
草原で必要なのは馬、そして羊である。財産も名誉も必要ではないのだ。あればあるだけ不要になっていく。だから彼等はそれを欲しないのである。

## 第十二部第五章　憂いの雨その三

「だからオリンピックにも参加しない」
「それよりも重要なのは草原での生活です」
そしてこう言い切った。
「それ以外には何もいりません」
「そうなのですか」
「はい。私も退役したら草原に戻りたいですね」
「モンゴルのですね」
「どの星の草原かまではまだ考えておりませんが。そう思っています」
「そうですか」
「今は地球にいた馬だけではないですからね」
「はい」
「ユニコーンやペガサスもいますし」
そう語る目が喜びに満ちたものとなっていた。かって人類が地球にのみいた頃ユニコーンもペガサスも空想上の生物に過ぎなかった。だが宇宙にはいたのだ。この幻想的な動物達が。当然モンゴルにもいる。彼等は角で己の身を守り、そして空を駆る。同時にモンゴル人達の友人であった。
「ペガサスに乗るのは非常に気持ちのいいものですよ」
「私は乗ったことはないのですが」
八条はそう断ったうえで尋ねた。
「そんなに気分のよいものなのですか」
「はい」
彼は答えた。
「馬に乗りながら下を見下ろすとね。そこには無限の緑の海が広がっています」
「ほう」

「それが何処までもね。所々にパオが見える以外は何もありません」
それを聞く八条の頭の中にその光景が思い浮かんだ。一目見たら忘れられない光景であった。
「本当にね、いいものですよ」
語る目の光がまるで少年のそれのようなものになった。
「一度見ると。忘れられないです」
「でしょうね」
「ただ、危ないですけれどね」
「落ちた場合は」
「はい。その場合は普通に落馬した場合の比ではありません。死を覚悟しなければなりません」
「死を」
これは当然と言えた。落馬して負傷したり死ぬ者は多い。普通の馬でそれである。これで空から落ちた場合はどうなるか。言うまでもないことであった。
「しかしその危険を冒す意味はありますよ。本当に」
「そうなのですか」
「それだけの価値はあります、あの光景は」
「ふむ」
「それにペガサスの馬乳酒はまた格別なのですよ」
「ほう」
それにはまた別に興味をそそられた。
「ペガサスからもミルクが採れるのですか」
「勿論ですよ」
彼は笑って答えた。
「馬の仲間ですからね。当然です」
「そんなに美味しいのですか」
「そうですね、普通の馬のそれよりも味が濃いです」
「濃いのですか」
「そこに山羊のミルクを混ぜたような味ですね。いけますよ」

「何かよくわからない味みたいですね」
「ユニコーンは牛ですね。これも美味いです」
「そちらもよくわからないです」
「まあそれは召し上がられたらわかりますよ。一度どうですか」
「そうですね、機会があれば」
社交辞令的な言葉であったが本当に乗り気であった。話を聞いているだけでどんな味なのか興味をそそられるものであった。日本の所有する星系にはペガサスやユニコーンはいない。だから余計にそうであった。
「ただ、食べるのは止めて下さいよ」
「食べる？」
「はい。日本では馬を食べるのでしたよね」
「ええ、まあ」
八条はそれを認めた。馬を食べるのは日本だけではないが日本人が馬を生で食べるのは有名である。馬刺しという馬の刺身だ。日本人はその他にも牛や鶏、豚も刺身にする。なお琉球王国では山羊も刺身とする。これ等は日本の風土料理として有名である。琉球においてもそれは同じだ。
「私も和食は食べますが馬だけはどうも」
「駄目ですか」
「モンゴル人にとっては馬は特別なものでして」
彼は言った。
「モンゴル人の足は四足です。自分の足は食べられないでしょう」
「はい」
これもまた昔からある言葉である。モンゴル人は常に馬に乗っている。生まれた時から男も女も乗っている。だからこそ生まれた言葉であった。

## 第十二部第五章　憂いの雨その四

「そういうことです。馬は我々にとっては本当にかけがえのないものですから」
「わかりました」
「ですから食べるのはミルクやチーズだけにして下さいね」
「はい、それで充分です」
「ならいいです。あと羊は御自由に」
「刺身にしても宜しいのですね」
「はい。羊はどんな食べ方でもいいです。まあモンゴルでは煮るのが主流ですが」
「焼かないのですか？」
「あまりしませんね」
「ではあのジンギスカン鍋は」
「あれは中国の料理ですよ」
「そうだったのですか」
「はい。確か元代かその辺りに地球の北京で出来た料理だと聞いていますが」
「それは知りませんでした」
　北京料理は羊を使ったものが多い。あと麺類や餃子等が多い。ただしこの餃子は水餃子である。地球にあった北京の気候故か全体的に油気の多い料理となっている。
「元々モンゴルでは羊は焼かないのですよ」
「何故ですか」
「焼く方が煮るより燃料を使いますからね。それを考慮したのです」
「そうだったのですか」
「それに煮た汁も食べられますし。それを決めたのはチンギス＝ハーンです」
「あのチンギス＝ハーンが」

「ハーンは今でも我々の心に生きていますから。その教えもね」
「今も」
「草原に彼は今でもいますよ。我々が銀河にいてもね」
視線を上にして遠くを見た。彼はそこにやはり草原を見ていた。
「永遠に。彼の心は草原にあります」
「そのハーンの教えもまた」
「はい。まあ流石に今は二千年前と違って燃料は多くありますが」
「でしょうね」
遊牧生活も二千年前と今では大きく違っている。現にバールもノートパソコンを使った通信教育で教育を受けていた。パオの中でも彼等は連合の者となっていたのである。
「それでも肉は煮るのが主流です、モンゴルにおいては」
「生はあまりありませんか」
「そうですね、少なくとも日本みたいに頻繁には」
「やはり」
「煮た肉もいいものですよ」
「それは私も知っていますよ」
八条は笑いながらそれに応えた。
「日本でも鍋がありますから」
「あ、あれはいいですね」
鍋の話が出るとバールは目を輝かせた。
「肉だけでなく野菜もかなり入っていて味に深みがあります」
「それだけではないですしね」
「最後のあれですか」
「そう、雑炊です」
八条も乗ってきた。
「卵を入れてね。あれはいいでしょう」
「そうですね。我々は元々あまり野菜や穀物は食べないのですがあれなら抵抗なく食べられます」
「そちらの力士も食べていますよ、毎日」

「ちゃんこ鍋ですね」
「はい」
「あれもいいですね。力がつきます」
「身体を大きくするにはあれが一番なのですよ。プロレスラーでもそうですが」
「レスラーもですか」
「レスラーは他にもバナナをよく食べるそうですよ」
「あれも栄養がありますからね」
「そうですね。ただ、軍でちゃんこばかりやるのもどうかと思いますが」
「まあそれは流石に無理でしょう」
バールはそれを聞いて思わず笑ってしまった。ちなみにちゃんことは力士が食べるもの全体をそう称する。つまり力士が食べれば全てちゃんことなるのだ。力士はちゃんこ鍋だけを食べるわけではない。他にも色々と食べる。彼等は食べるのも仕事なのでその量はかなりのものとなる。そうして身体を大きくするのである
「栄養価は今でも十二分に考えておりますし」
「それで一つ意外なこともわかりましたしね」
「ああ、あれですね」
バールはそれが何かすぐにわかった。
「前々から言われていましたが本当にそうだとは思わなかったですね」
「実際に見てみないとわからないということでしょうか」
「そうでしょうね」
二人は口々にそう述べた。
「我々と彼等でああまで体格が違うとは」
「食べるものの違いが出ていますね」
「はい」
彼等は連合の者とエウロパの者の体格の差について言及しているのである。国によって差はあるが連合の方が食べる種類は遥かに多

い。そして量もかなりのものだ。これにより彼等の体格はかなりのものとなっている。それに対してエウロパのそれは種類が極端に限られている。食べるものが違えばその体格も違ってくる。それは量にも直結する。こうして双方の違いはより顕著になったのであった。

## 第十二部第五章　憂いの雨その五

連合の者は平均してエウロパの者よりも長身であった。体重も重い。エウロパの者が大体一メートル七十五程であるのに対して連合の者は一メートル八十七であった。エウロパは平民と貴族で数センチ程違っていたがそれでもエウロパの者よりは小さかった。無論個人差はあるが連合の者の方が大きいのは変わらなかったのだ。
「彼等は我々のことを巨人とさえ呼んでいるそうですよ」
「巨人ですか」
八条はそれを聞いて苦笑した。
「十センチ程の差でそこまで言われるとは」
「案外その差は大きいですよ」
「まあ並んで立つとそうでしょうね」
「それでかえって我々が怖がられているようです。大きいので」
「ふむ」
実は八条も背は高い方である。スラリとしておりルックスという面でも人気があった。貴公子と呼ばれる由縁でもあったのである。
「かっては我々の方が小さかったそうですけれど」
「十九世紀や二十世紀ですね」
「我等が祖先がユーラシアを席巻した時は小さい奴等だと最初は笑われたそうですよ」
「我々もですね」
「日本人もですか」
「はい。何でも江戸時代は平均身長が一メートル五十程であったそうですから」
「男性でですか！？」
「どうやらそうらしいですね」
「そうですか。それはまたえらく小さいですね」
「当時は日本人は肉を食べませんでしたから。乳製品も口にしませ

んでしたし」
奈良時代は醍醐や酪といった乳製品があり食べられていたがごく限られた人達の間でだけであった。この時代はその醍醐も酪も食べられている。他にもコンデンスミルクおようなものもある。醍醐はバターとチーズの中間であり、酪はヨーグルトに似たものである。
「主に野菜、それに魚介類ですね。ですからあまり体格が大きくならなかったのです」
明治から次第に大きくなったのである。そして今では平均身長は一メートル八十を超えるまでになっていたのであった。これは食べているものが変わったことが大きいのは言うまでもない。
「そういえば我々もそうですね」
バールはそれを聞いて頷いた。
「野菜や果物もある程度食べるようになると体格がよくなりました」
「結局はバランスよく食べるということが重要なのですかね」
「おそらくは。個人差もありますけれどね」
「はい」
「ただ、あまり体格が大きいとモンゴルでは困る場合もあります」
「何故ですか」
「乗る馬が限られるので。それが困るのですよ」
「そういえばそちらではサラブレッド等は乗らないのでしたね」
「あれはちょっと」
そう言って手を横に振った。
「脚が弱いですから。レースはともかく遊牧には適していません」
「やはり」
「日本にあの小さい馬がいましたね」
「道産子ですか」
「はい。今ではアイヌ連邦によくいる」
「はい」
小型の頑丈な種類の馬を日本やアイヌ連邦ではこう呼ぶのである。小さくはあるが頑丈で従順な性質であるので農業や放牧にも使われ

る。アイヌ連邦では特に愛されている馬である。
「小さくはありますがあちらの方がずっといいですね」
「そうですか」
「頑丈でないと、駄目なのですよ」
「スピードではなくて」
「レースをするわけではないですからね」
ただしモンゴル人はレースもサラブレッドではしない。やはり脚の弱さが好まれていないからである。
「大抵我々は同時に三頭程の馬を乗り継ぎます」
「三頭程」
「乗っている馬が疲れると別の馬に乗り換えるのですよ。飛び乗ってね」
「それは凄い」
「何、モンゴルでは普通ですよ。これは基本です」
「いや、それでも」
「我々はそうして何千年も生きてきましたから。身体が自然に覚えているのですよ」
「そうなのでしょうか」
流石にそれは容易には信じられなかった。
「まあそれはモンゴルに住んでいればわかりますよ。馬は我々にとって手足と同じです」
「はあ」
「中にはもっと凄いことができる者もいますからね」
「何か信じられませんね」
「これは長官の御国のことわざでしたな」
「！？」
「百聞は一見にしかず、でしたかな。一度御覧になられればいいです」
「機会があればそうしたいですね」
「その時はお願いします」

「はい」
そして話はまた別の方に進んだ。ここであらたな俳優がやって来た。
「あ、こちらにおられましたか」
「ん、君か」
それは木口であった。彼は八条とバールの姿を確認してまずは一礼した。

## 第十二部第五章　憂いの雨その六

「本部長もおられるとは。都合がいいです」
「何かあったのかね？」
「はい。参謀本部のミネハタ大将が来られています」
「その話をしていれば」
「？何かあったのですか」
「あ、いや」
八条は木口が首を傾げさせたので手を横に振ってそれを打ち消した。
「何でもないよ。気にしないでくれ」
「わかりました」
木口はそれに頷いた。実はこのミネハタ大将というのはアイヌ連邦出身なのである。
女性であり参謀本部においては名の知られた女性である。五十代であり歳に相応しいが気品のある容姿をしている。軍人よりは学者に近い容貌とまで言われている。ミネハタというのは姓であり名前はシンカムという。アイヌ人の特徴としてかっては姓はなかったが日本人との混血の過程で姓がつくようになった。十九世紀からの日本人の北海道開拓の時にアイヌ文化は日本文化と混ざり合ったのだ。悪く言えば同化となりこの際言葉もかなり失われた。差別もあったのは事実である。だが日本人はアイヌ文化を根絶したりはせずそれどころか研究と保全に務め、彼等を法的には日本人として扱い、統治してきた。その際に混血も進んだ。元々日本人は混血には抵抗がなく結果的にアイヌ人達は日本人と殆ど同化してしまったのだ。これは琉球民族も同じである。銀河の時代になり日本から離れて独立したのであるがそれでも日本との関係は今も深い。三国は兄弟国として親しい関係にある。琉球王は日本の皇室と縁組をする程である。これもかって琉球王家が皇室に入っていたことも大いに関係してい

る。
　アイヌ連邦では民族衣装の他に日本の服も好まれる。連合においては小国の部類ではあるが所有する星系はいずれも自然が豊かであり、観光地としても人気が高い。残っているアイヌ文化も連合のエスニック文化の一つとして人気がある。食べ物は肉類も多く羊や熊、海豹等も食べる。日本文化の影響で生物も食べる。
「どうされますか」
「と言っても会わないわけにもいかないな。通してくれ」
「わかりました」
　木口はそう応えて部屋を後にした。それを見送った後で八条はバールとの話を再開した。
「何の用件でしょうね」
「おそらくは戦局のことであると思われます」
　バールは静かにそう述べた。
「前線ではかなり緊張が高まっているようですから」
　やがて黒く長い髪を後ろで束ねた初老の女性が部屋に入って来た。連合軍大将の軍服を着ている。彼女がミネハタ大将であった。
　ミネハタは敬礼してまずは八条とバールに対して挨拶をした。八条が返礼してから話がはじまった。
「前線のことですが」
「はい」
　八条とバールはそれを聞いてやはり、と思った。だが口には出さない。
「エウロパ軍が集結を開始しました」
「場所は」
　バールが彼女に問うた。
「クロノス星系です」
「クロノスですか」
　それを聞いた八条の目が光った。彼もその星系のことは頭に入っている。エウロパの首都オリンポスの前方にある星系である。事実

上エウロパの最終防衛ラインであると言えた。
「あそこに戦力の全てを集結させているとのことです」
「そうですか」
八条はそれを聞いて頷いた。
「妥当と言えますね」
「はい」
アルテミスに集結している連合軍から見ればクロノスはオリンポスへ向かう為には何としても通らなければならない場所であった。
そこに戦力を集結させるのは戦略としては妥当と言えた。

## 第十二部第五章　憂いの雨その七

「既に前線ではクロノス攻略の為の作戦立案に取り掛かっているそうです」
「でしょうね」
「マクレーン司令と劉総長が中心になっておられますが。如何致しますか」
「主立ったところは二人に任せましょう」
八条はそう答えた。
「現場のことは彼等が最もわかっているでしょうから」
「ではそのように伝えます」
「はい、お願いします。あと」
「あと！？」
「補給は大丈夫でしょうか。今はアルテミスを補給基地にしていますが」
「はい、それは御心配なく」
ミネハタは表情を変えずにそれに答えた。
「オリンポスに向かう予定である二千個艦隊の補給は滞りなく進んでおります。何の心配もありません」
「わかりました。それではいいです」
「他には何か」
「参謀」
「はい」
今度はバールが尋ねてきた。ミネハタはそれに応えた。
「エウロパは首都周辺にかなり強固な防衛ラインを築いていたな」
「はい」
「クロノスはどうなのだ。かなりのものなのだろうか」
「そうですね」
彼女は一呼吸置いてから答えた。

「今まで戦闘が行われたアルテミスやホズよりも強固なもののようです」
「そうか」
「それに戦力も今までとは違います。エウロパ軍の総兵力を動員しておりますから」
「事実上の決戦ということですね」
八条はそれを聞いて一言そう言った。
「我々と彼等の」
「ですね」
これにはバールとミネハタの双方が頷いた。
「これで雌雄が決します」
「我々と彼等の戦いに」
「今までは我々が圧倒的優勢のまま戦いを進めてきましたね」
「はい」
「今のところ敗北はありません。ニーベルングから勝利ばかりです。その為報道の加熱を抑制することまでしました」
「それに対してエウロパは敗戦続きです」
「もう後がありません」
「しかし今我々は敵地の奥深くにいます」
八条の声が少し深刻なものとなった。
「補給に関しては彼等の方が有利にあると言ってよいでしょう。そして地の利も」
「ですが戦力では我等の方が圧倒的に優勢ですが」
バールがそれに反論した。
「ティアマト級戦艦も健在です」
「あの戦艦は想像以上の戦力ですね」
これは八条も認めた。
「今まで撃沈された艦はなし、そして指揮艦としても優秀です」
「まさしく我が軍の象徴であると言えます」
「しかし今まで不沈の艦というのはありませんでした」

いつもの八条とは違っていた。異様にネガティブであるように感じられた。
「今度の戦いではわかりません」
「あの、長官」
その雰囲気に耐えられなくなったのかバールが言った。
「あまりにも悲観的に過ぎるのではないでしょうか」
「確かにそうかもしれません」
八条はそれは認めた。
「ですがある程度はそうした視点で考えるのも重要だと思いますが」
「それはそうですが」
「実は今考えていることがあるのです」
「それは」
「ティアマト級です。今あの艦は非常に役に立っているのは事実です」
「はい」
「ですが限界があるのではないでしょうか。一個艦隊を統率するのだけではありませんから」
「全ての艦隊を統括する艦が必要だということですか」
「今そうではないかと考えているのですけれどね。今回の戦闘では今までにない戦力が動員されました」
「二千百個艦隊」
「確かに空前絶後の規模です」
その通りである。人の数にして約六十億。これだけの数を動員した戦いはこれまでなかったことである。連合の人口と国力がどれだけのものかを象徴するものでもあった。
「それが一度に会戦に集結することもありました。その際色々と通信や指揮に支障が出ていたのではないでしょうか」
「言われてみれば」
バールには思い当たるふしがあった。それだけの戦力を完全に掌握するのは並大抵のことではない。ティアマト級は

一万隻からなる艦隊の旗艦としても建造されたことから通信もかなりのものだ。相互に連絡を取り合い作戦行動にあたっている。しかしそれでも限度がある。千個以上の艦隊が集結していてはその統率にも限界がある。事実これまでの多くの戦いで艦隊規模での作戦指揮からの脱落もあった。これはこの時は然程問題とはならなかった。後方でのことであり、またすぐに復帰できたからだ。しかしこれが前線ならばどうなることか。それはもう言うまでもないことであった。

## 第十二部第五章　憂いの雨その八

「それを考慮しますと。より上位の艦の建造もいいのではないでしょうか」
「軍を完全に掌握する為に」
「今回の戦いではまず補給を念頭に置きましたが」
「はい」
「通信や指揮に関しても気になりました。このままではいけません」
「今回の戦いの教訓というわけですか」
「そういうことになりますね」
戦いにより多くのものを学ぶ。そうして進歩していくのだ。これはどの世界においても同じである。だが戦争においてはそうしないと敗れてしまう。前の戦争と同じ失敗を繰り返すのは愚の骨頂である。
「まあそれはこれから考えればいいでしょう」
「はい」
「問題は今です。ミネハタ大将」
「はい」
八条はミネハタに顔を向けた。ミネハタはそれに応えた。
「マクレーン司令と劉総長はクロノスへの進撃を考えておられるのでしょうか」
「どうやらそのようですが」
彼女は率直に答えた。
「そうですか」
「何か問題でも」
「御二人にお伝えしたいことがあります」
「それは」
「決して焦ってはならないと。最悪攻め込む必要もありません」
「決戦を避けるのですか！？」

それを聞いたバールが驚きの声をあげた。
「ここまできて」
「そうではありません」
しかし八条はそれを否定した。
「では何故」
「このまま待っていれば彼等から来る可能性もあります。それを叩いてもいいでしょう」
「誘き出すのですか」
「それもまた戦いです」
そしてこう述べた。
「今や我が軍の基地となっているアルテミスで戦ってもいいでしょう」
「ふむ」
バールはそれを聞いて考える顔になった。
「それは一理ありますね」
「言い換えるならば敵の誘いには乗ってはならないということです」
「地の利も彼等にありますからね」
「それが一番気懸りです」
ミネハタにも言った。
「ホズにおいては磁気嵐により攻撃の機会を奪われました。そしてそれによりエウロパ軍は救われた」
若し磁気嵐がなければシュヴァルツブルグの指揮する軍はそこで全滅していたであろう。そうなれば戦いは終わっていた。今頃連合軍は意気揚々と凱旋していたであろう。
「若しクロノスで我々の知らない罠があれば」
「敗北、ですか」
「はい。戦いは最後の最後で勝っていればいい。ここで負ければ全てが壊れてしまいます」
中国紀元前の話である。項羽と劉邦が天下を巡って争っていた。項羽はその圧倒的な武力と戦術指揮により劉邦に負けることはなか

った。劉邦は負け続けた。だが最後の戦いで勝った。それにより天下を手に入れた。項羽は最後に敗れて天下を失った。
ローマのカエサルは一度ポンペイウスに敗れている。だが自らを決して常勝将軍などとは考えず、絶対に焦ることのないカエサルはすぐに戦力を建て直し再戦を挑んだ。そして勝った。ポンペイウスはエジプトに逃れそこで暗殺された。戦いとは最後に勝った者が勝者なのである。
「特に我々は。敵国深く入り込んでいますし」
「一度の敗北がそのまま総崩れに繋がる危険もありますね」
「だからこそです。今回の戦いはとりわけ慎重に行わなければなりません」
「決戦ですし」
「全てはここにかかっています。連合とエウロパの未来が」
「はい」
二人は頷いた。バールはそれを確認した後で言葉を再開した。
「ミネハタ大将」
ミネハタに言葉を向けた。
「二人にはそう伝えて下さい。わかりましたね」
「了解しました」
敬礼して応えた。
「それでは御二人にはそうお伝えします」
「お願いしますね」
「それでは」
「あ、待って下さい」
ここで八条はミネハタを呼び止めた。

## 第十二部第五章　憂いの雨その九

「何か」
「ミネハタ大将はこの件についてどう御考えですか」
「私ですか」
「はい。参謀として御聞きしたいのですが」
「私は今前線にいないのでよくわかりませんが」
彼女はまずそう前置きしてから言った。
「前線のことは前線の者が最もよく知っているのではないでしょうか」
「そうですか」
「はい。ですから出来る限り前線の意見を尊重すべきだと思います」
「現場主義というわけですね」
「そうです。これについてはどう思われるでしょうか」
「それでいいと思います」
八条はそれを肯定した。
「確かに現場のことは現場の者が最もよく知っています」
「はい」
「しかしそれが為に視野が狭くなっているケースもあります。マクレーン司令と劉総長はそのような方ではないにしろ」
「艦隊司令クラスではそうなっている危険性もありますね」
「戦闘に近いだけに」
「そうです」
バールの問いに応えた。
「そのうえで後方から警告を与えておくのも重要だと思います」
「それによりバランスがとれれだいいですね」
「バランスですか」
「はい」
今度はミネハタの問いに頷いた。

「前線だけでも後方だけでも戦争というものは円滑にはいきませんから」
二十世紀前半における日中戦争において問題となったのは極端な現場主義であった。現地で戦闘を行っている軍の行動があまりにも早く、かつ政府の統制が利かなくなっていた。その結果として無闇に戦域が拡大し、そして政府はその後追いしかできなかった。こうしてこの戦争は泥沼になってしまった。
同じく二十世紀後半のベトナム戦争においては全くの逆であった。アメリカは後方にいる政治家達が現場を知らない戦略を立て、そして兵装を考えていた為様々な不都合が生じた。彼等は戦場や兵士が欲しているものに関して想像がいかなかったのだ。具体的には戦闘機から機関砲を外し、ミサイルのみとしたりである。これは騎士に例えるならば槍のみで戦い、剣は持たないというものであった。やはりこの戦争も泥沼となった。結局アメリカは敗れた。なおこの二つの戦争は前者は統制の利かない軍の、後者は行き過ぎた統制の事例としてこの時代においても知られている。
「そこのバランスも重要なのですよ」
「わかりました」
「そのうえで前線に報告をお願いします。宜しいでしょうか」
「了解」
ミネハタは敬礼した。だが話はまだ続いていた。
「そして」
「はい」
今度は何でしょうか、と文官ならば問うところであった。だがミネハタは女とはいえ軍人である。その様な問いは決してしなかった。
「サハラはどうなっていますか」
「サハラですか」
「ええ。ミネハタ大将は本来はサハラの諜報がその任務でしたね」
「ええ」
「それならば状況をある程度把握していると思われますが。どうな

のでしょうか」
「今のところ表立った動きはありません」
「はい」
だがこれは八条もわかっていることであった。取り立てて知るべき話ではない。
「ですが裏では違うようです」
「裏では」
「ティムールが諜報活動を活発化させております。工作員も多数潜入しているようです」
「ハサンとオムダーマンに」
「そしてマウリアにもです」
「マウリアにもですか」
「また大掛かりですね」
バールもそれを聞いて顔を顰めさせた。
「そしてこの連合にも」
「我々にもですか」
「はい。数自体はそれ程多くはないようですが。それでも潜入しているようです」
「ふむ」
「詳しいことは現在情報部が調査中ですが」
「そうですか」
「厄介ですね。シャイターン主席は何を考えているのかわからないところがあります」
「おそらく我々に対してはこれといった工作は仕掛けては来ないでしょうけれどね」
八条はそれはないと予想していた。
「今のところは情報収集だけでしょう」
奇しくもクリシュナータと同じ予想であった。
「何故そう思われるのですか」
「情勢からです」

「情勢」
「そうです。今我々はエウロパと交戦中です。そしてティムールは北方の占領と統治に取り掛かっております」
「はい」
「関係も良好です。条約も結んでおりますし」
彼は言葉を続けた。

## 第十二部第五章　憂いの雨その十

「そうしたことを考えますと。我々に対して危害を加えるようなことはないでしょう。シャイターン主席もそれ程愚かな方ではないですしね」
「奸智の持ち主だと言われることはありますけれどね」
「それでも智は智です」
ここでこう言い切った。
「ですからわかっておられるのですよ。今我々に対して何もしてはならないと」
「ふむ」
「今後はわかりませんがね。今のところは工作に関しては気にすることはないでしょう」
「わかりました。ですが諜報員は」
「それも承知のうえです」
八条はそれにも応えた。
「諜報活動を見逃すわけにもいかないでしょう。ディカプリオ元帥にお伝え下さい」
「はい」
今度はバールに声をかけた。
「捜査にあたって欲しいよ。宜しいでしょうか」
「わかりました」
「軍事機密を手に入れられたら厄介なことになりますからね」
「ただ一つ問題があります」
ここでミネハタが口を開いた。
「何でしょうか」
「ティムールとの関係に影響しないでしょうか」
「ティムールと」
「ここは慎重に捜査を行うべきだと思うのですが」

「それは当然のことです」
八条はそれを肯定した。
「ですがティムールとの関係悪化はないでしょう」
「何故ですか」
「我々はティムールとは友好関係にあります」
表面上は、ですが。そもそも国同士の関係において表面上でしかない友好関係は幾らでもある。取り立てて驚くことでも言うべきことでもない。
「相互にね」
「それはわかっていますが」
「それを壊すことはありませんよ。ですから安心して下さい」
「ではどうなるのでしょうか」
「表面上は何もなかったことになります」
彼は落ち着いた声でそう述べた。
「表面上はね」
「そうなりますか」
「ビジネスマンか宗教家が何人か転勤したということになります」
諜報員はそうした身分で入ることが多い。日本では忍者は旅芸人や虚無僧等に変装して入っていた。これは極秘であるとされたがその為に虚無僧は何かと警戒される場合もあった。また山伏も警戒されることがあったがこれもまた彼等に化けて忍者が潜入していたからである。
「それで終わりです」
「シャイターン主席もこれといって言及したりはしないと」
「ティムールは友好関係にある勢力にそのような行動はしませんから」
「何か欺瞞的なものがありますね」
「政治にそうした一面があるのは否定しません」
政治の世界にある者ならではの言葉であった。八条も政治の世界に入ってそれなりの時間が経っている。だからこそ言える言葉であ

った。その世界にいる者でないとわからないこともあるのだ。
「少なくとも話はそれで終わります」
「そうですか」
「よいか悪いかは別にしてね」
バールもミネハタも軍人である。高官とはいえ政治の世界にそこまで熟知しているわけではない。ある程度は知っているがそこまでは知らないのだ。彼等は軍人の世界にいるのだ。軍人が政治を知るのにはやはり限界があるのだ。また同じように文民が軍事を知ることにも限界がある。この二つをどう合せて問題なくしていくのかが政治、戦略の問題の一つと言えるのである。
「ですから心配することはありませんよ」
「わかりました」
「ではこれについてはこれで」
「はい」
こうしてティムールに関する話は終わった。彼等にとってはティムールは同盟国であっても信用することは出来ない、こうした認識がかいま見える話であった。これはシャイターンという男に対する見方ではなく国際政治というものがそうであるからだ。
「では前線にはお願いしますよ」
「わかりました」
最後に八条の言葉で終わった。こうして彼等の話は幕を降ろしたのであった。

# 第十二部第五章　憂いの雨その十一

この話はすぐに前線に伝えられた。マクレーンと劉はそれを当然ながらブレスの艦橋において聞いていた。二人はその時食堂にいた。
「そうか」
メニューは鰐のステーキであった。あっさりとした味付けになっている。フォークとナイフで切って食べている。鶏肉に似た味だが肉は固い。噛み応えがあると言うべきか。
他には海草のサラダにレッドオニオンのスープ、そして白パンとデザートに桃のアイスクリームである。アメリカ風のメニューと言えた。
デザートまで食べ終えたところで話が来た。二人はそれを受け司令室に戻った。
「丁度いいタイミングといったところですな」
「はい」
マクレーンは劉の言葉に頷いた。そして司令室に入ると応接用のソファーに向かい合って座った。そこにあるテレビ電話を見るともうその人物がいた。
「御二人共お久し振りです」
そこにはミネハタがいた。落ち着いた顔で電話に出ている。
「今日は国防省において話されたことについて報告させて頂きたいと思います」
「国防省で」
「はい」
彼女は頷いた。
「八条長官、そしてバール本部長とお話したのですが」
「ふむ」
「その結果今後の作戦はかなりの部分を現場に任せたいとのことです」

「現場主義というわけですな」
「その通りです」
「しかし全て現場に任せるというわけではないでしょう」
話を聞いた劉が彼女にそう声をかけてきた。
「違いますかな」
「正直にお話しますとその通りです」
彼女は率直にそう答えた。
「前線の暴走は何としても抑制してもらいたいとのことです」
「それは当然ですな」
劉はそれを聞いて納得したように頷いた。
「おそらく敵はかなり強固な防衛ラインを敷いていると予想されますから」
「はい」
「今回前線が下手に暴走すればかなりの損害が出る。最悪の場合は敗北に繋がりかねない」
「それだけは何としても防がなければなりません」
「その通り」
マクレーンもそれに頷いた。
「最後に負けては何にもならない」
「長官もそれを危惧しておられました」
「だからこそここに貴官が電話を入れたのだな」
「はい」
「最後の戦いか。この戦いで勝たなければ何にもならない」
「これまでの戦いでの勝利も無駄になりますな」
「ええ」
劉の言葉にも頷いた。
「敵は今クロノス星系に集結しているそうですね」
「ええ、まあ」
二人はミネハタのその言葉に頷いた。
「エウロパのほぼ全軍が。数にして四百個艦隊近く」

「総動員してきたようなのです」
「敵も必死ですね」
ミネハタはそれを聞いて呟いた。
「それも当然のことですが」
「彼等にとっては滅亡するかどうかの瀬戸際ですから」
マクレーンが言った。
「それも当然のことでしょうな」
そして続いて劉がこう述べた。なお二人が階級が下であるミネハタに対して敬語を使っているのは敬意を払ってのことである。彼女は二人より年齢は上なのである。
「昔ならば全市民を動員するところでしょうがそれはできない」
「時代が違いますから」
ここでは古代ローマや第一次、第二次の両世界大戦について言っている。これ等の時代では国民は危機においては全て兵士となった。ローマはカルタゴとの第二次ポエニ戦争において若い男を総動員してカンネーの戦いにあたった。先に二つの戦いで致命的な敗北を喫してのうえであった。世界大戦の時はどの国も総動員令をかけた。ナチス＝ドイツやソビエト＝ロシアに至っては中学生まで動員していた。アメリカも開戦と同時に学徒動員を行っている。日本も昭和十四年に国家総動員令を発布しているが当時日本であった朝鮮半島は除外し、また学徒動員も戦局が決定的に劣勢になるまで決定されず、なおかつ理系の学生は除かれた。何処か甘かった。その甘さが日本なのであろうか。特攻隊の英霊達も志願制であった。最後まで甘かった。それが故に敗れたのであれば悲しいことである。だがそれが日本だと言われれば頷くしかないのだ。

## 第十二部第五章　憂いの雨その十二

「何の技術もない者を艦に入れても仕方ありません」
「はい」
「言葉を変えると技術者は全て軍に動員されているということです」
「後が大変でしょうね」
ミネハタはここでこう呟いた。
「彼等の多くが戦死することを思うと」
「それが戦争ですからね」
劉はいささか無機質な声で応えた。
「それに敵のことまで考える義理もないでしょう」
「ましてや今後のことは」
「まあそうなのですが」
それにミネハタも賛同した。
「負けた後は彼等で何とかするしかないです」
「そんなことは我々にとって知ったことではない」
「むしろ敵の人材が減って好都合というものです」
シビアな言葉であるがその通りであった。結局他国の優秀な人材というものはこちら側にとって有害にしかならないのである。こちら側にやって来ない限りは。
「まあ敵の人材の話はこれ位でいいでしょう」
マクレーンはきりのいいところで話を戻しはじめた。
「敵の集結しているクロノス星系のことですが」
「はい、クロノスですね」
「我々も偵察を行っていますがそれによるとかなりの防衛ラインを敷いているそうです」
「そうなのですか」
ミネハタはそれを聞いて考える目をした。
「やはり」

「コロニーレーザーに人工の防衛用惑星、そして修理基地」
「かなりの設備が揃っているそうです」
「最後の防衛ラインになりますからね、首都までの」
モンサルヴァートが整えたものであった。彼の防衛計画はエウロパ全土を対象にしたものであった。それによりこのクロノスの防衛も整えられたのである。無論オリンポス周辺は全てそうである。
「今までのものよりも強固なもののようです」
「ニーベルングよりも上でしょうか」
「そうですね」
ミネハタの問いに劉が答えた。
「流石にあそこまではないですがそれに比肩し得るものではあります」
「そうですか」
「かなり堅固な防衛ラインです」
「敵はそこに立て篭もっているのですね」
「一言で言うとそうなります」
「そうですか」
ミネハタはそれを聞いてあらためて考えた。
「それを打ち破る策は。ニーベルングでは無人艦艇を使われましたね」
「発案は義勇軍でしたが」
「今度はどうなさるおつもりでしょうか。敵将であるシュヴァルツブルグ元帥もモンサルヴァート元帥も冷静な人物であり挑発に乗るとも思えませんが」
「よく御存知ですね」
「元々諜報畑にいましたので」
ミネハタはここでうっすらと微笑んだ。
「おかげで主人が浮気の虫を起こしても事前に防ぐことができております」
「おやおや」

「ミネハタ大将の御主人はまた気の毒ですな」
「アイヌの女は手強いですよ」
そう言ってまた笑った。ミネハタの夫は有名な作曲家であり音楽家である。クラシックだけでなくロックも好きで音楽においては多芸多才な人物として知られている。長身で黒々としたアジア系の髪をたなびかせた黒人である。名前をペーター＝アンタイヤという。タンザニア出身である。
「主人もそうぼやいていました」
「クラシック界の英雄がですか」
「ロックの大御所が」
このアンタイヤという人物は両方の世界で定評があるのである。なおジャズや胡笛もすればバラードも得意である。アンチには節操がないとまで言われている。
「私は音楽はポップス専門ですのでそうしたことはよくわかりませんが」
「そうなのか」
「ですが主人の動きは手の中にありますので」
「流石というか何というか」
「どうやら大将を敵に回すと大変なようですな」
「元々はディカプリオ部長からの情報でした」
「情報部長から」
「はい。他にもエウロパ軍高官のデータが揃っておりますが」
「そんなものまであるのですか」
前線ではよくわからないことである。二人はそれを聞いて内心かなり驚いていた。
「送らせて頂きましょうか」
「是非共」
これは当然であった。敵を知ることは兵法の基本である。
「これで作戦を立てるのにかなり有利になります」
「はい」

「今まで何度か戦ってきているのでおおよそはわかっているつもりですが。それでも実際にデータがあるのとないのとでは全然違いますからな」
「それでは後でメールで送らせて頂きます」
「お願いします」
こうしてメールで資料が送られることになった。だが話はまだ終わりではなかった。
「今物資の方はどうなっているでしょうか」
「不足はなしです」
劉が答えた。
「補給は万全の状況です」
「それは何よりです」
「やはりアルテミスに基地を置いたのが正解だったようです。今まで置いていたニーベルングではやはり距離があり過ぎますから」
「距離が」
「そうです。実際にかなりの距離がありまして」
マクレーンも語りはじめた。

## 第十二部第五章　憂いの雨その十三

「アルテミスの戦いの時には結構それが気になっていました」
「だからこそアルテミスに基地を築くことを希望されたのですか」
「ええ。ここはオリンポス攻略の拠点にもなりますしね」
彼はまた言った。
「役に立ちますよ。移動も容易ですし」
「エウロパにおける要地というわけですね」
「だからこそ戦場になったのですよ。重要でない場所になぞ兵は置かれませんから」
「確かに」
「ここを手に入れるのはちょっと頭を使いましたよ」
「頭を」
「劉参謀総長の知略でね。勝ちましたよ」
「私は何もしておりませんよ」
だが劉はここでは謙遜の言葉を述べた。
「全て将兵の奮戦故です」
「左様ですか」
「それ故の勝利ですから」
「そしてその勝利によりこのアルテミスを手に入れられた」
「はい」
ミネハタはそれ以上戦功について聞かなかった。劉の気配りをおもんばかったのである。
「そこから何が見えますか」
「勝利が」
マクレーンはニヤリと笑ってそう述べた。
「オリンポスに入城するかどうかまではわかりませんがね」
「それでは期待していますよ」
「はい」

これで電話での話は終わった。ミネハタは姿を消し二人だけとなった。二人はあらためて話をはじめた。
「まずは八条長官でよかったと言うべきでしょうか」
「そうでしょうね」
マクレーンは劉の言葉に頷いた。
「細かいところにまで気がつく人でよかった」
「いいところで釘を差してくれました」
実は二人も今後前線部隊が暴走する危険性を危惧していたのだ。そこで戦いの前にこうして注意を入れてくれた八条に感謝しているのだ。
「ただ、敵の防衛ラインは堅固ですね」
「それは変わりませんね」
二人の悩みは自軍だけではない。やはり敵に対するそれもあるのだ。
「どうしますか」
「突破するしかないでしょう」
劉は率直にそう述べた。
「彼等がそう易々と出て来るとは思えませんから」
「やはりそうなりますか」
「あの星系の守りは極めて堅固です」
あらためてそれについて言及する。
「攻略するにしても相当の損害を覚悟しなければなりません」
「しかも防衛ラインは一重ではない。何重もあります」
「そのうえで敵艦隊もいる。難攻不落と言っても過言ではないですね」
「このまま対峙していてはどうなるでしょうか」
マクレーンはふとこう言った。
「対峙！？」
「はい。それにより彼等はどうなると思われますか」
「多くの領土を占領されたままですから。次第に弱っていくでしょ

う」
劉はそう述べた。
「今の時点でエウロパの大半が我々の手にありますから」
「その場所からの税収等はないわけですよね」
「はい」
「そして産業の収入も。だとすると彼等はかなり困窮していきます」
「只でさえ軍事費にかなり金を注がなくてはなりませんし」
「はい」
「このままですと彼等は労せずして降伏するのではないでしょうか」
「いや、それはどうでしょう」
しかし劉はそれに対しては懐疑的であった。首を横に振った。
「何故に」
「おそらくそれは彼等も承知しております。そうなれば彼等はうって出て来るでしょう」
「それは好都合なのでは」
「ただそれにより全員死兵となり向かって来るでしょう。そうなれば我が軍にとっても好ましくありません」
「無駄に損害が出かねないということですか」
「はい。ですから兵糧攻めはよくありません。やはり正攻法でいくべきです」
「しかしそれでも損害が」
「要は敵の裏をかけばいいのです」
「裏を」
「はい。一つ私に考えがあります」
「いつものようにですか」
「そうですね、いつものように」
マクレーンが笑うと劉もそれに合わせるかのようにして笑った。双方共勝利を願う笑みであった。
話が本格的にはじまった。そしてそれが終わると連合軍はその巨体をゆっくりと動かしはじめた。行く先は言うまでもなかった。時

の神の座にである。

# 第十二部第五章　憂いの雨その十四

クロノスというのはギリシア神話の古い神である。父であるウラノスを倒し神々の王となった。所謂ティターン神族であり巨大な身体を持っていた。

彼は時を司る神であった。北欧においては過去をウルズ、現在をヴェルザンティ、未来をスクルズと三柱の女神達がそれぞれ司っていたが彼は一人で時を司っていたのだ。それだけでも彼の力がどれ程強大なものであったかがわかる。

しかしそんな彼にも恐れるものはあった。それは自らの神々の王としての座を脅かす存在だ。彼はそれは自分の子供であると父であるウラノス、母であり祖母でもあるガイアに教えられていたのだ。

彼は自分の子供達を生まれるとすぐに飲み込んだ。そしてこの世に生まれないようにしたのである。スペインの画家ゴヤによる有名な絵画のもとともなっている。これは人間が描いたものの中で最も恐ろしい絵であるとさえ言われている。鬼気迫る絵である。

だが彼の子供は生まれた。最後の子ゼウスである。彼は母によって救い出されひっそりと育てられていたのだ。成長すると策略によりポセイドンやハーデスといった自身の兄弟達をクロノスに吐き出させると彼等と共に父とその一族に戦いを挑んだ。予言が的中したのであった。

予言の通りになった。クロノスは破れ彼は神の王座から追われた。そしてタンタロスに幽閉されることになった。この星系はその神の名を冠していた。暗赤色の巨大な二つの太陽を中心に三十の惑星と無数の衛星を持つ巨大な星系である。今ここにエウロパ軍はその全軍を集結させていたのだ。

その巨大な太陽を左手に二隻の戦艦が並んで航行していた。軍務相であるシュヴァルツブルグの乗艦ヴァレンシュタインとモンサルヴァートの乗艦リェンツィである。二隻の戦艦はその巨体を赤い鈍

い光に照らさせながら銀河を進んでいた。
　モンサルヴァートはこの時シュバルツブルグの乗艦であるワレンシュタインにいた。その司令室でシュヴァルツブルグと共にいた。
　二人は豪奢な椅子に座している。そして薔薇色のワインを水晶のグラスで飲んでいた。側にはチーズが置かれている。見ればモツァレラチーズやカマンベールチーズもある。
「残念だがあまり上等なものではない」
　シュヴァルツブルグはチーズを一切れ口に運びながらモンサルヴァートに対して言った。
「こんな状況だからな」
「仕方ありませんね」
　モンサルヴァートはワインを一口飲んでからそう答えた。
「むしろこうしたものを飲んだり食べたりできることに感謝しなければならないでしょう」
「そういうことだな」
　シュヴァルツブルグもワインを口にした。芳香が口の中に漂う。
「こうしたことはこれからも暫くは続くだろうな」
「はい」
　エウロパはこの戦いにおいて全てのものを軍事に向けている。従って他の物資は回らなくなっている。民間の物資は配給こそ行われていないがそれでも不足がちな傾向になった。戦時下においてはよくあることである。
「勝利を収めても敗北しても」
「うむ」
「苦難が続くでしょうね」
「戦争になった場合の当然の結果だな」
　シュヴァルツブルグは溜息混じりにそう述べた。
「それも戦場になった国では」
「はい」
「それでも三十年戦争や第二次世界大戦よりはずっとましか」

「連合軍の軍律がまともなせいもありますが」
「敵に感謝しなければならないということが皮肉だな」
シュヴァルツブルグの顔がさらに沈む。
「しかし今占領地では軍による横暴もなく市民生活がまともに行われているのも事実です」
「それはわかっている」
「ならば今は素直にそれを感謝しましょう」
「そうするしかないか」
「戦場においては別ですが」
「当然だ」
シュヴァルツブルグの言葉に力が戻った。
「今度の戦いは実質的に我が軍と連合軍の最後の戦いになる。敗北はエウロパそのものの滅亡に直結する」
「はい」
「その為には・・・・・・何としても負けるわけにはいかないのだ」
「はい。既にこのクロノスにはエウロパ軍のほぼ全ての戦力が集結しております」
「だが戦力では連合軍のそれとは比較にならない」
「それも承知のうえです」
「それをどうするか、だな。さて」
彼等はこの時クロノスのことだけを考えていた。星系としての防衛ラインは実質的にここが最後である。だから当然のことではあった。しかしそれに固執し過ぎていた。他の場所には目がいってはいなかったのだ。
「コロニーレーザーは既に星系の外周に配されているな」
「ええ」
「射程は大丈夫なのか」
「あのティアマト級巨大戦艦の巨砲よりも長く設定しました。これならば大丈夫です」
「そうか。そしてあれは用意できているかな」

「あれですか」
「そう、あれだ」
二人は思わせぶりな話を展開していた。

## 第十二部第五章　憂いの雨その十五

「あれを使う時が来たのだ」
「既に整っております」
モンサルヴァートは頷いてみせた。
「今前線に向かわせています」
「あれで連合軍を何としても止めなければな」
「はい」
また頷いた。
「我々に未来はないからな」
「あと首相府から指示があったのですが」
「首相府から？」
それを聞いたシュヴァルツブルグの目の色が変わった。
「それはどんなものなのかね」
「ペーチ首相から直々のものですが」
「首相直々か」
それを聞くとシュヴァルツブルグの顔はさらに暗くなった。
「首相にも困ったものだ」
「何故でしょうか」
「開戦以降全く休んではおられないではないか。もう少し自愛が必要だと思うのだが」
「そうも言ってはおられないのでしょう」
「だがそれにより首相に何があってはどうするのだ」
シュヴァルツブルグは真剣にペーチの身を案じていた。
「それでもいいと御考えのようですが」
「馬鹿な」
彼はそれを聞いて首を横に大きく振った。
「首相は軍人ではないのだぞ。命を賭けてどうなるというのだ」
「命を賭けるのは軍人だけではないと仰っているようですが」

「この戦いに全てを捧げているというのか」
「どうやらそのようで」
「文官はそこまでしなくてもいいのだ」
彼は言い切った。
「命を賭けるのは軍人だけでよい」
「ですが首相は貴族にあらせられます」
「それがどうしたというのだ」
「高貴なる者の義務でしょうか」
「文官であってもか」
「はい。貴族だからこそ命を捧げられるのではないかと思います」
「因果なものだな」
彼はそれを聞くと大きく息を吐き出してそう言った。
「貴族というものは」
エウロパの貴族というものは連合の者達が思っている程優雅なものではないのだ。確かに生活のことはあまり気にしなくていい。しかしそこに義務が伴う。彼等は義務の遂行なくして貴族はないということをわかっていた。戦場においては誰よりも果敢に戦い、職務を果たす。それがエウロパの貴族であり青い血の責務であったのだ。
「首相も貴族に生まれなければな」
「御本人は小説家志望だったそうですね」
「あまり文章は上手くはないのだがな、首相は」
「そうなのですか」
苦笑するシュヴァルツブルグの言葉に肩をすくめさせた。
「まだ首相になっておられない時に何作か書いておられる」
「初耳ですが」
「ペンネームを使っていたからな。仕方ない」
「そうだったのですか。それでどのような小説ですか」
「恋愛小説だ。対立するそれぞれの家の少年と少女のな」
「それはロミオとジュリエットでは？」
この時代においては連合やサハラにおいてすら広く知られている

シェークスピアの有名な悲劇である。今まで数多くのオペラや劇にされている。ただしこの作品はシェークスピアの作品にしてはシニカルでウィットに富んだ表現もくすんだ独特の世界もあまりない。ハムレットやオセローのそれと比べるとかなり異色の作品と言える。
「あれにヒントを得たようだな」
シュヴァルツブルグもそれを認めた。
「だが結末は違う」
「どのようなものですか？」
尋ねたところでおおよそのことは予想がついていた。ロミオとジュリエットの結末は誰でも知っているものだ。それと違うのならばどのようなものかすぐにわかる。
「二人は駆け落ちして結ばれる」
「やはり」
「わかっていたか」
「ええ、まあ」
今度はモンサルヴァートも苦笑してしまった。すぐわかる類のことであるからだ。
「愛は必ず勝つ、というのがあの人の信念だ」
「必ず、ですか」
「少なくとも今までの小説ではそうだな」
「何か話のレパートリーが少なそうですね」
「実際に少ない。しかも文章は読みにくいときている」
「あまり売れそうにはないですね」
「軍で読んでいるのは私位だろうな」
「まさか」
「そもそもその私も興味本位で読んでいるようなものだしな」
「何か意地が悪いですね」
「意地が悪い！？心外だな」
しかしシュヴァルツブルグはそれを否定した。今度はシニカルに笑った。

「古くからの友人だからな。当然だろう」
「お友達だったのですか」
これはまた意外なことであった。モンサルヴァートは目をパチクリとさせた。
「私が士官学校、首相が大学にいた頃からな。丁度学校が隣同士だった」
「ああ、あそこですね」
モンサルヴァートはそれを聞いてそこが何処なのかよくわかった。ドイツのリューベック星系のリューベック士官学校とノルトハウゼン大学のことである。この二校は並んで建てられているのである。両方共古い歴史を持つ名門である。リューベックは多くの優れた軍人を出し、そしてノルトハウゼン大学は有名な学者を大勢出している。ジャンルこと違うが互いに切磋琢磨する関係であると言えた。
「そこで知り合った。酒場だったかな」
シュヴァルツブルグはかっての若き日を思い出す目で語った。

## 第十二部第五章　憂いの雨その十六

「何か端の方で異様に大人しい青年がいた。ちびちびとビールを飲んでいたな」
「ビールを」
「黒ビールをね。それとハムの切れ端を少し」
「何か今の首相とあまり変わらないようですね」
「あの頃からどちらかというと地味だったな」
シュヴァルツブルグはその時を思い出しながらそう述べた。ワインをまた飲んだ。
「あの頃から私はワイン派で。まあビールも飲んだが」
「はい」
「リューベックはまた格別でね。酒は飲めば飲む程いいものだった」
「私のところとはまた違うのですね」
「卿の出身校はケーニヒスベルクだったか」
「はい」
ドイツでも士官学校は多くある。彼とシュヴァルツブルグでは出身校が違うのである。これは連合においても同じだ。軍人の数が多くなった為に二十世紀のように一国に一個の士官学校とはいかなくなったのである。軍の規模が大きくなればそれだけ仕官の数も必要なのだ。大卒をそのまま士官にすることも可能だがそれだけではやはり足りない。士官学校で育てられた士官もまた必要なのである。これはエウロパだけでなくサハラ各国でも連合でもマウリアでも同じことなのである。
軍人教育課程はこの士官学校と士官候補生コースの他に下士官候補生、各種専門コース、下士官補士、そして一般兵士過程が存在する。
これは連合各国においてである。連合は比較的下士官教育や一般大学からの編入が多い。それに対してエウロパのそれはやはり貴族

教育なのである。軍人もまた貴族の階級社会に組み入れられているのが連合だ。実は爵位によって階級も影響したりする傾向もないわけではないのだ。これが連合とエウロパの大きな違いであった。

「あそこは上品だからな」

「紳士であれ、とは口喧しく言われましたね」

学校が違えば校風も違う。例えば日本にある士官学校は連合においてはかなり厳格なことで知られている。二十世紀、それも第二次世界大戦前の以来の伝統を守っているとさえ言われている。日本にある士官学校の中にはその通称を『海軍兵学校』とさえ呼ばれているものすらある。かって世界に勇名を馳せた大日本帝国海軍の兵学校のことである。この学校の教育はあまりにも厳しかったことで歴史に名を残している。その厳しさたるや鉄拳制裁はおろかも死を覚悟するような訓練もあった。あまりにも過酷と言えば過酷であった。上下関係も異常なまでに厳しく上級生からの鉄拳制裁の激しさもまた異様なまでであった。だがその厳格さにより精強な海軍を作っていたのである。その名を冠されているということはそれだけ厳しいということであったのだが他の士官学校はそうでもない。あくまで日本のこの学校が異様なだけであった。

## 第十二部第五章　憂いの雨その十七

「酒の飲み方も。色々と言われました」
「そうだろうな。あそこはそうしたことに厳しい」
シュヴァルツブルグもそれは知っていた。
「まずは身だしなみ、からだったな」
「はい」
「リューベックは違っていてな。まずは訓練だ」
「そのようですね」
その為ドイツにおいては格式のケーニヒスベルク、精強のリューベックと言われている。他にも多くの士官学校がドイツにも存在するが有名なのはこの二校であった。
「一に訓練、二に訓練」
シュヴァルツブルグは言った。
「三も四も訓練、最後も訓練だ」
「そうして教育していくのですね」
「そのかわり他は自由だったな。外出も」
「そして外で飲む、と」
「中でも飲んでいたがね」
シュヴァルツブルグは笑った。エウロパでは酒は水と同じものである。ジュースと言ってもいいかも知れない。連合各国とはまた違うのである。従って艦内飲酒もいいのだ。
「飲めば飲む程いい」
「そしてその飲んでいる場で首相とはじめて御会いしたというわけですね」
「そう。いや、最初見た時はまたえらく地味な奴だと思ったよ」
「地味ですか」
「そう。これも今と変わらないな」
「ハンガリー出身なのにドイツの大学に通っておられたのは留学で

もされていたのでしょうか」
「その通りだ」
「やはり」
「成績優秀ということでな。交換留学でドイツに来ていた」
「それでお知り合いになったと」
「最初に声をかけたのは私だった」
彼は楽しそうにそう述べた。
「あまりにも暗そうだったからな。それで声をかけたのだ」
「どうなりましたか？」
「ワインを一本おごった」
「一杯ではなくて」
「リューベックではワインは一杯一杯チビチビ飲んだりはしない。一本一気にあける」
「豪快ですね」
ケーニヒスベルグでは考えられないことであった。彼は学生時代ワインは安いものを少しずつ飲んでいた。ワインよりも水を飲むことを奨励されていた位だ。
「ワインなぞ飲まずとも生きていける」
教官にはよくそう言われた。
「それよりも健康に気をつけて水を飲むのだ」
と。実際に朝食と昼食は水が飲み物であった。茶やコーヒーすら出なかった。それがケーニヒスベルグの教育であったのだ。ここにも厳格さが出ていた。
「それであの人にも飲ませた」
「どうなりました？」
「意外と酒豪では。驚いたよ」
「酒豪ですか」
「一本では足りずに何本も空けた。あっという間にな」
「見掛けによりませんね」
「それで驚いてな。そこから付き合いがはじまった」

「長いお付き合いですね」
「今でもだからな。確かに酒は強い」
「はい」
「しかし飲む時も変わらない。そのまま大人しい様子だった」
「そうだったのですか」
それは少し意外であった。
「そしてやはり真面目だった。あの時から難しい本ばかり読んでいた」
「変わらないのですね」
「そのまま成長した感じだった。ただ責任感だけは大きくなった」
「そして今に至ると」
「だから心配なのだ」
シュヴァルツブルグの顔は深刻なものに戻っていた。
「このままでは。本当に過労死しかねない」
「周りのスタッフは止めないのでしょうか」
「止めても聞かないだろうな」
彼は沈んだ声でそう述べた。
「昔から頑固なとことがあった」
「頑固でもあるのですか」
「そうだな。自分がやらなければならないと思ったことは必ず最後までやり遂げる。そしてその時他人に迷惑や不必要な仕事は与えないようにする」
「今のままですね、本当に」
「その責任感を買われて首相になったとは聞いている。それを聞いた時には総統も見る目があると思った」
彼が首相に選ばれた時多くの者は首を傾げさせた。何故この様な人物を首相に任命したのかと。外見も派手でなく、穏やかな人格しか評価されていなかったペーチを首相にしたことに疑問を感じずにはいられなかったのだ。単なる飾りではないのか、と噂する者までいた程であった。

「世間はあの人のことがわかっていなかった」
シュヴァルツブルグはそう断言した。
「だが総統はわかっておられたのだ」
「あれは実は私も疑問に思っていたのですが」
「地味だったからな」
シュヴァルツブルグはモンサルヴァートにそう答えた。
「卿だけではないな、それは」
「しかし」
「あの人のことはよく付き合わないとわからないものだ」
「そうなのですか」
「卿の不明ではない。無論世論もな」
「有り難うございます」
シュヴァルツブルグの心配りに素直に感謝した。
「私も最初はそうだった」
「理解されにくい方ですからね」
「人は見掛けによらないとは言うがな。あそこまで極端だと」
「ですが今はあの人が首相であってよかったと本当に思います」
「うむ」
「この戦いにおいても色々と支援をして下さいますし」
「他の省庁も抑えてくれているしな」
「はい」
今エウロパの財政は軍事費に極限まで割り当てている。戦争中であるから当然のことであるがその他の教育や福祉の予算も削りに削っているのだ。これにより他の省庁の反発があるのは当然である。だがそれを抑えて戦争を円滑に進めているのがペーチであったのだ。
「それは感謝しております」
「卿の国防計画もあの人の理解がなくては実際に動かなかっただろうな」
「そうでしょうね」
「本当にな。まさかこんなに働いてくれるとは思わなかった。働き

過ぎだ」
「顔色が日に日に悪くなっているとは聞きますね」
「それはそうだろう。殆ど寝ていないという。休める時間があっても一人悩んでいることが多いそうだ」
「悩みですか」
「こうした状況だ。無理もないが」
「こんな戦局ですからね」
「だがな」
それでも彼は言わずにはいられなかった。
「少しは休んでもらいたいものだ」
「お気持ちはわかりますが」
「無理なのもわかっている。何しろ長い付き合いだ」
「はい」
友を想う気持ちは強くはあったが明るいものではなかった。シュヴァルツブルグはいい加減気がめいってきているのを感じずにはいられなかった。
「話を変えるか」
「その方がいいでしょうね」
モンサルヴァートは杯にワインを入れながら言った。従者はいなかった。
話は変わった。しかしそれでも気持ちは晴れるものではなかった。彼等にとって今はこれまでになく暗いものであったからである。

# 第十二部第五章　憂いの雨その十八

その頃オリンポスは暗鬱とした空気に支配されていた。皆口にはしないが誰もが敗戦の影に怯えていた。
「このままだとまずいんじゃないのか」
「連合軍が入城してくるんじゃないだろうか」
それぞれそう考えていた。だが口にはできない。口にしたら最後それが現実のものとなってしまうのではないか、そうしたかなり古い考えが支配していた。これは所謂言霊であった。かっては古代に顕著に見られた信仰である。文字や言葉に表われたものが現実になるという考えである。長い間殆どの国で人々の記憶から消え去っていたが今は違っていた。特にエウロパではその信仰が強かった。
あるバーでは夜になると客達がその不安を紛らわせる為に飲んでいる。皆不安で仕方がないのである。
「ん、何だこりゃ」
誰かが壁に書かれている見たこともない記号のようなものに気付いた。
「下手な落書きだな、おい」
「そりゃルーン文字だぜ」
別の客がビールを流し込みながらそれに答えた。彼はもうかなり酒が入っていたがそれでもわかったのだ。
「ルーン文字？何だそりゃ」
「御前さんは何の神を信仰してるんだい？」
「バッカスさ」
「今酒を飲んでいるからそう言うのかい？」
「まさか。本当に信仰しているぜ」
ルーン文字に最初に気付いた中年の男はそう答えた。赤ら顔にはもう酔神が見えていた。
「俺は元々あっちの生まれなんでな」

「ほう、初耳だね」
ルーン文字を指摘した男はそれを聞いて面白そうな声をあげた。
「ギリシアなのか」
「いや、アルベニアだ」
彼はそう答えた。
「片田舎の生まれさ」
「で、オリンポスにはどうして来たんだい？」
「出稼ぎに出てな。それでここで結婚して居ついちまったのさ」
「まあよくある話だな」
そう言いながらビールを飲む。そしてもう一杯注文した。
「アルベニアは懐かしいかい？」
「まあ懐かしいって言わなきゃ嘘になるな。今は行かれねえが」
「それは仕方ないさ」
今アルベニアはその全土が連合軍に占領されていた。エウロパにおいては農業を中心としていることで知られている。エウロパでも屈指の穀倉地帯を多く抱えているのだ。
「こんな御時世だからな。だからルーン文字も書かれるんだ」
「この文字ってそんなに凄いものなのか？」
「まあバッカスの信仰者にはわからねえか」
「悪いな」
バッカスとはギリシア神話におけるディオニュソスのことである。バッカスとは別名であるが愛称ともなっている。この酔漢は親しみを込めてこう呼んでいるのであろう。
「俺はアルファベットしか読めないんだ」
「そうか。これは北欧にあった文字なんだ」
「ああ、今でいうスウェーデンとかあの辺りだな」
「むしろノルウェーだな」
「寒そうな国ばかりだな、おい」
スウェーデンやノルウェーは寒冷な星系を多く持っていることで知られている。連合で言うとロシアのそれに似た気候の星系を多く

所有しているのである。
「そこの文字だったんだ。ただし普通に使われた文字じゃない」
「読み書きには使われなかったのか」
「それよりも魔法や願い事に使われたんだよ、これは」
ルーン文字を指差しながらそう述べた。
「魔法にねえ」
「まあノルウェーだけでなくドイツやそうした場所でも使われていたんだが。ほら、ワーグナーっていただろ」
「あのやけに物々しい音楽家か？俺はクラシックは聴かないんだがな」
「それでも名前位は知ってるだろ」
「ああ」
「それで色々と出て来るよな、神様が」
「そんな作品もあったっけな」
「知らないのかよ」
「だからクラシックは詳しくなくてな」
「ニーベルングの指輪ですよね」
カウンターに座っていたバーテンがそれに応えて話に入ってきた。
「そう、それだよ」
男はそれを聞いて満足したように頷いた。店は照明も暗めで客も沈んでいたが彼だけは声をあげていた。
「あれに出て来るんだよ、神様が」
「あっちの神様っていうとだ」
バッカスの信者はこの時ラム酒をストレートで飲んでいた。きつい酒だが今はそれでも飲まなければやっていられなかったのである。
「オーディンとかか」
「そう、それだよ」
ルーンの男は手を叩いた。
「やっとわかってくれたか」
「で、その神様がどうしたんだ？確か片目で長い髭を生やしてるん

だったよな」
「何だ、知ってるじゃないか」
「それ位は学校でも習うぜ」
酔漢は答えた。
「アルベニアの田舎でもな」
「まあそれはそうだな」
「その神様が作った文字だったとでもいうのかよ、それで」
「その通りさ」
男は頷いた。
「魔法の為にな。だからここにも書かれているんだろうな」
「で、何て書かれているんだ？」
「それは俺にも」
男は首を捻ってしまった。
「何て書いてあるかまではな」
「読めねえのか」
「これは特別な文字なんだよ。もうまともに使われなくなって二千年以上経つしな」
「よくそんなのが残ってるもんだ」
「魔法の世界では使われていたからな、細々と」
「そうか」
「俺も占いやアクセサリーでは見掛けているが読んだことはないんだ」
「俺は占いとか興味ねえしな」
「悪いが何て書いてあるかは読めない。悪いな」
「エウロパに勝利を、って書いていますよ」
だがバーテンがここでこう言った。
「そうなのか？」
「はい。実はそれ私が書いたものでして」
照れ臭そうに笑いながら自白する。

## 第十二部第五章　憂いの雨その十九

「この御時世ですとね。どうしてもすがりつきたくなりますよね」
「まあな」
「それで書いたのですよ。エウロパに勝利が訪れればいいのですが」
「全くだ」
だがそれが適うと思える程楽天的な者はこの場にはいなかった。皆暗い顔をして飲むだけであった。
「何とかなればいいがな」
「そうですね」
「御貴族様達に祈るか。是非勝って下さいってな」
「それしかありませんか」
「ねえだろうな、実際には」
彼等は浮かない顔で酒を飲み続けるだけであった。美味くはなかった。苦い酒であった。だが飲まずにはいられない。そうでもしないと心が持たないからだ。
だがその酒ですら飲めない程追い詰められている者もいた。他ならぬペーチである。彼はこの日も執務室に篭り仕事にあたっていた。仕事は終わることなく机の上を満たしていた。それが終わっても彼の気は休まらないのであった。
「これで今日の分は終わりだな」
「はい」
秘書官がそれに頷いた。
「では首相、もうそろそろ」
「軍は今どのような状況だね」
休むことを勧めようとする秘書官の言葉を遮るようにして問うた。
「えっ」
「どのような状況かね」
言い出そうとしたことで先手を取られて戸惑ってしまった。ペー

チはそこに入ってきた。
「知っていたら教えてくれないか」
「わかりました」
彼は戸惑いながらもそれに答えることにした。あらためて口を開く。
「今我が軍の主力はクロノス星系に集結しております」
「うむ」
「そこに連合軍が全軍を挙げて迫ってきております」
「決戦を挑むつもりだということだね」
「おそらくは」
秘書官はそう報告をした。
「この戦いにエウロパの興亡がかかっていると言っても過言ではないでしょう」
「物資は大丈夫か」
「物資ですか」
これは秘書官にとっては意外な言葉であった。士気や勇気ではなかっただからだ。
「そう、物資は足りているか」
「はい、それは」
戸惑いを消してあらためて述べた。
「万全であります」
「不足があれば言うように伝えておいてくれ」
「前線にですか」
「そうだ。他に何があるというのだ」
「いえ、それは」
言葉はなかった。
「その通りであると思います」
「人員も足りているな」
「集められるだけの兵を動員しております」
「首都防衛軍もな」

「はい」
今オリンポスは何の守りもなかった。全ての兵を前線に送っていた。そうでもなければ圧倒的な戦力を誇る連合軍には勝てはしないからである。
「私ができるのはそれだけだ。物資も人員も不足させてはならない」
「後方支持というわけですか」
「食糧や武器がなくては何もできはしないからな」
ペーチはそう断言した。
「そして」
「そして・・・・・・！？」
「いや、何でもない」
しかしこれ以上は言おうとはしなかった。言葉を中断させた。
「御苦労。もう聞きたいことはない」
「左様ですか」
「では今日はもう休んでくれ。いいな」
「はい」
秘書官は遂に切り出せずにその場を立ち去った。結局部屋にはペーチだけが残った。彼は一人執務室の机に座していた。そこで書類に目を通していた。
目はまるで深海魚の様に飛び出てしまっている。頬がこけ、顔が異様にやつれてしまった為だ。戦争前はふっくらとしていた外見がもう見る影もない。そしてその顔色も疲労が漂っていた。
不意に腹を押さえる。また痛みが走ったのだ。
「まだだ・・・・・・」
彼は呻く様に呟いた。
「まだもってくれよ」
そう言い終えるとまた書類に目を戻す。そして仕事を続けた。
灯りが彼を照らしていた。古風なキャンドルである。だがそれはキャンドルには見えなかった。命の灯火のように見えた。まるで今にも消えそうな。

第十二部　完

2005・9・5

# 第十三部第一章　角笛を持つ時その一

角笛を持つ時

オリンポスには一人の神の像が立てられている。角笛を持つ神の像だ。よく見れば鎧で武装し、槍も持っている。それは北欧神話の神の一人ヘイムダッルである。

この神は北欧の神々の中でも独特の立場にいる神である。白き神とも呼ばれ、美しい姿をしている。眠る必要がなくどんな遠くにあるものも見ることができるし聞くことができる。未来を見ることすらできる。そしてヴァルハラの入口に館を構えそこに見張りをしている。神々の門番でもあるのだ。

彼の役割として最後の戦いを告げるというものがある。ラグナロクの到来をである。彼が手に持っている角笛、ギャラルホルンを吹いた時に戦いがはじまるとされているのだ。

今そのヘイムダッルの像を眺めている者がいた。エウロパ総統ラフネールである。彼は総統官邸の窓からこの神の像を見下ろしていた。

「まだ笛は吹かれないか」

「はい」

側にいる女が頷いた。黒い髪を短く切り揃えている。そしてスーツにズボンという男の様な出で立ちである。化粧も薄く、そこにある顔も三角形の切れ長のものである。長身で中性的な顔をしている。

彼女の名をメリュジーヌ＝ド＝アランソという。フランスの名門貴族の出身である。元々彼女の父がラフネールの側近であり、その縁でラフネールの知己を得た。まだ二十代前半でかりの若さだ。それがもとでラフネールとの不倫な関係を噂する声もあった。だが実際はその心配はなかった。

これはラフネールが取り立てて高潔な人物だからではない。確かに彼は男女関係においては清潔であったがこれとはまた別の理由か

らであった。それは彼女自身の性的嗜好によるものである。
彼女は同性愛者であったのだ。所謂レズビアンというものである。彼女自身それを公言している。その為言い寄る男もいない。女に対しては彼女の方から声をかける。そうした女性であった。
「女性が女性を愛するということに何の不都合があるのでしょうか」
彼女はとある雑誌のインタヴューでそう答えたことがある。
「私の処女は家のメイドに捧げました」
そして自らの体験について赤裸々に語ったのである。
「彼女は今でも私の恋人です。私にとってかけがえのない人です」
そう主張した。そして今もまた彼女は自身の邸宅にそのメイドと一緒に暮らしている。まるで夫婦のように。
これに対して彼女の実家は沈黙を守っている。家督は弟が継いでいるから問題はなかった。それにこの家では昔からそうした同性愛者が多かったのである。彼女の祖母の妹もまた同性愛者であったことで知られているのである。遺伝的な嗜好であると言えた。
そうした人物を補佐官にすることに疑問の声がないわけでもない。だがラフネールはそれでも彼女を補佐官に任命したのである。あくまで能力を買ってのことである。
「笛が吹かれるのはもう暫く先のことです」
「そうか」
ラフネールはその言葉に頷いた。
「ではそれまでに出来る限りのことをしなくてはな」
「はい」
アランソはそれに答えた。
「軍は何時でも戦闘に入れる状態にあります」
「それは何よりだ」
「ギャラルホルンの後はグングニルですが」
ラグナロクはギャラルホルンによってはじまりが伝えられる。そして戦いの最初にオーディンが自らの槍であるグングニルを投げるのである。

「それもまた整っております」
「後は勝つだけか」
「はい」
アランソは頷いた。
「エウロパの為にも」
「それが一番の問題だな」
ラフネールはそう述べて苦笑せずにはいられなかった。
「かといっても私は滅多なことは言えない」
「はい」
「総統たる者はな。立場というものは辛いものだ」
「ですがそれを承知のうえで総統になられたのですね」
「厳しいな、卿は」
今度は別のものに対して苦笑せずにはいられなかった。
「厳しいと言われないか、彼女に」
「御心配なく」
だがアランソの言葉は簡潔なままであった。
「彼女は私のこうした厳しいところを気に入ってくれておりますので」
「そうか。ならいいが」
「それよりもギャラルホルンが鳴る前のことですが」
「まだ何かあるのか？」
「外を御覧下さい」
「ふむ」
アランソの言葉に従い窓の外に映るガイアの市街を見る。見渡す限りの官公庁の建物に高層ビルが見える。ここはエウロパの中心地である。だからこそ多くの官庁や企業の本部、本社が置かれているのである。だがアランソは今はそれ等を指差してはいなかった。空を指差していた。

## 第十三部第一章　角笛を持つ時その二

「ラグナロクの時の話は御存知ですね」
「うむ」
ラフネールはそれに頷いた。
「私はフレイを信仰している」
北欧における豊穣と虹の神である。神々の中でもとりわけ美男子であるとされている。武器として鹿の角、そして一人手に動き回る剣を持っている。
「私はノルンです」
時を司る三人の女神達のことである。
「そうか。では言うまでもないことだが」
「それでもあえて申し上げたいのですが。宜しいでしょうか」
「何だ」
「今ガイアは冬です」
「冬か」
「ラグナロクの前には三年の間冬が続くと言われています。流石にそこまでの冬ではありませんが」
「今年のガイアの冬は長いな」
「はい」
この時のガイアの冬は歴史的な寒波であった。あまりもの寒さにストーブやヒーターといったものの売り上げがこれまでになく上昇している程である。
「天気予報によるとあと四ヶ月は続くそうです」
「困ったものだ」
「ですがこれが戦いの予兆なのでしょう」
「ラグナロクの前の冬か」
「そうです。そしてギャラルホルンが鳴った時に」
「全ての終わりがはじまる、か」

二人は窓の外の鉛の様に沈んだ空を眺めていた。見ればそこから白いものが舞い降りはじめていた。
「雪か」
「冬の象徴ですね」
アランソの声はその雪に比肩し得る程冷めたものに感じられた。
「銀河に雪は降りませんが」
「星には降る、か」
雪は瞬く間にガイアを覆い尽くした。それがすぐにこの街を白銀で染めてしまった。アランソはそれを表情を変えることなく眺めていた。その目はやはり冷めたものであった。
仕事が終わるのはやはり深夜になっていた。まだ帰られるだけましであると言えた。アランソは官庁の車で自宅に帰った。ガイア郊外にあるアランソ家の邸宅の一つである。彼女は今ここに自身と恋人、そして数人の使用人達と共に暮らしている。皆昔から知った者達である。
「お帰りなさいませ」
黒いタキシードを着た執事が彼女を出迎えた。
「まだ起きていたの」
「はい」
主に応え顔を上げる。見れば女であった。長い金髪を後ろで束ねている。妙齢の美しい女であった。
「今日は帰られると御聞きしましたので。家の者は皆御主人様をお待ちしておりました」
「有り難う」
アランソはそれを聞いて一言礼を述べた。
「いつも済まない」
「いえ、これが家の者の責務ですから」
それでも彼女はそれを礼とはせず当然のものとした。
「御気になさらずに」
「そうか」

「ではこちらへ。御夕食は」
「一応とってはいるが」
彼女はここで言った。
「もうかなり前のことだ。正直に言うとお腹は空いている」
「そう仰ると思い軽食を用意しておきました」
「そうか。済まないな」
「サンドイッチで宜しいでしょうか」
「充分だ」
「ワインはどれにしますか」
「そうだな」
彼女は歩きながら考えた後でそれに答えた。
「白がいいな。国はイタリアでいこう」
「イタリアですね」
「がらはアルヴァーロがいい。あるか」
「丁度一本冷やしております」
「ではそれを頼む。食堂に用意しておいてくれ」
「わかりました」
執事は主の命を全て聞き終えるとその場を後にした。アランソはそれを見届けた後でそのまま廊下を歩みはじめた。その周りに使用人達が集まる。そして進む彼女につきながらその服をスーツから普段着に替えていく。慣れた、機械的な動作であった。双方共これが当たり前であるかのようであった。ただアランソの服は男のそれではあったが。
食堂に入りテーブルに着くとすぐにサンドイッチが運ばれてきた。野菜サンドであった。アランソは肉はあまり好まない。どちらかというと菜食主義的だ。家の者達はその嗜好を知っている為野菜サンドを出したのである。オリンポス星系の惑星の一つオケアノスから採れた野菜である。ワインも運ばれてきた。白であった。
「御苦労」
「はい」

ワインとサンドイッチを運んで来たメイドに礼を言う。それからソムリエに入れてもらったワインを食べサンドイッチを口に入れる。食事は程なく終わった。取り立てて目立ったところはなかった。
「如何でしたか」
「久し振りに家の料理を口にしたが」
「はい」
尋ねてきた執事に対して答える。
「やはり美味しいものだな。味付けがいい」
「有り難うございます。シェフも喜ぶことでしょう」
「それに素材選びもいい。結果としてそれが最高の味になっている」
「はい」
「だがより上もある。精進して欲しいと伝えてくれ」
「畏まりました」
「私はあまり家にいないのに言えた義理ではないがな」
「いえ、そのような」
「では疲れを取りたい。バスの用意はできているか」
「既に」
「では行くとしよう」
立ち上がった。そのまま浴室に向かう。更衣室に着くとやはり家の者達に服を脱がされる。全裸になったその身体は白くほっそりとしている。だが胸は大きかった。

## 第十三部第一章　角笛を持つ時その三

開けられた浴室に入るとそこには巨大な浴槽があった。サウナや冷水の浴槽まである。メインである巨大な浴槽は白い。まるでミルクを入れているように。
「ミルクを入れたのか」
アランソもそれが気になって側に控える執事に問うた。
「いえ」
だが執事はそれを否定した。
「香料を入れまして。それでございます」
「そうなのか」
「どうぞ。肌にとてもいいそうでございます」
「肌か」
それに気付き自分の肌を見た。
「見ればかなり荒れているな」
連日の激務の故であった。疲れが肌にも出ていた。
「そう思いまして。それでこの香料を使わせて頂きました」
「色々と気を使ってくれているな」
「これも御主人様の為です」
彼女達はあくまでアランソの下僕であった。それに徹していると言えばそれまでである。だが彼女達はそれ以上の者達であったのだ。そこには職務以上のものがあった。
「そうか。ならば私からも褒美を与えよう」
「褒美といいますと」
「皆服を脱げ。共に疲れを癒すとしよう」
「それはまさか」
「共に風呂に入ろう。そう言ったのだが」
「勿体ない御言葉」
「皆を呼べ。すぐにな」

「はい」
執事は嬉しそうな顔を押し殺してその場を後にした。アランソはそれを見届けた後で側に残っているメイド達に声をかけた。
「そなた達もだ」
「宜しいのですか？」
「言ったな、皆だと」
「はい」
「そなた達もだ。早く服を脱げ」
「ですが」
「主の命令が聞けないというのか？」
アランソはそう言いながら妖艶な笑みを浮かべた。
「ならば私が脱がせてやるが。どうする？」
「わかりました」
メイド達はそれに従った。それぞれ服を脱ぐ。
「それでよいのだ。では来るがいい」
「はい」
アランソはメイド達に囲まれて風呂の中に入った。そして浴槽に入った。白い液体が彼女達の裸身を覆った。
「これ」
アランソは周りにいるメイド達に対してまた声をかけてきた。
「はい」
「そんなに離れる必要はない。もっと私の側に来い」
「宜しいのですか？」
「よいのだ。こうしないと疲れがとれぬ」
「わかりました」
メイド達はそれに従った。すぐに主の側に寄った。そこでまた浴室の扉が開いた。すると裸の女性達がまた入って来た。
「来たか」
「御主人様」
その先頭にいるのは執事であった。タキシードを脱ぎ長い髪を上

で束ねていた。
「御命令の通り家の者を呼んで参りました」
「うむ、早いな」
「それでは御相伴させて頂きます」
「早く来い」
アランソは目で招いた。
「宴は客が多い方がよいからな」
「勿体なき御言葉。それでは」
「来い」
アランソは右隣にいるメイドの肩を抱いていた。そしてその耳を噛む。
「あっ」
まだ十代後半程であろうか。うら若き少女であった。耳を噛まれ小さく呻いた。
「どうした？」
アランソはそんな彼女に声をかけてきた。
「こうされるのははじめてなのか？」
「はい」
少女はコクリ、と頷いて答えた。
「男と寝たことは？」
「ありません」
「では全くのはじめてか。面白い」
その笑みが妖艶なものとなった。
「私も同じだ。男は知らない。いや、知るつもりもない」
完全なレズビアンであった。だがそれを隠そうともしない。この時代の連合やエウロパにおいては同性愛はそれなりの社会的地位を得ているのである。どちらかといえばホモセクシャルの方が主流であるがこうしたレズビアンもまたポピュラーなものとなっているのだ。これはエウロパの貴族社会だけではない。
「だが女は別だ。そなたには今の私の相手を命じる」

「有り難き幸せ」
こうして宴が行われた。長い宴が終わるとアランソは浴槽を出た。それから共に出て来た家の者達に身体を拭かせ、服を着させた後で部屋を出た。それからゆうるりとした物腰で自室に入った。

## 第十三部第一章　角笛を持つ時その四

「お帰りなさいませ」
豪奢な部屋であった。高価な装飾品で飾られている。象牙で作られた時計や水晶のシャングリラ、黒檀の椅子等が置かれている。そしてベッドは絹のもので天幕まであった。
そのベッドの上に一人の女性が座っていた。白い絹のガウンを着ており豊かな金髪を膝の辺りにまで垂らしている。彼女はその緑の、森の様な目でアランソを見ていた。声はまるで天界の調べの様に美しかった。
「只今」
アランソは優しげな笑みを浮かべてそれに応えた。今までのそれとは全く違う笑みであった。
「随分長い間家を空けてしまったな」
「それは仕方のないことです」
その女性は優しい声でそう慰めた。
「お仕事ですから」
「そう言ってくれるか」
それだけでアランソの心は和んだ。
「済まないな、いつも」
「いえ」
今度は首を横に振った。
「私はアランソ様さえおられればそれでいいですから」
「優しいな。コンスタンツェは」
「私はアランソ様の為にいますから」
「私の為にか」
「はい」
アランソはゆっくりと彼女に近付いていた。彼女の名をコンスタンツェ＝シェルヘンという。オーストリアの辺境の星系に生まれた。

ごく普通の農家の娘であり高校まではごく普通に育った。高校卒業の際にたまたま募集していたアランソ家のメイドに応募してアランソと知り合ったのである。その時はアランソもノーマルであった。
だが彼女を一目見てアランソは変わった。彼女を好きになってしまったのだ。不思議と違和感はなかった。まだ高校に入ったばかりの彼女はこの年上のメイドのことばかり考えるようになった。そして遂には彼女に恋文を出すまでになってしまっていたのであった。
「受け取ってくれるか」
アランソは真っ赤な顔で彼女にそう言った。
「けれど私は・・・・・・」
メイドである。そして平民である。身分の違いがあった。だがそれでもアランソは言った。
「構わない。いや」
訂正した。
「貴女でなければ駄目だ」
「私でなければ・・・・・・」
「そうだ。何としても貴女が欲しい。この世界がなくなっても」
「世界がなくなっても、ですか」
「もう貴女のこと意外は考えられない」
彼女は言い切った。この時はまだコンスタンツェの方が背が高かった。髪はこの時から短かった。彼女を見上げてそう言ったのである。
「貴女が私の世界の全てなのだから」
「・・・・・・わかりました」
彼女はこくり、と頷いた。
「御主人様が私を愛して下さるというのなら」
アランソは次の言葉を待った。一瞬である筈だがそれは永遠のものであるように感じられた。それ程長いものに思えた。時の流れは実に奇妙なものである。
「私はその愛に応えたくございます」

「有り難う」
アランソはこの時泣いていた。愛が受け入れられた喜びの涙であった。こうして二人の愛がはじまったのである。
「一つ聞きたい」
「何でしょうか」
アランソはベッドに寝ていた。頭をコンスタンツェの膝の上に置いている。暗がりの中の彼女の緑の瞳を見上げながら声をかけていた。
「今エウロパがどのような状況かはわかっているな」
「はい」
彼女は応えた。
「若しこのオリンポスが陥落すればどうする？」
「私の考えは決まっています」
コンスタンツェの声も笑みもやはり優しいものであった。
「私は何時までもアランソ様と一緒です」
「一緒か」
「はい」
彼女はまた言った。
「最後まで。この世界が終わっても天界で」
「嬉しい言葉だ」
アランソは目を細くしていた。
「その言葉を聞いて安心した。私にはやはり貴女しかいない」
「私もです」
「何時までも一緒にいよう。いいな」
「はい」
そのままアランソは眠りに入ってしまった。コンスタンツェも。二人で朝まで休むのであった。
朝になりアランソは屋敷を出た。その時コンスタンツェに声をかける。
「では行って来る」

「はい」
「留守中を頼むぞ」
「わかりました。それでは」
二人は互いの頬に口付けをした。そして別れる。今度出会うのは何時になるかわからない。だがそれでも彼女達は別れるしかなかった。また出会うその時まで。

## 第十三部第一章　角笛を持つ時その五

ガイアは冬化粧を整えていた。アランソはその中を車で進む。後部座席からその冬の街並を眺めていた。
「人が少ないな」
「休日ということもありますから」
隣にいる官僚がそれに応えた。彼女も女性である。
「それは当然かと」
「遊びに出る者も殆どいないようだな」
「雪のせいでしょうか」
「そう思いたいが違うだろうな」
しかしアランソはそれを否定した。
「やはり戦局のせいですか」
「それしかないだろう」
「やはり」
官僚にもそれはわかっていた。だがそれは否定したかったのである。
「そうですか」
「残念なことだがな」
アランソもその彫刻の様に美しい顔を暗くさせていた。
「辛いものだな、本当に」
「はい」
官吏の顔も暗いものであった。
「劣勢だとこうなってしまうのか」
「致し方ないと言えばそれまでですが」
「卿はどう思っているか」
「何がでしょうか」
「決まっているだろう」
彼女は隣にいる官吏に問うてきた。

「次の戦いのことだ」
「戦いのことですか」
「そうだ。どう見ているか」
「私は戦争のことはよくわかりませんが」
そう前置きしたうえで答えた。
「あまり思わしくはないと思います」
「そうか」
アランソはそれを聞いても怒りはしなかった。顔色も変えはしなかった。
「そうだろうな」
「補佐官はどう御考えですか」
「卿の考えも至極当然だと思う」
まずはそれを認めた。
「確かに今我々は危険な状況にある」
「はい」
「今後の戦いで敗れたならば滅亡も覚悟しなければならない。だがな」
そしてここで言った。
「私は軍人達を信じている。それだけだ」
「左様ですか」
「彼等ならばやってくれる。いや」
言葉を変えた。
「やってくれなければならない。わかるな」
「はい」
官吏もまた沈痛な顔で頷いた。
「さもなければ我等は終わってしまう」
「できることなら武器を手に戦場に向かいたいのですが」
「残念だがそれはできない」
アランソはそれを否定した。
「我々が戦場に赴いても何の役にも立たない。今は銃だけを持って

戦場に行けばいい時代ではないからな」
「無念です」
官吏は口を締めた。
この時代の戦争は銀河の戦争である。宇宙での戦争において個人が銃を持て行っても何にもなりはしない。足手纏いにすらなりはしない。戦いに赴くにも専門の技術が必要なのである。そしてそれを持っている者は全て戦場に送り出している。エウロパは今そうした状況にあるのだ。
「では我々は後方でこうして書類を相手にするしかないのですね」
「そうだ」
アランソは言い切った。
「それが卿の、そして私の戦いだ。わかってはいると思うが」
「はい」
「卿はその職分を果たしてくれればそれでよい。それだけでな」
「左様ですか」
「ひいてはそれが戦場の将兵達の為になる。わかってくれるか」
「心の中では色々と考えてしまいますが」
彼女はそれに頷くことにした。
「私にも青い血が流れております故」
「済まないな」
青い血、すなわち貴族だということである。
「卿は確か騎士の出だったな」
「はい」
彼女はまた頷いた。

## 第十三部第一章　角笛を持つ時その六

「ノルウェーの騎士の家に生まれました」
「そうか」
エウロパの爵位はまず国家元首がある。そして公候伯子男の五つの爵位が存在する。このうち子爵は公爵に、男爵は侯爵に仕えている場合もある。
そしてその下が騎士である。そして紳士がある。その他にも貴族としての階級は存在し、かなり複雑なものとなっているがおおまかに分けてこうなっている。
「家は代々文官でしたので。私もエウロパ中央政府に入りました」
「そして今ここにいるのだな。以前は何処にいたか」
「文部省に」
「文部省」
アランソはそれを聞いて意外といった顔をした。
「そうなのか」
「意外でしたでしょうか」
「うむ」
そして彼女はそれを認めた。
「少しな。財務省か通産省と思っていたが」
「元々教員免許も持っておりますし」
「教師のか」
「はい。小学校の」
ここで優しげな笑みになった。
「主に音楽を学びました」
「音楽か」
「ピアノのコンクールにも度々出たことがありますよ」
「そうか。私はピアノはあまり聴かないが」
「補佐官はかなりの音楽好きだと御聞きしておりますが」

「実はそれはクラシックではないのだ」
「おや」
「ヘビーメタルだ。私が好きなのは」
「そうだったのですか」
それを聞いて今度は官吏が意外そうな顔をした。
「またそれは」
「あの派手な感じがいい」
そう語るアランソの顔が僅かに綻んだ。
「衣装もな。今一番好きなのはヘルモーズだ」
北欧の神の名を冠したグループである。五人組の実力派バンドとして知られている。彼等が言うには自分達こそがエウロパ最高のヘビメタバンドである。
「そこいらのニセ者とは訳が違うんだよ！」
「俺達の本物の音楽を御前等に聴かせてやるぜ！」
ステージでそう叫んでファンや他のグループを挑発する。だがそれはステージやインタビューの中だけで素顔はいたって素朴な青年達である。メイクをして楽器やマイクを手にすると性格が変わるのである。
「ヘビーメタルはやはりあそこまで反体制的、反宗教的でなければいけない」
「そうなのですか」
「ヘビーメタルは聴かないか」
「申し訳ありません」
「謝る必要はない。音楽の趣味なぞ人それぞれだ」
「左様ですか」
「少なくとも私はそうだな。だがピアノも嫌いではない」
「有り難うございます」
「そしてコンクールではどうだったか」
「学生の頃の話ですが」
彼女はそう前置きをしたうえで述べた。

「何度か賞も頂いております」
「ではそれなりに自信はあるか」
「最近はあまり弾いてはおりませんが。それでも暇を見つけて」
「そうか。では一度聴いてみたいな」
「宜しいのですか？」
「頼む。そうだ」
アランソは少し思案した後で述べた。
「この戦いが終わってエウロパが残っていたならば。それでいいか」
「わかりました。それでは」
「頼むぞ。卿の名は」
「アンネローゼ＝フォン＝メルヒオールです」
「メルヒオールか。覚えたぞ」
「はい」
「それではな。その時はエウロパを祝福してくれ」
「わかりました」
話をしているうちに官邸に辿り着いた。アランソは官邸に辿り着くとメルヒオールを伴ってラフネールのもとに向かった。そこでは既にペーチがいた。

## 第十三部第一章　角笛を持つ時その七

「首相」
「火急の用件があってね」
ペーチは傍目からも疲れが顕著な声でそう述べた。
「申し訳ないが来させてもらったよ。総統はおられるかな」
「総統ですか」
「そうだ。君が今来たところを見るとまだのようだね」
「はい」
補佐官は総統が来る前に色々と仕事をしておくのもその職務の一つである。従って補佐官の朝は早いのである。
「では少し待たせてもらうか」
「御言葉ですが首相」
「何かな」
彼はそれを受けてペーチに顔を向けた。
「何時こちらに来られたのですが」
「少し前だが」
彼はそう答えた。
「それが何か」
「いえ」
アランソは一呼吸置いたうえでそれに返答した。
「もっと早くから来られていたと思いましたので」
「残念だがそれはないよ」
笑みを浮かべてそれを否定した。アランソはその笑みから何かを感じ取っていたがそれは口には出さなかった。
「左様ですか」
「早くから来ても開いてはしないだろう？」
「それはそうですが」
だが彼女が思ったのはそれではないのである。しかしそれを口に

出すことはできはしなかった。
「それで総統だが」
「はい」
「昨日は帰られているな、官邸に」
「はい」
アランソはそれに頷いた。
「深夜に。帰られています」
「そうか。ならいい」
ペーチはそれを聞いてまた笑みを作った。
「あまり無理をなさってはよくないからな」
「それですが首相」
「何かな」
「いえ」
言いたいことがあったがそれは言い出せなかった。
「何もありません」
「そうか。ならいいが」
「はい」
誰に対しても、総統に対しても直言を憚らないアランソであるがこの時ばかりはとても言えなかった。言うにはあまりにも重苦しかったからである。止むを得ず話を変えることにした。
「総統ですが」
「うん」
「そろそろ来られる頃だと思います。それまでお茶でも如何ですか」
「お茶か」
「はい。デメテル星系で採れた茶を持っておりますが。如何でしょうか」
「悪くないね」
「ローズでどうでしょうか。きっと御気に召されると思いますよ」
「それではもらおうかな」
「わかりました。メルヒオール君」

「はい」
それまで後ろに控えていたメルヒオールがそれに答えた。
「早速伝えてくれ。ティーを二つ」
「わかりました」
「お茶菓子もね。頼んだよ」
「はい」
二人は官邸のティールームに入った。白い装飾で飾られた落ち着いた雰囲気の場所である。そこで二人は白いテーブルに向かい合って座っていた。見ようによっては年の差の離れたカップルに見えなくはない。だが男は朴念仁で妻をこよなく愛することで知られる冴えない男で女の方は同性愛者であった。それを知ってしまえば甚だつまらないカップリングであった。
音楽が聴こえている。朝を知らせるような優しい曲だ。ペーチはそれを聴きながら目を細めていた。
「いい曲だね」
「ヨハン＝シュトラウスの曲でしょうか」
アランソは記憶を辿りながらそれに応じた。
「二世の方だったかと」
「そう、これは息子の方の曲だね」
首相はそれに答えた。
「青く美しきドナウだ」
「それでしたか」
「かってオーストリアの帝都ウィーンを流れていたドナウ川を曲にしたものだったな、確か」
「お詳しいですね」
「いや、実はこの前オーストリア国王に教えて頂いたのだよ」
「そうだったのですか」
今のオーストリア国王はフランツ＝ヨーゼフ三世である。二千年もの間残っているハプスブルクの血脈を今に伝える古風な顔立ちの老人である。細長い顔に丸い目、鷲鼻、厚い唇とやや突き出た顎。

顔に出ているそれ等のものが彼の血筋を現わしていた。それこそがハプスブルクの血脈の証であったのだ。質素にして質実剛健な人物として知られ、音楽や芸術にも造詣が深いことで知られている。
「フランツ陛下から」
「何でもあの頃のオーストリアは色々あったそうでね」
「オーストリア＝ハンガリー帝国の頃でしょうか」
「そう、その頃だ」
彼はそれに答えた。
「あの頃のオーストリアは分裂寸前だった」
「確か欧州全体で民族主義運動が活発化していた頃でしたね」
「うむ」
長い間広大な領土と多くの民族を統治してきたオーストリアであったが十九世紀の民族主義のうねりをまともに受けてしまったのである。オーストリア自体はゲルマン民族であるがその領土であったポーランドの一部、チェコスロバキア、ハンガリーといった地域の多くはスラブ系であった。そのうねりを受けて遂にオーストリアはオーストリア＝ハンガリー帝国という二重国家になった。その中でもとりわけハンガリーの力が強かったのである。なおハンガリーはアジア系の国家でありマジャール人がそのルーツであると言われている。既に髪も目も色が違っており、肌の色も変わってしまっていたが彼等はアジア人だったのである。それは今は連合にいるフィンランドも同じであった。
その二重帝国の国家元首はフランツ＝ヨーゼフ帝であった。質素で生真面目な人物であった。彼は分裂しようとする自らの国をその絶え間ない努力と職務により抑えていた。決して民主的な人物ではなく頭も固いと言えば固かったが彼は公平であり贅沢を好まなかった。そして黙々と仕事をこなした。それにより国家を保ったのである。
その当時のウィーンはギリシアの天界の神ゼウスの像がよく建てられたがその顔は彼の顔であった。彼をゼウスになぞらえそれによ

りオーストリアの象徴としたのである。彼はこのモザイク国家の唯一の象徴であった。象徴として生きることにより国家を保持することを選んだのであった。

美貌で知られる皇后エリザベートは暗殺され、息子であった皇太子ルドルフは心中した。国家は常に分裂の危機にありプロイセンやロシアとの関係に常に苦慮していた。この世のあらゆる不幸が彼を襲った。だが彼はそれでも日々黙々と仕事を続けオーストリアを維持してきた。第一次世界大戦のさ中にこの世を去ったが彼が健在ならばハプスブルク家の一時断絶はなかったであろうと言われている。

「我々は帰って来ました」

二十一世紀オーストリア王として玉座に帰り着いたハプスブルク家の女当主マリアはまずこう言った。

「愛する国民達の前に。そしてフランツ＝ヨーゼフの側に」

そしてかってフランツ＝ヨーゼフが被った王冠を頭に飾った。その時彼女は泣いていたという。かって彼が守り抜いたものをようやく戻せたことに。

そうした歴史があった。この曲はかっての地球にあった時代を偲ばせるものであったのだ。ペーチはそれを静かに聴いていた。

## 第十三部第一章　角笛を持つ時その八

「私はシュトラウスの曲が好きでね」
「そうなのですか」
アランソは話を聞きながら今日はやけにクラシックと縁があると内心思っていた。
「こうもりも好きだよ」
「オペレッタの」
「そう、あれはね。何回も見た」
「新年になると多くの歌劇場で上演されるそうですね」
彼女が知っているのはこの位である。それ以上は入ることができない。
「そうだね。元々晴れやかな作品だし。そうだ」
「！？」
アランソはペーチの声に顔を上げた。
「何か」
「補佐官も出演してみてはどうかな」
「こうもりにですか」
「うむ。一つ似合う役があってね」
「失礼ですが私はクラシックにはあまり」
「いや、こうもりは特別だから」
ペーチはそう言って彼女を宥める。
「誰でもゲストで参加ができるのだよ」
「それはまた」
「それもあるしね。そしてその役とは」
「どんな役でしょうか」
「オルロフスキー公爵という貴族なのだが」
「オルロフスキー」
彼女はそれを聞いて顔を少し動かせた。

「一見だけでは何かスラブ系だと思われますが」
「確かロシアの貴族だったかな」
「ロシアの」
「舞台は十九世紀だったからね。まだあの国にも貴族は存在した」
今彼等は連合の主要国の一つである。第一次世界大戦までは貴族が存在し大きな力を持っていたことで知られている。ロシア革命の折は多くの亡命者を生み白系ロシア人と言われていた。
「それだけでどれだけ古い作品かはわかるね」
「はい」
アランソはそれに頷いた。
「確かテレビも電話もない時代でしたね」
「今となっては信じられないことだが」
「ええ」
「そうした時代にお金だけがあるとどうなると思うかね」
「今一つ実感が沸きませんが」
彼女も貴族であるが今の時代の貴族である。当時の貴族ではないのでどうしても想像が及ばないところがある。だがそれでも考えた後で答えた。
「暇なのではないでしょうか」
「そう、彼は暇だった」
「やはり」
「それで自宅にお客を招いてパーティーをすることが好きなのだ。退屈を紛らわせる為にね」
何処となく退廃的な話であった。
「確かに退屈ならば誰かが側にいてくれるに限る」
「そう。そしてこの公爵は役柄では男だが」
「演じる場合は違うのですか」
「男が演じる場合もあるがね。多くは女性が演じる」
「また余計に退廃的ですね」
「それを考慮した演出なんだよ。この公爵はね」

「それで私にその退廃的な役を演じてもらいたいと」
「あ、いや」
失言にとられたかと一瞬危惧したがそれは杞憂であった。

## 第十三部第一章　角笛を持つ時その九

「そういうわけではないが」
「わかっております」
当人が笑ってそれを否定したのでそれはなかった。
「それならばいいが」
「何か面白そうな役ですね」
「勿論歌う場面もある」
「そうでしょうね」
「この前はカウンター＝テノールが演じていたな」
カウンター＝テノールとは男性ながらソプラノに匹敵する声域で歌う歌手のことである。その声も歌う時は女性のものかと思える程にまでなる。かってカストラートという去勢した男性が歌ったバロック期の多くの作品を歌っていることでも知られている。代表的な役としてはヘンデルのジュリアス＝シーザーのタイトルロールやモンテヴェルディのポッペアの戴冠のネロ等がある。余談であるが長い間暴君とされてきたネロはこの時代においてはそうは認識されていない。芸術を愛し、気前のよかった皇帝として知られている。繊細な人物であり戦争も好まなかった。確かにキリスト教徒を迫害したのは事実であるがこれはカリギュラからであり当時のローマの基本政策の一つであった。むしろ彼は市民や奴隷にはいい皇帝だったのである。その証拠の一つとしてローマ市民はネロの帰還を信じていたしその墓には花が絶えることはなかった。
「あれはよかった」
「それでどういった風に出ればいいのでしょうか」
「極論すればヘビメタで出てもいい」
「御存知でしたか」
「まあな」

彼女の音楽の趣味はわりかし知られている。ヘビーメタルの歌手と握手する写真までである程である。
「ギターを派手に演奏しながら歌ってもいい」
「それはもうクラシックではないのでは？」
「本来クラシックもエンターティメントだよ」
ペーチはそう述べた。
「かってオペラは市民の娯楽の場だった」
「今のように背筋を伸ばして聴くものではなかったのですか」
「バロック時代のグランド＝オペラ等は特にそうだったらしいね。まあワーグナーをそうそう気楽に聴ける者はいないだろうが」
「ワーグナー家も五月蝿いですしね」
「うむ」
ワーグナー家はこの時代も存在している。ドイツのウルヴァシー星系に邸宅を構え新バイロイト劇場を拠点に活動している。この劇場はかってのバイロイト歌劇場がそうであったようにワーグナーの楽劇だけを上演している特別な歌劇場である。今ワーグナー家の当主はゴッドフリート、ジークムントの兄弟である。
「まああれは特別だ」
「はい」
「そのクラシックが本来持っていた娯楽をこうもりでは復活させているのだよ」
「だからギターを持ち出しても自由なのですね」
「そういうことです」
ペーチはそう答えた。
「だからよかったら出演してくれ」
「はい」
「あくまで気が向いたらでいいからね」
「わかりました」
ここで紅茶が到着した。ローズティーである。
「では首相、どうぞ」

「有り難う」
お茶菓子はケーキである。苺と生クリームのケーキである。アランソはまずそれに手をつけた。だがペーチは手をつけようとはしなかった。彼女はそれを見て内心思うところがあったがやはり口にはしなかった。
「美味いね」
「そうでしょう。この茶は特別な茶でして」
「ほう」
「丹念に栽培されていますから。薔薇もね」
「深紅の薔薇だね」
「はい。味も宜しいでしょう」
「うん。確かに薔薇は食用でもあるが」
「はい」
「それでもかなり旨いね。他の薔薇よりも甘く感じるよ」
「そうでしょう。砂糖もいらない程でして」
「そうだね」
「まだありますからゆっくりと味わって下さい。ティーは心を落ち着かせますし」
「心をか」
「疲れた時にはいいですよ。さあ、もう一杯」
「有り難う」
二人はローズティーを堪能した。飲み終えたところで席にメルヒオールがやって来た。
「総統が来られました」
「そうか」
「時間通りだね」
「はい」
アランソは左腕の時計を見てそう言った。メルヒオールはそれに頷いた。
「ではこちらに」

「うむ」
二人は席を立った。そしてラフネールの側に向かう。総統の執務室に入るともう彼が席に座っていた。
「私を待っていたそうだね、二人共」
ラフネールは二人にまずそう声をかけてきた。
「待たせて申し訳ない」
「いえ」
ペーチがそれを否定した。
「お茶を楽しませてもらいましたし」
「お茶を」
「はい、アランソ補佐官におごってもらいまして」
「ローズティーをだね」
「御存知でしたか」
「私も何度か馳走になったことがある」
彼はその気品のある整った顔を綻ばせてそう答えた。
「あれは絶品だ」
「有り難うございます」
「また今度馳走になりたいが。いいかな」
「ええ、何時でも」
アランソはそれに頷いた。
「御声をかけて頂ければ」
「では近いうちにな。それではだ」
彼はあらためて顔を引き締めさせた。
「用件は何だね、首相」
「はい」
ペーチは真摯な顔でそれに応えた。
「社会保険の財源のことでお話がありまして」
「あれか。どうなったか」
「とりあえずは直接税の増税で賄うことにしたのですが」
「今の状況ではそれは難しいな」

「はい。戦後のことを考えますと」
「それがある。おそらく戦争の後は色々と大変だ。復興にまず金を回さなければならない」
「はい」
「今は据え置きにしておこうと思うのだがどうだ」
「総統、御言葉ですが」
しかしここでアランソが話に入ってきた。
「それでは社会保険そのものが成り立たなくなる可能性がありますが」
「それもそうだが財政的にな。厄介なことになるぞ」
「ならば各惑星の高速道路の使用料、そして国立大学の授業料を僅かにあげてはどうでしょうか。あとは恒星間航行船の運賃をあげるのです」
「それだけで足りるのか」
「他にもありますが。ですがそれだけでかなりの財源になると予想されますが」
「ふむう」
ラフネールはそれを聞いてあらためて考え込んだ。そしてペーチに顔を向けて問うた。
「首相はどう思うか」
「一存では答えかねますが」
「それでもどう思うか」
「まずは財務省、そして厚生省と話し合ってみたいと思います。判断はそれからです」
「暫く待って欲しいということだな」
「はい。こちらは火急の用件ではありませんのでまだ調整の時間はありますから。もう暫くお待ち頂けるでしょうか」
「わかった。それでは宜しく頼むぞ」
「はい」
「そういうことだ。補佐官、それでいいか」

「私に異存はありません」
彼女は静かな声でそう述べた。
「社会保険が万全に執り行われることを願うだけです」
「そうか。ところで首相」
「はい」
ラフネールはまた彼に顔を向けてきた。
「用件はそれだけか。それならばこんなに朝早く卿自ら来ることもないと思うが」
「実はもう一つ用件があります」
彼は落ち着いてそう述べた。
「軍からの要請がありまして」
「軍から」
それを聞いたラフネールとアランソの顔色が一変した。

## 第十三部第一章　角笛を持つ時その十

「どのようなものだ」
「テューポーンの使用許可を求めてきておりますが」
「テューポーンのか」
「如何致しますか」
「止むを得ないだろう」
彼はそれを認めることにした。
「今の戦局を打開する為にはな。許可する」
「わかりました」
「ただし一つ言っておく。使用には細心の注意を払うようにな」
「はい」
「惨事なぞ起こらぬように。わかったな」
「了解しました。それでは軍にはそのように伝えます」
「うむ、頼むぞ」
「私からはそれだけです。それではこれで」
「あっ、少し待ってくれ」
だがラフネールはここで彼を呼び止めた。
「何か」
「連合の方からは何もないか」
「何もといいますと」
「卿は聞いてはいないか。連合ではこの戦いが終わったならばすぐに講和条約を締結したいと考えているとの情報が入ってきているのだ」
「講和の」
「そうだ。それに関しては何か聞いていないか」
「残念ながら初耳です」
「そうか。ならいいが」
まずはそう言って間を開けた。それからまた述べた。

「だがそうした話が入って来たならばすぐに伝えてくれ。いいな」
「わかりました」
「私からはそれだけだ。御苦労」
「はい」
こうしてペーチは総統官邸を後にした。ラフネールとアランソは彼を見送った。その後でアランソはラフネールに問い掛けた。
「総統」
「何だ」
「先程のお話ですが」
「講和のことか」
「はい。それは真実でしょうか」
「本当のことだ」
彼はそれを認めた。
「情報部の方から連絡があった。マウリアが仲裁に入る形でな」
「マウリアが」
「彼等が連合の要請を受けているという話もある。どうやら連合もエウロパ全土を占領、若しくは併合するつもりはないらしい」
「ではとりあえずは滅亡はないということですか」
「元々彼等は我々を併合するつもりはなかったようだがな」
彼は仮面の様に強張った顔でそう述べた。
「だが領土は奪われる可能性がある」
「ニーベルングとその周辺はかなり危ないでしょうね」
「それに関しても調査をはじめようと思う。彼等が何を要求してくるかをな」
「バチカンはどうなりますか」
「バチカンか」
「はい。今回の戦いの主要因なのですが」
「譲り渡すしかないのかもな」
そう語る顔が沈痛なものとなる。
「おそらく彼等はまずはそれを要求してくるだろう」

「そういえばバチカンの移転先の星系の候補地を探しているという情報もありますね」
「そうだろうな。勝利を収めた場合に備えて」
ラフネールはここで立ち上がった。そして窓の外を眺めた。
「それは当然のことだ」
「バチカンがエウロパから離れるのですか」
口では簡単に言えても俄かには信じられるものではなかった。
「あのバチカンが」
「教皇庁の移転はかってもあったことだ」
ラフネールは素っ気無くもあるが無念そうな声でそう述べた。
「教皇のバビロン捕囚でな」
「中世の話でしたね」
「そうだ。あの時はフランス王との対立が原因だった」
「今回は我々と連合との戦いにより」
「こうして言うならば迂闊なことをした」
ラフネールのその言葉に血が滲んだ。
「諜報員を送り込むのにバチカンを利用すべきではなかったな」
「今言っても仕方のないことでありますが」
「それはわかっている。だがそうならばこれは裁きだな」
「裁き」
「世俗のことに神を利用したことに対するな。もっとも世俗にまみれていない教会なぞかってなかったことだが」
「残念なことですが」
アランソはその言葉に頭を垂れた。
「だからといってこの難から逃れるわけにはいかないが。既にクロノスに迫っていたな」
「はい」
「テューポーンだけで足りなかったならばどうなると思うか」
「言うまでもないことだと思いますが」
「そうだな。だが彼等に期待しよう」

「はい」
「勝利をな」
翌日クロノスに向けて巨大な円形状のものが運ばれた。巨大なそれはまるで衛星のようであった。それが一直線にオリンポスからクロノスに向かうのであった。

# 第十三部第一章　角笛を持つ時その十一

その頃クロノスでは防衛ラインの建築がほぼ完成されようとしていた。連合軍の侵攻には何とか間に合った形となっていた。
「とりあえずは一安心といったところか」
モンサルヴァートは前線でその状況を眺めながら呟いた。
「後はテューポーンだけですね」
「そうだな」
そしてプロコフィエフの言葉に頷いた。
「問題は総統がそれを許可して下さるかどうかだが」
「許可されるしかないでしょう」
「されるしかないか」
「戦局を鑑みますと。当然ではないかと」
「確かにそうだが」
モンサルヴァートはそれに頷きながらも少し違和感を感じていた。
「だがあれを動かすのはまさに最後の最後だ」
「はい」
「我がエウロパが極秘に開発してきた切り札。あれを出すのだからな」
「切り札は切らなくては何にもなりません」
プロコフィエフは淡々として調子でそう述べた。
「そのまま負けては何にもならないでしょう。遅れた兵器は小説にはなりますが」
「戦争には貢献しない、か」
「はい。ですからここで切るべきだったのです」
「ふむ」
「敵は二千個艦隊。それに対抗するにはあまりにも数が少な過ぎます」
「その二千個艦隊が一気にここに雪崩れ込んだらどうなるかな」

「それはもう言うまでもないことです」
やはりその声は淡々としたものであるが内容はエウロパにとって実に厳しいものであった。だがそれでも彼女はその言葉を止めなかった。
「敗北です」
「やはり数は如何ともし難いということか」
「はい。だからこそ我が軍は今まで敗北を重ねてきました」
「そうだな」
「北方でも中央でも。南方は無血で明け渡しましたが」
「あれにしろ我が軍の屈服だな」
「残念なことに」
「その時にティアマト級巨大戦艦の中に入ったな」
「はい」
「あの中を見て思った。連合はあまりにも巨大だ」
モンサルヴァートは自身の言葉に感情を込めてはいなかったがそこには脅威を感じる者独特の響きがあった。敵の戦力を率直に認める軍人独特のものであった。
「外見だけではないのだ。彼等は」
「だからこそ今まで勝利を収め続けられたのですね」
「そうだ。だが無敗の軍というものは今まで存在しなかった」
「ローマ然りモンゴル然り」
「彼等も敗れることはあった。人間の軍隊で不敗の軍なぞ本来は有り得ない」
「彼等にも弱点はある筈ですね」
「彼等の象徴はその巨大戦艦だな」
「はい」
「敵の動きを見ると常にあの艦を中心に動いている」
「旗艦だからでしょうか」
「ただの旗艦ではないな、おそらく」
「指揮艦も兼ねていると」

その洞察は流石であると言えた。エウロパの参謀総長だけはあった。
「その動きを見ているとな。つまりあの艦を撃沈すればそれでその艦隊の通信、作戦指揮は大幅に低下する」
「烏合の衆となるというわけですね」
「そう見ているが。どうだ」
「それはどうでしょうか」
だがプロコフィエフはそれには懐疑的であった。
「違うというのか」
「はい。連合の通信システムはかなり整備されていますから。確かにあの艦は敵艦隊の中心でありますが」
「それだけではないと」
「私はそう思います。通信、及び指揮能力はかなり落ちるのは事実でしょうが」
「そうか。それだけではないか」
「どうやら連合軍はかなり充実した通信、作戦指揮能力を持っています。だからこそ連度と比較してあそこまで迅速な動きが可能なのでしょう」
「全ては艦の性能か」
「そういうことになります」
「我が軍で彼等い勝っているのは速度しかない」
「はい」
「防御戦でそれをどう活かすかだな」
「それは容易なことです」
「容易か」
「閣下、それに関してお話したいことがあります」
プロコフィエフの表情がさらに厳しいものとなった。
「何だ」
「まずはすぐに艦隊司令達をお集め下さい」
「司令官達をか」

「はい。それからお話させて頂きたいと考えているのですが」
「私だけでは駄目か」
「どうしても。お願いします」
「わかった。ではすぐに彼等を招集するとしよう」
「有り難うございます」
こうしてリェンツィに彼の下にいる主立った艦隊司令達が集められた。参謀達も一緒であった。彼等はリェンツィの司令室に集結した。

# 第十三部第一章　角笛を持つ時その十二

「今ここに来てもらったのは他でもない」
モンサルヴァートは諸将を前にしてまずはこう述べた。席の第二席にはプロコフィエフが控えている。モンサルヴァートはエウロパ元帥、プロコフィエフは元帥であり艦隊司令達は上級大将であるからこの席次は当然であった。
「我々の作戦行動に関してのことだ」
「それならばもう決定していることではないでしょうか」
まずマトクがそう述べた。
「防御戦ということで。違うのですか」
「確かにその通りだ」
モンサルヴァートは彼の言葉を認めた。
「我が軍はこのクロノスにおいて敵軍を迎撃する。その他にはない」
「やはり」
「ではここでお話することはないのでは」
ステーファノがそう述べた。
「後は敵軍を迎え撃つだけです」
「テューポーンも来るという話ですし。それでよいのでは」
「まあ話は最後まで聞いてくれ」
アローニカが口を開いたところでそう言った。
「問題はその動きだ」
「動き」
「そう。敵軍の艦艇と我が軍の艦艇を比較してどう思うか」
「彼等と我々のものをですか」
「率直に聞きたい。どう思うか」
「そうですな」
クライストがまず私見を述べた。
「正直に申し上げましてかなりの戦力差があります」

「そうか」
「火力も防御力も。通信やダメージコントロールにおいてもかなりの開きがありますな」
「他にはないか」
「全体的に大型で武器の搭載量も多いです。艦載機もかなりの数ですな」
ジャースクも述べた。
「あの数には負けます」
「数か」
「艦艇自体の数はもう言うまでもないですが。駆逐艦で我が軍の巡洋艦、巡洋艦で戦艦レベルの戦闘力があるというのが脅威になっております」
ニルソンも言った。
「全体的に見てかなりの強敵です。ただ一つ弱点があります」
「それは何だ」
ターフェルの言葉に一同視線を集中させた。数多くの光が彼に向けられた。
「速度です」
モンサルヴァートはそれを聞いてやはり、と思った。だがそれは口には出さなかった。
「これは今まで多くの者が指摘していますが。速度だけは我が軍の方が上です」
「確かに。ターフェル殿の仰る通りだ」
ゴドゥノフがそれに頷いた。
「彼等の艦艇はどうやら速度を犠牲にして他の部分を充実させているな」
「今までその差で何度も危ういところを助かってもいる。確かに速度は我等の方が上だ」
提督達は口々にそう述べた。しかしここでモナコが言った。
「ですが今回の戦いではどうでしょうか」

「モナコ大将、何か疑問があるのか」
「はい」
彼はモンサルヴァートの言葉に頷いた。
「閣下、宜しいでしょうか」
「うむ」
彼はモナコの発言を認めることにした。
「我が軍は今防御に徹することになっております」
言うまでもないことであるように思われたが彼はあえて言った。
「それで機動力はあまり必要ないのではないでしょうか。肝心なのは堅固な陣です」
「陣か」
「はい。それを固める方が重要だと思うのですがどうでしょうか」
「卿の言うことは戦術から見て正論だな」
「有り難うございます」
「しかしそれで勝てると思うか」
「御言葉ですがそれはあまり期待できないでしょう」
モナコはそうも述べた。
「敵の数はあまりにも大きいです。おそらくは無理かと」
「そう見るか」
「はい。それしかないとは思いますが」
「発想を変えてみてはどうか」
そしてここでこう言った。
「発想をですか」
「そうだ。何も防衛戦は陣を整えてだけやるものではないだろう」
「それはそうですが」
「機動戦による防衛戦術はどうかと思うのだが」
「機動力を使って」
「具体的には敵が来たならば叩くというやり方だ。少なくとも我々はそうして戦ってはどうかと思う」
「シュヴァルツブルグ閣下の軍とは別に」

「それはどう思うか」
「そうですね」
彼は一呼吸置いてから答えた。
「悪くはないと思います。遊撃戦力とするならば」
「わかってくれたか」
「ではそれでいきましょう。ただ一つ考慮しておかなくてはならないことがあります」
「わかっている」
モンサルヴァートはにこやかに笑ってそれに頷いた。
「シュヴァルツブルグ閣下とはその方向で調整する。それでいいな」
「はい」
「ではそれで行こう。皆それでよいな」
「ハッ」
司令達も参謀達もそれで頷いた。
「異論はありません」
「納得しました」
「よし。それでは決まりだな。我が軍は遊撃戦を展開する」
「了解しました」
「この戦いにはエウロパの興亡がかかっている」
そう語るモンサルヴァートの顔が真摯なものに戻った。
「卿等の健闘を祈る。以上だ」
会議は終わった。彼等はそれぞれの持ち場に戻った。心を整えいよいよ次の戦いにいどむのであった。

# 第十三部第一章　角笛を持つ時その十三

エウロパ軍は戦いの準備をほぼ整え終えていた。モンサルヴァートの計画もシュヴァルツブルグに報告されていた。それはモンサルヴァート自身に依って為されていた。
「それで宜しいでしょうか」
「遊撃戦力か」
彼等はこの時クロノス第三惑星タントリスにいた。この名の由来はこの惑星が漆黒の大地に覆われていることからきている。それが地獄を連想するからだ。
彼等はそこに設けられた基地にいた。そしてそこで今後についての打ち合わせを行っていたのである。
「はい」
モンサルヴァートは彼の問いに頷いた。
「危急があればその場に急行する機動戦を考えているのですが。如何でしょうか」
「そしって私の戦力が防衛の主軸を担う、か」
「そういうことになります。そしてローズ司令長官の戦力も」
「私の戦力も」
そこにはローズもいた。エウロパ軍の最高幹部達がそこに一同に会していたのだ。
「どうでしょうか。それで」
「確かに陣を組んで戦う戦力だけでは柔軟な作戦行動はとれないな」
シュヴァルツブルグは顎に手を当てて考えながらそう述べた。
「作戦にある程度の柔軟性は不可欠だ」
「では」
「うむ。卿に任せたい。それでよいか」
「わかりました。有り難うございます」
「それでは頼む。期待しているぞ」

「お任せ下さい」
「艦隊はそれでいい。防衛ラインはようやく整った」
「遂に」
「前線にコロニーレーザーを配置し、機雷も敷いた。これで敵の攻撃は抑えられる。ある程度ではあるが」
「了解しました」
「そして要塞の整備も整ったが。後はあれだけだな」
「あれですか」
それを聞いた二人の顔色が一変した。
「そう、あれだ」
シュヴァルツブルグもそれは同じであった。三人はその顔で互いを見合った。
「テューポーンは今何処にいるか」
「今私の部下達がこちらに向けて移動させております」
それに対してローズが答えた。
「卿の部下達が」
「はい。もうすぐでこちらに到着する頃だと思われます」
「そうか」
シュヴァルツブルグはそれを聞いて安堵したように頷いた。
「それならばよい」
「そしてどちらに配置しますか」
「外周に置こうと考えている。防衛ラインの第一次ラインにな」
「左様ですか」
「まずはそこで敵の戦力を消耗させたい。どう思うか」
「そうですね」
「本部長はどう思うか」
「第一次にですか」
だが二人はそれにはいささか難色を示していた。
「それではかえってテューポーンの威力を削いでしまうのではないでしょうか」

「私もそう思います」
「何故そう思うのか」
シュヴァルツブルグはそれを受けて二人に尋ねた。
「よかったらその理由を聞かせてもらえないか」
「はい」
それにローズが応えた。
「第一次ラインに置いたならばそれだけ敵の目に入ります」
「うむ」
「そして集中攻撃を最初に受けます。それでは防衛の任にあたれないかと」
「そうなるだろうか」
「はい。それにテューポーンはあまりに強大でその影響が友軍にまで及びかねません。それは避けるべきです」
「確かにあの攻撃力は絶大だが」
どうやらテューポーンは敵味方構わず攻撃する性質を持っているらしい。

## 第十三部第一章　角笛を持つ時その十四

「それを踏まえますとトラップ的なものとして使用するべきであると考えますが」
「トラップとして」
「はい。第一次ライン及び第二次ラインが破られた時の為です。その際敵軍はこの星系深くに侵入してくることが予想されます」
「そしてどうなるか」
「そこでです。彼等はテューポーンの存在を知りません。おそらくごく普通の要塞、若しくは軍事基地と認識するでしょう。そこを狙うのです」
「そこをか」
「一気にテューポーンによる攻撃を仕掛けます。それで彼等を迎撃しましょう」
「つまり第三次の主要兵器、そして切り札としてか」
「どうでしょうか。これなら味方を巻き込む心配もないと思いますが」
「丁度第三次防衛ラインは第一次、二次に比べて脆弱なものですし」
「わかった。そうするか」
「はい」
「お聞き入れ頂き有り難うございます」
「全ては勝利の為だ。エウロパのな」
シュヴァルツブルグは謹厳な声でそう述べた。
「その為のことだ。感謝されることはない」
彼はあくまで武人であった。だからこそ言えた言葉であった。こうしてテューポーンの配置が正式に決定した。だがそれはすぐに覆ることになった。
「閣下、こちらにおられたのですか」
「？どうした」

部屋にエヴァ＝プロコフィエフが入って来た。彼女は今ではシュヴァルツブルグの主席秘書官になっていたのである。
「先程入った情報ですが」
「敵軍のか、それとも我が軍のか」
「敵軍のです。クロノスに向かっていた敵軍ですが」
「うむ」
「そのうちの約百個艦隊程がクロノスから離れ一直線にオリンポスに向かっております」
「何だと！」
それを聞いて思わず席を立ってしまった。
「それはまことか」
モンサルヴァートもローズもそれを見て驚きを隠せなかった。普段は謹厳実直な軍務相のこれ程驚いた姿を見たのははじめてであったからだ。
「はい」
「どの部隊だ」
「報告によれば漆黒の艦隊のようです。おそらくはサハラ義勇軍かと」
「それが百個艦隊か。してどの星系を通りそうだ」
「ニョルズを通過するものと思われます」
「ニョルズを」
「また思いきったことを」
モンサルヴァートとローズはそれを聞いて眉を顰めさせた。ニョルズ星系はオリンポス近辺の星系の一つである。エウロパの星系にしては異様に複雑な状況にありブラックホールや超新星等がその周辺に散らばっている。大艦隊どころか一隻の民間輸送船の航行すら困難な場所でありエウロパ側の航路からも外れていた。人もおらずエウロパにとってみれば艦隊の通過不可能な自然の要害であった。だからことそちらに兵を配置してはいなかったのである。突破は不可能であると思われたからだ。

「だがあそこを突破されると非常にまずいことになる」
シュヴァルツブルグはその口元を引き締めてそう述べた。
「本部長」
「はい」
そして彼はモンサルヴァートに顔を向けた。
「すぐにニョルズに向かってくれ。よいか」
「わかりました」
「そしてテューポーンだが」
「はい」
今度はローズが応えた。
「どうするか。このままこのクロノスで使うか」
「左様ですな」
ローズはそれを受けて考え込んだ。
「それが宜しいかと思いますが」
「私はニョルズに移動させようかと思ったのだがな」
「それはかえって逆効果でしょう」
しかしローズはそれをよしとはしなかった。
「何故だ？」
「ニョルズは何かと複雑な地形です。そこでテューポーンを使っても何にもならないでしょう」
「つまりニョルズには合ってはいないということか」
「はい。あそこではそれよりもゲリラ戦術の方が相応しいです」
彼はそう述べた。
「要塞等よりもね。如何でしょうか」
「わかった。ではそうしよう」
「はい」
「それではモンサルヴァート本部長」
「ハッ」
モンサルヴァートはシュヴァルツブルグの言葉を受けてあらためて席を立って敬礼した。

「ニョルズ防衛に向かってくれ」
「わかりました」
彼はすぐにその場を後にした。そしてそのままニョルズへと向かうのであった。
シュヴァルツブルグとローズはそれをタントリスから見ていた。そして二人で話をしていた。
「遊撃戦力がなくなったのは痛いですね」
「うむ」
シュヴァルツブルグはローズの言葉に頷いた。
「だが仕方がないことだ。このままニョルズを通らせるわけにはいかない」
「はい」
「彼等にはその為にも行ってもらわなければならない。残念だがな」
「それで彼等の替わりの戦力はない」
「ない」
そう言って首を横に振った。
「これ以上の戦力はエウロパにはない。それはわかっていることだろう」
「聞くまでもなかったことですが」
「精神論になってしまうが各員がこれまで以上に奮闘するしかない」
精神論とは何かがある場合に言出て来るものである。今回のエウロパもそれであった。言うならば最後の最後で頼るものである。思えば悲しいものである。
「もっとも今精神論が何かの役に立つかどうかは疑問だが」
「それはそうですが」
「それしかもう我が軍にはない。寒いことだとは思わないか」
「・・・・・・はい」
ローズはそれに頷いた。遠くから黒い巨大な球体が姿を現わしてきた。
それを見ても気は晴れはしなかった。むしろ暗くなるばかりであ

った。

# 第十三部第二章　怒りの日その一

怒りの日

八条はこの時執務室で束の間の休息を楽しんでいた。パソコンを使って音楽を聴いていた。

曲はクラシックであった。モーツァルトである。彼のオペラの序曲集を聴いていた。

目をゆるやかに閉じ曲を聴いている。それは耳の中に軽やかに入って来ていた。

曲はドン＝ジョヴァンニの序曲。地獄落ちの状況からはじまる衝撃的な曲である。

彼はそれを聴きながら思っていた。この曲、いやモーツァルトの曲にはえも言われぬ魅力が存在していると。それは天使のようでもあり悪魔のようでもある。実に不思議な曲なのである。

モーツァルトがこの世に生まれてからもう千五百年が経とうとしている。僅か三十五歳でこの世を去ったのであるがそれでもその音楽は残っていた。まるで永遠のもののようにそれは不滅であった。

このドン＝ジョヴァンニもまた同じである。モーツァルトにより生み出されたこの悪魔的な男は邪悪な魅力を醸し出しながらこの世に存在している。無論実在ではないがそれはまるで実在しているかのようであった。

曲は終わった。そして次はコシ＝ファン＝トゥッテである。これもまた実に不思議な話である。カップルが入れ替わり愛を試す。だがそれに関する解釈は今だに多くのものがある。それはドン＝ジョヴァンニもまた同じである。

デンマークの哲学者キルケゴールはドン＝ジョヴァンニに対してある疑念を抱いた。彼は果たして冒頭の女性ドンナ＝アンナを口説き落とせたのかどうか、である。

これだけで落とせた、落とせなかったと様々な説がある。序曲に

その答えがあるとまで言われているがそれは確かなものではない。ドンナ＝アンナの他にも彼は劇中で多くの女性に声をかけている。だがそれも成功しているのかどうか。諸説入り乱れているのである。

八条は彼は実はこの劇中では一人も口説き落とせてはいないのではないかと考えている。その根拠は劇中のドン＝ジョヴァンニは追手から逃げ続けているだけであるからだ。そして最後には地獄に落ちてしまます。それでどうして女性を陥落させているというのか。

コシ＝ファン＝トゥッテはまた別の意味で不思議な作品だ。一度壊れた恋仲が果たしてまた元通りになるというのか。実際に演出によっては壊れたままで終わるものもある。これまた実に不思議な作品である。

千五百年もの間人々を考えさせる作曲家、それがモーツァルトである。彼は音楽の世界においては神童とも天才とも言われていたがその音楽は確かに天才のそれであると言えた。

最後は魔笛の序曲であった。フリーメーソンとの関わりがあるのでは、と今でも言われている。だが真相はわからない。モーツァルトの死にも関わっていると言われていたフリーメーソンは今でも僅かに存在する。もっともその実体は秘密結社などではなく単なる慈善団体なのであるが。

その魔笛の序曲が終わった。それと同時に木口が部屋に入って来た。

「モーツァルトでしたか」

「ああ」

八条は彼の言葉に頷いた。

「最近気に入っていてね」

「指揮者は誰ですか？」

「佐藤隆だね」

彼はディスクケースの名前を見ながらそう述べた。

「最近売り出し中の指揮者だそうだが」

「初耳ですね」

「君は指揮者は誰が贔屓だね？」
「私ですか？私はジェームス＝パレスです」
「ああ、彼か」
「オペラでは第一級の指揮者ですしね」
「確かにモーツァルトはオペラの作品も多いしな」
「はい」
「彼もモーツァルトはよく指揮していたな。あの指揮ぶりはいい」
「よく巨体を話の種にされますけれどね」
「それがかえっていいのだと思う。愛嬌があってな」
「愛嬌ですか」
木口はそれを聞いてにこやかな笑みになった。
「彼に関してよく言われることですね」
「まあそうだな」
「確かに人柄も悪い噂はありませんし。愛嬌があるとよく評価されるのは事実です」
「指揮者としてもいいな。あっさりした曲の感じにして」
「それがいいのですよ、本当に」
木口はそれに頷いた。
「佐藤隆のそれが結構激しい一面が多いですからね。対比的に」
「激しいか」
「激しくはありませんか？佐藤の指揮は」
「まあそうだが」
八条は頷きながらもいささかそれには賛同し難いようであった。
「だが彼の指揮は激しいだけではない」
「そうなのですか」
「このモーツァルトの序曲集では激しさと穏やかさを使い分けているしな」
「ふむ」
「一概にそうとばかりは言えないようだ」
「深みがあるというわけですね」

「大層に言うとそうなる」
彼はそれを認めた。
「まだまだ若いがな。これからが楽しみではある」
「若いといっても長官とそれ程変わらない筈ですが」
「指揮者としてはだよ」
そう言って苦笑した。

## 第十三部第二章　怒りの日そのニ

「あの世界はかなり息の長い世界だからな」
「歌手にしろ七十まで歌う人がざらですからね」
「ああ」
「千年以上前はその歳まで歌っていれば超人の様に言われたものですが」
「やはり医学の進歩か」
「それとテクニック等の変わりですね。それが一番大きいのではないでしょうか」
「テクニックか」
「技巧の使い方一つで歌手の寿命はかなり違ってきますよ」
「コロトゥーラの様に喉に大きな負担をかけるものを変えたりか」
「あとはハイCですね」
「あれもな。喉への負担が大きいな」
「はい」
　コロトゥーラとはコロトゥーラ＝ソプラノのことでありソプラノでもとりわけ高い声域のものである。かなり高度なテクニックを要求される役が多い。モーツァルトも魔笛において夜の女王を出している。
　ハイCはテノールの技術の一つである。代表的な役としてはヴェルディのトロヴァトーレの主人公マンリーコ等がある。オペラにおいてはコロトゥーラと並んでかなり重要な役柄である。
「それをあまり負担をかけないようにして歌う」
「口にして言うのは容易だが実際にやると難しいようだな」
「だからこそかっては歌手の寿命が今よりも短かったのですよ」
「そうだったのか」
「まあ人によりますが」
「マリア＝カラスなんかはかなり短かったな」

「ええ、まあ」
「当時はそれがかなり残念がられたそうだな」
「らしいですね」
　最早千年以上昔の話であるがそれでもマリア＝カラスの名は残っていた。それだけ圧倒的なカリスマ性を持っていた歌手だということである。
「カラスは聴いたことがありますか」
「昔のものでな。確かノルマか」
「如何でしたか」
「悪くはないが。どうもＣＤだけではわからないものがある」
「カラスに関してはよくそう言われていますね。けれど何分千二百年前のことですので」
「よくはわからないな」
「残念なことですが」
　マリア＝カラスという歌手は実際に舞台で見なければ何もわからなかったという。圧倒的な存在感と鬼気迫る演技力で知られていたという。だが今となってはそれを確かめる術はない。
「むしろ私はテバルディの方がいいな」
「彼女ですか」
　カラスと同時代に活躍したソプラノ歌手である。カラスのライバルとも言われその歌唱はこの時代においても伝説となっている二十世紀のオペラ界の黄金時代を支えた一人である。
「声もいいしな。ただ背は異様に高かったそうだが」
「あの時代の女性にしてはかなり高いですね」
「異常に高かったらしいな。確か一メートル八五程か」
「当時は大体一五五あるかないか位でしたね」
「イタリア系だったしな。それ位だろう」
「イタリア系といえばディカプリオ元帥ですが彼は長身ですけれどね」
「まあ昔と今では違うということか。カラスも高かったそうだが」

「あ、そうなのですか」
実際にカラスは背も高かった。だからこそ舞台姿が映えたのであろう。
「実は背のことはあまり言われない時が多いな」
「まあそうですね。アドルフ＝ヒトラーも当時では小柄ではなかったそうですし」
「私もいずれは小柄とされるのかな。その時代の視点で」
「長官が小柄だったら未来は皆巨人ですよ」
「そうか」
八条は顔を崩した。
「ええ、そうですよ。だったら私はもう子供ですよ」
「そこまではいかないだろう」
「いや、本当に」
「まあ背のことはこれ位にしよう。丁度休憩も終わりだ」
「はい」
八条と木口は元の顔に戻った。姿勢もあらためる。
「あそこに関する情報はわかったか」
「あそこですか」
「そう、あそこだ」
二人は実に思わせぶりな会話をした。
「調査結果はどうなっているか」
「調査結果ですか」
「既に出ていると思うがどうだ」
「こちらに」
彼はそう言って懐から一枚のディスクを取り出した。
「どうぞ」
「有り難う」
そして八条はそれを受け取った。すぐにそれを自身のノートパソコンに入れて見る。彼はそれを見ながら会心の笑みを浮かべていた。
「成程な」

「如何でしょうか」
「前線には既に資料は行き届いているか」
「はい」
木口はそれに答えた。

## 第十三部第二章　怒りの日その三

「マクレーン司令と劉参謀のもとに」
「そうか。ならいい」
彼はそれを聞いて満足気に頷いた。
「あとはあの二人でやってくれるな」
「そうですね」
「かって第二次世界大戦があったな」
「ええ」
「その時のドイツとフランスの戦いを知っているな」
「学校の歴史の授業でさわり程度は」
「それと同じだ。今回はな」
「我が軍はどちらですか」
木口はそれを聞いて尋ねた。
「フランスか、それともドイツか」
「それはもう言うまでもないと思うが」
彼は笑ったままであった。そして席を立った。
「バール統合作戦本部長のところに行こう。詳しい話はそれからだ」
「わかりました。それでは」
「うむ、行こう」
こうして二人はバールの執務室に向かった。だがその途中で他ならぬバール本人に出会ってしまったのである。
「あ、長官」
「本部長どちらへ」
「いえ、丁度そちらにお伺いしようと思っていたのですよ」
彼はそう答えた。
「私のところにですか」
「はい。しかしここで御会いするとは意外でしたな」
「いえ、私も丁度本部長に御会いする為にここにいたので」

「そうだったのですか」
「ここでは何です。場所を変えますか」
「はい」
こうして三人は場所を移した。手近なところにあった会議室に入った。八条はそこでバールに先程のディスクを手渡した。
「このディスクですが」
「あそこに関するものですね」
「おわかりでしたか」
八条はそれを聞いてにこりと笑った。
「それでは話が早い。どう思われますか」
「意外なことですね」
バールはそう答えた。
「ですがこれで我が軍の作戦もこれまで以上に幅を持たせられることになります」
「はい」
「ただ、問題はどう動くかです」
「我々が」
「はい。今我が軍はクロノスに向けて一斉に進撃を続けていますがそこから兵を割くとなると」
「支障も出てきますね」
「それをどうするか、です。さて、どうしましょうか」
「私は前線に任せてみようと思うのですが」
「前線に」
「マクレーン司令と劉参謀に。どうでしょうか」
「二人にですか」
バールはそれを聞いて腕を組んで考える態勢に入った。
「さて、どうしたものか」
「大胆でしょうか」
「いや、それが妥当ですけれどね」
だが彼はそこに一抹の不安を感じていたのである。自身の見るこ

とのできない場所のことであるからこれは当然のことであったかも知れない。
「今私や本部長が前線に向かっても間に合いません」
「はい」
「ましてや下手に介入しても齟齬を生みかねません。やはりそうするべきかと思うのですが」
「それはそうですが」
「本部長はどう思われますか」
「ふうむ」
深く考え込んだ。だがやがてその重い口を開いた。
「わかりました。そうしましょう」
「有り難うございます」
「前線に資料はもう届いていますね」
「はい」
八条はそれに頷いた。
「彼からもう報告を受け取っています」
そう言って木口を手で指し示した。彼はそれを受けて照れ臭そうに笑っていた。
「それならばいいです。ではこれ以上は私共の出る幕ではないですな」
「はい」
「彼等に任せましょう。果たしてどうするか」
「期待しておきましょう」
こうして三人の話し合いは終わった。連合軍の後方はこうして今回の戦いを前線に委任することにしたのである。そして彼等は別の仕事に入った。
「長官」
今度はシャリアピンが部屋に入って来た。
「はい」
「外務省からお招きです」

「早いですね」
八条はそれを聞いてうっすらと笑った。
「もうですか」
「はい。如何為されますか」
「行かないわけにはいかないでしょう」
彼はそう答え席を立った。
「すぐに行きましょう。次官はどうされますか」
「私はここで長官のかわりに仕事を進めていきたいと考えているのですが」
「そうですね。その方がいいですか」
「はい。では御気をつけて」
「わかりました。それでは」
こうして八条は国防省を後にし外務省に向かった。
国防省と外務省は少し距離がある。八条はそれまでの道を車の窓から見えるシンガポールの景色を眺めながら過ごしていた。
その横には木口がいる。彼は膝の上に資料を置きそれを丹念に見ていた。
シンガポールの風景は美しかった。熱帯にあり所々に椰子の木等がある。その向こうには海がある。まるでサファイアの様な色をしている。
この街が栄えるようになったのは二十世紀からである。イギリスから独立し、都市国家としてスタートしたのである。
最初はマレー半島の一寒村であった。だがここにリー＝クアンユーという優れた指導者が誕生する。彼の手でシンガポールは大きく変わったのである。
彼は市民に徹底した規則と努力を要求した。自らもシンガポールという都市国家が繁栄する為にはあらゆる政策を立案し実行した。それによりこの街は瞬く間にアジア太平洋の経済の中心地の一つとして知られるようになったのである。
太平洋地域の発展と共にこの街は成長していった。太平洋連合の

本部も置かれ太平洋の門でもあった。そして欧州にとって屈辱的なシンガポール条約を締結した場所でもあった。今は連合の首都地球において大統領府や総理府、国防省等が置かれている。あらゆる意味で連合にとって心臓とも言える場所であったのだ。

八条はこの時はそこまで考えてはいなかった。ただ風景を眺めている。たばぼんやりと眺めているだけであった。

「長官」

だがここで木口が声をかけてきた。

## 第十三部第二章　怒りの日その四

「？何だい」
八条はそれで我に返り木口に顔を向けた。少し戸惑ったような顔であった。
「カバリエ長官と御会いするのですよね」
「まあそうだろうな」
彼はそれに答えた。
「長官が行くとなればそれを出迎えるのは長官しかない」
「はい」
「だがそれがどうかしたのか？何か不都合でも」
「いえ、実は最近外務省で気になる噂を聞きまして」
「噂」
「最近外務省はマウリア外務省の者と頻繁に会っているそうです」
「マウリアの」
「はい。これはどういうことでしょうか」
「マウリアとか」
八条はそれを聞いてまずは腕を組んだ。そして考え込んだ。
「そうだな」
「長官はこれについてどう思われますか」
「マウリアとはここ数年これといって摩擦はない」
「はい」
連合とマウリアは長きに渡って友好関係を続けてきてはいるがそれでも摩擦が生じることはあった。ここ最近ではマウリアの宝石の輸入を巡っての摩擦があった。所謂『宝石摩擦』である。
マウリアは豊富な宝石資源を持つ惑星を多く持っている。それを連合やサハラ各国に輸出して莫大な利益を得ているのである。マウリアの宝石は貴婦人達には非常に美しく、そして装飾も立派だということで知られている。だからこそ莫大な利益のもととなっている

のである。
だがここで問題が起こった。宝石を重要な貿易品目にしているのはマウリアだけではないのである。連合においてはロシアや南アフリカ、オーストラリアといった国々がそうであった。
彼等は自国の宝石を保護したかった。これは利益の面から言って当然であった。マウリアの宝石の人気が上がればそれだけ彼等の宝石の売り上げが減る。そしてそれにより自国の宝石産業の者達が失業しかねない。彼等はそれを危惧したのである。
そしてロシアは連合においては日米中に比肩する大国であった。南アフリカもオーストラリアもその地位、国力は高いものであった。彼等は協同して連合各国、続いて中央議会に呼び掛けた。マウリアの宝石の輸入を禁止しようと。
この動きは忽ち連合各国、そして中央政府を巻き込んだ。特にロシアは強引とも言えるやり方で各国も中央も抱き込みにかかった。金をばら撒き、言う事を聞かない国には経済的な便宜を与えない、とまで言い出す程露骨な恫喝も行った。元々ロシアは強引な外交を得意としていたが今回もそうであった。
「山が動いた」
誰かが言った。まさにロシアの動きはそれであった。これにより連合とマウリアは宝石に関して深刻な対立関係にまで陥ったのであった。これが宝石摩擦であった。
連合各地でマウリアの宝石に関する規制が行われた。ロシアに至っては全面的に輸入を禁止し、マウリアの宝石に対する抗議デモまで起こった。政府もそれを大いに煽った為事態は更に悪化した。そして遂には中央議会においてマウリアの宝石の輸入を大幅に規制しようという議論まで行われるようになった。連合とマウリアの摩擦は頂点にまで達しようとしていた。
だがここでマウリアは意外な手に出た。まずはオーストラリア、続いて南アフリカ政府と個別に会談の場を設けた。そして彼等と妥協したのである。これで連合のマウリアの宝石に関する議論はある

程度沈静化した。
今度はロシアと会談を行なった。これは何度も行われたが遂にロシアにとってる程度有利な内容で妥協が行われた。次に中央政府、議会に話をした。これにより摩擦を抑えたのであった。
中央議会も議論を止めた。そして摩擦は連合にある程度有利な話で矛を収められた。マウリアが譲歩した形であるが摩擦は終わったのである。マウリアの巧みな外交であると言えた。
それ以前にも色々と摩擦は生じている。だがそれは全て切り抜けられている。多くはマウリアの巧みな外交故であったが。これによりマウリアは連合においては老獪な国とみなされていたのである。
「これといって外務省が頻繁に動く理由はないのではないか」
「ただ一つの事情を除いては」
「事情？」
「はい。おわかりになりませんか」
「そう言われてもな」
「長官のお仕事から」
「ああ、わかった」
八条にもわかった。数度頷いた。

## 第十三部第二章　怒りの日その五

「成程な。そういうことか」
「そういうことです」
「戦争ははじめるまでもかなり大変なものだがな」
「他にも大変なことは多いということですね」
「そうだな。ではカバリエ長官を御会いするのを楽しみにしていよう」
「丁度時間ですし」
木口は腕時計をちらりと見て述べた。
「昼食を食べながらのお話になりそうですね」
「またか。何かカバリエ長官と御会いする時はいつも食べる時だな」
「まああの方には相応しいですが」
「それもそうだな」
そしてその外務省に到着した。長官室に行くとカバリエが笑顔で待っていた。
「ようこそ」
「はい」
二人は挨拶を交わした。そして互いに手を差し出し握手をする。
「お待ちしておりました」
「はい。ところでお話とは」
「それはゆっくりと。まずはそろそろお昼ですし」
「はい」
八条も後ろに控える木口もそれを聞いてやはり、と思った。当然口には出さないが。
「昼食をご一緒しませんか」
「喜んで」
断るのはマナーに反する。それにカバリエは連合においてはその名を知られた美食家である。自分で作ることもあれば料理に関する

本まで出している。自分の金で専属のシェフも雇っている。その彼女のプロデュースする食事を味わうのもまた楽しみの一つであった。
「それでは私はこれで」
だが木口は八条から離れた。
「あれ、何処へ行くんだい？」
「ここで外務省の友人と約束がありますので」
「何時の間に」
「先日からメールでやりとりしていまして」
「そうだったのか」
「こちらにも仕事があるということです。秘密にしていて申し訳ないですが」
「そう、それはよくないな」
八条は少し意地の悪い顔を作ってみせてこう言った。
「君は最近どうも私に秘密を持っているようだ。秘書官としてそれはどうか」
「すいません」
「まあまあ長官」
だがここでカバリエが話に入って来た。
「秘書官にも都合があるのですし。それに彼の食事は用意してはいませんでした」
「そうだったのですか」
「こうなるだろうと思っていましたので」
「はあ」
「ここは羽根を伸ばさせてあげましょう。邪魔者は奥に引っ込んで」
「わかりました。それでは」
そして木口に顔を向けた。
「木口君、そういうことだから。カバリエ外相に感謝するようにな」
「はい、有り難うございます」
木口は頭を下げて彼等から離れた。そして一人何処か軽やかな足取りで去って行った。

「何か異様に楽しそうだな」
「お気付きになりませんか」
「？何がですか」
カバリエの問いに不思議そうな顔をする。
「仕事ではないようなのはわかりますが。おそらく古くからの友人なのでしょうね」
「友人に古いも新しいもあまり関係ありませんよ」
「そうでしょうか」
だが八条はそれには懐疑的であった。
「軍では同期の絆はもう絶対なものがありますけれど」
「いえ、そうではなくて」
「そうではないと」
「女性のお友達に関してですが」
「ああ、それなら」
カバリエはそれを見てようやく納得したかと思った。しかしそれは早計であった。
「今でも付き合いがありますよ。会うと話をしたり飲んだり。最近はもう時間がありますが」
「どうやらおわかりにならないようですね」
「？何がですか」
「いえ、いいです」
彼女はここでこれ以上言うことを止めた。
「もうよくわかりましたから」
「はあ」
八条はその貴公子然とした顔をキョトンとさせていた。
「そういうことでしたら」
彼のそうしたことに関する鈍さはカバリエの予想以上であった。これは周りにいる女性は大変だと思わずにはいられなかった。心の中で思う。
（顔はいいのに。そうしたことに長けていないのは意外ね）

彼女の祖国メキシコでは美男子には気をつけろ、とよく言われる。それだけ遊んでいて女の子を悪い道に引き込むからである。実際にそれは男というものの一面を捉えてはいた。

## 第十三部第二章　怒りの日その六

彼女は料理評論家の夫と結婚し幸せな家庭を築いている。子供は兄と妹の組み合わせである。息子には夫の名を、娘には自分の名をそのままつけている。息子にはともなく娘にはかなり厳しく男に注意するように言っている。

「悪い男には気をつけなさい」

と。同時にそんな男は逆に手玉にとってやれ、と。そうでなければ一人前の女ではないと。逆に息子には彼女の一人もできなければ一人前のメキシコの男ではないと言っている。陽気なメキシコらしい教育と言えばそうなる。

そうした彼女であるから八条のこうした鈍さが信じられない。聞いた話によるとあまりにも高嶺の花であるので言い寄る女性もそれ程いなかったらしい。案外そうした存在というものには手が行かないのである。

そうした彼の一面をはじめて知った。面白いとは思いつつもかなり不安ではあった。

「この前御会いしたアイドル歌手は如何でしたか」

「アイドル？ああ、彼女ですね」

言われてふと思い出した。

「神崎亜矢ちゃんでしたね」

「はい」

連合で今人気のアイドルの一人である。日本の芸能界においてはトップアイドルとされている。小柄でアーモンドの様な形の黒い目とショートの髪、そして白い肌が人気である。天性のアイドルとさえ呼ばれている。

「この前国防省のイメージキャンペーンに参加していたとか」

「ええ、まあ」

彼はそれに答えた。

「連合の軍服を着てもらいましてね。何かファンが一杯来て大変でしたよ」
「その時亜矢ちゃんにファンですと言われたそうですね」
「そういえばそういうこともありましたね」
何処かあまり身のない返事であった。
「ただあれは社交儀礼でしょう」
「そうでなかったら」
「まさか」
彼は笑ってそれを否定した。
「彼女はアイドルですよ。私は政治家。住む世界が違います」
「住んでいる世界ってのは一つではなくてね」
そんな彼に対してまだ言う。
「多くあるわよ。そしてそれが重なり合っている」
「それはわかっているつもりですが」
「どうかしらね。それで亜矢ちゃんはどうしたの？」
「どうしたと言われましても。そのままキャンペーンの撮影が終わったら日本に帰りましたよ」
「それで終わりなのね」
「ええ」
「喫茶店とかは一緒に行かなかったのね」
「マネージャーがいつもいますしね。それにそんな声もなかったし」
「聞いた話だと地球の遊園地に行きたがってたそうね、彼女」
「よく知ってますね」
「週刊誌に載っていたから。けれど本当に何もなかったね」
「当然ですよ」
そう言って苦笑する。
「一体何が起こるというのですか」
「わかったわ。さて、と」
ある部屋の扉の前に到着した。二人は歩きながら話をしていたのである。

「それでは食べましょう。今日の昼食はまた趣向を凝らしてもらったわ」
「どのような」
「それは見てのお楽しみ。それではようこそ」
「はい」
開けられた扉の中に入る。そしてその中に導かれた。見れば応接室であった。
「こうした中央政府の高官や連合各国の人達と会食する為の部屋よ」
「そうなのですか」
見れば薄い赤を基調とした装飾で飾られている。絹に似た素材のカーテンに赤い絨毯が敷かれている。だがそのカーテンも絨毯もよく見れば絹ではなかった。

## 第十三部第二章　怒りの日その七

「ミルクよ」
カバリエは言った。
「ミルクなのですか」
「そうよ。食事をする場所だからこれにしたのよ」
「そうなのですか。これはまた」
彼はそれを聞いて納得したように頷いた。
ミルクとは言うまでも泣く牛の乳である。これからも布が作られるのである。生地はサラサラとしていて絹に近い。この他にも山羊や羊の乳からも布が作られる。
「では席に」
「あ、はい」
案内役に勧められ席に着く。向かい側の席にカバリエが座る。そして程無くしてテーブルに料理が運ばれてきた。最初はスープではなくパスタであった。黒いフェットチーネであった。
「烏賊の墨ですね」
「ええ、そうよ」
カバリエはそれに頷いた。
「どうぞ召し上がれ」
「はい」
彼女に薦められるままそれを口に入れる。この時墨が服にかからないように注意を忘れない。烏賊の墨は美味いが食べるにあたってはそうした注意が必要な少し厄介なものなのである。
「どうかしら、味は」
カバリエはあらためて尋ねてきた。
「はい」
八条はそれに対して一呼吸置いてから答える。
「かなりのものですね」

烏賊の墨はその味を殺されてはいない。それでいてオリーブオイルと上手く合わさっている。そしてフェットチーネも茹で過ぎておらず硬過ぎてもいない。程よいアルデンテであったのだ。
「御気に召されたようね」
「はい。こんなフェットチーネははじめてです」
「嬉しいわ。ではシェフにそう言っておくわ」
「お願いします」
フェットチーネが終わると次の料理が運ばれて来た。今度はサラダかと思ったが違った。またパスタであった。スパゲティである。
「おや」
八条はそれを見て意外な顔をした。
「スパゲティですか」
「そうだけれどそれが何か」
カバリエは驚く八条に声をかける。その声も顔も楽しんでいるものであった。
「いえ、コースではないのかな、と思いまして」
「連合ではそうした決まりはない筈よ」
「それはそうですが」
こうした会食の場でも連合においては常にコースが出されるとは限らないのである。三百の国がありそれぞれの料理があるからこれは当然と言えば当然であると言えた。
見ればそのパスタはペペロンチーノであった。あっさりとした趣のパスタである。
一口食べるとかなり辛い。食べ終えて八条はカバリエに目をやった。彼女の言葉を待っているのである。
「メキシコの唐辛子を使ったのよ」
「やはり」
カバリエの祖国でもあるメキシコは辛い料理で知られている。そしてメキシコの唐辛子はかなり辛いことで有名なのである。
「驚いたようね」

「ある程度覚悟はしていましたが」
口の中がヒリヒリするのを我慢して言葉を返す。
「これはまた」
「メキシコの唐辛子はまた特別なのよ」
彼女は笑みをたたえたまま言う。
「だからそれを食べているメキシコ人も案外辛いわよ。覚えておいてね」
「わかりました」
スパゲティを食べ終えると今度はグラタンであった。マカロニが入っている。
「マカロニグラタンですか」
「海老のね」
「海老」
「よく見ればわかるわ」
スプーンを入れると大きな海老の肉が出て来た。それは伊勢海老のものであった。
「これは」
「長官の祖国の海老よ」
カバリエはまたしてもにこやかに笑ってそう言った。
「私の国のですか」
「赤城星系のね」
「赤城のですか。それではあそこで獲れた伊勢海老ですか」
「そうよ」
赤城星系は日本の星系の一つである。その名の由来は日本人達がこの星系に降り立った時にはじめて目に入った山が赤い城の天守閣に見えたからだという。この名のもとになった山は赤山と言われ細長いかなり独特の形をしている。
第五惑星である赤城にある。海老もここで採れたものである。大きく、かつ非常に美味な伊勢海老として知られている。その他にも多くの海産物を産する。

「評判を聞いてね。取り寄せたのよ」
「私の為にですか」
「長官はシーフードがお好きと聞いたのでね。御気に召したかしら」
「はい」
八条はにこやかな顔で頷いた。
「まさか今食べられるとは思いませんでした。しかもグラタンとは」
「日本では伊勢海老は生で食べることが多いそうね」
「はい」
「それにお味噌汁やお吸い物かしら。他の国で言うとスープね」
「頭からだしをとるのです」
八条は答えた。
「脳からいいだしがとれますので。美味しいですよ」
「それも考えたのだけれどね」
カバリエは言った。
「今回は考えるところがあってこうしたのよ」
「左様でしたか」
二人はそのままグラタンを食べた。食べ終えるとまた別の料理が運ばれて来た。一見しただけではそれは先程のグラタンとあまり変わりはなかった。

## 第十三部第二章　怒りの日その八

「ラザニアよ」
カバリエがそう説明した。
「チーズを使ったものが続いて日本人にはしつこいかも知れないけれど」
「いえ」
だが八条はそれを否定した。
「ワインがありますから。大丈夫です」
「ならよかったわ」
「ただこのワインは少し違いますね」
「何がかしら」
カバリエは八条のその言葉を楽しむようにしてそれに逆に問うてきた。
「いえ、何と言いますか」
見たところごく普通の赤ワインであった。パスタには赤ワイン、カバリエはセオリーを忠実に守っていた。だがそのワインが彼が今まで飲んできたものとはまるで違っていたのである。
「味が。上品ですね」
「それはエウロパのワインなのよ」
「エウロパの」
「そう。フランスのね。プロヴァンス産よ」
「プロヴァンス」
「エウロパにおけるワインの最大の産出地の一つよ。そこの銘柄なのよ」
「名は何といいますか」
「ヴィオレッタ」
彼女は答えた。
「ヴェルディのオペラからとった名前だそうよ」

「やはりそうですか」
名前を聞いただけでそうだろうかと思った。十九世紀、統一を目指しそれを実現したイタリアにおいてその音楽的象徴とさえ呼ばれた作曲家ヴェルディの代表作の一つ『椿姫』、そのヒロインがヴィオレッタなのである。パリの裏社交界の華である高級娼婦、それが彼女であった。だがそこで純粋な青年アルフレードと出会い本物の恋を知る。しかし胸の病により倒れその恋人の腕の中で息を引き取る。その作品のヒロインである。
「あのオペラは私も好きです」
「そうだったの」
「ヴェルディは劇的な作品が多いですがあの作品は全く違って穏やかです」
「そうね」
「彼の作品はその劇的なのがいいのですがそうした穏やかなのもいいと思います。だからこそ気に入っております」
「成程ね」
「その彼女の名を冠したワインですか」
「こちらのヴィオレッタも気に入ってもらえたようね」
「はい」
彼はそれに頷いた。
「連合のワインではあまりない味ですね」
「強いて言うのなら日本のワインに近いかしら」
「日本の」
「私はそう思うのだけれど。どうかしら」
「ふうむ」
そう言われてあらためて考え込んだ。それからカバリエに対して述べた。
「そうかもしれませんね」
「それも陸奥星系で採れた」
「陸奥のですか」

日本における有名な穀倉地帯である。ここで採れたワインは連合中に知られている。
「私はそう思うのだけれどどうかしら」
「言われてみればそうかも知れませんが」
彼はカバリエ程鋭い舌を持ってはいない。だからそう言われても即答できないのだ。
「どうなのでしょうか」
「そこまではわからないかしら」
「申し訳ありません」
「ならいいわ。今はこのラザニアを食べましょう」
「はい」
薦められてラザニアにスプーンを入れる。するとその中から赤いトマトと白がかった肉が出て来た。八条はそれが何の肉であるかすぐにわかった。
「鶏肉ですか」
「ええ」
カバリエは正解であると認めた。
「マウリアのね。ラーヴァナ星系の産よ」
「今度はマウリアですか」
「そう。これでわかったかしら」
「メキシコ、日本、エウロパ、マウリア。そして最初の黒」
今まで食べてきたパスタやワインについて思慮する。そして呟く。
「黒は何でしょうか。政治家はよく腹黒いとされますが」
ある程度以上に真実であると言えた。この世界は昔から様々な権謀術数が跳梁跋扈するものである。
「それでしょうか」
「そうだとしたら？」
「そして四つの国」
八条は正解を言われると続いて国について考えた。

## 第十三部第二章　怒りの日その九

「先の二国は私達のそれぞれの祖国、つまりここでは私達ですか」
「ではあとの二つは」
「エウロパは交戦国、そしてマウリアは友好国。一見して全く逆の立場にありますが」
「結び付く可能性は？」
「結び付く可能性」
そう言われてさらに考え込む。ふと顔を上に上げる。そこで気がついた。
「ここは外務省」
「ならわかるかしら」
「ああ、そういうことですね」
八条はここで顔を元に戻しあらためて頷いた。
「講和ですか」
「正解」
カバリエは彼にそう伝えた。
「それも満点よ。お見事」
「有り難うございます」
「戦いがはじまったならば最後には終わらせなくてはならないわね」
「はい」
「それが私達政治家の戦争での最も大切な仕事。その為に今ここに貴方を呼んだのよ」
「では烏賊の墨は交渉のことですか」
「少し意地悪だったかもしれないけれど」
「いえ、中々面白かったですよ」
笑いながらそう述べる。
「流石は。連合きっての食通と言いましょうか」
「そこに政治が合わさるとね。こういった面白いことになるのよ」

政治と料理は案外密接な関係にある。政治家達はパーティーにおいて情報収集に務める。外交官達も同じである。他には支持者との交流や資金調達の意味もある。その際の食事もまたそうした情報の交換や収集に必要なのである。人は酒や料理を堪能すると自然に口が軽くなるものだからである。
「成程」
「覚えておいた方がいいわよ、貴方も」
「はい」
「政治は料理も大事だということをね」
「中々洒落たものではありますね」
「洒落もまた政治」
カバリエは言い切った。
「そこから何かを出すものなのよ」
「わかりました」
「そして本題に入りたいけれどいいかしら」
「ええ、まあ」
二人はもうラザニアを食べ終えていた。
「メインの料理は終わったし。後はデザートだけだから」
「中々お腹がふくれましたよ」
「四つ続くと流石にお腹にたまるでしょ」
「はい」
「デザートもあるから。それは覚悟してね」
「わかりました」
そしてそれはすぐに運ばれてきた。ミルクのプリンであった。
「ミルクのプリンですか」
「そうよ。それが何か」
「いや、今まで結構色彩豊かなメニューばかりでしたから」
「白いものが来るとは思っていなかったのね」
「はい」
八条は率直に答えた。

「まさかとは思いますから」
「これも政治というわけなの」
「政治」
「確かに政治は駆け引きが必要ね」
「はい」
八条も政治家である。その程度はわかる。
「けれどそれだけでは駄目。少なくとも一流にはなれない」
「ではそのプリンは」
「政治を行うにあたっては誠意や魅力も必要だということよ。だからプリンなのよ」
「成程」
かくしてプリンは二人の前に運ばれてきた。そしてそれにゆっくりとスプーンを入れる。金属のそれをなめらかに受け入れ、そして二人の口の中にそれぞれ運ばれていく。
口の中をソフトな甘みが支配する。それはミルクの素材を充分にいかしたものであった。
「どうかしら」
「これもいいですね」
八条は一口飲み込んだ後でそう述べた。
「ミルクの味を上手くいかしていて」
「あえてそうしたのよ」
「そこにはまた何かおありで」
「ええ。さっき誠意と言ったわね」
「はい」
「そして鶏肉のマウリア」
「私に彼等に対して何かして欲しいと」
「そう。彼等との交渉は貴方が中心になってくれるかしら」
「この場合は戦争を終わらせる為の」
「仲介者を探しているのよ」
「そしてそれがマウリア」

「まさかティムールやハサンに頼めるわけもなし」
「それは流石に無理ですね」
彼はそう言って苦笑した。

## 第十三部第二章　怒りの日その十

ティムールともハサンとも秘密条約を結んでいる。そのうえ彼等サハラの者にとってはエウロパは仇敵である。とても仲介役なぞ頼めるものではなかった。
「そこで彼等に仲介役をお願いしたいのよ」
「そしてその交渉役に私が」
「お願いできるかしら」
「そうですね」
彼は少し考えた。そして時間を置いてから述べた。
「マウリアとは今軍事交流も盛んですし知人もおります」
「ではお願いできるかしら」
「ですが今我々は何かと立て込んでおりまして。何しろ戦争中ですから」
「つまり一人では無理ということね」
「申し訳ありません」
「いえ、それでいいのよ」
だがカバリエはそれをよしとした。
「今回は貴方にはこのプリンと同じものを要求したいのよ」
「といいますと」
「誠意と魅力よ。さっきも言ったけれど」
「彼等に我々の誠意を見せて欲しいということですか」
「これは大統領とお話して決めたのだけれど」
「はい」
「最適の人物は貴方なのよ。それ以外には考えられないという結論になったわ」
「そうだったのですか。それで今日ここに」
「そういうことだったの。どうかしら。頼める？」
「はじめた戦争を終わらせるのは政治家の仕事です」

先程言った言葉を復唱するように言う。
「それならば国防長官である私が動かなくてはならないでしょう」
「では引き受けてくれるのね」
「身体が許す範囲で。宜しければスタッフをこちらに回して下さい」
「わかったわ。それでは」
「宜しくお願いします」
こうして八条は講和においてマウリアとの交渉を受け持つことになった。また一つ激務が入ったことになったが彼はそれを特に不満もなく受け入れた。彼は与えられた仕事に対して不平を言うタイプではなく、謹んで引き受けるタイプの男であった。だからこそ話を出された一面もあるが。
話が終わる頃にはもうプリンは完全に食べられていた。カバリエはそれを見極めてからあらためて彼に対して言った。
「貴方は一流の政治家になれるわよ」
「それは何故」
「さっきも言ったことだけれど」
そして言った。
「貴方には誠意と魅力があるからよ。それもないと一流の政治家にはなれない」
「現実には権謀術数が渦巻いていても」
「それも政治ではあるけれど誠意もまた政治ということよ」
「複雑ですね」
「けれど理解できないというわけじゃないでしょ」
「はい」
「今回は誠意を見せてね」
「わかりました。それでは」
「マウリアはお願いね」
「了解しました」
これで話は終わった。だが八条はそのまま外務省に留まった。そしてカバリエから紹介されるスタッフとまず顔を合わせることにし

たのであった。
数ある会議室のうちの一室に案内された。機能性を重視した殺風景にも見える部屋である。部屋に入るとそこにはもう木口がいた。
「どうも」
「君はもう食事は終わったのか」
「おかげさまで」
彼はにこにこと笑みを浮かべながら言葉を返す。やけに機嫌がいい。
「もう満腹です」
「君が昼に満腹と言うのは珍しいな」
「えっ、そうでしょうか」
何気無い言葉であったがそれを聞いて異様に狼狽した。
「いや、君はいつも朝に食べることが多いから」
「そうだったでしょうか」
「それに何か機嫌がいいようだし。何かあったのかね」
「いえ、何もないですよ」
手を振ってそう応える。
「本当に。何もありませんから」
「そうか。だったらいいのだけれど」
幸か不幸か八条の暗い分野の話であったらしい。普段は鋭い彼もどういうわけか疎い分野もあるのである。木口はそれでどうやら助かったようである。

## 第十三部第二章　怒りの日その十一

「まあ昼食のことはいいよ。カバリエ外相との話の結果だけれど」
「はい」
木口は真剣な顔を作ってその話を聞きに入った。
「エウロパとの講和の交渉に入ることになった。仲介役にはマウリアを候補にあげている」
「マウリアですか」
「そうだ。これについてどう思うか」
「いいと思いますよ」
彼は迷うことなくそう述べた。
「マウリアならば最適でしょう。エウロパと利害関係も生じておりませんし」
「君もそう思うか」
「長官はどうなのですか？」
「と言っても他に的確な国もないしな」
いささか消極的な視点からそう述べた。
「国力の面から言ってもマウリアしかないでしょう」
「私も同じです」
「それで外相から言われたのだが」
「何と」
「私には誠意や魅力を見せてもらうことを期待しているそうだ」
「誠意と魅力をですか」
「政治家にはそれも必要だと言われてね。それがないと一流の政治家にはなれないとまで言われたよ」
「まあそれは何処の世界でも同じですね」
「政治の世界でもか」
「ええ。そもそも政治の世界にしろ人間の世界ですね」
「ああ」

「ですからですよ。人間の世界に誠意と魅力は欠かせないものですから」
「そういうことなのか」
「私はそう思いますけれど。けれど長官も同じでしょう」
「私は駆け引き等は好きじゃないしな」
元々そうした政治家ではなかった。資金にも苦労はせず、支持者にも困ったことはない。所謂貴公子であり、そうした日の当たる場所において仕事を行ってきた。また駆け引きは長けていなくともその政治家としての政策立案能力、指導力、事務処理能力、行動力、体力、そして演説や文章の能力はどれもかなり高く、言うならば政治家として登るべくして登ってきた人物である。だから裏の世界にも疎くて済んだのである。ある意味非常に幸福な政治家であった。
「それに軍、とりわけ経補ではそうしたおのが求められる」
「はい」
「だからそれには実は賛成だ」
「左様ですか」
「しかし」
それでも彼は渋るものがあった。
「相手はマウリアだ。果たして上手くいくかな」
「上手くいかさなければならないでしょう」
「厳しいな」
「結果が求められますからね、今回は特に」
木口の言葉は厳しいものであった。
「しかしだからこそ長官が選ばれたのでしょうが」
「そういうものかな」
「はい。まあ細かいことは向こうのスタッフと話しましょう」
「そうだな」
彼等は外務省のスタッフが来るのを待った。やがて数人のスーツ姿の男女が部屋に入って来た。
「お待たせしました」

黒い肌に銀色の髪と緑の目を持つ女がその先頭にいた。年齢は四十代程であろうか。彼女が一同を代表して挨拶をした。

## 第十三部第二章　怒りの日その十二

「いえ」
八条はにこりと笑ってその挨拶に応えた。
「マウリア局長シレーナ＝アグリハンです」
「国防長官八条義統です」
「はじめまして。お話は御聞きしております」
アグリハンは淡々とした様子で言葉を続ける。
「それでは早速お話に入らせて頂きたいのですが」
「はい、宜しくお願いします」
「それでは」
スタッフは席に座った。そして八条との話をはじめた。
「まず実務等は我々でやらせて頂きます」
「左様ですか」
「長官には統括的な指導をお願いしたいのですが」
「そこで一つ問題がありますね」
「それは」
「私は国防長官です。外相ではありません」
「はい」
「その点で管轄において大きな問題が出るのではないかと思うのですが」
「その心配はありません」
しかしアグリハンはそれを否定した。淡々とした声であった。
「何故ですか」
「我々が国防省へ出向するという形をとります。籍は外務省に置いたままで」
「成程」
「これなら長官の管轄下になりますね。そして外相からの指示を得られる」

「はい」
「これでどうでしょうか。悪くはないと思うのですが」
「そうですね」
八条は一呼吸置いて考えてからそれについて述べた。
「確かにこの話を進めるうえでそれは非常にいいですね」
「ではこれでいきますか」
「はい」
彼はそれを認めた。
「ではそれでお願いします。執務室はこちらで用意します」
「有り難うございます」
「ただ問題がありまして。国防省には軍事機密も多く」
「わかっております。それはこちらも同じことです」
「ではそうしたものには互いに触れないということで。宜しいですね」
「はい」
細かい部分の取り決めはこうして決められた。だが話はそれで終わりではなかった。彼等はまだ話し合いを続けた。
「マウリアのことですが長官もある程度御存知だと思われます」
「一言で言うと不思議な国ですね」
「ええ。だからこそ我々も苦労している一面があります」
彼女は率直にそう述べた。
「彼等は連合のどの国とも違います。まず宗教が」
「ヒンズー教が主流だとは聞いていますが」
「勿論それだけではありません」
「シーク教やゾロアスター教、他にはイスラム教や仏教もあるのでしたね」
「はい」
「宗教だけで無数に存在し、そして人種や民族も雑多でしたね」
「雑多というレベルではなくて。一度勉強しただけでは到底わかるものではありません」

話すその顔が困ったものとなっていた。
「言語も文字も違いますし、マウリアの国の中で」
「銀河語が通用しない場合もあると」
「残念ながら」
これは連合の者にとっては驚くべきことであった。
この時代連合各国は銀河語を使っている。英語と中国語、スペイン語を軸にそこに日本語やロシア語、その他様々な言語を入れてそこから作り上げたもので文字数はかなり多い。表意文字と表音文字がミックスされ、文字数自体は多いが使うのも話すのも容易なようにされている。なおかっての言語は今では古典として語学の対象となっている。二十世紀の言語を知らないのではその時代のことを知ることはできない。翻訳機はあるがそれでも実際に学ぶ以上に利益のあるものは存在しないのである。
なおインドの主な言語はヒンズー語である。主なものであるというのは他にも多くの言語が存在するからである。
「我々がヒンズー語を話しても通じない場合もあります」
「ヒンズー語まで」
「はい。だからこそ非常に困ったことになっていまして」
語るその顔の困惑の色が増す。
「こうした状況が千年以上も続いていますしね。ところが彼等にとってはそれすらも些細なことです。いえ、考慮するにすら値しないのです」
「あ、それは私もわかります」
八条はマウリアの時間の概念については同意した。
「今交流の為にも彼等の軍人を受け入れているのですが」
「雑誌で読みました、それは」
アグリハンはそれに応えた。
「何でも一日丸々遅れても普通だそうですね」
「ええ、その通りです」
「八時に来たのだから問題はないだろうと。担当の連合の士官がそ

う言われて呆然としたとか」
「その士官どころか国防省全体で呆然としました」
そこに八条が入っているのは最早言うまでもないことである。
「噂には聞いていましたが。まさか本当だったとは」
「我々も同じことがありましたよ、それは」
見ればアグリハンだけでなく他のスタッフもそれに頷く。どうやらかなりのことがあったらしい。
「本当にね。困ったものです」
「あと食事の戒律ですが」
「少なくとも牛と豚は控えた方がいいですね」
「やはり」
「連合のムスリムは豚や酒でもアッラーに謝罪してから口にする者が殆どですが」
むしろユダヤ教徒の方が厳格な程である。連合軍の食堂の区分もムスリム達よりユダヤ教徒達の主張の方がずっと強い程であった。
「彼等はそういうわけにはいきません。特に牛は」
「連合のある艦でそれは問題になりまして」
「ビーフカレーでも出したとか」
「はい。それでこの様なものは食べられないと。ところがポークカレーも駄目でして」
「ムスリムの者もいたと」
「そうです。それでその艦の給養員の出した結論とは」
「あと彼等はシーフードもあまり口にはしませんね」
「それもありました」
語る八条の顔が苦いものになる。海産物を好む彼にとっては信じられない話であるが。

## 第十三部第二章　怒りの日その十三

「シーフードカレーを食べないというのは残念ではあります」
「全くです」
「海老や烏賊、貝等が入ってそれぞれの味がルーに出てあれ程美味しいものはないというのに」
「少なくとも彼等にとってあれはカレーではないそうです」
「もっとも我々の食べているカレー自体が彼等のカレーではありませんしね」
「まあカレーの話は置いておきまして」
「はい」
長くなるのでそれは言わないことにした。話を元に戻した。なおアグリハンはマーシャル出身である。マーシャルもまた海の多い惑星が多く、海産物は昔からよく食べられている。従って彼女もシーフードが好きなのである。だが生ではあまり食べない。これは和食だけだとさえ言われている。
「それで彼等はチキンカレーを出したのですよ」
「賢明ですね」
「はい。マウリアでは鳥はよく食べられるのですね」
「それと野菜類と」
「それでそうしたものに変えたのですよ。それで助かりました」
「それは何よりです」
「やはりそちらもそれで困ることが多いですか」
「食事だけではないですしね」
「宗教や時間の概念だけでなく」
「細かいものを入れると本当に。千年経っても理解できないものは本当にあるものです」
「わかります」
「長官はマウリアのことを御知りのようでこちらもお話し易いです」

今度は憮然とした顔になった。
「知らない人には本当にわかりませんからね」
「そういうものですか」
「そういうものです、非常に残念なことに」
本当に残念そうな言葉であった。どうやら今までかなり苦労してきたらしい。
「困ったものです」
「それだけマウリアが異質な存在だということですね」
「少なくとも連合の常識は全く通用しません」
そう断言した。
「それに奥が深い。まるで底無し沼の様に」
「よく言われることですね、それも」
「二十世紀の時からしいですね」
「はい」
彼女は八条の言葉に頷いた。
「例えて言うのならマウリアとそれ以外の世界です。それ程違います」
「その為に彼等は連合に入ることはなかった」
「エウロパにもサハラにも。インドと呼ばれていた時からそれだけで一つの世界でした」
「一つの世界」
「連合は例えて言うのなら三百の世界の集合です」
「はい」
「ですがそれは連合という一つの世界に内包されている世界です。世界の中の世界」
「マウリアにもそれはあるのでしょうか」
「さて」
しかし彼女はそれには首を横に振った。懐疑的な顔で。
「その中すらどうなっているのかわからない。全く訳がわからないというか」

「わからない」
「長い間あの国について学んできたつもりですがまだ全くわからないのです」
「はあ」
「長官の御出身である日本もあの国の文化の影響を受けておりますね」
「仏教等ですか」
「他にもある筈ですが。何しろ連合で最もマウリアの文化が残っている国と言われていますし」
「言われてみるとそうですが」
連合においてもとりわけ独特な個性を持つとされている日本である。その個性においても大国であると言える。そしてマウリアの文化の影響がある程度残っているのもまた事実である。中国にも仏教が伝わったが結局道教に敗れてしまっている。またタイ等の仏教はタイ独自の色が強くなっている。もっとも日本の仏教も日本独自の色がタイのそれに負けず劣らず強いのであるが。
「ですが僅かなものですよ」
「それでも二十世紀からマウリアとは個別には最も関係が深い国ですね」
「ええ、まあ」
アグリハンと共にいる外務省のスタッフの一人が彼に尋ねてきた。見ればその人物はアジア系の顔に茶色の髪と青がかった紫の目をしている。ケルト系の血が入っているらしい。
「お世話になったこともありますね、二十世紀には」
第二次世界大戦の敗戦により日本は世界から悪の烙印を押された。それによりオリンピックからも締め出されてしまったのである。選手達には罪はないというのにである。そして大戦後独立した新しいアジア諸国によるアジア大会が開かれることになった。最初の開催国はインドであった。長いイギリスの支配からようやく独立できたインドであった。

この独立は苦難の道のりであった。ムガール帝国は滅亡しイギリスの徹底的かつ巧妙な統治によりあらゆる富は吸い出されていた。インド人達はその巧妙な分割統治により治められ、その独立運動は遅々として進まなかった。二十世紀最大の賢者ガンジーをもってしても。

そこで戦争が起こった。日本はアジアの解放を掲げ戦った。実質的には自らを盟主とする勢力圏を築くという野心があるにはあったが実際にアジア諸国を独立させようとし、実行に移したのは事実であった。あまりにも厳格で融通が利かず、さらに不始末があれば鉄拳制裁も辞さない日本軍の存在があったとしても。彼等は確かに厳格であったが生真面目で規律正しく公平であり熱心であった。そしてアジア人達を人間として見ていた。軍事訓練や教育も行った。イギリス人やその他のヨーロッパ人達が彼等を人間とは見ていなかったのとは全く違っていた。

その日本軍はインドも解放しようとした。今もその名を歴史に残す指導者チャンドラ＝ボースと共に。だがそれは失敗した。日本も結果として敗戦した。しかしこの戦いによりイギリスはアジアにおける力を回復不可能なまでに落としてしまった。同時にインド人達は知った。自分達も日本人と同じように戦えるということを。そして彼等は遂に独立した。

そのインドで最初のアジア大会が開かれる。だがここである者が言った。日本を排除しようと。理由は第二次世界大戦であった。敗戦国であり戦犯である日本を入れてはならないというのだ。無論日本には発言権はない。下手をすればこのままアジア大会からも排除されるところであった。だがそれはならなかった。

「それは違う」

インド人達は言った。

## 第十三部第二章　怒りの日その十四

「日本も同じアジアだ」

と。そしてアジアの国ならば排除してはならないと。こうして日本も招かれることとなった。最初のアジア大会に。それにより日本はこの大会に参加することができた。今ではオリンピックと共に連合最大のスポーツ競技会である連合大会、マウリアも参加するこの大会に日本は最初から参加することができた。全てインド人達の良心の為であった。

このことはこの時代連合の多くの教科書に書かれている。国ごとにそれぞれ数え切れぬ程の教科書がある。連合中央政府及び各国の定めた教育基準に従って編集されているがこのことは全ての教科書に書くよう定められている。マウリアの良識を知らしめる一例として。

このことに感謝していない日本人はいないと言っていい。まともな者ならば。これは八条も同じである。

「あの時はパール判事にもお世話になりました、我が国は」

「そうですね」

極東軍事裁判、事後立法のうえ単なる戦争犯罪をニュルンベルグ法と同じ人道に関する罪や平和に関する罪で裁いた法律上最低最悪の裁判である。しかもその判決は勝利者側が行い、資料も冤罪や都合のいいものばかりであった。全てが茶番であった。だがそこに一人の良心を持った人物がいた。それがインドのパール判事であったのだ。

彼は言った。ある言葉を。

「時が熱狂と偏見を和らげた暁に、また理性が虚偽からその仮面を剥ぎ取った時に、その時こそ正義の女神はその手に持つ秤を平衡に保ちながら、過去の賞罰の多くにそのところを変えることを要求するだろう」

と。日本を無罪であると主張しこう言ったのだ。これにより日本は救われた。多くの人々が刑場の露と消えたがその名誉を守る道は残されたのであった。
「それからですね、マウリアとの交流は」
「天皇陛下も何度も行かれているとか」
「今上陛下はまだですが」
「そのようですね」
「しかしいずれは、と考えられているようです。もっとも今私はこれに関わる立場ではありませんが」
「はい」
「ただ、交流が深いのは事実ですね。ただ、それでも我が国にとっては仏教とカレーの国であるというイメージしかありません」
「日本でもそうですか」
「あとは牛肉を食べない、時間の概念が全く違う、そしてカーストの名残がまだある。これ位でしょうか」
「意外とよくわかっているではありませんか」
「我が国ではもう訳がわからないの一言で終わりですよ」
「いや、それは我が国も結構言われていることです」
八条は外務省のスタッフの言葉にそう応えて苦笑した。
「掴み所がないと。他にも色々ありますが」
「まあそういう意見もあるのは事実ですね」
アグリハンはそれにも頷いた。
「ただ、マウリアはまた別次元なわけでして」
「言い忘れましたがマウリアの映画も結構入って来ていますよ」
「ああ、あれですね」
アグリハン意外の外務省のスタッフが皆一様にそれを聞いただけで露骨に嫌そうな顔をした。
「あれはちょっとね」
「御覧になられたことはあるようですね」
「正直言って何度見ても訳がわかりません」

そのうちの一人が正直にそう答えた。
「ストーリーも登場人物も。顔が同じにしか見えません」
マウリアの男はその多くが髭を生やしている。特に俳優はそうなのである。
「出て来た悪役が何時の間にかいなくなったり」
「突然踊りだしたりするのですから。しかも人が何処からともなく出て来て」
「あれをまともに評論できる映画評論家はおそらく奇人変人なのでしょう」
「若しくはマウリアの者達だけです」
「またえらく酷評ですね」
八条はそれを聞いて苦笑いを浮かべた。
「私はいいと思いますが」
「そうですか」
「あれがマウリアなのだと思うと。実に多彩で」
「しかも長いですしね」
「はい。時間がないととても見られませんが」
アグリハンに応える。
「けれど観ていると飽きないですよね」
「私はあまり好きにはなれないですが」
やはりアグリハンは懐疑的に首を横に振った。

## 第十三部第二章　怒りの日その十五

「けれど評論家によっては評価は高いですね」
「はい」
「好きな人にとってはいいようですね。あの国の映画は」
「合う合わないが大きいです」
「そういうことですね。マウリアはまさにそれです」
そしてここでまた言った。
「やはり今回のことは長官に何かと御尽力頂きたいのです。そうした一面から」
「そうですか」
「他の閣僚の方々ではどうも合わなくて」
「マウリア自体と」
「はい。それもあったのですよ。しかも今回は失敗したならば問題ですし」
「講和がかかっていますからね」
「ええ。次の戦いで実質的に最後ですが」
「講和が失敗したならばエウロパにおける占領地でも不穏な空気が漂いかねない」
「自棄になる者も出るでしょうから。このまま我々に屈服したままではとてもいられないと」
「そうですね。今占領地でそうしたことが起こっていないのは実に幸いです」
これは八条が軍の規律を徹底させ、一般市民の武装解除やエウロパ将兵の身の安全を保障したうえで投降を執拗なまでに呼び掛けた結果である。無論掃討戦も同時に徹底して行っているのであるが。なおゲリラとは敵側から見た場合であり、もう一方から見ればレジスタンスとなるものである。この時彼はあえて自分の功績を謙遜したのである。

「ただ、それでも限度があります」
「はい」
「これ以上占領が続くと。心配ですね」
「講和をしくじればさらに占領状態、しいては戦争状態が続きます」
「財政的な面からも問題です」
「だからこそです。無駄な損害や出費を防ぐ為にも」
「成功させましょう」
「はい」
そして皆あらためて八条の言葉に頷いたのであった。
「その為にもマウリアのことをもっと知らなければ」
彼はそう決意した。そして国防省に戻った。すぐに次の仕事が待っていた。
「人は待ってはくれないが仕事は待っていてくれるものだね」
「有り難いですか」
「仕事がなければ食べることができないからね」
八条は木口に対して笑いながらそう述べた。
「実家に帰ったら帰ったで会社のことで色々あるしな」
「はい」
彼の実家は裕福であるがだからといって仕事がないわけではない。今はそうしたことは顧問弁護士に任せているが政治家から離れるとそちらに専念しなければならないのだ。案外忙しい身である。
「暇はないものだね、本当に」
「まあお話はそれ位にして」
「わかってるよ」
そう言いながら執務室の自分の席に戻った。
「今度は何かな」
「どうやら国軍のことですね」
「国軍か」
連合は中央政府が統括する中央軍の他にそれぞれの国も軍を持っている。これを国軍という。だがその規模は小規模であり単なる治

安維持や哨戒がその任務なのである。規模はそれぞれの国の国力や領土によって制限されている。あくまで最低限の規模である。
「近頃中央軍と共同で使用する軍港や施設等に関してトラブルが起こっているようなのです」
「そうなのか」
「どちらが主導を持っているか。その国の軍なのか中央軍なのか」
「難しい話だな」
「はい。現場は極めて感情的な理由が多いそうですが」
「ふむ」
「それが実に政治的な理由を孕んでいます。中央政府と各国の軋轢まで」
「慎重な対処が必要なようだな」
「そうですね。如何すべきでしょう」
「中央政府の法は各国それぞれの法に優越しているな」
「はい」
ここで彼は法を出してきた。
「軍にもそれは適用されている」
「では中央軍が上位にあると」
「いや、それは違う」
だが八条はそれを否定した。
「連合の法は連合市民全てに公平に適用される。ならば中央軍も国軍も同じだ」
「では彼等は平等であると」
「連合市民はどの様な国、人種、宗教、出自、職業であれ法的には平等と定められている。ならばこれは当然だと思うが」
「それはそうですが」
「ならば中央軍も国軍も同じだ。以後そう扱うといいだろう」
「ですがそれでもまだ問題があります」
「施設の使用順位か」
「はい。これはどうしましょうか」

「それぞれの部隊の任務によることにすればいい」
彼の答えはこれであった。

## 第十三部第二章　怒りの日その十六

「所属ではなく任務によって決めるのですか」
「これならば作戦行動にも支障は出ないと思うがどうだ」
「それはそうですね」
「国軍の存在も必要なのは事実だ。彼等は連合内における貴重な戦力だからな」
「はい」
「軋轢があっては困る。またトラブルを起こしている国は何処だ」
「アメリカ、中国、ロシア、ＡＳＥＡＮ各国、そしてブラジル等です」
「またか」
八条はそれを聞いて少し嫌そうな顔をした。
「おおよその見当はついていたが」
「中央政府に対する反感からでしょうか」
「それもあるだろうが実はもっと深いものがあるのかもな」
「といいますと」
「これで何かを引き出そうとしているのかも知れない」
「何かを」
「以前中央軍が使用する設備のことで各国の対立があったな」
「はい」
「それ絡みでだ。法的にはこれでいいとして各国とはそれぞれ話の調整に入った方がいいな」
「骨が折れそうですね」
「何、いつものことだ」
だが八条はそう言ってそれを取るに足らないとした。
「中央政府にいればな。暗殺やスキャンダル追及がないだけまだましだ」
「いや、暗殺は流石にないですよ」

「それはわからないぞ」
それは笑って否定しようとする木口に対してそう述べた。
「この世界はな。何が起こるかわからない」
「それはそうですが」
「肉を切るナイフの片面に毒を塗っておき、それで切った肉を出して暗殺した例もある」
古代ペルシアでは実際にそうした事件があったらしい。
「同性愛者に刺客を送り込んだという話なら知っておりますが。そんなのもあったのですか」
これは日本の戦国時代の武将宇喜多直家が実際にやったことである。これにより政敵を葬っている。彼は実際の戦闘はそれ程強くはなかったがこうして謀略や調略を得意とし、それにより生きてきたのである。もっとも戦国時代、いや政治の世界においてはこうしたことは日常茶飯事であった。織田信長や毛利元就は謀略を好み、それを駆使していたしルネサンスの歴代法皇達はいずれも陰謀をも使ってその座に就いている。バチカンは長きに渡って、そしてこの時代においても伏魔殿とまで言われているのはこの為である。
「連合の歴史で不審な死を迎えた政治家もいないわけではないな」
「まあそうですね」
「もっと多いのはスキャンダルで失脚だが。今回のことでイスラエルはどうなのだ」
「彼等はこれといって衝突はないようですね」
「そうか。ならいい」
八条はそれを聞いていささか安心した。
「彼等はまた特別だ。彼等とは何もないというのならまず最悪の事態はない」
「そうですね」
そうした影の政治を最も得意とする連合の国はイスラエルなのである。ユダヤ系の隠然たる力と情報収集能力によりそうした行動を可能にしているのである。八条も彼等にマークされている可能性が

ないわけではないのだ。
「トラブルを起こしている国とは個別に話し合いの場を持とう。まとまって行動していないかも知れないからな」
「はい」
「特に米中露、そしてブラジルに対しては慎重に動こう。おそらく何らかの重大な意図がある」
「利権でしょうか」
「その可能性が高いな。前の話では彼等にとって不都合な取り決めになった」
「そうでしたね」
この時は日本の案が通ったのである。それに彼等が不満を感じている可能性があるのだ。

## 第十三部第二章　怒りの日その十七

「何かあればこれが連合の亀裂になりかねないからな。シャリアピン次官を呼んでくれ」
「次官を」
「彼でなければこの案件は解決は困難だ。やってもらおう」
「わかりました」
こうしてシャリアピンが八条の下に呼ばれた。そして彼はそれに従い行動に移った。彼の慎重且つ的確な行動、交渉により各国の国軍と中央軍の衝突は収まった。後日それを受けて八条は彼と話し合いの場を設けた。
「御苦労様でした」
「いえいえ」
二人は国防省の会議室で話をしていた。広い部屋に二人という寂しい状況である。
「次官のおかげで収まりましたね」
「ただ、見返りはかなり払いましたが」
「何でした、見返りは」
「国軍と中央軍の指揮系統です」
「そちらでしたか」
これは意外であった。八条は彼等が施設の使用の拡大やそれに伴う利益を狙っているのでは、と考えていたからであった。だがそうではなかったというのだ。
「そういえばそちらにはまだ手をつけていませんでしたね。迂闊でした」
「それは私もです」
彼は少し渋い顔を作っていた。
「中央軍の指揮系統だけを考えていましたから」
「はい」

「国軍との関係までは。考えておりませんでした」
「そして彼等とはどう話し合いの折がつきましたか」
「平常時も非常時も各国の国家元首及び政府の指揮下にあるということで話がつきました。従ってそれぞれの国から彼等が出るということもないということで」
「まあそれが妥当ですね」
元々治安維持、災害派遣等が任務である。だからこれでいいのである。
「そして中央軍は災害時等でも中央政府の管轄下にある」
「これは今まで通りですね」
「ただ、非常時には中央政府はそれぞれの国に協力を要請する場合もある。その際は州軍は中央政府の指示に従ってもらう。ただしその立場は中央軍と対等であります」
「第一種警戒態勢の時等ですか」
他国の侵略や惑星の爆発、ブラックホールの発生等星間単位で深刻な事態が起こった場合である。もっともこれ等のこと、とりわけ後の二つはそうそう起こりはしないものだが。少なくとも新しいブラックホールの発生も惑星の爆発等は連合の長い歴史の中でも一度や二度ずつしか起こってはいない。滅多に起こらないものである。少なくとも五百年や六百年という単位ではそうは起こりはしない。
隕石の惑星への接近は第二種である。かってＳＦ等でよくあったこの危機はこの時代ではそれぞれの惑星の周りにある人工衛星の迎撃で対処可能となっている。そうそう起こるものではないがこれに関しても対処可能なのである。
「そうです。そうした危急の事態にはまた話が別ですが」
「あくまで連合の法の領域内、でですね」
「はい。それを踏まえての話し合いでしたが。苦労しましたよ」
「そうでしょうね」
「法律の本まで持ち出して。それで何とか収まりました」
「またそれは」

「強敵でしたね、本当に」
「けれどこれで今後の国軍の運用の法的根拠もはっきりしましたね」
「はい」
「それが最大の収穫です。本当に何よりですよ」
「ただ、今回はイスラエルが関わっていなかったのが救いでしたね」
「そうですね」
頷く八条の顔に暗いものがさす。
「最近彼等は中央政府に対して好意的ですが」
「何を考えているのかわかりません。注意が必要ですね」
「はい」
イスラエルの影は中央政府にも及んでいる。彼等はそれを感じながら会議室を後にした。
こうして中央軍と国軍の問題は解決した。連合の歴史のほんの一コマである。だがこれにより連合軍はその運用に関して大きな法的根拠を得ていたのであった。

# 第十三部第三章　二匹の獣その一

二匹の獣

エウロパ領深くに侵攻している連合軍はクロノス星系に向かっていた。そしてその手前にあるテティス星系において布陣していた。そこで陣を整えていたのである。

そこには当然ながらマクレーンの旗艦ブレスもあった。ブレスは軍の後方において軍全体の指揮、統率にあたっていた。そしてそこで今後の作戦に関して考えていたのである。

「遂にここまで来たわけだが」

ザレボはこの時ブレスに向かう自分の指揮下にある一隻の戦艦の中にいた。

「思えば長い戦いだったな」

「そうだな」

それにゴルチャコワが頷いた。彼はザレボが提供してくれたこの艦に同乗していたのである。

「だがこれで最後になるだろうな」

「クロノスを抜ければ後はオリンポスまで一直線だ。我等を阻むものはもう何もない」

「距離もな。ここまで遠い道のりだったが」

戦争において空間程強大な防衛ラインはない。かってナチス＝ドイツがソ連との戦争に入った時その広大な空間に苦しめられたことからもわかるように距離というものは実に強大な防衛ラインとなるのである。エウロパは連合のそれと比べてその距離は短いものであるがそれでもかなりの距離があった。少なくとも戦闘をしながらではかなりの距離があったのである。

「だがクロノスからはもうその距離もない。あるのは目の前の防衛ラインだけだ」

「それをどう突破するかだが」

「それについてはこれからの会議で決まるな」
「そうだな」
彼等はそんな話をしながらブレスに向かっていた。ブレスはその巨大な姿を銀河の大海の中に浮かべていたのであった。
このテティスにおいては戦闘は行われなかった。エウロパ軍はその戦力を全てクロノスに集結させていたからである。従ってこの星系は無血入城という形で連合軍のものとなった。彼等はここで惑星テティスを中心に布陣していた。
テティスは人口七億程の比較的豊かな惑星である。資源にも農産物にも恵まれている。ギリシア領でありその市民もギリシア人が殆どである。彼等は今ここで連合の艦艇に惑星自体を覆われながら暮らしていた。
「ねえお母さん」
そのテティスに住んでいるギリシア人の家庭の一つにその少年はいた。金茶色の髪に青い目のあどけない顔立ちの少年である。まだ小学校に入ったばかりか。彼は熊のぬいぐるみを手に台所にいる母親に声をかけていた。
「お父さんは？」
「夕食には戻るわ」
息子と同じ金茶色の髪をした中年の女が少年にそう答えた。
「だから大人しく待っていなさいね」
「うん」
少年はそれに頷いた。そしてリビングに戻っていった。
「じゃあ僕大人しくしているよ。お父さんが帰って来るまでね」
「そうよ、大人しくしていたらお父さんは戻って来るから」
母親は少年に対して言った。
「だから大人しくしていてね」
「うん」
少年は素直であった。リビングに入るとそのまま熊のぬいぐるみで遊びはじめた。そこに子犬が来る。すると今度はその子犬と遊び

はじめた。
やがて遊び疲れてソファーで寝てしまった。目が覚めた時にはもう真っ暗になっていた。
「お母さん」
彼は起き上がって母を呼んだ。
「晩御飯は？」
「もうちょっと待って」
すると台所の方から母の声が返ってきた。
「もうすぐだからね」
「うん」
そして部屋の灯りをつけてまた遊びはじめる。それから暫く経ってやっと父親が帰ってきた。少年と同じ青い目をした中年の痩せたスーツの男であった。
「只今」
「お帰りなさい、お父さん」
少年が玄関まで行って彼にそう挨拶をする。だが彼はそれを受けても晴れた顔をしなかった。帰った時のままの疲れた顔であった。
「どうしたの？何かあったの？」
少年は父親のその疲れた様子を見て心配になった。そして彼に声をかけた。
「いや、何でもない」
しかし父親は息子の声に答えずかわりにこう言った。
「それよりもお母さんはどうしているんだい」
「お母さんは台所で料理作ってるよ」
彼はそう言った。
「まだ作ってるのかな」
「そうか」
彼はそれを聞いて疲れた顔のまま家にあがった。
「一体何なんだろうな、今日の晩御飯は」
「ハンバーグだったらいいね」

「ハンバーグか」
息子の好物である。実は彼も好きだ。しかし今はそれを食べたいとは思わなかった。肉を食べる気持ちにはなれなかったのである。
「お父さんは今日はハンバーグよりも食べたいものがあるんだ」
「何？」
「お酒さ」
彼は暗い声でそう述べた。
「お酒？」
「そうさ。ブランデーをな。もうそれだけでいい」
それ以外には欲しいとは思わなかった。
「けれどそういうわけにはいかないだろうな」
「僕お酒は好きじゃないからよくわからないけれど」
エウロパでは未成年も酒を飲んでいいがこの少年は酒はあまり好きではなかった。それよりもジュースが好きな少年だったのである。
「飲みたいの？」
「今はな」
「じゃあお母さんと一緒に飲んだら？お父さんいつも言ってるよね」
「ああ、そうだな」
父親はまた頷いた。
「食べたり飲んだりするのは一人より二人の方がいいって」
「そうだな。そうするか」
疲れた様子でそんな話をしながら台所に向かった。するとそこにはアイスバインとザワークラフト、そして茹でたジャガイモが置かれていた。

## 第十三部第三章　二匹の獣そのニ

「アイスバインか」
「何を作ろうかと考えてたんだけど」
見れば母親も疲れた顔をしていた。
「簡単なものでいいかしら。とりあえず」
「ああ、それでいいよ」
夫は何も言う気にはなれなかった。それでいいとだけ言った。
「あと酒はあるかな」
「黒ビールとワインならあるけれど」
「ブランデーはないのか。アルテミス産のがあった筈じゃ」
彼のお気に入りである。
「アルテミスは今は」
「そうか、そうだったな」
連合に占領されている。従ってアルテミス星系との流通は途絶しているのである。今はこの惑星自体が連合軍に完全に武装解除されたうえで包囲されているのである。そうした閉塞感の中にあったのだ。
「じゃあワインをもらおうか」
「赤でいいわよね」
「肉だしな。けれどそれしかないんだろう？どうせ」
「御免なさい」
妻は俯いてそう答えた。
「テティスの。赤しかないわ」
「そうだろうな」
この星系のワインは赤が有名である。白もあるがこちらはあまり味がよくないとされている。だがここではその赤はもうあまりにもありふれたワインとなっていた。まるで水のように飲まれている。従って非常に安く量にも困ってはいなかった。

「けれどそれでいい。じゃあ食べるか」
「ええ」
こうして一家は食事に入った。まずは神に祈りを捧げる。ギリシア正教会の礼であった。
次にアポロンに祈る。夫も妻も神々はアポロンを信仰していた。だから彼に祈ったのである。
それから食事に入る。静かな食卓であった。落ち着いたと言えばいいところであろうが実際は暗い食卓であった。少年も何も語らず黙々と食事を続ける。
「なあ」
父親がパンを千切りながら母親に声をかけてきた。
「何かしら」
母親はザワークラフトを口に入れていた。酸味が口の中を支配しているがだからといって言葉まで酸っぱくなっているわけではない。穏やかで低いものであった。
「この辺りで戦争になるらしいな」
「そう」
だが彼女はそれを聞いても特に驚かなかった。
「それで私達に何かあるわけでもなし」
そう言って取り合おうとはしなかった。最初は。
「別にこの星で戦争をやるわけじゃないんでしょ？」
「ああ」
「宇宙でやるのだから。ここに連合軍の軍人は一人も来ていないし」
「それでいいのか？」
夫はそんな無気力な言葉を言い続ける妻に対して問うた。
「御前は」
「戦争なんて私達にどうかしようがあるの？」
「いや」
それは否定するしかなかった。その通りだからだ。
「どうしようもない。けれど俺の仕事は」

「もう少しの辛抱よ」
彼女は抑えた声で夫に対して言った。夫は宇宙船の船舶会社に勤めている。だから今のように戦争中だと仕事に影響が出るのである。実際に会社の業績は戦争の影響でかなり落ちている。彼が暗いのはその為であった。だが家庭全体までが暗いのは他に理由があった。
「もう少しの辛抱か」
「戦争はもうすぐ終わるわ」
「オリンポスが陥落してか。それで俺達の国は滅亡だ」
「けれど私達は死んだりしないわよ。まして連合軍に何かされるわけでもないし」
「御前は自分の生活が変わらなければそれでいいんだな」
彼はそれを聞いて呆れたように言った。
「エウロパがどうなろうと」
「貴方の仕事があればね。それでいいわ」
「そうか」
「そうよ」
彼女は言い返した。ワインを飲む夫の顔はもうかなり飲んでいるというのに赤くもなければ青くもない。ただ沈んでいるだけであった。

## 第十三部第三章　二匹の獣その三

「それで充分じゃない。戦争だって」
「御前の言いたいことはわかってるよ」
そう言って妻の言葉を遮った。
「食べられればそれでいい。お金があれば」
「そうよ」
彼女はまたこう言った。
「それが女ってやつか」
「私はね。今だって戦争がなければもっといいものが食べられるのに」
ザワークラフトもアイスバインもエウロパにおいてはあまり高級な食べ物とは考えられていない。軍人達がよく食べる粗末な料理として考えられている。ドイツ料理はエウロパにおいてはあくまで質素な料理なのである。ソーセージ等もそうだ。ポピュラーでよく食べられてはいるが所謂安い食べ物である。ギリシアでは夜に食べるようなものではないと考えられている。朝食に食べるものだ。つまり彼等は今夕食に朝食のメニューを採っているのである。
「ザワークラフトを夜に食べるなんて」
彼女もそれに言及した。本当ならこんなものを夜に食べたくはなかったのだ。
「戦争がなければ」
物資自体は不足していない。だが全体的にインフレ傾向にあるのだ。そして夫の会社の業績悪化で給料が減っているのである。だからこのようなものを食べているのだ。
「もっといいものが食べられるのに」
「それは言うな」
夫は妻を窘めた。
「言っても何もならないだろう」

「それはそうだけれど」
「仕方ないことだよ、戦争は」
「もうすぐ終わるのよね、けれど」
「そうは聞いているがな」
「終わったら元の生活に戻るかしら」
「さてな」
だが彼はそれについては懐疑的であった。
「そうはいくかどうかはわからない」
「まだこんなことが続くというの？」
「だからそれは俺にもわからないと言っているだろう」
グラスをテーブルに置いて困った顔でそう返した。
「只のサラリーマンが。わかる筈ないだろうが」
「そうね。只のサラリーマンだから。そして私は只の主婦」
「それで何がわかるというんだ。何ができるというんだ」
「何も」
「金を稼いで、それでものを買って料理して食べる。それだけだろう」
「そうだけれど」
「今ここで何かを言っても何にもならないよ。何もな」
「どうしようもないのね」
「精々酒を飲んでうさを晴らすだけだ」
そう言ってまた酒を飲みはじめた。
「これだけだ。御前もやれ」
「え、ええ」
彼女は夫に言われるままに杯を取り出した。そして夫にそのワインを注がれた。
それを飲む。辛口のワインであった。その葡萄の辛さが口の中を包み込む。渋くもあった。まるで今の彼女の心の様に。
「美味いか」
「いいえ」

残念そうに首を横に振る。
「元々甘いのが好きなせいもあるけれど」
「今は口に合わないか」
「ええ。おかしなものね。普段はこれでも平気で飲めるのに」
実はテティスのワインは辛口であってもそれ程きつくはないのである。むしろいささか苦味が勝っている程である。しかし今彼女はそこに舌で味わうもの以外のものを感じていたのだ。
「飲めないわ。ビールだったらいけるのだろうけれど」
「じゃあそれを飲め」
「ええ」
夫に薦められるままビールを取り出した。黒ビールである。彼女はそれをグラスに注ぎ入れて口に入れた。先程のワインよりはまだ口に合う。だが決して美味いものではなかった。

## 第十三部第三章　二匹の獣その四

「美味くはないだろう」
「よくわかったわね」
「俺もそうだからな」
夫は俯いてこう述べた。
「いつもは美味いのにな。最近はまずくてしょうがない」
「それでも飲むのね」
「飲まずにはいられないんだ」
酒の味に負けたのか声も苦いものになった。
「本当にな」
「それでどうするの？」
「何をだ？」
「お仕事よ。会社大丈夫なんでしょうね」
「今のところはな」
しかしそう語る声に溜息が混ざっていた。
「ただ、また給料が減るかもしれん」
「またなの」
「済まないな、御前にも迷惑をかけてしまっている」
「いいのよ」
妻はそれを悪いとはしなかった。逆に夫を慰めた。
「さっきも話に出たじゃない。言っても仕方がないって」
「そうだったな」
さっき話したことだったがもう忘れかけていた。それは酒のせいであろうかそれとも忘れたかったからであろうか。
「我慢しましょう、我慢できることなら」
「そうだな」
「ねえお父さん」
ここで今までただ食べているだけだった息子が彼に声をかけてき

た。
「何だ」
「今日学校で面白いこと勉強したんだよ」
「面白いこと」
「うん、先生が教えてくれたんだ。今連合の悪い奴等が僕達の国に来ているよね」
「ああ」
「僕達は大人になったらあいつ等をやっつけなくちゃいけないんだって。あいつ等は僕達を殺そうとしている悪い奴等だから殺してもいいんだって教えてくれたよ」
「そうか」
「お父さんはどう思う？僕大きくなったら兵隊さんになりたいと思うんだけれど」
「兵隊さんは辛いぞ」
それ以上言う気にはなれなかった。ただこう言うだけであった。
「それでもいいんだな」
「うん」
少年は笑顔でそれに頷いた。
「僕、頑張るよ。そして絶対に連合の悪い奴等をやっつけてやるんだ」
「できるんだな」
「絶対やるよ。そしてお父さんとお母さんを守るんだ」
「そうか。じゃあ大きくなった時に頼むぞ」
「うん」
「けれどな」
ここでこの父親は言った。
「兵隊さんじゃなくてもお父さんやお母さんを守ることはできるぞ」
「？」
少年はその言葉に首を傾げさせた。
「それどういうことなの？」

「わからないか、まだ」
ここで父親は今日はじめて笑った。優しい微笑みだった。
「人間はな、強くなくちゃいけないってよく言われるよな」
「うん」
少年はそれに頷いた。
「それは力だけじゃないんだ」
「喧嘩に強いだけじゃないの？」
「喧嘩だけじゃない。もっと他のことでだ」
「ねえ」
母親も語りかけてきた。
「お父さんは強いと思う？」
「うん」
少年はその言葉に迷うことなく頷いた。
「お父さんは強いよ、とても」
「どれ位強い？」
「世界一強いよ。他の誰にも負けない位」
「けれど喧嘩に強いように見えるかしら」
「ううん」
しかしれには首を横に振った。
「全然。痩せてヒョロヒョロだし」
「ヒョロヒョロか」
父親はそれを聞いてまたその優しい笑みを浮かべた。
「うん。喧嘩ならあのカナンさんの方が強いと思うよ」
彼の友達のガキ大将である。気は優しいが身体は大きく度胸があり皆から一目置かれている。この少年が犬に襲われていた時は身体を張って守ってくれたこともある。貴族の子供で非常に正義感の強い少年である。
「あの人本当に凄いんだから」
「そうね。確かにお父さんには力はないわね」
「うん」

「けれど頼りにはしてるわよね。お父さんは頼りになる？」
「だからお父さんが好きなの」
彼はそう答えた。
「頼りになるから。この世で一番頼りになるよ」
「それが強いということよ」
「それが？」
「そうよ」
母親もその時今日はじめて笑った。やはり優しい笑みであった。
「強いっていうのはね、頼りにされることなの」
「頼りにされること」
「そう。力だけじゃないのよ、頼りにされるのは」
「どうしたら頼りにされるの？」
話を聞いていて彼は不思議になってそう尋ねた。
「力が強いのじゃないなんて」
「それはそのうちわかるようになる」
父親は息子に対してそう言った。
「そのうち？」
「そうだな、御前が大きくなったら」
そしてこう述べた。
「わかるようになる。まずは色々と本を読むんだ」
「本を」
「そして人と話をしてな。友達は大勢いた方がいい」
「今よりも」
「今よりずっとだ。友達あってなんだ」
彼も学生時代の友人がいる。だからこそわかることである。
「何もかも」
「そうなの」
「喧嘩に強くなくても構わない。ただ、強くなるんだ」
「何かよくわからないや、僕」
それを聞いてもわかるような歳でもなかった。彼は首を傾げてし

まった。
「どうすればいいのか。本を読んでお友達を作ればいいの？」
「そう。そして考えるんだ、自分で」
「うん」
言われることに従い頷いた。
「大人になればわかるからな」
こうして食事の時の話は終わった。少年は父親と一緒にお風呂に入った後ですぐに寝てしまった。あのくまのぬいぐるみを抱いたままベッドに寝ている。だが両親はまだ起きていた。
「何か気持ちが軽くなったわね」
「そうだな」
二人はリビングでそう話をしていた。また酒を飲んでいる。しかしその表情はかなり穏やかなものになっている。
「あの子に救われたかしら」
「あいつに話をしてるとな。何だか自分自身も見ているような気持ちになったな」
「ええ」
妻は夫の言葉に頷いた。
「不思議なものね。さっきまであんなに沈んでいたのに」
「こんな御時世だ。無理もない」
戦争が続き今彼等のいる星系も占領されている。そんな状況では気持ちが暗くなるのも当然と言えば当然であった。だがそれが急に晴れたのであった。
「けれど何かすぐに晴れたな」
「あの子に話しただけでね」
そして彼女もこう言った。
「本当に不思議だわ」
「不思議なのはそれだけじゃないな」
「どういうこと、それ」
「何か力が湧いてきたんだ」

さっき話した力とはまた違う力である。
「明日、何か頑張れそうだ」
「そうね、私も」
彼女もそれは同じであった。
「戦争がはじまってから沈んでばかりだったけれど」
「はじめて気持ちが楽になったな」
「これからもこの気持ちでいたいわね」
「じゃあ頑張るか。あいつもいるし」
「ええ」
そして頷いた。もう迷いはなかった。
「それじゃあ今日はもう遅いし寝るか」
「そうね」
そのまま眠りに入った。それで終わりであった。彼等は暗鬱とした気持ちから解放された。だが多くの者はそうではなかったのである。エウロパは暗鬱な悩みに覆われていた。

## 第十三部第三章　二匹の獣その五

エウロパ軍はそれでも前線で決戦に備えていた。だがその前には大軍が布陣している。その大軍が今にも動かんとしていたのである。
「まだ攻撃命令は出ないのかね」
スタンフォードは乗艦のトレーニングルームでさわやかに汗をかきながら隣にいる同僚に声をかけた。
「まだらしいな」
その同僚は手を止めてそれに答えた。
「何か作戦方針でまだ色々と話をしているらしいぜ」
「これ以上何を話すってんだろうな」
彼はそう言って首を傾げさせた。
「後はもう攻撃に移るだけじゃねえか。他に何があるんだよ」
「政治的な理由じゃないのか？上の方の」
「揉めてるのかよ」
「さてね」
同僚はそれに答えながら今まで止めていた手の動きを再開させた。
「俺はそうした噂話には疎いんでね。詳しいことはわからないが」
「おいおい、話を振っておいてそれはないだろ」
「じゃあ後は自分で調べな。ネットを見れば噂話の一つや二つ転がってるぜ」
「あんなのあまりあてにはならねえよ」
そう言ってネットの噂というものを否定した。
「情報元がないとな。信じられるものも信じられねえんだよ」
「何だ、よくわかってるじゃないか」
同僚はそれを聞いてわざと意地悪そうな笑みを作った。
「思っていたより頭がいいようだな」
「言っておくがな」
彼もそれに対して意地の悪い笑みで返した。

「頭がよくなくちゃ今まで生きていられねえよ。戦闘機乗りはな」
「それじゃあ次の戦いにもそれを見せてくれよ、エース」
「言われなくても見せてやるぜ。背中は任せときな」
「おう」
その同僚は爆撃機乗りであった。爆撃機は戦闘機の護衛を受けるものである。だからこそ彼の言葉は非常に有り難いものであったのだ。彼等は最後は爽やかな笑みで頷き合った。
トレーニングから終わるとシャワーを浴び自室に戻った。そしてそこで同僚に言われた通りネットを開いた。
「さて、と」
軍事関係のサイトを開く。そしてそこで本当に検索を開始した。
「おいおい」
まずはついこの前国防省に招かれてキャンペーンを行っていた神崎亜矢のファンサイトを見た。彼は母国のかなり胸の大きいブロンドのアイドルが好みであるがこの時はたまたま覗いたのだ。
「幾ら何でもそれはないぞ」
八条と神崎亜矢が何もなかったのは八条も神崎亜矢も同性愛者だからだという書き込みがあったのだ。確かに八条は同性愛者だという根も葉もない噂があるし神崎亜矢も自分の事務所の女性タレント達と何度も期間限定ユニットを組んでいる。この事務所の所長はかなりのやり手として知られているのである。
スタンフォードはこのかなり奇天烈な書き込みに苦笑した。ついでに神崎亜矢の画像を見る。それを見て彼は密かにこのアイドルに興味を持ちはじめた。
「へえ」
そこには水着の画像もあった。小柄だがかなり胸が大きい。それが彼に気に入ったのである。
「そういや爺様が言っていたな」
ふとそう呟く。
「日本人は意外と胸が大きいって。いいかもな」

彼の祖父も巨乳が好きであった。彼はその影響を受けて巨乳好きになったと言っても過言ではない。そして今それを思い出していたのだ。
だが神崎亜矢から今は離れた。それよりも他の目的があるからだ。とある巨大掲示板サイトを開いた。
「確かここだったかな」
そこは連合で最も有名なサイトの一つである。様々な人間が書き込み、そこから情報を得たり交流したりするのが目的だ。玉石混合ではあるがそれでも使い様によっては有益なのである。
そこの軍事関係の場所を開いた。すると早速ある掲示板が目に入った。
「連合最強のエースパイロットは誰か、か」
そんなタイトルのサイトであった。そこを開く。するとそこには連合軍のエースパイロット達の評価がそれぞれズラリと書かれていた。
「何か好き勝手書いてくれているな」
見ればスタンフォードへの評価もある。万事に渡って派出好きでそれがかえって身の危険に繋がるのではないか、とあった。派手な動きが失敗に繋がるというのだ。
「それは違うだろ」
自分ではそう思いながらも見続ける。他には曹やボニング、トワンキン、アクジェジト等についての評価もあった。アクジェクトは異常に運が強いともあった。
「確かにな」
それには頷くことができた。あれだけ撃墜されているというのに生き残っている。しかも大怪我すらないのだ。それを考えると異様な程の強運であると言えた。
だが後藤だけは別格であった。その掲示板に書き込んでいる者のほぼ全てが書いていた。連合で最高のエースパイロットであると。
「それは俺だろうが」

自信家の彼はそれを見て思った。
「違うっていうのかよ。確かに撃墜奇数はあれだけれどよ」
後藤は日本軍にいた頃から凄腕のパイロットとして知られていた。神懸り的な操縦テクニックと勘で敵を倒していく。それはまさに神のようであったと今でも言われている。
スタンフォードも派手なドッグファイトは好きである。しかし後藤の様に神技というところまでは達してはいない。彼自身がそれはよくわかっていた。
そのうえで掲示板を見続ける。確かに後藤の評価はあまりにも高い。しかしそこでスタンフォードへのアドバイスも書かれていたのを見た。

## 第十三部第三章　二匹の獣その六

『あいつは爆撃機の護衛の時上ばかり気にし過ぎなんじゃねえのか？』

そういった書き込みがあったのである。

『アメリカ軍の時でもそうだっただろ。敵はどっからでも来るぜ』

「よく知ってるな、おい」

彼はそれを見てそう思った。

「何でそこまで知ってるんだ」

だがそれはすぐにわかった。戦闘というものは今ではテレビ中継されたりするものである。スタンフォードが有名人なのもそのせいである。彼の戦闘もアメリカ軍時代からことあるごとに映像として映されていたのである。おそらくそういったものを観て書いているのだ。

『そういえばそうだな』

それに相槌を打つ書き込みがすぐにあった。

『あいつは個人主義者だからな。基本的に護衛とかには向かないこともあるがな』

『けれど任務だろ？それにやりようがあるだろ』

「本当に好き勝手書いてくれているな」

まさか本人が見ているとは思ってはいないだろう。そう思うとおかしくもあったがそれでも見た。これはこれでかなり勉強になると思ったからである。

『爆撃機の護衛ってのは縦や横に蛇行しながら飛ぶよな』

また書き込みがあった。

「よく知ってるな、こいつ」

スタンフォードはそれを見てこう思った。それは本当のことである。連合軍では爆撃機や攻撃機、艦艇の護衛の際には上下左右に蛇行しながら飛ぶ。より広範囲を見渡せるからである。

「マニアか、それとも専門家か」
マニアも極端なレベルまで達すると専門家と変わりはしない。どちらにしろ今この書き込みをした者は少なくとも戦闘機の動きにはかなりの知識があるようであった。ＩＤをチェックするとスタンフォードを個人主義者だと書いた者であった。
『そこにあいつの答えがあると思うぜ』
「答え、ねえ」
それを受けて考え込んだ。それはすぐにわかった。
「視野の広さか」
そう思った。確かに今までは上にばかり注目していた。横や下にはそれ程注意を払ってはいなかった。
それで反応が遅れているところがあるのは認める。それで他のパイロットに獲物を取られたこともあるからだ。反応が遅れたからといって味方の爆撃機や攻撃機に攻撃を許すような真似はしないがそれでも遅れがあったのは認めた。
「それかね、やっぱり」
彼はそれを認めて頷いた。
「俺にないのは」
『ちょっと気を付ければかなり違うんじゃね？』
「そうかね」
『あいつは元々パイロットとしての腕はいいんだからよ。どう思うよ』
『実際に戦闘にならなきゃわからないんじゃないのか、それは』
別の書き込みがこう言っていた。
『次の戦いでよ』
「クロノスでか」
その書き込みを見て目の光が変わった。
「じゃあやってやるか」
そう言ってそのサイトを離れ掲示板から離れた。そして今度は書類仕事に取り掛かった。パイロットといえど将校である以上こうし

た仕事からは離れることができないのである。
書類仕事をしながらもサイトでの書き込みのことは忘れてはいなかった。頭の中で反芻する。
（楽しみだな、クロノスが）
それを試す機会があると信じて疑わない。それを思うだけで楽しかった。彼は戦いを楽しむタイプであった。アメリカ人らしいと言えばらしい陽気な男であった。

## 第十三部第三章　二匹の獣その七

連合軍は布陣したまま動きはしない。各艦隊はそのままの状況でクロノスを見据えていた。その中にはシコースキー中将の第二四七艦隊もあり敵を睨んでいた。司令であるシコースキーはこの時旗艦イーゴリの中にいた。

「まだ行動の指示はないのか」

彼は側にいる幕僚達にそう尋ねていた。

「はい」

幕僚の一人がそれに答える。

「まだです。どうやら最後の調整に入ってはいるようですが」

「その最後の調整から話が全然進んでいないな」

彼は苛立ったような声でそう返した。

「全く。何をやっているのか」

彼は短気な性格で知られている。ロシアゴーリキー士官学校時代の仇名はライターであった。すぐに火が点くからである。実際にそれで色々とトラブルを起こしている。派手な身振り手振りもその性格故なのである。

「もう進むだけでいいではないか。それでエウロパ軍を正面から押し潰す」

「確かにそれで我が軍は勝利を収めるでしょう」

そこで艦長であるローレンガーが彼にそう言った。この艦では艦長が実質的に司令を抑える役となっていたのだ。

「これだけの物量差があればな。当然だ」

「しかしそれは敵に何の策もない場合です」

「何の策も」

彼はそれを聞いたうえでローレンガーの顔を見据えた。

「では貴官は彼等に何かの策があると思うのか」

「そう考えておいた方がいいかと思いますが」

「ふむ」
彼はそれを聞いてあらためて考え込んだ。今まで少し苛立っていたがそれを宥めさせてからである。
「そうだな」
そしてローレンガーの言葉をよしとした。
「迂闊な行動は慎むべきだな」
「従って今回の総司令部の判断は正しいかと思います。下手に攻勢に出るよりは」
「事前の準備だということだな」
「はい」
そしてあらためて答えた。
「敵は何重にも強固な防衛ラインを敷いているそうですし」
「それでは義勇軍の出番か」
「それはどうでしょうか」
しかし彼女はそれには懐疑的な言葉を呈した。
「彼等は他に出番があるかも知れません」
「出番！？」
それを聞いて口に手を当てて考え込む。
「他に何かあるか、先鋒として以外に」
「陽動任務等はどうでしょうか」
「陽動か」
確かに使えないわけではない。サハラ義勇軍の艦艇はどれも連合軍の通常艦艇と比較して速度が速いのである。エウロパの艦艇とも遜色ない程である。
「それにも使えそうだな、確かに」
「どちらにしろ今回の戦いでは重要な役割を担うことは間違いないですが」
「うむ」
「問題はどういう役割か、です。何もクロノスにのみ投入するだけではありません」

「他にもあるか」
「例えばですが」
そして彼女は言った。
「一気にオリンポスを急襲させる等」
「オリンポスを」
「はい」
頷いてそれに答えてみせた。
「別働隊として向かわせれば。如何でしょうか」
「所謂分進合撃というやつだな」
「はい」
「昔から多くあった戦術戦略だが」
「考えられるケースではないかと思いますが」
「だが今回はどうかな」
しかし彼はそれにはあまり肯定的ではなかった。

## 第十三部第三章　二匹の獣その八

「といいますと」
「問題はオリンポスへ行けるかどうかだ」
そしてこう述べた。
「今我が軍はこのテティスで布陣している」
「はい」
「ここからオリンポスへ行くには二つの道しかない。クロノスを通るか」
「それともニョルズ星系を通るかですね」
「ニョルズか」
それを聞いたシコースキーの顔が微妙に変化した。
「あそこは無理ではないのか」
「そうでしょうか」
「障害が多過ぎる。大艦隊の迅速な通過は無理だろう」
「常識ではそうですね」
それでもローレンガーの言葉に動揺はなかった。
「今までの常識では」
「どうやら何かを考えているようだな」
「おわかりでしょうか」
「わからないとでも思ったか。伊達に艦隊司令を務めているわけではない」
シコースキーはローレンガーに対してそう言った。
「確かに今までの艦艇ではあの星系を大艦隊で迅速に通過することは不可能だ」
そしてまたこう述べた。
「だが我々の艦艇ではどうだ。そして義勇軍の艦艇では。そう言いたいのだろう」
「その通りでございます」

ローレンガーも答えた。
「司令はどう御考えですか」
「危険な賭けだな」
彼はそう返答した。
「少なくとも正規軍には命令できない」
連合軍は志願制である。そしてその損害はそのまま軍や国防省への批判に直結する。民主主義国家における敗北、多大な損害はそれだけで政権への糾弾材料となるのである。その逆に微々たる損害での勝利は政権の支持になる。だからこそ二十世紀後半の湾岸戦争より政治家達は損害を出ることを極端に嫌ってきたのである。最悪の事態が起こったならば軍人達に責任を押し付けることもあった。軍人達もそれがわかっているから無駄な損害を好まない。損害を出さない戦争、民主主義国家の軍隊、そして志願制の軍隊にはそれが求められているのである。
「正規軍にはな」
「しかし義勇軍は違いますね」
「少なくとも危険な作戦があったならばそれに志願して武勲を立てなければならない立場にはいる」
短気だが冷静な判断もできる。シコースキーとはそうした男であった。
「それは他ならぬ彼等が最もよくわかっていることだろうな」
「そうでしょうね。ではその作戦が立案されたならば」
「行くしかないだろう。志願してでもな」
「そうなるでしょう。しかし志願するまでもないと思いますが」
「どういうことだ」
「自分から申し出るかもしれません。私ならそうします」
「それは私もだな」
シコースキーも同じ考えであった。
「義勇軍もその所属の者達も連合に入って日が浅い」
「はい」

「功績を挙げなければ認められない。既に功績はかなり挙げているが」
「今までの勝利は彼等があってのことでしたね」
「そうだったな。本当に今まで彼等にはよく助けられている」
現場に立つ者だからこそわかることであった。彼等は素直に言うと義勇軍に非常に感謝していた。彼等に危機を救われたり勝利をもたらされてきたからである。それは正規軍の者達が最もわかってきた。
「感謝しているよ、本当に」
「ですがまだ功績は足りませんか」
「この戦いに敗れれば今までの功績もない」
それは非常に冷淡な言葉であった。
「戦争とはそういうものだ。最後に勝ってこその功績の場合もある」
「結果が全て、ですか」
「それまでにどれだけ功績を挙げていてもな。それで終わりだ」
その言葉はさらに冷淡なものとなる。
「冷たいようだがな」
「ですが現実にそうですね」
「貴官もそれは同じか」
「勝たなければ意味がないですから。その為には何としてでも」
「そうだな。だがそれは敵も同じだ」
「はい」
二人は前を見据えた。その彼方には敵が牙と爪を隠して待っている筈なのである。
「勝たなければならないのも」
「どちらにしろ激しい戦いになりそうですね」
「将兵の士気はどうだ」
「衰えていません」
「補給は」
「万全です。燃料も弾薬も一〇〇パーセントに達しております」

「つまり何時でもいけるということか。では待つだけだ」
「ですね」
「命令が下るのを。その時こそ全てが決する」
彼が最後の戦いの幕が開けるのを待っている丁度その頃ブレスに向かう一隻の巨大戦艦があった。それは漆黒に塗られていることから義勇軍の艦艇であるとわかる。

## 第十三部第三章　二匹の獣その九

それはロスタムであった。言うまでもなくサハラ義勇軍の総旗艦であり司令官であるマシュハドの乗艦である。その中にいる者は最早言うまでもなかった。
「司令」
ワフラがそのマシュハドに艦橋で声をかける。相変わらず異様に広い艦橋である。
「何だ」
「この艦で行くこともなかったのではないでしょうか」
ワフラはティアマト級巨大戦艦に乗ったままブレスに向かうことについて異議を呈したのである。
「通常戦艦、若しくは高速戦艦を使ってもよかったと思うのですが」
「それではわしの気が済まん」
しかし彼はそれをよしとはしなかった。
「それにな」
「はい」
そして付け加えてきた。
「わしは義勇軍を代表して行くのだ。元帥としてな」
「それはわかっているつもりですが」
「わかっていたらそのようなことは言わない筈だ」
そう言ってワフラを窘めた。
「マクレーン司令も劉総長も元帥だな」
「はい」
「ならば階級的には同格だ。同格ならば同じ型の艦で行くのが道理だろう」
「それはそうですが」
「それにな。わしが格下の艦で行けばどうなると思う？」
「といいますと」

「司令官が正規軍のそれより格下の艦で行くのだ。これでは義勇軍自体が正規軍の格下だと思われるな」
「あっ」
そう言われてようやく気付いた。
「どうだ。わかったか」
「は、はい」
ワフラはどもりながらもそれに頷いた。
「そういうことでしたか、失礼しました」
「貴官は戦争のことには頭が回るがそうした政治的なものには弱いな」
「申し訳ありません」
「まあ仕方がないと言えば仕方がないがな。軍人も政治に口出しするのはよくないが政治について知っておいた方がいいぞ」
「そういうものですか」
「連合では選挙に行くだけだがな。そして議会や政府に聞かれれば見解を述べる」
「そんなものですか」
「どうしても政治に何か言いたければ軍服からスーツに着替えて政治家に立候補しろ。それが連合の考えらしい」
「そこが我々とは違いますな」
「ムスリムは皆アッラーの戦士だ」
前を見据えてそう呟いた。
「いざとなればクーデターも起こしてきた。だが貴官の国では違ったか」
「はい」
ワフラは素直に答えた。
「私の国では。軍人は政治家には完全に服従しなければならないという考えでしたから」
「そうだったのか」
「人事や作戦にも介入してきましたがそれが当然だとされてきまし

た」
「だがそれでは軍事に知識のない者が介入しては大変なことになるだろう」
「はい。そのうえ議会もそれをチェックしませんでしたし。結果的にそれが仇となりました」
「どうなったのだ」
「穏健派が政権を握りまして。徴兵制を廃止し軍備を大幅に削減しました」
「エウロパの侵攻が行われていたサハラ北部ですか」
「はい。結果は言うまでもないでしょう」
「そうだな。愚かなことだ」
「今更言っても仕方のないことですが。エウロパ軍の侵攻から滅亡まであっという間でした」
「そうだったのか」
「無念でした。まもとな兵もなく、自分達が為す術もなく侵略者達に敗れ去っていくのは」
普段は穏健な顔立ちのワフラがその顔を苦渋で歪ませていた。それはマシュハドも今まで見たことのない顔であった。彼はその顔のまま話を続けた。

## 第十三部第三章　二匹の獣その十

「そして首都に入城されて。向こうの要求を一方的に飲まされました」
「滅亡か」
「はい。同僚達の多くはハサンに逃れましたが私は家族と共に連合に流れ着きました」
「そこはわしと同じだな」
「司令もそうだったのですか」
「かっての同僚や部下達は殆どハサンに行った。しかしわしは連合に向かった」
「何故だったのですか、それは」
「それを言うならまず貴官からだ」
彼はそう言って逆にワフラに尋ねてきた。
「どうして連合に来たのだ。よかったら教えてくれ」
「成り行きですね」
それが答えであった。
「何時の間にか。流されるままに動いていたらここに辿り着きました」
「そうか」
「はい。気が付いたら連合にいまして。そしてそれから暫くはサラリーマンをしていましたが」
「義勇軍の募集に応じて参加したのだな」
「はい。そしてここにいます」
「わしとは違うな。わしは自分の考えで連合に入った」
「といいますと」
「ハサンに流れ着いてもそのハサン自体がエウロパの侵略を受けると思ったからな。あの国は戦争はそれ程強くはないし戦いも好まない」

「はい」
確かにハサンはそういう国であった。連合やマウリアとサハラ各国の中継貿易で栄えておりその富を守ることを至上命題としてきたのである。その富を守る為にも武力よりは交渉を重んじる国である。戦争の経験はあるがその兵はあまり強くはないとされてきている。勝利より敗戦が多い程であった。
「いずれエウロパに滅ぼされると思ってな。それで行かなかった」
「そうだったのですか」
「結果としてそれが正解だったな。今我等の祖国を滅ぼしたエウロパは滅亡の危機にある」
「はい」
「出来れば我々が最初にオリンポスに入城したいものだな」
「ですな」
二人はそう話しながらクロノスの方に目をやった。
「もうすぐですな。クロノスを突破したならば」
「いや、それはどうかな」
しかしマシュハドはここではワフラの言葉に首を縦には振ろうとはしなかった。
「といいますと」
「オリンポスへの道は一つではないぞ」
そしてこう言った。だがその意味はワフラにはわからなかった。
「そうなのですか」
「それもいずれわかる」
「いずれ」
「そう、いずれな。それもすぐにだ」
そう言いながらブレスに向かった。そしてブレスの横で止まった。そこから通路を伸ばしてブレスに入った。
ブレスの中はロスタムのそれと大体同じであった。二人は同行させてきた義勇軍の主立った将達と共にその中を進んでいった。
「中は一緒か」

マシュハドはブレスの艦内を見回しながらこう言葉を漏らした。
「外見の色が違ってもこれは変わらないな」
「同じ型の艦ですからね」
ワフラがそれに応えた。
「違いはありませんよ、そういったところでは」
「まあそうだな」
「違うのは中の人間ですね。これはそれぞれの艦で違います」
「うむ」
「我等の艦でもそれは同じですよ」
「人はそれぞれ違うものだ」
マシュハドはその義手を動かしながらそう言った。
「アッラーが作り給もうたものであってもな」
イスラムにおいては人間はアッラーが作ったものとされている。天使は光から、ジンは火から作られたとされている。なおジンの実在に関してはこの時代においても論争があるがあるイスラムの学者はこう主張している。
「彼等の名はコーランにある」
と。彼等はここでコーランを出してきたのだ。
「コーランに名があるのならこの世にいるということである」
それが彼等の主張の根拠であった。イスラム世界ではコーランとは絶対の存在である。無謬なぞはなく、そしてそこに書かれているものは他の何よりも根拠として確かなものとされているのだ。だからジンは実在するというのである。それがイスラムであった。
そして土から作られた人間であるが皆アッラーの前では只の人間に過ぎない。王も乞食もアッラーの前では一人のムスリムなのである。義勇軍司令官であるマシュハドも彼の部下の新兵もそうした意味では同じである。だがその心はそれぞれ違っているのである。

## 第十三部第三章　二匹の獣その十一

「アッラーは偉大である」
マシュハドはここでこう呟いた。
「人を作られた時に心まで入れて下された」
「はい」
「これ程の喜びがあろうか。故にアッラーは偉大なのである」
「それは誰の言葉だったでしょうか」
「少し忘れてしまったが」
そう言いながらも思い出そうとはしている。
「法学者の言葉だったと記憶はしている。百年前のな」
「そうだったのですか」
「あまり覚えてはいない。済まぬな」
「いえ」
「しかし法学者達はこうした言葉が好きだな」
「これは我々の世界だけのようですけれどね。本来法律に携わる者はあまり宗教を持ち出さないそうですから。宗教と法律はまた異なる存在であると」
「イスラムとは生活も何もかも入るからな」
「はい」
これはムハンマドが預言者となり、コーランを説くようになってから変わらないことである。イスラムは単なる宗教ではないのだ。文化や生活そのものであり、社会体制なのである。それはかってのキリスト教社会のそれよりも遥かに強固なものである。法はまずコーランにその根拠を求められる。だからこそ法学者達が必要とされているのである。原則として聖職者はいないがそうした市井の学者達がコーランを細かく学んでいるのである。もっとも聖職者の方は宗派によっては存在する。シャイターン家がそのいい例である。
「それでは違うのも道理か」

「そういうことになりますね」
「そしてどうも我々と連合のムスリムはかなり違うな」
「そうなのですか」
「気付かなかったのか、今まで」
逆にそちらの方が不思議に思える程であった。マシュハドはワフラに顔を向けて問うた。
「はあ」
「何故だ。連合の者とはそれなりに交流があったのではないのか」
「いえ、言われる程ありません」
しかし彼はそれを否定した。
「司令はともかく我々は。ましてや末端の将兵達ともなると」
「全く交流はないというのか」
「はい。話には聞いていますが」
「ふむ」
それを聞いてあらためて腕を組んで考え込んだ。当然廊下を歩きながらである。廊下は実に機能性を重視したものであり左右の要所には連合の兵士達が礼装で待っている。そして彼等が通ると敬礼するのだ。
「それは意外だな」
「はあ」
「もっと盛んに交流等が行われていると思っていたが」
「部隊や艦隊単位、艦艇単位でもそうしたことはありませんね」
「個人でもか」
「全く。我々は我々だけで完全に固まっているのが現状です」
「何か寂しいな」
「ですが多くの将兵はそれには別に何とも思ってはいないようです」
「いないのか」
「風俗も習慣も何もかもが違いますから。結果としてその為かトラブルも起こってはいません」
「しかしそれでは我々が連合軍において異質な存在になってしまう

な」
「元々そうでありますが」
「それは言うな」
マシュハドはそれを聞いて苦い顔を作った。

## 第十三部第三章　二匹の獣その十二

「我々は元々異邦人だ」
「はい」
「それはわかっているつもりだ。だが今は連合にいる」
「そうである限り連合の者であると」
「そのつもりだ。だからより交流を深めていきたいのだが」
「難しいですね」
「認めるしかないか、それは」
　マシュハドはそれを聞いて一瞬だが憮然とした顔になった。しかしすぐに元に戻った。
「だがしていかないわけにはいかないだろう」
「それはわかっているつもりですが」
「まあそちらもおいおい話を進めていこう」
「そうですね」
「だが今はこちらの方が先決だな」
　そう言いながら前を見据えた。
「これからどうするかだ。考えはあるか」
「一応は」
　ワフラはそれに応じてにこりと笑った。何かある笑みであるのは言うまでもなかった。
「そうか。では楽しみにしているぞ」
「はい」
　マシュハドも笑っていた。そして義勇軍の将達は廊下の終わりにある大きな扉の前に辿り着いた。その左右にはそれぞれ一人ずつ連合軍の兵士達が控えていた。
「お待ちしておりました」
　兵士達がマシュハド達に対して敬礼する。マシュハドが一行を代表して返礼した。

「それではこちらに」
「うむ」
その兵士達によって開けられた扉の中に入る。そこは茶を基調とした巨大な造りの会議室であった。見れば巨大な白い円卓が部屋の中央にあった。
「ようこそ、我が艦へ」
その円卓の最深部、マシュハド達から見て正対する形で彼はいた。連合軍宇宙艦隊司令長官マクレーン元帥である。その横には参謀総長である劉元帥もいた。
「ようこそおいで頂きました」
「いえ」
マシュハドはそのいささか大袈裟な言葉に苦笑しながらもそれに応えた。
「これから大きな戦いですから。当然ですよ」
「左様ですか」
見れば二人だけではなかった。北方方面軍を率いていたリバーグも南方軍司令官のコレッリもいた。他にも連合軍のこの戦役に参加している主立った高級将校達が揃っていた。その顔触れからこの会議の重要性が嫌でもわかるものであった。
見れば円卓は彼等のすぐ側に丁度彼等の人数分だけ席が空いていた。彼等はそこにそれぞれ向かった。すると兵士達が来て椅子を引いた。しかしマシュハドはそれをよしとはしなかった。
「それはいい」
そう言って自分で椅子を引いた。
「これ位はな。自分達でする」
「わかりました」
兵士達はそれに従い身を退いた。マシュハド達はその言葉通り自分で椅子を引いてそこに座った。そしてそれから会議に挑んだ。兵士達は皆その場を後にしていた。
「今日こちらに来てもらったのは他でもありません」

「はい」
議長役も務めるマクレーンの言葉にまずは頷いた。
「次のクロノスにおける戦いのことですが」
「作戦の方針はどうなっていますかな」
「それですが」
マクレーンはそれを受けて劉に顔を向けた。そして言った。
「参謀総長、あれを」
「わかりました」
劉はそれを受けてマクレーンの後ろにある巨大なモニターのスイッチをレーザーリモコンで入れた。すると円卓の中央に巨大な星系の地図が姿を現わした。

## 第十三部第三章　二匹の獣その十三

「クロノス星系のものです」
マクレーンはその星系の地図をレーザーで指し示してこう言った。
「これがですか」
見れば敵艦隊や防御施設の配備状況まで詳しく書き込まれている。
それを見ただけで今までかなり周到に偵察、情報収集に務めていたことがわかる。
「ふむ」
マシュハドはそれを見てまずは一言漏らした。
「中々堅固な配置になっておりますな」
「はい」
劉がそれに応えて頷いた。
「ですが我々にも策はあります。御心配なく」
「策ですか」
マシュハドはそれを聞いても眉一つ動かさなかったが他の義勇軍の将達は違っていた。中にはあからさまに嫌悪感をその顔に浮かび上がらせている者もいた。
「してその策とは」
「それは」
「閣下」
劉が言おうとしたところでワフラが動いた。
「実は私に作戦案があるのですが」
「作戦案」
劉はそれを受けてその鋭い目をワフラに向けてきた。
「中将、それは一体」
「今両軍の戦力はクロノスとこのテティスに集結しておりますな」
「はい」
「この二つの星系に。それもオリンポスを巡ってです」

「そうですね。その為に今我々もここに集まっています」
もう言うまでもないことのように思われる話であったが劉はこれといって表情を変えることなくそれに頷いていた。
「そしてそれが何か」
「ここで私が思うことがあるのですが」
「参謀長、それは何かね」
マシュハドがそれに合わせるかのように彼に尋ねてきた。
「よかったら教えてくれ」
「はい」
彼はそれに答えて懐から何かを取り出した。一枚のディスクであった。
「それは」
「まずはこれを御覧下さい」
そう言って劉にそのディスクを回した。劉はそれを受け取ってまずはクロノスの地図を消してそのディスクの中にある映像を映した。それはある星系の立体地図であった。だがクロノスのそれとは全く違っていた。
「参謀長、これは一体何処か」
「ニョルズ星系です」
彼はマシュハドの問いにそう答えた。
「確かオリンポスのすぐ側にある星系でしたな」
ザレボがその星系の名を聞いて言った。
「そこを越えればすぐにオリンポスだったかと」
「その通りです」
ワフラはザレボに言葉を返した。
「ここを越えればすぐにオリンポスです」
「成程」
ザレボはそれを聞いて頷いた。
「それではワフラ中将の御考えはわかりました。ここを越えて一気にオリンポスを目指すというわけですな」

「はい、その通りです」
彼自身もそれを認めた。
「如何でしょうか。クロノスを通るだけが戦いではないと思いますが」
「確かに一理ありますな」
それを聞いた連合軍の将の一人ゴルチャコワがそれに頷いた。
「ここを越えればオリンポスに容易に到着できる。そしてこの星系の守りは無いに等しい」
「絶交の狙い目というわけですな」
「私はそう考えております」
チャンカも言った。ワフラはそこに我が意を得た様に応えた。

## 第十三部第三章　二匹の獣その十四

「これについてはどう思われますか」
「いいとは言えませんな、これは」
ここでリバーグが口を開いた。彼は今まで黙って地図を見ているだけであったがここで口を開いたのであった。
「中将、ニョルズは見たところかなりの難所のようですが」
「それは否定しません」
立体地図にはブラックホールや磁気嵐、ステロイド帯、周辺には超惑星、その他にも様々な障害が映し出されていた。その為星系自体の航路も複雑なものであり他のエウロパの星系とは全く異なっていた。それはまるで迷宮のようであった。
「確かにここはかなりの難所です。エウロパで最も通航が困難な星系でしょう」
「そう、困難ですな」
リバーグはまた言った。
「大艦隊の運航が出来るかどうか。甚だ疑問なのですが」
「いえ、それは可能です」
だが彼はそう言葉を返した。
「それも調査済みです」
「調査済みといいますが」
それでもリバーグは引かなかった。時に臆病とすら称される程の慎重な用兵を常とする彼から見ればこれは当然であったかも知れない。
「それの根拠はあるのですか」
「あります」
ワフラは毅然としてそう述べた。
「それは」
「計算したところこの星系の航路は百個艦隊が何とか航行できるも

のです」
「百個艦隊が」
「まさか」
連合軍の将達はそれを聞いて思わず驚きの声をあげた。
「いえ、それが可能なのです」
正規軍の将達の驚きの声を前にしても言う。
「そこを抜ければオリンポスです。我等を阻むものはありません」
「しかし」
「いや、お待ち頂きたい。諸将よ」
そこで口を開いた男がいた。黒い髪を後ろに撫で付けている男である。座っていてもわかる程の長身でスラリとした身体をしている。目は黒く、顔立ちはまるでギリシア彫刻の様に整い、一見だけでは軍人とは見えない。だがその整った顔はどういうわけか左半分は右半分に比べて僅かに歪んでいる感じがする。彼はペドロ＝コレッリ、元帥であり今回の戦いでは南方軍を率いていた。コロンビア人である。
「コレッリ元帥」
諸将は今度は彼に視線を集中させた。
「ワフラ中将」
「はい」
コレッリはワフラに問うてきた。
「それを達成できる自信はあるのだな」
「私は軍人です」
彼は言った。
「自信のないことは申し上げません。アッラーに誓って」
「ふむ」
コレッリはそれを聞いてあらためてワフラを見やった。
「それを成功させれば大きい」
そしてこう述べた。
「オリンポスを急襲出来る。今あそこは兵は殆どいない。いても僅

かな守備隊だけだ」
「クロノスに集結させておりますから」
「それに成功させた場合敵に与える心理的打撃も大きいな。効果はかなりのものだ」
「閣下もそう思われますか」
「ああ。だが一つ問題がある」
「それは」
コレッリはここで思わせぶりに言った。いささか演技がかっているようにも見えた。
「それはあくまで成功した場合だ。失敗しては何もならない。それはわかっているな」
「勿論です」
ワフラはそれに頷いた。
「これは必ず成功します。いえ、させます」
「わかった。貴官の自信はな」
「はい」
「それでは司令」
そしてマクレーンに顔を向けてきた。
「どう思われますか」
「ニョルズ通過か」
「はい。ワフラ中将の話ですと成功できるもののようですが」
「そうだな」
マクレーンはそれを聞いて考え込んだ。
「百個艦隊程度なら回しても我が軍にとってはあまり大きくはないしな」
「それでは」
「いえ、私はそうは思いません」
しかしリバーグがそれに反論を申し出てきた。
「リバーグ元帥」
「この作戦はあまりにも危険が多過ぎます」

彼は憮然とした顔でそう反論してきた。
「ニョルズ星系は一目見ただけで危険極まる星系です」
それは否定できなかった。ブラックホールは一つではない。二つ並んでいる場所もある。その間に狭い航路が存在している。まるでスキュラとカリブティスの間の様に。
「この様な場所の通過は一歩間違えれば甚大な損害となります」
「そうだな」
「リバーグ閣下の仰る通りだ」
連合軍の諸将はそれを聞いて囁き合った。

## 第十三部第三章　二匹の獣その十五

「最悪全滅も考えられます。この様な場所の通過はそれだけで賭けであります」
「賭け、か」
「はい」
劉に答えた。
「戦争は賭けではありません。将兵のことを考慮しましてこの作戦は絶対に賛成できません」
「連合軍としてでしょうか」
「その通り」
ワフラの言葉にも返した。
「それは絶対に認められない。多くの将兵の命を預かる身としてだ」
この時彼の知恵袋であるジェリオは彼の隣にいた。そして黙ってその話を聞いていた。一言も発しないが頭の中では言葉を発していた。
（これがこの方の軍人としての限界だろうか）
リバーグをそう評していた。
（戦いとは軌道である）
そして孫子の言葉をその頭の中で反芻させた。中国春秋時代の高名な兵家である。彼により兵法が確立されたという説もある程である。実際に優れた将であり呉の将軍となり大国楚を破っている。
その彼の著作にある言葉である。戦いとは相手の思わぬ場所、部分を衝くことである。それによって勝利を得るのだ。だがリバーグには残念ながらそれはない。あくまでオーソドックスな戦略戦術しかないのである。
（だがそれはそれでよいか）
しかしだからといってリバーグを批判するつもりはなかった。少なくともそれで今まで大きなミスはなかった。しかし決して名将と

いった類ではないということもわかったのだ。
（しかしそれはそれでいいか）
それでもジェリオはそれをよしとした。
（名将、ましてや天才なぞそうは出ない。戦いの殆どもまた普通の人間によって行われる）
連合軍自体が名将や天才でなくとも戦いに勝利できる状況を想定して組織されているのである。誰でも確実に勝利を収めることができるように。八条の基本思想にはこれがあるし近代以降の軍隊もそうであった。ナポレオンもカール流星王も必要としない軍、それが連合軍の理想であるのだ。そうした意味でリバーグの発言は正しいものであった。しかも彼は純粋に将兵のことを思っている。それもわかった。だからこそ能力の限界を感じはしても批判する気にはなれなかったのである。
「このままクロノス星系に戦力を集中させても勝利は確実ではないのか」
リバーグは話を続けていた。
「中将、それについてはどう思うか」
階級が下であっても見下した様な言葉はない。そして正規軍ではない義勇軍の者だからといっても。リバーグはそういった男であった。その心の細かさ故に将兵にも慕われているのだ。
「御言葉ですが閣下」
ワフラはそんな彼にも遠慮することなく言った。
「何だ」
「死中に活あり、です」
「古い言葉だな」
マシュハドがそれを聞いて思い出したように呟いた。
「または虎穴に入らずば虎児を得ず、か」
「はい」
ワフラは上官の言葉に頷いた。

「その勇気が無ければ戦場に来ている意味がありません。命を賭けてこその戦いです」
「確かにそれが戦争だ」
リバーグもそれは認めた。
「しかし無意味に命を粗末にしていいというわけではない」
「それは承知のうえです」
「どうかな。貴官の作戦だと相当な精鋭でも困難だと思うが」
「精鋭でもですか」
「そうだ。余程訓練された将兵でなければな。我が軍にそれだけの精鋭がいるか」
彼は今までとは別種の疑問の声を呈した。

## 第十三部第三章　二匹の獣その十六

「精鋭ですか」
「我が軍は設立されてまだ日が浅い。正式な実戦経験も海賊やテロリスト相手ならともかくこうした正規戦はこの戦いがはじめてだ。とても精鋭が出るような状況ではまだない」
「はい」
「その様な状況で。そもそも精鋭部隊がいるのか」
「おります」
しかしワフラはそれでも言った。
「このうえなく頼もしい者達が」
「それは誰だ」
他の者ならば皮肉も言いたくなるような状況であったがリバーグはそうしたことはしなかった。ここに彼の人間性が実によく出ていた。
「我々です」
ワフラはその顔を仮面で覆ったかのようにしてそう言った。意を決したかのように。
「義勇軍が」
「はい」
驚くリバーグに答えた。
「確かに連合軍はそれ程実戦経験があるわけではありません。海賊やテロリストと国家はまるで違います」
「うむ」
実際には連合においては海賊やテロリストは連合軍の圧倒的な装備、物量の前に為す術もない状況であった。マウリアとの国境に存在して通商路を脅かしていた解放軍も無残に崩壊したのがその格好の例であった。中には投降して連合軍に入る者もいた。罪が軽ければ許されたのである。無論殺人や凶悪行為を行っていれば容赦なく

血も凍る様な連合式の処刑が待っているのであるが。どちらにしろ連合軍により連合の治安は極めて良好な状況となっていた。
「我々はその国家との実戦経験が豊富です。そしてこの度の戦いにおいても常に前線におりました」
「自信があるというわけだな」
「そういうことです」
そう言って頷いた。
「如何でしょうか、我が軍なら可能ですが」
ワフラは声を乗り出させてきた。
「そうだな」
それにマシュハドが頷いた。
「司令」
「参謀長、よくぞ言ってくれた」
彼はそう言ってふてぶてしさと自信を混ぜ合わせた凄みのある笑みを浮かべさせた。
「ここにおられる諸将に申し上げたい」
それから自ら口を開いた。
「この度の作戦、我等はニョルズ行きを志願させて頂く」
「なっ」
「ふむ」
それを聞いてリバーグとコレッリはそれぞれ反応を示した。リバーグは驚き、コレッリはマシュハドを一瞥した。
「それで宜しいか」
「マシュハド司令」
そう言ったところで参謀総長である劉が声をかけてきた。
「はい」
「本当に宜しいのですか」
「何がですかな」
彼はニヤリと笑ってそれに顔を向けた。
「ニョルズに行くことです。かなり危険ですが」

「元よりそれは承知のうえだと申し上げた筈ですが」
「ふむ」
劉はそれを聞いてまずは言葉を止めマシュハドの表情を見た。
「それに我々はアッラーの僕です」
今度はアッラーの名を出してきた。
「アッラーの僕は戦いを恐れません。死してもそれは天国への道なのですから」
「ジハードですか」
「ええ。これは我々にとってジハードですから」
マクレーンの問いにも答えた。
「如何でしょうか。我々にお任せ頂けませんか」
「つまり命を捨ててニョルズに向かうというわけですか」
「はい」
再び口を開いた劉に答えた。
「その通りです。そしてオリンポスを目指します」
「オリンポスを」
「如何でしょうか。我々を死地に送り込んで頂けませんか」
「何度も言いますが危険は承知ですね」
劉は執拗とも思える程彼にそう尋ねてきた。
「はい」
マシュハドも何度もそれに頷いた。
「偽りはありません。どうかお任せ下さい」
「わかりました。司令」
劉はそれを受けてマクレーンに顔を向けた。
「どう思われますか、この作戦は」
「そうですな」
話を振られた彼は考える目をしていた。それからおもむろに口を開いた。
「覚悟があるのならお任せしましょう」
「司令、ですが」

それでもリバーグは反対しようとする。思わず声をあげた。
「これでは義勇軍の者達が皆」
「御気持ちは有り難いですが」
マシュハドはそんな彼に対して言う。リバーグが北方においても義勇軍に対して公正で思いやりのある態度だったのを知ってのうえでの言葉である。
「我等はそれを望んで行くのです。お気遣いなく」
「しかし」
「閣下」
まだ言おうとする彼をジェリオが止めた。
「参謀長」
彼は何も言わず首を小さく横に振るだけであった。だがそれだけでリバーグは沈黙せざるを得なかった。
「・・・・・・わかった」
彼は苦い声でそう漏らした。
「私からはこれで」
「はい」
「それでです」
マシュハドはリバーグが沈黙したのを確認してからまた言った。
「すぐにでも向かいたいのですが」
「もうですか」
コレッリがそれに応えた。
「はい。そろそろ動かなくては間に合いませんからな」
「確かに」
ニョルズは彼等が今いるテティスからわりかし離れている。義勇軍の艦艇は他の連合軍の艦艇よりもまだ足が速いがそれでも早めに出なければならない距離であったのだ。
「元々クロノスへの攻勢も暫くしたら取り掛かる予定だったと思われますが」
「その通りです」

それには劉が答えた。
「この会議の後すぐにでも作戦を発動させるつもりでした」
「それでは今すぐにでも出た方が宜しいですな」
今度はマクレーンの言葉に返した。そう言いながら義手の方の腕を出す。それを振りはじめた。
機械の腕であった。黒い手袋で覆われているがその中身は完全な機械である。生物科学により純粋に人のものである腕をつけることができたが彼はあえてそれをしなかったのだ。
「もうこの手に人間の手はいらぬ」
彼は部下に義手ではなく手腕をつけてはどうかと言われた時にそう答えた。
「ここにあった腕は奴等により奪われた」
他ならぬエウロパの者達によってであった。彼は敗戦により祖国だけでなく自らの片腕も失っていたのだ。それを忘れたことはなかった。
「我が祖国と腕のことを永遠に忘れぬ為にも」
そのなくなった腕を目に見ながら言う。
「これでよいのだ」
そして彼は義手をつけている。それが彼の義手の由来であった。
その義手を振りながら話をしていた。嫌が応でも目立っていた。
彼はそのまま話を続ける。

## 第十三部第三章　二匹の獣その十七

「今行かなくては作戦の効果がありません。宜しいでしょうか」
「今ですか」
「そうです。今回は速さを求めます」
連合軍にはあまりないものであった。彼等はそれよりも他の分野を優先させていた。だから今回の戦争の進撃もかなり緩やかなものであったのだ。それがかえってエウロパにはジワジワと攻められているという心理的圧迫となっていた一面もあるのであるが。
「だからこそ今動かなくてはなりません。宜しいでしょうか」
「わかりました」
マクレーンはそれに頷いた。
「ではすぐにでもお願いします」
「はい」
マシュハドはそれを聞いてニヤリと笑った。
「ニョルズ通過、義勇軍全軍を以って行うことをここで決定致します」
「そして残る二千個艦隊でクロノスに攻撃を仕掛けます」
劉も言った。
「それで異存はありませんね」
「はい」
諸将もそれに頷いた。その中には当然ながらリバーグもいた。彼は決定したことに異議を唱える男ではなかった。それに忠実に従い動く男であった。
「それではこれで。なお我が軍のクロノス攻撃は義勇軍のニョルズ到達と同時刻の予定に行うこととします」
「同時刻に」
それを聞いてザレボが声をあげた。
「それはまたどうしてですか」

「競争ですよ」
「競争」
「はい」
劉はそう言いながらマシュハドをちらりと見た。マシュハドにもそれはわかった。
「どちらが先にオリンポスに到達できるのかをね。競いたいのですよ」
「それはいいですな」
それを聞いてコレッリが賛同の言葉を出した。
「互いに競うことで戦意も高まります」
「はい」
「焦ることさえ注意していけば。それでいいと思います」
「成程、そういうことですか」
それを聞いてザレボも納得した。
「いいですな。私も賛成させて頂きます」
「はい」
「司令はどう思われますか」
コレッリはザレボが賛成したのを見届けてからマクレーンに話を振った。全ての決定権は彼にあるからこれは当然のことであった。そして当人もそれに応えた。
「はい」
彼は少し間を置いてから述べた。
「私もそれでいいと思います。将兵の士気を高める為にも」
「わかりました」
それを受けてまず劉が頷いた。
「それではそれで宜しいですね」
「はい」
皆それに頷いた。これでおおよそのことは決まりであった。
「それでは作戦を決定する」
マクレーンが言った。

「義勇軍百個艦隊は別行動をとりニョルズに向かう」
「ハッ」
それにマシュハドが頷いた。
「そしてそこからオリンポスを目指す。それでいいか」
「異論はありません」
「正規軍二千個艦隊はクロノスにいるエウロパ軍主力と交戦する。そしてクロノスからオリンポスに向かうものとする」
「わかりました」
「それでは双方の作戦をこれでよしとする。よいな」
「了解」
こうして連合軍の作戦が決まった。義勇軍はそれを受けてすぐにニョルズに向けて進軍を開始した。漆黒の艦隊が動いた。それはまるで波の様であった。
「ニョルズに向かうとは意外でしたね」
マクレーンはブレスの艦橋において義勇軍の進軍を見送りながら傍らにいる劉に対してそう述べた。
「まさかとは思いましたが」
「そうでしょうか」
しかし劉はそれを予測していたような言葉を述べた。

## 第十三部第三章　二匹の獣その十八

「私はそうは思っていませんでしたが」
「そうだったのですか」
「はい。ニョルズは確かに複雑な星系です。まさに迷宮です」
「その迷宮を越えて」
「彼等にはそうしなければならない事情がありますからね」
「事情ですか」
それを聞いてまた義勇軍を見た。
「彼等の事情」
そして考え込んだ。その結論はすぐに出た。
「そういうことですか」
「はい」
劉は頷いた。それが何であるか彼もわかっていたのだ。
「彼等は異邦人です。この連合においては」
「そうでしたね。彼等は我々とは違う」
「異邦人でなくなる為には。認められなくてはなりません。命をかけても」
「厳しいものですね」
「ですが歴史にはよくあることです。閣下のお国の歴史でもそうでしょう」
「否定はしません」
マクレーンはそう答えた。
「我が国は移民により作られました。今でもその殆どが移民とその子孫達です」
「はい」
「私自身先祖はアイルランドからの移民です。どういった先祖か詳しいことはわかりませんがそれだけはわかります」
それは彼の名が示していた。マクレーンという名前が。これはケ

ルト独特の名前なのである。
マクという部分がそうなのである。これは『〜家の息子』という意味である。従ってマクレーンはレーン家の息子という意味になるのだ。他にもスコットランドやウェールズ系の者にもよくある名前だ。二十世紀のアメリカ軍元帥であったマッカーサーも正式にはマックアーサーとなる。アーサー家の息子なのだ。彼はスコットランドにルーツのある自らの出自を終生誇りとしていたが彼は自分がケルト人であるということに誇りを持っていたのである。
マクレーンもまた同じである。だが彼の家は純粋なケルトではない。わかっているだけで彼の親戚にはイタリア系やベトナム系、メキシコ系の人物がいる。そして彼の曾祖母は日系と中国系のハーフだったと言われている。彼の弟はブルンジ人と結婚している。かなり複雑なのである。当然彼もアフリカ系のルーツが入っている。その証拠に彼の母は肌が僅かに黒かった。肌の色は父のそれを受け継ぎ白人とアジア系の中間であったが。だがそれはかえって純粋なケルト人でないことの証明にもなっていた。
「我々の祖先も最初はかなり苦労したそうですが」
「ジャガイモ飢饉からですか」
十九世紀アイルランドで起こった飢饉である。当時アイルランド人はその多くが小作農であった。麦は全てイングランド系の地主達のものとなり彼等はジャガイモを食べていた。痩せた土地でも多くの収穫が採れるジャガイモは貧しさに喘ぐアイルランド人達にとって救世主であったのだ。だがそれが病気により採れなくなったのだ。その結果がジャガイモ飢饉であった。
これに対しイギリス政府の執った政策はお世辞にもいいものではなかった。結果として百万もの餓死者を出し多くの移民を生んだ。彼等はアメリカやオーストラリアに向かった。これによりアメリカのアイルランド系は大幅に増加した。この中には二十世紀に大統領を出したケネディ家もあった。
「いや、その前からアメリカにいたのかもしれませんが」

「建国の時からでしょうか」
実はアイルランド系アメリカ人はその前からアメリカに多くいるのである。建国当時には結構な数になっていた。
「まあそこまではわかりませんが。しかしアイルランド系が苦労したのは事実ですね」
「それで苦労してアメリカに入ったと」
「ええ。もっともアメリカに入った多くの者がそうですが」
アメリカの影の歴史でもある。アイルランド系に限らずドイツ系、イタリア系が差別されてきた。日系や中国系といったアジア系、アフリカ系、メキシコ系やキューバ系といったヒスパニックもである。流石に今はこうした肌や人種の差別は存在しないが長い間アメリカの深刻な社会問題であった。これは何も白人、ここで言うとワスプ、すなわち白人でありアングロサクソンでありプロテスタントである者達が他の者を差別するのだけではない。お互いで差別し合うことが問題であったのだ。

## 第十三部第三章　二匹の獣その十九

ユダヤ系が他の者達に対して排他的なのもアフリカ系がヒスパニックを差別するのも二十世紀後半に見られたことであった。とりわけロスの暴動においてはアフリカ系が白人に対しては襲い掛からずに韓国系に大規模な襲撃を仕掛けたのに多くの者が驚いた。アフリカ系の若者達はこう叫んで韓国系の者達を批判した。

「こんな差別を受けたのははじめてだ！」

「俺達は奴隷じゃない！ふざけるな！」

と。これを聞いた白人や韓国系以外のアジア系の者達は驚かずにはいられなかった。

「一体何があったのだ！？」

実は韓国系がアフリカ系をかなり酷く差別していたのだ。雇っては露骨に侮蔑の眼差しで見たり、虐待等まであった。彼等は言った。ニガーだと。この時代においては死語となって久しい差別用語である。

アフリカ系の者達は確かに最初は奴隷として連れて来られた。アンクル＝トムの小屋等にその話がある。実際には当時のアメリカ社会においては奴隷は非常に高価なものであり、そうそう無下には扱われていなかったのであるが。それに奴隷とはいえ彼等は人間であった。だが奴隷は奴隷ではあったが。それでもあまりにも極端な虐待はそうはなかった。確かにクー＝クラックス＝クランなぞという醜悪な組織はあったにしろ、だ。

だが韓国系は違ったのだ。彼等をまるで奴隷の様に扱ったというのだ。これは当時問題になっていた。韓国系の企業が東南アジア等に進出し、韓国人の旅行客が旅をする。そして各地で現地の者達と衝突し、差別を行っていたのだ。あまりにも酷いので先に進出して色々とトラブルを起こしていた日本人の方が遥かにましだとさえ言われていた。これをアメリカで、しかも差別に対して敏感なアフリ

カ系に対して行ったのだ。その結果がそれであった。
アメリカの歴史の一部分である。なおアフリカ系もその韓国系もアメリカには最初からいたわけではない。異邦人ではあるがアメリカにおいては異邦人ではないのだ。移民の国であるから。そうした意味で彼等もまたアメリカ人であった。その証拠にアフリカ系の騎兵隊やカウボーイ、ガンマンも多くいたのである。
この国においては本当の異邦人とは最初からいた者達である。ネィティブ＝アメリカン。彼等こそが本当の異邦人なのであった。
彼等はその土地を奪われ居留地に押し込まれた。そしてその結果異邦人となったのである。アメリカ社会において彼等は完全に異質の存在であり続けた。彼等の土地であったのであるが。
「結果的にね。まあ関門みたいなものでしょうか」
「我々の社会でもそうした存在はありましたよ」
「客家ですか」
「はい」
劉はそれに頷いた。
「もう彼等も完全に入り込んでしまいましたが。そうした者達もおりました」
漢民族ではあるが異質な存在とされているのだ。彼等は元々その土地にいたのではなく他所から流れ着いた者達なのである。中国の戦乱の歴史においてその故郷を離れざるを得なかった。そして異郷の地に住むようになったのである。彼等は発音も独特であり、かっての黄河流域の言葉を残しているとも言われている。
余所者であるから差別があった。その為彼等だけで固まって生活し、家は円形になっていた。守り易いからである。

## 第十三部第三章　二匹の獣その二十

そうした者達がかっては中国に存在したのだ。陽明学の始祖であり政治家、軍人として有名な王守仁や中国共産党の指導者の一人であった？小平、台湾の総統であった李登輝等もそうである。今では宇宙進出と共に完全に漢民族の中に入ってしまった存在ではあるがいささかルーツも残っていたりするのだ。

「私の母に微かにその血が入っているそうです」

「そうだったのですか」

「もっとも母の父、祖父はタイ人でその曾祖母はアボリジニーでしたが」

「ふむ」

「父はまあ純粋といってもいい中国人でしたけれどね。とりあえず生まれは」

「漢民族だということですね」

「もっともその漢民族の概念自体が非常にあやふやなものですが」

「そうらしいですね」

漢民族と一口に言っても非常に複雑である。一応は伝説の君主であり神でもある黄帝にそのルーツがあると言われている。だがそこから何千年もの歴史を経て多くの民族と混血を重ねてきた。中国は異民族の征服の時に彼等をそのまま漢民族として受け入れてもいる。北方の遊牧民族とも婚姻があった。唐代の有名な詩人李白は一説には目が青かったともいう。秦の始皇帝も青い目で赤い髭を持っていたという話がある。

言うならばアメリカ人のようなものである。宗教も風俗習慣も同じ民族にあるとは思えない程幅広い。従って劉もそのルーツは複雑なものであるのだ。

「私も一時期は自分が漢の高祖の血を引いていると思っていましたよ」

「ああ、彼ですね」
それはマクレーンも知っていた。紀元前に農民の身から身を起こし皇帝にまでなった男である。
「その姓からですね」
「はい。もっともそれならばこの姓の持ち主は皆そうですが」
「それはないですか」
「あったとしても三千年以上昔のことです。何の意味もありませんね」
「確かに」
「まあそれぞれの国で異邦人というものは苦労してきたのは事実でしょうね」
「そして今は彼等ですか」
「ええ。だからこそ彼等はこの戦いにおいて常に最前線で戦ってきた」
彼等を見るその目が細くなった。
「連合という社会に認められる為にね」
「その為に血を流しても」
「そういうことです」
劉はそれに頷いた。
「今ティムールにより北方が解放されたからといってもう戻れない者もいるでしょう。連合に住むしかない者達も」
彼等の中にはもう連合から離れて生活できないようになっている者達もいたのだ。家族がいたり、連合そのものに溶け込みたいと思うようになっていたり。その事情はそれぞれであるが。
「その為の義勇軍への参加でした。戦争があるのならばそこで功績をあげる」
「そして認められるのが最も効果があるというわけですか」
「そういうことになります」
劉は静かにそう言った。
「彼等が連合に入る為には血が必要なのです」

「そして我々はそれを利用してきた。連合の市民達の血を流させない為に」
「それもまた戦争です」
劉は冷徹にそう言い切った。
「盾になるものがあるなら使う。それだけです」
「そういうものですか」
「彼等がそうしなければならないのなら」
彼は言葉を続けた。
「我々はそれを使わせてもらう。それだけです」
「わかりました。では彼等にはニョルズで戦ってもらいましょう」
「はい」
星の大海の中に消えていく黒い艦隊。彼等は死地に挑もうとしていた。全てを掴む為に。それを勝利の為に利用する者達。戦いとは決して綺麗なものではなかった。

# 第十三部第四章　創造神の星においてその一

創造神の星において

戦いの後の講和について話を進める為八条はマウリアの外交官達との接触をはじめた。まずは彼等の話を聞くことからはじめたのであった。

「如何ですか、彼等は」

何度目かの接触の後彼は国防省次官補であるナム＝ホウサイ＝エイサイと食事をとっていた。女性であり赤い髪と青い目を持つ少し赤い肌の持ち主である。四十代であり離婚暦が二回程ある。その理由はどれも夫の浮気であった。今は十歳程歳の離れた年上の夫と一緒だという。今度も浮気が心配されたが彼女は笑って答えた。

「その心配はないわ」

それは何故か。彼女の夫は同性愛者であったからである。しかし所謂仮面結婚ではなかった。二人は肉体的なものは互いに求めなくとも愛情を持っていたのだ。この夫はラオスの議員であるがこの結婚に関してこう述べている。

「私は妻の心を愛し、その人間を尊敬している」

愛情というものは決して一つではない。この二人は互いの肉体を求めなくともその心を求め合っていたのだ。そうした結婚であった。なお彼女は同性愛の傾向はない。元々男好きとは全く縁遠い人物であり子供も最初の夫との間に生まれた娘がいるだけである。そうした方面には極めて穏やかな人物であった。

しかしだからといって彼女が禁欲的かというとそうでもない。国防省では知らぬ者はいないという程の酒豪であり煙草好きであった。一日に何十本を煙草を吸い、その部屋は常に煙で覆われていた。これにはさしもの八条も苦言を呈したことがある。彼は煙草は一切吸わない。

「少し控えた方が宜しいのでは？」

彼は穏やかにこう言った。しかしエイサイはそれに不敵に笑ってこう返した。
「それは健康の為でしょうか、長官」
「はい」
彼はそれを認めて頷いた。
「御身体に障ると思うのですが」
「それは承知しております」
今度は優しい笑みになった。
「それでは」
「しかしこれを止めるつもりはありません。煙草は私にとって命です」
「命？」
「はい。私はこれを吸う為に生きているのですから。長官は私から生きる喜びを奪われるのですか？」
「いや、そういうわけではないですが」
そもそも他人にあれこれ言う主義ではない。これが内相の金ならば健康に悪いというだけで全面的に禁止とするところであろう。実際に内務省では全館禁煙である。彼女は甘いものはよくとも煙草は絶対に許さないのだ。ただし酒は適量ならば許される。二日酔いで内務省に入った場合はどうなるか、これは実行した者がいないのでわかりはしないが。進んで虎の穴に入る者なぞそうはいない。
「それでは宜しいですね」
八条が怯んだところで終わらせにかかった。
「何かあれば私の自己責任ということで」
「はい」
こうして八条の忠告は不発に終わった。彼女はそれからも煙草を吸い続け今に至る。暇があると吸い、灰皿を吸殻だらけにしている。ただし歩きながらやレストランでの喫煙はしない。それだけの良識はあった。だから彼女の喫煙は笑い話で済んでいるのである。
八条はそのホウサイと今食事を採っていた。メニュー自体は彼女

の煙草の量と比べると比較的まともなものであった。
始祖鳥の刺身であった。そこに茸の味噌汁に漬物。白い御飯もある。二人はテーブルに向かい合ってその食事を採っていたのである。
「長官」
ホウサイが彼に声をかけてきた。
「はい」
「この始祖鳥のお刺身はなかなかいけますね」
「そうですね」
彼はそれに頷いた。どうやら煙草を吸ってはいても味覚は破壊されてはいないようであった。
「案外あっさりしていますね」
「そうですね。あの外見からワイルドな味だと思っていたのですが」
彼は箸でその始祖鳥の生肉を掴みながら答える。
「意外と。あっさりしていますね」
「鶏と同じような味ですね」
「ですね。大体そんな味です」
二人はそんな話をしながら刺身を食べ続けていた。

## 第十三部第四章　創造神の星においてそのニ

「ところで」
「はい」
ここでホウサイは話題を変えにかかってきた。
「先程マウリアの外交官達と何やらお話をされていたようですが」
「御存知でしたか」
「ええ。話の進展はあったでしょうか」
彼女はそう尋ねてきた。
「一応は」
答えはあったが今一つ歯切れの悪いものであった。
「どうかされたのですか」
「いえね」
やはり何かがあった。しかもよく見ればそれを隠そうともしていない。
「流石というか何というか」
「マウリア人の話ですか」
「はい。結局外交に関する話にはまだ至ってはいません」
苦笑しながら箸を動かす。そして今度は漬物をとった。
「接触自体の回数は多いのですがね。それでも」
「それでは一体何の話をされているのですか？」
「何と言われましても」
その漬物は茄子であった。ただし赤い茄子である。ベトナムのダナン星系で採れた茄子である。ここの茄子は赤いものの他に黄色いものもあるのだ。なお味自体はそれ程変わりはしない。
それを口に入れる。食べ終えてから話を再開した。
「特に。とりとめのない話ばかりです」
「こちらから話しても何もなしですか」
「はい」

彼は答えた。
「一向に。全く進展してはいませんね」
「困ったことですね」
ホウサイはそう言って少し溜息をついた。
「それでは話が進みません」
「戦争自体は進んでいますしね」
そこが彼等の悩みのもとであった。
「困ったことです。どうするべきか」
「とりとめのない話というところに引っ掛かるものがありますが」
「といいますと」
八条はそれを聞いて箸を止めた。
「そこに何かあるというのですか」
「話自体は行われているのですね」
「はい」
彼は答えた。
「そうですか。それでは交渉は可能ですね」
「といいますと」
「いえ。長官は気に入られない方とはあまりお話をされたくはないでしょう」
「ええ、まあ」
これは当然のことであった。誰も嫌いな人間と話をしたいなどとは思わない。これは素直に感情的な面からの考えである。もっとも政治の世界はそうはいかないのであるが。
「マウリアでは特に。嫌いな人間に対してはとりわけそうした傾向が顕著のようです」
「そうだったのですか」
それは正直意外なことであった。
「今はじめて知りました」
「マウリアといっても広いですが。地域にもよりますね」
「地域」

「それぞれの地域によって人の感情があるということです。そうした感情を露骨に出す者が多い地域もあるでしょう」
「そうだったのですか」
「その外交官がどこの者かですね、問題は」
「わかりました。それではまずそこを調べなおしてみましょう」
「そうされる方が宜しいかと思います。彼等のことは私に少しお任せ下さい」
「といいますと」
「こちらも気になっていますから。まあお任せ下さい」
「わかりました。それではそれが終わってから本格的な話に入るということで」
「明日にでもわかると思います。詳しい交渉は明日からお願いして宜しいでしょうか」
「ええ、まあ」
彼はそれに頷いた。

## 第十三部第四章　創造神の星においてその三

「時間自体は余裕を見ていますから。それでお願いします」
「わかりました。それでは」
「はい」
こうしてホウサイはマウリアの外交官達の調査を再び洗い直すこととなった。その結果面白いことがわかったのであった。
「長官」
彼女は八条の執務室でそれを報告した。
「どうやら彼等は交渉をする気はあるようです」
「それは何よりです」
とりあえずはそれを聞いてホッとした。
「また何か訳のわからない話のままはぐらかされるかと思いましたよ」
「その危険はありましたけれどね」
彼女はそれについても言及した。
「これまでの長官の発言や行動次第で」
「私の」
「はい。どうやら彼等は長官を試してたようなのです」
「試していたのですか」
「信用できるかどうか。そういったところも含めまして」
「細かいですね」
「彼等も外交官ですからね。リスクは考えていたのでしょう」
その話し振りは冷静であった。
「国益が絡みますからね。慎重に長官の人柄等を見極めていたのです」
「しかし一つ気になることがありますね」
だが八条はここで疑問の言葉を出した。
「それは」

「私のことをそうして何度も調べたことですよ。何故そこまでして」
「確かに長官はマウリアにおいてもよく知られています」
ホウサイはそれに関しても答えた。
「ですがそれは聞いているだけです。彼等は」
「百聞ですか」
「そうです。そしてその百聞よりも一見を選ぶことにしたのです。長官が本当に話通りの人物かどうか」
「一見どころか何度も会っていますけれどね」
そう言って苦笑した。
「慎重なのはわかりましたよ」
「ですがこれで長官は彼等の信頼を得ることになりました。信頼は大事ですよ」
「はい」
信なくば立たず、という言葉がある。信頼がなくては何もできない。これは政治の世界にもある程度言えることである。陰謀渦巻く世界であるがそうした信頼も必要なのである。信頼出来ない者には誰も身を寄せたり仕事を任せたりはしないものである。
「おそらく次から正常に外交の話になると思います。御安心下さい」
「だといいのですけれどね」
しかし彼にはまだ不安があった。
「彼等は。掴み所がない部分がありますから」
「それがマウリアですよ」
それに関しても答えた。
「我々にとっては理解出来ない部分が非常に多いです」
「私はこれでもマウリアをよく知っていると周りに思われているのですけれどね」
「そのようですね」
「しかし実際は。知っているなんてとてもとても」
「長官でもそうなのですか」
「はい。ラオスもかってはインド文化の影響を受けていましたね」

「ええ、まあ」
東南アジア自体がそうであった。中国とインド、二つの文明に挟まれそれぞれの文化の影響を強く受けている。それは食文化にもよく表われている。カレーがそれである。これは特にインドネシアやミャンマーが強い。
「それでも今ではもうかなり離れてしまっています」
「そのようですね」
「今ではもう名残程度でしょうか。そうした意味でも我々は完全に連合に入ってしまいました」
「もうマウリアとは関係もないですか」
「国家での交流はありますけれどね」
「しかしあまり深くはないようですね」
「そうですね。ラオスはあまり」
「あの国と交流が最も深いのはどうやら我が国のようですが」
「日本はまた特別ですよ」
「特別」
「はい。考えようによってはマウリアよりも理解し難いです」
「そうでしょうか」
八条はそれには首を横に傾げさせた。
「私はそうは思いませんが」
「マウリア人達もそう言っていますよ」
彼女はそう言って苦笑した。
「案外自分達のことはわからないものなのですよ」
「よくそう言われますけれどね」
「昨日食べた刺身にしろ」
「はい」
草食恐竜の刺身のことである。実はあれは日本のある惑星で養殖されているアンキロサウルスの刺身なのである。他にはブロントサウルスやトラコドンといった恐竜達が養殖され食べられている。身体が巨大で食べる部分が多いということで日本でもよく食べられて

いる。骨はスープにされたりする。ラーメンのスープにも使われる。
「あれは最初見た時はかなり驚きました」
「皆そう言いますね」
「我々は元々生の魚はあまり食べないのですよ」
彼女はそう言った。
「それを食べているのですから。驚かない筈がありません」
「皆まず刺身について言うんですよね」
「いや、他にも。とにかく驚かされることばかりです」
「それ程日本文化というものは異質ですか」
「はい。まあそれだけ興味深い存在と言えばそうなのですが」
「そう言われると悪い気はしませんね」
「そうですか。それは何より」
「しかし我が国は色々と言われますね」
「それだけ注目されているということですよ」
「私も。何かと言われますよ」
「この前タブロイド誌で長官のことが書かれていましたよ。日本の野望というタイトルで」
「野望！？」
そう言われて目をキョトンとさせた。
「それは一体」
「連合制覇を企む日本の野望、というタイトルで。そちらの首相と長官が結託して連合を牛耳ろうとしていると」
「まさか」
「いや、これが本当に。完全に悪役扱いでしたね」
「総理はその様な方ではありませんよ。確かに敵も多い方ですが」
首相ともなれば敵が多いのもまた事実である。伊藤は女狐と呼ばれる程鋭い頭脳と感性の持ち主でありとりわけ連合各国には彼女に煮え湯を飲まされている者が多い。

## 第十三部第四章　創造神の星においてその四

「連合をその手の中に収めるのは。幾ら何でも無理です」
「伊藤首相でも無理ですか」
「というか誰にも、何処の国にも出来ないことでしょう、それは」
彼は落ち着いてそう述べた。
「私はそう思うのですが。如何でしょうか」
「そうですね」
ホウサイもそれに頷いた。
「冷静に考えればそうなります」
「わかっておられるではありませんか」
「記事が面白かったので。タブロイドの記事というのも案外面白いものですよ」
「案外どころではありませんけれどね」
今度は屈託のない笑みになった。それでも気品が漂っている。彼の笑みはそうした笑みであった。
「我が国にあるスポーツ新聞で一つ凄いのがありますよ」
「どんなものですか」
「記事の内容がね。凄いんですよ。異星人が来ただの人類が滅亡するだの」
「オカルト雑誌ですか？」
この時代でもそうした新聞、雑誌は存在する。とりわけオカルト雑誌において人類滅亡が言われないことはない。これもまた一つの産業であった。ノストラダムスという医者の詩がとある作家の手によって人類滅亡の予言となる前からこうしたことはあった。中国においてもそうした話が出回り宰相が対処しようとした。しかしここで皇帝がその予言書とやらを持って来させたのだ。
「陛下、どう為さるのですか？」
「まあ見ているがいい」

彼は笑いながらその宰相に対して言った。そしてその本の糸を解いた。
「あっ」
それから皇帝はその本を適当にまとめ直した。それからそれを宰相に手渡した。
「読んでみよ」
「はい」
宰相は言われるがままにその本を読んでみた。だが。
「何と書いてあるか意味がわかるか」
「いえ」
とてもわかったものではない。大体において予言書というものは勿体つけるか威厳を醸し出す為かわからないがまわりくどく一見どころか何度読んでも何と書いてあるのかわからない場合が多いものである。それをさらにバラバラにしたのである。
こうなってはわかる筈もなかった。
「どうだ、全く理解出来ぬだろう」
「はい」
「これを街に広めておけ。それでよい」
「わかりました」
こうしてその適当に散らされた後でこれまた適当にまとめられた予言書が街に広められた。その結果予言といったものは急激に廃れてしまったのである。所詮その程度のものだったというわけである。
だがそれで終わりかというとそうでもなく結局この時代でも存在する。当然日本にも。
「有り得ないレベルで大袈裟に書かれているんですよ」
「それはまた」
「宇宙人の大軍が攻めて来るとか。これはもうごく普通で」
「それが普通ですか」
「ごく普通の記事ですね」
「それはまた」

流石に呆れざるを得なかった。
「物凄い新聞ですね」
「他にも我が国の総理が実は男だったとか。そんなものばかりですよ」
「かえってそこまで書けるのが脱帽ですね」
「それがその新聞なんですよ。センスが飛び抜けています」
「ですね」
「ラオスにはそんな新聞はありますか」
「タブロイドはあることにはありますが」
それはどの国にも存在する。元々マスメディアとタブロイドにはそれ程区別はなかったのだ。イエローペーパーと言われるそうした雑誌や新聞はある程度ならば民主主義の尺度の一つ、社会の猥雑な部分の鏡として評価も可能である。ただしあまりにも劣悪なものは論外であるが。その論外が多いのもまた事実であるが。中にはさながら独裁国家の機関紙の如きものもある。
「そこまではないですね」
「やはり日本だけですか、そこまで書けるのは」
「天才が揃っているとしか思えません」
ホウサイはそう言い切った。
「話を聞くだけでも凄過ぎます」
「やはりそうですか」
「何か。越えてはならない壁すらも易々と越えてしまっているような」
「ははは、そこまではどうかと」
「いえ、本当に。何かその新聞を読んでみたくなりましたね」
「日本に行けば売店で手軽に買えますよ」
「何と」
「一度行かれたら買われるといいです。後悔はさせません」
「わかりました。それでは」
「はい」

こうしてとりあえずタブロイドの話は終わった。八条は仕事を終え夕食に出掛けた。マウリア料理店である。そこで人と待ち合わせしているのである。それが誰であるか、もう言うまでもなかった。

## 第十三部第四章　創造神の星においてその五

「カレーですか、メニューは」
「その予定です」
同席したシャリアピンにそう返す。
「といっても他に何があると言われれば困りますが」
「長官、それを言っては駄目ですよ」
シャリアピンは苦笑して上司にまた言葉を返した。
「マウリアの料理は我々から見れば全てカレーになりますから」
「そうなのですよね。それがね」
どうやら何かあるようである。
「わからないというか何というか」
「私も最初驚きましたよ」
シャリアピンはまた言った。
「全てカレー味でしたからね。普通は有り得ません」
「ですね」
「いや、日本で言うと醤油みたいなものでしょうか。本当に全てがカレー味ですよね」
「元々インドの気候が影響しているそうですね」
「暑い国でしたからね」
彼はそう答えた。実際にインドはかなり暑く辛いものが喜ばれたのである。だからこそカレー味となったのである。これは香辛料をふんだんに使っているがこれにもインドの気候が影響していた。暑いこの国では香辛料が豊富なのである。従ってそれを使って料理が可能だったのである。胡椒を求めて遥かな海を渡り、金と同じ価値で扱ったヨーロッパとはそれだけで大きな差であった。
「辛い料理が好まれるのです」
「そういうものですか」
「逆に寒い国でも好まれますが」

「はい」
八条はそれに頷いた。
「韓国とか。金内相は全く違いますけれど」
「いや、内相も辛いものはお好きですよ」
「そうなのですか」
「韓国料理も召し上がられます。ただあちらのお菓子が一番お好きだそうですが」
「やはりお菓子ですか」
「ただ、甘いものの方がお好きのようですけれどね」
「やはり」
「けれど召し上がられないわけではないのですよ。そういうことです」
「内相の甘いもの好きはまた凄まじいですしな」
「最初見た時は私も驚きましたよ」
八条はそう述べた。
「あれだけ甘いものを多量に。糖尿病にならないかと心配でしたよ」
「あまりならない体質らしいですね」
「しかも太らない体質だとか。多くの女性の羨望の的らしいですね」
「それはそうでしょう。その分食べたもののエネルギーを他に回しているのかも知れませんが」
「はい」
「そのあたりはよくわかりませんね。どうなのでしょう」
「少なくとも病気にならない分だけ消費されているのでしょうね」
そう答えた。
「そうでなければちょっと説明がいきません」
「ですね」
そんな話をしているうちにマウリアの外交官達が来たとの報告があった。二人はそれを受けて襟を正した。
「準備は宜しいですね」
「はい」

シャリアピンは八条の言葉に頷いた。
「鬼が出るか蛇が出るか、ですか」
「また大袈裟な」
「いえ、本当にそんな気持ちです」
表情を見ればどうやらそのようである。かなり緊張しているのがはっきりとわかった。
「マウリア人といえば我が国ではもう異星人のようなものですから」
「またそんな」
そんな話をしているうちに昼にホウサイと話をした異星人の出るタブロイドのことを思い出した。それに関して心の中でおかしくも思った。
「実際にそうですよ。かてロシアで宝石に関してマウリアと貿易摩擦がありましたね」
「はい」
「その時言われていましたよ。マウリア人の言っていること、考えていることが全くわからないと。これに関してはロシア人に全面的に同意です」
「わかりませんか」
「理解不能です」
首を早く横に振ってそう答える。

## 第十三部第四章　創造神の星においてその六

「何が何だか」
「また極端ですね」
「私だけではないと思いますよ。ある意味サハラよりも理解が困難です」
「そこまでですか」
「少なくとも私にとっては」
「それは困ったことになりましたね」
八条はそこまで聞いて少し嘆息した。
「何故ですか」
「今回の会談に関して次官には色々とお助け願いたいと思っていたのですよ」
「そうだったのですか」
「ですがその御様子ですと。残念ですね」
「それでは私はどうすれば」
「いえ、このままこちらにいて頂きたいです」
しかし彼はそう言って彼を引き留めた。
「何故」
「それでも次官の御力が必要だと思います。とりあえずは御同席を願います」
「わかりました」
こうして二人はそのままマウリア側の者達が部屋に入って来るのを待った。やがてマウリアの礼服を身に纏った数人の男女がレストランのボーイに案内されてやって来た。こうしていよいよ話し合いがはじまろうとしていた。
（さて）
八条は心の中で身構えた。
（いよいよだな。ここからが肝心だ）

そして議論に挑んだ。まずはマウリア側がテーブルに着いた。
「今朝はどうも」
まずはマウリア側からこうした挨拶があった。
「お疲れ様でした。それでははじめますか」
「はい」
八条は頷いた。シャリアピンはそのやりとりを見て八条と彼等が既に顔見知りであるのを悟っていた。
「長官」
その彼等がまた口を開いた。
「何でしょうか」
「そちらの方はどなたですか」
そう言ってシャリアピンに視線を向けてきた。
「次官です」
八条は答えた。
「次官ですか」
「はい。国防次官です。私のよき仲間です」
彼はにこやかに笑ってそう述べた。
「彼には何かと助けてもらっています」
「そうなのですか」
「はい」
「それでは次官」
彼等はシャリアピンにも声をかけてきた。
「はい」
シャリアピンもそれに応えて顔を向ける。
「宜しくお願いします。マウリア外務省のバイラヴァ＝ビガーチャルです」
「マガバーン＝ボラーンです」
彼等はそれぞれ名乗った。そしてシャリアピンもそれを受けて自らの名を名乗った。
「イリア＝シャリアピンです。あらためて宜しくお願いします」

「はい」
「こちらこそ」
こうして話がはじまった。まずはとりとめのない話からであった。
八条はそれを聞いてやはり、と思ったが今は口には出さなかった。
「それでは」
だがそれはすぐに変わった。ビガーチャルが話を変えにかかってきたのだ」
「これはちらりと小耳に挟んだことですが」
「はい」
八条はそれに応えた。
「そちらの御国とエウロパの戦いがいよいよ佳境のようですね」
「それはまだ何とも言えませんが」
八条はそれに対してわざと話をぼかした。
「我が連合とエウロパが戦争状態にあるのは事実です」
「ですね」
「それで御聞きしたいことがあります」
今度はボラーンが尋ねてきた。
「何でしょうか」
「今度のことですが」
「今後のこと」
「はい。連合はエウロパをどうするつもりでしょうか。併合されるおつもりでしょうか」
（むっ）
シャリアピンはそれを聞いて一瞬眉を顰めさせた。

## 第十三部第四章　創造神の星においてその七

（またえらく単刀直入だな）
実は彼等は搦め手で来るとばかり思っていたのだ。だがそうではなかった。直球を投げて来たのだ。意表を突かれたと言ってもいい。
「今マウリアではそうした噂も出ているのですが」
「そうだったのですか」
だが八条はそれ対して表面上はしれっとした態度で応えた。
「どうなのでしょうか」
「我々は連合です」
彼は答えた。
「はい」
「連合の者にはエウロパの水は合いません。合わない水を飲むつもりはありません」
「左様ですか」
「それではエウロパの水は分けられるのですね」
「はい」
彼は頷いた。それが何よりの答えであった。
「分ける。しかしそれでも何かと問題がありますね」
「といいますと」
「激しく打ち合った水はそう簡単には分けられないですから」
ビガーチャルは思わせぶりにそう述べた。
「それを分けるとなると」
「しかも互いに沸騰していますし」
ボラーンも言った。
「難しい問題ですね。少なくともお互いでは無理でしょう」
「そう思われますか」
「はい。私共はそう見ております」
そしてこう述べた。

「間には冷たい水が入ることが必要かと存じます」
「冷たい水ですか」
「はい」
「しかしそれが見つからないのですよ」
八条もまた思わせぶりに言う。
「一体何処にあるのか」
「意外なところにあったりするものですよ」
それに対してボラーンが述べた。
「意外なところに」
「はい。それもかなり身近なところにね」
(話に乗ってきたか)
シャリアピンはそれを聞いて内心思った。
(だが問題はこれからだ)
そして心の中でそう呟きながら八条を見やる。
(長官、どう御考えですか)
そんな彼の心の中を察したのであろうか。八条がちらりと横目で彼を見てきた。
(むっ)
だが一言も発しはしない。ただ見やっただけであった。
すぐに視線を外す。そしてマウリアの者達に視線を戻す。それからまた話をはじめた。
「それではその身近な場所にある水ですが」
「はい」
ビガーチャルとボラーンはそれに頷いた。
「見つけられれば使うべきでしょうか」
「長官がそれをお望みならば」
まずはビガーチャルがそれに答えた。
「是非共お使いになられるべきでしょう」
ボラーンもそれに続いた。八条はそれを聞いて心の中で頷いた。
「わかりました」

そして言った。それからまた言った。
「それではそうさせて頂きます」
「わかりました」
二人の外交官はそれを聞いて頷いた。
「互いの水を冷やすのにも必要ですね」
「長官」
そう言う八条に対してビガーチャルは言った。
「水だけでは駄目かと思いますが」
「水だけでは」
「はい。水は何処から流れますか」
「泉からでしょうか」
少し考えた後でそう答えた。
「ですね。水が足りない場合も考えられます。そうした場合は泉自体が必要になります」
「そういうことですか」
「そうです。それではどうすべきかおわかりですね」
「はい」
また頷いた。だが実りのある頷きである。
「それでは泉にあたりましょう。御指摘有り難うございます」
「いや、何」
ボラーンはにこやかに笑ってそれに返した。
「些細なことです。本当に」
「我々の行いまぞこの銀河の中においては微々たるもの」
「そうなのですか」
八条はそれを聞きながら彼等がそう言う根拠が一体何なのかを考えていた。そしてそれが何なのかすぐに理解した。
「ブラフマーの一日のうちでどれだけのものがあるか。ほんの小さなことです」
（ブラフマー）
シャリアピンはその名を聞いて内心首を傾げさせた。

（もしかしてインドの神の一人であるあの神のことだろうか）
ブラフマーの名は彼も知っている。だが詳しいことは知らない。彼はインド神話に関してはあまり知識がないのである。これは無理もないことであった。
「その中のことです。御気に召されることはないかと」
「わかりました」
八条は頷いた。だがシャリアピンは首を傾げさせたままであった。
「それではそういうことで。泉に行ってみることにします」
「はい」
「それが宜しいかと」
こうして話は終わった。彼等はそれから出されたマウリアの料理を口にした。それはやはりカレー味であった。だが日本のそれとは全く違っていた。完全にマウリアの味であった。
「ふむ」
ビガーチャルはそのカレーを食べながら目を細めさせていた。

## 第十三部第四章　創造神の星においてその八

「美味しいですね。本格的なマウリア料理ですか」
「はい」
八条はそれに応えた。
「御気に召されたようで何よりです。実はこのレストランはマウリア人が経営しておりまして」
「ほう」
「味付けも完全にそちらのものなのです。如何でしょうか」
「実に素晴らしい。マウリアの料理は香辛料が何よりも重要でして」
「はい」
「その調合次第でかなり違ってくるのです。だからこそ難しい」
「そうだったのですか」
「それでは同じ香辛料を使ってもそれぞれの量や入れる順番でかなり違ってくるのですね」
「その通りです」
ビガーチャルはシャリアピンにもそう答えた。
「だから何かと難しい料理なのです。こう見えても繊細な料理なのですよ」
「そうだったのですか」
「連合では一口にカレーとされていますね」
「はい」
八条はそれに応えた。
「ところが違うのですよ、これがまた」
「ふむ」
「ほら、連合で文化交流の番組がありましたね」
「ええ」
連合のとある国のテレビ局で放送された番組である。マウリアと連合各国の二十代の若者達のトーク番組だ。これが意外と人気があ

り連合各国で放送されている。
「あれで・・・・・シンガポールの若者でしたか。マウリアの料理はカレーばかりだと言っていましたね」
「ハイ、そういうこともありましたね」
八条はそれに頷いた。
「確か料理の話で」
「ええ。けれどその時マウリアの若者の一人が反論しましたね。覚えておられますか」
「はっきりと覚えていますよ。カレーだけじゃないと」
「はい」
「羊のカレー、豚のカレー、鶏肉のカレー、鹿のカレー、馬のカレー、魚のカレー、蟹のカレー、色々あるのだと」
一口にカレーといってもその中に入っているものにはかなりのバリエーションがある。そのうえスパイスの調合等を入れると実に多彩な料理なのである。カレーとは非常に奥深い料理なのである。
「カレーといっても一口ではないのですよ」
「彼はそれを言いたかったのですね」
「つまりそういうことになります」
(結局カレーではないのか?)
シャリアピンは内心そう思いながらも黙っていた。話すときりがないからである。マウリア人と話す時は用心しろ、とは常に言われていることである。
「そしてその豚肉や鶏肉でも味付けは千差万別です」
「それで変わるのですね」
「そういうことになります。どうです、カレー、マウリア料理というのは非常に奥が深いでしょう」
「本当にそうですね」
「我がマウリアのソウルフードです。ただそちらのカレーにはこちらが驚かされましたが」
「それはよく言われますね」

八条はそれに頷いた。
「変わった日本の料理だと」
「確かルーツは我が国のカレーなのですよね」
「はい、その通りです」
「それがどうしてああなったのか。宜しければ教えて頂けませんか」
「あれは十九世紀からなのですよ」
八条は遥かな過去から言及しはじめた。
「そんなに昔からですか」
「我が国にとっては決していい時ではありませんでしたね」
ボラーンは十九世紀と聞いてその顔を暗くさせた。

## 第十三部第四章　創造神の星においてその九

「もっともそれもほんの一時でしたが」
（一時なのか）
シャリアピンはまたしても心の中で驚いた。
（百年にも渡っていた筈だが）
彼もイギリスの植民地統治については知っていた。イギリスはムガール帝国を滅ぼした後でそこにインド帝国を築きビクトリア女王をその元首としたのである。欧州においては皇帝になることはできなかったがインドにおいては皇帝となった。インドは大英帝国にとってなくては成らぬ存在でありその富がイギリスを支えていた。凄まじい搾取が行われインドの民衆は塗炭の苦しみを味わった。確かにその通りであるがインドという国は底知れない国である。イギリスの存在すら知らない者も非常に多かった。インドの民衆全てがイギリスの圧政に苦しんでいたかというとそうではなくイギリス政府もまたインドの全民衆を支配していたわけではないのだ。そういうことが可能な国ではなかったのだ。ガンジーにしろインドの全民衆の指導者、象徴になったかというとそうではなかった。この時代においてすら本当の人口は誰にもわかりはしないのである。二千億が公称であるが実際はそれより三百億は多いと言われている。もっともこれも言われているだけで確かなことはわかりはしない。三千億いるかも知れないとも言われている。
「その一時の間に我々のカレーがそちらに伝わったのですか」
「はい。当時海軍でいい料理を探しておりまして」
「海軍で」
「そうです。栄養のある料理を。丁度ロイヤル＝ネービーでカレーのシチューを見つけまして」
「イギリスからだったのですか」
「イギリスではパンに漬けて食べていたそうです」

「我が国のナーンのようにですか」
「まあそんなところでしょうか。最初はミルクのシチューでしたがすぐ腐るので」
「それはわかります」
二人のマウリア人はそれに頷いた。
「昔は冷蔵庫といった便利なものもありませんでしたからね」
「今ではもう信じられない話ですが」
「しかしそれにより我々のカレーは誕生しました」
「そこからですか」
「はい。そのシチューを海軍に入れようかという話になりまして。ただ、我が国の主食は米でして」
「ええ」
「それも粘り気の強い米でしたね」
「そうです。ジャポニカ米です」
この時代においても日本人の好きな米である。インディカ米は口に合わないとしてあまり好まれていない。結果として日本に輸出する場合はジャポニカ米だけとなる。そうでないと売れないのだ。ちなみにこのレストランの米はインディカ米である。八条もジャポニカ米の方を好むが特にインディカ米が嫌いというわけではない。そのあたりが難しいのである。
「あれに合うようにと。とろみを出したのです」
「そうだったのですか」
「後は野菜も。和風になりました」
「そう、それです」
ビガーチャルはそこに言及した。
「そこなのですよ」
「和風ですか」
「はい。日本のカレーは和風なのですよ」
「そこが我々が変わった和食だと言う所以なのです」
「そこだったのですか」

これは目から鱗であった。
「そこが」
「具体的に言うと味付けですね」
ビガーチャルは言った。
「味がね、完全にそちらのものなのですよ」
「そう、醤油の味です」
「醤油の」
ボラーンの言葉に眉を動かせた。シャリアピンはそれを聞いて成程、と思った。
「和食を決定付けるものといえば醤油ですね」
「よくそう言われます」
「それも大豆から作った。日本のカレーにはどれもその味が入っているのですよ」
「確かにそうしたカレーもありますが」
八条はそれにコメントした。
「入れないカレーもありますよ」
「それでもです」
だが二人もそれに反論した。
「何故かその味、そして香りが漂うのです」
「それこそ和食の証拠でしょう」
「そうだったのですか」
言われてみても今一つピンとこない。だがシャリアピンにはわかった。これも国が違うからであろうか。人間その中にいると案外それについてわからなくなるものなのである。外から見てようやくわかることもある。
「どうもよくわかりませんね」
「そうですか」
「実際に二十世紀に我々の先祖がそちらの方々にカレーを御馳走した時も言われたことのようですが」
つまり遥か昔からそうだったのである。

「結局我々と貴方達の味覚の違いということなのでしょうかね」
「そうでしょうね」
「カレーうどんは最初見た時はかなり驚いたものですよ」
他にもカレーパン等がある。日本人もカレーが好きなのは事実なのである。最早国民食といっても過言ではない。
「よく御存知ですね、そんな食べ物まで」
「本に載っていましたから」
「食べてみると中々いいものですね」
「気に入って頂けましたか」
「はい」
「ただ、服にルーがかかりやすいのが難点ですが。白い服を着ている時は用心が必要ですね」
「それはわかりますよ」
「何故ですか」
「かって私は日本軍にいたのですが制服が二つあったのですよ」
冬用の黒と夏用の白である。連合軍ではそうした区別はない。またこの時代では旧日本軍以外そうした二種類の軍服は存在しなかった。これも日本軍独特であった。
「夏にカレーを食べるのは正直怖かったですね」
「かかったら中々落ちない」
「そう、それで凄く怖かったですよ」
これまたシャリアピンにはよくわからないことであった。今回どうも彼には馴染みの薄い話ばかりであった。そして常に心の中で驚かされた。

## 第十三部第四章　創造神の星においてその十

「慣れないとね、大変です」
「そうですね」
「礼服を着ている時は特に」
「かといって食べないわけにもいきません」
「白というのは非常に罪作りな色です」
「全く」
カレーの難点については共通していた。これは何処でも変わらないようである。そして話はデザートに移った。
話は食べ物で終わってしまった。彼等はそれで別れそれぞれの仕事場に戻った。その帰路につく車の中でシャリアピンは八条に声をかけてきた。
「長官」
「何でしょうか」
八条はそれに応えて彼に顔を向けてきた。
「とりあえずは話が進んだと見ていいのでしょうか」
「はい。明日にでもあちらの外相と電話でお話します」
「そうですか」
「次官はあまり今回の話に関してはあまりおわかりにはなられなかったようですね」
「何と言いますかね」
彼はそう言って言葉を濁した。
「どうもマウリアは苦手でして。理解の範疇にないというか」
「多くの人がそう言いますね」
「その異質性故に連合に入らなかったという歴史がありますしね」
「はい」
実はマウリアはインドと呼ばれていた時代から連合への参加を国の内外で提唱されていたのだ。これは長い間続きマウリアになって

からも、宇宙に進出してからも続いていた。
　しかし結局それはならなかった。理由としてマウリアはマウリアで独自の経済圏を持っていたのと八条も言った彼等の異質性であった。連合のどの国とも全く異なる、マウリアはマウリアだけで一つの世界であったのだ。
「難しい国ではあります」
「それは同意致します」
「ですが今回は彼等の力が必要なのです」
「戦争を終わらせる為ですね」
「はい。これが最も難しい問題でして。はじまりがあるものは必ず終わりがある」
「はい」
「しかし幕を降ろすのがね。何かと大変です」
「どんな劇や小説も終わりが肝心ですしね」
　これはあらゆるものに言えることであった。ただし終わらずに何時までも続くものもある。作者が死んでも他の者が書き続ける場合だ。もっともそのような作品は滅多にないものであるが。
　そして最後に全神経を集中させるかのように文にこだわる場合がある。日本の二十世紀の作家太宰治はその最後の一文にこそ最大に輝きがある。自虐的とも甘えているとも批判される作家であるがその最後の一文は常に見事なものであった。それこそが太宰文学の真髄であるという者すらいる程であった。
「その助けをしてもらいたいのですよ、彼等に」
「そうなのですか」
「今まで足踏み状態でしたが。これで進みました」
「ただ、それはそれで問題が出て来ますね」
「見返りですか」
「ええ。マウリアは連合の何処かの国々の様に貪欲ではありませんが」
　米中露等の国々のことを皮肉っているのである。シャリアピンの

祖国リトアニアは連合においては中堅よりやや下の位置にある国であるが度々彼等の強引な外交、貿易に迷惑を被っているのである。
「満足するということを知っていますから」
「それもマウリアの哲学ですね」
「哲学なのですか」
「宗教もまた哲学ですから」
八条はそう述べた。
これは本当のことであった。宗教とはそもそも人の精神世界のものである。それを司るからにはその生き方や人生観も定める。これは仏教にしろキリスト教にしろそうである。人はその宗教の中で、その倫理の中で生きるのである。そして十九世紀から二十世紀において栄えた欧州のあらゆる哲学はその全てがキリスト教から派生していると言っても過言ではないのである。
彼等より前のスピノザやベーコン、デカルトにしろそうである。彼等はまず神について考えた。神はいないと断言するにもまず神の存在が必要なのであった。無神論者であり宗教そのものを否定したマルクスにしろこれは同じである。そもそも共産主義自体がフランス革命のジャコバン派にルーツを持つ思想なのである。なおこれはナチスも同じであり彼等の正体が同じものであることの証左ともなっている。
そのナチスの総統ヒトラーが愛読していたニーチェも神は死んだと言ったがやはり神を見ていた。彼と同じ実存主義であるが神の存在を認めようとしていたキルケゴールとは違うようで根は同じものだったのであろう。二十世紀、いや古の神々をその心の牢獄から解き放ち再びその存在を認めるまでの長い間欧州とはそのままキリスト教の歴史であり世界であったのだ。十字架に全てが支配されていたのだ。
インドの宗教、とりわけヒンズーはその色彩がさらに濃い。ウパニシャッド哲学というものもある。時の流れを創造、調和、破壊の三つで考え輪廻転生がそこに入る。仏教の解脱という考えもインド

ならではの考えなのである。インドはそれだけで一つの哲学であった

## 第十三部第四章　創造神の星においてその十一

「それはおわかりですね」
「私も複数の宗教を信仰しておりますから」
シャリアピンはそれを認めた。
「わかってはいるつもりです」
「それならばおわかりでしょう」
彼はまた言った。
「彼等があまり欲深くはない理由が」
「はい」
そして頷いた。
「一つの人生で過度に持っていても仕方のないことということですか」
「そういう一面がありますね」
「次の人生ではわからない。人は死んで終わりではないからですね」
「これをよく理解出来ない人には徹底的に理解出来ないようですけれどね」
八条はそれを聞きながらそう述べた。
「私は案外すんなりと入ることができましたが」
「仏教のせいではないでしょうか、それは」
「おそらくはそうですね」
八条はそれに頷いた。
「元々はマウリアの宗教であすから。あの宗教にも輪廻転生があり過度な物欲を好みません」
「はい」
「だからよくわかったのだと思います」
「しかしそれでも全てはわかりませんね、あの国に関して」
「全てを理解するのは無理ですよ」
そう言って苦笑した。

「何事も。自分自身のことですら」
「そういうものですか」
「少なくとも私はそう考えています。特にマウリアみたいな複雑な国はね」
「はい」
「一面だけではありませんから。何かと厄介ですよ」
「しかしその僅かな知識で最善の解決策を出さなければならない場合もありますね」
「ですね」
「それが今回だとすると。考えただけで胃が痛みます」
「まあそう深刻に考えないことです」
生真面目なシャリアピンらしい言葉であった。彼は次官として充分過ぎる程見事な働きを見せてくれている。八条もそれに関しては深く感謝しているのだ。
「とりあえず今日は終わりです。本題は明日からです」
「異様に長い序章でしたね」
「そういった話もありますよ。特にマウリア映画では」
「あれはさらにわかりません」
「ははは、そうですか」
彼等は国防省に戻った。八条もシャリアピンも自分の仕事に取り掛かりそれが終わるとそれぞれの家に戻った。八条は独身だがシャリアピンには家庭がある。同じ歳の妻、そして四人の子供達と一緒に暮らしている。家庭では子煩悩で知られるよき父である。ただし妻から見ればよき夫ではないらしい。何時の時代も何処の場所でもそうそうよき夫というものは存在しないものなのである。逆の方である悪い夫はかなりいるが。
八条は官邸で休み翌日朝早くから仕事に取り掛かった。その時の朝食は卵焼きに味噌汁、漬け物、納豆、そして白い御飯であった。彼が朝によく食べるメニューであった。
朝食を終えてまた仕事に取り掛かるとそこで三次元テレビ電話が

鳴った。スイッチを入れるとそこにマウリアの礼装を着た美しい女性であった。マウリア外相ヴァティ＝エルールである。
「お早う御座います、八条長官」
彼女はモニターに姿を現わすとまずはそう挨拶をした。
「はい、お早う御座います」
八条もそれに返礼した。そしてそれから話をはじめることにした。
八条は話の前に机の上のリモコンを手に取り数個のスイッチを押した。それでカーテンを閉め扉をロックした。諜報機のチェックはその前にしてある。こうして万全な態勢にしてから電話での会談に及んだ。
「お話は御聞きしていると思いますが」
「はい」
エルールは八条の言葉に頷いた。
「エウロパとのことでそちらに御助力願いたいのですが」
「我がマウリアの力をですね」
「はい。お願いできますか」
「そうですね」
彼女はここで笑みを作った。まるで彫像のそれのように神秘的な笑みである。八条はそれを見てインド神話の女神を思い出した。シヴァの妻であるパールヴァティーであろうか。
「他ならぬ貴方達の頼みです、こちらとしても断るつもりはありません」
「それでは」
「ただ条件があります」
「条件ですか」
八条はそれを聞いてやはり、と思った。しかしそれは口には出さない。
「我々は今何かと物入りでして」
「ふむ」
どうやら資金援助を希望しているらしい。

「そこについて考慮して頂ければ。喜んで力になりましょう」
「わかりました。それではその方向で話を進めます」
「お願いします。それでは」
「はい」
こうして話は終わった。電話での会談自体はすんなりと終わった。
しかしこれからもまた大変なのであった。
リモコンでカーテンを開け扉のロックを外す。するとその直後に
木口が部屋に入って来た。

## 第十三部第四章　創造神の星においてその十二

「あ、いいところに来たな」
「何かあったのですか？」
「ああ。ちょっと首相府に用件ができてな。それの調整をしてもらいたいんだ」
「首相府ですか」
「そうだ。お願いできるかな」
「そういうことでしたら」
彼は上司の言葉に頷いた。
「すぐにでも。どうやらマウリアとは上手くいきそうなのですね」
「わかったのかい」
「ええ、そのお顔を見れば。すぐにわかりますよ」
「顔には何も書いたつもりはないが」
「それでもわかるんですよ」
「やれやれ」
彼はそれを聞いて苦笑した。
「どうやら私もまだまだのようだな。顔に出るようでは」
「まあ嘘が漬けないってことですよ。それでいいではないですか」
「いいのか」
政治家とは嘘をつくものとされている。少なくとも腹芸も要求される職業である。だが八条はその性格故かそうしたことが得意ではないのである。木口はそれをよしと言ったのである。
「世間ではそうは言われないと思うがな。少なくとも政治の世界では」
「政治といってもそれぞれですよ」
木口はそれに対してはそう答えた。
「何も一人の人間が政治をするわけではないですよね」
「それはそうだ」

ましてや連合は民主主義体制である。多くの政治家がそれぞれの思想、政策を持っている。これはもう言うまでもないことであった。
「だからいいんですよ。長官は長官のままで」
「そうなのか」
「政治家の形は一つではないのですからね」
「ふむ」
「それに変に合わないことをしても疲れるだけですよ」
彼は木口の話を聞きながら考えていた。どうにもすぐに結論が出そうな話ではなかったからである。
「私はそう思いますが」
「わかった」
そこまで聞いてようやく頷いた。
「それではとりあえずは私のスタイルでいくとしよう」
「それが宜しいかと。それでは」
木口はそう言い終えるとその場から姿を消した。その足ですぐに首相府に向かった。八条はそれを見送りながら次の仕事に取り掛かっていた。今度は書類仕事であった。
その書類に一枚ずつサインをしていく。一枚サインをし終えるとまた別の書類に。そうして時間を費やしていく。彼は限られた時間の中でその膨大な仕事をこなしていた。だがそれでも仕事は減りはしなかった。それが終わるとまた次の仕事が待っていたのだ。
「長官」
サインを終えたところで木口が部屋に戻って来たのだ。丁度休憩の時間であった。だが彼はまだ休憩をとることはできそうにもなかった。今木口が来たからである。
「首相府からはゴーサインが出ました」
「それは何より」
「ただ細かいことは財務省とも話をしてくれとのことですが」
「財務省と」
彼はそれを聞いてその整った顔を曇らせた。

「またそれは。難題が一つ増えたな」
国防省と財務省の仲がよくないのは多くの国で見られることであるし中央政府でもそうした傾向は残念なことに見られる。財務省から見れば国防省は金喰い虫であるし国防省から見れば財務省は難癖をつける存在である。これで仲がよくなる方が不思議と言えば不思議である。
「しかし結局は話をしなければなりませんよ」
「それはわかっているが」
それでも八条は今一つ乗り気ではなかった。
「あの人が何と言うかな」
「おそらくあまりいい顔はされないでしょうね」
木口は率直にそう述べた。
「戦争で何かと出費が重なっていますし」
「それが最も大きいな」
「そしてまた出費です。しかも長官がその話のもとだとすると」
「苦労しそうだな」
「しかしだからといって話をしないわけにはいきません」
「それはわかっているよ」
乗り気でないままそう答えた。
「それでもな」
「ここで言っていてもはじまりませんよ。すぐに話をしましょう」
「そうだな」
木口の言葉を聞き入れて電話を手にとった。そして財務省に電話をかける。

## 第十三部第四章　創造神の星においてその十三

「はい、財務省ですが」
「国防省の八条ですが」
「八条長官ですか」
電話の応対をしている若い財務省のスタッフの声が彼の名を聞いた塗炭に不機嫌なものとなった。
「一体何の御用でしょうか」
「実はそちらの長官にお話したいことがありまして」
「わかりました。それでは暫くお待ち下さい」
「はい」
こうして財務長官と直接電話で話をすることになった。今の財務長官はダーバン＝モーリシャスという。マダガスカル出身であり長い間中央政府において財務官僚として辣腕を振るってきた。派手ではないが実務に優れ、安定感のある冷静な性格で知られている。長官にはキロモトが指名した。そこで財務省を一旦辞職して長官になったのである。次官補までは官僚であるが長官や次官は政治家だからである。だが彼はそれでも官僚の時の性格が抜けていないと言われている。人によってはコンピューターに過ぎないとまで言われている。
コンピューターという言葉はあながち民主政治の官僚に対しては実に見事に当てはまる言葉であった。政治をするのは政治家であり実務は官僚が行う。政治家は丁度コンピューターのプログラムを打ち込む役なのである。そして官僚はその打ち込まれたプログラムに従い動く。そうした関係だからである。
ここで問題となるのはその政治家の資質である。間違ったプログラムを打ち込んだり委任したままでは妙な方向に動きかねないのである。だからこそ常に気を払っておかなくてはならない。コンピューターだからといってミスがないわけでもない。バグや故障の可能

性もある。それも見なくてはならないのだ。コンピューターにも質の差がありバージョンアップも計らなくてはならない。何でもコンピューター任せにしてはならないのは政治の世界でも同じなのである。

だがこのモーリシャスはそのコンピューターそのものだと言われているのである。人間としては品行方正であり公正な人物であった。だがあまりにも人間味がないとされている。

八条とも特にこれといって交流はなかった。とかく近寄り難い人物だからでもあった。どうにも話し難い印象が強かったのである。

「どうも」

あれこれ考えているうちに電話に彼が出て来た。

「モーリシャスです」

「八条です」

彼もそれに返した。そして電話での会談に挑んだ。

「実はお話したいことがありまして」

「はい」

やはり感情の篭っていない機械的な返答であった。

「何でしょうか、それは」

「実はマウリア政府と講和の仲介での交渉を行っていまして」

「それに関しては聞いております」

モーリシャスは答えた。

「それでどうなったのでしょうか」

「どうやら仲介役を務めてくれるそうです」

「よいことです」

「ですがここで一つ条件を提示されまして」

「条件ですか。それは一体」

「経済援助なのですが。マウリアも最近財政難らしくて」

「それは初耳ですね」

モーリシャスはそれを聞いて一言そう述べた。

「マウリアは財政改革が成功してかなりの黒字の筈ですが」

「はい」
「それで経済援助ですか。一体どういうことでしょうか」
「私も詳しいことはわかりませんがそれを希望しております」
「希望が必ず適うわけではありません」
彼は相変わらず感情を込めないままそう答える。
「何も事情がわからないで援助をするわけにはいきませんね。どういうことなのでしょう」
「長官」
ここで目の前にホウサイが姿を現わした。そっと小声で囁く。

## 第十三部第四章　創造神の星においてその十四

「これを」
「むっ」
「八条長官」
そこでモーリシャスがまた問うてきた。
「どういうことなのでしょうか。お話下さい」
「それはですね」
今ホウサイから手渡されたものを見る。それはマウリアの資料であった。
「どうやら大規模な惑星の開発に乗り出すようなのです」
「マウリアがですか」
「はい。それにあたっての資金を調達したいようなので。どうやらそれが理由のようです」
「そうだったのですか」
モーリシャスはそれを聞いて電話の向こうで頷いた。
「ええ、どうやらそのようですが」
「ですがマウリアはその資金には困っていない筈です。そして我が財務省も中央政府の財政はそれ程豊かではないと認識しております」
「それではどうすれば」
「他の援助ならばどうでしょうか」
モーリシャスはそう提案してきた。
「他のですか」
「はい、技術援助ならいいと思いますが」
「ふむ」
八条はそれを聞いて考え込む。確かにそれならば連合の財政にとってもマウリアの開発にとっても悪くはないだろう。モーリシャスはいい提案をしたと思った。
「悪くはないですね」

「それではそれを提案しますか」
「いや、待って下さい」
だが彼はここで一旦それを止めた。
「何故ですか」
「まずはそれに関して調整していきたいと考えます。そのまま話を出してもあちらが不快に思うでしょうから」
「そうですか」
モーリシャスはそれを聞いて考える声になった。電話の向こうにいるのでどんな顔をしているのかはわからない。だが八条は彼の表情は変わってはいないだろうと思っていた。
「それで宜しいでしょうか」
「はい」
モーリシャスはそれに頷いた。
「詳細は長官にお任せします。私が交渉を行っているわけではないので詳しいことはわかりませんからね」
「有り難うございます」
「それではそういうことで。宜しいでしょうか」
「はい。それではこれで」
「わかりました」
こうして財務省との話は終わった。八条は電話の受話器を置くと側に立っていた木口に顔を向けて問うてきた。
「どう思うか」
「いいですね」
彼もそれに乗り気であった。
「単に資金援助や経済援助するよりは余程いいと思います」
「そうだな」
八条もそれに頷いた。
「それではマウリア側とのそれで話を進めていくとするか」
「はい、それが宜しいかと」
こうして彼はマウリア側に経済的な援助ではなく技術援助を申し

出ることにした。細かい調整の後エルールとテレビ電話での会談に挑んだ。
「技術援助ですか」
エルールはそれを聞いてその美しい顔に思案の絵の具を入れた。
「はい。そちらの方が貴国の開発にも役立つと思うのですが」
八条はそう説明した。確かに調べてみればマウリアは財政的には困ってはいない。むしろ技術面において連合と比して遅れをとっているのである。
「そうですね」
彼女はまだ考えていた。だがやがてその顔に入れていた思案の絵の具を消して元の顔に戻った。それから述べた。
「私の一存では決められませんがそちらの方がよいのではと思います」
「左様ですか」
八条はそれを聞いて内心会心の笑みを漏らした。
「それではそれで宜しいですね」
「はい」
エルールは頷いた。

## 第十三部第四章　創造神の星においてその十五

「そういうことで話を進めていきましょう」
「わかりました。しかし長官」
「何でしょうか」
「ここからは政治とは離れた話になりますが」
「はい」
見ればエルールの目の色が変わっていた。八条は政治の色の目から変わったのはわかったがその変わった色がどんな色かまではわからなかった。いや、知らなかった。この時は単に世間話か何かをするのだろうとばかり思っていた。しかしそれは違っていた。
「長官とはじっくりとお話したいですね、個人的に」
「個人的に、ですか」
八条はそれを聞いても特に何も思うことはなかった。感情があまりない言葉になっていた。
「夫がいるので残念ですがそれでも何処かで御会いしたいですね」
「有り難うございます」
彼はにこやかに笑ってそれに応えた。
「機会がありましたら。是非そうしたいですね」
「はい。それではまた」
「御会いしましょう」
こうして電話は切れた。エルールは暗転したモニターを見て少し苦笑していた。
「政治家としてはかなりのようだし綺麗な顔をしていらっしゃるけれど」
苦笑を浮かべたまま言う。
「あちらのことには完全に疎いようね。困った人らしいわね」
「うまくいきそうですか」
「はい」

そのモニターの向こうでは八条がホウサイと話をしていた。彼は苦笑ではなく会心の笑みを浮かべていた。
「これで調停役が決まりましたね。何よりです」
「よいことです」
「これも次官補のおかげです。今回も何かと助けてもらいましたね」
「いえ、私は何もしていませんよ」
彼女は笑いながらそう言葉を返した。
「長官の努力あってのものです。本当に」
「また御謙遜を」
「いえ、本当ですよ」
彼女はそれでも言う。
「マウリアに関することもよく御存知でしたし。それに細かい部分の調整も御自身でされましたし」
「そうしなければならない状況でしたから」
彼はそう述べた。
「そうしただけです。大したことはありませんよ」
「いえ、それでも」
彼女は言った。
「長官でなければ達成できなかったと思いますよ」
「有り難うございます。しかし今回の件は次官補やその他のスタッフに特別ボーナスを出さなければなりませんね」
「他のスタッフはどうかわかりませんが私はいいです」
「何故ですか」
「お金には困っておりませんから。別に構いません」
「そうですか」
八条はそれを聞いて残念そうな顔をした。
「しかしそれでは」
「何でしたら別の形でボーナスを頂きたいのですが」
「といいますと」
「煙草です」

彼女はにこやかに笑ってそう答えた。厳しい顔の多い普段の彼女からは想像もできない顔であった。
「煙草ですか」
「はい。何か美味しい煙草があれば。それでいいです」
「ふむ」
八条はそれを聞いて考える目になった。彼は煙草は吸わない。それで困っているのである。
「そうですね」
「それならどうでしょうか」
「わかりました。それでは探してみます」
「はい」
「日本にもいい煙草があるでしょうから。それで宜しいでしょうか」
「ええ、それでお願いします」
「わかりました。それではそういうことで」
「はい」
そして数日後ホウサイの家に八条から煙草が送られた。それは日本の煙草であった。
「あら、早いわね」
彼女はにこにこしながらそれを受け取って家のリビングに向かう。早速一箱取り出してその中の一本に火を点ける。それから吸いはじめた。
「ふうん」
味わってみる。だがそれは全く味がしなかった。
「どういうことかしら」
彼女はそれを感じて顔を顰めさせた。他の煙草ならばもうその素晴らしい味が漂っている頃だというのに。
しかしそれはいささか判断が早かった。彼女の口の中に徐々にではあるが煙草の味が浮かんできたのだ。少しずつ、徐々に。
「面白いわね」
それを感じたのでにやりと笑った。どうやらそういう煙草である

らしい。
「日本の煙草も悪くないわね」
そう言いながら吸い続けた。やはり味は薄いがその中に上品なものがあった。他の煙草とは全く違っていた。
それから彼女はその煙草も吸いはじめた。お気に入りの一つとなった。
煙草の中にも日本がある、そう思ったがそれは誰にも言わない。ただ黙々と一人でその味を楽しむだけであった。

# 第十三部第五章　嵐が来たりてその一

嵐が来たりて

連合が戦いの後にも着々と駒を進めているその頃エウロパもそれに関する情報を察知していた。それはすぐにペーチの下にも届けられた。

「そうか」

彼はそれを仮眠室のソファーで聞いた。電話から聞いたのだ。

「わかった。それではすぐにそちらに向かう」

そう言って起き上がると執務室に向かった。見れば服はスーツのままでありその上に毛布を被って寝ていたのだ。今眠りに入ったばかりであったがそれでもすぐに起き上がった。

こうした生活がもう長い間続いている。戦争がはじまってからずっとだ。いや、その前からであろうか。もうどれだけそうした生活を送っているかわからなくなってきていた。

常に身の周りには仕事がある。しかもエウロパにとって実に不吉な内容の仕事ばかりだ。気が滅入らないといえば嘘になる。だがそれでもやらなければならなかった。それは彼がエウロパの首相だからである。

執務室に入るとそこにはもう若い官僚が数人立っていた。そしてペーチの姿を認めると彼に一礼した。

「連合のことだが」

「はい」

ペーチは椅子に近付きながら彼等に声をかける。同時に彼等にも椅子を勧めた。

「まあ座ってくれ。話は長引きそうだ」

「わかりました」

官僚達はそれに従い座った。そして話をはじめた。

「まずは詳しいことを聞きたいのだが」

ペーチは彼等の顔を見回しながらそう尋ねてきた。
「いいか」
「はい」
彼等もそれに頷いた。そして最初の一人が口を開いた。
「彼等はまずマウリアと接触しました」
「マウリアとか」
「はい。どうやら彼等を仲介役にしたいそうです」
「そうだったのか」
ペーチはそれを聞いて頷いた。
「外交としては妥当だな」
連合とエウロパは対立関係に入って久しい。そのうえ今は戦争中である。そのような状況で普通の講和なぞできそうにもないことは一目瞭然であった。
「そしてそのマウリアの者がこちらに来ているのか」
「はい」
別の官僚がそれに頷いた。
「特使として。今サハラからエウロパに入ったそうです」
「ふむ」
彼はそれを聞いて顎を少し動かした。そして何か考える目をした。
「そしてこのオリンポスに向かっております。クロノスでの戦いがはじまるまでには到着すればいいのですが」
「おそらく間に合うだろう」
ペーチはそれに答えた。
「彼等も急いでいるだろうしな。それは心配しなくていい」
「左様ですか」
「だが問題はまだある」
それでも彼は言った。
「彼等が果たしてどちらの味方か、だ。いや、これは言うまでもないか」
そう言って苦い顔をした。

「彼等と連合の関係を考えればな。愚問だった」
連合とマウリアは同盟関係にある。それを知らぬ者はこの銀河にはいない。
「それでは連合に有利なように話を進めると」
「おそらくな」
ペーチは答えた。
「既に彼等から何らかの見返りを約束されている可能性もある。そうなるだろう」
「左様ですか」
「それでは仲介を断りますか」
「いや、それも愚だ」
だがペーチはそれは拒否した。
「これを受けなくてはエウロパは滅亡する可能性がある。若しもの時にな」
「若しもの時ですか」
「そうだ」
彼等はペーチの言う若しもの時が何であるのかわかっていた。それを聞いて戦慄を覚えた。
「オリンポスを占領され、それから講和もなくては。どうなるかわかるな」
「はい」
彼等は暗い顔でそれに頷いた。
「その時に備えなければならない。それはわかるな」
「わかりました」
そして彼等はまた頷いた。
「この仲介は受ける。ただしだ」
「ただし」
ペーチはまた言った。
「講和会議には私も出る。決して彼等の思うようにはさせない」
「宜しいのですか！？」

官僚達はそれを聞いて心配そうな顔でペーチを見た。
「閣下、無理をなさらずに」
「他に人もおりますし」
「おかしなことを言うな」
だが彼はそんな彼等の心配そうな顔と声を一笑に伏した。そして首相になる前のようなにこやかで優しい笑みを彼等に向けた。その時とは比較にならない程痩せこけ、疲れた顔ではあったが。

## 第十三部第五章　嵐が来たりてそのニ

「一国の首相が講和会議に出なくて誰が出るのだ」
「しかし」
「しかしも何もない。私は出る」
そう言い切った。
「いいな。だからこれに関しては任せてくれ」
「わかりました」
そこまで言われては頷くしかなかった。官僚達はそれに関してはもう黙るしかなかった。
「他には総統も出席されるな」
「はい」
代表格の一人がそれに応えた。
「後は補佐官と外相、そして軍務相といったところでしょうか」
「わかった」
彼はそれを聞いて頷いた。
「五人で挑むことになるな」
「他にもスタッフは大勢必要でしょうが。閣僚クラスはこれだけです」
「連合も同じ顔触れかな」
「そうでしょうね。中央政府の閣僚達が出るでしょう。ただ各国の首脳達は来ないと思いますが」
「どうしてそう思うのかね」
ペーチはそれを聞いて彼等に問うてきた。
「今回は各国には直接の利害は関係ありません。だからこそ出ることはないかと思います」
その代表格の一人はそう答えた。
「それに下手にでしゃばると他の国に変に思われるでしょう。無闇にそういった行動に出る愚か者もそうそういないと思います。それ

にそんな輩がそう易々と一国の元首になれるとも思いませんが」
「そうだな」
ペーチはそれに頷いた。
「その通りだ。よくわかっているな」
「はい」
「それではこちらも各国の元首は呼ぶ必要はありませんね」
「無論」
彼は短い言葉でそう答えた。ラテン語は簡潔な言葉として知られているがこの時は殊更簡潔な言葉となっていた。
「あの方々にも無意味な苦労を強要するものになる。それはならない」
「わかりました」
「そしてマウリアだが」
「はい」
「おそらく首相、若しくは外相が出て来るだろうな」
「そうですね。若しくはその両方が」
「うむ」
「そして仲介役を務めるでしょう。一応は中立の側に立つかも知れませんが」
「一応はな」
ペーチの言葉は少しシニカルな響きがあった。
「実情は言うまでもない。さっきも言ったが」
「左様で」
「だからこそ色々と知っておきたい」
彼はまた言った。
「連合とマウリアの参加するであろう人物のことをな。いいか」
「わかりました」
閣僚達はその目の色を変えた。
「それではすぐに調査にあたります」
「既にある程度は調査済みですが」

「ステッラの遺産か」
「はい」
彼等はそれを認めた。
ステッラは長い間連合に潜伏してその情報収集に務めていた。その活動の中には中央政府及び各国の要人達の調査も含まれていたのである。その結果として多くのことが伝わっていた。それは全てエウロパ政府のもとに入っていたのだ。彼女の非凡なところは同時にマウリアの要人達も調査していたことだ。それ等の資料が今彼等の手許にあるのだ。
「皮肉なものですね、それにしても」
「何故だ」
代表格の一人が口を歪めてそう言うと傍らにいた同僚がそれに顔を向けてきた。
「いや、この戦いは元々ステッラによりはじまった。彼女が見つかり、その潜入ルートを突き止められてから戦いがはじまったのだったな」
「そうだったな」
開戦の経緯は覚えている。スパイを潜入させ、なおかつ破壊工作等も計画していたとあれば充分過ぎる程の戦争の理由になる。言い逃れのできないエウロパのミスであった。
「そして今そのステッラが集めたデータを使わなくてはならない。皮肉なものだと言わずして何だ」
「うむ」
「だが使わせてもらおう。エウロパの為に」
「首相、それで宜しいですね」
「私に異存はない」
彼はそれに対してそう答えた。
「是非共使いたい。そうでなくては間に合いそうにもない」
「わかりました」
「その資料をまとめてそこから対策を講じなくてはならない。早期

にな」
「はい」
「それでは卿等にはその検証及び対策案を講じてもらいたい。いいか」
「了解しました。それでは」
「うむ」
こうしてそれに関する話は終わった。閣僚達は退き部屋にはペーチ一人となった。彼はそのまますぐに仕事に取り掛かった。

## 第十三部第五章　嵐が来たりてその三

書類にサインをしている。それは中々終わらない。だが彼はそれでも少しずつそれを終わらせていた。彼はサインをしながらふと呟いた。

「講和か」

あまりピンとこない言葉であった。少なくとも今は。何も考えられなかった。

「終わるにこしたことはないが。この戦いでエウロパは大きな損害を被っている」

国土のかなりの部分が占領され産業は停滞している。連合軍はエウロパの産業を破壊するようなことはせず一般市民にも危害は加えていないがそれでも戦争により産業活動は制限されている。そして特に通商は事実上行なわれてはいないと言ってもよかった。既に経済力はかなり低下していた。

少なくとも戦争が終わればそうした経済や産業に関しては今よりも好転することが期待できた。戦争は何も生み出しはしないのだ。だからこそ産業人は戦争を嫌う。兵器にしろ売れればそれでいいのだ。肝心の産業が破壊されては本末転倒である。

ペーチもそれはよくわかっていた。だが今はどうにもならない。まさに手詰まりであった。

「それでも大変だろうな」

戦争が終わっても産業の復興は困難であるのはわかっていた。戦後も前途多難である。だが彼にはそれに関して考えることも許されてはいないようであった。

「うっ」

突如として胃が痛む。近頃さらに痛みが強くなっていた。

それに耐えながら仕事を続ける。薬を取り出しそれを飲む。痛みが収まった。

しかしそれもほんの僅かであった。やはり痛みは続く。どうにもならない程であった。
それでも彼は仕事を続けた。手の動きは止まらない。仕事はそれでもあるのだ。あるのならばやらなければならなかった。
彼は果てしない悪夢の中にいるようであった。そしてそれは終わりそうにもない。だがそれでもその中で生きなければならなかったのだ。

連合とマウリアの調停を行うことになったマウリアであったがその元首クリシュナータは今一つ気乗りしない部分もあった。彼は官邸のテラスに出て一人考えに耽っていた。
「閣下」
そこにエルールが来た。見ればマウリアの民族衣装を身に纏い化粧をしている。やはり見事な顔をしていた。
「ここにおられたのですか」
「ああ」
クリシュナータはそれに応えて顔を彼女に向けた。
「少し考え事があってね」
「連合とのことでしょうか」
「やはりわかるか」
彼はそれを聞いて穏やかに笑った。
「その通りだ。彼等は資金援助を断ってきたな」
「はい」
エルールはそれに頷いた。
「そのかわりに技術援助を申し出てきましたが」
「それは聞いている」
クリシュナータは答えた。
「確かにそれはいいことだが」
マウリアの財政は少なくとも今の時点では豊かである。連合もそれを知っているからこそそれを申し出てきたのだ。だが彼はそこに

一抹の不安を感じていた。
「だが問題はその技術だ」
「少なくとも第一線の技術ではないでしょうね」
「うむ。連合の惑星開発の技術は優れたものだが」
「はい」
「それでも最先端の技術を易々と我々に渡したりはしないだろう。やはり幾らか前の技術だろうな」
「それでもよいのではないでしょうか」
しかしエルールはそれにはそう答えた。

## 第十三部第五章　嵐が来たりてその四

「それは何故だね」
「惑星開発という分野に関しては我々は連合に大きく遅れをとっています」
「うむ」
「少なくとも百年程は。やはりこの分野では連合は他者の追随を許しません」
「そうでなくては今の連合はないしな」
「はい。ですから幾らか前の世代の技術でも今の我々のものより上だと思います。ですから受けてもよいかと思います」
「そうか」
「全ては閣下の御決断次第ですが」
「わかった」
そこまで聞いて頷いた。
「それでは暫く考えてみよう。だが受けるのを前提としたい」
「わかりました」
「しかしだ。我々は今までそれ程惑星開発には積極的ではなかった」
「はい」
「それが急にだからな。連合はそれを不思議に思っているだろうか」
「どうやらそうではないようです」
しかしエルールはクリシュナータのそうした疑念を打ち消した。
「何故だね」
「連合にとっては今まで我々が惑星開発に関して積極的でなかった方が不思議なようです」
「そうなのか」
「ええ。連合の歴史とはそのまま惑星開発、開拓の歴史でした」
「うむ」
「その観点から見ると。我々の動きは非常にゆっくりとしたもので

あるようです」
「時間の概念の違いだろうか、いつもの」
「確かにそれもあるでしょうが」
彼女はそれも認めた。
「我々の人口を考えますと。やはり不自然なようです」
「人口といっても我々は連合の十分の一以下だぞ」
「連合全体で見ればそうですね」
「全体というと」
「彼等は国の集まりですから。彼等から見ればマウリアは非常に大きな国です」
「国か」
「連合にあるどの国よりも。彼等はそう見ています」
「そういえば彼等はそれぞれの国への所属意識が大きいのだったな」
「はい」
「連合そのものに対するより。それでか」
「これでおわかりでしょうか」
「うむ。それでは確かに我々は連合のどの国よりも大きい。人口も領域も産業もな」
「そういうことです。彼等は我々のことを人類で最大の国家と言っております」
「そこまで大きいつもりはないがな」
彼はそう言って苦笑した。
「しかし彼等はそう見ています」
「彼等がそう見るのが問題なのか」
「人間ものを見るのには絶対に主観が入るものですから」
「それでもな」
「何はともあれ援助は受けるにこしたことはないですが」
「それはわかっている」
援助に関してはもう受けることを前提としていた。
「それでいこう」

「はい」
「不安ではあるが」
「それではその不安を取り除いたら如何でしょうか」
「というと。どうしてそうするのかね」
「その技術がどういったものかお知りになればいいと思うのですが」
「そうか」
「それでどうでしょうか」
「そうだな。それが一番いいか」
彼はそれに頷いた。
「それではそうしよう。連合の惑星開発に関する技術について調べよう」
「わかりました」
「期待できるものであればいいがな」
「はい」
「ところで話を変えたいが」
「何でしょうか」
クリシュナータが話題を変えにかかるのを見てエルールもその目の色を少し変えた。
「君は八条国防長官と交渉したのだったな」
「はい」
「どの様な人物だったか。噂では若いながらかなりの切れ者だというが」
「その通りです」
彼女はそれに頷いた。
「落ち着いて冷静な方です。それに」
「それに？」
「もう一つの噂通りに。お綺麗な方でした」
「美男子か」
「ええ。マウリアでも俳優として通用する程ですね」
「それを聞いて嫉妬を覚えてしまったよ」

クリシュナータはその整った彫の深い顔を少し苦いものにさせて笑った。
「男としてね。彼の顔は写真で何度か見たことはあるが確かにいい顔をしているからな」
「写真で見るよりずっと綺麗でしたよ」
「モニターでもか」
「はい。直接御会いしたらどんなものか。それを思うと楽しみですね」
「やれやれ。まるでアイドルだな」
苦笑したまま言う。
「私はアイドルには詳しくはないのだが。彼に関しては詳しくなりたくなったな」
「あら、お詳しくなかったのですか」
「彼に関してはな」
「いえ、アイドルに」
見ればエルールは悪戯っぽく笑っていた。
「この前テレビを御覧になられてましたね」
「ああ」
「その時アイドルグループばかり見ておられたではありませんか」
「気付いていたのか」
「勿論ですよ。わからないとでも思ったのですか」
「そうだが。わかっていたのだな」
「ええ。最近はどのアイドルがお好きですか」
「実はこれといったグループはいないんだ」
「そうでしたか」
「昔は大勢いたのだがな。これも歳か」
「その御覧になられていたグループはどうでしたか」
「丁度興味を持ちはじめたところかな」
首を傾げて考えながらそう述べた。
「新しく売り出し中のグループだったな」

「はい」
どうやらマウリアでも連合やエウロパと同じようにアイドルというものがあり人気を集めているらしい。これはどの国でも変わらないということか。
「これからどうなるか。楽しみだ」
「そうですか。では是非注目していて下さい」
「何か楽しそうだな、やけに」
「実はあの娘達と知り合いでして」
「ほう」
「テレビでの討論番組へ出演する時に会ったのですよ。そして知り合いになりました」
「面白い縁だな」
「ええ。いい娘達でしたよ。明るくて礼儀正しくて」
「それは何よりだ」
「今度御会いになられたらどうですか、閣下も」
「時間がないからな」
また苦笑いを浮かべた。
「とりあえずはテレビで我慢させてもらおう。また何かあったら教えてくれ」
「わかりました」
こうしてクリシュナータとエルールの話は終わった。マウリアもまたマウリアで動いていたのであった。

## 第十三部第五章　嵐が来たりてその五

その特使はサハラを通過した。その際シャイターンのティムールも通過していた。そしてモントローズ要塞を越えてエウロパに入ったのであった。

それは当然ながらシャイターンの許可を得たものであった。彼はその特使達を黙って通過させたのであった。その際の見返りは全く要求せず受け取りもしなかった。

「主席」

官邸に一人の軍人が入って来た。そしてシャイターンの前に姿を現わした。

「何だ」

彼はこの時食事を摂っていた。その後ろを仮面を被った六人の将校達に守られながら。テーブルの上にみらびやかに並べられた料理を口にしながらその軍人に声をかけてきた。

「失礼、御食事中でしたか」

彼はそれを見て引き下がろうとする。

「待て」

しかしシャイターンはそれを制止した。

「話があるのだな。いい、聞こう」

「宜しいのですか」

「構わない。そして話とは何だ」

「マウリアの特使のことですか」

「あれか」

彼はそれを聞いて目を少し動かした。

「あれがどうしたのだ」

「只今モントローズを通り抜けエウロパに入りました」

「そうか」

彼はそれを聞いて頷いた。肉を口にする。羊の肉を焼き香辛料で

味付けしたものだ。今テーブルにある料理の中ではかなりシンプルなものであった。
　ナイフで押さえフォークで切ると肉汁が溢れ出る。それを口に入れる。羊の旨味と香辛料の辛みが口の中を支配する。シャイターンは味わった後でまた彼に対して言った。
「途中何のトラブルもなかったか」
「はい」
　彼はそれに頷いた。
「何もありませんでした。彼等は順調にエウロパ領に入りました」
「それは何よりだ」
「ただ、一つ気になることがありました」
「何だ」
「どうやら彼等は我が国の航路をかなり詳しく知っているようなのです」
「それは軍事用もか」
「はい」
　軍人はシャイターンの問いに答えた。
「その証拠にどの航路を通ってよいか聞かれまして。その際名前まで呼んでいました」
「そこまでか」
「彼等の演出でしょうか。それだけ我が国の事を知っているという」
「だろうな」
　シャイターンはその言葉に頷いた。
　サハラでは航路等は公表していない。戦乱が続くこの地域においてはそれはすぐに他国に利用される恐れがあるからである。これは当然ながらティムールも同じである。
　しかしマウリアはそれを知っていた。しかも航路の名前まで。彼はそれを聞いてあらためてその目の色を険しくさせたのであった。
「如何為されますか」
「消してはどうか、ということか」

「閣下がそれを望まれるのなら」
軍人はそう述べた。
「どうされますか」
「よい」
だが彼はそれには首を縦に振らなかった。
「その特使を消したところで航路のことが消えるわけでもない」
「では宜しいのですね」
「うむ。ただし気をつけておかねばならないことがある」
「それは」
「その情報がハサンやオムダーマンに漏れてはいないだろうな」
「そこまではわかりませんが」
「漏れていれば脅威だぞ。それはわかるな」
「はい」
「事前に作戦計画を立てられる怖れもあるからな」
「それはわかっております」
彼はそう答えた。今までのオムダーマンやティムールの快進撃を支えたのはこれであった。事前に情報部が平時からその国に潜入し、情報を収集する。そして航路を割り出しそれを参謀本部に渡す。参謀本部はそれに基づき作戦を立案する。こうして彼等は作戦を立て、戦争を行ってきたのだ。アッディーンやシャイターンの武勲の影にはこうした多くの情報部員達の活躍があったのである。これはサハラの歴史においてはどの国もやっていることではあるが。

## 第十三部第五章　嵐が来たりてその六

「それは避けたい。もっとも既にこの国にもハサンやオムダーマンの者達が入って来ているだろうがな」
「では」
「そう。そして今一人見つかった」
「それは」
「誰か知りたいか」
シャイターンの目の色が変わった。何か企むような目になっていた。
「閣下さえ宜しければ」
「わかった。では教えてやろう」
その言葉に笑みが含まれた。
「それは貴官だ」
彼がそう言った瞬間後ろにいる仮面の将校の一人が動いた。懐からビームガンを取り出し射撃する。次の瞬間に軍人は額を撃ち抜かれた。そしてその場に倒れ込んで事切れてしまったのであった。
「貴官のことは知っていた」
シャイターンは瞳孔を開いたまま横たわるその軍人を見下ろしながら冷たい声でそう述べた。
「ハサンからわざわざ御苦労だったな。だがそれも無駄な努力に終わった」
ワインを飲みながらそう語る。
「後はゆっくり休むがいい。土の下でな」
ムスリムは土葬である。それを意識しての言葉であった。
「葬ってやれ、丁重にな」
後ろに控える将校達にそう言う。
「アッラーの僕としてな。よいな」
彼等は一言も発さずにそれに頷く。話は充分伝わっていたのであ

った。
　そしてこのスパイはシャイターンの言葉通り官邸から運び出され丁重に葬られた。彼はその話を食事の後の執務室において聞いた。この時は仕事をしていたがそれを聞いて手を止めた。
「そうか」
「ですが重大な問題ですな」
　傍らにいたハラーイブがそう述べる。
「まさかハサンの者がこの官邸にまで出入りしていたとは」
「特に驚くことはない」
　だがシャイターンはそれに対しても冷静であった。
「よくあることだ。昔からな」
　確かにスパイがその国の奥深く二まで入り込むのはよくあることであった。今まで多くの国でそういうことがあった。中にはその国の高官を買収する等してスパイに仕立て上げた例もあるのである。
「言い換えれば我が国もやっている」
「そうでしたな」
　ハルシークはそれを受けてニヤリと笑った。
「それも彼等以上に」
「そういうことだ。だが意外なことだったな」
「といいますと」
「ハサンがやってくるとはな。オムダーマンなら有り得ると思っていたが」
「オムダーマンがですか」
「違うのか」
「はい。アッディーン元帥はそのような人物ではないと思いますが」
「彼ではない。あの国の外務省や諜報部だ」
「そちらですか」
「彼等は信用が置けない。何をしてくるかわからない」
　そう語るその目が光った。
「現に今までも何人か怪しい輩がいたな」

「はい」
「そう思ったらいつも消える。逃げ足が速い」
「だからこそ優れたスパイなのでしょうが」
「我がシャイターン家の使用人の中にも怪しい者がいたことがある」
「主席のお側にまで」
「そうだ。メイドの一人がな。フラームが何かおかしいと私に言って来たのだ」
「フラーム様がですか」
「フラームもあれで勘がいいからな。何かを察したのだろう」
「左様でしたか」
「そう私に言った翌日にはもう姿を消していた。小柄な少女だったが」
「少女でしたか」
「外見はな。中身はわかったものではない」
　こうしたことはよくあることである。変装している場合もあれば実際の年齢より若く見られたり老けて見られたりする者もいる。個人差と言えばそれまでだがそれを利用することも可能なのだ。
「人間は外からだけではわかりはしない。その中身ですらわからないことが多いしな」
「はい」
「全てを知られているのはアッラーのみだ。その当人ですらわからない時もある」
「まことに」
「そんなものだ。あのメイドも本当に少女であったかどうか疑わしい」
「他にも怪しい者はいますか」
「今はいない」
　シャイターンはそれには首を横に振った。
「だがこれからはわからない。これまで以上に身の周りには気をつけよう」

「そうされた方が宜しいかと」
「もっとも」
彼はここで悪魔的な笑みを浮かべた。端整なその顔に暗い影が指した。

## 第十三部第五章　嵐が来たりてその七

「私を害することができる者なぞこの世にはいないのだがな。アッラーに運命を託された私が」
「はい」
「私に対して何かをできるのはアッラーのみ。アッラー以外には存在しないのだ」
「その通りです」
「このサハラもまたアッラーが委ねて下さる。その為には」
「全てが許される」
「うむ」
彼は悪魔的な笑みをたたえ続けていた。ハルシークもその笑みを前にして笑っていた。それはまるでキリスト教世界の伏魔殿にいる魔王とその僕の様であった。
「そうか、勘付かれたか」
「はい」
オムダーマン外相アッバースは外務省の暗室にいた。そこで何者かと話をしていた。
「思いの他早かったな」
「申し訳ありません」
「いや、いい」
彼は椅子に座ってその者と話をしていた。その者は彼の前に立っている。その姿は暗室の中なので見ることはできない。だが声から女性であることはわかる。
「こうして戻ってきてくれただけでな。元々あの男の側にまで潜り込ませるという方が大胆過ぎた」
「そうなのですか」
「私も一度躊躇ったがな。だが賭けたのだ」
「成功するかどうか」

「そうだ。だがやはり危険だったな。早く帰ってきて正解だった」
「有り難うございます」
「だが情報は手に入ったのだな」
「はい」
その者は頷いた。
「あの男のことや家のことも。どうだ」
「ある程度はわかりました」
「それは何よりだ」
彼はそれを聞いて声だけで笑った。
「それでは後でその話をじっくりと聞かせてもらおう」
「はい」
「今は休んでくれ。御苦労だった」
「わかりました」
その者は一礼してその場から消えた。アッバースはそれを見届けた後で目の前に置かれているコーヒーを手に取った。それを飲み一服した。
「ふうう」
「今回も逃げる羽目になったようですな」
「貴方ですか」
「はい」
闇の中から一人の男が姿を現わした。オムダーマン軍特殊部隊のハルヴィシーであった。
「彼女ですら」
「彼女のことを知っていましたか」
「勿論ですよ」
ハルヴィシーは笑ってアッバースに対してそう答えた。
「前に声をかけたことがありますから」
「おやおや。それでどうでした？」
「いやあ、駄目でした」
彼は特に残念そうな素振りもなくあっけらかんとしてそう答えた。

「婚約者がいるとかで。もう結婚しているのでしょうか」
「年齢的にはそういうものを既に越えていますが」
「それでもまだですか」
「今回の仕事が終わってから式を挙げるつもりのようですが。詳しいことはわかりません」
「そうでしたか」
「しかし閣下も御目が高い。彼女のよさがわかりましたか」
「私は女性の趣味には自信がありまして」
楽しげにそう語る。彼も今までの功績を評価されて将官になっていたのである。だから閣下と呼ばれたのだ。
「美人を見る目はありますよ。後はワインも」
「それはいい。それでは今度飲みますか」
「時間があればね。しかしティムールは中々尻尾を掴ませませんね」
「こちらはかなり掴まれているようですけれどね」
アッバースは苦い顔になった。
「どうやらかなりの数の諜報員、工作員がオムダーマンに潜入しているようですし」
「それはこちらも調査中です」
ハルヴィシーも考える顔でそう述べた。
「ですが尻尾を掴みそうになったら逃げられる。それの繰り返しです」
「そちらもですか」
「ええ。まるで鰻の様です。いや、鰻よりも性質が悪い」
「鰻よりも」
ここで彼等が言っているのは普通の鰻ではない。サハラの多くの地域に生息する吸血鰻である。ヤツメウナギの仲間で川や海にいる生物の血を吸って生きているのである。ヤツメウナギと同じ位の大きさだがその動きはもっと速い。そして捕まえにくいのだ。泳いでいる人が襲われて血を吸われることも多い。サハラの多くの星系においては厄介者として嫌われている。

「血こそは吸いませんがね。それでも情報を吸っているから同じですか」
「国家の血を吸っているのと同じですよ」
アッバースはこう言った。
「それも相手のね。もっとも我々もそれは同じですが」
「では私も外相も鰻になりますね」
「まあそうでしょうね」
彼はそれを聞いても特に悪びれもせずそう返した。
「結局は同じ穴の狢ということでしょうか」
「ですな」
ハルヴィシーはそれを聞いて面白そうに笑った。

## 第十三部第五章　嵐が来たりてその八

「鰻同士で争っているということになります」
「それぞれの縄張りの中で」
「しかも互いに知らぬ顔をして」
それもまた政治というものであった。表ではにこやかに笑って握手をしていても裏では蹴り合いをする。そして互いに知らない振りをする。オムダーマンとティムールもそれは同じであった。表面上は友好関係にあってもである。
「ただ、ティムールは思いの他こうしたことに関して長けていますね」
「それはそうでしょう」
アッバースの溜息混じりの言葉にハルヴィシーは当然のようにそう述べた。
「シャイターン家ですから」
「シャイターン家だからですか」
「ええ。彼等は今まで多くの謀略でここまでなりました」
「噂の域を出てはいませんがね」
「そう、あくまで噂に過ぎませんが」
噂は大抵が根拠のないものである。だが中には真実もある。シャイターン家に関する噂はその多くが根拠こそないものの真実に極めて近いものであるのはサハラではもう常識となっていた。
「ですが有り得ることです」
「ですな」
アッバースもそれはわかっていた。それに頷いた。
「彼等ならね」
「シャイターン家なら」
「そういうことですな」
「はい」

それから頷き合った。
目的の為には手段を選ばず、最も有効と思われる方法を躊躇することなく選ぶ。全ては合理的な判断と現実性有効だけを考える。原因や結果も頭の中に入れ、犯罪なども構わない。それがシャイターン家であった。魔王の家とも言われていた。
「我々に対しても牙を剥くのですからな」
「どのみちいずれは表立ってそうしてくるでしょうな」
ハルヴィシーはいつもの軽い雰囲気を消してそう述べた。
「我々だけがこのサハラに残ったならば」
「そうなるでしょうな」
アッバースはこれもわかていた。
「昔の中国の言葉ですが」
「はい」
「天下に二日なし、です。王はその国に一人しか必要ないという言葉です」
「何処でも同じですね、それは」
「かってはそれにより中国では争いが耐えませんでした。王朝が衰えた時の内乱といい」
「平和な時でも宮廷における皇族同士の争いといい」
「そういうことです」
漢代の呂后という人物がいた。彼は高祖劉邦の正妻であり皇后であったがこの劉邦という人物はよくある話であるが好色であった。世の中に女好きでない男がいれば同性愛者だからこれは当然であったがここで一つの問題があった。
彼は皇帝であった。そして次の皇帝を選ぶことができた。次の皇帝には呂后の子がなる予定であった。しかし予定は予定である。劉邦の気分一つで変わるものなのだ。そして変わる要素があった。
劉邦の寵愛を得た妃の一人に威夫人がいた。劉邦は彼女との間の子を次の皇帝にしようと考えたのである。その子を如意といった。そして威夫人もそれを望んだ。だが呂后はそれを阻止せんとした。

漢王朝を作り上げた多くの重臣達と語らい何とか我が子を皇帝とした。恵帝である。
これで話は終わりではなかった。呂后は執念深い女性であった。威夫人も如意も殺そうとした。しかしそれを我が子である皇帝が阻んだ。彼は如意を常に側に置き守った。だが彼女は一瞬の隙を衝き如意を毒殺し威夫人を人豚とした。
人豚、この名を聞いて恐れぬ者はいないだろう。両手両脚を切り取り目をくり抜き、耳を潰して口も破壊して話せないようにしたものだ。そして当時厠となっていた豚小屋に放り込む。かっては絶世の美女と言われた威夫人はこうして無残な最期を遂げた。
これが呂后の恐ろしさであった。彼女は女性の極めて悪い部分が極端に出ていた女性であった。嫉妬、憎悪。人間ならば逃れられないこの負の感情が出ていた。ただし彼女の弁護をするならば彼女が君臨していた時代は宮廷はそうした陰謀と流血で満ちていたが世の中は平和であった。司馬遷の史記にはそうある。これは唐代の恐るべき女傑であり彼女と同じく敵を惨たらしいやり方で処刑した則天武后も同じである。彼女も中国の長い歴史で唯一の女帝となるまでに、そしてなってからも多くの人物を殺していたがその治世は戦乱も少なく平和であった。また民には寛容な人物であった。宮廷と世の中はまた別の世界なのである。
それにこうした話は何も中国だけではない。欧州でもよくあった話であった。イギリスのロンドン塔では玉座を争った結果暗殺された少年王とその弟の亡霊が出るという話があった。フランスの鉄仮面はその正体はルイ十四世の兄弟ではないか、という説がある。これはこの時代でも詳しいことはわかっていない。人類の歴史のミステリーの一つとされている。
とりわけバチカンではそうであった。教皇の座は一つ、その一つの座を巡って長い間恐ろしい陰惨な戦いが聖なる場において行われてきた。神の救いも祈りもそこにはなかった。あるのは権力と富への執念だけであった。バチカンこそはこの世で最も陰惨な権力闘争

が行われてきた場所であるかも知れないのだ。
サハラもそれは同じである。それで消え去った国も多い。内乱で国力を衰退させそこを敵国につけ込まれるのだ。こうして多くの国が滅んでいるが結局人間というものはわからないものなのである。
「その一つの座を巡って争われてきましたな」
「それは国も同じ」
「はい」
ハルヴィシーは頷いた。
「このサハラにあるべき国は本来一つです」
「アッラーの選ばれる国は」
ウマイア朝を最後にアラブを統一した国はなかった。統一は彼等の願いであったがそうはいかなかったのだ。アッバース朝もサラディンもオスマン＝トルコもそれはできなかった。そして今も。だがようやくそれを達成できそうな国が現われようとしていたのだ。その中の一つが彼等の国オムダーマンであった。
「ただ、向こうもそれは同じでしょう」
「でしょうね」
「どちらが生き残るか」
「いずれわかることです」
「はい」
彼等も話を終えた。アッバースは自身の本来の執務室に戻りハルヴィシーは何処かへ姿を消した。彼等は先の先にある戦いも見ていたのだ。
それはアッディーンも同じであった。彼はこの時訓練に従事していた。

## 第十三部第五章　嵐が来たりてその九

首都アスランから少し離れた場所において艦隊戦の訓練を行っていた。それは実際に攻撃こそ行わないものの本物の戦闘と何ら変わることのない激しいものであった。
「いかんな」
彼は一方の艦隊の動きを見てそう言った。
「あの部隊の動きが悪い」
そう言ってモニターに映る部隊の一つを指差した。
「私の言葉で注意を出しておくように」
「わかりました」
それにシンダントが頷いた。
「それではそのように伝えておきます」
「うむ」
アッディーンはそれを認めた。そしてまたモニターを見た。
「見ればその部隊だけではないな」
「といいますと」
傍らにいるムラーフが彼に問うた。彼はアリーの艦長から一軍の将にまでなっていた。今では大将として艦隊を率いる立場となっていた。
「全体的にだ。今一つ動きが鈍いとは思わないか」
「そうでしょうか」
「貴官はそう思わないのか」
「はい。取り立ててそうは思いませんが」
「そうか」
「言うならば暫く戦いから離れていますから」
「そうだったな」
アッディーンはそれを聞いて考える顔になった。
「それもあるか」

「それに今回の訓練は新兵も多いですし」
「うむ」
「仕方無い部分もあります。まだ入りたてですから」
「そうだったのか」
「まあすぐに慣れます。その為の訓練でありますし」
これは甘いようで正論であると言えた。
「落ち着いて見ていきましょう、今回は」
「そうしていいか」
「はい。それに御覧下さい」
「むっ」
ムラーフが指差した部分を見た。見ればそこは先程アッディーンが動きが悪いと指摘した部隊であった。
「彼等にしろ少しずつですが動きがよくなっております」
「確かに。私が注意しただけではないようだな」
それだけで動きがすぐによくなるわけはなかった。やはり訓練によりよくなっていくのである。それは少しずつだが確実に表われてくる。その部隊もそうであった。
「鍛えていけばいいです、焦らずに」
「うむ」
「焦るとろくなことはありません。まあ気長にいきましょう」
「今はそれでもいいか」
アッディーンは納得することにした。確かに急に戦争になる気配もなかった。今は訓練に専念してもいい。ならばじっくりやることにした。
「ではここはあまり言わないでおこう」
「はい」
「じっくり見せてもらうとするか。将兵の成長を」
そう言って見守ることにした。見ればムラーフの言葉通り彼等の動きは次第によくなってきていた。訓練が進むにつれ。アッディーンはそれを見て少しであるが嬉しさを感じていた。

とりあえずその日の訓練は終わった。各艦隊はそれぞれの場所に集結して休息をとっていた。アッディーンの乗るアリーもまた休息に入っていた。彼はそこでバヤズィトにあることを尋ねていた。
「アスランについてどう思うか」
「アスランですか」
彼は首都アスランについて聞かれその目を動かした。
「そうだ。オムダーマンの領域はかなり広くなってきた」
「はい」
「それを考えるとアスランはかなり西に偏りすぎてはいないだろうか」
「そう言われますと」
それはバヤズィトも頷くしかなかった。後方参謀として補給については詳しい。確かに今のままだと東に出撃する際には距離の問題で色々と苦労がある。距離はそのまま足枷になるのである。
「今でもかなりネックになってはいないか。東に進む時には」
「否定はしません」
バヤズィトはそれに答えた。
「ハサンからは離れ過ぎているように思われます」
「そうだな」
「今後、少なくともハサンとの戦いの後は考慮すべき点であると思われます」
「他にいい場所があればいいのだがな」
彼等はこの時単に軍事的な見解から拠点を選んでいただけである。だがこれが大きな流れとなる。サハラ全体を変えてしまうような。
「それも大統領にお話されてはどうでしょう」
「ううむ」
しかしアッディーンはそれには首を縦に振れなかった。
「我々はあくまで軍事的な見解から話をしている」
「はい」
「政治的、経済的にはどうかと思ってな。政治はともかく経済的に

は話が違うかもしれない。私も経済は最近勉強をはじめたのだが」
「そうだったのですか」
「経済もな、かなり厄介なものだ」
彼は困ったような顔をしてそう述べた。
「よく生き物と言われるな」
「はい」
「そういうことだ。常に動いている。何が何だかわからに部分もある。それに予測がつけづらい」
「難しいとは聞いていましたが」
「経済の専門家は何人もいるが完全にわかっている者は滅多にいないというしな」
彼はいささかシニカルにそう述べた。
「今までその予測通りにこれからの経済を見越した者はそうはいない。歴史に何人いるか」
「少なくとも共産主義は外しましたし」
「経済は宗教ではないしな」
「それはわかります」
「人だけで完全にコントロールできるものではない。かなりの部分がアッラーの御手に委ねられているのだ」
「かなりの部分が」
「そうだな。アダム＝スミスだったか」
初期の資本主義経済について言及したイギリスの経済学者である。国富論が有名である。

## 第十三部第五章　嵐が来たりてその十

「まだ彼の方がマルクスより経済をわかっていたのではないのか、そう思える」
「はあ」
「まあある程度マルクスの思想も資本主義に入ってはいるがな。もっとも今更資本主義云々言うイデオロギーなぞ無意味なものだが」
「それもそうですが」
　経済のイデオロギーなぞ二十世紀の遺物であった。ソ連の崩壊により終わった。経済は宗教ではなく、完全無欠な経済理論なぞこの世には存在しないのだということの証明となった。双方がわかっていない者もこの時代にもいるにはいるが。日本では二十一世紀中頃までそうした輩が存在した。日本の経済学は化石とまで言われていた。マルクスやケインズから全く進歩していなかったからだ。日本では経済学で国際的な賞を受賞した学者は長い間生まれなかった。それが日本の経済学の実態であった。
「しかし、案外地理的なものが影響するものだな、経済というものは」
「そうなのですか」
「それも今後考えていかなければな。副大統領になってから経済まで勉強するとは思わなかった」
「そういうものですよ」
　バヤズィトはそう答えた。
「地位が上がるとそれだけ知ることも増えます」
「ああ」
「同時に学ばなければならないことも。閣下も少尉の時と元帥の時では権限がまるで違いますね」
「幾ら何でも全く違うがな」
「それです。そして知るべきものも多い」

「うむ」
「それならば学べきものも多くなるのも道理です。さもなければやっていけません」
「そういうものか」
「はい」
「だがその心配はもうないな」
彼はここで笑ってそう言った。
「といいますと」
「私はここで終わりだ。副大統領でな」
彼は特にそうした野心はなかった。政治家に転身しようというつもりもなかった。軍人として終わるつもりであったのだ。
「退役したらどうするかまではまだ考えてはいないが」
「それで終わりだと思われますか？」
「というと」
その言葉に顔を向けた。
「閣下はまだお若い。これからどうなるかわかったものではありませんよ」
「これからか」
「アッラーの思し召し次第で。もっともそれは人縁ごときがわかる筈もないものですが」
「私が大統領にでもなるというのか？」
笑ってそれを否定しようとした。
「まさか」
「もっと上から知れませんよ」
「そこまでいくと何なのかわからないな」
また笑った。
「何が何だか」
「まあ今は副大統領としてお話しましょう」
「うむ」
「これからのことなぞ本当にアッラー以外には知り得ないことです

から」
「そうだな」
イスラムにおいては全てをアッラーが司っている。キリスト教やユダヤ教のヤハウェよりも無謬であり、絶対的な存在であるのだ。同じ神であるがその力はまるで違っていると解釈されているのだ。
「では副大統領閣下」
「うむ」
アッディーンはそれに応えた。
「本日の訓練の費用ですが」
「どうなっているか」
確かに地位が上がればそれだけ知らなければならないことが増えるのは本当のことであった。アッディーンは今今日の訓練に費やされた費用についての報告を受けていた。軍隊というものはその存在だけで金がかかるものである。経済においても維持費と減価償却費があるがそれもまた軍隊において適用されているのである。これは殆どの世界で同じことであった。
二人はそれについての話をしていた。それは順調に進んだ。そして次の日に備えるのであった。

## 第十三部第五章　嵐が来たりてその十一

彼等の訓練は数日に渡って続いた。アッディーンはその間その時間の殆どをアリーで過ごしその訓練の指揮、監督にあたっていた。その結果は彼の満足すべきものであった。

そして訓練は終わった。彼はその軍と共にオムダーマンにまで帰還した。その帰路で彼はあることを聞いた。

「それは本当か」

「はい」

それにシャルジャーが頷いた。

「先程ハルヴァシー中将から連絡がありました」

「彼からか。ではかなり確かな情報だな」

「そうだと思います」

彼もそれに応えた。

「あの男が動いたのか」

「アブサーファ」

そしてその名を口ずさんだ。

「どう動くのか」

「我々に対して動いているようではないですが」

「だが警戒するべきだな」

「はい」

シャルジャーはまた頷いた。

「彼が動いたということは間も無くあの国も動くことですから」

「今までがそうだったからな」

アッディーンはその顔を険しくさせた。その男はイブヌル＝アブサーファ。ティムール保安本部長であり大将である。シャイターンの影の懐刀として恐れられる男である。

その顔は鋭利で美しい。サハラの男の理想とも言うべき美貌の持ち主で身体も長身で引き締まっている。南方の裕福な家に生まれた

と言われているが確かなことはわからない。ふらりとシャイターンの傭兵隊に入りそこで彼の配下となった。
彼が手腕を発揮したのは謀略及び諜報活動であった。シャイターンの天才的な軍事的活躍を影で支えてきているとさえ言われている。そしてその政治的栄達も。
シャイターンは粛清を行わないと表では言われている。だがこれは誤りであった。彼はその前にその粛清すべき対象を葬ってきていたのだ。その主役が彼であった。
シャイターンの北方への来訪後、いや彼が南方において一介の傭兵隊長であった頃からその政敵は次々に謎の死を遂げてきた。朝ベッドで死んでいた、交通事故、自殺、急病、そして行方不明。彼の政敵は何故かそうした末路を辿ることが多い。反対派もだ。首謀者達がいきなり爆死したこともあった。これはその殆どがこのアブサーファの手によるものであったのだ。証拠はない。あれば今のシャイターンはいない。だが各国の情報部はわかっていたのだ。彼がやったということを。その性格は冷酷にして非常であった。部下や同僚からも心底恐れられる、そうした人物であった。
「そして何処に目を向けているのだ」
「東方に」
シャルジャーは答えた。
「東にか」
「おそらくは枝を先に攻めるのかと」
「枝を」
ハサンには多くの属国が存在する。そのことを言っているのだ。
「ではこれからあちらの国々で何かと起こるな」
「多分」
「それは彼等で何とかするしかないか」
「そうですね。それは彼等で何とかするしかありません。我々ではどうしようもありません」
「できると思うか」

「それは」
だがシャルジャーはそれには懐疑的であった。
「無理だと思います」
「あの男が相手ではな。そうだろうな」
「ですが本格的な動きはまだ先のようです」
「そうなのか」
「最後の調整に入っているとの情報もありますから」
「詰め、か」
「はい。やはり事前に色々と動いているようです」
「ふむ」
「どちらにしろいずれは戦争が起こるかと」
「我々も用意しておいた方がいいな」
「はい」
「ハサンだな、次は」
「ハサンですか」
「ティムールとは今は同盟関係にある」
アッディーンは言った。その証拠が彼の妻マルヤムであった。
「とりあえずは戦争にはならない」
「表立っては」
「そうだな。あくまで表立っては、だが」
彼も外交部や諜報部のことはわかっていた。耳にも入っている。だからこそこう言えたのであった。裏では互いに相当のことをしていた。
「ハサンの情報は集まっているか」
「はい」
シャルジャーはそれに頷いた。
「かなりのものが。どうされますか」
「更なる情報収集を」
彼は言った。
「まだ時ではない。それまではこちらも準備を整えておこう」

「わかりました」
「ハサンはサハラ第一の大国だ。用心するにこしたことはない」
「ハッ」
「万全を期したい。よいな」
「わかりました。それでは」
シャルジャーは敬礼した。そしてすぐに諜報部にそう伝えるのであった。
サハラも水面下ではあるが動こうとしていた。だがまだそれは水面上には出てはいなかった。戦乱は宇宙の別の場所で起こっていたのである。

## 第十三部第五章　嵐が来たりてその十二

クロノス星域。今ここでエウロパ軍がその主力を集結させて連合軍を待ち受けていた。
「敵はまだか」
前線にいる指揮官の一人ジェラール元帥が部下にそう問うた。彼はニーベルングでの戦い以後エウロパ各地を転戦しここにまで辿り着いたのであった。思えば敗戦の連続であった。その顔にはその敗戦による疲れが色濃く出ていた。
「まだです」
部下はそれに答えた。
「ですがもうかなり近くにまでいると思われます」
「そうか」
ジェラールはそれを聞いて頷いた。
「では全軍に伝えておけ」
「何と」
「攻撃用意だ。いいな」
「わかりました」
部下はそれに頷いた。そしてオペレーターに対して言った。
「全艦隊に伝えよ」
「何とでしょうか」
この艦にいるオペレーターは女性であった。見れば艦長も女性である。艦長もその部下に問うてきた。
「全艦隊への御指示でしょうか」
「そうだ」
それにジェラールが答えた。
「いいか」
「わかりました。それでは」
その女性艦長はそれを聞いて頷いた。そのうえで返礼した。

「オペレーター」
「はい」
女性オペレーターは艦長の指示に頷いた。
「閣下の御言葉通りに」
「わかりました」
オペレーターは頷いた。そして口元にあるマイクのスイッチを入れた。
「宜しくお願いします」
「うむ」
ジェラールは頷いた。そして部下に対して言った。
「いいぞ」
「わかりました」
その部下は応えた。そしてオペレーターに対して言った。
「全艦隊に告ぐ」
「全艦隊に告ぐ」
オペレーターは復唱した。
「第一種攻撃用意」
「第一種攻撃用意」
「これで宜しいでしょうか」
部下は伝え終わるとジェラールに顔を向けてそう問うてきた。ジェラールはそれに頷いてこう言った。
「これでよい」
「わかりました」
「しかしまだレーダー等には反応はありませんな」
罰の部下がこう言った。
「そろそろだとは思うのですが」
「既に彼等は我々を察知しているだろうがな」
ジェラールはその部下に対してこう言った。
「というと」
「電子機器も彼等の方が上だ」

そしてこう述べた。
「レーダーもだ」
「電波を受けたとの連絡は入っておりませんが」
「性能差があるとそれを気付かせないことも可能だ」
艦長にもそう答えた。
「では我々は自分達より遥かに目の効く相手と戦っているということになるのですか」
「それは今までの戦いでわかっている筈だが」
「確かに」
それには頷くしかなかった。艦橋にいた全ての者がそれに頷いた。
「だからこそだ。もう準備は整えておいた方がいい」
「ハッ」
部下達はそれに敬礼した。そしてそれぞれの配置に着いたのであった。
攻撃用意を命令したのはジェラールだけではなかった。他の前線指揮官達もである。彼等は今までの連合との経験でわかっていたのである。彼等の電子機器、そして偵察能力の高さを。だからこそもう備えていたのだ。
「よくわかっているようだな」
シュヴァルツブルグはそれを見てこう言った。
「何よりだ」
「ですが油断はできません」
それに対して傍らにいるローズがこう言った。
「彼等には今まで散々煮え湯を飲まされてきましたから」
それは厳しい声であった。そして憔悴も感じられた。
「わかっている」
シュヴァルツブルグはそれに頷いた。
「その結果が今だ」
「はい」
「このクロノスにまで追い詰められるとはな。エウロパ軍も落ちた

ものだ」
「まだ落ちてはいないかと」
だがローズはそれに反論した。

## 第十三部第五章　嵐が来たりてその十三

「落ちてはいないか」
「はい。我が軍は確かに敗戦続きで疲れが見えます」
それはもう誰にも否定しようがなかった。
「そして損害も無視できないものです。ですが多くの将兵が今だ健在です」
「士気もだな」
「はい。まだ落ちてはおりません。我等が大地に落ちる時は」
「エウロパの崩壊だな」
ローズはその言葉に無言で頷いた。
「軍の敗北はそのまま国家の滅亡に繋がるか」
「はい」
「そうだな。だからこそ我々は敗れるわけにはいかない」
「だからこそここにテューポーンを持って来ました」
「あの怪物にも」
そう言いながら席を立つ。話しながらその背をローズに向けていた。
「思う存分働いてもらおうか」
「はい」
ローズに顔を向けてそう言った。そしてローズはそれに応えた。
「勿論です」
「蛇達はどうなっている」
「腹を空かせております」
テューポーンの外見はかなり異様なものである。巨大なだけではなくその両脚は蛇の下半身であり身体中に羽根が生えている。そしてその肩からは百匹の蛇が蠢いているのである。将にギリシア神話最大最凶の怪物であった。一度は天空の神であるゼウスを破ったのも道理である強さであった。

「ならばよい」
シュヴァルツブルグはその強さを知っているかのように頷いた。そして顔を窓の外に向けた。そこには無限の星の大海が広がっている。
「連合の大軍をゼウスとするならば」
「はい」
「飲み込んでくれる筈だ」
「ゼウスですか」
「そうだ。それがどうした？」
「ゼウスは我が軍の神ですが」
「そうだったな」
彼はそう言われて沈痛な顔を作った。
「では何と呼ぶべきか」
呼ぼうにも思いつかなかった。テューポーンはそもそもが大地の母神ガイアがゼウス達を脅かす為に生んだ巨大な怪物なのでさる。考えようによっては邪神であった。そのような者が倒すとなればどのようなものかここにきてわからなくなってしまったのである。口にした本人が。
「敵とでもしましょうか」
「それが一番か」
「かと思いますが」
それでも彼等は晴れなかった。戦いは続く。だがその戦いには暗雲がまたもや漂おうとしていたのであった。二人はそれを感じずにはいられなかった。
「前方に敵影発見」
ニョルズに到着したモンサルヴァートの軍にそう報告が入った。
「その数約百個艦隊」
「速いな」
モンサルヴァートはそれを聞いて呟いた。
「連合軍は動きが鈍いと思っていたが」

「彼等は別です」
傍らに控えるプロコフィエフがそう答えた。
「艦が改造されているようですから」
「そうだったな」
それは聞いていた。モンサルヴァートはそれを聞いてあらためて頷いた。
「義勇軍か、サハラから来た」
「はい」
「皆かっては我々に敗れ去った者達ばかりだな」
「その中には閣下に滅ぼされた国の者もおりますが」
「アガデスか」
「他にも」
プロコフィエフは言った。
「多くの国から流れ着いておりますから」
「そして今はエウロパにいるか。不思議な縁だな」
「彼等の言葉ではそれこそがアッラーの導きです」
「我々の言葉ではオーディンか、それともアテナか」
プロコフィエフはそれには答えなかった。答えるかわりにゆっくりと前を指差した。

## 第十三部第五章　嵐が来たりてその十四

「答えは前にあります」
「前に」
「はい。導くのが我等の神々ならば我等の勝利となります」
「彼等が勝てば彼らの神の導きか」
「はい」
　ここでモンサルヴァートが単数であらわしたのはイスラム教が厳格な一神教であるからだ。これは彼もよく知っていることであった。
「だが一つ疑問があるな」
「それは」
「アテナはともなくオーディンは戦士の血を求める」
　表情を変えずにこう言った。
「そしてアッラーも。天国に確実に行ける者は戦死した者だけだったな」
「ジハードにより」
「そういうことだ」
　それを聞いてまた頷いた。
「どちらが勝利しても血は流れる」
「それならばそれでよいでしょう」
「それはどういうことだ」
「どれだけ血が流れても」
　その流麗な顔に凄みのある笑みが浮かんだ。いつもの知的で完璧なまでの美貌からは想像もできないものであった。
「勝てばよいのです」
「覚悟しているのか」
「何がでしょうか」
　答えはしてもその顔にある凄みは消えなかった。
「よくわかりませんが」

「ならばいい」
彼にはわかった。それ以上聞く気にはなれなかった。
「今回の戦い、卿の頭脳を借りたい」
「わかりました」
「場合によっては命もだ。よいか」
「私はエウロパの貴族です」
彼女は静かにこう言った。
「それならばエウロパの為には喜んで死をも賜りましょう」
「済まんな」
「私だけではありません」
彼女はまた言った。
「全ての者が。尊き血は何の為に流れているのでしょう」
所謂高貴なる者の義務であった。そしてその血は当然ながらモンサルヴァートにも流れていた。話を聞く彼の目にもそれが見えていた。
「そうだったな」
彼はまた頷いた。
「私もまたエウロパの為にこの血を捧げよう」
「わかりました」
そう言っている間にモンサルヴァートは腰の剣を抜いた。エウロパにおいては元帥以上はその腰に剣を帯びることを許されている。無論儀礼的なものであるが何よりもその権威を象徴するものなのだ。
その剣で自身の右腕を切った。そしてそこから流れる己が血を見詰めながら宣言した。
「私は誓おう」
その目にもまた赤いものが宿っていた。
「この戦いの勝利を。そしてオーディンに我が命を捧げることを」
そこにいた全ての者がそれに対して敬礼した。彼等は今モンサルヴァートと共にヴァルハラに向かうことを決意したのであった。
そのヴァルハラであるがかっての北欧においては天界であった。

しかしその天界というものは一つではないのだ。それぞれの天界が存在するのだ。
「アッラーのお導きだな」
義勇軍にいたグータルズは目の前に姿を現わしたエウロパ軍を見て不敵に笑っていた。
「あの時の恨みを晴らせと仰られている」
「それだけではありませんな」
部下の一人がそれに応える。
「その敵の心臓を奪い取れとまで仰っておられます」
「オリンポスか」
彼はそれを聞いてまた笑った。
「我等は内臓を食べたりはしないが」
「はい」
イスラムは元々遊牧民の影響が強い宗教である。都会の宗教、商人の宗教と呼ばれるが遊牧民の影響も受けているのである。羊が主な肉であるのはその証左である。羊は肉食文化圏で食べられてきたものだ。日本が二十世紀後半までその肉に今一つ馴染めなかったのもそれである。
だが遊牧民といってもモンゴル等とは大きく違っていたことがある。それは生物の血や内臓を食べたりはしないということである。とりわけ血については五月蝿い。
「だが今回ばかりは違うな」
グータルズはそれをわかったうえであえてこう言った。
「彼等の心臓は美味いだろうな」
「おそらくは」
その部下はそれに応えた。
「この上なく美味であるかと」
「俺は正規軍の者から心臓について聞いたことがある」
「何と」
「固いらしいな。肉としては」

「ほう」
「だが美味いらしい」
「左様ですか」
「はじめて食べるものも悪くはないだろうな」
「今回はアッラーも御許しですから」
「ああ」
彼等が見ているのは目の前の敵だけではなかった。その向こうにある宝も見ていた。そして勝利も。彼等は今複数のものを同時に見ていたのであった。

第十三部　完

２００５・１０・１

# 設定資料集九

第二部設定資料

人名篇

エレナ＝プロコフィエフ
金色の長い豊かな髪に緑の瞳を持つ絶世の美女。侯爵家の令嬢であり士官学校を主席で卒業している。エウロパ軍きっての才媛として知られその智謀はつとに有名である。

ニコライ＝ゴドゥノフ
濃い髭の大男。くすんだ金髪に灰がかった青い瞳を持っている。モンサルヴァート配下において猛将として知られている。

ホセ＝ヴァン＝マトク
提督としてはまだ若く、かなり上位の貴族の出身である。砂色の髪に藤色の瞳。防衛戦の名手である。

トーマス＝ターフェル
まだ三十代ながら多くの戦いを経ている歴戦の人物。赤い髪に茶色の瞳。

シラノ＝ジャースク
ダークブラウンの髪と瞳の美男子で漁色家である。バランスのとれた采配をとる。

ドミトリー＝ニルソン
金髪碧眼の長身の男。愛妻家であるが指揮官としてはかなり好戦的な人物である。

レナート＝アローニカ
黒い髪と瞳を持っている。パイロット出身であり、空母を使った戦術を得意としている。

ブワイフ＝サルムーン
壮年の口髭を生やした軍人。連合軍大将。トルコ出身である。

グエン＝バン＝チョム
ベトナム人。豊かな黒い髪と知的な光を持つ黒い瞳の男。痩せており頬はややこけている。一見すると学者に見えるが軍人である。連合軍技術総監。工学博士でもある。

オットー＝レイミー
カナダ人。黒に近い茶色の髪にダークブルーの瞳。逞しい身体つきをしている。連合軍技術中将であり陸上兵器の開発にあたっている。

ルチアーノ＝モナコ
エウロパの参謀。明るい人物。

オストゥール＝ハルージャ
サラーフ王国軍務大臣。その髪と髭からサラーフの銀狐と呼ばれている。

ムスタフード＝サレム
サラーフ王国首相。与党の領袖でもある。太っている。

セリム＝ハルヴィシー
オムダーマン軍特殊部隊。黄色っぽい髪にやや白い肌。痩せて鋭利な眼光の瞳を持っている。一見明るいが実は優秀。

アムル＝ウルドゥーン
ハルヴィシーの部下。いつも不真面目なふりをする上司に手を焼いている。

サルダーン
オムダーマン軍特殊部隊。

マナーム
オムダーマン軍特殊部隊。

メフメット＝シャイターン
シーア派の一派の大司教を父に持つ傭兵隊長。黒い髪を後ろに撫で付けた鋭利な顔の美男子。だが陰がある。政治にも戦略にも長けた人物であり目的の為なら手段を選ばない。女性に対しても手が早い。後にサハラの歴史に大きく関係する英雄の一人となる。生活はかなり豪奢である。

トゥース＝ハルシーク
シャイターンの参謀。鋭利な顔立ちをしておりやや小柄である。主をよくサポートしている。

東宗久
日本外相。カナダ人の血をそのルーツの一つに持っている。白めの肌を持つ長身痩躯の美男子。伊藤の愛弟子の一人でもある。

佐藤幹久
日本国防相。ラグビーで鍛えた大柄な身体を持つ。東と同じく伊藤の愛弟子である。

伊藤学
伊藤の夫。法学者であり日本の国立大学で教授を務めている。妻のよき相談相手でもある。また速筆なことでも有名である。

ハルーク家の未亡人。
サハラ北方の富豪の家の未亡人である。六十を越えていながらもまだ三十代前半にしか見えない老け込まない美貌を持っている。シャイターンは彼女を妻にしたことによりサハラ北方において揺ぎ無い力を手に入れることとなる。そして同時に彼はその美貌をも手に入れた。

地理・国家篇
ハプスブルク家
オーストリア王家。かっての神聖ローマ帝国、オーストリア＝ハンガリー帝国の皇帝家である。第一次世界大戦後皇位をなくしていたがオーストリア王家として復活した。エウロパきっての名門として知られている。

アレクサンドリア星系
サハラ北方にある星系の一つ。総督府の本拠地が置かれている。かってはサハラ星系と呼ばれていた。

ハサン王国
サハラ東方の大国。実質的にサハラで最大の国家となっている。交易等が盛んで連合とは交流が深い。

サラーフ王国
サハラ西方最大の国家でありサハラ全体でも第二の国家である。マスメディアの権力が肥大化しており、その腐敗に悩まされている。

アルフフーフ
サラーフ王国の首都星系。

ブーシル星系
ハルドゥーンの故郷。ミドハド連合の星系の一つであった。ここにハルドゥーンが潜伏していた。ここでアッディーン率いるオムダーマン軍とサラーフ軍の戦いがあった。俗に言うブーシル会戦である。

傭兵隊
サハラにおいて存在する職業の一つ。所謂雇われ兵士達である。時折その素行や士気が問題となる。戦乱が産み落とした子供の一つである。

ブワイフ共和国
サハラ北方の国家の一つ。シャイターンが来訪した。

イズライール
シャイターンの旗艦。中にはシャイターンの豪奢な私室もある。

マヤムーク王国
サハラ北方の国家の一つ。これといって特徴のない小国である。シャイターンが兵権を握る。

サンドリム連合
サハラ北方の国家の一つ。比較的地形が平坦。

エマムルド星系
サンドリム連合の星系。物資の集積地でありここでシャイターン

とモンサルヴァートが激突する。

アムド国
サハラ北方の国家の一つ。西方のサラーフとの境にある。

ズアラ星系
アムド国の星系。シャイターンとサラーフ軍が激突する。シャイターンは鮮やかな勝利を収める。

# 設定資料集十

第三部設定資料集

人物篇

ヌーフ＝ハルシメル
　黒く短い髪に四角い顔のがっしりとした体格の男。オムダーマン軍所属。空母を中心とした機動部隊を使った作戦を得意としている。

イフリート＝マトラ
　オムダーマン軍の提督。片目の勇将。

マーリク＝カーシャーン
　オムダーマン軍の提督。攻守にバランスのとれた良将。

イブン＝ラーグワート
　オムダーマン軍の提督。軍人としてはかなりの高齢であり、その実戦経験はかなり豊富である。

ハルーン＝ベニサフ
　オムダーマン軍の提督。情報戦にも長けた切れ者。

アーダム＝サリール
　オムダーマン軍の提督。勇敢で知られる猛将。

ミーカール＝ナクール
　オムダーマン軍の提督。知将であり、その眼力は確かである。

マスルール＝アルマザール
　オムダーマン軍の提督。叩き上げの人物であり堅実な采配を執る。

ジャムール＝カトラナ
　オムダーマン軍の提督。名将の誉れ高い人物である。

ムスタファ＝タルジーク
　オムダーマン軍参謀本部所属。アッディーンにサラーフの弱点を教える。

オマール＝ハルダルト
　アッディーンの秘書。しなやかな身体に白い肌、黒い髪に鳶色の瞳の美青年。

ナベツーラ
　オムダーマンとの戦闘時のサラーフ首相。マスコミの寵児であり、その作られた名誉と賄賂、卑劣な謀略の数々により首相となる。ブルドッグに似た顔に似合わないアフロ、そして極めて粗野で下品な行動をとる。政治家としての能力は皆無であり、人間としても実に卑しい。だがマスコミの受けはよく、そこでだけは素晴らしい天才となっている。サラーフの病理の集大成とも言える輩。

ホリーナム
　オムダーマン軍参謀総長。スプーンに似た顔をしており、眼鏡に出っ歯がトレードマーク。無能で卑劣、好色で無分別な男である。指揮官としてのビジョンは皆無である。だがマスコミによれば天才軍師となっている。しかも息まで臭く、人間としても最低下劣である。

ミツヤーン
　オムダーマン軍高官。軍におけるナベツーラ一派の領袖。軍人と

は思えない程醜く太った小男であり、偏執狂的な目と黄色く、脂ぎった肌を持っている。サハラ南方に生息する毒蝦蟇に似ている。旗艦の艦橋に女を連れて入り、そこで酒を飲みながら戦場の指揮を執る天才指揮官である。私腹を肥やすことが最も得意である。

後明正天皇
　若く美しい女帝であられる。黒く長い髪にまだ幼さの残る顔立ち。その伝統を受け継いだ非常に気品のある方である。

トクン
　醜く太り、重い瞼を持つ男。ナベツーラ一派であり福祉を食い物にしている似非慈善家である。ナベツーラの狂信者。

テリーム
　ガチャ目でスキンヘッドの小男。マスコミによれば正義を愛する毒舌家となっている。その実態はただ自分に反対する者達を罵倒することだけが取り柄の狂人である。ナベツーラの飼い犬。

エジリーム
　薄く、汚い髪と疣だらけの顔を持つ。サラーフのマスコミの頂点に立ち、ナベツーラの提灯記事を書いている。

ハラス
　サラーフ軍の司令官。落ち着いた有能な軍人であるがナベツーラ一派の卑劣な行動の数々により敗北に追い込まれる。

グルド＝スマラ
　ハラスの部下でありサラーフ軍きっての良識派である。

キヨハーム

ナベツーラ一派のサラーフ軍人。作られた筋肉を持つ獰悪な顔の男で極めて粗暴。犯罪者と全く変わらない。

モトキーラム
　気色悪い化粧に悪趣味なアクセサリーを身に纏ったナベツーラ一派の軍人。部下を惨たらしいやり方で虐待したり、幼女に手を出したりするのが趣味。

ペタシャーン
　色の黒い大男。粗暴で凶暴。やはりナベツーラ一派の軍人である。

エトン
　ナベツーラ一派の軍人。性犯罪者。

地理・国名編

ムスタファ星系
　サラーフ王国の星系の一つ。交通の要地であり、軍事的には物資の集積地である。アッディーンはサラーフとの戦いの際ここに拠点を置いた。そしてここでミツヤーン率いるサラーフ軍との間で決戦が行われた。

アルフフーフ
　サラーフ王国の首都。サハラ西方では最大の人口と発展を誇る星系の一つでもある。

京
　日本の首都。天皇がおされる場所であり人類社会で二つしかない帝都のうちの一つである。なおもう一つはエチオピアの帝都である。近代的なビルが立ち並び、それと同時に古風な建物が並立している

不思議な星系である。

八幡
　日本の政治の中心。政府及び議会が置かれている。

美原
　日本の経済の中心。

皇居
　京にある皇室のおられる場所。質素な造りであり、檜を中心とした木造である。内装もやはり質素であり古風。中に務める者達の服装は平安期のものとなっている。

大勲位
　日本で最も位の高い勲章。金色の菊に紫のリボンが飾られている。

エウロパ中央軍統帥本部
　エウロパ軍の作戦等を統括する組織。軍務省の下にある。本部長は現役武官が務めることが多い。

エウロパ総統官邸
　宮殿でありロココ形式をもとにした優雅な造り。カラーはオレンジが主流であり内部には様々な芸術品や装飾品が置かれている。かってプロイセンのフリードリヒ大王がポツダムに築いたサンスーシーをモデルにしている。

オーレフ星系
　サラーフ王国の星系の一つ。アステロイド帯が多い。ここでアッディーンはハラス率いるサラーフ軍に勝利を収める。その結果ナベツーラ達が選挙に勝つ。

ダルファヤ王国
　サハラ北方で最大の国。富豪ハルーク家がいる。

アルマザール星系
　サラーフ王国の星系の一つ。交易の中心地でありサラーフではアルフフーフに次ぐ人口を誇る。

# 設定資料集十一

第四部設定資料

人名篇

クマラ
　サラーフのメディアのドン。小柄で腰の曲がった醜悪な老人。ナベツーラの盟友。大学の同期でもある。異常とも言える程女癖が悪い。

チラフト＝ラーグワート
　サンドリム連合大尉。シャイターンの部下。

アレクサンドル＝ベニョーコフ
　ロシアの造船企業アナハイム社のオーナー。白髪の大男であり額には大きな傷を持つ。豪放磊落な人物。

ウラジミル＝ベニョーコフ
　ベニョーコフの息子であり秘書。父には性格も容姿も似ている。

ヨネスーケ
　ナベツーラの手下で麻薬の密売人。この上なく卑しい人柄の持ち主。

ウォルター＝ローズマン
　エウロパ財務相。青灰色の目の持ち主。吝嗇ともされているが有能な財務官僚。

ロギ＝フォン＝タンホイザー
　黒い髪と瞳を持つ長身の美男子。エウロパきっての名将であり天

才と謳われている。後にその天才的な戦術で歴史に名を残すことになる。

エルザ＝フォン＝ヴァンフリート
小柄で清楚な美人。モンサルヴァートの婚約者であり後にその妻となる。

ヴィーラント＝フォン＝ヴァンフリート
エルザの父。作曲家であり複数のオペラハウスの経営者でもある。伯爵。

ヴォルフガング＝フォン＝ヴァンフリート
エルザの兄。バイオリン奏者であり演出家でもある。

エフゲニー＝コズイレフ＝ブーニン
白い髪に灰色の目を持っている。エウロパのピアニスト。ハンガリー人。

ランドル＝チャクラーン
連合軍大将。タイ人。愛妻家で知られている。

プラシド＝アラガル
連合軍大将。メキシコ出身。口髭で有名であり、子沢山である。

アルバート＝オーウェル
連合軍大将。オーストラリア出身。アボリジニー系であり銀色の髪に黒い肌を持っている。

キリト＝コアトル
連合軍大将。ペルー人。後方支持部長。眼鏡をかけている。

地理・国名篇

グングニル
　タンホイザーの乗艦。モンサルヴァートの乗艦であるリェンツィと同じ型。名前の由来は嵐と戦いの神ヴォータンの持っている槍からきている。

アルマザール星系
　オムダーマン軍がサラーフとの戦いにおいて占領した星系の一つ。ムスタファ星系の次の拠点。

ブラーク
　サラーフの首都アルフフーフを守る要塞。彗星に近い。名前の由来はコーランにある人頭馬身の神獣。

サンドリム連合
　サハラ北方の国の一つ。

アナハイム社
　ロシアの大手造船企業。

オリンピック
　連合のものとエウロパのものがある。連合の方が商業主義的である。エウロパは貴族達が頑固な運営をしている。

マガバーン王国
　サハラ東方の小国。タンホイザーの軍に敗れる。その兵器はハサン王国の旧式兵器ばかりである。

復活祭

キリスト教時代からある祭りの一つ。この時代のエウロパにおいてかなり大掛かりな祭りとなっている。

バレンタイン

連合の行事の一つ。女の子が好きな男の子にチョコレートを渡す。今ではホワイトデーと一緒になっている。

# 設定資料集十二

第五部設定資料集

人物篇

アレクサンドル＝グリーニスキー
　ロシア大統領。長身で金髪の大男。豪放磊落な人柄で酒を愛する。

サラーヌ＝モハマド
　マレーシア首相。眼鏡がトレードマーク。大人しい外見だが実はかなりの切れ者で戦略家である。

アサム＝ンガバ
　ケニア出身。赤い髪を持つ中肉中背の人物。連合軍特殊部隊グリーンベレー隊長。冷静沈着な人柄でありその戦闘能力と統率力には定評がある。

ペドロ＝アラガル
　国防省テロ対策課長。探偵出身であり文民である。やや小柄なラテン系の男。ウルグアイ人。

クマラ＝ラーンチ
　マウリア国防大臣。口髭を生やした長身の男。

クベーラ＝ムルワーラ
　マウリア首相。頭にターバンを巻いた老人。

ヴァティ＝エルール
　マウリア外務大臣。艶やかなマウリアの女神を思わせる美貌の持ち主。その外見に相応しい知性を持っている。

ミカエラ＝ステッラ
　エウロパ諜報部員。素性、素顔、階級、全てが謎に包まれている。長い間連合に潜伏し様々な工作を行い、独自の諜報網を築き上げている。その諜報網を巡って連合の情報部と激しい暗闘を繰り広げてきた。後連合とエウロパの戦いの原因となる。大物スパイ。女性である。

趙虎
　アラガルの部下。台湾人。イスラエル出身の祖母の血を引いたダークブラウンの髪を七三分けにした黒い目の大人しい外見の人物。

ペテル＝ベニチャコヴァー
　茶色の髪に青い瞳の持ち主。モンサルヴァートの秘書。

シャービル＝ブワイフ
　オムダーマン共和国大統領。中肉中背。活動的な政治家として知られる壮年の男性。若い頃は農場で働いており、そこから縁あって政治家になった。恐妻家。

メガワティ＝ハラーイブ
　オムダーマン首相。眼鏡の似合う才媛。法学と文学、経済学の三つの博士号を持ち国際法の権威でもある。小柄。

ウダイ＝アッバース
　オムダーマン外相。よく太った男であるがその外見からは想像も出来ない程の切れ者。

アナンタ＝アジメール
　マウリア財務相。白い口髭の三十代の男。

ナシーム＝シカール
　オムダーマン国防相。文民。

地名・国家篇
スル星系
　サハラ北方、東方を結ぶ位置にある星系。交通の便に優れサラーフにおいても重工業や鉱産でも栄えていた。オムダーマン軍はここに軍事拠点を設ける。

ガイア
　エウロパの首都星系オリンポス星系にある。ここが首都である。

ニューワシントン
　アメリカの首都。政治の中心であり経済の中心ではない。ここにアメリカ合衆国大統領がいる。

マヤムーク王国
　サハラ北方の国家の一つ。王政で実権は選挙により選ばれる首相にある。シャイターンはこの国の首相に就任する。そしてさらなる権力を手に入れる。

木星
　太陽系にある惑星の一つ。かってはここから多くの資源を採掘した。

# 第十四部第一章　振り下ろされた刃その一

振り下ろされた刃

連合軍は遂にクロノス、そしてニョルズ両星系のすぐ側にまで迫った。それが何を意味するのか、最早誰に言われなくてもわかることであった。

「よし」

マクレーンはモニターにクロノス星系、そしてそこに展開するエウロパ軍を見て頷いた。

「遂にだな」

「はい」

それに劉が頷いた。

「これでエウロパは終わりです」

「もう決まっているのですか」

「少なくともこれからの人類の歴史では」

劉はそう述べた。

「これより先エウロパは衰亡の歴史を辿ることになります」

「長年の宿敵であった連合との戦いに敗れ」

「はい」

「我々にとっては心地良い歴史になりそうですな。しかし彼等は彼等で又違う歴史を書いているのではないですかな」

「歴史書を書くのは一人ではありません」

彼はまた言った。

「百人の歴史家がいれば百通りの歴史があります。真実はそれぞれです」

「貴方が言われると少し意味深いものになりますな」

「といいますと」

「そちらの国ではかって正史というものがありましたな」

「ええ」

劉はそれに頷いた。
「正史こそが正しい歴史書ではないのですかな」
「かってはそうでした」
彼もそれは認めた。
「ですがあくまでかってのものです」
「ふむ」
「そうした時代も終わっております。少なくとも我が国においては」
「今は歴史家それぞれの歴史がある、ということですか」
「それもまた違います」
「というと」
「その人それぞれの歴史があるのです。連合三兆の市民がいれば三兆の歴史が存在する」
「まるでパラレルワールドですな」
「歴史とはそうなのでしょう」
言葉を続けた。
「私の歴史と長官の歴史も違うでしょう」
「それはまあそうでしょうな」
マクレーンはそれに頷いた。
「私はアメリカ人、そして参謀総長は中国人」
「はい」
「ならばそもそもそこから観る地点が違ってきますな」
「エウロパにしてもそれは同じです」
「左様ですか」
「貴族には貴族の、平民には平民の歴史があるのでしょう、彼等にも」
「何か階級闘争じみてきましたな」
ここでマクレーンは十九世紀、そして二十世紀の過去の遺物を口にした。
「しかし実際はそうではない」
「階級闘争では人類は語れない」

「そうなります」
そもそも彼等はそうした階級というものがない連合という世界にいるのである。実感もない。ただあまり考えずにエウロパでは貴族が威張っているだの高貴なる義務を忘れていないだの思っていたのである。前者も後者もある意味で正しかったがある意味で間違っていたのである。
「マルクスという学者は案外ものを知らなかったと見えますな」
「そもそも彼はずっと図書館にこもったきりでした」
「ロンドンの図書館にですな」
「ええ。だから世間というものをあまり知らなかったと思います。結局は学者の空論です」
「学者の空論ですか」
「他に何と言えばいいのでしょう」
劉はその口をシニカルなものにさせた。
「素人の戯言とでも」
「それは経済学においてでしょうか」
「それだけではありません」
「というと」
「彼は社会学も哲学も宗教学も失格でした。それだけです」
「またそれは手厳しい」
「だからこそ共産主義は失敗した」
二十世紀の人類社会の歴史であった。今ではこの思想は化石となっていた。さしあたって経済学に適用するものではなくなっている。経済史学の資料の一つであった。失敗した例として。
「宗教なくして人間なし」
「はい」
マクレーンは劉の言葉に頷いた。

## 第十四部第一章　振り下ろされた刃そのニ

「それを否定したところで何になりましょう。人は信じるものなくしては生きられません」
「そちらの御国では道教がありますな」
「はい」
かなり現世利益的な宗教であるがこの時代においても生き残っていた。今でも天帝や関羽といった神々が信仰されている。伝説の軍師太公望や唐の玄宗も神となっている。なお玄宗は演劇等の神とされているがこれは彼が演劇を好んだ為である。
「私も信仰しておりますから」
「張良ですか」
「いえ」
漢の高祖劉邦の軍師だった男である。天才的な軍師であったがその容貌はまるで女性のようであったと伝えられている。
「それでは岳飛」
「彼でもないです」
宋代の将軍である。強敵金に対して敢然と立ち向かった英雄とされている。だがこの時代で面白いのは彼の政敵でありその命を奪った秦檜も神になり名誉が回復されているところである。彼は岳飛より神としてのランクはかなり落ちるが政治の神とされている。
「それでは誰でしょうか」
「李靖です」
「李靖」
「御存知ありませんか」
「確か」
マクレーンはその言葉にふと思案に耽りながら答えた。
「唐代初期の将軍の一人だったでしょうか」
「その通りです」

彼はその答えに満足して笑みを受かべた。
「彼は案外知られていませんが」
「そういえば」
マクレーンも思い出すのに少し時間がかかった程である。この時代は唐の太宗李世民が将としても極めて有能であった為それに隠れてしまいがちなのである。これはマクレーンも同じであった。
「案外長官の太宗ばかり注目してはおられませんか」
それは劉も感じていた。そうマクレーンに対して問うてきた。
「否定はしません」
そして本人もそれを認めた。
「あの時代は。若しくは玄宗皇帝に目がいってしまいます」
「あの皇帝も人気がありますな」
「はい。白楽天の詩にもなっておりますし」
「ええ」
長恨歌のことである。玄宗と楊貴妃の愛を歌ったものである。
「どうしても唐代というと皇帝の方にばかり目がいってしまいますな」
「ですがあの時代生きていたのは皇帝ばかりではありません」
「はい」
「そうした優れた将達のことにも目を向けるといいですぞ。そうすればさらに面白くなります」
「そうなのですか」
「それもまた歴史を知るということです」
「確かに」
「おわかりになられたでしょうか」
「ええ。ですがここで問題があります」
「何でしょうか」
「サハラやマウリアでは我々のことはどう書かれるでしょうか」
「サハラやマウリアではですか」
「はい。どうも今一つピンときませんが。総長はどうですかな」

「そうですな」
それを問われて劉も考え込んだ。

## 第十四部第一章　振り下ろされた刃その三

「正直マウリアは全くわかりません」
「はい」
彼等にとって理解不能な世界だからではない。悠久の時を刻む国マウリアにおいては百年程度の歴史の違いなぞ大したものではないと考える風潮があるのだ。それが彼等連合の多くの者にとっては全く理解不能なものとして映るのである。
「時間の概念が我々とは全く違いますからな」
「そうですな」
歴史とは時間である。その概念が異なっていては歴史の見方や感じ方も違うのである。従って連合とマウリアではその歴史観も大きく違っている。
「何といいますか。彼等の概念では人類の宇宙進出もほんの昔のことのようです」
「ほんの昔ですか」
マクレーンは予想されていた言葉とはいえやはり驚いていた。
「何ともまあ」
「この宇宙もまた神の一日に過ぎませんから」
「ブラフマーの一日ですか」
「俗にそう言われますな」
「ええ、まあ」
「そんな世界です。我々とはあまりにも違い過ぎます」
「はい」
「そこで比較するのはやはり容易ではありません」
「それではサハラはどうでしょうか」
「サハラですか」
「これについてはどう思われますか」
「それでしたら」

だが彼はここでは語ろうとはしなかった。
「むしろ長官の方がお詳しいのでは」
「私ですか」
「ええ。キリスト教を御存知ですから」
「そういうことですか」
キリスト教もこの時代はともかくかっては一神教であった。そしてイスラム教はそのキリスト教の流れを汲んでいるのである。彼等が言うにはイスラムとはその教えをさらに厳格かつ完璧にしたものなのである。
「今のキリスト教とは全く違っていますがそれでも宜しいですか」
「ええ」
劉はそれをよしとした。
「是非共。お願いします」
「わかりました」
彼はそれを聞いて頷いた。
「それではお話しましょう」
「はい」
「彼等の世界にはまず神がおります」
「はい」
「それも強力かつ絶対の・全てはその神の下にあります」
「歴史もですな」
「そうですね。その歴史もまた神が創るもの。過去も現在も未来も全て司っているのです」
「ふむ」
「従ってこれからの我々の戦いの結果も。全てはアッラーの意志なのです」
「そういうことですな」
劉はそれを聞いてまた頷いた。
「我々人間は全てアッラーの意志の下にある」
「イスラムの教えでは」

「それでもまた歴史に対する見方が大きく変わりますな」
「歴史は人が創るものではなく」
「神が創るもの」
「そう。歴史書もまたアッラーのものなのです」
「そういうことになりますな」
「これでどうでしょうか」
マクレーンは話を終えると劉にそう尋ねてきた。
「私の講義は。何処か至らない点があるでしょうか」
「いえ、合格点に達していると思いますよ」
劉はその講義をパスとみなした。
「査定にしてエーランクでしょうか」
「それはよかった」
マクレーンはそれを聞いて機嫌をよくさせた。
「士官学校では歴史の点数が悪かったので。冷や汗ものでしたよ」
「いえいえ、どうしてなかなか」
劉はそんな彼の言葉を信じようとはしなかった。
「見事なものでしたよ。大学の教授でもここまで見事な講義は中々できません」
「それでは退職後は大学の教授でも目指すとしますか」
「教授ですか」
「好評でしたので。ふとそう思ったのですが」
「長官には似合わないかと思いますが」
だが言いだしっぺの本人がそれを否定してきた。
「何故に」
「長官は書斎に篭るよりは銀河の海にその身を置く方がお好きではないかと思いましたので」
「それは否定しません」
彼はそう答えた。

## 第十四部第一章　振り下ろされた刃その四

「この銀河の大海は。その身を委ねるに相応しいもの」
「はい」
「ここからは離れたくはないのは偽らざる本心です。願いたくばここで死にたいとすら思います」
「死ぬ場所もですか」
「参謀総長はどう思われるでしょうか」
「私は最後はベッドの上で安らかにといきたいですね」
笑いながらそう答えた。
「最後位はゆっくりと。落ち着いて死にたいです」
「そうですか」
「はい。子供や孫達に囲まれまして。とりあえずは曾孫の顔を見るまでは生きる予定です」
「曾孫の」
「ええ。この前一番上の孫がようやく中学校に入りまして」
「私のところと似たようなものですな」
「まだまだ先の話ですが。じきに綺麗な娘になるでしょう」
「うちは既に立派な少年になっておりますぞ」
「もうですか」
「はい」
マクレーンは胸を張ってそう答えた。今までの彼の態度の中で最も得意気であった。
「こう言うと爺馬鹿になるかも知れませんが。いやあ、見事なものです」
「左様ですか」
「スポーツも勉強も無論のこと男気があり女の子にももてております。いや、もてているのが最も誇らしいです」
「もてることがですか」

「これはマクレーン家の掟ですが」
余程その孫が可愛いのだろう。彼は聞かれてもいない自分の家の家訓のことにまで言及してきた。
「男たるものまず女の子にもてなければならないと。我が孫は完璧過ぎる程にこの第一の掟を実行しております」
どうやらそれが彼の家の最も重要な決まりであるらしい。
「忠実に」
「宜しければ今度紹介致しますが」
「私にですから」
「いえ、総長のお孫さんに。きっと夢中になりますぞ」
「生憎劉家にも掟がありまして」
「それは」
「女は男を惚れさせろ、です。まず魅力がなくては」
「ほう」
マクレーンはそれを聞いてにんまりと笑った。
「それはまた」
「如何ですかな」
「洒落の効いた家訓ですな」
「長官の方こそ」
「それでは我が孫達には覚悟を決めてもらわなくてはなりませんな」
「ええ」
「どちらの家訓が勝つか」
「どちらが勝つか」
「楽しみですな」
「全くです」
話は何時しか孫自慢にまでなっていたがそれはやがて中断された。
モニターにコレッリが姿を現わしたのだ。
「コレッリ元帥」
「最前線に展開する艦隊からの報告です」
「はい」

最前線の指揮はこのコレッリが採っているのである。彼は連合軍においては勇猛な提督として知られている。左半分が微かに歪んでいると言われているがまるで彫刻か映画俳優の様に整った顔と見事な黒い髪に瞳、そしてスラリとした長身を持っている。その彼がモニターに出て来るとそれだけで女性の将兵達が一斉に視線をモニターに集中させた。だが当の本人は際立って女好きでも何でもないのでそれは意には介していなかった。少なくとも表面上はそうであった。

「敵の主力部隊の配置を正確に把握したとのことです」

「正確にですか」

「はい」

「ではすぐにそれの資料を送って頂きたいのですが」

「わかりました」

コレッリはそれに頷くと目を一瞬だけだが下にやった。そしてそれから言った。

「どうぞ」

「今送って頂いたのですか？」

「はい、メールで」

「左様ですか」

「是非御覧になって下さい。それでは」

「あ、お待ち下さい」

「何でしょうか」

彼は二人に呼び止められモニターのスイッチを押すのをすんでのところで止めた。

## 第十四部第一章　振り下ろされた刃その五

「一つお伺いしたいことがあります」
「若しくは二つかも」
「二つですか」
「まずは一つめですが」
「はい」
「閣下にお孫さんはおられましたかな」
「残念ですが」
　彼は首を横に振った。
「息子と娘にこの前それぞれガールフレンドとボーイフレンドができたばかりです。とてもそこまでは」
「そうですか」
「これで宜しいでしょうか」
「はい」
「それでは二つめです」
「今度は一体何でしょうか」
「閣下はこの戦いについてどう御考えですかな」
「この戦いについてですか」
「はい」
　マクレーンと劉はほぼ同時に応えた。
「歴史的に。どう思われるでしょうか」
「歴史的に、ですか」
「如何」
「そうですな」
　彼は即答した。
「連合の勝利、そしてエウロパの敗北。それも歴史的な」
「大勝利と大敗北ですか」
「後は政治的な話になるでしょうが。生憎私は政治家ではないので

そこまではわかりません」
「ふむ」
「私が思うのはこれだけです。宜しいでしょうか」
「わかりました。それでは」
「はい」
コレッリはそれに返礼してモニターから姿を消した。こうして後にはマクレーンと劉が残った。二人は真っ暗になったモニターの画面を見ながらそれぞれ横目で互いを見合った。
「どうやら総長の言われた通りですな」
「はい」
劉はマクレーンの言葉に頷いた。
「どうやら歴史は人それぞれ」
「そういうことですな」
「ええ」
「考えが当たって何よりです」
それから二人は頷き合った。だがそれで話は終わりではなかった。
「しかしコレッリ元帥にまだお孫さんがおられないとは。残念ですな」
「まあ考えればそれも道理ですが」
「それは年齢的な問題からですな」
「はい」
コレッリはまだ五十代になったばかりである。この年齢で孫がいるのは少し早かった。子供はかなり大きくなっている年頃ではあるが。
「まあそれは仕方のないこと」
「はい」
「我々は我々の孫達だけでやりますか」
「そうしますか」
こうして二人はまた別の戦いを自分達ではなく孫達にさせることにした。だがこれは遠く離れた連合にいる孫達にとっては全く知ら

ないことであった。だが話はそれでも動くのであった。彼等の意図になぞ全く構わずに。それが世界というものであった。

エウロパもまた動いていた。シュヴァルツブルグ率いるエウロパ軍は既にクロノス星系にその戦力の全てを配置し終え、連合軍の大軍を待ち構えていたのであった。

そのすぐ後ろにはオリンポスがある。そこでは市民達が戦々恐々としてテレビにかじりついていた。

「なあ兄ちゃん」

「何だよ」

アパートの一室で小さい兄弟が毛布にくるまりながらテレビを眺めていた。もう深夜であった。

「どっちが勝つかな」

「そんなの決まってるだろ」

兄は弟に対してそう言った。

「俺達だよ。そうに決まってるだろうが」

「僕達なの？」

「そうさ。そして連合の悪い兵隊達はエウロパの騎士様達に蹴散らされるんだよ」

「蹴散らされるの？」

「ああ」

兄は答えた。

「そしてそのままこのエウロパから追い出されるのさ。それで奴等は回廊を伝って逃げ去るんだ」

「何か格好悪そうだね、それって」

「けれど騎士様達は格好いいだろう？」

「うん」

「それが俺達のこれからなんだよ。最後の最後で俺達は勝つんだよ」

「じゃあ僕達はそれをこれからテレビで見ることになるんだね？」

「ああ。楽しみか？」

「うん」
弟はにこやかな笑みでそれに頷いた。
「とても。早く戦争にならないかなあ」
「もうすぐだ。ちょっと待てよ」
「もうすぐなんだね」
「そう、確かにもうすぐね」
ここで後ろから声がした。
「えっ」
「ママ」
二人はその声を聞いて振り返った。するとそこには二人の母親が魔女の様な顔で立っていた。
「二人共今何時だと思っているの？」
「何時なんだろ」
「わかんないや」
「むっ」
見れば壁にかけられている時計は止まっていた。母親はそれを見て内心舌打ちしたがそのうえで二人に対してまた言った。

## 第十四部第一章　振り下ろされた刃その六

「それはいいから早く寝なさい。明日学校でしょ」
「はあい」
「わかりましたあ」
「返事はしっかりと。いいわね」
「はい」
二人はそう言われて挨拶をもう一度した。
「おやすみなさい」
「宜しい。それじゃあすぐにベッドに行きなさい」
「わかりました」
こうして二人はすごすごと彼等のベッドに入って言った。母親はそれを見て困ったような顔を作った。
「全く。ちょっと目を離すとこうなんだから」
そう呟いてから彼女も自分のベッドに戻って行った。側には夫がいる。とりあえずは彼を電気毛布替わりにして寝るつもりであった。
この日の深夜テレビにかじりついていたのはこの二人の兄弟だけではなかった。その他にも多くの者がテレビの前にいた。そこで戦いがはじまるのを固唾を飲んで見守っていたのだ。
「凄い視聴率ですよ」
テレビ局のプロデューサーが満足気な声で社長に対して熱く語っていた。
「我が局開設以来のことです」
「そうか」
重厚な顔立ちの社長がそれに静かに頷いた。見ればあまり嬉しそうには見えない。
「このままいけば視聴率はさらにあがるでしょう」
プロデューサーはさらに軽薄な雰囲気で語り続ける。
「社長、いよいよ我が局がトップに躍り出る日が来たのです」

「一つ聞きたい」
社長はここでこのプロデューサーに問うてきた。
「何でしょうか」
「君は今楽しいかね？」
「といいますと」
「今の我々の状況が楽しいかね、と聞いているのだ。どうかね」
「勿論です」
彼は満面に笑みを作ってそう答えた。
「今の状況が楽しくない筈はないでしょう」
「そうか」
社長はそれを聞いて黙って頷いた。
「そうならいい。では視聴率をさらに上げるのだな」
「言われなくとも」
彼はやはり笑っていた。軽い足取りで社長室を後にするのであった。社長はそれを見て何故かあまり晴れやかな顔をしていなかった。
「全ては視聴率、か」
不愉快そうにそう言葉を吐き出す。
「エウロパの危機においても。これがテレビというものなのかな」
宿命と言えばそうなるだろうか。テレビ局はあくまで視聴率のみを考える。そしてその結果や状況に一喜一憂するのである。これはテレビというものが発明されてからあまり変わるところがなかった。
「まいい」
社長は仕方なさそうにそう言葉を漏らした。
「そう教えてきたのはわしだ。彼に罪はないな」
そう言ってテレビをつけた。自身の経営するテレビ局である。
「おはようございます。オリンポスの皆さん」
「！？」
それを聞いて時計を見た。見ればもう朝になっていた。どうやら徹夜をしてしまったらしい。テレビ局の社長ともなればよくあることであった。

「そうか」
もうそんなことには驚きはしない。ただテレビを見る。
「今のクロノスですが」
うら若き女性キャスターが動き易い服装でエウロパ軍を報道していた。
「我が軍の戦意は極めて高いものとなっております」
「そう言う他はないか」
プロパガンダである。マスコミの役割の一つだがこの時エウロパのほぼ全てのマスコミが軍のプロパガンダとなっていた。これは戦争のこと、エウロパのことを考えれば致し方のない一面もあった。
「そうですか」
「はい」
テレビ局にいる男のアナウンサーの言葉に頷く。

## 第十四部第一章　振り下ろされた刃その七

「勝利は間違いないものと思われます」
「皆さん、御聞きになられたでしょうか」
男のアナウンサーはそれを聞いてわざとらしく晴れやかな顔を作った。
「甘いな」
社長はそれを見て顔を苦くさせた。
「顔を作り過ぎた」
男のアナウンサーの演技について問題を感じたのだ。見れば確かに芝居ががって見えていた。
「これでは」
「我がエウロパ軍は敵を待ち構えております」
「しかも軽い」
それを見てまた呻く。
「勝利をその手に掴む為に」
「見ればまだ若いが」
男のアナウンサーを見て言葉を続ける。
「どうにかならないものか。あれではかえって」
「社長」
そこへ先程のプロデューサーがまたやって来た。
「今放送されているニュースですが」
「これのことかね」
彼は今見ているテレビを指差してプロデューサーに問うた。
「はい」
「どう思うかね」
「いいのではないでしょうか」
「いいのか」
それを聞いて心の中で眉を顰めた。あえて表には出さなかった。

彼の反応をもっと見る為であった。
「はい。視聴率は稼げています。朝の番組の中でもかなりのものかと」
「そうなのか」
「特に彼ですが」
「このアナウンサーだな」
「はい」
見ればその男のアナウンサーである。相も変わらず大袈裟なアナウンスを続けている。
「彼のおかげです」
「そうなのか」
「御覧下さい、あの身振り手振り」
「ふむ」
それこそを不快に思っていることも伏せた。
「あれが非常に好評でして。わざわざスポーツコーナーから移動させたかいがありましたよ」
「スポーツコーナーからか」
「はい」
言われてみれば確かにその動きはスポーツのそれである。派手で感情を露骨に込めている。それも格闘技の放送のようであった。
「以前はプロレス中継を担当しておりまして」
「ああ、あれか」
このテレビ局の人気番組の一つである。プロレスの実況中継はそのアナウンスも好評であったのだ。
「あの番組のアナウンサーは彼だったのか」
「ええ」
「そういえばそうだな。それでボーナスを出したこともあった」
「それからですよ、彼が注目されたのは」
「ボーナスからか」
「若いのによくやった、と。それで私は朝に移動させたのですよ」

「プロレスの方はどうなったのかね？」
「勿論そのままです。やってもらっています」
「そうか」
「彼がなくては持ちませんからね、視聴率が」
また視聴率であった。いい加減こればかり聞かされていればうんざりするというものであるが社長はそうではなかった。彼がそれを最も求めているからであった。皮肉なことではあるがそれを認めるしかなかった。
「ですから頑張ってもらっています。如何でしょうか」
「彼はそれについて何と言っているかね」
「特に何も」
プロデューサーは答えた。
「文句一つ言わず頑張ってくれていますよ。どちらの仕事も楽しくて仕方がないと」
「ならいいのだがな」
それを聞いてそう答えた。
「だが無理はさせないようにな」
「わかっております」
本当はわかっていないのはわかっていた。視聴率こそが第一の望みであるからだ。まずそれがなくては話にならないのである。それがテレビ局なのだから。
「それではゆっくりと御覧になって下さい」
「あ、待ちたまえ」
退室しようとするプロデューサーを呼び止めた。
「はい」
「わしに用があってここに来たのではなかったのかね」
「それはそうですが」
プロデューサーはそれに頷いた。
「では言ってみたまえ。何の用だね」
「これです」

そう言ってテレビを指差した。
「それか」
見ればその朝の番組のことであった。
「これについてお話をしに来たのですが」
「今終わったな」
「はあ」
「では帰っていい。君も最近家に帰っていないのだろう？」
「それはそうですが」
「今日は休暇をとりたまえ。いいな」
「わかりました」
釈然としないまま頷いた。本心は違うが社長直々の命令であるから従わないわけにはいかなかったのだ。プロデューサーといっても雇われている立場である。やはりオーナーには逆らいにくい。
「では今日はこれで。失礼します」
「うむ」
こうして社長はまた一人となった。一人になってまた呟いた。
「視聴率の記録を破るか」
続ける。
「エウロパが終わるか、か。難儀なものだな」
その言葉には自嘲も入っていた。テレビ業界にいる者としてのしがらみを噛み締めた、苦い自嘲であった。

## 第十四部第一章　振り下ろされた刃その八

戦いのことは当然ながら連合においても話題となっていた。テレビでも雑誌でも新聞でも話題はそればかりであったがネットにおいてもそれは顕著であった。ネットでは色々と議論も行われていた。

『連合が勝つか？』

『いや、エウロパは勝てないの間違いだろう』

いささかレトリックじみた反論が返って来た。

『あの戦力差では無理に決まっている』

『それはどうかな』

『何！？』

掲示板も殆どチャットの状態となっていた。常に複数の者がパソコンや携帯の前にいて画面を見ている。そしてそれを通じて議論を行っていたのだ。

『戦力差を引っくり返した戦いなんて幾らでもあるぞ』

『それ位俺だって知っているさ』

『そうだそうだ』

『皆知ってることを言うな』

『皆なんて他人もそう思っているように言うな。訳わからねえだろうが』

『すまん』

それでも議論は続いていた。

『しかし流石にもう無理だろう』

『オリンポスまであと少しなんだったな』

『クロノスを抜ければすぐらしいからな。もう少しだ』

『じゃあ後はその戦いで終わりか』

『まあそうだろうな』

『けれどここで負けたらどうなるんだ？』

『連合がか？』

『ああ』
また返事が返って来た。
『まさかとは思うけれどな』
『独ソ戦みたいになるんじゃねえのか？そっから』
『まさか』
『それはないぞ、流石に』
『そうかな』
『有り得ないだろ。国力的には立場が逆だぞ』
『それもそうだな』
『負けても少し引くだけじゃないのか？それでまたクロノスkかどっかに向かう』
『そういえばアルテミスに基地を築いたのだったな』
『議会で随分もめたらしいけれどな』
彼等はよく知っていた。いや、どうやら一人一人それぞれの知識はそれ程ではないようだ。だが数が違っていた。その一人一人がそれぞれ知識を出し合い有意義な議論をしていた。
『それでも敵のど真ん中に基地を置いたのは大きいよな』
『最初はまさかと思ったけれどな』
『けれどこれで万が一の時にも備えられるし。よかったんじゃねえのか』
『勝っても負けてもまた動けるってことか』
『そういうことだな』
由良は自分のノートパソコンでそうしたやりとりを眺めていた。
そしてほくそ笑んでいた。
「中々面白いな、これは」
「一体何を見ているんだ？」
そこにシャリアピンがやって来て彼に問うた。
「あ、次官」
「女の子の画像でも見ているのか？ニヤニヤして」
「違いますよ」

由良はその厚い唇を緩ませて笑ってそれに応えた。
「そんなことしていませんよ」
「どうかな。案外君みたいな真面目そうなのが一番あやしいからな」
「からかわないで下さいよ」
「からかってなんかいないさ。本当のことだからね」
「まさか」
「いや、これは本当だよ」
彼は笑ってこう言った。
「リバーグ元帥だってそうだろう？何人ものお子さんがおられるし」
「それはそうですが」
「案外真面目な人間に限って子供が多いものさ。違うかね」
「では次官もそうなりますね」
「まあな」
藪から蛇であった。彼は顔を苦くさせた。
「確かに私も子供が多いが」
「ほら」
「しかしそれは君もだろう？この前二人目ができたそうじゃないか」
「まだ二人目ですよ」
余裕があった。涼しい顔でそう返す。
「これからできないかも知れませんし」
「まあな。子供は何時出来るかわからないものだ」
「次官はこの前新しいお子さんがお生まれになったのでしたね」
「まあね。女の子だ」
「女の子ですか」
「君は御子息ばかりだったかな」
「ええ、まあ」
「幼稚園か何処かで一緒になった時は宜しくと御子息に伝えておいてくれ」
「うちの子二人共まだ言葉も話せませんよ」
「あ、そうだったか」

これは迂闊であった。シャリアピンは一言言った後バツの悪そうな顔を作った。

## 第十四部第一章　振り下ろされた刃その九

「そうだったな。申し訳ない」
「いえいえ」
だが由良はそれを気には止めなかった。笑って応える。
「まあ話を元に戻そう」
「はい」
シャリアピンは話がとりあえず中断したところでその話を元に戻しにかかった。
「一体何を見ているのかね」
「インターネットの掲示板でして」
「ほう」
シャリアピンはそれを受けてその掲示板を覗き込んだ。
「ああ、これか」
「御存知でしたか」
「知ってるも何も。有名な巨大掲示板群じゃないか」
連合においてはインターネットの代名詞ともなっているサイトである。ここで様々なジャンルにおいて多くの議論や書き込みが為されているのだ。
「ただ問題もあるがな」
「はい」
その問題は書き込みが自由な故の誹謗中傷の多さであった。これによりこのサイトが連合を代表するサイトの一つでありながら評判が今一つ芳しくないのはその為であった。
「だが使いようによっては役に立つからな。むげにはできない」
「だから今覗いていたのですよ」
「で、何かわかったか？」
「ええ、面白いことがね」
彼は笑ってそう述べた。

「それは」
「実に色々な意見があるものですよ」
「ネットだからな」
シャリアピンはそう答えた。
「それも当然だろうな」
「御存知でしたか」
「私もネットをやっているからね。実はそこにも出入りしている」
「ほう」
「中々面白いものだ。そこにいるだけで時間を忘れてしまう程にな」
「では何かお知りになられましたか」
「連合の勝利を約束してくれる者がいた」
「それは」
「アラン＝ハイド氏だよ」
「彼がですか」
どうやら由良もそのハイドという男のことは知っているらしい。
その名を聞いただけで声をあげた。
「で、何と」
「わかっていると思うが」
シャリアピンは面白そうに笑いながらそう言った。
「どうなのかね、そこは」
「まあ大体は予想がつきますが」
そして彼自身もそう言った。
「連合の大敗北でも予想していたのでしょうね、きっと」
「当たりだ」
シャリアピンは笑ってそう述べた。
「それも連合軍は壊滅するらしい」
「では我が軍の勝利は間違いなしですか」
「そういうことになるな」
実はこのハイドという軍事評論家はその予想や分析がことごとく外れることで知られているのである。その為ネットや軍事マニアの

間では『天才的な軍事評論家』『無敗の名将』とすら揶揄されているのである。ある意味かなり名の知れた人物であったのだ。
「だがそれに油断してはならないな」
「はい。前線の将兵達にはこのうえない励みになりますが」
「二十世紀に日露戦争があったな」
「はい」
シャリアピンの祖国リトアニアはこの時ロシア領であった。従って直接的にはあまり因果関係はなかった。リトアニア出身のロシア兵達が日本軍と戦っていた位である。
「あの時も何かと不思議なことが起こっていたな」
「それは聞いたことがあります」
この戦争は帝国主義の時代において有色人種が白人に対して勝利を収めた画期的な事件であっただけではないのだ。実に奇妙なことが多く起こったのである。

## 第十四部第一章　振り下ろされた刃その十

例えば白い神兵。日本軍の危機に何処からともなく姿を現わし戦った謎の兵士達である。そして日本海海戦の時には明治皇后の枕元に坂本竜馬が現れ勝利を予言したとも戦艦のマストに鳥達が止まったとも言われている。こうした神懸り的な出来事も多く起こった不思議な戦いなのであった。

「しかしそれは伝説でしょう」

「その伝説が今起こった」

「ハイド氏ですか」

「そう言うとジョークに聞こえるかな」

「どうでしょうかね」

由良は首を捻ってそう返した。

「少なくとも女の子には受けないと思いますが」

「辛辣だな」

シャリアピンはそれを聞いて顔を苦くさせた。

「まあそれでもいいか」

「いいのですか」

「私は妻にさえ人気があればいいからな。他の女性には興味がない」

「おやおや」

「もっとも完全に興味がないと言えば嘘になる」

彼はそこまで嘘つきではなかった。それを素直に述べた。

「女優やアイドルでも好きなのはいるな」

「まあそれは普通でしょう」

「最近日本のアイドルで神崎亜矢ちゃんが人気だな」

「人気も何も防衛庁のキャンペーンガールですよ」

「そうだったな」

ついこの前連合の元帥の軍服を着てキャンペーンを行ったばかりである。連合の軍服はスカートがない為いささか野暮ったく見えな

いこともなかったがそれがかえってギャップがいいと人気であったのだ。
「だが私は他のアイドルも好きだ」
「誰をですか」
「ジュリア＝リーブルだが」
「彼女ですか」
「いいと思うのだが。どうかな」
ザイール出身の今売り出し注のアイドルの一人である。長身でスリムな身体を持ち、いささか現実離れした彫刻の様な美貌を持つ黒人の女の子である。神崎亜矢が子供っぽい部分も多いのに大してリーブルは完全に大人の女であった。これが彼女の人気のもとであったのだ。
「まあ悪くはないですね」
「何か不満そうだな」
「まあ」
由良は少し間を置いてから答えた。
「人には好き嫌いがありますから」
「そういうものか」
「私は。あそこまでの美貌はかえって現実味がないように思えまして」
「そこがいいのだよ」
「そうでしょうか」
だが由良はそれでも納得しかねていた。
「私はそうは思いませんが」
「まあそれを言っても仕方ないか」
シャリアピンはそれについて話をすることの不毛さを悟った。そして中断を提案したのであった。これは賢明な判断であると言えた。
「そうでしょうね」
「話題を元に戻すとしよう。実際に油断はできないな」
「ですね」

由良は顔を元の真剣なものに戻してそう答えた。
「それについても掲示板で書き込みがありました」
「そうか」
「連合軍は油断していないか、どうかという心配する声が」
「実際のところについてはどう思う」
「私は今の時点では心配してはいません」
「そうか」
「皆落ち着いて戦いに向かっております。このままでは勝利は確実でしょう」
「予言がなくてもか」
「天才軍師で勝つ時代ではありませんからね」
暗にハイド氏を話の種にしていた。
「そんな時代は二十世紀で終わりました」
「うむ」
これは十九世紀から見られはじめたことであった。情報収集と敵の分析、そして敵を上回る物量と装備、新しい技術の効果的な運用。それで勝利を収める時代は二十世紀からであった。無論人の力で勝つ戦いも今まで多くあったが連合軍はそれを追い求めたりはしなかった。どのような人材でも安心して勝てる戦いを目指していた。すなわち二十世紀型の機能性のみの軍隊を極限まで追求しようというのである。
「ですから当たり前のことを当たり前にしていればいいのです。それで勝利を収めるのが我々のやり方です」
「基本的にはそうだな」
「だからこそ今まで勝ってきました」
由良はごく当然のことの様に素っ気無くそう述べた。
「違うでしょうか」
「いや」
そしてシャリアピンもそれを肯定した。
「その通りだ。よく考えれば今更言うまでもないか」

「はい」
「だがエウロパ軍は我々とはかなり違うようだな」
「貴族の軍隊ですからね」
その言葉にはいささかシニカルな響きがあった。
「中世の騎士物語の中に今でも生きているのでしょう」
「騎士か」
「はい」
「そういえばそんな名前の連中がかって私の国にもいた記憶があるな」
「ドイツ騎士団でしょうか」
うそぶくシャリアピンに対してそう問うた。
「よくわかったな」
「確か北の十字軍でしたよね」
「ああ」
十字軍というとエルサレムに向かった者達が有名であるがそれだけではなかったのである。南フランスにおいてはアルビジョワ十字軍があった。これは異端であるカタリ派を征伐する為に時の教皇インノケンティウス三世が提唱したものである。この十字軍もまた残虐だったことで知られている。
北の十字軍はドイツ人達が主力となって行われた。これもその真の姿は植民でありこれによりプロイセン等の国が設立された。ドイツの歴史においては重要な一コマである。
「十字軍が牙を剥いたのはムスリムに対してだけではない」
「スラブに対しても」
「スラブ人の名の由来はわかっているね」
「はい」
由良はそれに頷いた。かっての英語でスレイブとは奴隷のことであった。スラブ人達はよく奴隷にされたことからこの名がついたのである。もっともこれはドイツ人達も同じであった。アメリカにドイツ系が多かったのは彼等が奴隷としてアメリカに渡ってきたこと

にもその理由の一つがあるのだ。

## 第十四部第一章　振り下ろされた刃その十一

「辛い歴史だった。それが終わったと思ったらロシアだった」
「当時はソ連だったのでは？」
「どっちでもいい。いずれにしろその正体は変わりがない」
「まあそうですが」
　第二次世界大戦の時にスターリンにより無理矢理併合されたのである。これをとある国の進歩的と自称する学者達はかっての領土の回復に過ぎないと詭弁を呈している。この者達にとっては赤旗さえ振っていれば犯罪者でも聖人君子であったのだ。さもなければスターリンの如き独裁者を崇拝したりはできない。戦前はナチスを崇拝し、戦後はソ連であった。要するにこの連中は全体主義者であったのだ。
「ソ連崩壊まで。長かった」
「そして今は銀河にいますが」
「今ではそのロシア人達と同じ釜で焼いたパンや米を食べている」
「それは我々も同じですよ」
「そういえば最近貴国とロシアは仲がいいようで」
「成り行きですよ」
「成り行きかね、単なる」
「ええ。アメリカと中国が他の国を抱き込みにかかっていますから。どうやらイスラエルも動いています」
「またあの連中か」
「それで接近しているだけでしょう。もっとも今我々には直接関係のないことです」
「そうだな」
「では次官」
「何だ」
「そろそろ長官のところへ行きませんか。そろそろ呼び出しの時間

ですよ」
「今か」
シャリアピンは時計を見て言った。
「まだ早いのじゃないかな」
「いえ、もうすぐですよ」
「まさか。じゃあ賭けでもするつもりかい？」
「私は賭けは選ぶ主義です」
「ほう」
「必ず勝てるものと必ず負けるものはしません。絶対に」
「では今はどちらかな」
「それは」
答えようとしたところで電話が鳴った。由良がそれに出た。
「はい」
「由良君か」
「むっ」
その声の主は最早言うまでもなかった。
「実はすぐに来て欲しいのだが」
「わかりました。それではすぐに」
「うん。頼むよ」
「はい」
由良はそれに答えて電話を置いた。それからシャリアピンに顔を向けてにこやかに笑った。そして彼にこう言った。
「賭ける前でよかったですね」
「全くだ」
シャリアピンは苦笑してそう述べた。
「どうやら必ず負けるものだったようだな」
「いえ、それは逆です」
「君にとってはだね」
「はい」
由良は頷いた。

「では行きましょう。長官がお待ちです」
「そうだな。私も長官にお話があるし」
「それでは」
「うむ」
こうして二人はその場を後にした。パソコンのスイッチは切ってはいなかった。
そのモニターに新たな書き込みがあった。由良は自動更新にしていたのである。
『何か今回のハイド氏の予想は当たりそうだな』
『それはないさ、絶対にな』
『それもそうか』
『まあそうだろうな、あのおっさんの予想は外れる為にあるんだ』

## 第十四部第一章　振り下ろされた刃その十二

エウロパ軍は目の前に今にも姿を現わすであろう連合軍を見据えて布陣していた。その緊張は最早極限にまで達しようとしていた。
「来るか」
シュヴァルツブルグは旗艦ワレンシュタインの艦橋に立っていた。そして前を見ていた。
「もうすぐですね」
それにエヴァが答えた。
「おそらくその全軍を以って来るでしょう」
「全軍か」
「これまでもそうでしたし」
「今度もだな」
「はい。ですが今度ばかりは退くことはできません」
「わかっている」
シュヴァルツブルグはその言葉に頷いた。
「例え敵がギガンテス達でもな」
「はい」
「こちらにはテューポーンがいる。怖れることはない」
ギガンテスとはギリシア神話に出て来る巨人である。上半身は武装した髭だらけの大男でありその二本の脚は蛇の下半身となっている。テューポーンに似ているところがあるのは彼等の母がテューポーンと同じ大地の神ガイアだからである。
「テューポーンですか」
「そうだ」
「それに対しては敵も怪物を持っております、残念ながら」
「それは何だ」
「大地母神です」
エヴァはその問いにこう答えた。

「それも二千人の」
「あれのことか」
その数を聞いて何のことを言っているのかすぐにわかった。
「そういえばそうだったな」
「はい」
エヴァは頷いた。
ティアマトはメソポタミアの神話における神々の母である。そしてその本性は巨大なドラゴンであった。これは彼女が海水を象徴する神であり、海の力を現わしたものなのかもしれない。
「こちらは一匹か。確か連合の者はあの巨大戦艦に英雄や神の名をつけているのだったな」
「例えば宇宙艦隊司令長官マクレーン元帥の乗艦の名はブレスです」
「ブレス」
「ケルトの神話の神の一人です。麗しのブレスともいいます」
「我々の神話でのアポロンやフレイのような存在か」
「かなり違います」
彼女は考え込みながらそう答えた。
「例えて言うのならロキが近いでしょう」
「ロキか」
北欧神話におけるトリックスターである。巨人と神のハーフであるとされている。なおブレスもまた神と巨人フォモールのハーフなのである。いささか因縁めいた関係である。もっとも北欧の神々はオーディン然りトール然り巨人の血を引く者が多いのが実情なのであるが。
「彼もまた裏切ります」
「そうか」
シュヴァルツブルグはそれを聞いて考える目になった。
「では彼も最後は炎となるのだな」
「いえ」
「違うのか」

ここでシュヴァルツブルグが言ったことは北欧神話の異聞である。ロキの化身の一つがラグナロクにおいて姿を現わす炎の巨人達の王であるスルトとするものである。
このラグナロクにおいてロキは死ぬ。だがスルトは最後まで生き残りその手にある炎の剣レーヴァティンで全てを焼き尽くし何処かへと去っていくのである。
もう一つある。ワーグナーの楽劇ニーベルングの指輪においてロキは炎の神とされている。そして今エウロパではロキは実際に炎の神として崇拝されている。
英雄ジークフリートが死にその妻ブリュンヒルテがロキを呼ぶ。そしてその中み身を投じるのだ。ロキはかって己が言ったように炎となりヴァルハラも小人達の軍勢も全て焼いてしまう。後には人間達と愛だけがのこるのである。なおロキはこの話においてはローゲと言われている。
「彼は死にます」
「そうなのか」
「偉業を達成した後で。その満足感の中で息を引き取るのです」
「まるで英雄だな」
「英雄なのは事実です。だが」
「英雄にも色々とあるということだな」
「そういうことです」
そして彼女はそれに頷いた。
「彼は半分は巨人でしたから。完全に英雄にはなれませんでした」
「皮肉なものだな」
「といいますと」
「ロキは最後は人の世をもたらす。そしてオーディインもトールも偉大な神だ」
「はい」
彼等もまた巨人達の血を引いているというのに、である。ギリシア神話におけるゼウス達もまた巨人の子供達なのであるが。巨人は

古代の神々なのである。だがケルトのフォモールも彼等も古い神々、異端の神々であるのだ。今いる神ではないのであった。それが問題であったのだ。

## 第十四部第一章　振り下ろされた刃その十三

「だがブレスは死ぬという。これが皮肉ではなくて何だというのだ」
「それもまた神話です」
エヴァはそれに対して臆することなくこう述べた。
「神話も様々なものがありますから」
「そういうものか」
「私はそう思います」
「では今ここに来ようとしているブレスは何なのか」
「マクレーン元帥の乗るブレスですか」
「そうだ。あれもまた死ぬのだろうか」
「はい」
彼女はそれに答えた。
「我々の手で」
「できるか」
「閣下」
エヴァはあらためてシュヴァルツブルグに対して言った。
「今まで人間の作ったもので完全なものが存在したでしょうか」
「いや」
彼はそれに首を横に振った。
「人間は所詮は人間だ。超人にはなれるかも知れないが」
ニーチェについてさらりと言及した。十九世紀に神は死んだ、と言い超人思想を提唱したドイツの哲学者である。彼の思想にはワーグナーのそれが大きく影響していることで知られている。ワーグナーの楽劇のヘルデン＝テノール達がその超人だとも言われている。
「完全なものではない。神ではないのだからな」
「答えはそこです」
「沈められるというのか」
「無論です。ティアマト級巨大戦艦は連合軍にとって絶対的な象徴

です」
「うむ」
「今まで何度も言われてきたことですが。撃沈することに非常に大きな意味があるのです」
「できれば、な」
「先程も述べましたがこの世に絶対的なものはありません」
彼女はまた言った。
「それならば。必ずできます」
「普通にやっては効果期待できないが」
「普通にやれば、です」
「何か策があるな」
「はい」
彼女は頷いた。
「彼等が神を擁しているのなら」
「うむ」
エヴァの言葉に何かが宿った。まるでトランスしたように語る。その目は既に軍人のものではなくなっていた。何処か巫女めいたものになっていた。
「・・・・・・・・・」
シュヴァルツブルグはそれを黙って見ていた。エヴァはそれに構わず言葉を続ける。
「我々もまた神を擁しています」
そしてこう言った。だがそれで話は終わりではなかった。
「このクロノスもまたかっては神々の王でした」
彼は父であるウラノスに対してクーデターを起こし王となったのである。その時眠っている父に対して剣を抜いている。血塗られた神々の王であった。まるで人間達の世界がそうであるかのように。権力の座とは時として神も人もそこに至るまでに多くの血を必要とするものである。これはオーディンもそうでった。彼も自分達の生みの親のような存在である原始の巨人ユミルを殺している。そして

その屍で世界を作っている。
「彼のことは我々が最も知っています」
「そうだな」
この場合は地の利のことを言っているのである。
「そして彼もまた我々のことを知っています」
「そのうえにあれだな」
「はい」
「テューポーンの存在だ」
「彼の行動で全てが決します」
そしてこう述べた。
「全てを脅かす暴君」
「うむ」
「今こそその力の全てを解き放たれるべきなのです」
「そうだな」
「閣下、時は来ました」
やはりその声には何かが宿っていた。その目は最早エヴァのものではなかった。何か別の次元の存在の目であった。
シュヴァルツブルグはその目の持ち主を知っていた。戦場を駆け巡る乙女達。嵐と戦の神オーディンの忠実なる娘達のことである。
「ワルキューレ、か」
「はい！？」
それを聞いてエヴァはふと我に返った。
「閣下、今何と」
「いや、何でもない」
だが彼はそれを誤魔化した。
「神は何を求めているのだろうな」
「戦いです」
彼女は我に返ったように見えたがそれはどうやらほんの一瞬のことであったようだ。すぐにまたあの目に戻った。今度はオーラすらエヴァのものではなくなっていた。

「戦いこそが我等の神々の求めるものです」
「それはオーディンのことか」
「いえ」
首を横に振った。

## 第十四部第一章　振り下ろされた刃その十四

「ギリシアの神々もまた。英雄の血を求めております」
「英雄の血か」
それを聞いたシュヴァルツブルグの声のトーンが一つ下がった。
「その血で酔うつもりだというのか」
「それもよいですね」
やはりそれはエヴァの声ではなかった。
「英雄の血程美味なものはありませんから」
「そうなのか」
「この戦いでまた多くの血が流れます。騎士達の、戦士達の血が」
彼女は言った。
「勝利はその果てにあるものに過ぎません。ですがその勝利は我々のものです」
「それは神々の意志か」
「神々の」
「どうなのかな、それは」
あえてエヴァに対しても、そしてエヴァに宿っている何者かに対しても問うた。問いながら彼女を見据えていた。
「はい」
エヴァはそれを認めた。正確に言うのならエヴァの中にいる者が。
「ですが我々はその中でやらなければならないことがあります」
「それが勝利か」
「エウロパの興亡はこの戦いにあります」
「うむ」
「これだけは人の手によって為されなければなりません」
「閣下」
ここで連絡将校の一人が艦橋に入って来た。
「どうした」

「敵が姿を現わしました」
「遂にか」
「はい。その数二千個艦隊。クロノス星系の我が陣を半月型に覆う形で布陣しております」
「やはりな」
シュヴァルツブルグはそれを聞いて頷いた。
「そうきたか」
「予想されていたのですか、彼等の布陣を」
「ああ」
エヴァの言葉に応えた。
「敵の数は圧倒的だ」
「はい」
「ならばその数を生かした布陣を組むのは当然だと思っていた。そして今それが的中した」
「そうだったのですか」
「全軍に伝えよ」
彼は指示を出した。
「全軍戦闘用意」
「わかりました」
「そして予定通り作戦を執り行うとな。いいな」
「ハッ」
連絡将校はそれを受けて敬礼した。
「ならばそのように連絡致します」
「頼むぞ」
「はい」
こうしてこの連絡将校は姿を消した。シュヴァルツブルグはそれを見届けてからエヴァに顔を戻した。
「ギャラルホルンは鳴ったな」
「はい」
エヴァはそれに頷いた。

「次はオーディンがグングニルを投げる番だ」
「では軍を前に出されるのですか」
「そうしたいところだがあえてしない」
しかし彼はそれはしなかった。
「待つ。彼らをな。彼等も彼等で手順があるだろう」
そう言いながら前を見据えた。そこには星の大海を埋め尽くさんとするばかりの数の大軍が今姿を現わそうとしていた。
「全軍に告ぐ」
マクレーンはブレスの艦橋から指示を出していた。
「射程に入り次第攻撃に移るように」
「了解」
それにモニターに映る各元師達が頷く。皆戦闘服を着ていた。
「いつも通りいこう」
「わかりました」
「攻撃目標はエウロパ軍」
彼はまた言った。
「作戦通り殲滅していく。よいな」
「ハッ」
元帥達がそれに頷いた。階級が同じであってもマクレーンに従っているのは席次故であった。階級が同じであっても役職により上下関係はあるのである。軍の指揮系統はそうしたことも定めているのである。統合作戦本部長が制服組のトップであり宇宙艦隊司令長官と参謀総長がそれに続く。つまり今この艦には連合軍のナンバーツーとナンバスリーが乗艦していることになる。
元帥達がモニターから消えた。マクレーンはそれを見届けた後で隣に立つ劉に顔を向けた。

## 第十四部第一章　振り下ろされた刃その十五

「遂に戦闘となりましたが」
「はい」
「彼等は何を用意しているでしょうかね、一体」
「おそらくは切り札を用意しているでしょう」
「切り札を」
マクレーンはそれを聞いて考える目をした。それから言った。
「そういえば後方からテューポーンを持って来たと聞いていますが」
「はい」
「それが切り札でしょうか」
「おそらくは。ですが私に考えがあります」
「それは」
「それはその時になってから申し上げます」
そこで表情を変えた。笑った。
「それで宜しいでしょうか」
「はい」
マクレーンはそれに頷いた。特に断ることもなかった。
「今まで難攻不落と言われた存在は多いですが」
そしてこう言った。奇しくもエヴァが自分達の巨大戦艦に対して言ったことと同じである。
「実際に陥落しなかったものはありませんよ」
「テューポーンもそうなりますか」
「はい」
彼は頷いた。
「そういえばテューポーンは最後は負けていますな」
「そういえば」
「我々と彼等の神話は違いますがここはやってみましょう」
「神話の再現をですな」

「はい。我々はゼウスになりましょう」
劉は不敵な様子でそう述べた。
「あそこまで好色ではありませんが」
「ゼウスなら既に我々を待っていますが」
「我々をですか」
「そうです。オリンポスにおいてね」
「そうでしたな」
彼等はそう言い合って笑った。オリンポスはギリシアの神々が集う場所である。その主はゼウスだ。それをもじっているのであった。
双方は互いの姿を確認した。そして連合軍はそのうえでゆっくりと前進する。エウロパ軍はそれを待ち受ける。これはニョルズにおいても同じであった。
「間に合ってよかったな」
「はい」
ニョルズでの布陣を終えたモンサルヴァートはプロコフィエフに対してそう語っていた。プロコフィエフもそれに頷いた。
「丁度それが終わったら来た。やはり速い」
「そうですね」
プロコフィエフもそれは認めた。
「兵は神速を尊ぶといいます。連合軍にはあまり当てはまらないことですが」
「彼等だけは例外だということだ」
モニターには敵の大軍が映っている。漆黒の大軍であった。
「全軍戦闘用意」
アッディーンは指示を下した。
「よいな。この戦いは敗れるわけにはいかない」
「はい」
「そして私も敗れるつもりはない」
「私もそれは同じですよ」
「卿もか」

モニターに若いエウロパの軍服を着た男が姿を現わした。タンホイザーであった。
「まさか卿がここに来るとは思わなかったがな」
「何かを感じましたので」
彼はそう答えた。
「それで同行させて頂いたのですよ」
「いいのか？」
「何がですか」
彼はモンサルヴァートに対して問う。
「この戦い、尋常なものではないぞ」
「だからですよ」
彼は笑って返した。
「戦場は激しい程映えるのです」
「ふむ」
「このニョルズの戦いはエウロパ軍はじまって以来の熾烈な戦いとなるでしょう。これこそ私の望んでいた戦場なのです」
「わかった。なら卿の力を期待する」
「有り難うございます」
「閣下」
モンサルヴァートに対して報告が入った。
「何だ」
「敵軍がこちらに向かっております」
「そうか。そしてその先頭にいるのは」
「あの巨大戦艦です」
「あれがか」
予想していたことであった。彼はそれを聞いて静かに頷いた。
モニターに黒い巨大な艦影が映る。それはまるで怪物の様であった。
「行くぞ」
彼は一言そう言った。

「勝つ。よいな」
「ハッ」
エウロパ軍も動いた。こうして二つの星域での戦いがはじまった。
エウロパの命運を賭けた戦いが。

# 第十四部第二章　鉄の壁その一

鉄の壁

クロノス、そしてニョルズ両星系において連合軍とエウロパ軍は戦闘に入った。まずは連合軍の前進から戦いの幕が開いた。

「ティアマト級巨大戦艦、前へ」

マクレーンの指示が下った。それと共に二千隻の巨艦が前に出て来た。

あまりにも巨大な姿であった。まるで銀河を制圧するかのような。一隻だけでもそうであるのにそれが二千隻である。それだけで戦場を威圧していた。

その巨艦の艦首にある巨砲に光が込められた。そこから一斉に巨大な三条の光の帯が放たれたのであった。

「敵の攻撃来ます！」

エウロパ軍のオペレーターの声が響く。それは悲鳴であった。

この最初の攻撃により前線にいるエウロパ軍の艦艇のかなりの数が薙ぎ倒された。そして前線に配されていたコロニーレーザーにもかなりの損傷が出た。

「まずは手荒い挨拶だな」

シュヴァルツブルグはそれを受けてこう言った。

「我が軍の損害は」

「一万隻程かと」

「思ったより少ないな」

「ですが」

報告する参謀の声はそれでも暗かった。

「第一防衛ラインに置かれていたコロニーレーザーが」

「どうかしたのか」

「かなりの損傷を受けまして。満足に攻撃可能なレーザーは半分程になりました」

「半分にか」
「はい、先程の攻撃はどうやらコロニーレーザーを狙ったものであったようです」
「そうか。考えたな」
「それだけではありません」
別の参謀が報告して来た。
「機雷地帯にも敵が来ております」
「そこにもか」
「護衛艦隊に護られて掃海部隊が向かっております。如何為されますか」
「予想されたことだな。その数は」
「約百個艦隊程かと。如何致しますか」
「とりあえず足止めの艦隊を送ろう」
「わかりました」
「緑騎士団及び灰騎士団、そして銀騎士団を向かわせる」
「ハッ」
「ただしあくまで足止めだ。時が来たら退くように伝えよ。よいな」
「わかりました」
「そして敵の次の動きは」
「このまま前進して来ます」
また報告が入って来た。
「ティアマト級を先頭に。砲艦とミサイル艦の布陣が確認されております」
「わかった。ではこちらもあれに移ろう」
「あれですか」
「そうだ。準備はいいな」
「ハッ」
その参謀は敬礼した。次に前線にいる部隊に指示を伝える。
「そうか」
前線を指揮する指揮官の一人マールボロはその指示を聞いて静か

に頷いた。
「閣下、何と」
彼の主席参謀であるウィリアム＝マウントバッテン大将が彼に問うた。
「あれをするそうだ」
「あれですか」
それが何であるかは彼にもわかっていた。こくりと頷いた。
「敵の動きはどうなっているか」
「予想通りです」
マウントバッテンはそう答えた。
「砲艦とミサイル艦の斉射に移るようです」
「そうか、相変わらずだな」
もう連合軍の攻撃の手順はわかっていた。そうとなれば対処の方法もないわけではないのだ。無論これは連合軍も承知のうえであるのだが。
「では各艦に伝えよ」
「ハッ」
「あれをやるとな」
「了解」
こうしてエウロパ軍は次の行動に備えた。それに対して連合軍は機械的に砲艦とミサイル艦の攻撃の準備に移っていた。
「砲艦、ミサイル艦一斉攻撃」
「砲艦、ミサイル艦一斉攻撃」
また指示が下った。これにより砲艦の巨砲とミサイル艦の巨大ミサイルが一斉に放たれた。光の壁と心を持たない狩人達が獲物に襲い掛かった。
「来ました」
「よし」
マールボロは報告を受けて頷いた。そして言った。
「全艦散開！」

「全艦散開！」
一斉に各艦が動いた。今まで方陣を組んでいたのが散陣になった。それは一瞬のことであった。
その一瞬のことで彼等は救われた。散開したことにより連合軍の攻撃への損害を最小限に抑えたのであった。無数の光の帯もミサイルも陣をすり抜けて行ったのであった。

## 第十四部第二章　鉄の壁その二

「上手くいったな」
「はい」
マウントバッテンはマールボロの言葉に頷いた。
「まさかここまでとは」
「だがまだ敵の攻撃の一つをかわしただけだ」
「ですね」
油断はできなかった。それはこの二人もよくわかっていた。
「すぐに方陣に戻れ」
「ハッ」
それに従いエウロパ軍はすぐに方陣に戻る。よく訓練されていることと豊富な実戦経験が窺える実に巧みな動きであった。
「敵ながら見事と言うべきか」
連合軍の第一陣の中央を指揮するコレッリはそれを見て思わず唸ってしまった。
「ああしたかわし方があるとはな。勉強になる」
「ですがそうも悠長なことは言っていられませんぞ」
「わかっている」
副官の言葉に頷いた。
「敵がそう来るならばこちらにも考えがある」
「はい」
「電子妨害を仕掛ける。いつもの方法でな」
「わかりました」
こうして連合軍は次は電子妨害を仕掛けてきた。これによりエウロパ軍の動きを乱そうというのである。かってアルテミスにおける一連の戦いで猛威を奮った戦法である。これにより一気にエウロパ軍の陣を崩そうというのである。
「閣下」

マウントバッテンは電波の異常を見てすぐにマールボロに報告した。
「わかっている」
彼はそれに頷いた。だが頷いただけであった。
「さて、と」
コレッリは敵の動きを注視していた。そして同時に身構えていた。
「どうなるかな」
「それは決まっております」
傍らに立つ幕僚の一人が自信に満ちた笑みと共にそう言った。
「もうすぐ彼等はその陣を大いに崩すでしょう」
「崩すか」
「はい、今までのように」
彼の言葉もまた自信に満ちたものであった。
「我等はそこを衝けばいいのです。それで敵の第一陣は容易に崩壊します」
「今まではそうだったな」
コレッリはそれを聞いてそう言葉を返した。
「はい」
「だがこれからはどうかな」
「といいますと」
幕僚はそれを聞いて怪訝そうな顔をした。
「何かあるというのでしょうか」
「当然だ」
コレッリの返答はこうであった。
「人間は進歩する生き物だとされている」
「はい」
「ならば彼等とてそうではないのか。幾ら何でもあそこまで痛めつけられていて何も学ばないとは思わない方がいい」
「しかし」
「ここで貴族だから云々言うのは止めた方がいい」

「ウッ」
幕僚は今言おうとしたことを止められ口篭もってしまった。
「偏見に基づく価値判断は碌な結果を生み出さないぞ」
「それはわかっているつもりですが」
「ならすぐに捨てることだ。いいな」
「はい」
この幕僚は黒人であった。若しかするとかっての植民地時代のことから彼等を侮蔑しているのかも知れなかった。アフリカはかって欧州によって凄まじい搾取を受け、独立後も意図的な国境線や紛争への工作により苦しめられてきてきたのであるからだ。もっともこれは最早歴史の世界の話になっており忘れている者は忘れているのであるが。
「彼等がどうするかだ」
「どちらにしろ攻撃準備は整えておきますか」
「無論だ」
コレッリはそれは続けさせた。
「どちらにしろ攻撃は仕掛ける。よいな」
「ハッ」
連合軍は今にも飛び掛らんとする態勢のままエウロパ軍を見据えていた。見ればエウロパ軍はその動きを崩してはいなかった。
「やはりな」
コレッリだけではなかった。連合軍の多くの将がそれを見て頷いた。
「そのままの態勢でいるか。どうやら通信妨害では動じなくなっているようだな」
「まさか」
「だが彼等の動きを見よ」
コレッリは先程と同じ幕僚に対してそう言葉をかけた。
「通信妨害を仕掛ける前と全く動きは変わってはいないではないか」
「それはそうですが」

「これも訓練の故だろう」
「訓練の」
「若しくは実戦の経験によるものか。通信が効かなくなったら下手に動かない方がいい」
「はあ」
「彼等の出した答えはそれだ。どうやら我等の戦術はまたしても破られたわけだ」
「しかし」
「わかっている」
コレッリは幕僚に対して言った。
「攻撃を仕掛けよ。よいな」
「はい」
こうして再び砲艦及びミサイル艦による一斉攻撃が行われた。だがこれも散陣により損害を抑えられてしまった。連合軍の二つの攻撃を封じたエウロパ軍は意気が上がった。

## 第十四部第二章　鉄の壁その三

「閣下、ここは」
「うむ」
マールボロはマウントバッテンの言葉に頷いた。
「全艦砲門開け」
「全艦砲門開け」
「そしてミサイルも用意しろ」
「ミサイル発射用意」
マールボロの言葉に従いエウロパ軍の第一陣は全艦攻撃態勢に入った。
「まずは間合いを一気に詰める」
「はい」
彼は攻勢に出るつもりであった。
「そして間合いに入ったならば一気にいくぞ。いいな」
「わかりました。それでは」
「連合軍の攻撃の間合いは広い。それには注意しろ」
「わかっております。では」
「よし。全艦突撃！」
マールボロの指示が下された。それに従いエウロパ軍の艦艇は一挙に動いた。
「マールボロ元帥も思い切ったことをやる」
シュヴァルツブルグは後方からその指揮を見てそう呟いた。
「まさかここで攻撃に出るとはな」
「いえ、これは予想されたことです」
だがエヴァはそう答えた。
「予想されたことか」
「はい。連合軍の得意とする戦術を破ってきました。ならばここで反撃に転じたいというのが人としての欲です」

「欲か」
「はい。そして閣下は今その欲を取られました」
「だがそうするべき時なのか、今は」
「私はそう思います」
エヴァはそう言葉を返した。
「今我が軍の士気は上がっております」
「うむ」
「そういう時にこそ攻勢を仕掛けるべきですから。閣下は正しい判断を為されました」
「だが彼の指揮下にある兵だけでは危険だな」
「ですね。いざという時に」
最悪の事態を常に想定するのは軍人の常である。エヴァはこの時素直にそれに従ったまでであった。この時彼女は軍人であった。
「では第二陣及び第三陣に伝えよ」
「はい」
「すぐに第一陣をフォローするようにとな」
「ハッ」
こうしてエウロパ軍もまた動いた。エウロパ軍第一陣は散開と集結を繰り返しながら連合軍の攻撃をすり抜けつつ急進する。そのまま連合軍に迫っていた。
「そろそろいいな」
「はい」
またマウントバッテンが頷いた。
「全艦攻撃せよ！そしてその後は全速で離脱する！」
「了解！」
マールボロとて歴戦の将である。彼の指揮下にある軍だけでは連合軍の相手にはならないことはわかっていた。ここはあくまで一撃離脱戦法に徹することにしたのであった。
砲撃とミサイル斉射が同時に行われる。そしてエウロパ軍は全艦急進離脱する。攻撃を終えると一目散に後退をはじめた。

「これでどうだ」
マールボロはモニターに映る後方の連合軍を見て満面に笑みを浮かべていた。
「少しはダメージを与えることができたかな」
「少なくとも最初のあの巨艦の攻撃程のものはいけたのではないでしょうか」
マウントバッテンがそれに応えた。
「それならば御の字だな」
「いえ、それが最低限の戦果かと。我が軍を以ってすれば」
「言ってくれたな、また」
だが悪い気はしなかった。確かな手応えもあった。しかしそれは空振りに終わっていた。
「な・・・・・・！」
マールボロはモニターに映る連合軍を見て思わず絶句した。
「これは一体・・・・・・」
何とエウロパ軍の攻撃はほぼ無効化されていたのである。ビームは弾き返されミサイルは撃墜されてしまっていた。従って連合軍の損害は皆無に等しかった。
「うまくいったな」
「はい」
今度はクラウスが笑っていた。彼もまたこの戦いに参加していたのである。
「イージス艦、思ったより遥かに優秀なようですな」
「ああ」
クラウスは参謀の言葉に頷いていた。
見ればエウロパ軍に見慣れない艦艇が見られた。それは巨大な円盤状の艦体を持つ艦であった。見ればところどころに様々な武装を配している。
「この戦いに間に合って何よりだったな」
「ええ」

「これで敵の攻撃をより効果的に防ぐことができる。そうだな」
「その通りです」
参謀達はクラウスの言葉に頷いた。
「では行くとするか」
「はい」
連合軍は前進を開始した。だがエウロパ軍はそれよりも前に後方に退きはじめていた。
「危ないな」
マールボロは連合軍の動きを見てそれを察知していたのだ。
「全速で離脱を命じたのは正解だったな」
「どうやらそのようですな」
マウントバッテンもそれに同意した。
「しかしまた新たな艦艇を投入して来るとは」
「連合軍も侮れないな、本当に」
彼等はモニターに映る連合軍の艦艇の一つを見ていた。そこにはあの円盤状の艦艇が存在していた。

## 第十四部第二章　鉄の壁その四

「まるで大昔のＳＦ映画に出て来るＵＦＯみたいだな」
「また懐かしいお話を」
「いや、本当に。子供の頃見た映画で実際にあんな形の円盤が出て来たのだ」
「その中に乗っているのは宇宙人ですな」
「よく知っているな」
「知らない筈もないでしょう。我々は今実際に宇宙におりますし」
「ふむ」
「そうした本も読んでおりますよ。子供の頃から」
「卿は本でＵＦＯを知ったのか」
「よくあるオカルト雑誌で」
　彼はそう答えた。
「異星人が出て来たとか。私が見たのはロボット型の宇宙人でしたかな」
「おお、あれか」
　マールボロはそれを聞いて顔に笑みを浮かべた。
「それなら私の観た映画にも出ていたぞ」
「そうなのですか」
「敵役でな。人類を侵略せんとする悪しき宇宙人の尖兵としてだ」
「よくあるお話ですな」
「だが面白かったな。最後はお約束だが」
「悪い宇宙人は撃退されるのですな」
「そうだ。エウロパ人によってな」
「では今回もそうなるでしょう」
「だな」
　彼等は退きながらもそう言い合って笑っていた。そこには余裕すらあった。

「敵は確かに手強い」
「はい」
「だがあの形の兵器を出してきた時点で全てが終わりだ」
「あの形の兵器を使う者が勝った作品はありませんからな」
「今後映画業界は大忙しだろう」
いささかユーモアを込めて言う。イギリス人はこの時代においてもユーモアを嗜むのが貴族としての身だしなみの一つと考えられているのである。そしてマールボロはユーモアの名手としても知られている。
「私も映画に出るだろう」
「それは何よりです」
「ただし顔は全く違う」
「それは当然なのでは」
マウントバッテンも乗ってきた。彼も貴族でありユーモアの嗜みはある。
「そう。しかしもう一つ決定的に違うであろう場所があるのだ」
「それは一体」
「ここだよ」
そう言って自分の頭を指差した。
「流石にこれは変えられるだろう。映画の主役が禿頭では絵にはならない」
「さて、それはどうでしょうか」
「それも違うのか」
「ナポレオンも髪の毛は薄かったようですぞ」
「ふむ」
これは実際に彼が皇帝になってからの肖像画で描かれている。彼は小柄でありかつ頭が非常に大きかった。それだけにその髪の毛の薄さも目立ったのかも知れない。なお若い頃はそれなりに髪の毛はあった。
「ジュリアス＝シーザーも」

「それは有名だな」
「御存知でしたか」
「知らない者もそうはいないだろう」
「言われてみれば」
その通りであった。シーザーは全身の毛を脱毛し、髪の毛をカールにして、服にまで気を使いその男伊達ぶりをローマで見せつけていた。長身であった彼はそれだけで見栄えがあった。だがマスクや外見よりも言葉やそのカリスマで女性を魅了するタイプであったのだ。
その彼の悩みが若禿であった。いつもその広い額を隠すのに苦労していたという。その苦労は死ぬまで続いた。彼の数少ないコンプレックスであったのだ。
「だが映画でも漫画でもシーサーもナポレオンも髪の毛はある」
「小説でも多くはそうですね」
「幾ら何でも見栄えがよくない。ましてやもう特効薬があるというのに」
「禿頭の」
「わしは使ってはいないがな。そこまでして髪の毛を生やそうとは思わん」
「左様で」
「禿るなら禿てもいい」
彼は言った。
「そう思っていたら三十になると急に髪の毛が薄くなってきた」
「三十からですか」
「そしてこうなった。禿る時はあっという間だぞ」
「怖いお話ですね」
「薬があるにはあるがな。だが禿はまだある」
まるで天然痘かペストのように言う。実際に人類の歴史書では禿頭の特効薬はジェンナーの牛腫に匹敵する程の評価を受けているのだ。他には水虫の特効薬の評価も高い。

「わしがその生き証人だ」
「身につまされるお話ですね」
「薬を使わないとこうなる、か」
「今からお使いになられては」
「今更何を」
そう言って笑って返した。
「ここまで来たらかえって気分のいいものだ。何せ禿頭は滅多にいない」
「はあ」
「開き直るというのもいいものだぞ。この頭で辺りを照らすのだとな」
だが連合軍の行く先を照らす真似はしなかった。彼の率いるエウロパ軍は一目散に元の陣地に戻ってしまっていた。そしてまた防衛に務めるのであった。
「速いな」
マクレーンはその動きを見て思わず唸ってしまった。
「見事な動きだ。敵の指揮官は」
「マールボロ元帥のようです」
幕僚の一人がそう答えた。
「マールボロ元帥か」
「はい。それが何か」
「いや」
彼は少し間を置いてからそれに言葉を返した。
「慎重派と聞いていたのだがな。どうして大胆な動きをする」
「そうしなければならない状況ですし」
それに劉が答えた。
「状況ですか」
「はい」
そしてそれに頷いた。
「彼等はもう後がありませんから」

「ですな」
それはマクレーンにもわかっていた。こくり、と頷いた。
「それならば厄介ですかな」
「一面においてはそうですが」
劉はそれに対して言った。
「ですが別の一面から見てはそうではありません」
「といいますと」
「長官もおわかりだと思いますが」
「ふむ」
マクレーンはそれを聞いて楽しそうに笑った。
「あのことですかな」
「そうです」
劉もそれに合わせて楽しそうな笑みになった。
「心理的に彼等が追い詰められているのは事実」
「はい」
「焦りが見られます。それを衝いていくとしましょう」
「了解しました」
それを受けてマクレーンは全軍に指示を下した。連合軍は突如としてその進軍を停止したのであった。

## 第十四部第二章　鉄の壁その五

「何っ」
エウロパ軍の将兵達はそれを見て皆いぶかしがざるにはいられなかった。
「これは一体。どういうことだ」
「何かあったというのか」
「進撃を停止したか」
それはシュヴァルツブルグも同じであった。
「何を考えているのだ」
「罠ですね」
それに対してエヴァがこう言った。
「罠か」
「はい。今は大人しく陣に篭るべきです」
彼女は上官にそう述べた。
「今こちらから仕掛けたならば取り返しのつかないことになります」
「後手打ちを狙っているのか」
「おそらくは」
後手打ちとは敵に先に進ませてその攻撃の終結ポイントで一気に反撃に転じるというものである。かってドイツ軍の知将マンシュタインが数的に圧倒的に有利なソ連軍に対して仕掛け多大な戦功を挙げたことで知られている。
「まさかとは思うがな。物量は彼等の方が圧倒している」
「それでも策は仕掛けてくるでしょう」
エヴァはまた述べた。
「勝利を掴む為には」
「我々と同じだということだな」
「そうですね」
彼女はそれに頷いた。

「ただその勝利を捧げる神が違うだけです」
「神がか」
ワレンシュタインのモニターにはその神が映っていた。連合軍の巨大戦艦の異様なシルエットが映っていたのである。
連合軍は動かなかった。そしてエウロパ軍も動かなかった。両軍はそれぞれ睨み合いに入る形となった。
「気付かれたか」
劉は自分達の陣地に篭り動こうとしないエウロパ軍を見てそう呟いた。
「彼等もあながち馬鹿というわけでもないか」
「まっそういうことですな」
マクレーンはそれに頷いた。
「しかしだからといって我等の手が尽きたというわけではありませんぞ」
「ですな」
劉はそれに応えた。
「ではあれを仕掛けるとしますか」
「はい」
マクレーンはまた頷いた。そして再び全艦隊に指示を下した。
「全艦に告ぐ」
マクレーンの強い声が全ての艦艇に響いた。
「ムッ」
「うちの艦長の声じゃないな」
それぞれの艦艇にいる兵士達がその声を聞き顔を上げた。
「じゃあ誰の声なんだ？」
「分艦隊司令じゃないのか？どうかな」
「馬鹿を言え」
そんな話をしている若い兵士達にいかつい顔立ちの上級曹長が言った。
「これは宇宙艦隊司令長官の声だ」

「宇宙艦隊司令長官」
「マクレーン元帥が！？まさか」
「そのまさかだ」
彼はまた兵士達に対して言った。
「司令直々の御言葉だ」
「何てこった」
兵士達はそれを聞き驚きを隠せなかった。
「一体何が起こるっていうんだよ」
「面白いことが起こるんだ」
上級曹長は笑って兵士達にそう述べた。
「まあ見ていろ」
「はい」
「御前等が死ぬまで忘れられないようなことが起こるからな」
「この戦いで死んでもですか」
「何だ、死にたいのか？」
「いえ、まさか」
軽口を叩いた若い兵士の一人が首を横に振った。
「縁起でもありませんよ。俺は祖国に残してきた彼女がいるんですよ。この戦いが終わったら任期満了ですから田舎に帰って結婚するつもりなんですよ」
「御前国は何処だ」
「チベットです」
彼は答えた。
「実家は農家でして。都会に出て軍に入りましたけれどやっぱり田舎がいいなって思いまして」
「それで帰るのか。嫁さんをもらって」
「ええ。駄目でしょうか」
「御前の人生だ。そんなことにまで俺は何も言わん」
上級曹長はその若い兵士に笑みを浮かべてそう述べた。いかつい顔がまるでジャガイモの様になった。

「だが結婚するのはいいことだな」
「そうですか」
「俺にもかみさんがいてな」
「はい」
「家でいつも俺を待ってくれているんだ。娘達と一緒にな」
「上級曹長に娘さんが」
兵士達はそれを聞いて驚きの声をあげた。
「そうだ。それがどうかしたか？」
「いえ、あの」
「意外だなあと思いまして」
彼等は口々にこう言った。
「意外か。俺に娘がいるのが」
「まあ」
「それでどんな方々なんでしょうか」
「言っておくが御前等には紹介はしないぞ。もう三人共結婚している」
「そうなんですか」
「その証拠に見ろ」
そう言って彼は懐から一枚の写真を取り出した。それは私服姿の彼を中心に優しげな顔の初老の女性と三人にその女性に似たわりかし容姿端麗な三人の女性達がいた。見れば三人の横にはそれぞれ男がいてその手の中には子供達がいる。
「俺の孫達だ」
彼は笑ってそう言った。

## 第十四部第二章　鉄の壁その六

「皆女だ」
「そうなんですか」
「どういうわけか俺の血筋は女が多くてな」
彼は少し困った顔をしてこう言った。
「俺の兄弟も親父の兄弟もな。女ばかりだ」
「はあ」
「そんな女だらけの場所が嫌になって軍に入ったんだが。娘も孫も女ばかりだ」
「それはまた」
「まあ仕事場は違うのでどっこいどっこいといったところかなとは思っているがな。と思ったらここも女が多い」
「昔の軍隊ですよ、それは」
「今頃はね。サハラ位でしょう、男だけの軍隊は」
「そうだろうな」
彼もそれに頷いた。
「色気はもう足りているからな、俺の場合」
「色気ではないでしょう」
「わかるか」
「ええ。女も三人いれば」
「猛獣だぞ」
「猛獣ですか」
「結婚してみろ」
そしてここで兵士達にこう言った。
「わかるからな」
「俺だったら何人いても大丈夫ですけれどね」
「若いな、それは」
そう軽く言った若い兵士に対して言葉を返す。

「まあそのうちわかるさ」
「でしょうかね」
「身を以ってな」
そんなやりとりをしている間にも連合軍は動いていた。急にエウロパ軍に対して横腹を見せた。
「ムッ」
「これは一体」
エウロパ軍の将帥達はそれを見て眉を顰めさせた。
「どうするつもりなのだ」
「ここで腹を見せるとは」
彼等にはその理由がわからなかった。だが連合軍はそのままの態勢のままゆっくりとエウロパ軍に接近してきたのである。まるで壁が迫るように。
「圧迫するつもりか」
それを見てジェラールはそう呟いた。
「また数に頼み。芸がないな」
「果たしてそうでしょうか」
だがそれにシリアーニが疑問の声を呈した。
「私には彼等の策であるように見受けられますが」
「策か」
「はい」
彼は頷いた。
「それがどのようなものかまではわかりませんが」
「ふむ」
「絶対に何かある筈です。ここは様子を見ることにしましょう」
「わかった」
ジェラールはそれに頷いた。
「ではここは様子を見よう。今まで通りな」
「はい」
シリアーニは応えた。

「それが宜しいかと思います」
「連合軍」
ジェラールは呟いた。
「今度は何をしてくるつもりか」
だがそれは彼等にはわからなかった。わかっているのは連合軍の者達だけであった。
「どうやら我等の行動を見てかなり戸惑っているようですな」
劉はそれを見て勝利を確信した笑みを浮かべていた。
「ここで突撃を敢行することはないようですな」
「したくとも出来ないでしょう」
劉はマクレーンにもこう述べた。
「我々が何をしてくるつもりなのか予想できていないのですから」
「ですがそれももうすぐわかることです」
「はい」
「彼等がその身を以って。射程はどうでしょうか」
「まだです」
幕僚の一人がそれに答えた。
「全艦の射程に入るまであと数分程かかるようです」
「そうか」
「あと数分」
「そう、あと数分です」
見ればその幕僚も笑みを浮かべていた。
「宜しいでしょうか」
「悪い筈もない」
それがマクレーンと劉の答えであった。
「インスタント食品の完成するのが先かどうかという時間だ。待つ」
「インスタント食品ですか」
「ええ」
ここでクラウスが艦橋のモニターに姿を現わした。不意に姿を現わした彼に対してマクレーンは落ち着いて返した。

## 第十四部第二章　鉄の壁その七

「それ程の時間でしょう」
「確かに」
それはクラウスにもわかっていた。
「しかし私の好みのインスタント食品はまだできませんな、数分ですと」
「おや」
マクレーンはそれを聞いて面白そうにその眉を動かした。
「クラウス元帥はどの様なインスタント食品がお好みで」
「タコスですよ」
彼はそう言葉を返した。
「タコス」
「はい。電子レンジに入れてね。温めるだけです」
「それならすぐではないのですか」
「ところがこれが違いまして」
彼は言った。
「本当に美味しく食べるにはさらに温めなければならないのですよ」
「どれ程」
「十分程」
「あまり変わりがないように思えますが」
「ところがそれが違うのです」
どうやらクラウスはタコスというものに特別な思い入れがあるようである。なおタコスはこの時代連合においてはかなりポピュラーな軽食の一つであるハンバーガーや肉まんと同じ扱いである。他にはピロシキや生春巻、シシケバブ等もある。連合の食事は軽食であってもかなりバラエティに富んでいるのである。
「タコスはね。熱くないと」
「ハンバーガーと同じように」

「ところがハンバーガーとはまた違いまして」
「おやおや」
マクレーンはハンバーガーを否定されて少し苦笑いを浮かべた。
彼はハンバーガーが好物なのである。しかしだからといって怒ることが許される状況ではないのは理解していた。
「かなり熱くないと美味しくはないのです」
「それでそれだけ温められるのですね」
「そういうことです」
クラウスはここでようやく満足気に頷いた。
「ですが戦争は違います」
「ほう」
「頃合いがあります。この数分はその頃合いです」
「我が軍にとって」
「敵は今戸惑っています。今が狙い目です」
「二撃目の用意はできているでしょうか」
「無論」
劉とクラウスが同時に答えた。
「それどころか四連斉射も可能です」
「四連ですか」
「どうされますか。これはかなりのエネルギーを消費しますが」
「構いません」
マクレーンは躊躇することなくこう言った。
「今が肝心ですから。迷うことはありません」
「左様ですか」
それを聞いて劉もクラウスも納得したようであった。
「ではそれでいきましょう。我々としてもそれで異存はありません」
「はい。では」
こうして彼等の方針も決定した。距離はその間にもいよいよ狭まってきた。
「どうするつもりなのだ、彼等は」

エウロパ軍はそれを見ながらさらに不安な感情を募らせていた。
「仕掛けて来るのは間違い無いが」
「それが何であるか」
彼等には連合軍の真意が完全には掴めなかった。それがさらに不安感を煽っていた。
連合軍は次第に近付く。それは機雷源においても同じであった。

## 第十四部第二章　鉄の壁その八

「敵軍は戸惑っているな」
リバーグはそれを見て冷静にそう述べた。
「だがまさか彼等が来るとはな」
目の前にいる騎士団を見てそう言った。
「油断はできない」
「それはわかっているつもりです」
参謀の一人がそれに応えた。
「ですが今回の戦術ならば。如何に彼等とて」
「そうだな」
リバーグにも今回は自信があった。
「彼等がいないのが残念だがな」
「彼等とは」
「決まっているだろう」
彼はそう言葉を返した。
「義勇軍の将兵達だ。彼等がいればより楽に戦えただろうにな」
「それは仕方のないことです」
それに対する参謀の答えはこうであった。
「仕方のないことか」
「はい、彼等は今ニョルズにいます。そしてそこで死闘を繰り広げていることでしょう」
「彼等も戦っているのだな」
「はい」
参謀は頷いた。
「それも死闘を。果たしてどちらが先にオリンポスに辿り着くか」
「競争というわけだな」
「そういうことです」
「競争というが」

それを聞いたリバーグの顔が少し傾いた。
「少し問題があるな」
「といいますと」
「確かに功を競い合うのはいいことだろう」
「はい」
「だがそれにより焦らなければいいが。焦燥は百害あって一利なしだ」
慎重派で知られる彼らしい言葉であった。彼は常に将兵達に対しては焦ってはならない、落ち着いてことを運ぶようにと言っているのである。将兵達はそれを聞いてまたか、と苦笑いするのである。彼等はこんなリバーグのことを『心配屋の親父さん』や『リバーグ閣下の小言』と少し茶化して言ったりする。だが口やかましくとも誠実で将兵のことを真剣に考えているリバーグは人望があった。少なくとも部下には評価が高かった。
「それはわかっているな」
「閣下がいつも仰っておられますから」
「おい、君もそう言うのかね」
リバーグもそう言われているのはわかっている。思わず苦笑いを浮かべてしまった。
「全く。私はそんなに口やかましいかね」
「それは閣下が最もおわかりの筈ですが」
「ううむ」
だが当人は今一つわかってはいなかった。
「そうは思わないが」
「御家族は何と」
「娘達にはよく言われるよ」
渋々ながら言葉を返した。
「自分達にも自分達のことがあると。そんなに干渉しているつもりはないのだがね」
「まあ女の子というものはそんなものですよ」

「そうなのか」
何処かとぼけたような言葉になっていた。
「年頃の子というのは。難しいものです」
「妻もそう言っていたな、そういえば」
思い当たるふしもあった。
「では私の方が悪いのか」
「まあそうなります」
「難しいな、これは」
リバーグは首をまたもや傾げさせた。
「私はセクハラにも厳しいつもりだが」
「はい」
大体においてリバーグは女性に対しては極めて紳士的であると好評である。妻を大事にし、娘にも優しい。そして女性の部下達にも何かと気遣うことが多い。セクハラは彼の最も忌み嫌うことの一つでありこれに関する処罰は厳重である。彼は軍律にはことの他厳しいがセクハラやこうした事柄はとりわけそうなのである。生真面目な彼らしいといえば彼らしい。
「娘達にはまた違うのだな」
「今まではどうでしたでしょうか」
「中学校に入るまでは普通だった」
「やはり」
どうやらこの参謀には思い当たるふしがあるようである。

## 第十四部第二章　鉄の壁その九

「だが中学校に入ってから、いやその少し前からかな。変わりだしたのは」
「そうでしょうな」
「わかるのかね」
「ええ、勿論です」
彼は答えた。
「私にも娘がいますから」
「そういえばそうだったな」
リバーグはそれを聞いてこの部下のことを思い出した。彼は部下についてもよく知っておこうとする人物であるのだ。何事においても実に細かかった。
「そろそろ大学生だったかな」
「はい。一週間前に大学に合格しました」
「そうだったな。私も祝いの品を贈ったな」
「有り難うございます、あの時は」
「いや、いい」
リバーグはにこやかに笑ってそう返した。彼はこの部下の娘の入学祝いにと腕時計を贈ったのである。その大学のある星の腕時計であった。
「大したことではない」
謙虚にそう答えたのであった。
「私もあれには苦労させられました」
参謀は苦笑いを続けながら言葉も続けた。
「本当に。困ったものでしたよ」
「そうだったのか」
「ですからわかるつもりなのですよ、閣下の御苦労も」
「ふむ」

「まあ今はそっとしてみることもいいと思いますよ」
「そういうものか」
「時間が経てば。また変わります」
「それは何時までだね」
「まあ大学に入るか結婚する時にでもなれば。全然違っていますよ」
「結婚か」
彼はそれを聞いて少し遠い目をした。
「何かな。想像もできないな」
「私もそうでしたよ。この前生まれたばかりだというのに」
参謀も言った。
「気がついたら大きくなって。そして親元を離れて学校に入るのですから」
「そういうものかも知れないな」
リバーグは考え続けたままそう呟いた。
「娘、いや子供というものは」
「はい」
「親としては何か寂しいものもあるな」
「まあこれも仕方のないことです」
参謀はそう言ってリバーグを慰めた。
「あまり御気になさらない方がいいですよ」
「そうか」
「ええ。それを忘れるには最もいい方法が側にありますし」
「わかっている」
リバーグはその言葉に頷いた。
「ではそろそろだな」
「はい」
今度は全く別の顔と声の色になっていた。そして頷いた。
「敵との距離は」
「今駆逐艦及び護衛艦の射程にも入りました」
「よし」

リバーグはそれを聞いて顔を締めた。
「では行くぞ」
「ハッ」
「射撃用意」
「射撃用意」
命令がオペレーターによって復唱された。
「攻撃目標は前方にいる敵軍。四連だ」
「わかりました」
全軍彼の言葉に従い動く。彼はそれを冷静に見ていた。全ての艦の主砲及び副砲がゆっくりと旋回していた。そしてそれは前方のエウロパ軍に向けられていた。

## 第十四部第二章　鉄の壁その十

「全艦一斉射撃」
「全艦一斉射撃」
攻撃準備は整った。そしてそれぞれの砲身に光が灯る。リバーグの手が上げられた。その時同時にマクレーンの腕も上げられていた。二人の動きはこの時完全に重なっていた。
「撃て！」
「撃て！」
同時に命令を下す。そして手が振り下ろされた。これにより無数の光の帯が放たれたのであった。
光の帯は壁となっていた。そのあまりもの数により帯は重なり壁となっていたのである。壁は一直線に向かって行った。
「敵の攻撃来ました！」
エウロパ軍のオペレーター達が報告する。それは報告というよりは悲鳴に近かった。
「バリアーの出力を上げろ！」
「いえ、無理です！」
とある艦の艦橋にて艦長が必死に叫ぶ。だがそれは副長により否定された。
「あれだけの力だと・・・・・・。どちらにしろ・・・・・・」
もう光の壁はすぐ目の前に達していた。そしてそれがその艦を打ち据えた。光の壁の中に消え失せたのであった。
その艦だけではなかった。エウロパ軍の多くの艦がこの光の壁の中に消えてしまった。連合軍の圧倒的な攻撃であった。
「クッ、まさかあんな形で攻撃を仕掛けてくるとは」
シュヴァルツブルグは今何が起こったのかようやく理解した。そして苦悶の表情で呻いた。
「あんな古い戦術を今更」

「だからこそ効果があったのでしょう」
その傍らにいるエヴァがそれに応えた。連合軍が艦の横腹を見せ艦の中央に配されている全ての砲で一斉射撃を加える。所謂T字砲火であるがこれは二十世紀の砲戦の戦術であった。彼等は今それを行ったのである。
「確かに攻撃としては非常に効果的です」
「艦腹を見せてもだな」
「おそらくこちらから仕掛けても同じだったでしょう」
エヴァは冷静にこう述べた。
「射程に入れば」
「そういうことか」
シュヴァルツブルグはまたしても呻いた。
「やってくれるな。何処までも」
ここで二撃目が来た。エウロパ軍の艦艇はまたしても光の壁の中に消えてしまった。
「損害状況を報告しろ」
「一撃目で第一陣の一割程が撃沈されました」
「一割か」
「そして今の攻撃でも。損害は一割七分程に達しております」
「まずいか」
シュヴァルツブルグはそこまで聞いて呻いた。
「どうするべきか」
「おそらくまた攻撃が来るでしょう」
エヴァは言った。そしてそれは的中した。
またしても光の壁による攻撃がエウロパ軍を襲った。それによりまた多くの艦が撃沈された。

## 第十四部第二章　鉄の壁その十一

戦場は最早屍の山となろうとしていた。エウロパ軍の陣地は破壊されたり損傷した艦ばかりが漂い、まるで廃墟の様になっていた。生き残っている艦も何とかそこにいるだけのようになっていた。戦いは最早一方的な状況になろうとしていた。

またしても光の壁が来た。陣地は完全に破壊された。エウロパ軍は最早まともな戦力を為してはいなかった。

「三割近くが失われました」

報告が入って来た。

「三割か」

シュヴァルツブルグは腕を組んでその報告を聞いていた。

「最早考えるまでもないな」

「残念ですが」

見れば連合軍は艦首をこちら側に戻していた。そしてその速度を次第に速めてくる。

「敵の空母が前に出て来ようとしております」

今度は艦載機による攻撃だ。一刻の猶予もならない状況が近付こうとしていた。

「閣下」

エヴァが彼に声をかけてきた。

「御決断を」

「わかっている」

シュヴァルツブルグはこれに頷いた。その顔はもう土気色になっていた。

「第一防衛ラインを放棄する」

「ハッ」

「第二ラインまで下がる。よいな」

「了解」

こうなっては仕方がなかった。エウロパ軍は反転し全速力で第二ラインまで撤退を開始した。連合軍はそれを見てさらに速度を速めようとした。だがやはりここでも艦速の差が出た。
「無理か、追いつくのは」
「残念ですが」
コレッリに参謀の一人が応えた。
「では仕方ない。まずは第一ラインの障害を取り除くことにしよう」
「はい」
連合軍の動きに焦りは見られなかった。粛々と動き機雷やその他の障害物の除去にかかった。ここで掃海艇が大きな役割を果たした。
「やれやれだ」
掃海艇の艇員達はいささか不平混じりで仕事をしていた。
「全く。何でこう多いのかね」
「仕方ないだろ、敵さんも必死だ」
不平を言う若い下士官に同僚が言った。
「機雷も撒くさ。勝つ為にはな」
「それでもよくもまあこれだけあるものだ」
見ればそこは機雷の海であった。見渡す限り剣呑なものが浮かんでいた。
「終わるのかね、これだけあって」
「終わるのかね、ではない」
それを聞いた後ろに立つ紫の戦闘服の男が言った。
「終わらせるんだ」
「あ、艇長」
下士官達は後ろを振り向いて挨拶をした。見ればそこにはこの艇の艇長が立っていた。
「それに作業をしているのは我々の艇だけではないぞ」
「それはわかっているつもりですが」
若い下士官達はそれに応えた。
「しかし何といいますか」

「ボーナスは弾まれるぞ」
艇長はまだ不平を漏らす下士官達に今度は報酬で応じた。
「何でも給料の二ヶ月分らしい」
「えっ」
「それ本当ですか！？」
下士官達はそれを聞いて驚きの声をあげた。
「ああ。国防長官直々のお話だ」
艇長はニヤリと笑ってこう答えた。
「この戦いに勝利したら参加した将兵全員に一ヶ月のボーナス」
「おお」
「とりわけ危険な作業に身を呈した者達にはもう一ヶ月だ。どうだ。これで元気が出ただろう」
「勿論ですよ」
現金なものである。彼等は本当に元気が出た。
「それだけもらえたら」
「バイクのローンにもかなり助かりますし」
「バイクのか」
艇長はそれを聞いて思わず笑ってしまった。
「ええ、この前買ったんですよ」
彼はそう答えた。
「前から欲しかったんで。貯金を貯めてね」
「それのローンに今苦しんでいるんだな」
「ええ。けれどそれもかなり助かります」
彼は言った。
「羨ましいな」
これに対する艇長の返事はこうであった。
「羨ましいですか」
「当然だろう。俺は子供の養育費に全部消える。残ったのは女房のものだ」
「辛いですね」

「仕方ないといえば仕方ないさ」
家庭持ちの辛さであった。
「家を持つと金がかかる」
「それは聞いていますけれどね」
「まあボーナスが出るだけましだ。じゃあすぐにあの剣呑な奴等を始末するぞ」
「了解。全てはボーナスの為に」
「おい、勝利の為だろうが」
「あっ、そうでした」
「全く。困った奴等だ」
そんな軽いやりとりもあった。だがその中でも作業自体は粛々と進められた。そしてエウロパ軍が残していった障害物は彼等によってそのほぼ全てが取り除かれたのであった。
連合軍は障害を取り除くとすぐに第一ラインの跡地に入った。それからまずは集結を指示した。障害の除去の為に散開していた軍を呼び戻したのである。

## 第十四部第二章　鉄の壁その十二

「第一ラインはこれでよし」
マクレーンはブレスがラインの中に完全に入ったのを確認してからこう言った。
「まずは順調といったところかな」
「そうですな」
これに劉が頷いた。
「ですまだ終わったわけではありません」
「はい」
「敵軍は第二ラインに逃げ込みました。そしてそこでまたもや防衛を固めています」
「そして第三ラインには」
「あれです」
テューポーンのことである。
「第三ラインが正念場でしょうか」
「いえ、それは違います」
「というと」
「全てが正念場ですよ」
劉はこう述べた。
「全てですか」
「この戦いはね。敵は全てを賭けております」
「はい」
「そうした状況では。何時何処で何が起こっても不思議ではありません」
「特に山場を考えて動いてはいけないということですか」
「そういうことです」
劉が言いたいことはそれであった。
「そのうえで御考え下さい」

「わかりました」
「とりあえずは第二防衛ラインへの攻撃準備に掛かりましょう」
「はい」
マクレーンはそれに頷いた。
「それでは」
彼は横を向いた。そこには幕僚達が控えていた。
「先程の攻勢でエネルギーをかなり消耗しているな」
「はい」
幕僚の一人がそれに答えた。
「四連の斉射だけではありませんでしたから」
「それまでのミサイル等による攻撃もだな」
「そうです。再度大規模な攻勢を仕掛けるには補充が必要かと存じます」
「わかった」
マクレーンはこれに頷いた。
「それでは集結した後一時停止だ」
「ハッ」
「そして補給に入る。それから攻勢に入るぞ」
「わかりました。それではそのように」
「ただ一つ問題があるな」
「それは」
「敵に時間を与えるということだ」
マクレーンは眉を顰めさせてこう言った。
「時間を」
「そうだ。その間に防衛を整えるだろうな」
「それは当然でしょう」
劉が言った。
「敵も馬鹿ではありませんから。当然そうしてきます」
「そうですな」
「しかしそれもまた承知のうえ」

だがそれでも彼はこう言った。
「こちらが万全の状況にしておかなくてはかえって無駄な損害を出してしまいます」
「ミスをすれば敗戦に」
「そういうことです。ですから用心しておきましょう」
「了解ですな」
マクレーンはニヤリと笑った。
「それでは我が軍のとりあえずの方針は補給ということで」
「はい」
「全軍に告ぐ」
マクレーンは一連の会話のうえで指示を下した。
「補給艦による補給を受けよ。そしてエネルギー及び弾薬を完全な状況にしておけ」
指示はそれだけではなかった。
「補給を終えた補給艦はアルテミスに戻れ。そしてまたここに来るように」
ピストンでの行動を指示したのであった。今後の作戦行動を見据えての指示であるのはもう言うまでもないことであった。マクレーンは先のことも考えていたのだ。
「護衛にはパトロール艦を向けよ。その数を倍にしてな」
「護衛の数を増やすのですか」
「そうだ」
マクレーンは幕僚の言葉に頷いた。
「制宙圏を確保したとはいえここは敵地だ」
「はい」
「油断してはならないからな。何時どうやって奇襲を仕掛けて来るかわからない」
「わかりました」
「あとアルテミス星系の防衛も固めておこうか」
彼の指示は続いた。

「今はあそこが我等の生命線だ」
「はい」
「高速の機動艦隊を向けて破壊活動でもされたら適わないしな」
「今エウロパにそれだけの戦力があるでしょうか」
「作ればある」
彼はそう答えた。

## 第十四部第二章　鉄の壁その十三

「無理をすればな。現に彼等は我々の四分の一の戦力を集めてきた」
国力、人口にして三十分の一の国がである。これにはかなりの苦難があるのは言うまでもないことである。エウロパは連合との戦いに対してかなりの無理をしているのである。
「ですがそれももう限界では」
「国家というものはその最後が迫ると無理に無理を重ねる」
彼はまた言った。
「ナチス＝ドイツ然りソ連然りな」
第二次世界大戦の頃両国は中学生まで動員して互いに戦った。これにより両国の荒廃はその極みに達し多くの人々が命を落としたがソ連は生き残った。だがその傷は結果としてソ連という国がある限り残っていたが。
「そして北朝鮮という国もあったな」
「あれはまた特別でしょう」
幕僚の一人がそう答えた。
「幾ら何でも。二千万程の人口だったでしょうか」
「そうだ」
「それで百万の兵力は。当時としても異常だったと聞いていますが」
北朝鮮という国の国是は統一であった。その目的の為には手段を選ばない。武力行動も辞さなかったのだ。
そして各地で外国人の拉致や麻薬の密造、販売、偽札の発行等を行ってきた。国家が犯罪行為を行っていたのである。そうした国であるから敵も多かった。結果として過剰なまでの武力が必要だったのである。
「百万ではないぞ」
「多過ぎましたか」
その幕僚はマクレーンの言葉に自分の考えを訂正しようとした。

だがマクレーンはここで言った。
「違う。少ないのだ」
「少ない」
「予備兵力を含めるとな。九〇〇万だった」
「九〇〇万」
幕僚はそれを聞いて思わず呆然となった。
「人口の半分近くがですか」
「そうだ」
「確かナチス＝ドイツでも人口の十分の一程だったと記憶しておりますが」
「それを踏まえて見ると如何に異常な国家だったかがわかるな」
「はあ」
聞いてもまだ実感が掴めないでいた。
「何ともまあ」
「集めようと思えばどれだけでも集められる。兵士の数はな」
「しかし艦艇は」
幕僚は問うた。
「今の戦争は。艦艇や兵器がなくては。ましてや専門の技術者も」
二十世紀後半から軍人というものが大きく変わってきた。職種の専門家が顕著になってきたのである。
これまでは武器を手に取っていればそれだけで兵士となれた。長い間そうであった。それで容易に総動員令を敷くこともできたのである。
だが二十世紀後半からの技術革新によりそれが変わった。武器も多様化かつ複雑化しその取り扱いに専門的かつ深い知識が必要となったのである。そしてそれはこの時代においてはさらに顕著なものとなっていた。軍人は軍人であると同時に技術者となったのであった。これが連合やエウロパで徴兵制が施行されず志願制となった理由である。
「それも集めればどうにでもなる。老人でもな」

「そうなのですか」
「彼等にそこまでの覚悟があるかどうかまではわからないが」
「老人を戦場に送ることにですか」
「流石に髪の白い軍人は憚れるだろうからな」
「それはそうですね」
「危急の時にはそうも言ってはいられないだろうがな」
「それも踏まえてのことですか」
「もっともここでの戦いがすぐに終わればそうした心配もない」
「すぐにですか」
「敵にそうした戦力を整える時間を与えるまでに終わらせればな」
「それなら問題はありませんな」
ここで劉が言った。
「といいますと」
「私の計算ではそこまで時間はかかりません」
「ほう」
「御安心下さい。まあ守りを固めておくのは必要ですが」
「はい」
「エウロパがどれだけ堅固な防衛ラインを敷こうとも」
彼は言った。
「我が軍の前にはそれも空しいばかりです。それを見せてやりましょう」
「貴族の誇りも」
「同時に潰えます」
彼等は遥かな次の戦場を見据えていた。その前に彼等がいた。
「何とかここまで退くことができたな」
マールボロは第二ラインに入ったのを確認してからこう呟いた。
「はい」
マウントバッテンがそれに応じて頷く。
「しかし・・・・・・派手にやられたな」
「圧倒的な攻撃力でしたからな」

「第一ラインにいた戦力の三割以上を失うことになったな」
「主立った将達にも戦死者が出ておりますし」
「？誰だ」
マールボロはその言葉にすぐに反応した。

## 第十四部第二章　鉄の壁その十四

「それは一体」
「スチュワート元帥、そしてスコット上級大将です」
「あの二人がか」
マールボロはそれを聞いて沈痛な顔になった。
「二人共私の旧友だった」
「そうだったのですか」
「いい連中だったよ。かってはよく飲み合った」
「はあ」
「軍人ならば覚悟はしていたが。まさかそれが今だとはな」
「それも戦争の常です」
「そう言ってしまえばそれまでだが」
だがそれでも釈然としないものはあった。
「だがな」
「閣下、それ以上は」
マウントバッテンはそう言って彼がこれについてこれ以上言うのを止めた。
「そうか」
「いずれヴァルハラかオリンポスで会うことができます。それまでの辛抱です」
「そうだな。そう思うとしよう」
ようやく我を取り戻した。
「問題はこれからだな」
「はい」
艦橋から自軍の艦艇を見回す。見ればどの艦にもかなりの損傷が見られた。それが何によるものであるかはもう言うまでもないことであった。
「やはり彼等は手強い」

「はい」
「それはよく認識しておこう」
「ですね」
「まずは傷を癒そう。さもなければ戦えはしない」
「傷をですか」
「幸い敵も動くつもりは今はないようだな」
「どうやら陣地の確保と補給に専念しているようです」
マウントバッテンはそう報告した。
「今のうちかと」
「よし、ならば決まりだ」
マールボロは意を決した。
「全軍工作艦及び補給艦の修理及び補給を受けよ」
「ハッ」
「そして防衛ラインを再構築する」
彼はまだ指示を下した。
「連合軍の攻撃力は今までよりも高い。それに備えるぞ」
「わかりました」
「シュヴァルツブルグエウロパ元帥にもお伝えしろ」
彼はシュヴァルツブルグへの意見具申も行うことにした。
「防衛ラインも再構築すべしとな」
「わかりました。それでは」
「うむ。頼むぞ」
こうしてエウロパ軍も動いていた。シュヴァルツブルグの下に実際にマールボロからの意見具申が届いた。彼はそれを艦の会議室で受けた。
「どうされますか」
まずはエヴァがそれに問うた。
「防衛ラインの再構築ですが」
「そうだな」
シュヴァルツブルグはエヴァに顔を向けてから述べた。

「いい考えだと思うが」
「左様ですか」
エヴァは一見何の反対もなく頷いたように見えた。
「先程の連合軍の一斉射撃で予想以上のダメージを受けたのは事実だ」
「はい」
「防衛ラインは考慮し直した方がいいのは事実だ。さもないとまた大きな損害を被ることになる」
「ですね」
エヴァもそれに頷いた。
「ビーム砲及びミサイルに備えよう。これでかなり違う筈だ」
「もう一つありますが」
「それは」
「艦載機のことです」
エヴァは静かな物腰でそう答えた。
「艦載機か」
「彼等の艦載機はかなりの性能です。それに数も多いです」
「それがあったか」
「彼等への備えも必要があります」
「そうだな」
彼はそれに頷いた。
「対空砲座も増やしておくか」
「はい」
「後は電子妨害施設もだな」
「そうですね。それでかなり違うと思います」
エヴァは率直にそう述べた。
「第二防衛ラインでは接近戦も有り得ます」
「うむ」
「覚悟していきましょう。戦いはまだまだこれからです」
「そうだな。よし」

シュヴァルツブルグは頷いた。そしてそれから指示を下した。
「バリアーを増加せよ。そして対空砲座、電子妨害施設もだ」
「ハッ」
「これで・・・・・・よいかな。とりあえずは」
「そうですね」
エヴァはここでまた言った。
「テューポーンは第三ラインに配置しておりますし」
「うむ」
「機雷源はもう第一でその数を大幅に減らしております。数も少ないです」
「それも使えないか」
「仕方ありません。とりあえず出来ることをしなければ」
「これで充分か」
「いえ」
だが彼女はそれを否定した。
「まだやるべきことがあります」
「それは何だ」
「機動戦力です」
「機動戦力」
「そうです。我々が防御を固めている間に」
「うむ」
シュヴァルツブルグは彼女の言葉を真剣な顔で聞いていた。
「敵の側面や後方を攻撃する艦隊が必要です。それを用意しなければなりません」
「遊撃戦力というわけだな」
「はい」
エヴァはそれを受けて頷いた。
「これには竜騎士団が最適だと思いますが」
「竜騎士団か」
「そうです。彼等ならばそれに相応しいと思うのですがどうでしょ

うか」
「そうだな」
彼もそれを受けて頷いた。
「そうだな。ここは彼等に頑張ってもらおう」
「はい」
「辛いな、それにしても」
彼は応えた後でこう言った。
「御気持ちはわかります」
エヴァも言った。
「こちらが辛い時は敵も辛いというがそれはあくまでスポーツの世界だ」
「はい」
「戦場は違う。どうしたものか」
彼は次の戦場を見据えていた。そこでもまた多くの命が散るだろう。だがそれでも退くことはできなかった。もう後はなかった。それが今のエウロパであった。

# 第十四部第三章　後方の修羅場その一

後方の修羅場

連合軍は補給を整えていた。その中には空母の姿もあった。
「何か空母の補給は今回楽だな」
補給艦のクルー達が空母への補給を行いながらそんな会話をしていた。
「今回は出番がなかったらしいからな」
別の乗組員がこう言った。
「そうだったのか、いつもは一番手間がかかるのにな」
艦載機のせいである。それへの補給も行わなくてはならないのだ。空母はかなり手間がかかる艦種なのである。
「けれどそのせいで今回の仕事は楽だな」
「まあそうだな」
彼等は補給艦の艦橋でデータやパラメータを見ながら話をしている。そこからでも多くのことがわかるのだ。
「輸送艦はピストン輸送みたいだがな」
「あそこはまたこの戦争がはじまってからだろ」
気楽にこんな話をする余裕が少なくとも彼等にはあった。
「とりあえず俺達の仕事は今回はこれで終わりだな」
「ああ」
彼等の話は続いても、だ。
「それじゃあまたアルテミスに帰るか」
「そうだな」
そして彼等は一旦アルテミスに帰還した。彼等の仕事はとりあえずはこれで終わった。
だがその他ではそうではなかった。前線でも後方でも激しい戦いが行われていたのだ。
まず後方であるがここでの戦闘はビームやミサイルが飛び交う戦

争ではなかった。会計や物資に追われる戦争であったのだ。
「まだあるのか」
わざわざここにまで出向いていた後方支持部長コアトル元帥は自分の机の前に送られてきた書類の山を見てまた溜息をついた。
「どこまであるんだ、一体」
「まだありますよ」
会計部長であるマカモ＝ブーメル中将が彼の前に立っていた。アジア系の肌であるがその顔は唇がやや厚く、目がはっきりとした黒人のそれであった。少し縮れた髪が似合う美人である。彼女はマリ出身である。
「もうすぐしたらまた届くでしょう」
「やれやれといったところだな」
彼はそれを聞いてまた溜息をついた。
「何時まで続くのやら」
「戦争が終わるまででしょうね」
「この戦争がか」
「はい」
彼女は答えた。
「おそらくもうすぐだとは思いますが」
「それまで私の身体がもてばいいがな」
「何を仰いますやら」
ブーメルはそれを聞いてくすりと笑った。
「昨日は遅くまで飲んでおられたそうで」
「知っていたのかね」
それを聞いてコアトルも笑った。だが彼のそれは苦笑いであった。
「ええ。アルテミスのパブでしたよね」
「ああ」
彼はそれを認めた。
「ビールをな。引っ掛けていたよ」
「エウロパの市民達がそれを見て不思議に思っていましたよ」

「それはどうしてだね？」
「元帥ともあろう者がパブで飲むものかと。驚いていたそうです」
「誰が何処で何を飲んでもいいのではないのかね？」
彼はそれを聞いてこちらが不思議そうな顔をした。彼には元々ペルーのある古い街に生まれた。父は学校の教師であった。母はスーパーでレジ打ちをしていた。言うならば平凡な家庭である。その家庭の五人兄弟の真ん中であった。特に豊かでもないが貧しい生活でもなかった。
父は教師らしい生真面目な性格であったが酒が好きだった。いつもパブで一杯引っ掛けてから家に帰って来るのである。それを見ていたので彼もパブに通うようになったのだ。
「これについてとやかく言われたことはないが」
「連合ではそうですね」
「エウロパでは違うのか」
「エウロパではパブは平民が通うものだそうです」
「そうだったのか」
「はい。そしてバーは貴族が通うもの」
「はじめて聞いたな」
「元帥になるのは大抵貴族ですから。元帥がパブに姿を現わすのが不思議で仕方ないそうです」
「そう言われてもな」
彼はそれを聞いてもわからないといった顔をしていた。

## 第十四部第三章　後方の修羅場その二

「私は今までこうしてきたのだし」
「エウロパの考えには馴染まれませんか」
「ああ。私は連合の人間だ。やはりパブに通わせてもらうよ」
「それを聞いて安心致しました」
「安心したのか」
「はい。我々は連合の者です」
ブーメルはそう述べた。
「エウロパはエウロパです。やはり合わないものも存在します」
「うむ」
「閣下がパブに通われることは何一つ悪いことではありません。ただそうした文化の違いがあるということです」
「文化というより文明なのかもな」
「文明ですか」
それを聞いたブーメルの眉がピク、と動いた。
「我々はもう一つの文明だな」
「連合という一つの文明ですか」
「そうだ。長い間かかって熟成された文明だ。多くのものが混ざり合ったな」
「モザイク状に」
「そうなる。アメリカもあれば中国もある。日本もあれば東南アジアもある」
「ロシアや中南米、オセアニアも」
「そして君達アフリカ諸国もな。他には新興国家もあるな」
「復活した民族もおりますし」
フェニキアやヒッタイト、インカ等のことである。
「そうしたもの全てをくくってそう言える。我々は一つの文明なのだ」

「そうなりますか」
「何処かの学者が言っていたことだがね。この戦争はそうした文明の衝突でもあるらしい」
「エウロパもまた一つの文明というわけですか」
「そうなる」
彼は頷いた。
「そしてエウロパだけではない」
「といいますと」
「マウリア、そしてサハラもそれぞれ一つの文明なのだそうだ」
「人類は今四つの文明に分かれているそうですか」
「そういうことになる」
彼はそれにも頷いた。
「そのうちの二つが今衝突している」
「はい」
「そのうちのどちらが優位なのかを確かにする戦争でもあるのだ」
「文明は所詮同じ物差しでは計れないと思いますが」
「それは私も同じだ」
彼はその言葉を認めた。
「だが案外多くの者がそうとは考えない」
「それもわかります」
ブーメルはそれに答えた。
「人間というものは不思議な習性が一つあります」
「うむ」
「何でも優劣をつけるということです。それは文化や文明でも同じことです」
「残念なことかな」
「そうは思わない者も多いということです」
彼女の考えはこうであった。
「人それぞれですから」
「そういうことになるか」

「その考えが間違っているかどうかも結局はわからないのです」
「答えはない」
「はい。まあどちらにしろ戦争が今行われているという事実はあります」
「それがこの書類の山か」
「ええ。今日はパブに行くことができますかね」
「できる、ではないな」
コアトルはそれに言葉を返した。
「行くようにするのだよ。努力してな」
「大きく出られましたね」
ブーメルはそれを聞いて面白そうに笑った。その厚い唇が程よい曲線になった。
「まだまだ仕事はありますよ」
「ほう」
彼はそれを聞いて顔を見上げた。そして壁にかけられている時計を見る。昼食の時間が終わって結構経っていた。
「丁度いい時間だな」
「パブの時間までには、ですか」
「そうだ。では見せてあげよう」
彼は笑いながら言う。
「連合軍後方支持部長の事務処理をね。私はパブが開く時間にはそのドアの前にいる」
「では楽しみにしょております。私も仕事ありますので」
「うむ。それではな」
「はい」
こうして彼は仕事に向かった。瞬く間に書類の決裁を済ませ処理していく。パブが開く時間には彼は本当にその扉の前にいたのであった。
「そう」
ブーメルはそれを営内の自室で聞いていた。彼女はそこで一人酒

を飲んでいたのだ。実は彼女も酒は嫌いではない。だが一人でゆっくりと飲むのが好きなのだ。
「本当にやるとは思わなかったわ」
その手にはウイスキーがあった。ストレートでそこには氷が入っている。

## 第十四部第三章　後方の修羅場その三

「流石といったところかしら」
そう言う彼女も仕事はもう終わらせていた。そして夕食とシャワーを終え今一人でくつろいでいるのである。軍服は脱ぎラフな格好になっている。シャツにジーンズという服装であった。実によく似合っている。
「それにしても本当にパブに行かれるなんてね」
ここでは苦笑した。
「まさかとは思ったけれど」
『予想通りだったのでは？』
電話の向こうからこう声があった。
「予想通り」
『ええ。閣下のパブ好きはもう筋金入りですから』
「そうね。それで一つ気になることがあるのだけれど」
『何でしょうか』
電話の向こうの声はすぐに反応してきた。
「閣下はお一人ではないでしょうね」
『勿論です』
声は返答してきた。
『多くの者が周りにおります』
「ならいいわ」
それを聞いてとりあえずは安心した。
「何かあった取り返しがつかないからね」
『はい』
声はそれに頷いた。
「貴女もお願いね」
『わかっております』
どうやら声の主は女性であるらしい。確かによく聞けばその声は

高く、綺麗なものであった。
『それでは引き続き任務に当たります』
「お願いするわ」
『ハッ』
こうして電話は切れた。ブーメルはそれを確認してからまたウイスキーを口に入れた。一本空けたところで飲むのを止め眠りに入った。彼女もかなり飲む方であったのだ。
コアトルはパブで酒と食べ物を楽しんでいた。ビールにフィッシュフライ、そしてソーセージ等である。彼はそれを部下達と共に飲み食いしていた。
「ふう」
ジョッキを一本空けた。彼は杯をテーブルの上に置いて満足そうな顔を浮かべた。
「中々美味いものだな、こちらの酒も」
「ええ」
部下の一人がそれに頷く。
「エウロパの酒や料理は味が薄いと思っていましたがどうして」
「ここの料理も美味しいですね」
「そうだな」
コアトルはそれに応えた。
「実は心配していたのだ」
「何がですか？」
「いや、パブといえばイギリス等だよな」
「ええ、他にはアイルランドですね」
「とりあえずかってあの島にあった国々の文化ですよね」
「そうだ」
コアトルはそこまで聞いて頷いた。連合のパブもケルト系によって広められたものである。
「だから味の方は気になっていたのだ」
「味ですか」

「イギリスの食べ物は昔からまずいと評判だったからな。何でもイギリス人があちこちに進出できたのは食べ物の味には一切困らなかったからだという説もある程だ」
「それは聞いたことがあります」
部下の一人が言った。
「イギリスの料理は。凄まじいと」
「その証拠が王室が食べている料理であると」
「何かあるのか？」
「フランス料理なんですよ」
その部下が答えた。

## 第十四部第三章　後方の修羅場その四

「あれだけ仲の悪いフランスの料理ですよ。料理だけは別らしいです」
「そうだったのか」
「まあフランス料理は多くの宮廷で食べられていますけれどね」
「我々にもかなり影響を与えていますし」
「まあそうだが」
それには同意した。
「しかし幾ら何でもイギリスでフランス料理とはな」
「それだけ味があれだということなのでしょう」
「そういえばイギリス料理はあまり聞かないな」
「でしょう？」
部下の一人がコアトルのその言葉を聞いて満足そうに笑った。
「だからなのですよ。精々オートミールか」
「このフイッシュフライしかないか」
「これでアイルランドの料理だったような」
「他は・・・・・・。ローストビーフか」
「そういったものです。まあイギリスは元々土地が痩せていまして」
「そこに大元があるのか」
「私はそう考えます。従ってあまり美味しいものはなかったのです」
「ですがここの食べ物は中々いけますね」
「千年経ってようやく味に目覚めたということかな」
「ちょっとお客さん」
彼等の好き勝手な話にたまりかねたのか店のマスターが話に入ってきた。髪の毛がやや薄い赤い顔の中年の男であった。
「おや、マスター」
「話を聞いていればまあ好き勝手に」
「申し訳ない」

「マスターはイギリス人ですか」
「ええ」
彼は胸を張って答えた。
「生粋の。こう見えても大英帝国の時代からの由緒正しいパブのマスターです」
「おおっ」
連合軍の将兵達はそれを聞いて驚きの声をあげた。
「そんなに昔から生きていたのか」
「これはびっくり」
「そんな筈がないでしょうが」
これにはこう切り返してきた。どうやら洒落やユーモアもわかる人物らしい。
「先祖がそうなのですよ。ロンドンで開いていましてね」
「ほう」
「切り裂きジャックが街を徘徊していた頃にはもうロンドンで名を知られた店になっていたんですよ」
「切り裂きジャックとは」
「またおどろおどろしいものを」
繁栄を極めていた十九世紀後半当時のロンドンに突如として現われた猟奇連続殺人犯である。何かしら鋭利な刃物で犠牲者を切り刻む正体不明の人物であった。被害者は中年のくたびれた娼婦ばかりで女性に恨みを持つ者ではないかという噂もあった。だが結局正体はわからず今に至る。尚この事件に関してはビクトリア女王も特別に捜査を命じている。女王ですら感心を持っていた稀有な殺人事件であった。一説では犯人の一人は王族の誰かだったのではないかとも言われているが真相は千年以上経った今でも結局謎のままである。犯人はその謎と正体と共に煙の様に消え失せてしまったのである。
「それから長い間ロンドンで店を持っていましたが。宇宙に出てからはこのアルテミスに移りました」
「何でまた」

「ロンドンから離れたのですか」
なおこのアルテミス星系はイギリス領である。
「気分を変えることにしたようで、御先祖様が」
マスターはこう返答した。
「それでここに店を構えることになったのですよ」
「そうだったのですか」
「それでイギリス料理ですが」
「はい」
彼等はマスターに顔を向けた。
「決してまずいわけではありません。それは間違った情報です」
「そうなのですか」
「その証拠にうちの料理は美味しいでしょう？」
「ええ」
これには皆頷いた。

## 第十四部第三章　後方の修羅場その五

「他にも美味しいものは一杯ありますよ。何ならお出ししましょうか」
「ハギスですかな」
コアトルはそれを聞いて楽しそうに笑いながらこう言った。
「おお」
マスターはその名を聞いて楽しそうに声をあげた。
「御存知ですか」
「あれはいい食べ物です」
彼は笑いながらこう返した。ハギスとは羊の腸に同じく羊のミンチとオートミール、スパイス等を入れて蒸したものである。ソーセージに近いかというと全く別の食べ物である。
「癖が強いですが一度食べたら病み付きになりますな」
「お客さん通ですね」
マスターはそれを聞いてその笑みを営業のものから本物に変えた。
「ハギスを召し上がられたことがあるとは」
「あるのですか？」
「勿論」
マスターの機嫌がさらによくなる。
「元々我が家はスコットランドがルーツですから」
「ケルトだったのですか」
「そうですよ。このハギスは元々スコットランドの食べ物ですし」
「そうだったのか」
コアトルの部下達はそれを聞いて驚きの声をあげた。
「それは知らなかったな」
「ハギスは御存知でもですか」
「ええ」
彼等は答えた。どうやら連合ではハギスはそれなりに知られてい

るらしい。
「てっきりアメリカかカナダの食べ物だと思っていましたよ」
「パブも。こっちじゃカナダに多いですし」
「それは残念な話です」
マスターはそこまで聞いて明らかに落胆した顔になった。
「スコットランドの食べ物だというのに」
「そんなに残念ですか」
コアトルは彼があからさまに落胆したのを見てこう尋ねてきた。
「勿論ですよ」
彼は答えた。
「ハギスはスコットランドの誇りなんですから」
「けれどスコットランドは今独立していますよね」
「ええ」
「ならばそんなにこだわる必要もないのでは、と思いますが」
「それはそれ、これはこれです」
彼は答えた。
「我々とイングランドの関係は実に根深いものがありまして」
「あっ、それは知っています」
連合軍の将兵の一人がそれに応えた。
「御存知でしたか」
「有名ですからね」
「こっちにもケルトの者は多いですから」
別の兵士も言った。
「そうだったのですか」
「ケルト系の数で言うならば連合の方が多いでしょう」
コアトルがそれをまとめて言う。
「アメリカやカナダを中心として。かなりの数になります」
「それは聞いたことがあります」
マスターも応じてきた。
「移民がそのルーツでしたよね」

「はい」
「それから人口も増加しまして。今ではかなりの数にのぼっております」
「ケルトの神も復活していますしね」
別の将兵が言った。
「かなりのものですよ」
「そのようですね」
それはこのマスターにとって喜ばしいことであるようだ。彼の機嫌がまたよくなってきた。
「かってはケルトは衰退していましたが」
「はい」
ローマ帝国に征服されてから彼等の苦難と衰退がはじまった。イングランドに追いやられ、そこでもバイキングの掠奪に怯えイングランドの王家の支配に苦しめられてきた。そして長きに渡って支配下にある民族として生きてきた。神々も妖精となり姿を隠していた。それは二十一世紀まで続いた。

## 第十四部第三章　後方の修羅場その六

「しかし今は違いますな」
「嬉しいですか」
「私もケルト人ですから」
マスターは答えた。
「嬉しくない筈はないでしょう」
「成程」
「このハギスにしろそうです」
そしてハギスに話題を戻してきた。
「これはスコットランドのものですから。それ以外の何者でもありません」
「そうなのですか」
「当然です」
彼はまた答えた。
「これはスコットランドの誇りです。言うならば貴方達はスコットランドの誇りを召し上がられるのです」
「それは有り難い」
「それでは」
彼等はマスターに言われるままハギスを切った。そして口に入れた。
「ほう」
「如何ですかな」
まるで真剣勝負をしているかのようにマスターの目が鋭くなった。
そして問うてきた。
「これはかなり」
「美味しいのですね」
「はい」
コアトルがそれに頷いた。

「かなり。いや、これ程のハギスは」
一口飲み込んでから言う。
「滅多にありません。いや、素晴らしい」
「そうでしょう」
彼は勝負に勝ったかのように会心の笑みを浮かべた。
「うちのハギスは特別なのですよ」
「何かあるのですか？」
「最高の羊に最高のオートミール、そして最高のスパイスを使っております」
彼は胸を張っていた。
「しかも腕もね。最高のものです」
「それでは美味くない筈がないと」
「そうです」
「成程。よくわかりました」
コアトルはここでビールを一口飲んだ。
「それはいい。では今日は心ゆくまで堪能しましょう。おい」
彼は周りにいる将兵達に声をかけてきた。
「今日は私のおごりだ。皆とことん飲め」
「いいのですか！？」
「私達かなり飲みますし食いますよ」
「それは私も同じだ」
彼は笑っていた。
「どんどんいけ。遠慮はいらない」
「有り難うございます」
「それでは」
早速彼等は飲みはじめた。ここはパブである。元々そんなに高くはない。だからコアトルは苦にはしなかったのである。こうして彼は部下達、そしてマスターと共に楽しい時間を過ごした。そして深夜に店を出た。
「ふう」

彼は店を出ると満足した顔で大きく息を吐き出した。
「よかったな」
「御馳走様です」
後ろにいる部下達が彼にこう挨拶をしてきた。
「ハギス美味しかったですね」
「他の料理や酒も」
「素朴でしたが。どうしてなかなか」
「それがパブの良さだ」
コアトルは真っ赤な顔でこう言った。
「庶民の味と言えばわかり易いかな」
「はい」
「まあ私も本屋の息子ですし」
部下の中の誰かが言った。
「飲むとなればいつもこんなところですね」
「気取ったところで飲んでも面白くないですし」
「そうだな」
それはコアトルも同意見であった。
「エウロパの貴族達は違うようだが」
「彼等はまた別です」
部下の一人が言った。
「どうやら気取るのが生きがいのようですから」
「気取ってもいいことなんかないのにな」
「そうそう」
彼等は口々にこう言い合った。
「まあそれはそれだな」
コアトルはこう言ってとりあえずは彼等の話を中断させた。
「我々にはわからない世界もある」
「はあ」
「我々は我々の酒を楽しもう。それでいいのではないか」
「そうですか」

「まあそうですね」
部下の一人が頷いた。
「我々は我々、彼等は彼等で」
「うむ」
「それでいきましょう。それじゃあ明日もここで」
「とりあえずはここで解散ですね」
「ああ。じゃあ明日仕事場で」
「お休み」
「お休みなさい」
「うむ」
コアトルも部下達もそれぞれ別れた。だが何人かずつで集まって別れている。コアトルはその中の一グループにいた。そして帰路についていた。

## 第十四部第三章　後方の修羅場その七

「丁度いいな」
物陰で何やら囁く声がする。
「別れた。今が狙い目だぞ」
「ああ。準備はいいか」
声達はまだ囁いている。
「何時でもいい」
声が返ってきた。
「よし。それでは行くか」
「ああ」
影が動いた。そしてコアトルの方へ向かう。
コアトルはそれには気付いていない。やや不確かな足取りで夜道を歩いている。
「おっとと」
彼はつまづきそうになったところで慌てて態勢を立て直した。
「いかんな、かなり酔っている」
「気をつけて下さいよ」
「こけて打ち所が悪くて、なんて洒落になりませんからね」
「わかってるよ。まあここはゆっくりと行こう」
「はい」
彼等はそんなやりとりをしながら宿舎に向かって歩いていた。影はまだそれを見ている。
「こちらには気付いてはいないな」
「そのようだな」
彼等は互いに頷き合う。すぐにそこから姿を消した。これを遠くから見る別の影があった。
「動いたか」
それは女であった。女はそれを見届けるとスッと姿を消した。そ

して何処かへと向かった。
だがコアトルはそれには気付いていない。部下達と共に上機嫌で夜道を歩いている。
「明日も飲むか」
「今日あれだけ飲んだのにですか」
部下達はそれを聞いて呆れた声を出した。
「幾ら何でも飲み過ぎですよ」
「そうです、お身体に障るのでは」
「身体には充分気をつけているさ」
彼は笑いながらこう言った。
「だからそちらは心配ないさ」
「そうなのですか」
そうは言われても簡単に信用はできなかった。酔っている人間は誰でもこんなことを言うものだからである。とりわけ深く飲んでいる者はそうした傾向がある。
「しかしそれでも」
「私の命を狙う者がいるとでもいうのかね」
「ええ」
彼等はそれに頷いた。
「閣下はエウロパ軍にとっては目の敵ですから」
「後方支持部長がそんな大層な役だとは思わないがな」
「大層な役ですよ」
それに対して部下の一人が言った。
「元帥ですし。それに」
そして言葉を続ける。何かと慎重そうな響きがあるのは何故であろうかと思わせる言葉遣いであった。
「連合軍の補給を一手に司るのですから。かなり重要ですよ」
「前線部隊の指揮官よりもかね」
「そうですね。しかも狙い易い」
別の部下がこう言った。

「戦場、それも艦内にいてはそう易々とは狙えません」
「それこそその艦を撃沈するしかね」
「ふむ」
「ですが後方にいる人間は。そこまでする必要はありません」
「刺客を送ればいいのですから」
「刺客か」
コアトルはその言葉を聞いて何やら思うところがあるようだった。
これは直感であろうかそれとも。

## 第十四部第三章　後方の修羅場その八

「それで何とかなるとは思えないがな」
「少なくとも戦争に影響を与えることはできますよ」
部下の一人がこう言った。
「今我が軍の補給が滞りなく進んでいるのは閣下の御力によるところも大きいですから」
「それがなくなると。それだけでかなりの影響です」
「そういうものか」
彼はそれを聞いてまた考える顔になった。
「私はそうは思わないがな」
「それでもです」
だが部下達はまた言った。
「閣下の存在がどれだけ彼等にとって疎ましいものか。そこもよく御考え下さい」
「ならば答えは出ると思いますが」
「買い被り過ぎだとは思うがね」
彼はこう言って笑った。
「私にそんな力があるとは思わないが」
「まあそれでも御気をつけ下さい」
「何があるかわかりませんから」
「わかった」
一応はそれに頷くことにした。
「では注意しておくとしよう」
「そう為さるべきかと」
「何時来るかわかりませんし」
「それは今もかね」
彼はそれを聞いてこう問うてきた。
「今もですか」

「そうだ。何時起こるかわからないということは今もその可能性があるということだ。違うかね」
「それは」
「その通りです」
別の部下がこう答えてきた。
「ですから我々も今ここにいるのです」
「一人だと危ない為か」
「はい。これはもう言うまでもないことだと思っておりましたが」
「ふむ」
「用心に越したことはありません。宜しいですね」
「わかった」
彼はそれに頷いた。そしてまた道を歩きはじめた。
影達はそれを物陰から見ている。そして隙を窺っていた。
「いいか」
「ああ」
彼等はまた頷き合った。そして顔を見合わせ銃を構えた。見ればサイレンサー付の古式の拳銃であった。ビームガンであるがこれもまた独特の音が出る。それを消す為のものであったのだ。
「狙うのはわかっているな」
「当然だ。あいつだな」
そう言いながらコアトルを指差す。彼は一向の先頭を歩いていた。
「丁度いい具合に先頭にいるな」
「狙い時だな、まさに」
「そうだな」
そんな話をしながら狙いを定めていた。そのまま撃とうとする。これでコアトルは倒れると影達は思った。だがそれはならなかったのであった。
「グフッ」
「ガッ」
彼等は鈍い呻き声を出してその場に倒れ込んだ。その後ろにはあ

の影の女がいた。
「危ないところだったわね」
彼女は倒れ込む影達を見下ろしてこう呟いた。低く、それでいて冷徹な響きの持つ声であった。
「けれどこれで安心ね。危険は潰したわ」
見れば影達は気を失っていた。白目を剥きその場に倒れ伏していた。
女はそれを見届けると懐から何かを取り出した。それは一個の携帯電話であった。それで連絡を入れた。

## 第十四部第三章　後方の修羅場その九

「私です」
彼女はまずそう言った。
「こちらは終わりました。危ないところでした」
「有り難う」
電話の向こうにいる声も女のものであった。その女はそれを聞いて満足そうに声を返してきた。
「引き続き護衛を続けさせてもらいます」
「お願いするわ。多分もうすぐ終わりだと思うけれど」
「はい」
彼女はその声に頷いた。
「それでは隊舎まで」
「ええ。大変だけれどね」
「いえ、これも任務ですから」
それはよしとした。
「では引き続き任務を遂行します」
「頼むわね」
「はい」
こうして彼女達は電話での連絡を終えた。そしてまた任務に戻った。
翌日コアトルはまた仕事に取り掛かっていた。昨日の深酒の影響は何処にもない。
「今日も大変なようですね」
そこにブーメルがやって来た。そしてまた仕事を持って来ていた。
「そう言いながらまた仕事を持って来たのだろう」
「おわかりですか」
「わからない筈がないだろう。また分厚いファイルだな」
見れば彼女はその手に厚いファイルを持っている。それが仕事で

あった。
「それは何に関するものかね」
「アルテミスでの維持費に関するものです」
「ここのか」
彼はそれを聞いて目を少し動かした。
「そういえばここの施設もかなりの規模だな」
「はい」
彼女はそれに応えて頷いた。
「それの維持費もかなりのものとなっております」
「あとは減価償却費もだね」
「それもここにありますよ」
彼女はこう述べてこのファイルを差し出した。
「御覧になられますか」
「といっても見ないわけにはいくまい」
彼はそう応えてファイルを受け取った。
「仕事だからな」
「そういうことです」
彼女は頷いた。
「是非共お願いします」
「本当はやれやれと思っているのだがね」
「ですが仕事です」
「本当にやれやれだ」
そうは言いながらも彼はそのファイルを開いた。そして見はじめた。
「何というかな」
彼はファイルを見てまずこう言った。
「ここまでよくできているとはな」
「うちのスタッフの力作です」
ブーメルはにこりと笑って言葉を返した。
「如何でしょうか」

「褒めるべきかな、ここは」
「褒めて頂ければ幸いです」
「わかった」
彼はそれに対して頷いた。そして言った。
「よくできている、見事なものだ」
「有り難うございます」
ブーメルはそれを聞いてまたにこりと笑った。
「我がスタッフも苦労の介があったというものです」
「そうか」
「そして今度は閣下が苦労される番になりますが」
「おい、私がか」
苦笑はしたがおおよその展開はもうわかってはいる。そうは言いながらも頷いた。
「残念だがわかったと言っておこう」
「感謝致します」
「しかしな。困ったものだ」
だが彼はここでこう述べた。
「困ったもの」
「仕事が次から次に来る。何時終わるか知りたくなってきた程だよ」
「少なくともこの戦争に関してはもう暫くかと」
「今クロノスとニョルズでの戦いが行われているな」
「はい」
「最後の山場はそれか。一体どれだけの仕事がやって来るかな」
「少なくともティアマト級巨大戦艦数隻分のものが来るかと」
「それだけで済むかな」
「さて、それは」
「済まないのか」
「若しかすると。まあ覚悟はしておいて下さい」
「わかった」
苦笑いのままこれに応じた。

## 第十四部第三章　後方の修羅場その十

「ではそれに備えておこう」
「はい」
「とりあえずはこれを処理しておくか。しかし」
彼はファイルの中を読んでいた。そこには細かい文字でさらに細かい事柄がびっしりと書かれていた。まるで呪文のように。
「凄いな、実に。何処まで書かれているか」
「とことんまで書いてみました」
これがブーメルからの返事であった。
「では私も徹底的にやらせてもらおう」
「お願いします」
「本気を出す。いいかね」
「是非共」
こうして彼は朝から本気で仕事に取り掛かることとなった。ブーメルはそれを見届けてから自分の執務室に戻った。そこには一人の女性士官が待っていた。黒い軍服の袖にある金の帯からそれがわかる。
「お帰りなさいませ」
彼女は敬礼してブーメルに応えた。青い目に黄色い肌、赤がかった蜂蜜色の髪を後ろで束ねている。年齢は二十代後半程であろうか。
「来ていたのか」
ブーメルは返礼を終えてから彼女にこう声をかけてきた。
「昨日は大変だっただろうに」
「こちらが本来の職務ですから」
だが彼女は疲れを見せない笑顔で返してきた。笑顔がかなり眩しい。
「おろそかにするわけにも行きません」
「厳密に言うとそうなのだけれどね」

だがそれでもブーメルはまだ何か言いたそうであった。そのうえで言った。
「あまり無理も。よくないわよ」
「軍人は無理をする仕事では？」
彼女の返事はこうであった。
「それはそうだけれど」
これにはさしものブーメルも返答に窮してしまった。
「それでもね。昨日は碌に休めなかったでしょうに」
「疲れを取る方法は知っていますから」
「そう」
「御安心下さい。昼の職務に支障はきたしません」
「わかったわ。それじゃあお願いするわ」
ブーメルはここまで聞いて頷いた。そして彼女に対して改めて言った。
「ゼノビア＝カラトヴァ準佐」
「はい」
彼女は自分の官職氏名が呼ばれると姿勢を正した。
「今日の仕事はまずこれを」
ブーメルは懐から何枚かのディスクを取り出した。それを彼女に手渡した。
「お願いするわね。いいかしら」
「わかりました」
カラトヴァはこれに頷いた。それからすぐに側にある机に座った。そのディスクをパソコンに入れた。
「すぐに取り掛かります。宜しいでしょうか」
「お願いするわ」
ブーメルは言った。彼女も自分の机に向かった。すぐに仕事に取り掛かりはじめた。
「全く会計部というのも大変ね」
「そうですね」

カラトヴァはパソコンのキーボードを打ちながら話に応じてきた。
「経穂将校は楽だと思っていたけれど。どうして」
「ディスクワークに追われる日々で。大変ですね」
「パルミラ連邦でもそれは同じだったのかしら」
「はい」
カトラヴァはそれに頷いた。
「あまり変わりはなかったですね。もっとも毎日こんなのではなかったですが」
「それもそうよね」
ブーメルもそれに頷いた。
「マリだってそうよ。もっとも今は戦争中だから仕方がないけれど」
「何か。連合軍になってから仕事が増えた気がします」
「長官が経補出身のせいかもしれないわね」
ブーメルはここで八条について言及した。
「八条長官ですか」
「ええ。あの人が元々軍人だったのは知ってるわよね」
「はい」
これはもう言うまでもないことであったが。
「経補だったそうなのよ」
「日本軍でですね」
「そう。日本軍は特別でね」
ブーメルは言った。

## 第十四部第三章　後方の修羅場その十一

「将校は殆ど寝られないらしいのよ」
「戦時中みたいにですか？」
「そうだったらしいわ。しかも経補はね。休みなし」
「それはきつい」
「そんな中にいたから。激務にも平気らしいのよ」
「長官は連合軍の設立当時ずっと徹夜だったそうね」
「一時間二時間は寝られたそうだけれどね」
「それだけですか」
「それでも平気だったそうよ。日本軍にいた時を思えば」
「日本軍は恐ろしいところですね」
「伊達に連合で最も厳格な軍隊とは言われていなかったってことね」
ブーメルの声の色が変わった。剣呑なものを含んだ声となる。かつて日本軍は連合において最も訓練及び規律が厳しい軍隊として知られていた。そのことを言っているのである。
「剣呑剣呑」
「ところがそうも言ってはいられない」
ここでブーメルは付け加えた。
「その激務を普通と考えたならば」
「恐怖ですね、本当に」
「ところが幸い長官は部下には優しいタイプでした」
「だから平時は普通に家に帰られたのですね」
「そういうこと。まあ今は仕方ないわ」
「はい」
カラトヴァもそれはわかっていた。こくりと頷いた。
「今は仕事に励みましょう。さもないと金内相が国防長官になるわよ」
「うわ、それだけは御勘弁を」

カラトヴァはおどけてこう言った。どうも彼女は特殊工作の技能を持ちながらもその性格は極めて陽気なものであるらしい。先程から和気藹々として仕事に励んでいる。
「あの人にだけは勝てませんよ」
「只でさえ国防省と軍は部下に優しい長官に甘やかされているって言われているしね」
「はい」
「もしなったら地獄よ。一体どうなるか」
「毎日チェックと仕事の日々」
「そうはなりたくないでしょう。さあ仕事仕事」
「わかりました」
彼女達も別の敵に怯えながら戦争を行っていた。軍人とは何処に身を置こうとも敵がいるものである。そして当然ながら戦場においても敵は存在していた。
連合軍はエウロパ軍の防衛ライン第二ラインに対して攻撃を仕掛けていた。その攻撃はセオリーに従いティアマト級巨大戦艦による巨砲の一斉射撃からはじまった。
「撃て！」
銀河語での指令が下される。巨大な光の帯がエウロパ軍を打ち据える。だがそれのダメージは今までより遥かに軽微なものとなっていた。
「どうやら我々の策が成功したようですな」
「ああ」
シュヴァルツブルグはモニターに姿を現わしたローズの言葉に頷いた。
「バリアーを増やしておいてよかったな」
「はい」
ローズもまたこれに頷いた。
「かなり苦労しましたがね」
「それは仕方のないことだ」

シュヴァルツブルグはこう言った。そして目の前を見た。そこには無数の金属の壁が存在していた。それからそれぞれ何かが発せられているようである。
「だが間に合って何よりだった」
「そうですね」
これにはローズも賛同した。彼等は第一ラインでの連合軍の一斉射撃を受けて防衛ラインを強化していたのである。コロニーレーザー等の攻撃用の兵器を外し、その分まで回したのである。そして連合軍に備えたのであった。

## 第十四部第三章　後方の修羅場その十二

「とりあえずは艦艇からの攻撃は防いでいる」
「はい」
「さて、次はどうくるか。油断はできないな」
それでもシュヴァルツブルグは油断してはいなかった。そして敵に備える。対する連合軍も同じであった。彼等は自分達の攻撃がそれまでより功を奏していないのに対してそれ程驚いてはいなかった。
「バリアーを増加したようだな」
前線で指揮を執る指揮官の一人ケントゥンは至って冷静にこう言った。
「ティアマト級の巨砲でもそれ程のダメージを受けてはいないようだな」
「今までの三分の一以下に抑えているようですね」
幕僚の一人がこう答えた。
「バリアーの数が半端ではありません。おそらく砲艦やミサイル艦の攻撃もそれ程効果はないでしょう」
「そうだろうな」
ケントゥンもそれに同意した。
「第一ラインに対する我が軍の攻撃ではかなりの痛手を被っているからな」
「はい」
「これはまあ予想できることだった。だがそれだけではないな」
「それだけでは」
「そうだ。おそらくあの側面からの四連射撃のことも念頭に入れている筈だ」
「やはり」
幕僚達はそれを聞いて皆一様に顔を顰めさせた。
「ではどうすれば」

「特に驚くことはない」
だがケントゥンはそう言って幕僚達を宥めた。彼は落ち着いていた。
「これで我が軍の行動が全て潰されたわけではない」
「それはそうですが」
「案ずることはない。方法は幾らでもある」
そしてこう言った。
「幾らでもな」
「そうなのですか」
「それはおそらくマクレーン長官も劉総長も気付かれている筈だ。心配は無用だ」
「ならばいいのですが」
「我々は引き続き攻撃を続けるのみ」
そして一言こう言った。
「よいな。次は予定通り砲艦及びミサイル艦による一斉攻撃」
「は、はい」
「了解しました」
微動だにせぬ指揮官の声に彼等は戸惑いながらも頷いた。
「それでは」
「うむ」
彼はやはり動じない。その間に巨大戦艦は退き砲艦とミサイル艦の列が前に出る。そして攻撃に入った。
今度はミサイルも交えた攻撃が行われる。だがそれもまたエウロパ軍のバリアーの前に防がれる。ケントゥンはそれを見ても冷静であった。そして次の攻撃方法を練っていた。

## 第十四部第三章　後方の修羅場その十三

そのケントゥンの予想は当たっていた。マクレーンと劉もまた落ち着いており、エウロパ軍のバリアーに対しても全く動じてはいなかった。そして冷静にモニターに映し出されるエウロパ軍の陣地を見ていた。

「コロニーレーザー等を減らしたようですな」

「はい」

マクレーンはいつも通り劉の言葉に頷いた。

「そして同時に対空砲座やミサイル砲座も。また思い切ったことを」

「その分をバリアーに向けたということですな」

マクレーンはそれを聞いてこう言った。

「つまり防御に重点を置いたというわけです」

「はい」

今度は劉が頷いた。そして彼は後ろを見た。

「これに関してはどう思われますか」

「私に聞かれたのですか」

「はい」

劉は応えた。彼の顔の向こうには黒い髪と瞳のアジア系の肌を持つ白人の女性がいた。彼女は連合軍航空総監ジャスティヌ＝サフラワーズであった。階級は元帥。ケベック王国出身である。

かってケベック軍においては美貌の女性パイロットとして知られていた。五十代になった今でもその美貌は衰えてはいなかった。長身でまるでモデルの様にスラリとした身体をしている。それが連合軍の作業服のような紫の戦闘服ですらまるでブランドものの服の様に見せていた。見事な容姿であった。

彼女はこの戦いに幕僚の一人として参加していたのである。陸戦総監であるカーロス＝ポンス元帥もここにいた。彼はベネズエラ出身の黒人であった。ただしその顔はラテン系の髭の濃い顔である。

二人が並ぶ姿は極めて対比的で面白いものであった。
「そうですね」
サフラワーズは少し間を置いてから質問に答えた。
「ここは私ので出番かと」
「出番ですか」
「はい。とりあえずはセオリー通りに攻撃を行えばいいでしょう」
彼女はまずこう言った。
「ですが問題は接近してからです」
「今回は接近戦を挑まれると」
「はいおそらくこのまま艦艇による攻撃を続けてもそれ程効果があるとは思えません。無駄にエネルギーや弾薬を消耗するだけだと思われます」
「ふむ」
「ならばここは思い切って接近するべきかと。しかも敵はコロニーレーザーやミサイル砲座等を減らしております」
「はい」
「ならば接近は用意です。接近の際の損害が怖いというのならば事前に一斉攻撃を仕掛け出鼻をくじきましょう」
「そしてそれからは」
「私の部下達の出番です」
そう答えて笑った。美しいが戦場の中での笑みであった。ある意味壮絶な笑みであった。
「艦載機の一斉攻撃を仕掛けましょう」
「艦載機の」
「はい。敵の防御兵器が少ないならば。これで充分です」
言葉は続く。
「あとはあの新兵器も出せば完璧でしょう。どうでしょうか」
「成程」
劉はそこまで聞いて静かに目を閉じ頷いた。
「艦載機による戦いですか」

「はい。私はそれでいいと思いますが」
航空総監ならではの戦いだと言えた。だが劉はこれには即決しなかった。
「司令」
彼は今度はマクレーンに顔を向けてきた。

## 第十四部第三章　後方の修羅場その十四

「司令はどう思われますか」
そうやら彼は最終的な決断をマクレーンに委ねたようであった。これには彼の何かしらの思惑があるように思われた。
「そうだな」
マクレーンは自分の顎に自らの手を置いた。そしてそれから述べた。
「確かに今回はこれでいくべきかと」
「そうですか」
劉はそれを聞いて頷いた。
「それでは決まりですね」
全ては宇宙艦隊司令長官に帰する。彼が決定したことならばそれで問題はないというわけであった。
「ではそれでいきましょう」
「はい」
サフラワーズも他の幕僚達も頷いた。
「まずはこれまで通りの攻撃を行う」
マクレーンが言った。
「それから艦載機の総攻撃」
「ハッ」
「今回は艦載機での攻撃をメインに行うとしよう。それでいいですかな」
「私としては異存はありません」
サフラワーズはにこりと笑ってこう応えた。
「それでは決まりですな。では」
劉が音頭をとった。
「第二ラインへの攻撃を続けます。総員の健闘を祈ります」
「了解」

こうして連合軍の攻撃方法が決定した。そして砲艦とミサイル艦の攻撃が終わった後で戦艦が前に出て来た。ここまではまさに彼等のセオリー通りであった。
そして戦艦や重巡による射撃が行なわれる。今度は四連攻撃はなかった。
「！？艦艇による攻撃はなしというのか」
エウロパ軍の将兵達はそれを見てこう思った。
「どうやらあの四連攻撃はないようですな」
「我々のバリアーを見てこうしたのか」
「おそらくは」
提督と参謀達はそれぞれの艦橋で口々にこう話した。
「ではこれまで通りの戦いに戻ると」
「それはどうでしょうかね」
ある参謀がそれに異議を呈した。
「彼等とて馬鹿ではないでしょうから」
「ううむ」
それは今までの戦いでよくわかっている。連合軍は決して愚かではない。その為に今まで煮え湯も飲まされてきている。
「何か考えている筈ですよ」
「それは何だ」
「それは」
連合軍の攻撃は予定通り行われていた。次には空母が前に出て来た。
「艦載機ですかね」
「それでは普段と変わらない」
その通りであった。連合軍はいつもこうして艦載機による攻撃を行う。彼等もそれはよくわかっていた。
「ですがそれしか考えられません」
この参謀はまた言った。
「そしてそれが非常に大きな力ならば。どうでしょうか」

「むむむ」
その間にも空母は前に出て来ていた。その中では艦載機の発艦が急ピッチで行われていた。
「第三カタパルトにタイガーキャットを入れました！」
「よし！」
航空長がそれを聞いて頷く。艦載機の離着陸の直接の責任者は空母や艦艇においては航空長が務めている。
「ではすぐに着艦させよ！」
「はい！」
「攻撃機はどうか！」
彼は艦橋において指示を下す。しかも見守り目を離すことはない。
「炎龍隊全機発艦準備オーケーです！」
「爆撃機は！」
「これもよしです！」
「そしてあれもいけるか」
「勿論です」
格納庫には整備長がいる。そして彼もまた指揮にあたっていた。
「準備オーケーです」
「ならいい」
この艦の航空長はそれを聞いて頷いた。そして後ろにいた艦長に対して報告した。
「全てよしです」
「そうか」
敬礼と共に報告を受けた艦長はそれに対して頷いた。
「まらば全機出撃させよ。よいな」
「ハッ」
航空長はそれに頷いた。
「それではすぐに」
「うむ。既に他の艦では出撃がはじまっている」
見れば確かにそうであった。艦載機が次々に発艦していた。

「頼むぞ。遅れるわけにはいかない」
「はい」
この艦においても艦載機は次々と発艦した。そして敵艦に向かった。その中には連合の誇るエース達もいた。
「よお後藤さんよお」
後藤のタイガーキャットのモニターにスタンフォードが姿を現わしてきた。
「調子はどうだい？」
「悪くはない」
後藤はそれに対して簡潔に返した。

## 第十四部第三章　後方の修羅場その十五

「いつも通りだ」
「どうやらそうみたいだな。そっちの心配はないか」
「では誰を心配しているのだ」
「それは決まってるだろ」
スタンフォードは笑いながらこう返してきた。
「なあ」
「俺のことか」
「わかってるじゃないの」
モニターに出て来たのはアクジェジトであった。彼はいささか憮然とした顔になっていた。
「今度は撃墜されないようにな」
「大きなお世話だ」
彼の返事はこうであった。
「今度は撃墜されはしない」
「そうだったらいいがな」
「おっ」
また別のパイロットがモニターに姿を現わした。曹黒蛟であった。
「少なくとも死ぬことはないようにな」
「また不吉なことを言うな」
「戦場だからな」
曹は静かな様子でこう答えた。
「何が起こっても不思議はない」
「確かにそうだが」
「ましてアクジェントは今まで死にそうになった場面が何度もある。だからこそ気になる」
「そうは言いながらも生きているのだけれどね」
またモニターに誰かが姿を現わした。トワンキンであった。

「悪運が強いのかしら」
「だったら最初から撃墜されはしないと思うがな」
「俺には魔神がスポンサーについているのさ」
「ほう」
「また大きく出て来たわね。あんた宗教は何だったかしら」
「エジプトと仏教だ」
彼はこう答えた。
「祖国ではあまり信仰されてはいない宗教だがな、どちらも」
そしてこう断ってきた。
「神と仏は何だ」
「オシリスと大威徳明王だ」
後藤の問いにも答えた。
「それが何か」
「それだな」
後藤はそこまで聞いて納得したように頷いた。
「貴官には魔神がスポンサーについているのではない、死神がスポンサーだ」
「死神が」
「ああ、成程」
今度はボニングがモニターに出て来た。
「オシリスだからな」
「ボニング」
「今まで何処にいたんだよ」
「悪いが黙って聞かせてもらっていたのさ。けれどあんまり面白そうだったからな」
「話に入ってきたのか」
「そういうこと」
彼はこれに答えて頷いた。
「それで何で死神がスポンサーになったんだ？」
「正確に言うと冥界の神様だけれどな」

「冥界の」
「ああ、そういうことか」
曹がここで気付いたのか声をあげた。
「オシリスはな。確かにそうだ」
「そういうことだ」
後藤はその答えを待っていた。静かに頷いた。
オシリスは兄弟神であるセトによって一度殺されている。そこから復活した時に冥府の神になったとされているのだ。もっともこれはホルス信仰が盛んだった時に作られた話であり今はあまり伝えられていない。オシリスは最初から冥府を司る神として称えられている。そしてセトは知恵の神でもあるトトと共にラーを守る力の神なのである。決して邪悪な神ではなくなっているのだ。
「大威徳明王はまた別だがな」
この明王は六つの顔に六本の腕と足を持つ明王である。憤怒の形相をしており、魔を調伏する仏である。五大明王の一人として知られている。
「だがオシリスは確かにそうだ」
「そういうことか」
「けれどそれだったら違うんじゃないかしら」
トワンキンがここで言った。
「というと」
「いつも何だかんだで死なないけれど」
「ああ」
「これってそのオシリス神に嫌われてるってことじゃないかしら。だから冥界に行けないのよね」
「そういえば」
「そうなるか」
「ねえアクジェント」
彼女はアクジェントに問うてきた。
「そこらへんはどう思うかしら」

「そうだな」
彼は答えた。
「そう言われればそうかも知れない」
「やっぱり」
「だからといってオシリス神への信仰を止めるつもりもないが」
「そうなの」
「ある意味加護を受けているしな」
「言われてみればそうだな」
「まあ今回も生き残ってくれよ」
スタンフォードが締めるようにして言った。
「俺は御前さんに撃墜数でまだ負けているからな」
「抜くつもりか」
「当たり前だろ」
スタンフォードはニヤリと笑ってその問いに返した。
「連合のナンバーワンパイロットは俺だ。それを証明する為にもな」
「では俺は御前より多くの敵機を撃墜しよう」
「やるつもりかい」
「俺とて負けるつもりはない」
そう言いながら火花を散らし合う。戦いは既にはじまっていた。
「では行くか」
曹が話をまとめにかかってきた。
「既に敵機が来ている」
「よし」
その言葉に他の五人が頷く。
「何機撃墜できるか。競争だ」
「チップは自分の命」
「今回もやってやるよ」
「健闘を祈る」
「了解」
六人のエースは最後に後藤の言葉に頷いた。そしてそれぞれの戦

場に向かう。
パイロットとパイロット、宙を駆る戦士達の戦いがはじまろうとしていた。それが史上かつてない程の艦載機同士の戦いとなろうとはこの時誰も思わなかった。

# 第十四部第四章　エース達の戦いその一

エース達の戦い

連合軍はその艦載機を全て出してきた。それに対してエウロパ軍も応戦する形で艦載機を出す。こうして双方の戦いがはじまった。

「今度は艦載機で来たか」

シュヴァルツブルグはそれを見て呻いた。

「セオリー通りと言えるが。果たして効果は」

「かなり危険でしょう」

いつものように傍らに控えるエヴァが言った。

「危険か」

「はい。連合軍はその艦載機のうち動けるものは全て出してきているようです」

「うむ」

それはレーダーの反応からすぐにわかった。かなり夥しい数であった。

「これだけの艦載機を一度に出した例は今までないでしょう。前代未聞です」

「彼等の数は何でも前代未聞だな」

シュヴァルツブルグはそれを聞いてこう言った。

「この戦いでも二千個艦隊を送り込んできている。人員にして六十億」

「はい」

「エウロパでそれを越える人口を持つのはオリンポスを含めそれ程ない。どれだけの数なのだ」

「それが連合の力です」

「力か」

「はい、数は力です」

エヴァはこう言い切った。

「それだけで力となります。それはよくおわかりだと思いますが」
「そうだな」
シュヴァルツブルグはその言葉を否定することはできなかった。彼は軍人である。骨の髄からの軍人である。騎士でもあるがそれでも戦場に身を置く立場であった。だからこそよくわかることであった。
戦争はやはり数であった。物量である。かってオスマン＝トルコはその強勢さを欧州各国に怖れられた。その補給と技術、何よりも大砲と精鋭イェニチェリがその恐怖の象徴であったがただいるだけでは彼等はそこまで怖れられはしなかった。怖ろしいのはその数であった。一回の戦いで普通に十万を優に越える兵力を動員できたのだ。当時の欧州でそこまでの兵力を普通に動員できる国家はなかった。その為怖れられてきたのである。
「しかも彼等は装備がいい」
「はい」
「生半可なことでは太刀打ちできないな」
「こちらも艦載機は総動員しておりますが」
「数は」
「およそ八千万機」
エヴァは言った。
「我がエウロパ軍が一度の戦いで出撃させた艦載機の記録だそうです」
「それだけ見れば凄いものだな」
そうは言いながらもシュヴァルツブルグの声は醒めたものであった。彼はまた問うた。
「そして連合軍は」
「七億機程だそうです」
「冗談のような数だな」
「連合軍の艦艇はその艦載機の収容数が多いですから」
「それでもだ。よくもそれだけ出せるものだ」

「数にして最早これだけの差がつけられておりますが」
「だからどうした、とここでは言おう」
「だからどうした、ですか」
「そうだ」
シュヴァルツブルグはそう言いながらモニターを見据えた。
「今更数を聞いて驚くつもりもない」
「左様ですか」
「それはそれで戦い方がある」
シュヴァルツブルグの目はモニターから離れてはいなかった。
「航空参謀長」
「ハッ」
後ろに控える参謀達の中の一人が声をあげた。白い髪に灰色の目を持つ男であった。

## 第十四部第四章　エース達の戦いその二

「ここはどうするべきだと思うか」
「はい」
航空参謀長であるヨハネス＝ヴァン＝レンブラント大将はそれを受けて口を開いた。なお彼はベルギー出身である。その証拠に胸にベルギー国王から受けた勲章があった。それを大事そうに飾っている。
「敵の数はやはり多いです。そのまま迎撃しても敗れるだけかと」
「そうか」
「ここは誘い込むべきであると思います」
「誘い込む」
「はい。艦載機だけでは相手になりません。やはり艦艇と連携して迎撃するべきかと思います」
「艦艇の対空砲座やミサイルと共にか」
「如何でしょうか。当然敵機が艦艇に攻撃を仕掛ける危険性もありますが」
それは充分に考えられることであった。連合軍は攻撃機や爆撃機まで持っている。それが艦艇攻撃を主眼に置かれた機体であることはもう言うまでもないことであるからだ。
「少なくともただ迎撃するよりは。効果がずっとあると思いますが」
「ふむ」
シュヴァルツブルグはそれを聞きながら顎に自らの手を当てて考えていた。顎から手を離して言った。
「それがいいか」
「ではそれで」
「うむ。それしかないようだしな」
数において大きく劣るエウロパ軍に選択肢は少ない。シュヴァルツブルグも迷うことはなかった。

「ではパイロット達には前に出ないように伝えてくれ」
「はい」
「だが囮は必要だな。その為の部隊は用意しておく」
「わかりました」
「それで行こう。これでよいな」
「了解しました」
エウロパ軍の戦術は決定した。彼等は積極的に前に出ては来ない。だがそれを見ても連合軍はやはり動じたところはなかった。
「引き篭もるつもりですかな」
陸戦総監ポンスはエウロパ軍のそうした動きをブレスの艦橋で見て呟いた。
「まるで亀のように」
「ただの亀ではありませんよ」
そんな彼にサフラワーズは言った。
「牙を秘めた亀です」
「ワニガメですか、それでは」
「また怖い顔の亀を出しますね」
それを聞いて思わず笑みが零れる。
「けれどそうですね。どうやら彼等は危険な罠を用意しているようです」
「では罠にかかってみせますか」
それを背中から聞いていた劉がこう言った。二人に顔を向けながら。
「そうすれば彼等も動くでしょうから」
「罠に入るのですか」
「はい」
劉はにこやかに笑ってこう言った。
「どうでしょうか。これならば彼等も動くでしょう」
「確かに」
「では決まりですね。艦載機にはこう伝えましょう」

劉は言葉を続けた。
「エウロパ軍に攻撃を。予定通りね」
「はい」
「ただし、あれも使うこと」
「あれをですか」
それを聞いたサフラワーズの顔の笑みが変わった。ニヤリとしたものになる。
「ここが使い時だと思いますが」
「確かに」
どうやら彼女がよく知るものを使うらしい。笑みからそれがよくわかった。
「ではそれで。やりましょう」
「ハッ」
マクレーンも指示を下した。それを受けて連合軍の艦載機達は前に進んだ。そのままエウロパ軍への攻撃態勢に入った。
それぞれ五機を単位として小隊を組む。連合軍独特の小隊編成である。
それが五個集まって中隊となる。連合軍の艦載機はその単位からして違うのであった。
「来たか」
エウロパ軍の艦載機達は彼等を待ち受けていた。迎撃態勢はもう整えている。
「パイロットの諸君達」
「これは」
彼等は通信に入ってきた声を聞いて驚きの声をあげた。それはシュヴァルツブルグのものだったからである。

## 第十四部第四章　エース達の戦いその三

「軍務相の」
「まさか」
「これからかってない程熾烈な戦いが行われるだろう」
シュヴァルツブルグの声は続く。パイロット達に対して語っていた。重く、そして謹厳な声であった。
「だがそれに怯むことのないようにお願いする。この戦いは諸君等の健闘にかかっている」
「俺達の」
彼等はそれを聞いて心を動かした。そこに感じるものがあった。
「我々は勝利を収めなければならない。祖国の為にも」
シュヴァルツブルグはこう言った。
「その為にも健闘を祈る。戦いの神々達が諸君等を見守ってくれているということを忘れないでくれ」
「戦いの神か」
「確かにな」
ある者達は自分が乗る機体が何であるかを考えた。それはエインヘリャル。戦場で倒れヴァルハラに導かれた戦士達の名である。彼等が仕えるのはオーディン。嵐と戦の神である。
「では俺はオーディンに祈る。勝利をな」
「私はマルスだ」
彼等は口々に言った。
「勝利の為に」
「エウロパの為に」
彼等の士気が上がった。そして万全の状況で連合軍を迎え撃つ。
対する連合軍はそのまま突進する。まずはタイガーキャットが前に出る。
「さあてと」

トワンキンは中隊の先頭にいた。そして部下達を指揮しながら自らも獲物を狙っていた。
「いい、まずはミサイルで仕掛けるわよ」
「了解」
部下達はそれに頷く。そしてそれぞれミサイルの照準を合わせる。
「相変わらず動きがいいようだけれどね」
トワンキンはエウロパ軍の動きを見ながら言った。彼女はエウロパ軍のパイロット達を決して侮ってはいなかった。むしろその技量を認めている程であった。
だからこそ油断してはいなかった。冷静にミサイルの照準を合わせていく。
十個の照準が敵に当てはめられた。それを認めるとトワンキンはミサイルのボタンのカバーを外した。そのうえで部下達に対して言う。
「行くわよ」
「はい」
部下達はその言葉に頷く。そしてそれぞれ攻撃態勢に入る。
「撃て！」
「撃て！」
そして無数のミサイルが放たれた。それは複雑な動きを示しつつエウロパ軍の艦載機達に襲い掛かる。
そのうちの幾らかはミサイル砲座や対空砲座の弾幕により防がれる。エインヘリャル達も懸命に回避運動に移る。だがそれでも逃れることができずにミサイルの直撃を受ける機体が続出していた。
「チェッ、あまり当たらなかったわね」
「何機撃墜ですか？」
部下の一人が舌打ちするトワンキンに対して尋ねた。
「三機よ」
「いいじゃないですか」
その部下はそれを聞いてこう答えた。

「俺なんか一機も撃墜できませんでしたよ、今ので」
「そうだったの」
「ですから。気を落とさずに」
「それもそうね」
トワンキンは部下にそう言われて気を取り直した。そしてあらためて前を見た。
「何か今までより守りが堅いわね」
「はい」
他の部下達もその言葉に頷く。
「これはちょっと苦労しそうかしら。今まではさっきのミサイル攻撃で少なくとも三割は減らすことができたのだけれど」
「今は一割もいっていないようですね」
「そうね。敵も馬鹿じゃないわ。かなり守りが堅いわよ」
「ええ」
見ればその通りであった。艦艇と艦載機がそれぞれ連携する形で守りを固めていた。そのうえで連合軍を待ち受けていたのであった。
「今闇雲に突っ込んだら痛い目を見るわね」
「ですね」
「さて、ここはどうしようかしら」
「心配することはないと思いますよ」
ここで隣の機に乗る部下が彼女に対してこう言った。
「それは何故？」
「電子戦機があるからですよ」
「電子戦機」
トワンキンはそれを聞いてまずは怪訝そうな顔をした。それからまた口を開いた。
「ああ、あれね」
「はい」
その部下は彼女の言葉を受けてまた頷いた。

## 第十四部第四章　エース達の戦いその四

「あれを使うそうですから。これでまた違うと思います」
「そうそう上手くいくかしら」
「少なくとも上手くいくことを考えて作られている筈ですよ」
部下の言葉は落ち着き、そして整然としたものであった。
「ここは期待させてもらいましょう。とりあえずは」
「そうさせてもらおうかしら」
トワンキンもとりあえず今は頼りにする気になった。これに頷く。
「早速動くそうですしね」
「まずはお手並み拝見ってとこね」
「はい」
その言葉に続くように後方にいた変わったシルエットの機体が動く。十字の形をしており機体の上にそれを覆うかのような円盤状のものを置いている。どうやらこれが電子戦機であるらしい。
「早速はじめるか」
その中には三人程乗り込んでいた。彼等はその中でそれぞれの任務にあたっていた。機長が自分のすぐ後ろでコンピューター等の機器の前に座る男に対して言葉をかけていた。
「はい」
その男はそれに頷いた。そしてすぐにキーボードを叩きはじめた。
これが一体どういった効果を敵、味方に及ぼすのかはまだわからない。だが彼等は自分の仕事を信じていた。そしてそれが戦局に影響を与えるとも信じていた。
「ムッ」
まずはエウロパのパイロット達が異変に気付いた。
「何か通信が急に悪くなったな」
「そういえば」
彼等は口々にこう言い合った。

「どうしたんだ、これは」
「まさかまた連合の通信妨害か」
「レーダーの反応もおかしいぞ」
今度はレーダーであった。
「何か。時折見えなくなったりする」
「モニターもだ」
彼等はそれを見て次第に焦りはじめた。しかしそれで終わりではなかった。
「艦艇からの通信も」
「レーダーが完全に使えなくなった」
「どういうことだ、これでは敵が何処から来るかわからん」
これは艦艇も同じであった。多くの艦艇でも通信やレーダー、モニターが不調になってきたのだ。そして対空砲座の制御も効かなくなってきていた。
「また連合の電子妨害か」
誰かがこれを察して言った。
「気をつけろ、奴等はこういった時に仕掛けて来る」
そしてこう言う。見えはしないのに必死に辺りを見回す。
「来るぞ、対空戦闘用意だ」
「ですがどうやって」
彼の部下がそれに対して問う。
「対空砲座もミサイルも使えないのですよ」
「ぬうう」
「とにかく落ち着かれて下さい。今下手に動いてもさらに混乱するだけです」
エウロパ軍の艦艇及び艦載機の半分以上がこうした電子妨害を受けていた。それにより陣形が乱れてきた。これこそが連合軍の狙いであったのだ。
「上手くいってるようね」
トワンキンはモニターに映るエウロパ軍を見てこう呟いた。

「うちの電子系統って本当に凄いわね」
「喜ばしいことであります」
先程彼女に対してそれについて言及した部下が笑みと共に応えてきた。
「これで攻撃を仕掛けることができますから」
「そうね」
トワンキンはモニターに映る混乱する敵軍を見てこう言った。そこに指示が下った。
「全機突入せよ」
「言ってる側から」
これを聞いて思わず笑みが零れてしまった。
「相変わらず早いわね、我が軍は」
「少なくとも指示や動きは」
「遅いのは船足だけか」
「まあそれは言わない約束で」
トワンキン達は戦場とは思えない程の軽いやりとりを続ける。しかしその目は戦場から離れてはいない。前にいる敵を見据えていた。
「それじゃあいくわよ」
「はい」
「了解」
部下達もそれに頷く。操縦桿を握る手に汗が滲む。
「突入！」
「ラジャー！」
トワンキンの命令に従い敵に突入する。その両翼にあるミサイルをすぐに放つ。それで敵機を撃つ。
これは他の部隊のタイガーキャット達も同じであった。一直線に突入し敵を撃つ。そしてその攻撃により空いた穴に攻撃機と爆撃機が入り込む。こうして連合軍の総攻撃がはじまった。

## 第十四部第四章　エース達の戦いその五

「おのれ、また電子戦か！」
突入を許したエウロパ軍のパイロット達は歯噛みする。だがその間にも連合軍の攻撃は続く。それへの対処で精一杯という状況になっていた。
「戦闘機はとりあえず無視しろ！」
ベテランパイロットの一人が言った。
「攻撃機と爆撃機だ！奴等を何とかしろ！」
艦艇への配慮からであった。母艦がやられてはどうしようもない。彼の部下達はこれを受けて攻撃機と爆撃機に向かう。
部隊を二手に分け護衛の戦闘機に対してはそのうちの一つを向けて引き付ける。その間に彼は攻撃機や爆撃機に突撃する。ビームガンのボタンに手をやる。
「やらせるか」
彼は連合軍の攻撃機炎龍を憎悪の目で見ていた。
「これ以上貴様等の好きにはさせん」
この時彼は自分の攻撃で炎龍を簡単に撃墜できると思っていた。所詮攻撃機である。戦闘機に襲われてはひとたまりもないだろう。そう確信していたのだ。
「覚悟しろ！」
攻撃を放つ。それは一直線に一機の炎龍に向かって行く。だがここで思わぬことが起こった。
「なっ！？」
何と攻撃を向けた炎龍が突如として動いたのである。その重苦しい外見からは信じられない動きで彼の攻撃をかわす。
それから上にいる彼に向かってきた。そして何とミサイルを放ってきたのだ。
「うわっ！」

突然の攻撃に彼はよける暇がなかった。そのミサイルの直撃を受けエインヘリャルはあえなく撃墜された。何とか脱出はできたものの茫然自失といった状態であった。
「馬鹿な、どういうことなんだ」
脱出ポッドの中で彼は呟いていた。
「まさか攻撃機が。どういうことなんだ」
だがこれは彼だけではなかった。他のエインヘリャルも連合軍の攻撃機や爆撃機に撃墜されていた。彼はそれを悪夢を見るような目で見ていた。
「我が軍の攻撃機や爆撃機に撃墜されるエウロパ軍の者が多く出ているそうです」
サフラワーズがマクレーンと劉に対してこう言った。その顔には一目でわかる程の喜びが見られていた。
「どうやら我々の策には気付かなかったようで」
「まさかとは思いますからね」
劉がこれに応えた。
「我が軍の攻撃機や爆撃機は単に艦艇や施設への攻撃だけではありません」
「はい」
「格闘戦も可能なのです。彼等はそれに気付かなかった」
「今までもそれを見せてきませんでしたからね」
「はい」
サフラワーズはあらためて頷いた。
「ですがこれによりエウロパ軍は精神的にかなりのダメージを受けています」
「ですね」
「狙い目ですね。まずは波状的に艦載機の装備を換装させましょう」
「換装ですか」
「戦闘機は格闘戦を、攻撃機と爆撃機はそれぞれ対艦攻撃を念頭に置いて」

彼女は言葉を続ける。
「装備を換えていきましょう。それで攻撃を続けるのです。これでどうでしょうか」
「いいですな」
これにマクレーンが頷いた。
「そして波状攻撃を仕掛ける」
「そう、それです」
サフラワーズはそれに頷いた。
「それで敵を少しずつ削り取っていきましょう」
「そうしていきますか」
「数では大きく勝っています。それも利用できます」
ここでも数の話が出た。やはり連合軍の最大の強みはその数であった。彼等はそれを念頭に置いて作戦を立てている。それは今回も同じであった。
「波状攻撃を続け敵を減らしていく。これで如何でしょうか」
「はい」
マクレーンと劉はこれに頷いた。それでもう決まりであった。

## 第十四部第四章　エース達の戦いその六

「いいでしょう」
「有り難うございます」
サフラワーズはその言葉を聞いて会心の笑みを浮かべた。こうして連合軍の次の攻撃は決まった。前線の部隊は一旦退き代わりの部隊がそこに入る。これを繰り返しながらエウロパ軍に攻撃を続けていた。
「まさか攻撃機や爆撃機まで格闘戦ができるとはな」
エウロパ軍のショックは相当なものであった。冷静なシュヴァルツブルグですら落ち着きを少し失っていた。
「侮れないと言うべきか」
「ここでも彼等が一枚上だったということです」
エヴァはいつもの冷徹な分析を述べた。
「一枚上手か」
「はい、私もまさか攻撃機や爆撃機であのようなことができるとは思っていませんでした」
「それは皆そうだろう」
シュヴァルツブルグはこう述べた。
「まさかとは思うからな」
「ですがこれで我が軍のパイロット達に動揺が起こっています。これが一番の問題です」
「無理もない」
彼は短い言葉でこう言った。
「予想もしなかったことなのだからな」
「予想もしなかったことが起こるのもまた戦場です」
エヴァの言葉はクールなままであった。
「ですがそれを予測できなかったのは。迂闊でした」
「済んでしまったことを今言っても仕方がない」

彼はこう言ってエヴァを宥めてきた。
「重要なのはこれからだ。違うか」
「はい」
エヴァはそれに頷いた。
「おそらく敵はさらに攻撃の手を強めてくるでしょう」
「どうくるかな」
「波状攻撃です」
彼女は連合軍の動きを完全に読んでいた。だからこそ言えることであった。
「まずは今前線にいる部隊は一旦退きます」
「うむ」
「そしてそこに後ろの部隊が入る。その間に退いた部隊は装備を補給して前線に戻ってくるでしょう」
「その繰り返しというわけだな」
「そういうことになります」
エヴァはまた頷いた。
「おそらく今度は艦艇を狙ってくるでしょうが」
「普段に戻るわけか」
「そうなります。そして戦闘機がそれを護衛する。連合軍の基本パターンです」
「今までならそれを防ぐこともできたが」
シュヴァルツブルグの言葉は苦かった。彼はパイロット達の指揮を懸念しているのだ。だがそれに対しエヴァは簡潔に答えた。
「いえ、今からでも可能です」
「できるのか」
「要はパイロット達を元に戻せばいいのですから」
「だが」
シュヴァルツブルグはそれでも口を濁らせていた。
「口で言うのは容易いが」
「一人のパイロットがそれを見せればいいのです」

「一人のパイロットでか」
「私が行きます」
そして彼女は名乗りをあげた。
「卿が」
「そして連合軍の攻撃機や爆撃機を倒してみせましょう。これでいいですね」
「いいのか」
「悩んでいる状況ではないでしょう」
彼女は反論した。
「さもなければ。我が軍はこのまま押されたままになります」
「うむ」
「ここでこのまま負ければ。どうなるかおわかりでしょう」
これはもう言うまでもないことであった。シュヴァルツブルグの表情が暗くなった。
「それはそうだ」
認めたくはないがそれを認めた。
「では決まりですね」
エヴァの顔が険しいものとなっていた。

## 第十四部第四章　エース達の戦いその七

「では出撃させて頂きます」
敬礼と共に言う。シュヴァルツブルガは観念して言った。
「頼む」
「有り難うございます」
エヴァは頷いた。
「攻撃機、そして爆撃機と格闘戦をするのか」
「はい」
「確かに戦闘機と戦うよりは楽だろうが」
「無論油断できる相手ではありません」
彼女もまたパイロットである。それはわかっていた。
「しかし、それでもやらなければなりません」
「頼めるか」
「そうでなくてどうして今出撃しましょう」
その言葉は険しく、そして強い決意を秘めたものであった。シュヴァルツブルグにそれを阻むことはできなかった。
「では頼む」
「了解しました」
こうしてエヴァは出撃した。ワレンシュタインから一機のエインヘリャルが出撃した。
そのエインヘリャルはワレンシュタインの前で一回旋回した。そしてそれから戦場に向かうのであった。
「閣下」
それを見た幕僚の一人が彼に声をかけてきた。
「宜しいのですね」
「我々にワルキューレを制御できると思うかね」
「ワルキューレをですか」
「そうだ。それができるかどうかと聞いているのだが」

「それは」
返答に窮した。ワルキューレとは北欧神話に出て来る戦場を駆け巡る天女達である。オーディンの娘でもあり彼の命により戦場で勇敢な戦士達に加護を与え、そして時が来ればヴァルハラに導くのだ。かってジークフリートという偉大な英雄の妻ともなったブリュンヒルテが最も有名である。
「できないだろう」
「はい」
幕僚はシュヴァルツブルグの言葉に頷くしかなかった。
「そういうことだ。ここは彼女に任せよう」
「わかりました」
「どちらにしろ今のままでは敗北は確実だ」
「はい」
「それを何とかしなければ。どうしようもないからな」
「ですね。ではここは彼女に任せるしかありませんか」
「ワルキューレの加護を信じよう」
シュヴァルツブルグはまた言った。
「今はな。神頼みと言われようとも」
「ハッ」
戦局はエウロパにとって不利になっていく一方であった。それはシュヴァルツブルグが最もよくわかっていることでもある。それを打開する為には最早神の力でも何でも使うしかない、それ程までに彼等は切迫した状況にあった。
エヴァは戦場に到着するとすぐに敵に向かった。目標は予定通り連合軍の攻撃機及び爆撃機である。
「おい、あれ」
連合軍の攻勢の前に押される一方であったエウロパ軍のパイロット達が一機のエインヘリャルを見た。それは一直線に敵の真っ只中に突っ込んで行く。
「何を考えているんだ？一機で」

「死ぬつもりなのか」
だがそのエインヘリャルはそれでも突撃した。そこに連合軍のタイガーキャットが向かって来た。
「来たわね」
十機程いた。一機で相手できる数ではなかった。だがエヴァはそれでも怖気付くことはなかった。
その十機のタイガーキャットをかわした。突っ込んで来る彼等を木の葉の様に舞いかわしたのだ。彼等が気付いた時にはエヴァのエインヘリャルは既に彼等の後ろにいた。
「なっ！？」
彼等はレーダーを見て思わず呆然とした。何時の間にか後ろをとられていた。戦闘機の戦いにおいてこれは死を意味することであった。
「今は虎の相手をしている暇はないわね、残念だけれど」
それでも彼女は彼等を攻撃することはなかった。無視して素通りしていく。なおこの場合虎とは当然ながらタイガーキャットのことである。タイガーをあえてこう言ったのである。

## 第十四部第四章　エース達の戦いその八

戦闘機達をかいくぐるとそのまま攻撃機に向かった。爆撃機も一緒である。
攻撃機と爆撃機はエヴァのエインヘリャルを確認すると彼女の方に向かってきた。その数は優五十機を越えていた。
「何を考えているんだ、あのパイロットは」
エウロパ軍のパイロット達はそこに誰が乗っているのか知らない。乗っているのが女、しかも生粋のパイロットではなく参謀であると知ったならばどれだけ驚くであろうか。
「死ぬ気か、連合軍の攻撃機や爆撃機は手強いぞ」
「しかもあれだけの数だ。まるで自殺行為だ」
だがそれでもエヴァは突っ込んだ。そして冷静な目で連合軍の攻撃機と爆撃機の編隊を見据える。そこにミサイルがやって来た。
無数のミサイルが彼女の乗るエインヘリャルに襲い掛かる。これを見て誰もが彼女は死んだと思った。
「終わったな」
「やったな」
両軍はそれぞれ全く別の感情で彼女が乗るエインヘリャルを見ていた。だがこの二つの感情はその一人によってそれぞれ完全に裏切られることになった。
「なっ！」
双方は今度は同じ感情となった。驚愕である。
「まさか！」
また同じ感情になった。彼女はその無数のミサイルを全てかわしてみせたのだ。
右に左に、そして上に下に。流れる風の様な動きでそれをかわす。両軍のパイロットが気付いた時には彼女はもうミサイルを全てかわし終えてしまっていた。

「ミサイルで私を倒せるとは思わないことね」
「おのれ！」
「やった！」
両軍の感情はまた分かれた。苦渋と喝采がそれぞれの軍で沸き起こった。
エヴァは再び前に進む。今度はビームでの攻撃が行われた。連合軍は艦載機のビームにおいてもエウロパ軍のそれよりも射程も威力も大きかったのだ。
圧倒的な弾幕に見えた。しかしエヴァはその中にある僅かな隙間を通り抜けてみせた。そしてそのまま連合軍に向かい続ける。そして自身のビームの射程に入った。
「今ね！」
ビームを放つ。それで数機の攻撃機と爆撃機が撃墜された。撃墜し終えるとエヴァは戦場から離脱した。鮮やかなまでも攻撃であった。
「何て奴だ！」
銀河語とラテン語で同じ言葉が叫ばれる。言葉は同じでもそこにある感情は全く違うものであった。
自軍の方に帰って来たエヴァを喝采で迎えるエウロパ軍。地団駄を踏みかねない顔で見送る連合軍。両者の顔は完全に分かれていた。
「連合軍、恐れることはないわ」
エヴァは自軍の方に戻るとこう言ってみせた。そのヘルメットから整った透き通った顔が見える。今神業を披露したパイロットが美貌の女性だったと知りエウロパ軍はまた喝采を叫んだ。
これでエウロパ軍の士気はあがった。同時に連合軍の攻撃機や爆撃機にも臆することはなくなった。女にできたのなら男にも、同じ女として、そうした感情が芽生え敵に向かって行った。こうして戦いはエウロパ軍が盛り返す形となった。
「女がか」
後藤はこの話を自分の母艦で聞いていた。補給を受ける為に戻っ

ていたのだ。
「ああ。どうやらかなりの腕前らしい」
その艦の整備長であるハシム＝ギネットが彼にこう言った。彼は連合の整備士官でありアルム王国出身である。金髪に岩石の様な顔をしている。目はダークブルーであった。
「そうか」
後藤はそれを聞いて静かに頷いた。
「それでは誰なのか大体わかる」
「知っているのか」
「名前は知らないがな」
彼はこう答えてきた。
「名前も知らないのにわかるのか」
「ああ。大体どんな奴かはわかっているつもりだ。前に戦ったことがあるからな」
「そうか」
「そいつは俺に任せて欲しい。おそらく他の奴では無理だ」
「スタンフォード達でもか」
「おそらくな」
彼は冷静にこう言った。
「だからこそだ。ここは任せてくれ」
「そんなに手強いのか」
「そうだ。それは俺が一番知っているつもりだ」
語るその声に力が篭っていた。それだけで説得力があった。
「いいか」
「俺が止めても行くだろう」
ギネットはこう言って笑った。
「いつもそうだからな。今もそうだろう」
「済まない」
「いいさ。謝ることもない」
彼はそう声をかけて戦友に笑みを向けた。岩石の様な顔であるが

その笑みは実によいものであった。それを見ただけで落ち着く、そうした笑みであった。

## 第十四部第四章　エース達の戦いその九

「ただ、気をつけろよ」
「ああ」
「戦死なんて洒落にならないからな」
「それはわかっているつもりさ」
どうやら笑みを作るのは苦手であるらしい。後藤は表情を変えないままこう応えた。
「だがな」
「何だ」
「どうしてもやらなければならない仕事はあるからな」
「それはな」
ギネットも軍人である。それはわかる。軍人とは案外自分がやらなければならない仕事も多いものである。将校ともなると。
「それが今のやつだからな。やってみせるさ」
「頼むぞ」
「わかっている。それじゃあ行って来るな」
「健闘を祈る」
こうして後藤はまた戦場に向かった。部下達を連れ戦場に向かう。
「こちら旭日中隊」
後藤は通信を入れた。
「只今から戦場に復帰する。それでいいか」
「了解」
通信の向こうから返事が返って来た。
「すぐに頼む。今手強い奴が出て来てな」
「攻撃機と爆撃機の中に突っ込んだ奴だな」
「知っているか」
「有名人になっている。そいつは今どうしている」
「派手に暴れている。アクジェントが撃墜された」

「またか」
後藤はそれを聞いて一言漏らした。
「ああ、まただ」
電話の向こうでも同じ返事が返って来た。
「それで無事なのか」
「いつも通りな」
これもまた同じであった。
「とりあえず母艦に戻っている。それで補充のタイガーキャットに乗り込んでいるが」
「ならいい」
彼はそれを聞いてとりあえずは安心した。
「生きているのならな」
「彼は不死身だからな」
通信の向こうの声はこう言って笑っていた。
「撃墜された位では死なないさ」
「これもオシリスの加護か」
「ああ、それは言っていたな」
話が合っていた。
「俺はオシリスに護られているから死なないと。得意気に言っていたよ」
「実際はそれだけではないのは本人が一番よくわかっているだろうがな」
「それは言わない約束だ」
「そうだな」
タイガーキャットは非常に生存能力に優れた機体である。そして脱出装置も非常に優秀である。その為にアクジェントも生き残っているのである。
「それで君達にやって欲しいことだな」
「その暴れている者を何とかして欲しいと」
「わかってくれているみたいだな」

「話を振ってきたのはそれが理由ではないのか」
「ご名答」
通信の声はあえて明るい声で応じてきた。
「是非共お願いしたいのだが」
「他のエースは動けないのか」
「残念ながら。皆それぞれの担当エリアで頑張っている」
「仕方ないということか」
「アクジェントが戻るまでいいが。頼めるか」
「断ることはしない」
後藤は一言こう言って頷いた。
「頼まれた仕事はできることならさせてもらう」
「そうか、有り難いな」
「それでだ」
後藤は通信の向こうの声に尋ねてきた。
「そいつは一体どんな奴なのだ」
「詳しいことはわからない」
声はこう語った。
「エウロパ軍のパイロットなのは確かだが。それ以外は」
「男か女かもわからないのか」
「ああ。全くな」
「そうか」
彼はそれを聞いて考える顔になった。
「それでその技量はかなりのものだったのだな」
「あのアクジェントがやられたんだ。わかるだろう」
「それはそうだが。かなりの強敵か」
「それは事実だ。どうだ、やれるか」
「敵は強い方が面白い」
後藤は言った。
「やれるやれないは別にしてな」
「おいおい連合一のエースパイロットにしてはやけに謙虚だな」

「そうか。祖国ではそう言われたことはなかったが」
「日本人はな。そういえば大抵謙虚だったな」
「謙虚なのは我が国では美徳とされている」
彼は落ち着いた声でこう返した。
「それは子供の頃から言われてきた。自然と身に着いたのかもな」
「そうだったのか」
「だが謙虚でも尊大でもそのエウロパのパイロットはやらせてもらう」
「頼むぞ」
「今からそちらに向かう。ではな」
「ああ」
こうして後藤はその凄腕のパイロットが暴れているエリアに向かった。戦場に到達するとそのエリアではエウロパ軍が優勢であった。

## 第十四部第四章　エース達の戦いその十

そこのエウロパ軍は何倍もの連合軍を押していた。その先頭には一機のエインヘリャルがいた。
「あれだな」
「はい」
後藤は戦場に到着するとこのエリアにいたタイガーキャットのパイロットの一人に尋ねた。彼はそれに頷いた。
「どうでしょうか」
「そうだな」
彼はそのパイロットの動きを見ながら呟いた。一目でわかった。
「あいつだな」
「御存知なのですか」
「ああ。前に一度やり合ったことがある。動きでわかる」
「ではお願いできますか」
「どうやら俺以外にそれができそうなのもいないようだしな」
「すいません」
「いい。こればかりはどうしようもない」
そう言いながら前に出る。
「貴官等は他の奴を頼む。装備はいいな」
「はい」
「ではな。宜しく頼む」
「了解しました」
後藤はエウロパ軍の先頭にいるそのエインヘリャルの前に向かった。今目の前で一機のタイガーキャットが撃墜されていた。
「クソッ、脱出だ！」
そのパイロットも何とか脱出に成功していた。だがそれが適わなかった者もいる。連合軍もこの戦いで無傷では決してなかったのであった。

その先頭にいるエインヘリャルに乗るのはエヴァだった。彼女は仮面の様に表情のないまま戦いを続けていた。そして目の前に現われる敵を次々に屠っていた。
「お見事です」
後方にいるパイロットの一人がそう賞賛の言葉を述べてきた。
「おかげでこのエリアは有利に戦いを進めております」
「他のエリアは」
だが彼女はそれに心を喜ばせることなく相変わらず表情のない顔でこう尋ねてきた。
「他のエリアですか」
「そうよ。どうなっているのかしら」
「とりあえずは持ち堪えているそうです」
「そう」
不充分であったがそれに納得した。
「これも貴女の勇気ある行動のおかげです。皆怖気付いていたのが一気になおりました」
「怖れていられる状況ではないでしょう」
エヴァはやはり落ち着いた声でこう言った。
「この戦いがどんなものかわかっていたら」
「それはそうですが」
「本来なら持ち堪えていられるだけでは駄目なのだけれど」
「はい」
「仕方ないということかしら。数は」
「そればかりはどうも」
「けれど負けるやけにはいかない。わかっているわね」
「勿論です」
「なら貴方にもお願いするわ。健闘を祈るわ」
「有り難うございます」
「私も今までみたいに先頭に立てないみたいだから」
「何があったのですか」

「見て」
エヴァの前に一機のタイガーキャットが姿を現わした。彼女はその動きだけでそれに乗るのが只者ではないとわかった。同時に以前に戦ったパイロットであるということも。
「あのパイロットの相手をしなくてはならないから」
「一機です。大丈夫でしょう」
「本当にそう思えるかしら」
「といいますと」
「あっ、ならいいわ」
わからないのなら仕方がないと思った。エヴァは彼にこれ以上言うつもりはなかった。
「とりあえずあのタイガーキャットは私に任せて」
「お願いします」
「貴方達は他をお願いするわね」
「わかりました」
こうしてエヴァは後藤のタイガーキャットと正対した。互いに名乗りをあげることなく戦いに突入した。

## 第十四部第四章　エース達の戦いその十一

ミサイルは放たない。それが通用する相手ではないということはもうわかっていることであったからだ。

両者はまずビームを放った。だがそれも互いにかわされてしまった。

後藤は右に、エヴァは左に動いた。最低限の無駄のない動きであった。

「また腕をあげたようだな」

「僅かな間に。やるわね」

二人はそれを見てそれぞれほぼ同じことを思った。同じレベルにある者達だからこそわかった。

そしてそのまま交差する。交差した後で上に旋回する。二人の動きは全く同時であった。

また向かい合う。そして激突する。今度も決着はつかなかった。

「直線での戦いでは決着がつかないか」

後藤は二度正面からぶつかり合った後でこう悟った。だがそれならばそれで方法がある。

「ならば」

彼はタイガーキャットを大きく旋回させた。格闘戦に誘い込むつもりであったのだ。

タイガーキャットは可変翼である。その為大型であっても小回りに優れている。その点でもエインヘリャルに対して勝っていたのである。それを使おうとしたのだ。

「乗ってくれるか」

しかしそれでも相手がそれに乗るかどうかはわからなかった。タイガーキャットの機動性は向こうも承知している筈である。それであえて乗ってくる程相手は馬鹿でもないとも思っていた。だがそれでも誘い込むことにしたのだ。

「どうだ」
その賭けは当たった。乗ってきた。何とエインヘリャルがこちらに向かって来たのだ。
「よし」
後藤は表情を変えずに会心の言葉を口にした。これで勝ったとさえ思った。
だがこれはエヴァも承知のうえであった。彼女はそれを知っていてもあえて乗ってきたのである。
「エインヘリャルを甘く見ないことね」
彼女は旋回しながらこう呟いた。
「伊達に我が軍の艦載機を一手に担っているわけではないわよ」
このエインヘリャルは大きな特徴があった。それはパイロットの能力が大きく影響するということである。これはエインヘリャルが非常にバランスのとれた機体であり多くの目的に使用できるからである。すなわちパイロット次第だ。エヴァが乗れば彼女の技量だけ能力を引き出せる彼女もそれはわかっていたのだ。
後藤のタイガーキャットは大きく旋回した。エヴァのエインヘリャルもそれに入る。こうして両者は激しいドッグファイトに入ったのであった。
「どうなる」
両軍のパイロット達は戦闘を続けながらもそれに見入っていた。戦いは互角のまま続いていた。
激しい応酬もあったがそれでも両者は落ちることがない。そのまま戦いを続ける。それは何時までも続くかのようであった。
タイガーキャットは旋回を増す。エインヘリャルもそれに対抗する。しかしここで突如としてタイガーキャットの動きが一変した。
「！？」
何と反転してきたのだ。そしてエヴァのエインヘリャルに対して向かってきた。
「なっ！？」

反応が少しだが遅れた。これが後藤の狙いであった。
「よし！」
彼は勝利を確信した。最初からこうするつもりであったのだ。
敵の虚を衝く。戦いの基本である。彼は今それを行ったのだ。これは戦闘機同士の戦いにおいても同じことであった。
「これで最後だ！」
ビームを放つ。それはエヴァのエインヘリャルに吸い込まれていった。全ては終わった。かに見えた。
しかしここで信じられないことが起こった。何とエヴァの姿が消えたのである。
「ヌッ！？」
一瞬姿を見失った。何処に行ったのかわからなかった。しかしここで気付いた。
「下だ」
彼は見た。そこに彼女はいた。咄嗟の動きで今の攻撃をかわしたのであった。
「まさかあれをかわすとは」
「危ないところだったわね」
二人は言った。全く違う言葉であった。エヴァにとっては九死に一生を得た形となった。

## 第十四部第四章　エース達の戦いその十二

だがエヴァにこれ以上の戦いは無理であった。今の動きでエインヘリャルの動力に以上が出ていたのだ。如何にパイロットの能力が大きく関係するといっても無理のある動きを続ければ何処かが破損するのは自明の理であった。そして今それがきたのであった。

「くっ」

舌打ちするしかなかった。したところでどうにもならないのはわかっていたが。彼女は戦場から退くことにした。

そのまま戦いから離脱し去っていく。そのまま消えていった。この場は後藤の勝利という形になった。

「やりましたね」

部下達が早速彼に通信を入れてきた。

「お見事です」

「それはどうかな」

「あれっ、何かあるのですか？」

「ああ」

彼は部下達に対して頷いた。

「あの動きを見たか」

「ええ、まあ」

「それが何か」

「あれだけの動きが。できるか」

「我々にですか」

「そうだ。できるか」

「そう言われると」

彼等もここでハッタリを述べる程の度胸はなかった。自分の力量は自分が一番わかっていた。だから嘘は言うことはなかった。素直に口を開いた。

「ありませんね」

「あんな動き。思いもつきませんでした」
「それは俺も同じだ」
そしてそれは後藤も同じ考えであった。
「あそこで退かれていなければ危なかった」
「下に動いた時ですね」
「そうだ。あの時は勝ったと思ったが」
これは事実であった。反転した時は勝利を確信していた。
「だが。あんな動きをするとはな。俺が考えていた以上のパイロットだったということだ」
「しかしそれで何故あそこで退いたのでしょう」
「攻撃をしていればおそらく隊長は」
「おい」
「いや、いい」
それは遮らせようとはしなかった。部下の言葉を聞きたかったからだ。
「それは俺が最もわかっていることだからな」
「そうでしたか」
「ああ。続けてくれ」
「わかりました」
その部下はそれに応えて言葉を続けた。
「やられていたでしょう。腹を見せてしまっていたし」
「そうだな」
それもわかっていた。
「あのままですと。やはり敵機に何かあったということでしょうか」
「エンジンかビームのトラブルか」
「おそらくは」
これは当たっていた。その通りであった。
「それで退いたのでしょう」
「運がよかったかな、俺は」
「いえ、運ではありませんよ」

だがその部下はそれを否定した。
「何故だ」
「故障があるというのもそれだけその機体に問題があるということでしょう」
「そうか」
シビアだがその通りであった。やはり故障の多い機体というのはそれだけで問題なのである。
「運ではありません。あちらの問題です。我々にとってはこれもまたよいことです」
「そうか」
「そうです。ここは素直に喜んでおきましょう」
「そうさせてもらうか。だが」
そしてここで顔を引き締めた。そのうえで言った。
「また会いたいな。今度こそ倒してやる」
「はい」
こうして後藤とエヴァの二度目の戦いは終わった。ここでも完全に決着はつかなかった。結局この戦いにおいては二人の最後の戦いとなったのであった。

## 第十四部第四章　エース達の戦いその十三

二人の戦いは終わっても両軍の戦いは続いていた。連合軍は数を頼みにさらなる攻勢を仕掛けてきたのだ。無論そこには電子妨害も入っていた。こうして戦闘と電子、双方からの攻勢に入りエウロパ軍を圧倒しようとしてきたのである。

「よし、一気に押し潰せ！」

元々パイロット出身であるイポー＝コタバル大将は勇んで指示を下していた。彼はそのライトグリーンの目を輝かせていた。

「エウロパの貴族達をこのまま粉砕せよ！」

彼は乗艦であるティアマト級巨大戦艦マハティールの艦橋にいた。そこで命令を出していた。なおこの艦の名は彼の祖国であるマレーシアの偉人の名を冠したものである。二十世紀においてマレーシアの国際的地位と経済力を高めた首相の名である。彼はこの時代のマレーシアでは知らぬ者のいない英雄であったのだ。英雄とは決して武だけではない。文でも英雄は誕生するのである。ビスマルクがそうであったように。

「損害が出たならばすぐに退け！無理はするな！」

同時にこうした指示も出していた。彼もまた連合の軍人である。損害は好まない。それが如実に現われていた。

それに従うかのように連合軍の艦載機達は激しい攻撃を繰り出しながらもダメージを受ければすぐに退く。整備や修復、酷い場合にはストックの機体に乗り換える。こうして損害を極めて軽微に抑えていた。

だが対するエウロパ軍はそうはいかなかった。元々数では大きく遅れをとっていた。その為少し位のダメージで戦場を離れることはできなかった。ストックの機体も僅かであった。その為ダメージが蓄積され次々に撃墜されていった。数が減ればそれだけ残された機体に負担がかかる。それがまた損害に直結する。エウロパ軍は今少

数で戦う不利を味わっていた。また悪循環にも陥っていた。
「まずい」
それを見てレンブラントが呻いた。
「このままでは我が軍はここで総崩れに陥ってしまう」
「ですね」
それに対し戦場から戻って来たエヴァが頷く。彼等はやはりワレンシュタインの艦橋にいた。
「閣下、どうなされますか」
そしてシュヴァルツブルグに問う。見ればその顔には苦渋が浮かんでいた。
「止むを得まい」
彼はそれに対して一言こう言った。それだけで充分であった。
「わかりました」
幕僚達はそれに頷いた。こうしてエウロパ軍は第二防衛ラインを退いた。その後詰はローズが務めることになった。
「こんな厄介な撤退戦はそうないだろうな」
彼は目の前に展開する連合軍の艦載機の大軍を見て呟いた。それは銀河を埋め尽くさんばかりの数であった。
「どうするか、だな。我が軍の艦載機はかなりの損害を受けている。迂闊には出せない」
「対空攻撃を続けながら退くしかありませんか」
「大丈夫か」
連合軍の電子妨害について尋ねているのである。
「今のうちはまだ」
「今のうちか」
「はい」
迷うことは許されなかった。彼はそれを聞いてすぐに決断を下した。
「対空攻撃により弾幕を張れ」
「はい」

「そして全速で退く。主力が撤退したならばな」
「わかりました」
こうしてエウロパ軍は撤退にかかった。だが連合軍はそれを積極的に追撃しようとはしなかった。まるで無駄な損害を怖れているようだったが実は違っていた。
「次がある」
彼等は次の戦いを見据えていたのだ。第三防衛ラインでの戦いを。
エウロパ軍は連合軍から見れば驚くべき速さで第三防衛ラインにまで退いていた。既に星系にかなり入り込んでいる。そのうちの惑星の一つの側にそれが置かれていたのである。
「問題はあれだ」
彼等はそこにいる巨大な神を見据えていた。
「遂に姿を現わしたな」
「ああ」
「テューポーン」
かってギリシアの神々を恐慌状態に陥れた巨大な神。今それが彼等の前にその禍々しい姿を現わしたのであった。
連合軍の将兵達はそれを見ていた。その異様な姿は見る者に恐怖を感じさせずにはいられなかった。黒い巨大な球体がそこにあった。
「今度はあいつが相手だ」
「覚悟しておくか」
彼等は口々にこう言い合った。そして次の戦いに意を決するのであった。

# 第十四部第五章　神々の激突その一

## 神々の激突

かってギリシアにはゼウス達とは別の神々が存在していた。まず世界には混沌しかなかった。これは多くの世界の神話において見られることである。まず混沌があったのだ。

やがてそこに一人の女神が誕生した。大地を司る女神ガイアである。次に彼女は自分の力で神々を作り出していった。そしてその中の一人である天空を司る神ウラノスと結婚し世界を治めることとなった。

だがこのガイアという神は地母神であり多産の象徴であった。かっては結婚とはいっても多分にあやふやなものがあった。彼女は夫以外の神との間にも多くの子をもうけたのである。そして産まれたのが一つ目の巨人キュクロプスと五十の頭に百の腕を持つ巨人ヘカトンケイルである。

ウラノスはこの言うならば不義の子達を嫌った。嫌った理由は妻であり母である女の不義が理由ではなく彼等が醜いからであった。彼等はウラノスによって暗黒の地下世界タルタロスに追いやられた。

これに怒ったガイアはウラノスを排除することにした。そして子の一人であるクロノスをけしかけクーデターを起こさせた。こうしてウラノスは失脚しクロノスが神々の王となった。この神が今連合とエウロパの決戦が行われているクロノス星系の名のもととなっている神である。

だがこのクロノスもウラノスと同じであった。キュクロプス達をタルタロスに幽閉したのだ。そして自分の子に王座を奪われるという言葉を信じ子供達を次々と飲み込んでいった。これは十九世紀の画家ゴヤにも描かれている。

だが一人難を逃れたゼウスにより結局彼は敗北した。そしてかって彼が幽閉したヘカトンケイル達に監視されタルタロスに幽閉され

たのであった。キュクロプス達はこの時ゼウス達に味方し以後炎と鍛冶の神ヘパイストスの助手となった。
だがこの処置にガイアは快く思わなかった。やはり子供や孫達が幽閉されたからである。彼女はゼウスにも反感を持った。
そしてタルタロスとの間に子をもうけた。ギガンテス、そしてテューポーンである。この巨大な神はギリシア世界において最大の怪物でもあったのだ。
異様な姿に巨体、これは台風を象徴しているのだという。そう、彼はまさに台風であった。その力で天空と雷を司る神ゼウスに挑んだのであった。
この巨大な神が今連合軍の前に姿を現わした。彼等は敵の首都を前にして最大の敵を迎えていたのであった。
「でかいな」
連合軍の将兵達はそれを見てまずこう思った。
「ニーベルング要塞群と同じ位か」
「全体的な武装でいうとニーベルング以上らしいぞ」
彼等は口々にそう言い合った。
「何でも元々は首都防衛用に建造されたらしい」
「ほう」
「だがあまりにも巨大な為オリンポスにも置けなくてな。後方に留められていたそうだ。いざという時の切り札としてな」
「そして今その切り札を切ってきたのか」
「そういうことになる。エウロパも必死だということだ」
「後がない、か」
「ああ。だが最後の最後にあんなのが出るとはな」
「厄介なことだ」
流石に連合軍の将兵も戸惑っていた。彼等は第二ラインを占拠したところで停止しエウロパ軍と対峙していた。
「どうするかな」
「とりあえずは様子を見るか」

こうして彼等は停止していた。対するエウロパ軍はそれを見て少し胸を撫で下ろしていた。
「とりあえずは落ち着いたな」
「はい」
エヴァはシュヴァルツブルグの言葉に頷いた。
「ですが彼等はいずれ仕掛けてくるでしょう。その時は」
「わかっている。問題は何をしてくるか、だが」
「テューポーンは今ファビリチーニ司令が担当しておられますが」
「彼も必死だろうな」
シュヴァルツブルグはそれを聞いて呟いた。
「ニーベルングのことがあるからな」
「あれは致し方ないとも思いますが」
「だが彼はそうは思ってはいない」
彼はここでこう言った。
「誇りがあるからな」
「誇りですか」
「貴族は誇りで生きている」
今度はこう述べた。

## 第十四部第五章　神々の激突その二

「誇りでな。彼もまた貴族だ」
「それは承知していますが」
「卿もまた同じ。ではわかるのではないか」
「あっ」
　それを言われてハッとした。自分のことを言われたならばわかった。こうした点ではまだ彼女は若かった。軍人として、参謀として優秀であってもまだ世事のことについては知らないことが多かったのだ。
「わかったな」
「はい」
　エヴァが頷くのを見て微笑んだ。
「そういうことだ。だからこそ彼も必死なのだ」
「左様でしたか」
「だがな。だからといって勝てる程戦争は甘くはない」
「それはわかっています」
　これはよくわかっていることであった。頷くことができた。
「この第三ラインが破られたならば本当に後がない」
「はい」
「後は。第四ラインで玉砕覚悟で戦うしかない」
「ですね」
　第四ラインといっても名だけである。既に兵器は三つのラインに全て注ぎ込んでいる。エウロパの力ではこれが限度であった。だがそれでも彼等は諦めるわけにはいかなかったのである。
「事実上この第三ラインで凌ぐ」
「わかっています」
　エヴァはまた頷いた。
「その要となるのがテューポーンだ」

「我々の守り神ですね」
「そうだな。本来は神々の敵だったが」
そう思うと複雑な感情を抱いてしまう。
「今は我々の守りとなってくれている」
「ですね」
まさにその通りであった。オリンポスはこの巨大な神の手にかかっていた。
エウロパ軍の将兵達はテューポーンを期待の目で見ていた。まさに柱となっていた。
連合軍とエウロパ軍は第三ラインで対峙していた頃国防省では一つの話が持ち上がっていた。統合作戦本部長のバールが八条に対して意見を具申していたのである。
「あれをですか」
「はい」
バールは自分の意見を言った後で頷いた。
「今この太陽系は防衛という点ではいささか不安な点があります」
「そうでしょうか」
だが八条はそれには懐疑的であった。首都の管轄区も三百の艦隊が展開している。防衛の点では他の管轄区に決して劣ってはいないからである。
「確かに管轄区としてはいいです」
バールもそれに言及してきた。
「ですが首都の防衛は。やはり不安があります」
「ふむ」
そう言われても八条は懐疑的なままであった。日本では元々帝都である八幡星系の防衛はそれ程堅固なものではなかった。確かに首都としての防衛は備えてはいたが。太陽系はその八幡よりも防衛が堅固なのである。
「私は特にそうは思いませんが」
「それは閣下が日本におられたからでしょう」

やはり鋭かった。バールもそこを衝いてきた。
「日本は治安がいいですから」
「はい」
「あまりそうした心配がないのですよ。首都の防衛等は」
「それなりに備えはありましたがね、我が国も」
「それなりでは心もとありません」
バールは言い切った。
「やはりこれでもかという防衛が必要かと思います」
「雷王星や冥王星の防衛ラインだけではまだ足りないと」
雷王星とは二十一世紀に発見された太陽系の惑星の一つである。ゼウスから名がとられている。連合はこの星と冥王星において首都防衛のラインを施設しているのである。それはガンタース要塞群のそれに匹敵するものとさえ言われている。
「そうですね」
彼はまた言った。

## 第十四部第五章　神々の激突その三

「あれだけではまだ」
「左様ですか」
「やはり。さらなる防衛ラインが必要です」
「ですが我が軍にもこれ以上要塞を築く余裕はありませんよ」
「それもわかっています」
「ではどうやって。艦隊を増やすこともできません。やはり無理なのでは」
「実は私に考えがありまして」
「考え」
俗に足りぬ足りぬは工夫が足りぬという。今回もそうであるかも知れない。八条はバールの考えもまたそのようなものかと思った。
「エウロパの要塞を移動させてはどうでしょうか」
「エウロパの」
「はい。これは今後の講和の際の交渉において要求できるものですが」
彼は言葉を続けた。
「ニーベルング要塞群の十二の衛星と他に何か。これだけあればかなりの防衛ラインを設けることができますが」
「ふむ」
八条はそれを聞いて考える顔になった。
「ニーベルングをですか」
「後は。何かもう一つ巨大なものを」
「悪くはないですね」
これには八条も頷いた。
「ではそれでいきますか」
「少し首相や外相ともお話してみることにします」

彼はそう答えて即答は避けた。
「どうもかなり大きな話ですからね」
「はい」
「あともう一つ御聞きしたいことがあるのですが」
「何でしょうか」
「これは制服組からの統一された意見でしょうか」
「といいますと」
「いえ、実ははっきりさせたい部分がありまして」
八条はバールを見上げながら言う。
「これが制服組の統一された意見か、統合作戦本部長個人の案かで周囲の受け止め方がかなり変わりますので」
「今のところ私個人の案ですが」
彼はそれを聞いて素直にそう述べた。だがここで今のところ、と付け加えるのを忘れなかった。流石に元帥、そして制服組のトップである統合作戦本部長ともなればそういった軍事行政への配慮も心得ておかなければならなかった。そういった意味で軍人にも政治への知識や関心がなくてはならなかった。例えシビリアン＝コントロール下にあってもである。
「左様ですか」
八条はそれを聞いて頷いた。
「これからはわかりませんが」
「わかりました」
そしてそれを聞いて納得した。
「ではもう少し待ちましょう」
「はい」
「制服組からの話なら議会に話してもいいです」
議会は制服組の意見を聞き政府の軍事行政をチェックする。その機能を使ってみてはどうかとアドバイスしているのである。
「幸い軍事に明るい議員も多いですしね」
「ですね」

「そこが羨ましい」
八条は意外なところで苦笑いを浮かべた。
「日本ではあまり軍事に明るい議員はいなくて。どうもそうした柔軟性に欠けているところがあったのです」
「日本軍のことは聞いております」
バールも述べた。
「時の政治家の考えで。結構振り回されてきたそうですね」
「予算はともかくその配分がね。かなり偏っていまして」
苦笑したまま言う。
「それを兵器が高過ぎるのでは、と疑念を覚える議員が後を絶たなくて」
「結構なことではないですか？」
「その原因まで考えが及ばないのですよ。どうして兵器が高いのか、と」
「確か日本軍は全て国産で賄っていましたね」
「はい」
「そのせいではないでしょうか」
「しかも軍の規模が小さかったので」
日本軍は少数精鋭を採っていた。志願制で採用した将兵を鍛え抜き真に精強な軍を築くという考えである。建前ではそうであったが実は軍人へのなりてがいなかったのである。これは今だに連合が抱える悩みの一つであるが日本においてはそれがとりわけ顕著だったのだ。従って軍の規模は人口や国力に比して極めて小さなものだったのである。

## 第十四部第五章　神々の激突その四

「どうしても兵器の建造が少なくて。大量生産しないし」
「結果として兵器が高くなると」
「しかしここで問題があったのですよ」
八条は言った。
「何年もかけて建造するのではなく短期間に一気に建造していれば。安価で済んだのです」
「今の連合軍のように」
「はい。軍事のそうしたことを知らないと。周りが困ります」
「そしてそれを今の連合軍に適用させたのですね」
「おわかりですか」
「わかりますよ。けれどそれで我が軍は軍備を急激に整えることができました」
「どうも」
笑顔が明るいものに変わった。
「日本軍でのことが生きたということでしょうか」
「軍人としての経験はあまりなかったのですがね」
少し謙遜した。
「けれど政治家になってみると。そうしたことも見えてきました」
「そうだったのですか」
「軍事行政も他の行政と同じですからね」
「はい」
「また予算も。集中的に使わないと効果はありません」
「そういうことですね」
「これもやはり日本が平和だったせいでしょうかね」
「それに関しては先程申し上げた通りです」
「はい」
「日本は。あまりにも恵まれた立場にある国ですよ」

確かにその通りであった。中央政府の側に広大な領域を有しその所有する星系は豊かな土壌を持ち、資源も豊富である。そして人が住むのに最初から適している惑星も多い。これはこの時の中央政府の意向もあった。中央政府に忠実な日本に対して配慮したのである。なお中央政府に批判的であったり逆らう行動の多い米中露やＡＳＥＡＮ諸国は豊かであっても中央政府からかなり離れた場所にそれぞれ置かれていた。

「我がモンゴルは中央政府から結構離れていますし」

「そういえばそうでしたね」

「まあ遊牧に適した惑星が多いのはいいですが。我々はやはり馬がないと」

「生きていけませんか」

「モンゴル人は二本足ではありません」

それに対するバールの返答である。

「四本足なのです。おわかりでしょうか」

「馬が足ということですか」

「ええ。まあ今は船にも乗っておりますが。それでも馬がないと落ち着きません」

「本部長もかってはパオで暮らしておられたのでしたね」

「はい」

パオとはモンゴル古来のテント型の家である。彼等は草原にパオを設けそこで暮らす。羊が移動すればそれと共にパオをたたみ移動する。そして別の場所にパオを設ける。こうして生きているのだ。

「いいですよ、あの生活は」

懐かしむ顔でこう語った。

「草原で羊達と共に暮らす。常に馬に乗り」

「昔ながらの遊牧民の生活ですか」

「私はあれこそが最高の生活だと思います」

珍しくその声に熱みが入った。

「軍を退いた後はその生活に戻るつもりです」

「ほう」
「モンゴル人の生活にね」
「何か別世界の話のようですね」
八条はそれを聞いてもどうもピンとこなかった。
「そうでしょうか」
「遊牧民の生活というのは。不思議な気がします」
「日本では昔からそうした生活はありませんでしたからね」
「ええ、まあ」
「仕方無いかと。けれど過ごしてみるといいものですよ」
「そうなのですか」
「長官もどうでしょうか」
「悪くはないですけれどね」
だがここでまた言った。
「どうも私には。遠慮させてもらいます」
「そうですか」
「この生活が気に入っていますからね。仕事漬けなのがあれですが」
「ははは、確かに仕事ばかりですね」
「何はともあれその首都の防衛ですね」
「はい」
「大統領にもお話しておきましょう。それで宜しいですね」
「宜しくお願いします」
「しかしエウロパの要塞をですか」
「そうです」
「どういうふうになるのか。今の状態では何か想像がつきませんね」
「まあ今は仕方ないです」
バールは長官である八条に対してこう述べた。
「実は私も今プランを考えておりまして。想像図をスタッフに作らせているところです」
「左様ですか」
「もう暫くしたらそちらも届く予定ですので。お待ち下さい」

「それでは」
「はい」
軍は戦場以外でも動いていた。こうして彼等は次々と手を打っていたのである。
そして同時に戦争は政治の一手段である。政治ならば政治家の仕事となる。国防省以外にも関わるものなのであった。八条の言葉通りに。
今その仕事を担っている者達がいた。カバリエは自身の執務室でスタッフから話を聞いていた。

## 第十四部第五章　神々の激突その五

「マウリアからなのね」
「はい」
数人のスタッフが彼女の机の前に立っていた。カバリエはペンを持ったまま彼等の話を聞いていた。
「既にマウリアの密使がエウロパに入っているそうです」
スタッフの一人がこう述べた。
「そして今我々のところにも。講和の仲介を務めたいとのことです」
「誰かが動くとは思っていたけれど」
カバリエはそれを聞いて言った。
「マウリアだったのね。まあ彼等しか動けないわね」
「ですね」
スタッフ達はそれに頷いた。
「サハラ各国では。立場的に無理でしょう」
「国力でもね。そうなるとマウリアしかいない」
「はい」
「そして彼等は。何を考えて仲介役を買って出たのかしら」
「おそらくは自身の立場を強める為かと」
スタッフの一人が言った。
「我々とエウロパの戦争を終結させてその国際的な評価を高める」
「そしてその見返りを我等に言外で要求する。そんなところではないでしょうか」
「見返りね」
それを聞いたカバリエの目が光った。
「かなり高いものを要求されそうね」
「マウリアですから。最初はとんでもない位のものを要求するでしょう」
「そして徐々にそれを減らしていく。交渉上手と言うべきかしら」

「交渉というよりはハッタリですね」
別のスタッフがそれに答えた。
「彼等の中に染み付いたものです。ごく自然に出るものでしょう」
「それもかえって凄いわね」
カバリエはその言葉を聞いて苦笑した。
「一番凄いのはそれが本当のことだということかしら」
「はい」
「政治家になるまでは信じていなかったけれど。実際にそれに遭ってみると」
「驚きでしたか」
「そうね。これがマウリア人なのかと思ったわ」
「私も最初はそうでした」
長い間マウリアを担当してきたスタッフが言った。
「しかし慣れると。中々面白いものです」
「面白い」
「はい。あれだけ個性の強い国は連合にもそうはありませんし。知れば知る程興味を持つ国です」
「政治や外交においても」
「そうですね。彼等は我々と同じ共和制の議会制民主主義ですが。細部が全く違いまして」
「マハラジャや部族の長が普通にいて。そしてカースト制も残っているわよね」
「他にも。宗教的色彩も我々より強くて」
「ヒンズーね」
「それだけではありませんから。本当に多くの宗教が存在しておりまして」
「つまり様々なものがモザイクに入り組んでいるのね」
「ええ。一言で言いますと」
「もっとわかり易く言えばいいわね」
「どういったふうに」

「カレーみたいにって」
カバリエはここでマウリアをカレーに例えてきた。
「カレーですか」
「そうよ。丁度マウリアにルーツがある料理だし。どうかしら」
「言われてみれば」
スタッフ達はその言葉に頷いた。
「似ていますね」
「というかそのものかと」
「そう思うわよね」
確かに似ていた。カレーは様々なスパイスを入れ様々な野菜や肉を入れてじっくりと煮込む。そして作るものなのである。
確かにマウリアはカレーであった。だが唯のカレーではない。何千年もかけて作られた特別なカレーなのであった。
「癖はかなり強いけれどね」
「ですね」
「あの癖の強さで。結局連合にも参加しませんでしたし」
「けれどそれは連合にとっても彼等にとってもよかったのじゃないかしら」
「といいますと」
「カレーは癖が強いから。どうしても他の料理の味を消してしまうわ」
彼女はまたカレーに例えてきた。
「お味噌汁の後スープやシチューは飲めてもカレーの後ではどれも飲みづらいわね」
「そう言われると」
「カレーはもうそれだけで」
「そういうことよ。カレーはそのままで一つの世界になるわ」
そしてこう言った。
「だから我々の中には入らなかったのよ。マウリアはマウリアで。一つの世界になったのよ」

「一つの世界に」
「私達やエウロパが一つの世界であるようにね。そういうことなのよ」
「そうだったのですか」
「ううむ」
「だから私達には入らなかったけれど。充分やっていけている」
「マウリアはマウリアで」
「我々と全く同じ一つの世界だと」
「そういうことよ」
カバリエは頷いた。そして話を政治の世界に戻してきた。

## 第十四部第五章　神々の激突その六

「それで講和のことだけれど」
「はい」
「マウリア側からの使者はもう地球に来ているのかしら」
「ええ、もう」
「既に外務省にまで来られています」
彼等はそう報告した。
「それも次官クラスが」
「大物を送り込んで来たわね」
それを聞いたカバリエの目が光った。温厚な彼女だがそういった目もできるようであった。
「本気と見ていいわね」
「ですね」
「マウリア外相であるエルール女史は本国に留まっていますので。どうやらかなり隠密的なもののようです」
「あちらも考えているわね」
目の光をそのままにしたまま不敵に笑った。
「周囲に悟られないように動くなんて」
「そして同時にエウロパにも動いております」
「双方に働きかけて」
「はい。とりあえず建前としては戦争が早く終わり無益な血が流れるのを止めたいということでしょう」
「大義名分としてはいいわね」
「ですね」
「それに対する私の考えだけれど」
「どういったものでしょうか」
カバリエは持論を述べてきた。
「もう戦争は終わりにするべきだと思うわ。潮時ね」

「やはり」
これは殆どの者が思っていた。今連合軍とエウロパ軍はオリンポスの前で戦っている。最後の戦いであるのは誰の目にも明らかであった。
「だから。講和には丁度いい時だわ」
「はい」
「そういった意味でマウリアの今回の密使は非常にタイミングがいいわね」
「乗りますか」
「基本的にはね」
彼女は頷いた。
「けれど。ただ乗るだけじゃ駄目ね」
「といいますと」
「彼等が利益を要求しているのなら。我々も利益を要求してもいいと思うの」
不敵な笑みをたたえたまま言う。
「それはどうかしら」
「利益をですか」
「ギブアンドテイク。古い言葉ね」
英語である。だがこの言葉は銀河語でも残っていたのである。
「外交では基本ね」
「確かにそうですが」
「まあそれはおいおいあちらと話をして調整していきましょう」
彼女は言った。
「とりあえずは彼等と会いたいですね」
「わかりました」
「もう戦争を終わらせなければならない時期にきていますから」
「はい」
これは外務省としてもよくわかっていることであった。何時戦争を終わらせるべきか、彼等も考えていたのである。とりわけカバリ

エは。
「今日の夕食の時に御会いできればいいのですが」
「場所は」
「レストラン『ダージリン』でどうでしょうか」
彼女は言った。ここはインドネシア料理のレストランである。あえてインド料理の影響を受けているレストランを選んだのである。東南アジアの料理は今でもインド文化圏の影響が残っているのだ。
「ではそのように手配します」
「お願いね」
「はい」
スタッフ達は頷いた。そして彼等も動きはじめた。もう一つの戦いがここでひっそりとはじまったのであった。

## 第十四部第五章　神々の激突その七

こうして連合の中でも戦争の終結に向けて動きがある中クロノスでは第三防衛ラインへの攻撃がいよいよはじまろうとしていた。
連合軍はゆっくりと前進していた。そして前方に布陣するエウロパ軍を見据えていた。
「あれか」
連合軍の提督達はその第三ラインにある巨大な球体を見ていた。
「あれがテューポーン」
「はい」
それぞれの幕僚達が頷く。そこには黒い巨大な球体が浮かんでいた。
「外見は他の要塞とは変わらないな」
「ですね」
ゴルチャコワの言葉に彼の幕僚達が応えた。
「だがその力はかなりのものだというが」
「あれ一個でニーベルング要塞群に匹敵する力があるとのことです」
「ニーベルングのか」
それを聞いたゴルチャコワの顔が強張った。
「あの時は義勇軍とダミーの無人艦隊の力で攻略できたが」
「はい」
「今回はそうはいかないだろうな。おそらくかなりの出血を強いられる」
「覚悟しておかなければなりませんね」
「ああ」
テューポーンはその連合軍の将兵達と対峙するかのようにエウロパ軍の丁度中央に展開していた。そしてその禍々しい姿を彼等に誇示していた。エウロパ軍はそんなテューポーンを見て戦意を沸き上がらせていた。

「今度は陥落させぬ」
この要塞の防衛司令官となっていたファブリチーニは作戦指揮所から連合軍を見据えていた。そして強い声でこう言った。
「例え何があろうともな」
「このテューポーンは流石に無理でしょう」
「うむ」
彼は幕僚達の言葉に応えた。
「無数の光の蛇を浴びて銀河の藻屑となるだけです」
「攻撃準備はできているな」
「ハッ」
射撃を担当する幕僚の一人がそれに応えた。
「何時でも可能です」
「ならばよい」
彼はそれを聞いて満足そうに頷いた。だが表情は変わらない。
「戦いはまだ決まったわけではない」
また呟いた。
「ここで勝つ。そしてエウロパを守るのだ」
「はい」
幕僚達がまた頷いた。
「そしてニーベルングの雪辱を晴らしましょう」
「・・・・・・・・・・」
しかしファブリチーニはそれには応えなかった。沈黙してしまった。
「失礼」
それに気付いた言葉を発した幕僚が謝罪した。
「失言でありました」
「いや、いい」
だが意外なことにファブリチーニはそれを不問とした。
「事実であるからな。事実を言って悪いということはない」
「申し訳ありません」

「あの時は彼等の奇略に敗れた。そして難攻不落の筈のニーベルングは陥落した」
「はい」
「だが今度はそうはいかぬ。このテューポーンがある限りエウロパに敗北はない」
彼はこう言い切った。そして前を見据え続けていた。

## 第十四部第五章　神々の激突その八

敵は今にも向かって来ようとしている。しかし彼は怖れてはいなかった。それどころか復讐への青い炎を燃やしていたのであった。
エウロパ軍の戦力は当然ながらこのテューポーンだけではなかった。艦隊も健在であった。彼等は整った方陣をそれぞれ組み守りを固めていた。
その中には竜騎士団もいた。彼等は軍の先頭に立っていた。そして連合軍と対峙していた。
彼等は内心焦りを感じていた。今までの戦いでは碌に役に立っていないと感じていたからだ。それは団長達が最もよくわかっていた。彼等は今白金騎士団団長であり一同のまとめ役でもある戦艦オーステンデに集結していた。
見ればそれぞれの色の戦艦がオーステンデの周りに集結していた。これがそれぞれの団長達の乗艦であることは言うまでもない。彼等がそこにいる証でもあった。
そしてオーステンデの会議室に団長達がいた。彼等は皆気難しい顔をして円卓に座っていた。
「円卓か」
それを見たシュヴァイクがまず口を開いた。
「我等が座るのに相応しいと言えるな」
「うむ」
それにタファリアが頷いた。
「かって円卓にはアーサー王と円卓の騎士達が座っていた」
「ああ」
「その時からだ。円卓が騎士のテーブルとなったのは」
「今では連合の者達も使っているがな」
モンフェラートがふとこう言った。
「だが彼等の円卓は円卓であって円卓ではない」

それに対してアビラがこう述べた。
「円卓には心が宿っている」
彼は続けた。
「連合の円卓は形だけだろう」
「そうだな」
「そんなものは。何でもない」
「円卓は騎士が座ってこそはじめて円卓となる」
シュトレームが言った。
「今我等が座ったことでこの円卓は本当の円卓になったのだ」
「では我等がすべきことはわかっているな」
ダムは今まで黙って話を聞いていたがここでようやく口を開いた。
「卿等が騎士であるならば。我等が為すべきことは一つ」
「勝利をもたらすことだ」
プールがまず口を開いた。
「エウロパに勝利をな」
「できるか」
「騎士に不可能なことはない」
プールはまた言った。
「特に戦場においては。そうではないのか」
「他の同志達はどう思うか」
ダムはそれを受けて他の者達に問うてきた。皆プールと同じ顔をしていた。
「逆に我等が聞きたい」
コレッリが言った。
「卿もまた我等と同じなのであろうな」
「無論」
ダムは頷いた。
「そうでなくてどうしてここにいようか」
「それを聞いて安心した」
コレッリもまた頷いた。

「では勝利の為に命なぞいらぬな」
「うむ」
ダムだけではなかった。皆それに頷いた。

## 第十四部第五章　神々の激突その九

「ではこれが我等の今生の別れとなるやも知れぬ。だが我等は死してもヴァルハラで会う宿命」
アビラが言った。彼の神はオーディンであったのだ。
「惜しむことはないな」
「うむ」
「では戦いの前に飲むとしよう」
「既に呼んである」
ダムが言うと近侍の若い兵士達が会議室に入って来た。その手にはそれぞれワインとグラスが持たれている。
そのグラス達がそれぞれの前に置かれワインが注がれる。それが終わると一同はグラスを手にした。会議室の光をグラスが反射していた。そしてワインの赤い光を放っていた。
「では」
「ヴァルハラで会おうぞ」
「パラス＝アテネの御前で」
アテナを信じる者達はこう言った。信じる神は違ってはいても心は一つであった。
エウロパの勝利の為、その為に心は一つとなっていた。そうしてそれぞれ戦いに思いを馳せるのであった。
双方既に戦いへ向けて気構えはできていた。マクレーンもまたそれは同じであった。彼はブレスの艦橋においてその黒い巨体を誇示するテューポーンを見ていた。
「さて、どうするか」
彼はその要塞をどのようにして攻略するべきか考えていた。
「正攻法では効果がないか」
「陥落させることはできても我等の損害は甚大なものとなりましょう」

それに応えて劉が述べた。
「それは我が軍にとっては思わしいことではありません」
「ですな」
「しかし陥落させなくてはならないのも事実」
「それをどうするかですが」
「まずはあれの力を見てみましょう」
劉は落ち着いた声でこう述べた。
「既に駒は用意しております」
「駒」
「はい。これです」
そう言うと自分の手でモニターのスイッチを動かした。そこにエウロパ軍の艦艇が映し出された。
「今までの戦いで捕獲したエウロパ軍の艦艇です」
「それを使うのですか」
「無人で。既に自動操縦の用意はしております」
彼は静かに言った。
「これをテューポーンに向けましょう。それで様子を見ます」
「様子を」
「そうです。それで如何でしょうか」
「いいですな」
マクレーンはそれに異論を述べるでもなくこう言った。
「ではそれでいきましょう。問題は彼らに勘付かれるかどうかですか」
「勘付かれなければそれはそれでいいのです」
それでも劉は冷静なままであった。
「中には爆薬を多量に入れております。そのまま爆弾として使えます」
「その際はテューポーンへの直接攻撃になると」
「そういうことです。まあ艦隊を出して来るかも知れませんが」
「はい」

「それはこちらの艦隊で牽制しましょう。それでいい筈です」
「わかりました。それでは」
「はい」
こうして連合軍の戦術は決定した。まずは二千にも及ぶ艦隊が動きはじめた。いよいよエウロパ軍に向かおうとしてきた。
「遂に動いたか」
シュヴァルツブルグもローズも既にそれは読んでいた。すぐに防衛の指示を下す。

## 第十四部第五章　神々の激突その十

それに従いエウロパ軍は守りを固める。だが連合軍の動きは思ったよりも遅く、しかもテューポーンには攻撃を差し向けては来なかった。

「どういうことだ」

エウロパ軍の将兵はそれを見て妙に感じた。そのうえで次にはこう思った。

「また何か仕掛けてくるのか」

連合軍の今までの行動でこう考えたのである。それで何度も苦渋を舐めてきた経験からだ。彼等も経験から学んできているのであった。

「何をするつもりだ」

彼等は連合軍の動きを見据えた。そして彼等は動いてきた。連合軍から艦艇が出て来たのだ。

それはエウロパの艦艇であった。彼等はゆっくりとテューポーンに向かって来た。シュヴァルツブルグはそれを見てその太い眉を顰めさせた。

「まさかまた」

「可能性は高いと思われます」

エヴァは彼が考えていることを察してこう述べた。

「また無人の艦隊か」

「姑息な手を」

幕僚達は口々にこう言う。だがその艦隊はそれを嘲笑うかのように前に進んできた。それはテューポーンからも確認された。

「司令」

要塞にいる将官達がファブリチーニに顔を向けた。

「どうされますか」

「このまま放っておいたらどうなると思う」

ファブリチーニは彼等に答えなかった。それどころか逆にこう問うてきた。
「それは」
「あの艦隊に人が乗っていれば必ず攻撃を仕掛けてくる」
「はい」
「乗っていなければ何かしらの細工が施されている。ニーベルングの時のようにな」
「それでは」
「今は攻撃するしかない」
彼は言い切った。
「蛇を使うぞ」
「蛇をですか」
「そうだ。それであの艦隊を一掃する」
彼はこう指示を下した。
「すぐに攻撃準備に掛かれ」
「ハッ」
幕僚達がそれに頷く。その後で司令室は動きはじめた。
「エネルギー充填完了」
「各砲のチェックよし」
次々に報告が入る。ファブリチーニはそれを黙って聞いていた。
「一番から二十七番まで照準よし」
「五十一番から七十番までもよし」
「全ての砲の照準がセットされました」
「よし」
それを聞いてあらためて頷いた。それからその手をゆっくりと挙げる。それから叫んだ。
「撃て！」
「撃て！」
指示が復唱される。その次の瞬間に攻撃が放たれた。それと共に無数の光がテューポーンから放たれた。

それは光の速さで連合軍の艦隊に襲い掛かった。そしてそれを光の中に消し去っていく。そして一回の攻撃で連合軍が繰り出してきた無人艦隊をほぼ一掃してしまったのであった。
「あれがテューポーンの蛇か」
エウロパ軍の将兵達はその攻撃を見て唖然としていた。それをはじめて見た者が殆どである。無理もないことであった。
「凄いな」
「ああ」
次にはこう言い合った。それを見て元気付けられたのであった。
「勝てる」
こう思った。
「この戦い、勝てるぞ」
「最後に勝つのは俺達だ」
それによりエウロパ軍の士気はさらに高まった。今まで敗戦と連合軍の圧倒的な物量の前に萎縮しているところがあったがそれがなくなったのだ。そして敵に対して睨みを向けてきた。
「やってやる！」
「エウロパから追い出してやるぞ！」
「攻撃は成功だったようだな」
ファブリチーニはそんな将兵達を見てこう言った。要塞内でも士気が異様に高まっていたのだ。
「これでいい。すぐにまた蛇を使えるようにしておけ」
「はい」
司令部にいる将校の一人がそれに頷いた。それに従いエネルギーがまた充填されていた。ファブリチーニはそれを見ながら別の指示を下していた。

## 第十四部第五章　神々の激突その十一

「残存艦隊は要塞のミサイルや砲座で掃討しておけ」
「わかりました」
見れば僅かに残った艦隊がこちらに向かって来ていた。ファブリチーニはそれへの対処を命じたのである。
こうして残った僅かな無人艦隊も掃討された。だが連合軍の首脳部はそれを見ても全く取り乱してはいなかった。
「成程」
マクレーンはテューポーンの攻撃を見終わりまず頷いた。
「あれがテューポーンの攻撃ですか」
「神話ではテューポーンは肩から百匹の蛇を生やしております。そしてそれが頭となっております」
参謀の一人がそれに応えた。まさに異形の神である。
「あの光がまさにそれでしょう。だからこそその名が冠されたのです」
「台風の化身」
「そう、まさに銀河に吹き荒れる台風です」
ポンスも言った。
「中に入るのは。困難でしょうな」
「何、中から攻めることもありません」
だが劉がここでこう言った。
「参謀総長」
「敵の切り札はこれでわかりました。どうやらあの蛇はエウロパ軍のコロニーレーザーと同じものです」
「コロニーレーザーと」
「ええ。先程の攻撃の威力と射程を計算させていたのですが」
「はい」
見れば彼の側に一人の将校がいた。

「貴官は」
それはマクレーンも知っている者であった。自身の幕僚の一人である。
「パレオ＝ビスマーク少将」
「はい」
ビスマークはそれに応えて敬礼した。赤い肌に赤い髪を持っている。赤といっても肌と髪でその色が違っていた。肌は赤銅色であったが髪は人参の色に近かった。ナウル出身の将官である。
「貴官が計算していたのか」
「はい。その結果あの蛇の正体がわかりました」
「そうか」
「参謀総長も述べられましたがあれはエウロパ軍のコロニーレーザーと同じものです」
「そうか」
「それを集中的に配備させております。それであの威力を出しているのです」
「それが蛇の正体か」
「はい。それはおそらく百門では足りないでしょう」
「伝説より頭が多くなっているか」
「全ての方角に同時攻撃が可能でしょう。見れば砲門が全ての方角にあります」
「ハリネズミみたいだな」
マクレーンはそれを聞いて呟いた。
「そう、まさにハリネズミです」
ビスマークはそれに答えた。
「ですが普通のハリネズミとはまた違います」
「それは何かね」
「ハリネズミの腹には針はありませんがあれには何処にも針があります」
「そして目もか」

「そうです。つまりハリネズミを捕まえるようにはいきません」
「ではどうするか」
マクレーンはそこまで聞いてあらためて彼に問うてきた。
「針も目も何処にでも利かせているとなると。方法がないのではないか」
「ないと言えばここにいる資格はありませんね」
ビスマークはこう言って笑った。
「少なくとも幕僚としては終わりでしょう」
「では何か考えがあるのかね」
「先程も申し上げましたが」
彼はここで言った。

## 第十四部第五章　神々の激突その十二

「テューポーンに装備されている砲はエウロパ軍のコロニーレーザーと全く同じものです」
「うむ」
「そこに答えがあります。我が軍のティアマト級巨大戦艦の巨砲は彼等のレーザーよりも射程は長いです」
「アウトレンジ攻撃か」
「はい。それで攻略が可能だと思いますが。如何でしょうか」
「だがあれだけの巨大さだ」
マクレーンはここでテューポーンの巨大さも指摘してきた。
「例えティアマト級でも十隻や二十隻では何の効果もないと思うが」
「では千隻ではどうでしょうか」
「千隻」
「何と」
それを聞いた他の幕僚達がざわめいた。
「千隻のティアマト級巨大戦艦による巨砲の射撃ならば。効果があると思われますが」
「千隻でか」
「はい。確かに距離の関係で威力は落ちると思いますが。それでもダメージを与えていくことはできます」
「ふむ」
「そして別の千隻で敵艦隊に睨みをきかす。私はそれでいいと思うのですが」
「そうだな」
マクレーンの口が開かれた。
「確かにそれは効果が期待できる」
「はい」
「そして損害も出さずに済むだろう。損害もな」

「それが最も重要だと思われますが」
劉もここで口を開いた。ビスマークを援護する形になった。
「どう思われるでしょうか」
「そうですな」
実はマクレーンの考えはおおよそ固まっている。だがそれでもあえて彼はここで間を置いてきた。
「問題は巨砲でテューポーンの装甲を破れるかどうかですが」
「それは御心配なく」
ビスマークはそれについても述べた。
「ティアマト級の巨砲を斉射していけば。それが次第にボディブローとなってきます」
「ふむ」
「何度も攻撃を加えていくべきです。そしてダメージを蓄積していきましょう」
「そうして攻略するのか」
「はい、どうでしょうか」
「よし」
そこまで聞いて今まで保留していた結論を出すことにした。
「ビスマーク少将」
「はい」
マクレーンは彼に顔を向けてきた。ビスマークの方もそれに応える。
「貴官の案でいこう。すぐにティアマト級巨大戦艦を集めよ」
「ハッ」
他の幕僚達がそれに返礼する。
「そしてすぐに攻撃に移る。よいな」
「わかりました。それでは」
「うむ」
こうして連合軍は巨大戦艦による一斉攻撃を仕掛けることになった。彼等はすぐに行動に移った。巨大戦艦達がその巨体を銀河に誇

示しつつ動く。
「奴等、動いたか」
それはエウロパ軍からも確認された。彼等は巨艦が一箇所に集まっていくのを見ていた。
「何をするつもりだ」
「テューポーンの方に集まっているな」
彼等はそれを見て話していた。
「あれで攻撃をするつもりか」
「どうやってだ」
「そこまではわからないが」
この時点では彼等はまだ連合軍の考えを掴めないでいた。
「だが。何かをしてくるのは事実だ」
「だな」
「だがテューポーンは陥ちはせんさ」
しかし彼等はテューポーンに万全の信頼を置いていた。こう言って不安を掻き消した。
「来るなら来るがいいさ。どうせ無駄な努力だ」
「そうだな」
それは会話にもよく現われていた。今度こそは大丈夫だと思っていた。それだけテューポーンの攻撃が頼もしかったのもあった。

## 第十四部第五章　神々の激突その十三

彼等はティアマト級巨大戦艦が集結してもまだ自信に満ちていた。だが要塞の指揮を執るファブリチーニはそうではなかった。彼は集結する巨艦を見て一抹の不安を感じていた。
「奴等、何をする気だ」
彼はモニターに映る巨艦達を見て呟いた。
「どうやら攻撃を仕掛けてくるものと思われますが」
幕僚の一人がそれに応えた。
「ですが大丈夫です。このテューポーンは陥落しません」
「あの無人艦隊も通じませんでしたからね」
「無人艦隊か」
先程蛇で一掃したあの艦隊のことを言っているのである。一掃した後で残骸を調べると今回も無人艦隊であったことがわかったのである。
「彼等も遂に策が尽きたようで」
「もう心配は要らないかと思います」
「本当にそう思うか」
だがファブリチーニはそんな部下達に対して懐疑的な言葉を述べた。
「といいますと」
「無人艦隊は確かに奇略だ。だが連合軍は基本的に正攻法を執っている」
「はい」
「それが彼等にとって最も効果的な戦い方だと知っているからだ。そして今回もおそらくそうだ」
「ではあの巨大戦艦の集結も」
「その正攻法で来るつもりだ。何をしてくるか」
「そこまでは」

「まずは攻撃を控えよ」
ファブリチーニはここで指示を下した。
「攻撃の分のエネルギーを防衛に回せ。バリアーを強化せよ」
「バリアーを」
「そうだ。まずは守りを固める」
彼は言った。
「いいな。とりあえずは様子を見るぞ」
「わかりました。それでは」
「うむ」
こうしてテューポーンはバリアーを強化して様子を見ることにした。連合軍はそれに構うことなく攻撃準備に取り掛かっていた。
「どうやら守りを固めてきているようですが」
「それはそれで結構です」
マクレーンは低い声で劉にこう述べた。
「こちらも攻撃に専念できますから」
「では」
「はい」
マクレーンは頷いた。
「ティアマト級全艦攻撃用意」
彼は指示を下した。
「巨砲で一箇所を集中攻撃する。いいな」
「了解」
「わかりました」
各艦の艦長達がそれに頷く。艦の指揮は彼等が執っていた。
「では攻撃に移る」
マクレーンの指示は続いた。彼等はそれに従いティアマト級の三門の巨砲にエネルギーを充填している。同時に照準も合わせる。マクレーンの指示通り一箇所にだ。
「全艦エネルギー充填完了」
「照準セット完了」

「よし」
それを聞いて頷いた。そしてその右手をゆっくりと挙げていく。
次にそれが頂点に達すると言った。
「撃て！」
「撃て！」
指示が復唱される。同時に右手が振り下ろされた。
光の帯が一斉に放たれた。そしてそれがテューポーンを直撃する。
だがバリアーがそれを何とか防いだ。
それでも衝撃は凄まじかった。要塞全体が揺れた。
「グッ」
司令室に立つファブリチーニも揺れた。だが彼は何とか立っていた。
「巨大戦艦での一斉射撃か」
「これで来るとは」
「どうやら彼等はこの要塞を本気で攻略するつもりのようだな」
衝撃が収まった後で言った。
「バリアーへエネルギーをさらに向けろ」
「はい」
「そうでないと。防げはしない」
「蛇の方はどうしますか」
「今はいい」
彼はそれに対してはこう言った。
「それよりも守りだ、いいな」
「ハッ」
彼等は敬礼してそれに頷いた。彼等もまた攻撃に備えた。
一斉射撃を終えた連合軍はさらなる攻撃に移ろうとしていた。マクレーンは各艦にさらなる巨砲の一斉射撃を命じていたのであった。
「狙いはいいな」
「ハッ」
各艦の艦長達がそれに頷く。

「既に。準備は整っています」
「よし」
彼はそれに頷いた。そしてまた腕を掲げる。
「撃て！」
また攻撃が放たれる。そして要塞を再び激しく撃ち据えたのであった。
「グワッ！」
テューポーンはまたもや大きく揺れた。だがそれでも何とかバリアーは撃ち破られずにもっていた。ファブリチーニも立っていた。彼も倒れるわけにはいかなかったのだ。

## 第十四部第五章　神々の激突その十四

「まだだ」
彼は言った。
「まだ倒れるわけにはいかん」
要塞にも、そして司令官としても意地があったのだ。
「今は耐えよ。何として」
まずは精神論を口にした。しかし彼は精神論だけの男ではなかった。
「必要なもの以外の全てのエネルギーをバリアーに向けよ」
さらなる防御を命じた。
「敵の攻撃は熾烈だ。何としても防がなければならん」
「しかしバリアーにばかりエネルギーを向けても」
「攻撃に向ける力はあるか」
彼は問うてきた幕僚の一人に逆に問いなおした。
「それは」
「ないな。それはわかるだろう」
「はい」
幕僚もそれに頷くしかなかった。確かにこれだけの攻撃を受けては攻撃を仕掛ける余裕はとてもなかった。
「敵の攻撃にも限度がある。それまで待て」
「はい」
幕僚達はそれに頷くしかなかった。
「よいな。耐えよ」
「わかりました」
辛いがここはこうするしかなかった。今は耐え忍んだ。だが連合軍の攻撃はさらに続いた。
この事態を打開すべくエウロパ軍の艦艇はテューポーンに向かおうとした。しかしそれは連合軍の圧倒的な数の艦艇に牽制され思う

ようにはいかなかった。
「千隻の巨大戦艦を向けてもまだあれだけの戦力があるか」
「彼等は二千隻の巨大戦艦を持っている」
歯噛みするエルハルトに対してラールベルクが言った。
「千隻向けてもまだ千隻残っている」
「クッ」
「そして他の艦艇も。だからこそ我が軍を牽制できるのだ」
「あのような巨大戦艦なぞ」
オーティスが激昂してきた。
「ものの数ではない。突撃しまとめて撃破してくれるわ」
「そう思っているのならやればいい」
モンフェラートは同僚のその言葉を突き放した。
「一隻で一個艦隊に匹敵する戦力を持っている巨艦をな。一度に撃破できるのならばな」
「ならばわしの艦隊だけでも」
「よさぬか」
そんな彼等をダムが叱責した。
「今は喧嘩している場合ではない。仲間内で見苦しい」
「グッ」
「済まぬ」
オーティスとモンフェラートは彼にそう言われて大人しくなった。
「だがこのままではテューポーンが危ないのは事実だ」
「では動くか」
「そうしたいのはやまやまだが」
それでも動けなかった。だからこそ辛かったのだ。
「今は無理だ」
「いや、そうともばかりは言えない」
しかしここでタファリアが出て来た。
「何か策があるのか」
「側面だ」

彼は言った。
「敵の側面に回り込んでこちらが逆に牽制を仕掛ける。それでどうだ」
「側面攻撃か」
「それでいこうと思う。これならば敵もこちらに戦力を向ける。そしてテューポーンの攻撃も鈍るだろう」
「その間に全軍で態勢を整える」
「そうだ。これでどうだ」
「よし」
ダムは頷いた。
「それでいくか。全騎士団に告ぐ」
彼は言った。
「これより敵の側面に向かう。後はそれぞれの武勲をあげよ」
「うむ」
各団長達はそれを聞いて頷いた。
「我等の動きがテューポーン、ひいては軍全体を救うことになる。卿等の奮闘を期待する」
こうして騎士団は動いた。彼等は軍の左方に布陣しており連合軍の右に向かうことになった。連合軍の右方はコレッリがいた。
「エウロパ軍が動きました」
すぐに彼のもとに報告が入った。
「こちらに来ます。どうやら側面から攻撃を仕掛けるつもりのようです」
「甘いな」
彼はそれを聞いて一言こう呟いた。
「今動いたところで。どうにもなるものではない」
「ですが敵はあの竜騎士団ですが」
「例え竜騎士団であってもだ」
それでも彼は臆するところはなかった。
「心配はない。そのそも敵の数は」

「七十個艦隊程です」
「その程度だ。では守りを固めよ」
「攻められないのですか」
コレッリは攻撃的な戦法を好むことで知られている。だが今回の彼はそれを採ろうとはしなかった。部下達にはそれが不自然に思えたのだ。

## 第十四部第五章　神々の激突その十五

これがポートならば当然だと思えただろう。しかし今の彼の指示は連合軍きっての猛将のそれとは思えないものであったのだ。
「今はそれでいい」
彼は言った。そして布陣を命じた。
「方陣を敷け」
「はい」
やはり防衛用の陣であった。連合軍の右翼はすぐに陣を整えた。
「数では我が軍が圧倒的に上だ。それに今は攻撃に出る時ではない」
「だから動かれないのですか」
「その通りだ」
彼は答えた。
「攻撃に出るには条件が必要だ」
「条件」
「下手に攻めると損害が出る。そして失敗してしまう」
「はあ」
「それを見極めることが大事だ。ましてや今彼等は全軍死兵となっている」
「はい」
「その様な者達に攻撃を仕掛けるのはよくない。今は守りを固めなければならない」
「そうなのですか」
「私のやり方を見ておけ」
そして自信に満ちた声で言った。
「徐々にわかっていく。何時攻めるべきか守るべきかな」
「ではそれを」
「よく見ておくことだな」
連合軍は守りを固めていた。その数だけでも騎士団を圧倒してい

た。それにより守りを固めたのだ。急襲して一気に突き崩そうとしたがそれがかなわぬことだと認識しざるを得なかった。
「クッ、もう整えているか」
ダムはそれを見て歯噛みした。
「早い。これも電子能力の差か」
「既に我等の動きは察知しているというわけだな」
プロエシュチが言った。
「おそらくな」
「で、どうする」
それでもプロエシュチはダムに問うた。
「このまま引き下がるのか。それとも」
「テューポーンが危機に陥っているのは事実だ」
ダムの言葉は何故かテューポーンに向けられていた。
「しかし」
「しかし。どうした」
「今あの敵陣に突撃を敢行したならば。我等に待っているのは全滅だけだ」
「戦場で死ぬのは名誉ではないのか」
「実りある死ならばな」
ダムは昂然とした様子で言った。
「だが今突撃したならば。無駄死にだ」
「無駄死にか」
「そうだ。無駄に死ぬことはない。今は退くぞ」
「わかった。それでは退こう」
「うむ」
他の同志達もそれに納得した。そして彼等は撤退したのであった。
騎士団はエウロパ軍の左翼に戻った。それを見て連合軍のコレッリが言った。
「どうやら騎士といっても無駄に命を粗末にするものではないようだな」

「どうやらそのようで」
それに幕僚の一人が応えた。
「あながち彼等も無分別というわけではないようですな」
「うむ」
彼はそれに頷いた。
「騎士といえば。プライドばかり高くて無謀なイメージがあったのですが」
「それも我等の偏見であったようだ」
「はい。それはあくまで我等の偏見であったようです」
「命をかける時を心得ている、か。面白い」
そう述べてその端整な顔に笑みを浮かべた。
「では我等は陣を元に戻そう」
「はい」
部下はそれに頷いた。
「そして中央の攻撃のフォローに回る。よいな」
「ハッ」
「あの要塞を陥落できるかどうかにこの戦いがかかっている」
そしてモニターに映る巨大な黒い球体を見据えた。
「彼等の居神が勝つか、我等の神々が勝つか」
「それがこの戦いの最後も決定しますな」
その通りであった。だからこそ連合軍も攻撃を止めなかった。
巨砲による攻撃はさらに続いていた。それは絶え間なくテューポーンを撃ち据えていたのであった。
攻撃を受ける度にテューポーンは揺れる。だがその守りは堅くバリアーはまだ巨砲の光の帯を跳ね返し続けていた。

## 第十四部第五章　神々の激突その十六

その中にはファブリチーニもいた。彼は揺れる要塞の司令室の中で傲然と腕を組んだまま立っていた。
「この程度の攻撃でテューポーンは陥ちん」
彼には自信があった。
「幾ら攻撃を続けようとも無駄なことだ。それを彼等に教えてやれ」
「ですね」
それに部下達も頷く。彼等は連合軍の攻撃に耐え続けていた。
「所詮無駄だ。そしてここで耐えれば」
「我等に勝利が」
「そうだ」
彼は言った。
「諦めたその時だ。一気に攻撃に転じればよい」
「はい」
「待つのだ、今は」
彼等はモニターに映る巨艦達を見ていた。
「そしてシュヴァルツブルグ閣下にお伝えしてくれ」
「何と」
「今の言葉をだ」
彼は伝令将校に顔を向けていた。
「彼等が退いたその時こそ。反撃の好機だと」
「反撃の好機」
「そうだ、覚えたな。ではすぐにこの言葉を伝えるがいい」
「ハッ」
伝令将校はそれを聞いた後敬礼した。
「それではすぐに」
「うむ。時が来ようとしている」
彼はその時を待っていた。

「ニーベルングからの屈辱を晴らす時が。今から我等の勝利がはじまる」
「そして連合の敗北が」
「戦いはここで大きく変わるのだ」
彼は言葉を続けた。
「我等が耐えることにより。さあ来い」
そしてまた言う。
「勝利の女神ニケよ。今こそ貴女が我々の前に姿を現わす時だ」
彼は勝利を確信していた。待っていたのだ。だが連合軍はそんな彼の言葉を全否定するかのように熾烈な攻撃を加え続けていた。
「流石にしぶといな」
「はい」
劉はマクレーンの言葉に頷いた。
「これだけの巨砲の攻撃を受けてまだ健在だとは」
「何、これも想定の範囲内です」
それにビスマークが応えた。
「やはり距離が大きく開いていますから。威力が弱まっていることもありますし」
「それも計算していたのか」
「ええ。ですが要塞内の振動はかなりのものでしょう」
「だがそれで要塞は陥落しないぞ」
「それはわかっています」
これは彼もわかっていた。
「ですが。内部はどうでしょうか」
「内部が」
「はい。振動を与え続けると。ダメージが蓄積されますね」
「うむ」
「それが頂点に達した時。カタストロフィが起こります」
「カタストロフィか」
「ええ。機器も人も」

こう言ってその赤い顔に屈託のない笑みを浮かべさせた。それは軍人の笑みとは思われぬ程のものであった。
「耐えられなくなっていくでしょう。例えば脳ですが」
「脳」
「ボクシング等で振動を受け続けるとパンチドランカーになります。骨法でも掌底で攻撃を与えるのは脳等内蔵にダメージを浸透させる為です」
「それは聞いたことがあるが」
「それの応用です。テューポーンを外から壊すことはありません」
そして言った。
「内部にダメージを浸透させて。それで破壊していけばよいのです」
「成程な」
マクレーンも劉もそれを聞いて頷いた。
「まるでドラム缶の中に入った敵をバットで外から叩いてダメージを与えるようなものだな」
「原理は同じです」
彼はそれを認めた。
「ただ。常に叩けるという状況が必要ですが。また止めても効果はありません」
「ないか」
「また気付かれると。おそらく彼等は内部の人間を交代させるでしょう。そしてまだ耐えようとします」
「要は気付かれないようにか」
「彼等には我々が愚かだと思わせなければなりません」
つまり演技をせよというのである。
「あくまで攻撃を続ける。それも執拗に」
「わかった。それではこれまで通り巨砲による攻撃を続行するのだな」
「はい」
彼は頷いた。

「ではそれを続けよう。さて、どうなるかな」
マクレーンは要塞を見据えて笑った。
「如何に堅固な鎧を着ていようともその中までがそうだとは限らない」
また巨砲による斉射が加えられた。そして要塞が大きく揺れる。
「どこまで耐えられるか。見せてもらおうか」
こうして攻撃は続けられた。連合軍の攻撃はその真意を隠して続けられたのであった。
攻撃は数日続いた。テューポーンのバリアーは破られずそのまま巨体を誇示していた。
内部にいる将兵達にも損害はなかった。だが彼等に疲れが見えはじめていた。

## 第十四部第五章　神々の激突その十七

「いい加減嫌になってくるな」
砲座に位置する兵士の一人がこう言った。
「ここまでしつこいと。揺れてばかりで寝ることすらできないぜ」
「確かにな」
それに同僚の兵士が頷く。
「まるでやたら揺れる船に何日も乗ってる気分だぜ。いい加減船酔いしてくらあ」
「おいおい、ここは宇宙だぜ」
兵士は同僚に対してこう言って笑った。
「船酔いなんてするかよ。それは川や海でのことだろ」
「いや、案外そうでもない」
彼はそう返して顔を顰めさせた。
「気分が悪くなっている奴もいる」
「そうなのか」
「あまり揺れるんでな。酔ってきてな」
「それはまずいな」
「それに。参ってこないか、ここまでしつこく攻撃されると」
「ああ、それはある」
彼はそれに頷いた。
「何かな、いい加減うんざりしてきたぜ」
「何時まで続けるつもりかな」
「さてな。諦めるまでだろ」
「その時まで待つか」
「仕方ないな」
そんなことをぼやきながら彼等は揺れる要塞の中にいたがやはり耐えていた。
これがさらに数日続いた。連合軍はその間補給を受けながら絶え

間ない攻撃を行っていた。そしてその間テューポーンは揺れ続けていた。
これが次第に影響が出てきていた。将兵に疲労が見られてきたのだ。
「疲労だけではありません」
軍医長が言った。
「どういうことだ」
「長い間振動を受け続けたことによって将兵にダメージが蓄積されています」
「ダメージが」
「はい」
軍医長はファブリチーニの言葉に頷いた。
「激しい振動の中に長い間置かれるとそれだけで身体全体がダメージを受けていきます」
「ふむ」
「ボクシングで言うパンチドランカーと同じです。あれは頭部に振動を受けることにより脳が破損されることによる症状ですね」
「ボクシングのことはよく知らないが」
彼はそう述べたうえで聞いていた。
「ケーキを箱の上から揺らすと崩れる。それと同じか」
「原理は同じですね」
軍医長もそれに頷いた。
「つまり我々はその箱の中のケーキと同じなのです」
「崩れようとしているということか」
「そういうことになります。もっとも我々は生クリームやチョコレートでできているわけではないので身体が崩れたりはしないのですが」
「ダメージは確実に受けるということだな」
「そういうことです。そしてそれは人間だけではありません」
「というと」

「要塞内部の機器もです。ここまで衝撃を受け続けていては。大丈夫でしょうか」
「それは心配ないのではないか」
ファブリチーニはそれは杞憂だと思った。
「軍事用の機器、そして兵器だ。振動では」
「ですがこうまで攻撃を受け続けていると。私は機械のことは専門外ですが」
「ううむ」
それを聞いて考えざるを得なかった。言われてみればそうである。
「一度チェックされてみてはどうでしょうか」
「チェックか」
「それもまた必要であるかと思います」
「そうだな」
そしてそれに頷いた。
「ではそうするとしよう。すぐに全機器及び兵器のチェックを行う」
「ハッ」
それに幕僚達が頷いた。
「ではすぐに取り掛かれ。よいな」
「蛇もチェックするのでしょうか。そしてバリアーも」
「無論だ」
彼はそれにも頷いた。
「すぐに取り掛かれ。何かあっては大変なことになる」
「わかりました」
「そしてダメージを受けた将兵は後方に下がらせよ」
「下がらせるのですか」
「彼等は負傷兵だ。負傷兵を前線に立たせるわけにはいかん」
彼はこう言った。
「いいな。そしてその分の補充は・・・・・・。私からシュヴァルツブルグ閣下に打診しておく」
「果たしているでしょうか」

「わからぬ。だが負傷兵をそのまま前線に置くよりはいい」
彼の判断であった。負傷兵を置くということはそこに穴を作るということである。戦場に穴を作るとそこから付け込まれる。彼はそれを避けたかったのである。

## 第十四部第五章　神々の激突その十八

「よいな」
「ハッ」
幕僚達はまた頷いた。
「それではそのように致します」
「それにより人員がどれだけ減るかも把握しておけ」
「はい」
「すぐに態勢を調え直す。よいな」
「わかりました」
こうしてテューポーン内部であらたな動きがあった。そしてこれに従い各機器及び兵器のチェック及びダメージを受けている将兵の撤退が行なわれた。その結果深刻なことがわかった。
「将兵の二割近くがダメージを受けていました」
司令室に幕僚達の報告が響く。
「そして各機器及び兵器も。かなり損傷しておりました」
「そうか」
それを聞くファブリチーニの顔が暗いものとなった。
「特にバリアー、そして蛇のダメージが。早期の修復は不可能な状況です」
「何っ」
特にそれを聞いて顔色が険しくなった。
「それはまことか」
「残念ながら」
報告をする幕僚の顔も険しいものであった。
「今のままではバリアーの出力は一割近く減少するでしょう。蛇も何パーセントかは発射不可能になる模様です」
「蛇はともかくバリアーはまずいぞ」
ファブリチーニは言った。

「応急処置をせよ。今でようやく耐えている状況だ」
「それはわかっています」
その幕僚も言った。
「今応急処置に取り掛かっています。ですが」
「駄目なのか」
「作業は思うように進んではいません」
彼の声はさらに暗くなった。
「バリアーの出力は落ちようとしております。このままでは」
「しまった」
そこまで聞いて暗い舌打ちをした。
「ダメージの蓄積を視野に入れていなかった。私のミスだ」
「閣下、今はそれを考える状況ではないかと」
だがこれは幕僚達に諌められた。
「今はどうするか、です。それは後で回想録にでも書かれれば」
「わかった」
それを言われて少し気分を落ち着かせた。それからまた言った。
「では応急処置を続けよ。とりあえずは今の出力を維持せよ」
「わかりました」
「手空きの者、作業に支障のない者も協力しろ。何としても今の状況を維持するのだ。よいな」
「ハッ」
こうしてテューポーンは守りを維持することになった。だが言うは易しであるが行うは難し、であった。ましてやダメージを受けた将兵達が撤退し人員は減っていた。これにより作業はさらに困難なものとなっていたのである。
ファブリチーニ、残った将兵達の苦労も空しくテューポーンのバリアーの出力は落ちようとしていた。そして連合軍の攻撃は今まで通り続いていた。ダメージはさらに蓄積されていた。

## 第十四部第五章　神々の激突その十九

「！？」
これに連合軍の将兵も気付こうとしていた。
「何か敵の守りが弱くなっていないか」
艦長の一人がまずこう言った。
「守りがですか」
「そうだ。バリアーの力が弱まってきている」
彼は自分の艦の砲術長の言葉にこう応えた。
「バリアーが」
「詳しいことはわからないが。これは狙い目だな」
そう言ってニヤリと笑った。
「このまま巨砲による攻撃を続ける」
「はい」
「そしてバリアーがさらに弱まった時だ。楽しみだな」
「わかりました。では引き続き」
「うむ。頼むぞ」
「了解」
連合軍の攻撃は艦単位でも続いていた。上層部もテューポーンのバリアーが弱まってきていることを確認していた。
「いよいよですね」
それを見てビスマークが言った。
「内部のダメージで。鎧にも影響が出てきています」
「要するに棍棒で殴りつけているのと同じか」
ここでマクレーンがこう言った。
「鎧はダメージをそれ程受けなくとも中の身体はダメージを受ける」
「はい」
「それで攻撃をしているというわけか。思ったより効果があるな」
「かって鎖帷子がありました」

ビスマークはここで中世の鎧を出してきた。
「十字軍の騎士達がよく着ていましたが。これは剣を上手く防ぐかわりに弱点がありまして」
「薄い為にダメージの浸透は防げなかったのだったな」
「はい。その為中に布等を着ておりました」
彼はこう答えた。
「どうやらテューポーンにはそうした布はなかったようですね」
「それで今の状況か」
「ええ。ですがこれは好都合」
彼はまた言った。
「このまま攻撃を続けましょう。そうすればさらにダメージが蓄積されていきます」
「そしてバリアーも弱まっていく」
「その通りです。勝利が見えてきました」
その赤い顔に笑みが浮かんだ。
「もうすぐです」
「もうすぐか。では攻撃を続行だ」
「はい」
攻撃は続けられた。テューポーンのバリアーは次第に弱まっていく。それに対して連合軍の攻撃は衰えることがない。その差は歴然としていた。
そして遂にその結果が出た。バリアーが突き破られた。要塞を激しい衝撃が襲った。
「遂にか」
「はい」
ファブリチーニに対して幕僚の一人が応えた。
「バリアーが破られました」
「うむ」
「そして敵の攻撃は続いています」
「こうなっては致し方あるまい」

覚悟はできていた。最後の決断を下す。

## 第十四部第五章　神々の激突その二十

「全ての機器を使用不能にせよ。そしてコードを凍結する」
「ハッ」
「それが終わった後で総員撤退だ。遅れることのないようにな」
「わかりました。そしてシュヴァルツブルグ閣下には」
「私が話しておく」
彼はそう答えた。
「だからそれについては心配することはない」
「了解」
「わかったならばすぐに撤退に取り掛かれ。よいな」
「ハッ」
こうしてテューポーンの放棄と撤退が決定された。それはすぐにファブリチーニ自身からシュヴァルツブルグへと伝えられた。彼はそれを聞いてまずは暗い面持ちになった。
「そうか」
その声からは感情は見られなかった。ただ言葉を出しただけであった。
「致し方あるまい」
そして次にこう言った。それから自身の指示を下した。
「第三防衛ラインを放棄する。さらなる戦線の後退だ」
「わかりました」
伝令将校達がそれに頷く。
「それではすぐに」
「うむ」
声に感情をこもらせないように努力はした。だがそれでもそこにこもってしまった。こもらずにひられなかった。
「恒星の向こうまで撤退するぞ」
「そこでまた戦われるのですか」

「そこが最後になる」
彼はまた言った。
「防衛ラインは第三までだったが。そこに急遽ラインを建造する」
「わかりました」
「そこで最後の戦いを挑む。よいな」
「ハッ」
ワレンシュタインの艦橋にいた全ての将校達がそれに応えて敬礼をする。
「ではテューポーンからの撤退が完了し次第我々も撤退する。先に応急の防衛ラインを築く艦隊を派遣しておくように」
「わかりました。それでは」
「うむ」
第三ラインの放棄も決定された。彼等はテューポーンを放棄してさらに退いた。その光景は連合軍からも確認された。
「敵が退いていきます」
「勝ったか」
「いえ、まだでしょう」
マクレーンに対して劉がいつものように述べる。
「おそらく彼等はまだ戦うつもりです。最後の戦いを」
「最後の戦いか」
「私もこれで終わりだと思ったのですが」
「彼等の戦意は予想以上だったと」
「はい。それでは我等も戦うだけです」
その声は普段のそれよりも強いものであった。
「それでは全軍進撃ですな」
「はい」
劉は頷いた。
「テューポーンも占拠して。忙しいですぞ」
「忙しいのは慣れていますから」
マクレーンは笑みを作ってこう返した。

「それでは全軍進撃」
「ハッ」
「第三ライン及びテューポーンを占拠した後で撤退する敵の追撃に取り掛かる。追撃が終わったならば」
「終わったならば」
「神々の山へ入るぞ」
もう彼等の前にはオリンポスが見えていた。そこに兵を進めることに心の奥底から期待していた。彼等の戦いも遂にその最後の目標が見えようとしていたのであった。

第十四部　完

２００５・１１・１８

# 第十五部第一章　放浪の果てにその一

放浪の末に

かつて十字軍があった。イスラム教徒達の侵攻に悩んだビザンツ帝国が同じキリスト教徒達に対して救援を要請したのがそのはじまりであった。

ビザンツ帝国としては軽い気持ちであった。ただ傭兵が欲しかったのだ。だが西のキリスト教徒達はそこにチャンスを見出していた。それを単なる傭兵の募集とは考えなかったのである。

当時のローマ教皇ウルバヌス二世はクレルモンにて公会議を開きそこで聖地エルサレムを異教徒達より奪回する軍の派遣を決定した。そして西欧の各国に対して軍の派遣を命じたのだった。

これに多くの諸侯達が賛同した。彼等はこの時土地を欲していた。そして権益を。またその権益の独占を狙う教皇のお膝元であるイタリア半島の商人達もこれを支持した。そして農民達は植民先を。当時の西欧は未開の地域であり土地も
権益も限られたものであった。だからこそ彼等は外に出て行きたかったのである。

こうして十字軍の派遣が決定された。彼等はまず聖地に行くまでにビザンツ領でその野蛮な姿を見せた。ローマ帝国の文化や技術を継承していたビザンツ帝国から見てこの同じキリスト教徒達は呆れるまでに野蛮で粗野な連中であったのだ。

当時のビザンツ皇帝アレクシオス一世は彼等を適当にあしらった。そしてそのまま勝手にエルサレムに向かうように仕向けた。この最初の十字軍はとりあえずは成功した。エルサレムは陥落し中東に多くの植民国家が設けられたのであった。

だがここで問題となるのはその十字軍の行動であった。彼等はあまりにも野蛮であったのだ。

異教徒は虐殺した。同じキリスト教徒であっても異教徒と共にい

るというだけで虐殺しった。そしてその肉を喰らう有様であった。欧州もまたカニバリズムがある地域だったのである。

こうしたことが何時までも続く筈も成功する筈もなかった。すぐにイスラム教徒も反撃に転じた。そして第二次十字軍はダマスカスで敗北した。

これを受けて西欧も総力を結集しようと試みた。イングランドの獅子心王リチャード一世、フランスの尊厳王フィリップ二世、神聖ローマ帝国皇帝の赤髭王ハインリヒ一世といった名立たる君主達が軍を派遣したのである。だがこの軍は同床異夢の軍でありとりわけフィリップ二世の士気は乏しいものであった。途中ハインリヒ一世が溺死しリチャード一世がほぼ独力で戦争にあたることとなった。

この王は伝説的な軍人であった。敵に対しては時には恐ろしく寛容になるが時には恐ろしく残忍になった。相手に誓った約束は破ることがあっても自分に対して誓った約束を破ることがなかった。長身で腕が長く立派な顔立ちと体格を持っていた。政治家として、国王としての力量はそもそも備わっておらず、本人もそれを求めてはいなかったが軍人としては極めて優秀であった。その彼の前に一人の男が立ちはだかった。

サラーフ＝アッディーン。サラディンである。クルドの貴族に生まれた彼はエジプト、そしてシリアをもしそれが本当に幸運だったならば実に幸運なことに手に入れた。そしてアイユーブ朝の始祖となったのである。

彼はリチャードと比して君主として、政治家としても極めて有能であった。だが中東では彼等は軍人として激突した。激しい戦いを繰り広げエルサレムを巡る攻防を続けた。この時エルサレムはエルサレム王国に治められていたがサラディンにより攻略されてしまっていたのだ。この時彼は掠奪も虐殺も行わず逆にエルサレムの市民達の安全を保障した。この聖地において虐殺の限りを尽くしたキリスト教徒達とは全く違っていたのだ。

そのサラディンが守るエルサレムにリチャード一世は進軍を続け

ていた。だがそれが遂に適わないことを知ると彼は自分の顔の前に己が獅子の楯をかざしてこう言った。

## 第十五部第一章　放浪の果てにそのニ

「聖地を取り戻すことができぬ者に聖地を見る資格はない」
こう言ってエルサレムから去った。そして以後十字軍がエルサレムを取り返すことはなかった。敗退に敗退を重ね遂には中東からキリスト教国はなくなってしまった。後には十字軍の残虐な行為の跡と多くの副次的な遺産を残して。
それから以後はオスマン＝トルコによりこの地域は治められた。だがそのオスマン＝トルコが衰えるとまた欧州から侵略者がやって来た。今度は土地ではなく石油を狙って。こうして彼等の受難はまたはじまった。
それが宇宙の時代になり終わると彼等はまた侵略を受けることがなくなった。だがエウロパの人口が過密になってくると彼等は植民先としてサハラ北部に狙いを定めてきたのだ。そしてまた侵略を行ないそこにいたサハラの者達を追い出して自分達が居座った。それが総督府であった。
「最早総督府はなくなったそうだな」
マシュハドは乗艦ロスタムの艦橋でふとこう言葉を漏らした。それに傍らにいたワフラが顔を向けさせた。
「そのようですね」
「ということはあの地はもうサハラの手に帰したか」
「はい」
ワフラはその言葉に対して頷いた。
「今はティムール領となっております」
「そうか」
彼はそれを聞いて考える顔になった。
「では我等はティムールの者ということになる」
「あちらに帰れば」
「サハラに帰れば、か」

「はい」
「まるで夢のような話だな」
そう言って遠くを見た。
「ここにいる者達は皆かってエウロパによって故郷を追い出された者達だ」
「はい」
「難民だ。だがもう難民ではなくなったというのか」
「エウロパがいなくなりましたから」
「そうだな。そういう意味でもう難民ではない」
「ですな」
「だが。帰るべき国がないということではまだ難民だ」
それでもあえてこう言った。
「わしはアッバースにいた」
「アッバースですか」
「エウロパの侵攻により滅ぼされた。そして全てを失った」
「はい」
「我々も善戦したつもりだったがな。数には負けた」
「丁度今の彼等のようにですな」
「そういえばそうだな」
言われてようやく気付いた。
「我々も物量に負けたが。彼等もそれで負けている」
「はい」
「だが彼等にはもう一つのカードがあったからな」
「謀略と外交ですか」
「それを侵略に絡めてきた。それで多くの国が滅んだ」
「アガデスもそうでしたな」
「アガデスだけではない。他の国もだ」
マシュハドの言葉がさらに苦いものとなった。

## 第十五部第一章　放浪の果てにその三

「若しかすると我々もそれでやられたのかも知れないな。気付かないうちに」
「それだけエウロパの調略が優れているということです」
ワフラはとかくエウロパの外交や謀略に警戒していた。
「この戦いにおいてはそれはないようですがね」
「暗殺でも仕掛けてくると思ったがな」
「それは国防省の方でも警戒しているそうです」
「ほう」
「情報部もグリーンベレーも密かにエウロパに入っているようです。そして工作への対処に当たっているとか」
「そうだったのか」
「あとアラガルもエウロパ入りしているとか」
「あのアラガルもか」
彼もアラガルのことを聞いていた。かってステッラと死闘を繰り広げた連合きってのテロへの専門家である。非常に秀でた人物として知られている。
「彼がいるとなると。かなり違うな」
「そのせいか不審な事故等は極めて少ないです」
「不審な事故、か」
それを聞いてマシュハドの顔が少し歪んだ。
「そういえばそうだな」
「ですね。戦争をしていると何かとつきものですが」
その原因はもう言うまでもないことであった。
「私もそれが妙に少ないと最初思いましたが。そういうことだったのです」
「そうだったのか」
「暗殺や工作で戦力が落ちるのは誰でも避けたいですからね」

「それは当然だな」
「ただしこちらから仕掛けるということはないようですね」
「あの長官はそうした方ではないようだからな」
マシュハドは八条に対しても言及した。
「正攻法しか御存知ないようだ。育ちがいいせいもあるだろうが」
「育ちですか」
「育ちがいいとな。極端になり易い」
彼はこう述べた。
「いい方向に行くか、悪い方向にいくかな。全ては環境や自分の考えで決まるが」
「はあ」
「あの長官はどうやらいい方向に行かれたようだな。そのせいか顔もいい」
「連合では女の子にも人気らしいですね」
「あれでもよくわからないところがある」
「といいますと」
「何故勝手に同性愛者という設定にされているのだ？そうした漫画も出ているようだが」
「あれは日本の一部の女の子達が面白がってやっていることですよ」
「面白がって」
「どういうわけかあの国の女の子達の中にはそうした漫画や小説を書くのが好きな子が昔からいるようでして」
「ふむ」
「その関係です。まあ特に御気にされることはないかと」
「所謂同人誌というやつだな」
「はい」
ワフラは頷いた。
「商業出版とはまた違う」
「完全に趣味の世界ですね」
「趣味で漫画や小説を書いて、か」

「ええ。ですから多少のことは見過ごされるのですよ」
「妙な話だな」
「連合でも日本とその文化に変わった方向に興味がある者にしかわからない話のようですけれどね。私もあまり詳しくはないのですが」
「その割にはよく知っているな」
「そうでしょうか」
それに応えておかしそうな笑みを浮かべた。
「案外そうしたことに興味があるのではないか」
「まさか。私はノーマルですよ」
そう言ってまた笑った。
「少なくとも同性愛は。合わないです」
「連合、特に日本では昔から普通だったらしいな」
「はい」
「変わった国だな、どうも」
「それぞれの文化ですから」
「キリスト教の宣教師だったか。日本人が同性愛を普通に行っていてかなり驚いたというが」
「確かイエズス会だったでしょうか」
「そうだったか」
フランシスコ＝ザビエルのことである。イエズス会の重鎮であった彼は日本にキリスト教をはじめて布教したことで知られているが彼は日本と日本人を見て絶賛した。しかし一つのことだけはどうしても容認できなかったのだ。

## 第十五部第一章　放浪の果てにその四

それが男色であった。当時キリスト教倫理が強かった欧州においては男色は忌むべき悪徳であったのだ。ソドムやゴモラが滅ぼされたのもそのせいだとされている。貴族達の中には青髭ことジル＝ド＝レイの様にそれを愉しむ者達もいたがそれでも絶対的な悪徳とされていたのは事実である。その悪徳が彼の目から見ればはびこっていたのだ。彼はそれを見て嫌悪感を露わにしたのである。

だが日本では普通のことであったのでこれは理解されなかった。それを言われた大名は激怒したと言われている。当然彼も男色家であったからだ。

「それと同じか。ただ、どうも納得がいかない」

「いきませんか」

「わしにそうした趣味がないせいだろうがな。同性愛というものは」

「ですがそれもまた連合の文化です。同人誌は一部でも同性愛は結構普通ですよ、ここでは」

「では女同士もか」

「勿論です」

彼は頷いた。

「所謂レズビアンというものですね」

「ああ」

「連合においては普通ですぞ。エウロパにおいても」

「さらにわからなくなってきたな」

首を傾げる角度が深くなってきた。

「背徳にしか思えぬ。訳がわからない」

「まあ理解できないことはどの文化にもありますから」

「そういうものか」

「そこは目をつぶればいいですよ。それで無闇に衝突することもありません」

「イスラムの寛容の精神にのっとってだな」
「それが宜しいかと。人それぞれです」
「そうか」
「そうです。ではそろそろ本格的に準備に入りましょう」
「わかった」
それに応えた後でまずは艦橋を見回した。既に総員配置についている。
「各艦隊戦闘態勢に入れ」
「ハッ」
「敵が現われたならばすぐに動く。そして倒す」
力強い声で言う。
「オリンポスが待っているぞ」
「敵の首都が」
「そうだ。かって我々をサハラから追い出した仇の首都がだ」
ニヤリと笑う。これは将兵の士気を鼓舞する為の言葉でもあった。
「そして奴等に城下の盟を誓わせる。どうだ、楽しみか」
「はい」
艦橋にいる者達が声をあげた。それを見る限り彼の意図は成功したと言えた。
「だが敵もおそらく決死だ。それに勝つ自信はあるか」
「司令」
艦橋にいる若い将校の一人が声をかけてきた。
「何だ」
「我等はムスリムです」
「うむ」
「ムスリムは戦場において怖れを知りません。そして勝利の為に全てを捧げます」
「では勝利を願うのだな」
「無論」
彼は言い切った。

「そうでなければここにはいません」
「わかった。ではその命預かろう」
「はい」
若い将校の声がさらに強くなった。
「では全軍ここで陣を敷く」
「ハッ」
皆その言葉に敬礼した。
「そして敵を待つぞ。来たならば」
「勝利を我が手に」
「うむ」
彼等は勝利を待っていた。そこには今までへの多くの思いもあった。
「さあ来い」
マシュハドは前を見据えながら呟いた。
「今までの遺恨、全て晴らしてくれる」
対するエウロパ軍はクロノスからオリンポスを通過しニョルズに向かっていた。彼等はモンサルヴァートの指揮の下全速力でニョルズに急行していたのだ。
「急ぐぞ」
モンサルヴァートは彼等にそう声をかけて激励していた。

## 第十五部第一章　放浪の果てにその五

「さもなければ取り返しのつかないことになる」
「はい」
その言葉に各艦隊を率いる提督達が頷く。ゴドゥノフ、マトクといった長い間彼と共に戦場を駆け巡った歴戦の提督達である。彼等は今またモンサルヴァートの下に集い戦場に向かっていたのであった。
「しかも今度の敵は強敵だ」
「サハラ義勇軍ですな」
「うむ」
彼はモニターに映るアローニカに応えた。
「連合軍の最強部隊だ」
「正式に連合軍ではなかったと記憶していますが」
「それでも連合にいることには変わりはない。彼等もまた連合軍だ」
彼はこう言って説明した。
「その出自はともかくとしてな」
「そういうことですか」
「だがその戦闘力は通常の連合軍と比してかなり高い」
「はい」
提督達はその言葉に頷いた。それは今まで干戈を交えてきた彼等自身が最もよくわかっていることであった。
「そのうえ数も我等より多い。百個艦隊だ」
「百個艦隊」
「それに対する我等は五十個艦隊」
ターフェルが重厚な言葉で一言言った。
「数の問題ではないですが」
それでも言わずにはおれなかった。義勇軍の強さとその数。彼等の前に立ちはだかる壁の高さと厚さにあらためて憂慮すべきものが

あるとわかったからだ。
「ただ、戦う場所がニョルズだというのが救いです」
「うむ」
モンサルヴァートはジャースクの言葉に頷いた。
「あの星系はかなり通航が困難な場所ですから」
「それに地の利は何といっても我等にあります」
「それを使えば勝機はあるな」
「はい」
提督達があらためて頷いた。
「少なくとも彼等は我等程あの星系に関して知らないでしょう」
これは自明の理であった。彼等はこのエウロパに生まれてから住んでいる。そしてニョルズ星系にしろ地球からエウロパに移り住んでから探索、研究を続けていた。それだけあってニョルズに関する知識の蓄積はかなりのものとなっていたのである。付け焼刃ではない知識である。それは大きかった。
「あの複雑な星系をね」
ジャースクはそこまで言って笑った。ニヤリとした不敵な笑みであった。
「ではここは我等の戦い方で挑むか」
「はい」
提督達はまた頷いた。
「全てはエウロパの為に」
「勝利の為に」
「ニョルズとクロノスの戦いでエウロパの行く末が決まる」
モンサルヴァートの言葉が決意に満ちたものとなった。
「卿等の健闘でな。そして私の指揮で」
「はい」
「期待しております」
「わかった」
モンサルヴァートは他者からの期待に対しては素直に応えようと

する人物であった。そうした意味では非常に素直な人物である。やはり彼は軍人、騎士であり政治家ではないのだ。無論事務処理能力や軍事行政においてはかなり優秀な能力を持っているがそうした影の意味での政治能力は持ち合わせていなかったのである。彼は軍人としてまずあり、そこから政治も考える人物なのである。そしてこうした彼の性格がここで現われていた。

「閣下」

ここで幕僚の一人が彼に声をかけてきた。

「どうした」

「もうすぐニョルズに到達しますが」

「遂にか」

「はい。既に敵軍はニョルズに到達しております。陣を組もうとしております」

「そうか、早いな」

彼はそれを聞いてまずはこう言った。

「では我等も到着したならばすぐに布陣するとしよう」

「ハッ」

「場所はオリンポスへの入口付近とする」

「わかりました」

「陣形はまずは複数に分ける」

「複数に」

「ここは私に任せてくれ」

表情を変えずにこう言った。

「いいな」

「わかりました」

その変わらない表情に強い決意が見られた。幕僚達だけでなく提督達も頷いた。

「それでは速度をあげよ」

「はい」

「全軍ニョルズに急行する。そして敵を防ぎ止めるぞ」

「ハッ！」
彼等もまた戦場にその心を向けていた。ここにおいてもまた戦いがはじまろうとしていた。

## 第十五部第一章　放浪の果てにその六

しかし戦いはそれだけではなかった。クロノス、ニョルズの二つの星系の後方の首都オリンポスにおいてはまた別の戦いが行われていたのであった。

「講和、ですか」

「はい」

ペーチは官邸の一室においてマウリアの服装であるサリーを見に纏った女性と会っていた。そして彼女の話を聞いていたのであった。

「正直に申し上げますがエウロパはこれ以上の戦闘は無理ではないでしょうか」

「それは」

ここで嘘を言うかハッタリを言うこともできたであろう。だがペーチの性格からそれはできなかった。彼はそうした口よりも実際の行動を重んじる人物であるからだ。

「如何でしょうか」

「はい」

憮然とした顔でそれを認めた。

「その通りです」

「これ以上の戦闘はエウロパにとって容易に回復できないレベルのダメージを与えます」

「仰る通りです」

「既にエウロパの財政は破綻寸前ではないでしょうか」

「それは」

流石に口を濁して誤魔化そうとする。だがここでそのサリーの女性の横にいるドーティを着た男が彼の前に一冊のファイルをすっと差し出してきた。

「それは」

「私共が申し上げるまでもないと思いますが」

「・・・・・・・・」
その言葉を聞いて口を開けることはできなかった。それが何なのか、今までの会話からもう言うまでもないことであるからだ。
「我々もそれなりに学ばさせて頂きました」
「左様ですか」
「我々は今卿達の為にここにいるのです」
「私達の為に」
「はい」
その女性は微笑んだ。見ればマウリアの女性特有の優しさと奥深さを感じさせる神秘的な微笑みであった。
「このままエウロパが滅びるのを見るのは我々も本意ではありませんから」
「お言葉ですが」
流石にそこまで言われるとペーチもムッとした。彼とてこの国の首相である。反論せずにはいられなかった。
「我が国は国力では連合に負けていますがその他では決して負けてはおりませんぞ」
「そうなのですか」
彼女は表情を変えずに彼の話を聞きに入った。
「このオリンポスへの入城は適わないでしょう。そしてそこから押しやって御覧にいれます」
「エウロパ軍の力で」
「彼等も負けてばかりいるわけではありません。必ずやってくれるでしょう」
「エウロパ軍を信じておられるのですね」
「当然です」
連日の激務で憔悴しきってはいたが強い顔と声で言い切った。
「何でしたらそれを御覧にいれましょうか」
「いえ、そこまでは」
彼女は笑ってそれを拒否した。

「エウロパ軍の強勢なのはもう承知しておりますから」
「左様でしたか」
「はい。そのうえでまたお話っせてもらうのです」
彼女はまた言った。
「連合とエウロパの講和を。宜しいでしょうか」
「はい」
ペーチは自分の話を止めあらためて彼女の話を聞きに入った。
「今クロノスとニョルズにおいて戦いが行われておりますね」
「ええ」
「この戦いが決したならば時だと思うのです」
「決したならば」
「そちらとしてはオリンポスに侵入させなければよい筈ですが」
「確かにその通りですが」
戦略的には正解であった。
「それではもう迷う状況ではないです」
「ですが」
「既にラフネール総統ともお話していますし」
「えっ」
それを聞いて思わず声をあげた。
「総統と」
「はい」
答えてまたもやあの神秘的な笑みを浮かべた。
「総統は快く頷いてくれましたが」
「初耳ですが」
「昨日のことでしたので」
しれっとした返してきた。
「どうやらお伝えするのが遅れたようですね。申し訳ありません」
その態度からは真意も真実も読み取れなかった。だが確実にペーチに対してプレッシャーを与えたということは真実であった。そしてここではそれで充分であった。

「何でしたら確かめられて宜しいですが」
「いえ、それには及びません」
しかしペーチはそれはしようとはしなかった。
「すぐにわかることですから。また貴方達が嘘をつかれるような方ではないということも信じております」
「有り難うございます」
「そのうえで御聞きします」
ここで彼は気付いてはいなかったがその腹を括った様をマウリアの外交官達に見せていた。これは非常に大きな意味合いを持っていた。

## 第十五部第一章　放浪の果てにその七

「連合との講和の話を。宜しいですね」
「ええ」
「我が国としてましても無闇な戦争は望むところではありません」
彼は言った。
「しかし我々もまた国家です。守るべき市民と財産、そして領土があります」
「領土ですか」
「そのどれも譲り渡すことはありません。まずはそれを覚えておいて下さい」
「わかりました」
マウリアの外交官達はまずはそれに頷いた。
「そのうえでお話をはじめたいと思うのですが」
「ええ」
彼等はそれに頷いた。
「では」
ペーチはそれを確認してから話をはじめた。慎重な彼らしく手順を踏んだものであった。それがマウリアの外交官達をして自分達のペースに入らせないものであった。自分達のペースに入れるのもまた外交の駆け引きの一つであるからだ。そうした意味でペーチは見事な外交を展開していた。
「我が国としましては」
「はい」
彼等は話し合いに入った。エウロパも戦争終結に向けて水面下で動き出そうとしていた。だがそれはエウロパだけではなかった。連合もまた動きはいｚめていたのであった。
「昨日のことだけれどね」
メキシコ料理店において二人はいた。八条とカバリエは二人そこ

で昼食を採っていた。メニューはメキシコ料理で最も有名なタコスであった。そしてサボテンのステーキ、パン。二人はそれとジュースを口にしながら部屋で話をしていたのである。
「はい」
八条はこの時ステーキを切っていた。切りながらカバリエの話に耳を傾けていた。
「マウリアの外交官とまた話をしたわ」
「講和のことですね」
「そうよ。私の他にも首相や大統領とも話をしているわ」
「そうですか」
「エウロパとの講和の仲介をしたいということで。君のところにも来ているかしら」
「勿論です」
彼は応えた。そしてステーキを口に入れる。
肉とはまた違った旨味が口の中を支配する。噛み、飲み込んだ後で彼はまた言った。
「何回か来ております。そして講和の際の軍事的な面について話をしております」
「軍事的な面ね」
「はい」
八条は頷いた。
「よかったら少し話してくれないかしら。丁度二人だけだし」
「わかりました。それでは」
八条はタイミングを置いてから話をはじめた。
「まず制服組の意見ですが」
「ええ」
「エウロパの軍事要塞の幾つかを接収したいとのことです」
「軍事要塞を」
「はい。具体例を挙げますとニーベルング要塞群の十二の衛星とテューポーンです」

「それを何に使うつもりかしら」
彼女は問うてきた。
「エウロパとの国境にはもうガンタースがある筈だけれど」
「首都防衛です」
彼は言った。
「今首都星系である地球にはこれといった防衛設備がありませんね」
「駐留艦隊だけかしら」
「それだけではいささか心もとないというのが制服組の意見でして。とりわけ統合作戦本部長であるバール元帥の」
「あの人が」
「はい。ですがあの二つの要塞施設を置けばその防御力はかなり上がりますので。それでの考えです」
「私は軍事のことはあまり知らないけれど」
カバリエはそう前置きしたうえで言った。

## 第十五部第一章　放浪の果てにその八

「首都の防衛は確かに重要ね」
「はい」
「それに越したことはないと思うわ」
「御理解頂けましたか」
「ただ。もう一つ気になることがあるわ」
「それは」
「エウロパとのことよ。外交部としてもエウロパとの講和には色々と条件があってね」
「はい」
「出来る限りこちらに有利な条件で講和したいと思ってるわ。これは当然ね」
「勿論です」
政治、そして外交の基礎であった。最早言うまでもないことである。
「それで問題となるのはエウロパの感情よ」
「エウロパの」
「今まで一千年以上に渡る対立関係があったわね。そしてこの戦争」
「ええ」
「恨みに持たない筈がないけれど。その備えはガンタースだけで充分かしら」
「まだ不安があると」
「ブラウベルグ回廊かその出口にもう一つ防衛施設を置いてはどうかと思うのだけれど」
この場合はエウロパ側から見れば入口になる。カバリエは連合側からの視点で語ったのである。
「回廊、もしくは出口に」
「ガンタース程の設備じゃなくてもいいと思うけれど。どうかしら」

「そうですね」
八条はそれを聞いたうえで考え込んだ。
「私としてはガンタースで充分だと思うのですが」
「備えは一つより二つの方がいいわよ」
「一度スタッフと話をしてみます」
そう言ってここは即断を控えた。
「それからでも宜しいですね」
「私は別に構わないけれど」
だがそのうえでまた言った。
「ただ、話をする時間はあまりないわよ」
「わかっております」
「それは承知しておいてね。とりあえず首都はそれでいいと思うわ」
「はい」
八条は頷いた。
「けれど問題はエウロパが譲歩するかね」
「それは今の戦い次第ですね」
「戦い次第」
「クロノスとニョルズで行われている戦いが我が軍にとって有利な状況で終われば講和も有利な条件で進めることができるでしょうが」
「そうね」
「不利ならば。条件も不利なものとなるでしょう」
「ここは軍人達に頑張ってもらうしかないわね」
「はい」
八条はまた頷いた。
「ですが彼等ならやってくれますよ」
「信頼しているのね」
「当然です」
にこりと笑ってそれに応えた。
「私の大切なスタッフ達ですから」
「えらく大勢のスタッフね」

「はい」
「国防省の創設から一緒だったしね。言うなら貴方の子供みたいなものですか」
「そう言われると何か恥ずかしいですね」
八条はその言葉を聞くと苦笑いを浮かべた。

## 第十五部第一章　放浪の果てにその九

「結婚もまだだというのに。子供とは」
「未婚の親なんて普通だけれど」
「それでもですよ」
苦笑いは続いた。
「何か。照れ臭いですね」
「純情ね、国防長官は」
そんな彼を見てカバリエも笑った。
「日本人は奥手だと聞いていたけれど」
「奥手というよりはあまり積極的ではなくて」
「女の子もそうかしら」
「人それぞれですね」
彼は日本の女の子に関してはそう答えた。
「大人しい娘もいれば派手な娘もいますよ」
「あら、日本の女の子は大和撫子じゃなかったかしら」
「まさか」
さらに苦笑いは続いた。
「あれは幻想ですよ」
「幻想」
「ええ。そのような女の子は昔から日本にはいません」
「そうだったの」
「日本の女の子がおしとやかなんて。とんでもない話です」
「まあ実際にはそうではないとはよく聞くわね」
「ええ」
「結構お転婆だとか」
「それは昔からですよ」
「何か次々にイメージが崩れるわね」
「江戸時代の町娘ですが」

「ああ、時代劇でよく出て来る」
「元気がいい娘ばかりでしょう。あれが理想の一つでしたし」
「そういえば昔から日本の小説や漫画では元気のいい娘が多いような」
「実際にはそちらの方が多いのですよ。おしとやかな娘なんて滅多にいません」
「幻想が崩れたわね」
カバリエも苦笑した。
「何か。嘘みたいだわ」
「いえ、嘘ではなく本当のことです」
八条はさらに言った。
「大体日本は地球にあった頃は四季があり豊かな土地で働けば働くだけ実りを得られましたから」
「今でも凄くいい星系ばかりよね」
「それはあくまで幸運で」
その軽い皮肉にはこう切り返した。実はメキシコもかなり恵まれているのであるが。
「運がよかっただけです」
「まあそれはそうね」
「結果として動くのが最もよかったのです」
「ふん」
話は元に戻った。カバリエはその言葉に頷いた。
「それであのおしとやかな大和撫子は。ないでしょうね」
「では何故そんなのが出て来たのかしら」
「理想ではないでしょうか」
「理想」
「明示かその頃に出て来た。あくまで私の憶測ですが」
「あの頃日本はかなり変わったそうね」
「はい。日本の歴史において非常に大きなターニングポイントの一つです」

所謂文明開化である。西洋の文明が入り日本の文化はそれまでの和風文化と混ざり非常に独特の形となった。
『ざんぎり頭を叩いてみれば文明開化の音がする』
こうした言葉が出たように明治から日本の文化は非常に大きく変化した。肉食も復活し、乳製品等も食べられるようになった。また国家システムも西洋風になっていった。
「あれが今の日本の源流の一つですね」
「その頃に大和撫子が出来たのかしら」
「それまでかなりあけっぴろげでしたしね、日本の女の子は」
彼はまた言った。
「性的にも。それが倫理観も変わって」
「おしとやかなのが尊ばれるようになったと」
「政策的な意味合いもあるでしょうがね。明治から昭和の前期にかけては日本の女性はかなりおしとやかでした」
「それが大和撫子だったと」
「全部が全部そうではなかったでしょうが。まあそういう女性が多かったのは事実ですね」
「けれどそれはその時だけ」
「だから幻想と申し上げたのですよ」
彼はここでまた言った。
「正直それからは。元に戻ったというか」
「さらに変わったと言いたいわけね」
「今の日本の女の子は。ミーハーですし」
「同性愛の話も好きね」
「事実女の子同士の恋愛も多いです」
「あら、そっちもあったの」
カバリエはそれを聞いて意外そうな顔をした。
「日本ではホモセクシャルだけだと思っていたけれど」
「男同士があるならば女同士もありますよ」
彼は笑ってこう答えた。

「男同士が薔薇なら女同士は百合と言われますし」
これは最早連合においては共通語とさえなっていた。かつては男同士の同性愛を扱う雑誌においてこの名が使われ、その一コーナーにおいて女同士の同性愛も花に例えられたのがはじまりであると言われている。日本では昔から同性愛は普通でありタブーではなかった。だからこそあった話なのである。

# 第十五部第一章　放浪の果てにその十

「私なんかはよく女の子に薔薇と言われますよ」
「顔がいいのも災難ね」
「災難といいますか」
困った顔になった。
「心外といいますか。私はそもそも男には興味がありませんし」
「ノーマルなのね」
「はい。それは個人の嗜好なのでとやかく言うつもりはありませんがね。ただ女の子の方がいいのは事実です。この前なんて同性愛者のタレントに言い寄られて困りましたよ」
「ああ、彼ね」
カバリエにもそれが誰なのかよくわかった。
「あれでかなり男前なのだけれどね、彼も」
メキシコ出身のタレントである。元々はお笑いであったが演技も歌もできるのでそちらでも人気がある。長身に筋骨隆々の身体に短く刈り込んだ髪を持っている。ボディビルダーとしても人気がある。
「一応結婚しているのですよね、彼」
「バイセクシャルなのよ、自由恋愛主義で」
「さらにわかりません」
「美男子も好きらしいわ。彼の主張によると連合は懐の大きな勢力だと」
「それは否定しませんが」
「だから恋愛もそうあるべきだ。同性愛もそうした意味で非常によいものだと主張しているの」
「そうなのですか。何か強引なような」
「まあ実際は自分の主義を理論武装しているだけかも知れないけれど。それでも主張としては間違っていないわね」
「はい」

「あれで紳士だし。個人的な趣味を除けばいい人よ」
「それはわかります」
「さて、大和撫子と同性愛の話はこれ位にして」
「はい」
二人は本来の話に戻ることにした。
「マウリアの話だけれどね」
「それですね」
二人はまずデザートのサボテンのプリンとアイスクリームを口にした。それから話に入った。
「私は受けるべきだと思うわ」
「講和ですか」
「ええ。こちらも財政的に余裕がないしね」
「それはこちらも承知です」
実は戦費を巡って国防省と財務省の間にかなり激しいやり取りが行われてきたのである。八条自身も財務長官であるトラブゾンと何度も激論を交わしているのである。その苦労は並大抵のものではなかった。
「今の戦いで。戦費は底を尽きそうです」
「となるとこれ以上の戦闘は何とか工面しなければならない」
「それで財務省は頭を悩ましていますね」
「だから余計に困っているのよ」
「とりあえず我々としてもこれ以上の戦闘は望んではいません」
「制服組もね」
「はい」
彼は頷いた。
「損害も増やすわけにはいきませんし」
「では国防省は講和、と」
「それでお願いします。外務省はどうなのでしょうか」
「こちらも講和よ」
カバリエは答えた。

「流石にオリンポスの側まで制圧すれだ。目的は果たせるから」
「こちらはそれでいいですね」
「ええ」
彼女はまた頷いた。
「ただ、一つ問題があります」
「それは何かしら」
彼女はそれを受けて尋ねてきた。
「首相も大統領も講和派だし。こちらの問題はないわよ」
「おそらく各国政府も同じでしょうね」
「ええ」
「これ以上の戦闘を望んではいない。これが続けば我々が彼等に財政支援を要求するのでは、と危惧しているでしょうから」
「それに自国民が参加しているしね。これまでこの戦争自体に消極的な国も多かったし」
「ですから彼等も講和には反対しないでしょう。むしろ積極的に継戦を主張する国の方が探すのが難しい程です」
「だとすると何なの、問題は」
「もう一方です」
八条は落ち着いた声でこう応えた。

## 第十五部第一章　放浪の果てにその十一

「もう一方」
「エウロパです」
そして八条は国の名を出した。今彼等が戦っている相手である。
「彼等がどう動くかですね。問題は」
「彼等のことね」
カバリエもそれを聞いて頷いた。
「エウロパも。彼等がどう動くかね」
「徹底抗戦も考えられますが」
「それはないと思うわ」
だがカバリエは八条のその言葉をすぐに否定した。
「何故」
「彼等は我々より辛い立場にあるからよ」
「確かに」
エウロパが今どのような状況にあるのかわからない八条ではなかった。彼がエウロパを今そのようにしている者達のトップであるからだ。
「今彼等は危急存亡の時ね」
「はい」
「だったら講和を望んでいるのは彼等の方よ。ただ意地は貫くと思うわ」
「意地ですか」
「どんな人間にも少しは意地があるわね」
「ええ」
これは軍でもよく見てきた。訓練期間の間それに耐えてきた自分自身や同僚達。彼もまたそれを見てきたからこそ頷けることであった。
「それよ。これは国家にもあるわ」

「では当然エウロパにも」
「そうね。ただ、意地だけではないでしょうね」
「誇りですか」
「ええ」
カバリエは八条の言葉に頷いた。
「彼等は誇り高いわ。その点では私達より上かもね」
「でしょうね」
これは制服組からも聞いていた。エウロパ軍、とりわけ貴族出身の高給将校達は極めてプライドが高かった。そしてそれを自ら傷つけるような行動や発言は極めて卑しみ、行おうとしなかった。そうした意味で彼等は実に高潔な騎士であり貴族としての風格も備えていた。
「それもあるから。だから彼等の納得するところでないと講和は結ばないでしょうね」
「その納得するところは何処だと思われるでしょうか」
「おそらく今の戦いね」
「今の」
「ええ」
カバリエはまた頷いた。
「クロノスとニョルズで。彼等のプライドが保てるギリギリのところまで戦うでしょうね」
「ではオリンポス入城は控えた方がいいでしょうか」
「それをやったらどうなるか一番わかっているのは貴方だと思うけれど」
「確かに」
これもまたその通りであった。首都を占領しても戦いは終わるとは限らない。むしろ首都奪還の為にエウロパはその残された僅かな力、そして全市民を挙げて連合に戦いを挑んでくることだろう。そうなれば果てしない消耗戦に突入するのは目に見えている。幾ら国力差があるとはいえそうなれば連合が受けるダメージも計り知れな

いものがある。少なくとも今のそれとは比較にならない。これは八条程の者であれば容易にわかることであった。
「クロノスとニョルズの勝利で止めておくべきね」
「それも限定的勝利」
「エウロパにとってはオリンポスへの突入を許さなければいいのだから。若し占領でもしたらそれこそことよ」
「エウロパ一千億の市民を全て敵に回しますね」
「そして戦いはエウロパ全土を占領し、エウロパという国を滅ぼすまで続けられる。残った市民はおそらく連合にとって最大の不穏分子となるでしょうね」
「連合にとってはいいことは何もありません」
「じゃあわかるわね。どうするべきか」
「はい」
八条は応えた。
「これは政治の問題になりますね」
「軍人の問題ではまたないわね」
「では彼等にもそう伝えますか」
「今からじゃ間に合わないでしょ」
「それはそうですが」
「そこもね。マウリアがやってくれるそうよ」
「用意がいいですね」
「既にクロノス、そしてニョルズの我が軍にも特使が向かっているそうよ」
「ということは我々は彼等の主導の下動いているということですか」
八条はそこまで聞いて難しい顔をした。

## 第十五部第一章　放浪の果てにその十二

「何か。今一つ面白くないですね」
「そうは言っても仕方ないわ」
だがそんな彼とは対象的にカバリエの顔には余裕があった。
「利用されるのも。時として必要よ」
「我々の利益になるのなら」
「ええ。今回は乗ってみるべきかしら」
「彼等にしてみれば双方に恩を売る絶交の機会」
「特に我々に」
「それではここは乗りますか。にこやかな顔で」
「わかってくれたようね」
「これでもこの世界に入って結構経ちますから」
「経験というのかしら」
「そうですね。やはり政治の世界も経験です」
そう応えながら茶を口に入れる。八条はこの時緑茶を飲んでいた。カバリエはコーヒーである。八条だけが飲み物を変えていたのであった。
「経験から多くのものを学んできました」
「そうね。流石は伊藤首相の秘蔵っ子」
「からかわないで下さいよ」
「あら、私は人をからかったりしないわよ」
そう言いながら悪戯っぽく笑う。豊満な顔ににこやかな笑みが浮かぶ。
「特に若い男の人はね」
「そうですかね」
「ましてや伊藤首相の生徒を。後が怖いわ」
「そんなに首相は怖いですか」
「外国人にとってはね」

笑みをたたえ続けながら言う。
「手強いわよ、本当に」
日本以外の国では伊藤は非常に厄介な政治家として知られている。知的な美貌とはうらはらに強かで尚且つ粘り強い外交を得意としている。彼女は内政においてもそうであるがそこに的確な情勢判断と実務処理も加わる。単なる学者出身の政治家ではなかった。生来の政治センスも併せ持った稀有の政治家であったのだ。だからこそ『女狐』とさえ言われるのである。その狐には各国が手を焼いているのである。
「メキシコもあれで煮え湯を飲まされてるから」
「はあ」
「といっても今貴方に言っても仕方ないのだけれどね」
それぞれの国の政府にいるのならともかく今八条とカバリエは連合中央政府において共に閣僚となっている。それでは対立するわけにはいかない。彼等もお互いにそれがわかっており、また個人としても相性が悪くはなかった。だからこそ今もこうして普通に食事を採りながら話をしているのである。
「中央政府とはまた別だから」
「はい」
「とりあえず講和の件はこれで終わりね」
「はい」
「それにしても今回は結構驚かされたわ」
「マウリア側にですか」
「ええ。本当にね。手強いというか」
今度は苦笑いになってきていた。
「強かというか。今のマウリア政府は中々手強いわよ」
「そうですね」
これは八条も同意であった。
「国防省でもそれは話に出ています」
「やっぱり」

「交流に来ている軍人達ですが。あれでかなり優秀です」
「技術やシステムを盗まれたりはしていないわね」
「最も重要な部分はブラックボックスにしております。そこは大丈夫です」
「だったらいいけれど」
「ただ」
「ただ。何かしら」
カバリエの目の色が少し変わった。
「どうも彼等は我々の艦艇や兵器を見てそこから何かを知ろうとしているようです」
「敵もさる者ね」
「時間のリンクはわかりませんが。何年かかっても身に付けようと考えているようです」
「流石はマウリアといったところかしら」
「もしかするとティアマト級をあちらで建造するかもしれません」
「あれを」
「ええ」
八条は言った。
「まさかとは思いますがね」
「あれは確か連合の科学力、技術力を結集して開発されたものだったわね」
「他の艦艇や兵器も同じです。容易にコピー等はできない筈ですが」
「彼等は私達の予想を越えている可能性もあると言いたいのね」
「連合やエウロパ、サハラにある国ならある程度は予想できたりもするのですが」
「相手がマウリアではね」
結局話はそこに行き着いた。

## 第十五部第一章　放浪の果てにその十三

「何をするかわからないわよね」
「はい。多分に先入観に過ぎないとはわかっていますが」
「けれど多くの人達がそう思っているわね」
「そうでしょうね」
　これは八条も同じであった。彼は比較的偏見の少ない人物であるが完全にないというわけではない。やはり人間である以上大なり小なり誰でもそうしたものは持っているのである。
「まあここは彼等に乗りましょう」
「はい」
「悪い条件ではないしね」
「若し騙していれば」
「その時はその分の責任は彼等が負うことになるわ」
　そう答えて笑った。
「何かとね。それがわかっていたらしないでしょうね」
「ですね」
「それじゃあ私達は賛成ということでいいわね」
「はい」
　八条はあらためて頷いた。
「国防省としてもそれでいいです」
「わかったわ。それじゃあ」
「この話はこれで終わりということで」
「そうね」
　言い終えるとコーヒーを飲んだ。
「丁度昼食が終わる時間ね。どうするの」
「どうすると言われましても」
　八条はその言葉を聞いて苦笑いを浮かべた。
「仕事がありますから。国防省に帰るしかありません」

「大変ね、国防省は」
「外務省も似たようなものだと思いますが」
「あら、私は忙しいなんて思ったことはないわよ」
「それはまた何故」
「気のもちようよ」
カバリエはここでこう言った。
「気の」
「そうよ。それ一つで大きく変わってくるものなのよ、何事も」
「つまり認識の違いということですか」
「そのものズバリね」
カバリエは八条のその言葉に頷いてみせた。
「物事は何でもそうだけれどそれに対する気の持ちよう、考え方で全く違ってくるのよ」
「よく言われることですね」
「仕事もそうよ。だから私は忙しいとは思わないわ」
「そうなのですか」
「貴方もそう思って仕事をしたらどうかしら。悪くはないと思うわよ」
「いや、実は今でもそれ程辛いとは思っていません」
「あら」
「日本軍にいた頃からこんな感じでしたからね。もう慣れています」
「慣れてるの」
「はい。まああの頃より多少は忙しいですが」
笑いながら言う。
「平気ですね。むしろやりがいがあっていいです」
「流石ね」
カバリエはそれを聞いてまた笑った。
「初代国防長官に選ばれただけはあるわ。どうやら大統領の人選は正解だったようで」
「そう言って頂けると有り難いです」

「けれど気をつけてね」
「今度は何に」
「世の中勤勉な人間ばかりじゃないわ。怠け者も多いわよ」
「はあ」
「そうした人間に仕事を押し付けられるようなことはないようにね。受けていたらキリがないわよ」
「それも時々言われますけれどね」
「要領も身に着けた方がいいわよ。政治家はね」
「そういうものですか」
「だから色々と勉強するようにね。いいわね」
「わかりました」
八条は何度目かの頷きをした。
「とりあえず勉強していきます」
「そう、それが肝心なのよ」
どういうわけかカバリエの顔も教師のようなものになった。彼女も伊藤と同じくそうした一面があるということであろうか。そうだとすると両者は全く正反対の外見を持ちながら似ている部分もあるということになる。
「まだ若いのだから。期待しているわよ」
「有り難うございます」
こうして二人の昼食は終わった。カバリエはまず大統領府に向かい八条は国防省に戻った。そして自身の執務室に戻り仕事に取り掛かった。

## 第十五部第一章　放浪の果てにその十四

「さて」
彼は机に就くとまず自分の目の前にある書類の処理に取り掛かった。
「これが終わったなら」
「失礼します」
「おや、早いですね」
シャリアピンが部屋に入って来た。技術総監であるグエン元帥も一緒である。シャリアピンが八条に礼をしてから話ははじまった。
「こちらの仕事が予定より順調に進みましたので」
「それは何よりです」
「それでこちらにお邪魔したわけですが。大丈夫でしょうか」
「ええ、こちらも」
八条は処理した書類を机の左の方に重ねて置きながら応えた。
「これで今ある分は終わりましたから。それでは話をはじめましょうか」
「はい」
シャリアピンは頷いた。そしてグエンが前に出て来た。
「これがその資料です」
そう言いながら分厚いファイルを八条に差し出してきた。
「これがですか」
「ええ。まずは御覧になって下さい」
「わかりました。それでは」
八条はそれを受け取ると早速ファイルを開いた。そしてその中に目を通しはじめた。
「ふむ」
「如何でしょうか」
グエンは問うてきた。

「技術部としてはかなりの自信作ですが」
「そうですね」
八条はファイルに目を通しながら答えた。
「正直に申し上げますと私の予想以上です」
「予想以上」
「はい。ここまで大型、そして重装備のものになるとは思っていませんでした」
「左様ですか」
「もっと小型になると思っていたのですが。これではまるで防衛衛星ですね」
「その防衛衛星以上の火力を持っておりますぞ」
それに対する返答はこうであった。
「これだけで十個艦隊以上を相手にできる程に」
「大きく出ましたね」
八条はグエンの自信に満ちた言葉を聞いて笑みを浮かべた。
「ティアマト級ですら一個艦隊だというのに」
「そのティアマト級をも凌駕するものです」
グエンの自信は続いた。
「あの巨大戦艦、そして全軍をコントロールする為のものなのですから」
「だからですか」
「はい」
「巨大なのは。だとするとその電子機器、コントロール設備はかなりのものなのですね」
「ですね。今それも開発中です」
「ふむ」
「今まで艦隊の統率はティアマト級がやっていましたが」
連合軍のそれぞれの艦隊の旗艦はティアマト級が務めている。ただ単に艦隊の旗艦なのではなく艦隊の指揮及びコントロールも行っている。そうした意味でも連合軍の象徴なのである。単に火力が大

きいだけではないのだ。
「あの巨大戦艦といえどもコントロールできるのは一個艦隊程度まで。軍団、軍の統率はやはり人とシステムに頼る部分が大きかったと認識します」
「それをソフトウェアの部門からも充実させる」
「はい」
「それがこれの目的ですか。だからこのように巨大なのですね」
「その通りです」
グエンは答えた。なお連合軍の軍の単位は艦隊を基準とし十個艦隊で軍団、十個軍団で軍となる。なお千隻の艦艇で分艦隊となる。艦隊司令官は中将が務め分艦隊は少将である。軍団及び軍は大将が司令官となる。これは連合軍特有であるが大将には実は同じ階級であってもランクがあるのである。上級大将という階級がない為にこうなっている。なお連合軍に上級大将がないのは連合軍設立前に各国の軍隊でそれぞれあった頃からのことである。エウロパ軍に上級大将という階級があり、これに就くのが貴族がほとんどであった為に嫌悪されたのだという意見もある。実際は単に連合各国の軍事形態がそうさせたのである。階級がなくそれ程特定の階級の為のポストを必要としていなかった為だ。
「これで一個軍の統率が可能です」
「一個軍のですか」
「非常に大きな存在になると思いますが」
「ティアマト級以上の」
「はい。人類史上今だかってない巨大なものとなるでしょう」
どうやら技術部はこれの開発にかなり自信を持っているようであった。総監であるグエンの言葉からそれが如実に感じられた。
「まさに連合軍をあらたに象徴するものとなります」
「期待していいようですね」
「はい」
グエンは頷いた。

## 第十五部第一章　放浪の果てにその十五

「むしろ存分に期待して下さい」
「わかりました。それでは」
「お願いします」
「そして長官」
今度はシャリアピンが声をかけてきた。
「何でしょうか」
「名前はどうしましょうか」
「名前ですか」
「ティアマト級は神々や英雄からとられていますが」
「それよりも上位のものでなければ格好がつきそうにもないですね」
「はい。そのうえで名付けて頂きたいのですが」
「わかりました」
そこまで聞いて頷いた。
「今すぐにというわけにはいきませんが考えておきます」
「そちらもお願いします」
「ではそれも」
「何の名前にするか。期待していますよ」
「はい」
「格好いい名前をね」
「何かプレッシャーがかかりますね」
「そうでしょうか」
「どんな名前にしようかと考えると。胃が痛くなります」
「そういえば長官は御身体は何処も悪くありませんね」
「ええ」
彼はグエンの言葉に頷いた。
「幸い。何処も悪くはありません」
「胃腸も大丈夫のようですね」

「ええ、まあ」
彼はそれに頷いた。
「おかげで何の障害もなく食事を楽しむことができています」
「それは何よりです」
「これ程の激務ですから胃腸を少し位は壊しても平気だと思うのですが」
「それはないですね」
彼は言った。
「昔から。ストレスで身体の何処かが悪くなったことはないです」
「羨ましい」
シャリアピンはそれを聞いて素直に感嘆の言葉を漏らした。
「私なぞ何かあると胃腸薬が必要になるのに」
「胃潰瘍ですか？」
「いえ、下痢の方です」
彼は答えた。
「すぐにね。お腹が緩くなるのですよ」
「それは災難ですね」
「まあもう慣れてきましたが」
苦笑しながら言う。
「それでも厄介なことには変わりありませんが」
「今はどうですか」
「今はないですね」
彼は言った。
「仕事の量は多いのですが。不思議と」
「それはよかった」
「国防省はストレスで悩んでいる者は少ないそうですよ」
グエンがここで言った。
「それは何故」
「長官のおかげですよ」
「私のですか」

「ええ。特に厳格なことやノルマ等は課せられませんね」
「はい」
「それのせいですよ。おかげで国防省は極めていい雰囲気で働くことができています」
「それはよかった」
「それに対して内務省はかなりストレスが溜まっているようですが」
「金長官が厳しいせいですね」
「はい」
「その通りです」
二人は同時に答えた。
「何かにつけて寸分の隙もないそうですから」
「しかも自分に対して最も厳しいそうで。反論もできないそうです」
「そうでしょうね」
八条はそれを聞いて頷いた。
「おかげで内務省は木の休まる暇もないそうです」
「セクハラで処分を受けた者もいるそうです」
「それは当然でしょう」
「若い女の子に声をかけただけでですよ。内務省の若い女の子に」
「それだけでですか」
「はい」
シャリアピンは頷いた。
「お茶でも一緒にどうかと声をかけたら。それが内相の耳に入って減給処分だとか」
「それはまた厳し過ぎますね」
「何でも声を掛けた方が所帯持ちだったのがよくなかったそうです」
「そんなことを言ったら世間の軟派男は皆捕まりますね」
「まあそこまではいかないでしょうが」
「あまりにも風紀が厳しいこともまた事実です」
「そこまでだったとは」
さしもの八条も閉口してしまった。

「流石と言うべきか何と言うべきか」
「あと内務省の者は糖尿病の危険も噂されていますしね」
「あ、それはわかります」
八条はそれを聞いてすぐに頷いた。
「他でもない長官の嗜好によってですね」
「別に強制でも何でもないですが長官はお酒よりも菓子やジュースをスタッフにも勧めているそうで」
「内務省に御菓子屋の出入りがかなり激しくなったそうです」
「そうでしょうね」
これは八条も大いに心当たりがあった。
「金内相の甘党ぶりは。凄いものです」
「お菓子だけでなく果物も相当お好きなようですが」
「スタッフへの差し入れはいつもお菓子か果物だそうですし」
厳格極まる金ではあるが決して吝嗇ではない。下の者には仕事も風紀も極めて厳しいものを求めるがそれ以外では公平でかつ気前がいいのである。その厳しさから殆どそう見られることはないのだが。

## 第十五部第一章　放浪の果てにその十六

「中には太り気味になって当の長官に健康の為運動を薦められた者もいるそうです」
「何か笑い話ですね」
「あの長官と同じだけお菓子や果物、ジュースを食べていると」
「普通の人間だったら確実に肥満するか糖尿病になりますよ。あれはもう異常です」
「私も最初見た時は驚きましたよ」
八条は率直に述べた。
「あれだけのお菓子を瞬く間にね。あれであんなに細いのが不思議でした」
「何でも太らない体質だそうで」
「いや、それでも」
「糖尿病にはあれでも気をつけておられるそうですね」
「そうなのですか」
「至って健康だそうですよ、御本人は」
「そしてまたお菓子を食べているとか」
「飲み物も凄いですからね、あの人は」
「麦茶や緑茶にもシロップをかなり入れられるそうで」
「流石にそれを見た時は我を失いました」
八条の驚きはお菓子や果物だけではなかったのだ。
「どちらにもシロップは入れないものだと思っていましたから」
「そうだったのですか」
シャリアピンはそれを聞いて目を少し丸くさせた。
「ええ、そうですが」
「ウクライナとかでは普通に入れますが」
「本当ですか！？」
「はい。ロシアンティーやそういった感じで」

彼は言った。紅茶にジャムを入れるのがロシアンティーだ。かつてはロシア人はそうした飲み方は実際にはしてはいなかったとも言われているがこの時代は違う。ロシアでも飲まれるし他の国々でも飲まれる。

「流石にジャムを入れたりはしませんけれど。普通に入れます」

「そうだったのですか」

「案外お茶だけで飲むのは日本だけのようですよ」

「中国も結構何か入れることが多いですからね」

「それは意外でした」

八条は二人の話を聞いて大いに頷いた。

「けれど私は紅茶にも何も入れないですからね」

「コーヒーには生クリームを入れられますね」

「はい、あれは好きです」

「ウィンナーコーヒーでしたね、確か」

コーヒーの上に生クリームを置くものである。オーストリアやドイツでよく飲まれた為にこの名がついたとも言われている。欧風の飲み物だが連合でもポピュラーな飲み物である。名前はそのまま使われている。意地の悪い者達はこのコーヒーを飲んで今オーストリアの貴族の誇りを奪ってやっただの貴族の誇りを飲み干しただの言う。おおむねお洒落な飲み物として知られている。

「その通りです」

「コーヒーはいいのですね」

「そのままですと苦いですから」

彼は答えた。

「あれにはクリーム等を入れます。ただ砂糖は」

「入れられないのですね」

これは人それぞれである。中には他の甘味料を入れる者もいる。砂糖にしろ白砂糖を入れる者もいれば黒砂糖を入れる者もいる。この辺りは千差万別というのが連合である。

「はい。健康の為に。ただ甘いものは嫌いではありません」

「わかりました」
「今度の戦いも」
グエンは話の締めに一言述べた。少し冗談めかした言葉を入れてきた。
「美味しいデザートの様に全てを上手く締め括りたいですね」
「はい」
この一言で話は終わった。戦いは佳境に入っていた。だがその結末はまだ誰にもわかってはいなかったのであった。それは神のみぞ知るものであった。未来というものは残念ながら神ならざる人にはわかりはしないものだからである。

## 第十五部第二章　助演者達の思惑その一

### 助演者達の思惑

連合とエウロパの戦いが集結に近付いていることはもう誰の目にも明らかなことであった。マウリアはそれを受けて双方の講和に動いていた。これはクリシュナータの指示によるものであった。

「さて」

彼は首相であるムルワーラ、そして外務省のスタッフと主席官邸の会議室において話をしていた。彼はムルワーラに対して顔を向けていた。

「双方に送った特使はどうかな」

「信頼していいと思います」

ムルワーラはまずこう言葉を返した。

「彼等ならばやってくれます」

「かなり信頼しているのだね」

「はい」

彼は自信に満ちた笑みで以って頷いた。

「エルール外相の判断が今まで狂ったことがあったでしょうか」

「そういえばないね」

これはクリシュナータも認めるとことであった。

「それを考えると信頼していいということかな」

「是非信頼されて下さい」

ムルワーラはまた言った。

「そしてこの講和を締結に導いたことにより人類社会における我等の評価は大きく上がるでしょう」

「全面衝突する二つの勢力を平和に導いた者として、だね」

「その通りです」

ムルワーラはニヤリと笑った。

「その平和を愛する心と外交手腕を」

「得られるものは大きいな」
「そして得られるものはそれだけではありません」
「連合からの見返りか」
「まあ連合もそうそう何かをおいそれとくれるわけではないでしょうが」
「ある程度は要求してもいいな」
「そうですね。何が宜しいと思われますか」
「それは色々だ」
どうやらまだ判断がつきかねているようであった。
「彼等の技術もいいが」
「後術供与ですか」
「だが最先端の技術は貰えないだろう」
「それは仕方のないことです」
ムルワーラは言った。
「まあそれでも得られるものは多いと思いますが」
「そうか」
「連合の技術が我々より上なのは事実ですからね。例え彼等にとって最先端でなくとも我々にとっては非常に高度な技術である場合もあるでしょう」
「特に惑星開発だな」
「あれは特に。彼等はその分野においては他の追随を許しません」
「うむ」
「医療やエネルギーの分野ではあまり差がないように思えますが」
「これは以前から技術供与や共同開発を進めているな」
「はい。ですが惑星開発の分野では。我々が大きく遅れをとっているというのは事実ですし」
「今まで開発に積極的に乗り出していなかったせいも大きいか」
「これからもそれは当分の間変わらないでしょうけれどね」
ここで当分の間と言ったが重要なのはマウリア人の時間に対する考え方である。一日や二日のタイムログは全く意に介さず歴史書に

おいては百年の違いも普通にある国である。その時間の概念はあまりにも悠久であった。すなわち当分といっても五百年程はある場合があるのである。そしてムルワーラの今の当分の間もそちらの方であった。
「考えればその間に追いつけばいいかも知れませんが」
「ははは、その頃には我々は別の人生になっているな」
「何、大した違いはありません」
彼等にとっては今の人生は輪廻の中の一つに過ぎないのだ。よく連合の者とマウリアの者が衝突する。連合の者が抗議するとマウリアの者はこう返すのである。
「何をそんなに怒っておられるのですか」
「怒る理由があるから怒るのだ」
連合の者はこう抗議する。
「怒る理由ですか」
「そうだ。それを何とかしろ」
「いえ、それには及びません」
マウリアの者は落ち着いた顔と態度でこう返す。
「何っ！？」
「それに何とかすることは不可能なのですから」
「不可能だと」
「はい。これは前世の巡り合わせのせいなのですから」
「何、前世」
ここで連合の者は呆然とする。
「何が言いたいんだ、あんたは」
「私と貴方は前世の巡り合わせが悪かった為こうなってしまったのですから」
マウリアの者は続ける。
「前世だと！？」
「はい。これは私達ではどうしようもないこと。気にされてはいけません」

「・・・・・・・・・」

連合の者は大抵これで沈黙してしまう。宗教観の違いと言ってしまえばそれまでだがマウリア人の独特の概念を示す話の一つではある。

## 第十五部第二章　助演者達の思惑その二

「この宇宙であるのは同じなのですから」
「ははは、そう言われればそうだな」
クリシュナータはそれを聞いて笑った。この宇宙というのは当然ながら今ある宇宙である。これもまたマウリア独特の考えであり今ある宇宙は創造神ブラフマーが創り、調和神ヴィシュヌが調和し、最後に破壊神シヴァが破壊するものである。その後にまた宇宙が創造されるのである。一つの宇宙は神々の一日のうちに創られ、そして破壊されるのである。これもまたマウリア人独特の考えであった。
「その頃我々はどういった人生かはわかりませんが」
「人であるという保障もない」
「その時にならなければわかりませんな。ですがその頃までに技術で連合に追いついてもいいです」
「では惑星開発はそれ程求めなくてもいいな」
「私はそう思います。今のこの時間でも」
「うむ」
この今の時間は流石に数年、そして数十年のスパンである。
「あまり積極的に開発を進める必要性は見受けられません。我等は既に土地も食糧も資源も満ち足りております」
「そうだな」
「一国としては人類社会で最大です。そうそう焦ることもありません」
今度は国力の視点から言った。
「少なくとも私はそう思います」
「今行われている惑星開発も順当だしな」
「ですから惑星開発に関しては今の普通の交流で学んでいってもよいと考えます。従ってこれは求める必要はないと考えます」
「わかった」

クリシュナータはそこまで聞いたうえで頷いた。
「では何を求めるか」
「軍事はどうでしょうか」
「軍事か」
「連合はこれにおいてもかなりの技術を持っておりますが」
「ふむ」
これを聞いてあらためて考え込んだ。
「今の戦いは彼等の技術力によるところも大きいのではないかと思いますが」
「技術力だけではないな」
クリシュナータは言った。
「確かにそれも大きいが」
「といいますと」
「やはり数と」
そこにもう一つ付け加えた。
「補給だ。彼等のロジスティック能力は驚くべきものがあると思わないか」
「言われてみれば」
ムルワーラも言われてそれに気付いた。
「六十億の大軍を動員したというのは人類史上はじめてのことだ」
「はい」
「それをつつがなく行っているというのは。やはり大きいな」
「そうですね」
スタッフの一人がここで頷いた。
「物量だけの問題ではありませんから」
「うむ」
「その他にも。それだけの兵力を一度に動員するとなるとかなりのものを要します。それを考えますと」
「連合のロジスティックシステムは非常に興味深いな」
「ではそれを学びますか」

「だがこれは軍事交流でも学べるな」
「それはそうですが」
これもどうやら重要な話ではないと思えた。
「ではどれを引き出させますか」
「我等の求めるものはどのみちブラックボックスにされているだろうしな」
「はい」
連合とて馬鹿ではない。それは容易に予想されることであった。これはもうマウリアの方でも見当がついていることであった。
「となるとあまり得られるものはないのかも知れない」
「ですがそれでは」
「それもわかっている。さて、どうするか」
「とりあえず貰えるものは貰っておきましょう」
ムルワーラは言った。
「通商で有利な条約、そして謝礼も貰っておかないと国民世論が許さないでしょう」
「それもある」
これもまたクリシュナータにとっては当然のことであった。しかし彼にとってはそれまでの技術の話の方が重要であった。しかし話をそちらに移すことにした。

## 第十五部第二章　助演者達の思惑その三

「しかしそれだけでは」
「駄目ですか」
「物足りないような気がするな」
「いえ、そうではないと思います」
しかしスタッフの一人がここでこう言ってきた。
「むっ」
「君は」
クリシュナータもムルワーラもそれに顔を向けた。見れば赤がかった黒髪の彫の深い顔立ちの男がそこにいた。目は黒く琥珀の様な光を放っていた。その目が実に印象的であった。
「君は」
「新しく任命した首相補佐官です」
ムルワーラが言った。
「彼がか」
「はい。セオニ＝ボパール。首相府のスタッフの一人です」
「何でも前の補佐官が国防省に出向になたので若手を任命したとは聞いていたが」
「それがこの彼です。若いですがかなり優秀な人材ですよ」
「いえ、そのような」
ボパールはその言葉には謙遜を示した。
「私なぞはまだまだ」
「いやいや、何を言う」
ムルワーラはそんな彼を笑顔で応じて言った。
「君は常に頼りにしているのだ。そんなことを言ってもらっては困る」
「はい」
「では遠慮なく言ってくれたまえ。この件に関して君はどう考える

かね」
「これは私個人の考えですが」
まずそう断ったうえで言う。
「やはり技術供与は肝心なものは得られないと思います」
「やはりそうか」
「また我々もどうしても欲しいという技術はないと思います。ですからこちらはあまり望むべきでもないと思います」
「では何を求めるか」
「講和の見返りとしての金銭的な援助、そして各通商条約を有利なものとすることでしょうか」
「ふむ」
クリシュナータはそれを聞いてまず考え込んだ。
「それで手打ちというわけか」
「それだけでは不足でしょうか」
「規模にもよると思う」
クリシュナータはまた言った。
「どれだけの規模になるか」
「中央政府、そして各国との間で行えばどうでしょうか」
「双方とか」
「はい。これならかなりのものになると思いますが」
「確かにな」
言われてみればその通りであった。連合は一国ではないのだ。中央政府という束ねる存在とは別個のような形で三百もの国家が存在する。巨大な連邦国家であったのだ。
「これですと我々が得られるものも普通に中央と条約を結ぶより遥かに実入りのいいものとなります」
「これは連合の諺だったか」
クリシュナータはふと言った。
「塵も積もれば山となる、ということか」
「まあそうした感じです」

ボパールもそれを認めた。
「それでどうでしょうか」
「首相はどう思うか」
クリシュナータはまずは即断を避けた。そしてムルワーラの意見も伺うことにした。
「非常によい案だと思います」
それが彼の答えであった。
「首相はそれでいいのだな」
「はい。大統領は如何でしょうか」
「私としてもそれで異論はない」
彼は言った。
「実入りがあるのならな。積極的にやっていこう」
「わかりました。それでは」
「うむ。だが各国と提携を結ぶとなると作業が厄介になるな」
「いや、案外そうはならないでしょう」
ボパールはまた言った。
「それはどうしてだね」
「この戦いを講和に導いたというだけで大きな恩ですから。我々が有利なように話は進みますと」
「恩か」
「はい。これ以上はないという位の大きな恩です」
「講和か」
「これにより連合の多くの者が無傷で戦場から帰ることができます。それだけでも大きいでしょう」
「そうだな。では」
「はい」
ボパールは頷いた。
「ではそれでいきましょう」
「よし」
クリシュナータは頷いた。これで全てが決定した。

「では連合から求めるものは以上とする。これでよいな」
「はっ」
一同それに応えた。
「それではまず講和の締結を優先させる。全てはそれからだ」
「はい」
「よいな。それで」
「わかりました。それでは」
「うむ」
こうして彼等は講和、そして講和の後に向けて動きはじめた。その動きは水面下であったが確実に動いていた。しかしそれはまだ他の者には知られてはいなかった。あくまで水面下の世界でのことであった。それを知ることができるのはまさに神だけであった。
ムルワーラはクリシュナータとの話が終わると自身の官邸に戻った。そして執務室でボパールと二人で話をしていた。

## 第十五部第二章　助演者達の思惑その四

「さっきは見事だった」
ムルワーラはこう言ってまずボパールを褒めた。
「中々求めるものが決まらなくて困っていたのだ」
「私も色々と考えたのですが」
ボパールは静かな声でこう述べた。
「これが最も有効かと思いまして」
「まさか連合の各国とも話をしようとはな。これは私も思いが及ばなかった」
「私もふと気付いたのです。連合という勢力の形態について」
「彼等はあくまで連邦国家というわけだな」
「はい」
彼はこう答えて頷いた。
「連邦国家ならではの特色ですから」
「確かにな」
「それに我が国は元々連合の各国とは条約を結んでおりますし。下地もあります」
「何かと結構あるものだな」
「ですから動き易くもあります」
「ふむ」
そこまで聞いて考えに入った。
「そうだな」
「何か」
「いや、気になることがある」
ムルワーラは考える目になっていた。
「それは一体」
「彼等とて愚かではない。それぞれ癖のある国も多い」
「はい」

「てこずる国もあるだろうな。それも調べておいた方がいいか」
「まず思いつくのはイスラエルですね」
「あそこか」
ムルワーラはその国の名を聞いてさらに目に思慮の色を入れた。
「はい。やはりあの国には警戒すべきかと」
「一筋縄ではいかないだろうな」
「そしてベトナムにタイ、フェニキア」
「癖のある国が続くな」
「そして日本です」
「あの国もか」
最後に日本を聞いてさらに考えが深くなった。
「伊藤首相はかなり強かな人物のようだな」
「連合においては色々と言われているようですね」
「女狐だったか」
「他にも女帝の懐刀とも言われています」
「ああ、そういえば今の日本の天皇は女性だったな」
「はい」
ボパールは応えた。ムルワーラはここで天皇とわざわざ銀河語で言った。素直にマウリア語で言うと皇帝になるのだがあえてこう言ったのである。
「若くて可愛らしい方だと聞いているが」
「それでも側にいる人物は厄介ではないとは限りません」
「それが彼女か」
「はい。彼女を相手にするには。生半可ではいかないかと」
「厄介な話だ」
「まあ日本やイスラエル、ベトナム等にはこちらも優れた人材を派遣しましょう」
「アメリカや中国、ロシアはいいのか」
「あの三国はいいと思います」
ボパールは連合の三大国は特にマークしていないようであった。

「どうせ力技しかありませんから」
「おいおい、それは言い過ぎではないか」
ムルワーラはその言葉を聞いて苦笑を禁じ得なかった。
「連合の中心となっている国家だぞ、いずれも」
これは日本も同じなのであるが何故かボパールはここでは日本と三国を分けてきた。
「それだからです」
彼は言った。
「連合の中心である大国だからこそ。彼等の外交は稚拙なものがあります」
今度は稚拙とまで言った。かなり辛辣であった。
「所謂井の中の蛙です」
「ふむ」
「連合内部でも反発を受けているような外交が我等に通用するでしょうか。ロシアとの宝石の摩擦を思い出して下さい」
「あれは我々にとっては楽な話だったな」
「そうだったでしょう」
ここでボパールの顔が変わった。会心の表情となった。だがその顔に笑みは浮かべてはいない。
ロシアとの宝石摩擦は実はマウリア側はロシアの手の内を全て読んでいたと言われている。そのうえで彼等は手を打ち、そして対策を講じてきたのであった。その結果双方納得のいく条件での妥協となったがこれもマウリア側は全て予測していたのであった。だがロシアは結局気付いてはいなかったのだ。自分が完全に読まれていたということに。
「確かにロシアの動きは実にわかり易い」
「はい」
「アメリカや中国も。これで我々が連合にいればかなり違っただろうがな」
この三国は何かと恫喝をすることでも知られている。連合内部で

は武力行使といったものはない。それで話が済む時代は二十一世紀で終わっている。むしろそれよりも経済による影響力行使の方が効果があるのである。連合は武力を用いた戦いはないがそうした経済、貿易による戦いが極めて熾烈なのである。

「でしょうね」

「それで連合内部の小国はよく合従連衡しているそうだな」

「はい」

「全ては彼等に対抗する為か。それで上手くいっているのかな」

「いく時もあればいかない時もあるようですね」

ボパールは答えた。

## 第十五部第二章　助演者達の思惑その五

「時と場合によるようです」
「そうか」
「ですが案外大国の方も苦戦しているようです」
「ふむ」
「先に述べさせてもらったように彼等の外交は稚拙なものがありますから」
「小回りが利かなくてそこを衝かれている、ということかな」
「一言で言うとそうですね」
彼はまた言った。
「それが為に連合はバランスがとれているという一面があります」
「調和というわけだな」
「ヴィシュヌ神の御加護です」
「いや、それはどうかな」
ムルワーラはヴィシュヌという名を聞いてそれには異を呈した。
「といいますと」
「連合にはヒンズー教徒は殆どいない筈だが」
「はい」
これは事実であった。インド系の者もいないわけではないが極めて少数である。他にはビジネスや留学等で来ているマウリア人ばかりである。多くの宗教を擁する連合においてヒンズー教は極めて少数派であった。バリ島の名残でインドネシアにいないわけではないがそれはやはり少数派であった。それ程多くはないのである。といってもマウリアの思想はやはり残ってはいる。
「ヴィシュヌ神は連合にはおられぬだろう」
「いえ、おられますよ」
ここで彼ははじめて笑った。
「ヴィシュヌ神はこの宇宙を司られているのですから」

「そうだったな」
「ですから。連合にもおられます」
その笑みは穏やかな笑みであった。まるでバラモンが神を説くような笑みであった。
「では連合もまたヴィシュヌ神の御加護があるというわけだな」
「そういうことになります」
「彼等が信仰していなくとも。神は偉大だな」
「そうですね。流石にサハラでこれは言えませんが」
「あそこはまた別だな」
「はい」
彼は頷いた。
「イスラムは。我々にとっては全くの別世界です」
「同じムスリムであっても連合のそれとはかなり違っているな」
「はい」
「アッラーを信仰しているということでは同じだが。その他は別のものであると言ってもいい」
「人や場所が変われば神も変わるものです」
「神の中は変わらなくともか」
「はい。神のお姿は一つではありません」
そして彼はヒンズー独特の宗教思想に入った。

## 第十五部第二章　助演者達の思惑その六

「ヴィシュヌ神やシヴァ神がそうであるように」
「言われてみればそうだな」
　これはムルワーラにもわかった。ヴィシュヌにしろシヴァにしろその姿を自由に変えることができるのである。ヴィシュヌは時として英雄クリシュナになり、時として勇敢な王子ラーマになる。そして仏陀にもなるとされているのである。人に生まれ変わることも普通なのである。これがヒンズーであった。
「しかしイスラムと我々は全く違う神だな」
「はい」
「これはどう説明できるかな」
「世界も、宇宙もまた一つではないということでしょう」
　彼はこう答えた。
「一つではないか」
「はい。我々の宇宙はヒンズーの宇宙です」
「うむ」
「連合にもそれはかかっております。ですがサハラの宇宙はサハラの宇宙なのです」
「全く違う世界だと言いたいのだな」
「はい」
　ボパールはまた頷いた。
「そういうことになります」
「成程、よくわかった」
　ムルワーラはそれを聞いて納得したように頷いた。
「そう言われるとわかり易いな」
「ええ」
　これはこの時代独特の考えであった。宇宙は決して一つではない、それがこの時代の人類の宗教における考えの一つであったのだ。

社会も世界も複雑に多層、そして並列に存在している。人類は長い思索を経てようやくその考えにまで辿り着いたということである。
それまでに実に多くの血が流れたがようやく克服されたと言ってよかった。人間は愚かな一面もあるが進歩するということの証左の一つであると言えた。だがこれはあくまで宗教や哲学での話であり、利害はまた別であった。そうした争いはやはり存在しているのであった。
「ではサハラはサハラでいいな」
「はい」
「連合は我等の世界も入っている。これで納得がいった」
「有り難うございます」
「そのうえで話を続けようか」
「はい」
こうして二人は話を戻した。
「あの三国にもやはり優れた人物を送るべきなのは事実です」
「うむ」
「交易等での重要度はやはり高いものがりますから」
「それはあるな」
ムルワーラはそれには同意した。
「地位も高い者を送るか」
「はい」
「だが三国にはタフ＝ネゴシエーターは必要ないか」
「ある程度の能力の持ち主でいいと思います」
「そして日本等には地位はある程度低くとも優れた者を」
「それで宜しいかと」
「だが日本は厄介だな」
ここでまた一つ頭を悩ませる問題が生じてきた。
「一体誰を送るべきか」
ムルワーラは腕を組んで考えはじめた。
「地位も高く、そしてとりわけ交渉に秀でた者だが」

「では私が行きましょうか」
「君がか」
「はい」
その声が強いものとなった。
「いいのか」
「はい。以前外務省にいたこともありますから」
そしてこう述べた。
「日本大使館にも赴任したことがあります。これはお話していたでしょうか」
「そういえばそうだったな」
「ですから日本はお任せ下さい。首相補佐官では地位的にもいいでしょう」
「そうだな」
「それではその時は私が行きます」
「うむ、頼むぞ」
「お任せ下さい」
これで日本へ行く者までもが決定した。マウリアは既に戦後に向けて動いてた。今戦いの先はこの調停者によって定められようとしていたのであった。

## 第十五部第二章　助演者達の思惑その七

連合とエウロパの戦いは次第に終末へと近付いていっていた。これを眺める者達の中には別のものを見ている者もいたのであった。

シャイターンは北方の総督府を解放した後そこへの難民の帰還、生活の確保に尽力を尽くしていた。すなわち内政に専念していたのである。

これはティムールにとって非常に大きな効果をもたらしていた。人口が急激に増加し、産業も復興してきたのである。総督府においてエウロパが苦心して築いたものが彼等のものとなったのである。それはティムールのもとの国力をも凌駕するものであり彼等はそれを得たことによりその力を飛躍的に増大させていた。そうして大国になろうとしていたのであった。

シャイターンは軍務よりも政治に専念していたのである。この日も数名の閣僚と個別に会談を行っていた。

豪奢な黒檀の机が置かれ絹のカーテンで飾られた部屋が彼の執務室であった。彼はここにその赤く華麗な軍服とマントに身を包み座っていた。そして目の前に立つ男と話をしていた。

「財政面はそれでいいな」

「はい」

細い顔に鋭い目を持った狐に似た顔の男がそれに頷いた。草色のスーツを着込み、何処か隠密めいた印象を与える。文官であろうが只の文官にはとても見えなかった。

「こちらもかなりの増加を見せています」

「財政が豊かになるのはよいことだ」

シャイターンは彼のその言葉を聞いて頷いた。

「その分だけ色々なことに資金を回せるからな」

「はい」

「だが管理は厳密にしておくように」

そして彼はこう言った。
「急激に豊かになるとそれに目が眩む者もいる」
「はい」
「懐に入れようとする不心得物が出る可能性もある。それは注意しておくようにな」
「わかりました」
草色のスーツの男はまた頷いた。
「それでは信頼できる者達に管理を任せましょう」
「頼むぞ」
シャイターンは言った。
「資金がなくては何もならないからな。政治においても」
「はい」
「何事においても黄金は必要だ。それがなくては戦争もできはしない」
そう言いながらその鋭利な目に何かを見ていた。
「ティムールも動きはしない。黄金は国家にとってまさに血だ」
「仰る通りです」
「血がなくては人は死ぬ。国家もまた然り」
「そしてその血は実に多様な使い方ができます」
「そうだ。それをどう使うかによって全てが決まる」
彼はあくまで現実を見据えて語っていた。
「全てがな。これからのこともだ」
「これからのことも、ですか」
「そうだ。先を見据えて動くようにな」
「わかりました」
スーツの男はまたシャイターンの言葉に頷いた。
「今はそれを内政に使う」
「はい」
「ここで一つ言っておくことがある」
彼はそう言って男を見据えた。

「一つのことが二つのもの、さらに多くのものを生み出すということを覚えておくようにな。利益は一つでは駄目だ」
「はい」
「さらに得たものをより増やしていく。それで政治は成り立っているのだ」
「拡大、そして更なる拡大ですか」
「そうだ」
彼は言った。
「内政もまた戦争だ。何かを生み出す為のな」
「では我々も戦場にいるということになりますな」
「そうだ。それは常に心に留めておけ」
その目がさらに鋭利になる。まるで剣の様に白く鋭い光を放っている。
「我々は常に戦場にいる。それを忘れるな」
「はい」
男は応えた。
「この世界に戦いのない場所はない。例え武器がそこになくとも」
その目には明らかに武器を含んでいた。
「戦いはある。そして戦争は常に勝利を収めなくてはならない」
「勝利を」
「そうだ。では行くがいい」
男に出陣するように言った。
「そして多くのものを掴め。よいな」
「はい」
彼はまた応えた。そして一礼した。
「ティムールの為に」
「ティムールの為に」
こうしてこの草色のスーツの男との会談は終わった。男が去ると暫くして別の若い男が部屋に入って来た。

## 第十五部第二章　助演者達の思惑その八

「大蔵大臣は帰られました」
「ああ」
シャイターンは彼の言葉に対して頷いた。
「会談はどの様なものでしたか」
「彼を出陣させた」
「出陣ですか」
「そうだ」
そしてまた頷いた。
「戦いにな。政治もまた戦いだ」
「はい」
「少なくともそう考えていなければどうにもならない。旧総督府はまだまだ人が少ない」
「その通りですね」
「これからどんどん戻って来るだろうが。その為の施設の保存や住居施設の整備もある。後はインフラか」
「インフラもかなり復興が進んでいます」
「それは何よりだ」
これは彼にとっては朗報であった。
「既に今戻って来ている者達の分は復興しております」
「そしてこれから戻って来る者達の分もだな」
「はい」
若者は応えた。
「それを思うと大変ですね」
「だがエウロパが築いたものがそのまま我々の手に入った」
「それは大きいですね」
「結果として彼等が攻め込む前よりも国力は上がっているな。これは朗報だ」

「後は難民達が順調に帰って来るだけですが」
「サハラにいる者達は順調に帰ってきているようだな」
「ええ、彼等は」
彼はそれにも頷いた。
「そしてマウリアにいた者達も。これは心配していない」
「心配といいますと」
若者はシャイターンの言葉に一抹の危惧が含まれていることに気付いた。
「それは一体何でしょうか」
「連合にいる者達だ」
「連合に」
「そうだ。彼等はどうなっているか」
「帰って来ている者もいますが」
若者はそれに応えた。
「も、か」
「はい」
「全てではないようだな」
「彼等は暫定的ではありますがあちらに市民権も持っていまして」
「それは聞いている」
「そして義勇軍として今の戦いに参加している者もいます。すぐにの帰還はあまりないようです」
「つまり順調ではないということだな」
「申し訳ありませんが」
「仕方のないことだ。謝る必要はない」
だが彼はそれはよしとした。
「問題は他にもある」
「他にも」
「それは情だ」
シャイターンはここで情という言葉を出してきた。それを口にしながらも目はそれを見てはいなかった。

「情ですか」
「そうだ。長い間そこに住んでいるとその土地に愛着が出て来るな」
「ええ、まあ」
「それによりここに帰らない者が出て来る可能性もなるな」
「サハラに生まれたのにですか」
「こればかりはどうしようもない」
シャイターンはそう言ってまずは突き放した。
「人の感情というものはな。人ではどうしようもないのだ」
「それもまたアッラーの思し召しというわけですか」
「そういうことだ」
そしてこう述べた。
「だからそうした者にはあえて強制はしない」
「はい」
「戻って来た者だけのことを考えよう。よいな」
「わかりました」
「そしてだ」
彼はまた言った。
「難民達がどれだけ戻って来るのか。見通しは立っているか」
「はい」
若者はそれにも答えた。
「全体の九割以上は。少なくとも見込めます」
「九割以上か」
シャイターンはそれを聞いて顎に自分の手を当てて考えはじめた。
「全てではないのだな」
「流石にそれは有り得ません」
若者は率直に述べた。
「それに数自体が大きく変わっていますし」
「長い間だったからな」
彼はそれを受けて呟いた。
「死んだり子供が生まれたりするか」

「それがありまして。数はかえって増えています」
「それで大きく変わったのだな」
「その通りです」
「全体的には増えているのか。それとも減っているのか」
「増えております」
若者はまた答えた。
「それも結構。マルン＝バンプール大蔵相もそれを考えて予算を編成されています」
「今さっきの話ではそんなのは出なかったが」
「仰っていませんでしたか」
「ああ」
シャイターンは往った。
「初耳だ。完全にな」
「そうでしたか」
「だがそれを既に見越して考えているのなら構わない」
彼はそれはよしとした。
「しかし問題は帰って来ない者達のことだ」
「彼等のことですか」
「彼等はどの辺りの者達だ。連合に行った者達か」
「仰る通りです」
「やはりな」
彼はそれを聞いてまずは頷いた。

## 第十五部第二章　助演者達の思惑その九

「それ程連合というのは居心地がよいのか」
「噂によると既に彼等の新国家建設の案まで出ているそうです」
「新国家の」
「はい。もう場所の選定まで話が進んでいるそうです」
「また早いな」
シャイターンはそれを聞いて考える目をした。
「もうそこまで話がいっているのか」
「既に彼等の各国首脳会議まで話がいっているそうです」
「そうか。そこまでいくともうすぐだな」
シャイターンはそれを聞いてまた顎に手を当てた。連合の政治システムについては彼もよく知っていた。中央政府は二院制であるがその上に各国首脳会議が存在する。それにより実質的には三院制となっているのである。
「そして彼等はそこに国を作ってどうするつもりなのだ」
シャイターンは顎から手を離して若者に問うた。
「どういった国家を作るつもりなのか。気になるな」
「そこまではまだわかりませんが」
彼はいささか首を傾げながらもこう答えた。
「ですが新国家を建設することは事実のようです。今わかっているのはそこまでです」
「国家建設といっても人口は少ないのではないのか」
シャイターンの疑問はまだあった。彼はそこにも言及してきた。
「精々。十億程か」
「はい、それ程です」
若者も答えた。
「おおよそ。連合においてはそれでは小国に過ぎませんが」
「そうだな」

連合は三兆の人口を誇る巨大勢力である。三百の国家がその中にあり当然国力の大小が存在する。そこには千八百億の人口を擁する中国や十億の人口をやっと持つ小国も多数存在する。大国と小国の力の差はこの時代にあっても歴然として存在しているのである。これもまた現実であった。
「ですがそれでも国家を建設するようです」
「帰るべき場所があるのにか」
「既にサハラは彼等にとって故郷ではなくなっているということでしょう」
その言葉にはいささか寂寥感が感じられた。
「連合に帰るべき場所を見つけた。それだけです」
「それだけか」
「はい。言葉で申し上げますと」
その言葉の中にはやはり何か寂しいものがあった。
「連合が彼等の家になってしまったのです」
「生活基盤がそこに移ってしまっては仕方がないか」
シャイターンはそこまで聞くとポツリとそう呟いた。
「こればかりは我々にはどうしようもない。全くな」
「はい」
若者もその言葉に頷いた。
「そうした意味で。連合に負けたな」
「負けましたか」
「そうだ。それも完敗だ」
この場合は政治的名敗北という意味である。
「人はただ故郷だけに帰りたいとは限らないということだ。それもまた真理だったのだ」
「真理ですか」
「この世で絶対の真理はあくまでアッラーの御教えだけだ。だがそれ以外の事柄には全て多くの真理がある」
シャイターンはいささか哲学めいたことを口にした。

「多くのですか」
「そうだ。そうした視点から見れば彼等は我々とはまた別の真理を選んだということだ。結局はそうなる」
「そうなりますか」
「それをどうにかすることもできはしない。諦めよう」
「わかりました」
「一割未満なら取り返しもつく」
純粋の国力の観点からもこう見ていた。こうした冷徹さもまた彼の特徴の一つであった。
「今後はその取り返しのことを考えていく」
「確かに一割未満なら容易ですね」
「そうだ」
シャイターンはまた頷いた。
「妻は四人まで持ってもよい。まだ我々は生まれる命は基本的には止めはしない」
イスラムの教えであった。
「人口を増やすのは容易だな」
「それですぐに取り戻しがききますね」
「長期的にはな。さしあたっては短期的にだが」
「何かありますか」
「新たな産業を振興させよう」
シャイターンは言った。
「幾つかプランも考えている。それについて話をしたいのだが」
「わかりました」
若者はそれに頷いた。
「それでは産業大臣を御呼びします」
「うむ、頼む」
シャイターンは若者に対してこう言葉を返した。それからまた言った。
「では宜しく頼むぞ。そしてだ」

「そして」
「一通り済んだらまた動く。今度の敵は」
「今度の敵は」
「東だ。よいな」
「わかりました」
若者は最後に頷いた。一礼してその場を後にした。その後でシャイターンの執務室を後にした。そのまま音を立てることのない不思議な足取りで廊下を進んでいた。
「シャイターン補佐官」
そんな彼を後ろから呼び止める声がした。

## 第十五部第二章　助演者達の思惑その十

「はい」
彼はそれを受けて後ろを振り向いた。見れば彼より前にシャイターンと話をしていた草色のスーツの男であった。ティムール大蔵大臣であるマルン＝バンプールである。
「大蔵相」
「主席と話をしていたのだね」
「ええ」
この若者、ハルツーム＝シャイターンは彼の言葉に頷いた。このシャイターンの名前からもわかるように彼もまたシャイターン家の者であることがわかる。彼はシャイターンの従弟にあたる。シャイターンの父であるムシュタの妹の子である。
「そうか」
バンプールはここで一旦辺りを見回した。そしてそれからハルツームに顔を戻して言った。
「ここで立ち話も何だ。場所を移すか」
「それでは私の執務室ではどうでしょうか」
「お邪魔していいかね」
「ええ。ただ少しお待ち下さい」
「仕事かね」
「はい。産業大臣を主席のところに御呼びしなくてはいけませんので。その間はお待ち下さい」
「わかった。それではまた後で」
「はい」
こうして彼等は一旦別れた。その後でハルツームの執務室にて落ち合うこととなった。バンプールがわざわざ彼の執務室に出向く形となった。
「ようこそ」

「うん」
軽い挨拶の後で話がはじまった。二人はソファーに腰をかけ向かい合った。まずはバンプールが口を開いた。
「話というのは他でもない」
「はい」
「予算のことだ。これから主席にもお話しようと思っているが」
「何かあるのですか」
「思ったより増えそうなのだ」
「増えそう」
それを聞いたハルツームの顔が動いた。
「それは意外ですね」
「意外か」
「ええ、まあ」
そして彼はそれに頷いた。
「普通予算というものは。どうしても不足するものですから」
「ははは、確かにな」
バンプールはそれを聞いて笑った。
「それを何とかするのが大蔵大臣の仕事だからな」
この言葉は真実であった。予算というものは常に足りないものである。潤沢にあるように見えても実際に編成してみたりすると足りないということが常である。それはこのティムールにおいても同じである。この国は財政面では困ってはいないと言われているがそれでもこうなのである。それだけ予算というものは難しいものなのである。
「そして多い理由は」
「彼等が置いていったものだ」
「彼等」
「エウロパの者達のことだよ。実は彼等が置いていったインフラや設備が思ったよりよくてね」
「はい」

「その分を整備する予算が浮いたのだよ。大蔵省としてもよい話だ」
「ですね」
「そしてその浮いた分をどうするか、なのだ。問題は」
「そこですか」
「君はどう考えるかね。この分を何処に回すべきか」
「普通なら軍事費に回すべきですが」
「私はそれはどうかと思うのだが」
「何故でしょうか」
「今我々は表向きは平和政策を執っている」
「はい」
あくまで表向きである。裏では各国に工作員を送り込んではいてもそれが表面化しなければ平和政策を執っているということになるのである。
「だから軍事費に回すのはどうかと思うのだが」
「機密維持費や臨時費としては駄目でしょうか」
「それでも勘がいい者には気付かれるだろう」
「まあそれはそうですが」
「それにまだ戦いを進める時ではない。今はいいと思う」
「ではどうされるおつもりですか」
「教育費と社会保障費に回してはどうかと思うのだが」
「そちらにですか」
「うむ。それはどう思うかな。君の率直な意見を聞きたいのだが」
「そうですね」
問われた彼は一呼吸置いてから答えた。
「意外といえば意外ですが」
「うむ」
「いい案だと思います。それでいいと思います」
「君もそう思うか」
バンプールはそれを聞いて笑みを浮かべた。鋭い顔が微かではあるがほころぶ。

「建国以来教育費と社会保障費に充てられる額は決して大きなものではなかったですし」
「そうだろう。それもあって考えたのだ」
彼は応えた。
「予算ができたのならば回すべきです。教育省や厚生省にもお話をして」
「うむ」
「今ここでそれ等を固めていきましょう。そうした意味で賛成させて頂きます」
「理解してもらえたようだな」
「ですが有効にやっていきたいですね」
「それは当然だ」
ただ予算を回して終わりというわけではないのである。資金がなければ何にもならないがそれを有効に使わなくては何にもならないのである。それは彼等もよくわかっていた。

## 第十五部第二章　助演者達の思惑その十一

「教師の質の向上を図り、そして設備の充実ですか」
「特に教師の質は重要だな」
「はい」
　これは言うのは易しであるが実際に行うには非常に難しいことであった。教師というのは一朝一夕でできるものではない。一人育て上げるまでにかなりの時間と労力、そしてここでいう資金が必要なのである。それでもまともな教師ができるとは限らない。これは連合やエウロパにおいても問題になっていることである。
　思想や人格に非常に問題のある教師が出てしまうことがままあるのである。ある宗教に入れ込み原理主義を生徒に叩き込む教師やそもそも人格に障害がある教師などである。そうした教師は結局何処にでもいるものではあるがそのような教師に教えられる生徒の方こそいい迷惑である。だからこそできるだけそうした教師を減らし、いなくなるようにすることが重要なのである。
「問題のある教師をまずマークするか」
「教育相には私からお話しておきます。主席もお話すれば理解して頂けるでしょう」
「そして大学からのカリキュラムの見直しだな」
「同時に今いる教師の教育の徹底」
　教師だからといって教育を受けないわけではないのだ。むしろ教師こそそうした教育を徹底的に受けなくてはならないのである。
「現場にも目を行き届かせてな。チェックが働らかなくてはどうにもならない」
「それへの資金もですね」
「何か社会保障費よりも予算がいきそうだな」
「まあそれは仕方ないです」
　ハルツームはそれをよしとした。

「元々教育にかける費用は惜しんではならないものですから」
「そうだな」
「問題はそれをどう有効に使うかなのです」
「教科書はどうかな」
「それに関しては私は目を通してはいませんが」
そう断ったうえで述べた。
「一応チェックはされるべきでしょうね」
「そうか」
「その分の予算も回しておかなくてはならないでしょう」
「やはり教育費に重点を置いていくか」
「今回はそれでいきますか」
「そうだな。ではこれでおおよそは決まった」
「はい」
「教育費に七割程回したい。社会保障費は三割だ」
「それではそれで」
「うむ」
こうして予算の配分も決定された。二人の話はこれで一応は終わりをみた。だがそれで完全に終わりではなかった。
「ところでだ」
「何でしょうか」
バンプールはあらためて口を開いた。そしてハルツームはそれに応えてきた。
「先程機密維持費と秘密費のことが出たが」
「それが何か」
「そちらでのことはどうなっているかな。私は保安情報部のことはよく知らなくてな」
「イブヌル＝アブサーファ大将の管轄でしたね」
「そう、彼だ。確かあそこは主席府直属だったな」
「はい」
「あそこにかなりの部分が回されるのだが」

「私も詳しい使われ方は知りませんが」
「補佐官の君でもか」
「はい。あそこはその殆どが謎に包まれた組織です」
ハルツームの声が剣呑なものを含んできた。
「ですから。どういったものか私にもわかりません」
「そうなのか」
「ただ、ここにおいてすらおおっぴらには言えないようなことに予算が回されているのは事実でしょう」
「工作機関だからか」
「はい。ただそれは我々や国民には向けられてはいません」
そうした意味でかってのゲシュタポやＫＧＢといった二十世紀の独裁国家の秘密警察とは違った組織となってはいる。なおこういった組織のもとはフランス革命のジャコバン派にある。フーシェが作り上げたと言われている。
「そうか」
「あくまで外に対してです。例えば」
「ハサン、そして」
「はい」
バンプールの声にも剣呑さが含まれてきた。
「オムダーマンか。例え同盟関係にはあっても」
「それが政治ですから」
ここでハルツームの声は淡々としたものとなった。
「当然ではないでしょうか」
「そう言ってしまえばそれまでだな」
「そういうことです、結局は」
剣呑さこそ消えてはいたがそれでもその淡々とした様子には毒が含まれてはいた。
「他国、しかも同じサハラにある以上いずれは」
「雌雄を決するということか」
「ですね」

シビアな視点であった。だがそれだからこそ多くのものを冷徹に見ていた。
「その時の為に何かと手を打っておいてもいいでしょう」
「何かと、か」
「はい」
ハルツームの声に剣が宿った。
「主席はそこまで考えておられますが」
「流石と言うべきか」
賞賛の言葉であったがそこには敬愛よりもむしろ畏怖があった。
「それではそちらは主席、そしてアブサーファ大将の管轄ということだな」
「そうですね。私も迂闊には入られないものですし」
一族の者であっても、であった。シャイターン家の者であっても入ることのできない場所もあるということであった。
「ではとりあえずそこはいい」
「はい」
「我々の出来る場所で出来ることをするとしよう」
「ですね」
こうして話は終わった。そしてそれぞれの仕事に戻った。バンプールは大蔵省に、ハルツームはシャイターンのもとへと向かった。ティムールもまた独自の動きを水面下で行っていたのであった。

## 第十五部第二章　助演者達の思惑その十二

それは影の世界でもであった。ハサンのとある街の酒場に一人の男がいた。

黒い髪と瞳、そして赤い肌から彼がサハラの者であるとわかる。顔は細長く卵に似た形をしている。黒い髪は縮れておりそれをショートにしている。顔立ちは整っていると言えた。だがその黒い琥珀の様な目から発せられる光は鋭く、強いものであった。まるで砂漠の中において獲物を狙う砂漠狼のようであった。サハラ各国にいる狼の亜種である。サハラにおいては誇り高い生物とされている。

服はごく普通の軽い服装であった。身軽ですぐ動けるものであった。彼はそれを着て一人で四人掛けのテーブルに座り酒を飲んでいた。酒はビールであった。

何も語りはしない。ただ黙って酒を飲んでいる。そんな彼のところに一人やって来た。

見れば如何にもといった感じの柄の悪そうな男であった。服装もそうした感じだ。こうした店には悪い意味でよく似合う男であった。

彼はビールを飲んでいるその男の側にまで来るとニヤリと笑った。笑った後で声をかけてきた。

「どうも」

「うむ」

男はそれに応えて顔をゆっくりとあげた。それから男を見据えた。

「どうだったか」

「上手くいきました」

どうやら今ビールを飲んでいる男の方が上位にあるようであった。柄の悪い男は敬語でもって返していた。態度も違っていた。それはそうした筋の男というよりは軍人のそれに近かった。

「そうか」

男はビールを飲む手を止めて静かに頷いた。そして言った。

「まずは一杯やるか」
「悪くないですね」
彼はそれに頷いて男の向かい側に座った。そしてメニューを注文した。
程なくしてビールが運ばれてくる。だがそれは男が飲んでいる白ビールではなく黒ビールであった。実に対象的であった。
「白と黒か」
「俺達には相応しいと思いますが」
彼はそう応えてまたニヤリと笑った。
「ヤクザな世界の住人にはね」
「ヤクザか」
男はそれを聞いてポツリと呟いた。だがその表情は全く変わってはいなかった。
「確かにな」
「そうでしょう」
「我々の世界はな。実にそうだ」
「まあ好きでやってるんですけどね」
彼は笑いながらまた言った。
「まあ今は一杯やりましょう。とりあえずビールで」
「ワインにはしないのか」
「生憎酒には弱くて」
彼は笑ったまま言った。
「いざという時にね。困りますから」
「そうか」
「まあ一杯やってから行きましょう」
「そうだな」
男は淡々とした様子で答える。
「こちらはもうすぐ飲み終わる」
「こっちもですよ」
「早いな」

「酒には弱くても飲むのは早いんですよ」
「それはいいことだ」
やはり淡々とした調子で言う。
「何事も早いのがいい」
「はい」
「いざという時は何時来るかわからないからな」
その言葉が終わると同時にもう黒ビールは空となっていた。それを見届けると男は席を立った。

## 第十五部第二章　助演者達の思惑その十三

「行くか」
「はい」
彼も頷いた。運転手に金を払いその店を後にした。
二人はそのままタクシーを拾って複雑な道を通ってとある場所で降りた。それから裏道に入る。そしてその裏道にあった古い家に入るのであった。
先頭を進む男がまず家の扉をノックした。すると暫くして扉の向こうから声がしてきた。
「赤い月」
その声はふと呟いた。
「青い星」
男はそれに対してこう返した。すると扉がゆっくりと開いた。
「お待ちしていました」
「うむ」
こうして二人はその家の中に入った。家の中もまた古いものであった。彼等はその中を進んで行った。
階段を降り地下に入る。その最後にあった地下室にはもう何人かが集まっていた。そして男が部屋に入ったのを見ると一斉に敬礼をした。
「上手くいったようだな」
男は敬礼をした者達に対してこう言った。薄い灯りの中に様々な服装の者達がいる。その中には女もいる。一見すればどういった者達かわかりかねる。ただ、皆鋭い目を持っていた。それで彼等が只者ではないことだけはわかる。だがそれだけであった。
「はい」
彼等を代表して一人が応えた。
「今回も」

「既にネットでは話題になっております」
その中の一人がテーブルに置かれたノートパソコンを覗きながら言った。
「ザーヒダン大将暗殺さる、とね」
「狙撃された模様、即死だったとか」
「それはいいことだ」
男はそれを聞いて笑いもせずにこう言った。
「作戦は成功したということだ」
「もう一つの作戦も成功しました」
女が言った。
「ほう」
「一服盛ることができました、彼に」
「では数日後か、彼が急死するのは」
「はい」
「突如奇病に襲われ急死。全てはそれで終わる」
「左様で」
「便利なものだな。急死という言葉は」
実は『急死』という言葉には裏がある場合が多い。突如として健康な人間が死んだりする場合はその死んだ者が重要人物である場合は事故や暗殺といったことがままあるのだ。
歴史において酒を飲んだ後で急に死んだり朝起きれば事切れていたことは枚挙に暇がない。極端な例では激しい運動の後で生水を飲んで急死したということもある。
無論食あたりや身体を急に壊した、本当に事故だったということも多いだろう。しかしそんな中でも無慮の死というものは裏があるケースがままあるのである。
そうした場合は死んだ者がいなくなり誰が得をするのか考えてみるといい。得をした者が犯人である場合が多い。
あくまで例えであるが徳川家康にしろ実際には大阪の陣を起こさずともよかったのだ。豊臣秀頼と淀君が『急死』すればそれで話は

かなり上手くいくのだ。秀頼の遺児は『幼少によりはしかで亡くなった』こうすればよいだけだったのだ。無論家康は実際に豊臣家を滅ぼしている。なお徳川吉宗の場合は彼の前にいる紀州藩や将軍への継承者達が『急死』していってなっている。そこに『何が』あったのかは歴史書は何も語りはしない。しかしそこに『何かが』あったのではと推測することは可能なのである。

シャイターンも同じであった。実際に彼の周りでは『急死』が実に多いことで知られているのである。

「全てはそれで終わります。事の真相がわからぬ限りは」

「常にそうだ」

男はそう言いながら空いている席に座った。それを見て周りの者達も座った。それから彼等はようやくといった感じで話を再開した。

## 第十五部第二章　助演者達の思惑その十四

「今までこうして死んだ者は多いだろうな」
「真相は藪の中、ということはよくあることです」
先程男が飲んでいた場所にやって来た彼が言った。面白そうに笑っている。
「ですが本当のことがわからない限りはね。問題はありません」
「そう。わからない限りは」
男はまた言った。
「何をしてもいいのだ。この世界では」
「はい」
一同その言葉に頷く。
「世界は全てアッラーの御前にある」
男はここでアッラーの名を出してきた。
「アッラーがサハラが一つになることを望んでおられるのは言うまでもないな」
「その通りです」
これは人類が銀河に進出する時から言われていた。いずれアラブ、そしてサハラの者達は一つになる運命だと。それが何時なのか、可能なのかを明言できる者はいなかったがそれは預言にもあるとされてきた。これはムスリム達にとっては絶対のこととなっていたのであった。
「その為には。光ばかりを使うわけにもいくまい」
「だからこそ我々が今こうしてここにいる、ということですね」
「そういうことになる」
男はまた言った。
「これもまたアッラーの思し召しだ」
「サハラを一つにする為の」
「その為に流れる血は出来るだけ少ない方がいい」

「だからこそ我々がいるということになりますね」
「暗殺にしろ何にしろそれで無益な血が避けられるならそれでよい」
男の声は冷徹なものであった。
「違うか。我々が間違っているというのならアッラーが我々を裁かれる」
「はい」
「それだけだ。だから今の仕事をやっていくだけだ。それにこれもまた戦争だ」
「戦争」
「ただ単に艦に乗り込んで銀河で戦うだけではないということだ」
「こうした特殊任務もですか」
「一言で言えばな。だから気にすることもない。我々はそうした意味でジハードを戦っている」
「ジハードを」
それを聞くと背筋が立った。ムスリムならではであった。
「そうだ。これもまたジハードだ。いいな」
「わかりました」
まるで催眠術の様であった。皆頷く。
「では次の仕事に取り掛かろう」
「はい」
そして一同は再び話に入った。まずは男が口を開いた。
「次の作戦だが」
「はい」
皆彼の言葉に注視する。
「要人の暗殺はここではあらかた終わった」
「ではいよいよ首都に入りますか」
「いや、それにはまだ早い」
だが彼はそれは否定した。
「ここでもまだやるべきことがある」
「それは一体」

「破壊工作だ」
彼は言った。
「軍事施設にテロ活動を行なう。いいな」
「わかりました。では早速準備を」
「その際だが」
「何かありますか」
「協力者達がいるのだ」
「協力者」
それを聞いて皆動きを止めた。
「それは一体」
「何者でしょうか」
「市民団体だ」
彼はこう答えた。
「市民団体」
「そうだ。今のハサン政府のあり方に疑問を持つ者達だ。建前は市民団体となってはいるがな」
「その実情は違うと」
「以前より我々が資金援助をしてきた。その実態は反政府組織だ」
「そうだったのですか」
「彼等の目的はな」
「はい」
「建前は今のハサン政府の富者を優遇し、貧者を切り捨てる弱者切捨て政策に対する反対組織となっている」
だがそれはどうやらあくまで建前だけのようであった。建前、すなわち表看板とその実態が全く異なるということは実際に多くあるものである。
「だが実は違う」
「自分達の主張を押し通したいだけだと」
「そうだ。そしてその主張も実は」
「権力の座、ですか」

「そういうことになる。流石に話がわかるな」
「こういう世界にいますとね」
彼等の中の一人が言った。
「嫌でもわかりますよ」
「ですね。ここからは普段は見られないものが見えますから」
別の者も言った。
「そういった連中のこともね。まあ内部にいればすぐに処分するべきですが」
「他の国にいますと。これ程利用し易い存在もありません」
「そういうことだな」
男もそれに頷いた。

## 第十五部第二章　助演者達の思惑その十五

「ではいいな」
「はい」
一同再び頷いた。
「では次の作戦はまずは彼等との接触からはじめる」
「わかりました」
「攻撃対象は電子、そして通信施設だ」
「そちらですか」
「武器庫もいいがな」
男はここで別の攻撃対象も指し示した。
「ですがそういった場所は」
「守りが固い、そう言いたいのだな」
「はい」
「今回はそういった場所は外す。別の機会だ」
「左様ですか」
「今はまだ破壊工作は陽動に過ぎない」
「本格的に行うのは我が国と彼等の戦いが本格化してからですか」
「そういうことになる。ハサンは大国だ」
そう語る彼の顔が引き締まったものとなった。
「国力差で言えばティムールとはかなり離れているな」
「ええ、まあ」
「ハサンの方が遥かに上です。残念ながら」
「だからこそだ」
彼はまた言った。
「工作は頃合いを見て行わなければならない。それも効果的にな」
「効果的に」
「要人の暗殺は今のままでいい」
彼はそれはよしとした。

「だが。破壊工作はまだ本格的に行う時ではないのだ」
「わかりました」
「陽動でいい。そしてその後の騒ぎの間に」
「我等は別の場所に移動する」
「都合よく身代わりもいるしな」
「その市民団体ですか」
「これが彼等の最も役立つところだ」
男はここではじめて笑った。だがその笑みは剣呑で邪悪ささえ感じられる笑みであった。
「スケープゴートだな、つまりは」
「まあそれがいいでしょうね」
「ですね」
他の者の声も実に冷やかな者であった。
「自分達の欲望の為に他国の工作に加担する者なぞ」
「味方になったとしても信じられるものではありません」
「そういうことだ」
男の言葉もそれに同意した。
「ハサンを裏切る者は何時我々を裏切ってもおかしくはない」
「はい」
「そしてサハラをもな。エウロパの侵攻の時のことを忘れるな」
「あの時ですか」
「そうだ。何があった」
「それはここにいる全ての者が知っていることだと思いますが」
あの柄の悪い服装の男がここでこう言った。
「違いますか」
「いや」
男はその言葉には首を横に振った。
「当然知っている筈だ。だが確かめたくてな」
「そういうことでしたか」
皆それに頷いた。かってのエウロパのサハラ北方侵攻、さらに総

督府設立は単に彼等の武力よってのみ行われたことではないのである。
そこには工作もあった。エウロパは事前に各国の高官や提督達を買収、または秘密を握って脅迫し彼等から情報を得たり利敵行為を確約させた。そして彼等の協力を得てサハラに侵攻を開始したのである。
その後で彼等はエウロパ政府に『友人』として迎えられた。だがサハラからは『裏切者』として扱われた。これはサハラから見れば当然のことであり彼等はサハラの裏切者として名を残している。
「連中もあの者達と同じだ」
「ですね」
「決して信用することはできない。そして用が済めば」
「これですね」
一人が左手を手刀にして横に掻き切る動作をした。
「そうだ。ハサンがしなければどのみちいずれ我等が連中を始末する」
男は冷徹極まる声でこう述べた。
「罪状は・・・・・・幾らでもあるな」
「ええ」
「連中が気付いていないだけで」
「人間というのは面白いものだ。他人の姿は見えていても自分のことは見えてはいない」
ここではシニカルな言葉になった。だがそこには色はなかった。
「そうした意味で面白いな」
何の感情もない言葉であった。そこには侮蔑も嘲笑もなかった。淡々としたものであった。
「そうした連中は見つけ出しておいてくれ」
「わかりました」
「当然我々の身分は表向きは隠してな」
「裏では教える、と」

「我々がこの国を併呑した時の見返りを保障することになるからな」
当然それは嘘である。こうした世界においては空手形など幾らでもあるものだ。
「所詮は嘘だがな。騙される方が悪い」
「全くです」
「ではそういうことで」
「ハサン政府には気付かれないように行動するだけだな。後は」
「はい」
「では明日から徐々に作戦を進めていくぞ」
「了解」
一同返礼をする。
「総指揮は私が執る」
男はまた言った。
「このイブヌル＝アブサーファがな」
「わかりました。それでは」
「うむ」
ティムールの暗躍は剣を交えていない時でも行われていた。それは不気味な影であった。しかしその影の動きもまた世界の動きの一つであることは事実であった。戦いは艦艇や戦車を使ったものだけではないのであるから。

## 第十五部第二章　助演者達の思惑その十六

アッディーンもまた動いていた。だが彼は影の面での動きはとってはいなかった。

その日々を執務室、そして会議室で過ごしていた。軍政に専念していたのである。

「軍政というのも疲れるものだな」

彼はその日の午前の会議を終えた後副大統領府のカフェでこう呟いた。その手にはコーヒーとチョコレートケーキがある。ケーキは無論エウロパ風ではなく連合風の派手な装飾のケーキであった。それと砂糖を入れないブラックコーヒーを飲みながらハラス大将と話をしていた。彼はもう完全にオムダーマンの将となっていた。

「会議とデスクワークばかりだ。これが平和というものかな」

「そうですね」

ハラスはまずはその言葉に頷いた。

「ただ。これはまた次の戦争への準備です」

「それはわかる」

アッディーンはコーヒーを一口飲んだ後で応えた。そしてカップを置いて言った。

「次はハサンとの戦いになるかな」

「地理的に言いますとそうなるかと」

ハラスは答えた。ここには誰もいないからこそ言えることであった。盗聴器等のチェックは欠かしていない。

「ただ、ハサンは大国です」

「うむ」

「今までの敵とは違います。南方での戦いとはまた違ったものとなるでしょう」

「南方か」

アッディーンはそれを聞いてふと思い出したことがあった。

「あの時は迷路の様な地形に悩まされたな」
「はい」
「ゲリラ戦術にも。慎重に進軍したものだ」
「その介あって戦いを有利に進められましたね」
「ハサンはゲリラ戦術を使うと思うか」
「先程の会議でも出ましたが」
午前の会議はハサン軍に関する会議であった。その席においてハサン軍の戦略戦術に関して詳細な意見が交あわされたのであった。
「彼等は大国です。サハラで第一の」
まずはそこから話をはじめた。
「その為兵もまた多いです」
「うむ」
「ですからゲリラ戦術よりは正攻法で以って来るでしょう」
「正攻法か」
「はい。おそらく正面からの戦いになる筈です」
「だがゲリラ戦術への備えもしておこう」
アッディーンはここでは慎重案を述べた。
「敵も愚かではない。こちらの虚を衝こうと考えているだろう」
「はい」
「あらゆることに備えておかなくてはな。いざという時困る」
「ですね」
ハサンはアッディーンのその言葉に対して頷いた。
「普通はそうなのです」
その言葉の口調が少し変わった。
「普通は。ましてや」
「サラーフのことか」
「はい」
彼は答えた。
「あれはな。あまりにも愚か過ぎた」
「あれがサラーフのマスコミ、そしてそれと癒着した政治家の正体

だったのです」
忌々しげにこう述べた。
「腐敗と言わずして何と言いましょうか」
「あれには私も驚かされた」
アッディーンも述べた。
「軍の行動から何から何までテレビで言っているのだからな。おかげで作戦が立て易かった」
「連中はそういうことすらわかっていなかったのです」
ハラスはまた述べた。
「私の失脚を狙ったものだったようですが」
「ミツヤーンの時もそうだったな」
「あれは絶対に勝てると思っていたようですから。宣伝のつもりだったのでしょう」
「あそこまで楽な戦いはなかったがな」
アッディーンは言葉だけで笑ってこう返した。
「あんな軍隊ははじめて見た。何もかもが出鱈目だった」
「そうだったようですね」
この時彼は更迭されていたのである。他ならぬナベツーラ、そしてミツヤーンの手によって。
「倍程の戦力差だったが。損害はこちらの方が信じられない程少なかった」
「そうだったようですね」
「戦略も戦術もあったものではなかった。あれだけ楽な戦いはそうはないだろうな」
「それがマスコミの実態です」
ハラスはコーヒーを置いてから言った。
「マスコミというのは厄介な存在でして」
その害毒に苦しめられてきたサラーフ出身だからこそ言えることであった。
「自分達が最も偉く、賢い存在だと信じ込んでいるのです」

「滑稽な話だ」
「情報網を持っているからです。しかし実態は」
言葉に含まれた苦さがさらに強くなる。
「あれ程愚かで腐敗し易い存在もありません。そもそも自分達へのチェックなぞ考えもしないのですから」
「だからか」
「はい」
彼は答えた。
「だからこそサラーフは滅びました。マスコミの手によってね」
「ナベツーラの為ではなく、か」
「あの男もマスコミでしたから」
彼は言った。
「完全に癒着しているという意味で。マスコミの寵児なぞああした輩に過ぎないということです」
「よくテレビでは下品な発言ばかり繰り返していたそうだな」
「はい。取り巻き連中も」
「それが批判どころか絶賛されていたそうだが」
「英雄的発言としてね。マスコミというのはダブルスタンダードの権化ですから」
「また随分と嫌っているな」
「当然です」
彼は応えた。
「あれだけ醜いものを見せられたのですからね」
「ではネットについてはどう思うか」
ここで彼はマスコミとは正反対で対立する存在を出してきた。

## 第十五部第二章　助演者達の思惑その十七

「ネットですか」
「そうだ。サラーフでは発達していなかったな」
「ええ、まあ」
「だがオムダーマンでは発達している。これについてはどう思うか」
「いいですね」
苦味で満たされていた顔に笑みを入れてきた。
「公平な情報が得られますし。それへのチェックも容易です」
「嘘や誤った情報も多いがな」
「それを見極めるのもまた重要ですから。おかげで何かと勉強になります」
「そうか」
「少なくともマスコミの一方的な情報や腐敗はないですから」
「それだけ有効かということか」
「はい。そういえば閣下のこともよく書かれていますね」
「それは知っているよ」
彼は笑いながらこう述べた。
「酷く書かれる場合もある」
「ですが楽しんでいらっしゃるようですね」
「別に批判でも何でもしてくれればいい」
彼はそれはよしとした。
「一方的な中傷は無視すればいいだけだしな」
「ですね」
「要は使い方だ。本来はマスコミもそうなのだが」
「それがより容易だということですよ。ネットならばね」
「そういうことだな」
「はい」
「そしてだ」

彼は話を戻してきた。
「今後のことだが」
「はい」
「やはり国境線を越えての戦いになるな」
「まずはこちらから仕掛けて」
「宣戦布告をしてからという形になる。既に国境には互いに戦力を集めている」
「ええ。まずは国境線において激しい戦いが行われることになるでしょう」
「では序盤から激戦になるな。まずは一気に終わらせたいものだ」
「その後の為にも」
「その通りだ」
アッディーンはそれに頷いた。
「問題はその後だ。ハサンは広い」
「はい」
「所有する星系も多い。それを占領していくのもまた尋常ではない」
「だからこそですね」
「うむ」
また頷いた。
「慎重に計画を進めていこう。そして」
「そして」
「ティムールも動くだろう。あちらとも話をしていた方がよいな」
「そうですね。では外務省とも話をして」
「事前にやっておくことは色々あるな」
「戦争は政治の一環ですから」
「確かにな」
これには大いに頷くところがあった。
「戦争はあくまで政治における武力行使の一手段に過ぎない。シビアに言うとそうなる」
「はい」

「それだけだ。だが」
そしてここで付け加えた。
「だからこそ失敗も許されない。政治の世界は結果が全てだ」
「ええ」
「戦争もまた政治ならばな。そういうことになる」
「戦争を行うにはせいじかでもなければならないということですね」
「そういうことになるな。私も一士官の時はそこまではわからなかった」
自身のことを踏まえて言う。
「だが今は。元帥、そして副大統領になって多くのものが見えるようになった」
「その一つが政治ですね」
「流石に副大統領とまでなると政治に携わらないではいられないからな。よく見える」
「はい」
「それでわかってきた。だがこちらもまだまだ勉強が必要だな」
「まだまだですか」
「そうだ」
素直に自分の力量を認めていた。アッディーンは地位や権力に惑われてたり慢心する程愚かではないからこそ言えることであった。
「とりあえずハサンについては慎重に進めていこう」
「はい」
「さっきも言ったが失敗は許されないからな」
「わかりました。それでは」
「うむ」
二人は会話を終え店を後にした。すぐに次の戦いへの備えにかかるのであった。
戦いは干戈を交えていない場所でも行われていた。それは何時しか実際に干戈を交えるまでに至ることは時の女神達にとっては明らかなことであった。

# 第十五部第三章　ラビリンスその一

ラビリンス

ニョルズ星系は北欧の神の一人ニョルズからその名が取られている。本来はオーディン達とは別の系列の神々であり
アスガルドにおいては司祭となっている。あまり目立つ存在とは言えないが重要な神である。
その神の名を冠したのがこのニョルズ星系である。オリンポスに隣接するこの星系はエウロパにしては極めて複雑な場所となっており、また星系の環境も過酷である為人も住んではいない。言わば障害そのものであった。
だからこそエウロパ軍もここには備えをしていなかった。ここよりもクロノスに軍を向けて来るだろうと考えていたのだ。だが今こうして連合軍義勇軍が来ていることにかなり狼狽しているのは事実であった。だからこそモンサルヴァートがここに急行してきたのである。
「敵は星系の入口に布陣しております」
リェンツィの艦橋に立つモンサルヴァートに幕僚の一人が報告する。
「そうか。そして数は」
「百個艦隊程です」
同じ幕僚が答えた。
「百個か」
「義勇軍の全軍であると思われます」
プロコフィエフがそれに応えた。
「確か彼等は百個艦隊でしたから」
「うむ」
「すなわち義勇軍全軍で来たということになります」
「全軍でか」

「はい」
「決戦の場であるクロノスに向けずに。二正面作戦というわけだな」
これは攻撃側の利点をフルに活用したものであった。攻撃側はその攻撃ポイントを自由に選択できる。防御側はそれに対して受け身で応じるしかない。それを利用した作戦であった。
「おそらくは。その通りでしょう」
プロコフィエフもそれに頷いた。
「そして兵を二分してきたのかと」
「おそらく本軍はあくまでクロノスにいる正規軍だな」
「はい」
「そしてここに来ているのは別働隊か。だが」
彼は言葉を続けた。
「その別働隊にしろオリンポスに到達すればそれで彼等の勝利だ。上手いことを考えたものだ」
「戦力差を上手に使っていると言えますね」
「少なくとも連合軍は戦略的には無能ではない」
「はい」
「それは今までの戦いでわかっている。どれだけ煮え湯を飲まされてきたことか」
そう思うと少し腹立たしさを覚えた。
「南方でもアルテミスでもな。そして今回もか」
「次はありませんが」
「そうだな。後ろにオリンポスがある状況では」
モンサルヴァートはここでオリンポスを意識せずにはいられなかった。
「負けられはしない。今度ばかりはな」
「はい」
「だが我が軍は五十個艦隊。それに対して敵は百個艦隊だ。数のうえでの劣勢は否めない」
「それは承知のうえです」

「ではどうするかだ。これは覆せるものではないな」
「はい」
「数はどうしようもない」
これにより最も苦しめられてきたのだがそれでもだ。まずはそれは諦めることにした。
「やはり戦術でカバーしていくしかないな」
「ええ」
「地形を使っていくか」
「それが一番かと」
プロコフィエフは答えた。
「さて」
モンサルヴァートはここで幕僚の一人に顔を向けた。先程の幕僚とはまた違う幕僚である。
「ニョルズの宙図を映してくれ」
「わかりました」
その幕僚はそれに従いモニターのスイッチを入れた。するとそこにニョルズの宙図が映し出された。
一目見ただけでわかる複雑怪奇な宙形であった。アステロイド帯に磁気嵐があちこちにあり、またブラックホールも数個存在している。惑星も中性子星まであり太陽にも異常がある。エウロパにあるとは思えないような星系であった。
「知ってはいたがまるで迷路だな」
「はい」
プロコフィエフがまた答えた。
「この迷路が決戦の場となります」
「うむ」
「さて、どうされますか」
そして彼女は問うてきた。
「どう戦われるおつもりですか」
「そうだな」

モンサルヴァートは宙図をもう一度一通り見てから応えた。
「これは正攻法には向かないな」
「はい」
「陽動作戦で敵の消耗を計るとしよう。それでいいな」
「それで宜しいかと」
「そしてだ」
彼はまだ宙図を見ていた。それからまた言った。
「敵は今のところ星系の入口にいる」
「はい」
「補給路もそこにある。ではそこを必死に護ろうとする筈だ」
「補給路をですか」
「そこも狙っていくか。よくよく考えれば我が軍は負けなければいい」
発想の転換でもあった。

## 第十五部第三章　ラビリンスその二

「別に勝つ必要もない。違うだろうか」
「負けなければいいというのであればそうなります」
それがプロコフィエフの答えであった。
「勝つ必要がなければ。要は彼等をオリンポスに入れなければよいのです」
「そうだな」
「その為にどうするか、です。こう考えると選択肢はおのずと増えていきます」
「ではそれでいくとしよう。あまり好みではないが」
彼は正面からの戦いを好む。しかし今はそうも言ってはいられない状況であるのは他ならぬ彼自身が最もよくわかっていることであった。
「艦隊を幾つかに分けていくとするか」
「はい」
「まずは私の直属艦隊とタンホイザー元帥の艦隊」
彼はその場で分割を決めはじめた。
「そしてゴドゥノフ、マトク、ターフェル、ジャースク、ニルソン、アローニカの各提督の艦隊だ。それぞれ分けていこう」
「規模はどれ位にしますか」
「まずは私の艦隊とタンホイザー元帥の艦隊はそれぞれ十個」
規模についてもすぐに決断を下す。
「各提督のそれは五個艦隊ずつだ。おのおのの指揮に従い艦隊を行動させる」
「各自の意志によってですか」
「そうだ。ただしターフェル、ジャースク各提督の部隊は補給路の確保に回ってくれ」
「補給路の」

「そうだ。さもないと大変なことになるからな」
「わかりました。それでは各提督にはそのように伝えておきます」
「頼む。つまり我々は四十個艦隊で彼等に向かうわけだが」
「このニョルズをどう使うかが勝敗の分かれ目になるかと」
「結局はそうなる。ではすぐに編成しなおすとしよう」
「はい」
「これに対して敵はどう出るかな」
「まずは調べにかかるでしょう」
「調べに」
「はい。彼等はこのニョルズのことをまだ詳しくはありません。宙図や情報は知っていてもそれ以上のことは知りません。ですからまずは慎重に調べながら進んでくるでしょう」
「そうか」
「それに対いして我々がどうするかです」
「まず地の利はこちらにある」
「はい」
「それは揺るがないな。だがそれに胡坐をかける状況でもない」
「ですね」
「まずは彼等は積極的に動くということはないということか。おそらく偵察艇や偵察機で情報収集を行うだろう」
連合軍の偵察能力はかなりのものであった。それは彼等も今までの戦いで苦渋を舐めることにより思い知らされていることであった。
「基本的に今いる場所からは動かないと思います。当面は」
「うむ」
モンサルヴァートはそこまで聞いて頷いた。そして言った。
「ではまずは情報収集の妨害にかかろう。アローニカ提督の艦隊に任せる」
「アローニカ提督ですか」
「そうだ。ここは空母に活躍してもらう。彼等が偵察を行うのならばこちらも情報収集に優れた艦隊を出す」

エウロパ軍では空母が最も高い情報収集能力を持っているのである。だからこそ彼はここで空母と、それの運用に長けたアローニカを推したのだ。
「それでどうだ」
「そうですね」
プロコフィエフは一呼吸置いてから述べた。
「それでいいと思います。ただ」
「ただ。何だ」
「それだけでは足りないかと。ニョルズの様々な道に機雷等を敷いておきましょう」
「機雷をか」
「はい。これで敵の進路を制限しておきましょう。敵はこれでかなり動きを制限される筈です。ですが敵が通れず我々が通られる道には敷きません。そして見つけるのが困難と思われる道も」
「ふむ」
「それでどうでしょうか。おそらくそれでかなり違うと思うのですが」
「そうだな。それも行うとしよう」
モンサルヴァートはそれもよしとした。
「これは他の艦隊で行うか。残る三十五個艦隊でな」
「はい。では早速動きましょう」
「うむ。では総員戦闘配備」
モンサルヴァートはすぐに指示を下した。
「すぐに作戦に取り掛かる。ここから連合軍を一歩も進ませるな」
「はっ！」
プロコフィエフと幕僚達が敬礼で応えた。こうしてエウロパ軍は動きはじめたのであった。

## 第十五部第三章　ラビリンスその三

エウロパ軍が動くそれよりも前に連合軍は動いていた。彼等の予想通り偵察活動を行なっていた。情報収集に務めていたのであった。
「今わかったことです」
マシュハドのもとにその情報収集の結果が送られてくる。矢次早に送られてくるそれにはこのニョルズ星系が如何に複雑な迷宮であるかを教えていた。
「エウロパにあるとは思えんな」
マシュハドはその情報に目を通してまずはこう言った。
「まるでサハラにいる気分だ。懐かしいと言えば懐かしいな」
「懐かしいですか」
幕僚の一人がこう問うてきた。
「そうだ。まあ北方にはここまで複雑な星系は滅多になかったがな」
「はい」
「南方にはよくあるそうだが。生憎俺はそちらのことはよく知らんので何も言えん」
「そうだったのですか」
「北のことしか知らん。だがそれでも戦わなければならんな」
「ですね。では情報収集を続けましょう」
「そうだな。ところでだ」
「はい」
「我々の情報収集に対して連合軍はどう出て来ると思うか」
「当然妨害の為に軍を出してくるでしょう」
「そうだろうな」
マシュハドはその言葉に頷いた。
「五個艦隊程を」
「五個艦隊か」
それを聞いたマシュハドの眉が動いた。

「大した数ではないな」
「ですが彼等には実際の数以上の味方がおります」
「地の利か」
「はい。これは覆しようがありません。このラビリンスは彼等のものですから」
「ラビリンスか」
マシュハドの眉がまた動いた。
「では我々はそのラビリンスに迷い込んだ生け贄というわけだな」
「とすると彼等がミノタウロスと」
「うむ」
マシュハドはワフラの言葉に頷いた。
「だが我々は只の生け贄ではない」
「テーセウスである、と仰りたいのですな」
「異教の英雄を出すのは気が引けるがな」
そう言いながら笑った。
「しかしこれ以上にいい例えはないな。ラビリンスだとすると」
「では我々もテーセウスに倣いますか」
「うむ。まずは補給路を確保しつつ前に出る」
「はい」
「そして情報収集の拠点を築く。そこからさらなる情報収集を執り行う」
「ハッ」
ワフラと幕僚達が敬礼で応えた。
「おそらく敵は防御に徹するつもりだろう」
「防御に」
「この戦いでは彼等は負けなければよい」
これはマシュハドも見抜いていた。歴戦の経験が彼にこの戦いのことを見抜かせていたのであった。
「負けなければな。では守り抜くだろう」
「この星系の複雑な宙形を利用してゲリラ戦術を使いながら」

「機雷を撒いて道を塞ぐこともしてくるだろうな」
これもまた見抜いていた。驚くべき慧眼であった。その顔に刻まれた皺と白い髭は伊達ではなかった。
「ニーベルングでも機雷は使っていた。そしてここでも」
「はい」
「だがそれはさせておけ」
「宜しいのですか」
「どうせ我々のことを甘く見てのことだ。ではそれに乗ってやろう」
ワフラの疑問の声には不敵に笑って応えた。
「表向きはな。おそらく普通の連合軍ならこの星系にかなり戸惑う筈だ。だが我々は違う」
「違うといいますと」
「我が軍は何だ」
彼はここでその場にいる幕僚達に対して問うた。
「我が軍は？」
「そうだ。我が軍は何だ」
彼はもう一度問うた。
「我が軍ですか」
「そうだ。言える筈だ」
マシュハドはこう言った後でニヤリと笑った。
「どうだ」
「サハラ義勇軍であります」
幕僚の一人が言った。
「そうだ。そしてサハラ義勇軍とは何だ」
「銀河最強の軍であります」
「そう。我が軍にその程度の工作が通用すると思うか」
「ご冗談を」
これには全ての幕僚が応えた。
「他の軍ならいざ知らず。我が軍にその程度の工作が通用する筈もありません」

「そういうことだ。ではわかるな」
「はい」
皆それに頷いた。
「では行くぞ。いずれエウロパの貴族達にはその小細工の代償を払ってもらう」
「はい」
「先に進む。まずはわかっている場所まででよい。補給路はマクラン大将の軍団に任せる」
「了解しました」
「残る九十個艦隊で前に進む。よいな」
「ハッ」
皆敬礼した。

## 第十五部第三章　ラビリンスその四

「では行くぞ。情報収集は行軍中も続けよ」
「わかりました」
「行軍は急ぐ必要はない」
「焦られないのですか」
「うむ」
彼は頷いた。
「特にな。ましてやクロノスの正規軍と功を競っているわけでもない」
少なくとも彼にはそのような意識はなかった。
「落ち着いていけばいい。焦るとかえって彼等に付け込まれる」
「ですね」
これにワフラが同意した。
「ただ、勝たねばならないが」
「勝たねば」
「そうだ。彼等は我々をオリンポスに辿り着かせなければいい。しかし我々は違う」
「オリンポスに辿り着かなくてはならない」
「そうだ。だとすればわかるな」
「はい」
ワフラだけでなく全ての幕僚がそれに頷いた。
「ただ、これも状況によって変わる」
「状況によって、ですか」
「それは一体」
「戦いを有利に進め、そこで手打ちとするならばな。限定的勝利でもよい場合もある」
「はあ」
「実際にはそうした勝利の方が多いとは思わないか、実際に戦いで

は」
「確かに」
例えば二十世紀初頭に行われた日露戦争である。これは帝国主義時代において有色人種が白人種に対してはじめて勝利を収めた画期的な戦争として知られているがこの戦争もまた限定的勝利であった。圧倒的な国力を誇るロシアに対して日本が勝利を収めただけでも非常に驚くべき話であるがこれには外交的努力もあったのだ。アメリカに仲介を依頼し、日本海海戦、そして奉天の戦いにおいて勝利を収めたところで仲介が入り勝利という形になったのだ。戦争を政治の一手段と認識するのならば非常にいいタイミングでの講和であった。日本の外交的勝利であるとも言えた。
「この戦いは我等と彼等の力の差は歴然としているが」
「それは確かに」
「しかしそれだからこそだ。エウロパが潰れることを望んでいない者がいるとすれば当然我等のオリンポス入城も望んではいない筈だ」
「ではこの戦いが最後になると」
「そうだ。だとすればこの戦いの途中でそうした話になる」
「途中で」
「わしもそこまではわからないが。政治の世界というのはどうも軍人には馴染めないところがある」
彼は生粋の軍人であった。だから政治というものに少し拒否反応もあったのだ。戦場での駆け引きは得意でも政治の駆け引きには疎い男であった。
「だからな。そういったことまではわからないが」
「勘で語られているということでしょうか」
「まそうだな。これも長年の経験だ」
ワフラの言葉にこう応えた。
「軍人というのは。政治の世界では都合よく使われることが多い」
「はい」
「連合といえどな。待遇はよいが」

「既に都合よく使われている部分はありますね。我々は緒戦正規軍ではありません」
「常に最前線に送られる。それだけでもうわかっていることか」
「はい。結局我々は異邦人ですから」
「異邦人か」
それを聞いたマシュハドの目が寂しいものとなった。

## 第十五部第三章　ラビリンスその五

「ここにいる者には既に連合に心を寄せている者も多くいるというのにな」
「認められるには。まだ時間がかかるということでしょうか」
「だからこそ今戦場にいるのだ」
彼はここでこう述べた。
「ここで功績を挙げ連合の社会に認められるようにな。違うか」
「いえ」
それは事実であった。今彼等が義勇軍にいるのはそうした理由からでもあった。かって第二次世界大戦で収容所に入れられたアメリカの日系人達がそうして認められたのと同じだ。彼等は収容所に入れられたわけでもないし市民権も保証されている。だが異邦人であることには変わりがないのだ。異邦人がその社会に入るには並々ならぬ努力が必要である。そういうことであった。なおこの日系人の収容は西海岸の日系人に対してでありワシントンやハワイの日系人には為されてはいない。またこうしたことが行われた背景には確かに日系人、黄色人種への偏見があるがそれと共に日本軍が日系人の間に強力で隠密的な諜報ネットワークを築いていたからである。こうしたことが行われた背景には実は複雑な事情があるのである。
「結局我々は勝つしかない」
「そうなるのですか、やはり」
「そうだ。今前にいる敵を討つ。戦いが終わるその時まで勝っているぞ」
「わかりました。ではその時に勝っているように」
「進軍だ。兵は分けるな」
「はっ」
「まだこの辺りにはエウロパ軍も来ていない筈だ。すぐに大きな道

を進んで行く」
「了解」
「進撃開始。攻撃目標は今のところ定めない」
モンサルヴァートは全軍に対して指示を続ける。
「拠点も設けられたらいいのだがな」
「それはどうやら期待しない方がいいですね」
「そうだな」
ニョルズ星系はそもそも無人星系である。あまりにも複雑な宙形と太陽に異常があり、また惑星もとても人が住めるような状況ではないので誰もいない。従って軍事基地やそういったものすらないのである。ただしこれはエウロパの技術ではであって連合の技術では容易に人が居住できる星系にすることが可能である。伊達に水星や冥王星にまで移住を果たして居住可能な惑星に作り変えているわけではないのである。連合の惑星開発能力は他の勢力の追随を許さないものであったのだ。
「それだけに補給路の確保は重要だな」
「はい」
「それに気を払っておけ。よいな」
「了解」
こうして義勇軍は兵を前に進めた。彼等も動きはじめたのであった。その動きは義勇軍のそれにも負けてはいない程迅速なものであった。モンサルヴァートは迅速な用兵により兵力と艦艇の攻撃力、防御力の差をカバーしようとしていたのである。連合軍の艦艇の攻撃力と防御力の凄まじさを身を以って知っていたからである。このことは非常に大きかった。

## 第十五部第三章　ラビリンスその六

エウロパ軍も同時に動いていた。彼等は兵をそれぞれに分け、敵にあたろうとしていた。その中でアローニカは五個艦隊を率いて哨戒にあたっていた。これは命令通りであった。
「今のところ目立った動きはないようだな」
「はい」
幕僚の一人がそれに頷いた。
「時折偵察機や偵察艇が見られるだけです。それは全て撃墜しております」
「そうか。では問題はないな」
「ただ。気にはなりますね」
「それはわかる」
彼は幕僚の言葉に顔を向けてきた。
「連合軍が今どう動いているか、知りたいのだろう」
「はい」
「それは私もだ。彼等とて馬鹿ではない、じっとしているということはないだろう」
「では前に進んできているということでしょうか」
「そうだな。その道だが」
彼はここで地理参謀に顔を向けてきた。
「ヴァドゥーヴァ少将」
「はい」
その彼が応えた。
「モニターにこのニョルズの宙図を映してくれ」
「わかりました。それでは」
「うむ」
こうしてニョルズの三次元宙図が映し出された。実に複雑な星系がそこにはあった。

「彼等が進むと思われる道は幾らか考えられる」
「はい」
幕僚達はアローニカの言葉に頷いた。
「まず彼等がここにいるとすれば」
懐から出したレーザーでまずは入口を指し示す。
「道は複数考えられる。まずはここだ」
一地点を指した。
「そしてここ」
別の地点を指した。
「最後にここか。合計三つだな」
「三つですか」
「兵力を分散して進んでくるということも考えられますね」
「さて、それはどうかな」
幕僚の一人のその言葉には疑問で以って返した。
「違うと仰られるのですか」
「私はそう考える」
彼は答えた。
「ニョルズの複雑さは彼等も少しだがわかっているだろう。そう、少しだ」
「ならば無謀に進むということも考えられますが」
「敵の司令官はマシュハド元帥だったな」
「はい」
「彼はサハラにいた。長い間戦場にいた。実戦経験という点においては少なくとも他の連合軍の提督のそれとは比較にならない」
「つまりその経験を生かしてここは慎重に進んで来る、と」
「私はそう見ている。おそらく彼は一つの道を選んでそこに主力、いや前線に投入する戦力を全て進ませる筈だ」
「全て、ですか」
「下手に兵を分散させるよりは集結させた方がいい。戦術の基本だな」

「はい」
戦力集中の原則である。これは最早言うまでもないことであった。
「だからこそだ。おそらくは」
ここでまたレーザーで指し示した。
「ここを通るだろう」
そして中央にある最も大きな道を指し示した。
「そこですか」
「そうだ。ここが一番大きく、また障害も少ない。進むとすればここだろうな」
「ではそこにトラップを仕掛けていってはどうでしょうか」
「そうしたいのはやまやまだがな」
だがそれには首を横に振った。
「既に彼等が自分達の左右に機雷等を撒いているだろう」
「機雷をですか」
「いつもそうやっている。おそらく今度もだろう」
「前に撒いていってもあまり効果はありませんね」
「すぐに突破されるだろう。ここはその道を明け渡すしかない」
「無念です」
「何、それならそれでやり方がある」
彼はこう言って部下を宥めてきた。
「彼等が来る道がわかっているからな。だがそれを仕掛けるのは我々ではない」
「といいますと」
「正面からの戦いは後になる。それまでは我々の任務を行う。別働の艦隊もだ」
「戦いはまだ先ということですか」
「いや、それは違うな」
アローニカはそれは否定した。
「戦いはもうはじまっている」
「もうですか」

「そうだ。これもまた戦いだ」
「偵察もですか」
「戦いはただ干戈を交えるだけではない」
彼は言った。
「また武力を使うだけではないのだ」
「といいますと政治もまた」
「そういうことになる。そして」
言葉を続ける。
「普段からもな。国力を伸張させるのもまた戦いだ」
「そうだったのですか」
「そうだ。従って」
「従って」
「我々は既にその戦争において敗北していた。それもかなりな」
「かなり」
「エウロパと連合の国力差は三十倍以上」
「それは存じていますが」
「我々は長い間一千億の人口で抑制してきた。だが彼等はどうだ」
「爆発的な増加と拡大を続けております」
「その結果四兆にも手が届こうとしているな」
「いや、それを越えるのも時間の問題だと聞いております」
年老いた参謀の一人が述べた。
「かってこれ程までの人口を持つ勢力は。かって存在したこともありません」
「我々とは比較にならない。この狭いエウロパと広大な連合との差ではな」
「覆しようもありませんか」
「ブラウベルグ、いやそれ以前からそうだった」
アローニカの言葉に苦味が漂う。

## 第十五部第三章　ラビリンスその七

「彼等と我等の差は。大きく開いていた」
「はい」
「宇宙に出てからもそうだった。例えこの戦いを凌げても」
「その差は埋まりません。どうするべきか」
「最早南に行くことはできない」
「残念ながら」
　総督府は放棄した。そしてシャイターンのティムール連合が掌握してしまった。統一された勢力が確保していては進出は容易ではない。エウロパは南に関しては手詰まりになっていた。
「北か西か」
「あの何もない無限の空間を越えるしかないのですか」
「そうだろうな。越えられないと言うことはできない」
「そうでなければ生き残れないからですね」
「この戦いの後だが」
「はい」
「あくまで我々が生き残れたらの話だが。連合の工作には注意した方がいいな」
「工作に」
「かって地球にあった頃のようにな。知っているな」
「勿論です」
　これには皆頷いた。
「バルカン問題と。買収騒動ですね」
「そうだ。あのようなことが再びあってはならない」
　アローニカ達は千年以上の過去、エウロパの者達にとっては忘れることのできない忌まわしい過去に関しての話をはじめた。
　これは宇宙進出がはじまってからの話であった。かってユーゴスラビアと呼ばれていた地域の国々はなおも血生臭い抗争を続けてい

た。この時太平洋諸国にシンガポール条約において決定的な敗北を喫していた欧州は内部を維持するのに必死でありバルカンにまで手が回らなかった。太平洋諸国をそこを衝いてバルカン問題に乗り出してきたのである。これは十九世紀後半よりこの地域を狙っていたロシアが主軸となっていた。

彼等はバルカン諸国に停戦と宇宙への進出を提案してきた。進出の際には優先的によい星系を提供するという条件でである。幾度にも渡る交渉の末彼等は遂にそれを呑んだ。こうして彼等は太平洋側に参加することになったのである。

同時に欧州内の切り崩しも計られた。標的は彼等以外のバルカン諸国とフィンランドであった。ロシアの脅威と日本への好意もあったがこの時のフィンランド大統領エボニ＝カタヤイネンが連合寄りの人物であったことと欧州からはそれにより少し疎外されていたこともまた要因であった。

ここで連合は大規模な買収工作に出て来た。標的にした各国の高官達に賄賂を贈ると共に反対派は謎の死を遂げていった。謎の死ということにはなっているが多くの者はここに陰謀があったと考えている。千年以上経った今でもこれは歴史のミステリーの一つとされている。

次には国家単位での買収が行なわれた。旧ユーゴ諸国に対するのと同じように経済支援と宇宙進出が約束され、それが実行されたのである。これでアルバニアやブルガリア、そしてフィンランドが太平洋側になった。

連合の工作はさらに続きルーマニアやギリシア、ハンガリーに対しても行われるようになった。同時に国連においてもロシアが自身の自治共和国を国連に加入させ影響力拡大を計ってきていた。それぞれの自治共和国は表向きは独立国であってもその実態はロシアの衛星国、完全に太平洋諸国であったのだ。

工作は成功するかと思われた。欧州の崩壊が近いのは誰が見ても明らかであった。こうした時に出て来たのがブラウブルグであった

のだ。そうした意味でも彼は欧州の救世主であったのだ。
「あの時ブラウベルグがいなかったら今の我々はない」
「はい」
「危ないところだった。もう少しで我々は全てを失うところだった」
「既にスラブの多くを失っておりましたし」
今エウロパにあるスラブ系国家はポーランドだけであると言っていい。ロシア系国家はもとよりブルガリアやアルバニアまでもが連合に参加してしまったからだ。そうした意味で今のエウロパはゲルマン系とラテン系の勢力の国家であると言っていい。なおハンガリーはアジア系なのは言うまでもない。だがスラブ系は今ではエウロパのあちこちに散っている。宇宙進出以後最も人口が増加したのは彼等であったからだ。
「連合はそうした工作は得意だ。伝統的にな」
「その内部でも買収等が恒常化しているようですね」
「腐敗していると言えば腐敗している」
彼等にとっては賄賂や買収といったことは汚い行為であるのだ。エウロパではそうしたことは連合と比較して極めて少ない。これもまたエウロパ貴族の価値観であった。
「だが。有効な手段だな」
「それは否定できませんね」
幕僚の一人がそれに頷いた。頷くしかなかった。
「黄金の力は。絶大ですから」
「我々は情報収集や破壊工作を得手とするが。彼等は政治工作を得手とするのだな」
「いえ、それはどうでしょうか」
だがそれには幕僚の一人が異を唱えた。

## 第十五部第三章　ラビリンスその八

「違うのか」
「はい。政治工作は我々も行ってきました」
「サハラでか」
「綺麗だったとは言えませんが。これもまた事実です」
「そうだったな」
　アローニカもこれは知っていた。彼もまた総督府におり、長い間そこで戦ってきたから知らないとも言えなかったのだ。そうした意味で連合もエウロパも同じであった。
「我々もそうだったな」
「はい」
「それにより進出を成功させてきましたから」
「情報部の力が大きかったな」
「はい」
　エウロパの情報部は破壊工作等も行っているのだ。そうした意味でエウロパの影の部隊であった。ここが連合の情報部とは大きく違っていた。連合では情報部は情報収集に専念している。そうした破壊工作は別の管轄下であるのだ。
「そして今その情報部はどうしているか」
「ステッラを失いましてからどうにも精彩を欠いているようです」
「そうか」
「前の情報部長は自決されましたし」
「そうだったな」
　それを聞いたアローニカの顔がまた苦くなる。
「デ＝シリアーニ部長も今は動けないか」
「少なくとも連合相手には防戦のようです」
「彼等も何かと工作を行っているというわけだな」
「はい。そして彼等だけでなく」

「まだいるのか！？」
「ええ。どうやらティムールもまた何かと蠢いているようです」
そう述べる。
「ティムールが」
「はい。コーカロイドに整形した工作員が多数潜入しているという未確認情報もあります」
「シャイターンがか。また動いているというのか」
「何を考えているのでしょうか、彼は」
「連合に恩を売るつもりなのかもな」
政治的な考えになる。あまり愉快ではなかった。
「恩を」
「そうではないか、と思うのだが」
アローニカは考えながら述べた。
「我々の行動を阻害することにより連合の動きに貢献する」
「サポートということですか」
「サポートの方法もまた一つではないからな」
彼はまた述べた。
「表立ったサポートばかりとは限らない。裏でのサポートもある」
「テロ活動もですか」
「影の世界でもまた行えるものだな」
「はい」
「我々がかってサハラでやってきたことだ。因果なものだな」
「ですがそれを見過ごすわけには」
「いかないな。それはこちらの情報部もわかっていることだろう」
「そう願いたいですね」
「ここはアイスブルーの悪魔に期待しよう」
ここでデ＝シリアーニの通り名を述べた。
「やってくれることを信じてな」
「少なくとも工作の結果と見られる損害はないですけれどね」
「では合格ということかな」

「だといいですが」
「そう思うことにしよう。では作戦行動を続けるぞ」
「はい」
アローニカの艦隊は哨戒作戦を続けていた。その結果多くの連合軍の偵察機や偵察艇が破壊された。しかしそれで全てではなかった。義勇軍の出した偵察機等の数は驚く程多いものであった。従って全てを破壊しきれるなぞ不可能であった。中には見つからずに偵察を続けているものもあった。そしてかなりのことがわかったのであった。

## 第十五部第三章　ラビリンスその九

「ふむ」
マシュハドは自室で送られてきたニョルズの宙図を見ていた。そして考えに耽っていたのであった。
「成程な」
「失礼します」
そこにワフラが入って来た。彼は部屋に入るとまずは敬礼した。
「おう」
マシュハドもそれに返礼した。彼はそれからワフラに対して言った。
「今この星系の宙図が送られてきている」
「はい」
「かなり詳細にな。その結果面白いことがわかってきたぞ」
「面白いことですか」
「そうだ。何かとな。この星系はやはり迷路だ」
「迷路ですか」
「そう、迷路だ」
その目を煌かせて言う。
「我々は今将に迷路の中にいるな。あらためてそれを認識させられた」
「はい」
「迷路の中ではどう戦うべきかな」
「少なくとも手探りでは話にもなりません」
ワフラは答えた。
「そうだな」
それにはマシュハドも頷いた。
「ではどうするべきか」
「テーセウスはアリアドネの赤い糸を伝って戦っていましたが」

「うむ」
「我々は補給路を確保しながらです。しかしそれは今回はミノタウロスも同じこと。神話のそれとはそこが違います」
「そうだな」
「ですがミノタウロスは迷路の隅まで知っています。これは神話と変わりがありません」
ワフラは自分達をギリシア神話の英雄の一人テーセウスに、そしてエウロパ軍をミノス王のラビリンスにいた牛頭人身の怪物ミノタウロスに例えて話をした。このミノタウロスという怪物の出自は実に奇怪である。ミノス王の妃と牡牛の間に生まれたとされている。そのうえ人肉を喰らう。牛の頭なのにだ。これには何かの宗教的儀式があったのではないかとも言われている。
「これは大きいです。ですがテーセウスは勝っております」
「神話ではな」
彼の冒険はそれからも続き多くのことが起こった。だがそれはまた別の話となる。少なくとも彼はこの後でラビリンスには入ってはいない。
「我々も勝てる筈です。方法を誤らなければ」
「正しい選択をする自信はあるか」
「エウロパの神々に対してはありません」
ワフラはここで思わせぶりに言った。
「ですがアッラーが導かれるのならあります」
「そうか」
マシュハドはそれを聞いてニヤリと笑った。
「それを聞いて安心したぞ」
「アッラーフアクバル」
ワフラはここでまた言った。そして彼もニヤリと笑った。いつもの冷静沈着なサポート役としての彼はこの時はいなかった。
「アッラーならば怪物を倒すことは造作もないことです」
「そしてその僕達である我々もな」

「ええ。ではやりますか」
「何か考えがあるな」
「まずは宙図を見せて頂けないでしょうか」
ワフラは申し出てきた。
「宙図をか」
「はい。まずはそれを見て考えていきたいと考えております」
「わかった」
マシュハドはそれに頷いて今自身が持っている宙図をまとめた後で彼に手渡した。

## 第十五部第三章　ラビリンスその十

「では見てくれ。そしてそこから何がわかるかな」
「了解しました」
ワフラは頷いた。そして宙図を受け取り目を通しはじめた。
「ふむ」
念入りに一枚一枚見ていく。そして考えに耽っていた。
「これはこれは」
暫く念入りに宙図を見ていた。それが終わると彼はその図をマシュハドに返した。
「どうも。有り難うございます」
「何かわかったか」
「ええ」
彼はニヤリと笑って応える。
「よくわかりました。何、この程度なら」
「問題ないというのだな」
「この程度で戸惑っていてはサハラにいたと胸を張ることはできません」
「確かにな」
これにはマシュハドも同意であった。
「しかし数がサハラにいた時とはかなり違いますな」
「うむ」
「その問題もありますが。ここは少し我等の戦いを見せてやりますか」
「どうするつもりか」
「援軍を呼びましょう」
「援軍を」
それを聞いたマシュハドの眉がピクリと動いた。
「援軍をか」

「はい」
彼はにこりと笑ってそれに頷いた。
「その通りです」
「一つ言っておくが我が軍には流石にこれ以上の数は」
「それも承知のうえです」
彼はまた言った。
「全ては。策です」
「策か」
「お任せ下さい。この星系のこともわかりましたし。それに戦い方も確立できます」
「では任せてよいな」
「勝利を我等が手にする為にも」
「大きく出たな」
「ふふふ」
ワフラは思わせぶりな笑みを浮かべた。それは何よりも自信の表れであった。
「では任せるとしよう」
ワフラも決断を下した。
「今回の作戦。参謀長に任せる」
「有り難うございます」
「ただし、必ず勝つようにな」
「アッラーに誓って」
ワフラは言った。
「必ずや勝利を収めます」
「よし、期待している」
「はい」
「それにしてもだ。我々はかなり辛い戦いを続けているな」
「ですね」
ワフラの顔が苦笑になった。
「義勇軍ですから。仕方ありませんが」

「常に前線だな」
「それもまた。仕方ありません」
「何事もか。仕方ない」
「その為に我々は集められましたからね」
「ニョルズには自分で来たがな。たまには正規軍にも花を持たせてやらんとな」
「ははは、花をですか」
「やはり決戦ならば彼等にしてもらわないとな」
笑いながらこう述べる。
「違うか」
「いえ、その通りです」
ワフラも笑った。
「損害を恐れはするでしょうが。果たしてどう戦うでしょうか」
「普通にやって負ける戦力ではない」
マシュハドは言った。
「クロノスにいる戦力は二千個艦隊だったな」
「はい」
「対するエウロパ軍は三百五十個程だったな。五倍以上の戦力で正面からぶつかって負ける方がどうかしている」
「ましてやあの装備で」
「それに連合軍の提督達も将兵もそれ程愚かでも弱くでもない。大丈夫だろう」
「私もそう思います。ただ、どうも」
「どうも。何だ」
「連合軍の正規軍は。今一つ緊張がないように見えるのです」
「それはわしもだ」
マシュハドもそれに頷いた。
「司令もそう思われますか」
「うむ。そう見えるのは事実だろう」
彼は言った。

「やはり。戦争がなかったからかな」
「一千年以上もの間。これは大きいかと」
「だが宇宙海賊やテロリストとの抗争はあったがな」
「ですが正規の戦闘はありませんでした」
「それは大きいか」
「そう思います。どうも彼等は軍というものを多くの仕事の中の一つに過ぎないと考えているようです」
「それはあるな」
マシュハドはここで頷いた。
「仕事としての軍隊か」
「はい。ですから我々と考え方も違うのも道理かと」
「難しい話だ」
そしてこう述べた。
「そこまで違いがあるとな」
「我々はコーランの教えにのっとっていますが彼等は違います」
「うむ」
「あくまで職業倫理でしかありません」
「あの軍律もか」
話を聞いていて不思議な感覚を覚える。それこそが連合とサハラの違いであった。
「ええ。そうした意味で非常に割り切られたものがあります」
「そのせいだな。ああした感じは」
「はい。連合軍は我々とは全く違います。完全に異文化の軍隊です」
「だが連合ではそれが普通だ」
「はい」
ワフラはマシュハドのその言葉を認めるしかなかった。

## 第十五部第三章　ラビリンスその十一

「むしろ我々の方が異邦人ということになる」
「そうですね。我々は連合においては余所者でしかありません」
「中に入られると思うか」
「中に」
「そう、連合の中にだ」
マシュハドはそう言いながらワフラの目を見てきた。
「どう思うか」
「やはり難しいことではあると思います」
それがワフラの答えであった。
「難しいか」
「ええ。我々はサハラで生まれました」
「うむ」
「そしてサハラの中で育ってきました。全てはサハラにあります」
「連合にはない」
「その通りです。ですから中に入るのは容易ではありません」
「その戦いで貢献してもか」
「表面的にはそれでいいでしょうが内面までは無理でしょう」
彼はまた言った。
「全てが連合に入られるようになるのは。かなり時間がかかると思います。それに」
「それに」
「連合の者達の偏見もあるでしょうから」
「それはあるな」
これはマシュハドも肌で感じていることであった。
「人間というものは複雑なものだな」
「はい」
「肌や目の色、髪の色での差別は少なくとも連合にはないが」

「宗教や文化での差別もないですが」
「そう、そして階級もない。だが」
「文明の違いでの差別はあったということですね」
「そういうことになる」
マシュハドは残念そうに呟いた。
「イスラムは連合にもあるが我々のイスラムとは全く違う」
「はい、そして生活習慣も。これ程違うとは思っていませんでした」
「君は豚を食べられるか」
「滅相もない」
首を横に振ってそれを否定する。
「では犬に舐められたならば」
「ぞっとします」
イスラムの教えでは犬の唾は不浄なものとされている。これはムハンマドが定めたものであるが狂犬病を嫌ったものであるらしい。狂犬病は伝染すれば確実に命を落とす。日本の化け猫や欧州の吸血鬼の正体の一つもそれであると言われている。実際に狂犬病にかかった猫は無気味な鳴き声を出したり油を舐めたりするのである。
「そうだな。だが彼等は平気だ」
「はい」
「我々はまた妻を四人まで持つが」
「彼等は違いますね。同じムスリムであっても」
「一人だ。もっとも愛人がいる者もいるが」
「あれもわかりません」
ワフラは愛人という存在に首を傾げさせた。
「何故正式に妻としないのでしょうか。法律の問題は抜きにして」
「それもまた大きな違いだろうな」
マシュハドは述べた。
「妻や夫がいても同じ性の者と寝るのもな」
「同性愛ですか」
「あれ程公になっているとな。信じられないものだ」

「あれもね。異常です」
ワフラは今度は顔を顰めさせた。
「話には聞いていましたが。あのような背徳の行為が公になっているとは」
イスラムでは同性愛はタブーとされている。これはユダヤ教からの伝統である。今でも連合においてはイスラエルにおいては同性愛は禁じられている。
「恐ろしいことです」
「エウロパでもこれは同じだがな」
「そうですね」
本来キリスト教でも同性愛は禁じられている。かつてはそれだけで死刑となるような罪深いことと考えられていた。厳格なカトリックの団体であるイエズス会の領袖の一人であったフランシスコ＝ザビエルは日本に来た時日本と日本人を非常に高く評価した。しかし男色が公になっていることには非常に憤慨していたのである。彼は日本にはおぞましい悪徳がはびこっているとまで言っていた。

## 第十五部第三章　ラビリンスその十二

これは十九世紀でも同じことでオスカー＝ワイルドが牢獄に入れられたのも同性愛からであった。彼はこれにより寿命を縮めている。十九世紀でも日本では同性愛は普通であったから彼は日本にいれば逮捕、投獄されるようなことは決してなかったであろう。

しかしエウロパはキリスト教だけではなかった。ギリシアの神々も存在しているのである。古代ギリシア社会では同性愛は至極普通にあったことであった。ゼウスも美少年を攫い自分の側に置いていた。また多くの者が女性との愛よりも同性との愛を選んでいた程であった。これは後にローマにも入る。当初は同性愛に寛容ではなかったローマもギリシアの影響を受けるにつれ変質していったのだ。その結果同性愛も認められたのである。

「しかし今は彼等も違う」

「ええ」

「ギリシアのあれの影響か」

「そうでしょうね」

これは彼等もわかっていることであった。

「妙な話ではあります」

「総統補佐官だったか。レズビアンらしいな」

「はい」

アランソのことであるのは言うまでもない。

「しかも女性を妻に持っているそうだな」

「信じられない話です」

「連合にも多い。子供は養子を迎えてな」

「異常な世界だと思いましたよ、最初は」

「わしもだ。本当に何もかもが違う」

「男が家庭で料理を作るのはまあこちらでもありますがね」

「わしも得意だぞ」

「そうなのですか」
「肉料理はな。いつもやっている」
マシュハドはその厳しい顔を崩してこう言った。
「羊や牛が得意だ。今度食べてみるか」
「いいですね。ビーフステーキでも」
「レアでな。酒は赤ワインだ」
「はい。それで何枚も」
「悪くはないな。よし、この戦いが終わったらステーキを焼くか」
「では私はピラフを作りましょう」
「おっ、君も料理をするのか」
「ええ。妻が怒った時等は。自分でやるしかないですから」
どうやら彼は恐妻家であるらしい。男権社会であるとされているサハラにおいても恐妻家というのは存在するのである。むしろ妻を恐れない男の方が少ないであろう。もっとも妻を恐れないからといっても暴力を振るったりするような男は最早この世にいる資格すらないのであるが。
「そうだな。実はわしもだ」
「司令も」
「わしの妻は怒ると恐いぞ。この世で最も恐ろしい」
「そんなにですか」
「少なくとも今から戦うエウロパ軍よりも手強い」
「それはまた」
信じられないが実際に恐妻家にとってはそうである。かって天下を獲った男も正妻には頭が上がらなかったという話がある。彼は天下人になってもこの正妻を大事にしていた。夫婦喧嘩の時は生まれ故郷の言葉をそのまま出して言い争っていたという。幾多の修羅場を潜り抜けてきた男も妻には勝てなかったと言われている。
「それを思うと。戦場に行くのも気が楽になるな」
「では気楽にいきますか」
「そうもいかんがな」

笑ったまま言った。
「まあ慎重さを忘れずにいこう」
「はい」
「少なくとも夫婦喧嘩よりは簡単にいくだろうからな」
「そう言われると気持ちが楽になりますね」
「肩の力は抜いた方がいい」
マシュハドはまた言った。
「さもないといざという時にアクシデントが起こるからな」
「ですね」
「まずは九十個艦隊で前面に移動していく」
彼は言葉を実際の戦闘に関するものに移した。
「そして相応しい場所で陣を敷き、そこでさらなる情報収集に務める」
「わかりました」
「敵はいずれやって来るだろうがな」
「来なければこちらから来るように仕向けますか」
「そのやり方は考えているか」
「はい」
ワフラは頷いた。
「今回の戦いは私に任せて頂くのですから。もう幾つか考えています」
「速いな」
「兵は神速を尊ぶといいますから。連合軍にはあまり縁のない言葉かも知れないですが」
「連合軍はそれよりも優先させたものがあるからな」
「はい」
それが攻撃力であり防御力である。そして情報収集能力だ。連合軍は速度よりもそういったものにその技術を集中させたのである。運用思想の違いであった。
「しかし我々はまた少し考えが違う。この艦艇も」

実は連合軍の艦艇と義勇軍の艦艇は少し違っている。重武装でかつ速度も強化しているのである。連合軍の艦艇を強化したような状態になっているのだ。
「用兵もな。それを使っていくのだな」
「勿論です」
ワフラはまた頷いた。これは彼もよくわかっていた。
「それではやりますか」
「うむ」
二人は頷き合った。
「では頼むぞ」
「はい」
ワフラは応えた後でマシュハドに対してまた言った。
「ただ指揮は司令がお願いします」
「わしがか」
「はい。そうでなければ軍は動きませんから」
「仕方ないな。ではそれはやらせてもらおう」
「お願いします」
「ではな。行くか」
「了解」
こうして義勇軍は進撃に入った。この時それを察した者はエウロパ軍に一人だけいた。

## 第十五部第三章　ラビリンスその十三

「来るぞ」
タンホイザーは乗艦であるグングニルの艦橋においてふとこう呟いた。
「閣下、今何と」
「来ると言ったのだ」
彼は幕僚の問いに対してこう言葉を返した。
「来る。一体何が」
「わからないか。敵だ」
彼はまた言った。
「敵」
「そうだ。彼等は動く」
タンホイザーはその目を輝かせて言う。鋭い、剣の輝きであった。
「動くのですか」
「まずは補給路に注意してくれ」
「既に五個艦隊が常時警戒にあたっていますが」
「それだけでは足りないな。とても」
「ではどうすれば」
「我々も行こう。それならかなり違う」
こう述べてきた。
「我々の十個艦隊を向けるのですね」
「そうだ。モンサルヴァート司令には私から話しておく」
「わかりました。ではすぐに向かいましょう」
「うむ」
「ところで」
「何だ」
話が終わると幕僚達はまたタンホイザーに問うてきた。
「何故そう言い切れるのでしょうか」

「敵が補給路に来るということがか」
「はい。確かに充分考えられることではありますが」
「勘だ」
タンホイザーは言った。
「勘」
「そう、勘だ。勘がそう教えているのだ」
「御言葉ですがあまり確かなものでは」
「その場合の責任は私が取る」
彼は言い切ることによって部下達を納得させるつもりであった。
「だから安心してくれ。何かあってもな」
「私共の責任に関しては構いませんが」
彼等の心配事は他にもあったのだ。
「勝敗に。大きく関わりかねないことですから」
「ここで十個艦隊を動かすとなると。かなりの兵力ですが」
「元々この十個艦隊は私の指揮下に預けられていたな」
「はい」
「ならばそれを動かさなくてどうするか。私は私の判断で以ってこの軍を動かすのだ」
一歩間違えなくても暴論であった。だが彼が言うからこそ納得できる言葉でもあった。
「ここは任せるのだ。いいな」
「・・・・・・・・・・」
幕僚達はその言葉に無言で顔を見合わせた。しかしタンホイザーの天才とも言うべき用兵の才、そして勘は彼等もよく知っていた。ここはそれを信じることにした。
「わかりました」
「わかってくれたか」
「はい。それではすぐに補給路に向かいましょう」
「十個艦隊で。宜しいですね」
「うむ」

タンホイザーはそれを聞いて満足そうに頷いた。
「では行くぞ。すぐに」
「はい」
「敵が来たならば一気に反撃を仕掛ける」
「こちらからですか」
「攻撃は最大の防御だ」
彼はまた言った。
「我々の戦い方をまた彼等に見せてやる」
「わかりました。それでは」
「うむ」
「ただ。疑問に思うところがあります」
「何だ」
「このニョルズのことですが。どうも彼等の動きは我々が思っていたよりスムーズですが」
「卿もそう思うか」
タンホイザーはその言葉に心を向けてきた。
「はい。本当に補給路を狙って来るのでしたら。かなりのものかと思います」
「思えば彼等がここに来ることを選んだのだな」
「はい」
攻撃側は自由に攻撃ポイントを選ぶことができる。彼等はそれを使ったのである。これもまた兵法の基本であった。
「ならば彼等には彼等なりに勝算があったことになる」
「つまりニョルズのこの宙形も考慮していたということですか」
「事前にな。いや、むしろ」
タンホイザーはここで言葉を変えた。
「ニョルズもまた。彼等にとってはどうということのない場所なのかも知れない」
「まさか」
「そのまさかの可能性もある」

彼はまた言った。
「サハラは複雑な宙形の星系が多いからな」
「それはわかっていますが」
「だからだ。こうした場所にはある程度慣れているのかも知れない」
「それでは」
「地の利は。思ったより期待できないかも知れないな」
「残念なことです」
「それはそれで仕方のないことだ」
だが彼はここではこう述べた。
「それに。それでもニョルズに関する知識は我々の方が多いのには変わりがない」
「はい」
「それをどう生かしていくか、だ」
「臆することはないというわけですね」
「それはもう言うまでもないだろう。しかし」
「しかし」
「敵を侮るつもりもない。手強いぞ」
「はい」
これには皆頷いた。
「全艦隊進軍開始」
彼はまた言った。
「そして敵を退けるぞ」
「ハッ」
「おそらくこれで終わりではないだろうがな」
「でしょうね」
これだけは部下達もわかっていた。
「戦いの序章に過ぎないでしょう」
「うむ」
タンホイザーは頷いた。彼の心は既に戦場へと赴いていた。
ニョルズにおける戦いは遂に実際の戦闘へと移ろうとしていた。

戦いは次の局面に移ったのであった。

# 第十五部第四章　前哨戦その一

前哨戦

タンホイザー率いる十個艦隊は彼の指示に従い戦場に向かっていた。しかしこれに気付く者は彼とその兵士達以外誰もいなかった。
これはエウロパ軍も同じであった。補給路を守るターフェル、ジャースクの両提督もまた周囲に警戒態勢は敷いていてもタンホイザーの接近には気付いてはいなかったのであった。
「敵は来るでしょうか」
中にはこのような発言もあった。味方が来るとは夢にも思ってはいない。ジャースクの旗艦であるヘルメスの艦橋内における発言であった。発言したのはジャースクの部下であった。
「まず来るだろうな」
ジャースクはそれに答えた。
「補給路を絶つことは戦術の基本だ」
「はい」
「それを狙って来ないとは思えない。確実に仕掛けて来るだろう」
彼は重厚な声でこう言った。
「確実に、ですか」
「今も動いているだろうな」
「左様ですか」
「だからこそ周囲には警戒を払っておけ」
「はい」
「仕掛けられてからではどうにもならないからな」
「わかりました。それでは」
「うむ」
彼等は周囲への警戒を怠ってはいなかった。だがそれでもタンホイザーの艦隊を発見することはできなかったのだ。
味方が発見出来ない程である。敵である義勇軍の者達が発見出来

ないのも当然であった。義勇軍もまたタンホイザーの艦隊には気付いてはいなかった。だがジャースクとターフェルの艦隊に関してはその旗艦の位置まで把握していた。
「まずはターフェル提督の旗艦を狙うぞ」
濃い頬髭と口髭を生やした浅黒い肌の男がティアマト級巨大戦艦の艦橋で言った。補給路に向けられた二個軍団のうち一個軍団を指揮するイブン＝アルガイダであった。
「はっ」
艦橋に詰める幕僚達がそれに頷いた。
「まずは敵の指揮系統を破壊する。それから敵艦隊だ」
「敵艦隊の後は補給路の寸断ですね」
「そうだ。補給艦を奪取出来ればいいな」
「それでこの戦いは勝ったも同然ですね」
「そうだ。敵の数は把握しているな」
「はい」
「十個艦隊です。我が軍のおよそ半分です」
「もう一個の軍団と合わせてな」
「はい。数的には我等の方が有利な状況となっております」
「間違いさえ犯さなければよいな。第七義勇軍団のカフジ大将にも伝えてくれ」
アルガイダは言った。
「これから補給路の破壊に取り掛かるとな。よいな」
「わかりました。それではそのように」
「うむ」
彼等はこうして戦いに取り掛かった。まずはターフェルの旗艦グンナルに狙いを定めた。しかしグンナルはまだそれには気付いてはいなかった。だが別の者がそれを知っていた。

## 第十五部第四章　前哨戦その二

「今まさに攻撃を仕掛けようとしておりますね」
グングニルの艦橋で幕僚の一人がタンホイザーに対して語っていた。
「そうだな。やはりと言うか」
タンホイザーはその幕僚の言葉に頷いた。既に義勇軍の姿はモニターに映し出されていた。彼等は今タンホイザーの軍の前方、斜め下にいた。
「その数およそ十個艦隊」
「一個軍団ということか」
「そうですね。数においては互角です」
「ポイントは我が軍が抑えているがな」
「ではすぐに攻撃に移りますか」
「当然だ」
彼は答えた。
「全軍すぐに攻撃に移る。総攻撃だ」
「了解」
幕僚達が一斉に敬礼して応える。
「まずは一撃を加えよ。そうすればターフェル提督も気付く」
「はい」
「それで彼の艦隊も攻撃に加わるだろう。そうすれば勝利は見えてくる」
「わかりました。それでは」
「うむ」
こうしてタンホイザーの軍は戦闘態勢に入った。彼等は敵に気付かれぬうちに、且つ迅速に兵を動かしていた。今まさに義勇軍が攻撃に移ろうとしたその時に攻撃を仕掛けて来たのであった。
「攻撃用意」

アルガイダが指示を下す。
「攻撃目標は予定通りだ」
「はい」
「そこに集中攻撃を仕掛けよ。その後は波状攻撃に移る。よいな」
「了解しました」
巨大戦艦の巨砲がグンナルを捉えた。その咆哮を叫ぼうとするその時であった。突如として無数の光が彼等に降り注いだ。
「なっ！？」
「敵襲か！」
アルガイダはそれを受けてまずこう叫んだ。
「何処からだ！」
「上からです！」
幕僚の一人が大きく揺れる艦橋の中で応えた。アルガイダの乗艦であるムアーウィアも攻撃を受けていたのだ。だがその攻撃は重厚なバリアーと装甲によって防がれていた。
しかし他の艦は違っていた。攻撃を受け撃沈される艦もあった。どれだけ装甲やバリアーが厚くともやはり限界があるということであった。
「上からか」
彼はそれを聞いて口惜しそうに上を見上げた。
「すぐに攻撃を中止せよ」
「はい」
幕僚達がその指示に頷く。
「そして上の敵に備える」
「わかりました」
「ダメージを受けた艦は一先後方へ下がれ」
「ハッ」
「工作艦による修理を受けよ。よいな」
「防衛戦ということで宜しいですね」
それを聞いて幕僚の一人が問うた。

「とりあえずはそうだ」
そしてアルガイダ自身もそれを認めた。
「そして第七義勇軍を呼んでくれ。このままでは危険だ」
「どうやらそのようですね」
斜め前に姿を現わした帝国軍はそのまま下に向けて突撃して来る。
彼等の勢いを見てそれは判断できた。
「ではすぐに」
「頼むぞ」
「了解しました。それでは」
「うむ」
連絡も取られた。そして義勇軍はジワジワと退きながら陣を整えていく。そしてタンホイザーの攻撃を凌ぎにかかっていた。
「敵の提督もどうやらそれなりに戦い慣れているようだな」
タンホイザーは義勇軍のその動きを見て呟いた。
「流石と言うべきでしょうか」
部下の一人がそれに答える。
「歴戦の精鋭部隊と言われておりますから」
「少なくとも正規軍よりも動きは遥かにいいな」
タンホイザーもそれは認めた。
「彼等の動きは。何処かぎこちない」
「はい」
これはどうやら実戦経験の差であるらしい。こうした動きは訓練だけではどうにもならない部分があるのである。
「それと比べるとな。まるで違うな」
「そうですね」
「だがそれに臆する必要はない」
彼は言い切った。

## 第十五部第四章　前哨戦その三

「このまま攻撃を続ける。よいな」
「わかりました」
「そしてターフェル提督の艦隊はどうしているか」
「こちらに気付かれました。今急行されています」
「そうか、それは何よりだ」
それを聞いてとりあえずは安心した。
「ではまた攻撃だ」
「はい」
「敵は防衛態勢を整えようとしている。速攻でくじくぞ」
「わかりました。では」
「行くぞ。よいな」
「ハッ」
グングニルが前面に出た。自らが率先して攻撃に入るのであった。
嵐の神の槍が突き進む。その後に騎士達が続く。義勇軍はそれを受けてもまずはその攻撃を受けるしかなかった。間に合わなかったのだ。
「クッ、早い！」
「だが！」
攻撃を受けた。それで多くの艦艇が撃沈される。だがそれでも義勇軍は後退を止めずそのまま下がり陣を整えたのであった。
「損害状況は」
アルガイダは幕僚達に損害状況を問うた。彼は腕を組み艦橋に仁王立ちしていた。
「千隻程です。そのうち撃沈されたのが半分程です」
「多いな」
彼はそれを聞いて呟いた。
「奇襲を受けただけはあるな」

「残念ながら」
「だが陣を敷くことはできた。これで守るぞ」
「はい」
「司令」
別の幕僚が問うてきた。
「何だ」
「とりあえずは守りを備えるとしまして」
「うむ」
「問題はそれからです。如何致しますか」
「友軍には連絡してあるな」
「はい」
「ならば問題はない。援軍が来るまで守り抜くぞ」
「わかりました。それでは」
「暫くは守りに徹する。そして援軍が到着し次第次の動きに移る」
「次の動きは」
「それは敵の状況によって判断を下す」
彼は言った。
「よいな。それで」
「了解しました。では攻撃、退却双方の準備をしておきます」
「うむ」
幕僚達もわかっていた。アルガイダはその外見から勇猛な人物と思われているがその実はかなり慎重な男なのである。従って作戦行動もあらかじめ決めてから動くことが多い。
「敵がまた来ました」
「ビームの斉射により弾幕を張れ」
彼は指示を下した。
「敵を近付けさせるな。巨大戦艦及び戦艦を前面に出せ」
「ハッ」
「そしてその火力と防御力で防ぐ。よいな」
「わかりました。では」

こうして守りが固められた。義勇軍はまるで盾を構えたかのように厳重な防衛陣を敷き敵を寄せ付けない。それに対してエウロパ軍は果敢に攻撃を仕掛けるがその守りの前に攻めあぐねていた。そこに遂に義勇軍が待っていた、かつエウロパ軍が怖れていた援軍がやって来たのであった。
「来たな」
アルガイダは彼等の姿を認めてニヤリと笑った。援軍は丁度戦場の真下から現われた。その数十個艦隊、かなりの規模であることはもう言うまでもなかった。
「おい、何を手こずっているんだ」
モニターに一人の男が姿を現わした。浅黒い肌から彼もまたサハラの者であることがわかる。
「すまん、こっちのミスだ」
「それで俺を呼んだのか」
モニターに映る男はそれを聞いてあえて不機嫌な顔を作った。
「全く。いつも困った奴だ」
「まあそう言うな。困った時はお互い様だと言うだろう？」
「知らないな。悪友程難儀な存在はないという言葉なら知っているがな」
「そんな言葉聞いたことがないが」
「当たり前だ。俺が今考えたのだからな」
そうした話をしながらも援軍は戦場に向かっていた。それは当然ながらエウロパ軍にも確認されていた。
「下から敵です」
「規模は」
タンホイザーはまず敵の数を問うた。
「十個艦隊、即ち一個軍団です」
「一個軍団か」
「これで敵は二個軍団となります。それに対して我々は」
「十五個艦隊だ。数においては不利になったな」

「はい。残念ながら」
「そして状況もな。このままでは前と下から挟撃される」
「如何致しますか」
「補給路を守るという目的は達した。ここは一時退く」
「はい」
「勝っているうちに退くことも大事だからな。今がその時だ」
「わかりました。それで宜しいのですね」
「今は打って出る時ではないしな」
彼はここで思わせぶりに言った。

## 第十五部第四章　前哨戦その四

「出る時はまだだ。今はこれでいい」
「わかりました。それでは」
「うむ。全軍退くぞ」
タンホイザーは指示を下した。
「そして補給路で陣を敷きなおす。よいな」
「了解」
全軍それに従った。こうしてエウロパ軍は退き補給路において陣を敷いた。それまでの動きはまるで風の様であった。迅速そのものの動きであった。
「クッ、退いたか」
「それにしても。見事な動きだな」
アルガイダと浅黒い肌の男は歯噛みと苦笑いを浮かべつつこう言い合った。
「機動力はやはり向こうの方が上だ。仕方がない」
「そうだな。で、だ」
男は今度はアルガイダに対して言葉をかけてきた。
「何だ」
「この借りはどうしてくれるんだ」
「どうすると言われてもな」
アルガイダはそれを聞いて困った顔を作った。
「正直に言わせてもらうと感謝している。済まないな」
「じゃあワインでも貰おうか。青でいいのが入ったそうじゃないか」
「青じゃない、黒だ」
アルガイダは言い返した。青ワインもあれば黒ワインもあるのだ。これは黒葡萄から作る。青や黒の作り方は赤や白とはまた違うのである。葡萄の色がそのまま出ることで知られている。
「黒か」

「嫌か？だったらいいが」
「馬鹿を言え、もらえるものはもらっておく」
男はこう言い返した。
「このカフジ、美女とワインの申し出は決して断らない主義だ」
「ワインはともかく美女から申し出を受けたことはあったか？」
「これからのことだ」
彼はこう言葉を返した。
「まだ妻は一人だからな。後三人空いている」
「養えたらいいがな」
「金の問題はないが」
「そういうことじゃない。身体の方は大丈夫だろうな。四人は大変らしいぞ」
「そんなことは御前が気にすることじゃない。それに俺は美女なら何人いても平気だ」
「そうだったかな」
アルガイダはそれを聞いて口の端を歪めてきた。
「この前もう歳だ、とか誰かが言っていたような気がするがな」
「それはそれだ」
「つまり美女はいいのだな」
「うむ」
「ワインも。いいな」
「ではくれるのだな」
「ああ。助けられたのは事実だしな」
アルガイダは言葉を返した。
「礼だ。助かった」
「何、これもアッラーの思し召しだ。貴様のワインを俺が飲むようにとな」
「アッラーは本来酒を好まれてはいないが」
「だから言っただろう？それはそれ、これはこれだ」
カフジは口が減らなかった。そしてまた言った。

「わかったかな」
「都合がいいな。だがいい」
アルガイダも納得したうえで笑った。
「持っているのを全部でいいな。
「ああ。気前がいいな」
「そのかわり今回のことはこれで貸し借りなしだ」
「うむ」
「それでだ。これからどうする」
「これからか」
彼等は作戦に戻っていた。
「敵は退いたが。補給路はまだ健在だ」
「しかし。今は襲撃を仕掛けるのは無理だろう。見ろ」
カフジはこう言って前を指差した。
「既に防衛態勢を整えている。今攻撃を仕掛けても無駄な損害を出すだけだ」
「そうだな。ではここは退くか」
「致し方あるまい」
「よし、全軍撤退」
「すぐに安全な場所にまでさがれ」
「ハッ」
こうして義勇軍の二個軍団はとりあえず安全な場所にまで撤退した。結果として補給路を寸断する作戦はタンホイザーの思いもよらぬ奇襲により防がれた。エウロパ軍は当面の危機は脱することができたのであった。

## 第十五部第四章　前哨戦その五

「そうか、タンホイザー元帥がか」
モンサルヴァートはその報告を受けた時食事中であった。司令室で一人であるが豪勢な食事を採っていた。ラムを赤ワインでじっくりと煮たものに肉と野菜、そして卵のスープ、野菜をオリーブオイルで炒めたものに鮭のムニエル、白く柔らかいパン、そして赤ワインであった。彼は若い将校からその報告を受けていた。
「今回もまた彼に救われたな」
「はい」
報告に来た若い将校はそれに頷いた。
「危ないところでしたが」
「直感というのは大事なものだ」
彼はラムを口に入れた後でこう述べた。
「大事ですか」
「そうだ。勘がなくてはな。戦争はできない」
「はあ」
「そんなものに頼っていては、と思っているな」
首こそ傾げないがいぶかしげな将校の顔を見てこう言葉をかけてきた。
「どうだ」
「申し訳ありませんがその通りです」
将校は申し訳なさそうにそう述べた。
「謝る必要はない」
これに対してモンサルヴァートはまずこう述べた。
「まず行っておこう」
「はい」
「これは士官学校でも言われたと思うが将校はあまり頭を下げてはならない。必要な時だけでいい」

「はい」
　これは軍においては将校としてのあり方としてよく認識されているものである。人に命令する立場であり、無闇に頭を下げては指揮等にも支障が出るからだ。また階級組織としてのあり方にも影響が出る。誤りがあれば黙って正す、頭を下げるのは必要な時だけであるべきというのが軍における将校としてのあり方だとされている。
「わかったな。それからだが」
「はい」
「君は何かスポーツをしているか。どうだ」
「フェシングをやっております」
　将校は答えた。
「そうか。フェシングをか」
「サーベルを主にやっております。これでとある大会で優勝したこともあります」
「かなりの腕のようだな」
「いえ、地方のほんの小さな大会ですし」
　そう言って謙遜を見せる。
「あまり大したことは」
「だがやっていることには替わりがないな」
「ええ、まあ」
「ならばわかるな。勘がどれだけ重要かを」
「あくまでスポーツにおいてですが」
「それでもだ。相手と正対していて何か来る時があるだろう」
「はい」
　これには頷いた。
「それだ。それがないと勝負には勝てない。違うか」
「仰る通りです」
　彼もそれは認めた。
「剣や身体の裁きは最も重要ですが」
「うむ」

「それだけでは。戦っていると何か来る時があります。それに従って動かないとどうしようもないです」
「そうだな。それを感じないと敗れる」
「しかし御言葉ですがこれはあくまでスポーツの話ですが」
「スポーツの源流は知っているか」
「確かスパルタでしたね」
「そうだ」
モンサルヴァートは頷いた。スパルタとは言わずと知れた古代ギリシアの都市国家である。戦争に勝つことを至上命題とし、男の市民は皆兵士であった。厳しい集団生活と過酷な訓練により精強な軍隊を作っていた。かつては古代ギリシア世界において最強の戦士達と謡われていた。
「彼等が身体を鍛える為だったのを知っているな」
「スポーツの語源にもなっていますね」
「そういうことだ。では私が何を言わんとしているかわかるな」
「はい」
彼は頷いた。
「つまりスポーツもまた戦いであると。そういうことですね」
「そうだ」
モンサルヴァートはワインを飲んだ後で満足そうに応えた。

## 第十五部第四章　前哨戦その六

「極論を言えばスポーツは戦場で戦う為に自分の身体を鍛えるものなのだ。これでわかるな」
「よくわかりました」
「だからだ。勘もまた必要だ」
彼は言った。
「そうした意味でタンホイザー元帥は正しい。しかしな」
「しかし」
「彼程の勘の持ち主はそうはいない。あれは最早天才の域だ」
「つまりそうおいそれと真似できるものではないと」
「彼の他にああした戦い方ができる者がいるか」
「いえ」
これはすぐにわかった。将校は首を横に振った。
「やはりタンホイザー閣下の戦術は。あの方にしかできないものであると思います」
「そうだな。私にも無理だ」
モンサルヴァートは述べた。
「ああした戦い方は。将に天才だ」
「はい」
「天才というのは特別な存在だ。誰かに言われる前にもう知っている」
歴史上天才と言われる人物は稀である。モーツァルト然り。彼は幼い頃から作曲をはじめ、ピアノを弾いていた。そして三十五歳で夭折するまでに多くの曲を残した。そこには一作も駄作はないとまで言われている。とりわけオペラにおける才能は驚嘆すべきもので多くの解釈まで可能である。そして彼はその音楽の才を全ての登場人物に与え、人格を作ったのである。モーツァルトのオペラには端役はない、とまで言われている。

「彼もまたそうだ。こと戦場のことにかけては彼以上の天才はいない」
「そういえば初陣でいきなり五隻の敵艦を沈められたそうですね」
「士官学校を卒業してすぐにな。それから瞬く間に元帥に昇進した」
「はい」
「だが彼は階級にはあまり興味がないようだな。それよりも戦場にいたいようだ」
「ただ戦いだけを求められているということですか」
「それが天才の天才たる由縁の一つだな。欲がない」
モンサルヴァートは言った。
「だからこそ天才なのだろうがな」
「今回はその天才に救われましたね」
「ああ。正直今補給路を襲われては恐ろしいことになる」
彼は言った。
「やはり十個艦隊では無理があるか」
「はあ」
「そこもよく考えておくか。しかしこれ以上前線に戦力を向けないのもな」
「それはそれで厄介なことになりますね」
「そうだ。問題は多い。一度参謀総長とも話してみる」
「わかりました。それでは」
「食事の後ですぐに話をしよう。ところで」
「何でしょうか」
「いや、卿ではない」
彼はこう言うと後ろに控える従兵に顔を向けた。
「デザートを持って来てくれないか」
「畏まりました」
食事の最後のデザートである。これもまた形式であり崩すわけにはいかない。司令官の食事もまた一つの形式なのである。軍隊、とりわけ貴族の軍隊であるエウロパ軍はとりわけ形式を重要視する。

この時もそうであった。
デザートが運ばれて来た。チョコレートパウダーを多くまぶしたティラミスであった。モンサルヴァートはそれをフォークとナイフで切り口に入れた。
「如何でしょうか」
「今回のティラミスは甘さを抑えているな」
「はい。シェフは素材を活かすことを考えられたと仰っています」
「そうか。だからか」
彼は味わいながら応えた。
「そしてお味はどうでしょうか」
「いい。むしろ甘みを抑えたことが成功している」
そしてこう述べた。
「今度からこれで頼みたいな、ティラミスは」
「わかりました。ではその様にお伝えします」
「明日もティラミスで頼むと伝えてくれ。そして期待していると」
「はい」
こうして食事は終わった。彼はその後で会議室に向かいプロコフィエフと主立った参謀達との話し合いに入ったのであった。

## 第十五部第四章　前哨戦その七

モンサルヴァートが会議室に入った時既にプロコフィエフ達は部屋にいた。そして彼が部屋に入ると一斉に席を立ち敬礼をした。
モンサルヴァートもそれに返した。席に着きそれから会議がはじまった。
「補給路の件だが」
彼はまずそれについて言及してきた。
「もう聞いているな」
「はい」
一同を代表してプロコフィエフが答えた。
「連合軍の襲撃を受けましたね」
「それだ。彼等はもう我々の補給路を掴んでいる。まずそれが第一の問題だ」
「はい」
「そして第二の問題は」
参謀の一人が問うた。
「補給路まで来れたということだ」
モンサルヴァートの第二の問題に対する答えはそれであった。
「このニョルズはエウロパで最も複雑な宙形を持つ星系だ」
「はい」
「それなのに易々と辿り着かれた。彼等の調査能力と航宙能力の高さがわかるな」
「それですか」
「おそらくまた補給路を狙って来るだろう。そして我々はそれに対して充分な兵力がない。十個艦隊ですら心許ないこともまたわかった」
「ではどうすれば」
「こちらから仕掛ける」

モンサルヴァートは言った。
「決戦を挑む。さもなければこのまま補給路を脅かされ何れはこちらが敗れる」
「敗れる」
「そしてオリンポスに雪崩れ込まれる。それだけは避けなければならない」
彼はここで自分では気付いていなかったが焦っていた。補給路を脅かされ、そこにまで到達されたことに対してかなりの危機感を抱いたのであった。これは指揮官として当然のことであったがこれがここでの戦いに大きく影響するということはこの時はまだ誰も知らなかった。
「四十個艦隊で敵の主力に攻撃を仕掛ける」
「補給路を守る艦隊のみ置いてですか」
「そうだ。だがこちらから積極的に仕掛ける必要はない」
「といいますと」
「敵の主力を引き付ける。今はそれだけでいい」
だが彼は決戦を挑むことはここでは避けた。
「前にも言ったが我々は負けなければいいのだからな」
「はい」
参謀達もその言葉に頷く。
「負ければそれで終わりだ。戦いは何も戦場において勝つだけではない」
「それだけではないのですか」
「負けないこともまた必要なのだ。そして今はそれだ」
「それですか」
「このニョルズの後はもうないということをまず念頭に置いてくれ」
彼は言った。
「ここを破られたならばそれで終わりだ。後はオリンポスしかない」
「御言葉ですが司令」
「何だ」

やや年配の参謀に顔を向けた。
「オリンポスにも防衛ラインはありますが。それを使えばまだ戦えるかと」
「首都の攻防戦か」
「はい。それは無理なのでしょうか」
「それをしたらどうなると思うか」
「無論オリンポスにもかなりの損害が出るでしょう。ニーベルング要塞群の例を見るまでもなく」
「そうだな。首都がその機能を崩壊させる。それではどうにもならないな」
「あ・・・・・・」
この参謀はあくまで軍人であると言えた。軍人だからこそそうした首都機能にまで考えが及ばなかった。迂闊と言えば迂闊な話である。しかし軍人には軍人の限界があるのもまた事実であった。この世には真に万能な者も全知全能の存在もいはしないからだ。

## 第十五部第四章　前哨戦その八

これは幾分か政治家の考えであった。モンサルヴァートは軍人であるが総督府においてマールボロの下で統治にも携わり、また統帥本部長として政治にも関わってきている。だからこそそこにも視点を向けることができたのである。

「当然首都での戦いも考えられている。しかしそれをすればエウロパ事態が崩壊してしまう。戦いも泥沼になり収納がつかなくなるだろう」

「無制限戦争になるということですか」

「そうだ。我々はそれは望んではいない。そうなれば無辜の市民にまで犠牲が出る。今は何とか最小限に抑えているがその努力も水泡に帰す」

エウロパ軍の戦略思想として銃を持たない市民に対する攻撃は控えるというものがる。これは連合軍も同じであった。かつての騎士道、そして武士道の考えであるとも言われている。連合軍がこれに対して厳格なのはやはり連合が市民により形成されている国家連合という勢力であるからであった。若し他の国家が他の国家の市民を害すればそれだけで深刻な外交問題に発展する。それを避けるという意味合いもあったのである。この為連合軍は暴徒等に対してもまず威嚇射撃、それから生命の危険のない催涙弾による攻撃といった順序を踏むのである。暴徒に対しては即座に攻撃を仕掛けることの多いサハラとは思想も状況も異なるのである。サハラは戦場である。そうした悠長なことは不可能な場合も多いのである。

「市民に害が及んでは何もならない」

「それは当然のことです」

これには皆頷いた。彼等もまたエウロパ軍であるからだ。

「だからだ。若し何があっても勝ちたいならばいいがな」

「ゲリラ戦を使ってでも、ですか」

「だがそれをやれば話にもならない。この美しいエウロパは無残に破壊されてしますだろう」
「そうなれば」
「何の意味もない。我々は市民とこの美しいエウロパを守る為に戦っているのだからな。だからオリンポスでの戦いはできはしない。侵入されたならばそれで終わりだという意味がわかったな」
「はい」
年配の参謀は苦渋に満ちた顔で頷いた。
「わかってくれたならばいい。それでだ」
モンサルヴァートは言葉を続けた。
「やはりここで防がなければならない。それならば対峙するだけでいい」
「だからこそですか」
「そうだ。まずは敵軍をここに貼り付ける。それが第一の目的だ」
「第二は」
「先にも言ったが敗れないことだ。我々の戦略目的はオリンポスの防衛なのだからな」
「ではそれに従い敵を誘導しますか」
「その必要はない」
だが彼はそれを不要とした。
「何故」
「彼等の方から来てくれる。それはいい」
彼はこう答えた。
「我々が然る場所に集結したならばな。彼等は勝利を収めなくてはならないからな」
「成程」
「ならば来る。我々はそれを引き付けて守っていればいいのだ」
「それでは」
「すぐに艦隊を集結させよ。ポイントは」
ここで彼等の前にホノグラフィーでニョルズが浮かび上がった。

三次元地図であった。
「ここだ。よいな」
「はっ」
モンサルヴァートはレーザーでニョルズにおいて最も広いポイントを指し示した。そこは将に決戦の場に相応しい場所であった。集結するにはそこしかなかった。
「では我々も向かう。ただし補給路を守る艦隊はそのままだ」
「はい」
「四十個艦隊で向かう。何としても彼等をここから先には進ませないぞ」
「了解」
エウロパ軍は動きをはじめた。今まで散開してそれぞれの行動をとっていたエウロパ軍はすぐに集結に向かった。この動きは義勇軍にも伝わっていた。

## 第十五部第四章　前哨戦その九

「そうか、動いたか」
それはマシュハドも聞いていた。彼は艦橋のモニターに映る三次元地図を見ながら思索に耽っていた。
「そのポイントに兵を集結させてくるとはな」
「これはおそらく我等への足止めでしょう」
傍らにいるワフラがこう応えた。
「足止めか」
「はい。おそらくは」
「オリンポスに行かせない為だな」
「私もそう思います。彼等の戦略目標はオリンポスの防衛が第一ですから」
「それに対して我々の目標はオリンポス入城だ」
それが連合軍の戦略目標である。これは義勇軍も変わりはしない。それに対してエウロパ軍は何としてもオリンポスを守り抜く。それのせめぎ合いであるのだ。
「はい」
「それを認識したうえでか。まさかそれで戦力を集結させて来るとはな」
「これは正直予想していませんでした」
「そうなのか」
「はい」
ワフラはそれを認めた。
「彼等を各個撃破していく戦術も考えていたのですが。その手間が省けたと言えば省けました」
「ふむ」
「集結したのは好都合である反面やはり策を疑います」
「おそらくは守りを固めて動こうとはしないだろうな」

「亀の様に。数においては我等の方が優勢ですから」
ワフラは答える。答える目が鋭く光っていた。
「そしてその間に伸びた我等の補給路なりを脅かしてくる」
「はい」
「予想できるな。だがそれをどうするかだ、問題は」
マシュハドの目もまた光る。何かを求めているかのように。
「その前に彼等を潰すということです」
「仕掛けるのか」
「無論」
彼は言い切った。
「我々は勝たなければなりませんから」
「一つ聞きたいが」
「何でしょうか」
マシュハドはここで落ち着いた声で彼に問うてきた。ワフラもそれに応えた。
「焦ってはいるか」
「焦って」
「そうだ。戦いに焦燥は禁物だぞ」
あえて落ち着いた声で問う。
「失敗を誘ってしまうからな」
「それはわかっているつもりです」
ワフラは言葉を返した。
「ならばよいがな」
「そして敵が集結している場所ですが」
彼は作戦に言葉を戻した。
「かなり厄介な場所のようですね」
「周りはアステロイド帯に磁気嵐まで出ているな」
「はい。これ程戦うのに不向きな場所もありません」
彼は述べた。
「そこに我が軍を誘うということは。何か魂胆があるのでしょうか」

「地の利を使って戦うつもりなのだろうな」
「地の利を」
「そうだ。これは厄介な戦いになるかも知れないな」
マシュハドはあえて落ち着いた声で述べる。まるで言い聞かせるように。
「だが行かねば戦いにはならない。勝利も収めることはできない」
「はい」
「それはよく認識するようにな。虎穴に入らずば」
「虎児を得ず、ですね」
中国にある古い諺であった。彼等は連合に流れ着いてからこの諺を知ったのである。サハラにも多くの諺があるが何故か連合のものを気に入ってよく使っているのである。
「今エウロパ軍は虎児だ。そしてそこは虎穴だ」
「罠がない方が不思議ですね」
「罠は破ればよい。何があろうともな」
「では」
「行くのだろう、無論」
「はい」
ワフラはニヤリと笑って答えた。
「勿論です」
「では行くぞ。九十個艦隊でよいな」
「はい」
また頷いた。
「では補給路を防衛する艦隊を残して全軍進撃だ」
マシュハドが指示を下した。
「攻撃目標はエウロパ本軍。ここで彼等を殲滅しオリンポスに向かうぞ」
「ハッ」
ワフラだけでなく幕僚達もそれに頷く。
「異教の神々が我等に屈する時が来た。それが今だ！」

彼は宣言した。今巨大な漆黒の軍隊がその動きをゆっくりとはじめたのであった。まるで嵐が動きはじめたかのように。

## 第十五部第四章　前哨戦その十

義勇軍が動いたとの報告はモンサルヴァートのもとにも入った。彼はそれを聞いた時既に集結ポイントにいた。そこはニョルズ星系において数少ない広がった空間であった。だがただ広がっている場所ではない。

そこは周辺を磁気嵐、そしてアステロイド帯に囲まれた場所であった。一見広くともその周辺は艦艇の航行を妨害するものに満ちておりまるで棘のついた檻であった。彼はその檻の中にあえて自軍を置いていたのである。

「連合軍が動いたそうだな」

「はい」

ベルガンサが彼の問いに答えた。プロコフィエフはこの時順番で休息に入っていた。戦いの前の最後の休息である。

「九十個艦隊を以ってこちらに進んできております」

「そうか、予想通りだ」

彼はそれを聞いてこう述べた。

「それだけの大艦隊でここに来れるかな」

「その心配はないでしょう」

ベルガンサはその蒼い目に複雑な光をたたえながら言った。

「これだけ複雑な障害を潜り抜けて補給路を狙ってきたのですから。まず来るでしょう」

「そうか」

「ただ。ここで戦えるかどうかまではわかりませんがね」

そしてこう言ってニヤリと笑ってみせた。

「この檻の中ではね」

「だが我等も檻の中にいるが」

「それでもです」

ベルガンサには絶対の自信があった。

「我等はこのニョルズを知っております」
彼は言った。
「閣下もここははじめてではない筈ですが」
「無論だ」
モンサルヴァートもそれに答えた。
「士官学校時代からここには来ている」
「やはり」
このニョルズは平時においては軍の訓練場所であった。サハラでの戦いを想定するのならこの複雑な星系は訓練やシュミレーションにおいて絶好の場所だったのである。モンサルヴァートもここで士官学校時代から訓練を受けていた。言うならば馴染みの場所である。
「懐かしくもあるな。あの頃を思い出す」
「違うのは今はここで実際に敵と干戈を交えるということですね」
「そうだ。今回は命を賭ける」
モンサルヴァートの目が決する。
「全軍に伝えよ。この戦いにエウロパの全てがかかっている」
「ハッ」
ベルガンサはそれを受けて敬礼した。
「クロノス、ニョルズ、この二つが我等の運命を決する場だ」
「そしてそれに敗れたならば」
「言うまでもないだろう」
「はい」
これには頷くしかなかった。
「閣下」
ここで伝令将校が入って来た。
「来たか」
「はい。モニターを御覧になって下さい」
それに従う形でモニターのスイッチが入れられる。そこに義勇軍の漆黒の艦隊が映し出された。銀河の無数の星達にその威容が映し出されていた。

## 第十五部第四章　前哨戦その十一

「遂に来たな」
「はい」
ベルガンサがそれに頷いた。
「丁度今最後の休息時間も終わりました」
「お待たせしました」
ここでプロコフィエフも艦橋に入ってきた。役者が揃った。
「来たな」
「はい」
「彼等も来た」
モンサルヴァートは一言プロコフィエフにこう述べた。
「その数約九十個艦隊」
伝令将校が言葉を続ける。
「我が軍の正面に展開してきております」
「正面からですか」
今モンサルヴァートの軍はアステロイド帯を背に布陣している。そこに義勇軍は正対する形でやって来ているのだ。まるで餓えた狼が獲物を追い詰めるようにである。
「どうやら数を頼りに攻勢を仕掛けるつもりのようですね」
「それはどうかな」
モンサルヴァートは若い参謀の言葉に疑問の声を投げ掛けた。
「違うと」
「その可能性もある」
モンサルヴァートはまた言った。
「敵も愚かではない。芸もなくここにまで来るとは思わないことだ」
「それでは」
「用心しておけ。わかったな」
「はい」

「そしてだ」
言葉は続く。
「磁気嵐は今どうなっているか」
「今は収まっております」
気象参謀から報告があった。
「アステロイド帯からの重力障害も我々の方は大したことはありません」
「そうか。では我々にとってはいい状況だな」
「はい。それでは」
「うむ。予定通り全軍戦闘態勢に入れ」
「ハッ」
艦橋にいる全ての者が敬礼した。
「守りに備えよ。よいな」
「わかりました。それでは」
「うむ」
エウロパ軍は戦闘態勢に入った。これに対して義勇軍はその巨体をゆっくりと進撃させてきていた。その間周囲への調査を怠らなかった。勇猛な中にも慎重さを忘れないマシュハドらしい行動と言えた。
「どうだ、ここは」
マシュハドは参謀達に問うていた。
「やけに複雑な場所ですね」
義勇軍の主任気象参謀がこれに答えた。
「宇宙潮流まで複雑に絡み合っています」
「宇宙潮流か」
「はい。しかも一つ一つがかなり強いです。我が軍の艦艇でなければ巻き込まれそうになる程です」
「そこまで強いか」
「艦艇の中にはそのせいで速度が落ちているものもあります。全体の進撃速度に影響が出ております」

「ふむ」
彼はそれを聞いて考える顔になった。思案深い顔には深い皺が刻まれている。まるでそれが歴戦のあかしであるように。
「それは厄介だな」
「はい」
「これからのことも考えると。どうするべきか」
「いえ、これはこれで使えるのではないかと思いますが」
「策があるのか」
「はい」
ワフラはニヤリと笑って答えた。
「ならばそれを見せてもらおうか」
「時が来れば。まずはその潮流を調べましょう」
「うむ。流れの向き及び強さをな」
「それではすぐに」
こうして気象参謀による調査が即座に開始された。その調査を続けると同時に義勇軍はエウロパ軍の前に進出した。両軍はここではじめて対峙したのであった。

## 第十五部第四章　前哨戦その十二

「決戦を挑むつもりか」
「彼等はそのつもりのようですね」
目の前に布陣した義勇軍を見てモンサルヴァートとプロコフィエフはそれぞれそう話した。
「正面から来るかな」
「彼等の兵力は我等の倍以上」
プロコフィエフはまず兵力について言及してきた。
「それを踏まえますとまずはそれが第一に考えられます。ですが」
「何かあるというのだな」
「はい。連合軍は今までの戦いで常に策を用意してきました」
「ニーベルング然りアルテミス然りだな」
「それを考慮に入れますと今回も何かを考えているでしょう」
「彼等は連合軍正規軍ではないにしろか」
「同じことです。連合軍は本質的に犠牲を嫌う軍隊です」
程度の差こそあれどこれは軍隊の本質の一つである。だが連合軍はそれが突出しているのである。これは志願制であり尚且つ軍人という職業があくまで職業の一つとしか認識されていないからである。連合では軍に入るのは待遇がよく、戦死することが稀だからである。それで犠牲が多ければどうなるか。もう言うまでもなかった。
「だからこそ策を講じるのです」
「ふむ」
「彼等はサハラからの難民による義勇軍でしたね」
「その通りだ」
「連合においては異端ですが。その装備及び編成は連合のそれです」
「では結局同じことをしてくるというわけだな」
「私はそう見ています。問題は何を仕掛けてくるか、ですが」
「備えはあるか」

「はい」
これには答えることができた。
「まずは防御を固めましょう。そしてこちらからは動かないことです」
「うむ」
「それでニーベルングの時のような無人艦艇による攻撃やアルテミス等における釣り出し戦術にも対抗することができます」
「敵を釘付けにするだけでよいからな、今の我々は」
「そうです。後は掃海艇や魚雷艇を多数用意しておきましょう」
「何故だ」
「機雷を使って何かをしてくるかも知れません。彼等は機雷を使うことが多いですから」
「それはあるな」
モンサルヴァートも話を聞いて頷いた。
「連合軍は。機雷を使って足止めや工作をすることが多かった」
「はい」
「確かに有効だからな。撒くのは迅速かつ容易だが除去は時間がかかり難しい」
陸においては地雷、海及び宇宙においては機雷である。これ等は悪魔の発明品と言われている。非常に安価で撒くのも容易だがそれへの対処は困難なのである。効果的であり後始末は厄介なのだ。そうした意味で地雷や機雷はまさに悪魔の兵器であった。もっともこれを使うのは連合軍だけでなくエウロパもサハラ各国も使うのであるが。
「だが今対峙している状況でどう使ってくるかな」
「私の予想ですが」
プロコフィエフは述べた。
「潮流を使ってこちらに流してくるのではないでしょうか」
「潮流を」
「はい。それにより我が軍の混乱を誘うか破壊を目論んでいるかと」

「姑息と言えば姑息だな」
「ですが有効な手段の一つであることには変わりありません」
あえてそう言う。慎重に。
「ではすぐにそれぞれの潮流の流れを把握しよう」
「はい」
「機雷に関してはこれでよいか」
「とりあえずは。後は魚雷艇ですが」
「うむ」
「切り込み隊に備えてです。おそらく彼等は隙をついて急襲を仕掛けてくるでしょう」
「それはあるな」
モンサルヴァートもそれはわかる。プロコフィエフはここでまた述べる。
「だからこそです。それへの備えです」
「ではミサイル艇も配しておくか」
本来は惑星防衛用の小型艦艇である。エウロパだけでなく連合も惑星防衛用に多数配備している。だがプロコフィエフはどういうわけかここにそれ等の艦艇を多数持って来ていたのである。モンサルヴァートも今に至ってその意味がようやくわかった。これは少し迂闊ではあったが。

## 第十五部第四章　前哨戦その十三

「それで備えは宜しいかと。全軍を挙げて来た時には」
「その時には」
「閣下にお任せします」
「わかった。それでは」
「はい」
やはり戦術ではモンサルヴァートに勝る者はいない。ここではプロコフィエフはモンサルヴァートに全てを任せることにした。こうしてエウロパ軍もまた備えを講じていたのであった。
対峙している間義勇軍は何かを用意していた。それは重厚な布陣に隠しエウロパ軍には見せようとはしなかった。
「さて」
マシュハドはそれを見ながらワフラに声をかけてきた。
「上手くいくかな」
「少なくとも我等への跳ね返りはありませんから」
ワフラはニヤリと笑ってこう答えた。
「やってみる価値は充分にあると思います」
「少しせこい気もするがな」
マシュハドはここであえて俗っぽい言葉を使った。
「どうかな」
「せこいと言われようとも問題はありません」
彼は答えた。
「まずは戦争に勝たなければ。それにこれは卑怯なことでも何でもありませんぞ」
「それもそうだな」
これには頷くものがあった。
「機雷を使うのはな。卑怯でも何でもない」
「はい」

「戦術の一つだ。ならば問題はないな」
「そういうことです。ではすぐに流しましょう」
「うむ」
こうして機雷が撒布されはじめた。義勇軍が撒いた機雷は潮流に乗りエウロパ軍に向かっていった。プロコフィエフの予想通りであった。
「機雷が流れてきました」
リェンツィの艦橋にも報告があがってきた。
「卿の言った通りになったな」
「はい」
プロコフィエフもそれに頷いた。
「では予定通り行動に移りましょう」
「うむ。各艦隊に伝えよ」
モンサルヴァートは指示を下した。
「こちらに流れて来る機雷の処理に取り掛かれとな。この際陣形は乱すな」
「はっ」
「こちらに来ないものは無視しろ。やって来るものだけを処理しろ。よいな」
「わかりました。それでは」
「すぐに取り掛かれ。いいな」
「了解」
エウロパ軍はモンサルヴァートの指揮の下機雷の処理に取り掛かった。義勇軍から流れてきた機雷を全て処理したのであった。義勇軍の搦め手はまずは失敗した。
「申し訳ありません」
「いや、よい」
マシュハドは謝罪するワフラをこう言って宥めた。
「犠牲者は一人も出てはいない。ならば問題はない」
「有り難うございます」

「それに敵も真似をしてきた。こちらに機雷を流してきたぞ」
「ではすぐに処理に取り掛かりましょう」
「うむ。この際陣形を崩さぬようにな」
「はい」
ワフラもまた的確な判断を下していた。それをもとにエウロパ軍の機雷を適切に処理させた。まずはこれで双方の最初の搦め手は終わったのであった。
「お手並み拝見といったところだったが」
マシュハドは機雷処理が終わったのを確認してから口を開いた。
「なかなかどうして。味な真似をしてくれる」
「敵の司令官はモンサルヴァートエウロパ元帥であります」
ワフラがここで彼に述べた。
「あの若い貴族の男か」
「はい。御存知でしたか」
「知っているも何も多くの国があの男により滅んでいる。違うか」
「確かに」
モンサルヴァートの総督府での戦いのことを言っているのである。彼は総督府において武勲を挙げ続け今の地位を築いていたのである。だからこそ難民達にとっては忘れることのできない男であった。
「その我等が今こうしてあの男と対峙しているか」
「これもまたアッラーの思し召しでしょうか」
「彼を倒せとな」
マシュハドはそれを聞いてこう応えた。
「有り難い思し召しだ」
「それではそれに従うとしますか」
「その為に今ここに来ているのだろう？」
「確かに」
言われればそうであった。ワフラもそれに気付いた。
「では攻撃を再開致しましょう」
「うむ」

マシュハドは頷いた。
「次はどうするか」
「どうやら敵は魚雷艇やミサイル艇を用意してきているようですね」
ワフラはモニターに映し出される敵陣を見ながら言った。

## 第十五部第四章　前哨戦その十四

「ならば。奇襲を仕掛けても彼等の機動力でかえって手痛い打撃を受けかねません」
「それは止めておいた方がよいな」
「やはり。正面から正攻法で挑みますか」
「守りを固めているというのにか」
「守っていればこじ開けるまで」
ワフラはこう返した。
「それもまた戦い方です」
「強引にいくか」
「如何でしょうか」
「言った筈だ。この戦いは貴官に任せてあるとな」
彼はここでこう言った。
「思うようにやってみるがいい」
「それではそうさせて頂きます」
「勝利を得られる自信があるのならば」
「私はよく慎重な性格だと言われます」
ワフラはここで思わせぶりにこう述べた。
「確実な可能性がない限りしないということをね」
「それではやれるのだな」
「はい」
彼は答えた。
「では任せよう。よいな」
「はっ」
ワフラは敬礼で応えた。
「全軍攻撃用意」
マシュハドは指示を下した。やはり司令の指示でないと軍は動きはしない。

「攻撃目標前面の敵艦隊。敵を殲滅するぞ」
そしてこう述べた。それを聞いて義勇軍の中に戦慄が走った。
「戦闘か」
「遂に」
軍の士気が上がる。戦いと聞いて血が滾っていたのだ。
「覚えているか」
マシュハドは将兵達に問うてきた。
「我等がサハラを去った時を。一体誰によって去らねばならなかったのかを」
「知らない筈がない」
「それだけははっきりと覚えているさ」
将兵達は心の中でそれに答えた。エウロパによってであった。彼等にとっては十字軍、帝国主義列強の進出と並ぶ忌々しい記憶であった。彼等にとってエウロパは侵略者であり自身の国を奪った憎むべき存在なのである。
「今その敵が目の前にいる」
マシュハドは言葉を続けた。言葉は簡潔である武骨であった。演説としては決して上手いものではない。だがアラビア語で話されるその言葉は力強く、そして義勇軍の将兵達の心を打った。それは何故か。彼等がサハラの者であるからだ。
「進め。そして敵を討つ」
「はっ」
艦橋にいる者達が一斉に敬礼をして応えた。
「オリンポスに入るのは我等だ。侵略者の首都を陥落させるのは我等だ」
「敵の首都を」
「遂に」
それを聞いてさらに心が沸き起こった。
「よいな。進むぞ」
「はい」

皆それに頷いた。
「アッラーは勝利を約束して下さる」
「倒れれば天界へ」
「そうだ」
マシュハドはそれにも応えた。
「これはジハードだ。アッラーに歯向かった侵略者達に対するジハードだ」
「ジハード」
「そうでなくて何だ。エウロパ軍は何だ」
「異教徒の軍です」
誰かが答えた。
「そして我々は何だ」
「イスラムの軍です」
また誰かが答えた。
「では異教徒の侵略者達を撃つのは何だ」
「正義です」
答えが返り続けていた。確かにその通りであった。エウロパと彼等では信仰している神が違う。そしてエウロパがかって侵略を行ったのも事実であった。それを踏まえるとマシュハドがこの戦いをジハードと呼ぶのは道理であった。
「そうだ。では正義を遂行する」
「はい」
将兵達は頷いた。

## 第十五部第四章　前哨戦その十五

「アッラーの名の下に」
「アッラーの名の下に」
将兵達も復唱した。そして進撃をはじめた。
義勇軍九十個艦隊が動いた。それはすぐにエウロパ軍からも確認された。
「来ました」
報告がモンサルヴァートのところにも届けられた。
「全軍だな」
「はい」
参謀の一人がそれに頷く。
「その数九十個艦隊。数にして百万隻近く。ティアマト級巨大戦艦を前面に出しこちらに向かって来ております」
「決戦を挑むというわけか」
「おそらく機雷を防いだのを見て決意したのでしょう」
隣にいるプロコフィエフが述べた。
「小手先の技は通用しないことを知って」
「正攻法に切り替えたと」
「はい。如何為されますか」
「何、この戦いは常に数においては劣勢だった」
モンサルヴァートは慌てるまでもなくこう返した。
「今更驚きはしないさ」
「それでは戦われるのですね」
「うむ。全軍方陣を敷け」
彼は命令を下した。
「そして守りを固めよ。後ろがないことを忘れるな」
「はっ」
エウロパ軍の将兵達も士気が上がった。彼等とて必死であった。

今侵略者は連合軍であり彼等はそれと戦い祖国を守る騎士達なのであるから。立場というものは常に変わるものである。そしてそこには主観が入るということもまた事実であった。今両軍はそれぞれの正義の名の下において戦っていたのだ。
「まずは守りを固め機が来たならば攻撃に転じる」
「攻撃にですか」
「補給路にいる十個艦隊に連絡してくれ」
彼は言った。
「補給路の艦隊にですか」
「そうだ。急遽こちらに向かい敵の後方を衝けとな。よいな」
「ですがそれは」
「敵はここにその戦力の殆どを集めてきている。もう補給路を侵される心配はしなくていい」
「では」
「そうだ。その分の兵力を戦場に投入する。よいな」
「宜しいのですね」
「責任は私がとる」
彼は言い切った。
「どのみちこの戦いは短期で終わる」
「はい」
「ならば。全戦力を投入してでも勝つ。よいな」
「わかりました。それでは」
プロコフィエフも覚悟を決めた。義勇軍が動いたならば短期決戦となる。最早躊躇している場合ではなかったのだ。そうした意味でモンサルヴァートの下した決断は正しかった。非常に危険な賭けであったのは事実であったが。
「お任せします」
「済まない。卿等の命、私が預かる」
「喜んで」
これに応えたのはプロコフィエフではなかった。艦橋にいる者達、

そして彼が率いる将兵達全てであった。彼等も今覚悟を決めたのであった。命を賭けて戦うということにだ。
「我等の命閣下に」
「預けてくれるのか」
「無論。閣下ならば」
彼等は言った。
「ですから勝利を」
「オリンポスに敵を入れる事のなきよう」
「わかっている」
そしてモンサルヴァートもそれに応えた。
「よいな。過酷な戦いになるぞ」
「覚悟のうえ」
「では全軍方陣を敷け」
先程の命令を繰り返した。
「まずは敵を寄せ付けるな」
「ハッ」
「そしてそれから機を見て動く。よいな」
「了解」
こうしてエウロパ軍は陣を敷いた。その堅固な方陣で義勇軍を迎える。
「一つだけわかっていることがある」
「それは」
プロコフィエフはモンサルヴァートの言葉に問うた。
「ここを動く訳にはいかんということだ。動けば」
「我等にとって全てが終わる、ということですね」
「ああ」
モンサルヴァートは頷いた。それから再び前を見据える。モニターを見た。
その目の前に義勇軍がやって来る。彼等は星達を埋め尽くさんばかりの数でエウロパ軍に迫るのであった。

## 第十五部第五章　防戦その一

防戦

遂にニョルズにおける義勇軍とエウロパ軍の戦いがはじまった。まずは義勇軍のティアマト級巨大戦艦における巨砲の一斉射撃からはじまった。

「巨大戦艦を前へ」

マシュハドの指示が伝わる。前面に展開していた巨大戦艦達は更に前に出る。連合軍にとっては恒例の最初の一撃であった。

「射撃用意」

「射撃用意」

命令が復唱される。それに伴い巨大戦艦の巨砲に光が宿る。次の命令でその光が放たれたのであった。

「撃て！」

「撃て！」

アラビア語で指示が下される。そして今アッラーの使徒達の炎がエウロパ軍に向かって放たれた。

二百を優に超える巨大な光の矢がエウロパ軍に向かう。それは音のない筈の銀河において唸り声を挙げて突き進んできていた。

「バリアーの出力を全開にしろ！」

モンサルヴァートの指示が下る。

「そして散開だ！集まっていては危険だ！」

「了解！」

そしてまた指示が下る。今度は散開するように言った。それに従いそれぞれの方陣が散陣となって敵の攻撃に備える。これで巨大戦艦の巨砲の攻撃によるダメージを減らそうというのだ。

それは成功した。それまでその一撃だけで戦意を挫いていた巨砲による攻撃のダメージを抑えることに成功したのだ。これは奇しくもクロノスにおける友軍の連合軍の全艦艇による一斉射撃を凌いだ

のと同じ方法であるがモンサルヴァートもまた使ったのであった。
「損害は」
彼は敵の攻撃が終わった後で問うてきた。
「一パーセント未満です」
参謀の一人が報告する。
「何とか損害を最小限に抑えることに成功した模様です」
「そうか。では成功と見ていいな」
「はい」
参謀はその言葉に頷いた。
「ですがこれで終わりではありません」
ここでプロコフィエフが言った。
「敵はまだ。次の攻撃があります」
「そうだったな」
モンサルヴァートは方陣に戻る自軍と次の動きに取り掛かる敵軍を相互に見ながら応えた。
「次は砲艦及びミサイル艦による攻撃か」
「セオリーに従うならば」
「セオリーか。義勇軍もそれは守るか」
「少なくとも効果的な戦術ではあります」
プロコフィエフは述べた。
「圧倒的な攻撃力とこちらの射程県外からの続け様の攻撃。それにより今まで我が軍は大きなダメージを受けてきてきたのは事実です」
「そうだな。少なくとも我が軍はまだ彼等に勝ってはいない」
彼はそれに応じる形で述べた。
「効果があるのはそれだけでわかるな」
「はい」
「だがそれだからこそ備えなければならない。それへの私の答えがこれだ」
「散陣ですか」
「そうか。まずはこれで損害を最小限に抑える」

モンサルヴァートは言葉を続けた。
「反撃が出来ないならば。損害を抑える。それしか有るまい」
「確かに」
プロコフィエフもそれに頷くしかなかった。
「方陣と散陣の使い分けだ。それで敵の攻撃を凌ぐ。まずはそれでいこう」
「了解しました。それでは」
「うむ」
「敵の砲艦及びミサイル艦が前に出て来ました」
また参謀の報告が入って来た。
「来たか」
「はい。今にも攻撃を加えんとしております」
「わかった。では散陣になれ」
「了解」
また指示が下る。それによりエウロパ軍は再び散開した。
「敵の攻撃が来ました」
「うむ」
モンサルヴァートは頷いた。見ればその言葉通り義勇軍の砲艦及びミサイル艦による一斉攻撃がはじまったところであった。

## 第十五部第五章　防戦その二

「今度はどうかな」
マシュハドは自身の眼前に展開するエウロパ軍を見据えながら呟いた。
「先程は見事にかわされてしまったがな」
「おそらく今回もそうでしょう」
それにワフラが応える。
「既に敵軍は散陣に移動しておりますから」
「確かにな」
マシュハドもそれに頷いた。
「だが今はこれでいくか」
「はい」
「しかし良い勉強にはなるな」
「といいますと」
「こちらに攻撃の方法があれば敵も備えるということだ」
彼は思わせぶりにこう述べた。
「我々の今の攻撃はそのまま連合軍のやり方だな」
「ええ」
「最早これはセオリーになっている。連合軍はこうした意味で何もかもがマニュアルになっているな」
「物量と装備で戦う軍隊ですからね」
ワフラは連合軍をそうした軍隊だと認識していた。
「サハラやエウロパのそれの様に戦術の柔軟性はありませんね」
「そうだな。硬直していると言えば硬直している」
マシュハドはまた言った。
「これも長い間戦争がなかったせいかな」
「エウロパ軍もサハラ侵攻当初は戦術は発達していなかったそうですしね。その時は謀略を駆使することが多かったと聞いております」

「戦争がないとな。どうしてもそうなる」
「はい」
「現に連合の装備は。索敵等はかなり発達しているな」
「ですね」
「戦争はなくとも宇宙海賊やテロリストとの戦いがあった。彼等の艦艇はそれを念頭に置いている」
「だからこそ圧倒的な物量で挑むのですか」
「海賊は所詮海賊だ」
マシュハドは突き放した様に言った。
「数は大したことがない。それに連合はあまり複雑な星系はないな」
「ええ、まあ」
流石に勢力圏があまりにも広大な為中にはサハラやニョルズの様な複雑な宙形の星系も存在する。だがそれは決して多くはなくおおむねこれといった障害が存在しない。そうした中での宇宙海賊達なので正面からの戦いも多いのである。
正面からの戦いならば数がものを言う。地の利は海賊にあるならば奇襲を警戒しなければならないならば哨戒能力を発達させる。こうして連合軍の艦艇は設計されているのである。圧倒的な火力と重厚な防御力、驚異的なダメージコントロール能力もまた海賊に対する為である。海賊の奇襲に遭遇しても生き残り、そして一撃で粉砕する為である。従って速度はかなり犠牲にしているがそれでも海賊達に対しては圧倒的な戦力にあったのだ。
「それを考えると。こうしたセオリー通りの戦いもいい。それに賊は結局賊でしかない。戦争に関しては全くの素人だからな」
「確かにそうですね」
海賊行為やテロ行為は戦闘とはまた違うのである。彼等はそれぞれにおいてはプロフェッショナルであっても軍隊同士による戦闘に関しては全くの素人なのであるのは動かぬ事実であった。
「海賊相手にはこれでいい」
「はい」

ワフラはマシュハドの言葉に頷いた。
「だがな。戦争は違うのだよ」
「敵も戦闘のプロですから」
「そうだ。実戦というものを知っているとな。全く違ってくる」
そう言いながら目の前の散陣を見据える。

## 第十五部第五章　防戦その三

「その証拠があれだな」
「はい」
ワフラは頷いた。
「散陣か。考えたものだな」
「損害を最小限にする為に、ですね」
「そうだ。彼等とて愚かではない」
彼は述べた。
「経験から学んでいる。流石と言うべきか」
「伊達に誇りは持っていないということですね」
「そうだな。貴族というものは好きにはなれんが」
エウロパ貴族主義そのものへの反発というよりは貴族というものについての疑問である。マシュハドは言うまでもなくムスリムでありイスラムはアッラーの前に全ての者は等しいとしているのである。王であろうが乞食であろうが同じムスリムなのである。
「その誇りに見合うだけの能力と努力はあるようだな」
「その様ですね」
「だがそれは我々とて同じだ」
彼は目を引き締めさせて言った。
「わかっておろうな」
「はい」
ワフラは頷いた。
「遠距離からの攻撃が二度も凌がれた。ではどうするか」
「切り込むまでです」
彼は答えた。
「これもまたセオリー通りですが」
「だがそれが一番だな」
「はい。砲艦及びミサイル艦の援護射撃の下全艦突入です」

ワフラの判断はそれであった。
「戦艦による一斉射撃はしないのか」
「先の二つの効果が薄いのを見ると。止めた方がいいかと」
彼は言った。
「それよりも近接して射撃を加えた方がよいと判断します。散陣を組んでも意味がないような距離において」
「ふむ」
マシュハドはそれには即答しなかった。顎に手を置き考える動作をするだけであった。
「それからです。本格的な攻撃は」
「武器の連射性はほぼ互角だったな」
「はい」
「我が軍が僅かに上だが」
「ほぼ変わらないのなら。攻撃力の大きい方が勝ちます」
「そうだな」
「正確さでは我が軍が上回っております。何ら問題はありません」
「敗北する要素はないと見ているのだな」
「負ける筈が。しかも電子兵器による敵の妨害も可能ですし」
「よしわかった。では全軍突入だ」
「有り難うございます」
マシュハドはワフラの案をよしとした。こうして全艦突入が決定された。
義勇軍が動いた。それは将に星が動いたかの様なものであった。巨大な黒い壁が動いた様に見えた。
「今度は突入か」
モンサルヴァートはそれを見て呟いた。
「どうされますか」
いつもの様に傍らにいるプロコフィエフが問う。
「陣を組みなおす」
彼は言った。

「縦と横にそれぞれ十段の陣を敷け」
「はい」
「それで敵を随時減らしていく。よいな」
「その際突破された部隊の残存兵力はどうされますか」
「後方に下がり合流していく。どうだ」
「それで宜しいかと」
「その間に補給路を守っていた部隊が到着すれば。戦局は変わる」
「それは期待できますね」
「それまで持ち堪えよ。よいな」
「了解」
こうしてエウロパ軍は縦深陣を組んで敵にあたった。その陣を見て義勇軍も攻撃の仕方を変えることにした。

## 第十五部第五章　防戦その四

「敵はどうやら我が軍の消耗を誘うつもりの様です」
「その様だな」
マシュハドはワフラの言葉に頷いた。
「そして補給路を守っていたエウロパ軍がこちらに急遽向かって来ているそうです」
「彼等もか」
「どうやら彼等は総力戦を挑むつもりの様です。だからこそ補給路の防衛をあえて捨てた」
「最早我が軍の補給路への攻撃がないのを見越してな」
「はい。そこまで読んでいますか」
「ならば我々も備える必要がある」
彼は言った。
「敵が挟み撃ちにしてくるのならばな。双方の相手をしなければならん」
「では丁度おあつらえ向きの陣があります」
「何だ、それは」
「私の祖国に伝わる陣です。かなり複雑ですが」
「どんな陣だ」
「まずは中央に工作艦及び補給艦を置きます」
彼は言った。
「そしてそこからそれぞれの艦隊ごとに分かれ腕となります。中央の工作艦等を目としてそこから九本の腕を回転させるのです」
「竜巻の様にか」
「竜巻というよりは台風です」
彼は答えた。
「次々に新手を出すことにより敵に絶え間ない攻撃を加えます。それも全方位に」

「ふむ」
マシュハドはそれを聞いてまた考える目をした。
「かなり複雑な陣形だな」
「ですが効果はります。少なくとも敵の挟み撃ちを無力化させることは可能です」
「わかった。ではそれで行こう」
彼は決断を下した。
「陣を組みなおす。工作艦及び補給艦は一箇所に集まれ」
まずは非戦闘艦艇に集結を命じた。
「それぞれの艦隊はそれを軸として回転して敵にあたれ。よいな」
「ハッ」
「了解しました」
各艦隊の司令官達から了解の返事があがった。
「そして前方のエウロパ軍にあたる。後方からも来ていることを忘れるな」
「わかりました」
「では陣を組め」
義勇軍は迅速に動いた。そして見事に言われた通りの陣を組む。目を中心に無数の黒い触手が上下左右に生えた無気味な陣であった。台風というよりは無気味な、二十世紀アメリカで活躍した怪奇小説家ラグクラフトの作品に出て来る様な邪悪な神の様な姿であった。
「これでよいな」
「はい」
ワフラはマシュハドに問われ答えた。
「この通りです」
「そうか。ならいい。ところでこの陣の名は」
「車懸かりの陣です」
「車懸かり」
「はい。三十年戦争の頃の騎兵戦術及び日本の戦国時代に見られた陣の一つであります。次々に新手を繰り出して攻撃を仕掛けるとい

う戦法です」
　日本においては上杉謙信が川中島の戦いにおいて使用したことで知られている。統制が複雑なうえに地形により使えない為コントロールも運用もかなり厄介であるが謙信はこれを上手く使ってきた。それで以って武田信玄に対抗してきたのである。戦国時代においても最高の戦術家と言われる彼ならではであった。
「ふむ」
「それも全方位に攻撃が可能です。ただ機動力はかなり落ちますが」
「だがそれはあまり問題にしなくてよいな」
　マシュハドはとりあえずは機動力を置くことにした。
「それよりも敵の挟撃への対処と戦力を減らしていくことだな」
「それではそれを優先させて」
「うむ。攻撃を開始する」
　そして攻撃の指示が出された。
「それでよいな」
「はい」
　ワフラも賛成した。これで全ては決した。

## 第十五部第五章　防戦その五

義勇軍はゆっくりと前進して来た。陣を組み替えたそれはまるで一つの巨大な化け物である。それを前にしてエウロパ軍は戸惑いを隠せなかった。
「また異様な陣を敷いてきたな」
モンサルヴァートも困惑の色を隠せなかった。
「そもそもあの陣は何という名だ。見た事も聞いた事もない陣だ」
「おそらくは三十年戦争の頃のカラコールをモデルにしたものと思われますが」
プロコフィエフが言った。
「カラコールをか」
「はい」
ワフラが言った車懸かりの陣のことである。サハラのアラビア語とエウロパのラテン語では指し示しているものが同じであっても言葉が違ったりする場合があるのである。これは銀河語やヒンズー語においても見られることである。
「それを宇宙に合わせると。ああなるのでしょう」
「それでか。まるで台風の様だな」
「黒い台風です」
プロコフィエフは淡々とした声で述べた。
「それが今我が軍に向かって来ております」
「台風の弱点はその目だが」
「狙うのは容易ではないでしょうね」
「見えないからな。だが機会は窺っていくぞ」
「はい」
「敵も本気だ。ならばこちらも全軍死兵となって向かう」
「死兵に」
「そうだ。何としても勝つ」

何時になくモンサルヴァートの声が険しいものに聞こえた。
「その為にも今は耐える。よいな」
「ハッ」
エウロパ軍はさらに守りを固めた。まずは機会を窺うことにした。そんな彼等に対して義勇軍は攻撃に取り掛かった。巨大な怪物が前に進みはじめてきたのだ。
「それぞれの艦隊は攻撃を終えたならばすぐに移動せよ」
マシュハドはワフラの言葉に従い命令を下す。
「そしてその次には別の艦隊が攻撃を仕掛ける。よいな」
「了解」
各艦隊の艦長達がそれに応える。そして攻撃を仕掛けるのであった。
殴り付ける様な攻撃が開始された。一撃を加えるとすぐに去り、そこにまた別の艦隊の攻撃が加えられる。そしてまた次の艦隊が。義勇軍は激しい回転と共に攻撃を続ける。それに対してエウロパ軍はただ防御に徹するだけで積極的な攻撃を仕掛けようとはしなかった。
「敵の先頭に集中攻撃を仕掛けよ」
モンサルヴァートの指揮もありきたりなものであった。彼は自身の言動通り今は積極的に動こうとはしなかった。ただ亀の様に守り、反撃を繰り出すだけであった。戦いの主導権は明らかに義勇軍にあった。
「前線の損害は」
彼はその中で自軍の損害状況を問うた。
「今のところは軽微です」
すぐに返答が帰って来た。とりあえずは安心出来るものであった。
「そうか」
「ですがこのまま敵の攻撃が続けば」
「わかっている」
彼はそれに頷いた。

「だが時は必ず来る。その時を待て」
「はい」
「いいな。必ず来るからな」
「わかりました」
「どんな陣であろうとも弱点のない陣はない」
彼は言った。
「あの怪物の如き陣にも必ず弱点はある。問題はそれが何処かだ」
「目なのはわかっていますが」
「うむ」
プロコフィエフの言葉に頷く。
「その目をどう突くか、ですね。問題は」
「今の勢いでは突くのなぞ夢のまた夢だな」
彼はまた言った。
「残念なことに」
そしてプロコフィエフもそれを認めた。
「ですが友軍が来れば」
「違ってくるな」
「はい。まずはジャースク、ターフェル両提督の艦隊を待つか」
「はい」
彼等ですら今は守りに徹するしかないのはわかっていた。そしてそれに徹していた。しかしそれだけであった。彼等はそれから何をすべきなのか掴めないでいた。彼等ですらそれが限界であったのだ。
しかしここに次にどう動くべきかわかっている男がいた。タンホイザーである。彼はグングニルの艦橋で義勇軍の黒い台風を見据えていた。

# 第十五部第五章　防戦その六

「派手に暴れてくれているな」
彼はその台風を見て呟いた。
「無数の触手で続け様に攻撃を繰り出す。考えたものだ」
「それにより我が軍はその戦力を少しずつ削り取られております」
彼の参謀であるヴェスター＝フォン＝クルーゲが言った。金色の髪を後ろに撫で付けた端整な顔立ちの男である。その緑の目は何処か猫を思わせるものであった。
「また、我が軍はこれに対し有効な手段を打てずにいます。このままでは」
「簡単なのだがな」
タンホイザーは呟いた。
「簡単！？」
「そうだ。台風を抑えるにはどうすればよいかわかっているな」
「よくある方法は」
クルーゲは戸惑いながらも答えた。
「その目にミサイルを撃ち込むということでしょうか」
「そうだ。それでかなり威力が弱まるな」
二十世紀からある方法である。アメリカが軍を使って行う作戦の一つである。今ではそれでほぼ消滅させることも可能となっている。
「そういうことだ。要は目を潰せばいい。しかも」
タンホイザーはここでニヤリと笑った。
「台風の目は一つしかない。しかも義眼を入れることもない。楽なことだとは思わないか」
「ですが」
「ミサイルを撃ち込めない、と言いたいのだな、今の状況では」
「はい。どうすべきでしょうか」
「何、今は無理でもすぐに出来るようになる」

彼は余裕を以ってそう答えた。
「すぐにな。もうすぐだ」
「策がおありのようですね」
「何、いつものことだ」
タンホイザーはその笑みを涼しいものにした。そして言葉を返した。
「戦いというものを考えればな。何事も応用だ」
「はあ」
「まあ見ていていればいい。これから起こることをな」
彼は勝利を確信している様であった。だがそれをどうして掴み取るのかまだ誰にもわからなかった。戦いは尚も続いていた。義勇軍の攻撃は留まることなく行われていた。
「このまま押し潰せ！」
マシュハドの叱咤激励が飛ぶ。
「守りを固めているのならそれをこじ開けろ！よいな！」
「ハッ！」
部下達が一斉に頷く。そして攻撃はさらに激しさを増していくのであった。
戦局は義勇軍のものであることはもう誰の目にも明らかであった。エウロパ軍はモンサルヴァートの卓越した指揮と守りの固い方陣によりそのダメージを最小限のものに抑えていたがそれが何時までも通用しないのは誰もがわかっていることであった。戦いは次第にエウロパ軍にとって不利なものとなろうとしていた。
「もうすぐだ」
だがモンサルヴァートはそれでも諦めてはいなかった。
「もうすぐ来るぞ」
「閣下！」
ここで伝令将校がリェンツィの艦橋に飛び込んで来た。入って来たのではない。それは将に飛び込んで来たのであった。
「来たか」

彼はそれを見て本能的に察した。
「援軍だな」
「その通りです。遂に来ました」
伝令将校は明るい声で言った。
「敵の後方に。今全速力で突き進んでいます」
「よし」
モンサルヴァートはそれを聞いて頷いた。
「勝てるぞ」
「はい」
艦橋にいた幕僚達も一気に活気付く。彼等の顔に生気が甦っていた。
「これでチャンスがやって来る」
モンサルヴァートもそれは同じであった。今までは固かった顔に緩やかなものが漂いはじめていた。

## 第十五部第五章　防戦その七

「そしてジャースク提督達はどう動いているか」
「そのまま後方から攻撃に取り掛かる様です」
「足止めだな」
「はい。これで時間が我等に来ます」
「よし、その間に態勢を整えるぞ」
「はい」
「閣下」
ここでモニターにタンホイザーが姿を現わした。
「タンホイザー元帥か。どうした」
「遂に援軍が来ましたな」
「うむ」
当然ながらタンホイザーもそれはわかっていた。モンサルヴァートはその言葉に頷いた。
「遂にな。これで流れが変わる」
「それでです。私に考えがあるのですが」
「考えが」
「はい。申し上げて宜しいでしょうか」
「うむ」
そしてモンサルヴァートはそれをよしとした。
「言ってみてくれ。どんなものだ」
「はい、それは」
タンホイザーは己が考えを述べはじめた。それは驚くべきものであった。
補給路から戦場にやって来たジャースク、ターフェルの率いる十個艦隊は一つにまとまっていた。そしてそのまま義勇軍の後方に回り込んでいた。
だがマシュハド達義勇軍の上層部はそれを見ても特に驚くことは

なかった。彼等は落ち着いた顔でモニターに映し出される敵軍を見ていた。その中央には自軍がいる。
「遂に敵の援軍が来たな」
「はい」
ワフラはマシュハドの言葉に応え頷いた。
「時間まで。予想通りですね」
「そうだったか」
「はい。おそらく我が軍の後方から攻撃を仕掛けて来るでしょう」
「おそらくな」
「それで足止めをするつもりでしょう。それもわかっています」
「そこまで読んでいたか」
「はい」
彼は頷いた。
「我が軍に攻勢を仕掛け、そしてそれで足止めをします」
「ふむ」
「その間に前方の敵主力が態勢を整え攻撃に入るでしょう。問題はあくまで前方の敵です」
「後方の彼等はそうした意味で問題でないというのか」
「確かに問題ですが主な問題ではないと思います」
ワフラは答えた。
「数のうえからも。違うでしょうか」
「わかった」
マシュハドは答えるでもなくただ頷いた。
「そしてそれへの対抗手段は」
「このままでいいと思います」
「対策を講じないのか」
「対策ですか」
ワフラはそれを聞いてニヤリと笑った。
「それなら既に講じておりますが」
「この陣自体がか」

「はい。この陣はあらゆる方向に対処が可能です。本来はそうした意味で防御的な陣形なのですが」
「そうだったのか」
「本来カラコールも車懸かりも攻撃の為の陣形なのですがね」
彼は言った。これはその通りであった。
三十年戦争の頃のカラコールは拳銃を持った騎馬隊による反復連続攻撃である。それで敵の戦力を削り取っていく戦法なのである。日本の戦国時代に上杉謙信が川中島の戦いにおいて敷いたと言われている車懸かりの陣も同じである。次々に新手を繰り出し敵の戦力を削り取っていく。謙信は宿敵である武田信玄との決着をつける為にあえてこの陣を執ったのである。結果として勝利こそできず引き分けに終わったものの実在は疑われているが武田の軍師として名を馳せた山本や信玄の実の弟で彼の副将、右腕として活躍した武田信繁等が戦死した。信玄も謙信本人に本陣を切り込まれるといった危機に陥り負傷までしている。無敵とまで言われ、戦国最強とされた武田軍に対してそこまでの打撃を与えたのである。
それを考えると極めて攻撃的な陣形であると言えた。
「宇宙で敷くと。防御的な陣形となります」
「そうだったのか」
「その結果に敵の攻撃を寄せ付けておりません」
「ふむ」
「機動力もありません。それを踏まえるとやはり防御的な陣形でしょう」
「ではそれを攻撃に用いたのは後方から来る敵のことを考えてか」
「その通りです」
彼はまた述べた。
「戦いの前にも述べさせて頂きましたが挟み撃ちにも対処出来ますから」
「成程な」
「そして現実に可能となっています。落ち着いて行きましょう」

「ではこのまま続けるのだな」
「はい」
彼は断言した。
「わかった。では攻撃を続ける」
マシュハドは決断した。
「攻撃目標は前方及び後方の敵」
「はっ」
「これまで通り攻撃を続ける。よいな」
「わかりました。それでは」
「うむ」
義勇軍の行動に変更はなかった。こうして戦いはそのままエウロパ軍の別働隊の戦場の到達を迎えた。別働隊は戦場に到達するとすぐに攻撃に取り掛かった。

## 第十五部第五章　防戦その八

「全艦攻撃用意」
ジャースクから指示が下る。
「敵の動きを止めよ。よいな」
「ハッ」
「攻撃は無理をする必要はないぞ」
「何故でしょうか」
幕僚の一人がそれを聞いてジャースクに問う。
「ここで無理をしないというのは」
「足止めだけでよいからだ」
彼はその問いに対してこう答えた。
「足止めだけで」
「そうだ。だから無理をする必要はない」
彼は述べた。
「よいな。落ち着いて攻撃を仕掛けよ」
「はっ」
「じきに本格的な攻撃に取り掛からなければならない事態になることも予想される。その時まで待っていてくれ」
「わかりました。では」
「うむ」
こうしてジャースク、ターフェルの部隊は然程積極的ではない攻撃に取り掛かった。攻撃自体は激しいものだが突撃はなかった。ただ一点を集中して狙う果敢なものではあった。
「これも予想通りか」
「はい」
ワフラはマシュハドの問いに答えた。
「怖れることはないかと」
「ではこのまま攻撃を続けてよいのだな」

「ええ。お願いします」
「わかった。それでは攻撃を続けるぞ」
マシュハドの命令はそれまでと変わるところがなかった。
「よいな」
「ハッ」
前方だけでなく後方の敵にも攻撃が加えられるようになった。だがそれにより攻撃力が分散されてしまった。動きが緩んできたのであった。
「時が来たか」
モンサルヴァートはそれを見逃さなかった。敵の動きが鈍ったのを見て機が来たと確信した。
「全軍に告ぐ」
そしてすぐに指示を下す。
「今より総攻撃に移る。よいか」
「お待ち下さい」
だがここでタンホイザーがモニターに姿を現わしてきた。
「どうした」
「総攻撃に移られるのですね」
「そうだが」
「それでは私にいい考えがあります」
「いい考え」
「はい。ここは鋒矢型の陣を敷きましょう」
「鋒矢型か」
「はい。それで一直線に突き進み敵の中央を衝くのです。如何でしょうか」
「大胆な攻撃だな。それに」
「側面への防御が弱くなりますね」
「そうだ」
前面に戦力を集中させる。その結果として当然のことであった。攻撃力のかわりに防御を犠牲にした陣形であった。

「かなり危険な賭けだな」
「ですが敵の本陣に到達するのは最も効果があるのではないでしょうか」
「それもそうだな」
「では採用して頂けますか、拙策を」
「うむ」
モンサルヴァートは頷いた。
「それで行こう。一気に敵の中央を衝く」
「はい」
「それで戦いを決める。それでよいか」
「私もそれでよいかと思います」
プロコフィエフもそれに賛同した。
「待つ時期は終わりました。今は攻撃に出る時です」
「そうか」
「攻撃に移るならば短期決戦でなければなりません。我が軍は戦力において大きく劣っているのはもう言うまでもないでしょう」
「うむ」
「攻撃に移り一気に決めるのならば攻撃的な陣を敷くべきです。違うでしょうか」
「参謀総長も賛成か」
「他にさらに有効な手段はないでしょう」
「わかった。それでは作戦決定だ」
モンサルヴァートも断を下した。
「全軍鋒矢の陣を敷け」
「了解」
連合軍はそれに従い陣を敷きなおした。そこに巨大な矢が姿を現わしたのであった。その先頭には戦艦や高速戦艦が集中的に配備されていた。

## 第十五部第五章　防戦その九

「全軍突撃だ」
「はっ」
「一気に敵の本陣を崩すぞ。よいな」
「了解」
こうしてエウロパ軍は突撃に取り掛かった。全速力で義勇軍に向かう。
「前方の敵が突撃して来ます！」
オペレーターから報告があがった。
「数は」
「全軍を挙げてです。一直線に突撃して来ます！」
それはもう悲鳴であった。見ればモニターには巨大な矢が映っていた。それが一直線に義勇軍に向かって放たれていたのである。
「前方には戦艦及び高速戦艦を配備しています。明らかに全面攻撃にうって出て来ています」
「そうか」
だがワフラはそれを聞いても冷静なままであった。
「では全軍左に向かわせます。行動に支障が出るのならば回転の動きを暫し止めてもよいでしょう」
「左にか」
「はい」
彼はマシュハドの問いに頷いた。表情は真摯なままで変わらない。
「そしてそこであえて敵を合流させます」
「その間に時間を稼ぎ、陣を組み替える」
「はい。今のままではおそらく防ぎきれませんから」
「だろうな」
これはマシュハドもそう見ていた。
「今のままでは戦力が分散されている。それを考えると四十ないし

五十の艦隊が集結して一挙に向かって来ると対処は不可能だ」
「はい」
「よし、左に移動する」
彼も指示を下した。
「そしてそこで陣を組み替える。迅速にだ」
「ハッ」
ワフラだけでなく他の幕僚達もそれに応えた。
「敵を待ち受けるぞ。よいな」
「わかりました。それでは」
「うむ」
義勇軍もまた動いた。左に動いた。そして命令通り陣の組み替えに取り掛かったのである。
「敵が動きましたね」
「ああ」
それはモンサルヴァートも見ていた。プロコフィエフの言葉に頷く。
「陣を組み替えております」
「好機だが」
彼はそれを好機と見ていた。陣を組み替える時は防御力がなくなる。その時を狙えば確実に勝利を収めることも可能だ。事実それにより勝利を収めた戦いも枚挙に暇がない。この戦いにおいても義勇軍もエウロパ軍も極めて迅速に陣を組み替えているのだ。だからこそ戦うことができたのである。これもまた双方の熟練度の高さを表していた。こういった場面でこそ熟練度が最も出るものなのである。
「どうする？」
「いえ、間に合わないでしょう」
これを突如としてモニターに姿を現わしたマントの男が制した。見れば大将であった。
「卿は」
「ハッ、第二十一軍団司令官ウォルター＝ギルフォードです」

彼は敬礼の後でこう答えた。黒い髪を後ろに撫でつけ、髪と同じ色の鮮やかな色の目を持っている。彫が深く、高い鼻を持っており唇は薄い。顔は白く、透き通る様である。スラリとした長身をエウロパの豪奢な軍服で包んでいた。

「閣下に直接お願いに参りました」

「私にか」

「はい。今突入しても混戦になるだけかと思われます。その証拠に」

彼はここで敵軍を指し示した。

## 第十五部第五章　防戦その十

「既に陣を半ば整え終えております。今から行っても既に陣を組み終えているでしょう」
「早いな」
「多くの実戦を経験しているからこそでしょう。今行っても無駄かと」
「ふむ」
モンサルヴァートはそれを聞いて考える目をした。そして同時に感じていた。このギルフォードという男の持つ不思議なものに。
どういうわけかその言葉には妙に納得させるものがあるのである。疑問を感じることすら許さないような。ごく普通の口調であるのに妙なことであった。
「ではどうするべきと思うか」
「別働隊と合流しましょう」
ギルフォードはこう述べた。
「合流するのか」
「はい。それで敵にあたるのです。少なくとも今の戦力よりは充実したものになります」
「それは確かだな」
「では」
「うむ。補給路から来たジャースク、ターフェル両元帥の艦隊と合流するぞ」
彼は指示を下した。
「はい」
「そしてそれから本格的な攻撃に移る。よいな」
「陣形はそのままで」
「それはそのままでいい」
陣形はそのままとした。

「そしてだ。そのまま突撃する」
「宜しいのですね」
プロコフィエフがそれに問う。
「敵も来る可能性がありますが」
「それならそれで好都合だ」
彼はそれもよしとした。
「来るなら来い」
強い声で述べる。
「来たところを一挙に突き崩す。そのつもりで行くぞ」
「わかりました。それでは」
「うむ」
こうして義勇軍は合流して一つになった。そして突撃を開始した。
義勇軍はその合流の間に陣を組み替え終えていた。それは魚鱗陣であった。言うまでもなく突撃用の陣形であった。それから彼等が攻撃に移る気なのは見てとれた。
「来るか」
モンサルヴァートはその陣を見て呟いた。
「彼等も。本気の様ですね」
「そうだな。先陣はタンホイザー元帥だったな」
「はい」
プロコフィエフがそれに頷いた。
「彼ならやってくれると思うか」
「むしろタンホイザー元帥以外に今先陣を担える将がいないかと」
彼女はこう返した。
「そうか。では迷うことはないな」
「はい」
「全軍このまま総攻撃に移る」
彼は言った。
「そして一気に突き崩す。よいな」
「了解」

「突破したならば反転しもう一度突撃する」
「もう一度」
「そして何度も突撃を敢行する。そのつもりで行くぞ」
「わかりました。それでは」
「うむ、行くぞ」
作戦を決定し突撃に入った。両軍はそのまま突撃し合うこととなったのである。
「敵が来ます」
義勇軍もまた同じものを見ていた。こちらに向かって突撃して来る敵軍をである。彼等は互いに同じものを見ているということには気付かなかった。ただ敵を見ているということはわかっていた。そしてそれだけで充分であった。
「来るか」
「はい。如何致しますか」
「知れたこと。一気に踏み潰す」
マシュハドは一言で作戦を述べた。
「いいな。一気にだ」
「わかりました」
「それでいいのだな」
「はい」
ワフラもそれに頷いた。
「こうなれば総力戦です。一気に行きましょう」
「うむ。では行くぞ。全軍突撃！」
双方攻撃に取り掛かった。まずは激しいビームの応酬からはじまる。
その数は圧倒的に義勇軍の方が上であった。やはりその数と装備の差が大きく出ていた。しかしそれだけではなかった。
射撃の正確さにおいても彼等はエウロパ軍の上をいっていた。コントロールシステムもまたエウロパ軍のそれより上であったのだ。技術力の差が大きく出ていた。

エウロパ軍の前線の艦艇は次々と薙ぎ倒される。だがそれでも彼等は怯むところがなかった。
「グングニルを前に出せ」
タンホイザーの指示が下る。
「グングニルをですか」
「そうだ。どのみちこの状況では同じだ。こうなれば前線に出て自ら戦うまでだ」
タンホイザーは驚く部下に対してこう答えた。
「そして先頭になって突っ込むぞ。いいな」
「わかりました」
それに最初に頷いたのはクルーゲであった。
「面白い御考えです、それは」
「卿もそう思うか」
「はい」
彼はニヤリと笑ってそれに頷いてみせた。
「今は全軍死地にあります。そこで躊躇しても何にもなりますまい」
「うむ」
「ならば自ら死地に飛び込むのが騎士というもの。そしてそこで武勲を挙げましょうぞ」
「よし。では行くぞ」
「はい」
グングニルは前線に出て来た。既にそこは修羅場となっていた。
「怯むな！撃ち返せ！」
「ここで退いたら負けだぞ！」
提督達の命令は最早悲鳴となっていた。義勇軍の光の帯は容赦なく撃ち据えて来る。これに対してエウロパ軍は散陣を以って対処しようとするがそれは困難であった。それ程までに義勇軍の今の攻撃は圧倒的なものがあったのだ。
そこにタンホイザーの乗艦であるグングニルが姿を現わした。エウロパ軍の将兵達はそれを見て驚きを隠せなかった。

## 第十五部第五章　防戦その十一

「馬鹿な、指揮官自ら前線に」
「こんなことは。有り得ない」
「戦場において有り得ないということはない」
タンホイザーはそれに対して言い返した。
「それに大将が後方にいるのはどうかと思わないかい？」
「ですが」
「何、死にはしないさ」
彼は根拠なくこう言った。
「我等にはヴォータンの加護があるからな」
「いえ、それは違います」
だがそれにクルーゲが一言加えた。
「違うのか」
「はい。ヴォータンだけではありません」
そして彼は言う。
「アレスもいればアテナもおります。我等の戦の神は一人ではありません」
「そうか。そうだったな」
これにはタンホイザーも一本取られた。楽しそうな顔で笑う。
「では言い直そう。我等には神々の加護がある」
「はい」
将兵達はこれにあらためて頷いた。
「それでは行きましょう」
「それでもだ。覚悟はいいな」
「無論」
艦橋にいる全ての者が頷いた。
「戦場にいれば死ぬのは当然のこと」
「それが怖くて司令の下にはおられません」

「言ってくれるな」
それを聞いて今度は苦笑を浮かべた。
「私の下では命が幾つあっても足りないというのか」
「少なくとも生きた心地はしません」
部下の一人がこう言った。
「ですが。これ以上はないという程派手な戦いを経験できます」
「では今も経験してみるか」
「無論」
彼等は答えた。
「では指示をお願いします」
「進撃の御指示を」
「よし」
それを聞いてあらためて頷いた。
「では全軍進撃だ」
彼は言った。
「攻撃目標は前方の敵軍。全艦隊を挙げて突撃するぞ」
「はっ」
この場合の全軍とは彼が率いる先陣のことである。彼はそれを率いて突撃を敢行することを決意したのである。
「撤退はない。あくまで敵の奥深くを狙っていく。それでいいな」
「わかりました。それでは」
「卿等の健闘を祈る」
そしてまた言った。
「戦の神々の加護があらんことを」
「了解」
エウロパ軍の突撃がはじまった。これに対して義勇軍は既に万全の備えに入っていた。
その魚鱗陣は重厚なものであった。前面に戦艦や高速戦艦を配置しているのはエウロパ軍と同じである。だがその守りの固さがまるで違っていた。

「来るな」
マシュハドはそれを見て呟いた。
「突撃を仕掛けて来る。用意はいいな」
「はい」
部下達はそれに対して頷いた。
「こちらも突撃だ」
守りを固めるつもりはなかった。突撃には突撃で、それで勝つつもりであった。
「一気に潰す。いいな」
「わかりました」
部下達は今度は敬礼で応えた。
「それでは全軍このまま突撃します」
「そうだ。ティアマト級巨大戦艦も前に出せ」
彼はまた指示を下した。
「そして空母もだ。艦載機の発進準備を急げ」
「了解」
「格闘戦を挑む。数ではこちらの方が遥かに上だ」
彼はまた数での優位を説いた。
「そうなれば我が軍が有利に立てる。接近してそれぞれ潰していくよいな」
「わかりました。それでは」
「うむ。諸君等の健闘を祈る」
「ハッ！」
これは全てワフラの策に拠るものであった。今回彼は的確全ての作戦を立案していた。マシュハドはそれに従うだけであった。だがそれで充分であった。戦いは今義勇軍主導の下に行われている形になっていたのであるから。

# 第十五部第五章　防戦その十二

義勇軍もエウロパ軍も突撃を続けた。遂に両軍は衝突したのであった。

「撃て！」

双方一斉攻撃を仕掛ける。これにより多くの艦が炎の中に消える。真っ二つに割れた艦がその乗組員と共に銀河の塵と化していく。中には無数のミサイルを浴びバラバラになっている艦もあった。だがそれで終わりではなかった。戦いはさらに熾烈なものとなろうとしていた。

巨大戦艦がその主砲を前面に向けて放つ。砲艦に使われている巨大なものだ。それが幾十も放たれたのである。光の帯が複数の艦艇を貫く。その貫かれた場所に光の珠が散る。それは命の珠であった。

そこに義勇軍の戦艦及び高速戦艦の攻撃が続く。今度は光の帯がエウロパ軍を襲う。それでエウロパ軍はまたしてもその艦艇の多くを失った。そして動きも止まってしまった。

「よし、今だ！」

マシュハドはそれを見て好機が来たと感じた。

「全軍さらに突撃だ！決めるぞ！」

「はい！」

「空母艦隊も切り込め！そして艦載機による攻撃を仕掛けよ！」

続けて指示を出す。それに従い空母が前に出る。だがタンホイザーも愚かではない。それは読んでいた。

「怯むな！突撃を続けよ！」

彼は多大な損害を前にしても臆することはなかった。怯む自軍に対してあくまで果敢な指示を続けていた。

「そして艦載機の発進準備に取り掛かれ！」

「艦載機のですか」

「そうだ」

彼は部下の問いに応えて頷いた。
「敵は次には艦載機で来る。急げ」
「何故それが」
「あれを見ろ」
彼はそう言ってモニターを指差す。そこには義勇軍の艦艇が映し出されていた。そこには空母もいた。徐々に前に出て来ようとしていた。
「艦載機による接近戦を挑む気だ。わかるな」
「はい」
「それならばこちらも艦載機を出す必要がある。艦載機には艦載機しかない」
「それでは」
「空母を前に出せ」
彼も空母を前に出すように言った。
「こちらも格闘戦を挑む。いいな」
「了解」
こうして戦いは次の局面に移った。戦艦による砲撃戦から艦載機での戦いに。両軍は激突すると同時に艦載機を発進させた。双方雲霞の様な数の艦載機を出して来た。
「何か久し振りの出撃だな」
黒い炎龍のコクピットで髭だらけの顔の男が呟いた。ウダイである。
「最近どうもこうした戦いが少なかったからな」
「そのせいで腕がなまってるとかは勘弁してくれよ」
それを聞いたのか黒いタイガーキャットの中の一機から通信が入った。
「敵艦はあんた達に任せているんだからな」
「それはわかっている」
ウダイはそのタイガーキャットのパイロットに答えた。
「それに久し振りと言ってもアルテミスが最後だ。それ程時間は空

いてはいない」
「だといいがね」
「だがそれはそっちもだろう」
ウダイはここでシニカルに言った。
「久し振りの戦いは。大丈夫なのか」
「おいおい、言ってくれるな」
そのタイガーキャットのパイロットはウダイの言葉を笑い飛ばした。
「俺を誰だと思ってるんだ」
「エースだと言いたいのか」
「そうさ、義勇軍きってのエース、シフル＝ザーヒダン様だぜ」
その男ザーヒダンは切れ長のその目を悪戯っぽく歪めて言葉を返した。
「俺に限ってそれはないさ。銀河は俺のものだからな」
「それは違うな」
「違うっていうのかよ」
「銀河はアッラーのものだと言われているだろう。その発言は取り消した方がいい」
「ちぇっ、旦那は真面目だなあ」
ザーヒダンはそう言われて今度は目を残念そうに歪めた。
「そんなに堅物だと人生面白くねえぜ」
「俺は別にそうは思わない」
だが彼はこう言い返した。
「これで満足している。家に帰れば妻や子もいるしな」
「おっ、マイホームパパってやつかい」
「御前だってそれは同じの筈だが」
ウダイはここでこう言い返した。

# 第十五部第五章　防戦その十三

「見たぞ。この前奥さんと小さな子供連れて買い物に出掛けていただろうが」
「そういうこともあったかな」
ザーヒダンはそれにはとぼけてきた。
「記憶にないな、そんなことは」
「よく言うぜ。しかも写真も部屋に飾っている癖にな」
「あれはうちのやつが五月蝿いからさ」
照れ隠しの様にして言う。
「俺だって好きでやってるわけじゃない」
「ほう、そうなのか」
「そうさ、少なくとも旦那みたいに家庭べったりってわけじゃねえんだよ、こっちは」
「嘘つけ」
「嘘だと思うのなら証拠を出してくれ」
何か決まり文句が飛び交う。
「おい、わしが出すのか。普通逆だろ」
「そこまで言うんなら証拠があるんだろ？じゃあ早く出してくれよ」
「出してくれって言われてもな」
口篭もりながら返す。
「さっき出したのじゃ駄目なのか」
「写真にしろ買い物にしろ普通にあるんじゃないのか？実は」
「それでも仲がいいのは事実だと思うが」
「そうはならないな」
「じゃあ今女遊びを止めたのはどういう理由だ？」
彼は質問を替えて反撃に出て来た。
「あれだけ派手にやっていた御前さんが。急に止めたよな」
「趣味が変わったのさ」

彼はしれっと返した。
「女より酒にな」
「よく言うな、下戸の癖に」
「フン」
「まあいい。それで気が済むのならな」
ウダイはこれで話を止めることにした。
「証拠は見つからなかった。それでいいんだな」
「ああ」
「じゃあ敵の艦載機の方は頼むぞ。こっちはいつも通り艦艇をやる」
「おう」
「しかしな、こうして機種が多いのも考えものだな」
「今度はどうしたんだよ」
「いや、サハラにいた時を思い出してな」
彼は考えながら述べた。
「あの時は艦載機との戦いも艦艇への攻撃も普通にやってたんだがな」
「今は分かれてるよな」
「攻撃機や爆撃機でもエウロパのエインヘリャルとやり合えないわけじゃないと思うんだがな」
「止めときな、それは」
彼はそれを打ち消した。
「ミサイルやビームで戦うことはできるだろうがな。それでも向き不向きってやつがあるさ」
「そうか」
「それを言うならこのタイガーキャットでも艦艇への攻撃が出来るぜ。元々そうした装備が出来る様にも開発されているようだしな」
「そうらしいな」
「けれどな、攻撃機は結局攻撃機、戦闘機は結局戦闘機なんだよ」
彼はややシニカルな響きでこう述べた。
「役割分担を守った方がいいな。さもないといらん怪我をしちまう」

「怪我か」
「そうさ。俺だって艦艇に攻撃した時はあるさ。けれどそれはあえてしない」
「あくまで狙うのは戦闘機だけか」
「そういうことだ。だから旦那も艦艇への攻撃に専念してくれ。頭の上は俺がしっかり守っといてやるからな」
「わかった。それじゃあ頼むぞ」
「ああ。任せておきな」
「おう」
　こうして彼等は攻撃に入った。まずは攻撃機と爆撃機が敵の艦艇に一斉攻撃を仕掛ける。それを頭上にいる戦闘機達が守る。ここでも彼等のセオリー通りの戦いが行われていた。
　攻撃を受けた艦艇の至るところから炎が噴き出る。それによりダメージを受けているのは明らかであった。だがそれでも艦は沈まない。逆にビーム砲座やミサイルランチャーから反撃が加えられる。だがそれは電子戦機の妨害と攻撃機、爆撃機の防御力により阻まれる。ここでも連合製の特質である守りの堅さが生きていたのであった。

## 第十五部第五章　防戦その十四

「このしぶとさは流石だな」
ウダイは炎に包まれる敵の巡洋艦の攻撃を防ぎながらこう呟いた。
「おかげで。何度命拾いしたかわからんな」
「隊長、悠長なこと言ってる場合じゃありませんよ」
だがここで通信が入ってきた。
「おっ」
「敵の艦載機が来ますよ。それも数え切れない程」
「来たか」
「もうこっちの戦闘機は迎撃に出ちゃいましたよ。けれどかいくぐってこっちにも来るでしょうね」
「そうはしないってのが戦闘機隊の方の返事だがな」
「信じていいんですかね、それって」
部下達はその言葉に疑問符をかけていた。
「信じるしかないだろうな」
ウダイはそんな彼等に対して言った。
「それが連中の仕事だからな。少なくともさぼるようなことはせんだろう」
「だといいですけれどね」
「仕事が出来ないとかそうした冗談は抜きで」
「まあここは信じてやれ」
彼はそれには笑って返した。
「さもないと連中がむくれる。それに後で何を言われるかわからんぞ」
「酒でもおごれっとか」
「女紹介しろとか」
「まあそういうことだ。だから滅多なことは言わん方がいい」
「了解」

その言葉にこくりと頷く。
「それじゃあそういうことで」
「おう、じゃあこれはこれで終わりだ」
「はい」
部下達はそれに頷いた。
「とりあえず弾がなくなるまで攻撃を続けるぞ」
「了解」
「それまでにもう一隻敵を沈められればいいがな」
「一隻だと楽勝でしょう」
「そう上手くいくかな」
「いくんじゃなくていかせるんだ、ってのはよく言われますけれどね」
いささか減らず口じみていたがそれでも言った。何故か戦場ではこうした言葉がよく出る。
「やってみるか」
「やったらボーナス出ますかね」
「だったらやりますけれど」
「出なきゃわしが出してやるよ」
「本当ですか！？」
ボーナスと聞いて話が弾む。現金と言えば現金だ。
「ああ。とびっきりのバーボンを用意してやるさ。アメリカ産のな」
「バーボン」
「それが嫌ならテキーラだ。メキシコ産の上等なのも持っている」
「いいですね」
「何か急に元気が出て来ましたよ」
「じゃあやるか」
「はい」
部下達はそれに頷いた。
「それじゃあバーボンとテキーラの為に」
「おい、両方か」

彼はそれを聞いて苦笑いを浮かべた。
「幾ら何でも欲張り過ぎだろう」
「いやいや、俺達は何時死ぬかわかりませんから」
「飲める時に飲んでおかないとね」
「後悔しますよ」
「仕方無いな」
言われてみればその通りである。義勇軍は言うならば連合軍の楯である。危険な作戦にはまず投入されるのが常である。そうした軍にいる者達が何時死ぬかわからない立場にいるのはもう言うまでもない。実際に連合軍と義勇軍ではその死亡率は全く違うのである。これが何よりも雄弁に物語っていた。

# 第十五部第五章　防戦その十五

「それじゃあ両方出してやる。特別にな」
「有り難うございます」
「流石は隊長」
「ただし、悪酔いはするなよ」
こう言ったのには理由がある。バーボンとテキーラの強さのせいである。
どちらも結構アルコールが強い。三十度は優に越える。なお連合でもエウロパでもサハラでも非常によく飲まれているワインは十五度が平均である。日本酒もまたその程度だ。ビールは三度と四度の間である。それと比べるとかなり強い。それを踏まえてこう軽口を述べたのである。なおウォッカは九〇を優に越えるとんでもなく強い酒である。サハラの者にとっては劇薬扱いされている。ロシアにおいてはロシア人の永遠の友と呼ばれているが。
「わかってますって」
「それじゃあバーボンとテキーラの為に」
「いざもう一隻」
「やれやれだ」
意気上がる部下達を見て困った様に息を出す。
「酒でやる気になるとはな。困ったものだ」
そうは言いながらも彼もやる気になっていた。
「では前の戦艦をやるぞ」
「了解」
部下達はそれに頷く。
「エンジンを狙う。いいな」
「まずはそこですね」
「そうだ。それから艦橋にありったけのミサイルをぶち込む。それでいいな」

「ええ」
「隊長にお任せします」
「よし、では行くぞ」
「はい」
四機の黒い炎龍が動いた。そして敵の戦艦に向かう。
まずは敵のビームをかいくぐりながらダイアモンドを組んでエンジンに向かう。そこにビームを浴びせはじめた。
ウダイの機が先陣を切って攻撃を仕掛けるとその後から三機続く。そして反復して攻撃を続ける。これによりエンジンとその周りの部分は火を噴きはじめた。
「よし、次だ！」
「はい！」
ウダイはそれを確認すると艦橋に向かった。すぐさまミサイルを撃ち込む。これで艦橋は完全に機能を停止した。
そこでエンジン部分の誘爆がはじまった。これで全てが終わった。戦艦はエンジン及び艦橋から爆発を起こし炎の中に消えた。これでこの戦艦は完全に撃沈された。
「やったな」
「はい」
部下達はウダイの言葉に頷く。
「これでバーボンとテキーラは御前等のものだ」
「へへへ、どうも」
「御馳走になります」
彼等はそれを聞いって喜びの声をあげた。
「それじゃあこの戦いが終わったら」
「うむ」
「頂きますね。それじゃあ」
「よし。まずは空母に帰るぞ」
「もうですか」
「何言ってる、もうミサイルもビームも何もないぞ」

「おっと」
「弾がなくなっちゃどうしようもない。すぐに下がるぞ」
「わかりました。それでは」
「おう」
ウダイとその部隊は母艦へと引き返した。そして補給を受けまた戦場に戻る。攻撃機も爆撃機も激しい戦いの中にその身を置いていたのであった。

# 第十五部第五章　防戦その十六

それは戦闘機も同じであった。黒いタイガーキャット達は今敵の艦載機エインヘリャル達と死闘を繰り広げていた。数と武装、そして電子装備で大きく勝る彼等に対してもエウロパ軍のパイロット達は怯むところがなかった。果敢に戦いを挑んでいた。

「数で負けているってのによ」

ザーヒダンはエインヘリャルの編隊を目の前にしながら口の左端を歪めて笑った。

「頑張ってくれているじゃねえか、意外によお」

「当然だ」

そこで戦闘機部隊を率いる彼の上司から通信が入った。彼は空母の中にいた。

「敵も後がない。ならば必死に戦うしかないだろう」

「背水の陣ってやつですかい」

「そうだ。人間追い詰められればその能力を極限まで出す。侮るな」

「何かそれは俺達が言われる言葉ですね」

「いつも火事場に飛び込むからか」

「命知らずと伊達と酔狂が義勇軍ですからね」

ザーヒダンはシニカルな言葉を口にした。

「毎度毎度真っ先に敵の中に飛び込む。それが義勇軍でしょ」

「だからといって俺達が言ってはいけないということはないがな」

「まあそうですけれどね」

彼はシニカルなまま返す。

「とにかく敵は必死だということだ。それは忘れるな」

「了解。ったく素直にやられちまえばいいのにな」

「では聞くが御前が彼等の立場なら素直にやられるか？」

「まさか」

おどけた動作を交えながらそれに返す。

「精々必死にあがいてやりますよ。それで一人でも多く道連れにしてやりますよ」
「それから天国に行く、だな」
「ええ。最後の最後まで戦いますね、そうなると」
「そういうことだ。今の彼等が将にそれだ」
「やれやれ」
その言葉についつい溜息が出る。
「だからこそだ。いつもの様にふざけた態度は止めておけよ」
「了解」
「本当にわかっているのかどうか疑問だがな」
「あれっ、俺って信用ないんですね」
「じゃあさっさと行け」
上司は急き立てる様にして言った。
「そして一機でも多く倒して来い。いいな」
「結局戦えってことですか」
「安心して行って来い。天国が待っているからな」
「そんなところよりカジノに行きたいですね、俺は」
「御前ギャンブルはしなかったんじゃないのか？」
「そうですけれどね。けれど入るのは好きです」
「入るだけか」
「学生時代ちょっとやって全然勝てなかったんでね。止めたんですよ」
「学生って何時の頃だ？」
「中学生の頃です。小学校から出てすぐに」
「呆れた奴だ。その歳でもうやっていたのか」
「煙草もその時からでしたよ」
「一体どんな学生時代だったら聞いてみたいな、一度」
「まあそれはこの戦いが終わってからですね」
「それは俺の台詞だ。だがまあいい」
上司は憮然としながらも言った。

「後で聞こう。ゆっくりとな」
「それじゃあそれで」
「後そっちに敵のエースが来ているから注意するようにな」
「敵の」
「そうだ。エリザベート＝デア＝アルプだ」
上司はそのパイロットの名を呼んだ。
「エリザベート＝デア＝アルプ」
そしてそれを聞いたザーヒダンの顔色も変わった。
「あの女がですか」
「どうやら真剣になってきた様だな」
それを見た上司もニヤリと笑った。
「真剣にもなりますよ。それであの女がこっちに来てるって話ですけれど」
「そっちにエインヘリャルの大群がいるな」
「ええ」
ザーヒダンはその問いに答えた。
「そっちのレーダーにも映ってますよね」
「嫌になる程にな。やる気満々の様だな」
「嫌なことです。それでその中にいるんですか」
「そうだ」
上司はまた答えた。
「おそらくすぐに派手に暴れるだろうからな。注意しておけ」
「やれやれ」
「何なら御前が相手してもいいぞ」
「俺がですか」
「そうだ」
彼は言った。
「どうだ、やってくれるか」
「拒否することはできますか？」
「別にしてもいいが御前が周りから恨みを買うだけだぞ」

上司は突き放した声で言った。
「御前があの女の相手をしなかったせいで多くの人間が戦死した。そう言われたいのか？」
「つまり拒否することはできないってことですか」
「そうだ。それでどうするんだ」
「拒否できないっていうんなら従うしかないでしょ」
ザーヒダンは苦笑混じりに言った。
「やりますよ。けれどその替わりボーナスは弾んで下さいよ」
「御前がアルプを倒したらな」
「妖精を捕まえないと報酬はなし、ですか」
「そういうことだ」
アルプとは妖精という意味である。彼等はそれをもじってきたのである。
「やれるな」
「どっちみちあの女の相手をできるのは俺しかいませんしね」
ザーヒダンは苦笑を続けたまま言葉を返した。
「やってやりますよ。それじゃあ行って来ます」
「頼むぞ」
「他の連中に伝えて下さい。とりあえずあの女のことは気にしなくていいって」
「わかった」
「後は・・・・・・別にないですね」
「遺言とかはないんだな」
また問う。だがこれといった返事はなかった。
「そんなの性に合いませんよ。それに俺は生きて帰って来るって決まってるんですから」
「そんなこと誰が決めたんだ？」
「俺です」
彼は言い切った。
「御前がか」

「ええ」
彼は今度は満面に笑みを浮かべて頷いた。

## 第十五部第五章　防戦その十七

「俺以外に誰が決めるっていうんですか」
「アッラーだ」
「ではアッラーと俺が決めました」
「どちらにしろまだ死ぬ気はないんだな」
「そうですよ。ここで死んでどうするんですか」
彼は言った。
「俺にはまだやらなくちゃいけないことが山程あるんですからね」
「そんなにあったか？」
「俺にとっちゃあるんですよ」
彼はまた言い返した。
「何かとね」
「それが何なのかまではわからんがとにかく今は生きたいんだな」
「はい」
「じゃあ勝って来い」
上司はそう言葉をかけた。
「そして生きて帰って来い。いいな」
「了解。それじゃあ」
「妖精は任せたからな」
「はい」
ザーヒダンの愛機が戦場に向かう。そしてエウロパ軍でもまた同じ様なやりとりがあったのである。
「そう、向こうのエースパイロットが出撃しているの」
「どうやらその様ですね」
エインヘリャルに乗るエルザに部下からの通信が入っていた。彼女はそれに応対していたのである。
「ザーヒダン少佐ですね」
「大尉じゃなかったかしら」

「昇格した様ですね、ついこの前」
「速いわね、昇格が」
「連合軍にしては。まあ義勇軍と正規軍ではそうしたところも少し違う様ですがね」
「そうなの」
「ええ。義勇軍は正規軍に比べて功績に基づく昇格が顕著な様です。それに大国の利害も絡みませんし」
「大国の利害」
それが言及される。
「知りませんか？連合では提督クラスの人事には大国の意向もかなり反映されるんですよ」
「初耳だわ、それは」
エルザはそれを聞いてこう返した。
「そうだったの」
「大将クラスまではそうでもないみたいですけれどね。それより上ともなると」
「そうはいかないと」
「現実に今連合にいる三十人の元帥は皆大国出身ですよ」
「アメリカとか中国とかね」
すぐにこうした大国が出る。連合はやはり大国主義的側面があるのは否定できない。
「はい。他には南アフリカとか。小国の出身者は今のところいませんね」
「連合も何かと複雑な様ね」
「中央政府としては何とかしたいようですけれど。難しいみたいですね」
「大国のエゴをどう抑えるか。連合の持病ね」
「はい。彼等はこれで一千年以上苦しんでいますから」
どうやらこの部下は連合のことにかなり詳しい様である。実に的確に見ていた。

「軍事にもそれが影響するのはもう当然かと」
「そこが我々と違うのね」
「はい」
部下は通信の向こうで頷いた。
「我々はそれぞれの国はあっても中央政府の権限がかなり強いですから」
「そうね」
「それぞれの国の者であるというよりはエウロパの者ですから。その意識では彼等に勝っております」
「彼等は連合の者であるというよりはそれぞれの国の者だと考えているみたいだからね」
「そうです。ですからそうした地域対立がある」
「ふん」
「今まではそこを衝いて動けなくしてきましたが。いざ動かれるとこれ程厄介なものだったとは」
「身体は大きいからね。仕方無いわ」
エルザは笑いながらこう述べた。
「おかげでここまで追い詰められたし」
「はい」
「けれどここから先には進ませてはいけないわよ。それはわかってるわね」
「無論です」
部下もそれに頷いた。
「では」
「とりあえずザーヒダン少佐は私が相手をするわ」
自ら相手をすることを申し出てきた。
「いいわね」
「お願いします」
「他のタイガーキャットはお願いね」
エルザの言葉は軽いものだったがその内容はそうではなかった。

しかしそれでも彼女は言った。
「わかりました。それでは」
「数は向こうの方が多いし。注意してね」
「わかりました。ではそちらを」
「お願いするわね」
「了解しました」
部下はまた頷いた。そしてそれぞれ動きはじめた。
「全機迎撃用意」
ここでタンホイザーの指示が下る。
「艦艇と連動して防御にあたれ。いいな」
「了解」
「わかりました」
「頼んだぞ。この戦いの趨勢は卿等にかかっている」
「はい」
パイロット達はその言葉に頷いた。
「では戦神達に健闘を祈ろう」
「有り難うございます。それでは」
「うむ」
エインヘリャル達はその翼を広げ義勇軍の漆黒のタイガーキャットに襲い掛かる。銀色のその機体が黒い編隊に向かうその姿はさながら天使が悪魔に向かう様であった。

## 第十五部第五章　防戦その十八

これに対して義勇軍も動いた。タイガーキャット達はエインヘリャルに向かいそのミサイルの照準を合わせる。そのうえで狙いを定めた。

「発射！」

ミサイルが一斉に放たれる。まずはタイガーキャットのミサイルが。次にエインヘリャルのミサイルが。そのうちの幾らかが激突した。

ミサイル同士の激突で爆発が起こる。その爆発が銀河を赤く色彩る。だがその爆発をかいくぐったミサイルがそれぞれ敵に迫る。両軍は回避運動に移った。

「回避！」

「避けろ、いいな！」

それぞれ指示が下る。だが多くの者はそれよりも前に動いていた。そしてミサイルをかわす。だがかわしきれなかった者達がその直撃を受ける。多くの機がそれで炎と化し銀河の塵となっていった。

「行くぞ」

双方次の攻撃に移った。

「突撃だ、いいな」

「了解」

両軍で全く同じ指示が下った。それぞれそれに頷く。

ビームのボタンに手がかけられる。そして動きはじめる。両軍の艦載機は光よりも速い動きで迫った。最早レーダーに映るものも便りにはならない。勘が大きくものを言う戦いとなろうとしていた。

激突した。すぐに激しい戦いがはじまった。両軍入り乱れての乱戦となるのに然程時間はかからなかった。

こうなるともう後はそれぞれの能力だけが頼りであった。小隊単位、酷い場合には一機で戦っている者達まで存在していた。彼等は

その中に死にもの狂いで戦っていた。
　その中でザーヒダンとエルザはそれぞれ敵を探していた。彼等は自分の勘を頼りに敵を探す。
　ザーヒダンのタイガーキャットにエインヘリャルの小隊が襲い掛かる。上から来た。
　しかし彼は怖れてはいなかった。それを確認するとすぐに動いた。
「甘いんだよ！」
　一瞬影が交差した。それで終わりであった。そのエインヘリャルの小隊は瞬く間に炎の中に消えた。ザーヒダンは交差する間にその小隊全てに攻撃を仕掛けていたのであった。
　敵を屠った後で戦場を見渡す。見れば一機こちらに向かって来るエインヘリャルがいた。
「ザーヒダン、生きているか」
　ここで先程の上司から通信が入ってきた。
「はい」
　彼はそれに応えた。激しい戦いの中でも通信機器には何ら問題は生じていなかった。
「そっちに妖精が行ったぞ」
「妖精がですか」
「そうだ。もう来ているんじゃないか」
「というとあれですね」
「今そっちのレーダーにも映っているな」
「ええ」
　彼はまた応えた。
「前に来ているあれですね」
「そうだ。それでは頼むぞ」
「了解」
　ザーヒダンは上司の言葉に頷く。
「元々妖精を倒す為に戦場を探し回ったんですからね」
「それでは頼むぞ。いいな」

「わかりました。では」
「うむ」
エルザのエインヘリャルは前から来ていた。ザーヒダンの顔が決する。

## 第十五部第五章　防戦その十九

「よし」
エルザもそれは同じであった。前にいる一機のタイガーキャットを確認して険しい顔になった。
「あれね」
お互いがわかっていた。後はもうどうするべきか、言うまでもなかった。
「行くか」
「行くわよ」
二人はそれぞれの国の言葉で呟いた。ザーヒダンはアラビア語で、そしてエルザはラテン語で。彼等はそのままかつてのサハラでの戦いに戻っているかの様であった。
互いを確認すると対峙した。エルザは右に、ザーヒダンは左に動き円を描く。そして敵を狙っていた。
「どう来るかな」
ザーヒダンは敵の動きを見ながら不敵に笑っていた。今彼はこの状況を楽しんでいた。
エルザはレーダーに映るザーヒダンを見据えていた。その動きから目を離すことはない。
「予想されるパターンは」
次にコンピューターを見る。見ればそこにザーヒダンの次の動きの予想が数パターン提示されていた。彼女はその動きの結果がどうなるかも考えていた。
これはザーヒダンも同じであった。だが彼はそれを無視した。
「こんなものどうにもならねえよ」
笑いながらこう言った。そしてそこから目を離した。
「どう動くか完全にわかってたら戦争なんざ常に勝っちまう。けれどそうはならねえのが戦争だ」

彼はこう呟いた。
「なら。勘に頼ってやる」
タイガーキャットを大きく旋回させた。
「行くぜ、エウロパの女騎士」
そしてそのまま敵に突き進む。
「ここで仕留めてやるぜ」
「来たわね」
エルザはコンピューターから目を離してレーダーを見た。そして呟いた。
「来るとは思っていたけれど。このパターンもコンピューターにあるわね」
コンピューターに目を戻して言う。
「それなら対処の仕方もあるわ」
「さて、どうするのかね。妖精は」
ザーヒダンは突き進みながら言った。
「俺の行動が読みきれるかな」
「どんな動きをしても読んでみせるわ」
彼等は実際に話しているわけではない。だがそれは自然と話の様になっていた。
「コンピューター、いえ私の勘で」
「どう来ても潰してやるぜ」
「サハラのマムルークを」
「エウロパの騎士を」
「倒す！」
最後は同じ言葉であった。マムルークとはかってアラブで活躍した白人奴隷出身の軍人のことである。今ではサハラの戦士全体を指す言葉となっているのだ。
彼等は激しくぶつかり合った。そして戦いをはじめる。
ニョルズの戦いも熾烈さを増していっていた。その中でザーヒダンとエルザの一騎撃ちも幕が開いた。

最後の戦いは最早ラグナロクと化していた。最後に戦場に立っているのは誰か、それはまだ誰も知らないことであった。

第十五部　　完

２００６・１・１

# 第六部設定資料集



人物篇

ウスマーン＝ハワージャ
オムダーマン軍将校。参謀。かって連合中央政府に駐在武官として赴任していた。

水口賢雄
八条の秘書官。

二キータ＝カバリエ
連合中央政府外相。メキシコ人。黒い髪と瞳で彫の深い顔の太った中年女性。美食家としても有名。

山口義彦
日本出身の中央政府議員。薄汚い悪人であらゆる悪事に手を染めている。好色で貪欲、とりわけ金には汚い。それでいて善人の仮面を被っている。最低最悪の卑劣漢。

スブタイ＝バール
連合軍統合作戦本部長。元帥。モンゴル出身であり乗馬の名手でもある。

スティーブン＝ディカプリオ
連合軍情報本部長。元帥。カナダ人であり右目が青で左目が緑。彫が深く高い鼻を持つ美男子である。

由良美一

八条の秘書の一人。大柄で筋骨隆々としているがその頭脳は明晰で繊細な心の持ち主。

金桃姫

連合中央政府内相。韓国人。知的な美人で名門大学を優秀な成績で卒業した才媛。自分にも他人にも厳しい潔癖症であり無類の鋭さを誇る。だが決して慢心せずあくまで最善の判断を下すタイプ。無類の甘党でもありそれにかけては他の者を驚かせずにはいられない。

ムシュタ＝シャイターン

シャイターン家の主であり教団の教皇である。謀略をこよなく愛する権謀家。メフメット＝シャイターン達の父親でもある。

シギット＝フンプス

連合中央政府商務相。インドネシアの富豪の家の次男。母はユダヤ系であり黄色の髪と灰色の瞳を受け継いでいる。肌は褐色である。

リー＝チャクラーン

タイ出身で一代で連合最大の財閥を築き上げた伝説の人物。立志伝中の人物とさえ言われている。

フェリペ＝カレーラス

フィリピン人。バイソングループの総帥であり連合の財界における長老の一人。

チバチ＝マウム

カメルーン人。ファランクスグループ総帥。連合財界の長老の一人。

マオリ＝ポート

パプワニューギニア人。イーグルグループ総帥。やはり財界の長老。父がニュージーランド人でありその為肌にその影響が見られる。

ラッキー＝ウェスト
シンガポール出身。バイソングループ所有の球団の監督。

上春利
中国出身。ファランクスチームの監督である。

ドン＝ファチリーニ
アメリカ出身。イーグルスグループの球団の監督。

ナル＝サン
元ビルマ大統領、現在中央政府交通相。中央政府の長老格。

ムノウム＝ネゴロツキー
山口の解放軍の仲介ブローカー。南アフリカ人で山口の顧問弁護士でもある。邪悪で下劣な屑。

フィデル＝ドトール
連合中央警察長官。大柄で猛禽類を思わせる雰囲気。黒い髪に紫の目のキューバ人。ジャズが好き。

ベニョーコフ＝コレイスキー
ウクライナ人。連合中央警察副長官。赤い髪に青い目、実務派。

トニー＝ミッチェル
アメリカ人。黒人のジャズ歌手で従弟とグループ『ミッチェル＝ブラザース』を組んでいる。ピアノ担当。

サミュエル＝ミッチェル
アメリカ人。トニーの従弟。サックス担当。

小泉哲也
山口の腹心。下種。

田代勝広
解放軍首領。悪趣味で下品な最低の屑。

アブー＝シャイターン
シャイターン家の三男。中性的な美男子でシャイターン家の剣でもある。

カーロス＝クラウス
ベネズエラ人。連合軍元帥。茶色の髪と灰色の口髭の紳士。迅速かつ的確な用兵で知られている。

ハリアム＝モハマド
連合軍南東軍管区司令官、元帥。マレーシア人で実直な人柄。

ヘンリー＝スタンフォード
連合軍のエースパイロットの一人。黒い髪と藤色の目の黒い肌の黒人。アメリカ人。

サリー＝ハルーシャ
ブルネイ人。内務省のスタッフの一人であり金の秘書を務める若き才媛。

地理・国家篇等
エリュシオン

エウロパの最初の首都。ブラウベルグ回廊の出口付近にある。

ダークムーン条約
エウロパとサハラの境界を定めた条約。黒い色の衛星の上で調印されたのでこの名になった。

ハッティーン作戦
オムダーマンの南方進攻作戦。司令官はアッディーン。

ティムール連合
シャイターンの国家の正式名称。国家元首は主席と呼ばれている。一応は民主制であるが国家元首の権限が極めて強い国家となっている。

解放軍
連合とマウリアの境にかなり大きな力を持つ宇宙海賊。名前だけで凶悪犯の集まりである。ニアー＝オリエント社と深い関係がある。

ブルジルト
ハサンの首都。

ニューデリー条約
連合とマウリアが同盟を結び共に宇宙に進出する際に結ばれた軍事条約。主に指揮権について定められたもので両軍が共同作戦を実施する際は階級、任期が上の者が指揮を執ることとなっていた。これは両軍の関係が対等であることを示していた。

アイユーブ王国
オムダーマンと隣接している南方の国家。戦わずして降伏する。

ムワッハド連合
南方の国の一つ。要地にある。

連合内務省
連合内部の自治や領域決定を担当する。連合中央政府においてはかなり重要な省庁である。

イズライール派
シャイターン家が教皇等要職を独占している宗派。シーア派の一派でありかなりの勢力を持っている。言うまでもなくシャイターン家の基盤の一つである。

バイソングループ
連合の財界における一大グループの一つ。航宙産業を基幹としている。

ファランクスグループ
連合財界の大グループ。その中心は航宙産業。

イーグルグループ
連合財界大手グループ。中軸は航宙である。

連合のスポーツ産業
かなり複雑に様々なチーム、リーグに分かれている。マスコミは経営から排除されている。

フライア星系
エウロパの保養地。観光名所でもある。

シカゴ星系

アメリカ領。工業が発達している。ミッチェルブラザースの出身地。

播磨星系

重工業及び商業で知られている。各国の船や人が行き交い、そして工場から活気が聞こえてくる。賑やかな星系である。その繁栄は日本においては美原星系の次にくる程である。

神戸

播磨星系の惑星の一つ。商業が発達している。

ニアー＝オリエント社

山口の会社。正体は闇金であり全てが腐り果てた企業である。

# 第七部設定資料集

## 第七部設定資料集

### 人物篇

ロスタム＝グーダルズ
連合にいるサハラからの難民の一人。現在はニジェール籍となっている。精悍な顔立ちと雰囲気の若者であり後にサハラ義勇軍の英雄となる。アガデス軍の士官学校出身。八人兄弟の四番目。

ナルサス＝ハルドゥーン
グーダルズの働いていた農場のオーナー。難民出身で現在はニジェール籍。気さくな性格でよく太っている。

ビルギース＝グーダルズ
ロスタムの姉。弟とよく似た顔を持ち長い髪をしている。

トゥース＝サムディ
サハラ北方マラケシ共和国出身。大男でサハラ義勇軍のメンバーになる。

ハイメ＝ラビルヘン
コスタリカ出身の黒い肌に東南アジア系の顔立ちの人物。連合軍教育総監。元帥。コスタリカ軍の士官学校の校長を務めていたことがあり祖国では教育者として有名。

ハルジャ五世
ハサン王。平凡な老人。

ルクマーン＝ワシード

ハルジャ五世の長子。摂政、そして王太子として国の実権を握っている。三十代前半の美男子であり文民優先の政治体制で国を安定させている。

シャービル＝ラージー
ハサン首相。痩せた小男。目はくぼんでいるがその光は強い。能吏である。

チェーザレ＝デ＝シリアーニ
エウロパ情報部長。アイスブルーの目に金髪の美男子。奸智にも長けた男でありアイスブルーの悪魔として恐れられている。だが軍人としても人間としても公平で善良である。

イブン＝ウダイ
義勇軍の炎龍パイロット。髭を生やした中年。マラケシの攻撃機乗りであった。

ビバーチェ＝オセアノ
ドミニカ出身の連合の水兵。白人の肌にポリネシア系の顔、黒人の髪。巨大な七色の薔薇が好きで後に文化人類学者となる。

ファン＝クーラ
メキシコ大統領。口髭を生やした筋肉質の大男。陽気な人物。

ゴー＝シェイロン
シンガポール第一首相。ふくよな外見の老人。

ティアン＝ホア＝チャクラーン
タイ首相。長身の痩せた男で軍人出身。タイ軍大将であった。

ダグラス＝ワイルド
オーストラリア大統領。黒い髪にアジア系の肌の色をしておりその青い目はかなり大きい。連合においてはかなり有名な政治家でもある。

コサイン七世
リャド国王。老人。

ソホラーズ＝ハイヤーン
リャド王国の名将。白髪の多い老人である。

ルードヴィッヒ＝ヨアヒム＝フォン＝シュヴァルツブルグ
エウロパ軍務大臣。元帥。白いものが混じった黒髪に豊かな頬髯をたくわえた姿勢のいい初老の男。エウロパ軍を率いるに値する堂々たる将でありモンサルヴァートも一目置いている。

ロマーニ枢機卿。
連合に送られているバチカンの枢機卿の一人。その実態はエウロパ諜報部に協力している者である。

地理・国名篇
サハラ義勇軍
サハラからの難民達で構成される連合軍の部隊。正規軍とは違いその兵器は漆黒に塗装され装備もかなり強化されている。常時戦闘

態勢にあり戦闘においては常に先鋒、殿軍を務める。訓練はかなり厳しい。連合軍きっての精鋭であると共に盾としても使われている。

ワシード家
ハサンの王族。七百年の歴史を誇る。

ハサン王家の歴史
血塗られた歴史であると言っていい。王位継承を巡って様々な謀略と暗殺が行われてきた。その為首都ブルジルトの黄金色の宮殿は血に染まっているとまで言われている。

ハサンの政治システム
かなり複雑であり王の権限が強いが議会や政府もかなりの力を持っている。今現在は摂政である王太子クルマーン＝ワシードが実権を握っている。

リャド王国
オムダーマンの南方攻略第三段階における攻撃目標。南方で最大の国家でもある。

カブール
リャド王国の首都。

アレクサンドリア
ティムールの首都。エウロパ総督府と隣接している。最前線でもある。

ジェルファ星系
サハラ北方の星系の一つ。農業や放牧で有名な星系。ここにいる牛は長い角を持ち大きいことで知られておりその肉は極めて美味。

ケベック王国
連合の新興国家の一つ。フランス系カナダ人達により建国された国であり国王はブルボン家である。

コンゴロ共和国
連合の新興国家の一つ。豊かな土地と資源を持ち建国から二百年ながら連合の大国となっている。人種的には黒人が多い。

フェルダウス星系
ブラックホールや超新星、赤色巨星等が入り混じったかなり複雑な星系。地形の複雑さ、危険さではこの南方でも随一と言われている。オムダーマン軍とリャド軍の決戦の場となる。

ハルーン
フェルダウス星系第十惑星。フェルダウス星系においては最も大きな惑星であり軍事基地も充実しておりこの星系では人の居住も可能。その為それなりに人口も多い。

ホラズム
ハイヤーンの乗艦。

ニューヨーク
地球にある都市の一つ。かつては人類の経済の中心地の一つであった。ステッラが潜んでいた。

# 第八部設定資料集

## 第八部設定資料集

### 人名篇

キーン＝バルバロッサ＝ローズ
エウロパ軍宇宙艦隊司令長官。元帥。イギリス出身。栗色の髪に緑の瞳を持つ細面の美男子。イギリスにおいて公爵の爵位を持つ大貴族であり代々名のある軍人を輩出している武門の家の嫡男。彼もまた騎士道精神を尊び、能力にも恵まれた人物である。

エリザベート＝デア＝アルプ
エウロパ軍のエースの一人。金髪碧眼の小柄な美人。赤いエインヘリャルを駆り、多くの戦場で活躍してきた。まだ若いながらその撃墜機数は既に百を越えている。

キンム＝ペリ
ナウル出身。政治学者であり黒い肌に銀色の髪、紫がかった青い目の老人。魚料理が好き。

ボブ＝フィアート
ケベック王国出身。連合軍大将。浅黒い肌のアジア系の男で目は緑。

リー＝ミケンズ
連合軍大佐。ハイチ出身の黒人。ラビルヘンの副官。

ラシード＝ウッディーム
サハラ義勇軍少佐。アガデス出身。

イリア＝シャリアピン
連合国防次官。リトアニア出身。金の髪に黒い瞳の地味な外見の白人の男で中肉中背で容姿もこれといって目立たない。黒ブチ眼鏡がよく似合っている。髪型も七三分けにしておりよく銀行員と間違われる。かつては財務省にいたが国防省が設立されるとそこに移籍。カナウス星系出身。

ロンド＝サックス
黒い髪の紳士。ビッグリバー連邦出身。かつて祖国のとある軍需産業において経理部門のトップを務めていた。だが財務省からスカウトを受け出向という形で次官に就任。

マラーイヤ＝アッディーン
アッディーンの母。

ザール＝アッディーン
アッディーンの父。

カリム二世
カタール宮殿を造らせたサラーフ王。

地理・国名篇
ヤゲロー家
ポーランドの名家の一つ。侯爵の爵位を持ち学問の分野に大きな影響を持っている。プロコフィエフの夫の実家。

連合におけるサハラの難民達の新興国家の位置
ブラジル近辺の予定になっている。

カタール星系
オムダーマンとティムールの境にある星系。風光明媚な観光名所。かってはサラーフ王国領であった。

カタール宮殿
サラーフ王の別荘であった宮殿。

# 第十六部第一章　最後の防衛線その一

## 最後の防衛線

ニョルズ星系において義勇軍とエウロパ軍が激しい衝突を繰り広げている頃クロノスにおいても連合軍正規軍とエウロパ軍の主力部隊が最後の戦いを繰り広げていたのであった。

三重の防衛ラインを突破した連合軍は勢いに乗りそのまま攻勢に出る。これに対してエウロパ軍は最早為す術もないように思われた。

だがそれは違った。彼等がいたのであった。

「司令」

シュヴァルツブルグの乗艦ワレンシュタインの艦橋のモニターに各竜騎士団の団長達がその姿を現わしていた。

「どうした」

満を持して配置していたテューポーンが破壊されシュヴァルツブルグは意気消沈していた。そんな彼に彼等が姿を現わしたのである。

「まだ戦いは終わったわけではありません」

彼等は言った。

「それはわかっているが」

シュヴァルツブルグはそれに対して沈んだ声でまた返す。

「だがな。今の我々にはもう」

「とりあえずはここは下がりましょう」

彼等を代表してダムが言った。

「下がるのか」

「はい。そして第四の防衛ラインを築くのです」

「ふむ」

シュヴァルツブルグはそれを聞いて考える目をした。

「第四のか」

「はい」

「実質的に最後の防衛ラインになるな」

「ですがそこを守りきれば」
ダムはまた言った。
「我等にも希望はまだあります」
「今残っている艦隊はどの程度か」
シュヴァルツブルグはそれを受けてエルザに問うた。
「今の艦隊ですか」
「そうだ。すぐに報告してくれ。いいな」
「了解」
「問題は今の戦力がどの程度かだ」
エルザはすぐに調べに入った。シュヴァルツブルグはそれから目を離しダムに顔を戻して言った。
「それによってどうするか決まる」
「はい」
ダムはその言葉に頷いた。
「少なくとも騎士団はまだ戦えます」
「充分にか」
「無論。我等は最後まで戦い抜きます故。その点も御心配なく」
「では期待させてもらおう」
彼はまた言った。
「頼むぞ」
「お任せあれ」
「そして今後ですが」
次にプロエシュチが口を開いた。
「まずは戦力を確認してから防衛ラインのあり方を考えましょう」
「だがかなり急ごしらえになるな」
「それは仕方ありません」
彼はそれは仕方ないとした。
「ですが築く他ないのもまた事実かと」
「確かにな」
「ここで負けてはエウロパはありません」

「うむ」
「何としても防ぎましょう、ここで」
「わかった。ではそうしよう」
シュヴァルツブルグはまた頷いた。
「ここで戦う。いいな」
「はい」
団長達が一斉に答えた。
「そしてその際だが」
「閣下」
だがここでエルザが戻って来た。
「今の我々の戦力がわかりました」
「そうか。どの位だ」
シュヴァルツブルグは話を中断させてエルザに顔を向けてこう問うた。

## 第十六部第一章　最後の防衛線その二

「はい、三百個艦隊です」
「三百か。これを多いと見るか少ないと見るかだな」
「この戦いだけで五十個艦隊に相当する戦力が失われたのですか」
それを聞いた参謀の一人がこう呟いた。
「これに対して連合軍はその数を殆ど減らしてはいない。決して楽な戦いではありませんな」
「それはもうわかっていることではないのか」
シュヴァルツブルグは怒りはしなかった。ただ冷静な声を向けただけであった。
「最初から数、そして装備で大きく遅れをとっていることはわかっていた」
「はい」
「ならば。言ってもはじまるまい。問題はその三百個艦隊でどう戦うかだ」
「そうですな」
それに応えてタファリアが低い声で言った。
「まずは防衛ラインを築きましょう。問題はそれからです」
「うむ」
「主力は先にお下がり下さい。そして防衛ラインの建設に取り掛かって下さい」
「よいのか」
「はい。後詰は我等が引き受けます」
彼等は言った。
「竜騎士団が」
「ええ。ですから安心してお下がり下さい」
「だが。危険ではないのか。連合軍は今勢いに乗っている」
「また面白いことを仰る」

アシャンがそれを聞いて笑みを浮かべた。
「戦場において安全な場所なぞありましょうか」
「しかし」
「それに退く際の後詰はこのうえない名誉。是非お任せ下さい」
「どのみち誰かが残らなくてはならないのです。それなら我等が」
「どうかお任せを」
「・・・・・・いいのだな」
それを聞いてシュヴァルツブルグも退くことはできなかった。認めるしかなかった。
「それで。では頼めるか」
「はい」
「喜んで」
彼等は笑顔でその言葉に頷いた。
「わかった。ではすぐに退き第四防衛ラインの設立に移ろう」
「ハッ」
「その間後詰は竜騎士団に任せる。これでよいな」
「是非」
「お任せ下さい」
「わかった。ではすぐに作戦開始だ」
彼は言った。
「主力部隊は撤退だ。その間後方は竜騎士団が受け持つ」
「ハッ」
「そして竜騎士団が支えている間に主力部隊で防衛ラインを構築する。これでよいな」
「わかりました」
「全ては危急のことだ。遅れることのないよう」
その言葉は実に重いものであった。その重さが今の彼等の置かれた立場を何よりも雄弁に物語っていた。
エウロパ軍はすぐに第三防衛ラインから退いた。そしてそのまま下がっていく。

「オリンポスまで後退するか」
「いえ、それはないでしょう」
リバーグに対してジェリオが言った。
「首都で戦う位ならここでまだ戦うでしょう、彼等は」
「ここでか」
「はい。首都に敵が入られるというだけでももう致命的です。それだけは避けるでしょう」
「そうか」
「ですから。ここで踏み止まると思います」
「ふむ」
「問題は後詰ですね。誰が来るか」
「誰だと思うか」
「私の予想では各竜騎士団です」
その予想は当たっていた。
「おそらくは。かなり頑強に抵抗するでしょうね。味方の時間を稼ぐ為に」
「そうくるか」
「その間に彼等は防衛ラインを築くでしょう。そして最後の戦いを挑むものと思われます」
「ではまずは騎士団を倒してからだな」
「はい。ですがかなり厄介な敵だと思われます」
「数のうえでは我が軍が圧倒的に優勢だが」
「それでもです」
彼はまた言った。
「彼等はおそらく決死の覚悟で立ちはだかるでしょう。いざとなれば玉砕も躊躇わないかと」
「玉砕！？」
それを聞いたリバーグの顔が戸惑ったものになった。

## 第十六部第一章　最後の防衛線その三

「何だ、それは」
「御存知ありませんか」
「はじめて聞く言葉だが。よかったら教えてくれないか」
「我々もお願いします」
そこにいた幕僚達もリバーグに問うてきた。
「それは一体どういったものでしょうか」
「ああ、御存知なかったですか」
「うむ。悪いが聞いたことはない」
リバーグはこう言って首を傾げさせた。
「何を意味するのかね」
「はあ」
ジェリオは軍事に関しては博識で知られるリバーグもここにいる多くの幕僚達も全く知らなかったことに内心戸惑いを覚えていたがそれでも言った。落ち着いてゆっくりと話しはじめた。
「簡単に言いますと全滅です」
「全滅か」
「はい。それも只の全滅ではありません」
「というと」
「最後の一兵まで戦うということです。妥協なぞ全く無い戦いを挑むということなのです」
「恐ろしいな」
リバーグはそれを聞いてこう呟いた。
「そこまで戦うつもりなのか」
「我々にとってはあまり考えられないことですが」
「あまりどころではない」
リバーグはまたしても言った。
「そこまで命を捨てられるのか。狂気の沙汰だ」

「我々の価値観ではそうですね」
ジェリオも言った。
「ですがそれが彼等の価値観なのです」
「最後の一兵まで命を賭けて戦うということがか」
「はい。かってそうした戦いを繰り広げた軍隊もありました」
「それは確か」
リバーグはここで自身の頭の中を探った。そしてそこから思い当たるものを出してきた。
「第二次世界大戦の時の日本軍か」
「はい、その通りです」
正解であった。ジェリオはそれに頷いた。
「そうか、あの戦い方が玉砕だったのか」
「そうです。今彼等はあの時の日本軍と同じものだと考えて下さい」
「ついこの前まであった日本軍ではなく、ですね」
「ん！？」
ジェリオはその言葉に顔を向けた。見ればプラチナブロンドの髪の妙齢の美女がその言葉の主であった。顔は白人のものだが肌の色はやや黄色く、目の色は黒であった。
「君は確か」
「はい、倉田純子です」
彼女は敬礼して彼に応えた。
「階級は中佐であります」
「うむ。君は日本人だったか」
「はい。無論あの戦いのことも知っております」
「それで玉砕という言葉を知らなかったのか」
「もう我が国でも使われていない言葉です」
「そうだったのか」
彼はそれを聞いて少し残念そうな顔をした。
「あの時の日本軍と前まであった日本軍は違うと仰りたいのですね」
「そうだ」

ジェリオはそれに答えた。
「貴官には申し訳ないがな」
「いえ、今の日本とあの時の日本は違いますから」
「違うのか」
「はい。あれだけの気迫を持つ軍隊は。そうそう生まれはしません」
「ふむ」
それを聞いてリバーグもジェリオも考える顔になった。

## 第十六部第一章　最後の防衛線その四

「やはり今の我々は連合の一員ですから」
「あそこまで戦場に賭けるものはないというのか」
「そうです。我々も全滅だけは避けろと言われてきました」
「命を粗末にするな、か」
「命があればこそ戦えますから」
「確かにな」
リバーグもジェリオもそれに頷いた。他の幕僚達もである。
「我々にとっては命あっての戦いだ」
「はい」
「だがエウロパ、とりわけ貴族達にとっては違う。戦場においては命を賭けるものなのだ」
「これもまた価値観の相違ですか」
「そうなる。だからこそ彼等は残るのだ」
「後詰として」
「司令、そういうことです」
ジェリオは話を終えるとリバーグに顔を向けてきた。
「彼等は今エウロパという国の為に全てを賭けようとしております。その覚悟は尋常なものではありません」
「うむ」
リバーグもわかった。そして強い言葉で頷いた。
「こちらも覚悟を決めましょう。容易ならざる相手であると」
「その様だな。数の問題ではなく」
「はい」
「全軍に伝えよ。数が少ないからといって決して侮ることのないようにとな」
「ハッ」
上官の言葉に敬礼で応える。

「死兵に対しては死兵に対する戦い方があります」
「それは」
「彼等の気迫を利用するのです。それに引っ掛かればいいですが」
「引っ掛からなければ」
「その時は大人しく彼等を遠巻きに見ておきましょう。我々にとって今は命の賭け時ではありません」
「そうだな。どちらにしろ戦いはまだある」
「はい。築かれるであろう最後の防衛ラインが」
そう語るジェリオの目が光った。
「我々にとっての最後の戦いですね」
「そうだな。では彼等は今は置いておいていいか」
「はい。向かって来るなら別ですが」
「わかった。それではそれを総司令部に伝えよう」
リバーグはこう述べてきた。
「お願い出来ますか」
「マクレーン司令や劉総長がどう判断されるかまではわからないがな。上申はしておく」
「お願いします。それでは」
「少なくとも私の軍は迂闊な行動はさせない」
「はい」
「無駄な損害を避ける。いいな」
「わかりました。それでは」
こうしてジェリオの案が上層部に打診された。それを受けマクレーンと劉はブレスの艦橋において話をはじめた。
「どう思われますかな」
まずはマクレーンが劉に問うてきた。
「この案に関して」
「悪くはないと思います」
劉は素直にジェリオの案を認めた。
「今出て来ているエウロパ軍は全員死兵なのは事実です」

「はい」
「彼等と戦っても無駄に損害を出すだけです。それだけは避けなくてはなりません」
「ではやり過ごすということですね」
「それがいいと思います。どちらにしろ戦いはもう一度あるのですから」
その点に関する読みはジェリオも劉も同じであった。
「その時にまとめて殲滅しましょう。それでいいと思います」
「わかりました。それでは今来ている後詰はやり過ごす」
「はい」
「それでいいですな。わざわざ向かって来る敵を相手にすることはない」
「ですが罠は張っておきましょう」
「罠、ですか」
「はい」
劉はここで頷いた。
「誘い込むことは考えておきましょう。敵の戦力を減らしていくことも重要ですから」
「擬態でもしますかな」
「それが一番いいでしょう。まあそれに安易に引っ掛かる方がどうかしていますが」
「まあそうですね。ですがやってみる価値はありますな」
「そういうことです。ではそういう方針でいきましょう」
「はい」
連合軍は積極的には騎士団に対して攻撃を仕掛けることはなかった。ただ遠巻きに騎士団を眺めているだけであった。時折練度のなさからか動きが乱れる。だが騎士団はそれを見ても動こうとはしなかった。

## 第十六部第一章　最後の防衛線その五

「こちらからは仕掛けるな」
ダムが全軍に対してこう命じていたのである。
「今はこちらから仕掛けてはならん」
「あくまで味方を下がらせるだけ、というわけですな」
「そうだ」
彼は幕僚の一人の言葉に頷いた。
「今はそれでいい。敵と戦う必要はないからな」
「わかりました」
「敵の陣が乱れてもだ。迂闊に飛び込んでは死を意味するぞ」
「死を」
「連合軍の今までのやり方は知っているな」
「敵を誘い込むのを常としています」
それで今まで敗れてきている。流石に彼等も慎重になってきていた。
「そうだ。彼等はそうしたことが上手い。正々堂々とはしていなくとも戦い方としては正しい」
「確かに」
「ならば今度も仕掛けて来る筈だ。こちらからは動かないことも肝心だ」
「動かないことですか」
「まして今の我々は後詰だ。動くこともない」
彼はまた言った。
「ならばな。ここは守るだけでよいのだ。だが命を賭けて守れ」
「はい」
幕僚達はダムのその言葉に声と顔を引き締めさせた。
「よいな。ここで死すともだ」
「はっ」

そして彼等はその言葉に応えた。
「是非共」
「卿等の命は私が預かる。だからこそ迂闊な行動はとらんぞ」
「わかりました」
「ここからは一歩も進ません。そしてこちらも仕掛けぬ」
「それは我が白金騎士団だけではありませんな」
「当然だ。全騎士団だ」
断言した。
「ここが正念場だ。我々にとってな」
「もしここで我等が滅べば」
「その時は今退いている友軍も滅ぶ」
ダムの声は沈痛なものとなる。
「おそらく敵は勢いに乗り友軍に一気に襲い掛かるだろうからな。そしてその後は」
「オリンポス侵攻ですか」
「それでなくとも勝負は決する。今のオリンポスには備えはない」
「はい」
全ての戦力をこのクロノス、そしてニョルズに投入しているからである。彼等はこの二つの戦いに全てを賭けているのである。
「よいな。それを覚えておけ。我々の迂闊な行動がエウロパを滅ぼす」
「わかりました」
幕僚達は全てを聞き終えた後で沈痛な顔で頷いた。
「では全軍にその様に伝えます」
「団長達にはわしが伝えておく」
ダムは同志達には自分から伝えることにした。
「ではこのまま守りを固める。よいな」
「ハッ」
騎士団もまた動かなかった。彼等は互いに動かず対峙し合っていた。双方共迂闊なことは出来ない状況であったのだ。

「もどかしいな、どうも」
それを見たチャンカがこう呟いた。
「敵を目の前にして何も出来ないというのはな。仕方ないが」
「今は動くと無駄に損害を出すだけかと」
「それはわかっている」
側にいた副官の言葉にこう返す。彼もその程度はわかっていた。
「だがな。この間に敵は防衛ラインを築いている」
「はい」
「それは何とかしておきたいが。難しいか」
「難しいでしょうね。進路は全てあの騎士団が守っていますから」
「少ない兵でな。よくやる」
「彼等の数は精々五十個艦隊程度なのですがね」
「我が軍の四十分の一か」
戦力的にはお話にならないだけの差だ。
「その戦力で抑えるとは。見事なものです」
「仮に攻撃を仕掛けたらどうなるかな」
「彼等をですか」
「そうだ。その場合の損害はどうなると思う？」
「そうですね」
副官は上司にそう問われて答えた。
「やはり敵と同数は失うと見ていいでしょう。彼等はもう死を覚悟していますから」
「我が軍の装備でもか」
「はい。最悪で百個艦隊の損失も覚悟しなくてはならないかと」
「百個艦隊か」
それを聞いたチャンカが顔を濁した。
「はい」
そして副官はその言葉に対して頷いた。
「今までは敵軍は損害が出たならば退いていましたが今回はそうはならないですから」

「こちらの総力を以って攻撃を仕掛けてもそうなるのか」
「あくまで最悪の予想ですが」
「軍では最悪の予想が普通の予想だ」
彼は副官に対してこう述べた。
「百個か。人員にして一億人だ」
「はい」
「小さな国だとそれだけで働き手のかなりの数を失ったことになる。とんでもない話だ」
連合において最も小さい国の人口は十億程度である。それを考えると途方もない損害である。それだけの損害が出たならば世論への影響は免れない。民主主義国家においてそれは政府、そして軍とその指揮官達への批判に直結するのは言うまでもない。
「アメリカや中国の様な大国でもそれだけの人間を一度に失うということは大変なことだ」
「ですね」
連合はそれぞれの国への帰属意識が強い。考える基準もそこにある。それを考えると一億の損害は絶対に出してはならないものであった。
この戦いにおける連合軍の戦死者は今の時点でまだ七百万にも達してはいない。エウロパ軍の戦死者が百億を優に超えるのに対してかなりの差であった。これは将兵の消耗を可能な限り防ぐという連合軍の考えが強く出たせいでもあるがそれでもかなりの差であった。

## 第十六部第一章　最後の防衛線その六

「今でもかなりの損害が出ている」
「はい」
これはチャンカの言葉にもよく出ていた。全体的な損害としては全体の四パーセントにも満たない。だがそれでも彼等にとっては大きな損害なのである。
「それを踏まえると攻めることは出来ないな」
「そうですね。ここはやはり動かない方がよいかと」
「わかった。では我が軍も迂闊な行動には出ない」
「はい」
「司令部の命令を守るとしよう。よいな」
「わかりました」
「だが一つ聞きたいことがある」
「何でしょうか」
副官はそれを受けて彼に顔を向けた。
「本当にそれだけの損害が出るというのか」
「本当にあくまで最悪の予想です」
「我が軍と敵軍の数と装備を考えてもか」
「はい。いざとあれば彼等は特攻も辞さないでしょう」
「特攻」
それを聞いたチャンカの顔色が変わった。
「あの特攻か」
「はい」
かつて第二次世界大戦の頃の日本軍が行ったことである。爆弾を搭載した航空機に乗り込みそのまま敵艦等に体当たりを仕掛ける。今まで誰も行うことのなかった日本軍の最後の戦法であった。
これにより多くの若い命が散った。人間魚雷回天を設計、開発した二人の海軍将校はまず自分達が乗り込み出撃した。無論これは兵

法においては常識外れもいいところである。やってはならないことである。だがそれでも彼等は行った。全ては愛する祖国の為であった。
狂気なのか、そうではなかった。彼等はわかっていた。こんなことをしても最早どうにもならないと。だが彼等はそれでもあえて命を賭けたのである。そして散華していったのだ。戦いの後の祖国のことを最後まで思いながら。恐るべき気迫、そして意志であった。彼等は死さえ越えて戦場に赴いていたのである。この特攻隊の恐ろしさはこの時代においても尚語り継がれていることであった。彼等は鬼とさえ言われている。
「あれをやられるとな。まずいな」
「はい」
「全軍恐慌状態に陥る。確かにそれだけの損害が出るかも知れないな」
「今の彼等を見ていますと。そう出る可能性はあります」
「よくわかった」
チェンカは戦慄を覚えながら副官に応えた。
「それでは尚更攻撃を仕掛けるわけにはいかんな」
「はい」
「こちらに来た場合だけ攻める。よいな」
「了解」
こうして連合軍はただ遠巻きに見るだけであった。その間にエウロパ軍は後方に退き陣地の構築にかかった。それは極めて迅速なものであった。
「急げよ」
シュヴァルツブルグは全軍に指示を出しながらその間に呟いた。
「敵は待ってはくれぬからな」
「ですね。そして後詰を務めてくれている騎士団の為にも」
「うむ」
彼は頷いた。

「早く終わらせそれから退かせる」
「はい」
「こちらにな。彼等には最後の戦いにも是非参加してもらいたい」
「最後の戦いですか」
「そうだ」
彼は言った。
「三重の防衛ラインは破られた。後我等に残っているのは今築いている防衛ラインだけだ」
「ですね」
「オリンポスを守るのは今はそれだけなのだ。他にはもう何もない」
「それは皆わかっていることです」
「だからこそだ。今の我等には彼等が必要だ」
「騎士団が」
「頼む。無謀は真似はするな」
彼は祈る様にこう呟いた。
「必ず戻って来てくれ」
騎士団はまだ友軍と敵軍の間にいた。そしてそこから一歩も動きはしなかった。

## 第十六部第一章　最後の防衛線その七

各騎士団の団長達もそこにいた。彼等は前にいる敵を見据えつつ一歩も動きはしなかった。それは部下達も同じであった。
「敵は来ないか」
オーティスは自らの乗艦であるレッドドラゴンでこう呟いた。
「少し拍子抜けだな。我が騎士団の戦いを見せてやろうと思っていたが」
「どうやら彼等は無闇な損害を避けている様ですね」
「無闇な損害か」
「はい」
損害について言及した部下はそれに頷いた。
「彼等は今構築中の防衛ラインに対する攻撃に専念する様です」
「ふむ」
「つまり我等はとりあえずはやり過ごすつもりの様です」
「慎重と言うべきか」
「慎重と言うのならそうでしょうね」
部下は応えた。
「とりあえずは我等への攻撃はないでしょう」
「よかったと言うべきかな」
「さて、それはどうでしょうか」
だが彼はそれには疑問を呈した。
「戦いは短に延ばされただけですから。どのみち次の防衛ラインで戦いがあります」
「そうだな」
「ですが時間は稼ぐことができているのも事実です。これがどう生きるか、ですね」
「何かあるというのか」
「戦いとは何があるかわかりません」

彼は述べた。
「戦場の他の場所においても。あくまで可能性でしかありませんが」
「その可能性が時として確実なものになるのも戦争というものだな」
「はい」
彼はまた頷いた。
「何か起こるか。果たしてそれが吉となるか凶となるかも」
「そういえば今マウリアが動いているそうだな」
「マウリアが」
「平和の使者という触れ込みでな。我々と連合の講和に向けて動いているそうだ」
「彼等が、ですか」
その部下はそれを聞いて怪訝そうな顔をした。
「これはあくまで私見ですが」
彼はそう断ったうえで述べた。
「彼等はあまり信用できないかと」
「連合に近い立場だからか」
「はい。講和といっても連合にとってかなり有利な条件になるかと思われますが」
「その可能性は高いな」
オーティスもそれにある程度は同意した。
「彼等と連合の長年の盟友関係を考えるとな」
「閣下もそう思われますね」
「うむ」
「ですが。我が軍はもう後がないのもまた真実です」
「後がないか」
「最後の防衛ラインが破られたならば。オリンポスは最早陥落したも同然です」
「そうなれば講和なぞ比較にならない程の不利な条約が結ばれる」
「我々にとっては死亡通知に等しい程のものが。それを考えるとやはり講和の方がよいですね」

「そうだな」
これにはオーティスも頷いた。
「最悪か、それより少しましな程度のものか」
「どちらか、です」
「嫌なものだ」
オーティスはそれを聞き終えて忌まわしげにこう呟いた。
「どちらにしろエウロパにとっては認め難いものだ」
「ですが死亡通知よりはましかと」
「それはそうだが」
「生きていればまた再起を計れますが」
「死んではどうにもならないか」
「全ては次の戦いと時間が決めます」
「時間が」
「このクロノスは時の神」
そして今いる星系の名を司る神の名を口にした。
「今こそその力と加護を我等に示してもらいたいものです」
「示してくれるかな、果たして」
「クロノスが我等を見ているならば」
「では祈るとしよう」
オーティスはまた言った。
「時の神の加護をな」
「はい」
彼等もまた祈っていた。エウロパにはもう後がないのは彼等もわかっていた。戦いは最後になろうとしていた。それは誰もがわかっていることであった。だがその帰結はどういったものかは誰も知りはしなかった。その時を司る神以外は。
両軍はさらに対峙を続ける。連合軍は手出しすることなくエウロパ軍、そして騎士団を見据えていた。だが何もしていないというわけではなかった。
今エウロパ軍が必死になって築いている防衛ラインを偵察し調べ

ていたのである。どの様にして攻略するか思案していたのだ。
「今までは一斉射撃、艦載機、そして巨大戦艦の斉射で突破して来たが」
劉は主だった参謀達を会議室に集めていた。そこで敵の新たな防衛ラインについて対策を練っていた。

## 第十六部第一章　最後の防衛線その八

「今度はそうはいかないだろう。彼等も対処を考えている筈だ」
「はい」
これにユタバルが応えた。
「彼等は戦う度に先の戦いへの対策を講じてきております。おそらく今度もそうでしょう」
「それが彼等が愚かではないという何よりの証拠だな」
「はい」
参謀達はその言葉に頷いた。
「だがだからといってこちらもただ何の芸もなく攻めるというわけにはいかない」
劉はまた言った。
「電子妨害への対策も行っているだろう。今も言ったが彼等に二度は同じ手は使えはしない」
「次の手ですか」
「そうだ。何か考えはあるか」
「そうですね」
その中の一人が円卓の中央に映し出されているクロノスの三次元地図を見ながら言った。そこには今構築中の最終防衛ラインが描かれていた。
「今敵の陣を見ていますが」
「ムオン中将」
劉はその参謀の名を呼んだ。彼はナム＝ムオンという。連合軍中将である。ラオス出身であり赤茶色の髪に青がかった黒い目をしている。少し鼻が低く唇が厚いところを見ると黒人の血も入っているようだ。その証拠に肌も少し黒かった。逞しい顔をしており参謀にはあまり見えなかった。だが実は連合軍の中でも切れ者として知られ将来を嘱望されている

人物の一人であるのだ。
「非常によく考えられていますね」
「貴官もそう思うか」
「はい」
ムオンは引き締まった声で応えた。
「少なくともただ攻めただけでは我が軍の多大な損害は免れないと思います」
「ふむ」
「方陣を基本にしていますがすぐに散陣にもなれるようになっております」
「それだけではないな」
「そうです。艦載機に備えて砲座も多く建造しています。電子設備まで置かれています」
「堅固なものだな、実に」
「散陣にも移れますから巨大戦艦の斉射もあまり効果がないでしょう。我が軍の今までの戦術をよく理解しております」
「だが攻めないわけにはいかない。それはわかっているな」
「無論です」
彼は応じた。
「ですが攻め方が全くない陣というものもまたありません」
「何かあるのか」
「一度機略から離れてみてはどうでしょうか」
「機略から？」
「はい」
彼は答えた。
「ニーベルングでもアルテミスでも我が軍は知恵を使って勝ってきました」
「ふむ」
「このクロノスにおいてもそれは同じです。ですが我が軍は元々はそうした機略に頼らずとも充分に戦うことのできる軍なのです」

「それはそうだな」
劉にもそれはわかっていた。連合軍の艦艇及び戦術思考は正攻法を念頭に置いたものである。圧倒的な火力で攻撃を仕掛け、敵の攻撃はその防御力で防ぐ。近付いて来る敵に関してはその索敵で以って発見し、素早い攻撃で撃破していく。これが連合軍の戦い方なのであった。
「それに立ち戻られてはどうでしょうか」
「つまりオーソドックスな戦術で攻めるというわけだな」
「はい。どうやら彼等は我が軍の今までの戦法に対してそれぞれ手を打っております。言い換えるならば総合的には手薄な処置になっております」
「わかった」
劉はそこまで聞いて頷いた。
「それでは検討してみるとしよう。確かに見たところエウロパ軍は色々と手を打っている」
「はい」
「だがそれで総合力においては分散が見られるのも事実。そこを衝いていけばいいな」
「如何でしょうか」
「今も言ったがとりあえずは考えてみたい」
劉は言葉を繰り返した。
「どうするかまではまだわからないとだけ言っておこう。だが」
彼は言葉を続けた。
「敵の虚を衝くのが戦術だ。その中には正攻法というのも当然あるな」
「その通りです」
「この防衛ラインを突破すれば後は何もない」
「オリンポスまで」
「そうだ。どちらにしろこれが最後だ。悔やむことのないようにはしたいな」

「同意です」
そこにいた全ての者がそれに頷いた。彼等もまた参謀である。参謀ならば自らの作戦の失敗により悔やむということを最も嫌う。劉はそれも踏まえてあえて言ったのであった。
「それでは今のところはこれで終わる。次の話は昼食後だ」
「了解」
「レーションだったな、今日の昼食は」
「はい、戦闘配置ですので」
補給を担当する参謀の一人が述べた。
「では早速頂くとしよう。では暫し解散」
「ハッ」
参謀達は散会した。劉は会議室を後にして食堂に向かった。そこでレーションを受け取った。レーションといってもエウロパ軍やサハラ各国のものと比較するとかなり豪勢なものであった。

## 第十六部第一章　最後の防衛線その九

ソーセージにハム、テリーヌ、オイルサーディン、鶏のパテ、マカロニ、パンに乾燥させた野菜と果物が数種。ビスケット、チョコレート、そして茶だ。他にも様々なバリエーションがあるがこの日のメニューはそれであった。数も多いが量も多い。それを食べたら誰でも満腹になりそうなものであった。

それを持って空いているテーブルに座った。するとそこにムオンがやって来た。

「どうも」

「おお」

劉は彼の姿を認めて声をあげた。そしてムオンは劉の向かい側の席に座った。対面する形となった。

「何かレーションを食べるのも久し振りですね」

ムオンは笑いながら言った。

「そういえばそうだな」

劉もそれに頷く。頷きながら缶を開けていく。それぞれ缶に入っているのである。

「最近は戦闘配備でも普通に食べられることが多かったからな」

「はい」

連合軍の艦艇では調理に火は使わない。電気や熱等を使って調理をするのである。二十世紀は戦闘中は火を落としたものであるがそうしたことをする必要はなかった。それを考えるとかなり立派な設備であった。

「中国軍にいた頃はしょっちゅう食べていたのだがね」

「そうだったのですか」

「訓練でな。その合間はいつもレーションだった」

「何故でしょうか」

「考え方だろうな。訓練の間はレーションを食べる。戦闘中を念頭

に置いていたのだろう」
「そうだったのですか」
これは彼の知らないことであった。
「だが連合軍ではそれが違う。それも大きな違いだな」
「はい」
「だがな」
彼はここで顔を変えた。懐かしむ様な顔になった。
「中国軍のレーションは美味かったな」
彼は感慨を込めてこう述べた。
「味付けまでよく考慮されていてな。それで連合軍のレーションにも旧中国軍の補給士官達がよく意見を出したそうだ」
「それは聞いたことがあります」
ムオンは答えた。
「レーションも美味くなくてはいけないと」
「そう」
劉は頷いた。
「美味いものを食べなくては士気にも大きく関わるからな」
「それはありますね」
ムオンもそれには同意した。
「エウロパ軍はよくあんなものを食べて戦っていられるものだと常々不思議です」
「下士官や兵士達の食事だな」
「はい、粗末なソーセージにジャガイモに黒パンですか。それにワインかビール」
「艦内で酒が飲めるだけでもいいという話が出そうではあるがな」
確かにそうした感じの食事である。典型的なドイツの食事だ。
「まあ私は酒はあまり飲みませんが」
「そうなのか」
「それよりも甘いものが。まあそれはいいですね」
「では話を戻そう」

「はい。そして将校達は豪勢な食事ですね」
「彼等はその多くが貴族だからな」
ある意味これは厳密な事実である。貴族と平民の差はエウロパ軍においては絶対のものがあるのだ。
「将校の食費は自分で払うそうですが。かなりのものらしいですね」
「少なくとも我々が食べているものとは比較にはならない」
「はい。まあ階級社会である為だと言ってしまえばそれまでですが」
「それでも彼等は戦意が衰えないな」
「それが当然だと思っているのでしょうね。我が軍なら暴動にまで発展しているところでしょう」
「どの階級の者も同じ場所で同じものを食べる」
劉はここで一言こう述べた。
「それが連合軍だからな」
「はい」
「だからこそ味付けは細心の注意を払ってもらわなくてはな。例えレーションでも美味くあって欲しい」
「そうですね」
「私もかって他の国の軍のレーションを食べたことがあるのだがね」
「如何でしたか」
「やはり国によって色々と違いのあるものだと痛感させられたものだよ」
彼は笑いながらこう言った。
「まあ大抵どの国も量は半端なものではないが」
「それは我がラオスでもそうでした」
「問題はそれが舌に合うかどうかなのだよ」
「合わない国もあったと」
「カナダのレーションはな、よくなかった」
「ああ、カナダですか」
これにはムオンも同意した。
「あの国とフィンランドにはあまり期待されない方がいいですぞ」

「話には聞いていたがあれ程とは思わなかった」
劉は苦笑いを浮かべてこう述べた。連合三百ヶ国あるがその中においてカナダとフィンランドは料理のまずさで定評があるのであった。そうした意味で双璧とさえ呼ばれている。
「一度食べたら忘れられない」
「それはまた」
「カナダという国は実はあまりよくは知らなかったがあれで知るようになった位だ」
「食べ物がまずい国と」
「そうだ。だがわからない」
ここで劉は首を捻った。

## 第十六部第一章　最後の防衛線その十

「あそこまでよい素材があるのにどうしてそれを活かせないのか、両方共」
「それで満足しているからでしょうか」
「かってアメリカが食べ物がまずいと言われていたがな」
それは昔のことである。この時代のアメリカ人は食べ物にも案外五月蝿い。
「今では案外いいですね」
「彼等も舌を成長させたが。カナダとフィンランドはまだか」
「カナダに関してはケベックが分かれたのも大きかったようですね」
「その時にフランス系の者があらかたそっちに行ったのだったな」
「はい」
「そのせいか。あの料理は」
フランス人が味に五月蝿いのはこの時代でも同じである。これはフランス系も変わらない。ケベックは伝統的にフランス的なのである。
「確か今のカナダはイギリス系が元になっていますね。ネィティブと」
「それからかなり混血している筈だが。それでも舌だけは変わらないのか」
「どうしたものでしょう、あれは」
「三百国あればそういう国もあっていいとは思うがな」
劉は考えながら述べた。
「だが食べたくはない。それは本音だ」
「はい」
「それを考えると連合軍に統合したのはよかったかもな。あのレーションだけは駄目だった」
「ディカプリオ部長が聞いたら怒られますよ」

「おっと、そうだった」
悪戯っぽく笑いながらそれに応える。
「情報部長はカナダ出身だったな」
「確かパスタがお好きでしたね、部長は」
「カナダのパスタはな」
ここで劉の顔が曇った。
「論外だ。あんなまずいものはない」
「そんなに酷いんですか」
「貴官はコシのないスパゲティは好きか」
「まさか」
ムオンは笑ってそれを否定した。
「麺類はやはりコシがないと。食べられたものではありません」
「精々マカロニやラザニア位だな、それが許されるのは」
「パスタといっても色々ありますけれどね」
「少なくともスパゲティでは許されることではないな」
「勿論です」
彼は答えた。
「そんなものスパゲティとは呼べません」
「そうだ。それが出て来るのだ」
「嘘みたいな話ですね」
思わずそう言ってしまった。
「そんなもの。野戦食ですら出やしませんよ」
「ところがカナダではそれが常識だ」
劉は述べた。
「何と」
「コシが全くないスパゲティだ。カナダにはそれしかない」
「では他の麺類は」
「皆同じだ。坦々麺もうどんもな」
「物凄いですね、それはまた」
聞いているだけで嫌になる話だと思った。コシのない麺類なぞ。

「どうやらカナダ人はコシというものを知らないらしいのだ」
「それは酷い」
「その他の料理も酷いものだが。情報部長はどういったスパゲティを食べているのかな」
「想像するだけで恐ろしいですね」
「確かルーツはイタリア系だったが」
言うまでもなくパスタ発祥の地である。マルコ＝ポーロが伝えたと言われているが実際にはそれよりも前にもう存在していた。ルネサンス期にもパスタは存在していた。マッケローニ、今で言うマカロニである。だが今のマカロニよりはフェットチーネに近いものであった。
スパゲティは意外と新しい。十九世紀頃に確立されたと言われている。最初はチーズ等をまぐして手で食べていた。ナポリ産が有名であり作曲家であるロッシーニも好んだと言われている。
「これはナポリ産のパスタではないね」
彼がパリのある店でまだ茹でてもいないパスタを食べた時の言葉である。美食家でありその音楽の才能に匹敵する程才能を示した味覚を発揮したエピソードである。
パスタと言えばイタリアであった。連合においても非常にポピュラーな料理であるがその中でもイタリア系の作るものが一番とされているのである。
「ですがカナダのイタリア系ですよ」
「それだ」
劉はそこを指摘した。
「部長の食べるスパゲティ。一度は見てみたいが」
「食べるのが怖いですね」
「カナダ人の味覚だけは認められない」
料理に五月蝿いことでは連合に知られる中国人ならではの言葉であった。
「一度食べてみたらわかる」

「御免被りたいです。レーションで充分ですから」
「そうだな。それにこのレーションは美味い」
「はい」
彼等はシチューを食べながら頷いた。もう暖めてある。口の中にデミグラスソースとトマトの味が拡がる。
「これを食べたらカナダのパスタはもう食べられないな」
「そうなのですか」
「だが、中国の麺は食べられる」
劉はここでニヤリと笑った。
「刀削麺は知っているかな」
「聞いたことはあります」
ムオンは答えた。
「調理がかなり難しいそうですが」
「あれはそうそうできるものではないな」
劉もそれは認めた。
「だからこそ美味いのだがな」
「一度食べてみたいですね」
「今度いい店を紹介しよう」
中華料理の伝説的な一品である。だからこそ食べられる店も限られているが劉は知っているようである。
「本当ですか!?」
「ああ。地球に一つ知っている。そこに行けばいい」
「わかりました。それでは戦いが終わった後に」
「楽しみにしておいてくれ」
食べ物の話をしながらレーションによる食事を終えた。彼等がそれを終えると会議室に戻った。それから作戦会議を再開したのであった。

## 第十六部第一章　最後の防衛線その十一

「さてと」
劉は席に着くとまずは口を開いた。
「食事の前の話では正攻法が出ていたが」
「はい」
それに作戦参謀首席であるバルバラ＝ロスアンヘルスが応えた。セントルシア出身であり階級は大将である。黒い髪と瞳を持つ美人である。美人であるがかなり気の強そうな外見をしていた。
「ムオン中将の提案でしたね」
「うむ」
劉はそれに頷いた。
「ロスアンヘルス大将はこれについてどう思うか」
「悪くはありません」
彼女は高い声で答えた。高くはあるがソプラノというよりはメゾソプラノのそれに近かった。ドラマティック＝ソプラノであると言えた。
「今わかっている限りの敵軍の陣を見ますと」
「うむ」
「正攻法で攻めるのが一番であると思いますが」
「では貴官も正攻法で攻めるのがいいというのだな」
「私はそう思います。そうした意味でムオン中将の案に賛成です」
「そうか」
「ただ、一つ気になることがあります」
「それは何だ」
「敵の陣の後方です」
彼女はそこを指摘してきた。
「後方」
「はい。御覧下さい」

そう言いながら地図をレーザーで指し示した。
「機雷原があります」
「ムッ」
これには劉だけでなく他の参謀達も目を向けた。
見ればその通りであった。そこには機雷原が確かにあった。見てみれば妙なことであった。普通ならば敵の前に撒かれる筈が自軍の後方に撒かれている。それが不思議と言えば不思議であった。
「どういうことだ」
参謀達がそれを見てその目に懐疑の色を浮かべさせた。
「何故後方に」
「見ればオリンポスへの入口にも撒かれているな」
「はい。まずは我が軍の侵攻も防ぐつもりの様です」
「だがそれだけではないな」
「おそらくは。彼等は自らの退路もまた絶っています」
「退路を」
「つまりここで全軍最後の一兵まで戦うつもりの様です」
「今我々の前にいる騎士団の様にか」
「おそらくは」
ロスアンヘルスはやはり高い声で答えた。
「そして何としてもここから先には我等を進ませないつもりの様です」
「最後の決戦か」
「彼等にとっては。攻めるにあたってはこれを忘れてはならないでしょう」
「それだけ敵が必死だということをな」
「はい。私が危惧しているのはそれです」
言葉を続けた。
「敵の戦意と我が軍の損害を。それを踏まえて戦わなければならないかと」
「わかった」

劉はそこまで聞いて頷いた。
「それでは私に考えがある」
「それは」
「ここは数を使おう」
「数を」
「そうだ。我が軍が敵軍より勝っているのはまずは数だな」
「はい」
参謀達は彼の言葉に頷いた。
「その数を使う。そしてもう一つ使うものがある」
「それは」
「攻撃側の利点だ」
彼は言った。
「攻撃側の利点」
「では話すとしよう」
彼はここで己の考えを皆に述べはじめた。参謀達はそれに耳を傾けさせた。

## 第十六部第一章　最後の防衛線その十二

話は暫く続いた。それが終わった時参謀達は何かを得たかの様に大きく頷いたのであった。

「成程」

「それは効果が期待できますね」

「そう思うか」

だが劉はまだ表情を崩してはいなかった。

「それでは今回の作戦に採用していいと思うか」

「はい」

彼等は皆頷いた。

「少なくとも失敗した場合でもリスクはありませんから」

「是非やるべきかと」

「わかった」

リスク、それこそが最も重要であった。戦争というものは失敗した場合のリスクが極めて大きいものである。多くの将兵を死傷させるだけでなく、最悪の場合国さえ滅ぼす。それを考えるとそうそうおいそれとはリスクの高い作戦なぞ考えられないのである。ここに戦争というものの難しさがある。軍人が最も保守的な職業と言われるのもここに大きな理由がある。一度確立された戦術やシステムはリスクがないのである。相当な天才でもない限りそれを変えてまで何かをしようとはしない。若しくは狂気が入っている人物か。人や国をかけているととてもそうした判断は容易には下せないものなのである。

連合は民主主義の勢力であり連合軍は志願制だ。損害はそのまま軍への批判に直結し、結果として志願者が減り軍の衰退に繋がる。これは連合軍が最も恐れることの一つである。連合軍はそのあり方の結果最もリスクを怖れる軍となっているのである。貴族が高貴なる者の義務として志願して来るエウロパ軍やクシャトリア階級がま

だ生きているマウリア軍とはそこが全く違う。階級なぞはなくあくまで職業の一つとしか考えられていないのである。当然サハラ各国の様な宗教的な意識もない。拠って立つものが殆どない言うならば人工的な軍なのである。だからこそリスクが許されない一面が強いのである。

「では決定だな」

「はい」

劉もそれはわかっている。それを踏まえたうえでの作戦である。だからこそ皆頷いた。こうして作戦は決定された。

連合軍は次の作戦を決定した。後はその発動を待つだけである。今は敵の動きを見据えるだけであった。

エウロパ軍の竜騎士団はそのまま留まっていた。連合軍はまだ動きはしなかった。

「まだ動かないのか」

「やはりこちらの意図に気付いておるようですな」

プールにエルフルトが声をかけてきた。

「何を使ってもここを通さないという意図に」

「そうか。それで損害を怖れてか」

「はい、おそらくは」

エルフルトは応えた。

「その結果動かないのかと。ですがそれはそれでよし」

「我等の目的は達成されますからな」

「はい。今順調に陣が築かれています」

エルフルトはまた言った。

「このままいけば明日にでも築かれているでしょう。我々はそれまでここに留まっていましょう」

「そうですな」

「ただ、次の戦いで最後です。もう後は本当にありませんぞ」

「それはこちらも承知しております」

プールはこう言って頷いた。

「だからこそ後ろに機雷を撒いている」
「人口の背水の陣ですな」
「そう。これこそが我が軍の決意の表われ。大艦隊が通過できる道は全て抑えているようですな」
「少なくとも連合軍が通れる様な道は」
ここが重要であった。彼等は首都との連絡の為に小さな道は残しておいたのである。そしてこれが結果として後で彼等を救うことになるのだ。
「全て塞いでいる様です。最早退くことはできません」
「はい」
「ここで敵を退けるか、それとも墓場とするか」
「後は我々次第ということですな」
一日が過ぎた。エウロパ軍は信じ難い程の速さで陣を構築した。そしてそれは騎士団にも伝わった。
「そうか、もう完成したか」
ダムはそれを聞いて感慨を含ませた声で呟いた。
「速いな」
「不安がおありですか」
「突貫作業だからな。将兵に疲れはないかと思ってな」
「残念ですが今の我が軍にはそうしたことを考慮する余裕はないかと」
幕僚の中の一人が言った。
「今の状況は。我が軍にとって決して芳しいものではありませんから」
「そうだな。そうも言ってはいられないか」
「はい。それよりも今は戦うだけです」
その幕僚はまた言った。
「陣ができましたしもうここにいる理由はありません。すぐに合流しましょう」
「わかった。それでは行くか」

「はい」
こうして騎士団は退きはじめた。そして本軍と合流した。こうして彼等は無事その任務を果たしたのであった。

## 第十六部第一章　最後の防衛線その十三

エウロパ軍は陣を整え終わった。それは連合軍からも確認された。退いた騎士団の後ろにあったのは見事なまでに整った敵の陣地であった。

「では行きますか」

「はい」

マクレーンは劉の言葉に頷いた。

「既に作戦は決定しておりますし」

「そうですな。あれで行きましょう」

二人はブレスの艦橋において話をしていた。そのモニターにはエウロパ軍は映っていた。

「さて、今度で最後でしょうが」

「はい」

今度は劉が応えた。

「エウロパ軍は何処まで戦うでしょうな」

「おそらく最後の一兵までかと」

「左様ですか」

「ええ。その為のあの機雷でしょう」

ここでモニターが切り替わった。敵の陣をコンピューターで映すものとなった。三次元で映し出されている。

「あれこそは彼等の決意の表われ」

「そして我が軍を通すまいとする意志、といったところですか」

「何があっても退きはしないでしょうな。彼等の祖国の為に」

「エウロパというのは実に幸せな国ですな」

「といいますと」９０

劉はマクレーンのその言葉に顔を向けさせた。

「いえ、これは皮肉ではなくね」

マクレーンはまずこう断ったうえで述べた。

「ここまで将兵に必死に戦ってもらう国というのは。そうはないでしょうな」
「歴史を見ても」
「第一次世界大戦やその頃は凄かったそうですがね」
「ナショナリズムが高揚していた時代でしたからな」
劉はいささかクールな物腰でこう述べた。
「しかも教育がそうでしたし」
「教育が」
「それは二十一世紀までの司令の御国も我が国も同じだったと思いますが」
「言われてみれば」
マクレーンはその言葉にふと気付いた。
「今では何か地域意識の様になっていますな、連合においては」
「連合というよりはそれぞれの国への帰属意識が強いですから」
「それを考えると我々にもあるのでしょうかね」
「エウロパ程強くはないですがあるのは事実かと」
妙と言えば妙な言葉である。
「ふむ」
「まあ程度の問題でありそれもエウロパのものとは比較になりませんが」
「話をそのエウロパに戻しますが」
「はい」
「彼等はそこまで国を愛しているのでしょうな、やはり」
「でしょうな」
劉はそれに頷いた。
「そして今まで戦いながらでありますがエウロパを見てきましたが」
「はい」
「よい国です。愛される資格は充分にあります」
「戦うまでは貴族が特権を振りかざし自分達だけ優雅で贅沢な暮らしを楽しんでいると思っていたのですが」

「その貴族達にしろ。立派なものです」
「まず率先して戦場に赴くだけでなく」
「平民達を守ろうとするのですから。そこは認めなくてはなりませんな」
「全くです」
これはマクレーンも同意であった。戦いの最中こうしたことがあった。
連合軍がある星系を占拠した時である。エウロパ軍は敗走し、地上に残る軍も降伏せざるを得なくなった。それを受けて連合軍はその星系に地上部隊を降下させ各地を占拠しにかかった。だがそんな彼等を見てエウロパの者達は怯えた。そしてある貴族の屋敷に駆け込んだのである。
それを見て連合軍の指揮官であるケミ＝カタヤイネン准将は自ら兵を率いてその貴族の屋敷に向かった。ちなみに彼はフィンランド出身である。
このフィンランドは一応はアジア系とされている。だがその髪も目も肌の色も白人のものであった。これは混血が進んだ為であうが最早殆ど白人と言ってもよい程であった。これは今ではエウロパになり別れ別れという形になった欧州における同じアジア系の国家であるハンガリーと同じである。もっともかつての東欧はフン族の移動やモンゴル帝国の侵攻等でアジア系の血が濃いのであるが。ロシアはその最たるものであった。
なおこのカタヤイネン准将の髪も目も黒である。顔立ちは白人のものであるが髪と目はあまりそうとは言い難いものであった。これは彼の曾祖母の一人がベトナム出身だったからである。彼の髪と目はそこからきているのである。
逞しい長身を誇っている。まるでプロレスラーの様な体格だ。ここから彼がかなり強靭な肉体の持ち主であることがわかる。だからこそ地上部隊にいるのだろう。
その彼が兵を率いて屋敷にやって来たのである。屋敷に逃げ込ん

だ市民達は恐れおののいた。皆殺しにされるのではないかと危惧したのである。

## 第十六部第一章　最後の防衛線その十四

だがカタヤイネンにはそんなつもりは毛頭もなかった。一般市民、武器を持たない者に対しては決して危害を加えるなと軍規にも明記されており八条がそれを徹底させていたからである。それを破れば死だ。だからこそ彼はその様なことをする気はなかった。

彼はあくまで話し合いに行くつもりだったのだ。彼とて市民に危害を加えるつもりはない。市民達には今まで通りの生活を保障し、日常生活に戻ってもらうつもりだったのである。だがここで問題が生じた。

「市民達に危害を加えることは許さんぞ！」

屋敷から発砲と共に声がした。その発砲では幸い誰も怪我はなかった。だがこれに連合軍の将兵達は驚いた。

「何だ、一体」

慌てて屋敷の方を見る。見ればそこには一人の老人が古風なライフルを持って窓から身構えていたのである。

「あれは誰だ」

カタヤイネンもその老人が誰か尋ねた。

「確か」

将校の一人がそれに応える。電子手帳を開きそこから調べながら。

「メルトラ子爵ですね。このポルトガルでは名士だそうです」

「貴族だったか」

彼はそれを聞いて呟いた。

「貴族ならば何故ここにいるのか」

「彼の屋敷だからではないですか？」

別の将校がそれに応えた。

「家を守る為に」

「逃げなかったのか」

「プライドを守りたいのでしょう、お貴族様の」

誰かがシニカルに言った。
「屋敷を枕に討ち死にしようとでも考えているのでしょうね。御苦労なことです」
「滅びの美学というやつかな。貴族ならば貴族らしく尻尾を巻いて逃げればいいというのに」
「馬鹿を言え！」
それに対してまた銃声と声が帰ってきた。
「そんな恥知らずな真似ができるか！」
「まただ」
「やけに耳のいい老人だな」
「当然のこと。今わしは全神経を集中させておるのだ」
メルトラ子爵は言った。
「市民達を守る為にな。ここはわし一人でも守るぞ」
「旦那様」
そこに彼と同じ位の年齢の執事がやって来た。髪は彼と同じく真っ白であった。
「何じゃ」
「あまりその様な御無体は。御身体に障りますぞ」
「そんなことはどうでもよい！」
彼は執事を怒鳴りつけた。歳のわりにやけにハリのいい声だ。
「それよりもどうしてここにおるのか！下がっておれと言った筈だ！」
「そういうわけにはいきません」
執事は困った顔で応えた。
「心臓がお悪いのに。しかもお一人で」
「武器を持っている者が戦うのは当然の筈だ」
「ならば私共も」
「そなた達はよいのだ」
子爵は憮然として述べた。
「戦い、そして市民を守るのが貴族の務めだ。わしはその務めを今

果たしておるだけだ」
「ですが」
「いいから下がっておれ」
彼はまた言った。
「連合の田舎者共なぞわし一人で充分じゃ。その間に市民達と共に逃げよ」
「そうは言われましても」
「早く行けと言っておるだろう」
「ですが」
そのやり取りはカタヤイネン達からも見えていた。彼等はそれを見て最初は呆気にとられていたがすぐに我に返った。その後すぐにカタヤイネンが言った。
「待ってくれ」
子爵に対して声をかけた。少したどたどしいラテン語であった。

## 第十六部第一章　最後の防衛線その十五

「何じゃ」
「メルトラ子爵ですな」
「如何にも」
子爵は答えた。
「我々は連合軍です」
「そんなことはもう知っておる」
彼は述べた。
「ここの市民達を皆殺しに来たのだろう。それは許さんぞ」
強い声で言いながらまたライフルを構えてきた。
「わし一人でも。卿等の相手をしてやる」
「待って下さい、我々は市民達に対して危害を加えるつもりはありません」
「嘘を申せ」
「嘘だと言われるのなら今からそちらに向かいましょう」
「何だと」
「一人で。それなら信じて頂けますか」
「待て」
だが子爵はそれを制止した。
「一人でなくともよい。何人来てもよい」
「よいのですか？」
「ただし武器はなしでな。わしも会う時はライフルを置こう」
彼は言った。
「それでよいな。では入れ」
「よいのですか、旦那様」
執事は困った顔で主に尋ねてきた。
「その様なことをされては。相手は連合軍ですぞ」
「あそこまで言われては招くしかあるまい」

彼はそんな執事に対して言った。
「わしもエウロパの貴族じゃ。誠意を見せられればそれに応えなければならん」
「ですが」
「全く。ですがという言葉が好きじゃのう」
いい加減癇癪を起こしてきた。
「何十年わしに仕えてもそれは変わりはせんな」
「はあ」
「よい。そなたが心配することではない」
「旦那様に何かあれば」
「何、その時はその時よ」
彼はニヤリと笑ってこう述べた。
「奴等の評判が落ちるだけだ。連合軍全体のな。あの男がそれを考えない程の馬鹿者でなければあそこまで言えばどうするべきかわかる筈じゃ」
彼はこう計算もしていたのだ。
「では行くぞ。応接間に彼等を案内せよ」
「畏まりました」
「コーヒーか紅茶を用意しておくように。よいな」
「はい」
こうしてカタヤイネンとメルトラ子爵の会見がはじまった。まずは屋敷の中に案内された。
屋敷の中は広いがかなり古風な造りであった。宮殿と言うには少し小さいが見事な建物であった。黄色を基調とし、様々な彫刻品や芸術品で飾られている。カタヤイネン達はそこを案内されてきたのである。
「ようこそ、我が家へ」
彼等をカタヤイネンが出迎えた。そして彼等を応接室に招き入れた。
「では話をしようか。まあ座ってくれ」

「はい」
カタヤイネン達はそれに頷いた。そしてそれぞれ席に着いたのであった。こうして話し合いがはじまった。穏やかではあるが殺気立ったものも内包している、そうした場での話し合いとなったのである。
「市民達のことだが」
「はい」
まず子爵が口を開いた。カタヤイネンがそれに応えた。
「まず言っておくが危害を加えることは断じて許さん」
「わかっております」
「では何故ここに来たのか。兵を連れて」
「これは失敬」
カタヤイネンはまずそれを謝罪した。
「まだ武装している者達がいると思いまして」
「今ここにはそんな者はおりませんよ」
子爵は一言で返した。

## 第十六部第一章　最後の防衛線その十六

「皆戦場に行っておるわ。残ったのはわしだけじゃ」
「はあ」
「だからこそ市民達を匿ったのじゃ。平民と言ってもよいな」
「彼等を守る為ですか」
「他に何があるというのじゃ」
逆にこう問うてきた。
「今この辺りにいる者達を守れるのはわししかおらん。だから匿ったのじゃ」
「そうだったのですか」
「言っておくがわしを甘くみるなよ」
意気はかなり盛んであった。
「こう見えてもオリンピックの射撃にも出たことがあるのじゃ。軍にいた頃は射撃では誰にも負けたことはない」
「はあ」
「だからこそじゃ。卿等がどれだけ来ようとも怖れはしなかったのじゃ。何人いても相手をするつもりじゃった」
また意気軒昂なことだ、カタヤイネンをはじめとする連合軍の者達はそれを聞いてこう思ったがそれは口には出さなかった。
「ここでもじゃ。素手でも負けはせんぞ」
「いえ、我々は子爵と戦闘をしにここに来たわけではありませんので」
「うむ」
これを聞いて暫し落ち着いた。
「話し合いに来たのじゃったな」
「そうです」
カタヤイネンは頷いた。
「それで我々の考えですが」

「うむ」
「これまで通りの生活を送って頂きたいのですが」
「嘘を申せ」
子爵はその言葉を即座に否定した。
「安心させた後で徴用したりするのじゃろう。騙されぬぞ」
「それは絶対にしません」
だがカタヤイネンもそれを否定した。
「それが今までの占領地での我が軍を御覧になられればおわかりだと思いますが」
「何かしておるのか」
「我々は市民の安全と経済活動を可能な限り保障しております」
カタヤイネンの隣にいた参謀の一人が述べた。
「可能な限りであろう」
子爵はシニカルに応じた。
「便利なものじゃな、言葉というのは」
「我が軍を侮辱されるというのですか」
「まあ待て」
カタヤイネンは激昂しかけたその参謀を制した。
「ですが」
「落ち着け。いいな」
「・・・・・・わかりました」
彼は憮然としながらもそれに答えた。カタヤイネンはそれを見届けた後で話に戻った。
「今まで我が軍は一般市民を攻撃対象としたことはありませんが」
「そうなのか」
「それは保障します。我々が戦っているのはあくまでエウロパ軍です。エウロパの市民ではありません」
「ふむ」
「若し彼等に危害を加えるようなことがあれば」
彼は言った。

「私が責任を取りましょう」
「覚悟はよいのだな」
「無論」
「よかろう。その時はわしが卿をライフルで葬ってくれるわ」
老貴族の目が鋭く光った。
「それでよいな」
「はい」
こうして一般市民は子爵の屋敷から出て元の生活に戻った。連合軍は約束通り彼等に対して危害を一切加えなかった。こうして約束は守られた。連合軍の規律を現わすと共に子爵の気迫と信念を現わす話であった。
この話は連合軍にとってもエウロパ貴族にとっても美談となっていた。とりわけ貴族達にとって子爵は鑑とさえ讃えられるまでになっていた。
「あの話は見事でした」
劉も感嘆の言葉を述べた。
「エウロパの貴族達は単に特権の上で胡坐をかいているわけではありません」
「そうですな」
マクレーンもそれに同意であった。
「彼等は我々が今まで思っていた様な者達ではないのは事実です」
「はい」
「その為苦労もしていますが」
「ですな」
ここでは苦笑になった。
「思ったより手強い」
「粘り強いですし」
連合軍にとってエウロパの貴族達の粘り強さは最早定評になっていた。そのあまりものしぶとさの為にここまで戦いが長引いているのである。それも道理であった。

「しかしそれもいよいよ最後」
「準備は宜しいですな、総長」
「はい、司令」
彼等は頷き合った。そしてクロノスにおける最後の戦いが今幕を開けたのであった。

# 第十六部第二章　新たな英雄その一

新たな英雄

クロノスで連合軍とエウロパ軍は遂に最後の戦いに入ろうとしていた。そしてニョルズでは既に最後の戦いに入っていた。

「怯むな！」

両軍からそれぞれの言葉で叱咤が飛ぶ。

「これで最後だ！武勲を挙げるのはここしかないのだぞ！」

「倒せ！敵を倒せ！」

とりわけ義勇軍の声は大きかった。

「そしてオリンポスに入るのだ！一番乗りは我等ぞ！」

彼らは一本の巨大な矢となっていた。そして突き進む。これに対してエウロパ軍も一本の矢となっていた。両者は互いにぶつかり合い激しい衝突を繰り広げていたのであった。

エウロパ軍の先頭にいるのはタンホイザーの軍であった。彼は敵の大軍と大規模な攻勢に臆することなく果敢に攻撃を浴びせていた。乗艦であるグングニルは敵の前にその姿を晒していた。

「司令、危険です」

幕僚達はそれを止めようとする。

「もし何かあれば」

「心配は無用だ」

だが彼は退こうとはしなかった。

「この艦はオーディンの槍だ。オーディンが自分の槍を折ると思うか」

「ですが」

「何、ヴァルハラに行くならばそれでよし」

彼はそれでも下がらなかった。

「いずれは行く運命だ。後悔はない」

「左様ですか。それでは」

「うむ、行くぞ」
タンホイザーはさらに前に突っ込んだ。彼の軍もそれに続く。
エルザもまたその中にいた。彼女はザーヒダンと激しい一騎撃ちを繰り広げながら戦場を駆けていた。
「チッ、何て女だ」
エルザのビームを左にかわした。そして忌々しげに言う。
「普通のパイロットなら今ので天国行きだったな、危ない危ない」
身体から冷や汗が出るのがわかった。彼がここまで汗をかいたのははじめてのことであった。
「俺じゃなきゃ相手できねえってのは本当だったみたいだな。厄介な仕事を押し付けられたもんだ」
そう言いながらも果敢にエルザとの戦いを繰り広げていた。両者は一歩も引くところがなかった。
エウロパ軍は数で劣りながらも義勇軍と五分に渡り合っていた。それは彼等の闘志やタンホイザーの卓越した戦術指揮だけではなかった。そこにはもう一人の名将がいた。
「進め！」
エウロパ軍の先陣にタンホイザーとは別にもう一人の男がいた。
「全軍ここが死に場所と心得よ！生きるということはない！」
彼は自身の乗艦であるネルソンの艦橋においてそう言っていた。
「だがそれはこの今の命だけのことだ！卿等の名は人類の歴史に永遠に残ることになる！」
「人類の歴史に！？」
「そうだ！」
彼の声が強くなった。
「卿等はエウロパを救った英雄としてその名を歴史に永遠に刻まれることになるのだ！今がその時である！」
「今が」
「戦え、エウロパの戦士達よ！」
言葉が続いた。

「そして敵を退けるのだ！今がその時だ！」
「おおっ！」
軍の士気があがった。そして戦いに向かう。両軍の戦いはさらに激しさを増していった。
モンサルヴァートもまた戦場にいた。だが彼はこの時は後方で全体の指揮にあたっていたのであった。

## 第十六部第二章　新たな英雄その二

「前線に出てみたいがな」
「それは止められた方がいいです」
だがそれはプロコフィエフによって制止された。
「戦いは前線だけではありませんから。ここで全体を見据えられるのが宜しいかと」
「慎重だな、参謀総長は」
「今は慎重にならなければならない時ですし」
彼女は落ち着いた声で答えた。
「あえて気を鎮めております」
「そうか」
「それに前線は今は充分戦っております」
その通りであった。何とか持ち堪えているという状況だが。
「タンホイザー元帥か」
「いえ、彼だけではありません」
「というと」
「ギルフォード大将とその軍もまた奮戦しております」
「ギルフォード大将、彼か」
「はい」
プロコフィエフは頷いた。先に艦橋に姿を現わしていた人物である。
「彼の軍が奮戦しております。それにより我が軍は戦線を保っております」
「そうか。これは計算外だな」
「ですね」
彼女も同意であった。
「まさかここで新たな将が出て来るとは」
「そもそもギルフォード大将とは何者か」

彼は問うてきた。
「軍では聞かない名前だったが」
「イギリスの侯爵家の嫡男だそうです」
「イギリスのか」
「はい。マグナ＝カルタの頃にまで、いえ十字軍にまで遡ることのできる名家だということですが」
「十字軍からか」
それだけで相当古い家の者であることがわかる。古い家の多いイギリス貴族の中でもとりわけ古い家であると言えた。
「イギリスにおいてはマールボロ家やフッド家と並ぶ古い家だそうです」
「フッド家、あああの家か」
それはモンサルヴァートも知っていた。代々海軍の提督を出した家である。第二次世界大戦の頃にはその名を冠した戦艦まであった程であった。
「それまではイギリスでごく普通の貴族としての生活を楽しんでいたそうですがこの戦いに自ら志願して軍に入ったとのことです」
「大将でか」
「いえ、最初は中佐だったそうです」
彼女は答えた。
「中佐だったのか」
「巡洋艦の艦長だったそうです。ですが最初の戦いから武勲を挙げ続け」
「大将にまで至ったというわけだな」
「はい」
プロコフィエフは頷いた。
「見事なものだな。これだけ劣勢な戦局において武勲を挙げ続けるとは」
「一回の戦いで五隻の敵艦を撃破したことすらあるそうです」
「巡洋艦でか」

「どうやら。そして艦隊司令にまで至ったということです」
「見事なものだ。天才と言うべきか」
「タンホイザー元帥と同じく」
モンサルヴァートはここでタンホイザーの名を出す。最早彼はエウロパ軍にとっての救世主の一人となっていた。
「我が軍はまだオーディンには見放されてはいないようだな」
「それはどうでしょうか」
だが彼女はここで懐疑的な言葉を口にした。
「何かあるというのか」
「タンホイザー元帥はともかくギルフォード大将には」
ここで声に暗いものが宿った。
「野心があります」
「野心」
「はい。近頃急に目覚めたようですが。本人はまだそれに気付いていない可能性がありますが」
「野心といってもたかが知れているだろう」
だがモンサルヴァートはそれを意に介そうとはしなかった。
「エウロパがある限りはな。どう上がっても総統までだ。先がはっきりしている野心は取るに足らない」
「でしょうか」
「心配性だな、参謀総長は」
モンサルヴァートはこう言って笑った。

## 第十六部第二章　新たな英雄その三

「それに今はこの戦いに負けぬことだ。全てはこれからだな」
「それはそうですが」
「彼が総統になったところでエウロパが滅ぶわけでもない。それは杞憂だ」
「杞憂でしょうか」
「そんな先のことは考えても仕方のないことだ。問題は今だ」
「それはわかっております」
彼女は述べた。
「では戦場に戻りますか」
「うむ」
彼等はその心を戦場に戻した。戦いは互角のまま進んでいた。
タンホイザー、そしてギルフォードは果敢な攻撃を続ける。これに対して義勇軍も負けずに激しい攻撃を浴びせていた。両軍は互いのダメージをものともせずぶつかり合っていた。
「これが戦いというものだな」
マシュハドは前線の激しい応酬を見て楽しそうに笑っていた。
「こうでなくては。ロスタムを前に出せ」
「最前線にですか」
「そうだ、この艦はそうおいそれとは沈まん。ならば派手にやるぞ」
「よいのですね」
艦長であるスキクダ准将が問うてきた。痩せた大男であった。
「よい。何の為のこの主砲だ」
「使う為です」
スキクダは答えた。
「そう、何の為に使うのか」
「敵を倒す為です」
「敵は」

マシュハドの問いは続く。
「エウロパの貴族達」
「彼等は何だ」
「仇敵であります」
スキクダの声も次第に強くなる。
「仇敵はどうするべきか」
「粉砕するのみ！」
スキクダだけでなく他の者も応えはじめた。
「ではどうするべきかわかっておろう」
「ハッ！前進！」
スキクダは艦に指示を下した。
「本艦も最前線に出る！よいな！」
「了解！」
それを受けて艦橋を歓声が支配する。こうしてロスタムも最前線に姿を現わした。
「敵の総司令部が出て来ました！」
「ロスタムか！」
ギルフォードはその報告を受けて部下に問うた。
「はい。それに続いて敵の巨大戦艦が次々に姿を現わしております」
「その数は」
「二十隻を優に越えます」
部下の報告は続いた。
「二十をか」
「どうされますか」
「それはもう言うまでもない」
彼は時間を全く置かずにこう述べた。
「倒すのみ。戦艦を前に出せ」
「はい」
「確かあの巨大戦艦はこの戦いで一隻も沈んではいないのだったな」
「その通りです」

部下の一人がそれに答えた。
「残念なことに。我が軍は未だに彼等に対して有効な手段が打てずにおります」
「ここで一つ言っておく」
ギルフォードは項垂れる部下達に対して言った。
「何をでしょうか」
「沈まぬ艦なぞこの世にはないのだ」
「ですが」
「かつて我が英国の誇る戦艦があった」
プリンス＝オブ＝ウェールズのことであった。第二次世界大戦初期に就航したキング＝ジョージ五世級戦艦の二番艦であった。この当時七つの海を支配していた大英帝国の誇りとも言える巨大戦艦であった。
だがそれはマレー沖において空しく撃沈されてしまった。日本軍の爆撃機の攻撃により沈められてしまったのである。ロイヤル＝ネービーの象徴は二流国とされ、侮られていた日本海軍によりあえなく撃沈されてしまったのである。これと同時に大英帝国の誇りも沈んだ。この戦いの後で英国の失墜は決定的なものとなり七つの海の支配権も失くしてしまった。そして欧州の中の一国の地位に甘んじるまでになったのである。それが今のイギリスであった。
「だがそれは沈んでしまった」
「はい」
部下達は彼の言葉に頷く。
「そしてその巨艦を沈めた国の巨大な戦艦もまた沈んだ」
大和である。日本海軍がその持てる力を結集して作り上げた巨大戦艦である。恐るべき巨砲と要塞の如き装備を持った巨大な戦艦であった。その大海原を行く姿はまるで幻想の世界にあるように美しく、そして威厳があった。この世にある艦の中で最も雄々しく、そして美しい姿を持っていたのである。
だがその大和も沈んだ。沖縄へ特攻し、アメリカ軍の艦載機によ

って葬られた。最後の最後まで戦いながらも散ったのであった。
「これでわかるだろう。沈めることのできない艦なぞ存在しない」
「ではあの巨大戦艦を」
「そうだ。戦艦の主砲で集中砲火を加えよ」
彼は指示を出した。

## 第十六部第二章　新たな英雄その四

「よいな。それで倒す」
「わかりました。それでは」
「あの巨大戦艦は彼等の象徴だ。ならば」
言葉を続けた。
「それを沈めることができれば戦いの流れも変わる。よいな」
「了解」
それを受けて戦艦達が集まる。その中心にはネルソンがあった。
「全艦攻撃準備完了」
報告が入る。
「何時でも射撃可能です」
「よし、照準合わせ！」
また指示が下った。
「一撃で決める。よいな！」
「ハッ！」
「撃て！」
「撃て！」
命令が復唱されｂニれ！」
彼は咄嗟に指示を下した。
「敵の攻撃が来るぞ！かわせ！」
「敵のですか！？」
操舵手がそれを受けて面舵をとる。ロスタとれ！」
彼は咄嗟に指示を下した。
「敵の攻撃が来るぞ！かわせ！」
「敵のですか！？」
操舵手がそれを受けて面舵をとる。ロスタムの水雷長が咄嗟に彼に問う。
「そうだ！モニターを見ろ！」

スキクダは叫んだ。
「敵が集結している！この艦に艦首を向けてな！」
「確かに」
「これが敵の攻撃でなくて何か！だから面舵をとったのだ！」
「了解しました」
それまでロスタムがあった場所を光の壁が通過した。あと一瞬動きが遅れていればどうなっていたかわからないところであった。
「見事だ」
マシュハドはスキクダに対して声をかけた。
「今のを受けては流石に危なかったな」
「何、大したことはありませんよ」
スキクダは不敵な笑みを浮かべて言葉を返した。
「これも実戦の勘ですから」
「勘か」
「はい。まあそれがなければ今頃は大変なことになっていたでしょうがね」
「撃沈されていたな、おそらく」
「はい」
スキクダもそれを認めた。
「おそらくは。危ないところでした」
「うむ」
彼等は巨大戦艦に対して連合軍の多くの者の様に幻想を抱いてはいなかった。沈まない艦なぞない、それは彼等もはっきりと認識していた。ここが実戦に乏しく、自分達の兵器や装備に頼りきっているところのある連合軍との大きな違いであった。
「この艦が撃沈されたら流石に洒落にはなりませんからね」
「そうだな。それだけで戦局が変わる」
「はい。そして敵はどうやら巨大戦艦に攻撃を集中させようとしているようですが」
「ならば対処の方法がある。各艦に伝えよ」

彼は指示を出した。
「それぞれ集結している戦艦に対して攻撃を集中させよとな。敵が集まっているのなら好都合だ」
「了解」
連絡将校の一人がそれに応えた。
「そして巨砲での一斉射撃を強化する。これで敵を薙ぎ払っていくぞ」
「巨砲ですか」
「そうだ。ここで派手に攻撃を仕掛ける」
彼はまた言った。
「よいな。そして敵が乱れたならば」
「一気に勝負をつける」
「今こそその時だ。わかったな」
「了解」
こうして義勇軍は方針を定めた。そしてまずはエウロパ軍の戦艦達に狙いを定めてきた。
「気付かれたな」
ギルフォードはその巨大戦艦の動きを見て呟いた。
「といいますと」
「決まっている。彼等は我々が巨大戦艦を潰そうと考えていることに気付いた」
彼はモニターに映る数隻の巨大戦艦を見据えながら言った。
「早いな。流石に実戦慣れしている」
「如何致しましょう」
「何、それならばそれで対処の仕方がある」
彼は言った。
「散陣を執れ。よいな」
「散陣ですか」
「そうだ。そして各艦ごとの判断に任せて攻撃を仕掛ける」
「兵力を分散させるのですか」

「違う」
彼はそれは否定した。
「あくまで攻撃は集中させる。そして敵を攻撃する」
「上手くいくでしょうか」
「いかなければここで終わりだ。だがそうはならない」
その声が強くなった。
「よいか！」
彼は叫んだ。
「各艦の艦長達に告ぐ！今より散陣に移る！」
「ムッ！」
それに艦長達が顔を向けた。
「そして各艦ごとに攻撃を仕掛けよ！だが何処に攻撃するべきか卿等は知っている筈だ！」
ここで彼等の心を煽った。
「それを踏まえて動くのだ！さもなければ敗北しかない！」
「敗北」
その言葉に皆心を戦慄させた。
「わかっただろう！一つの判断ミスが国を滅ぼすことになるのだ！」
今度は煽ってきた。
「それを踏まえて動け！よいな！」
「ハッ！」
こうしてギルフォード配下の艦隊の動きは決定した。彼等はそれぞれ散陣を執り敵の集中攻撃を回避に移った。その動きは的確で理に適ったものであった。そして同時に敵に攻撃を加える。その攻撃もまた的確なものであり義勇軍のそれに負けてはいなかった。

## 第十六部第二章　新たな英雄その五

「また思い切った戦術を執っているな」
共に前線で指揮を執るタンホイザーはそれを見て呟いた。
「ギルフォード大将もまた天才的だな」
「確かこの戦争まで軍歴はなかった筈ですが」
参謀の一人が述べた。
「その様だな」
「それであそこまで判断を下せるとは。恐ろしいことです」
「それが才能というものだ」
彼は答えた。
「才能ですか」
「そうだ。天から与えられたと言うべきかな」
「天才というものでしょうか」
「簡単に言うとそうなる」
これは彼もまた天才であるが故に言えることであった。天才を知り得ることができるのは天才のみである。この時彼はその天才を以ってギルフォードを理解していた。
「そして彼の天才は軍事用兵だけではないな」
「といいますと」
「あのカリスマ性と弁もだ」
彼は言った。
「それもですか」
「そうだ。おそらく政治家としての才能もあるだろうな」
「多才ですな」
「そうした人間もまた時には出る」
その声は落ち着いたものであった。
「国が危機に陥った時にな。彼がそれかも知れない」
「だとすれば登場が少し遅かったかと」

「私は政治のことはあまりわからないが」
タンホイザーは部下のその言葉にはまずこう断ったうえで述べた。
「まだ間に合うのではないか」
「そうでしょうか」
「この戦いの後もあるからな」
彼は述べた。
「その時に彼がどう動くかだ。それによりエウロパは大きく変わるかも知れない」
「エウロパ自体が」
「もっともこの戦いで生き残らなければそうした話もないがね」
言葉が少し突き放したものとなった。
「とにかく彼は今後のエウロパに大きく関係する人物かも知れないのだ」
「救世主でしょうか」
「そうともばかり限らない」
しかしタンホイザーはここでは薔薇色の答えは出さなかった。
「救世主と魔王は紙一重だからな」
「そうなのですか」
これは歴史が証明していることの一つである。アドルフ＝ヒトラーは敗戦と世界恐慌、そしてベルサイユ条約による屈辱的な立場に喘いでいたドイツ国民にとって救世主であったのだ。自信を喪失していた彼等の優秀性を保障し、不況と失業を解決し、そしてベルサイユ条約を破棄して国民の誇りを取り戻した。彼の手により確かにドイツは救われたのである。一度は。
だが度重なる戦争によりそのドイツはまた崩壊した。彼はドイツを救ったが同時にドイツを滅ぼしもしたのである。
「彼は果たして救世主か魔王か」
「それはまだわからない。それを判断するのは」
「判断するのは」
「今の我々には不可能なことだ」

「わかりました」
部下達は頷いた。そして戦いに戻った。戦いは今タンホイザー、ギルフォードが率いるエウロパ軍先陣と義勇軍の主力から義勇軍全軍に移ろうとしていた。彼等は遂にその数を頼みにしようとしてきたのであった。
「司令」
これはワフラの策であった。
「ここで勝負をつけましょう」
彼はマシュハドに対してこう言ってきた。
「全面攻撃か」
「はい」
彼は頷いた。
「このまま前面だけの兵力で戦っていても埒があきません」
「ふむ」
マシュハドはそれを聞いて思索に入った。
「全兵力を使ってか」
「如何でしょうか」
「確かに今のままでは無駄な消耗で出かねない」
これはマシュハドも同じ意見であった。
「それよりは兵力差を利用して一気に勝負をつけるべきか」
「どうでしょうか。私はそう考えるのですが」
「先に言ったな」
彼はここでワフラに声をかけてきた。
「この戦いのことは貴官に任せると」
「ええ」
「ならばそれでいく。よいな」
「有り難うございます」
「何、礼はいい」
だがここでマシュハドは豪快に笑って言った。
「勝てばいいのだからな」

「はい」
こうして義勇軍は一気に勝負に出ることとなった。それまで後方にあった艦隊までもが大きく前に出て来た。そして上下左右からエウロパ軍を包みにかかってきた。

## 第十六部第二章　新たな英雄その六

それと共に艦艇の攻撃と艦載機の数も増した。これがエウロパ軍にとってどういうことか、最早言うまでもなかった。
「やっと我々にも出番が回ってきたな」
戦艦ムワッヒドの艦橋でグータルズは副官に対して声をかけた。
「ようやくといったところですね」
「ああ。この戦いでは出番はないかとさえ思っていた」
そして彼はこう述べた。
「前線でだけ戦いがあったからな」
「車懸かりから陣を一変させましたから」
「あれは動かし難いところがあるからな」
先程敷かれていた車懸かりの陣について言及する。
「あれよりは今の陣の方が自由に戦い易いか」
「敵が正面に常にいますから」
「ではこのまま突っ込むぞ」
「はい」
副官は頷いた。
「突撃命令が出ております。そうすべきです」
「では本艦はこれより敵陣に突入する」
彼は言った。
「勝利を我等の手に掴む為にな」
「ハッ」
グータルズは艦を突撃させた。それは他の艦も同じであった。
空母も艦載機を一斉に発進させる。その中には義勇軍のもう一人のエースパイロットラバトもいた。
「ザーヒダンさんは今どうしていますか」
彼は出撃する時整備士官の一人に尋ねた。
「何でもエウロパ軍のエースと一騎撃ちの最中らしいぞ」

その整備士官は彼にこう答えた。
「そうですか」
「相手はあのエリザベート＝デア＝アルプらしい。特別に相手をしに向かったらしい」
「妖精ですか」
彼もまたエルザをこの仇名で呼んでいた。
「確かにあの女を相手にできるのはザーヒダンさんしかいませんね」
「御前はどうなんだ」
「私ですか」
彼はここでスッと笑った。
「私には無理でしょう。やはりここはザーヒダンさんしか」
「またえらく謙虚だな」
「謙虚？少し違います」
彼はそれを否定した。
「私は自分を知っているだけですよ。それでは」
「ああ。行って来い」
「はい」
こうして彼も戦場にその姿を現わした。その時戦場は襲い掛かる義勇軍の黒い影で埋め尽くされていた。
「さてと」
ラバトは自軍は見ていなかった。敵を見据えていた。
「行きますか。各中隊へ」
命令を出す。
「それぞれ編隊を崩さずにまずは敵の艦載機を狙います。それでいいですね」
「了解」
指揮下にある全ての中隊のリーダー達から返事が返る。
「まずはいつも通りミサイルで。そして後は」
「ドッグファイトですね。いつも通り」
「はい。基本はわかっていますね」

「勿論」
彼等はまた答えた。
「小隊ごとで一機を狙う」
「はい」
「いつも通りですね。わかりました」
「では全機照準セット」
ラバトの言葉が続く。
「一気にいきますよ」
ラバトとその部隊もまた黒い影を戦場に見せていた。彼等の黒い影は今エウロパの貴族達を覆おうとしていた。
「ここで全軍を投入してきたか」
その動きはモンサルヴァートからも確認されていた。
「前線はかなり劣勢に追い込まれていますが」
「わかっている」
彼はプロコフィエフの言葉に頷いた。
「すぐに動くぞ。後方の部隊を全て投入する」
「どうされるのですか」
「私が率いる。そして敵の上方に向かう」
「上に」
「そうだ。そしてそこで敵を挟み撃ちにする」
彼の判断は早かった。
「それでこの戦局を打開する。どう思うか」
「それで問題はないと思います」
プロコフィエフの答えはこうであった。
「今は。迷っている時間もありません。一気に動くのが吉でしょう」
「よし。では行くぞ」
「はい」
「そして敵を食い止める。ここが正念場だ」
モンサルヴァートは後方の兵を全て率いてうごきはじめた。その中にはゴドゥノフ達歴戦の将達もいた。

「遅れる奴は置いておくぞ！」
そのゴドゥノフが部下達に叱咤を飛ばしていた。
「よいな！今ここで遅れるということがどういうことか考えよ！」
彼の叱咤は一つだけではなかった。続け様に飛ぶ。
「一隻でも、一兵でも遅れればそれが敗北に直結する！」
彼は言い切った。
「貴様等の遅れが国を滅ぼすと考えよ！よいな！」
彼の言葉は将兵達の士気を高めた。これにより彼等は整然として義勇軍の上に回り込んだのであった。
「よし、上をとったぞ」
ニルソンはモニターに映る敵軍を見据えて言った。
「全軍このまま下る」
「はい」
「怯むなよ、いいな」
「わかっております」
部下達はそれに応えニヤリと笑った。モンサルヴァートの右腕が大きくあがっていた。
そしてそれが素早く振り下ろされる。だがその動きはどういうわけか時間が止まっているかの様にゆっくりと感じられた。彼はその中で叫んでいた。

## 第十六部第二章　新たな英雄その七

「全軍降下！」
それが合図となった。エウロパ軍は稲妻の様に降下した。そして義勇軍に襲い掛かる。
これに対して義勇軍は艦艇の主砲を真上に向けて斉射で応える。忽ち多くの艦が光の直撃を受け自らも光と化して銀河の深淵の中に消えていく。だがそれでも彼等は果敢に突撃を続けた。
それで義勇軍の包み込もうとする腕は潰えた。少し引いた。これこそがエウロパ軍の狙い目であった。
「今だ！」
タンホイザーはそれを見逃さなかった。そして叫んだ。
「全軍一斉攻撃！ビームを最大出力で叩き込め！」
「最大出力ですか！」
「そうだ！」
彼は言った。
「今だ！今攻撃せずして何時攻撃するか！」
彼はまた叫んだ。
「敵が動きを変えた今こそだ！そして流れを一気に掴む！」
「流れを」
「撃て！まずは撃つのだ！」
彼はさらに叫ぶ。
「いいな！まずはそれからだ！」
「わかりました、それでは！」
「よし、全艦最大出力で一斉射撃！」
「了解！」
「そして反撃だ！いいな！」
彼にしては珍しく高揚しきった声であった。それが部下達を奮い立たせた。

その奮い立った部下達が彼の言葉通りこれまでにない強さでビームを義勇軍に叩き付けた。これにより引きはじめていた義勇軍は大きなダメージを受けた。
「突撃！」
グングニルが先頭に立った。そして敵陣に切り込む。ここに戦いは最後の局面に入った。
「落ち着け！」
マシュハドは押されている自軍に対して言った。
「方陣だ！」
ワフラも叫んでいた。
「方陣を敷け！それで敵の動きを抑えよ！」
「方陣か」
「はい」
彼は穏やかになったマシュハドの言葉に頷いた。
「今は。まずは流れを食い止めましょう」
「わかった。それでは」
マシュハドも頷いた。これで決まった。
「まずは方陣を敷け！そしてその間に機動部隊を編成せよ！」
「機動部隊を」
「そうだ。違うか」
「いえ」
マシュハドもワフラもニヤリと笑い合った。
「その通りです」
「そうだな。ここは定石だ」
「はい」
まずは敵の攻撃を凌ぎ、その間に機動力に長けた部隊を編成してそれで反撃に転じる。戦いの基本であった。彼等は今それを行おうとしていた。
「ではすぐに編成に掛かる」
「はい」

まずは義勇軍は守りを固めた。それは極めて堅固でありエウロパ軍の動きは鈍った。
「陣を組むのが早いな」
義勇軍の動きを見たマトクの言葉であった。
「しかも隙がない。やはり実戦経験がものを言っているな」
「実戦経験ですか」
「そうだ」
幕僚の一人の言葉に応える。
「サハラは長い間戦乱の中にあった。今もな」
「はい」
「我々が侵攻していた北方でもそれは同じだった。彼等は気の遠くなる程の長い時間を戦乱の中で過ごしてきた」
「その結果の一つがあの動きですか」
「そうだ。やはり彼等は侮れん」
彼は述べた。
「連合軍の正規軍と比べるとその動きに差がある。やはり手強いぞ」
「あの方陣を破るのは容易ではないですか」
「一つ一つがそもそも極めて堅固だ」
彼はまた述べた。
「しかも互いに連携し合っている。打ち破る為にはかなりの犠牲を強いられるだろうな」
「ですが打ち破らなければ」
「わかっている。おそらくモンサルヴァート閣下もそれはわかっておられる筈だ」
「はい」
「ここは閣下の判断に任せよう。軽挙妄動こそが敗北に繋がる」
「わかりました」
慎重なマトクらしい判断であった。そしてモンサルヴァートもそれはわかっていた。
「あの方陣は避ける」

彼は即決した。
「避けられるのですか」
「そうだ」
ベルガンサの言葉に応えた。彼は本来後方参謀であるが今では作戦参謀の一人にもなっていた。これはモンサルヴァートの彼への信任の厚さを物語るものであった。
「今は迅速な動きが必要だがあれを打ち破るのは容易なことではない」
「ですね」
これにプロコフィエフが同意した。
「かえって足止めを受けるものと思います」
「そうだ。だからこそここは避けるのだ」
モンサルヴァートはまた言った。
「ですが」
「中将」
彼はベルガンサに顔を向けた。
「はい」
「卿の考えはわかっている」
そしてこう言った。
「では」
「今こちらに向かっている部隊がある」
モニターに動きがあった。
そこには義勇軍の方陣の後ろに急な動きがあった。艦隊のかなりの数が迂回しようとしていたのだ。
「右から来ますね」
「そうだ」
ベルガンサにも彼等が何を考えているのかわかった。所謂鉄と鎚だ。

## 第十六部第二章　新たな英雄その八

前方の守りを固めそれで敵の動きを封じる。そしてその間に敵の側面若しくは後方に機動部隊を回り込ませそこで挟み撃ちにする。かつてマケドニアのアレクサンドロスが得意とした戦術であった。彼はこれでギリシア諸都市を軍門に降し、あの大帝国であったペルシアを滅ぼし北インドまで達した。天才的な戦術家であった彼が編み出した必勝戦法は三千年以上経たこの時代でも生きていたのだ。

「彼等も考えたものだ。やはりかなりの強敵だな」

「どう為されますか」

「まず方陣には抑えを置く」

彼は言った。

「そして機動部隊には主力を向ける。よいな」

「わかりました」

これにプロコフィエフとベルガンサが頷いた。

「まず方陣の抑えにはマトク提督とアローニカ提督の軍を置く」

「はい」

「そして他の軍で敵の機動部隊にあたる。よいな」

「了解」

エウロパ軍もすぐに動いた。軍を二手に分け義勇軍の攻撃にあたる。その際艦載機達は全て引き払っていた。

「いいところだったのにな」

ザーヒダンはこう軽口を叩きながら母艦に帰還した。

「もう少しで妖精を仕留められたのによ」

「それは違っていたようだがな」

だがそれは母艦の副長に否定されてしまった。

「あれ」

「あれ、ではない。勝負は互角だったそうじゃないか」

「それは間違いですよ」

だが彼はそれを認めようとはしなかった。副長に対して反論する。
「俺は終始あの女に対して優勢でしたよ」
「主観では、だな」
副長も負けてはいなかった。
「周りは互角だと見ていたぞ」
「そんなのは実際に戦ってないとわかりませんよ」
「だが撃墜してはいないな」
「それは向こうが運がよかったんですよ」
彼はまだ言った。
「あっちにはあっちの神様の加護があったんですよ、それも強烈にね」
「そして君にはアッラーの加護があったのだな」
「ええ、まあ」
勢いが弱まった。彼もまたムスリムでありアッラーの名前を出されると弱かった。それが副長の狙いでもあったのであるが。
「ではお互い様だ。むしろアッラーの御加護があった分だけ君の方がずっと有利だな」
「それはそうですが」
「今回は諦めろ。結局今こうしてお互いが生き残っていることが何よりの証拠だしな」
「じゃあそういうことにしておきます」
彼もようやく折れた。
「腑に落ちないですけど」
「とにかく今はゆっくり休んでくれ」
「はい」
「我々は守りを固めているからな」
彼の所属する艦隊は方陣を組んでいた。攻撃を仕掛ける立場にはなかった。だから言えることであった。
「戦いは艦隊同士の激突に移る」
「艦隊同士ですか」

「そうだ。暫く艦載機の出番はない」
「だといいですけれどね」
「無論何かあったら出てもらうがな。それまでとにかく休んでおいてくれ」
「わかりました。それでは」
「うむ」
ザーヒダンはパイロットスーツを脱いだ。それを置き自室に帰る。部屋に入ると真っ暗であった。今まで誰もいなかったのであるからこれは当然であった。
灯りをつける。そこにあったのは殺風景な部屋であった。がらんとして何もない感じであった。
彼は無言のまま紫の戦闘服を脱ぎトランクスだけになった。緑色のトランクスであった。色が一色しかないのは彼の好みであった。
「ふう」
そしてベッドの上に倒れ込む。灯りをそのままに眠りに入った。そうして泥の様に眠るのであった。
両軍の戦いがまた局面を変えようとしている時に戦場の外では動きがあった。この時ニョルズに一隻の艦が向かっていたのであった。
「申し訳ありません、この様な艦しかありませんで」
「いえいえ」
見れば古いタイプの艦艇であった。エウロパでは何十年も前に就航していた型であった。その古い艦の艦橋でスーツ姿の白人の男がドーティとターバンを着た浅黒い肌の男に申し訳なさそうに声をかけていた。
「いえいえ」
だがそのドーティの男はにこやかに笑ってそれに応えていた。
「豪奢でいい艦ではありませんか」
「はあ」
「艦には古いか新しいかは問題ではない筈ですが。軍艦でもない限り」

彼は穏やかな声でこう述べた。

## 第十六部第二章　新たな英雄その九

「重要なのは安全な航海と快適な旅が出来るかどうかです。そしてこの艦はそれを保証してくれています」
「では宜しいのですね」
「はい」
彼は頷いた。
「それに今我々は責務があります」
「それはわかっております」
スーツの男は答えた。
「間に合えばいいですが」
「何、大丈夫でしょう」
彼は落ち着いたものであった。
「貴国の軍が退いているという話はまだありませんから」
「それはそうですが」
「今ここでそれがないということは安心されていいと思いますよ」
「はあ」
「それにそうなってしまっては我々としても不具合ですし」
「不具合」
「はい」
ドーティの男はここでにこやかな笑みを作った。
「あまり彼等には徹底的には勝って欲しくないのです」
「それは何故」
「我々の仕事がなくなるからですよ」
「仕事が」
「そうです。我々は貴国と彼等の停戦及び講和の為に来ているのですから」
「それは知っていますが」
「彼等は只でさえあまりにも巨大な身体を持っています」

「確かにその通りですが」
「それで勝ち過ぎると。増長しかねません。それは避けたいのです」
「はあ」
スーツの男はただ話を聞くだけであった。
「それは貴方もおわかりだと思いますが」
「無論」
スーツの男は答えた。
「伊達に外務省に身を置いているわけではありませんので」
「ではボルドー審議官」
「はい」
そのスーツの男アンドレ＝ド＝ボルドーはそれに応えた。その名が示す通り彼はフランス出身の貴族である。貴族といっても騎士と爵位はあまり高くはない。だが実家はかなり広大な農地を持つ資産家であり裕福な暮らしをしていることで知られている。名門ではないがそうしたことで有名となっていた。
「第三者の視点から見ても彼等の危険性がわかりますな」
「勝ち過ぎた場合の」
「はい。まず貴国は著しく不利な立場に追い込まれます」
「はい」
それを聞いたボルドーの顔が曇る。
「おそらくは死亡通知に等しいものを突き付けられるでしょう」
「エウロパの死亡通知ですな」
「その通りです」
ドーティの男はその言葉に頷いた。
「国は名前だけは残っても。最早それは残骸でしかない程に」
「我々はそれを防ぐ為に戦っているのですが」
「その努力も無駄になるでしょう、その場合は」
「・・・・・・・・・」
ボルドーは沈黙してしまった。そうなることは彼にもわかったからであった。

「そして我々にとってもあまり望ましいことではないのです」
「それは何故」
「我々は基本的に中立の立場です」
彼は述べた。
「ですからバランスが崩れるのは好まないのです」
「ですが貴国は彼等の同盟国では」
「同盟国だからですよ」
彼は述べた。
「彼等の伸張は我等にも益があるのは事実ですが」
「はい」
「それもバランスがとれる範囲です。おわかりでしょうか」
「つまり貴方達は今回はバランサーに徹しているというわけですな」
「一言で言うとそうなります」
彼もそれを認めた。
「つまり何を言いたいかといいますと」
「はい」
「我々は今は貴方達の味方であり貴方達の存続を強く望んでいるのです」
「だからこそ講和に動かれたと」
「ええ」
「その御好意有難く思っております」
「これはどうも」
「正直貴方達が来られなければ講和なぞ思いもつきませんでした」
「そうなのですか」
「はい。我々は最後まで戦い抜くつもりでした」
その声に強さと鋭気が宿った。

## 第十六部第二章　新たな英雄その十

「最後の一人まで。若しかするとオリンポスが陥落しても」
「無制限戦争ですな」
「おそらくはそうなっていたでしょう。その際我がエウロパの一千億の民は一人残らず天界に旅立ったとしても」
これは極論である。だがあえてこういう表現を使ってきた。
「連合もまた大きな傷を受ける」
「そうするつもりでしたが」
「それもまた我々にとっては望ましくないのです」
「やはり」
「先程も述べましたが我々は調停者であります」
そういう建前である。決して善意だけではない。
「はい」
「そうなれば無闇に人類社会のバランスが崩れます。それがあってはならないのです」
「その為にも来られたと」
「貴国にとってもその方がよいでしょう」
「まあそうですが」
彼とても分別はある。エウロパ一千億の民を全て死なせてまでする戦争なぞ愚行以外の何者でもないことはわかっていた。そしてこれはエウロパの者の全てがわかっていることであった。エウロパの者も愚かではない。戦争とは政治の一手段でしかないことはわきまえていた。だがその中において無制限戦争という選択肢があることもわかっていたのだ。彼等はあくまで冷静にそれを見極めていた。
「滅亡よりは存続です」
「ですがピガーチャル大使」
「はい」
そのドーティの男バイラヴァ＝ピガーチャルはボルドーの言葉に

応えた。
「確か貴方の御国では滅亡もまたよいことなのでは」
「シヴァ神の教えですか」
「創造、調和、破壊のサイクルでしたでしょうか」
「その通りです」
ピガーチャルはその言葉に頷いてみせた。
「それぞれブラフマーとヴィシュヌ、そしてシヴァが司っています」
「そうでしたね」
「我々の世界観はまずここからはじまっています」
「破壊も、ですか」
「これはそちらのラグナロクと似ていると思いますが」
「神々の黄昏とですか」
北欧神話の最後の戦いである。神々と巨人達が最後の決戦を行うのである。そこで全ての神も巨人も死に絶え只一人生き残った炎の巨人の長スルトがその手に持つ炎の剣レーヴァテインで世界を焼き尽くすとされている。なおラグナロクはもう一つある。
オーディンの娘であるワルキューレの一人ブリュンヒルテが夫であるジークフリートの亡骸を薪で包む。そこに火を放ち炎の神ローゲを呼び出すのだ。
ブリュンヒルテはその中に身を投げ夫の後を追う。ローゲの炎はそのまま天に駆け上がり神々の城であるヴァルハラも、そして小人達の軍勢も巨人達も何もかもを焼き尽くし浄化するというのだ。後には人間の世界だけが残る。それがもう一つのラグナロクであった。どちらにしろ神々も巨人達も滅ぶとされている。
「ラグナロクの後でも世界は復活しますね」
「はい」
「破壊の後での創造です」
「あれと同じなのですか」
「そう考えられればわかり易いかと」
「ふむ」

ボルドーは頷くところがあった。
「これはあくまで神々の秤の中での世界です」
「神々の」
「破壊がはじまる時は人間にはどうしようもありません。その時こそ人類が滅亡する時でしょう」
「滅亡ですか」
マウリアの思想ではシヴァの破壊のサイクルとなる。マウリアでは決して悪い意味ではない。
「しかしそれは遥か未来の話でしょうね」
「未来なのですか」
「少なくとも銀河系、そしてこの宇宙が壊れる時です」
「そんな時まで人類が残っているかどうかすらわかりませんね」
これはきつい言葉であったがその可能性は否定できないものであった。実際に人間は急に滅ぶ可能性もあるものなのだ。
「はい。ですから我々は今は破壊については考えなくてよいのです」
「成程」
「世界は今ヴィシュヌ神のサイクルに入っております。調和の世界に」
「だからこそ調和の為に動いておられるのですね」
「そういうことです」
ピガーチェルは頷いた。

## 第十六部第二章　新たな英雄その十一

「少なくとも調和のサイクルにある間は調和の為に動きます」
「はあ」
「ですからここに来たのです。おわかり頂けたでしょうか」
「正直まだわかりかねるところはありますね」
ボルドーは正直に述べた。
「我々にとって貴方達の世界観はあまりにも異質過ぎます」
「彼等には一千年以上言われておりますよ」
「彼等でもですか」
「はい」
ピガーチェルは頷いた。なお連合には仏教等マウリアの文明の影響が強いものが多い。
「それも一千年以上も」
「どうやら彼等と我々は全く違う時間の世界を生きているようで」
「時間」
「そう、時間です」
彼は語った。
「我々の生きている時間はこの宇宙の時間だけではありません」
「！？」
「おわかりになられませんか。この宇宙が終われば新たな宇宙が生まれる」
「はあ」
ボルドーは呆然としながら聞いていた。
「そして生まれたそのあらたな宇宙でも時間が刻まれるのです」
「そうなのですか」
「それは神の一日の生活の中で営まれます。つまり我々の一生は神の一日の中の一秒にも満たない時間なのです。その様な短い時間の中でしかありません」

「言わせて頂きますが」
「はい」
ボルドーは呆然とした顔で述べた。
「あまりにもスケールが大き過ぎて掴めないのですが」
「そうですか」
「はい。我々の世界はその程度のものなのですか」
「神々から見ればそうです」
彼は答えた。
「ですが貴方達も彼等も違いますね」
「はい」
これはボルドーがエウロパの者だから言えることであった。
「我々の時間の基準はあくまで人間の一生です」
「ですね。それは彼等も同じです」
「神の一日が基準ではありません。ましてやそれだけ悠久の時間なぞは」
「ありませんか」
「我々の概念では。とても」
彼は述べた。
「それがマウリアの時間なのですね、とにかく」
「そうです。そしてその一日の中の落ち着いた時間なのですよ、今は」
ピガーチャルはまた語った。
「おわかりでしょうか」
「正直まだよくはわかりませんが」
彼はまだ言った。
「とりあえず貴方達が講和に動いてくれていることはわかりました」
「はい」
「そしてそれには素直に感謝したいと思います」
「有り難うございます。ではお茶にしますか」
「お茶」

「はい。実は本国からよいお茶を持って来たのですよ」
ピガーチャルは笑いながら述べた。
「紅茶のいいのをね」
「紅茶ですか」
それを聞いたボルドーの顔が明るくなった。
「紅茶はお好きですか」
「はい。実は私の祖国はコーヒーが主流なのですが」
ボルドーの国はフランスである。フランスではこの時代においてもコーヒーと紅茶を比べればコーヒーの方がよく飲まれる。なおこの時代においても紅茶帝国と言えばイギリスである。イギリス人は食べ物の味には疎いが紅茶の味には五月蝿いと言われたのは昔のことであり今ではそれなりに味にも通じているがとりわけ紅茶には通じているのである。
ちなみにコーヒーが強い国はフランスの他にイタリア、ドイツ等である。特にオーストリアはコーヒーが強い。連合になるとこれがさらに複雑化しアメリカではコーヒーとレモンティー、日本は緑茶や麦茶、ロシアはロシアンティー、中国は烏龍茶や薬膳茶、トルコはコーヒー、ＡＳＥＡＮ諸国は各種の茶と様々に別れる。なお韓国は麦茶が多い。ただしそれにシロップを入れるのは金内相位である。
「私は紅茶派でして」
「ほう」
「有り難いですね。御一緒させて頂いて宜しいでしょうか」
「勿論」
ピガーチャルはそれを快諾した。
「どうぜお。お茶は一人で飲むより二人で飲んだ方が美味しいですから」
「はい。ではこちらはお茶菓子を用意しますので」
「ビスケットやクラッカーですかな」
「まさか。私はフランス人ですよ」
彼は笑いながら述べた。

「イギリス人とは違います。もっと素晴らしいお菓子を用意しております」
「期待していいみたいですね」
「期待ではありませんよ」
彼は笑みをたたえたまま言う。
「確信してくださって頂くのです」
「そでは」
「はい」
二人は艦橋を後にして私室へ向かった。そして次の来たるべき仕事に向けて英気を養うのであった。

# 第十六部第三章　講和への道その一

講和への道

連合とエウロパとの戦いの収束に向けて動くマウリアだが実は彼等の動きはかなり早くからはじまっていたのである。これは双方の戦いが勃発した時のことであった。

「連合軍がニーベルング要塞群に向けて攻撃を開始しました」

「そうか」

クリシュナータはその報告を官邸で聞いていた。

「その数は二千個艦隊だったな」

「はい」

彼はこの時既に連合軍の参加兵力まで知っていた。無論エウロパ軍の戦力もである。

「まずは義勇軍を先頭にしている様です」

「義勇軍か」

それを聞いたクリシュナータの整った眉が動いた。

「サハラの難民達から成る軍か」

「はい」

報告をする武官は応えた。

「ニーベルングへのそれは彼等による攻撃の様です」

「体のいい消耗品だな」

「そうですね」

武官はまた応えた。

「ですがそれだけではないかと」

「彼等にも戦わなければならない事情がある」

「はい」

武官は今度は頷いた。

「彼等の立場を掴む為にも」

「正式な連合の市民として」

「今は単に地位だけですから」
「法的な地位だけでは完全になったとは言えないからな」
「そうです」
それが武官の答えであった。
「今は彼等はまだ完全に連合の者にはなっておりません」
「そうだな。だがここで彼等の行動には矛盾がある」
「それは」
「彼等は難民だったな」
「はい」
武官はまたしても応えた。
「難民ならばサハラには帰らないのか。ティムールが動くそうだが」
「どうやら」
ティムールの動きも予測していた。彼はこれも知っていた。
「連合に生活基盤を持った者も多いそうなので」
「複雑だな」
クリシュナータはそれを聞いてこう述べた。
「難民問題にはつきものだが」
「はい」
「だが連合にとっては好都合だな。これが連合の市民の兵士達なら問題だが」
「彼等は異邦人です」
「そう、異邦人だ。異邦人は所詮は異邦人でしかない」
彼は述べた。
「何があっても連合には傷はない。そうした意味で非常に便利な存在だな」
「左様です」
「それに彼等には戦わなくてはならない。ならば利害は一致する」
「まことによくできておりますな」
「うむ」
彼等はそれについての話はここで終えた。そして別の話に移った。

「この戦いだが」
クリシュナータは戦局に話を移した。
「どちらが勝つと思うか」
「国力から見ればたはり連合かと」
「そうか」
彼は武官の言葉にまた眉を動かした。
「やはりそう思うか」
「では主席も」
「うむ。そう考えるのが当然だろうな」
彼は冷静な言葉でこう語った。
「やはり連合の国力差はエウロパを圧倒している」
「ですね」
「三十倍の国力差は如何ともし難いだろう。それに連合軍は侵攻する立場だ」
「はい」
「自分達の勢力圏内で戦うのではない。それを考えると連合軍は楽とも言える」
「楽ですか」
国内で戦うのと国外で戦うのとでは勝手が違う。この場合は国力の消耗に関してであった。
「彼等の補給態勢はかなり整備されているようだしな」
「どうやらそのようですね」
武官もそれには同意であった。
「八条長官でしたか」
「そうだ」
「彼はまず補給態勢を整備したようですから」
「連合は広い。これは当然だろうな」
「それがエウロパ侵攻にも生きるのですね」
「そういうことになるだろう」
クリシュナータは補給も見ていた。ここが彼が只の企業家出身の

政治家ではないことの証左であった。
「あれだけの軍が万全の補給態勢で進軍する。これを防ぐのは容易ではない」
「ですが彼等は敵地で戦うことになります」
武官は先程のクリシュナータの言葉に言及するようにして言った。
「これにはどう思われますか」
「まずこれはエウロパ軍にとってのメリットだ」
「はい」
「今連合軍には楽だと言ったがな。これは自分達の国では戦わないということは損害を気にしなくて済む」
「はい」
「産業や経済が荒廃するのはエウロパだ。連合ではない」
ここでは極めて冷徹に述べた。
「だが戦場であるエウロパの地形に関しては彼等はよくは知らないな」
「エウロパ軍が付け込めるのはそこでしょうか」
「いや、それはどうかな」
「違いますか」
「エウロパの地形は緩やかだ」
彼は言った。

## 第十六部第三章　講和への道その二

「アステロイド帯や磁気嵐、超新星、ブラックホール等は極めて少ない」
「そう聞いています」
「従って障害になるものはあまりない。これは防衛戦を行ううえで非常に不利だ」
「ではエウロパ軍は地の利すら得られないと」
「普通にやればな。問題はそれでもその中に彼等が見つけられるかどうかだ」
　難しい話であった。それが果たせなかったからこそ今があるからだ。
「エウロパにとっては不利なことしかないようですな」
「まず敗北は確実だ」
　クリシュナータは述べた。
「連合は普通に進めてもオリンポスまで達することができるだろう」
「オリンポスまでですか」
「そうだ。連合の指揮官が相当な愚か者でもない限りな」
「ですが連合軍は然程無能な人物はいないようですが」
「そうだな」
　クリシュナータはそこも見ていた。視野が広いと言えた。
「サハラのそれのように傑出した人物もいないようだが」
「むしろ連合はそうした人物を好まないようですね」
「好まないのか」
「これはあくまで私個人の見方ですが」
　顔を向けてきたクリシュナータに対してこう答える。
「連合軍の教育はまず平均化、そして画一化を目指しております」
「うむ」
「そしてその装備や戦術も。全てマニュアル化されています」

「誰が戦っても勝てるようにな」
「それも最小限の損害で。圧倒的な戦力を基本に忠実な戦術で運用するのが彼等の思想の様です」
「軍事的天才を不要とする軍隊か」
「はい。一人の名将よりも百人の凡将という考えのようです」
ここで凡将と述べているがこの場合は決して悪い意味ではない。平均に達している将という意味である。少なくとも武官はこう考えている。
「作戦もまた基本に沿っています。いえ、そこから一歩も出てはおりません」
これは劉の立案した作戦を見てもわかることであった。彼は誘い込んで一気に反撃に転じるやり方を好むがこれも戦術の基本である。彼はあくまで基本に沿った作戦を考えているのである。
「補給の充実もそもそもがそこにあります」
「戦略も基本に沿ってか」
「全てが。そうした意味で二十世紀後半の軍の思想に近いでしょうか」
「近代化軍だな」
「はい」
彼は頷いた。
「当時の軍をモデルとしているようです」
「連合ならではだな」
クリシュナータはまた述べた。
「損害を最小限に抑えて確実に勝利を収める為に。それだけを考えている」
「はい」
軍の思想の基礎ではある。
「圧倒的な国力があればこそ実現に向けられる考えではある」
「ですが背景はそれだけではないようです」
「連合軍の在り方自体にか」

「おそらく。やはり彼等は志願制の軍隊であり市民の軍隊ですから」
彼もまた述べた。

## 第十六部第三章　講和への道その三

「志願者の減少を防ぐ為に考え出されたのでしょう、損害を少なくする方法も」
「うむ」
「そして訓練度も今一つですし。そうした将兵達が勝利を収めるには」
「マニュアルが一番ということか」
「そう考えますが」
「全ては連合だからこそ生まれた軍隊であるということに要約できるな」
「はい」
彼はまた頷いた。
「私はそう考えているのですが」
「その通りだろうな」
そしてクリシュナータもそれに同意した。
「見事だ。そこまで彼等のことを研究しているとはな」
「有り難うございます」
「そこまでわかっているのならば弱点も見えているだろう」
「無論です」
ここではにこやかに笑ってきた。何故か不敵な笑みではなかった。
「ですがエウロパ軍は今回はそこを衝けはしないでしょう」
「弱点をか」
「はい。例え気付いたとしてもそれを為すことは容易ではないのです」
「かなりの難関か」
「少なくとも彼等では無理でしょう」
「エウロパ軍は今五百個艦隊存在する」
彼は述べた。

「そしてその将兵の練度も士気も高い。それでもか」
「はい」
彼はまたしても頷いた。
「扇の要を崩すのは。彼等でも無理でしょう」
「扇の要か」
クリシュナータはその言葉に注目した。
「それが連合の弱点だな」
「そうです、そこが連合軍の弱点の一つです」
武官はそれを認めた。
「連合軍の戦術面における弱点であります」
「巨大戦艦かな」
クリシュナータはここではあえて思わせぶりに呟く形にした。
「扇の要と言えば」
「はい」
武官は頷いた。
「まさにそれです」
「あの巨大戦艦をか」
クリシュナータはそれを聞いて考える顔を作った。だがそれは作ったというよりは本当に考えた顔であった。
「無理ではないか、やはり」
「彼等では無理でしょう」
武官はまずはこう言った。
「今の我々でも。あの戦艦はそうおいそれとは沈めることはできません」
「そうだろうな」
これは銀河の多くの者が同じ意見であった。ティアマト急巨大戦艦は言うまでもなく連合軍の象徴である。そして不沈戦艦として知られていた。それを考えるととても簡単に沈められる存在ではなかった。
「ですが不沈戦艦というものが有り得ないのもまた事実です」

これもまた多くの者が口にした言葉である。
「必ずや撃沈する方法があります」
「それは」
「隕石かブラックホールをぶつけることができれば可能ですが」
彼は言った。
「少なくとも今人類が持っている兵器では容易ではありません」
「少なくとも今のエウロパ軍には無理なことだな」
「はい」
「ブラックホールは。兵器化するのはあまりにも危険だしな。隕石も」
かってサハラのある国で実用化が計画されたことがある。だがそれは無残な失敗に終わりその国は隕石の雨と巨大なブラックホールの発生により大きなダメージを受けた。それ以降人類社会では巨大な隕石、そしてブラックホールを兵器に使用することは憚れてきたのである。
「それを考えるとやはり今ある兵器しかないが」
「それは今のエウロパ軍には無理であると判断しているのです」
「そうだな」
クリシュナータもそれに同意した。
「だがそれは認識しておいた方がいいな」
「それとは」
「連合軍の弱点だ」
彼は述べた。
「扇の要こそがそれだ。それに関しての研究を進めておくのはよいことだ」
「まさか連合と」
「違う」
だがクリシュナータはそれを否定した。

## 第十六部第三章　講和への道その四

「我々は同盟関係にある。そしてこれはこれからも続けていくつもりだ」
「はい」
「だが我が軍は同時に彼等を参考にしているな」
「ええ」
武官は頷いた。その通りであるからだ。
「だからこそだ。弱点は克服していかなければならない」
彼は言う。
「そういうことだ。わかったな」
「わかりました」
「そしてこの戦いだが」
「はい」
そして戦争、政治のことに移った。
「連合には程々で勝利を収めてもらいた。そしてエウロパには滅亡してもらいたくはない」
「では」
「きりのいいところで双方を講和させる」
それが彼の考えであった。
「使者の選定も行っておこう」
「今からですか」
「おそらくこの戦いは暫く時間がかかるだろうがな」
彼は述べた。
「しかしその間に使者の選定と準備は行っておくべきだ。わかったな」
「わかりました」
武官は敬礼で以って答えた。
「そちらは私の管轄下ではないので何とも言えませんが」

彼はあくまで武官である。武官は政治のことには口出しはできない。意見を求められることはあってもだ。マウリアもまたシビリアン＝コントロールの下にあるということである。
「それはこちらで進めておく。安心してくれ」
「はい」
「そして次には」
彼は言葉を続けた。
「使者の道筋も調べておくか」
「連合からはそのままでいいですな」
「そちらは心配してはいない」
彼もこれには配慮を見出してはいなかった。
「だがエウロパの方はそうはいかないな」
「はい」
「ハサン及びティムールに話を通しておくか、今から」
「ハサンはともかくティムールは」
武官の声が気兼ねしたものになった。彼はシャイターンという男に対して警戒を持っているのである。
「何、心配することはない」
だがクリシュナータはそれをよしとした。
「シャイターン主席は政治家だ。利があるとわかっていれば常識ある対応をとるだろう」
「それでは普通に交渉してよいと」
「そうだ。そちらも心配しなくていい」
彼はこう言った。そして執務室の自分の机に向かった。
「とりあえずはそれだけだな」
「それでは私はこれで」
「いや、まだある」
「何か」
「連合に派遣している軍事留学生だが」
これについても言及されてきた。

「はい」
「彼等は今どうしているか」
「順調に連合軍のことを学んでいるようです」
「そうか。それは何よりだ」
それを聞いて顔を綻ばさせた。
「ですが少し摩擦もあるようです」
「食事や時間の概念でのことだな」
「はい」
彼は答えた。
「やはり双方の違いが如実に出ているようです」
「我々は連合ではない」
クリシュナータはここで述べた。
「また彼等もマウリアではない」
「はい」
「当然のことだ。そしてこれは一千年も前、いやそれ以前からあったことだ。気にしても仕方がないだろう」
「ですがあちらはかなり戸惑っておりますが」
「ある程度は許してもらおう。こちらも改善すべき点は改善する」
図々しいと言えば図々しい。しかしこれこそが国家のあり方と言ってしまえばそれまでだ。生き馬の目を抜くようなものはこの時代においてもはっきりと存在しているのだ。
「それではそれで」
「そうだ。だがこれも長い間終わらない話だな」
「それだけ我等が独自の文化、そして文明を持っているということですから」
「お互いこれに関しては歩み寄るつもりもないしな」
「文明はそういうものではありませんから」
武官は自身の考えを率直に述べた。
「互いに影響し合うことはあっても」
「うむ」

「学ぶものなのは事実ですが。その為の留学生でもありますし」
「他にも交流は進めていくつもりだが」
「よいと思います」
「そうか。ではさらにそれを発展させていこう。軍部に関しても技術者の交流も進める」
「技術者も」
「技術は盗むものだとよく言われるがな」
実際に連合ではそう考えられているふしが多い。各国は互いにそれぞれ各分野での技術を競い合っている。だがそれと同時に産業スパイ等もよく行われているのだ。競争の激しい一面がある連合においてはこうしたことも常識であった。表向きは禁じられていてもだ。所詮表は表でしかないということである。
「だが交流で学ぶこともできる」
「はい」
「表だけではなく裏のこともな。わかるな」
「無論です」
武官は当然というように答えてきた。
「ならばいい。ではそちらも検討に入ってくれ」
「はい」
「今銀河は久し振りに大きく動いている。我々も少し動くことにしよう」
「少し」
「少なくとも連合やサハラ程動くことはないがな。それでも動かなければならない」
「わかりました。それでは」
「うむ」
これで武官との話は終わった。クリシュナータは武官を下がらせると一人で仕事に入った。机に置かれている書類の整理をはじめたのである。

## 第十六部第三章　講和への道その五

暫くそれを行っているとまた誰かやって来た。扉をノックしてきた。
「どうぞ」
部屋に入るように言うと首相であるムルワーラがやって来た。彼はその脇に一冊のファイルを持っていた。
「先程廊下でアジメール大将と擦れ違いましたが」
「私が呼んだ」
クリシュナータはその問いに対してこう答えた。
「軍事のことでな。話しておきたいことがあったので」
「左様ですか」
「ところで総理府で頼んでおいたものは出来ているかな」
「はい」
ムルワーラは頷いた。そして懐にあるファイルを彼に差し出した。
「こちらに」
「有り難う」
彼は礼を言ってファイルを受け取った。そしてまずはムルワーラに席を勧めた。
「まあ座ってくれ。長い話になるかも知れない」
「はい」
彼はそれに従いソファーに座った。そして少し離れた距離で話をはじめた。
クリシュナータはまずはファイルに目を通していた。そしてムルワーラに顔を向ける。
「何パターンか予想されているのだな」
「ええ」
彼はその問いに対して頷いた。
「戦闘の経緯はどうなるかわかりませんから」

「ふん。確かに」
彼はそれに頷いてまたファイルを見た。見ればそこには連合とエウロパの戦いの進展とそれによる双方の軍事費の推移がデータとなって書かれていた。
「やはりエウロパが敗北するケースが多いか」
「軍部も同じ考えだと思いますが」
ムルワーラは述べた。
「政治的な視点から見てもエウロパの劣勢は免れないかと」
「確かにな」
「そして軍事費も。連合の負担は実際それ程でもないですが」
「これでか」
クリシュナータは連合軍のデータを見ながら述べた。
「我々だったら確実に国家財政が破綻している。まあ規模が違うが」
「規模を考えるとそれ程負担ではないですね」
「そうもとれるな」
「連合は財政負担はそれ程にもなりませんが」
勢力としての規模が大きく違うということであった。連合の人口は三兆、やがて四兆にも達する。その勢力圏も銀河のかなりの部分に及んでいるのだ。
「だがエウロパは違うようだな」
「はい」
「財政的な負担もかなりのものだろう」
「ほぼ全ての予測で壊滅的な結果が出されていますが」
彼は答えた。
「そうか、やはりな」
「最悪の場合エウロパ全土が占領されその経済活動も崩壊します。かつ戦後の復興等で」
「財政は完全に破綻するのだな」
「あくまで最悪ですが」
だが政治の世界とは常に最悪のパターンを予測して考えるものだ。

それだけにムルワーラの言葉は重みがあった。
「どちらにしろエウロパの財政は戦後破綻するものと思われます」
「辛いな、それは」
クリシュナータはそれを聞いて呟いた。
「彼等にとってはな」
「はい」
「どちらにしろ敗戦は確実なようだしな」
「勝利の可能性は殆どありません」
ムルワーラはそれについてまた述べた。真剣な響きがその言葉にはあった。

## 第十六部第三章　講和への道その六

「これだけ国力差があると」
「戦力では今はそれ程ではないと思うが」
「戦力的には数のうえでは四対一ですが」
数のうえでは、である。それでも四倍という差は圧倒的である。エウロパ軍にとってはこれが精一杯だったのだが。
「うむ」
「装備や補給、情報収集能力等を考慮しますとやはり大きな差があります」
「そうか」
「単純な国力の差がここでも出ています」
連合とエウロパの国力差は三十倍以上である。最早その差はどうしようもない程であった。これだけを見てエウロパの敗戦は決定的だとする識者も多くいる程である。
「それに技術力も」
「エウロパは軍事に関しては連合より勝っていたのだがな」
「それももう。連合軍が統合されてからは完全に遅れをとっています」
「技術もか」
「やはり多くの技術が集まり、それを選定し研磨した結果だと思います。それにより連合の軍事技術は大きな発展を見せたのです」
「やはり連合の力は大きいか」
「一言で言うならば」
彼は応えた。
「それを集中させたならば。恐るべきものになります」
「この一千年彼等は金や資源のことだけを考えてきた」
「はい」
「そしてそれを巡って内部で様々な駆け引きを繰り広げてきた。連

合という巨大な器の中でな」
「ですがそれが一つになった時に」
「ああした巨大な戦力が完成されるのか。恐ろしいことだ」
「はい」
ムルワーラはまた頷いた。
「やはり彼等は侮れません」
「うむ」
「その力を向けられたエウロパは気の毒と言う他はありませんがね」
「問題はそれで秩序が破綻することだ」
「秩序が」
「人類社会は長い間四つの勢力に分かれてきた」
連合とエウロパ、サハラ、そして彼等のいるマウリア、この四つのことであるのは言うまでもない。人類社会はこの四つの世界で千年以上に渡って生きてきたのである。
「エウロパが崩壊するということはそれだけでその秩序が崩れるということだ」
「はい」
「唯でさえ連合はあまりにも強大な力を持っているというのにな」
「ではエウロパは崩壊させてはまずいと」
「私はそう見ている」
彼はここで己の考えを述べた。
「連合とエウロパの戦いはきりのいいところで終わってもらわなければならん」
「では」
「我々が仲介に入ろう」
彼は言った。
「それでいいな」
「わかりました。それでは外相にも話をしておきます」
「頼むぞ」
「全ては銀河の秩序の為に」

「形のうえではな」
彼はここであえてこう言った。
「よいな、我々はあくまで善意の調停者だ」
「はい」
「まずはそれを念頭に入れておいてくれ。いいな」
「わかりました」
こうしてクリシュナータとムルワーラの話し合いも終わった。これが連合とエウロパの戦いがはじまった頃の話であった。これはあくまで極秘であった。
だが火のあるところに煙がたつものである。マウリアが連合とエウロパの戦争の仲介者になろうとしているという噂は人類社会においてもヒソヒソと囁かれはじめていた。

## 第十六部第三章　講和への道その七

これはネットにおいてとりわけ顕著であった。連合では特にこれがネットの話題になっていた。
『マウリアが俺達とエウロパの貴族共の仲介に入ろうとしているだって？』
『ソースは？』
まずはこういう話になった。
『ソースはまだないけれどな』
『じゃあ意味ないじゃねえか』
『不確かな情報だな』
普通はこれで片付けられる類のものであった。だが相手はあのマウリアである。ネットの参加者達も急にその猜疑心を深めたのであった。
『いや、わからないぞ』
誰かがこう書き込んだ。
『あのマウリアだ。何をするかわからない』
『けど不確かな話なんだろ』
それに対する反論がすぐに書き込まれた。
『それを今から言ってもな』
『いや、不確かだからこそ信憑性があるぞ』
また誰かが書き込んだ。
『何でだよ』
『あのマウリアだぞ』
また書き込まれた。
『何をしてくるかわからんからな』
『まあそれは事実だな』
それに対する返事であった。
『連中はな。何をしてくるかわからねえのは事実だな』

『今までも色々あったしな』
『だからだ。連中が何か仕掛けてくる時は徹底的に隠す』
これは彼等も今までのことでわかっていた。
『今回もな。わからんぞ』
『じゃあ企んでいるって考えているんだな』
『少なくとも俺はそう思ってるよ』
返答が返ってきた。
『連中のことだからな。まあこれからに期待しとくか』
こうしたやりとりが連合のネットのあちこちで見られた。大体見ている部分は同じであった。彼等もマウリアとの付き合いは長い。文化や文明はなかなか理解できなくとも今までの過去の行動は覚えてはいる。だからこそこうして予測もできたのである。彼等はマウリアが何かをしてくると思っていた。
これはビジネスマン達も同じであった。マウリアの首都ブラフマーに滞在する連合各国のビジネスマン達は近頃マウリアの中央省庁での人の出入りが激しいことに気付いたのである。
「何かあるのかな」
ブラフマーの喫茶店の一室でスーツ姿の男達が銀河語で話をしていた。
「特に外務省と国防省で出入りが激しいけれどな」
「どっちかだけだったらそんなに気にすることでもないんだろうけれどな」
「ああ」
彼等はマウリアの紅茶を飲みながら話をしていた。連合では高級品として知られているが当然ながらマウリアではごく普通に飲まれているものである。その味は銀河で最もよいとされている。
「両方だとな。何かキナ臭いな」
「何か考えているのかな」
「サハラへの軍事行動」
「まさか」

だがそれはすぐに否定された。
「国境には兵はそれ程回されてはいないぜ、そっちに言ってる奴の話だと」
「そうか」
「とりあえず軍の方に配備命令とかはかかっていないらしい。それはないだろう」
「だったらいいけれどな」
「いや、よくないかもな」
だがこのビジネスマンは同僚の言葉に懐疑的な動きを示した。
「何かあるのか？」
「連中また何か企んでいるんじゃないか」
彼は眉を顰めさせながらこう言った。
「何かって」
「今うちとエウロパで戦争になってるしな。それ絡みかもな」
「そっちか」
同僚はそれを聞いて自身も眉を顰めさせた。

## 第十六部第三章　講和への道その八

「援軍か」
「いや、連合の方にも兵は動いてないしな。それもないだろうな」
「そうか」
「それならもっと早く兵を出しているだろうしな」
「ううむ」
「まあ援軍の線はないさ」
　彼は同僚に対してまたこう言った。
「それよりも別のことを考えていると思う」
「別のこと」
「ああ。軍も関係しているが決して軍事的じゃないことかもな」
「何だ、それは」
「今のところはわからないけれどな」
　そう言いながら窓を見る。見れば多くの車が首相官邸や外務省の方へ向かっている。水面下で動きがあるのは間違いないと思った。
「とりあえずは様子見かな」
「その間にえらいことにならなきゃいいけれどな」
「少なくとも俺達のビジネスには影響はないと思うぜ」
「だったらいいけれどな」
　マウリアでも何かしらの動きが感じられていた。そしてこれはビジネスマンの上にいる経営者達も感じていた。
「妙なこと」
「そうじゃ」
　カレーラス、マウム、ポートの三人がカレーラスの経営するホテルのロイヤル＝スイートルームで話をしていた。特別な話であるのでカレーラスがわざわざ機密性の高いこの部屋を選んだのである。三人は黄色を基調とした中国清朝の造詣を模した豪奢な部屋の中央にいた。同じく清朝の造詣形式の豪奢な香木の椅子に座り向かい合

って話をしていた。三人の間にあるのは同じく香木で造られたテーブルだけである。その上には茶が置かれている。やはり中国風の茶であり薬膳茶であった。ここが高齢の三人らしかった。
「この前マウリアに行ったのじゃがな」
カレーラスが他の二人に対して話していた。
「それは知っておる」
「暫しの別れの盃を交わしたからな」
彼等はマウリアとの間でもビジネスを行っている。当然マウリア政府高官達ともパイプがある。彼等がそれぞれ築いた独自のパイプである。それはかなり太い。
「どうも今までとは雰囲気が違う」
「どう違うのじゃ」
ポートが彼に問うた。
「それだけでわかる程わしは勘はよくはないぞ」
「何を言うか」
だがカレーラスはその言葉には笑って返した。
「主みたいに勘のいい男はわしは他に知らぬぞ」
「さて」
ポートはとぼけた。彼はこの三人の中では特に勘がいいことで知られている。それにより成功を収めたといっても過言ではない程である。カレーラスもそれは当然知っている。だからこそ言ったのである。
「実際おおよそ見当はついているじゃろう」
「うむ」
「そちらも」
「ああ大体はな」
マウムも答えた。
「政府高官の動きが。何かせわしいとでもいうのじゃろう」
「その通りじゃ」
カレーラスは頷いて答えた。

「とりわけ外務省の関係がな。あと国防省じゃ」
ネットやビジネスマン達の話と一致していた。
「何かな。妙に動き回っている」
「舞台裏でじゃな」
「まだな。じゃが何かを考えているのは事実じゃ。その証拠にうちの大使館でも同じ感じじゃった」
「中央政府のか」
「左様。同じ頃に同じことになっているということは」
「接触があるということじゃな」
これは容易にわかることであった。この三人程の眼力があれば容易に見抜けることであった。だがこの三人の眼力はこれに留まらない。だからこそあまりにも巨大な連合財界において御意見番と言われるまでになっているのである。それは伊達ではない。
「何の為じゃと思う？」
カレーラスは他の二人に対して問うてきた。
「この動きは」
「財務省も動いているな」
「うむ」
カレーラスはマウムの問いに頷いた。
「では通商省等は」
「動いてはおらぬな」
「では決まりじゃな」
ポートが言った。

## 第十六部第三章　講和への道その九

「連中は今の戦争のことを考えている」
「そうじゃろうな。わしもそう見ておるのじゃ」
カレーラスはここでようやく自分の見解を示した。そしてここから話の本題に入った。
「今最も重要な情報じゃな。どうするかじゃ」
情報は金になる。熟練の経営者である彼等はそのことをよくわかっている。
「中央政府に渡すか」
「それがよいな」
ポートはそれに傾いた。
「じゃが今は早いな」
「早いか」
カレーラスはマウムの意見に顔を向けた。
「うむ。もっと後でよいのではないか」
「話を渡すタイミングか」
「中央政府の大使館との接触はまだ事前の準備で講和の話はまだじゃろうからな」
「どうしてそう思うのじゃ？」
「わしにも勘はあるぞ」
マウムはそれに対してニヤリと笑って応えた。
「マウリアの者達は人を驚かせるのが好きじゃ」
「うむ」
これは彼等がインド亜大陸ごと移動した時から連合の者の間では定説になっていた。もっともこれは連合の者の偏見である部分が多く実際にはマウリアの者も人を驚かせるのが格段好きというわけではない。連合の者がマウリアの文明や風俗習慣に驚かされ続けているというのも大きいのだ。

「じゃからここでも寸前まで隠しておくじゃろうな」
「ではうちの大使館との接触は」
「それへのカモフラージュじゃろう。交流促進とか謳っておったのではないか？」
「その通りじゃ」
カレーラスはそれを認めた。
「やはりな。思った通りじゃ」
マウムはそれを聞いて頷いた。９４
「おそらく大使館が忙しかったのはパーティーとかの準備じゃ」
「うむ」
「それ以外にはこれといってないじゃろう。おそらくマウリアの方は隠しておる」
「左様か」
「それに気付いたのはわし等三人だけかの」
「だったらいいのじゃがな」
三人はここで顔を見合わせた。情報は独占してこそ価値があるものである。それが広まれば何の意味もないのだ。それがわかっているからこそ今こうして打ち合わせをしているのである。何につけても周到な三人であった。
「ネットでも色々と話が出ているがの」
「ネットは風聞も多いぞ」
「じゃが鋭いものもある」
カレーラスは二人に対して言った。
「嘘の中にも真実はある。それを拾うのがネットじゃ」
「では講和を予測している者もおるな」
「多分な。全て見たわけではないが」
「まずいのう、それが中央政府の目に入れば」
「何、心配はいらぬ。今はそれが事実かどうか分析している段階じゃ。はっきりするまで時間がかかる」
「ではまだ時間があるか」

それもまた重要なスパイスになる。老人達はそれもわかっていた。年老いてはいるが強い光を放つ目がさらに光った。
「そうじゃな。少し時間を置いてからこの情報を政府に渡すとしよう」
「便宜と引き換えにな」
「うむ」
こうして三人の老経営者達の話は終わった。彼等はここでその熟練した経営センスを見せようとしていた。無論それはただではない。そうしたものを無料で提供する程彼等は人がよくはない。またそれと同時にそれを意地悪をしてまで交渉する程彼等は人が悪くはない。そうしたところが妙に食えず、妙に人間味がある。そうした味のある老人達であった。

## 第十六部第三章　講和への道その十

そして暫くして連合商務省や外務省にマウリアがエウロパとの戦争の仲介を買って出ようとしているとの話が出て来た。丁度マウリアの使者が連合に向かう直前の頃であった。
「あまりにもタイミングがよすぎるわね」
それを見てカバリエの言葉である。彼女はそこに何かを見ていた。
「講和の話の出所は何処かしら」
そして彼女はそれを部下達に対して尋ねた。
「どうやらバイソン、ファランクス、イーグルの三つのグループからのようですが」
「あの三つから」
彼女はそこにはっきりとしたものを見た。
「これは何かあるわね」
「おそらく事前に情報を掴んでいたものと思われます」
「うちが気付かなかったのは失敗ね」
「申し訳ありません」
「謝る必要はないわ。間に合ったのだし」
「はあ」
「もっともそれも見計らってのことでしょうけれど」
「あの老人達ならばその程度は見切っているでしょうね」
外務省でもカレーラス達の老獪さは知られていた。時として利益になる情報をもたらしてくれることもありその関係は決して悪いものではないが。
「それで彼等の見返りは」
「商務省に何らかの便宜を内密に要請しているようですが」
「流石ね。抜け目がないというか」
「それが狙いだったのだと思います」
「そして講和の内容は」

「それも流れてきております」
官僚は言葉を続けた。
「おそらくあの老人達があえて流しているのでしょうが」
「本当に老獪ね」
カバリエはそれを聞いて苦笑してしまった。
「何処までも。煮ても焼いても食べられそうにない人達だこと」
「揚げてみてはどうでしょうか」
「フライ？唐揚げ？」
冗談であるが乗ってきた。連合きっての美食家である彼女にしてみれば乗らなければならない話ではあった。
「この場合は天麩羅でしょうか」
「サラッとあげるのね」
「はい」
彼は頷いた。
「気付かれずにおだててみては。下手に攻めるよりは」
「彼等が乗るかしら」
「乗るのでは。あれでも根は善人ですから、あの方々は」
「確かに根は悪ではないわね」
これはカバリエも認めた。
「色々と曲者ではあるけれど」
「グループや球団には限り無い愛を感じますし」
「そうなのよね。特に球団に対して」
カバリエは言った。
「私は応援しているリーグは違うけれど彼等の球団に対する愛情は聞いているわ」
「はい」
この場合球団とは野球のチームのことである。彼等は一流の経営者であるが同時に野球ファンでもあるのだ。そして自分の持つ球団を心から愛していることで知られている。普段は仲のいい三人であるがこと野球のことになると話が別で何かといがみ合う。だが自分

のチームを心から愛していることは事実であった。
「わしの持っているものの中で球団だけは赤字なんじゃよ」
カレーラスは笑いながらこう言ったことがある。
「しかし宣伝広告になっとるからな。よしとするか。しかもドラ息子程可愛いわい」
彼は球団を愛していた。だからこそ持っているのだ。グループの経営方針として球団は看板となっていたのである。これはマウムも同じであった。
「死ぬ前に言っておくぞ」
彼はよく周りの者に対して言う。
「球団と劇団は何があっても手放すな」
と。彼もまたこれは同じであった。そしてポートも。彼等は球団を実の息子の様に可愛がり、愛していたのである。
「あれはね。頭が下がるわ」
「はい」
「一流の経営者は一流の人間でもある。そういうことね」
「少なくとも山口義彦の如き輩とは違いますな」
「あれは犯罪者に過ぎないわ」
カバリエはかって悪逆の限りを尽くし処刑された悪辣漢を一言で吐き捨てた。
「あの末路を見ればわかるでしょう」
「ええ、まあ」
「そうした男とあの人達を比べるのは間違いね。確かに一癖もニ癖もある人達だけれど」
「左様ですね」
「その彼等が流していることなら。事実なのでしょう」
カバリエはそう読んでいた。しかもそれは正解であった。
「はあ」
「後は実際にあちらから話を聞いてみるわ。けれどここで大事なのは」

「演技ですね」
「そうよ」
カバリエと官僚の目が同時に光った。
「私達は講和に関して何も知らないのよ」
「はい」
官僚は硬い顔で頷いた。
「いいわね、何も聞いてはいない。寝耳に水のことなのよ」
「わかりました」
「隠していくわよ。まずはそこから入っていくわ」
「そして話を進めていく」
「徐々にね。こちらのペースに入れていくわよ」
「わかりました。それでは」
「ええ」
外務省は仮面を被ることにした。そしてそこからマウリアと対峙することにした。彼等とて愚かではない。マウリアに対して充分に策を練っていたのであった。

## 第十六部第三章　講和への道その十一

外務省としては彼等と直接対峙する為かなり細心に対策を練りはじめていた。だが商務省は少し違っていた。
「いきなりといった感じのする話だったが」
ワンプスは腹心の一人であるウォーレマウリア局長に話を聞いていた。彼はミクロネシア出身であり幼い頃マウリアにいたことがある。その為マウリア通であるとされてきたのである。商務省においては切れ者であり将来有望な人物とされてきている。
「申し訳ありません」
ウォーレは小柄な身体をさらに小さくさせてワンプスに対して謝罪する。小さいといってもそれは連合の基準においてでありエウロパの平民の平均程はあった。サハラでも平均であろう。
「謝る必要はない」
だがワンプスはそれはよしとした。
「正直こちらもこれは予想していなかった」
「はい」
「気付いていたのはあの老人達だけか。彼等にしてやられたな」
「おかげで情報料を支払うことになりました」
これが便宜のことであるのは言うまでもない。
「それが狙いだったのだろうな。相変わらず抜け目のないことだ」
「もう少し彼等の動向にも目を向けておくべきでしたが」
「今言っても仕方がないな。今回は完全に遅れをとっている」
「残念ながら」
「問題はこれからだ。遅れは取り戻さなくてはな」
「そうですね」
ウォーレの言葉に気が戻ってきた。
「おそらくマウリアは講和の仲介の代償としてこちらにも色々と要求してくるでしょうが」

「うむ」
「それへの対処ですね。おそらくは貿易や通商で何かと有利にな条件を要求してくるでしょうが」
　これは当然のように考えられた。連合側もそれは読んでいたのだ。
「平和を取り戻させたことへの報酬としてな。それが狙いだろう」
「他にもあるかも知れませんが」
「外交や技術のことでな。だが我等に直接関係があるのは貿易や通商だ」
「はい」
「そこをどうするかだな。さて、何を言ってくるか」
「関税の大幅な引き下げはまず確実でしょうね」
　ウォーレは述べた。
「只でさえマウリアはこれを不満に思っていますし」
「まずはそれか」
「そして紅茶等農産物の完全自由化」
　実は国によってはマウリアの商品を自由化していない国もあるのである。かってロシアと宝石に関して揉めたことがあるがこうした摩擦もよく起こっている。
「中央政府として要求してくるでしょう」
「中央政府としてはその国に対して通達することだけしかできないがな」
「おそらくその国にも言ってくるでしょうな、これに関しては」
「マウリアのものが合わない者もいるだろうがな、こればかりは」
　ワンプスは少し苦い顔を作ってこう言った。農産物は食べ物がかなりの割合を占める。食べ物は舌で味わう。舌に合わなければどうしようもないのだ。当然マウリアの食べ物が合わない者も連合には多い。むしろかなりの割合でそちらの方が多いと思われる。
「そういう問題ではないですから」
　ウォーレは冷静な様子でこう述べた。
「問題は売れるかどうかです」

「食べ物でもこれは変わらないか」
「はい。まあ多少はこちらの舌にも合わせてくるかも知れないですが実はこちらも」
「マウリアだからな」
この言葉にはかなりの警戒があった。
「はい」
「普通にマウリアの味のままで出してくるかもしれないな。むしろそちらの方が可能性は高いな」
「ですかね、やはり」
「それは君も予想しているのではないかね」
「はい、まあ」
彼は答えた。
「それが彼等の流儀ですから」
「まるで異次元だからな、あそこは」
ワンプスは今度は難しい顔になった。
「何をしてくるかわからないところがある。今回も然り」
「あらゆるパターンを想定していきますか」
「まずは今回の講和への条件に関してだな」
「はい、早速想定に入ろうと考えております」
彼は述べた。
「問題はこれからですから」
「そうだ、宜しく頼むぞ」
ワンプスは信頼する腹心として彼に対して声をかけた。
「まずは彼等のことについて調べなおしてくれ」
「はい」
「それから我々のこともな。そうすれば容易に想定できてくるだろう」
「わかりました、それでは」
「うむ、頼むぞ」
商務省も対策に入った。そして彼等も彼等で動きはじめたのであ

った。
連合は戦争とは別のものに関する比重が多いと言えた。これは彼等が攻める側であり、また戦局が有利なことも大きかった。だがエウロパではそうはいかなかった。

## 第十六部第三章　講和への道その十二

「首相」
首相の執務室に総統補佐官であるアランソが入って来た。
「補佐官」
「御客様ですが」
彼女は顔をあげたペーチに対してこう述べた。いつもの様に冷たささけ感じられる硬質の声であった。
「御客様」
「はい、マウリアからの」
「マウリアから？」
ペーチはそれを聞いて怪訝そうな顔になった。
「わざわざマウリアから来たのですか」
「はい」
「大使館からではなく」
「どうやら。如何致しますか」
「お通しして下さい」
彼は言った。
「何の件が気になります」
「わかりました」
アランソは相変わらず無機質な声で応えた。メタリックな響きが彼女の冷徹さをさらに浮き立たせていた。
「それではどちらのお部屋で」
「応接室がいいでしょう」
ペーチは述べた。
「そこで。ゆっくりとお話したいです」
「わかりました、それでは」
「はい」
こうして部屋も決まった。ペーチは席を立ちすぐに応接室に向か

った。アランソは先に使者の方へ向かっている。
彼女は女性の官僚と共にいた。そして彼女と共にそのマウリアからの使者を案内していた。
「こちらです」
「どうも」
温かい赤を基調とした部屋にその使者は案内された。もうそこにはペーチが待っていた。
「ようこそ」
ペーチは務めて明るい声を出した。そして使者に顔を向けたのであった。できるだけ疲れた様子は出さないようにしていた。
「私がペーチです」
「どうも、はじめまして」
使者はピガーチャルであった。彼はマウリアの礼である合掌をした。それから再びペーチに顔を向けた。
「バイラヴァ＝ピガーチャルです」
「ピガーチャルさんですか」
「はい」
彼は頷いた。
「ではお話をしたいのですが。宜しいでしょうか」
「ええ、こちらこそお願いします」
「はい」
こうして二人は席に着いた。そして話をはじめた。話の内容はペーチにとっては思いもしないものであった。
「講和」
「そうです」
ピガーチャルは頷いた。
「貴国と連合の戦いの仲裁をしたいと思うのですが」
「左様ですか」
ペーチはその言葉に内心の驚きを隠しながら応えた。
「率直に申し上げますが」

「はい」
ペーチは応えた。
「今の状況は貴国にとって危機的だと思うのですが」
「それは否定しません」
嘘はつけなかった。今の連合の状況は最早誰が見ても明らかであった。
「苦しいのは事実です」
「やはり」
「ですが。我等は負けるつもりはありません」
できるだけ強い声を出した。
「最後の一兵まで戦う所存です」
「そう、負けない為にですね」
「その通りです」
ペーチはまたしてもピガーチャルの言葉に応えた。
「では私達はそれに協力致しましょう」
「ご冗談を」
だがペーチはその言葉を一笑に伏した。
「私とて世の中のことは知っているつもりです」
彼は言った。できるだけ明るく笑ったつもりであった。だがその笑いは生気のないものであった。そして残念なことに彼はそれに気付いてはいなかった。自分では自分のことに気付かないこともままある。それが悲劇につながることもままある。何故悲劇が書かれてきたか、それは実際に有り得ることでもあるからだ。壮麗なギリシア悲劇もまた神々、英雄というアクター達を取り除けばそこには等身大の人間達が残る。むしろ神々も英雄もそうした言葉の飾りを取り払ってしまえば人間があるだけだ。全ては人の世の中にあるものなのだ。悲劇にしろ。

## 第十六部第三章　講和への道その十三

「貴国は。連合の同盟国ではないですか」
「はい」
ピガーチャルもそれは認めた。
「その貴国が。どうして我等に協力して下さるのか。おかしいではないですか」
「おかしいとは思いませんが」
しかしピガーチャルは平然とした様子でこう返す。この時ペーチの顔も見ていた。
「同盟を結んでいるのは事実ですが貴国を助けてはならないとは何処にも書かれてはいません」
「まあそうですが」
外交は一筋縄ではいかないものだ。これはペーチもわかっている。そして彼はまた言う。
「我々は貴国の敗北を望んではいないのです」
「それは何故」
「秩序の為です」
ピガーチャルはここで背筋を伸ばしていた。あえて自身を大きく見せながら述べたのであった。
「秩序の」
「はい。今人類社会は四つの勢力に分かれています」
「ええ」
「我々と貴国、連合、そしてマウリア」
彼は言葉を続ける。
「四つの勢力に分かれております。サハラはサハラで今は三つの国がありますが」
「はい」
「この秩序が崩れると。それだけで人類社会が不安定なものとなり

ます。我々はそれを防ぎたいのです」
「だからこそ講和を考えておられるのですね」
「そうです。おわかり頂けたでしょうか」
「ええ」
ペーチは頷いた。この時ピガーチャルは彼の首筋も見た。
「我々のことを考えておられるのは」
「そうです、我々は貴国のことを心配しているのです」
あえて善人の仮面を被ったようなことを言った。
「このままでは取り返しのつかないことになるので」
「取り返しのつかないことですか」
それを聞いて目が沈んだ。今のエウロパの状況を考えると杞憂ではないからだ。
「そうなる前に。そして敗北前に」
「講和を結べというわけですね」
「はい。きりのいいところで終わらせるのです」
ピガーチャルは言う。
「如何でしょうか」
「そうですね」
ペーチは少し考えてから述べた。
「私としてはそれで異存はありません」
「左様ですか」
「総統はどう御考えでしょうか」
「ラフネール総統も同じ御考えです」
彼は述べた。
「では講和ですか」
「はい。この際オリンポスにまで入れてはなりません」
「その前に講和せよと」
「そういうことです。宜しいでしょうか」
「はい」
ペーチは頷いた。

「それではそうしたことで話を進めましょう」
「ですね。それでは今後共宜しくお願いします」
「こちらこそ」
二人は手を握り合った。これで会談は終わった。ピガーチャルは話を終えると滞在先のオリンポスのあるホテルに戻った。
そのホテルはオリンポスにおいては格式の高いホテルとして知られている。ゴシック様式を模した荘重な造りでありステンドガラスがホテルを色彩っている。ピガーチャルはそこのホテルの最上階のロイヤル＝スイートルームで部下の一人と共にいた。
この部屋もまたゴシック様式であった。彼はステンドガラスに描かれた北欧の神々の姿を見ていた。見ればそこには雷神トールが巨大な毒蛇ヨルムンガルドを釣り上げようとしている姿が描かれていた。北欧神話の中の有名なエピソードの一つであった。他にはフレイやバルドルが描かれている。彼はそれを見てふと呟いた。

## 第十六部第三章　講和への道その十四

「彼等の神も滅ぶつもりはないだろう、今はな」
「はい」
部下はその言葉に頷いた。
「確かこの北欧の神々は滅ぶが」
「そのようですね」
ラグナロクのことである。これは北欧神話の最も有名なエピソードの一つである。神々は世界の滅亡の時に宿敵である巨人族と最後の戦いを行う。そして皆滅ぶ。この話のことである。
「今は滅ぶ時ではない。ラグナロクはまだ先のことだ」
「そうなのですか」
「私はそう思う。少なくともそれはまだまだ先のことだ」
「はい」
「エウロパの滅亡もな。形あるものはいずれは滅びるが」
その言葉にはマウリアの哲学が表われていた。
「少なくとも今ではないということだ」
「だからこそ我々は講和に動いた」
「そうだ」
彼は頷いた。
「今はな。エウロパには滅びてもらっては困るのだ」
「人類社会のバランスの為に」
「連合は只でさえ巨大だ。さらに巨大になってもらっては困る」
「そういうことですね」
「そうだ。おそらく連合もエウロパを滅ぼすつもりはないだろうしな」
「そうなのですか」
「私はそう見ている」
ピガーチャルは述べた。

「エウロパの人口は一千億だ」
「はい」
「これに対して連合の人口は三兆を優に越えている。外交や戦争のうえでの力関係では最早話にもあらない程開いている」
「ですね」
これもまた言うまでもないことであった。
「だが内政ではどうか」
「内政」
「一千億といえば国家としてはかなりの大国だな」
「はい」
「連合でもそこまでの人口を持っている国家は数える程しかない。そう、数える程だ」
「国力もですね」
「そうだ」
それを聞いたピガーチャルの口元が笑った。
「エウロパは国家としてはかなりの力を持っている。連合の中でも侮れない程にな」
「では連合を仕切ろうとする大国達が併合に反対すると」
「大国達だけではない」
彼は言った。
「小国もだ。彼等とてまた大国が一つできるのは好ましいと思わないだろう。只でさえアメリカや中国、そしてロシアといった国々の専横や独断に悩まされているのだからな」
「悩みの種をわざわざ抱える者もいないということですか」
「そうだ。そして中央政府も望まないだろうな」
「併合をですか」
「さっきも言ったが一千億だ」
ピガーチャルはまた人口のことを口にした。
「エウロパと連合の関係は仇敵だった」
「ええ」

これもまた言うまでもないことであった。彼等は月での争いからシンガポール条約、そしてブラウベルグの出現から今まで対立を続けていた。それは一千年以上も続いており今に至るのである。
「そしてその仇敵を自分達の中に入れる。そうすればどうなるか」
「一千億の不穏分子をですか」
「連合にとって深刻な問題となるな」
「はい」
「だからだ。併合はない」
「左様ですか」
「ここまで問題が予測されるからな。彼等とて愚かではない」
連合のこともエウロパのことも見極めていた。そうでなくてはこうは言えない。
「では今回は限定戦争なのですか」
「双方共きりのいいところで終わらせたいのだ。だからこそ我等が動く」
「そうでしたか」
「それにここで力を見せておきたい」
「力を」
「この戦いは人類史上最大規模の戦争になる。それを終わらせれば我々の名もあがる」
「マウリアの」
「国家にも名声は必要だということだ」
彼はことさら冷静な声で述べた。
「国威もな。これは現実に見てそうだろう」
「あまりそれにこだわり過ぎると墓穴を堀りかねませんが」
「連合の大国達の様にな」
声は今度はシニカルになった。これは先にも出た連合の大国であるアメリカや中国、ロシアといった国々を指しているである。彼等は自分達のプライドやそういったことに対しては非常に敏感であり口喧しい。その為にしばしば墓穴を掘ったりもしている。それを皮

肉ったのだ。
「彼等程こだわる必要もあるまい」
「はい」
「だが我等の器に合うだけの名声もまた必要だ。それ以上の名声や国威を求める必要はないが」
マウリアにも名声は必要だということである。彼が言いたいのはそこであった。

## 第十六部第三章　講和への道その十五

「その為にも今回の講和は成功させなければならない」
「わかりました」
「よいな。その為にはある程度裏の手段も使う」
「はい」
「そして話を進めていく。それでいくぞ」
「わかりました。それでは」
その言葉にこくりと頷いく。
「とりあえず今で話を一旦休む」
「休むのですか」
「急がなければならない話だが焦ってはならない話でもある」
ピガーチャルの顔は笑みになっていた。
「そうそうせかせかすることはない。いや、あってはならない」
「はあ」
「私も君も働いてばかりで疲れただろう。食事にしよう」
「食事」
「私は大使館にいた頃ここのホテルで食事を摂ったことが何度かある」
彼の顔は笑みになっていた。
「美味いぞ、ここの料理は」
「美味いのですか」
「そうだ。それにサービスもいい」
彼は言う。
「値段も相当なものだがそれに見合うだけのものはある。どうだ、一食」
「それでは御相伴に預からせて頂きます」
実はカーストのうえではピガーチャルは今目の前にいる部下よりも上である。この時代の考えではカーストが違っていても食べるも

のは同じでもよいし同席してもよい。この辺りは改善されていると言えた。だがカーストが上の者は下の者に対して金等を払わせてはならないとも考えられていた。だからこそこの部下は今こう言ったのである。
そしてこれはピガーチャルもわかっていた。だからこそ今の言葉を問題とはしなかった。
「あちらの料理でいいか」
彼は素っ気無くこう問うてきた。
「はい」
部下もそれでいいとした。
「是非共。異国では異国のものを食べるべきですから」
「たまには祖国のものが食べたくなるがな」
「その時はその時です。それではメニューは」
「私に任せてくれ。それではルームサービスで頼むぞ」
「はい」
ピガーチャルがフロントに電話を入れた。そして暫く経ってチャイムが鳴った。
「どうぞ」
扉を開けるとルームサービスのボーイであった。食事を銀の豪勢な台車に入れて持って来ていた。
「お待たせしたした。ではこちらに」
「うん」
部屋の中央にあるテーブルの上に料理を置いていく。見れば見事なフルコースであった。
「これはオリンポスで採れたオマール海老のポタージュであります」
まずはスープについて説明をはじめた。
「オマール海老と貝を入れまして」
テーブルに着く二人に対して説明をはじめる。
「そしてホワイトパンプキンでこしたのです」
ホワイトパンプキンとはエウロパのオケアノス星系の名産である。

外見も中身も真っ白のカボチャでありその味は甘く、非常にまろやかである。連合でもマウリアでも採れるがエウロパのものが最も有名なのである。
「そしてシーフードサラダですが」
説明を続ける。シーフードを基調としたメニューでありメインディッシュもそうであった。これまたエウロパ名産のかなり巨大な舌平目を料理したものである。オリーブでステーキにしたものであった。
ワインは当然ながら白である。デザートはケーキであった。シーフードのメニューに合わせたかのように穏やかなケーキであり生クリームを使ったものとなっている。あまり甘みもきつそうではなかった。
「それではお召し上がり下さい」
「はい」
一旦ボーイを下がらせる。そして二人は食事をはじめた。
「オマール海老ですか」
部下はポタージュを見てまずこう言った。
「食べたことはないのか」
「いえ、ありますが」
彼は答えた。
「ただ。こうしてエウロパ風の料理で食べたことはないです」
「そうか」
「カレーで食べたことはありますが」
所謂シーフードカレーである。マウリアでは非常にポピュラーな料理の一つである。といってもマウリアのカレーであり連合、とりわけ日本のカレーとは全く違うのであるが。
「他ではないのか」
「そうですね。ちょっとないです」
部下は答えた。
「こうした食べ方でも美味しいのでしょうか」

「エウロパは素材を重要視する料理だ」
ピガーチャルは不安げな部下に対してこう述べた。
「元々のオマール海老の味が好きならば問題はないだろう」
「そうですか」
「オマール海老自体は好きなのだろう？」
「はい」
部下は頷いた。
「海老は好きです」
「ならば問題はない。安心して食べればいい」
「わかりました」
「ただ、エウロパの料理は素材を大事にする」
またそこに言及してきた。
「香辛料はあまり利かしていないからな。かなり薄い味だぞ」
「それは知っています」
彼はまた答えた。

## 第十六部第三章　講和への道その十六

「何度か食べたことがありますので」
「最初は驚いただろう」
「はい」
苦笑いを浮かべながら言う。
「味がしませんでしたから」
「そうだな、味がない」
これは実はピガーチャルも思ったことであった。
「私も最初はそう感じたよ」
彼は笑いながら述べる。
「エウロパの人間はこんなものを食べているのか、と」
「このスープにしろ薄味ですね」
「うむ」
二人はスープを飲んだ。ポタージュの濃厚でまろやかな味が口の中を覆っている筈だがこれはあくまでエウロパの者が感じることである。彼等はそうは感じなかった。やはり薄いと味わっていた。
「だが素材の味はわかる」
「はい」
「そして後で口の中を香りが漂い、それが心地良さを与えてくれる。それがエウロパの料理だ」
「同じメニューを出しても連合のものとは全く違いますね」
「君は連合にも言ったことがあるのか」
「はい」
彼はその問いに頷いた。
「あそこの料理は全般的に味が濃いですね」
「調味料の数も多いしな」
「アメリカの料理も中国の料理もかなり味が濃いと思いました」
「うむ」

「タイにしろベトナムにしろ。韓国料理はかなり辛かったですね」
なお韓国料理は連合のグルメ達の間でも好評である。
「メキシコ料理で驚いていましたが」
「メキシコ料理も辛いな」
「はい」
彼は頷く。
「我々の料理より辛いのではないでしょうか」
「だが彼等にしてみれば我々の料理の方が辛いらしい」
「わかりませんね」
「味覚の違いだろうな。どういう理屈かわからないが」
「はあ」
「韓国料理よりも辛いと感じるらしい」
「いや、それはちょっと」
彼はそれを否定しようとする。
「幾ら何でも」
「だが彼等はそう感じている。これは事実だ」
「妙な話ですね」
「確かにな。しかし本当のことなのだ」
「ううむ」
彼は首を傾げさせた。
「味覚というものは。わかりませんね」
「うむ」
「ロシア料理は油っこいですし」
「寒い場所が多いからな、あの国は」
「そして酒も強いです。マウリアであそこまで強い酒はないです」
ロシアといえば酒というイメージはこの時代においても変わってはいない。ロシア人達は人類社会で最も酒を好む人間として知られている。
「あれも連合独特だな」
「はい」

スープを飲み干し、サラダを食べていた。海草を口にする。ドレッシングはフレンチである。やはり連合のそれと比べるとかなり薄味だ。なおマウリアではフレンチドレッシングは食べられない。そもそも生野菜を食べること自体があまりないことなのである。

「全体的に連合の個性の強さが出ていますね」

「そうだな」

なお連合に言わせればマウリアの個性の強さは連合の枠に入りきれないらしい。あまりにも複雑で独特な文化であるというのが彼等の意見である。これもマウリアに言わせれば異論がある。

「ただ、日本の料理は違いましたね」

「和食だな」

「はい、あれは味が薄かった」

彼は素直にその時の感想を述べた。

## 第十六部第三章　講和への道その十七

「今食べているエウロパの料理とそこは似ていますね」
「そうだな」
これはピガーチャルも同意であった。
「あれも最初食べた時は驚いた」
「生の魚や貝が普通に出て来ますからね」
「刺身だな」
「あと少し変わったフライですか」
天麩羅のことである。
「和風のスープも」
言うまでもなく味噌汁のことである。
「粘りの強い米も。かなり変わっていますね」
「連合の料理の中でも独自の地位にあるらしいぞ」
「そうでしょうね」
これはすぐに想像がつくことであった。
「醤油をかなり使いますし」
「そして山葵だ」
それを口にしたところでピガーチャルの顔が歪む。
「あれには参った」
「私もですよ」
部下も応える。
「いきなり鼻と脳味噌を攻めてきますからね。あれには参りました」
「ああ」
「和食は薄い味だと思っていたら。あの様な隠された兵器があったとは」
兵器とまで言う。
「参りました。それに和食も後からきます」
「そう」

ピガーチャルはここで白ワインを口に含んだ。
「口の中でな。香りと味が漂う」
「はい」
「案外日本という国の特色を出しているのかもな、あれは」
「日本のですか」
「外見は穏やかそうだが実は煮ても焼いても食えない」
連合でもよくある日本評である。
「そして後になって来る。日本らしいと言えばらしいな」
「そうかもしれないですね」
「まだエウロパの外交の方がわかりやすい、そういう意味では」
「はい」
「料理はまた違うが」
サラダ等を食べ終え次にはメインディッシュである舌平目のステーキに入った。
「同じ魚を使っていてもな。ところでだ」
「何でしょうか」
「このヒラメには一つ面白い話があるのを知っているかな」
「面白い話」
「そうだ。かってフランスにタレーランという外交官がいた」
「ナポレオンの下での外務大臣ですね」
「知っていたか」
「名前と外交の実績だけは」
彼は答えた。ピガーチャルの言う通りタレーランはフランスの第一帝政期の外務大臣である。優れた話術と知性、教養、洞察力で知られフランス外交を一手に担った。なおナポレオンに対しては忠誠心はなかった。警察大臣であり共に帝国の両輪であったフーシェとここは共通していた。ちなみにこの二人は互いに憎み合っていたことでも知られている。そしてナポレオンが倒れるとウィーン会議においてナポレオンに責任を擦り付けることでフランスを救った。お世辞にも綺麗な方法ではなく彼自身も清潔な人物ではなかったがそ

れでもフランスの為に動き、フランスを救ったのは事実なのである。
そうした意味で不世出の外交官であった。
「そうか。だがヒラメの話は知らないか」
「申し訳ないですが」
「だが仕方無いか。我が国ではヒラメはあまり食べられない」
「はあ」
「少なくともエウロパや連合のようにしては食べないからな」
マウリアではやはりカレーかカレー風に味付けをして食べる。だから知らないのだろうというのがピガーチャルの見方であった。
「タレーランはある時二尾の立派なヒラメを手に入れた」
彼は話をはじめた。
「彼はそれを宴席で客に出すことにした。だがまずは最初の一尾はあえて床に落とさせた」
「客達は落胆したでしょうね」
「そうだ。そしてそれが彼の狙いだった」
「狙い」
「彼はその後でもう一尾出してきたのだ。そしてそれを見た客達は落胆から立ち直って気付いた。これはタレーランの演出なのだと」
「演出ですか」
「そうだ、演出だ。タレーランは演出の効果をわかっていたのだ。そしてそれは彼の外交においても存分に発揮された」
「成程」
「ナポレオンという男は外交は不得手だった。だがその時のフランスの外交を支えていた」
「忠誠心はなくとも」
ナポレオンもそれはわかっていた。度々裏切られている。だが彼を使うしかなかったのである。タレーラン以上の外交官はこの時代欧州においてもまずいなかったからである。
「そうだ。私の言いたいことがわかるな」
「外交における演出ですか」

「優れた外交官はそこも考えなくてはならない」
ピガーチャルは述べる。
「それも考えていくといい」
「わかりました」
こうして二人はヒラメのステーキを口に入れながら話を続けた。
後にこの若い部下はマウリアきっての外交官、美食家として名を馳せるようになる。その名をイブン＝ラオ。彼はマウリアの舌に革命を起こした男であった。

# 第十六部第三章　講和への道その十八

ピガーチャル達は心地良い食事を楽しんでいた。だがそうはいかない者も当然ながらいた。
ペーチは執務室で食事を採っていた。質素で知られる彼はこの日はオートミールだけであった。
「それだけで宜しいのですか？」
それを見た首相府の官僚の一人が声をかける。
「オートミールだけでは。腹持ちしないかと」
「いや、これで充分だよ」
だが彼はそれ以上を求めなかった。
「朝だしね。これだけでいい」
「左様ですか。ですが」
「昼のことは昼のことだ」
彼はそう言って官僚の言葉を遮った。
「違うだろうか」
「いえ、そうですがメニューの関係で」
「一品でいいよ」
「またですか」
「うん。それだけでいい」
彼の食卓もまた質素なことで知られている。こうして一品だけを頼むことも多いのだ。
「それとパンと。食べ易いものを頼むよ」
「わかりました。ワインは」
「ワインもいいな。それよりもミルクだ」
「ミルクですか」
「うん。それだけでいい」
「あの、首相」
あまりにも質素なので官僚は思わず声をかけた。

「何か無理をされていませんか？」
「無理？何をだい？」
観察力がかなりいい者ならここでペーチがその顔を一瞬だけだがギクリとさせたことに気付いたであろう。だがこの官僚はそこまでの観察力は持ってはいなかった。
「いえ、節約されているとか」
エウロパではこうした食事も自分持ちである。士官の食事と同じ扱いである。
だがペーチの家は然程貧しくはない。むしろ裕福な方である。それを考えるとどうにも納得できないものではある。
「何でもないよ。ただ」
「ただ？」
「最近あまり食欲がなくてね。それだけだ」
「左様ですか」
「うん」
ペーチはここでにこやかな顔を作った。しかし彼は同時に重大なミスを犯していた。
食欲がない、この言葉には重大な意味を含んでいた。しかしペーチも官僚もそれには気付いてはいなかった。これはペーチにとっては幸いであった。
「卿が気にすることじゃない。安心してくれ」
「わかりました、それでは」
「うん」
これでその官僚は部屋から消えた。ペーチはそれを見届けた後でまた食事に戻った。ボソボソとオートミールを食べ続けている。
「つっ」
その途中で腹を抑えた。
「どんどん酷くなっているな」
腹を見ながら呟く。
「だがもう少しもってくれよ。もう少しでいいんだ」

彼は腹に言い聞かせるようにして言った。
「私はまだやらなくちゃいけないことがあるからな」
オートミールを食べることは止めた。そして器を机の端に置き職務に入った。書類の山が彼を覆っていた。そしてそれは不吉に彼を包みこんでいた。

# 第十六部第四章　停戦その一

停戦

クロノス星系での激闘は最後の段階に入っても続いていた。エウロパ軍は第四の防衛ラインから一歩も引くつもりはなくそこで連合軍を迎え撃たんとしていた。

「退くことは敗北だ！」

提督達の叱咤が飛ぶ。彼等はその背後に機雷まで敷いていた。そしてそれこそが彼等の決意の表れであった。

エウロパ軍は連合軍を見据えていた。そして連合軍もまたエウロパ軍を見据えていた。

「あの戦意は見事なものだな」

コレッリがエウロパ軍の整然とした陣を見て言った。

「そして戦意だけではない」

「陣も。見事なものですね」

傍らにいる大将の中将の者が言った。コレッリの乗る巨大戦艦コヨルショウキを旗艦とする第一八七四艦隊の司令官であるエディタ＝ポップ中将である。淡い金髪に淡い青の目を持つ小柄な女性だ。少し太めだが顔立ちは童顔で可愛いらしい。軍人というよりは学校の先生の方が相応しいような容姿であった。かってロシアにあった国の一つコミ共和国出身である。

「そうだな」

コレッリはポップの言葉に頷いた。

「エウロパの貴族達がここまでやるとは正直思わなかった」

彼はまた言った。

「戦意も能力も。かなり高い」

「我々が思っていたのと実像は違いましたね」

「それは否定しない」

彼はやはりエウロパ軍を見据えていた。

「貴族といえば特権を振りかざし、威張るだけの能無しだと思っていたが」
確かにそうした者もいるかも知れなかったが少なくともコレッリの目に入るエウロパの貴族達は違っていた。
「どうやら違うようだな。私の認識違いだったようだ」
「それは私もです」
ポップもそれに応えた。
「エウロパの貴族達は勇敢です。そして優秀です」
「うむ」
「容易ならざる相手です。これは報告にも度々書いておりますが」
実際に連合軍の報告ではエウロパ軍、とりわけ貴族出身の上級指揮官達の健闘と高潔さを述べるものが多い。これはポップの艦隊でも同じことであった。
「彼等は立派です。そして今も立派に戦っております」
「敵ながら見事、と言うべきだな」
「はい」
「だがここで破らなくてはならないのもまた事実だ」
コレッリはまた言った。
「これに関して参謀総長から策がある」
「策ですか」
「そうだ。司令」
彼はポップに顔を向けてきた。
「はい」
小柄なポップはそれを受けてコレッリを見上げた。コレッリは整ったマスクだけでなくスラリとした長身も併せ持っているのだ。だからこそ女性にももてるのだ。
「艦隊の火力を一点に集中させるようにな」
「一点に」
「そうだ。細かい指示は私が下す」
彼は言った。

「いいな。一点集中だ」
「わかりました。それでは」
「うむ」
連合軍は攻撃に入ろうとしていた。それは全軍でありジワリジワリと敵に近付きながら攻撃に備えていた。ブレスの艦橋ではマクレーンと劉がそれを見据えていた。
「いよいよですな」
「はい」
マクレーンは劉の言葉に頷いた。
「最後ですか」
「そしてオリンポス入城です」
劉は言う。
「この戦いに勝てば。それはもうすぐです」
「もうすぐというわけですな」
「そうです。気持ちの整理はよいでしょうか」
「無論です。落ち着いております」
その言葉に嘘はなかった。マクレーンは冷静な様子であった。
「それでは射程に入ったならば」
「攻撃開始です」
彼等は言う。連合軍はそれを受けてかジワジワとエウロパ軍との距離を狭めていく。だがエウロパ軍はそれでも陣を退こうとはしなかった。

## 第十六部第四章　停戦その二

「来るな」
シュヴァルツブルグは迫り来る連合軍を見ながら一言言った。
「最後の戦いだ。覚悟はいいな」
「はい」
幕僚達がその言葉に頷く。
「どちらにしろ退くことはできない。あれを見よ」
モニターが切り替わる。そこには機雷陣があった。
「あれがある以上我等に下がる道はない。ただ最後の一兵まで戦うのみ」
「はっ」
「私も一兵卒となって戦おう。この戦い、全ての者が兵士である」
「兵士」
「そう、兵士だ」
彼は言った。
「貴族であろうとも兵士となれ。よいな」
「兵士に」
「戦場にいる者は全て兵士だ」
兵士といえば平民である。貴族出身の兵士、下士官は存在しない。だがあえて戸惑う彼等に対してシュヴァルツブルグはこう述べたのである。
「全て、な」
「階級に関係なく、ですか」
「その通りだ」
彼は答えた。
「私がここで言っているのは階級の問題ではない」
「はあ」
「戦場にいるかどうかなのだ。その意味で私も兵士だ」

「閣下も」
「兵士という言い方に抵抗があるのならば騎士だ」
彼は言い換えた。
「騎士ならばわかるだろう。騎士とは何だ」
「戦場で剣を手にする者です」
部下の一人が答えた。
「そうだな。我々は今から全員剣を手にせよ」
「剣を」
「全ての者が剣を手にするのだ。そして連合の戦士達を退けよ、よいな」
「ハッ」
「それでは」
「このワレンシュタインも最前線に出る。いや、最早全ての艦が最前線にあると心得よ。最早我等に護りはないのだ。我等こそが護りなのだ」
「我等こそが」
「このエウロパのな」
軍とは何の為にあるのか。国民を、国家を守る為である。彼はそれを忘れてはいなかった。決してロマンシズムだけでものを見る軍人ではなかった。これは彼が軍務大臣という国の要職にもあるからであろうか。そうした意味で彼は政治家でもあったのだ。
「わかったならば行くぞ」
「はい」
部下達は一斉に答えた。
「剣を持ってな」
「わかりました」
ワレンシュタインは戦場に向かった。彼等に続いてエウロパ軍は剣を手にした。その剣を連合の大軍に向けていたのであった。
それに対して連合軍は槍を構えていた。長い槍をである。
「全軍攻撃用意」

マクレーンは指示を下す。
「照準合わせよ。よいな」
「了解」
部下達がそれに応える。そして全軍整然と動く。その動きは決して速くはないが統制のとれたものであった。彼等は一隻一隻に至るまで完全に駒と化していた。
「ポイントは二十」
「ポイントは二十」
「それぞれの軍の目標を狙え。よいな」
「了解」
指示が続く。軍とは軍における編成の単位である百個艦隊から成る。十個艦隊で軍団、そして十個軍団、すなわち百個艦隊で軍となる。彼は今それを基準として指示を下したのである。
「第一軍照準完了」
それぞれの軍から報告が入る。
「第二十軍照準完了」
これで全てであった。二十の軍からの報告が終わった。

## 第十六部第四章　停戦その三

「よし」
マクレーンはそれを全て聞いて頷いた。
「行くぞ」
その右腕をゆっくりとあげる。
頂点に達した。同時に連合軍の緊張も。
沈黙が場を支配していた。誰も何も言わない。ただマクレーンの動きを注視していたのであった。誰かが唾を飲み込む音が聞こえてきた。
「撃て！」
マクレーンは叫んだ。それと共に腕を振り下ろす。それは大きく、派手な動きであった。
「撃て！」
命令が復唱される。それと同時に連合軍から槍が放たれた。それは一直線にエウロパ軍の陣地に襲い掛かった。
光の壁、ミサイルの嵐であった。それがエウロパ軍に向けて襲い掛かる。二十の牙がエウロパ軍の陣地をえぐった。そして大きな傷を負わせた。
多くの艦が攻撃を受け炎に包まれる。中には光の壁の中に消え、ミサイルの嵐に飲み込まれて消えた艦まである。彼等は大混乱に陥ろうとしたかに見えた。
「落ち着け！」
だがここでローズが叫んだ。
「今をこらえずして何時こらえる！」
彼はこう叫んで全軍を叱咤した。
「よいな、ここはこらえるのだ」
「こらえる」
「そうだ」

彼の言葉を聞いてまず彼の直率する艦隊が落ち着きを取り戻しはじめた。
「この程度の攻撃。今まで何度もあった筈だ」
「確かに」
このクロノスの戦いだけでそうであった。連合軍は全艦隊、全艦艇による一斉攻撃、艦載機による総攻撃、さらに巨大戦艦による斉射とその物量をふんだんに使って攻撃を加えていた。今の一点集中攻撃も簡単に言ってしまえば同じであった。
「だからこそだ。落ち着くのだ。よいな」
「わかりました」
部下達は頷く。それは全軍に広まっていった。
エウロパ軍は何とか落ち着きを取り戻した。そして多大な損害を受けながらも連合軍の一点集中攻撃にも耐え陣を維持していたのであった。
「何とかもったな」
シュヴァルツブルグはそれを見て言った。
「ローズ司令の功績だ」
「はい」
それにエヴァが答える。
「とりあえず一撃目は凌ぎましたね」
「うむ」
「すぐに次が来ますが」
「それも我々の射程外から」
見れば連合軍は二撃目に入ろうとしていた。射撃の間隔も短かった。ここにも艦の性能の差がよく現われていた。射撃の間隔も連合軍の方が遥かに短いのである。連合軍の火力が大きいのは装備だけではないのである。
「どうされますか」
「散陣をとれ」
彼は命じた。

「一点集中攻撃にもそれで対処する。よいな」
「わかりました」
彼等はまた陣を換えようとしていた。だがこれも連合軍にとっては想定されたことであった。
「予想通りですな」
劉は眼前の敵軍の動きを見て呟いた。
「我々の一点集中攻撃にかなり戸惑っております」
「表面的にはそうでなくとも」
それにマクレーンが応えた。
「損害も多大なようですし」
「今ので二十個艦隊近くがダメージを受けたようです」
それに対する報告が入った。
「今の敵軍の数から察するとかなりのものと思いますが」
「その通りだ」
劉はそれに対して頷いた。
「かなり大きいな、そのダメージは」
「ですが戦意は衰えておりません」
「流石と言っておこう。だがそれだけで戦争はできない」
彼は落ち着いた声で述べる。
「今度は一斉射撃を仕掛けるぞ」
「予定通りですな」
「はい」
劉はマクレーンの言葉に対してにこりと笑った。不思議なことに穏やかな笑みであった。
「全ては予定通りです」
「はい」
「敵は散陣を敷いているようですがそれが果たして通用するか」
「お手並み拝見といったところですな」
「そういうことです」
「それでは。全軍攻撃用意」

マクレーンは指示を出した。
「一斉射撃だ。よいな」
「了解」
「それが終わったならばまた一点集中攻撃を加える。そしてそれによりできた穴の中に突入するぞ」
その後は艦載機で決着をつけるつもりであった。全て連合軍の基本戦術通りであった。

## 第十六部第四章　停戦その四

「よいな」
「了解」
次の次まで戦術が決定された。連合軍の全軍の砲門が再び開かれた。
「撃て！」
「撃て！」
また攻撃が放たれる。エウロパ軍はそれを各艦の回避運動で防ごうとする。その為の散陣であった。
「かわせ！」
「回避運動に移れ！」
それぞれの艦で指示が下る。流石に皆必死の顔であった。
これにより何とか生き延びた艦もあった。だが炎と化して乗員と共に消えた艦もあった。無数の槍と弓矢が陣をくぐり抜けた。それによる傷も決して小さなものではなかった。
しかしそれでも彼等は踏み止まっていた。そして戦場においてなおも敵を見据えていた。
「この程度で・・・・・・！」
彼等は心の中で呟いた。
「我等は崩れはせぬ！」
「見事と言うべきだな」
それを見たリバーグが呟いた。
「私だったらもう撤退を命じている」
「撤退をですか」
「命がある限り何度でも挽回の機会はあるからな」
やはりここでも連合の価値観が出た。リバーグの欠点を挙げるとすればやや器が小さく神経質の傾向があるところと自身の置かれた境遇の価値観に対して無批判であるというところであろうか。無論

だからといって軍人として恥ずべき行動に出る人物ではないが。
「私はそう考えているのだが。彼等は違うな」
「何としてもオリンポスを渡すつもりはないようです」
「誇りか」
彼はジェリオの言葉にそう返した。
「我々にも誇りはあるつもりですが彼等の誇りとは全く違うようですね」
「そうだな」
彼は頷いた。
「その誇りがどちらに出るかはまだわからないが」
「どちらかとは」
「いい方向か悪い方向かだ」
彼は述べた。
「そのうちのどちらか。まだわからないな」
「左様ですか」
「とりあえずは脱帽したいものを感じるが」
「はい」
「それで戦争に勝てるというわけでもない。戦争はそんなにはっきりしたものでもない」
彼はある意味においてまたしても連合的なことを述べた。何事も最後までどうなるかわからない、連合にはこうした考えもあるのだ。
「彼等の場合は。どうなるか」
「見せてもらうとしますか」
「うん。では次の攻撃に取り掛かろう」
「一点集中攻撃に」
「そうだ。そしてそれからは」
「艦載機による攻撃ですね」
連合軍の得意攻撃の一つであるのは言うまでもない。
「予定通りな。それで決めたい」
「わかりました」

彼等も攻撃に入ろうとしていた。そして実際に艦隊が動いていた。またもやマクレーンの腕が挙がった。
「撃て！」
「撃て！」
一点集中攻撃が浴びせられた。だが今度は前程の損害はない。やはり散陣を敷いているからであった。
だがそれに構わず連合軍は次の動きにかかった。今度は突撃である。
「全軍突撃！」
「了解！」
砲艦とミサイル艦の援護射撃を受けながら一斉に前に出る。その間も攻撃は続けられる。先頭には巨大戦艦がいた。やはりこのティアマト級巨大戦艦なくして連合軍はなかった。

## 第十六部第四章　停戦その五

「敵軍が突進して来ます！」
ワレンシュタインの艦橋にオペレーターからの報告が入った。
「数は」
「二千個艦隊！全軍です！」
「よし、これが最後の戦いだ！」
シュヴァルツブルグはそれを聞いてすぐに叫んだ。
「覚悟はいいな」
「ハッ！」
艦橋にいる部下達は一斉に敬礼をして応えた。
「接舷してでも敵を倒すぞ」
「将に剣を握ってですな」
「そうだ。私にも剣はある」
彼はここで己の腰にある剣に目をやった。元帥以上の者が帯びることを許されている剣である。
「これで。一人でも多くの敵を倒してやろう」
「及ばずながら我々も」
「うむ。ヴァルハラで会おうぞ」
彼等は覚悟を決めていた。そして今将にぶつからんとしている敵を見据えた。だがここで両軍の間に誰かが入った。
「！？」
両軍の全ての艦のモニターが切り替わった。そしてターバンの男が姿を現わした。
「はじめまして、皆さん」
「！？マウリアの者か」
「私はマウリア外務省のマータリ＝クベーラと申す者です」
「マータリ＝クベーラ」
「何故マウリアの者が」

「我々は貴方達にお渡しするものがあってこちらに参りました」
見れば両軍から離れた場所に一隻の船があった。彼はその中から通信を送っていたのである。
「平和を」
「平和だと！？」
「どういうことだ」
両軍はそれを聞いてそれぞれの言葉で囁き合う。戦闘は完全に終わっていた。
「これ以上の戦闘は無意味であると思います。ここは講和されてはどうでしょうか」
「講和」
「聞いたことはありますか？」
「いえ」
マクレーンも劉も首を傾げさせていた。
「無論疑われるのならば確認をとられてもいいです」
「フォーゲルヴァイデ中将」
「ハッ」
モンサルヴァートは通信主任参謀であるフォーゲルヴァイデ中将に声をかけた。
「すぐにオリンポスに確認をとってくれ」
「わかりました」
彼はそれを受けてすぐに通信室に入る。シュヴァルツブルグはそれを石の様に強張った顔で見送っていた。
「どう思うか」
そしてエヴァに問うてきた。
「彼が嘘を言っているとは思えません」
エヴァはそれにすぐに言葉を返した。
「さもなければわざわざマウリアからここまで来ないでしょう」
「そうだな」
それはわかっていた。だがあまりにも突然のことなので話が掴め

ないでいたのだ。
「では本当の話なのだろうか」
「まだ確かなことはわかりませんが」
「それはこれからわかることだな」
「はい」
エヴァもある程度は予想していたが確固たる判断は下せないでいた。そして暫くしてフォーゲルヴァイデが艦橋に戻ってきた。
「どうだったか」
「間違いありません」
フォーゲルヴァイデは敬礼の後答えた。
「我がエウロパ中央政府は講和を受諾しております」
「そうか」
シュヴァルツブルグはそれを聞いて頷いた。
「本当のことだったか」
「そしてどうやら連合中央政府も。間違いはないようです」
「ならば我等はそれに従おう」
彼は言った。
「全軍に告ぐ」
そして命じる。
「停戦だ。よいな」
「はっ」
こうして彼等は戦闘を停止した。これは連合軍も同じであった。だが彼等は行動は少し違っていた。彼等は祖国から遠く離れている。だから彼等はクベーラに直接確認をとることにしたのである。
「クベーラさんと仰いましたね」
「はい」
クベーラはマクレーンの言葉に頷いた。彼等はモニターを通して話をしていた。
「講和とのことですが」
マクレーンが問う。

「これは中央政府も合意しているのでしょうか」
「勿論です。今そちらに連絡が届くと思いますが」
「連絡が」
「閣下」
ここで通信室からブレスの通信長が艦橋に入って来た。

## 第十六部第四章　停戦その六

「講和のことか」
「はい、こちらに」
ファックスで一枚の書類が送られてきていた。マクレーンはそれを受け取る。見れば確かにクベーラの言う通りであった。
「ふむ」
「間違いありませんな」
劉もそれを見た。そして彼はこう言った。
「おわかり頂けたでしょうか」
「はい」
マクレーンは答えた。
「間違いありません」
「左様でしょう。では停戦に合意して下さいますね」
「わかりました。それでは」
彼はそれに従った。そして全軍に指示を出す。
こうしてクロノスにおける両軍の戦いは終わった。参加兵力は連合軍約二千個艦隊、総兵力約四十億。対するエウロパ軍は三百五十個艦隊、総兵力六億。エウロパ軍は最終的には四重の防衛ラインを敷き、テューポーンという切り札まで投入しながらもそれ等をことごとく破られはしたが最後まで生き残ることができた。対する連合軍はその圧倒的な物量を駆使して攻撃を仕掛けあと一歩のところまで追い詰めながらも結局はその軍を壊滅させ、オリンポスに入城することはできなかった。
エウロパ軍の損害は兵力の二割に及び戦死者もかなりのものであったがそれでも生き残った。連合軍は敵をことごとく破りその損害は僅かなものであったが戦略目的は果たせなかった。結果として引き分けであるとの評価が為されることとなった。だがエウロパにとってこれは苦い引き分けであった。

「戦いはまだ続く」
シュヴァルツブルグは停戦が成った後のワレンシュタインの艦橋でこう呟いた。
「銃を持った戦いではなく政治での戦いがな」
そして掃海部隊にそれまで道を塞いでいた機雷の除去を命じた。
「オリンポスに帰るぞ」
彼は一言言った。
「とりあえずは宇宙での戦いは終わった」
「はい」
「だが。これからが正念場なのだ」
銀河にそう言い残した。そして戦場を後にするのであった。
戦いが終わった連合軍は集結していた。そしてブレスの会議室において次の行動について考えていた。
「ここに主力を置いておいても無駄に費用がかかるだけかと」
ロスアンヘルスが言った。
「ふむ」
マクレーンはそれを聞いて考える顔をした。
「停戦は成りました。一時退き身体を休めるべきです」
「場所はアルテミスがいいですね」
今度はケントゥンが述べた。
「あの場所に築いた中継地で骨を休めましょう」
「だがここにある程度の艦隊は残しておきたいな」
「そうだな」
それには劉が頷いた。
「では三百個艦隊程置いておくか」
「そうですな」
マクレーンはそれに頷いた。
「交代で。順次休ませましょう」
「はい」
「とりあえずはそれでいいかと。我々軍人の仕事はこれで終わりま

した」
「そう、後は」
マクレーンは言った。
「政治家の仕事です」
「はい」
連合軍の将達はその言葉に頷いた。そして矛を収めたのであった。
戦いを終えた連合軍はその大部分をエウロパ侵攻の第二の足掛かりとしていたアルテミスまで退きはじめていた。その中には連合のエースの一人であるトワンキンもいた。彼女は小柄な身体を紫の戦闘服で包んでくつろいでた。
「何はともあれこれで終わりね」
彼女は自分の部屋にいた。見ればその周りには何人かいた。
男もいれば女もいる。人数は彼女を入れて五人だ。その五人が何かと話をしていた。
「乾杯といきたいところだけれど」
「生憎艦内は禁酒ですよ」
「だからコーラやサイダーを出してるのよ」
青い戦闘服の若い男にこう返した。
「わかってるでしょ、ニシュ」
「確かに」
彼は笑ってその白い歯を見せた。彼はトワンキンのバンドのメンバーでドラムを担当している。名前はボリス＝ニシュ。クロアチア人で階級は一等軍曹である。
「けれど寂しいですね」
「まあそれは言いっこなしよ。アルテミスに帰ったら浴びる程飲みましょ」
「はい」
彼等はそれぞれ椅子に座って車座で話をしていた。その手にはそれぞれ炭酸飲料がある。トワンキンの言った通りコーラやサイダーで乾杯しているというわけである。

「けれどこれだけじゃ寂しいわね」
キーボードを担当しているニナ＝アビジャンが言った。金髪の黒人で階級は少尉である。彼女はコートジボアール出身である。
「やっぱり騒がないと」
「ところが艦内は無闇な騒ぎも禁止ですよ」
ニシュがそれに答える。
「残念なことに」
「連合軍というのは面白くない組織ね」
「紳士たれ、がモットーだからな」
ベースのサン＝チャウクが言った。長い顔を持っている。彼はミャンマー出身である。階級は中尉であった。
「それは仕方のないことだ」
「私には仕方のないことには思えないけれどね」
トワンキンは不満げに返した。

## 第十六部第四章　停戦その七

「全く。お酒がなくて何が軍隊なのよ」
「大尉はまた飲み過ぎですよ」
「あんたには言われたくはないわ」
ニシュにこう返す。
「いつも浴びる程飲んでいるのに」
「けれどそれは艦の外でですよ」
しれっとして応える。
「私はメリハリはつける主義ですので」
「何処がよ」
「騒ぐのなら後で好きなだけ騒げるぞ」
「リーダー」
トワンキンは重厚な男の声にその顔を向けさせた。そこには大柄なアジア系の顔を持つ白人がいた。
彼はヨシフ＝グレゴリアン。タタール共和国出身で階級は少佐である。ギターを担当しておりこのバンドにおいてはリーダーも務めている。
「アルテミスでな」
「だからそれはわかってるわよ」
トワンキンは口を尖らせて言い返す。
「派手に騒ぐわよ、その時は」
「用意はできているな」
「用意って」
「ここに俺達が集まっていればそれでわかると思うが」
「まあね」
トワンキンはリーダーの言葉に頷いた。
「次のライブはどうしようかしら」
「戦勝記念といきたいですね」

「そうだな」
グレゴリアンは頷いた。
「ここは派手にいきたいところだ」
「それまで喉の調整はしておくわ」
「そうだな、頼む」
「思いっきり歌いたいからね、こっちも」
「最近歌ってなかったからな」
これは戦争の影響である。流石にこれは無理だった。
「あんたのベースも。蜘蛛の巣でも張っていなかったでしょうね」
「安心してくれ、手入れは怠らなかった」
「それは安心」
「キーボードも。練習だけは毎日やっていたわ」
「ドラムはまあ任せて下さい。ほら、俺って天才だから」
こうした言葉を出すミュージシャンは多い。彼もその一人というわけだ。
「天才ってどういう意味か知ってる？」
「さて」
トワンキンの言葉にとぼけてみせる。
「エジソンが言った言葉だけれど」
言わずと知れたアメリカの発明王である。
「はい、何でしたっけ」
「天才とは九十九パーセントの努力と一パーセントのひらめきなのよ。わかるかしら」
「俺は九十九パーセントのひらめきと一パーセントの努力だって思ってましたよ」
しれっとして応える。
「それが天才ってやつじゃないんですか？天才は練習なんかしないんですよ」
「馬鹿を言え」
グレゴリアンがそんな彼を嗜める。

「そんなことで上手くなるものか」
「おっと、藪蛇」
「少しでもいいから練習はしておけ。わかったな」
「わかってますよ。リーダーは厳しいなあ」
「趣味でもやるからには徹底的にやらなければな」
彼は言った。
「それが俺達のバンドの方針だった筈だ」
「そうね」
頷くトワンキンの顔が真剣なものになった。
「それだからこそ派手にやるんだしね」
「そうだ」
「そういうことだから。ニシュ、あんたも練習しときなさいよ」
「ちぇっ、何か俺ばっかり言われるなあ」
「言われたって懲りないでしょ」
「ははは、確かに」
彼は笑って答えた。どうやら彼が一番何かと問題児であるらしい。
「では明日またミーティングを行おう」
「了解」
リーダーの言葉に頷く。
「それではな、また明日だ」
これでとりあえずは解散した。トワンキンは皆がいなくなると部屋を出た。そしてそのまま娯楽室に向かった。そこでビリヤードでも楽しむつもりだったのだ。

## 第十六部第四章　停戦その八

「ねえ」
ここで彼女に声をかける者がいた。
「あんたがトワンキンじゃないの？」
「誰？」
その声に顔を後ろに向けた。話し方から見るとどうやら階級は同じであるらしい。彼女はそれを受けてこちらもタメ口でいくことにした。そしてその声の主に問うた。
「私はドゥーニャ＝ポロディナよ」
「ああ、あんたがそうだったの」
トワンキンは目の前にいる自分と同じ位の背丈の金髪碧眼の女性を見て呟く様に言った。そして彼女に言葉を返した。
「今度の戦いではかなりやったそうじゃない」
「まあ少しはね」
ポロディナは彼女の言葉に笑みで以って返した。
「向こうのエースをちょっとね」
「確かラインマル＝フォン＝ハイデルシュタットを撃墜したんだっけ」
「そうよ」
満面に笑みをたたえてきた。どうやら自慢らしい。
「かなり手強かったけれどね。やったわよ」
「けれど喜ぶのは早いわよ」
「どうしてかしら」
二人は並んだ。そして並びながら話に入った。
「だって彼生きているから」
「あら、そうなの」
「ええ。捕虜になってるわよ。今アポロン星系にある捕虜収容所に送られているそうよ」

「そうだったの」
「そのうちリターンマッチってことになるかもね」
「じゃあその時にまた撃墜してあげるわ」
それを意には介さない。何ら臆することなくこう述べる。
「何度でもね」
「気が強いわね」
「そうじゃなきゃタイガーキャットのパイロットは務まらないと思うけれど」
「全く。私にも最初からタメ口だしね」
「年齢も階級も同じなのだけれど、あんたとは」
「よくそんなことまで知ってるわね」
「有名人だからね、あんたは」
彼女は言った。
「まあ私程じゃないけれど」
「今度のことで有名になったって言いたいみたいね」
「いいえ、その前からよ」
「何かやったの？」
「フォルクラムって知らないかしら？」
「フォルクラム？」
トワンキンはそれを聞いてその大きな目をまた少しだけ大きくさせた。
「確かロシア軍にあった航空機のショーチームじゃなかったっけ」
「そうよ、今は中央軍の中のショーチームの一つだけれど」
「そこがどうかしたの？」
「知らないかしら、その中にいた一輪の百合」
ポロディナは笑いながら問うてくる。
「有名だったのだけれど」
「それがあんただったって言いたいわけね」
「そういうこと。わかってもらえたかしら」
「そういえば聞いたことがあるわ」

トワンキンは言った。
「何でもとんでもないジャジャ馬がいるってね」
「あら、御言葉ね」
彼女は笑いながら言葉を返した。
「私みたいにおしとやかな女はそうはいないわよ」
「聞いた話じゃおしとやかとは全然違うらしいけれど」
流石は外交上手で知られるＡＳＥＡＮの一国ラオス出身だけあった。やりとりは見事なものであった。だがポロディナも強引な外交では連合一とまで謡われるロシア出身である。負けてはいなかった。
「こう見えても家ではレディーだったんだから」
「何処が。牧場で馬を乗り回していたそうじゃない」
「あら、よく知ってるわね」
「愛馬はアルキードっていうそうね」
「御名答」
「それで競技にも出ている。ロシア軍じゃ乗馬でも有名だったそうじゃない」
ロシアでの馬の名前としてはありふれたものの一つである。
「乗馬は軍人の嗜みの一つだから」
「何時の話なんだか」
「そういう心構えでいろってことなのよ」
これは流石ロシア人の言葉であると言えた。ロシアはかつて強力な騎兵を持っていたことで知られている。コサック騎兵。かつては河川を利用した賊であったが後に馬を使う者達となっていた。ロシアの数多くの戦いに参戦しその強力さを謳われた。日露戦争においても恐れられ、日本軍は彼等の存在を心から恐れていたと言われている。
「少なくともロシアではそう教えられてきたわ」
「それで銀河の騎兵となったのね」
「中々詩的な表現じゃない。伊達にバンドで作詞までやってるわけじゃないのね」

「知ってたの」
「あんたも有名人だからね。知ってるわよ」
トワンキンに対して楽しそうな笑みを見せてきた。彼女も話をしていてそれを楽しんでいるようである。
「何かお互いのことをよく知ってるということなのね」
「そうね」
「それじゃあ知ってるついでに親睦を深めない？」
「艦内ではお酒は駄目なのはわかってるわよね」
「勿論よ。寂しい話だけれど」
ポロディナはこう言って残念そうな顔をした。

## 第十六部第四章　停戦その九

「私にとっては。連合軍の規律で一番過酷なものだわ」
「ロシア人は皆言うわね」
「でしょうね。ロシアでは艦内でも飲んでよかったのよ」
これは本当のことだ。しかもあのウォッカである。
「まあロシアだからね」
「何か引っ掛かる言い方ね」
「ロシアからお酒を抜いたら何が残るのよ」
「文学と音楽が残るわ」
ロシア人のそうした分野への造詣の深さは定評がある。これは血であるとまで言われている。陰気なイメージの強いロシア人は酒を豪快に飲み陽気に音楽や文学を作り上げていく。ただし完成する作品は暗いものが多い。それもまたロシアである。俗にロシア人は一人一人は素朴で善良であると言われている。この辺りは一人一人も個性が極めて強い傾向にあるアメリカや中国とは違う。そして陰気だとも言われる。ただしこれは酒が入ると急に陽気になる。つまりいつも陽気であったりする。
「それもお酒がなかったらあそこまではなっていないんじゃないの？」
「バレエとかフィギュアスケートはそうはいかないわよ」
「この前バレリーナが休憩時間に飲んでるのテレビで見たわよ。あれは何？」
「ビールでしょ？ビールはお酒じゃないから」
そういう認識である。これは昔から変わらない。ソ連時代に整備兵がウォッカを飲んで整備しているのを見て驚いたパイロットがせめてビールにしろと言うとあの口煩く剣呑な政治将校がウォッカはロシア人の命だと言い返して突っぱねたことがある。それがロシアだ。

「凄い理屈ね。連合でそんなこと言えるのロシアだけよ」
「ロシアじゃワイン以上をお酒っていうのよ。わかる？」
「わからないわね」
ラオスの酒はあまり強くないものが多い。トワンキンも酒はあまり強くないものを多量に飲むタイプである。だからポロディナのこの発言には内心かなり呆れている。
「ロシアだけの話だから」
「ところが連合軍ではビールも駄目」
「当然ね」
「そこだけはエウロパ軍が羨ましいわね。彼等はどれだけ飲んでもいいのでしょう？」
「それどころか子供だって飲んでるわよ」
「ロシアでも子供でもビールは飲んでるわよ」
これまた事実だ。連合でここまで酒を飲むのは流石にロシアだけである。当然ながら一人当たりの消費量も国家全体の消費量も連合の中で図抜けて多い。
「だからロシアの基準を言わないの」
「ちぇっ、面白くないわね」
「それでどうするの？」
トワンキンは酒の話が終わったところで尋ねてきた。
「親睦を深めるって言っても。何をするのよ」
「あんた娯楽室に行くつもりなのよね」
「そうよ」
「ゲームでもしない？格闘ゲームとかさ」
「格闘ゲーム」
それを聞いたトワンキンの目が光る。
「あたしそっちでも自信あるからさ。対戦でさ」
「まあいいけれど」
トワンキンも対戦格闘ゲームは嫌いではない。むしろかなり好きだ。休憩時間にはビリヤードと共によくやる。最近はある会社のポ

リゴンの３Ｄゲームが好きである。
「それじゃあそれで親睦を深めましょう」
「負けないわよ」
「こっちこそね」
何だかんだ言って二人はもう意気投合していた。そうしてアルテミスに帰るまでの息抜きの時間を二人で楽しむのであった。とりあえず彼女達の戦いは終わっていた。

## 第十六部第四章　停戦その十

クロノスでの戦いが終わっていた頃ニョルズでの戦いも終わっていた。義勇軍もエウロパ軍も互いに離れ停戦についての話を聞いていた。
「停戦、か」
モンサルヴァートはそれを聞いて一言呟いた。
「とりあえずは我々の責務は終わったわけだな」
「後は銃を持たない戦争というわけですね」
「そういうことだな」
ベルガンサにこう返す。
「総統や首相のされることとなる。我々の仕事ではなくなった」
「はい」
「後はお任せするとしよう。だが我々もまだ終わりではない」
「といいますと」
「何かあればまた動かなくてはならない」
その言葉が鋭くなった。
「何かあればな」
「講和が上手くいかなかった時でしょうか」
「その可能性もないわけではない。そして双方の軍が暴発する危険もな」
「暴発」
「特に我が軍で起こった場合は致命傷になる」
その言葉には偽りも装飾もなかった。ただ事実を述べたまでである。だからこそ迫力があった。
「わかるな。軍の統制はこれまで以上に気をつけよ」
「わかりました」
ベルガンサは強張った顔で頷いた。
「それでは」

「うむ」
モンサルヴァートは頷いた。だがこれで話は終わりではなかった。
「それにしても」
「何でしょうか」
「犠牲の大きい戦いだったな」
「はい」
ベルガンサの顔は強張ったままであった。
「今までになり戦いだったな」
「ですね」
「今までは我々は攻める側だった」
サハラへの侵攻がそれであった。攻撃する側であり戦力もおおむねエウロパの方が上であった。だが今回の戦いはそれが違っていた。敵の方が遥かに多かったのである。
「それが変わると。全く戦い方も違っていた」
「我が軍にとっては辛い戦いでした」
「否定できないな。このリェンツィも損傷が激しい」
その通りであった。幾多の戦いを潜り抜けてきたこの艦であるが今回の戦いではこれまで以上に敵の激しい攻撃を受けてきた。撃沈こそしなかったがそのダメージはかなり深刻なものであった。
「それが何よりの証拠だ」
「他の艦もかなりの損傷を受けておりますし」
ベルガンサのこの言葉も事実であった。傷を受けていない艦なぞないと言ってもよい状況であった。それが何よりもこの戦いのエウロパ軍の傷を表わしていた。
「失った艦、そして将兵も多いです。これからの再建の苦労がしのばれます」
「再建しなければならないのは軍だけではない」
モンサルヴァートの言葉はさらに深刻の色を深めた。
「エウロパという国自体も。再建の必要がある」
「エウロパもですか」

「そうだ。これから長い間我々には冬の時代が続くぞ」
彼は言った。
「そしてそれに耐えなければならない。わかったな」
「はい」
「ではオリンポスに帰ろう」
その冬が支配するオリンポスに。
「武力による戦いは終わった。後はテーブルの上での戦いだ」
「はい」
「全軍撤収」
モンサルヴァートは全軍に対して命じた。
「オリンポスに帰還するぞ、よいな」
「ハッ」
こうしてニョルズに展開していたエウロパ軍もまた軍を退けた。
そしてオリンポスまで帰るのであった。彼等は堂々とはしていたがその先にあるものは決して穏やかなものではなかった。そのことは彼等自身が最もよくわかっていることであった。戦いはまだ終わってはいなかったのだ。

## 第十六部第四章　停戦その十一

オリンポスに退く軍の中にタンホイザーがいた。彼はグングニルの艦橋から遠く離れていく敵の大軍を見据えていた。
「倒せはしなかったか」
黒い艦隊はそこに傲然と立っていた。まるで勝ち誇る様に戦場に立っていた。
「無念だな」
「仕方がありません」
だがそれは部下の一人により宥められた。
「敵の数が多過ぎました」
「数の問題ではなかったが」
「いえ、結局はそうではないでしょうか」
「普通はそう考えるな」
タンホイザーは言った。
「だが違うのだ。数で負けていようとも勝つことは幾らでもできる」
「それは」
「頭脳だ」
彼は一言で言った。
「頭脳さえあれば。どんな相手にも勝つことはできる」
その言葉には絶対の自信があった。
「私は今までそれで勝ってきた。だが今回はそうはいかなかった」
そして言った。
「それが無念だ。勝つことができなかったのがな」
「連合軍の戦術には何か見出されましたか」
「マニュアルだな」
まずはそう述べた。
「戦術自体は実にオーソドックスだ。基本からはみ出してはいない」
「はい」

「そして誰でも使える様な戦術だな。誰でも勝てる戦術だ」
「誰でもですか」
「二十世紀型の戦術だ」
そして言った。
「二十世紀型」
「機械化された戦術ということだ。あの時の軍は機械化が進められていたな」
「はい」
部下は頷いた。
「軍はその末端に至るまでユニットと化していた。そして全ては厳密な統制の下に動く。決まった動きをし、損害は軽微に抑える」
「将に連合軍の在り方そのものですね」
「そうだ。そしてそれがあの連合軍だ。彼等は機械だ」
「我々は人を相手にはしていなかったということでしょうか」
「そうした意味ではそうだ」
彼は言い切った。
「彼等は全てマニュアル通りに動く。勝つ為、損害を出さない為にな」
巨大戦艦も砲艦やミサイル艦による一斉射撃も駆逐艦や巡洋艦による魚雷攻撃も戦艦による砲撃も、最後の空母による艦載機での攻撃もそうであった。そしてそれを圧倒的な数で行なう。それが連合軍の戦術であった。
「彼等は実戦経験がなかった」
「はい」
「精々宇宙海賊位だったな。テロリストや」
「連合建国以来そうでしたな」
「正規軍同士の戦いは絶えてなかった。将にはじめての戦いだった」
「ですね」
タンホイザーの言葉は続く。
「訓練度もそれ程ではない。そうした軍を勝たせる為、損害を出さ

ない為の戦術だ」
「だからこそマニュアルだったのですか」
「補給等を確固たるものとしてな。そして彼等は我々との戦いに赴いた」
「その結果彼等はここまで達した」
「一度も負けてはいない。そうした意味で非常に完成されたマニュアルだ」
「はい」
「だが」
ここで口調が変わった。
「マニュアルはマニュアルだ。それ通りにはいかない場合もまたある」
「そこを突くおつもりだったのですか」
「機動力を活かしてな。そして集中攻撃を仕掛けて」
事実彼はそれで善戦していた。モンサルヴァートもまたそれに気付いており巧みに機動戦術を展開していると言えた。だがそれでも勝利には届かなかった。
「崩していけた。今言っても仕方のないことだが」
「我々ができることにも限界があったということですか」
「人は万能ではない」
タンホイザーの言葉は短かったがそれでもかなりの深さがあった。
「神ではないのだからな。それは仕方のないことだ」
「はあ」
「気付いていても。できるとは限らない。そうした意味でいい勉強をさせてもらった」
「ですがそれをできるようにするのもまた」
「わかっている。今度彼等と剣を交えることがあれば」
最早銀河の中にその漆黒の姿を消そうとしている敵軍を見据えながら最後に言った。

## 第十六部第四章　停戦その十二

「斬る。必ずな」
タンホイザーも戦場を離脱した。彼と共に軍の後詰を務めるギルフォードもまた戦場から離脱しようとしていた。
「さて」
彼は艦橋で撤退する軍の統率にあたっていた。そしてそこでその流麗な目で全軍を見渡していた。
「剣はこれで収められた」
「はい」
「次にはペンだが」
「どうなると思われますか」
「おそらく剣で行われるものよりも激しいものとなるだろう」
彼は述べた。
「それに勝利を収めるかどうかでエウロパの運命が下る」
「エウロパの」
「連合の軍門に下るか、それとも」
彼は言う。
「誇り高く生きるか。どちらを選ぶか」
「無論生きる道を」
艦橋にいる彼の部下達は答えた。
「それ以外に何がありましょうか」
「連合の者達の前に膝を屈する位なら死を選びましょう」
「我等は負けたわけではないのですから」
「そうだな」
これこそ彼が待っていた言葉であった。それを聞き内心ニヤリと笑う。
「我々は負けてはいない」
彼は復唱するように言った。

「決してな。敵をオリンポスまで着かせなかった。すなわち戦略目的は達した」
「はい」
詭弁と言えば詭弁になる。だが部下達はそれには気付かなかった。気付くにはあまりにもギルフォードの言葉は彼等の心の隙間に入り、そして刺激していた。人間の心にはプライドというものがある。特にエウロパの貴族達にはそれが強い。ギルフォードはそれがわかっていた。だからこそ彼等の心を攻めているのだ。
「我等は彼等に劣ってはいない。むしろ優れている」
「優れているのですか」
「数、そして装備では圧倒的な差があったな」
「はい」
「だが負けはしなかった。これが何よりの証拠ではないのか」
彼は部下達の心に直接言う。
「数が同じならば彼等を圧倒していた。違うか」
「ですがそれは」
「言っても詮無きことかと」
連合とエウロパの物量の差は千年前からのことである。エウロパはそれを熟知したうえで国家戦略を立てていたのである。反目してはいたが表立って手を出すことはしなかった。あくまで工作に終始していたのである。この戦争の発端となったバチカンの利用もその一環であった。
「詮無きことではない」
だがギルフォードはそれを否定した。
「考えてもみよ」
彼はまた語りかけてきた。
「我々は個々では彼等に勝っていた」
「はい」
「だが我々はこれで終わりなのか？」
彼は問う。

「といいますと」
「我々の力は限界かと聞いているのだ」
彼のその黒い目が妖しく光っていた。そしてその目で部下達を見回していた。
その目で見られると部下達も何も言えなかった。彼の言葉と目は彼等の心を覗き込んでいるようであった。それはカリスマと言うべきであろうか。だがそれ以上のものがそこにはあった。彼はそれで以って彼等を惹き付け、離そうとしなかったのである。魔性の力に似ていた。
「どうなのだ」
彼はまた問うてきた。
「まだやれるのではないのか」
「まだ」
「そうだ」
彼は言った。
「まだ力を出せるな」
「はい」
部下達は答えた。
「我々の力はこの程度ではありません」
その中の一人が言う。
「まだ。力を出せます」
「そうだな」
ギルフォードはその言葉に頷いてみせた。口元が微かに笑っている。
「我々の力はこんなものではない」
「その通りです。ですが」
「ですが・・・・・・何だ？」
異議を述べるかに見える部下の一人にその黒い目を向けた。
「我々の戦いは終わりました。それを今出すことは」
「誰が今かと言ったか」

ギルフォードは不敵に笑ってこう返した。
「私は一度もこの戦いで全てだとは言ってはいないぞ」
「では」
「そうだ。我々の戦いはこれからも続く」
彼は部下達の耳元で囁く様な言葉を出した。

## 第十六部第四章　停戦その十三

「これからもな。この戦いだけではないのだ」
「では」
「そうだ。我々は近いうちにまた戦いに入る」
それが何の戦いなのかはあえて言わなかった。だがその言葉には説得力があった。少なくとも人を納得させるものはあった。真実かどうかは別にして。
「その時には卿等の力が必要になる」
「はい」
「この戦い以上の力を見せて欲しい。いいな」
「わかりました」
部下達は応える。この時彼等は気付いてはいなかった。ギルフォードは総統ではないということに。だが彼等はそこに総統を見ていた。そう、今彼は総統になっていたのだ。
「では帰ろう」
ギルフォードは最後に述べた。
「戦場からオリンポスにな。そして槍を用意しておけ」
「はい」
「常に使うことのできる槍とな」
これがこの戦場における最後の言葉であった。ギルフォードはもう振り返らなかった。戦場を見ることはなかった。だがその目は戦場を見ていた。今までいた戦場とは全く違う戦場を。戦場は銃が飛び交い命のやり取りをする銀河だけとは限らない。それはテーブルの上においても行われることがあるのだ。それは政治という戦争である。
停戦は当然ながらサハラ義勇軍にも伝わっていた。彼等は敵が退いていくのを沈黙して見送っていた。
「意外な結末ってやつかな」

帰還したザーヒダンの言葉である。
「今度こそ徹底的にやり合うって思ったのによ」
「まあ仕方がないさ」
彼の所属する母艦の整備士であるバンダル少佐が言った。母艦の格納庫では収容された艦載機の整備が行われている。整備兵達が先任下士官の指示の下キビキビと動いている。若い将校達もいるが彼等はおおむね指示を先任下士官達に任せ自分達は監督にあたっている。これが軍の作業であり実際の現場は先任下士官達に任され将校は監督をしたりするだけである。だからこそよく軍は下士官によって動かされると言われるのである。とりわけ下士官の権限が強く階級も細分化されている連合においてはそうだ。連合軍において先任下士官とは絶対的な存在であるのだ。
本来サハラは違っていたが義勇軍は連合軍の中にありそのシステムに完全に組み込まれている。だから下士官の権限も強くなっているのである。それが今整備の段階になってはっきりと出ているのである。
「これは政治の話だからな。俺達はそれに従うだけだ」
「連合とエウロパの御偉方の間での話なんだろ」
ザーヒダンはそう悪態をつく。その周りでは帰還したパイロットがあれこれと話をしている。話している内容は人によって違うが皆停戦に関する話をしていた。

## 第十六部第四章　停戦その十四

「まあそう言うな」
バンダルはそう言って彼を宥めた。
「命があって何よりじゃないか」
「命が？」
「ああ。天国に行くのはまだ先にしたいところじゃないのか？」
彼に小さい子供がいることを知っているからこその言葉であった。
「今のところは」
「ヘッ、俺が死ぬ筈ないだろ」
彼はその言葉に軽い笑いで返した。
「俺が天国に行くのはまだまだ先の話だぜ」
「死なないっていうのか」
「そうさ。俺が死ぬのはもっと派手なところなんだ」
笑ったまま言う。
「もっとな。敵を倒して倒して倒しまくって」
「死ぬというわけだな」
「そういうことさ。少なくとも今じゃない」
「もっと派手な戦場でか」
「この程度の場所じゃあ死ぬのには相応しくないんだよ」
「困った奴だな、死ぬ舞台まで選ぶのか」
「その通り」
笑みが変わった。軽いものからニヤリとしたものになる。
「そこまで生きてやるさ。とことんまでな」
「わかった。じゃあその時まで精々派手にやりな」
「ああ」
「こっちも死ぬまで見ていてやるぜ。それでいいな」
「頼むぜ」
戦士達はそんな話をしながら戦争が終わったその時を過ごしてい

た。そしてその中には当然ながらマシュハド達もいた
¥のであった。
彼等はこの時艦橋にいた。そして少し感慨に耽っていた。
「終わったか」
「はい」
マシュハドの言葉にワフラが応える。
「何かいささか狐につままれた様な感じですが」
「連合の諺だな」
「はい」
ワフラはそれを認めた。
「確かかなり古い諺だったかと」
「狐か。何か連合の狐は我々が知っている狐とは違うな」
「どうやらその様ですね」
「魔力を持っているという印象があるな」
サハラでは狐はあまりそういう目では見られてはいない。頭のいい動物として知られてはいるがそれだけである。
「そして日本のあの首相を思い出す」
「ああ、あの人ですか」
ワフラにもそれが誰のことなのかすぐにわかった。言うまでもなく伊藤のことである。彼女はその頭の回転の速さと知識から『日本の女狐』『九尾の狐』等と呼ばれているのだ。連合の中でも特に頭の切れる政治家として知られ彼女に煮え湯を飲まされた者は多い。その為狐と呼ばれているのだ。
なおこの時代日本という国はよく狐だの猫だの呼ばれる。基本的に女性的な性格の強い国家であるとされその頭の回転の仕方がそういった動物を思わせることから言われている。なお女性的な性格を持つ大国はあまりないとされる。少なくとも米中露やブラジル、トルコ、ＡＳＥＡＮ諸国といった大国の中ではあまりない。
「サハラでも女が政治家をやっていることは多いがな」
「はい」

彼等は話し合う。
「だが。それでもあそこまで切れる政治家はいない」
「オムダーマンの首相はどうでしょうか」
「彼女でもな。あそこまではいかないだろう」
「左様ですか」
「手強いな、敵に回すと」
そしてこう述べた。これは冷静に見ている言葉である。政治は冷静に見なければ話にならない。何かを見失えばそれがすぐに全てを失うことになってしまうというのもままある世界なのである。
「味方ならば心強いが」
「そう、味方であればですね」
「敵だと思うか？」
「場合によっては」
その言葉は醒めていた。

## 第十六部第四章　停戦その十五

「日本は今のところ我々に対して好意的ですが」
「うむ」
国防長官である八条はその職務上彼等に対する配慮を忘れないのは当然であるが日本は彼等サハラ難民に対して連合において最も好意的な国として知られている。これは人間としての好意よりもやはり国益が絡んでいた。彼等によい避難所を提供することにより彼等の支持を得るつもりなのだ。概して日本の外交は善意により恩を売っておくというものである。これにより彼等は連合においてかなり高い人気を得ることに成功している。日本外交の伝統であるがそれを最も効果的に使っているのが伊藤である。彼女はそこに買収や弱味を握るといった影の外交も使う。女狐と言われる由縁であり綺麗ではないがそれでも非常に利益をあげていた。彼女は個人としては清潔だがそうした策も使う。政治家としては決して清潔ではない。だが日本の国益に貢献しているのも事実であった。
「下手に敵に回すとまずいですね」
「日本かイスラエルか」
マシュハドはふと呟いた。
「連合で危険な存在は。彼等の戦争は少し違うな」
「ですね」
「政治の戦争だ。それを一千年の間繰り広げてきた」
連合は決して一枚岩ではない。その中では常に様々な衝突があった。そして札束や謀略が飛び交った。表では手を組んでいても水面下では睨み合っていることもざらではない。武力を使わない戦争が連合の中での戦争である。負ければ国益を損なう。三百もの国がその国益をかけて戦っているのである。
「恐ろしいと言えば恐ろしいな」
「我等も同じですが」

「武力を使った戦争を繰り広げてきたからか」
連合とは逆にサハラでは武力を用いた戦争が行われてきた。これは命と国家の存亡をかけた戦いであり多くの国家が今まで滅んできた。サハラの歴史は興亡の歴史なのである。負けても国家は当然のように存続し国益も取り戻すことが可能な連合のそれとは全く違っているのである。
「はい」
ワフラはその言葉に頷いた。
「それを考えますと。同じです」
「結局我々も変わらないということだな」
マシュハドはこう言って苦笑した。
「信じる神は違えど」
「人は変わらないということでしょう」
「アッラーの思し召しはそこにあるのかもな」
「アッラーの」
「そうだ。そこから何を学ぶか」
彼は呟いた。
「我々に問うておられるのかもな」
「そうなのでしょうか」
「そしてこの戦いもそれの一環かも知れない」
「この戦いも」
「とりあえず我々は勝ったと見ていい」
彼等の基準ではこの戦いは勝利であった。連合やエウロパの考えではこの戦いは政治的に見てまだ続いており、勝敗はわからないのだがサハラの者の考えでは勝利であり、多くの領土が彼等のものとなるようなものであった。サハラにおいては敵を多く倒し、最後まで戦場に立っていた者が勝者となる。純粋と言えば純粋である。
「連合やエウロパの考えは知らないがな」
「勝ったのではないでしょうか」
「連合では違うようだ」

マシュハドもそれについて言及する。
「武力は政治の一手段に過ぎない」
「武力も」
「少なくともジハードではない」
「私は今までジハードだと思っていましたが」
エウロパの者達は言うまでもなく異教徒である。異教徒との戦いは聖なる戦い、即ちジハードであると定められている。実際にはサハラでは政治的なムスリム同士の戦いでも戦意高揚や宣伝、正統性の主張の為にジハードと位置付けられることが常である。だがそれでもジハードはジハードであった。
「違ったのでしょうか」
「彼等の考えにはジハードはない」
「神が違うからですね」
「そうだ。彼等にとっては聖戦というものはない」
マシュハドは言った。
「あくまで政治だけだ」
「何か寂寥としたものがありますな」
「だが彼等にとってはそれが自然だ」
彼は言葉を続けた。
「長い間連合の中では国家間による武力衝突なぞなかった」
「はい」
連合設立以来そうであった。彼等は国家同士の衝突で武力を用いることはなかった。あらかじめ領土を極めて広く決められていた為そこへの開拓に時間をかけなければならなかったのと退くことがあれば別の場所が無限に存在していたからである。そうした意味で連合は極めて幸運であった。サハラの様に中に向かうことがなかったからである。その何処まであるかわからない広大な未開発の星系が彼等の衝突を極端なものとしなかったのである。
「だからこそ政治が発達した」
「そういうことですか」

「そうだ。あったとしても海賊やテロリストへの対処だった」
それが連合最大の問題であった。それへの対策の為に中央警察、そして中央軍が設けられた程だからである。
「だから軍の人口に占める割合も小さいのですね」
「うむ」
数に惑わされるが連合軍の人口に占める割合は極めて小さい。三兆を優に越える人口のうちで九十億である。一パーセントにも満たないのだ。
「平和と言えば平和だったのでしょうか」
「海賊やテロリストの存在は大きかったがな」
「それはサハラにも多くおりましたが」
「ははは、確かにな」
マシュハドはその言葉に思わず笑ってしまった。実際にサハラの方がそうした輩は多い。これは戦乱が原因であった。
「それを考えるとやはり平和なのだな、連合は」
「その為でしょうか。正規軍の動きはお世辞にもいいものではありませんでした」
「彼等は長い間戦争を忘れていた」
彼は言う。

## 第十六部第四章　停戦その十六

「急にそれを思い出せるものではない」
「成程」
「まあ勝つことはできたからいいがな」
「ですね。損害も極めて軽微でしたし」
「あの訓練度でも勝つことができる軍隊か」
マシュハドは今度は別のことを口にした。
「中々難しいがな。よくできたと思う」
「はい」
「とにかく我等も勝った」
最早戦場には敵はいなかった。いるのは彼等だけである。
「これは事実だ。エウロパの者達に勝ったのだ」
「この日を皆夢見ておりました」
「うむ」
マシュハドはワフラの言葉に頷いた。
「サハラを追われて以来。遂にここまで」
「そうだな。私もだ」
こう応えてまた頷いた。
「長かった、本当に」
その目に熱いものが微かに宿った。
「今まで色々とあったがな。ようやくそれが報われた」
「ええ」
「しかも彼等の国の中で勝利を収めることができた。これ以上の喜びがあるだろうか」
「皆それを祝いたいでしょう」
「わかっている」
マシュハドは今度は笑みを浮かべた。にこりと穏やかな笑みになっていた。

「全軍に伝えよ」
彼は指示を出した。
「サイダーやジュースを出せ。そして駱駝の丸焼きもだ」
「駱駝の」
サハラにおける最大の御馳走とされる。その中には羊や魚、卵等様々なものが入れられている。婚礼の時に出される特別な料理である。
「そうだ、他に何か相応しい料理はあるか」
「いえ」
皆それは否定しなかった。
「将にそれが相応しいかと」
「他には。ないでしょう」
「そうだな。ではすぐに用意しろ」
「はい」
「サイダーもジュースもありったけ出せ。そして菓子もだ」
艦内では禁酒という連合軍の規律であった。彼等とて本心ではワインで祝いたい。だがそれは流石に適わなかったのである。
「あるだけ出すのだ。そして皆で祝おうぞ」
「はい」
「この勝利を。何にも換え難い勝利を」
「では皆で祝いましょう」
「うむ。当直員を残して全員自由行動とする」
彼はまた指示を出した。
「ではわしも行くか」
「司令」
だがそれはワフラにとって止められた。
「何か」
「料理ができるのはまだ先ですが」
「おっと、そうだったか」
言われてようやく気付いた。

「済まん済まん、あれは時間のかかる料理だったな」
駱駝を丸焼きにするうえにその中にも様々なものを入れる。先に述べたように鶏もあれば魚も卵もある。実に手間のかかる料理であり婚姻等の祝いの場において振舞われるものである。しかし婚姻というこれ以上にないハレの場を考えればこれは当然のことであった。サハラにおいては婚姻というのはとりわけ祝われるものだからである。富豪であればエウロパ貴族達のそれよりも春かに凄いものになる。
「ではゆっくりと待たせてもらうか」
「はい。それまでは勝利の美酒を味わいましょう」
「サイダーでな」
艦橋は明るいものとなっていた。彼等は勝利を収めたと感じていた。事実最後まで戦場に立っていたのは彼等であった。だがこれは剣による戦いが終わっただけであった。別の戦いがその幕を明けようとしていた。だがそれはもう軍人にとっては直接関係のない話であった。

# 第十六部第五章　剣は収められその一

剣は収められ

連合とエウロパの突然とも思える講和は当然ながら人類に衝撃を与えた。全ての国にいる者達がそれを聞いてそれぞれの考えを口にした。

「マウリアがやはり動いていたな」

連合のある巨大掲示板での書き込みである。

「前誰かこれを予想していたな」

「そういえばそうだったな。誰だったか」

書き込みが続く。彼等はまずそこから話をはじめていた。

「それ書いたの俺だ」

誰かがそう名乗った。

「あんただったのかよ」

「ああ、まさか当たるとは思わなかった。実際に連中が動いていたなんてな」

「マウリアだからな」

次にこの書き込みが出て来た。

「何してくるかわからんからな。無理もない」

「そうだな」

「何はともあれ講和になったんだな」

「ああ、戦争はこれで終わりだ」

これは彼等もわかっていた。

「俺達の勝ちか？」

「そうだろ？こっちは殆ど損害が出ていない」

結局戦死者は五千万程度であった。参加者の〇・五パーセントにも満たなかった。

「それに対してあっちは軍の四割は失ったんだろう？圧勝しゃないか」

「まあそうだな」
何人かはそれに納得した。
「オリンポスには入られなかったがな。勝ちって言えば勝ちだよな」
「そうだな」
これに納得する書き込みが書かれた。
「主な戦いには全部勝ってるしな」
「クロノスやニョルズのあれもか？」
「まあ勝ってるうちに終わったってことでいいんじゃね？」
こう返答が来た。
「実際勝ってたんだし」
「まあな」
「まさかこれだけ勝てるとは思わなかったけれどな、正直」
「ああ、それは俺も思っていた」
話は連合軍に移っていた。
「千年位外国とは戦争してなかったしな」
「それどころか中でもなかっただろ」
やはりまずはそこが言及された。
「それでまともに戦えるかな、って思ってたんだけれどな」
「勝てたな、それも圧勝だ」
「あの巨大戦艦のおかげかね」
「おいおい、ここは軍事板だぜ」
ティアマト級巨大戦艦について言及されたところでこう突っ込みが入って来た。
「まさかあの戦艦だけであそこまで勝てるとは思ってないだろうな」
「若しそうだとしたらあんた素人だな」
当然ここに書いている者のほぼ全ては軍には属していない。だがそれでも一応の知識はある。だからこう問うたのであった。
「まさか」
その書き込みで返事があった。
「そんな筈ないだろう？ここの住人が」

「じゃあ何でだと思うんだ？」
そしてまた問われた。
「うちがここまで勝てたのは。歴史的な大勝利だぜ」
「その大勝利の秘密は」
「まず補給なんじゃねえの？」
彼は答えた。若しかすると彼女かも知れないが。

## 第十六部第五章　剣は収められその二

「うちの補給はすっげえしっかりしてたからな。ガンタースからニーベルング、そしてアルテミスまでそれはしっかりしていたよな」
「ああ」
「まずそれが大きいだろうな。後はダメージコントロールか」
「そういえばそれも凄かったな、うちは」
それが書かれて返事の様にこの書き込みが続いた。
「大破している巡洋艦が数日で戦線に復帰したこともあったな」
「ああ、あれには驚いた」
「まさかとは思ったがな」
「中にいる乗組員も殆ど無事だったらしいからな。信じられん」
「あとうちはとにかく戦死者が少ないよな」
「それはあるな」
これにもまた賛成の意見が出た。
「敵と比べてな」
「それはまず奇襲とかを受けなかったからだろうな」
「偵察がしっかりしていたってことか」
「情報収集がな。それはもう折り紙付だろうな」
「敵の情報は全部筒抜けだったってわけか」
エウロパの敗因の一つだった。連合軍の情報収集能力はエウロパ軍のそれを遥かに凌駕していた。通信能力でもそうだが技術の差が出た結果である。
「そういうことだな」
「それで逆に先手を打ったことも多いしな。そっちもしっかりしていたってことか」
「その次でやっと数だろうな」
連合軍の物量について話が為されたのはかなり後であった。
「うちの数は確かに桁外れだけれどな」

「それは連中もかなり圧迫されていたな」
戦争は物量が大きくものを言うものである。その点においては連合に勝る勢力はないと言ってよい。
「押し潰したって形だな」
「それそのものだな」
「連中も軍は集められるだけ集めたみたいだけれどな。それでもうちにはかなわなかったな」
「戦争はやっぱり数だぜ」
これは確かに真理の一つだ。結局はこれに行き着く。
「結局一千億程度の人口で三兆のうちには勝てなかったってことだな」
「おい、三兆じゃねえぜ」
「違うのか？」
「もうすぐ四兆になるらしいぞ」
これは事実だ。連合の人口は増え続けている。四兆に達するのも時間の問題であるのは以前から言われていた。
「おい、また増えたのかよ」
「らしいな」
「そういや俺の女房も今度四人目産むな」
多産の連合らしい話であった。
「まだ二十七だってのにな」
「二十七で四人も子供産んだのかよ、あんたの奥さん」
「そういうあんたは幾つなんだよ」
「俺か？三十だよ」
彼は答えた。
「もうすぐ三十一になるけれどな」
「御苦労さん」
「その歳で四人も子供がいちゃ何かと大変だろ」
「いや、結構でかい農園にいるから。別にな」
「そりゃ何より」

「じゃあ一家で巧いバナナでも造ってくれ」
「うちはバナナはやってないぜ。マンゴーだ」
連合ではどの国でも非常によく食べられる熱帯の果物である。非常に甘酸っぱく、美味なことで知られている。
「じゃあマンゴーでいいさ」
「俺はキーウィも好きだけれどな」
「あんたニュージーランド人か？」
「おっ、わかったか」
「キーウィっつたらニュージーランドだからな」
ニュージーランド人にとってこの果物と羊は特別な意味を持っている。地球にいた頃からの彼等の側にある食べ物である。それは最早友人であると言って過言ではない。
「確かにあれは美味いな」
「身体にもいいしな」
「これはやってるのか？」
「ちょっとだけな」
その四児の父が答えた。
「ただ、メインじゃないんだ」
「そうか」
「まあ売れるんなら造るけれどな」
「頼むぜ」
「やっぱりニュージーランド人はそれか」
突込みが加わるいささかチャットめいてもきていた。
「じゃあ話を戻すか」
「ああ」
雑談を止めて話に戻った。
「装備はどうなんだ？」
今度は装備についての話であった。
「うちの装備は」
「それも文句なしだろ」

返事が書かれた。
「攻撃力も防御力も相当なものだったしな」
「おまけに種類も多かったしな。弱いのはスピードだけだ」
「それ位か」
「うちの軍は機動力はねえからな」
「まあそれは仕方が無い」
それに同意する書き込みが書かれた。
「こちらはそれは犠牲にしてるからな」
「その分他に回したからな」
「ああ。そのせいで生存能力が上がったんだろ」
「そうだったな。じゃあ別に気にすることもでもないか」
「そうだな。気にすることはない」
彼等、若しくは彼女等はこう書き込んだ。
「けどな」
そしてここで注釈が入った。

## 第十六部第五章　剣は収められその三

「どうなるかな、これから」
「講和のことか？」
「ああ。賠償金とか領土とかは手に入るのかな」
「確実なのはバチカンの処遇だろうな」
「バチカンのか」
「それだ。それが元で戦争になっただろう？」
「ステッラのあれからだったな」
　戦争の間は実はあまり省みられてはいない話であった。多くの者がまずは勝利を目指していて、それについて考えていたからだ。
「覚えていたか。まずはそれだな」
「ステッラか。何か懐かしい名前だな」
「ここではな。けれど専用のスレがあっただろ」
「あそこはもう過疎ってるぞ。しかもネタスレになってるぜ」
　実際にそうしたスレもあったりする。これはネット黎明期からのことだ。
「そうか。前はあんなに賑わっていたのにな」
「本人が死んだんだから仕方がないだろ。もうどうしようもないさ」
「残念なことだな、それは」
「まあここでは関係のない話だけれどな」
「戦いのはじまりは別にしてな」
「しかし一人のスパイが元でここまでの戦争になるとはな」
　だが実際にこうしたことは昔からあった。戦争とは往々にしてそのはじまりは些細なことであったりするものである。
「意外だったか？」
「意外って言えば意外かもな」
　それに返事が返って来た。
「あそこまで大事になるとはな」

「おい、何言ってるんだよ。スパイにしろ破壊工作にしろ重罪だろ」
すぐに返答が書かれた。
「充分戦争の原因になるぞ」
「そういえばそうか」
その言葉に頷く言葉が出た。
「実際にそれで連合に害が出ていたのだしな。戦争の理由としては充分だ」
「エウロパにとっちゃ藪蛇だったがな」
「藪蛇どころじゃないぞ」
「まあそうだな。自業自得ってやつかな」
「そうだな」
書き込んでいる者はそれに納得した。
「それでは話は戻ってバチカンだな」
「どう処遇するんだろうな」
「おおかたこちらにバチカン自体を移転させるんだろうな。これなら利用されることもなくなる」
「バチカンをか！？」
それを見て驚きの書き込みが為された。
「マジかよ」
「何だ、やけに驚いてるな」
「どうしたんだよ」
「いや、まさかと思ってな」
先程驚きの書き込みをした者から返事が返って来た。
「バチカンをか」
「何か信じられないか」
「ああ、バチカンだろ」
また同じ人物から書き込まれた。
「それが移るかね」
「前例はあるぞ」
すぐに返事が書かれた。

「教皇のバビロン捕囚か？」
「そうさ。それで教会が分裂しただろ」
かってフランス王フィリップ四世と当時の教皇ボニファティウス八世が聖職者への課税を巡って対立したことがあった。これへの解決に対してフランス王は三部会を開くと同時に武力を用い、アナーニに滞在していた教皇を拘束、監禁したのである。これにより教皇は憤死したが後継者はフランス王が立てた。それを見たフランスと対立関係にあるイングランドと神聖ローマ帝国は別の教皇を立てた。これにより教会は分裂状態に置かれた。所謂教皇のアナーニ事件、教皇のバビロン捕囚と教会分裂である。
「またそうなるかもな」
「ややこしいことになりそうだな」
「別にそうでもないだろ」
また反論が書かれた。
「教会なんて分裂してばっかりだからな」
「それだけじゃないのか」
「東西教会の分裂だってそうだろ」
偶像崇拝を巡るコンスタンチノープルとローマの対立による東西の教会の分裂である。これによりキリスト教はギリシア正教とローマ＝カトリック教会に分かれた。東欧と西欧を分ける印象的な事件でもあった。
「その前にもアリウス派とネストリウス派とかな」
「何だ、案外多いな」
「そんなことを言ったらルターのあれもそうなるな」
「まあそうだな」
それを認める書き込みが為された。

## 第十六部第五章　剣は収められその四

「プロテスタントもだな」
「しかしどれも何か政治的な色彩が強いな」
今度は政治性が指摘された。
「ルターのあれなんか神聖ローマ帝国皇帝に対抗する為の諸侯の方便だろ」
「東西教会の分裂もイスラム世界との関係が背景にあったしな」
「その教会分裂にしろそうだしな。完全にフランスとイングランド、神聖ローマ帝国との対立になっている」
アリウス派とネストリウス派の問題もそうである。信仰を一本化したい皇帝側の意図もあったのである。
実際に宗教だけの問題ではないのである。そこには政治が完全に絡む。そして問題が複雑になり大きくなっていくのだ。意図的に大きくされたり複雑にされたりする例も決して少なくはない。
「今回もそれを考えると政治だな」
「というか完全に政治の話だろ」
「それもそうか」
「何せバチカンを利用して工作員を送り込んでいたんだ。これは大変なことだぜ」
「処置を取らないと戦争をした意味がなくなる」
その通りであった。これについてもここだけでなく様々な場所で議論が為されている。
「エウロパの方もそれをしないわけにはいかない。こっちはまあ順調にやれるだろうな」
「もっともそれはそれで揉めそうだがな」
「連合の何処にバチカンを置くか、でか」
「またあの四国が揉めるぜ」
日米中露のことであるのはもう言うまでもない。

「今度はブラジルとかも入ってな」
「あそこがあったか」
「あそこはバチカンに思い入れが強いからな。あとはフィリピンか」
両方共カトリックの多い国である。その為ここで名前が挙げられているのである。
「自分達の側に置こうとか考えるかもな」
これは信仰の問題だけではない。バチカンに影響力を行使したり、バチカンに巡礼に来る信者達のもたらす経済的な恩恵を狙ってのことである。信仰は表で政治が裏、すなわち真実であった。
「特にフィリピン辺りはしきりに動くだろうな」
「あの国はそういったことは上手いからな。もう動いているかもな」
「面白いことになりそうだな」
「あの四国もあるしな。中央政府も黙ってはいないだろう」
四国とは言うまでもなく日米中露である。
「そっちも見ものだな」
「そうだな。面白いものが見れそうだ」
「バチカンもそうなってそしてうちとエウロパだよな」
「こっちもややこしいことになりそうだな」
「そうか？意外と簡単に収まるんじゃないのか？」
「何でそう言えるんだ？」
疑問符のつく書き込みが続いた。
「いや、あっちが譲歩して」
「それはないな」
だがそれはすぐに否定された。
「向こうも必死だ。それは絶対にない」
「必死かね」
「当然だろう、国がかかってるからな」
「国がか」
「余計に必死になるだろうな。多分一歩も引かない」
「領土とかは取れないかな」

懸念材料が一つでてきた。昔から戦争に勝てばその結果として領土を得られるということが多いからだ。それを巡っての戦争もかなりあった。
「国境の武装解除と賠償金位だろうな」
「何だ、そんなものか」
「併合とかはできないのか」
「併合？したいのか？」
こう問いが来た。
「一千億も不穏分子を抱え込みたいのか？」
「一千億か」
エウロパの人口全てのことである。
「大変なことになるぞ。いいのか？」
「いや、御免被りたい」
すぐに返事が書かれた。
「とんでもないことになるのは俺でもわかる」
「それだけは勘弁してくれ」
「そういうことだ。併合も絶対にないのはわかったな」
「ああ、よくな」
「じゃあ賠償金を思いきりふんだくるだけか」
「それもできるかどうかわからんがな」
「何でだよ」
問い掛ける言葉が出るとすぐに返答が返された。
「第一次世界大戦を知っているか」
「ああ、あれだな」
すぐに返答が書き込まれた。
「二十世紀の最初の大規模な戦争だろ？セルビアがもとではじまった」
「そうそう」
当時欧州は緊張の中にあった。ドイツとオーストリア、イタリアの三国同盟とイギリス、フランス、そしてロシアの三国協商が激し

い対立にあったのである。

## 第十六部第五章　剣は収められその五

対立の原因は明白であった。それぞれの帝国主義政策によるものである。イギリスがカイロ、カルカッタ、ケープタウンを拠点とした３Ｃ政策を採ればドイツはベルリン、ビザンチウム、バグダットを中心とした３Ｂ政策をぶつける。なおこの３Ｃ政策というのは当時のドイツ皇帝ヴィルヘルム二世が呼んだものだとも言われている。

そしてオーストリアは汎ゲルマン主義を掲げ、ロシアは汎スラブ主義を掲げていた。双方共バルカン半島、東欧進出への旗印であったがこれが衝突していた。

同時にバルカン半島ではそうした二国の影響もあり民族主義が高揚していた。とりわけセルビア等が激しく若者達の一部はオーストリアに対して激しい憎悪を抱いていた。彼等はスラブ民族であると自覚しており、ゲルマン系であるオーストリアを快く思っていなかったのだ。

セルビアを訪問したオーストリアの皇太子夫妻が暗殺された。これが引き金となった。オーストリアはセルビアに宣戦布告しドイツも同盟関係から参戦した。だがセルビアと同じスラブ主義にあるとしてロシアが味方になりその同盟国であるフランスも参戦した。戦いは一気に地域問題から欧州全土を巻き込む戦乱となった。

フランスとロシア、東西に二つの強敵を一度に相手にすることになったドイツであったが策はあった。士官学校卒のユンカー出身が主流を占めるドイツ軍にしては珍しく法学部にいた参謀総長シュリーフェンが計画、立案していたシュリーフェン＝プランである。これを下にまずはフランスを一気に叩き、返す刀でロシアを倒そうというものであった。

計画はすぐに実行に移された。だがここでドイツはミスを犯していた。中立国であるベルギーに侵攻したのである。これを大義名分としてイギリスも参戦した。フランス軍は塹壕に立て篭もり、マシ

ンガンでドイツ軍を退けた。ドイツは東部では後に大統領となるヒンデンブルク、ゼークトの作戦により圧倒的な物量を誇るロシア軍をタンネンベルクで退けることに成功した。だが戦線は膠着し、イタリアも寝返り戦いは長期化した。

この戦いは長引いた。だがそれはアメリカの参戦とロシア革命により転換期を迎えた。自国の商船がドイツ軍の潜水艦に撃沈されたことからアメリカも参戦したのだ。ロシアでは長引く戦争に不満を覚えた水兵達がまず戦艦ポチョムキンにおいて反乱を起こした。それはすぐに帝国全土に拡がりロマノフ王朝はその三百年に渡る歴史に幕を降ろした。共産主義を掲げるレーニンが戻りロシアは対外戦争どころではなくなった。政権を手に入れたレーニンはすぐにドイツと講和した。ブレスト＝ルトフスク条約である。

「これは講和ではない。単なる革命の息抜きだ」

「いずれ連合国は諸君等にブレスト＝リトフスク条約を課すことになるだろう」

上はこの時の講和のレーニンの言葉である。ロシアの内戦は続き、多くの餓死者、戦死者、粛清された者を出した。だが共産党は政権を握ることに成功しソ連が誕生したのであった。

下の言葉はこの条約が結ばれた時の言葉であった。ドイツはロシアが不安定なことに付け込み一方的な条約を結んだのであった。それに対する言葉である。そしてこれは的中した。

ロシアとの講和が成りドイツはその軍を一気に西に向けた。そのままフランスを潰して戦いを終わらせるつもりだったのだ。だがそこにはアメリカがいた。思うようには進めなかった。戦車や航空機、毒ガスまで使われたこの戦争は無闇に犠牲者ばかりが出た。だが戦いは順調ではなかったのだ。

遂にドイツでも暴動が起こった。起こしたのはここでも水兵であった。キール水兵暴動である。これにより皇帝は亡命しドイツ帝国は崩壊した。そしてオーストリア帝国も。戦いはこれで終わった。

ドイツはブレスト＝リトフスク条約を課せられた。ベルサイユ条

約である。全ての植民地と領土の一部を失い天文学的な賠償金を課せられた。これが第二次世界大戦の伏線の一つともなった。あまりにも過酷なペナルティはかえって禍根を残すということの証左の一つである。
「歴史では絶対勉強するな」
「そうだな。つまり一方的にエウロパに課すのはよくないってことか」
「俺はそう思う」
一次大戦を出した男はこう書き込んだ。
「まあ程々にってやつだな」
「けれどこっちとしても何か手に入れないと割に合わないぜ」
「勝ったんだしな」
「まあな」
彼等は自分の勢力が勝ったと思っていた。そしてそれは確かに事実ではあった。
「どんなものかな」
「まあ賠償金は確実だな」
誰かが書いた。
「これだけはもらわないとな」
「ああ」
「額は・・・・・・エウロパが払えるギリギリってところか」
「三十分の一の国力で、しかもあれだけ兵を動員していてどこまで出せるかな」
「まあ僅かだろうけれどな」
「それでも貰えるものは極限まで欲しいな」
「同感だな」
金の話が行われた。

## 第十六部第五章　剣は収められその六

「さもないと話にもならないしな」
「そういうことだな」
「後は領土だな」
「領土か」
　またそこに話がいく。
「エウロパ領からどっか手に入るかな」
「ニーベルングとかな。あとブラウベルグ回廊の安全とかな」
「それは難しいな」
「どうしてだ？」
　疑問符に対してすぐに問いが入った。
「いや、領土を手に入れたとする」
「ああ」
「誰が管理するんだ？その旧エウロパ領を」
「中央政府じゃないのか？」
「すんなりと中央政府に話がまとまると思うか？ここでも大国が出て来るんじゃないのか？」
「またあの連中かよ」
　そうした話になるとすぐに顔を出すのは連合の大国なのである。
「あれだけ沢山の星系と人口、資源まで持っていて何が不満なのかね、奴等は」
「只でさえ小国を脅して利益を貪っているってのにな」
「まだ何か欲しいのかよ、バチカンでの話といい」
「連中はそういう連中だよ」
　シニカルな書き込みが書かれた。
「どれだけ持っていても満足しない」
「それで奪ってもまだ欲しがる」
「今度はエウロパか。本当に貪欲だな」

「まあ日本はそうでもないがな」
大国の中で日本はそれ程欲はないとされている。もっとも米中露があまりにも酷過ぎるだけであるが。ＡＳＥＡＮ各国も抜け目がないとされていて安心されてはいない。
「その分日本は狡賢いぞ」
「あの狐を信頼していたらえらい目に遭うぞ」
「ああ、狐か」
伊藤のことである。
「あの女だけは全然安心できないな」
「何仕掛けて来るかわからんからな」
「この前も日本に対して強硬的だったアンゴラの政治家が失脚したよな」
話がキナ臭い方に向かう。
「金銭スキャンダルでな」
「急に話が出て来たよな」
「偶然、な。最近日本絡みでそんな話が多いな」
「伊藤が首相になってからな。いい意味でも悪い意味でも非常に賢いよ」
「まるでイスラエルみたいなやり方だな」
「イスラエルか、連中もいたんだな」
それを見てうんざりした様な書き込みが入った。
「あいつ等も何するかわからんよな」
「同感。何か下手に領土要求すると収納つかなくなるな」
「それは止めておいた方がよさそうだな」
「まあ政治家がどう判断するかだな、そこは」
「見せてもらうか」
「そうだな」
書き込みはまだ続いたがこの戦争に関する話とは離れていった。ネットにおいてもこうした話が頻繁に為され講和がどういったものになるかで話はもちきりであった。これは当然ながらマスコミにお

いてもそうであった。
「まずはこの戦いの流れですけれどね」
明るいセットの中で一人のキャスターが話していた。眼鏡をかけた灰色の髪の男である。その目は灰色がかった緑であり肌は赤い。タイの売れっ子キャスターであるゼノ＝ウボンである。元々はスポーツキャスターでありその派手な放送が有名である。だが今回は妙に大人しい。
「結局何か押し切った形ですね」
「日本の相撲で言う押し切りですね」
「よく知ってますね、ナンさん」
そう言って隣にいる小柄な女子アナに顔を向けた。彼の相方でこの番組のキャスターを務めるサシャ＝ナンである。
「この前特集組みましたから」
「ああ、あれはよかったですね」
相撲の話にウボンも乗ってきた。どうやら彼も相撲は好きな様である。
「今日も特集やりますので」
「はい、では楽しみにしていますね」
「それでは話を戻しまして」
ウボンは話を戻してきた。
「まあオリンポスまでは辿り着けなかったのがヒットが一本足りなかったってところですね」
今度は野球に例えてきた。

## 第十六部第五章　剣は収められその七

「そこが残念ですがまあ終わったことですから」
「兵隊さん達も頑張りましたしね」
「いや、今回私驚いたことがあるんですよ」
隣にいる白髪で眼鏡をかけた銀行員風の外見の男がここで話に入って来た。彼の名はリュナン＝パークナム。軍事学者であり政治学者でもある。この番組にはよく出演している。
「それは」
ウボンはそれを受けてパークナムに声を向けてきた。
「いや、連合軍の規律正しさですよ」
「そんなに凄かったのですか」
「ええ。とにかく紳士的で。トラブルとかは殆どなかったですね」
「そうらしいですね」
「市民達に対しても穏やかでしたね。まあ気をつけているのでしょうが」
「確かに事件は非常に少ないですね」
ここで資料が出された。
「六十億以上の人間を送り込んでいてこれだけですよ」
「えっ、それだけなんですか」
見れば連合軍が起こしたトラブルは極めて少なかった。それと合わせて連合の平均犯罪件数も出ていたがそれを遥かに下回っていた。
「何か凄い少ないですね」
同時に載せられている連合で最も治安のいい国と同程度であった。それを見てキャスター達は驚きを隠せなかった。
「非常に規律のいい軍隊だということがわかりますね」
「ええ」
ナンはウボンの言葉に頷いた。
「軍律は確かです」

「ですね」
「それに凶悪犯罪が少ないですね」
パークナムが指摘してきた。
「殺人とかは数える程しかない」
「ですね。まあ連合の処刑を考えると当然ですが」
コイケットの例を見るまでもなく連合軍の処刑もかなり酸鼻を極める。恐竜の餌としたり八つ裂きにしたりするのは普通である。中には稜遅刑もある。連合軍の刑罰は連合のそれと同じで過酷なものである。犯罪者には容赦しないのが連合なのであるから。
「それでエウロパから避難の声があったそうですね」
「処刑でですか」
「はい」
ナンは言った。
「あまりにも残酷だと」
「ははは、何を言うのやら」
それを聞いてパークナムが声をあげて笑った。
「エウロパなんか昔はもっと酷かったじゃないですか」
「そうなんですか」
「魔女狩りなんて。あれに比べたら我々のやっていることは可愛いものですよ」
「それはもう大昔じゃないんですか？」
ウボンがこう突っ込む。
「それこそ千年以上昔ですよ」
「何、彼等が批判してくるものですからね。反論ですよ」
パークナムは笑いながら言う。
「残酷かどうかなんてその国の文化とかによって違うんですよ」
「はあ」
「我々がやっているのは凶悪犯に対してだけじゃないですか。凶悪犯なんて許してはおけない場合もありますね」
「確かにそうですね」

ナンはそれに頷いた。
「許せない犯罪もあるのは事実です」
「だからですよ。そうした犯罪者には極刑も止むを得なし。それが連合の考え方ですよね」
「ええ」
ウボンもそれに頷いた。
「人権に対する考え方が違うのですよ。連合では凶悪犯やテロリストの人権なんてどうでもいいんですよ」
これが連合での一般の考えであった。加害者の人権なぞ保証する必要もない、大切なのは被害者、そして多くの善良な一般市民の人権なのである。それを害する輩に対しては徹底した処置をとる、これが連合の人権に対する考えである。なおこの他の多くの部分はエウロパと同じである。とりわけ被害者の人権に関してはかなり考慮されている。
「大体他人に迷惑かけているのに権利もないでしょう」
「それがよくないとエウロパは言うんですよね」
「馬鹿言っちゃいけません」
パークナムはまた言った。
「悪人の人権なんてありはしませんよ。それを言ったら大多数の善人が迷惑します」
「そうなんですけれどね」
「私はそこが全然わからないんですよ」
パークナムの顔が変わってきた。不機嫌さが表に出て来た。
「何で彼等は犯罪者の人権まで言うのか。刑務所をちゃんとしていればいいでしょう？」
連合の刑務所は普通の犯罪者のそれはかなりいい。真っ当に刑に服せるようになっている。だが凶悪犯のそれは極めて過酷だ。密林の中や氷河の中にある。そして何時公開処刑されるかわからないのだ。時には密林の獣達の餌にされたり氷河の中に放り出されてそこで凍死する様を放送されたりする。これが連合の凶悪犯に対する考

えである。悪人の人権は全く考慮されるに値しない、ということである。
「人に迷惑をかける連中にはそれなりの報いがあるって小学校でも教わりますよ」
「はあ」
「そんな奇麗事を言いながら自分達はサハラを侵略してそこにいた人達を追い出して自分達が居座っていたんですから。お笑いです」
「ではパークナムさんはエウロパの批判は気にしなくていいと仰るんですね」
「当然です」
ここでネットの番組実況では彼の言葉に熱狂する書き込みが相次ぎサーバーがダウンしてしまったサイトもあった。

## 第十六部第五章　剣は収められその八

「人の振り見て我が振りなおせって言いたいです」
「わかりました。それでは」
「話を戻しましょうか」
「はい」
進行役であるウボンが言った。そして話は元に戻った。
「とにかく規律正しいんですよね、連合軍は」
「戦場の紳士でしたね」
パークナムはまたにこにことしていた。
「礼儀正しくて」
「内務省のスタッフも連合入りしていたそうですね」
実はこれがかなり大きいのである。
「そうなんですよ」
パークナムはこれにも応えた。
「かなり厳しかったそうですよ、憲兵隊以上に」
「でしょうね」
金の厳しさを知らない者は連合にはいない。『韓国きっての才媛』『女教皇』『鋼鉄の美女』という通り名は伊達ではなかった。その冷徹な目はエウロパにおける占領地にも向けられていたのである。
「数こそは少なかったそうですけれどね」
「それでもですか」
「ええ。これも規律に役立っていたそうです」
「では成功ですね」
「そうですね。まあ不名誉な話は残さなかったです」
軍隊の規律を維持することは難しい。それを徹底させたことに今回の連合の凄さがあるのだ。それが今話されていた。
「それは何よりですね」
「ただ私一つ気になることがあるんですよ」

「何ですか？」
ウボンとパークナムはナイの言葉に顔を向けた。
「いえ、犯罪の種類ですけれど」
「はい」
「飲食店のトラブルが一番多いですよね。それもかなりの割合で」
「そうですね」
「言われてみれば」
見ると全体の半分程であった。かなりの割合であるのは事実であった。
「これって何なんでしょうか」
「酒飲んで暴れたりしたのみたいですね」
パークナムが答えた。
「やっぱりそれですか」
「あと店の食糧を全て食い潰してもう出せないと言われて怒ったとか。そんなのですね」
「お店にあるの全部食べちゃったんですか」
「エウロパの人間ってあまり食べないんですよ」
パークナムはここでこう言った。
「そうなんですか」
「ええ。我々から見たら昼食がおやつ程度でね」
「はあ」
「兵隊さんって皆食べるじゃないですか。それでお店にあるものがなくなっちゃうってことがあったそうです」
笑いながら言っている。冗談めいた話であるのがそこからもわかる。
「そうだったんですか」
「まあそれも処罰されてますけれどね。お酒のトラブルは洒落になりませんから」
「はい」
「全体的に規律はよかったのは事実ですよ」

「それを聞くと安心しますね」
「あと戦死者が凄く少ないですよね」
ウボンもそれを言ってきた。
「そうですね。それが一番嬉しいです」
パークナムも頷く。
「身内が戦死するんじゃないかと思うとやっぱり不安ですから」
「そういえばナンさんの弟さんも参加されているんですよね」
「はい」
ナンはウボンの問いに頷いた。
「水兵で。行ってました」
「御無事でしたか？」
「ええ。昨日電話がありまして」
「ほう」
「元気だから。安心してくれって言ってました」
今まで知的に固めていたその顔が綻んでいた。やはり身内が無事でほっとしたらしい。
「それはよかったですね」
「はい、無事で何よりですよ」
これは紛れもない本音であった。
「ずっと心配していましたから」
ナンは完全に姉の顔になっていた。弟を気遣う姉の顔であった。

## 第十六部第五章　剣は収められその九

「心配事が一つ消えました」
「そうですね。まずは生きていないと」
「はい」
ここでも連合の考えが出ていた。軍人であっても命は粗末にしないというものである。
「何もならないですからね」
「昔からやんちゃな弟でして」
もう完全に姉として話していた。
「大変なんですよ」
「それはまた」
「けれど御無事でよかったですね」
「全くです」
満面に笑みを浮かべて頷く。
「けれどこの戦いに参加している家族の方をお持ちの方は皆同じなんですよね」
「ですね」
ウボンにもそれはわかる。
「家族が戦場にいる者の気持ちがよくわかりました。家族としては心配ですね」
まずはこう述べた。
「けれど」
そして今度は個人としての意見になる。
「この戦争は。しなければならなかったし勝たなければならなかったと思います」
「そうですね」
パークナムも同じ考えであった。
「諜報活動や破壊工作をそのままにしておくわけにはいきませんか

ら」
「はい」
ナンが言いたいのはそれであった。家族を戦場に送る立場としては辛いがそれとは別にこの戦争は連合にとって行なわなければならない戦争であったのだ。それもわきまえていた。
「それは私もわかっているつもりです」
自分でもこう述べた。
「そうですよね、やっぱり今回の戦争は避けられなかったと私も思います」
メインがウボンに戻ってきた。彼はナン達の言葉に頷きながら述べる。
「実際にこの戦争への支持率はかなり高いですよね」
「八割、いや九割近くですからね」
パークナムも述べた。
「避けてはならない戦争でしたから」
「はい」
「何はともあれこれに勝ったことは大きいですよ」
「大きいですか」
「そうですよ。だって連合は千年以上対外戦争はしてませんよね」
内部でも戦争はなかった。海賊やテロリストへの取り締まりや攻撃はあってもだ。そうした意味で実に平和であり続けた。
「ええ」
「内部でもそうしたことはありませんでした。できてからはじめての戦争でしたから」
実際に戦争を行ったのはこれがはじめてであった。
「それに勝ったんですからね。おまけにできたての軍でしょ」
「統合されてから日は浅いですよね」
「それが勝ったんですから。凄く大きいですよ」
「それも大勝利ですよね」
「そうです。私はかなりのことが期待できるのでは、とも思うんで

すよ」
笑顔で語る。これは連合の多くの者達と同じものを見ているからである。
「かなりのこと？」
「講和の条約でね。何か得られるか」
「賠償金はもらえるでしょうね」
「まあそれは当然ですね。他にも色々と」
鼻が膨らんでいる。そこからも上機嫌なのがわかる。
「楽しみですか」
「そうですよ。何はともあれ勝ってよかったです」
「はい」
これでこの番組での戦争の話は終わった。そしてそこから別の話に移った。ウボンの得意なスポーツ関連であった。約束通りまずは相撲特集からであった。
「相撲か」
それを仕事をしながら見ている者がいた。

## 第十六部第五章　剣は収められその十

「そういえば土俵の側ではもう長い間見ていないな」
「そうなのですか」
そこは執務室であった。一人の青年がペンを手に机に座っていた。そして彼に同じく若い秘書官が声をかけていた。
「日本にいた時はよく招かれたけれど」
その青年八条は言った。
「支持者の方々にね。けれど中央政府の国防長官になってからはないね」
「はあ」
秘書官である木口はそれに応えた。応える彼も自分のことに気付いた。
「そういえば私もですね」
「相撲は結構有名なのだけれどね」
「案外日本固有のものだと思われているようですね」
「それは昔からだね」
八条はここでこう返した。
「モンゴルのモンゴル相撲も。他の国にはあまり広まっていない」
「あくまでその国の中でだけ行われていますよね」
「日本にあるから相撲、モンゴルにあるからモンゴル相撲なのかな」
「ですかね」
「他の国では行えない。よく考えれば相撲は仕方ないな」
「あれは宗教儀式でもありますからね」
「うん」
八条は頷いた。実は相撲は神道とも深い関係がある。力士は魔を退ける者であり神主の親戚みたいなものなのである。そうした意味で日本固有の存在と言えた。
「それを考えれば当然か」

「だと思います。しかし寄席で御覧になられたのですか」
「そうだけれど」
「羨ましいですね。私はいつも普通の観客席でしたよ」
「それも付き合いだったんだよ」
八条は笑いながら答える。
「支持者の方とね。誘われたら行くしかないだろう」
「政治家の仕事ですからね」
汚職等ではないだけに断れないのだ。政治家も楽な身体ではない。
「流石に迫力があったけれど。ただその時はね」
「何かあったのですか？」
「鷲襲山が欠場していてね。それが残念だったよ」
「ああ、横綱の」
「あの時はまだ関取だったけれどね」
八条は応えた。鷲襲山は無類の強さで知られる力士でありその髷が赤い。その為『赤鷲』とまで呼ばれる。八条は彼がお気に入りなのである。
「怪我をしていて出ていなかったんだ」
「あの時だったんですか」
「そうなんだ。凄く残念だった」
「御気持ち察します」
「だから正直最初からあまり気乗りはしなかった。ここだけの話だけれど」
「はい」
八条の言葉に対して頷く。
「それでもいいものは見られたけれどね。相撲はやっぱり側で見るのがいいよ」
「テレビでは駄目ですか」
「スポーツとか格闘技はね。生で見た方がいい」
彼は言った。
「そっちの方がずっと迫力があるよ」

「ですか」
彼は観戦派であった。口調も普段のそれより少し熱かった。
「それでだ」
「はい」
「話を戻すけれど」
その間もペンを止めてはいない。仕事は続けていた。
「ようやく停戦になり今こうして処理をはじめているけれど」
「ええ」
「世の中は講和の話で持ちきりのようだね」
「テレビのさっきの話でしょうか」
「それだけじゃない、雑誌やネットでもね」
彼は言った。
「講和とその内容に関する話が常に出て来ている。まあ意見は色々あるけれど」
「ええ」
特に軍事や政治関連ではそうであった。専門のコーナーまでできる程であった。
「それに関する話が多いのは事実だね」
「雑誌ではよく見ますね」
木口もそれは見たことがあった。
「ネットは最近チェックしていないのでよくはわかりませんが」
「チェックはしておいた方がいい」
八条はこう述べた。

## 第十六部第五章　剣は収められその十一

「そうすれば何かと見えてくるよ」
「そちらは怠けていました。申し訳ないです」
「謝る必要もないがね。暇があれば見ておくことだ」
「はい」
「勉強にもなる」
「それにしても今回はマウリアが何かと動きましたね」
木口は話をマウリアに向けてきた。
「私はオリンポス占領まで戦争は行われると思っていたのですが」
「彼等には彼等の考えがある」
八条の目が鋭くなった。
「それで動いたのだろう」
「何を狙っているのでしょうかね」
「まずは恩か」
彼は言った。
「我々とエウロパ双方に恩を売っておく」
「次には」
「戦いを収めたという実績だな」
次にはそれであった。
「我々とエウロパという二大勢力の衝突を収められたという実績だ。同時にこれはマウリアの力を示すことになる」
「次はそれですか」
「そして宣伝だ。戦争を終わらせた、つまり平和を愛しているということを言える。マウリアを平和を愛していると」
「それがまずは看板の部分ですよね」
「当然実利もある」
八条はそちらにも言及してきた。
「恩を売るということが後でどういった効果をもたらすか」

少し外交というものを知っていればわかることであった。
「彼等はそれはよくわかっている」
「伊達に長い歴史を持っているというわけではないですか」
「あの国だけはわからないからな」
八条もマウリアに対してはこう思うところがあった。
「何を考えているのか」
「わかる人間の方が圧倒的に少ないかと」
そして木口もそれは同じであった。
「何せ今でも街中に牛が平気な顔をして歩いていますから」
「そうだな」
これでテレビで見て知っていた。
「最初見た時には我が目を疑った」
「はい」
「現実なのかと思ったよ。あれがマウリアかと」
「それですらもほんの表面的なものだそうです」
「奥が深いな」
「奥が深いというよりないのでは？」
木口は少し変わったことを言った。
「奥がない？」
「そのまま果てしなく何処かに繋がっているとか。可能性としてはありますよね」
「マウリアだからな」
何となく納得できるのが自分でも不思議であった。
「何があるかわからない」
「ええ」
「外交もだ。とにかく何をしてくるかわからないからな」
「その前に話をすること自体が困難です」
「それもある」
マウリアの難しいところはその文明、文化の違いだけではないのである。

「彼等と話していると。まとまる話もまとまらない時があるな」
「知らないことを平気で知っているなんて普通に言いますからね」
「あれがマウリア流らしい」
「普通逆ではないのですか？」
「それは我が国だけだよ」
八条は笑って言葉を返した。
「あっ、そうでしたか」
この時代でもよく日本人はとりあえずは謙虚だと言われる。その為知っていることをあえて謙遜して知らないと言ったりするのである。その為他の国の者は日本人に対してはもう一度聞いたりする。実は知っていた、ということが頻繁にあるからである。これは一面では謙虚とされているが別の一面では日本人の含みだとされている。日本人はいい意味でも悪い意味でも賢い者達と考えられているのである。柔らかな中に硬いものを持っていると言われている。
「それがかえって迷惑だそうだが」
「日本人とマウリア人は会議では注意しろ、ですか」
「会議で最も難しいことが二つあるとも言うな」
八条は言う。

## 第十六部第五章　剣は収められその十二

「日本人を喋らせることとマウリア人を黙らせること」
「しかも強引に自分の興味のある方向に話を持って行こうとしますからね」
「何の脈絡もなくな」
　実際に連合各国とマウリアの学生達の討論番組でもあった。マウリア側の学生達のあまりにも強引な話の持っていき方に連合の学生達がその目を白黒させていたのである。しかも自己主張の強い国が非常に多いとされている連合各国の者達を遥かに凌駕する言葉の多さと個性の強さであった。その番組でマウリア恐るべしと認識した連合の者達は非常に多かったと言われている。
「あれには正直参る」
「全くです」
「その彼等だ。とにかく常に警戒していないと何時の間にかとんでもない方向に話が行きかねない」
「ですね」
「何を要求してくるのかもわからないな。一日一食はカレーを食べてくれとか」
「流石にそれはないかと」
　いささか下手なジョークであった。八条はジョークは聞かされる方であり自分で言うのはあまり得意ではないのである。
「妥当なところでは通商等で有利な条件を要求してくるか」
「あとは関税ですか」
「そんなところかな。他にもあるかな」
「各分野の交換留学の促進、そして技術協力でしょうか」
「常識で考えればそうだな」
「ええ」
「だがどうにも安心はできない」

八条にはまだ不安があった。
「相手が相手だからな」
「心配し過ぎと言えないところが問題ですね」
「そうだな。外務省も苦労するだろうな」
「ええ」
その言葉に頷く。
「どうなることか」
「おそらく長官にも話が来ると思いますよ」
「だろうな」
これは予測していた。国防長官という立場を考えると充分予想できることである。彼は彼でマウリアの軍事関係者達と話をすることが多いのだ。
「軍事技術の供与かな」
「それとロジスティックのノウハウ等でしょうか」
「ノウハウは伝えても特に困ることはないな」
「はい」
「問題は技術か」
「これは渡すものを選ばなければなりませんね」
「我々の技術はその多くが民間から移転されたものなのだがな」
実はそうであった。連合では今でも軍の重要性は低い。その為技術の発展も民間の方が高かったのである。それが軍に応用されたのである。これが連合軍の技術力の秘密であった。
「そうでしたね」
「まあトップシークレットはブラックボックスにしよう」
「はい」
「それで供与していくか」
妥当な考えであった。オーソドックスと言えばそうなる。
「それで宜しいかと」
木口もそれに同意した。
「既に彼等は惑星開拓及び開発の技術等を我々に要求しはじめてい

るそうです」
「そうか」
それを聞いた八条の目が少し光った。
「やはりそこに目をつけてきたか」
「当然と言えば当然ですね」
「そうだな」
「仲裁の見返りは。かなりのものになるでしょうか」
「程々で終わらせたい」
八条は一言で返した。
「際限なく要求されてはたまったものではない。向こうもそれはわかっている筈だ」
「はい」
「と思いたいが」
やはりマウリアはわかりかねるところがあった。
「マウリアの基準だとな。どうなるやら」
彼等の時間や数量の概念は昔から途方もないものなのである。神話や経典では普通に有り得ない数字が出て来る。それがマウリアであり八条はそれを心配しているのである。
「我々としてもきりのいいところで話を収めますか」
「そうだな」
八条は木口の言葉に頷いた。
「外交の基本だが。それしかないな」
「ですね」
「これが連合の国ならばよかったのだけれど」
そして少し苦笑した。
「あの国だけは。わからないからな」
「そうですね。一体どうなるやら」
「粘り強くいくしかないか。もっともその粘りも向こうの方が上だが」
「上というよりは時間の概念が違い過ぎるので」

マウリアでは時刻表を使った推理小説は不可能とまで言われている。電車が十二時間遅れて今日中に着いたなどと平気で言われることがある国であるからだ。
「やはり。ここは根気でしょうかね」
「難儀だな」
その苦笑が強くなった。
「彼等との交渉は」
「まあ言っても仕方ないので」
「やるしかないか」
「それではまずはシュミレーションをはじめますか」
「幾つか想定問答集を作ってもらうか」
そう言うとすぐに返事が返ってきた。
「はい、では手配をします」
「既に幾つかあったと思うが」
「ではそれも出して」
「外務省からも協力を要請しよう」
「わかりました。それでは外務省にも」
「頼むよ。あとは双方の軍事関連のデータも」
集めるべきデータも多い。木口もそれに言及した。
「資料が多いですね」
「敵を知り己を知れば百戦危うからずというからね」
孫子の言葉を出してきた。
「互いのことを熟知していれば何を言って来るのかある程度見えてくる」
「見えますか」
「ある程度だがな。後は相手の出方をシュミレーションしていって」
「話し合いに挑みましょう」
「うん」
八条はマウリアの外交官及び軍人達との交渉の準備に入った。彼の多忙な時間は続くことになった。そんな中彼のもとに一つの電話

が入った。

## 第十六部第五章　剣は収められその十三

「はい」
「あの」
声は内相である金のものであった。
「内相ですか？」
「はい、私です」
いつもと少し様子が違っていた。
「国防長官」
「はい」
「今夜お暇でしょうか」
「暇ですか」
彼はすぐに答えた。
「かなり忙しいのですが」
「そうですか。それは残念ですね」
金はそれを聞いて引っ込もうとした。だがここで他ならぬ八条が助け舟を出すことになった。
「待って下さい」
「はい」
「何かご用件でも」
「仕事の打ち合わせをしたいと思いまして」
「仕事の」
「はい。夕食でも採りながら。宜しいでしょうか」
「夕食ですか」
ちらりと時計を見る。見ればもうかなりいい時間であった。
「如何でしょうか」
「わかりました」
彼は電話の向こうで頷いた。
「御一緒させて頂きます」

「左様ですか」
こうしたことに少し勘のいい者ならすぐに気付く様な、そうした声であった。だが八条は気付かなかった。やはり彼はある分野においては非常に鈍いものがあった。
「それでは今から」
「はい。場所は」
金は店も伝えた。そして八条はその店に車で向かった。当然車の中でも仕事である。ノートパソコンでメールを出し、渡された資料を研究していた。
店は韓国料理の店だった。店に入るとすぐに店員に店の奥に案内された。
「こちらです」
そこは個室であった。入るともう金が待っていた。
「どうも」
「はい」
二人はまずは挨拶を交わした。
「来て頂き有り難うございます」
「いえ、こちらこそ」
八条は丁寧に返事を返した。
「お招き頂き」
「ではそろそろ料理が運ばれて来ますので」
「早いですね」
「あらかじめ注文しておきましたので」
彼女は答えた。
「では席に」
「はい」
八条は金に勧められるまま席に座った。個室であったので金と向かい合う形である。その向かい合う二人にすぐに料理が運ばれてきた。
まずは麺類であった。ラーメンである。だが普通のラーメンでは

なかった。
「あれ、これは」
八条はそのラーメンを見て声をあげた。
「インスタントですね」
「はい」
金は答えた。見れば確かにインスタントラーメンである。スープは真っ赤でありそれが如何にも韓国のそれらしかった。そこに卵や野菜が入っている。量はかなり多い。
「韓国ではインスタントラーメンも店で出るのですよ」
「そうなのですか」
「日本や他の国では出ませんけれど。まあ召し上がって下さい」
「はい」
八条は言われるままラーメンを口にした。味自体は変わりがなかった。辛いのが如何にも韓国らしかったがその他は至って普通のインスタントラーメンであった。
「如何でしょうか」
「そうですね」
八条は一口食べた後で答えた。
「最初は驚きましたけれど」
「店でインスタントラーメンが出ることに」
「え。けれど実際に口にすると悪くないですね」
「そうでしょう。他にも来ますよ」
「他にもですか」
「ほら。噂をすれば」
店員達がメニューを運んで来た。チジミに餅、炒飯であった。炒飯は無論韓国風のそれである。
それに豚足を煮たものに生レバーであった。生のレバーを見て八条は意外そうな顔をした。
「生のお肉が珍しいですか？」
「はい」

金の問いに頷く。

## 第十六部第五章　剣は収められその十四

「日本ではよく食べられますが」
「韓国でも食べられるんですよ」
金は笑いながらこう述べた。
「日本とも付き合いが深いですし」
「はあ」
「お刺身もありますよ。味付けはこちらのものですけれど」
「そうなのですか」
「このお店でもありますけれど。如何ですか」
「いえ、今回は遠慮します」
だが八条はそれを断った。
「これだけメニューがあると」
「左様ですか」
「しかしこのお餅は面白いですね」
「日本のそれとは少し違うでしょう」
「ええ。硬めですね」
八条は食べながら応えた。
「日本のお餅はもっと柔らかいですから」
「そうですね。そこが違いますね」
「ええ」
「だから食感も。かなり変わります」
「はい。チヂミもいいですね」
「ここはチヂミが有名なのですよ」
見れば金もそのチヂミを口にしていた。
「絶品だということで。しかも量も多い」
「確かに」
大皿一面に広がっている。そして細かく切られている。それが一人分である。かなりの量であった。

それだけでもかなりのものだというのに他のメニューの量も全体的に多い。連合の料理はどれもかなり量が多いものであるがこれは特に量が多いものであった。
そこに酒もあった。八条はその量に少し不安を覚えたが金は平気な顔をして食べていた。
酒はマッコリであった。韓国の酒である。かなり甘い酒だ。
金もそれを飲んでいた。そして飲みながら八条に声をかける。
「停戦となりましたが」
「はい」
話はやはりそれであった。彼はそれに目を向けた。
「これからも色々とありそうですね」
「ですね」
やはり金もそう見ていた。ここは八条も同じであった。
「既に国防省の方ではこれからのことのシュミレーションをはじめています」
「そうなのですか」
「マウリア軍の方がどういった要求をして来るか。今色々と調べはじめています」
「内務省ではそうしたことはありませんね」
「はあ」
八条は炒飯を食べながら応えた。程よい辛さだった。
「こちらは占領しているエウロパ領の治安維持に務めております」
「そして軍の憲兵隊との交流ですね」
「はい。中央警察との」
憲兵隊が中央警察に研修に行っているのである。そこで法律や捜査の形式を学んでいるのだ。
「こちらは順調に進んでおります」
「それは何よりです」
「占領地の治安維持も。最初は不安でしたが」
「それはこちらで軍律を徹底させましたから」

マッコリを口にした後で述べる。
「流石に不祥事が多くては軍の評判に関わります」
「はい」
「それだけはまず徹底させました」
「賢明な判断ですね」
金は冷静な声でこう述べた。
「正解だったと思います」
「有り難うございます」
「その為今回の戦争で連合軍、ひいては連合の評価が上がっています」
「軍律が厳しかったからですか」
「軍律の悪い軍は絶対に信頼されません」
金は冷静な声のままた述べた。
「これは何事においてもそうですが」
「はあ」
これは如何にも金の言葉であった。潔癖症で厳格極まりない。そしてそこには一切の妥協も寸分の隙もない。将に女教皇の言葉であった。
「セクハラなぞも極めて少ないですね」
「そちらも気をつけていますので」
八条は答えた。
「教育も徹底させております」
「それは何よりです」
それを聞くとにこりと笑った。
「やはり教育というものは重要です」
「はい」
「軍隊はまず規律です」
それが金の考えであった。
「他の組織よりも遥かにそれを重要視しなければなりません」
「風紀の粛正ですか」

「そうです。長官がそれを念頭に置かれているということは非常によいことだと思います」
「有り難うございます」
「連合はそうした面ではあまりいいとは言えないというのに。お見事です」
「実は日本軍を参考にしまして」
「日本軍を」
八条が以前いた組織である。これはもう言うまでもない。

## 第十六部第五章　剣は収められその十五

「はい。日本軍の規律を参考にしまして」
「成程」
日本軍は連合においては非常に規律のよい軍隊として知られていた。そしてその訓練の凄まじさで精強さも知られていたのである。少数ながら精鋭部隊とされていた。
「日本軍を参考にされていたのですか」
「ええ。何かと厳しい軍でしたから」
八条は述べる。
「ただ、訓練等はあの様にはいきませんでしたが」
「そうでしょうね」
流石にそこまでは無理だったということである。連合軍の訓練度はお世辞にも高いとは言えないところがある。兵士それぞれの強さではエウロパ軍にもかなり劣っていた。デクの棒とまで呼ばれていた。
「規律を最優先させましたから」
「正解だったと思います、それで」
「はい」
金の言葉に頷いた。金はまたマッコリを口にしていた。
「まずは規律」
金はまた言った。
「そこから全てがよくなるのです」
なお彼女は学生時代常に学級委員か風紀委員を務めていた。美人だがその厳しさと融通の利かなさで同級生からは敬して遠ざけられていたという。だが公平で親切な一面もありそれで後輩達には好かれていたそうである。なお料理部に所属し、そこの顧問の先生を糖尿病寸前まで追い込んだこともある。
「私もそう思います」

八条も同意見であった。
「どんな組織でもね」
「はい」
なお内務省では汚職やセクハラも皆無と言っていい。中央警察もである。金の前ではその様なものが許される筈もなかった。
「他にも軍のことに関して色々と骨を折っておられるようですね」
「別にそうは思いませんが」
新たに運ばれて来ていた餃子を口に入れる。日本のものを参考にしたと思われる焼き餃子だ。実は韓国の料理は案外日本の料理を参考にしたものがちらほらと見受けられる。この焼き餃子もそうである。だが味付けはやはり韓国風である。唐辛子と大蒜で辛くまとめている。
「当然のことですので」
「その当然のことをしない人が多いのです」
これまた金の言いそうな言葉であった。
「困ったことです」
「はあ」
「そんなことだから連合は民度が低いとされるのです」
「そんなことも言われているのですか」
「エウロパの貴族達から。千年以上も言われていますよ」
「まあ彼等は置いておいて」
見れば金もその餃子を食べてマッコリを飲んでいる。どうやら金は酒もかなり飲める方であるようだ。だがどうもその酒も甘いものでなければ駄目なようだ。マッコリはかなり甘い酒なのである。
「どちらにしろ他人を批評するのが趣味なのですから」
「あまりいい趣味ではないですね」
「暇だとそれだけ底意地が悪くなるのでしょう」
八条は答えた。
「ですがその底意地の悪さはともかく誇り高さは見事なものでしたよ」

「そうなのですか」
「彼等は勇敢でした」
八条は語る。
「非常に優れた軍人でした。それは事実です」
「そうだったのですか」
「はい。それに紳士でもありましたし」
「敵ながら、というわけですね」
「ええ。捕虜になっても軍人として、貴族としての欣治を忘れませんでしたし」
「成程」
「彼等の言う平民達を命をかけて護ろうとした貴族もいました。銃を持って屋敷に立て篭もって」
カタヤイネンの話のことであるのは言うまでもない。
「そして最後の最後まで戦いましたから」
「その身分に見合うだけのことはしたと」
「ええ」
八条は頷いた。

## 第十六部第五章　剣は収められその十六

「その通りだと思います」
「見事ですね。数のうえでは圧倒的な劣勢にあったというのに」
「こちらも損害こそ少なかったものの非常に手こずりましたから」
「左様で」
「はい。強敵でありました」
それは認める。
「その強敵に対して連合軍もまた見事に戦ったと」
「そう思います。それは称賛されるべきかと思いますが」
「私は今まで軍関係の部門に就いたことはないので」
金はまずこう前置きした。
「あまり詳しくはないのですが」
「はい」
「それでもあの戦いが連合軍にとって極めて厄介なものであったということはわかります」
「そうですか」
「はじめての戦いでしたし」
一千年もの間戦争がなかったというのに。その彼等がサハラで豊富な実戦経験を積んでいたエウロパ軍と戦ったのである。これも考えてみれば非常に凄いことではあった。
戦いを知っている軍隊と知らない軍隊、その差は大きい。だがそれでも彼等は戦ったのである。そして勝ったと言ってよかった。
「この結果には満足すべきだと思いますが」
「いえ、そうは思いません」
しかし八条は満足してはいなかった。
「色々と反省すべき事柄があると思います」
「研究して後に生かすと」
「そうです。そうでないと軍は先に進みません」

彼は言う。
「そして技術の研究も。軍というものは常に進歩していかなければならない組織です」
「そのうえ出費しかない」
「はい」
これには頷くしかなかった。
「考えてみると因果な組織ですね。何も生み出さないのですから」
「しかしなくてはならない組織であるのも事実です」
彼は答えた。
「少なくとも最低限は」
「最低限ですか」
金はそれを聞いて考える顔と目になった。
「連合軍はそれを考えると最低限の軍備でしょうか」
「予算と人員のうえでは」
これは単に連合が巨大なだけであった。全人口の九割近くとその総生産の殆どを擁する巨大勢力である。それならば軍も大きくなる筈であった。巨大さと合わせて。
「割合的にはね」
「ですが他の勢力からはそうは思われませんね」
「はい」
これは八条もよくわかっていた。
「何しろ数が膨大なものですから」
「サハラでの小国の人口程の数ですからね」
「そうですね、九十億と一口に言っても」
「実際の数になると信じられない程です」
実際に連合においても小国ではここまでの人口を持っているわけではない。三百の国の中には当然ながら小国も存在する。十億程度で所有する星系も一つしかない国も存在するのである。昔で言うところの都市国家の様な位置である。
「それを考えますとやはり脅威ですか」

「そうですね」
金はそれに頷いた。
「問題はこれからの行動かと」
「ええ」
「周辺の勢力を無駄に刺激しないことが。連合軍にとっても中央政府にとってもよいのでは、と思います」
「わかりました。では以後はそれも考えていきます」
「それが宜しいかと」
金としては周辺諸国とのパワーバランスを考慮し、あえて彼等を刺激しないという考えであった。それは八条も同じであった。
「無闇に敵を作るのもよくありませんからね」
「そういうことですね」
金の声は何時になく穏やかであった。
「それが連合にとってもいいと思います」
「ただ」
だがここで八条は言った。
「ただ？」
「近いうちに軍の大幅な拡充を提案しようと考えているのですが」
「人口の問題でですか？」
「はい」
八条は答えた。
「連合の人口はもうすぐ四兆になろうとしております」
連合の人口はまだ増え続けていた。三兆であったのはもう昔のことであり数十年の間にまた一兆増えていたのである。これは連合が様々な問題を抱えながらも安定し、人口増加が可能な状態にあるからである。
「増えた人口を守る為には。増強が必要かと」
「それが国防省の御考えですね」
「内務省も状況は同じだと思いますが」
「否定はしません」

金の返答はこうであった。
「人口増加はそのまま治安の問題と直結します」
「はい」
「今内務省も中央警察の人員の増加を検討しているところです」
（やはり）
八条はそれを聞いて心の中で呟いた。
「それでは」
「そうした意味では国防省と内務省の置かれた状況は同じです」
金はチヂミをまた口に入れた。それから述べる。
「ですが違う部分もまたあります」
「予算ですか」
「はい。中央軍にかけられる莫大な予算は議会においては批判する議員もおります」
「ええ」
予算の割合から見てはそれ程ではないのだ。だがそれでも反対する議員が多い。これは他の予算との関係やそもそも連合軍という存在をまだ認めたくない議員がいたりするからである。各国の権利に対して熱心な議員は中央軍の存在を快く思っていないのだ。こうした中央の権限拡大と各国の権利の尊重は連合において常に議論される問題であった。千年もの間続いている。なお各国の権利に執心しているのは大国である場合が多い。
「彼等の存在を考えると。また議論が紛糾するでしょう」
「それに関しては既に予想しております」
八条は述べた。

## 第十六部第五章　剣は収められその十七

「今の九十億から。百三十億にまで増員します」
「人口に合わせてですね」
「はい。そしてそれに合わせて艦艇や軍港も整備していきます。計画は立案の段階に入っております」
「早いですね」
「人口が四兆に達したところでこの案を提出するつもりです」
八条はそこまで話を進めていたのであった。これには金も内心感嘆するものがあった。
（流石ね）
しかしそれは口には出さない。あくまで胸の中に収めて話を続けた。
「予算全体も拡大するようですね」
「人口が増えておりますからね」
八条はそれも知っていた。
「そしてそれと同時に国力も」
「はい」
「あくまで今の予算での割り当てを崩すつもりはありません」
それは崩さない。他の分野での発展を考慮に入れてのことである。軍事だけ突出するというのは少なくとも連合においてはないことである。
「そうですか」
「それを崩すと反対派がより批判を増しますからね」
「賢明な判断ですね」
「有り難うございます」
八条は素直に礼を述べた。何処か先輩と後輩を思わせるやりとりであった。
「国防省としてもこれから多くの動きがあるということですね」

「ええ」
「そして連合も。戦争が終わってもまだ動きが続く」
それが世界というものであった。人間の世界は人間という存在がいる限り永遠に続く。これは自明の理である筈だがそれを思う時はあまりない。その時で必死な場合が多いからである。またあまりにも当然のことと思い意識もしない。人は当然と思ったことは意識したりはしないのだ。これは重要なことであり歴史においてもその当時において当然と思ったことは記録として書かれないことが多い。変わったことだから書くのだ。犬が人を噛んでも誰でも驚かないが人が犬を噛めば驚く。それと同じことなのである。だから歴史を調べるにおいてはこれを頭に入れておかないと後で後悔することになったりもする。
「我々も。何かと手を打っておかなければなりません」
「その為に政治家をやっているのですからね」
「はい。おや」
ここでデザートが運ばれて来た。
「丁度いいタイミングで」
既に料理はあらかた食べてしまっていた。マッコリもなくなっていた。そうした意味で非常にいいタイミングであった。
デザートはフルーツであった。山の様なフルーツが運ばれて来る。

## 第十六部第五章　剣は収められその十八

その中に桃もあった。金はその桃をうっとりとした目で眺めていた。
「いい桃ですね」
「そうなのですか」
「この色といいみずみずしさといい。素晴らしいです」
彼女は果物も好きなのである。そのせいか果物の目利きとして知られていた。
「そうなのですか」
「是非召し上がられて下さい。他の果物も素晴らしいです」
「はあ」
言われるままその桃を皿に取る。そして口に入れる。
口の中に桃独特の優しい甘みが漂う。それは確かに素晴らしいものであった。
「これは」
「如何ですか？」
金は問うてきた。
「美味しいでしょう」
「はい」
八条は素直に頷いた。
「これはまた。こんな桃ははじめてです」
「台湾産ですね」
金も一口食べていた。それから述べた。
「この色と味は。間違いなく台湾の火焼星系のものです」
「左様ですか」
「あの星系は台湾きっての穀倉地帯とされていますね」
「はい」
台湾だけでなく連合の中でも有名な穀倉地帯である。連合はそう

した大規模な穀倉地帯を多数抱えている。これもまた連合の豊かさの象徴の一つであった。
「そこで採れたものです」
「よくおわかりですね」
「味、いえ外見で」
金は答えた。
「わかります。ましてやこの甘さは」
「はあ」
「火焼の桃以外にはありません。流石と言うべきです」
「そうなのですか」
「ここにある果物は全てそうですね」
金はそこまで見ていた。
「苺も西瓜も。もっともこちらは野菜ですけれど」
「ですね」
これはもう言うまでもないことではあった。
「それでも見事です。新鮮で」
「はい」
中身が青い西瓜である。品種改良の結果だ。赤い西瓜に比べてあっさりしていることで知られている。
「この青い西瓜もまた火焼のものに限ります」
金は急に食べ物に関して饒舌になっていた。やはり甘いものには目がないということであろうか。
「一番美味しいのですよ」
「はあ」
「長官は召し上がられたことはないのですか？」
「あるとは思いますが」
八条は答えた。
「ですが。これといって記憶が」
「それは残念です」
金はそれを聞いて本当に残念そうな顔になった。

「果物は。やはりここが一番ですから」
「そんなにですか」
「それは今ここにある果物を御覧になればおわかりでしょう」
彼女はまだ言う。
「さあ、どうぞ」
そして八条にも勧める。
「召し上がられて下さい。後悔は有り得ませんから」
「わかりました。では」
八条もその果物を次々と食べはじめた。それは確かに美味かった。
連合一と言ってもいいものであった。

## 第十六部第五章　剣は収められその十九

八条と金は食事の後で別れた。八条はそのまま国防省に戻った。そして仕事に復帰するのであった。
「内相とは何か」
「何もありませんよ」
部屋にやって来たシャリアピンに笑いながら返す。
「内相がその様な方だとも」
「ははは、確かに」
わかっていて聞いていた。シャリアピンも笑いながら返す。
「それはないですね」
「そういですよ。何かあればそれこそ連合中が大騒ぎです」
「あの内相に限ってね」
「はい」
「ただ、内相はあれで結構もてたそうです」
「そうでしょうね」
これには八条も頷いた。
「綺麗な方ですから。聡明ですし」
「それでも男性とお付き合いしたことはないそうで」
「それもそうでしょうね」
八条の言葉はさっきのと殆ど変わりがなかった。
「厳しい人ですから」
「ガードがね。半端ではなかったそうで」
「昔からかなり潔癖症だったとか」
「韓国では有名な美人でしたが同時に潔癖なことでも有名だったそうですね」
「異性は相手にはしない、ですね」
「そのせいで同性愛者だという噂まであったそうで」
それもさもありなん、といった程であったのだ。

「ふむ」
実は八条も似たような評判であるのだが彼はそれに気付いてはいない。
「まだ結婚はされないのですか」
これもである。美男子であるがそうした話が見事なまでにないので同性愛者だと思われていることに彼も全く気付いてはいないのである。
「そのようですね」
「またそれは」
「けれど内務省のスタッフには結婚はいいことだと仰っているようですから興味がないというわけではないそうです」
「そうですか」
「まあ相手もいると思いますよ。綺麗で清廉な方なのは事実ですし」
「ええ」
「長官も。もっとも長官はお相手には事欠かないのでは？」
「ところがそうではないのです」
八条にも話が回ったが彼の返事は素っ気無いものであった。
「私はもてないので」
「まさか」
「いえ、これが本当に」
やはり気付いてはいなかった。彼はその美貌と穏やかな性格と優雅な物腰で学生時代から人気があった。しかし高嶺の花だと思われていたのと彼の鈍感さで気付いてはいなかったのである。
「特定の女性との交際はないですね」
「またそれは」
女性との交流はないわけではないがあまり深いものではないのである。
「このまま独身かも知れないですね。最近弟や妹達が次々に結婚して」
「それは寂しいですね」

「まあ縁ですからね」
そう言って話をまとめようとする。
「結婚も相手ができるのも」
「私もそうですからね」
シャリアピンはそこには頷くものがあった。
「今の妻とは。ふと知り合って」
「はい」
「交際して。それから結婚しました」
「そして今に至るのですね」
「そうです」
彼はまた頷いた。
「まあ何があるかわかりませんからね、これも」
「人との縁は」
二人はそうした話をしていた。だが次第に仕事に話を戻してきた。
「講和はしましたが」
「はい」
停戦と講和に関してであった。
「エウロパもまた必死なのはおわかりでしょうか」
「無論です」
八条は応えた。
「彼等も国がかかっていますからね」
「果たしてどうしてくるか」
「粘るでしょう」
「粘りますか」
「ええ」
シャリアピンは言う。
「今彼等は圧倒的に不利な状況にあります」
これは事実であった。国土のかなりの部分を占領され多くの兵を失った。あやうく首都であるオリンポスまで占領されるところであったのである。これを劣勢と言わずして何と言うのか。

「戦いに負けたと思っているでしょう」
「はい」
これは紛れもない事実である。連合から見れば。
「ですが心では負けてはいないのです」
何故かエウロパの側に聞こえる言葉であった。
「少なくとも彼等はそう思っているでしょう」
「まだ戦意がありますか」
「ですね」
彼は言う。
「それに戦争はまだ終わっていないのも事実ですし」
「はい」
これもまた言うまでもないことであった。今は停戦である。正式に矛を収めたわけではない。
「だからこそです」
「マウリアを間に入れての話し合いですか」
「そう。テーブルの上で最後の戦いです」
語るその言葉が強くなる。
「これに勝たなければ」
「真の勝利ではありませんね」
「外務省は今それで対応に追われているそうです」
「総理府も」
今この二つの省庁では灯りが消えない状況である。
「大統領もほぼ不眠不休だそうで」
「忙しいのは国防省だけではないですね」
「ですね」
二人は頷き合った。
「若しかすると長官もそれで動かれることになるかも知れませんよ」
「私もですか」
「この戦争の主役であるのは紛れもない事実ですし」
「ふむ」

「それは頭の中に置かれているのがよいかと。何が起こってもよいように」
「わかりました。では」
「はい。こちらが今回の戦いでの物資の資料です」
ディスクを差し出した。
「かなり膨大な量ですが」
「でしょうね」
八条はそれに応えた。
「何十億もの人員のものですから」
「はい。費用も莫大です」
「覚悟はしていましたが。さて」
机の上にあるノートパソコンにそのディスクを入れた。そして見る。
「どれ程のものか」
二人はそれに関しての話に移った。そして朝まで話を続けるのであった。

## 第十六部第五章　剣は収められその二十

八条が戦後処理に没頭しているその頃大統領府も様々な仕事に追われていた。
通常の内政や外交の他にここでも戦後処理に関して多くの仕事があったのである。キロモトを中心として皆その処理に追われていた。
その中でキロモトは首相であるアッチャラーンと自身の執務室において話をしていた。
「では留守は私が」
「うむ、頼むぞ」
二人はソファーで話をしていた。そして何かを決定したようである。
「私が行かなくては話にならないだろうからな」
「そうでしょうね」
アッチャラーンはその言葉に頷いた。
「向こうも総統が出て来ますから」
「うむ。そして首相もな。我々は乗り込む立場だ」
「はい」
アッチャラーンはそれに答えた。
「会談の場所はやはりオリンポスですね」
「そこしかないな」
キロモトの声が重くなった。
「おそらくは。彼等もそこで話すつもりだろう」
「敵の首都でですか」
「入城と言えば聞こえはいいが敵の本拠地だ」
「一千年もの間全くの異世界であった場所に入るのですか。何か感慨がありますね」
「そうだな。まだ信じられん」
キロモトは述べた。

「そしてそこで講和の条約を結ぶのだからな」
「これを夢見たことはありますね」
「うむ」
これは連合にとって夢であった。
「彼等に城下の盟を誓わせるのは。その逆は悪夢でしたが」
連合の仮想戦記小説では他の知的生命体の侵略と共にエウロパの侵略がよく題材に使われてきた。これはエウロパでも同じである。彼等は互いの存在を恐れていた。だからこそこうした小説が誕生したのである。
「それが現実になった」
「そして閣下が行かれる」
「大統領になった時には想像もしなかったな」
素直にこう述べた。
「エウロパとの戦争も」
「オリンポスに入ることも」
「私の他にも同行する閣僚が必要だな」
「ですな。まずはカバリエ外相でしょうか」
「彼女には是非来てもらわなければならない」
キロモトは言った。
「外務大臣としてな」
「はい」
これは当然と言えた。外相ならばこれだけ重要な会談に出席しないわけにはいかない。キロモトの判断は当然と言えるものであった。
「そしてもう一人だが」
「誰を」
「八条長官だ」
「彼ですか」
「そうだ。どうかな」
そう言いながらアッチャラーンを見た。
「いいと思うのだが」

「そうですね」
それに対してアッチャラーンは一呼吸置いてから答えた。
「まずは国防長官としての立場からいいと思います」
「うむ」
「そして資質からも。いいと思います」
彼は二つの理由を挙げた。
「では賛成だな」
「無論です」
「よし、それを基本として話を進めよう」
キロモトは言った。
「三隻の巨大戦艦を用意してくれ」
次に戦艦の手配を命じた。
「それぞれの艦に乗ってエウロパに向かう。よいな」
「わかりました。では」
「すぐにそちらの準備にも取り掛かろう」
「はい」
こうして二人の話し合いの結果エウロパに向かう者の選定も進められることになった。話は粛々と進められていた。時代はまた一つの局面を迎えようとしていたのであった。

第十六部　　完

２００６・２・１４

# 第十七部第一章　銃は収められその一

銃は収められ

連合とエウロパは一千年もの間激しい対立関係にあった。これは月の開拓からはじまったものであるが実はその前から対立の火種は存在していた。

太平洋と欧州の二つの経済圏があった。日米中、そしてＡＳＥＡＮを中心とする太平洋と西欧と東欧を合わせた欧州のそれである。この二つの経済圏は人類社会を二分する巨大な二つの軸となっていたのだ。

勢力的には太平洋が圧倒的に優勢であった。その人口も経済規模の欧州のそれとは比較にならないものがあった。だがまとまりは決してよくはなくそれが為に欧州に遅れをとることが多かった。その欧州にしろ決して中は円満ではなかったがそれでも彼等の方がまとまりがあった。

彼等は世界各地で衝突していた。武力衝突こそなかったがそこには激しい戦いがあった。アラブ、そしてアフリカで。彼等はそれぞれの国を自分達の側に引き込む為に様々な手段を講じてきた。これが今の連合の流れにも繋がる。この時の取り込み工作がアフリカ諸国を太平洋に引き込む一因ともなったのだ。

こうした背景があり月での資源争奪が起こった。そして結果としてそれが決定的なものとなり連合とエウロパの対立となったのである。これは一千年もの間続いた。その対立が人類社会の一つの軸となったのである。

彼等はそれぞれ一つの文明となった。そして文明同士の対立へと変化した。エウロパの貴族文明、連合の大衆文明。俗にこう言われることがある。マウリア、サハラもそれぞれ文明であり人類社会は四つの文明に分かれたのであった。

その四つの文明の中でも衝突は常にあったが連合とエウロパ程の

ものはなかった。その対立がそのまま長きに渡って続き、様々な工作も繰り広げられた。これは主としてエウロパ側から行われていた。その隠れ蓑ともなっていたのがバチカンであった。

カトリックの信者は連合にも多い。だがバチカンはエウロパにある。エウロパはそれを利用したのだる。連合とエウロパの間を自由に行き来出来る数少ない存在、聖職者という存在を。そしてこれは成功していた。ステッラという大物工作員もシスターに変装し連合に入っている。だがそれも遂に見破られた。

工作員を潜入させて様々な破壊工作を行う、これは充分に宣戦布告の材料となるものであった。そして連合は迷うことなく宣戦を布告した。作戦名はハンニバル。かってローマを攻略せんとしたカルタゴの名将の名を冠したのであった。欧州世界を叩き潰さんとする連合の意志がここにもはっきりと出ていたのであった。

こうして連合とエウロパの戦いがはじまった。一千年の対立が遂に武力衝突となったのである。だが今はその矛も収められていた。そして講和の段階に入ろうとしていた。

その中で憂いに沈む者達もいた。それはエウロパの西方にある一つの星系であった。

ヨハネ星系。かっての預言者の名を冠した星系でありここにバチカンがあった。この時代バチカンは惑星一つがそのまま教会となっていた。キリスト以降、そして今に至るまで欧州の心であったこの宗教の象徴として相応しいとも言える規模であった。

そこにある新聖ピエトロ寺院。ここに教皇がいた。インノケンティウス十七世。もう老齢の教皇であった。

彼はスペインに生まれた。カトリックの力がとりわけ強い国である。これは昔からであった。

スペインのカトリックの強さには根拠があった。歴史的根拠である。かつてスペインのあったリベリア半島はイスラム教徒の勢力圏であった。そこにキリスト教徒達が領土の奪還を掲げて戦いを挑ん

だのである。
　その時の旗印がカトリック、信仰であった。そしてそれによりリベリア半島は完全にカトリックの手になった。こうした背景がある為スペインではカトリックの力が強いのだ。そして王家はハプスブルク家、ブルボン家であった。どちらもカトリックである。両家は欧州においての対立軸となっていたが信仰するものは同じだったのである。だが愚直なまでにカトリックを護るハプスブルク家に対してブルボン家は新教徒と手を結ぶことを厭わず三十年戦争に参戦する等いささか手段を選ばないところもあった。もっともそのハプスブルク家もフランスに対抗する為にイギリスやロシア、オランダといったカトリックではない国と手を結んではいるが。あくまで程度の問題である。
　そのスペイン出身の教皇である彼は最初は教会の神父であった。信仰心が強く真面目でありよい神父であった。学生時代から聖書の研究を行っておりその論文でも有名であった。
　それが目に止まり神学博士となり大学の教授となった。だが地位や名誉にこだわる性格ではなくそれが余計に信頼を集めた。
　遂にはバチカンに招かれ枢機卿となった。それから教皇に。真面目な学者肌の人物であり政治的な野心は皆無であるとされる。温厚篤実な人物としても有名である。その学識は歴代教皇の中でも指折りとされている。もっとも中世の教皇は学者というよりは政治家であった。だが彼は政治家ではなかったのである。この時代もバチカンに政治が求められるのは事実であるが彼はそれよりも学問と信仰を大事にすべきと考える人物であったのだ。
　だからこそ彼にとって今回の戦争は非常に悩むべきことであった。工作に枢機卿までが関わり、起こったことであるから。彼はこの戦争の間中いつも塞ぎ込み懺悔の日々を送っていたのである。
　この日もそうであった。講和が成ったとはいえ彼の心は晴れなかった。一人祈っていた。毎朝、毎夕。今は朝の祈りであった。それが済んでから彼は自室に戻った。すぐにそこに侍童がやって来た。

## 第十七部第一章　銃は収められその二

「教皇様」
見れば金髪の美しい少年である。バチカンは基本的に女人禁制である。その為こうした少年が側にいるのである。これで男色の噂もないわけではないがこの教皇は信仰を心得ておりそれはない。この時代もバチカンは同性愛に対してはあまりよく思ってはいないのである。
「朝食の用意ができました」
「はい」
教皇はそれに頷いた。そして朝日が差し込む白い宮殿の廊下を進んで行く。その姿は神々しくまさに神の僕に相応しいものであった。
一室に案内される。ここも白い部屋であった。
広いが装飾はない。清潔で落ち着いた感じの部屋であった。
教皇はそこにある椅子に座った。すぐに朝食が運ばれて来た。一杯のオートミールであった。
まずは祈る。それから静かに食事をはじめる。それが済むとオートミールが入っていた皿は下げられた。それで食事は終わりであった。
食事が済むとすぐに仕事であった。まずは信者達に顔を見せることであった。
これは歴代教皇の重要な仕事である。エウロパ中にいる信者達が教皇に会いに行く。連合からは行き来ができないので自然とエウロパの者達だけになる。その信者達の前に姿を現わす。それだけであるが非常に重要な仕事なのである。それが終わると次の仕事だ。今度は会談であった。
「ヤロシュ枢機卿が来られました」
「はい」
それに頷く。また白い廊下を進み宮殿の一室に入った。今度は応

接の間であった。やはり白く、清潔な部屋であった。
「お待ちしておりました、教皇」
そこに緋色の衣を着た老人が立っていた。彼がヤロシュ枢機卿である。彼もまた学者出身であり教皇の腹心ともされている。その彼がやって来たのだ。
「お早うございます」
「はい、お早うございます」
まずは挨拶からはじまった。
「ようこそ来られました」
教皇は彼に穏やかな笑みを浮かべてこう応える。
「まずはお座り下さい」
「はい」
枢機卿は勧められるままに席に座った。そして教皇も座った。それから二人は話に入るのであった。
「今日来られた理由を御聞きしたいのですが」
「以前お話したことの続きですが」
「はい」
教皇は頷いた。頷くその顔に暗い影が差し込んだ。
「戦争は終わりました」
「そして講和の話になっているのですね」
「そうです。その講和の条件にやはり我々が入っているとのことです」
「バチカンが」
教皇の顔の影がさらに暗いものとなった。
「ロマーニ枢機卿がステッラに関わっていたのは事実ですから」
「そうですね」
「我々も責務から逃れることはできないかと」
「やはり前以て調べることを強く行うべきでした」
教皇の声は暗澹たるものとなった。
「政治に関わっているかどうか。迂闊でした」

「教皇、御言葉ですが」
枢機卿の声も暗いものとなっていた。
「それを行っても。やはり工作は行われていたと思います」
「隠れて。嘆かわしいことです」
教皇はそれを聞いて嘆息した。
「信仰が利用されるとは」
だが彼にもわかっていた。
「昔から。それが人間の参かわしいことです」
教皇はそれを聞いて嘆息した。
「信仰が利用されるとは」
だが彼にもわかっていた。
「昔から。それが人間の弱さなのでしょう」
「残念なことに」
枢機卿も暗い顔でそれに頷いた。
「我々は完璧ではありません。弱い存在です」
「はい」
それが人間であった。弱いのである。そして完全ではない。
若し人間という存在が完全な善、若しくは完全な悪であったならば世の中というものは遥かに簡単で分かり易い世界になっていただろう。同時に哲学や宗教といったものもここまで大きな存在にはならなかったであろう。
人間は不完全な善であると同時に不完全な悪である。絶対的な善、絶対的な悪というものは人間という存在を考えると存在しないと言ってもよいかも知れない。

## 第十七部第一章　銃は収められその三

多くの者の血を流し、以後の人類の歴史に大きな影響を与えたフランス革命。その中で恐怖政治を築いたジャコバン派も正義に燃えていた。彼等は一人一人は高潔な者が多かった。革命の理想と正義を確立させ、広めようとしたのである。だがその結果が恐怖政治であった。罪のない者達がギロチンに、銃の前に露と消えた。革命は罪のない者達の血まで欲する。彼等の正義を追えば追う程フランスでは血が流れたのであった。

異端審問も然りである。これは教会の数多い汚点の中でも最大のものの一つとされている。何も知らない者達を一方的に魔女と決め付け処刑する。悪である。だがそれを行う者達の中には魔女裁判により魔女からもたらされる利権を狙う最も卑しむべき輩もいたが魔女をこの世から消そうとする者達もいた。その利権を漁っていた輩達もまた家庭等では善良であったりした。世の中とはそうしたものである。

人間は神ではない。決して邪悪な存在でも好戦的な存在でもない。野蛮な存在でもない。一言では言えない。だからこそ信仰が存在するのである。弱い存在であり、完全な存在ではないから。彼等は何かにすがろうとするのである。そしてすがる。そこから何かを得ようとする。それが人間である。

「何かを利用しようとする。それが信仰だったのですね」

「嘆かわしい話ですが」

「これも昔からでした」

教皇は悲しそうに首を横に振る。

「教会もまた同じでしたが」

「はい」

「その結果がこの戦争ですか。これに対して我々は何もできなかった」

「それどころか一千年に渡る対立の解消もできませんでした」
むしろ対立を煽る原因の一つともなっていた。エウロパにバチカンがある。連合のカトリック教徒達はそれが我慢ならなかったのである。
連合のカトリック教徒はエウロパのそれよりも遥かに多い。これは元々の人口が全く違うから当然であった。彼等は自分達こそがバチカンを戴くに相応しいと考えていた。そしてバチカンを連合に迎えようと主張する者までいた。これに対してエウロパの者達は当然の様に反抗する。結果としてこれもまた連合とエウロパの対立の一つとなった。教会は何も言えなかった。その感情的な対立を考えればこれは当然であった。
一方を立てればもう一方が立たない。バチカンはエウロパにあるが信者は連合の方が多い。それを無視することはできなかった。どうにもならなかったのである。
「私は思うのです」
教皇は言った。
「我々は。本当に人を救っているのでしょうか」
「教皇様」
枢機卿もこれに対して何も言うことはできなかった。
「以前の教会はそれすらも放棄していました」
「はい」
中世、そしてルネサンスでの腐敗した教会である。
「ですが今は。救おうとしても救うことができないでいる」
嘆きが声を支配していた。
「我々は無力です。何の力もありません」
「そうではないと思いたいですが」
枢機卿は何とか教皇を励まそうとしていた。
「日々教会には救われたことに感謝する手紙が届いておりますし神への祈りも捧げられています」
「それはそうですが」

「我々は政治に関わることを放棄しました。そして本来の責務に戻りました」
「本来の責務ですか」
「人の心を救う。そうではないでしょうか」
「心をですか」
だがそれを聞いても教皇の顔は晴れなかった。

## 第十七部第一章　銃は収められその四

「ですがこの戦争で人の心も」
「・・・・・・・・・」
枢機卿はそれを聞いて黙るしかなかった。
「荒んでいます。我々の声も届いてはいないでしょう」
「それでも我々は」
枢機卿はたまりかねたように言った。
「神に仕える者として」
「それはわかっています」
だが応える教皇の声はやはり晴れない。
「ですが我々はもう」
「教皇」
「誰も救うことは。できてはいません」
「・・・・・・・・・」
枢機卿はもう何も語ることはできなかった。彼等は最早無力な存在であった。そして神の手に任せるしかなかった。何もかも。自分達の運命でさえも。
バチカンは沈黙と絶望に支配されていた。彼等はもう自分達の運命を自分達でどうにかすることはできない状況になっていた。その為絶望に支配されていたのだ。
エウロパ一千億の民もまた同じであった。彼等はこれから自分達がどうなるのか全くわからないでいた。その為荒れようとしていた。
「俺達は連合になってしまうのか！？」
誰かが不安にかられて言う。
「そしてあいつ等に膝を屈して」
「おい、止めろよ」
喫茶店で言い争いがはじまった。
「そんな訳ないだろ」

見れば学生達が話をしていた。コーヒーカップを挟んで言い合う。
「俺達はずっとエウロパだ。それ以外の何者でもない」
「連合の中のエウロパか！？」
金髪を後ろに撫で付けた学生が言う。不安にかられているのは彼であった。
「連合に併合されて」
「何でそんなこと言うんだ」
茶色の髪の学生がそれに反論する。
「俺達は負けたわけじゃないぞ」
「負けていない？詭弁だな」
金髪の学生はシニカルな笑みすら浮かべなかった。一言こう返しただけであった。
「俺達はもうすぐでこのオリンポスまで占領さｓれるところだったんだぞ」
「だが占領はされなかっただろ」
「負けはしなかったからじゃないか」
赤い髪の学生もそこに入った。そして言う。
「だから俺達はここにいるんだ」
「マウリアのおかげでな」
金髪の学生は何を言っても認められないようであった。今度はこう言った。
「あのままいけばオリンポスまで占領されていただろうが」
「軍は頑張ったじゃないか」
「それでも数が違っていただろ。だからこんなことになったんだ」
「数のことは言っても仕方ないじゃないか」
「仕方なくなんかはない。こんなことなら」
「どうしたらよかったんだ？」
茶色の髪の学生の声が厳しいものとなった。
「俺達は。どうすればよかったんだ？」
「人口の差なんて最初からわかっていただろう」

「それは」
金髪の学生は赤い髪の友人に対しても答えることができなかった。
「どうしようもないことなんて最初からわかっていただろう」
「ああ」
「それを承知で俺達はずっとやってきただんだろ。エウロパはな」
「そうだったな」
彼は項垂れて頷いた。
「それはどうしようもないな」
「そうだ。国力の差は」
「わかっていただろ。そのうえで俺達は戦争をした」
「そして今だ。誰もが必死にやったんだ」
「それでこのオリンポスには入らせなかった。それでいいじゃないか」
「そうだな」
金髪の学生はようやく落ち着いてきた。そしてまた頷いた。

## 第十七部第一章　銃は収められその五

「そうだったよな。済まない、どうも感情的になてしまったよ」
「わかってくれたのならいいさ」
友人達はそんな彼を許すことにした。言葉が穏やかなものとなる。
「けれどこれからどうなるんだ」
「確かに併合されるってことも考えられるな」
茶色の学生は彼が落ち着いたのを見計らってからまた言った。
「やっぱりそうか」
「けれどこれは最悪の線だ。これから馬鹿なことをしない限りはないだろうな」
「馬鹿なこと」
「色々あるだろう？テロとか暴動とか」
彼は言う。
「特に一番危ないのは軍の暴走とあちらの要人暗殺だな。これをやると向こうにその意志がなくても併合されてしまう。そうなったらエウロパは完全に終わりだな」
「連合の中の国々になっちまうってことだな。イギリスやフランスとして」
「まあ連合として扱われはするだろうが冷や飯食いだ。永遠にな」
「それだけはやっぱり嫌だな」
金髪の学生はそこまで聞いたうえでまた言った。
「だったら馬鹿なことはしないことだ」
「ああ」
「今は特にな。銃での戦争は終わった」
茶色の髪の学生は腕を組んでこう言った。
「後は交渉だけだ。そこが最後の戦いになる」
「最後のか」
「戦争はまだ続いているということか」

「そうだ」
茶髪の学生は言い切った。
「銃や剣での戦いは終わったがな」
「後は別の戦争ってわけだね」
「そうだな。それが終わらないうちは完全に戦争が終わったとは言えないだろうな」
彼は赤い髪の友人に返した。
「今度はテーブルでの戦争だ。それに不利な材料は作らないにこしたことはない」
「不利な材料か」
「だから厳戒態勢が敷かれているんだ」
「成程」
見ればこのオリンポスもである。オリンポスの市街には警察や軍が出動している。そして警戒にあたっていた。その警戒の強さは尋常なものではなかった。
「馬鹿な奴が馬鹿なことをしないようにね」
「政府の方もわかってるってことか」
「だろうな。何も起こらないことを祈るよ」
「本当にな」
彼等の前を一両の戦車が通り過ぎて行く。そこに乗る兵士達の顔は強張ったものになっていた。それが今のエウロパの置かれた状況を何よりもはっきりと表わしていた。

## 第十七部第一章　銃は収められその六

その警戒態勢に置かれたオリンポスであるが中心にいるのは軍と内務省であった。この二つの組織がオリンポス、そしてエウロパの連合に占領されていない地域を厳戒態勢に置いていたのである。

内務省は首相官邸に程近い場所に置かれていた。左右対称の華麗な宮殿がそれであった。

そこにエウロパ内務相であるハインツ＝フォン＝ボーデーがいた。黒い髪を後ろに撫で付け、口髭を綺麗に整えた端整な姿の男であった。細身の長身がよく映えていた。

彼はノルウェーの名門の出身である。ノルウェーにおいては多くの有名な政治家や官僚を出している。代々文官の家であり中央政府にも多くの閣僚を出している。彼もまたその中の一人であるのだ。

彼は今宮殿の窓からオリンポスの街を見下ろしていた。そしてそこで何か思索に耽っていた。

「閣下」

そこで後ろから声がかかってきた。

「どうした？」

彼は低い、落ち着いた声でその声に返した。見ればそこには若いスーツの男がいた。見れば内務省の若い官僚である。

「シュヴァルツブルグ閣下が来られています」

「国防大臣がか」

「はい。どうされますか？」

「国防大臣自ら来られるとは相当の用事があってのことだろう」

彼は言った。

「だとすれば会わないわけにはいかない。通してくれ」

「わかりました」

官僚はそれを聞いて一礼し部屋を後にした。

「何の話かは大体わかるが」

彼はまた窓の外に目をやり物思いに耽りながらそう呟いたのであった。
暫くしてシュヴァルツブルグが入って来た。彼は部屋に入るとまずは敬礼した。
「どうも」
「はい」
これに対してボーデーも返礼した。彼はそれから国防大臣に対して声をかけた。
「まずはこちらに来られませんか」
「何かあるのですか？」
「窓の方に」
彼はこう応えた。
「オリンポスの街を見ながら。話といきませんか」
「オリンポスの街をですか」
シュヴァルツブルグはそれを聞いて考える顔になった。
「如何ですか」
「是非共」
彼はそれを受けることにした。了承の返事を返す。
こうしてシュヴァルツブルグも窓の方にやって来た。そして二人は並んだ。そこから街を見下ろす。
「何か久し振りですな」
シュヴァルツブルグはその街を見下ろしてこう言った。
「こうしてオリンポスの街を見るのは」
「お疲れ様でした」
ボーデーはここで彼にこう声をかけた。
「長い間戦場で戦われて」
「ですが結果は」
シュヴァルツブルグはそれに対して顔を暗くさせた。
「あの有様ですから。とても胸を張れたものでは」
「しかしこのオリンポスは守られました」

だがそれでもボーデーは言った。
「そして今も。軍は働いておられますね」
「それはそちらもでしょう」
シュヴァルツブルグはこう言ったボーデーに対して言葉を返した。
「今警察も大変な筈ですが」
「はい」
ボーデーは頷いた。警察は内務省の管轄下にある。これは連合と同じである。
だがエウロパの警察は連合のそれとは少し違う。連合の様に重武装ではない。軽武装だ。これはエウロパの治安と大きな関係がある。だが今は違っていた。警戒態勢にある為その装備はかなり重いものになっていた。
「ですが軍に比べれば」
「いや、同じことです」
シュヴァルツブルグはこう述べた。
「警察も軍も。今は」
「失敗が許されませんね」
「はい。何かあればそれがすぐにエウロパの命運を絶ちます」
「はい」
ボーデーは頷いた。彼にもそれはよくわかっていた。学生達が話していたことと同じである。だが彼等はその責任者だけありそれがよりわかっていた。
「それだけは避けなくてはなりません」
「だからこそ警察と軍が協同して警戒にあたっている」
「特にこのオリンポスでは」
「とりあえずは我々がまだ持っている場所では不始末は許してはなりませんね」
「はい、それだけは」
シュヴァルツブルグは答えた。

## 第十七部第一章　銃は収められその七

「断じて許してはなりません」
「ですね。ただいまの我々ではどうしようもない問題があります」
「占領されている場所のことですか」
「はい。アルテミス等はどうしようもありませんが」
「それは占領地の市民達の良心と分別に期待しましょう」
こう言うしかなかった。かなり不安なものではあるがそれしかなかった。
「それしかありませんか」
「彼等に呼び掛けて」
「ですな。ですが今のままだと安心でしょう」
「連合軍の素行と市民達のこれまでの対応を見ているとですな」
「はい。少なくとも私はそう思っています」
ボーデーは述べた。
「まさかこれについて敵軍に感謝するとは思いませんでしたが」
「それは私もです」
シュヴァルツブルグもこう述べた。
「連合軍の規律がいいことは確かです」
「ですな」
「この点に関しては連合軍は誉められたものです」
シュヴァルツブルグも一国の閣僚であり軍を率いる身である。敵だからと入って全てを否定するような男ではなかった。認めるべきものは認めていた。
「若しかすると我々よりも」
「少なくともトラブルは極めて少ないですね」
「ええ。かなりそれに気を使っているそうですが」
「新設だというのに」
連合軍が設立されたのは近年のことである。そしてそれを管轄す

る国防省も同じである。
「見事なものです」
「やはりあちらの国防長官の行動が大きく影響しているようです」
シュヴァルツブルグは述べた。
「八条義統でしたかな」
「ええ」
「彼の存在が。極めて大きいと思います」
「日本人ですな」
「はい」
これは名前を見ればすぐにわかることであった。
「日本では名家の出身だそうです」
「だが貴族ではない、と」
「その通りです」
連合には貴族制度はない。だから八条も彼等から見れば平民なのである。連合の者は皇族及び王族を除いて平民しかいない、これがエウロパから見た連合の社会である。
「かつては貴族だったそうですが」
「左様ですか」
この場合は華族である。第二次世界大戦まで日本にあったものである。だが欧州のそれの様に極端に強い価値を持つものではなかった。
「今は違います」
「あくまで平民の中の名家というわけですね」
「そういうことです」
シュヴァルツブルグは答えた。
「彼等にもそういう意識はあるのですか」
「我々のそれとは全く価値観が違うようが」
「それでもです。何か妙な感じですな」
「連合は階級がないというのを誇りにしておりますからな」
「ええ」

階級というものがなくてもそうした意識はやはり何処にでもあるということである。だが連合に階級がないというのは事実である。ここがエウロパとは全く違うのだ。

## 第十七部第一章　銃は収められその八

「所詮作りものかというとそうではありません」
「イメージだけではないと」
「彼は日本出身ですから」
「あの国ならばそうですな」
これはボーデーにもわかっていた。
「日本は連合の中でも極めて異質な国です」
「はい」
連合三百国はいずれも極めて個性の強い国ばかりであると言われている。個性が強くなくてはとても生きられない社会であるのも事実だ。だがその中でも日本の個性の強さは突出しているとされている。
歴史も文化も。長い間貴族や武士といった封建的な階級が存在していた。エウロパの者達はここに自分達と似通ったものを見る時もあるのである。
だがエウロパのものとは根本が異なる。彼等のそれは異民族統治であった。だが日本の場合は同じ民族である。大和民族であるとされている。元々おおらかな気性があり混血に対しては寛容な民族でありここも欧州の貴族達とは違っている。彼等は決して異民族との混血はしないのである。清教徒革命で知られるクロムウェルがアイルランドを植民地と定めた際まず行ったことの一つにイングランド人とアイルランド人の結婚を禁止したのである。貴族は平民とは結婚しない。これもまた民族間の混血を嫌うからである。実際にはかなり怪しい部分があっても建前はそうである。これに対して日本人は平気で混血する。皇室も朝鮮半島の者と婚姻し、この時代においては琉球王家やエチロピア皇室、そして各国の王族と婚姻を結んでいる。とりわけ琉球王家とはかって明治時代に琉球国が廃され日本になった時に縁組され皇族の一員となったこともあり縁が深い。今

の帝は琉球国王を『叔父上』と御呼びし、琉球王は帝を『姪殿』と呼ぶ程である。実際に血縁関係にある。
大和民族と琉球民族は元々違う民族であった。感情的な対立もかってはあり、差別もないわけではなかった。だがこの時代においては兄弟とも言える間柄であった。これはアイヌ民族とも同じである。日本と彼等は深い関係にある。兄弟国として連合に知られている。互いの交流も婚姻も盛んである。民間レベルでもだ。
「貴族的なものも。解しているようです」
「あの国だけは特別ということですか」
「そのようですね」
シュヴァルツブルグは述べる。
「後はかっての民族を復興させたと言っても素性が怪しい国ばかりです」
ヒッタイトやフェニキア等の国々のことを言っているのである。彼等からみればこうした国々は何処の馬の骨とも知れない連中が勝手に名乗っているだけである。少なくとも彼等はそう思っている。だが当時者達はそうは思っていないのだ。彼等はあくまで自分達がフェニキアやヒッタイト、インカの末裔だと主張する。
「カルタゴにしろティルスにしろ。滅んでおります」
「ですな」
いずれもフェニキア人の都市であった。海洋民族である彼等は地中海の各地に植民し、多くの都市を築いた。優れた商才と航海技術、そして農業を持っていた為忽ちにして一大勢力となった。だがティルスはアレキサンダー大王に、カルタゴはローマに滅ぼされた。彼等は歴史の中に滅んだとされているのだ。

## 第十七部第一章　銃は収められその九

「フェニキアの者達は今回の戦争をカルタゴの復讐だと言っていたそうです」
「また大昔の話を」
「さながらユダヤ人の様に」
　この時代エウロパにはユダヤ人はいない。彼等はイスラエルが連合についた時に皆欧州から去った。その際欧州は経済的、学術的、技術的に莫大な損失を被ったとされている。これは欧州にその名を知られた富豪ロスチャイルド家の名にちなんで『ロスチャイルドの裏切り』とされている。ロスチャイルドの五本の矢は今では連合において君臨している。『煮ても焼いても食えない』とされているイスラエルとその資本は健在であった。連合における陰の実力者だともされている。イスラエルとユダヤ人が動くと連合が動くとさえ言われている。
「では我々は海の民だとも言うのですかな」
「さて、それは」
　シュヴァルツブルグはこれには懐疑的であった。連合にはヒッタイトもあるから言うのである。
　ヒッタイトは鉄器を使い、騎兵により君臨した軍事大国であった。だがその彼等は突如として歴史から姿を消した。海の民と呼ばれる謎の民族に滅ぼされたのである。
　この海の民についてはこの時代においてはルカ人やペリシテ人の諸民族だとされているが詳しいことはわかっていない。この時代においても彼等の正体は今一つわかっていないのである。
　だがその彼等によってヒッタイトは滅ぼされた。同時にミケーネも滅ぼされ、エジプトは衰退した。そして歴史から姿を消した。何処までも謎の民族であった。この時代においてもである。そもそも当時鉄器と騎兵により最強の軍事力を持っていたヒッタイトを瞬く

間に滅ぼし、そうして突如として消え去っているのである。あまりにもその存在が不可思議な民族でもあるのだ。連合においても彼等の正体については今だ不明である。
「ヒッタイトの方は何も言っていないようですが」
「まあそうでしょうね」
「そのかわりアステカが五月蝿いです」
「スペインのあれですか」
「はい。何でもコルテスやピサロに受けた仕打ちへの復讐だとか」
「復讐復讐と」
これには流石に辟易した。もっとも人間というものは何かの支えが必要なものであり復讐もまたそれに成り得るものである。人間を支えるのは決してプラスの感情だけではない。マイナスの感情もそうなのだ。誰かを恨み、憎んでそれを生きる糧にしている者も存在しているのだ。人間とは実に因果な生き物でもある。
「彼等は一千年もの間それしかなかったのでしょうか」
「民族を復興させ、国家を甦らせることに忙しかったとは言っております」
「そのうえでですか」
「はい」
シュヴァルツブルグは応えた。
「その彼等が。よくあれだけ規律を守っていられる」
「口ではそうは言っても記憶にはありませんからな」
ここに連合のそうした国家の問題があった。
彼等は確かに民族の末裔を言ってはいる。だが記憶にはないのだ。彼等が末裔だったとしてもその記憶はもう存在してはいないのである。記憶は消え、断絶していたからである。彼等はそうした意味で本来の末裔ではないとも言えた。記憶は歴史とはまた違う。学んで得られないものなのだ。

## 第十七部第一章　銃は収められその十

「あれは国を纏める為の方便だったのです」
「連合という勢力自体がそれを欲していた」
「それは我々もまた同じです」
シュヴァルツブルグはここで意外なことを口にした。
「我々も同じとは」
「申し上げた通りです」
彼は言う。
「彼等は確かにその纏まりの為に我々を敵視してきました」
「はい」
国家を纏める為に最も容易な方法の一つに敵を作るということがある。国民の目を外に向けて敵愾心を煽り、一つに纏めるのである。かってアメリカが得意としたやり方であり連合もそれを踏襲した。それぞれの国家への帰属意識が強く、纏まりに欠ける連合がそれでも一つの勢力としてやってこれたことの一因でもある。彼等はエウロパという共通の敵を持っていたのである。これは事実であったが誇大に宣伝されている向きもあった。よくあったエウロパからの侵略を扱った小説や貴族達の悪評等である。
「ですがこれは我々も同じことでした」
「言われてみれば」
ボーデーもそれに頷いた。
「我々も彼等を敵と認識し宣伝しておりましたな」
「はい」
シュヴァルツブルグは応えた。
「一千年もの間。それは同じことです」
「左様ですね」
「普通ならばだからこそ連合は占領地で蛮行の限りを尽くすと思ったのですが」

「そうではなかった」
「これに関しては彼等に感謝しとえります。見事な占領地政策だったと」
「はい」
「全てはあの八条義統のせいかも知れませんな。少なくとも彼がいないとここまでにはならなかった」
ここで八条の名が出て来た。やはり彼はエウロパにとって強敵なのだ。
「今頃占領地にいる数百億の市民達は恐怖の中に置かれていた」
「そうだったでしょう。連合軍のモラルは思っていた以上に遥かに高かった」
「ですな」
「だからこそ。我々もゲリラ工作を行えなかった。そして今も平穏を保っていられる」
「それも狙ったのでしょうか」
「我々が基本的にそうしたゲリラ戦を好まないことも知っていたうえであえてやったとしたら八条という男はかなりの人物です」
エウロパ軍は貴族の軍である。誇り高い戦いを好む。その彼等にとってゲリラ戦とは誇りのない戦争なのである。だから滅多にはとられない。サハラでもとられたことはなかった。訓練すら稀である。
「一代の政治家です」
「あの若さで」
「センスがあるということなのでしょう」
シュヴァルツブルグはまた言った。
「軍政家としても」
「恐ろしい人物の様ですね」
「そうでなくては僅かの間であそこまでの軍を作れはしないでしょうし」
「あれだけの軍を僅か数年でというのは確かに驚くべきことです」
「そうです。そしてそれだけではなかった」

彼はまた言った。
「占領地政策も見事だったのですから」
「ですね。まさか連合にあれ程の人材がいようとは」
「結果として。それで今があります」
言葉がきつくなった。
「もう少しでオリンポスまで奪われるところでした。何とか助かりましたが」
「軍務大臣らしからぬ御言葉ですな、それは」
「連合の力は思っていた以上でした」
言葉がさらにきつくなる。
「迂闊でした。ただ国力や技術の差だけではありませんでした」
「それだけではなかったと」
「政治でも。遅れをとっております」
「占領地政策を見せられて、ですな」
「ですがこちらはまだ何とかなります」
「いえ、それは違いますな」
ここでボーデーの言葉も鋭くなった。
「！？」
シュヴァルツブルグはその言葉に目を瞠った。それまで温厚なことで知られ厳しい言葉さえ口にするのを聞いたことがない彼が鋭い言葉を出したからである。
「しなければならないのです」
そしてこう言った。
「さもなければ。我々は全人類、そして後世にまで汚名を残すでしょう」
「そしてエウロパは滅びる」
「それだけはあってはなりません。だからこそ今は治安を徹底させているのです」
「軍部の一部の暴発や市民達の軽挙も」
「今は。些細なことでも許されません。エウロパ貴族の誇りにかけ

て」
「エウロパ貴族の」
それこそが彼等のバックボーンであった。
エウロパとは何か、そう問われると殆どの者が貴族社会だと答える。その貴族である彼等がその誇りを忘れるわけにはいかなかったのだ。

## 第十七部第一章　銃は収められその十一

だからこそ意地がある、彼等はそれが最もよくわかっていた。
「ここは抑えましょう」
「はい」
シュヴァルツブルグの方が頷いてしまった。これは意外なことであった。
だがそれだけのものがないと今の難局は乗り越えられない、それはシュヴァルツブルグもわかっていた。だからよしとした。そして彼等は今後の治安について話し合うのであった。
この話のことはすぐに首相であるペーチの許にも届いた。彼はそれを聞くと静かに顔を動かした。
「治安か」
「はい」
それに財務相であるローズマンもいた。見れば二人共顔の色が紫に近くなっていた。かなり疲労が溜まっていたのだ。
「今我がエウロパはその領土の大半が連合に占領されてしまっている」
「その通りです」
「その大半にはこちらからは手出しが出来ない。だがそれでも残された地域の治安は維持しなければならない」
そうであった。これはペーチもわかっていた。
「だが。被占領地はどうなるか」
「今の時点ではこちらからはどうしようもないかと」
ローズマンは述べた。
「自重するよう呼び掛けるしか」
「辛いものだな」
ペーチの顔は暗いままであった。
「自国の市民達であっても。それだけしか出来ないとは」

「仕方のないことですが」
「いや、それでは済ませられない」
彼は財務相の慰めの言葉をよしとはしなかった。
「何かあれば。それはすぐに我等の滅亡に直結する」
「滅亡ですか」
それを聞いたローズマンの顔がさらに暗くなる。
「誇張ではない。その危険は常にあるぞ」
「わかっております」
「今オリンポスへの入口であるクロノス、ニョルズ両星系は彼等の勢力圏になった」
停戦の後エウロパ軍はオリンポスへ引き上げた。その際連合軍は最後まで戦場に残っていたことからこの二つの星系をそのまま占領したのである。そしてそこに艦隊を置き、占領した。その為この二つの星系は彼等の勢力圏となったのである。これは即ちオリンポスの喉元に刃を突き付けたということである。
「それだけでも。危機にある」
「そして占領地からの税収、交易が途絶えております」
「それにより財政的損失はかなりのものになっているな」
「はい。どうやら連合は民間人及び民間施設には一切攻撃を加えておりませんのでそちらの損失はないのですが」
それだけが救いであった。連合軍はある意味道理の通った軍隊である。
「それでも占領されているということは。経済活動も制限されている」
「経済的損失もかなりのものとなっております」
「しかもそこに軍事費が加わる」
「財政は破綻していると言っていいです」
「講和が成ったとする」
「はい」
「それで財政は復活できるか」

「おそらくすぐには無理です」
ローズマンは率直に述べた。
「今成長率はマイナス二十パーセントです。それをゼロにまで持って行くことすら困難な状況が予想されます」
「そこに軍や防衛施設の再建も加わる」
「戦死者、戦傷者とその家族への保護も。それだけではなく」
「連合が何を言って来るか」
「連合は貪欲です」
これは偏見から出た言葉であったが一面において真実でもあった。連合、とりわけ大国は自国の利益の為ならばどんなことでもする傾向がある。流石に武力は使わないが経済制裁をちらつかせて小国を恫喝するのは日常茶飯事である。これに対して小国は協同してあたるか別の大国を引き込む。連合の内部はそうした欲のぶつかり合いなのである。
「とんでもないことを要求してくるのではないでしょうか」
「途方もない賠償金か」
「有り得るかと」
「我々は一千億しかいない」
ペーチはここでエウロパの人口を述べた。
「それに対して連合は四兆になろうとしている」
「三兆ではなかったのですか？」
「また増えたらしい。それで四兆になろうとしている」
「この期に及んでまた増えたのですか、彼等は」
「土地と食べ物があれば人は増える」
ペーチの言葉は冷静であった。
「簡単にな。彼等にはそれがある」
「我々にはありませんがね」
顔を歪ませてそう述べる。連合とエウロパ、全てを決したのはそこであった。
連合は何処まで続くかわからない広大な無数の星系が目の前にあ

った。エウロパには豊かであるが限られた星系しかなかった。それが両者の運命を決定したのである。

## 第十七部第一章　銃は収められその十二

連合は開拓と経済活動に専念出来た。そして一千年もの間国家間の戦争や紛争はなかった。クーデターすらなかった。豊かな生活がそれを許したのである。海賊やテロリストはあっても彼等は平和であった。多少の治安の不安定なものがあっても彼等は満ち足りていたのだ。

だがエウロパは違った。人口の増加はすぐに抑制せざるを得なかった。そして限られた場所に住み、そこで生きてきた。生きる為にサハラに侵攻した。これに対して連合は参加国全てと中央政府の連名で以って批判を表明した。

「何でも持っている奴等に我々のことがわかってたまるか！」

その時のエウロパ軍務大臣の言葉である。これが何よりも彼等の置かれた状況を言い表していた。

持っている者と持っていない者、その違いがあった。連合とエウロパの違いはそこにあったのであった。

「それでまだ欲しがるというのですか」

「勝者の権利だな」

「都合のいい権利ですな」

「今までは我々がサハラ北方の各国に対して主張してきたものだ。極論すれば連合は我等一千億を消し去ってそこを自分達のものとしてもいいのだ」

この時代では有り得ないがそれが可能な状況なのは事実である。

「かっての人類社会はそうでしたな」

「古代のことだがな」

「はい」

「連合は中世以降もそうしたことをしてきた国もあるが」

アメリカの開拓や中国の膨張のことを言っているのである。ロシアもこれに含まれるかも知れない。

「流石にこれはないだろうが。下手をすればエウロパがなくなる」
「エウロパが」
「そうした意味でシュヴァルツブルグ軍務相とボーデー内相の行動には感謝する」
「ですね」
「軽挙妄動はそれだけで国をあやまつ」
その言葉は真実であった。
「今はまさにそうした時期だ」
「ここを乗り切ってもまだ困難は続きます」
「うむ」
「財政的にも。暫くは冬の時代になりそうです」
「その冬も今を乗り切らねば来ない」
ペーチの言葉は沈んだままであった。
「今は。エウロパ一千年の歴史で最も重要な時だ」
「ここでどうなるか。いえ、どうするか」
「全てはそこにあるのだ」
ペーチはそう言いながら席を立った。
「首相になった時はまさかこんなことが起こるとは思わなかった」
「それは私もです」
「この戦争は。何時かは起こるものだったのだろうが」
彼はそう考えていた。
「そして起こった。この時代にな」
「運命だったというわけでしょうか」
「連合とエウロパの関係を考えればそうなる」
彼はこう答えた。
「我々は長い間いがみ合ってきた。それが武力衝突にいずれ変わるのは必然だった」
「はい」
「それが起こったのだ。だが今はその後の話だ」
「どう乗り切るか」

「そしてどう生き延びるか」
「生き延びるか、ですか」
ローズマンはそれを聞いてシニカルな笑みを浮かべた。
「辛い話ですね」
「卿の仕事はその生き延びた後が主になるが」
ペーチはローズマンに顔を向けて言う。
「財務大臣としてな」
「それではそれを引き受けましょう」
彼はそれに頷いた。
「ですが首相もそれは同じですよ」
「私か」
しかしペーチはその言葉に何故か顔を強張らせた。
「私は」
「どうされたのですか？」
「いや、何でもない」
言おうとしたが止めた。
「とりあえず後は頼むぞ」
「わかりました」
ローズマンはペーチの妙な様子にいぶかりながらもそれに応えた。
「では私はこれで」
「うむ」
ローズマンは退室しようとした。
「また明日参りますので」
「ではまた」
「はい」
こうしてローズマンは退室した。後にはペーチだけが残った。
「うっ」
一人になると彼は腹を押さえ苦悶の声を漏らした。
「まだもって欲しいが」
彼は額に脂汗を滲ませて呟く。

「まだ。話が終わるまで」
彼はまだ時間を欲していた。それが適えられるまで生きたかった。
当然生きるつもりだった。例え何があろうとも、である。

# 第十七部第一章　銃は収められその十三

エウロパは深い沈黙と暗鬱な空気の中にあった。だがこれに対して連合は沸き返っていた。
「オリンポス入城だ！」
「そして城下の盟を誓わせてやれ！」
市民達は口々に叫ぶ。その中でサラム＝フットは机に向かって何かを書いていた。それは今執筆している本であった。
彼はパソコンで書いていた。ワードパッドで次々と文字を打ち込む。そしてきりのいいところで書くのを止めた。
机から立ち上がると背伸びをした。そこに彼の妻がやって来た。
「お疲れ様」
「丁度今休もうと思っていたところだよ」
彼は笑顔でこう応えた。
「どうも今は比較文化を書く気分にはなれなくてね」
「じゃあ何を書くのかしら」
妻はそれを聞いてくすりと笑った。そして言葉を返した。
「書くのは合わないね」
彼は夫として笑みを返した。
「お茶は飲みたいけれど」
「そう言うと思っていたわ」
どうやら予想していたらしい。妻はこう言った。
「お茶の間にお茶とお菓子を用意しているのだけれど」
「コーヒーかな」
「ええ、そうよ」
妻は答えた。
「どうかしら。ブラジルのだけれど」
「いいね」
フットはそれを聞いてにこりとした笑みになった。

「コーヒーはやっぱりブラジルのものに限る。それもリオデジャネイロのがね」
「そのリオデジャネイロのよ」
妻は言う。
「用意がいいね」
「もう何十年も一緒だから。これ位わかるわよ」
「それだけ経ってるかな」
「学生の時に結婚して。それからだから」
時を振り返って述べる。
「そうか、もうそんなに」
「立って話をしても何よ。行きましょう」
「うん、わかったよ」
そして彼は妻に誘われて茶の間に向かった。そこにはもうコーヒーが二つ置かれていた。
あとお菓子も。それはモンブランのケーキであった。
「モンブランかい」
「嫌いだった？」
「いや、子供達が好きだったなと思ってね」
彼は笑ってこう述べた。
「うちの子供達は。何故か皆モンブランが好きだな」
「私が好きだから」
妻は笑って言った。
「よくおやつに出したのよ」
「そうだったのか」
「それでも貴方にだけ出したのははじめてかしら。けれど貴方も嫌いじゃないわよね」
「まあね」
こう応えた。
「あまり甘過ぎないのが特に好きだよ」
「あら、私はとびきり甘いのが好きだけれど」

「君はコーヒーでもそうだね」
「コーヒーも。砂糖がないと」
そんな話をしながら席に着く。
「飲めないわよ」
「クリームだけで充分じゃないか」
そう言いながらクリームを手にする。そして漆黒のコーヒーの中に入れる。
白いクリームがその黒い世界の中に溶け込む。渦を描いた後でゆっくりと混ざり合っていく。そしてそれは沈んで行きそこから浮かび上がる。そしてコーヒーを灰色ではなく独特の淡い色にした。
「思えば不思議よね」
「何がだい？」
彼はコーヒーを眺める妻に問うた。
「いえ、クリームを入れると」
妻は言った。
「こうした色になるのが」
所謂カフェオレである。
「それがコーヒーの魅力なんだよ」
フットはにこにこと笑いながら言う。
「白を入れても灰色にはならないのがね」
「灰色のコーヒーもあるけれどね」
「コロンビアのやつだね」
「ええ。あれは甘くて美味しいわ」
「僕はあれは好きじゃないけれどね」
笑って妻に言うのだった。
「どうしてかしら」
「コーヒーはやっぱり黒いものがいいよ」
そしてこう述べる。
「黒くなければコーヒーじゃない」
「こだわるのね」

「コーヒーはこだわるのが許される飲み物なんだよ」
コーヒーカップを口に近付ける。そして一口含む。コーヒーの苦味とその中に含ませたクリームの甘さが口の中を覆う。それはそのまま口の中を支配した。
「あとお茶もね」
「紅茶かしら」
「いや、緑茶も」
彼は言った。

# 第十七部第一章　銃は収められその十四

「お茶全般がね。それを許されるんだ」
「面白いわね、それって」
「だから長い間飲まれているんだ」
ここでコーヒーカップを置いた。
「こだわっていられるから」
「こだわられないと飲まれないのね」
「そうだね」
それを認める。
「何でもそうだね。こだわりがないと駄目なんだ」
「それじゃあ貴方は何にこだわっているのかしら」
「決まってるじゃないか」
そこでまたコーヒーカップを手に取る。
「コーヒーと研究と」
またコーヒーを口に含みながら語る。
「結婚生活だよ」
「褒めたって何も出ないわよ」
妻はそれを聞いて悪戯っぽく笑った。その笑みは若い時のものと同じだった。
「子供達ももういないし」
皆結婚して家を出たのである。従って今この家には夫婦二人しかいない。
「何も出なくたっていいさ」
しかし彼はそれをよしとした。
「こだわりというのはね。見返りは期待しないものなんだから」
「趣味とでも言うのかしら」
「そうだね、趣味だね」
彼は妻のその言葉に頷いた。

「まあ中には趣味に見返りを期待する人もいるけれど」
「欲張りね」
「連合は欲張りを認めているから」
彼はここで顔を崩して笑った。
「別にいいじゃないか」
「連合だけかしら、欲張りなのは」
「いやいや、それは違うよ」
彼は少し学者の顔になった。
「何処でも。やっぱり人間は欲張りさ」
「そういうものなのね」
「欲で身を滅ぼしたりもするけれどそれを身を立てることもあるし」
文化人類学者というよりは宗教学者めいた言葉であった。
「悪いことだと決め付けることはできないね」
「私は今で充分過ぎる程満足しているけれど」
「それならそれでいいさ」
妻の言葉を認めた。
「人それぞれだし」
「それも連合的ね」
「連合的、か」
フットはそれを聞いて考える顔になった。
「そう言われると何か妙な気分だね」
「どうしてかしら」
「これが連合的だからって決められないからさ」
彼は答えた。
「これこそが、ってね。連合は広いから」
「それもそうね」
「欲がないのも案外連合的なのかも知れない」
矛盾しているようでしていない言葉であった。連合は多様性の社会である。だからこれも一理あるのだ。
「少なくともコーヒーには欲を出していきたいけれどね」

「そうね。ところで聞きたいことがあるのだけれど」
「今度は何だい？」
「このコーヒーのことよ」
妻は言った。
「コーヒーは連合以外でも飲まれているわよね」
「うん」
「エウロパやサハラでも。サハラは置いておいて」
「エウロパのコーヒーのことだね」
「ええ。どんなコーヒーを飲んでいるのかしら」
それが一つの疑問であった。コーヒーの飲み方も国によって違うのである。
「ウィンナーコーヒーとか。洒落たコーヒーがメインみたいだね」
「ウィンナーコーヒー」
「知らないかな。クリームコーヒーのことだけれど」
彼は説明した。
「コーヒーの上に生クリームを置いた」
「ああ、あれ」
妻はそこまで言われてようやく納得した。
「あれのことだったのね」
「知らなかったのかい？」
「お店で見たことはあるけれど。飲んだことはないから」
彼女は答えた。
「わからなかったのよ。御免なさいね」
「いや、謝る必要はないよ」
彼は夫としてこう答えた。
「僕もあれは殆ど飲んだことがないし」
「そうなの」
「何かね、好きじゃないんだ」
彼は言う。
「ああした飲み方は。贅沢な感じが」

「嫌なのね」
「コーヒーは手軽に飲みたいじゃないか」
そしてこう答えた。
「そんなに贅沢にしなくても。手間はかけるのはいいけれど」
「エウロパの貴族は自分で入れないんじゃないかしら」
「だったら尚更駄目だね」
これには駄目出しをした。
「そんなことじゃ。本当のコーヒーのよさはわからないよ」
「それがこだわりってやつね」
「そういうことだね。特に君が入れてくれたのが一番いい」
「それって矛盾するんじゃないかしら」
「さてね」
これにはとぼけてみせた。
「けれど。そのエウロパとの戦争もやっと終わったわね」
「うん」
「貴方はこの戦争を支持していたわね」
妻は今度は戦争に関して尋ねた。
「これは私もだけれど」
「この戦争はしなくちゃならなかった戦争だからね」
彼は答えた。今度は学者の顔になっていた。
「工作員を送り込まれて破壊工作をされていたことがわかったら。戦争になるよ」
「そうね」
これは誰にでもわかることであった。
「サハラじゃもっと簡単な理由で戦争が起こる。それと考えれば」
サハラにおいては普通に何もなく宣戦布告が行われることすらある。これはサハラにおいては特におかしいことではない。サハラは各国が統一を掲げている。これはムハンマドの前の預言者の一人の預言にあるからだ。

## 第十七部第一章　銃は収められその十五

『啓典の民は何時か一つになる』
と。この場合啓典の民とはアラブ、そして今はサハラにいるムスリム達を指すと解釈されている。そして彼等を一つにした者こそ啓典の民の統治者となると。彼等はそれを目指して戦っているのだ。無論それぞれの野心や思惑もある。アラベスクの様に様々なものが混じり、それが戦争へと繋がっているのである。
「うちの戦争の売り方は案外大人しいと思うよ」
「戦争自体は大人しいものではないけれどね」
「まあそれは仕方ないよ」
彼はそれはよしとした。
「政治の一つであるわけだしね」
「連合ではそうではないけれどね」
連合では衝突の際武力を使うことはない。これはエウロパの中においてでも同じである。
「国内と国外では解決の方法が違うものさ」
フットはこう答えた。
「特に対立する勢力に対しては」
「それがエウロパだったのね」
「そう。彼等とは本当に気の遠くなる程長い間いがみ合ってきたし」
連合とエウロパの対立が人類社会の軸の一つであった。両勢力は武力紛争こそないものの長い間対立してきたのである。ここにエウロパのサハラ侵攻が加わる以前より。そうした意味で彼等は人類社会の主役であった。
「何時かは衝突していただろうしね」
「それが今だったのね」
「そういうことになるね」
彼は頷いた。

「それもこれで終わりかしら」
「連合とエウロパの対立が？」
「ええ。エウロパは負けたのだし」
妻は言った。
「もうこれでその長いいがみ合いも終わるのかしら」
「さて、それはどうかな」
しかし彼はそれには懐疑的な言葉を述べた。
「違うのかしら」
「これから余程不味いことをしない限りエウロパは残る」
これは彼も読んでいた。
「どれだけのものを失ってもね。それを考えると」
「エウロパは私達と対立し続けるのね」
「そうだね。復讐を誓って」
「復讐を」
「エウロパでは仇討ちが認められているんだ」
「まだそんなのがあったの」
「そうだよ」
かつて日本等にあったものである。親や家族を殺された者がその仇を取るのである。時代劇や歌舞伎での定番でもある。日本ではその仇を探して日本中探し回ったりした。相手を見つけられればいいが見つけられない場合は悲惨なものである。これは幕府が許可を与えていた。封建社会ならではであり他の国から見れば実に奇妙なものが多いこの幕府のやり方の中でもとりわけ面白いものであると言える。
江戸幕府は当時では極めて公平で寛容な法治主義であった。捜査も人道的で科学的であると言えた。その幕府でこうしたことが認められていたのは彼等が武家政権だったからである。
儒教と武士道、この二つから考えれば仇討ちは当然のことなのである。だから幕府はそれを公認していたのだ。少なくとも近代民主主義国家の法律では有り得ないことだが幕府なら当然のことだった

のである。
「この時代に」
「エウロパは我々と違うからね」
フットが言及するのはそこであった。
「そういうこともあるのさ」
「エウロパも確か民主主義よね」
「そうだよ」
「それなのにそんなものが残っていたなんて」
「彼等は貴族社会だからね」
「だからなの」
「そうさ。貴族にとって誇りは最も大事なものだから」
彼は言う。
「そうしたものも残っているんだ」
「変わった社会ね」
「それを言うなら連合だってそうだよ」
彼は笑いながら言った。
「多分向こうから見たら。階級がない社会なんて」
「おかしいのかしら」
「彼等から見ればね。だから仇討ちをしないのもおかしなことなんだ」
「そういうものなの」
「そう。だから彼等は戦いが終わった後できっと復讐を宣言する」
語るその目の光が鋭くなる。
「そしてそれは連合にとってもいいかも知れない」
「敵が残るのに」
妻はそれを聞いていぶかしむ顔になった。
「何故それがいいのかしら」
「国をまとめるには外に敵がいるのが一番都合がいいんだ」
フットは答えた。

## 第十七部第一章　銃は収められその十六

「特にまとまりに欠ける国家や民主主義国家はね」
「それはそのまま連合のことね」
「我々は内部でしょっちゅう揉めているけれど連合にいることに変わりはない」
「ええ」
夫の言葉に頷く。
「その連合が連合である為には。外に共通する敵がいるといんだ」
「それがエウロパなのね」
「そう。しかも彼等は我々とは全く違う」
彼は指摘した。
「貴族主義に代表される独自の文明も。そう、文明なんだ」
それに言及する。
「我々も文明だし彼等も文明なんだ」
「文明同士の衝突」
「そう、この戦争はその一面もあったんだ」
彼は妻に対してこう述べた。
「連合とエウロパのそれぞれの文明の」
「そうだったの」
「そうさ。連合の大衆文明とエウロパの貴族文明のね。今回は連合の勝利に終わりそうだけれどね」
「今回は？」
「文明の戦いは一度の戦争では終わらないということなんだ」
彼は言う。
「これからも続くよ」
「戦争が？」
「いや、武力を使った戦争はこれで終わるさ。これからはそうそうなことじゃ起こらないだろうね。少なくとも連合とエウロパの間で

はね」
「じゃあ対立が続くということね」
また夫に問うた。
「そうさ。人口や国力の問題じゃない」
「どっちの文明が優れているかの問題なの？」
「それもまた違うんだ」
彼はそれも否定した。
「文明には優劣はないよ。文化が同じ物差しで計れないようにね」
文化人類学者らしい言葉であった。彼はこうした視点において連合とエウロパを同等の存在であるとみなしていたのである。
「それじゃあ」
「そう、だからこそ対立が続くんだ」
文明の違いにこそその対立があるとしていた。
「我々は全く違う世界にそれぞれ生きているのだから」
「同じ人間なのに住んでいる世界が違うのね」
「マウリアやサハラだってそうじゃないか」
彼は今度はこの二つの世界を出してきた。
「彼等だって。我々とは全く違う世界だね」
「あっ」
妻はそれを言われて気付いた。
「そうだったわね」
「そういうことさ。我々は四つの世界に分かれている。連合とエウロパ、マウリア、そしてサハラ」
「四つの文明に」
「この四つの文明の中で一千年生きてきた。これは容易には変わらないよ」
そもそも文明はそう変わるものではない。だからこそ文明なのだから。
「百年やそこらではってことかしら」
「もっとかかるかもね。また千年かかるかも」

「気の遠くなるような時間ね」
「これも我々の文明だったらね」
彼はまた文明を出して来た。
「けれどマウリアでは千年も大した時間じゃないんだ」
「千年が」
「彼等の時間は今生きている時間だけじゃない」
これはマウリア独特の時間の概念であった。
「今ある宇宙は創造の神の一日に過ぎないとされている」
ブラフマーのことである。
「一日」
「そう、一日なんだ。人間も全ての生き物もその一日の時間のほんの僅かな時間を生きているだけなんだ。しかもそれは一回の人生でね」
「輪廻のこと？」
これは妻も知っていた。連合においては仏教もよく広まっている。仏教はインドで生まれたものであり、輪廻はその思想の中に大きな部分を占めているのである。

## 第十七部第一章　銃は収められその十七

「そう、輪廻さ。全ての命はその一日が終わってもまだ生きるんだ。途方もない時間をね」
「何か凄い話ね」
「だから彼等にとっては一千年は大した時間じゃないんだ」
彼は言った。
「もっと凄い時間の中に生きているから」
「そこまでくるとわからないわね」
妻は苦笑してこう言った。
「マウリアの時間が」
「時間じゃないんだ」
そしてそれを待っていたかのような言葉だった。
「時間じゃないの？」
「それもあるけれどそれだけじゃない。これが文明なんだ」
「これが」
妻はそれを言われてまたハッとした。
「連合とマウリアのそれぞれの文明の違いなんだよ」
「そうだったの」
「わからないよね」
「ええ」
頷いてそれを認めた。
「何か。あんまりにも途方もない話だったから」
「けれど彼等にとってみればこれは当然のことなんだ」
「マウリアの人達にとっては」
「そう、そしてこれは我々とエウロパでも同じなんだ」
「だから私達は衝突しているのね」
「文明的な概念からはそうなるんだ。けれどね」
ここで一息ついた。コーヒーを自分で入れる。カップにあるもの

はもう飲み干していた。妻のカップにはまだ少しだけ残っている。だがそれもほんの僅かである。
「戦争になったのは。多分に政治的だね」
「政治もあるのね」
「政治も文明から離れられないものだけれど」
「政治は文明から生まれるということかしら」
「そういう一面はあるよ」
話は政治に移ってきていた。
「政治風土を形作るものの一つに文明があるのは事実だからね」
「色々と関わるのね、文明は」
「そういうものさ。世界なんだから」
「連合という世界の」
「そしてエウロパという世界も」
彼はまた言った。
「それぞれを形成しているものだから」
「政治もそうなの」
「連合には階級といったものはなく、民主主義によって政治が進められているね」
「ええ」
「これも。連合の大衆文明なんだ。けれどエウロパは貴族達が大きく関わる。同じ民主主義でもね」
民主主義といっても様々な形態があるということだ。連合においても共和制に立憲君主制がある。流石に共産主義国家と称する全体主義国家を民主主義国家と言う人間はいないが。二十世紀にはいたのだ。
「そこが本当に違うわね」
「政治もそこで対立を生んでいたんだ。何かきっかけがあれば前にも戦争があっただろうね」
「ステッラ事件は引き金に過ぎなかったのね」
「そうだね、あれはほんの引き金だよ。戦争がはじまる幕開けの言

葉に過ぎないさ」
「幕が開くまでには舞台裏で多くのことがあるわね」
劇とはそうしたものである。役者達だけで行われるわけではないのだ。無数の裏方が常に動いているのだ。幕が開く前からである。

## 第十七部第一章　銃は収められその十八

「その舞台裏で全ての者が何に基いて動いているのか」
「文明によって」
「政治家でも頭のいい人はこれに気付いているかもね」
「どうかしら」
その言葉にくすりと笑ってみせてきた。
「気付いていたらこれからすべきこともわかるだろうね」
「これからのことも？」
「そう、戦後のこともね」
彼は言う。
「二つの文明が急に一つになれるのか」
「ここは政治家さん達のお手並み拝見ってことね」
「まあ実際は」
ここでフットは少しシニカルな笑みになった。そしてコーヒーを口に入れる。
「併合とかそういうことをしたら世論が黙っていないだろうけれどね」
「世論があったわね」
「その通り」
ここでもまた文明が出ていた。大衆文明が。
「誰もエウロパを併合しようなんて言ってはいない」
「そういえばそうね」
妻はこれにも気付いた。
「戦争には勝ったのに」
「国力から見れば連合にとってエウロパなんてちっぽけなものなんだ」
ここではエウロパを馬鹿にしたように言う。
「一千億のね。けれどそれが連合の中に入ると」

「一千億の不穏分子ね」
「そんなのを入れたらかえって大変なことになるね。しかも全く異質な存在だ」
「ええ」
「それがわかっているから。誰も言わないんだ。まああちらが相当馬鹿なことをしない限り併合という極端なことにはなりはしないだろうね」
　実際にそうした馬鹿なことをして併合に至った歴史的前例もあることにはある。そうして莫大な財政負担を毎年抱え込むことになった国もある。実に不幸なことに。
「きりのいいところで手打ちね」
「その手打ちの内容で揉めるね」
「文明から急に世俗的な話になったわね」
「そういうものさ、世の中ってのは」
　コーヒーを置いて菓子を食べた。コーヒーで苦くなった口を今度は甘みが包む。
「些細なことで揉めるんだ、けれどそれは人間にとっては大きなものだったりする」
「人間にとっては」
「けれどそこからは少なくとも僕の専門分野じゃないね」
「文化人類学者としては」
「そうさ。まあ論文には書かないけれどじっくりと見せてもらうよ」
　彼は言った。
「これからどうなるか」
「面白いことになると思っているのかしら」
「そうだね。それは役者さん達次第だ」
「政治家の」
「さて、どうなるかな」
　二人はそこで談笑に話を移した。そして楽しい一時を過ごした。コーヒーを飲みながら。だから美味いコーヒーを飲んでいる者だけ

ではなかった。中には苦いコーヒーを飲んでいる者もいた。
「またこれは」
八条は次々に送られて来る書類に閉口してしまっていた。
「しかも次から次へと」
「減ることがありませんね」
それを見てシャリアピンも言った。そこには中央議会議員であるセチフ＝ハンニバルもいた。
「国防省は相変わらず大変そうですね」
「否定はしません」
八条はハンニバルにこう返した。
「猫の手も借りたい程です」
「実際に借りられてみては？」
「いえ、単なる例えでして」
冗談とわかっていながらも応える。
「かえって邪魔になります」
「その通りですな」
ハンニバルはそれを聞くと顔を崩して笑いだした。
「猫は邪魔にしかなりません」
「はい」
「用事をする時になると側に寄って来てまとわりつきます」
「ですね」
「尚且つ自分勝手で我儘ときています」
彼は言葉を続ける。
「おまけに怠け者で気紛れです。こんな勝手な生き物は他にはいないでしょう」
「またえらく猫について御存知ですね」
「十四匹飼っておりますので」
「十四匹」
その数に大いに驚く。
「また増える予定です。最早我が家は猫屋敷となっております」

「またどうしてそんなことに」
「私が好きでして。猫はいいものです」
笑いながらこう述べる。
「そんなところがまたいとおしくて」
「そうなのですか」
「ですが妻は犬好きでして」
「それはまた」
犬派と猫派の戦いはこの時代においても健在である。両方好きな者もいる。
「犬は七匹です」
「家が騒がしくて大変そうですね」
「まあ子供達の遊び相手にはなってくれております」
「ふむ」
「家のあちこちを爪跡だらけにしてくれていますけれど」
「でしょうね」
八条もそれを聞いて笑った。猫の習性である。
「虫には跳び付きますし」
これもまた猫の習性である。動くものに興味を示す習性なのである。

## 第十七部第一章　銃は収められその十九

「何かと大変ですよ。冬にはストーブの周りを占領して夏には涼しい場所を独占して」
「猫らしいですね」
「妻に言わせればそんな我儘な猫よりも忠誠心溢れる犬の方がいいということです」
「犬はそういう生き物ですからね」
「はい。そのかわり散歩に連れて行ったりしなければなりません」
「犬は動かさないと駄目ですね」
そうした動物なのだ、そこが動かない猫といささか違う。
「そうです。結果としてそれが妻の運動不足解消になっていますが」
「それはいいことです」
「ただ食べる量が。犬はねえ」
「大型犬は特にね」
「セントバーナードが一匹おります」
犬で最も大きい種類である。スイス原産の犬で遭難者の救助用の犬である。
「あれですか」
「滅茶苦茶食べます。うちの子供達よりも」
「ははは、そうですか」
その言葉には思わず笑う。
「家の犬や猫のリーダーになっていますね。頭のいい奴でして」
「いい犬ですね」
「感謝はしていますね。番犬にもなりますし」
「元々そうした為にいますからね、犬は」
「はい」
連合ではペットを買うことも趣味の一つとなっている。犬や猫の他に魚やハムスター、鳥、爬虫類、両生類等を飼う。狐や狸を飼っ

たり、中には猛獣や猛禽類、恐竜まで飼っている者もいる。なおこうした生き物は食材にも使われたりするが同時に愛玩用としても飼われているのである。
連合の法律においてはペットを無断で捨てたり、虐待することは法律によって禁じられている。発見されたならばすぐに罪に問われる。
「ただ。やはり私は猫の方がいいですね」
彼は紛れも無い猫派であった。
「常に側に寄ってくれますし」
「それがちょっとわからないのですが」
「何がでしょうか」
「猫が側に寄ってくるということです」
八条は言った。
「それが何か」
「猫というのは。そんなに人に集まる生き物でしたっけ」
八条の認識では猫は常に一匹でいるものなのである。
「何か違うと思うのですが」
「猫は寂しがり屋ですよ」
それに対するハンニバルの返答はこうであった。
「気ままで。ですから常に側に誰かいないと嫌なのですよ」
「何か勝手ですね」
「それが猫なんですよ」
上機嫌でこう言う。
「そうだったのですか」
「一度飼われてみるといいですよ。私はスコティッシュ＝ホールドがお勧めですね」
「ああ、あの耳が垂れた」
スコットランドの農場で見つかった猫である。身体は大きいが気性は大人しい。連合では人気の猫だ。なお連合では動物を捨てることも法に触れ、手放さざるを得ない場合はそうした動物専用の惑星

に送ることになっている。言うならば惑星全体が動物ランドとなっているのだ。そうした惑星が各国に存在している。これはエウロパやマウリアでも同じで連合軍は戦争中エウロパの動物施設には一切攻撃を加えていないしその運営を阻害もしていない。
「はい」
「あれは中々いいですね」
「そうでしょう、性格もいいですし」
「そうなのですか」
「太り易いのと動きが鈍いのがあれですが大人しいし、いいですよ」
「考えておきます」
八条はいささか社交辞令的にこう応えた。彼は今のところあまりにも多忙でペットのことまで考えられる状況ではなかったのである。
「ところで」
「はい」
八条は話を移してきた。
「今議会では講和に関してかなり紛糾していますね」
「あの程度ではまだ紛糾とは言えないと思いますが」
彼は笑ってこう返した。
「それに路線は両方共共通していますし」
「出来るだけ有利な条件で講和を結ぶ」
「はい。問題は程度です」
ハンニバルはこう述べた。
「我々保守派と改革派で温度が違うだけです」
なお八条もキロモトも改革派である。今は開拓よりも連合内部の拡充を図ろうという考えの政党である。中央警察や中央軍もその一環である。なお保守派は各国の権限を守り、開拓を進めていこうという考えである。時代によってこの考えは全く逆になるが今の時代ではこうである。なお保守派には大国の者が多く、改革派には小国の者が多いとされている。ただし八条の様に大国出身でありながら改革派にいる者もおり、一概には言えない。

「今回はそれ程揉めはしないでしょう」
「どうでしょうかね」
「それ程緊張していないから私もここにいるわけです」
ハンニバルは笑ったままこう述べた。
「保守派のホープの一人と目されている私が改革派の若きエースの前に」
「エースというのは買い被り過ぎです」
八条は照れ臭そうに笑ってこう言い返した。
「今も目の前の仕事にすら満足に対処しきれていないのに」
「いやいや、まさか」
だがハンニバルはそうは見ていなかった。
「長官程見事に処理されている方はおられませんよ」
「そうですかね」
「さもなければ中央軍は今頃これ程効果的には機能していなかったでしょう」
「左様ですか」
そのハンニバルの言葉に応える。しかし笑ってはいない。
「私も中央軍の設立は必然があったと思っていますし。上手く動いてくれないと困るのですよ」
「そういえば議員は中央軍の設立には賛成票を投じておられましたね」
「はい」
彼はその言葉に頷いた。
「保守派の議員の多くは反対したというのに」
これは改革派でも紛糾した話であった。果たして必要なのか、軍事費はどうなるのか、その結果あと一歩で話自体が流れかねない場面もあったのだ。
「治安の為です」
これに対するハンニバルの返答はそれであった。

## 第十七部第一章　銃は収められその二十

「治安の為」
「宇宙海賊に対処するには。各国の軍では機能的に動いていると言えませんでしたから」
　それぞれの国の軍隊はその領域でしか動くことができない。海賊達はこれを利用して逃げ回っていたのである。古典的映画『俺達に明日はない』と似たような話になっていたのだ。
「それを踏まえて。賛成したのです」
「ふむ」
「それは正解だったようですね」
「そうですね。これにより連合の治安は格段に向上しました」
　これは事実だ。今の政権の最大の功績の一つでもある。
「はい。そして開拓等もより容易になる」
「拡充路線はそのままですか」
「連合の人口は多大ですから」
　ハンニバルもこれは譲らなかった。
「しかもまだ増えております」
「はい」
「四兆に。これだけの人口を養うとなると」
「開拓が必要だと仰りたいのですね」
「そういうことです」
　彼は言った。
「今我々はまた開拓の時代に来ております」
「ハンニバル議員はそう考えておられると」
　他の者が言えば皮肉に聞こえかねないが八条が言うと特にそうは聞こえない。これはやはり八条の人柄によるものであろうか。
「そうです。今は拡大期でしょう」
「私は違うと思います」

だが八条はそう反論した。
「今拡大路線を採っては後々支障が出かねません」
「支障が」
「そうです。今の状況でもその四兆の人口を養いきれると思います」
「果たしてそうでしょうか」
少し疑問をあえて述べてきた。
「私は五兆までは大丈夫だと見ていますが」
「それは開拓省の発表ですね」
「はい」
彼は頷いた。
「開拓省も今の時点での開拓の推進には消極的ですが」
「改革派は。今はそうですね」
「それよりも内部の充実を計るべきです」
「内部の充実はもう充分だと思いますが」
ハンニバルはあくまで譲らない。
「インフラも。現時点の開拓地は全て開発も整備も整え終えております」
「だからといって開拓を進めるのはやや拙速です」
八条も譲らない。
「それよりも。今はその開拓し終えた星系も含めてよりそのインフラ等を充実させるべきです」
「長官はそう考えておられるのですね」
「はい」
彼はそれを認めた。
「否定はしません」
「それは日本の考えと一致しますな」
「それも否定はしません」
彼は嘘はつかない。これも認めた。嘘をつくのも政治であるが嘘をつかないでもやれるものである。政治のタイプは一つではないのだ。

「伊藤首相と」
「それもまた否定しません」
「成程。ですがそれはよいです」
ハンニバルもこの八条という男が何かを為す、何かを考えるにあたって母国のことを優先させるような男ではないことは知っている。だからここに八条のひいきといったものは見ていなかった。そしてこれは正解であった。
「ただ、問題は大国の中で日本が開拓に消極的なことです」
保守派には大国出身の者が多い。その中には当然のように日本出身の者も多いのである。
「日本は今開拓は整っているのですね」
「そのようですね」
八条はそれに応えた。
「伊藤首相はさしあたって内政の充実を計っておられます」
「だからですか」
ハンニバルにもこれはわかっていた。人間は自身の置かれた環境を基準として物事を考える。それを踏まえれば日本出身の保守派の議員達が今の時点での積極的な開拓に消極的なのも道理なのである。どうやらこれが今保守派の開拓推進派にとっては頭の痛い話であるらしい。
「それはまた」
「ところが他の国々では意見が違うようですね」
「はい」
ハンニバルはここでは隠さなかった。

## 第十七部第一章　銃は収められその二十一

「まあ何処とは申しませんが」
「わかりました」
言わなくともおおよその見当はついていた。今開拓に熱心なのはブラジルやオーストラリアである。
「何はともあれこれはかなり議論を呼びそうですね」
「そうですね」
「正直講和の話はこれに比べたらまだましなのですよ」
「ましですか」
「講和は今の時点で外交の最も重要な課題でありますけれどね」
連合では外交より内政の方が重要視される傾向が大きいのである。これは他の勢力に比べてその力が比類なき程大きいのと内部のまとまりが弱いからである。
「それよりもやはり開拓の方が市民の目も向き易いです」
「それはわかります」
八条も連合の者である。これは当然であった。
「長官には申し訳ありませんが」
「いえいえ」
「講和の方の調整は。順調であればよいですね」
「外務省が主に取り扱っていますけれどね」
彼は答えた。
「カバリエ外相も不眠不休でことにあたっておられます」
「そうですか」
「どうやらエウロパもかなり粘り強いらしくて」
「彼等にとっては死活問題ですからね」
「そうですね。今は彼等にとって建国以来最大の国難です」
エウロパにとってはまさにそうなのだ。連合とは全く正反対なことに。

「それを乗り切れるかどうかが彼等にとって焦眉の急」
「ですから必死のようです。マウリアがその仲介にあたっています」
「マウリアが、ですか」
ここでハンニバルの顔が曇った。
「長い間我々の同盟国であってくれていますが」
声も曇ってきていた。
「しかし。それでも」
「信用出来ないということでしょうか」
「信用出来ないのではなくわからないのです」
ハンニバルはそう言った。
「わからない」
「はい、あの国の考えていることが」
これは連合の多くの者に共通することであった。そしてハンニバルもその中の一人であったのだ。
「あまりにも。独特の考えであり過ぎますから」
「確かにマウリアは独特ですね」
八条もこれはよくわかっていた。
「何と言いますか。全く違う世界です」
ハンニバルは言う。
「違う宇宙であるような。そんな感じです」
「マウリアに行かれたことはあるのですか？」
「学生時代に。旅行したことはあります」
「そうなのですか」
「無賃旅行で。ヒッチハイクをしながら」
「マウリアをですか！？」
これにはさしもの八条も驚いてしまった。
「旅というものは金を持たない方が面白いものです」
彼は笑ってこう応えた。
「何かとね。トラブルも起きますが」
「いえ、それでも」

八条はそれを言われても驚きを消せないでいた。この時代は宇宙船でもヒッチハイクが可能なのである。これで連合中を旅する者も多い。
「マウリアでそれをやるとは」
「異次元を見た気分でしたよ」
ハンニバルの顔が憮然としたものになった。
「街中で平気で牛が歩き回っているのですよ」
「それは知っています」
「死体が流れている側で平気で洗濯していたりしますし。あれは我が目を疑いました」
これは古代からである。それもまたマウリアだ。
「それでも行かれたのですね」
「何から何までが異様でした。あんな国は他にはないでしょうね」
「それは皆言いますね」
「はい」
「けれどそれでマウリアから離れられないのだとか」
「それは人によります」
彼はそうではなかったのだ。
「逆に強烈な拒絶反応を持ってしまう者もおります」
それが他ならぬ彼であった。
「あの国は。そこまであるのです」
「では今回マウリアからの仲裁は不満だったのでしょうか」
「不満はないですね」
しかし彼にはそれはなかった。

## 第十七部第一章　銃は収められその二十二

「仲裁出来る国といえば。マウリアしかありませんでしたから」
「はい」
「当然のことだったと思います。ただ、彼等が何を考えているのかわからないだけで」
「わかりませんか」
「全く。彼等の動きだけは読めません」
とにかく彼とマウリアの相性は悪いらしい。どうやら彼が一方的に拒絶反応を示しているようであるが。これも連合の者に多く見られることである。交流は一千年にも及ぶがそれでもマウリアはわからないのである。マウリアは宇宙だと誰かが言った。それも全く違う次元の宇宙であると。だからわからないのかも知れない。
「今回の講和も。外務省は大変でしょう」
「確かに何かと苦戦しているようですね」
「やはり」
これはわかった。
「マウリア側の話術と哲学の前に」
「あれは話術とは言わないでしょう」
ハンニバルは苦笑いと共にこう答えた。
「何かよくわかりません」
「わかりませんか」
「少なくとも私には。マウリア式の話術は」
「はあ」
マウリア人の会話はこれまた有名である。知らないこと、専門外のことに口を出してきて知っているという。俗に言うハッタリというやつだが彼等のそれは連合のそれを遥かに凌駕しているのである。
これだけではない。彼等は話を自分の興味のある方向に強引に持って行こうとするのだ。先にどんな話をしていても構わない。話の

腰を折るのも厭わない。これがマウリア式なのである。
「カバリエ外相も大変ですな」
「私も彼等と話をしたことがありますよ」
「やはり」
「何度か。あれが異文化コミュニケーションでしょうか」
八条は何かを深く考える顔で言うのだった。その表情は哲学的なものであった。
「というよりは異文明ですね」
「はあ」
「彼等と話をするのは若しかすると他の知的生命体と話をするより大変かも知れません」
「他の知的生命体ですか」
こうしたことも連合ではよく言われる。それもまたマウリアだ。
「まあエウロパとは軍人が結構話をしているそうですが」
「はい」
「それ程困ったことにはなっていないようですね」
「そうですね、色々と貴重な話を聞いています」
「一千年対立してきた関係だというのにある程度は理解できるようですね」
客観的な言葉だがその通りだ。まだエウロパとの方が意志が通じているのである。
「ですがマウリアは違うと」
「さて、これからどうなるか」
ハンニバルはまた言った。
「マウリアのペースに巻き込まれないことを祈ります」
彼は最後にこう述べた。戦後の処理もマウリアとの交渉も着々と進められていた。連合もエウロパも。彼等は戦いの後もまだ動いていた。そしてそれぞれの欲するものを掴もうとしていたのであった。

## 第十七部第二章　マウリアの思惑その一

マウリアの思惑

「そうか、順調か」
「はい」
クリシュナータは自身の執務室で電話から連絡を受けていた。彼はそれを聞いて満足そうな笑みを浮かべた。
「話は。こちらのペースで流れているか」
「双方の外務省はかなり困惑しているようです」
電話の向こうにいる者がこう述べた。
「我等の話術の前に」
「いいことだ」
そしてまた満足そうに笑った。
「外交は尻尾を掴まれては終わりだからな」
「はい」
電話の向こうの声は答えた。
「ここは様子を見ながらやっていこう」
「こちらのペースに巻き込みながらですね」
「そうだ。ではこれからも頼むぞ」
「はい」
ここで電話は切られた。クリシュナータは受話器を置いてから立ち上がった。そして窓の前に立った。
「エウロパはいいな」
彼はそちらは安心していた。敗者であり防ぐ立場である。だからかなりの条件をこちらから出しても飲まざるを得ないだろう、そう考えていた。
「問題は連合か」
彼は連合の方を問題視していた。彼等は勝者であり攻める立場である。その如何によっては銀河のパワーバランスが崩れてしまいか

ねない。それだけは防がなければならないのだ。
連合はやはり巨大である。その巨大な身体からくる要求もまた途方もないであろうことが予想される。それを抑えて、かつ彼等に満足してもらうような条件を出す。そしてそれを飲んでもらう。こちらからも見返りを出して受け入れてもらう。話は難しいものであった。
「そうだな」
彼は考えながら執務室の中を歩いた。そしてまた受話器を手にした。
「私だが」
彼は何者かに声をかけていた。
「すぐに来てくれないか」
そしてその者を呼んだ。それから執務室に座りとりあえず手許にある事務仕事を処理した。
処理しているとその者がやって来た。エルール外相であった。
「御呼びでしょうか」
「うん」
彼は部屋に入って来た外相の問いに応えた。
「少し聞きたいことがあってね」
「あの件に関してですね」
「そう。両方共動きはどうかな」
「まずエウロパですが」
エルールはまずエウロパについて説明をはじめた。
「彼等はかなり追い詰められています」
「やはりな」
これはクリシュナータもわかっていることであった。
「表面的には何でもないのを装っていますがその内実は。かなり切羽詰っています」
「当然だな。喉元に刃を突き付けられたまま交渉にあたっているのだからな」

「はい」
「かろうじてオリンポスは残っているが。それだけだ」
西方に僅かな領土が残っているだけであった。そこまで追い詰められたのだ。
「その領土と人口の大半を占領されていますから」
「国力の下落も相当なものだろうな」
「既にかってのエウロパの面影はない程です」
「だからこそ必死か」
「はい」
エルールはまた頷いた。
「生き残る為に」
「さて、それは成功するかな」
「成功させなければならないと思いますが」
「我々がか」
「エウロパに潰れてもらってはまずいですから」
「確かにな」
クリシュナータはエルールのその言葉に頷いた。
「だからこそ講和の仲介をしている」
「はい」
「彼等は生き残る為に懸命になっている」
同じ様な内容であるがまた言った。
「そこが狙い目だな」
「何を手に入れられるでしょうか」
「交易は以前からあまりなかったな」
彼は交易について言及してきた。
「これはどうするべきか」
「話をするならハサンやサハラの国々ですね」
「そしてティムールか」
「はい」
一応であるがマウリアとエウロパは交流がある。交易も行われて

いる。だがその間にハサン等サハラ諸国があったのだ。連合もサハラ各国を仲介としてエウロパの情報や品物を手に入れてきていた。所謂中継貿易である。これによりハサンは大きな利益を手に入れてきていたのだ。

「ですから交易に関する件は少し難しいかと」

「では彼等からは何を手に入れるべきかな」

「信頼だけでしょうか」

エルールは述べた。

## 第十七部第二章　マウリアの思惑その二

「そして名声と。戦争を終わらせたという」
「最も得難く、貴重なものだな」
「はい」
「それで満足するか」
言葉に疑問符が入った。
「それが手に入れられることを考えれば他のものは不要かと思います」
「だが埋め合わせは欲しいな」
「埋め合わせですね」
「それは考えてあるね」
「無論です」
エルールは答えた。
「それは連合に」
「そうか、やはりな」
クリシュナータはそれを聞いて頷いた。
「彼等からか」
「ただ、彼等は勝者です」
「うむ」
彼女もまた彼と同じ懸念を抱いていた。
「かなりの余裕があります」
「そう易々と見返りは手に入れられないかな」
「いえ、そういうわけでもありません」
だがエルールはそうではないと言った。
「上手くいっているのか」
「はい。こちら側からの要求に対してはそれ程不快感を示してはおりません」
「彼等からは微々たるものだということなのかな」

「勝者の余裕も見られます」
「ふむ」
連合側が意識していなくともだ。やはり彼等は勝ったのである。そこに何かしらの余裕が出るのも当然と言えば当然のことと言えた。
「要求は滞りなく認められそうです」
「我等の要求は問題ないな」
「はい」
「そうか。ならばそれでいい」
まずはそれは満足した。
「こちらもそれを見越してある程度は抑えていたしな」
「はい」
なお連合から見ればかなり都合のいい要求だったと言われている。連合とマウリアの違いがここでも出ていたのであった。
「それはいいな」
「はい」
「後はあちらの要求だが」
「とりあえずエウロパに対して賠償金を請求するようですね」
「これは当然だな」
「はい」
一種の決まりであった。戦勝国が敗戦国に賠償金を請求する。サハラでは日常茶飯事であり、これが目的で行われる戦争も存在している。
「額がどれだけになるかですが」
「途方もないものでなければよいがな」
「そうですね」
彼はそれに頷いた。
「連合の巨大さを考えますと」
「彼等はな。あまりにも大きい」
またそこに言及した。
「三兆か、いやもうすぐ四兆になるな」

「ええ」
「それだけの膨大な人口だ。それをもとに要求してくるとなると」
「エウロパでは払いきれないものになりかねません」
それもまた問題であった。
「そうだな。ここはある程度抑えてもらうか」
「さもなければかってのベルサイユ条約と同じになります」
「うむ」
第一次世界大戦の後で締結された条約である。連合国、その中心であったイギリスとフランスがアメリカの意見を無視してドイツに法外な条件を突きつけたものである。全ての植民地の放棄とアルザス、ロレーヌ両地方の割譲、ダンチヒの自由都市化、東プロイセン領の一部のポーランドへの割譲、そして最後に天文学的な賠償金の要求である。これによりドイツは再起不能になったとすら言われた。結果ドイツの連合国側への憎しみの念は強まり、ナチスの台頭の土壌ともなったのであった。歴史が教える教訓の一つである。
「それを避けなければ。また同じことの繰り返しです」
「そうだな。それだけは止めさせなければ」
「はい」
エルールはそれに頷いた。

## 第十七部第二章　マウリアの思惑その三

「連合中央政府はそれ程愚かではないようですが」
「連合にある力は一つだけではないからな」
「はい」
「三百の国は。どう考えているかだ」
「やはりエウロパに対して強硬な意見を持つ国も少なくないようです」
「だろうな」
　これは予想されたことであった。クリシュナータは見越していたような顔で応えた。
「千年の対立は長かった」
「ええ」
「彼等にとってはな」
　マウリアではそれ程長い時間とされてはいないとしてもだ。
「何時かは戦う運命にあったのだろう。そして衝突した」
「その結果もまた問われる運命にあったと」
「そうだ。そしてそれを収めた者には大いなる恩恵が与えられる」
「マウリアに」
　言葉が笑っていた。
「僥倖と言うべきだな。これを上手く使おう」
「ですね」
「連合に関する情報の収集を強化してくれ」
「はい」
　エルールはまた頷いた。
「連合もな。何かと色々とある」
「そうですね。面白い存在ではあります」
「うむ」
　マウリアから見れば連合は面白い勢力であった。連合から見れば

マウリアはよくわからない国であったが。
「見ていると実に面白いものだ」
「彼等にそれを言えば嫌な顔をされるでしょうがね」
「まあな。だが気付かれなければいい」
「はい」
「では情報収集にさらに力を入れてくれ。よいな」
「わかりました」
こうして連合に対する情報収集が強化されることになった。だが彼の打つ手はそれだけではなかった。
「そしてだ」
彼はまた言った。
「次に気になるのは」
「はい」
「サハラの動きだ」
「サハラですか」
クリシュナータの言葉に顔を向けた。
「ティムールだな」
「彼等ですか」
「シャイターン主席についてどう思うか」
彼はエルールの美しい目を見ながら問うてきた。
「彼について。君はどう思う」
「一言で申し上げますと魅力的な人物です」
「それは女性から見てかね」
彼女が女であることを意識しての言葉であろうか。
「いえ、人間としてです」
だがエルールはこう返した。
「人間として。彼は非常に魅力溢れる人物です」
「ふむ」
「ですが。その魅力は魔性を含んでいます」
「魔性をか」

「はい、私はそう思います。彼は狡猾で野心溢れる人物でもあります」
「そうだな」
これはクリシュナータも同じであった。彼もまたシャイターンには魔性を感じていないわけではなかったのだ。
「その様な人物ですから。動かないという保証はありません」
「うむ」
「彼の動きもまた注視すべきだと思いますが」
「だが彼は同時に非常に頭がいい」
「はい」
エルールはそれもわかっていた。シャイターンの切れ者ぶりはマウリアにおいても知られていた。
「だから。要求するにしろ法外なものはないと思うが」
「今は解放したと宣言している旧エウロパ総督府領の統治に専念しているそうですが」
「そちらはかなり順調なようだな」
「はい、難民達が続々と戻り。繁栄に向かっているようです」
これは事実であった。難民達にとっては悲願達成である。
「それは彼等にとってはよいことだな」
「ええ」
「その目がエウロパに行かなければよいがな」
「ただ、今のところシャイターン主席はあの戦いに関しても中立宣言をされ、内政に専念していましたが」
あくまで今のところは、である。どうなるかわからないという前提もまたある。
「今回の講和に関しては動いてはこないと見ていいのか」
「おそらくは。警戒は必要だとは思いますが」
「わかった。だが警戒は緩めないでくれ」
「はい」
「彼は得体の知れないものすら感じる。まさに魔性をな」

クリシュナータは勘も鋭い。シャイターンのカリスマの中にそうしたものも感じていた。
「そして野心も」
「その目がサハラに向いているうちはいい。だがそれが外に向けられたならば」
「必ずや大きな災いとなりますね」
「その可能性は高い。注意してくれ」
「わかりました」
「彼等は第二の警戒対象とする」
クリシュナータはあらためて言った。

## 第十七部第二章　マウリアの思惑その四

「今回の講和においてな。そして第一の警戒対象は」
「連合各国ですね」
「一部の識者の間では連合側からの講和の条件の内容はスムーズに決まり、内容も穏やかなものになるとの話も出ているのだがな」
そう述べられる。
「果たしてどこまでそうなるか」
「正直疑問だ。政治の世界が学者の言う通りになれば」
「今こうして我々は銀河にはいないかも知れないですね」
「そうかもな」
二十世紀の学者の多くは共産主義革命が世界中で起こると言った。だがそれは起こらずソ連は崩壊した。人類史に特筆されていることである。そしてある作家は人類が一九九九年に滅亡すると言って大騒ぎになった。だが何も起こりはしなかった。その後も何度もそうした話が出ているが結局人類は滅亡していない。予言について書かれた本に関しては一つ面白い話がある。古本屋で五年前の予言書を探せばいい、というものである。見ればそこに書かれている予言はその全てが外れていると。そういうものである。
「迂闊な判断はできない」
「はい」
「どうなるかわからないな。中央政府や議会がそうでも」
「各国がどうなるか。連合は一つではありませんから」
「その各国だけでも三百存在する」
クリシュナータは言った。
「そして他にもそれ以上の無数の世界が存在する」
「連合は一つの世界ではないと」
「全ての世界は重複しているものだ」
彼は言った。

「一つだけで存在している世界なぞはないさ。だが連合はその中でも極めて複雑に重なり合っている」
「そうなのですか」
「我々のマウリアもそうだが。連合はとりわけ世界が多く、重なっている」
そしてまた述べた。
「だからそこをから読み取るのは難しい。判断するのはさらにだ」
「連合は連合で我々をそう見ているようですね」
「我々の方がわかり易いと思うがな」
マウリアから見ればそうであった。連合から見れば全くそうではないが。
「それは彼等の主観か」
「我々の主観は」
「あるいは両方かな。迂闊な判断は出来ないな」
「ですね」
彼等は頷いた。そしてクリシュナータはその後で言った。
「情報を集めて、そこから分析に取り掛かってくれ」
「はい」
「話はそれからでもいい。まずは情報だ」
「わかりました。それでは」
「うむ」
こうして外相との話は終わった。クリシュナータはその後で他の仕事に移った。国家主席ともなれば仕事は一つではない。同時に複数のものを抱えている。またそれに対処出来なければとても務まる仕事でもないのである。

## 第十七部第二章　マウリアの思惑その五

マウリア側は講和を締結させるつもりだった。そしてそれは連合とエウロパ両方で現実の行動となっていた。
連合では連合外務省とマウリア大使館の人の行き来が活発化していた。カバリエはその交渉の主役を務めることとなっていた。
彼女もまた仕事に追われていた。その巨体を揺らして右に左に動き回る毎日であった。
「ふう」
彼女は車に乗り込むと大きく息を吐き出した。その額にはうっすらと汗をかいている。
「今回の仕事は何かと大変ね」
「ですね」
秘書役を務める外務官僚の一人がそれに応えた。彼はカバリエの隣の席に座っていた。
「次から次に。話が来るわ」
「お疲れですか」
「そうね。いいダイエットになるわ」
カバリエは笑ってこう返した。
「最近起き上がるのも辛くなってきていたから」
「それはかなりまずいのでは？」
「けれど身体は健康そのものよ」
「それでも。足腰にかかる負担も相当なものかと」
「これでも若い時は痩せていたのだけれどね」
「はあ」
これは事実であった。カバリエは若い日は痩せて美人であった。だが結婚し、美食と料理に目覚めてからこうなってしまったと言われている。相変わらず彼女の書いた料理や食事に関する本は定評がある。

「人間恋をしたら幸せになるわね」
「ええ」
「そうしたら太るのよ。太るのは幸福な証拠よ」
「そうともばかりは言えないと思いますが」
官僚は首を傾げながらこう返した。
「ロシアのお婆さんは。寒さの為に太るらしいですし」
ロシアの老婆はこの時代においてもロシア名物となっていた。太った身体をコートで覆い、子供達に生活の知恵を授けていく。そうしたお婆さんは宇宙の時代でも健在であった。ロシアの寒さと共に。
「そういえばあの国は結局寒い惑星ばかり持っているわね」
「はい」
「何の因果かしらね。宇宙でも寒い場所ばかり」
「ロシア人にとっては結局縁のあるものなのでしょう、あの寒さも」
「私は勘弁願いたいわね」
カバリエの生まれた場所はその惑星の赤道直下であった。そこで海と果物に囲まれた少女時代を送ったと言われている。
「寒いのは苦手だから」
「ではここのシンガポールは」
「実に過ごし易いわね」
彼女はにこりと笑ってこう述べた。
「適度な気候で」
「そうですか」
だがその官僚はどうやらそうではないようであった。
「貴方にはそうでもないようね」
そしてカバリエもそれに気付いた。彼にこう声をかけた。
「ここは暑いかしら」
「正直に申し上げますと」
彼は言った。
「私は惑星の北極近くで生まれ育ちまして」
「それならここは辛いわね」

「はい」
彼は答えた。
「ずっと。氷ばかり見て育ちましたから。暑いのには」
「私は逆に寒いのに耐えられなしのよね。人間というのは厄介ね」
「厄介」
八条はその言葉に目を止めてきた。目がそう動いていた。
「そうよ。暑いのが苦手な人もいれば寒いのが苦手な人もいる。人によって全然違うわよね」
「人それぞれといいますから」
「世に中には色々な人がいるともいうわね」
「はい」
「この歳で外相になって。あらためてそれがわかったわ。人の種類は料理の種類よりも多いって」
如何にもカバリエらしい例えであった。ここで料理を出すのが彼女らしかった。
「そして交渉のやり方もね」
「ですね」
「マウリア局は今大変そうね」
「おそらく今連合で最も忙しい場所の一つかと」
もう一つは国防省であるとされている。国防省は設立から開戦、そして今に至るまで連合で最も多忙な省庁となっている。八条はその中の中心にいるのである。
「しかもわかりにくい」
「マウリアの専門家を多数配属させたのだけれどね」
「それでも相手が相手ですから」
「マウリアの料理は辛いわ」
カバリエはふと料理に例えてきた。

## 第十七部第二章　マウリアの思惑その六

「けれどデザートは甘いわ。それもとんでもなく」
メインになる料理が辛ければデザートはそれに比例して甘くなる。だからマウリアの菓子は甘いのである。
「マウリアはそういう国よ」
「辛く、それでいて甘い」
「それを仲介するのは何かしら」
「仲介」
官僚はそれを聞いてふと眉を顰めさせた。
「ええ。それは何かしら」
「食事の時ですよね」
「そうよ。それは」
「お酒と・・・・・お茶でしょうか」
「その通りよ」
正解であった。カバリエは満足そうに微笑んだ。
「特にお茶ね。マウリアの紅茶は」
「はい」
「絶品として知られているわ。そのお茶をまず知ることが大事なのよ」
「ではマウリアを知るには」
「まずはお茶ね」
彼女は言った。
「お茶から見ることね。そうすれば色々とわかるかも知れないわ」
「わかりました。それではマウリア局にはそう話を伝えておきます」
「お願いね」
カバリエはこうしてマウリア局にヒントを与えた。それを聞いた連合外務省マウリア局長ペドロ＝フローレスはまずは首を傾げさせた。

「お茶、か」
彼は次にこう言った。
「コーヒーではなく」
彼はバルバトス出身でありこの国ではコーヒーが主流なのである。だからまずはそれに戸惑いを見せた。
「マウリアの紅茶はミルクティーが多かったな」
そして側にいたスタッフの一人に尋ねる。そのスタッフはマウリア文化の専門家である。
「はい、そうです」
そしてその専門家が太鼓判を押してくれた。
「少なくともレモンティーとかは滅多に飲まれませんね」
「そうだったな。ミルクティーか」
「しかも種類は豊富にあります」
「それは知っている」
彼は答えた。彼もマウリアに関するエキスパートである。ただしその比重は政治に関して大きく傾いている。
「覚えきれない程あるな」
「一万種は越えているそうですから」
「それできくかな、とも思うのだが」
一説には百万種もの茶がマウリアにはあるとも言われている。詳しいことはその専門家達ですらわからない程である。
「とにかくお茶か」
「はい」
「マウリアを、そして今回の交渉のヒントは」
「一体何でしょうか」
「お茶はどういった時に飲まれるか」
彼はまずそれについて考えた。
「そうですね」
その文化の専門家がそれに答えた。
「食事の合間、ティータイム、そして喉が渇いた時。色々ですね」

「そう、言うならば常に飲む」
フローレスも言った。
「特に口直しにもな。食事の後のデザートの前と後に」
「つまり何にでも使える」
「マウリアにとってそういう存在のことか、茶とは」
「ではそれは」
「宗教と。哲学ではないかな」
そしてそこに注目した。
「そこですか」
「人間にとって宗教は切り離せないものだ。そして哲学もな」
元々哲学は宗教から派生していると言っていい。それを踏まえると宗教と哲学は兄弟の間柄になる。ヨーロッパの哲学は全て宗教とは切っても切れない関係にあった。将にキリスト教は欧州の心であった。
「これはマウリアにおいては特に、だ」
「マウリアの宗教で」
「うむ」
フローレスはここで頷いた。
「その独特の宗教こそがお茶なのだろう」
「またやけに飲みにくいお茶ですな」
「彼等にとってはそれが違うのだろうな」
「また厄介なことです」
顔を顰めさせて述べる。
「まあそう言うな。とにかくこれで解決案が見つかった」
「マウリア人の宗教観、そして哲学ですか」
「マウリア哲学の専門家で誰かいいのを探そう」
「はい」
官僚は頷いた。
「まずはそれからだ。そして話を聞いて」
「対策を練っていきますか」

「あの国は一筋縄ではいかない」
フローレスはまた言った。
「ここは慎重にことを進めよう。いいな」
「わかりました」
こうして連合外務省はすぐにそれに相応しい人物の調査にあたった。そして一人の人物に白羽の矢が立ったのであった。

## 第十七部第二章　マウリアの思惑その七

「？私ですか？」
それは一人の若いかけだしの詩人であった。彼の名はゴロワ＝ホームズ。ボサボサの赤茶色の髪の黒人で何代か前にサモアに移住してきたらしい。外務省には詩人としてよりもマウリアに関する専門家として招かれたのであった。
「またこんなところに」
「貴方の御力をお借りしたくて」
フローレスは彼を出迎えてこう言った。
「外務省のＰＲの為の詩ですか？」
彼はフローレスに対してまずはこう言った。
「生憎ですが私は今は詩を書く気にはなれません」
どうやら気が乗らないと書けない性分であるらしい。詩人にはよくあることだ。
「いえ、今回は詩ではなく」
「では私の仕事ではないと」
「いえ、貴方が最も相応しい仕事です」
だがフローレスはこう述べた。
「貴方でなければ出来ない仕事なのです。最もよく」
「けれど詩ではないのですよね」
「はい」
それは認めた。
「では一体」
「マウリアに関するものです」
「マウリアに」
それを聞いたホームズの目の色が少し変わった。
「そう、貴方は何度もマウリアに行かれていますね」
「はい」

彼はそれを認めた。
「そしてかなりマウリアについて詳しいとか。マウリアに関する本も何冊も出されている」
「よく御存知ですね。そっちは全然注目されていないのに」
どうやらこれは事実であるらしい。連合は実に広い。何があるかわからない世界でもある。
「もっとも詩人としてもまだまだ食べられないのですが」
「貴方の詩のことも知っておりますよ」
フローレスは言った。
「あそこにもマウリアに関することがよく書かれていますね」
「マウリアは一言で言うならば」
彼はそれに応えた。
「無意識です。人の心の奥底にある」
「無意識ですか」
フローレスはその言葉に顔を向ける。そこでまた言われた。
「ええ。ですからそれは漠然としております」
「それは我々も知っていますが」
「ですがその中にはっきりと見えるものがあるのです」
「そしてそれを詩にすると」
「はい」
彼は答えた。
「私はマウリアを何度も旅してきました。先程貴方が仰られたように」
「ええ」
「そしてわかったのです。マウリアとは無意識だと」
「あれは無意識だったのですか」
「私はそう思います」
彼は言った。
「それを詩にしているのです」
「そうだったのですか」

「一言で言うと」
彼は言葉を続けた。

## 第十七部第二章　マウリアの思惑その八

「そこにあるのは一目ではわかりません」
これはフローレスにもよくわかった。彼もマウリアに関する専門家ではあるがそれは政治や経済に関するものである。マウリアの宗教や哲学には弱い部分もあるのだ。
「ではどうやって理解するのですか」
「感じるのです」
彼は言った。
「感じる」
「はい。そしてそれを詩に現わしたのが私の作品です」
彼は述べた。
「よいか悪いかは別にしまして。私の詩はマウリアがバックボーンにあります」
「わかりました。ではまた御聞きしたいのですが」
「はい」
「マウリアの宗教や哲学には関心はおありですか」
「無論です」
彼はそれに頷いた。
「マウリアを見るにはそこも見なければなりません」
「ふむ」
フローレスはそれを聞いて自分の人選が正解であったことを感じた。彼が欲しがったのはこうした人材である。そして今この若い詩人はそれに応えようとしていた。
「さもなければ。何もわからないでしょう」
「連合にも多くのマウリアの宗教や哲学を学んでいる学者がおりますが」
「それは知っています」
実は彼もその一人である。何でも彼は中学生の時にマウリアをは

じめて旅行し、それから金と暇が出来てはマウリアを旅していたという。そして大学はマウリア哲学を専攻した。素性は哲学者なのである。だが彼は詩人と呼ばれるのを好み、また世間も彼は学者というよりは詩人であるとみなしていた。
「私も一応学者らしいですから」
「らしいですか」
「自分では詩人と思っていますから」
自分でもそれに言及してきた。
「ここにも詩人として参りました」
「成程」
「そして詩人としての感性から申し上げます」
「わかりました。ではこちらへ」
フローレスはこう言って彼を外務省の奥へと案内した。
「詩人としてお話をお伺いさせて頂きます」
「はい」
外務省は一人の詩人を得た。そしてそこからまた多くのことを学んだのであった。それはマウリアとの交渉に対して非常に大きな力となったのであった。
それはすぐにマウリア外務省にも伝わった。エルールはそれを自身の執務室で聞いた。
「連合外務省が手強くなった」
「はい」
これにスタッフの一人が応えた。
「今までの様にはぐらかしたり、惑わせたりといったことがあまり通用しなくなっているようです」
「強力なブレーンを手に入れたのかしら」
「何でも一人の若い詩人が外務省に招かれたとか」
「詩人」
それを聞いたエルールの整った顔が動いた。
「詩人なのね」

「はい」
スタッフはそれに頷く。
「一応は学者らしいですが。自分では詩人と言っているそうです」
「その詩人が彼等のブレーンかしら」
「おそらくは。何でもマウリア哲学を専攻する学者でもあるそうで」
「学者でもあり、詩人でもあるということかしら」
「ところが彼は自分は詩人だと言い張っているそうです」
「また変わった人物みたいね」
なお連合の者から見ればマウリアの者は変わっているどころではないという。
「その彼が何かとアドバイスをしていると思われます」
「我々の考えについてかしら」
「おそらくは」
スタッフはまた答えた。
「おかげで現地のスタッフが苦労しているそうです」
「連合もあながち馬鹿ではないということね」
エルールはそれを聞いて一言こう述べた。
「むしろかなり考えているかと」
「三人いれば文殊の知恵だったかしら」
エルールは言った。
「我が国から生まれた宗教の言葉で」
「ヒンズー教の一派でしたな」
「そうだったわね」
仏教のことである。マウリアではヒンズー教は仏教の一つと考えられているのだ。仏教はカースト制度を否定しているのであるがそういうことはあまり考慮されてはいない。
「それから出て来た諺だけれど」
「一人では駄目でも人が集まればそれだけ知恵が出せる」
「はい」
「ましてや三兆ともなるとね。やっぱり知恵が出て来るわ」

「いえ、三兆ではありません」
だがここで訂正が入った。

## 第十七部第二章　マウリアの思惑その九

「そうなの」
「もうすぐ四兆になろうとしておりますから」
「四兆・・・・・・。また物凄い数ね」
「このまま連合の人口は増えていくのでしょうか」
「今のところはそうでしょうね」
　エルールはそう見ていた。
「けれど何時かは止まるでしょう」
「そういうものでしょうか」
「何でも何時かは止まるもの」
　そして言う。
「人口の増加も。当分はないでしょうけれどね」
「やはりエウロパの様に調整をせざるを得ない状況になるということでしょうか」
「増えすぎてね。けれど当分それはないと思うわ」
　彼女はこう見ていた。
「当分は」
「連合はまだまだそれぞれの国に移住出来る場所もあるし開拓地も何十万光年も広がっているわ。それこそ別の銀河系までね」
「はい」
「他の知的生命体に遭遇する可能性もその何十万光年の間はないそうだし。とりあえずは大丈夫だと思うわ」
「何十万光年もの開拓地ですか」
　これは幅としての何十万光年ではない。広さとしての何十万光年である。言うならば銀河系の殆どである。連合は銀河系の端にあると言われている太陽系から大きく広がっているのである。危惧された他の知的生命体との衝突もなく。そして広大な勢力圏を築いていた。

「我々も持っているけれど」
「はい」
マウリアもまた南方に広大な開拓可能な星系を多く持っている。だがそこへの進出は積極的には行ってはいない。連合のように早急に話を進めるということがないのである。
「サハラもね」
そしてサハラも。オムダーマンの西方に持っている。だがそれは戦乱で長い間手がつけられないでいる。
「けれどエウロパにはないわね」
「はい」
「あるのは。何十万光年も続く闇だけ」
彼等の北と西はそれにより阻まれていた。何度も調査が行われているがそこには恒星一つない状況であった。従ってそこを通ることは今の技術では不可能であるとされていたのだ。何十万光年も、しかも辿り着く先がどの様な場所かわからないのにワープすることは到底不可能なことであった。
「闇だけですか」
「そう。一方では何十万光年もある開拓地、一方では何十万光年もある闇」
なおエウロパの場合は幅としての何十万光年である。これがあらゆる立体的方向に伸びているのだ。
「運命とは本当に不公平ね」
「ですな」
二人は頷き合った。
「連合はそれだけの力を手に入れ、エウロパは人口を抑制し、サハラに攻め込むしかなかった」
「その両者が戦ったのが今回の戦争だったというわけですな」
「そして今はその後始末」
「はい」
その言葉にこくりと頷く。

「喧嘩してそれで終わり、というわけにはいかないのがね」
「人の世の難しさというわけですか」
「話を戻すわね」
「ええ」
エルールはここで話を元に戻してきた。

## 第十七部第二章　マウリアの思惑その十

「連合が我々の宗教や哲学を研究してきたうえで交渉を進めてきているけれど」
「おかげで苦しくなっております」
「暗号の管理は厳重にね。そして芝居も打つわよ」
「芝居」
「そう、芝居よ」
　エルールは不思議な、何かを惑わす様な笑みを浮かべた。そうした笑みも彼女には似合っていた。
「彼等を惑わせる為の」
「何をされるおつもりでしょうか」
「私に任せて」
　そして言った。
「男も女も。その耳には逆らえないものよ」
「耳には」
「そう。特に盗み聞きしてまで聞く話からは」
　彼女は深い策を考えていた。
「そして部屋の掃除も厳重に」
「了解」
「耳と合わせてね」
「は、はあ」
　これの意味はスタッフにはわからなかった。だがおおよそのことはわかった。彼女はここで何かの策を連合に対して仕掛けるつもりだった。連合の者達はそれにはまだ気付いてはいなかった。
　連合はマウリアに関する研究をもとに交渉を進めると共に情報収集にもあたっていた。こうした交渉では半ば公然としたものとなってしまっているがその中にはお世辞にもいいとは言えない収集の方法もあった。

最もオーソドックスとされるスタッフへの買収工作は今回はなかった。ただそのかわりに連合側は盗聴器を使った情報収集をメインに使っていたのだ。
これは部屋の中を丹念にチェックして防ぐ。連合の方でもこれを警戒し、それぞれの担当者は自身の家の寝室やトイレ、バスルームにまで警戒を払う程であった。なおこの時代バスルームとトイレは別々になっている。所謂ユニットバスというものはない。
これだけ警戒しているのは連合の方が仕掛けているからである。彼等はマウリア側に提供した施設や果てはマウリア外務省にまで盗聴器を仕掛けた。そして彼等の動向を探っていたのであった。
だが情報は思うようには集まらなかった。何故かどうでもいい話ばかり入っていた。
「気付かれているかな」
フローレスはそれを聞いてこう呟いた。
「盗聴器に」
「よく行われることですしね」
彼に部下の一人であるマウリア局のスタッフの一人が応えた。
「こうした話では」
「そうだな。暗号の方も駄目らしいな」
「残念ながら」
彼はまた応えた。
「全て最新のものに切り替えられました。解読には暫く時間がかかります」
「またか」
実はこの前暗号が変わったのを知ったばかりである。そしてまた、であった。
「尻尾を掴ませないつもりだな」
「耳にも入れさせないようですが」
「盗聴器も。見破られているとなると」
「やはりあれを使いますか」

「コインをか」
思わせぶりな言葉をあえて使う。するとすぐに返答が来た。
「如何でしょうか」
「いや、それは止めておこう」
この場合コインとは買収の暗語である。それをぼかして言っているのである。
「今来ているあちらのスタッフはそうしたことには潔癖な者ばかりのようだからな」
「では男や女も」
「無駄だろうな。しっかりした人選だ、敵ながら」
「左様ですか」
ここでフローレスはマウリアを敵だと言ったがこの場合は真実であった。例え同盟国であっても外交交渉で競り合っている状況では敵対していると言ってよかった。そうした意味で彼等は敵同士となっていた。ただし水面下においてである。
「それだけ向こうもこの交渉の重要性がわかっているということだ」
「ではどうしますか」
「それでも盗聴器は仕掛け続けろ」
「はっ」
「見つからないようにな。そしてあちらの大使館のスタッフにも伝えてくれ」
「何と」
その言葉に問う。
「ブラフマーに赴任しているビジネスマンや企業家と今まで以上に話をしてくれと。パーティーを開くのならうんと人を招くようにとな」
「わかりました」
外交交渉においてパーティーとは情報交換の為に行われる。彼はそこを狙ったのである。

## 第十七部第二章　マウリアの思惑その十一

「当然マウリア側の人間も。情報が集まればいいが」
「期待薄でしょうか」
「別にそうは思わないが。だがな」
フローレスの顔が渋いものになっていた。まるでまだ全然熟していない青い柿を食べた時の様に。
「わかっていることだが一筋縄ではいかない連中だ」
「はい」
「ああくればこうかわす、そう攻めればまた防ぐ」
「変幻自在ですな」
「マウリアらしいと言うか。厄介な奴等だ」
「とりあえずは向こうのペースにはまらないようにしたいですな」
「それは当然な」
彼は応えた。
「話の基本だ」
「はい」
「とりわけマウリアは。あちらに引き込むのが上手い」
これも有名であった。引き込むというよりは話を強引に持って行くのである。これもまたマウリア流であった。
「それは最も警戒すべきことの一つだ」
「ですね。そして我々も周囲に警戒しましょう」
「こちらが使っているからか」
「そうです」
これは犯罪者の心理に似ていた。自分が行っているから相手も、というわけである。そうした意味で彼等は犯罪に手を染めていたと言える。
「それも警戒しないとならないでしょう」
そしてそれには気付かない。これもまた犯罪者の心理であった。

「気をつけることは多いな」
「残念なことに」
「まだあるかも知れない。少しずつそれを消していく」
「わかりました。では」
「次に向こうが打って来る手段も検討しておくか」
フローレスは考えを巡らせていた。
「彼等がな」
「ですね。話をする場所も考えましょう」
「うむ」
彼等もその策を知られまいとしていた。テーブルの下での激しい戦いはさらに激しいものとなろうとしていた。だがそれは表には決して出ることはない。見えはしないものであった。
「こちらも暗号は頻繁に変える必要があるな」
「はい」
暗号に関しても手を打つことにした。
「想定される範囲のことは全て手を打つ」
「そしてこちらの意図を知られないようにする」
「それが外交だ。外交は自分の腹の中を知られないようにすることが秘訣だと思う」
これはフローレスの考えであった。
「違うだろうか」
「私は少し違う考えですが」
「どうした考えだ」
フローレスはそれを受けて問うた。
「よかったら話してくれないか」
「話術です」
「話術か」
「はい。テーブルの席で如何にこちらに引き込むか。私は腹の中を見せないことよりもそちらを考えたいと思います」
不敵に笑ったうえでの言葉であった。

「だがどちらにしても決して綺麗なものではないな」
「ですね」
これは一致していた。
「難儀な仕事だ。善人ではできない」
「ですが悪人で容易にいくとも限りません」
「人間そのもののようだな。善悪の微妙なバランスの中にある」
これはどの世界においても言えることであった。人間というものは中立の存在である。善になるのも悪になるのもその時の動きによって変わる。そしてその善悪ですらその時によって変わる。どれが絶対に正しいとはそう容易にはわかりはしないものであるのだ。
「外交も同じだ」
「今の我々は大きく悪に傾いているようですが」
「それで成果が得られるなら悪は善になる」
フローレスはこう答えた。
「政治や外交の世界はな。何でもそうかも知れないが」
「そうかも知れませんね」
これは納得できるものがあった。このスタッフも頷いた。
「タレーラン然り、ディズレーリ然りな」
「はい」
ナポレオン時代のフランスの外相タレーラン。好色で賄賂を貪り、嘘をつくことを何とも思わなかった。部下や同僚を切り捨てたり、女を奪ったり、陥れてギロチン台に送ったりとその行動は将に悪であった。主であるナポレオンにも忠誠を誓うことはなかった。警察大臣であるフーシェと並んで帝国の両輪であったがその彼と並んでその時のフランスで最も信用のならない男であった。
だが彼はウィーン会議においてフランスを救った。欧州各国を騙し、ブルボン王家を騙し、ナポレオンを騙し、フランス国民をも騙して。フーシェと共にフランスを救ったのであった。底知れぬ悪人であったが彼は確かにフランスという国を救ったのであった。部下にも同僚にも上司にも持ちたくはなく、そして友人にも知り合いに

も決して持ちたくはない男ではあったが。
ディズレーリは黄金時代のイギリス外交の主役である。スエズ運河買収、インド帝国設立等は彼の手腕に拠るところが大きい。当時のイギリス外交は道理的には褒められたものではないがイギリスという国には多大な利益をもたらしたのである。これもまた外交であった。
「善行を行っても失敗すればそれで悪になる」
「ですが悪事を働いても失敗すればそれは善になる」
「そういうものだ。無論ばれては元も子もないがな」
「ですね」
「それは肝に命じておこう。では仕事に戻るぞ」
「はい」
彼等もまた仕事に戻った。そしてマウリアとの交渉と情報収集を続けるのであった。

## 第十七部第二章　マウリアの思惑その十二

この様に連合とマウリアの水面下の戦いは実に激しいものであった。これはエウロパとマウリアとなると状況が少し、いや大きく違うものとなっていた。
「彼等の条件はこれね」
エルールは外相の執務室で部下からの報告を受け取っていた。
「はい」
報告に来た部下がそれに応えた。
「また状況が変わるかも知れませんが今の時点ではおおよそそこにある通りかと」
「わかったわ」
彼女はそれを聞いて頷いた。
「それにしても思ったより控えめね」
「ですね」
部下は彼女の言葉に頷いた。
「もっと強行な話になると思ったのですが」
「どうしてそう思ったのかしら」
「彼等の士気からです」
「士気」
「彼等は確かに戦争では敗れましたが。精神では敗れていないと思うからです」
「心ではね」
それは当然であった。心を攻めるのが最も難しい。
「はい、それを考えますと。もっと強気に出ると考えたのです」
「ところが彼等はそれをしてはいない」
「そうです、それが意外に思えます」
「私はそうは思わないわ」
だがエルールはそれには異論を述べた。

「違いますか」
「あくまで私個人の見方だけれど」
彼女は言う。
「彼等はわかっているのよ。現実というものが」
「現実が」
「そう、だからあまり過度な要求は出さない」
これもまた駆け引きである。
「自分と相手の状況を読んでいるというわけですか」
「だと思うわ。彼等はそこまで愚かではない」
「老練なエウロパ、といったところでしょうか」
「そうね」
エウロパ外交は連合のそれに比べて技量が高いとされている。これは欧州と呼ばれていた頃から各国で巧みな外交を行ってきた歴史があるからである。
神聖ローマ帝国、後のオーストリアのハプスブルク家。それに対抗するフランスのヴァロア家、後にはブルボン家。それを離れた場所から見てバランサーとなり、時には主導権を握らんとしてきたバチカンとイギリスのチューダー家、スチュワート家、そしてハノーヴァー家。他にもロシアのロマノフ家やプロイセンのホーエンツォレルン家があった。彼等はそれぞれの国益と王家のプライドをかけて常に争ってきた。長い間ハプスブルクとヴァロア、ブルボンの対立が軸となっており、そこから動いていた。七年戦争で両者が手を結んだ後も、そして第一次世界大戦までオーストリアとフランスは欧州において重要なアクターであった。
「彼等は紅茶やコーヒーを飲みながら優雅な雰囲気で外交を行っているわね」
だが水面下では陰湿とも言える戦いが繰り広げられている。それは決して表に出すことはない。
「これに対して連合は山の様な食事をテーブルの上に置いてそれを貪りながら、罵りまで含めて外交を行う」

「連合らしいと言えばそれまでですがね」
「けれどエウロパの方が洗練されているのは事実ね」
「はい」
彼は頷いた。
「外交的な技量は確かにエウロパの方が上だけれど」
「外交もやはり年季だということでしょうか」
部下はここで問うてきた。
「年季？」
「はい。連合は確かに巨大ですがその国の中にはまだ新しい国が多いです」
これはマウリアから見た時間のスパンにおいての判断である。
「中国や日本、エチオピア位でしょうか。我々に匹敵する歴史を持っているのは」
「あとは怪しいけれどヒッタイトやアッシリア、フェニキアといった復活した国々ね」
「はい」
ヒッタイトなぞは遥か昔に突如滅亡し、そのまま長い間姿を消していたのであるが。
「イスラエルもそうね」
「あの国もまた特別です」
二千年に及ぶ放浪のことを言っているのである。

## 第十七部第二章　マウリアの思惑その十三

「あの国の外交は。また異様なものがあるかと」
「彼等は彼等で必死なのだけれどね」
「それはわかりますが」
「けれど。こうして見れば確かにそうした国々でも外交に長けた国は連合にはないわね」
「ＡＳＥＡＮ各国は上手いですね。あと中南米の系列の国が」
「そうね」
　エルールもそれに賛同した。
「米中露、それにブラジルやオーストラリアといった国々はあまり上手いとは言えないけれど。あとトルコもかしら」
「大国ばかりですね」
「大国だからそうなのでしょうね」
　エルールは言った。
「力任せになる。それで外交もそれに頼る」
「日本はそうではないと」
「あの国はまた異質よ」
「異質ですか」
「ええ。イスラエルと並んでね。連合では油断出来ない国よ」
「今の首相はそうだと言われていますね」
　伊藤のことである。彼女のことはマウリアにまで響いている。
「歴代の首相も。それぞれ一癖も二癖もあったわね」
「ええ。何を仕掛けて来るかわからない」
「そう」
　日本はそういう国と思われていた。この時代においても日本人が考えている日本とそれ以外の国々が見ている日本はかなりのギャップがあった。他の国から見れば日本は狐なのである。若しくは化け猫か。それだけ油断のならない国だとみなされていた。

「表にはそれは出さないだけにね」
「厄介な国ですね」
「敵に回すとね」
彼女は言う。
「恐ろしいことになるわね。イスラエルと同じで」
「そういえばイスラエルの今の首相もかなりのやり手だそうで」
いささか下世話な言葉が出て来た。
「各国に警戒されているとか」
「あの国はそうでなくても警戒されているけれどね」
連合の影のフィクサーともされている国である。大国ですら無下には出来ない国、それがイスラエルであった。この国とユダヤ人に逆らって失脚した人物は無数にいるとさえ言われている。
「戦争は武器を手にするだけではないから」
「はい」
「口やお金でも行われる。連合はまさにそれね」
「そうした意味で彼等は内戦状態ですね」
「決して武器の出ない、ね」
そうした戦争もある。ということである。何も武力を使ったものだけではないのである。そして同じ勢力に属していても戦争はあるのである。
「私達は一千年の間連合を見てきたわ」
「その間わかったことは」
「彼等は一つの世界。私達とは全く異なった世界」
そこには多くのものがあるということである。
「文明としては新しいけれど一つの世界なのよ」
「そして今我々はそれを相手にしている」
「それを覚えておいてね、よく」
「はい」
「今だけではないから」
エルールの言葉は何時になく真剣なものであった。彼女達は連合

という勢力をよく知っていた。そしてさらに学ぼうとしていた。全てはマウリアの為に、であった。

## 第十七部第二章　マウリアの思惑その十四

連合議会は長い審議に入っていた。講和の条約をどうするか、という問題である。だが話される時間が長いだけであり、審議自体はそれ程紛糾してはいなかった。

「これは予想通りだな」

ハンニバルはそれを見て呟いた。今彼の目の前では改革派の議員が話している。その内容は保守派の主張とあまり変わり映えのしないものであった。

その口調自体はいささか過激であった。我々はエウロパに勝った、だからこそ勝者の権利を要求するのは当然であると。だが同時に勝者の寛大さも示すべきであると。だからエウロパに対する要求はいささか抑えてもいいのではないかというものである。

「貴方は抑えろと仰るが」

それに対して保守派の議員の一人であるペテロ＝シーサクが意見をした。

「はい」

そしてそれにその改革派の議員ニコル＝コヴァルスキーはそれに応えた。両者は視線を合わせた。

「具体的にはどういった内容を考えておられるのか」

（さて、どう言うかな）

ハンニバルはそれを見て心の中で呟いた。

（内容はおおよそわかるが）

「まず賠償金は抑えておきましょう」

（やはりな）

「抑えるのですか」

「はい」

コヴァルスキーは応えた。

「エウロパに支払能力があるとはあまり思えませんし」

（少なくとも我々を満たせるものではないだろう）
ハンニバルはそう思っていた。エウロパの人口は一千億、それに対して連合は四兆に達しようとしている。一千億で四兆を養える筈がない。そしてそれを支払うことも不可能なのはわかりきっていた。
「程々でよいかと」
「あちらの国家予算の二年分程度ですかな」
「まあそれ位でしょうか」
当然この話は公である。あえて公の場で話し、世界に連合がどう考えているかを知らせていた。なおこうしたものより重要な話は当然ながらトップシークレットとなっている。実は賠償金に関しても重要な部分は表には出してはいない。
「いや、一年分でよいかと」
（決して寛大ではないな）
ハンニバルは思った。
（エウロパにとってはな）
表で話していることである。この中には真実もあるがどちらかと言うとエウロパを惑わせる為の芝居である一面が多かった。この議論はマスコミやネットに流れる。そして世に広まるからだ。
「その程度で」
「一年分ですか」
「如何でしょうか」
「確かに寛大ですな」
シーサクは言った。
「ベルサイユ条約と比べると」
「はい」
流石にあの条約と比べるとどんな条約も甘く見える。
「ですが一つ疑問があります」
「それは？」
「我々の主張とあまり変わらない気がしますが」
「それは」

コヴァルスキーは一瞬言葉を詰まらせたがそれはあくまで一瞬であった。すぐに反論する。
「具体的な指摘ではないようですが」
「我々もエウロパの賠償金はその程度でよいと主張しておりますぞ」
シーサクは反論した。
「彼等の支払能力を考慮して。違うでしょうか」
「違いますな」
コヴァルスキーは反論した。
「我々は数値目標を決めております」
(詭弁っぽいな)
ハンニバルはそれを聞いて思った。
「数値目標」
「左様、エウロパはどこまで支払えるか調べたうえで。それであちらの国家予算一年分というのを出したつもりです」
「先程二年分と仰いましたが」
そこに注意を向けてきた。
「確かにそれだけ支払うこともできるでしょう、彼等は」
「ではそれを要求しないのは何故に」
「それをすれば彼等が破綻するからです」
(エウロパを潰すわけにはいかぬということか)
ハンニバルはまた思った。
「それは避けなければなりません」
「エウロパを崩壊させることも併合させることも考えてはおられない」
「はい」
コヴァルスキーはこれには強い声で頷いた。

## 第十七部第二章　マウリアの思惑その十五

「その通りです。我々の戦争目的はあくまで彼等への勝利でした」
「はい」
「占領は一時的なものであり、併合しようとは全く考えられていませんでしたな」
「それはその通りです」
シーサクもそれは認めた。
「彼等を併合しても。何のメリットもありません」
「はい」
実は連合が今言いたいのはここであった。あえてエウロパを併合する意志がないということである。
「それをすれば連合は不安定要素を抱え込むことになります」
一千億の不穏分子である、数十人に一人不穏分子がいれば勢力としては厄介なことになる。ましてやそれが一つの地域に固まっていると。すぐに独立運動等に発展するのは歴史が伝えている通りである。ましてや異文明の者達がその対象である。混乱は目に見えていた。
「それだけは避けなければなりません」
「その為にもエウロパの破綻は防ぐべきと」
「はい」
コヴァルスキーは頷いた。
「私はそう考えております」
「わかりました。貴方の意見は御聞きしました」
「はい」
彼は今度はシーサクの言葉に頷いた。
「エウロパを併合すべきでないというのは私も賛成です」
（というよりは賛成する理由が見当たらない）
ハンニバルはまた思った。

「ですが賠償金にまでそれを考慮すると」
「では貴方は何を考慮されるべきであると御考えなのでしょうか」
コヴァルスキーは逆に問うてきた。
「あくまでエウロパを追い詰めないことです」
シーサクは言い切った。
「窮鼠猫を噛む、とも言いますし」
「ふむ」
それを聞いたコヴァルスキーは考える顔を見せた。
「追い詰めない、と」
「はい。過剰な要求はそれこそベルサイユ条約の二の舞です」
「確かに」
「それはあってはなりません。あらたな戦いを生むでしょう。またエウロパとの戦いを望まれますか？」
「まさか」
コヴァルスキーはそれをすぐに否定した。
「それを望む者は少なくとも連合にはいないでしょう」
「はい」
エウロパは彼等が思っていたより手強い相手だった。そしてその相手に満足していいような状況で停戦となり話を進めている。これ以上やれば何かあるかも知れない、それは避けたかったのだ。
「今は剣を出す時ではありません」
「ですな」
二人は頷き合った。なおこれはハンニバルも同じ考えである。彼もエウロパとの再度の戦いは無意味なものだと見ていたのであった。
「それではペンを出しましょう」
コヴァルスキーはまた言った。
「今はその時期です」
「戦争を再発させない為の条約を結ぶと」
「はい」
コヴァルスキーはシーサクの言葉に応えた。

「その為には穏やかな条約で構わないと思います」
「ふむ」
（ただし）
ハンニバルはここで心の中で呟いた。
（市民が納得出来る内容でなければならない）
そこにバランス感覚が必要であった。市民が納得出来るものでなければ反対意見で話が流れてしまう。また次の選挙で勝利もおぼつかないだろう。民主政治の難しさがここで出ていた。
「さしあたっては賠償金はそれ程多額のものを請求する必要はないでしょう」
「その他で求めるべきだと仰るのですね」
「そういうことです」
コヴァルスキーは述べた。
「これで如何でしょうか」
「そうですな」
シーサクはそこまで聞いて思索に入った。

## 第十七部第二章　マウリアの思惑その十六

「悪くはない考えです」
自分の考えもほぼ同じだとは言わない。政党が違うのだから表向きそれを認めるわけにはいかなかったのである。
「では外交委員会で検討するということで」
「はい」
こうしてコヴァルスキーの賠償金に関する案は外交委委員会の審議にかけられることとなった。話は一旦議会から委員会へと移ることになった。ハンニバルはそれを見て話はとりあえずは順調にいっていると思っていた。
（後は各国の首脳達がどう判断するかだな）
連合は実質的に三院制となっている。上下の二院の上に各国の首脳達がいるのである。彼等が最後の決定権を持つ。その彼等がどう判断するかという問題なのである。
外交委員会で話の調整が為されそれはまた議会に送られた。その内容は当初予想されたものよりもかなり穏やかなものであった。だが連合の市民達はこれに対して比較的寛容に受け止めていた。
「こんなものだろう」
彼等の感想はこうであった。
「エウロパみたいな小さなところから取れるものは少ない」
彼等はこう見ていた。連合から見ればエウロパは極めて小さな存在なのである。一千年来の宿敵ではあるがその差は歴然たるものがあると彼等は考えていた。そんな勢力からそう大したもんが取れるとは考えてはいなかったのである。連合は現実主義の文明である。その程度は見抜かなければならず、わからなければならないことであった。
「まあ下手にエウロパに恨みを持たれても意味はない」
「既に戦争やったのにか」

この意見にはこうした反論が帰って来た。
「恨みにもパラメーターがあるからな」
それに対する反論である。
「これ以上恨まれたくもないだろ？」
「もう限界まで達してるが確かにな」
変に恨みを抱え込みたい者もそうはいない。いるとすれば変人である。
「じゃあここは穏やかにいこうぜ」
「そうするのが一番か」
こうした話があちこちで話されていた。そしてそれは当然ながら各国の首脳の耳にも入っている。これを最もよく聞いていたのはイスラエルであった。
そのイスラエルの首相はマウリア外相であるエルールが話に出した通りの評判の人物であった。スラリとした長身の容姿端麗の人物であり、まるでテノール歌手、それもヴェルディのオペラに出演する様な容姿の持ち主である。金色の髪を綺麗に後ろに撫でつけ、黒い目には知的でかつ情熱を思わせる光が宿っている。だがその容姿とは裏腹にかなりの策士であると言われている。彼の名はルカ＝サッバティーニ。四十代半ばの政治家としてはまだ若い男であるがその能力を大きく買われイスラエル首相となっている。そのバックにはユダヤ系財閥が多数いると言われ、連合においては『金色の烏』『猛禽の爪を持つ烏』等と言われている。日本の伊藤と並んで連合で最も油断のならない政治家であるというのがもっぱらの評判である。
「世論はそう考えているのですな」
彼はレストランの個室においてある恰幅のいい老人と話をしていた。長い髭を生やした老人である。
「そうです」
老人はステーキを切りながらそれに答えた。見れば羊のステーキである。

「今は穏やかな話で収めるべきと。これは多くの国において同じです」
老人は語った。見れば眼鏡の奥のその目には油断ならない光が宿っている。
「多くの国で、ですか」
サッバティーニはその言葉に少し違和感を感じた。
「ではそう思っていない国もあるということですね」
「そうです」
老人はそれを認めた。
「それは何処だと思われますかな」
「今回大国達は思ったより温和です」
「はい」
日米中露やＡＳＥＡＮ各国、オーストラリア、ブラジル、トルコといった国々である。この中で日本が最も温和な国だとされている。同時に何を考えているかわからないとも評されているが。
「さしあたって反対している国はない筈ですが」
「彼等もエウロパから取れるものはないと見ておりますから」
老人は答えた。
「ですから今回は大人しいのです」
「既に鼻薬をかかせたとかそういうのはないのですね」
「そこまで話はいきませんでした」
老人は言った。

## 第十七部第二章　マウリアの思惑その十七

「有り難いことに」
「それは何よりです」
サッバティーニはそれを聞いて満足そうに笑った。連合においてはユダヤ系の力は隠然たるものがある。各国のマスコミや知識人、金融界に多くの人材を送り込んでいる。そしてその団結によって隠然たる力を保持しているのである。イスラエルに対して強硬派というだけで落選したある大国の大物議員がいたとさえ言われている。これは多分に都市伝説であったしイスラエルとユダヤ系の力に関しても都市伝説が入っていた。だが彼等が連合においてかなりの力を持っていることは事実であった。
「話を穏便に済ませるに越したことはありませんからな」
「我々は何時でも穏便な筈ですが」
老人はここで不気味な笑みを浮かべた。
「全ては人の善意に頼っておりますから」
「おっと、そうでしたな」
サッバティーニはそれに合わせて笑った。
「我々イスラエルは平和を常に望んでおりますから」
「そういうことです」
一応はそういうことになっている。だが連合においてそれを信じる者はあまりいない。イスラエルとユダヤ人は連合の言うならば影のまとめ役であるとされているのである。
「何事も穏やかにしなければね」
「はい」
サッバティーニは老人の言葉に頷き彼も羊のステーキを口にする。
「ではどの国が」
サッバティーニは肉を一口食べた後で尋ねた。
「まあ小国が数国程ですかな」

「ではあまり問題ありませんね」
「はい。既に手は打ってあります」
老人は答えた。
「すぐに彼等も考えを改めてくれることでしょう」
「それはよいことです」
サッバティーニの笑みも変わった。それまでの端整な笑みからまるで仮面の様に表情のない無気味なものとなったのであった。
「それでは各国首脳による審議と議決は問題ありませんな」
「御安心下さい」
老人は太鼓判を押した。
「全てはつつがなくです」
「そう、全ては」
サッバティーニはその仮面の様な笑みのまま応える。
「つつがなく」
「そういうことです」
彼等はあえてそう応えていた。今度はワインを口にした。赤いワインである。
「ところで話は変わりますが」
「はい」
サッバティーニは老人に応えた。
「そちらの事業は今どうなっているでしょうか」
「全ては順調ですよ」
老人は今度は明るい笑顔になり答えた。
「これからも拡大していくつもりです」
「それは何よりです」
「かってエウロパから民族ごと連合に移住した我等」
「はい」
「この連合で生きていくつもりですからな。覚悟はできております」
「そして我々が生きていく為には」
「連合の中が平和でなければなりません」

「今回はそれが上手くいきそうで何よりです」
「はい。では我等が十二支族の為に」
「ダビデの星の為に」
二人は杯を打ち合わせた。十二支族とはユダヤ人を形成していたとされている十二の一族である。ヤコブの息子であるルベン、シオメン、レビ、ユダ、イッサカル、ゼブルン、ヨセフ、ベニヤミン、ダン、ナフタリ、ガド、アシェルの十二の一族をさして言う。イスラエル王国が分裂し、北のイスラエル王国が滅亡した時にユダ族、ベニヤミン族を除く十支族の行方がわからなくなっていた。今では揃っている。その血はどうであれ彼等にしてみれば十支族も戻っているのだ。長い間の苦労が報われたのである。
そしてダビデの星は彼等の象徴である。彼等は今それに対して誓い合った。イスラエル、そしてユダヤの血は今も健在であったのだ。

# 第十七部第三章　シャイターンの蠢動その一

シャイターンの蠢動

連合とエウロパの戦いが停戦に入ったことはサハラにも影響を与えていた。

まずはハサンである。彼等はこれにより途絶えていたエウロパとの交易を再開させることにした。戦争はこうした経済活動も停滞させてしまうのである。

ハサンはこれにより長い間多大な利益を手に入れていた。そしてこれはハサンの繁栄にとって欠かせぬものの一つともなっていたのであった。

「とりあえずはめでたしめでたしでしょうか」

首相であるシャービル＝ラージーがそれに対して言った。彼の目の前にはルクマーン＝ワシードがいる。言わずと知れたこの国の太子であり軍事行政の実質的な最高指導者であった。

「まずはな」

ルクマーンはとりあえずはそれに頷いた。

「だが彼等の国力はかなり落ちているだろう」

「はい」

ラージーはそれに頷いた。今二人は暗室で話をしていた。宮廷の中だと思われるがその部屋は異様に暗いものであった。

「これまでのような交易は望めないだろうな」

「今エウロパの国力は開戦前の八割程だそうです」

「そうか」

「しかも現在占領されている地域を含めて。経済活動が阻害されたのがその大きな原因です」

「だがそれだけではないな」

「はい」

ラージーは答えた。

「やはり戦乱で各種産業にもダメージが出ております」
「うむ」
「それへの修復に時間がかかると思われます。そして総督府から流入した人口も足枷になっていくでしょう」
「前途多難と言うべきだな」
エウロパの前途は暗澹たるものだと、はっきりと述べたのであった。
「まさにそうです。これからのエウロパは暫くの間人口難と産業の復興に悩まされることでしょう」
「国難はまだ続くか」
「それへの解決策は早急なものはありません。彼等は暫くは立ち直れないでしょう」
「では当分の間交易による収益も望めないな」
「そうだと思われます」
ラージーは述べた。
「他の分野の育成を考えるべきかと」
「わかった。それでは検討してみる」
「はい」
「重工業ではどうか」
「重工業ですか」
「そうだ、その中には軍事産業もある」
彼は言った。
「どう思うか。我が国は重工業も発達していることだしな」
「それは悪くない御考えだと思いますが」
だがラージーの声は懐疑的なものであった。
「ただ」
「ただ。何だ？」
「何故軍需産業までも。あれは出費ばかりで」
「わからないか」
「オムダーマンとティムールでしょうか」

近年とみに勢力を伸ばしているこの二国に対して言及された。オムダーマンは西方と南方を、そしてティムールは北方を掌握している。今やハサンに比肩し得る力を着けているのである。
「そう、彼等だ」
ルクマーンはそれを認めた。
「彼等に対する備えをしておきたいのだ」
「備えですか」
だがラージーはそれにはあまり賛成してはいないようであった。
「今のままで充分だと思いますが」
「そう思うか？」
しかしルクマーンはそうではなかった。

## 第十七部第三章　シャイターンの蠢動その二

「我が国は軍備においてもサハラ第一のものですから」
ラージーは言った。
「心配は無用だと思われますが」
「片方を相手にしている場合はな」
ルクマーンはここでこう返した。
「両方を相手にしたならばどうなるか」
「両方ですか」
それを聞いたラージーの声色が変わった。
「そうだ。兵力においてこちらは劣るな」
「はい」
「そしてオムダーマンにもティムールにもそれぞれ天才がいる」
彼は言う。
「アッディーン元帥と」
まずはオムダーマンの副大統領であり軍事の最高責任者でもある彼が。彼の軍事的才能は最早サハラはおろか人類社会全体に知られていた。
「シャイターン主席だ。彼等に対抗出来る将は今我が国にいるか」
「それは」
ラージーはその言葉に詰まらざるを得なかった。
「御言葉ですが」
「そうだ、いないな」
ルクマーンもそう見ていた。だからこそ言ったのである。
「ましてや最近不可思議なテロ事件が多発している」
「はい」
ラージーはその言葉にも頷いた。
「これにより有能な軍人や官僚達が亡くなっている。人材の損失も深刻だ」

これはシャイターンの手によるものである。当然ルクマーンも事件の究明に務めている。だがその手懸かりを掴むことすら容易ではないのが現状であった。
「今はそれを補う為には数が必要なのだ」
「では軍備の増強に出られるのですね」
「そうだ、すぐに大規模な軍備増強案を作成しろ」
「はっ」
ラージーはその指示に対して一礼した。
「ではすぐに軍務省と大蔵省に命じて立案させます」
「うむ。そして傭兵達も集めよ」
「傭兵達も」
「少しでも兵力が必要な時だ」
彼は言う。
「備えはしておかなければな。徴兵でも集められる兵力に限りがある」
この時代は徴兵制といっても実質的には厳格な選抜徴兵制である。身体的な能力だけでなく技能も要求されるからである。エウロパが総動員令を敷いても五百個艦隊を集めるのが精々だったのもそこにある。中学生でも銃を持たせて兵士に仕立て上げていた第二次世界大戦の頃とは違うのである。
「だからこそだ。よいな」
「わかりました」
ラージーはそれにも頷いた。
「ではそちらも早急に」
「急ぐようにな」
「はい」
「敵は待ってはくれない」
ルクマーンの言葉は真実であった。
「何時仕掛けてくるかわからないしな」
「備えを進めると共に一つ手を打っておいてはどうでしょうか」

「手を」
それを聞いたルクマーンの眉が動いた。
「それは一体何だ」
「外交です」
彼は答えた。
「マウリアや連合と手を結び。そしてその力を後ろ楯にしてはどうでしょうか」
「同盟か」
「はい」
ラージーは言った。

## 第十七部第三章　シャイターンの蠢動その三

「悪くはないと思いますが」
「打てる手は打っておくにこしたことはないな」
少しでも有利になる為に。これは国家として当然のことであった。
「では打たれますか」
「そうだな」
彼は頷いた。
「連合とマウリアに使者を送ろう。そして」
「そして？」
「オムダーマン、ティムールの双方から目を離すことのないようにな。よいな」
「はっ」
こうして外交の手は打たれた。ルクマーンは首相との話の後でその足で王宮に向かった。そして父でもある国王の部屋へと向かった。
「父上」
彼は父を前にして一礼した。
「お話したいことがあります」
「政治のことか」
「はい」
彼は答えた。そして口を開いて述べた。
「今我がハサンは重大な岐路に立たされております」
「あれだけの国があったサハラも今では大きく三つになったな」
「はい」
彼は答えた。
「我等とオムダーマン、そしてティムールの三つにです」
「これは予想もしていなかった。オムダーマンにしろティムールにしろ」
王は言った。

「これ程短期間に勢力を伸ばすとはな。予想していなかった」
「あの二人の力が大きいでしょう、やはり」
アッディーンとシャイターンの。その存在がやはり大きいと言えた。これは最早言うまでもないことであったが。
「二人共急に出て来たな」
「はい」
「まるで彗星の様に」
「そのうち最も警戒すべきはシャイターンだと思います」
「シャイターン主席か」
その名を聞いた王の顔が不吉なものに歪んだ。
「彼は。陰の強い男だな」
「父上もそう思われますか」
「確かに軍事も政治も天才的なものを持っている。だが彼が持っているのはそれだけではない」
王はそう見ていた。
「目的の為なら手段を選びはしない。そしてそれを決して表に見せることはない」
「目的の為に最も効果的な方法のみを選び、そしてその後の処置も怠らない」
「そのうえでそれを芸術の域にまで高めている。恐ろしい男だな」
「全くです。まずはあの男をどうにかするべきでしょう」
これはルクマーンも同じ考えであった。
「だが対抗出来る者がいるのか」
王は問うた。彼はそれがまず疑問であったのだ。
「あの男に。我が国にそこまでの男が」
「父上」
だが彼はその問いには不敵に笑って返した。
「何も男ばかりとは限りませんぞ」
「どういうことだ」
「女もおります。御安心を」

彼は自信に満ちた笑みでこう言った。何かしらの考えがあることは明らかであった。
「女か」
だが王は息子のその言葉に懐疑的に眉を動かした。
「言っておくが刺客は通用するとは思わないことだ」
彼はそうしたことを好まなかった。情報収集は当然のことだと考えていたがテロによる目的の遂行は王者の為すべきことではないと忌み嫌っていた。ハサン王家の誇りがそれを許さなかったのだ。
「ましてやあの男相手には」
「何も刺客を使うとは言っておりませんが」
だがルクマーンはそれにはあえてとぼけてみせた。
「他にも方法はあります」
「外交官か？」
「いえ、より直接的な方法です」
彼は答えた。

## 第十七部第三章　シャイターンの蠢動その四

「あの男に対抗出来る女傑を向かわせます」
「期待していいのだな」
「是非」
彼の言葉に揺らぎはなかった。そこには絶対の自信が見えた。
「ではそれは任せる」
「はい」
「そしてオムダーマンだが」
懸念はもう一つあった。アッディーンのオムダーマンである。
「あの国に対してはどう考えているか」
「その勢力はティムールを凌いでおります」
ルクマーンはまず国力に関して述べた。
「瞬く間に西方と南方を統一し。その勢いは日の出と言えましょう」
「そうだな」
なおイスラム世界では太陽よりも月の方が尊ばれてきた歴史がある。砂漠の国であるイスラム世界では昼に酷い光で苛む太陽よりも夜に優しい光で照らしてくれる月の方が有り難い存在とされてきたのである。ムハンマドの紋章が三日月であり、トルコの旗に三日月があるのもここにある。
「そしてアッディーン元帥ですが」
「彼もまた天才だな」
「ええ」
彼は父王のその言葉に頷いた。
「軍人として。そして最近では政治の才能も発揮しようとしております」
「副大統領としてな」
副大統領ともなればやはり政治に関わるものである。閣議にも参

加し、軍政を統括する立場となっている。従って彼も政治に携わる機会が増えているのである。
「とりわけ軍政方面で」
「うむ」
彼等もそれに言及してきた。
「只の軍人ではないことは事実です」
「その彼が率いるオムダーマン軍の強さはわかっているな」
「無論です」
瞬く間に西方と南方を征服した軍である。アッディーンは今まで無敗を誇っていた。敵がどれだけの数をぶつけようとも地理を生かして戦おうとも彼はそれを破ってきた。今ではサハラの英雄とさえ言われていた。
「おそらく今ではサハラ最強でしょう」
「だろうな。そしてその最強の軍にあたるべき我がハサンの軍は」
王の顔が曇った。
「御世辞にも。どうしたものか」
ハサンは軍が弱いことで有名である。戦争で負けることが多く、その為にサハラ最大の勢力を誇りながらサハラを統一できずにいたのである。これはハサンが豊かである為だとも言われている。何故か古来より豊かな国の軍は弱いとされている。他の方面に人材が行き、享楽を知るからだろうか。この時代においては連合の軍隊がそうであるとされている。連合の将兵は人材確保の為他の勢力の軍から見れば破格の待遇を与えられており、訓練もそれ程激しいものではない。そしてやはり豊かである。それはエウロパとの戦いでも如実に現われていた。連合の兵はその装備と数に頼り、動き等はエウロパ軍に遅れをとっていた。同じ数と装備だったならば惨敗していただろうというのが専門家の多くの見方である。
「あの軍でオムダーマンに対抗出来るのか」
「父上」
だがルクマーンは怯む父に対して言った。

「軍は何も将兵や数だけではありませんぞ」
「というと」
「お任せ下さい。備えはあります」
「何か考えているな」
「はい。将兵で劣るならば他のもので戦えばいいのです」
彼は言った。
「既にそれは考えてあります故」
「わかった。ではそなたに任せよう」
王はここは息子を信頼することにした。

## 第十七部第三章　シャイターンの蠢動その五

「オムダーマン軍、必ず抑えてみせよ」
「はっ」
「それにしてもだ」
王は話が終わったところでふと呟いた。
「何か」
「この数年でサハラは大きく変わろうとしている」
彼は言う。
「何もかもだ。若しかすると近付いているのかも知れぬな、統一の時が」
「統一の」
「ウマイア朝が崩壊してから我等が一つになったことはない」
「はい」
ムハンマドとその後継者達の正統カリフ朝の後ウマイア朝が成立した。そのアラブ人優遇政策とスンニー派偏重に反感を覚えた者達がアッバース朝を立てた。だがこの時ウマイア朝の者は何とか落ち延びイベリア半島でまた王朝を立てたのである。この時にイスラム世界は分裂した。それから以後統一されることはなかった。オスマン＝トルコもそれは出来なかった。そして宇宙の時代になって一千年。やはり統一は成っていなかったのであった。
サハラを統一した者こそそのスルタン＝カリフ、皇帝になる資格があると名を忘れられた預言者の言葉にあるとされている。だがそれは夢だと多くの者が思っていたのであった。
「だがそれが三つになった」
王は言う。
「そしてそれが一つになる時が来ようとしているのかもな」
「それは我がハサンによって為されるべきです」
ルクマーンはここで強い声で言った。

「まずは敵の攻撃を凌ぎましょう」
「ふむ」
「そしてそれが衰えてから反撃に出るのです。国力ではこちらが勝っております」
彼は強い声で語る。
「その後は二国を滅ぼし。我等がサハラを一つにするのです」
「そして我が家が皇帝にだな」
「そうです」
頷きも強いものとなっていた。
「それこそが我等の悲願であった筈です」
「確かにな」
しかし父王の言葉は歯切れが悪いものとなっていた。
「何か」
「いや、いい」
しかしそれはあえてぼかした。彼はここは多くを語ろうとはしなかった。
「何でもない。忘れよ」
「はい」
「何はともあれ国政は今はそなたにその多くを任せておる」
「はい」
ルクマーンは息子として、国政を預かる者として頷いた。
「では頼むぞ。何事も慎重にな」
「わかりました」
こうして二人の話は終わった。ルクマーンは部屋を後にする。そして王だけが部屋に残ったのであった。
「統一か」
王は浮かない顔で呟いた。
「あまりよいとは言えぬな」
彼は統一には消極的であった。これは彼自身の考えからくるものであった。

ハサンは東方の大国になって久しい。その国力は大きく、安定している。その為下手な軍事行動を避け、現状維持でよいのではないかという考えもまた強いのである。王はその考えを持つ者の一人であった。

「守るだけでよいが。果たして」

だがそれだけではならないのもわかっていた。彼も決して愚かな人物ではない。侵略に対しては何としても反抗しなければならないのはわかっている。国を守る為に。だがそれ以上のことは望んではいないのである。

彼は少し溜息をついた。そしてテーブルの上に置かれていたワインを自分で入れて飲んだ。一息ついた後でそのまま椅子の上で休んだ。後は闇の中に心を沈めるだけであった。

## 第十七部第三章　シャイターンの蠢動その六

ハサンがオムダーマン、ティムール二国への備えを配しようとしている頃オムダーマンでは次の軍事計画に関して話されていた。
その中心にはアッディーンがいた。彼は連日会議に出席しその調整にあたっていた。副大統領、そして軍務の最高責任者として彼は多忙を極めていたのであった。
日々が書類との戦いであった。軍隊も官僚組織である以上そうしたデスクワークから逃れることはできない。彼は会議が終わればデスクワークに取り掛かっていた。多忙な日々を過ごしていた。
「今回の軍備増強案に関してですが」
秘書官であるハルダルトがまたディスクを持って来た。
「またかなり大幅なものですね」
「それは承知のうえだ」
アッディーンは自身の椅子に座り、ノートパソコンで仕事をこなしながらそれに応えた。
「西方と南方の戦力を全てまとめた戦力なのだからな」
「はい」
「しかもただまとめただけではない。大幅に増強してある」
「装備を統一したうえで」
「その通りだ。それに伴う軍事費もかなりのものだったな」
「はい。財政部はもう悲鳴をあげております。特に艦艇建造に振り分けられる費用が莫大なもので」
「うむ」
それは当然のことであった。西方だけでなく先程統一した南方の軍に対しても行われているのである。統一された兵備でなければまともな戦いなぞできはしないからである。
「しかも研究費も相当なものでした」
「これからはサハラ全土で戦える艦艇でなければならない」

「はい」
これはハルダルトもわかっていた。
「今までのように西方での戦いを重視した建造では不都合が起こる。技術部にはそれで迷惑をかけたがな」
「ですがそれが仕事ですからね」
ハルダルトは答えた。
「技術部にも仕事をしていると満足してもらいましょう」
「少なくともボーナスははずんだ」
「それで宜しいかと」
金銭面での報酬が重要なのはサハラでも同じということである。
「そうでもなければ激務に向かう気にもなれないだろうからな」
「それで宜しいかと。ただ」
「ただ。何だ？」
「艦艇の建造は追いつくでしょうか。しかも新造艦ばかりになりますが」
「それは考えてある」
アッディーンは答えた。
「今配備した艦艇から訓練を進めさせている」
「それで慣れさせていると」
「そうだ。新造艦はそうでなくとも問題が多い」
どうしてもそうなる。ある程度運用してからでないと問題点はわかりはしないのはこの時代でも同じである。
「はい」
「今のうちに何かとな。さもなければ次の行動に間に合いはしない」
「次の行動」
「わかっているだろうな」
彼は問うた。
「次に我々が何を為すべきかを」
「無論です」
ハルダルトは答えた。

「サハラがいよいよ動こうとしておりますから」
「そうだ。だが一つ気になるのだが」
「それは」
「我がオムダーマンは共和制だな」
「はい」
　これもまた言うまでもないことであるが。それでもこの場合は極めて重要なことであるのだ。
「国家元首は大統領となっている。だが統一した者は皇帝になるという預言があるな。あれとの関係は一体どうなるのだ」
「それはアッラーの思し召しかと思いますが」
　ハルダルトはこう答えた。
「アッラーの」
「はい。おそらくアッラーはそこまで既に考えておられる筈です」
「ふむ」
　アッラーは全知全能の神である。知らないものはない。だからここでも知っていると考えているのである。唯一にして無謬の存在であるからだ。
「どういった皇帝なのかも」
「皇帝は一つではないのか」
「無論です」
　ハルダルトはまた答えた。
「かっての中国の歴代王朝やオスマン＝トルコの様に世襲の皇帝もあれば」
「うむ」
　その権力の委譲の仕方は様々であるが。中国の歴代王朝は基本的に正室である皇后が産んだ者の中の長子が継ぐようになっていた。清王朝は太子を定めず、後継者の名を額縁の裏に納めており、皇帝の崩御と共に出すことになっていた。オスマン＝トルコは初期は最初に帝都に着いた者がスルタン＝カリフ、即ち皇帝となるようになっていた。それぞれ形式が異なっていたのである。

「ローマ帝国の様な例もあります。そして形式的には選ばれる神聖ローマ帝国のようなものもありましたな」
「必ずしも世襲ではないということだな」
「そういうことです」
彼は頷いた。確かにその通りであった。

## 第十七部第三章　シャイターンの蠢動その七

なおローマ帝国の皇帝は一つの家から出るものではない。軍や元老院に支持された者が皇帝となることが多かった。特に軍人皇帝の時代は皇帝が次々に変わっている。

神聖ローマ帝国は後半はハプスブルク家が皇帝となっていたが一応は選帝侯達が選ぶことになっていた。この中にはケルン等の司教もいたが彼等は宗教よりも世俗のことに熱心であった。従って皇帝を選ぶ度に多くの金が動いていたのである。

「別に世襲でなくとも構わないのです。ただ」

「ただ。何だ？」

アッディーンは問うた。

「世襲の方が何かと都合がいい場合もあります」

「血筋か」

「はい」

「確かに王家や皇室といったものの存在は国家を統合するのにいいな」

「エチオピア皇室やハプスブルク家、ロマノフ家が復活したのもそれですし」

「ああ」

エチオピア皇室はかつて悪名高きメンギスツ政権によって倒され、皇族の殆どが殺されてしまった。だが国家の統合の存在として、そしてシバの女王の時代からあったとされているあまりにも古い皇室が消えるのは惜しいという話が出、探し出された結果傍流の一人の青年が皇帝となった。傍流と言っても血筋はかなり怪しいとの意見があったがそもそもあまりにも長い歴史を持つ家であり言うならば国民全体が多かれ少なかれ皇室の血を引いていると言ってもよかったので皇帝となった。今のエチオピア皇室はこの青年の流れである。その皇帝はマガプトといい、今のエチオピア皇帝はハルシャ二十世

である。温厚な人物として知られ、日本の皇室とも交流が深い。
なお面白い話があり日本の皇室とエチオピアの皇室は連合の国家元首の中では最上位とされている。皇帝の下に王がおり、王の下に大統領や国家主席等がある。大統領と主席の差はないが王との差はあるのだ。そして皇帝の差も。アメリカや中国はこの点においてかなり席次が下なのである。皇室や王室を持つ国々では首相が実質的な行政の長であり、大統領と同格とされている。あくまで皇帝や王との差は歴然としているのである。
その中でも日本の天皇とエチオピア皇帝は別格である。連合においてもたった二人の皇帝なのである。ヒッタイトやアッシリアといったかっての民族を復活させた国家の中には王制を採った国もあるがそうした国々も彼等に遠慮して皇帝とはならなかった。それだけこの二つの皇室は別格なのであった。
その二つの皇室のどちらが席次が上かというとここで厄介な話になった。歴史は伝説の時代にまで遡ることができ、ギリシア神話にまで登場するエチオピア皇室の方が古い。だが一度断絶しているのである。日本の皇室にはそれがなかった。従ってどちらの席次を上とするかで議論が巻き起こった。国力やそうした問題ではなかった。上は中央政府から下は中学生までこの議論に加わった。そして連合中を巻き込んだ議論となったのである。
また日本の皇室もエチオピア皇室も互いの理由を根拠として譲り合った。流石にここで自分の考えを主張することはできなかったからだ。皇室としての威厳と伝統を守るという意図もあったのであろう。
結局これは時と場合によって変わることになった。所謂玉虫色の決着である。どちらの天皇、皇帝が先に在位にあるかである。中央政府が仲介で出した見解であった。各国の元首もそれが適応されており、それでよいことになった。つまり就任一日目であるとアメリカ大統領でも中国大統領でも席次は最下位となる。それと同じであった。それでも威張っているのがアメリカや中国なのであるが。

ロマノフ家は連合にロマノフ公国がある。モスクワ大公としてのロマノフ家として新たな国家の元首に迎えられたのである。ロシアの兄弟国家の様な存在である。そしてハプスブルク家はオーストリア王となっている。こちらの家は復活した時に一ランク下がってしまった。今エウロパには皇帝はいない。総統がおり、それが実質的にローマ皇帝の継承者的な位置にあるからである。

この時代は多くの国では皇室や王家は国家の象徴としての国家元首であった。決して政治には加わらないのが連合やエウロパのそれである。サハラでは違うが。

「大統領や主席よりも箔があるとの見方も可能です」

「箔、か」

アッディーンはそれを聞いて少し眉を顰めさせた。

## 第十七部第三章　シャイターンの蠢動その八

「何か今一つわからないものがあるな」
「そうなのですか」
「国家にも箔が必要なのはわかっているつもりだが」
これは流石に政治を少しかじっていればわかることであった。
「だがな。それ程意味があるものなのか」
「連合を御覧になられればいいでしょう」
それがハルダルトの返答であった。
「現に皇帝という存在が非常に大きな意味を持っておりますから」
「ふむ」
アッディーンはそれを聞いてまた思索に入った。
「そういうものか」
ここで彼はある考えを抱いた。
「一度連合に言ってみたいな」
「連合にですか」
「そうだ。そこまで色々とあるのならな」
彼は言った。
「勉強の為にもな」
「ううむ」
だがハルダルトはあまりいい顔をしなかった。
「駄目だろうか」
「いえ、駄目とかそういう問題ではなく」
彼は答えた。
「現実にできるかどうかです」
「実際には困難なのは私もわかっている」
アッディーンはこう言葉を返した。
「だが。百聞は一見にしかず、ともいう」
「はい」

「実際に見てみるのが一番いいと思うのだが。どうだろうか」
「そうですね」
ハルダルトはさらに考えた後で自分の意見を述べた。
「可能ならば悪くはないでしょう」
「可能ならば、か」
「あくまで可能ならばです」
そう念を押した。
「ただ、今は絶対に無理ですね」
「この状況ではな」
これはアッディーンもわかっていた。軍の再編成と次の作戦に向けての準備が大変なのである。
「まあ今後機会があればでいい」
「ですね。まあその話はこれで終わりましょう」
「うむ。それでだ」
「はい」
話は軍事に戻った。
「連合とエウロパの戦争の結果だが」
「それですか」
「あまりにも連合の物量が圧倒的だったな。そしてそのせいで勝った印象が強い」
「確かに圧倒的な物量でしたな」
これはもう言うまでもないことであった。
「だがそれだけではないな」
「ですね」
これはハルダルトもアッディーンも認識していた。
「それを満足に動かすことのできる補給態勢が整っているという前提が必要だ」
「その点連合軍は実に優れていました」
ハルダルトもこう述べた。
「まず補給基地を整備し、それから進撃を開始する」

「うむ」
ハルダルトのその言葉に頷く。
「航路も確保、整備しながら進んでいく。そして進撃も緩やかでした」
「あれは連合軍の艦艇の速度が遅いせいもあったがな」
「はい。ですが補給を念頭に置いた進撃でした」
「その結果補給で困ったという話は出なかった」
「ですね。連合軍は常に豊富な物量で敵を相手にしておりました。逆にエウロパ軍の方が物資不足を危惧していたそうです」
これはそのまま互いの国力が出た結果であった。

## 第十七部第三章　シャイターンの蠢動その九

「エウロパは自分達の領土で戦っていたせいもあるがな」
「それもありますな。エウロパが受けたダメージは最低限でしたが」
「それでも甚大であったことには変わりがないしな」
戦力差を考えれば最低限であった、という意味である。エウロパ軍として受けたダメージは言うまでもなく甚大であった。
「そうです。連合軍の進撃を全く止められませんでしたし」
「補給で負けたということか」
「敗因の一つにそれがあるのは間違いないかと」
「ふむ」
「結果としての見方ですが」
「いや、間違ってはいないな」
アッディーンはハルダルトのその見方を肯定した。
「それに結果を見てからの分析は重要だ」
「有り難うございます」
「連合の勝因とエウロパの敗因の分析はな。我々の今後の役にも立つ」
「エウロパの敗因も、ですか」
「そうだ」
アッディーンは頷いた。
「両方がだ」
「エウロパの敗因となるとあまりないですね」
ハルダルトは述べた。
「ないのか」
「私はそう思いますが」
少なくとも彼はこう見ていた。
「物資不足が危惧されたのはありますがそれでも最後まで満足に戦いましたし」

「確かにな」
「そして戦略も戦術も特に不備はありませんでした。多くのミスはありましたが」
「ミスは連合もしている」
「ですがそれは致命的なものではありませんでした。エウロパもまた」
「ではエウロパの敗因は何か」
　これはサハラにとっては重要な研究材料となっている。
「彼等は満足に戦ったと言うべきでしょう。ですが」
「連合はそれ以上だったということか」
「物量や補給の問題だけではなく」
　そこも見られていた。戦争とは勝因にしろ敗因にしろ一つではない場合が殆どだ。
「戦略もしっかりしていたか」
「エウロパ以上に。そうした意味で今の連合軍とそれを統括する国防省はかなり優秀だと思います」
「そうだな。連合中央政府の国防長官は日本人だったな」
「はい。八条義統です」
　ハルダルトは答えた。
「そう、八条長官だった」
　アッディーンも言った。
「若いが。相当優れていると言うべきだな」
「そうですね。彼の手で国防省と連合軍は築き上げられたと言っても過言ではありませんから」
「それを考えると。相当なものだ」
「はい。あれだけの軍を短い期間で。見事と言うべきでしょう」
　一口に言うと簡単であるが実際にやるとそうではない。雑多な各国軍を統一された中央軍にするというのは。決して容易なことではない。かなりの時間がかかるし綻びも次から次に出る。だが八条はその統率力と政治力、事務処理能力により果たしたのである。結果

として設立当初はかなりの激務の日々であったが。
「天才的と言うべきか」
「かつては軍にいたそうです」
「日本軍にか」
実はアッディーンは八条の細かい経歴までは知らなかった。今はじめて聞いたと言っていい。八条の名はサハラ全体で知られるようになってきているのは事実である。しかしその細かい経歴まで知っている者はそうは多くはなかったのだ。
「それから政治家になり日本の国防相となり」
「中央政府に誘われて初代国防長官になったということか」
「そうです。そうした経歴を考えますとやはり相当の人物です」
「連合はこれまで軍事に関してはそれ程考えてはいなかった」
「はい」
これは事実である。連合は産業の発展や開拓地の開発にばかり熱心であり、軍事に関してはおろそかであったのである。各国の軍は地位も決して高くはなく、その規模もエウロパやサハラ各国と比べてそれぞれは大きいものではなかったのであった。

## 第十七部第三章　シャイターンの蠢動その十

「だが中央政府が権限を強化し、治安維持の為にも中央軍が必要になった」
「それで出来上がったものです」
「一千年の間存在しなかったものがな。瞬く間に出来上がった」
「蜃気楼の様に」
「しかしこれは実際にある」
アッディーンは強い声でこう述べた。
「現実にな」
「はい」
「砂上の楼閣ではないこともあの戦いではっきりとした」
「確固たる軍ですな」
「そうだ。実際に存在するものだ」
アッディーンはさらに言う。
「国防省も連合軍もな。だからこそ天才的なのだ」
「連合は恐るべき人物を持っていると言えます」
「だが我々としては学ぶべき存在だ」
これは別に謙虚から来るものではない。アッディーンは軍人として、軍の発展の為にそれが必要であると認識しているからこそ言ったまでである。
「私はそう思うが」
「それは同意致します」
ハルダルトはまずはこう述べた。
「ですがもう一つ問題があります」
「それは何だ」
「将来のことです」
「将来」
アッディーンはその言葉を聞き眉を動かした。

「このまま我々がサハラで勢力を伸ばすとします」
「うむ」
「その場合連合と何かしらの事情で利害を衝突させる可能性もありますがその場合のことも考えておくべきかと」
「連合とか」
「はい。その場合最悪の事態も考えておかなければならないでしょう」
「最悪の事態」
それを聞いたアッディーンの顔がピクリと動いた。それは何か、軍人である彼にはすぐにわかることであった。
「それが起こる可能性がないとは決して言えないな」
「はい。どうされますか」
「その場合に起こる様々なケースも考えておこう」
「はい」
「連合は豊かな勢力だ」
彼はまずは連合に対する認識を述べた。
連合は広大な領土を持ち、尚且つ何処までも続くとさえ思われる開拓地を持っている。そして技術力も高い。産業や商業は千年に渡って発展を続け、農場や牧場からは無尽蔵と思われる程のものが採れている。資源もエネルギーもだ。発展を約束されたような勢力である。それが四兆に達しようとしている人口を支えているのである。
「充分満ち足りているとは思うが人間というものは不完全な存在だ」
今度は宗教的な人間観を述べた。
「欲望にも限りがない」
「食べるものに着るもの、そして住む家があろうとも」
「それで満足出来るかというと。それ以上のものがあれば容易に転ぶな」
「そうですね。ましてや連合は欲望を肯定しております」
「欲を持つことは悪いことではない」
アッディーンはハルダルトにこう述べた。

「それ自体はな。アッラーも商業や錬金術を認めておられた」
「はい」
イスラムは元々都市で誕生した宗教である。ムハンマドは確かに預言者でありイスラムの指導者であったが同時に普通の市井の者であり商人であった。その為人間の欲望の存在を戒めていたのだ。認めたうえで。コーランはその思想に基づいて書かれているものなのである。
「だが節度というものがある」
「連合はその節度を解除することにより発展してきました」
「その通りだ」
より多くの土地を、より多くの金を、より多くの食べ物を、そしてより多くの資源を。それが連合を発展させてきた。当然彼らにも節度は彼等なりのものがあったがサハラから見ればそれはあまりにも節度のないものに見えていたのである。
「欲望を完全に肯定してな」
「ですね」
「そして一千年の間発展を続け、人口を増やしてきた。連合の歴史は欲望の歴史だ」
「剥き出しの」
「もっともそれを言ってしまえば人間の歴史は全てそうなってしまうがな。所詮人間は欲望なしでは生きてはいられない」
いささかシニカルともとれる言葉であったが事実ではあった。

## 第十七部第三章　シャイターンの蠢動その十一

「そうした意味で連合もサハラも同じだが。それにしても、だ」
「資本主義の進化した姿でしょうか、あれは」
「元々資本主義の好きな国ばかりだしな。アメリカといい」
二十世紀にはそれで世界の覇権を共産主義のソ連と争った。十七世紀の欧州においてその原型が形成されたとされる資本主義であるがそれ以前からそうしたものは存在していた。商業というものはどの国においてもあり、そしてその発展は喜ばれるものであるからだ。
「中国は二十世紀は共産主義だったがな」
「一時的なものでしたがね」
「ああ」
それはすぐにトウ小平という人物に路線変更された。それ以後の中国は共産党とはいっても名ばかりで実態は開発独裁を行う強権政党になっていたのだ。所詮人間は霞を食べて生きるわけにはいかないということである。
「ロシア位か。あそこの大国で資本主義を好まなかったのは」
「あの国はまた独特ですからな」
「貴族と農奴の社会から共産党の官僚支配」
「それからまあ普通に資本主義になっていきましたが」
「外交はそれでも変わらないのだな。ビジネスのやり方も」
「ロシアですから」
ハルダルトは言った。
「あの国から力技を抜いたら何も残りませんよ」
「文学や芸術だけか」
「ですね」
「あちらもかつてのロシアのものとは全く違ってきているがな」
ロシア文学や音楽はこの時代においても有名である。トルストイやドストエフスキー、チャイコフスキー、そしてムソルングスキー

達を産出したロシアの文学や芸術はこの時代においても多くの花を咲かせていた。しかも女流作家までいた。ロシアは連合においては芸術関係で最も評価の高い国の一つとなっていたのである。
だが内容は全く違うものになっていた。音楽はともかく文学は明るくなっていたのである。かつてのロシア文学の代名詞とも言えた深刻さ、重苦しさはなかった。ワイルドで陽気、そして闊達な連合の文化になっていた。これもまた連合のものであった。そうした意味でロシアも連合になっていたのである。
「この前そのロシアの作家がウォッカを飲んで寒中水泳をして心臓麻痺で死にかけたそうです」
「それは馬鹿だろう」
だがロシアの保有する星系は寒い場所が多かった。これは奇妙な因縁であった。結局彼等は寒さからは逃れられはしないのだろうか。
「私は酒はあまり飲まないがそんなことをすれば命に関わるのは誰でもわかるぞ」
「しかしそれで作品のヒントが得られたと喜んでいたそうです」
「一歩間違えればその新作はあの世で書いていたな」
「アッラーならばそんなことで死ねば即座にジャハンナムですな」
恐ろしい言葉であるが実際にそうなりかねない。ことイスラムに関してはサハラは容易にはジョークにならない部分がある。
「全くだ。ロシア人というのは連合でもわからんところがあるな」
「外交はあれですがそうした芸術のセンスはあります」
これは事実だ。そうした意味でロシア人のセンスのバランスはいささか歪と言える一面がある。これはどの国の者にも大なり小なり言えることであるが。
「うむ」
「連合に入ってからはそれなりに資本主義も身に着けているようですが」
「やはり国力に頼ったところが大きいな」
「ロシアはロシアということでしょう。国民性も面白い差がありま

すし」
「それもよく言われるな」
アッディーンはそれも知っていた。連合と一括りに言っても三百の国家がある。そしてそのそれぞれの国民性があるのである。
一概にであるがロシア人は利害関係のない相手には非常に寛容で親切であるとされる。だが一旦利害関係が生じるとその巨大な力瘤と巨体を見せつけ執拗に威嚇してくるのだ。当然その拳を振り下ろすことも躊躇わない。
マウリアとの宝石問題もそうであった。激しい利害関係が生じた為に牙を剥いた。こうしたところがロシアははっきりしているのである。アメリカや中国の様に表面的は矛を収めて交渉のテーブルに着きながらも裏で何をしてくるかわからないといったものや日本の様にのらりくらりとかわしながらその間に話を有利に進めようとするものはない。あくまではっきりとしているのである。

## 第十七部第三章　シャイターンの蠢動その十二

「ですがあしたはっきりした国もある、ということです」
「連合の中の一国か」
「はい。そしてそのロシアもまた連合にあるのです」
「資本主義か」
「その中に彼等もいます。そうした意味で彼等も同じなのです」
「連合というわけか。その連合の中には多くのムスリム達もいるが」
サハラもまた資本主義である。ムハンマドが商人であったことからそれははじまっている。しかし連合のそれとは根本的なものが違っている。サハラのそれにはイスラムが根を下ろしているが連合ではそうではないのだ。
「ええ」
「我々のイスラムとはかなり違っているな」
「一度はメッカに参るようですがね」
今メッカにある黒い石はハサン王国のメッカ星系に移動させられている。メッカという都市ごとだ。アラブ人達はこれだけは、ということで持って行ったのである。大陸ごと持って行ったエウロパやマウリアとは少し違っていた。
「これによるハサンの利益も莫大なものだということですが」
「そうだろうな。だが同じムスリムといってもかなり違ってきてはいる」
「イスラムを第一としていれば問題はないそうですし」
「豚肉を食べるにも事前にアッラーに謝罪すればいいそうだしな」
「連合は我々に比べて信仰が希薄でもありますから」
「あれだけ宗教が多ければな。十三兆だったか」
アッディーンはその数字を口に出した。
「連合の宗教人口は」
「何でも今度十七兆になるそうです。人口増加に伴い」

これまた聞いたこともないような数字であった。少なくとも人口統計上は。
「途方もない数字だな。何処をどうやればそこまでなれるのか」
「彼等にとって宗教とは複数信仰してもいいものですし」
「だから仏教徒でもありキリスト教徒でもあるという訳のわからない者がいるのか」
「これはエウロパでも同じですが」
「だが次元が違う」
そう述べるアッディーンの顔は苦いものになった。
「最悪の事態もいいがそうした理解し難い連合の性質も学んでおかなくてはな」
「今後の為にですね」
「そうだ。それは必ず我々にとって益となるだろう」
アッディーンは述べた。
「その最悪の事態に関してもな」
「はい」
頷くハルダルトの声が硬いものとなった。
「連合に関しても資本主義に関しても宗教に関しても」
「そして国民性に関しても」
「思えばエウロパはそこへの研究はしていなかったのではないか」
「そうでしょうか」
「互いに調べ合っていると思って油断していたかも知れない」
アッディーンは言った。
「一千年の対立の間に、ですな」
「そうだ。これは連合もそうかも知れないが」
「そういえば連合の者はエウロパに入って貴族達の毅然とした態度にかなり驚いたそうで」
「それも根拠の一つになるか」
アッディーンは呟いた。
「お互いにどれだけ知らなかったか」

「というよりは偏見があったのでしょう」
「偏見か」
「ええ。連合もエウロパも互いに。大衆だ貴族だと」
「ふむ」
アッディーンはそれを聞いて顎に手を当てて考える顔になった。
「わかっているつもりだったのだろうな」
「双方。しかしそれは偏見が多分だったようです」
「よくある話だが」
「とりわけそれは連合が強かったそうです」
「連合にとってはエウロパは腐敗した国家だったのだな」
「はい」
ハルダルトは答えた。
「貴族達が権益や権力を独占する。まあ確かにそうとられてもおかしくはない状況ではありますが」
「階級社会は事実だしな」
「はい」
「だが連合は彼等をフランス革命やロシア革命の宣伝の頃の貴族達のように考えていたのだろうな」
「その通りです」
「やはりな」
それには納得できるものがあった。
「貴族の悪い部分というとあの時代の宣伝が最も効果的に書かれている」
その通りであった。どのようなものにも悪い部分というものが存在している。それを拡大誇張して宣伝するというのはよくある話である。とりわけ敵に対しては。
「実際はかなり違うようだがな」
「それはその革命の後で成立した政権を御覧になられればおわかりだと思います」
「ジャコバン派とソ連か」

それを口にするアッディーンの目の光の色が変わった。

## 第十七部第三章　シャイターンの蠢動その十三

「連中の方が問題だな」
「私もそう思います」
ハルダルトは答えた。
「危険性で言うならば彼等は恐ろしいものです」
情報統制や官僚支配、秘密警察等だけではないのだ。ジャコバン派にしろソ連にしろ、そしてナチスにしろその危険性は貴族制社会の非ではない。一人の人間が全てを独占するということも。貴族達とは比較にならない程危険な性質を持っているのである。
「何があったのか、だけでわかります」
「血の恐怖政治か」
「そうです。あれは貴族制よりも遥かに恐ろしいものです」
「ジャコバン派もソ連も貴族だけを殺していたわけではなかったな」
「多くの一般民衆も殺しております。革命にすら加わっていない者達までも」
それが彼等のやり方であった。こうした話がソ連に残っている。
レーニンが粛清すべきかどうかチェックする人物の名簿を見ていた。彼は見終わった書類にバツを付けて見たことを書いておく癖があった。それを秘密警察のトップであったジェルチンスキーが粛清すべき対象と見て、その名簿にあった人物を全て粛清してしまった。だがレーニンはそれをよしとした。
「革命の前には些細なこと」
であったのだ。トロッキーにしろ前線に出た時にまず行ったのは自軍の無能な将校の粛清であった。それから自分が指揮を執り、戦ったのだ。そして一般民衆からは食糧を強制的に徴収した。これによりボルガ飢饉が起こった。この飢饉においても非常に多くの民衆が死んでいる。
フランス革命も同じである。ここでは当時のフランスにおいてあ

のタレーランと並ぶ怪物の一人フーシェが無気味な暗躍をした。彼はジロンド派にいたが政局を見極めたうえでジャコバン派に鞍替えし、ある街においての反乱鎮圧でその街の市民の一割を粛清するとの目標を掲げ、それを実行に移した。そして達成した。そのあまりもの酷薄さにはロベスピエールでさえ鼻白んだと言われている。彼はこうしたことにかけてはロベスピエール、そしてナポレオンですら凌駕していた。フランス革命が産んだ一人の魔物であったのだ。

なお彼は私生活においてはよき夫であり優しい父であった。教師としては高潔な人格者であり生徒達から尊敬され慕われた。しかし政治家としてはナポレオンでさえ油断できないような怪物だったのだ。人間として、教師として高潔であっても政治家としての人格は最悪と言うべき男であったのだ。

「ああした国家の方が問題です」

「連合はそうした思想も嫌っている筈だがな」

「ですが貴族達はまた別のようです。どうやら一千年以上前に自分達を支配していたけしからん輩だと思ってもいるのでしょう」

古い話だが事実である。実際に連合はその頃のことを強調して教育しているふしもある。

「恨みか」

「かなり的外れだと思いますが」

「そうだな。だが確かに連合はかって欧州に煮え湯を飲まされた国が多い」

「はい」

「アメリカも植民地だったし中国も清朝末期にな」

中南米や東南アジア、アフリカ諸国は言うまでもない。

## 第十七部第三章　シャイターンの蠢動その十四

「違うのは日本やタイ、自分達がその欧州の一つだったロシア位か」
「そうですな。まあ中には今は同じ勢力にある連合の国に支配されていた国もありますが」
　ロシアに支配されていたフィンランドやモンゴルに支配されていたロシア、トルコに支配されていたバルカン諸国、そして日本に支配されていた韓国等である。この中で最も寛容な支配であったのが日本のそれだったとされている。韓国にとってはそれが面白くはないのだが。
「現実に最近まで侵略を受けていた我々にとっては何を言わんや、という気もするが」
「そして階級社会への拒絶感でしょうか」
「それも強そうだな」
「一番強いのはこれでしょうかね。連合にとっては」
　連合では階級は完全に否定されている。少なくとも制度の上では。制度の上であるのとないのとでは全然違うのだ。
「そうかもな。だがエウロパもこれはあるだろう」
「大衆社会への反発ですか」
「そうだ。ないとは言えないな」
「はい」
　ハルダルトもこれは認識していた。
「お互いあるからこそ複雑なのです」
「そして戦争がはじまるまでお互いのことを偏見のままで見ていた、か」
「連合の者達はかなり驚いたそうです」
「貴族達の姿にか」
「はい。彼等は腐敗なぞしてはいませんでした。毅然として誇り高かったそうです」

実際にはエウロパ貴族達には腐敗はそれ程ない。誇り高く毅然としていると言っていい。無論中には不心得者もいるがこれがどの時代のどの国のどの社会でも同じである。
「らしいな」
「そして果敢に戦い、戦死者の割合は平民達よりも遥かに高かったそうです。中には平民の部下を逃がす為に最後まで戦い戦死した者もいるとか」
「立派なことだ」
アッディーン達サハラの者にとってもエウロパは敵だが賛辞を送らずにはいられなかった。
「少なくともそこに腐敗は見られないな」
「しかも手強かったそうです」
「エウロパ軍は強い」
これもまた素直に認められるものであった。
「その強さの秘密には誇りもある」
「その通りです」
「貴族としての誇りが彼等を支えている」
「刑罰も彼等に適用されるものは平民のそれより重いですしね」
これもまた『高貴なる者の義務』というわけである。連合軍でも将校への懲罰は重い。
「それは連合も知っていた筈だが」
「捏造だと思っていたそうです」
「それではそっくりそのまま革命前の宣伝に乗っていたのだな」
「そういうことになります」
その言葉に頷く。
「厄介なことだな、全く」
「それで真の姿を見て戸惑っているそうです」
「エウロパの方もだろうな」
「彼等は彼等で連合の者達を野蛮人だと思っていたそうです」
「野蛮人か」

アッディーンはそれを聞いて苦笑した。
「はい。指導するべき者がおらず、めいめいで勝手なことをしているのが連合社会だと思っていたそうです」
「そうした一面は確かにあるかもな」
「ですがそれを全てだと思っていたそうです」
「だが実際にやって来た連合軍を見てその認識を変えたか」
これは重要なことであった。偏見が取り払われたからだ。もっともそうである者もいればそうでない者もいるのがこの件での現実であるが。
「どうやら。侵略者を見て認識を変えるというのも不思議な話ですが」
「まあよくある話かもな、それは」
だがアッディーンはそれを肯定した。
「モンゴル帝国は残虐極まりない侵略国家だったと言われているな」
「はい」
世界史上最も苛烈で凶悪な国家だったとも言われている。掠奪を産業とし、人を殺し尽くすことを一切躊躇しない。それがモンゴル帝国であるとされていた。
「だが実際の統治は公平で闊達なものだった」
他国の文化を破壊したりもせず、信仰も認めていた。反逆者には容赦はしなかったが自国の民として扱った。そうした意味で彼等は後のスペインやイギリス等とは全く違っていた。

## 第十七部第三章　シャイターンの蠢動その十五

「そしてオスマン＝トルコも」
寛容な帝国であった。キリスト教徒も自国民として扱い、ユダヤ人に対しても温かかった。捕虜の虐待といったこともしなかった。当時の欧州に比べて遥かに温厚な性質を持っていた。もっとも捕虜をたてに身代金を要求し、それが払われなければその捕虜を奴隷にするといったことはしていたが。だがその奴隷の扱いも寛大でありムスリムになれば解放された。やはり当時の欧州よりも遥かに寛容であった。
「案外そうした国家もある」
当然そうでない国家もあるが。
「連合もまたそうだったのだ」
「連合軍はかなり軍律に気を配っているそうですね」
「あの長官が直接指示を出しているそうだな」
八条はそれをまず徹底させた。それは政治的な配慮によるものである。
「その様ですね。その結果でしょうか」
「そうだろうな。お互いにとって相手を色々と知ることが出来たそうだ」
「それで認識も変わろうとしているそうですね」
「だといいがな」
しかしこれにはすぐに賛同はしなかった。
「違うのですか」
「一応は話は入った」
「はい」
彼の言葉にこくりと頷く。
「だが。それで簡単に話は終わりはしないだろうな」
「偏見自体は消えないということでしょうか」

「それもあるだろうが。それ以上に問題がある」
「それは」
「政治だ」
アッディーンは言った。
「政治」
「そう、連合とエウロパは互いに敵と認識してきたな」
「ええ」
「一千年の間。それはそれぞれにいる者達にとっても同じだった」
彼は言った。
「それが勝った、負けたからといって容易に変わるものではないだろう」
「ではこれからも対立は続くと」
「私はそう考える」
それがアッディーンの予想であった。
「それに連合も勢力を纏める為の敵が必要だ」
「今まで通り」
「そうしたことを踏まえていくと。これからも対立は続くだろうな」
「政治的な理由によって、ですか」
「だが使い方によっては平和を維持することになる」
アッディーンはクールに述べた。
「無論一歩間違えれば破滅だが」
「深刻ですな」
「だが有効ではある」
それでも彼はその方法を認めていた。
「とりわけ連合の様に多様な勢力を纏めるにはな」
「ただ、それを利用しようとする政治かも現われる危険性もありますな」
「エウロパへの敵愾心を煽ってそれを自身への人気にしようとする政治家か」
「若しくは自らの失政をエウロパに向けることによってそれを相殺

しようとする輩が。そうした輩が出るとまた戦争になるかも知れません」
これもまた古来からあることだ。実際にサハラではそれが原因で起こった戦争も多い。
「そして遂にはエウロパ併合か」
「有り得ることかと」
「その可能性は全くないわけではない」
アッディーンはそれも認めた。

## 第十七部第三章　シャイターンの蠢動その十六

「アジテーターはどの時代のどの場所にもいる」
「はい」
「とりわけ民主主義においてはな。深刻な問題となる」
民主主義の弱点の一つだ。システム的にそうした扇動者もまた抱え込んでしまうのだ。それを見抜く目もまた必要なのである。
「では」
「だがここで問題がある」
「問題！？」
「エウロパ一千億の市民と彼等が忌み嫌う貴族達だ。彼等はどうなるのだ」
そう問うた。
「それは」
「難民にするか。それとも」
「その一千億の市民も貴族達も銀河から抹消するか」
即ち虐殺、殲滅であった。
「それが出来るか」
「流石にそれは不可能です」
ハルダルトはそれをすぐに否定した。
「連合内部でも反対意見が続出するでしょう。大変な議論となります」
「そうだな。追放するにしてもだ」
「そうです。精々可能なのは貴族達の身分剥奪でしょうが」
「それですらも不可能だと思っていい。まず不可能なことだ」
「私もそう思います」
ハルダルトも述べた。
「おそらく暴動に近い状態になり。エウロパ中が騒然となるでしょう」

「だがエウロパを連合に組み込んだならばしなければならないことだ」
「はい」
また頷くこととなった。
「連合にとって階級社会とは忌むべきものなのだからな。例え同じ民主主義、資本主義であってもだ」
「大衆社会と貴族社会というイデオロギーなのですな」
「簡単に言うとそうだな」
そのものであった。彼等は一千年の間イデオロギーによる対立を続けてきたのだ。これは互いの陣営で言われてきたことであったがアッディーンはそれをあらためて述べたのだ。
「そのイデオロギーが異なる者達を一千億も抱え込む」
「内憂となります」
サハラの様に同じ神を信じている者達ばかりではないのである。
「しかもその殆どが肌の色も髪の色も目の色さえも違う」
連合は混血が非常に進んでいる。純粋な白人、黒人、黄色人、アボリジニー、といった存在はあまりない。それに対してエウロパは完全に白人ばかりである。彼等は人種という面からも離れてしまっていた。ここでも両者は全く違っていたのであった。
「何もかもがな」
「宗教も」
「キリスト教はあるにしろ、な」
「同じ人類でありながら最早全く異なる存在同士になっておりますな」
「それは我々とても同じことだがな」
「我々とても！？」
それを聞いたハルダルトは怪訝な顔をした。
「そうだ。連合と我々では全く違っている」
アッディーンは言った。
「マウリアともな。それぞれ全く異なった存在になっているな」

「一千年の間に」
「いや、それもまた違う」
彼はそれは時間のせいではないとした。
「違うのですか」
「文明だ」
それが彼の答えであった。
「文明ですか」
「人種もあるがそれは最早大きな問題ではない」
アッディーンは述べる。
「連合にも白人やアラブ系がいるからな。しかも彼等の中に溶け込んでいる」
「はい」
「だからそれは大きな問題ではないだろう。存在が異なっているという面においては」
問題としてあってはいてもだ。それは決して第一の問題とはなっていないのである。
連合は人種的問題はないと言っていい。かつて人類を狂わせる程荒れ狂った人種問題からは解き放たれていた。そこに至るまで多くの犠牲と時間が必要だったが人類はその問題は二十一世紀に解決することができたのだ。連合はその遺産を忠実に受け継いでいた。
「やはり文明だ」
アッディーンは言う。

## 第十七部第三章　シャイターンの蠢動その十七

「我々はイスラム文明にいる」
「ですね」
「そして彼等は連合の文明に。エウロパはエウロパ文明に」
「それぞれ所属する文明が違っておりますな」
「だからこそだ。決して混ざることはない」
　彼はそう見ていた。
「少なくとも百年やその程度ではな。やはり文明的な視野から見ても連合とエウロパが合わさることはない」
「となりますか」
「言語もな。異なっているしな」
　連合は銀河語、エウロパは新ラテン語である。通貨単位も異なっている。その他にも実に大きな違いが多々ある。併合されれば連合のものが適用されるだろう。だがそれに際しても大きな混乱が伴うことが予想されるのであった。
「併合はあらゆる意味で非現実的なものだとしか言わざるを得ない」
「そうなりますか」
「そしてまだ問題がある」
「それは」
「資源の問題だ」
　アッディーンが次に言及したのはそこであった。
「連合には資源は豊富にある」
「はい」
「エネルギー問題も。ないといっていい」
　豊富な資源と技術がそうさせていた。常温核融合が確立されているとはいえそれでもエネルギー問題は起こるものなのである。それだけで全てをまかなえるものではないのだから。連合は豊富な資源によりそういった懸念から免れていた。しかしエウロパにはそこま

で豊富な資源は存在しないのである。国土の違いがこれ程までになく大きく出ていた。
「今更エウロパを併合しても彼等には腹の足しにもならない」
「つまり全ては連合がエウロパを併合する理由はない、と結論付けているのですな」
「そうだ。エウロパ側が相当愚かなことをしない限りはな」
彼は言った。
「それはないだろう」
「エウロパもそれがわからない程愚かだとは思えませんしね」
「だからそれはない。まあ当分エウロパにとってはその歴史で空前絶後の冬の時代が待っているだろうがな」
エウロパにとっては冷徹極まりない言葉だった。しかしそれと同時に真実でもあった。
「辛い時代になりそうですね、彼等にとっては」
「敗戦国の歴史とはそういうものだ」
アッディーンはあくまでクールに述べた。
「国の建て直しにも。苦労するものだ」
「成程」
「とりあえずは我々はそれに関しては見ているだけでいいだろう。サハラはな」
「ではそういうことで」
「うむ。しかし」
ここでアッディーンは微かに笑った。
「私も。こうしたことに詳しくなったものだ」
副大統領になってからであった。政治に携わるようになって軍事以外のことにも目がいくようになったからだ。そして多くのことを見るようになったのだ。
「幼年学校を出た時にはこんなことまで学ぶとは思わなかったがな」
「人間自分ではどうなるかわからないものですから」
ハルダルトがその言葉に対して述べた。

「全てはアッラーの思し召しです」
「そうだな。だがアッラーは毅然と動く者を愛される」
「はい」
「その動く準備を進めていくぞ」
「わかりました。では」
「次の仕事を持って来てくれ」
アッディーンは自身が毅然とした声を出した。
「もうここに」
「おい、早いな」
それに応えてすぐに出されたディスクを見て思わず苦笑いを浮かべた。
「仕事は待ってはくれないものですから」
「わかった。ではすぐに取り掛かるか」
「はい」
アッディーンは仕事に取り掛かった。彼もまた次の動きに備えて何かと忙しい日々を送っていた。そしてその動きがある日は刻一刻と近付いていた。時もまたその動きを止めることはないのだから。

## 第十七部第三章　シャイターンの蠢動その十八

シャイターンはその日まずは演劇を鑑賞した。その上演は朝からあったのである。
上演されたのはサハラにある古い舞踏劇であった。サハラがアラブであった頃からある劇である。シャイターンはそれを護衛を連れてロイヤルボックスで鑑賞していた。
「見事と言うべきだな」
彼は赤いワインが入ったグラスを手に持ちながらこう言った。
「流石は何十年に一度の名舞台と言われるだけはある」
彼の後ろにはいつものように仮面を被った六人の護衛が控えていた。そして横にはハルーク家出身のあの老夫人もいた。だがやはり老夫人といってもとてもそうは見えない。三十代前半としか思えない美貌であった。
「そうは思わないか」
「はい」
話を振られた夫人はそれに頷いた。
「こんな立派な劇は今までそう観たことはありません」
「それは私もだ」
話を振ったシャイターン自身もそれに応えた。
「曲も舞踏も。実に素晴らしい」
「ええ」
「それだけではない。演出も演技も見事だ。どれか一つだけ優れている劇というものはよくあるがそれが全て揃っているものはそうそうはない」
「その数少ない例外でしょうか」
「私はそう思う」
シャイターンは言う。
「ここまでの劇はな。そうは観られないだろう」

「幸運ですね」
「いや、これは幸運ではない」
「といいますと」
これは夫人にとっては意外な言葉であった。目を少し開け顔も上げた。
「本来はこうあるべきなのだ。全ての劇はな」
シャイターンの言葉は厳しいものであった。
「だがそれを可能にするのは容易ではないのだ。凡人の力では」
シャイターンは劇を観続けていた。そしてそのうえで語っていた。
「それが可能なのは天才のみだ。そう、天才が」
「天才ですか」
「それは劇だけではない」
夫人に向き直った。その黒い目が赤く輝いているように見えた。
「あらゆることにも。全てを完璧に揃えられるのは天才のみ」
「天才のみが」
「そう、そして天才は全てを超越する」
またその目が光った。
「全てを。そしてあらゆるものを変えるのだ」
「アッラーの思し召しにより」
「天才をつかわすのがアッラーの思し召しであるのならそうだ」
彼は夫人のその言葉を認めた。
「そうした意味で天才とは選ばれた存在なのだ」
「そしてその天才が為すことは」
夫人はまた問うた。
「今行われている」
その問いに対する答えはこうであった。
「案ずることはない。いいな」
「はい」
そして二人はまた観劇に戻った。劇は今クライマックスを迎えようとしていた。それが終わるとシャイターンはすぐに劇場を出た。

その足で官邸に戻った。

## 第十七部第三章　シャイターンの蠢動その十九

夫人は私邸に戻った。シャイターンは護衛を連れそのまま官邸の奥深くへと入って行く。アラベスクの装飾が宮殿を飾っていた。そして金や銀の装飾もあった。それで以って宮殿を照らさんとしているようであった。

執務室に入る。そして椅子に着きまずは電話を入れた。程なくしてハルシークが部屋にやって来た。

「御呼びでしょうか」

「例の件で聞きたいことがある」

シャイターンはまずはこう言った。

「例の件ですか」

「そうだ。今はどうなっているか」

「全ては順調です」

その例の件が何であるかハルシークにはよくわかっていた。そのうえでこう答えたのである。

「そうか」

シャイターンはそれを聞いてその猛禽の様な目を動かした。

「順調か」

「皆よく働いてくれております」

ハルシークは述べた。

「特にアブサーファ大将は」

「あの男を直接送り込んだのが効果的だったようだな」

「ですな」

ハルシークはそれに頷いた。

「やはり彼がいるといないのとでは。こうしたことは全く違います」

「破壊工作及び暗殺のプロフェッショナルだからな」

シャイターンは言った。

「上手く動いてくれる。こちらとしては実に助かる」

「これによりハサンの優秀な人材はかなり減りました」
「ではそろそろ潮時かな」
考えながら述べる。
「ですな。気付かれぬうちに」
「引き揚げるか。実はもう一人大物を消したかったのだがな」
「それは」
「キングだ」
彼は言った。
「クイーンではなくキングをだ。それを消しておきたかったがな」
「ナイトやビショップはもう消しておりますが」
「それだけではな。満足はしない」
シャイターンの言葉は思わせぶりなものとなっていた。
「キングを除いておくと。後が楽なのだがな」
「流石にそこまでは無理かと」
「やはりな。表のキングならともかく」
彼はそれに応える形で返した。
「真のキングは。そうは取らせてはくれないか」
「取れる場所を一つ知っておりますが」
「戦場だな」
「はい」
ハルシークは頷いた。
「そこが一番かと存じます」
「ではこれまで通り戦いの準備も進めておこう」
「はい」
「またサハラは戦乱に覆われることになる。だが」
その言葉に甘美なものが宿った。それは決してよい存在ではなかった。異形の、無気味な存在を思わせる甘美な言葉であった。
「その先にあるものは栄光だ。間も無くサハラはその長い戦乱の歴史に終止符を打つ」
「そして栄光の歴史が」

「それをもたらすのは私だ。私をおいていない」
先程劇場で述べた言葉が重なった。今彼の目には果てしない栄光が映っていた。
「違うか」
「いえ」
ハルシークは首を横に振った後で答えた。
「全てはアッラーの思し召しです」
「そう、アッラーは選ばれるのだ」
シャイターンは笑った。その唇に野心を宿らせて。
「栄光をな。サハラに対して」
「その為の布石は打っておくにこしたことはありませんな」
「そういうことだ。だが問題はサハラだけではない」
「はい」
ハルシークもそれは読んでいた。
「エウロパにマウリア、そして」
「連合だ」
「連合との関係はどうされますか」
「友好関係を結んでおくにこしたことはない」
彼はまずはこう述べた。

## 第十七部第三章　シャイターンの蠢動その二十

「連合の力は強大だ。人類の九割近くを占めようとしている」
連合の人口、そして国力は膨張する一方であった。この一千年の間彼等は産業の振興に専念することが出来た。その結果彼等は人類史上かってない繁栄を続けている。これは戦乱に喘いでいたサハラから見れば夢の様な話であった。シャイターンにとってもそれは同じであった。
「今彼等とことを構えるのは愚策以外の何者でもない」
「ですな」
ハルシークが望んでいた通りの言葉であった。満足そうに頷く。
「連合は敵に回すな。何があってもな」
「はい」
「だからといって今はエウロパを刺激するのもよくない」
「エウロパもですか」
「そうだ。確かに彼等は今存亡の危機にある」
シャイターンは言う。
「だがそれだからこそ敏感になっている。言うならば手負いの狼だ」
「手負いの狼は下手に追い詰めない方がよいですな」
「何かあってからでは遅いからな」
それがシャイターンの答えであった。
「それに当分エウロパは動けまい」
「その傷の為に」
「そうだ、少なくとも我々の最後の行動までは動くことはできまい」
シャイターンはこう述べて笑った。
「これこそアッラーの思し召しだ」
「これ以上はないという程の」
確かに彼等にとって連合とエウロパの戦いは天の配剤であった。
エウロパが占拠していた総督府を一兵も失うことなく併合できただ

けでなく外敵の懸念も払拭することができたのだから。彼等にとっては僥倖以外の何者でもなかった。
「それを生かさない手はないな」
「全くです」
「連合には少し話を出しておくか」
「連合にですか？」
「そうだ。非武装地帯について提案しておこう」
「非武装地帯」
ハルダルトはそれを聞いて顎に手を当てて考えはじめた。
「連合にとっても悪い話ではない。打てる手を打っておくという意味でもな」
シャイターンは述べた。
「具体的にはニーベルング要塞群とその周辺星系だな」
「あの辺りですか」
「そうだ。あの周辺が非武装化されてば連合の国防上非常に有利だ」
「確かに」
「それに我々の要求も通すのに矛盾はなくなる」
シャイターンはそこまで読んでいる。シンダントはそこにさらに突っ込む。
「何か御考えが」
「我々も要求したい非武装地帯があるからな」
「モントローズですな」
「そうだ」
そのものであった。応えるシャイターンの顔にも会心の笑みが浮かんでいる。
「あの要塞と周辺星系が非武装化されれば我々は後ろを完全に気にしなくて済む」
「そして全ての戦力を東に向けることが出来ます」
「その時は近いぞ」
「はい」

ハルダルトはそれに応えて頷いた。
「兵は備えてあるな」
「何時でも。既に新型艦艇の配備と兵士の補充は整っております」
「それは何よりだ。では後は私の指示を待て」
「はっ」
「時が来れば動こう。まずは戦争についてはそれでいい」
シャイターンは別の話に移ることにした。
「旧総督府はどうなっているか」
話は軍事から内政に移った。国家主席ともなれば一つのことに何時までもこだわってはいられないのである。全てのことに目を向けなくてはならない。これはシャイターンもよくわきまえていた。
だがここで一つ矛盾とも言えることがあった。話をする相手である。これは内政に関することである。だが今彼の目の前にいるのは軍人であるハルダルトだ。彼は文民としての役職には就いておらず、そしてその経験もない。全くのお門違いではないかと思われるものであった。
「旧総督府ですか」
だが彼はそれに応えた。しかもその声は澱みのないものであった。

## 第十七部第三章　シャイターンの蠢動その二十一

「今のところは。特に異常はありません」
「そうか。だが復興費用及び難民達の受け入れには莫大な費用がかかっているな」
「仕方のないことです」
彼は軍人であるがそれに答えられていた。
「それに彼等を受け入れることによってその復興も急激に進んでおります。財政に関しては憂慮すべきではないでしょう」
「そうだな。では聞きたい」
「はい」
シャイターンは本題に入って来た。ハルダルトもそれに応じる。
「屯田兵達はどうか」
「彼等もまた順調です」
ハルダルトはこれまで異常にはっきりと答えた。
「駐屯し、その場で開墾を続けております」
「そうか、では今回屯田制を採用したのは正解だったな」
「それはデータにも出ております」
「粉飾等はなしでか」
「無論です。それは厳しくチェックされております」
シャイターンはそうしたことには異様に目が利く。彼に対して誤魔化しは通用しないと有名である。彼は鋭利で頭の回転が早く、人を見極めるのに長けていた。どちらかと言えば仕えづらいタイプの人物であった。
「ならばよい」
彼はそれを聞いてそれはよしとした。
「連合の開拓方式で行けばいいという話もあったがな」
「あれはあくまで連合だからこそ出来るものです」
それに対してハルダルトはこう述べた。

連合の開拓はまず候補地である星系を発見する。そしてそれから惑星に防衛用の人工衛星を配備し、開拓民達が中に降り立つ。そこから開拓が行われる。全ては計画的であり、許可制となっている。誰かがそこに勝手に入り込んでそこを開拓地だと名乗ることは許されないのである。これは連合中央政府開拓省とそれぞれの国家の協同によって行われることとなっている。連合中央政府が許可を出すのだ。連合がまとまりに欠けながらも一千年の間続いてこれたのは中央政府にこの権限があったからである。また防衛用人工衛星の配備等は以前はそれぞれの国家の軍が行っていたが今では中央軍が行っている。移住の際の護衛も同じである。

ただしこれには例外もある。犯罪者等が宇宙船で名も知られていない星系へ逃亡する例である。こうした場合後に深刻な問題を引き起こすことがある。その犯罪者達が集団でそうした惑星に逃れ、そこで一大勢力となる場合である。

解放軍等もその例の一つであると言えた。こうした輩には征伐軍が差し向けられる。他には漂流等である。まだ誰もいない筈の惑星に降り立ったところそこに何十年も前に行方不明になっていた人物がいたという話も残っている。また冒険主義者とも言える者達が勝手に何処かの星に渡ることもある。こうしたことは連合においては厳しく禁じられているがそれでも例外はいるのが実態である。

「連合は戦乱を気にしなくてよいのですから」

「そうだな」

だが連合の開拓はあくまで開拓でしかない。戦乱を気にはしないで済んでいるのだ。だから彼等は屯田といったものを採用してはいない。今ではこれはもっぱらサハラにおいて見られるものとなっていた。今シャイターンが採用しているようにで、ある。

「彼等をモデルにしても詮無きことです」

「我々には我々のやり方があるということか」

「そういうことです」

ハルダルトはこう述べた。

「ですからそう簡単に何でも取り入れればいいというものではありません」
「こちらの事情も考えて、ということだな」
「その通りです」
「では復興はこれまで通り屯田を中心に行っていく」
「はい」
「都市部もな」
この時代の屯田は農耕だけではない。都市開発に対しても行われているのである。
「いざという時には彼等にも働いてもらうぞ」
これは当然のことであった。その為の屯田兵であるからだ。
「エウロパへの備えの意味も含めてな」
「しかし彼等はまた見事にサハラから立ち去りましたな」
「戦争中というプラスアルファまであってな」
シャイターンは述べた。

## 第十七部第三章　シャイターンの蠢動その二十二

「あれは見事だったと本当に思う」
「ええ」
「連合側も彼等の害になるようなことはしなかったしな。双方の識見があればこそだった」
「その結果我々も無償で北方を統一することが出来ました」
当初彼等は全面的な攻勢を仕掛けて総督府を力づくで排除するつもりだったのである。だが連合との戦争で彼等が戦力確保の為止むを得なく総督府から兵を引き揚げ、それに伴い市民達を脱出させたことがシャイターン達にとっても利益をもたらしたのである。彼等にとっては非常に大きな利益であると言えた。
「そして今に至ります」
これによりシャイターンの名声はあがった。今や彼はサハラで一ニを争う英雄となっている。その人気は今や熱狂的な程であった。
「連合とエウロパで最も得をしたのは私だという者もいるそうだな」
シャイターンはここでまた言った。
「言いえて妙だと言うべきか」
「閣下が英雄なのは元からですが」
「世辞か？」
不敵な笑みを浮かべて問う。
「私に世辞は通じぬぞ」
「いえ、真実でございます」
ハルダルトは媚びるような男ではない。そして嘘を言うような男でもなかった。
「紛れもない」
「そうか」
「はい」
彼は答えた。

「私は英雄だったのだな。以前から」
「英雄とは生まれながらにして英雄なのです」
ハルダルトは言う。
「それ以外の何者でもありません」
「英雄以外ではないと」
「はい。そして英雄の為すべきことは」
「サハラの英雄にとって為すべきことは一つしかない」
シャイターンは言った。
「わかるな」
「無論です」
「その為ならば手段を選ぶことはない。いいな」
「はっ」
「誰が来ようとも私の前に立ち塞がろうとする者には死だ」
その声に剣が宿る。
「それだけは忘れるな」
「わかりました」
ハルダルトはそれに頷いた。これで話は終わった。シャイターンは話が終わると執務室を後にした。そして車で私邸に戻って来た。
「お帰りなさいませ」
彼を忠実な執事が出迎えた。ハルダルトは執事がやって来ると彼に声をかけた。
「あれの様子はどうなっているか」
「あれですか」
「そう、あれだ」
彼は思わせぶりに言った。その周りでは召使達が控えている。シャイターンは彼等を従えたまま家のホールに向かった。
「どういった状況かと思ってな。どうなのだ」
「まずは円満な様でございます」
執事は表情を変えずにこう述べた。
「そうか、うまくいっているか」

「はい。夫君も家庭人としては静かな人物のようでして」
「それは何よりだ」
その言葉からは表情は読み取れなかった。だが思うところはあるようだった。
「だが生活はかなりつつましやかなものらしいな」
「夫君が豪奢な生活を好まれないようでして」
「だからか。それが辛くなければいいがな」
「いえ、それはないようです」
それは否定された。幸いなことに。

## 第十七部第三章　シャイターンの蠢動その二十三

「ないか」
「はい」
「わかった。では場所を変えよう」
彼はそう言ってホールから移った。広大で豪奢な私邸の中の一室に入ったのであった。
「ここならいいか」
「はい」
執事は頷いた。シャイターンはそれを認めてから話を再開した。
「それは意外だったな」
彼はまずはこう述べた。
「人間というものは一度覚えた贅沢を忘れたりはできぬもの」
これは確かに真実であった。人は一度味わった美食や豪奢を忘れることは出来ないのだ。その為生活を落とすことは中々難しいのである。とりわけ極上の贅沢を知った者達にとっては。
「それがな。よく耐えているということか」
「いえ、耐えられているのではないようです」
「違うというのか」
「はい。お嬢様はその生活を楽しんでおられるようです」
「それはまことか」
それはシャイターンにとって信じられぬことであった。思わず目を瞠った。
「はい。元々お嬢様は宴よりも一人でおられるのを好まれる方でした」
「それは知っていたが」
「服も装飾も。あまり派手なのも多くのものも望まれてはおられませんでした。だからこそそうした質素な生活にも苦痛を感じられないのでしょう」

「食事もか」
「はい。御自身で作られ、質素に暮らされているようです」
「思いも寄らぬことだな」
　これはシャイターンにとっては予想外のことであった。彼にしては意外なことにそのまま思ったことを口に出してしまった。
「まさかな」
「そうしたことは人それぞれといったところでしょうか」
　執事は述べた。
「お嬢様にとっての贅沢とは。そうしたことだったのでございましょう」
「待て」
　だがシャイターンは執事のその言葉を呼び止めた。
「今贅沢と言ったな」
「はい」
　執事はそれを認めた。
「では聞くが贅沢とは一つではないというのか」
「そういうことなのでございましょう」
　彼は述べた。
「ただ金や女、地位にだけ心を奪われる者だけではないということなのでしょう」
「そういうことか」
　シャイターンはその整った鋭角的な顎に彫刻のそれの様な指を当てた。そして考えに入った。
「だとすると。これからのことにも影響が出るな」
「といいますと」
「あ、いや」
　だが彼はここでは言葉を濁した。
「言葉のあやだ。気にするな」
「左様でございますか」
「だが。人は贅沢や快楽を追い求める者ばかりではないことは覚え

ておこう」
「それが宜しいかと」
シャイターンは今までの人生を贅沢と快楽、そして野心の中に置いてきた。そんな彼にとってそうした贅沢等を餌に人を釣るといったことは常識であった。だからそうしたことを望まない者なぞいないとさえ考えていたのであった。環境が彼をそうした考えにさせた。贅沢と権謀の世界に生き、そしてその中で頂点を極めた者であるからそうした考えに至るというのも至極当然であったのだ。
「それはそれで使えるしな」
そう言って悪魔的な笑みを浮かべた。美しさの中に邪なものがさし、それでいて妖しい、そうした不思議な笑みであった。
「わかった。ではあれは今は何ともないな」
「はい」
執事は答えた。
「ならばそれはそれでよい。だが何かあれば」
「またお知らせ致します」
「頼むぞ。では下がれ」
「はい」
こうして執事は下がった。だがシャイターンは一人部屋に残った。そしてまだ思索に耽っていた。
「贅沢だけではないか」
彼は呟いていた。
「覚えておくことにしよう。これからの為にもな」
そう言い残してその部屋から立ち去った。そして何処かへと去ったのであった。

# 第十七部第四章　幕の中でその一

幕の中で

人類のほぼ全ての国がその関心を集中させている連合とエウロパの講和であるが話はその殆どが水面下で進んでいる状況であった。従ってその進行を知る者は限られていた。それでも様々な憶測が飛び交っていた。

「エウロパ併合か」

こうした話もあるがこれは決して大勢ではなかった。話の殆どは現実的な視野に立ったものであり、そしてその予想もありきたりのものであった。しかしその幅は大きく、様々なものがあった。

連合もエウロパもその憶測の中で動いていた。中にはその憶測を見て楽しむ者もいた。

「中々面白いことを言うわね」

伊藤はあるスポーツ新聞を見て面白そうに笑っていた。

「エウロパと連合の電撃併合、エウロパ首脳部の背信行為って書いてあるわよ」

それは日本のスポーツ新聞であった。一面にそうした文章が大きく載っていたのだ。

「また派手に書いてくれていますね」

それに東が応えた。

「しかし背信行為とはまた過激な書き方ですね」

「それがスポーツ新聞というものよ」

伊藤は東に笑ってこう述べた。

「派手に書けば書く程いいのよ」

「それは知っていますが」

「それが売りなのだから。普通に書いたら只の新聞と変わりがないでしょう？」

「ええ、まあ」

頷いてみせる。
「だからよ。それにスポーツ新聞は嘘を書いても許されるの」
「許されるのですか？」
「面白ければね。ほら、日本スポーツってあるじゃない」
「ああ、あの新聞ですね」
一面で堂々と出まかせを書くことで有名な新聞である。その新聞の記事は膨大な資料を緻密な検証をもとにして書かれていると評判である。ただしそこから書き出されるものが普通の新聞とは全く違うのである。またそのもととなる資料も検証も普通の新聞とは違っている。
「あの新聞みたいにね。面白ければいいのよ」
「しかしそれでもあの新聞はやり過ぎでしょう」
生真面目な東はそう言って口を尖らせた。
「幾ら何でも。宇宙人が出て来るのは」
「不自然だというのかしら」
「総理が宇宙人にさらわれただの会見しただのいった話もありましたね」
「そういうばそんなのもあったわね」
実際にあった記事である。その為ネタ本で伊藤首相宇宙人説まであったのだ。
「あと予言とか」
「二十年後銀河が崩壊するというあれね」
「はい。確か二十世紀の予言者の言葉だという触れ込みでしたよね」
「十九世紀じゃなかったかしら」
一世紀の差はあれど実は百年単位でこうした話はある。
「どちらにしろ大した違いはないかと。結局は同じ内容ですから」
「その予言者の予言について書かれた本がベストセラーのようね」
「あれは完全な空想です」
東はそう言ってその予言を切り捨てた。
「予言について書かれた本なんて。十年か二十年後に見てみればす

ぐにわかりますよ」
　彼は忌々しげにそう言った。
「全部外れているんですから。そして実際にはもっと凄いことが起こっている」
「そうね。事実は小説より奇なりっていうし」
「その通りです。予言なんて全くあてにはできません」
「あら、予言は楽しむものなのよ」
「といいますと」
　東は伊藤のこの言葉を内心で極めて不謹慎な言葉だと思った。しかしそれは口には出さなかった。
「今貴方が言った通りよ」
　彼女は言った。
「私が？」
「ええ、十年後か二十年後に見てみるのよ。とっておいてね」
「はあ」
「それが予言を扱った本についての一番いい楽しみ方よ。古本屋で昔の本を買うのもいいわね」
「面白いのですか、それは」
「一度やってみるといいわ。病み付きになるから」
　かってノストラダムスという予言者がいた。彼の予言は確実に当たると二十世紀の日本で話題になったが実際は何を書いているのか今一つわかりにくい詩をそれを扱った作家がめいめいで解釈したものであった。だからその本によってかなり差があった。外れることはない筈なのに五年後見てみると全然違っていたといったことが常であった。当の本人であるノストラダムスは天国で苦笑していたことだろう。自分のことが祖国フランスよりも日本で誰もが知っている有名人になったのだから。実際の彼は優れた医者であり美容師であった。裕福な家に生まれ、学問を愛したと言われている。取り立てて変な人物ではなかったようである。彼を扱った作品の中には明らかにその主張が話によって矛盾し、世界が何度滅亡しているかわ

からず、しかし過去を振り返らず、眉唾といった言葉さえ通用しない漫画さえあった。これはこれで面白かったという評判だったらしい。書いた本人達の意図は別にあったかも知れないがギャグ漫画として大好評であったらしい。この時代の日本でも実はそうした本や漫画は多いのであるが。

「私はああした予言は世の中にとってよくないものと思いますが」

それでも生真面目な東はこう考えていた。

「それに惑わせられる人も多いので」

「けれど少し見ればわかるわよ」

しかし伊藤は意には介さない。

「だってこんな新聞にまでネタにされるのよ」

「その新聞はまた特別です」

だが東はこう言って反論した。

## 第十七部第四章　幕の中でその二

「日本で唯一でしょう、宇宙人の話を一面に持って来る新聞なんて」
「だから面白いのよ」
「あまり賛成出来ませんが」
「貴方もまだ若いわね。こうしたことを面白く読めるのも政治家の力量の一つよ」
「政治家は漫画にならなければ一流と言えないというのは聞いたことがありますが」
　かつての日本の首相の言葉である。背が高く、顔立ちはキリッとしていて発言等に問題はあるが中々の人物であったと言われている。ただ、タカ派とされながら実際の外交はその口とは全く違って穏健なものであったというのが歴史の評価である。発言がそうだからといって実際の外交もそうなるとは限らないのだ。
「しかもそれで面白くなければ駄目なのよ」
「風刺されてこそ、ですか」
「そうよ。この新聞にも載っているわよ」
　伊藤はそう言いながら新聞を開いた。見れば四コマ漫画に政治が書かれていた。
「今日の漫画は中央政府とマウリアの話ね」
「マウリアですか」
　それを聞いた東の顔が曇った。
「手強い相手です」
「私も同感ね、それは」
　伊藤がこう言うことは滅多にないことである。日本にとってもマウリアはよくわからない、不思議な国であり相手なのである。なお連合の中では日本は比較的マウリアを理解出来ていると言われている。日本人はそれを言われるとすぐに否定してしまうが。
「あの国は。掴み所がないから」

「一千年の交流がありますがわからないところばかりです」
「マウリアを理解出来るのはマウリア人しかいないでしょうね」
さしもの伊藤もマウリアにはお手上げであるようであった。
「あの国だけは。幾ら勉強しても本質がわからないわ」
「そもそもその本質すらあるのでしょうか」
「それが問題なのよ。マウリアに関する研究を進めている学者でも強くこうだとは言えないから」
「厄介な国です」
こうした感情は連合には多い。口には出さないだけで。
「彼等が連合に入らなかったのはそれああるのでしょね。あまりにも異質だわ」
「ですね。あの国だけはわかりません」
「けれど相手にしなくてはならない。そしてこうして漫画に描かれているものは時としてヒントにもなるわよ」
「ヒントですか」
だが東は難しい顔をしたままである。
「あの国を漫画に描くのも大変ですが」
「この漫画家もわかりかねているようね」
見ればその漫画はカバリエを主役にしたものであった。彼女が巨体を揺らして走り回っている。そして何をしているかといえばマウリアに関して調べているのだ。交渉に関して使うからだという。だがそれでも結局わかりはしない。わかったのはカレーの作り方だけだったというオチである。
「カバリエ外相も実際苦戦しているようですね」
「でしょうね」
「観戦武官や留学で中央軍にも将校を大勢派遣しているようですが」
「何かと問題を引き起こしているそうね」
「文明の問題で」
彼は言った。
「とにかく牛肉は出さないのだけは徹底させているようですが」

「あれだけは駄目よ」
それは伊藤も駄目出しした。

## 第十七部第四章　幕の中でその三

「絶対的な御法度だから」
　これはマウリアに関して最もよく知られていることの一つであった。マウリアはヒンズー教徒が多い。仏教もヒンズー教の一派だとマウリアにおいては考えられている。仏の多くがインドで生まれた聖者やインド発祥の神であるからなのかそれとも釈迦がバラモン出身だからなのか。カーストを否定しながらもそこにある戒律が似ているものが多いからなのか。とにかくマウリアではこう考えられているのである。
　そのヒンズー教では牛は聖なる生物、神の使いなのである。元々は農耕で使う牛を食べるのは非効率だという考えから来ているのだが今ではこれは信仰となっている。だから首都ブラフマーの繁華街でも牛が平気な顔をして歩いていたりするのである。これを見た連合の者が思わず眼科に行こうとしたという話が伝わっている。幾分都市伝説のようであるが。
「それはわかっているようです、皆」
「有名だからね。私だって知っているし」
「私も最初話を聞いた時は驚きました」
「街の中に牛がいることね」
「他にも死体が流れている横で平気で洗濯をしていたりとか。マウリアとは何なのかよ」
「マウリアはマウリアなのよ」
　伊藤は言った。
「それ以外の何者でもないわ」
「わからないですね」
　東はそれを聞いて難しい顔をして首を傾げさせた。
「一体何なのか」
「けれど話し合いをするのなら彼等のことも知っておかないと駄目

よ」
「それはわかっています」
頭から否定する程彼も愚かではなかった。
「しかし。勉強してもわかりません」
「専門家に聞いたりしてもいいわよ。その専門家ですらわかっている人は少ないでしょうけれど」
「はあ」
その返事が力ないものとなっていた。東は今の伊藤の弟子では屈指の優等生でありいずれは首相になるとさえ言われている。その彼にしろマウリアに対してはこの有様であった。
「いい専門家を見つけることね。自分の目で」
「わかりました」
「何かと難しいでしょうけれど」
「予言や宇宙人のようにはいきませんか」
「あら、彼等は異星人じゃないわよ」
伊藤は笑ってこう述べた。
「れっきとした人類よ。我々と同じ」
「それはわかっているつもりですが」
だがやはり違うものがあるのだ。
「それでも。住んでいる地域も違いますし」
「文明も違うと言いたいわけね」
「これから我々は異なる種族と出会う可能性はあります」
一千年の昔から言われてきていることである。まだ出会ってはいないが。
「その中には我々と同じ種族もいるでしょう。ですがその彼等にしろマウリア程理解するのが困難であるとは思えないのです」
「またえらく大袈裟ね、それは」
「私の憶測ですが。それ程までにマウリアは理解し難いです」
東は言う。
「何が何なのか。これは連合の多くの者が思っていますが」

「逆に言えばマウリアの方でもそう思っているでしょうね」
「ですかね」
「連合のことはわかりにくいって。だから彼等は連合には入らなかった」
「そして我々もマウリアを入れることはなかった」
そういう話が一千年の間になかったわけでもない。だが結局今までマウリアは連合の同盟国であり連合には入らなかった。マウリアはマウリアのままであった。
「これからも入ることはないでしょうね。けれど同じ人間よ」
「はい」
「それは科学的にちゃんと証明されているじゃない」
「それはわかっているつもりですが」
「結局文明だからね」
伊藤はまた文明について言及した。

## 第十七部第四章　幕の中でその四

「私達はあまりにも文明として違い過ぎたのよ」
「連合とマウリアは」
「それこそ連合とエウロパ以上にね」
一千年の間いがみ合ってきた者達よりも。連合とマウリアにはそこまでの違いがあった。
「多分これからも一緒になることはないでしょうね」
「マウリアはマウリアで」
「そして連合は連合でね」
伊藤は語る。
「やっていくことになるでしょうね。同盟は結んだままで」
「ではこのまま外交を続けていくのですね」
「それしかないわ」
伊藤は言い切った。
「マウリア相手の外交もね。進めていくわよ」
「はい」
「そちらに関しても大変だけれどね」
「あと首脳会議のことですが」
「ああ、あれね」
伊藤は新しい話に顔を向けてきた。
「今回はすんなりいきそうですね」
「珍しく、といったところかしら」
伊藤のその言葉はいささかシニカルな響きを含んでいた。
「いつも揉めるから」
「どうもあそこで我が国の評判はよくありませんし」
「油断のならない国、と見られているってことね」
「はい。それを言っているのはもっぱら特定の三国ですが」
アメリカ、中国、ロシアといった三大国である。日本を入れて四

大国とされる。連合において最も力のある四国であるとされている。
「彼等の言うことはいちいち気にしなくていいわ」
「はい」
「どうせ手の内はわかっているのだし」
「ですが今回は反対する理由もありませんね」
「戦争のことはね。反対のしようがないわ」
伊藤はこう述べた。
「連合の中でのことじゃないから。それを越えているから」
「ですね」
「権益とかそういったものは中央政府に行くし」
「これで中央政府の発言力はかなり大きくなるでしょうね」
「そうね。そうした意味では我が国にとっていいことかしら」
日本は伝統的に中央政府に対して好意的である。時と場合によりその立場や主張をコロコロ変える外の国々とはそこが違っているとされる。これは日本の領土が中央政府に近いせいもある。大国の中では日本が地球に最も近い場所にあるのである。アメリカや中国はかなり離れた場所に置かれている。その為昔から日本は中央政府の番犬だのと揶揄されることがある。中には『中央政府第一の下僕』とさえ言われる。それ程中央政府に対して好意的なのである。これは中央政府を通じて連合をまとめようという日本の戦略でもある。
「そう考えればそうですね」
「それ自体はいいことね」
「はい。ですがこの戦争では被害も少なくありませんでした」
「そうね」
エウロパのそれとは基準が違うのである。連合は戦死者を出すことをこの上なく嫌う。それが軍部の評判や政治家への支持に直結するからだ。軍需産業もサハラやエウロパのそれ程発言力は強くはない。その軍需産業にしろ要するに兵器が売れればいい。下手に損傷でもされてそこから欠点でも見つかれば改良の為に投資をしなければならない。軍需産業は常に設備投資が必要であり、しかも案外実

入りが少ないものである。儲けるには案外コストパフォーマンスが悪いものである。カレーラスのバイソングループ等も一応は軍需産業にも顔を出しているがその彼にしろ言っている。

「球団に金をやった方が実入りがある」

と。自分の持っている球団を愛する彼であるがグループで唯一の赤字部門と公言している球団の方が実入りがあるとまで言っているのである。もっとも球団はグループ全体の看板であるから一概には赤字部門とは言えないのであるが。

## 第十七部第四章　幕の中でその五

結局連合では戦争をするのはいいが損害は好まれないのである。最小限に抑えなくてはならない。あまり損害が出てはならないのである。それが連合軍であった。

「あまりこうした戦争は。望ましくありません」

「国家同士の正規戦だから仕方ないのでしょうけれど」

伊藤は言った。

「戦争はしない方がいいものね」

「特に利が得られないと思われる場合は」

利の得られないことなぞ誰もしない。この戦争は連合に利が得られるものだから行った。極論すればそうなる。そして彼等は勝った。だがそれでも不平はあるものである。

「しないに限ります」

「問題は何を得るかね」

伊藤の言葉は何かの意図を含んでいた。

「勝利によって。ただ勝ちました、だけでは話にならないわ」

「はい」

「得るものがなければ。これは政治なのだから」

戦争もまた政治の一環である。こうした意味で伊藤の言葉は正鵠を得ていた。

「その為の首脳会議になるわ」

「我々が得られるものは」

「まずはお金よ」

彼女は言った。

「お金」

「そう、具体的に言うならば賠償金。けれどこれは国力差があるから」

連合とエウロパの国力差は四十倍に達しようとしている。そこま

で差の開いている相手に対して過度の賠償金を要求することは流石に出来るものではなかった。
「適度なところでね」
「はい」
「そして安全ね」
「安全と言いますと」
「非武装地帯を設けるのよ。ニーベルングの周りを」
「成程」
「おまけに要塞を幾つかもらえればいいわね。エウロパの防衛力を弱める為にも」
「そしてそれを再び強める為にはまた資金をつぎ込まなくてはならない」
「彼等にお金を使わせることもね。重要だから」
伊藤の案はかなりシビアであると言えた。軍事に金を使わせるということは完全な出費であり浪費である。戻って来るものはない。一歩間違えれば国力の衰退に直結する。古来より過度の軍事大国がそれにより衰退するのはそれが理由なのである。
「あとは心ね」
「心」
これは東にもわからなかった。
「心ですか」
「そうよ、心よ」
だが伊藤はそんな東に対して思わせぶりに笑った。
「ある意味これが一番大事かしら」
「はあ」
だが東には伊藤の言葉の意味がよくわからなかった。
「一つ覚えておくといいわ」
伊藤はそんな東に対して言った。
「政治はね、かつては宗教と同じだったのよ」
「政と祭ですか」

「昔はね。近代政治はそれを分けることが絶対条件だった」
「それが政治闘争にもなっておりました」
「言い換えるとそれだけ政治と宗教は深い関係にあったということね」
「それはわかります」
伊藤は答えた。欧州においては長い間ローマ＝カトリック教会が各国の政治に深く関わっていた。僧侶が政治家となることは珍しいことではなかった。ルイ十三世の宰相であったリシュリューは枢機卿でもあった。非常に優れた戦略家であり時として狡猾とさえ言われた彼は僧侶でもあったのだ。
「我が国でもそうでしたし」
仏教の僧侶が政治顧問になったりしていた。これもまたどの国でもあったことである。
「そうね。この二つを離すのには気の遠くなるような時間がかかったわね」
「はい」
「そして血も流れた。けれど完全には切り離せないものなのも事実ね」
「あくまで程度の問題でしょうか」
「最低限ならいいのよ」
伊藤は言った。

## 第十七部第四章　幕の中でその六

「宗教の政治への介入も」
「その逆は今ではタブーとなっていますね」
「そうそう介入出来る程簡単な話でもないしね」
特に連合の様に複雑に様々な宗教が存在している場所においてはそうである。自分でどれだけの宗教に入っているか把握しきれていない者までいる程である。伊藤の所属している政党にしろ中央政府の保守派や改革派にしろ宗教で見ればモザイクとなっている。そうした状況で政治が宗教に介入出来る筈もなかった。問題となるのは特定の宗教団体が法律的に問題を起こしたり、それよりさらに問題のあるテロ行為を行った場合だ。そうした場合は警察が出て来るし最悪の場合軍隊が派遣されて鎮圧される。どれだけ立派な教義を持っていようともテロ行為に走ればその宗教団体はそれでテロ組織となるのである。
「あくまで法律的に問題のある時だけね」
「対処するのは」
「他ではやってはならないわ」
「特に連合においては」
「サハラみたいにほぼ一つの宗教しかないってわけじゃないし」
サハラはまた別である。イスラムは単なる宗教ではない。生活であり文明であるのだ。彼等にとってイスラムから離れることは想像も出来ないことなのである。
「それでも影響はあるものなのよ」
伊藤はまた言った。
「信仰は心の問題だから」
「心ですか」
だが東にはまだ今一つわかりかねていた。
「その心とは」

「これから貴方は一つ勉強することになるわ」
だが伊藤はそれには答えずこう言うだけであった。
「宗教の効果をね」
「わかりました。それでは拝見させてもらいます」
東は答えた。
「宗教というものを」
「これがわかるようになるにはね。かなりの勉強が必要なのよ」
伊藤は言う。
「けれど。わかったらそれは政治家にとって大きなプラスになるわよ」
「はい」
「まずは学ぶこと」
伊藤は教師の顔になっていた。
「それが大事なのよ。わかったわね」
「わかりました。それでは」
「楽しみにしておきなさい。それじゃあ」
「食事でしょうか」
「あら、もうそんな時間ね」
時計を見る。丁度昼食の時間だった。
「それじゃあ何かいただこうかしら」
「では私は一先これで」
「あら、帰るの？」
「私も食事を摂らなければなりませんので」
彼は答えた。
「それでは」
「食事もちゃんと摂らないと駄目よ」
「はい」
「栄養があるものをたっぷりとね。食べないと身が持たないわよ」
「連合の者はかなり食べ過ぎだと言われておりますがね」
「エウロパから見ればね」

伊藤はそれに応えてくすりと笑った。
「それが身長にも出てるって言われてるけれど」
「その様ですね」
これは本当のことであった。エウロパの平民の平均身長は一七五程度、貴族で一八〇程である。これに対して連合の者は一八九となっている。二メートルの者も珍しくはない。これは食べているものと量の関係である。とにかく連合では様々なものが多量に食べられる。栄養がかなり違うのだ。
だからといってエウロパの平民達が餓えているというわけではない。貴族達がいいものを独占しているわけではない。エウロパでは平民と貴族では食べるものが違い、食材も連合程多くのものがあるわけではないのだ。連合では恐竜や昆虫、ステラーカイギュウやオオウミガラス、そして地球にはなかった青い葡萄や四角い西瓜、異様に大きなザクロやアケビ、黄色いライチ等もある。また食事の量は連合では常に活発に動く社会である為エネルギー補給として食べられてきたのである。その結果が体格に出たのである。エウロパでも餓えはない。食べるものこそ違うが平民も貴族も腹一杯食べてはいる。ただその食材と量が違うだけである。
「エウロパでは我が軍の将兵達が引き起こした食事に関するトラブルが多く発生していたようですし」
「店のものを全部食べてしまった話ね」
「はい。それでエウロパのレストランでは一時閉店を余儀なくされた店が多発したとか」
「難儀なことね、それは」
「彼等は言ったそうですよ」
「何て？」
「まるでバイキングの再来だと」
「バイキングね」
伊藤はそれを聞いてくすりと笑った。

## 第十七部第四章　幕の中でその七

「確かにそうしたところはあるわね」
彼女がそう笑っていた時もそうした事態は起こっていた。エウロパのあるレストランにおいて事件は起こっていた。事件は執務室で起こる場合も稀にあるが大抵は他の場所で起こる。この時はレストランで起こっていたのである。
「おい、またか」
店の奥で恰幅のいいオーナーが青い顔をしていた。
「また連中が来ているのか」
「はい」
ボーイの一人がこれまた青い顔でそれに応えていた。
「一ダース程」
「まずいな」
オーナーはそれを聞いてこう言った。
「それだけ来られると」
「また店の食べ物を食い潰されてしまいます」
「既にかなりのものが食べ尽くされております」
別のボーイが言った。
「このままではまた」
「どうしたらいいか」
「どうしようもないかと」
彼等はこう言うしかなかった。
「このままま一時閉店ということで」
「馬鹿を言え」
だがオーナーはそう言ったボーイを叱った。
「うちの店が二度も一時閉店に追い込まれるなぞ。あってはならないことだ」
「ですが」

「ですがもこうしたもない。おい」
ベテランのボーイに顔を向けた。
「食材を買って来い。すぐにだ」
「わかりました」
「七十人前だ。いいな」
「はい」
ベテランのボーイは頷いてその場から消えた。そしてエアカーを飛ばして市場へ向かった。
「これでまずはあの連中の分は確保したわけだ」
店の中を覗き込みながら言う。
「化け物共が。どれだけ食えば気が済むのか」
そこにはセーラー服を着た連合の若い兵士達がいた。彼等は和気藹々と話をしている。
「話には聞いてましたけれどね」
ボーイの一人が言った。
「最初見た時は我が目を疑いました」
「あんなに食うなんて」
「うちの店が出来てから食い潰されたのははじめてだ」
「はい」
「だが二度目はない。ここは凌ぐぞ」
「わかりました。それでは」
「シェフには通常通り料理を作るように伝えてくれ」
オーナーの指示が下る。
「そして。この難局を乗り切るぞ」
「わかりました」
ボーイ達は頷いた。そして彼等はそれぞれの持ち場についた。既にテーブルでは連合の兵士達が最初のメニューであるサラダを口にしていた。
「何かなあ」
その中の一人がまず言った。

「エウロパの料理って基本的に味が薄いよな」
「そうだな」
黒人の若い兵士がそれに答えた。
「ドレッシングもな。ちょっとな」
「連中に言わせれば素材の味を大事にしてるそうだぜ」
ソバカスのある赤毛の兵士がそれを聞いて言う。
「素材ってやつをな」
「素材つってもなあ」
アジア系の兵士の一人がサラダの中にあるトマトを突いていた。
「どれも連合にもあるものばかりだしな」
「それで素材云々って言われてもなあ」
「実際ピンと来ないよな」
「ああ」
サラダは一つではなかった。ボイルしたポテトを入れたものやチシャのものもあった。彼等が注文したものである。
そこにまた別の料理が運ばれて来た。ボイルドベジタブルである。ジャガイモが多く入っていた。
「ジャガイモだって普通にあるしな」
「これ何処でも食べられるだろ」
「マウリアとかサハラでもか？」
「いや。そこまでは知らないけれどな」
赤毛の兵士と金髪のアジア系の兵士が言い合う。
「エウロパでもあるよな」
「まあな。味も同じかな」
赤毛の兵士はそう言いながらイモにバターを塗っていた。ボーイ達はそれを見ながら苦い顔をしていた。
「何言ってやがる」
彼等は囁き合った。
「御前等の食ってるイモと俺達の食ってるイモが同じな筈ないだろ」
「そうだ。うちのイモは馬鹿みたいに多量生産されたものじゃない。

農家の人が丹精込めて作ったものなんだ」
連合では個人農家も大規模な農場を持ち、多量生産をするのが普通である。それに対してエウロパでは零細農家も多い。彼等は農作物一つ一つを丹念に作っているのだ。
「あんな連中がエウロパのイモを食うなんて」
「世も末だ」
そう言いながら連合の兵士達の食事を見ている。彼等は山の様なサラダもイモもあっという間に食べ尽くしてしまっていた。
「次は何だ？」
「パスタだろ」
黒い髪の兵士の言葉と共にそのパスタがやって来た。トマトソースのパスタであった。

## 第十七部第四章　幕の中でその八

「ほらな」
「ほらなって俺が注文したんじゃねえか」
赤毛の兵士が黒髪の兵士に言う。
「まあいいじゃねえか。早速食おうぜ」
「ああ」
彼等はそのパスタに粉チーズとタバスコをふんだんにかけた。それからパスタを食べる。それはスパゲティであった。
「コシはしっかりしてるな」
「ああ」
彼等はそのスパゲティを食べながら品定めをする。
「ただ、やっぱり味が薄いな」
「どうにかならんのかね、やっぱり」
「オリーブも少なめだよな」
「やっぱりドバットかけないとな、オリーブも」
「ああ」
「馬鹿言うな」
これまたボーイ達の琴線に触れた。
「限度ってやつがあるんだ」
「そんなにかけたら味のバランスが崩れるだろうが」
彼等にとっては連合の兵士達のそうした言葉が非常に無神経なものに聞こえていた。言葉の一つ一つが気に触るのである。
スパゲティの次はフェットチーネであった。そしてスープだ。兵士達はそれを食べながらやはり不満げであった。
「量がなあ」
「やっぱり少ないよなあ」
「ああ」
彼等は苦い顔をしてこう言い合っていた。

「アルゼンチンの店は何処もずっと多いぜ」
「ああ、御前アルゼンチン生まれだったな」
赤毛の兵士は黒髪の兵士に顔を向けて言った。
「そうだよ、親父もお袋も農場やってた」
彼は言う。
「でっかい畑や田んぼでな。ロボット使ってやってたよ」
「そんなでっかい農場にいて何で兵隊なんかになったんだ？」
「まあそれはな」
彼はその質問に答えた。
「成り行きってやつでな」
「どんな成り行きだよ」
「俺五番目の子供でな。三男だったんだ」
「ふん」
「このまま百姓になってもよかったんだけれどな。兄貴の手伝いで」
「じゃあそうなればよかったじゃねえか」
「街に出てみようと思ってな」
だが彼は戦友のその言葉にこう返した。
「とんでもねえ田舎だったし」
「で、街に出たと」
「働く場所探してたら。そこで広報のおっさんにばったりと会ってな」
「それで軍に入ったのか」
「待遇もよかったしな。で、今ここにいるってわけさ」
「人間の一生なんてわかりゃしないものだな」
同僚達はフェットチーネをすすりながら話を聞いていた。そしてこう言った。
「街に出ていきなり広報のおっさんに会うなんてな」
「まっ、おかげでこうして飯が食えてるんだけれどな」
「満足してるか？」
「食い物の量には今のところ満足しちゃいねえな」

「勝手なことを言うな」
それを小耳に挟んだボーイ達はまた呟いた。
「牛か馬みたいに食いまくりやがって」
「しかも味もわかってないじゃないか。野蛮人共が」
だがこれは彼等の主観であった。彼等自身は自分達を野蛮人などとは考えていない。客観的に見ても連合とエウロパはあまり変わりはしない。
「やっぱり少ないよな」
「それはメニューを頼んで解決するしかないけれどな」
「そうだな」
「もうすぐ次のメニューが来るぜ」
メンバーの中の一人が言った。
「今度は確か魚だな」
「何頼んだ？」
「フライさ」
その彼が言った。
「アンチョビのな」
一同フェットチーネを食べ終わったところでそのフライがやって来た。それを食べはじめたところでまた話が再開された。
「このフライもな」
緑の目の兵士が一口食べてから言った。
「やっぱり味が薄いよな」
「そうだな。ソースがな」
青い目の兵士がそれに応える。
「やっぱり。弱いな」
「エウロパの料理はこんなのばかりだよな」
「素材を生かしてるそうだぜ」
彼等は口々に言った。
「連合の下品な料理と違ってな」
「嫌だねえ、お高く止まって」

兵士達はそれを聞いてシニカルに笑った。
「貴族だか何だか知らねえが」
「ここの店は平民相手の店で貴族はもっと立派な店に行くそうだけれどな」
「まっ、そうだろうな」
彼等はそれを聞いて納得した。
「俺達みたいな兵隊は門前払いだろうな、そんな店は」
「やなこった」
所謂一見さんお断り、ノーネクタイ不許可というわけである。こうした格式の高い店は連合にもないわけではない。特に有名なのはケベック王国や日本の高級レストラン、料亭等である。こうした店に入る客も限られてはいるが。連合ではそうした格式のある店よりもやはり大衆的な店の方が人気がある。
「食い物屋がお高く止まっても何にもならねえだろうが」
「ていうかまずけりゃそれで終わりだ」
「そうそう」
そう言いながらフライを食べ終えた。そして鶏のオリーブ焼きの後羊のスペアリブを食べた。これでメインディッシュは終わったのだが彼等の食事はまだ終わってはいなかった。

## 第十七部第四章　幕の中でその九

彼等はもう一つメインディッシュを頼んでいた。分厚いステーキが運ばれて来た。それは牛肉のものでありジュウジュウと音を立て、上に置かれたバターが溶けていた。焼き加減はレアであった。
「やっと腹にたまってきたかな」
「そうだな」
彼等はそのステーキを前にして言い合った。
「これでもう何品も食ってるけれどな」
「何でエウロパの連中ってこんなに少食なんだろうな」
「俺達がよく食うだけだそうだぜ」
アルゼンチン生まれの黒髪の兵士が言った。
「連中に言わせればな」
「またかよ」
「そんなに食ってねえけれどな、俺達も」
「いや、それが違うらしいぜ」
青い目の兵士がここで言った。
「何か。俺達の食う量は人類の中でかなり多い方らしい」
「そうなのかよ」
「エウロパの連中が俺達の半分も食わないのはもう知ってるよな」
「ああ」
「まあな」
彼等は答えた。実際には三分の一も食べはしない。無論個人差はあるが。
「これってエウロパだけじゃないらしい。サハラの連中もらしいぜ」
「そうなのかよ」
「サハラの連中の体格も俺達程大きくはないんだ」
これも統計に現われていた。サハラの者の身長や体格はエウロパの平民のそれと変わりはしない。また食べているものはコーランに

のっとったものであり、限られている。また断食の戒律もある。こうしたことから食事の量は連合のそれよりも少ないのだ。無論連合のムスリム達も断食の戒律はあるのだが何時の間にか昼食を控えるといったものになってしまっている。これはサハラから見れば堕落ととられかねないが連合ではそうではなく、実用的なものにしたとの解釈になっている。誰かが許可したものだというお墨付きまである。その誰かとなると話がややこしくなるのであるが。

「ふうん」

「マウリアの連中もそうだろ」

「ああ、確かに」

これは彼等もハッと気付いた。

「連中は牛肉食べないからな」

「そもそも菜食主体らしいしな」

「中には殆ど食わないで生きている連中もいるらしいしな」

「まさか」

流石に彼等もそればかりは否定したかった。

「幾ら連中でも」

「それはないだろ」

「そう言い切れるか？」

だが青い目の兵士はあえてここでこう述べた。

「相手はマウリアだぞ」

「けれどよ」

「そんなことは」

「まあ今はそれはいいよ」

金髪の兵士がここで話を元に戻しにかかった。

「ここはエウロパだしな。流石にマウリアの話は止めておこうぜ」

「そうだな」

「連中のことは。また今度だ」

「カレーでも食べながらな。ゆっくりとしようぜ」

「そうだな。で、何で俺達ってそんなに食ってたのか」

「だから体格も大きくなったしな」
「そういえばそうか」
誰もがそれに納得した。見れば彼等は周りにいるエウロパの客達の誰よりも大きい。そして誰よりも騒がしかった。
「俺達はいつも動いてきた。この一千年な」
「ああ」
「で、動く為には食わなきゃならないからな。しかも色々食いまくっていた」
「で、こんなに大きくなったのか」
「栄養の関係でな」
「成程な」
「そういえば昔の人間ってもっと小さかったんだよな」
「ああ、そうらしいな」
一人の言葉に他の者も応える。

## 第十七部第四章　幕の中でその十

「何でも一メートル五〇位の奴が多かったとかな」
「男でそれかよ」
「そうらしいぜ、江戸時代の日本とかな」
「それはまた小さ過ぎるだろう」
流石にこれは多くの者が信じ難かった。この時代の日本人の平均身長は連合のそれと全く同じである。ちなみに伊藤や小泉はかなり低い方である。
だからといって日本の女性の身長が低いわけでは決してない。連合の中では低い部類かも知れないがエウロパやサハラの女性と比べると高い。小柄な女性もいれば背の高い女性もいるのである。
「何でも一メートル四十ない男もいたらしいぜ」
「またそれは極端だな、おい」
「食ってるもののせいらしいがな」
「当時の日本って確か」
「菜食主義だったよな」
長い間日本では肉は食べなかった。精々鶏肉や山でとれる猪等位である。江戸時代中期までは狸や猿といったものも食べていたがそれも食べなくなった。これはおそらく新田開発等により食糧生産が安定し、そうしたものを食べる必然性がなくなったからだろう。当時の日本も度々凶作に悩まされたが日本の凶作の時と同じ時代のフランスの豊作ではフランスの方が餓死者が多かったのである。なおフランスはこの時代から欧州においては屈指の農業国であり、随一の大国であった。そのフランスよりも餓死者が少なかったのである。
「それでそこまで低くなるのかね」
「栄養のバランスが極端に偏ってたらしいな」
青い目の兵士が言った。
「大豆と魚位しか蛋白質がなかったからな」

「それでもそこまでなるのか」
「大体昔は栄養が悪かったからな。そんなもんだったらしいぜ」
「ふうん」
「昔のローマだって俺達から見ればかなり小さいんだぜ」
「そうなのか」
「あのバイキングにしろ実は一メートル七十程だったらしいしな。思ったより小さいんだ」
「俺達から見ればそうだな」
「やっぱり食うものの影響って大きいんだな。それがあらためてわかったぜ」
ここでパエリアとパンがやって来た。皆赤ワインを飲みながら話をしていた。
パンは白パンであった。柔らかく、甘いものであった。
「このパンは柔らかいな」
兵士の一人がそのパンを手に取って言った。
「エウロパのパンって言えば固いものとばかり思っていたのにな」
「そりゃフランスパンだろ？」
金髪の兵士がそれに突っ込みを入れる。
「あのパンはまた別だぜ」
「いや、それでもな」
その兵士は反論した。
「エウロパのパンは連合でよく食べられるパンに比べて固いぜ」
「そういやそうかな」
金髪の兵士もそれを言われて納得した。
「こちじゃ食パンやコッペパンが多いからな」
「あとは揚げパンか。それと比べたらエウロパのパンも昔ながらのパンだよな」
「そういうことになるかな」
そんな話をしながらパンを千切り、マーガリンを塗り込む。食べるとパンの柔らかい味とマーガリンの濃厚な味が口の中を支配した。

そして次にパエリアを食べる。連合では米は主食の一つなのでパンと同じく最後の方に食べられる。エウロパでは主食ではないのでリゾットにしろパスタやスープと同じ扱いになるのである。ここが大きな違いであると言えた。

連合でもパエリアはよく食べられる。パスタもだ。どちらも世界的な料理になっていたせいもあるがパエリアは連合に中南米のラテン系の者が多い為広まった。今ではこの料理はエウロパよりも連合でよく食べられている程である。

貝や海老、魚や黄金色のライスの中にちりばめられている。そこにスプーンが入れられる。そしてそれを口の中に導いていくのだ。

「やっぱり美味いよな」

「ああ」

兵士達はそのパエリアに舌鼓を打った。

## 第十七部第四章　幕の中でその十一

「やっぱり味は薄いし量も少ないけれどな」
「パエリアはパエリアだ」
「やっぱりいいものだよな」
「ああ」
「つくづく口の減らない連中だ」
ボーイ達は彼等が自分達の店のパエリアに文句をつけたのを聞いて顔を赤くさせていた。この店のパエリアは絶品だと評判だからである。それを汚されたと思ったのだ。
「あれだけ食ってまだ足りないのか」
「生ハムやソーセージだって食ってるだろうが。何処まで食うんだよ」
既に一人あたりワインを二本空け、そのうえで食べているのである。それはまさに牛馬の如しであった。
だがその食事もそろそろ終わろうとしていた。遂にデザートがやって来たのだ。
それはプリンであった。黄色いプリンの上に黒いソースがかけられている。そして横には生クリームやチェリーが配されていた。
「おっ、プリンか」
「気取っちゃってなあ」
黒髪の兵士がそのプリンを見て言った。
「プリンだったらもっとこう庶民的にいって欲しいよな」
「そんなこと言っても何にもならないぜ」
「何でだよ」
赤髪の兵士に顔を向けた。
「お高く止まるのがエウロパ風なんだからよ。そんなこと言っても無駄だぜ」
「おっと、そうか」

黒髪の兵士はその言葉に納得した。
「貴族ってのはやっぱり違うな」
「平民相手の店なのにな」
「まあゴージャスさが味わえていいか」
「相変わらず味は薄いけれどな」
彼等にとっては結局このプリンもその一言で片付けられた。連合とエウロパでは味付けが根本から異なっていた。そもそも使っている調味料や香辛料の数も違うのである。その差もあった。やはり連合とエウロパでは料理が完全に異なっていたのであった。
兵士達は好きなだけ食い、好きなだけ飲み、そして好きなだけエウロパを酷評して去って行った。後に残された山の様な皿と食べカスを見てオーナーは苦虫を噛み潰した顔になっていた。
「今度から連中をお断りにするか」
「また店の食べ物がかなり減りました。流石に今回は閉店とはなりませんでしたが」
「当然だ。二回もあってたまるか」
オーナーは苦い顔のまま言った。
「シェフも。大変だったな」
「腕自慢だというのに」
「あれだけ味のことを文句つけられたらな。怒らない筈ないだろう」
「今ウェイトレスが宥めています」
思えば酷い話であると言えた。
「薄い薄いと。連中は一体どんな馬鹿なものを食ってるんだ」
「何でもかなり味が濃いらしいですよ、向こうの料理は」
「何だ？胡椒まみれのステーキや化学調味料をふんだんに利かせたスープとかか？それとも合成着色料で無気味な色をしたデザートか？」
「まあ大体そのようで」
この時代は化学調味料も合成着色料もかなり品質がよくなっている。昔の様に人体への影響が懸念されるというようなことはなくな

っていた。
「そんなものばかり食っているからああなったのだな」
オーナーは忌々しげに言った。
「馬鹿なものばかり食っているから馬鹿になる」
「所詮連中にエウロパの味はわからないでしょうね」
「わかってたまるか」
彼はボーイの言葉を聞いてこう吐き捨てた。
「あんな連中にな。エウロパのことがわかってたまるものか」
「元々理解するつもりもない連中が多いようですが」
「それはそれで結構だ。すぐにここから立ち去れ」
「講和がなってからのようですね、それは」
「それまでずっとここにいるのか。何と忌々しいことだ」
「ほら、あそこでも好き勝手やってますよ、連中」
左手にあった窓の向こうを指差す。見ればそこでは別の兵士達がビール片手にバーベキューに興じていた。地元の子供達を招き気持ちよくやっている。
「しかも子供達まで入れて」
「わしの子供はおらんようだな」
「おられたらどうしますか？」
「連れ戻す」
一言でこう言い切った。
「あんな野蛮人共の側にいるだけで虫唾が走る」
「はあ」
「特にな。上の娘はもうすぐ結婚するんだ。銀行員の好青年とな」
「何かあっては困ると」
「そうだ、野蛮人に手篭めにでもされてみろ、大変なことだ」
「けれど連中はそうしたことはしませんよ」
「どうだか」
オーナーは連合軍の規律に懐疑的な目を向けていたのである。
「揉み消しているのだろう、どうせ」

「いえ、実際に」
だがボーイはそれに反論した。

## 第十七部第四章　幕の中でその十二

「連合軍はそうしたことに最も気を払っているようですから」
「つまり自分達は紳士だと。そう宣伝したいのだな」
「少なくともそれは宣伝ではないようで」
「どうだか。侵略者と言えば悪の限りをするものだ」
実際に軍隊のそうした行動は歴史上多く見られている。
「あの野蛮な連中がそれをしないとは思えんがな」
「けれど実際に鹿みたいに食い散らかしはして、酒を馬みたいに飲みはしますがそれ以外は殆どありませんよ」
「食えればいいのか」
「金払いもいいですよ」
「まあな。チップはいつも多量に置いてくれる」
連合の将兵は気前がいい。これも八条が通達を出していたりする。
「掠奪もしませんし」
「そうした意味では紳士だということか」
「連合の紳士みたいですけれどね。それも兵士の」
「連合では兵士にもそんなものを求めるのか」
「連合には階級がありませんから」
ボーイは言った。
「兵士でも将校でもそれは変わらないのです」
「フン」
オーナーはそれを聞いて面白くなさそうに呟いた。
「まあ悪事を働かないということだけは認めてやる」
「食べまくるだけですからね」
「それだけか。案外大人しいものか」
「大人しいかどうかまではわかりませんが」
ボーイはそれにはいささか懐疑的であった。
「規律を守っているのは確かなようですね」

そして窓の向こうにいる連合軍の兵士達を見ていた。彼等は相変わらずバーベキューに舌鼓を打っていた。それと同時にエウロパの子供達とも楽しく談笑していた。
「お兄さん達って悪い人達じゃなかったんだね」
「おいおい、何でそうなるんだよ」
そのバーベキューを食べる連合軍の将兵達のリーダーであるルチアーノ＝ロスアンヘルス中尉が子供達のそんな言葉を聞いて苦笑いを浮かべた。その手には羊のスペアリブがある。
「だってなあ」
「うん」
子供達はここで一旦顔を見合わせて頷き合った。
「パパやママが。連合軍は悪い奴等ばかりだって言ってたから」
「学校の先生も。変に近寄ったら殺されるって教えてたし」
「またえらく言ってくれてるんだな」
ロスアンヘルス中尉はそれを聞いて首を捻った。
「大袈裟に」
「けれどお兄さん達は全然違うね」
「うん、全然怖くない」
「優しいし」
「当たり前だろ、同じ人間なんだから」
中尉はラテン語でこう返した。
「俺達だって君達と変わるところはないさ」
「そうなの？」
「そりゃそちらには貴族とか平民があるけれどな」
「うん」
兵士達の言葉に頷く。
「結局人間なんだから。変わるところなんてないさ」
「そうなの」
「そうなのって君達の親御さんや先生がどう言ってるのかなんて知らないけれどな」

「若しかすると人をとって食うとか言ってないよね」
中尉の横にいる若い女性の黒人の少尉がここで子供達に尋ねた。
「まさかと思うけれど」
「教頭先生が言ってたよね」
「連合軍は何でも食べるからって。人間さえ食べかねないってね」
「言ってたよね」
「まさかとは思ったけれど」
少尉はそれを聞いてその綺麗な顔を顰めさせた。
「本当に言ってたなんて」
「ゼノ少尉、どうやら本当らしいな」
「はい」
ゼノ少尉は頷いた。
「信じられませんが」
「それも学校の先生がな」
「連合は野蛮人だって。何をするかわからないって」
「女の子は絶対に近寄るなって。僕達だって一人じゃ」
「危ないって言われてるんだ。それこそステーキにされるって」
「おいおい、ステーキかよ」
中尉は思わず吹き出してしまった。
「俺達が君達をステーキにするって？」
「うん」
「それだったら今こうして羊なんか食べてないと思わないかい？」
「それは」
「そうだろう？君達を食べることなんて絶対にないから安心してくれ」
実はエウロパ人の間では連合の者達にカニバリズムがあると言われてきたのである。それは彼等の祖先達にそういう風習があった民族がいたからであろうか。
「けれど連合の人達って昔は人間食べてたんだよね」
「！？」

「それも先生から聞いたよ」
「そうなのか！？」
中尉はそれを聞いて少尉に顔を向けた。それまでの明るい顔ではなく真摯で深刻な顔となっていた。少尉はそんな彼に対して答えた。

## 第十七部第四章　幕の中でその十三

「アメリカ開拓時代や中国の話ではないでしょうか」
「それか」
少尉の話を聞いて中尉もおおよそのことはわかった。
「そっちだったか」
「それって本当なの！？」
子供達はまた尋ねてきた。
「まさかって思うけれど」
「誤解がないように言うけれどな」
中尉は真剣な顔で子供達に言った。
「それは本当のことさ」
「えっ」
子供達はそれを聞いて顔を青くさせた。
「それじゃあ」
「けれどそれはそれこそ連合が出来る遥か前のことだぜ」
彼は言った。
「それこそ大昔の。少なくとも今の俺達については違うよ」
「そうなの」
「だから安心していい」
「若しそうだったら今頃大変なことになってるわよ」
少尉も言った。
「そんなことは有り得ないから。安心してね」
「うん。だったら」
子供達はそれを聞いてとりあえずは安心した。
「大丈夫なんだよね、よかった」
「僕達だってステーキになんかなりたくないし」
「けれどバーベキューは食べたいだろ？」
「勿論」

彼等は一斉に言った。
「このソース美味しいね」
ソースはオニオンをすり込み、そこに香辛料をたっぷりと入れたものであった。連合独特のかなり味の強いソースである。だがそれがバーベキューにはよく合っていた。
「味が濃いけれど」
「やっぱり君達もそう言うんだな」
中尉はそれを聞いて呟いた。
「だって本当のことだから」
「うちじゃこんな強い味のはないよ」
「どうやらエウロパ全体がそうみたいですね」
「そうだな」
中尉は少尉の言葉に頷いた。ここでは銀河語を話しており、子供達には何を言っているのかよくわからない。
「けれどとっても美味しい」
「玉葱が特に」
肉と玉葱は非常にあうものである。連合では両方を上手く使った料理が多い。
「そうか、それはいいことだ」
中尉は子供達がバーベキューとソースに満足しているのを聞いて顔を崩した。
「じゃあどんどん食べてくれ、いいな」
「うん」
「野菜もあるわよ」
少尉も言う。見れば野菜も多量に焼けていた。
「果物もあるぜ」
下士官の一人が声をかけてきた。
「林檎にバナナ、オレンジもな」
「四等軍曹、子供達の分は置いておけよ」
「わかってますって」

若い軍曹であった。中尉より少し下な位か。その年齢と階級から見るにハイスクールを卒業してすぐに下士官候補生で入ったのであろう。連合軍においては貴重な中堅将校候補である。ここから将官になれることもある。ただし元帥ともなると様々な事情で事実上不可能となっているが。元帥になれるのは大国の出身者しかいないというのは連合軍の問題の一つであった。大国支配の弊害とそれへの反発は残念なことに軍の人事にまで影響していた。八条が打破すべきものの一つとしている。だがこれへの改革は今一つ進んではいない。

「俺達はホストなんだからな」

「御客様第一ということですね」

「そうだ、それを忘れるな」

「勿論ですよ、俺達は連合軍ですから」

彼は言う。

「サービスは忘れませんよ」

「よし」

中尉はそれを聞いて頷いた。連合軍は一般市民への接待をその広報の第一に置いているのである。その為腰は低く、態度はよいと言われている。そうしたサービスもしないと人が来ないのである。志願制の軍隊の悩みの一つでもあった。連合軍にはこうした悩みもあるのである。

「それじゃあオレンジでも切ってくれ」

「はい」

軍曹はそれに従い包丁を受け取る。

## 第十七部第四章　幕の中でその十四

「頼むぞ」
「了解、これでも包丁裁きには自信がありまして」
「そうなのか」
「結婚してから。かみさんにいつも料理を手伝わさせられていますから」
「それはまた難儀だな」
こうした妻はどの国にもどの時代にもいる。非常にいいことだ。
「まあ慣れたらそれ程でもないですけれどね。最初はね」
「大変だったんだな」
「男の料理なんてワイルドなものですからね。それを色々と言われました」
「男の料理はそうでなければ面白くないだろう」
中尉もそう考えていた。だからこそこう述べたのである。
「ですが女房はそんなのは料理じゃないって言うんですよ。丁寧に作らないと」
「今時珍しい奥さんだな」
「勿論冷凍食品やインスタント食品もなしです」
「それはまた」
少尉もそれを聞いて驚きを隠せなかった。
「こだわる奥さんね」
「美味い料理は作ってくれますがね」
「自然食というやつかな」
「ええ。野菜も女房の実家から取り寄せた有機農法の野菜で」
「ふむ」
どうやら軍曹の奥さんは農家出身であるらしい。
「肉も。ブロイラー等はもっての他です」
「そうなのか」

「卵もそうですし牛乳も」
「お金がかなりかかりそうだな」
「ええ、まあ」
軍曹はそれに頷いた。
「実際に食費が占める割合はかなりでして」
「よくそれでやっていけるわね」
「私の分は殆どこっちで食べていますから」
それが秘密であった。軍では食事が無料で支給される。これが非常に大きいのである。
「そうしたことはありません」
「そうか。だが何かと大変だな」
「さっきもお話しましたが慣れてはいますけれどね」
笑って言う。だがその笑みには何処か苦いものが含まれていた。
「たまにはいいものです」
「たまにはか」
「人間とは不思議なもので身体にあまりよくないと言われるものでも時々食べたくなりますよね」
「ああ」
化学調味料をふんだんに使った料理やインスタント食品等である。何故かこうした食べ物は不思議と美味く、癖になるのである。
「そういうことです。まあこうして外に食べるのはまた違う魅力があります」
「そういえばエウロパでもインスタント食品はあるのかな」
「あるよ」
子供の中の一人がそれに答えた。
「スパゲティとかマカロニのインスタントスパがあるよ」
「連合と大体同じか」
こうしたものは何処にもでもあるということだ。手軽で便利だからだ。
「そっちじゃどうか知らないけれど僕達もよく食べてるよ」

「お昼に時間のない時とかね。ママが作ってくれるんだ」
「そうなのか」
「連合と同じですね」
中尉に少尉がそう応えた。
「そうしたところは」
「あまり身体にはよくないんだけれどね」
ここも連合と同じであった。もっとも身体によくないといっても品質や品種の改良によって二十世紀のそれとは比較にならないものになっているのであるが。
「けれど美味しいよな」
「僕ネーロが好き」
イカ墨のことである。エウロパでもイカ墨のパスタはよく食べられているのである。
「食べた後でうんこが黒くなるけれど」
「ははは、あれはな」
中尉はそれを聞いて顔を大きく崩した。
「本当にな。真っ黒になるな」
「連合でもイカ墨は食べるの？」
「ああ」
彼は答えた。
「結構な。シーフードの一つとしてな」
「そうなんだ」
「美味いよな、コクがあって」
「うん」
「最初見た時はインクをスパゲティにまぶしているのかって驚いたけれど」
「インクか、確かに」
少尉もそれを聞いて納得するものがあった。
「あれはそう思われても仕方ないな」
「美味しいけれど食べる人は少ないけれどね」

「そうなのか」
「イカを食べない人達もいるから」
こうした国は案外多い。イギリス等がそうだ。勿体無いと言うべきか残念と言うべきか。
「僕達は食べるけれど」
「おっと、そうか」
連合の軍人達はここであることに気付いた。
「坊主達はシーフードを食べる国だったな」
「うん」
「そうだよ」
彼等は答えた。ここはスペインである。だから海の幸も食べられるのだ。スペインでは昔から海の幸もよく食べられる。これはイタリアやフランス等他のラテン系のエウロパ国家でも同じである。
「蛸も烏賊も大好きだよ」
「美味しいしね」
「エウロパといっても国によって食べるものが違うようですね」
「そこも我々と同じか」
少尉と中尉はまた銀河語で話をした。これは連合もまた同じであり国や宗教によって食べるものがかなり異なっているのである。とりわけユダヤ教は食事に関するタブーが今尚厳格である。これを破ることは彼等にとっては絶対の悪行とされている。三千年以上昔の戒律がまだ生きているのである。

## 第十七部第四章　幕の中でその十五

「イギリスとかじゃそうじゃないらしいけれど」
「イギリス人ってイカを食べられるの知らないらしいぜ」
やはりこの話に触れられた。
「えっ、それ本当！？」
「この前テレビでやってたよ。何と食べられるんだって言ってたよ」
「うわあ、嘘みたいだ」
「本当ですかね」
「さてな」
少尉と中尉にとっては信じられない話であった。首を傾げるばかりであった。
「だがエウロパにも国によって何かと違いがあるようだな」
「はい」
「連合ってイカ食べるよね」
「蛸も」
海産物は人気がある。とりわけ日本人は蛸が好きなのはこの時代も同じだ。たこ焼きが一番人気である。
「美味いしな、あれは」
「刺身にもするわね」
「刺身！？」
「知らないのか、生の貝や魚を切った料理だよ」
子供達がそう囁く。
「連合の中の日本で食べる料理さ」
「そうなんだ。カルパッチョみたいなもの？」
「近いかもな。ああした感じでな」
中尉がそれに応えた。ラテン系が多い関係で連合は昔からスペイン料理もよく食べているのである。スパゲティはそれ以上に世界的にメジャーとなっているが。

「日本の醤油を着けて食べるんだ」
「ふうん」
「そこに山葵っていう独特の香辛料も使って。美味いぞ」
「生物が駄目という人には辛いでしょうけれどね」
少なくともエウロパではメジャーではない。スペインやイタリアにある位だ。
「連合って色々食べるんだね」
「何か凄い」
「恐竜だって食べるっていうし」
「あれも美味いぞ」
実は中尉は恐竜が好物なのである。
「特に草食恐竜がな。トラコドンとかな」
「ああ、あの水辺にいる恐竜だね」
カモノハシ竜と呼ばれる恐竜達の一種である。大人しいことで知られている。
「肉があっさりしていてな。食べ易い」
「そうなんだ」
「そういえばエウロパでは恐竜は食べないか」
食べるのは連合とマウリアだ。宗教的なものや風俗習慣嗜好なぞ様々な要因がそこにはある。
「だってあまり美味しくなさそうだもん」
「それより牛や豚の方がいいよね」
「うん」
「これが文明の違いでしょうか」
「少なくともその一つなのは確かみたいだな」
二人はまた銀河語で囁き合った。
「だったら今度食べてみるか？美味いぞ」
「いや、いいよ」
だが子供達はそれを受けようとはしなかった。
「何か食べたらお腹壊しそう」

「それより羊のバーベキューの方がいいよ」
「そうか、だったらどんどん焼くぞ。たんと食え」
「うん！」
子供達は元気よく頷き敵の将兵達のもてなしをふんだんに受けるのであった。
バーベキューパーティーが終わった後で連合の将兵達はその所属する艦に戻った。その通信室では当直の兵士が電報を受けていた。
「これは」
見れば極秘であった。それを見た彼はすぐに士官室に向かった。
「通信士はおられますか」
「何かしら」
そこにいたのは通信士であるゼノ少尉であった。彼女は今艦に戻り軍服に着替えたばかりであった。出航中及び戦闘中以外は将校は軍服なのである。
「通信が入っておりまして」
「わかったわ。すぐに行くわ」
「お願いします」
こうして彼女は兵士と共に通信室に入った。そしてその極秘の通信を見た。
「まさかとは思ったけれどね」
彼女もそれを見て表情を硬くさせた。
「本当に来るなんて」
「すぐに艦長にもお知らせしましょう」
「そうね。これは重要な話だわ」
彼女は頷き兵士を通信室に残し自分はその足で艦長室に向かった。
艦長室に入り通信のことを知らせた。艦長はそれを聞いて顔を少し動かした。
「オリンポスで会談か」
「どうやらそのようです」
少尉はそれに応えてこう述べた。

「その可能性は前から言われていましたが」
「私はてっきり連合領内で行うものだと思っていたがな」
「事情が変わったのでしょうか」
「それに関しての情報はまだこちらには入ってはいないが」
艦長は言った。
「だが敵の首都での会談とは。また大胆なことをする」
「城下の盟というものですね」
「そうだな。宣伝としてはこれ以上のものはない」
艦長はまた言った。
「勝ったということを知らせるにはな。だが」
「代表のその身辺は非常に危険なものになりますね」
「勝った者が負けた者の家に入り込む。これ程の屈辱はそうはない」
「はい」
「それを考えるとな。当然だろう」
政治的配慮であった。連合軍はそうした配慮を慎重に行っている。
「だからこそ極秘だったのですね」
「そうだろうな。今からテロ対策はこれまで以上に徹底させよう」
「はい」
「一般市民との交流も控える。よいな」
「わかりました。それでは」
連合軍に緊張が走った。それは上層部から末端の兵士にまで及び彼等はこれまで以上に警戒を払うことになった。
その中で連合の本土もまた動きがあった。それは一つの大きな歴史的場面にまで発展するのであった。戦いは矛が収められても続き最後の幕に次第に近付いていっていた。

# 第十七部第五章　選ばれた神々の山その一

選ばれた神々の山

連合軍の各艦艇に極秘の通信が入った頃中央政府国防省においてはかなり大掛かりな話が進められていた。

「そちらに向かう人間は何人か」

「警護は大丈夫なのか」

「そしてどの艦に乗艦してもらうのか」

そうした話が国防省のそれぞれの会議室で行われていた。当然ながら八条もその中に身を置いていた。

「ふう」

会議を終えた彼は少し疲れた顔で国防省の喫茶店に姿を現わしそこで紅茶を飲み一息ついていた。ダージリンティーである。

熱い茶を一口飲んだ後でコップをテーブルの上に置く。そして大きく息を吐き出したその時であった。

「お疲れのようですね」

声をかける者がいた。見れば由良であった。

「ああ君か」

八条は微笑んで彼を見上げた。そして声を返した。

「何かと忙しい日々が続きますね」

「それは仕方ないさ」

八条はその言葉に応えた。

「だけれどそれは君だって同じだと思うけれど」

「まあ確かにそうですが」

由良はそれに頷いた。

「しかし長官はそれ以上でしょう」

「立ったままで話をするのも何だ」

見れば由良は八条の側で立ったままであった。

「座ろう。そしてゆっくりと話をしよう」

「わかりました」
彼はそれに従い八条の向かいの席に座った。そしてドリンクを注文した後で八条に向き直った。頼んだのはコーヒーであった。
「ここのコーヒーは絶品ですよね」
「そうだね」
まずはコーヒーの話になった。八条もそれに応える。
「とにかく豆がいい。それに眠気も吹き飛びます」
由良はこの店のコーヒーに関して熱く語りはじめた。
「私はここに来たらいつもコーヒーなんですよ」
「そうなのか」
「はい、ここのコーヒーで気を奮い立たせて仕事に戻るようにしております。そうした意味でここのコーヒーには助けられていますね」
「私は特にそういうことはないな」
八条は暫し間を置いたうえで答えた。
「その時によってここで飲むものも変わる」
「そうなのですか」
「紅茶を飲む時もあればコーヒーを飲む時もある」
彼は言った。
「何かを飲むのに特にこれだということはないね」
「はあ」
「ただ、ここのコーヒーが絶品なのには同意だ」
「左様ですか」
「個人的にはブラックがいいな」
これはあくまで彼の好みだ。
「クリームも砂糖も入れずに」
「そちらの方が味がよくわかる」
彼は言う。
「コーヒーそのものの味がな。砂糖を入れるとその甘さでどうも微妙な味わいが出来なくなる」
「細かいですね」

「コーヒーも生物だからな」
「コーヒーも」
「紅茶も同じだが。下手に何かを入れるよりもそのまま飲んだ方が美味しい場合もあるということだ」
「成程」
八条の言葉に応えて頷く。八条はそれを確かめてからまた話を続ける。
「これは人それぞれだと思うがね。私はそう思う」
「そういえばカバリエ外相もコーヒーがお好きだそうですね」
「あの人が好きなのはコーヒーに限ったことではないが」
「まあそうですが」
彼女はコーヒーだけでなく紅茶も他の飲み物も好きである。伊達に連合きってのグルメと言われているわけではないのである。
「ただ、あの人のコーヒー論も面白いな」
「そうですね、何かと勉強になります」
「中央政府の閣僚ではコーヒー派は結構多いしな」
「大統領もそうですし」
「首相はお茶派だが。よくわからないのは金内相だな」
「内相はどちらでもいいようですよ」
由良は急に小声になった。それにはちゃんとした理由があった。
「多量に甘いものをぶちこめればいいみたいですから」
「成程な」
金とは何かと一緒になる機会の多い八条はその話に大いに頷くものがあった。
「確かコーヒーに角砂糖を十個程だったか」
「そのうえでクリームをコップに一杯」
「それで味がわかるのかな」
「コーヒーの飲み方も人それぞれの筈ですが」
「それはわかっているが」
だが八条は顔を顰めさせていた。

「何度見てもあの飲み方には驚かされる」
ストレート派の彼にとっては信じられないことであるのだ。

## 第十七部第五章　選ばれた神々の山その二

「内相らしいと言えばらしいですが」
「それもそうだが。内相はそれだけではないからな」
「お菓子や果物もお好きですよね」
「とにかく甘いものには目がない方だ」
「はい」
「韓国人は辛いものが好きだという定評があったがな」
　これはこの時代においても変わることがない。韓国料理は連合においても最も辛い料理として知られている。この評価はそうおいそれと変わるものではない。
「辛いものも普通に召し上がられますけれどね」
「だが甘いものはそれ以上だ」
　八条は言う。
「この前食事を同席したのだが」
「えっ」
　由良はそれを聞き驚きの声をあげた。
「長官、それは」
「！？どうかしたのか？」
　だが八条はその整った顔をキョトンとさせるだけであった。
「仕事のうえでの同席だったのだが」
「いえ、それでも」
　由良は驚きを隠せなかった。
「あの、同席といいますと」
「食事をしただけで何かあるのか？」
「あの、それは」
　由良が言わんとしていることが八条にはどうしてもわからないようであった。
「若い女性と一緒に食事をされるということは」

「何かあるのかな」
しかしそれでもわからない。
「私は学生時代から女性に食事を誘われることは多かったが」
由良はそれを聞いて何と羨ましい、と心の中で思った。それもその筈で八条は美男子であり性格もよい。資産家の家に生まれ学識もある。これでもてない筈もないのだ。
だがもてているからといってそれで満ち足りているかというとそうでもないのだ。それにはもてている本人がそれを自覚しているという前提も必要なのである。彼にはそれがないのだ。
「それが何か」
「相手は金内相ですよ」
「それが何か」
「いえ」
由良はもうこれ以上言うことを放棄した。
「何でもありません」
「何かおかしなことを言うな」
本当にわかってはいなかった。八条にとってはこういった話は全く気付きもしないことなのである。
「それで内相とは何かありましたか？」
「何かとは？」
「御食事だけですか」
「他に何があるというのかな」
「はあ」
この言葉には流石に内心唖然とした。
「仕事の打ち合わせと親睦も兼ねてだった。それだけだ」
「それだけですか」
「その後でまた食事だった。今は遊んでなんかいられないさ」
「まあ確かにそうですが」
開戦前から国防省の忙しさは目が回る程である。それは由良もよくわかっていた。

「このままずっと続くかも、とも思いますが」
「流石にそれはないさ」
八条はうっすらと笑ってそれは否定した。
「あの戦争が終わったようにこの忙しさもいずれは終わる」
彼は言った。
「ただ、それまでは大変だがな」
「全くです」
「物事ははじめるよりも終わらせることの方がずっと難しいものさ」
これは真理であった。物事というものははじめるのは思いつきだけでもいい。だが終わらせる、しかもよい形で終わらせるというのは非常に難しいのだ。何事においてもそうである。
「この戦争も中途半端で終わったという意見があるな」
「はい」
「オリンポスを占領出来なかったからだとな」
「あれは仕方なかったのでは？」
由良は反論した。その後でコーヒーを口に含む。
「マウリアが仲介に入りましたから」
「尻切れトンボと言われているのだがな」
「私はいいところで終わったと考えています」
「それは何故だ」
八条はその言葉に問うた。ダージリンティーはもう三分の二がなくなっている。

## 第十七部第五章　選ばれた神々の山その三

「首都は。その国家のプライドでもあります」
「我々の地球もそうであるようにか」
これは連合としての首都である。連合には三百の国が存在する。その国家にもそれぞれの首都が存在する。全ての首都が彼等にとってのプライドであり象徴でもあるのだ。
「サハラでも戦争はその国の首都を占領すれば事実上終了です」
「うむ」
無論例外もあるが。首都を占領されても諦めず、ゲリラ戦を展開する輩もいる。ミドハド連合がそうであったようにだ。どんなことにも例外というものは必ず存在するのである。よいか悪いかは別としてだ。
「我々もオリンポス占領をその最大の戦略目的としてきました」
「それは後一歩だったな」
「はい」
由良は答えた。連合軍はオリンポスの直前にあるクロノス、そしてニョルズにおいてエウロパ軍の最終防衛ラインを今将に破らんとしていたのである。だがそこでマウリア側からの使者が戦場にやって来たのだ。もう少し遅ければどうなっていたか、おそらく今頃は連合軍はオリンポスで凱歌をあげていたことだろう。
「正規軍にしろ義勇軍にしろあのままいけば確実にオリンポスに入城を果たせたでしょう」
「それを目的としていたしな。だがそれは君も支持していた筈だが」
「ええ」
由良自身もそれを認めた。こくりと頷く。
「その通りです」
「では何故今ここで占領されなくてよかったと言っているのかな」
「その後のことが気になりまして」

「オリンポス占領後か」
それについてであった。言うまでもなくこの戦争における最重要問題の一つである。
「我々は首都を占領した後で彼等と外交交渉に入る予定でしたね」
「ああ」
今度は八条が頷いた。
「それで彼等の戦意が完全になくなると分析したうえでな」
「そう、それが前提でした」
由良は言った。
「首都占領により彼等の戦意がなくなることが」
「だがそうはならないと」
「そう思えてきまして。彼等の戦いぶりを見ていますと」
「ふむ」
八条はそれを聞いて考えに入った。
「それに関してもシュミレーションされていたな」
「はい」
「そしてその場合は」
「ゲリラ戦です」
由良は答えた。
「それに突入していたのではないかと思われます」
「かってのスペインやベトナムの様にか」
それを聞いた八条の顔が曇った。
「エウロパの貴族達はゲリラ戦を嫌悪しているというが」
「勝つ為には何でもしなければならないのが戦争です」
八条のその言葉に対して由良はこう反論した。
「それは我々も同じ筈ですが」
「確かにそうだが」
だが八条はあまり表情が冴えなかった。

## 第十七部第五章　選ばれた神々の山その四

「ゲリラ戦等は市民に犠牲が出かねない」
惑星で行う場合である。突如として軍服を着ていない者達が攻撃を仕掛けて来るのである。かつてフランス軍やアメリカ軍はこれにより恐慌状態に陥った。そしてその結果市民達にもかなりの犠牲が出た。一般市民への虐殺はそのまま世論にも直結する。敵はそこまで考えていたのである。とりわけアメリカの様な民主主義国家はそれに弱い。アメリカの国家システムと将兵の消耗、そして戦意への影響まで見抜いていたホー＝チ＝ミンという人物は恐るべき人物であったと言えよう。彼はベトナムをボロボロにされながらも戦争に勝った。それもアメリカだけでなくフランスや中国といった他の大国達にもだ。彼は傑出した戦略家であり政治家であった。彼がいなくてはこの銀河の時代のベトナムもなかったと思われる。犠牲を出したが国家を守り抜き、独立まで導いた稀有の英傑であった。なお彼は共産主義を看板に掲げていたがその実態は民族主義者であり、共産主義は看板に過ぎないと割り切っていた。極めて現実主義の人物であった。
「それを使うというのは」
「本来ならばこの戦いの序盤から使われる危険性もありました」
「それはわかっている」
八条もそれは認識していた。そのうえで戦略を立てていたのである。
「市民の武装解除を徹底させ、銃火器を放棄させました」
「果てにはナイフまでもな」
あまりにも徹底されていたのでかって日本で行われた刀狩りの様だとまで言われた。
「エウロパ軍もゲリラ戦を採らなかった為話は順調に行きましたが」
「それでもオリンポスを占領されてからはわからなかったか」

「例えエウロパの者であっても一般市民へ危害を加えることは許されません」
「それは当然だ」
八条の言葉がきつくなった。
「我等は市民を守る為に存在している」
「はい」
それが連合軍の最大の存在理由であった。
「それを逸脱しては。どうにもならない」
「それはわかっています」
由良もそれは同じだった。
「だからこそエウロパでもそれは徹底させました」
「だがそれも。ゲリラ戦の下ではわからない」
「惑星ごと焼き払うわけにもいきませんし」
これは連合軍では想定されていないことである。連合軍は一般市民を攻撃目標とする軍ではないのだ。
「そうした泥沼に陥る可能性もあったというのだな」
「皆無とは言い切れなかったかと」
「オリンポスを占領しなかったことでそれは避けられたのだな」
「はい」
由良はまた答えた。
「私はそう考えております」
「それも一つの見方か」
八条はそれを聞いたうえでこう呟いた。
「私はオリンポス占領でかたがつくと見ていたが」
「その後で交渉に入られると」
「マウリア辺りが動いてな。そうなると見ていた」
如何なる時も調停者は必要とされる。それがマウリアであったのだ。
「では今と同じ様な動きになっていたと」
「そう見ていたが。実際はもっと早かったな」

「オリンポスを占領するとしないでかなり違っていますな」
「そうだな。結果として占領はされなかった」
彼は言った。
「問題はそれが我々にとって吉と出るか凶と出るかだが」
「それを出させるのが中央政府の仕事になりますな」
「うむ」
ここで八条は頷いた。
「ここからは話せない。執務室に戻るか」
「重要なお話ですな」
「そうだ。少し来てくれないか」
「丁度今飲み終わったところですし」
由良は今コーヒーを飲み終えていた。既に八条も飲み終えていた。二人はほぼ同時にそれぞれのコーヒーと紅茶を飲み干していたのであった。
「それでは行きますか」
「ああ」
二人はこれまた同時に席を立ち金を払い喫茶店を後にする。その足でエレベーターに乗り八条の執務室に向かうのであった。

## 第十七部第五章　選ばれた神々の山その五

「最近何かと言われることがありまして」
「何がだ」
八条はエレベーターの中でふと口を開いた由良に尋ねた。
「いえ、エレベーターを使うよりも階段を使った方が健康にいいと」
「それはよく言われるな」
「はい。ですがそうそう使うことは」
「出来ないな。時間の関係で」
「そうです。少なくとも今の我々は」
今国防省は目の回る様な忙しさなのである。どのスタッフも不眠不休で動いており、それぞれ僅かな時間も惜しい程である。その中でエレベーターは移動に関して欠かせないものとなっているのだ。
「階段を使う余裕すらありません」
「だが時間が出来たらそれは言い逃れになるぞ」
「無精者の言い逃れですか」
「そうだ。そして肥満のもとになると批判される」
「迷惑な話です」
由良はそれを聞いて苦虫を噛み潰した様な顔を作った。
「我々としてもその様なことは警戒しているというのに」
「殆どの者が好んで太りたがったりはしないものだ」
八条は言った。
「特に女の子はな」
「だからエレベーターは宜しくないと」
「しかしそれは時と場合による」
「はい」
「今みたいに忙しい場合は使わずにはいられないだろう」
「全くです。しかしつくづく大きな建物ですな」
中央政府国防省のビルはかなり大きい。そして高い。八条はその

中でもかなり高い場所に執務室を置いているのである。本来は低い場所に置きたかったのだが場所がそこしか空いていなかったのとテロ対策である。入口から離れた場所にいる方がテロには遭わないで済むからだ。また上からの脱出も容易である。国防省のビルの屋上には脱出用の飛行機もあるのだ。
「ここにいてかなり経ちますが常に実感します」
「少なくとも日本の国防省のビルよりはずっと大きいな」
「はい」
「それがいいか悪いかは別問題だが」
八条はあえてこう述べた。
「セキュリティも万全だということですが」
「地震対策もか」
「そちらも。大丈夫だとのことです」
「それは実際に起こってみないとわからないがな」
だが八条は由良のその言葉にはいささか懐疑的な言葉を述べた。
「地震は人の予想を遥かに越える」
「災害とはそうしたものです」
「だからこそ対処が難しい。この前の地震もな」
「アルムの地震ですか」
「あれ程の地震は彼等も予想していなかったらしい」
アルムの開発中の星系の主要惑星の一つにおいてその地震が起こったのである。その地震はマグニチュードにして八を記録し、その一帯にある建物や施設を完膚なきにまで破壊したのである。
「あんな地震は。ないでしょう」
「記録的な地震だったらしい。犠牲者もな」
「はい」
「すぐに軍を派遣したからよかったものの。復興の見通しはまだ立たないらしい」
「開発前に起こるとは。アルムも不幸なことです」
「だが今更言ってもはじまりはしない」

八条は率直にこう述べた。

## 第十七部第五章　選ばれた神々の山その六

「起こってしまったことはな。開発省も科学者も地震が多発する惑星だというので警戒はしていた」
「そして事前に警告を発し開拓民だけは避難することはできましたが」
「それだけが不幸中の幸いだったな」
「はい」
「人がいれば。その後の復興はどうにでもなる」
そういうことだった。まずは人なのだ。
「それはそうですが」
「またやりなおせばいいからな。開発に投資した分は返っては来ないが」
「それで開発省とアルム政府が頭を悩ませているそうです」
「軍としても出来る限りのことはしよう」
「ですね」
戦後処理と共に国防省にとっては重要な仕事となっていた。軍にとって災害救助は国防、そして戦争と並ぶ非常に重要な仕事なのである。
「派遣されている部隊にはボーナスを弾む」
「はい」
「そして激務をねぎらってくれ。いいな」
「わかりました。それにしても」
「何だ？」
由良の言葉に顔を向ける。
「出費ばかりが多いですな、本当に」
「それが軍というものさ」
八条は答えた。シニカルな響きがないのは彼の言葉の特色であった。

「軍は出費だけで収入がない。そして後の見返りもない」
「採算は度外視されていると」
「だからこそ金喰い虫なのだ。出て行くだけだ、入るものは何一つない」
「難儀な存在ですね」
話を聞いていささか困った顔を見せたが心はそうでない。わかっていることだからだ。
「福祉や教育も出費ばかりだがこれは先行投資とアフターケアーになるな」
「はい」
「だが軍はそれとはまた違う。いや」
しかし彼はここであることに気付いた。
「セキュリティだな、軍は」
「やはり投資が必要な分野だということですか」
「最低限のものになるが。そうなる」
彼は答えた。
「もっとも連合は今まで軍のことにはあまり考えを回す必要もなかったがな」
「災害救助と海賊やテロリストの征伐が主な任務でしたから」
中央軍設立前の長い一千年の間はまさにそうであった。国防には殆ど気を払わないで済んだ。それぞれの国の軍隊はそれぞれの国の領域を警護していればよく、それ以上のものは求められなかったし、また誰も求めはしなかったのである。海賊やテロリストは確かに脅威であり迷惑な存在であったが外敵とは全く異なっていたのだ。そして餓えや貧困を知らず、資源も満ち足りている連合ではそれへの争奪戦もなかった。ただ利害調整だけをしていればとかったので戦争も起こりはしなかったのである。
「そうした心配は今までありませんでした」
「しかし海賊やテロリストへの国境を越えた対策が叫ばれていたのも長かったな」

「はい」
由良はその言葉に頷いた。
「それでも中央警察や中央軍の設立には長い時間がかかりました」
「ようやく両方共設立されたが」
「結果として連合にとってよかったと思いますが」
「結果としてはな」
しかし八条の言葉は晴れなかった。
「それまでのことを思うと。大変だったな」
「連合の地域主義が立ちはだかっていましたから」
「連合の長所でもあり短所でもある」
八条は言った。
「その多様性と寛容性、そしてそれと表裏一体のまとまりの悪さ」
「ですね」
「連合は長い間この相反するようで同一の問題に悩まされてきているな」
「それは終わるのでしょうか、何時かは」
「何時かは終わるかも知れないがそれは百年や二百年ではないだろうな」
八条のその言葉は達観したものであった。
「この一千年の間連合はその綱引きにあった」
「綱引きですか」
由良はその言葉に目を向けてきた。
「そうだ。連合という国家連合の形式を考えるとな。仕方のないことだ」
「中央政府の権限強化も長い間様々な議論が巡らされてきましたし」
「大国も小国も。この中にある」
「はい」
「四兆の人類も。この巨大な連合の中にな」
連合というのは巨大な国家連合なのだ。その巨大な中に様々なものが内包されている。八条が言っているのはそういうことであった。

「またこの問題については議論と政策が交あわされていくのでしょうね」
「その結果は連合が終わるまでわからないな」
「何時になりますかね」
「それは私にもわからない」
八条は言った。

## 第十七部第五章　選ばれた神々の山その七

「マウリアではそれこそ千年や二千年こそさしたる時間でもないしな」
「あそこはまだ特別です」
由良はマウリアのことが出て思わず苦笑してしまった。
「千年どころの時間の感覚ではないですから」
「あれ位の長い目で見た方がかえって解決の方法もわかるかもな」
八条はうっすらと笑ってこう述べた。
「これは連合にとって宿命的な問題なのだから」
「宿命ですか」
「これだけはな。どうしても避けられない問題だ」
彼は言う。
「連合にとっては」
「左様ですか」
「何時かは解決しなければならないだろうがそれが連合の分裂であってはならない」
「分裂」
由良にはその言葉は俄かには信じられないものであった。ぴくりと顔を動かせる。それから述べた。
「まさかそれは」
「可能性としては皆無ではないと思うが」
だが八条はそんな彼に対してこう返す。
「今まで多くの国家がそれぞれの事情で分裂してきた」
「はい」
これはわかってはいた。だがいざ自分達のこととなると。どうしても実感が湧かないのだ。少なくとも由良はそうであった。
「連合とて例外ではないと思うが」
「それを現実的な可能性として認識してことにあたれと」

「皆無ではない可能性は常に現実のもの」
彼はまた言った。
「そう総理に教えてもらったのでね。それならば可能性の一つとして考慮するべきだろう」
「最悪の結果ですが」
「だが起こり得る」
八条の言葉は連合の殆どの者にとっては夢物語だ。だが実際に恐怖を覚える言葉であるのも事実であった。それだけのものが彼の言葉にはあった。
「そうなれば中央軍だのどうの言ってはいられないぞ」
「絶対に避けたい話ですね」
「そうならない為にもこの話は焦らないで行こう」
落ち着いた言葉だった。
「焦らずに」
「そうだ。百年、二百年とかかるのなら焦る必要もない。ゆっくりと話していけばいい」
「はい」
「今は中央政府の権限を集中させているがまた揺れ戻しがあるだろうしな」
そう予想を立てたがこれには根拠があった。連合の歴史はそうした中央政府と各国政府の権限の綱引きの歴史でもあるからだ。
「地域主義への」
「そうやってバランスが取られている。この一千年の間もそうだった」
「綱引きの様ですね、それを聞くと」
「様ではなくてそのものだな」
八条はまた冷静に述べた。
「これに関しては。それも果てしない綱引きだ」
「勝負はつきますかね」
「少なくともそれは私達が生きている間ではないな。何十世代も後

だろう。若しかすると百世代経っても終わっていないかも知れない」
八条はかなり長期的な展望を述べた。政治家、とりわけ民主主義の政治家というものは自身の失脚を恐れて時として近視眼的になるが彼は違っていた。
「またマウリア的な話を」
「私も彼等に影響されたかな」
「何かある度に前世と言うのは止めて下さいよ」
「それはわかっているさ」
そんな話をしながらエレベーターの中の移動時間を過ごした。そして彼等は八条の執務室に入ったのであった。

## 第十七部第五章　選ばれた神々の山その八

以前と変わらず質素で味気のない執務室であった。八条はそこに入るとまずは執務用の席に向かった。そして同時に由良にも席を勧める。

「長くなるかも知れないから座って話をしよう」

「はい」

由良はそれを聞いてこの話がかなり重要なのだと思った。執務室において話されるだけでもかなりのものだがそのうえ長くなるというのだ。一体どの様な話か、興味も湧いてきた。

「そのオリンポスでの使者のことだが」

「はい」

彼は応えた。

「閣僚クラスが赴くことになりそうなのだ」

「閣僚クラスがですか」

「そうだ。その中には閣下も含まれている」

「大統領閣下でしょうか」

中央政府の閣僚である八条が閣下と呼ぶのは一人しかいない。それが誰なのか、最早言うまでもないことであった。

「そう、閣下も行かれることになるかも知れない」

「だとするとオリンポスまでの警護を手配しなければ」

「各部隊には極秘で通信を入れようと考えているのだが」

「是非そう為さるべきです」

由良は答えた。

「今から手を打っておくに越したことはありません」

「そうだな、まずはそれはそうしよう」

「是非共」

由良は言った。こうして各部隊に極秘で通信が入れられることになった。これによりゼノ少尉が艦長と話をすることになったのであ

る。これは繋がっていたのだ。
「そして他にも閣僚が行くことになるだろう」
「だとするとカバリエ外相は確実でしょうね」
「そうだな。外相はまず間違いない」
八条は述べた。
「実は外相もそれはもう御承知だという」
「左様ですか」
「今から準備を進めておられるそうだ」
「またそれは気の早い」
由良はそれを聞いて苦笑した。
「もう行かれるおつもりとは」
「ドレスやスーツを選ばれているそうだ」
カバリエはファッションにも造詣が深いことで知られている。その巨体からは想像も出来ないことであるがお洒落で服のセンスにも定評がある。ちなみに若い頃は痩せていたらしい。だがこれは様々な異論もある。多くの者が彼女を知った頃には既に今の様な立派な体格だったからだ。
「あの方はどれだけではないかと思いますが」
「料理か」
それを聞いては地上はすっと笑った。
「そちらはどうなるかな」
「果たしてエウロパのものがお口に合うか」
「いや、エウロパのものを口に入れるのはこの場合まずいな」
八条は急にその目を鋭くさせて答えた。
「毒、ですか」
「一介の軍人ならいざ知らず。国家元首や閣僚ともなると毒殺の危険性もある」
「エウロパ政府としてそれは考えていなくとも」
「一千億の市民の中に愚かな考えを抱いている者もいる可能性がある」

また可能性という言葉が出た。その可能性が皆無でない限りは事前に対策を講じておく必要がある、それが政治の、そして八条の考えであり摂理であった。
「ならばその危険は避けた方がいい」
「わかりました。それではそちらは避けて」
「うむ」
八条はその言葉に対して頷いた。

## 第十七部第五章　選ばれた神々の山その九

「警護の方は軍で行うこととしよう」
「それでは大統領も外相もここは軍艦において移動されるということで」
「それが一番だろうな」
八条もそれに賛同した。
「安全の為にはな」
「問題は乗艦される艦艇ですが」
「それならもういいのがあるが」
「ティアマト級ですか」
「あれしかないだろう」
八条は述べた。
「あれなら居住性も優れているし警護も通常の艦艇に比べて高いレベルにある」
「それにエウロパに対して威圧にもなりますか」
「威圧か」
だが八条はその言葉には顔を暗くさせた。
「威圧するのは考えていなかった。それに」
「まあ政治では必要なことです」
「今回は外交を有利にする為か」
そう問うた。
「その通りです」
「好き嫌いは言っていられないか」
「政治ですからね。それにこれ位のことは」
「わかった。ではその際の演出も考慮が必要だな」
「映画の一シーンの様に」
由良は笑ってこう言った。
「派手に決めるのがいいと思います」

「勝者と敗者の違いを印象付けるようなものをだな」
「そうです、まあエウロパにとっては屈辱的ですが」
「こちらとしても出来るだけいい条件で話を終わらせる必要がある、と」
「そういうことです。まあこの程度は許容範囲かと」
「わかった」
八条もそれを自分自身に納得させた。威圧やそうした行動は力の誇示よりも他の方法を好む彼にはあまり好ましいやり方ではないと考えていたがここは自分だけの好みで決めるわけにもいかなかった。確かに有効な方法であり、とりわけ今回はそれが効果があると思われたからである。彼はそれを採ることにした。
「そしてそのティアマト級は何隻使うべきか」
「全ての閣僚が一隻の戦艦に乗り込んでいてはいざという時にことかと」
由良は述べた。
「ここは分けましょう」
「分けるか」
「はい、万が一に備えて」
「そうだな。その方がいい」
八条はそれにも同意した。
「では各人にそれぞれの巨大戦艦を回すことにしよう」
「わかりました」
由良はそれに頷いた。
「ではそれでお願いします」
「それはそうとその巨大戦艦もまた大規模に建造することになるな」
「軍の拡大と共にですね」
「そうだ。連合の人口は四兆に達しようとしている」
「はい」
連合の人口は増え続けている。これもまた一千年の間続き今では兆単位の人口にまでなっていた。そしてそれでもまだ増え続けてい

るのである。
「それに伴い軍備拡大案が政府及び議会与党からも出されている」
「これに関して野党である保守派の意見は」
「さしあたっては反対はないようだな」
「少し意外ですね」
「人口の増加は事実だ。それではそれに伴って軍も規模を拡大するのは当然だからな」
人口規模は軍事編成に大きく関係する。これは何時の時代も同じだ。
「そして予算も増えると」
「むしろ彼等はその軍事費に関してクレームをつけてくるだろうな」
彼は言った。

## 第十七部第五章　選ばれた神々の山その十

「彼等にしてみれば惑星開発やそういったものに使いたいだろうからな」
「あくまで地方分権ですか」
「そして外に向かうことだ」
連合にとって外に向かうとは惑星開発のことである。それに対して中に向かうとは今ある惑星の再開発等をさすのである。この中に教育や福祉も含まれているのである。
「彼等の方法も決して間違いではないと思う」
八条はまずは保守派の考えを認めた。
「連合はそうして発展してきたからな」
「はい」
これは由良も同じであった。連合は開拓により大きくなってきた勢力である。これにより人口問題も食糧問題も解決してきた。それと同時にエネルギーや資源、そして環境といった問題もである。新たな資源やエネルギーを見つけ出し、そして一つの惑星に密集しないようにして環境を守っていた。大体の目安として地球レベルの大きさの惑星だと一つの惑星に十億程がよいというのが連合の考えであった。なお今の連合の技術では太陽系にある全ての惑星が居住可能となっている。その為水星や冥王星にも多くの者が住んでいる。大気や環境を生物が住める状況に改造したのである。今太陽系にはそれぞれの惑星にある衛星の居住者も含めて数百億の者が暮らしている。連合の首都だけありかなりの人口が集まっているのである。だがその国籍はそれぞれの国に帰する。連合市民であり、それぞれの国の市民でもあるのだ。
「あながち間違いではないのだ」
「問題はその時期ですね」
「そうなのだ」

八条は頷いた。
「今は外に向かう時代ではないだろう」
「はい」
由良はそれにも頷いた。
「連合軍の設立も然りだ。今は中を充実させる時だ」
連合全体の内政においてである。戦争とはまた話が別となっている。
「開発は後で存分に出来る」
連合の開拓地はまだまだあった。銀河に果てしなく存在しているのである。やがては別の銀河にまで到達するだろうと言われていた。他の知的生命体と遭遇するまでこの開拓は続くと予想されている。そしてその知的生命体は今のところ少なくとも数十万光年程先にしか存在しない。連合に与えられたものはあまりにも広大であり、そして豊かであったのだ。それはフロンティアを与えられたかってのアメリカ人達のそれよりも遥かに豊かであり、広大なものである。だが連合はアメリカとは違っていたのだ。
アメリカは建国から開拓を続けてきた。それが彼等の国是であった。インディアン強制移住法といった極めて身勝手であり、明らかな侵略行為も同時に進行していた。この時代はかってのインディアン、ネイティブ＝アメリカン達の国家も存在しているが彼等はアメリカの開拓の影で土地を奪われ、食べ物を奪われ、そして命を奪われていた。この場合よく白人達が悪者にされるが実際は違う。実はこの侵略者達の中には黒人や黄色人種もいたのである。彼等は確かに白人に差別されていたが彼等もまたアメリカにやって来た者達なのである。そうした意味でネイティブとは正反対の者達だ。だから彼等も侵略行為に参加していたのである。西部劇は実は騎兵隊やカウボーイ、保安官、ガンマン等の荒野での英雄物語であるように描かれていたがこれはあくまでアメリカ側からの見方でありネイティブから見れば侵略の美化に他ならなかったがここで出て来る騎兵隊にしろカウボーイにしろ保安官にしろガンマンにしろ黒人が多かっ

た。特にカウボーイの三人に一人は黒人であった。バファローをインディアンの食糧を奪う為に撃ちまくる者達の中にも黒人は大勢いたのである。彼等もまた侵略者なのであった。被差別対象であったが侵略者でもあったのだ。アメリカではかって黒人やヒスパニックは二等国民とされてきたが彼等より下の存在もあったのである。それこそがネイティブであった。彼等は居留地に押し込められてきた。アメリカ史の陰の部分でもある。

こうした陰の部分も確かにアメリカには存在する。だがその開拓は確かに彼等に途方もない豊かなものをもたらしてきた。しかし彼等はその終わりは知っていた。カルフォルニアまでである。だが連合のフロンティアには終わりはまだ見えはしない。だからこそ途中で開拓の手を緩めて内部に目を向けてきたりしていたのである。中と外、集権と分権、中央政府とそれぞれの国家、連合はその綱引きの中にあるのは先程八条が言った通りであった。

そして八条は今は集権の時であると考えていた。だからこそ野党の考えには今は賛成出来なかったのである。

「今はそれよりも集権だ」

「ですね」

由良はまたそれに応えた。

## 第十七部第五章　選ばれた神々の山その十一

「中央政府の権限を強めていくべきだな」
「中央警察及び軍の存在を確固たるものにしたうえで」
実際にそれはかなりのところまで進んでいた。とりわけ軍はこの戦いの勝利でその存在をはっきりとしたもにさせていたのであった。
「また開拓をすればいいでしょう」
「今までの開拓はそれぞれの国家の軍や警察に護られながら行われてきた」
八条は言う。その言葉通り今までの連合の開発は開拓可能な惑星を発見し、そこにそれぞれの軍に護られた移民船団が移住し、そこで計画的に住居や農場、そして鉱山に産業を設け発展させてきた。その惑星の防衛は軍が行い、惑星を護る防衛用人工衛星や軍事基地の建設も行ってきた。だが今はそれを連合軍と各国の国軍が協同で行っている。またその方が惑星開発もそれぞれの国家と軍で行うより連合軍も参加することにより開発や防衛自体もこれまでより速くなっているのである。
「それに中央政府のコントロールをより積極的に入れていきたい」
これは各国の過剰な開発を制御する為にこれまでも行われてきた。だが連合軍の設立によりそれがさらに強まろうとしているのである。
「その方が連合にとってもいいだろう」
「今はそれを固める時期だと」
「そうだ。足場を固めるべきだ」
八条はまた言った。
「次のステップに向けてな」
「わかりました。それでは」
「野党とはまた激しくやり合うことになるだろうな」
「またハンニバル代議士が出て来られますな」
「彼がか」

どういうわけか彼の名を聞いたところで八条は笑みを作った。
「また何かと言ってくれるだろうな」
「長官はあの方はお嫌いではないのですね」
「嫌う理由もないしね」
八条はそれに応えて言った。
「むしろ好きな方か」
「それはまた何故」
「ああした有言実行で直線的な行動は。ある意味清々しい」
無論彼はそれだけではない。そうでなくてはあの若さで政党の領袖の一人になれはしない。服芸も備え、機を見る目もあるとされている。
「議論していても勉強になるしな」
「勉強ですか」
「議論からも学べるものは多い」
八条はこう述べた。
「そしてそこから得られるものは大きな力になる」
「政治家として」
「政治家としてだけでなく人間としてもな」
彼は述べる。
「得られるものは多いな。これは勝ち負けではないからな」
「議論は勝ち負けではないと」
由良はその言葉に反応した。
「何か伊藤総理の様な御言葉ですね」
「総理か」
八条の方でもその言葉に反応した。

# 第十七部第五章　選ばれた神々の山その十二

「言われてみればそうだな」
伊藤は議論に関する本も出版しているのである。その中で彼女は議論は勝ち負けではなく自分がそこから何を得られるかが大事なのだと書いている。
「ではまた代議士とお話されますね」
「時間があったら雑誌かテレビでしたいものだな」
「発行部数や視聴率が稼げそうですね」
「余程表紙や演出が悪くない限りはな」
「何でしたら長官が表紙を飾られては」
「私はいいさ」
その言葉には苦笑いで返した。
「俳優やモデルでもあるまいし。そんなところには出たくはないな」
だが八条が雑誌の表紙を飾ったり、テレビで取り上げられるのは多い。その貴公子然とした美貌が女性達の間で人気なのだ。これは年齢を問わずである。そして同性愛者達からの人気も高い。これは八条にとっては内心あまり気持ちよくないことであったが。
「左様ですか」
「やはり中身で勝負といきたいものだ」
「案外外見も重要ですけれどね」
「そういうものかな」
「まあ世の中えてしてそういうものかと。顔が怖いだけでよく思われていない場合もありますし」
「スポーツ選手でもそうだな」
「ああ、彼ですね」
由良はそれが誰かすぐにわかった。
「ドルジ＝チュル選手ですね」
あるサッカーチームのキーパーである。モンゴル出身で顔が非常

に怖いことで有名である。
「彼は十八の頃からあの顔なんですよ」
「そうなのか」
「あの頃からゴジラだの世紀末覇者だの言われていましたね」
どちらも日本の古典的名作である。ゴジラは怪獣映画であり世紀末覇者は漫画の登場人物である。どちらも驚異的な強さを誇っている。
「まあ歳相応の顔になってきましたね」
「非常に温厚な性格らしいな、彼は」
「ファンにも親切ですしね。好人物ですよ」
「今ではその顔も愛嬌があると言われている」
「はい。最初はかなり言われましたがね」
「結局顔なんてそんなものだろう」
八条は言った。
「時と場所が違えば価値観も変わる。アイドルにしろ連合のアイドルがマウリアやサハラで人気が出るかというとあながちそうとも限らないしな」
「はい」
「そうしたものだと思う。外見で人を判断してはえらいことになる」
「男は四十になれば自分の顔に自信を持て、という言葉が残っていますけれどね」
古い言葉である。人間の生き方は顔にはっきりと出て来るものだ。それを述べた言葉であるのだ。人相の悪い者は卑しい者も多かったりするのだ。無論全員がそうではないが。
「リンカーンだったか、確か」
「はい」
「その歳になると今までの人生が顔に出て来るというしな」
これはあながち間違いではない。その人物が高潔な人物であれば非常にいい相になり、下劣な輩であれば顔を背けたくなるような相になる。生き方が出て来るからだ。

「高僧が高貴な顔になり、ヤクザが悪相になるのもそれでしょうか」
「だろうな。ある程度は確かに影響する」
「はい」
「だがあくまである程度だと思う」
八条はここで首を捻った。
「完全には出ないものだ」
「そうなのですか」
「何もかも完全に出たならば世の中は実に簡単なものだっただろう」
そして呟いた。
「しかしそうはいかないものだ。世の中というものがそうであるようにな」
「意味深い言葉ですね」
「祖父に言われたことさ」
八条がそう述べると由良はすぐにそれに応えた。
「はあ」
「世の中は色々なことが混ざり合って、しかもそれは一つにはならない。おまけに常に姿を見せるというわけでもないとな。それが世の中だと」
「難しい言葉ですね」
「だが真理の一面は述べていたと思う」
こう言って自身の祖父の言葉を肯定してきた。

## 第十七部第五章　選ばれた神々の山その十三

「顔もな。それだけでは完全にわからないさ」
「そう御考えですか」
「私はな。まあ明らかに胡散臭そうな輩はいるが」
「ははは、確かに」
由良はその言葉を聞いて笑った。
「見るからに悪人といった感じの者もいますね」
「そして実際に悪人だ」
「山口なんかがそうでしたね」
「そうだな。あれこそが生き方がそのまま出たのだろう」
「ああした輩は何時の時代にもおります」
「善人が常にいるように悪人もまた常にいる」
八条はまた言った。
「これもまた祖父のことだったよ」
「確か長官の御実家の会社の社長でしたよね」
「後に会長になったがな」
「それを考えると意味深い言葉ですね、本当に」
「少なくとも人間的には尊敬出来る人だった」
祖父についての言葉だった。
「でしょうね」
「総理と同じく私には色々と教えてくれたよ」
「そうですか」
「ただ、最後に変なことを言われた」
「それは？」
「私は若しかしたら永遠に結婚出来ないのではないかと」
八条はここで顔を懐疑的なものにさせた。
「これは一体。どういう意味なのか」
「長官」

「何だ？」
由良の言葉に顔を向けた。
「いえ、何でもないです」
「そうか」
それにすら気付かないのではおそらく駄目だろうと思った。おそらくこの祖父は彼には女性や恋愛のことは教えていなかったに違いない。結果として彼はそうしたことにはかなり疎くなってしまっているのだ。だがやはり本人はそれに気付きはしないので意味はなかった。
「では話を最初に戻しますか」
「そうだな。雑談はこれ位にして」
八条もそれに応えた。
「ではとりあえずティアマト級を使おう」
「はい」
「あちらに送られる閣僚が何人かわからないとりあえず三隻でどうかな」
「三隻ですか」
「大体それ位の数だと思うが」
「そうですね」
由良は暫し考え込んでから自分の意見を述べることにした。
「それ位でしょうね、おそらく」
「では三隻で考えていっていいな」
「はい、それで宜しいかと」
由良は頷いた。
「多くなればまた追加しましょう」
「そうだな。ではどの管区の艦艇を回そうか」
「太陽系周辺からで宜しいかと」
由良はそう提案する。
「やはりな。そうか」
「そこが一番手配しやすいですし。それにすぐに呼べますから」

「わかった、ではそこから選ぶぞ」
「はい」
連合軍はその軍管区を十に分けている。それぞれに司令部と艦隊司令部を置いている。艦隊は今のところ三百個艦隊、三個軍集団をまとめており艦隊司令も司令部もその長官は元帥である。当然首都である地球と太陽系、その周辺星系も一つの管区となっている。三百個艦隊がここに駐留している。
「後はどれを選ぶかだな」
「はい。まあどの艦でも大して変わりはしないと思いますがね」
「では新しい艦から選ぶか？」
「それでも変わらないかと」
「ある程度は抽選か」
「今任務にあたっていない艦艇からですね」
こうして二人はこの件について話をはじめた。送る艦艇の選別もまた真剣な話であった。だがそれもまた重要な仕事であった。軍の仕事は非常に細かいものでもあるからだ。

## 第十七部第五章　選ばれた神々の山その十四

この頃エウロパに駐留している連合軍はこれまでとは変わり少しピリピリした空気の中にあった。といっても相変わらずエウロパ各地で暴飲暴食を楽しみ、レストランやバーを一時閉店に追い込むことは続けていた。だが憲兵隊は少し緊張した状態にあった。

ニーベルングに駐留する部隊においてもそうであった。近頃憲兵隊のパトロールが多くなり、そしてチェックも厳しくなっていた。一般の兵士達はそれを見て妙なものを感じていた。

「何かあるのか？」

セーラー服の兵士達はジープに乗りパトロールを行う憲兵達を見て怪訝な表情を浮かべていた。

「やけに物騒なんだが」

「戦争やってた時よりも何かな」

「ああ」

若い兵士達はこう囁いていた。

「顔付きも険しいしな」

「最近バーとかでもあまり飲んでねえしな」

「連中があんな感じだとこっちも何か調子狂うぜ」

そうは言っても彼等は相変わらず盛んに飲み食いしていた。昨日もバーでビールの樽を何個か空にしてしまっていた。なおエウロパ人の間では連合軍の将兵は階級に関わらずパブにもバーにも顔を出すので驚かれている。階級社会であるエウロパではそれぞれの身分で飲む場所も違っているのである。だがそもそも階級なぞ存在しない連合ではその時の気分や財布の状況で飲む場所が変わるだけである。ここにも大きな違いがあった。

「やっぱり憲兵は怖いしな」

「そうだな」

憲兵とは軍の中の警察である。その取締りにあたり軍の中では恐

れられている存在なのである。その彼等が盛んにパトロールしているだけでも将兵にとっては緊張すべきことなのである。
彼等は心持ちスゴスゴとその場を後にし営舎に戻るのであった。ニーベルングだけでなく連合軍のいる場所全てがそうした空気に包まれていた。そしてそれは憲兵隊本部でも同じであった。
憲兵隊本部はアルテミスに置かれていた。最初はガンタースに置かれていたが戦局の進展によりニーベルングに移り、それからアルテミスに移動したのである。今はここで連合軍全体の取り締まりと警戒にあたっている。一時買い取ったビルの一室で厳しい、鋭利な顔の中年の女が机に座って報告を聞いていた。
「では今のところ風紀は強化されているのですね」
「はい」
女の前には軍服の男がいた。階級を見れば大佐であった。
それに対する女の軍服は元帥のものであった。それだけで彼女が連合軍においてかなり高位にある者であることがわかる。
だが大佐が畏まっているのはそれが理由ではないようであった。それはどうやら今目の前に座っている彼女に理由があるようであった。
「パトロールを増やしたところ将兵の規律があがったようです」
「そうですか」
彼女はそれを聞いて厳しい顔のままで頷いた。
「では引き続きパトロールを強化するように。いいですね」
「はい」
「そして憲兵総監であるゴー＝タト＝アインの名においてサインします」
彼女は言った。
「テロ警戒レベルを最高レベルであるＡにまで上げることを」
「わかりました」
「それで宜しいですね」
「はい、私には異論はありません」

「宜しい。ではサインします」
「はい」
こうして連合軍のテロ警戒レベルは最高のAにまで達した。これがエウロパに向かう閣僚達の警護に関するものであることはもう言うまでもないことであった。連合軍は今それに向けて調整中であり、そして動いていた。ゴーのサインもまたその一環なのであった。
「他に用件は」
ゴーはサインの後で大佐に尋ねてきた。
「いえ、ありません」
大佐はその質問に対してこう答えた。そして彼は敬礼の後で退室した。後にはゴーだけが残り彼女は粛々と仕事を続けたのであった。
彼女が仕事をしている間ニーベルングのあるパブでは兵士達が仕事を終え一杯引っ掛け最近の憲兵隊の巡回等の多さについてあれこれと話をしていた。

## 第十七部第五章　選ばれた神々の山その十五

「まあここで話していてもまずいかな」
「いや、それはないと思うぜ」
その中の一人がまずこう言った。
「俺達兵隊が知ってることなんてほんの少しだしな。特にここであれこれ話してることがエウロパの連中の耳に入ってもどうこういうことはないだろ」
「それもそうか」
その言葉に納得する。
「まあ流石に機密とかの話は止めておこうぜ。後でことになるしな」
「そうだな」
「それじゃあ何の話するよ」
その中の一人が言った。
「このまま黙ってちびちび飲んでも美味くとも何ともないぜ」
「と言われてもな」
だが同僚達はその言葉に少し戸惑いを見せた。
「最近どうにもこれといった話題がないしな」
「憲兵隊のパトロールが多くなっただけだしな」
「ああ」
実はこれこそ重大な問題でありエウロパ側もそこに何らかの動きを見て取っているのだが彼等はそれに気付いてはいない。
「後方基地になってるここではそうした話もないか」
「平和なものだぜ。仕事は多いけれどな」
「特に憲兵総監はな。お忙しいことって」
「そりゃ元帥ともなれば忙しいだろう」
この中の一人が言った。
「何せ九十億の中で三十人しかそこらしかいない元帥様なんだからな」

「俺達は幾らでもいるのにな」
「言うなよ、どうせ臨時雇いさ、俺達は」
これは一般で入った兵士達が自嘲を込めて言う言葉である。連合軍の採用には一般、下士官補士、下士官候補生、士官候補生、士官学校とそれぞれ募集されている。その中で一般は当然ながら三等兵からはじまり、軍服もセーラー服となっている。これは下士官補士も同じであるが補士が三年から七年で下士官になれるのに対して一般はテストを潜り抜けなければならない。言うならばアルバイトが本採用になるようなものである。年季制であり三年の任期が終われば続けるか退職するか選ばなければならない。この際退職金が貰える。彼等は連合軍の末端を構成し、教育も下士官候補生とはまるで違っている。あくまで末端であり、任期制なのである。だからこうした自嘲の言葉も生まれるのだ。
「任期になればお金を貰ってほいさようなら」
「だから履いて捨てる程いるってね」
「こんなことなら下士官候補生で入るべきだったかな」
「じゃあ今から受けろよ」
すぐに同僚達から突っ込みが入る。
「受かるんならな」
「どうせ無理だろうけれどな、御前の頭じゃ」
「ちぇっ」
その兵士は同僚達の言葉に口を尖らせ酒を一口含んだ。ビールである。
下士官候補生は一般や補士とはまた待遇が異なる。二年で伍長になり、それからの昇進も一般出身者等に比べて早い。そして将校になることもしきりに進められる。そもそも入隊した時の軍服がセーラー服ではなく七つボタンの詰襟であるということからもそれがわかる。この濃紺の軍服は実は日本軍の下士官候補生やパイロット候補生、少年学校の軍服であり本来ならば彼等は下士官の軍服になるところを八条が採用したのである。これに関しては賛否両論あり、

アメリカや中国、ロシアといった国々の軍事評論家達の中にはこれを職務乱用だと批判する声もあった。当然自分達のことは棚にあげてはいるのであるが。

一方でこの軍服を採用したことは日本等の軍事評論家及びマニア達からは高い評価を受けていた。とりわけ詰襟の軍服であった王制国家からは高評価であった。彼等は軍服を決めるにあたって当然ながら詰襟を希望したのだが圧倒的多数の共和制国家により今のスーツに決められたのである。この王制国家の中には当然ながら皇室を戴く日本も入っておりここは八条の意見が通ったことに溜飲を下げたのである。

「あの七つボタンは出世出来るって証だからな」

「あそこから最低でも連合軍付最上級曹長にまでなれるんだろ」

「そうさ」

「将校になったら中佐までか」

「それどころか優秀だったら提督にもなれるぜ」

そんな話が為される。

「俺達なんて曹長になれるかどうかすらわからない」

「将校になってもな。やっぱり昇進が遅いらしいな」

「何なら士官学校にでも入るか？」

「まさか」

だが皆その言葉には肩をすくめてみせた。

## 第十七部第五章　選ばれた神々の山その十六

「何だかんだ言ってもここに長くいるつもりはないしな」
「そういうこと、ここで一寸金を稼いでな」
「止めて地元でここで身に着けた技能で食っていく」
「どうせ軍もそれを望んでいるんだろうさ」
「何か俺達ってそれ考えると適当なんだな」
「当たり前だろ、本採用じゃないんだからな」
ここでまたこの言葉が出て来た。
「俺達はあくまで臨時雇い」
「三年ではいおさらば」
「それが嫌なら早く下士官になるか別の試験受けなってね」
「難儀なこった」
「少なくとも元帥様とは違うってことさ」
そしてまた元帥に話が向かった。
「大学や士官学校を出た人達とはな」
「俺なんて地元の高校出てすぐに入ったんだけれどな」
「そういや御前ジャングルの奥に住んでたんだっけ」
「そこの小さな学校にな。通ってたんだけれどよ」
「ふうん」
連合にはこうした者も多い。大平原で放牧をして暮らしている者もいればジャングルで狩りをして暮らしている者もいる。様々な生き方が連合にはあるのだ。
「そこに募集のおっさんが一人やって来てな。ヘリコプターで校庭に降りてきて」
「おいおい、またそりゃえらく派手だな」
同僚達はそれを聞いて苦笑した。
「で、軍人を募集してるって聞いてな。最初は軽い気持ちだったんだ」

「それで受けて今ここにいるんだな」
「ああ。最初はびっくりしたぜ」
そのジャングル出身の兵士は言った。
「何て言ってもよ、木がない場所に連れて来られたんだからな」
「また随分な場所に住んでたんだな」
「小さい村でな、周りは本当に木ばかりだった」
彼は言った。
「そこで生まれてからずっといたんだよ。ところがヘリコプターで教育隊に連れて来られて」
「そこは別世界だったと」
「そうだったんだよ。本当にびっくりしたの何のって。だって砂漠だったんだぜ」
「砂漠にあった教育隊かよ、それはまた」
そうした場所にある教育隊も連合においては存在する。様々である。
「学校の授業でしか習わなかったものがよ、急に出て来てな」
「ほう」
「そこで三ヶ月暮らしてたんだ。それが終わったら基地勤務で」
「で、今度はこのニーベルングか」
「流転してるぜ、本当によ」
彼は困惑した顔でこう述べた。
「俺これからどうなるんだよ、って何度も思ったよ」
「やっぱりジャングルがいいか？」
「そうだな。三年経ったら帰ろうと思う」
彼は言った。

## 第十七部第五章　選ばれた神々の山その十七

「やっぱり俺にとっちゃそっちの方が性に合ってる。そこで漁師でもして暮らしたいな」
「ああいったところの漁師もかなりワイルドらしいな」
「そりゃ二十世紀頃までの話だろ？今は違うぜ」
彼は同僚達にこう語った。
「今はピラルクでもオオナマズでも何でも機械で釣るからな」
「へえ」
「昔みたいに命懸けで釣るってことはないさ。まあ河に落ちたらそれだけでまずいがな」
ワニや大蛇にピラニア、星によっては淡水性の鮫や恐竜までいる。ジャングルは危険な場所なのである。
「じゃあやっぱり危ないじゃねえかよ」
「戦場よりはましだけれどな」
「そういえばそうか」
「確かに」
同僚達はその言葉に頷いた。
「まあ俺達は後方勤務だけれど」
「前線はやっぱり大変なんだろうな」
「それで憲兵総監も結構規律とかに目を光らせてるらしいぜ」
「それでパトロールを増やしてるのかね」
「そうなんじゃねえの？流石に前線は今まで命のやり取りしてたんだから殺伐とした空気もあるだろうしな」
「殺伐とした、か」
何時の時代でも前線はそうである。例え機械の戦いでもだ。それは銀河においても変わりはしないのである。
「ここだって今でこそこうやって静かだけれどな。激しくやり合っただろ」

「ああ」
「その時は凄かったじゃねえか。前線なんてそんなもんだって」
「まああの総監は元々殺伐としてるけどな」
「というか厳し過ぎるぜ」
彼等は憮然とした顔でこう言った。
「ヒス起こさないだけましだけれどな」
それはゴーに関してはなかった。彼女は確かに厳格であったが常に冷静で感情を露わにするような人物ではなかったのである。そして優秀で潔癖症だ。寸分の隙もなく道徳的である。その為『連合軍版金内相』『ベトナムの鉄の女』とさえ呼ばれている。違いは無類の甘党ではないということであろうか。
「しかもあれで家庭的らしいぜ」
「まじかよ」
「ああ、旦那さんは何でも有名なカメラマンらしいけれどな。ベトナム軍への取材の時に出会ってそこから結婚したんだけれどな」
軍への取材は連合においてはかなりフランクである。これは中央軍設立前からである。軍にとっては絶好の宣伝の機会でもあると考えられている。
「その旦那さんとは今でもアツアツってわけか」
「そうらしいぜ。子供もえらく可愛がってるらしい」
「あの厳しい顔でどうやって子供と一緒にいるか想像出来ないんだけれどな」
それが今一つ彼等にはピンと来なかった。
「仕事と家庭は別だってことかな」
「そうかもな。まあそれを仕事に持ち込む人じゃないしな」
「真相は藪の中ってね」
日本のある作家の作品から出て来た言葉である。この作品では登場人物の全てが違うことを言っている。真実は決してわかりはしないのだ。そういった意味を含む深い作品である。
「そういうこったな」

「まあもっと厳しくなるかも知れんし今のうちに飲んでおこうぜ」
「そうだな」
こうして彼等は酒を楽しむのであった。戦争が終わり一息つくわけにはそうはいかないものであるがそれでも落ち着ける時間があるうちは落ち着くことにしたのであった。

# 第十七部第五章　選ばれた神々の山その十八

連合軍はそれでもまだ比較的緩やかな空気もあった。だがエウロパ軍はそうはいかなかった。

彼等は首都オリンポスを中心に厳戒態勢にあった。戦争が終わっても彼等はその警戒を解くわけにはいかなかったのである。

軽挙妄動はそのまま国家の滅亡に直結する、だからこそ彼等は動きを戒めていた。じっとその動きを顰めていたのであった。

その中心である首都オリンポスの防衛責任者はギルフォードであった。彼は先のニョルズの戦いの功績により上級大将に、そしてこのオリンポスの防衛司令官に就任したことで元帥に昇格していた。彼は今オリンポスの総司令部において首都防衛の一切を取り仕切っていた。

「閣下」

彼はこの時会議に出る為車に乗ろうとしていた。そこで彼を呼び止める声があった。

「何だ、一体」

ギルフォードが反応するより早く周囲にいる護衛の兵士達が反応した。

「私です」

「貴女は」

見ればそれは総統補佐官であるアランソであった。彼女はギルフォードの前にやって来た。

「探しましたよ」

「何かあったのですか」

ギルフォードはそれを受けて彼女に目をやった。端整だが鋭く、そして同時に危険なものも含んだ視線であった。

「お話したいことがありまして」

「お話ですか」

ギルフォードはそれを受けて辺りを見回した。
「ここでは何ですね」
「ええ」
「そして補佐官も会議に出席される」
これからの防衛計画に関する会議である。総統補佐官であるアランソも出席することになっていた。
「宜しければ車の中でお話しませんか」
「それで宜しいですか？」
「私としてはそれで構いません」
彼は言った。
「それに変な誤解を招くこともないでしょうしね」
「それは御安心を」
アランソはすっと笑ってそれに応えた。
「生憎私は男性には興味がありませんので」
「それでは」
「はい」
アランソはレズビアンである。そしてギルフォードは独身である。この為彼にも同性愛の噂があるのだがこれは本人が意には介していないので問題にはなっていない。そんな風説を気にかける彼ではなかったのだ。
そして二人は車に乗った。その中で話をはじめた。
「今回の計画に関してですが」
「はい」
ギルフォードは応えた。
「今の件が終わってから本格的に動き出すのですよね」
「そうですが」
彼はありきたりの顔でそれに答えた。
「それが何か」
「いえ、それですと」
それを聞いたアランソの顔が微妙に変わった。

「問題がありまして」
「問題！？」
「はい財政面で」
彼女は言った。
「色々と支障が出るかも知れないと思いまして。今只でさえ財政的には危機的な状況にあります」
「それは私も承知していますよ」
ギルフォードはそれを聞いて言った。
「この戦いで。消費したものはあまりにも莫大です」
「そのうえ連合には多額の賠償金を支払わなければならないかも知れません」
勝者と敗者ではそれぞれ背負うものが違うということである。
「それを考えると。あまり過剰なものは」
「ですがやらなければなりません」
ギルフォードは厳しい声で言った。
「この戦いで我が軍はあと一歩でオリンポスに入城されるところでした」
「はい」
「我々もここにいられなかったでしょう。違うでしょうか」
「いえ、その通りです」
彼女は答えた。
「正直マウリア側から仲裁が入らなければ。今頃は」
「そういうことです。防衛計画は根本から見直し、そして再構築されるべきなのです」
ギルフォードの声が強くなった。
「さもなければ。次の脅威には耐えられないでしょう」
「しかし財政は」
「それも御心配なく」
だが彼はそれを遂に封じ込めて来た。
「防衛計画はこれだけではないのです」

「といいますと」
「基地建設だけではなく港湾の整備、そして艦艇の建造もあります」
「多額の費用がかかりますね」
「お金が動きますね」
「まさか」
それを聞いたアランソの目が動いた。

## 第十七部第五章　選ばれた神々の山その十九

「そう、そのまさかです」
ギルフォードはここで満足そうに笑った。
「これは同時に財政政策、経済政策ともなるでしょう」
投資を行うおとにより経済を活性化させる。ケインズの理論であった。二十世紀の古典的な経済理論である。
「それにより今の財政難、そして経済危機を克服させることが可能です」
「ですがもう一つ深刻な問題があります」
アランソはそれでも言った。
「彼等のことですか」
「そう、彼等です」
彼女は言った。
「総督府から引き揚げて来た二百億の市民のことは。如何されるおつもりですか」
「今彼等は西方に避難しておりますね」
「はい」
南方においてモントローズ要塞の開城と共に八条が彼等の身の安全を保障したことにより彼等は無事に避難することが出来たのである。そして今彼等は西方の安全な場所で身を寄せ合って暮らしている。
「彼等はそれぞれの国に帰ってもらいます」
「そのそれぞれの出身国にですか」
「はい。そして復興に協力してもらいます」
「許容出来るスペースがあるでしょうか」
「それはありますよ」
これに関してギルフォードは楽観しているようであった。
「元々エウロパは一千億の市民がいました。それが戻って来ただけ

です」
「それでも時代が」
「そう、時代が違いますね」
これは彼も認識していた。
「だからこそなのですよ」
「つまり以前に比べて住める場所が広がっていると」
「そういうことです。その点は心配無用です」
彼は言った。
「むしろ彼等の移住と開拓でもまた資金が動くでしょうし」
「ですがその動かす資金の出所は」
あまりにも楽観的に過ぎると思ったのかアランソはそこに言及してきた。
「何処からなのでしょう。最早一千億の市民は塗炭の苦しみの中にあり増税にはとても耐えられそうにありませんが」
「借金ですよ」
彼は答えた。
「借金」
「ここはハサンから借りるとしましょう。これでかなりの額を賄えます」
「ハサンからですか」
ハサンは相手が誰であろうとそれが収益に繋がるのなら躊躇なく金を貸したり貿易をする国である。それがサハラ全体の怨敵であるエウロパであってもだ。
「後はマウリアか。それで資金を調達しましょう」
「嘆かわしいことですね」
アランソはそれを聞いて溜息をつかざるを得なかった。
「何がですか？」
「借金までしなければならないことがです」
彼女はそれを嘆いているのだ。
「今のエウロパの惨状は」

「仕方のないことでしょう」
しかしギルフォードはそれを肯定していた。
「我々は今未曾有の国難の中にあります」
「それは承知しております」
「そのうえで考えなければ。それでどうするのか」
「借金もその中の一つですか」
「そういうことです。嘆いても何もはじまりません」
毅然として言う。何故かその言葉には絶対の自信が見られた。
「閣下は強い方ですね」
「そうでしょうか」
「そうしたことを肯定出来るというのは。これは皮肉等ではなく」
「はい」
「凄いことだと思います。とにかくこれから長い間耐える時が続くでしょう」
敗戦と講和、復興。エウロパにとっては試練の道であると言えた。
「それを乗り切らねば。何もなりませんね」
「ですね」
二人は車中でそんな話をしていた。そして会議の場に到着した。会議においてもギルフォードの弁説は冴え渡ったものであった。彼はこれにより政府や議会にも注目される存在となってきていた。
特に野党である保守勢力からは。彼等も彼等で今の国難をどうすべきか考えていたしそして次の選挙で勝たなければならないと考えていたのである。そのうえ彼等はもう一つ問題を抱えていた。

## 第十七部第五章　選ばれた神々の山その二十

「いい人材かも知れないな」
その保守勢力の領袖であるカシウス＝ニルセンはテレビに映る彼の姿を見てこう言った。彼はデンマーク出身のの政治家であり伯爵の爵位も持つ。薄くなっている白髪頭にそれと対比するかのような黒く濃い髭を持っている老人である。長い間エウロパ中央議会において議員を務め、保守勢力が政権を握っていた時には閣僚を経験したりもしている。先の総統選ではラフネールの対抗馬でもあった。保守勢力のドンとされている。
「この若い元帥は」
彼はこの時自宅の居間においてテレビを見ていた。そしておもむろに自分の携帯を取り出し電話をかけた。
「私だが」
ある者に声をかけた。
「あっ、これは代表」
電話をかけられた者は彼の声を聞いて声をあげた。
「こんばんは」
「うむ、こんばんは。堅苦しいことはいい」
「はい」
そう断ったうえで話に入った。
「ＡＳＧのニュース番組を見ているのだが」
エウロパのテレビ局の一つである。
「ギルフォード元帥ですか」
「そうだ」
彼は答えた。
「ギルフォード元帥が出ている。少し彼のことについて聴きたいのだが」
「最近つとに名を知られていますね」

「そうだ。どうやら軍人としてかなり優秀なようだな」
「ニョルズの戦いで武勲を挙げていますね」
電話の向こうの者はそれに対してこう返した。
「この戦いが初陣だったという話ですが」
「初陣でか」
「はい。その間武勲を挙げ続け瞬く間に大将にまでなっています」
「ふむ」
ニルセンはそれを聞いて眉を動かした。だが携帯であるので向こうからはわかりはしない。映像のスイッチはあえて切っている。今はプライベートな場所から電話をかけているからだ。
「それだけを見ましたら軍人としてはかなり優秀であると言えます」
「軍人としてはか」
「はい」
電話の向こうの者はそう答えた。
「そう判断しても宜しいかと」
「では他ではどうだ」
「他ですか」
「そうだ。軍人以外の彼に関しても聞きたいのだが」
「残念ですが詳しいことは」
彼はその問いには口篭もった。
「イギリスにおいて侯爵位を持つということはわかっていますが」
「それ以外はまだわかっていないか」
「調べましょうか」
彼は逆にこう問うてきた。
「代表が宜しければ」
「うむ、頼む」
ニルセンはここでこう言った。
「若しかすると掘り出し物かも知れないぞ」
「掘り出し物ですか」
「そうだ。我々にとってな。細かいところまで調べてくれ」

「わかりました。それでは」
「うむ」
ニルセンは電話を切った。そしてまだテレビにいるギルフォードを見て呟いた。
「わしの後を継げる者かも知れないな」
彼はこう考えていた。そうした意味でギルフォードに注目していた。だがここで彼は一つ見方を間違えていた。人は自分の物差しでしか人を計ることは出来ない。そして彼も例外ではなかった。
彼はギルフォードを評価しようとしていた。しかしそれは自分の物差しの中でだけである。彼がどこまで巨大な資質を持っているかということまではまだわかっていなかった。少なくとも彼はまだわかってはいなかったのであった。

## 第十七部第五章　選ばれた神々の山その二十一

エウロパも動いていたが連合もまたそれは同じである。国防省や外務省だけでなく大統領府も何かと忙しい日々が続いていたのであった。

「では私は行かなければならないな」

「おそらくは」

キロモトもそれは同じであった。今は首相のアッチャラーンと自身の執務室で話をしていた。

「閣下御自身で署名されるということに非常に大きな意義があります」

「そうか」

彼はそれを聞いてまずは眉を動かした。

「それは歴史的にもだな」

「そうですな。連合がエウロパに勝ったということをこれ以上になく印象付ける。歴史の場面の一つとしましても」

「絵画の様にか」

「まあ誰が書くかはわかりませんが」

アッチャラーンは述べた。

「写真としても残ります」

「敵の首都において国家元首が勝利のサインをする」

キロモトはここで呟いた。

「確かに場面としてはこれ以上のものはないな」

「はい」

「わかった。では私も行くとしよう」

彼は言った。

「まずはこれで一人決まったな」

「ですね」

アッチャラーンはその言葉に頷いた。

「では他の人選だ」
彼はそのうえで話を続けた。
「誰に同行してもらうかだ」
「まずは一人は既に決まっております」
「カバリエ外相か」
「少なくとも女史には行って頂かないと」
アッチャラーンは述べた。
「外相としての当然の責務だと思います」
「そうだな」
これにはキロモトも同意した。
「ではまずは外相は決定だ」
「はい」
「後は・・・・・・誰かだな」
「後は一人で宜しいかと思います」
彼は今度はこう提案してきた。
「一人か」
「それ程大勢で行く必要もないですし。少なくとも閣僚に関しては」
「ふむ」
「もう一人。送り出せば宜しいかと」
「では誰にするか」
それが問題であった。キロモトはアッチャラーンに問うてきた。
「首相は誰がいいと思うか」
「そうですな」
彼は問われたうえで考えに入った。
「まずは財相や内相は別になります」
「うむ」
これは軍事や外交とは直接関係ないのでまずは省かれた。
「私が行きましょうか」
「いや、それはまずい」
だがこれはキロモトにより制止された。

「私が国を離れる。その間色々と見て貰わなければならない」
国家元首がいない間はその留守を預かり切り盛りするのも首相の仕事である。彼はそれに関して言及してきたのである。
「それを頼みたい。だから君は離れないでくれ」
「わかりました」
アッチャラーンはそれを了承した。これで彼が行くことはなくなった。
「他に適任者というと」
「一人しかいませんな」
アッチャラーンはここでこう言った。
「彼しか」
「そうか、やはりな」
そしてそれにキロモトも頷いた。
「では彼にも行ってもらうか」
「はい」
こうしてまずは人選は終わった。だがそれで一件落着とはいかない。
「そしてだ」
キロモトは次の話に入った。
「手配も進めていこう」
「わかりました」
連合とエウロパの講和の交渉は遂に実際にテーブルに着く段階になろうとしていた。話は少しずつだが確実に進んでいた。そして銀河において大きな場面となろうとしていたのであった。

第十七部　　完

２００６・４・３

# 第十八部第一章　舞台の移転その一

## 舞台の移転

連合とエウロパの停戦は成立してからもまだ動きがあった。彼等はそれぞれ兵をオリンポス、そしてアルテミスに引き揚げたがそれでも緊張は残っていた。一触即発の状態もあったのが実情であった。

だがそれはその都度双方の努力によって回避されてきた。彼等とてこれ以上の戦闘は望んでいなかったのである。

戦力的には圧倒的に優勢にある連合軍にしろそうであった。彼等は完全なシビリアン＝コントロールの中にありその独断や暴走はつとに嫌われる。それもありそう取られかねない行動は慎む必要があったのだ。

これは連合軍設立前からの連合の風潮でもあった。彼等は各国の軍に分かれていた頃から文民統制の下にありその行動は常に強い統制下にあった。そしてその暴走は警戒されてきたのである。

だがそれだけではなく軍の意見を汲み上げるシステムも存在していた。それは議会であった。

議会は軍の意見を聞き、そして軍を統制する政府をチェックする。こうした三すくみとも言えるチェック体制が連合の文民統制であった。なおこれは文官である官僚に対しても行われている。こうした意味で軍人と官僚は同じであり武官と文官は連合においては同じ統制が敷かれていたのである。

だがエウロパは違っていた。現役武官が軍事の責任者になることも多い。そして国家元首である総統の強いコントロール下にある。議会のチェックは連合のそれ程強くはない。エウロパは総統の権限が強く議会の権限は弱いからである。

従ってエウロパ軍の方が突発的な暴走を危惧された。ましてや彼等は敗戦しておりそのプライドを傷つけられていた。だが彼等はそれを防がれていた。それはやはり首都オリンポスにおいて彼等を統

括するギルフォードの存在が大きいと言えた。
彼は今オリンポスにおいてエウロパ軍主力の統括を行っていた。その手腕は的確であり誰も口を挟むことは出来なかった。それは軍務大臣であるシュヴァルツブルグも認めていた。
「まさかあれ程までの逸材がいたとはな」
「意外でしたか」
同じ部屋にいたローズがそれに応えた。
「そうだな。在野の人材だったとは」
シュヴァルツブルグはそれに対してこう返す。
「思いも寄らなかった」
「人材とは思いも寄らないところにいるものです」
「そうだな」
彼はローズの言葉に頷いた。
「今それがようやくわかった。軍以外にも軍を知る者は多い」
「連合には多い様ですが」
「あれはまた違うだろう」
だがシュヴァルツブルグはそれには異議を呈した。
「あれはマニアとかいうらしいな」
「オタクだったでしょうか」
「どちらにしろ意味は変わらないな」
「はい」
所謂一つのことに極限までのめり込み、研究し、知識を蓄えていく人物はこの時代においても存在する。オタクというのは二十世紀末の日本語であり、マニアの中でも極端な者のことを言う。かっては悪い意味であったが今では研究者としていい意味となっている。
「あれは単なる趣味だろう」
「ですがその知識は侮れないようです」
「そうらしいな」
「何でも軍事機密まで知っているとか。何処で仕入れたのか」
これはネットや風説により入手するらしい。その殆どは所謂ガセ

であり信頼に値しないものであるがその中にはごく稀に事実が埋もれている。それを入手するのだ。
「それはまた凄いな」
驚くと同時に呆れもした。
「だが連合軍はそんなスパイ紛いの輩を野放しにしているのか？」
「決してそうではないようですが」
ローズは述べた。

## 第十八部第一章　舞台の移転その二

「ですが取り締まりし難いようです。情報の出所もまた不明なことも多く」
「ふむ」
「それにこれは軍の管轄ではなく内務省の管轄らしくて」
「あちらの軍の権限はかなり規制されているらしいからな」
「はい。今の連合中央政府内務省はかなり厳しくそうした人物は見つかり次第厳密な注意を受けるようです」
「逮捕はされないのか」
シュヴァルツブルグにはこれも不思議であった。
「逮捕されるのは情報提供者位みたいですね。国家機密漏洩罪で」
「まあ提供者は当然だな」
これは流石に当然のことであった。連合でもエウロパでもこれは同じである。
「ですが入手者は注意の後データの消去と情報漏洩を禁じられるだけのようです」
「甘いな」
「連合は軍事に関してはあまり厳しくないですから」
「そうしたことは緩やかというわけか」
「そういうことです」
ローズは言った。
「やはり長い間戦争というものを経験していなかったからでしょう」
「軍事機密等に関していささか緩くなっているのか」
「戦争がないと。それに関しての認識も甘くなるというものです」
「いい事例と言えるな」
「ええ」
ローズは今のシュバルツブルグの言葉に対して頷いた。
「そうした軍事機密に関して。だがそれが大事になることはない、

か」
「国防省も気を着けていますからね、それでも」
「それでも、か」
声が少し曇った感じになった。
「はい。実は連合軍になってから軍事機密漏洩がかなり減ったそうです」
「彼等も馬鹿ではないか」
「馬鹿ではないからこそクロノス、そしてニョルズに達したのでしょう」
「そうだな」
これには苦笑いと共に頷いた。
「確かに彼等は愚かではない」
「はい」
「いや、むしろ優秀だ。僅か数年であれだけの組織を作ったのだからな」
「確かに数もありますが」
これがかなり大きいのは言うまでもない。
「だがその数を統制する能力も必要だ」
「はい」
「彼等にはそれもある。その能力は極めて高いな」
数は揃えるだけでは駄目なのである。それをコントロール出来なければ話にはならない。むざむざ大軍を揃えておきながらその統制が取れずに敗れた例も多いのである。
「今までなかった程だ」
「高く評価されておられるのですね」
「それは否定しない」
シュヴァルツブルグの方もそれを認めた。
「国防省の長官は日本人だったな」
「はい、かっては日本軍の将校だったそうです」
「そして政治家になり若くして国防長官になったのだな」

「その通りです」
「名前は確か」
ここで名前を手繰る。日本人だったという記憶がよぎった。
「八条。八条義統といいます」
「そう、八条だったな」
シュヴァルツブルグはローズのその言葉に応えた。
「彼が私のライバルだったのか」
「如何でした、若きライバルは」
「手強かったな」
彼は素直にこう述べた。
「これまでになく。強敵だった」
「その戦略には隙がありませんでした」
「圧倒的な兵力を送り込み、そして補給を整えたうえで少しずつ攻め込んで来る」
「実に的確で、そして脅威でありました」
「そうだった。私は結局常に後手に回っていた」
これは防御側の不利と戦力差が大きく出た結果であった。エウロパ軍は最後までそれを挽回することが出来なかったのであった。
「私はそれに振り回されっぱなしだったな」
「それを考えますとあの八条という若者はかなりの人物ですね」
「そうだな。一度会ってみたいとも思う」
これはシュバルツブルグの本音だった。ローズがそれを聞いて声をあげた。
「本人とですか」
「そうだ。噂によるとかなりの美男子だそうだな」
「写真もありますよ」
「ほう」
シュヴァルツブルグはその言葉に反応した。
「御覧になられますか」
「よかったらな」

微笑んでそれに応じた。なお彼はノーマルである。決して男色家ではない。
「ではこちらに」
ローズはこう言って懐から一枚の写真を取り出した。そしてシュヴァルツブルグの前に差し出した。

## 第十八部第一章　舞台の移転その三

「これが彼です」
「ほう」
そこには黒い髪と瞳の端整な顔のアジア系の若者がいた。シュヴァルツブルグはその若者の顔を見てまずはこう述べた。
「確かに美男子だな」
「ですね」
「だがこれはエウロパの美男子ではないな」
そして次にこう述べた。
「少し線が細い」
「日本では昔からその方が女の子に人気があるそうです」
「そうなのか」
「はい。在原業平や光源氏は御存知でしょうか」
「日本の古典の主人公か？」
「はい」
日本の古典はエウロパでも知られていた。伊勢物語や源氏物語は連合だけでなく他の国々でも読まれているのである。
「彼等にしろ優男です」
「ふむ」
「戦国時代、いえ安土桃山時代の名古屋山三郎もそうですし」
「出雲阿国の恋人だったらしいな」
「あっ、知っておられましたか」
「これでも古典は好きだ」
笑いながら応えた。
「日本のものも中国のものもな。勿論他の国のものもだ」
この時代は若草物語や赤毛のアン、戦争と平和といったものも古典とされている。他にはユゴーやデュマの作品もそうである。音楽ではモーツァルトは古典中の古典である。

「当然エウロパのものもな」
「左様ですか」
「だからエウロパの古典も読んでいる」
そう述べられた。
「はい」
「それでも線の細いタイプはいないわけではないが」
「日本におけるようなものはないですか」
「私はそう思う」
シュヴァルツブルグは答えた。
「神話でもどちらかというと戦士が好まれるな」
「ええ、確かに」
「如何にも毛深そうな。ヘラクレス然り」
実際にヘラクレスは大男でかなり毛深かったとエピソードの一つにある。
「だが日本人のそれは。強者であっても線が細く書かれるのだな」
「そうでないと女の子受けしないそうです」
「そうなのか」
「新撰組というのがいたのは御存知ですね」
「江戸時代末期のか」
「はい。幕府側についた言うならば都の警察でしたが」
実際には少し違うのであるが。彼等は日本についてかなり詳しかった。日本はエウロパにおいては連合の中でかなり異質な国であるとも思われているのである。その為研究も盛んである。なおエウロパの中では日本はとりわけ油断のならない国であるとされている。表面上は温和であるがそれは仮面であり、何を仕掛けて来るかわからないというのだ。少なくともこれは伊藤に関しては当たっていた。
「彼等の中でも優男が人気があるのです」
「沖田総司か」
「まあ彼は実際には美男子だったかどうか怪しいそうですけれどね」
「ふむ」

彼はよく美男子とされるが残っている話からモンタージュするとそうではないという話もある。若くして結核によりこの世を去った天才剣士を惜しんでの伝説が彼を美男子にさせたのであろうか。
「けれど彼が優男に思われているのは事実です」
「あくまで優男か」
「今の俳優やアイドルもそうみたいですよ」
「連合では優男が好まれるとは思わないが」
「まああそこは色々な人間がいますからね。人気もそこそこあるそうですよ」
「そうなのか」
連合は非常にエネルギッシュな勢力である。従って好きな者のタイプもまたエネルギッシュなタイプとなりやすい。だから優男よりも筋肉質で大柄なタイプが好まれる傾向も確かにあるのである。
「日本だけではないのか」
「ええ、そうです」
彼は答えた。
「確かに多数派ではないですが」
「ふむ」
「優男も一つの好みの中にちゃんとあるそうです」
「わかった。そういうことか」
「そしてその中にこの八条という人物も入っているのです」
「成程な」
それを聞いて大きく頷いた。
「そういうことか」
「結構幅広く人気があるそうですよ」
「確かに美男子ではある」
「はい」
「貴公子と言うべきか。気品があるな」
写真の八条の顔を見て述べる。

## 第十八部第一章　舞台の移転その四

「連合にはあまりないタイプだな」
「日本の名家の嫡子だそうです」
「そうなのか」
「かっては華族、まあ貴族の家であったそうですが」
明治から昭和初期の貴族は華族と言われていた。
「血筋もあるのか」
「どうもそういうところは連合よりも我々に近いですね」
「そうだな。やはり連合的ではないな」
「むしろ我々に近いでしょうか」
「混血も強く見られない。連合にこうした人物がいるとは少し驚かされた」
人間としての八条をこう評した。今まで彼が見ていたのは国防長官として、敵としての八条であったのだ。敵としての八条はこの上ない強敵であった。
「連合に色々な人間がいると聞いてはいてもな」
「確かに」
「そして我々はこの若者に敗れたのだ。線の細い優男にな」
「ヘラクレスやジークフリートに敗れたのではなく」
シュバルツブルグはローズのその言葉を受けてさらに言う。
「強いて言うならオルフェウスに敗れたというところか」
「オルフェウスですか」
「戦いは筋肉質の大男だけでやるというわけではないということか。そういえばオルフェウスもまた英雄であったな」
「あっ」
ローズはシュヴァルツブルグのその言葉にはっとした。オルフェウスはギリシア神話きっての竪琴の名手であり音楽の天才だけでなく一人の勇敢な英雄でもあったのだ。アルゴー号に乗ったこともあ

り、死んだ妻を取り戻す為に一人で冥府に行き、地獄の番犬ケルベロスや冥府の王ハーデスと対峙したこともある。剣こそ出さないがその心は確かに英雄のものであったのだ。
「そして彼も。しかも元軍人だった」
「そうした意味でこの八条もまた戦士でしたか」
「戦士かどうかは外見だけで決まるものではないということか」
シュヴァルツブルグは呻く様に言った。
「軍服を着ていなくともな」
連合では軍の最高司令官は中央政府大統領であり、統括者は国防長官である。中央軍設立前は各国の国家元首ないしは首相が最高司令官、そして統括者はそれぞれの国防省の長官であった。少なくとも現役武官がその最高司令官及び統括者となることはなかった。タイの様に古い王室を持ち、国王が最高司令官となっている国家でも実際には一兵も指揮することは出来ず、首相が最高司令官代理として実質的な最高司令官になっているようなケースもある。なお日本は少し変わっており、国防長官は文官であるが儀礼によっては軍服を着ることもあった。だが身分はあくまで文官である。これは極めて特殊なケースであった。
「戦士であるのは事実だ」
「そういうことですか」
「もっとも実際に戦うのは我々軍人だがな」
「はい」
シュバルツブルグのその言葉に頷いた。
「文民統制であろうとなかろうと。軍人が戦う」
「政治家はそれをコントロールする。しかし」
「彼等も戦争に加わっているということだな」
「そういうことになりますか」
「実際国家と国家の戦争になればそれぞれの国の者全てがそれに参加しているということになる」
古代の戦争はあくまで王と王の戦争でありそういうことはなかっ

た。だが国家としての意識が強まり、また産業が発展すると共に次第にその国の全ての者を巻き込んだ総力戦となった。そして今に至るのである。
「こう言うと全員が戦士ということになるがな」
「実際に女性も参加していますけれどね、今は」
サハラはまた違うが連合とエウロパでは女性の軍人も普通にいる。
「しかし我々はそうは考えていませんな」
「エウロパではな」
シュヴァルツブルグは言った。

## 第十八部第一章　舞台の移転その五

「戦うのはあくまで軍人であり戦う場所は戦場だ」
「はい」
「それ以外の者もそれ以外の場所でもない」
「そうです」
「戦場以外で武器を使うこともない。戦場での勝敗が全てだ」
「その通りです」
これもまたエウロパ騎士道の考えであった。
「確かに全ての国民が戦場に参加していてもな」
「そこが違うということですね」
戦場と銃後は分ける、エウロパではそれがはっきりとしていた。
「銃を持つ者と持たない者は違う」
シュヴァルツブルグはまた言った。
「軍服を着ている者と着ていない者が違うのも同じだ」
「ええ」
戦時法でこれは定められていた。正規の軍服を着ているのが軍人である。それ以外は軍人ではない。原則として軍人以外への攻撃は禁止されているが彼等が攻撃を仕掛けてきた場合にはゲリラとして反撃が可能である。なお捕虜になれるのは軍人だけであり、ゲリラは認められない。またゲリラと判断可能な場合は先制攻撃をしてもよいがそうでなかった場合には処罰の対象となる。これは連合でもエウロパでも同じである。
「少なくとも我々は今までそう考えてきた」
「連合もそれは守りましたな」
「そうだ。彼等は一般市民や産業には手を出さなかった」
「はい」
「てっきりバイキングみたいなのだと思っていたのだがな」
「バイキングですか」

「そうでなければモンゴルかゲルマン民族だな」
いずれにしろ連合の者達を野蛮な侵略者だと考えていたのである。
「だがそれは違ったな」
「少なくとも戦場においても銃後においても紳士でありました」
「それは不幸中の幸いだった」
「これもあの長官が軍律と風紀を徹底させたからだそうです」
「そうか」
それを聞いたシュヴァルツブルグの目が微妙な光を発した。
「これも政治的配慮かな」
「幾分かはそうでしょう」
ローズは言った。
「連合軍、そして連合のモラルを人類に喧伝する」
この戦いは全人類が注目していた。その為両軍共その一挙手一投足に細心の注意を払っていたのは事実である。エウロパは元々騎士道からそうしたことには細かく配慮してきた。捕虜にあっても騎士として、そしてエウロパ貴族としての誇りを保つべきだというのが彼等の考えであった。
「非常に効果的だな」
「戦争に参加している将兵に対しては大幅に給与を増やしてもいたそうです」
元々連合軍は艦艇に乗る者にもパイロットにも手当てを行ってきている。これに戦争に参加した場合の手当ても付けているのである。その為彼等の給与はかなりのものとなっている。
「掠奪等を防ぐ為か」
「元々は人員確保の為の高給であったそうですがそれもあったようです」
「そしてそれは成功した」
「はい。軍律だけではありませんでした」
「それを考えるとこの美貌の長官殿は実にバランス感覚の取れた人物だな」

シュヴァルツブルグはまた写真を見た。
「そこまで考えているとはな」
「しかもこの若さで」
「どうやら我々は思いも寄らぬ強敵を相手にしていたらしいな」
「はい」
ローズはその言葉に頷いた。
「八条義統という男を」
「この男、エウロパにとって忘れられない男となるだろう」
「強敵として」
「考えようによってはあのチンギス＝ハーン率いたモンゴル以上のな。だが今度は軍人ではない」
「政治家です」
「将来この男が怪物とならないことを祈る。我々では対処しきれない存在にはならないことをな」
その言葉は重いものであった。それはそのままエウロパの重苦しい空気となっていた。それはエウロパ全体を包み、その中には占領地も含まれていた。

## 第十八部第一章　舞台の移転その六

占領軍としての連合軍は明朗でかつ規律正しい軍隊であった。だがここにきて空気が微妙に変わってきているのを市民達は感じていた。

「何か妙だな」

市民達は連合軍の将兵達を見て言った。

「最近外出している奴等の数が減っていないか」

「そうか？あまりそうは感じないけれどな」

「いや、実際に」

パン屋を経営している親父が言った。

「客が減ってるんだよ」

「そういやおっさんのところ前みたいにしょっちゅう一時閉店にはならなくなったな」

「そうだろ？やっぱり連中は減ってるんだ」

この親父のパン屋も連合軍の将兵達によってしょっちゅう閉店に追い込まれていたのである。とにかく彼等は食うのである。それはまるでバイキングの再来だと言われていた。

「他の店でもそうじゃないかな」

「そうかね」

「まあわしのところではそうだよ」

親父はまた言った。

「少なくともな」

「ふうん」

「けれど何で減ったんだ？」

若い男が言った。

「減るにはそれなりの事情があるだろ？」

「撤退でもしてるんじゃないのか？」

「そんな話は聞いたことがないぜ」

だがそれはすぐに否定する言葉が出て来た。
「俺軍港に勤めてるのは知ってるよな」
「ああ」
「いつも連中の艦艇は見ているんだがそれはなかった」
「そうなのか」
「あと最近連中は街よりも停泊地に施設をもうけてそこで遊んでるみたいだ」
ふとそう言う。
「施設でか」
「ああ。それで街にはあまり行かないようにしているみたいだな」
「それで減ったのかもな」
「そうかもな。けれど今まで街に出て遊んでいたのにな」
そうなのだった。街で派手に飲み食いするのが連合軍なのだ。その食いっぷりがバイキングのようだとも言われている。
「街に出られない事情でもあるのかね」
「基地にいかきゃならんような」
「だとしたら何でだ？」
疑問はそこであった。
「基地にいなければならない事情は。問題はそこだよな」
「何だろうな」
エウロパの市民達もそれについて考えはじめた。
「何かありそうだけれどな」
「また戦争でもやるつもりか？」
「それだったらもっと物騒になってるだろ」
その中の一人が言った。
「それはないさ」
「じゃあ何だ？」
「さてな。ただ一つ気になることがあるんだ」
「何だよ」
皆軍港に勤めている者に対して問うた。

「最近連合の連中掃除ばかりしているんだ」
「掃除！？」
「ああ、基地とか艦艇とかな。やたら磨いたりしているんだよ」
そう答えが来た。
「ふうん」
「どういうわけかわからないがな」
「セレモニーでもするのか？」
「だったら基地に篭ったりはしないだろ。それに宣伝もするだろうしな」
「そうだよな。じゃあ何だ？」
「わからないな。何をするつもりなんだか」
首を傾げる。そこに一人が言う。
「ただ一つ言えることはあるな」
「何だ？」
「掃除をしてるってことは戦争をするつもりはないな。別の事情でだ」
「そうなるか？」
「物資は積み込んでいないんだろ？」
そこが指摘される。これは重要なポイントであった。
「ああ」
「だったら大丈夫だ、安心していい」
「そうか」
「エネルギーや弾薬をどかどか積み込んでから騒ごうぜ。今はいい」
「じゃあ今まで通り接しておいていいな」
結論の一つが出た。
「だろうな。とりあえずは」
「何をするつもりかはわからないがな」
とりあえず彼等はこれで話を終えた。そして戻っていく。その頃連合軍は軍港に勤めている者が言った通り掃除に専念していた。艦の至る所で掃除用ロボットが動き回っていた。

## 第十八部第一章　舞台の移転その七

「おい、そっちは終わったか？」
青い作業服の上級下士官が若い下士官に尋ねていた。
「はい、今丁度」
「よし、じゃあ今度はこっちに回してくれ」
「はい」
見れば下士官や兵士だけでなく紫の作業服の将校まで雑巾やモップを持っている。連合軍では将校も指揮をしながら掃除をすることになっているのである。エウロパとはここも違っていた。
その中には艦長もいる。彼等は主に艦橋や自室の掃除にあたっている。
「艦橋も終わったな」
「はい」
部下達がそれに頷く。
「では次はそれぞれの居住区だ、いいな」
「わかりました」
下士官及び兵士達はそれを受けて艦橋から下がる。艦長はそれを見て少し笑った。
「空母の掃除がこんなに大変だとはな」
「全く。色々とありますな」
副長がそれに応えた。
「案外飛行甲板の掃除は楽ですが」
「あそこはロボットですぐだからな」
「そうですね。整備班は艦載機に専念していますし」
「後はトイレにシャワールーム、そして浴室か」
「そっちもロボットが」
連合軍の艦艇は大形である為掃除もそのかなりの部分を機械に頼っているのである。バクテリア等も使っている。機械だけでなく生

物も使うのがこの時代の掃除であった。
「はい、もう回しています」
「早いな」
「うちの兵士達は優秀ですから」
副長は笑って応えた。
「もう素早く済ませてくれましたよ」
「そして正確にか」
「はい」
副長は頷いた。
「急な話でしたがね。それでも不平を言わず」
「それは有り難い。だが確かに急だな」
「そうですね、大掃除の達なぞ」
連合軍ではこうした達が多い。掃除の非常に多い軍隊でもある。
「うちの艦隊だけではないらしいしな」
「というとエウロパにいる全軍でしょうか」
「そのようだ。他の惑星の艦隊のことは知らないが」
「何かあるのでしょうか」
「要人が来るとかか」
艦長は言った。
「それもビッププクラスが」
「既に制服組のトップは何人もここにおります」
宇宙艦隊司令長官であるマクレーンと参謀総長である劉を筆頭としてだ。エウロパには多くの元帥や大将が来ているのである。
「それより上でしょうか」
「おそらくな」
「では」
また問う。
「各国の首脳か、若しくは」
「中央政府ですか」
「各国の首脳ならばここまではしないだろうな」

「視察先の部隊だけでしょうね」
「そうだろうな」
艦長は副長の言葉に頷いた。確かに各国の首脳達の視察ならばここまではしない。その視察先の部隊等だけで済む話である。だが今回はどうも違うのである。だから彼等も考えるところがあるのだ。
「では中央政府か」
「そうなると思います」
副長は言った。
「前から噂は出ていましたね」
「そうだな。ここ最近」
「オリンポスで講和条約を結ぶと」
「オリンポス入城か」
艦長はそこに思いを巡らせる。思えば快挙である。
「そして城下の盟を誓わせる。勝利を宣伝するにあたってこれ以上ない姿です」
「同時に歴史的名場面ともなる」
「連合に招くよりは。そちらの方がいいでしょう」
「地球よりもか」
「それはそれで絵になると思いますがね。彼等が去った惑星に連れて来て条約を結ぶ」
そういうことである。連合もまたそうした政治的なショーを望む一面があるのだ。
「しれもそうだな」
「しかしオリンポスで結んだ方が絵になるでしょう。我々の目標はオリンポス占領でもあったのですし」
「そのオリンポスに入る」
「格好はつきます」
副長はまた述べる。
「格好か」
「政治にも格好は必要ですし」

「それはわかる」
艦長はこれにも頷くものがあった。これは身だしなみに常に五月蝿く言われる連合軍の将兵達にとってはわかる話であった。連合軍の基地では至る所に鏡がある。そこで身だしなみをチェックさせられているのである。

## 第十八部第一章　舞台の移転その八

「我々にとってはな」
「はい」
「それを絵にするか」
「演出としてよいかと」
演出は軍においてこそ最も重要である。軍は見せるのも仕事だからだ。
「その為に我々の艦艇もこうして掃除をする」
「まあ我々のこれはビップ達が見るからでしょう」
「まあそうだろうな」
「何かあると掃除があるのが連合軍ですし」
「全くだ。掃除掃除と」
艦長は苦笑いを浮かべた。
「これで商売ができそうだな」
「ははは、確かに」
副長もそれを聞いて笑った。
「とにかく何かあれば大掃除ですからね」
「戦闘のない場合は毎日掃除をしているしな」
「マウリア軍の留学生達が驚いていますよ、何で連合軍はこんなに掃除が多いのかと」
そもそも連合軍の掃除が異常に多いのだ。日本軍出身の八条がそうしたことを徹底させているからでもあるが。
「それと身だしなみか」
「とにかく五月蝿いと。まるで何処かのお嬢様学校だと」
「では我々はいい婿になれるかな」
「さて、それは」
だがそうはいかないのが現実である。
「どうでしょうか。少なくとも私は自分ではそうではないと思って

おります」
「私もだな」
艦長も言った。
「女房にはいいとは思われてはいないだろうな」
「私もですね」
「アイロンがけや掃除だけではな」
「いい亭主にはなれないものです」
「料理を出来ても駄目らしいぞ」
「洗濯が出来ても」
結局妻にとってよい夫とはそれぞれの理想の具現化なのである。だがそうそうそんな夫はいないのが現実である。夫は夫で別の人格であるからだ。妻の分身でも人形でもないのである。
「女房程注文の多い客はいない」
「全くです」
二人は頷き合った。そしてまた話を戻した。
「とにかく掃除は予定通り進めていこう」
「はい」
「ビップが来る直前にまたあるだろうがな。とりあえずは今を終わらせよう」
「わかりました。では」
「うむ」
こうしてこの空母はそのまま掃除を進めさせた。エウロパにある全艦、全部隊でそれは行われていた。これは連合軍統合作戦本部が直接指示を下したものであった。バールはその報告を自身の執務室の机で聞いていた。
「そうか、掃除は進んでいるか」
「はい」
報告に来たスーツの男がそれに応えた。どうやら彼は文官であるらしい。
「順調であります」

「我々にとっては専門の一つだからな。順調にやってもらわなければ」
「連合軍の仕事の一つだったのですか、掃除は」
「掃除だけではないぞ」
バールはその文官に対して言った。
「パーティー会場の設定に御客様へのサービス、災害救助」
彼は言葉を続ける。
「そういったものは全て我々の仕事だ」
「戦闘よりそちらが重要というわけではないと思いますが」
「ところがそうではない」
バールは彼に対してまた言った。
「我々は戦争がなければそちらの方が主な仕事になる」
「そんなものですか」
「そうだ。・・・・・いや、知らないのか？」
「申し訳ありませんが元々国防省の人間ではありませんので」
文官はバールの問いにこう述べた。
「そうしたことには」
「元は何処にいたのだ？」
「銀行です」
彼は言った。
「エクアドルの銀行に。研修で参りました」
「銀行から国防省にか」
バールはそれを聞いて不思議そうな顔をした。

## 第十八部第一章　舞台の移転その九

「また研修先としては変わっているな」
「採算について勉強する為だそうです」
「採算！？」
「はい。軍という組織は出費だけで収入がありませんね」
「確かに」
それが軍という存在である。極論すれば将兵もまた消耗品なのである。そこにある全てのものが消耗品であると言っていいのだ。
「それを見て来いと。それで派遣されました」
「また面白い銀行だな」
「その前は財務省に派遣されました」
「ふむ」
「といってもこちらではなくイスラエルの方ですが」
「イスラエルか」
バールはそれを聞いて怪訝そうな顔をした。
「大変だっただろう」
「あまり機密には触れていないので詳しいことはわかりませんが」
「機密に触れようとしたら今ここにはいなかったかもな」
「そうかも知れません」
エクアドルの銀行員はバールのその言葉に賛同した。
「あの国はまた特殊ですから」
「その歴史と共にな」
「はい」
「色々とある国だ。少なくとも私にはわからない部分が多い」
「閣下はモンゴル出身でしたね」
「そうだ」
それに頷いた。
「そこで遊牧をして暮らしていた」

「遊牧民だったのですか」
「若い頃は、だがな。軍人になってからは流石に違う」
「そうですか。やはり遊牧はいいものですか？」
「モンゴル人にとってはな」
彼は言った。
「やはり遊牧こそが最もいい生活だ」
これは昔からの血であろうか。モンゴル人はやはり遊牧という考えがこの時代にも残っているのである。
「羊を追い、草原で暮らす」
「はい」
「それこそが最もいい生活だ。モンゴル人の故郷だ」
「パオで暮らして、ですか」
「よく知ってるな」
バールはパオという言葉を聞いて目を細めた。モンゴル人の住居でありテントの一種である。
「あの中で寝起きしていたな、かっては」
「何でも中は暖かいそうですね」
「そうだな。夏は涼しいしな」
彼は答えた。
「そして起きたらそこから出て馬に乗る」
「快適そうですね」
「その馬もペガサスやユニコーンの場合もある」
「空を飛ぶのですか」
「そのかわり落ちたら普通の落馬よりも遥かに危険だがな」
そう言いながらも顔は笑っていた。
「しかしそれでも空を駆るのはいいものだ」
「一度乗ってみたくなりましたよ」
銀行員もそれを聞いて目を細めさせた。
「気持ちいいのでしょうね」
「そもそも馬に乗ること自体がな」

それがバールの答えだった。
「いいものだ」
「成程」
「軍人を退いたらまた戻る」
これが彼の老後の夢だった。草原の民は草原に戻る、そういうことである。
「遊牧生活に」
「そして馬や羊と一緒に暮らすつもりだ。草原でずっとな」
「モンゴルにも都市はありますよね」
「ああ」
彼は応えた。

## 第十八部第一章　舞台の移転その十

「しかし草原の方がいいのですか」
「モンゴル人にとってはな」
「遊牧ですか、やはり」
「チンギス＝ハーンの時代から、いやそれ以前からか」
その言葉に懐かしさが混じっていた。
「我々は草原で生き、草原で暮らしてきた」
中国の北にあるモンゴルの大平原。そこが彼等の住処であった。冬は厳しく夏は暑い。人が生きるにはあまりにも過酷である。だがそこで彼等は暮らしてきたのだ。その過酷な場所が彼等を育ててきたのである。
「そして遊牧をしてきた。それだけで充分だと思うが」
「御言葉ですがあまりピンときません」
銀行員はこう返した。
「私は。街で生まれ育ってきましたので」
「なら仕方ないか」
バールはそれを聞いて少し寂しそうに笑った。
「街も農園も。草原ではない」
「はい」
「草原のことは草原でしかわかりはしないからな」
「その草原に戻られるのですか」
また問う。バールはその問いに笑って応える。
「君が研修の後銀行に戻るのとはまた違うがな」
「ははは、確かに」
「故郷に帰るんだ。そしてそこで死ぬまで暮らす」
「何処かに再就職はされないのですか？」
「モンゴル国軍にでもか？」
「統合作戦本部長ともなれば引く手あまただと思いますが」

「確かに再就職はする」
彼はそれは認めた。
「では」
「だがそこが遊牧なのだ」
そしてこう言ってくすりと笑った。
「遊牧が我々の仕事」
「羊を追い、乳を搾るのが」
「今から楽しみだ。馬乳酒があるな」
「名前は聞いたことがあります」
モンゴル伝統の酒である。馬の乳から作った酒である。あまりアルコール度は強くはないがモンゴル人達はこの酒を浴びる様に飲む為かなり酔うのである。
「あれはこうした場所で飲んでも美味くはないんだ」
「そうなのですか」
「普段から飲んでいるがな。やはり街で飲むものではない」
「草原で、ですか」
「そうだ。あの酒もまた草原で飲むのがいい」
彼は言った。
「それはわかるだろうか」
「これまた御言葉ですが」
「やはりわからないかな」
「はあ。あの酒は飲んだことがありませんし」
そう答える。その表情は本音のものであった。
「今では普通に街にも売っているがな」
「私は酒に関しては実は偏食家でして」
「何を飲むのだ？」
「コニャックです。それ一本です」
「コニャックか」
中々面白い酒が出て来た。
「はじめて飲んだのがあれで。そして今までずっとコニャックです」

「あれも悪くないがな」
「妻と酒は一つと決めておりまして」
「エクアドル人にしては珍しいな」
バールはそれを聞いて顔を崩した。
「酒はともかく妻は一つというのは」
エクアドルの男は遊び人とされているのである。それでエクアドルの女は常に焼き餅を焼いているのである。もっともこれは連合どころか人類社会全てで言えることであるが。浮気は女がするものより男がする場合が圧倒的に多い。そして焼き餅を焼くのが女の仕事なのである。
「いや、案外多いものですよ」
銀行員はバールにそう反論した。
「そうした男も」
「私の知っているエクアドルの男はどれも遊び人だぞ」
「まあそうした輩もいますが」
「もっともモンゴルの男もだがな。金内相に睨まれそうな奴ばかり知っている」
モンゴルの男はおおむねおおらかである。草原で生きている為そうなっていったとも言われている。この時代の草原での生活はかつてのそれとは全く違うのどかなものになっている。科学技術の進化がそうさせたのだ。
「あの内相は男女関係にも五月蝿いそうですね」
「あの人はまた特別だ。内務省は要塞と化している」
「はい」
「君には案外合っているかも知れないが」
「冗談じゃないですよ」
彼は口を尖らせてこう言い返した。
「あそこだけは勘弁して欲しいです」
「そんなに嫌か」
「うちの銀行ではあそこへの研修は罰ゲームとさえ言われています」

「評判が悪いのだな」
それを聞いてバールは顔を顰めさせた。
「悪いとかそういう問題ではなく。息が詰まります」
「入っただけでそれがわかるしな」
「あの厳格な空気に耐えられないのですよ」
「国防省でもそれは有名だ」
「それに引き換えここは穏やかですね」
「長官が優しいからな」
バールはそれに応えて言った。
「軍律は厳しいがそれ以外は」
「成程」
「おおらかなものだ。ここが気に入ったみたいだな」
「イスラエル財務省みたいなことはないですね」
イスラエル財務省は厳格で有名だ。連合の影の実力者の金庫番だけはある。
「あそこは内務省の様な感じか？」
「かなり違いますね」
上を向いて考えながら述べた。
「緊張した空気があったのは事実ですが」
「内務省の様な厳格な空気ではない」
「影を感じるものではありました」
「影か」
それを聞いたバールの顔が微妙に動いた。

## 第十八部第一章　舞台の移転その十一

「一筋縄ではいかない国だしな」
「一筋どころか二筋でもいかないかと」
それだけイスラエルは連合の中で厄介な国だと思われていた。連合の影の支配者、裏の実力者と呼ばれることも多い国なのである。
「我がエクアドルもあの国には苦戦のしっぱなしですし」
「強いか」
「強いというよりは強かです」
彼は述べた。
「あの国の場合は」
「強かか」
「そうでなければ連合の中でもあそこまではなれません」
「それはそうだな」
バールはそれにも頷いた。
「あの国の力は隠然たるものがある」
「はい」
「そしてそれを作り上げ、支えているのは確かに彼等自身だ」
「我々も彼等には苦戦続きです」
「百戦錬磨の銀行員でもか」
「まあ私は下っ端ですけれどね」
くすりと笑って言う。
「次期頭取のスタッフの端役に過ぎません」
「それでも大したものだと思うが」
「所詮はスタッフですから」
「いずれは違うと」
「いえ、そこまでは考えておりません」
だが謙遜か分をわきまえているのかこう述べた。
「私は権力志向ではありませんので」

「そうか」
「今の地位で満足しておりますよ。おそらくこれからもね」
「ふむ」
その言葉を聞いて頷く。
「次期頭取も分別のある方ですし」
「その次期もまたイスラエルに苦しめられていると」
「残念ながら」
彼はそれを認めた。
「中々辛いものがあります」
「最近金融業でまたユダヤ系の力が増大しているのは聞いている」
「我々はまだいいですが小国はもっと苦しいようです」
「そこから攻めてきているのか」
「どうやら。そちらではどうですか？」
「我が国はそれ程でもないようだな」
バールはそう答えた。
「大国にはあまりちょっかいを出していないらしい」
「そうなのですか」
エクアドルは連合においては中流国家のかなり上の方である。それなりの人口を持ち、連合設立以来のメンバーであり地位も高いものがある。また国も豊かだ。
「我が国にも手心を加えているのでしょうか」
「だからここでぼやく程度のことで済んでいるのではないのか？」
「ははは、確かに」
それを聞いて笑った。
「あの国が本気になって攻めてくればアメリカでも只では済まないでしょう」
「アメリカは特にそうではないのか？」
「というよりも逆らえませんか」
これはアメリカの特殊な事情による。アメリカはその建国以来ユダヤ系の移民が多く入って来ておりその力は隠然たるものがあるの

である。知識人や金融業、映画界には昔から多く、かなりの資金と情報を手にしている。二十世紀のイスラエル建国以来アメリカはイスラエルには何も言えなかった。若し言えばそれだけでその政治家の政治生命は終わりだとさえ言われてきた。ユダヤ系の資金と集中豪雨的な票がなくなるだけでなく、ネガティブキャンペーンも盛んに行われるからだ。それだけアメリカにおいてはユダヤ系の力が強いのだ。

もっとも連合では殆どの国において多少の程度こそあるがどの国にも見られることである。ユダヤ人達は連合設立にも大きな貢献があったと言われている。そしてエウロパにいた全てのユダヤ人達が連合に移っていた。彼等の資金と情報網、頭脳等を失った欧州はかなりのダメージを受けたとさえ言われた。その資金と情報網、頭脳を以って彼等は連合に根をおろした。そして今に至るのだ。彼等は連合の影の実力者となり、各国にもネットワークを張っていたのだ。アメリカだけでなく中国、ロシア、他の国々にも。どの国もイスラエルとは正面から渡り合うには勇気が必要であった。それだけの力がイスラエルにはあった。

「他の国も」

「表立ってはな」

「はい」

「特に今はな」

「烏がいるからですか」

イスラエル首相であるルカ＝サッバティーニである。彼はそのイスラエルの中でもとりわけ強かな人物と言われている。

「彼がエウロパにいなくて本当によかった」

「はい」

これはバールも彼も同じ意見であった。

## 第十八部第一章　舞台の移転その十二

「若しあちらにいればこの程度で済まなかっただろう」
「スパイにしろそうですね」
サッバティーニが最も得意とするのは謀略と情報収集であるとされている。将にイスラエルを象徴するような政治家であると言えた。
「ステッラも捕まえることは出来なかったろうな」
「おそらくは。そしてより巧妙に工作を行っていたことでしょう」
「彼はある意味天才だ」
バールは言った。
「あそこまで巧妙に出来るのだからな」
「敵でなくて何よりでした」
「もっともエウロパも決して弱くはなかったが」
「はい」
また頷く。
「むしろ手強かった。もう少し楽にいけると思ったのだがな」
「義勇軍の存在にも助けられましたね」
「彼等の存在は大きかったな」
バールもそれは認めた。
「正直彼等なくしてはここまで戦えなかった」
「私もそう思います」
どうやら銀行員でありながらそれなりの軍事的素養もあるらしい。
「その分彼等の損害も多かったがな」
「正規軍と比べると結構高い割合だそうですね」
「そうだ」
バールはそれに頷いた。
「戦死者もかなりのものになっている」
「ですがニュースや話題にはなりませんね」
「そういうものだ」

だがバールはそれには冷淡な言葉を述べた。あえて冷淡にしているようであった。
「彼等は正規の連合の者ではないからな」
「難民だから、ですか」
「市民権は持っていてもな。彼等は異邦人だ」
「異邦人ですか」
その言葉が出ると自然と気が引き締まる感じがした。
「我々から見ればな。だから話題にもならないのだ」
「彼等にとっては嫌なことでしょうね」
「それを承知で来ているのだ。その異邦人でなくなる為にな」
「それは果たせていますか？」
「果たせていれば話題になる筈だ」
バールは述べた。
「それがなっていないということがどういうことか・・・・・・。言うまでもないな」
「はい」
「これもまた現実だ。いいか悪いかは別にしてな」
やはりバールはわざと冷淡に述べた。それを強調することで言外に何か言いたいようにも思えた。
「連合は多様な世界だ」
「ええ」
「しかし。受け入れられていないものもある」
そうした意味でイスラエルもまた連合の中にいるのである。少なくとも彼等は『連合に』おいて影の実力者と言われていた。異邦人ではないのである。長い間欧州において異邦人とされていたがこの時代の連合では違っていた。彼等もまた連合の一員であったのだ。
「一つはエウロパ貴族主義」
「あれだけはね」
認められる筈がなかった。それへの反発、アンチテーゼが連合の一面であるからだ。

「そしてマウリアだ」
「あれは特別でしょう」
銀行員はこう言って苦笑した。マウリアは連合にとっては完全に異世界であった。そうした意味で連合とマウリアは決してわかりあえない世界同士なのである。
「最後にサハラだ」
「そういうことですか」
「彼等もまた異世界だからな」
「そしてその異世界からこちらにやって来た難民達ですか」
「その彼等が受け入れられるにはかなりの時間がかかる」
バールは静かに述べた。
「彼等がここに入りたいならばな。多くの努力と共に」
「彼等がどう思っていようとも」
「確かに連合にもイスラムはある」
「ええ」
銀行員は頷いた。
「私の知り合いにも多くおります」
「だが彼等は連合のムスリムだ。サハラのムスリムではない」
「同じムスリムでもですか」
「全然違うものになっていると思うが」
「それも確かにですね」
彼もそれに頷いた。
「連合のイスラムは穏やかです」
「うむ」
「それに対してサハラのイスラムは」
「同じスンニー派でも全然違うな」
「同じ派とは思えない程です」
「私もそう思う」
バールも同意であった。
「やはり環境の違いかな」

彼はふと呟いた。
「連合とサハラの」
「彼等は砂漠の惑星が多いそうですね」
「それに対して我々は様々な惑星がある」
「はい」
「あと地形もな」
サハラの宇宙地形の複雑さは彼等も承知している。
「我々と彼等では別世界と言っていい」
「彼等のそれの方がかなり過酷ですね」
「そうだ。そうしたことが信仰にも出ている」
これは本当に見られることだ。何時になっても信仰は存在しているからだ。無神論者であっても教会や寺院に参るのが連合であったりする。
「我々やエウロパが多くの宗教を持っているのに対して」
「彼等はアッラーのみだ。他の宗教はあったかな」
「ほぼイスラムで統一されているようです」
「アッラーの他に神はなし、か」
「そういうことですね」
これは地球にいた頃から変わりない。アラビア人の信仰とはイスラムへの信仰に他ならないのである。
「神は一つ、アッラーのみ」
銀行員は再び言った。
「他にはないということですね」
「そうなる環境がサハラだ」
バールの言葉は鋭かった。

## 第十八部第一章　舞台の移転その十三

「ユダヤ教の起こりは知っているな」
「ええ、まあ」
いきなりユダヤ教の話が出て戸惑ったがそれに返した。
「荒野の遊牧民の間で生まれた宗教です」
「そうだ」
当時ユダヤ人達はシオンの荒野にいた。そこで放牧と農業を営んで暮らしていた。放牧の方がメインであったのはカインとアベルの話にある通りである。
「そこではまずリーダーシップが必要だ」
「はい」
「全てを纏める様な、な。信仰もそうだった」
「そして一神教となった。有名な話ですね」
「うむ」
ユダヤ教が一神教となったのはこうした経緯があってのことである。信仰というものも決して自然には生まれないのである。そこには必ず原因と結果がある。ユダヤ教もまた同じである。
「そしてキリスト教とイスラム教はそこから生まれた」
「歴史が言う様に」
「森の中の宗教となったキリスト教と違いイスラムは砂漠で生まれた」
「だからこそ一神教として更に徹底したものとなったのでしたね」
「そして今もな。彼等は砂漠にいる」
「砂漠に」
「イスラムを生んだ砂漠に。だから信仰もそのままなのだ」
バールの言葉は深い歴史への知識に支えられたものであった。
「そういえばエウロパの信仰はかなり変わりましたね」
「かってはキリスト教のみだったがな」

「ええ」
「今ではギリシアや北欧の神々も復活している。一神教だけではなくなった」
「ケルトの神々は復活しませんでしたがね」
「エウロパにはもうケルト人はあまり残っていなかったからな」
バールは少し寂しそうにこう述べた。
ケルト人達はかつてはフランスやスペイン、イギリス等にいた。そこでローマと激しく対立していた。だがポエニ戦争やカエサルのガリア征服を経てその領域を狭め、遂にはイギリスとアイルランドに残るだけとなった。そのイギリスでもノルマン人達に支配され、庶民階級となっていた。欧州では征服民族が貴族となる。従って貴族と平民では元々の民族が違うのである。異民族支配であると言ってもいいし、カースト制に似ていると見ることも可能であろうか。事実貴族の階級が上に行けば行く程混血していない。後には王族同士での婚姻が盛んとなった。ハプスブルク家のそれに様に。
ケルト人達は下級に落とされた。そしてアイルランドでも征服された。後のジャガイモ飢饉でかなりの数が飢え死にし、そしてアメリカに移民した。この時代ではアメリカを中心にかってのケルト人達が連合に多く存在する。それに対してエウロパでは僅かとなっている。
「それは致し方ない」
「そうなりますか」
「宗教も移動するからな」
バールはまた述べた。
「そして神々も」
「古代エジプトやメソポタミアも神々もそうですな」
彼等も今は連合で信仰されている。
「私もその中の神々の一柱を信仰している」
「それは一体」
「ラーだ」

彼は言った。エジプトの主神とされ太陽を司る年老いた神である。
「モンゴルでは太陽への信仰が昔からあるからな」
「テングルへの信仰もですね」
「その通りだ」
テングルとはかってのモンゴル語で天を意味する。モンゴルでは自然への信仰があり、その中でも天空への信仰が強かったのである。
「その関係でラーを信仰している。他にも信仰しているものはあるがな」
「成程」
「君もそれは同じだろう」
「一応キリスト教徒ではありますが」
彼はそう問われて言葉を返した。

## 第十八部第一章　舞台の移転その十四

「イシュタルやイシスも信仰しています」
「ルーツは確か同じだったな」
「はい」
　イシスがメソポタミアに入りイシュタルになったとされている。そのイシュタルがフェニキアでアスタルテとなり、ギリシアでアフロディーテとなったのである。
「後キュベレイも」
　古代中央アジアの地母神の一人である。ローマでも深く信仰された。
「女性神が多いな」
「母の影響で」
　彼は答えた。
「女神への信仰が強くなりました」
「そうか、親御さんの影響か」
　信仰ではこうしたケースが多い。親の信仰に賛同するか反発するか別れるがいずれにせよその信仰の影響を受けているのである。
「信仰に五月蝿い母親でしたので」
「エクアドルではカトリックの力が強かったな」
「教会も多いですよ」
「らしいな。行ったことはないので本で読んだだけだが」
　バールは述べた。
「まあ確かに教会は多いですね」
「ふむ」
「他にも色々な宗教がありますが」
　それが将に連合的であった。多くの宗教が共存しているのである。悪く言えば雑多に存在している。
「ですがサハラはモスクがあるだけですね」

「そのモスクが全てだ」
バールは言った。
「彼等にとってはどんな宗教もイスラムには適いはしない」
「はい」
「宗教は一つ、神は一つだ」
「イスラムとアッラー」
「ただし、ジズヤを納めれば許される」
ここで悪戯っぽく笑った。
「そこがかってのキリスト教と違うな」
「強制はしませんからね、彼等は」
「ただしイスラムを信じなければ地獄に落ちる」
「そして信じれば様々な特典がある」
ここで特典という言葉が出た。
「そこが凄いと思う。実際連合にも多くのムスリムがいるのは事実だ」
「かなり形は違っていてもですね」
「同じムスリムであることには変わりはないということだな」
確かにその通りではあった。だがこれはあくまで連合からの見方であり、サハラから見れば少しばかり違っているのだが。彼等には彼等の見方が存在する。
「ですが彼等は異邦人です」
「悲しいことにな」
先程のサハラからの難民達、そして義勇軍の将兵達のことである。
「扱いに困ることは事実だな」
「彼等には達は出していますか？」
「掃除等のか」
「はい。そちらはどうなっていますか？」
「一応出してはいる」
バールは答えた。
「彼等も連合軍の一員であることには変わりがないからな」

「それで宜しいのではないでしょうか。差別するわけにもいきませんし」
「だがやはり世界が違うな」
それがバールの懸念であった。
「正規軍と義勇軍では」
「彼等の中でその達が変わっている可能性があると」
「そう思う。我々はあくまで連合の基準で語っているが」
「彼等はそれをサハラの基準で考え、行動する」
「そこが問題だ。そしてそれがトラブルにまで発展しなければいいがな」
「今のところそうした話はありませんがね」
そう前置きを入れる。
「彼等の戦いぶりには感謝しているのも事実だ」
「はい」
「だがそれ以上に。異邦人の存在がこれ程厄介なものだったとはな」
「正規軍との軋轢もですか」
「それはあまりないのだがな」
「では一体」
そこを問うた。
「彼等への感情だ」
「感情」
「皆口に出しては言わないが彼等を仲間とは思ってはいない」
バールもそれに気付いていたのである。

## 第十八部第一章　舞台の移転その十五

「客人、若しくは駒だと思っているな」
「そうなのですか」
「確かに彼等には侵攻の際の先陣を務めてもらった」
それは認めた。
「だが。私は消耗品として扱ったつもりはない」
少なくともバールはその様な男ではなかった。彼等を人間として考えていたのである。
「彼等もまた連合軍の将兵だ」
「ですが前線の将兵達は彼等に厄介ごとを押し付けた感じがある、と」
「そう思われないか」
「それは」
彼にもそれは否定出来なかった。
「真っ先に火事場に飛び込んでいたのは常に義勇軍だった。前線への偵察も義勇軍だった。そして犠牲の多そうな戦場に参加するのもな」
「嫌な仕事は全て彼等に押し付けていたと」
「そう思う。前線の将兵達がそれを意識しているかどうかはわからないが」
「リバーグ元帥は義勇軍と正規軍の交流を積極的に進めているそうですが」
「彼らしいがな」
リバーグはその時の道徳には極めて忠実な男である。気が利き、そして何かと動く人物として知られている。
「だが裏を返せば交流を進めざるを得ない状況でもあるということだ」
「確かに」

「目には見えない溝がある。それを見ているとな」
バールの顔が曇る。
「問題は深刻だ」
「対処する方法はあるでしょうか」
「すぐにはないな」
彼は答えた。
「時間が解決する問題だろう」
「時間が」
「彼等が連合に入ってまだ僅かな時間しか経っていない」
バールは言う。
「まだ連合に入っていないのだ、まだな」
「彼等自身も」
「そして我々も受け入れていない。その垣根を取り除くには」
「時間が必要なのですか」
「人間というのは厄介なものでな」
バールはさらに言う。
「そうおいそれと変わることは出来ない」
「はい」
「特に悪い癖をなおすのには時間がかかる。差別や偏見といったものもな」
「そういうものですか」
どの時代、どの場所でも同じことであるが連合でも差別や偏見は存在する。人種や宗教、職業での偏見は克服した連合であるがそれでも差別はあった。この差別は異文明への偏見や差別である。義勇軍の問題こそそれであった。
「ただ、彼等が認められているのもまた事実だ」
「ええ」
今回の戦いにおける義勇軍の活躍は多くの者の認めるところであった。常に前線に立ち獅子奮迅の働きをした。これにより連合の大勝利はなったとさえ言われている。圧倒的な物量と装備、そして補

給システムやダメージコントロール能力を誇るが実戦経験は皆無と言っていい連合軍がサハラで長い間戦ってきたエウロパ軍に戦史に残る程の勝利を収めることが出来たのは彼等が先頭にいたからであった。事実クロノス以外の戦いでは義勇軍は常にいた。彼等なくしての戦いは考えられない程であった。

「実際助けられた」

「全くです」

「我が軍の将兵は弱い」

制服組のトップとして驚くべき言葉ではある。

「一千年に渡って戦争を知らなかった。幸いと言うべきだろうがな」

「それに対してエウロパ軍は戦いというものを知っている」

「その相手に勝つことが出来たのだ。しかもごく僅かの損害でな」

これが大きいのはバールが一番よくわかっていた。制服組のトップとして。

「そうすることが可能だったのは義勇軍の為、と」

「それは前線の将兵達が最もわかっていると思いますが」

「同時にコンプレックスもあるだろうな」

「彼等に助けてもらっていると」

人間の心とはそう簡単なものではないのだ。助けてもらっているという感謝には同時に劣っているから助けられているというコンプレックスも存在するのである。連合軍も人間だからだ。

「それに体格の問題もあるかな」

「体格ですか」

「我々の方がサハラの者達よりも大きいな」

「ええ、まあ」

これは事実であった。連合の者の方がサハラの者よりも大きいのである。これは統計にも出ていた。

## 第十八部第一章　舞台の移転その十六

「人間身長や体格にはコンプレックスを抱き易い」
「ナポレオンもそうであった様に、ですか」
「特に男はな」
「はい」
　ナポレオンは小男で有名であった。逆にカエサルは長身であった。ナポレオンは身長と自身の野暮ったい容姿にいささかコンプレックスがあったという。それに対してカエサルは身長や体格に関してはそうではなかった。公の場で着るトーガに気を使い、全身の毛を脱毛して髪の毛をカールにさせる伊達男ぶりであった。多くの女性を魅了したのはそのカリスマ性と話術の他にそうしたものもあったのだ。もっともそんな彼にもコンプレックスはやはりあった。そのカールにした髪の毛である。歳を経るにつれ後退していったのだ。それをどうするかが彼の終生の悩みでありコンプレックスであった。
「我々はそれで優越感を持つだろう」
「しかし彼等は逆に劣等感に捉われる」
「そして数も」
「数もですか」
「彼等は難民だ。ごく僅かしかいない」
「はい」
　彼が頷くのを見るとバールはまた述べた。
「それに対してここは我々の勢力だ。言うまでもないな」
「四兆の人の海の中にある僅かな者達ですか」
「大海原の中の漂流民と同じだな」
「今度は少数派、ですか」
「そういうことになる」
　バールはまた述べた。
「数の問題もな。重要なのだ」

差別という問題に関しては数は大きな問題となる。少数派と多数派。この差は非常に大きいのである。強者と弱者と言うべきものだろうか。だがここで重要なのは少数だから、そして弱者だから必ず正しいというものではないのである。正義も悪も非常に曖昧な定義でありそれは常に流転し、そして複数存在することもある。だから一概にこれが正しいとは言えないのである。

「彼等は圧倒的に少数派ですね」

「そうだ。難民としてな」

「こうして見れば難しい問題が非常に多く転がっていますね」

彼はそれを確認して嘆息せざるを得なかった。

「文明の違いに戦いでの感情、体格、そして数ですか」

「差別は簡単には言い表せないものだがな」

「それでもです。確かに一筋縄ではいきませんね」

「解決には長い時間がかかるか」

「とりあえず義勇軍はこれからどうされるおつもりですか？」

「最終的には正規軍に組み込むべきだろうがな」

バールはそう考えていた。

「長官もそう御考えらしい」

「あの方ですとそうでしょうね」

それはこの若い銀行員にもわかった。

「世間ずれしていないと言うべきでしょうか。そうしたことは好まれない方ですから」

これも八条の資質であった。彼はいい意味で貴公子であるからだ。

「義勇軍と聞こえはいいが実質的には難民を利用した突撃部隊だ」

「はい」

「そうした存在はな。やはり人道的ではないか」

「最初はそうではなかった筈ですがね」

いささか悲しさを帯びた言葉になっていた。バールもそれに応える。

「戦いが続くにつれて変わっていったな」

「そうですね」
「難しいものだ。確かに先陣を務めてもらうことは期待していたが」
戦争を知る者として、である。
「鉄砲玉にするつもりはなかった」
「今後はどうなるでしょうか」
「やはり鉄砲玉にせざるを得ないがな」
バールはまた苦い顔になった。
「正規軍の損害は避けたい」
まずはそれが念頭にあった。
「我々制服組や政治家だけではない。市民達は皆そう思っているな」
「間違いなく」
誰も自分の家族に死んでもらいたくはない。出来ることなら生きて帰って欲しい。だからこそそう思うのである。それに軍人や政治家にとっては戦死者の増加は彼等への批判に直結する。特に政治家は票に繋がる。批判も結局は命令に従う立場である軍人よりも受ける立場にある。だからそれは避けるべき問題であるのだ。
「誰も死にたくはない」
「その代わりに進んで前線に向かってくれる者がいれば」
「必要とするな」
「嫌な話ですね、何だか」
「誰だって我が身が可愛いものだ」
バールの言葉はシニカルなものだったが真実であった。

## 第十八部第一章　舞台の移転その十七

「だから助かるならそちらを選ぶ」
「他人がどうなろうとも」
「それが異邦人ならばな」
「余計に後腐れがない、ですか」
「人間とはそういうところがあるのは事実だろう」
やはりその言葉はシビアであった。
「君だってそうだと思うが」
「確かに」
彼もそれは認めた。
「知っている者より知らない者を犠牲にする方が人間は気が楽です」
「うむ」
「ましてや全く違う国や場所にいる者ならば」
「だからだ。彼等は前線に立たされる」
こうしたことも歴史上よくあった。正規軍と分けられて。
「はい」
「それも最前線にな。因果なものだ」
「しかし彼等は志願して義勇軍に入っているのですが」
「それは我々も同じだと思うが」
バールは言った。
「違うだろうか」
「いえ、その通りです」
「入り方は同じだ。だが扱いは違う」
「彼等が異邦人であるが故に」
「この問題は。続くぞ」
異邦人という存在は一言で済むがそれで全てを言い表せるものではないのだ。そこには実に深いものがあるのだ。
「ですね。おそらく何十年も何百年も」

「彼等が異邦人でなくなるのは時が経つのを待つしかない」
「時間ですか」
「結局それが解決してくれるだろう。最初移住してきた者が溶け込むのに時間がかかるのと同じだ」
「それの大きい話ですか」
それについても述べられていく。
「簡単に言うとな。さて、どうなるかな」
「彼等の行く末は」
「それにもう一つ来るかもな」
「もう一つ？」
「これはこれから次第だが」
バールは声を細めた。
「これから、ですか？」
「エウロパとの交渉でな。どうなるかはまだわからない」
「若しかしてバチカンのことでしょうか」
「そうだ」
彼は銀行員の言葉に頷いた。
「バチカンはな。また特別な存在だが」
「あのバチカンが連合に来るのですか」
「これから次第でだ。もっとも我々としてはこっちに持って来たいところだが」
「また工作の隠れ蓑にされたらたまりませんからね」
「宗教というものはそうしたことに使い易いからな」
これもまた真実である。だから頷くことができた。
「はい」
「信仰は心だ。人の心は利用し易い」
「だからこそ彼等は隠れ蓑に使ったのですね」
「元々バチカンは陰謀の温床だった。何があっても不思議ではない場所だ」
「ええ」

これは地球にあった頃からである。ローマ＝カトリック教会はあらゆる悪を行ってきた。虐殺に弾圧、荒淫、汚職、韜晦、その歴史は腐敗の歴史でもあるのだ。
「陰謀に使われたとしてもな。驚くことではない」
「むしろ当然ですね、あそこは」
「ステッラを送り込んできたこととといいな」
「はい」
「大人しいか、バチカンの歴史から見れば」
「そもそも無神論者の法皇がいたということ事態が異常ですが」
これは事実である。ボニファティウス八世という法皇がそれである。彼は神を信じず、祈っている者を怒鳴ったことすらあった。彼はキリストは自分すら救えなかった男だ、それがどうして他人を救えるのか、とまで言った。そしてやはりと言うべきか快楽と腐敗の中におり、権謀術数の限りを尽くしていた。法皇と言うよりは政治家だったのである。ローマ法皇は確かにキリスト教の頂点に存在するがそれ以上に多くの領土を持つ領主であり、政治家であったのだ。その権威は非常に大きなものであり、誰もがそれを狙っていた。そしてその頂点で栄華を極めてきたのである。
「かつてはな」
バールもそれは知っていた。

## 第十八部第一章　舞台の移転その十八

「あの法皇は確か政争に負けて死んでいるな」
「自業自得です」
　ボニファティウス八世はフランスの美顔王フィリップ四世と聖職者への課税問題を巡って対立し、フランス王に捕らえられたのである。神を信じていない者が聖職者への行動に対して批判するというのもブラックジョークであるが結局それは果たせなかった。そして捕らえられた。自業自得、因果応報と言うべきか。
「あの様な輩が歴代法皇には多過ぎます」
「ボルジア家にしろメディチ家にしろな」
「彼等も法皇を出していましたね」
「枢機卿もだ。ボルジア家なぞは子供までいた」
　それがチェーザレ＝ボルジア、そしてルクレツィア＝ボルジアである。ルネサンスの魔王と名花はボルジアにあったのである。その父こそ法皇アレクサンドル六世である。
「全く。腐敗の極みです」
「ましになったのは二十世紀からかな」
「そうですね。バチカン市国が成立してからです」
「ムッソリーニの功績の一つか」
　何かと悪名高い独裁者ではあるが政治家としての能力は高かった。それにヒトラーやスターリンと比べると人間味のある人物でもあった。先の二人があまりにも異様であるだけだが。
「もっとも。裏ではわかりませんが」
「裏を探っていた者が急にいなくなる、位はありそうだな」
「それで済みますかね？」
「バチカンだからな。わからんな」
「そうですね。あそこは特別です」
「エウロパの者達は謀略を好むと言われているが」

これは東のオーストリア、西のイギリスとこの時代では評されている。オーストリアがエウロパ東方に、イギリスが西方にその領土を持っている為である。他にはフランスも有名である。
「バチカンは特に、な」
「法皇の選定なぞはかなり陰惨な舞台裏かも知れませんね」
「少なくとも連合にある諸王家のそれの比ではないだろう」
「今時王位継承争いなぞあっても」
「何の意味もないものだからな」
「そうですね。プライベートがなくなりますし」
そもそもそんなものは省みられない。法皇ともなると。
「おまけに中央政府大統領より忙しいぞ」
「そうなのですか！？」
「日本の皇室はそうみたいだが」
「ああ、あそこですか」
彼はそれを聞いて納得したように大きく頷いた。
「生活そのものが仕事だからな、王室というのは」
「特にあの家は」
「正直あの家に生まれたくはないな」
「激務などというものではないですしね」
皇室のスケジュールの過密さは連合ではつとに知られている。エチオピア皇帝もまた同じである。連合で二つしかない皇帝の家として多忙な毎日なのである。
「宮内庁か、皇室のスケジュールを取り扱っているのは」
「そうでしたね、確か」
「毎回思うが。よくもあんなスケジュールを考えられるものだ」
「売れっ子のタレント以上ですね」
「神崎亜矢でもあそこまでは忙しくないだろうな」
「彼女も相当なものですけれどね」
神崎亜矢の忙しさもまた有名である。トップアイドルともなればそれこそ目の回る様なスケジュールなのはこの時代も一緒である。

「法皇も忙しいのですけれどね」
「今は多くの儀式等があるからな」
「法皇の椅子は温まる暇がない、と」
それだけ様々なことがあるということだ。宗教的にも政治的にも。
「その椅子を移動させるかどうかという話になっているしな」
「それに関して一つ思うことがあるのですが」
「何だ？」
「分裂の可能性です」
彼は言った。
「分裂」
「先程ボニファティウス八世の話が出ましたね」
「ああ」
「あの時、教会は分裂しました」
彼は言う。実際にフランスが立てる法皇とそのフランスと敵対するイギリス、そして神聖ローマ帝国が立てる法皇で分裂したことがある。これにより教会の権威は暴落した。
「そして今回も。分裂するのではないでしょうか」
「法皇がこちらに来てもか」
「あちらも法皇を立てる可能性があります」
「言われてみればそうだな」
バールもそれを認めた。
「不可能ではない」
「はい」
「心の問題だからな」
最大の根拠はそれであった。
「バチカンを移動させられるのをはいそうですか、と認めるわけにはいかないかも知れない」
「条約でそう決められたとしても」
「時間が経てばバチカンがなくなったことに耐えられなくなるかもな」

「それでは」
「いずれはそうなるかも知れない」
バールもその可能性を否定しなかった。
「その時は分裂か」
「それでいいのですかね」
「何、この場合正当性やそうしたことは問題じゃない」
だがバールはそうしたことには関心を持っていなかった。
「今回の移転はあくまで政治的原因からだ」
「はい」
「スパイの侵入や工作の温床を防ぐ為にな。確かに彼等から権威を奪い去るという目的もあるが」
政治にも宗教的権威が必要なのである。それを見越してのことであった。

## 第十八部第一章　舞台の移転その十九

「表向きはそれだ。だから彼等が別にバチカンを設けてもそれは知ったことではない」
「勝手にしろ、ということですか」
「そうだ。なおこれに関してバチカンの意見は問題ない」
バチカンの言葉は無視されることとなった。
「それは何故ですか？」
「彼等は政治的発言はしない方針だったな」
「表向きには」
実際には違う。かっては盛んに政治に関わったが二十世紀以降そうした政治的行動は慎むようになっていたのである。だが実際にはかなり関わってはいたが。
「だからだ。今回も従うしかない」
「バチカンが遂にエウロパを去るのですか」
「感慨深そうだな」
「はい。キリスト教は彼等にとって心そのものでしたから」
キリスト教の存在しない欧州なぞ誰も考えられないものである。それは彼も同じであった。
「その心の象徴が去るとなると」
「一言で言うと自業自得なのだがな」
バールは今度は素っ気無く述べた。
「工作の隠れ蓑に利用してきた。それを取り上げられるだけだ」
「はい」
「それだけだ。口で言うだけだとな」
「ですがそれは非常に大きな事件です」
「この戦争もまた人類史で非常に大きな事件だった」
「ええ」
はじまった時点で永遠に名前が残るレベルであった。空前絶後の

戦力がぶつかり合い、そしてエウロパが首都近くまで追い詰められ、総督府を放棄した。連合は大勝利を収め、そしてシャイターンは北方を完全に解放した。この時点で彼等当事者達もこの戦いが人類にとってターニングポイントになるかも知れないとさえ考えていた。
「だがこのバチカン移転はさらに事件かもな」
「まだそうなるとはわかっていませんが」
「なればだ」
彼は言った。
「そしてそれが我々にもたらす影響は」
「これまた未知数のものですね」
「どちらにしろ一つはっきりしていることがある」
「それは」
「かっては我々を見下してきた彼等がその我々の前に膝を屈するということだ」
「それだけは確実ですね」
バールは笑っていた。銀行員もそれを聞いてニンマリと笑った。
「帝国主義の時代我々の多くは彼等の前に奴隷となっていた」
「はい」
「中には本当に奴隷として売られていた者達もいた」
アフリカ等からの奴隷である。
「ありとあらゆる方法で差別され、搾取されていたな」
この時代搾取という言葉は死語であったがあえて使った。
「独立してからも。何かと馬鹿にしてくれた」
「その彼等が今我々の前に屈すると」
「いいことだ。人類は人種で優劣が決まるものではないのはもうわかっていることだが」
「ええ」
これは既に科学的にもはっきりとしていた。連合は混血が進んでいる。そして能力差とは個人によるものであり、それもある程度以上は本人の努力で補えることがわかっていた。かつての優性人種思

想といったものは完全に否定されているのである。
「実際にそれを見るのと見ないのとでは違うな」
「そうですね」
「もっとも既に数と国力では完全に差をつけていたが」
連合とエウロパの人口及び国力差のことである。これは最早言うまでもないことであった。
「それも見せ付けたかな」
「今頃彼等はオリンポスで震えているのでしょうか」
「いや、残念ながらそうではないらしい」
だが彼はそれは否定した。

## 第十八部第一章　舞台の移転その二十

「どうも今も規律を守ってそれぞれの職務に就いているらしい」
「意外ですね」
「彼等は彼等でモラルが高いということだな」
「またあの例の貴族主義ですかね」
「多分な。それが彼等のアイデンティティだ」
それは連合とは全く違うものではあるがだ。
「それだけは崩れませんか」
「それが崩れた時こそ本当に終わりだろうな」
「エウロパそのものだ」
「逆にそれさえあれば彼等は彼等であり続ける」
「バチカンがなくとも」
かつて欧州には教会はなかった。騎士道というのはルーツはゲルマンにあるのだ。そうした意味で騎士道は最初は多分に北欧的であるとも言えるものである。
「若しかするとな。そして我々と対峙し続けるだろう」
「この戦いで負けても、ですか」
「戦いは一度の戦いだけを言うものではないからな」
「ですね」
これは彼にもわかっていた。かってローマとカルタゴは三度に渡って戦ってきた。それはカルタゴが滅ぶまで行われたのであった。ローマの戦略目的は最後にはカルタゴそのものの滅亡になっていた。そしてローマはそれを果たすまで戦いを止めはしなかった。戦争というものはその戦略目的を果たすまで何度も行われる場合があるのである。
「連合とエウロパ、どちらが滅ぶまで」
「何、それはないさ」
「ないですか」

「エウロパを欲しいか？」
バールは彼に問うてきた。
「エウロパをですか」
「そうだ。欲しいと思うか？」
「いえ」
彼はその問いに対して首を横に振った。
「一千億も不穏分子を抱え込むわけにもいかないでしょう。産業も資源も我々にとって魅力的なものはありませんし」
「そうだな」
「要は彼等に手出しをさせなければいいのです。それは今度の戦争での条約で充分果たせると思いますが」
それだけで戦争防止にもなる。戦争を防ぐには手を出させないことも重要なのだ。
「逆に言えば果たさないとそれは無能になる」
「そう思います」
「エウロパにとっても連合に併合されるのは嫌だろうな」
それは言わずもがなであった。かつての奴隷達に支配されるのを喜ぶ者はいない。
「あの誇り高い彼等が我々の中に入るなんて想像も出来ませんね」
「うむ」
「以前は植民地で今は大衆達による無知蒙昧な政治が続いているこの連合に対して」
「それは貴族としての誇りが許さないか」
「どっちにしろ我々と彼等は合うとは思えません」
彼はそう結論を下した。
「併合なぞ考えられませんしあってはならないことでもあります」
「そうなるか」
「精々防衛上必要な処置を飲ませて、バチカンを譲り受けて、ですね」
バチカンの譲渡は譲れない。それが連合の願いの一つだった。

「そして賠償金かな」
「それも大して得られないと思いますが」
「エウロパの国力の問題でか」
「流石に四十倍の相手の腹を満たすなんて無理でしょう」
彼はエウロパの国力をもとに話をしていた。
「四十人相手だと。牛でも無理です」
「鯨ならともかくな」
「エウロパは精々子羊といったところでしょう」
「ラムか」
子羊の肉だ。柔らかく匂いもない非常に美味い肉だ。連合はおろか人類全体で人気のある肉の一つだ。

## 第十八部第一章　舞台の移転その二十一

「はい。ラムに四十人の腹を満たせというのはあまりにも酷です」
「賠償金も少なくなるか」
「彼等の経済的負担を増やすのはいいでしょうがそれも限度を過ぎると」
「逆にこちらにとって不利益となるな」
「何も彼等が以前犯した過ちを我々が繰り返す必要もないですしね」
ベルサイユ条約のことを言っているのである。ここで戦勝国である連合国側は敗戦国であるドイツにあまりにも多額の賠償金を押し付けた。だがこれはドイツの支払能力を越えており、ドイツ経済は敗戦の痛手と合わせて破綻した。これに世界恐慌も加わった。その結果出て来たのがナチスであったのだ。
「ここは穏健にいきましょう」
「それが我々の為にもなる、か」
「そうではないかと」
「見事な洞察だな。流石は銀行員だ」
バールはそう述べて彼の洞察を賞賛した。
「君のいる銀行は将来君により大いに発展することになるだろう」
「その際は我が銀行を御利用下さい」
彼はにこやかに笑ってこう述べた。
「その銀行の名は？」
「エンツォ銀行です」
「そして君の名は」
「お話しなかったでしょうか」
「いや、聞いていないが」
「そうでしたか。では」
彼はそれを受けて名乗った。
「スライ＝ヴァルガスです」

「スライ＝ヴァルガスか」
「はい。御見知りおきを」
彼は言った。
「そして取引の際は我が銀行をお使い下さい。モンゴルの銀行の多くとも提携しておりますので」
「わかった。ではそうさせてもらうか」
「是非」
彼は銀行員の顔になっていた。
「損はさせませんので」
「ではそうさせてもらうか。もっとも我々にはあまり財産は必要ないのだが」
「お金に関してはそうなのですか」
「悪いがな。遊牧をしていると金はそんなに必要ではないのだ」
バールはこう語った。
「都市や農村で生きるよりはな」
「それでは今後はそちらへの開拓を進める必要がありますね」
銀行員の顔のまま語る。
「どうするべきか」
「難しいぞ、中々」
バールは笑って述べた。
「草原での銀行はな」
「ですが新たな開拓地ではありますね」
「開拓地か」
バールはその言葉に注目した。
「どうやら我々の開拓地は惑星だけではないようだな」
「それは無限にあります」
ヴァルガスは語った。
「そこに何かがある限り」
そしてそれを見つけ出すことも無限であった。彼等は連合の者であった。連合はやはり動く勢力であった。そこにいる全ての者が。

それは彼等も同じであった。様々な問題を内包していても彼等は動き続けるのであった。何かを掴む為に。

# 第十八部第二章　出発その一

出発

エウロパに展開する連合軍の警戒態勢は続いていた。それは次第に緊張したものとなり彼等はその中で動いていた。そしてその理由が次第に伝わってきていた。

「今朝の新聞を見たか？」

ある艦で艦長が自室で副長に対して言っていた。他の将兵の部屋と何ら変わりのない個室であった。そこで二人は向かい合ってソファーに座っていた。

「いえ、まだ読んでおりませんが」

副長は今まで仕事をしていた。だから読んでいないのである。

「そうか。面白い記事が載っていた」

「面白い記事」

「何故最近我等の警戒態勢が厳しいかだ。それがやっとわかってきたぞ」

「確か講和会議で閣僚が何人か来るのですね」

「そうだ。そしてその人選だ」

艦長は言った。

「大統領が来られるらしい」

「大統領が」

それを聞いた副長の目が見開かれた。

「またそれは」

連合中央政府の大統領がエウロパに来るなどとは。それだけで考えられないことであった。

「にわかには信じられない話ですね」

「カバリエ外相かアッチャラーン首相だけと思っていたのですが」

「ネットでもそうした予測が主流だったな」

「はい」

副長は頷いた。
「実は私もそう思っていました」
「わしもだよ」
それは艦長も同じだった。
「まさか大統領御自らだとはな」
「はい。これは流石に」
「思いも寄らなかったな」
「そして大統領だけ、ではないでしょうね」
そこが問題であった。警護の問題が大きい。
「そうだな。単身で来られる筈がない」
「ええ」
「後二人来られるらしい」
「それは誰と誰でしょうか」
肝心なのは言うまでもない。やはり警護の問題でだ。
「一人はもう言うまでもないと思うがな」
「カバリエ外相ですか」
「そうだ。そしてもう一人は」
「誰なのでしょうか」
これは副長にはわからなかった。
「後ここに来るべき人物と言えば」
「一人いると思わないか？」
「一人」
艦長に言われてもやはりピンとくるものがなかった。
「誰ですかね、それは」
「君は勘がいいと思っていたが」
艦長はそんな副長を見て少し残念に思った。だからこそ言った。
「だがそれは戦争に関することだけなのか？」
「申し訳ありません」
「まあ我々は軍人だ。それでもいいが」
「はい」

艦長の言葉に頷く。
「それでだ。最後の一人だが」
「誰なのですか？」
「我等の指揮官だ」
「統合作戦本部長ではありませんね」
「うむ」
艦長はそれを聞いて副長のいつもの勘が出て来たと思った。
「あの方ですか」
「そう、あの方だ」
艦長はその言葉を聞いてニヤリと笑った。
「このエウロパに来られるらしい」
「考えてみれば最後の一人はあの方しかいませんね」
「わからないわけでもないと思うが」
「はい。この戦いのトップにあったのは事実ですから」
副長は言う。かなり軍人的な言葉なのは当然であった。
「軍服は着ていなくともな」
「我等の指揮官であった」
「そうだ。そしてこの御三方が来られるということは」
「警備や警戒も厳重になる」
そういうことであった。何かあったでは済まないからだ。
「事前であってもな。だからだったのだ」
「何かあってからでは遅いですしね」
「細心の注意が必要なのは言うまでもないな」
「そうです。だからこそ警戒を強めていた」
「そして基地や艦内の整備も。その成果は出ていると言うべきかな」
「かなり苦労しましたけれどね」
副長は笑いながら言った。

## 第十八部第二章　出発その二

「細かいところまで掃除しましたから」
「そうだな。だが基地も艦内も光る程にまでなったぞ」
「苦労の甲斐がありました」
「そして後は来られるまでにもう一度大掃除をしておく」
「はい」
「それで完璧かな」
一通り述べたうえでの言葉だった。目は考えるままであった。
「将兵には当分外での遊びは控えてもらいますか」
「基地内のレジャー施設を使ってもらってな」
「そうですね。あそこでも充分に楽しめますし」
連合軍のそうした施設は非常に充実している。これもまた魅力化対策の一つではある。
「我々もそこを使って」
「うむ」
「今日は風呂にでも行きますか」
「君は風呂好きなようだな」
「はい」
副長は笑って答えた。
「シャワーよりもずっといいですよ」
「サウナに電気風呂か」
「他にも色々とありますが」
ジェット温泉までである。こうしたところまで充実していた。
「一時間は楽しめますね。その後で飲むビールがまた美味いのですよ」
「おいおい、それではまるでおっさんではないか」
「実際もうそんな歳ですし」
副長は四十になったばかりである。確かに中年である。それを考

えるならばこの言葉にも納得がいった。
「ただ、順番を間違えると大変なことになりますが」
「それは死ぬぞ」
艦長はこの瞬間真顔になった。
「酒を飲んだまま風呂に入ると」
「ですからそれだけはしません」
副長もいささか真剣に返した。
「本当に危ないですからね、あれは」
「うむ」
「しかし、本当に長官が来られるとは」
副長はまた言った。
「これはまさかと思いましたが」
「だが考えてみれば妥当だな」
「はい」
「長官が講和会議に出席されるということは」
「そうですね」
副長も言われてみれば頷くものがあった。
「戦争の指揮官として」
「向こうも軍務大臣が出席するだろうしな」
「シュヴァルツブルグエウロパ元帥ですか」
「そうだ」
艦長は応えた。
「彼も出て来るだろうな」
「言い方を変えると出て来ずにはいられない」
「そういうことだな」
副長の言葉に頷く。そこでは表情は消えていた。
「それぞれの将が直接対峙するのですか」
「絵にはなる光景だな。勝者と敗者」
「我々はいいですがあちらにとっては屈辱でしょうね」
「騎士だからな、彼等は」

艦長はまた言った。
「誇りはとりわけ大事にする」
「我々以上ですね、あれは」
「昔誰かが言ったな。軍人はプライドを食べて生きている、と」
昔からある言葉だ。誇り高い軍人を皮肉った一面もある言葉だ。
「誰の言葉でしたっけね」
「そこまでは覚えてはいないが。とにかく我々はとかく誇り高い職業だと思われているな」
「連合ではそうではありませんがね」
「連合はまた特別だしな」
これは真実であった。
「我々にとっては待遇と収入の問題がまずある」
「はい」
「その両方が悪い職業には人は集まらないからな」
「軍はまあどちらもいいですね」
「それで苦労しているがな、何かと」
連合軍は他の軍に比して人件費がかなり高い。これは将兵への厚生や福祉、そして給与に割り当てられているのである。連合軍の特色であり、そして志願制故のことでもあった。
「市民団体の中には貰い過ぎではないかという意見もあるが」
「そうでしょうかね」
「その割に働いているのか、と。わざわざ色々な統計まで出してくれてな」
「日本軍なんかは道を軍服で歩いていると訓練しろ！と叱られた者がいたそうですね」
現実にあった話である。思えば凄い話だ。
「軍事マニアにか」
「はい。あそこの軍事マニアは特に五月蝿いそうですね」
「凝り性だからな、日本人は」
艦長は日本人の凝り性について言及した。

## 第十八部第二章　出発その三

「自分の趣味には徹底的にのめり込む」
「はい」
「あれには頭が下がる。オタクと言うべきか」
「誉め言葉ですね」
「うむ。だからこそあれだけの国になれるのか」
言わずと知れた連合の大国の一つである。その中でもとりわけ大きな四つの大国の一つなのである。
「元々の領土も凄く恵まれていますが」
「運がいいことだ。私の国の中には海しかないうえにそこにしかいない動物がいて開発しようにも出来ない星すらあるのだがな」
「艦長はパプワニューギニア出身でしたね」
連合の中では古い国になっている。地球にあった頃は熱帯にある国家だった。
「そうだ」
「ではあの惑星ですか」
「ビスマークだ。知っているのか」
「はい」
副長は頷いた。
「有名な惑星ですから。生物学的に」
「そうだろうな。海しかないうえにそこにしかいない生物までいるとなっては」
「はい」
「巨大な鯨だ。ダイダリアサンといったか」
「今のところわかっている銀河で最大の生物でしたね」
「そうだ。シロナガスクジラなんかの比ではない」
鯨の中でも大きな部類のものである。多くの惑星で生息している。
「ティアマト級より大きいかもな」

「まさか」
「ははは、これは流石に冗談だがな」
艦長はここでまず笑った。
「だが途方もなく巨大なのは事実だ」
「はい」
「観光資源にはなっているがな。それを考えると利益にはなっているか」
「私もそう思います」
「連合には色々な国があるしな」
日本もパプワニューギニアもその中の一つなのである。
「流石に観光だけでやっている国はないが」
「そうですね。やはりそれだけでは」
「我が国は観光も比較的いいがな」
パプワニューギニアのそれは自然の風景が好評なのである。それを見る為に多くの観光客が訪れている。ビスマークもその観光資源の一つなのである。
「いいことだと思いますよ」
「だがやはり日本程ではないな」
艦長は言った。
「あの国と比べるとやはりな」
「あまりにもあの国は恵まれていますか」
「恵まれていると言えば我が国も否定は出来ないが」
「サハラ各国が羨ましがってるようですよ」
サハラの自然と連合各国の自然は全く異なる。それもあらゆる惑星レベルでだ。これも運命であろうかと思う程に。
「我が国の自然にか」
「ええ。サハラは砂の惑星ばかりらしいですから」
「過酷なのだな」
「開発にも手を回せないそうですし」
連合にも砂漠の惑星は多い。だがそうした惑星はまずは徹底的に

開発されるのである。そして緑の惑星にされるのだ。水星や冥王星ですら人が快適に住める惑星に変えてしまうこの時代の科学技術ではこれも当たり前のことであった。
「戦乱の為にか」
「はい」
「そういえばエウロパもそうした開発はあまり行われていないな」
「そういえばそうですね」
「それをすればより多くの人口が養えると思うのだがな」
「そうした技術がないのでしょうか」
これについても疑問であった。エウロパの惑星開発能力についてだ。
「おそらくな。それとも政府が無能なのか」
「スペースコロニーはかなりありますがね」
「コロニーなぞ不経済だろうに」
艦長はそう言って顔を顰めさせた。
「収容人員は限られているうえに一つ作るのに結構費用がかかる」
「少なくとも連合ではあまり見られませんね」
「耐久年数もあるしな」
「はい」
連合ではそれよりも惑星開発にその力を集中させてきた。コロニーはもっぱら惑星開発や小惑星、アステロイドでの鉱物採掘の際の基地に使われている。無論軍事用のコロニーやコロニーレーザーといった兵器も存在する。
「連合とエウロパの違いの一つか」
「それにこれだけの領土で一千億しか養えないというのもわかりませんが」
「もっと養えるだろうな」
「ですよね」
だが彼等はここで一つ見当違いをしていた。彼等はあくまで連合の技術と環境において話をしているのである。エウロパの基準では

ないのだ。

## 第十八部第二章　出発その四

「努力不足ですかね」
「その結果がサハラ侵攻か」
「本末転倒と言うべきでしょうか」
「彼等にとっては仕方ないものだったらしいがな」
よくある話だ。自分達にとっては仕方ないことであってもそれは他者にとってはそうではないのだ。今回の件もそれであった。
「惑星一つを開発すればそこに十億の者が住むことが出来ます」
「うん」
「それをしないとは。やはり妙ですね」
「その割にコロニーは多いしな。妙な状況だな」
これもまた連合から見た目であった。連合ではコロニーは少ない。それを一個作る位ならばすぐに惑星開発に乗り出すのが連合なのだ。
「これがエウロパなのでしょうか」
「おそらくな。変わった場所だ」
「はい」
「そしてその変わった場所に長官が来られる」
八条がだ。言うならば主役である。
「警護も用心しなければなりませんね」
「どうやら巨大戦艦に乗って来られるらしいぞ」
「モントローズ要塞の時と同じですね」
「ただあの時使ったテスカトリポカは今はドックに入っているから別の艦でだな」
軍艦は定期的にドックに入らなければならないのはこの時代においても同じだ。整備は最重要課題の一つであり続けているのだ。
「そうですね」
「どの艦で来られるか」
「まずはそれの選考も為されているでしょうね」

「どちらにしろ来られることは間違いないだろうな」
「はい。警護及び清掃はより念を入れて」
清掃は連合軍においてはかなり五月蝿い。日本軍出身の八条が定めた基準であるから当然であった。
「やっていくことになるだろう。それへの調整を頼むぞ」
「わかりました。では」
「うむ」
こうして彼等もまた仕事に取り掛かっていた。連合軍は相変わらず忙しい日々であった。それは地球にある国防省本部においても同じであった。
八条は相も変わらず仕事に追われていた。書類だけでなくコンピューターでも仕事をしている。彼の机の上から書類、ディスクの類が消えることはなかった。そして他にも仕事があったのだ。
「その件につきましては」
今は中央議会において軍事費に関しての説明を行っていた。野党から軍事費の増大に関して詳しい説明を求められたからである。
「まず連合の人口の問題があります」
「我々の人口ですか」
「はい」
野党である保守派の若い議員の言葉に応える。見ればまだ精悍な顔をしている。老練さは感じられない。駆け出しの議員なのであろうか。
「連合は間も無く四兆に達しようとしております」
「それは私もわかっております」
若い議員はそれにまずは頷いた。
「そしてそれに合わせたシステムが必要となっております」
「軍もその中にあるというわけですね」
「はい」
八条は答えた。見栄えのするスラリとした長身が議会に映える。
「軍の役目は何か」

彼は言った。
「市民を守る為です。そしてその為には」
「今以上の数が必要であると」
「そうです」
彼は答えた。
「ですから今回軍事費の増額は当然のことだと思います」
「確かに一理はあります」
若い議員はそれには一先は賛同を示した。
「中央政府そのものの財政も増額しておりますし。これは当然でしょう、確かに」
「はい。おわかり頂けましたか」
「ですがここで長官に御聞きしたいことがあります」
「それは」
相手も馬鹿ではない。やはりこれではいそうですか、と納得するわけではなかった。政治においての説明はただ単に説明をするだけではないのだ。政治家としての力量も見られる。そしてそれは説明を求める側もだ。言うならば説明一つですら戦いなのである。
「その財政の優勢順位です」
「お待ち下さい」
与党である改革派から手があがった。

## 第十八部第二章　出発その五

「財政では財務省の管轄なのでは？」
「私でしょうか」
財務相であるモーリシャスが声をあげた。
「それでしたら」
「いえ、私は軍事費に関して御聞きしているのです」
だがこの若い議員はこう返した。
「従って財相は御言葉ですがこの件に関しましては」
「門外であると」
「はい。宜しければまたの機会に」
「わかりました」
その目を細くさせて光らせたがここは黙っておくことにしたようである。
「では国防長官にお任せします」
「はい」
八条と若い議員の両方がそれを受けた。見ればこの議員は若いと言っても八条よりは年上であった。八条が政治家としてはあまりにも若いだけであった。それへの敵愾心もあるのであろうか。彼の質問は中々執拗とも言えるものであった。
「では長官」
「はい」
質問と説明に戻った。
「その軍事費に関してですが」
「何かおかしなところでも」
「先日その内容が公開されましたね」
「はい」
八条は答えた。議会を照らす光が彼に集中したように見えた。
「貴方は先程軍は市民を守る為と仰いましたがそれは果たして第一

に考えておられるのでしょうか」
「といいますと」
「ここで問題としたいのはその内容です」
彼は言った。
「今回の軍事費は設備にかなり資金が配されていますが」
「はい」
八条の方もそれを認めた。
「これは一体どういった理由からでしょうか。お話して頂けますか」
「防衛の為です」
彼は言葉を返した。
「防衛！？」
「はい。エウロパとの戦いは我が軍優勢のうちに停戦となりました」
「そうでしたね」
これはもう言うまでもないことであった。この議員もそれには頷いた。
「しかし勝って兜の尾を締めよという言葉があります」
古い言葉であった。勝利による油断を戒めた言葉である。
「私は今こそ防衛を見直す必要があるのではないかと考えます」
「そして具体的にはどういったことを御考えなのでしょうか」
彼はまた問うた。
「まずは首都星系である地球の防衛体制です」
「地球の」
「はい。星系に強力な要塞を配したいと考えております」
彼はまずこれについて言及してきた。
「冥王星付近に今までよりも堅固な要塞を」
「それで防衛にあたるというわけですね」
「そう考えております」
「成程、今の各惑星や衛星に配された防衛用の人口惑星や衛星だけでは不充分であると」
「海賊ならば充分でしょうが」

連合のどの星にもこうした防衛用の人口惑星及び衛星は配されている。守りを固めてから開拓を行うのが連合式の開拓だからである。これは海賊への対策であった。無論既存の惑星、そして首都である地球も例外ではない。
「私はこれからは大規模な軍の侵攻に耐えられるものが必要であると考えます」
「戦略上からも」
「はい。長い間対外的な脅威も内乱もありませんでしたがこれからもそうだとは限りません」
「成程」
「同時に各星系の防衛も高めていくべきだと考えます」
「城壁を高く、濠を広く深く」
かつてはそう言われて城の守りを固くしていた。今度はそれを惑星それぞれにおいて行うというのだ。
「そして堅固にするべきと存じます」
「そういう御考えだったのですか」
「納得して頂けたでしょうか」
「確かに星系はそれでいいでしょう」
だが彼の質問はこれで終わりではなかった。八条はその言葉を聞いて無言でその目を光らせた。しかし決して言葉には出さなかった。

## 第十八部第二章　出発その六

「しかし問題はまだあります」
「それは」
「境です」
彼は言った。
「今連合とエウロパの境にはガンタース要塞群があります」
「はい」
言わずと知れた要衝である。エウロパへの侵攻の際の拠点ともなった。難攻不落と呼ぶに相応しい要塞群である。
「長官の御言葉ですとそれだけでは足りないように解釈出来ますが」
「その通りです」
「なっ」
それを聞いて与党からも野党からも驚きの声があがった。質問している若い議員からもである。
「それは本当ですか？」
「はい」
八条は臆することなく答えた。
「ガンタースだけでは足りないというのか」
「まさか、そんな」
議会がざわめいていた。八条はそれを見ることはなく、ただ肌で感じているだけであった。
「それでですね」
若い議員は戸惑いを必死に隠そうとする。だがそれを果たせないままま質問をしてきた。
「何でしょうか」
ペースは完全に八条のものとなっていた。彼はそのうえで質問に応えてきた。
「その根拠ですが」

「確かにガンタース要塞群は難攻不落です」
「はい」
「これは事実です。しかしそれだけに頼る防衛は如何なものでしょうか」
「ガンタースだけでは駄目だと」
「そうです。無論ガンタースの護りも更に高める必要があると思います」
彼は言う。
「ですがそれより前に。敵を連合に入れない為の基地も置いておきたいのです」
「それは何処に」
「ブラウベルグ回廊です」
「あの回廊に」
またしてもあの回廊が問題となっていた。
「そうです。中間地点に基地を一つ置くべきだと考えているのですが」
「回廊にですか」
「ガンタースの前の前哨基地として。如何でしょうか」
「その為の割り当てだったのですか」
「そうです。無論他にもありますが」
八条は言った。
「如何でしょうか」
「まさかその様なことを考えておられるとは」
皆驚く他なかった。
「二重の防衛ラインですね」
「西の守りをまず固めたいと考えております」
「まずはそちらですか」
「北、東、そして南の広大な開拓地及び新興国家への守りはまた別になりますが」
そういった場所にはこれまで通り防衛用の人口惑星や衛星で対処

することになっている。もっとも懸念されている他の知的生命体は今尚確認されていないのであるが。
「西にあるのは現実の脅威ですから」
「成程、よくわかりました」
与党の議員達がそれに大きく頷いた。
「見事なお考えです」
「有り難うございます」
「守りなくして国はなし、ですか」
「そういうことです」
「ですが」
しかし野党側も退くわけにはいかない。あの若い議員が口を開いた。
「そこまでする必要もあるか、とも思いますが」
「回廊のことですか」
「左様。私はガンタースだけで充分ではないか、とそのお話を聞いても思います」
「回廊は不要であると」
「そう思います。あそこを以って境としてきましたし。これでよいのではないでしょうか」
こういう意見もある。予算の問題が大きい。
「いえ、ところがそうではありません」
「まだ何か」
「これは関所の役割も果たします」
「関所ですか」
その考えはこの時代も残っているということであった。
「そうです。エウロパから入り込んで来る者をチェックする。その為にも必要ではないかと思いますが」
「そういう意味もあったのですか」
「あの戦争のことを思い出して下さい」
八条はここで開戦について遡ってきた。

## 第十八部第二章　出発その七

「エウロパは教会を利用して工作員を送り込んできました」
「はい」
これは忘れる筈がなかった。
「それを防ぐ為にも。必要なのです」
「防衛は単に軍備だけの問題ではないということですね」
「はい」
それを素直に認めた。
「ステッラをはじめとした工作員による損害はかなりのものでありました」
ステッラ以前も含めてである。エウロパの工作は以前からあったのだ。
「それへの対処は。今までは困難な状況にありました」
「確かに」
野党もそれを認めるしかなかった。各国の軍及び諜報機関に分かれている状況では系統だった対処が出来る筈もない。統合軍になってはじめて可能であったと言ってもよい。それまでは事実上エウロパの工作員達の跳梁跋扈を許してきたのである。
「ですがこれからは違います。彼等の侵入を断じて許してはなりません」
八条の声が強くなった。
「その為にも。ブラうベルグにも要塞を築くべきなのです」
彼の言葉は続いた。その演説は連合全土、そして人類全体に伝わった。その中には当然ながらエウロパも入っていたのであった。
「回廊は最早我等のものということか」
その演説はモンサルヴァートも聞いていた。彼はオリンポスにある自宅で三次元テレビを腕を組んで見ていた。そして一言こう呟いたのだ。なお邸宅は他にも持っており、領地や避暑地にそれぞれ持

っている。
「大した自信だ」
「はあ」
傍らに立つ執事がそれに応えた。気品のある白髪の初老の男である。幼い頃からモンサルヴァートに仕えている。私的な執事であった。
「綺麗な顔をして。言うことはきつい」
「確かに美男子でありますな」
執事はそれに応えて一言言った。
「我々にはない顔でありますが」
「連合でもこうした顔はもう珍しいらしい」
「そうなのですか」
「ああした純粋なアジア系の顔はな。少なくなっているそうだ」
「それはまた」
「連合は混血には躊躇しない。その結果だ」
彼はテレビを眺めながら言った。まだ八条がそこにいた。
「よく見てみるといい。普通に赤い髪の黒人や銀髪のアジア系がいるな」
「ですね」
見ればその通りであった。テレビには様々な肌や髪の色の者達がいた。
「顔立ちも混ざっている」
「これが連合なのですか」
「そういうことだ。彼等は我々の様に血を尊ぶということもない」
「貴族は存在しないのでしたな」
「最初聞いた時は信じられないことだった。指導し、導くべき存在がいなくてどうやって国を動かしているのかと」
モンサルヴァートの考えもまたエウロパ貴族主義に根幹を置くものであった。少なくともその話をはじめて聞いた頃は。彼もまた貴族なのであるから。

「今でも信じられない時があるがな」
「彼等はそれでも国を動かしていっているのですか」
「完全な民主主義とやらでな。彼等の言葉では大衆民主主義らしいが」
当然ながらエウロパの貴族主義民主主義とはまた違うものである。
「よくわからない世界だ。職業もそれぞれ勝手に選べるらしい」
「代々ということはなく、ですか」
「ある程度はあるようだが。我々やマウリアのそれのようなことはないそうだ」
「不思議ですな、それはまた」
それはこの執事にとっても信じられないことであった。彼もまた代々この家に仕えているからである。彼の息子はこの家の若い執事であり、娘はメイドをしているのだ。なお彼等にとってモンサルヴァートは知った相手であり気前のいい主であった。彼は下の者に対して、とりわけ軍務を離れれば穏やかで思いやりのある主であった。
「彼等が言うところ我々は少数の貴族が支配するとんでもない階級社会だしな」
「それの何処が悪いのでしょうか」
これもまた執事にとってはわからないことであった。
「高貴なる者がいるのは当然ではないでしょうか」
「ところが彼等にしてみれば違うのだ。貴族は自分達に都合のいいように何でもしようとすると」
「偏見ですな」
無論そうした不心得者もいるのは当然だがそうした者は何時の時代もどの場所にもいるものだ。多くの貴族達はその誇りを忘れず、自らを厳しく律している。
「だが彼等にとってはそれが真実だ」
彼は言った。

## 第十八部第二章　出発その八

「連合の大衆主義こそな。そしてエウロパ貴族主義は悪なのだ」
「では我々は敗れた悪なのですな」
「そういうことだな。そしてまたその悪が動き出さないように封印をしようとする」
「おとぎ話の騎士殿のように」
「ローエングリンやランスロットとは思っていないにしろ、な」
これだけはなかった。連合では騎士といった考えはない。軍人は職業の一つでしかない。エウロパにある騎士道やかって日本にあった武士道は存在しないのである。武士道はあるにはあるがあくまでスポーツや格闘技の中だけである。
「敗戦した我々は封印されるべき存在なのだ」
「そして今その封じ方をあちらの議会で話をしちえるところですな」
「そうだ。おそらく彼が勝つな」
八条を指し示して言った。
「最早議会は彼のペースに入っている」
「その様ですな」
「私は彼と一度会っているのは知っているな」
「はい」
モントローズ要塞明け渡しの時である。この時南方軍の指揮を執っていたモンサルヴァートはエウロパまでやって来た八条と直接会談したのである。そして要塞を明け渡したのだ。
「その時だが。悪い印象はなかった」
「以前お話して下さいましたな」
「そうだったな。今もだ」
彼はソファーに腰を深くおろしたまま言った。
「気品があってな。涼やかな人物だった」
「そうですか」

「今も悪い印象は受けないと思うが」
「はい」
確かにその通りであった。テレビからも悪い印象は受けない。
「優れた人物だと思う。人間的にもな」
「ですが敵になるとそうではない」
「強敵だ。彼により敗れたようなものだ」
素直に八条の能力を認めていた。それは彼の度量が為せるものであった。
「そして今も追い詰めようとしていますな」
「手強い男だ。戦いはまだ続いているしな」
「まだですか」
「停戦して全てが終わるというわけではない」
モンサルヴァートは言った。
「条約が結ばれるまでな。戦いは続いているのだ」
「では彼はまだ我々を攻めてくると」
「今話していることがそれだ」
「これが」
「彼はおそらく回廊だけを狙っているのではない」
モンサルヴァートの目の光が強くなった。
「ニーベルングも。狙っているだろうな」
「ニーベルングまで」
「あの要塞を押さえれば我が軍の防衛は完全に骨抜きになる」
それは彼が最もよくわかっていた。
「だからこそだ。そして非武装地帯をもうけることも要求してくるだろう」
「ニーベルングの辺りでしょうか」
「おそらくはな」
モンサルヴァートは述べた。
「あの辺りを非武装地帯にしておくと連合にとって防衛上非常に有利になる」

「はい」
それは執事にもわかった。

## 第十八部第二章　出発その九

「ではそれを要求してくることは間違いないですな」
「そしてそれにどう対処するかだ」
彼はまた言った。
「連合も愚かではないだろう。自分達の守りは固めてくる」
「同時に我等の守りは削って」
「非武装地帯の設立はそうした意味でも有効なのだ。連合にとってはな」
「我々にとっては有害であり」
言葉に険がこもる。
「非常に厄介なものになるのだ。どちらにしろ連合にとっては要求しない筈がないものだ」
「ですな」
「少なくともブラウベルグ回廊は彼等のものになる」
「それだけでも大きな痛手です」
八条は議会でそれを堂々と言っている。最早連合にとってそれは規定路線なのがわかる。
「我等にとってはな。敗戦の意味は非常に大きい」
「それに関して御主人様は何か御考えは」
「残念だが完全なものはない」
彼もそう返すしかなかった。
「今彼等はクロノスとニョルズにまで達している」
首都オリンポスの喉元にまで。停戦となければ間違いなくその首都も占領されていた。厳然にして冷酷な現実がそこにはあった。
「戦力もその三割を失った。総動員した戦力がな」
「交渉においても非常に不利であると」
「そう言う他はない。交渉するにしろ我々は非常に不利だ」
「彼等もそれがわかっているのでしょうな」

「今見てもそれがわかるな」
「はい」
八条はまだ話をしている。野党の議員もだ。彼等の主張は完全に連合が有利な状況にあると認識しているものであった。それは非常によくわかった。
「彼等は必要とあらばエウロパ併合すら可能だろう」
「エウロパをですか」
落ち着いた雰囲気を醸し出していた執事だがその声が突如として震えた。
「驚いたか？」
「ええ、まあ」
彼の方でもそれを認めた。
「まさか。その様なことが」
「必要とあらばな。だがそれはない」
「ありませんか」
「連合にとって我々は完全に異世界とその住人だ」
「異世界ですか」
「規模にしてはあまりにも大きな差があるがな。だが異世界には違いない」
彼は言う。
「サハラに侵攻した時我々はサハラの者達を追い出していたな」
「はい」
「それは何故だ？」
そして執事に問うた。
「それは」
「彼等が我々とは異なる存在だからではないのか」
その言葉こそが答えの一つであった。最もそうした一つの問題で片付けられる程単純な話ではなく居住区域や資源等様々な問題が他にもあるのであるが。
「サハラは。我々とは違う世界だ」

「それはよく承知しております」
「同じことが我々と連合にも言えるということだ」
「連合にとって我々は異世界だということですか」
　これについては連合も同じことを考えている。つまりはどっちもどちということなのだ。同じ人間ではある。
「我々がそう認識しているのと同じ様にな」
「同じことを考えていると」
「彼等にとってみれば一千億もの不穏分子を抱え込みたくはないのだろう」
「社会不安等のもとになるからですか」
「そうだ。それに彼等は我々の持っているものにはどれに対しても何の価値も見出してはいない」
　モンサルヴァートが併合はないと言う根拠は他にもあった。それがこれであった。
「資源も技術も文化も。彼等にとっては興味をそそられるものではないようだ」
「それは少し無念ですな」
「彼等にとってみればどれも既に持っているものだ。文化は文化で興味がないらしい」
「エウロパのこの素晴らしい文化をですか」
　それはいささか憤慨すべきものであった。

## 第十八部第二章　出発その十

「何ということを」
「彼等の文化にとって我々の文化は受け入れられないものなのだ」
「そうなのですか」
「我々の貴族文化はな。文明的にもな」
合わない。これは一目瞭然であった。
「全く違うと」
「そういうことになる。やはり我々と連合は全く違う存在なのだ」
「我々としても別に彼等に合わせるつもりもありませんし」
そのような考えはエウロパには毛頭ない。誰も考えもしない。どんな身分、どんな立場であってもだ。この戦いにおいて特徴的だったのは所謂『売国奴』という存在が皆無だったことである。それだけエウロパは連合を激しく敵視し、誇りを持っているということであった。
「彼等は尚更な。だから併合だけはない」
「はい」
「こちらが余程致命的なミスを犯さない限りはな。向こうもそれを言い出したりはしない」
「では問題は領土ですか」
そこがまず問題であった。そして。
「そして賠償金だ」
「お金ですか」
「これは間違いなく要求して来る」
戦勝国として当然の話であった。勝者は敗者から何かを手に入れる。それはこの戦争においてもやはり当然の話なのであった。
「問題はその額だ」
「どれだけのものになるでしょうか」
「かなりのものになるな」

それだけは確かであった。
「彼等の巨大な胃袋を満たせるものは出せないにしろ、だ」
「我々を餓えさせておく必要がある、と」
「そういうことだ。敵を太らせる愚か者はいない」
モンサルヴァートは少し離れた位置から見たように述べた。
「痩せさせる為に何かと手を打っておくものだ」
「それが今回も」
「そういうことだ」
彼は言った。
「その為にも賠償金は要求して来るだろう」
「辛い話ですな」
「辛いか」
「はい」
執事は重い声でそれに答えた。
「これを辛いと言わずにして。何と言いましょうか」
「そうだな。だがこれで終わりではないぞ」
彼はまた言った。
「エウロパにとって冬は。まだはじまろうとしているだけだ」
「まだこれからだと」
「そうだ。この戦争で受けた傷は深く大きい」
その目の前では八条がまだ話をしている。だがもう議会全体をその雰囲気で支配していた。
「これを回復させるには。多くの時と費用が必要だ」
「連合の妨害を受けながらも」
「どれだけかかるかわからないが。耐えなければならない」
「我々が生き残る為にも」
「今度の講和会議はそのはじまりに過ぎない」
「冬は間も無くでありますか」
ここで窓を見た。外の世界は今将に春に入ろうとしていた。暖かい日差しが世界を照らし、緑の若々しい木々が誇らしげに世界を飾

っていた。
「そうだ。ラグナロクよりも長い冬がな」
モンサルヴァートは今それを見ていた。エウロパの冬を。そして彼もその中に入ろうとしていた。だがそれから逃げるつもりはなかった。あくまで戦うつもりであった。

## 第十八部第二章　出発その十一

連合は講和に向けて何かと調整に入ろうとしていた。その中キロモトはエウロパに向かう準備と並行してアッチャラーン達と様々な調整に入っていた。

「バチカンのことだが」

今二人はケニア料理のレストランにいた。そこでケニア料理を食べながら話をしていた。

メニューは四品であった。牛肉のシチューであるンコンベ、緑色のマッシュポテトであるイリオ、そしてピラフであるスクマ＝ウィキとミルクティーであった。このミルクティーの名をチャイという。

「どうするべきかな」

キロモトはイリオを食べながら向かいの席に座るアッチャラーンに問うた。このイリオという料理が緑色なのはグリーンピースを入れているせいなのであるが今彼等が食べているジャガイモもまた緑色である。これはカンボジア名産の有名なジャガイモである。普通の白いジャガイモと比べて美味だとされている。

「そうですな」

アッチャラーンはピラウを食べながら言葉を返した。

「まずは。地球に来てもらいますか」

「地球にか」

「細かい場所は問いませんが。太陽系の何処かに」

「そこで仮住まいというわけだな」

「はい」

アッチャラーンは答えた。

「暫くの間は。そうしてもらうことになるでしょう」

「その間に各国の間で調整だな」

「問題はどの国の側に置くか、ですな」

「若しくはどの国の影響を排除するか」

「それが問題です」
「うむ」
キロモトはンコンベを口に含んだ後で頷いた。
「ここは大国は避けたいですね」
「そうだな」
これはまず第一に抑えなければならないところであった。
「そしてキリスト教徒が多い国も」
「はい」
「出来ることならどの国の影響も欲しくはない」
「ではどうされるおつもりですか？」
「あえて僻地に行ってもらうか」
キロモトは考える目でこう述べた。
「僻地に」
「そうだ。開拓予定の新星系にな。これでどうだろうか」
「それもまた一つの考えであると思います」
アッチャラーンはそれに応えた。
「ですがそれだけでは」
「駄目か」
「その星系が何処かの国の開拓であった場合は」
「では中央政府が開拓する必要があるか」
その問いにはすぐに答えが返ってきた。
「おそらくは。今回はどうやら普通の新国家建設の様な形では済みませんし」
「それでは我々で星系を提供するか」
「それが宜しいかと」
アッチャラーンはまたピラウを食べた。
「バチカンの影響力はあまりにも大きいものですし。そしてそれがもたらす利益も。一国に渡していいものではありません」
「わかった」
キロモトはそれを聞いて決めた。

「ではバチカンへの場所の提供は中央政府が取り仕切る。いずれ案を議会に提出しよう」
「また議論になりますな」
「そうだな。だが今回は相手はまとまりに欠けるだろうな」
「中央政府に賛成する派とそれに対して何処かの国により提供されるべきであるという派の」
この二つの勢力は連合においては設立当初からある。千年経っても存在しているのだ。
「どちらかだな。だが一方は」
「それぞれの国のことだけしか考えておりませんから。対応は楽ですね」
「うむ。敵も分かれていれば対処が楽だ」
政治力学においても各個撃破という戦術は存在するのである。キロモトもアッチャラーンもそれは完全に把握していた。だからこそ今回は安心して見ているのである。
「今回の様に利益に惑わされ易い例は特にな」
「ですね」
「特にこれといった手を打つ必要はないか」
キロモトは茶を口に含んだ。

## 第十八部第二章　出発その十二

「多数派を確保出来ればいい」
「ただ今回は政党はあまり意味がないでしょう」
「信仰の問題でもあるからか」
「はい。バチカンはやはり偉大です」
アッチャラーンは仏教徒である。タイでは国王は仏教徒でなければならないとされており、仏教が盛んな国なのだ。だが他の宗教にも寛容であり、国王も全ての宗教を守らなければならないと同時に定められている。これは昔から変わりはしないことである。
「人の心を掴んで離さないものがあります」
「それぞれの国の利益以外にも心が関わるか」
「それが宗教かと」
「信仰は心。そしてそれは政治と複雑に絡まり合う性質がある」
「個人の感情と国家、団体の利益と混在しわからなくなるのです」
アッチャラーンは言う。
「歴史においてはままあることです」
「信仰を野心の隠れ蓑にする場合は普通にあるしな」
「はい」
アッチャラーンは茶を飲みながら頷いた。
「それとは離れて。純粋に信仰を考える場合もあります」
「どちらが厄介かな」
「一概には言えませんね」
これについては判断の難しいところであった。だからこそアッチャラーンはこう答えたのであった。キロモトもそれを受ける。
「それもそうか」
「今回注意するべきはいささか原理主義的な考えの持ち主でしょう」
「バチカン、そしてキリスト教が絶対に正しいと信じている者か」
「連合にもいないわけではありませんし」

「ふむ」
所謂ファンダメンタリスト、キリスト教原理主義者も僅かだがこの時代の連合にも存在する。これはキリスト教だけでなく他の宗教にも存在しており、アッチャラーンの信仰する仏教にも存在している。宗教を純粋に突き止めていくと原理主義に陥る可能性もあるのだ。こうなると非常に厄介である。その教義こそ絶対的な正義だと盲信し、他者を認めなくなってしまうからである。
「彼等の行動にも注意しましょう」
「バチカンを何としても自分達の側に置きたい」
「そしてそれを阻むのならば何でもしようという行動を」
「バチカンに移住を勧めるか、彼等は」
「いえ、それは危険です」
だがアッチャラーンはそれは止めた。
「危険か」
「非常に。只でさえバチカンの正義を盲信しているのです」
こうした人物は昔からいた。バチカン、ローマ＝カトリック教会、そして法皇こそが絶対の正義であると考える人物が。悪いことにバチカンに無謬はないのだ。決して過ちを犯さない神の代理人、それこそがバチカンでありローマ法皇であったのだ。過ちがあったとしよう。それは認めずに何時の間にかなおしている。そうして長い間恐ろしいまでの影響力を保持してきた。それに気付かない者もいるのだ。
「彼等がバチカンと結んだら」
「止めた方がいいな」
「はい」
ここで彼等はバチカンに力を持たせることをさせないことにした。只でさえその信仰により大きな力を連合においても持っているバチカンである。余計な力、それも安易にテロに走りそうな力を渡したらどうなるか。恐ろしいことになるのがわかっているからだ。キロモトもそれを察した。

「彼等は取り締まることでいでしょう」
「テロリストとしてか」
「実際にテロに走る危険性があったならば。そしてバチカンとの交流もチェックしましょう」
「バチカンそのものへも目を光らせておくか」
「そうですね」
アッチャラーンもそれに頷いた。
「バチカンも何をしてくるかわかりませんから」
「非常に危険だからな、彼等自身も」
「はい。あそこは権謀術数の本家です」
彼は述べた。イリオを食べた。
「快い発言をしなかったならば次の日の朝急死しているかも知れませんし」
「おいおい、まさか」
流石にキロモトはそれは笑って否定した。

## 第十八部第二章　出発その十三

「それはないだろう」
「そうでしょうか」
「確かにバチカンは以前そうしたことも頻繁に行ってきた」
ルネサンスの時代はとりわけ。法皇の選定の際もかなりのことが行われてきた。
「だが。時代が違うぞ」
「そうですか」
「こっそりと懐に何かを入れてくることはあってもな」
「そうしたことも得意そうですね」
これについてはよく為されてきたのもバチカンであった。またそれに従わなければ女を向けることもあった。時には男も。それで駄目ならば今度は剣か毒が来るというわけだ。買収できなければ死、というわけである。
「むしろそっちを警戒しよう」
「はい」
「彼等は人の心を司っている」
そしてまた言った。
「人の心もよくわかっているだろう。それに訴える方法もな」
「その方法は昔から熟知していると」
「おそらくな。色々としてくることも考えられる」
「油断のならない者達ですな、実に」
「だから今まで力を持ってこられた」
キロモトもイリオを口にした。
「信仰だけではないのだ」
「政治も知っている」
「そのバチカンを抱え込むことになる。事前に打つべき手は打っておきたいな」

「わかりました」
「だがそれは暫く後の話だな」
キロモトはまずは言葉を置いた。
「今のところバチカンの移転は正式に決まったわけではない」
「はい」
「エウロパでの交渉次第ということになっている。それをどうしていくかだ」
「エウロパにおいて」
「向こうへの出発準備は進んでいるか」
「はい」
アッチャラーンはそれに頷いて答えた。
「無事に」
「そうか。ならいい」
キロモトもそれを聞いてうなずいた。満足そうに。
「私とカバリエ外相、そして」
「八条国防相。二人にはもう伝えてあります」
「よし。では細かい手配も頼むぞ」
「そちらはもう外相と国防相で進めております」
アッチャラーンは述べる。そうした実務的な処理においては彼に勝るものはいない。事務処理もまた政治家にとって欠かせない能力であるからだ。
「自分達の仕事をか。有り難いことだ」
「閣下もそろそろ御自身の準備を」
「それはもうしているよ」
人を安心させる様な穏やかな笑みで応えた。
「その点は心配無用だ」
「左様ですか」
「何時でも出ることができる」
「そうですか」
「他の二人はどうかわからないがな」

「カバリエ外相はまず大丈夫でしょうね」
アッチャラーンは述べた。
「流石に慣れておられますから」
「うむ」
「そして八条長官は」
「彼も大丈夫ではないのか」
キロモトは述べた。

## 第十八部第二章　出発その十四

「しっかりしているし」
「そうでしょうかね。御曹子なので何処かおっとりしたところもあるように思えるのですが」
「そうかな」
「私はそう見ているのですが。何処か」
それは女性に対してであるがアッチャラーンは細かいところには気付いてはいなかった。
「まあ今回は大丈夫だ」
キロモトは安心させるようにして言った。
「彼も経験があるしな」
「マウリアとの交渉、そしてモントローズでの件ですか」
モントローズでの見事な交渉は八条の株を上げていた。これもまた彼の立派な功績の一つとなっていたのだ。
「そうだ。それを言うと私より安心出来ると思うが」
「そうですか」
「とりあえずは安心していい。それはな」
「後はオリンポスに行き交渉のテーブルに着く」
彼は今オリンポス行きを自らの口で言った。そこには不退転の決意が既にあった。
「それまでも大変だな」
「ですが行かねばなりませんな」
「そうだ。この戦いを終わらせる為にも」
その声が確かなものになる。
「行くとしよう」
「留守の間はお任せを」
ここでデザートがやって来た。アイスクリームである。だがそれは只のアイスクリームではなかった。

「あれだね」
「はい」
ボーイはキロモトの言葉に頷いた。
「それではお楽しみ下さい」
「何かあるのですか？」
「まあまずは見てくれ」
キロモトはいぶかしるアッチャラーンに対してこう述べた。
「面白い食べ物だからね」
何かあるようであった。そしてその何かがはじまった。
「何と」
アッチャラーンはそれを見て思わず声をあげた。何とボーイはその手に持つ蝋燭に火を点けたのであった。
「それでは」
「うむ」
キロモトはニンマリと笑った。そして蝋燭をアイスクリームに近付ける。そのまま点火された。
「おお」
アッチャラーンはただ驚くばかりであった。そして火は忽ちのうちにアイスクリームを包んだ。派手に燃えはじめた。
「これは一体」
「首相は知らなかったか、この料理は」
「料理なのですか、これは」
「そう、炎のアイスクリームだ」
キロモトは燃え盛るアイスクリームを前にして言った。
「食べられるのですか？」
「火が消えた後でな」
「はあ」
アッチャラーンにとっては信じられない話であった。この燃えるアイスクリームは連合独特の菓子料理の一つであるが中々存在しないものである。それは何故か、料理法が難しいからだ。言うまでも

なくアイスクリームは熱に弱い、それに熱そのものである火を使うのだから。難しい料理であるのも当然であった。
「焼けた後で香ばしさが際立ってな。美味いぞ」
「まさかこんな食べ方があったとは」
「これは最初何処の料理だったかは知らないが」
キロモトは語る。
「この店の名物料理なのだ。一度君にも紹介したいと思ってな」
「それでこの店を選ばれたのですね」
「そうだ。では食べるとするか」
「はい」
火が消えた。そして二人はその炎のアイスクリームを食べはじめた。激しく燃え盛っていたがアイスクリームの中身は無事であった。その味は冷たく、美味かった。不思議なものであった。

## 第十八部第二章　出発その十五

この頃八条は身支度に取り掛かっていた。当然エウロパに行く為である。
彼は自宅にいた。八条家の邸宅の一つであり広大な屋敷である。今彼はここに一人暮らしをしている。最も八条家の者としては、という意味であるのだが。
「坊ちゃま」
「その言い方はいい加減止めてくれないかな」
八条は老婆を振り返って苦笑いを浮かべた。見ればそこには白髪頭で着物を着た温厚そうな老婆がいた。
「僕はもう働いているんだし」
「これは申し訳ありませんでした」
老婆はそれを受けて頭を下げた。それからまた言った。
「御主人様」
「そう言われるとまたかえって変な気持ちだな」
「ではどうすれば宜しいですか？」
「まあここは婆やの好きなように呼んでくれていいよ」
妥協案を出してきた。
「ただ、坊ちゃまだけは止めてくれよ」
「わかりました、若旦那様」
「それも何かおかしいなあ」
「では旦那様で」
この言葉にはすぐこう返す八条であった。
「そこまで歳はとっていないしね」
「意外と呼び方も難しいものですね」
「まあ何でもそうさ」
八条はそれに応えて言った。
「仕事の時は長官と呼ばれているのだけれどね」

「では長官で宜しいですか？」
「いや、それは仕事の時だけだし」
それもよくないとした。
「まあ弟や妹達の呼び方でいいかな、私の場だし」
「では兄様で」
「うん、それでいいよ」
ようやく頷ける呼び方が出て来た。
「今からはそれで頼むよ、いいね」
「わかりました」
こうして呼び方が決まった。それから本題に入った。
「もうすぐ出発ですよね」
「うん、明後日にね」
八条は答えた。
「今度は長くなると思う。留守をお願いするよ」
「わかりました。聞いたわね」
「ああ」
その老婆の横にいる年老いた男が応えた。見れば彼は執事の服を着ている。ここだけどうにもエウロパの感じがないわけではない。だがエウロパ風なものは一切感じられなかった。明治期の華族のそれに近いものはあったが。今彼等がいる屋敷は実に和風の屋敷であった。八条は今畳に座っていた。服は洋服であったがラフなものである。
「いつも通り二人に任せるから」
「はい」
「畏まりました」
二人老人はそれに頷いた。
「宜しく頼むよ、まあいつも通りだけれど」
「いつも通りですか」
「仕事であけるからね」
「地球に来られてからそうしたことばかりですね」

「仕方ないさ、仕事だから」
彼は二人に対してこう述べた。
「留守にすることが多いのはね」
八条は極めて多忙であった。徹夜で仕事をすることも珍しくはなかったし、こうして何日も家に帰らないことすらあった。それが国防長官の仕事であるから仕方のないことではあったにしろだ。
「くれぐれも無理はなさらないで下さいね」
「わかってるよ」
爺やに声をかけた。にこりと笑っていた。
「二人も皆も僕がいない間はゆっくりしていていいから」
「そういうわけにはいきませんよ」
だが婆やは笑ってそれを否定した。
「兄様がいないからといって手を抜くわけにはいきませんから」
「真面目だね、相変わらず」
「真面目に生きるのが一番でございます」
どうやらこれが婆やの人生哲学であるらしい。
「違いますか」
「僕が子供の頃からそれは言うね」
「そう、そうでなければ今の兄様はなかったでしょう」
爺やも同じことを言った。
「それを守ってこられたからこそ今があると。私共は確信しておりますぞ」
「有り難う」
「後は。兄様が生涯の伴侶を娶られるだけです」
「そちらもお願いしますよ」
「ははは、近いうちにね」
だがこればかりはそうそう簡単にはいきそうになかった。

## 第十八部第二章　出発その十六

「では明後日で」
「はい」
八条は二日後に家を出ることになった。その日と次の日は家に留まることができそうであった。だがその仕事の量は相変わらずであった。
「こればかりは減りませんね」
「留守の間はこちらでもできるだけやっておきますが」
「いえ、そういうわけにはいきません」
シャリアピンにそう答える。
「出来るだけこちらにも送って下さい」
「それで宜しいのですか」
「ええ」
そして彼はそれをよしとした。
「私のパソコンにメールで送って頂ければ。長ければファイルにして送ってくれて」
「わかりました」
「それでお願いします。次官も次官で大変でしょうから」
「それは否定出来ませんね」
シャリアピンは苦笑いをしてそれに返した。その通りであったからだ。
「私も。かなりの量の仕事を抱えております」
「ですね」
「今悪戦苦闘中です」
「私より多いのではないですか？」
「いえ、流石にそれはないですが」
「そうですか」
頷くとすぐに言葉が返ってきた。

「多いのはね。否定出来ないものがあります」
「ですから。負担を回すわけにはいきません」
「そうなのですか」
「仕事は移動中でも出来ますし」
彼は言う。
「その点は御心配なく」
「わかりました。ではお任せします」
「はい」
これで書類やメールでの仕事の話は終わった。だがそれで話が完全に終わったわけではなかった。彼等は引き続き話をしていた。
「エウロパ領のことですが」
「何かあるのですか？」
「風俗及び習慣のことで」
シャリアピンは八条に対してエウロパのことを話しはじめた。
「一度行かれているので御存知だと思いますが」
「はい」
「連合とかなり違うのですよね」
「はい、そうです」
八条もはその言葉に頷いた。
「完全に別世界ですね」
「やはり」
シャリアピンはそれを聞いて頷いた。
「そんなに違うのですか」
「やはりエウロパは貴族社会です」
まずはエウロパをしてエウロパたらしめている貴族という存在について言及してきた。
「現場の将兵もその存在に最初驚いていたそうですね」
「報告にありましたね」
シャリアピンもそれは聞いていた。
「捕虜の扱いで」

「はい」
連合軍は捕虜の扱いにおいては及第点であった。こうしたことは漏れるとすぐに拭い去ることのできない悪評となり歴史にすら残る。それがわかっており、そして八条も自身の価値観から捕虜への扱いは丁重なものとしたかった事情があった。かって連合軍の中ではとりわけ風紀が厳しかった日本軍出身のことだけはあると言われた。
「まずそれに驚いたようですね」
「貴族の方よりも平民の方で拒否反応が出ましたからね」
「はい」
最初連合軍は貴族と平民の将兵を同じ扱いにしようとした。一応階級による扱いの違いはあったが階級社会ではない連合の将兵達は彼等を同じ扱いにしようとしたのだ。だがエウロパ軍の将兵達、それも平民出身者の方からこれに対して抗議が出たのだ。
「俺達は俺達で扱ってくれ」
「俺達は貴族の方々とは別なんだ」
と。皮肉でも敵対感情からくるものでもなかった。連合軍の将兵達はそれを聞いて驚きを隠せなかった。
「これは一体どういうことなんだ」
彼等は顔を見合わせて呆然としてしまった。食事も居住も全て分けろと言ってきたのだ。連合軍では元帥から三等兵まで全て同じものを食べる。だがエウロパ軍では違っていた。同じものを出して抗議を受けたりもしていた。
「何故抗議されるのだ？」
彼等にはそれが非常に不思議であったのだ。
「扱いに問題は無い筈だが」
「いえ、あります」
だがここで助言をしてくれた者がある。それは何とマウリア軍の観戦武官であった。
「あるのですか？」
「おわかりになりませんか？」

「はあ」
連合軍にとっては何処が悪いのかさえわからない。だがマウリア軍の者達には何処が悪いのかはっきりとわかる問題であったのだ。
「階級なのですよ」
「階級ですか」
マウリア軍の武官が指摘したのはそこであった。
「そうです。エウロパは階級社会です」
「それは我々もわかっています」
連合軍の将兵は戸惑いながらも答えた。

## 第十八部第二章　出発その十七

「ですからあえてああしたものを廃した扱いを念頭に置いているのです」
「それこそが間違いなのですよ」
「といいますと？」
ここに階級というものを頭から悪であり排除すべきものであると考える連合の者達と決してそうではないマウリアの者達の違いが出ていた。
「御承知の通りマウリアにはカーストがまだ残っています」
彼は言った。
「どういったものかはおわかりだと思いますが」
「ええ、まあ」
マウリアでの階級制度である。これが為に連合でもマウリアを否定する声がある。
「あれはあれで社会の秩序を形成しているのですよ」
「そうなのですか」
「はい。だからこそ今だに残っています」
彼は言った。
「そして私達はその中に生きている」
「エウロパの将兵達もそれと同じであると」
「そうです」
それが彼の答えであった。
「おわかり頂けたでしょうか」
「今一つピンときませんが」
連合の将兵達は戸惑いながらも応えた。
「とりあえずここは彼等の要望に従うべきだということなのですね」
「はい」
マウリアの武官は頷いた。

「それで行けばいいと思います」
「わかりました。それでは」
連合の将兵達はそれを受け入れることにした。こうしてエウロパ軍の貴族出身者と平民出身者は分けられることになった。そしてこれにより不満はかなり減ったのであった。
これに最も驚いた者がいた。それはリバーグ元帥であった。
「階級社会は貴族支配の為だけではなかったのか」
彼は部下からの報告を聞いて思わずこう呟いた。
「どうやらそのようですね」
「わからないな」
彼はあくまで連合の価値観の中で生きている男である。それから一歩も出ることはない。だから階級社会が肯定されているということがどうしても理解出来なかったのだ。
「だが認めるしかないな」
「はい」
「無闇に騒動の種を撒いておくのも愚だ。ここは彼等の要望通りにしよう」
「わかりました」
こうして連合軍の捕虜の取り扱いは彼等の要望を取り入れたものとなった。こうしたいきさつがあったのである。
「あれを聞いた時はかなり驚きました」
「連合内部でもかなり議論になっていますね」
「階級社会を何故認めているのかと」
「人間は確かに自分と他人の間に優劣を決めたいとは考えるものですが」
「はい」
「それでも。連合では階級制度は到底認められないものですからね」
大衆社会である連合故のことであった。
「そうです。それがどうしてと思いました」
「これも異文化、異文明ということなのでしょうね」

「階級の存在もまた」
「その一環ですか」
「そういうことなのでしょう」
「やはり理解し難いですね」
シャリアピンもまた連合の者である。これは当然と言えば当然であった。
「貴族を認めているとは」
「ですが貴族の殆どは立派でした」
八条はここで彼等を認める発言をした。
「立派でしたか」
「ええ。毅然としていて。中には不心得者もいるのでしょうが私が見聞きした限りでは殆どが立派なものでしたよ」
「信じられませんね」
シャリアピンはつい本音を漏らしてしまった。
「貴族が、ですか」
彼も貴族に関してはいい認識を持っていないのである。
「そうですよ。貴族でもです」
八条はそんな彼に対してこう述べた。
「いえ、貴族だからかも知れませんね」
「態度や行動が立派なのは」
「はい。彼等には独特の責任感があります」
「誇りというものでしょうか」
次に出て来たのは誇りであった。これこそ八条の待っている言葉であった。
「そうですね。貴族の誇りです」
「それで威張っているだけだと思っていたのですが」
「案外そうではないのですよ」
八条はまた言う。
「彼等も彼等で倫理観がありますし」
「それに従っていると」

「ええ。誰にでもありますし」
「成程」
「そうした意味では我々と同じなのでしょうね」
「ようやくわかりました」
シャリアピンもそこまで聞いてようやく理解した。
「彼等はエウロパ貴族としての倫理の中に生きている」
「はい」
「そういうことだったのですか」
「おわかりになられましたか」
「はい、ようやく」
彼も頷いた。

## 第十八部第二章　出発その十八

「わかりましたよ」
「それは何よりです」
「他にも色々と連合とは違うのですよね」
「小作人もいますし」
貴族の農場で働く農民のことである。ただかっての小作人と違い、給料で雇われている。ここは連合での農場経営と似ていると言ってもよいか。連合の大規模農場では農民を雇うのである。グータルズが義勇軍に入る前に働いていた農場もその中の一つである。
「その他は零細農家が多いそうですね」
「連合のそれみたいに広大な農地を持っていて科学化されているということはありませんけれどね」
「らしいですね」
「やはり人口の差が出ています」
八条は述べた。
「エウロパは一千億。それに対して我が連合は四兆です」
「その差がそのまま産業に出ていると」
「そういうことです。しかも連合は広い」
「はい」
なおかつその開拓すべき星系はまだ無限に思われる程存在している。
「限られた場所しかないエウロパとは根本的に違いますから」
「一千億しか住むことの出来ないエウロパとは、ですか」
「そういうことになります」
「国力も国家のあり方に影響を及ぼすのですね」
「はい」
これは歴史が証明していた。ローマもその力を伸ばすと共に共和制から帝政に変わった。カエサルは共和制に限界を感じ、このまま

ではローマはその国力の伸張に比してシステムが追いつかないと危惧したのだ。これがやがてオクタヴィアヌスの帝政へと繋がっていくのである。
「連合もそうした意味でこれからどうなるかわかりませんね」
「そういえば時代により中央集権と地方分権が行われてきたのも」
「国力の伸張が背後にありますね」
「人口も増えて」
やはり人口はどの時代においても重要である。
「ええ」
「単に市民の声だけで成るものではないのですね」
「その市民の声にも国力は大きく関係しますし」
「ふむ」
「そうしたものですよ」
そのカエサルにしろローマ市民及び兵士達からの圧倒的な支持があったからこそ出来たのだ。類稀なるカリスマ性を持っていた彼だがそれだけで何かを変えられるというわけではなかったのである。やはりそこには他の者達を納得させ、支持させるというものが必要だったのである。彼の国家システム案が当時のローマ市民に受け入れられたということなのである。そしてローマは帝政になっていくのである。
「連合軍が出来たのもそうですし」
「今の中央集権の流れも」
「また地方分権へとなるでしょうけれどね」
「連合はその二つの綱引きの中にあるのですか」
「はい」
八条は答えた。
「もっと具体的に言うならば中央政府と各国の間で」
「しかしこの二つは対立する関係ではないですね」
「対立はなくとも綱引きは行えますから」
世の中とはそうしたものなのである。

「この二つで。連合は連合となってきたのです」
「そしてエウロパは貴族主義によりエウロパとなってきた」
「はい」
「彼等には貴族と平民という対立はないのですね」
「それはないですね」
見て来たからこそ言える言葉であった。
「共存していると言っていいです。いえ」
「いえ！？」
「棲み分けていると言うべきでしょうかね」
「棲み分けですか」
「はい。階級社会にはそうした意味もあるようです」
どちらにしろ連合には全くそぐわないものであるのは八条は承知であった。彼は第三者の目で見て語っていたのである。
「無闇と対立を起こさない為にも」
「エウロパの知恵であると」
「それを知恵と呼ぶのならそうなりますね」
「何か割り切れないものがありますね」
「連合の考えだとそうですね」
ここにも連合とエウロパの違いが出ていた。
「ええ。釈然としないものがあります」
「私もそれは感じますがね」
彼もやはり連合の人間である。やはり感情的に階級社会は受け付けないのだ。
「エウロパにはエウロパの考えがありますから」
「押し付けは出来ませんか」
「仮に今エウロパで貴族制度を廃止したならばエウロパは混乱状態になり手がつけられないでしょう」
「統治者がいなくなって」
「はい。エウロパの議員や閣僚にも多いですし」
大半がそうなのである。とりわけ軍人はその傾向が強い。官僚も

である。平民出身者もいないわけではないのだがどうしても数が少ないのだ。

## 第十八部第二章　出発その十九

「彼等がそのままいなくなると。今のエウロパは成り立ちません」
「これは仮の話ですが」
「はい」
「連合に組み入れるとすれば当然貴族制度は廃止ですよね」
　これは言うまでもなかった。
「当然そうなるでしょうね」
「では。そうなれば旧エウロパ領は混乱したままであると」
「おそらく」
　八条は答えた。
「そして我々は一千億の混乱した地域を抱え込むことになります」
「人口の四十分の一、ですか」
「それは難しいですよね」
「治安維持に派遣すべき軍に。そして復興費等も考えますと天文学的です」
　軍はとかく金がかかるが他の国を併合するとその比ではない。日韓併合では日本は毎年国家予算の一割か二割を半島に使っていた。大変な出費である。ドイツ統一でもそうだ。サハラでもその度に財政破綻する国家も多い。オムダーマンやティムールはかなり上手くやっているのである。
「そして不穏分子を抱え込む」
「それも考えるとやはり併合はすべきではありませんね」
「それだけはしないということはもう決まっていますよ」
「何よりです」
　わかってはいたが実際に聞いて安心した。
「やはり適度なところで手を打つのですね」
「問題はその適度の範囲ですが」
「それを決めるのが今回の講和会議ですね」

「そういうことになります」
八条は穏やかな笑みで応えた。
「それでは留守はお願いしますね」
「大過ないように務めます」
「はい」
「あとエウロパの水には御注意を」
「そういえばエウロパには風土病もありませんね」
よくそう言われている。連合にはかなり多いが。
「そうなのですか」
「むしろ我々の方が多いとか。まあ我々は惑星も多いですから」
「そちらでは何かと苦労していますね」
「ええ」
連合の開拓は同時に風土病との戦いでもあった。その為医学が他の文明に比べてかなり進歩しているのもまた特徴の一つである。環境が発展を促した例の一つである。
「エウロパには。それがないのですか」
「少なくとも連合のそれよりは遥かに」
「少ないと」
「かつてのペストやコレラの様なことはないです」
「それもかなり心配しましたがね」
エウロパ侵攻の際彼等は病気についてもかなりの注意を払った。それにかかることにより戦力が落ちることを警戒したのである。こうしたことはこの時代にもあった。
「流石にかっての欧州の頃とは違いますか」
「まあそれはなかったですね」
中世の欧州のことを言っているのである。道の端に普通にゴミや糞尿を捨て、疫病が蔓延していた欧州のことをである。なおエウロパはエウロパで連合は風土病が蔓延していると考えているのだ。これも冒険小説華やかなりし頃のアフリカや東南アジア、中南米のイメージである。そのイメージをそれぞれ復活させていたのである。

「お互い疫病が流行るということはありませんでしたね」
「それは何よりです」
「細菌が異常進化することもなかったですし」
「ええ」
「その点はよかったですよ」
「全くです。実は心配していたんですよ」
細菌や病気の問題は戦争や冒険、開拓においては常につきまとう。連合ではそれを第一に警戒しているのだ。
「帰還した将兵達が疫病を持って来ているかどうかですね」
「はい。どうやらそれは杞憂だったようで」
「それは何よりでした」
「惑星開発でも常に悩まされていますからね」
それが実際に言われる。
「はい」
「しかし、ああした病気というのは減りませんね」
「一つ克服したと思ったらまた一つ出て来る」
「その通りです」
「それも厄介なものばかり残ります」
そういうものである。厄介な病原菌程残る。かつての天然痘やペスト、エイズのようにだ。
「空気感染するエボラ菌があった惑星もありましたね」
「ワクチンがあって何よりでした」
この時代はエボラ菌のワクチンもあるのである。
「ペストの再来から恐れられましたね」
「そうでしたね。ただ一つ言えることがあると思いますよ」
「それは」
「克服出来ないウィルスなぞないということですよ」
八条は言った。

## 第十八部第二章　出発その二十

「人類は今まで確かに多くの病気を見てきました」
「はい」
これは事実であった。インフルエンザもそうであるしペストにしろコレラにしろ天然痘にしろそうである。梅毒やエイズといった性病も入れていいであろう。こうした病は常に人類を脅かしてきたのである。
「そして襲われてきた」
八条はそれにも言及する。
「しかし克服してきました」
「ペストも天然痘もなくなりましたからね」
「そうです。まあ流石に風邪はありますが」
インフルエンザはともかくこれは流石に無理であった。尚リューマチやハンセン氏病、ガンといった病気は克服されている。無論白血病もである。
「他の多くの病気は克服してきましたね。そのエボラでさえ」
「はい。あれはウィルスを作るのも不可能ではと言われていたそうですね」
エボラが問題となったのは二十世紀末である。アフリカの風土病であったのだが一気に世界に知られることになった。これはエイズの経緯と似ている。エイズを遥かに凌ぐ恐ろしさで世界はエボラによって滅亡するのでは、とさえ言われていた程であった。
「しかしウィルスは完成されエボラも克服された」
八条はこう述べた。
「人類はまた救われたのです」
「あの時代そうした病気で人類が滅亡するという話も多くあったそうですね」
「今でも本屋に行けばコーナーになっていますよ」

「確かに。何時の時代でも変わらないということですか」
残念ながらそうである。特に連合ではそうした本は売れている。
「結局人間の考えることには変化はないということでしょう」
「はあ」
「日本で話題の漫画がありまして」
「若しかして何かにつけて人類滅亡の序曲だ、誰それの陰謀だ、と騒いでいる漫画ですか？」
そうした漫画も健在だ。殆どの人間はギャグ漫画と思っているが。
「御存知でしたか」
「雑誌の編集者達を主人公にした」
「はい、そうです」
日本から世界で知られるようになった漫画である。何かと予言者や影の中央政府といったそもそも存在する必然性があるのかどうかすら怪しい組織や実在していても大したことはしていない人物にスポットを当てて連合、そして人類社会に警鐘を鳴らしている漫画である。都合よく書くとこうなる。都合悪く書けば適当に出鱈目なことを喚き散らし、その場その場でいい加減なことを書き殴るギャグ漫画である。
「本当にあんな編集者が日本にはいるんですか？」
「本当にいるとしたら病院でしょう」
八条は笑いながら言った。
「次の話では全然違うことを平気で言っていますし眉唾という言葉さえ存在しない」
「はい」
「しかも誰も主人公の発言を疑わないのですから。予言者なんて次から次に出て来ますし」
「ノストラダムスとやらも出ましたっけ」
二十世紀に有名になった。実は医者であり美容コーディネイターであり占い師として当時は有名であったのだが。
「確か最初の方に出ていましたね」

「最初の頃はまだ読んでいないのですが。まあ普通あそこまで滅茶苦茶は言えませんね」
「だから売れてるんですよ」
八条は言う。
「笑えますから」
「成程」
「日本の首相の発言ですがね」
「伊藤首相ですね」
言わずと知れた八条の師である。
「予言の本は十年前のものを読むのが一番面白いと」
「どれだけ滅茶苦茶を言っているかわかるからですね」
これはこの時代でもそうだ。予言というものは実にいい加減なものでしかない。
「そういうことです」
「ではあの漫画も十年後は」
「いえ、あれは十年も待つ必要はありません」
「といいますと」
「今すぐ読んでもわかりますから。滅茶苦茶だと」
「ははは、確かに」
シャリアピンは八条のその言葉に顔を崩した。

## 第十八部第二章　出発その二十一

「あそこまで凄いと」
「疫病の話も何度もありましたからね」
「定番ですね」
「異種の侵略者と並んで」
「あの侵略者のパターンも色々ありますよね」
「ハインラインに出て来るようなものとか人間そっくりのものとか」
しかし最も有名なものがある。それは。
「一番多いのは頭が異様に大きな小人型ですよね」
「あれは。何処ではじまったんでしょうね」
「さて。そこまでは詳しくはありませんが」
実はこれもまた日本からはじまったのである。日本のある天才的作家であり番組制作者が作り上げた宇宙人なのである。記録に残っているが二人はそこまで興味がないのである。
「しかし疫病は克服されてきている」
「揺ぎ無い事実ですね」
「克服出来ない病なぞ有り得ないのですよ」
八条は正論を述べた。
「普通はそう考えますよね」
「はい」
「それが違うのは予言ものの特色です」
「そうですね。あれは一体どうしたことか」
「まあ面白いからでしょうね」
八条は商業主義によるものであると考えていた。
「売れるから。そういうふうに書くのでしょう」
「中には本気で信じている者もいるようですが」
「子供とかですか？」
「いえ、大の大人でも」

悲しいがこれもまた現実の話である。
「まさか」
「いるようですよ。それでその時の為に備えているとか」
「それはまた」
八条はそれを聞いて驚いた顔をした。
「ちょっと信じられませんね」
「世の中色々な人間がいますからね」
シャリアピンは達観した様に言った。
「それを信じる人もいるのですよ」
「ううむ」
「長官は疫病を克服出来ると考えておられますよね」
「はい」
それが彼の考えだった。基本的に克服できないものはないと考えている。
「ですがそう考えない人もいますし」
「そういうことですか」
「ですから驚かれることはないと思いますよ」
「我々は我々で対策を講じていけばいいですし」
基本的にはそうであろう。あまり不必要に騒ぐのは愚である。
「そうですね」
「疫病への対策は。これまで通りやっていきましょう」
「まず第一には清潔にすることですね」
厚生省めいた言葉を口にした。
「そして衛生管理」
「これまで以上に」
「それから全てははじまりますから」
シャリアピンは述べた。
「学校と同じく」
「インフルエンザもそうですしね」
そうした意味ではインフルエンザの予防と全く同じ考えであると

言えた。

## 第十八部第二章　出発その二十二

「綺麗にしていきましょう」
「わかりました」
「目標は内務省です」
「いや、それはちょっと」
八条は苦笑いをしてそれを制止した。
「そこまでは」
「まあ衛生管理の部門は徹底的にしないとなりませんがね」
「ええ」
「艦内の清掃も含めて。さもないとそこからやはり疫病になりますから」
だから清掃は重要なのだ、見栄えの問題も大きいが。清潔にしなければやはり病気の原因になる。かつての大航海時代なぞがその例である。これは十九世紀までそうでありそれが直接将兵の死亡率にも関係していたのだ。
「そうですね。おかげで連合軍の仕事は清掃業だとも言われていますが」
「現実にそうならいいのですがね」
「軍人が暇なことは平和な証拠ですから」
「災害等の関係であながちそうともならないのが現実ですが」
「戦争がなくとも」
実際には軍の仕事は戦争以外にも結構あったりするものである。これは国防長官である八条が最もよくわかっていることであった。
「残念なことに。災害は我々の手ではどうしようもありませんし」
「難儀なことですね。惑星のコントロールといったものはやはり完全にはいきません」
「あれはやはり難しいです」
この時代は風水やかっての魔術といったものもかなり科学的に研

究され応用はされている。科学はやはり万能ではなく、また風水や魔術もやはり科学と一脈通じていることがわかっているのである。錬金術もだ。流石に石を金に変えたり、人を犬や猫に変えたり何もないところから火や水を出すことは不可能である。だがそれ等のものをコントロールすることはかなり進んでいるのだ。
「今の時代においても」
「水星や冥王星に人が住めるようになってもう何百年も経つというのに」
「完全にはいきませんね、どうも」
「完全を目指しても完全には成り得ない」
八条はいささか哲学的な言葉を述べた。
「世の中とはそういうものかも知れませんが」
「はい」
「難儀なものです。宇宙はもっと難しい」
「それに我々の知っている宇宙はまだほんの少しです」
シャリアピンの言葉も哲学的なものとなった。
「大海の中の水滴一つ程にしかわかっていません」
「銀河のかなりの部分に進出していても」
連合はやがて他の銀河にまで進出することが考えられていた。だがそれでもわかっていることは全てではないのであった。これはかっての二十世紀の地球に似ていた。あらかた探検した筈だったが知られていないことが山程あったあの時代に。二十一世紀になってもそれまで知られていなかった動物が発見されたりもしていた。人間は全てを知っているようで実は殆ど何も知らないものなのである。
「何もわかっていませんね」
「そうですね」
「まあ何かあればメールでお知らせ下さい」
八条は仕事に話を戻した。ようやくといった感じではあるにしろだ。
「こちらで対処しますので」

「わかりました。それでは留守はお任せ下さい」
「はい」
翌日八条はキロモト、カバリエと共にエウロパへ旅立った。そして遠路オリンポスへ向かうのであった。

# 第十八部第三章　旅路その一

旅路

キロモト、カバリエ、そして八条の三人はそれぞれ三隻のティアマト級巨大戦艦に乗りオリンポスへ向かっていた。太陽系を出てそこからブラウベルグ回廊に入ることになった。

まずはその入り口であるガンタース要塞群である。八条は乗艦であるスサノオの艦橋からその要塞群を眺めていた。

「こうして見るとやはり壮観ですね」

「はい」

スサノオの艦長であるイロコ＝メサ准将がその言葉に頷いた。赤い肌に黒人の顔を持つ精悍な男であった。スー王国出身でありネィティブ＝アメリカンの血を濃く引いている。このスー王国は連合の中で独特の国家であり各部族の酋長がそれぞれ持ち回りで国王をやっているのである。マレーシアと同じである。

「何度か見ていますがその都度思います」

「基地としての機能も見事なものです」

「はい」

「エウロパ侵攻の最大拠点ともなりましたし」

連合軍はまずこのガンタースに集結した。そしてここからエウロパに攻め込んだのである。この要塞群なくしてはそのはじまりすら考えられなかった。

「やはり連合の防衛の象徴と言えましょう」

「そうですね。この要塞群が今まで連合を守ってきました」

「はい」

「ですが今後はさらに守りを硬くしていきます」

「左様ですか」

「ここそのものの機能はあまり変わりませんが」

八条は述べる。

「その他の部分を。強化していきます」
「ガンタースだけではないと」
「そうです」
彼はメサの言葉に頷いた。
「やはり。一つの要塞群に頼るのは防衛上好ましくありません」
「全体としても、ということですか」
「そうです。確かに今の連合は地球をはじめとしてかなりの防衛体制を整えておりますが」
これもまた八条が推し進めている。もっともかつての各国軍の防衛施設をかなりそのまま利用しているのだが。
「それをさらに強化していくと」
「開拓地も含めて。ですがとりわけ重要なのはこのエウロパとの境ですね」
「ブラウベルグ回廊にも要塞を築かれるおつもりですよね」
「はい」
これは議会で述べた通りである。もう軍全体に知れ渡っていた。
「そしてそれだけではありません」
「何かと御考えなのですね」
「ええ、まあ」
「オリンポスまで行かれるのも。その中の一つですか」
「とりわけ重要なものの一つですね」
なお彼はまだその真意を完全には明かしてはいない。
「わかりました。では無事お届け致します」
「お願いします」
要塞群には一日留まりすぐに回廊に向かった。三隻の巨大戦艦の周りを三個艦隊が護衛している。かなりの警護であった。
キロモトはオロルン、カバリエはコヨルショウキ、そして八条はスサノオに乗っている。巨大戦艦はその勇姿を誇示しながら回廊の中を進んでいた。
八条はこの時自室にいた。そしてそこでノートパソコンを使って

仕事をしていた。
「長官」
そこに木口がやって来た。ノックをした後一礼して入る。

## 第十八部第三章　旅路その二

「どうしたんだ？」
「あまり大したお話ではないのですが」
「艦内で何かあったとかかい？」
「いえ、食事のことで」
「食事」
重要な話であった。
「どうされるのかと。メニューは」
「それは気兼ねしなくていいと答えてくれ」
八条は木口に顔を向けてこう言った。
「将兵と同じものを食べるから」
「わかりました」
「場所も食堂でね」
「それで宜しいですね」
八条は特別扱いされることを嫌った。そういうことであった。それに将兵達の食事も直に食べてみたかったのだ。
「艦内にいるからには食堂で食べる。それが当然だからな」
「わかりました。では艦長にはその様にお伝えします」
「うん。しかしやはり大きな艦だな」
「はい」
「テスカトリポカもそうだったが。二十キロ以上は優にあるな」
「一応は二十キロと公表していますがね」
公表では、あである。実際はわからないのが兵器というものだ。
「どう見てもそれより大きいというのが専門家の意見だったな」
「実際に試験艦と比べてかなり大きいのだがね」
かっての観閲式の時の艦艇のことである。量産体制に入り建造された艦艇は実際にはあれよりもかなり大きくなっていたのである。
これは全ての艦艇に言えることであり駆逐艦や護衛艦にしろ二割

か三割は大きくなっていた。そしてこのティアマト級巨大戦艦に到っては五割は大きかった。艦艇を建造していくと次第に大きくなるものであるが連合軍のそれはかなりのものであった。
「エウロパ軍はその巨大さにかなり驚かされたそうですね」
「そうだろうな」
「特にこの巨大戦艦には。まるでコロニーの様だと」
「コロニーか」
八条はそれを聞いて少し目を動かした。
「エウロパではかなりの人間がコロニーで暮らしているな」
「はい」
木口は答えた。
「惑星が限られていますので」
「しかし住めない惑星はそれ程多くはないと思うが」
「惑星開発の技術のせいですね」
木口はそう考えていた。
「我々と比べて。彼等はその分野では遅れをとっていますから」
「ふむ」
「仕方ないと言えば仕方ないですね」
「だがコロニーへの開発技術は我々と同程度かそれ以上はあるようだが」
彼はモントローズでの会談の時のことを思い出して言った。
「進化の分野が違ったのか」
「そうかも知れないですね」
「エウロパ独特の進化だな。我々は惑星、そして衛星に住むことを目指し」
「彼等はコロニーを目指した」
「不経済だという意見もあるようだが」
主に連合からの意見である。

## 第十八部第三章　旅路その三

「ですから限界がありまして」
「サハラに侵攻したというわけだな」
「はい」
「因果なものだな。惑星それぞれはむしろ我々のそれよりもよい惑星が多いと聞くのに」
「ですが狭いのです」
　エウロパのネックはそれであった。宙域があまりにも狭いのである。
「一千億がやっとという程度にか。もっとも我々の祖先が半ば追い出したのだがな」
「つまりサハラ侵攻の遠因は我々の祖先にもあるのですか」
「そうなるだろうな。彼等はそこまで考えていなかったが」
「因果な話ですな、サハラにまで影響が及ぶとは」
「それが世の中なのだろうな」
　八条は静かな目で言った。
「一つの出来事が連鎖的に反応する」
「はい」
「そして時には大きな事件を引き起こす。そうしたものだ」
「この戦争もそうなのでしょうかね」
「少なくともサハラにはもう影響を及ぼしているな」
「北方の解放ですか」
　これであった。実に大きなことであるのは言うまでもない。
「そうだ。あれはサハラにとって非常に大きな事件だ」
「あれによりシャイターン主席はサハラの英雄となりましたね」
「英雄か」
　だが八条はその言葉に眉を少し動かした。
「どうかしましたか？」

「彼は。本当に英雄なのだろうかと思ってな」
八縦5はなく妖しい魅力を漂わせるカリスマに。彼も気付いていたのだ。
「違うのでしょうか」
「英雄と呼ぶには少し禍々しい様に思える」
把5はなく妖しい魅力を漂わせるカリスマに。彼も気付いていたのだ。
「違うのでしょうか」
「英雄と呼ぶには少し禍々しい様に思える」
彼は言った。
「若しもの話だが」
そして言葉を続ける。
「彼がサハラを掌握したならば。恐ろしいことになるかも知れない」
「そうでしょうか」
「ただそんな気がするだけだがな」
「はあ」
「何はともあれサハラも大きく動いた」
これは事実だった。何事もまず動かないと話にならない。
「はい」
「あの小国が乱立している状況から僅かの間に実質的に三国となった。また動くぞ」
「東のハサンに北のティムール」
「そして西と南を押さえるオムダーマンだ。この三国の間で必ず戦争が起こるな」
「いよいよサハラが統一されるのでしょうか」
「そこまでは何とも言えない。どうにもイメージが湧かない」
彼にとってもそれは同じであった。人類の宇宙進出から長い間サハラは多くの国家に分裂して互いに争ってきた。砂と星の海の中に多くの国家が生まれ、そして消えていった。そのサハラが一つになる、やはりにわかには信じられないものがそこにはあった。

「サハラが一つになるのは」
「そうでしょうか」
「君は違うのか？」
「といいますか」
木口は八条に顔を向けられ応えた。
「何といいますか。一つになったらどうなるのか、と思うことはあります」
「ふむ」
「面白いだろうな、と。どういった国家になるのか」
「どの様な国家であっても帝政は間違いないようだが」
「預言によってですか」
名も残っていない預言者の言葉だというあの預言である。サハラは英雄の名を冠した男により統一される。そしてその男は皇帝となると。かってイスラム世界には皇帝が存在していたのは事実である。オスマン＝トルコの皇帝だ。宗教的な指導者であるスルタンと政治的な指導者であるカリフを兼ねておりそう呼ばれた。これがイスラム世界の皇帝なのである。
「そう、あの預言に従えばな」
「つまり彼等は預言に従って戦っているのですか」
「むしろ預言を利用していると言うべきか」
「そして統一する」
「あのサハラをな。それが一千年の間の彼等の願いだ」
そこに地球にあった頃からの歳月も加わる。それを考えれば途方もない時間であった。
「その為に多くの血が流れようとも」
「彼等は厭わなかった。今度こそ、とも思っているだろう」
「それは果たして可能なのでしょうか」
木口は問うた。
「といった意見も多いですね」
だがこれは彼の考えではなかった。彼は若しかしたら、と考えて

いたのである。
「どうかな」
だが八条は懐疑的な言葉を述べた。

## 第十八部第三章　旅路その四

「確かに勢力はまとまってきているが」
「はい」
「だからといって。すぐに統一されるわけではない」
シビアな考えであった。
「政策を一つ間違えば分裂するしそれに戦いが長引くことも考えられる」
「そしてそこにまたエウロパが介入することも」
「全ては有り得ないとは言えないのだ。全てはこれからの彼等の行動次第だ」
「どうとでも変わるのですね」
今までは成功していても選択を間違えて失敗するということは常だ。歴史においても人生においてもである。
「シャイターン主席は出来るかも知れないがそれよりも気になる存在がある」
「誰ですか、それは」
「オムダーマンのアッディーン副大統領だ」
八条は銀河の遥か彼方にいる彼を見ていた。
「アッディーン元帥ですか」
「彼もまた英雄だな」
「はい」
彼のことは連合でもよく知られている。軍事的天才であるとさえ謳われている。
「オムダーマンの西方、南方の統一は彼の手によるものですから」
「寡兵であってもどの様な宙形であっても鮮やかに勝利を収めてみせる」
カッサラでの戦い以降、いやそれ以前からであった。彼は常に勝利を収めてきた。そして今のオムダーマンを築いたのである。

「彼からは。妖しいものを感じない」
シャイターンから感じられるもののように。
「彼が英雄かどうかまではわからないがな」
「ではサハラは彼の手により統一されると」
「そこまではまだ何とも言えない」
八条はここでも即答を避けた。
「そして問題は統一された後のサハラだ」
「二千億の人口を持つ統一国家ですか」
「連合で言うならば中国と同等の人口だ」
連合でも個々では一千億を越える国家は稀である。エウロパで一千億、そしてマウリアが公称しているもので二千億である。それと同等の国家が誕生するのである。
「我等にとって脅威となるでしょうか」
「人口にして二十倍だ」
八条はまず連合との人口の差を述べた。
「圧倒的だな」
「はい」
「人口でも経済力でも。そして通常の科学や技術に関してもな」
ここで彼はあえて通常と言った。
「だが軍事ではな」
「彼等に長がありますか」
「エウロパがサハラに勝てていたのは事情があった」
八条は述べた。
「彼等が分裂していたからだ。乗じていた」
「確かに」
「そしてエウロパはそれを工作により助長させてきた。そしてサハラを侵食していた」
「それが為しえなかったならば」
「サハラ侵攻もままならなかっただろう」
「成程」

サハラ侵攻は武力だけではない。謀略もあってのことだったのだ。
「サハラの艦艇はかなりの速度らしいな」
「一概には言えませんが全体的な傾向としましては」
「ふむ」
「我々が速度よりも攻撃力や防御力、そして情報収集能力に重点を置いているのとは対照的に」
生存能力も。サハラの艦艇はそうした諸々の面においては連合のそれよりも大きく劣っていた。
「軍事技術はそれ程差はないと思います」
「むしろ我々の方が上か」
「彼等にはこの艦を造ることは出来ないようですし」
ティアマト級巨大戦艦のことである。
「この艦を建造することが可能なのは連合だけと言われています」
「確かにな。ここまでの巨大なものは」
「はい」
「その中にある技術も。彼等には真似出来ないか」
「とても。不可能だとされています」
技術の差はやはり歴然としているということであった。
「ハードウェアでは勝っているか」
「そう判断していいと思います」
「だがソフトウェアではどうだ」
八条は今度は人材面について問うてきた。

## 第十八部第三章　旅路その五

「人材は。どちらが上だと思う」
「これは技術以上に言う必要がないかと」
木口の表情が硬くなった。
「我々は一千年の間戦争を知りませんでした」
「うむ」
「そして。軍はあくまで職業の一つでしかありません」
その教育や訓練も穏やかなものである。そして待遇もかなりいい。豊かな、恵まれた軍隊であると言えた。それが連合軍であった。
「ですから。そもそもがサハラと違います」
「そうだな」
「サハラでは殆どが実質的には厳密な選抜徴兵制です」
つまり人材を厳選しているのだ。
「尚且つ戦争慣れしています。基準があまりにも違いますね」
「そうだ、サハラは戦争を知っている」
八条はそれがよくわかっていた。
「エウロパ以上にな」
「はい」
「そして動員をかけることにも慣れている」
連合で総動員令が出されたことはない。出した国もない。こうした非常事態そのものの経験がないのである。
エウロパは今回の戦争がはじめてであった。その為今振り返ると不備もわりかしあったと言えた。だがサハラは違う。大規模な戦争があれば常にそれが行われてきている。これで即座に艦艇、そして軍歴のある者を集められるのである。これは非常に大きなことであった。
「そこが大きな差だな」
「ですね」

「国家システムとしても戦争を知っているということは大きい」
「我々はそれを知りません」
「やはり一千年のブランクがあるな」
八条はそこに視線をあてた。
「我々が戦争を知らないのは道理か」
「そうなりますか」
「幸いなことだがな。戦争を知らないで済んだというのは」
ただこれは武力を用いた戦争のことであり経済や金融、貿易での戦争はかなり熾烈なものであった。国家だけでなく企業や個人の間でも行われてきた。これが連合の闘争であった。
「だが防衛上はそれがネックとなり易い」
「やはり戦争を知っているのと知っていないのとでは大きいですからね」
「うむ」
八条はここで一旦頷いた。
「このエウロパとの戦いはそれにおいても非常に大きな収穫だが」
「どう生かされるおつもりですか？」
「さしあたっては防衛を確かなものにしたい」
「エウロパ方面をですね」
「いや、違う」
だが彼はここでそれを否定した。
「違うのですか」
「そうだ。私はサハラ方面の防衛も強化したい」
「そのサハラの」
「彼等が統一されたならば。我等に敵対する可能性もある」
「それに備えて」
「そうだ。市民を一人たりとも戦火に晒すわけにはいかない。これは国防上の絶対条件だ」
それが八条の考えであった。

## 第十八部第三章　旅路その六

「境に備えを置きたいのだ」
「左様ですか」
「エウロパの防衛ラインも参考にしたいな」
「モンサルヴァートエウロパ元帥が築いたラインですね」
木口はモンサルヴァートが築き上げた防衛ラインに関して言及した。
「あれはかなりのものでしたが」
だが連合軍はそれを破ってきた。それぞれの星系の連携を緊密化させ、コロニーレーザーや軍事衛星の増加及び惑星の防衛システムを充実させエウロパ全体の防衛を強化したこの多重式防衛ラインはかなりのものであったが連合軍の慎重な進撃と物量、技術はそれをほぼ無効化して突破していた。そうした意味では役に立つものではなかったがそれでも参考になるものではあった。
「あれよりも圧縮したものにしたい」
八条は言った。
「よりな。境に」
「集めるのですか」
「そうだ。サハラの軍は一気に攻める傾向が強い」
そしてさらに言う。
「それをどうしていくかだ。問題はな」
「成程」
「横幅はそんなに必要ない。だがその堅さが問題なのだ」
「そして火力も」
「敵を退ける為にな。同時に足も止める」
彼は続ける。
「それが重要なのだ。どうするかな」
「そうなのですか」

「今のところサハラは脅威ではないが」
これは長い間そうであった。サハラは連合やマウリアに目を向けることはなかった。ただ内部で激しく争っていたのだ。だから国防に関しては警戒する必要はなかった。それが変わろうとしているのである。
「これからに備える」
「はい」
「何しろ我々は戦争を知らないのだ」
そしてまたそれに言及した。
「戦術にしろ彼等の方が知っている」
「そういえばサハラの軍人達の中では我々の戦術をかなり古いと見ているようですね」
「それも当然だろうな」
国防のトップとしてそれは否定出来なかった。
「我々が基本的に密集陣形を採用しているのに対して彼等は散陣にも容易に移っている」
「はい」
「そして戦術も機動的だ。エウロパのそれ以上にな」
「それに対処するのは容易ではないですか」
「ただ力の差がある」
「力の」
それが何かはすぐにわかる。八条もそれについて言及してみせた。
「国力だ。我々とサハラの国力差は二十倍になろうとしている」
「それは承知していますが」
「普通に考えればこれで戦争を売るとは思えないな」
「ええ、まあ」
「こちらが相当混乱し、まともな防衛が不可能になっているか外交において信じられないミスを犯さない限りは。サハラとの衝突はない」
「ありませんか」

「まずな。だが念の為だ」
「防衛は」
「念には念を入れる」
彼は言った。
「それもまた国防の基本だな」
「確かに」
「備えはしておくに限る。例え相手と仲がよい状態でも」
「いざという時にそれが役に立つ」
「我が国の諺でもあっただろう」
八条はふと日本の諺について言う。木口もそれに応える。
「備えあれば、というやつですな」
「そうだ。だから備えておく」
「わかりました」
「サハラにも。そしてマウリアにもか」
「マウリアは流石に大丈夫だと思いますがね」
「私もそう思うが。何しろあの国だけはわからない」
八条の眉がしかんだ。
「何を考えているのか、何をやろうとしているのか。とにかく読めない」
「それがマウリアですけれどね」
「そうなのだ。対処の仕方もな」
「掴めませんか」
「それをわかる者すらいないだろう」
八条の眉はしかんだままであった。そのうえで話を続ける。
「あの国だけはな。わかりはしない」
「サハラ以上に難しいですか」
「基本的に攻撃的な性格ではないのはわかっているがな」
「しかし破壊の神を信仰してもいます」
「同時に創造の神と調和の神もな」
シヴァとブラフマー、そしてヴィシュヌのことである。

「待てよ、あの三柱の神は確か同一という話もあったな」
「そういう説もありますね」
「わからないな、その辺りが」
八条もそこが完全に把握出来ないでいた。
「何処がどうなっているのか」
「昔からそうですね」
「それこそ遥かな過去からだな」
「ええ」
その言葉に頷いた。
「あの国のことは。とりあえずは境に防衛ラインを置いておくか」
「どの様なものにしますか？」
「軍事基地にしたい」
彼は言った。
「要塞をな。置いておこう」
「わかりました」
「そして開拓地には軍をだ」
次には外周部の開拓地についてであった。
「治安が不安だからな」
「ですね、相変わらず」
連合の開拓は計画的に行われている。誰もが無造作に新しい惑星に行けるというわけではないのだ。

## 第十八部第三章　旅路その七

まず開拓省やそれぞれの国の政府がどの星系に進出するか決めてそこに調査団を送る。そしてそのまま居住可能ならば即座に、そうでない場合は居住環境を整備したうえで移民を送る。進出と同時に地方自治体も設置されており、防衛用の人口惑星や衛星も置かれる。安全に開拓が出来るようにしてから進出しているのである。

だが中にはそうでない場合もある。犯罪者や海賊が未開拓の惑星に潜り込んだり逃げたりする場合があるのだ。開拓の前に彼等との戦闘があったということもある。これは戦争ではなく言うならば犯罪者の取り締まりなのであるが連合の歴史がはじまってからずっとあったことである。

これにどう対処するかは今でも中央政府及び各国の政府の重要課題であった。中央軍が設立されかなり改善されたとはいえ今尚連合にとっては重要な問題の一つであった。

進出した惑星に狂信的なカルト教団がおり、戦闘になったこともある。そうした未開発の惑星に逃げ込み法の支配を逃れる輩もいるのだ。流石にこうした輩まではコントロールすることが出来ない。それが連合にとっての悩みであった。法律を破る者は破る。いくらコントロールしても限度があるのであった。

「外縁部にもパトロールを強化させるか」

「それしかないですね」

そして対策と言えばこれ位しかなかった。

「異なる知的生命体が現われればまた別だが」

「どうやら別の銀河にしかいないようですね」

「そちらにもいるかな」

「さて」

それがわかる者なぞいる筈もなかった。

「いるかも知れませんし」

「いないかも知れない」
「それに戦争に入るかどうかもわかりません」
「彼等が満ち足りていればな」
「戦争にはならないでしょうし」
自分達の腹が満ち、よい服を着ていればそれだけで戦争はかなり減る。連合がこの一千年の間国家間で戦争が起きていないのはそれであった。彼等は餓えることもエネルギーのことで心配することもなかったからである。そして何かしらの戦争を促す思考も存在しなかった。サハラの様にそもそもが砂の惑星ばかりであり、預言も存在しなかったからである。ここが連合とサハラの大きな違いであった。アメリカや中国の様に相変わらず覇権を目指している国は武力ではなく経済でそれを目論んでいる。経済により何かをするつもりならばそれを阻害しかねない武力は捨てなければならない。こうした事情から連合では国家間の争いに武力が用いられることがなかったのだ。領土問題が起これば別の広大な場所が見返りとして与えられる、若しくは無限の権益が。宇宙は彼等に多くのものをもたらしていたのだ。
「どんな知的生命体がいるかな」
「まだ巡り合っていませんが」
「願わくばウルトラマンに出て来る様なのでなくて欲しいな」
二十世紀の日本で生まれた特撮もののヒーローである。最早ゴジラと並ぶ伝説的な存在となっている。今も新作が作られている。連合ではヒーローの一つである。スーパーマンと並んでいる。
「若しかするとウルトラマン本人達がいるかも知れませんよ」
「それは簡便して欲しいな」
八条はそれを聞いて笑みを浮かべた。
「彼等が出て来ると地震より怖い」
「はい」
「余計な仕事が増えてしまう。それはよしてもらいたいものだ」
ウルトラマン達が戦闘の際に街を破壊することを冗談めかして言

っているのである。
「しかし悪い奴等を倒してくれますよ」
「実は前から思っていたのだが」
「はい」
「その悪者にしろ彼等がいるから来るのではないのか？」
そう仮定してみせた。
「そうでしょうか」
「よく考えてくれ。彼等がいない間は来ない」
「別のヒーローは出ますが」
「あのバルタン星人にしろヤプール人にしろ」
ウルトラマンシリーズの名悪役である。宇宙忍者と言われ、各シリーズで大活躍したバルタン星人も群生し、ウルトラマン達に向かうヤプールもウルトラマンシリーズにしか出ない。
「ウルトラマンが出て来る時だけだな、出番は」
「言われてみれば」
それは当然なのである。ウルトラマンシリーズの悪役なのだから。放送されている間にしか出ることは無い。二人はそれを承知のうえで話をしているのだ。

## 第十八部第三章　旅路その八

「ウルトラマンが敵を呼び寄せているのではないのか」
「そうした考えも可能ですね」
「そうだろう。願わくば会いたくはない」
「Ｍ７８星雲が本当にあったとしても」
本当にあればあればで恐ろしいことであるが。
「いて欲しくはないな」
「しかし御会いしたいという想いはあるでしょう」
「否定は出来ない」
八条は笑ってこう言った。
「子供の頃そう思ったものだ」
「誰でもですね」
「そうだな。宇宙にはまだまだ可能性がある」
八条の目が遠くに向けられた。
「我々の前に。無限の可能性をたたえている」
「一千年を経ても」
「だがそれを手に入れる為には後ろを固めておかなくてはな」
「その為に今エウロパに向かっているのですね」
「そうだ。オリンポスに」
八条の目が近くに戻った。
「エウロパにとっては今は無限の可能性どころではないだろうな」
「彼等にとっては危急存亡の時です」
木口は落ち着いた声でこう述べた。
「今を切り抜けなければ可能性なぞありません」
「切り抜けられるだろうか」
「少なくとも我々は彼等に止めを刺すつもりはありません」
「では彼等次第か」
「生きるも死ぬも」

「だがそうそう元気になっても困る」
これは連合の本音であった。敵に薬を与える者なぞいはしない。
「適度に苦しんでもらわなければ」
「では何かと足枷をつけておきましょう」
「それも交渉次第だな」
八条はそう述べた。
「大統領と外相も。何かと考えておられるだろう」
「明日また打ち合わせでしたね」
「そうだ。オロルンに入ってな」
「私もまた同行させて頂きます」
これは秘書官として当然のことであった。だが彼の意図はまた別のところにもあった。
「それで宜しいでしょうか」
「ああ、是非頼む」
「はい」
木口はにんまりと笑った。八条もその笑みに気付いた。
「！？何かあるのか！？」
「何かとは！？」
慌ててその笑みを消して応える。
「いや、急に笑いだしたからな」
八条はその笑みに対して問うた。
「何かあったのかと思ってな」
「別に何もありませんよ」
実はあるのだがそれをわざわざ口に出す者もいない。
「御心配なく」
「そうか」
八条には不思議な癖がある。かなり鋭いのであるがあることに関してはその鋭さが全く向けられない。それが彼を彼たらしめていると言っても過言ではない。
「ではいい」

「はい」
そして木口はそれを誤魔化すことに成功した。
「では明日な。宜しく頼むよ」
「わかりました」
そして次の日になった。八条はシャトルでオロルンに向かった。
巨大なシルエットが彼の前にあった。
その巨大な腹から中に入り会議室にカーで向かった。
「艦艇の中に車があるのもティアマト級だけですね」
「そうだな」
八条は木口の言葉に頷いた。
「艦内での戦闘になった時は戦車も持ち込めた」
「あれは最初聞いた時かなり驚きましたが」
「だが決して不可能ではないしな」
これは設計上からも容易に理解出来るものであった。
「意外なことだったが。特に驚くことでは」
「そんなものですか」
「この艦はあらゆる意味で特別な艦だ」
そしてこう言った。
「巨大なだけではなくな」
「はい」
「言うならば我が軍の象徴か」
数千隻のこの巨艦が連合軍を象徴していた。エウロパ軍は結局この巨艦を一隻も沈めることが出来なかった。一隻のティアマト級巨大戦艦に一個艦隊が退けられたこともある。不沈艦とさえ謳われていた。
「これ以上にない」
「将兵達に頼りにされているそうですね」
そして精神的な支えにもなっていた。
「この艦がいれば。負けることがないと」
「信仰に近いのかもな」

「だとすれば。因果ですね」
「因果！？」
「はい、ティアマト級巨大戦艦はその名称を神々や英雄からとっていますから」
今八条が乗り込んでいるスサノオにしろそうである。日本神話の荒ぶる神である。ヤマタノオロチを倒した英雄神でもありその名はよく知られている。今いる艦もアフリカの神話の創造神の名である。カバリエが乗っているコヨルショウキは中南米の神話の女神である。この二柱の神々が銀河の時代になって復権したものである。
「信仰されるのも。当然と言えば当然でしょう」
「神故にか」
「そういうことです」
木口は答えた。

## 第十八部第三章　旅路その九

「自然な話に思えます」
「そういう見方もあるか」
「はい」
「巨大戦艦には神々が宿っている」
「巨大戦艦だけではありませんがね」
いささか日本神道的な考えを述べた。
「他の艦艇もです」
「宿っているのは」
「全ての艦艇に何かが宿っているのではないでしょうか。そして我々はその何かを信じている」
「ふむ」
「私はそう思う時があるのです」
「確かにそうかも知れないな」
一理あると思った。八条も日本人でありそうした考えに頷けるものも見出したのである。
「全てのものに何かが宿っている」
「ええ」
「そしてそれを信じる。原始的なシャーマニズムかも知れないな」
「ですが信仰なのは事実です」
「確かに」
「それからか宗教というものが生まれましたし連合にある多くの宗教もその流れを汲んでいます」
「そして我々も」
「はい。この艦にはスサノオが宿っているのでしょうね」
「スサノオか」
「頼りになると思いますよ」
日本神話における最大の荒ぶる神であると言っていい。だからこ

の名が冠せられたのでもあるが。
「だがこれで満足するつもりはない」
「といいますと？」
「このティアマト級巨大戦艦は確かに素晴らしい性能を誇っている」
連合軍がその技術の全てを注ぎ込んだものである。これは至極当然のことであった。艦隊の旗艦でもあり連合軍そのものの象徴でもあるのだ。強大な連合軍そのものを表す巨大戦艦というわけである。神々や英雄の名が冠されているのもそうした理由からである。
「はい」
「しかしそれに安心する気はない」
「ではこれ以上の艦艇を開発されるのですね」
「そうだ。今考えているのは軍を指揮するものだ」
連合軍の編成では十個艦隊で軍団、その軍団が十個で軍となっている。即ち百個艦隊で軍となるのである。この艦隊一つ一つに巨大戦艦が旗艦として配されている。なお艦隊司令は中将となっている。連合軍は将官の階級は准将、少将、中将、大将の四つである。上級大将は存在しない。下士官の階級は他の軍に比べて異様なまでに多いが将校のそれは案外シンプルなものになっているのだ。なお大将は軍団及び軍の司令官になる。同じ階級であっても待遇が違うということである。この軍が複数集まり一つの軍管区を担当するが普通これは三つの軍から成り軍集団と呼ばれる。軍集団の司令は元帥となっている。連合軍の元帥は単なる階級でありエウロパのそれのように元帥府を開いて独自の人材を集められるだの軍服のマントの色が変わるだのといったことはない。そもそも連合軍の制服は背広タイプでありそうした装飾はないのである。軍服のマントは連合軍にとっては忌まわしい貴族の華美の象徴でありまた機能面から言っても好ましくないと判断されている。そうした理由でマントは連合軍には存在しない。本来防寒や熱気から身を守るものであるがそれにはコートや夏服で対応しているのである。ちなみに連合軍の冬服は黒、夏服は白である。夏服はかなりラフなものであるが礼服になる

と詰襟になり堅苦しいものになっている。

# 第十八部第三章　旅路その十

連合軍の階級編成は次の様になっている。まず艦長は中佐である。そして艦艇が十隻の小艦隊で大佐、百隻、小艦隊が十個で中艦隊であるがこれは准将、そして千隻、十個中艦隊で少将が指揮する。ここは繰り返しになるが軍団は大将が指揮し、軍も大将である。ここで階級が重なるが大将の中でもランクがあり、よりランクの上の人物が軍を指揮する。ここが連合軍が他の軍と違う大きなポイントの一つである。あえて上級大将というものを置いていないのだ。これは将官の階級が増えて指揮系統が混雑するのを嫌ったのだとも連合軍では元々上級大将という階級がなかったせいだとも言われている。この軍が三つ、やがて四つで軍集団となる。これは一つの管轄区を担当し、元帥がその地区の艦隊総司令を兼ねて指揮している。おおよそ編成はこの様になっている。

「それも軍を」

「軍をですか」

「それで考えているのだが」

八条は考える顔になっていた。

「どういった艦艇にするかな」

「百個艦隊を指揮する艦艇ですね」

「そうだ」

「ではティアマト級より更にスケールの大きな艦になりますか」

「専用の港も必要だな」

「はい」

連合軍の艦艇は地上に降りる場合と宇宙港に停泊する場合の二つがある。もっぱら後者であるが両方可能になっている。

「この巨大戦艦ですらそうですから。かなりのものが必要です」

「うむ」

「それをどうしていくかですね」

「それも今後考えていくか」
「はい」
「この巨大戦艦以上のものになるのだからな」
そこで車が止まった。会議室の前に着いたのである。
「到着です」
「はい」
車の扉を開けた兵士に応える。
「では案内致します」
「御苦労様です」
そう言って若い中尉の案内を受ける。木口は別室に案内される。
そこで八条を待つことになっていた。
「あの」
案内される途中で木口は案内役の将校に声をかけた。
「何でしょうか」
「この艦に若い女性の大尉の方がおられましたよね」
「マークは何でしょうか」
職種のことである。
「ええと、確か」
それを問われて頭の中で考える。
「航海でしたっけ」
「航海ですか」
「ええ、確か」
「航海で若い女性の大尉といいますと」
その将校は考える顔になった。
「エドガー＝リー大尉ですか」
「そんな御名前だったのですか」
「リー大尉がどうされましたか？」
「いえ、実は」
彼はにこやかな声で応えた。
「お暇ならお話したいことがありまして」

「お話ですか」
「ええ、宜しければお伝え願えるでしょうか」
「いいですが」
「わかりました。ではお願いしますね」
木口の顔がさらに明るくなった。
「この艦艇について御聞きしたいことがありまして」
「はい」
こうして彼はそのリー大尉と話すことになった。事前にわかったことはチリ出身であるということと彼女が独身であるということだった。彼にとって重要なのは後者であった。
「それにしても」
八条は案内されながら考えていた。

## 第十八部第三章　旅路その十一

「木口君は。何故あそこまでこの艦に来たがっていたのだろう」
仕事だからここに来るのは当然である。だが彼のそれは明らかにニュアンスが違っていたのだ。来たくて仕方がないといった感じなのであった。
「この艦の紅茶が美味しいのだろうか」
そして的外れな予想を立てた。
「それとも性能に注目したのか。わからないな」
「長官」
「はい」
だがその考えは中断せざるを得なかった。案内役の将校が声をかけてきたからである。
「着きました」
「はい」
見れば目の前に黒い扉がある。会議室と書かれている。
「ではどうぞ」
「有り難うございます」
将校が扉を開けてくれた。それに応えて部屋に入る。
部屋の中は機能的な簡素な部屋であった。あくまで会議をする為の部屋であることがわかる。
そこにはもうキロモトが待っていた。カバリエもである。
「おお、来てくれたか」
「遅れて申し訳ありません」
八条は部屋に入るとまずこう言って一礼した。
「いやいや、遅れてなんかおらんよ」
その言葉にキロモトは鷹揚に返してきた。
「私も外相も今来たところだ」
「そうなのですか」

「うむ。ではすぐに話に入りたいのだが」
「わかりました」
彼はそれを受けて席に着いた。そして二人と向かい合って話をはじめた。
「話すことはわかっているね」
「はい」
二人はキロモトの言葉に頷く。
「今回の講和の条約に関してだ」
「まずは領土の問題ですね」
カバリエが口を開いた。
「それをまずどうするか」
「そうだな。私の考えではだ」
「はい」
二人はキロモトの言葉に注目した。四つの光が彼に集まる。
「領土は殆ど要らないな」
「要りませんか」
「そうだ。連合にとって魅力のある星系はないと言っていい。産業も資源も」
「そうですね」
それにカバリエが頷いた。
「それに各国の間で。どの星系を手中に収めるかで騒動のもとにもなります」
「だからだ。ここは要らないと思うのだ」
「成程」
「ブラウベルグ回廊だけでよいのではないかな」
「いえ、それだけでは防衛上完全とは言えません」
しかしここで八条が口を開いた。
「長官」
「回廊の出入り口も押さえておかなければ」
「つまりそれは」

「そうです、ニーベルングです」
八条は二人にこう言った。
「ニーベルング要塞を割譲させたいのですが」
「ニーベルングをですか」
「そうです、そして周辺星系の非武装地帯です」
「エウロパ側からの侵攻をさせない為に」
「如何でしょうか」
「そうですね」
それを聞いたカバリエが考える顔をした。
「私は国防に関しては専門家ではないですが」
「はい」
「悪くはないと思います」
「賛成して頂けるのですね」
「ええ。守りなくして国はありません」
それは彼女にもわかっていた。だからこそ八条の案に賛成しているのである。
「エウロパは間違いなく我々に復讐の念を抱きますし」
「それを防ぐ為にも」
「よいのではないでしょうか」
「御二人はそれで宜しいのですな」
キロモトはここで二人に尋ねた。
「ニーベルングの割譲と周辺星系の非武装化で」
「国防に関してはそれでいいと考えます」
八条は述べた。
「非武装地帯は周辺星系全てで」
「ふむ」
「他の割譲は不要だと考えます」
「そうですな」
キロモトも領土を欲してはいなかった。これには素直に賛成出来た。

## 第十八部第三章　旅路その十二

「領土はニーベルングだけ」
「はい」
「他は興味なしといったところですな」
「領土はそれでいいと考えます」
八条は言った。
「ですが防衛上まだ行っておきたいことがあります」
「それは一体」
「敵の兵器の接収です」
それもまた重要な戦利品なのはこの時代も同じである。
「兵器ですか」
「はい。具体的に言うと要塞等です」
「何か注目すべきものがありますかな」
「まずはテューポーンです」
クロノス星系会戦でエウロパ軍が第三次防衛ラインに置いていた巨大要塞である。無数のビーム砲を持っていることで知られている。
「テューポーンをですか」
「敗れはしましたがあれはかなり強力です」
彼は言った。
「接収し、連合の防衛に使えば」
「ですが長官」
しかしここでカバリエが話に入って来た。
「何でしょうか」
「あれは。かなりの損害を受けている筈ですが」
「それは修復すれば済むことです」
「しかも我が軍の巨大戦艦の一斉射撃に敗れています。弱点も露呈しておりますし」
「はっきりと露呈していればそれをなおすことは容易いものです」

だが八条はここでこう述べた。
「そうすれば問題はないと考えます」
「そうなのですか」
「それにあれを単独で使うから問題があったのでしょう」
「単独で」
「他のものと組み合わせればよいのですよ。無論他の要塞も接収します」
連合軍はそれを考えていた。それをそのまま連合の防衛に使うというのだ。
「他のものも」
「エウロパのめぼしい要塞兵器は全て移動させます。そして連合の国防にあてます」
「何処を守らせるつもりかね」
「まずは首都である地球です」
八条は言った。
「これ等の要塞にまず地球を守らせます」
「ふむ」
「続いてサハラとの国境でしょうか」
「サハラとか」
「そろそろ。あの地域もまた戦乱に覆われそうですし」
既にその気配はあった。連合もそれを察知しているのである。
「オムダーマンとティムール、そしてハサンの間でか」
「残りは三国、その三国でいよいよ統一の為の戦いが起こります」
「それに巻き込まれない為に、そして統一した後の為にか」
「備えておくべきかと」
彼は述べた。
「如何でしょうか」
「国防上基本だな」
キロモトはそれを聞いて頷いた。
「反対する理由はない」

「有り難うございます」
「だが一つ気を着けたいことがある」
「それは」
「罠だ」
彼は言った。
「罠！？」
「そうだ。受け渡し等の際にな。注意したい」
「爆弾等のテロ工作でしょうか」
「いや、装置に細工をして使えなくしている可能性がある」
キロモトは言う。
「そうなれば元も子もないからな。それはわかっているな」
「はい」
八条はその言葉に頷いた。
「その可能性は否定出来ません」
「ではわかるな」
「エウロパの要塞の設計図等も押さえますか」
八条は細かかった。そこまで見ていたのである。
「それは条約には組み入れられないがな」
「はい」
「裏でだ。よいな」
「了解」
「軍事はこれでいいか」
キロモトは軍事に関する話が一段落ついたと見た。
「次は宗教についての話がしたいのだが」
「バチカンですね」
カバリエが問うた。
「うむ」
そしてキロモトはそれに頷く。
「あそこを。何とかしておかなければな」
「やはりエウロパに移転させますか」

「そうだな。だがここで一つ問題がある」
「それは」
「バチカンの意志だ」
バチカンの名前が出る。これは予想されたことだったが。
「バチカンの」
「信仰は心だ」
そしてここでこう言った。
「これを汚すことは。人にとって最大のタブーだ」
「どういうことでしょうか、この場合は」
「我々がバチカンを強制的に連合に連行したと思われたくはない」
彼は言う。
「そうなれば。歴史にまで悪名を残してしまう」
「教皇のバビロン捕囚の様に」
「あれをまたするわけにはいかない」
「ではどうされるのですか？」
「バチカンには自分達の意志で来てもらいたい」
それが連合の判断であった。
「自分達の意志でですか」
「そうだ。表向きにはな」
この言葉こそが真理であった。
「自分達の意志で連合に来て欲しいのだ」
「それを我々が援助すると」
「バチカンに来てもらうのだ、連合に」
そういった体裁を取りたいのである。裏はどうであれ、真相はどうであれ表ではそういったふうに。これが政治であった。裏や真実はまずはどうでもいいのだ。表面さえ取り繕えられれば。それで全てが済む。話は収まるのだ。奇麗事で塗ってしまえばまずは終わるのである。
「我々はそれを喜んで迎える」
「美談になりますね」

「来る理由はどういったものがいいかな」
「そうですね」
カバリエはそれを聞いて考え込んだ。

## 第十八部第三章　旅路その十三

「連合の信者の声に応えて、ではどうでしょうか」
「信者のか」
「はい、連合のカトリック信者の数はエウロパのそれを遥かに凌駕していますし」
これは人口の関係から当然であった。
「これは充分な理由になるかと思います」
「だが今のところそうした声はあがってはいない」
「あることにすればよいかと」
カバリエは述べた。
「戦争に勝つことは不思議なものでありまして」
そして言葉を続ける。
「戦勝国があると言えばあるのです」
「では我々にとってはあるということだな」
「はい」
「無いと言えば無い」
「そういうことです」
詭弁めいているが。政治の世界ではこうなることもある。
「ではバチカンの移転も決定だな」
「ですね」
「問題はバチカンの場所だが」
「それはまた別の問題でしょう」
「さしあたっては太陽系にいてもらうか」
「それがよいかと」
預かりという形である。そこから本格的に決めるということになるのだ。
「大国達の動きも気になるしな」
「ええ、まあ」

その大国の一つである日本出身である八条は少し複雑な顔になっていた。カバリエの母国であるメキシコも大国であり、尚且つ多くのカトリック信者がいるが彼女はそれを顔には出してはいない。
「暫くは様子見か」
「下手に手を打ってはそれが騒動の元になります」
「うむ」
「ここは慎重に」
「いずれは何処かの場所に国を持ってもらうことになるだろうがな」
これについても議論が為されることは予想されていた。なお実際にこの後で連合中を巻き込む大論争にもなる。
「バチカン自身に力を持ってもらっても困ったことになりますね」
「長官」
キロモトとカバリエは八条に視線を集中させた。
「それはどういうことかね」
「バチカンのこれまでを考えますと」
彼はその視線に応える形で述べた。
「密かに力を蓄えることが考えられます。また彼等の資金は他の国のそれとは異なっています」
「しかも尽きることがない」
「はい」
八条は答えた。バチカンの財源は聖書や賛美歌からだけでなく信者からの寄付がある。これが実に莫大なものなのである。若しバチカンが財政的に困っているという話が出る。するとそれだけで多くの寄付が集中豪雨の様にバチカンに送られて来るのである。これが信仰の力であった。
「かつての様に軍を持つことはありませんが」
教皇領もである。流石にそれはなかった。
「ですがあの資金、そして信仰はそれだけで他の国々にとって脅威であります」
「バチカンには逆らえないか」

「彼等は信仰、人としてのあり方として我々に対して色々と話をすることは可能です」
八条は非常に言葉を選んでいた。彼もバチカンの恐ろしさはわかっていた。あくまで政治的介入という言葉を避け、慎重な言葉に終始していた。だからこそこうした場でもあえて慎重に言葉を選んでいるのである。
「ですが我々からは」
「宗教に政治が介入することは憚れるな」
「本来は政治に宗教が介入することこそが問題なのですが」
表向きはそうだが。実際は結構違うのが現実でもある。
「バチカンはあまりにも政治的な存在でも有り過ぎる」
「はい。中央政府でも連合のどの大国でもバチカンとことを構えるのはリスクが大きいです」
「それを選んだ政治家は少なくとも次の選挙を覚悟しなくてはならない」
「そうですね」
それは政治家にとって非常に大きな危機である。
「政治生命だけであればよいのですが」
「怖い言葉ね」
カバリエがそれを聞いて呟いた。

## 第十八部第三章　旅路その十四

「それだけで済めばいいなんて」
「カンタレラは流石にないでしょうが」
「カンタレラか」
それを聞いた二人の顔が暗くなった。
「確かに今は彼等はカンタレラは持っていない」
「けれど。まだ毒は持っているでしょうね」
「バチカンは。毒の宝庫ですから」
毒薬ばかりが毒ではないのである。政治の世界には様々な毒がある。表だけで政治は語れない。全ての世界においてそうであるが政治の世界はとりわけ裏の世界がある。その裏の世界で使われるものを毒と称しているのである。なおカンタレラとはボルジア家が使っていた有名な毒薬であり彼等はこれを使って多くの政敵を暗殺してきたと言われている。この毒はルネサンスの時代非常に恐れられたがむしろこれを駆使する教皇アレクサンドル六世とその息子であるチェーザレの奸智にこそ恐怖があったのである。
「手段は。選ばないでしょう」
「それは歴史のうえでだな」
「今も。そうでないとは限らないでしょう」
「そうね」
カバリエはその言葉に頷いた。
「バチカンだから」
「はい」
「何でもあると思っておいた方がいいわね」
「エウロパの連合への移転の本当の理由はもう言うまでもない」
「はい」
「スパイ工作の根源の一つを消すことと彼等から権威を奪うことだ」
この場合彼等とはエウロパのことである。

「スパイという毒の害から逃れる為だが」
「バチカンそのものもまた毒です」
「我々もその毒に苦労しそうだな」
「何処にいてもらうかで今後大きな議論になるのは間違いないでしょうね」
「うむ」
キロモトは八条の言葉に応えた。
「非常にな。厄介な話でもある」
「ですが何としても彼等は連合に持って来なければ」
「またステッラの様な事件が起こる。そうなっては今回の戦争の理由がなくなる」
「ええ」
キロモトのその言葉に頷く。
「入れるしかないな」
「そうですね」
「問題は中央政府がその毒にやられないことかと」
「だが目を離してはいけない」
「はい」
「バチカン市国の様にしてもよいが」
これはイタリア統一後教皇領を奪われバチカンに幽閉される形となっていた教皇に対してファシスト党のムッソリーニが彼等を国家とし、和解したことにはじまる。水道や電気等生活に必要なものは全てイタリア政府が供給し、そのうえでローマ市内にある国家として認めたのである。カトリックの本拠地であるイタリアでは教皇を無視することは出来なかった。ムッソリーニは確かに政治家としては傑出していたのである。
「何処かの国に任せるとやはりまずいかな」
「少なくとも大国だけは間違っても」
「長官には悪いが四大国は絶対に駄目だな」
「わかっております」

八条はキロモトのその言葉に応えた。彼はこの時日本人としてよりも連合中央政府の閣僚として応えた。これは公人としての返答であった。
「ＡＳＥＡＮや中南米諸国もな」
「はい」
カバリエもそれは同じであった。
「避けたい」
「そうですね」
「バチカンへの行幸もまた莫大な収入をもたらすからな」
人の往来があればその分だけ金が動くからである。
「どうすべきか」
「中央政府が面倒を見るのがいいのでは、とも思いますが」
カバリエはここで言った。
「我々でか」
「ただ。それだとやはり信仰と政治の問題があります」
「中央政府がそれではまずいな」
「出来ませんか」
「これは容易に結論が出ない問題だ」
この場は話が収まりそうになかった。キロモトはとりあえずは話を打ち切ろうとした。
「講和が終わり、バチカンがやって来てから本格的に行うか」
「そうしますか」
「まずはな。じっくり大勢で話した方がよい問題だ」
「ではここではこれで止めますか」
「いささか不本意だがな」
そうであるが。これ以上話してもらちが明かないのもまた事実である。
「まあ仕方ないかと」
「では次の話に移りましょう」
「うむ」

カバリエと八条に促され次の話に進んだ。今度は賠償金に関してであった。

# 第十八部第三章　旅路その十五

「次は賠償金だが」
「はい」
「問題は額だな。そして名称」
「賠償金ではいささか体面が悪いですか」
「そうだろう。向こうにもプライドがある」
そのプライドを徹底的に壊す場合もあるが政治であるが彼等はこの時はそれを使うつもりはなかった。
「それを傷つけると。執拗に復讐を考える恐れがある」
「翻ってそれが我々の防衛上の危険になる」
「額もそれに関係しているがな」
「双方を慎重に考えなければなりませんね」
「そうだ。まずは名称だ」
キロモトは言った。
「ストレートに賠償金ではな」
「別の名前ですが」
「何かいいのはあるか？」
「そうですね」
カバリエが思索に入った。
「戦傷者への義援金ではどうでしょうか」
「何か回りくどいな」
「ですがそれだと賠償ではありませんし」
「向こうも立つ瀬があるか」
相手のプライドも立てる。これも外交的配慮である。彼等はそうしたことも考えていた。敗戦国とはいえ名誉を守るのも重要なのだ。無論例外もあるが。
「そう思いますが」
「ではそれでいくか」

「はい」
「次は額だ」
それもまた肝心だ。というよりは最重要問題である。
「まあエウロパを破滅に追いやらない程度で、しかも彼等の足枷になるレベルですね」
「そう考えると難しいな」
「ですが手頃なところで」
「うむ」
キロモトも八条も考えていた。
「さしあたっては」
八条が言った。
「今回かかった戦費程度でいいと思います」
「戦費のか」
「はい。ちょうど莫大な額になっておりますしエウロパにも支払い可能なレベルだと思います」
「戦費の分の埋め合わせの意味もあるな」
この加減が難しい。一歩間違えれば永遠の怨恨となるものでもあるからだ。
「ええ。それ以後は」
「その戦費の額だけ支払い続ける。支払い期間は」
「十年が宜しいかと」
期限も定められる。これはそれだけ相手国に経済的負担を強いるということである。
「ではそうするか」
「はい」
「賠償金はこれでいいな」
「そうですね。これだといいでしょう」
「彼等もそれを破るとは思えませんし」
「破ればどうなるかは彼等の方がよくわかっていることだ」
キロモトの言葉は冷静なものであった。

「それに彼等の騎士道にとってそれは忌むべきことだな」
「ええ」
「安心していい。それに関しては」
「では」
声をあげる。
「とりあえず我々の打つ手はそんなところか」
「軍事的、経済的な足枷はしないのですか」
「いや、それはいい」
キロモトはカバリエのその言葉に首を縦には振らなかった。
「軍事的にはどんどん増強してもらってもいい」
「それが彼等にとって財政負担になるからですね」
「そうだ。そしてそれが向けられても退けられればいい」
「ですね」
八条がここで頷いた。
「だからこそニーベルングまで手に入れるのです」
「長官は考えているな」
「備えあらばこその防衛ですから」
八条はこう言ってすっと笑った。
「彼等を進ませない」
「どれだけの軍備で来ようともか」
「エウロパの軍備は五百個艦隊が限度であると考えます」
これはエウロパの人口及び国力から計算したものである。総動員令をかけて集めたのがこれだけの艦隊であったのだ。それは八条も見抜いていた。

## 第十八部第三章　旅路その十六

「それだけを防げればいいのです」
「ニーベルングとブラウベルグ、そしてガンタースによって」
「はい。まあ一挙にそれだけの艦隊を動員することはまあないでしょう」
「国をかけない限りはか」
「とりあえずはエウロパにはそれを行う力は消えております。他ならぬこの戦争で」
　エウロパがこの戦争で失ったのは五百個艦隊のうちの百五十個艦隊だけではないのだ。金銭的な損失もかなりのものであるし人的な損失も凄まじいものであった。それはエウロパがエウロパになってはじめての規模であったのだ。
「うむ」
「その間に五百艦隊を退けられるように整えておきます」
「わかった。ではそれは任せるぞ」
　カバリエと八条に言い伝えた。
「はい」
「そして経済的にだが」
「はい」
　二人はまたキロモトの言葉に顔を向けた。
「既に財政的な足枷は行った」
　賠償金のことであるのは言うまでもない。
「これで経済的にもかなり困るのは確実だ」
「確かに」
「それにエウロパ内部だけでは経済活動も限られたものになる。特に気にしなくていいだろう」
「ではこれは放っておいてよいのですね」
「うむ」

キロモトは頷いた。
「それでいいと思う」
「わかりました。ではその様に」
「わかってくれたか」
「技術面でもですね」
「彼等の技術は我々にとって脅威と言えるものではないと思うが」
八条にそう返した。
「それに足枷ばかりしても彼等の反感を過剰に買うだけだろう」
「ではこれもよいと」
「そうだ。彼等には活発に動いてもらいたいしな」
「我々に矛先が行かない限り」
「そう、我々に行かなければいい」
その言葉が少し剣呑なものになったように聞こえた。
「それでいいと思うが」
キロモトはここで言った。
「それを考えるとニーベルングを固めることは重要だな」
「はい」
八条は頷いた。
「そちらは長官に一任する。頼むぞ」
「わかりました」
「エウロパはこれから辛い状況になるでしょうね」
「戦争に負けるとはそういうことなのだな」
「はい。東は我々が抑え南はサハラに防がれ」
エウロパの現実であった。あまりにも過酷と言えば過酷だ。この状況がどれだけの閉塞的状況なのかはもう言うまでもないことである。
「北と西に行くしかないが」
「何十万光年も闇だけが拡がっています。これを越えることは」
「彼等の技術では無理だろうな」
「我々にしろ不可能です」

連合ですら何十万光年もの距離を踏破できる艦艇は持ってはいない。
「ましてや彼等は」
「それが出来たならばまさに大航海時代だな」
「第二の」
「今度は香料を求めるわけではない」
「プレスター＝ジョンの国ならあるかも知れません」
「モンゴル帝国かも知れないがな」
かってヨーロッパ人達に信じられてきた伝説の国である。最初はアジア、そして後にはアフリカにあると言われていた。キリスト教徒の王が支配する国であり、いずれイスラム教徒を討ち、彼等を救うと言われていた。それがプレスター＝ジョンの国である。
「若し彼等が行くとなればどうなるでしょうか」
八条は問うた。
「求めるのは新たな領土ですが」
「辿り着くまでに多くの犠牲を出すだろうな」
キロモトはそれにこう答えた。

## 第十八部第三章　旅路その十七

「何十万光年もの距離はそれだけで障害だ」
「はい」
「そのうえそこに何があるのかもはっきりしない」
「恒星がないのははっきりしていますがね」
「エウロパは以前からあの辺りに調査団を送っているそうですが」
いずれ進出する為だ。今のままでは閉塞していくのが彼等にもわかっているのだ。
「まだ大したものは見つかってはいないのだろうな」
「それならばこちらにも話が伝わっているでしょうし」
「そのうえ犠牲者も多いと聞く」
「はい」
「どうしていくのか。我々にはわからないな」
「惑星開拓の技術も我等の方が上ですしね」
八条は述べた。その技術の中には小型ながら人口の恒星を作り出したりブラックホールを消したりするものまであるのだ。こうした技術を持っているのは連合だけである。
「その我々でもあそこへを踏破することは不可能です」
「少なくとも一気には無理だな」
「そうです」
「しかし実際に行くとなれば彼等はあそこしかないな」
「留まっても結果が見えておりますし」
「それを考えると我々は非常に恵まれている」
キロモトは感慨を込めて述べた。
「その何十万光年もの距離に無限の恒星と惑星があるのだからな」
「はい」
「これが連合を支えてきた」
「そしてこれからも」

「時々考えることがあるのだ」
そしてまた述べた。
「何でしょうか」
「我々とエウロパの立場が逆だったならどうなっていたのか、とな」
「そうですね」
八条がその言葉に答えた。
「おそらくは。我々もああしてサハラに攻め込んだでしょう」
「やはりそうか」
「人口にも発展にも悩まされていた筈です。少なくとも今の我々ではなかったでしょう」
「我々は幸運だったのだろうか」
「そうした意味では幸運です」
彼は言った。
「何の気兼ねもなく発展することが可能だったのですから」
「そうなるか」
「進出の先に他の知的生命体がいる可能性もありますが」
「何十万光年も先にか」
「はい。彼等が若しいるならば」
あくまで仮定である。しかし常に念頭にある仮定であった。
「何が起こるかわからないな」
「全面戦争の可能性もあります」
「そうならないことを祈る」
「はい」
「宇宙は確かに広い」
こう述べた。
「だが。我々の世界は限られている」
「何処まであるかわからない宇宙でも知ることのできるものは限られていますから」
「そうだな。そして我々はその中で生きるしかない」
結論はそれしかなかった。

「案外。狭いものでもある」
「ええ」
「別の銀河に進出することも考えられてきているというのに。案外変わらないものだな」
「そういうものです」
八条は落ち着いた声で述べた。
「人間の本質はそうは変わりませんし」
「うむ」
これは残念ながら真実であった。愚かと言うべきか元々そうなのだと言うべきであるか。どちらにしろ人の本質というものはそれが善であれ悪であれそうそう容易には変わりはしないものであるのだ。
「他の知的生命体とはまだ正式に巡り合っていません。何が起こるのかもわかっていませんから」
「では今もまだ手探りか」
「そうですね」
「何もかもがか。とりあえずは今は発展させるか」
「四兆の人口がありますがそれ以上を」
「そして今まで以上の国力と技術を」
それしかなかった。といってもこれが中々難しいのも事実だ。連合も一千年の間に停滞も多く経験してきている。常に進歩しているわけではないのだ。またその停滞も後の時代から見たものでありそれもまた他者が見れば次のステップへの力の充実期だという意見もあるのだ。
「それがなければ若し他の知的生命体と遭遇した際の有事に対処出来ないでしょう」
「同じ人類に対しても」
八条は今度はカバリエの言葉に応えた。
「今もその一環だしな」
「外を安んじなければ」
「内政もない」

「はい」
こうして講和会議での連合の要求は決定した。八条は会議が終わるとすぐに乗艦であるスサノオに戻ることになった。だがここで一つ変わったことがあった。

# 第十八部第三章　旅路その十八

「木口君が？」
彼がリー大尉という女性士官と話をしているという話が耳に入ったのである。
「何処で話をしていたんだい？」
木口に直接問う。
「何処でって普通の場所ですよ」
「普通の場所」
「待合室で。まさか持ち場を離れるとでも？」
「いや、そうは思わないが」
八条はここで自分の問いがピントをずらしていることに気付いていなかった。
「ただ。気になってな」
「まあ御気になさらずに」
「ああ」
「ちょっと待て」
それを後ろで聞いていた制服組の面々はヒソヒソと話をはじめた。
「場所の問題か？」
「違うよな」
堅物が多いとされている彼等でも問題の本質に気付いていた。
「木口さんってこの前も美人と噂がなかったか？」
「あったあった、で、今度はリー大尉か」
「相変わらずだよな」
「フットワークがいいと言うか」
口々に結構勝手なことを述べる。
「で、この艦のことは何かわかったかい？」
「えっ！？」
「いつもながら熱心で助けられる」

やはり彼はわかってはいなかった。
「うちの長官ってこういうことには疎いな」
「顔はいいのにそうしたことは知らないか」
「美男子でももてるとは限らないしその道を知っているわけではないんだな」
「そうだな」
「後でじっくり聞かせてもらいたい。いいな」
「はい、わかりました」
そう言われてはこう答えるしかなかった。
「では後程」
「ああ」
八条は仕事に関しては安定感があり鋭い。穏やかだが知識も細かいのだ。
困ったことになった、木口は内心焦っていた。だがここで運良く八条がカバリエに呼ばれた。彼はその間に制服組に接近した。
「あの」
「わかっておりますよ」
軍人達は苦笑いを浮かべて彼に返した。
「秘書も大変ですな」
「いや、まあ」
「ところでリー大尉とはどうでしたか」
それを木口に直接聞く。するとこう返事が返ってきた。
「それはまた後で。まあガードの固い人ですが」
「けれどまんざらでもないようで」
「本当ですか！？」
「確かに彼女は堅物ですけれどね。けれどああしてじっくり話すことは少ないんですよ」
「そうなんですか」
木口はその言葉に目を向ける。
「脈ありかと。安心して下さい」

「わかりました」
木口の顔がかなり明るくなっていた。
「ですが仕事の方は」
「ええ、そちらですね」
考えをそちらに戻した。
「宜しければこの艦について」
「はい」
「教えて下さい」
「わかりました。では」
彼は軍人達から色々と話を聞いた。そして八条とも何とかそつなくこなすことが出来たのである。
八条は木口と共にスサノオへ帰った。変える途中は三万隻もの艦隊が周りを守っていた。
「これだけの艦隊があっても充分とは言えないかもな」
「閣下達の守りがでしょうか」
「いや、そっちじゃない」
だが八条はそれは違うと言った。
「より大きな話だ」
「大きな話」
「今我々は三千の艦隊を持っている」
基幹戦力である。後方支援のものもありそれはかなりのものになっている。
「はい」
「そしてそれが四千に増える。だがそれだけでも不充分かも知れないな」
「それだけあってもですか」
「今はいい」
窓から見える銀河を眺めながら言った。
「まだ時間がある」
「時間が」

「他の知的生命体と遭うまでな」
「そちらの話でしたか」
同じ人間に対する話ではなかった。木口はそれを聞いて頭を切り替えた。
「我々より大きな勢力を持っていて、尚且つ好戦的であったならばと思うとな」
「そうですね。けれどそれは向こうも同じことを考えていると思いますよ」
「向こうもか」
その生命体について考えを巡らせた。
「はい。まだ彼等が実際にいるかどうかもわかりませんがね。何十万光年の先に」
「ああ」
「けれどいたならば。やはりまだ見ぬ我々のことについてそう考えているでしょう」
「そうか」
「若しくはまだ石器時代かも知れません」
「文明も持っていないと」
そういう可能性もあるのだ。実際のところどういった文明なのかその規模も程度も全くわかっていないのである。
「既に戦乱の最中にあるかも知れませんし」
「宇宙にもかっての国連の様な組織があるかも知れないか」
「どちらかというと長官の御考えの方が可能性が高いかも知れませんけれどね」
「国連か」
「はい。やはり何事にも調整機関が必要ですから」
木口は言った。

## 第十八部第三章　旅路その十九

「それでとりあえずは平穏にまとまっているかも知れませんね」
「そうであればいいがな」
「まあ我々の知っている宇宙なんて本当に銀河の中の小惑星の様なものです」
「殆どわかっていないな」
「ですね。四兆の人口といっても」
「スープの中の小匙の一滴か」
そうなるのだった。四兆の人口も無限の宇宙の中ではその程度の存在でしかないのだ。
「そういうものです」
「かつて地球にいた頃にもそう言われていたがな」
「あの時の地球もそうでしたが。宇宙も果てしないものでしたから」
「そうだな。まさか恐竜がいるとは思わなかった」
「ドードーやステラーカイギュウもいましたし」
これは人類も思いも寄らなかった。まさか他の惑星で彼等に出会うとは。
「ましてやペガサスまで。想像上の動物だと思われていたのがな」
「エウロパにはそうした生き物はいないようですね」
「そうだな」
八条はエウロパの生態系についても聞いていたのだ。
「地球とあまり変わらない星が多い」
「はい」
「穏やかな惑星も多いしな」
「惑星一つ一つは連合の惑星よりも豊かな惑星が多いと言えましょう」
「それで何故惑星開発が遅れているのだろうか」
連合ならば容易に居住可能にできる惑星にも移住は行われていな

いのだ。スペースコロニーに住んでいる者は多いというのにだ。中には貴族が自分達の金でコロニーを作りそこに私有地を持っている場合もある。
「そうした技術は発展しなかったようです」
「それがわからない」
八条は述べた。
「見たところエウロパは一千億が限度ではない」
「我々ならば二千億は容易に住めますね」
「それも快適にな」
連合の技術ならばそうなるのだ。
「冥王星程度の惑星ならば居住可能にできますからね」
「そうだ。そうした分野ではかなり遅れているようだな」
「そうですね」
「精々火星レベルの惑星しか居住可能にはしていない」
「砂漠の惑星はそのままですし」
連合の者達は皆それに気付いている。それで内心驚いてもいる。
「生態系の破壊を恐れているわけでもないようだな」
「本来ならばそうは言ってもいられないでしょう、エウロパの人口問題を考えますと」
「そうだな。やはり科学技術の進歩の問題か」
「我々とはかなり違う方向に進化したのがわかります」
「具体的に言うとコロニーの開発か」
そこであった。エウロパではコロニーがかなり多いのだ。スペースコロニーはエウロパの文化と言ってもいい。

## 第十八部第三章　旅路その二十

「そういった方向に向かったようですね」
「我々とは考え方が違っていたのか」
「そうとしか考えられません」
「どうしていくつもりかな、これから」
「さて。総督府もなくなりましたし」
　エウロパの問題だが彼等にも関心があることであった。エウロパの動きは連合にも影響するからだ。政治というものは玉突きの様に影響し合うものなのだ。
「今まで以上に人口問題に悩まされるのは確実だ。それこそ惑星開発に必死になるか」
「何十万光年もの距離をつっきっていくのか」
「どちらしかないか」
「ですがどちらも彼等にとっては困難です」
「いや」
　だが八条はここでもう一つ方法があることに気付いた。
「いや待て、まだあるぞ」
「それは一体」
「侵略だ」
　そしてこう言った。
「侵略」
「そうだ。またサハラに侵略するのだ。この方法もある」
「ですがそれは」
　木口はその言葉には懐疑的だった。
「幾ら何でも無理では」
　普通はそう考える状況であった。
「今のサハラ北方はティムールが掌握しておりますしシャイターン主席は」

「今はな」
だが八条はそれでもこう言った。
「だが。彼がいなくなったらどうか」
「シャイターン主席がいなくなれば、ですか」
「そしてサハラが混乱すれば。わからないぞ」
「また攻め入ると」
これも考えらていることである。
「そうだ。もっともサハラの方でもそれに関しては考えているだろうがな」
「ではまたサハラで戦乱が起こると」
「その可能性は皆無ではない」
彼は言った。
「双方にそういう条件が揃えばあるいは」
「サハラもサハラで色々ありますからね」
「そういえばティムールは今回の講和条約に関して何も言っていないな」
「言う立場でもないと思いますが。戦争には直接参加していないのですし」
「いや、モントローズ要塞の非武装化位は言ってくると思ったが」
「ないようですね、それは」
シャイターンが動くと思っていたのだ。しかしこの予想は肩透かしを受けた形となっていたのである。連合においてはシャイターンは頭脳明晰でカリスマも兼ね備えているが狡猾で抜け目のない人物と思われている。この評価は当たっていると言えた。
「そうだな。これは少し意外だ」
「ですがシャイターン主席ですからね」
「何か考えているか」
「そう考えるのが妥当かと。少なくともあの御仁は善人ではありません」
「我々の基準ではな」

八条の言葉は意味深いものであった。ここでサハラの基準を出したからだ。これは連合の基準とは違うと。はっきり言っているのである。

「だがサハラではどうかな」

「連合とサハラでは違うと言われるのですか」

「そうだ。連合の中でも基準はそれぞれ違うが」

「連合全体とサハラでも違うと」

「サハラではまず全ての基準はイスラムにある」

「はい」

これは不変のものであった。サハラはアラブ社会がそのまま銀河に出たものである。従ってその思想や行動原理は全てイスラムが基準となっているのだ。だからその善悪の基準もイスラムに沿ったものなのである。

## 第十八部第三章　旅路その二十一

「アッラーの前では一人の人間の悪なぞたかが知れている」
「偉大なるアッラーの前には」
「そうだ。そして善とはアッラーの教えに沿っていることがまず基準となる」
「シャイターン主席はそれから外れてはいないと」
「彼は信仰心が篤いというしな」
　シャイターンという男の複雑な二面性であった。彼は目的の為ならば手段を選ばない野心家であるがそれと共に常に信仰を忘れない男なのであった。色を好むことでも知られているがその妻はコーランにある通り四人である。豪奢な生活を楽しんでいても貧者への寄進も忘れない。イスラムの戒律は破っていないのである。これはムスリムの考えでは善となるのである。
　戦いに関してもだ。奸智は用いるが決して虐殺はしない。陰謀を使っても関係ない者まで巻き込んだりはしない。無法にして冷酷に見えてもそこには一定のモラルがあるのだ。ましてや戦いはイスラムにおいては大いに認められているものである。勇敢に戦い、そして死んでもジハードとみなされるならばそれは善なのである。シャイターンは決して臆病ではない。やはり彼はここでもムスリムから見れば善なのであった。
「我々から見れば油断のならない男だがサハラでは英雄か」
「英雄ですか」
「我々から見れば英雄ではなく姦雄、若しくは梟雄だがな」
「場所が違えば、というわけですか」
「そうなる」
　彼は冷静な声でそう述べた。
「シャイターン主席は英雄なのだ」
「その英雄が今回は動かない」

「若しくはエウロパの今度を見ているのかも知れないな」
「今後を、ですか」
「どう考えてもこれからエウロパは長い冬の時代を迎える」
「はい」
敗戦の後であるからこれはもう言うまでもなかった。
「それを見越してのことなのかも」
「暫くは動けないと」
「その間に守りを固めておく」
戦略の基本である。どれだけ衰えている相手でも決して油断せず備えは怠らない。八条はそのセオリーを忠実に守ろうとしていた。
「そう考えているのでしょうか」
「あくまで私の予想だが。そうではないかな」
「成程」
「どちらにしろエウロパは今後手詰まりになる」
それがどういった結果を連合にもたらすかはわからない。しかしこれは事実であった。
「どう動くにしろ、ですか」
「一千億の民を養う為に。どうするかな」
「そのどうかを出来なければ」
「衰退、若しくは破滅だ」
破滅、その言葉があまりにも心に残る。
「破滅、ですか」
「エウロパの未来は明るいとは言えない」
そしてこう述べた。
「自分達でどうにかしなければな」
「困難が待っていますか」
「さて、どうなるかだ」
「どちらにしろ我々には関係ないと」
「酷な言い方をすればな」
そこまで連合の者が考える義理はないのだ。八条の言葉が普段の

それとは違い冷淡なのもそれがあるからである。彼はあくまで連合の人間なのだから。
「彼等自身で考えるしかない」
「はい」
「これからどうしていくかは」
「我々にとってはこっちに来なければいいですね」
「その為にニーベルングを手中に収める」
彼は言った。
「こちらに向ける牙と爪は取っておく」
「その為にもですか」
「そうだ。もっともその牙と爪もやがてまた生えるが」
「それを我々には向けさせない」
「そのつもりだ。さて」
ここで銀河を見た。果てしない星の大河が拡がっている。
「どうすべきか」
「友好関係は望めませんしね」
「それは残念ながら無理だな」
現実的にそう判断を下した。
「一千年だ」
「はい」
「戦乱はなくともそれだけの期間対立していた。今更無理だろう」
「無理ですかね、やはり」
「彼等の貴族文化と我々の大衆文化は相容れないものがある。あれはどうしようもない」
貴族文化というものを悪し様に批判してきたのが連合である。連合では貴族とは腐敗し堕落した特権階級といった意識が強かった。教育の影響である。
「貴族と言えば我々にとっては」
「傲慢な支配者でしかない」
「ですね」

これが連合の持つ貴族のイメージであり優雅な存在という者はいてもその彼等にしろまずは連合の大衆文化ありきなのである。どちらにしろ連合の視点から見ているのだ。
「支配者ですからね、彼等は」
「特権階級とも見ている」
特権階級という言葉自体がエウロパへの感情であった。
「ええ」
「それでどうして相容れられるか。バチカンは別として」
「そういえばバチカンもありましたな」
「あそこをどうするか、だな」
「とりあえずは太陽系にいてもらうのですよね」
「そうだが」
木口の言葉に頷く。すると木口はまた述べた。
「どの惑星に住んでもらうことになりますかね」
「そうだな」
八条はその言葉を受けて思索に入った。

## 第十八部第三章　旅路その二十二

「とりあえず居住区地域があるのは木星以外だが」
「木星も開発しようと思えば可能ですがね」
「少し資源開発の為と割り切り過ぎたか」
「冥王星はまずいでしょうか」
「あそこは軍事基地が多いしな」
　太陽系の外縁としてその役割を担わされているのである。そのさらに外にある雷王星は第一防衛ラインとなっている。冥王星には一般市民の居住地域や農園、工場等もある。
「教皇の座される場所としては相応しくないだろう」
「では火星か金星でしょうかね」
「そこも五月蝿そうだな」
　八条は火星と木星を聞いて眉を顰めさせた。
「火星も金星もな」
　火星は戦乱の星とされている。これはギリシア神話の頃からである。そして金星はさらに因縁がある。堕天使ルシファーの星なのである。事情は複雑であった。
「では月は」
「キリスト教ではあまり縁起のいい星ではなかったと思うが」
「そうでした」
「難儀なものだな」
　八条は思わず呟いた。キリスト教の教義も案外厄介なものだとも思っていた。
「ここまで扱いに苦労するとは」
「地球の衛星軌道上に人工惑星でも作るか。そこにいてもらう」
「それもいいかも知れませんね」
「まあそれもおいおい考えよう」
「はい」

木口は彼の言葉に頷いた。
「もっともこれは私の仕事ではないが」
「宗教関係は。直接関係のある省庁はありませんからね」
「中央政府にはな」
各国の政府は別である。王室、皇室のある国には宮内省が存在する。ここは宗教も扱うのである。日本の宮内省もそれは同じで神道のそれを扱う。完全に政教分離が為されていないとも思えるがそもそも皇室や王室といった存在が政事ではなく祭事をその責務としている為に仕方ないのである。これはエウロパでも同じである。マウリアはさらに複雑なものとなっており連合でそれを理解出来る者は少ない。
サハラはまた別である。そもそもイスラムが全てであり、多くの派で聖職者が存在しない。従って政教分離も何もないのである。全てがイスラムから発しているのだから。この地域は完全に別世界となっている。
「大統領が直接あたられることになった」
「そうですか」
「あそこは放っておくわけにもいかないしな」
「バチカン、あまりにも力が大きいですね」
「枢機卿の紅の衣は一国の君主の紫の衣に等しい」
かつてはそう言われていた。この時代においてもその権威は高い。緋色の法衣は伊達ではないのだ。
「はい」
「そして教皇の白い衣は。皇帝か」
「いえ、皇帝よりも」
「そうだったな」
八条はここである言葉を思い出した。
「教皇は太陽、皇帝は月」
「はい」
教皇絶頂期の教皇インノケンティウス三世が言った言葉である。

この時教会は欧州をほぼ完全に掌握していたと言っても過言ではなかった。
「今でも皇帝と同じか」
「エウロパ総統がイギリスやオーストリアの王よりも待遇を上としているように」
「では陛下やエチオピア皇帝と同格になるのか」
「でしょうね」
木口もそう予想していた。
「それだけのものがバチカンにはあります」
「うむ」
「だからこそ扱いに困るのです」
「だがこれ以上工作の種を放置するわけにもいかない」
「そしてエウロパから権威を奪う為にも」
他にもバチカンがもたらす権益の存在も。理由は一つではなかった。

## 第十八部第三章　旅路その二十三

「手に入れなければなりません」
「だが何処に置くのかでもめるとは」
「ここはじっくりと考えていきましょう」
「そうだな」
彼等の問題は尽きることがなかった。宇宙が何処まであるのかわからないと思わせるまでに広いように。彼等は果てしない世界にいて、そして果てしないことを考えていると言えた。そしてそれを考えながらオリンポスに向かっていた。
それから暫く経った。八条はスサノオの艦長室でメサと話をしていた。
菓子と茶を囲んでである。見れば菓子は中国の桃饅頭であった。茶も中国風の茶である。
「内務省の友人から聞いたのですが」
「はい」
八条はメサの話を聞いていた。ソファーに向かい合って座っている。
「金内相もこの桃饅頭には目がないそうで」
「あの人が目がないのは桃饅頭だけではありませんよ」
「やっぱりそうですか」
「他のものも。かなりね」
「ケーキもお好きだとか」
「いや、甘いものなら何でも」
それが金であった。
「ほう」
「辛いものも召し上がられますが甘いものはそれ以上ですね」
「らしいですね」
これはもう連合では誰でも知っていることである。金は無類の甘

味通として有名なのだ。
「ホットケーキにもシロップをたっぷりと」
「確か色が完全に変わってベトベトになるまで」
「そうでないと食べた気にならないとか。当然飲み物にも」
「サイダーに生クリームとシロップでしたよね」
「果物もお好きですね」
「何とまあ」
これにはメサもかなり閉口であった。
「糖尿病になりそうですね」
「まあ内相は健康管理もしっかりしておられるようですが」
「いえ、そこまで召し上がられてそれはないかと」
「特殊な体質なのですかね」
「まあ糖尿病の薬もありますがね」
今ではこの病気も完治する病気になっている。痛風もそうであるが。
「それでもあそこまでは。尋常ではないです」
「まあそうですが」
「韓国料理は辛いですよね」
「はい」
「それでなおかつ甘いものまでとは。流石にそれは」
栄養バランスが冗談抜きに悪そうだと思ったのだ。間違いなく成人病になるような。
「金内相は辛いものは普通ですね」
「そうなのですか」
「やはり甘いものがお好きで」
「お酒はどうなのですかね」
「甘いカクテルやフルーツ酒がお好きだとか」
「やはり」
これはおおよそ想像がついていたことであった。
「なおそこにも砂糖やシロップを」

「うわ」
メサはそれを聞いただけで胸焼けがしそうであった。
「勘弁して欲しいですね」
「駄目ですか」
「駄目も何も尋常ではないですよ、やっぱり」
「甘いものも手頃なところで、ですか」
「はい」
桃饅頭を手にしながら八条に応える。
「極端に甘いと。本当に舌がどうにかなります」
「ただ和菓子はそのまま召し上がられますね」
「和菓子はですか」
「ええ」
八条は答えた。

# 第十八部第三章　旅路その二十四

「普通に。特に砂糖やシロップをかけることもなく」
「それは意外ですね」
見ればメサは本気で驚いていた。
「あの金内相が普通に菓子を召し上がられるとは」
「あの食べ方はもうかなり有名ですからね」
「ええ」
それはもう言うまでもなかった。
「それでですから」
「和菓子には何かあるのですか？」
「何かとは？」
八条は茶を口に含んでから返した。
「いえ、特別な甘さがあるとか。そういうのはないのでしょうか」
「別にそれはないですね」
八条はそう答えた。
「まあ上品な味だとはよく言われますが」
「はあ」
「そんなに驚くものでもないです。内相もお気に入りなのは本当ですし」
「けれどあの内相がそのまま食べられるとは」
「本当に信じられないのですね」
驚きを隠せないのがわかる。
「否定出来ません。まさか」
「和菓子だけは特別ということでしょうかね」
八条は特に結論を出すわけでもなくこう述べた。
「内相にとっては」
「特別！？」
「はい。巣のままの味を味わいたい。そんな対象ではないのでしょ

うか」
「ああ成程」
メサはそれを聞いて急に笑みになった。
「そういうことですか」
「どうされたのですか、急に」
八条は彼が急に態度を変えたので目をパチクリとさせた。
「何か気付かれたのですか？」
「おわかりになられませんか」
「！？」
だが八条はそれに一向に気付いていないようであった。目をしばたたかせている。
「何を」
「内相のことですよ」
「甘いものに関してですね」
「いえ、あのその」
八条の的を外した返事にメサの方が逆に唖然とした。
「おわかりになられないのですか、本当に」
「ですから何を」
「いえ、いいです」
そんな彼を見てもう言うのは止めることにした。
「とりあえず内相が和菓子は特別なものと認識しておられることは覚えておられてよいと思います」
「はい」
「ではそろそろガイアですが」
「エウロパの首都」
それを意識すると。あまりにも感慨深いものがあった。敵の首都に乗り込む、しかも勝者として乗り込むというのは途方もなく大きいものであるからだ。
「そこに降り立つのは連合の者ではじめてですね」
「ええ」

八条の頷くその顔に英気が戻る。その英気こそが八条を八条にさせているとも言えた。彼はその英気により動いているのだから。
「敵の首都に入城する。そして城下の盟を誓わせる」
「その時が来ようとしています」
「我等が出来るのはお送りすることだけです。そしてその後は」
「お任せ下さい」
八条は強い声で答えた。その声と共にスサノオ、そして他の二隻の巨大戦艦とそれを護衛する艦隊はオリンポス、その中のガイアに向かうのであった。

# 第十八部第三章　銃のない戦いその一

銃のない戦い

キロモト、カバリエ、そして八条達がオリンポスに近付いてきているのはエウロパ側にも伝わっていた。ラフネールはそれを聞きながら様々な策を練っていた。

「こう言ってくればどうするかだ」

「その場合は」

スタッフを集めて会議でのシュミレーションを行ったりしている。その対策に抜かりはないようにさえ思えた。

シュミレーションの他にも連合とエウロパの国力を調べなおし、彼等が要求してくるものやキロモト達についても研究したりしている。そうして万事に抜かりがないようにしていた。

交渉の席に着く閣僚達に対してもそれを要求していた。ペーチやシュヴァルツブルグ、そして外相であるラサール＝ド＝カミュとも話をしていた。とりわけカミュとは何度も話をしていた。

このカミュという男は名前からもわかる通りフランス出身である。貴族の中でも名門に生まれ、代々外交官の家系である。まだ三十代になったばかりながらエウロパ中央政府の元帥を務めており、ラフネールからの信任も篤い。薔薇を愛し、美食や芸術に長けた人物である。その容姿は整った茶色の髪と緑の目を持つ貴公子然とした美貌で知られている。

なおその人間性はあまりよくは言われないことが多い。女性関係も派手であり、享楽的だとされているからだ。だがそんな彼をラフネールは深く信頼しているのも事実であった。

「人間性だけで政治は出来ない」

ラフネールは常々こう言っていた。

「外相が政治的なミスを犯したのならばすぐに解任しよう。だがそれがない限り解任することはない」

そしてこうも言っていた。彼にとってカミュは信頼すべき頼れる部下であったのだ。
なおカミュはそんな言葉を聞いて感謝の言葉を述べるような人物ではない。その整った顔で笑みを浮かべてこう述べるだけであった。
「有り難いことです」
と。次にこう言った。
「では私はこのまま外相をすることになるでしょう」
彼は自分の資質に絶対の自信があったのだ。昼も夜も豪奢な生活を楽しみ、その側には常に美女がいる。そんな彼であるが今まで仕事では確かにミスはなかった。かっては内政にも携わっていたがそこでも業績を残していた。
フランス内務省にいたことがあった。その時彼は自身の政策をフランス内相に提案したのだ。警官の増員、マナーの徹底、市街の美化。当時フランスは治安が緩んでおりそれをどうにかすることが求められていたのである。そしてそれを実行に移す為にこれ等のことを提案したのだ。
結果は成功だった。街を綺麗にすれば意外にも治安にもそれが影響されたのである。
綺麗な街を見ていると人の心も清々しくなる。荒んだ気持ちではなくなる。彼はそれがわかっていた。だからこそこれを提案したのである。そしてそれは成功した。
「綺麗なものをわざわざ汚したい者なぞいないでしょう」
彼はこう言うのが癖であった。
「変わった趣味の持ち主でもない限り」
外交においてはかってはサハラ北方への侵略の際二十代でありながら外務次官におり、その調略により諸国を分裂、混乱状態に陥れ侵略し易いようにしてきた。その一方でマウリアとの関係を進めたりもしている。政治家として彼が有能であるのは言うまでもないことであった。
それでもその評判は今一つであった。享楽的な性格が彼の評判を

落としていた。だが今のところ選挙に出ることもない彼はそんな評判を気にしてはいなかった。そして今も享楽を楽しむのであった。
「如何ですか、ムッシュ」
彼はガイアのオペラハウスにいた。そこのロイヤルボックスで一人の貴婦人と共に鑑賞していたのである。
「今日の舞台は」
「見事と言うべきでしょう」
彼はタキシードを着てその劇を見ていた。その右手にはクリスタルのワイングラス、そして薔薇色の酒があった。
「百年に一度とまで言われるソプラノ、その実力をまざまざと見せてくれています」
劇はベルリーニのノルマであった。ローマに占領された古代ケルト社会を舞台にした作品である。ベルリーニの代表作であり美麗ながらその中に勇壮なものを持つ音楽、そしてタイトルロールであるノルマの激しく、かつ繊細な人物像がつとに知られている。
今そのノルマをカミュが百年に一度とまで謳われた歌手が歌っていた。異様に難解な役をそつなくこなしている。

## 第十八部第四章　銃のない戦いその二

「この役を満足に歌うことの出来る歌手は稀です」
「はい」
これはあまりにも有名な話であった。このノルマの役はオペラの中でもとりわけ困難な役として知られているのだ。
まず技巧が問われる。ベルリーニはコロトゥーラと呼ばれるソプラノの高音の技巧を駆使した技術をその音楽に多用させたがこのノルマもまた例外ではない。むしろノルマこそがその代表であった。
そして役作りが。ノルマは女としての激しさ、指導者としての風格、女として、母親としての繊細さと優しさが問われるのだ。こうした高いハードルをクリアできる歌手はそうはいない。かってマリア＝カラスがこの役を当たり役にしたのはあまりにも有名であるが言い換えればカラス程の歌手でなければ歌えなかったのである。
そのノルマを今その歌手は何なく歌っていた。まるでノルマそのものであるかのように。
「天才と言うべきでしょう」
カミュはまた言った。
「これ程の歌手に出会うことができたのは幸福です」
「それは劇場でだけですか？」
「はい」
彼は答えた。
「二人きりで御会いしたということはないのですか？」
「生憎私はこれでも道理は知っているつもりでして」
「おや」
いささかシニカルな笑みになる。
「家庭を持っておられる方とは。二人きりにはならないのですよ」
「では私はどうなのですか？」
「ローレンス男爵夫人」

「はい」
その貴婦人ローレンス男爵夫人は答えた。黒い髪と目の美女である。
「御相手は見つかりましたか？」
「相応しい相手はいるのですが」
男爵夫人はそれに答えて優美な笑みを浮かべた。
「生憎。その相手が私の魅力の前に押されてしまいまして」
「再婚はまだだと」
「はい。まあ焦らずにいきます」
そう静かに述べるのであった。
「恋の御相手を検分しながら」
「侯爵なら宜しいのですが」
「生憎私はマダムのご期待には沿えることはできませんが」
「あら何故」
「私なぞではとても。マダムの様な魅力的な方のお相手は」
とぼけてみせる。楽しげに笑いながら。
「無理だと仰るのですね」
「ええ。高嶺の花です」
「ベッドの中でもそれは言えまして」
「無論」
彼は悪戯っぽく笑いながら答えた。
「しかしその高嶺の花の香りを味わうのもよいものですね」
「あら、またそれは」
「冗談ですよ」
「侯爵が仰ったら冗談には聞こえませんけれど」
「おやおや、またそれは手厳しい」
カミュは笑った言葉を返した。
「私の様な未熟な者を捕まえて」
「少なくとも恋愛に関しては未熟ではないですよね」
「さて」

そんな話をしているうちに舞台は佳境に入っていた。第三幕の二重唱である。

ノルマと彼女の部下にあたる巫女アダルジーザの二重唱である。ソプラノ二人で歌われる場合もあればソプラノとメゾソプラノで歌われる場合もある。どちらにしろ非常に有名かつ美麗な曲であり女同士の友情を歌ったものである。

## 第十八部第四章　銃のない戦いその三

ノルマという作品はただノルマだけがいいというものではない。アダルジーザも重要な役なのだ。ベルリーニは彼女にも美しい歌を与えた。そして同時に困難でもあるが。従ってノルマは非常に優れた女性歌手を二人揃えなくてはならないのだ。贅沢な作品である。

今日の舞台ではソプラノ二人によって歌われている。アダルジーザの役も天才とまで謳われる歌手である。カミュは彼女の声と歌にも注目していた。

黙って舞台に目をやっている。一言も発しない。身動き一つない程であった。

曲をじっと聴き、舞台から目を離さない。そしてそのまま見ていた。

曲が終わった。万雷の拍手と称賛の声が劇場を包んだ。

「見事と言いましょう」

カミュも一言称賛の声を述べた。

「やはり彼女は天才です」

「左様ですか」

「ノルマもアダルジーザも素晴らしい。ですがやはり」

「ノルマが勝っていましたか」

「あの役はそうでなくてはならないのです」

彼は落ち着いた声でそう述べた。

「強い女であり、同時に脆い女でもある」

「複雑ですね」

「それを歌いこなせる者この天才なのですがね」

「天才ですか」

「はい」

カミュは舞台の幕が降ろされるのを見ながら応えた。まだ称賛の声が止まらない。

「天才とはあらゆる困難を楽しめるもの」
「ではあの歌手も楽しんでいると」
「そうです。そしてそれは歌に止まりません」
「といいますと」
「全てのことにおいて言えるのですよ」
彼は言った。
「天才というものは。全ての事柄に存在します」
「歌だけでなく」
「芸術だけでなく」
言葉を続ける。
「あらゆる事柄に。そう、この世のあらゆるものに」
「そうなのですか」
「文学にも料理にも」
ここで料理を出すのがフランス人、そして美食家としても知られている彼らしいと言えた。
「天才は存在します。そして」
「そして？」
「政治にもね」
その流麗な目がすっと笑った。
「天才はいるのですよ。そしてそれを楽しんでいる」
「そういえば侯爵」
「何でしょうか」
「もうすぐ連合から使節が来るそうですね」
「ええ、このガイアに」
彼は答えた。
「それが何か」
「エウロパ一千年の歴史が終わるとも言われていますが」
「そうした風聞は聞きますね」
今更言うまでもないことであった。停戦後、エウロパ内部では講和の条件次第では滅亡もあるのではないかとさえ囁かれているので

ある。外相である彼がそれを知らない筈がなかった。
「あくまで風聞ですが」
「あくまで、ですか」
「それは決して現実のものとはなりません」
「何故でしょうか」
「そこにもまた天才がいるからです」
彼はその問いに思わせぶりにこう返した。
「おわかりでしょうか」
「期待させて頂いて宜しいということでしょうか」
「はい」
その流麗な目がまた細くなった。
「存分に」
「了承致しました。では」
夫人は舞台に顔を戻した。
「最後の幕が開きますよ」
「いよいよですね」
「はい。私は第四幕も好きなのですよ」
「あの合唱が」
「そうです。何か心の奥底から感じるものがありまして」
第四幕ではローマに戦いを誓うケルト人達の合唱があるのだ。ノルマを前にして歌われるこの合唱はベルリーニのもう一つの側面、熱く情熱的な側面が露わになっているのである。
（ローマか）
カミュはふとそこで気付いた。
（そしてケルト）
今ではけるとの末裔達は連合にこそ多く存在する。ケルトの神々も連合において復権している。イギリスやスコットランド、アイルランドにケルトの末裔達はいるが連合のケルト系に比べてその数は圧倒的に少ない。もっとも連合のケルトはかなり混血しているのであるが。

（立場が逆になったか）
頭の中でローマを自分達、ケルトを連合に移し替えていた。

## 第十八部第四章　銃のない戦いその四

（因果なものだな。だが）
それでも彼には引けないものがあった。
（ローマにもローマの立場がある。そうそう上手くはいかせるわけにはいかないな）
「侯爵」
「はい」
夫人の言葉に舞台の世界へと帰る。
「この幕が終わったらどうされますか？」
「マダムとご一緒といきたいのですが」
ここで寂しげな笑みを作ってみせた。
「生憎。時間がありませんので」
「それは残念」
「すぐにお邪魔させて頂きます」
「わかりました。それでは」
「はい」
こうして彼等はまずは舞台を楽しんだ。そしてそれが終わるとカミュはすぐに外務省に戻った。
外務省はエウロパらしく宮殿になっている。壮麗なバロック調の宮殿である。ベルサイユ宮殿を彷彿とさせる豪奢でみらびやかな宮殿である。彼は今そこに私用車で戻って来た。
「真夜中まで仕事とは」
「思いつくことがあってね」
隣にいる執事にこう返す。彼の家の執事である。
「まあ明日の夜は戻るから」
「今宵はこちらで、ですか」
「そうなるね。まあ留守の間はいつも通り頼むよ」
「畏まりました。では明日の晩は」

「牡蠣がいいね」
彼は言った。
「牡蠣ですか」
「ワインはシャンパンで」
そしてさらに言った。
「それで頼めるかな」
「はい」
執事は機械的な動作で頷いた。
「それではシェフにその様に伝えておきます」
「頼むよ。うちのシェフの牡蠣がまた食べたくなったからね」
彼の好物の一つとして牡蠣がある。昔からフランス人は牡蠣を愛していたがこの時代でもそれは同じである。だがこの時代牡蠣を好きなのはフランス人だけではない。他の国の人間も食べる。連合ではやはり日本人のそれが有名である。
「じゃあ行って来る」
「はい」
カミュは車を出て宮殿に入った。そして自身の部屋に向かうのであった。
外相の部屋はまるで王の間であった。白を基調としており、床には豪華な絨毯が敷かれている。カーテンは絹であり所々に美しい芸術品がある。
彼はそこの奥にある執務用の机に座った。黒檀で作られた見事な机と椅子である。
そこに座るとすぐに電話を手に取った。そして誰かを呼んだ。
「すぐに来て欲しいのだけれど」
「何か考え付かれたようですね」
電話の向こうの声はカミュの様子に何かを察したようであった。
「わかるかい？」
「はい」
「ではすぐに」

「わかりました」
声は応えた。そして一旦電話を切った。
すぐに一人の若い女が執務室に入って来た。金がかかった赤い髪に青緑の瞳を持つ背の高い女だ。胸はそれ程大きくはないがその顔は健康的な美貌を持っている。

## 第十八部第四章　銃のない戦いその五

（そういえばルイ十五世だったかな）
彼は彼女が部屋に来たのを見てふと思った。
（女の全ては胸からはじまると言ったのは）
その若い女の胸を見て思ったのだ。お世辞にも大きいとは言えない胸である。
（言いえて妙か）
そして今度はこう思った。
（だが大きい胸でも小さい胸でもよい悪いはない）
彼の考えはこうであった。
（大きい胸は大きい胸の、小さい胸は小さい胸の魅力がある）
これが彼の考えであった。ここがルイ十五世とは違っていたのである。
ルイ十五世は若い頃よりその美貌を讃えられてきた。肖像画でも眉目秀麗の顔立ちであることがわかる。フランス一の美男であるとも言われていた。だが容姿と王としての資質はまた別である。
「その性は善だが責任を取ろうとはしなかった。不正を知っていたが正そうとはしなかった」
これが後世彼に与えられた評価の一つである。優柔不断であり気が弱く、自身もそれを知っていながらどうこうすることも出来なかったのである。
「私は改革に失敗した」
彼自身の言葉である。それは彼もわかっていた。
「私の資質が足りなかった。そして私を補佐する者がいなかった」
人材にも恵まれていなかったのだ。もっとも彼は女性を見抜く以外にはこれといった目を持っていなかったのかも知れないが。あらゆる意味で不幸な人物であった。
彼が興味を示したのは女性に関してである。美女はおろかそうで

ない女性も愛した。鹿の苑という少女ばかりを集めた退廃的なハーレムも持っていた。彼はイギリスの富豪という触れ込みでこのハーレムに通っていた。そんな彼の多くの愛人達の間で最も有名なのがポンバドゥール侯爵夫人とデュ＝バリー伯爵夫人である。

どちらも当時ではいい出自とは言えない。平民出身である。だが王は彼女達を愛した。とりわけポンバドゥール侯爵夫人は王のかわりにフランスの政治、とりわけ外交を取り仕切りそれを持たせていた。有名なのは長年に渡る宿敵であったオーストリアのハプスブルク家との同盟である。

ハプスブルク家とフランスのブルボン家は欧州の対立軸であった。双方共カトリックであったがそんなものは関係がなかった。神聖ローマ帝国皇帝の座を争ったこともあればイタリアを巡って対立したこともある。フランドルでは常にであった。ルイ十四世もスペインの王座を巡って争った。とかく争いとなれば彼等は互いに別れて争ってきたのである。

これが変わったのはフランスのもう一つの宿敵であるイギリスとの植民地を巡る争いがあり当時勢力を伸張させていたプロイセンの存在があった。

オーストリアはプロイセンを憎んでいた。当時オーストリアを治めていたのはマリア＝テレジアである。オーストリア、そしてハプスブルク家中興の祖であり長い歴史を誇るこの家でも屈指の名君である彼は先のオーストリア継承戦争においてプロイセンにシュレージェン地方を奪われていた。それを奪還せんとしていたのである。

これにプロイセンの勢力伸張を快く思わないポンバドゥール夫人は注目した。そしてオーストリアと同盟を結ぶことにしたのだ。その証はハプスブルク家が最も得意とした婚姻政策、マリー＝アントワネットが嫁ぐことになったのだ。

なお当時のプロイセン王はフリードリヒ大王である。彼はどういうわけか女性に対して冷淡な人物であった。

「女なぞ子供を生ませる道具でしかない」

彼はよくこう言っていた。これでその女性でありマリア＝テレジアやポンバドゥール夫人に好かれる筈もなかった。彼女達は個人的にも彼を嫌悪していたのだ。

## 第十八部第四章　銃のない戦いその六

二人は徹底していた。さらにこの王は内では深く敬愛されていたが外では敵が多かった。なお悪いことにここにもう一人敵が存在していた。

ロシアである。ロシアにとっても西のプロイセンの勢力伸張は面白いものではない。しかもロシアの君主は女性であるエリザベータ女帝であった。彼女自身の感情的な理由もありフリードリヒが大嫌いであったのだ。

遂にこの三国による同盟が誕生した。名付けて『三枚のペチコート』。女性による女性の為の同盟といった感じであった。さらに伝統的に卓越した外交を誇るオーストリアとフランスはスウェーデンやザクセンといった諸国も味方に引き入れた。フリードリヒ大王は三人の女性を敵に回すことによって欧州の殆どを敵に回してしまったのだ。

これが七年戦争である。結局プロイセンが勝ったがポンバドゥール夫人は長年に渡る敵対関係を終わらせ、フランスの外交を変えた。この国は後にタレーランという彼女よりもさらに煮ても焼いても食えない人物を出すがこうした天才的な外交官の一人でもあったのだ。

（大きい胸は大きい胸で、小さな胸は小さな胸でよいものだ）

胸が小さかったという侯爵夫人のことを思っていた。そこにその女性がやって来た。

「閣下」

「うん」

カミュは彼女に顔を向けた。

「御呼びに預かり参上致しました」

「御苦労様」

まずは優雅な言葉でそれをねぎらう。それからまた口を開いた。

「それで話だけれど」

「はい」
彼女はその言葉に青緑の目を向けてきた。
「わかっているね」
「おおよそは」
そしてこう答えた。
「今回の講和会議のことで」
「その通り。それで私の考えだけれど」
彼は言った。
「ウィーンをやろうと思う」
「ウィーンですか」
「そう。彼等に我々の外交を見せてあげたいんだ」
そう言って彼女を見た。
「どうかな」
「よいと思います」
彼女はそれに頷いた。
「外交は何も表だけではありません」
「うん」
「裏もあります。彼等にはそれで以って当たりましょう」
「彼等は皆平民だったね」
「はい」
連合に貴族制度といったものが存在しないのはエウロパでは誰でも知っている。カミュはそれであえて彼等を平民と呼んだのである。
「平民と貴族は別の世界に住んでいる」
「はい」
この若い女もまた貴族なのである。そのうえで言ったのだ。
「全く別の世界に。ウィーンは知らないだろう」
彼の目は不気味な色になっていた。
「その毒も」
「甘い毒を」
「そうだ。彼等のお菓子やワインにその甘い毒を入れておく」

見ればその不気味な色になっている目は動いていた。何かを考えている目であった。

## 第十八部第四章　銃のない戦いその七

「甘く、それでいてカンタレラよりも恐ろしい毒を」
「悪魔の様に黒く、地獄の様に熱く」
女はここで呟いた。
「天使の様に純粋でそして天国よりも甘い」
「その毒を使わせてもらおう」
「わかりました」
「ではレナータ＝デル＝スコット次官」
「はい」
女は名前を呼ばれてそれに応えた。名前からイタリア貴族であることがわかる。
「それは卿が取り仕切ってくれ」
「わかりました」
「全ては卿に一任する。よいな」
「はい」
「そして」
彼はさらに言葉を続けた。
「料理やワインだが」
「連合のものは素材の面でも調理は困難だと思われますが」
連合にあってエウロパにないものが実に多いのだ。肉も魚も野菜も。そして調味料も。とりわけ連合ではスパイスはかなり豊富だがエウロパのそれは地球にいた頃とあまり変わらない種類と数のスパイスしか使っていないのだ。恐竜の肉をオープンで油を徹底的に落とし、青いペパーと白いソースで味付けしたものやステラーカイギュウの紫のワイン煮、ジャコウウシのティーボーンステーキといったものはエウロパには存在しないのだ。
「彼等に合わせることはない」
だがカミュはそれを一蹴した。

「私も連合の料理について調べたことはあるが」
そしてそのうえで語った。
「次官」
「はい」
スコットはまた応えた。
「生の魚を食べるのは大いに構わない」
「はい」
「犬や猫を食べるのもだ」
連合ではそういったものも口にする。サーベルタイガーを食べる国もある。マンモスやオオツノシカも食べたりするのである。ある意味かなりワイルドだ。犬や猫はまだ大人しい食材だ。
「あのハンバーガーやラーメンとかいう下品な食事も」
この時代のフランス貴族から見ればこういった食べ物はそうなる。
「まだよしとしよう。しかし」
「しかし？」
「許せないことがあるのだ」
「それは」
「彼等の舌だ」
そう言ってその整った顔を顰めさせた。
「連合軍の兵士達が言っているそうだな」
彼等のことは外相であるカミュの耳にも入っていた。
「我がエウロパの料理がまずいと」
「はあ」
彼にとってはそれが許せないことであるらしいのだ。
「味がない、量が少ないと。随分好き勝手言ってくれているそうだな」
「話には聞きますが」
「実にけしからん話だと思わないか」
彼は不機嫌を露わにしていた。
「連合の者達は。我々の文化を馬鹿にしている」

料理も文化である、彼はそう認識していたのだ。間違ってはいない。むしろ正しい。だが彼の考える文化とはあくまで高尚なものであり、低俗なもの、大衆的なものではないのだ。
「それだけは許せない」
「ではウィーンにおいては料理も出すと」
「そうだ。彼等を黙らせてやる」
その目がキッとなる。
「何としてもな」
「今回はコーヒーやケーキだけではなくなりましたね」
「コーヒーやケーキもいいがね」
ナポレオンが倒れた後のウィーン会議ではコーヒーやケーキが客達にふんだんにふるまわれたことで知られている。オーストリアのケーキはチョコレートケーキが有名である。所謂ザッハトルテだ。そしてコーヒーはその上に生クリームを置いたウィンナーコーヒーだ。どちらもかなりの美味でありこの時代のエウロパでも連合でもよく食べられている。
「今回はそれだけでは気が済まない」
「わかりました。では仕切らせて頂きます」
「うん」
カミュはスコットの言葉を聞いて頷いた。
「ただ、わかっているとは思うけれど」
「ウィーンと同じように、ですね」
「そう。会議は踊る。されど」
「進まず、と。我々は表で踊りがある間に」
「言葉を盗む。メッテルニヒやタレーランのように」
メッテルニヒは当時のオーストリアの首相である。長きに渡ってオーストリアの舵を取ってきた卓越した政治家である。かなり頑固な保守派でもあり民主運動、民族運動には徹底した弾圧で挑んだことでも知られている。
「わかったね」

「畏まりました」
「ではそれに関するプランを考えてくれ」
「早速ですね」
「そうだ。私の方でも何かとやっておきたい」
そのうえでこう唱えられた。
「全てはエウロパの為に」
「そう、エウロパの為に」
カミュの声が強くなった。

## 第十八部第四章　銃のない戦いその八

「会議は踊らせる。そして進ませない」
「今回はナポレオンもおりませんし」
ウィーン会議は一時中断を余儀なくされたのである。エルバ島に流されたナポレオンがそこを脱出してフランス皇帝に返り咲いたからである。
「いや、一人いる」
「それは」
「魔王だ」
カミュは自身の声に剣呑なものを含ませた。
「魔王、ですか」
「そうだ、魔王だ」
彼は言った。
「シャイターン。彼には気をつけたい」
「彼も介入してくるということでしょうか」
「可能性は皆無ではないだろう」
彼はそう言って顔をあげた。目には警戒する光があった。
「ないとは言い切れないならば対処を考える必要がある」
「ただ、これは我々の仕事ではありませんが」
「軍務省の仕事になる」
「はい」
そういうことであった。
「シュヴァルツブルグ閣下がそれに気付いておられるだろうか」
「おそらく承知しておられるとは思いますが」
「だがモントローズ要塞は非武装化されたままだったな」
「ええ」
「そして連合に占領されたままだが」
これが大きな問題であった。つまりエウロパは南方のサハラとの

国境まで連合に押さえられてしまっているのである。全ては彼等の思うままというわけだ。
「若し連合がティムールと密約したならば厄介なことになります」
「モントローズがティムールの手に落ちる」
「そうなればまた別の危機が生じます」
「厄介なことがまた一つ出来る」
「それだけは何とかしなければ。ですが」
「連合のことを少し調べておきたいな」
カミュは考える目をして述べた。
「ティムールとはどういった密約があるのかな。あればの話だが」
「そうですね。そちらも調べた方が宜しいかと」
「わかった。そちらは私がやっておこう」
「はい」
スコットはその言葉に対して頷いた。
「ではそういうことで」
「うん。若し密約があり、それが我々にとって不利益ならば」
「また手を打つ必要がありますからね」
「そうだ。だがここで問題がある」
「それは」
それをカミュに問うた。
「その当のティムールが何処を見ているかだ。それも大きく関わるな」
「何処を、ですか」
「我々を見ているのか。それともサハラ内部を見ているのか」
「どちらかが問題ですね」
「それを見極めていくか」
カミュは慎重な目になる。そこでそのカミュに対してまた述べた。
「果たしてどちらか」
「確かなことはまだ言えない。今のうちに調べておこう」
「はい」

「こちらはウィーンの前に済ませておきたいな」
「ウィーンの前に」
「そうだ。すぐに取り掛かる」
彼はそう決断を下した。
「卿もそちらの仕事を頼むぞ」
「わかりました。それでは」
「外務省のこの宮殿は当分夜を知ることはないようだな」
少しシニカルな笑みを浮かべた。
「そして私も。明日も帰ることができないかもな」
「実は私も最近家には帰ることが出来ないです」
「それはお互い様ということか」
「今の外務省は。軍務省もそうですが」
異様なまでに忙しいのだ。定時に帰ることができないと暴動になりかねないのがエウロパであるがそんな悠長な話は消え去ってしまっている。一月もそのまま泊り込みという事態に陥っているのである。
「未曾有の国難だからな。致し方ない」
「ではこれで」
「うん」
仕事に取り掛かろうとするスコットに声をかけた。
「では私もすぐに仕事に掛かろう」
「それでは」
スコットは一礼して部屋を出た。そしてカミュはすぐに己の仕事に取り掛かった。
「済まないな、こんな真夜中に」
彼は何処かに電話をかけていた。
「そうだ、すぐにそちらを調べてくれ」
彼は電話の向こうにいる者に対して語っていた。
「すぐにな。すぐに知りたいのだ。そう」
声は焦ってはいなかったが相手をあえて急かしていた。

「頼むよ。報酬は弾むから」
そして電話を切った。すぐにまた電話を取ってかける。それを繰り返し、ノートパソコンを打ちながら仕事に励んでいたのであった。

## 第十八部第四章　銃のない戦いその九

キロモト達がエウロパに向かった後の連合は比較的穏やかな状況となっていた。多くの仕事を彼等がそのままエウロパに持って行ったからである。

だがそれでも忙しい場所はあった。金のいる内務省もその一つであった。

今内務省は開拓省と共に辺境地域の治安についての話を進めていたのだ。金は直接開拓省に出向き何度も話をした。そしてどうすべきか話の調整を行っていたのである。

「このお話の結果は議会に提出するということで」

「はい」

開拓省の高官達とも話を調整していた。だがこうした話をするにあたってもう一人重要な人物がいないことが話を今一つ充分に進められないでいた。

「国防省には行かれないのですか？」

秘書官の一人が車の中で彼女に尋ねる。

「国防省ですか」

「はい。辺境地域には法の目を逃れて逃げ込み、そこで海賊やテロリストと化している者達が潜伏していることも多いですし」

「その者達への対処が必要だと言いたいのね」

「そうです。それにはやはり軍の存在が必要不可欠かと」

「確かにね」

金もそれに頷いた。

「そうした者達が罪を犯していなければ連合軍や惑星開発に組み入れ」

「はい」

「罪を犯しておれば処罰する。けれど抵抗した場合に関しては」

「警察だけでは限界がありますから」

そういうことであった。あまりに強大な武力ではやはり警察では限度があるのだ。
「軍の力がいるわね。けれど長官は今は」
「エウロパにおられます。シャリアピン次官が留守を守っておられますが」
「シャリアピン次官にも話はしておくわ」
金は静かな声でこう答えた。
「そして長官には」
「メールですか」
「ええ」
こくりと小さく頷いた。
「細かい話は長官が帰られてからだけれど」
「しかし最近辺境地域にそうした海賊やテロリストの話が結構ありますね」
「それね」
金の声と顔が変わった。
「由々しき問題ね」
「ただ単に惑星開発の障害となるだけではありませんからね」
彼等の問題はそれだけではなかったのだ。放置しておくとやがて独立勢力となっていく。しかも非合法の。それを防ぐ為にも放置は出来ないのである。
「置いておくことはできません」
「ええ」
「その為には軍の力が何としても必要ですが」
「長官がいないというだけで延ばしていい話ではないわ」
「はい」
「では決まりね」
金は一言言った。
「長官には私からメールをお送りするわ」
「わかりました」

「そしてシャリアピン次官とも話の調整がしたいわ」
「では国防省にも向かわれるのですね」
「そうよ」
金は頷いた。
「それでいいわね」
「わかりました。それでは」
秘書官はそれを受けてメモを取る。
「スケジュールをそれにより調整致します」
「お願いするわ。また解放軍の様な組織が出ては厄介なことになるから」
「解放軍ですか」
「そして彼等と結託する政治家や企業家も」
稜遅刑に処された山口一派のことである。
「出るかも知れないし。それは避けないと」
「そうですね」
これは言うまでもないことではあったが連合においては長い間問題になっていることでもあった。
海賊やテロリストと結託し私腹を肥やすか己の目的を達成しようとする者達はこの時代にもいた。どの世界にもどの時代にも腐った林檎は存在する。それが彼等であった。それをどう取り除くかも政府の仕事であり当然の様に求められる自浄能力であった。自浄能力をなくした組織は腐敗する。そして崩壊する。それが自然な姿である。
「辺境地域ならばこそ。対処はしておきたいわ」
「その為にも現時点での積極的な惑星開拓は慎むべきですか」
「中央政府としてはね」
金はその言葉にはこう答えた。

## 第十八部第四章　銃のない戦いその十

「それよりも今は内部を充実させるべき時よ」
「はい」
「戦争はしていても。いえ、それだからこそかしら」
「それだからこそ」
金の言葉に応える。すると金はすぐに述べてみせた。
「連合軍は設立されてまだ日が浅いわ。その組織を確かにする必要がある」
「では」
「そう、今は治安やシステムの整備も含めて内部を整えるべき時なのよ」
金はそう考えていた。
「惑星開発はそれからね。ゆっくりと出来るわ」
それはそのまま今の政府及び与党の考えであった。その為積極的に惑星開発を行おうと主張する野党保守派とは対立しているのである。
「まずは中から」
金はまた言った。
「内部を整えるわよ」
「はい」
「四兆の人口がいれば四兆の為のシステムが必要になる」
「四兆の為の」
「なおかつ民主的な。それをまとめるのは容易ではないわよ」
一言で言うと容易いが。それを行うとなると容易ではないのである。
「民主主義だけではないのでは、それは」
「他のシステムでも同じだと言いたいのね」
「はい。専制政治にしろそうです」

最早人類社会からなくなってしまった懐かしい国家システムである。サハラに存在したがそれも今ではなくなってしまった。
別に専制政治だから悪なのではない。その時代その国に適応したシステムが必要とされるから専制政治となるのである。カエサルにしろ共和制から帝制に移行を目指したのも巨大な勢力となった当時のローマではこれまでのような旧態依然とした元老院を中心とする共和制ローマではそれを治めることは困難だと判断したからそれを選んだのである。カエサルという男が魅力的な野心家でもあり、権力志向があったのは事実だ。だが彼は決してそれだけで動いたのではない。だからこそ彼は魅力的な英雄となったのである。
連合もそれは同じだ。各国の権限がかなり大きな分権的民主主義だがその中では常に集権と分権が綱引きを行い、その時の情勢に合わせようとしてきた歴史がある。今は丁度集権の時代であろうか。
「その時に適応するシステムを選ぶのは。決して容易ではありません」
「ええ」
「ましてや我が連合は。まず民主主義があります」
「それでないとまとまらないでしょうね」
「異論を封じることは不可能です。我が連合においては」
「ええ」
多彩な国家、文化、人種、宗教、そういったものを抱え込んでいる。その連合において言論を封じることは不可能だ。四兆の口が存在する。それを全て封じることは誰にも出来ない。思うことを止めることはさらに無理である。
まず喋らせろ、それが連合の考えである。それから話をまとめていくのだ。
「まず話し合ってそれから話をまとめる方法でないとね」
「はい」
民主主義によるコントロールである。民主主義は一歩間違えば銘々が勝手なことばかり主張する衆愚政治ともなりかねないがこうし

た話や国家のまとめ方もあるのである。
「時間は少し掛かる場合があるけれどそれが一番ね」
「ベストではありませんがベターです」
「ええ」
金はそれでよいと考えていた。
「大国にも小国にもまず喋らせる。何事もそれから」
「はい」
「問題は分権か集権かだけれど」
「そういえば大国の多くは今の政府に不満を持っているそうね」
「私の祖国もね」
金は唇だけで苦笑いを浮かべた。
「これは失礼」
秘書官はその言葉を聞いて頭を垂れた。金の祖国である韓国は連合設立当初からのメンバーであり環太平洋諸国の中でも国力が高かった。この時代においても大国といっていい立場にありそれなりの位置にある。だが彼等は日本を越えることを考えさらなる地位を狙っているのだ。そうして一千年過ごしてきている。今では大国の立場として現在の中央政府の方針に反発を示している国の一つである。
「いいのよ。それは仕方ないし」
「はあ」
「祖国には祖国の立場、考えがあるのだからね」
「韓国にも、ですか」
ここで金の祖国が出て来た。金はその言葉に対して言う。
「まあまた長官の母国とは対立する立場にいるけれど」
「まあそれはいつものことでは」
「そんなことだから何時までも日本を越えられないのでしょうけれど」
「といいますと?」
「力もね。入り過ぎていると駄目なのよ」
金は言った。

## 第十八部第四章　銃のない戦いその十一

「かえって疲れるから。逆効果なのよ」
「スポーツでもよくそう言われますね」
「ええ。だから時には力を抜く必要があるのだけれど」
「長官の御国は八条長官の御国ばかり見られて常に力を入れられていると」
　韓国の特徴であった。それは金も知っていた。その証拠に苦い顔になっていた。
「困ったことに」
「ですが韓国の位置も悪くはないですが。大国なのは事実です」
「そうね」
「それで何故。日本を追い越そうとばかり考えておられるのか。私にはよくわからないのですが」
「一千年以上昔に併合されてからね」
「ああ、あれですね」
　日韓併合のことである。日本は崩壊状態にあった朝鮮半島を併合し、教育を徹底し、インフラを整備して、荒地を開墾した。それにより半島は歴史上稀に見る発展を遂げ、人口は二倍になった。ただし当時の李氏朝鮮、大韓帝国の無能とテロリストのせいで国家が失われたのは事実である。韓国人にとってはそれが耐え難いことなのである。ただしこれはこの時代では流石に遠い記憶の話である。
「あの時からね」
「イスラエルの様に長い話ですね」
　いささか皮肉めいている言葉だった。
「けれどそれとはまた別ね」
「では一体」
「結局もう無意識下なのよ」
　金は率直に述べた。

「最初の百年は恨みだったのでしょうけれど何時の間にかそれがあやふやになって」
「ただ日本を越える、日本を越える、と」
「そういうことよ。まあそれだけ日本を意識しているということよ、韓国が」
「何か凄いですね」
思えばかなり変わったことである。特定の国をそれだけの時間見てきているのだ。それは日韓関係だけと言えるものである。
「今回日本は中央政府支持だけれどこれは理由があるわね」
「はい」
秘書官はその言葉に頷いた。
「そのまま彼等の今の行動ですから」
日本は今内政を整備しているところなのだ。それならば内政重視の今の中央政府の政策に反対する理由はない。むしろ中央政府のそうした方針が彼等が他の大国に批判される際の錦の御旗になる。
「我々を支持することが彼等の利益になります」
「そういうことね。これで日本まで反対だったら困ったことになっていたわ」
「はい」
「今中央政府の内部重視政策に反対しているのは米中露ね」
「いつもの三国ですね」
この三国はとかく中央政府と対立するので有名になっている。一千年の間彼等をどうするかが中央政府の課題の一つともなっているのだ。
「彼等は惑星開拓を進めたいそうです」
「今は惑星が足りないどころか満ち足りているようだけれど」
「惑星開発業界の声だそうです」
「やはり」
金はそれを聞いて思わず声を出した。
「あちらからだったのね」

「彼等が言うには今は開発の時期だそうです」
「その根拠は？」
「治安も安定しており。国力が充実しているからです」
「一見するともっともな理由ね」
金の言葉には少し皮肉も見られた。
「けれどそれは彼等の国だけではないかしら」
「まあそうです」
「それを連合全体に押し付けるのは。関心しないわね」
「それが彼等ですから」
身も蓋もない言葉だったがわかり易くはあった。的は得ていた。
「自分達の流儀を押し付けるのがね」
「一千年経ってもそれが変わらないのはある意味凄いわね」
「国の性格はそうは変わりませんよ」
人の性格もそうであるが。
「宇宙に出ても」
「環境が大きく影響するとは思いますが。それでも」
「彼等は変わらないわね」
「はい。状況がそれ程変わってはいませんし」
そして秘書官はこう述べた。
「やはりそうおいそれとは変わらないかと」
「日本は変わったのにね」
「少なくとも強かにはなりましたね」
「ええ」
日本は中央政府に忠実だとされている。その為『中央政府の下僕』『第一の家臣』と揶揄されることもある。だが彼等も決して損得抜きで中央政府に好意的ではないのだ。
星理的に太陽系に近く、そしてその政策が中央政府のそれと重なることが多かったからだ。当然一千年の間には中央政府と対立することもあった。その際は日本は中々強かな行動を見せているのだ。
「日本が一番手強かった」

ある中央政府大統領が退任時に言った言葉である。

## 第十八部第四章　銃のない戦いその十二

彼はエネルギー政策を巡って日本と対立した。高性能の常温核融合を推す日本とそれよりも廉価な常温核融合を推す中央政府との間で。日本はあの手この手で中央政府と対立し、何とその高性能の核融合エンジンを量産化して自分達の意見を押し通したのである。

それまでに日本は各国に裏で話をし、自分達に賛成させてきた。中央政府もそれに気付いていたがそのなりふり構わぬ買収工作等に負けた。本気になれば手強い、それが日本だと言われているのだ。

「今の首相もね」

「伊藤首相ですか」

「彼女については色々と聞くわね」

「九尾の狐ですか」

「またきつい言葉ね」

金はその仇名を聞いて苦笑いを薄く浮かべた。日本の平安時代に出たとされる妖怪である。元は中国の妖怪で人を食う魔物だがそれが日本に逃れてきたものだとされている。

「けれどこれは褒め言葉ですよ」

「そうね」

これは実は彼女にもわかっていた。

狐は頭がよいとされている。とりわけ尻尾が多ければ。猫又という妖怪がいる。これは尻尾が二本になった猫で猫が五十年生きて魔物になったものだ。九尾の狐もこの理屈である。一千年は生きていると言われている。

「それだけ頭が回るということで」

「確かに伊藤首相は切れ者ね」

「はい」

「八条長官の師でもあるし」

そのことで有名でもある。

「そういえばそうですね。しかし」
「長官配当首相程強かではないわね」
「何と言いますかね」
秘書官は言葉を慎重に選びながら述べた。
「長官は確かに優れた方ですが」
「ええ」
「政治の駆け引きはされませんね。あくまで実際の政治だけで」
「そうね」
実はこれは金も同じである。あくまで政治家としての政策、理念を念頭に置くタイプであり駆け引きや工作はしない。そうした意味で彼女と八条は似ていると言えた。
「伊藤首相とはそこが違いますね」
「伊藤首相は駆け引きも工作も相当なものね」
「そうですね」
秘書官はそれに頷いた。
「まあ色々と。買収工作もされているようで」
「必要とあらばね」
こうしたことは連合ではありきたりな話である。各国の政治は裏を少し見ればすぐに札束やコイン、そしてスキャンダルが吹き荒れている。それを上手く利用するのも政治なのである。
とりわけ連合では。伊藤はそれを使っているだけなのだ。正義とか悪とかいう問題ではない。これが政治、連合の政治なのである。中央政府も各国もその中で動いている。伊藤はその中で傑出した存在である、一言で言えばそれだけのことなのである。
「綺麗な顔に似合わず手強いとは言われてるわね」
「女帝陛下は狐を側に侍らせておられるとも」
天皇陛下のことである。今の帝が女性であられる為こう言われているのだ。
「それも九尾の狐を」
「よくもまあそこまで言われるわね」

「けれど本人は気にしてはいないようで」
「褒め言葉だから」
こうなるのだ。
「そうとらえているようです、御本人も」
「煮ても焼いても食えないという評価も」
「砂糖を入れてもシロップを入れても」
「コーヒーも角砂糖を十個入れれば甘くなるわよ」
「左様ですか」
これには秘書官は少し気持ち悪そうな顔をした。実はそこまで砂糖を入れない主義なのだ。あまりに甘いコーヒーは身体に悪いと考えている。そこは金とは違っていた。
「そこまで入れると身体に悪そうですが」
「そうでもないわよ」
だが本人はそうは考えていない。平気である。
「それよりもそのままのコーヒーの方が身体に悪いわ」
「でしょうか」
「ストレートだとね。何でもよくないの」
「はあ」
絶対にそうではないと思っているのは言わない。
「麦茶やウーロン茶にもシロップを入れないとよくないのよ」
「左様ですか」
「甘いものは身体だけでなく心にもいいから。リラックスできるわよ」
聞いているだけで胸焼けがしそうであった。金の甘党ぶりは内務省の人間ですら辟易するものであった。真似をして急性糖尿病になり、入院したものもいる。この時代では糖尿病も完治するが厄介な病気であるのは変わらない。
「それで伊藤首相ね」
「はい」
「今回は中央政府に味方してくれているのね」

「左様です」
秘書官は答えた。

## 第十八部第四章　銃のない戦いその十三

「伊藤首相も期待できます」
「総理はこの件に関してどう考えておられるのかしら」
「まだそこのところは詳しくはわかりませんが」
「おおよそのところはわかるかしら」
「少しは。どうやらある程度日本に対処してもらうとのことです」
やはり日本が出るのであった。金はそれを聞いて目を少しだが鋭くさせた。知的な光が強くなった。黒い光が。
「日本に」
「大国には大国を」
秘書官は述べた。
「その様に御考えだとか」
「日本だけじゃ辛くはなくて？」
「既に日本は他の国にも働きかけているようですので」
「そしてそれを背景に中央政府が動くというわけね」
そういうことであった。中央政府とて馬鹿ではない。タイミングを探っているというわけなのだ。
「そして与党が」
「わかったわ。それなら勝算があるわね」
「はい」
「今は内部充実の時」
金は一言述べた。
「惑星開発はそれからで充分ね」
「それを大国に理解させられればいいですが」
「いえ、理解するのは大国ではないわ」
「では」
「市民、そして議員よ」
金は言った。

「彼等が理解すれば。それでいいの」
「大国の思惑ではなく」
「彼等も首脳会議前に話が進んでいれば無下にはできないわよ」
連合は実質三院であり最後の議決は各国の首脳達が行う。それを踏まえての言葉である。
「上下二院が。肝心なのよ」
「ではそこで話を調整すると」
「ええ」
金は頷いた。
「そうなると思うわ」
「では我々は議会の調整をすることに」
「なると思うわ。けれどそれをするのは私ではないわね」
「総理が」
「どうされるのかしら」
金は静かに一言発した。
「それは私の仕事ではないからあまりわからないけれど」
「左様ですか」
「けれど。かなり激しい舞台裏のやりとりがあるでしょうね」
これも連合においては常であった。連合の政治の真の舞台は舞台裏にあるとさえ言われている程である。もっとも政治とは常に表と裏があるのであるが。どの世界にも表と裏は存在するが政治の世界はそれが特に顕著なのである。
「私はそうしたことには疎いけれど」
「はあ」
金はそうした裏での駆け引きを好まない。そうした政治家もいるということなのである。
「とりあえず私は今は自分の仕事をするだけね」
「では」
「国防省に向かうわよ」
「畏まりました」

「八条長官がいないのが残念だけれど」
その顔には一瞬であるが仕事を離れたものがあった。だがそれに気付いたのは誰もいなかった。車の中であり、またほんの一瞬のことであったからだ。

## 第十八部第四章　銃のない戦いその十四

その調整役となったアッチャラーンであるが彼は多忙を極めていた。
キロモトの留守を預かり政務を取り仕切る。そしてその惑星開発に関する件である。彼は常に書類と人に囲まれていたのであった。
「総理」
執務室で仕事をする彼に総理府の官僚が声をかけてきた。
「どうした？」
「お電話ですか」
「誰からだ？」
「日本からです」
「そうか」
それを聞いたアッチャラーンの目が光った。
「わかった。出よう」
「はい」
彼はノートパソコンを打つ手を止めてそう言った。そして机の上にある電話を手に取った。
「どうも」
「はい」
電話には伊藤が出て来た。予想通りであった。
「何の御用件でしょうか」
「例の件で」
電話の向こうの伊藤は言った。
「お話したいことがありまして」
「左様ですか。何かあったのですか？」
「こちらは既に守りを整えました」
「守りを」
「はい。そちらはどうですか？」

「生憎時間がない身でしてな」
アッチャラーンは笑ってこう述べた。
「スキャンダルの種を撒く暇もありません」
「総理はそうなのですか」
「はい。ただ他の者はわかりません」
アッチャラーンはここで真顔になった。
「今調べているところです」
「左様ですか」
「まあ何かあればすぐに対処します」
「はい」
「あと向こうはどうしていますか？」
「相変わらずですね」
伊藤はこう答えた。
「小国に対して盛んにロビイ活動を行っております」
「やはり」
「時には釣り、時には脅し」
それが政治の基本の一つだ。
「ふむ」
「そうして自分達のほうへ引き込もうとしております。そしてそれは成果を収めているようです」
「厄介なことですな」
それを聞いて顔が曇るのが自分でもわかった。
「いつもながら」
「いえ、こちらもそれはしておりますので」
だが伊藤の声は冷静なものであった。
「お互い様です」
「左様ですか」
「それにあちらの弱みは着実に掴んできています」
「ほう」
その言葉に声をあげる。

「これを使えばかなり有利になるかと思います」
「お見事です、いつもながら」
「ですがまだ障壁はありますね」
伊藤は言った。
「障壁ですか」
「はい。やはりあちらの力は侮れません。その力そのものが障壁です」
「それですか」
「それをどうするか、です。問題は」
「アメリカに中国にロシア」
「そしてＡＳＥＡＮと中南米各国です」
連合の主要メンバーばかりである。彼等が惑星開発を積極的に推進している国々である。そして中央政府では野党である保守派だ。それに対して日本と新興国家群、そして与党である改革派が内政重視方針である。イスラエルやアフリカ諸国はおおむね中立であり様子見といったところである。
これ等の国々の事情はそれぞれ違う。開発推進派は自分達の内政は整い、今は大いに開拓を行いたいのだ。惑星開発業者やそれに連なる者達の強い要望もある。それに対して内政重視派は丁度内部をまとめている時なのだ。そういったそれぞれの事情があった。

## 第十八部第四章　銃のない戦いその十五

そしてそれが中央政府の政策を巡る対立にも影響していた。中央政府は連合全体の規模でその政策を検討しているからである。

惑星開発を進めるべきか、それとも内政に専念するか。どちらを選ぶかで今彼等は論争を行っているのだ。

開発を進める野党は内政が整っている国々を出して言う。しかし内政を重視する与党はそうではない国々を出して反論する。また都合の悪いことに惑星開発を主張する国と内政を重視したい国の勢力比が比較的拮抗しているのである。そこにまた話を激しくさせるものがあった。

「丁度真っ二つですね」

「はい」

「さて、どうするか」

アッチャラーンはここで考える目になった。

「大国の発言力が強いのは事実です」

「そうですね」

なおアッチャラーンの祖国であるタイは開発推進派である。その国々の中でも様々な意見がある。内政重視方針である日本の、それも伊藤が率いる政党においても惑星開発推進派が存在している。状況は極めてモザイクでアラベスクの様に絡み合っていた。それも色彩が様々なアラベスクであった。

「しかし彼等の意見が連合全体の意見ではない」

これもまた事実である。自分の意見が全員の意見と主張出来るのはかなりの視野狭窄か他人の意見を認められない輩か頭がおかしいかである。それか工作をしているか。ネットの警告の序文に堂々と書かれていることだ。こうした人物は放置しておくのがいいと。

「他の国々の意見もまた同じ意見なのです」

「左様です」

伊藤は電話の向こうでその言葉に頷いた。
「そしてどちらの主張が連合全体にとって有益なのか。問題はそれです」
「そうです。そして我々は今は内政を重視すべきだと考えている」
「はい」
「彼等は違う。しかも各国の事情もある」
「それも摺り寄せが必要ですね」
それぞれの事情を摺り合わせていく。それも政治だ。
「とりあえず今はそれぞれの勢力は均衡していますね」
「ええ」
「じっくりと議論を進めていきますか」
アッチャラーンは考える目をしてこう述べた。
「表はそれでいいでしょう」
「裏はまた別に」
「はい。とりあえず日本は各国をお願いします」
「わかりました」
伊藤はアッチャラーンの言葉に頷く。アッチャラーンはそれを受けて述べるのであった。
「こちらはこちらで野党を相手にしますから」
「了承しました。しかしいつもながら問題は複雑ですね」
「何か中央軍設立の時よりも」
「そうですね、確かに」
電話の向こうの伊藤はその言葉を聞いて笑っていた。
「あの時より事情が複雑になっています」
「それも連合らしいと言うべきでしょうかね」
連合においてはまず内政で対立することが多い。貿易や通商、そしてこういった惑星開発でだ。長い間そうしたことに専念してきているからであると言えた。
軍に関することはそれよりもずっと関心が低い。だから今よりは激しい論争にはならなかったのである。それでも連合中を巻き込ん

だ論争になり、ようやく設立されたものであるが。
「それでですね」
「ええ」
伊藤はアッチャラーンの言葉に応えた。
「とりあえずは今は準備の段階です」
「わかりました」
「そちらも。表と裏でお願いします」
ここでも表と裏が出る。政治というものが。
「ええ、そちらもお願いしますね」
「はい。それでは」
「また何かありましたら電話を差し上げますので」
「お願いしますね」
「はい」
こうして伊藤は電話を切った。とりあえずアッチャラーンはノートパソコンへ顔を戻した。
「さて」
画面を見詰めながら呟く。
「まずは」
仕事に戻っていく。銃後の世界も決して暇ではない。
「そうですか、日本が」
サッバティーニはこの時ホテルの一室にいた。そして老人達と話をしていたのであった。

## 第十八部第四章　銃のない戦いその十六

「内政重視路線を公にするのですか」
「そうだ。そしてアメリカや中国とこの件で対立する」
「それは最早確実だ」
老人達はサッバティーニの前に半円で座っていた。見れば十二人いる。
「避けられないですか」
「そうだ。今のところ我々は中立だったな」
「はい」
サッバティーニは老人達に対して答えた。
「その通りです」
「今のところ我々は惑星開発は行ってはいない」
「つまり内政を重視していると言っていいな」
「そうなりますね」
「しかし」
ここで老人の一人が言った。
「最近日本はいい目を見過ぎている」
「彼等が発言力を持ち過ぎるのは困る」
「大国なのは認める。だが今以上の発言力を持つのは許されない」
誰が許さないのか、それは明らかにはしていない。彼等が許さないのかも知れないし、若しくはそれ以上の存在が。それは一体何か。
「ですが相手は手強いですよ」
サッバティーニは涼しい声をあえて出した。
「伊藤首相は。強かです」
「馬鹿を申せ」
しかし老人の一人はそう言ったサッバティーニを叱った。一国の首相を叱れるという立場にこの老人達はいるようである。
「そなたは何か。申してみよ」

「イスラエル首相です」
サッバティーニはそう答えた。
「左様、わかっておるな」
「では己が為すべきこともわかっていよう」
「はい」
彼は老人達の言葉に頷いた。
「勿論です」
「ではこの場合はわかっているな」
「イスラエルがどう動くべきか」
「無論です。それでは」
「だがな」
しかしここで老人達は声の色を変えた。
「下手に動くとあの三国をつけあがらせる」
「それもまた愚だ」
「程々のところで収めてもらうということですね」
「左様。程々にな」
「すなわち妥協だ」
「それは承知しているつもりです」
サッバティーニもそれは把握していた。政治に妥協は欠かせないものであると。今暗闇の中で顔の見えない老人達に言われずとも。
「大統領にも個別に話をしている」
「はい」
どうやらイスラエルでは実は大統領は最高権力者ではないらしい。この老人達が彼より上位にあるようだ。
「この件はそなたに任せることにした」
「では大統領は」
「また別に仕事を与えている」
「それに関してはそなたの知るところではない」
「畏まりました」
「ではすぐにかかるのだ」

「我等シオンの民の為にな」
老人達は厳かに告げる。まるで彼等そのものが神の代理人であるかのように。
「シオンの民の為に」
「ダビデの星の為に」
老人達の胸が光ったように見えた。それは六角形の光であった。
老人達は音もなく消え去った。そして後にはサッバティーニだけが残った。
部屋の暗がりはそのままだった。そして彼は一人呟いていた。
「彼等の前では首相といえど小間使いというわけか」
シニカルな言葉であった。
「全ては十二の同胞達、そして唯一の神に優先される」
ユダヤ人ならではであった。この時代においてはユダヤ人もかなり混血している。十二支族が復活したと言ってもそれは四千年前のシオンの民とは違っていた。肌の色も髪の色も目の色も。全てが変わってしまっていた。
その中で彼等がユダヤ人となっているのは何か。宗教であった。ユダヤ教こそが彼等をユダヤ人にしていた。それがイスラエルであった。
「それだけはこの国においては変わらないか。まあいい」
だがサッバティーニはここはそれを受け入れることにした。

## 第十八部第四章　銃のない戦いその十七

「私は私の仕事をするだけだ」
そう言って電話を手に取った。
「私だ」
「首相」
「例の件のことだが」
「はい」
彼は電話の向こうの人物に対して話している。語るその声も目も鋭いものになっているがテレビ電話ではないので目については相手にはわからない。彼もそれを考慮して普通の電話を選んだのである。
「方針が決まった。日本を抑える」
「左様ですか」
「ただし気をつけてくれ」
「狐ですか」
「そうだ、狐だ」
サッバティーニの目の光がさらに険しく、鋭くなった。
「狐を相手にしなければならなくなったからな」
「それも九尾の狐を」
「厄介だぞ。それはわかっているな」
「勿論です。まずはこちらの影を消していきましょう」
「土壇場までな。狐には気付かれるな」
「狐だけでしょうか」
電話の向こうのサッバティーニに対して問うた。この問いはかなりの深い意味を持つ、サッバティーニは本能的にそれを悟ったがあえて言葉には出さないでおいて逆に問い返した。
「どういうことだ？」
「日本では狐といえば」
「狸か」

「はい。狸も何かして来ないでしょうか」
「可能性はあるな」
サッバティーニの目がまたさらに険しくなった。それはもう剣呑なものがあった。
「もうあまり姿は見せなくなったが」
「狐の後ろにいるのは間違いないですから」
「そちらも探っておくか」
「はい」
電話の向こうの相手はサッバティーニに頼むようにして頷いてみせた。
「狐と狸、両方が動けば面倒だ」
「それでは」
「いや、それは止めておけ」
サッバティーニは何かを制止した。
「二人共健康だ。そこで急に・・・・・・となれば」
「我々が怪しまれる、ですか」
「黄金ならいいがな」
「彼等はともかく周りの者を」
「そしてスキャンダルは探しておけ」
これがやはり決め手であった。政治家にとってスキャンダルを暴かれるということは即ち死を意味している。外れてもダメージは否定できないものだ。
「はい」
「黄金と合わせてな。これで落ちない場合は」
「その場合は」
「その時こそ正面から日本を抑える。よいな」
「わかりました」
「ではその方針でいく」
サッバティーニはこれで話を終わらせた。
「よいな。全ては」

「シオンの民の為に」
「ダビデの星の為に」
彼等もまたその言葉を口にした。そして電話を切る。
「では私も消えるとしよう」
電話を終えたサッバティーニはこう言って立ち上がった。
「まずはこれでよし」
そして姿を消す。後には暗闇だけが残っていた。

## 第十八部第四章　銃のない戦いその十八

「ウィーンか」
「はい」
カミュは首相官邸の執務室でペーチを前にして語っていた。自身の執務用の机に座るペーチの前に立って説明を行っているのである。これは首相と外相の関係からである。爵位のうえでは子爵に過ぎないペーチはカミュに劣る。しかし彼は首相でありカミュは外相だ。首相の方が席次が上なのは言うまでもない。ここではそれにならっているのである。
「それを再現したいのですが。それもより豪華に」
「そうか、ウィーンを」
「宜しいでしょうか」
「外交は何も堅苦しいだけではない」
ペーチはここで呟く様に言った。
その言葉と顔には英気が見られない。表情は土色で声はしわがれていた。実際の年齢より三十は老けているように見える。
「パーティーもまた。一つの方法だ」
「はい」
ペーチのそうした憔悴にはカミュも気付いていたがあえて何も言わない。彼の言葉に応えるだけだ。
「それでは」
「総統はどう言っておられたかな」
「総統はよしとのことです」
カミュはそう述べる。ペーチはそれを聞くと静かに頷くのであった。彼らしく。
「そうか」
「それが何か？」
「いや、私も特に反対する理由はないしな」

「左様ですか」
「情報収集にパーティーは不可欠だ。思う存分やればいい」
ここはそう言ってカミュに任せるのであった。彼は外交に関しては以前よりカミュに任せるところが多かったが今回もそうであると言えた。
「有り難うございます」
「ただ」
「ただ。何か？」
「連合も一筋縄ではいかないだろうな。彼等も強かだ」
「何、そこはあれです」
カミュは言った。
「どうするのかね？」
「我々の流儀に引き込んでみせます」
「できるのか？」
「首相、できるのかではありません」
カミュは不敵に笑って言った。
「するのです」
「するのか」
「はい。彼等は所詮大衆社会。本当の贅沢を知りません」
カミュは誇らしげに述べる。贅沢と一口に言うが様々なものがある。カミュはここでは本当の贅沢と表現したがこれは貴族だけにしかわからないものであると豪語したのである。不遜なまでに。
「贅沢、か」
「真の贅沢を知るのは我々のみ。エウロパのみですから」
「そこに引き込んで情報を集めるのだな」
「そうです。そして話を有利に進めていきます」
彼は述べた。
「それが私の考えですが」
「悪くはないな」
ペーチはやや消極的だがそれは認めた。

「だが」
「だが？」
「贅沢も。一つしかないのだろうかと思ってな」
「贅沢と言えば一つしかないではないですか」
カミュは軽く笑ってこう述べた。
「我々の贅沢こそが余裕のある贅沢です」
「連合のそれは贅沢ではないのかね」
「あれは単なる消費です」
やはり彼の考えの根底には連合への蔑視があった。そして彼自身それを隠そうともしていない。

## 第十八部第四章　銃のない戦いその十九

「金を派手に使い、家や食べ物、服、そして装飾を大袈裟にするだけです」

確かに連合の消費にはそうした一面もある。所謂大衆消費社会である連合においてはとにかく宣伝や派手さが目につくのだ。そうして皆それに乗る。結果としてエウロパの貴族達から見れば多分に下品な装飾が氾濫することになる。カミュも当然ながらそれを知っている。知ったうえで露骨に侮蔑しているのである。もっとも彼はどんなものであっても連合のものならば心から侮蔑するのであるが。エウロパ貴族主義こそが最も貴いと考えている男だからである。これは当然であった。

「持てる力を使うだけの。野蛮な話です」

「野蛮か」

「他に何と言えばいいでしょうか」

カミュが聞きたいといった感じであった。そこにも不遜なものがありしかもそれを隠そうともしない。その態度はある意味において見事ですらあった。少なくとも連合を悪し様に言っていてもそこには気品と優雅さが備わっている。それを忘れないのは流石であった。彼は決して卑しい男ではないというのをここで見せてもいた。

「あの奇抜でゴテゴテしただけの文化を。洗練なぞ何処にもありません」

「食べ物もか」

「変わったものを食べればそれでいいというのではないでしょう」

彼は言った。

「それで済めば。贅沢を馬鹿にしています」

贅沢も文化の一つなのである。少なくともカミュはそう認識していた。ローマ帝国では贅沢もまた文化の一つであった。欧州の貴族達は何かとローマ貴族を模範としたがそうであるからこそ贅沢にも

文化を見出しているのである。これは連合もそうであるがやはり違うのだと。彼等は考えているだけである。それをまたしても言葉で述べるカミュであった。
「彼等はそれがわかっていません」
「わかろうともしないだろうな」
「全く。所詮は植民地の奴隷達です」
「奴隷が平民になったと言いたいのかね」
「その通りです。それが何時の間にか力を持ち」
そういうことであった。彼にしてみれば。もっとも彼はかなり極端であると言えるが程度の差こそあれエウロパの者達は平民に至るまで連合についてはこう考えている。彼等にしてみれば連合の者達は植民地化それに近い立場から成り上がったに過ぎない連中なのだ。そこには様々な肌の色が混ざり合ったことへの偏見もある。連合においてはその混血によって偏見が消えたのだが彼等は違っていた。それは彼等はほぼ完全な白人だからである。しかも貴族達は決して平民と婚姻なぞしない。階級間の違いはこの時代はさらに歴然としていた。そうしたことがあるから連合への偏見は実に強烈なものになっていた。だからこそ連合を見下してきたのである。ある意味においてこの偏見は十九世紀の帝国主義時代に勝るとも劣らないものであった。また連合も連合で彼等を心から侮蔑して白い肌しかない過去の栄光にしがみついているだけの化石だと考えている。どっちもどっちなのである。
「我等に勝利を収め今こうしてオリンポスに向かっている」
「敗戦は事実です。それは認めます」
渋々ではあるが。それを認められない程彼も愚かではなかった。
「ですが」
「文化や文明で負けたわけではない。それを見せたいのだね」
「そうです。是非お任せ下さい」
彼は強い声で述べた。
「この会議において。彼等を負かせてみせます」

「では卿にそれを任せよう」
ペーチはそこまで聞いて言った。
「是非共。頼むぞ」
「はい」
こうしてカミュとの話は終わった。彼は一礼してペーチの執務室を後にしたのであった。
「あれが英気というものかな」
ペーチは先程までそこにいたカミュのことを思って呟いた。
「そして若さが。蛮勇と言うべきか」
だが彼はそれを悪くは思わなかった。
「私も。ああしたふうに考えることができればな」
力なく微笑む。
「難しいものだ。個性は」
そう言いながら書類を前に持って来る。
「だがそれはそれでいい。私は自分の為すべきことをするだけだ」
書類にサインをはじめる。
「最後までな」
腹の中が痛むのを感じる。だがそれ置いて仕事に励むのであった。
彼の信念に従って。

## 第十八部第五章　入城その一

入城

「そろそろだな」
シャイターンは自身の宮殿の一室でこう呟いた。窓からは一面の緑の庭が見える。所々に色とりどりの花々が咲き誇っているのも見える。
「！？何のことでしょうか」
側に控えていたアブーがそれに反応を示す。
「まだ我々が動くには少し時があると存じますが」
「アブー」
シャイターンはそれを受けて弟に顔を向けた。
「はい」
「御前は軍人だな」
「ええ」
これは言わずとも、であった。アブーは自らをシャイターン家の剣と考えている。それ以外の何でもないというのが彼の考えであった。
「それはよい」
「有り難うございます」
「だがな」
しかしシャイターンはここで付け加えた。
「何でしょうか」
「それだけでは駄目なのだ」
「といいますと」
兄はすぐに弟の問いに答えた。
「軍事は政治の一つの手段だ」
「はい」
「真の意味で軍人となりたいのならば政治も知ることだ」

「お言葉ですが兄上」
アブーはそんな彼に対して言う。
「軍人は政治に関わるべきではないと思いますが」
連合やマウリアではそれが軍人としての考えであったがサハラではかなり違う。アブーの考えは武辺に拠るものであり連合やサハラのそれとはまた違うものだ。
「何故だ」
シャイターンもそれに問うた。
「軍人は軍人、政治家は政治家。互いの領域に入るのは齟齬をきたします」
「正式に政治的な役職にいない限りはか」
「はい。そしてそれは政治家も同じだと存じます」
「一理ある」
彼は弟の言葉をまずは認めてみせた。
「確かにな。それは指揮系統の乱れ、そして専門外の者が介入する事態を招く」
「その通りではないでしょうか」
「だがな」
しかし彼はここで述べた。
「だからといって政治を学ばなくてよいというわけではないのだ」
「それは何故」
「今言った。軍事も政治の一手段だと」
シャイターンはまたその言葉を述べた。
「それならば政治を知れば軍事がよりよく理解出来るのだ」
「視野を広くしろと」
「そういうことだ」
シャイターンは弟の言葉に頷いた。
「これは御前にだけ言っていることではない」
「フラーム兄上にも」
アブーはふと気付いたように声をあげた。

「そうだ。フラームにもな」
「ですがフラーム兄上は法皇ですが」
「宗教もまた政治に関わるな」
「え、ええ」
兄の言葉に頷く。
「ならば知っておいて損はない。私もそうなのだからな」
「兄上もですか」
「そうだ。全てを統べようとする者は全てを知らなければならない」
そしてこう言った。
「アッラーがそうであられるようにな。サハラを統べんとするならば」
「サハラの全てを知る」
「そういうことだ。ならば私の言いたいことがわかるな」
「はい」
アブーは頷いた。
「政治も学べ。そして真の意味での軍人になれと」
「剣もまた自分の目を持つべきなのだ」
シャイターンはここであえて剣を人に例えてきた。
「そうすれば。よりよく動けるようになるからな」
「わかりました」
「御前はまだ若い」
彼はまた弟に対して言った。
「学ぶべきことは多くある」
「はい」
「政治も然りだ。よく学べよ」
「わかりました。ところで」
「何だ？」
弟の言葉に顔を向けてみせる。彼はすぐに言う。
「先程そろそろと仰いましたが。あれは何だったのでしょうか」
「オリンポスだ」

「オリンポス。といいますとエウロパの首都の」
「そろそろあそこに連合の者達が辿り着くと思ってな」
「確か三隻の巨大戦艦に乗っているのでしたね」
「国家元首である中央政府大統領と二人の閣僚がな。それぞれ」
シャイターンはそう説明した。
「一隻ずつ乗り込んでいる。そして地球から遠路オリンポスまで向かったのだ」
「彼等にしてみればその旅は如何なものでしょうか」
「特に思うところはないと思うがな」
シャイターンは述べた。
「その殆どを艦内で過ごしていてはな。思うこともない」
「左様ですか」
「それよりもオリンポスでだ」
彼は言った。
「何が起こるかな」
「エウロパは何を仕掛けて来るか、ということですね」
「そうだ」
兄は弟のその言葉を聞いてすっと笑った。

## 第十八部第五章　入城その二

「仕掛けるのは戦争の世界だけではないのだ」
「政治も」
「戦場においても様々な仕掛け方があるな」
「はい」
「それは政治の世界でも同じだ。それを見ておくのだな」
兄の言葉はあくまで現実を語ったものであった。アブーはそれを聞きながらまた彼に対して問うた。
「エウロパが何を仕掛けるか」
「そして連合がどう反撃するか。彼等は互いに相容れぬ存在」
「一千年の対立、ですか」
「話はそう簡単ではない」
だがシャイターンはここで付け加えた。
「貴族と平民だ」
「階級、ですか」
「御前はこれについてはよく知らないと思うが」
「否定はしません」
そしてアブーもそれを認めた。
「今一つ具体的なものは掴めません」
「王者も乞食も同じイスラム」
シャイターンはふとしたような感じでこの言葉を口ずさんだ。
「我々はどの様な立場であれ同じイスラムだな」
「はい」
「だから階級がどの様なものか理解し難い。これは仕方のないことだ」
「それは連合もでしょうか」
「彼等は特にな」
連合は完全な大衆社会だ。少なくとも制度としての階級は存在し

ない。こうしたものは無意識のうちに出来上がるものだがそれでも制度としてないのは非常に大きかった。
「左様ですか」
「連合は階級といったものは存在しない。確かにそれぞれの地位や社会的名声、収入、そういった様々な要因でランクはある。だがそれは決して階級ではない」
「制度化されてはいないと」
「そこはサハラと似ているのかもな。富豪も貧者も結局は同じ連合市民だ」
「その中に三百の国があれど」
「同じなのだ」
シャイターンの言葉はアブーにとっては実にわかりやすいものであった。それで容易に頷くことができた。
「成程」
「といってもエウロパの貴族社会はマウリアのカースト制社会ともまた違う」
「あれはまたかなり特殊だと思いますが」
アブーはマウリアのことを耳にして今一つ理解し難いといった感じの顔になった。マウリアはカースト制を否定はしているのだがやはり根強く残っているのである。
「特殊だと思うか」
「そもそもマウリア自体」
「あの国はな」
これにはシャイターンも頷くところがあった。
「まず正確な人口統計がない」
「はい」
「何時の間にか人口統計から消えてそれぞれの暮らしを営んでいる者達もいたりする」
「それが三百億でしょうか」
これが洒落にならない数なのは言うまでもない。

「今ではさらにいるのかもな」
「信じられない話ですね」
「そしてＧＮＰもあれは正確なものではない」
「それも聞いています」
　マウリアの公表しているＧＮＰは正確なものではないのは誰もが知っていることである。そもそも納税者が誰にもわかってはいないマウリアの全ての人口から何割が収めているのかも正確に把握されていないのである。今の時点で連合のどの国よりも公表のＧＮＰは高いが実際のＧＮＰはそれよりも五割は上ではないかと言われている。
「あれは。果たして国家なのでしょうか」
「またえらく妙なことを言うな」
「主席がいるのに王もおりますし」
「マハラジャか」
　所謂藩王だ。マウリアは大統領制だがそうした君主も多く存在しているのだ。
「はい。連合の様に国家連合ではないですよね」
「違うな」
「ではあれは一体」
「それがマウリアなのだ」
　シャイターンは弟にそう語った。
「それが」
「そうだ。混沌としているな」
「はい」
　マハラジャは一応地方自治体の元首となっている。それぞれの星系の自治の主といった形なのだ。そこに世襲の君主がいることがアブーの理解の外にあったのだ。
「その混沌こそがマウリアだ」
「混沌が」
「他にも色々とあの国にはわからないことがある」

「そのようですね」
アブーはまだ政治を知らない。だが勘は鋭かった。だからそれもわかったのだ。

## 第十八部第五章　入城その三

「我々の理解の範疇を越えているのはわかります」
「少なくともエウロパの貴族社会とはまるで違う」
「ええ」
「全くの別物だ。マウリアのそれは職業による階級だが」
「エウロパは今では完全に爵位ですね」
大きな違いだった。そこがマウリアとエウロパを分けてもいた。
「そういうことだ。もっともマウリアとエウロパは人種的なルーツは同じだが」
「確かマウリア人も白人でしたね」
「うむ」
これは事実である。その顔立ち及び骨格は白人のものである。アーリア人の侵入以降そうなっている。元々いたドラビア人も残っているがこれは下位のカーストである。上位のカーストにある者達は白人種なのである。肌の色は違うが。
「元々は同じようなものだったのですね」
「そうだ。だが長い間にそれが変わっている」
「マウリアはマウリアの、そしてエウロパはエウロパの」
「階級になっている。エウロパのそれは貴族だ」
話が最初に回帰してきた。
「貴族による階級社会。そこにある」
「その貴族達の文化と文明で連合に対抗するつもりなのでしょうか」
「そういうことになるな」
シャイターンは述べた。
「戦いでは負けたが文化では負けてはいないと。躍起になっているだろう」
その読みは当たっていた。カミュがまさにそうであったからだ。
「ですが兄上」

「何だ」
ここでアブーが問うた。
「文化で負けるも何も。所詮同じ物差しでは計れないものでしょうに」
文化とはそういうものである。それが文化なのだ。だが。
「エウロパの貴族達はそうは考えない」
「はあ」
「連合とエウロパは確かに対立してきた」
「はい」
「だがその力の差は。あまりにも歴然としている」
彼は言った。
「それぞれが設立した当初から。力においてエウロパは連合のそれを越えたことはない」
「人口も国力も。何もかも」
「そんな彼等のアイデンティティなのだ。文化や文明で勝っているというのは」
実際にはどうあれ、である。そう考えないと精神の安定が利かないのだ。
「根拠のないものに思えますが」
「大衆社会より貴族社会の方が全てにおいて優れている。それが彼等の考えだ。根拠は必要とはしない」
人間とはそういうものである。何かにすがらなければ生きてはいけない。それが根拠のないものだとしても。
「実際にエウロパの文化も素晴らしいがな」
「絵画等。我々の世界では乏しいものもありますね」
「うむ」
サハラでは絵画や彫刻は発達していない。これはイスラムが偶像崇拝を禁じているからである。キリスト教も本来はそうであり長い間議論が行われてきたがかなりうやむやになっている。
「それ自体は確かに素晴らしいです」

「だが連合のそれも同時に素晴らしい」
シャイターンは連合の文化も率直に認めていた。
連合のそれは大衆文化である。エウロパの様に洗練された貴族的で優雅な雰囲気はない。だが活力があり、鮮やかで多彩だ。シャイターンはそうした連合の文化も認めているのだ。
「それが彼等にはわからないのか」
「わかろうともしないようです」
「残念なことだな。致し方ないこともあるが」
サハラにおいてはサハラの見方がある。シャイターンはそれはわきまえているつもりだった。
「エウロパは連合を認められないか。とりわけ貴族は」
「それは彼等が貴族だからでしょうか」
「その一面はある」
彼はそれをまず肯定した。
「エウロパのナショナリズムと共にな」
「ナショナリズムですか」
「他にどう言えばいいかわからないな。古い言葉だが」
「はあ」
長兄の言葉に応える。長兄はさらに述べる。
「連合には連合の、エウロパにはエウロパのナショナリズムがあるということだ」
「そういうものですか」
「そしてエウロパのものの方が強い」
「確かに」
言われてみればそうである。アブーもそれを理解した。
「連合は余裕がありますね」
「国力差が圧倒的過ぎる。どうしようもない程は」
「それを考えますとエウロパは奮戦していたのですね」
「僅か一千億の人口でな。頑張っていると思う」
「ええ」

「いや、頑張っていたというべきかな。戦いも」
シャイターンは先の戦争にも言及した。
「あれだけの国力差がありながらも」
「連合軍は二千個艦隊に対してエウロパ軍は五百個艦隊を動員しておりましたね」
「あれはかなり苦労していたな」
「はい」
それだけの数を集めるのは実は大した問題ではない。肝心なのはその維持と運用なのである。エウロパ軍、とりわけその首脳部であるシュヴァルツブルグやモンサルヴァートはそれに苦心していたのだ。
「よく戦ったと言うべきか」
「損害は圧倒的でしたが」
「それでもな」
シャイターンは言った。

## 第十八部第五章　入城その四

「よく戦ったものだ。最後まで」
「あそこでマウリアが講和に動かなければどうなったでしょうか」
「おそらくオリンポス入城だ」
その答えは素っ気無いものであった。
「それを考えると今と同じだがな」
「はい」
「だが内容は全然違っていただろう。少なくとも今の様にあれこれする余力はない」
「ですか」
「少なくとも今のように交渉するということは困難だった」
シャイターンが言うとアブーも言う。
「自分達の本拠地に導き入れて」
「いや、あれは連合の方からやって来たのだ」
それは訂正させた。
「連合の方から」
「城下の盟を誓わせる為にな」
「それは勝者と敗者を知らしめる為でしょうか」
「そういうことだな」
弟の言葉に頷いてみせた。それからまた言った。
「アブー」
「はい」
弟の名をまず呼んだ。
「ヒトラーを知っているな」
「はい」
言わずと知れた二十世紀、いや人類史上最大の独裁者である。その能力と野望は最早伝説にまでなっている。イスラエルが影のバランサーとなっている連合においては人類史上最大の悪人とされてい

る。ヒトラーはこの時代においても多くの者に悪とみなされているのだ。
「あの男があそこまでなれたのは何故だと思うか」
「それは」
「演出だ」
彼は言った。
「演出！？」
「そうだ。演出は映画やドラマにだけ使うのではない」
「はあ」
アブーは兄が言っていることが少し場違いに思えた。だがそうではなかったのだ。
「政治にもまた演出が不可欠なのだ」
「そうなのですか」
「ヒトラーがどうして瞬く間にあそこまでなれたかわかるか」
「力があったからでしょうか」
「確かにそうだ」
その言葉は認めた。
「だが。それだけでは完全な正解とは言えない」
「そこに演出が加わってこそだったということですか」
「そうだ」
これはシャイターンには非常によくわかることであった。何故なら彼もまた演出を駆使して今の地位に至ったからである。同じだからこそ理解出来ることであった。
「その力を見せるのが演出だ」
「そうなのですか」
「そしてそれもまた政治だ」
「演出もですか」
「そういうことだ。今連合はそれを行おうとしている」
「勝者である自分達を演出する為に」
それは昔からある。どの国もそれを行う。連合もまた然り。

「さながらローマ帝国の様にな。もっともローマと呼ぶにはかなり穏健だが」
「はあ」
「そしてエウロパには敗者を演じることを強いる」
「エウロパにとっては耐えられないことですね」
「しかし、だ」
そしてまた言った。
「エウロパの貴族達は誇り高い。それを許すと思うか？」
「いえ」
これは言うまでもないことであった。アブーは首を横に振ってそれをすぐに否定した。
「そうだな。だから彼等は彼等で演出を考えている」
「オリンポスにおいてですか」
「そしてまた御前に言っておくことがある」
「それは」
「政治はな、堅苦しいばかりではない」
「はあ」
これは意外な言葉であった。彼にとって政治とは難解で確かに堅苦しいものであったからだ。だが兄はそれを否定してきたのである。これは違和感を覚えるものではあった。
「優雅な一面もある」
「といいますと」
「贅沢もまた政治だ」
「贅沢も、ですか」
話が見えなかった。首を傾げてしまった。
「パーティーや御馳走、演劇もな。政治なのだ」
「そうなのでしょうか」
兄に言われても実感がわかなかった。やはり首を傾げてしまう。
「そこから情報を引き出すこともできれば自分達をよく見せることもできる」

「はあ」
「それをするのも政治だということだ。華やかな面もあるのだ」
「そうなのですか」
「そこも勉強しておくといい。戦争にも役立つ」
こうも言うシャイターンであった。
「だといいですが」
「さっきも言ったな」
彼は懐疑的な顔を見せる弟に対してまた言った。
「戦争は政治の一手段に過ぎないと」
「はい」
「政治における解決の手段の一つだ。極論するとそうなる」
「そして演出はそれをよく見せる為のものであると」
「戦争にも使えるのだ、演出は」
「戦争にもですか」
またアブーが声をあげると述べた。
「そうした意味で御前が学ばなければならないことは多いぞ」
「はい」
「色々とな。御前には政治的なポストも用意しておくか」
「有り難うございます」
「シャイターン家がこのサハラを統べる為には御前の力もまた必要だ」
彼には野心があった。このサハラを己の下に統一するという野心が。そしてそれを今弟に語っているのである。それは魔王の言葉であった。

## 第十八部第五章　入城その五

「よいな。御前は剣であり楯だ」
「はい」
「意志を持つ。それを忘れるな」
「はっ」
敬礼した。それが終わってからシャイターンはまた述べた。
「そして次の行動だ」
「どうされるのですか」
「エウロパには手は出さない」
彼は落ち着いた声でこう述べた。
「やはり」
「まずは東だ」
そして声を強くさせた。
「東を倒す。よいな」
「はっ」
「外には構うな。エウロパにもマウリアにも。そして」
「連合にも」
「とりわけ彼等はな」
シャイターンの頭の中に銀河の星図があった。今彼はそれをじかに見ていたのであった。
「我等の目的はあくまでサハラの統一、そしてその統治だ」
「はい」
「外に向かうことではない。ましてや連合はあまりに大きい」
連合の大きさは最早言うまでもないことであった。誰もが認識していることであるがらためて言葉に表現するとこうなるのである。
「巨人ですか」
「巨人だな、中に多くのものを包み込んでいる巨人だ」
「その巨人と対することはサハラを一つにしても無理ということで

すか」
「サハラの人口は二千億」
シャイターンはまずサハラの人口について述べた。
「連合の人口は四兆だ。そして国力も技術も比較にはならない」
国力は優に二十倍を遥かに超える差がある。戦乱に明け暮れたサハラとは違い連合は経済発展と開発にいそしんでいた。千年に渡るその差が如実に現われているのだ。
「これで戦うとなれば。負ける」
「負ける」
「勝てる筈がない。確かに戦いは我々の方が知っている」
これは自明の理であった。彼等は千年の間戦ってきたのだから。その長い間サハラにおいて戦火の途絶えた日はなかった。今三国になってようやく僅かの間収まっている。だがこれがかりそめの平和であることは誰の目にも明らかであった。オムダーマンもハサンも、そしてティムールも戦争への備えを怠っていないのだから。
「だが。戦争は数だ。これはわかるな」
「はい」
少数で多数を鮮やかに撃破してみせてきたからこそわかることであった。
「数がなければ何も出来はしない」
「連合の力は数そのものですね」
「そうだ。圧倒的な兵力をその重厚な装備で覆って来る。それを支えるシステムも健在だ」
「将兵の個々の質は問題ではないと」
「圧倒的な数の前にはな。その様なものは意味がない」
それが戦争の現実であった。
「だからこそ。連合との戦いは避ける」
「はい」
「何があろうともな。よいな」
「わかりました」

「だが連合というのは面白い勢力だな」
シャイターンは一旦言葉を止めてからそう言った。
「面白い、ですか」
「そうだ。長い間戦争を知らなかっただけではない」
魅力は他の部分にこそあった。
「あの多様性と豊かさ、そして開放感は魅力だな」
「無秩序という意見もありますが」
イスラムで思想や宗教がほぼ固まっているサハラに対して連合はあまりに多彩である。だからサハラの宗教学者達の間ではこうした意見もあるのだ。
「それもまた魅力の一つだ」
だがシャイターンはそれもよしとした。
「連合のそうした無秩序さは。活気と表裏一体だ」
「妙な勢力なのですね、つくづく」
「だがそれがいいのだ」
「はあ」
アブーは兄の言葉にどうも頷けないものを感じていた。
「そういうものなのですか」
「あの世界は無限だ」
そして今度はこう言った。
「その無限の世界に生きているということは幸福なことだな」
「ですが兄上」
「わかっている」
弟が何を言うのかはわかっていた。
「私はサハラの者だ。そしてシャイターン家の者だ」
「はい」
「それはわかっているつもりだ。そして私が為すべきことも」
「サハラを一つに」
「そう、このサハラを一つにだ」
窓を見た。サハラの世界がそこに広がっていた。そこは連合とは

違った荒々しい美しさであった。

## 第十八部第五章　入城その六

キロモト達がエウロパに向かったからといって連合の動きが止まったわけではない。特に経済活動はそれに構うことなくいつもの様に動いていた。

「あの三兄弟が動いているのか」

ベニョーコフは息子であるウラジミルから話を聞いていた。息子はもうアナハイム社の常務となっていた。

「はい」

父に実によく似た顔で彼は頷いた。その顔に嘘はなかった。

「どうやら最近軍需産業への進出を考えているようで」

「ううむ」

ベニョーコフはそれを聞いて思わず腕を組んで考え込んだ。

「確かあそこはそうしたものとは無縁だった筈だが」

「ノースロップと提携するようです」

「ノースロップとか」

それを聞いて自分の眉が不意に動くのを感じた。ノースロップはアメリカの巨大企業である。軍需産業も持っておりかってはアメリカの重要な軍需企業であった。もっとも取り扱っているのは軍需産業だけでなく他の様々なものも扱っていたが。連合においては兵器は昔から必要なだけしか製造、販売されない。そもそも消費が少ないからこれも当然であった。莫大な設備投資と維持費のわりにはあまり採算がとれづらいのだ。軍需産業も簡単に儲かるわけではない。ノースロップ社にしろアナハイム社にしろ軍需関連ではあまり収入はない。黒字を保ってはいるが。それよりも他の分野で収入をあげているのが実情である。

「また厄介なところと提携するな」

「アメリカ人は信用できません」

「それを言うならあの三兄弟もだ」

ベニョーコフの声は苦いものになっていた。
「中国人も。信用できん」
「はい。まあフェニキア人よりはましでしょうか」
「そもそも連中は本当のフェニキア人かどうかすら怪しいぞ」
「確かに」
一応連合にいるフェニキアの者達は自分達はかってのフェニキア人の末裔だと言っている。だが何千年も前に歴史の中に消えた者達の末裔だからと自称してはいそうですかと納得できる者はいない。これはアルムやヒッタイト、カルタゴ、そしてアッシリア等の国々も同じである。
「そもそもカルタゴにしろあれだったな」
「フェニキア人の殖民都市がそのはじまりです」
「確かローマに滅ぼされたな」
「そして生き残った市民は奴隷として売られ各地に散りました」
それが古代の戦争であった。戦争に敗れれば全てが破壊され、虐殺の後生き残った者は奴隷として売られる。カルタゴはローマに滅ぼされた後完全に破壊され地上から消えたのだ。それでどうして今連合にカルタゴ人達がいるのかというと非常に疑問があるのだ。
「今普通に連合にいるが」
「本当に彼等はそのフェニキアやカルタゴの末裔かどうかは疑問ですね」
「ヒッタイトもいきなり滅んでいるしな」
「はい」
鉄器と騎兵で強勢を誇ったヒッタイトは海の民という謎の民族により滅ぼされた。彼等の正体はこの時代においても結局謎のままである。
「本当にフェニキア人なのか」
「おそらく違うかと」
「そうだな。そう考えるのが妥当だな」
「まあ商売の上手さは受け継いでいると言えますが」

これは事実である。カルタゴはこの時代貿易でかなりの利益を得ている。商業国家として名高い存在なのである。
「それは認めるしかないな」
「はい」
「上手いものだ、実に」
それは素直に認めた。
「我々ロシア人は素朴だ」
ロシア人というのは酒をこよなく愛し、粗暴なイメージがあるが実際には国家としても謀略は不得手な部分がある。少なくともアメリカや中国と比べるとわかりやすいとされている。その外交が基本的に力に頼るだけでしかも次に何をするのかわかるからだ。
「どうもああした強かなのには弱いな」
「日本にも」
「また連中は訳がわからない」
また困った顔になった。
「あの首相も企業家達もな」
「ええ」
「まあ中央政府の防衛長官は優れているがそうした強かな部分はないな。話もし易い」
「手強いことは手強いですがね」
それが八条への彼等の評価であった。悪い評価ではない。
「そうだな。あのままいけばいい政治家になるだろう」
「日本国の首相でしょうか」
「それか中央政府の大統領か。いや、これは難しいか」
「ですね」
これには理由があった。大国出身の者は中央政府大統領にはなりにくいのである。これは小国とのバランスを取る為の配慮であった。それでも大国の横暴はあるのだが。
「どちらにしろあの若さでな。よくやるものだ」
「エウロパでも頑張って欲しいですな」

「そうだな。では我々も頑張るとしよう」
「はい」
ウラジミルはその言葉に頷いた。

## 第十八部第五章　入城その七

「まずは三兄弟への牽制をはじめましょう」
「それは御前に任せていいか」
「是非共」
彼は応えた。
「やらせて下さい」
「わかった。だが油断はするな」
豪放磊落な気質のベニョーコフにしては珍しい言葉であった。
「あの三兄弟は手強い」
「はい」
「一番下はそうでもないがな。上の二人は」
「実質的にグループを動かしておりますから」
「そうだ。長男は慎重で無駄のない動きをする。次男は機を見るに敏で果断だ」
「あのグループをあそこまでしたのはあの二人だそうですね」
「そうだな。一応あの三兄弟の父がそうしたと言われているが」
実は違ったのだ。その父が二人の息子に支えられてグループを大きくしたのだ。彼は常に二人の息子の意見を聞いていたという。
「実は違うのはこの世界ではもう常識だな」
「はい。まあ人の話を聞けるというのはそれだけで大きなことでありますが」
「中には聞こうともしなければ理解も出来ない者がいる。そしてそんな輩こそが出鱈目なことをしでかして反省しないのだ。自分が破滅する分にはいいが大抵周りも巻き込む」
「迷惑なものです」
「そんな奴は切り捨てるしかないがな。まあ滅多にいない」
理由は簡単である。実際に取り返しのつかないことをしてしまい

破滅するからだ。残念なことに思慮分別が全くなく、自分の
したことを何一つ把握出来ず、法律やルールは理解出来ない、そのうえで嘘をつき人の信頼をどれだけ破壊してもそれすらわからないといった者はいる。何時の時代にでもそうした者は結局破滅するしかないのだ。人の話を聞かない、理解も出来ないのでは手の打ちようがないのだ。
「そうした意味であの父親もそれなりだったということか」
「まあ二人の息子に操られたという見方もありますがね」
「しかもノースロップ社もいるか」
「連中もまた手強いですね」
「少し背後関係を調べておけ」
背後関係についても言及された。
「三兄弟とノースロップのでしょうか」
「いや、もう一つだ」
ベニョーコフはその猛々しい目を忍ばせていた。
「ここまで話が大きいと何か引っ掛かる」
「彼等が動いている可能性もあると」
「そうだ。大規模な経済やビジネスの話だとな」
「この連合では常にですからね」
「そうだ。裏があるかも知れない」
ベニョーコフはそれまでの熊から狐になっていた。
「彼等がいたら適当なところで手を打て」
「わかりました」
「向こうもそのつもりだからな。いいか、よく覚えておけ」
彼は息子に対して経営者、そして父として語った。
「連合には様々な勢力が存在する。そしてその中には危険なものもある」
「その危険も一つではない」
「特に危険なのは。彼等だ」
あえて名前は出さないがそれでもわかるものであった。だからこ

そ息子も頷くのだった。
「はい」
「絶対に敵に回すことのないようにな。いいな」
「わかりました。それでは」
「それに軍需産業は我々にも三兄弟にもソースロップにもさして収益のある分野ではないしな」
どちらかというと政府への売り込みといった趣が強い。自分達の企業の製品の性能を知ってもらう為の。そうでなければ設備投資と維持費に莫大な費用がかかるのに注文も消費もさして多くはならないこの分野に進出したりはしない。企業も収入が大事なのだ。
「ここは適当なところで手打ちでもいい」
「ですね」
「下手に突っ張って破滅しては元も子もないからな」
「全くです。命あってのものです」
「アナハイムの社員の為にもな。やってみろ」
「わかりました」
アナハイムは手を打つことになった。それも後継者のベニョーコフが。そしてそれはすぐに中国の三兄弟の下へと話が入ったのであった。

## 第十八部第五章　入城その八

「ほう、もう動きはじめたのですか」
白髪の中年の男が目の前の皮の椅子に座る端整な青い目の男の言葉に頷いていた。この男はギルバート＝デュランダル。ノースロップ社の重役である。立派な青いスーツを着ている。
「はい。アナハイムはもう気付いたようですね」
デュランダルはその白髪の男に言葉を返した。見れば彼の他に二人の男がいる。一人は黒髪に鋭い目の男、そしてもう一人は長身で逞しい身体をした男だった。四人はテーブルを囲んで如何にも高そうな絨毯を敷いた部屋の中で話をしていた。三人はそれぞれ茶色のスーツを着ていた。
「貴方達が軍需産業への進出を考えていることを」
「気付いたのはそれだけでしょうか」
鋭い目の男がそれを聞いて言った。彼は三兄弟の次男である李王極、彼等が経営する桂平公司の副会長である。機を見るに敏な人物として知られている。
「といいますと」
デュランダルはその言葉を受け李王極に顔を向けた。
「我々のことも。気付いているのではないでしょうか」
「おそらくは」
「やはり」
それを聞いて白髪の男が頷いた。彼は会長であり三兄弟の長男である李王神、慎重で的確な判断を下す大局観のある人物と言われている。
「それはもう察していますか」
「特に隠すことでもないと思いますが」
「確かにそうですが」
李王神はデュランダルのその言葉に頷いた。

「我が社と貴社が提携関係にあるのは公にされておりますし」
「軍需産業においても近々公にされますな」
「だから特にそれを察せられても困ることではない」
「私はそう認識しております」
デュランダルは特に気にかけるでもなくこう述べた。
「貴方達がどう思っているかはわかりませんが」
「我々もそれは同じです」
李王神はデュランダルの腹を探りながらであるがこう述べた。
「ただ、それを事前に知られたことが」
「気になりますか」
「流石はアナハイムと言うべきですがね」
「しかし会長」
ここで三兄弟の末っ子である李王登が口を開いた。
「放ってはおけないと思いますが」
「それはわかっている」
彼は弟にも言葉を返した。
「知られたことは問題だ。だが」
「知られた内容は問題ではないと」
「そういうことだ。こちらから騒ぐ必要はない」
「わかりました」
李王登は長兄にそう言われて言葉を引っ込めた。
「しかし問題はアナハイムの情報収集能力ですね」
李王神はそう言ってデュランダルに顔を向けた。
「我々の予想を越えております」
「確かに」
「これが細かい技術の分野にまで達しているならば。由々しき問題ですな」
「そういえば最近我が国にアナハイムの技術者がよく来ております」
「ほう」
それを聞いた李王神、李王極の目が光った。

「表向きは研修ということですが」
「彼等が怪しいというわけですな」
「そちらの国にも結構来ているのではないですか？」
「予定はあると聞いております」
李王極がそれに答えた。
「大規模なものが。やはり表向きは技術交流ですが」
「技術を盗みに来ましたか。彼等も考えるものです」
「おそらく彼等はこうした情報収集も兼ねているのでしょう」
「そう考えるのが妥当ですね」
デュランダルもそう見ていた。
「彼等にしては細かいですな」
李王極は述べた。
「力技を得手とするロシアにしては」
「彼等も伊達に連合の大国ではないということなのでしょう」
デュランダルはその言葉に涼しい顔をして述べた。
「流石に力技ばかりではあれだけの地位を維持は出来ませんから」
「確かに。彼等は愚かではない」
「はい」
デュランダルは今度は李王神の言葉に頷いた。
「特にアナハイム社は。どうして中々強かです」
「そしてこちらに来るのは誰ですかね」
李王登が他の三人に問うた。
「やはり社長自らでしょうか」
「いや、それはないな」
だが李王極はそれを否定した。
「ないですか」
「社長自ら出ては目立つ。それはないな」
「では一体誰が」
「おそらく息子が出て来るだろう」
「ウラジミール＝ベニョーコフか」

「はい」
兄の言葉に頷く。
「最近常務になったそうですね」
デュランダルもそれに続いた。
「父親に実に似ているとか」
「では豪放磊落というわけですな」
「細かいことは苦手と」
だが四人は決して安心する顔ではなかった。
「アナハイムは人材も多い。彼が出て来るということはブレーンも動くでしょう」
「ここはどうされるおつもりですか？」
デュランダルは李王神と李王極に問うてきた。
「引き下がるおつもりではありますまい」
「無論引き下がるつもりはありませんよ」
李王神がそれに言葉を返した。
「桂平公司は常に前進する会社ですから」
「だからこそ我々も協力させて頂いているのです」
デュランダルは顔だけの笑みを浮かべた。それは企業化特有の笑みだろうか。むしろ腹の底を隠した笑みであった。

## 第十八部第五章　入城その九

しかし李王神と李王極はそれはあえて無視した。そのうえで話を続けた。
「有り難いことです」
「では期待しておりますよ」
デュランダルは述べた。
「そちらのさらなる発展を」
「その言葉、有り難くお受け致します」
これで四人の話し合いは終わった。デュランダルは部屋を後にし自分の会社であるノースロップ社中国支社に戻った。後には三人が残った。
「いけ好かない男ですな」
李王登が不機嫌を露わにした顔でまず言った。
「何を企んでいるのか」
「ノースロップもノースロップで思惑があるのだ」
それに李王神が応えた。
「我々はお互い利用し合っている。だからそんなことを言っても無意味だ」
「お互い様ってことですか」
「そうだ。だからそんなことを言っても無駄だ」
「わかりました。それでは俺は黙っておきましょう」
「御前の管轄は最近どうなのだ」
李王極が弟に尋ねた。彼はグループのスポーツ、芸能部門を統括しているのである。兄二人がグループ全体を統括しているのと比べればかなり小さかった。これは彼等の父が定めたことなのである。父も末っ子の力量を見極めていたということであろうか。
「野球チームは黒字ですね。成績もいいです」
「ストッパーがフリーエージェントで出そうだと聞いているが」

「何とか引き止めます。彼がいないと抑えがいませんから」
「最悪の場合を考えて若手を育てておいたらどうだ？」
李王極が言った。
「中継ぎでいいのが何人かいただろう」
「いるにはいますがメンタル面で問題があるそうで。その辺りは監督に任せています」
「そうか」
「現場のことは監督が一番わかっていますからね。オーナーとしては現場は彼とゼネラルマネージャーに任せるのがいいでしょう。下手に現場に口出しするよりは」
「そうだな」
二人の兄はその言葉をよしとした。幾ら器量に劣るからといっても李王登はスポーツのことはよくわかっているようであった。
「こちらとしては宣伝や選手へのバックアップをするだけです。そしてそれは最大限務めます」
「それでいい」
「では芸能はどうだ」
今度は長兄が問うた。
「あのアイドルグループが相変わらず売れています」
このグループの事務所のアイドルグループのことである。メンバーは全員十代前半から後半までの女の子で構成されている。メンバーチェンジが激しく、卒業したメンバーが事務所でまたソロ活動をしたり、期間限定のユニットを頻繁に組むことでも知られている。
「ただ、またメンバーが卒業します」
「またか」
「今度は二人です。二人共惜しいですがまた別のユニットやソロで頑張ってもらいます」
「あの娘も大分成長したな」
李王神はその卒業するメンバーのうちの一人について言及した。
「最初は。大丈夫かと思ったが」

「歌も踊りも最初は酷かったですからね。けれど努力家で芯が強かったので」
李王登は述べた。
「きっとやってくれると思っていましたよ。あそこまでなってくれて本当に嬉しいですね」
彼は所属のアイドル達からは優しいおじさんとして知られているのだ。間違ってもタレントを粗末に扱ったりはしない。そこも弁えていた。

## 第十八部第五章　入城その十

「卒業したのも。自然でしょう」
「そうか」
「またオーディションをするのだったな」
「ええ」
彼は二番目の兄に対して頷いた。
「その予定です」
「今度もまた若い娘なのだな」
「うちの事務所の方針で。そのつもりです」
「そうか。くれぐれもスキャンダルには注意するようにな」
「ハイエナの様なマスコミ達がいるからな」
マスコミが芸能人にとって天敵なのはこの時代も同じである。
「そっちは常に手を打っていますから。御安心を」
「よし」
「では頼んだぞ」
「お任せ下さい」
芸能にしろスポーツにしろどうしても裏の世界が関わってくる仕事である。李王登もそれは例外ではなくやはりその筋の者と会う機会もある。必要悪と言えば必要悪である。かつては球団の監督が選手獲得の為に裏社会の人間を通じて金を回したりもしていたことがあった。こうしたことがまかり通る時代もあったのである。この時代もドラフト制度があるがそれでもこうした話や選手の囲い込みはあるのだ。
「そしてそちらはどうされるのですか」
「軍需産業か」
兄二人は弟の言葉に顔を向けさせた。
「はい。何分我々にとってははじめて進出する分野ですから」
「だからこそノースロップ社と提携するのだがな」

「正面からアナハイムと衝突するおつもりですか？」
「いや、待て」
だが李王神は弟の言葉に慎重な言葉を述べた。
「流石に正面から渡り合うことはしない」
「下手な刺激は避けると」
「違う。輸送船等の技術ではやはりアナハイムには大きく劣る」
彼は言う。
「だから。他のものを開発、製造していきたいのだ」
「何に進出するおつもりですか？」
「電子機器も既にそのノースロップがいるな」
「はい」
「それよりも後方に進出するか」
李王神は言う。
「後方に」
「そうだ。コンピューター等はどうだ」
「コンピューター」
「我々の基幹産業だしな。いいと思うが」
「それは収入に繋がるのですか？」
「少なくともそれは出さなければならない」
長兄が言った。
「だがギリギリのところでいいな」
「それよりも宣伝をと」
「そうだ。軍需産業の目的は多分に宣伝だ。それを忘れるな」
「わかりました。ではそうされるのですね」
「うむ」
李王神は最初の弟である李王極の言葉に頷いた。
「それでいくか」
「最初は造船に乗り出すと思ったのですが」
桂平公司は造船業でも大きな力を持っている。実はベニョーコフもそれで来ると考えていたのだ。だが李王神はあえてそれを採らな

いことにしたのだ。
「私も最初はそれを考えた」
李王神もそれは認めた。
「だが。それだとこちらもリスクが多い。それに」
「それに！？」
「彼等が動く可能性もある」
「彼等が」
それを聞いて李王極も李王登も顔色を不吉なものにさせた。その彼等が一体誰のことなのか二人もすぐにわかったからである。
「何でもあの十二人の長老達が最近集まっているらしいのだ」
「軍需産業のことでしょうか」
「わからない。だが可能性はある」
「その介入を事前に防ぐ為にも」
そう述べる。
「ここは最初から退いた方がいい。引くに引けなくなってから彼等に入られるとな。ことだ」
「ええ」
「ですね」
二人の弟達は兄の言葉に頷いた。
「彼等にしてみれば我等のグループですら小さな勢力に過ぎない」
中国、そして連合に名を知られたグループですらも。そうした風に感じられるのは彼等よりも遥かに巨大な勢力だけである。
「いいな。それを忘れるな」
「はい」
弟達はまた頷いた。
「無闇な衝突は避ける。今は」
「彼等が動いているとなれば」
「そういうことだ。これでわかったな」
「はい」
そしてまたもや頷いた。

「彼等だけは敵に回すわけにはいかない」
「そういえば彼等で気になることを聞いております」
「何だ？」
李王神と李王登は李王極の言葉にそれぞれの顔を向けた。

## 第十八部第五章　入城その十一

「今中央政府、そして各国の間で問題になっている惑星開発ですが」
「あれか」
「はい。そこではまだ動きを明確にさせておりません」
「動く時を待っているのかもな」
「おそらくは」
次兄は述べた。
「何やら考えているのでしょう」
「またしてもか」
「その動きで今回の話の趨勢は決まると思いますが」
「だろうな」
李王神はその言葉に頷いた。
「彼等の動向でな。今までがそうであったように」
「はい。そちらも様子を見ておくべきでしょう」
「我々のビジネスにもなるな」
「ええ」
彼等も惑星開発に関わっているのである。そちらにおいても多大な利益を得ているのだ。
「ここは重要ですね」
「うむ」
彼等のいる中国は惑星開発推進派である。なおノースロップ社のあるアメリカもアナハイム社のあるロシアもこの点においては同じである。大国の殆どと環太平洋諸国がそれに賛同している状況であった。
「影のバランサーとしての力、また見ることになるな」
「はい」
「影のバランサーですか」
李王登はそれを聞いて呟いた。

「全く以って彼等に相応しい言葉ですな」
「御前の管轄分野でも関わっていたな」
「こっちは裏世界と結構色々ありますからね」
彼は長兄の言葉に応えた。
「ありますよ、それは否定しません」
「そうか」
「もっとも只の裏世界よりよっぽど怖い話ですけれどね」
「どんな話だ？」
兄達はまた末弟に顔を向けて尋ねた。すると。
「兄上達でも知ったら絶対に他言出来ない内容ですよ」
「絶対に、か」
「どうです？御聞きになりますか？」
「いや、いい」
「悪いが遠慮する」
二人の兄は賢明にもその誘いを断った。
「大体のことは見当がつくからな」
「左様ですか」
「そちらの世界は実に色々あるのだな」
「作られた世界ですからね、特に芸能界は」
彼は目を少し下に向けて言った。
「何かとありますよ。タレントを薬から守ったり訳のわからないストーカーを退けたり」
「ほう」
「他にもね。男の子にしろ女の子にしろ守らなければならない。社長としてね」
彼の事務所は業界では非常にいい事務所として知られている。彼は経営者としては二人の兄には劣るが少なくとも悪質な経営者ではなかった。だからタレント達を守っているのだ。
「八条長官みたいな朴念仁ばかりではないですから、男も」
「八条長官か」

いきなりここで八条の名前が出て来たが二人の兄はそれには驚かなかった。
「そういえばそちらのタレントが一人国防省のキャンペーンに参加していたな」
「彼女はタレントじゃないです、アイドルです」
「どっちでも同じじゃないのか？」
「本人はそう主張しています。そのうち女優になるでしょうね」
「そうか。で、そのアイドルだが」
そのアイドルの名前が問われた。
「神崎亜矢ですね」
「そう、彼女だったな」
二人の兄は末弟の言葉に頷いた。

# 第十八部第五章　入城その十二

「彼女は結構八条長官を気に入ったそうだな」
「そうですね、優しいお兄さんと呼んでいました」
「スキャンダルにはならなかったのか、それで」
「全然、神埼も中身はあれで強かでしっかりしていますが」
「そうだろうな」
「あの目は十代の目ではない」
　神埼亜矢は確かに可愛いとされている。だがその目はファンによっては怖いと言われている。何かに餓えた様だと。一説には十代ではないのでは、とも言われている。
「私達も不思議に思っているのだが」
「ええ」
　二人の兄もそれに言及してきた。
「彼女は年齢を詐称していないか？」
「そこのところはどうなのだ？」
「それはないです」
　末弟はそれを否定した。流石に所属事務所の社長が知らないということはなかった。
「神崎は間違いなく十代ですよ」
「そうか」
「ならばいいが」
「あのプロポーションと目はやっぱり引っ掛かるものがありましたからね。こちらも調べることにしまして」
　神崎はプロポーションでも定評がある。十六の時に水着の写真集を出したがそこで意外な程大きい胸とくびれのあるウエスト、形のいい腰が話題になったのだ。脚線美は以前から知られていたからそれは写真集においては今更話題にはならなかったが。
「そうだったのか」

「その結果わかりました。彼女は間違いなく十代です」
「あれでか」
「はい」
彼は二人の兄に対し強い顔で頷いた。
「そうですから。御安心を」
「わかった。ならいいがな」
「おわかり頂けましたか」
「ああ。では神崎亜矢も八条長官をそう言っているだけだな」
それを確認すると彼はプロダクション社長として答えてきた。
「はい」
「まあその位ならいいだろう。神崎が踏み込まないのならな」
「御言葉ですが女が歩み寄らずとも男が来ればそれで話になりますが」
李王登は如何にも芸能プロダクションの社長に相応しいことを言った。
「違うでしょうか」
「まあ確かにそうだが」
「だが八条長官だぞ」
二人はそんな末弟に対して返す。
「自分から来ると思うか？」
「いえ、それは」
それがないのは末弟にもわかっていた。
「絶対にないと思います」
「そうだな」
「どんな美女が来ても一向に気付かない御仁だからな」
八条の女性に対する鈍感さに二人も気付いていた。顔がよくて性格もあって名門の出身で地位もある。それだけでもてるかと言えば決してそうではないのだ。最も重要なのは本人の意識だ。
「流石にそれはないな」
「ええ、ですから私もそれは完全に安心しておりました」

「一応女性に興味はないのではないのだろう？」
「御自身ではもてないのを気にしているそうですな」
「もてないのではない、あれは」
李王神は苦笑いを浮かべてこう述べた。
「気付かないだけだ」
「そうですな」
「全くです」
そして二人の弟も長兄の言葉に同意した。
「そしてその長官ももうすぐオリンポスだな」
「明日か明後日でしたな」
「うむ」
長兄は次兄の言葉に応えた。
「どちらにしろもうすぐだ」
「オリンポスに降り立つのは」
「一千年来の宿敵の首都に国家元首、そして軍の指揮官が降り立つ」
「実に絵になりますな」
「それが美男子であれば尚更な。テレビでの中継が見物だ」
そういうことであった。やはり容姿というものは重要なのであった。政治的な演出の場においてもそれは変わりはしない。

## 第十八部第五章　入城その十三

「それももうすぐです」
「楽しませてもらうか。その時は」
「はい」
「では今日の話はこれ位にしよう」
長兄が席を立つと他の二人もそれに続いた。
「またじっくりと話をするか」
「はい」
「また三人で」
「あれは誰の言葉だったかな」
李王神は末の弟の三人という言葉を聞いてふと口から言葉を出した。
「矢も一本なら簡単に折れるが三本なら折れはしないという言葉は」
「日本の毛利元就だった筈です」
「そう、それだ」
日本の戦国時代における有名な戦国大名の一人である。一代で中国地方に覇を唱え、幕末の長州藩の礎を築いたことでも知られている。戦争よりも謀略が得意であったが中においては実に温厚篤実で領地経営にも支障はなく、そして一族や家臣団の結束を重視した。厳島大明神に深く帰依したことでも有名だ。
「他にはロスチャイルド家か」
「また彼等ですか」
「やはり彼等が強いのはその団結力にあるのだろうからな」
「同じユダヤ人としての」
イスラエルという国がその人口と国力に比して強い力を持っているのはユダヤ人による団結力も大きいのだ。彼等は同胞であるならば何としても救い出そうとし、そして中においてはユダヤ教に基づく絶対の規律を持っている。財力や知力だけが彼等の武器ではない

のだ。団結もまた大きな力となっているのだ。
　イスラエルは連合に入ってからユダヤ系のコネクションとその財力、各国に対する影響力、学者達を使って今の地位を築いてきた。そして連合において影のバランサーとまで言われるようになった。これが悪かというとそうではない。むしろ日米中露といったあまりにも個性の強い大国達を抑えるのに役に立っている。イスラエルが動けばそれで話が収まるとまで言われている。イスラエルに反発しようとしたある大国の大物政治家が急に沈黙してしまったこともある。これはどうやら彼等に弱みを握られたらしいのだ。こうした話もありイスラエルの存在と動向は連合の中においては非常に大きな意味を持つ。力は何も国力だけではないのだ。イスラエルの様な力もまた力なのである。
「元々連合は団結力はない勢力だが」
「日本は比較的ありますがね」
「彼等は彼等でな。まとまるまでに時間がかかるな」
「はい」
「我々やアメリカ、ロシアはな。仕方がない」
　昔から多くの民族を抱えていたからだ。アメリカ人、漢民族と一口に言ってもその実態は多くの民族の混血である。これがそのまま進み今では連合全体が混血し、人種という概念すら極めて曖昧なものになっている。
「団結力がないのも」
「ましてや三本の矢の様な」
「若しくは五本の矢の様な」
　五本の矢はロスチャイルド家の家紋である。ロスチャイルドの五人の兄弟達はフランクフルト、ナポリ、ウィーン、ロンドン、そしてパリに散り各地で助け合いながら発展していったのだ。
「我々も三本の矢になるか」
「父上もそんなことを最後に言っておられましたしね」
「とりあえず私の下ではそんなことを教えてはおります」

李王登の統括するスポーツや芸能事務所においてはこれが重要になる。アイドルグループ内の喧嘩で人気グループが解散に追い込まれたことは枚挙に暇がない。チーム内の分裂がそのままチームの成績に繋がる場合も多々ある。だから彼はそれには五月蝿くなっているのだ。

「では我々もそうしよう」

「これからの桂平公司の為にも」

「そうだな」

こうした話をして三人の話は終わった。何はともあれ三人の方針は決まった。結局アナハイムとの直接対決は避けられ、アナハイムも内心胸を撫で下ろすことになった。

## 第十八部第五章　入城その十四

連合内でこうした動きがあることは遠いエウロパにいる八条にも伝わっていた。彼は自室でノートパソコンを通じてモニターでシャリアピンと話をしていた。
「で、結局彼等はこれに関わろうとしていたのですか？」
「どうやら違うようです」
シャリアピンはパソコンの画面を使っているモニター越しにこう答えた。どれだけ離れていてもモニター等で通信は可能となっているのである。
「しかし十二人の長老達がイスラエル政府高官達と会っているというのは」
「それは間違いない情報の様です」
「左様ですか」
「ただ、その目的は別のものにあったようです」
「別のもの、ですか」
八条はその言葉に顔を向けた。
「はい、それが何かまではまだよくわかりませんが」
「重要なことであるのは確実でしょうが」
「はい」
「バランサーとして動くか、それとも、ですね」
そこが問題であった。バランサーならば問題はない。しかしその他の動きがあれば。問題はそこであった。
「中央政府の決定にも関わることであることも考えられます」
「でしょうね。今回の交渉に関してではないですね」
「それはないようです」
シャリアピンはそれに応えて言った。
「彼等はこの戦争にも交渉にも他の国々と同じく賛成でしたから」
「やはり」

「これは私の予想ですがおそらくは連合内部の事柄に関してだと思われます」
「内政ですか」
「こうなるとかなり限られてきますが」
内政に限ると話が狭まるのであった。それだけ。
「ええ」
「まだ調査の段階です。まだ確かな判断は出来ません」
「わかりました。ではこれまで通り留守をお願いしますね」
「はい」
八条の言葉に応える。八条はまた述べた。
「桂平公司の方が来られたら宜しくお願いします」
「彼等の製品を採用されるのですか？」
「あのグループの電子やコンピューターは非常にいい製品ですので」
八条は迷うことなくこう答えた。
「お願いしますね」
「わかりました。それでは」
「はい」
シャリアピンはモニターから消えた。八条はモニターそのものを消してパソコンに戻った。そしてメールを出したりしながら仕事に取り掛かっていた。
暫くノートパソコンの前にいたがそれも終わった。八条はパソコンを閉じ大きく背伸びをした。そしてそのまま背広を脱ぎ、トランクスの上からパジャマを着るとベッドの中に入った。
数時間眠ると扉をノックする音が聞こえてきた。それに気付き声をかける。
「どなたですか？」
「メサです」
「艦長ですか」
「はい。お邪魔して宜しいでしょうか」
「少し待って下さい。今起きたばかりですので」

「はい」
メサはそれに頷きどうやら部屋の前で待っているようである。八条はその間に着替え、簡単に身なりを整えた。それから扉を開けメサを出迎えた。
「お待たせしました」
「お早うございます」
「はい、お早うございます」
八条は敬礼に応えて挨拶を返した。それから彼を部屋に入れ向かい合って座った。それから話を聞いた。
「朝早くから申し訳ありませんが」
「いよいよオリンポスなのですね」
「はい」
メサはその赤い顔で頷いた。
「明日到着です」
「明日ですか」
「オリンポスの時間にして正午、降り立つことになると思います」
「正午にですか」
時間はもう決まっていた。
「それをお伝えしようと思いまして。こちらにお邪魔させて頂きました」
「そうだったのですか」
「既に各艦で大統領、そして外相にも伝わっていると思いますが」
「私にも今」
「その前にオリンポス周辺を先遣隊が抑えて」
安全の為だ。用心に越したことはない。
「どれだけの規模ですか？」
「三百個艦隊が。既にオリンポス周辺を抑えております」
「左様ですか」
「はい。これでオリンポスでの安全を確保致しました」
「すいませんね。そういったところにまで」

「いえ、これが我々の職務ですから」
メサは謹厳な顔と声で答えた。

## 第十八部第五章　入城その十五

「お気遣いなく。全てはマクレーン司令の御判断です」
「マクレーン司令のですか」
「そうです。既にエウロパ各地の軍事要所は全て抑えました」
先の戦争の後の講和の時に連合軍はエウロパ各地の要所を抑えて回っていたのだ。そして今はオリンポス周辺までその艦隊が包囲している状況であった。
「会談にも。心置きなく臨まれることと思います」
「有り難うございます」
「そしてオリンポス降下の際ですが」
「はい」
話はさらに続いた。今度はオリンポスに降り立つ時の話である。
「前もってオリンポスに地上部隊を降下させておきます」
「警護の為でしょうか」
「当然それもあります」
「むっ」
ここで八条は気付いた。
「成程、あれをやられるのですね」
「はい」
笑みを浮かべた八条に対してメサも笑みを返した。その謹厳な顔が僅かに綻びた。
「如何でしょうか」
「いいと思います」
「その際降下は何で降下されますか？」
「巨大戦艦で降下することは流石に出来ませんからね」
「はい」
連合の艦艇は大気圏内に入ることも可能である。だがそれは環境への影響が深刻なものになる為殆ど行われることはない。宇宙艦艇

の港も惑星の衛星軌道上にある。そこまでシャトルや直通のエレベーターを使って向かい、そしてそこから乗船するのである。当然地上に港がある場合もないわけではない。人口の惑星や要塞ならばそうなっている。これはおおむねエウロパも同じである。
「というかこれだけの巨艦が降り立つとなると。地上にいる将兵達が吹き飛んでしまいます」
「それではお話になりません」
「そうです。ですからここはシャトルを使いましょう」
「わかりました。それではそれでお願いします」
「はい」
段取り等も決定されていく。話は現実にも着実に進んでいた。
オリンポスに向けて進む三隻の巨大戦艦と艦隊はその前に連合軍の艦隊に包囲されたオリンポスを見た。既に重要な軍事施設は全て接収されている。
その中の港の一つに三隻の巨大戦艦は入った。エウロパ軍の将兵達はその巨大なシルエットを見て思わず息を呑んでしまった。
「大きいな、やっぱり」
「ああ。公表しているデータよりもな」
彼等は巨大戦艦を見て囁き合う。それ程までに巨大であったのだ。
その中の一隻であるスサノオから八条が降り立った。そしてキロモト、カバリエと基地の中の将官用のものであったサロンでオリンポスに向かう前の最後の話し合いに入った。
サロンはみらびやかなものであった。高級絨毯が下に敷かれ、テーブルも椅子も装飾が施されていた。窓は見れば普通のガラスではなくステンドガラスもあり、カーテンは白い絹であった。連合の視点から見ればとても軍人が通常に使う施設ではなかった。ましてや階級によってこうした待遇の差があることなぞ考えられもしないことであった。
キロモト達はその中央の席に座った。三人がそれぞれテーブルを取り囲み顔を見合う形となった。そのうえで話し合いに入った。

「しかし」
まずはキロモトが口を開いた。部屋を少し困惑した顔で見回す。
「立派なものだな」
「まるで宮殿の中にいるようですね」
それにカバリエが応えた。
「みらびやかなものです」
「少なくとも軍の施設には思えないな」
「はい」
「我々には考えられないことだ」
「これがエウロパの文化なのでしょうね」
八条も口を開いた。
「こうしたみらびやかなものが。見れば細かいところにまで装飾があります」
「うむ」
「それも豪奢な。そういえばエウロパで将官というと貴族出身者が殆どでしたね」
「そうだったな。それも爵位が上の者が多い」
「だからですか。ただ、ここを使う場合の費用はかなりのものだそうです」
「そうだろうな。連合でこれだけのものを用意し、使用するとなればかなりのものだ」
少なくとも若き日のキロモトには夢の様な話であtっただろう。八条にとってはそうではないが。これには生まれや育ちも関係していた。

## 第十八部第五章　入城その十六

「エウロパでもそれは同じだろうに」
「はい」
「それを使うのだ。やはり金はかかるだろうな」
「ですが貴族にとっては何でもないことです」
「金の心配をすることはない、か」
富が違うということだった。これもまた階級社会である。
「そういうことです。彼等にとってはそれだけの支払いは支払いにあたりません」
「凄い話だ」
「人によってはそれこそが腐敗だと批判しますね」
カバリエが笑いながら言った。連合でも以前からエウロパ貴族達がこうした施設を使っていることも金には困っていないことも知られていた。連合の者達の一部はそれを貴族の特権だの階級社会だの腐敗だのと口を極めて批判してきたのだ。彼等にとってみればそうした出自や社会的立場に基く露骨な差は唾棄すべきものであり、吐き気すら催すものであった。だからこそ批判せずにはいられなかったのだ。
この戦いにおいても実際にエウロパのそうした施設を破壊し、貴族達の特権を糾弾すべきだとの声もあった。だが八条はそれに対し真っ向から反対した。これは国防委員会会議におけるその時の八条と改革派の若手議員とのやり取りの話である。同じ改革派でもそうした意見対立があったのだ。
「エウロパ貴族達は人類社会への挑戦です」
彼女はまずこう言った。その議員は女性議員であったのだ。
「今この時代に階級というものが明確にあること、生まれにより差別があること、これはあってはならないことです」
彼女は正義感が強い議員として知られていた。福祉や保険の専門

家として知られていた。連合軍の政策に関してもまずは軍人達の厚生を考慮したことでも知られている。細かいところにまで目が行く人物であった。
「そして今。エウロパは我々の下に敗れようとしております」
彼女は宣言した。
「今こそエウロパの誤ったあの身分社会、そして特権を全て破壊するべきではないでしょうか」
「お待ち下さい」
八条はそれに対して反論した。
「それはあくまで連合の視点ではないでしょうか」
「連合の」
「そうです。我々の正義は確かにあります」
「はい」
「ですが。エウロパの正義も同時にあるのです。彼等にしてみればその貴族社会こそが正義であり秩序なのです。そう、我々の社会に身分がないのが秩序であるように」
これは連合にとっては。理解の外の言葉であった。
「身分が秩序なのですか」
「そうです」
八条は答えた。
「エウロパにおいては。それで混乱が起こったことはありません」
「ですが貴族の特権は」
彼女はムキになって言い返した。
「放置しておくわけにはいきません」
「それは我々が決めることでしょうか」
八条はその言葉に応えて言った。
「！？」
「我々は確かにエウロパと戦争を行っています」
「はい」
これはもう言うまでもないことであった。女性議員だけでなく他

の議員達もそれに頷く。
「ですが。エウロパの文化や文明に関する戦争ではありません。あくまで国家と国家の戦争の筈ですが」
「それは」
「そして攻撃も軍事施設だけに限っています。文化施設への攻撃は一切行わないというのは既に決定されていたことであると認識していますが」
「その通りですね」
八条の意見に頷く議員も出て来た。
「確かに私もエウロパの貴族主義には反対です。しかしてそれはエウロパの中での問題です」
その議員は言った。
「我々が決めることではありません。違うでしょうか」
「そうですな、エウロパにはエウロパの文化がある。それを一方的に破壊するというのはお世辞にも文明的なことではない」
残念ながら昔からあることだが。他の文化や文明を認められない輩は残念なことに何時でも何処でも存在するものなのだ。
「ここはそのままにしておけば宜しいですな。それに無駄な兵力を割くことになる」
「では文化施設等はそのままで」
「これまで通り軍事施設への攻撃のみ行うということで」
「それで宜しいでしょうか」
「はい」
そして彼等は八条の言葉に頷いた。

## 第十八部第五章　入城その十七

「それではそれで行きましょう」
「むざむざそれでエウロパ市民の反感を向けられることもありませんし」
彼等も冷静になっていた。こうしてその女性議員の意見は見送られ八条のこれまで通りの作戦が採用されることとなった。その女性議員は今でも国防委員会に所属しているが今ではその様な極論を言ってはいない。
これには訳があった。その直後でマウリアに行き、そこでマウリア式の階級社会を目の当たりにしたからである。連合の社会しか知らなかった彼女にとってこれは強烈なカルチャーショックであった。
「ここまでだったなんて」
連合に帰って来た彼女の最初の言葉であった。
「マウリアにはマウリアの考えがあるというのがわかったわ」
「はあ」
それを聞く者も彼女のあまりもの変貌に戸惑っていた。実は彼女はそれまでマウリアに関しては殆ど知らず、また何も言うことがなかった。それが多いに変わったのである。
「あそこに関しては本当に別世界ね。そして」
ここで彼女の変貌を表す言葉が出た。
「エウロパの社会も同じことなのでしょうね」
何はともあれ彼女が丸くなり、視野が多少ではあるが広くなったのは事実であった。以前の様な階級社会そのものが悪であるといった過激なことは言わなくなった。慎重にもなったのであった。
その議員に対して反論した八条は今オリンポスを前にした基地にいた。そしてそこで最後の話し合いに入っていたのだ。
「問題はやはりエウロパの搦め手だな」
「そうですね」

カバリエはキロモトの言葉に頷いた。
「情報によるとウィーンだとか」
「ウィーン！？」
「会議は踊るということです」
「ふむ、そういうことか」
キロモトはその言葉だけでエウロパが何を仕掛けてくるのかわかった。
「強かなものだな、実に」
「それが貴族というものなのでしょう」
カバリエは貴族というものを実際に知らない。あくまで推察で述べただけだ。
「表では笑っていてもそれは仮面に過ぎない」
「ふむ」
「もっとも人間は皆そうした一面がありますが。貴族はそれを優雅に行うと」
「いうのが貴族なのだな。成程な」
彼の中では納得したのであった。
「そういうものかと」
「御馳走の中には毒がある」
「それも気付かれにくい甘い毒が」
「では我々はその毒に注意することとしよう」
「はい」
カバリエも八条もそれに頷いた。
「話は適度なところで切り上げてな。それに私は踊りは苦手だ」
「そうだったのですか！？」
これを聞いてカバリエも八条も思わず笑みになった。
「どうもな。そうした優雅とかいった世界には昔から疎くてな」
これは当然であった。農家から軍人になったのだ。そうしたことを知らないのも無理はない。なお彼の趣味はゴルフやレスリングである。武骨な趣味が好きなのだ。

「それよりも食べることの方が」
「ではエウロパの御馳走に御気をつけを」
「うむ」
三人の打ち合わせは続いた。それはさして大きな話ではなかったがそれでも彼等の情報交換としては有益なものであった。こうしてオリンポス入城への準備は最後の段階に入った。
既にガイアには連合軍が降り立っている。そして要所要所を押さえキロモト達の降下の準備を進めていた。
「全ての軍事施設は押さえたな」
「はい」
ガイアの連合軍の責任者はコーネフ大将であった。カナダ人である。
「そして降下場所には義杖兵が向かっています」
「そうか。ではこちらの準備は全て整ったな」
「そうですね。後は大統領達の降下だけです」
「それももうすぐか。いよいよだな」
「閣下も降下場所に行かれますか？」
部下の一人がこう尋ねた。降下場所はガイアのゼウス港である。ガイアで最も立派な宇宙港だ。キロモト達はここに降り立つことになっているのだ。
「あそこにか」
「はい。どうされますか？」
「やはり私が行かなければならないだろうな」
責任者として出迎える必要があるからだ。
「それではそれまでに今の仕事を全て終わらせておくか」
「そうですね。そしてそれから向かいましょう」
「時間がない。急ぐぞ」
「了解」
彼等も仕事に入った。それを遠くから苦々しげに見ている者達がいるがそれは意に介してはいなかった。

「遂に来ますね」
「ああ」
モンサルヴァートはこの時軍務省にいた。そこでキロモト達がガイアに入城するのを見ることになっていたのだ。
彼は講和後のオリンポスの治安維持の責任者となっていた。今のところ彼の手腕によりテロや不穏な行動は見られない。だがそれは今までのことでありこれからが一番肝心なのは彼もわかっていた。

## 第十八部第五章　入城その十八

彼はベルガンサと共にいた。そして苦い顔でガイアに展開する連合軍の将兵達を見下ろしていたのだ。
「敵の元首がな。我等の首都に」
「屈辱的な話です」
ベルガンサは忌々しげにこう言った。
「エウロパ建国以来。この様なことははじめてです」
「言うな。それを言えば講和がなければオリンポスは陥落していた」
「陥落、ですか」
「そうなれば多くの犠牲者が出ていたかも知れない。そしてこの美しい星は焦土と化していただろう」
「オリンポスがですか」
「だからそれを言うな。言っても何にもならない」
「はい」
ベルガンサはそれに納得することにした。いや、納得するしかなかった。彼も愚かではない。それ位のことは把握できていたのだ。
「今は。それよりもな」
「これからのことですか」
「そうだ。我々は警護を厳重にするだけだが総統や首相はそうはいかない」
「今も激務の中におられるそうですね」
「特に首相は。大丈夫だろうか」
ペーチの激務のことは彼等の耳にも入っていた。そしてかなり疲労していることも伝わっていたのだ。
「あの御様子ですと。危ういですね」
「そうか」
ベルガンサはこの件ではモンサルヴァートと同じ見解であった。
「やはりな。無理をされなければよいが」

「しかしそうも言っていられないのが現状で」
「凡人と言われていた方が。あそこまでやられるとはな」
「それだけでも驚きでしたが。今のエウロパがかろうじてあるのも首相の力が大きいですしね」
「うむ。ここは自重して頂きたいものだ」
「はい」
ペーチの動きは戦争中エウロパにとって非常に有益なものであった。軍事と政治、経済、行政を完璧に把握したうえでラフネールに対しても的確に助言を行っていた。軍事、とりわけ国防を優先させ軍が動き易い様に法的なものまで整備し、その動きを円滑にさせてきたのだ。戦乱の中にありながらエウロパ軍の動きが素早く、そして市民生活がギリギリの水準ながら破綻することなく維持出来ていたのは彼の手腕に拠るものであったのだ。
今やペーチは目立たない地味な人物から名宰相となっていた。彼自身はそれに驕るということはなかったが。
「それにしてもな」
モンサルヴァートは話題をペーチから別の事柄に移してきた。
「連合軍の兵士は。多いな」
「全くです」
モンサルヴァートもベルガンサもうんざりした顔になっていた。
「どれだけの軍が降下していたか」
「確か五百万程が」
「五百万か。オリンポスの治安維持にあたっている将兵よりも多いな」
「はい」
「そして周辺には数十個艦隊がか。恐るべき数だな」
「その数こそが連合の強さです」
ベルガンサは顔を元に戻した。といっても表情が消えただけであるが。
「我々はそれを嫌という程思い知らされました」

「それと装備、補給だ。連合軍は人で戦う組織ではない」
「ですね」
「システムと兵器で戦う軍隊だ。二十世紀後半の軍を今に復活させたものだ」
「あの時代のアメリカ軍の様なものですか」
「彼等と違って一般市民を攻撃することは決してないがな」
アメリカ軍の特徴として一般市民も攻撃対象とすることがある。これは開拓時代からであり騎兵隊はネイティブ達の非戦闘員を集中的に狙った。子供を産む女を、そして将来戦士となる子供を。天然痘菌の付いた毛布を渡してそれで細菌戦術すら行っていた。第二次世界大戦でもベトナム戦争でも空爆や枯葉剤で多くの一般市民を巻き添えにしている。これは侵略戦争を行う軍隊だからである。
連合軍がそれをしないのは八条の指示によるところも大きいがそれにも増してやはり国防の為の軍であるという意識が念頭にあるからだ。また連合軍は侵略を行う必要がない。エウロパとの戦争も侵略ではない。だから彼等は一般市民に手を出すことはないのだ。
「彼等は名将も猛者も必要とはしていない」
「誰であろうと勝てる軍隊ですか」
「それを目指している。だから人では戦わないのだ」
「どの様な状況でも確実に勝てる軍隊ですか」
簡単に言うがまず有り得ないものでもある。
「そして損害を出さないな。ある意味それは軍の究極の形だな」
「ええ」
「それを目指すか。彼等は」
「あまりぞっとしない話ではありますが」
ベルガンサはまた顔を変えた。今度は曇ったものであった。
「人で戦わない戦争というのは」
「そうだな」
モンサルヴァートもそれは同じであった。
「戦争は。やはり人が行うものだ」

「そうです」
ベルガンサはその言葉に頷いた。
「心を持って。特に我々は」
「騎士道だな」
「それなくして戦争なぞ何の意味がありましょうか」
彼の言葉はエウロパ人の言葉であると言えた。それも戦場で戦うエウロパ貴族のものであった。
「そこまで徹底してシステム化、合理化して人というものを廃するのは。そもそも何の意図があるのか」
「やはり勝利と損害を出さない為だ」
「理由はそれですか」
確かに頷ける。だが納得しきれない。

## 第十八部第五章　入城その十九

「志願制の軍隊だからか。損害を異様に嫌う」
「志願制なのは我々も同じですが」
「それでもだ。やはり彼等は階級がないからか」
この場合は言うまでもなく社会における階級である。
「そうした進んで戦場に立つ者はいないと」
「そうだ。そして損害が出ればそれだけ志願者も減る。連合には他に幾らでも職業がある」
「職業、ですか」
「そうだ」
モンサルヴァートは答えた。
「彼等にとっては軍人は職業の一つなのだ」
「そもそもそれが最もわからないのです」
ベルガンサはこう言って懐疑的な顔になった。
「彼等は軍を仕事と考えているのですか」
「うむ」
「義務ではなく。将校までも」
エウロパでは兵士はともかく将校は軍人になるのは『高貴なる者の務め』の一つだと考えている。それは決して仕事等ではないのだ。
「同じだ。何しろ彼等にはそもそも階級がないからな」
ちなみに将校と兵士で給料差もそれ程ではない。そういうものなのだ。
「貴族や平民といった概念がないのだ」
「だからですか。仕事と考えるのは」
「そういうことになる。わかったか」
「理解出来ませんが」
顔はさらに懐疑的なものになった。
「あの軍も。そうした考えからですか」

「人はミスをするからな。そのミスを可能な限りゼロにし、フォローするには」
「機械化、システム化、合理化だと」
「それを突き詰めていっているのが連合軍だ。その果てには何があるのかはわからないが」
「機械は人が作ったものです」
ベルガンサは忌々しげに言った。
「それが人を越えることは。有り得ません」
これは十九世紀から議論されてきたことである。この時代でもそれは続いている。だが結論は出てはいない。機械が上なのか、人が上なのか。これは機械というものが出来てからの永遠のテーマであった。
「私もそう思うがな」
「しかし連合は違うと」
「少なくとも損害を出さないことを念頭に置いて考えてはいるな」
「兵士はともかく将校が戦場で散るのは名誉なことの筈ですが」
兵士は全て平民である。下士官もだ。貴族は全て将校である。これがエウロパの軍なのだ。
「そうした考えも連合にはない。連合にヴァルハラは存在しない」
「そういえばそうでしたね」
これは当然と言えば当然であった。連合の信仰の中にはギリシアと北欧の神々はないのだ。ヒンズーは微かにではあるがインドネシアにあったりするが。神話体系がそもそも違うのだ。ケルトはアメリカに移住してきたアイルランドやスコットランドの者達のものである。エジプトやメソポタミアのそれは連合の多様性の中で多くの古の民族と共に復活した。だが元々エウロパにあり、そしてエウロパの者で構成されるここにしかギリシア、そして北欧の神々は存在し得ないのだ。だから連合にヴァルハラは存在しないのだ。
「では彼等には戦場で死ぬという思想はないのですか」
「戦いの神は信仰されていてもな。その信仰のあり方も違う」

「死ぬことを避けているのですか」
「その通りだ。彼等にとって戦場で死ぬことはあってはならないことなのだ。だからこそそれは何としても避ける」
実際に連合軍の損害はエウロパ軍のそれと、そして参加兵力、全体の割合全てに比して極めて軽微であった。ダメージコントロール、生存能力を念頭に置かれた兵器の設計と運用、後方施設の充実等でそれを達成したのである。とりわけ正規軍の損害は〇・一パーセント程度に過ぎなかった。火事場に立つことになっていた義勇軍はそうはいかなかくそれなりの損害を出してはいるが。これに対してエウロパ軍のそれは最終的には四割近かった。五百個艦隊あった艦隊のうち二百近くが失われたのである。
「その為の機械化なのだろうな」
「命を機械に委ねるのですか」
「機械にミスはない」
モンサルヴァートは冷ややかに述べた。
「磨耗しない限りはな」
「人に委ねるよりも安全だということですか」
「少なくとも我々をこうして降すことは出来た」
「くっ」
思わず歯噛みするベルガンサであった。
「それは揺るがない事実だ。我々はその機械化された戦術に敗れたのだ」
「国力だけでなく」
「だが機械は所詮機械だ」
モンサルヴァートの声はさらに冷淡になった。

## 第十八部第五章　入城その二十

「人が造り出したもの。果たして人より優れているか」
話が戻ったように思えたがそれは違っていた。
「いずれそれはわかるな」
「我等の手で」
「であればいいが」
しかしそれは人にはわかりはしない。
「この世に完全なるものはないのだ。機械にも」
「そこを突くのですね」
「それしかあるまい。だがそれが可能なのは」
モンサルヴァートの目が青く光った。まるで焔の様に。
「限られたものだけだ。天才だけが」
「可能だと」
「連合は確かに強大だ。連合軍もまた」
「はい」
それは認めるしかないものであった。彼等にとっては実に悔しいことに。
「しかしこの世に完全なものがないのなら必ずそれを破れるものが出て来る。それを為し得る者は果たしてこのエウロパにいるのかそれとも」
「それとも」
「それは神のみぞ知ることか、まさに」
「はあ」
ベルガンサは最後の言葉には少し戸惑いを感じた。だが自分達を破った連合軍にも穴があるのはわかった。それが何であるかまではわからなかったが。
連合軍の義杖隊は港に集結していた。そして三隻のシャトルを待っていた。

「いよいよだな」
「ああ」
皆礼装になっている。銃を持った義杖兵達に楽器を持った音楽隊が集まっている。彼等はキロモト達を出迎える為にここに集まっているのだ。
これもまた軍の仕事であった。要人を出迎えるのもだ。軍の仕事は戦うだけではないのだ。
「緊張するよな」
義杖兵の一人が言う。
「もうすぐ大統領がここにな」
「そうか？この仕事じゃいつものことだろ」
同僚がそれに応える。
「ＶＩＰの出迎えなんてな」
「それでもだよ。今回は特にな」
空港は厳重な警備である。キロモト達が通る予定の道には赤絨毯が敷かれその左右に義杖兵達が並んでいる。そしてその後ろには軍楽隊が待機している。何時来てもいいようになっていた。
「ここはエウロパの首都なんだし」
「最高の気分じゃないか」
彼は緊張する同僚にこう言って笑い飛ばした。
「敵の首都でこんなの出来るなんてな。一千年の間あれこれしてきた奴等の心臓でこんなことが出来るんだぜ。幸せだと思わないのか？」
「よくそんな考えになれるな」
「御前こそよくそんなにネガティブになれるな」
逆に笑って返した。
「こんなワクワクする場面なのにな」
「失敗は許されないんだぞ」
「銃を捧げるだけじゃないか、いつも通り」
「それはそうだけれど」

そんな話をする。彼等はリラックスと緊張が同居する中にいた。
「だから落ち着けばいいんだよ。ここはな」
「そうか」
「そうさ。まあ大船に乗ったつもりでどっしりいけよ」
「ああ」
「いつも通りな」
そうも言い合う、できるだけ簡単に考えようともしていた。
「わかったよ、まあ落ち着いていくよ」
「それに越したことはないな」
「おい、そろそろだぞ」
二人に別の同僚の兵士が声をかけた。
「おっ、もうか」
「おしゃべりはこの位にしとこうぜ」
「そうだな」
「わかった」
二人はそれを受けて黙った。黙ると周りが見えるようになった。
空港の空気が緊張したものになっているのが見えた。
三隻のシャトルが降り立ってきた。そこにそれぞれの閣僚達がいるのは言うまでもない。皆それを目だけで見上げていた。
まず一隻降り立った。丁度絨毯の前に扉が来た。

## 第十八部第五章　入城その二十一

その扉が開く。するとそれを合図とするかの様に号令が唱えられた。

「捧げぇーーーーーーーーっ、筒！」

その号令を合図に兵士達は一斉に顔を扉の方に向ける。同時に持っている短刀付きの銃を顔の高さに掲げられ扉から現われるであろう者を迎えるのであった。

軍歌がはじまる。それを後ろに一人の男が姿を現わした。キロモトである。

扉の横に待機していた将官が敬礼する。そして彼を案内して空港に導く。キロモトはそれを受けて今エウロパに降り立ったのであった。

エウロパに降り立った彼は将校達に先導され後ろを護られながら赤絨毯を進んでいく。連合の元首が歴史上はじめてエウロパの首都に降り立った瞬間であった。

続いてカバリエが降り立つ。連合の閣僚達はまた一人エウロパに降り立ったのだ。

そしていよいよ最後の一人の番になった。それをテレビで観る二人の男がいた。

「いよいよですな」

「はい」

首相官邸の執務室のテレビであった。ソファーに二人の男が座っていた。ペーチとシュヴァルツブルグの二人である。若い頃からの友人である彼等は今共にテレビで連合の閣僚達がやって来るのを見ていたのであった。

「我々を破った男が来るのは」

「八条義統でしたな」

「はい」

シュヴァルツブルグはペーチに答えた。
「彼です」
「私は写真で彼の姿も確認しましたが」
ペーチは相変わらず憔悴した様子であった。今も低い声で言葉を発していた。
「とても国防を預かる者には見えませんでしたね。気品のある美男子で」
「ええ」
それはシュヴァルツブルグも確認していた。当然その経歴や実績も。
「元々は軍人であったようですがそうは見えませんね」
「今は文民だからでしょう」
シュヴァルツブルグは重厚な声でそう述べた。
「軍を離れていると変わってくるものです」
「そうなのですか」
「はい、そうした意味で彼は今は文官です」
「文官ですか」
「しかしその文官により我々は敗れました」
その重厚な声に苦渋が混じる。
「それは事実です」
「閣下、それは」
「いえ、事実です。我々は文官に敗れたのは。まごうかたなき事実です」
武人が身に寸鉄も帯びない文官の戦略の前に敗れた。エウロパの軍人にとってはこのうえない屈辱であった。開戦から今に至るまでシュヴァルツブルグはそれを屈辱に感じていたのだ。
「我々は敗れました。そして今我々を破ったその者が」
「降り立ちますか」
「いよいよですぞ」
シュヴァルツブルグはペーチに声をかけた。

「彼が出て来ます」
「はい」
シャトルの扉が開いた。その中からスーツに身を包んだ長身の青年が姿を現わした。
「捧げぇーーーーーーーーーーーーーーっ、筒！」
号令が三度響き兵士達が銃を捧げる。同時に顔を一斉に八条に向ける。
扉の横にいる将校が敬礼する。彼はそれに応える。
「先導します」
「はい」
将校が先導を買って出、受ける。これもまた全て儀式であった。軍の式典はこうした儀式的な色彩が多いのである。
将校の案内を受けて階段を一歩一歩降りる。降りるごとにエウロパに近付いていく。
今遂に階段を降りた。彼は今遂にエウロパの大地を踏んだのだ。
（遂にか）
周りでは軍楽隊の曲が奏でられている。彼は今その中を進んでいた。
大変なのはこれからなのはわかっていた。エウロパは何をしてくるか。完全には掴めていない。だが何はともあれ彼はエウロパに降り立った。それは新たな話のはじまりであった。

第十八部　　完

２００６・５・３０

# 第十九部第一章　悠久の時は過ぎその一

悠久の時は過ぎ

長い対立であった。この対立は運命であったかも知れない。

連合は連合である前からエウロパと対立していた。月における資源の争奪の前から。彼等の多くは欧州列強の植民地となりそこで辛酸を嘗めてきた。

厳密な意味で植民地になっていないのは僅かである。アメリカはイギリスの植民地であったし中国も清朝末期には半ば植民地とされた。なっていないのは日本とタイ、エチオピア、そして元々その列強の一つであったロシア位であろうか。エチオピアにしろファシスト党時代のイタリアの侵略を受けている。台湾や韓国は日本であった。

宇宙進出の時代において連合各国がエウロパに対して執拗な攻撃を加えたのはここに一因があるとも言われている。人は受けた恨みは忘れないものなのだ。決して。

そう人は受けた恨みを忘れない。これはエウロパとて同じであった。地球を追われるように去る時に彼等はこう呟いたのだ。

「今に見ていろ。貴様等をもう一度はいつくばらせてやる」

と。それからブラウベルグ回廊を挟んで連合とエウロパの対立がはじまった。

一千年もの間行われてきたのは冷戦であった。それは幾多の緊張を経ていたが実際の戦争になることはなかった。連合は中の結束が弱く、エウロパよりも内部での経済競争、惑星開発に専念するだけだったのだ。船頭多くして、というやつであった。エウロパはそれに乗じて様々な工作を仕掛け、連合がそれに気付くと対処する。そうした対立であったのだ。

それが変わったのは連合軍設立からであろうか。それまであまり力を持っていなかった中央政府がそれなちの権限を持つようになっ

てきた。連合の力がまとまりだしたのである。
その結果連合は勢力をさらに大きくさせ、他の国々にとっての脅威となった。とりわけエウロパに対しては。その時に折り悪くステッラの工作が発覚した。これが戦争に発展したのは最早言うまでもない。戦争は終始圧倒的な物量を誇る連合有利に進み遂にはオリンポスの喉元に刃を突き付けられた形での講和となった。それが今である。
「けれど話はこれからなんだよな」
「ああ」
アルム王国のとある大学の喫茶店で二人の学生が話をしていた。
一人は黄色い髪に黒い目をしている。ジェダ＝リフトという。国際関係を専門にしている。
もう一人はピクト＝ギネス。黒い髪に青い目を持っている。ジェダと同じく国際関係が専門である。
「講和会議か」
「停戦してからもかなり長かったな」
「全くだ。手打ちして終わりといかないのが政治だよな」
ジェダは腕を組んでこう述べた。その前には一杯のコーヒーがある。
「何だかんだで色々と話がある」
「ああ」
「裏世界と同じだな、こういうのは」
「裏の世界はもっと簡単だろ？」
「そうか？」
その言葉には疑問が投げ掛けられたがすぐに言葉が返ってきた。
「抗争で何人か死んだらその分の金を互いが払ってな」
「それで手打ち式やってそれで御仕舞か」
「もっともまたすぐに抗争になるんだがな」
裏世界とはそうしたものである。実際にそれで結構人が死んでいるものである。こうしたことはこの時代でもやはりある。そう簡単

になるなるものではない。
「そこは実際の政治と同じだよな」
「裏世界と同じかよ」
「けれど似てることは事実だぜ」
ジェダはピクトにそう返した。
「同じ人間の世界なんだからな」
「そう言われればそうか」
「そうなるな。結局人間なんて同じさ」
そしてこう言った。
「やることは。何年経っても変わることはないな」
「おいおい、何年じゃないぞ」
ピクトはその言葉に反応して笑った。
「あっ、そうか」
ジェダの方も言われてやっと気付いた。
「そういえば一千年だったな」
「そうだよ。しかし一千年の間よく何も起きなかったな」
この場合の『何も』とは戦争のことを示しているのである。対立はしていたがこれだけは起こらなかったのだ。これはこれで事情があった。起こらないのにも訳があるのだ。
「そりゃこっちの目が中に行くことが多かったしな」
ジェダは言った。これも理由の一つである。
「俺達はずっと中であれこれやってただろ」
「今もな」
「中央政府も弱かったしな。エウロパの工作に対処してもそれは決定的なものじゃなかった」
「それが変わったのはやっぱりあれか」
「中央警察と中央軍だろうな」
ジェダはそれに応えてこう述べた。

## 第十九部第一章　悠久の時は過ぎその二

「あれが出来てからエウロパの工作への対処が効果的になったからな」
「やっぱりそれか」
「それしかないんじゃないのか？それで今があるんだしな」
「戦争にか」
「つまりあれだ。今までも中央警察や中央軍があればエウロパの工作に対処出来たんだ」
今更言ってもであるがその通りの言葉であった。
「早く設立すべきだったかな」
「さて、それはどうかな」
しかしジェダはそれには懐疑的だった。
「設立されなかったのにも理由がある」
「何だ、その理由は」
「やっぱりあれだ、地域主義だ」
「それか」
ピクトはそれを聞いてその美麗な顔を少し歪ませた。連合の宿唖と言うべきものであったからだ。
「これがあるからな、連合は」
「それも三百もな」
「おかげで何か一つ決めるにしろ大騒ぎだ。三百も国があったんじゃまとまるものもまとまりゃしない」
この地域主義により連合は長い間まとまってこなかったのである。今も決してまとまっているとは言えない。そうした複雑な状況が連合そのものであった。
「特に大国が中央政府の権限強化に反対してきたからな」
「連中にとってみれば自分達が主導権を握れなくなるからな」
「そうだな。難儀な連中だ」

アルムは大国になるにはまだ人口が少ない。従ってそうした大国の横暴を批判する立場になっているのだ。あくまでケースバイケースであるが。
「ここまで至るにもずっと綱引きがあったしな」
「ああ」
「結局今がその時期だったんだろう、中央警察や連合軍が出来たのは」
「そういうものか」
「それでもまだ反対が多いしな。完全に上手くいくわけじゃないな」
政治に完璧というものはない。そういうことであった。
「これも地域主義のせいかな」
「連合はそれから離れられないからな、どうしても」
連合は三百の国が全て立場的には公平であり、それぞれの独立性が強い国家連合なのだ。連合内部の中でそれぞれ外交交渉があり、かっては正規軍も持っていた。中央政府はその上にあって監督、指導するのが役割だとされている。位置的にはかっての国際連合が強くなり、正式に政府となったようなものである。つまり権限はそれ程強くはなかったのだ。
それが一千年の間に地域主義と集権主義の鬩ぎ合いにより徐々に中央政府にも権限が集まっていった。それが一千年の間続きようやく中央警察及び中央軍の設立となったのである。それまでに非常に大きな動きと気の遠くなる様な時間があったのであった。
「これは仕方ないさ」
「若しもっと早くできていたらエウロパとの戦争も早まったかな」
「その可能性はあるな」
「やはりそうか」
「しかし今みたいに圧倒的な状況で話を進められたかな」
疑問がそこに向けられた。
「無理だったっていうのか？」
「連合はやっぱり国力で押していたからな」

これが第一の理由なのは彼等もわかっていた。やはり戦争は国力である。
「ああ」
「それが今よりもないと。やっぱり状況は変わっていただろう」
「今だからこんなに勝てたんだな」
「そういうことだな」
「そうか、そういうものか」
ピクトはそれを聞いて頷いた。
「じゃあ今の戦争はこうなるべくしてこうなったんだな」
「正直こんなに効率的に動けるとは思わなかった」
「それはどうしてだと思う？」
「これは人的要因だろうな」
「人的なものか」
「トップがよかった。そのせいだ」
ここが指摘された。

## 第十九部第一章　悠久の時は過ぎその三

「八条長官か」
「中央警察にしても金内相がいたからな。あれだけ短期間であそこまでなれた」
「二人がいたからこそ、か」
それが大きかったというのだ。彼等は両輪と考えられていた。
「連合にとって僥倖と言うべきかな」
「いや、多分それは違うぞ」
「違うか？」
「ああ。正確に言うと連合の集権派だ」
ピクトはこう訂正させた。
「連中にとってあの二人がいたことは非常に大きい」
「ふん」
「そのおかげで中央警察も中央軍も僅かの間であそこまでなれたからな」
「あの二人がいればこそ、か」
「逆にいなければどうなっていたかわからないぞ」
逆説的にこうも言われた。
「治安も今よりずっと悪かったし、あの戦争もあそこまで勝てなかったかもな」
「特に戦争はな」
ジェダは言った。
「下手にすれば国が潰れていた」
「連合がか」
「あまりにも下手をすればだが。その可能性は皆無ではなかっただろうな」
「重いな、それは」
「それが戦争だ。そう言う俺にしろ実感はないんだが」

一千年もの平和は彼等に戦争を忘れさせるのには充分であった。戦争を知らないというのは確かに幸せなことである。だがそれで政治を見誤ることも多いのもまた事実である。戦争を知ることも重要なのである。
「戦争というものはな。どうしたものなのか」
「わからないか、やはり」
「ああ。あの長官もそれは同じだっただろうがな」
「しかし彼は最初は軍人だったんだろう？」
「それでもだ」
ジェダは言う。
「戦争の経験はない。それで知っている筈もないだろう」
「確かに」
「何度も言うが俺達は戦争を知らない」
エウロパはサハラに攻め込み戦ってきた。それに対して連合軍は海賊やテロリストの相手だけであった。これもまた軍の重要な仕事であるのだがそれでも戦争とは違うのだ。
「それで戦うのには。やはり色々と問題があるな」
「よく勝てたものだな。数はあるにしろ」
「やはりシステム化かな」
ジェダはここで言った。
「システム化」
「ああ。連合軍の特色としてそれがある」
「戦場でもか」
「そうさ。特に補給はそうか」
ジェダはその中でも補給に注目していた。
「徹底した後方支持体制と安定したシステムだ。連合軍にとって非常に大きかっただろうな」
「ニーベルングとアルテミスを拠点にしていたな」
「ああ」
「そこからか。戦うのにはまず補給か」

「システムの方は常に万全の補給が受けられるようにしてな。進撃速度を犠牲にしてもそれを行っていたようだな」
連合軍の進撃速度は遅い。これは各国の軍人、軍事評論家の間でも有名になっている。
「慎重と言うべきかな」
「それを慎重と言うのならそうだろう」
「只単に数で勝ったわけじゃないか」
「その数を支えるものが必要だからな」
戦争の場合それが補給なのである。
「まずそれがなければ。腹が減ってはとは昔から言われてきた」
「ふん」
「ただ、連合軍は補給だけをシステム化していたわけじゃない」
そこが言われた。
「というと？」
「戦場においてもな。戦いをシステム化していた」
「戦い方もか？」
「そうだ。攻撃方法はかなりパターン化していた」
これは少し軍事をわかっていれば誰にもわかることであった。連合軍はまず巨大戦艦の巨砲の攻撃を浴びせた後で砲艦及びミサイル艦の斉射を浴びせ、そこから戦艦や重巡が攻撃し、次に軽巡と駆逐艦が魚雷を撃ち込んだ後で空母が護衛艦、イージス艦に護られながら接近して艦載機を発進させて決定的なダメージを与える。情況によっていささか変化はあってもこれがおおよその流れであった。

## 第十九部第一章　悠久の時は過ぎその四

「何せ我々は戦争を知らないからな」
「確実に戦える方法を選んだということか」
「そういうことになる」
「成程な。勝つまでに相当苦心したんだな」
「だからこそあそこまで勝てたんだろう」
ジェダはクールに述べた。
「戦争を知らない者が戦争を知る者に対して勝利を収めるにはな。ああして確実にダメージを与えられる方法を構築するのが一番いい」
「確実に、か」
「そして損害を出さない。志願制の軍隊だしな」
損害が多ければそれがすぐに志願者の減少になる。徴兵制の軍隊とはここが大きく違うのである。だから連合軍は損害を出すことを嫌うのだ。
「それを突き詰めていけばな。おのずとそうなる」
「システム化、か」
「全て勝つ為だ」
ジェダは淡々と述べる。
「連合軍は勝つ為だけ、損害を出さない為だけを考えて作り上げられている。まあ何処の軍隊もそれは同じなんだがな」
「それを徹底的にシステム化したのか」
「それが他の軍との違いだな」
「優秀な将兵ではなく」
連合軍の新兵教育や訓練は思ったより厳しくはない。他の軍に比べればかなりのどかなものがある。厳しいのは軍律に関してである。これだけはかなり厳しい。そしてそれもまたシステム化の一環であるのだ。
「連合軍は天才を不要としない組織だ」

ジェダは言い切った。
「一人の天才よりも百人、千人の水準の能力を持つ者を必要とする。そうした組織だ」
「天才は要らないのか」
「八条長官にしろそうだろう？」
彼は共に対して疑問符の言葉をかけてきた。
「彼は天才ではないな」
「努力家か」
「このシステム化にしろかっての近代国家の軍と同じだしな」
連合軍は二十世紀後半の機械化された軍隊の復活であると言われている。実際に八条はその時代の軍隊のシステムをこの時代に適応、発展させたのである。それで戦いを行っているのだ。
「原型はそもそもあった」
「ふん」
その言葉に頷く。
「それを見出したのは優れているがな」
「それにしてもな」
「何だ？」
「八条長官も天才じゃないのか」
「どっちかというと努力肌だからな、彼は」
ジェダは少し考える顔をして述べた。
「仕事を最後までコツコツと進めていく」
「コツコツとか」
「ああ。それで今の連合軍を作り上げた。努力をする、ということも才能だと言うのならそっちの天才かもな」
「努力の天才か」
一言で言ってしまえるがそれは決して簡単なことではない。結局人間にとって努力や勤勉はなくてはならない美徳なのである。人の努力を認められない者はそれで終わりだ。伸びはしない。絶対に。
「その努力の天才によって天才を必要としない軍隊が出来上がろう

としている」
いささか皮肉な話であった。
「とりあえずこの戦いは勝った。だが今後はどうかな」
「一つの戦争に勝っただけでは駄目なのか」
「外での戦争はいい。だが中はそれでは駄目だ。侵略に負けるということはそのまま滅亡だ」
「異なる知的生命体が来た時にか？」
連合が長い間漠然と抱いている不安の一つである。若し異なる知的生命体と遭遇し、彼等と衝突すればどうなるか。まだ遥か彼方にいるとされる彼等との出会いには不安が多く存在しているのである。
「そうだ。それもあるし他の勢力もある」
「マウリアは同盟関係にあるぞ」
「ではサハラだ」
「サハラ」
ピクトはその言葉を聞き口を少し止まらせた。それからまた動かせた。
「あそこか！？」
これは流石に賛同しかねた。
「あそこはないだろう」
そしてこう言った。
「あそこは今は」
「今は、な」
ジェダも彼が何を言いたいのかはわかっていた。
「今は内で争っている。俺達が一千年の間戦争を忘れていた間彼等は戦争をしていた」
「ああ」
これが世界というものであった。連合が武力を使った戦争を忘れ、経済や交易のことだけを考えていたその間にサハラは銀河を舞台に死闘を繰り広げ多くの国が興亡していた。一方では戦争を忘れ、一方では戦火が絶えることがない。これもまた人類社会なのである。

「そして今三つになった」
「三つにか」
「ハサンとオムダーマン、ティムールにな。三国だけになった」
それまで無数の国家に分かれていたサハラが三つにまでなったのだ。これは非常に大きなことであると言えた。それまでサハラがここまで大きくまとまったことはなかったのだ。彼等は常に無数に分かれて争ってきたのだから。これはやはりオムダーマンとティムールの動きが大きかった。

## 第十九部第一章　悠久の時は過ぎその五

「もっともハサンはその中に多くの属国を持っているがな」
「ああ」
それでもハサンの勢力圏にあることは変わりがなかった。
「これから。また動くぞ」
「二つになるか？」
「いや、一つにだ」
ジェダは友の言葉をそう訂正した。それはこれからのことを見据えてのことであり彼は今未来を彼なりに見ていた。ここで見ているのはサハラの未来であり連合の未来ではない。だからその見方はかなり客観的なものになっていた。それは自分が当事者でないからである。当事者でないのならばどうしても他人事であり客観的になってしまう。そういうものである。
「サハラは。遂に一つになろうとしている」
「一つに、か」
「想像出来ないか？」
「ちょっとな」
それがピクトの返事であった。
「今まで長い間無数の国家が興亡してきた地域だからな」
「ピンとこないか」
「また分裂していくんじゃないのか？」
ピクトはそう述べた。彼もまた客観的に述べているがやはりこれも自分が当事者ではないからである。彼等の頭の中ではサハラという存在はあくまで外のことなのだ。連合が中ならばサハラは外だ。そういう存在でしかない。
「今までだって強大な国家は誕生したよな」
「ああ」
「それも一つの地域を支配するような」

今のハサン王国の様な国家が二つ並立したことも稀ではない。だが結局は戦乱の中に消えていっているのである。それがサハラの歴史であった。
「それでも統一することはなかった。結局同じじゃないのかな」
「どうかな」
それでもジェダは異議を呈した。
「今は英雄がいる」
「英雄が」
「そう。それもサハラの歴史上かってない英雄がだ。それも二人も」
「二人」
ピクトは二人と聞いて言葉を止めた。彼の頭の中でその二人の候補者の存在が出ては消え、出ては消えする。そうして答えにされた二人とは。
「誰かわかるか？」
「一人はティムールのシャイターン主席か」
「ああ」
ジェダは友の言葉に頷く。
「まずは彼だ」
「英雄と言うには少し影があるがな」
「だがサハラの人々には圧倒的な支持を得ているぞ」
英雄というものは周りから熱狂的かつ圧倒的な支持があるものだ。アレクサンドロス大王もそうであったしユリウス＝カエサルもそうであった。ブラウベルグもまたエウロパにおいて熱狂的な、まさに神か英雄かという程の支持があった。それにより彼は英雄とされた一面もある。英雄は周りが作るものでもあるのだ。
「それだけのものがあるということかな」
「英雄というのは決して一つのタイプだけじゃない。多くのタイプがある」
「だが彼は英雄と言うよりは梟雄に近いんじゃないのか？」
「若しくは姦雄か？」

「そうだな」
ピクトはその言葉に同意して頷く。

## 第十九部第一章　悠久の時は過ぎその六

「彼は。そうした感じのする男だ」
「目的の為に手段は選ばないからな」
「そしてそれを芸術にまで昇華させる。彼が関わっているとされている暗殺や謀略は色々言われているよな」
「ああ」
「それで批判されることはない。むしろその手腕の鮮やかさに尊敬すら覚える」
かなりシャイターンを高く評価していると言える言葉だった。
「そこまでか」
「だからだ。彼は梟雄だ」
「厳しいな」
「別に悪い意味で言っているんじゃないぞ」
ピクトはここでこう訂正した。
「政治の世界は普通の世界とは少し違うからな」
「それはそうだが」
「結果が全てだ。暗殺にしろ謀略にしろ戦争をやるよりずっと犠牲者が出ない場合もある」
「確かにな」
これにはジェダも頷くものがあった。戦争も政治の一手段であるし暗殺や謀略もそれと同じだからだ。結局は如何にしてその目的を達成するかなのである。従って陰謀も政治の世界では大いに結構なことなのだ。時としてそれを私利私欲の為のみに使う輩もいるが。
「あれはあれでいいさ」
「ふむ」
「シャイターン主席にカリスマ性があるのは事実だしな」
「そしてだ」
「ああ」

ジェダは話を移してきた。ピクトもそれに応える。
「もう一人の英雄だが」
「出す名前はわかってるさ」
ピクトはそう言って笑った。
「彼だろう？」
「そう、彼だ」
ジェダもニヤリと笑った。もう二人の前のカップの中にはコーヒーは一滴も残ってはいないが話は続いていた。
「アッディーン元帥だ」
「副大統領でもあるな」
「ああ。しかし彼は軍人で言った方がいいだろう」
「今までの実績から見るとな」
「そうだな。オムダーマンが短期間であそこまでになったのは彼がいたからだ」
「それは本当にな」
これはもう言うまでもないことであった。オムダーマンは今まで数多くの勝利を収めて今の勢力圏を築き上げたがそれは全てアッディーンの軍事的才能によるものであった。今や彼はオムダーマンにとってなくてはならない人間となっていたのだ。そうした意味で彼もまた英雄であった。
「彼がもう一人の英雄だ」
「英雄が二人か」
「二千億の人間が一人の英雄の下に集まるということになるかもな」
「二千億がか」
ピクトはその言葉を聞いて目の光を強くさせた。
「丁度。中国の人口と同じ位だな」
「そうだな。そして持っている資源や開拓すべき場所は我等のどの国よりも多い」
「砂の惑星ばかりだがな」
「そんなものはどうとでもなるさ」

ジェダはそれは意には介さなかった。この時代では植林も開墾もそれまでと比べて造作もないことになっていた。砂漠を緑の森にするのも見渡す限りの農園にするのも簡単に出来ることになっていたのだ。冥王星ですら人が住める惑星になる時代である。砂漠など問題にはならない。
「そんなものはすぐに解決される」
「ではすぐに大国になるというのか」
「マウリア以上のな」
「それが我々に向いて来たならば」
「脅威になるだろう？」
「だな」
ピクトはまたジェダの言葉に頷いた。
「エウロパ以上のな」
「ただ彼等が我々に刃を向けて来るかどうかはまだわからない」
「来ないかも知れないか」
「しかし備えはしておいた方がいいな。彼等はマウリアとは違う」
「戦争を知っているか」
「国力差は圧倒的だがな。そこが違う」
ジェダはそこに注目していた。
「エウロパとの戦いは戦争を知る意味で非常に大きかったと思うが」
「サハラは遥かに知っているか」
「サハラの歴史は戦争の歴史だ」
ジェダは印象に残る様な言葉をあえて口にした。
「我々とは住んでいる世界が違う」
「何もかも」
「その彼等を相手にすることにならなければいいがな」
「太った牛が餓えた狼に対するようなものか」
「その場合牛はどうするかだな」
「狼を刺激しないことだな。出来れば前に出ない」
これが一番である。何につけても。

「出来ればな。どうなるかな」
「どちらにしろサハラの動向からは目が離せないな」
「そうだな」
二人はそんな話をしてキャンバスでの一時を過ごしていた。それは連合の中での学生達のとりとめのない話であったが事実は確かに含まれていた。サハラを見ているというのは重要なことであった。

## 第十九部第一章　悠久の時は過ぎその七

連合ではサハラはあまり注目されているとは言い難い。何処か別世界だという認識があった。エウロパの様にほぼ公式の敵というわけでもなくこれといって利害関係はなかった。だからそれ程意識する必要はなかったのだ。

それでも次第にサハラに目がいくようになっていた。これからどうなるのか、連合との関係は、彼等は次第にそれを意識するようになっていた。

だがサハラでは違っていた。彼等は自分達のことで手が一杯であった。今は目の前のことを考えていた。連合のことは殆ど考えてはいなかった。

それでも僅かではあるが今後のことを考えている者もいた。例えばそのアッディーンである。

「ハサンとはいずれ戦うことになる」

彼はそう認識していた。戦うからには勝たなければならない。問題はその後であった。

「連合とハサンは同盟を結んでいる」

その話はもう掴んでいた。これが軍事同盟であったならば。かなり厄介なことになるのだ。

彼は今そのことに関して情報収集を行っていた。その最終報告は彼を安堵させるものであった。

「そうか、何もないか」

「はい」

情報局長であるアルフート＝ジャハード大将が彼に報告していた。今彼等は副大統領府のアッディーンの執務室で話をしていたのだ。

「同盟は昔からのもので軍事的なものではないです」

「まずは一安心だな」

「はい。まずは連合の介入の可能性は薄いと思われます」

「だが皆無ではないな」
「それは」
「とりあえずは連合の世論も見ていこう」
彼は言った。
「連合は民主主義だ」
「はい」
これはオムダーマンも同じであるがいささか強権的色彩を持つオムダーマンよりも民意が反映されているのが連合である。その度合いはかなり高いのも彼は認識していた。
「世論がそのまま政治に反映される」
「彼等の発言でどう動くかわかると」
「かなりの割合でな」
アッディーンは述べた。
「確かに連合は強大だが」
「ええ」
「決して独善に至る勢力ではない。そこに至るにはあまりにも人間が多過ぎる」
「それだけ意見が存在しているからですね」
「そうだ。今は四兆か」
「そうです」
彼等も連合の人口に関しては把握していた。一口に言えるが実際にはサハラ全土を合わせたものの二十倍、オムダーマンの七十倍程はある。
「それだけの人間がいればそれだけの意見がある」
「まとめるのが大変そうでありますが」
事実連合はまともにまとまったことは非常に少ない。彼等をまとめるのは至難の技である。単に人口だけでなく国や民族、人種、宗教、文化、風俗、様々なものがモザイク状に入り組んでいるからだ。連合は非常に複雑なモザイク国家なのである。
「また万が一そこに至るまでもすぐにわかる」

「彼等自身の中の議論においてですか」
「そうだ。まあその前からあらかじめ備えをしておくにこしたことはないがな」
「ですね」
「ハサンを倒したら連合との境には防衛ラインを敷くか」
それを考えていた。彼等にとって連合の存在は脅威であるからこその言葉であった。
「他には」
「不可侵条約を結ぶ。これでいいか」
「戦争になったならば我等は勝てるでしょうか」
「連合にか？」
「はい。やはり国力に大きな差がありますから」
「正直困難だ」
アッディーンの結論は簡潔であった。
「そうおいそれと勝てる相手ではない」
「やはり」
「少なくともこちらから攻めることは不可能だ。連合はあまりにも広大だ」
「はい」
勢力圏も連合とサハラ全土では比較にならない程の差があるのだ。何処までも彼等との間には差があった。
「戦争があるとすれば彼等が攻めて来た場合だが」
「連合の者は欲が深いですから」
サハラにおいてはこう認識されている。連合は資本主義、大量生産経済、大衆社会が極めて進化した社会である。人の欲望というものを肯定し、それを社会の発展に活かしているのだ。商業を奨励し、錬金術までよしとしたかってのイスラム社会以上のものがある。だから彼等はこう言うのだ。
「こちらで何かしらのものがあれば」
「来るかも知れないと」

「その辺りはどうなのでしょうか」
「戦争があるとすればそれだな」
アッディーンはその意見に頷いた。

## 第十九部第一章　悠久の時は過ぎその八

「やはり」
「連合は確かに欲望をこれ以上にないまでに肯定している」
「はい」
「それを考えると。我等に彼等にとって有益なものがあれば何としても手に入れに来るだろう」
アッディーンは連合をそうした存在と見ていた。利益を何処までも追求する彼等の性質を見抜いたうえでの言葉であった。
「武力を使ってでも」
「有り得ないとは言えない。可能性が皆無でないならば警戒せねばならない」
「ですね」
それが国の重責を預かる者としての責務であった。可能性が低いからといって備えを怠ったのではいざという時に取り返しのつかないことになる。実際にそれで危機に陥った国は枚挙に暇がない。
「何としてもな」
「連合はそうした意味で危険ですね」
「彼等の意図に関わらずな」
アッディーンの言葉は完全を外から連合を見たサハラの者特有の言葉であった。
「独善に至らずとも好戦的でなくとも」
「その存在だけで」
「巨大な勢力というのはそういうものだ」
彼はこの時目の前に連合の巨大な姿を見ていた。
「自分達が意図していなくとも脅威となる」
「今までも脅威でしたが」
「連合軍設立以降だな。大きく変わりだした」
「ええ」

アッディーンのその言葉に応える。これは否定しようのない事実であった。
「それまでは単に巨大な勢力だけだった。その中で各国が好きなことを言っているだけの」
「しかし一つの武力を持つようになりました」
「その武力こそが問題だ。それが我等に向けられれば」
それが問題なのだ。連合軍はあまりにも巨大なのだから。
「サハラそのものが存亡の危機に陥ります。それだけは避けなければ」
「矛先が向けられればそれで終わりだ」
「四兆の国力で以って潰されますか」
「そうだ。今まではその矛先はエウロパだったが」
連合とエウロパの対立は人類社会の一つの基軸であったことは彼も認識していた。
「それを我々が担うわけにはいかないからな」
「そうなればすぐに破滅です」
「連合とは争わない」
アッディーンは言い切った。
「若し争わば今のエウロパの二の舞だからな」
「わかっております。それでは」
「東には余計な兵を向けるな」
「はっ」
「あくまで我々は中をまとめるおだ。そしてそれが成った後も」
「巨獣には剣を向けずに」
勝てない相手には向かわない。それも戦略である。むしろそれをわきまえているのが真の戦略家なのだ。
「これはおそらくハサンもティムールも同じ考えだろうな」
「ハサンはともかくティムールもですか」
「そうだろうが。何か異論があるのか？」
「いえ、ティムールのシャイターン主席は」

「確かに彼は野心家だ」
「はい」
これはサハラはおろか人類社会に知られたことである。シャイターンが並々ならぬ野心を持ち、その為には手段を選ばないことも知られていた。彼は狡猾な野心家であるとされていたのだ。
「だが。同時に切れ者だ」
「切れ者ですか」
「彼程の頭脳があればわかることだ」
「連合と争うことの愚が」
「そうだ。サハラでは無理だ。それに」
「それに？」
アッディーンの次の言葉を待つ。すると彼は言うのだった。
「彼は確かに野心家だがその野心は大それたものではないだろうな」
「といいますと」
「彼の望みはサハラの中だけだ」
「この中だけですか」
「そうだ。そこから一歩も出るものではない」
彼は言う。
「マウリアにも連合にもその目は向けてはいない。その目はあくまでサハラの中だけだ」
「ではその野心は」
「サハラ統一だな」
アッディーンはまた言い切った。
「それ以外のものもそれ以上のものも考えてはいない」
「左様ですか」
「つまり、いずれ我々とも戦うということだ」
「そうですね」
これはもうある程度は予想していたことである彼もそれを聞いて驚かなかった。
「天に二日は不要ですから」

「今は銀河に無数にあろうともな」
古い中国の言葉が出て来た。

## 第十九部第一章　悠久の時は過ぎその九

「彼はそう考えているだろう」
「ですが。宜しいのですか？」
「何がだ？」
「シャイターン主席は閣下の」
彼の妻はシャイターンの妹である。それに言及してきたのだ。
だがシャイターンはそれを言われても動揺しなかった。落ち着いた様子で返す。
「向こうが来るのなら受けて立つだけだ」
「受けて、ですか」
「そうだ。こちらから仕掛けるつもりはないがな」
「はあ」
アッディーンの言葉に応える。
「もっともそれはあくまで私の考えだ。国民がそれを望むなら」
「こちらからも向かうと」
「今までサハラは一つになったことはなかった。アラブの時代から」
ウマイヤ朝以降アラビア人達を一つにした国家は存在していない。様々な国家が誕生したが結局イスラムは一つにはなってはいないのだ。統一はサハラになると彼等の究極の悲願になっていた。
「それが一つになるのなら。私はその為に戦う」
「オムダーマンの為に」
「いや、サハラの為だ」
彼はあえてこう返した。
「我々は長い間欧州の勢力の介入を受けてきた」
まずはそれに言及した。
「十字軍だけでなく西欧列強にも、そしてエウロパにも」
これは繰り返されてきた歴史である。彼等にとっては拭い去ることの出来ない忌まわしい記憶だ。

「それを防ぐ為には。やはりサハラは一つになるしかないだろう」
「サハラを一つに」
「今それは近付いているのかも知れない」
彼もそれを感じていた。
「ならば。私はそれに従う。そして」
「そして？」
「戦う。それだけだ」
その言葉にはこれといって野心はなかった。彼はあくまで軍人であり国家に従い戦っているのだ。ここがシャイターンとは違っていた。
「しかし」
「しかし？」
「私も政治に詳しくなったな」
そう呟いて微かに笑った。
「軍人であるつもりなのだが」
「ですが同時に副大統領でもあります」
「それか」
「はい。副大統領ともなれば政治家です。政治とは無縁ではやっていけるものではありません」
ジャハードは述べた。
「ですがそれを考慮されても。閣下は政治家としての才覚があられるのではないですか？」
「世辞か？」
「私が世辞を言ったことがありますか？」
「いや、ない」
これは本当のことであった。ジャハードはそうした世渡り的なことはしない人物として知られていた。公人としては有能であるが私人としてはかなりの部分が謎に包まれ変人とさえ言われていた。
「ですな。ではおわかりでしょう」
「私にその様なものがあるとはな」

「人間持っている才覚は一つだけとは限りません」
これは確かにそうであった。
「閣下は。アッラーに政治の才覚も与えられていたのでしょう」
「幸運なのかな、これは」
「それもアッラーが示されます」
将に予定説であった。アッラーはヤハウェの神と同じ存在であるがその力はヤハウェよりも強く、絶対のものがある。人の運命もまた全てアッラーが決めているのである。
「我等はそれに従うだけです」
「アッラーを信じて生きる」
「そうです」
生きるも死ぬも運命なのである。アッラーが決めた。
「閣下はそれを生かされるだけです」
「わかった。ではそうしよう」
彼は頷いた。
「政治家としても。生きてみるか」
「はい」
彼はそう決めた。副大統領としてのアッディーンは有能であったがこれ以降さらに活躍することになる。彼の政治家としての資質も開花していたのであった。

## 第十九部第一章　悠久の時は過ぎその十

エウロパの首都オリンポス。今ここは連合とエウロパの講和会議の用意で慌しくなっていた。
あちこちで催しが計画され、外務省のスタッフを中心としてそれへの用意が進められていた。
それは決して催しではない。この戦いにおける講和でもある意味なかった。連合とエウロパのこの戦いにおける最後の戦闘であったのだ。その証拠にエウロパ外務省の者達の顔は険しいものであった。
「エウロパの者達の動きが慌しくなってきたな」
クベーラはそれをマウリア大使館において見ていた。彼は今自分の部屋で一人食事を採っている。その向かいには一人の若い男が座っていた。
「講和会議の準備だそうです」
「それはわかっているが」
彼はまずそれに応えた。
「だがなアグニ君」
「はい」
その若い男はアグニと呼ばれた。それが彼の名前であった。
「講和だけだと思うか」
「いえ、違うかと」
彼は問われたのに応じて私見を述べた。
「エウロパは企んでいますね」
「何をだ？」
「講和の条件を彼等に有利にする為に。違うでしょうか」
「それは当然考えているだろうな」
二人は今カレーを食べていた。カレーと言っても連合で普段食べられているようなカレーではない。マウリア風のカレーである。連合のそれぞれの国のものとは全く違っていた。

「またそれを考えない外交官なぞいない」
「はい」
「カミュ外相もな。彼は特に考えている筈だ」
「カミュ外相ですか」
アグニはその名を聞いて顔を少し顰めさせた。
「どうした？カレーが辛かったか？」
「いえ」
クベーラはわざとそう聞いたのだ。これはからかいの言葉である。
「あの外相と比べればこのカレーの辛さなぞ」
「ふふふ」
「私はどうも彼が好きにはなれません」
「人間としてか」
「はい。気位が高くエウロパのもの以外が認めようとはしません。それに女性に目がなく賄賂まで取るとは」
それだけではとんでもない人間となる。しかしカミュはただそれだけの男ではないのである。
「その女性と賄賂では面白いことがあるぞ」
「それは？」
「まず女性だが独身しか相手にしない」
「独身しか」
「既婚者や婚約者があると手を出さない。そして賄賂に関しては仕事が失敗したら返すのだ」
ここが重要なのだ。汚職や女色も節度があるのだ。
「変に律儀ですね」
「そうした人物だ。面白いとは思わないか」
「そもそもそうしたことをすること自体が好ましいことではありませんが」
「まあそう言うな」
クベーラはそう言って彼を宥めた。
「少なくとも今のエウロパにはなくてはならない人間だ」

「あの様な偏見が強く、清潔とは全くかけ離れた人物がですが」
「あくまで能力のうえだ。人間性は関係ない」
クベーラの言葉は冷徹であった。
「違うか」
「そうなのですか」
「人間的には高潔であっても政治家、外交官としては無能な場合もある」
当然その逆もある。カミュはその逆の場合であった。
「そうしたものだ。人間性は関係ないのだ」
「そういうものですか」
「政治の世界ではな。外交の世界でも」
スプーンでカレーを口に入れながら言う。この時代では指を使って食べるということは殆どなくなった。マウリアでもフォークやナイフ、このスプーンを使って食べている。これはサハラも同じである。指を使って食べる文化はかなり廃れている。
「大事なのは能力だ」
「能力ですか」
「人間性は関係ないと言っても差し支えない」
「シビアですね」
「国の命運が関わるからな」
これも真実であった。外交には国の命運がかかっている。だからこそ連合内部でも執拗な外交戦が行われているのだ。当然マウリアもそれに関わっている。
「悪人や下劣な人間が国を救う場合もある」
「逆に高潔な人間や善人が国を滅ぼす場合もありますか」
「そうだ。面白いか？」
「面白いと言うか不条理ですね」
それがアグニの感想であった。

## 第十九部第一章　悠久の時は過ぎその十一

「本来は高潔な人物や善人が国を救うべきなのですが」
「そうしたものだ。そもそも善人や高潔と言っても主観に基づく場合が多い」
「ええ」
「ある者から見て善人であっても違う者から見れば悪人である場合もある」
「人それぞれですね」
これは事実だ。善悪は主観だからである。
「そうだ。だから一概には言えない」
「はあ」
「結局は能力を見るのだな」
「政治の世界は」
「うむ。そういった意味でカミュはエウロパにとっては善人だ」
こうなる。例え賄賂に女性を好む高慢な人間であってもだ。
「連合にとっては憎むべき悪人であると」
「そうなるな。だが我々にとってはどうだ？」
「善人でも悪人でもないですね」
それがアグニの見方であった。
「彼が有能であり、私にとっては好意を抱けない人物でありますが」
「そうだな。そのどちらでもない」
クベーラはその言葉を聞いて静かに頷いた。
「我々は今は調停者だ」
「はい」
「調停者としては。どちらが善でどちらが悪でもない」
「ただ話を調停するだけだと」
「言うならばカミュ外相も我等にとっては駒だ」
あえて他の勢力の人間を言う。駒であると。

「駒ですか」
「話をまとめる為のな。もっともそれは我々も同じだ」
「講和を有利に進める為の駒であると」
「そういうことだ。どちらも互いに利用し合う」
それが政治の世界だ。昔から変わりはしない。
「剣呑な世界です」
「だがそれは連合に対してもだ」
「同盟国であっても」
「同盟国でも外交は外交だ」
クベーラの言葉はあくまでシビアなものであった。
「互いを駒として扱うこともある」
「ふむ」
「連合も我々を利用しようとする。我々も連合を利用すればいい」
「利用ですか」
「そうだ、連合の情報を集める」
「はい」
アグニはその言葉に頷いた。
「彼等にはあまり手に入れてもらっては困るからな」
「適度なところでと」
「そういうことだ。だがもっとも」
ここでクベーラは少しシニカルに笑った。
「連合にとってエウロパは。そんなに価値がある存在かという問題もあるが」
「連合にとってですか」
「そうだ。それについてはどう思うか、君は」
「連合と比べるとエウロパの勢力は微々たるものです」
アグニはまずは勢力差について述べた。
「今やその差は四十倍です」
「うん」
クベーラは彼の言葉に頷きながら話を聞く。

「連合の中には一国でエウロパ全土より人口、国力も上回っている国家もあります。それに」
「それに？」
「連合になくエウロパにある技術や資源はありません」
それ程までに連合とエウロパの差は開いていたのだ。
「それに領土も。狭いものですし」
「連合にとってはエウロパ自身の魅力は少ないというのだな」
「そう思います」
アグニはここまで述べた。
「違うでしょうか」
「いや、確かにその通りだ」
クベーラはアグニの言葉を聞き終えたうえで頷いた。
「確かに彼等にとってエウロパは魅力ある場所でもない」
「はい」
「ましてや併合も。普通にやっていれば有り得ないな」
「エウロパが余程愚かなことをしない限りは」
「そこでだ」
彼は言った。
「我々は彼等がその愚かなことをするかどうかチェックする必要がある」
「ですね」
アグニはその言葉に応えた。
「そしてこの講和が穏健な形で済むことを」
「それだけでいい。だが」
「だが！？」
「その後のことは知らない。連合とエウロパがまた対立に入ろうともな」
「また対立するでしょうか」
「おそらくな」
クベーラの言葉は冷静なものであった。

「むしろ対立してもらわなくてはならない」
「何故に」
「連合は多民族国家だ。いや、勢力か」
連合は時として、また人によって国家とも勢力とも言われる。そうした曖昧な部分も連合には存在しているのである。もっともマウリアにしろマハラジャがいれば知事もいる。マハラジャは半ば独立国家的なところもある。そうした意味の曖昧さは連合以上のものがあるのであるが。
「多くの国家と市民をその中に持っているのはもう言うまでもないな」
「はい」
アグニは何故彼が今頃そんな当然のことを言ったのか妙に感じたがそれでも話を聞いた。

## 第十九部第一章　悠久の時は過ぎその十二

「そして宗教も思想も。雑多だ」
二十世紀の様なイデオロギーの対立はなくともその中に様々な宗教、思想を抱いているのは事実である。
「四兆の人口がいるしな」
「確かにそうですが」
「だからだ」
クベーラはここで言った。
「彼等はあれでもある程度まとめてくれる存在が必要なのだ」
「それは一体」
「それこそがエウロパだ」
クベーラはようやく核心を述べた。
「エウロパが」
「そうだ。彼等は一千年の間エウロパを敵としていたな」
「はい」
「中央政府の政権が幾度変わろうとも。その第一の敵はエウロパだった」
どの国にも勢力にも仮想敵国というものは存在する。連合とエウロパはお互いを第一の仮想敵国とし合ってきていたのだ。どんな政権であっても。
「それは存じていますが」
「まあ聞いてくれ」
クベーラはアグニに自分の話を聞いてくれるよう言った。
「それでだ」
「ええ」
二人はまだカレーを食べている。だがそれも終わろうとしていた。同時に側に置かれていたヨーグルトを口に含む。カレーにはヨーグルトが案外合うのだ。

「雑多な人間をまとめる方法の一つとして共通の敵を作るというものがある」
「敵を、ですか」
「そう。かって多くの国家がそうしてきたようにな」
代表的な例では宇宙進出までのアメリカである。この国は国家をまとめる為に常に敵を探し、攻撃してきた。最初はネィティブアメリカンであり次はメキシコであった。それがスペインになり日本、ソ連、イスラム原理主義となっていった。次々に自分達の目の前に『強大な敵』を作り上げてそれを『共通の敵』とすることで国家をまとめてきたのである。
「それが連合のやりかたですか」
「そうだ。彼等の目がエウロパに向いているうちはいい」
ヨーグルトを飲んだ後で述べた。
「しかし。別の方に目が向けばどうなる？」
「我々にですか？」
「可能性は皆無ではない」
「まさか」
アグニはクベーラのその言葉を一笑に伏した。
「我々は同盟国ですよ」
「うむ」
「それなのに何故。敵視されなければならないのか」
「同盟ははじめられるものだな」
アグニに対してクベーラは冷静に述べた。
「はい、確かに」
これは彼もわかっていた。
「そしてはじまりがあるものは何時かは終わるものだ」
「では」
「そうだ。連合との同盟も何時かは終わるものだ。そしてそれは何時になるかはわからない」
「明日かも」

可能性は低くとも。その可能性は皆無ではないのだ。
「そうなるかも知れないのは可能性としてはやはり皆無ではない。そして同盟はどちらかが一方的に解消することも可能だな。あれこれと理由をつけて」
「では」
「それにより我々と連合が対立関係に入る可能性もあるということだ。彼等がそれを望んだならば」
「まとめるべき対象を我々にすると」
「あくまで可能性だがな。だがそれは避けなくてはならない」
「はい」
彼も連合のことはよくわかっていた。だからこそ頷いた。
「かつての連合ならそれなりの対処も可能だったが」
「今は。容易ではないですか」
「やはり中央警察、何よりも中央軍の存在が大きい」
連合が変わった要因はやはりそこだと見られていた。クベーラもそこに大きな存在を見出していた。
「あの二つがある以上。下手をすれば」
「それこそエウロパの二の舞になると」
「我々は第二のステッラ事件をやってはならないぞ」
連合とエウロパの戦争の原因となった事件である。これにより一千年の冷戦は一気に実際に干戈を交える戦いへとなったのである。

## 第十九部第一章　悠久の時は過ぎその十三

「とにかく連合との対立は避けなくてはならない」
実は同盟関係にあるとはいえ連合とマウリアの間に問題がないわけではないのだ。貿易問題で連合とマウリアは長い間複雑な関係にあるのだ。
「その為には」
「彼等にはこれまで通りエウロパに目が向いてくれないといけませんね」
「そういうことだ。だが」
「だが！？」
「エウロパで勝手にそうしてくれる可能性もあるな」
「エウロパでですが」
エウロパと聞くと。やはりこの場では目が自然と動くのであった。その問いにすぐに言葉が返る。
「今度の総統選挙では今のラフネール総統は立候補しないそうだな」
「ええ、確か」
これはまだ未確認の情報であるがマウリア大使館に入っている重要な情報である。この戦争の責任を取ってのことであるのではと推測されている。
「では。次の総統次第だな」
「どの様な人物か、ですね」
「それを抜きにしてもエウロパの次の総統選挙は彼等にとっては彼等の歴史上最も重要な選挙になる」
「最も、ですか」
「そうだ、誰を選ぶかでな」
そう語るクベーラの目の光は静かではあるが強いものであった。
「大きく変わる」
「それが対連合強硬派であったならば」

「またエウロパは連合と対立するな」
「我々としてはそうであって欲しいと」
「宥和派であれば困る。だがここで問題になるのは今のエウロパの世論だ」
　エウロパもまた民主主義なのだ。連合のそれとはかなり形態は異なるが彼等も民主主義であることには変わりがない。民主主義も一つではないのだ。
「連合に対して。どう思っているか」
「敵愾心は衰えることがないようですね」
「それは何よりだ」
　クベーラはそれを聞いて笑みを作った。
「では後は見ているだけかな」
「次期総統によるかと」
「こちらとしては出来るだけ有能な者がいい」
　当然この言葉は好意からではない。他国の幸せを願うのはこの場合まずない。４
「そして過激な者が」
「かってのヒトラーの様に」
「なおよいな」
　クベーラの笑みは深くなった。同時に剣呑な笑みであった。
「我々にとってはな」
「彼等にとっては？」
「さて」
　だがその答えはぼかした。わざとである。
「そこまではわからない。だが今はヒトラーの時代でもない」
　これが大きな違いであった。今この時代は二十世紀の様に破滅の時代ではないのだ。少なくともあのヒトラーが完全に出て来る時代ではない。
「その総統によってエウロパが滅ぶということはまずない」
「また連合と戦争をしない限りは」

「すると思うか？」
「いえ」
アグニもそれには首を横に振った。
「狂人でもない限りそれはないでしょう」
「狂人ならば消されるだろうな」
「ええ」
もっとも狂気を帯びた人間が出て来て、彼によって導かれるケースも考えられ歯するが。あの時代のドイツがまさにそうであった。ヒトラーは狂気を帯びていたがそれでも有能で冷静な一面もあったが。彼程理解し難い人物も珍しい。この時代においてもヒトラーという人物には様々な意見がある。
「何度も言うがあの時代とは違う」
「ですがヒトラーに比肩し得る人物は」
「出る可能性はある。そしてそれ程の人物でなければ」
「今のエウロパは救えませんか」
「出るかな」
クベーラの笑みがニヤリとしたものになった。
「果たして。エウロパを救える恐るべき人物が」
「それを見つけ出すのはエウロパです。そして」
「それを選ぶのも彼等か」
「そうかと」
「どうやら講和会議の後も面白いことが続きそうだな」
クベーラの笑みはニヤリとしたままであった。
「連合とエウロパは」
「それによって我々は安泰となります」
「表向きは連合と同盟を結ぶ忠実な仲裁役として」
「やっていけるかと」
「有り難い話だ」
彼等は食後のヨーグルトを楽しみながら話をしていた。カレーの辛さは何時の間にか政治の霧の中に消えていた。その霧はそのまま

エウロパ全土を覆っていたのであった。

## 第十九部第一章　悠久の時は過ぎその十四

エウロパの首都星ガイアはこの時慌しい雰囲気にあった。優雅に落ち着いているのは実はマウリアの者達位であった。
「そうか、そちらの準備は整ったか」
「はい」
カミュは首相官邸でペーチに報告していた。ペーチはそれを聞いて頷いていた。
「何時でも彼等を迎え入れることが出来ます」
彼は答えた。その声は自信に満ちたものであった。
「それは何よりだ」
ペーチの声には感情は見られない。疲れは感じられるが。
「ではこの件は卿に一任したい」
「有り難うございます」
「総統もそう御考えだ。宜しく頼むぞ」
「連合の大衆とやらにエウロパの偉大さと素晴らしさを教えてやります」
カミュは尊大とも取れる声でこう述べた。
「大衆文化が所詮我々貴族の文化には到底及ばないことも。見せてやります」
「見せるのか」
「はい」
彼は答えた。
「確かに我々は戦争では遅れを取りましたが」
「うむ」
もうこれは言うまでもない。
「ですが文化で敗れたわけではありません。所詮彼等は土人です」
彼はここであえてもう使われなくなって久しい侮蔑の言葉を用いた。

「土人の文化なぞ。長きに渡って培ってきた我々の文化と比べ物にはなりません」
「彼等はその殆どが我々のかっての植民地だったな」
ペーチはあえて誰もが知っていることをここで口にした。
「ええ」
カミュもそれに何気なく頷く。
「それが。何か」
「いや、ただそれだけのことだがな」
「それだけとは？」
「まあ私の国は外に植民地を持ったことはないが」
まずはこう断る。彼の出身地であるハンガリーは長い間オーストリアのハプスブルク家の支配下にあったのだ。オーストリア＝ハンガリー帝国という二重国家になってもそれは変わりはしなかった。所謂異民族の支配下にあったのである。ハプスブルク家はゲルマン、ハンガリーはアジア系のマジャール人の国家なのであるから。今ではエウロパで唯一のアジア系の国家であった。
「彼等は植民地だった。それだけのことだ」
「首相」
カミュには彼が何を言いたいのは今一つわかりかねていた。
「それがどうされたのでしょうか？」
「だからそれだけのことではないかと思うのだ」
「はい、確かにそれだけです」
カミュの声は憮然としたものを含んでいた。
「ですが」
そのうえで言う。
「彼等は我々の下にいたのです。言うならば召使でした」
「召使か」
「そうです。召使が御主人様より上になりことはないのです。彼等は平民よりも下の存在です」
その言葉は剥き出しの貴族主義であった。連合の者がこれを聞け

ばさぞかしシニカルに笑ったことだろう。だがここはエウロパでありペーチもまた貴族であった。彼は取り立てて何も言わないことにした。
「平民もまたエウロパの者です」
「うむ」
貴族主義の高みから見ているがそれはカミュも認識していた。
「ですが彼等は。何だというのですか」
敵愾心も露わになってきた。
「数と図体だけの。所詮は烏合の衆ではないですか」
「だが外相」
ペーチはそんな彼に言う。
「我々はその烏合の衆に遅れを取ったのではないのか」
「戦争でだけです」
顔も憮然としたものになっていた。
「しかし今度はそうはいきません」
「戦争以外でか」
「はい。文化で」
彼の言葉は何故か追い詰められた感触があった。
「本当の文化を。彼等に見せてやります」
「連合は三百の国家があったな」
ペーチはここで一見関係ないようなことを口にした。
「はい」
カミュはそれに戸惑いと苛立ちを覚えたが返事を返した。
「その中には。それぞれの文化があるが」
「あんなものは文化ではありません」
カミュはそれをあくまで認めようとはしない。
「土人達の文化なぞ。我々のものとは」
「比較にならないか」
「その通りです」
彼はまたしても言い切った。

「単に大層な数を堆く積み上げただけです。その豊かさを誇るだけの下品なものです」
それもまたそうであるのは確かであった。連合の文化はその豊かなものをふんだんに使う性質のものが多いのもまた事実であるからだ。
「我々の様に洗練されてはいません。繊細さなぞ何処にありますか」
「ふむ」
「装飾も。派手にギラギラと飾っただけです。芸術にしろそうです」
彼はとにかく連合のものをことごとく否定しにかかっていた。
「大きいだけの絵や巨大な建築物。それが芸術ですか」
「連合にはそうしたものだけだと言いたいのだな」
「私は他にどう言っていいか知りません。あれは単なる展示物です」
「彼等にわかる筈もないでしょう。料理にしろ」
「料理か」
「酒も。彼等が決して味わうことの出来ない至高のものをあえて用意しておきました」
ここで笑みが誇らしげなものに変わった。

## 第十九部第一章　悠久の時は過ぎその十五

「あの調味料を素材に放り込んだだけの。料理の種類だけが多い料理とは違う本当の料理をね」
彼はとにわけ料理にはこだわりがあるようである。如何にもフランス貴族らしいと言うべきか。それとも彼の連合への蔑視故のものか。あるいはその両方か。
「味あわせてやりますよ。そして」
「その中に含んでいるもので」
「はい」
彼は答えた。
「エウロパを救ってみせます」
「わかった」
「すぐに閣下の下にも吉報が届きましょう」
その返事は自信に満ちたものであった。彼にはその自信があった。
「お待ちあれ」
「だが一つ気になることがある」
「それは」
「料理で彼等を攻めるのだな」
「はい」
料理とは堪能するだけではないのだ。こうした外交の場においては武器にもなる。ただしそれは暗器である。表に出ることはないのである。そうした武器もあるのだ。
「そこだ」
「！？」
カミュはペーチが何を言いたいのかわかりかねていた。ふと首を傾げる。
「卿は連合の料理を大したことはないと思っているな」
「私はフランス人ですよ」

優美だがそこに嫌味なものも含んだ。ここが実にフランスらしい。
「フランス料理こそが最高であると自認しておりますが」
「そうか、最高か」
「はい」
その返答に迷いはなかった。
「連合の料理ですか？」
そのうえで言う。侮蔑に満ちた笑いと共に。
「先程も述べさせて頂きましたがあんなものは」
「量と調味料をふんだんに使っているだけだと。そう言いたいのだな」
「その通りです。あんなものは馬の餌です」
「馬のか」
「牛馬に様に飲み喰らいする」
連合の者を評してこう言う。
「味も何もあったものではない単に濃いだけの味付けで。何が料理でしょうか。料理とは芸術です」
これまたフランス人らしい考えであった。
「芸術か」
「違いますか？」
「いや、確かにそうだ」
「そう、我々の料理こそが芸術なのです」
これは一理ある言葉だと。エウロパから見ればそうなる。
「だが。芸術は一つなのだろうか」
「といいますと？」
「我々だけが。芸術を理解しているのだおるかと思ってな」
「おかしなことを」
ペーチのその言葉を聞いて思わず笑ってしまった。
「首相」
「何かね？」
「芸術は。何処で生まれたものでしょう」

「何処でと言われると」
「このエウロパでです。かつてローマがそれを作り上げました」
「ローマが」
またローマが出たと。思わなくもない言葉であった。
「そしてギリシアが。今ある芸術は全て我々が築き上げたものではないですか。我々の偉大な祖先が」
「そうなのか」
「そうなのです」
少なくとも彼はそう認識していた。実際にエウロパではそう考えられている。文化も芸術も今のそれのはいzまりはエウロパにあるのだと。近代国家以降人類を正しく導いていたのだと。それを連合の野蛮人達が邪魔をしたと考えているのだ。もっとも連合は連合で高慢なエウロパの者達が搾取をして私腹を肥やし、あの文化や芸術を築いたと考えている。どっちもどっちと言えなくもない。

## 第十九部第一章　悠久の時は過ぎその十六

「植民地の奴隷達に文化なぞ」
「ないというのか」
「そうです。まあ彼等には本当の文化というものを教えてやりましょう」
あくまで尊大であった。
「じっくりとね」
「その文化にしろだ」
だがペーチの言葉は今一つ歯切れが悪かった。
「何か？」
「果たして。一つなのだろうか」
「といいますと？」
「我々のものだけかな、と思ってな」
「何を仰るかと思えば」
カミュはその言葉を一笑に伏した。
「野蛮人は野蛮人です。所詮は」
「それもすぐにわかると思うが」
「ええ、すぐにね」
カミュはあくまでエウロパの優位を疑わない。
「彼等が。数と図体だけの存在であると」
「わかるのだな」
「それも御覧になられると思いますよ」
「そうか」
「存分にね。では」
ここで踵を返す。すぐに問いがかけられる。
「帰るのか？」
「ええ。これで報告は終わりましたし」
「そうか」

「何か関係ない話ばかりしてしまいましたが」
「いや、いい」
それはいいとした。
「しかしだ」
それでも言わねばならぬものはあると思った。だから言った。
「文化は同じ物差しでは計れない」
「はて」
しかしその言葉はカミュには通じなかった。
「ではエウロパと彼等が同格であると」
「いや、違う」
「！？」
顔が変わる。疑問符が浮かび上がった。
「同じだとかそういう問題ではない。彼等は彼等なのだ」
「違う世界にいると」
「だから。そうした判断は出来ないのではないのか」
「いえ、それは違いますね」
これはペーチも予想していた。カミュはそれを否定した。
「連合の者達はその殆どがかっては我々の植民地であり奴隷でした」
またそれについて言及した。
「我々が本当の文化や芸術を教えてやったのですよ。そして今の彼等がある」
「今がか」
「恩知らずにも。この一千年歯向かい、そしてオリンポスにまで来ますが」
今度は嫌悪感が露わになった。
「それもここまでということです」
「そうか」
「そうです。それでは宜しいでしょうか」
「ああ」
止める理由もなかった。これ以上言うつもりもなかった。ペーチ

はそれをよしとした。
「それではまたな」
「はい」
カミュは一礼してペーチの執務室を後にした。こうして部屋にはそのペーチだけが残った。
「若さ故かな」
カミュが去った後の部屋の扉を見て呟く。
「あそこまで強気なのは」
あえてそう評した。カミュの能力はわかっている。それを汲んだうえでの呟きであった。
「しかしそれが時には」
次の呟きの言葉はそれであった。
「失敗になるが。どうか」
だがそれを問う相手はもういなかった。彼はまた仕事へと戻るのであった。

## 第十九部第一章　悠久の時は過ぎその十七

オリンポスへ入ったキロモト達はまずは三隻の巨大戦艦をガイヤに降下させた。そしてそこにを宿として会談に臨むこととなったのであった。

彼等の艦はガイヤの港を占拠していた。その周りにも連合軍の艦隊が停泊している。彼等は地上の港をあえて占領してその安全を確保し、同時にエウロパに対してその存在を見せ付けていた。

港には今は連合軍の艦艇しかいない。本来そこにいる筈のエウロパ軍の艦艇は追い出された形になっている。

「壮観ね」

その停泊する姿を見てカバリエはこう言った。彼女は今その乗艦であるコヨルショウキの窓の側にいた。

「敵の首都に艦隊を集結させるなんて」

「確かに」

それに世話役の将校が頷く。

「連合軍、いえ連合はじまって以来のことですから」

「こうしてエウロパの首都にまで来たのは」

「はい。今でもまだ夢の様です」

「けれどこれは夢じゃないわよ」

カバリエは将校に顔を向けて言った。

「現実なのよね。本当に」

「はい」

「そしてこれから起こることも現実よ」

「これから」

その言葉にすぐ反応を示す。するとこう返事が返って来た。

「今度は。私達が受けて立つ番」

「我々がですか！？」

「ええ。戦争はまだ終わっていないのだから」

「はあ」
返事が急にぼやけたものとなった。
「講和が締結されるまで戦争は続いているのよ」
「それは認識しております」
彼もまた将校である。その程度のことは認識していた。
戦争は停戦で終わりというわけではないのだ。それは単に武器を収めただけである。本当に戦争が終わるのは講和により条約が結ばれた時だ。それまで終わったということにはならないのだ。
「ではわかるわね」
「はい」
彼は頷いた。
「戦争はまだ行われているのよ」
「そしてここでもまた戦争ですか」
「今度は武器は使わないけれど」
「武器を使わない戦争」
「そう。私達が行う、ね」
つまり交渉である。これもまた戦争なのである。
「行って来るわ」
「警護はお任せ下さい」
「わかったわ。ただ」
「ただ。何か？」
「向こうが何をしてくるのか楽しみではあるわね」
くすりと笑って。そのうえでの言葉であった。
「会議の場はプロヴァンス宮殿でしたね」
「確かそうね」
「かなり大きく、そして豪奢な宮殿と聞いておりますが」
既にそうした情報は集めている。事前調査で。
「どんなものかしら」
「そこに待つのはエウロパ貴族達」
「さぞかし面白い催しを用意しているでしょうね」

「既にそこにも我々の将兵が詰めておりますので」
宮殿は武力的には連合の手に落ちている。だが文化的には違っていたのだ。
「御安心下さい」
「わかったわ。それじゃあ」
「はい」
カバリエも戦場に赴く覚悟を決めた。そして八条もそれは同じであった。
「そう、遂に」
「はい、いよいよです」
彼はノートパソコンをモニターにして伊藤と話をしていた。かなり距離は開いているがこうしたことも出来るようになっているのである。人類は光も越えたのである。
「講和会議がはじまります」
「貴族達には気を着けるのよ」
伊藤のその言葉はいささか保護者めいたものであった。やはりこれは彼女が八条の師であるからであろうか。そうした感じがあった。

## 第十九部第一章　悠久の時は過ぎその十八

「彼等は腹黒いから」
「腹黒い、ですか」
「それも連合にはない腹黒さよ」
「はあ」
これは八条には少しわかりかねる言葉であった。首を傾げさせた。
「腹黒いのだったら連合に幾らでもいるのじゃないかって考えてるわね」
「わかりますか？」
「わかるわよ。顔に書いてあるから」
「おっと」
慌てて表情を元に戻す。
「確かに数じゃ連合の方が多いわね」
これは当然と言えば当然であった。連合の人口は四兆である。それに対してエウロパは一千億、全人口の中に腹黒い輩がいる割合がどんなものかはわからないが数のうえでは連合の方が圧倒的に多いのはすぐにわかることであった。
「けれど中身が違うのよ」
「中身が」
「彼等はね。腹黒さもある意味芸術なのよ」
「芸術、ですか」
それを聞いて眉を顰めさせた。
「腹黒さがですか」
「そうよ。だから注意しなさい」
そのうえでこう忠告した。
「何をしてくるかわからないから」
「はあ」
「その何かが。厄介なのだからね」

「彼等はそれ程手強いのですか」
「手強いって言えばそうね」
腹黒いのをあえてこう表現したのだがそれに頷いた。
「顔では笑っていて、様々な催しをやってもそれは仮面に過ぎない」
「仮面に」
「仮面舞踏会は知っているわね」
「はい」
かって欧州で行われた催しである。皆それぞれ仮面を着けてその仮面の役になりきり遊ぶ。自分ではない役になりきる、そうした束の間の催しであった。王が農民に、農民が王になる。なおその下にある素顔はわからない為それが密会や謀略の道具にもなったのである。
「あれがエウロパなのよ」
「仮面の下に素顔を隠している」
「そして毒もね」
語る伊藤の目が剣呑なものになった。
「毒をよ。わかったわね」
「ええ」
応えはしたがやはりまだ返答は弱い。どんなものかわかりかねているのだ。
「仮面の下には毒があるのよ」
「仮面の下には」
八条は思わずその言葉を繰り返す。
「そう、表は信じないことね」
「裏ですか」
「後部屋には注意して」
「盗聴器ですか？」
八条は盗聴器と聞いて声をあげた。これはこの時代においてもよく使われている。実際に彼もこれまでそうしたものにかなり慎重でいたがここでも出たので声にあげたのであった。伊藤はそうしたこ

とも見越していたようにまた彼に述べるのであった。やはりそれは何処か保護者めいたものがあった。
「部屋だけじゃないでしょうけれどね。服にも」
「わかりました。ではそちらも」
「用心するにこしたことはないから」
「わかりました。それでは」
「武運を期待するわ」
ここで伊藤はあえて武運と言った。

## 第十九部第一章　悠久の時は過ぎその十九

「武運ですか」
「そうよ」
そして笑った。にこやかに。伊藤の笑みは知的な笑みとして評判がいい。もっともそれは連合の政治家や他の国々では狐の笑みと言われているのだが。
「まだ戦争なのだからね」
「ではこれをこの戦いでの最後の戦場にします」
「期待しているわよ」
この一言でモニターから姿を消した。後には普通のケース等が置かれている画面とそれを見る八条だけが残っていた。
「さてと」
彼はまずはパソコンの電源を落とした。そしてそれをしまってから大きく背伸びをした。
「そろそろはじまるかな」
「長官」
丁度いい時に木口が部屋に入って来た。
「あっ、来てくれたか」
「そろそろ御時間ですよ」
「そうか、もうか」
木口の言葉に応える。そうして席を立つ。エウロパの貴族達にも負けない優雅な物腰であった。
「行きましょう。車は用意してあります」
「連合のものだろうな」
「勿論。事前に細部までチェックしました」
木口はここでは爆弾について述べていた。だが八条は別のものを見ていた。
「いや、違う」

「違うのですか！？」
「爆弾が仕掛けられている可能性も確かにある」
「はい」
八条の言葉に頷く。これは当然ながらもう警戒していた。
「だが他にも。爆弾より危険なものが仕掛けられている可能性もあるぞ」
「それは一体」
「盗聴器等だ。それにも気を配らないとな」
伊藤に言われたことだがそのまま述べる。そうして木口もまたそれに声を述べる。
「盗聴器ですか」
「君も身辺には気を着けてくれ」
「私もですか！？」
「そうだ。秘書もな。狙われる」
彼は木口に対してそう述べた。先程の伊藤の忠告を思い出していた。
「何とまあ」
「といってもこれは連合も同じだと思うが？」
「そりゃ私にもそうした声がかかってきたことはありますがね」
「そうだったな」
これはその都度木口から直接聞いている。だからわかっていた。
「買収だのそんなのは」
「買収もあるだろうな」
「やはり」
「他にも色々と。身辺には注意してくれ」
木口にそう述べる。すると彼もまた神妙な面持ちで八条に述べるのであった。彼もまたそうしたものを感じ取っていた。何しろここはオリンポス、敵の本城なのだ。警戒しないでいられる程彼も豪胆ではなかったのだ。
「軍艦に閉じ籠るってわけにはいきませんからね」

「秘書がそれでは仕事にならないと思うが？」
そう木口に言う。少しだけ厳しい感じがあるのが普段の八条と違っていると言えた。そもそも彼が敬語を使わない相手は木口のようにとりわけ親しい相手だけである。他には家族や長い間家にいる者達位である。何かと謙虚で礼儀正しい八条であった。
「厳しい御言葉で」
「そういうことだ。では行くぞ」
「はい」
木口は真面目な顔になって頷く。
「いざ敵の城へ」
「出陣だな」
八条は木口と共に部屋を出た。そのまま車に乗り込みプロヴァンス宮殿に向かう。そこで仮面の貴族達と熾烈な戦いを繰り広げることになるのであった。

# 第十九部第二章　会議は踊るその一

会議は踊る

八条達がオリンポスにおいて講和会議に入ったのは連合にも伝わっていた。その中身の情報を最初に手に入れたのは中央政府ではなかった。

それはイスラエルであった。彼等は連合三百国の中でもとりわけ情報収集、情報戦に秀でていたのである。

暗い部屋に老人達が集まっている。その数は十二人。彼等こそイスラエルの実質的な最高指導者達である長老と呼ばれる存在である。

彼等は十二支族それぞれの出身である。その支族から選挙で選ばれてその地位に就くことになっている。地位はかなり高く、大統領の顧問ともなっている。彼等の言葉でイスラエルが動く程なのである。

「さて」

その中の一人が口を開いた。

「中央政府がエウロパと講和のテーブルに着いたが」

「やっとだな」

別の一人がそれに答えた。

「長かったな、ここまで」

「うむ。停戦からな。思ったより時間がかかった」

「その間にエウロパの者達に備えの時間を与えてしまったようだが」

「だがそれは仕方なかろう」

また別の長老が言った。

「オリンポスに行くまでは時間がかかる」

「太陽系に呼んでもよかったのではないか？今思うと」

「それを言っても詮無きこと」

それをさらに別の長老が否定する。

「敵の首都へ乗り込むことこそこの講和会議の第一歩だったのだか

らな」
「左様か」
「それに時間を与えたところでたかが知れている」
「どういうことだ？」
長老達の一人が同僚に問うた。
「あの者達の考えていることは容易にわかるということだ」
「！？」
「耳だ」
長老達の中でもとりわけ年老いた者がそれに答えた。
「そして目が。あそこにもあるからな」
「どうやってそれを備え付けたのだ？」
「人間とは弱いものだ」
最長老はそう返した。
「誘惑には逆らえぬ」
「成程な」
老人達はその言葉を聞いて含み笑いを浮かべた。
「それで目と耳をあちらに置いたのか」
「後で皆で見よう」
「そうだな」
「この情報をどう使うかだ」
「売れるか、中央政府に」
またしてもその考えになる。そこは何処か商人めいていたがそれ以上に鋭いものもあった。
「いや、ここは売らないでおこう」
「というと？」
「無償で提供しようと思う」
最長老は述べた。
「無償で」
「恩を売っておくのだ」
それが彼の考えであった。

「悪くはなかろう」
「確かにな」
「中央政府だけでなく大統領達にも個人的に貸しができるな」
「恩は何よりも貴重な財産だ」
最長老の言葉は思慮深いものであったが同時に非常に企み深いものであった。
「多過ぎて困るというものではない」
「確かに」
「どうやらエウロパの者達はその贅と文化で彼等を骨抜きにし、そこに付け込むつもりらしい」
「ほう」
「それは回りくどい手を」
長老達はそれを聞いて声をあげた。動作は少なく、声も低いがそれは確かに発せられていた。暗室の中でその話は続いている。

## 第十九部第二章　会議は踊るその二

「情報を仕入れ、弱みに付け込み」
「講和を有利な条件にするのか」
「手段を選んではいられぬだろうしな」
「確かに」
「あの者達もあの者達で必死であるからな」
「貴族の余裕も。何処までもつやら」
　彼等もまた連合の者達なのである。その考えにはエウロパ、とりわけ貴族達に対する偏見が存在していた。イスラエル人はかなりの割合でかっては欧州にその祖先がいたが連合設立の際のその全財産、頭脳、影響力と共に皆連合へ行ってしまい、今ではエウロパとは何の縁もないのである。もっとも密かにどういったルートかはわからないがエウロパの最深部までその情報網を張り巡らせているという噂もある。ことの真相は定かではないが。
「どのみち先が見えていると言えなくもないがな」
「いや、それはどうかな」
　最長老は同僚の楽観視には疑問を呈した。
「違うというのか？」
「これは中国の諺だったかな」
　そう前置きしたうえで述べる。
「窮鼠猫を噛む、だったか」
「その諺なら知っておるぞ」
「そうか」
「追い詰められた者は何をするかわからないというのだな」
　これは何時の時代も変わらない。人は絶体絶命になると何をするかわからない。破れかぶれになるからだ。
「左様。ではわしの言いたいことはわかるな」
「うむ」

「今のエウロパは。何をするかわからないのだな」
「そうだ。油断はするなよ」
「わかった」
「では情報収集は抜かりなくな」
彼等の十八番である。それにより長い間生きてきており今も連合で陰の実力者になっている理由はこれなのだから。
「特にあの若い外務大臣はな」
「カミュだったか。フランスの貴族の」
「そう、その男だ」
「何でも人間的にはかなり高慢な男らしいがな」
顔に嫌悪感が浮かぶ。それも全員に。およそ彼等のユダヤ教に基く厳格な倫理観から離れているからだ。
「賄賂を取り、贅沢に明け暮れ、歓楽を愛し、しかも女に目がない」
「お世辞にも褒められた男ではないな」
「だが能力は別だ」
中の一人が述べた。
「能力は。人間性とはあまり関係がない」
「うむ」
「政治家としての能力はかなりのものらしいな」
だがそれはわかっている。だからこそ問題なのだ。
「その彼が今回の講和会議を仕切っているとか」
「何をしてくるかわからぬか」
「甘い菓子の下に毒を含ませる程度は常識であろうな」
「毒を、か」
声に剣呑なものが宿る。
「それも人を殺める毒ではない。国を危める毒だ」
「成程のう」
「貴族らしいと言えばらしい」
「悠長なことも言っていられんがな」
また中の一人が述べた。

「中央政府に下手をされては困る」
「それは確かに」
「今回だけはな。彼等には頑張ってもらわぬと」
「外の脅威は完全に取り除く」
「そして中で栄える。それが我々の願いなのだからな」
彼等は戦争を欲してはいない。戦争になれば貿易も商売も出来なくなるからだ。それは連合においては死活問題である。だから彼等は戦争を嫌い、平和を愛するのだ。平和ならば栄えることが出来るからだ。

## 第十九部第二章　会議は踊るその三

「ではここは連合に二度と歯向かえないまでにしておいてもらうか」
「そうだな。さしあたってはニーベルング要塞の割譲だな」
「周辺星系の非武装化、ブラウベルグ回廊ももらおうか」
「あの回廊の名も変えさせてもらうか」
意地悪い笑みを一斉に浮かべる。ここではいささか嗜虐的なものが見えてもいた。
「まあそれは後のことだな」
「賠償金ももらうか」
「賠償金ではないぞ」
これにはすぐに仲間達から訂正が入るのであった。言った本人もすぐにそれに気付く。
「おっと」
「名前だけは変えておる。名前だけはな」
「そうであったな。これは失敬」
「うむ」
「確か。災害救助金だったかな」
彼等はまたしても意地悪い笑みになる。名前を変えても、と言いたいのだ。
「いや、正式な名称はまだ決まってはいない」
「そうだったか」
「有力な候補は幾つかあるがな。変わるやも知れぬ」
「左様か。まあそれはどうでもよいな」
「どうでもよいか」
「中身が変わるわけではない」
その長老はしれっとそう述べた。
「勝った我等が負けたあの者達に支払わさせるのだ。それに違いはない」

「そういうことか」
「じゃから。払わせる額が問題であろう」
「これはまあ適度なところじゃな」
これについても考えを及ばせる。やはり彼等は優れた頭脳を持っている。
「エウロパの負担になり、同時に我等に反感が及ばぬ程度で」
「払ってもらうか」
「そうじゃな」
「そしてじゃ」
話はまだ続いた。
「あれはどうするか」
「あれか」
「左様。重要な問題じゃぞ」
「とりあえずは太陽系に居候ということらしいな」
「ふむ」
十一人が一人の言葉に頷いた。そうしてまた言われる。
「じゃが何処に移るかはまだ未定じゃ」
「何処になるかの」
「中央政府としては大国の影響を除きたいそうだが」
「当然だな」
彼等は仲間の一人の言葉に頷いた。
「連中にむざむざ美味しい権益を渡すこともない」
「その通り」
「ここは中央政府の肩を持つとするか」
「それと日本のな」
「日本か」
日本の名前が出ると長老達は急に不機嫌な顔になっていった。
「この話では連中の顔を立ててておきたいが」
「あの問題ではな」
「うむ。また別じゃ」

彼等は口々にこう述べた。
「この話ではアメリカや中国の肩を持つとするか」
「そうじゃな。日本にあまり増長してもらっても困る」
「あの狐は手強い。用心は必要だがな」
伊藤のことである。彼女の渾名である『女狐』という言葉をあえて使ったのだ。
「それにここでは儲けたいからの」
「惑星開発は。金になるからのう」
「我等の為にも。ここは動かなければ」
「中をまとめるのは後でもよい」
「うむ」
八条の考えとは正反対であった。彼等は今は惑星開発をするべきだと考えていた。八条が今は内部を整理するべきだと考えているのに対して、である。これは惑星開発による利益を狙う彼等の思惑もあった。彼等も自分の国の利益を考え、それに基づいて動いているのである。
「それに中央政府に強くなっても困るからな」
「左様。手頃なところで満足してもらわなければ」
「我等も何かをし辛い」
同時にバランサーとしての自分達のポジションも維持するつもりであった。彼等は連合の中のバランサーとして位置することにその存在を見出していたのである。

## 第十九部第二章　会議は踊るその四

「その為に手を打っておくか？」
「いや、それにはまだ早いな」
「早いか」
「そうじゃ。まだ気付かれるわけにはいかぬ」
「わかった」
長老達は最長老の言葉に頷いた。
「では準備をするだけじゃな」
「うむ」
「まずはこれでよし」
最長老は話がまとまったと見てこう述べた。
「では今はこれで終いとするか」
「そうじゃな」
「また集まるとしよう」
「最後に聞きたい」
「何だ？」
皆立ち上がろうとしたところで仲間内の一人の言葉に動きを止めた。
「この話、大統領には伝えるのか」
「当然だな」
最長老がそれに答えた。
「我々はあくまで顧問だ」
そういうことになっているのだ。実際にはどうあれ。イスラエルにおいてはこの十二人の長老達は大統領の顧問となっている。だがその権限は大統領のそれを上回ることすらあるのだ。大統領といえど彼等に逆らうことは出来ないのである。これはイスラエル独特のものであった。
「話を伝えなければならない」

「わかった。では」
「いや、待て」
この話でまた別の長老が気付いた。
「今度は何だ？」
「『烏』はどうするか」
「『烏』か」
「左様。あの者にも直接伝えておかなければならないのではないのか」
「言われてみればそうだな」
同僚の長老達もそれに気付いた。
「では伝えておくか」
「あの者には狐にあたってもらうか」
「狐にか」
「あの女狐に対抗出来るのは烏しかおらぬからな」
「ふむ」
長老達は考え込んだ。思案に耽る。
「確かにな」
一人が述べた。
「あの女は生半可な相手ではない」
「政治だけでなく謀略も巧みだ」
ここが八条と大きく違うのである。そもそも謀略とは無縁の政治の表の力だけを発揮すればよい道だけを歩んできたと言える八条に対して伊藤は日本の首相、そしてそれ以前の閣僚経験から政治の裏の世界にも精通するようになっていたのだ。その為謀略も巧みなのだ。彼女は単に政治家として優れているだけではなかった。一癖も二癖もある策士でもあるのだ。だからこそ各国に警戒されているのだ。
「ここは烏しかおらぬだろうな」
「決まりか」
「他にはいない」

「イスラエルはおろか連合の中にもそうはおらぬな」
「女帝の下にいる一匹の狐にここまで目を向けなければならぬとはな」
言葉が警戒するものになる。それと同時に賞賛もそこにはある。
「只の狐ではないしな」
「狐は狐でも化け物か」
「左様。日本だったか、いや中国か」
長老の一人が語った。
「狐は長い間生きると化けるそうだ」
「それは聞いておる」
これは彼等も知っていた。今の話にもそれが念頭にある。
「千年生きると尻尾が九つになる」
「あの女はまさしくそれだな」
「全くだ。九尾の狐だ」
これが伊藤が最も多く呼ばれる渾名である。その頭の切れと女性であることから彼女はこう呼ばれるようになった。九尾の狐は女であったと伝えられているのだ。
実はかっては狐はその全てが女であると言われていた。狐は陰性の動物であるとされ、女もまた陰性であるからだ。これに対して狸が陽性であるとされている。もっとも童話等における扱いは狐も狸も全く変わりがないのであるが。化けて悪戯をして人間に殴られたり懲らしめられるという話が日本には実に多い。
「今の天皇は厄介なものをその足下に置いているな」
「女帝陛下は狐を飼っておられるか」
「それも最も厄介な化け物狐を」
「こちらも烏を出すしかないな、やはり」
「うむ」
他の十一人が一人の言葉に頷いた。
「やってもらうか」
「そうだな」

「それでは」
「次の会合の時までさらばだ」
「またな」
彼等は別れた。闇の中には何も残ってはいなかった。

## 第十九部第二章　会議は踊るその五

連合とエウロパの講和会議の件は当然調停役であるマウリアにも情報は入ってきている。クリシュナータのところにもその情報は入っていた。

彼は今現在ハサンにおいてハサン国王と会談していた。これは講和とは全く別の親善、そして通商のことでの会談であったがそこにも講和会議の情報は入ってきていた。

国王との最初の会談を終え控え室に戻るとそこに補佐官が待っていた。

「どうした」

アラビア風の白と黄色、そしてアラベスクの豪奢な部屋である。彼はここで補佐官と二人になったのだ。他には誰もいない。密室での話にはもってこいであった。

「講和会議のことで」

補佐官は言った。

「進展があったのか？」

「いえ、はじまりました」

「はじまったか」

「はい」

補佐官は頷いて応えた。

「予想通りの流れになっている模様です」

「エウロパが仕掛けているのか？」

「そうです」

「ふむ」

クリシュナータはそれを聞いて考える顔になった。

「やはりな」

「カミュ外相が中心となってそれにあたっているようです」

これもまた予想通りであった。マウリアは当初からの情報収集で

そういったことを掴んでいた。だからクリシュナータもそれには特に驚きはしなかったのだ。
「そして連合は？」
彼は問うた。
「今のところは動いておりません」
「今のところは、か」
「ですが彼等も決して愚かではありませんから」
「そうだな」
それはクリシュナータもちゃんとわかっていた。むしろ彼は偏見なく、かつ公平な視点から連合を見ていると言えた。離れた場所から見るというのはかなり有利な場合があるのだ。
「いずれ動くと思います」
「問題はどう動くか、だが」
「どう動くでしょうか」
「さて」
そこまではまだわかりかねていた。
「動く人物によってそれは変わるな」
「誰が動くか、ですか」
「今オリンポスにいるのはキロモト大統領、カバリエ外相、そして八条国防長官の三人だ」
動くのはこの三人なのである。
「彼等のうち誰が動くかで。全然違う。八条長官ならば穏やかに動くだろうしカバリエ外相ならば機知に富んだものだろう」
「そうなりますか」
補佐官はそれを聞いて声をあげた。これはそれぞれの関係者の個性をよく把握している言葉であった。カバリエはその身体からは想像も出来ない程機転がきき、ユーモアのある人物である。また八条は軍人出身ながら穏やかで、過激なことはしない。そうしたことを踏まえているのだ。
「問題はキロモト大統領だな」

「彼ならばどう動くでしょうか」
「豪放磊落な人物だがな。それだけではないだろう」
「となると」
「彼に関しては何をしてくるかわかりかねるところがある。だが大きいことを狙ってくるだろう」
大きいことというところに反応があった。
「大きいことを」
「彼が動くと。どうなるかな」
クリシュナータは実はそれが楽しみでもあった。
「面白くなりそうだ」
「見てみたいですか」
「うむ」
そしてその問いにも頷いた。
「何をしてくるかな」
「とりあえず今は様子を見るしかありませんが」
「じっくり見てみるか」
「そうですね。ところで」
「何だ？」
補佐官の言葉に顔を向ける。
「ハサンも最近物騒になってきていますね」
「それか」
彼はその言葉を聞くとまずは辺りを見回した。白檀のテーブルに黒檀の椅子が二つ置かれていた。白と黒の対比がお互いを上手く引き出していた。
「まずは座るか」
「宜しいのですか？」
「落ち着いて話がしたい。いいかな」
「わかりました。では」
「うん」
二人は黒檀の椅子に座った。そのうえで話を再開させた。

## 第十九部第二章　会議は踊るその六

「そのハサンのことだがな」
「はい」
語るクリシュナータの顔は先程よりもずっと真剣味のあるものであった。
「どうやら。戦争が近い」
「やはり」
補佐官はそれを聞いてその目を動かした。
「南と西の境に戦力を集結させていっているようだ。そろそろ動員令もかかるかもな」
「緊迫しつつあるのですね」
「そうだ。理由はわかるな」
「無論です」
この補佐官もサハラのことに関して全くの無知ではない。この程度のことは把握していた。
「南はオムダーマン、そして西は」
「ティムールだ。この両国が動こうとしているらしい」
「いよいよですか」
「彼等はそれぞれサハラ西方と南方、北方を統一したがそれだけで満足する筈もない」
「ですね」
サハラ統一は全ての国にとっての悲願である。だから一つになるまで戦争が終わることはないのだ。問題はどの国がそれを果たすのかであるが。
「ハサンは双方から狙われる位置にあるしな」
「それをどうするか、ですね」
「国力の点ではハサンが一番上だ」
「はい」

これは誰もが認めることであった。
「しかしオムダーマンとティムールを合わせるとハサンよりも上になる」
「そして挟み撃ちに出来る位置にいる」
「ハサンはその両方を相手にしなければならない」
「彼等にしてみれば厄介ですね」
いささか他人事になっていたがそれは当然と言えた。マウリアであるからだ。
「そうだな。全てを防ぐことは困難だ。そしてこの困難にはもう一つ根拠がある」
「それは？」
「人材の問題だ」
「人材の！？」
「そうだ。最近ハサンで何が起こっているのかも知っているな」
「勿論です」
補佐官は答えながら後ろにある窓を見た。そこからは市街が見える。
「テロ事件が相次いでいますね」
「ハサンを支えている人物がな。次々と死んでいる」
「マハーイク副首相、ムワーウィア財務省、オームル元帥」
皆ハサンの重要人物ばかりである。
「多くの人材が失われていますね」
「ハサンにとって欠かせない人間がな。次々と」
「テロに急死、病状が急に悪化と原因は色々ですが」
「他には不慮の事故か。よくもまあこれだけ原因が多彩なものだ」
思わず苦笑して述べる。真相の予測をつけたうえで。
「しかも怪しげな原因が」
「わかるか」
「あくまで憶測ですが」
そう語る補佐官の目は鋭かった。

「何者かの。影がちらつきます」
「そうだな。誰かな」
「詳しいことはわかりませんが。ハサンの弱体化を心から願っている人物なのは確かですね」
「まるで魔王の様に狡猾で頭が回る男が」
ここに答えがあった。
「まさか」
「可能性は最も高い。少なくともそれをする理由はある」
そうであった。何かをするにあたってそれをする理由は重要なのである。これを突き止めれば誰が犯人であるかわかるのだ。利害関係を調べるというのは推理、犯罪捜査において鉄則であった。
「彼の野心の為にはな」
「恐ろしい男ですね」
「しかし見事ではある」
そう語るクリシュナータもそれは認めながらも快くは思ってはいなかった。
「側には置きたくはないな」
「はい」
「そして敵にも回したくはない。マウリアにいてよかったと言うべきか」
「その彼が動くのは何時になるでしょうか」
「表でか」
そこを問う。
「はい。何時動くか、ですね。さしあたっての問題は」
「もう暫く先だろう」
クリシュナータは少し上を見てこう述べた。そこに時間を見ているかのような顔であった。
「先、ですか」
「今すぐではないのは確かだ」
クリシュナータは言った。

## 第十九部第二章　会議は踊るその七

「だが確実に戦争になるだろうな」
「それに備えてこちらはハサンに置いてある資本を回収しますか」
「いや、それには及ばない」
「宜しいのですか？」
「あらかじめオムダーマンとティムールに話をしておくことだ」
クリシュナータは述べる。冷徹な輝きをその目に漂わせて。
「こちらの資本には手を出すな、と」
「そういうことだ。まあ向こうもわかっていると思うがな」
「左様ですか」
「そういうことだ。後は、だ」
彼はさらに言った。
「サハラが一つになった時も重要だな」
「統一された時に」
「三国のうち何処が統一するかはわからないが。我等の脅威になり得るかも知れない」
マウリアはハサンと境を接している。今までサハラ各国は中にばかり目がいき、マウリアにその目が向けられることはなかった。だが統一されたらどうなるか。それに備えておくのは為政者として当然であった。
「とりあえずは国境に兵を置き、守りを固めておくか」
「ですね」
「まずはそれからだな」
さしあたっては基礎的な備えをすることにした。無防備宣言なぞ何にもなりはしないのを彼はよく把握していた。もっとも派手に喧嘩をしている隣で何の備えもしていないというのは愚か者に他ならないが。それでもそれを主張しているのは何か魂胆がある可能性もないわけではないだろう。

「サハラも動く」
「動きに備えて我々も」
「そういうことだ」
「しかしサハラが統一ですか」
「何か違和感でもあるのか？」
「ええ、まあ」
補佐官はそれに答えた。
「今までずっと分かれていましたからね」
「サハラでは多くの興亡があった」
マウリアの者がそれを口にすると実に印象的なものがある。
「その中で彼等は戦い、そして一つになることはなかった」
「はい」
「今の様な状況になったことも何回かあったな」
これは本当のことである。サハラがまとまるのではないか、という状況が出来上がったのは一度や二度ではない。過去何度かあった。だが結局はそれに至らなかったのだ。
そこには権力闘争もあったし失敗もあった。エウロパの工作もあった。何はともあれそうした様々な事情から結局今までサハラは統一されなかったのである。
「では今回も」
「そうなるかも知れない。しかし」
「しかし？」
「私は。今回こそ出来そうな気がするのだ」
「統一が」
「その根拠は人だ」
語る彼の目は遠くを見ていた。
「人がいるからだ」
「その人とは」
「一人はメフメット＝シャイターン」
彼はまずはシャイターンの名を口にした。

「彼はそれを果たせる力がある」
「梟雄であっても」
「サハラでは英雄だからな」
「そうなりますか」
外からみればそうであっても中では違うということである。そうした意味においてシャイターンは確かに英雄であると言えた。そのカリスマこそが何よりの証拠である。
「そしてもう一人は」
「もう一人は」
補佐官は息をこらしている自分に気付いた。
「アクバル＝アッディーンだろう」
「彼ですか」
アッディーンの名もまた銀河に知られていた。オムダーマンの副大統領としてよりも若き名将として知られていたのである。これは今までの武勲からだ。
「エウロパも当分サハラに手出しは出来ない。もしかするとな」
「彼等の手で統一ですか」
「しかし天に二日はない」
クリシュナータは古い言葉を持ち出してきた。
「それがどういうことかわかるな」
「はい」
補佐官もそれはわかっていた。こくりと頷く。
「それではいずれ」
「どちらかが倒れることになるだろうな」
「英雄か梟雄か」
「どちらにしろ。サハラにおいて最大の戦いがはじまるかも知れない」
その言葉は久遠の銀河を語るものであった。銀河は永遠であってもそこにいる者達は永遠ではない。今そこにいる者達は永遠のその銀河の中で戦っていたのであった。

## 第十九部第二章　会議は踊るその八

八条達はカミュの用意した宴の中にいた。これは彼等の全く知らない別の世界の催しであった。
オペラや観劇は連合にもある。そして御馳走や贅沢も。だがそれそのものが連合にあるそれとは全く異なっていたのである。それはまさに別の世界のものであった。
「ここまで全く違うとは思いませんでしたね」
ディナーを終えた後のことである。八条は休息の為に艦に戻る時に同じ車に乗り合わせたカバリエに対してこう言った。
「そうなの？」
「はい、実は連合の皇室や王室の晩餐会と同じ感じかと思っていました」
八条は素直にそう述べた。
「ですが。全く違いました」
「確かに全然違うわね」
そしてこれにはカバリエも同意であった。
「連合で出される料理は量も多くてそして盛り付け等も豪快で香辛料もふんだんに使っているわ」
「はい」
「けれどエウロパの料理は。繊細ね」
「最初食べた時は味がないのかと思いました」
「それは私も同じよ」
「外相も」
それを聞いて思わずカバリエに問うた。
「ええ。けれど後から口の中に漂ってくる」
「そうですね」
「香りも。連合のそれみたいにあからさまなものじゃなくてほのかで」

「それでいて実にいい」
「一言で言うと気品があるように作られているわね」
それがカバリエの評価であった。
「気品ですか」
「連合の料理は。美味しさと量、そして盛り付けもワイルドなものになり易いけれど」
無論これには国によって差がある。日本のそれは繊細であるとされている。和食は全体的に薄味だと言われている。だがそれでもその日本出身である八条がエウロパの料理と比べると味が濃いのだ。
「そちらの料理でお好み焼きってあったわね」
「あっ、はい」
それに応える。
「あれは。かなり濃い味付けよね」
「確かに」
ソースの上にマヨネーズをかけて食べる。日本の料理の中ではかなり味が濃くてきついことで知られている。他にはたこ焼きも同じ食べ方である。これとビールが実によく合うのだ。
「けれどあれも料理の味付けで変わるわね」
「薄味が好きな人もいますから」
「同じものを作っても連合とエウロパじゃ味が違ってくる」
「そして盛り付けも」
「だからよ。私達と彼等じゃ味が違うのね」
それは確かにあるのだった。なおエウロパの中でも違いはかなりある。
「はあ」
「そして他のものも」
「他のものも、ですか」
「エウロパの贅沢は私達にとっては知らないものよ」
カバリエの声は忠告するものであった。
「そこで絡め取ってくることも考えられるわ」

「絡め取って」
「それに気を着けてね」
「わかりました」
　これは彼もわかっていた。だから警戒を解いてはいない。木口に言った言葉は自分自身も忠実に守っているのだ。それだけのことは彼もわきまえていた。
「貴族っていうのはね」
　カバリエはまた語る。
「腹の底が見えないものなのよ」
「歴史ではそう言われますね」
「そうね」
　貴族というものが存在しない連合においては貴族に関してリアルに語るのは困難であった。だがカバリエはそれを長い間培ってきた観察から、そして八条は歴史の知識から語っていた。どうもカバリエの方が確かな見方をしているようである。これは歳と観察から見ている為であろうか。

## 第十九部第二章　会議は踊るその九

「宴の中にも隠しているわよ」
「腹の底を」
「注意した方がいいわ。あのワインだってそこに何を含ませているかわからないから」
「ワインは何かを喋らせる為の薬ですか」
「そう」
カバリエは八条のその言葉に頷いた。
「その通りよ。わかってるじゃない」
「ええ、まあ」
アルコールが入ると人は饒舌になる場合がある。それは人の習性の一つである。もっともそうではない者もいるのだが。その為酒は宴席で使われるのだ。
「じゃあわかるわね」
「はい」
八条は頷いた。
「迂闊に酒を飲み過ぎるのも危険よ」
「ですね」
もっとも八条は酒には弱くはないが。酔い潰れた経験はない。
「エウロパのワインは幾らでも飲めるものだけれど」
ここでもその味に違いがあった。エウロパのワインは甘いものも辛いものもその味がまろやかなのだ。勿論それはわざわざ最高級のワインを用意している為でもあるがそれでもエウロパのワインが連合のそれよりも自己主張がなく、幾らでも入るのは事実であった。味が薄く感じられるのも同じであるが。
「だからこそ」
「そして一人になるのも」
「危険ね。どんな手で篭絡してくるか」

「わかりませんからね」
「とにかく相手は強かよ」
カバリエは何処か息子に対するようにして言った。
「それは忘れないでね」
「それに話も進んでいませんし」
「そうね」
彼等はそこにも気付いていた。
「それも狙いでしょうね」
「その間に情報を集めて、ですか」
「どちらにしろ彼等も必死よ」
「ですね」
それはよくわかっていた。
「何を仕掛けてきてもいいようにしないと」
「そういうこと」
カバリエの目は警戒する光を放っていた。その光が何よりの証拠であった。
「手強いから」
「手強いですか、やはり」
「連合にあるどの国とも違うわよ」
エウロパは連合ではない。そこにあるのはエウロパの外交なのである。連合の知らない外交。手強いのも当然と言えば当然であった。人は知らないものに対しては戸惑うのだから。
「どうなるかしらね」
「そしてどうするべきか」
「これから次第よ」
カバリエは八条に教えるような言葉であった。
「いいわね」
「はい」
そして八条もそれに頷いた。
「わかっているつもりです」

「長官は外交関係はしたことがあるのかしら」
「日本にいた頃外務次官だったことはあります」
八条は答えた。
「その頃に、ですが」
「じゃあ素人じゃないのね」
カバリエはそれを聞いて納得したように頷いた。
「わかったわ。じゃあいいわ」
「それも。重要だということなのですね」
「そう、経験はね。何よりも重要よ」
カバリエは経験も重要視していた。人間何かを知る為には経験も必要だからである。彼女はそれをよくわきまえていたのである。彼女自身も経験によって学ぶことが多かったからである。

## 第十九部第二章　会議は踊るその十

「外交においてもね」
「同じですか」
「そういうことよ。それに相手は只者じゃないでしょうし」
「カミュ外相ですか」
今日じかに会った。温和な笑顔であったがその下には何か剣呑なものを感じていた。
確かに笑っていたがその目の光は笑っていなかったのである。目は口程にものを言う。カミュの目もまた多くを語っていたのである。それはカミュも気付いて隠していたのであろうが八条にはわかったのだ。
「彼は。油断ならないわよ」
「そのようですね」
「おそらく今回の宴のプロデューサーだし」
「だとすると」
カミュのことがすぐに脳裏を支配した。ここで。
「彼に関する資料はもう集まっているわ」
「もうですか」
「外務省のスタッフに命じてね。集めさせておいたの」
カバリエは事前にそれを行っていたのだ。彼女も手ぶらで戦場に立つような人間ではないのだ。
「すぐにそれを見て打ち合わせをしたいのだけど。いいかしら」
「あっ、はい」
八条はそれに応えた。
「ではすぐに。お願いします」
「わかったわ。それじゃあ」
「了解です」
二人はコヨルショウキの中に入った。そしてその中に置かれたカ

バリエの部屋においてすぐに資料を前にしての打ち合わせに入ったのであった。
すぐにキロモトもやって来た。どうやらカバリエが連絡したらしい。
「カミュ外相のことだね」
「はい」
カバリエは部屋に入って来たキロモトにそう返した。
「どうやら彼がエウロパのキーマンであるようなので」
「そうだな」
それはキロモトも同意であった。すぐに三人で打ち合わせに入った。
カミュに関するデータは膨大でかつ細かいものであった。八条はそれを見ながらカバリエに対して口を開いた。
「有能であるのは事実であるようですね」
「そうね」
それは認められるものであった。家柄もあるがその昇進は只ならぬものであった。同時にその功績も見事なものであったからだ。
「見事なものです」
八条は今その実績を見ていたのだ。
「総督府があった時代には各国への調略や工作も主導していますね。戦争の後の外交交渉でもエウロパの思う通りに進めています。それも常に」
「そうね」
キロモトもカバリエもそれに頷いた。
「事務処理能力も優れていて戦略も持っているようね。ただ」
「ただ！？」
八条はカバリエのその言葉に顔を向けさせた。
「人間としては褒められた人物ではないようね」
とりわけ連合の者にとっては、である。
「尊大で女性に目がなくことあるごとに賄賂まで要求する」

カバリエは露骨に嫌悪感を示してこう述べた。
「しかも私達を露骨に見下す発言ばかりで。ここまで嫌な人間もそうはいないわね」
「確かに」
八条はその言葉に頷いた。
「だがそこには一定のモラルがあるようだな」
「モラル！？」
「うん」
キロモトは八条の問いに返してきた。
「例えば賄賂を取っても依頼されたことが失敗すれば返している」
「もっとも殆ど成功していますが」
カバリエが付け加える。彼の工作や仕事には殆ど失敗がなかった。これは実に見事なものであった。
「そして女性に対しても既婚者や婚約者を持っている者には声すらかけない」
「それはわきまえているということなのですか」
「おそらくはな」
キロモトはそう述べたうえで八条に顔を向けてきた。
「どうやら彼なりのモラルがあるらしい」
「はあ」
「これもエウロパ貴族の特徴かな」
「フランスの大貴族の出身ですしね」
カバリエは今彼の出自に関するデータに目を向けていた。
「貴族意識の塊であるようです」
「エウロパ貴族の中で、でもですか」
「ええ。それもかなり」
「しかも生活を楽しむタイプの人物だな」
キロモトは人となりに関するデータを見ていた。
「美食家で観劇をこよなく愛するようだ」
「成程」

「なおかつそれへの批評も好むようだ」
「そうですか」
八条はそれを聞いて少し嫌そうな顔をした。彼は批評家という存在はあまり好きではなかったのだ。
「そしてエウロパのものが最もいいと確信しているわね」
カバリエはまた言った。

## 第十九部第二章　会議は踊るその十一

「信仰に近いまでに。彼のアイデンディティにまでなってるようね」
「そこまでですか」
「我々への強烈な偏見はそれへの裏返しだろうな」
自分の所属するものに強烈な思い入れがあるからこそ他の存在を否定する。人間心理としては非常によくあることであった。ここには優越感と劣等感も混ざる場合もある。若しかするとカミュは連合に対して劣等感を持っているのかも知れない、八条は調べながらそう思った。
「あの」
そして彼はそれに言及することにした。声をあげる。
「彼の我々への強烈な偏見ですが」
「それか」
「そこに何かあるの？」
「はい。これはあくまで私の憶測ですが」
そう断ったうえで話した。
「彼は。我々を恐れているのではないでしょうか」
「我々をか」
「はい。だからこそあそこまで強烈に憎悪している」
彼は自身の考えを述べた。
「そう思われるのですが。如何でしょうか」
「ふむ」
キロモトはそれを聞いて考える顔になった。
「恐れか」
「そして劣等感です」
さらに述べた。
「強烈な偏見はそれの裏返しのように思えるのです」
「それはあるかもね」

カバリエはそれに頷いた。
「やっぱり連合とエウロパじゃ国力にあまりにも差があるから」
「はい」
「エウロパ全てを合わせても我々の中にある一国にすら勝っていない場合があるし」
日米中露等である。エウロパから見ればこの四国はまさに巨人である。
「恐れるのも道理ね」
「それはあるかと」
「そしてそれはエウロパだけではないだろうな」
「といいますと」
八条もカバリエもキロモトのその言葉に顔を向けさせた。
「我々を脅威に感じているのはエウロパだけではないということだ」
「ではマウリアやサハラ各国も」
「口には出さないがな」
キロモトは述べた。
「脅威に感じない筈もない」
「我々は彼等とことを構える意図はありませんが」
そもそも連合は満ち足りているのである。無限の開拓地があり、銀河のかなりの部分を占めている。そしてさらに広がっていこうとしている。欲しいものは開拓で得られるのだ。何かを得る為の戦いをしなくてよい勢力なのである。
「それは関係ないな、この場合は」
「ただ我々がここにいるだけで」
「そういうことだ」
キロモトは言った。
「それだけで脅威なのだよ」
「よくある話ですね」
カバリエがそこまで聞いて述べた。
「自分達にその意図がなくとも巨大なだけで脅威と感じられる」

「そういうことだ。我々は四兆」
まずは人口であった。人口はやはり国力に対してかなりの部分を占めるのである。これはこの時代においても変わることはないのである。
「総生産も全人類の九割以上か。あまりにも巨大だ」
「はい」
今現在全人類は四兆五千億であると言われている。そのうちの九分の八が連合にいる。しかも総生産の九割以上が連合のものだとするならばこれはもう圧倒的なものであった。
「食糧生産も資源も。全人類の殆どだな」
「はい」
カバリエと八条はそれに頷いた。
「考えてみてくれ。そんな勢力が隣にあったらどうだ？」
「あらゆる面において深刻な脅威ですね」
まず八条が述べた。
「何時何をされるかわかったものではありません。彼等が平和を愛する勢力だとしても」
「そうだな。では私が言いたいことはわかるな」
「はい」
「ええ」
二人はそれに頷いた。
「我々はその存在だけで他の国家にとっての脅威となっているということだ」
こうした事例は歴史的に幾らでもある。歴代の中国王朝の脅威を受け続けていた朝鮮半島がそうであるしアメリカの動向に脅かされてきたカリブ海諸国もそうである。もっとも彼等は中国やアメリカの意にそぐわぬ行動を取ればすぐに軍隊を向けられ、政権交代位はやらされていた。連合はそういうことはしないが同じ様な存在だとみなされているのである。気付かないのは自分達だけである。案外自分のことには気付かないものなのだ。これは多くの者に言えるこ

とである。人間は鈍感な一面も存在しているからだ。

## 第十九部第二章　会議は踊るその十二

「脅威ですか」
「友好国であるマウリアにしても」
「だからこそ彼等は友好的であり続ける」
逆説的だが事実であった。脅威となる相手とは手を結ぶという解決方法もあるのだ。マウリアはそれを採り続けているということなのである。賢いと言えば賢い。それに度胸も必要である。それを果たせるマウリアという国の凄みがそこにはあった。
「もっともサハラはそれよりも自分達のことで手が一杯のようだがな」
「それは確かに」
これは千年前から同じである。連合がサハラでのことに口出しをしたことはない。ただそれぞれの国と外交交流があるだけである。連合にとってはサハラは旨味も何もない場所なのだ。二十世紀のアラブの様に石油があるわけでもない。下手に足を突っ込めば大火傷どころではない。だから多少の企業活動だけでそれも安全な場所に限っている。何かあればすぐに逃げ出す用意はいつもしている。連合にとってはサハラとはそうした存在でしかないのである。実際に戦乱が激しくなり全面的に撤退したケースも数多くある。今の活動地域にしろハサン王国に集中している。間違ってもエウロパの勢力圏である総督府やそこの近辺には進出していなかった。戦乱の多かった西部や南部にもほぼいないと言っても過言ではなかった。
「彼等ですらそうならば」
キロモトはまた言った。
「長い間対立してきたエウロパはどうかな」
「言うまでもない、ということですか」
「そういうことになる。カミュ外相が我々を恐れるのも道理か」
「偏見は恐れの裏返しと」

「本人がそれに気付いているかどうかは別としてな」
おそらくカミュはそれには気付いてはいない。そしてそれに気付かないまま連合と対しているのである。ここに大きな問題があるのだ。
「それでだ」
キロモトはまた言った。
「我々はこの怯えを突いていくべきだと思うのだが」
「カミュ外相の怯えを」
「また言うが彼は非常に偏見の強い人物だ」
「はい」
人間的には多くの問題があるが今回特に問題となるのはそれであった。
「そこで攻めていくか」
「その偏見を逆手にとって」
「何かいい案はあるか」
「申し訳ありませんがまだ」
カバリエにも八条にも思い浮かばなかった。
「そうか。だが早いうちに考え出してくれよ」
「わかっております」
あまり時間がないのは彼等も認識していた。すぐに返す。
「それをどうしてるかですね」
「そうだ。そして」
彼等の話は続いた。その日はそのまま朝まで打ち合わせが続いた。少し休んだ後でまたエウロパ側が用意した宴に出ることになった。

## 第十九部第二章　会議は踊るその十三

「こうパーティー続きだと」
「パーティーには慣れているんじゃないのか？」
八条は一旦スサノオに戻っていた。そこでぼやく木口にこう言った。実は木口はパーティーが趣味の一つなのだ。連合ではパーティーは盛んである。アメリカからはじまった風習であり、そこに各国の宴席が混ざり合って形成されたものである。日本でもパーティーはよく行われる。当然そこには酒に料理、そして歌と踊りが付き物である。
「慣れてはいますけれどね」
「では問題ないだろう」
「いえ、それが」
問題があるというのだ。
「あれはパーティーじゃありませんよ」
「違うのか？」
「違いますよ。あんな形式ばって無駄に飾ったのはパーティーじゃありません」
「儀式か」
「そうですね。皇室の宮廷晩餐会と同じですよ」
この場合は日本の皇室のである。ここに呼ばれることは非常な名誉とされている。各国や中央政府の首脳達もこれに呼ばれることを楽しみにしている者が多い。だがそれを仕切るのは宮内省でありあまりにも形式に偏重し、そしてあれこれと規制が多いことでも知られている。呼ばれることは名誉であるが参加するのは非常に疲れることもで知られているのだ。
「あれと同じか」
「私にとってはね」
なお木口は呼ばれたことはない。ただ見ているだけである。

「あそこまではないと思うがな」
「そうですかね」
「私から見ればだが」
あくまで八条から見れば、である。これが重要であるのだが。
「それに何か違和感があるんですよ」
「違和感」
「そうです。何かわかりませんがね」
彼は顔を顰めながら述べた。
「エウロパの連中を見ていると。それを感じるんですよ」
「どういうものをだい？」
八条は気になってそれを問うた。
「同じ様に見えるっていうか。何故でしょうね」
「同じ様にか」
「妙ですよね。同じ顔の人間なんていないのに」
「ふむ」
その言葉に八条も首を傾げさせた。
「確かに妙だな」
「そうでしょう？何故なんでしょう」
それは木口にはわからなかった。八条も今はわからなかった。
「おかしいですよね」
「まあここはエウロパだからな」
実は八条のこの言葉に重大なヒントがあったが彼はまだそれには気付かなかった。
「何もかも違っている。それかもな」
「ですかね」
「何はともあれそろそろ時間だぞ」
「はい」
木口は彼の言葉に頷いた。
「行こう」
「わかりました」

二人は部屋を出て艦内の車で桟橋に向かう。そしてそこから車で今日の宴の場に向かうのであった。

## 第十九部第二章　会議は踊るその十四

今日の宴は音楽を聴きながらの昼食会であった。八条達の前には一品一品ずつ運ばれて来る贅沢な、見たことも聞いたこともないような料理とワイン、そして複雑なマナーがあった。後ろには流麗なクラシックがあった。

場所はガイアにある宮殿の一つであった。コバルトブルーを基調にしており、絹のカーテンは白、そして珊瑚や真珠で飾られていた。それを見るとどうやらこの宮殿は海をイメージして建てられたらしい。

今彼等がいる宴の場もそうであった。絨毯はマリンブルーであり、演奏を奏でる音楽家達も青いタキシードとドレスに身を包んでいる。シャングリラは青水晶であり、まだ灯りはないが青い透明な光を放っていた。それがここにいる者達をまるで海の中にいるように思わせていた。

「如何ですか、長官」

あえて銀河語を使った言葉が八条にかけられてきた。それはカミュのものであった。

「今日の催しは」

「そうですね」

見ればカミュは笑っていた。笑ってはいたがそれが仮面であることは明らかであった。八条は慎重に言葉を選びながらそれに応えた。

「海の中にいるようです」

「あえてそれをイメージしてみました」

カミュはその言葉を聞いてスッと笑った。

「ここはオケアノス宮殿と言いまして」

「ティターン神族の海の神ですね」

「そうです。その神と海そのものをイメージしました」

「ポセイドンではなく」

「海の神と言っても一人ではありませんよ」
カミュはそう応えて笑った。
「複数の神がいるのです。ギリシア神話では」
「ふむ」
「太陽にしろヘリオスがいればアポロンもいる。彼等は同時に同じ世界に存在しているのです」
これはギリシア神話の特徴の一つである。オリンポスの神々の時代であってもアポロンが太陽神であると共にヘリオスもまた太陽神である場合があるのだ。月に関しても同じであり、アルテミスとセレネが同じ時代にいる場合もある。また両者が混同されている場合もあるのだ。
「同じ世界に」
「はい。言い換えれば同じ時代です」
カミュは述べる。
「こうしたことはそちらではもっとある筈だと思いますが」
そう言いながら八条を見据えてきた。
「連合では。どうなのでしょうか」
「同じ神話体系であっても同じものを司る神が複数存在することは確かにあります」
それは認めた。
「ラーとホルスにしろ」
連合ではこのエジプトの古い神々も同時に信仰されているのだ。ラーが昔からの年老いた太陽神であり、ホルスが若い太陽神であるとされている。
「左様ですか」
「はい、それを考えるとオケアノスとポセイドンが同じ時代にいても特に差し支えはないのですね」
「そういうことですね。そして」
「はい」
カミュは話題を変えてきた。

「今回の料理は。如何でしょうか」
「料理ですか」
今回のメインディッシュは兎のステーキであった。オリーブで焼き、ソースは白いまろやかなものである。
「今回は我がフランスよりとりわけ名のあるシェフを呼びましてね」
我がフランス、と述べたところでカミュは何時になく言葉尻を上げた。

## 第十九部第二章　会議は踊るその十五

「他のものとはまた違いますよ」
見れば彼の周りのエウロパの者達の多くがその言葉に沈黙を守っている。どうやらフランス以外の国々の出身者であるらしい。この時代においてもフランス人達は美食を追い求め、自分達こそその王道だと自認しているようである。イタリアやドイツ、スペインといった欧州で他に美味しい料理を持っている国は二流だと思っているようなのだ。ましてや永遠のライバルイギリスのそれは。言うまでもないことなのだろう。
「是非お召し上がりを」
「わかりました」
八条はそれに応えてフォークとナイフでその兎の肉を口に入れた。だが最初は味が全くしない。
（またか）
彼はそれを口の中に入れて心の中で呟いた。こうしたことはエウロパの貴族の食事では常なのだ。見ればキロモトやカバリエ達も慣れてきたようである。表情が変わることはなかった。　一口飲み込んだ後でその味と風味が口の中にほのかに漂う。そのハーモニーこそがエウロパの料理の秘密なのであった。
「この兎は素材も特別でしてね」
カミュは八条が食べ終えたのを確認してから述べた。
「わざわざ特別な養殖場で育てた兎なのですよ」
「特別な場で」
「そうです。餌も育てる飼育員も厳選してね。ブロイラーの様なものではなく」
連合ではブロイラーは正直普通に食べられる。飼育は二十世紀のそれとは全く違っており、詰め込みでもなければ普通に牧場で自然に作られた穀物を食べて成長している。二十世紀の感覚で言うなら

ば地鶏のそれに近くなっている。だが大量飼育なのでブロイラーと呼ばれているのだ。
「少数を厳選して育てているのです」
「そうなのですか」
「連合でも兎は食べられますよね」
「はい」
八条は答えた。実際によく食べられている。鳥に似た味で癖がなく食べ易いからだ。また兎は食べられるだけではなく愛玩用としても飼われている。その可愛らしい姿がこの時代でも人気なのである。
「ですが。あえてこの兎は特別だと申し上げておきましょう」
「はあ」
彼は自慢気なものを帯びさせてきた。
「この上ない最高の素材です。飼われながら自然に育てられた」
そこが一番の自慢のようである。
「その飼料も。厳選されたものです」
「飼料までですか」
「人間と同じですよ。食べるものが違えば中身も変わる」
やんわりとワイルドな食事が多いとされている連合の者達に皮肉を仕掛けてきた。
「兎もまた。飼料により味が大きく変わるのです」
「そうなのですか」
「左様、そして兎だけではありません」
その話は続いた。カミュは波に乗ってきたのかにこやかな顔になり饒舌になってきた。
「このソースも調味料もまた。厳選された調一級の品々です」
「そこまで素材を選ばれたのですね」
「料理するシェフも調理器具も。何もかも選ばれたものですよ」
傲慢なまでに八条達に述べるのだった。
「そしてその選ばれたもので作られた料理を食べる」
「如何ですか、人類の最高の食事は」

「人類の、ですか」
「少なくともここまで選りすぐられたものはないと思いますが」
カミュははっきりと言ってきた。連合のそれよりも上であると。
その自信はどうやら絶対のものであるらしい。そしてそれを隠そうともしていなかった。

## 第十九部第二章　会議は踊るその十六

「確かにこの料理は素晴らしいです」
八条は少し間を置いてから述べた。
「これ程までのものは」
「召し上がられたことはないでしょう」
「連合にもあまりありませんね」
「あまり！？」
それを聞いたカミュの顔が強張った。だがそれはすぐに隠した。
「味は一つではありません」
八条は反撃に転じてきた。
「そして美味しいものも一つではありませんから」
「それはどういうことでしょうか」
カミュは自分が守勢に転じてしまっているのを認識していた。そのうえで反撃を仕掛けてきたのだ。
「十人十色というものですよ」
八条はあえて多くを語らなかった。そしてそのうえでこう述べた。
「人それぞれです」
「それぞれ、ですか」
「はい。確かにこの料理は素晴らしい」
それは認めていた。
「後ろの音楽も素晴らしい」
先手を打ってきた。音楽についても高く評価してみせる。
「宮殿も演出も。ですがそれだけではないのではないでしょうか」
「どういうことでしょうか」
「カミュ外相」
八条は彼に顔を向けてあらためて声をかけてきた。
「今まで我々は何かと招待を受けてばかりでした」
「何、些細なことですよ」

カミュはわざと度量の大きなふりをしてみせた。
「御客様をおもてなしするのは当然のことです」
例えそれが嫌な客であったとしても。言外にはそう含んでいた。
「それでですね」
八条はここでキロモトとカバリエをチラリと見た。目配せをしたのであった。
二人もそれに対して目で応えた。そのうえで話をはじめた。
「今度ですが」
「はい」
「我々がおもてなしをしたいのですが」
「何処でですか？」
「オリンポス星系のウラノスです」
「ウラノスで」
ギリシア神話において最初に天空を司っていた神である。ティターン神族の父でもある。
「ウラノス！？まさか」
カミュはそれを聞いて思わず失笑してしまった。
「ウラノスについては御存知ですよね」
「ええ」
八条は平然とした様子で返す。
「それが何か」
「本当にあそこで何かをされるのですか？」
「そうですが。何か不都合でも？」
「いえ、別に」
彼は急に不機嫌な顔になってきていた。
「あそこで何かをされても別にいいですがね」
「宜しいのですね」
「ええ。何かをするのが可能ならばね」
言葉の中に少し毒を含ませてきた。
「どうぞ御自由に」

「わかりました。では」
こうして連合はウラノスを借りることになった。だがそれは一先置かれて宴は続いていた。しかし話は進まなかった。エウロパ主導のままただ宴が続くだけであったのだ。
「されど進まず、か」
八条は帰りの車の中でこう呟いた。隣には木口がいる。
「これが狙いなのだろうな、彼等の」
「その間にこちらの情報を収集する」
「弱みも含めてな」
「それで長官」
「何だ？」
八条は彼の言葉に顔を向けた。
「ウラノスの件は」
「ああ、あれか」
八条はその言葉に顔を向けさせた。
「何か御考えが？」
「ないと思うか？」
「いえ」
木口はそう問われ首を横に振った。
「おありですね」
「そうだ。後で細かい話はキロモト閣下やカバリエ外相とお話する」
「わかりました」
「向こうがそうしてのらりくらりとやるつもりならこちらにも考えがある」
彼は正面に顔を向けてこう言った。その顔は真剣なものであった。
「押さば引け、引かば押す」
そのうえで呟く。
「そういうことだ」
「はあ」
「少なくともカミュ外相の鼻をあかすことはできるかもな」

「あの御仁はかなりの食わせ者ですね」
「わかるか」
「同時に嫌な奴でもあります」
木口の言葉はこっちに重点が置かれていた。
「あそこまで嫌味な人間ははじめて見ました」
「おいおい、そこまで言うのか」
八条はその言葉に苦笑した。そして木口の方に顔を戻してきた。
「また極端だな」
「そう思っているのは私だけではないと思いますが」
「ううむ」
「偏見の塊でプライドが高くて高慢で」
木口の言葉は続く。
「しかも無類の女好きで貪欲だというではないですか。人間としては最低ではないですか」
だが美男子であり能力も備えている。確かにこれ以上はない程嫌な人物である。性格がいい人物が有能ならば好まれる場合も多々にしてあるがその逆だと全ての者に嫌われる。そういうものである。

## 第十九部第二章　会議は踊るその十七

「連合でもあんな御仁はおりません」
「エウロパ特有か」
「もっとはっきり言うならば貴族だからですね」
つまりカミュという人間はエウロパの貴族社会だからこそ出来上がる存在なのである。存在というものは環境が作り上げるものなのである。
「高慢な貴族です」
「ふむ」
「ですから長官には是非お願いします」
「私にか」
「はい。あの御仁の鼻をへし折って下さいね、絶対に」
「わかった。ではそうしよう」
八条はその言葉に頷いた。
「そしてこちらの思う通りに話を進めよう」
「はい」
彼等はそんな話をしながらスサノオに戻っていた。同じ頃カミュは自身の宮殿でくつろいでいた。
「お疲れ様でした」
「うん」
使用人やメイド達の言葉に応えて自身の部屋に入り安楽椅子のうえで優雅にワインを飲んでいた。シックな雰囲気の落ち着いた部屋であり椅子は樫の木、部屋着はシルクであった。そしてサファイアのグラスの中に白いワインをたたえていたのであった。
「今日は遅い。もう休んでくれ」
彼は側にいる使用人達に対してこう言った。
「ですが」
「今まで私を待っていてくれたのだろう？疲れている筈だ」

「はあ」
連合の者には決して見せなかった優しい顔と声である。
「休んでくれ。いいな」
「わかりました。それでは」
「うん」
こうして彼等は休むことになった。実はカミュは使用人やメイド達にとっては優しく、思いやりのある主人である。彼はエウロパの者に対しては平民に対しても優しく、思いやりがあるのである。確かにエウロパ貴族主義においてであるが少なくとも彼等を無闇に蔑視したりはしていない。
彼は一人になった。そして呟いた。
「猿共が」
憎悪を満たした目でこう呟く。窓の向こうにある軍港に目をやっていた。
「精々今のうちにそこで勝利者を気取っているがいい」
連合に向ける目はこのうえなく侮蔑と偏見に満ちたものであった。
「そのうち足元をすくってやる。その時を楽しみにしていろ」
そう言い終えて休息に入った。朝は少女のメイド達に起こされた。
「御主人様」
「ん、もう朝か」
少女の声に気付き目を開ける。朝の眩い光が目に入って来る。
「そうです、起きて下さい」
「ああ、おはよう」
挨拶をしてベッドから起き上がる。そして男の使用人達により身支度が整えられる。まずは乗馬をした。
それで少し汗を流すとシャワーを浴び朝食だ。落ち着いた装飾の食堂でオムレツにトースト、そしてデザートにチーズ、ミルクといったメニューである。
「今日の朝はオムレツか」
「はい」

若い眼鏡をかけた執事がそれに応える。
「御気に召されませんか」
「私の好みは知っている筈だが」
カミュはその言葉に笑みを向けてこう返した。
「オムレツは好きだ」
「はい」
「そのかわり。味には五月蝿いぞ。わかっているな」
「シェフの自信作でございます」
その言葉に応えてであった。
「ほう、自信作か」
「ですから。是非お召し上がり下さい」
「わかった。それではな」
「どうぞ」
彼はフォークとナイフを手に取りそのオムレツを切り口に入れた。
優雅な手つきであった。

# 第十九部第二章　会議は踊るその十八

口の中に入れ噛む。そして味わう。
「如何ですか？」
「うむ」
一呼吸置いてから執事に答える。
「美味いな」
「シェフも喜びましょう」
「だがこれは普通のオムレツではないな」
「といいますと」
見たところよくあるプレーンオムレツである。何の変わりもない。
「これは。中に面白いものを入れている」
「中に、ですか」
「チーズだな」
カミュは述べた。だが外見は至って普通のプレーンオムレツである。その中も。
「チーズを。僅かに忍ばせたか」
「そうなのですか」
「それが微妙な隠し味になっている。面白いな」
「左様ですか」
「シェフに伝えてくれ。実にいい隠し味だとな」
笑って言う。
「はい」
「こうした工夫はいい。いいものを生み出す」
彼はそのオムレツを食べながら述べる。
「よりよいものをな。これからも期待していると伝えてくれ」
「畏まりました」
食事を終えると歯を磨き宮殿を出て外務省に向かうのであった。
外務省に入るとすぐに来客があった。

「モンサルヴァートエウロパ元帥がおいでです」
「モンサルヴァート元帥が」
彼はそれを聞きその目を顰めさせた。
「彼がか」
「はい。どう為されますか」
若い女性のスタッフが彼に問う。
「御会いになられますかそれとも」
「今はさしせまった仕事もないしな」
実は理由はそれではないのだが表向きはそうした。
「会おう。こちらに通してくれ」
「わかりました」
カミュはモンサルヴァートと面会の場を持った。彼が面会の間に着くと暫くしてモンサルヴァートが部屋に案内されてきた。
「ようそこ」
カミュはにこやかにエウロパ元帥の軍服を身に纏う彼に挨拶をした。
「朝早くから御疲れ様です」
「有り難うございます」
モンサルヴァートは敬礼で返礼をした。
「御忙しいとは思いますが御邪魔しました」
「何、今は丁度時間がありまして」
笑みで作った理由を述べた。
「それに閣下が来られるとは余程大事なことと思いまして」
モンサルヴァートの名声はエウロパにおいて第一のものとなっていた。ニョルズの戦いにおいての奮戦はエウロパ市民に好意を以って迎え入れられているのである。言うならば英雄だ。しかし本人はそれを意識するというところがなかった。そういうところも市民達の人気の理由ともなっていた。
「何の御用件でしょうか」
「はい、それは」

「まあ御茶でも飲みながら」
丁度そこにコーヒーが運ばれてきた。
「御話しますか」
「はい」
まずはテーブルに着いてから当のカミュの言葉通りコーヒーを手にしながら話をはじめるのであった。
「閣下はこちらでしたな」
コーヒーは二種類あった。一つはブラック、もう一つはウィンナーであった。カミュはモンサルヴァートに対してウィンナーを勧めたのであった。

# 第十九部第二章　会議は踊るその十九

「あっ、どうも」
実はそれは彼の好物であった。それを言わずとも出されて少々驚いているのである。
「閣下が甘いものが御好きだと聞きましたので」
「左様ですか」
だが実は彼についても情報を持っているのだ。モンサルヴァートはそのことに警戒感を抱いた。だがそこまでの卓越した情報収集能力がなければ今の難局は乗り越えられないとも思った。
「絶望の様に黒く、地獄の様に熱い」
カミュはコーヒーを手に語りはじめた。悠然と微笑んでいる。
「恋の様に甘く、天使の様に美しい」
「タレーランの言葉ですか」
「失恋の様に苦い」
だがカミュはそこに付け加えた。
「タレーランの言葉も入っていますが私のコーヒーに対する考えです」
「思い入れがおありなのですね」
「コーヒーは人に想われるものです」
彼は語った。
「恋人の様にね」
「成程」
「だからこそ愛されている。常に側に置きたくなる」
「そして飲みたくなると」
「そういうことです。実は私はコーヒーに砂糖やクリープを入れない場合も多いです」
カミュのにこやかな言葉に対して問う。
「それは何故ですか？」

「時として。そのままの味を楽しみたくなるのですよ」
悠然とした笑みのままそう述べた。
「コーヒーはそのままですと実に苦い」
「はい」
これはもう言うまでもない。
「ですが。そこにこそコーヒーの本来の姿があるのです」
「本来の姿ですか」
モンサルヴァートはコーヒーに口を添えていた。そしてクリームの中に隠れているそれを少し飲んだ。それはクリームの白によりブラウンになっていた。コーヒーのブラウンであった。
「そう、何もない生まれたままの姿が」
カミュもまたコーヒーを口に含んでいた。優雅な飲み方であった。
「そこにはあります」
「そうなのですか」
「私もウィンナーを飲むことは多いです」
彼は言う。
「ですが同時にこうしてそのままのものも飲みます。当然他の形のものも」
「どれが最もよいのですか？」
「どれもまた。素晴らしいものです」
そしてそのそれぞれに見るべき価値を見出していた。
「ワインから作られたカクテルがどれも素晴らしいように」
「ふむ」
「ですがワイン本来を飲みたくなる時もありますね、カクテルを愛してはいても」
「確かに」
モンサルヴァートもワインもカクテルも飲む。だからそれはよくわかった。
「コーヒーの本来の姿は。実に苦いものです」
カミュの言葉はそれでいていとおしさを見ているものであった。

「しかしその中に甘さがあります」
「甘さが」
「はい、微かにコーヒー本来の持つ甘さが。人を惹き付けて離さない魅力と申しましょうか」
「だからこそ飲むのだと」
「そうなのです。我々は苦さの中のその甘さに惹かれているのです」
どうやらそれはコーヒーそのものが持っている甘さよりもその魅力のことを言っているらしい。
「この世界と同じでね」
「世界と」
「閣下はそれを私に語りに来て頂いたのではないですか？」
「世界を」
「そう、エウロパに関して。違いますか？」
「外相にお伝えしたいことがあるのは事実です」
彼はそう返した。
「私に」
「そうです、ウラノスを連合に任せられると御聞きしまして」
「ええ」
カミュはその問いに頷いた。
「それが何か」
「やめられた方がいいです」
モンサルヴァートは言葉をオブラートに包むことなく率直にそう述べた。

## 第十九部第二章　会議は踊るその二十

「またそれは何故ですか？」
「提案してきたのは連合の八条防衛長官ですね」
「そうですが」
「彼ならば余計に。止められた方がいいです」
「おかしなことを仰る」
カミュはその忠告を聞いてすっと笑みを浮かべた。
「ウラノスは。何もない惑星ですよ」
オリンポスでは誰も住んではいない。資源の発掘に使われているだけである。人なぞ一人もいはしないのだ。
「あんな場所で何が出来るというのですが」
「確かに我々には出来ません」
モンサルヴァートは連合の者を明らかに軽く見ているカミュに対してこう返した。
「ですが彼等には可能です」
「まさかあの惑星を忽ちのうちに人が住める惑星にするとでも？」
カミュもまた連合の技術のことは認識していた。その惑星開拓の技術もよく認識していた。しかしそれでもウラノスを短期間で改造出来るとは思っていなかったのだ。
惑星開発及び開拓には綿密な計画と技術、そして費用が必要だ。だからこそそれに長けた連合においても中央政府が必ず関わることになっている。各国の政府がそれぞれの意図でするにはかなりの制限があるのである。それだけ重要であり、また計画が必要なものであるからだ。
そして時間もかかる。地球の様な惑星ならばよいが冥王星の様な惑星ならば小型の人口太陽を置いたり、海や大陸を作り、そこに植物や動物を持って来なければならない。だからこそ必ず中央政府が関わるのである。中央政府開拓省は連合になくてはならない省庁な

のである。
「それは幾ら何でも無理でしょう」
「何も人が住めるようにする必要はありません」
「彼等もそんなことはしませんか」
「あそこで宴が開かれればそれでいいのですから」
「まあ無理でしょうね」
カミュは明らかに連合を甘く見ていた。それは偏見から来るものであった。
「大したことはできませんよ。ここで我々が行っているようなものは」
「そうでしょうか」
「だからこそあの惑星を任せたのです」
彼は述べた。
「彼等に何が出来るのか。まあ見てやりましょう」
「連合がここまで来れたのにはそれなりに理由がありまして」
モンサルヴァートはそれでも言った。
「彼等の軍事技術はただ兵器だけではないのです」
「ほう」
「基地を築き上げる能力も卓越しています。今やアルテミスは彼等の牙城です」
連合とエウロパの大規模な戦いが行われた場所であった。連合はここを制圧するとすぐに自分達の軍事拠点としたのであった。彼等はここをニーベルングに次ぐ第二の拠点として用いたのである。
「我等が使用していなかった未開発の惑星や衛星にも軍事基地を多数置いております」
「それをウラノスにも置くと」
「流石に軍事基地はないでしょうが」
「面白いですね、実に」
彼は真剣に取り合ってはいなかった。
「あの橋にも棒にもならない惑星がどうなるのか。見たいものです」

「後悔されることになろうとも」
「何、所詮は数が多いだけの連中です」
結局彼の連合に対する評価はそれであった。
「猿知恵を出してくるだけかと」
「あまりそうして相手を軽く見られるのは」
「心配無用ですよ」
しかしカミュはモンサルヴァートの忠告に取り合おうとはしなかった。
「本部長、何故人間の肌に違いがあったのか御存知ですか？」
「えっ、いえ」
モンサルヴァートはカミュが人種論者であることも知っていた。少なくとも極端に混血が進んでいる連合においてはとうの昔に消え去った過去の遺物だがエウロパにはまだあったりするのだ。それは何故か、エウロパが純粋な白人しかいないからである。連合においては純粋な白人も黄色人も黒人もアボリジニーも殆ど存在しなくなってしまっているがエウロパは違うのである。ここに大きな差があった。
「白人は人類を正しく導き、指導する為に作り出されたのですよ」
十九世紀末から二十世紀前期に世界を覆ったこの論理はエウロパでのみ生きていたのである。化石がまだ存在しているという見方が連合ではされている。
「連合の者達は。かつては我々の植民地であります。そのうえ混血までしております」
「それが何か」
モンサルヴァートはカミュに問うた。

## 第十九部第二章　会議は踊るその二十一

「それが全てです。彼等は所詮我々とは比べるべくもない存在なのです」
　人種論の根拠は偏見である。カミュもまた偏見に基づいて連合の者達を見ていた。だがこれは決して優越感から来るものではないのだ。カミュ自身は気付いてはいないが。
「所詮は猿ですよ、本部長」
　カミュは彼等を侮蔑する声でモンサルヴァートに対して言う。
「猿のすることです。大丈夫です」
「果たしてそうでしょうか」
「ええ」
　モンサルヴァートは忠告はしたがそれは決して聞き入れられないものだとわかった。だがそれでも言おうとする。
「しかし」
「まあ放っておいていいです」
　だがカミュが先に動いてきた。彼の言葉を遮る。
「何をしても。結局は同じですから」
「そうですか」
「軍事基地を築くことは許しませんがね。それ以外ならば好きにさせます」
「左様ですか」
「はい」
　カミュは頷いた。やはり連合の者達を甘く見ていた。もっと直接に言えば舐めきっていたのだ。
「御安心を」
「わかりました。それでは」
「ところで」
「はい」

話が終わったので帰ろうとしたがそこで呼び止められた。
「今日のコーヒーは如何でしたか？」
またコーヒーに話を戻してきたのだ。
「今日のですか」
「ええ、ウィンナーは」
「そうですね」
美食家として知られるカミュである。その名声にかけて出されたコーヒーについて尋ねてくる、それがどういうことなのかモンサルヴァートにもわかっていた。彼は勝負を挑んできているのだ。
「御見事です」
「そうですか」
カミュはその言葉を聞いてその整った顔に笑みを作った。
「コーヒーもクリームも。絶品でした」
「ふむ」
「これ程までのものはそうはないでしょう。私はコーヒーには特に五月蝿くはないのですが」
一応はそう述べる。
「有り難うございます」
「ですが」
「ですが。何でしょうか」
「ここで外相に述べさせて頂きたいことがあります」
彼は言った。
「それは？」
「コーヒーは我々だけが飲んでいるわけではないということです」
「それは知っていますが」
連合でもサハラでも飲まれる。マウリアでは殆ど飲まれることはないが人類社会全体に広がっていることは事実だ。茶とコーヒーは人類の友なのだ。
「連合のコーヒーもまた美味だと聞いております」
「何を仰るかと思えば」

カミュはその言葉を聞いて首をゆっくりと横に振って笑った。
「確かに連合にもコーヒーはあります」
「はい」
「しかしそれは紛いものに過ぎません」
「紛いものですか」
「そうです。全てはこのエウロパにあるのですよ。連合にあるのは数だけです」
あくまでそうとしか見ない。
「そんな連中に。何が出来るのやら」
「そうですか」
結局彼に伝えることは出来なかった。戦場で直接感じた連合の脅威のことは。だが彼はそれでも諦めてはいなかった。
車の中に乗り込むと元帥府には戻らなかった。運転手に対して別の場所に向かうように言った。
「どちらまでですか？」
「首相官邸だ」
彼は言った。
「ペーチ首相とお話がしたい。いいな」
「わかりました。では」
「うむ、頼むぞ」
こうして今度はペーチの下へと向かった。彼は諦めてはいなかったのだ。
「ここで諦めてはな」
彼は心の中で言った。
「全ては終わってしまう」
彼はまだ戦っていた。連合との戦いに。その剣はまだ収められていなかったのであった。

## 第十九部第二章　会議は踊るその二十二

カップの上に黒く、熱いものが注がれていく。湯気がたちこめ、かぐわしい香りを辺りに漂わせている。
それは一見するとコーヒーであった。しかし実はそうではなかったのだ。
「何時見ても間違えてしまいますね」
八条は前に座っているカバリエに対してこう言った。
「コーヒーと」
「そうね」
カバリエはその言葉に笑みで返した。
「けれどコーヒーではないのよね」
「はい」
「ブラックティー。エウロパにはないみたいね」
「どうやらそうみたいですね」
これは連合にある茶の一つである。黒い葉を持ち、これで茶を煎じると黒い茶となるのだ。まるでコーヒーの様な。それでよく悪戯にも使われたりする。
「エウロパにはこうしたお茶はないみたいですね」
「普通のお茶しかないのかしら、かって地球にあったみたいな」
「お茶だけではないみたいですよ」
八条はカバリエにそう述べた。
「他の食材とか調味料も。あまり種類は多くはないです」
「どうやらそうみたいね」
カバリエもそれに頷いた。
「エウロパの料理は確かに品があるわ」
「はい」
「けれど。味の幅は狭いから」
これは使用している調味料や香辛料の種類が連合のそれとは比較

にならない程少ないからだ。だから致し方ないとも言えるのであるが。
「それがね。彼等は気付いていないみたいだけれど」
「他の世界は知らないみたいですしね」
「私達だってエウロパは知らなかったし」
「ええ」
「それはお互い様だけれど」
「それにしても本当に種類が少ないですね」
「爬虫類や昆虫も食べないみたいだし」
「ですね」
連合においては実にポピュラーである。連合の将兵達が蝗やタガメ、ゲンゴロウ、蟻等を喜んで食べるのをエウロパの市民達は驚いて見ていたという話も残っている。恐竜やカンガルーを食べるのも驚かれていたが。
「彼等は何故食べないのかしら」
「多分に文明的なものだと思いますが」
八条は述べた。
「ただ、それにしても」
「不思議ではあるわね」
「調味料や香辛料が少ないのは仕方ないです」
「そうね」
「そして料理のバリエーションも。そもそも我々は多くの文化の寄り合いですから」
それが連合なのである。その中にはアメリカもあれば中国もあり日本もある。かってのイタリア料理やスペイン料理も残っている。だがエウロパはヨーロッパしかない。そこに大きな違いがあるのだ。
「しかし。本当に食べるものの幅がないですよね」
「エウロパの料理に合わないものは排除されてきたからかしらね」
「それですかね」
八条は考えながら述べた。

「恐竜も昆虫も食べられないのは」
「欧州ではどれも食べられなかったから」
「それで今も食べられないと」
「私はそう見ているけれどね」
「左様ですか」
「連合じゃ恐竜なんてラーメンのスープの骨とかハンバーガーにも使われているけれどね」
これは本当のことである。連合ではポピュラーでもある。
「あと刺身や天麩羅にも」
「それには私も驚いたわ」
八条の言葉には苦笑を浮かべた。
「まさか恐竜までそうして食べるなんて」
「おかしいですか？」
「おかしくはないけれど」
だが日本の食文化に戸惑っているのもまた事実であった。
「日本人って生ものが好きなのね、本当に」
「否定はしません」
というよりは出来なかった。八条もまた刺身が好きだからである。
「ですが天麩羅は」
「あれもいい料理よね」
「はい」
そう言われると正直嬉しかった。
「私も大好きです」
「けれどあれも天麩羅にできるのね」
「そうですが」
「唐揚げにはしないの？」
「当然唐揚げにもしますよ」
これもまた本当のことであった。
「草食恐竜が食べ易いですよね」
「そうね」

恐竜は肉食より草食のものの方が柔らかく癖のない味で食べ易いと定評がある。それもどちらかというとあまり大きくないものの方がである。ウルトラサウルスやブロントサウルスといったものは鯨の様に扱われている。この時代では鯨はアメリカやオーストラリア等の国でも食べられるようになっている。捕鯨反対も今は昔である。もっともアメリカは捕鯨反対を唱えながら実際はイヌイットが鯨を捕まえるのを許していたのであるが。

「ティラノサウルスはちょっと」

暴君竜は癖の強い味で知られている。

## 第十九部第二章　会議は踊るその二十三

「プレシオサウルスやモササウルスはそうじゃないけれどね」
当然海にいる恐竜も食べられているのだ。
「アーケロンは美味しいわよね」
「はい」
巨大な亀は美味で人気がある。養殖までされている程だ。ちなみに恐竜をペットで飼う場合もある。星によっては小型の恐竜もいてそれをペットにするのだ。中にはそのままブレキオサウルスを飼う豪気な飼い主もいる。恐竜は爬虫類なのでその体格の割にはあまり食べないのだ。無論身体が大きいので量自体は多いが。
「エウロパではそういったものは食べないのね。残念だわ」
「何か昔の欧州の食生活のままですよね」
「そうね。ソーセージにアイスバイン」
ドイツ料理である。連合でも普通に食べられているものである。
「マカロニにラザニア。ポトフにオムレツ」
「どれも連合にありますね」
こうした料理は実にポピュラーなものとして連合でも食べられる。彼等にしても驚くべき料理ではない。
「貴族達の料理はね。また別ね」
「確かにあれはどれも豪勢なものばかりです」
「まるで自分達の贅沢と文化を誇示したいみたいにね」
カバリエはそれを見抜いていた。また贅沢も文化の一環であることもわかっていた。質素も文化であれば贅沢もまた文化なのである。よく質素が善であり贅沢が悪であると禁欲主義者は言うが決してそうではないのだ。
「彼等の贅沢は我々の贅沢とは全く違います」
「確かにね」
二人はそれもわかっていた。

「彼等の贅沢は余裕と時間を重視した贅沢です」
優雅と気品、そこに重点を置いたものなのである。それがエウロパ貴族達の贅沢なのだ。みらびやかでもあるがそれだけではないのである。
「しかし我々の贅沢は」
「それを見せてあげるのね、彼等に」
「あまりこうしたやり方は好きではないのですがね」
それでも彼はそうすることにした。
「やります」
「期待しているわ」
カバリエはそれを聞いてにこりと笑った。
「連合軍の実力もね」
「彼等に見せてやりますよ、我々のやり方を」
「どうなるかしらね」
「まあ費用は戦場でやり合うよりはずっと安上がりですし」
「けれど彼等にとっては深刻なものになるかしらね」
「ははは、我々の食べる量は彼等から見れば途方もないもののようですし」
これは事実であった。エウロパから見れば連合の一回の食事量はそれだけで彼等の一日分であるのだ。連合の将兵が三日来て一時休店に追い込まれた店が今でも後を絶たない。
「彼等にも派手に食べて楽しんでもらいましょう」
「心配なのは風紀だけれど」
「憲兵どころか内務省のスタッフも派遣されていますが」
「じゃあかなり安心かしら」
金のスタッフは上司と同じく厳格さで知られているのだ。これは連合では誰でも知っている話であった。
「風紀の粛正は普段以上に行いまずがね」
八条の顔が真面目なものになった。
「それはしっかりします」

「そう、ではそちらもお願いね」
「はい」
「軍が悪いことをしたら洒落にならないからね」
「ですね」
今までの歴史で軍の蛮行は常に書かれてきた。彼等はそれが起こることをとりわけ警戒しているのである。
特に八条は。彼はそれがないように今まで神経を使ってきたのである。
「それはお願いするわね」
「わかっています」
八条は真面目な顔のまま頷いた。
「今までもそれに神経を使ってきましたし」
「ええ」
「今後も。それは変わりません」
「頼むわよ」
カバリエは念を押した。
「全人類が見ているから」
「無論です」
応えながら茶を手に取った。
「何としても不祥事は防ぎます」
「ええ」
茶を飲む。紅茶のそれよりもずっと濃厚な味が口の中を支配した。
「砂糖を入れなくても甘いですね」
「それがブラックティーなのよね」
カバリエは真剣な顔から穏やかな顔に戻った。
「そのままでも充分に甘い」
「はい」
「外見はコーヒーそっくりだけれど」
「コーヒーとは何もかもが違う」
連合にはあってエウロパにはないものだ。エウロパの貴族達はこ

の味を知らない。当然カミュも。
「彼等にも教えてあげようかしら」
カバリエはふと言った。
「この味を」
「コーヒーだと思わせて」
「それも面白いかもね」
悪戯っぽい笑みを浮かべた。
「何かとね」
「仕掛けてみましょう」
「そうね」
二人は笑みを浮かべ合って話をしている。
「そして流れをそのまま我々のものにして」
「話を進めていければね」
彼等は手を打とうとしていた。とびきりの大掛かりな手を。エウロパはそれには気付いていない。連合の者達は自分の掌の中で踊らされ続けていると思っていた。最初から中にはいなかったというのに。

# 第十九部第三章　会議は変わりその一

会議は変わり

連合軍はウラノスにおいて何かしらの建設を行っていた。それは軍事基地ではないにしろエウロパの者達にあまりよい感情を与えてはいなかった。

「何をするつもりだ！？」

彼等は巷で、そしてテレビやネットのうえで話し合っていた。

「あんな場所で」

「何を作るつもりなのだ」

しかし何をするのかはわかりかねていた。それが一層彼等を不安にさせていた。

「大丈夫なのか、あれは」

それはラフネールも同じであった。自身の執務室でカミュに対して問う。

「彼等をあそこで自由にさせて」

「何、監視役の将校達は大勢派遣しております」

カミュは落ち着いた声でそう述べた。

「軍事施設でなければ何も問題はないと思いますが」

「それはそうだが」

だがラフネールはそれでも不安を感じていた。これは多くのエウロパの者達も同じであった。総統である彼はそれを代表する形となっているのだ。

「宴の準備のようですね」

「宴の」

「はい、それもどうやら連合軍全軍を挙げて」

「連合軍のか」

「エウロパに駐留している連合軍全軍でそうした動きが見られます」

彼は述べた。

「どうやらその関係であると思われます」
「ウラノスで宴をか」
それがラフネールには理解し難かったのだ。
「あの様な場所で」
「彼等の考えることはわかりませんね」
「全くだ」
ラフネールにはカミュ程の連合に対する偏見はないがそれでも理解出来ないことには違いなかった。
「あの荒涼とした星で。何をするのか」
「まあ面白いものが見られればいいですね」
「面白いものか」
「はい」
カミュは笑っていた。連合に対する嘲笑の顔であった。
「所詮彼等では何をしても無理でしょう」
「無理か」
「単に大勢いるだけでは。限界があるというものです」
「だが我々はその数に負けたが」
「それでもですよ」
彼はそれを問題とはしなかった。
「今回は無理です。まあ楽しみしておきましょう」
「楽しみか」
「猿知恵をね。見せてもらうとしましょう」
カミュの態度は変わらなかった。相変わらず連合を甘く見ていた。しかしその間にも連合は動いているのだ。カミュはそれを知っていながらも侮蔑を止めてはいなかったのだ。
連合軍はウラノスに集まっていた。そしてそこで黙々と作業にあたっていた。
「まずは水だ」
指揮官が工兵達に指示を出していた。
「そして空気だ、いいな」

「わかっております」
「ただし長時間のものではないぞ」
指揮官はそう付け加えた。
「少しの間だけでいい、水と空気も」
「宴をやる間だけですね」
「そういうことだ。その間さえ水と空気があればいいからな」
「緑もですね」
「緑はホノグラフィーで出す」
指揮官は述べた。
「こんなところに木を植えても仕方ないだろう」
「確かに」
「エウロパの奴等にくれてやるものは何もない」
ここで上を見上げた。
「あそこにいる奴等にはな」
そこにはガイアがあった。彼はそこにいるエウロパの貴族達に対してカミュのそれよりは幾分かましな侮蔑の目を向けていたのであった。
「木なんてくれてやることもないだろ」
「わかりました」
「それではホノグラフィーの用意もしておきます」
「建物も一時的なのでいいぞ」
「それでいいんですか？」
「ここに移住するわけじゃないんだぞ」
彼は部下の言葉にそう返した。
「それとも何だ。エウロパに住みたいのか？」
「まさか」
部下達はその言葉には肩をすくめておどけてきた。
「こんな場所に誰が好き好んで」
「何もないじゃないですか」
「そうだ、ここには何もない」

それがエウロパを席巻してきた連合軍の意見であった。
「資源も土地もない。住みよい惑星ばかりみたいだがこの程度なら連合に幾らでもある」
「住みよい惑星に作り替えられますし」
「そういうことだ」
指揮官は部下の一人のその言葉に頷く。
「ここにあって連合にないものは何一つとしてない。思えば貧しい場所だな」
「我々と比べたらいけませんよ」
部下の一人がそれを聞いて笑った。
「本当のことを言えば彼等も怒りますよ」
「おいおい、本当のことか」
これを聞いて一堂思わず顔を崩してしまった。見ればかなり楽しく作業をしている。

## 第十九部第三章　会議は変わりその二

「けれどねえ」
「エウロパって本当に何もないでしょ」
「飯も不味いし」
少なくとも彼等の口には合わないのだ。カミュが聞いたらどう思い、何を言うかは別にしてだ。確かにエウロパの料理は連合の者には合わないことが多い。
「大体こんな惑星すぐ開発できません？」
「すぐに人が住めるようになるでしょ、この程度だと」
連合の技術ではそうなのだ。連合の惑星開発能力ではウラノス程度の惑星ならば容易に人が住める惑星になる。水星や冥王星の様な惑星でも人が住めるようにした連合の技術では、であるが。
「エウロパの連中って確かサハラに攻め込んだのは住む場所がなくなったからですよね」
「だからスペースコロニーに住んでいる者もいる」
「そんなの作れて惑星開発はなおざりなんですね」
「俺達だったら二千億は住めるようになってますよね」
「そうだよな、それが何で」
「結局それが技術なんだろうな」
指揮官は首を傾げて話す部下達にそう述べた。
「技術ですか」
「そうだ。彼等は惑星開発の技術は我々には大きく遅れをとっている」
これには理由があった。エウロパは元々住みよい惑星が多く、そこに住めばよかったからである。そしてその中で平穏に暮らしていたのだ。
だが連合は違っていた。多くの荒涼とした惑星、人の住めない惑星があった。将来これ等の惑星に住まなければ深刻な人口問題にな

ると考えた彼等はそうした惑星を次々に開発、開拓していったのである。その中で惑星開発の技術もノウハウも身に着けたのである。連合の惑星開発技術にはそうした背景があるのだ。
「数百年のレベルでな」
「他にもえらく遅れをとっていますよね」
「医学でも。ワクチンとかは」
「外科手術もそうらしいですね」
そこに居合わせた軍医の言葉に顔を向けた。
「そうですね。とりわけワクチンが」
これにも事情があった。惑星開発において新種のウィルスが発見されることが多い。それへの対処、そして惑星開発時での事故により負傷への対処として連合ではワクチン開発や外科手術、そしてロボット開発も進んでいるのだ。連合の発展は惑星開発によるものが非常に大きいのである。
「驚く程低い水準にあります」
「数百年遅れているのか、我々と比べると」
「はい」
軍医は指揮官に頷いて答えた。
「他にもあると思いますが」
「遅れていないのは軍事だけか？」
「そうですね」
これは実際に戦ってきたからわかることである。
「兵器は我々のものとさして変わりはありませんね」
「まあそれでも俺達の方が質はずっとよかったですけれどね」
「そうだな」
そこでも技術力の差が出ていたがそれでも他の分野と比べればずっとましであったのだ。
「何か、それを考えるとエウロパって大したことないですよね」
「口では偉そうなこと言ってますけれどね」
「だがそれでも俺達はここに来るまで俺達だけで来たわけじゃない」

しかし指揮官はそう言って部下達を嗜めた。
「それはわかっていると思うがな」
「ええ」
「俺達だけじゃ。確かに無理でしたよ」
連合軍正規軍だけでは無理だった、その通りであった。幾ら膨大な数と万全の補給体制、充実した装備、卓越したシステムを持っていても彼等ははじめての戦争だったのだ。そのうえ設立後間もない軍である。その彼等が殆ど損害を出さずに停戦を迎えられたのは彼等の他に戦場において矢面に立つ者達がいたからである。
「義勇軍がいなけりゃね」
「まあここにいる連中も結構死んでたでしょうね」
「俺も含めてな」
指揮官はその中にあえて自分自身を入れてきた。

## 第十九部第三章　会議は変わりその三

「義勇軍がいなければ危なかった」
「ですね」
「あれだけ戦争慣れしている玄人がいなければ」
そうなのであった。連合の者達は戦争を知らない。それに対して戦乱の続くサハラからの難民から募集して作られている義勇軍は戦争を知っていた。ここに非常に大きな差があるのだ。
彼等は戦争を知っているからこそ果敢に戦えた。そして戦果を挙げることができたのだ。これが戦争を知らない連合の者達だけであったならば。負けはしなかったであろうが損害はずっと大きなものになっていたであろうことは誰にでもわかることであったのだ。
「我々も。ここまで来れたかどうか本当に怪しいですね」
「実際危ない場面もありましたし」
「その分彼等の損害は大きいがな」
「はい」
部下達はそれに頷いた。
「相当なものでしたね」
「我が軍の損害の九割五分が彼等だ」
指揮官は言った。
「義勇軍全体では二割近い程だったな」
「多いですね」
つまり連合軍の損害は実質的に彼等の損害なのだ。どれだけ矢面に立っていたかわかるというものであった。
「我々も結構戦っていたつもりですがね」
「それでもな。彼等が受け持っていた場所はどれも激戦地だった」
あえてそこに行かされたのである。理由はやはり連合の人間ではないということが大きかった。そして戦争を知っている。こうした理由から彼等は激戦地で送られたのである。

連合軍の指揮官達も彼等に偏見といったものはないつもりであったが半ば無意識に彼等を激戦地に送っていた。そして勝利を収めてきた。連合のここまでの勝利は彼等の存在あってのものだったのだ。
「それを考えると。彼等には感謝するべきだな」
なおクロノスの戦いはほぼ唯一と言ってもいい正規軍のみの戦いであった。ここでは正規軍は数を背景に慎重に攻めていた。だから損害も少なかったのだ。
「しかし連合の人間じゃないって思われてるんですよね」
「そう考えている人間がいるのは事実だがな」
「市民権は持っている筈なのに」
「それでも難民は難民だ」
指揮官の言葉は冷たいと言えば冷たいものであった。
「サハラが落ち着けば帰るからな」
「そんなものですか」
「実際にサハラに帰りたいという者も出て来ているしな」
「そういえばサハラ北方がティムールに併合されたんですよね」
これはもう彼等も知っていた。エウロパがいなくなり空白地になった場所に兵を進め瞬く間に自国領としたのである。
「そうだ」
「あっという間に。まああれも俺達との戦争のせいですけれど」
「戦争は一つでは収まらないからな」
指揮官はまた言った。
「何でもそうだが玉突きみたいに話が続く」
「ええ」
それは部下達にもわかった。
「経済でも何でもな」
「スポーツでもですね」
「そうだな。そういえば連合のスポーツはどうなっているかな」
「もうすぐオリンピックでしたね」
「その前のギャラクシア＝カップからすぐだな」

サッカーの連合での大会のことである。
「あっという間でしたね。その前は野球で」
「そうだな。毎年何か大きな大会があるからな」
「はい」
サッカーはギャラクシア＝カップで野球はギャラクシア＝ベースボール＝クラシックとなっている。三百国から強豪が集まってその銀河一を競う。なおこれにはマウリアも参加している。
「エウロパに一年もいない筈なのに長い時間が経っているような気がするな」
「そうですね、何か」
「エウロパのスポーツはな。見ていても」
「規模が小さいですよね」
「そうなんだよな」
指揮官は苦い顔で首を傾げさせた。これが連合の者から見たマウリアのスポーツの感想である。
「何か。スケールが小さいな」
「そうですよね」
部下達もそれに頷く。

## 第十九部第三章　会議は変わりその四

「何かこう。派手さもないですし」
「連中に言わせれば俺達のは極端な商業主義らしいな」
「派手な大会に金が動くのは当然だと思いますけれどね」
「連中はそうは考えないらしい。スポーツも貴族的にやるものらしい」
「やれやれ、また貴族ですか」
皆それを聞いて肩をすくめさせた。
「何でも貴族、貴族って。何がそんなに偉いのか」
「さてな。流れている血が違うわけでもあるまいし」
ブルー＝ブレッドを皮肉ってきた。
「大方自分達が一番だと思っているのだろうな、何でも」
「負けた癖に」
「負け惜しみが強いのも貴族らしいしな」
「厄介な奴等ですね」
「煮ても焼いても食えない連中なのは事実だな」
彼等の貴族への評価の一つである。彼等から見れば妥当なものである。
「やれやれ」
「さて、と」
指揮官はここで辺りを一旦見回した。
「それでだ」
「はい」
「ここにその貴族共を黙らせるものを作るらしいな」
それは彼等もまだはっきりとはわかっていない。
「その貴族共をですか」
「そうだ。一体何かな」
「どでかいものらしいですね」

「どでかいだろうな」
指揮官はこれから作る建物や庭の見取図を見ながら述べた。
「それもかなり」
「でしょうね」
連合の建物はエウロパと比べるとかなり大きなものが多いのである。その彼等にしろこう言う程のものを作ろうというのである。一体どの様なものか。
「さて、どんなものか」
「少なくとも貴族共が顎を外すレベルのものであって欲しいですね」
「そうだな。ここはとにかく派手にな」
「給養班も今から腕が鳴るって言っていますよ」
「こちらもそれを楽しみにしているさ。ところでだ」
ここで話が変わった。
「はい」
「食材はどうしている？俺はそっちは管轄外だからよくわからないんだが」
「エウロパから直接買っておりますが」
「エウロパからか」
「はい。恐竜とかは狩猟で捕まえて」
「何か大変そうだな」
恐竜のハンティングは決して一人で行ってはならない、少なくとも二十人以上でまとまってするべしと言われている。それは安全の為である。全高十メートル以上の肉食恐竜が何匹もいてはあまりにも危険だからである。草食恐竜にしろ物騒なものである。何しろ体格が違う。
「その介あってかなりいいのが捕まっているそうですよ」
「そうか」
「果物や香辛料でこっちにないものはストックを使って」
連合にあってエウロパにないものは多い。逆は殆どないが。ここにも両勢力の差があった。

「美味いものを作るということか」
「給養班はそのつもりですね」
「では期待させてもらおう。ただな」
「ただ。何でしょうか」
「うちの連中にあんな貴族趣味がどうとかいう料理が作れるかな」
指揮官はそう言って心配そうな顔をした。
「高慢というか傲慢というか。そんな料理が」
「別にそんなものを作ることもないでしょう」
「そうか」
「そうですよ。我々が連中に迎合する為にここを借りるのではないですから」
部下の一人がこう述べた。
「連中を黙らせる為に、ですからね」
「そうだな」
「そうです」
その部下は指揮官に不敵な笑みを返してきた。
「黙らせましょう、奴等を」
「君も相当連中が嫌いなようだな」
「威張っている奴はね、昔から嫌いなんですよ」
「ほう」
「だから。黙らせてやりたいんですよ」
それが彼の考えであったのだ。
「ではやるか」
「はい」
その部下だけでなく他の部下達もそれに頷いた。
「一発派手にね」
「よし、では気合入れて作るぞ」
「了解！」
「すぐに済ませましょう」
「だが手抜きはするなよ。大統領や長官も来られるのだからな」

これは非常に大きかった。国家元首や彼等の指揮官である。それも当然と言えた。
「わかってますよ」
「ここはね、慎重に」
「そして迅速にだ。いいな」
軍隊でよく使われる言葉であった。迅速かつ慎重に。これが軍の行動の基本であるのだ。
「エウロパの貴族共め、今のうちに精々威張っていろ」
彼等はガイアの方を見上げて言った。
「今にその高慢な鼻がへし折れるからな」
そう言いながら仕事をしていた。その目の先にはガイアの赤と青の色彩があった。
そのガイアにおいて八条は今日も宴に出ていた。今日は舞踏会であった。

## 第十九部第三章　会議は変わりその五

貴族の踊りは社交ダンスである。八条はその中でエウロパの貴夫人達と次々に踊っていた。

その服は貴族の華やかな服ではなく黒のタキシードであった。タキシードに身を包んでいる彼は貴夫人から貴夫人に、優雅な舞いを待っていた。

「誰かしら、あの殿方」

「背が高くてとても御綺麗で」

エウロパの貴夫人達はそんな彼を見てヒソヒソと話をしている。

「見たことのない方ですけど」

「まさかあの方があの」

「ええ、そうですよ」

それにモンサルヴァートが答えた。彼は礼装の軍服を着てこの舞踏会に参加していた。エウロパでは軍人であるならば礼装の軍服を着て宴に参加してもよいのである。

「あの御仁が連合の防衛長官です」

「左様ですか」

「私達の敵なのですね」

「そういうことになります」

答えるモンサルヴァートの目は何故か敵を見る目ではなかった。

「日本出身だそうですよ」

「まあ、日本の」

「はい」

彼はまた貴夫人達に答えた。

「連合の中でも大きな国でしたね」

「そうです」

「このエウロパ以上の。そんな国から来られたのですか」

「あの変わった文化を持つ長い歴史を持つ国から」

「日本から」
エウロパにおいて日本は連合の中でもとりわけ変わった国として知られているのである。それはこの貴夫人達の言葉からもよくわかる。
「はるばる来られたのですね」
「ですがあの方は私達にとって敵ですわよ」
「それはわかっておりますわ。けれど」
「ええ」
踊りを踊る八条の姿にうっとりとなっていた。
「何とお美しい」
「優雅で気品のある御姿」
八条の美貌に魅入られていたのである。例え敵であろうとも美しいものは美しいと認めているのである。
「あの様な方がおられるなんて」
「連合にもおられるのですね」
「そうですね」
モンサルヴァートがそれに頷いた。
「連合もまたいいものを持っているのは事実です」
「はい」
貴夫人達は彼のその言葉にこくりと頷いて応える。
「エウロパにはあの様な方はおられないですし」
「黒い髪に黒い目」
それは今では連合にもあまりない。純粋なアジア系の持っているものであった。今では混血が進みそうした純粋なアジア系の人間も殆どいないのである。そうした意味で八条の美貌は連合においても稀有なものであるのだ。純粋なアジア系の美貌は。純粋なヨーロッパ系の美貌はエウロパに多くある。なおアフリカ系の美貌はやはり少なくなっている。そのかわり混血の結果である美貌が連合には多くある。こちらの方が連合らしいと言えば連合らしいが。
「切れ長の目」

「それにスラリとした長身で」
「あの様な方。見たことはありませんわ」
彼女達は素直に女性として八条を見ていた。モンサルヴァートも男ではあったが彼を素直に認めていた。南方の戦いの時での会談の時に彼を認めていたからでもある。
しかしそうはいかない者もいた。カミュである。彼は八条がエウロパの貴夫人達と共に踊っているその姿を見て内心激しい歯軋りを覚えていたのである。
（忌々しい）
彼は心の中で呟いていた。
（所詮は野蛮人ではないか。それが何故あそこまで）
彼にとっては八条もまた野蛮人に過ぎないのである。
（確かに顔はいいかも知れない）
それは認めてもよかった。
（だが我がエウロパの女性達の関心を奪うとは。野蛮人の癖に何という男だ）
自分の国の女が他の国の男に惚れるのを快く思わない男もいる。これもまた嫉妬である。彼は今その嫉妬を感じていたのである。
「外相」
だがそんな彼に声をかける者がいた。
「！？」
見ればそれはペーチであった。彼は穏やかな顔でカミュに近付いてきた。その手にはグラスを二つ持っている。
「一杯どうかね」
「ワインですか」
そのグラスには透明の液体が入っている。彼はそれを見て言った。

## 第十九部第三章　会議は変わりその六

「そうだ、どうかね」
「宜しければ」
首相からの誘いである。受けないのもあれであった。彼はそれを受けることにした。
ワインを手にし口に入れる。ペーチはそれを見てから彼に言った。
「落ち着いたかね」
「ええ、まあ」
カミュは彼が何故ここに来たのかわかった。
「申し訳ありません」
「やはり。思うところがあるようだね」
「否定はしません」
彼はそれを認めた。読まれているのはわかったからだ。
「だが。感情を昂ぶらせるのはよくないな」
「・・・・・・・・・・」
昂ぶらせようとしていたのは事実である。ペーチはそこまで読んでいたのだ。
「何ならもう一杯どうかね」
「はい、どうか」
そして彼はそれを受けた。
「わかった。では」
側のテーブルの上にあったワイングラスを差し出す。
「どうぞ」
「有り難うございます」
それを受け取って飲む。カミュはそれを飲み終えてから口を開いた。
「御恥ずかしいところを御見せしました」
「何、恥ずかしくはない」

ペーチはそう言って彼を宥めた。
「それが表に出ていないからな」
「表に出なければよいと」
「世の中はそんなものだと言われているよ」
その言葉はいささか人生経験を表に出したものであった。
「表に出なければね。人間はそうそうわかりはしないものだ」
「人は仮面しか見ていないとも言われますね」
「人が普段見せている顔は仮面か」
ペーチはカミュのその言葉を聞いて顔を少し綻ばせた。
「成程な。確かに一理ある」
「今の首相の御言葉を聞いていると。ふとそう考えました」
「そうかもな。人の目というものは案外当てにはならない」
またいささか哲学的な言葉であった。
「多くを見ているようでほんの少ししか見ていないものだ」
それでいて多くを見ているような気になるのだ。人間というものはそうした一面もある。賢明なようで、実は愚かなのだ。無論その逆の例もある。
「違うかね」
カミュは自分のことを言われていると感じていた。自身の連合に対する偏見を。偏見を抱いていると自覚しているからこそわかることであった。
「何事もな。一面を見るだけでは駄目だ」
「多くの面からですか」
「彼にしろ。確かに連合の人間だ」
ペーチも八条に目を移していた。そこでは彼が優雅に踊り続けている。その踊りには寸分の狂いもなく、華麗なものであった。エウロパであってもあそこまで踊れる者はそうはいない。
「だが。連合の人間でもそれだけではない」
「それだけではない、ですか」
「そうだ。それで枠に嵌めると見誤るぞ」

「・・・・・・・・・」
カミュはまた沈黙してしまった。ワインの酔いが彼の頭の回転を速くさせていた。自分の偏見がどういった結果に繋がりかねないか認識しだしてきたのだ。
「いいかね。彼等もまた我々と同じ人間だ」
「同じ人間ですか」
「彼等の肌の色は様々だがね。同じ人間であることには変わらない」
ペーチの言いたいのはそこであった。
「能力もな。大体同じだ」
「同じですか」
「彼等を惑わすのはいいと思う。だが」
「侮るな、ですか」
「そういうことだ。いいね」
「はい」
空のグラスを置いてからそれに答えた。

## 第十九部第三章　会議は変わりその七

「特に彼はな。ウラノスの件だが」
「何を仕掛けてくるか、ですか」
「おそらく連合のやり方で来るだろうな」
「連合の」
「用心するに越したことはない。我々は今我々の中に彼等を引き込んでいるが」
　その為の連日の宴であるのだ。一見贅沢であるようだが実は戦争をやることに比べれば遥かに費用はかからないのだ。宴にしろそんなものである。言い換えれば戦争がどれだけ金がかかるかということである。
「彼等もまた。同じことを考えているだろう」
「自分達の中に」
「そうだ。前以て連合のことを調べておいた方がいい」
「再度ですね」
「さもないと痛い目を見るのはこちらだからな」
　ペーチは言った。
「わかりました。では」
「うん」
　ペーチはカミュの言葉に頷いた。
「この宴が終わりましたらすぐに」
　主賓が退くわけにはいかなかったのだ。それに彼はここで情報収集も行っているのだ。自分の目で八条達を見ておかなければ気が済まなかったのだ。
「そうした方がいい」
　ペーチは言った。
「卿がエウロパを救いたいと思うのならばな」
「エウロパをですか」

「そういうことだ」
「私にも愛国心はあるつもりですが」
カミュはいつものシニカルな笑みを浮かべて言葉を返した。
「では決まりだな」
「はい」
「ウラノスで行われるもの次第では宴も打ち切るか」
「ですね。そして対処にあたりましょう」
そうペーチに応えた。
「そうだな。ただ、これは肝に命じておいてくれ」
「それは一体」
「人種的偏見に基づく価値判断はいい結果にはならないということだ」
「・・・・・・・・・」
カミュはその言葉を聞いて沈黙してしまった。自分に向けられた言葉であるのは明らかであるからだ。またペーチがこれ程までに率直に言って来るとは思わなかったからだ。
「それだけはな。覚えておいてくれ」
「エウロパの為ですか」
「そう考えてくれたら考えが変わるのならそう考えてくれ」
「わかりました。それでは」
「うん。では用事があるからこれでな」
「はい」
二人は別れペーチは何処かへと去った。カミュは一人残り八条の舞いを見ていた。
「偏見か」
それは自分でも気付いていた。だが実際に言われると鮮明になる。彼は今それを自分の中で反芻しているのであった。同時に連合について考えていた。
「若しかするともう少しで取り返しのつかないミスをすることになるところだったのかもな、私は」

次にこう思った。
「それを避けられたのかも知れない。首相はそれを教えて下さったのか」
それを思うとペーチが偉大な人物に思えてきた。
実は彼は戦争がはじまるまではペーチを凡庸な人物だと軽く見ていたのである。外見も華がなく、その経歴や行動も地味で目立ったものがないからである。しかしそれは開戦と共に一変した。
戦争がはじまってからのペーチの動きは素晴らしかった。政治面から戦争を全面的にバックアップし、総統であるラフネールの補佐も行っていた。彼がいなければエウロパはその全土が連合に占領されていたのかも知れないのだ。それを考えるとペーチはエウロパを救ったとも言えた。

## 第十九部第三章　会議は変わりその八

カミュもまたそれはわかっていた。だからこそペーチの言葉に頷けたのである。今彼はペーチの言葉から自身の過ちを正されたと考えだしていた。それはいささか不愉快なのも事実であったがそれ以上に気付いていないことを見つけることができたので満足もしていた。そうした心境は中々複雑なものがあったがそれは顔には出さず澄ました顔のままであった。しかしだ。

彼はすぐに動いた。側にいた外務省の要人の一人に声をかける。彼はカミュの腹心の一人である。だからこそ彼は声をかけたのである。なおこの腹心はフランス人であり貴族でもある。それもまたカミュが腹心に選んでいる理由であるが彼もそれだけで人を選ぶのではない。当然ながらそこには能力もある。彼は貴族主義であるが能力主義者でもあるのだ。有能ならば平民でも女性でもどんな出身でも使う男なのである。賄賂も取るがそれでも能力を優先させる男なのである。

「卿に少し頼みたいことがある」

「それは」

「後で私の部屋にモンブランを持って来てくれ」

「モンブランをですか」

「そうだ、シェフが腕によりをかけて作ったものをな」

実はこれは菓子のモンブランのことではない。一連の宴を通じて集めた連合側の情報のことである。彼はそれをあえて暗号に隠して言っているのである。こうした暗号はこの時代においても非常によく使われている。連合もエウロパも外交の場でも諜報の場でも暗号を盛んに使ってやり取りをしているのである。

「いいな、モンブランだ」

「わかりました。それでは後程」

「頼むぞ、急に食べたくなった」

「いえいえ」
「モンブラン」
それは連合の外務省のスタッフの一人が聞いていた。だが何のことかわからない。
「妙だな」
彼は思った。
「カミュ外相は今の時点でかなり菓子を食べている。それなのにまだ差し入れとは」
そこを見抜いたのだ。外交官は勘も必要な職業である。もっとも勘が悪くてもある程度は他の方面を努力することでカバーできるものであるが。八条は勘も鋭いからこそここではそれが生きるのであった。もっとも政治的には抜群の勘の鋭さを誇る彼もどうやらこと女性に関してはそうではないようであるが。その容姿と気品、毛並みのよさと才覚から光源氏にも例えられる彼であるがこうした話においては光源氏ではないのであった。むしろ武骨な源為朝であろうか。そうした感じであった。
「よし」
彼はここで決めた。
「外相にも。お話しておくか」
カバリエに報告することにした。八条がエウロパの貴夫人達を虜にしている間にも会議は踊っていたのである。舞台裏は常に喧騒であった。

## 第十九部第三章　会議は変わりその九

宴が終わっても八条の周りにはエウロパの貴夫人達がいた。彼女達はそれぞれ八条に声をかけようとしていた。
「忌々しいことだな」
その様子を見て苦い顔をする貴族達も多かった。
「連合の者だというのに」
「コルテーゼ侯爵夫人までが」
エウロパでも名門であるコルテーゼ家の女当主である。先代のコルテーゼ侯爵には娘しかなく、長女である彼女が家を継いだのである。フランスきっての美人と謳われている。黒い髪に青い目が印象的だ。なお彼女はまだ独身である。一応婚約者はいるようであるが。
その彼女も八条と踊り、彼に魅せられているのである。彼女はとりわけ八条にアタックを仕掛けていた。
「八条様」
「はい」
熱い目を向けている。だが八条はそれに気付かないようだ。これはいつものことであるがエウロパの者達はそんなことは知りもしない。
「今日は御暇ですか？」
「申し訳ないですが」
彼は女性の誘いを気付かないうちに断った。
「仕事がありますので」
「あら」
コルテーゼ夫人はそれを聞いて悪戯っぽく笑った。
「八条様は女性に興味がおありではないのかしら」
「あら、それじゃあ」
「あちら方面で」
「いえ、それは違いますが」

それはすぐに否定した。連合でもいつも言われて困っていることなのである。
「私にはそうした趣味はありません」
「ではどうしてですの」
「まさか本当に御仕事なんて仰るのかしら」
「悲しいことにそうです」
彼は答えた。
「申し訳ありませんが今宵は宴も終わりましたので」
「御帰りですの？」
「ええ」
「残念ですわね」
「本当に。つれない方」
「またこの埋め合わせは」
「何でしたら連合まで御一緒しましょうか？」
「えっ！？」
無論冗談であるがこれには流石に驚いた。
「如何でして」
「あら、では私も」
「私も。この様な方エウロパにはおりませんし」
「もう暫くここにいて下さっても宜しいですし」
「楽しむことは僅かな時間でも充分ですしね」
情事はエレベーターの中にいる、それだけの時間で済ませるのが最もよいと言ったのは二十世紀の印象派の画家ガリであった。彼女達は今それを冗談で言っているのである。
「如何ですか、八条様」
「残念なことですがその僅かな時間もないのです」
「左様ですね」
「それではまた」
「時間がありましたら」
貴夫人達は止むを得なく去った。八条は彼女達がいなくなるとそ

の場を後にした。その後ろに貴夫人達の熱い羨望の眼差しと貴族の男達の熱い嫉妬の目を受けて。彼はスサノオに戻った。
戻るとすぐに細かいボディーチェックを受ける。盗聴器等をチェックしているのだ。
「これで大丈夫です」
「今日はどれ位ありました？」
八条はチェックをした若い兵士に尋ねた。
「いつも通りですね」
「そうですか、いつも通りですか」
八条はその言葉を聞いてうっすらと笑った。
「はい、いつも通りです」
「彼等もまた。必死なのですね」
「まあ我々と同じですね」
「それにしても手が込んでいる」
踊っている間にも付けられていたのだろう。側に寄られている時も。奇麗な薔薇には棘があるとはよく言われるがそれはエウロパ貴族社会においても同じであった。
「まさに美酒の中に含まれた甘い毒です」
「私も言われていますよ」
若い兵士は八条に言った。

## 第十九部第三章　会議は変わりその十

「娼婦を買うのにも注意しておけって。そこからどう情報が漏れるかわからないからと」
「連合からその筋の人達を招いたのは正解だったようですね」
「そうですね」
　実はエウロパとの戦いでは連合の風俗産業が一斉に出張して来ているのである。これは将兵達を相手に大儲けを考えた風俗産業の狙いが最大の理由であったが将兵の衛生と情報漏洩を危惧した国防省の思惑があった。基地内のレジャーコーナーにあえてそうした場所を設けてそうした楽しみを満足させていたのである。当然男だけでなく女性用のそうした風俗産業も来ていた。ホストに入れ込んで借金まで作った女性兵士までいる程である。
「おかげでエウロパの風俗産業は思ったより儲かっていないそうですよ」
「ふむ」
「あっ、長官は風俗には御詳しくないですよね」
「どうもそうしたことは直接には」
　よく知らないのだ。やはり彼はどうにも女性といったものに疎い。
「申し訳ないですが」
「左様ですか」
「私はどうも女性には縁がないのですよね」
　そして困った顔で苦笑した。
「そうなのですか！？」
「まさか」
　だがこれは誰も信じていなかった。周りにいる兵士達は心の中で呟いた。
「どうも。昔からもてないのですよ」
「はあ」

「学生の頃から。どうもね」
実はあまりにも高嶺の花なのと本人が全然気付いていないからであった。彼はどういうわけか恋愛のことにはかなり疎いのである。
「もてたことがありません」
「左様ですか」
だが誰もこれは信じてはいなかった。
「ええ、本当に」
「風俗もですか」
「行く機会がなかったもので」
「日本軍におられた時も」
「そうです、全然」
正直にそう述べる。
「それはまた」
「かえって奇遇ですね」
普通男の多い職場に行けばそれだけで風俗の話が出る。だが八条の場合はそうではなかったのだ。これも実に八条らしい理由があった。
「誰も私を誘ってくれませんでしたし」
「そうなのですか」
「はい、そんなのは必要ないだろうと言われましたよ」
苦笑したまま述べた。
「女の子なら何人も寄って来るんじゃないかと」
「やはり」
「そうなりますか」
「それで結局風俗には行ったことがないのですよ」
八条にはそもそも似合わないものであるが。
「はあ」
「本当に奇遇ですね」
「しかしこうした産業もまた必要だとは思います」
金ならば全否定したところだろう。だが八条は違っていた。

「男性にとっても女性にとってもね」
この時代は女性用の風俗もある。当然同性愛者の為の風俗も存在している。こうした方面でもかなりの変化があった。なおマウリアでは娼婦も階級化しているのが残っている。少なくともそこには連合の常識が通用するものは存在してはいないのである。完全に違う世界なのだから。

## 第十九部第三章　会議は変わりその十一

「結局人間は色々な欲というものを持っていますから」
「確かにそうですね」
「俺達だってそうですし」
「そういうことです。だからこうした産業もあります」
ただしその裏にはどうしても黒社会が関わるが。賭博や芸能、そして風俗といったものに黒社会が深く関わるのは致し方ない一面もあった。人類社会がある限りどうしても表と裏が出来上がる。社会もまた。だから黒社会が存在するのだ。連合でもエウロパでもマウリアでもサハラでも程度の差こそあれこれは何処にでも存在する。存在しないとすればそれは究極の独裁国家である。ヒトラーのナチス＝ドイツやスターリンのソビエト＝ロシアは黒社会はなかった。もっとも独裁者とその下にある秘密警察は黒社会なぞ比較にならない程危険な存在であったが。
「全て否定するのは不可能でしょう」
「そういう御考えですか」
「はい、私は」
八条自身もそれを認めた。
「そう考えております」
「左様ですか」
兵士達はこれを聞いて話のわかる長官でよかったと思った。少なくとも金ならこうしたふうにはなりはしない。内務省はセクハラのない、そして徹底的なまでに風紀の行き届いた恐るべき場所として知られている。厳格で潔癖症で不正を許さず、そのうえ切れ者である金がその長だからだ。どうしようもないまでであった。
「では長官」
「はい」
八条は一人の兵士に顔を向けた。

「一度御忍びでも行かれたらどうですか」
「そうですよ、一度中に入られては」
「デートクラブなんかいいですよ」
「おい、あれは違法なのが結構あるぞ」
風俗にはつきもののことではあるが。
「おっと、そうか」
「デリバリーヘルスだろ、やっぱり」
「あれデートクラブとどう違うんだ？」
「最後までやるかやらないかだろ」
建前ではそういうことになっている。
「ホームページにも書いてあるじゃねえか、デリヘルのよ」
「あんなの当てになるかよ」
「ホームページでデリヘルつっても別の雑誌でデートクラブとして堂々と載ってるぜ」
「そうなのか」
「そうなのかじゃねえよ」
「俺のダチだってそれでやってたからな」
何と友人に男性の風俗関係者がいる者までここにいた。
「ホテルの中じゃ誰にもわかりゃしないからな」
「二人きりだからな」
「後は自由恋愛っと」
そうしたものである。結局誰にもわかりはしないのだ。二人だけで密室に入るのだから。
「それ考えると怪しいよな」
「デートクラブとデリヘルって実は区別ないからな」
「ああ」
「そうらしいですね」
八条がそれに応えて言った。
「その辺りの区分はかなり曖昧だとか」
「最後までいくと金余計に取られたりしますけれどね」

「まあそれでもしたい奴はしたいのですけど」
「そういうものなのですね」
「ですよ」
「やっぱり人間ですからね」
そうしたこととは切っても離せないのである。そうした面でもやはり人間は人間なのだ。
「ただ、最低限気をつけて欲しいことはあります」
「はい、トラブルと」
「病気です」
「わかってますよ」
「その為に、ですからね」
「そうです。この二つは気を着けて下さい」
その二つがないようにする為の風俗でもある。それでこの二つがあっては話にはならない。
「了解」
「承知しました」
「特に病気は今のところ流行ってはいないようですが」
「それはまあ」
「検査厳しいですし」
「いいことですね」
そうでないと大変なことになる。かってフランスがイタリアに攻め込んだ時には娼婦達から移された梅毒により戦争続行が不可能な状況になって撤退する羽目になっている。性病への配慮も軍になくてはならないものなのだ。

## 第十九部第三章　会議は変わりその十二

「そうでないと軍が成り立ちません」
「成り立ちませんか」
「そうですよ。他にも風土病にも気を着けていますが」
　これも重要である。もっともエウロパには風土病というものは連合と比べるとないに等しいが。連合は広大であり様々な病気が存在し、それが撲滅されるとまた別の病気が出る、という状況でもあるのだ。エボラやエイズを容易に撲滅出来る医術があるがそれでも全ての病原菌を撲滅することは不可能なのである。そもそも解決できない病気やワクチンが解決出来ない病原菌などというものも有り得ないのであるがその全てを解決するというのもまた無理な話だ。それは万能の能力ということであるが人間は万能の存在ではない。だからこれもまた無理なのだ。もっとも病原菌で人類が滅亡するなどというのは杞憂を通り越して異常な幻想であるが。　こうした幻想に取り憑かれて喚いている奇人変人はこの時代にも存在はしている。こうした奇人変人はそれこそ何時の時代のどの国にも存在している。当然であるが連合にもこの類の首領を展開している奇人変人が存在している。この奇人変人は他にも何とかとかいう訳のわからない予言者の言葉や他の知的生命体の存在や連合、人類を裏で操る秘密結社の存在等を必死に叫んでいる。そのうえで自分が弾圧され命が狙われていると主張しているのだが彼は何度も精神病院に入ったことがあるので誰も信じないのであるが。ただ彼の本は売れている。そうした本が売れるのもまた世の中である。
「エウロパはそんなのはないですね」
「むしろ我々の方が、ですね」
「そうですね」
　それは彼等自身も認識していた。連合とエウロパでは医療技術にもかなりの差がある。とりわけ細菌研究やその技術に関してはかな

りの違いがある。それは惑星開拓と開発によるものが非常に大きい。惑星開拓や開発において新規の病原菌の発見とその脅威は付き物だからである。それに迅速かつ的確に対応する為に連合においてはその研究と技術が発達したのである。無論他の医療技術においてもそれは同じである。一つの技術だけが突出するということは長い目で見ればあまりない。医療においても同じことである。その結果として連合の医療技術はエウロパのそれをかなり凌駕してしまっているのである。一千年前は世界の医療をリードしそれを誇りとしていたエウロパも今ではその分野においても連合に大きく遅れを取ってしまっていた。千年以上前は彼等が考えもしなかった黒い肌の医学者達がそれこそ星よりも多くいる。そうした時代になってしまったのである。

「その面では羨ましい」

「ワクチン打ってきたのが杞憂でしたかね」

「いえ、そうでもないかと」

だが八条はそれも否定した。

「違いますか」

「ウィルスというのは急に進化しますからね」

これもまた本当のことである。中南米でのほんの皮膚病だった梅毒が人を腐らせて死に追いやる恐ろしい病になったのはヨーロッパ人の中でであった。この梅毒が瞬く間に全世界に広まり多くの者が命を落とした。鼻が腐って落ち、身体全体が腐り果てていく。特徴的なのはその紫色の斑点や瘡蓋である。かつてはこの瘡蓋から瘡病とも呼ばれた。吉原等ではこの病で命を落とすことが非常に多かったのは言うまでもないことである。二十世紀までこの病で命を落とす者は非常に多かった。一説によるとベートーベンの耳が聞こえなくなったのはこの病のせいだと言われている。中国清代の皇帝同治帝の死因もこれであるとされているが実際のところは眉唾であるとも言われているが。ハイネも梅毒で死にシューベルトもそうであると言われている。これもまた一説には、であるが。またアメリカ大

陸で多くの原住民が死んだのはヨーロッパ人達が知らないうちに持ち込んだ菌によってであった。八条はこれも警戒して手を打っていたのである。

## 第十九部第三章　会議は変わりその十三

「恐ろしいことに」
「空気感染するエボラもありましたね」
それで惑星が一つ隔離され、多くの人間が死線を彷徨ったことがあった。他には真空にまで及ぼうという狂犬病まであった。これは連合中央政府厚生省やその地の政府の必死の尽力により解決された。
「あれは聞いた時本当に怖かったですよ」
「全くです。何か惑星開発もいいですが」
「そうした病原菌だけは勘弁して欲しいものです」
「同感ですね」
それは八条も同意であった。
「とにかく病気には細心の注意をです」
「了解です」
「性病であっても風土病であっても」
「少しのところからえらいことになる」
「病気って怖いよなあ」
だからこそ八条はそれを防ごうと必死になっているのである。
「それにはくれぐれも」
「わかってますよ」
「けれど何かエウロパの連中は連中で俺達を警戒しているそうですよ」
「警戒」
「はい。訳のわからない病原菌を持って来るんじゃないかって」
「連合は野蛮人だからって理由で」
これはエウロパ側からの偏見だ。
「野蛮人ですか」
「連中から見たらそうなんでしょう」
「御貴族様から見れば俺達って所詮植民地あがりですからね」

「あっ、長官は別にして」
日本は数少ない例外であった。この国が植民地になったことはない。根本から勘違いしていたとしか思えない植民地統治をしたことはあるが。日本型植民地統治の難点は統治する方が大赤字となることだ。搾取やそういったことはまず考えず、内地との一体化を図るからだ。
「千年経っても野蛮人は野蛮人らしいですよ」
「これでも毎日風呂に入ってますけどね」
「貴族の連中こそ。毎日風呂に入っているのかどうか」
これはかなり偏見である。
「何年に一回かもな」
「シャワーじゃなく、か」
「シャワーどこか。水浴びだって怪しいぜ」
「で、道の端は糞まみれでな」
「実際はそうじゃなかったがな」
中世のヨーロッパのことを言っているのである。上下水道がなく糞尿は道の端に捨てていた。この為街は非常に臭く、道を走り回る鼠達がペストの温床となっていた。そのうえ彼等は本当に風呂に入ることはなかった。日本の大名達が儀礼的に毎日風呂に入っていたというのに彼等は何と何年に一回かだった。あるスウェーデンの王妃なぞは手垢で手が隠れてしまっていたという。それが変わったのはやはり時代の進歩ではあったが。ナポレオンは無類の風呂好きとして有名であり、彼はほぼ毎日、しかも何度も風呂に入っていた。
「私達はここでも偏見を受けていたのですか」
「どうやらそうみたいですね」
「何かねえ」
「こちらとしても気をつけていますがね」
「まっ、不潔ってのは相手へのレッテル貼りには一番効果的ですね」
「確かに」
少し年長の兵士の言葉に頷いた。

「汚い、とかそういうのは我が国では一番の罵倒語ですね」
日本ではそうなのである。言葉は同じでも国によって何が一番の罵倒なのかは違うのだ。
「こっちじゃ馬鹿がそうですけれどね」
「俺の国じゃ卑怯だな」
「モンゴルじゃ馬泥棒かな」
「多分な」
こんな感じである。兵士達もそれぞれ出身国が違い罵倒に対する感情も違うのである。
「まずは清潔に、ですか」
「そしてワクチン」
「これで病原菌はかなりましになりますね」
「それを考えると入浴はいいものですか」
「俺は風呂大好きですしね」
「俺も」
連合ではシャワーより風呂が好まれることが多い。エウロパではどちらかというとシャワーか。ちなみに連合の風呂は多彩であり湯の風呂もあればサウナも多い。風呂と言っても一つではないのだ。
「身体も奇麗になりますし」
「気分転換になりますしね」
「では艦内の設備は気に入っていますね」
「勿論」
当然といった様子で頷いてみせる。
「やっぱり風呂も充実していると違いますよ」
「わかりました。ではそちらは正解ということで」
「はい」
将兵の士気への配慮以外にもそうした効果があったのであった。もっとも衛生の為にも入浴は不可欠なものであるのは既に認識されていたことであったが。
「では私も後で」

「そうされるといいと思いますよ」
「見たところかなり汗をかいておられますし」
「確かに」
かなり踊っている。だからこれは当然であった。
「それでは部屋に戻りましたら」
「どうぞ」
彼も風呂に入ることになった。大勢の人間がいる艦内では風呂も何個もあるのが普通である。とりわけティアマト級は人が多い為かなりの数になっている。八条はその中の一室を選んで汗と垢を洗い落とし、それからくつろぎはじめた。

## 第十九部第三章　会議は変わりその十四

「長官」
暫くすると扉をノックする音が聞こえてきた。
「どうぞ」
部屋に入るように言うとスサノオの親甲板士官であるシギリ中尉がやって来た。彼はガンビア出身の若手将校である。
「失礼します」
彼は部屋に入るとまず敬礼してこう挨拶をした。八条もそれを受けて席を立った。それから話をはじめた。
「御用件は」
「司令に報告することがあって参りました」
「私に？」
「はい」
中尉は言った。キビキビした動作と声であった。
「港周辺で妙な動きがありました」
「それは一体」
「何か。プロマイドがどうとか」
「プロマイド」
破壊工作の予兆か、と危惧したがどうやらそうではないらしい。
「エウロパの十代の若者達が我が連合の女優やアイドルの写真を見てファンになったそうなのです」
「ほお」
これはまた面白い話であった。八条も声をあげた。
「我々の」
「そうです。兵士達が落としたプロマイドが偶然彼等の手に入り」
「話題になっているのですか」
「長官の御国のアイドルも話題になっております」
中尉はここでその重厚な唇を微かに綻ばせた。

「神崎亜矢さんですね」
「はい」
中尉の笑みはさらに強くなった。僅かではあるが。
「彼女のプロマイドがそもそもの話の発端でありました」
彼は言う。
「それで今エウロパの少年達がこの神崎亜矢とはどういったアイドルなのかを必死に調べているとのことです」
「また変な話になっていますね」
「変な話と言いますか妙な話なのは事実です」
「妙な、ですか」
「敵のアイドルが人気者になるとは。我々はどうも」
彼は言葉を濁した。
「まあ、その、何です」
「はい」
「エウロパのアイドルや女優は。連合のものとは全然違いますね」
「それは確かに」
「グループで同じ服を着て派手に踊ることもなければその衣装も」
なお連合のそれはかなり派手である。商業主義の結果である。
「我々のものに比べて地味だと」
「少なくとも印象に残るものではないです」
「何処かの事務所の様に派手なラメまみれのステージ衣装というのはあまり見られませんね」
「あの事務所はまた特別です」
その事務所が何処のことなのか、連合で知らない者はない。男性アイドルや俳優を専門に売り出している大手事務所である。やり手と評判の社長はゲイであるというのもまた有名である。
「あれは社長の趣味だそうですね」
「はい」
これもまた有名であった。
「よくもまああんな衣装を次から次に考えつくものです」

「社長は社長で楽しんで衣装を考えておられるとか」
「デザイナーは雇わないのですか」
「それより御自身で考えたいとか」
「左様ですか。そういえばあの事務所のタレントも人気でしたね」
「ほう」
八条はそれを聞いて面白そうな声を出した。
「女性男性問わず」
「あの事務所のタレントは同性にも人気のある人が多いですからね」
「確かに。そういえばエウロパでも同性愛は普通でしたね」
「そこは連合と変わらないそうですね」
エウロパでも同性愛は普通に認められている。男同士、そして女同士の結婚も普通にある。これはアランソを見てもわかることであった。
「そうですね。そこは」
「こちらでは古代ギリシア文化の影響だとか言っているそうですが」
「そうらしいですね」
古代ギリシアでは同性愛はごく普通に見られたものなのである。神話にも堂々と残っていることからそれが窺い知れる。無論彼等はキリスト教といった存在は知らなかったから後にこの同性愛が徹底的に非難され、排撃されるということは知らなかった。当然ながら今復権していることも知らなかった。

## 第十九部第三章　会議は変わりその十五

「我々とはまた違うものですね」
なお日本のことはその筋の人間では誰もが知っていることである。
「そうですね。まあそれは」
「はい」
「それでプロマイドですが」
八条は話をそちらに戻してきた。
「どうされればいいと思われますか？」
「私の考えですか？」
「はい」
彼はにこりと笑って頷いてきた。
「貴方はこのことに関してどう御考えでしょうか」
「そうですね」
彼は少し間を置いてから自分の考えを述べた。
「別にプロマイド程度でしたら」
いいのではないか、と言った。
「と思うのですがどうでしょうか」
「ですね」
そして八条はそれに頷いた。
「プロマイドなら何枚でもいいですね」
「はい。別に軍事機密ではないですし」
「二次元写真にしろ三次元写真にしろ焼き増しにそんな大層な技術は使っていませんし」
流石にこうしたものにまで出鱈目な差があるわけではない。如何に連合とエウロパに技術の差があるといっても。細かい日用品の分野ではエウロパの方が技術的に上のものもあるのだ。
「大丈夫です」
「それでは宜しいのですね」

「はい」
八条はそれをよしとした。
「むしろ実際の連合の姿がわかっていいでしょう」
「貴族の中には我々を本当に野蛮人と思っている輩がいますからね」
「そうですね。我々も我々で貴族主義だの特権階級だの言ってきましたが」
「お互い様という部分もありますか」
「そういうことになるかと」
これは実際にそうであった。そうした意味で連合もエウロパも同じ人間であり何ら変わることはなかった。連合にもカミュと同じ様に偏見を以ってエウロパとそこにいる者達を見ている者もいるのである。ちなみにその割合はおそらくエウロパの中で連合に偏見を持っている者達のそれと大して変わらないが数は連合の方が圧倒的に多い。人口の差がここでも見事なまでに出ていた。
「その野蛮人のアイドルに夢中になるということに怒る者がいればそれでよし」
「面白いからですか」
「人はその偏見が打ち崩された時が最もショックなのです」
そこからどうなるか、それにより人の価値も決まったりする。
「では」
「彼等の偏見も打ち砕ければ面白いですね」
「そうなれば確かに面白いですね」
「もっともそれでも」
だが彼はここで言った。
「連合とエウロパの対立はこれでは収まらないでしょう」
「収まりませんか」
「それが連合とエウロパにとっていいことか悪いことかは別にして」
彼は中尉に顔を向けながら述べた。中尉の顔は今までは笑っていたが急に引き締まり、姿勢も直立不動になっていた。二人はそのうえで話をした。

「我々はあまりにも違う文明の中にそれぞれいます」
「文明ですか」
「我々の文明は言うならばアメリカ、中国、ロシア、日本、東南アジア、中南米、オセアニア、そしてアフリカの八つの文明が合わさったものです」
「はい」
それが連合のはじまりなのである。無数の社会と多くの文明をミックスさせたモザイク、それが連合であった。
そこにかっての古の民族達の復権や新興国家の設立もあり今に至るのだ。
「新興国家、そして太古の文明の復活もあり」
「アルムやフェニキア、ヒッタイト等ですね」
「そうです」
十二支族の復活やエジプト神話の神々の再興もそれである。連合はそうした古の文明の復活も認めた。実に多様な勢力なのである。
「本当に様々なものがあります。ですが」
「エウロパの文明は違うと」
「はい。我々の文明にはないものばかりです」
「ギリシアや北欧の神々、ラテン語、貴族文化」
連合の者達が抱くエウロパのおおよそのイメージである。
「そうしたもの全てが。連合にはありません。あるのはキリスト教でしょうか」
「あれだけですか」
「それもまたこちらの方が信者の数は多いですが」
「ええ」
これもまた事実であった。連合の中でもローマ＝カトリック教会の信者はかなりの数にのぼる。連合の中でも大勢力なのである。バチカンはこの時代でも健在なのだ。

## 第十九部第三章　会議は変わりその十六

「とりわけ階級社会。これは我々には決して受け入れられないものです」
「ええ」
中尉もこれには同意であった。連合にも確かに漠然とピラミッドは存在するがそれでもエウロパの様にはっきりとシステムで定義されてはいないのだ。この差は実に大きい。
「我々はあまりにも違う文明にそれぞれ分かれています」
「文明の衝突、ですね」
「そうです」
八条がまず言いたいのはそれであった
「我々の多くのものが混ざり合った文明と」
「彼等の貴族文明が。衝突していると」
「一千年の間。だからこそ我々はいがみ合ってきました」
「政治的な理由とはまた別にですね」
「背景にはこれがありますね」
政治的な理由も時として感情等に左右される場合があるのだ。この衝突はある意味イデオロギーや宗教の対立と同じだ。互いに受け入れられないものを認めないのだから。
「ただ、政治的な理由もあるのは事実です」
「政治的な理由も」
「先程も言いましたが我々はモザイクです」
八条は再びそれに言及した。
「文化も文明も人種も宗教も国家も。全てがモザイク状に入り混じっています」
「はい」
これはさっき八条が言った。
「これを纏める為には。共通の敵が必要です」

「それがエウロパだと」
「そうです。彼等が敵になったのは宇宙進出の際の月資源を巡っての対立からですが」
「そしてブラウベルグの登場もあり」
これはエウロパだけでなく人類にとっても大きなターニングポイントであったことは言うまでもない・そうした意味でやはりブラウベルグは英雄であった。
「対立は決定的なものになり、一千年の間エウロパは我々にとって共通の敵でした」
「しかし今その敵を破った」
「共通の敵がなくなりかねないのですよ。そうなれば」
「連合が纏まるのがより困難になりかねないですね」
「そういうことです」
八条はそれを危惧していたのであった。
「我々はその纏まる為の敵を必要としています」
「ですがエウロパはもう」
「いえ」
だが彼はここで言った。
「また。彼等と戦うことになりますよ」
「そうでしょうか」
「はい」
彼はこくりと頷いた。
「御安心下さい。エウロパは敗戦の屈辱に燃えているでしょう」
「それはあるでしょうね」
これは容易に予想がつくことであった。長い間蔑んできた連合の者に敗れた、誇り高い彼等がそれを屈辱と感じていないとはとても思えない。
「次の総統は我々に対する強硬派です」
「では」
「はい、対立はまだ続きます」

八条は述べた。
「この戦争もまた。その対立の数ページに過ぎないものです」
「特筆大書されるものであっても」
「左様です。彼等にとっても我等にとっても」
「しかし」
中尉はそこまで聞いて一息ついたように言葉を出した。
「因果なものですね」
「因果ですか」
「はい。そうして対立し続けるというのは。これを因果と言わずして何と言うのか」
顔も少し溜息をついたようなものになっていた。若い顔がその分だけ年寄り臭く見える。
「人間の世界ですからね」
八条は言った。
「どうしても。そういったものになります」
「そうですか」
「残念かどうかは別にしまして」
「このままずっとですかね」
「連合とエウロパの対立は」
「はい。私もエウロパは好きではありませんが」
彼は述べる。
「まだ対立が続くかと思うと。いささか疲れるものを覚えます」
「人間がより進歩すれば」
これに対して八条は言葉を返した。
「そうした安易な対立ではなく賢明な握手を実現出来るのでしょうが」
「連合とエウロパであっても」
「はい。しかし今は無理です」
「人間がそこまで進歩していませんか」
「それ以前に人間の悲しい性かも知れませんが」

これもまたよいか悪いかは別にして人間はやはり人間なのである。その本質はそうそう容易には変わりはしない。こうした共通の敵を見て纏まるということも人間の性質の一つである。だからある程度はどうしようもないのである。人間の本質は滅多なことでは変わったりはしないのだ。人間もまた生き物であるからだ。

## 第十九部第三章　会議は変わりその十七

「ある程度は。仕方ない部分もあります」
「エウロパとの対立は」
「また彼等もそれは同じでしょうし」
「戦争が終わってそれで終わりといかないのが小説やアニメとは違うところですね」
　なお連合の小説やアニメとエウロパのそれはかなり異なったものになっている。これも文明の違いである。
「いや、小説やアニメでもそんな展開は多いですよ」
「おっと、そうでしたな」
「ええ。漫画やゲームも。そちらの方が続編を作り易いですしね」
「ははは、確かに」
　言いえて妙であった。確かに話の続編をはじめるにあたっては戦争は完全に終わらず、続いている方が都合がいい。だからといって続編は最初と何も変わらず、しかも登場人物が退化していては元も子もないが。その中でも最悪なのは前作の主人公を不用意に崇め奉り、絶対の存在とすることであろうか。これをすればストーリーは確実に破綻するであろう。ごく稀にそれがわかっていない者がいるのは残念なことだ。
「では我々は丁度何作目かの最後の場面にいるわけですね」
「そういうことになります」
「次の作品の主人公は」
「残念ながら現実には主人公はいませんね」
　八条はいささかシニカルに述べた。
「言うならば。全ての者が主人公です」
「この戦いに参加した者全てが」
「そう、関係した者全てが」
　連合とエウロパにいる全ての者だけでなくマウリアやサハラの者

達まで。この戦いは実に多くの者が関係する戦いであった。彼等全員が主人公なのであった。戦いは一つではない。それぞれの戦いがそこにあるのだ。
「主人公ですか」
「戦死も入れて」
「現実の世界は物語が一つではない」
「無数にあるのですよ。連合とエウロパだけでなく」
「成程」
その言葉に頷く。
「そしてそのドラマは人類がある限り永遠に続き」
「終わらないと」
「そういうことです。連合とエウロパもまた」
「戦い続けるということですね」
そういうことであった。そうして次に述べられる言葉は。
「何時かは和解する可能性もありますがね」
「何時かは、ですか」
「はい」
八条は答えた。
「けれど。今はないですね」
「でしょうね」
中尉もそれに頷いた。
「先程申し上げた理由から」
「連合もエウロパも。互いを不倶戴天の敵をみなしているから」
「今は我々が勝ちましたが」
「いや、今後もそれは変わらないのでは？」
「といいますと？」
八条は中尉の言葉に目を動かした。
「いえ、我々には無限の開拓地がありますが」
「ええ」
銀河の殆どに進出し、さらにまだ多くの未開の星系を向こうに持

っている。連合の強みは何と言ってもこれであった。この無限の開拓地こそが連合を連合にしてきたのだ。
「ですがエウロパは」
「見たところまだ開発出来る惑星は多いですけれどね」
「その技術がないようですね」
「それを開発すれば二千億は養えると思いますが」
「我々の技術だと三千億といったところですね」
「そうですね。スペースコロニーよりそちらの方がいいと思うのですが」
　これは宇宙開発においてそれぞれが辿った道の違いであった。連合は惑星開発に進化した。

## 第十九部第三章　会議は変わりその十八

それに対してエウロパはスペースコロニーを選んだのだ。その結果であった。もっとも連合のスペースコロニー開発の技術も相当なものでありエウロパのそれよりも上なのであるが。
「辿った道が違っているのですね、我々のそれとは」
「ですね」
「人口密度も我々のものより濃いですし」
「ですね」
また頷く。
「いずれ。彼等は今以上の人口問題に悩まされるでしょうね」
「どうするのですかね」
「一つ方法がないわけではありません」
八条は言った。
「それは」
「暗黒宙域を越えることですね」
「暗黒宙域をですか」
「そうです」
八条は述べた。
「そしてその彼方にある筈の新天地に進出する」
「何十万光年もの距離を越えて」
「ですがそれしかないでしょう。そうでなければまたサハラと戦争です」
「同じことの繰り返し、ですか」
それもまた歴史である。循環する場合もあるのだ。停滞もある。
「それをしたくなければ」
「何十万光年を越えて」
「はい」
「気の遠くなるような話ですね。そんなことをしなければならない

とは」
溜息をつく。だがそれを受け入れるしかなかった。
「しかもその新天地が安全であるという保障もありませんし」
「そこが危険に満ちた荒野の星ばかりか。それとも」
「他の知的生命体がいるか。どうなっているのかは誰も知りません」
「エウロパに待っているのは我々とは違う未来なのですね」
それだけは確かだった。次の言葉もまた。
「そうですね。ですがそれは我々には預かり知らないこと」
「彼等の問題、ですか」
「冷たい言い方になりますがそうなります」
八条が冷たいのではない。これはエウロパの問題であり彼にはどうすることも出来ない話なのだ。だからこう言うしかなかったのである。
「ただ、彼等に遅れを取ってはなりませんが」
「ええ、それは」
だがこれは言うまでもないことであった。中尉も頷く。
「彼等がどんな道を歩もうとも。彼等の勢力拡大はそのまま我々の脅威になります」
そしてこれもまた言うまでもないことであった。敵の勢力拡大を望む者なぞいない。売国奴以外は。
「今回の講和ではその目も摘み取っておきましょう」
「何か御考えが」
「ええ、ある程度ね」
思わせぶりな口調になっていた。
「私が提案するのは国防においてですが」
「期待させて頂いて宜しいですか」
「期待される程のものではないかも知れませんが」
これは謙遜であった。
「連合の安全と、エウロパへの足枷は同時にね」
「わかりました」

「そして話を進める為にも」
「はい」
また頷く。
「ウラノスでは演出するとしましょう」
「ウラノスももうすぐ工事が終わるそうですね」
「そうらしいですね」
報告は彼も聞いていた。
「それが終わればパーティーですよ」
「楽しみにしております」
中尉はここでにこりと笑った。
「彼等に。我々のパーティーを見せてやりましょう」
「勿論です」
ウラノスでの工事が終わったのはそれからすぐであった。程無くしてエウロパの高官や貴族達がそこに招かれた。その中には当然ラフネールやカミュも含まれていた。

## 第十九部第三章　会議は変わりその十九

「何と」
カミュはその宴の場を見てまずは声をあげた。
「これが連合の宴なのか」
「どうやらその様だな」
それにペーチが応えた。
「これはあまりにも」
辺りをゴテゴテと派手に飾っていた。様々な色の灯りが眩しいまでである。
酒や料理がテーブルに山程盛られていた。その料理も様々だ。肉もあれば魚も野菜もある。その料理もサンドイッチにハンバーガー、寿司、生春巻、蒸餃子、タコス、トムヤンクンと連合の大衆料理まである。やかましいまでに音楽が鳴り響き、そこにいる者には一般の兵士達まである。エウロパの貴族達がセーラーと呼んでいる連合の兵士達だ。この呼び方は彼等がセーラー服を着ているからである。エウロパでは兵士はセーラー服ではないのだ。今セーラーを着ているのは連合の兵士だけであった。
「猥雑な」
それがカミュの感想であった。確かにそこに洗練されたものは何処にもなかった。
「だが。面白そうだな」
ここでペーチが言った。カミュに対してである。
「こんな宴は。見たことがない」
「エウロパでは平民でもこんな宴は開きません」
カミュの顔と声は憮然としたものであった。
「人と料理だけ多いではありませんか。音楽も」
「音楽はクラシックだけではないと思うが」
ペーチはまた言った。

「また宴にクラシックだけしか使ってはならないという決まりもない」
「まあそうですが」
だが公の場では普通はしない。連合はあえてこうした宴にしたのである。ここに何らかの意図があるのは明らかである。カミュはそれも探っていた。
（何を考えている）
彼は心の中で呟いた。
（こんなものを設けて。一体何を）
「首相、外相」
ここで後ろから首相府の若いスタッフがやって来た。どうやらペーチと彼を探していたようである。
「大変です」
「どうした？」
ペーチが彼に顔を向けて問うた。
「このパーティーの参加者ですが」
「うん」
「一億人に達します」
「なっ」
これにはペーチもカミュも言葉を失った。
「一億だと」
「はい。その参加者の殆どが連合の者です」
「それだけの人間を集めたというのか」
「そしてそれだけの人間が入られる場所をあれだけの短期間で作り上げた」
「やられたな」
ペーチは苦い顔で述べた。
「これは彼等の力の誇示だ」
「くっ」
カミュはそれを聞いて顔を顰めさせた。

「そして連合の文化を見せるつもりだな」
「大衆文化をですか」
「そうだ。我々の文化とはまた違う文化を」
連合の狙いはそれであった。そしてエウロパをまんまと引き込んだのである。
そこに外務省の若いスタッフがやって来た。見ればあまりいい顔をしていない。深刻な顔をしていた。
「外相、そこにおられましたか。首相も」
「！？」
「どうしたのだ」
カミュとペーチはその若いスタッフに声をかけられ彼に顔を向けた。
「恐ろしいことが起こっています」
「恐ろしいこと」
「はい。連合軍全体で派手なパーティーをはじめています。当直の者以外で全軍を挙げてです」
「全軍だと」
「何でも親睦会という名目で。一般市民まで招いてここと同じ様に派手なパーティーを」
「どうなっているのだ、一体」
カミュはそれを聞いてまた顔を顰めさせた。
「軍全体でパーティーなどと」
「これもまた宣伝だな」
ペーチが言った。
「何処までも。エウロパ全体を自分達の土俵に巻き込むつもりだ」
「それも全軍を挙げて」
「それにより一つ深刻な問題が起こっています」
「深刻な」
カミュは思わず問い返した。
「はい、内務省から報告があがっているようです。今連合軍の将兵

によりエウロパにある食料が膨大な桁で消費されています。このままですと」
「我々は食糧危機に陥りかねないというのか？」
「その危険はあります。既に果物や野生動物がかなり食べられております」
「馬鹿な」
だがカミュはそれを信じようとしなかった。

## 第十九部第三章　会議は変わりその二十

「僅か六〇億で一千億人分の食料をこんな短期間で食い尽くすなぞ」
「いや、それは有り得る」
それをペーチが否定した。
「首相」
「バイキングは知っているな」
「はい」
中世に欧州を荒らしまわった北欧の者達である。彼等は一応交易に来ていたのだが殆どは略奪者であった。海や河を船を使って侵入し、街や村、修道院を荒らし回った。彼等の恐怖と強さは凄まじく、モンゴル帝国と並んで恐れられていた。
「彼等もまた。恐ろしいまでの食事だったという」
「シェークスピアの戯曲の文句ですか」
「そうだ」
ペーチはカミュの問いに頷いた。
「それで欧州が食糧危機に陥った」
「ですがあれは」
カミュはそれに反論する。
「かなり長期間で。しかも書いているのはシェークスピアですよ」
シェークスピアはかなり大袈裟な表現を好む。その為実際には有り得ない様なホラめいた話になったりするのだ。彼の表現の特徴としてシニカルな表現がある。一説によるとシェークスピアは数人いたとも言われているし正体はベーコンだとも俳優だったとも言われているがいずれにしろかなりの文才の持ち主なのは事実だ。
「そんなことは」
「だが有り得るぞ」
それでもペーチは言った。
「これだけの量を。連日消費されると」

「うっ・・・・・・」
カミュはペーチの言葉に声を詰まらせた。
「恐ろしいことになる。唯でさえ今は総督府から逃れてきた二百億の難民達の食料を確保する為に四苦八苦しているという状況なのだからな」
「では」
「早期に講和のテーブルについた方がいいな」
ペーチは言った。
「さもないと。彼等の宣伝を許すと共に食糧危機になる」
「そのうえ売らなくていい恩を売ってしまいますね」
「連合には食べ物が有り余っているらしいな」
連合は食料に関しては量も種類も相当なものになっている。だからこそ人口が増え続けるのも支えられるし産業の発展も進んでいるのだ。人は食べなければ生きていけないのだから。
「それは聞いていますね」
「我々も餓えは知らないが」
「このままですと」
「そして彼等がそこで動く。連合の諺だったか」
そして言った。
「敵に塩を送る。だがそこに見返りがある」
「下手をすれば洒落にならない要求が来る」
「そうなれば厄介だ。ここはすぐに手を打つ」
「わかりました」
確かに人種的偏見、階級主義者であってもカミュは若くして閣僚にまでなった者である。何をすべきかはすぐにわかった。そのうえでペーチの言葉に従ったのだ。
二人はすぐに手を打つことにした。ラフネールにも連絡する。だが今この場から逃れることはしなかった。悠然とした態度を保ってパーティーに参加していた。
踊りもエウロパのものとは違う。時折クラシックの音楽もかかる

がそれだけではない。何やら派手な曲が頻繁にかかる。聞いたこともないような曲だがやけに耳に残る曲だった。
料理は種類も量も莫大なものであり味付けは多彩でありかつ濃いものが多い。はっきりした味だ。調味料や香辛料も豊富に使われていた。
「エウロパでは使われていないものも多いな」
カミュはその中にある料理を一つ口に入れて呟いた。
「フルーツも。エウロパのものよりもはっきりした味だ」
「品種改良のせいだな」
それを聞いて隣にいるペーチが応えた
「配合により甘くさせていったようだな」
「そうみたいですね」
ペーチは食べ物には手をつけていない。カミュだけが食べている。カミュはめぼしい料理やフルーツ、酒を味わいながら確かめていた。彼の鋭い舌は瞬時に細かい部分まで分析していた。
「恐竜の肉まであるな」
「恐竜ですか」
カミュは目の前にある白い肉を見て顔を顰めさせた。
「彼等はこんなものまで食べているのですね。話には聞いていましたが」
「どんな味がするかな」
「ふむ」
カミュが切れ端を皿に入れ口の中に導いた。そして味わってみる。
「どうかね」
「そうですね」
彼は暫く口の中に入れ味わった後でペーチに答えた。
「鳥に似ていますね」
「噂通りか」
「はい。思ったより癖がなくて食べ易いです」
「そうなのか」

「何か蛙みたいですね。外見を想像してしまいますが味自体はいいです」
実際に鶏に近い味である。連合では人気の食材だ。
「意外だな、それは」
「ですね」
「他にも鰐の肉まであるな」
鰐のステーキである。連合ではポピュラーな料理だ。
「それも食べてみるかね」
「そうですね。それでは」
連合のカクテルを飲んでから応える。今飲んだのはジントニックであった。口直しのつもりだったがエウロパのそれよりも癖の強い味に思えた。
鰐のステーキに向かおうとする。だがここでカバリエが彼等のところにやって来た。
「ようこそ」
にこやかな顔で彼等に挨拶をしてきた。
「如何ですか、我々の宴は」
「御見事です」
ペーチがそれに応えた。カミュはその横で笑みを作っている。

## 第十九部第三章　会議は変わりその二十一

「これが連合の宴なのですね。実に大掛かりです」
「我々は宴は派手にやる主義ですのね」
「成程。そして食べるのも」
「はい」
カバリエはにこやかに返す。
「食べて、飲むのでなければ何の宴でしょうか。それも大掛かりに」
「大掛かりですか」
「連合ではまずは食べることです」
そして言った。
「食べ、飲む。こうしたバイキングの形式が多いですね」
「一つ一つ座りながら食べるということはないのですね」
「そういう宴もあることにはありますが」
それでもテーブルの上には料理が山の様に盛られているか一品一品が運ばれて来てもそれの量が極めて多いか。どちらにしろ連合の宴は多量の料理と酒を必要とするものだ。これが今話を聞くペーチ達にとって無言のプレッシャーとなっていた。彼等はそれを聞いて食糧危機を真剣に考えた。そしてそれへの対処の為にここは何としても講和のテーブルに着くべきだと決意した。
「やはり主流はこうしたバイキングですね」
「左様ですか」
「これですと多くの人間が参加出来ますし」
「ふむ」
「よいものですよ」
「そういえば我々のところではこういったものは」
「はい」
ふと気付いたようなペーチにカミュが声をかけた。４
「なかったな」

「ええ」
　エウロパの宴は大抵座って行われる。立って次から次に好きなものを食べるということはないのだ。これが連合の宴とエウロパの宴の大きな違いの一つであった。
「ところで我々の料理は如何ですか」
「料理ですか」
「はい。様々な品を揃えておきましたが」
「そうですな」
　これにはエウロパきっての美食家と謳われているカミュが答えた。
「かなり濃い味付けですね」
　まずはこう述べた。
「そして食材は種類が実に豊富です。調味料も香辛料も」
　話を続ける。
「正直繊細さには全く欠けます」
「繊細さはありませんか」
「はい。かなりワイルドなものであるように感じられました」
「成程」
　一旦はそれに頷く。だが。
「しかし」
「しかし？」
「エウロパにはない味でした。中々興味深いものでありました」
「エウロパにはこうした味はないのですね」
「はい」
　率直に述べた。
「新鮮でしたね」
「それはこちらもです」
「そちらも」
「はい。エウロパの繊細な味付けは。かなり新鮮でした」
「ふむ」
「香りも穏やかで。口の中まで支配するとは」

「そうだったのですか」
「美味しさとは一つではないのですね」
「ええ、まあ」
これにはカミュは少し嫌な声になっていた。彼はやはりエウロパの料理が最高だと思っているからである。正直それは認めたくはなかった。
「今回はそれがよくわかりました」
カバリエは述べた。
「それではまた明日もどうぞ」
「明日もですか」
それを聞いたペーチとカミュの目が動いた。
「はい。宴は暫く続けますので」
カバリエはにこやかに笑っているがそこには魂胆がある。そしてペーチとカミュはその魂胆を察していた。
「我々の宴を楽しんで頂けたらと思っております」
「それは何よりです」
カミュは外見では笑っていた。
「それではまた明日」
「はい」
カバリエは挨拶をしてその場を後にした。宴はそれからも続いた。宴が終わってからペーチとカミュは総統官邸に向かった。そこでラフネールに話をした。
「このままではエウロパの食料が食べ尽くされます」
「卿等もそう思うか」
ラフネールの危惧は彼等のものと同じであった。
「ええ」
カミュがそれに応える。
「このままですと」
「かなり危険です」
ペーチも述べる。三人は連合の宴を見て同じ危惧を抱いていたの

だ。
「牛の丸焼きを見たな」
「はい」
連合の中の一国アルゼンチンにある料理だ。文字通り牛を丸焼きにするのだ。宴でよく出る料理である。
「流石に鯨や恐竜の丸焼きはなかったが」
「連中はシーフードもかなり食べます」
「魚も膨大な量だったな」
「はい」
「それに野菜や果物も」
「全てエウロパで買い入れるか狩猟で手に入れたものです」
略奪はしていない。あくまで買ったのだ。ここが連合らしいと言えばらしい。

## 第十九部第三章　会議は変わりその二十二

「それも店の品物を一つ丸ごと買ったりしているとか」
「こうしたことを次々と続けているようです」
「それ以前からも我々の領内で食料をかなり買っているな」
「ええ」
「それでかなりの食料が消費されております」
「彼等は我々の三倍は食べる」
ラフネールは深刻な顔で述べた。
「宴では普通に五倍は食べていたな」
「そうです」
どう見てもそれだけは食べていた。連合の者達の食べる量の凄まじさはエウロパの者達の度肝を抜くのに十二分であった。
「こんなことを毎日続けるのか」
「瞬く間にエウロパの食料はなくなります」
「それは避けなくてはならない」
人間食べるものがなければとても生きてはいけない。仙人にでもならない限り無理だ。どんな生き物も食べることにより生きているからである。
「彼等には宴を終わってもらい一刻も早く帰ってもらわなくてはな」
「それでは」
「事態は変わった」
ラフネールは苦々しい顔になっていた。
「講和のテーブルを用意するのだ」
「わかりました」
二人はそれに頷いた。
「このままでは食糧危機を付け込まれる。事態はより悪化する」
「ですね」
「すぐにそれを変えなければ」

「それならば今のうちにだ」
ラフネールの判断は早かった。そしてそれを止めなかった。
「いいな」
「了解です」
「すぐにでも」
彼等はすぐに動くことにした。そこに一片の躊躇もなかった。
「だが。ここからが正念場だな」
「わかっております」
カミュがそれに頷いた。
「ここで何とかしなければ」
「我がエウロパは」
「二人にも頼むぞ」
ラフネールの言葉にももう余裕はなかった。
「エウロパ建国以来の危機だ」
「はい」
「これを乗り切らなければ。我々に明日はない」
こうして遂に講和の席が設けられることになった。仮初めの宴は終わった。その後の本来のテーブルが用意されるまでに然程時間はかからなかった。また連合もこれを受けた。
「いよいよね」
「はい」
カバリエと八条はコヨルショウキのカバリエの部屋にいた。そして二人で話していた。
「彼等を講和のテーブルにつかせるのに成功したわね」
「宴もこれで終わりですね」
「そうなるわね」
「将兵の中には残念がっている者達もいますが」
「まあそれは仕方ないわね」
カバリエは笑みを作ってこう述べた。
「元々こうする予定だったし」

「まあ彼等には帰国後に盛大に騒いでもらいましょう」
「戦勝祝いね」
「そうです。それで彼等の残念も晴らします」
「大層なものね。それにしても」
「それにしても？」
八条はカバリエの言葉に問うた。
「あのカミュ外相はかなり悔しいみたいね」
「我々とのことでですか」
「宴でまんまと嵌められたと。そう思っているわよ」
「我々の計算通りでしたけれどね」
「彼もそれに気付いて。歯噛みしているかもね。それに八条君にも」
「私にも！？」
この言葉には首を傾げさせた。
「それは一体」
「わかっているんじゃないの？本当は」
カバリエはにこりと笑ってそう言ってきた。彼女は八条のそうした方面での極端な鈍感さをこの時迂闊にも忘れてしまっていたのだ。
「どうなのかしら」
「何のことかわからないのですが」
だが八条は八条であった。
「外相、宴のお話ですよね」
「ええそうよ」
カバリエはカバリエで八条を誤解していた。彼女は八条が普通の女性に対する感覚を備えていると思っていたのだ。だがそれは見事なまでの誤解であった。
「何だと思っているの？」
「いえ」
まだ彼にはよくわかってはいない。
「その、何故カミュ外相が歯噛みしているのか」
「わからないの？」

「何のことか」
「本当に？」
カバリエはしつこいまでに彼に尋ねる。
「はあ」
「わかったわ」
彼女もようやくわかった。八条に今までどうして浮いた話がないのか。これでようやくわかったのであった。それを知った彼女は話題を変えることにした。
「それで次の会談だけれどね」
「はい」
八条の表情も変わった。仕事の話になったからだ。
「こちらの要求はわかっているわね」
「無論です」
「じゃあ話は早いわ。大統領、そしてスタッフと打ち合わせをするわよ」
「わかりました」
二人も話に入った。こうして講和の為の会談は遂に最後の幕を開けた。最後の幕は静かに、だが大きな波乱をその奥に隠して開かれたのであった。

# 第十九部第四章　最後の意地その一

最後の意地

「やっとはじまったらしいな」
連合のネットでは連合とエウロパの講和会議の進展に動きがあるのが伝えられていた。そして掲示板での議論がはじまったのであった。
「長い間待たせやがって」
「全くだよ、エウロパの奴等が」
彼等はまずエウロパの者達に不満をぶつけた。
「どうせパーティーとか言って情報収集ばっかりやってたんだろうよ」
「だろうな」
「何かやり方がせこいな、貴族とか言って偉そうにしているわりには」
「それが貴族のやり方らしいぜ」
「へえ、せこいのが貴族なのかよ」
彼等は口々にそんなことを書き込んでいる。まずは当たり障りのない言葉であった。
「そうらしいな。宴やベッドの中から情報を引き出す」
「そんなのアメリカや中国なら幾らでもやってるがな」
「連中みたいに露骨なんじゃなくてもっとソフトらしいぜ」
「どうソフトなんだかわかりゃしねえな」
シニカルな書き込みが入った。
「どうせお貴族様らしくエレガントに、なんだろ」
「下らねえな、おい」
「だから戦争に負けるんだよ、奴等は」
「そういやエウロパで戦争に強い国ってイギリスとドイツ、あとはスウェーデンだけだったか」

「いや、ポーランドも兵隊はそこそこ強かったぜ」
なお連合にもポーランドは存在する。連合とエウロパで一つずつポーランドがあるのは連合に入ったリトアニアとの関係から来ている。
「そうなのか？」
「ポーランド騎兵ってあっただろ」
「またそりゃ随分昔だな」
「けど強かったのは事実だぜ」
これは本当のことだ。平野部にあるポーランドでは騎兵が発達しそれが強力だったのである。
「そうか？ポーランドつったら何か攻められているイメージだけしかねえんだがなロシアとかドイツとかによ」
「俺の国かよ」
ロシアの者からと思われる書き込みが入った。
「あんたの国はまた徹底的にやったよな」
「そうらしいな」
「で、ポーランド騎兵の話は伝わってるかい？」
「いいや、全然」
彼はすぐにそれを否定した。
「千年以上昔だろ、そんなの残ってねえぜ」
「それもそうか」
「ただイタリア軍の弱さは伝わってるぜ」
「奴等が弱いのは常識だろうが」
「全くだ」
十九世紀末から二十世紀にかけての話であるがこれは今でも残っている。実は先の戦いでもサハラでの戦いでもイタリアの将兵も奮戦しているのだが彼等はそれをあえて無視しているようだ。というよりはエウロパ軍とひとくくりにしているふしがないわけでもない。
「砂漠でパスタ茹ででたってな、二十世紀に」
「そうらしいな」

「それでワインにフルコースがないと将校は動かない、動いてもドイツ軍から見れば全くの役立たず」
「凄いな、そりゃ」
「ドイツ軍が凄過ぎたんだがな」
ドイツ軍の質素さは連合の者達も知っている。戦史ではかなり有名な話である。
「まあ連合軍も結構いいもの食ってるけどな」
「ワインがないだけでな」
「そっちはエウロパ軍がやってる」
「酒飲みながら戦争するとはいい御身分だ」
「貴族ってのは本当に特権あるみたいだな」
「全くだぜ」
そしてエウロパの貴族達に対して誤解が見られた。
「どうせ戦場でも酒と女なんだろうな」
「馬鹿な話だね、全く」
「いや、そうでもないらしいぞ」
それにすぐに訂正が入った。
「そうなのか？」
「戦死者の割合は平民のそれより貴族のそれの方が多いらしい」
「へえ」
「そうだったのか」
それを読んで驚いた書き込みが続いた。
「そしてかなり勇敢だったらしいぞ。俺のツレ今エウロパから帰って来てるから聞いたんだ」
「おっ、あんたのお友達兵隊さんかよ」
「ああ、今第三軍曹だ」
「下士官か」
連合では下士官の階級が多い。軍曹も何ランクもあるのだ。
「何かまさに現場ってとこだな」
「陸戦部隊にいるんだ。それでじかに話を聞けたんだ」

「凄いな、そりゃ」
「貴族の将校が一番強かったらしい。兵士を護るし」
「意外だな」
彼等にしてみればそうである。貴族に対して根本的に悪感情を持っている彼等なら。
「自分だけ我先に逃げると思ってたら」
「捕虜になっても堂々としていてな。凄かったらしいぜ」
「おいおい、何か俺が思ってた貴族のイメージとは違うな」
「一発こづいたらピーピー泣きだして命乞いするかと思ってたんだがな」
そうしたイメージも持っていた。貴族は威張り散らしているだけだと思っていたのだ。
「それが全然違うってさ。あんまり凄いんでかえって尊敬の念覚えた程らしいぜ」
「信じられねえな」
「何か別の世界の話みたいだ」
彼等は口々に驚きの言葉を書き込んだ。

## 第十九部第四章　最後の意地その二

「貴族の誇りがあるってことか」
「戦場で酒を飲むだけはあると」
「そういうことだな」
「何か俺達とえらい違いだな」
「ああ」
これには彼等は自分で頷くしかなかった。
「そういや連合軍って正規軍は殆ど損害出してないんだったよな」
「あの義勇軍だけだろ、損害出してるのは」
「連中の損害ってどれだけだったっけ」
「ここにデータあるぜ」
「おっ、サンキュ」
ネットの掲示板での議論で最も凄いことはすぐにこうした資料を出してくる者がいるということである。それにより多くのことがわかるのだ。少なくともかってのマスメディアの様に自分達に都合のいい資料や統計を出して世論をコントロールするということはない。
彼等は早速その資料を見た。その結果また書き込みが加わった。
「成程な」
「やっぱりかなりの損害だよな」
「ああ、全然違うな」
彼等は口々に書き込む。
「正規軍の楯にされたんだろうな」
「元々その為の義勇軍だったんだろう？」
「そうだけどな」
「連合の人間じゃないからな、そもそもが」
一応市民権を持ってはいるがやはり彼等は異邦人なのだ。それは誰もがわかっていた。だからこそこう書き込まれるのである。
「やっぱり。こうなるのかよ」

「仕方ないって言えば仕方ないけれどな、俺達の立場から見れば」
「戦争に言っても死にたくはないからな」
「それ位ならってなるよな」
「否定できないな」
書き込みが暗くなる。
「正規軍の損害なくす為にもな」
「義勇軍は必要ってことか」
「少なくとも火事場に飛び込んでもらうことは出来るからな」
また書き込みがあった。
「正規軍とは別に」
「それで前で戦ってくれる」
「正規軍はその間に危険の少ない場所から攻撃を仕掛ける」
「そういやって戦ってきたのがわかるな」
「損害を出さない為にな」
正規軍の損害を最小限にして勝つ為にはどうしても義勇軍の存在が必要だったのだ。もっと言えば彼等の犠牲が必要だったのだ。
「そうだな」
「結局はそれなんだよな」
「誰だって死にたくはないよ」
「全くだ」
戦場での死を単なる死に過ぎないと考えるのは連合の風潮であった。彼等の信仰にも戦いの神は存在するがそれはもっぱらスポーツやそうしたことに関してである。サハラの様に戦乱に覆われた世界ではなく、長い間武力を行使しての戦争を知らなかったのだからこれは当然であった。海賊やテロリストとの戦いはあったが。
「正規軍の損害は一個艦隊程度なんだろ」
「ああ」
「っていうと百万位か」
「百万つったら一口に言うと大きいけれどな」
「で、義勇軍が一千万以上だ」

この数字はまた衝撃的なものであった。彼等もそれを聞いて驚く。
「全然違うな」
「それが現実ってやつだな」
義勇軍がどれだけ危険な戦場に身を置いていたか。それが何よりも雄弁に物語っていた。これが現実なのであった。
正規軍の損害は〇・一パーセント程度であるが義勇軍は一割を越える。同じ装備であってもだ。連合軍の兵器はダメージコントロール、生存能力に優れ、医療設備も整っているがそれでもそれだけの数の犠牲者が出た。これも五〇〇あった艦隊が最終的には三五〇にまで減ったエウロパ軍に比べればかなりましであったが。
「難民ってやつのか」
「難民か」
「そうだな、彼等は連合の人間じゃない」
やはりそこに最大の問題があった。

## 第十九部第四章　最後の意地その三

「だからどんなことがあっても基本的には困りはしないんだよな」
「思う存分戦わせていいってことか」
「連中がサハラに帰るにしろここに残るにしろな」
彼等は話す。
「どっちにしろ俺達の力が必要だ」
「それに義勇軍の将兵にも家族がある」
「彼等のことを考えると、か」
「何かかなりえげつない話だな」
「けどそれが政治ってやつだろ」
誰かが書き込んだ。
「自分達が生き残る為に他人を犠牲にする」
「若しくは利用する、か」
なお連合においては前者は米中露タイプで後者は日本やＡＳＥＡＮ各国のタイプだとされている。イスラエルになるともっと手が込んでいる。連合のバランサーはその外交能力が半端なものではないのだ。
「嫌な世界だな、おい」
「何かよ、俺達悪者みたいだな」
「まっ、義勇軍から見たらそうだな」
「参加兵力で二十倍以上もあるのに損害があっちの方が十倍以上多いんじゃな」
「どう見てもそうだろ」
「後味悪いな」
これは率直な感想であった。実際のところ彼等も笑ってそれを受け入れられる程冷徹ではないのだ。それが普通である。
「けどよ、それで戦場に行っている人がかなり助かったんだぜ」
「義勇軍がなかったらもっと損害出てるのは事実だぞ」

「それこそ今頃あちこちで遺骨や写真抱いた喪服の人ばかりになってたぞ」
「そうか」
皆それを聞いて神妙になった。
「そんなの嫌だろ」
「ああ」
好きな者もそうそういない。
「だからさ。仕方ないんだよ」
「義勇軍だって志願制なんだからな」
「給料は正規軍よりいいらしいな」
「それに軍律もサハラのそれに合わせているらしいな」
そうした配慮も為されている。そうでなければ動かないからだ。
「何か結構配慮してるんだな」
「そうでないと駄目だろ」
「駄目か」
「当たり前だろ、あの人達はサハラの人間なんだぜ」
そう書き込まれた。
「こっちの風習とはまた違うよ」
「サハラって俺達とは全然違うからな」
「俺ムスリムだけど豚肉も鱗のない魚も食うし酒だって飲んでるぜ」
「おい」
これにはすぐに突っ込みが入った。
「やばいだろ、それは」
「バチが当たるぞ」
「一応その前にアッラーには御赦しをこうてるけどな」
「じゃあいいか」
「それやらなかったら流石にまずいからな」
連合のムスリムはかなり緩やかになっている。ラマダンであってもアッラーに赦しを乞い食べたり飲んだりもしている。だがサハラではそれは決してない。戦闘中はまた別であるが。酒は飲まれはし

ても。連合とサハラでは同じムスリムであってもまるで別の宗教の様に違っているのだ。
「そういや義勇軍も志願兵なんだよな」
「そうだよ」
「そこは正規軍と同じだぜ」
そもそも連合には徴兵という概念がない。その様なものは一千年の間の武力のない生活により廃れてしまっている。どの国も軍事に力を入れるよりは産業の発展、惑星開発、農地の開墾といったことに精力を注いできたのだ。連合では軍事はあくまで最低限のものであり続けたのだ。
「けど、置かれた状況が違うか」
「全くな」
「言うなら彼等は絶対に戦わなくちゃいけない」
「絶対にか」
「そうさ、サハラに帰るにしろ連合に留まるにしろ」
「功績が必要ってわけだな」
これは事実であった。手ぶらで帰られない事情がそこにはあるのだ。
「それでこの戦争に参加した」
「功績はあったな。損害はでかかったが」
「さて、これでどうなるかな」
また誰かが書き込んだ。
「帰るかな、結構」
「いや、大分残るんじゃね？」
それには反論が来た。

## 第十九部第四章　最後の意地その四

「何かこっちの生活に馴染んできてるっていうぜ」
「へえ」
「それで連合に残りたいって人間も結構多いらしい」
「ああ、それで新国家作るって話も出てるらしいな」
「それ聞いたぜ」
また書き込みが来た。
「何処に作るかはまだわからないらしいけれどな」
「それでも作るんだな」
「らしいな」
「新国家か」
感慨の篭もった書き込みが加えられた。
「難民から新国家を作るんだな」
「ひょっとしたらな」
「勝利に貢献した御褒美ってやつだ」
「ただ、国としてはあまり大きくはないらしぜ」
「そうだろうな」
これは人口から言って当然であった。
「小国かあ」
「最初は何処だってそうだろ」
「ビッグリバーだって最初はそうだったぜ」
連合の中では大国である。だがそのビッグリバーにしろ最初はしがない小国であったのだ。保有する星系も一個に過ぎなかったのだ。
「それ考えると妥当だよ」
「そんなものか」
「あとバチカンも来るってな」
「おっ、バチカンもかよ」
少し驚いたようであった。

「講和会議次第でな。来るらしいぜ」
「また賑やかになるな」
「そうだな」
話は難民からバチカン、そして講和会議に移っていった。
「ブラウベルグ回廊をはるばる通ってな」
「バチカンがエウロパの手を離れるのか」
「人類の歴史がはじまって以来だな」
「そうだな。キリスト教って言えばやっぱり欧州だったからな」
「それが。変わるのか」
「三千年で」
三千年、これは非常に大きい。これだけの歴史を持つ国は人類の中でもそうはない。だからこその重みがそこにはあった。
「まだそれもはっきりしないけれどな」
「講和会議も今はじまったばかりだしな」
「そうだったな」
「会議がはじまるまで本当に長かったからなあ」
今までの流れを振り返るような書き込みであった。
「あの連中うだうだやってたからな」
あの連中とはこの場合エウロパの貴族達をさす。
「まあそれもこれで終わりだ」
「さて、講和会議では何がこっちに入るかな」
「あまり大したものは入らないんじゃねえか？」
「何でだよ」
すぐに突込みが入った。
「だってよ、エウロパに何かあるか？」
「エウロパに！？」
「そうだよ。あそこに何かあるのかよ」
「性格の悪い貴族共がいるぜ」
「そんなもんいらねえよ」
すぐに返事が返って来た。

「他にはねえのかよ」
「高慢ちきな文化があるぜ」
「結局それも貴族じゃねえか」
罵倒めいた書き込みが入る。
「あとは味が薄いって言われている料理」
「そんなもん食いたくもねえ」
「資源とか産業とかそんなのだよな、あんたが言いたいのは」
「そうだよ。何かあるのかよ」
「いや、ないな」
それには否定の書き込みがすぐに来た。
「エウロパにあって連合にないものってないな」
「そういえばそうだな。こっちはまあ何でも足りているが」
足りているどころか満ち溢れていると言っても過言ではない。それが連合であった。連合は資源も産業も農作物も何もかもが満ち溢れていると言っていい。それはエウロパの比ではない。
「あっちはそうでもないんだよな」
「技術だってこっちの方がずっと上だろ」
「ああ」
「だったらよ、やっぱり併合とかは無意味だよな」
「それは真っ先に否定されてるぜ」
すぐにこう書かれた。
「政治家でそれ言い出してる馬鹿もいねえな」
「そんな馬鹿いたら紹介してくれ。ある意味凄いぞ」
連合の政治家でエウロパ併合を唱える者は一人もいなかった。強硬派は多数いたが彼等はエウロパそのものを締め上げようという考えである。併合論者ではないのだ。
「じゃあエウロパとの講和はそれはないな」
「ないない、絶対ない」
「あんなとこ併合しても何もないぜ」
「かえって騒乱の種抱え込むだけだ。いらねえよ」

頭から否定される。
「そうだな。じゃあどうなるんだ？」
「とりあえずこっちにそうおいそれとは手出し出来ないようにするだろ」
「まずはそれは」
「それで賠償金をな」
「ストレートに表現したらまずいだろ、連中プライド高いからよ」
それはよく認識されていた。実際にそうでもある。
「名称は変わるんじゃね？」
「そうか。まあ金を払わさせて」
「それでバチカンだな。まあそんなところだろう」
「これにて一件落着か」
「何か随分長かったな」
「ステッラからの話だったからな」
彼等は書き込み合う。

## 第十九部第四章　最後の意地その五

「それもこれで終わりだ」
「俺達の勝ちだな」
「気持ちがいいものだな、戦争で勝つなんてな」
彼等が知ることのない感覚であった。連合では戦争というものが長い間なかった。その為戦争に勝つ、負けるという感触を知らなかったのだ。
「はじめてだからな、連合にとっては」
「戦争をしたのもな」
「そこいらの海賊やゴロツキ共の相手は多いけれどな」
「それだけだったからな、武力を使うのは」
「連中には徹底的にやってやればいいしな」
実際に徹底的にやっていた。連合においては各国での刑罰の関係もあるが海賊やテロリストは凶悪犯として扱われる。凶悪犯は取調べと裁判の後で有罪の判決を受けたならば大抵は血も凍る恐ろしい刑罰で処刑されるのが常である。実況中継で生体実験に使われたり、動物の餌になるのも珍しいことではない。他人の権利を害する輩に人権なぞ不要なのだ。そうした輩はどんどん殺しても構わないというのが連合の考えだ。死刑執行人は悪人に裁きを下す正義の職業として人気がある。悪人を殺すというのは何か、善行なのだ。
「それだけだったもんな、ずっと」
「戦争なんてな。ないにこしたことはないしな」
「金儲けにもならやしないしな」
「そうだな。軍需産業って儲からないらしいな」
今ではそれよりもテレビを作った方が遥かに儲かるのが連合である。理由は簡単でその方が遥かに需要が望めるからだ。理由は他にもあり軍需産業の人気はかなりない。
「あれ赤字覚悟のとこもあるらしいぜ」

「そりゃそうだろ。設備投資とかが馬鹿にならねえんだろ？」
「発注もそんなに。だしな」
「消費するってことはそれだけ戦死者がいるってことだから」
連合で最も忌み嫌われていることである。戦死者だけは出してはならないのだ。
「儲かる筈がないんだよ」
「で、実際に儲からないと」
「そういうことだな」
「昔のＳＦとかアニメじゃよく悪の軍需産業とか出てるんだけどな」
「そりゃ漫画だろ」
「実際には昔からそんなに儲からないらしいぜ」
そういうことであった。産業が発達すればする程軍需産業は儲からなくなる。それが実際なのだ。
「それよりスポーツチーム持った方がよっぽどましだぜ」
「少なくとも宣伝になるからな」
「そうそう」
連合においては軍需産業というのは採算のいい分野ではないのだ。参入するにはかなりの技術力が必要だししかもそれを常に向上させる為に設備投資が欠かせない。品質管理も厳重だ。そうやって金と気を注いでも収入はそれ程ではない。だからあまり人気がないのだ。軍も公に自分の会社の製品を使っているという宣伝は出来てもこれも赤字覚悟なのである。兵器というものは実際には採算のいいものではないのだ。
「アイドルの事務所持ったりとかな」
「どっかの事務所の社長になれば大きいからな」
「美少年のタレント側にはべらせてな」
「そりゃあそこの社長だろ」
そうした噂のある社長も連合には存在している。
「あの人ももう七十越えてるんだろ？それでか」
「元気だよなあ」

「全くだ」
「まっ、講和自体は程ないところで落ち着きそうだな」
「そうだな」
その言葉に応えて頷く。
「俺達にとって有利な形になるかな」
「そこまでこじつけるのにまた苦労するんじゃねえの？」
「またかよ」
「何でそれが言えるんだ？」
「だってよ、エウロパだって必死だぜ」
それが返答であった。
「やっぱりここは。相当な苦労があると思うぜ」
「最後の最後までもか」
「難儀なもんだな」
「けどそれが終わったらいよいよだな」
「ああ、いよいよだ」
彼等が待ち望んでいる勝利の確定がそこにある。
「俺達の勝利がな」
「確かなものになるぜ」
「じゃあその時の祭り楽しみにしとこうぜ」
「よし」
「酒でも用意するか」
「つまみもな」
そんな書き込みがネットで行われていた。そして実際にマウリアの仲裁の下連合とエウロパは講和のテーブルについていたのである。
主な参加者は連合からは大統領であるキロモト、外相のカバリエ、そして国防相の八条だ。これに対するエウロパ側の主な参加者は総統であるラフネール、首相のペーチ、外相のカミュだ。三人はそれぞれ向かい合って話をする形となっていた。
八条とペーチはカウンターパートナーを持ってはいなかった。だがそれでも話をしていた。

「まずこちらからの講和の案ですが」
カバリエが口を開く。そしてラテン語で書かれた一枚の書類をエウロパ側に手渡す。それを双方の間に座るマウリアの者が仲介する形でエウロパ側に引き渡した。
「この様なものでどうでしょうか」
そこに書かれている条件は次のようなものであった。

## 第十九部第四章　最後の意地その六

1．エウロパは連合中央政府に対して友好の証としての義援金を毎年六〇京テラ相当を支払う。
2．ニーベルング星系及びブラウベルグ回廊を連合に割譲する。
3．ニーベルング星系周辺の星系を連合に割譲。
4．ローマ教皇及びバチカンは連合に招待する。
5．エウロパ領内への連合軍艦艇の通行の自由。
6。エウロパ全域の非武装化

それはエウロパが、連合の大部分が予想したものよりも遥かに高圧的で過酷なものであった。だが連合側はあえてそれを提示したのである。

「これで如何でしょうか」
「これが。講和の条件でしょうか」
「はい」
カバリエがカミュの言葉に応える。
「我々としてはこれで宜しいかと」
「左様ですか」
カミュはまずはそれを受けた。
「そちらとしてはどうでしょうか」
「無論」
「これでは講和をすることは出来ませんな」
カミュが言うよりも先にペーチが声をあげてきた。
「首相」
「むっ」
カミュが声をあげ連合とマウリアの者達が目を瞠った。いつもは穏やかなペーチが何時になく強い言葉を口にしたからである。これは意外であった。

「この様なものを受け入れては。講和ではなく服属になります」
彼はカバリエを見据えて言った。
「我々は講和のテーブルに着いたのであって服属の為のテーブルに着いたのではありません」
「首相」
ラフネールもその強い言葉に驚いていた。ペーチに顔を向けている。
「ですから。飲めないものははっきりと述べさせて頂きます」
「成程」
キロモトはそれを聞いてまずは頷いた。
「それでは今の案件はお断りするというわけですね」
「そうです」
ペーチも答えた。
「ですから。まずはそれをお下げ下さい」
「残念ですがこちらもそういうわけにはいきません」
それにカバリエが返した。
「我々も今連合の為にここに来ているのですから」
「それは私も承知しています。しかしそれと同じように」
ペーチの目の光が強くなっていた。それは彼が今まで見せたことのないものであった。
「私もまた。エウロパの為にここに来ています」
「エウロパの為、ですか」
「そうです。エウロパの為にこの提案は受け入れることが出来ません」
これには連合の者達も目を瞠った。今や連合軍はオリンポスにまで入っている。エウロパは丸裸と言っていい状態である。それでもなおこの様なことを言えるペーチの胆力を見たからだ。
「宜しいでしょうか」
「では」
カバリエがまた口を開いた。

「そちらの提案はおありなのですか」
「当然です」
彼は答えた。
「我々の案はこれです」
そして一枚の紙を出してきた。またマウリアがそれを仲介して手渡す。その内容は次のようなものであった。

## 第十九部第四章　最後の意地その七

1．エウロパは連合中央政府に対して友好の証としての義援金をを支払う。
2．ニーベルング星系及びブラウベルグ回廊を連合に割譲する。
3．ニーベルング星系周辺の星系の非武装化。
4．連合とエウロパの不可侵条約締結。
5．連合とエウロパ、互いの法を尊重する。

以上のものであった。これを見てまずは八条が口を開いた。
「御聞きしたいのですが」
「はい」
ペーチがそれに応じる。
「この五番目は」
「具体的に言いますと治外法権を認めないということです」
「治外法権を」
「互いの法に干渉せず、侵すことがないようにと。おわかりでしょうか」
「わかりました」
八条はその説明を聞いたうえで頷いた。
「それは宜しいでしょうか」
「そうですな」
権限者であるキロモトがそれに応える。
「我々としてもエウロパの法は尊重しております」
むしろエウロパ本土のことはどうでもいいというのが本音である。彼等の目的はエウロパを弱めることであってエウロパを呑み込むことではないのだ。
「これは了承したいと思います」
「左様ですか」

「ですが他の条についてはお待ち下さい」
彼は言った。
「まずは審議したいと思います。宜しいでしょうか」
「わかりました。それでは」
「はい」
会議は一旦終わった。そして明日また協議のテーブルに着くことになった。話し合いはまだ続くのであった。その中マウリア側は連合に接近していた。
「あの条件ですが」
そのうちの一人がこっそりとカバリエに近付いて問うてきていた。
「あまりにも。高圧的ではありませんか」
「あら」
カバリエはそれにこやかに笑って応える。
「そうでしょうか」
そしてこう言ってまずは受け流そうとした。だがマウリアの高官はその受け流しを防いできた。反撃に出て来た。
「いえ、本当に」
「あれ位なら宜しいのではなくて？」
「御冗談を」
それを即座に否定する。
「あの様な厳しいものは。講和のものではありません」
そう言って否定したのだ。
「あれではまるで併合を目論んでいるか、挑発しています」
「挑発、ですか」
「そうです」
高官は少しムッとした顔になった。
「まさかとは思いますがまだ戦争を望まれているのですか？」
「連合は戦争を好みません」
その言葉に対するカバリエの返事であった。これは確かに事実である。産業や貿易の発展、惑星開拓を至上命題としている連合にと

っては戦争はそれを阻害する害悪に他ならない。対外戦争にしろはじめてなのである。これはこれで将兵の犠牲が気になるものなのだ。だから連合は戦争を好まないのだ。
「それに。最早戦争目的は達しましたし」
「それでは何故そこで」
高官の声が大きくなっていた。うっかりヒンドゥー語になりかけてさえいた。
「まあ御安心下さい」
カバリエはそんな彼に対してこう言った。
「悪いようにはしませんから」
「決裂、ということにならなければいいですけれどね」
最後はいささか皮肉が篭もっていた。
「それだけはないようにお願いしますよ」
「決裂、ですか」
「そうです。そうなればどうなるかおわかりでしょう」
その連合側が嫌うと自分で言っている戦争がまたはじまるのだ。それだけはないように釘を指してきたのだ。
「勿論です」
それに対してカバリエの笑みは変わらなかった。
「ですから」
「では期待させてもらいましょう」
不安ではあったがそれに頷くしかなかった。
「それでは」
「はい」
高官はカバリエから離れた。カバリエはそれを見てさっきと同じ笑みを浮かべていた。
「どうやら上手くいっているようね」
そう心の中で言って笑っていた。
「このままいけば大丈夫ね」
そしてコヨルショウキに戻った。この日の講和会議のことはすぐ

におおよそのことが連合、エウロパ双方のネットに伝わっていた。
まずはエウロパのネットは紛糾していた。

## 第十九部第四章　最後の意地その八

「連合の奴等、かなり高圧的なもの送りつけてくれたらしいな」
「何かこっちの星系の大部分を寄越せとか言ったらしいな」
そこには伝聞もかなり入っていた。その為彼等の激昂は高いものであった。
「オリンポスまで寄越せとか言ってるらしいぞ」
「いや、そこまではないらしい」
「そうなのか」
「精々ニーベルング周辺までらしいぞ」
正確な情報を掴んでいる者もいた。だがこの時点ではまだそれは確かなものとしては伝わってはいない。ここにネットの問題があった。確かな情報と不確かな情報の分析、見極めが難しいのだ。
「そうなのか？」
「それでも相当なものだぞ」
議論はとりあえずは落ち着いた。だがそれでも紛糾はあった。
「それだけ取られたらかなりのものだ」
「ニーベルングは仕方ないにしてもだ」
「仕方ないか？」
「あそこを取られたらかなり辛いぞ」
エウロパの防衛上かなり不味いことであるのは最早常識であった。彼等もそれがよくわかっていた。
「それでもな。あそこを取られるのは仕方ないさ。俺達は負けたんだからな」
「そうか」
「そうさ。それは仕方ないだろ」
そう返答が書かれた。
「だが。その周辺まで渡すのはな」
「ああ。絶対に駄目だ」

「それだけはな」
「それに義援金か？」
名称はそうなっているがそれが賠償金に他ならないのは一目瞭然であった。
「あれも相当なもん要求してきてくれたな」
「ああ」
「あんなもの払いきれないぞ、それに毎年も」
「連中、俺達を挑発しているのか？」
彼等もそう感じていた。
「それでもう一回戦争するつもりか？」
「まさか」
「幾ら何でもそれは」
「しかしな。かなり高圧的な内容じゃないか」
「それはな」
誰も否定出来なかった。
「有り得るよな」
「ああ」
「また戦争をするつもりかよ」
「よくあるからな、こういうことは」
誰かが書き込んだ。
「ほら、相手が飲めない挑発をするってやつ」
「あるな、それ」
「それで相手を怒らせて」
「ドカン、ってやつだな」
「そういうことだな」
戦争を起こす常套手段の一つである。こうすれば大義名分は自分達のものとなる。大事なのは自分が何を突きつけたか、ではないのだ。相手が何を起こしたか、であるのだ。
「それかな、やっぱり」
「そうかもな」

掲示板に不穏な空気が漂ってきた。
「若しそれでラフネール卿とかが乗ったらどうなるんだ？」
「言うまでもないだろ」
すぐに返事が書き込まれた。
「戦争だよ」
「やっぱりそれか」
「そして今度こそ、ってなるんだろな」
「ふざけた話だ」
「今度は俺も戦うぞ」
怒りにまかせた感情的な書き込みが遂に来た。

## 第十九部第四章　最後の意地その九

「戦うってどうやってだよ」
「家に銃がある。それでな」
「今それは無理だぜ」
これは流石に笑われた。
「そうだよ、宇宙に出なけりゃな」
「そうか」
「そうだよ、まあ気持ちはわかるがな」
「それによ、軍に入隊してからでないと捕虜にもなれないしな」
「そう、それだよ」
この書き込みに突込みが入った。
「軍に所属しないと駄目だったんだよな」
「ああ」
「それで規定の軍服を着ないとな。何か窮屈な話だよな」
「けど仕方ないだろう」
そうした意見をフォローする書き込みもやはりあった。ネットは多くの者が参加する。だから様々な意見、様々な知識を持つ者が書き込み、多くの考えを見られるのだ。
「実際にそうじゃないとゲリラ扱いだからな」
「ゲリラか」
それを聞いて一同冷静になった。
「悪けりゃテロリストだな」
「おい、冗談じゃないぞ」
誰かが慌てた様に書き込んだ。
「何で俺達がテロリストなんだよ」
「エウロパの為にやってもか」
「それもまた戦争なんだよ」
「戦争か」

「そうさ。戦争にもルールがあるんだ」
人類社会なら何処でもそうである。何事も。だから戦争にもルールがあるのは当然なのだ。ルールがなければそれは単なる殺戮となってしまう。実際にそうであることも多いがこの戦争はルールある戦争であった。連合もエウロパもルールを知っており、それが政治的にどう影響するか把握していたからこそ今回はそれが重要視されているのだ。
「だからな、軍服を着なくちゃいけないんだ、軍に入ってな」
「じゃあその時は志願するか」
「ああ、そうした方がいいな」
「実際に戦争になるんならな」
「なるかな、やっぱり」
それについても考えられるのだった。
「どうかな」
「一概には言えないんじゃないか？」
「交渉の駆け引きって可能性もあるってことか」
「そういうことだな」
「連合も馬鹿じゃないからな」
「馬鹿じゃないな、確かに」
誰かが書き込んだ。
「狡賢いぜ、中々」
「狡賢いか」
「そうだよ、奴等は」
ここには偏見も含まれていた。やはり彼等はエウロパの人間であり連合の者に対しては多かれ少なかれ偏見を抱いていた。これは連合も同じであるからお互い様である。
「そうだからこそ注意が必要だ」
「迂闊な動きはするなってことだな」
「ああ」
「じゃあどうするべきだろうな」

何となく交渉者自身になっている気分になってきている者もいた。
「俺達は。ここは」
「やはりまずは冷静になることだな」
「冷静にか」
「ああ。そうじゃないと敵の意図を見抜けない」
「何を考えているか」
「何を仕掛けているか」
連動する様に二人が書き込んだ。

## 第十九部第四章　最後の意地その十

「それを見抜いてからだな」
「じゃあ連合は何を狙っているかだな」
「挑発か。それとも」
「交渉か。どちらだろうな」
考えは巡る。螺旋状に。
「これ俺の考えだけれどな」
「何だ？」
「多分。戦争じゃないぞ」
誰かがそう書き込んだ。
「何でそう言えるんだ？」
「だってな、連合は志願制だろ」
「それを言うなら俺達だってそうだぞ」
連合軍もエウロパ軍もそれは同じであった。完全志願制である。サハラの国々の様に徴兵制はそれが選抜であってもない。状況が違うからだ。
「いや、それに連合は階級もないしな」
これはかなり大きかった。
「貴族みたいに軍役を誇りにしているわけじゃないしさ」
「ああ、何か軍隊も仕事の一つでしかないんだってな」
「それで給料や待遇が悪かったら人が来ないって」
「凄い話だよな、それで戦争が出来るっていうんだからな」
「別世界みたいだ」
「だからだよ」
話をはじめた者がここで書き込んだ。
「連中はまず働くことが大事なんだ」
「ああ」
「仕事だからな。仕事で死にたいなんて誰も思わないよな」

「そりゃな」
「俺だって大工で死にたくはないぜ」
「あんた大工か」
不意に職業に突込みが入った。
「まあな。それでだ」
「ああ」
「だから連合軍はこれ以上戦争をしないっていうのか？」
「戦争やったら損害が出るだろう？」
これは言うまでもないことである。損害の出ない戦争なぞ有り得ない。連合軍にしろエウロパ軍や義勇軍と比べれば非常に微々たるものであるが損害が出ている。これは連合にとっては憂慮すべき数であるという意見もあるのだ。連合軍はまずは戦死者を出すことを避ける。それが志願者の減少、そして中央政府への糾弾に直結するからだ。政治家として、また国防の責任者としてそれは避けなければならないものであるのだ。
「それに連中もうオリンポスまでいるよな」
「忌々しいことにな」
「だからだよ」
また書き込まれた。
「もう戦略目的は達してるだろ？」
「エウロパの大部分、特にオリンポス占領か」
「挑発するしない以前にもうそこまでいるんだから意味ないんじゃないか？」
「挑発する理由がないってことか」
それが現実であった。連合軍とて好き好んで戦いをするわけではないのである。
「俺はそう思うけどな。だから安心していいだろ」
「そうか」
「そう思うけどな。だからな」
「これは交渉か」

「だとしても随分高圧的なのは変わらないぜ」
「確かにな」
これは彼等の主観だが彼等にしては事実である。
「こんなの飲める筈ないだろ」
「で、次にはトーンダウンしたのを出して来るってわけか」
「そうじゃないかな」
「だとしたらどうなるかな」
「少なくとも俺達が飲めるやつなんだろうな」
話はそこにも行く。
「どうだろうな、どっちにしろとんでもないもんじゃないのか？」
「かもな。奴等だしな」
「どんなのを出して来るやら」
何はともあれ彼等も連合の動きに注目していた。そうした意味では政府の者達と同じであった。違うのはその立場であったが。決定権を持つ者達はその苦悩をも抱え込んでいたのである。
「あの条件を飲むわけにはいかない」
ラフネールは厳しい顔と声でペーチに話していた。今二人はラフネールの私邸にいた。そこで今後の打ち合わせを行っていたのである。
「飲めば。エウロパは二度と立ち上がれなくなる」
「ですね」
ペーチもそれに頷いた。
「あの賠償金はそれだけで我々の財政に致命的な打撃を与えかねません」
「それを毎年だ。エウロパの経済は確実に崩壊する」
「そのうえニーベルング周辺の星系を割譲となると。防衛上でも致命的な事態となります」
「彼等もそれを狙っているのだろうがな」
「いえ」
しかしペーチはこれとは違う考えを示した。

「あの条件は。我々が受け入れることが出来ないのを承知して出したのではないでしょうか」
「ではやはり挑発か」
「それもないかと。既に彼等はこのオリンポスまで来ておりますし」
「では一体」
そこを問う。
「外交上の駆け引きではないかと思うのですが」
「最初に強硬な意見を出して後で、か」
「そうではないかと思うのですが」
「ふむ」
ラフネールは柔らかいソファーの上で腕を組んだ。そして考え込んだ。
「では。どういった条件で来るかな」
「まず義援金はかなり減るものと思われます」
「ふむ」
「そして。実際にはエウロパ領の割譲はニーベルングだけで済むと思います」
「それとブラウベルグ回廊だな」
「おそらくは。それだけで済むかと」
「ブラウベルグをか」
だがラフネールはそこに感慨を込めずにはいられなかった。

## 第十九部第四章　最後の意地その十一

「一千年前我々の祖先達はあの回廊を越えてこのエウロパにまで来た」
「はい」
「そこを明け渡すというのだな」
「これは仕方ないかと。おそらく連合はあの場所に一大軍事基地を作り上げるでしょう」
「ガンタース、ニーベルングを繋ぐ中継基地か」
「おそらくは」
それを築くとなると。連合軍も本気だということであった。
「連合の防御は難攻不落のものになるな。太刀打ちは出来まい」
「それで我々の備えにするかと。同時に周辺星系は非武装地帯として」
「ううむ」
「領土的にはこれで終わるかと思います」
「それでもかなり過酷な条件だな」
「ですがエウロパは残ります」
それは事実であった。失うものが大きくとも。
「残る、か」
「対処は可能です。あと義援金は交渉の余地が残っております」
「何処で手を打たせるかだな」
「はい。彼等が我々に手枷、足枷をしようとしているのは確実です」
ペーチはそれを読んでいた。
「ですから」
「それは避けなければならないな」
「そういうことです。後は」
「バチカンだな」
ラフネールは教会に言及してきた。

「彼等はバチカンの移転を要求してきている」
「表向きは信者の願いですが」
「実際は。違うな」
「はい、まずは工作の源を断つこと」
この戦争はステッラ達エウロパの工作員達がバチカンの枢機卿と結託して連合内に侵入し工作を繰り返していたことが発覚したことにはじまる。即ちこの問題の解決は連合にとっては必須なのだ。それがわかっているからこそ連合も講和の条件としてバチカンの移転を盛り込んでいるのだ。無論別の意図もある。
「次に我々から権威の剥奪」
「バチカンという権威をだな」
「そうです」
ペーチはそれに頷いた。
「彼等は。それと同時に我々からバチカンという権威を剥奪し、自分達のものとしようとしております」
「狡猾なことだ」
「ですがそれが政治でしょう」
だが彼はそれは不問にした。
「我々もまた。バチカンを利用してきましたから。そしてバチカンも」
「同じか」
「私はそう思います。ですからここで肝心なのは」
「我々は。彼等より狡猾にならなければならないということだな」
「その通りです」
ペーチはラフネールのその言葉に首を縦に振った。
「そうした意味で我々は今覚悟が必要なのです」
「だな」
ラフネールもその言葉に頷くしかなかった。
「ですがバチカンは。引き渡すしかないでしょう」
「それでもか」

「さもなければ。講和自体が進みません。ニーベルング、ブラウベルグと同じくそれは致し方ないかと」
「バチカンが。我等からなくなるのだな」
「残念ですが」
ラフネールはカトリックである。その彼にとってバチカンを連合に奪われることは耐えられないことであった。だがそれを飲まなければならないのは彼にも理解出来るものであった。また彼自身もそれを認めるしかなかった。認めたくはないことであっても認めるしかなかったのである。
ラフネールの顔がとりわけ苦いものになった。カトリックの信者としてそれに首を縦に振ることは出来ない。だが彼はカトリックの信者である以上にエウロパの総統であった。その立場としてはこれの首を縦に振るしかなかった。それがどれだけエウロパにとって屈辱的なものであったとしてもだ。
「わかった」
遂に彼はこの言葉を口に出した。

## 第十九部第四章　最後の意地その十二

「ではバチカンを。彼等に引き渡そう」
「既にバチカンは政治的決定に口を出さないと宣言しております」
「バチカンも。覚悟を決めているのだな」
「はい。連合ではもうバチカンを何処に置くべきかで議論が行われているそうです」
「気の早い連中だ」
思わず出た言葉である。それと共に苦渋にも満ちている言葉であった。
「バチカンが何処にあるかで交通や交易が大きく変わりますから。これは当然でしょう」
「利益が。大事だというのだな」
「はい」
ペーチは答えた。
「巡礼者の落とす金を。連合各国は欲しているのです」
「貪欲なものだ」
「連合はあくまで利潤を追い求める社会ですので」
「それでか。宗教でさえも権益となる」
連合らしいと言えばらしいが。ペーチはここであえてこう言うのであった。
「それもまた。人間です」
「そうだな。よく考えれば我々もそれは同じだ」
「ですね」
「まあいい。とりあえず我々の出す条件は整ってきたな」
それだけは整ってきていた。彼等にとっては苦い内容であっても。
「そうですね。義援金を抑え」
「ブラウベルグとニーベルングの割譲」
「そしてバチカンの移転。これだけでよいかと」

「わかった。ではマウリア側にはそう話を伝えてくれ」
「はい」
「これで話を纏めなければな。しかし」
ラフネールはここでペーチの顔を見てきた。
「何でしょうか」
ペーチもそれに気付き顔を彼に向けてきた。
「卿も意外だな」
「といいますと」
「いや、ここまで強硬に連合に立ち向かうとはな」
それはラフネールにとっては予想外のことであったのだ。
「どうやら。私は卿のことをよくわかっていなかったらしい」
「はあ」
「今回の会議。卿に任せてみたくもなった」
そう言ってニヤリと笑った。
「どうやら。我々は得難い人物を手に入れているな」
「有り難うございます」
「卿がいてくれているという、そのことだけでエウロパは救われる。では会議に挑むか」
「はい」
「だがその前にだ」
ラフネールはここで会議からは離れてきた。
「景気付けに。ブランデーはどうか」
「ブランデーですか」
「そうだ、丁度緑のいいものが入っているのだ」
ブランデーは葡萄等の果実を発酵させて作る。発酵させてから蒸留して寝かせて作るのだ。その原材料の関係で緑のブランデーもあるのだ。他には赤や青のブランデーも存在する。今ラフネールが話を出してきた緑のブランデーはエウロパにおいては高級酒として人気がある。鮮やかな緑にコクがあり、それでいてすっくりとした喉越しで評判なのだ。

「どうかね」
「折角ですが」
だが彼はその申し出を断った。手の平を前に出して断る。
「いいのか」
「申し訳ありませんが」
「そうか。それなら無理には言わないが」
「折角の申し出ですが」
「いや、いい。では講和会議は宜しく頼むぞ」
「わかりました」
ペーチは頷いた。二人は覚悟を決めていた。この会談はエウロパの運命を決する、それがわかっていたからこそ彼等は覚悟を決めていたのである。

## 第十九部第四章　最後の意地その十三

そして会談はこの日も行われた。まずは連合からの提案であった。
「よく話し合った結果ですが」
カバリエが話を切り出す。
「我々としてはこれで」
その内容はいささか譲歩したものであった。義援金は減らされ、割譲する領土も幾分か減らされていた。だがバチカンは相変わらず連合に、というものであった。
「法皇庁に直接話を聞いたのですが」
「はい」
ペーチがカバリエに応えた。
「あちらは神の思われるままに従うとのことです」
「左様ですか」
そう言うしかなかったのだ。今のバチカンに発言権はなかった。
「そのうえでこの提案を述べさせて頂きます」
「ふむ」
エウロパ側はまずはその提案をよく見渡した。そのうえでペーチがコメントした。
「こちらとしては義援金はここまでは払えませんな」
そしてまた言った。
「領土もです」
「それは何故でしょうか」
「エウロパを守る為、と言えばよいでしょうか」
彼は言う。
「これを飲んではエウロパは崩壊します。よってこれを受け入れることは出来ません」
「ではどういった条件ならばよいでしょうか」
「義援金はまずこれだけです」

ここで義援金の案を出してきた。それは驚いたことに今回の戦争で連合が使った軍事費とほぼ同じ額であった。エウロパはこれを提示すると共に自分達の分析能力、調査能力も見せてきたのだ。まだ今回の軍事費は発表されていない。だがそれよりも前に出してきたのである。
「これを。一年で如何でしょうか」
「一年ですか」
「はい。承知して頂けるものだと思いますが」
「長官」
カバリエはここで八条に目をやった。そして問う。
「そうですね」
彼はそれに応えて口を開いた。
「我々としては満足のいく額だと思います」
「そうですか」
これは国防省としての見解であった。彼はここではあえて国防省のトップとしての見解を述べたのであった。無論こっれで話がまとまるとは思っていない。彼等の話は続く。
「額としては問題ないと思います」
カバリエは返答を送った。
「しかし」
「しかし？」
「一年では。いささか短いと思うのですが」
「連合ならば大丈夫だと思いますが」
「我々なら」
その言葉に応える。
「はい。それだけの御力があるのですから。ここまで来られるだけの御力が」
「それとこれとは話が別だとは思いますが」
「いえ、そうではありません。それは貴方達がわかっておられないだけです」

「我々が」
「そうです。ですから我々としてはこれだけでいいと思います」
ペーチは述べた。
「それにこれ以上支払うというのは我々の能力を越えている」
「ふむ」
「如何でしょうか。丁度いい内容だと思いますが」
「まずはそれは後でじっくりお話しましょう」
連合側はこの問題を一時置くことにした。そして別の内容に入った。
「まずは申し遅れましたがエウロパ領内への連合軍艦艇の通行の自由とエウロパ全域の非武装化ですが」
「はい」
「これ等は取り下げさせて頂きます」
「何故に」
ペーチはそれを聞いて内心笑みを作った。そのうえでカバリエに問うた。
「最初はそちらの市民の要望があったのですが」
これは嘘である。
「ですが我々も考えまして。そちらの権限を侵すのではないかと思いこれは取り下げました」
「左様ですか」
「はい。そのうえでお話したいと思います」
これは駆け引きであった。ここで惹いたからそちらも、というわけである。だがペーチは引かなかった。むしろ押してきたのである。これは連合にとっても意外であった。
「ではこちらとしましては」
「はい」
「ニーベルング以外は。割譲出来ません」
「ほう」
カバリエ達は内心その言葉を意外に思ったがそれを隠してあえて

彼に尋ねた。
「それは何故でしょうか」
「そちらの事情を鑑みまして」
「我々の事情とは？」
「そちらは三百の国により構成されていますね」
「はい」
「確かにそうですが」
それは否定出来なかった。エウロパもそうであるが連合は国家連合なのだ。しかも各国の権限は中央集権的色彩の強いエウロパよりもずっと強いものになっている。この参加国のそれぞれの権限と自主性が強いのが連合の特徴であるのだ。中央政府があるにしろ、だ。
「だからこそです」
「どういうことでしょうか」
カバリエは問う。
「そこに事情があるとは」
「その割譲した星系は連合のいずれかの国のものになるのですね」
「はい」
カバリエは答えた。必然的にそうなるのは自明の理である。
「ならば。どの国のものになるのですかな」
「むっ」
その言葉を聞いてようやくペーチが何を言わんとしているのかがわかった。

## 第十九部第四章　最後の意地その十四

「どの国が。これは問題ではないでしょうか」
ペーチは連合の構造を熟知したうえであえてこう言ってきたのである。その割譲した星系がどの国のものになるかで各国の間でトラブルの原因となる。そうなればまた厄介なことになりそこをエウロパに逆に付け込まれることになりかねない。彼はそこを突いてきたのである。
「私はそう思うのですが如何でしょうか」
そしてこう述べたのであった。連合のシステムをよく知っているからこその言葉であった。
「如何でしょうか」
「そうですね」
カバリエはこの件での敗北を悟った。そのうえで彼に言った。
「まずは検討させて頂きます」
とりあえずはこう述べた。
「そのうえで返事をさせて頂きます。これで宜しいでしょうか」
「ええ、我々は構いません」
ペーチはやんわりとした言葉でそれに返した。
「我々は。そちらにお任せします」
「はい。ではこちらからの返答は明日のこの場でということで」
「わかりました」
今日のところはこれで終わりとなった。
「それでは」
「また明日」
それまでは銀河語で話されていたものがエウロパ側はラテン語で挨拶をした。これもまた印象的な出来事であった。何はともあれ今日の話は終わった。そしてその夜双方はそれぞれの打ち合わせに入っていた。

彼等だけでなくこれは調停者であるマウリア側も同じであった。
ピガーチャルは自分の泊まるホテルの一室で主だった者達を集めて話をしていた。
「そろそろ終わりだな」
まず彼はこう言った。
「終わりですか」
スタッフの一人がそれに問うた。
「そうだ。ここはエウロパの要求通りになる」
「エウロパの勝ちということですか」
「講和の内容がエウロパにとって厳しいことには変わりないがな」
かなりの譲歩を勝ち取ってもだ。それでもニーベルングを割譲し、義援金を支払い、バチカンは連合に行くことになる。それだけでかなりのダメージなのは言うまでもない。
「だが。エウロパの要求通りにいったということは勝ちと見ていい」
「左様ですか」
「明日にでも話は決まる」
彼はそのうえで言った。
「これでこの戦争は正式に終わることになる」
「随分と長い戦争でしたが」
「これで終わりですね」
「そうだ。だが連合は予想通りだったな」
「予想通りですか」
「彼等は数を背景に戦争を行ってきた」
今度は連合の戦いについて言及しだした。
「そしてここまで来た。高圧的な条件を出してきたのも予想していた」
「予想されていましたか？」
「そうだが」
ピガーチャルはスタッフの問いに返した。
「連合の性質を考えるとな」

「私はそうは思わなかったのですが」
「そうなのか？」
「はい。カバリエ外相や八条長官の性格からして。ソフトな手法で行くと思っていました」
「そうだったのか」
それはピガーチャルとは違う予想であったので印象があった。
「またそれは。面白いな」
「はあ」
「実際には強硬路線で来たわけだがこれも駆け引きだ」
駆け引きという言葉に反応する。
「駆け引きだったのですか」
「最初から穏やかな提案をすればどうなる？あらためて尋ねるが」
「そうですね」
「まずはエウロパ側の人材を見ます」
先程カバリエ、八条に関して言及したスタッフの一人がまた言った。
「やはり。カミュ外相の存在が大きいですね」
「彼か」
「はい。あの御仁はああした性格ですが能力があるのは事実です。おそらくはそこに付け入ってくるでしょう」
「おそらくはな」
彼の読みはそうであった。それを言葉にも出してみせる。
「ですから。下手に穏やかな提案を最初に出しては連合にとって面白くない講和内容になったと思います。それを考えますとやはり強硬路線でよかったのではないでしょうか」
「君はそう分析するのだな？」
「はい。今思ったことですが」
「そうだな、その通りだ」
そしてピガーチャルはそれを認めた。

## 第十九部第四章　最後の意地その十五

「連合がソフト路線を採っていたならば確実にそうなっていただろうな」
「では」
「連合側もわかっていたのだ。だからこそあえて強硬な案を最初に出してきた」
「それで流れを掴む為に」
「うむ。実際に流れを掴むことは出来たな」
「確かに」
その通りであった。流れを掴むということは交渉において非常に大きい。連合はそれを手にしたのである。
「案件もどうやら彼等の望む方向に落ち着きそうですな」
「しかし」
ここでスタッフの中の一人が言った。
「どうした？」
「思ったより欲のない条件でしたな」
彼は言う。
「領土はニーベルングだけ、義援金は一年のみ、そしてバチカンの移動だけとは」
「確かに。これでは自然とエウロパが勢力を回復するのでは？」
「今は敗戦のダメージがありますがそのうちに」
「そうなればまた対立になりますが」
「おそらく連合はそれもわかっているのだろうな」
ピガーチャルはそれについても述べた。
「わかっていると」
「そうだ。エウロパが弱体化するのも彼等にとっては困るのだ」
「何故に」
「これはおそらく無意識的にそうしているのだろうが」

ピガーチャルは話す。
「二つの理由があるな」
「二つ」
「そう、まず連合は外に敵を欲している」
「敵」
「それは内を纏める為の敵でしょうか」
「その通りだ」
またスタッフの一人の問いに答えた。
「知っての通り連合は雑多な勢力だ。モザイク状になっていると言っても過言ではない」
「はい」
「それは確かに」
スタッフ達もそれは熟知していた。連合のそうした状況は政治を知っている者なら誰でも知っていることである。だからこそ頷くのであった。
「そういった勢力を纏めるのは非常に困難だ。だが彼等には共通の敵が今まで存在していた」
「それがエウロパだと」
「そういうことだ。これからもその共通の敵は必要だ」
「ではその為にもエウロパの勢力を温存していると」
それに今気付いた。
「理由の一つはそれだ。そしてもう一つは」
「もう一つは」
「サハラだ」
語る声が強い響きを帯びていた。
「サハラ」
「何故ここでサハラが」
「夷を以って夷を制す」
彼は諺を出してきた。
「中国の古い諺だったな」

「はい」
「確かそうだったかと」
外敵に対して同じ外敵をぶつけさせてそれで互いの力を弱めるというものである。中国の歴代王朝が宿敵である北方の遊牧民族に対して用いてきた伝統的な外交戦略である。これを使って彼等はあの精悍な騎馬民族に対してきたのである。非常に頭のいい外交戦略と言うべきである。
「それだ。サハラもまた連合にとって脅威となる可能性があるのだ」
「サハラですか！？」
「それは」
そこにいた多くの者がそれに対して懐疑的な言葉を述べる。
「まさかそれはないでしょう」
「サハラは分裂状態です。それがどうして」
「今のサハラの流れを。どう思うか」
だがピガーチャルの言葉は真剣なものであった。彼は顔も真剣なままスタッフ達に問うていたのであった。
「どうとは」
「長い間多くの国に分裂していましたが今は大きく三つになっていますな」
「ハサンとオムダーマンとティムールと」
「とりわけオムダーマンとティムールの勢力伸張が著しいかと。あの二国により今のサハラの状況が作られたと言っても過言ではありませんから」
「そうだな。その二国の動きだ」
ピガーチャルは言った。

## 第十九部第四章　最後の意地その十六

「その二国の大幅な勢力伸張はまた戦乱を引き起こす」
「ハサンを巻き込んで」
「そうだ、三国の戦いだ」
彼の言葉は続く。
「若しかするとそのまま統一されるかも知れない」
「統一」
「サハラが」
今一つ実感の出来ない言葉であった。長い間、それこそアッバース朝の時代から一つになることのなかったあのサハラが一つになる。サハラはその為に長い間戦乱が支配していたが今までそれが適うことがなかった。そう言われてもどうにも実感が掴めないのは仕方がなかった。
「そうだ、統一されるかもな」
「あの三国のうちのいずれかが」
「統一するというのですね」
「それにより二千億の統一国家が誕生する」
「二千億」
一口で済むがそれが示すものは。マウリアに匹敵する大国の存在であるのだった。
「そのうえ今まで手が着けられていなかった多くの開拓地と眠っている資源がある。何を意味するのかはわかるな」
「強大な勢力が」
「連合の側に誕生すると」
「そう、しかも全く異なる文明、全く異なる性質の勢力がな。我々とはまた違った存在が」
「お待ち下さい」
その話を聞いて一人が気付いた。

「それはむしろ。我々にとって脅威なのでは？」
「そうだな」
「考えればそうだ」
　他の者もそれに気付いた。連合は圧倒的な力を持っている。人口にして四兆、対するサハラは統一しても二千億である。だがマウリアは公式に発表している人口は二千億だ。力が拮抗しているのである。しかも彼等はマウリアとも異なる文明であり性質も異なる。すなわち衝突する可能性は大いにあるのだ。彼等にしても。
「そうだ、彼等は我々にとっても脅威なのだ」
　ピガーチャルもそれを認識していた。それをあえて黙っていることで彼等に気付かせたのである。
「だからこそ。今回の戦争も仲裁した」
「エウロパの力を過度に削がない為に」
「そういうことだ。これでわかったな」
「はい」
「全てが」
「連合と我々の考えはここでは一致しているのだ」
　そして言う。
「まだエウロパには弱くなっては困る」
「我々の為にも」
「動いてもらう。彼等もそれは気付いているのかも知れないがな」
「しかしそうせざるを得ないと」
「彼等もまた弱体化は望まない。誰にとってもいいことではないのか？」
　そしてここまで言って不敵な笑みを作った。
「この講和は」
「サハラはともかくとしまして」
「あそこもまだどうなるかはっきりしないところがあるがな」
　言うならば予防処置である。国家の安全にはこれもまた欠かせないことなのだ。

「だが。ここは連合に乗っかる。そして手を打つぞ」
「わかりました」
「それではその方針で」
「うむ。サハラは今後間違いなく大きく動く」
ピガーチャルはそれを見抜いていた。
「だからこそ。わかるな」
「はい」
マウリアも決して善意で仲裁を買って出たわけではない。今それを果たそうとしていた。彼等は彼等で目的を持っていたのである。連合、エウロパとは別の理由を。その仲裁は今別の成果をも得ようとしていた。
翌日連合とエウロパは講和条約を結んだ。その内容は以下の通りであった。

## 第十九部第四章　最後の意地その十七

1．エウロパは連合中央政府に対して六〇京テラを義援金として支払う。
2．ニーベルング星系及びブラウベルグ回廊を連合に割譲する。なおこの二つはガンタースを所有するソマリア領とする。
3．ニーベルング周辺星系の非武装地帯化。
4．カトリック法皇庁を連合に招待する。

以上の四つであった。義援金の額は減らなかったがそれは一年に留まった。領土の割譲もニーベルングだけで済み、周辺の非武装化とバチカンの移動は行われることになった。エウロパ側にとっても満足のいく内容であった。

「それではこれで」

「はい」

双方は条約を締結すると握手をした。握手をしたのは互いの国家元首であるキロモトとラフネールであった。この条約は『オリンポス条約』と呼ばれ人類の歴史に記録されることとなった。連合がエウロパとの戦いに勝利を収めた印象的な条約であった。

これを以って戦争は終わった。連合にとっては満足のいく戦争の結果であった。連合全土は勝利に沸きかえり所々で派手な宴が行われた。それはエウロパにいる連合軍も例外ではなかった。

「おい、ビールだ」

「シャンパンだ」

彼等は口々に酒を頼みそれをぶちまける。アルコールの匂いのする泡が辺りを覆いあちこちで派手な歓声が聞こえる。彼等は勝利の美酒を思う存分堪能していた。

「まずは勝利に」

「乾杯」

軍の総指揮にあたっていたマクレーンと劉もまた。二人はブレスの司令室でシャンパンを飲んでいた。二人で勝利を祝っていたのであった。
「これで我々の戦争は終わりましたな」
「いえ、まだ油断はできませんぞ」
劉はマクレーンに対してこう言った。
「まだ連合までの撤収がありますからな」
「そいうでしたな、それがありました」
「ですが。勝利を収めたのは事実です」
「はい」
二人はここでニヤリと笑い合った。
「停戦からここまでも長かったですが今それが終わりました」
「ようやく」
「ニーベルングからクロノスまで。途方もない作戦でしたが」
「このハンニバル作戦、まずは成功ですな」
それは確かであった。エウロパの首都に乗り込めたのだから。政治的戦略を果たしている時点で成功であった。
「ええ。初陣同然の軍でここまで勝てるとは」
「信じられないですな」
「それは将兵達が一番わかっているようですぞ」
「といいますと」
マクレーンは劉に問うた。
「これを御覧下さい」
テレビのスイッチを入れる。そこでは連合軍の将兵達の戦勝ライブが行われていた。
「ほう」
マクレーンはそれを見て声をあげた。
「これは」
「彼等の顔を見て下さい、あの喜びに満ちた顔を」
見れば満面の笑みで歌い踊り、歓声をあげていた。それは単なる

ライブではなかった。生きて帰れる喜び、勝利への喜び、そうしたものに満ちたライブであった。
「これこそがその証拠です」
「勝利したことへの喜び」
「そして生きていることへの喜び。はじめての戦争でここまで勝てたのですから」
「そのことが我々をここまで歓喜に導いている」
「そうです、全てはそこにあるのです」
劉は言う。
「生きられたことと勝利が。何よりも嬉しい」
「我々は勝った、そして生きている」
「はい」
「そうですな。それが最も嬉しい」
「今は祝いましょう、その二つを」
劉はグラスを掲げてきた。

## 第十九部第四章　最後の意地その十八

「連合の為に」
「連合の為に」
彼等はグラスを打ち合った。そして喜びを分かち合う。テレビの向こうではライブが派手に続いていた。歌っているのはトワンキンであった。彼女は自分のいるバンドのメンバーと共にステージの上にいた。
「それじゃあ皆いくよ！」
「おおーーーーーーーっ！」
観客である連合軍の将兵達がそれに応える。皆完全に熱中状態にあった。
「今日は戦勝祝いだから。どんどんいくよ！」
「あんたが撃墜した敵機の数だけアンコールを頼むぜ！」
「宜しくな！」
「そんなんじゃ幾つあるかわからないよ！」
トワンキンは観客達に言い返す。
「あたし今回はかなり派手にやったからね！」
小さな身体で叫ぶ。ダークグリーンのティーシャツはもう汗でびっしょりでありジーンズにも汗が滲んでいた。今の時点でかなり歌っているのである。
「何曲あるかわからないよ！」
「構うもんか！」
「どんどんやってくれよ！」
だが観客達はそれにもお構いなしであった。そう声を送る。
「そうかい、じゃあ覚悟はいいね！」
「ああ！」
応えたのは客達だけではなかった。彼女のバンドもメンバーもであった。

「こうなったら何処までも付き合うぜ！」
「火の中水の中ってやつだ！」
「甘いね！銀河の果てまでよ！」
トワンキンはそう言い返して笑った。
「どうせならそこまで行くよ！」
「よし言ったな！」
リーダーであるギターのグレゴリアンがそれに応えた。
「じゃあアンドロメダ星雲まで行くぞ！」
「ああ！望むところさ！」
「皆、今日はとことんまで派手にやるからな！付き合ってくれ！」
「おお！アンドロメダまで行こうぜ！」
「よし！」
一際派手な演奏になった。五人は観客達と息を合せて演奏をする。派手で、それでいて人々を乗らさずにはいられない、そんな演奏がはじまった。今勝利の女神がトワンキンに降臨したかの様であった。
ライブは続き連合軍の将兵達の歓喜の叫びも続く。だがそれを苦々しく見ている者達もいた。言うまでもなくエウロパ軍の将兵たちであった。
「これが敗戦というものなのですな」
「ええ」
モンサルヴァートとローズはこの時バーにいた。そこでのテレビ放送を見ていたのである。丁度トワンキンのライブが放送されていた。
「勝った者の喜びを見せられる」
「それに対して何も出来はしない。酷なものです」
二人はワインとカクテルと飲んでいた。貴族用のバーである。だがそこは今はしんと静まり返っていた。敗戦の為誰も元気がなかったのである。
「今思うのは彼等には一刻も早く帰ってもらいたい」
「そうでなくては次の行動が取れませんしな」

「全くです。その次ですが」
「はい」
二人は話をはじめた。
「動き出すのは難しいようですね」
「今のエウロパは」
敗戦の衝撃だけでなく戦争の疲弊もあった。それはこのバーを見てもわかる。これをどうにかすることさえ至難の業であるのがわかる。
「暫くは。苦難の道ですかな」
「おそらくは。それがどれだけになるかはわかりませんが」
「こうした時には得体の知れない輩が出るのも世の常ですし」
「得体の知れない輩ですか」
「はい」
モンサルヴァートは答えた。
「エウロパを過つ様な者が」
「出て来る恐れがある、と」
「私はそれを恐れています。無論真の意味での英雄が出て来る可能性もありますが」
「英雄ですか」
「そう、英雄です」
彼はまた言った。
「今常人では動くのが困難であっても英雄ならば違う」
「容易に動くことが出来る」
「そして導くことが出来るのです」
英雄とはそうしたものである。普通の者には到底為し得ないことを為せるから英雄なのだ。だがそうした英雄が出るのは非常にごく稀のことでもある。滅多にいないからこそ英雄でもあるのだから。

# 第十九部第四章　最後の意地その十九

「果たして出るのかどうか」
「出ればよし、出なければ」
「出なければ」
「エウロパは迷うことになるでしょう」
「これからが大変だというのにですか」
「はい」
モンサルヴァートは答えた。真摯な声であった。
「エウロパを救う者が出るかどうか」
「かってのブラウベルグの様な英傑が出るか」
「それが問題です」
彼等はそれを望んでいた。そしてその人物は確かにいた。だが今は雌伏の時を過ごしていたのであった。
その者は今自身の邸宅にいた。その中の一室で誰かと話をしていた。
「そうか、うまくいっているか」
「はい」
彼は暗い部屋の中にいて椅子に座っている。その周りに何人かの男達がいた。
「全ては。順調です」
「資金の方は問題ないかと」
「問題は宣伝だが」
「それも御心配なく」
男達の中の一人が言った。
「既にマスメディアの多くの支持を取り付けました」
「インターネットでの宣伝準備も出来ております」
「知識人達とのコネクションも出来上がりつつあります」
「貴族達とは」

「それも御安心下さい」
別の男が述べた。
「既に。かなりの貴族達に話をし」
「支持を得ているのだな」
「最後に平民の支持ですが」
「数としてはそれが一番大きいな」
やはり貴族達と比べてその数は圧倒的に多い。そのうえ彼等の一票も貴族の一票も同じ価値を持つ一票なのだ。平民の支持なくしては貴族といえど議員にはなれないし、ましてや総統になることも出来はしないのだ。こうした面においてはエウロパもまたれっきとした民主主義国家であった。
「そちらはどうなっているか」
「これは宣伝とリンクしています」
また男達の中の一人が言った。
「あの戦争での武勲が大きな効果を果たすかと」
「あれがか」
「そうです。圧倒的な兵力を持つ連合軍に対して果敢に立ち向かい怯むことはなかった」
「それだけでも非常に大きいです」
「勇敢な騎士としてだな」
「はい」
男達は彼に答えた。
「わかった。では私は勇敢な武人だ」
「はい」
「連合と果敢に戦う武人だ。これでいいのだな」
「そうです。侯爵は武人であられます」
「そして」
「そして？」
彼は男の中の一人の言葉に反応を示してきた。
「英雄であられます」

「英雄か」
その言葉に笑った。不敵な笑みであった。
「そうです。英雄です」
「連合に立ち向かった英雄」
「今度はエウロパを救った英雄となるのです」
「わかった。ではエウロパを救おう」
彼は言った。
「この美しいエウロパをな。もう一度蘇らせる」
「はっ」
「今回の敗戦を敗戦としない偉大なるエウロパに。もう一度するぞ」
「わかりました」
「それでは」
「もうすぐ時が来る」
彼はまた言った。
「その時に備えるぞ。いいな」
「畏まりました」
「エウロパの為に」
「うむ」
男は闇の中で男達の言葉を聞き満足そうに頷いていた。彼はそこに未来を見ていた。エウロパが自らの手で復活する夢を。今彼は英雄になろうとしていた。

# 第十九部第五章　退場その一

退場

「エウロパの奴等、思い知ったか」
連合軍が勝利に沸いている頃連合のネットも勝利で興奮していた。
「一千年の恨みだ」
「植民地の怨念、今晴らしたぞ」
「ざまを見ろ」
連合の者達はその殆どが植民地出身か、若しくはかって欧州列強の脅威を受けてきたかだ。例外は殆どない。日本に白その維新は列強の脅威を受けてのことだったからだ。
「所詮は落ちぶれた没落貴族共だな」
「ああ、こうなる運命だったんだよ」
「一千年前何か白人が一番偉いって言ってたらしいがな」
「そういえばそうだったな」
人種思想はこの時代の連合では全く意味を為さないものになっていた。混血が進み純粋な白人どころか黄色人も黒人も殆どいないような状況だからだ。そもそも人種思想なぞ単なる偏見かそうした類のものでありあまり意味がないものである。白人達が自分達の優秀さを示そうとしたら必ずその優秀なのはアジア系になるとまで言われていた。当時の話である。アメリカで人種による知能指数の検査をしたら白人よりもアジア系の方が高いということもあった。今の連合ではそうした人種思想程ナンセンスなものはない。混血していて何が何なのかわからなくなっているからだ。ちなみに連合とエウロパでは体格に結構差があるが知能指数では全く変わらないという統計が出ている。お互いを馬鹿だ阿呆だと言い合うのは単なる罵倒であり根拠が全くないものである。
「あれってナチスとかのだったよな」
「その前からだぜ」

「そうなのか」
「神は人類を正しく導く為に白人を作り出したってな」
「単なる色素がそうなだけじゃないのか？」
「俺一応白人だけど。爺さんがタイ人だからちょっと肌が褐色だけど」
「あんたそりゃクォーターってんだよ」
書き込みにすぐに突込みが入った。
「おっと、そうか」
「けど、よくそんなことが言えたな」
「エウロパの連中は先祖も馬鹿だったんだな」
これが罵倒である。当時はそうした考えもあったのだ。植民地政策や帝国主義を正当化する為の方便だ。今の連合の者達もそれを知らないわけではないがあえてそう言ってエウロパの者達を馬鹿にしているのだ。
「で、それが今晴らされたと」
「歴史書じゃ連中が地球から出て行った時も同じこと言ってたみたいだがな」
「どっちにしろあの連中が屈辱にまみれる姿を見るのは気分のいいことだよ」
「それもそうだな」
「連合万歳ってやつだな」
「それも大勝利だったしな」
喜びの書き込みが続くがそれも変わった。
「奴等は相当な数の損害出したんだろ？」
「ああ、三割程な」
全滅と言ってもいい。軍事的に致命的なダメージと言えた。
「こっちは正規軍は一個艦隊程度」
「それと義勇軍が全体の一割か」
「やっぱり義勇軍の損害が大きいな」
「そりゃそうだろ。いつも火事場に飛び込んでいたからな」

「火事場か」
つまりは最前線というわけである。
「ああ、相当派手にやってたぜ」
「だからか。何か脱帽だな」
「勲章ダントツらしいぜ」
「そりゃそうだろ、勲章の価値はあるぜ」
「全くだ、けどこっちの人間じゃないんだよな」
誰かが書き込んだ。
「ああ」
それに誰かが頷く書き込みをした。
「難民だからな」
「サハラの人間だよな」
「一応市民権は持ってるんだろ？連合の」
「けど難民だからな」
「色々と問題はあるぜ、実際に」
「サハラからもエウロパは排除されたしな」
これはもう知られていた。というよりは連合との戦いが悪化して戦力をサハラに振り向けられなくなったから全て撤収したのである。
「帰るべき場所は戻ってきたし」
「やっぱり。帰る奴も出て来るぜ」
「じゃあ義勇軍はどうなるんだ？」
「さてな」
それは誰もすぐにはわからないことであった。
「やっぱり帰る奴も出るだろうし」
「残る奴もいるだろうけど」
「実際に。義勇軍が維持出来るまで残るかは」
「わからないってわけか。義勇軍がいたからここまでやれたのにな」
「体のいい楯としてな」
突き放した書き込みが書かれた。
「最前線に立たせてな。正規軍はその後ろでのんびりとだ」

「嫌なこと書くな」
それに反応してすぐに他の者が書き込んだ。
「けれど事実だろう？」
「ああ」
そして残念なことにそれを認めるしかなかった。
「だから正規軍の損害が異様に少ないんだよな」
「正規軍は二千個艦隊が参加して義勇軍は百個艦隊だ」
参加兵力に対する書き込みも行われた。

## 第十九部第五章　退場その二

「だが損害は」
「正規軍が一個艦隊程度で義勇軍が十個艦隊程か」
「パーセントで言うと相当なものだな」
「正規軍は〇・〇桁なのに義勇軍は二桁に届いてる」
「一割の損害ってかなりのものだぜ」
だがそれが現実であった。義勇軍がどの様な戦いを潜り抜けてきたのか、これだけでわかるというものであった。現実は過酷なものである。
「本当に義勇軍あってのものだな」
「何か正規軍って得してるよな」
「まあ正規軍も正規軍でちゃんと戦ってるけどな」
「それはな」
これもまた多くの者がわかっていた。
「クロノスでは正規軍だけだったが立派に戦っていた」
「それに損害の差は戦術にも関係あるしな」
「そうなのか」
「ああ、義勇軍はサハラの戦術で戦っていたんだ」
「損害を気にしない戦術でか？」
驚いたような書き込みであった。
「ある程度ってレベルだけどな」
「それでも損害を考慮する戦いだろ、あっちは」
「まあそれはそうだな」
それは認めた。
「サハラの戦い方ってのは突撃とか多いからな、それでな」
「損害も多くなるのか」
「そういうことさ。しかしそれに対してこっちは」
「まず損害を出さないようにするな」

「そういうこと」
砲艦やミサイル艦での一斉射撃も長射程の主砲による斉射もそれに拠るものであった。連合軍はまず損害を出さない戦いを選ぶ。それは圧倒的な物量に裏付けされたものでありかなり確かなものとなっている。
「戦死者が多いと志願者が減るからな」
「それが大きいな」
「おまけに政治家への批判になるしな」
「損害が出て喜ぶのって軍需産業だけか？」
有り触れた疑問の書き込みであった。
「どうかね。何処も軍需産業なんて半分公への宣伝の為だしな」
「ああ、あれって儲からないのか」
「設備投資やら技術への研究費用が洒落にならないらしいぜ」
それが軍需産業の難点であった。これはエウロパも同じである。軍需産業の運営の難しさは彼等だけでなくマウリアも抱えている問題である。
「その割には調達の数なんて限られているしな」
「案外難しいものなんだな」
「桂平公司も軍需産業に進出しただろ」
「最近な」
「そっちも芸能関係のトップが言っているらしいぜ。あれは半分宣伝だって」
宣伝の効果はこの時代でも変わらない。むしろより大きくなっている。
「宣伝か」
「あまり採算は考えないで自分達の製品のアピールだってな。そんなものだろ」
「そのトップってあれだろ？三兄弟の末っ子の」
「多分李王登社長だろ」
この名も連合では広く知られている。芸能では。

「あそこはスポーツと芸能でかなり儲けてるからな。そうも言えるだろうな」
「余裕があるってか」
「実際軍需産業やるよりプロ野球かサッカーのチーム持った方がいいしな」
「それを言うとな、確かに」
「スポーツに金出してる企業の方がずっと多いしな」
「確かにな」
実際にこっちの方が安易に収益に繋がったりする。連合では特にそうであった。軍需産業は思ったより採算を取り辛いのでどうしてもそうした方に投資する。スポーツチームも芸能プロも実にいい宣伝になる。李王登はそれ以上にアイドルの育成が趣味で様々なアイドルを揃えているが。また育成には厳しいが基本的に面倒見のいい甘い社長なので少女趣味とかロリコンとかも言われているが。
「何かそんな話聞いてると戦争で人が死んだり、損害出るのって喜び人間いないんだな」
「そうなんだよな」
「案外儲からないからな、戦争ってのは」
「戦費が洒落にならないものになったしな」
「まあそっちはな。けれど何で二十世紀のアニメや漫画はそうした軍需産業が多いんだ？」
「死の商人ってやつだな」
今の連合では死語となっている単語である。
「それだよ。こんなに採算の取れないものなのにな」
「戦争のことをあまり知らなかったとかか？」
「そういう時代だったんじゃないのか？」
「戦争が儲かった時代か」
そういう時代があったのも確かだ。この時代は違うが。
「その時代は武器も他の国に売ることが出来たしな」
「そうなのか」

「それでアメリカとか中国はかなり収益をあげていたらしいな」
「また連中か」
その二国の名を聞いて誰かが見るからに嫌そうに書き込んだ。

## 第十九部第五章　退場その三

「ついでにロシアもだろ？」
「あっ、わかったか」
「こうした話の常連だからな。連中は」
「まあそうだ」
「で、売って戦争させてまた売って、の繰り返しだったんだな」
「ああ」
その書き込みに誰かが答えた。
「連中のやることって基本的にあまり変わらないんだな」
「今は戦争しないだけだな」
「儲ける為には何だってするからな、連中は」
「日本はやってなかったのか」
日本の名前も出る。大国として。
「日本はな、武器は扱っていなかったらしい」
「へえ」
「それは意外」
だがこれは事実である。二十世紀後半日本は憲法の制約もあり兵器の輸出は行ってはいなかった。もっとも輸出してもあまりにも高価である為売れたかどうかは疑問である。当時の日本の兵器は性能と価格が全然釣り合っていないという批判が多かったのである。
「まあ連中のことだから他でかなり儲けてたんだろうな」
「狐みたいにな」
「それか狸か」
「今は九尾の狐が首相やってるしな」
伊藤のことである。
「ある意味あの三国より危険な国だよな」
「全くだ」
「表ではにこにこしてるけどな」

「裏じゃ相当したたかだからな」
「ある意味かなりやばい国だな」
これが連合内での日本の評価であった。米中露三国とは違った意味で警戒されていた。日本も決して純粋な性格というわけではないのだ。そんなものは国際社会においては存在しない。日本はよく狐や狸、時には猫だと言われる。頭の回転が速いのだ。そして巧みに動き回る。連合の者達はそんな日本も警戒していたのだ。小国には優しいがそこにも戦略があることも皆わかっているのだ。
「あの首相が特にやばいな」
「今の中央軍のトップだって日本人だぜ、しかもあの首相の愛弟子だ」
「ああ、八条長官か」
「顔はいいがな」
これは誰もが認めることであった。
「内面はかなりえげつないのかもな」
「今のところ真面目に、的確に仕事をしているイメージしかないがな」
「あの首相の悪賢いところは学ばなかったのか」
またしても伊藤について言及された。
「あんなのそうそう真似出来ないぞ」
「あれで学者出身なのが余計に凄いな」
「確かに」
「信じられない話だ」
伊藤の知略はそれ程までに有名であった。連合の中でそれに苦しめられなかった国はない。だからこそ九尾の狐などと呼ばれるのである。絶大な魔力を持ち、多くの国を傾けさせ、滅ぼしてきた稀代の魔物に。
「けれどまあ勝ったことは事実だ」
「話がやっとスレ本来の話に戻ってきたな」
「今日だけで何スレも浪費してるしな」

「祭り中だからな。仕方ないさ」
「何か俺ステッラのことが発覚してから時間があったらずっとネットやってるぜ」
「あんたそりゃ中毒だ」
すぐに突込みが入った。
「外に出て遊ぶのもいいぜ、たまにはな」
「そういうあんたはどうなんだよ」
その書き込みに返してきた。
「やっぱりずっとネットやってるんじゃないの？」
「俺一応スポーツマンだから」
「へえ」
「いつも朝は健康的にランニング、夜は水泳さ」
「随分健康的な生活だな」
そう書かれた。
「おかげでここ数年病気一つしていないぜ」
「それは何よりだ」
「じゃあ俺もたまには外に出るか。それでカラオケでも」
「あまり変わらないんじゃないのか？」
こうも書かれる。
「まあ外に出るだけでも許してくれよ」
「別に俺のことじゃないからいいけどな。しかし長い戦争だったな」
「そうか？こんなものだろ」
長い戦争と言うには少し抵抗がある者もいた。
「サハラの戦争と比べてないか？」
「ああ」
それは認めた。
「実際今までの戦争だと何十年もやったのだってざらだぜ」
「何十年か」
「百年やった戦争もあったな」
イングランドとフランスの百年戦争である。この戦争は断続的に

百年以上も続けられた。当時イングランドはフランスにも多くの領土を持っており、豊かなフランドルとフランス王位継承を巡って行われたものである。主役はエドワード黒太子、そしてオルレアンの少女ジャンヌ＝ダルクである。

## 第十九部第五章　退場その四

「イギリスとフランスだろ？連中もよくやるよ」
「まあエウロパの奴等はな。好戦的だからな」
「そもそも何十年もやった戦争ってあれだろ？三十年戦争」
「おお、それ」
この書き込みも書き込んだ本人が認めた。ＩＤからそれはわかる。
三十年戦争はカトリックとプロテスタントの対立を御題目に神聖ローマ帝国皇帝であるハプスブルク家とそれに対立するドイツ諸侯、そして周辺国の覇権と独立を巡る戦いであった。この戦いによりドイツの国土は荒廃し、一六〇〇万と言われた人口は一〇〇〇万にまで減ったと言われている。資料によっては四〇〇万にまで減ったと言われている。
なおこうした戦乱による人口の減少は中国で顕著だがこれには面白い現象がある。
戦乱が終わった直後には極端に減っていた人口が暫くしたら急激に元に戻っているのである。これは何故か。戸籍調査により人口が把握されるからだ。実際には人口はそれ程減ってはおらず、戦乱で戸籍制度が崩壊したからである。それでも実際に戦争の災厄はあり、多くの者が犠牲にはなっているが。
「他には七年戦争とかオーストリア継承戦争とかもあったな」
「世界大戦もあそこだったよな」
「十字軍もな」
「戦争ばっかりだな、あそこは」
嫌味な書き込みではあった。
「まあ俺達も千年前までは変わらなかったがな」
「それでも今だにやってるのは凄いよな」
「サハラ侵攻か。あれもなあ」
「酷い話だよなあ、サハラの人間追い出してって」

「そうか？」
だがここでエウロパを糾弾する声に反論が返ってきた。
「酷いか？」
「酷いだろ、侵略だぜ」
「だから批判されてたんだろ？違うのか」
「俺達から見ればそうだけどな」
それは書き込んだ本人も認めた。
「悪事には違いないな」
「だろ？」
「じゃあ」
「しかしそれは俺達から見た結果だろ。連中から見たら違うんじゃないか」
「連中から見たらか」
「さっき米中露とか日本の話出たよな」
彼等の話がまた出されたのであった。
「ああ」
「連中だって確かに洒落にならないレベルのことやってくれるがそれだって連中から見たら悪事じゃないだろ」
「連中にとっては正しいことなのか」
疑問符のついた書き込みであった。
「連中の相手にも正義はあるしな」
「どっちにも正義があるってことか」
「そこに人間がいればその数だけ正義はあるさ」
そしてこう書き込まれた。
「その数だけな」
「そういうものか」
「じゃあエウロパのサハラ侵攻にも正義があるんだな」
「そういうことさ」
また書き込まれた。
「サハラ侵攻はあれだろ。人口問題の結果だったよな」

「そうだったな」
「たかだか一千億でな。大した問題じゃないと思うが」
連合にとってはそうである。しかし。
「それも向こうの事情さ。何はともあれそれでサハラ侵攻があったんだ」
「そうなのか」
「で、それには連中の正義があるんだ」
「正義か」
微妙な文字まで出た。それに対する反論は。
「ああ。当然サハラにも正義はあるしな。正義なんて一つじゃないさ」
「俺達には俺達の正義があるってか」
「悪もな。人の数だけあるさ」
書き込みは哲学的なものになっていた。そして続く。

## 第十九部第五章　退場その五

「今度の戦争だってそうだったしな」
「何かそう書かれると喜んでいられないな」
「悪いエウロパの貴族共を成敗しました、で済む話じゃないか」
「世の中ってのは簡単には出来ていないからな」
その通りであった。世界というものは一つではない。それを形成している人間という存在もまた一人一人の中に多くのものを同時に含んでいる複雑な存在だ。それを考えれば世界が簡単になる筈がないのである。
「やれやれだ」
「そういえばエウロパにいる連合軍は撤退するんだったな」
「戦争も終わったしな」
「全員撤退したらこれで終わりだな」
多少楽観的な書き込みであった。だがそれが戦争の終わりを象徴するものであるのもまた事実である。彼等はそれをわかっているのだ。またそれに頷く書き込みがここで書かれたのであった。
「そうだな」
「何はともあれな」
「あとニーベルングで各国首脳とあっちのそれぞれの国の首脳が会うそうだな」
「戦勝記念にか？」
戦勝記念は国家の一大セレモニーである。栄光だけでなく団結の象徴にもなる。そうした意味において格好のセレモニーであるのだ。
「ああ。ニーベルングがこっちのものになった確認式典でな。そうするらしい」
「それ、何か面白そうだな」
「敵と味方が会うってわけか」
「勝者と敗者がな」

「それぞれの正義と悪がな」
「おいおい、何かキザったらしいな」
正義と悪という書き込みにはすぐに突っ込みが入った。
「宗教っていうか、漫画チックになるな」
「そうか。じゃあ止めるか」
「いや、別にいいけどな。とにかくこれで戦争は終わった」
またそれが実感される。実感するにつれ喜びがこみ上げる。これは彼等が戦争に勝った側であるからなのは言うまでもないことである。そうでなければ喜びなぞ湧きようもない。そうしたものである。
「そうだな」
「俺達にとってははじめての戦争だったが上手く乗り切れたな」
「けれど二度とはやりたくないな」
「それはな。御免だな」
こうも書かれる。彼等にとっては戦争は望ましいことではない。それをする位ならば楽に金を儲けたい。それは人としてのごく普通の感情である。彼等はそれに素直なだけであると言えた。
「全くだ。戦争より金儲けの方がいいな」
「それを言うなって。まあこれで何もかも終わりだ」
「ニーベルングでの顔合わせと凱旋だけだな」
「それを楽しみにしておくか」
「その時また祭りだな」
また書き込みの機嫌がよくなった。
「今度は実況でな」
「ああ」
ネットでのやり取りは何処も連合の勝利やそれに関連するもので覆われていた。特に政治、軍事関連はそうであった。連合にとってのはじめての戦いは彼等にとって非常に大きな印象を与えるものであったのだ。その中でキロモト達はオリンポスを離れ連合への帰路についていた。三隻の巨大戦艦は護衛の艦隊と共に連合へ戻っていた。

## 第十九部第五章　退場その六

八条はスサノオの中にいた。今は食堂で食事を採っている。連合軍では士官であろうと兵士であろうとも同じ食堂で食事を採る。だからこそ彼も今食堂にいるのだ。食べるメニューも同じである。国防長官だからといって特別扱いはされないのが連合軍なのである。

「今日はラーメンですか」

八条は自分の前に出された熱い白い透明なスープの中の細めの麺を見て言った。

「そして炒飯」

「後は餃子に八宝菜です」

「中華尽くしですね」

「味付けは中国風でね」

給養の下士官の一人が八条に説明する。彼等は今厨房で必死に動き回っていた。

「中国の江東風に」

「シーフードを使った料理で有名な」

「はい、そっち風味にしてみました」

「成程、それはいいですね」

八条はそれを聞いて目を細めさせた。

「そういえば炒飯も餃子もシーフードを使っているようですね」

「はい、海老や貝なんかをね」

見れば餃子だけでなく焼売や小龍包もあった。料は連合軍らしくかなり膨大なものがある。ラーメンにしろその具はシーフードであった。

「ふんだんに使いました」

「いいですね、実に」

八条の機嫌はさらによくなっていく。

「やはりシーフードはいいものです」

「今日はシーフード尽くしでいこうって決まったんですよ」
「そういえば朝はフィッシュフライバーガーでしたね」
「あれもそうです」
下士官は答えた。
「夜は夜で考えていますので」
「楽しみにしていますよ」
「はい、是非期待しておいて下さい」
「わかりました」
八条はまずはその中華料理を食べた。味も量も満足出来るものであった。麺もコシがあり非常によかった。中華料理にシーフードを使うと抜群の味になる。彼はそれを堪能して食事を終えた。食事を終えると休む間もなく仕事が待っていた。パソコンにメールが届いていた。
「首相からか」
首相といっても中央政府のアッチャラーンである。彼からのメールであった。
それは講和条約の締結をねぎらうメールであった。八条はそれを見てまずは頬を緩ませた。
だがメールはそれだけではなかった。もう一人彼が首相と呼ぶ人物のものもあったのだ。
伊藤のものである。彼はそれも開いた。
するとそこから伊藤が姿を現わした。メールから通信電話になるようにされていたのであった。
「遅かったわね」
伊藤は姿を現わすとまずこう八条に声をかけた。
「食事だったのかしら」
「はい、その通りです」
八条はそれに答える。実際に昼食を採っていた。時間的にそうであったのだ。
「中華料理を。シーフード中心で」

「それはいいわね。こっちは御蕎麦だったわ」
「蕎麦ですか」
「天ざるをね。堪能させてもらったわ」
「それはまた」
伊藤は天麩羅もざる蕎麦も好きなのである。彼女にとってこの組み合わせは最高のものであった。顔を見ればそれはわかる。満足しきった顔であった。
「それで今はとても機嫌がいいわ」
「それは何よりです」
「その機嫌がいいうちに済ませておこうと思って」
「仕事ですか？」
「ええ。一つ話しておきたいことがあるの」
「それは一体」
八条はパソコンの横にある茶を飲みながらそれに応えた。マリンブルーの甘い味のする茶であった。連合インドネシアでよく採れる茶である。
「ニーベルングのことだけれどね」
「ああ、話は聞いていますよ」
八条はニーベルングの名を聞いて述べた。
「連合各国首脳とエウロパ各国の首脳が一同に会するのでしたね」
「そうよ。それで日本からは私が」
「ですね」
天皇陛下が行かれるわけにはいかなかった。警護の関係もあるし、こうした政治的な行事は大統領や国家主席ならともかく天皇陛下や皇帝、国王といった存在が行くには不都合な性質のものであるからだ。だからこそ伊藤が行くことになったのである。そうした政治的な事情があった。
「それで聞きたいのよ」
「ニーベルングのことをですか？」
「あの星系の割譲の式典で行くだけだけれどね」

「はい」
伊藤の言葉に応える。
「そこでね。エウロパが色々と仕掛けてきそうで」
「工作ですか」
「ここでね。何かして来るんじゃないかと思っているのよ」
伊藤は用心していた。慎重な彼女は十二分にそれを警戒していたのである。彼女らしい、用心深い考えであった。
「で、ニーベルングのことだけれど」
「ええ」
「どんな場所で、そしてエウロパ側からは首脳の他に誰が来るのかしら。今わかっていることだけでいいから教えてくれないかしら。いい？」
「わかりました」
八条はそれに頷いた。そのうえで述べた。

## 第十九部第五章　退場その七

「エウロパ中央政府からはカミュ外相が来られるようですね」
「ああ、彼ね」
彼のことは伊藤も聞いていた。
「エウロパで中々の切れ者らしいわね」
「非常に癖の強い人物でもあります」
「そう」
「パーティーがお好きで。そこで何かと情報を集められますね」
パーティーでの情報収集は外交での基本である。カミュはその中でもとりわけそれを得意としているだけである。
「情報を」
「盗聴も得意なようです。身辺にはくれぐれもお気をつけを」
「わかったわ」
「普段はにこやかに笑っておられますがね。内面は我々をかなり嫌っておられるようでした」
「それは聞いてるわ。相当なものだったそうね」
「御存知でしたか」
伊藤の言葉に声が微妙に歪んだ。
「雑誌に載ってたわ。カミュ外相の意外な一面って内容で」
「それ、どんな雑誌ですか？」
記事のタイトルを聞いて少し不安になった。まさかスポーツ新聞の類ではないのかと思ったのだ。こうしたタブロイドの中には極めて悪質な権力者の提灯記事ばかり書くのもあればあからさまな嘘、出鱈目を面白おかしく一面で記事にする雑誌もある。後者の方が遥かに本来のタブロイドであり面白い。だが八条はこの場合後者であることを内心心配していたのである。まさかとは思っていたが。
「週刊誌よ」
「週刊誌」

それを聞いてさらに不安になった。
「まさか」
「違うわよ、週刊誌でもあれよ」
八条を落ち着かせて言う。
「総合誌だから。安心して」
「そうだったのですか」
「それでオリンポスでの会談やパーティーでの様子が特集組まれていたのよ」
「面白そうですね、何か」
「実際に面白かったわよ、あの外相の顔がね」
伊藤の声が笑う。その顔も。
「色々変わっておられたのですか」
「連合の人間を見る時はね。侮蔑や嫌悪を露骨に表わしていて」
「成程」
「そういうのがよくわかったわ。あの外相が私達に強烈な偏見を持っていたことがね」
「そういうことも分析されていましたか」
「君のことも書かれていたわよ」
ここでまた笑うのであった。
「私のこともですか？」
「そうよ。向こうの貴婦人達にももてているって。ダンスのあれね」
「あれは単なる社交辞令でしょう」
だが八条はそれは一笑に伏した。
「単なる」
「そう思っているのね」
「違いますか」
「そう思っているのならそれで構わないわ」
「はあ」
やはり彼にはわからない。伊藤は愛弟子のそうしたところが今一つ気になるのだがそれを言うのも憚られた。結局それを言うことは

なく別のことを言うのであった。
「ただ、最後の方の顔は違っていたわね」
「変わってきていたと」
「ええ。何かね」
伊藤はそこまで見ていた。カミュのことを彼女自身で細かく分析しているようであった。
「連合の人間を見る目が微妙に変わってきているわね」
「そうなのですか」
「それで彼のことを聞きたいのだけれど」
「今の彼を」
「何か。わかるかしら」
「まだ我々に対しての偏見は持っていると思います」
八条はそれに応じて述べた。
「ですが。能力は確かですし同じエウロパの人間に対しては公平で親切です」
「身内には、なのね」
「はい。ですから向こうのガードは固いです。それは覚えておいて下さい」
「こちらからの工作はどうだったの？」
「カバリエ外相が色々と考えておられましたが。無駄でした」
モニターの向こうで首を横に振って述べた。
「向こうのガードは思ったより固く」
「やっぱりね」
「ですから。工作は至難の技だと思われます」
「そうね。じゃあ手を出すのは考えた方がいいかしら」
少し考えてから述べる。
「否定はしませんが迂闊な行動はかえってこちらの首を締めることになるかと思います」
「わかったわ。うちは何もしないわ」
「それが宜しいかと」

「各国にも。それは伝えておこうかしら」
「伝えるだけ伝えればよいかと」
八条はそれは賛成の意見を述べた。
「しかし。それを取り入れるかどうかはまた別です」
「こちらは忠告をするだけ」
伊藤は述べた。
「それだけでいいわね」
「私はそう思います」
「わかったわ」
そこまで聞いたうえで頷いた。
「日本の方針はこれで決めたわ」
「それでは」
「ええ。今回はこちらからは何もしないわ」
それが伊藤の結論であった。
「それでいいわね」
「直接的には何も言えませんが」
「それは中央政府国防長官としてかしら」
「はい」
くすりと笑った伊藤にそう返した。
「中央政府としては各国には紳士的な対応を求めます」
「そして淑女として」
「我々が願うのはそれだけです。宜しいでしょうか」
「細かいところまでね。わかったわ」
伊藤にはそこまでわかっていた。八条もあえて多くは語らなかったがそれで充分であった。

## 第十九部第五章　退場その八

「それにしてもね」
「今度は何が」
「いえ、エウロパ各国の首脳達と実際に顔を見合わせるのははじめてだから」
　これは当然であった。一千年の間対立だけで交流なぞ全くなかったのである。連合は連合で、エウロパはエウロパで、ある意味完結した社会であったのだ。
「どんな顔をしているのかと思ってね」
「人種的には純粋なコーカロイドですね」
「それが今一つ掴めないのよ」
「はあ」
「ほら、連合は混血が進んでいるでしょ。だから」
　連合では白人と言っても混血の結果純粋な白人は殆どいなくなっている。これは黒人や黄色人も同じである。顔付きは白人であっても肌が黒かったり、肌は白人のものであっても低い鼻と切れ長の目を持っていたりというのは普通にある。というよりはそれが連合の顔であった。連合では純粋な人種というのはほぼ存在しない。日本にしろアイヌ連邦、琉球王国との昔からの交流の結果彼等の血がかなり入っているし、それ以外の国々の人間との婚姻も多い。従って純血というものがなくなっているのである。もっとも日本という国は昔からそれに無頓着な傾向が強く大和民族は縄文人と弥生人の混血でありそこに渡来人も入れば琉球系、アイヌ系の血もある。昔から純血意識の希薄な民族であり、これには抵抗がないのである。ある意味非常に変わった民族ではある。
「純粋な白人と言われても」
「実際に会ってみると我々と変わりませんよ」
「そうなの」

「ただ、我々に比べて小柄というだけで」
「それは私には通用しない言葉よ」
伊藤はその言葉には少しムッとしてみせた。
「あっ、これは失礼」
そして八条もそれに気付いた。伊藤は小柄なのである。
「レディーに背のことを話すのは禁物よ」
「年齢ではなかったのですか？」
「私にとってはそうなのよ。これでも気にしているんだから」
伊藤もこう見えてかなり繊細なのである。
「そうだったのですか」
「そうだったのですかって知らなかったの！？」
「初耳ですよ」
「呆れたわね。昔から言っていたのに」
こうしたことは案外気付かないものだ。背の高い人間には背の低い人間のことは解かり難い。もっとも今の八条のそれは女性のことがわからないだけであるが。
「すいません、総理が気にされていたとは」
「まあ小泉君もそうだしね」
小泉絵里のことである。彼女も極めて小柄だ。伊藤より小柄である。その為九尾の狐の下にいる子狐とさえ呼ばれているのである。
「何か。日本の女の子って結構小柄なのよね」
「そうでしょうか」
「そりゃ貴方は男で背も高いけれどね。女は違うのよ」
伊藤はとにかく自分の背のことを気にしていた。どうやらこれにかなりコンプレックスを持っているらしい。知的でしっかりとした印象を人に与える彼女にしては実に意外なことであった。
「どうしても差が出るわ」
「はあ」
「小柄なのは。どうしようもないわ」
「今は栄養の関係でかなり体格がよくなっているとは聞きますが」

「まあね。けれどね」
伊藤は一五〇あるかないかである。これは誰が見ても小柄だ。
「それでも。どうしようもならない場合だってあるのよ」
それが伊藤の場合であった。どうやら子供の頃から相当苦労しているらしい。

## 第十九部第五章　退場その九

「伸びないのはね」
「まあそれは」
「今ここで君にそんなこと話しても仕方ない話だけれど。エウロパは小柄なのね」
「はい」
「栄養の関係かしらね。摂取カロリーは連合とエウロパでそれ程変わらない筈だけれど」
　実際のところ連合とマウリアでは食材に違いはあれど摂取カロリーでは差はないのである。人類の摂取カロリーは宇宙時代になってからかなり平均化されていっている。そして今ではどの国も勢力もカロリーにおいてはほぼ同じになっているのである。もっとも戦乱の続くサハラは除いてであるが。ここはまた特別である。
「食べているものが違うせいでしょうね」
「食べているものね」
「はい、彼等の食べているものは基本的に地球にあったものと変わりません」
「らしいわね」
　伊藤はこの話も聞いていた。
「それに対して我々は何でも食べますから。その結果」
「体格に大きな差が出たというわけね」
「そういうことでしょう。彼等は我々のことを巨人とさえ呼んでいました」
「巨人」
　伊藤の言葉が微妙に動いた。それは彼女が小柄だからであろうか。
「女性であっても向こうの男性より高いケースもありまして。あちらは驚いていました」
「エウロパの平均身長ってどれ位だったかしら」

「階級によって差がありまして」
八条はそのうえで述べた。
「貴族は一七八程でしょうか。平民は一七四程で」
「そんなものなのね」
「はい、まあ我々は一八〇を越えていますから。一九〇近いですね」
「女性で一七四程でね」
やはり伊藤の言葉がここでも微妙になる。
「そうですね、ですから大きいと思われていました」
「やっぱり食べ物で差が出るのね」
「それは間違いないかと」
「日本人は昔小柄だと言われていたらしいけれどね」
「今は違いますね。私も背が高いと言われていました」
実際に八条は長身である。スラリとしておりスタイルの良さも際立っていたのである。
「何か憂鬱になってきたわね」
伊藤はここで溜息をついて苦笑いを浮かべた。
「私が言ったら。見えないかも」
「まさか」
「陛下からは気を着けてって言われてるけれど」
「よいことではないですか」
八条は笑うが伊藤は違っていたのだった。
「それでもね。背のことはね」
「まあそれは置いておいて」
「置いておきたいわね、本当に」
これは彼女の本音であった。偽らない心からの言葉であった。
「何処かにね」
「どちらにしろニーベルングでまた御会いすることになりますね」
「ええ」
「その時にまた。宜しくお願いします」
「こちらこそね」

そう言い合って伊藤はモニターから姿を消した。八条はそれが終わるとノートパソコンのワードを開いてそこに文章を入力していった。国防長官としての仕事である。講和が成ったら成ったで彼の仕事は増えるのだ。彼はそのまま仕事に入る。そして部屋で一人仕事を続けるのであった。

## 第十九部第五章　退場その十

だが連合はかなり気が楽だった。彼等は勝者なのだから。敗者はそうはいかない。ペーチは早速戦後処理に奔走していたのであった。
「酷いものだな」
執務室において軍務省からあげられた損害報告に目を通してまずは呻いた。
「ここまでやられていたとは」
「軍としての損害だけではありますが」
損害報告を提出してきた将校がそう述べる。
「民間に関するものはまた別になります」
「内務省からだったね」
「はい」
「後は交通省や通産省か。そちらはどうなるかな」
「連合軍は民間には危害を加えませんでしたのでそちらの損害はほぼありません」
将校は答えた。
「ですが戦争により経済活動が阻害されていた為その分の損失がありますが」
「それが問題だな」
「ですがインフラは健在です。すぐに経済活動を再開できるものと思われます」
「だといいのだがな」
だが彼は楽観視はしてはいなかった。
「市民生活に困窮はあまりありませんし」
「うむ」
「難民も出てはおりません。このことは連合軍に感謝すべきかと」
「敵に感謝するというのも因果なことだがな」
「彼等が節度を守ったということに」

「皮肉な話だ」
ペーチは苦い顔でこう述べた。
「それで今はかなり楽になっている一面があるからな」
「ですが戦争による損害は」
「わかっている」
目の前にある資料こそがその証拠であった。
「五百個あった艦隊は三割を失っているな」
「はい」
「そして多くの人員を失った。遺族への救済が大変だ」
「物資も。かなりのものを失いました」
「防衛態勢もな。致命的なダメージだな」
エウロパ軍にとっては。天文学的な損害であった。
「戦争前に回復させようと思えばかなりの額になるかと存じます」
「ニーベルングも失った。防衛態勢を一から考え直さなければならない」
「問題は山積みですね」
「そういった事柄を全てクリアーしなくてはならない。暫くは辛い時代が続くな」
「それは覚悟しております」
将校は唇を噛み締めて答えた。
「それはよく」
「軍のこともな。よく考えなければ」
彼はそのうえで将校に対して言った。
「軍務相は今どうしているか」
「軍務相ですか」
「そうだ。今はオリンポスにいるのか」
「はい、おられます」
将校は答えた。
「クロノス及びニョルズへの視察を終えられまして」
「そうか、それは何よりだ」

「ただ、かなりお疲れですが」
「そうだろうな」
これは容易にわかった。今このオリンポスで疲労を感じていない者なぞいない。誰もが敗戦のショックに打ちひしがれているのが実情であった。
「「だが。時間はあるか」
「御会いになられるのですか？」
「あくまで私の希望だが」
二人が古くからの親友同士だというのは多くの者が知っている。それはこの将校も知っていた。軍ではかなり有名な話なのである。
「よいかな」
「閣下にお話してみます」
「うむ、頼むぞ」
「わかりました。ところで」
「何だ？」
「何処でお話されるおつもりですか？」
将校は尋ねてきた。
「こちらでですか？それとも軍務省で」
「いや、レストランで会いたい」
「レストランですか」
「そうだ、部屋を予約してな」
そうも言い加える。
「わかりました。それではその際はこちらで手配致します」
「頼めるか？」
「ええ、その位は」
彼は答えた。

## 第十九部第五章　退場その十一

「仕事でも何でもありませんので。お任せ下さい」
「わかった。では頼むぞ」
「はい」
その日の夕方に連絡が入って来た。レストランの予約が取れたというのは時間は次の日の夜、ペーチはそれを聞いて満足して言葉を返した。
「丁度いい時間だ」
「有り難うございます」
電話をしてきたのは昨日の将校である。彼が手配してくれたのだ。
「しかもそのレストランとは」
「御二人の御贔屓の店でしたよね」
「そうだ、よくわかったな」
「閣下からお話を御聞きしていましたので」
実はシュヴァルツブルグもペーチもあまり華美を求めない。生粋の軍人であるシュヴァルツブルグもそうであるし元々地味な性格のペーチもそれは同じであった。彼等はそうした意味でカミュとは全く違っていたのである。
「その店で宜しいですよね」
「うん、それでいい」
ペーチの返事は満足したものであった。
「それでは明日だな」
「はい」
「軍務相に伝えてくれ、無理を言って済まないと」
「いえ、閣下も楽しみにしておられる御様子でした」
「そうなのか」
その言葉には素直に頷くことができた。
「久し振りに二人でお話が出来ると。ですから」

「では私も楽しみにしていると伝えてくれ」
「首相もですね」
「そうだ、宜しく頼むぞ」
「わかりました。それでは」
「明日楽しみにしている」
そう言って電話を切った。それからカレンダーを見る。ガイアのカレンダーだ。
「明日か」
ペーチは寂しい様子になっていた。そして寂しい様子でカレンダーを見て呟いていた。
「明日、会って」
また呟く。
「それまでもてばいいがな」
彼は何かを心配していた。その理由は彼にしかわからない。だが明らかに心配していた。明日まで持ちそうにもないものであるのはわかった。
そして次の日の夜になった。まずはペーチがそのレストランにやって来た。
「ようこそ」
ボーイが彼を出迎える。それ程洒落た店でも高級な店でもない。昔ながらの味を維持するエウロパ料理のレストランである。
「お待ちしておりました」
「部屋は何処かな」
彼は店に着くとそのボーイに声をかけた。偉ぶった様子はない。
「部屋はいつもの部屋です」
「あそこだな」
彼はそれを聞いて頬を緩めさせた。
「はい。御二人が御会いになられる部屋といえばあの部屋しかありませんから」
「よくわかっていてくれるね」

「オーナーに言われましたので」
ボーイはそう答えた。
「御二人にはあの部屋しかないと。それで」
「そうか、わかってくれているな」
ペーチの頬がさらに緩んだ。彼もシュヴァルツブルグもこの店のオーナーとは昔馴染みなのだ。それこそシュヴァルツブルグが軍に入り、ペーチが家を継いだ頃からの付き合いである。本当に長い付き合いなのだ。
「オーナーは元気にしているかな」
「はい、今日は仕事で店にはおりませんが」
「そうか」
「御二人が久し振りに来られると聞いて喜んでいましたよ。そんな日に店にいないのが残念でならないと」
「ではオーナーに伝えてくれ」
こう言葉を加えさせる。
「何と」
「今度プロヴァンスのワインを贈ると。それで残念な気持ちを忘れてくれと」
「プロヴァンスのワインですか」
フランス産のワインである。エウロパではブランドものとして有名なワインだ。甘口で知られている。
「オーナーの好物だったが」
「はい」
その通りだった。ペーチは古い付き合いでそれを知っていたのだ。

## 第十九部第五章　退場その十二

「それでいいな」
「オーナーもきっと喜びましょう」
「では部屋に案内してくれ」
「わかりました」
ボーイはそれに頷いた。
「それではこちらへ」
「うん」
ペーチは店の奥へと案内された。店の中は木造を基調とし、静かな造りになっている。ペーチはボーイに案内されその中を進んでいた。
そして部屋に着いた。やはり落ち着いた造りである。
「暫く振りに来たが変わっていないな」
「有り難うございます」
ボーイはペーチの言葉に礼を述べた。
「それでは暫くお待ち下さい。閣下も来られますので」
「うん、わかった」
それに頷く。そして席に座って暫く待っているとまたボーイがやって来た。シュヴァルツブルグがやって来たと彼に伝えたのであった。
「こちらにお通し致しますね」
「是非共な」
その言葉に従い彼を部屋に案内する。こうして旧友同士は久し振りにテーブルを交えたのであった。
「久し振りだな」
「そうだな」
二人は和気藹々として話をはじめた。にこやかに食卓を囲み話をしている。

「だが。いきなりどうしたのだ？」
「いきなりとは？」
「いや、急に会いたいとは」
シュヴァルツブルグは彼に問うた。
「何かあったのか？」
「いや、最近お互い何かと忙しかったな」
「確かにな」
それはお互い様であった。軍務省も首相府も開戦直前から目の回る様な忙しさだった。それは彼等も身を以ってわかっていることであった。
「それでな。久し振りに会いたいと思ってな」
「そうだったのか」
「そちらも元気そうで何よりだ」
「おかげでな。かなり疲れてはいるが」
「そうか。何処も悪くはしていないか？」
「今のところはな。幸いと言うべきか」
言葉と共に顔が少しだけほころぶ。
「いいことだ。こちらはスタッフが何人も過労で倒れている」
「それはこちらもだ」
シュヴァルツブルグは苦笑いを浮かべてこう言った。
「外務省も内務省もな。同じ様な状況らしい」
「これから暫くこんな状況だろうな」
「そうだな」
ペーチは友の言葉に頷いた。
「我々は負けた。その傷は決して浅くはない」
「それを癒す為に。今は無理をしなければな」
「そうだ、それが我々の務めだ」
シュヴァルツブルグも言った。
「その為にも。ここが踏ん張りどころだな」
「そうだな。ところでだ」

ペーチはここでシュヴァルツブルグに声をかけてきた。
「何だ」
「エウロパはこれから大変な時代を迎えるがそれに当たって必要なものは何だと思うか」
「エウロパにとってか」
「そうだ。何だと思う？」
「難しいな」
彼は肉を切りながら答えた。今回の料理は鳩料理であった。鳩の胸肉と脛肉をゆっくりと煮て、穏やかに味付けしたものを食べていた。
「何かと物入りだ。資金も必要だな」
「うむ」
「それに我々の熱意も。だが最も重要なのは」
「それは」
「指導者ではないか」
シュヴァルツブルグは考えながらこう述べた。
「指導者か」
「そうだ。ラフネール閣下は次の選挙には立候補されないのだったな」
「おそらくはな」
「ではより一層だ。今はエウロパを導くことのできる指導者が必要だと思う。まずはそれがないと話にならない」
「船頭か」
「そうだな、船頭だ」
友のその言葉に頷いた。

## 第十九部第五章　退場その十三

「それこそかってのモーゼの様な。果たしてそうした人物がいるかどうかという疑問すらあるが」
「いるかも知れない」
ペーチは少し俯いてそう述べた。
「だがいないかも知れない」
「それは誰にもわからないか」
「残念だが。しかし」
それでも彼は言った。
「我々が探し出すことも出来る」
「その指導者をか」
「そうだ、このエウロパにいるならば」
「それが卿の政党とは違う政党でもか？」
シュヴァルツブルグはペーチにこう問うてきた。連合と同じ様にエウロパもまた議会制民主主義であるから政党が複数あるのも当然であった。階級はあっても政党も存在しているのだ。連合の者にとってはこれがいささか奇妙に見えるが実際にはそうではない。この二つは両立するものなのだ。
「問題ない」
だがペーチの言葉に迷いはなかった。
「それがエウロパの為になるのならな」
「変わったな」
シュヴァルツブルグは友のその強い言葉を聞いて微かに笑った。
「卿も。かってはそうではなかったというのに」
「変わったか」
「そうだな。はじめて会った時のことを覚えているか」
「バーだったな」
ペーチはその話を振られて昔を懐かしむ目になった。それはすぐ

に顔全体へと広がっていく。
「あのバーで。会ったな」
「そうだ。私がカウンターで仲間達と飲み」
「私は席で一人飲んでいた。あれから何度か一緒になっているうちに」
「知り合うようになっていたな。私達の仲は酒によるものだ」
「あの時はビールだった。そして今は」
「ワインだ。だが酒は酒だ」
一旦酒は置かれる。そのうえで言葉が出される。
「うむ」
「あの時私は思ったものだ。やけに青い顔をした不健康そうな奴だと」
「その話は何度も聞いているぞ」
「それでもだ。本当に思った」
「学者の卵か何かと思っていたのだったな」
友の言葉に微笑む。
「そうだ。そして卿は実際に学究の徒になろうとしていた」
「昔の話だ。若い時はな」
ペーチはさらに深い顔になった。かっての思い出にさらに入っていく。
「そうも思っていた。だが今はこうして」
「卿は首相になり私は軍務相になった。お互い変わったものだ」
「あの時はこうして長い付き合いになるとも思わなかった」
「ただ同じバーにいただけだったな、本当に」
「しかしあれから私は政治家になり卿はそのまま軍人になった」
その間も二人の交際は続いていた。若き政治家と軍人として。彼等は公私に渡って付き合ってきた。それはまさに竹馬の友であった。
「長いようで。短かったな」
「短かったか」
「今では。そう思う」

ペーチは答えた。
「まるで一睡の夢だ。何もかも」
「それもそうかもな」
シュヴァルツブルグもペーチの話を聞いているうちにそう思えてきた。確かにかって出会った頃のことがもう昨日のことにも思える。言われてみれば確かにそうであった。
「これからも。そうなのか」
「人によって違うが。歴史ではほんの一ページなのかもな」
「エウロパの苦難の歴史も」
「それが一瞬になるか、そのまま奈落へと繋がっていくか」
「全てはこれからの指導者だな。誰がなるか」
「エウロパを救うことの出来る指導者」
それが問題であった。
「現われることを切に願う。本当にな」
「そちらではいないか」
シュヴァルツブルグはここで尋ねてきた。鳩はもう食べ終えてしまっていた。食べるのはペーチよりシュヴァルツブルグの方が早かった。見れば動き全体がシュヴァルツブルグの方が早い。これは軍人であるというよりも今のペーチの動きが妙に遅いせいであった。

## 第十九部第五章　退場その十四

「私の政党にか？」
「そうだ。誰かいるか」
「そうだな」
ペーチはその質問に一呼吸置いたうえで答えた。
「いないわけではない」
「それは誰だ」
「カミュ外相はどうか」
「彼か」
シュヴァルツブルグはカミュの名を聞いて少し苦い顔になった。
「駄目か？」
「能力的には申し分はない」
それは認めた。彼から見てもカミュは若いながら優れた男であった。だが。
「しかし人間的にな」
「問題があるか」
「最近極端な偏見はなりを潜めているようだが。それでも」
彼は言った。
「女性問題に収賄、それに華美に過ぎる生活と高慢な人格、これでは人望があるとは思えないのだが」
「それはな」
ペーチもそれはよくわかっていた。カミュはそうした一連の問題と性格により人望はまるでなかった。最も他人から何を思われようとどれだけ嫌われようとそれを意に介する彼ではなかった。彼は自分に対して絶対の自信があった。だからそんなことを意に介しはしないのである。
「あれでは総統として人を纏めきることは不可能だ。もっとも彼の方で人を纏める気があるのかどうかさえ疑問だが」

「ないだろうな、それは」
「やはりな」
カミュはそんなタイプではない。人を纏めるよりも自身の才能でことを為す人物であった。
「カリスマにも欠ける。やはり」
「彼には無理か」
「軍にも一人有望な者がいるが」
「彼だな」
「うむ」
ペーチの言葉に対して頷いた。
「モンサルヴァート司令はどう思うか」
「悪くは無い」
ペーチもまたまずは彼を認めた。
「彼にはカリスマもあり指導力もある。あの若さでエウロパ元帥にまでなり、戦場においても卓越した才を見せる」
「それに軍政もな」
エウロパの防衛計画を立案し、それを実行に移したのはモンサルヴァートであった。その結果連合とここまで戦うことが出来た。彼の整備した防衛態勢がなかったならばエウロパはとうの昔にオリンポスどころかその全土を占領されていたとさえ言われている程だ。
「見事だと思う。それを考えるならば政治センスもある」
「では」
「だが」
しかしペーチはあえてここで制止する言葉を述べてきた。
「まだ政治を知らないところがある。純粋に軍人であり過ぎる」
「ではまだ早いか」
「そう思う。軍務相か何かで政治をよく知ってからでも遅くはないと思う」
「今は無理か。それでは」
言葉をまずは収めて話を聞いた。

「天才的な政治家と軍人はいてもさらに天才はいないものか」
「どちらにもか」
「しかもカリスマまで備わっている。というと」
「彗星の様に出てくればな」
シュヴァルツブルグのその言葉は完全に願望であった。
「そうはいかないか」
「それまでは。私も頑張るしかないな」
「私もな」
二人は互いにそう言って頷き合った。
「ところでだ」
「何だ？」
シュヴァルツブルグはここでペーチの食事に気付いた。
「殆ど食べていないな。どうしたのだ？」
「ああ、少しな」
この問いには少し顔を濁した。見れば料理にも酒にも殆ど手をつけてはいなかった。
「料理がまずいというわけでもあるまい」
少なくともシュヴァルツブルグにはそうは感じられなかった。派手さこそないが家庭的で温かい味がする。これでこの料理をまずいというならばそれはおかしなことであるとさえ思った。

## 第十九部第五章　退場その十五

「それはないが」
「では何故だ」
「どうにもな。食欲が」
「おかしなことを言うな。誘ったのは卿なのに」
苦笑いになるがそれは決して悪意のあるものではない。それは真の友情を持ち合っているからこそであった。
「申し訳ないがな」
「まあいい。それでだ」
「うむ」
二人は話を戻した。
「とりあえずは選挙までは誰が出て来るかわからない」
「どんな人物がか」
「そうだ。英雄というものは時折何の前触れもなく現われる」
「既存ではなくか」
その言葉を聞いて考える目になるのであった。
「知っている者は知っていても殆どの者にとってはそれは突然のことだ」
「成程」
「彗星の様にな。何の前触れもなく」
「姿を現わすか」
「だからこそ英雄とも言われるが。アレクサンダーしかりカエサルしかり」
「オクタヴィアヌスもな」
いずれも歴史にその名を残す英雄達である。オクタヴィアヌスは前述の二人とは違い戦争は得手ではなかったがそれでもローマ帝国を築き上げたということを考えればやはり英雄であった。
「そしてナポレオンもか」

「ネルソンもだ」
どれもエウロパの歴史にその名を永遠に残す英雄達である。カエサルは中年まではこれといって目立たない存在であった。ただその借金と女性関係ではローマでその名を知らぬ者はいない存在であったが。確かにカエサルは英雄色を好むという言葉に相応しい存在であったが彼は何も女性だけを魅了し、声をかけていたわけではない。男もまた魅了していて、英雄として声をかけていた。彼は全ての者を魅了する存在だったのだ。だがそんな彼も英雄になるのは中年になってからである。それまではそうした借金と女性関係だけの人物であったのだ。なお彼はローマでは名門の出身でありマリウスは彼の叔父にあたるのである。
「英雄は突如として現われ、そして危機を救い社会を変える」
「それを言われるとヒトラーもそう見えるな」
「ヒトラーか」
シュヴァルツブルグはペーチの言葉にフォークを止めた。
「そうだ、彼はどうか」
「英雄なのだろうな」
彼はまずそれは認めた。
「今では悪の象徴だが。特に連合では」
「うむ」
彼はユダヤ人を弾圧し迫害した。その結果イスラエルでは今も彼を悪の権化として扱っているのである。確かに彼はユダヤ人を弾圧し、スラブ人や有色人種を蔑視していた。ロマニも迫害した。しかし。
「崩壊状態にあったドイツを立て直した」
「経済を復興させ人々に職を与えた」
「それだけではない。希望と自信を」
「希望と自信もか」
「社会や経済を立て直すのはまだ容易だ」
それでもかなり困難なものであるが。それでも後のものに比べれ

ばかなり容易なことである。
「だが。希望や自信といったものは」
「なかなかできるものではないな」
「そうだ。それが最も難しい」
シュヴァルツブルグにもペーチにもそれはわかっていた。今のエウロパもそうだからだである。今エウロパは敗戦のショックから立ち直れなくなっていたのだ。
「だがヒトラーはそれをやってのけた」
「人種論でな」
当時はこの人種論も大きな意味を持っていた。今では誰も振り返らないこの思想もまた力を持っていたのだ。帝国主義からの残照であった。最早白人しかいないエウロパでも忘れ去られ、文献にのみ残っている思想であるが。ヒトラーの時代は確かに存在していたのである。ヒトラーはこれの熱烈な信者であった。

## 第十九部第五章　退場その十六

「それでドイツ人に自信を取り戻させた」
「そして希望を。彼等を飾ったうえで」
軍服と行進で。それで彼等を纏め上げ、飾ったのである。
「それだけのことをした。最後は敗れたが」
「だが一度はドイツを救った」
「そうだ。そしてもう一度栄光に満ちた帝国にした」
「それを考えるとやはり英雄なのだな」
「独裁者になるには能力がなければ駄目だ」
シュヴァルツブルグは述べた。
「人としての能力だけでなくそれとはまた別のものが」
「カリスマか」
「今我々に必要なのはそれを持つ者だな」
「カリスマ性を持ち、人々を導いていける存在がか」
「そう、例えば」
ここでシュヴァルツブルグは述べた。
「ティムールのシャイターン主席の様にな」
「彼か」
ペーチはその名を聞き少し顔を顰めさせた。
「彼は英雄だと思うが。少なくともサハラにとっては」
「それはな。しかし」
「英雄にしては影があると言いたいのだな」
「そんな気がする。それに彼は手段を選ばないという話も聞く」
「権謀術数を駆使する英雄も過去に幾らでもいたが」
「それはそうだが」
「英雄にしろ様々だ」
そしてまた言った。
「奇麗な英雄もいればな。影のある英雄もある」

「そうしたものか」
「歴史上でもそうだが。ヒトラーにしろだ」
「うむ」
「そうしたことは小事なのだ。英雄にとってはな」
「英雄にとってはか」
そうなるのである。歴史では。
「私はそう思う。英雄とは特別な存在なのだからな」
「だからこそ英雄か」
「そう、そして今は」
「その英雄がエウロパにとって必要、ということか」
「現われなければ。エウロパは終わりだ」
それもまた事実であった。今のエウロパにとっては。
「ブラウベルグがまた現われるか」
「そうでなければ。このまま枯死してしまうかも知れない」
「それを防ぐ為には」
「英雄を見出す、その英雄が表舞台に現われるまで」
「支えるしかないな、国を」
話はやはりそうした結論になった。それ以外にはなりようのないものではあった。
「それでだ」
今度はペーチが声をかけてきた。
「どうした？」
「それまで。頼むぞ」
「頼むぞ、とはおい」
シュヴァルツブルグはその言葉に違和感を感じずにはいられなかった。
「私だけでか。卿はどうなのだ」
「私か」
「そうだ、今言ったではないか。共にエウロパを支えようと」
「そうか、そうだったな」

「そうだ」
シュヴァルツブルグはペーチが妙なことを言ったと思った。それにどうしても違和感を覚えずにはいられなかった。だがペーチはそれを隠すようにして述べた。芝居の下手な彼にしてはここはやけに巧く演じたものだとシュヴァルツブルグは後に述懐することになる。
「済まない、言葉のあやだ」
「言葉のか」
この時彼は自然にこの芝居を信じてしまったのだ。
「だから。気にしないでくれ」
「わかった。ではこれから何かと忙しいぞ」
「うむ」
「軍も立て直さなければならないし経済もな」
「インフラも。何もかもな」
「幸いなのは連合軍がそうしたものに手を出さなかったことだが」
一般市民への損害も皆無と言ってよかった。八条が攻撃対象を軍事施設だけに限り軍規を徹底させたのと、エウロパ側がゲリラ等の正規の戦闘以外の抵抗を禁じたからであった。また連合軍もエウロパ軍も一般市民を攻撃対象とする性質の軍隊ではなかったことも大きかった。連合軍は基本的に海賊やテロリストへの対策、また領土防衛を第一の任務としており一般市民への攻撃を対象とはしていないのだ。これは連合軍が各国の軍隊に分かれていた頃からである。内戦や対外戦争の経験がこれまでなかったこともそれに加わっていた。
エウロパ軍は貴族の軍隊である。戦いはあくまで戦場でのことだ。騎士は武器を手にしない者には剣を向けない、そう考える彼等にとって一般市民への攻撃はあってはならないことなのである。そうした考えの違いはそれぞれあっても。連合軍とエウロパ軍がそれぞれ一般市民に銃を向ける様な軍ではないということはこの戦争にとって非常に大きかった。少なくとも一般市民とその最低限の生活は維持されたのだから。

## 第十九部第五章　退場その十七

「それを考えると普通の敗戦よりは幾分ましか」
「うむ」
「どちらにしろ苦難が待っているがな」
「それでもな」
「だな。ではまた明日から」
「いや、今日からだな」
「そちらもか」
シュヴァルツブルグはその言葉に思わず苦笑してしまった。
「帰ったらまた仕事か」
「うむ」
「わかった。では健闘を祈るぞ」
「そちらもな」
最後にそうエールを交あわせて別れた。久し振りの旧友同士の会合であった。少なくともシュヴァルツブルグにとってはそうであった。だがペーチにとっては違ったものであった。
「これでよし」
彼は車の中で呟いた。
「思い残すことはない」
「！？首相」
その言葉に運転手が気付いた。
「一体どうされたのですか？」
「あ、いや」
つい口に出してしまった。それに自分で戸惑いを見せた。
「何でもない」
「そうなのですか」
「そうだ。だから気にしなくていい」
「はあ」

それで運転手との話は終わった。そして官邸に戻る。すると官邸に内相であるハインツ＝フォン＝ボーデーとカミュが待っていた。ペーチはそれを聞いて頬を綻ばせた。
「最後だからか」
そしてまた呟いた。
「いたせりつくせりだな」
「！？首相」
今度は秘書官が聞いていた。そして彼を怪訝そうに見る。
「何か」
「うむ、何の用件かな」
彼はそれを誤魔化し逆に秘書官に尋ねた。
「内相と外相が来たのは」
「今後のことについてお話したいそうです」
「そうか。やはりな」
それを聞いてまた顔を綻ばせた。
「いいことだ。では」
「はい」
秘書官はそれに頷いた。
「会談の場へ」
「いや」
だがペーチは会談の場を選ばなかった。
「別の場所がいいな」
「といいますと？」
「三人はもう夕食は済ませているな」
「と思いますが」
「ではもっといい場所がある」
ここでこう述べてきた。
「それは何処ですか？」
「私の執務室だ。そこでどうだ」
「執務室ですか」

「二人は仕事で来たのだろう？やはり」
そう問うと。返事はこうであった。
「その通りですが」
「ならばそこが一番いい。すぐに呼んでくれ」
「わかりました。それでは」
「うむ」
こうして二人はペーチの執務室に呼ばれた。だが机を前にしての話ではなくソファーに座っての話になった。
ボーデーとカミュは並んで座っている。ペーチはそれに対して座っている。二人は正対した形で座っていた。そのうえで話をはじめた。
「まずはようこそ」
ペーチが挨拶をした。
「深夜なので何も出せないが」
「いえ、こちらこそ」
それに対して年長者であり序列も上であるボーデーが応えた。エウロパ中央政府では総統をトップとして首相、内相、外相、軍務相、財務相といった序列になっている。内相は非常時には首相代行となることもある。それ程までに重要な位置にいるのである。
「まあお茶だけでも。菓子とな」
ペーチはボーデーの挨拶に対してそう返した。そして人を呼び茶を頼んだ。
「どちらがいいかな」
彼はそのうえで二人に尋ねた。
「お茶か。それともコーヒーか」
「お茶をお願いします」
「私はコーヒーを」
ボーデーはお茶を、カミュはコーヒーを頼んだ。ペーチはお茶であった。そして暫くしてお茶とコーヒー、お菓子がやって来た。お菓子はビスケットであった。簡素なのはペーチの嗜好であった。

「では早速」
「うん」
三人はお茶とコーヒーをそれぞれ口に含んだ。口の中にそれぞれの甘みと苦味が入り、そして支配する。三人は口の中にそれを漂わせたまま話に入った。

## 第十九部第五章　退場その十八

「まずは私からですが」
ボーデーが述べた。
「とりあえず復興政策の費用とそれに費やす時間がわかりました」
「どれ位だ？」
「費用はその年の予算の何割かは占めることになります」
「そうか」
「そして五年はかかるかと思われます」
「五年か。長いと見るべきか短いと見るべきか」
「正直短いと私は思います」
それがボーデーの識見であった。
「これだけの戦争をしながらこの程度だったのですから」
「そんなものか」
「ええ。連合軍はインフラや市民生活といったものには何も手出しはしませんでしたから。これは非常に大きかったです」
「そうだな」
ボーデーもまたシュヴァルツブルグと同じ考えであった。やはり考えることは同じであった。
「それでも五年か」
「惑星ならともかく星系単位、国家単位での経済活動は停滞し、寸断されていました」
「それの復興か」
「はい。それにかかる費用が莫大なのです」
「つまりはインフラだな」
「その通りです」
彼は答えた。
「それへの復興が重要なのです」
「戦時下で市民生活も疲弊した」

連合軍が手を出さなくとも戦争があるというだけで影響は出る。戦地ではない連合には全く関係がなかったがそれが戦地であったならば。難民こそ出なかったがやはり深刻な影響が現われるのだ。
「それもな。何とかしなければ」
「全ては五年で」
「五年で立ち直るのか」
「立ち直らせなければならないでしょう」
ボーデーの言葉は厳しかった。温厚な性格で知られる彼にとっては滅多にないような言葉であった。だがそれだけ状況が深刻であるという証拠でもあった。
「何としても」
「長くかかればそれだけ我々の首を絞めることになるか」
「連合の工作を許すことになりますし」
カミュがここで述べた。
「隙を置くのはよくないです」
「その通りだな」
ペーチは彼の言葉にも頷いた。
「敵は彼等だけではない」
「ティムールですか」
「彼等もな。何を仕掛けて来るか。モントローズも非武装化されてしまった」
「はい」
これは連合が意図的に講和条約に入れたものである。エウロパの防衛力を削ぐ為だ。連合は講和条約に巧妙にエウロパの力を削ぐ内容を入れていたのである。こうした狡猾さも彼等は併せ持っていたのだ。
「シャイターン主席が妙な気を起こす前にな。力は取り戻しておきたい」
「それにはやはり五年です」
ボーデーはまた述べた。

「それ以上かけると。連合やティムールに妙な気を起こさせるでしょう」
「我々の敵は彼等だけではないということか」
「時間もまた。敵です」
「そういうことだな」
暗鬱になる。時間さえ自分達に味方しないという現実に。
「それ以上のロスは我々の危機を招きます」
「わかった。ではそれを最優先させよう」
「はい」
「それと軍の復活もな。並行させよう」
「内政と完全にリンクさせるのですね」
「分割するとかえって費用や時間を費やす」
ペーチはそれを何よりも怖れていた。
「各省庁とも連携をとってくれ。一連の復興政策は完全に一本化させる」
「一つに纏めて」
「その統括は首相府が執り行う」
彼はそこまで決めた。
「いいな。今回は非常事態だ」
ペーチもまたそれまでのペーチとは違っていた。凡人と言われ目立たず、大人しい人物であった彼は今は何処にもいなかった。ここにいるのは熟練の政治家である男がいた。

## 第十九部第五章　退場その十九

「若しくは総統官邸で行われるべきだ。その辺りは閣下とお話するが」
　エウロパでは中央政府、とりわけ総統の権限がかなり強い。総統の決定により行政府は動くと言っても過言ではない程である。それはペーチもよく認識していた。
「とりあえず何処かで統率する」
「わかりました」
「そしてだ」
　話はまだ続いた。
「総督府から逃れてきた難民達だが」
「彼等の居住先も決めなければなりませんね」
「祖国に帰ってもらうか」
「彼等の本籍の国にですか」
「そうだ。各国にそれを打診してくれ」
　ペーチは二人に述べた。
「是非受け入れて欲しいとな」
「わかりました。それではこの件も」
「うむ。見捨てるわけにはいかないからな」
「左様です。ですが厄介な問題ですな」
「仕方ない話だ」
　ペーチはそう返した。
「我々は戦争に敗れ、そして総督府を失ったのだからな。これは紛れもない事実だ」
「はい」
「それへの対処も行わなければな。これで問題は全てか」
「後はその都度、ですね」
「これで終わりとは思えません」

「問題は中にだけあるものではない」
ペーチの言葉は意味深いものであった。
「外にもある。今我々はまさに」
「内憂外患を抱えていると」
「そうだ。それはよく認識してくれ」
「無論です」
「その為に我々が今こちらに参ったのですから」
「そうだったのか」
だが少し考えればそれはすぐにわかることであった。内相と外相なのだ。まさに内と外である。両者がここに来ただけでそれがわかうというものであった。
「深夜真に申し訳ありませんでしたが」
「いや、それはいい」
それはまたいいとした。
「こちらとしても実りのある話だったからな」
「左様ですか。それならいいのですが」
「だが問題はこれ等を全て纏められる人物だ」
「指導者ですか」
二人はすぐにそれを察した。
「暫くしたら総統選挙だ。ラフネール閣下は辞退されるそうだ」
「それでは」
「我々改革派も新たな指導者を出さなくてはならない」
「その人物によってこれからのエウロパの運命が決まる」
「私はそう思う」
ペーチは答えた。
「全てはな。指導者だ」
「誰かいればいいのですが」
「今改革派には」
二人は口籠ってしまった。ラフネール以外にこれといった人物がいないのである。だがペーチはここで先程のレストランでのシュヴ

ァルツブルグとの話を密かに出してきた。
「卿はどうか」
カミュに対して声をかけてきた。
「私ですか」
「そうだ。総統になってみるか」
彼に問う。同時にその目を見据える。ペーチの目は強い光を放っている。だが。二人は気付かなかったがその光は今にも消えそうな危うさも含んでいた。
「どうだ」
「いえ」
だがカミュはそれを断った。
「有り難いお話ですが」
「ならないのか」
「私はまだその時ではありません」
将来はどうあれ今は違うというのだ。
「まだ経験を積まなければ。総統にはなれないでしょう」
「そうか」
「はい」
それは彼自身がよくわきまえていた。そうした意味で彼はやはり聡明な人物であった。
「ですから。今回は」
「わかった」
ペーチはその言葉に頷いた。
「では誰がいいか」
「何か参ったことになったようですな」
ボーデーがここで言った。
「これといった立候補者がいないというのは」
「それは今のところ保守派も同じだが」
今のエウロパの野党である。保守派と改革派に分かれ、また今の時点では改革派が与党となっているのは連合もエウロパも同じであ

る。もっとも連合とエウロパでは同じ改革派であってもその主張は全く異なるのであるが。
「だが油断は出来ない」
「はい」
「我々は何としても優れた立候補者を見つけ出さなくてはならない」
「ですが今は」
「何も政界か財界、官界だけではない」
ペーチは言った。

## 第十九部第五章　退場その二十

「他の世界でも。これといった人物がいたならば」
「スカウトして、ですか」
「そうだ。何としてもな」
そのうえで言う。
「総統になれる人物を見出すのだ。これは改革派だけの問題ではない」
「エウロパの問題でもあると」
「今こそ我々には優れた指導者が必要なのだ」
そしてまた言った。
「ブラウベルグ以来の」
「ブラウベルグ以来」
「ジュリアス＝シーザーでもオクタヴィアヌスでもいい」
その二人まで出すということに今のエウロパの逼迫した事情が現われていた。今エウロパに必要なのは英雄である、ペーチはシュヴァルツブルグとの話を思い出していた。
「指導者がいれば」
「エウロパは救われる」
「逆の意味も当てはまりますがね」
カミュの言葉は辛らつなものであった。
「今指導者がいないと」
「そうだ。だからこそ」
「見つけなければなりませんか」
「しかし誰が」
それが最も厄介な問題であった。指導者、いや英雄とは探して見つかるものでもあまりないからだ。突如として現われる、彗星の様な一面が確かにある。そしてそれは現われると恒星になるのだ。ヒトラーがそうであった。彼は突如として現われドイツを救った。当

時のドイツにおいては英雄であったのだ。この時代においても否定される存在であっても。作られた英雄も確かに存在するがだからといって容易に見つかるものではないのである。
「それは」
カミュにも答えられなかった。
「そこまではわからないか」
「申し訳ありません」
「いや、いい」
それは責めても仕方のないことであった。
「だが。見つけなければならない」
「はい」
それは二人もよく認識しだしていた。
「何としてもな」
「では」
「誰かを探してくれ」
ペーチは言った。
「エウロパを救える存在をな」
「エウロパを」
「いいな」
「果たしているかどうかもわかりませんが」
「いや、いる」
だがペーチは諦めてはいなかった。
「必ずな。いるのだ」
「その人物を一千億の中から探し出す」
「それこそが我々の仕事だ、いいな」
「これまでになく厄介ですがね」
「それでもな」
探すしかなかった。それを三人はこの時噛み締めていた。
「ではそちらも頼む」
「わかりました」

二人は最後に頷いた。
「中々面白そうな仕事ですね」
カミュはいつもの余裕を見せた。ようやくといった感じであった。
「では頼めるか」
「ええ。ただ」
カミュはそれを納得したうえでまた述べた。
「それが保守派になるか我々になるかはわかりませんが」
「私の立場でこれを言うのも何だが」
ペーチもまた一言断ったうえで述べた。
「最低限エウロパが救われればそれでいい」
「左様ですか」
「そうだ。今はそんなことを言っている場合ではない」
「政党を越えて」
政党政治なのであえてであった。
「エウロパは一致団結しなければならないのだ」
「階級も越えてですね」
「階級は確かにあるがな」
ボーデーに応える。エウロパにいてそれを否定することは出来ない。エウロパにおいては階級というものは絶対のものである。貴族と平民、これはなくすことは誰にも考えられなかった。
「それでもだ」
彼は述べた。
「我々は派閥やそうしたものを越えて一つになり、優れた指導者の下」
「エウロパを救わなければならないのですか」
「私はそう思う」
ペーチの言葉は硬いままであった。

## 第十九部第五章　退場その二十一

「エウロパの為に」
「エウロパの為に、ですか」
「いざとなれば挙国一致政権もある」
「挙国一致」
「かってのブラウベルグ時代の様に」
ブラウベルグの時代のエウロパは挙国一致であった。彼の絶大な指導力とカリスマ性の下団結し今の連合を成す多くの国家と渡り合ってきた。圧倒的な国力を誇る彼等に対して毅然として立ち向かい五分と五分であった。だがそれはブラウベルグの時だけの非常時扱いでありそれから一千年の間は普通の政党政治が行われてきたのである。だがそれを。崩してもいいというペーチの言葉は印象的なものであった。
「あくまで可能性だがな」
「わかりました」
二人はその言葉を聞いたうえで応えた。
「それは考えておきます」
「まさかとは思いますが」
「確かにまさかだがな」
それはペーチもわかっていた。だが。
「エウロパを救う為には」
「何としても」
「そうだ。今が正念場だ」
彼は言う。
「エウロパという国は。戦争の勝敗だけではないのだ」
「むしろその後が」
「そうだ。その後こそがな」
「では首相」

カミュが言った。
「この件、お任せ下さい」
「頼むぞ」
「はい、カミュ家の名にかけて」
フランスにおいても名門である自身の家について言及した。そのうえで誓ったのであった。
「私も」
ボーデーもまた誓った。
「必ずや救国の英傑を探し出してみせましょう」
「わかった。私もな」
「はい」
三人は誓い合った。そしてそれぞれの仕事に戻った。ペーチはそれから仕事の合間にこれといった人物を探していた。だが中々見つかりはしない。英雄というものはそうそこいらにいる存在ではないのだから。
「旦那様」
ここでペーチに声をかける者がいた。彼はこの時珍しく私邸に戻りくつろぐことができていた。開戦以来殆ど家に帰っていなかったが。久し振りに帰っていたのである。
「どうした？」
幼い頃から家に仕えてくれている使用人に声をかけた。知った仲である。
彼の邸宅は祖国ハンガリーにあるものとこのオリンポスにあるものと二つある。そして官邸も入れると三つだ。二つの邸宅はどちらも質素であり伝統的に華美を好まないペーチ家の嗜好をよく表わしていた。このオリンポスの邸宅もまた同じである。彼はそこでソファーベッドに腰掛けながら本を読んでいたのである。それは今話題の恋愛小説であった。丁度今読破したところであった。
「御客様です」
「仕事の関係か？」

「いえ、違うようです」
「では何だ」
ペーチはそう言われて首を傾げさせた。友人が来るという話は聞いてはいない。

## 第十九部第五章　退場その二十二

「ギルフォードと仰る方が」
「ギルフォード！？」
「はい、イギリスの方だとか」
「どうやらその様だな」
それは名前でおおよそわかった。しかし。
「だがイギリス人か」
「それが何か？」
「イギリス人にも友人や知り合いはいるが」
「はい」
「ギルフォードという名前はいないが。誰なのだ」
その名を問うた。
「侯爵だそうですが」
「侯爵か」
「ええ。どうされますか」
「侯爵ともなれば相当な地位におられるな」
それはわかった。ペーチの家は爵位では子爵に過ぎない。格式ではそちらの方が上であった。では非礼があってはならないと考えた。こうした意味で彼もまた貴族であった。
「よし、わかった」
そのうえで応えた。
「御会いしよう。家の中へ通してくれ」
「わかりました。それでは」
「うん、応接間でな。私も行こう」
「服を着替えられるのをお勧めしますが」
「それはわかっているよ」
にこりと笑って使用人にそう返した。
「忠告有り難う。ではメイド達を呼んでくれ」

「わかりました」
ペーチは使用人達にとっては温厚で心優しい主であった。怒っているのを見たことがない程であった。だから使用人達にはかなり慕われていた。なおエウロパにおいては貴族が平民に危害を加えたならば重罰が待っている。家の使用人であってもだ。性関係の強要もタブーとされている。同意であれば構わないがそれでも貴族やその平民が家庭を持っていれば不倫として糾弾される。貴族と平民では貴族に対する処罰の方が遥かにきつくなっている。下手をすればそれで御家断絶である。これもまた高貴なる者の宿命であった。
こうしてそのギルフォードという男はペーチの前に案内された。既に正装に着替えたペーチは応接間にいた。そして客人を出迎えたのであった。
「ようこそ、我が家へ」
「はい」
そこにやって来たのは黒い髪と目を持つ美男子であった。長身で全体的に鋭利な印象を受ける。彼を見てペーチはまず目を瞠った。
（ムッ）
そして心の中で唸った。
（彼は、まさか）
何かを感じていた。このはじめて出会う若者に。
「はじめまして」
ギルフォードはペーチに挨拶をした。
「ウォルター＝ギルフォードです」
そして名乗った。
「かってエウロパ軍にもおりました」
「エウロパ軍に！？」
そう言われるとペーチにも心当たりがあった。
「それではニョルズの会戦での」
「はい、参加していました」
彼の方でもそれを認めた。

「残念ながら勝利を収めることは出来ませんでしたが」
「そうですか、卿でしたか」
ペーチはそこまで聞いて顔を綻ばせた。
「あの時の御活躍は聞いております」
「有り難うございます」
「おっと」
ここでペーチはふと気付いた。
「まだ立ったままでしたな。座りますか」
「はい」
ギルフォードもそれに頷いた。そして二人は並んだ椅子に座り合った。そのうえで向かい合って話を続けた。
「御出身はイギリスだと御聞きしていますが」
「はい」
ギルフォードはその言葉に頷いた。
「侯爵家だと」
「爵位はそうです」
それにも頷いた。
「今は仕事もなく領地に引き込んでいますが」
「ふむ」
「家は代々イギリス王家にお仕えする立場で。ロイヤル＝ネービーや貴族院にもおりました」
「そうだったのですか」
どうやらかなり古い家である。その話でそれがわかった。
「無論ブリティッシュ＝アーミーにも」
「ほう」
イギリスでは海軍と他の軍隊には明確な差があった。陸軍等は『ブリティッシュ』であり国立である。だが海軍は『ロイヤル』であり王立なのである。そうした明確な違いがあったのだ。
「代々、それこそノルマン＝コンクエストの頃からです」
「それはまた古いですね」

「はい、まあ古い新しいはあまり意味がありません」
「いえいえ」
「それでですが」
話は本題に入った。

## 第十九部第五章　退場その二十三

「実はお話したいことがありこちらに参りました」
「私にですか」
「そうです、今日は首相としてではなくペーチ子爵として」
「子爵として」
そう言われると妙な感じを覚えた。彼は今は首相であると思っていた。だがここで子爵だと言われたのである。やはりそこに違和感を覚えた。そして公人として会いに来たのではないと悟った。
「子爵」
ギルフォードはペーチをこう呼んだ。
「私は今考えていることがあります」
「それは」
「今のエウロパです。どう思われますか」
「今のエウロパですか」
「そうです。私は危惧を覚えずにはいられません」
「敗戦のことですか」
「それだけではありません」
彼は首を横に振ってそう返した。
「むしろ復興、何よりも市民の敗戦へのショックが深刻です」
「アノミーですか」
「それをそう言うのならいいでしょう」
彼は言葉には今はこだわらなかった。
「どちらにしろこの復興と衝撃からの回復こそが」
「エウロパにとって問題であると」
「はい、それを消し去り」
ギルフォードの声が強くなった。そして顔も。何かを惹き付けるものがあった。ペーチは今それを見た。強烈なまでに。それこそが彼が捜し求めていたものであった。

（まさか）
ペーチはそれを見て心の中で呟いた。
（彼は）
「エウロパを救わなくてはならない。私はそう考えております」
「左様ですか」
「はい、その為には」
彼は言葉を続ける。
「私は。全てをエウロパに捧げるつもりです」
「全てを」
「そうです。それは私しかいないでしょう」
強烈な自負であった。そしてその言葉にはペーチも抗うことは出来なかった。有無を言わせぬものがそこにはあった。まるで魔術の様な。不思議な言葉だった。
「エウロパを救う、そして再びこの国に誇りを取り戻します」
（彼だ）
ペーチは確信した。
（今ここにいる彼だ。私が捜し求めていたのは）
それを今わかった。そう、彼なのだ。今を救うことが出来るのは。それを見たペーチは今心が震えるのを感じていた。
（よし）
そのうえで彼に対して言った。
「侯爵」
「はい」
「宜しいのですね」
わかってはいたが念を押した。
「今のエウロパは。苦難の時代です」
「苦難ですか」
だが彼はその苦難という言葉にも臆することはなかった。
「そんなもの、何だというのですか」
「考慮するに値しないと」

「苦難というものは、それを重荷と思うからそう呼ばれるのです。ですが」
「ですが？」
その言葉に問うた。
「重荷ではなく、必然的に乗り越えるものと思えばそれは苦難ではありません。違いますか」
「そうなりますか」
「はい、そして」
彼は続ける。
「それを乗り越えなくてはエウロパの今後は無いでしょう」
「では」
「そうです、エウロパは今を乗り越えます。ですがそれには一つの存在が必要です」
（その調子だ）
ペーチはまた心の中で呟いた。
「その存在とは」
「指導者です」
これこそペーチの待ち望んでいた言葉であった。
「私は次の総統選挙に出ます」
最早決断していた。あまりにも早い決断であった。果断そのものであった。

## 第十九部第五章　退場その二十四

「指導者こそが今のエウロパに必要です。それは私以外にありません」
「左様ですか」
「ですが私は改革派からも保守派からも出ません」
「といいますと」
「今は政党に拘っている時ではないのです」
　これもまたペーチの考えていたことであった。挙国一致、そうでなければ今のエウロパは救われない、そう考えていた。今同じことを考えている人物がいた。それも彼なぞ比べようも無い程に強烈なカリスマ性を放つ青年が。今目の前に存在していたのである。
「だからこそ。政党からは出ません」
「では」
「はい、私は一人で出ます。そして一人で総統になります」
　言い切った。
「エウロパを救ってみせましょう」
「決意されているのですね」
「私の言葉が何よりの証拠だと思いますが」
「確かに」
　最早ペーチは彼の言葉に捉われていた。その強い言葉に。まるで催眠術にかかったようであった。それ程までにこのギルフォードの言葉は強烈であったのだ。
「それではいいでしょう」
　ペーチは頷いた。
「卿の心意気、受け取りました」
「有り難うございます」
「勝たれるのですね」
「総統になるのは通過点に過ぎません」

彼にとって総統になるということもそれに過ぎなかった。
「総統になってからです」
「総統になってから」
「しかしそれも私が総統になれば全て解決します。エウロパはかっての、十九世紀の栄光を取り戻します」
「栄光を」
「全て私の手によって」
まるで神のそれの様に強い言葉であった。
「今それがはじまったのです」
「そうですか、今」
「私が総統になると決意したその瞬間に」
傲慢と言っていいものであった。だが。そこまでのものがなければとても今はエウロパを救えないのだ。今エウロパはそこまで強烈な指導者でなければ救われない、そうした状況であったのだ。
「エウロパの栄光の復活が」
「連合を凌ぐのですね」
「連合は確かに強大です」
彼はそれは認めていた。
「ですがそれに怯むことがあってはなりません」
「果敢に、ですか」
「例え人口と国力で差があっても」
ここで注目すべきことがあった。彼はかつてのカミュの様に人種論には走ってはいなかった。これは非常に大きなことであった。エウロパ貴族としての誇りは確かに強く感じられるが人種論はなかった。これは非常に大きかった。
「それに臆してはなりません。我々は今あらたなるはじまりの時も迎えているのですから」
「復興がはじまりであると」
「そうです、ですから」
彼はさらに言う。

「絶望する必要はないのです」
「しかしエウロパにはもう場所がない」
ペーチはあえて意地悪い事を持ち出してきた。
「開拓すべき場所も。また技術も連合には大きく劣ります」
「はい」
「これをどうするか。人口問題も深刻なものになりますが」
連合ならば開発出来る星系もエウロパは開発出来ない。技術力の関係で。そうしたこともありエウロパの人口問題は解決されていないのである。
「そんなものはすぐにでも解決できます」
「ほう」
ペーチはその言葉を聞いて声をあげた。
「それはどうやって」
「北と西です」
それが彼の答えであった。
「北と西ですか」
「遥か数十万光年の暗黒の空間の果てにそれがあるのです」
「希望が？絶望が？」
「無論希望が」
いささか演出めいているように聞こえたがそれは妙な説得力があった。
「そこにはあります。我等にとってあの数十万光年の距離は乗り越えることが決まっている障壁でしかありません」
「乗り越えるのですか」
「そうでなくては。未来はないでしょう」
そこまで言う。
「我等には」
「確かに」
それはペーチもわかっている。最早エウロパは手狭になっている。だからこそサハラへも侵攻したのだ。だが。数十万光年という距離

はあまりにも遠い。
「侯爵」
ペーチもそれに問うた。
「一口に言いますが」
「わかっています」
どうやらギルフォードもそれはわかっているようであった。それがペーチにもわかった。

## 第十九部第五章　退場その二十五

「しかし問題はありません」
「大丈夫なのですか？」
「はい、人口太陽を使って中継地を作っていけば」
「ふむ」
「乗り越えるのは容易です。既に調査はある程度進んでいますし」
「それはそうですが」
　これについてはもうわかっていた。しかし力をそこに向けることができなかったのだ。その分の力をサハラに向けてきていたのである。
「そしてその先にあるものを掴むのです。それこそがエウロパの未来です。そして」
「そして？」
「総督府も機会があれば奪還します」
「奪還ですか」
　なおサハラの側から見ればこれは再侵略になる。しかしギルフォードはそうは捉えてはいない。
「はい、そしてエウロパ防衛の為にも」
「軍備の再編成も」
「やるべきことは山の様にあるのです」
　また述べた。
「エウロパの栄光の為には」
「栄光の為に」
「だからこそ今のエウロパには私が必要なのです。おわかりでしょうか」
　その言葉には現実には無理ではないのか、というものもあった。特に数十万光年の暗黒宙域の突破は。流石に不可能ではないかと思う。しかし。それを現実に言う彼の言葉はかなり説得力があった。

「はい」
まずは彼の言葉を肯定した。そのうえで言った。
「それを実行に移されるのですね」
「そうです、最初は誰も嘲笑するようなこともいざ実行に移したならばそれが大きな夢へと繋がったということは人類の歴史において何度もありました」
「ええ」
「私の言っていることもそれです。今エウロパは大きく道を踏み出す時なのです」
「そこまで仰るのですね」
「はい」
やはり言葉に迷いはなかった。そのうえ説得力まであった。
「わかりました」
遂にペーチは認めた。かなり誇大妄想の気もあると感じたが。彼は賭けてみることにした。この青年に。
「侯爵」
彼を見た。彼にも迷いはなくなった。
「それでは卿を信じましょう」
「信じて頂けるのですね」
「はい、エウロパの未来を託します」
一言だがこれは非常に重い言葉であった。今のエウロパのことを考えるとだ。しかし彼は今それをあえてギルフォードに対して言ったのだった。そうしてギルフォードもその言葉を受けてみせた。
「有り難うございます」
「是非。総統に立候補して下さい。そして」
「さっきも申し上げましたが総統になるのは通過点に過ぎません」
その考えは変わってはいなかった。
「私の望みはあくまで」
「ええ、期待していますよ」
「それではお願いします」

「わかりました」
二人はほぼ同時に立ち上がった。手を握り合った。ギルフォードはここで気付いた。
（！？）
「何か」
「いえ」
すぐには答えずにまずは一呼吸置いた。そのうえでペーチに述べた。
「子爵」
「はい」
「お忙しいとは思いますが休息も必要ですぞ」
「うっ」
その言葉をかけられて思わず言葉を詰まらせてしまった。
「宜しいですね」
「わかりました。御忠告有り難うございます」
「それでは」
そしてギルフォードはペーチの屋敷を後にした。ペーチは彼を見送ると一人呟いた。

## 第十九部第五章　退場その二十六

「全てはわかっているのだな」
ギルフォードは。握手しただけで見抜いていたのだ。驚くべき勘と触覚であった。
「だが。そうでなくては駄目か」
そのうえで納得するものがあった。
「それだけの鋭さがなくては」
そうなのであった。英雄には鋭さも必要なのだ。無論鷹揚な英雄もいるにはいるが。どうやらギルフォードは鋭利な英雄であるようであった。
「任せられないな、エウロパの今後は」
そこまで言うとゆっくりと屋敷に戻った。その翌日のことであった。
「旦那様」
朝起こしに来た若いメイドが主の部屋をノックした。
「朝食の御時間ですが」
だが返事はない。いつもはすぐに返事が返って来る筈なのに。メイドはそれに違和感を覚えた。
「旦那様！？」
おかしいと思い執事を呼んだ。執事はすぐにメイドと共に主の部屋の前までやって来た。
「御返事がないのだな」
「はい」
メイドはそれに答える。
「どうされたのでしょうか」
「若しかすると」
執事の心に不吉な影がさした。彼はそれを感じてすぐに行動に移った。

「すぐに従医を呼んでくれ」
「御医者様ですね」
「そうだ、すぐにな。そして」
彼は言葉を続ける。
「私はマスターキーを持って来る。若しかすると非常に危ないかも知れないぞ」
「まさか」
「いや、有り得る。奥様と若旦那様達も御呼びしてくれ」
「は、はい」
彼等は慌しく動きはじめた。不吉なものを感じだすとそれが急激に全てを覆っていった。医者と鍵を用意し部屋の扉を開ける。そこにあったのは。
「旦那様！」
ペーチはベッドの中で倒れていた。おそらく眠ったままそうなったのだろう。
彼は意識が混濁していた。慌てて医者が駆け寄る。
そのまま治療がはじまった。病院に担ぎ込まれ検査が行われた。胃癌も発見された。既に癌は克服出来る病になっていたがそれでも手遅れであった。もう手の施しようがない程に。
「どうしてこんなことになるまで」
「時間がなかったのだよ」
検査を一通り終えたペーチは執事に語った。意識を取り戻していたのだ。だがその顔は。やつれ、死期が近いことが明らかであった。
「時間がな。私には」
「無理は為さらずともよかったのに」
「そうも言ってはいられなかったのだ」
病院の個室のベッドの中で言う。
「私はな」
「そんな・・・・・・」
「だが安心してくれ」

執事に優しい声で語り掛けた。いつものペーチの声であった。やつれた声ではあったが。
「もうエウロパには英雄が現われる」
「英雄が」
「彼がエウロパを救ってくれるだろう。だから安心してくれ」
「ですが私達は」
「何、私のことはいい」
ペーチはいい主人であった。その主人に去られることを悲しむ執事に対して言ったのだ。
「私がいなくても妻や息子達がいる。彼等のことを頼むぞ」
「はい・・・・・・」
「私が頼むのはそれだけだ。後は」
「後は？」
「ここでな。最後の時を待つとしよう」
微笑んでの言葉であった。
「ドンナーの館に行くまでの時間を」
「ドンナーの館か」
ペーチはその言葉を耳にすると口元を微かに綻ばせた。
「あそこは戦死した者以外が行く場所だったな」
「はい」
「ではそこに行くか。それもまたよしだ」
ペーチはそのままベッドに寝たきりになった。首相代行はボーデーが務めることになった。ペーチの余命は幾許もないのは誰の目にも明らかであった。そして。
一人の俳優が今退場した。誰にも注目されていなかった脇役が何時の間にか主役の一人になっていた。その役目を果たして。一人舞台から去ったのであった。

第十九部　　完

2006・7・27

# 第二十部第一章　新たなる舞台の開幕その一

## 新たなる舞台の開幕

連合とエウロパの戦いという人類の歴史にとってとりわけ大きな出来事が終わった時同じ舞台にいた多くの者達は知る由もなかった。新しい舞台が既に幕を開こうとしていることに。

それは連合とエウロパだけではなかった。そこにはサハラ各国もマウリアも存在していた。今度の舞台の主役は誰なのか誰にもわからなかった。そこにいるのは神ならぬ者達ばかりであり知る術を持たなかったのだから。それでも舞台はその幕を開こうとしていたのであった。

連合もエウロパもマウリアも。その動きを止めたわけでは決してない。人の世界において動きが止まることはない。戦争が終わってからも。俳優達は舞台の表と裏で慌ただしく動いていた。

「まずはこれでよしですな」

「ええ」

アメリカ大統領マックリーフは電話で話をしていた。その相手は連合におけるもう一方の大国である中国の大統領李であった。いささか剣呑な顔触れと言えるかも知れない。少なくとも連合においてアメリカや中国の横暴さは誰もが知っていることであった。これは彼等が地球にいた頃から何ら変わることはなかった。

「エウロパの貴族達を平伏された」

「実によいことです」

「はい。ですが」

ここでマックリーフは述べた。

「また一つ厄介事が出来ましたな」

「ええ、バチカンです」

「ですな。彼等をどうするべきか」

「厄介なことです。もっとも我が国にはカトリックは少ないのです

が」
「でしたな」
連合でカトリックが多いのは伝統的に中南米の諸国やフィリピンである。アメリカや中国にとってはいささか厄介な国々ばかりである。彼等は外交が巧みで状況によっては彼等と対立することも多いのだ。
「しかしバチカンは旨味もある」
「はい」
「貴国も狙っているのではないですかな？」
李は率直にマックリーフに尋ねてきた。
「どうなのですかな、そこは」
「そうですな」
マックリーフはそのあまりにも率直な問いに一呼吸置いたうえで述べた。
「確かにバチカンには旨味もあります」
「はい」
巡幸により信者達が落としてくる金は大きい。観光産業にとっては絶好の金儲けの機会であった。アメリカも中国もかなり大きな観光産業を持っている。
「しかし」
マックリーフは言った。
「我々が直接バチカンを抱え込むと反発が大きそうですな」
「ええ、確かに」
彼等はそう考えていたのだ。所謂大国の横暴という批判だ。確かに横暴であるがそんな彼等も批判は気にしているのである。またその悪評が自分達にとって首を絞めることになるのもわかっていた。
「ですからここは我々は動くべきではないでしょう」
「ですな」
「むしろバチカンは何処か友好国に任せるべきでしょうな」
「友好国ですか」

「ええ」
「中々難しそうですな」
ふとした感じで言葉があがった。
「少なくともロシアや日本に預けるのは。賛成出来ませんな」
「あの二国ですか」
「とりわけ日本には」
「そういえば伊藤首相はこの件に関しても言っておられましたな」
「はい」
マックリーフは李の言葉に頷いた。
「バチカンの意見を尊重すべきだとか。何を考えているのやら」
「九尾の狐ですからな。油断は出来ません」
「狐は狐でも九尾ですか」
「元々は我が国にいた魔物でしたがね」
「おっと、そうでしたな」
「ええ。国を二つ滅ぼしました」
殷と周である。どちらも九尾の狐が美女に化けその時の王を惑わしている。この狐はとてつもない魔性の存在であったのだ。だから今だに言われているのだ。伊藤がその狐だと称されるのはあまりにも鋭い頭脳故である。
「どうやら今度は女帝陛下にお仕えしているようですが」
今上天皇のことであるのは言うまでもない。伊藤は天皇陛下の足下に控える天狐だとも言われている。とにかく狐に例えられる人物であった。
「それも日本の為に」
「変われば変わるものですな、国を滅ぼす魔物が今は日本の為にそこにいる」
「確かに。しかし我等にとっては」
「厄介なことです。その狐があえてバチカンの意見を尊重と言い出した」
それが問題なのであった。

「何を考えているやら」
「まさか自分達がバチカンを抱え込もうと考えているわけではありますまい」
「それはないでしょう」
マックリーフはそれはすぐに否定した。
「事情は我々と同じで」
「ですな」
それは李も読んでいた。すぐに頷く。

## 第二十部第一章　新たなる舞台の開幕その二

「では何をしようと考えているのでしょうかな、彼女は」
「どのみち我々の利益とは違うことでしょうが」
「日本の利益を」
「考えているのでしょうな、いつもながら」
「まあそれは我々も同じですが」
「はい」
マックリーフは李の言葉に頷いた。これはどの国の国家元首も同じである。何も伊藤だけではないのである。連合市民である以上にその国の市民であると意識が強い連合の内部事情もそこに影響している。
「祖国の為に何かをするのが我々の務めです」
「中央政府とは違って」
「そういうことですな。してその日本ですが」
また日本の話が出る。
「ええ」
「果たして何をしてくるか」
「今の時点では何もわかりませんが」
「とりあえずは今は情報収集ですな」
李は今度は素っ気無く述べた。
「日本だけでなく各国に対して」
「我が国にもですかな？」
「無論です」
またもや率直な返事であった。
「それは貴国も同じではないですかな」
「否定はしません」
その通りであったマックリーフもこう返した。
「左様ですか」

「はい」
そして頷いた。隠すつもりもなかった。
「まあこの問題も落ち着くところに落ち着くでしょう」
「案外バチカン市国の様になるかも知れませんな」
「ははは、バチカン市国ですか」
「はい、ああした感じで」
イタリア統一以後ローマに閉じ込められた形になり、イタリア政府と険悪な関係であったがムッソリーニがその関係を修復しバチカン市国という形で収まったのだ。ムッソリーニは確かに独裁者であったが政治欲は確かに持っていた。これは政治力とは関係がないが少なくともヒトラーやスターリンの様に人間味の欠片も感じられないといった人物ではなかった。同盟を結んでいた日本人の施設を訪れて子供に頬擦りしたり、ユダヤ人を助けたりといったエピソードも残っている。唯一の問題は自国の軍隊の戦闘力や士気を完全に見誤っていたことであった。
「収まるのかも」
「では太陽系に」
「さて、そこまでは」
「まあとにかく今は様子見もありますな」
「ええ、まあ」
「どちらにしろ話はこれから本格化します」
そのうえで述べた。
「その時にまた」
「お話しましょう」
二人の元首の会話は終わった。電話が切られすぐに仕事に戻る。二人が警戒している伊藤はこの時ロシア大統領ベニョーコフと話をしていた。奇しくも連合四大国の元首と宰相が二組に分かれる形で会談を行っていたのであった。伊藤とベニョーコフもまた電話での会談であった。
「それでは貴国もバチカンを抱え込む気はないのですね」

「はい」
伊藤はベニョーコフにそう答えた。
「我が国がバチカンを保護しては各国から顰蹙を買うでしょう。利益を独占するのかと」
「確かにそうですな」
ベニョーコフもそれを認めた。
「それは我が国も同じことです」
彼もそれを認識していた。
「私だけではないでしょうが」
「アメリカや中国も」
伊藤はこの時マックリーフと李の会談を知っていたわけではない。だがその優れた洞察力からそれを読んでいたのであった。この鋭さが狐と呼ばれる由縁であった。

## 第二十部第一章　新たなる舞台の開幕その三

「同じことを考えているでしょうね」
「同じことをですか」
「ええ」
そして応えたのであった。
「自分達は批判を浴びたくはないけれど利権は欲しい」
「成程」
ベニョーコフは伊藤のその言葉に納得して電話の向こうで頷いた。
だが伊藤はさらに彼に対して言った。
「それは貴方も同じだと思いますが」
「ふふふ、確かに」
敵もさるものであった。ベニョーコフは悪びれずにそれを認めた。
「そちらもまた」
「おわかりでしたか」
「相変わらずですな」
「でしょうか」
しれっとした顔で誤魔化してきた。奇麗な顔に似合わずしたたかである、伊藤が受けている評価はあながち間違いではなかった。
「ではバチカンを巡ってはかなり激しい対立が今後あると」
「それは既に水面下でははじまっていますね、既に」
伊藤は述べた。確かにその通りであった。そうでなければこうして今電話で話をしたりはしない。バチカンを巡る各国の綱引きはもうはじまっているのである。
「それでは」
「ええ」
二人はさらに話を続けた。
「こちらもロシアとして動きますので」
「望むところとお返しすればいいのでしょうか」

伊藤は単に頭の回転が早いだけではなかった。その肝もまた有名であった。連合屈指の大国であるロシアに睨まれれば震え上がる国も多い。日米中三国といえど覚悟を決めなければならない。大国だから安心というわけにはいかないのだ。何故獅子と獅子が互いに争わないか。それはお互いが強いということを誰よりも知っているからである。争えばどちらかが死ぬか、そうでなくても致命傷を負ってしまう。だからお互いに争うことを避けるのだ。大国同士の争いも全く同じである。争えばどうなるかわかっているのだ。

だが伊藤はそれをにこやかに受けてきた。無謀ではない。肝と頭、両方備えているのである。そして今その肝をベニョーコフに見せてきたのだ。ロシア大統領に対して。

「ははは、またそれは手厳しい」

「ふふふ」

ベニョーコフもその返事には思わず笑ってしまった。伊藤も笑みを返す。

「まあ今回の件では確かにロシアの権益に添いますが貴国とは対立するつもりはありませんので」

「左様ですか」

「ええ。それは約束します」

「ではこちらも」

話がまとまった。伊藤はすかさず述べた。

「この件につきましては貴国とは中立、若しくは協力ということで」

「わかりました。では」

ベニョーコフもそれに応えた。

「そういうことでお願いします」

「はい」

「そしてですね」

ベニョーコフはさらに続けた。

「バチカンは国になるのですか」

「国ですか」

「はい。エウロパでは一応は国でしたね」
「はい」
バチカンはオリンポスの衛星の一つにおいて国となっていたのである。その衛星の名もバチカンであった。彼等はそこで宗教国家として生活を営んでいたのである。
「連合に移っても国なのでしょうか」
「そうなると思います」
伊藤の返答は早かった。
「バチカン市国以来ですから」
「左様ですか」
「はい。連合ならば星系一個になるかも知れませんね」
「星系一個ですか。それはまた」
ベニョーコフにとっては驚くべき破格の待遇であった。

## 第二十部第一章　新たなる舞台の開幕その四

「連合の広さから見てそれ程破格とは思えませんが」
「それはそうですが」
　言われてみれば確かにそうなのである。連合はエウロパと比してあまりにも広大だ。銀河の大半をその領土としている。その中においては星系の一つ位どうということはなかった。連合において領土の基本基準は星系なのである。惑星がかっての都市の様な扱いを受けている。星系が郡や県、州の様なものなのである。
「では独立国家になるのですか」
「そうかと」
「それはまた意外ですね」
「ですから権益を考えるにあたってはいささか注意が必要ですね」
「さて、どうなるか」
　以前にもバチカン問題は話し合われた。だが結論は出てはいないのである。そして今も。それは容易に出せそうにないものであった。
「それはまたこれからですね」
「長い議論になりそうですね」
「ですが何時までも放置できる話ではありません」
「ええ、それはわかっています」
　ベニョーコフは答えた。
「案外中央政府も動くかも知れませんね」
「中央政府が」
「星系一個単位ですし。それに国家の設立になりますから」
「ではまた事情が異なります」
　伊藤は述べた。
「中央政府が積極的に話に出て来たならばまた事情が変わって」
「複雑になりますかね」
「むしろシンプルになるかも知れないですね」

「簡単にですか」
「ええ。今のままですと各国での対立になりますが」
「はい」
その対立という言葉に応えた。
「中央政府が出ると中央政府とそれぞれの国の。対立となります」
「つまりは中央と地方というわけですな」
「そうですね」
伊藤はそれに頷いた。
「無論我が国も」
「おや、貴国が中央政府とことを構えられる」
ベニョーコフはそう言ってくすりと笑ってきた。
「まさか」
「何かおかしなことでも？」
「いえ、日本が中央政府と対立するというのは。珍しいと思いまして」
実際には珍しいどころかそうそうなかった話である。日本は中央政府がある太陽系にほど近い場所に領土があり、また長い間中央政府には忠実な方針であった。その日本が中央政府と対立を辞さないというのがベニョーコフには実に奇妙に映ったのである。
「あくまでケースバイケースです」
そしてこれが伊藤の返答であった。
「状況による、ということですか」
「その通りです」
伊藤の返事には何の淀みも迷いもなかった。率直なものであった。
「ふむ」
「日本といえどその政策が中央政府のそれと添ぐわないならば対立することもあります」
「そうなのですか」
「そうです、それの何処がおかしいのでしょうか」
「いえ、現実にはそうなのですが」

ベニョーコフはまた言った。

## 第二十部第一章　新たなる舞台の開幕その五

「ただ。今までがそうではなかったので」
「実際はそうでもありませんがね」
「そうなのですか」
「水面下では常に色々とありましたよ」
「ふうむ」
　これまた意外なことであった。日本と中央政府がそうした形で対立していたとは。ベニョーコフにとっては驚くべき話ではあった。容易には信じられないレベルの。
「それがあまり知られていないだけです」
「そうだったのですか」
「はい。中央政府はあれでかなり厄介な存在です」
「向こうもそう思っているでしょうな」
「それは間違いないかと」
　当然それも承知のことである。
「中央政府第一の家臣とまで言われているようですが。中央政府にとってはそうではないかも知れませんね」
「ははは、実際は違うということですか」
「夫婦の様に」
　外では仲のいい夫婦として知られていても実際では言葉も交わさない夫婦や喧嘩ばかりしていても実は互いに信頼し合っている夫婦というものは確かに存在するのである。それは人の関係ならばよく見られるものであり国と国の関係でもあるものであおる。日本と中央政府の関係もそれと同じである。
「中央政府とはこれでも色々とありまして」
「一千年の間ですか」
「私が今総理をしている間でも結構ありました」
「そうだったのですか」

これまたベニョーコフにとっては意外な話であった。
「耳に挟まれたことはないですか？」
「いえ、全然」
ロシア大統領であるベニョーコフの耳にすら入らなかった話である。それ程までに知られていなかった話なのである。
「本当に。意外な話です」
「中央政府もそう言うでしょうね」
「案外色々とあるものですな」
「おおむね関係は良好ですが」
そう断ってはいてもやはり驚くべき話であるのには変わりないのだ。ベニョーコフの驚きは電話の向こうからでもわかった。それ程までに日本の中央政府に対する好意的な姿勢は有名だったのである。
もっともそれには日本政府なりの読みと計算、国益があるのは言うまでもない。日本にとっては中央政府に好意的である方が何かと利益になる場合が多いのである。だからこそ友好的であり続けているのである。時には対立することも当然としてある。そういう関係なのである。言うならばこれもまた国家と国家の関係なのだ。
「とりあえず中央政府が出て来るのですね」
「私はそう見ています」
「ふむ、わかりました」
ベニョーコフはそこまで聞いて今度は納得したように頷いた。
「ではそのケースもシュミレーションしておきましょう」
「ではこちらも」
「そちらはもう想定しておられたのではないのですか？」
「さて、それはどうでしょう」
伊藤はとぼけてみせた。こうした演技も政治には必要なのである。もっとも今の演技はジョークの様なものであり底が見えているものであるが。
「ではそれで」
「はい」

話は終わった。伊藤とベニョーコフは電話を切りそれぞれの仕事に向かった。それはニーベルングに向かうことである。ニーベルングでのエウロパ各国の首脳との対面が待っていたのである。

## 第二十部第一章　新たなる舞台の開幕その六

各国の首脳達がそれに向けて動こうとしていた頃中央政府内務省では金が難しい顔をして自身の執務室においてノートパソコンを叩いていた。

その側にはコーラが置かれている。当然そのコーラにもかなり砂糖を入れている。金以外の者が間違えて飲んだならば吹き出してしまうかも知れない。それ程までに甘いのである。おそらく金以外には耐えられないであろう。彼女は今それを飲みながらパソコンを叩いていた。

見れば事務仕事を処理していた。その処理速度は驚くべきものである。パソコンの中に置かれていた仕事が次々と処理されていく。しかも的確に。それが終わるのはすぐであった。終わるとコーラを口に含んだ後でパソコンからディスクを取り出した。そして部屋を出た。

その足で隣の部屋に向かう。秘書の部屋であった。清潔なオフィスの中でこれまた奇麗な身なりの若い女性達が仕事に励んでいた。だが金が部屋に入って来ると皆顔をあげた。

「内相」

「続けて」

仕事の手を止めようとするのを制した。そして仕事を続けさせる。

「こちらの仕事が終わったから届けに来ただけだし」

「わざわざ有り難うございます」

「前から言っているわね、自分で動いて仕事をしなさいと」

「はい」

「だからよ。届けに来ただけだから」

彼女の持論であった。お茶を入れるのも仕事を届けるのも下の者にやらせるのではなく自分でやるようにと。金はコピーも自分でするのである。

「このディスクに全部入っているわ」
「あれだけの仕事をもうですか」
「ええ」
秘書の一人の言葉にこくりと頷く。
「それが何か」
「いえ、相変わらず速いと思いまして」
「これは慣れね」
「慣れ、ですか」
「そうよ。ずっと事務仕事はやってきたから」
金は述べた。
「速くもなるわね。今じゃ指が自然に動くから」
「指が自然に」
「そんな」
アッディーンが聞いたならば唸る様な言葉であった。彼は事務仕事が好きではないのだ。処理能力はそれなりにあるがそれでも嫌いなものは嫌いなのである。
「だから貴女達も数をこなすことね」
「それで処理能力が上がるのですか」
「そうよ、これは事務仕事だけじゃないわ」
彼女は言う。
「何でも。要は経験なのよ」
「それはよく聞きますけれど」
「知っているのと知らないのとでは全然違うわ」
金はこうも言った。
「知っていれば出来る仕事も何も知らないと出来ないでしょ」
「はい」
「知れば知る程出来るようになっていくの。そういうことよ」
「じゃあ私達も」
「どんどんやっていけば」
「頑張りなさい」

ここでうすらと笑った。
「何事もまずは努力だから」
「わかりました」
「それじゃあ」
秘書達も仕事に励みはじめた。金はそれを見ると自分の部屋に戻った。そして次の仕事に取り掛かろうとパソコンのある部分をクリックすると机の上の電話が鳴った。
「はい」
それを受けて電話を手に取った。電話をかけた主は彼であった。
「私だが」
「首相」
金はその声を聞いて声をあげた。
「こんにちは。どうされたのですか？」
「うむ、実は聞きたいことがあってな」
アッチャラーンは電話の向こうでそう述べた。
「私にですか」
「バチカンのことでな」
「バチカンの」
その単語を耳にした金の眼鏡の奥の目が微かに動いた。

## 第二十部第一章　新たなる舞台の開幕その七

「あの講和条約で連合に来ることになった」
「はい」
これはもう銀河の誰もが知っていることである。人類史上最大の事件とさえ言われている。少なくともローマ＝カトリック教会にとっては十字軍や叙任権問題、アナーニ事件、教会分裂、ルター騒動、バチカン市国設立といったこれまでの数多い歴史的事件に匹敵するものであった。
「それ自体はいいことだが」
「工作の芽をこちらに移してそれを防ぐという意味でも」
「連合内にいる数多くのカトリック教徒の為にもな。また巡幸で観光産業も喜ぶだろう」
「まずはいいことが多いですね」
「だが同時に厄介なことも起こっている」
「問題はその場所と処遇ですか」
それについても言及される。
「何処に置くかだ。そしてその広さは」
「広さは私に考えがありますが」
「どれ程がいいと思うのかね、君は」
「星系一つでいいのではないでしょうか」
「星系をか」
「そうです」
金は短い言葉で述べた。
「連合では星系一つは訳はないです」
「ふうむ」
だがアッチャラーンはそれを聞いて少し考え込んだ。だがここには金の深謀があった。
「星系をか」

「はい。それでいいと思いますが」
「それを提供するとなると国が限られてくるな」
アッチャラーンは考えながらこう述べた。連合には小国も多い。むしろ数においては大国よりも小国の方が圧倒的に多いのが実情である。中には星系を数個しか持っていない国もある。一つの国もあるのだ。そうした国は残念ながら星系を提供することは不可能である。
「だとすると大国だが」
彼は言う。
「アメリカや中国、ロシアといった国々に提供してもらうと後がな」
「何も各国に星系を提供してもらうことはないでしょう」
「というと？」
「まだどの国の領土にもなっていない惑星も多々あるではないですか」
「辺境で発見されたばかりの星系か」
「ええ、その中から」
金はそう述べた。
「一つよい星系を提供すればいいと思います」
「つまり完全な新国家とするのか」
「それも大国の影響が及ばない場所に」
「成程な、そういう方法があったか」
コロンブスの卵であった。アッチャラーンも思わず頷いた。
「いい案だな」
「有り難うございます」
「考えてみればそうだ。何も何処かの国に提供してもらうことはない」
「新国家として新たな星系に入ってもらえば」
「それに越したことはないな。ではその方針で行くか」
話を聞いて述べる。
「利権を諦めない大国が何かと妨害して来るでしょうが」

「それはそれで対処が必要だな」
「いつもはそれぞれの大国が中央政府についたりつかなかったりするのですが」
「今回はそれぞれが利権を主張するだろうな」
「日本もわかりませんね」
「日本か」
その国の名を耳にしたアッチャラーンは自身の声を苦くさせた。
「あの国はまた何を考えているかわからないな」
「ですか」
「少なくとも私はそう思うが。君は違うのか」
「憚りながら日本に関してはかなり知っているつもりです」
金はアッチャラーンにこう言った。
「かなりか」
「はい、何かと日本のあらゆることに接する機会が幼い頃からありましたので」
これは彼女が韓国人だからである。韓国は何かと日本に関して報道し、自国と日本を比較することで有名なのである。これ程隣国を見ている国はないとまで言われている。
これは二十世紀末からだと言われている。かっての日韓併合やその後の分断、反日政策の影響もあると言われているが実際はどうも違うのではないのかとも言われている。とにかく韓国という国は日本に執心なのだ。それは異様なまでであった。
「結局韓国は日本が好きなんだ」
誰かが言った。確かにそうかも知れない。嫌いな相手のことをここまで執拗に意識したりはしないからだ。それも一千年もの間だ。彼等は宇宙に出ても日本ばかりを見てきた。国際的なあらゆるランク付けではまず日本と自分達はどうなっているかを見るし、自分達が日本でどう思われているか、日本で流行っているものは何か、日本では何をしているのか、そうしたことばかり意識しているのである。それは異様なまでであった。

当初は金もやたらと八条に対してきついことを言っていると言われていた。だがそれは間違いであった。彼女は誰に対しても厳しいのであり、いささかおっとりした性格である八条を窘めているだけであった。今では普通の関係となっている。表面的にであり、金が八条をどう意識しているかはまた問題外である。

## 第二十部第一章　新たなる舞台の開幕その八

「日本のことは多少は知っているつもりです」
その彼女がアッチャラーンにそう述べた。
「そうなのか」
「はい、日本は確かに掴み所のない国です」
「そうなのだよ」
アッチャラーンはそれに同意してきた。
「何というかな、押さば引き、引かば押すで」
「何時の間にか彼等のペースに嵌っている」
「だから怖いのだ。そこが他の大国とは違う」
「力技を使わないと」
「そうだな。日本はそれを好まないな」
日本について言うのだった。
「柔よく剛を制すという言葉は御存知でしょうか」
「柔道の言葉だったな」
「はい」
金は頷いた。柔道は日本の武道の一つでありこの時代においても剣道や空手と並んで親しまれている。やはり日本の強さは確かなものであり国際大会においては日本を破ることが重要であるとされている。
「それが日本人の考えの中に強くあります」
「力よりは技だと」
「若しくは頭脳です」
「それは聞いたことがあるが。それだけではないだろうな」
「そうですね、他にも要素は多くあります」
金は知日派として知られている。学生時代から日本について研究し、韓国にいた頃は外務省に出向した折対日交渉のスタッフとして活躍したこともある。この時は日本側に若いながら手強い人物がい

るとまで認識された程である。
「その文化にもあります」
「日本文化か」
「はい、一見穏やかですがそこには芯があります」
彼女は述べた。
「それこそが日本なのです。ですからああした外交になるのです」
「力を隠して」
「そうです」
「あくまでソフトにか。成程な」
「その中でも伊藤首相はかなりの辣腕家です」
「彼女のことはもう言わないでもわかるよ」
アッチャラーンは電話の向こうで苦笑いを浮かべた。
「かなり手強い」
「やはり強かだと」
「いざとなればどんな手段でも使ってくるしな。まさに狐だ」
九尾の狐と言われているのは伊達ではないのだ。
「正直あの国の外務官僚はそれ程怖くはない」
「そうですね」
それは金も感じていた。
「単に仕事をしているだけだ。これといって個性や癖はない。相手をするのは意外に楽なものだ」
流石にかって地球にあった頃の様に酒や料理を浪費するだけであり政治家とは勝手に動いたりすることはなくなったがそれでも日本の外務官僚の能力はこの時代もあまり高くは評価されていなかった。それは日本人が特に辛く評価しており、彼等を露骨に馬鹿にする者さえいた。
「だが政治家は違う場合があるな」
「それが厄介なのです」
金もアッチャラーンも同じものを見ていた。
「官僚は多くはテストで入っただけですが」

「うむ」
高級官僚は首相が直接任命したりもするが。連合ではどの国もトップが官僚を直接任命するスポイルズ＝システムと試験で採用するメリット＝システムを併用している。日本はどちらかというとメリット＝システムが強いとされている。連合の他の殆どの国ではスポイルズ＝システムの方が強い傾向にある。なお韓国は大統領の権限が強い為かとりわけスポイルズ＝システムが強い。実はこの二つのシステムの調和は中々難しい。
メリット＝システムが強いと官僚主義になり易く、また組織が硬直化する。スポイルズ＝システムが強いとトップが意のままに政治を行うようになり、トップのお気に入りの無能な人物が高官になる。それぞれのシステムにはそれぞれの問題があり、これが政治上の問題となるのだ。実際連合においては中央政府も含めてこの二つの弊害が見られることが多々あった。その匙加減を見誤るとそれで厄介なことになるのである。
「政治家は違いますから」
「選挙の洗礼があるからな」
「票集めに長けているだけでは当選しませんから」
「そして要職になるのはな」
「はい。地盤を持っていてもそれは同じです」
金は韓国においては国会議員になったことはない。官僚として辣腕を見せ、それを時の大統領に見出され抜擢されたのである。これはスポイルズ＝システムの一つだが彼女を見出したのは非常に大きかったと言われている。もっともそれ以前に彼女の能力ならば抜擢されて当然とも言われているが。
「能力がなければ結果はありません」
「そういうことだな」
「はい。私は選挙の経験はありませんが」
「あれはあれで楽しいものだよ」
アッチャラーンの声が笑っていた。

「当選したならばな。それまでの苦労が報われたと感慨に包まれてな」
「苦労、ですか」
「まず政治には金がかかる」
これを否定することは誰にも出来ない。とりわけ民主政治においては。民主政治の弱点と言えば弱点ではある。とかく政治、選挙に金がかかるのだ。

## 第二十部第一章　新たなる舞台の開幕その九

宣伝に交通費、スタッフへの給料も支払わなければならない。政治家の収入はこれでかなり消えるとまで言われている。当然支持者への配慮もある。実際にはあまりよくない贈り物もあったりする。連合の大衆政治の腐敗だとエウロパでは批判されることが多いがエウロパではそもそも政治家のかなりが貴族でありその資産も莫大なものだ。それに地盤の強さが違う。エウロパの選挙は貴族が立候補する場合は選挙民達は自分達の領主様を議会に送ってあげようという意識なのだ。そもそもの政治、選挙のあり方が違うのである。

連合の政治は大衆社会の政治だ。資金の調達もしなければならないしそうした賄賂もある。賄賂がない社会というのもそうそうはないが。政治家はとにかく金が必要なのだ。むしろそうした基本の資金さえ調達出来ないでは政治家になってもどうしようもないのだ。

スタッフへの面倒も支持者との後援会や贈り物も。全て金が必要だ。選挙活動はとりわけそうである。こうしたことをやり遂げてようやく選挙に勝てるのだ。資金に困っていない政治家というのも殆どいない。八条はそうした意味でも非常に恵まれていた。彼がそうした危険な金には縁がないのはその人柄のせいもあるがそれ以上に裕福な名家の出身だからでもあるのだ。これが非常に大きかった。

「それの調達がまた大変でな」

「それは仕方ないですね」

潔癖症の金の言葉は不機嫌なものであった。

「ですがあまりよくは」

「君の言いたいことはわかっているよ」

アッチャラーンは彼女にそう返した。

「だが現実もまたわかっていると思うが」

「はい」

それは認めた。それがわからない程彼女も頑迷ではない。

「スタッフへの給料や食事もな。ばかにはならない」
「そして支持者への贈り物も」
「ただ単に贈り物をするだけではない。地元への貢献もな、大事なのだ」
「それを呼び込む為にもお金ですか」
「そう、結局は金なのだよ」
アッチャラーンは言う。
「地元を大事にして、同時に国のことも考える。難しいのだよ」
「国のことが即ち地元のことではなくですね」
「具体的に言うと地元がそれぞれの国だな」
「ですね」
「そして中央政府が国だ」
中央政府もまた国だと言われた。
「ですがそれぞれの国にいたならばまた事情が違いますね」
「いや、それも程度の差こそあれ同じだ」
「といいますと」
「この場合は国はそれぞれの国になり、地元は出身の星系や惑星になるのだよ」
「そういうことですか」
まずは納得する。
「これも学んでいると思っていたが」
「知ってはいました」
金は答えた。
「好き嫌いは別にしまして」
「やれやれ、そういうことか。だが認めてはいるな」
「それは確かに」
その言葉にも答えた。
「政治の世界では必要なことだと」
「だがいいがな」
「しかし見つかれば処罰の対象となります」

「それもわかっていることだ」
それを上手くやるのもまた政治なのである。汚いと言えば汚いがこれもまたどの世界にもあることなのである。どの世界も完全に清浄とはいかないものなのである。
「それで当選した時だ」
「やはり気分がいいものですか」
「一言で言うと至福だな」
アッチャラーンの声が笑っていた。
「苦労が報われるというのは。スタッフ達にも感謝して」
「スタッフですか」
「そうだ、政治は政治家一人でやるものではない」
そのうえで意味深い言葉であった。
「家族や支持者、スタッフがいてはじめてなるものなのだ。君はそれは知らないのだったな」
「申し訳ありませんが」
これは仕方のないことであった。韓国政府において官僚として入り、そのまま抜擢を受けてここまできた人物であるから。彼女は選挙に立候補して政治家になった経験はないのである。
「一度は知ってみるべきだぞ」
「はい」
「政治とは何たるかをより知ることができる。それに面白い」
「面白いですか」
「選挙というものはな。だからあれだけ宣伝も熱いものになるのだ」
「内戦の様に見える時もありますね」
「内戦か」
この言葉がアッチャラーンの心に届いた。そしてまた口を開かせた。

## 第二十部第一章　新たなる舞台の開幕その十

「確かにな。そうかも知れないな」
「左様ですか」
「民主政治において選挙とはそうした内戦や政治抗争を防ぐ意味合いもあるのだ」
「選挙によりどちらが正しいのか、どちらが勝利者なのかはっきりさせるということですね」
「そうだ。それはわかるか」
そこを問うのだった。
「ええ。それはよく」
「他の政治体制ではこういったことが容易ではない場合がある。しかし民主政治ならば」
「選挙ではっきりすると」
「選挙で負ければそれで終わりだからな。しかも再戦を挑むことも可能だ」
「それも同じく選挙により」
「そういうことだ。それを考えると民主政治はいいものだな」
それでもそう言えるものがあるのだった。デメリットは確かにあるが。
「そうですね」
「何かと問題が多いが」
「ただ、それは連合の大衆民主主義だけでしょうか」
「というと？」
「エウロパもまた民主主義でありマウリアやサハラ各国にしろ選挙は存在しますが」
「エウロパは確かに民主主義だな」
アッチャラーンはそれは認めた。確かに彼等は貴族というものを持っており、階級社会ではあるがれっきとした民主主義であり平民

であっても選挙に立候補が可能であり実際に平民の政治家も多数存在しているのだ。平民の閣僚もいるし総統でもいた。そうした面では平等なのである。
「だがマウリアは」
「彼等もまた民主主義ではないのですか？」
「言われてみればそうかも知れないが」
アッチャラーンはどういうわけか急に口篭もりはじめた。
「あの国は。よくわからないな」
「選挙も議会も政党も存在していますが」
「いや、そういう意味ではなく」
マウリアにも政党は複数存在している。これは連合やエウロパと同じである。だがマウリアにはアッチャラーンをして民主主義であると断言するのを躊躇わせるものがそこにあったのだ。それは何か。
「カースト制も残っている」
「それはエウロパにも貴族制がありますが」
「それだけではない。マハラジャもいれば他にも何か色々と存在している。何が何なのか多分にわからないところがあるからな、あの国は」
「これだと言い切れないと」
「そうだ、それは君も同じ考えだと思うが」
「否定はしません」
金もそれは同じであった。
「あの国を理解するのは非常に困難であります」
そしてこう述べた。彼女もマウリアに関しては理解出来ないものが多々あったのだ。
「統計に出ていない人口が三百億ですか」
「最近の話ではもっと多いかも知れないという話もあるな」
「惑星一個そのまま誰がいるのかわからないとも聞きますが」
「そうらしいな。連合では考えられないことだ」
首を傾げる。マウリアの話は彼等にとってはどうしてもそうなる。

「誰もまだ知らない民族が多々存在しているとも」
「彼等自身ですらな。とにかくあの国は理解出来ない部分が多い」
「少なくとも我々には」
金の言葉は生真面目なものであったがそれでも何か挟まったようなものであった。
「何なのでしょうか、あの国は。そう考える時があります」
「それがマウリアなのだろうな」
「それがですか」
「マウリアは一つの世界だとも言われているな」
「旅行者や学者、哲学者から」
「マウリアに行って人間そのものが変わったという話も多い」
これは昔からあった話である。あれこれと多くの国について語る人物がインドのことになると沈黙してしまうということもよくあった。マウリアになってからもそれは変わらず、しかもマウリアに旅に行ってそこで人間まで全く変わった例も多い。彼等はそこで連合にはなに何かを見たのである。

## 第二十部第一章　新たなる舞台の開幕その十一

「そこまで影響を与えるものなのか」
「底無し沼の様に」
「底無し沼か」
アッチャラーンは金の底無し沼という言葉に電話の向こうで眉を動かした。何か思うところがあったようである。
「そうかもな」
「何処まであるのか全くわからない」
「そのまま沈んでいっても死にはしない。かなり変わった底無し沼だ」
「その中に民主主義もあると」
また問う。
「だがそれは底無し沼の中のほんの少しの水に過ぎないな」
「そんなものですか」
「マウリアという国を見ればそうなのではないか」
彼は言った。
「あの国にはそれ以外にも多くのものが存在する」
「しかも秩序だってはおらず」
「混沌だ」
こうも言った。
「少なくとも連合の様に極めて雑多であっても何処に何があるのか一応はわかるものではない」
「我々をバイキングとしたならば彼等は全てのものを一緒に煮込んだシチューでしょうか」
「シチューだな、そう言われれば」
その言葉もまたアッチャラーンの頭に残るものがあった。
「かなり煮込んで具の形さえわからなくなった」
「鶏肉も入っていれば豚肉も入っている」

「牛肉だけか、入ってはいないのは」
「いえ、彼等はヒンズー教徒だけではありませんから」
そう断りを入れる。
「ああ、そうだったか。ではさらに色々入っていることになるな」
「そういうことになります」
「さらに訳がわからない」
アッチャラーンはまた述べた。
「何でも入れればいいというものではあるまい」
「砂糖と唐辛子もまた多量に入れるのでしょうね」
「だろうな。食材だけでなく」
話している側から自分でもわからなくなってくる。
「それで何が出来るかと言えば」
「マウリアなのですね」
「それも国家なのかな」
アッチャラーンの声は考えるものであった。
「我々とはまた違う」
「言うならば連合は人口国家です」
金は言った。
「一千年前に多くの国家が集まって出来上がったものです。しかしマウリアは」
「何千年もかけてああなったのか」
「四千年でしたか」
「五千年ではなかったか？」
その辺りははっきりしない。一万年とも言われているのがマウリアの歴史なのだ。
この国の歴史はあまりにも独特である。時間の概念が他の国のそれとは全く違うのだ。釈迦の生年が学説によっては百年も違うのである。普通ならば有り得ない話である。百年も違えば大変な違いだ。普通ならば。十九世紀中頃、まだビスマルクが若き外交官であり大食を楽しんでいた時代にヒトラーが出れば誰もが違和感を覚えるで

あろう。だがマウリアの歴史はそうなのだ。幾ら古代の話であっても百年も違えば大した違いだ。この時代では言うに及ばず。しかしマウリアではそうではないのである。

## 第二十部第一章　新たなる舞台の開幕その十二

マウリアにとっては百年、人の一生にかかる時間なぞほんの一時なのだ。人はその一生を終えれば輪廻転生し別の人生を歩む。神もまた。神のほんの一日のはじまりと終わりが宇宙の全ての時間であり、神が眠ればその宇宙は終わりまた新しい宇宙が次の日に誕生する。途方もない時間の概念なのである。神もまたその中に存在し輪廻転生を繰り返す。なお釈迦にしろマウリアにおいては調和神ヴィシュヌの姿の一つであり仏教はヒンズー教の一派であると考えられているのだ。これを聞いて腰を抜かす連合の者は多い。

「彼等にしてみれば千年は大した違いではないのでしょうか」

「貴国の歴史は六千年だったか」

「あれは只の宣伝です」

金は韓国の歴史の長さについては一笑に伏した。

「我が国の歴史は三千年かそれ位です」

「そうなのか」

「六千年もありません。今だにそうしたことを主張する人がいるので多くの韓国人は困っているのです」

「そんなものか」

これは意外な話であった。何しろ一万年と主張する韓国人もいるからだ。

「少なくとも私は信じていません」

「ふむ」

「自分の国を素直に認めたうえで愛するのが本当の愛国心なのですから」

金の愛国心はそうした意味で健全なものであった。

「そういうものか」

「私はそう考えます。ですがマウリアは」

「素直に認められるものでもないな」

「正確に言うならば理解する、でしょうか」
「だが頭は切れる」
「はい」
それは素直に理解出来るものであった。
「伊達に長い歴史を持っているわけではないな」
「エウロパとの講和においても」
「その前の停戦もな。彼等はタイミングを見計らっていたのだろう」
「でしょうね。そのタイミングもまた見事でした」
「うむ、確かにな」
彼の言葉に頷いてみせた。
「どちらにしろ今回の停戦と講和は我々に恩を売ったことになります」
「それも非常に大きな運だ」
「これがどう生きるかですか」
「いや、それは言葉が違う」
「といいますと」
金は電話の向こうでその整った目を少し動かした。
「生かしていくか、だな」
「そうなるのですか」
「こちらも下手に付け込まれるわけにはいかないからな」
「よくマウリアは訳のわからないことをすると言われますが」
これはある意味においては事実であった。あくまで連合の主観においてであるが。マウリアは理解出来ないという彼等の主観がマウリアの行動をそう見せていたのである。
「今回もそれをしてきますか」
「何を要求してくるかだ、問題は」
「はい」
「しかも今回は各国政府ではなく中央政府が相手だ」
「実入りもそれだけ大きいと」
「こちらとしてはある程度は要求に応えなければならないが」

流石に何もなしというわけにはいかなかったのだ。そんなことは実際には不可能であるし、若しそれをやれば連合中央政府の信頼は大きく落ちることになるからだ。
「過度なものはな」
「あまりしては来ないと思いますがね」
「いや、そう思うのもまた危険だ」
「危険ですか」
「そう思うこと事態が既に彼等の術に嵌っているのかも知れないが」
アッチャラーンの言葉の歯切れが少し悪くなっていた。

## 第二十部第一章　新たなる舞台の開幕その十三

「どうにもな。マウリアが何をしてくるのか」
「読み切れないですか」
「そうだ。とりあえずはその方面も情報収集が必要だな」
「はい」
アッチャラーンの言葉に頷く。
「外務省や通産省にはまた働いてもらおう」
「外相もお疲れ様ですね」
「そうだな、帰ってすぐに仕事が待っているとは彼女も思いもしないだろう。だがこれも仕事だ」
「仕事ですか」
それを聞いて金の声が少し変わった。
「外相にいてもらっている間はな。その後はどうかわからないが」
「政治家を引退された後は料理に関する本をどんどん出したいと仰っていましたよ」
「そうか、それは彼女らしいな」
カバリエの食通ぶりは彼等もよく知っていた。彼女は連合の全ての料理を制覇しようと考えているのである。三百国の料理をだ。これまた恐るべき野望であった。カバリエは他のことには野心はなくとも食に関してはフランスの不良貴族なぞ足下にも及ばない程の野心を持っているのである。
「出版された折は見せてもらいたい」
「そうですね、特にお菓子等は」
「金外相」
アッチャラーンはお菓子という言葉に反応した。
「何でしょうか」
「あまり甘いものも過度に食べるとよくないのだが」
「私は太る体質ですよね」

「いや、それとは別に」
「糖尿病になる体質でもありませんので」
それを考えると彼女は非常に幸運な体質であると言えた。何しろ好きな食べ物を好きなだけ食べられるからだ。これは実に有り難いことである。もっとも彼女自身もただ無造作に甘いものを食べているわけではない。その量は無造作だとしてもだ。
「それに健康管理は怠っておりません」
「スポーツかね？」
「はい。適度に」
彼女は学生時代から才媛として知られていたがスポーツにおいても秀でていることも有名であった。テニスや短距離走では部活で選手に選ばれた程である。
「欠かさず行っております」
「それはよいことだ」
これを咎める者は流石にいない。健康管理を怠れば誰でもまずいことになるのはわかっているからだ。それで身を滅ぼす者はどの時代にもどの場所にもいる。天才歌手が酒と薬に溺れてそれにより若くして世を去ることになるのも結局はそれなのだ。身体に気を使わなくてはどうしようもないのだ。
「では安心していいな」
「それは自分が最もよくわかっています」
「うむ、それではそれはいいな」
「はい」
「ではカバリエ外相には私から話をしておこう」
アッチャラーンが言ってきた。
「マウリアの件をですか」
「うむ、まずはこれでいい」
「そして今は」
「やはりバチカンだな。だが道が見えてきたな」
「ですね」

彼等は実のある話をしていた。その頃エウロパでは。連合軍は着々と撤退の準備を進めていた。その中八条達は連合への帰路についていたのであった。
八条はスサノオの自室にいた。そこで相変わらず仕事をしていた。
「長官」
そこへ艦長であるメサがやって来た。部屋に入り彼の前で敬礼する。
「どうしました？」
「カバリエ外相がこちらに来ておられますが」
「外相が」
「どうされますか？」
「何の用件でしょうか」
追い返すつもりもないしそれは不可能であったが彼はまずは用件を問うた。
「何でもこれからのことに関してとのことですが」
「これからのこと」
「はい。どうされますか？」
「御会いしましょう。場所は会議室で」
「わかりました」
その言葉に頷いてみせる。するとまた言葉が返ってきた。
「あちらから来られているのは外相だけですか？」
「いえ、外務省のスタッフも何人か」
「そうですか。なら」
八条はそれを聞いて断を下した。
「こちらも国防省のスタッフを集めましょう。すぐに呼んで下さい」
「わかりました」
この場合スタッフとは制服組のことではなく背広組のことである。八条はエウロパへの講和条約の協議及び締結に際して国防省のスタッフも何人か連れて来ていたのである。これは当然のことであり彼等のサポートを受ける必要もあり、また彼等も八条と共にエウロパ

に行かなければならなかったからである。国防省は八条一人で動いているわけではないのである。

こうして外務省と国防省の者達がスサノオの第一会議室に集まった。その中心にいるのはカバリエと八条であった。彼等は長方形のテーブルにおいて相対していた。

## 第二十部第一章　新たなる舞台の開幕その十四

「ようこそおいで下さいました」
まずは八条がカバリエに挨拶をした。
「今回は何の御用件でしょうか」
「マウリアのことで」
「マウリアの」
「そう、さっき首相からメールがあったの」
カバリエは落ち着いた声でこう述べた。
「首相から」
「講和のことでね。彼等に恩ができたから」
「はい」
それは八条も認識していた。だから頷いたのである。
「これがそちらにも及ぶかも知れないから。話を伝えに来たのよ」
「直接ですか」
「ええ、直接話をしておきたくて」
カバリエは言った。
「これは私の憶測だけれどね」
「何でしょうか」
「彼等は。連合の軍事技術も欲しがっているわ」
「我々のですか」
その言葉に目を動かしてみせた。
「そうよ。講和条約の仲介をした見返りとして」
「我々の軍事技術をですか」
「彼等も善意で停戦から講和まで仲介したわけじゃないから」
外交の世界では常識である。善意でそんなことをする国はまずない。表面上は善意という名前で取り繕われていてもだ。そんなものは仮面に過ぎないのが外交、いや政治というものなのである。
「ギブアンドテイクなのよ」

「それでですか」
「そうよ。その軍事技術だけれど」
「マウリアの軍事技術はそれ程低かったでしょうか」
八条は言った。
「確かそれ程ではなかったと思いますが」
「技術は兵器だけじゃないでしょ」
「ええ」
これも八条はよく理解していた。言われるまでもなく。
「通信にしろ偵察にしろ」
「そちらでしょうか」
「今回の戦争で連合軍の通信能力、偵察能力はかなりのものだってわかったから」
「それで被害を最小限に抑え、敵の意表を衝いてきましたから」
「そうね」
カバリエは納得した顔で八条の言葉に頷く。八条はそれを受けてさらに言葉を続けた。
「それがこの戦争の大きな勝因の一つともなりました」
「マウリアはそれを欲しがっているようなのよ」
「左様ですか」
「ええ。それでね」
「停戦と講和の仲裁の見返りとして」
「それだけではないでしょうね」
八条はそれも見据えて述べた。
「他には」
「まだ色々とあるけれどね。軍事技術だけでなく」
「やはり」
八条はまた頷いた。
「それでも講和までこぎつけられたのは事実だし。見返りもまた必要なのよ」
「ではそれを提供するべきだと」

「私はそう考えるけれど。長官はどうかしら」
「マウリアとは何の軍事的緊張もありません」
八条はまずそれに言及した。
「将来にもその可能性は薄いでしょう」
「そうでしょうね」
「ですから。それならば提供してもいいと思います」
「じゃあそれはこで決まりね」
そう八条に問うと返事は明るいものであった。
「はい」
「わかったわ。後で首相に直接メールしておくといいわ」
「わかりました」
「ただ、どうにもマウリアの要求は訳がわからない時があるのよね」
「腹が読めないと」
「それが彼等の意図なのでしょうね。腹の底を読ませない」
これは外交の基本中の基本である。駆け引きにおいては自分の考えは見せずに相手を惑わせるのだ。さながらポーカーの様に。そして自分の有利なように話を進めていくのである。

## 第二十部第一章　新たなる舞台の開幕その十五

「マウリアはそれが特に上手いわ」
「連合の中でもあそこまで腹の底を読ませない国はあまりありませんね」
「タイかベトナムか」
「そうした国々だけですか」
　この二国は伝統的に卓越した外交センスで知られている。時としてかなりえげつないことも微笑を浮かべながら実行するので警戒もされている。また彼等は連合の中では中々国力も高く侮り難い国々とみなされている。日本とはまた違った意味で厄介な外交相手と認識されているのだ。
「後はイスラエルね」
「あそこはまた特別でしょう」
　イスラエルの場合は連合はおろかマウリアやサハラ各国にまでその網を張り巡らせたネットワークを活かした外交が知られている。ユダヤ系の人脈である。連合各国にも深く入り込んでおり、その情報収集能力はかなり高いのである。
「あの外交はイスラエルにだけ可能なことです」
「そうね。華僑でもあそこまでのネットワークは持っていないわ」
「美僑や日僑も」
　外国に移住しているアメリカ系の者や日系の者である。華僑程ではないがこの時代はアメリカにしろ日本にしろこうした存在を持っているのである。これは連合の国は大なり小なり同じである。国が違っていても結婚し、そこに住むことも普通になっているのである。
「そういえば思い出したわ」
「また彼等ですね」
「そうよ、印僑」
　インド系移民のことである。

「彼等もいたわね」
「私はあれがよくわからないのですが」
「何が？」
「彼等はマウリア人ですよね」
「ええ、そうよ」
カバリエの返事は何を今更、と言いたげなものであった。
「そしてシーク教徒で」
「彼等が多いらしいわね」
「連合の市民で」
条件が限られてきていた。
「ええ」
「どうも彼等のリズムと言いますか概念が。よくわからないのです」
「日本人でもそうなの」
「いえ、日本人だとかそういう問題ではなく」
八条は歯に何かが挟まったかの様に話しはじめた。
「やはり。あまりにも異質でして」
なお連合ではマウリアのことを一番理解している国は日本だとされている。日本人はそれを言われると必死にそれを否定する傾向がある。それは八条も同じである。
「こうした話があるのですよ」
その彼が一つの話を紹介した。
「どんな話かしら」
「ある日本人がそのマウリア人と喧嘩したんですよ」
「喧嘩ね。口喧嘩かしら」
「はい。けれど日本人が怒っているだけで」
結局はそれだけである話なのである。とどのつまりは。
「マウリア人は怒っていなかったのね」
「何かヒンズー語で言っていて。それを通訳してもらったら」
「何て言ってたの？」
「私と貴方は前世の巡り合わせが悪いからこうなってしまった。だ

から気にしてはいけないと」
「凄いわね、それは」
これにはカバリエも絶句した。流石に。
「他にもサッカーの八百長が」
「それは聞いているわ。一〇〇点差あったらしいわね」
「バスケットでも大量得点ではないでしょうか」
「サッカーだと有り得ないわね。当然野球も」
「はい」
なお日本はサッカーはあまり強くはない。中南米やアフリカ勢が伝統的に強い。新興国家ではケベックが定評がある。メキシコは強豪として名高い。日本は野球が強いことで知られているが実はメキシコはこちらでも強いことで知られている。ちなみに連合で最強のスポーツ大国はキューバだと言われている。スポーツ、とりわけ野球でこの国に勝てる者はいないとまで謳われている。とりわけその打線は伝説的な強さを長年に渡って誇り、『レッドサンダー打線』と呼ばれている。一時は何と四割バッターが五人もいた程である。当然この時は野球の連合大会もオリンピックも圧倒的な力で金メダルであった。日本は一六〇を優に越える剛速球の持ち主尾崎高志が奮闘したが連合大会でもオリンピックでも九回裏に打ち崩されてしまった。そして銀メダルに終わったのである。

## 第二十部第一章　新たなる舞台の開幕その十六

「よくあんな点数差を考え付いたわ」
「他にも色々とありますね」
「あの国はね。本当に何でもありだわ」
それを実感するのだった。マウリアというものを。
「だからこそ余計に理解することが困難です」
「あの国が連合に入っていたらもっと凄かったでしょうね」
「誰も理解出来ないのでは？」
「理解も何も」
カバリエは言った。
「あの国は国であって国でないところもあるし」
「はい」
「印僑にしろ。何が何なのか」
「掴めきれません」
八条までもがそう言うのであった。マウリアに対して。
「あの国と揉めるのは避けたいわね」
「全くです。理解することが困難な相手とことを構えるのは」
「危険だからね。だから私達は今まで彼等との全面衝突を避けてきたのね」
「そうでしょうね」
一千年の間。それにはこうした事情もあったのである。連合はどうもマウリアを敬して遠ざけるといった感じであったのだ。
「そしてこれからも」
「マウリアとの全面衝突の可能性も一応検討していますが」
「そうなの」
八条の言葉に応える。
「はい、国防上の防衛計画において」
「で、どうなっているのかしら」

「まず実際に衝突する可能性は極めて低いと出ています」
「でしょうね」
これは容易にわかった。
「国境での武力衝突が一番可能性があります」
「そのうえで、でね」
「はい。ですがやはり可能性は低いので。国境への兵の配置もあまりなく」
「ふん」
また頷くカバリエであった。
「即応体制だけは整えておくというのが結論です」
「マウリアはそれ程備えはないと」
「ええ、エウロパに対するのとは違って」
「わかったわ。それでエウロパは」
そこも問うた。
「やはりニーベルング、ブラウベルグ、ガンタースでの三重の備えとなります」
「三重のね」
「そうです。やはり彼等との衝突の可能性は今後もあります」
「その時はまた激しい戦争になるのね」
「はい。ですがここ十年はまず安心です」
八条はそう述べる。ここには冷静な読みがあった。
「エウロパにも国力がないから」
「かなり弱っていますから」
「その間に防衛態勢を整えて充分間に合いそうね」
「ですね。後は」
「サハラはどうかしら」
サハラについても考えるカバリエであった。国防は全ての勢力に関して想定するという基礎を守っていた。
「サハラですか」
「あの地域への備えは考えているかしら」

「無論です」
八条は淀みの無い声で答えた。
「当然それも考えております」
「そう、安心したわ」
「おそらく今後あの地域では統一を巡って大規模な戦争が起こります」
「ハサンと」
「オムダーマン、そしてティムールとの間で」
彼は述べた。
「起こるでしょうね」
「そしてそれはもうすぐでしょうね」
「ですね。三国共戦争準備に取り掛かっているようです」
「果たして何処が生き残るかしら」
「正直完全な判断が下せかねています」
八条は難しい顔でこう述べた。
「国力ではハサンですが」
「それでも他の二国を圧倒するものではないわね」
「そうです。しかもオムダーマン、ティムールに挟まれておりますし」
「ということは両国が手を組めば」
「それだけで彼等は大きな危機に陥ります」
それは最早言うまでもないレベルの話であった。ハサンは確かにサハラにおいて最も国力の高い国であるがそれでもオムダーマン、ティムール二国を相手にできるレベルではないのである。
「それはハサンもよくわかっているでしょうが」
「その敵を危機に陥れるのが政治というやつね」
「はい。ならば」
「オムダーマンとティムールは手を結ぶわね」
「既にその手は打たれています」
八条の声が鋭いものになった。

## 第二十部第一章　新たなる舞台の開幕その十七

「シャイターン主席の妹君であられるマルヤムさんが」
「オムダーマンのアッディーン副大統領の奥方にね」
「家同士の繋がりを重視するサハラではこの婚姻は非常に大きく見られているようです」
「明らかにオムダーマンとティムールの繋がりを重視したものだと」
「はい」
八条はここで頷いた。
「後は正式に友好条約を調印するだけですが」
「それはないわね」
「といいますと？」
この言葉は八条にとっては意外であった。思わず顔を上げた。
「ハサンを倒した後だけれど」
「ええ」
「オムダーマンとティムールが戦いに入るわよ」
「彼等が」
今のカバリエの言葉に目を向けた。
「そうよ。絶対にね」
「共通の敵を倒したら今度はお互いが、ですか」
「それが国際社会というものよ」
カバリエの言葉は真理を語るものであった。彼女は今極めて冷静に政治というものを語っていたのである。これは多少の違いがあるとはいえ連合の中でも同じであるからだ。
「歴史でもそうだったわね」
「はい、確かに」
大学で歴史を学んでいた八条にとっては頷けるものであった。
「連合でもよくあるじゃない。通商で共通のライバルを抑えたら今度は自分達が争いだすっていうのは」

「そうですね、そうしたことは頻繁にあります」
連合の中はこうした経済や貿易、通商を巡る対立で満ちているのである。それを抑え、調停するのが中央政府の役割なのである。中には極めて厄介な話も多い。中央政府の仕事も決して楽なものではないのである。
「そうよね。だから」
「彼等は争うと」
「確実にね」
こうまで言ってきた。
「そしてそれに生き残った者がサハラを掴むと」
「さて、そう簡単にいくかしら」
「ではまだ不安要素が」
「今までもここまで話が進んだことは何度かあったわ」
カバリエはまたしても冷徹とも呼べる声で述べはじめた。
「サハラでは。けれど」
「その度に失敗している」
「まるでそれが運命みたいにね。指導者が暗殺されたり」
「後一歩で統一までこじつけていた国が一度の敗戦で分裂したり」
「そうしたことで何度も統一の機会を逃しているわよね」
それがサハラの歴史である。そうして常に争ってきているのだ。
「それはそうですね」
「その結果で。今もサハラはあのままなのよね」
「残念と言うべきでしょうか」
「残念ではないわね。結局サハラには統一するだけの下地がまだなかったということだし」
「しかし今は」
「それがわかるのはこれからよ」
カバリエはまた述べた。
「どの国が生き残るのか、そして統一されるのか」
「全てはこれからですか」

「そうした意味でサハラは今が正念場ね」
言葉がさらに冷徹さを増していく。
「統一出来るかどうかの」
「これを逃したら」
「また分裂時代に逆戻りね」
その言葉は素っ気無くさえあるものであった。
「そしてまた各地で戦乱よ」
「そうなりますか」
「それで当分の間は統一される気配もなく、になるでしょうね」
「サハラの市民が望んでいなくとも」
「人の意志ではどうにもならないこともあるからね」
カバリエの言葉はやはり冷徹な響きが感じられた。これは普段の彼女とは全く違うものであった。
「それを望んでいても」
「時代の流れがそうはいかない」
「ただし、その逆も有り得るのよ」
「逆も」
それを今考えた。
「そう、一人の人間が変える時もあるわ」
「英雄ですか」
「その人を英雄と呼ぶのならね」
カバリエも八条のその言葉に応えた。
「英雄になるわ」
「今サハラにおけるその英雄は」
「一人ははっきりしているわ」
「ティムール連合主席メフメット＝シャイターン」
その名が今告げられる。魔王の名が。
「彼ね、まずは」
「最近は何かと情報収集に務めておられるようですね、あの方は」
「いえ、それだけじゃないわ」

「！？」
カバリエの言葉に剣呑な響きが混ざった。それを察した八条も国防省と外務省のスタッフもそこに穏やかではないものを感じずにはいられなかった。
「この前外務省ティムール大使館から極秘のメールが届いたのだけれど」
「極秘ですか」
「ええ。どうやら最近ティムールの工作部隊がハサンに多数潜伏しているようなのよ」
「まさか」
それですぐに何かを察しない程八条は勘が鈍くも知識がないのでもなかった。彼はその頭の中ですぐに一つのことを繋げたのであった。

## 第二十部第一章　新たなる舞台の開幕その十八

「知っているみたいね」
「はい、最近のハサンですが」
「要人の暗殺やテロが相次いでいるわね」
「急死や事故であるとされていますが」
「実際は違うわね」
　それはもうわかっていることであった。カバリエにとっては。
「おそらくは。やはりそうした事情があったのですか」
「まだ確かなことはわからないけれどね」
「それはシャイターン主席の指示でしょうか」
「ティムールは議会はあるけれど国家主席の権限がかなり強いものになっているわ」
　すなわちシャイターンの独裁体制下にあるのである。彼は国家主席として国家の全てに絶大な権限を有しているのである。そのうえで市民から圧倒的な支持を得ているのだ。ただ単に独裁者になれるのではない。独裁者となるには力が必要だ。そして人に圧倒的かる熱狂的な支持を受けるカリスマ性も。かつてのヒトラーが独裁者になったのは何故か。その恐るべきまでの絶対的なカリスマ性があったからだ。確かにヒトラーという男には超人的な域に達する指導力、政治力、知力、そして決断力があった。謀略も得意であり、情報操作にも長けていた。それは一介の伍長のレベルではなく天才の域であった。記憶力も教養も驚異的なものであり、三週間前の言葉を完全に覚えていた。哲学と音楽に通じ、その方面でも深い知識を有していた。だがそういった多々の才だけであそこまでになったわけではないのである。例え演説の才もあったにしろ。
　彼にはカリスマがあったのだ。平凡な容姿であり、背丈も普通であった彼に。彼は国民を惹き付けて離さなかった。ドイツ国民は彼に導かれたのだ。そして彼を熱狂的なまでに支持し、賛同した。こ

こまで支持された人物はかっていない程であった。いや、キリストやムハンマドがいるが。それでもヒトラーが受けた支持は圧倒的なものであった。ナポレオンのそれに匹敵する程であった。
　そうしたことを考えればシャイターンは単なる優れた指導者ではないのだ。独裁者であり英雄であると言えた。少なくともサハラにおいてはそうである。だからこそ熱狂的な支持を受けているのである。
「全てが彼の意のままよ」
「それでは」
「間違いないでしょうね」
「だとすると危険な人物ですね、彼は」
「それはもうわかっていることだと思っていたけれど」
「まあそれはそうですが」
　だが八条の予想をも上回っていたのである。彼も自分でそれを認めていた。
「テロまでやるとは」
「政治に良心は不要だとは言うけれどね」
　連合ではそこまではしない。スキャンダルのリークといったものは頻繁にあるにしろだ。流石に命を奪ったり、破壊活動を行う状況にはないのである。
「けれど連合とサハラではまた違うし」
「それはわかっているつもりですが」
「とりあえずそれでハサンは損害を受けているわ」
「かなりの規模でですね」
「それにはハサンは気付いているでしょうね」
「気付かない筈がないと思います」
　八条はまず結論から述べた。
「当事者ですし。それに情報も離れた場所にいる我々よりも確かですし」
「そうよね。けれど」

「尻尾は掴めてはいないようです」
「そう、それなのよね」
「シャイターン主席は自分の存在は匂わせても姿は見せないのです」
八条の目があまりよいものを見るものになっていなかった。そうした手段を選ばないにしろあまりにも露骨なやり方に拒絶間を感じているのだ。彼はそうした謀略とは無縁でいられる幸運な政治家であるがそういうことを差し引いてもあまりいい感情は抱けなかったのだ。
「それが凄いと言えば凄いのですが」
「狡猾と言うべきかしらね」
「狡猾、ですか」
八条の目がまた動いた。
「そう言うのが適切でしょうか」
「もっとおどろおどろしい言葉でもいいかもね」
「そうかも知れませんね。しかし」
「目的が達成されればそれでいいのよ」
カバリエは八条にこう返した。
「政治というものは」
「過程は問われない」
「そうよ、結果が全てだから」
「それはわかっているつもりですが」
「どんな謀略を好む英雄だっていたわ」
難しい顔をする八条にさらに言った。

## 第二十部第一章　新たなる舞台の開幕その十九

「今の時代に英雄と呼ぶのは憚れるけれどヒトラーも謀略を駆使していたわ」
「チェーザレ＝ボルジアも」
「彼は最後で失敗したけれどね」
「はい。それはわかっているつもりですが」
「戦争をすれば損害が確実に出るわね」
「ええ」
　これは言うまでもない真理である。損害の出ない戦争なぞ有り得ない。今回の戦争でも連合軍にしろ損害が出ているのだ。一個艦隊規模ではあるが。義勇軍はそれよりも遥かに大きな規模になっている。
「けれどそれを抑える為には」
「テロも必要だということですね」
「そういうことよ」
「しかしシャイターン主席はそれをかなり狡猾に行っていますね」
　それは八条も感じていた。好感は抱いていない。
「それは否定しないわ」
「ですか」
「そのうえで認められるものよ。私も謀略は使うタイプではないけれどね」
　要するに見つからなければよいのだ。見つからずに目的を達成する。それでよいのだ。もっとも逆に言えば見つかればそれで全ては終わりなのだが。
「どちらにしろハサンは今かなり参っているわね」
「それは間違いありません」
「とりわけ優れた人材が次々に失われていっているのは」
　人的資源の損失は大きい。とりわけ戦乱の中にあっては。

「あまりにも大きいです。結果として今のハサンは一流の人材が払底しようとしています」
「代わりに二流の人材を上に上げるしかない」
「育ちきっていない人材を」
「そして彼等のミスがさらにハサンを苦境に追いやるということになるわね」
そういうものであった。だからこそ優秀な人材は必要なのだ。
「悪循環そのものです」
「ハサンは敗れるかしら」
「それでもハサンの国力は確固たるものがあります」
八条はそれまでの嫌悪感を出した目の光を抑え普通の目になった。その目で述べるのであった。
「ティムールだけならそれでも防ぎきれます」
「シャイターン主席が相手でも」
「何とか。国境は防ぎきる公算が高いと国防省では出ています」
「ハサン軍は数が多いからね」
「それに国境における防衛ラインも堅固ですから」
「じゃあオムダーマンに対してはどうかしら」
「これも単独ならば同じです」
八条は説明した。
「その兵力と防衛ラインによりオムダーマン軍を退くことが可能だと出ています」
「じゃあ安心なのかしら」
「計算においては」
「計算、ね」
「ここでは人材というものが入力されていません」
ハサンにおいて今とりわけ減っているものである。こうした戦略への計算や研究の問題点の一つとしてはそこにいる人間の行動を完全に予測出来ないということである。少なくとも意表を衝くもの等は予想していないのである。これが何よりの問題であるのだ。

「人材、ね」
「ハサンにおいて今最も深刻なものとなっていて」
話がそこに戻った。
「オムダーマンとティムールの躍進の要因となったものです」
「オムダーマンにもいたわね」
「はい」
「オムダーマンの若き獅子」
この二つ名で呼ばれているのは一人だけである。
「アッディーン副大統領ね」
「おそらく彼がオムダーマンとハサンの戦いの総司令官になるでしょう」
「というよりは彼が出ないと話にならないわね」
カバリエの言葉に少し溜息が入る。
「オムダーマンの近年における数多くの勝利は彼あってのものですから」
「そう、彼があってこそね」
「ですから今回も出陣すると思います」
「これに対してハサンはその優勢な兵力で攻めるのね」
「しかしアッディーン副大統領は今まで劣勢な兵力においても鮮やかな勝利を収め続けています」
それは八条も知っていた。だからこそ注目もしているのだ。
「見事なまでにね」
「そうです、まさに華麗に」
八条の目がまた変わった。警戒するものになっていた。彼はアッディーンという人物に将来の脅威を感じているのであろうか。これをアッディーンが聞けばどう思うであろうか。遠く離れた、別世界の様な勢力の要人に警戒されているとは。少なくとも今は想像すらしていないことは間違いない。
「彼もまた英雄なのでしょうね」
「少なくとも軍事的には天才ね」

「はい」
「ハサンはその天才を防げるかしら」
言葉にあえて疑問符をつけてみせた。
「コンピューターでは可能と出ています」
「コンピューターではね」
「しかしコンピューターの計算通りにいかないこともまた」
「多々にしてあるわね」
「そうです。ですから」
八条は言う。
「今回もまた」
「これが十倍の兵力でもあれば別ですが」
「十倍の」
「流石にそれだけあればアッディーン副大統領でもどうしようもありません」
数はそれだけ重要だということである。連合はエウロパとの戦争においてその圧倒的な兵力を使って勝利を収めているからこれは実感があった。

## 第二十部第一章　新たなる舞台の開幕その二十

「個人の天才だけでは」
「けれどハサンにはそれだけの力は流石にないわね」
「そうですね。ただ一つ確実に言えることは」
「それは？」
「やがてサハラにおいて大規模な戦争が起こるということです」
八条は言った。
「これは間違いありません」
「そうね」
カバリエもこれははっきりとわかっていた。
「それがどういう形になるかわからないけれど」
「そしてそれによりサハラに統一国家が出来るならば」
「連合の外交政策にも大きな影響が出るわね」
「敵になるか味方になるか」
「味方になればいいけれど」
それに越したことはないのだ。誰でも好き好んで敵を作りたくはない。外交で下手に敵を作ることは最悪と言ってもいい。それが滅亡に直結するのであるから。
「敵に回ってしまったら」
「二千億の統一国家です」
八条の言葉がまた鋭くなった。
「手強いと言うしかありません」
「こちらは四兆だけれど」
カバリエはここであえて彼女も数を出してきた。しかしこれは八条を試したものなのである。彼がどう答えるか見ようというのである。だがそれは顔には出さない。
「確かに国力差は圧倒的です」
八条もそれは認めた。

「ですが脅威になるのはいただけません」
「力を過信しないということかしら」
「過信は危険なことです」
八条はそれをよくわきまえていた。
「例えどれだけ国力差があっても何の利害関係もない相手を敵に回すことはありません」
「敵は多くは必要ないということね」
「只でさえ我々にはエウロパという不倶戴天の敵がおりますので」
これは変わらない。その対立は最早文明としての対立になっているからだ。だからこそ尾張はしないのだ。
「彼等がどれだけ弱くなっても」
「敵として存在していることは事実ですから」
「それじゃあサハラに関しては」
「条約を結ばないまでも好意的中立ということで」
「そうね」
常識的な判断であった。わざわざ敵を作るまでもない。だがそれはあくまで利害関係が存在しない場合である。何かあれば敵対関係に意向するのが政治というものである。
「とりあえずサハラの今後に関しては防衛上は」
「国境を固めてはおこうと思ってはいます」
これは基本であった。境を固めるのはどの国でもやっていることである。
「具体的に言うとハサンとの国境ですが」
「口実はどうするの？」
「そうですね」
八条は問われてしばし考える顔になった。だがやがて答えた。
「辺境の海賊への取り締まりで」
「それね」
「はい、実際に最近また活動が活発化している傾向がありますから」
「随分減ったけれどね、中央軍と中央警察のおかげで」

「それでも完全には減りません」
八条の声はいささか苦いものになっていた。

## 第二十部第一章　新たなる舞台の開幕その二十一

「流石にそれは不可能でした」
「残念ながらね」
「それでもかなり減ったことは事実です」
「開拓地の海賊もね」
　これもまた問題なのだ。実は開拓地よりも外の一応はまだ人のいない場所にいる海賊が一番問題なのだが。連合は計画的に開発を行っておりまだ開発を決めていない星系には人も送らない。しかし様々な理由でもうそこにいる者達もいるのだ。そうした者達を狙う宇宙海賊が一番問題なのだ。何故なら連合の勢力圏では惑星はどれも人工衛星で守られている。宙路にも艦隊がいる。深刻な問題であってもそれは対処してきた。しかしその外になると完全に目が届かないし中央政府も各国政府も責任を持てない。だからその外は常に無法地帯なのである。
「ですね。またそちらに討伐艦隊を送る計画もありますが」
「正規軍でかしら」
「義勇軍も入れまして。彼等の戦闘力ははっきりわかりましたので」
　今ではもう連合軍の精鋭部隊となっていた。まず義勇軍が先陣を切り突撃する。それから正規軍が攻撃を仕掛ける。率直に言えば楯であり剣だ。正規軍を守る。だがその戦闘力がかなり高いこともまた事実である。それは歴戦のエウロパ軍ですら粉砕していった程なのである。
「役立ってもらいます」
「その彼等の処遇も今後問題となるわよ」
「あっ」
　八条はそれを言われてようやくあることに気付いた。
「そうでしたね」
「ええ、北方が解放されたからね」

義勇軍は難民から構成されている。彼等はエウロパ軍のサハラ侵攻により国を追われた者達なのだ。その殆どは同胞であるサハラ各国に逃れていたが連合に逃れていた者達もいたのである。彼等こそが今の義勇軍の将兵達なのだ。
「彼等の多くも帰るかもね」
「困りましたね」
これは軍のトップとしての言葉であった。腕を組み深刻な顔になっていた。
「彼等に今去られると」
「貴重な戦力がいなくなると」
「はい。それは痛いです」
八条もそれは事実であった。
「彼等がいない分はそのまま正規軍の負担になるし」
「それの問題もありますね」
「それを考えると彼等は必要なのね」
「はい」
彼は答えた。
「どうにかしたいのですが」
「けれどこちらから無理強いは出来ないわよ」
「はい」
今は連合の市民権を持っているがそれはあくまで暫定的なものである。元々彼等はサハラの人間なのだ。ならばサハラに帰るというのが道理である。それもまたわかっていることだ。だから八条は困っているのである。
「まさか全員去るとは思いませんが」
「流石にそれは有り得ないわね」
「既に連合に生活基盤を築いている方もいますし」
「その問題についても今後議論になるわね」
それもまた言ってみせてきた。
「新国家を築くという話も浮かんできているそうですが」

「新国家！？」
「そうです」
八条はまた答えた。
「まだ水面上には上がってきていませんが。そうした話もあります」
「新国家ね」
カバリエはそれを聞いて考える顔になった。
「悪い話じゃないわね」
「そうですね。ではこれは検証する必要がありますか」
「今即断は出来ない話だけれどね」
カバリエは述べた。
「じっくり話し合いましょう、連合に帰ってから」
「わかりました。ではそれも」
「ええ」
話は一通り終わった。何時の間にか内政の問題まで話すようになっていたのが意外ではあったが。それでも実り多い話であった。
「じゃあマウリアの件はね」
「了解です」
八条は本題に応えを返した。
「そういうことでね」
「まあ今回はそれなりに奮発しまして」
「お願いするわ。マウリアは貪欲な国じゃないけれど」
「我々よりはずっとね」
「ふふふ、確かに」
二人はここで顔を見合わせて笑い合った。周りのスタッフもそれは同じであった。連合にとっては痛いところなのである。連合は他の国から見れば極端と言っていい物質文明の社会であるからだ。それに対してマウリアは精神世界を重要視していると言われる。ただし理解不能な世界であると。
「それにしても時々考えるのよ」
「何をでしょうか」

「マウリアが連合に入っていたらどうなっていたかって」
「想像がつきませんね」
またしても周りの者も同じであった。八条も彼等も同じ顔をしていた。
「どういったことになっていたか」
「それを考えると面白いけれど」
「とりあえず今は外の世界の相手としてマウリアに対しましょう」
「じゃあ」
「はい」
二人は頷き合った。話はようやく終わった。
「そういうことで」
「お願いするわね」
彼等の話は終わった。カバリエはコヨルショウキに帰り八条も自身の仕事に戻った。だが二人の話には重要なものが複数含まれていた。それがどうなっていくのかはまだ完全にははっきりしていない。だが。また銀河が動こうとしていることだけは確かであると言えた。

## 第二十部第二章　割譲その一

割譲

ニーベルング星系は連合に割譲されることとなった。その式典がニーベルングにおいて行われることになっていた。そこに連合、エウロパそれぞれの国の首脳達が集まろうとしていた。丁度八条達がニーベルングに入ろうとしているのと入れ違いの形で連合の首脳達がニーベルングに向かっていた。

彼等はそれぞれの国の国軍の軍艦に乗っている。中央軍は中央政府の管轄下でありこうしたことに使用することは出来なかったのだ。だが護衛としては十個艦隊が同行していた。

「この回廊も私達のものになったのね」

日本の艦艇も当然ながらその中にあった。伊藤は日本軍の艦武蔵の中でこう呟いた。武蔵は今ブラウベルグ回廊を通過していたのである。

「はい」

それに彼女の公の秘書官が答える。

「ニーベルングと合わせまして」

「ブラウベルグ回廊」

伊藤はその回廊の名を呟いた。

「エウロパが新天地へ向かう為に通り抜けた場所」

「彼等にとってみれば希望への道だったのでしょうか」

「ただ希望だけがあるわけじゃなかったと思うわ」

「といいますと」

「希望の他には不安がね」

伊藤は知的な光をその目にたたえて言った。

「同じ位あったと思うわ」

「希望と不安ですか」

「そうよ。これは誰もがそうよ」

「誰もが」
「新しい場所に足を踏み入れる時はね。誰でも」
「言われてみれば確かに」
秘書官はその言葉に頷くものがあった。
「そうですね。期待もありますがやはり心配もします」
「そういうことよ」
伊藤はまた言った。これは学者としての学識ではなく人生経験から語っていたのである。
「かっての彼等もね」
「それだけにこの回廊は彼等にとっては忘れられない場所なのでしょうね」
「ある意味オリンポス以上でしょうね」
「オリンポス以上ですか」
その言葉に視線を向けさせた。
「ある意味ではね。全てのはじまりだったのだから」
「それが今我々のものとなるのですか」
「そうね。私達は彼等のはじまりを奪うのよ」
「彼等の目の前で」
「かなり残酷なことと言えば残酷なことね」
言葉では一言だが。歴史では違っていた。
「ですがそう考えているのは我々だけかも知れません」
「復讐ということかしら」
「はい」
秘書官は答えた。またしてもここで連合とエウロパの帝国主義時代、いや大航海時代からのしがらみが姿を現わしてきていたのである。
連合で植民地や欧州列強の直接的な侵略を受けた経験がないのは日本とロシア、モンゴル位である。他は新興国家がそうであるが。ロシアは当の列強の一員であったし、モンゴルも後でソ連に組み込まれている。日本にしろ脅威は感じていた。なお例外中の例外は韓

国でありこの国は日本に併合された過去がある。
　そうした植民地時代のことは今も連合の者にとっては忌まわしい過去なのである。だがそのかっての支配者達に城下の盟を誓わせるというのは気持ちのいいことであった。彼等は比較的上機嫌であったのだ。
「もっともエウロパにしてみればシンガポール条約やエウロパに来た経緯を考えると」
「そちらが屈辱になりますね」
「そうね。それにしてもここを通る日が来るなんて流石に思わなかったわ」
「このブラウベルグ回廊を」
「ええ。けれどこれからもここを使う人間は限られるわね」
「軍人ですか」
　彼等以外はそうはいなかった。
「そうね、それも最前線勤務の」
「この回廊にも中継基地を設けるそうです」
「そうらしいわね」
　これは伊藤も聞いていた。

## 第二十部第二章　割譲その二

「三段の備えをしておくと」
「はい、それを以ってエウロパへの備えとすると」
「まあそれだとまず破られる心配はないわね」
「と思います」
流石にそこまで厳重であると。誰にも破られはしないものであった。如何なる軍事的天才であっても堅固極まる要塞、軍事基地を続けて三つも攻略するのは至難を極める。連合はこうしたことも計算に入れて三重の防衛ラインを敷いていこうとしているのである。あまりにも慎重と言えば慎重であるし徹底していた。八条はエウロパとは将来も対立することを予想しそうした備えを敷こうと決定したのである。
「ただ、ニーベルング要塞は大丈夫かしら」
「といいますと？」
「戦争がはじまった時に大規模な戦闘が行われたわね」
「ええ」
これは誰もが知っていることであった。連合とエウロパの双方がはじまって以来の大規模な戦いであり連合にとってははじめての外での戦闘であった。それが行われた歴史的な戦いなのである。
「その結果ニーベルング要塞はかなり破壊されたそうだけれど」
それは映像でも流された。廃墟そのものになり、降伏し苦々しい顔のエウロパ軍の将兵達が連合軍の兵士達に後方へ送られていく姿は連合、エウロパはおろか全人類に放送されたのである。
「復興しているかしら」
「それはすぐに取り掛かられたそうですよ」
「そうなの」
「はい、ニーベルングはそのまま軍事拠点となりまして」
「使われていたのね」

続いて状況が述べられる。
「まずは港湾施設や倉庫、ドックが復旧され」
「そして防衛も」
「今では戦闘当時より遥かに要塞化が進んでいるとのことです。かっては惑星一個に軍事衛星を十二個設けていたものでしたが」
「今度は星系全体かしら」
話を聞いてからそう問うた。
「そうです。それで連合軍のエウロパ侵攻の拠点となったそうです」
「凄いわね、星系全体を作り変えるなんて」
「それが連合のやり方ですね」
「そうね。知ってはいるつもりだけれど」
それでも凄いと思うのは当然であった。ガンタース要塞群にしろ星系全体を要塞にしてしまっている。連合において要塞とは星系全体を使うものだ。エウロパでは惑星である。この違いが実によく出ていたのであった。
「連合の国力を感じさせるわね」
「結果が今の勝利です」
「ええ」
伊藤は秘書官の言葉に頷いた。
「そして私達が今ここに来る原因にもね」
「エウロパ側はかなり不満らしいですね」
「まあそれは当然ね」
その言葉にはすっと笑ってみせた。
「誰だって自分達が負けた記念式典には出たくはないわ」
「ですね。それは私もです」
「けれどそれを見る方は楽しいわね」
「さて、エウロパ側はどれだけ悔しがっていることでしょうか」
「それを見るのも一興と。そういったところかしら」
「ははは」
二人も楽しげな顔になっていた。やはり歴史的な宿敵に勝利を収

めたことが嬉しいのだ。伊藤だけでなく他の国々の首脳達もおおむね上機嫌であった。だが当然と言えば当然ながらエウロパ側はそれとは見事に正反対であった。不機嫌そのものの様子でニーベルング要塞に向かっていたのであった。

「全く忌々しい」

エウロパでは連合の様な国軍はないがそれぞれの国王や貴族が爵位によって制限を受けながらもそれぞれの軍を持っていたりする。これがエウロパにとって貴重な予備戦力となっており連合との戦いにおいては総動員されてもいる。その中の一つイギリス王家の直属にあるロイヤル＝フォースの旗艦インビシビルにくすんだ茶色の髪にグレーがかかった緑の目を持つ壮年の男がいた。彼は腹立たしげな顔でこう述べていた。

## 第二十部第二章　割譲その三

「全く、この様な式典に参加せねばならんとは。我が英国はじまって以来の屈辱だ」
「尊厳王に敗れた時や百年戦争での敗北よりもですか」
「そんなものは今に比べれば遥かにましだ」
そしてこうも述べた。
「ザリガニにたまには蛙に負けることもある」
この場合ザリガニとはイギリスを、蛙とはフランスを指す。これはナポレオン時代の軍服の色が関係している。イギリス軍は赤でありフランス軍は青だったのだ。そのうえフランス軍は蛙等も食べていたのでこうした渾名がついたのである。どっちもどっちとはまさにこのことであった。
「だが。あのでかいだけの大飯喰らい共に負けたのは」
「屈辱ですか」
「チャーチルの気持ちがわからないでもない」
次にこう言った。
「プリンス＝オブ＝ウェールズとレパルスが轟沈した時はな。彼は泣いたそうだな」
「らしいですな」
これはあまりにも有名な歴史的場面だ。連合では七つの海を私物化してきたロイヤル＝ネービーの終焉の時と派手に書かれている。エウロパでは無念の敗北、敗れ去りはしたがそこで見せたロイヤル＝ネービーの態度は誇りであると。実に正反対の教育が行われている。
「私は泣きたくはないが実に腹立たしい」
「左様で」
「可能ならば連合の首脳達に決闘を申し込みたい程だ」
「まさか」

「私は本気だぞ。全く」
憤懣やるかたないといった様子であった。
「仮にも英国の首相がな。恥を受けるとは」
「まあ恥をかくのも仕事のうちでは」
「わかっている、それはな」
彼はそう言って宥めた軍人達に対して答える。
「しかし、それでも不愉快なものは不愉快だ」
「ええ」
「どうしたものなのか、全く」
彼の名をウィリアム＝スターツという。イギリスの首相である。伯爵家の当主であり家は代々イギリス政府の高官や議員を出している家柄である。首相になって一年、殆ど戦争関連で働きづめである。その仕事は的確だが実に短気な人物として知られている。
彼が激昂したという話はしょっちゅうである。何かあれば怒り、マスコミを騒がせる。あまりにも短気なので瞬間湯沸かし器とも言われているのだ。
その彼が今ニーベルングに向かっていた。相変わらず怒りを露わにしている。
「まあ首相、ここは」
後ろにいる背広の男達が彼に声をかけてきた。同行している首相府のスタッフ達である。
「ここは落ち着かれて」
「落ち着いたらそれでニーベルングが帰って来るのならな」
「まあそう仰らずに」
「ふん、まあいい」
彼は憮然とした顔でとりあえず怒りを抑えることにした。表面的にではあるが。
「とりあえず式典の準備はどうなっているか」
「既にかなり整っているそうです」
「では我々が到着した頃には」

「完全に整っているかと思われます」
「そうか、ならばいいがな」
それを聞いてまずは納得した。
「しかしな」
「はい」
彼はそのうえでスタッフに対して言ってきた。
「連合の者達とのポジションはどうなっている」
「ポジションですか」
「そうだ、確かに我々は敗れたが」
それは認めるしかない。
「だが誇りは失ってはいない。屈辱的な位置は避けなければならないぞ」
「それは向こうで用意している各国の宮内省の者達が細心の注意を払って考えているかと」
「宮内省がか」
「そうです」
イギリスにも宮内省は存在する。言うまでもなく王室の職務から儀式、生活に至るまでの一切を取り仕切る省庁である。日本のそれ程ではないがやはり頭が固いとされている。
「ならば問題はないかな」
スターツですら宮内省は苦手であった。何処となく気が引けているのがわかる。
「彼等が行っているのならな」
「向こうの宮内省も来ているそうですし」
「そういえばいたな」
スターツはそれを聞いて思い出したように言った。
「連合も王が。結構な数だったな」
「王だけでなく皇帝も二人」
「確か向こうもこちらも皇帝や王の参加はなしだったな」
「はい」

スタッフ達はその言葉に頷いた。その通りであったのだ。
「陛下にこの様な屈辱的な式典に顔を出して頂くわけにはいかないしな」
「全くです」
これは他のスタッフ達も軍人達も同意であった。それに頷く。
「泥を被るのは陛下や市民でなくていい。我々で充分だ」
「その為に給料を貰っていると」
「泥を被るのも仕事のうちだ」
スターツはあえてこう言った。
「それもな。これはわかるな」
「はい」
「だが泥を被っていても胸を張らなければならない」
「例え虚勢でも」
「胸を張るのだ。そして敵に弱みを見せない」
誇り故にである。エウロパ貴族としての。
「それが我々の仕事ですな」
「そういうことだ、いいな」
「はい」
スタッフ達は皆頷いた。彼等は軍服を着ておらず、銃さえ普段は持っていない文官達である。だが文官であっても覚悟は必要なのだ。スターツはそれに言及していたのだ。
「ところでだ」
「何でしょうか」
スターツはふとここであることに気付いた。

## 第二十部第二章　割譲その四

「式典の際の序列とその内容だが」
「それですか」
「そうだ。まず序列は就任順だな」
「そうなっております」
「ならいい。そして内容は」
「こちらはハプスブルク家のものに習うことになっております」
そういうことであった。それには理由もあった。
「ハプスブルク家のか」
「やはりあの家のもので行くのが一番よいということになりまして」
「そうだな。あの家以上の家はエウロパには存在しない」
「ですね」
ハプスブルク家は言うまでもなくエウロパきっての名門である。その名を知らぬ者はなくエウロパ王家ではイギリスのウィンザー家よりも上の第一位とされている。階級というものの性質上序列に極めて五月蝿いエウロパにおいて第一とされているのはハプスブルク家であるからである。それ以外の理由は不要と言っても過言ではなかった。ハプスブルク家はそこまでの名門なのである。
「それでよいと思いますが」
「そうだな」
スターツもこれには異論がなかった。
「私もそれでいいと思う」
「わかりました」
「さて、我々はいいとしてだ」
彼の話はそこで終わらなかった。
「連合はどうなるかな」
「連合ですか」
「あの国は王家が多い」

「はい」
国の数が多いから王国も多いのである。割合としては共和制の国家の方が遥かに多いのだがそれでも連合内にある王国の数はエウロパ全土の国数よりも多いのである。ここにも連合という国の規模の大きさがはっきりと出ていた。連合は何処までも巨大であったのだ。
「序列ではかなり揉めそうだが」
「王室の問題ではないようですね」
「！？どういうことだそれは」
スターツにはその言葉の意味が最初よくわからなかった。
「連合にあるのは王室だけではありませんから」
「ああ、そうだったな」
話は戻っていた。連合には帝室と皇室が存在しているのである。どちらも同じ意味であり漢字も入っている銀河語では同じ意味として扱われている。エウロパでは両方共『皇帝』とされている。言うならばローマ皇帝と同じ存在が連合の中には二人いると考えられているのだ。
「日本とエチオピアか」
「はい」
「どちらがより古かったか」
「一応エチオピアらしいですが」
スタッフの一人がいぶかりながら答えた。
「成立がシバの女王の頃ですから」
「紀元前一〇〇〇年頃か」
「確かその頃かと」
「では四〇〇〇年だな」
「そうなります」
ただしエチオピア帝室は一度断絶している。それが復活しているのである。
「日本の皇室は確か」
またいぶかりながらの言葉が繰り返された。

## 第二十部第二章　割譲その五

「最初の天皇という神武帝がいたのが紀元前五〇〇年か六〇〇年のことで」
　これはかなり怪しい説である。神武帝から何代かの帝は実在されていないというのはこの時代でも一般論である。幾ら何でもそれぞれの帝の生きられた年が長過ぎるのである。その為神話であると考えられている。
「三五〇〇年程ですか」
「ローマより前か」
「ローマどころかアテネ、スパルタとペルシアの戦争よりもまだ昔です」
「どうもピンとこないな」
　スターツはその話に首をかしげてしまっていた。
「そこまで長いと」
「殆ど伝説ですがね」
「だが長いのは事実だな」
「はい」
　その言葉に頷いてみせた。
「そして皇帝であるのも」
「それもまた事実です。連合の中でも二人しかいない皇帝です」
「四兆人の中でか」
　二兆人の中に一人だ。あまりにも特別と言える。
「そしてその二つのどちらかが式典を仕切ることになると思いますが」
「今丁度揉めているだろうな」
「揉めているとは？」
「考えてもみろ」
　スターツはスタッフ達に言った。

「それだけの気の遠くなる様な歴史を持つ家が二つ一緒にある」
「はい」
「どちらのものにするか揉めない筈がないだろう」
「言われてみれば」
スタッフ達もそれに気付いた。
「もっとも揉めたからといって我々にどうにかなるわけではないがな」
「ですね」
彼等にとって残念なことにその通りであった。今更連合の中でたかが式典のことで揉めて彼等にどう影響するというわけではないのだ。もうエウロパは敗戦しておりニーベルング要塞の割譲も決定しているからだ。
「それでも面白い話になるかもな」
スターツはそれでもニヤリと笑ってこう言った。
「さて、どうなるか。見せてもらうか」
彼の予想は当たっていた。日本とエチオピアのそれぞれの宮内省のスタッフは式典の内容を巡って対立していた。このことは連合各国の首脳達の耳にも当然ながら入っていた。
「何やら面白いことになってますな」
「ですな」
スー王国の戦艦ワーラワーラに二人の男がいた。スー王国首相ライマン＝スコットとアステカ＝マヤ連合王国首相チェ＝ルシッドである。二人共黒い髪と目のアジア系の顔立ちだが肌の色は黒く、そして彫もいささか深かった。やはりかってのネイティブやインディオの血は薄くなっている。
「日本とエチオピアとは」
「珍しい対戦カードです」
二人は顔を見合わせて言い合った。実は日本とエチオピアは友好関係にありこれといって対立することは今まで滅多になかったのである。だが今回は事情が違っていたのだ。

「まあ別に貿易がどうとかそういう話ではないですが」
「式典のことですからな」
些細と言えば些細である。当事者達以外にとっては。
「しかしまあ連合でも屈指の旧家同士の揉め事というのは」
「面白いというか何というかですな」
「我々が介入しても何にもなりませんし」
「ここは様子を見ませてもらいますか」
「しかし」
ルシッドはここで悪戯っぽい笑みをスコットに見せてきた。
「日本が勝ったならばまさかとは思いますが」
「何か？」
「式典はあの雅楽でやられうのでしょうか」
「ははは、まさか」
スコットはそれは笑って否定した。
「日本の宮内省もクラシックには長じていますよ」
長じているどころか専門分野の一つであると言っていい。儀礼には音楽が欠かせない。その為各国の王室等は専属の管弦楽団を持っているのである。連合においては君主制国家のクラシック雑誌は保守系であることが多い。それは何故か。君主とクラシックが古来より儀礼や君主の楽しみから密接な関わりがあったからだ。これは連合においても受け継がれている。日本においてもクラシック雑誌は実は頑固なまでに保守派なのである。その保守ぶりには同志である筈の通常の保守系雑誌ですら引く程である。クラシックの演奏者にとっては陛下の御前での演奏はこの上ない名誉であるし評論家も殆ど保守系なのである。音楽の志向はともかく政治に関しては連合のクラシック界は保守なのである。
「そうでしたな」
「あれで大きな省庁ですし」
「色々と持っているのでしたな」
「はい、他の国の宮内省と同じで」

それを言う。
「ただ、どうにもあの国の宮内省は我々の国のそれよりも」
「頑固ですな。それも飛び抜けて」
「まあそれで名の知られた場所ですから、あそこは」
「確かに」
ルシッドはスコットの言葉に頷いた。納得するものがあったのだ。
日本の宮内省の頑固さは最早連合では誰も知らない者はいない程であるのだ。

## 第二十部第二章　割譲その六

「エチオピアの宮内省も相当なものですし」
「ええ」
　エチオピアの宮内省もまた頑固で有名なのだ。日本の宮内省があまりにも有名なのでそれ程話題になることはないがエチオピア宮内省もまたかなり頑固なのである。
「どちらが勝つか」
「どちらが勝ってもあまり違いはないようにも思えますがね」
「本人達にとっては違うのでしょう」
　ルシッドは突き放した見方をしてみせた。
「非常に大きな問題と」
「まあ本人達にしかわからない問題もありますから」
「さて、我々としましては」
「高みの見物となりますか」
「おっと、あまり大きな声で言うと」
「ははは、わかっておりますよ」
　ルシッドは今度は大きく笑った。
「どちらかに聞かれるとことですからな」
「そういうことです」
　彼等にとっては他人事でありかなりどうでもいいことであった。しかし当事者達はそうはいかない。ニーベルングにおいて今も激しい議論が行われていたのである。
「ここはそうではないのでは？」
「いえ、これで宜しいのです」
　会議室で黒いスーツを着込んだ者達が話し込んでいた。男も女もいる。人種こそ様々であるがその顔はどれもやたらと厳しく難しそうな顔つきである。彼等は二つに別れて言い争っていた。
「それではまずいでしょう」

「いえ、こうしなくては駄目なのです」
机の上には一枚の室内図が置かれていた。双方そこを指差しながらあれこれと話をしているのである。
「そうでなくては成り立ちません」
日本側の代表が言った。
「ここはそうなのです」
「いえ、それをすると後が大変です」
だがエチオピア側はそれを否定した。
「スムーズに流れるようにですな」
「後もこれで充分流れます」
日本側は反論した。
「何の問題もなく」
「いえ、そうはいきません」
話は平行線を辿っている。日本側もエチオピア側も譲りはしない。双方意地があるのかお互いのやり方をどうしても認めようとしないのである。
「時間的にもまずいことになります」
「我々は今までこうやってきましたが」
日本側は遂にこう言ってきた。
「それで支障が出たことは一度もありません」
「一度も」
「そうです、一度も」
日本側はこれでカタがつくかと思った。だがそうは上手くいかなかった。敵もさるものである。ましてや一度断絶しているとはいえ何千年もの歴史を持つエチオピア帝室を護るエチオピア宮内省である。そう簡単には引き下がることはなかった。
「成程」
エチオピア側の代表はまずは間を置いた。腕を組み目を閉じる。
「一度もですか」
「この件に携わってもう四〇〇年ですが一度も」

「ふむ」
「ですから問題ありません」
「我々は五〇〇年ですが」
「むっ」
エチオピア側は反撃に出て来た。
「これで支障が出たことは一度もありません、こちらもね」
「ほう、五〇〇年ですか」
「はい」
エチオピア側の代表は心の中でニヤリと笑っていた。こうした話は歴史と伝統が大きくものを言う。日本側もそれをわかっているからあえて出してきたのだ。だがエチオピアも長い歴史を持っている。そう簡単には話は纏まらない。
「その間つつがなく行われてきております」
彼は述べた。
「そして流麗に」
「流麗にですか」
「ええ、みすぼらしくはならずにね」
日本の式典はその国力や伝統に比して極めて質素だと言われている。皇居にしろ実に質素なものでありこれが連合屈指の大国の国家元首の住まいなのかと驚く者も多いのだ。これもまた伝統であり日本の皇室は質素な生活を送られているのである。明治帝、昭和帝の頃からとされているが実はそれ以前からだ。下手な華美や贅沢はかえって下品に見える。それも踏まえて今も質素な生活や式典なのである。

## 第二十部第二章　割譲その七

これはエチオピアもおおむね同じである。やはり本当に格式のある家というのは華美にならない。だが日本と比してその質素のあり方が違うのである。エチオピアは色彩豊かであると言っていい。日本はどちらかというと大人しいのである。そうした違いがあった。

「みすぼらしいですか」

「白ばかり使うのもどうかと思いますが」

「白こそ全ての基礎です」

日本側は言う。

「変に多くの色を使うこともありますまい」

「色は重要なものですが」

エチオピア側も負けてはいない。その言葉に密かに剣を隠しながら言う。

「美しい色が多くある程よいのです」

「それが違うのですよ」

日本側は表面上は穏やかに、だが内面では全く違うものを含ませながら反論した。

「色はそれ程多くは必要としないのですよ」

「どういった理由で」

「大切なのはその鮮やかさと配色なのですよ」

それが日本の式典の色への考えであった。

「違いますかな」

「確かにそれは不可欠ですが」

エチオピア側もそれは認めてみせた。だが日本側の主張を認めるわけではない。

「多くないとやはり華やかにはならない」

「別に華やかにする必要はないでしょう」

日本側はまたしても反論する。

「気品があれば」
そうしたやり取りが会議室で行われていた。各国の宮内省や外務省のスタッフはそこに近寄ろうともしない。触らぬ神に何とやらであった。そのせいか式典の準備はあまり進んではいなかった。予定通りには何とかいっているがそれでも間に合うかどうかというレベルで不安を抱きはじめる状況になりつつあったのだ。
「やっぱりそうなりましたか」
「はい」
伊藤はエチオピアの艦ハルシャに来ていた。そしてそこでエチオピアの首相ナタル＝アジスと会談していた。青い目に黒い髪を持つやや彫のある顔立ちの黒人の美女であった。背は高く小柄な伊藤と並んで立つと頭一つ出る程である。これは伊藤が小さいせいもあるが。
「困ったことです」
「ですね」
二人の耳にも双方の宮内省の対立が耳に入っていたのである。入らない筈がない。その為今こうして対策を話し合っているのである。
「どうしますか？」
アジスは伊藤に問うてきた。
「このままですとそれぞれの室にも影響が及びかねませんが」
「首相」
伊藤はアジスに声をかけてきた。
「はい」
「まずは座りませんか？」
「えっ！？」
アジスはその言葉に目をしばたたかせた。実は今まで二人は立っていたのである。
「さもないと私が首を痛めてしまいます」
伊藤は悪戯っぽく笑ってこう述べた。
「何分背が低いので」

「おっと、これは失礼」
アジスもその言葉には思わず笑ってしまった。
「左様ですね。それでは」
「はい」
二人はあらためて座った。そしてそのうえで話を再開したのである。
「それでですね」
アジスが言葉を切り出す。
「こちらがあくまで引かないようでして」
「我が国の方も」
伊藤はその言葉にこう返した。つまりどちらも引かないのだ。
「困ったことに」
「どうすべきでしょうか」
アジスは困った顔で述べた。
「折衷案ではどうかと思うのですが」
「ある部分ではエチオピア、ある部分では我が国のやり方で」
「それでどうでしょうか。丸く収まると思うのですが」
「いえ、それは止められた方がいいです」
伊藤はそれには反対の意見を述べた。
「左様ですか」
「はい、式典全体としてはツギハギになります」
「それはやはり」
「ですね」
非常にまずいことになる。それでは式典自体が不恰好なものとなる。そうなればエウロパにも侮られることになってしまう。それだけは避けなければならなかった。
「ではどうすれば」
「首相」
伊藤はアジスに顔を向けてきた。
「はい」

「一つ私に考えがあるのですが」
「それはどの様なものでしょうか」
「宮内省が最も五月蝿いことです」
「宮内省が最も五月蝿いこと」
アジスはその言葉を聞きまずは眉を顰めさせた。
「宮内省が五月蝿いことなぞどれだけあるか」
「まあそれはそうですが」
伊藤もこの言葉には苦笑せざるを得なかった。実際に日本の宮内省もエチオピアの宮内省も口煩いことでは定評があるのである。これに関してはとりわけ日本の宮内省が批判の対象になっている。閉鎖的である、時代遅れであるとのことだ。だがこうした問題は常に歴史も踏まえた深刻なまでに難しい議論になる。

## 第二十部第二章　割譲その八

保守系に属する知識人が宮内省を手ぬるいと言うのだ。彼等にとってみれば皇室にしろ帝室にしろ閉じられるべきでありリベラルな風潮に従って安易に表に出るということは我慢できないことなのである。その結果彼等は頑強なまでに閉じられた皇室、帝室を主張する。これはどちらが正しいとは言えない問題であり厄介なのである。実際に日本やエチオピアでは千年この議論が続いているが結論は出ていない。出るものでもない。

「そのうえで申し上げます」

「さて何のことか」

アジスにもわかりかねた。エチオピア宮内省も石頭では連合屈指の存在であるからだ。日本宮内省に匹敵する石頭はここだけだとさえ言われている。

「時間です」

「時間！？」

「そうです、宮内省は時間に五月蝿いですね」

「時間といいますと」

やはりまだわかりかねた。

「まだ鉄道職員の方が五月蝿いですが」

「いえ、そちらではなく」

伊藤は答えた。

「即位された時間です、それぞれの陛下の」

「ああ、そういうことですか」

それを言われてようやくわかった。

「我が国の陛下と貴国の陛下の即位された時間ですね」

「序列は常にそれによって決められていますし」

「そうでしたね、うっかりと忘れていました」

連合の国家元首の序列は皇帝が最高となっている。もっとも連合

三百国の中で皇帝は二人しかいないからどちらかが先といった程度だが。
この序列は即位順である。それによってどちらが先になるか決まるのである。伊藤はそれに習おうと提案しているのである。これは中々的を得た提案であった。
「成程、それでしたら宮内省も従いますね」
「はい、彼等が何よりも大事にしているものですから」
「それではそれに倣いますと」
「貴国の方になりますね」
「そうですね。ではそれで宜しいですか？」
「はい」
伊藤はにこやかに笑って答えた。
「それでお願いします」
「わかりました。ではそれで行きましょう」
「それではそういうことで」
「ええ」
話は決まった。式典はエチオピア式でいくことに決まった。日本の宮内省も序列を出されては従う他なかった。こうして全ては決まったのであった。
「日本が退いたようですな」
それは旧太平洋各国の高官達の耳にすぐに入った。彼等はそれぞれの国家元首達に伝えると共にニーベルングのある部屋で自分達も話し合いの場を設けていたのである。
「ただ退いただけではないでしょうがな」
ベトナムの高官が述べた。
「ではやはり何かしらの見返りが」
「おそらくは」
そのベトナムの高官はタイの高官の言葉に応えた。
「それが政治というものですから」
「日本とエチオピアの間でですか」

「多分儀礼的なものに関してでしょうな」
王国であるマレーシアの高官が言った。
「儀礼ですか」
「ええ、日本もエチオピアも皇帝を戴いているわけですから。彼等のみの事情でしょうな」
「だとすれば我々には直接関係がないと」
アメリカの高官がそう口にした。
「そういうことになりますかな」
「直接どころか全く関係ないかも知れませんな」
中国の高官がそれに応えた。
「我々は共和制か王制の国ばかりですから」
「王と皇帝は違いますからな」
マレーシアと同じく王制のブルネイの高官も言った。なおマレーシアはそれぞれの州のスルタンが持ち回りで王位に就く連合王国であるがブルネイの王家は一つである。
「我々には関わりがなくとも彼等に関わりがあることもあるのでしょう」
「ふむ」
「別次元の話ということですな」
「そういうことでしょうな」
ブルネイの高官はまた言った。
「それがどういったものかまではわかりませんが」
「知っただけで命が危ないこともあるでしょうし」
オーストラリアの高官は冗談交じりに言ったがそれはあながち冗談ではなかった。
「陰陽師やそんな存在ですな」
メキシコの高官が真顔で言った。
「うっ」
「そしてソロモン王とシバの女王の間の秘密等も」
「エチオピア帝室は一度断絶していたのでは？」

インドネシアの高官がメキシコの高官に問う。
「二十世紀に」
「おっと、そうでしたか」
「ですが本当にありそうですな」
フィリピンの高官がここでこう言った。
「あの二つの家は。ただでさえ謎が多いですし」
「下手をすればバチカン以上に」
「バチカンもまあ奥を見ては生きて帰れないでしょうな」
「ははは、確かに」
そこにいた全ての者が口では笑っていたが目は笑ってはいなかった。バチカンの恐ろしさはもう言うまでもないからである。バチカンの闇は恐ろしいまでに深い。少し入っただけで人の一人は何気なく天に召される世界なのである。多少の差こそあれ日本とエチオピアにもそれはあるのである。

## 第二十部第二章　割譲その九

「では今回は不介入を貫いたのが正解でしたな」
「全くです」
ニュージーランドの高官がシンガポールの高官に応えた。
「同じ旧太平洋諸国であってもそれぞれの主権は大切にする」
ロシアの高官が言っても相当に白々しい言葉であるが。ロシアだけでなくアメリカも中国も他国の主権なぞお構いなしなのである。これで大いに敵を作っている。
「そういえばトルコも動きませんでしたし」
「そうでしたな」
連合内ではトルコもまた大国なのである。かってのオスマン＝トルコの栄光は銀河の時代で復活したのである。
「あのイスラエルでさえも静観していました」
「それだけ厄介な話だったということですな」
「皇帝と話せるのは皇帝だけ」
「我々には縁のない話だと」
「結局はそういうことですな」
「まあ日本が何かするか見ておくのはいいことですが」
韓国の高官が言った。この国は日本しか見ていないと言われることが実に多かったりする。
「何もなくて何よりです」
「そういえば」
ここでこの韓国の高官はペルーの高官に声をかけられた。
「何か」
「貴方の服は日本の服ではないのですか」
実はこの韓国の高官が今着ているスーツは日本のブランドものである。韓国ではとかく日本ブランドのものが人気があり、飛ぶように売れるのである。これで日本の美形タレントが服を着てＣＭに出

れば一発である。それだけで大人気となるのが必定なのである。
「それが何か」
韓国の高官は開き直ることにした。
「いえ、何もありませんが」
「別にね」
他の国の者達も同じ態度であった。何か言葉がニヤニヤと笑っているがそれを感じながらも開き直り続けていた。
「仕方なくですよ」
そしてこうも言った。
「知人に貰いましてね。他に着るものもなかったので」
「長旅ですからスーツも何着か持ってきておられるのでは？」
「今その持ってきたものの全部をクリーニング中でして」
実に苦しい言い訳である。
「これしかなかったのですよ、本当に仕方なく」
「そう仰るわりには以前も着ておられましたな」
ブラジルの高官が意地悪い笑みを浮かべながら声をかけてきた。
旧太平洋諸国にはブラジル等中南米諸国の主要国も来ているのだ。
これはかっての環太平洋共同体に加盟していた関係である。かって太平洋にあった中南米諸国の他にブラジルやアルゼンチン等が入っている。
「何か何度も見ている気もしますが」
「確かに」
チリの高官がそれに頷く。
「まあそれも偶然なのでしょうな」
「そうですよ、全部偶然です」
ここまで来たらそう言い切るしかなかった。
「ですから気になさらずに」
「わかりました」
「では」
実は韓国が何かにつけ日本を見ていることは連合では誰でも知っ

ていることなのである。連合の中で最も奇妙な二国関係とも言われている。韓国が一方的に日本を意識しているだけではあるが。そもそも日本を見ていない韓国なぞ想像も出来ないとさえ言われている。
「とにかく今回はあまり我々も話に入る必要がないですな」
「はい」
「あくまで外野ということで」
結局そうなるのだ。皇帝を持たない者達の悲しさとまでは言わないが実際に何も言う機会がないものであった。
「それにしてもどうも」
アルゼンチンの高官がここでふと漏らした。
「何か？」
「いえ、今まではこの会合は日本の味方になったり敵になったりしましたが」
「ええ」
実はこうした太平洋諸国が集まる顔触れは様々なパターンがある。当然日本もこの中にいるので参加する場合が殆どである。だが当事国を抜きにして他の国々だけで集まることも多いのである。今回の会合はそうしたものであった。
「どうも最近は。違ってきていますな」
「確かに」
シンガポールの高官がそれに頷いた。
「どうもどうしていいかわからない場合が増えてきたような」
「少なくとも敵になる機会は減りましたな」
「そうですね」
ラオスの高官の言葉にカンボジアの高官が頷いた。
「妙なことに」
「ただ単に妙なことであればいいですが」
メキシコの高官がここで言った。
「何か意味ありげな言葉ですな」
「いえね、どうも」

彼はそれを受けて話しはじめた。
「敵にさせないのはあちらの意図かも知れません」
「日本の」
「はい、伊藤首相の」
「まさか」
「いえ、有り得るかと」
メキシコの高官はあえて述べた。
「伊藤首相ですぞ」
「九尾の狐が」
「狐は頭のいい動物」
カナダの高官が言うと続いてそもそもの九尾の狐の故郷である中国の高官が口を開いた。

## 第二十部第二章　割譲その十

「しかも九本の尻尾を持つと」
「これ以上はない程頭の回転がよくなるというわけですな」
アメリカの高官がそれを受けて述べた。
「そういうことです」
「それに狐の後ろには」
「ええ、狸もいますな」
「全く。食えない国であります」
「狸にしろ組み易しと思ったのですがね」
彼等は言う。
「揚げを用意しても引っ掛かりはしない」
「むしろ揚げだけを取って食べてしまう」
日本の狐だけであるが狐は揚げが好きだとされている。実際に食べたりもするらしい。とりあえず日本では狐と言えば揚げなのである。
「厄介な相手ですな」
「敵に回った時は特に」
「しかし今回は特に敵になることでもなかったので」
「よしとしますか」
「こちらが味方になるべき話でもありませんでしたしな」
「はい」
これで話は終わり彼等はその場を後にした。そして式典の日となった。式自体は速やかに終わり何も残らなかった。だが連合の首脳達とエウロパの首脳達の間ではえも言われぬ溝がありそれは双方感じていた。
「フン、敗者共が」
連合の首脳の一人が心の中で呟いた。これは連合の首脳達の殆どの偽らざる心境であった。

「何時までも勝ち誇っていられると思うなよ」
そしてこれがエウロパ側の考えであった。彼等は互いを睨み合いながら式典に参加していたのだ。
エウロパの旗が下ろされ連合の旗が高々と掲げられる。そして所有国の旗も同時に。続いてその周りに連合の他の国々の旗が掲げられる。あからさまな誇示であった。最早ニーベルングは連合のものであるということの。
連合の首脳の中には当然ながら伊藤もいる。彼女は自国の旗が掲げられるのを黙って見ていた。
それは日章旗であった。赤と白の旗が高々と掲げられる。彼女はそれを見てやはり何処か満足したものを感じていた。これを否定することは自分でもしなかった。
エウロパ側の旗は掲げられない。寂しいものであった。連合の旗だけが翻り式典を彩っていた。全て連合の為の式典となっていたのであった。
「下らん」
それを見ながら顔を顰める男がいた。スターツである。
「単なる連合の勝利の誇示ではないか。まあわかっていたことだが」
「あの、首相」
そこにイギリスのスタッフがやって来て彼に声をかけてきた。
「聞こえますよ」
「聞こえたならそれはそれでいいがな」
「そんなことは仰らずに」
「わかっているつもりだ」
一応はそう返す。
「しかしだな」
「御気持ちはわかります」
そのスタッフは一応はそう返した。

## 第二十部第二章　割譲その十一

「ですが今は」
「イギリスの首相としてな」
「はい、公で」
そう応える。
「嫌なものだ、公人は屈辱にも耐えなければならん」
「それも仕事ですから」
「これは誰が言ったわけでもないがな」
「はい」
ここでスタッフに囁く。
「あそこで偉そうな顔をしている連中の何人かに決闘を挑みたいと。思う者もいるだろうな」
「はあ」
「あくまで誰が言ったわけでもないぞ。妄想の言葉かも知れない」
「左様ですか」
「そういうことだ。いいな」
念を押すような言葉になっていた。
「わかりました。それではそういうことで」
「そういうことだ。ところで要塞の名前だが」
「はい」
「変わるのだろう？やはり」
「ええ、おそらくは」
そのスタッフは答えた。
「名前もここで発表されるようですが」
「聞きたくはないものだな」
スターツはそれを聞いて顔を顰めさせた。
「どんな名前でも」
「ブラウベルグ回廊の名も変わるようです」

「我々の運命の場所もか」
「残念なことに」
「残念だが変わることを止められはしない」
忌々しいがそれははっきりと認識していた。
「何があってもな」
「どの様な名前になるでしょう」
「まだわからん。だが一つだけ確実に言えることがある」
「それは」
「我々にとっては不愉快な名前になるということだ」
スターツはまたしても忌々しげにそう述べた。
「ブラウベルグでもニーベルングでもなくなるのだからな」
「確かに」
「さて」
彼は前を見据えて身構えた。
「それもそろそろかな」
「そのようですね」
式典は順調に進んでいた。司会であるエチオピア宮内省の者達がいよいよニーベルング要塞及びブラウベルグ回廊の命名変更に移っていた。
「次は」
「いよいよね」
「いよいよか」
伊藤とスターツがそれぞれの場でそれぞれ呟いた。
「それではニーベルング星系の新たな名称は」
「さて」
「何だ」
二人だけではなくそこにいる全ての者が注目している。その名は。
「アタチュルクとします」
「ほう」
「彼か」

「フン」
その名を聞いて連合の首脳達は笑いエウロパ、とりわけギリシアの者達は顔を顰めさせた。第一次世界大戦後のトルコの独裁者でありトルコを立て直した英雄ケマル＝アタチュルクのことである。彼から名前をとったのである。なお独裁者ではあるが彼は絶大な支持を国民から得ていた。この時代においても彼はトルコの英雄であり国父であると讃えられている。ある者は歴史上で最も成功した独裁者とまで呼んでいる。
「そして回廊の名は」
「遂に国父の名も消えるか」
「これも運命か」
エウロパの者達は嘆くがそれが運命であった。最早それを止めることができなかった。
「マラッカとします」
「これはまた」
「何と」
エウロパの者達は顔を顰めさせた。これまた露骨なあてつけであった。

## 第二十部第二章　割譲その十二

エウロパにとって屈辱的なシンガポール条約。そのシンガポールの前にあるのがマラッカ海峡なのである。エウロパの国父の名を消してあらたにそこの名を冠したのである。これが意図的でないとしたら何なのであろうか。
「かつて我々はシンガポールも領有していたが」
「はい」
スターツの言葉にイギリスのスタッフが応えた。
「まさか今になって屈辱を味合わされるとはな」
「全くです」
「だが名前が変わったことは事実だ」
「はい」
「最早ブラウベルグの名は消えた」
スターツはあらためて言った。
「あの回廊もな」
「ですね」
「以上で星系及び回廊の名称の変更をお伝えしました」
「これでまずは終わりね」
伊藤は日本のスタッフに対して言っていた。
「まずはね」
「これからもあるということでしょうか」
「ええ、時間が止まることはないから」
そう言ったうえでまた述べた。
「またあるわよ」
「連合とエウロパの間で」
「それが変わることはないでしょうね」
「そうなのですか」
「連合かエウロパどちらかがなくならない限りね」

それまで両者の対立が終わることはない、伊藤ははっきりと述べたのである。
「また衝突があるのでしょうね」
「戦争に勝ってそれで終わりとはいきませんか」
「映画ならそれでハッピーエンドでしょうけれど」
「これは映画ではないと」
「映画になるかも知れないけれどね」
笑って言った。
「その時は私の役は美人だったらいいけれど」
「神崎亜矢でどうでしょうか」
「亜矢ちゃんが！？」
伊藤は彼女の名を聞いて悪戯っぽく笑った。
「彼女がやるには背が低く過ぎるのじゃないかしら」
「別にいいのでは？ナポレオンも背が高かったりしますから」
「そう言われればそうかしら」
ナポレオンは小男として有名であった。軍服を着てもブカブカであり『長靴を履いた猫』と揶揄されることもあった。だが映画では長身で筋肉質の美男子が演じる場合もある。あのタレーランやフーシェにしろ美男子が演じて悩める主人公になったりするのだ。実際には容姿はそれといって美男子でもなく人間としては上司にも友人にも部下にも欲しくはない人物だとしてもだ。演出や脚本によってこれは大きく変わるのである。
「ですから総理も」
「私は子供の頃からクラスで一番前だったのだけれどね」
これも本当のことである。伊藤は子供の頃から小柄であったのだ。
「それが映画の中とはいえ大きくなれるのはいいことかしら」
「まあそうかも知れないですね」
スタッフの一人がそれに応えた。
「大きくなれるのがいいのなら」
「言われてみれば別に大きくなりたいと思ったことはないわ」

「そうなのですか」
「小さいからって男の子が寄って来ないわけじゃなかったし」
「ははは、確かに」
明るい顔で笑って言う伊藤に彼等は頷いた。小柄な女の子が好きな男も多いのである。とりわけこれは背の高い男がそうである。ちなみに伊藤の夫も背が高い。
「あっ、一つ困ったことがあったわ」
「それは」
「首が疲れることね。それだけね」
「左様ですか」
「ああ」
「あれっ」
ここでスタッフの一人がふと言った。
「そういえば」
「どうしたのかしら」
「神崎亜矢ちゃんも首がよく疲れるって」
「そうなのか」
「待てよ、そういえば」
ここでふと気付いた者がいた。
「どうした？」
「いや、亜矢ちゃんだけどな」
「ああ」
皆彼に顔を向ける。伊藤もである。
「背、そんなに高くなかったんじゃ」
「どれ位だ？」
「あそこの事務所の女の子って余り背が高いのいないだろ」
「そういえばそうね」
伊藤もそれに頷いた。
「社長がそういう女の子ばかり集めているそうだけれど」
「それでですよ」

その気付いた彼が言った。
「亜矢ちゃんも一六〇なかったような」
「何だ、あまり高くないんだな」
「というか明らかに小さいだろ」
「連合の平均身長って女の子で一七八位だっただろ？」
「男で一九〇位だったか」
「それ位だったよな」
かなり高いと言っていい。だからエウロパ側には図体ばかりでかい大喰らい共と言われていた。実際に背が高く食事の量がエウロパの者と比べると半端ではなく多いのであるが。

## 第二十部第二章　割譲その十三

「じゃあ小柄だよなあ」
「ああ」
「けれど私よりずっと大きいわね」
「まあそれは」
伊藤は一五〇あるかないかだ。長身の八条等と比べられるとまさに大人と子供なのである。
「やっぱり映画になると私は大きくなるみたいね」
「ですね」
「嬉しいということにしておこうかしら」
伊藤達はそんな話をしていた。少なくとも連合はリラックスした状況であった。だがエウロパ側は違っていた。極めて重々しい空気に包まれたままであった。
「もうすぐ終わるのだな」
「はい、もうすぐです」
イギリスだけでなくフランスやドイツ、他の国々の首脳達もまた不機嫌な顔をしていた。
「全く、これ程まで時間が長いと思ったことはない」
「何時終わるのだ」
彼等にとっては不愉快極まる時間である。だから時間が長くかかると思っていたのだ。
「早く終わってしまえ」
「奴等の顔なぞ見たくもないわ」
向かい側に座っている連合の首脳達を見て言った。
「どの者も天国にいるような顔をしているな」
「それ程嬉しいのか」
「敵愾心は消えぬか」
スターツはそんな彼等の様子を見てこう呟いた。

「まあ当然か。私もそうだしな」
「また戦争でしょうか」
「少なくとも対立は続く」
問うてきたスタッフの一人に言葉を返した。
「これからもな」
「戦争は」
「それは当分はない」
これは否定した。
「その当分が何年になるかはわからないがな」
「左様ですか」
「そのまま睨み合いばかりでまた千年かも知れないしな」
「千年」
「これまでの千年でエウロパも連合も変わったと思うが」
「確かに大きくは変わりました」
これは否定出来なかった。連合にしろエウロパにしろ千年という時間は長かった。国家システムにしろかなりの変遷があり、国の名はそのままでもその性格が完全に変わった国もあった。また新しい国家も多く生まれたし文化も文明も変わってしまっている。やはり千年という時間は長いものであったのだ。
だがそれでも連合とエウロパの対立は続いていたのだ。それぞれの文明も文化も変わったがそれでも衝突する関係そのものに変わりはなかったのである。
「ですが」
「そうだな、対立する構図そのものは変わってはいない」
「それが変わらない限りはですか」
「変わるとは思えないがな」
これがスターツの意見であった。
「そう簡単にはな」
「我々はそういう関係ですか」
「そうだ、それに我々は纏まる必要がある」

「纏まる必要とは？」
この言葉の意味は少しわかりにくかったのかも知れない。スタッフ達は驚いたような顔を見せた。
「わかりにくいか。つまりエウロパとして一つにならなければならないということだ」
「そういう意味でしたか」
「そう言えばわかるな」
「はい」
その言葉に頷く。
「それでしたら」
「では。纏まる為には何が必要か」
「最も手っ取り早いのが敵でしょう」
「特に我々にとっては」
「連合だ」
スターツは一言で述べた。
「連合こそその為の敵だ」
「象徴として、同時に現実にある敵ですね」
「そうだ。彼等は現実にいる敵でもある。だからこそだ」
彼は言う。
「彼等との対立は続く」
「あまりにも強大な相手ですが」
「敵は強い方がいいのだ」
そしてまた言った。
「実際に戦わない限りではあるが」
「纏める為には」
「ですが実際に戦えば」
「惨めな話だな」
今度は顔を思い切り苦くさせた。
「栄光のエウロパがこのようなことになるとは」
「大変なのはこれからでしょう」

それはイギリス政府のスタッフ達にも嫌になる程よくわかっていた。
「戦争による荒廃こそそれ程ではありませんでしたし人口も減ってはいませんが」
このことに関しては連合に感謝しなくてはならなかった。連合軍は攻撃対象は軍事関連のみに絞り民間人の居住区や産業には一切手をつけなかったのである。これは民間人を戦争に巻き込むことを嫌う彼等、とりわけ八条の考えが大きく影響していたのである。

## 第二十部第二章　割譲その十四

「しかしそれでも」
「総督府から逃れてきた者達もいるしな」
「はい、深刻な問題が山積みです」
「それのいずれもがエウロパそのものを崩壊させない程に」
「厄介な話だ、どれも」
　スターツは周りに気付かれないように配慮して小さく溜息をついた。
「このまま崩壊させてはならないが」
「それを何とかする為には」
「我等の道はあまりに困難ですな」
「英雄が必要か」
　スターツはここでポツリと述べた。
「英雄！？」
「そうだ、英雄だ」
　そしてスタッフ達に言った。
「英雄だ。かってのブラウベルグの様な」
「その英雄がエウロパを救ってくれるのですか」
「それだけの英雄がいればだが」
　彼はこの時ペーチの前に現われた一人の男のことを知らなかった。彼だけでなく今はエウロパにいる殆どの者がそれを知りはしなかったのであるが。
　病気というものは不思議なものであり誰かが気付く時にはそれこそどんな時でも気付かれる。例えどれだけ周到に隠したとしても。しかし逆に見つからない、気付かれない時はあまり隠すのが得意そうではない人物でも隠し通せるのである。これもまた運命なのであろうか。見つかるべきではない人間のそれが見つからない場合が時としてあるのである。そうではない者が手遅れになってから見つか

ってしまうこともあるのだが。これもまた天命と言うのはあまりにも惨く心ない言葉になってしまう。例えばであるが幼い子を残して逝かなければならない親はどういった気持ちか。これは察するにあまりあるものがあるのではないだろうか。それがわからないならば人としてやはりおかしいのだ。

「果たして。出るかどうか」

「出なければエウロパは救われないですか」

「そこまでは思わないが困難なのは確かだな」

こうも述べた。

「今のエウロパはな」

「英雄を必要とする時ですか」

「望むものは現われると言いますが」

「果たして今のエウロパに」

「そうした英傑が出るかどうか」

それは誰にもわからない。神ならざる人間には。だが彼等はそれでもやらなければならないことが山のようにあった。それに対してどうするべきか。とにかく今は諦めることだけはしてはならなかった。それだけはわかっていた。だがそれだけでどうにかなるということでもないのだ。しかしそれに気付いている者がエウロパにいるかというと話は別だった。最早それは僅かしかおらず彼等だけでどうこうできるものでもなくなってしまっていたのだ。全てがエウロパにとって大きく悪しき方向に進もうとしていた。そしてそれを止められる者はいなかった。精々その流れを緩やかにするだけなのであった。

式典が終わり連合とエウロパの各国の首脳達はそれぞれ挨拶をすることもなく別れた。それがこれからの関係を暗示していると言えなくもなかった。

## 第二十部第二章　割譲その十五

だがそれに関して何かを言う者もいなかった。連合で第一の大国アメリカの大統領マックリーフは自国の艦艇であるアイオワに入ると早速同行しているターフェルに声をかけてきた。彼は次席補佐官であり大統領の秘書の様な存在である。この時代のアメリカでは首席補佐官が首相の様な存在となっている。かって首相といったものは存在しなかったアメリカにおいてはかなりの違いとなっていた。

マックリーフはその秘書的存在であるターフェルに対してまずはこう言った。

「面白い式典だったな」

その端整な褐色の顔に不敵な笑みを浮かべて。こう言ったのである。

「彼等の苦虫を何百匹も噛み潰し飲み込んだような顔は。見ていて実によかった」

「遂に千年の恨みを晴らしましたしね」

ターフェルは席に座るマックリーフの横に立っていた。そしてこう述べたのであった。

「千年、実に長い話でした」

「いや、それよりも昔からか」

マックリーフはふとこう変えた。

「昔といいますと」

「植民地時代からだ。思えば我が国も彼等の下にあったのだな」

「ですね」

アメリカのはじまりはイギリスの植民地である。これはどの歴史書にも教科書にもはっきりと書かれている。

「その屈辱は晴らしたと思っていたが」

「どうやらそうではなかったようですね」

「まだ我々の恨みは残っていたか。シンガポール条約を越えても」

「それまでの恨みはシンガポールで晴らし、それからの千年の恨みを今晴らしたということでは？」
「それとこれとは別の恨みだということか」
「はい」
ターフェルは述べた。
「そう考えるべきかと思いますが」
「言われてみればそうか」
マックリーフもそれに頷くところがあった。
「それを考えると我々と彼等は対立する宿命にあるのだな」
「全ては月からでしたな」
「そうだな。そういえばこの戦争の激戦地の一つはアルテミス星系だった」
「ええ」
これはターフェルにとっては意外な言葉であった。少し戸惑いを見せる。
「ですね、言われてみれば」
「月の神の悪戯か」
「彼等にとってはアルテミスの」
「アルテミスの悪戯により我等が戦うようになったのだとすると」
マックリーフはそう言いながら笑っていた。おかしそうに。
「あの月の処女神は我等の味方なのかな」
「さて、それはどうでしょう」
だがターフェルはそれには懐疑的な言葉を述べた。
「違うのか」
「ギリシアの神々は気紛れです」
「ふむ」
これは神話においてそうであった。ギリシアの神々は極めて人間的な性格をしており実に気紛れなのだ。しかもかなり感情的でもある。付き合いにくい性格と言えばそうなる。
「普段は彼等の味方をしていても」

「何かの心変わりでそんなことをするのか」
「そういうものではないでしょうか」
「あまりいて欲しくはないな、連合には」
「それでも彼等はエウロパでは人気がありますよ」
ターフェルはフォローするように述べた。
「彼等にとっては精神的なバックボーンですから」
「そういうことなのか」
「まあ何かと月が重要な位置にあるのは事実ですね」
「確かにな」
これにはまず頷いた。
「我々にとっても彼等にとっても」
「幸か不幸かはともかくとして」
「月は我々にとって縁起がいいものなのかも知れないな」
「少なくとも恵みはもたらしてくれましたね」
「そうだな」
なお連合では月もまた崇拝の対象である。日本の月読等がそれである。ただし月の神で男性神というのは極めて少なく女性神が殆どであるが。
「だがエウロパでも崇拝されているな」
「はい」
「イスラムでも」
マックリーフはイスラム教徒ではない。信仰するのはケルトである。

## 第二十部第二章　割譲その十六

イスラムでは月は優しい夜の象徴である。厳しい昼の太陽よりも愛されている存在である。
「悪い存在ではないということか」
「タロットではぼんやりとしたイメージですが」
「逆にすると意味は変わるがな」
「ええ、確かに」
タロットは大抵逆にすれば意味が全く違ったものになる。ただし十六番目のカードである塔だけは別である。このカードは逆でも破滅的な最悪の意味を表わすのである。
「月もまた我等を守護してくれている」
「有り難いことです」
「その守護は有り難く使わせてもらおう」
「これでニーベルングもブラウベルグも手に入りましたし」
「待て」
ここでマックリーフはターフェルに顔を向けて笑った。
「何か」
「最早ニーベルングもブラウベルグもない」
「あっ」
言われてはっと気付いた。
「そうでした、申し訳ありません」
「今あるのはアタチュルク星系とマラッカ回廊だ」
「我等の」
「そうだ、この二つが我等のものになった意味は大きい」
マックリーフの笑みが変わった。普段は知的な笑みを浮かべる彼であるが今回のそれは不敵なものであった。
「エウロパに対して圧倒的な優位に立つことになる」
「ですね」

エウロパは単に領土を失っただけではなかったのだ。連合への工作の足掛かりも防衛拠点も両者を隔てるものも失ったのだ。そうした意味でエウロパの損失は大きかった。
「少なくとも今までのようにはいかない」
「はい」
「これを埋めるのは容易ではない。少なくともこの銀河にいる限りは」
「最早エウロパは銀河の辺境に位置する一小勢力になるかと」
その危惧もエウロパには確かにあったりする。
「それこそが相応しいな」
「全くです。そもそもヨーロッパなどと大層なことを言っても」
「実際は人類社会の辺境だった。長い間な」
「ええ」
これはある意味において事実であった。ヨーロッパはローマ帝国時代はかなりの勢力であったがそれの崩壊後少なくとも西欧は文明の崩壊した地であった。文明は東欧、すなわちビザンツ帝国にあり西欧は未開の地となり果てていたのだ。人口もまた少なく過疎地でもあった。そうした状態が長い間続いていたのである。
「ああなるのが相応しいのだ」
「何が貴族文化だ、というわけですか」
「私は貴族は嫌いだ」
はっきりと言い切った。
「それは君もだろう」
「アメリカ人ですから」
それはターフェルの返答であった。
「余程の物好きでもなければ連合でもいないでしょう」
「どうも実際はかなり勇敢で秩序ある連中のようだな」
「ああ、それは」
これに関してはターフェルも聞いていた。
「マクレーン元帥から聞いております」

「貴族達は皆勇敢に戦い、毅然としていたとな」
「そのうえ生真面目で法にも忠実であったと。どうも我々の思い描いていた貴族達とは違いますな」
連合の多くの者は貴族というと傲慢で無能で無法な者達だと思っていたのだ。一部にはその優雅な生活に憧れる者達もいたがその彼等にしろ実際には連合の生活に骨の髄まで浸かっていたりする。
「嫌いなことは嫌いだが」
マックリーフはまた述べた。
「彼等にしろ見るべきものはあるということか」
「どうやらそのようで」
「そして気概もある」
「はい」
気概という言葉を認めてみせた。
「これだけ絶望的な状況でも何かしてくるかもな」
「困難でしょうが」
「まあ楽しみにさせてもらおう」
またしても笑みが変わった。楽しむようなものになっていた。

## 第二十部第二章　割譲その十七

「何をしてくれるのかな」
「主に中央政府の仕事になりますが」
「それでもこちらにも関わってくる。どちらにしろ敵は敵だ」
「彼等もそう思っているでしょうな」
「お互いにか。どうやら我々はまだまだ争うな」
「また千年でしょうか」
「より長くなるかも知れないが」
両者の対立はそこまで根が深くなっているのである。深刻なまでに。
「だが気を揉む必要はない」
「先は長いと」
「とりあえずはエネルギーを補給しよう」
冗談めかしてこう述べた。
「今日のディナーは何だったかな」
「ブラジル料理でシェラスコです」
「ああ、あれか」
牛肉を鉄の串で刺しそのまま焼く。それを徐々に切って食べていくのである。牛肉の他にも鶏肉等を使う場合もある。ブラジル料理の中では最も有名な料理の一つである。
「ああした料理はエウロパではないだろうな」
「飾った料理なら一杯ありますが」
「食べるのならやはり量が多くなくてはな。ただ飾っただけというのは面白くない」
「味は」
「シェラスコらしくワイルドで頼む」
「はい、それでは」
「では行くか」

マックリーフは席を立った。
「シェラスコが待っているぞ」
「はい」
二人は部屋を後にした。そして食事を摂りに向かう。丁度この頃中国大統領李は食事を摂っていた。料理はオムレツであった。
ただし普通のオムレツではない。その中に挽肉も野菜も何でも入れたかなり大きなものだ。卵を何個使っているかわからない程だ。彼はそれをスタッフ達と共に食べていた。オムレツの他にはサラダやスープ、パスタもあったがそれ等はもう食べてしまっている。それでメインディッシュとなっているオムレツを食べているのである。
「ところでだ」
「はい」
スタッフの一人が口を開いた李に顔を向けた。
「エウロパでは動きはあるか」
彼はこの式典の最中にもエウロパの情勢を探らせていたのである。それを問うてきたのだ。
「一つ妙なことがありました」
「何か」
「エウロパ中央政府ですが」
「うむ」
オムレツを食べながら鷹揚に応える。
「ペーチ首相の姿が見えません」
「何かあったか？」
「その代わりにボーデー内相が首相の責務も果たしているようです」
「急死か」
「いえ、そうした話はありませんが」
それは別のスタッフによって否定された。
「ただ、表から姿を消したのは事実です」
「では病か」
「そうではないでしょうか。戦争の間かなりの激務だったそうです

し」
「だろうな。劣勢に追い込まれている時程忙しいものだ」
李の言葉はその口調も色も冷たいものであった。エウロパのことなので突き放したものとなっているのである。やはり彼は連合の人間だからだ。

## 第二十部第二章　割譲その十八

「それが宰相ともなればな」
「殆ど不眠不休だったそうです」
「これはペーチ首相の性格によるところも大きかったそうですが」
「かなり真面目な性格だったらしいな」
「はい」
スタッフ達はそれに頷いた。
「それが災いしたそうです」
「一人で何でも背負うのはよくないことだ」
李はそれを聞いて述べた。
「大統領ですら権限がある程度分散されているというのにな」
その為に首相がいるのである。そうした一面もある。一人の人間にあまりもの負担を負わせる組織というものは破綻する可能性が高いのである。
「まあ連合には直接は関係のないことだが」
「詳細はまだはっきりしておりませんが」
「ふむ」
「ただ、ペーチ首相は倒れる直前にある人物と会っております」
「ある人物」
李はそれを聞いて手を止めた。それから問うた。
「それは一体誰だ？」
「さるイギリスの貴族でして。ギルフォードという人物です」
「ギルフォード」
李はその名を聞いて怪訝な顔をした。
「確かその人物は」
「御存知なのですか？」
「ニョルズ会戦でエウロパ軍の先頭で戦った提督ではなかったか？タンホイザー元帥と共に」

「そういえば」
それを受けて軍事関連に明るいスタッフが顔を上げた。
「そうした名前の提督がおりました」
その彼もこの程度の認識であった。この時はまだギルフォードもそれ程名を知られていたわけではないのである。この時は、であるが。
「やはりな」
李はそれを聞いて頷いた。
「そのギルフォード提督とか」
「何でも軍には志願して入ったそうで」
「それまではイギリスに留まっていたのか」
「調べましたところイギリスの名門の出身らしくて。代々イギリスにおいて要人を輩出しているそうです」
「つまり絵に描いた様な大貴族ということだな」
「はい」
スタッフは答えた。
「そう考えられると宜しいかと」
「その大貴族とペーチ首相が会っていた」
「やはり何かあると思われます」
「ないと考える方がどうかしているな」
李はフォークとナイフと再び動かしはじめた。そしてオムレツの切った端を一切れ口に入れていた。
「そしてそのギルフォード卿だが」
「はい」
「今後名前を聞くことになるかも知れないな」
「でしょうか」
「若しかしたらだがな」
これは勘でそう言っているだけであった。確証はない。
「一応情報を集めておいた方がいいだろう」
「わかりました、では」

スタッフ達はそれに頷く。
「帰国しましたらすぐに」
「頼むぞ。だが気をつけてもらうことがある」
「何でしょうか」
「誇大する報告も過小する報告も控えてくれ」
李はスタッフ達にこう述べた。
「それだけは用心してくれ。いいな」
「了解です」
スタッフ達はそれにも頷いた。李はそれを見てまずは満足そうに頷いた。
「ではその様にな」
「ええ」
彼等は食事を再開した。オムレツが終わると次はデザートだった。彼等が食事を進めている間にも艦は連合に戻っていく。領土の割譲は終わりそれは新たな時代のはじまりをも告げていた。それは果たして連合とエウロパだけのことであるのか。それはまだ誰にもわかりはしなかった。

# 第二十部第三章　英雄の鼓動その一

英雄の鼓動

連合各国の首脳達が意気揚々とそれぞれの国に引き揚げている時連合軍もまた順次エウロパから撤収していた。戦争が終わればもう留まる理由もなかった。彼等は祖国へ帰っていっていたのだ。

「さらばエウロパよってとこだな」

ジャマイカ出身の若い下士官が煙草に火を点けながら夕暮れ時の道でジープに乗っていた。彼は助手席におり運転はしていない。

「思い入れがあるかい？」

隣で運転している同僚がそれに問う。

「いや、別に」

彼は煙草を手に持ってそれに応えた。

「料理も量が少なかったしな」

「味も薄かった」

「ああ。それに何か連合と全然違ったしな」

当然と言えば当然のことを言った。

「何かどいつもこいつも同じ顔に見えたしな」

「それはな」

同僚もそれに頷いた。頷きながら暗くなっていく道の中を進んでいる。その周りには家々が見えるがそれも闇の中に消えようとしていた。太陽もその光を弱め大地に沈もうとしている。

「白人ばっかでな」

「そうだよな、これだけ白人見たのも珍しいぜ」

彼等もある程度は白人の血が入っている顔をしていた。とりわけ煙草を吹かしている者は髪も金色で彫が深かった。肌の色は黄色であったが。

「というか白人ばかりか」

「まあエウロパだからな」

同僚は運転しながら彼にこう言った。
「コーカロイドだけで国が成り立っていたからな」
「ずっとだったか」
運転手の彼はそれを聞いて述べた。
「それは」
「ああ、ずっとだぜ。それこそローマ帝国の頃からな」
「へえ」
「白人だけ。あの地域で他の人種は殆どいなかったそうだ」
「俺達んとこのロシア人みたいに混血したってことはなかったんだな」
そう言う。
「あることにはあったが薄いみたいだな」
「まあそうした歴史だったのか。しかし何だな」
「どうした？」
「同じ肌の人間ばかりってのもまた変わった風景だったな」
「ああ、そうだな」
同僚はそれに頷いた。
「そういえばうちじゃあまり見ない光景だな」
「御前アルム出身だったよな」
「ああ」
彼は運転しながら応えた。
「親父は時計屋でな。駅前に店があった」
「そこでもやっぱり色んな奴いただろ」
「ジャマイカと同じだぜ」
彼はこう言った。
「それこそ何か赤いのやら白いのやら黄色いのやら黒いのやらってな」
「そうだよな」
アルム王国は古のアルム人が復活して成立した国家だとされている。だが実情はこうしたように様々な人種がモザイク状に入り組ん

でいるのである。実際にアルム人の血がどれだけ入っているかは甚だ疑問である。
「俺の親父もお袋も色々入ってたな」
その息子である彼にしろ。目は青いが髪は黒く縮れていた。肌は黄色く彫は浅い。
「そういうところにいたからな。どうもエウロパは」
「変な印象があるよな」
「何か最後までそれが消えなかったよ」
前を見ながら述べた。
「白人ばかりっていうのはな」
なお連合においては純粋な白人や黄色人、黒人といったものは殆ど存在しない。長い混血の時代でそうしたものはなくなってしまっているのである。
「凄い違和感があったよな」
「逆に言っちまえば純粋な白人っていうのもな」
「珍しいよな」
「結局俺達は混血しちまっているからな」
運転席に備え付けられている灰皿を開けてそこに灰を入れる。
「何かな。珍しく思えるな」
「そういうことだよな」
二人はそのまま道を進んでいた。
「けれどな」
「どうした？」
「それがここの連中にとっては自然なんだろう？」
「自然か！？」
「だってよ、この連中はずっとそうした社会で生きてきたんだろう？だからよ」
彼は言う。
「それが自然だってことになるよな」
「そういえばそうか」

同僚はそれを言われて何となく頷くものがあった。
「俺達にとっちゃ色んな人間がいるのが普通なのと一緒で」
「そういうことだな。何かずっと変な目で見られてたけどな」
「ああ」
「そんなに黒い肌や黄色い肌が珍しいのかって思ったけどな」
「エウロパにはいないからな」
話が人種論になっていた。
「ほら、日本の話だったか」
「日本の？」
「あれだよ、どっかの領主が黒人をはじめて見た時」
「ああ、あの話か」
同僚もそれを言われて気付いた。
「あれだろ？洗ったって話」
「そう、それだ」
織田信長の話である。彼は黒人を最初見た時何故肌が黒いのかわからずその身体を洗わせたのである。面白い話と言えば面白い。
「俺達もそんな目で見られてるのかな」
「まあそうだろうな」
同僚は何気ない様子で答えた。

## 第二十部第三章　英雄の鼓動その二

「少なくとも別の世界の人間には思われてるぜ」
「やれやれだな」
「けどそんなものだろ」
その返事はやはり素っ気無いものであった。
「エウロパの人間に取っちゃ俺達は余所者だしな」
「それはわかってるつもりだがな」
「やっぱり気分が悪いか」
「何となくな」
「けどよ、それは俺達だって同じだろ」
「同じって？」
煙草を口に戻しながらそれに問うた。
「同じなのか？」
「だってそうだろ。俺達もあれだ」
彼は言う。
「白人ばかりで変だって。そう言っただろ？」
「そういうことか」
「そういうことさ。まあ俺もその違和感ってのは否定しないがな」
「そうか」
「俺はな。御前はどうかは知らないぜ」
「今まで見たことがなかったけれどな」
「そこも同じなんだよ」
彼はまた言う。
「俺達もここの連中もな。今までお互いに見たことがなかった」
「実際に見てみたら」
「かえって違和感を覚えたってな。やっぱり相互理解ってやつはそう簡単にはいかないな」
「よくある感動もののＳＦみたいにな」

他の知的生命体と遭遇して意識を通じ合わせるというものである。侵略ものが一番多いがそうしたジャンルもかなりの数があるのである。
「そうはいかないな」
「実際のところ他の知的生命体ってのに会ったらどうなるかわからないぞ」
「ああ」
「けれどな。お互いを理解するってのはやっぱり難しい」
「よく考えたら俺達マウリアと千年付き合ってるけれど全然理解出来てないしな」
「あそこはまた特別だがな」
同僚の口調が憮然としたものになった。
「エウロパよりずっとあれだろ」
「まああれだな」
いささか変な調子になった。やはり彼等もマウリアは理会し難い存在であるのだ。
「訳がわからねえ」
「向こうも俺達に合せようって気は全くないしな」
「そんなもん考えもしねえだろ、マウリアの連中は」
彼は眉を顰めさせてこう述べた。
「自分達こそが基本なんだと思ってるぜ」
「俺達にしろエウロパの連中にしろそうなんだが」
「あの連中はまたな。別格だよな」
「わからねえつったら本当にわからねえ」
同僚の言葉はエウロパや連合に対したような切れが消えていた。ただ戸惑いだけがあった。彼にしろマウリアにはいささか苦手意識があったのである。
「あの国だけはな」
「前世がどうとか言うしな」
「いや、それは仏教にもあるけどな」

「その仏教もな」
彼等はそれぞれ眉を顰め合ったまま話を続ける。エウロパに対するのとは全然様子が違っていた。
「連中はあれはヒンズー教の一派だって思ってるそうだ」
「言ってる意味がわからねえんだが」
同僚は車を運転しながら憮然とした顔で述べた。
「どういうことだ？」
「だからまんまだよ」
煙草を吹かしながら言う。
「御釈迦様がな。向こうのヴィシュヌ神の転生の一つなんだそうだ。それで仏教は」
「凄い解釈だな、また」
これには流石に連合の多くの者が並行せざるを得ない。これを言われて思考停止に陥る者もいるのだ。
「何処をどうやったらそんな考えになるんだ」
「輪廻転生らしい」
仏教にあるものだがそのルーツはインドにある。仏教がそもそもインドから生まれたものである。従ってインドの思想が仏教のベースなのである。インドの思想には輪廻転生が強く影響しているのである。
「それでか」
「そうだ」
「御釈迦様がヴィシュヌの生まれ変わりの一つで」
「そのうちキリストもそうだと言い出すかもな」
「もう何でもありなんだな」
「マウリアだぜ」
あまりにも決め付け的な言葉であったがそれで充分であった。
「それ位何でもないだろ」
「そういうものか」
「若しかしたらもう言い出しているのかも知れないな」

「有り得るな、それは」
「マウリアにもキリスト教は入ってるしな」
「ううむ」
話せば話す程、知れば知る程わからなくなる国、それがマウリアなのだ。少なくとも連合の人間にとってはそうである。
「やっぱりわからないな」
「そうだろ」
「何かエウロパの方が理解しやすそうだ」
「程度の問題だがな」
煙草が根本まで達していた。それでそれを灰皿の中で消してもう一本取り出した。

## 第二十部第三章　英雄の鼓動その三

そこに火を点ける。周りの闇はさらに深くなっていた。
「ここにしろずっと違和感があったがな」
「どうしても好きになれなかったな」
「俺もな。何かな」
「他の連中もそうかな」
「そうした奴も多いだろうな」
それは予想がついた。
「やっぱりわからないものはわからないさ」
「そうだよな」
「もうすぐこことともさよならだが」
「二回来たいとは思わないな」
「そうだな」
心から同意するものがあった。やはり馴染めないものは馴染めないのだ。
「これが戦争でなくてもな」
「ああ」
「これでお別れってやつだ」
「さようならってな」
こうして彼等は基地へ戻った。連合軍の将兵達は次々に撤収していく。それは粛然としたものであり混乱はなかった。そのうえで何処か寂しさもあった。
「やっと帰ったな」
あるレストランのシェフがその星に駐留していた連合軍が一人残らず去ったと聞いて店の中でこう呟いた。今店は閉店していた店の者でも残っているのは彼ともう一人だけであった。
「難儀な奴等だった」
「馬か牛みたいに食べてましたね」

その残っているもう一人である若いウェィトレスが言った。彼女は学生でアルバイトなのである。
「ああ、連中が来てから食材の減りが凄まじくなった。
「いつもの四倍でしたっけ」
「一人当たりはな。だが数もあったからな」
「凄かったですね」
「マナーもな」
「はい」
二人の顔が憮然としたものになった。
「とんでもなかったな」
「店の中ですぐにドンチャン騒ぎをするし」
「テーブルは汚し放題、煮込んだ肉なら骨まで食べようとする」
「連合ではそうするって言って」
「まるで何かの動物みたいだったな。野蛮人そのものだった」
連合のワイルドな一面が出ていたのである。
「だがそれ意外はな」
「礼儀正しかったですね」
「少なくとも悪事は働かなかった」
これだけはよかった。連合軍は例え馬鹿騒ぎをしても軍律は守っていたのである。これは連合軍が何があろうともまず軍規を教え込むことを徹底してきたからだ。これだけはよかったの。
「そうですね、それだけはよかったですね」
「不思議な奴等だった」
シェフは誰もいないテーブルに腰掛けてこう呟いた。
「荒くれ者であっても紳士だった」
「大騒ぎはしても店は破壊しなかったですし」
「そこが違ったな。うちによくいる不良連中とは」
「ええ」
エウロパにも連合にもそうした不心得者はいる。当然裏社会も存在する。こうしたものは何時の時代のどんな場所にも存在するのだ。

それは何処でも変わりはしない。
そんな連中は容赦なく処刑していけばいいのだ。実際に連合軍はそうしている。処刑は公開にしてとりわけ惨たらしく処刑しているのである。そうして悪事の結果を見せつけているのだ。
これはその処刑の仕方や公開等はしないがエウロパでもどの社会でも同じである。悪逆非道の輩には裁きを加えなければならない。そういうことなのである。
それを徹底しているからこそ連合軍は規律正しいのである。鋼の如き厳格な規律と子供が聞いて震え上がるような過酷な刑罰こそが秩序を守る、極論であるがそれは真理の一つなのは確かである。連合軍はその真理を忠実に実行しているだけなのである。
「そこはよかったな」
「はい」
「馬か牛みたいに食ってくれたが」
「儲かりはしましたね」
「そうだな」
それには納得した。
「あれだけ食ってくれればな」
「他のお店では一時閉店がざらな程に」
「それも当然だろうな」
それにあらためて頷いた。

## 第二十部第三章　英雄の鼓動その四

「あんなに食う連中は見たことがない」
「ですね」
「連合の人間があれだけ食べるとは思わなかった」
「身体が大きいからでしょうか」
「それもあるな、確実に」
これには容易に想像がついた。
「だが、それだけではないだろう」
「といいますと」
「連中はやたらとエネルギッシュだ」
シェフは言った。
「常に何かをしている。だから食べるのだろう」
「確かにやたらと元気でしたが」
メイドもそれには頷くものがあった。
「ですがそれはやっぱり食べているからですか」
「人間食わないと生きていけないものだ」
シェフはまた言った。
「それはわかるな」
「勿論ですよ、だってレストランのウェイトレスなんですから」
「そうだな」
「食べるから元気になる、ですか」
「だから連中はああなのだろう」
「はあ」
「馬鹿みたいに食べるから馬鹿みたいに元気なのだ」
その言葉には何処か蔑視が見られるのはやはり彼がエウロパの人間だからであろうか。どうあってもお互いにある感情というものは安易には消えはしない。
「じゃあ私もあれだけ食べれば」

「太るぞ」
シェフはウェイトレスの閃きにすぐ突っ込みを入れた。
「あれだけ動かないとな」
「それは困りましたね」
ウェイトレスはそれを聞いて顔を顰めさせた。
「こう見えても私は品行方正な文学少女なんですから」
「嘘付け」
この言葉はすぐに否定された。
「この前店に来てた格好いい男の子と何か色々と話してただろうが」
「あれ彼氏なんですよ」
「何人目のだ？」
「勿論一人目ですよ。嫌なこと言いますね」
「俺の妹もよくそう言ってたよ」
シェフは憮然とした顔で述べた。
「家に来る男にいつもな。私は貴方だけのものって。何人もの野郎にな」
「面白い方ですね、シェフの妹さんって」
「まあ結婚したらそんなのはなくなった」
それはいいことの筈であるが何故か彼の不機嫌さは増していた。
「いいことじゃ」
「そのかわりビヤ樽みたいになりやがった」
不機嫌の理由はそこであった。
「ったくよお、学生の頃はスマートでな、可愛かったんだぜ」
「誰だって歳をとったら太りますよ」
もっともこれは人による。若い頃から痩せている人もいることはいる。一番腹が立つのは子供の頃太っていて見向きもしなかったのに年頃になって痩せて美人になる場合だ。これは史上最悪の詐欺行為である。こんなことならあの時優しくしておけば、と思うのは後の祭りという話である。これは女の子にも同じような話があるであろうが。とにかく後悔する話である。しかもこういう時には相手も

自分が美人になっているのがわかっているから余裕のある態度を見せるのだ。それがまたとんでもなく腹が立つことなのである。
「そうじゃないと身体が持たないですよ」
「子供がいるからか」
「はい」
育児は疲れるのである。だから立派な体格が必要なのだ。
「じゃあ何か？」
シェフはまだまだ不機嫌な顔をしていた。
「体力つけるのに山みたいなお菓子が必要なのか？」
「甘いものは元気が出ますよ」
「それは知ってるさ」
まずはこう返した。
「問題はその結果だよ。体重が二倍、太さは三倍」
「大袈裟じゃないんですか？」
「全然、歩くと大地が揺れるとまで言われてるんだぞ」
「うわっ」
それを聞いて思わず声をあげてみせる。
「浮気がなおったと思ったらすぐだったな、子供ができて」
「はあ」
「今じゃ自分の娘にお母さんみたいなデブにはなりたくないって言われてるさ」
「で、妹さんはそれには何て言ってます？」
「平気なものさ、心配しなくてもあんたもこうなるんだよって娘に言ってるさ」
「やっぱり」
何か妙に納得出来る話であった。
「そうなりますよね」
「肝っ玉はまあ昔からあったがな。連合が攻め込んで来た時もケーキ食べてたよ」
なおエウロパの食糧事情は戦争中でもよかった。この時代は惑星

だけでもかなり自給自足ができることと連合が必要な場合以外は一般の経済活動を抑制しなかったからである。だからエウロパの一般市民は確かに困ることはあっても危機的な状況までにはならなかったのだ。これは八条の配慮によるものであった。

## 第二十部第三章　英雄の鼓動その五

「あの食い方は連合軍並だな」
「そこまでですか」
「で、そうなりたいのか？」
シェフはここでウェイトレスに顔を向けた。
「ビヤ樽によ」
「女の子はスタイルが命なんですよ」
それが彼女の答えであった。
「確かに太めが好きな人だっていますよ」
これも案外多い。本当の遊び人は夏は痩せた女の子を、冬は太った女の子を愛する。それは何故か。汗をかかなくて済むからだ。だが一途な男は痩せていようが太っていようが構わないと言う。
「けれど私の彼氏は」
「痩せているのが好きか」
「そういうことです。だから私も頑張って痩せてるんですよ」
「だったら食べ過ぎは禁物だな」
シェフはそう言った。
「太るからな」
「結局そうなりますか」
「体格に合った食べ方をしないとな」
それが彼の持論であった。
「さもないとえらいことになるぞ」
「そういえば」
ここで彼女は気付いた。
「どうした？」
「連合もやっぱり太ってる人多いんですかね」
「そうなんじゃないのか？」
シェフは何となくあまり考えずに返した。

「こっちだってそうなんだからな」
「そうですかね、やっぱり」
「ほら、講和会議に来てた向こうの偉いさんの一人」
カバリエのことである。
「かなり立派な体格してただろ」
「ええ」
「そういう人も多いんじゃないのか、やっぱり」
「ですかね、やっぱり」
「まあ実際に連合に言ったことはないからどうってことは言えないけれどな」
一応はそう断った。
「けど、そうなんじゃねえのかな。やっぱり」
「太ってる人も多い」
「誰だって結婚すれば太るさ」
そしてまたこう言った。
「うちの妹みたいにな」
「じゃあ私は気をつけないと」
身に滲みる話である。彼女は強くその心に誓った。
「太りたくありませんからね」
「誰だってそう言うんだよ」
それに対するシェフのコメントは辛口であった。
「若い頃はな」
「私は違いますよ」
「その言葉もだよ」
年長者としての言葉であるがそれ以上に何か毒を含んでいた。しかも結構露骨にだ。
「歳取るとそんなものどうでもよくなるんだ」
「またそんなこと言って」
「そんなことじゃねえ、事実さ」
今度は突き放してきた。

「太るのもそれがどうでもよくなるのもな」
「けれどそうじゃない人もいますよね」
「努力してな。けどよ、そこまで努力したいのか？」
「女ってそうですよ」
「じゃあ俺の妹は今は女じゃねえのか」
何処となく真理に近い言葉であった。
「昔は違ったが。ついでに俺の女房も」
「まあまあ」
「まあいいさ。女ってのは太っててもな」
「さっきと言ってること違いますよ」
「別にいいじゃねえかよ」
突き放した後はふてくされる。どうにも感情の動きが激しいシェフであった。

## 第二十部第三章　英雄の鼓動その六

「太ってる方が頼もしいしな」
「それってこっちの考えじゃないですよ」
「そうだったか？」
「連合の、ロシアの考えじゃなかったですか？」
ロシアでは昔から女の人は太っている方が頼もしいと言われているのだ。ロシア名物ともなっているお婆さんだが大抵太っている。そうした太ったお婆さんの言葉は大切な生活の知恵でありある意味司祭の言葉よりも有り難いものである。酒やバレエと並ぶロシア名物であるとまで言われている。
「連中のか」
シェフは何か無性に不機嫌になってきた。
「もう二度と来ないでもらいたいな」
「来る時って多分戦争ですよ」
「だからだよ」
彼は不機嫌な声で言う。
「今度のでかなり派手にやられたからな」
エウロパ軍の損害は一五〇個艦隊、全体の三割程にも及ぶ。壊滅的なダメージを受けている。戦死者は二億、ここまでの戦死者は戦史上かって例のないものであった。彼等の受けた傷はかなりのものである。そしてエウロパそのものの傷もまた。これからの復興は苦難の道であるのは言うまでもないことであった。
「戦争ってのは勝たないと意味がないもんだ」
「ですね」
「負けたらどうしようもねえ」
「しないにこしたことはないですか」
「負けるのならな」
手に顎をついて述べる。

「避けられるのなら避けた方がいいものさ、負ける戦いってのは」
「ですか」
「何だってそうだろ、喧嘩でも何でも」
シェフは言う。
「負けない為にやるんだよ」
「スポーツは違いますね」
「何でもスポーツで済めば話は簡単なものさ」
「サッカーで決めるとか」
「もっともスポーツにだって勝ち負けはあるがな」
「ええ」
試合をすれば勝敗がつく。そういうことであった。だがスポーツは戦争ではない。かつての日本では試合に負けたからという理由で生徒に丸坊主を強要し、次の日それをしてきた人間が少なかったという理由で暴れた教師がいた。こうした教師は狂人であるので容赦なく懲戒免職にするべきなのである。教師というのは案外精神異常者や暴力常習者が多いものである。閉鎖された空間にいるからであろうか。そうした社会不適格者もまた多いのが実情なのである。なおこの狂人教師は生徒への虐待がネットで公になり教育委員会に通報され社会的生命を絶たれている。至極当然のことである。異常な教師は淘汰されなければならないのだ。
「何だって勝ち負けはあるんだよ。だがな」
「戦争はその中で特別だってことですか」
「命のやり取りだしな。それに」
「それに？」
「その国それぞれにいる人間に影響を与えるからな。余計にだ」
それもまた問題ということであった。外交の基礎でもある。
「責任が大きいってことですか」
「本当はどんなことをしても勝たないといけないものだろうな」
「どんなことをしても」
「御貴族様はそこんとこがどうもわかっていねえようだがな」

自分達の上の貴族達に対して言っているのである。彼等は騎士道を重んじ汚いとされていることは決してしようとはしない。それが彼等の戦いなのである。
「けれど卑怯なことをして勝っても」
「後味が悪いよな」
「そうですよね」
「そこんとこが難しいんだよ」
シェフは言った。
「普通の人間はな、やっぱり目的とかに手段を選ぶもんさ」
「ええ」
無論これにも例外はいるが。

## 第二十部第三章　英雄の鼓動その七

「非道なやり方ってのは好かれないんだ」
「裏の人達でも」
「裏には裏の掟ってのがあるらしいしな」
そういうものである。どの世界でも卑劣な輩は疎まれるものであるのだ。
「誰だってモラルってのがあるさ」
「はい」
「世間にもな。だから御貴族様達も戦争で正々堂々とかやるのさ」
「けれどそれで負けたら」
「だからよ、そこが難しいって言ったな」
シェフはまた述べた。
「卑怯なことをしてまで勝ちたくはないって考えがあるってな。御前さんだってそうだろ」
「ええ、まあ」
このウェイトレスもまともな人間だからそうなのである。何度も言うがそうそう極端に卑劣な人間はいないものだ。若しいたならば徹底的に糾弾されもする。これまたどの世界でも一緒である。
「誰だって汚いことは嫌うさ」
また言った。
「だからルールってやつがあるんだ」
「ルールが」
「それへの抜け道を探す奴だっているさ。けどな、やっぱり悪事ってのは嫌われるんだよ」
人間というものは複雑である。心の中に醜いものは確かにある。だがそれと同じくその醜いものを嫌うものも持っているのである。その互いに矛盾するものを持っているのが人間なのである。
「どうやってもな」

「だから戦争でもルールがあって」
「秩序ってやつも必要だしな」
それも付け加えた。
「それと同じ位な、やっぱり悪いことってのは嫌われるものさ」
「はあ」
「だから世の中が成り立っているんだよ」
こうも言った。
「悪事ってのを憎む気持ちがあるからな」
「私にもあるでしょうか、そんな気持ち」
「なかったらおかしいよ」
「そうなります？」
「本当の悪人じゃねえか、それって」
「ですよね」
「だからな」
シェフはさらに言う。
「色々と難しいんだよ、世の中ってのは」
「そういえば連合軍は悪いことしませんでしたし」
「連中にも連中のルールがあるってこった」
それを踏まえたうえで述べる。
「同じ人間なんだからな」
「てっきりとんでもない乱暴者ばかりだって思ってましたけど」
「まあマナーは褒められたものじゃなかったな」
といっても食べ方が汚いだの意地汚いだのそういった程度である。
この程度は笑って済ませられる話なのである。
「意外と悪い連中じゃなかった」
「そうですね」
「二度と来るなとは思うがな」
「向こうも来たくなさそうですけれど」
「願ったり適ったりだな、それは」
お互い嫌い合っているのがよくわかる言葉であった。

「エウロパはエウロパでやっていきたいものだな」
「正直そうですよね」
「馬が合わないってやっぱりあるもんだしな」
それもわかってきた。双方にとってこの戦いはあらゆる意味で色々なことがわかった戦いであった。そうした意味でも歴史的に重要な戦いであったと言えよう。
「とりあえずこれから何かと大変になるぞ」
「忙しくなりますかね」
「店じゃねえ、エウロパがだよ」
「エウロパが」
「そうさ、当分えらいことになるぜ」
シニカルな言葉を出してみせた。
「何かあまりよくなさそうですね」
「負けたからな」
「結局そうなるんですね」
「まあ派手に負けたしな」
「従兄も兵隊だったんですよ」
ここで彼が言った。
「大丈夫だったか？」
「ちょっと怪我しちゃいまして。今病院です」
「命は助かったのか？」
「足を骨折しただけですから」
「その程度で済んでよかったな、運がいい」
それを聞いて笑う。少なくとも戦死よりはましであった。
「ですよね」
「問題はこれからだよ」
シェフはまた言う。
「何もかもな」
「お店大丈夫でしょうか」
「それどころかエウロパが大丈夫かじゃねえのかよ、こうした場合

は」
「だってアルバイト先がなくなったら本買うお金が」
ウェイトレスにとってはどうやらそちらの方が重要なようであった。現実的と言えば現実的である。
「なくなっちゃいますから」
「エウロパがなくなったらそれどころじゃねえぞ」
「けどレストランがなくなったら」
「ああ、もうわかったよ」
たまりかねてそう返した。
「ったくよお、意外と所帯しみてるんだな」
「だって女ですから」
「やれやれ」
「生きていれば何とかなりますよ」
「まあそれはそうだな」
この言葉には頷けるものがあった。そしてシェフは素直にそれに頷いた。

## 第二十部第三章　英雄の鼓動その八

「とりあえず命はある」
「はい」
「そうしたら頑張れるな」
「ですね」
そんな話をしながら店の中で二人いた。だがやがて二人は店を出た。そして家に帰ることになった。
「彼氏でも迎えに来ないのか？」
「さっきからメールで呼んでるんですけど」
「出ないのか」
「向こうもバイトありますから」
「何か本当に所帯しみてるな」
また苦笑いになるのであった。
「お金があったら何でもできますよ」
「まあな」
「ですから二人で稼いでるんですよ。それで本買ったりデートしたり」
ごく普通の女の子の生活である。これはエウロパでも連合でも変わりはしない。
「楽しいですよ」
「まあまずは金だしな」
「そういうことですよ」
「おいそこの御二人さん」
もう夜になっている。その中で最近嫌でも覚えた銀河語がやって来た。
「何だ！？」
「おい、こっちの言葉じゃわからねえだろ」
「そうよ、ここはラテン語じゃないと」

「俺ラテン語わからねえよ」
不意に言う。ここで出自がわかる。
「じゃあ俺が言うよ。あのな」
「あんた達連合軍か？」
「ああそうさ」
暗がりから出て来たのは連合軍の将兵達であった。見ればセーラー服を着ている。
「バーを探してるんだけどよ」
「バーか」
「この辺りにないかな」
「何軒かあったがな」
「おっ、じゃあその中でいいのを」
紹介してくれと言おうとしたがここでシェフは言った。
「今は一軒もやってないぞ」
「そんな遅い時間か？」
「馬鹿言え、夜はまだこれからだぜ」
連合の兵士達はそれを見て言い合う。
「そうよ、普通まだやってるわよ」
「そうよね」
「全部あんた達が食い潰したんだよ」
女性兵士達が言っているのを聞いて言った。
「それで何処も一時閉店なんだよ」
「うわっ」
「そうだったのか」
「だから今は何処もやってねえよ。まあ諦めるんだな」
「仕方ないな」
「じゃあ帰って一杯やるか」
「まあそうするんだな」
ラテン語で返す。なお連合軍では艦内での飲酒は禁じられている。
その為基地内に置かれているバー等で飲むのである。連合軍はそう

した施設の充実はかなりのものであるのだ。
「わかったよ、じゃあ」
「ああ、飲むんならそっちだ」
「有り難うよ、おっさん。ところでだ」
「何だ？」
「若い娘と付き合うのならかみさんにばれないようにな」
「馬鹿言え、これは店の子だ」
シェフはムッとした声と顔で応えてみせた。
「変なこと言うな」
「いや、お店の子ってな」
「まんまよね」
「嫌らしい」
「嫌らしいのはそっちだ、この大喰らい共が」
変な邪推に本気で頭にきてきた。
「うちはレストランだ、そしてこの娘はそこのウェイトレスだ」
「まんまじゃねえ？それって」
「ああ、やっぱりな」
「助平親父ってやつよね」
「いい歳して若い女の子とって。奥さん放っておいて」
「御前等そんなことしか考えられんのか？」
いい加減額に青筋が立ってきた。
「食うことと女ばかりで」
「おっと、酒が抜けてるぜ」
「派手に飲んで食って遊ぶのが連合軍」
「それを忘れてもらっちゃ困るね」
「じゃあそれは基地でやるんだな」
シェフは憮然としたまま言った。
「とりあえずここには今はバーは一軒もないからな」
「わかったよ、じゃあ」
「基地に帰るか」

「そうだね、そこで」
別れになった。
「じゃあまたね、おじさん」
「ああ、二度と来るなよ」
「言われなくてもすぐに帰るさ」
「それじゃさようなら」
連合軍の兵士達はシェフに別れを告げると闇の中に消えた。暫くして車の音が聞こえそれが遠ざかっていく。それで彼等は去っていったのであった。

## 第二十部第三章　英雄の鼓動その九

「いっちゃいましたね」
「全く、何をやっても騒がしい奴等だ」
忌々しげに言う。
「大体俺が何で不倫なんぞしなくちゃいけないんだ」
「不倫は駄目ですよ」
ウェイトレスは真面目な声で言ってきた。
「そんなことしたら奥さんに言いますから」
「だから俺は不倫なんてしていないって言ってるだろ」
ウェイトレスにまで言われてさらに頭にきた。
「俺はカトリックだぞ、それでどうして」
「ゼウスの信者は普通にしますけれどね」
「あれはまた特別だ。御本尊があんなのだからな」
ゼウスと言えば有名な浮気者である。多くの神話で多くの神々がいるがゼウスはその中でとりわけ好色なことで知られている。見境がないレベルだ。その信者もゼウス様がそうなのだと好色に励む場合が多いのだ。彼等の特徴はそれが女性だけには留まらないということである。古代ギリシアでは普通であった話だがゼウスは同性愛者でもあった。少年愛も嗜んでいたのである。それでゼウスの信者達は同性愛にも励んでいるのである。
「俺はカトリック一本だ」
「そうなんですか」
「だから安心していいぞ」
「そうだといいですけれどね。けれど男の人って」
「そんなに俺が信用出来ないのかよ」
「下半身は皆同じですよ」
これは今も昔もよく言われる言葉である。このウェイトレスもまた同じ考えであった。本の受け売りではあるが。

「誰だって」
「彼氏もか？」
「勿論ですよ」
実にあっけらかんとした言葉であった。ここにこの時代のエウロパの性に対する考えが出ていた。なおこれは連合も同じようなものである。
「外見はおっとりしてるのに」
「まあそんなものだ」
シェフはそれに妙に納得するものを感じていた。
「男ってな外見だけじゃわからない。付き合ってからわからんだ」
「ですね」
「で、彼氏のとこに行くのか？迎えで」
「ちょっとねえ」
ここで彼女は困った顔をした。
「さっきからメール送ってるんですけど返事が」
携帯を眺めながら述べる。
「困りましたね」
「まだバイトかよ」
「遅くなってるのかな。あっ」
急に声が明るくなった。
「返事来てます。ええと」
「遅れるってか？」
「はい、やっぱりバイトが遅くなってって」
「やっぱりな」
そうだと思っていた。シェフは自分の予想が当たって内心少し嬉しかった。
「今からこっち来るって」
「車か？」
「いえ、自転車ですけど」
「二人乗りは危ないぞ」

「大丈夫ですよ、いつもですから」
「彼氏の自転車に、か。いい御身分だね」
「彼女の特権ですよ」
にこりと笑って言う。若い時の特権とも言おうか。少なくともおのろけであるのは事実である。
「もうこっちに向かっているって」
「じゃあ俺が送り迎えしなくてもいいな」
「はい。それじゃあまた明日」
「遅れるんじゃないぞ」
「はい」
二人は別れた。遠くから自転車のベルの音がする。シェフはそれを聴きながら家へと帰っていった。夜の静寂の中にベルの次は若いカップルの明るい声が聴こえてきた。

## 第二十部第三章　英雄の鼓動その十

エウロパにおいては戦争の空気がなくなろうとしていた。しかし一千年の間戦雲に支配されたこの場所は違っていた。相も変わらず戦雲の漂う中で話をしていたのであった。

「エウロパはこれから多くの苦難を乗り越えなくてはならない」

シャイターンが呟いた。彼は今自身の宮殿で兄弟達と共にいた。食事の間で豪勢な食事を摂っていたのであった。羊や鳥をメインとしたエウロパ風の料理がテーブルに並んでいた。彼は今赤紫のワインを口に含んでいた。酒を楽しみながら述べたのである。

「建国以来のな」

「長く辛い道ですね」

「そうだな」

彼はフラームの言葉に応えた。

「果たして乗り越えられるかどうかもわからない程だな」

「エウロパが崩壊する可能性もあるということでしょうか」

「その通りだ」

今度はアブーに応えた。

「その可能性は決して低くはない」

「エウロパが」

「そうだ。想像出来ないか？」

「ええ、あまりのことですので」

彼は述べた。

「まさかと思っています」

「そうだな、エウロパは我々にとっては長い間脅威だった」

「はい」

二人は兄の言葉に頷いた。広いテーブルにシャイターンとフラーム、アブーが向かい合って座る形になっている。兄は弟二人に語り掛ける形になっていた。

「その脅威がなくなるということは確かだ」
「エウロパが崩壊したならば」
「今でもう殆ど脅威ではなくなっているがな」
そのうえでまた述べた。
「だがエウロパがなくなったならば」
「それは永遠に」
「実感が湧かないか」
「はい」
「私もです」
フラームも応えた。
「あのエウロパがそんな」
「国家が滅亡する時は呆気ないものだ」
シャイターンはこうも言った。
「実にな。どれだけの歴史や国力を持っている国家であっても」
「それはわかっているつもりですが」
無数の国家が出来上がっては滅んでいく。それがサハラの歴史である。これは彼等が最もよくわかっていることであった。サハラにいて、政治に携わってきたからだ。ティムールにしろ北方の国家を集めて出来上がった国家である。興亡と無縁ではないのである。
「滅びる時は簡単に滅びるものだ」
「それがエウロパであっても」
「そうだ。だがそれを避ける方法もある」
シャイターンはグラスを置いて言った。
「苦難も無事乗り越えられる方法もな」
「それは一体」
「どの様なものですか？」
「英雄を見つけることだ」
シャイターンの答えはそれであった。
「英雄、ですか」
「そうだ、私のようなな」

そしてここで思わせぶりに不敵に笑ってきた。
「そうすれば大きく変われる」
「エウロパが危機を乗り越えると」
「上手くいけばより上を目指せる。英雄がいればな」
「ですがエウロパにそんな英雄がいるでしょうか」
「そうですね。それがまず問題です」
「御前達はいないと思っているのか？」
シャイターンは弟達に問うた。
「エウロパに救国の英雄はいないと」
「そうは出るものではありません」
フラームは宗教家らしい達観した声で述べた。
「ですから英雄なのです」
「ましてや兄上のようなとは。有り得ないでしょう」
アブーも述べる。二人の見方は同じであった。
「望むものは与えられる」
シャイターンはそう言う二人に対してこう述べた。その声は落ち着いたものであった。
「アッラーが与え給うのだ」
「エウロパは違う神を信じていますが」
「それでもですか」
「そうだ」
彼は答えた。
「神が違えどな。与えられるものは同じだ」
「ではエウロパもまた」
「英雄が与えられると」
「そしてもうそれはいる」
「ムッ！？」
フラームもアブーも兄の言葉に目を瞠らせた。そして問う。
「誰ですか、それは」
「初耳ですが」

「ウォルター＝ギルフォード侯爵」
シャイターンはその名を言った。
「彼だ」
「ギルフォード侯爵」
だが二人はその名を知りはしなかった。
「誰ですか、それは」
「知らないのも無理はないな」
シャイターンは二人の弟達にまた述べた。
「私もまた彼のことを知ったのはほんの少し前だ」
「そうなのですか」
「そして兄上、その者は一体何者ですか」
「イギリスの貴族だ」
まずは身分を言った。

## 第二十部第三章　英雄の鼓動その十一

「先の戦いにも参加していた」
「そうだったのですか」
「ニョルズの戦いでだ。前線で指揮を執っていた」
「そういえばその戦いでタンホイザー元帥と共に前線で果敢に戦う提督がいたと聞いていますが」
　それはもう彼等も知っていることであった。
「そう、それが彼だ」
「そうだったのですか」
「彼があの提督だったのですか」
「意外だったか」
「意外というよりは」
　二人はそれとは別の考えを抱いたのであった。
「よくぞそれを」
「御存知でしたね」
「情報は集めるものだ」
　弟達に対する返答はこうであった。
「どんなものでもな。そしてそれを役に立つものかどうか整理していく」
情報は集めるだけではないのだ。それを整理して検証しなくてはならないのである。
「その結果に過ぎない」
　言葉が断定的になっていた。
「してそのギルフォード侯爵は」
「今はどうしているのでしょうか」
「早速水面下で動こうとしているらしい」
「水面下ですか」
「まだ」

「表に出た時には既にだ」
彼はまた言った。
「全てが整っている時だ」
「そういうことですか」
「どうやら只者ではないらしい」
「ではやはり」
「英雄だと」
また英雄が出た。何処までもつきまとうかのように。
「少なくともエウロパを救える程だろうな」
「エウロパを」
「そうでなくては今現われる意味がない」
「現われる意味が」
「この世にいる者は全て何かの目的を持ってこの世に現われる」
所謂予定説である。これはカルヴァン派の思想であるがイスラムではそれはイスラム教そのものが開闢された時からあるものなのだ。アッラーは絶対者なのだ。アッラーに間違いはない。それならば。人のことは全て決められているのだ。それがこの世の摂理である。そう教えているのである。
「違うか」
「その通りです」
フラームがそれに答えた。
「アッラーが定められております」
「そうだな。全てアッラーが定められているのだ」
「ではエウロパもまた」
「そうだ。どうやら彼等はまだ滅亡する時ではない」
「それはまだ先だと」
「どれだけ先になるかはまだわからないがな」
こうも述べた。国も人も必ず終わりがあるものだ。これはイスラムではなくどちらかと言えば仏教に近い考えである。正者必滅、それは誰も避けられないのだと。そしてまた新たな国や国家が生まれ

るのだという。なおエウロパにしろ連合にしろ国の名はそのままだ。だが。そこにあるのは一千年の間でかなり変わり、そして中のシステムも幾度か変化している。そうした意味では今のエウロパも連合もやはり生まれ変わっていると言えるのである。
「少なくとも今ではないようだ」
「ギルフォード卿によって」
「エウロパはまた」
「立ち上がるだろうな。だが」
「だが！？」
その言葉に反応してみせた。
「そのエウロパは。今までのエウロパではないだろう」
「といいますと」
「英雄が出るのだ」
シャイターンはあえて英雄という言葉を強調してきた。

## 第二十部第三章　英雄の鼓動その十二

「英雄だ。どういうことかわかるか？」
「絶対者ですか」
アブーがそれに応えて言った。
「絶対的な存在であると」
「英雄とは絶対者なのだ」
それはまさにその通りであった。シャイターンは末弟の言葉にその整った口の端に笑みを浮かべさせた。
「だからこそ英雄たりえるのだ」
「では」
「そうだ、エウロパに独裁者が誕生する」
それこそが話の核心であった。
「かっての多くの独裁者達の中に。ギルフォード卿も加わることになるだろう」
「ロベスピエール然りナポレオン然り」
フラームはふと呟いた。
「そしてヒトラー、スターリンの様に」
「いや、ブラウベルグかもな」
「ブラウベルグ」
「エウロパの国父であると」
「ギルフォード卿の資質にもよるが。今エウロパが求めているのはブラウベルグだ」
シャイターンはその鷹の様に強く光る目で言った。
「ならば。彼はブラウベルグとなるだろう」
「国父が再びですか」
「もっとも完全にはブラウベルグではないだろうがな」
こう付け加えはした。
「彼がギルフォード卿であることには変わりがないからな」

「どちらにしろエウロパに強力な独裁者ですか」
「こちらも手を打ちますか」
「一応は北の境に備えはしておく」
シャイターンはグラスを手に取ってこう述べた。
「だが」
「だが！？」
「何かあるのですか、兄上」
「そうだ、あるのだ」
アブーに返す。
「彼はおそらく我々は見てはいない」
「そうなのですか」
「まずはエウロパの中だ」
シャイターンはそれを見抜いていたのだ。敗戦を経たエウロパは今深い傷を受けている。経済は疲弊し軍はダメージを受けている。そのうえ二百億の難民まで抱え込んでいる。そうした諸問題をどうするのか。まずはそれからであった。そして。彼等はもう一つサハラに目を向けない理由があった。
「そしてもう一つは」
「もう一つは」
「連合だ」
「連合」
「そうだ、国を纏めるのに最も簡単な方法は敵を作ることだ」
この時代も変わることのない基本的な政策である。これを誤って国を傾ける場合も多い諸刃の剣と言っていい政策であるがこの時代にも存在している。連合とエウロパが長い間使ってきているのだ。
「エウロパの敵は何処だ」
「言うまでもないことですが」
弟達はそれぞれの口で同じ言葉を述べた。
「連合です」
「やはりまずは彼等です」

「そうだな」
シャイターンはそれを聞いてまた不敵に笑った。
「では我々に目が行くことは殆どないな」
「はい」
「連合が相手ですと」
「ニーベルング回廊も奪われた」
それが大きいのは言うまでもない。
「エウロパの国防は危機的な状況に陥っている」
「おそらくは非武装地帯の外縁部に防衛ラインを敷くと思われますが」
「それしかないだろうしな」
アブーの言葉に応えた。
「ですね」
「それでは防衛ラインが長大なものになり負担もかなりなものになる。それこそが連合の狙いなのだろうが」
「どちらにしろ連合に目が行きますね」
「連合とエウロパの対立は戦争前より激しいものとなる」
そこでシャイターンはこう述べた。
「戦争はなくともお互いを激しく憎むようになるだろう」
「では我々はその間に」
「サハラを手中に収めるぞ」
弟達に言った。
「はい」
「我がシャイターン家はサハラの主となるべき家」
これは確信であった。
「その為にこの世に出たのだ」
「ならば」
「いよいよですね」
「そうだ、また動く」
シャイターンの声には有無を言わさぬものがる。それは今とりわ

け強くなっていた。
「いいな。風の様に動き」
「炎の様に焼き尽くす」
彼等はそれぞれ言い合う。
「敵が誰であろうとも私にとっては問題ではない」
「誰であろうともですか」
「私に不可能ということはない」
弟達に対してこう豪語した。
「私もまた英雄なのだからな」
「サハラは長い間英雄を待ち望んでいました」
フラームは静かに述べた。

## 第二十部第三章　英雄の鼓動その十三

「一千年、いえそれ以前から」
「ウマイア朝以後だったか」
シャイターンは言う。
「アラブ人が分裂しているのは」
「ですね」
「あのオスマン＝トルコですら統一は出来ませんでした」
「メフメット二世やスレイマン大帝を以ってしても」
「はい」
アラブの分裂は長きに渡っている。ムハンマドが砂漠からイスラムを興して以来正統カリフ時代、ウマイア朝、そしてアッバース朝となっていく過程でイスラムは分裂していった。国家だけでなく信仰もだ。信仰は仕方がない。だが国家として分裂していることが。彼等にとっては痛ましいことだったのである。
「大帝国の偉大なスルタンですらな。無理だった」
「今のトルコはあの頃のトルコではありませんし」
「かつての繁栄は取り戻したそうだがな」
「ええ」
今トルコは連合においては屈指の大国となっている。その繁栄ぶりはかってのオスマン＝トルコを凌駕しているとさえ言われている。豊富な資源に高い技術、確かな産業と溢れ出てくる農業生産物、そういったものが今のトルコの繁栄を支えていたのである。
「アラブにあった頃よりもずっと」
「彼等にしてみれば勝ち馬に乗ったということだろうな」
「勝ち馬ですか」
「連合に戦乱はない」
シャイターンは一言そう述べた。
「あるのはコインと札束、そしてカードが乱れ飛ぶ戦いだ」

「経済ですか」
「それを別に米や麦にしてもいい。どちらにしろ彼等にとって戦争とは別の次元の世界の話なのだ。エウロパとの戦争があったにしろな」
「戦争を知らないと」
「そうだ、そして安心して経済活動に邁進できる。確かに勝ち馬なのかも知れない」
治安もまた連合はサハラよりいいのである。宇宙海賊やテロリストに悩まされてきたといってもその数も質も連合とサハラでは比較にならないのだ。
連合で宇宙海賊がどれだけ多くともそれはサハラ全土における海賊達よりも常に少なかった。テロリストもだ。何十倍の人口差があってもである。従って治安もまた連合とサハラでは全く違う。連合において危機的な状況の治安はサハラにおいては普通の状況であると言っていい程なのだ。サハラの戦乱がそうさせていた。そうした意味でもやはり連合は戦争を知らないと言えるのであった。
「このサハラに戦乱が絶えたことはない」
「残念なことに」
「一千年の間。我々はこのサハラにおいて血を流してきた」
多くの国家が滅び、多くの者が戦場に倒れてきた。それがサハラを歪ませたという者達もいる。だがそれ以上に。彼等は戦火に飽くことを知らなかった。常に戦いを追い求めていた。その結果が今であるのだ。彼等もまた野心を抱いていたからである。
「それが終わるのだ」
その野心を持つ男の一人が今言った。
「この私の手によって」
「サハラが兄上の手に」
「うむ」
「その為に我等はいます」
「ですから是非共」

シャイターンに対して言う。
「サハラが一つになった時は」
「はい」
「我がシャイターン家の名は歴史に刻まれることになるだろう」
紫の輝きをそこに称える美酒を眺めて言った。
「そう、永遠にな」
「英雄として」
「そう、英雄として」
シャイターンの顔に悪魔的な笑みが浮かんだ。その笑みは英雄のものだったとしても何処か酷薄で、そして血や奸智を含んだものであった。それがシャイターンの笑いであった。
「歴史に名を残そうぞ」
「兄上の為に」
「シャイターン家の為に」
フラームとアブーは杯を掲げた。シャイターンはそんな弟達をじっと見ていた。それは赤い、戦乱を見据える目であった。
アッディーンは副大統領として多忙を極めていた。この日は艦隊の訓練の指揮を執っていた。
「第七艦隊はそこだ」
彼はアリーの艦橋で宙図を見上げながらそう述べていた。
「そこで防衛ラインを敷け」
「はい」
第七艦隊を預かるカーシャーンがそれに応えた。
「それでは」
「うむ。だが軍団全体はまだ動くな」
「第七艦隊のみですか」
「そうだ、第八、第九艦隊はそのままの位置で待機」
アッディーンはカーシャーンに指示を続ける。
「いいな、その間に第五軍団がそちらに向かう」
「はい」

それにラーグワートが応える。
「それぞれを敵と想定して模擬戦闘を行え。よいな」
「了解」
「わかりました」
カーシャーンとラーグワートはそれぞれ敬礼で以ってそれに応える。そしてアッディーンの言葉に従いそのまま模擬戦闘に入るのであった。
「そこで第八、第九艦隊を動かしてくれ」
アッディーンは第七艦隊に第五軍団が攻撃を仕掛けてきたところでカーシャーンにまた言った。
「今ですか」
「そうだ、今こそその絶好の機会だ」
彼は言う。
「そこで動かすのだ。細かいところは任せる」
「わかりました。では」
彼は二つの艦隊を動かしはじめた。第七艦隊の後方に待機していたその艦隊を第五軍団の左右に動かしてきたのである。そのまま三日月型に包囲しようとしていた。

## 第二十部第三章　英雄の鼓動その十四

第三軍団のその動きに対して第五軍団は徐々に退きはじめた。そして攻撃を仕切りなおそうとしていた。アッディーンはそんな両軍の動きを見て満足そうに頷いていた。
「いい動きをしている」
「第三軍団がでしょうか。それとも第五軍団がでしょうか」
「両方だ」
シンダントにそう答えた。
「両方共的確な判断だ。それに艦隊それぞれの動きもいい」
「ですな」
これにはガルシャースプが頷いた。
「艦艇それぞれの動きもまた。いい感じです」
「ここ暫く大規模な演習は行っていなかったがな。それでもだ」
「やはり経験がものを言っております」
シンダントは今度は自分から述べた。
「これまでの経験が」
「西方、そして南方でのか」
「ええ。特に南方での戦いは進むのにさえ苦労しましたから」
「そうだったな、あの時は私も苦労したものだ」
アッディーンはそう述べて微かな苦笑いを浮かべた。
「そのうえ何処から敵が来るかわからないからな」
「今でも南方での反抗勢力や海賊の掃討は続いておりますし」
「だな」
「それが軍全体にとって貴重な経験となっております」
戦争においても経験は必要なのだ。実戦経験があるというだけで軍はその動きを大きく変える。連合軍がそうであるようにだ。
「複雑な宙形の中で戦うということがか」
「そうです。南方以降艦隊の動きが飛躍的に高まっております」

「将兵の個々の動きも指揮官の指示もか」
「それは次の戦いにかなり影響すると思われます」
「次か」
その言葉を聞いたアッディーンの目が光った。
「次はおそらく大物と戦うことになるぞ」
「ハサンですか」
「そうだ。彼等は我が国との境に長大な防衛ラインを敷いてきているそうだな」
「どうやらそのようです」
そう報告する。ハサンも既に動いているということであった。これは非常に大きいと言えた。
「それで我々を防ぐつもりだな」
「そしてティムールには属国の軍を動員してきているようです」
「警戒は怠らない、ということか」
「ですが主な敵はまだはっきりしておりません」
「いや、それもわかっている」
アッディーンはシンダントにそう述べた。
「といいますと」
「それはおそらく我々だ」
「我々ですか」
「それだけの防衛ラインを敷いてきているのだからな。それで我々を防ぐつもりだろう」
「左様ですか」
「いずれその防衛ラインについての細かい情報も集めたいな」
アッディーンは述べた。
「一体どの様なものか」
「それはもう情報部が潜入しているそうです」
「そうか、早いな」
それを聞いて言う。少なくともそれはアッディーンの予想以上であった。

「ハルヴィシー少将は自ら乗り込んだとか」
「少将自らか」
「はい、それだけのものがあるということで」
「どちらかと言うと少将の冒険心を満たしたいだけのような気もするがな」
これは半分当たっていた。

## 第二十部第三章　英雄の鼓動その十五

「まあそれでもいいかと思います」
シンダントがそれをフォローした。
「それが結果につながるのならば」
「ふむ」
アッディーンはそれに頷けるものを見出していた。
「そうした考えもあるか」
「私はそう思います」
「ではここはハルヴィシー少将に任せよう」
そのうえで断を下す。
「防衛ラインのことはな」
「では」
「ただしだ」
それでも付け加えることは忘れなかった。彼にしてみればまだ注文したいことがあったのだ。
「境全体に関しても調べてもらいたい」
「境全てをですか」
「そうだ。少将にはその旨を伝えてくれ。いいな」
「はっ」
「了解しました」
「ハサンとの戦いに関してはまずそれだ」
アッディーンは境を破ることにまず重点を置いていた。
「それが済んでからだ。全てはな」
「全ては」
「ハサンの首都を目指すまでの道のりは遠いものになるだろうが」
ハサンは広大である。空間はそのまま障壁となる。国境を突破してもまだ首都までかなりの距離がある。アッディーンはそれを把握していたのだ。

「一つ一つクリアーしていきたい」
「わかりました」
「そうしたように作戦を立案していきましょう」
「近頃ハサンの要人の事故が続いているな」
アッディーンはそれにも言及した。
「どういうわけか知らないが」
「あれでしたら」
ガルシャースプがそれに答える。
「どうやらティムールの工作の模様です」
「ティムールのか」
「はい、まだ確かな情報は掴んでおりませんが情報部からはそうした予想が複数あがっております」
「閣下、これは有り得る話であります」
バヤズィトが述べた。
「有り得るか」
「敵国の優れた人材を消すということはそれだけ消した国にとっては有り難いことです」
「確かにな」
敵国の優れた人材はそれだけで脅威となる。これは政治の世界だけでなくビジネスやスポーツの世界においてもそうである。連合においてもそうした相手のスキャンダルの発掘がある。これもそうした抹殺方法の一つである。中には自分達に引き込むといったやり方もある。これはスポーツ界で最もよく見られ、ある野球チームはこれを十八番にしていると言われる。これには今ではかなり規制がかかっている。
「シャイターン主席にしてみれば戦いの前の布石なのでしょう」
「勝つ為にか」
「はい、サハラの覇権の為に」
バヤズィトは何処か人間味が感じられない声で述べた。彼にしては珍しい口調であった。

「それをしているのかと」
「それによりハサンの受けた傷は小さなものではないがな」
「今後の戦局に大きく影響するのは間違いありません」
「かなりの犠牲者が出ているしな」
「そうです、有能な提督や高級官僚が次々と」
その報告は既にオムダーマンにも届いていた。オムダーマンにとっては対岸の火事であるが。
「ハサンの上層部はそれに頭を悩ませているそうです」
「頭を悩ませたからといって人材が帰って来るわけでもなし。辛いな」
「ええ」
「ですがこれは我々には」
「わかっている」
敵国の不幸は自国にとっては幸福である、いささか他力本願であり彼の好むところではなかったがアッディーンはそれにも頷いた。
「付け込むことが可能だ」
「その通りです」
「ではもう一つ手を打っておきたい」
アッディーンは言った。
「もう一つとは？」
「ハサンのその要人達だ」
彼は述べた。
「新しく繰り上げざるを得なかった。彼等だ」
「彼等のことを」
「よく調べてくれ、何かとな」
「わかりました、ではそちらも」
「まずは敵のことを全て知っておきたい」
敵を知ることこそが戦略の第一歩である、アッディーンは今それに忠実に従っていた。
「戦略そのものも同時に進めていくが」

「そしてそれが整った時こそ」
「決まっている、開戦だ」
声が強いものになった。
「全てはその為に進んでいる。いいな」
「了解」
「それでは」
参謀達もアッディーンの言葉に敬礼した。オムダーマン軍も今胎動の段階に入っていた。連合とエウロパの戦いが終わり今度は砂の星達の中での戦いがはじまろうとしていたのであった。

## 第二十部第四章　彗星の如くその一

彗星の如く

彼が姿を現わしたのは突然のことであった。それは最初は誰も気付かなかった。

「諸君に問う！」

夕暮れ時の立体テレビで。いきなりそう叫ぶ者が姿を現わした。

「諸君等は今の自分達についてどう思うか！」

彼は叫ぶ。強い言葉がテレビから発せられる。

「惨めな存在だと思っているのか！敗残者だと思っているのか！」

「だって実際にそうじゃないか」

青い顔をした若い男がそのテレビでの言葉を聞いて呟いた。道行く者達も家でテレビを見ている者達の中にも彼と同じ顔の者は大勢いた。

「俺達は負けたんだ、そして多くのものを失った」

「その通りじゃないか、何を今更」

若者だけでなく他の多くの者達もそう思った。エウロパは敗戦の衝撃に打ちひしがれている、これは隠しようのない事実であったからだ。それを否定するような詭弁は流石に誰にも言えはしなかった。

「我々は敗れた！」

テレビで叫ぶ男もそれは肯定した。

「それは動かすことの出来ない事実だ！」

「何だ、わかってるじゃないか」

「それで何で今更」

「ではあえて聞こう！敗戦により絶望したままでいいのか！」

彼はテレビの向こうの者達に問い掛けてきた。

「敗北したままで！一度の敗北で打ちひしがれるのか！」

「そんなこと言ってもよ」

「負けたから。仕方ないじゃないか」

彼等の声は醒めていて、そして諦観に満ちていた。どうしようもない状況と言ってしまえばまさにその通りであった。何を今更、といった面持ちで男の話を聞いていた。
「思い出すのだ諸君！」
だが彼はここでさらに強い声を出した。
「かつての我々を！誇りあるエウロパはどうして誇りあるエウロパになったのか！まずは思い出すのだ！」
「まずはって」
「よく考えたら俺達は」
彼等はそんな威勢のいい話を聞いてもさらに沈み込むだけだった。結局負けたのだ、その思いを拭い去ることがどうしてもできないでいたからだ。
「我々はかって幾度も敗れた！」
だが驚いたことにテレビの男はそれを今堂々と言ってのけた。
「幾度も！滅亡の危機すらあった！」
こうも言った。
「それぞれの国に分かれている間！それぞれの国もまた多くの敗北や危機を経験してきた！それは私の祖国であるイギリスとて同じことだ！」
イギリスの歴史も決して平穏なものではない。ローマの属州であったしノルマン＝コンクエストがあった。フランスとは果てしない戦いを幾度も経験し二度の世界大戦ではその度に本土を空爆されている。その後のアジアやアフリカ各国の独立で富の源泉であった植民地の殆どを失っている。アメリカ独立戦争では手痛い敗北を喫している。こういったようにあの大英帝国もまた多くの敗北や危機を経験しているのだ。これはどの国も大なり小なり同じである。特に長きに渡って戦乱の絶えなかったエウロパではそれが顕著である。
「だがイギリスは健在だ！そしてエウロパ各国もそれまでの歴史で多くの危機があったが健在だ！エウロパもまた同じなのだ！」
「同じ！？」

「はったりじゃないよな」
市民達は次第にその言葉に耳を傾けはじめた。
「エウロパもまた危機を乗り越えられるのだ！それは何故か！」
彼は言う。
「皆かって多くの危機を乗り越えられたからだ！それまでの危機に比べたら今の敗戦の衝撃の何と軽いことか！」
「軽いか！？」
「いや、案外そうかもな」
彼等は口々にそれぞれの考えを反芻しはじめた。

## 第二十部第四章　彗星の如くその二

「俺達は確かに負けたが受けた傷自体は深くはない」
「人も思った程死んじゃいないし産業も無事だ」
これは連合軍が攻撃対象を軍事関連に絞った為である。彼等は民間人や民需には一切手をつけなかったのだ。それは彼等の、そして八条のモラルによるところが大きかった。連合軍は一般市民を巻き込む軍隊ではないのである。これは彼等がその一般市民からの軍隊であるからだ。
「とりあえず食べるものと仕事には困ってはいない」
「それだけはな」
「命がある！それは何故か！」
男はさらに叫ぶ。
「それはこれからの為である！偉大なるエウロパの為なのだ！」
「エウロパの為」
「またえらく強く出るな」
この言葉には皆いささか引いた。だがそれはこの男の計算通りであった。
「我々は確かに敗れはした！しかし守るべきものは守った！」
「オリンポスまで奪われそうになったってのにか」
「命と仕事があるだけいいと思うがな」
「それは何か！誇りである！」
声が一際強くなる。
「最後の最後まで誇りは守り抜いた！連合の者達にもそれは手をつけさせはしなかった！それがまずある！」
さらに言う。
「そう、我々の誇りは誰にも侵されはしないものなのだ！それがある限り我々はまた立てる！」
「立てる」

「俺達が」
「この戦いは終わりではないのだ！全てのはじまりだ！全てのはじまりは苦難を乗り越えてからなのだ！」
心を鷲掴みにするような、そうした言葉だった。それが発せられていく。
「我々は今偉大なるはじまりにいる！今こそ！」
またしても叫んだ。
「立ち上がるのだ！偉大なるエウロパの為に！」
「エウロパの為に、か」
「確かにな」
それに頷く者達も出てきた。
「俺達もずっと負けた負けたって言っていていいわけじゃないしな」
「そうだよな」
そしてそれに同調する者も。
「今度は自分達の心との戦いである！だがそれは必ず乗り越えられる！」
彼は言い続ける。
「偉大なるエウロパの歴史は再びはじまる！諸君等はその主役なのである！」
「俺達が」
「主役か」
この言葉が多くの者の琴線に触れた。
「今こそ！立ち上がれ！英雄達よ！」
「英雄だって」
「俺達が」
普通ならば一笑で終わる言葉だった。だがそれまでの強い言葉が彼等を誘っていた。彼等はそれに乗った。
「エウロパの偉大なる未来の為に！今こそ！」
そこで演説は終わった。この演説はエウロパにとってあらたなはじまりとなった。

「俺達が英雄か」
「エウロパの為にか」
若い者達が中心になってその言葉を反芻した。
「やれるかな」
「やれるさ」
勇気さえ出て来ていた。
「俺達は英雄なんだからな」
「そうか」
「エウロパを復興させるんだよ」
そして誰かが言った。
「そして連合の奴等に今度こそ」
「一泡吹かせてやるんだ」
「ああ、そうするか」
彼等は今敗戦の衝撃から立ち直ろうとしていた。それは最初はささやかなものであったが次第に大きなものになっていった。その中心には演説の主がいた。
「侯爵、大成功です」
周りの者達が私邸でくつろぐギルフォードに語り掛けていた。彼はこの時私邸の今の安楽椅子の上でくつろいでいた。豪奢な部屋着に身を包んでいる。
「若年層を中心に支持が広まろうとしております」
「侯爵の御名前がエウロパ全体に広がろうとしております」
「当然の結果だ」
普通の政治家ならばそれだけで顔を綻ばせるところであった。だが彼は違っていた。その程度のことに過ぎないといった態度であった。

## 第二十部第四章　彗星の如くその三

「私の演説の結果なのだからな」
「左様ですか」
「それも一度だけでだ。それではこの程度だろう」
「デビューとしてはかなり鮮烈なものと思いますが」
周りの者の一人がこう述べた。見事と言わんばかりの声であった。
「それも演説一つで」
「一つ言っておく」
彼はその周りの者に対して言った。
「私の目的は政治家になることではない」
「違うのですか」
「総統になられるのでは」
「それは一つの通過点に過ぎないのだ」
ここがまた他の政治家とは全く違っていた。
「問題はな」
「はい」
「総統になった後なのだ」
「総統になった後」
「そうだ、そこからだ」
彼は総統になってから何を果たすのか、それを考えていたのである。最早彼にとって総統になるということは規定事項であった。そしてそれからのこともだ。
「総統になり、エウロパを蘇らせる」
「はい」
「それで満足なのか？」
「えっ」
「といいますと」
これには周りの者達もどう答えていいかわからなかった。

「満足なのかと聞いている。これまで通りのエウロパで」
「それはやはり」
「なあ」
彼等は当惑した顔を見合わせていた。
「より上のものが」
「欲しいよなあ」
「そうだな、かってのエウロパの栄光を取り戻すだけでは駄目なのだ」
彼は言った。
「新たな時代がな。はじまるのだ」
「それが侯爵によって」
「そうだ、私がはじめる」
彼は言い切った。
「エウロパは今の狭いエウロパだけでは留まらないのだ」
「またサハラに」
「それもある」
彼にとってはサハラ北方はエウロパのものである。それを奪い返すことは当然であると考えていたのだ。
「だが。我々には大きな可能性が前にある」
「それは一体」
「銀河の果てだ」
「銀河の果て！？」
「そうだ」
その表情が強くもあり、同時に遠くを見据えるものとなっていた。
「我々の北と西に広がる何十万光年もの暗黒宙域」
「それを越えると言われるのですか」
「何か不都合があるのか？」
「幾ら何でもそれは」
「不可能ではないでしょうか」
「不可能か」

言葉が笑ったように聴こえた。
「オリンポスから連合の辺境に向かうよりも遥かに遠大です」
「その先に辿り着くのは」
「かってこういった者がいるのは知っているか？」
ギルフォードは当惑を露わにする彼等に対して言った。
「何をでしょうか」
「不可能だとまず思うことが不可能なのだとな」
「やろうと思えば何でも出来るということですか」
「そうだ」
彼は言った。

## 第二十部第四章　彗星の如くその四

「その通りだ。これはコロンブスという男の言葉だが」
「ジェノヴァの商人ですね」
「そうだ、あの男の言葉だ。あの男はアメリカ大陸を発見した」
実はそれより前にバイキング達が発見していたのであるが。また航海術に優れたカルタゴもまたアメリカ大陸まで足を運んでいたという。この時代ではカルタゴ人達はそれをえらく自慢している。彼等が本当にカルタゴ人なのかどうかはまた別問題であるが。
「それをやっかまれた時に言った言葉だ」
「コロンブスの卵の逸話ですね」
一人が言った。
「それではないでしょうか」
「そうだ」
ギルフォードもそれに頷いた。
「では私が言いたいこともわかると思う」
「ではそれは」
「不可能だと最初から諦めていては何事を為すこともできはしないのだ」
「何事も」
「そうだ、何もな。だからあえて言おう」
彼は言う。
「私は遥かな銀河の果てを目指す。そこにエウロパの未来があるからだ」
「エウロパの未来が」
「最早ここでは限りがある。我々は無限を目指すのだ」
「連合が今持っている無限を」
「彼等が持っているのならば我々も持つ権利がある。違うか？」
「いえ、その通りです」

周りの者達は述べた。
「かつては世界を指導していた我等が」
「この一千年の間彼等の後塵をきしていました。それは恥辱以外の何者でもありませんでした」
「そうだ、恥辱だった」
ギルフォードの言葉に怒りが込められた。
「この恥辱は必ず返さなくてはならない」
「無論です」
「そしてその為にも」
「銀河の果てを目指す」
ギルフォードの声が立ち上がった。
「これでわかったな。その果てに何があるのかはまだわからない」
「希望かそれとも絶望か」
「しかしだ。行かずにこのまま絶望するのと行って絶望するのとどちらがよいか」
「やはり行って絶望した方がよいでしょう」
これは言うまでもないことであった。何もしないよりは何かした方がいいに決まっているからだ。
「違うでしょうか」
「そうだな。ではこれは私の基本政策にする」
「はい」
「あの暗黒宙域を越えた先には。未来があるのだ」
その遠くを見る目がまた現われた。
「それを掴むことこそがエウロパが連合に対することが出来る道なのだ」
「遥かな道ですな」
「道は必ず終わりがある」
「その果てに希望があればいいですが」
「希望と絶望か」
話は少し戻った。

「そこに絶望があるならば」
「如何致しますか」
「それを希望に変えてやる。エウロパの為に」
ギルフォードはそう決心していた。全ては連合の為である。彼は今エウロパの為に遠くを見据えていた。そこにある全てのものを希望に変えようとしていた。

## 第二十部第四章　彗星の如くその五

ギルフォードの名はエウロパに広まろうとしていた。テレビでの演説により急激に知れ渡ったのである。
「何か凄い男が出て来たぞ」
「ああ、ギルフォードだな」
敗戦の衝撃で茫然自失になっていたエウロパの者達にその名は急に浸透していった。今や彼の名を知らない者の方が少数派になろうとしていた。
「一体どの国の人間なのだ？」
「何でもイギリスの貴族らしいぞ」
彼等は口々に言い合いネットに書き込む。
「イギリスじゃ由緒正しい貴族らしい」
「イギリス人か。そういえばそういう名前だな」
「それにニョルズで活躍したそうだぞ」
「ニョルズというと」
「あれだよ、連合軍の黒い連中と戦っただろ」
「ああ、あの時かよ」
ネットに言葉が次々と書き込まれる。
「そこで前線で獅子奮迅の戦いをしたらしい」
「へえ、それはまた」
「そして今出て来たってわけだな」
「そうみたいだな」
「で、何をするんだろうな」
「総統になるつもりじゃねえのか？」
ここで誰かがこう書き込み、誰かが何処かで言った。
「総統にか」
「ああ、やっぱりそれだろ」
「なるつもりじゃねえのか、やっぱり」

「保守派かね、改革派かね」
「保守派じゃねえの、やっぱり」
誰かが書き込んだ。
「今は改革派が政権握ってるし、言ってることが保守派みてえだろ」
「じゃあそっちかな」
「保守派はまたえらい手駒が手に入ったかもな」
「手駒か」
誰かがその言葉に微妙な反応を示した。
「どうした？」
「いやな、あのギルフォードって奴、若しかしたら俺達が思ってる以上にとんでもない奴かも知れないぞ」
「どういうことなんだ？」
「ひょっとしたらもっとスケールがでかいかも知れない」
「そうなのか」
「テレビで言っていること聴いてたらな。そう思う」
「まああれは凄かったな」
それは誰しも認めることであった。その演説により知られるようになったのだから。
「けどそれだけで判断するのはあれだぜ、早計だ」
「そうか」
「そう思うぜ。まあこれからだな」
「どんな奴か見極めるのは」
「そう、これからだ」
強い言葉で応える。
「もっともすぐにわかるかも知れないがな」
「さて、ギルフォード侯爵か」
「どんな奴かな」
「そろそろ次のスレ頼むぜ」
「ああ、今から立てるからな」
そんな話がネット掲示板で為され、巷でも同じような話が行われ

た。とりあえずは彼等はギルフォードについては今は噂話や憶測の域でしかなかった。だがそれは急激に広まっていた。すぐにエウロパ全土にまで満ちたのであった。
これは病床にあるペーチの耳にも入っていた。彼はその話を見舞いに来たボーデーから聞いていた。
「そうか」
白い病室であった。ベッドもシーツも全て白である。その白い部屋にペーチは横たわっていた。
個室である。だがごく普通の個室であり何も豪奢なところがなかった。それが贅沢とは全く縁のないペーチの性格や嗜好をよく物語っていた。
「彼の名が知れ渡っているのか」
「彼！？」
ボーデーはその言葉に反応を見せた。
「若しかして彼のことを御存知なのですか？」
「ああ、一度会ったことがある」
彼はボーデーに顔を向けてこう言った。
「私の家に来たのだ。講和会議が終わった後に」
「そうでしたか」
「凄い者が現われたと思ったが」
「早速動きはじめていますな」
「彼は将来エウロパに大きな風を起こすだろう」
「風を」
「そしてその風が。エウロパを救う」
確かな声であった。語るその顔も病でやつれているが決して弱々しいものではなかった。
「必ずな」
「ただ、政党は違うようになるかと」
ボーデーはそれを残念そうに述べた。これは政治家にとっては憂慮すべきことであった。エウロパの者としては歓迎できてもである。

ここがどうにも複雑でありボーデー自身内心苦笑いを浮かべていたのであるが。
「彼の発言はどちらかというと保守派のそれですから。我々にとっては」
「いや、その心配はない」
だがペーチはその心配を打ち消した。
「それはまた何故」
「彼は。政党や派閥には捉われない人間だ」
「ということはまさか」
「そうしたものを越えて動くだろうな」
「そうなのですか」
「おそらく。それでも事を為すだろう」
彼は言った。
「彼ならば可能だ」
「英傑というわけですか」
ボーデーは彼が何を言いたいのかわかった。
「エウロパに現われた」
「そうだな」
ペーチはその言葉に頷いた。
「彼は。英傑だ」
「エウロパにとって救世主となるでしょうか」
「エウロパの天命がまだ尽きていないならばそうなるだろう」
ペーチの言葉は静かだったが確かなものであった。
「ノルンもクロノスも見限っていなければな」
「何か少し不安になりましたが」
そうした神々の名を聞くとどうにもそうした感情を抱いてしまうことは否定出来なかった。時の神というものは実に気紛れな存在であるからだ。
「まあ大丈夫だ」
ペーチはまた言った。

## 第二十部第四章　彗星の如くその六

「今はまだ。エウロパの市民達も健在だ」
「はい」
この場合の健在とは何か。彼等はわかっていた。
「心はしっかりとしている」
「ですね」
「そうである限りはな。まだまだ大丈夫だ」
「敗戦の衝撃こそかなりのものでしたが」
「それも。彼が復興させる」
「ギルフォード侯爵がですね」
「彼ならば必ずやってくれる」
ペーチのその言葉は期待を込めたものであった。彼のギルフォードへの信頼は揺るぎないまでであった。
「きっとエウロパを新しい時代に導いてくれるだろう」
「長い間我々はこの銀河の片隅に追いやられていました」
「うむ」
連合と比べて比較にならない程に狭い場所に。彼等は一千億年暮らしてきた。その中ではやはり鬱屈した気持ちも抱いていた。彼等は閉塞感にも苛まれていたのである。
「それが終わる時が来ようとしているのですか」
「どうなるか、結末はわかりはしないが」
ペーチはまた述べた。
「しかし。変わることが事実だ」
「ええ」
「変わらないことを苛立ちとにかく変わることを期待する」
また述べた。
「人はそうしたところが確かにあるからな」
「それは確かに」

人の一面である。変わらないまま閉塞感に耐えられなくなるのだ。これもまた人間の性質の一つである。その変わらないことに苛立ちを覚えそこから変化してそれを脱却しようとする。それが時として思わぬ効果や結果を出すのである。
「今エウロパがそうした時なのだ」
「一人の英雄によって」
「かって我々は一人の英雄によってここまで辿り着いた」
「ブラウベルグによって」
「彼の名は。銀河からは消えてしまったが」
「無念なことに」
ボーデーは俯いてしまった。ブラウベルグ回廊は割譲されマラッカ回廊となった。あの忌まわしいシンガポールの前にある海峡からとられた。それを思うだけで連合の者達の勝ち誇った顔が思い浮かぶようであった。
「しかし。もう一人の英雄が今得られたのだ」
「彼はブラウベルグ以来ですか」
「歴史上英雄は何人か出た」
「ええ」
確かにいた。ここぞという時に。
「カエサル然りナポレオン然りな」
「彼等の様な存在であれば今のエウロパをどう見るでしょうか」
「その時のローマやフランスよりはましではないかな」
ペーチは静かにそう述べた。
「中だけはな」
「中だけは」
「外は。あれ程巨大な敵がいたかどうか」
「連合が」
「彼等の存在がエウロパにとっては最大の脅威なのだ」
敗戦以上に。彼等に抱く恐怖心は途方もないものなのだ。
「四十倍か、今は」

「はい」
「数は力だというが。確かにな」
「どうしようもありませんでした、結局は」
敗戦の悔しさまでこみ上げてきた。
「新たな時代になればこの関係が逆転するでしょうか、いえ」
ボーデーは言葉を言い換えた。

## 第二十部第四章　彗星の如くその七

「かつての。我々が彼等を支配する。そうしたようになれるでしょうか」
「それは無理だ」
ペーチはそれはあっさりと否定した。
「かつての。帝国主義時代のようには最早いかない」
「やはり」
「あの頃は我々は技術においても軍事力においても彼等を圧倒していた」
それと近代国家としてのシステムである。それ等により彼等は世界を支配していたのだ。
「だがそれは今や。彼等の方が」
「我等を圧倒していますか」
「連合の人口は途方もなく増え続けている」
そして国力も。まずこれがあった。
「それに対して我々は。遥かな銀河の果てに辿り着いても」
「そこをどうにかしていくまでには時間がかかりますね」
「かなりの時間がな。どれだけの時間になるのか」
「様々な問題も起こるでしょうし」
「それもある」
ペーチは言う。
「その間に連合はさらに技術を進め」
「システムも作り替え」
「さらに強大になっている。地力がそもそも違う」
「彼等には勝てないですか。かってとは違い」
「数百年は無理だろう」
ペーチにとってもそれは悲しいことではある。彼もまたエウロパの者であるからだ。

「どれだけ頑張ってもな」
「無念な話です」
「最悪若しその新天地に辿り着く」
そう述べると返事が返ってきた。
「はい」
「そこに異なる知的生命体がいたならば。摩擦が起こるぞ」
「ＳＦ小説のようにですか」
「若しくは我々が開発をしている間に連合がすぐ側までやって来る」
「それは」
「有り得なくはない」
未来にもまた暗澹たる種が存在していることもまた事実であった。ペーチはだからこそあえて言うのであるが。
「そうなっている場合。連合は今よりさらに恐るべき勢力になっている」
「そうなるのですか」
「彼等は全てを飲み込む」
連合は雑多な文化や宗教、勢力の寄り合い所帯である。エウロパもそうなのであるがそれの桁が違うのである。設立当初から多くの国家を抱いていたからである。民族の数もまた途方もないものであるのだ。既存の民族だけでなく復活した民族まであるのだから。
「我々以外は」
「他の知的生命体までも」
「そうかもな」
ペーチは天井を見て呟いた。
「それが我々の様に意固地なまでに彼等を拒まないか、マウリアの様にどうしても彼等が受け入れられないものではない限りはな」
「彼等の中に入ると」
「少なくともこのまま開拓と膨張は続く」
それが連合の歴史であるから言うまでもないことであった。
「果てしなくな。四兆がさらに五兆になり」

「銀河、そして宇宙に満ちますか」
「だからこそだ。我等とまた別の場所で衝突する可能性もあるのだ」
「ううむ」
それを聞いて思わず唸る。
「そうなった場合も考えておかなければな」
「それでも動かなくてはならない時なのが」
「辛くもあるな」
「はい」
ボーデーはまた頷いた。
「だが今こそ動く時なのだ」
ペーチの言葉が病床のそれとは思えないまでに強くなった。
「英雄が我等の下にいる」
「彼によって」
「エウロパは動く。そして」
「未来を掴み取ると」
「そうだ」
越えは強いままであった。
「果てには何かがある」
「何かが」
「そして。それは変えることもできる」
「暗い結末であっても変えることが」
「運命は、複数用意されている」
それがペーチの運命に対する考えであった。

## 第二十部第四章　彗星の如くその八

「選択によってそれは変わっていくのだ」
「努力次第で」
「だから。我々はこれから選択を慎重に選ばなければならない」
「未来の為にですね」
「それは出来る筈だ」
彼は言う。
「今までそうしてきたのだから。きっと」
「必ずや」
「時として選択を誤ることもあるだろう」
こう付け加えもした。
「しかし複数あるのは事実だ」
「その中からよいものを選び出すと」
「最良のものならば言うことはないがな」
そう述べてにこりと笑った。力のない笑みになっていた。
「そうでなければ」
「次善のものを」
「うん」
「ギルフォード侯爵はどうなのでしょうか」
「彼ははっきりしている」
ペーチは述べた。
「最善か。若しくは」
「最悪、ですか」
「そうだ。どちらかだ」
「できればこうであることを望みます」
ボーデーはそれに応えて言った。
「エウロパにとって最善であり連合にとって最悪であると」
「そうだな。それにこしたことはない」

「はい」
「だがエウロパはこれからどうなるかな」
「暫く苦労することになることだけは確かですが」
「それをかなり和らげることができるのが優れた指導者だがな」
そうした意味でも国家に指導者は必要なのである。とりわけ危機に陥っている時じゃ重大事には、である。指導者がいた為に救われる場合もその逆もよくあることである。
「彼は力はある」
「ありますか」
「すぐにわかるさ」
ペーチは天井を見上げてそう述べた。
「すぐにな」
「ではそれを見届けさせてもらいます」
「私は生憎そうはいかないようだがね」
また力のない笑みを浮かべた。
「だが頼むよ」
「わかりました」
こくりと頷いて答える。
「それではそれもまた」
「卿の仕事になるな」
「回想録という形になるかも知れませんが」
「それはそれでいいのではないか」
ペーチは言った。
「自分の本が出せるのなら。私も小説なら出したかったが」
「首相」
「生憎そうはいかなかった。どういうわけか政治家になって首相になってしまったな」
「それは首相にとってよくはなかったと」
「いや、そうは思わない」
それには首を横に振った。

「これもまた運命なのだろう。複数あったうちの一つだ」
「左様ですか」
「小説家になる運命もあっただろうが。しかしな」
彼は言う。
「これはこれで何かと色々経験できた。悔いはない」
「ありませんか」
「あれば今頃ここで愚痴を言っていることだろう。こんなことなら小説家として人生を送りたかったとな」
「それは」
ボーデーもその言葉には苦笑いを浮かべてしまった。
「もっとも私には文才はなかったのだがね」
ペーチも苦笑いを浮かべてきた。

## 第二十部第四章　彗星の如くその九

「小説は一作も書いたことがない」
「はあ」
「読むだけだった。昔から書きたいとは思っていても」
「読むだけでしたか」
「それだけで満足していたところもあったしな」
若き日を思い出していた。文学のことばかりを考えていた学生の時を。もう遠い過去である筈なのに今ではほんの数日前のことのようにも思える。それが不思議な感触であった。
「本を読めるだけで」
「よかったのですか」
「それだけでな。他は何もいらなかった」
青春時代である。誰にもある時代だ。
「しかし歳をとるとな」
「違いますね」
「色々と物入りになる」
歳をとるということはそういうことでもある。子供の頃はただ遊んでいられればそれでよくとも大人になるにつれ色々と持っていなければならないことが増えていく。歳をとるということはそういうことでもあるのだ。ペーチは今それを病床で語っているのである。
「難儀なものだ」
「けれどそれを持つのもまた楽しい」
「それもあるな」
その言葉にも頷くものがあった。
「いらないものもあるがそれ以上に持っていていいものが多い」
「はい」
「私はそれにも満足していたのだろうな」
また自分のことも思いを馳せる。

「だから。小説を書かなくてもよかった」
「満足されていたからですか」
「小説を書ければ幸せだっただろうがもう充分過ぎる程幸せだったからな」
だから小説を書く幸せを楽しまなくてよいと言っているのだ。彼は無欲であった。
「ならそれでいい」
「そうなのですか」
「卿はどうかはわからないがな」
「私は見届けてみます」
またこう言った。
「ギルフォード卿とこれからのエウロパを」
「頼むよ」
「首相もできることなら」
「では頑張ってみるか」
彼はその言葉を受けてこう述べた。
「もう少しだけ生きてみる」
「是非共そうして下さい」
ボーデーもそんな彼を励ます。
「人間やはり生きていなければ何にもなりませんから」
「そうだな」
ペーチもそれに賛同した。
「それではな」
「はい」
「これから少し頑張ってみる。宜しく頼むよ」
「ええ、わかりました」
ボーデーはにこりと笑って言葉を返した。
「それではこちらも」
「うん」
握手は出来なかった。ペーチはそこまで健康ではなかったからだ。

だが二人は心で握手をした。それで充分であったのだ。
「ではな」
「はい、また」
ボーデーは立ち上がった。そして病室を後にする。
「またお伺いしますので」
「その時は本を頼めるか」
「本ですか」
「小説か詩集で何かいいのがあれば頼む」
「わかりました。それではそれを」
「うん、宜しくな」
笑みを交あわせて別れた。ボーデーが去るとペーチは病室に独りになった。すると急に心の中を寂寥感が覆うのであった。
「また会えればいいがな」
そう呟いた。そのまま眠りに入った。

## 第二十部第四章　彗星の如くその十

八条がギルフォードの話を聞いたのは丁度地球に戻った時だった。この時彼は自身が理事長となっている日本の学園について話を聞いていた。

「制服はこの様に幾つか種類をもうけていますが」

学園の者がテレビ電話を通じて彼に説明をしていた。

「ですが普及率は」

「今一つなのですね」

「というよりは皆私服のようなものだと思っています」

学園の者は困った顔をしてそう述べた。

「詰襟にしろブレザーにしろ。どれか一つだとは思っていません」

「リーズナブルでお洒落な学校の提供物といったところですかね」

「そうですね、そういった感覚のようです」

学園の者は八条のその言葉に頷いた。

「とりわけ女子学生は」

「まあ仕方ないですね」

八条はそれを別に咎める様子はなかった。

「学校は軍隊ではありませんから」

「はい」

「取り立てて奇妙な服装以外はいい場所ですからね」

「ええ、まあ」

連合ではあまり制服というのは流行らない。あってもファッションの一種のように思われている。学生では特にそうであり殆どの学校で制服と私服を併用しているのである。この八畳学園でもそれは同じである。

「髪形も」

「はい」

学園の者はまた頷いた。

「これといって出鱈目なものでなければ」
「髪を染めたり脱色程度ではね」
「何でもありませんから」
そもそも混血で様々な髪の色の人間がいるのに何を今更な話である。連合では昔から髪を染めたり脱色したりするのは別に構わないことになっている。この時代は髪を傷めない技術が確立されているので染めようと思えば染め放題である。実際に青や緑といった普通はない髪の色の者もいる。
「髪や服装に関する規制は別にいいです」
八条は述べた。
「幾ら何でもモヒカンや辮髪やちょんまげはそうはいないでしょうから」
「あれはまあ」
学園の者もそれ等の髪形に関しては苦笑いを浮かべるだけであった。
「洒落にならないですから」
こういった髪形は所謂不良の髪形とされている。リーゼントやアフロ、パーマがごく普通の髪形であり、そういった髪形ではアイデンティティを発揮できないからである。気合の入った不良はそういった髪形をするのが連合である。
「普通はしないですけれどね」
「ある意味ああした髪形をするのは勇者です」
八条はこうも言った。
「ですからこれも書く必要はありませんね」
「はい」
「軍隊とも違いますし」
流石に軍は学校とは違う。正規の定められた軍服を着なければならない。着ないと捕虜になった時等に正規兵扱いされず容赦なく殺されてしまう。だからこれに関しては厳しい。髪形に関してはあまり取り決めがない。だがまずちょんまげで軍服を着てはお笑いにし

かならないのでこれもまたいない。
「学校の校則は法律程度でいいです」
「大昔は下着まで決められていたそうですが」
「滑稽と言えば滑稽ですね」
八条はそれを聞いて言った。
「そんなことまで」
「全くです」
これには学園の者も同意であった。

## 第二十部第四章　彗星の如くその十一

「下着なぞ。どんなものを身に着けようが」
「流石に女生徒がトランクス、男子生徒がショーツではまずいでしょうが」
「ですね」
　これは幾ら何でも変態である。男装や女装もあるにしてもだ。
「最近褌が流行っているそうですが」
「まだあったのですか、あれ」
「ええ。やはり不良達の間で。流行っているそうです」
「何故また」
「気合が入るからだと。よくわかりませんが」
「はあ」
　八条もこれには何と言っていいかわからなかった。連合もエウロパもサハラも、そしてマウリアでも下着は男はトランクス、女はブラとショーツだと殆ど決まっている。それでいきなり褌とはやはり面食らうものがある。
「覚悟の証だそうです」
「それはわかりませんね」
「私もです。力士だけだと思っていました」
　相撲では流石に違う。力士は褌である。
「男だけのようですが」
「まあそれもいいです」
　八条は困惑を残しながらもそれに答えた。
「下着にしろいちいち何かを言っていては」
「はい」
「何の意味もありません。他に幾らでも見るべき場所はありますから」
「そうですね」

「しかし学生達も色々あるようですね」
そういった話を聞いていてそう思った。
「話を聞いていると」
「まあ青春時代ですから」
「もう遠い時代のようですね」
八条はその言葉にうっすらと笑った。
「今では」
「一度学園に来られてはどうでしょうか」
学園の者はそう提案してきた。
「学園に」
「はい、何かとお忙しいでしょうが」
「ふむ」
それを聞いて興味を抱いたような顔になった。
「時間さえあれば。理事長として」
「時間があればですが」
つい苦笑いを浮かべてしまった。
「今は少し。日本に戻ることすらままならない状況ですから」
「では仕方ありませんか」
「当分は。今の仕事が終わってからですね」
「わかりました。それでは」
「ええ、では引き続き留守をお願いします」
「はい」
こうして電話での話し合いは終わった。八条にとっては久し振りの政治以外での仕事の話で頭の切り替えもできた有意義な話であった。
話が終わると政治の仕事に戻った。地球に戻ってもやはり仕事の量は相変わらずだ。
「戦後処理ですか」
一枚の書類を見て述べる。
「来るとは思っていましたがそれにしても」

莫大な量の書類であった。それを処理していかなければならない。八条はすぐにそれに取り掛かった。
処理自体はかなりの速さであった。彼は事務処理能力にも優れていたのだ。その結果とりあえず今机の上にあった仕事を終わらせたところで。木口が部屋に入って来た。
「次の仕事かい？」
「いえ、今日は打ち止めです」
「そうか、それは何よりだ」
仕事ではなくてまずは一安心だった。
「それじゃあ何だい？」
「ニュースです」
「いいニュースか悪いニュースか」
八条は次にこう尋ねた。
「それか両方かな」
「今のところどうなるかわからないニュースです」
木口の返答はこうであった。
「それで宜しいでしょうか」
「ああ、それでも構わないよ」
八条は笑顔で頷く。女性だけでなく同性愛者まで痺れさせる笑みだ。だが本人には自覚はない。
「じゃあ教えてくれ」
「はい、エウロパにおいてですが」
「エウロパに」
それを聞いて内心悪いニュースなのでは、と思ったが今は口には出さなかった。そうだとわかった時の為にそれは取っておいたのだ。

## 第二十部第四章　彗星の如くその十二

「はい、一人の人物が姿を現わしました」
「メシア、ということはないな」
「少なくともジーザス＝クライストではありません」
「彼ではないか」
「それに預言者はもう出ませんし」
木口は笑ってイスラムの話を出してきた。
「ですからそれではないです」
「そうか」
「一人の男がテレビに現われました」
「エウロパの！？」
「はい、テレビ演説においてエウロパの者達の心を急につかもうとしている男です」
「その男の名は」
「ウォルター＝ギルフォード」
木口はその男の名を出してきた。
「イギリスにおいて代々侯爵の爵位を持つ名門の出身だそうです」
「門閥貴族か」
「言うならばそうです」
「その侯爵が何をしたのだ」
「突如として現われた演説でエウロパの者達の心を掴んでいるようです」
「政治家か！？」
「今の時点では違います」
木口は述べた。
「少なくとも選挙にも出てはいません」
「そうなのか」
「ただ、先の戦争には参加していましたが」

「ほう」
それを聞いた八条の目が少し光った。
「どの戦いにだ？」
「ニョルズの戦いです」
「ああ、彼か」
それを聞いて一体誰なのかわかった。
「先陣でタンホイザー元帥と共に戦っていた。彼なのか」
「はい、おそらくは彼です」
「よし、わかった」
それを聞いてあらためて頷く。
「彼だったのか」
「ただ、実は正規の軍人ではなかったようです」
「志願していたのか」
「エウロパの危機に。まあこえは多くの貴族と同じですね」
「そうだな」
エウロパ貴族はエウロパの危機にはまず馳せ参じて戦場に向かう。これが高貴なる者の義務の一つなのだ。彼等は戦場で戦いその義務を果たすのである。
「そしてニョルズで戦ったか」
「あの戦いは義勇軍優勢だったが」
それでもエウロパ軍は健闘したとされている。確かに敗北寸前であり途中でマウリアの仲裁がなければ大変なことになっていたとしてもだ。
「そこにいたのか」
「はい」
木口は応えて頷いた。
「軍人としては優秀なようですね」
「少なくとも素養はあるな」
八条にもそれはわかった。
「だが政治家としてはどうかな」

「それはこれからわかることですかね」
「そうだな、これからだ」
そのうえでこう述べた。
「見極める必要がある」
「ええ」
「大したことがなければそれでよい」
「大物であったならば」
「その時だ」
八条の目がいささか鋭いものとなった。
「手を打たなければならない」
「それはエウロパ全体にでしょうか。それとも」
「勿論エウロパ全体にだ」
八条の返事はこうであった。
「彼一人をどうこうしてもな」
そうした謀略は八条はどうも苦手なのだ。政治的な謀略は知っているがそれでも使うか使わないかは別である。八条は謀略やそうした類を使わない政治家なのである。こうした政治家も存在する。

## 第二十部第四章　彗星の如くその十三

「仕方ないだろう」
「これからもエウロパは我等の敵というわけですか」
「連合にとっては永遠に敵なのかもな」
八条はまた応えた。
「彼等という存在は」
「左様ですか」
「そのうえでだ」
彼は言った。
「必要とあらば手を打つ」
「エウロパ全体を封じ込める」
「まずはアタチュルク要塞か」
ニーベルング要塞の改称である。
「ここに一大軍事基地を築く」
「はい」
「ガンタースに匹敵するものをな。そして」
彼の戦略は続く。
「マラッカにもだ」
「回廊にも」
「そこは中継基地だな」
ガンタースとアタチュルクをつなぐ基地だ。彼はそれも考えているのであった。流石と言うべき慧眼であった。
「同時にいざという時の為の」
「備えですか」
「何があるかわからないのが戦争というものだ」
彼は言う。
「陥落しない要塞もまたない」
「どうやっても陥落す時は陥落すると」

「セバストポリがそうだったな」
「あれですか」
かってロシア、ソ連がクリミア半島に置いていた大要塞である。クリミア戦争ではこの要塞の攻防が主な戦争であった。ロシアの黒海進出の重要な軍事拠点でありこれを陥落させられるかどうかがクリミア戦争の焦点であったのだ。
結果は攻め手であるイギリス、フランス、トルコ。そしてサルディニアの勝利であった。要塞は陥落しロシアは敗北した。しかりそれにより攻め手であるイギリス等の損害は大きなものであった。ここで傷ついた兵士達の為に活躍したのがナイチンゲールである。なお彼女はこの戦争の後で看護婦界のフィクサーとなりその発展に大いに貢献することとなる。晩年は寝たきりで目も耳も見えず、聞こえなくなっていたがベッドの中でよくこう呟いていたという。
「私の兵士達・・・・・・」
と。彼女は死ぬ間際までクリミアの兵士達のことを忘れていなかったのだ。
「あの要塞も陥落した」
「クリミア戦争で一度、第二次世界大戦でもう一度」
「二度陥落している。難攻不落である筈がな」
「そういうものですか」
「二度目はまた相手が悪かったが」
「マンシュタインですか」
「ああ」
当時のドイツ軍きっての知将である。プロイセンからの軍人の名門に生まれアルデンヌの戦いにおいてはその作戦を立案している。それまでのドイツ軍のフランスへの作戦は第一次世界大戦の時のシュリーフェン＝プランから何等変わっていなかった。無論フランスもそれがわかっていたからドイツとの国境にマジノ線という防衛ラインを敷いてそれに対抗したのだ。だがマンシュタインはそれに対してアルデンヌの森を戦車で突破してフランスに雪崩れ込む作戦を

考え出したのだ。
結果は成功だった。ドイツ軍とフランス軍の戦力は拮抗していた。そのうえフランス軍はイギリスが同盟国にいた。だがそれでも為す術もなく敗れ去った。瞬く間にパリまで入城されフランスは降伏したのである。ルーブルにヒトラーが入りその美を楽しむという一幕もあった。

## 第二十部第四章　彗星の如くその十四

そのマンシュタインはクリミアでは重砲部隊を動員してその火力でセバストポリを陥落させた。黒海の要衝はこうしたように二度も陥落の憂き目を遭っているのである。
「陥落したのは事実だ」
「ではアタチュルクもまた」
「こちらが相当なミスを犯すかあちらに驚異的な軍事的天才が現われれば」
彼は言う。
「陥落するだろうな」
「左様ですか」
「残念なことだがな」
「それへの備えと」
「備えあれば憂いなしだ」
昔からある言葉だった。
「二重三重に備えはしておく」
「それでは」
「また計画を立てなければならない」
既に頭の中にそれは浮かぼうとしていた。
「エウロパへの備えをな」
「ギルフォード侯爵、果たして」
「若しかすると我々にとって第二のブラウベルグ総統か、それとも」
八条の目がまたしても鋭く光った。
「アレクサンドロス大王かそれともナポレオンか」
「ヒトラーかスターリンかも知れません」
「いずれにしろ脅威になるのは間違いないだろうな」
「ええ」
木口はまた頷いた。

「エウロパもですね」
「彼等は何処に向かうか」
「今の彼等は袋小路ですが」
「それを抜け出すには何をしてくるかだな」
「はい」
その言葉に頷いてみせる。
「サハラに向かうか」
「こちらに来るか」
「こちらに来るとなれば玉砕覚悟だろうな」
「今ではサハラもそれに近いですね」
「北が纏まってしまったからな」
「ええ」
ティムールが押さえてしまった。こうなってはちょっとやそっとでは手は出せないのだ。
「こちらは備えをしておけば」
「彼等はさらに道がなくなります」
「だが行くべき先はまだある」
「それは一体！？」
「東と南が駄目ならば」
東は連合、南はサハラである。
「北と西がある」
「暗黒宙域ですか」
「そこを突破して遥かな新天地を目指すか。そうした道もある」
「それはいささか辛いのではないでしょうか」
木口は懐疑的な声でこう言ってきた。
「何十万光年もの距離を突破するというのは」
「やはり辛いと思うか」
「勿論です」
彼は述べる。
「それができれば彼等はとっくにしているでしょう」

「ふむ」
「それだけは無理です。我々の技術でも不可能なのですから」
何もない場所を突破するということがどれだけ困難なことなのか。木口はよくわかっていた。何十万光年というと銀河系の幅よりもある。連合ですら銀河の大半をその勢力圏に収めていてもそこまでの距離は踏破してはいない。エウロパの技術では不可能だと思われた。
「幾ら何でも」
「常識で考えればそうだな」
「はい」
木口は答えた。その返事にも迷いがない。
「我々ですらまず無理だというのに」
「一回で行こうと思えばな」
「といいますと」
「これは我々が行った場合のことだが」
八条はそう断ったうえで述べる。
「中継地を設けていく」
「中継地ですか」
「そうだ、人口太陽等を作ってな。そして恒星も作っていく」
「そして徐々にですか」
そう問うた。
「中継地だからそれ程の規模のものは要らない。それをワープ可能な距離ごとに設けていくのだ」
「そうして新たな場所を目指すと」
「これならいけるのではないのか」
「そうですね」
木口はまずそれに頷いた。それは肯定であった。

## 第二十部第四章　彗星の如くその十五

「それならば問題ありませんね」
「そうだな」
「ですが」
だがここには大きな問題点があるのだ。木口はそれに関して言及してきた。
「それが彼等に可能なのでしょうか」
「今の彼等の技術では無理だな」
八条もそれはわかっている。あっさりと述べた。
「人口太陽の技術は彼等は持っていない筈だ」
「はい」
「少なくとも我々のものより高度なものはな」
連合はいざとなればその手で星系を作れるところまでその技術を高めている。海王星や冥王星の様な惑星ですら地球の様に適度な状況に作り変えることも可能になっている。そうした技術は連合のものでありエウロパのものではない。だから進出する場所も限られ人口問題に悩まされているのだ。
「作られはしない」
「では今のままでは無理であると」
「そうだ」
彼は言った。
「とても何十万光年の距離は無理だろう」
「やはりそう思われますか」
「しかしだ」
だが木口はここで付け加えた。
「目指すというそのことに関しては問題はない」
「はあ」
何か八条の言葉に今一つわかりかねるところが出て来た。

「そう思うことがまず大事だ」
「果てを目指そうと」
「我々にしろそうではないのか？」
彼はここで自分達に話を振ってきた。
「私達がですか」
「銀河の果てを目指すということがな」
「まあ我々にとって開拓と進出は国是ですから」
連合は拡がっていくことを理想としている。そうして発展してきた勢力なのである。
「それは当然のことです」
「そうだ。それをエウロパも持ったならば」
「暗黒宙域を突破出来ると」
「必ずな」
八条は述べた。
「彼等にしてみればそうしないと待っているのはこのままジリジリと衰退していく暗い未来だけだ」
所謂ジリ貧である。
「そんな未来を誰が受け入れられるか」
受け入れる者はまずいないであろう。これもまた言わずともがなであった。
「だからこそだ」
「進出すると」
「そう、暗黒宙域の果てにな」
彼は述べた。
「それ以外に道はないのだからな」
「かなり苦難の道ですね」
可能かどうか、考えたくなくなる程の。途方もないものである。
「我々でもかなりの苦難です」
「それを彼等が為し得るか」
「第二の大航海時代と言えば聞こえがいいですが」

「まず無理だと思うのが妥当だな」
「ええ」
木口はそう答えるしかなかった。
「普通に考えますとエウロパはこのまま衰退して枯死しますが」
「弱小勢力として残存するか」
やはり碌な未来ではないことだけは確かだ。

## 第二十部第四章　彗星の如くその十六

「それでも進出しますか」
「サハラに攻め込むことも考えられるが」
「それはまず失敗するでしょうね」
「おそらくはな」
もうサハラもかってのサハラではない。あの戦乱に明け暮れた北方はもうないのだ。シャイターンという強力な独裁者に率いられたティムールという国はあれども。
「侵攻するにしろ時と場合が限られている」
「はい」
「やはり彼等の目指す先は暗黒宙域の先だ」
「そこしかありませんか」
「ないな」
はっきりと言い切った。
「まずは何かと準備が必要だな」
「進出の為の」
「それを整えてから暗黒宙域に乗り出し」
「そこから徐々に何十万光年も突破していく」
「辛いな」
口にしただけでそれがすぐにわかる。
「辛いですね」
二人の意見はここで見事に一致した。
「ですがそうしないと未来は掴めない」
「彼等はな」
「何か残酷な話ですね」
木口はあらためてそれを認識した。
「我々はすぐ目の前に幾らでも進出すべき場所を持っているというのに」

「運命の神というのは非常に気まぐれなものだ」
八条はいささか冷たい声でそう述べた。
「ある者には幸運を、ある者には不幸を与える」
「はい」
「その幸福と不幸を与える規準というものは何一つ存在してはいない」
「全くの運ですか」
そこまで聞いてこう述べた。
「その運命の神は我々には無限の開拓地を与えてくれた」
「エウロパには限られた場所と暗黒宙域を」
「これが公平だとは誰も思わないな」
「確かに」
公平だと言える者がいれば少し頭がおかしいか、それとも何か特別な宗教か哲学を持っているかだ。どちらにしろややこしい人物なのは間違いない。
「だがそれでもその中で生きなくてはならない」
「運命の中で」
「我々にしろエウロパにしろだ」
国家も勢力もそれは同じなのだ。
「乗り越えられれば別の未来が待っている。乗り越えなければ」
「何もならない」
「エウロパにとってみれば何時かは乗り越えなくてはならないことだったのだ」
冷静な声でそう述べた。
「それが今か」
「成功するしかないですね」
「彼等が暗黒宙域を突破する頃は。どれだけの時間が経っているかな」
八条はふとそう述べた。
「！？」

木口はその言葉に首を傾げた。
「どういうことですか、それは」
「そのままだ。何年かかっているか」
「何年ではきかないでしょう」
木口は述べた。
「何十年どころか。百年単位では」
「百年単位か」
「はい。二百年か」
「三百年か」
「どちらにしろ我々が今こうして話している時代ではありません」
「遥かな未来か」
「その頃には我々もさらに大きな勢力になっているでしょうし」
百年後には人口は十兆に達しているだろうと予想されている。進出場所もさらに拡大されていることもまた予想されているのだ。連合はさらに拡大する運命にあるのだ。

## 第二十部第四章　彗星の如くその十七

それに対してエウロパは。やはり辛い運命にある。道は全て塞がれている。その道をどうするか、ということからはじめなければならない状況にあるのだ。やはり連合とエウロパとでは置かれた状況がまるで違う。このことが両者の運命をはっきりと分けていたのだ。
「例えばだ」
「はい」
木口は八条の言葉に顔を向ける。
「我々が異なる知的生命体で出会ったとする」
「ええ」
これは千年も前から考えられていることだが今も遭遇してはいない。幸か不幸かは別にしてだ。
「その場合向こうが好戦的でもない限りは我々にとっては拒む理由はない」
「まあそうですね」
「我々は餓えてもいなければ戦争を求めているわけでもない。住む場所もある」
「戦う理由がないと」
「そうだ。何だかんだで銀河には土地が有り余っているしな」
「ではその知的生命体が連合に加わりたいと言えば」
「迎えられるだろうな」
八条は述べた。
「それにだ」
「はい」
「これを言うとあれだが」
八条は少し苦笑いになった。
「他の知的生命体の文明でもマウリアのそれよりは理会し易いではとも思うしな」

「あそこは特別です」
木口もそう考えていた。
「あれはもう。そうそう理解出来るものではありません」
「そうだな」
「まあかなり相互理解が困難な知的生命体も出て来るでしょうが」
「うむ」
その言葉に頷いてみせた。
「連合に入りたいというのなら拒む理由はないかと」
「そういうことだな」
「はい。勢力が拮抗している場合は別ですが」
「銀河単位の勢力か」
八条はそれを頭に浮かべ何か考える顔になった。
「今後遭遇する可能性もあるな。そうした勢力と」
「可能性はないわけではありません」
「そうした勢力が戦う理由があったならば」
「こちらも全力で向かわなければならないでしょうね」
それだけは確かであった。例え連合といえども、である。
「そうしたことがないことを祈るが」
「こればかりは。わかりませんね」
「とりあえずこれから我々もそれを考慮に入れておかないとな」
八条はあらためて言う。
「はい」
「それからだが。まあ銀河系にそうした知的生命体はいないのは幸運だったか」
「幸運と言えばそうなりますね」
「おかげで我々は産業の発展と惑星の開拓に専念することができた」
これは確かに幸せなことだった。だからこそ連合は四兆の人口を持つ強大な勢力になり得たのである。
「それが後どれだけ続くかだな」
「銀河周辺の星団や星雲には知的生命体がいる可能性も指摘されて

いるものもありますが」
「だが強大な勢力ではないな」
「はい」
「ではまだ安全ということか」
「そう思います」
「しかし銀河単位でものを考えていくとは」
八条は顔を少し上げて遠くを見る顔をした。

## 第二十部第四章　彗星の如くその十八

「途方もないな。今一つピンとこない」
「確かに」
「実感が湧かないものもある」
そこまで話が大きくなると流石によくわからなくなってくる。これは否定出来なかった。
「何が何なのか」
「この銀河でさえまだ端には達していませんし」
「銀河の端に達するのはどれだけ先かな」
「二百年はかかるかと」
「周辺の球状星団等を含めてか」
「ですね」
そう応える。
「私はいないな、その時には」
「私もですが」
木口は八条のその言葉に思わず笑ってしまった。流石にそこまで生きられる人間は存在してはいない。
「そこまではやはり」
「有り得ないか」
「人間の寿命は精々一五〇年です」
この時代の平均寿命は一〇〇に達しようとしているが流石に不老不死というものは存在しない。それがあればそもそもこの世というものが成り立たなくなる。全ての存在は死ぬ。それだけは如何ともし得ないものであるのだ。死なないということは有り得ない。この世のおそらく唯一の絶対の真理であるからだ。
「二百年はやはり無理です」
「そうだな。それから先は次の世代か」
「そうなります」

「若しかしてだが」
八条はまた述べた。
「我々が将来進出する銀河と彼等、エウロパが進出する銀河が同じであるならば」
「その時はまた戦争ですね」
「そうなる運命か、やはり」
「避けられはしないかと」
「その時は先のようにはいかないだろうな」
「先のようにとは」
「この戦争は正直勝ち過ぎた」
八条は言う。
「ここまで一方的な勝利を収めた戦いは稀だ」
「まあそうですね」
木口もそれはわかっていた。
「正規軍の損害は僅か一個艦隊規模」
「参加兵力六〇億に対して百万程度」
「義勇軍は九〇〇万程ですが」
「それを入れても一千万程だ」
「それに対してエウロパ軍は一五〇個程の艦隊を失い」
「人員は二億か三億か」
連合では間違いなく政権が崩壊する規模である。
「お話にもならない差です」
「その理由は色々あるがな」
「はい」
「装備もあれば数もある。我が軍が犠牲を極力避けたせいもあるが」
志願制の為後の志願者の減少、翻っては軍の人員の減少を恐れる連合軍特有の発想である。連合軍は犠牲を嫌う軍隊である、これはかなり大きかった。無論その皺寄せが義勇軍にいっているのだが。それは否定出来ない話であった。
「だが。次はそうはいかないな」

「連合もエウロパもどうなっているかわかりませんし」
「そうだ」
流石に何百年も先のことは誰にもわかりはしない。三年先は闇という言葉もある位だ。
「今のままいくにしろエウロパはようやく暗黒宙域を越えたところか」
「我々は相変わらず拡張していて」
「そういうところか。それ以外は本当に何もわかりはしないな」
「難儀なものですね」
「そういうものだ、何時になってもな」
八条は目をしばたかせていた。考えているようである。
「未来のことはわかりはしない」
タイムマシンはこの時代でも発明されてはいない。本当に発明可能なものなのかどうか疑問視されて久しい。
「マウリアの考えでは千年なぞほんの些細な時間なのですがね」
「だからそれがわからないのだ」
八条は今度は首を捻った。
「千年の何処が些細な時間なのだ？」
「私に言われましても」
無論木口にもわかりはしない。
「彼等の時間の概念は特別なものですから」
「仏教にもそれは出ているがな」
「元々はあちらが発祥ですからね、仏教は」
これはあまりにも有名な話である。今では連合の方が仏教徒自体は遥かに多い。そう、仏教徒自体はである。ここからの話がマウリアの真骨頂となる。
「仏教はヒンズー教の一派らしいがな」
「ああ、マウリアではそう考えられていますね」
「あれがわからないのだ」
八条はまた首を傾げさせた。

## 第二十部第四章　彗星の如くその十九

「何でも釈尊がヴィシュヌ神の化身の一つだからそうなるのだそうだが」
「向こうの人間がそうだと言えばそうなるのでは？」
「そういう問題なのかも疑問だが」
「彼等の考え方でしょう、それは」
木口は言う。
「私も最初にそれを聞いた時は何を言っているのかわかりませんでした」
「全くだ」
八条にとっては珍しいことに哲学的なもので困惑した顔になっていた。
「そういう発想があったとは」
「マウリアでも仏教徒は二十世紀後半から増えているとは聞いていましたが」
「ところがそれはヒンズー教だった」
「凄いですね、確かに」
「だとするとヒンズー教はこの人類の中にある宗教の中で最大になっていたということになるが」
「そうかも知れませんね」
木口は何が何かよくわからない顔のまま答えた。
「当時のインドの人口から考えますと」
「ううむ」
これには八条も唸るしかなかった。
「恐ろしい話だ」
「恐ろしいというレベルではありませんが」
「私が理事長を務めている学校でもマウリアからの留学生がいるが」
「らしいですね」

「かなり凄いらしい。最早連合の常識なぞ超越しているそうだ」
「それがマウリアですからね」
答えになっていないようで答えになっている。これもまた連合の者がマウリアを語る時特有のことであった。
「さもありなん、です」
「君は確か教員免許を持っていたか」
「はい」
木口はその問いに頷いた。
「それが何か？」
「政治家の秘書を辞めることになったらうちに来るか？」
「八条学園にですか」
「そうだ、待遇はいいぞ」
まずはそれについて言及する。
「給料もいいし休日も多い。それに校舎も厚生施設も充実している」
「八条学園のことは私も聞いていますが」
「どうだ？私はそこの理事長でもあるしだ」
八条の肩書きは多い。八条家が古くからの名の知られた資産家であるせいで政治家以外の肩書きも実に多くなっているのである。
「何処でもいいぞ」
「何か高等部は大変そうですね」
「そうかな」
「これは友人から聞いていますが」
「まあ大したことはないだろう」
八条の返事はしれっとしたものだった。
「戦場に行くよりはな」
「比較する対象が間違っているのでは？」
「そうか？だが定時には変えられるぞ」
「だといいのですが」
「だが今は必要ないか」
「今の仕事を満喫していますので」

木口はこう答えてにこりと笑ってみせた。
「長官も秘書は多い方が宜しいですよね」
「君と由良君達でな」
「これからも宜しくお願いします」
「うん。しかしだ」
「何か？」
「軍を退かせるのがな」
「順調にいっていると思いますが？」
話はまた仕事に戻った。今度はエウロパに送り込んでいた軍の撤収に関してである。
「またえらく費用がかかるな」
「戦争は何をするにもお金がかかるものですが」
「エウロパからの賠償金がなければ大変なことになっていたな」
「しかし日本軍にいる時よりは予算への不安はないと思いますが」
「あそこは特別だ」
八条は日本軍の話を出されると苦い顔を見せてきた。
「連合にある国の中で最も予算に困っている軍隊と言われていたな」
「はい」
これは半ばキャッチフレーズと化していた。かつての日本軍は日本の国力に比してあまりにも小規模な軍隊であった。これは今の連合も実は同じである。図体が巨大な為その規模も巨大に見えるがその割合等は実はエウロパやサハラ各国と比べたならばごく些細なものなのだ。これはかつての連合各国の軍隊も同じであった。戦争がないからだ。だから必要最小限の兵力さえあればよかった。日本はとりわけ治安もよかったのでそうなった。軍隊が小規模になるのにも大規模になるのにもそれなりの理由があるのである。

## 第二十部第四章　彗星の如くその二十

だが日本軍はそれでもかなり予算が少なかった。装備と設備、そして人件費にその殆どが消え、運営費は微々たるものであった。その結果各部隊では運営に工夫に工夫を重ねる結果になってしまっていたのだ。八条をはじめとした旧日本軍出身者達のやりくりの上手さは定評があるがそれはこうしら苦労があってのこそだとも言われている。

「私もよく言われた」

「足りぬ足りぬは工夫が足りぬと」

「それで訓練はいつもある」

「少しでも訓練が少ないと」

「国民からの愛の鞭が来たな」

「訓練をしないのか、と」

「訓練をするのにも費用がかかる」

これが軍隊である。

「何をするにも費用がかかるからな」

「大変だったのですね」

「特に私はな。経補だったからな」

実際にそれをやりくりする部門だったのだ。

「何かと苦労させられた」

「それから見て今の連合軍はどうですか？」

「正直に言おうか？」

「はい」

木口は応えた。

「是非共」

「では言おう。非常にやり易い」

実に率直な言葉であった。

「こんなに予算があっていいのかと。夢の様な話だった」

「ですが他の制服組の人達はそうではなかったようですが。辛い予算配分だと」
「各国の軍隊は本当に恵まれていたのだと思った」
八条の言葉はやけにしみじみとしたものだった。
「そんなことが言えるのかと」
「日本軍は少数精鋭と言われて連合の中でも強くて格好いい軍隊だと言われていましたが」
少なくとも軍事マニア達からは評価が高かった。軍服も連合の中で最も格好いいと言われていた。その軍服はもうないが。
「内実は悲惨なものだったのですね」
「国力が高いからといって軍事費もあるわけではない」
そうもならないのだ。だからややこしい。
「特に連合はな。一五〇億の軍隊にしろ」
「ええ」
サハラの小国の人口よりも遥かに多い数である。
「総生産に対する軍事費の割合は微々たるものだ」
「まあ有り過ぎるという状況は不幸な証拠ですが」
緊張状態にあるということだからだ。
「今のままでいいのでしょうね、やはり」
「そうだな」
「軍隊の数があまりない方が」
「国家戦略を考えるうえで最低限あればな」
八条もそれは認識している。
「それでいいが」
「少なくとも現状では」
「軍事費が少なくて済むのは国家としては有り難いことだ」
「そうです」
「撤収にかかる費用はまあ膨大なものになっているがな」
「一体どれだけですか？」
「見てみるか？」

そう言葉を返す。
「何か気になりますから」
「そうか、これだけだ」
ここで一枚の書類を木口に手渡した。

## 第二十部第四章　彗星の如くその二十一

「どうだ？」
「こんなにかかるのですが？」
木口も額を見て思わず唸った。
「撤収だけで」
「エウロパ内に設けた施設の撤去もあるからな」
「それでもこれだけ」
「軍隊というものは本当にお金がかかるものだ」
八条はまたそれを述べた。
「何かにつけな」
「節約したいですが」
「そうもいかないな」
彼の悩みは次々と出て尽きることがない。悩みというものは無尽蔵に溢れ出てくる壷の水なのである。
「そうしたらそれを他に回して」
「それの繰り返しですか」
「パズルと同じだ」
「パズルと」
「足りない部分を補っていき、何とか取り繕っていく」
予算の編成とはそういうものだ。これはそうした才能が要求されるものなのだ。削るべき部分を削り、そして足りない部分を補い。そうやって編成していくものなのである。
「そういうことだ」
「しかもパーツが足りない」
「いや、連合軍はギリギリである」
八条はそれにはこう述べて笑みを浮かべた。
「日本軍はそもそもかなり少なかったが」
「それはまたえげつないですね」

「だからだ。これでも楽に思えるのだ」
「何か凄い話ですね」
「軍隊はまずお金だからな」
古来普遍の原理であった。
「それがないことには話にもならない」
「ですね」
「連合だけではないからな、これは」
「エウロパもサハラ各国もまた」
「同じだな。これからエウロパの方は何かと資金難に悩まされるだろうな」
「かといって急激な国力の拡大も望めませんし」
「さて、どうなるかだ」
八条の視線の先が一つになった。
「これからのエウロパは。それによって我々の打つ手も変わる」
「はい」
二人は頷き合った。
「エウロパに関する情報収集は続けよう」
「これからも」
「それが我々の為だからな」
彼はあらためて述べた。
「連合の為にもな」
「連合の為にも」
「エウロパに関しての情報収集を続けていくぞ」
「それではすぐにも」
「うん」
その言葉に頷いてみせる。そこから八条が見ているものは政治でもあった。
「とりわけ彼ですね」
「それは言うまでもないな」
八条の目の光が強くなった。

「ギルフォード侯爵・・・・・。果たしてどの様な人物か」
「まだ何もわかっていません」
「わかるのはこれからだ」
八条の言葉までが強くなる。
「全てのことはな」
「わかりました」
「そういうことだ」
再び頷き合う。彼等の仕事はまたはじまった。八条は地球に戻っても休まる暇がなかった。彼の休息の時はまだ先であったのだ。

# 第二十部第五章　脇役として終わりその一

脇役として終わり

ギルフォードについての調査や議論は連合においてもはじめられようとしていた。中央政府も各国も彼についてそれぞれ調べ、研究を行おうとしていたのだ。

「イギリスの貴族か」

「また嫌そうな奴だな」

こう思う者もいた。連合の人間の貴族への悪感情は最早遺伝的なものとさえなっていた。それを止めることはもうできるものではなくなっていたのだ。

「演説は上手いな」

テレビで行った演説についての分析も行われた。

「人の心を掴んで上手く自分に考えを向けさせている」

「的確にな」

「それがまず凄いな」

「ああ」

「軍人としてもいい」

次にニョルズの戦いの分析が行われた。

「ニョルズでの指揮は見事だった」

「勇敢で軍を見事に統率しているか」

「攻撃も防御も巧みだ」

これは主に軍人達によって研究されていた。それぞれの専門家に別れて研究が進められていた。今連合は総がかりでこの男に対する研究を進めていたのであった。

「それまで実戦経験なぞまるでなかったというのにな」

「とてもそうは思えないな」

ここから得られた結論は軍事に対しては先天的な才能があるということであった。ギルフォードは少なくとも戦術においては天才で

あったのだ。
「軍人になった方がよいのかもな、彼は」
「いや、待て」
だがそこでその言葉は止められた。
「どうした？」
「確かに軍人としても優れているが」
「うむ」
「むしろ彼は。政治家向きではないか」
「政治家か」
「あの演説を聞いているとな」
誰かがこう言った。
「そう思えるのだがどうだ」
「だから今出て来たのか」
研究者の一人がそれを聞いて呟いた。
「演説により」
「しかしな」
誰かが言った。
「何もなしで世に出られるのか？」
「というと？」
「彼は急に出て来たイメージがあるが。彗星の様に」
連合の者達はそうした印象を受けていた。少なくともこれまで彼の存在は知ることもなかった。イギリスにギルフォード家という名門の家があるということ位は知っている者は知っていたが。
「そんなに都合よく出て来るものなのか」
「出て来る時は出て来るものさ」
運命論的な哲学者が答えた。
「それが時代の流れならな」
「そういうものかな」
「そういうものさ。社会というものはな」
「ではギルフォードも運命の一つか」

「ただしだ」
その哲学者は口調を変えてきた。
「何だ？」
「その運命が作られたものである可能性もある」
「機械仕掛けの神か？」
「ああ」
彼は答えた。
「今我々が見ているのは舞台だ」
そう、表の世界だけである。
「舞台裏のことはそうそう簡単にはわからない。ましてやエウロパの舞台裏はな」
「舞台裏での動きもあるということか」
「可能性はないわけではないと思うが？」
「確かにな」
多くの者がその哲学者の言葉に頷いた。
「問題はそこで何をしていて」
「何があったかだ」
彼等はそれぞれの口でこう述べた。
「どうやらそこだな」
哲学者は言った。どうやら只の運命論者ではないようだ。
「問題は」
「彼が何者か、か」
「一応実家についてはある程度調べはついている」
研究者の中の一人が言った。
「イギリスの有力貴族で代々実力者を輩出している」
「名門ということか？」
「一言で言うとな」
こう返事が返ってきた。
「それもかなりの」
「では資金的には問題はないか」

政治にはやはり金がいる。とりわけ民主主義においては。エウロパも議会制民主主義である以上この政治と金の話からは離れることは出来ない。連合と程度の差はあれどだ。

連合にしろエウロパにしろ政治は金なのだ。選挙費用だけではなく様々なことにも使われる。スタッフへの給料も裏工作も全て金だ。自己ＰＲにも金がいる。何もかも金なのだ。

## 第二十部第五章　脇役として終わりその二

それが善か悪かと言われると微妙な話になる。そもそも金がなくては何にもならないし民主政治も成り立つものではない。宣伝をしなくてはそもそも名を知られることもない。政治家は名前と顔を知られて幾らか、である。それに金が必要なのだから。宣伝は即ち金なのだ。

だから連合では結構政治家は裏金等を持っている。八条の様に資金面で何も不安もない政治家の方が希少だ。殆どの政治家は大なり小なり資金繰りに苦労している。色々やって手元に残る金はあまりなかったりする。会合でレストランに行くのにも金がかかる。これは些細なことであるが。そうして何かと金がかかる世界なのだから。ギルフォードの資金力が注目されるのも当然であった。

「ないな」

「いや、待て」

ここでまた新たなことがわかった。

「どうした？」

「確かにギルフォード家は資産はあるが」

「ああ」

「それだけじゃないな。どうやら莫大な資金が彼の方に流れている」

「何処からだ？」

「彼の支持者からだがこれは」

パソコンに出て来るデータは驚くべきものであった。

「エウロパの有力貴族達ばかりだ」

「貴族か」

「それに著名な企業からも。だが貴族が多いな」

「彼等の指示を取り付けたか」

「これは大きいかもな」

「そうだな、エウロパの社会を考えると」

貴族社会を考慮してのことである。エウロパは多くの者が指摘しているように貴族制社会なのだ。その中で貴族、しかも有力貴族達から指示を得ているのは非常に大きいのだ。
「だが指示を取り付けるまでに」
「それなりの根回しがあったか」
「ペーチ首相にも会っていたそうだ」
「ほう」
これは研究側としては実に興味深い情報であった。
「それは確かなものか？」
「いや、マウリアから流れてきた情報だ」
「そうか、では根拠は薄いか」
「だが面白い情報だな」
「若しそれが本当ならばな」
「そうだな」
その情報はまず洗われた。その結果信憑性が明らかとなった。ギルフォードが倒れる直前のペーチと会っていたことがはっきりしたのである。
「この組み合わせか」
研究者達はまずそれに注目した。
「面白い組み合わせと言うべきか」
「どうかな」
検証が再びはじまる。
「面白いと言うべきかそれとも」
「何か密約があるのではないか」
「改革派に入るように言ったのか？」
「いや、それはないな」
この話はすぐに否定された。
「ギルフォード侯爵の思想は保守的らしい」
「では違うか」
「選挙に出るとしたら保守派ではないのか？」

ここでは彼等のギルフォードへの検証はまだ不完全であった。読み違えがあった。
「保守派か」
「ではペーチ首相との密約はないか」
「では何故彼と会ったのだ？」
「資金調達か？」
「ペーチ家はそれ程資産家ではないぞ」
「そうだったな」
これは本当のことであった。ペーチの家は権門でもなくハンガリーでは知らない者の方が多いそうした家なのである。それなりに財産はあるが大規模な援助が可能なものでもないのだ。ペーチ自身蓄財やそういった類には淡白であり首相を務めてもそれが家によい影響を与えたということはなかった。
「ではどうしてだ？」
「わからんな」
「これは検証を進めていくか」
「そうするか。一先端に置いておこう」
「うむ」
そのことへの検証はまずは置かれた。

## 第二十部第五章　脇役として終わりその三

「やはり謎が多いな」
「どうしてもな」
研究者達は再度顔を付き合わせることになった。
「まだわかっていないことが多そうだ」
「だがこれだけは言えるな」
誰かが言った。
「何だ？」
「彼がこの世に現われたということだ」
そのことだけは確かであった。
「それだけは変わりがない。ギルフォード侯爵という男がこの世に出たことはな」
「エウロパにか」
「果たしてどうなるのかはまだわからないが」
「動きはじめてはいる」
「じっくり見極める必要がこれからもあるが」
「どうなるかだな」
彼等は口々に言う。
「それによってエウロパが」
「そして我々が」
彼等の研究はそのまま続けられたが一旦は一つの区切りを見た。
その話を聞いて中国大統領李は自身の執務室で考える顔をしていた。
「一つ言っていいか」
「はい」
報告した秘書官である曹紫民はそれに応えた。
「今のところははっきりとはわかっていないのだな、多くのことが」
「結論としてはそうなります」
曹もそれを認めた。

「やはりまだ情報が少ないので」
「難儀なものだな」
「ですが現時点で集まったものとしてはこんなものかと」
「満足すべきということか」
「私はそう思います」
曹は述べた。
「現状としてはですが」
「ではさらなる情報収集と分析を期待する」
李はいささか事務的にそう述べた。
「研究者達にはそう伝えてくれ」
「わかりました」
曹はそれに頷く。
「ではその様に」
「しかしだ」
「まだ何か」
曹は李の言葉に顔を向けた。
「あの侯爵はかなりエリート意識が強そうだな」
「貴族ですから」
「いや、その中でもだ」
李は言う。
「とりわけ強い」
「プライドが高いということですか」
「そうだ、おそらく彼はプライドの塊だ」
彼はそれをまだ完全とは言えない状況の情報から正確に見極めていた。
「誇り高く気高い」
「成程」
「そうした意味で貴族意識の塊だな」
「かっての歴代のエウロパ総統達に様に」
「彼等よりもまだ上かもな」

「彼等よりも」
「そうだ。発言、とりわけあのテレビでの演説を見ているとな」
李は述べる。
「かなりのものだ。そのプライドは」
「それが彼を彼たらしめているのでしょうか」
「向こうの人間はよく言うな」
「何と」
話の内容が少し変わったようで実はぶれてはいなかった。
「貴族は誇りを糧としていると」
「ですね」
これはよくエウロパの貴族達が言う言葉である。そう言いながら誇り高く生きているのである。
「だからだ。誇り高いのだろう」
「彼もまた」
「それもとりわけな。その誇りが彼を動かしている」
「エウロパをして」
「普通その誇りは一人だけに留まる」
李の言葉は少し思わせぶりなものになった。
「だがそれは時として他者に伝わる」
「そうやって広まっていくと」
「エウロパ全土に広まれば大きな力になる」
李の目は遠くを見ていた。その先には何かがあった。
「極めて大きな。それを彼が発するとすれば」
「脅威になりますね」
「若しかすると我々は新たな強敵を見ているかも知れない」
李は言う。
「その誕生をな」
「手を打ちますか」
曹の言葉が剣呑なものになった。
「今なら軍が撤収中なのでそれへの援護という形で人間を密かに送

り込めますが」
「それをして可能ならばな」
だが李はそれには首を縦に振らなかった。
「ですが」
「いや、それはしない」
曹の顔もまた剣呑なものになっていた。だがそれは李の言葉で霧消した。

## 第二十部第五章　脇役として終わりその四

「おそらく成功はしないだろうからな」
「左様ですか」
「向こうもこちらの考えはある程度読んでいるだろう。ならば効果がない」
「ではそれは見送るということで」
「そうだ。別の対策を講じなくてはならない」
「別の対策」
「連合、そして我々そのものな」
李はそれまで以上に顔を真剣なものにさせた。
「一人の英雄が世界を変えることがある」
まずはこう述べた。
「世界を」
「そうだ、国もな」
「エウロパが大きく変わるのですか」
「少なくともあのギルフォード侯爵が本当に英雄ならばだ」
その目に危惧の色が浮かぶ。豪放磊落で知られる彼にしては珍しい顔であった。
「エウロパは衰退には向かわない」
「敗戦から立ち直り」
「復活するだろう」
「あの状態からですか」
「そして我々に剣を向けて来る」
言葉に深刻な色が篭もる。そのことが話の重要性を物語っていた。
「戦争にならないまでもな」
「対立ですか」
「これまでと同じくな」
曹はそこまで聞いてまずは言葉を止めた。暫くしてからまた口を

開いた。
「ですが」
「国力差で圧倒していると言いたいのだな」
「そうです、エウロパ全体でも我が中国に遥かに及びませんし」
これは事実であった。連合にある大国の幾つかはエウロパよりも国力が高い。日米中露がそうである。なお国としても最も力があるのはマウリアである。
「今の状態から立ち直るにしろ時間がかかるでしょう」
「だが敵であることに変わりはないな」
李はそう言葉を返した。
「敵であることには」
「そうだ、敵は敵だ」
「敵ですか」
「敵がいるということはそれだけで防衛上大きな影響を及ぼす」
古来から変わらない自明の理である。李もそれをはっきりと認識していた。
「ガンタース、マラッカ、そしてアタチュルクのラインが重要になる」
「そこですか」
「このラインが重要になり緊張したものになる」
「戦闘にならなくとも」
「エウロパとの緊張はさらに深刻なものになるからな」
「それが変わらないのですか」
「変わる筈もないしな。我々はお互いまだ生きているのだから」
今度は冷徹な声色になった。
「そこに英雄が現われたならば」
「彼に率いられ対立はさらに深まると」
「将来にはこれが大きく影響するだろう」
李は述べた。
「そう私は思う」

「今後のことについて協議が必要ですか」
「一度主要国で話をしておいた方がいいかもな」
李は考える目で述べた。
「集まるべき国は」
「まずはアメリカですね」
「うむ」
連合随一の力を持つこの国を外すことはやはり出来なかった。
「そしてロシア」
「あの国もだな」
ロシアもまた。連合において絶大な力を持つ。
「日本も」
「当然だ」
日本も外すわけにはいかなかった。この四国がやはり連合においては重要であった。
「後はトルコとブラジルですか」
「そうだな。まずは大国だけで話をしよう」
連合の中でとりわけ大きな力を持つ国々だった。
「そして各国でも話していく」
「はい」
この時代においても大国というのは重要な位置にいる。彼等の動向が大きな影響を及ぼすのは変わってはいないのであった。連合の中では。

## 第二十部第五章　脇役として終わりその五

「その流れでいくか」
「まず話す国は」
「やはりアメリカだろうな」
李は考える目で曹に答えた。
「マックリーフ大統領に直接電話してみる」
「それでは」
「うむ、早速な」
テーブルの上にある電話を手に取る。そしてすぐにホットラインをつなぐ。
「私ですが」
彼はすぐにマックリーフと話をはじめた。そのまま連合のニ大国の首脳達は電話において話をはじめたのであった。
電話の後でマックリーフは二人のスタッフに李との電話のことを話した。同時に各国での会合の申し入れのことも。
「思ったより早かったですな」
まず口を開いたのは主席長官であるロバート＝トムリンソンであった。主席長官とは首相に相当するポストである。
「こんなに早く話を出してくるとは」
彼等はマックリーフの執務室にいた。そこで執務用の机に座るマックリーフの前にそれぞれ椅子を持って来て話をしていたのである。
「いえ、予想通りでしょう」
それに首席補佐官であるウオルター＝ノーマンが応えた。
「李大統領ならば」
「そうなるか」
「私はそう思います」
ノーマンはそう返した。
「だが提案があったのは事実だ」

マックリーフは話をする二人にそう述べた。
「会合の申し入れがあったのはな」
「それで大統領」
二人はマックリーフに対して問うた。
「どうされますか」
「この会合、受けますか」
「私は受けるべきだと考えている」
マックリーフは答えた。
「今後の連合のことを考えるとな」
「中央政府だけには任せておけないと」
「所詮彼等では出来ることは限られている」
彼は中央政府に過度の期待はしていなかった。むしろ軽く見ている方であった。これは連合の大国によく見られることであった。
「我々としても手を打っておかなければな」
「それでは」
「うむ」
彼は頷いた。
「すぐにそちらの準備に取り掛かろう」
「わかりました」
「集まるのは六カ国ですか」
「そうだ、四大国にトルコとブラジルを入れてな」
それ等の国を入れて連合では六大国と称したりする。少なくとも連合においてはかなりの力を持っている国々として知られている。
「それで話をすることになる」
「ではそれぞれの大使館に話をしておきましょう」
「すぐにな」
「続いて会合の場所ですが」
トムリンソンとノーマンは続けて話をしていく。
「そういったところも詰めていきましょう」
「伊藤首相達ともお話して」

「私が直接出ることはないだろうがな」
「まだそのレベルには達していないかと」
トムリンソンがそう返した。
「まだ高官同士の話し合いで充分です」
「彼はまだ総統になってもいないですから」
「わかった」
マックリーフは二人の言葉に頷いた。
「ではそういうことだな」
「はい」
「そうした方向で話を進めていきましょう」
彼等は言う。
「それではそういうことで」
「頼むぞ」
「お任せ下さい」
「それにしてもギルフォード侯爵という男」
ノーマンがここで言う。
「果たしてどうなっていくのか」
「彼が指導するエウロパもな」
彼等は危惧を覚えようとしていた。連合もまたギルフォードの影響を受けようとしていた。それは徐々に侵食しようとしていたのであった。

## 第二十部第五章　脇役として終わりその六

連合内で様々な動きが行われようとしているのはサハラ各国やエウロパにも伝わっていた。アッディーンもまたそれを聞いている者の一人であった。
「連合も戦争が終わって間も無くだというのに息をつく暇もないか」
彼はそれを聞いてまずはそう呟いた。
「エウロパでまたか」
「ギルフォード侯爵ですね」
「彼の出現がどうなっていくかだ」
そうハルダルトに述べる。今二人は執務室で向かい合っていた。そこのソファーに向かい合って座っているのである。
「連合とエウロパにな」
「我々にも影響を及ぼすでしょうね」
「当然な」
それはもう自明のことであった。
「彼等の動きはそのまま我々にもかかってくる」
「とりわけ連合のそれはでしょうか」
「連合がエウロパに兵を向ければエウロパはそれに対処せざるを得ない」
彼は言う。
「そういうことだな」
「その場合エウロパの侵攻はないと」
「今でも可能性は低いが。そうなればその可能性はさらになくなるだろう」
「ではエウロパは暫く考えずに済むと」
「いや、本来ならば今よりも考慮しなくて済んだ」
アッディーンは言う。
「その復興により多くの時間がかかっただろうからな」

「復興にですか」
「まだはっきりわかったわけではないがあのギルフォード侯爵という人物」
アッディーンは直感的に彼を見抜いているかのようであった。
「やるかも知れない」
「それ程までに」
「何かな。あの演説を聴いていると」
彼もまたあの演説に感じるものがあったのだ。言葉を越えて。
「そうさせる。彼についていきたくなる有能な人材も集まるだろう」
「人材もですか」
「無論そうではない人材、そして取り入ろうとする人材も出て来るだろう。だがそうした人材は」
「元より登用されないと」
「彼が確かな目を持っていればな」
英雄とはただ自分だけの能力で英雄になっているわけではないのだ。その鑑識眼でも英雄になるのである。そうしたものが備わっていなくては英雄足り得ないのである。
「そうなる」
「それでは」
「エウロパは予想より短い時間で復興出来るかもな」
「そして連合に目を向ける」
「それが我々にとっての理想だが」
アッディーンは述べる。
「そうも上手くはいかないかな」
「いかないのならいかせるべきかと」
ハルダルトはここで提案してきた。
「いかせる！？」
「はい、エウロパの目を完全に連合に向けさせるのです」
「確かにそうなればいいが」
だがアッディーンの顔は少し難しいものになっていた。机の上で

その顔をしてハルダルトを見ている。
「我々は連合ともエウロパとも境を接していない」
「はい」
ハルダルトも流石にそれはわかっているようである。
「それでは」
「今の時点では、ですね」
打ち消されようとしたところで彼は言った。
「今の時点では、か」
「そうです」
彼は言う。
「これからはわからないかと」
「これからか」
アッディーンは考える顔になった。
「今エウロパと境を接しているのはティムール連合、連合はハサン王国」
「我々のこれからの敵は」
「ハサンです。それならば」
「ハサンを倒した後、若しくは連合と国境を接した時か」
「その時に動くべきです」
ハルダルトの目が強い光を放っていた。普段は落ち着いた雰囲気の彼からは想像がつき難い姿であった。彼にしてもそういう動きを見せる時があるということであろうか。

## 第二十部第五章　脇役として終わりその七

「我々が」
「連合に工作をするか」
「エウロパに目を向けるように」
「しかし」
だがアッディーンはここで考える顔を作った。
「何か？」
「そうまでしなくてもよいかも知れない」
「自然とそうなっていく、ですか」
「今のエウロパには纏めるべき目標が必要だ」
アッディーンは述べる。
「もっと具体的に言うと敵だな」
「敵、ですか」
「そうだ。国家を纏める為に共通の敵を見せる」
昔から使われてきた手法である。とりわけアメリカはそうしてその雑多な国を纏めてきた。インディアン然り、ソ連然り、イスラム教徒然り、である。
「連合もエウロパも今までそれをやってきた」
「それをさらに強くしていくと」
「自分達の手でな」
「では私の考えは却下ということで」
そうなっても惜しくはないといった顔であった。
「いや、そうならない場合の為に置いておきたい」
だがアッディーンはそれを置いておくことにした。
「連合とエウロパが互いに激しく対立すれば我々は彼等を気にすることなく動くことが出来るからな」
「とりわけエウロパに関しては」
「そうだな。連合は確かに巨大だが」

彼は言う。
「我々に対してはこれといってないからな。だからな」
「わかりました。それでは」
「うむ。それでいいと思う」
彼等は連合に関しては危険視は殆どしていないのだ。連合は設立より開拓に、敵としてはエウロパに目がいきサハラにはあまり関心がなかったからである。誰も好き好んで犠牲が出そうな場所に進出していったりはしない。犠牲がなく、実りのある場所に行くものである。だから今まで彼等は開拓に専念してきたしこれからもそうなのである。
「ただ、四兆の国力です」
ハルダルトはそこに注視することを忘れてはいなかった。
「その彼等が動けば」
「わかっている、我々はひとたまりもないだろう」
アッディーンの目が変わった。敵を警戒する獅子の目になった。
「連合軍は九〇億、いや一五〇億だ」
「はい」
「その兵力が我々に向けられたならば。勝てるものではない」
「おそらくサハラ全土は瞬く間に蹂躙されるでしょう」
「サハラにあった小国よりも遥かに多い数の軍でな」
「やはり勝てはしませんか」
「無理だ」
アッディーンは言い切る。
「数だけではないしな、彼等は」
「物資と技術、そして国家システム」
「全てが我等を凌駕している。まさに巨大勢力だ」
「戦争がないということが彼等をそこまで巨大にさせたのでしょうか」
「元々が巨大だったがな」
連合設立当初からそうであった。何しろヨーロッパの殆どとイン

ド、そしてアラブを除いた地域が全て入っていたのだから。その勢力が巨大にならない筈がなかったのだ。
「だが一千年の開拓と発展が彼等をああさせた」
「我々が勝っているのは実戦経験と」
「戦争システムだな。他のシステムでは劣ってはいても」
つまり戦争を知っていることである。これに関してはサハラに勝る者はいない。
「そこは負けてはいないな」
「それでも数や技術はどうしようもありませんね」
「絶望的だ」
アッディーンは言い切った。
「サハラ全土を合わせても連合には対抗出来ない」
「はい」
二人はそれをはっきりと認識していた。
「だから連合との緊張は何としても避けなければならない」
「ハサンがそうであったように」
「そうだ」
ハサンは長い間連合中央政府及び各国と交流を深め、友好関係を築いてきた。それは何故か。連合の恐ろしさをよくわかっていたからである。だから彼等は連合と仲良くしてきたのである。
「あれに倣わなければならない」
「では軍部としては」
「連合とは融和だな」
結論はそれであった。妥当と言えた。
「ただ、外務省はどうかな」
「大丈夫だと思います」
ハルダルトはすぐに答えた。
「彼等こそ外交を理解していますから」
「そうだな」
オムダーマン外務省には定評がある。だから彼等軍人達も信頼を

置いているのだ。だからこそ南方侵攻においては共同戦線を執ったのである。
「彼等もいる」
「はい」
「では安心していいか、外に関しては」
「さらなる外はそれでいいと思います」
ハルダルトの返事は少し特殊な意味を含ませていた。
「サハラ内部はそうはいきませんが」
「ハサンか」
「彼等も兵力を集結させてきていますし」
衝突が近いのは誰の目にも明らかであったのだ。

## 第二十部第五章　脇役として終わりその八

「間も無く彼等とは断交になるでしょう」
「一応はティムールと共同する形になるな」
「ですね」
ティムールもまたハサンとの緊張の度合いを強めているからだ。サハラにおける戦いは三国共既にそのつもりでいたのである。これで戦争がないと思う方がどうかしている。
「ハサンも手強いが」
「長い間、そして今に渡ってサハラ最大の国家でしたから」
「そう、最大だ」
アッディーンはその言葉に頷いた。
「実質的にはサハラの盟主とも言える存在だった」
「ええ」
「だがその役目は今終わろうとしているのだ」
獅子の目が今度は燃えるものになっていた。
「我々の手によってな」
「それでは」
「間も無くだ」
その燃える目のまま言う。
「彼等との戦いはな」
「我が国の命運を賭けたものになりますね、この戦いは」
「今までもそうだった」
燃える目のまま落ち着いて述べる。
「戦争だからな」
「戦争は命運を賭けたもの」
「人であっても国家であっても」
アッディーンはまた言う。
「そして時には」

「心までもだが。我々には関係はないな」
「同じムスリムとして」
「思えば因果なことだ」
アッディーンはまた述べた。
「同じくアッラーを信じていても剣を交えるのだからな」
「それがサハラの歴史でした」
「砂を血で染める歴史か」
「統一されればそれも終わるでしょうが」
「さて、それはどうかな」
だがアッディーンはそれには懐疑的な言葉を返した。
「違うと」
「一歩間違えればな。先に述べた連合も何かあればわからない」
連合が侵略性に乏しいといってもそれはあくまで今の段階では、という意味である。状況が変わればどうなるかわからない。それが政治というものである。
「あらゆる可能性がある」
「出来ることなら統一されて終わりといきたいところですがね」
「残念だがそれで終わりとはいかないからな」
アッディーンは話しながら遠くを見ていた。
「人の世というものは。アッラーの裁きまで」
「アッラーですか」
「そういうことになる」
全てはアッラーの意志の下、絶対なるアッラーが全てを定めるというのがイスラムの教えである。アッラーの前では人は卑小な存在に過ぎないのだ。
「その定められるところに従って生きるしかないな」
「戦いもまた」
「それもまたアッラーの定められたことだ」
全てがそうなのだから戦いもまたそうなのである。
「戦死は即ち天国への道」

「アッラーは偉大なり」
ジハード、即ち聖戦で死ねばそれは天国へ確実に行ける方法なのだ。だからムスリムは他の宗教を信じる者達と比べて死を恐れない。少なくともサハラのムスリムは。マウリアの者達も死を恐れないがこれは輪廻転生の考えから来るものであって事情が違う。ジハードは本来異教との聖戦であるのだがサハラではあらゆる戦いにおいてそう称される。
「アッラーが統一を定められていればよし」
「はい」
「定められていなければ今はその時ではない。そういう考えになるが」
「我々は出来ることをするだけです」
ハルダルトは言った。
「統一する為に。与えられた人生の中で死力を尽くすことこそが運命なのですから」
「そうだな」
「ですから我々は戦場に向かいましょう」
そしてこう話を持って行った。
「新たな戦場へ」
「今ある軍のほぼ全てを動員することになる」
アッディーンは参加戦力について言及した。
「オムダーマンはそれだけの相手だ」
「確かに」
「油断は出来ないぞ」
こうも言う。
「勝利の為にはな。いいな」
「わかっております」
「では間も無く細かい作戦の検討に入る」
動くがはじまろうとしていた。
「ハサンとの戦いに向けてな」

「了解」
サハラの歯車が大きく動こうとしていた。それはオムダーマンだけではなかった。

## 第二十部第五章　脇役として終わりその九

ティムールにおいても。シャイターンは自身の官邸において会議室で首相であるウーアンザと向かい合って座っていた。今広い会議室にいるのは二人だけだ。それがかなり異様な風景ではあった。
「あらかた終わったか」
「はい」
ウーアンザはまずシャイターンの言葉に頷いた。
「ハサンの目ぼしい人材はこれでほぼ全て」
「下地は整ったか」
シャイターンはその報告を聞いて整った目を面白そうに動かした。
「予定通りの時間だな」
「丁度いいですか」
「そうだ、早過ぎず遅過ぎずもない」
笑みを浮かべて言う。
「最高のタイミングだ」
「では工作員達はこれで」
「いや、まだ留めておけ」
それはよしとはしなかった。
「留めるのですか」
「そうだ、彼等にはまだ仕事がある」
「それは一体」
「攪乱だ」
その目が妖しく光る。
「これからの戦いの後ろでな」
「そちらですか」
「一旦忍び込ませた、ではまた仕掛けさせてもらおう」
彼は言う。
「蛇は一度噛むだけでは駄目だ。二度三度と噛まなければ」

「その蛇は隠したまま」
「今度は狼を放つ」
即ち戦争である。
「狼の牙は一度でいい」
「毒で弱った獲物の喉に」
「その血がまた美しく銀河を染める」
目の妖しい光が増していく。
「紅にな」
「銀河は紅に染まるものですか」
「銀河の色は何だ」
シャイターンはここで首相に問う。
「色ですか」
「そうだ。銀河の色は。何だ」
「黒でございます」
ウーアンザは思惑のある笑みを浮かべて答えた。
「漆黒の。美しい色でございます」
「黒に最も似合う色は赤だ」
それがシャイターンの嗜好であった。彼が愛するのが鮮やかな赤、そして漆黒の黒なのだ。赤と黒こそが彼の愛する世界なのである。即ちそれは銀河と戦争だ。
「漆黒に匹敵する美しい赤」
心なしかその目さえ紅く輝いていた。
「それがまた見られるのだ」
「そしてその先には」
「覇業がある」
シャイターンは笑い続けている。
「永遠の覇業がな」
「シャイターン家による、ですな」
「このサハラは長きに渡って集合離散を繰り返してきた」
「地球にあった頃からですな」

「あのアッバース朝も統一はしていなかった。ハールーン＝アル＝ラシードがバグダートにおいてこの世の栄華を誇っていた時代も」
その時にこそ分裂がはじまっている。ウマイア朝がリベリア半島に逃れたその頃から。
「バイバルスもサラーフ＝アッディーンも統一はしていない」
「出来なかったと言った方が妥当ですな」
「彼等を以ってしてもな」
「あの世界帝国オスマン＝トルコも」
「あれだけの大国でもな。それは適わなかった」
「銀河にあっても」
「大国が出来ては消え、出来ては消え、だった」
正に混沌であった。サハラでは多くの国が生まれ、そして戦乱の中に消え去っていく。それの繰り返しだったのだ。何度か統一の気運が見られたがそれはいつも消え失せるのが常だったのだ。

## 第二十部第五章　脇役として終わりその十

「だがそれが遂に終わる」
彼は言い切る。
「今がその時だ」
「ではその為にも」
「戦時体制へ以降していくぞ」
シャイターンは国家主席として命じる。
「いいな」
「無論です」
ウーアンザは答える。
「それにはすぐに以降が可能です」
「よいことだ」
シャイターンはそれを聞いて満足な顔になる。
「そして北だが」
「エウロパですか」
「モントローズ要塞は非武装化されたな」
「はい」
これは連合とのオリンポス条約によるものだ。
「では境にある程度兵を置いておけ」
「万が一の備えですか」
「エウロパは完全な敵だ」
彼ははっきりとそう位置付けていた。
「おそらくまた侵攻を考えているだろう」
「連合との傷を抱えてもでしょうか」
「確かに連合との戦いでのダメージは大きかった」
シャイターンもそれは認める。
「だがな」
「はい」

「あれは致命傷ではない。エウロパは奥深くまで攻め込まれたが人も産業もほぼ無事だ」
「連合が手を出しませんでしたからな」
「彼等は一般市民には手は出さないようだな」
「どうやら」
ウーアンザはそれに応える。
「八条長官がそれを徹底させたようですが」
「彼がか」
「ええ。敵国であっても一般市民に変わりはないのだと。ただしゲリラにはかなり強硬な手段を執ったようです」
「ゲリラならば当然だ」
シャイターンは醒めた声で述べた。
「正規軍でないならばな。容赦なく殺しても構わない」
「ただ、連合の処刑方法は」
「少なくとも我々の考えにはそぐわないな」
「あまりにも惨いかと」
ウーアンザもサハラの人間であり処刑に対するその概念もサハラのものなのである。だから連合の惨たらしい処刑には納得出来ないものがあるのである。
「軍律を犯した兵士を恐竜の餌にしたそうですし」
「それも衆人監視のうえでな。判決文を読み上げる時は犯人を全裸にして、暴行を加えながらだったそうだ」
「そこまでする必要があるのでしょうか」
「あるのだろうな」
シャイターンの声は醒めたままであった。
「連合にとっては」
「ゲリラも八つ裂きや獣の餌、人体実験に使われたのでしたな。やはり公開で」
これが連合であった。死刑の数は少ないがその処刑方法は実に多彩で、尚且つ酸鼻を極める。これによりサハラの者達は連合の者達

は殺戮を楽しむと言うことが多いのである。
「それで一気にゲリラ活動が減ったそうですが。エウロパ政府もゲリラ戦の停止を呼び止めたせいもありますが」
「それが狙いだったのだろうな」
シャイターンはまた述べた。
「人間というものは圧倒的な暴力や恐怖の前には動けなくなる」
厳格な刑罰にはこうした効果もある。悪事を働けばどうなるか、それを見せるということである。　連合は法に関してはそういう考えなのである。悪逆非道の輩には容赦なぞしてはならないし、人権も一切不要、他者の人権を侵す者の人権は保障されない、それが連合なのだ。
「賢いと言えば賢い」
「ですが」
「首相の言いたいことはわかる」
シャイターンはウーアンザが苦い顔をしているのを見ていた。

## 第二十部第五章　脇役として終わりその十一

「私にもまたあんなことは出来ない」
「サハラでは出来はしません」
　実際はサハラ全体の方が連合全体より死刑は多かったりする。だがこれはコーランに則ったものであり、その処刑の仕方も同じである。殺す時には時間をかけずに一気に済ますのがイスラム世界の伝統だ。少なくともコーランから外れたことはしないのである。
「だがそれでゲリラはなくなり、無駄な血も流れなくなった」
「それは確かに」
　何だかんだ言ってもこれは確かであった。
「これもまた占領地統治ということですか」
「あくまで連合式だな」
「我々には真似出来ない部分も多いですな」
「少なくともあの処刑は無理だ」
　シャイターンもまたムスリムでありそうした発想がないのである。冷徹だからといって血を好むというわけではないのである。それとこれとはまた話が別なのだ。
「幾ら効果があろうとな」
「全くです」
「だがそれもまたエウロパを守る効果があった」
「まあ逆説的ですが」
「迂闊な行動を鎮めたからな」
　ゲリラ戦の問題点としてそれが敵軍の疑心暗鬼を呼び一般市民への攻撃へとつながることである。だからこそ連合軍はそれを避ける為にもゲリラを厳罰に処したのである。八条はそれをよくわかっていたのだ。
「そうしたこともあってエウロパは市民や産業は立ち直り可能なレベルのままだ」

「比較的短期間にでしょうか」
「それは彼等の今後次第だな」
シャイターンは少し考える顔になった。
「あの侯爵が本物ならばすぐにだが」
「そして我等と脅かすと」
「それまでに終わらせる」
彼は言う。
「いいな」
「はい」
ウーアンザも頷く。
「短期間でだ」
「統一までですね」
「それまでには終わらせなければな。貴族達は存分しぶとい」
彼は決してエウロパ軍を侮ってはいなかった。そして貴族達も。敵を侮るということはそれだけで墓穴を掘る。よくわかっているのである。
「そしてまずはハサン境には」
具体的な対策の話し合いに入った。彼等もまた動きだしていた。時の歯車は止まることがない。今サハラは再び戦乱の歯車を動かそうとしていた。
ギルフォードの出現は連合にもサハラにも大きな影響を与えていた。それを見て一人目を細める男がいた。
ペーチである。彼は病室において話を聞いていたのだ。
「上手くいっているようだな」
「当然のことです」
その枕元には当のギルフォードがいた。
「何を驚かれることがありますか」
「当然か」
「はい、これは言うならばプレリュードです」
実にサバサバした様子であった。

「はじまりでつまづくなど。それは喜劇です」
「喜劇か」
「今エウロパは私の手により神話を歩むことになります。それは決して喜劇ではありません」
「そして悲劇でもない」
「それは英雄物語です」
彼はそう述べた。
「堂々たる神話であるのです」
「その先には何があるのだ？」
「栄光が」
こうも述べた。
「エウロパの栄光があるのです」
「それは夢か？」
「いえ、現実です」
強い言葉で言い切った。そこには嘘も迷いも微塵もない。
「もっと言うならば予定された未来なのです」
「卿の手によってか」
「はい」
不敵な笑みは続く。

## 第二十部第五章　脇役として終わりその十二

「エウロパは再び人類の上に君臨することになるだろう」
「かつてのようにか」
「その通りです」
「大航海時代から二十世紀まで確かに我々は人類の盟主だった」
エウロパにとっては輝かしい栄光の時代である。
「全てにおいて我等が勝っていた」
それが正当な地位かどうかは別として。だが彼等にとっては正当な地位なのであった。
「だが今はな」
「シンガポール条約から長い間連合の後塵を拝してきました」
「それが終わるのは確かにいいことだ」
「無論です。その前にはこの度の敗戦なぞ何でもないのです」
「復活の前には、か」
「そうです。今エウロパは私の手によって復活します」
揺るぎのない、絶対の自信がそこにあった。ギルフォードを支えているもの、それは己に対する絶対の自信なのである。これがギルフォードをギルフォードたらしめていると言ってよかった。
「そして遥かな別の宇宙へ」
「第二の大航海時代というわけか」
ペーチは話を聞いていてふとそう思った。
「その先にあるものを掴めればな」
「それこそが我等の未来なのです。無限の可能性を持つ」
「宇宙は無限か」
ペーチは話を聞いてふと遠くを見た。病室にありながら彼は遠くを見ているのである。
「はい」
ギルフォードはそれに答える。

「少なくとも我々にとってはそうです。宇宙は限りがありません」
無論宇宙にも広さがあることはわかっている。だがそれは人では辿り着けないスケールのものであることもわかっている。この宇宙は何処までもある、そう言って過言ではないのである。
「もう一度それを掴めばよいのです」
「その先に何かがあれば」
「何かとは」
「他の知的生命体がいれば。どうするべきかな」
「倒せばいいでしょう」
この言葉がやがて大きなうねりとなる。連合とエウロパの違いがここでもまたはっきりとなり、それが連合とエウロパの新たな戦いを未来において演出することになる。だがギルフォードは今それを知らなかった。彼はこの時サハラ侵攻と同じ感覚で語っていた。だがそれは未来の連合の考えとは全く違い、また彼等の介入を招くこととなった。エウロパの命運を決めてしまう言葉となってしまった。しかしギルフォードもペーチも人であり神ではない。だから未来のことはわからない。それがどういった未来であろうとも。ギルフォードも人であり、未来を見ているつもりでもそれは完全な未来ではない。見れていれば今の言葉はなかったであろう。だが今はそれを誰も知りはしない。
「我等の栄光の為に」
「敵は倒す、か」
「その通りです」
ギルフォードは言う。
「エウロパの為に」
「ローマ帝国を宇宙に築くか」
「それもまたよし、ですね」
ローマ帝国、この名がギルフォードの誇りを刺激した。
「大英帝国もよし、ローマ帝国もよし」
「フランク王国もか」

「悪くはありません。ビザンツ帝国もまた」
いずれも欧州にその名を残した王国、そして帝国である。フランクは王国であったがシャルルマーニュはローマ＝カトリック教会からローマ帝国皇帝の帝冠を授けられているので帝国とも言える。この場合は西ローマ帝国である。
「我等の栄光のモデルとして」
「神聖ローマ帝国もだな」
「まあ大英帝国はローマではありませんが」
インド帝国を持っていたが欧州においてはイギリス王であるだけだった。王であり皇帝ではなかったのだ。欧州においては皇帝はローマ皇帝かその継承者しかないからである。ここが他の地域の皇帝とは違う。

## 第二十部第五章　脇役として終わりその十三

皇帝は複数の民族、宗教を治める存在である。中国ではこれに中華世界の支配者という位置付けもあった。オスマン＝トルコでは世俗とイスラム、双方を治めるスルタン＝カリフという意味もあった。皇帝はただ皇帝ではないのだ。その中に複数の意味を持っている。連合の二人の皇帝、日本の天皇とエチオピア皇帝もまた同じである。双方共国家元首であると共に歴史と宗教もその中に内包している。皇帝と王はまた違うのである。皇帝は特別な意味を持つ。ただし誰でもなれるという側面もある。ナポレオンがそうであるようにだ。王には家柄が必要だが皇帝はそうではないのである。ここがかなり複雑と言えば複雑なのである。

「ですがローマの復活は悪い話ではありません」

「あのローマを再び宇宙で」

「ＥＵもまたローマでしたが」

「うむ」

ＥＵにも確かにそうした一面があった。あれは二十世紀、二十一世紀のローマ帝国だったのである。

「ですが今度は宇宙にローマを」

「そうなればよいな」

ペーチとしてもそれは悪い話ではない。だが。

「連合を屈服させるのは。ローマといえど楽ではないだろうな」

「確かにそうでしょう」

ギルフォードもそれはわかっている。

「相手はあまりにも巨大です」

「そうだな」

「ですが。未来では新たなローマの前に彼等は敗北しているでしょう」

「かってのようにか」

「彼等の殆ど、いえ全ては我等の足下に屈していた者達です」
アメリカ然り中国然り。そう言いたいのだ。ギルフォードはイギリス人である。イギリスはかってアメリカを植民地にしており、中国をアヘン戦争で踏みつけてきた。
「またそうしてやるのです」
鼻息も荒い。
「それだけのことです」
「未来でか」
「はい、必ずや」
彼は言う。
「シンガポールでの怨みもこの敗戦もまた」
「全ては未来にか」
「その未来を切り開くのが私です」
目の光もまたこの上なく強くなっていた。全てを射竦め、黙らせ、従わせる目であった。それこそが英雄の目である。
ペーチもまたその目を見ていた。見ながら彼は思った。
(ならば賭けるか)
彼に。賭けようとあらためて決意した。
「侯爵」
また彼に声をかけた。
「はい」
ギルフォードはそれに応える。
「ではやってみせてくれ」
「総統になり」
「そうだ、エウロパをもう一度蘇らせてくれ」
ギルフォードに顔を向けて語り掛ける。
「頼めるか」
「無論」
自信に満ちた笑みは変わらない。
「是非お任せ下さい」

「今の苦難の時代だけでなくな」
「それもまた言わずと知れたことです」
その言葉には何処までも迷いがなかった。
「エウロパの為に」
「任せたぞ」
ペーチは最後にギルフォードを見た。そして握手を交あわせる。
それでギルフォードは病室を去り後には彼だけとなった。彼は一人になるとまたベッドで呟いた。

## 第二十部第五章　脇役として終わりその十四

「英雄が出るのだな」
天井は白い。その白はまるで雲の様なものだった。
「それを見られて。よかったな」
彼がこの世を去ったのはそれから数日後であった。眠るように、静かにこの世を去ったのであった。
「そうか」
シュヴァルツブルグは友の死を軍務省の己の執務机の上で聞いた。それを聞いて泣くでもなく遠い目をするだけであった。
「先に言ったのか」
「葬儀の予定ですが」
「わかっている、必ず出る」
彼は報告する秘書官に応えた。所謂鞄持ちである。
「しかし。あいつが先に逝くとはな」
「はあ」
「軍人である私の方が先だと思っていたのだが」
その目は遠いままであった。
「ままならぬな。何もかも」
「それが人生ですから」
「そうだな。それもまた人生だ」
ふと寂しい微笑を浮かべる。
「友の死を見届けるのもまた」
彼が見届けた死は一つではない。軍人として今まで数え切れない死を見届けてきた。だが。
それでも友人の死は辛いものなのだ。ましてや古くからの親友同士とあっては。シュヴァルツブルグは今それを噛み締めていた。何とも言えない苦さが口の中を覆っていた。
その苦さはそれまでも幾度も味わったものだ。だから知ってはい

る。しかし知っているからといっても慣れているものではない。彼にとっては到底慣れるものではなかったのだ。
「お気持ち察します」
「済まないな。で、葬儀だが」
「はい」
「ペーチ家での葬儀だな」
「おそらくはそうであると思います」
秘書官は答えた。
「首相は質素な方でしたので」
「何につけても目立たない男だった」
シュヴァルツブルグの目はやはり遠い。
「しかも控えめでな。最初に会った時はかえってその存在感のなさに驚かされた」
「ですか」
「首相になってもよく目立たないと言われていたしな。だがそれも」
「もう」
「今夜は一人にさせてくれ」
シュヴァルツブルグは秘書官にこう述べた。
「一人にですか」
「ああ。ちょっとな」
秘書官は彼の目を見た。そのことで事情を察した。言い換えるならば充分であったのだ。たったそれだけの流れで。静かだが確実な流れであると言えた。
「わかりました。それでは」
「済まないな」
寂しい顔で笑った。それは本当に寂しい顔であった。その顔で。彼は別れを告げようとしていたのであった。
秘書官が去り一人となった。あらためて空を見る。
「今夜は久し振りに二人で飲もう」
天にいるペーチに語り掛ける。

「それでいいな。御前の好きなワインを用意しておくからな」
その目には熱いものがあった。それは彼が今まで誰にも見せたことのないものであった。それを宿らせながら。彼は空を見上げていた。

第二十部　完

２００６・９・１１

# 第二十一部第一章　代理人の座その一

代理人の座

神の代理人、これはローマ＝カトリック教会の首長であるローマ教皇を指して言われる言葉である。この言葉で長年言い表されてきている。

だがこの代理人はいささか世俗的な色彩が強く何かと問題を起こしてきた。蓄財や女性、謀略に戦争、弾圧と行って来たことは並の政治家の適うところではなかった。バチカンは神の代理人であったが同時に悪魔よりも恐ろしい人物でもあった時代も多いのである。

むしろ悪魔そのものか。どちらにしろその悪は比類がない。あらゆる悪を行ってきた。まるでカンタレラの毒で腐敗していく屍の様に。彼等は醜い腐敗を見せ続けていたのである。

近代になるにつれバチカンの力は弱まりその腐敗はかなりましになっていく。だがそれでも様々な謀略が渦巻いてきていた。それは二十世紀も二十一世紀も変わらずこの銀河の時代においてもやはりあった。今その教会の中で一人の緋色の衣の男が歩いていた。

白く、眩い太陽の光が差し込む教会の中を進むこの男はアジア系の顔をしている。名をリーという。その顔立ちから彼が連合出身であることがわかる。長い間国交がなく対立のみ続いている連合とエウロパだがその中でも例外がありそれはバチカンを主とした聖職者の交流である。エウロパ諜報部もまたこれを利用して工作員を送り込んでいた。彼は今ある事情から連合からこのバチカンまではるばるやって来ていたのである。

彼はある礼拝堂に入った。そこにはもう一人枢機卿がいた。

「もうおられたのですか」

リー枢機卿はラテン語でその枢機卿に声をかけた。

「はい、少し早過ぎたようでして」

彼は苦笑いを浮かべてリー枢機卿に応えた。

「これを読んでおりました」
「聖書ですか」
見ればその枢機卿の手には聖書があった。新約聖書である。
「ええ。何度読み直してもそこには多くの教えがあります」
「神の御教えが」
「そうですね。ですから聖書は素晴らしい」
「神もまた」
「その神がここからもうすぐ去らなければいけないというのは」
「そのことです」
リー枢機卿は言った。
「実はここに参りましたのは」
「やはりそうですか」
「宜しいでしょうか、ヤロシュ枢機卿」
彼は声をかける。
「そのことについてお話させて頂いて」
「その為に遠路はるばるおいで下さったのですね」
「そうなります」
「ではお断りするのは心無いことです。それに」
「それに？」
その言葉に対して問うた。
「私も是非貴方とお話したいと思っておりました。それでは」
「はい、神の御前で」
「隠すところなく」
十字架にかけられている主を前にして言う。それぞれの手にバイブルを置いている。二人の誓いは儀式的なものであったがそれでもかなり強いものが見て取られた。
「それでは」
「はい」
あらためて隣同士に座わり合って話をする。枢機卿が二人同時に並ぶというのも珍しい姿であった。

「先程ヤロシュ枢機卿が仰ったことですが」
「バチカンの移転ですか」
「はい、只今連合ではその移転先について論争が起こっております」
「そのようですね」
ヤロシュ枢機卿はそれに応えて頷いた。
「各国で。かなり激しい論争になっているとか」
「カトリックの多い旧中南米諸国からは熱狂的なラブコールがありまして」
「熱狂的なですか」
「はい、是非自分達の国にバチカンをと」
「それは信仰だけではないでしょうね」
「第一にそれがあるのは事実ですが」
リー枢機卿は率直に述べた。

## 第二十一部第一章　代理人の座その二

「やはりそれだけではありません」
「バチカンはその存在だけで大きなものがありますから」
枢機卿の権威は一国の君主にも匹敵すると言われてきた時代があった。それだけの地位にあるのである。だから政治にも関わる。ヤロシュ枢機卿も世俗のことに無知というわけではなかった。
「ここにもエウロパ中から神と法皇様を慕って多くの神の子等が来ています」
「ですね」
「それを目当ての店や観光ツアーもありますから」
人が集まるところにはこうして商業が関わる。これは自明の理であった。
「連合でも同じ話になるのは当然ですね」
「連合はむしろもっと凄いです」
リー枢機卿は語った。
「連合こそは商業主義で成り立っていますから」
「やはり」
「人口もまた。ですからそれがもたらす収益も莫大なものとなるのです」
「即ち我々は利用出来る存在であると」
「まさしくそうです」
答えると言葉が返って来た。
「そして神もまた」
「それもまた」
「それこそが報いなのかも知れませんね」
ヤロシュ枢機卿はそこまで聞いて溜息をついた。そして非常に悲しい顔になった。
「我々の今までの行動の。利用されるということが」

「ヤロシュ枢機卿」
リー枢機卿はここで彼を見据えてきた。穏やかだが問い詰める目であった。
「はい」
「貴方は。エウロパの工作員のことを知っていましたね」
「神の前で嘘は申し上げることは出来ません」
それは肯定に他ならなかった。
「そのことは私も知っていました」
「やはり」
だからといって咎めるつもりはないようであった。リー枢機卿はそれを静かに聞いていた。
「ですが私は何もしませんでした」
「何故」
「私が動けば法皇様にも迷惑がかかると思い。そしてやはり私にもエウロパ人だという心がありました」
「信仰とは別にですか」
「お恥ずかしい限りです」
頭を深く項垂れる。
「不正を知ってはいたがそれを正そうとはしなかった。神に仕える者として私はしてはならないことをしました。私には・・・・・本来この衣を着る資格もまた」
「いえ」
だがリー枢機卿は穏やかな声を彼にかけた。
「人は弱いものです」
彼は言う。
「ですから時として過ちを犯す」
「リー枢機卿」
ヤロシュ枢機卿はリー枢機卿のその言葉に顔を上げた。
「大切なのはそれを悔やみ、懺悔することなのです。今貴方は神の御前におられます」

「はい」
「神も御聞きになられています。そして赦して下さるでしょう」
「神が・・・・・・」
「そう、神が。ですから貴方はもうそれを悔やむことはないのです。懺悔は終わりましたから」
「有り難うございます」
「それよりも今はこれからなのですから」
リー枢機卿は話を戻してきた。

## 第二十一部第一章　代理人の座その三

「これからですか」
「果たして連合の何処に辿り着くのか」
「はい」
「それが問題です」
「こう言うのは今更何なのですが」
ヤロシュ枢機卿は言う。
「出来れば政治利用されるようなことは避けたいです」
「難しいですね」
リー枢機卿はそれには難色を示した。
「我々の立場からすると」
「やはり」
「バチカンはその存在そのものが政治でありましたから」
「それはわかっていますが」
そもそも政治と宗教は古代においては同じであった。王と司祭が同一であったことすらある。バチカンの場合は教皇を太陽、皇帝は月とさえ言っていた。この場合皇帝とは神聖ローマ帝国皇帝である。この国はカトリックの守護者としての帝国であった。その為神聖ローマ帝国皇帝家であるハプスブルク家はカトリックを信仰し、それを守ることを使命としてきたのである。フランスもまたカトリックであり、リシュリューは枢機卿であった。政治と宗教が分かれていくのはフランス革命以降である。政治が宗教の介入を嫌ったのである。ここで重要なのは政治が宗教の介入を嫌ったことであり、宗教が政治の介入を怖れたということではないのだ。
「ましてや連合は大国の横暴と小国の対抗がせめぎ合う世界」
「そうはいきませんか」
「諦めて頂ければ」
「わかりました」

頷いてみせた。
「ただ、カトリックの国に大国が思ったより少ないのです」
「左様ですか」
「はい、日米中露はカトリックはあまりいません」
「いずれの国もクリスチャンはプロテスタント、ロシア正教でしたね」
「そうです」
リー枢機卿は答えた。
「トルコはイスラムですし」
「ブラジルやフィリピン等でしょうか」
「後はメキシコでしょうか」
「思ったより少ないのですね」
「ですが油断出来ない国ばかりです」
「そうなのですか」
ヤロシュ枢機卿は連合の事情には詳しくはなかった。生まれてからエウロパを出たことはないのだ。
「この中ではとりわけフィリピンが」
「所謂曲者ですか」
「はい。連合の中では旧東南アジア諸国の外交はかなりのものです」
リー枢機卿は述べる。
「顔ではにこやかに笑っていても腹の中では何を考えているのか」
「わからないと」
「これは今後よく覚えておいて下さい」
そう忠告する。
「連合の中はエウロパのそれとは比較にならない程入り組んでいます」
「そうなのですか？」
「連合の中の国家はエウロパの中の国家よりも遥かに権限があります。それぞれの国が中で外交を行っているのです」
「ふむ」

「各国の軍隊はもうなくなりましたが。宗教も尋常な数ではありませんし」
「何かえらく厄介なのですね」
「慣れるまでが大変だと思います」
率直にこう言った。

## 第二十一部第一章　代理人の座その四

「それまではモザイク、或いはカオスに見えるでしょうが」
「そこにも秩序はあると」
「連合の秩序です」
秩序までもエウロパのそれとは違うというのだ。連合とエウロパはあらゆる点において違いが顕著となっているのである。これは今のヤロシュ枢機卿には到底わからないものであった。
「それをまず御存知下さい」
「わかりました」
「そのうえでです。我等の場所が決まるのも」
「我々には決定権はありませんから」
「働きかけることはできますが。ある程度は」
「左様ですか」
「あらゆる手段で」
リー枢機卿の目がここで光った。
「信仰もあれば」
「資金も」
バチカンが資金に困るということは有り得ない。賛美歌や聖書の売り上げは全てバチカンのものである。そして慈善事業もしていれば信者からの浄財もある。そうした噂が少し流れるだけで集中豪雨の様な浄財が舞い降りて来る。それが信仰というものなのである。
「それを使うということも可能です」
「ですがそれこそが政治です。確かに我々は政治的でもありますが」
「教皇様の御判断を仰ぎますか」
「そうですね」
ヤロシュ枢機卿は頷いた。
「それが宜しいと思います」
「わかりました。それではこの件はそれで」

「はい」
そしてまた頷いた。
「地球にいるということも考えられますが」
「かつてのバチカン市国の様に」
「しかし今我々は星系を一つ所有しています。それを考えますと」
「連合でも星系を一つですか」
「連合はエウロパと比べてあまりにも広大です」
彼は言う。
「星系の数は比較にはなりません」
「我々のこれは球状星団の中でも最も小さいものでしたね」
「はい」
銀河周辺にある星団である。銀河系の周りに一五〇程存在している。エウロパはその中の一つなのだ。サハラはそれの集合体である。どちらにしろエウロパやサハラは実は銀河の外周なのである。マウリアもそうではあるが一部が銀河にあったりしている。銀河のほぼ全てが連合が領有していると言っても過言ではないのだ。
「そこで星系一つを頂いています」
「連合でもそれは変わらないでしょう。むしろ」
「むしろ？」
「その広さは比較しようがありません」
「連合の広さを」
「はい、バチカンはそこに移るのです」
リー枢機卿の目は不思議な光を帯びていた。何と言えばいいかわからない色の光であった。
「強制的にしろ」
「問題はそれが何処か」
「そうです」
彼は言う。
「ですが長きに渡っていた欧州を離れるのもまた事実」
「私も連合へ行くことになります」

「ですね」
「またバビロン捕囚となるのか。それとも」
「永遠に連合に留まるのか」
「ですがそれも全ては神がお決めになることですか」
「試練かも知れませんね、いえ」
リー枢機卿は言葉を言い換えた。

## 第二十一部第一章　代理人の座その五

「報いなのかも」
「この度のあまりにも重い罪の為に」
「連合でも必ずや神がいて下さります」
「ええ」
それはわかる。神はあらゆる場所に存在するからだ。かってスピノザはそう言って凡神論を唱えていた。神の力をあくまで偉大なものとするキリスト教ならではの考えである。
「ですから。そこでもまた御加護を」
「報いではあっても」
「そうです。では参りましょう」
話が一段落したところでヤロシュ枢機卿に声をかけた。
「教皇様の下へ」
「はい」
二人は立ち上がり礼拝堂を後にする。そして教皇の下へ向かった。まずは連合各国への呼び掛けについて二人で提案をした。だがそれはむべもなく下げられた。
「なりません」
「やはり」
「これは私達に対する報いなのです」
教皇もそれを言った。
「知っていてそれを正そうとしなかったこと。これは罪なのですから」
「それでは」
「どの様な場所でも笑顔で進まなければなりません」
教皇は言う。
「私達の罪の報いなのですから。よいですね」
「わかりました。それでは」

「はい。かって主はゴルゴダの丘を歩まれました」
キリストの最期の話である。
「それに比べれば如何ばかりでしょうか。ましてや罪への償いなのですから」
「喜んで受けるべきだと」
「少なくとも私はそうです」
その言葉も声も澄んだものであった。
「神が与えた給もうた報いであり試練ならば」
「そうですか」
「リー枢機卿はどうなのでしょうか」
「私もまた神の僕です」
リー枢機卿の答えはこうであった。彼もそれを忘れたことはない。
「ですから」
「それを聞いて安心致しました」
「皆そうなのですよ」
彼はまた言う。
「神の僕です」
「では僕としての責務を果たしましょう」
「それでは」
「連合にも神はおわします。いえ」
教皇は二人だけを見ていたのではなかった。その目には神さえも見ていたのである。
「あらゆる場所に。ですから」
「はい、私達も共に」
「神の場所に向かいましょう」
「有り難うございます」
教皇は二人の枢機卿の申し出に目を細ませる。
「それでは」
「はい」
三人は頷き合った。

「この話は終わりです。もうすぐ時間です」
「時間？」
「神の僕達に会う時間です」
教皇が窓から姿を現わし彼に一目会わんと集まっている信者達に応える時間なのだ。これもまた神の代理人である教皇の仕事なのである。
「もうそんな時間ですか」
「はい」
「わかりました。それでは」
「私共はこれで」
「また機会があれば」
「お話しましょう」
二人の枢機卿は教皇に別れを告げた。教皇は信者達と会う為に窓に向かい二人の枢機卿は部屋を後にした。二人並んで廊下を進みまたあの礼拝堂に入った。
「お流石と言うべきでしょうか」
「教皇様ですか」
「はい、あれ程神の御意志に従おうという方は他にはいないでしょう」
「そうですね」
リー枢機卿はそれに頷く。
「ですから今も多くの信者に慕われている」
「お世辞にもいい教皇様ばかりではありませんでしたがあの方は少なくとも」
「違いますね」
「ええ、私はそう思います」
ヤロシュ枢機卿はにこりと笑って述べた。
「では私もまた」
リー枢機卿はここで言った。
「何か御用件が？」

「はい、共に来ている者達と食事の時間ですので」
「主の身体と主の血を」
「頂きに向かいます」
「わかりました。それでは私も」
「はい」
二人は言い合う。
「またお会いしましょう」
「今度は連合になるかと思いますが」
「その時にまた宜しくお願いします」
「こちらこそ」
二人は言葉を交わした。そのうえで別れる。エウロパを離れる前のバチカンは郷愁と未練が漂いながらも神の意志に従おうとしていた。その中でこんな話が出ていた。

## 第二十一部第一章　代理人の座その六

「バチカンが連合に移るとなるとだ」
連合での話である。
「やっぱり教皇も連合出身になるのかな」
「まあそうでしょうね」
洒落た野外の喫茶店のテーブルで茶を飲みながらぽつりと呟いた彼氏に向かいに座る彼女が答えた。すぐ側は道路でそこに人が行き来している。車も通っている。
「だってエウロパにいたからエウロパ出身の教皇様なんでしょう？」
「ああ」
「だったら。これからはそうなるわよ」
「連合出身の教皇様かあ」
「何か不思議なことでもあるの？」
彼女は考える顔をして上を見上げた彼氏に対して問うた。
「当然じゃないかしら」
「まあ当然って言えば当然だけれどな」
彼氏は一応はそれに答えた。
「けれどなあ」
「違和感があるってこと？」
「ほら、枢機卿までは一杯いるけれどさ」
カトリックの信者は連合の方が圧倒的に多いのだ。他の宗教との掛け持ちも含めて。
「教皇は今まで一人もいなかったかしら」
「それが違和感ってことかしら」
「白い肌の教皇に見慣れてきたからね」
彼氏は言う。
「黄色い肌や黒い肌の教皇様か」
「面白いじゃない」

だが彼女はその言葉にくすりと笑ってみせた。
「私はそう思うわ」
「面白い、か」
「だって。今まで白い肌の教皇様ばかりだったのにそれが変わるのよ」
「ふうん」
「それはエウロパが結局はバチカンを独占していたってことだけれどそれが変わるってことだし」
「そういう意味もあるか」
「そうよ、だから私は楽しみなのよ」
見れば上機嫌な顔になっていた。
「連合に教皇様がやって来て、それからが」
「それからか」
「エウロパの連中がまたヒス起こすわよ、肌の色が違う教皇様が誕生したって」
「成程、それは面白そうだね」
彼氏もそれを聞くと想像力を働かせて面白い気持ちになった。
「あいつ等がヒス起こすの見られるなんて」
「正直エウロパのものなんて詰まらないものばかりだけれど」
「美術品も音楽もね」
「ええ」
連合から見ればそうであるのだ。これは人によるが。連合から見ればエウロパのものはさして価値のあるものではないのである。これは価値観の違いであった。
「味がないっていうか」
「上品ぶっていてね」
「まあそれが貴族なんでしょうけれど。少なくとも私達には合わないわ」
それを簡単に言うと合うか合わないかだ。エウロパの誇る貴族文化は連合の大衆文化から見れば上品ぶっているだけで味気ないもの

だったのだ。実際に料理では連合の者達の多くはエウロパ貴族が舌鼓を打つ料理を味のないものと評している。こういうことなのである。逆にエウロパの貴族達は連合の料理は調味料、とりわけスパイスを極端に使っただけの料理だと感じている。お互いの価値観が違うのである。

元々連合はエウロパから戦利品の類は取るつもりはなかった。だから美術品等にはエウロパのものに関しては一切関わらなかった。だが実際にそれを見てみて落胆したのである。そのデザインや様式に何も感じるところがなかったからだ。今の彼女もまたそれと同じなのである。

「それでも教皇様は別よ」

「バチカンだけはってことかい」

「ええ。今から楽しみにしてるのよ」

蕎麦粉のクレープを食べながら言う。見れば地球にあったような蕎麦粉ではない。かなり黒い。ケベック王国のセントジョーンズ星系産である黒い蕎麦を使っているのである。

「その時のエウロパの顔をね」

「じゃあ僕も楽しみにさせてもらうかな」

彼氏は自分の彼女の言葉に応えてふと笑みを作った。

## 第二十一部第一章　代理人の座その七

「エウロパの怒り狂う様をね」
「面白いでしょうね、何かと」
「うん、何か今から楽しみになってきたよ」
「そうでしょ。私もよ」
「それじゃあまずはバチカンが何処に来るかね」
「ええ、それね」
まだ場所も決まってはいない。だが歯車は動こうとしていた。連合にいる者もエウロパにいる者もそれを肌で感じていた。時が確実に動いているのを。
この彼女の予想は当たっていた。エウロパではもう今後の教皇のことが話題になっていたのだ。話の内容も彼女が予想した通りであった。
「全く面白くない」
パブで男達がその不満を思いきりぶちまけていた。
「何であいつ等のところに教皇様が行かれるんだ」
この男達はカトリックである。だから不満もひとしおであった。
「戦争に負けたからだろ」
「それはわかってるさ」
太った赤ら顔の男がビールのジョッキを手にしながらそれに応える。四人で店の端にある樫のテーブルを囲んでいた。その座っている椅子もまた樫の木であり店も樫で作られている。如何にも頑丈そうであった。
「けれどな。それでもむかつくものはむかつくんだよ」
実に率直な言葉であった。エウロパの者の多くの言葉でもある。
「そういうもんじゃねえのか？」
「まあな」
「それは否定しねえさ」

それは仲間達も同じであった。これは感情的な問題である。
「これでバチカンも終わりだな」
「少なくともエウロパのはな」
「全く。どうしてこんなことになったのやら、だな」
「それもはっきりしてるけれどな」
わかっていても言いたくなることであったのだ。
「中央政府の工作員がバチカンを利用して連合に潜入していたからだ」
「そしてそれに枢機卿様まで関わっていた」
それがもとで戦争になったのである。これでは移転させられても文句は言えないものであった。何しろバチカンが原因で起こった戦争であるからだ。
「キナ臭いならその元を断たないとな」
「連合も馬鹿じゃねえか」
「へっ、図体はでかいが頭にまでちゃんと栄養が行き渡っていやがるぜ」
ついつい悪態が出てしまう。言うのはやはり太った赤ら顔の男である。
「洒落にならねえよな」
「まあな」
「馬鹿だと思いたかったぜ」
「で、戦争に負けて俺達のところから教皇様は出て行かれる」
「バビロン捕囚と同じだな」
「ったく、どうしたものかね」
赤ら顔の男はぼやく。
「今のこんな状況をよ」
「我慢するしかないな」
頭の禿げた同僚の言葉はこうであった。
「今更どうしようもないからな」
「どうしようもないか」

「じゃあできるか？」
禿げた、というか薄い感じであった。この時代は禿も治療可能であるからそれを行っているのであろうか。だがそれはまだ途中でどうやら髪の毛が完全に元に戻ってはいないようである。
「できないだろ」
「ああ」
赤ら顔の男は憮然とした顔でビールを飲み込んだ。
「できたらこんなところであれこれ言ってねえよ」
「そうだよな」
「とっくに外務省に入ってるぜ」
「鉱山の労働者に出来ることは限られてるってわけか」
「資源を掘ることとお祈りだけさ」
赤ら顔の男はビールをもう一杯手に取って言う。
「俺達にできるのはな」
「お寒い話で」
「何にもできはしねえさ」
「けれど教皇様はその話を聞いたらこう仰るぜ」
紫の目の男が話を出してきた。
「祈ることだけで充分なのです。神は貴方達の信仰を見ておられるでしょうと」
実際に教皇の声いろも真似ている。中々似ていた。
「だろうな」
「それこそが最高の行いなのです。働くこともまた神の御意志なのですと」
「バチカンらしい言葉だよな」
「というかそのまんまじゃねえか」
同僚達はそれを聞いて言う。

## 第二十一部第一章　代理人の座その八

「教皇様の御言葉のよ」
「わかるか」
「わからないわけねえだろ」
「他に誰がそんなこと言うんだよ」
「だよな」
「似てるだろ」
「というかそっくりだ」
それにも返事が返ってくる。
「御前こそこんなところにいるべきじゃねえな」
「物真似芸人になれってか」
「そういうことだ」
「なってみるか？」
「いや、それはいいさ」
紫の男は笑顔でそれを断った。
「俺はちゃらちゃらした服より鉱山でもの掘って、それが終わったらこうして飲むのが一番性に合ってるからな」
「そうか」
「そうさ」
ニヤリと笑って答える。
「それと同じで教皇様もバチカンにおられるのが一番いいんだよ」
「エウロパにな」
「それがよ、全く」
紫の目の男の顔も赤ら顔の男のそれと同じになった。
「馬鹿なことだぜ、全く」
「幾ら言っても言い足りないか」
痩せた男がポツリと呟いた。
「何かな」

「言っても言ってもな」
皆それは同じ意見であった。
「言いたくもなるぜ」
「どうしようもないことだから余計にな」
「教皇様について連合に行くのもあれだしな」
「おいおい、馬鹿言っちゃいけねえよ」
皆痩せた男のその言葉はすぐに打ち消した。総出であった。
「連合に言っても何もねえぜ」
「そうだよな」
「家族はどうするんだよ。それに」
その禿げたというよりは髪の毛の薄い男が言う。
「言葉も習慣も全然違うのによ。俺達じゃどうしようもねえぜ」
「行っても暮らしていけない」
「そうだ」
それが現実であった。厳然たるものであった。
「開拓地に放り込まれて体よく使われるだろうな」
「それで終わりか」
「下手したらそのまま奴隷だろうな」
「奴隷っておい」
当然この時代は奴隷というものは存在しない。二十一世紀と比較して労使関係がよりしっかりしているのである。これは連合もエウロパも同じである。ただしマウリアはカーストの関係で俗に奴隷と言われるカーストも存在する。だがマウリアはあまりにも独特の事情であり、それが秩序ともなっているので一概には言えない。
奴隷的な待遇というものもなくなっている。当然ながら虐待に対しては厳罰が待っている。そこはかなりしっかりしているのである。
「そんなわけねえだろうが」
「幾ら連合の奴等でもな」
「そうだよ。まあ精々開拓地で馬鹿みてえに働かさせられるだけさ」
紫の目の男が言った。

「そんなところだよ」
「金を貰ってか」
「ああ」
「けれどどっちにしろ連合では俺達は生きてはいけねえさ」
それは嫌になる程わかる。赤ら顔の男もそれはよくわかっていた。
「どうやってもな」
「エウロパしかないってわけか」
「そうさ、俺達はエウロパ人なんだ」
彼は俯いて述べる。
「他の何でもねからな」
「他の何でもか」
「じゃあ何だ？」
逆に問うてきた。
「俺達がエウロパ人じゃなかったら。一応俺はベルギー国籍だが」
昔からカトリックの勢力が強い国である。それで隣国のオランダとはかっていざこざもあった。十九世紀に独立してザクセンから王家を迎えている。これはこの時代でも続いている。もうかなり古い王家である。
「俺はアイルランドは」
紫の目の男は言った。
「出稼ぎでな。ここに来ている」
「俺はベルギー」
「俺もだ」
彼等の中の殆どがベルギー出身であった。他の国から来ているのは紫の目の男だけであった。

## 第二十一部第一章　代理人の座その九

「そこから離れたくはないぜ」
「祖国だしな」
「まあ俺もだな」
紫の目の男もそれは同じであった。
「これが終わったら女房のいるアイルランドに帰るつもりだしな」
「かみさんのところにか」
「ああ、ガキも一緒だ」
彼は答える。
「一人な。男だ」
「へえ」
「で、かみさんは美人か？」
世間的な話になってきた。
「ああ、美人だぜ」
男はニヤリと笑ってそう答えた。
「それはいい」
「羨ましいな」
「二十年前はな」
そしてお約束の返事が返ってきた。
「へっ、そうきたか」
「誰でもおばさんになったらな」
「今じゃビヤ樽みたいになってるさ」
紫の目の男はこう述べて笑った。
「二十年の間にどんどん太ってな」
「特に三十越えてからだろ」
「わかるか」
「俺の女房もそうだからな」
髪の毛の薄い男が言う。

「あっという間だったぜ。二十歳の頃はスリムで美人だったのによ」
「女房ってのは皆詐欺師さ」
紫の目の男の言葉は実にシニカルであった。
「結婚する前はスリムで美人でもそれからは漫画みたいに太っていきやがる」
「ジャムの摂り過ぎさ」
「それだけか」
「ワッフルもさ」
「こっちはフライドポテトとフィッシュアンドフライさ」
「それとビールだろ」
「御名答」
太るのには太る理由がある。ベルギーではワッフルが、アイルランドではジャガイモとフィッシュアンドフライである。どちらも明らかに太る食べ物である。
「女房の言葉がふるってるんだ」
「何て言ってるんだ？」
「ジャガイモはアイルランド人のソウルフードだ。だから何があっても食わなくちゃいけないってな。ガキにもそう教えてるんだよ」
「いいことじゃないか」
「アイルランドだからな」
「まあそれ自体はな」
アイルランドの歴史において最大の悲劇とされているジャガイモ飢饉。そのこともありジャガイモは彼等のソウルフードとなっているのである。
「けれどな」
「かみさんは太るのは嫌か」
「だから詐欺なんてよ」
彼は言う。
「困るだろうが」
「けれど別れる気はないだろ」

「俺はカトリックだぜ」
「いや、それでも」
「別れたくはないだろ」
「それとこれは別さ」
苦しい言い訳である。
「惚れちまったからな」
「へっ、詐欺にあってもか」
「仕方がねえ」
ニヤリと笑ってビールを口に含む。
「アイルランドの男ってのはな、一途なんだよ」
「一途か」
「独立でも何でもな。思ったら何処までもさ」
「じゃあかみさんにもだな」
「勿論」
結局そういうことなのであった。
「ビヤ樽でもな。一生だぜ」
「いいねえ」
「俺も娘にはアイルランド男を勧めてみっかな」
「ああ、それは止めときな」
紫の目の男はベルギー人の同僚達にこう述べた。
「どうしてだい？」
「アイルランド男は気が短い。それに飲んべだ」
「ビールをか」
「俺を見りゃわかるだろ？」
今度はにこにこと笑っていた。もう顔は真っ赤になっている。

## 第二十一部第一章　代理人の座その十

「アイルランド人はビールがねえと駄目なんだよ」
「パブでか」
「ああ、一日の終わりはパブにあり」
「一日の全てもパブにある」
「そういうことさ。そんなのと結婚するものじゃねえぜ」
「連合のピロシキ野郎共と一緒か」
　ふとスラングが出て来た。
「連中は女でも飲むだろ。ウォッカをよ」
「そっちの女も飲むんじゃねえのか？」
「男程じゃねえよ」
「そうか」
　なおピロシキ野郎とはロシア人への蔑称である。ロシアの有名な食べ物から取られている。これがアメリカ人になるとハンバーガー野郎、ホットドッグ野郎になり中国人になると肉饅野郎やラーメン野郎になる。日本人だとお握り野郎だ。差別表現にしても強いものではない。愛称に近いものがある。タイだとトムヤンクン野郎、ベトナムは生春巻野郎、メキシコはタコス野郎である。それぞれの国でバリエーションが豊富に存在している。
「だからさ。止めておきな」
「じゃあそうするか」
「そこであっさり止めるのかよ」
「だっておめえが今止めろって言ったじゃねえか」
「素直だな、おい」
「それがベルギー人の美徳さ」
　そうかというとそうも言えない。結構世知辛いのがベルギー人である。地球にあった頃はベルギーの辺りは商業が発達していたのである。

「まああんたんとこはジョンブルは駄目だろ」
「冗談じゃねえよ」
即答であった。イギリス人は駄目ということである。
「何で俺の息子をライマーの娘にやらなくちゃいけねえんだ」
こうも言った。
「息子には言ってあるぜ。女はイングランドの女以外にしとけってな」
「徹底してるね、また」
「一途なんだよ」
またアイルランド人の一途さを口に出してきた。
「特にイギリスに対してはな」
「あれかい？やっぱり歴史か」
「それ以外に何があるっていうんだよ」
彼はそう述べ返した。
「カトリックだってえらく虐められたんだぜ」
「ああ、それは知ってるよ。クロムウェルにな」
「あいつの前からだけどな。あいつは最悪だ」
紫の目の男のそのパープルアイに嫌悪の色が浮かぶ。
オリバー＝クロムウェルのことである。清教徒革命の立役者であり狂信者であった。イングランド内の旧教徒を支援するアイルランドに侵攻し徹底的な破壊と殺戮をもたらした。そのうえアイルランド植民地法を作りそれでもアイルランドとカトリックを弾圧したのである。
「イギリス人らしいぜ」
「言うねえ」
「これはまたきつい」
「あんた達だってダッチマンには結構あるんじゃねえのかい？」
「あるって言えばあるな」
赤ら顔の男がそれに頷いた。
「あいつ等はプロテスタントで俺達はカトリックだ」

「こっちと同じだな」
「中々嫌味で底意地の悪い奴等でな」
「力はない癖に威張り散らす。それがオランダ人共さ」
「そこはジョンブルとは違うな」
紫の目の男はそれを聞いてふと言った。
「ジョンブルは力もあってずる賢い」
「最悪だね、また」
「だからあそこまでなれたんだよ」
「大英帝国か」
「悔しいがそれは認めるぜ。だが俺達はそれに勝ったんだよ」
「それは俺達もさ」
ベルギー人達も言う。

## 第二十一部第一章　代理人の座その十一

「世界を支配したと自称するダッチマン共の鎖を断ち切った」
「そして今こうして自分達で立っているんだ」
「王様と一緒にな」
「それが誇りか」
「歴史は薄くてもな」
「そうだぜ」
　こういうジョークがある。世界で最も薄い本とは何か。ドイツ人のユーモアの本とベルギーの歴史の本である。彼等はそれを自分達でネタにしてきたのである。
「けれどな」
　だがここでベルギー人達は溜息をついた。
「それもこれも結局は俺達がカトリックだからやれたんだ」
「ああ。教皇様がおられたからな」
　ベルギー人をベルギー人たらしめているものはカトリックであった。これにより彼等は戦い、独立を経ているのである。それだけに信仰は中々に強いのだ。
「しかしもうこれからはな」
「教皇様はもうおられないんだ」
「エウロパにはな」
「それを考えるとよ」
　皆ここでビールを飲み干す。
「やっていられねえ」
「全くだ」
「賠償金なんぞいいから教皇様だ」
　彼等は口々に言う。
「何とかならねえのかよ」
「もう決まったってさ」

「犬や猫みてえにやる、やらないの話じゃねえのはわかってるけれどよ」
彼等はわかってはいる。だがわかっていても口に出さざるを得ない心境なのだ。
「それでもな」
「戦争に負けるってのは嫌なもんだぜ」
今度はソーセージを口に入れる。またビールを注文する。
ビールがジョッキに並々と注がれて運ばれてきた。またそれを飲む。
「何もかんも持って行かれるんだな」
「ああ」
「連合の奴等、戦争の間は異様に大人しいと思ったらこれかよ」
「タチの悪い奴等だぜ」
飲みながら相変わらず不平を述べ立てる。
「数も多いしな」
「やっぱり数か」
「あればかりはどうしようもねえがな」
「俺達数で勝ったことはねえけれどな」
「それを言うなよ」
紫の目の男はその言葉に苦笑いを浮かべた。
「アイルランドもベルギーもそればかりはな」
「へっ、苦労してきたからな」
「小国の悲哀ってやつだな」
「だからそれを言うとよ」
「小国はそれだけで罪ってやつだな」
「人道主義なんて政治じゃ通用しねえんだな」
「いや、通用はするぜ」
痩せた男が言った。
「するのか」
「一応はな。便利な時だけだ」

実にシニカルな言葉であった。だがそれが現実でもある。政治の世界とはそうしたものである。所謂錦の御旗が欠かせない世界なのである。実際にローマ＝カトリックもその錦の御旗であり続けてきた。バチカン自身がそれを使って長きに渡って欧州に君臨してきているのである。

「嫌なこった」

赤ら顔の男がまずいビールを飲んだ。

「ご都合主義かよ、そこんとこは」

「まあそういうことだ」

痩せた男はそれに応える。

「はっきり言わせてもらうとな」

「それで小国は小国なりにやっていかなくちゃいけない」

髪の薄い男は彼の話を聞いて呟いた。

「そういうことだな」

「ああ、その通りさ」

「エウロパは大国じゃなかったのか」

「連合から見ればそうじゃなかったってことだな」

痩せた男の言葉はさらにエウロパの者達にとっては聞くのが辛いものになっていく。それでも彼は言い続ける。

「その小国が工作を仕掛けてきたから戦争でやり返し」

「それで懲罰として教皇様をか」

「まあそんなところだな」

「でかい相手にちょっかいをかけるってのは勇気がいる」

髪の薄い男はまた呟いた。

「ガキの喧嘩でもな」

「そのままさ」

痩せた男はそう言葉を返した。

「政治の世界でも結局はそれだろ」

「でかいってのはそれだけで力だからな」

赤ら顔の男も言う。

「俺はガキの頃でかかったからな。よくわかるぜ」
「あんた今でもそうじゃないのかい？」
紫の目の男はそれを聞いて思わず笑ってしまった。
「特にそこはな」
そして腹を指差してきた。実に巨大な腹である。
「見事なものじゃないか」
「おう、これは俺の誇りだ」
それを言われて怒るわけでもなく逆にこう応えて笑ってきた。
「これからもどんどん大きくなっていくぜ」
「成人病には気をつけてな」
「しかしエウロパが小国だったのか」
「あくまで連合の連中から見ればだけれどな」
痩せた男は髪の薄い男にまた言葉を返した。
「何せ相手は四兆もいるんだ」
「こっちは千億だ」
「俺もエウロパが小さいなんて思ったことはないんだけどな」
「あいつ等がでか過ぎるんだ」
赤ら顔の男の意見はこうである。
「馬鹿みてえによ。まあそれもこれも」
「言っても仕方ない話だな」
紫の目の男も言葉がなかった。
「俺達はこの星団でチマチマとやってきて」
「奴等は銀河で派手にやってきた。千年の間な」
「何とかならねえのかね」
痩せた男がぼやいた。
「こんなのが続いたらよ、いい加減」
「将来はえらいことになるな」
「というかもうなってるじゃねえか」
赤ら顔の男は紫の目の男に突っ込みを入れた。

## 第二十一部第一章　代理人の座その十二

「負けてよ」
「まあな」
「このままずっとこの星団にいても同じだろうな」
「俺達が掘ってる資源だって限りがあるしな」
「そうだよな、結局は」
「そうなんだよ」
彼等は口々に言う。
「どうにかしてこっから外にだな」
「前はまだ総督府があったのによ、それもな」
総督府は彼等にとって新天地であり救いの場所であったのだ。人口問題はおろか閉塞感さえも取り払ってくれるものであったのだ。それにより多くのサハラの者達が難民になっていたとしてもだ。彼等にとっては総督府の存在はなくてはならないものであったのだ。
「なくなった」
「何もかもなくなったな」
「どうなるのかな、これから」
「さてな」
それがわかればこんなところにはいない。ここにいる誰にもわかることではなかった。
「どちらにしろ大変なのはわかるがな」
「しかもどえらくな」
「英雄でも出ないかね」
「あいつがいるんじゃねえのか？」
「あいつ！？」
ベルギー人達は紫の目の男の言葉に顔を向けてきた。
「あのイギリスの貴族だよ」
彼は苦い顔をして語った。

「ギルフォードとかいう奴だ」
イギリス人というだけで不快なのがわかる。彼のイギリス嫌いはやはりかなり徹底したものであった。
「最近やけに名前を見るけれどな」
「あの侯爵様か」
痩せた男はその名を聞いて考える顔になった。
「どうかな」
そのうえで述べる。
「まだ何とも言えないな」
「若しかすると凄い人間なのかも知れないがな」
「若しかするとか」
赤ら顔の男は痩せた男の言葉に目を向けてきた。
「まだ何もわからないからな」
「まあそうだな」
それには赤ら顔の男も頷いた。
「情報が少ないな」
「というか詳しいことはまだ何もわかってないだろ」
「イギリスでは名門の貴族だってことだけだな。古くからの」
「御先祖様はアイルランドで好き放題やってたに決まってるさ」
紫の目の男は忌々しげに述べた。
「イギリスの貴族だぜ」
「それはアイルランドだけじゃねえと思うがな」
「何しろイギリスだからな」
ベルギー人達も当然イギリスのことを知っている。だから言うのだ。
「世界中でな」
「何をしていたのか」
「戦争の時連合の連中イギリスにはかなり冷たかったそうだな」
無論虐待や蛮行は行ってはいないが。かなり冷淡な態度を取っていたのは事実である。

「あとフランスにもな」
「当然だよな」
「昔かなりやられたんだろう？」
「というかやられていない方が少ないだろうな」
アイルランド人が言うと説得力がある。
「あの国には」
「その国の出身か」
「かなり性格が悪いかもな」
「だがな。任せてみるのもいいかも知れないな」
紫の目の男はここで意外な言葉を述べた。
「おいおい」
「そうなるか？」
「今うちは大変な時だ」
「まあな」
「正直どうしようもない」
エウロパの惨状は言うまでもないことである。
「それをどうにか出来る奴ならな」
「できるか？」
「賭けだ」
紫の目の男はそれに答えた。
「かなり危険ななな。しかしだ」
そしてここで言った。
「ジョンブルってのはな、賭けには強いんだ」
「ほお」
「ここぞという時には負けない。嫌になる位な」
「今がここぞという時なら」
「負けないってことか」
「アイリッシュが言うんだから間違いはない」
敵対してきたからこそ言えることであった。敵は時として自分自身より己のことを知っているものである。

「やれるかも、だ」
「じゃあここはあの侯爵様に任せてみるか」
「そうだな」
ベルギー人達は顔を見合わせてそれぞれ言い合う。
「どちらにしろ今エウロパはどえらい状況だしな」
「ああ、賭けてみるしかない」
「一か八か。鬼が出るか蛇が出るか」
「やってみるか」
彼等は言い合う。最後にジョッキを高く掲げた。
「けれどもう終わりだな」
「ああ、この一杯で止めにして」
まるで剣を重ね合わせるかの様である。だがそこにいるのは騎士ではなく真っ赤な顔をした酔漢達であるからいささか間抜けな姿ではある。
「教皇様に幸あらんことを」
「ベルギーとアイルランドにも」
「エウロパにも。そして」
最後に言う。
「あのジョンブルの旦那がいいカードであらんことを」
そう言い合った後でビールを飲み干した。これで彼等のこの日の飲み会は終わったのであった。

## 第二十一部第一章　代理人の座その十三

教皇のことは多くの者が気にかけており、またその動向が注目されていたのであった。教皇自身は動けなくともだ。とりわけ移動先である連合においては様々な議論が表面、水面下両方で行われていた。

これは水面下の話である。密室で十二人の老人達が話をしていた。

「まずはこれだけは確認しておきたい」

その中の一人がまず口を開いた。

「我々は彼等とは直接は関係がない」

「うむ」

その言葉に他の老人達も頷く。

「確かにな」

「我等には我等の教えがある」

彼等はそれぞれの口で述べる。

「彼等が何処に行こうが本来ならば何の問題もない」

「好きにすればいいのだ」

「そうだな」

一旦はそうした結論が出る。

「しかしだ」

それはすぐに否定された。

「そうもばかりは言っていられない」

「あの代理人はいるだけで大きな存在となる」

「その彼等が何処に座ることになるか」

「その場所は我等にとっては大きな問題だな」

「うむ」

老人達は円を囲んでそれぞれの椅子に座っていた。そして話をしている。

「我等が利益を得るべきか？」

「既に我が子達はそれに関して動いている」
老人の中の一人が言った。
「観光としては大きなものがあるからな」
「それか」
「観光だけでもないしな」
「人が集まる場所。それこそが利益の動く場所なのだから」
「だからだ。やはり我等は動くべきだ」
「我等の為にか？」
「それもある」
これは当然のことであった。まずは利潤を求める、それがなくて動く者なぞいはしない。
「だがそれだけでは駄目だな」
老人の中でも最長老が声をあげた。
「というと」
「今この問題で連合各国が動いている」
彼は言う。
「中央政府も調整の時を見計らっているが」
「難しいだろうな」
「一歩間違えれば大きなミスになる。そしてそれは彼等もわかっているだろう」
「だからだ」
長老は述べる。
「今は調整役がいないのだ。わかるな」
「わかるとも」
他の老人達はそれを聞いて笑みを浮かべる。
「わからない筈がない」
「そういう時こそ我等の出番か」
「思えば動くには絶好の話だ」
「では手を打ちはじめておくか」
「カトリックの国を中心にな」

「いや、大国達にも根回しをしておこう」
そちらにも目が向けられた。
「アメリカや中国にか？」
「そうだ。日本とロシアもな」
「やれやれ。相変わらず貪欲な奴等だ」
老人達は長老の言葉を聞いて呆れた言葉をあげた。
「利になるものは何でも利用する、か。相変わらずだな」
「日本もまた。表向きは利には関心が薄い顔をしていて」
「あの狐は別だ」
伊藤のことである。
「賢い狐だからな」
「表の意味でも裏の意味でもな」
伊藤のことは彼等もよく認識していた。狡猾で抜け目のない女というのが彼等の認識である。
「利になるとなればすかさず動く」
「表向きは穏やかな笑みを浮かべていてもな」
「素顔は別か」
「いや、素顔が元々あれなのかも知れんぞ」
老人の中の一人が述べた。

## 第二十一部第一章　代理人の座その十四

「というと？」
「日本にあるな。狐の面」
「ああ、あの白いのか」
「そうだ、あれを被っていると考えるなら」
「その下にあるのも狐の顔」
　こう述べられる。
「同じか」
「うむ」
「しかし。国の中にキリスト教徒が殆どいないのに動くつもりか、あの国は」
　日本は伝統的にキリスト教徒が少ない。教会はあちらこちらにあるが信者自体は極めて少ないのである。どれだけ布教しても広まらないことでかえって不思議がられているのである。
「だからかも知れんぞ」
　一人が言った。
「宗教的にも政治的にも公平が保たれると。そう主張するかも知れん」
「詭弁だな」
　それは誰にもわかる。
「そんなことを言ったらどの国の側に置いてもいい」
「だが大国がそれを言えば詭弁ではなくなる」
　力があれば詭弁もまた正論とすることが出来るのである。それが政治力学なのだ。
「都合のいい話だ」
「だがそれはそれでいいではないか」
　中の一人が言う。
「付け入るところははっきりわかっているしな」

「まあそうだな」
「それは幾らでもある」
「弱みも知っているしな」
「だがあの狐の弱みはあるのか」
また中の一人が問うた。
「わしは知らないのだが」
「わしもだ」
「わしも」
彼等の中に伊藤の弱みを知っているものはいなかった。あれだけの地位にいるのなら一つや二つは持っているのが普通である。だが伊藤はそれがないのかそれを見せないのか。とにかく彼等でも知らなかったのである。
「気付かせないか」
「やりおるわ」
「流石は狐と言うべきかな」
「狐にスキャンダルは無縁か」
「ならば作り上げるか？」
「いや」
それは最長老が止めた。
「それをしても意味はないだろう。すぐに否定されるに決まっている。証拠まで出されてな」
「左様か」
「ではそれもなしだな」
「そういうことになるな」
「やりにくいものだ」
老人達は歯噛みするしかなかった。
「だが」
ここで最長老が言った。
「それならばそれでやり方がある」
「というと」

老人達は彼に顔を向けてきた。老人らしいゆっくりとした動きであったが確実にだ。
「狐は頭がいいものだ」
「うむ」
「それは承知しているつもりだが」
「ここは話をするとしよう」
「交渉か」
ふと交渉という言葉が出た。
「そうだ。日本としてはさして重要な話でもあるまい。利益だけの話だ」
「それを言うと他の大国もそうだな」
「あくまで利益だけだ。信仰はない」
「ならば話は進めやすい」
最長老の長い髭が暗い部屋の中で動いていた。顎が動くと共にだ。
「信仰というものは心だ。心は容易にはコントロールできはしない」
「我等がそうであるようにな」
「こればかりはな」
「そうだ。だが今回の彼等にはそれがない」
「ということはだ」
また言葉が出た。
「話をつけるのは容易い」
「別の見返りを提示すればか」
「日本にはどの様な手土産をあげればよいかな」
「そうだな。アメリカとの果物の輸入問題等で日本に有利に仲裁をしてみるか」
「それがいいか」
その案に他の老人達も乗る。
「惑星開発に便宜を図ってな」
「ではそれでいいな」
「日本はな」

「後の三国はどうするか」
「米中露か」
その三国であった。
「そうだ、あの連中は日本と比べても貪欲だ。見返りもとんでもないものを要求してくるだろう」
「個人的にも何か送るか？」
誰かが言った。所謂袖の下である。

## 第二十一部第一章　代理人の座その十五

この時代でも、特に連合においてはよく見られることである。もっとも政治家は選挙資金やスタッフへの給与、支持者へのサービス等で金が幾らあっても足りない職業なのでその袖の下もまず自分達の懐には入らない。この時代は誰もがまず餓えも渇きもなく、安定した生活を送られるので多少の賄賂も謝礼のうちという考えになっている。人間とは不思議なもので自分が安定した生活を送っていれば汚職や賄賂には寛容になれる。少なくとも個人的に些細なレベル、国や企業が傾くものでなければ見つからなければよいという考えである。凶悪犯罪には五月蝿いが汚職、収賄には甘い傾向が連合にはある。なお見つかれば当然罪に問われる。

「それが効果がある者にはな」

「ではそうしておこう」

「国としてはどうするかだな」

「それが一番厄介だな」

「連中の言い分をそのまま聞くと大変なことになる」

「その通りだ」

大国の横暴というやつである。

「だが見返りをやらなければ首を横に振りそうもないぞ」

「全く。何処までも勝手な奴等だ」

「仕方ないな。何かの便宜を提供するか」

「そうするとしよう」

「中央政府にも話をしてな」

そちらの根回しについても述べられた。

「若しそれで従わなければその時は」

「思い知らせてやるか」

「そうだな。痛い目を見せてやろう」

彼等は口々に言う。

「我々の手でな」
「だが完全には怒らせぬようにな」
最長老はここで釘を指してきた。
「連中は力が強い。それに頭もある」
「わかっている」
「あくまで切り札だ」
「しかも。致命傷は与えぬさ」
「何人かは苦しむことになるだろうがな」
彼等は不敵で不気味な笑みを浮かべてそれぞれ述べた。
「便宜を優先させる」
最長老の下した結論はこれであった。
「バチカンと見合うだけの便宜をな。紹介しよう」
「そうするか」
「まあ話し合うとするか。それで話を纏めていけばよいか」
「幸い利益だけの話だしな。信仰が絡まないと実に楽だ」
「左様、信仰の重みは我等こそが最も知っている」
中の一人が述べる。
「それが為に我等があるのだからな」
「うむ」
「そしてそれを元に行動する国は」
「フィリピン、そしてメキシコにまず動くか」
どちらもカトリックの国である。そしてその信仰は強い。
「彼等を抑えて」
「それから小国へ移っていく」
「とりあえず小さい国なら与えてやってもよかろう」
「そうだな。あまり影響のない国に」
「ならばそうした国も調べておこう」
「焦ることはない。じっくりとな」
彼等は言い合う。
「やっていけばいい。どのみち決まるまでに相当な時間がかかる」

「調停役としてはな。好都合だ」
「終わる頃には適度なことになっているだろう」
「あとバチカン自身にも接触しておくか」
「そうだな、彼等の考えも聞いておきたい」
「やることは実に多い」
既に彼等は考えを纏め、行動に移ろうとしていた。
「何かとな」
「打つべき手はまだあるか」
「今後はあるだろうな」
答えが返って来た。
「ではその時にまた」
「集まるとしよう」
「では今日はこれで終わりだな」
「うむ」
「また会おう。その時まで」
「神の僕でいよう」
老人達は部屋から姿を消した。後には円を描くテーブルだけが残った。それは十二あった。まるでそれぞれを代表するかの様にそこにあった。

# 第二十一部第二章　狐と狸その一

狐と狸

バチカンを巡って連合内部で様々な動きがあることは他の国にも伝わっていた。当然マウリアにも広く知れ渡っていた。
「面白いことになるかな」
クリシュナータはその話を報告書で見ていた。報告書の詳細まで目を通してからこう述べた。
「今後の展開次第では」
「なるかと」
報告書を手渡してきたエルールがそれに答えた。
「既にかなりの事態になっています」
「予想されたことだがな」
クリシュナータは報告書を置いてから言った。
「バチカンの移転が決まった時から」
「はい」
エルールは頷く。
「ある程度はな」
「規模としてはどうでしょうか」
「規模か」
「そうです、議論の」
「こんなものではないか」
クリシュナータの言葉もまた落ち着いたものであった。
「連合でのいつものパターンもあるしな」
「大国の介入ですか」
「彼等はカトリックはそれ程多くはないのだろう？」
「そうですね」
これはエルールも知っていた。
「日米中露はいずれもカトリックではありません」

「それなのにバチカンが欲しいか」
「バチカンではなくその利権が欲しいのでしょう」
「相変わらずというわけか」
「そういうことになります」
「そしてそれは上手くいっているのか」
クリシュナータは問うた。
「順調に」
「いえ」
だがそれはすぐに否定された。
「イスラエルが彼等を宥めに出ています」
「イスラエルがか」
その国の名を聞くと眉が自然に動くのがわかる。
「はい、彼等が動いております」
「調停にか」
連合におけるイスラエルの役割はバランサーである。それも表の世界のバランサーではない。影の世界のバランサーであると言われている。彼等は大統領が国家元首であり最高権力者であるとされているが実際にはその顧問として十二支族それぞれの代表がいる。彼等は長老と言われている。彼等の話で決定することが多いのである。よって彼等こそがイスラエル最高権力者であるとする者も多い。
「中央政府と連絡を取ってだな」
「そのようです」
「相変わらず動きが速いな」
「しかも的確です」
エルールは述べる。
「まずは日本に話をしているそうです」
「一番話し易い国にか」
「そして後の三国とも接触をはじめているそうです」
「いい動きだな」
「私もそう思います」

そう述べて頷くのだった。
「彼等は調停がわかっている。では今回は大国は大人しくなるか」
「すぐにそうなると思います」
「ではどの国がバチカンを手に入れるか」
「若しくは中央政府が」
「そうだったな」
その名を聞いて思い出した。
「中央政府もいた」
「彼等は特定の国ではなく全体の利益を考えたいようです」
「全体のか」
「はい、連合全体の」
エルールは述べた。
「それを考えているようです」
「上手くいくかな」
クリシュナータはそれを聞いたうえで懐疑的な言葉を述べた。

## 第二十一部第二章　狐と狸その二

「各国もそうそう容易には言うことを聞かないだろう。この問題は複雑だ」
「政治だけではありませんから」
「政治だけなら話は容易い」
クリシュナータはさらに言った。
「信仰もある。それこそが最も問題だ」
「信じるもの、ですか」
「我々にしろそうだしな」
「はい」
マウリアはヒンズー教だけではない。シーク教や拝火教、イスラム教も存在している。仏教もあるがこれはマウリア人の中ではヒンズー教の一派となっている。これを聞いて眉を顰めさせるというか理解不能になる連合の者は多い。釈迦はヴィシュヌの転生の一つだと言われるとさらに理解不能になる。
「宗教は人を人たらしめる」
「そして人を狂わせもする」
「それが厄介なのだ」
クリシュナータはさらに言う。
「もっとも連合は我々に比べて宗教に関してはドライだったな」
「比較的そうした者が多いです」
「それはそれで疑問だが」
信仰心の篤いマウリアから見れば連合の信仰の薄さは嘆かわしいことなのである。もっともそれでも宗教行事は常に行われているのであるが。世俗化していても。
「だが今回は別か」
「やはりローマ＝カトリック教会の総本山ともなりますと」
「違うか」

「そういうことです」
「どういう結末になるかだな」
クリシュナータはまた言った。
「この騒動が」
「とりあえず大国は引っ込むと共に便宜を提供してもらうようです」
「惑星開発に通商でか」
「それはそれでまた問題なのですが」
「アメリカが抱えている通商問題は幾つあったか」
「十や二十ではききません」
恐ろしいことにこれは事実である。
「数え切れないものがあります。一つの国と複数抱えている場合がありますし」
「何をしても勝手な連中だしな」
「全くです」
エルールもそれには同意であった。
「中国もロシアも。彼等も彼等でな」
「桁外れの通商問題を起こしております」
「大国の横暴に小国は為す術もないか」
「であれば話は簡単なのですが」
「小国も小国で対抗する」
それが連合である。
「今回はその中でバランスよく、それでいてアメリカ等が満足する便宜のようです」
「成程な」
「人は不満は一つならば何とか我慢できますから」
「小国が一国ずつその大国の便宜を受けていくか」
「その穴埋めを他のところでと」
「見事なものだ、流石はイスラエルだ」
素直な賞賛の言葉であった。
「良くも悪くも連合になくてはならない存在か」

「はい」
「その彼等が動くということはやはり大きな話ということだが」
「それもまた適度なところに収まるようですね」
彼なりの分析であった。
「では我々はこの件に関しては見ているだけにしよう」
「わかりました」
「それでは話は終わりだ。御苦労」
「では私はこれで」
エルールは手の平を前で合わせて礼をした。
「うむ。ところでだ」
「何でしょうか」
クリシュナータに呼び止められ顔を上げた。
「これからどうするのだ」
「これからといいますと」
「いや、部屋から帰ってからだ。何をするのかと思ってな」
「時間が時間ですし」
エルールは部屋の壁にかけている時計を見て言った。

## 第二十一部第二章　狐と狸その三

「昼食にしようかと」
「そうか、もうそんな時間か」
「はい、今日は少し変わったものを食べようと思っています」
「変わったもの？」
「カレーです」
彼女は述べた。
「カレーを頂こうと」
「カレーならいつも食べているが」
クリシュナータはそれを聞いて怪訝な顔をした。言うまでもなくカレーとはまさにマウリア料理そのものなのである。連合ではマウリア人はカレーしか食べていないとすら思っている程である。
「いえ、日本のカレーです」
エルールはそう述べて微笑んだ。
「一度食べてみようと思いまして」
「成程な」
クリシュナータはそれを聞いて納得したように頷いた。
「そちらのカレーか」
「はい、面白い食べ物だと聞いていまして」
「それで食べてみるというのだな」
「ただ。鶏肉のカレーを」
「そうだな」
エルールもヒンズー教徒である。だから牛は食べないのだ。
「それか羊か」
「あちらのカレーは豚肉もありますが」
「意外と多いのだな、種類が」
これはクリシュナータも知らないことであった。日本のカレーは僅かだと思っていたのである。

「どうやらそのようです」
「そうか。では後で教えてくれ」
興味深げにこう言ってきた。
「どんなものか私も興味がある」
「はい、それでは」
別に拒むものではない。エルールもそれに頷いた。
「これで失礼します」
「しかし日本といえば」
「何か」
「いや、醤油というあの不思議な調味料のイメージが強くてな。カレーもあるのはわかるが」
「醤油もカレーに入れたりするそうですが」
「想像がつかないな、それは」
クリシュナータはそれを聞いて本気で怪訝な顔をした。
「どんな味なのか」
「それもこれから試してみます」
「宜しくな」
「はい。あと」
「まだあるのか？」
思わずこう問うたが平然とした返事で返された。
「食べるカレーは二つの予定ですので」
「わかった、では聞かせてくれる話も二つだな」
「はい」
「では楽しみにしている。またな」
「これで」
再び礼をして部屋を後にする。そしてその足で食堂に向かった。
エルールが姿を現わすと食堂の者達がにこりと笑って彼女を出迎えたのであった。
「お待ちしておりました」
「もう用意はできているかしら」

「勿論でございます」
ウェイターが彼女に応えた。
「それではこちらへ」
「ええ」
案内されたテーブルに着く。程なくしてカレーが運ばれてきた。
「日本風のチキンカレーでございます」
「頼んでいたものね」
「はい。どうぞお召し上がり下さい」
カレーを差し出して言う。見ればマウリアのカレーとは全く違う。色は同じだ。ライスにかけられているのも。だが中に入っているものが全く違っていたのだ。
鶏肉の他に人参と玉葱、そしてジャガイモがある。ジャガイモはマウリアではあまり食べられはしない。だからかなり奇妙に感じられた。

## 第二十一部第二章　狐と狸その四

それにルーそのものも違っていた。マウリアのルーはサラサラとしているがこのカレーのルーは粘り気がある。それもあり全く違う料理にしか見えはしなかった。
「話には聞いていたけれど」
エルールはそれを見てまず述べた。
「全く違うものに見えるわね」
「というよりは全く違う料理だと考えて下さい」
来ていたシェフもそう述べた。
「味もまるで違いますから」
「わかったわ。それじゃあ」
その話を聞いてから食事の前の礼をする。
「いただきます」
「どうぞ」
スプーンを手に取りそれをすくう。ゆっくりと口に入れる。
「如何でしょうか」
一口食べ終わったのを見てから問いが来た。
「そうね」
それに対して一呼吸置いてから答える。
「確かに全然違う味ね」
「はい」
「マウリアのカレーよりはずっと辛さが抑えられていて。味もまろやかね」
「左様ですか」
「ええ。それにライスも」
エルールはライスにも気付いていた。
「粘り気があるわね。このルーに合っているわ」
「日本のライスです」

シェフが答えた。
「如何でしょうか」
「話には聞いていたけれど全く別の食感ね」
エルールは言う。
「少なくともマウリアのお米とは味も香も違っていて。けれどこのルーには合っているわ」
「はい」
シェフはその言葉に頷く。
「それを考えてあえて日本のライスを使いました」
「そうだったの」
「連合の中でも日本の米はかなり独特でして」
多くの国はインディカ米を使っている。米は麦や豆、芋と並んで連合における主食だが日本人はその中でもこのジャポニカ米を好んでいるのである。
「使うべき料理が限られるのですが」
「このカレーには合っているわね」
「はい。そしてルーの中ですが」
「鶏肉かしら」
「何時間もかけてじっくりと煮込みました。その為味がルーにまで出ているのです」
「野菜もそうね」
「そうです。そのジャガイモも」
シェフの説明は続く。
「じっくり煮込みました」
「そのせいね、こんなに柔らかいのは」
「はい」
「ジャガイモがこんなに柔らかいなんて。嘘みたいね」
ジャガイモを指摘する。カレーには欠かせない野菜の一つを。
「煮込んだせいです」
「やっぱりそうなのね」

「こちらではジャガイモはあまり食べないので私も驚きましたが」
「カレーに入れるのがね」
「はい」
彼等にとってはあまり考えられない話であったのだ。これは日本人の発想であった。
「よくこんなの考え付いたと思うわ。あら」
「何か」
「これは一体」
ここでカレーの端に添えられている赤いものに気付いた。
「何なのかしら」
「福神漬けでございます」
「福神漬け！？」
エルールにとってはこのカレー以上に変わったものであった。
「何なの、これ」
「日本の漬物の一つでございます」
「漬物」
言われてもピンと来ない。また首を傾げさせた。

## 第二十一部第二章　狐と狸その五

「日本ではカレーに添えるものです」
「訳がわからないわね」
これもまたマウリアの者には想像出来ないことであった。
「お漬物をカレーになんて」
「日本ではそれが普通だそうです」
「変わってるわね」
「ですがこのカレーには合います」
シェフはあえてこう述べる。
「宜しければそちらも」
「わかったわ。それじゃあ」
こくりと頷いてそれも口に入れてみる。すると。
「あら」
ここでエルールにとって思わぬことが起こった。目を丸くさせる。
「確かにこれは」
「合いますね」
「ええ、意外と。いえ」
言葉を訂正する。
「見事に。美味しいわ」
「左様でしょう。これが日本人の考えた隠し味のようです」
「隠し味というよりは伏兵ね」
エルールはそう述べた。
「これは。意外だったわ」
「その福神漬けのおかげでカレーも味がかなり際立っております」
「そうみたいね。カレーもより美味しく感じられるわ」
「はい。ではこのカレーは美味しいのですね」
「見事よ。日本のカレーははじめて食べたけれど」
もう皿には何も残ってはいなかった。

「堪能させてもらったわ。有り難う」
「いえいえ」
「では次のメニューを」
「ええ」
水を口に含んでナプキンで口元を拭いてからそれに応えた。
「お願いするわ」
「それでは」
すぐに次のカレーが運ばれてきた。それはエルールにとってははじめて見るものであった。
「それは！？」
「カツカレーです」
シェフはそう説明した。
「カツカレー！？」
見ればライスの横にカツレツが置かれその上からルーがかけられている。実に変わった料理であった。
「とあるプロ野球選手が考えたものだそうで」
「野球！？ああ、連合でよく行われているあのスポーツね」
「はい。マウリアでもありますが」
「御免なさい、野球はあまり興味がなくて」
そう答えて謝罪してきた。
「左様ですか」
「ソフトボール派だから」
「はあ」
「それはさておき野球選手が考えたの、その料理は」
「何でも洋食が好きだそうでカレーとカツレツを一緒に食べたくて考えたそうです」
「ちょっと待って」
エルールはここで気付いた。
「何か？」
「日本ではカレーは自分達の料理とは考えていないのかしら。確か

日本では自分達の料理は和食と言うから」
「どうやらそのようです。明治に入って来たものはそう呼ぶとか」
「そうだったの」
「まあ今では日本の料理のうちだとみなされていますが。そういうことになります」
「変わっているわね」
「日本に関しては正直かなり変わっていますから」
シェフは述べる。
「料理に関しては。少なくとも私は今回は日本の料理を作った気持ちです」
「そうね」
「はい。このカツカレーもまた」
既に料理はエルールの上に置かれている。ここで彼女はシェフに尋ねた。
「このカツだけれど」
「はい」
マウリアでもカツは食べられる。外国の料理として考えられている。
「肉は何かしら」
「鶏でございます。外相はヒンズー教徒ですので」
「有り難う、わかっていてくれたのね」
それを聞いて微笑を浮かべる。マウリアの女性の優しくて優雅な笑みであった。

## 第二十一部第二章　狐と狸その六

「やはり鶏が無難ね」
「所謂チキンカツカレーです。本来は豚肉なのですが」
「そうなの」
「牛肉のカツカレーもあるにはありますが。恐れ多いことです」
「連合は牛を食べることがポピュラーだから」
彼女は言う。
「あちらではそれが普通なのよ」
「我々にとってはとんでもないことです」
「まあそれはそれ、これはこれよ」
話しても平行線で終わりのないものである。なお連合から見ればマウリア人に牛の話をすればとんでもない方向に話がいくと言われている。
「宗教が違うのだから」
「はあ」
「それでね」
既にカツレツにもカレーにも手をつけていた。
「これも美味しいわね」
「有り難うございます」
その言葉ににこりと笑みを返す。
「最初見た時は驚いたけれどルーとよく合っているわ」
「私もそう思います」
「カツの味とライスの味、それにルーの味が口の中で合わさって」
「一度食べると病みつきになります」
「そうね。これはかなり気に入ったわ」
どうやらこのカレーはエルールの好みに完全に合ったようである。
「簡単に言うわ、とても美味しいわ」
「とてもですか」

「これが連合の外相ならもっと違う言葉になるのでしょうけれどね」
カバリエの美食家ぶりはつとに有名である。伊達に料理の本を出しているわけではない。その表現もまた多彩に渡っているのである。
「私は料理に関してはこうね」
「その一言が嬉しいのですよ」
シェフはにこりと笑って言う。
「美味しいという言葉が」
「食べるものがあるというのはそれだけで有り難いことだけれど」
「はい」
「美味しいものがあるのはさらに有り難いことね。それだけで幸せよ」
「では外相は今幸せであると」
「勿論よ」
満面に笑みを浮かべて言う。
「ただ」
「ただ！？」
「向かいの席に奇麗な男の人がいればなおよいのだけれど」
「ははは、そうですか」
これにはこの場にいる者全員が顔を崩して笑った。
「それは贅沢に過ぎるかしら」
「よいと思いますが」
「女性ならばそう思われるのは当然ですし」
「男のまた」
「そう言ってもらえると有り難いわ。けれど」
ここでふう、と悩ましげな溜息をつく。
「いてくれたらいいのだけれど」
その目の向こうにいるのは誰か。それはエルールにしかわからない。彼女はカツカレーを食べながらその目に映る美しい若者のことを想っているのだろうか。それは彼女にしかわからないことであった。

日本にはイスラエルや中央政府から今回のバチカンに関しては『自重』してくれるように申し出があった。あくまで『自重』である。だがその一言にあるものは実に重いものであった。

「『自重』、ですか」

「そうよ」

伊藤は小柳にそう返す。二人は首相官邸の食堂で向かい合って食べていた。食べているのはコロッケである。他にはサラダやスープもある。洋食であった。

## 第二十一部第二章　狐と狸その七

「そうして欲しいと。『お願い』があったわ」
「そして『お願い』ですか」
「随分と穏やかよね」
「言葉だけはそうですね」
小柳はそれを聞いて言う。
「その底にはいつもの剣が潜んでいるのでしょうが」
「けれど今回はその剣は見せてはいないわ」
伊藤は言った。
「ちらりともね」
「使うまでもないということでしょうか」
「違うわね、あえて隠しているのよ」
「あえて」
「彼等が剣を持っているのはもう誰でもわかっているわね」
「はい」
「十二人の長老達が連合で知らないことはないと言われているから」
つまりイスラエルの剣とは情報なのである。その群を抜く情報収集能力と分析能力により彼等は連合の影のバランサーとなっているのである。その頂点にいるのが大統領顧問である十二人の長老達なのだ。
彼等は十二支族からそれぞれ選ばれる。イスラエルの十二支族を代表する存在である。だからこそ絶大な力を持っているのである。それを考えると存在が明らかになっている影のバランサーなのだ。
「それであえて言ってきているのよ」
「そういうことですか」
「そうよ、彼等は甘く見られないわ」
「それはわかっているつもりですが」
「貴女も色々と調べられたみたいね」

「ええ、主人のことまで」
ここで暗い顔になった。
「よく調べています、彼等は」
「それが彼等の武器だからね」
周りに誰もいないからの言葉であった。人払いと盗聴等へのチェックは欠かしていない。二人はあえて夜遅くこうして食堂で密会のようにして食事を摂っているのである。
「集められるものは何でもよ」
「不気味ですね」
「不気味でも何でもそれが役に立てばいいのよ」
伊藤は言う。
「それが政治の世界だから」
「手段は選ばないと」
「結果だけの世界だからね、ここは」
「そして私達の結果とは」
そこを問う。返答はこうであった。
「惑星開発の便宜と通商問題における譲歩。これが条件よ」
「惑星開発は元々私達は乗り気でしたが」
「それをストップさせたのもイスラエルだったわね」
「はい、それを考えると勝手なような気もします」
「何にしろ惑星開発に取り掛かれることはいいことよ」
そういった感情は今は抑えろということであった。
「違うかしら」
「そう言われればそうですが」
「今我が国はそれを主張していたしね」
「ただ」
「ただ？何かしら」
その実際の年齢よりも幼く見える小柳の顔を見て問う。
「いささか勝手ですね」
「勝手！？」

「はい。前には惑星開発は抑えられたのに」
「そうね」
伊藤も当然ながらそれを忘れたわけではない。
「それが今になっていいとは。あの人達も何か」
「政治とはそうしたものよ」
伊藤はそんな小柳に対して言う。
「一旦引っ込めた話が展開次第で戻って来る」
「それが今回の惑星開発ですか」
「ええ。けれど日本にとってはいいことよ」
「それはそうですが」
それがわからない小柳ではない。コロッケを切りながら答える。

## 第二十一部第二章　狐と狸その八

「それでも。何か割り切れません」
「割り切れないのも割り切るのもまた政治なのよ」
伊藤はここでコロッケの切ったものを口に入れた。
「そしてそこから何かを見つけていく」
「はい」
「わかっているとは思うけれど？」
「頭の中ではわかっていますけれど」
ジュースを口に含む。緑の林檎のジュースである。日本の神楽星系で摂れた緑の林檎をジュースにしたものだ。この林檎はジュースにすると鮮やかな緑になるのである。
「それでもまだ心では」
「まあそれも慣れよ」
「慣れ、ですか」
「といっても感覚を麻痺させるのとは違うわよ」
「ええ」
その言葉に頷く。
「慣れるのとそれは別」
「ですね」
「感覚を麻痺させるとかえってよくないのよ」
「政治家として」
政治家という単語も話に出た。
「政治家も人間なのよ。いい意味でも悪い意味でもね」
「つまり人間らしく、ですか」
「そういうこと。それでわかるかしら」
「それはよく」
小柳は答える。
「父にも言われました」

「貴女の御父さんには私も何かと教えてもらったわ」
「そうなんですか」
「あれでね。面倒見のいい人だったから」
「私から見ればえらく昔かたぎの人でした」
「そのせいよ」
伊藤は言う。
「昔、というか日本古来の心かしら。それを大事にしていたわね」
「そういう言い方になるのですか」
「ええ。私はそう思うわ」
伊藤は今度は自分も林檎のジュースを口に入れた。濃厚で、それでいてすっきりとした甘さが口の中を支配する。
「いい意味で政治家であり人間だったわ」
「家では頑固親父でも」
「その頑固親父がね。いいのよ」
「結構迷惑ですよ、それも」
「あら、そうなの」
それには気付いたような声をあげた。
「家では。何かと口煩くて」
「けれど貴女のお兄さん達が政治家にならないのには賛成していたのよね」
「ええ、まあ」
それはその通りであった。
「そのかわりその道を極めろって言っていました」
「いいわね、その言葉」
どうやら伊藤はそうしたかって、といっても日本がまだ地球にあった頃に多く存在した頑固親父が好きなようである。この時代においてもいることはいるが当然ながら絶滅危惧種となっている。
「如何にも、という感じで」
「私も言われました」
「あら」

それを聞いてくすりと微笑む。
「女でも道を極めろと。言われました」
「それで貴女はどう思っているのかしら」
「私自身ですか」
「そうよ。どうなの？」
そのくすりとした微笑を向けたまま尋ねる。小柳はそれに対して少し考えた顔をしたがやがて答えた。

## 第二十一部第二章　狐と狸その九

「正直私もそれには同意です」
「そうなの」
「はい。やっぱり自分の目指すものがあるのは確かですし」
「それは何かしら」
「総理みたいな政治家、と言えばお世辞になりますか？」
伊藤の顔を何処か覗き込む感じになっていた。その光景はさながら生徒が教師を慕うようであった。
「駄目でしょうか、それは」
「私が目標なの」
「はい」
こくりと頷く。やはり生徒のようである。小柳は小柄で童顔だから今でも制服を着ればそう見えるであろうことは容易に想像がついた。
「総理みたいになりたいと思っています」
「私はそんなに立派じゃないわよ」
「いえ」
だがその言葉には首を横に振った。
「私はそうは思いません」
「褒め過ぎよ、それ」
「けれど目標にしたいです。そして」
「政治家としての道を極めるといのね」
「父の言葉だとそうなります」
小柳は答えた。
「それで宜しいでしょうか」
「私はいいわ」
伊藤もそれには悪い気はしなかった。拒む理由はないからだ。
「目標としてもらっても。むしろ照れ臭いわ」

「照れ臭いですか」
「そんなふうに思われたことは。多分あったかも知れないけれど」
「ですか」
返答はこうであった。
「私が気付かなかっただけかしら」
「多分そうではないかと」
「迂闊だったかしら」
「どうでしょうか」
迂闊と言えば確かに迂闊だがそれ以上に鋭いことで知られる伊藤にしては珍しいことだと思った。
「それでですね」
「ええ」
小柳は多少強引に話を戻してきた。
「父に関しては私も辟易するところがあるのは事実です」
「頑固親父は嫌いかしら」
「そうですね。はっきり言わせて頂くと苦手です」
「やっぱり」
「今までの彼氏も主人もそういうタイプではないですし」
小柳の夫は優しいことで知られている。彼女はそうした異性が好みなのである。
「父みたいなタイプが主人だと疲れると思います」
「成程、そういう考えもあるわね」
「母もまた昔気質でしたから上手くいったのでしょうが」
「そうじゃないと辛いわね」
「そう思います」
小柳の意見はこうであった。
「少なくとも私にとっては」
「じゃあ高崎前総理はどうかしら」
「あの方はそうではないです」
小柳は答えた。

「昔気質でも頑固一辺倒ではありませんし」
「そうね、あの人は」
伊藤はそう答えて頬を緩ませた。
「鷹揚な人だから」
「私達若手の意見もよく汲んでくれましたし」
「ただね、色々言われる人だけれど」
「口が軽いところが。ちょっと」
小柳は言葉を濁らせた。
「どうしても禍が」
「けれどあれで大事なことは言わないのよ」
「そうなのですか」
これは意外であった。
「それは気付きませんでした」
「それがわかるようになったら違うわよ。あれでもイスラエルの長老達と渡り合ってきたし」
「はあ」
さらに意外なことであった。驚きを隠せない。
「あの人がですか」
呆然としている。伊藤は小柳のそんな顔がおかしくて仕方がなかったらしい。
「何そんなに驚いているのよ」
「それはその」
それでも驚きを止めることが出来ないでいた。まだ呆然としている。

## 第二十一部第二章　狐と狸その十

「高崎総理のイメージからは」
「狸なのよ」
「狸！？」
「そうよ。あの人は狸なのよ」
「つまり化かすということですか」
「私は狐だしね」
何となく話が童話めいてきていた。だが伊藤はあえてこうした表現を使ってきたのである。例え話をしてわかり易くする為であろうか。
「身内も時として化かさないといけないのよ」
「身内もですか」
「これでわかったわね。少しだけれど」
「一応は」
だが戸惑いはまだ残っている。
「けれど。本当に意外ですね」
「人なんて実際全てをわかるってのは無理ね」
またコロッケを切って口に入れた。
「自分自身でも」
「それは何となくわかります」
「そういうものよ。それじゃあ今回の件だけれど」
「はい」
バチカンの話に戻ってきていた。
「日本は手を引くわよ」
「わかりました。そういえば」
「何かしら」
「国内ではバチカンを招くことに関して積極的な世論は少なかったですね」

「やっぱり信者が少ないせいね」
日本では昔からクリスチャン自体が少ない。これはこの時代でも変わらない。
「結局はそれですか」
「我が国は昔からクリスチャンが少ないわよね」
「ええ」
これは二十世紀からである。一パーセントを中々越えないことで有名であった。今も人口比に対してその程度である。その中にカトリックとプロテスタントが存在している。カトリックの数は微々たるものなのである。
「ロシアはロシア正教だし」
「そうでしたね」
「アメリカはまだキリスト教徒が多いけれどあそこは確か」
「プロテスタントが多いですね、伝統的に」
「そうなのよね、アメリカは」
元々プロテスタント、しかもピューリタンによって建国された国である。その伝統が今も残っているのである。千年経っても。ただアメリカにはカトリックもいればケルトの神々、ネイティブの神々への信仰もある。宗教も多彩なのである。
「ただ、アメリカのカトリックはともかく世論全体ではさして大きな勢力とはなっていません」
「そうみたいね」
「そして中国は」
「言うまでもない、と」
「彼等はただ利権が欲しいだけですので。信仰は乏しいです」
「日本も入れてね。そういうことね」
「はい」
小柳は頷いた。彼女もコロッケを食べている。
「大国で動向が注視されているのは」
「ブラジルとフィリピンね」

「ええ。その二国です」
大国で目立つのはこの二国なのだ。
「彼等の宗教人口でカトリックの割合はどれだけだったかしら」
「両方共半数は優に越えています、確か」
「半数以上ね」
「彼等の伝統ですね、これも」
「そうね。そして信仰は」
「力です」
一言でこう言い表された。
「世論にもなる。両方共政治家もカトリックである場合が多いから」
「強いですね」
「問題はこの二国ね」
「はい」
そこに焦点が集まってきているのを感じていた。
「さて、どうなるかしら」
「中央政府としては全体に利益があるようにしたいようですが」
「全体、ね」
伊藤はそれを聞いて少しシニカルな笑みを浮かべた。
「連合では中々に難しいことだけれど」
「この件に関しては金内相の管轄でした」
「そうね、彼女の」
伊藤は彼女を知っている。何度か会って話をしたこともある。

## 第二十一部第二章　狐と狸その十一

「彼女はね。切れ者だから」
「そうですね、韓国では有名な才媛だったのですね」
「ええ、それで若くして抜擢されてね」
「凄い人なんですね」
「風紀とかにも厳しくてね。内務省は凄いわよ」
これはもう連合だけでなく全人類の間で有名になっていることであった。
「逆に国防省は緩やかみたいですね」
「決まりや軍律は厳しいけれどね」
「それだけじゃ空気は引き締まらないんですね」
「そういえば連合軍って穏やかな空気だし」
これもまたよく知られていることである。軍律は厳しく守られているが。
「そうですね。それはやっぱり」
「国防省は八条君だから」
「彼も頑張ってるんですね」
「頑張ってるってものじゃないわよ」
伊藤は笑みを変えてきた。生徒に関して語る教師の笑みになっていた。
「毎日身を粉にして働いているわ」
「相変わらずですね、そこは」
「そうね、彼は勤勉よ」
伊藤は言う。
「体力もあるしね」
「あの体力は凄いですね」
小柳は八条が日本の議員だった時から知っている。実はわりかし好みでもあるがこれは口にはしない。実は小柳が小柄で八条が長身

なので並ぶと自分の背が目立つのが少し嫌なのだ。実は彼女は伊藤よりも小さいのだ。なお伊藤は自分の背のことはあまり気にはしていない。漫画でそれを描かれても笑い飛ばしている。
「だから初代国防長官に任命されたのでしょうね」
「ですか」
「その彼がいるから空気もいいのよ」
伊藤は言う。
「内務省の空気が悪いってわけじゃないけれど」
「そういえば最近内務省で」
「何かしら」
「甘いものの消費が増えているそうですね」
「それもわかるわ」
それが金のせいであることは伊藤もすぐにわかった。
「あの人のせいね」
「そうでしょうね」
小柳もそれは察しがついた。実に容易に。
「よく身体を壊しませんね」
「あれはね。見ている方が引くわ」
金がお菓子や果物を食べる場面は伊藤も見たことがある。とにかく食べる量も食べ方も尋常ではないのだ。
「ケーキだってね」
「シロップをたっぷりとかけるんですよね」
「べったりと濡れる程にね」
「聞いているだけで何か」
小柳の顔がうんざりしたものになった。
「嫌になります」
答えながら最後の一切れを食べ終えた。そこでデザートが運ばれてきた。
デザートはゼリーであった。桃のゼリーである。
「このゼリーだってね。凄いのよ」

「ゼリーにもシロップですか」
「そのゼリーそのものもね。気が遠くなる程甘いのよ」
「よく糖尿病になりませんね、あの人」
「そういう体質らしいわね。しかも太らない体質だそうで」
「運がいいですね」
少し違う表現だがこう言った。
「羨ましいです」
「まあ女性の夢なのは確かね」
「そう思います」
「けれどね。どうもあれは」
伊藤も困った顔になっていた。
「あの人はお菓子や果物が半分主食だから」
「他のものも食べてますけれどそれでも」
「あそこまで毎日食べていると。お茶だって」
「麦茶にもお砂糖とか入れてますよね」
「普通入れないわよね」
「少なくとも私は入れません」
小柳も伊藤もこれは同じであった。
「そこまでするのは。やはり」
「そうよね、やっぱり」
これだけはそうそうできるものではなかった。
「有り得ないわよね」
「韓国人といえば辛党の筈ですが」
「内相は辛いものも食べているわよ」
「味覚が特別とか？」
そう問うたが答えはそれと反対であった。
「いえ、それがかなり鋭いのよ」
「余計にわかりませんね」
「好みかしらね、結局は」
「それにしてもかなり」

小柳は言葉を濁らせる。

# 第二十一部第二章　狐と狸その十二

「変わっていますね」
「変わってるなんてものじゃないわ」
伊藤はそれに対してこう返した。
「異様ですらあるわね」
「八条君・・・・・・失礼」
「本人がいなくてよかったわね」
あやうく君付けで呼びそうになったところで小柳は言葉を引っ込めた。伊藤はそんな彼女を見てくすりと微笑む。やはり何処か生徒と教師を思わせる。
「八条長官はよく一緒に食事をしているそうですね」
「打ち合わせとかでね」
「大丈夫でしょうか。太ったりは」
「それはないと思うわ」
だがそれは伊藤によって否定された。
「彼は体調管理が上手いから」
「そうですか」
「極端に太ったり糖尿病になったりはしないわ。ただ」
「ただ？」
「彼は他にやらなければならないことがあるのだけれど」
「何ですか、それは」
小柳はゼリーをスプーンで切りながら尋ねた。程よい弾力を示しながらすうっと切れていく。
「貴女も彼と一緒に食事に行ったことがあったわよね」
「結婚前ですよ」
それははっきりと言う。
「幾ら何でも結婚してから二人というのは」
スキャンダルの元である。八条はあの容姿だ。噂にならない筈が

ないのだ。小柳はそれは必死に証明する。顔が少し赤くなっていた。
「それはわかってるわ。けれど誘ってたのでしょう？」
「それは否定しません」
小柳本人もそれは認めた。
「けれど」
「彼は気付かなかったのね」
「全くです。遅くなったと言ったらタクシーを呼んでくれました」
「それだけ？」
「それだけです」
普通は遅くなった、酔ったというのは女性からのオッケーの言葉だ。小柳はあの時は八条を誘っていたのだ。小柄ながらちゃんとスーツを着こなして誘った。だがそれは気付かれもしなかったのだ。
「それで終わりでした」
「そんな子がいるなんてね」
これにはさしもの伊藤も苦笑いしかない。
「普通そこまでいったらね」
「そうですよね」
「私が男だったらそれでその夜は二人よ」
「あの人は同性愛とかはないんですよね」
「ああ、あれは噂だけよ」
伊藤はそれは否定した。
「よく話になっているけれどね。それはないわ」
「そうだったのですか」
「何処からそんな話になったかわからないところがあるけれどね。急に出て来て」
「所謂薔薇の人達の憧れでしょうか」
「ああ、あっちの人達ね」
男性の同性愛者、つまりホモセクシャルのことを薔薇と表現するのである。なお女性同士の同性愛はレズビアン、こちらは百合と呼ばれる。

「あの人ああした顔ですから」
「背が高くてスタイルもいいしね」
「あれで本人はもてないって思ってるみたいですよ」
「気付いてないだけよ」
伊藤の言葉は率直でかつ辛辣であった。
「あれだけはどうにもならないわね」
「それでまだ独身なんですか」
「下手したらあのまま婚期逃すかもね」
「まさか」
「結婚は顔じゃないのよ」
人生の真理の一つである。
「結婚出来る時はすぐだけれど」
「そうじゃないと何時までも、ですか」
「結婚は出来る時にしないと駄目」
伊藤はきっぱりと言う。
「花が来たら掴み取れ」
「男も女もですね」
「何かモーツァルトのオペラの台詞みたいになってきたわね」
「ドン＝ジョヴァンニとかコシ＝ファン＝トゥッテの」
「ただあの貴公子はドン＝ジョヴァンニとは逆ね」
「いえ、ある意味ドン＝ジョヴァンニですよ」
だがこう言うのだった。その理由は。
「オペラの中でドン＝ジョヴァンニは一人も陥落させていないからかしら」
「あれってそうですよね」
「じゃああの序曲は何だってなるのだけれど」
伊藤は少し考える顔をした。学者らしい顔になった。
「何なのかしらね」
「あれでわかるだろ、って人もいますが」
「それにしては最初のあれはね」

ドン＝ジョヴァンニは夜這いを仕掛けたドンナ＝アンナに追い立てられての登場なのだ。そして彼女の父である騎士長を剣で殺す。規律など知ったことではない彼らしいが格好悪いと言えば格好悪い登場である。
「ないわよね」
「そう思います」
「劇の間で女の子達を陥落させているっていう話もあるわよ」
「それにしては動きが悪いですね」
「そうよね。やっぱり一人も陥落させてはいないのかしら」
「私はそう思います」
小柳は述べる。
「あの人がそうであるように」
「全く。内相も大変ね」
伊藤はそう言って苦笑いを浮かべた。
「韓国の女の人が誘うのってかなりのことらしいけれど」
「果たしてどうなるんでしょうかね」
「まあ内相は脈はないわね、残念だけれど」
「ですか」
「彼のことはね。ある意味難攻不落だから」
「はい」
「どうにもならないわよ。そういうこと」
そう言って伊藤もゼリーを食べていく。二人は打ち合わせ等をしながら食事をするのであった。それが終わってからそれぞれの家や官邸に戻り休息に入る。だが伊藤はそうはいかなかった。

## 第二十一部第二章　狐と狸その十三

「総理」
官僚の一人がシャワーを浴びて自室に入ろうとする伊藤に声をかけてきた。もうラフな私服に着替えている。寝巻きは自室で着替えるようにしているのだ。
「何かしら」
「お会いしたい方がおられるのですが」
「急用なの？」
「高崎前総理です」
「あら、総理が」
伊藤はそれを聞いてくすりと笑った。
「何しに来られたのかしら」
「お会いになられますか？」
「ええ、そうさせてもらうわ」
そのくすりとした笑みのままそれに答える。
「じゃあお通しして。会談室にね」
「わかりました。それでは」
「その間に着替えておくから」
伊藤は伊藤で準備に入った。一国の首相ともなれば誰かと会うのには常に身なりを整えておかなくてはならないのだ。
「それではその間にお通しして」
「ええ、お願い」
「では」
すぐに準備が進められる。伊藤がスーツに着替えて会談室に入ると四角い顔に四角い身体の巨漢の老人がいた。やけに横幅がある。
「おおすまんな、夜遅くに」
「いえ、そういう仕事ですから」
「何だ、実はな」

「はい」
この四角い人物が日本の前の宰相高崎唯之である。在任中は放言と意外な細かい動きで知られていた。お騒がせ人物とも中々頭の回る人物とも言われその評価は定まってはいない。
だが少なくともキングメーカーとしては優秀であるとされている。首相である伊藤を陰に日向に盛り立て、直言も辞さない。そうした人物である。
「イスラエルの件だが」
「彼等ですか」
二人はテーブルに向かい合って話をはじめた。イスラエルの名を聞いた伊藤の眉がまず動いた。
「そちらでも何かと話題になっているだろうね」
「御名答です」
伊藤は真摯な顔でそれに答えた。
「今は話題がそれで持ちきりです」
「そうか、やはりな」
「バチカンからは手を引くようにと話が来ております」
「それでその代わりに」
答えはこうであった。
「はい、惑星開発や通商での便宜の根回しを約束しております」
「交換というわけか」
「ただ、確かなものを手にしてから話をあちらに伝えたいとは考えております」
「うん、そうした方がいいな」
高崎は伊藤のその案に大きく頷いた。
「よくある話だからな、口約束だけで痛い目を見るというのは」
「はい」
「気を着けてくれよ、そこは」
「無論そのつもりです。そして」
「うん」

話は続く。
「バチカンからは手を引くことはもう決めています」
「実は、か」
「これはあちらも気付いているかも知れません」
「ではそれで足下を見られるかもな」
「それが気懸かりなのです」
伊藤の顔が曇る。
「そうなっては取引であちらに有利になってしまいます」
「そうだ。それは避けなければならない」
高崎もそれをよく認識している。だからこそここに来ているのだ。
伊藤とその件について話をする為だ。
「こちらはもう一枚カードを欲しいところですが」
「イスラエルの弱みを知っていると？」
「一枚なら」
「一枚か」
高崎はそれを聞いて面白そうに笑った。

## 第二十一部第二章　狐と狸その十四

「それは何かな」
「とびきりのジョーカーです」
伊藤はそう言ってにんまりと笑った。
「実は最近イスラエルは独自でマウリアと接近を計っております」
「マウリアと」
「金融であちらにさらに食い込みたいようで。それでです」
「ふむ、それは知らなかったな」
「ですが苦戦しているようで。何分風俗と習慣の違いもありますから」
「マウリアとイスラエルではかなり違うからな」
「はい、イスラエルは連合の中でもとりわけ独自の風俗、習慣を持っています」
これはユダヤ教の戒律に基づくものである。ユダヤ人やユダヤ人となっているのは実は人種やそういったものではないのだ。宗教によってそうなっている。ユダヤ教を信じているからこそユダヤ人でありイスラエル市民なのである。これはローマにシオンの地を追われた時から変わってはいない。国がなかった時からそうなのだ。イスラエルができてからも。彼等にとってユダヤ教とは全てであるのだ。
「それではマウリアでは苦労するな」
「マウリアに関してはどの国も大なり小なりそうでありますが」
「それでそれがカードになるのか」
「はい」
伊藤はここで答えた。
「入り込む為の便宜をこちらが提案しようかと考えております」
「イスラエルに対してか」
「これならよいと思いますが」

「うん、いいんじゃないか」
高崎はその話を聞いたうえでそれに頷いてきた。
「それだといい取引になる」
「やはり」
「ただ、注意しておいた方がいいことがある」
「それは一体」
「彼等の気質だ」
「ユダヤ人のですか」
「まあこの場合はマウリア人もそうだが。ユダヤ人は難しい」
これは連合ではよく言われることだ。
「少しでもミスがあればそれを忘れない」
「そうだ。逆に恩も忘れないが」
「この場合ミスと恩は取引での価値になりますね」
「それを踏まえて彼等は交渉してくるだろう。それを考えると」
「マウリアとの話し合いも重要になりますね」
次にマウリアについて指摘が来た。
「そうだな。三国での話になる」
「ではマウリアとも話をしていきます」
「それがいいな」
高崎はそこまで聞いてまた頷いた。
「今回はとりわけ慎重にいかないとな。イスラエルは手強い」
「特に今の長老達は、ですか」
「わしも彼等には何度も手を焼かされたよ」
実際に左手を振って言う。
「あの手この手で仕掛けて来るからな。やれやれだ」
「私もそれは同じですよ」
伊藤は笑ってそれに応える。
「同じ顔触れですし」
「十二支族だったな」
「はい」

この言葉にも答える。
「厄介な連中だ。伊達に長い間苦労してきたわけではないか」
「そのうちの十支族は長い間存在が消えていましたし」
「宇宙になって復活した。ヒッタイトやアッシリアと同じなのか」
「私達もそのうちの十支族の一つだと思われていたそうです」
「彼等とか！？」
高崎はそれを聞いてその小さな目を大きくさせた。これは彼は知らないことであったのだ。
「はい、十支族のうちの一つが日本まで流れ着いたのだと考えていたそうです」
「わからんな、その話は」
「彼等がそこまで同胞を探すのに必死になっていたということでしょう」
伊藤は言う。
「まあ結局そうではなかったのですが」
「だとしたらだ」
高崎はそれを聞いて伊藤に対して述べる。
「もう少し手加減してくれてもよいものだが」
そう言ってぼやく。
「同胞候補に対してえらく手厳しいじゃないか、彼等は」
「それとこれとは別だそうです」
伊藤は微かな苦笑いでそれに対する。

## 第二十一部第二章　狐と狸その十五

「世界とはシビアなものなので」
「そういうことか」
「はい、彼等はリアリストでもありますから」
「厄介なものだな。まあだから連合の中でもフィクサーの一つとなっているのだろうが」
「そうでしょうね」
「それでも歴史を見れば丸くなったかな」
高崎はここで斜め上を少し見上げて呟いた。
「イスラエルができた頃は凄かったみたいだな」
「凄いなんてものじゃなかったようですね」
伊藤はそれに応える。
「戦争でも何でもして。生き残る為に」
「生き残る為にか」
「やっと持てた国を失わない為に。だからこそ」
「あそこまでやったのか」
「そうということでしょう」
「やり過ぎだと思うがね、わしは」
その大きめの口を尖らせて言う。
「何もあそこまでは」
「とにかく国を失って流浪の生活に戻りたくはなかったのでしょう」
「しかし今は国を失う心配はない。イスラエルだって千年以上の歴史がある」
「ええ」
「安心していてもいいと思うがね」
「それに関してはもう彼等は心配していないでしょう」
伊藤は冷徹な目でそれを見抜いていた。
「ただ」

「そこにまだ何かあるのか」
「はい。やはりそれまでに作り上げられた気質です」
「ユダヤのか」
「それは容易には消えないかと。決して悪い意味ではないですが」
「彼等が優れているのは事実だ」
「はい」
これは多くの者が認めていることである。だからこそ決して多くはない人口、人口に比例される国力と比較してその力が大きいのである。連合における陰のバランサーとなっているのもその優秀さに拠るところが大きいのである。そうでなくてどうしてここまで力を持てるであろうか。
「団結力もな。随一だろうな」
「連合の中では」
これはユダヤ教があるからである。全てのアイデンティであるユダヤ教の下に一つになっているのである。
「それはあの気質のいい面だな」
「そうですね」
「わし等に手厳しいのは悪い面だ」
「ちょっとそれは」
あまりにも勝手な論理なので伊藤は苦笑を禁じえなかった。
「率直過ぎるのでは」
「何、そういうものだ」
だが高崎はここで言った。
「善悪は実際すぐに変わるものだ」
「はあ」
「特に政治の世界はな。自分にとってよい存在ならば」
「それで善ですか」
「そういうものだろう？人と人の付き合いにしろ」
「言われてみればまあ」
真理の一つではある。人間とはやはり自分を中心に考える傾向が

あるのでそう判断するのだ。これは伊藤にもわかる。
だがどうにも。あまりにも率直に過ぎる言葉であるように思う。それに戸惑いを覚えているのである。
「だから彼等はそういうところは悪いな」
「そうなのですか」
「何、彼等も同じさ」
高崎はまた身も蓋もなく率直に述べる。
「わし等が自分達の意に沿わないから」
「悪だと」
「彼等の場合はそこに宗教が入る」
「ユダヤ教ですか」
宗教も入ってきた。
「それで裏付けというか固めてくるからな。余計に厄介になる」
「それがイスラエルですね」
「だから正直彼等の相手は疲れるんだよ」
「強敵ではあります」
「わしなんぞどれだけ手を焼いたか」
また口を尖らせる。
「参ったぞ」
「そのわりには上手くやっておられたようですが」
「何、運がいいだけだ」
今度は口を広げて笑う。どうにも表情豊かな人物だ。漫画にするとかなり描き易い雰囲気である。政治家は漫画にならないと駄目だというが少なくとも彼はその点では合格であった。実際にかなり漫画で描かれているのである。漫画家の方でもやはり描き易いらしい。

## 第二十一部第二章　狐と狸その十六

「政治家にまず必要なのは何かというとな」
「はい」
「運じゃないか。わしは運がいい」
「そうなりますか」
「こう言うと二十世紀のアニメみたいだな」
「ええと」
伊藤はそれを言われてふと考えを巡らす。
「あのロボットアニメですか」
「そう、あれだ。わかったか」
「私も子供の頃に観ましたので」
「ははは、あれはまさに古典だな」
今度はアニメに言及してきた。
「二十一世紀の最初の頃の二作は好きにはなれんがな」
「あれは当時から評判が悪かったそうです」
「そうだろうな。それで今の言葉は」
「あの仮面のパイロットですよね」
「そう、間違っても青いロボットではないぞ」
「それは作品が違います」
「おっと、これは手厳しいな」
高崎は伊藤にそう言われて顔を崩して笑う。二十世紀のアニメもこの時代では古典なのである。日本の当時のアニメは今でも評判だ。この時代においても日本のアニメは定評がある。
「彼等はアニメは観るのかな」
「観ているとは思いますが」
伊藤はそれに答える。
「ただ。お国柄を反映して結構固い内容です」
「まあそうだろうな」

これはおおむね予想がついていた。
「あの長老達が軽薄な内容を許すとは思えない」
「旧約聖書に反するものは駄目のようですね」
「厳しいな。そういえば日本のゲームにもいい顔をしていなかったな」
「宗教が入っているせいでイスラエルには出せないゲームもあります」
そういうゲームは昔からあるのだった。
「わしは哲学はあまり知らないのだがな」
「そうなのですか」
「いや、ニーチェとかハイデッガーとか名前だけはわかるぞ」
「はい」
どちらもドイツの哲学者である。
「それでもな。あまり哲学には詳しくはない」
「総理は教育に関しては専門家だったと記憶していますが」
「おいおい、そりゃ皮肉かね」
高崎はその言葉を聞いて今度は苦笑いになった。
「確かにその通りだ」
「ですよね」
実際に教育に関する本を何冊か出したり講演も積極的に行っている。失言も多いがここでは大局観を持ったビジョンで知られている。
「だが宗教は結構わかる」
「宗教も哲学も一緒なのでは？」
ヨーロッパの哲学はすべからくキルスト教から生まれている。神の存在を否定している哲学もある。マルクスがそうであるし前述のニーチェは神は死んだと宣言した。だがやはり神について言及し、彼等の思想もまた神から離れてはいないのである。全ては神からはじまるのが当時のヨーロッパの哲学であった。
「何か違うように思えるのだよ」
彼はその細い眉を顰めさせてこう言った。

「何というかな。眠くなってしまう」
「眠く、ですか」
「あのグノーシス主義とかはわかる」
「あれもまた哲学ですが」
「いや、宗教だからだ。だがどうにも哲学となるとな。難しい言葉をこねくり回しているようで」
嫌な顔を見せてきた。
「駄目ですか」
「変わりはないのだろうがな。そう、そのグノーシス主義だ」
「はい」
「それが駄目だったそうだな。ゲームでそれが反映されていて」
「旧約聖書に反すると」
「あれはあれでいいと思うのだがな、わしは」
グノーシス主義はあの神を邪神と定義している。人に知恵を与えず、檻の中に入れていたからだ。そのかわりに人に知恵を与えた蛇、サタンを善と考える。そうした思想なのである。

## 第二十一部第二章　狐と狸その十七

「どうかな」
「それも一つの考えだと思います」
伊藤はそれに答えた。
「ただ」
「ユダヤ教も一つの考えだな」
「はい、そちらも正義です」
「うむ」
高崎はそれに頷く。
「難しいことに」
「それは政治も同じなのだな」
「そういうことになるかと」
伊藤はまた答えた。
「ですから利害も衝突して」
「いざこざが起こる」
「厄介なのは互いにそれぞれの正義があることですね」
「そうだ、まあ国益ともいうがな」
「ええ」
その国が自分の国益を追求するのは当然である。人が自分の利益を追求するのと同じである。どれも同じことなのである。こう考えるとわかりやすい。
「同じだな」
「そして今回はその国益で手打ちというわけです」
「手打ちの内容としては悪くはないか」
「私はそう思います」
伊藤はここで自分の考えを述べた。
「どうでしょうか」
「そうだな」

高崎は考える顔の後でそれに応えた。
「わしもな。それでいいと思う」
「それでは」
「ただしだ」
だが彼はここで付け加えてきた。
「素直にこのままでは少し寂しいな」
「飾りもですか」
「そうだな。贈り物はやっぱり贅沢な方がいい」
笑って述べるのであった。
「貰うのは」
「日本人はそういうところには気を使うと各国から言われているしな」
「それを逆手に取って」
「これ位なら彼等も認めてくれるんじゃないか？」
「そこに何かをプラスで」
こうも言い加えられる。話が細かいところにまで及んでいる。
「そうだ。さしあたっては」
「漫画やアニメ、ゲームの規制緩和でしょうか」
「おお、それがいいな」
軽い話だった。その程度ならば。
「ただ、やはり極端なのは」
「そこはこちらから自主規制だな」
しかしこうも言われる。そこは厳しい。
「彼等の受け入れられない部分は外しておいて」
「わざわざ話をこちらから壊すこともないからな」
「そうですね。まあ宗教的なものは省いて」
「それ以外だ。チェックは彼等に任せることにしてだ」
「そうですね」
「これを加えてもらおう。それでいくか」
「わかりました」

伊藤は満足した顔をしてそれに頷いた。これで決まりであった。
「さて、これでいいと思うが」
高崎は話が決まったところで述べた。
「問題は彼等がどう受け止めるかだな、これを」
「受けるとは思いますが」
「ただな。気難しい彼等だ。どうなるのかはな」
「はい」
伊藤も不安定要素は認めていた。
「それはありますが」
「まあ出してみよう」
高崎は言った。
「反応が悪ければ別の案を出してだな」
「そうですね。それでは」
「うむ。それではな」
「ええ。そういうことで」
日本側はカードを整えた。それをイスラエル側に提示する。日本とイスラエルの交渉は今度はイスラエルが答える番になったのであった。

## 第二十一部第二章　カードは切られその一

カードは切られ

日本側からのカードがイスラエルに送られてきた。イスラエル政府はまずはそのカードの中身を検証してきた。

「トッピングしてきたか」

イスラエル首相サッバティーニは日本側が提示してきた交換条件を見てまずはこう呟いた。首相官邸の執務室において受け取った条件が書かれた書類に目を通している。

「アニメや漫画の規制緩和とはな」

「受けやすくて害のない条件として出してきたのでしょうな」

通商相であるシャイエックがそれに答える。

「しかもこれは若者には有り難い話です」

「若者だけではないな。中年層や老人層にも」

「いい話ということですか」

「しかもだ」

サッバティーニは付け加えた。

「チェックはこちらに任せるとある。随分いい条件だな」

「そうですね。ですが」

「わかっている」

サッバティーニはシャイエックが何を言いたいのかわかっていた。

「これはあの二人が考えたものらしいのだな」

「はい、伊藤首相と」

「高崎前首相か。狐と狸だな」

「あの古狸は。以前から我々に対して何かと仕掛けてきましたが」

高崎はイスラエル政府から見て厄介な相手であったのだ。押さば引き、引かば押す。そして時として思わぬカードを出してくる。そうした人物とみなされていたのである。

「まだ動いているとは」

「生きている限り人は動くものだ」
サッバティーニは落ち着いた声でそう述べた。
「それで大統領と長老達は何と仰っているか」
「この件に関してですか」
「そうだ。当然話が伝わっていると思うが」
「よいのでは、ということです」
「よいのか」
「はい。そして首相に一任すると」
「ふん」
彼はそれを聞いて少しその目を鋭くさせた。
「私の力量を見たいということかな」
「それは何度も御覧だと思うのですが」
「人の能力というものは変わるものだ」
シャイエックに対してそう述べた。
「簡単にな。努力しなければ伸びることはない」
「シビアですね」
「衰えもある場合がある」
「まだそんな御歳ではないと思いますが」
サッバティーニは四十代半ばである。政治家としてはかなり若い。その整った容姿は舞台俳優とまで言われる程である。いささか嫌味な顔と言われることもあるが。
「人の旬というのはわからないのだ」
「旬、ですか」
「早熟もあれば大器晩成もある」
「ええ、それは」
シャイエックもそれは認識していた。
「存じているつもりですが」
「スポーツ選手でもそうだろう？三十から伸びる選手もいれば十九で華々しくデビューして、すぐに衰えが顕著になっていく選手もいる」

「スポーツに例えられますか」
「それが一番わかりやすいと思うが」
サッバティーニはシャイエックに顔を向けて言う。
「違うか」
「まあ言われてみればそうですね」
少し考えた後で答える。
「実例もあれこれと見つけることが出来ますし」
「中には残念な選手もいるがな」
これはサッバティーニの私情である。
「期待していた選手が思うように伸びないとな」
「まあそういうこともありますな」
「それを今私自身が試されているのだろうな」
「今回の交渉で、ですか」
「そうだ。それでだ」
長く前置きしたうえでまた述べる。
「今の私が首相としてよいのかどうか見極めるのだろうな」
「つまり失敗したら、ですか」
そう考えると恐い。首がかかっているからだ。だがそう考えるのは神経の細い人間である。生憎サッバティーニの神経は細くはなかった。そうでなくては一国の首相は務まらない。もっともそうでない者もいたりするが。政治家だからといって皆神経が太いわけでもない。
「恐がることはないだろう」
サッバティーニは余裕の笑みを浮かべて言った。

## 第二十一部第三章　カードは切られその二

「何もな。要はミスを犯さなければいいのだ」
「ミスをですか」
「では聞くが」
サッバティーニはシャイエックに聞き返す。
「私がミスを犯すと思うか？」
「自信がおありですか」
「無論」
不敵に笑って返す。
「この件に関しては答えがもうある」
「それは一体」
「何、そのまま受け入れればいいのだ」
「日本側の条件をですか？」
「ではこれが文句をつけれるものと思うか」
そう言ってシャイエックに条件が書かれた書類を見せる。彼はもう一度見ているがあえてまた見せたのである。
「こちらにチェックを任せるとまで言っているのだぞ」
「はい」
「これでいいと思うがな」
「では受けられると」
「これで問題はない。ただし、チェックは怠らない」
「風俗を乱すもの、そして聖書に反するものは」
「認めてはならない。言うまでもなくな」
イスラエルで言う聖書とは旧約聖書である。この聖書こそがユダヤ教の教えの根本なのである。これに反することはユダヤ教徒、即ちイスラエル人ならば出来ることではない。
「それはあちらも理解しているのだろうな」
「そこも計算づく、ですか」

「おそらくな。それでだ」
サッバティーニは言う。
「これならそのまま飲んでも構わない。むしろ今までの規制が厳し過ぎた」
「まあそれはあります。実際にアニメや漫画を愛する人間からは不満の声がありましたし」
日本人の風紀とイスラエル人の風紀の基準は違うのだ。そこがまた大きな問題になっているのである。しかも宗教倫理まで入るから話は余計にややこしくなるのだ。
「緩和するよい時ですか」
「そうだな。いい機会でもある」
「それではこれはそのままで」
「うむ。では受け入れる」
「はい。しかし」
ここでシャイエックは考える目をして呟いた。
「どうした？」
「いえ。大統領と長老達のことを思いまして」
「彼等が厳しいというのか？」
「何と言いますか。そこまで細かくするとは」
「そうでなくては政治は駄目だというのだろうな」
「イスラエルが連合の中で生き残っていく為には、ですか」
「そうだ。彼等は言うだろうな。二千年の放浪の時を忘れるな、とな」
ローマ帝国に国を滅ぼされてからイスラエル建国までの間である。その間彼等は苦渋を嘗め続けてきた。それを忘れるなというのだ。
「もう国をなくすということは有り得ないがな」
「ええ」
実際にはこの心配はない。連合の一千年の歴史の間彼等は国を保ってきている。その為亡国の民という意識は彼等の中でも消えていた。この場合彼等が危惧しているのは連合内におけるイスラエルの

地位である。これこそが最大の関心事なのである。
「ただ、我々は人口の上では小国に過ぎない」
「はい」
これもまたよく認識していることである。
「その我々が力を持つ為には」
「情報と知略ですか」
「そしてネットワークだ」
「同胞達のネットワークもまた」
これは昔から持っているものである。これこそがユダヤ人の最大の武器であるとも言えた。
ユダヤ人は各地に同胞がいる。その彼等が互いに助け合う。そうして生きてきたのだ。そうでなければ生きていけなかった。彼等の住む世界は決して安穏としたものではなかったからだ。
「それは大統領も長老達も御承知だ」
「その力を以って今回も」
「そうだ。日本はまずはいい」
日本に関しての話は確かにこれで終わりであった。これ以上進めようにも進めない。下手をすればかえって難しい話になってしまう。そうするつもりは今はなかった。

## 第二十一部第三章　カードは切られその三

「続いては後の三国か」
「米中露ですか」
「彼等は日本に比べて厄介かな」
「外交能力というよりはその要求が」
「全く。彼等は満足することを知らないようだな」
「あれだけの資源や権益を持ちながら」
シャイエックはそう不満を述べた。
「満ち足りるというのはあの三国にはない言葉か」
「全く。何時まで経っても変わりませんな」
「だがそこが付け目だ」
「確かに」
サッバティーニの言葉に不敵に笑ってみせた。
「それでは今回も」
「そうだ、とりあえずある程度は満たしているが」
「それは決して彼等の満足いくものではないと」
「何度も言うが彼等は満足するということを知らない」
「はい」
「そこでだ。仕掛ける」
続いてこう言った。
「それ以上何か言うと、ですか」
「もっとも我々が提示した条件は他の国から見ればかなりいいと思うがな」
そう言ってみせた。
「バチカンを放棄しても有り余る程に」
「それでもさらに、というのが。どうにもな」
「彼等は何を要求してくるでしょうか」
「まあ大体予想がつく」

「さらなる通商の便宜等ですか」
「それは飲む」
飲むと言ってみせる。これは意外であった。
「飲むのですか！？」
「まあ聞くのだ」
驚きの声をあげるシャイエックに対して述べる。
「当然それだけではない」
「こちらも見返りを要求すると」
「どうだ？これなら問題はあるまい」
「ユダヤ商人は決して安くはありませんからな」
「それは違うな」
サッバティーニも笑っていた。商人というよりは弁護士か知識人の笑みであるが何処か含むものがある笑いであった。またそれがやけに似合っている。
「ユダヤ商人の品物にないものはない」
「だから安くはないと」
「そうだ。まずは彼等の要求を受け入れる」
「はい」
「それとは別にこちらもな。見返りをだ」
「マウリアへの権益でしょうか」
「それだ」
サッバティーニは言った。
「金融への便宜は日本が言ってきてくれた」
「善意で以って」
「親切だな、日本人は」
真相を知ったうえでの言葉である。
「やはり日本人は心優しい。それに感謝しなくては」
「そして今度は」
「あの三国が友情を示してくれる。我々はその御礼にだ」
「友情ですな」

「そうだ。連合という社会における」
かなり白々しくはあるが建前はそうなる。政治の世界というのは建前が整えばいいというところが確かに存在しているのである。これは事実だ。
「これでマウリアにも入られる」
「二千億の市場が」
「二千億か」
しかしサッバティーニはここで複雑な顔をした。
「彼等は。本当に二千億なのかな」
「まあそれより多いのは間違いないですね」
「今でもそんな国があるとはな」
「何処かの辺境の星でその存在がわからない部族もあるようです」
「部族！？」
これには流石に眉を顰めさせる。イスラエル首相ですらそんな顔をさせるのがマウリアであった。
「はい、部族です」
シャイエックはそれに答えた。
「マウリアには存在します」
「確かに彼等は我々とは全く違う世界だが」
「はい」
「部族というのが。今でも存在するのか」
「私も最初は民族の間違いかと思いましたが違います」
連合では民族という概念である。一民族一国家という概念もまだ生きている。だからアイヌや琉球、満州やネイティブ＝アメリカンの国家も存在しているのである。
「間違いなく部族です。しかも未発見の」
「一応地球から来ているのだな」
「それは間違いないのですが。その」
「何時辿り着いたのかがはっきりしないのか」
「森の中で見た、という話がありまして」

そう述べるがかなりあやふやな言葉の調子になっていた。
「まるで未確認生物みたいだな」
「それに近いものがあるかと。人間ですが」
「どうやら私はマウリアを甘く見ていたようだ」
これは本心からの言葉である。シニカルは欠片もなかった。
「そんなものがまだ存在していたとは」
「マウリア映画では普通に何処からともなく人が沸いてきますが」
「人が！？」
「はい、そして皆で踊って歌って」
「ううむ」
サッバティーニはまるで異次元の話を聞いている気分になった。

## 第二十一部第三章　カードは切られその四

「そして風の様に消えます」
「それは映画か！？ミュージカルでなく」
「ミュージカルも入っているのです」
「そうか」
あらためてその衝撃に打ちのめされる。
「ミュージカル映画なのか」
「それが違いまして」
「じゃあ何だ？」
さらに話がわからなくなってきた。
「それが違うのなら」
「何と言いますか」
「うん」
「何でも入っているのですよ」
「何でもか」
そこも問うのだった。
「ですから。マウリア映画は連合のどの国の映画とも違う存在であるということを認識して下さい」
「映画でそれか」
「当然他の事柄も」
「そうだと思ったよ」
サッバティーニは溜息と共に述べた。
「道理で今まで何度も進出しても上手くいかない筈だ」
実は何回かイスラエルのマウリア進出はあった。だがその度に失敗して撤退する破目になっているのである。それにはこうした事情があったのだ。イスラエルはマウリアを理解出来ないでいたのだ。
「そんなに違うのではな」
「部族の他にも藩王も」

「ああ、それは知っている」
これはサッバティーニも知っていた。
「地方政権だったな、君主制の」
「はい」
「他にも知事がいたりするそうだが」
「まあそこはその地方政権によって違います」
「さっぱりわからないところがあるな。やはり日本の善意だけでは困難だな」
あくまで善意と言い張る。
「あの三国の協力も必要だな」
「ではそれを交換条件に」
「そうだ」
サッバティーニは頷いた。
「それでいきたい。いいか」
「それで宜しいかと」
シャイエックもそれに応えて頷いた。
「我々もこれでようやくマウリアに進出することとなりますな」
「ああ。しかし他の国の力を頼らなければならないとは」
「それもいいではないですか」
シャイエックは言う。
「我々の利になるのなら」
「それもそうか」
「はい。交換条件にもなりましたし。よいかと」
「確かにな。いい交換条件になった」
「はい」
「それで後はだ」
ここまで聞いてこう述べたのであった。
「フィリピンやブラジルですか」
「そうだ。彼等は簡単にはいかないぞ」
「信仰が関わっているだけに」

「彼等にとっては夢の様な話だ」
サッバティーニは言う。
「自分達の国にバチカンが来るとなるとな」
「確かに。出来れば欲しいと思うでしょうな」
「だがな。それがもたらす利益がバランスを崩しかねない」
「少なくともブラジルやフィリピンはかなり豊かになりますな」
「これが小国なら問題はないだろうがな」
口を歪めさせて言う。

## 第二十一部第三章　カードは切られその五

「生憎彼等は大国だ」
「そうもいきません」
「彼等に今以上の力を与えることはよくない」
「では彼等もまた」
「フィリピンは外交が巧い」
まずはフィリピンに目をつけてきた。
「一筋縄ではいかないな。どうするべきか」
「それでしたらよい方法がありますが」
「それは何だ？」
シャイエックの言葉に顔を向けてきた。
「フィリピンですよね」
シャイエックはそれを確かめる。
「ああ、そうだが」
「それでしたら我々だけで説得する必要はありません。他に説得にあたってくれる国があります」
「むっ」
それを言われたところでサッバティーニは気付いた。
「彼等だな」
「そう、彼等です」
シャイエックもここでにこりと笑ってきた。そうした笑みもできるようである。
「他のＡＳＥＡＮ諸国もまた使えるではありませんか」
「そうだな、彼等にも説得にあたってもらおう」
ＡＳＥＡＮ同士のつながりは今でも深いものがある。旧東南アジア諸国はその団結で力となっているところがあるのである。
「タイやベトナムに」
「うむ」

「まあフィリピンにも権益を約束して」
「あの国はさして貪欲でもないしな。そこは楽だな」
「はい。陽気で気さくな国民性ですし。上手くいくかと」
こう述べるのであった。
「それを考えると東南アジアやラテン系の国はやり易いな」
「国民性が明るくて欲がないと」
「アメリカや中国も明るいがな」
「あの二国は貪欲に過ぎます」
シャイエックはすぐにそう返す。
「ロシアも酒が入ると明るいな」
「ですがやはり貪欲で。というかあの国はいつも飲んでいませんか？」
「それがロシアだからな」
よりによって銀河でも寒い星ばかりなのである。ロシアという国は余程寒さと縁があるのであろう。
「酒がなくてはやっていけないのだろうな」
「難儀なことです。酒は慎むべきであるのに」
当然のようにユダヤ教では過度な飲酒を禁じている。イスラムの様に完全に禁止するということは流石にないが。もっともこの時代では連合のムスリム達は平気で飲んでいるしサハラでもそれは同じである。元々コーランの教えは目標であり人は弱いものだから破ることもある、と最初からわかって決めているのである。
「まあ貪欲でないのはいいことだ」
「それはブラジルも同じことですな」
「あの国も明るいしな」
「はい、ブラジルに関してはどうしますか？」
「そうだな」
問われてからまた考えはじめた。
「あの国はあの国でかなりの力があるしな」
「ええ」

「彼等もまた連合の主要な大国だ。今回では一番厄介な相手とも言える」
「日米中露よりも」
「元々南米諸国ではバチカンの力が大きかった」
これはスペイン人達による征服の後からである。強制的な場合も多分にあり、カトリックは中南米を支配していった。長い間これ等の国々ではバチカンの言うことは絶対であったのだ。
「他にも色々と宗教ができてもな。ブラジルのカトリック達も他の教えを同時に信仰しているのだったな」
「はい、そうです」
シャイエックはそれに答えた。
「一つの宗教しか信じていないのは我々だけではないでしょうか」
「連合の中ではか」
「エウロパもそうですが。我々ヘブライの民だけです」
その言葉の中には自負もある。
「まあ他の宗教のことは正直どうでもいいがな」
「そうですか」
「だが。それでもカトリックにこだわるのか」
「権益よりも心のようです」
「信仰は心か」
「心は幾つもあります」
シャイエックは言う。

## 第二十一部第三章　カードは切られその六

「少なくとも連合の多くの者にとっては」
「ブラジル人達もそれは同じか」
「そういうことでしょう。そしてその心の一つが」
「カトリックなのだな」
「はい」
そこまで話したうえでこくりと頷いた。
「その心を手に入れる為に今動いている」
「ですがそれは」
「避けたい。中央政府は大国と関係のない場所にバチカンを置きたいらしいしな」
「それはよいかと」
シャイエックもそれに賛成した。
「むしろそれが理想ですね」
「そうだな。大国の利益になるよりはな」
「それはそれで場所が問題なのですが」
「で、だ」
サッバティーニは一呼吸置いてからまた声を出した。
「問題はブラジルだが」
「どうしたものでしょうか」
「彼等を抑えるにはどうすればいいかだな」
「それですね、問題は」
話が焦点に入ろうとしていた。
「抑えるのはかなり。難しいですね」
「だがしなければならない」
「はい。それではどうやって」
「まずは彼等を抑えることだが」
難しいがそれをしなければならないことはわかっていた。

「方法がないわけではない」
「それは一体」
「昔のアルファベットだ」
「アルファベット！？」
「ＡＢＣというな」
「ＡＢＣ・・・・・・ああ、彼等ですか」
これでシャイエックはわかった。
「彼等の力を使うのですね」
「そうだ、アルゼンチンとチリだ」
どちらもかっては中南米の大国であり今でも連合においてかなりの力を持っている国々である。二国合わせればブラジルよりも上となる。
「彼等の力を借りるか」
「いえ、よく考えれば」
「何だ？」
「この件は。我々が動くまでもないかと」
「どうしてだ？」
「アルゼンチンとチリだからですよ」
シャイエックはまたにこりと笑った。そしてこう述べた。
「だからなのです」
「我々が動かなくともブラジルの牽制に動くというわけか？」
「そうです。ですから動くことはないかと」
「そうなのか」
「まあどちらにしろアルゼンチンとチリには話しておきましょう」
「うむ」
それは決まった。
「これでブラジルを動けなくするか」
「交換材料はどうしましょうか」
「そうだな。それも検討してな」
「はい」

こくりと頷いてみせた。
「どちらにしろこれでめぼしい国は抑えられるな」
「そうですね。これで何とか」
「だがやはりブラジルが不安だな」
「彼等にはとりわけ注意していかないと」
「やはり利益よりも信仰の方が厄介だな」
サッバティーニはあらためて呟く。
「どうしてもな。心というものは」
「そこを何とかしていくのもまた政治です」
「どれだけ厄介でもな。まあめぼしい国は他は全部抑えられるし慎重に話を進めていこう」
「それでは」
「うむ。これでよしだな」
「ですね」
サッバティーニの手は決まった。このことはすぐに長老達の耳にも入ることとなった。
「上手いことを考えたと言ってやるべきかな」
彼等は今度は密室で話をしてはいなかった。長老達がいつも集まる大統領官邸の元老の間で円卓に座って話をしているのである。

## 第二十一部第三章　カードは切られその七

この部屋は機能性ばかりを重視して絢爛さは何処にもなかった。これは贅沢や華美を嫌うユダヤ教の教えに基づいた造りだからである。

「サッバティーニに関しては」

長老の一人がこう述べた。

「まああの者も伊達に首相をしているわけではないか」

「これで大国は全て抑えられたな。問題はないな」

「いや、まだブラジルが残っているぞ」

中の一人が異を唱えてきた。

「ブラジルに関してはまだ話が決まってはいない」

「そうだったな」

「ではブラジルか」

「あの国への対処を見てからだな」

「うむ」

「だが今までの対処はそれだけでかなりいいな」

別の一人が言った。

「これは及第点ではないのか」

「どうかな」

それに異論を言う者がすぐに出て来た。

「最後まで終えてからでないとな。判断は下せはせぬ」

「それもそうだな。最後までやり遂げてこそだ」

「そうか。ではブラジルへの対処を見極めてからか？」

「そうなるがどうかな」

「いや、それでは不都合だろう」

また異論が出る。十二人もいると中々話が紛糾する。彼等も一つの人格ではない。複数の意見があって当然なのだ。それを考慮しての組織でもある。

「やはり個々で見なければ」
「日米中露、そしてフィリピンそれぞれに関してか」
「そうだ。個々で見ればかなりいいのではないのか」
「それには異論はない」
これに関してはどの長老達も意見が一致していた。
「そうだな。日本に関しても」
「他の三国に関してもな。上手く話を纏めている」
「カトリックの強いフィリピンを大人しくさせたのは見事と言うべきか」
「それを考えるとな。今までのことで充分に評価に値するか」
「だがそれでもブラジルへの対処は別となる」
ブラジルにこだわる長老がまた言った。
「これをどうするかだな」
「だが今まででであの男の首はつながったな」
「少なくとも首を切る必要はない」
「今まで通り首相をさせておいてもよいな」
「そうだな」
「そのうえでだ」
話がまた動いた。
「ブラジルへの対処をさせよう」
「この仕事は大統領もあの男に任せられるとのことだ」
「我々の言葉を聞いて下さったということか？」
流石に国家元首である大統領は立てている。だが実際にはその関係は複雑で大統領の最高顧問である彼等の意見は大統領ですら無下には出来ないのである。これがイスラエルという国の政治の特殊性ともなっているのである。少なくとも他の国とは全く違っている。
「どうかな、それは」
早速異論が提示された。

## 第二十一部第三章　カードは切られその八

「違うのか」
「おそらくはな。あの方はあの方で」
「考えておられるということか」
「やれやれ、いつもながら困ったお方だ」
「どうもあの男を自分の後にと考えておられるらしい」
「そういえば大統領も御高齢だな」
「わし等よりはまだまだお若いがな」
そう述べる。確かに彼等の年齢は見ただけでかなりなのがわかる程だ。
「ふぉふぉふぉ、それを言えばおしまいよ」
「何せわし等は歳だけでここにおるからな」
「確かにのう。所詮は老いぼれ共の集まりじゃ」
「しかしな」
そう話されたうえで話は進む。
「長く生きている分だけ知恵はあるつもりじゃからな」
「左様。よく見極めていかなければな」
「そのうえでだ。まずはサッバティーニは切ることはないな」
そう彼等の打ちの何人かが判断を述べる。
「うむ、これまで通り首相じゃ」
「大統領にもそうお話しておこう」
「じゃがまだ大統領には早いな」
「そうじゃな」
「まだ若い。更なる経験が必要じゃ」
しかすすぐにこうした言葉が出て来た。
「この国の大統領となるのにはな」
「じゃが目星はつけておくか」
「そろそろな。やはり後継者がいなければ」

「与党、野党に関係なくな」
当然イスラエルにも政党があり与党と野党がある。だがこの長老達はそもそもがそれぞれの支族から出ているのであり正当とはまた違った勢力となっているのである。政党に所属している政治家とはそうした意味で立場が違うのである。当然官僚でもない。
「あの男はそれになるか」
「まあブラジルへの対応を見てからだな」
「うむ、どうなるかな」
「最後のチェックをさせてもらうとしようか」
「そうじゃな」
彼等は話を詰めていく。そしてそれが終わった時。彼等はそれぞれ席を立った。
「後はあの男の動き次第だな」
「さて、どういった手を打つか楽しみにさせてもらおう」
「最後の最後でミスをするかやり遂げるか」
「お手並み拝見じゃな」
「それでは今日はこれで終わりだ」
最長老が述べた。
「皆後はそれぞれゆっくりしてくれ」
「わしは家へ帰らせてもらおう」
中の一人が言った。見ればさっきブラジルに関して言っていた老人である。
「実は孫が家に帰って来ておるのじゃ」
「もう、お孫さんがか」
「これがのう、大層美人でな」
さっきまでの厳しい顔は何処に行ったのか。急に砕けただらしのない顔になっていた。
「我が孫ながらあそこまで奇麗だと将来が心配じゃ」
「おやおや」
「孫にのろけておるわ」

イスラエルは美人が多いことで有名である。彫が深く背の高い美人を多く出すことで知られている。だが信仰の関係で彼女達と付き合いたいという他の国の男は稀である。従ってイスラエルの美人達はその殆どがイスラエルの男達のものとなっているのである。
「今大学生でな。どんどん奇麗になっておって」
のろけはまだ続いていた。
「モデルの話も来ておるらしいのじゃ」
「よいことではないか」
「うむ、悪い話ではないな」
「じゃがなあ」
ここで笑みを含めた困った顔をしてみせる。
「派手な生活をしたり悪い男に引っ掛からないか心配なのじゃ」
「大丈夫じゃろ？」
「しっかりした娘ならな」
「しっかりした娘じゃぞ」
これには多分祖父としての主観がかなり入っている。
「頭もよくてなあ。本当に自慢の孫なんじゃ」
「では大丈夫じゃな」
「うむ、心配することもない」
他の長老達は結構さめた声で述べる。

## 第二十一部第三章　カードは切られその九

「何なら目付けでもつけておけ」
「それでよいじゃろ」
「ではそうさせてもらうか」
かなりの爺馬鹿ぶりを発揮し続けている。
「全ては孫の為じゃしな。こっそりとな」
「おい、こっそりはまずいじゃろう」
これにはすぐにクレームがついた。
「お孫さんにばれるぞ」
「左様じゃ。そうなっては元も子もないぞ」
「そうか」
「そうじゃ。何でそれがわからん」
「孫で頭が一杯なのか」
「ううむ」
実際にそうであった。どうもこの老人は孫のことになると急に周りが見えなくなるようである。これもまたよくある話である。やはり孫は可愛いのだ。
「とにかくそれはやめておけ、よいな」
「他の方法を選べ」
「何かあるだろう」
「とりあえず考えておく」
彼はそれを受けてこう述べた。
「じゃが孫は守らなくてはな」
「それはいい」
「しかしそんなに心配ならやはり」
「何だ？」
「芸能界にでも入れよ」
老人の中の一人がこう提案してきた。

「やはりそれか」
「あそこはあれで案外安全じゃぞ」
「そうなのか？」
「優れたマネージャーがいればな。それでいい」
「そうか」
彼はそれを言われて大きく頷いた。
「そのマネージャーに腕利きの優れた者を置いてな。それでいいな」
「そんなのがいるのか」
「軍から呼び戻せばいい」
「国軍のか？」
所謂イスラエル軍のことだ。当然軍も彼等の影響下にある。
「国軍でも中央軍でもいい。すぐにリストアップせねばな。そして高給で雇う」
「やれやれ」
「孫の為にそこまでやるか」
「血縁は何よりも尊い」
彼は断言した。
「それがヘブライの筈だぞ」
「まあな」
「それは確かに」
彼等もヘブライの民だからそれは否定しない。何故ならそれにより十二支族を復活させたからだ。ユダヤ人というのは信仰により成り立っているがその血縁を重視することは他の民族の比ではない。そうして長い間生きてきたからである。
「だからだ」
「それでその者は男にするつもりか？女にするつもりか？」
「女がよいじゃろうな」
彼は答えた。
「やはり女同士の方がな。いざという時にも常に側にいられる」
「成程」

「しかもじゃ」
まだ利点があった。彼はそれについても言う。
「女だとミイラ取りがミイラになるということもあるまい」
「いや、それはわからんぞ」
だがそれはすぐに否定が入った。
「わからんとは？」
「女同士でもあるぞ」
「左様、男同士でもな。無論そんなことは恐ろしい悪徳だが」
ユダヤ教では同性愛はこの上ない悪徳の一つとされている。それはこの時代でも同じでありユダヤの指導者でもある彼等がそれを許す筈もなかった。
「それへの配慮もしておけよ」
「そうじゃな」
彼は仲間達の言葉に頷いた。

## 第二十一部第三章　カードは切られその十

「人選は厳しくなりそうだな」
「それだ」
ここで最長老が声をあげた。
「どうした、いきなり」
「何かあるのか？」
「それがあるのだ」
最長老は仲間達にこう述べた。
「同性愛に関してだ」
「うむ、それがどうした」
「それが入っている漫画やアニメ、小説等のチェックはしなければ」
「うむ、そうだったな」
他の者達はそれを言われてようやく気付く。
「それを怠れば恐ろしいことになるぞ」
「そうだった、日本は何といってもそっちの方では何の規制もなかったのだったな」
「それだけではない、歴史上同性愛の罪で罰せられた者は一人もおらんぞ」
「何と！」
これは彼等にとっては恐るべき話であった。同性愛で裁かれた者が一人もいないということがだ。
だがこれは事実である。戦国時代の逸話である。
この国にはじめてキリスト教の布教に来たイエズス会のフランシスコ＝ザビエルは日本人の美徳に深い感銘を受けた。だが厳格なカトリックの信者である彼はそれを見て怒りに身体を震わせたのだ。
「この国は非常に素晴らしい国です」
彼は戦国大名の一人大内義隆にこう述べた。
「ですが一つだけ恐ろしい悪徳がはびこっております」

「悪徳とな」
悪徳という言葉に大内は驚かざるを得なかった。
「それは何じゃ、一体」
彼はその驚きの顔のままザビエルに問うた。流石に悪徳がはびこっているとなれば彼も対処をせざるを得ない。
「教えてくれ、すぐに手を打つ」
「はい」
ザビエルは厳しい顔でそれに応えた。そしてその罪を告発した。
「それは男色です」
「！？」
大内はそれを聞いて顔を震わせた。
「この罪を一刻も早くこの国から消し去らなければなりません。すぐにでも」
だがそれを聞いて大内は途端に不機嫌になった。それもその筈で彼もまた男色を嗜んでいたからである。
相手は美少年と謳われた陶晴賢である。なお彼は後に謀反を起こし主を死に追いやっている。
結局この話は大内を怒らせただけであった。彼の他にも武田信玄も織田信長も男色を嗜んでいた。だからといって彼等が罰せられたということも批判されたことも全くなかった。
こうした国である。平安時代では貴族が日記にそれを書いている。この時代の日記は誰かに読まれることを意識して書かれている。また江戸時代でも普通にあった。それが日本なのである。
「とんでもない話だ」
彼等は顔を見合わせてこう言い合った。
「これは何とかせねばな」
「サッバティーニもわかっていると思うが」
「だがな」
彼等の心を不安が覆っていく。それも急激に。
「これは放置してはおけんぞ」

「そうじゃ、大統領にもお話して」
「そして厳密な対処をな」
「うむ、ではこの件はわし等が積極的に動こう」
「チェックだな、作品の」
「左様、同性愛だけは許せん」
これは宗教的な理由なので彼等にとっては到底看過できないものであった。
「全く。あの様な悪徳を礼賛しておるとは」
「日本人の頭の中はどうなっておるのか」
当然日本人の同性愛への考えは彼等にとって受け入れられるものではない。
「何とかせねば」
「全く。そもそもこの連合は同性愛の悪徳があまりにもはびこっておる」
「そうじゃ。連合一千年の歴史は悪徳の歴史じゃ」
連合は同性愛は普通の恋愛として認められている。例外中の例外が彼等なのである。イスラエルは国内法で同性愛を厳しく禁じており違反者は裁判にかけられ刑罰の対象となる。流石に死刑にはなりはしないが。
「とんでもない」
「イスラエルに悪徳を入れるわけにはならぬ」
「まずはこれを管理するぞ」
「うむ」
こうして漫画等へのチェック、同性愛に関しては彼等の管轄となった。当然ながらこれで弾かれた作品はかなりの数にのぼることになる。これはイスラエルの同性愛への考えの一例として長くに渡って伝えられることとなった。
「御主も気をつけよ」
最長老は孫自慢の仲間にも言った。
「お孫さんのことはよいがな」

「うむ」
彼もその言葉に応えてきた。
「それだけはくれぐれも気をつけるようにな」
「そうじゃな、あの悪徳だけは」
「許せはできぬぞ」
「まずはそれじゃ」
同僚の言葉に頷く。
「恐ろしいものを見落とすところであった」
「では長老会議としては同性愛に関しては」
「極めて厳格なチェックを施すということで決定だな」
「それは決まりだ」
最長老が述べた。
「満場一致でよいな」
「異論はない」
他の十一人が一斉に述べた。
「ではこれで今日の会合は完全に終わった」
「ではまた」
「うむ」
互いに別れの挨拶を交あわせて部屋を後にする。こうして長老達は同性愛に関しては自分達が取り締まるということで話がまとまったのであった。

## 第二十一部第三章　カードは切られその十一

この話はサッバティーニにも伝わった。だがこれは彼にとっては特に驚くべきことではなかった。
「大統領もそれを認められたのか」
「はい」
前の時と同じく話す場所は首相の執務室であり話し相手も同じくシャイエックであった。二人はそこでまた話をしていたのである。
「やはり同性愛ともなりますと厳密にせねばならないとのことなので」
「確かにな。こればかりは」
サッバティーニもこれには反対しなかった。彼もまた同性愛をかなり嫌悪しているからである。
「厳密にいかなければ」
「どうも連合の中で同性愛を嫌っているのは我々だけとなったようですね」
「ヘブライの民だけがか」
「キリスト教の者も殆どが同性愛を容認しております」
「全く。世の中には恐ろしい悪事が罷り通っている」
「そうです。あの様なおぞましい行為を平然と行うとは」
「特にタイや日本か」
どちらも同性愛がかなりおおっぴらな国である。特に日本ではそれは文化とさえなっていることであまりにも有名な程である。
「彼等はな」
「あの八条長官も同性愛者だと聞いていますが」
「ああ、彼は違う」
「そうなのですか」
「彼はノーマルだ。ただ女性に奥手なだけだ」
その奥手がかなりのものであるのだが。

「奥手ですか」
「意外か？」
「あれだけの美貌ですと女の子の方から寄って来るものなので」
「それに本人が気付けばな」
サッバティーニの目は冷徹なものとなった。
「気付かなければどうしようもない」
「鋭い切れ者と聞いていますが」
「政治に関してはそうでも女性に対してそうとは限らない」
彼はシビアな現実を述べた。
「少なくとも彼に関してはな」
「そうなのですか」
「あのバレンタインという風習があるな」
「はい」
バレンタインという言葉に対して頷いた。
「まあこれは我が国にも定着しているが」
「あのチョコレートを贈るという」
「何かよくわからない風習だが」
「あれは日本からだそうですよ」
「また日本か」
日本と聞いて思わず顔を顰めさせた。
「何か日本からのはじまりが多いな」
「まあ大国ですからね」
「ああして二月十四日にはチョコレートを贈るのは何の意味があるのか不思議で仕方ないが」
「あれですか」
「そうだ、何の意味があるのだ？あれは」
「あれは元々は商売の為だそうです」
「商売の！？」
切れ者と謡われ連合内部では烏とさえ呼ばれるサッバティーニが目をしばたたかせていた。この顔を見た者は今ここにいるシャイエッ

クだけであろうか。
「はい、お菓子屋が勝手にでっちあげたものだとか」
「女の子が男の子にチョコレートをあげる慣わしだとか言ってか」
「どうやらその様です」
「見事だな、そのお菓子屋は」
思わず感嘆の言葉を漏らす。商人の民族であったユダヤ人だからこその言葉だった。
「そんな話を作って商売にしてしまうとはな。見上げたものだ」
「日本人も馬鹿ではありませんな」
「全くだ」
なお本来のバレンタインデーはキリスト教の聖バレンタインが殉教した日である。彼は愛し合うローマ市民とキリスト教徒を結婚させてその罪に問われたのである。ローマでは長い間キリスト教は認められず弾圧されてきたのだ。この弾圧はネロがはじめたと言われているが実際には違う。カリギュラからである。さらに言えばネロはローマを燃やしたこともなければ暴君でもなかった。人並みの政治力を持っており、薔薇と芸術を愛した皇帝であった。名門の出身で気前もよくローマ市民には人気があった。ネロが自害してその短い一生を終えてもローマ市民達はネロは何時か帰って来ると信じていたしその墓には花が絶えることがなかった。
「そんなものを考え付いて連合に定着させたのだからな」
「ですな」
「まあ私もチョコレートは嫌いではない」
「左様ですか」
「だがあの長官は自分ではチョコレートを贈られたことはないと言っている」
「まさか」
「本命のチョコレートをだぞ」
彼は述べた。
「全部義理だったとか言っているそうだ。それで自分はもてないと

な」
「そんな筈はありませんね」
シャイエックはそれをすぐに否定した。
「あれだけの美男子が。しかも頭もよくて名家の出身、性格も温厚とあっては」
普通はもてない筈がない。ここまでいい条件を揃えている男も滅多にはいない。
「十人は側に寄って来るでしょう」
「だが彼は気付かなかったのだ」
「義理と本命の区別がついていないのですか？」
「そういうことだ」
サッバティーニは述べた。
「凄い話だが」
「凄いというレベルではありませんね」
シャイエックにしろ信じられない話であった。

## 第二十一部第三章　カードは切られその十二

「そこまでいっているのはどうしてそこまで鈍いのか」
「女性に関してはな。確かに謎だ」
「はい」
「そういえば確かに彼は同性愛者からも人気があるな」
そう述べた。
「らしいですね」
「それには困っているそうだが」
「あと日本では奇怪な輩が跳梁跋扈しているそうで」
「奇怪な輩！？」
「はい、同性愛の漫画や小説を愛好し、嗜んでいる少女達がいるとか」
シャイエックは嫌悪感を口と顔に露わにして述べた。
「おぞましい話です」
所謂腐女子である。そうした存在もまたこの時代においても健在であった。とりあえず他人に迷惑をかけなければ連合では許される。イスラエル以外では。
「その者達がそうした退廃した背徳を助長しているそうですな」
「助長も何もその女達が元凶の一つだ」
「左様で」
「かなり厄介な連中だ」
「我が国では間違いなく懲役ですな」
流石に死刑にはならない。昔とは違う。だが重罪であるのは変わらないのである。
「あの長官はその女達にも人気がある」
「何故ですか？」
「美男子はそういうふうにイメージし易いらしい。厄介な話だな」
「厄介というレベルではありませんが」

「とにかく日本の漫画や小説はかなりのチェックが必要だな」
このれは結論として彼等も出した。あくまで彼等の主観によってだが。
「全く。日本人の感性がわかりません」
「あの国は昔からだしな」
「よく国が滅びませんでした」
同性愛はイスラエルでは国を滅ぼす悪徳だと考えられている。ソドムとゴモラの時代からである。
「それどころか今でも強国だな」
「ですな」
「とりあえずチョコレートでも食べるか？」
「まだバレンタインではありませんが」
そう言葉を付け加えてきた。
「そうでなくても食べていいものだと思うが」
「それもそうですか」
「おぞましい悪徳の話をすると気が滅入る。チョコレートでも食べてまずは落ち着こう」
「わかりました。では」
「実は私はチョコレートには五月蝿くてな」
席を立ちながら言う。そのままソファーに向かう。その側の棚からチョコレートと紅茶を出してきた。
「こっちで食べよう」
「ええ」
向かい合って座りチョコレートを食べ合う。シャイエックはそのチョコレートを食べてまずは顔を綻ばせた。
「ほう、これは」
「旨いか」
「中々。細かい味付けに凝っていますな」
「中にフルーツやミルクを入れてそこにも工夫を凝らしている」
「はい」

「見事なものだ。これは日本のチョコレートだが」
日本ではチョコレートもよく作られているのだ。また有名でもある。
「日本の」
「こうしたものなら幾らでも輸入するのだがな」
苦笑いを浮かべて述べる。
「そのチョコレートの中に毒が入っていて本人達がそれを毒と思っていないのは」
「困りものですな」
「全くだ」
「本人達が気付いていないのが厄介ですな」
「だがこれで手を打ったな」
「ええ」
「さて、次はだ」
サッバティーニは同性愛と日本から思考を外した。これで終わったと判断したからである。

## 第二十一部第三章　カードは切られその十三

「ブラジルだ。そして同時に中央政府とも話を調整したい」
「中央政府ともですな」
「当然だと思うが」
シャイエックに顔を向けて問う。
「最後の判断は彼等がするのだからな」
「例えどのような形であれ」
「そうだ。これの管轄は内務省になる。開拓省もいささか関わるかもな」
「というと金内相ですか」
「優れた人物と言っていいがな」
「かなり厳格で潔癖でもありますが」
これに関してもやはり有名であった。
「むしろその方がいい。今回に関してはな」
「ブラジルからの買収工作にも応じないと」
「本人だけでなく内務省の内部もな。今あそこは中央政府で最も清潔な省庁となっている」
「国防省よりも」
「そうだ。まあ国防省の関連の利権なぞ所詮微々たるものだがな」
「ですね、それは」
軍需産業は実入りが少ないのである。莫大な設備への投資、それ以上の技術への研究費用、そして失敗作へのロス等を考えると途方もない資金が必要になる。だが受注は決められたものしかない。連合では軍需産業はあまり発達していない。それでも技術的にはエウロパよりも上にあるが。イスラエルもこちらにはあまり力を入れてはいない。理由は簡単で実入りがないからである。
「内務省は少し違うが」
「あの内相が目を光らせているので腐敗や汚職はないようです」

「政治に支障が出るレベルでなければいいと思うのだがな」
「何分不正を極めて嫌う方なので。そのようになっています」
「ふむ」
「当然ながら我々の資金援助も断っております。政治家は支持がありそんなものは必要ないと仰って」
「選挙資金もか」
それについても問うた。
「はい。そのせいか私生活はかなり質素ですが」
「その質素なのを美徳と考えているのだな」
「そうかと」
「韓国もまたそうした裏金が結構盛んだがな」
無論イスラエルもそうである。連合ではどの国も大なり小なり裏金を使う。伊藤にしろ買収工作をすることがある。彼女もまた目的の為とあらばそういうことをするのである。だがこれが政治というものであり伊藤が悪というのではない。政治は結果の世界である。結果を出す為なのである。
「まあ例外は何処にもいるが」
「類稀な例外ですな」
「だが今その例外があそこにいるのは僥倖だ」
サッバティーニは述べた。
「中央政府内務省に連絡を取る」
そして次にこう言った。
「それでいいな」
「わかりました」
「担当者には甘党を送れ」
「甘党をですか」
「そして糖尿病にかかっていない者をな」
「人を選びますね」
「あの内相はまた別だ」
顔が辟易したものになっていた。

「あれだけ甘いものばかり食べているとはな」
「それであのスタイルです」
「そちらでも例外なのだな」
「そうですね。私にはあそこまでの甘いものは」
「質も量も無理か」
「ええ。普通はそうだと思いますが」
「このチョコレートにしろだ」
テーブルの上のチョコレートをつまみながら述べる。
「中に入れている他の菓子や果物だけではなくそこからも蜜や砂糖をかけて食べるのだ」
「口の中が甘ったるくなって後が大変でしょうな」
聞いているだけで甘いものが嫌いならばうんざりしてくる話である。
「だがそれでも食べる」
「はあ」
「だからだ。やはり甘いものに強くなければな」
「能力の他にも」
「そちらの人選を急いでくれ、いいな」
「わかりました。といっても選ぶのに苦労はしそうにありません」
「そうだろうな」
能力にこの嗜好である。自然と人は限られる。
「ではすぐに頼む」
「わかりました」
「外相と相談してな。こういう時にいないとはな」
外相は今ヒッタイトを歴訪している。何かと忙しいのが外務大臣というものである。
「まあいい。戻ってきてからでも遅くはない」
「では」
「さて、どういったことになるかな」
サッバティーニはあらためて呟いた。

「ブラジルとの話もある。だが話はかなり纏まってきた」
「それは確かに」
「最後の局面だ。後は」
「チェックメイトまでですか」
「それまで気を抜くことはできないぞ。いいな」
「はい」
イスラエルは今度はブラジル、そして中央政府との話の調整に入った。まずはブラジルであった。
「バチカンを諦めろ、か」
ブラジル大統領ロベルトはイスラエル側の提案を聞いてまずはこう述べた。
「簡単に言ってくれるな」
「あちらとしてはカトリックのことなぞどうでもいいということなのでしょう」
報告をした官僚がロベルトに対して言った。

## 第二十一部第三章　カードは切られその十四

「ユダヤ教徒にとっては」
「そうだろうな。だが我々は違う」
「はい」
「教皇をお迎えするということがどれだけのものか。言うまでもない」
「そうです。どれ程名誉なことか」
　無論名誉だけではない。そこには権益もある。だが今はそれは口には出さない。
「わかってはいないようだな」
「その名誉の代償ですが」
「ふん」
　それは一蹴した。
「そういう問題ではないと言ってやれ」
「わかりました」
　これは言外にもう少し条件を出せば考えると言っているのである。口で言う言葉と実際の言葉が違うのもまた政治というものなのである。
「中央政府も動いているのだったな」
　ロベルトは官僚に尋ねた。
「はい、金内相が」
「そうか。では本格的に動く前にか」
「イスラエルとは」
「教皇様をお迎えする意志は変わらないと言え」
「はい」
「これは心の問題であるとな」
「わかりました」
　ただし人の心は容易に変わる。それもあえて口にはしない。

「しかし。思わぬ奇貨が飛び込んできたものだ」
「あの戦争によって」
「これで連合には皇帝が三人か」
「教皇は皇帝とはまた違いますが」
「正確に言うと皇帝に比肩するだな」
「はい、枢機卿が一国の君主に匹敵するならば」
「その上に立つ存在である。ならば皇帝と同じだ」
そうなるのだった。位で言うと。
「むしろかつてはより上位でした」
「教皇は太陽、皇帝は月か」
「ええ、その言葉です」
教皇権が絶頂期の頃の教皇インノケンティウス三世の言葉である。僅か三十七歳で教皇となった彼はまさしく欧州の主であった。一国の王も彼には逆らうことが出来ない程であった。バチカンの歴史はそうした絶大な権威の歴史でもあるのだ。
「日本の皇室とエチオピア皇帝」
「それにローマ教皇」
「三つか。連合に三人の皇が存在することになる」
「確かに。誰もが追い求めるだけのことはあります」
「それを擁するということがどれだけのことかわかっているからだ」
それが問題なのであった。
「ええ」
「他の大国は全て降りたようだな」
「まずは日本が」
「流石に皇を二人を持つのはな」
認められる筈もなかった。
「だが日本は権益を手にして下がった」
「他の国々も」
「だが我々は違う」
「はい」

「さて、イスラエルとはどう話をしていくか」
「条件をまた提示してくると思われますが」
「それ次第だな」
ロベルトは述べる。
「どうするかは」
「中央政府とも話して」
「金内相か」
また金の名前が出て来た。
「ええ」
「手強いな、あの才媛は」
「伊達に内務省を預かっているわけではないということですか」
「彼女に妥協はないな」
「正論ならばあくまで通す、ですか」
「そうだ。だからこそ厄介だ」
こう述べた。
「しかも駆け引きも知っている」
「何をしてもな。手強い」
「手はありますか？」
「話し合いしかない」
結局はそれであった。
「どうするかは」
「それでは話をしていって」
「うむ、それしかないな」
「まずは中央政府の考えを知りたいところですが」
そこにも考えが及ぶ。
「どういう案かだな」
「はい、それによって我々も動きを変える必要がありますし」
「そうだ。だからこそ」
「はい」
「まずは情報を集める」

ロベルトは言った。
「中央政府の考えに関してな」
「では」
「すぐにロビー等から情報を集めるように伝えてくれ」
「わかりました」
官僚は頷いた。
「それではすぐに」
「うむ」
「それが我が国にとって妥協できるものならばよいですが」
「まあ希望は希望だな」
「ええ」
希望という言葉に頷いてみせた。
「持つのは悪くは無い。だがそれに頼るのは」
「かえって悪いと」
「そうだ。最悪の事態を想定して動くぞ」
これが政治の基本であった。ロベルトも一国の元首である。そこはわきまえて考えているのである。その方が様々な対処が出来るし危機も乗り切れるからだ。
「いいな」
「何としてもそれ相応のものを手に入れて」
「おきたいからな」
ブラジルもまた妥協点を探して手を打とうとしていた。バチカンを巡る各国の動きは収束に向かいながらもまだ激しい綱引きがあったのであった。

# 第二十一部第四章　妥協案その一

妥協案

中央政府もまたバチカンを何処に置くかで様々な議論が交あわされていた。その中でも内務省と開拓省の間では細かいところまで話し合いが行われていた。その結果として一つの案が出た。

「ここにおくのね」

「はい」

その話し合いの担当者が金にそれを提出していた。置く場所は銀河の東北の端の方であった。今は辺境とされている場所である。

「ここに置いてはどうかという案になりました」

「辺境ね」

「今のところは」

その担当者は述べた。

「ただ、バチカンをここに置くことによって人の行き来が増えます」

「それだけ経済活動が伸びるということかしら」

「そうです、それによってまだ未開のこの辺りもまた」

「開発が進むのね」

「如何でしょうか、それで」

そこまで述べたうえで尋ねた。

「開拓省としてはこれでどうかということなのですが」

「貴女の意見はどうなのかしら」

金は担当者に問うた。

「私もそれでいいと思います」

「それは自分の意見なのね」

「はい」

こくりと頷く。

「内政面から見ましてもこの辺りの開発を進めるべきだと思います」

「そうね」

「そうしたことを踏まえましてこの案となりました」
「私達としては大国の管理下には置きたくはなかったのよ」
金は述べる。
「それはクリアーされているわね。まずはそれはいいわ」
「有り難うございます」
「ただ」
金はまだ解決しなければならないものを知っていた。そして今それを出してきた。
「ブラジルだけれど」
「それも問題ないかと」
「そうかしら」
「この案のバチカンの位置をもう一度御覧下さい」
疑問を呈してきた金にそう述べた。
「そこに答えがあります」
「答え！？ああ、成程ね」
それを見て金にもわかった。
「だから東北に置くのね」
ブラジルはその東北にあるのだ。無論ブラジルは開けてはいる。そこから遥かに及んだ場所がまだなのである。そこへの開発は今の政権の課題の一つであるのだ。
「そういうことです」
「一石二鳥ということなのね」
「はい、この点では運がよかったです」
担当者はまた述べた。
「おかげでブラジルも満足させられます」
「行き来する信者達のお金がブラジルにも落ちるから」
ブラジルはその辺りでは最大の大国である。交通の要衝もそこに多くあるからだ。
「これだと問題はないわね」
「ではこれで宜しいですね」

「ええ、いいわ」
金は満足そうな顔でそれに頷いた。
「合格よ。よくやったわ」
「有り難うございます」
「ではこれをブラジル政府に渡して、内密でね」
「内密にですか？」
「そうよ。今はね、まだ」
ここは政治的な理由があった。
「中央議会にも出していないし」
「そうですか」
「そうよ。だからね」
金は言う。
「イスラエル政府とも連携を取って。話を収めたいの。いいわね」
「わかりました。それでは」
担当者は応えた。
「それでお願いします」
「ええ、ここからはね。そして」
「そして？」
「この案は内務省、開拓省共同で出すわ。双方で話し合った結果だから」
「中央議会にですね」
そう応える。

## 第二十一部第四章　妥協案その二

「さて、これで通ると思うけれど」
「はい、シュミレーションではほぼ確実に議会を通過すると出ています」
「そう、シュミレーションでは」
何か引っ掛かる言葉であった。
「あの、何か」
「不確実性は考えておいた方がいいわよ」
それが金の言葉であった。
「事態はいつもシュミレーション通りにいくとは限らないのだから」
「ええ、それは」
わかっているつもりである。だが金はあえてそれに言及したのである。
「シュミレーションはもう一度やり直してみて」
そしてこう命じた。
「いいわね。それであらゆるパターンを想定しておいて」
「はあ」
「この案が一番いいから。これで通ったら問題なくいけるからね」
「わかりました。それでは開拓省と話し合って」
「お願いね。それで」
「はい」
頷いてみせてきた。
「まだ調整が必要なようだけれど」
「話は纏まってきています」
「そうね。それは何よりだわ」
金は少し満足そうであった。
「これでブラジルも満足するでしょうし」
「ですね。これだと異論はないかと」

「ブラジルの我儘というのもあまり経験なかったわね」
「あっ、そういえば」
それを言われてようやく気付く。
「今まではあまり」
「そうでしょ。我儘を言うのは」
「あの三国ですから」
米中露である。この三国の我儘勝手は千年前から変わりはしない。
「あの三国は今回は大人しく引き下がったけれどね」
「まあカトリックではないですし」
やはりこれが大きかった。関係ない宗教に対しては人は淡白になるものなのである。それは如何にこの三国であろうと変わりはしない。
「それが大きかったですね」
「おかげでそちらはやり易かったわね」
「ええ、イスラエル側もスムーズに話を進めていきましたし」
「日本もいたけれどね」
「日本はいつも通り淡白でしたね」
「そうね。まあ彼等はあんなものね」
金は日本に対しては見切っていた。
「やっぱり満たされているから。欲がないのよ」
「欲がですか」
「人間ものを持っているとね。欲が消えるものだから」
「あの三国は日本以上に持っていますが」
「彼等にしてみればまだ足りないということでしょうね」
「あれで」
担当者の官僚はそれを聞いて顔を顰めさせた。
「あれだけのものを持っていながら」
「元々そういう国だったと思うけれど」
金はわかりきったような声で述べた。
「彼等はね。それはそれで使いようがあるけれど」

「使いようが、ですか」
「ええ、わかりやすいから」
金は述べた。
「欲があってもね。それはそれで使えるのよ」
「はあ」
「それも彼等程はっきりしていると。望む要求を見て交渉が出来るから」
「彼等は交渉が可能ですしね」
「そうよ。まあ厄介な相手には変わりはないけれど」
そうぼやき気味に述べた。
「それでもですね」
「やり方があるから。今回も大体同じだったわね」
「交換材料を提示して話をつけていく」
「それよ。彼等はそれでやっていけるから」
「下手をすると何かと恫喝をしますが」
「武力がないだけましね。地球にいた頃はそればかりだったらしいけれど」
「ですね。特にアメリカは」
連合はまず設立の時点で連合内部での治安行動以外の軍事的行動を禁止した。その為武力行使がなかったのである。それに経済的な恫喝や制裁の方が武力制裁よりも多用でき、効果もあるようになってきたのと軍の兵器の価格が途方もなく高価になり軍需産業自体があまり実入りのないものになったこと等の様々な理由がある。結果として連合で武力行動が国家間で行われたことはない。今では中央軍ができ、その元となる軍さえない程である。国軍はあっても。
「とりあえず今回は話が収まるわね」
金はまた述べた。

## 第二十一部第四章　妥協案その三

「バチカンは国軍も持ちそうにないけれど」
「はい。そもそも軍も必要ありませんし」
あっても儀礼的なものである。かっての教皇領の様なものもないからこれは当然である。
「連合内部でもかなり特殊な国家になると思われます」
「文字通りの宗教国家ね」
「はい」
「それはそれで面白い国家になりそうね」
「少なくとも今まで連合にはなかった国家になります」
「そうね」
そうした意味で実に興味深い存在ではあった。
「バチカンは」
「国名はどうなるでしょうか」
この官僚、ナターシャ＝コズイレフは尋ねた。名前からわかるようにスラブ系でありカレリア人である。
「国名？」
「はい、今のところはバチカン教国となっていますが」
「それは私達の関与する話ではないわね」
金はその言葉に対して述べた。
「国名はその国が決めるものだから。私達は登録するだけ」
「はい。ですが予測を」
「予測、ね」
金はそれを聞いて少し考える顔になった。
「それだったらそのままじゃないかしら」
「バチカン教国と」
「ええ。変える必要もないし」
「そう言われればそうですね」

「そうよね。だから」
金はまた言う。
「私は変わらないと思うわ」
「左様ですか」
「ええ。問題は他にもあるし」
「宗教家だけで国家運営は可能か、という声もありますが」
「ああ、それは大丈夫」
金はそれには特に不安は持ってはいなかった。
「バチカンは宗教だけの国家ではないから」
「政治もよく知っていると」
「教皇は政治家でもあるから」
この時代でもそれは変わりはしない。かっては神の代理人という名前の第一級の政治家であった。謀略家、陰謀家の教皇なぞ幾らでもいた。
「それに神父さん達もね。宗教は政治と密接な関わりがあったし今でもあるから」
「では」
「技術者はカトリックの信者が馳せ参じてくれるでしょうし」
「国家運営は安泰ですか」
「開拓もする必要はないでしょうね、開拓省でも」
これは彼女個人の見解だ。しかし的確ではあった。
「全て信者が馳せ参じてですか」
「そうなるでしょうね。バチカンが来るとなれば」
「凄い話です」
コズイレフは感嘆の声を述べた。
「そこまでのことが為し得るとは」
「バチカンだからということね」
金は冷静な顔で述べた。
「だからそこまで」
「そうなりますか」

「ええ。そちらの心配は開拓省もしていないでしょう？」
「はい、そういえば」
コズイレフはこれも報告した。
「話にも出ませんでした」
「問題は場所だけなのよ、彼等は」
「場所、ですか」
「私は太陽系に置いてもいいんじゃないかって思ったりしたけれど」
「バチカン市国の時の様にですか」
「本当にそうした感じでね」
これはこれで前例があり悪くはない考えではある。
「けれどそれより。東北に置いた方がいいわね」
「はい」
「話はこれで纏まると思うけれど」
「それでもシュミレーションを」
「やってみて。議会がノーと言った場合も含めて」
「わかりました」
コズイレフはそれに頷く。
「それでは」
「それでね」
話はまだ行われた。

## 第二十一部第四章　妥協案その四

「エウロパではおかしな行動を取ろうという動きはないかしら」
「エウロパですか」
「彼等がこのことでかなり憤っているのは間違いないから」
「はい、それはかなりのようです」
「でしょうね。自業自得とはいえ」
元々連合とエウロパの戦争はバチカンを利用して潜入した工作員の問題に拠るものだったからである。その元を消す為のバチカンの移転なのであるから。
「納得出来ないって考えも多いでしょうね、まだ」
「テロですか」
「国家が認めても個人はそうはいかないから」
これが難しい問題であった。
「それが問題ね」
「ですね」
「まあそちらはあくまであちらの責任ね」
「エウロパ政府の」
「ここで失敗すれば彼等はその統治能力さえ疑われることになるわ」
「今首相がいないのですよね」
「ええ。ペーチ首相はなくなったから」
かわりでボーデーが首相代行を務めている。なお彼は内相を兼任したままである。
「エウロパも大変なようですね」
「敵の窮状はこちらにとっては幸福よ」
とんでもない話だがそれは真実である。
「現に私達は今順調だしね」
「はい。ところでそのエウロパですが」
「何かしら」

「ギルフォード侯爵という人物が出ていますね」
「ええ、彼ね」
金ももう彼のことは耳に入れていた。
「近頃急激に名が知られてきているわね」
「はい」
「彼がどうなるかね。何でもあの戦争ではニョルズで活躍したらしいけれど」
「それ以外はまだわかっていません。わかっているのはイギリスの大貴族であることです」
「経歴はともかく能力は不明だと」
そこを問うた。
「ええ、まだ未知数です」
「その未知数の人物に縋ってでもエウロパは生き残らなくてはいけない」
「彼等にとっては辛いですね」
「そうね。けれどそれも彼等の問題」
「さて、どうなるでしょうか」
こう述べながら思案を巡らせる。
「それ次第でエウロパは大きく変わるわ」
「大きく」
「復興か衰退か」
金はその言葉を強調させた。
「どちらになるか」
「敗戦から立ち直ればまた連合と対立しますね」
「それは間違いないわ。彼等は絶対に対立するわね」
これは容易に見越せる未来であった。
「連合とエウロパは結局相容れないものなのよ」
大衆主義と貴族主義、そして異文明同士である。それで相容れる筈がなかった。
「それは彼等もわかっているでしょうね」

「軍部もその違いにかなり驚いていたそうですね」
「そうね。実際にエウロパに入ってね」
「そんなに違っていたのですか」
「違っていただけじゃないらしいわ」
「異世界のようだったと聞いています」
「とにかくね。連合とは違う世界なのよ」
金は述べた。
「何もかもがね」
「はあ」
「パーティーでも全然違ったと聞いているわ」
「料理もですよね」
「ダンスも。あちらは本場の社交界だって自慢しているようだけれど」
「八条長官があちらで貴婦人達を相手に見事に踊られたそうですね」
「ええ、それも聞いているわ」
ここで何故か金の整った眉がピクリと動いた。コズイレフもそれに気付いた。
（！？）
何事かと思った時に金は言った。
「何人もの美しい貴婦人達と踊られたそうね」
「はい、それで」
「一人も彼とねんごろにはなれなかったと。相変わらずね」
「女性に清潔でいいことだと思います」
「あれは清潔とはまた違うのよ」
「それでは一体」
「さて。何なのかしらね」
微かに苦笑いを浮かべたようにに見えたがそれは一瞬であった。
「わかれば凄いかも知れないわ。それでね」
「はい」
「バチカンにもこの話は伝えておいて欲しいのだけれど」

「事前に、ですか」
「決定事項ではないということでね。お願いね」
「わかりました。それでは」
彼女の言葉に頷くのだった。
「そちらもお願いね。それじゃあ」
「ええ」
話はこれで終わった。コズイレフは一礼して部屋を後にした。金は一人になったところで書類を見ながら少し悩ましげな溜息をついていた。
「誰の言葉にも気付かないのもいいけれど」
あの苦笑いをまた浮かべていた。
「もう少し。女性に敏感になって欲しいとも思うわね」
それが誰のことを言っているのかは彼女にしかわかりはしないことであった。だがその言葉は彼女の心の吐露であることは疑いようがなかった。

## 第二十一部第四章　妥協案その五

話はブラジル、イスラエル、中央政府、そしてバチカンの間に複雑に錯綜しながら進んでいた。中央政府の内務省と開拓省がそれぞれ候補地に挙げている東北部の辺境では農民達が畑を見回っていた。

麦畑である。だがかつての麦畑とは違う。品種改良と遺伝子操作により稲の様に水を使う麦になっていた。所謂水麦である。生産量もかっての麦とは比較にならない。米と同じ位の収穫量を誇る。もっとも米自体も生産量、収穫高を増加させているので今だに米の方が多いのであるが。

彼等は今その麦田を見回っていた。そして話をしていた。

「今年はどうかな」

「結構いけそうだな」

麦の様子を見ているのである。

「虫もついていないしな。大丈夫だろ」

「そうか、林檎もいけているしな」

「今年は悪くはないぞ。かなり売れる」

「いいことだな」

彼等は笑顔で言い合う。

「ただな」

ここで一言入った。

「ここに来て随分経つがまだあまり採れていないんじゃないのか？」

「そうか？」

「ああ。他の星系とかずっと凄いじゃないか」

「いや、この辺りの星系は全部こんなもんだろ」

「日本とかだよ」

一言入れた彼は言った。

「収穫高とか全然違うよな」

「日本とかと一緒にするなよ」

それにはすぐに突込みが入った。
「あそこは元々かなり豊かじゃないか。ここは文字通り辺境だぜ」
「辺境か」
「そうさ。言うならまだ未開なんだよ」
「結構開けてきていると思うけれどな」
「あくまで程度の問題だな」
麦田を見ながら言う。
「ここはな。やっぱり田舎だよ」
「田舎か」
「そうだろ？人口も少ないしよ」
実際にこの辺りの国々は新興国ばかりでまだ人口も少ない。ようやく国家経営が軌道に乗りはじめた国々ばかりであると言っていい状況なのだ。
「まだまだ本当に未開なんだよ」
「住んで結構なるんだけれどな」
「それでもな。何か足りないんだよな」
「ブラジルはずっと南だしな」
「ああ。華やかなのはずっと南」
星系単位での南である。
「俺達はここで田舎者ってわけか」
「嫌な話だぜ、全く」
「まあ言っても仕方ないけれどな」
「それはな」
それでも話は続く。
「それなりに生きていけてるしな。別にいいか？」
「よかねえよ。やっぱりもっと開けないとよ」
「麦だって売れないか」
「もっと売れればそれだけ儲かるぜ」
これは真理であった。
「そうだよな。けれどよ」

「人が来ないからなあ」
「もっと人が来ればやっぱり違うんだろうな」
「そうだよな。もっとな」
彼等は言い合う。
「人がいてくれたら」
「まあ急には無理かね」
「それを言ったらおしまいだぜ。来るつったら何かパトロール艦隊とかしょぼい企業だけだしよ」
「しけてるな、本当に」
こうぼやく。
「急に賑やかにとかならないのかね」
「人が行き来すればそれで全然違うんだけれどな」
「じゃあどうやって人が来るんだよ」
「さあ」
実際に言われても考えが思いつかない。
「来ないって。こんなところに」
中の一人が言った。
「とりあえず地道にやろうぜ」
「それが一番か」
「確かに一攫千金もいいけれどな」
「真面目にやるのが一番だって」
笑顔での言葉だった。
「とりあえず生きてはいけてるしな」
「そうそう」
「ここはじっくりやっていこうぜ」
「俺達の孫の代には開けてきているだろうしな」
「そうだったらいいな」
「そうだな」
それでも明るい未来は持っていた。実際に開拓してから今まで頑張ってきたからそうした感情を持つのもまた当然である。新興国特

有であるとも言えた。

## 第二十一部第四章　妥協案その六

「今にアメリカ以上の大国に」
「ははは、それは無理だよ」
「けれどまあ頑張っていればいいさ」
「そうだな。神は見ていて下さる」
当然信仰もある。彼等はそれぞれ信じている神は違うが。
「じっくりだな、やっぱり」
「それしかないか」
「そうそう」
「そうしたら何時かいいことがあるからな」
「まあ今でも充分幸せだけれどな」
「ははは、まあな」
それでいて今の生活にも満足していたりする。何かと複雑に感情が入り混じっていた。
「じゃあそろそろまたはじめるか？」
「俺は鶏の世話をしに行くぜ」
中の一人が言った。
「卵を売ってな」
「じゃあ俺は梨だな」
「そっちはかなり時間かけたんだって？」
「ああ、十六年だ。昔ながらの梨にこだわってみた」
今ではかなり短縮はされている。梨であっても。
「ほう、それ美味いのか？」
「美味いぜ、今度食べさせてやるよ」
「おう、楽しみにしてるぞ」
「甘いぜ、これは」
梨も品種改良されて十六年だった実がなるまでが半分以下にまでなっていた。これは柿も同じで三年で実がなる柿が普通に存在して

いる。
「甘いか」
「滅茶苦茶な」
不敵に笑って言う。
「一度食ったら病み付きになるぜ」
「よし、じゃあ今度な。食わせてもらうぜ」
「ああ」
「で、俺は青葡萄と黒葡萄のところに行く」
また一人が言った。
「それでワインをな」
「青ワインと黒ワインか。あれもいいな」
「そうだろ」
美食の一つとして有名になっている。紫のワインや緑のワインもある。
「あれとな。ステーキとかハムがいいんだよ」
「たまらねえな」
「じゃあ俺は牛や豚の方に行くか」
そしてまた一人。
「酪農もいいぜ」
「ああ、そっちもな」
「御前のとこの牛かなりいいな」
「当たり前だろ、手塩にかけて育ててるからな」
「そうだったのか」
「そうだよ、だから美味いんだよ」
彼は言う。
「ミルクもな。とびきりのものだぜ」
「俺は肉がいいな」
「ステーキもな。あるぜ」
「いいねえ」
「じゃあそれも貰おうか」

「その時になったらな。今はまだ先だ」
「そうか」
その言葉に応える。
「そうだよ。そのうち恐竜でも飼おうかな」
「あれはちょっと難しいぞ」
「そうなのか？」
「ブロントサウルスとかトラコドンだよな」
「まあそっちを飼おうかなって思ってるんだけれどな」
恐竜の養殖や家畜化もかなり行われている。連合は何かと家畜や作物が多い。
「難しいのかよ」
「少なくとも牛や豚とは全然違うぜ」
「ふうん」
「それに寒さに弱いしな」
「ああ、爬虫類だからか」
そう結論付けるのだった。
「そうさ、ここはあまり向かないだろ」
「別の場所ならいいだろうけれどな」
「じゃあ止めておくか」
彼はそれを聞いてこの話を止めることにした。
「大人しく牛や豚を増やしていくか」
「それがいいな」
「羊はどうだい？」
「羊か」
それを聞いて考える顔をした。

## 第二十一部第四章　妥協案その七

「悪くはないな」
「そうだろ」
「羊毛も取れるしな」
「そうそう」
「肉も美味いし乳もとれる」
「乳！？」
一人がそれを聞いて不思議な顔をした。
「羊って乳もあるのか！？」
「おい、知らないのか！？」
皆それを聞いてかえって驚いた。
「結構いけるぞ」
「そうなのか」
「モンゴルでも飲むよな」
「ああ」
「ああ、モンゴルじゃ乳が主食の一つだったよな」
これはこの時代ではかなり変わっているがモンゴル人の中で遊牧を続けている者はそうだ。またモンゴル人は連合の中ではかなり特別な存在であり遊牧民の割合がかなり高い。この時代においても草原の民なのだ。
「そうだぜ。まあメインは馬の乳らしいがな」
「そうか」
「それも結構いいぜ」
「じゃあおれもやってみるか」
「馬は持ってるよな」
「持ってないわけないだろ」
この時代でも酪農には欠かせないものである。移動にも使えるし食べてもいい。馬もまた非常に役に立つ動物なのである。それに繊

細で優しい生き物である。
「あれの乳をか」
「他にも山羊の乳とかな」
「ああ、それはもうやってる」
「おっ、早いな」
山羊の乳があると聞いて笑顔になるのだった。この時代は牛の乳だけが使われているのではない。馬や羊の乳も飲まれたり乳製品となっている。この山羊もだ。山羊はおろか豚の乳まで使ったりする。連合では何でも飲み食いされるのだ。まさに食べないものはない。空を飛ぶものは飛行機以外。四足は机や椅子以外、海のものは船以外、二本足は人以外というわけだ。言うまでもなく虫も食べるのである。
「そっちは通向けでな。もうやってるんだ」
「いいな、それは」
「人気商品なんだぜ、うちの」
「人気あるのか」
「その独特の味がな。どうだい？後で」
ここで誘う。
「それと御前のとこの青ワインでよ」
「いいな」
ワインをやっている者がそれを聞いて面白そうに笑う。
「デザートは梨で」
「ああ」
「楽しくやろうぜ。仕事が終わったらよ」
仕事が終われば後は楽しい時間が待っている。このことに関してはどの時代であっても変わらない。例え寝るだけにしてもだ。その睡眠がまた無上の喜びであったりする。幸せというものは少し落ち着いてみれば実に身近に多くあるものなのだ。それを見つけられるか見つけられないかはまた別問題であるが。
「じゃあ俺の家でな」

「それぞれ持って来て」
「俺は鶏肉持って来るからよ。それをオーブンで焼いて」
「さらにいいな」
「楽しくやろうぜ、今日は」
「よし」
そんな話をしていた。彼等も何だかんだで今を楽しんでいた。素朴に。それが騒がしくなっていくとはこの時は望んだり、考えたりはすれど本当になるとは思ってもいなかったのであった。

## 第二十一部第四章　妥協案その八

ブラジルでもこの東北案が伝わっていた。ロベルトはそれを聞き閣議で話に出していた。
「バチカンのことは聞いているな」
官邸の会議室にブラジル政府の閣僚を集めている。そこで彼はこの話を出したのである。
「中央政府は東北の辺境にバチカンを置くらしい」
「東北の辺境にですか」
「そうだ」
財務省のガスディアに答えた。
「ううむ」
「それについてどう思うか」
彼に答えたうえであらためて問う。
「この中央政府の案について」
「そうですね」
「悪くはないと思います」
閣僚達はまずはそう述べていった。
「ただ」
だがここで通産相のニッサが口を開いた。
「どうした？」
「それで我等が利を得るかどうかです、問題は」
「東北の辺境ならば我々を通らなければならないな」
それがロベルトの返事であった。
「それならばわかると思うが」
「確かに」
ニッサはそれを聞いてまずは頷いた。
「後は我々がどう動くかですか」
「そういうことになるな。だがこれは容易いと思う」

「ええ、それは」
「バチカンに向かう観光客や信者がブラジルを通るのですから」
「それは問題ないでしょう」
「そのうえで少し思うものがあります」
ニッサはまた述べた。
「今度は何だ」
ロベルトは微笑を浮かべながらそれに耳を向けさせた。
「観光産業に関してですが」
「うむ」
「我々に便宜を集中させてもらいたいのですが」
「取引材料にか」
「はい、それでもう文句はありません」
彼は言った。
「そこまであったならば」
「わかった。ではそれも話をしてみるか」
「はい」
「もっともこれも自然になるがな」
ブラジルはこの辺りで最大の大国である。彼等の意見が通るのは当然であると言えた。もっとも小国は小国で連衡してあたるから油断は出来ないのであるが。
「だが実際に申し出てみるのと放置しておいてそうなるのは違う。言ってみるか」
「それがよいかと」
「ではこれも入れる」
ロベルトは断を下した。
「それで以って我々はバチカンを放棄する。これでよいな」
「ええ」
「それで宜しいかと」
全ての閣僚達がそれに頷いた。これで決まりであった。
「よし。では」

ロベルトはそれを受けて自身のすぐ側に控える男に声をかけた。
「首相」
ブラジル首相であるフレーニに声をかけた。
「それで話を纏めていってくれ。ブラジル政府としてな」
「わかりました」
フレーには彼の言葉に頷いた。
「さて、後は議会だな」
「反対し続けるのは熱烈なカトリック教徒だけと思われますが」
「彼等の議会に占める割合はそれ程大きくはない。いけるか」
「そうかと」
「あらかじめ説得をしておこう。与党に対しても野党に対してもな」
「そうですね」
彼等は与党に所属している。だがそれでも説得や説明が必要なのは変わらない。政治には事前の根回しというものがどうしても必要なのである。
「しかし今回もイスラエルだったな」
ロベルトは議会に対する話まで終わったところであらためて呟いた。
「相変わらず。よく動くものだ」
「流石と言えば褒め言葉になりますか」
ガスティアがここで応えた。
「どうでしょうか」
「それだと褒め言葉になるな。だが」
ロベルトは言う。

## 第二十一部第四章　妥協案その九

「あまり褒めたくはない相手だと思うが」
「それは確かに」
「今回もしてやられたという感じがします」
閣僚達もあまりいい顔はしていなかった。
「確かにな。利は得られたが」
ロベルトもまた言った。
「それでもだ。この感じはいいものではない」
「おそらくそれも見越しているのでしょうが」
「それも踏まえてやはり」
話は続く。
「あまり気持ちのいいものではありませんな」
「そうだな。だがこれで話は終わった」
「バチカンは東北の辺境にですか」
「そうだ。後は中央議会でそれが議決される」
「中央議会にいる我が国出身者には何もしませんか」
「もう話は終わった。いい」
ロベルトはそれはしないことにした。今更何かしても何の意味もない、むしろそれが漏れればかえって各国の不信を招く、そう判断したのだ。
「彼等にはそのまま動いてもらう。いいな」
「わかりました」
「反対でも賛成でも構わん。どのみち話は決まった」
「可決されますか」
「間違いなくな。この案は中央政府内務省と開拓省が作ったものらしい」
「内務省もですか」
今度は内務省が出た。

「あの金内相が命じたらしい」
「左様ですか」
「あの才媛がまたしても」
「我が国にも配慮してのことだろう。それ以上に中央政府の思惑があるだろうがな」
「あの辺りはまだ開拓が不充分ですから」
フレーニが言った。
「それも考えてのことだと思われますが」
「開拓省も協力しているからか」
「はい、私はそう思います」
「だろうな。これであの辺りも開拓が進むな」
「はい」
「巧妙だ。何もかも」
ロベルトは感心した様に呟いた。
「今の中央政府は賢い。我々を上手くあしらってくれる」
「中央軍設立に関しても」
「我々にも便宜を図ったうえでな。そのうえでその権限を強めている」
「全てはあの大統領の考えでしょうか」
「全てではなくともかなりの部分は確かだ」
言葉は言い切りだった。
「そうですか」
「最初は豪放磊落なだけかと思っていたのですが」
「あてが外れたな」
「はい」
「見事に化かされました」
「我々はまだいいがあの三国はかなりしてやられているな」
米中露のことである。この三国は何かと中央政府と対立する国としてあまりにも有名である。他の国から見れば我儘でしかないにしろ。

「中央軍にしろだ」
「彼等は最後まで反対しましたからな」
「我々と違い」
ブラジルは中央軍には反対しなかった。日本と協同歩調を取ったのである。
「ですがスキャンダルが起こり反対派の首魁が動けなくなり賛成となった」
「実に見事です」
「スキャンダルなぞ掴まれる方が悪い」
ロベルトの言葉は冷徹だが真実であった。
「彼等はそれを掴まれた。それだけのことだ」
「ですがよくあれだけの面子のスキャンダルを掴めたものです」
「叩けば幾ら埃が出るにしろ」
「それは日本も関わっていたそうだしな」
「ああ、伊藤首相ですね」
「あの御婦人は。奇麗な顔をしてまたやることがえげつない」
伊藤のそうした謀略は彼等もよく認識していた。
「狐が後ろからついてきてそれに気付かないのもまた不明でしかないです」
フレーニが静かにそう言った。
「彼等は闇夜の中で狐に気付かなかった。ですから」
「掴まれたということか」
「そういうことです」
ロベルトにも答えた。
「あの御婦人に」
「迂闊といえば迂闊だったな」
「はい」
「まあ無能とも言っていいな」
こうまで言う。
「そうですね。スキャンダルは掴まれる方が悪い」

「しかし。相変わらず敵にすると恐ろしいな」
「日本という国自体も」
「あれで彼等は自分は無害で外交が下手だと思っているらしいな」
「とんでもない」
それはその場にいる全ての者から否定された。
「日本が無害ですか」
「あんな強かな連中が」
「どうやら自分のことをよくわかっていないのは昔からのようだな」
ロベルトも彼等と同じ意見であった。

## 第二十一部第四章　妥協案その十

「のらりくらりとかわしながら自分のフィールドへ導いていく」
「そして自分達の有利なように進める」
「かなり手強いのですがね。我々としては」
日本の外交は日本国内と連合各国の間では評価が違う。連合各国では嫌らしい外交を得意としているとされている。だが日本国内では外交が下手でどうしようもないと言われている。差があるにしろここまで差があるのも珍しい。どちらが正しいのかわからないが実際にはこうである。
「わかっていないのは自分達だけです」
「日本人というのはわからないな」
「ある意味マウリア人と同じ位に」
「いや、あそこまではいかないだろう」
その言葉には流石に突込みが入った。
「マウリアは異次元そのものだぞ」
「それもそうか」
「日本がわかりにくいのは同意だがな」
「ああ」
「今回は日本も絡んだがな」
ロベルトはここで言葉を漏らした。
「しかし。今回はあっさりと引き下がったな」
「一応は、ですね」
フレーニがそれに応えた。
「ですが」
「何かあったのか？」
「いえ、その見返りの一つにイスラエルとの話があったようでして」
「イスラエルとか」
「日本とイスラエルの間で規制緩和の話が出ております」

「ああ、漫画やアニメでの」
ニッサがそれを聞いて言った。
「あれは何度か出ては立ち消えになっておりますな」
「はい。それを今回確約したそうです」
「あのイスラエルとか」
イスラエルの規制の厳しさはまた特別である。ロベルトも何度も手を焼いているからこれはよくわかる。実際にやってみないとわからないことが世の中には多いのである。
「はい。それでかなりの部分が緩和されたとか」
「ふむ」
「ただ一つを除いて」
「それは一体」
「同性愛です」
彼はガスティアにこう答えた。
「ああ、あれですな」
「はい」
これを聞いて皆まずは頷いた。
「あれは流石に」
「イスラエルでは認められないでしょうか」
「はい。ですから彼等はそれへのチェックは認めさせたそうです」
「日本は同性愛を完全に容認しているのにか」
「はい。しかも顧問会議が直接チェックするようです」
「厳しいな。あの老人達が相手では」
泣く子も黙るイスラエル大統領顧問会議。あの十二人の長老達に逆らえる者はこの世には存在しない。実に厄介な存在である。
「それ以外はいいようですか」
「所謂ポルノもか」
「それなりに緩和されるそうです。同性愛以外は」
「それだけは、か」
「そのようです」

「何かそれでは緩和しても日本側が得られるものは少なそうだが」
それでもであった。話は。
「ですがそうでもないようです」
「他のものはいいからか」
「そもそも日本での漫画やアニメ、小説はかなりのものになります。同性愛だけではありません」
「それもそうか」
「どうしても、というのならばイスラエルの外で見ればいいですし」
「手間がかかるがな」
「その筋の嗜好家はそれもわかっていますよ」
フレーニは述べた。
「抜け道も。まあイスラエル国内では流石に難しいみたいですが」
「今後この件でも水面下で色々ありそうだな。イスラエルでは同性愛は犯罪行為だしな」
「ええ」
「いつも思うのですが極端ですね」
文部相のディンティーノがポツリと述べた。

## 第二十一部第四章　妥協案その十一

「そこまでしなくとも。彼等は他にも」
「彼等はな。特別だ」
ロベルトはそのディンティーノにこう返した。
「本来ユダヤ人という民族は純粋な意味ではなくなっているな」
「混血しているのは事実ですから」
「現にイスラエルの中では白人のユダヤ人もいれば黒人のユダヤ人もおります」
これはイスラエル建国以来からだ。エチオピアが混乱に陥った時は何とそこにいる黒人となっている同胞の救援にも向かっている。彼等をユダヤ人としているのは民族の血ではないのだ。その信仰なのである。
「そうだな。まあ今民族といってもかなりあやふやになっているが」
「はい」
これもまた事実である。肌の白い大和民族もいる。日本人の中核を為していると言われているこの民族は元々混血に抵抗はないが今では白人も黒人も大和民族となっている。兄弟国家であるアイヌ、琉球とは元々混血しており今でもかなり交流が盛んである。これが連合の民族の例の一つである。
ヒッタイトやフェニキアは事情がまた違う。彼等は自称であるという一面が強い。その出自はかなりわかってはいない。そもそもヒッタイトは滅亡した筈だからである。それが復活した、というのは確かに素っ頓狂な話である。だが彼等が自分達がヒッタイト人の末裔でそう名乗って建国したならばそれが事実なのである。
「だがイスラエルは」
「その信仰が彼等をユダヤ人としていると」
「だからそれを否定することは出来ないのだ、絶対にな」
ロベルトはそう述べた。１０２

「彼等自身を全否定すると」
「そうだ。何もかもをな」
「厄介なものですな」
あらためて溜息が起こった。
「何か自分達で自分達の世界を狭めている気もします」
「ムスリムはそうではないのに」
「まあ仕方がない」
ロベルトはまた言った。
「それが彼等なのだからな」
「左様ですか」
「それでだ」
彼はまた述べた。
「日本側もそれは飲むらしい。無条件でな」
「下手に刺激しないのですか」
「そういうことらしいな。それでこの話を纏めるそうだ」
「成程」
その言葉に頷く。
「それでも実入りがあると計算したのですか」
「だろうな」
「まあイスラエルとはこちらも話がつきましたし」
「後は彼等での話ですな」
「まあ普通に進みそうですが」
「では次は」
「はい、今年度の財政ですが」
話は内政に移った。ガズティアが述べる。
「今のところは」
話は別の方向に入って行った。彼等も外のことばかりには携わってはいられない。中もまた重要なのだ。彼等は今それをしようとしていた。問題は次々に出て来る。それを一つずつ対処し、収めていくのであった。

各国での調停が終わったという情報は遠くバチカンにも届いていた。あのリー枢機卿が教皇に直接報告していた。
「左様ですか、そちらに」
「はい」
枢機卿は頭を垂れてそう返した。
「教皇様が行かれるにはかなり不便ですが」
「この世には不便な場所というものは存在しません」
教皇は枢機卿に対して厳かに述べた。
「神は常にそこにおられます。それで何が不便というのでしょうか」
「それでは」
「はい」
教皇は頷いた。
「何処であろうと私は神の下におります」
「教皇様・・・・・・」
「それだけです」
「その御言葉、心に留めておきます」
「連合にもまた神はおわします」
彼は今それを見ていた。
「ですから」
「連合でも教皇様は教皇様です」
リー枢機卿は多分に政治的なところもある人物である。だが今彼はそれを越えて教皇の心に触れたのである。彼もまた神の道を学んできた男だ。それに心動かされない筈がなかった。
「ですから我々もまた」
「参りましょう」
教皇は笑顔で述べた。
「連合へ」
「御供致します」
枢機卿は再び頭を下げてこう述べた。
「何処までも」

「有り難うございます。それでは」
彼は微笑みと共に述べた。
「参りましょう」
「神の御意志の下に」
バチカンは運命を受け入れるだけであった。迷いはなかった。二人の話の後連合中央議会においてバチカンにおける審議がはじまった。それで全てが決まるのであった。バチカンの運命が。

# 第二十一部第五章　舞台の終わりその一

舞台の終わり

バチカンに関する議論が遂に連合中央議会でもはじまった。東北部の辺境に移転させ、そこに星系一個を提供し、独立国家を築いてもらうというのが中央政府内務省、そして開拓省の案であった。

「連合にとってみれば星系一個なぞどうということもない」

エウロパの者達はこの話を聞いてこう言い捨てた。

「バチカンに場所を提供するのもそういうことだな」

だが連合ではそうではなかった。そこに至るまでにかなりの議論と政治的開け引きがあった。全てはその結果なのである。それまでが実に長かった。

金はそれを今実感していた。法案がようやく纏まったからだ。

「よくやってくれたわ」

彼女は今レストランにいた。そこで今回の責任者であったコズイレフと話をしていた。

「おかげでいいのができたわ」

「有り難うございます」

「議会の方は特に反論はないみたいね」

「はい」

コズイレフはその言葉に答えた。

「今のところこれといって反対する声は聞いていません」

「事前の様々な話のせいかしら。大国を巻き込んだ」

巻き込んだというよりは彼等のいつもの我儘であったのだがそれはオブラートに包んでいる。

「それは当然中央議会にも伝わっているでしょうし」

「それもあると思います」

コズイレフもそれは認めた。

「ただ、それだけではないでしょうが」

「貴女の案に頷けるものがあったということね」
「これが連合全体にとってもいいということは確信しています」
コズイレフはまずは自負を述べた。
「東北の辺境は開発がかなり遅れ、人口も少ないですし」
「あの辺りの開発を促進する為にはね。あれが一番ね」
「はい。それにバチカンの利用を政治的にも防げますし」
東北の辺境にはこれといった大国が存在しない。それも見ていたのである。
「やはりあそこしかありません」
「そうね。本当にあそこしかないと思うわ」
金もそれは同意であった。
「絶妙の一手だと思うわ」
「大国の権益が関係ないと。話はスムーズに進むようになりました」
「ブラジルも手を引いてからね」
「観光業者や交通の便宜は仕方ありませんでしたが」
ブラジルへの見返りはそれであった。それは仕方がなかった。取引材料であったのだ。
「それでも」
「まあそれ位はね。いいと思うわ」
「はい」
「これで話が進んだし」
ここでデザートが来た。トライフル、イギリス起源のクリームケーキである。
それが二人の前に並べられた。金はそれを見てまず言った。
「これは意外だったわね」
「ケーキがですか？」
「ええ。これはイギリスのお菓子だったわよね」
「そうらしいですね」
コズイレフは料理はそこそこ知っているが専門家ではない。流石にこれがイギリスのお菓子であるとは思わなかったのである。

「イギリスの食べ物は美味しくないと聞いているけれど」
「国防省の制服組の人達がやけに主張していますね」
「イギリスに入った部隊はそれでかなり苦労したそうね」
「そうらしいです。食べ物ことで。いえ」
「どうしたの？」
「カナダは別だったそうです」
コズイレフは述べた。
「カナダ出身者はこれの何処がまずいのかと。イギリス料理を平気で食べていたとか」
「カナダ人はそうだったのね」
「そうらしいです」
「彼等ならね。私もわかるわ」
カナダ料理のまずさは連合最高と謳われている。これは連合ならば誰でも知っていることである。カナダ人達はこのことを必死に否定するが。これは事実であった。
「カナダのお菓子は。美味しくないから」
「はあ」
「甘くないのよ」
苦笑いを浮かべて述べた。
「あまりね。それに繊細さもないわ」
「そうなのですか」
「このトライフルはどうかしらね」
そして自分の前に置かれているそのトライフルを見た。

## 第二十一部第五章　舞台の終わりその二

「これは多分カナダでも結構食べられているけれど」
「元々はイギリスの植民地でしたしね」
「ここは何の料理店だったかしら」
「アメリカです」
「アメリカね。じゃあこれが出るのも道理ね」
「はい」
　それに応える。
「もっともアメリカはどんな種類の料理が出るかわかったものじゃないけれど」
「この前は中華料理が出ました」
「ふふふ、中国系アメリカ人の料理なのかしら」
「麺類が。それとハンバーガーが」
「それ結構合いそうね」
「味はよかったです」
　この時代のアメリカの食べ物はそんなに評判は悪くはない。
「抵抗なく食べられました」
「少なくともこの店の料理は悪くはないわ」
「はい」
「ただ、デザートは重要よ」
　連合で名の知られた甘党ならではの言葉であった。その目が光る。
「最後だから」
「締めがしっかりしていないと、ですか」
「そういうことよ。わかっているわね」
「ええ、まあ」
　ここでコズイレフの言葉は何故か切れが鈍った。金の甘党ぶりが尋常ではなく、しかもその量が普通ではないことは彼女も知っているからである。

トライフルにスプーンを入れる。そしてそれを口に運んだ。
その瞬間緊張が走った。それが終わってから彼女は述べた。
「いいわね」
「美味しいですか」
「ええ。上品な味でね」
目を細めさせてこう述べた。
「桃を上手く使っているわね。それにジャムも」
「桃が中にあるのですか」
「外から見たのじゃわからないわよね」
「はい、それは」
外から見ただけでは何が入っているのかまるでわかりはしない。生クリームが完全に覆ってしまっているのである。つまり食べてみてからのお楽しみというわけだ。
「程好いわね、これは」
「では私も」
コズイレフも食べてみる。それは確かにかなりの味であった。
「これは」
「どう、美味しいでしょ」
「はい、ジャムまで」
「そうよね。いいジャムを使っているわ」
金はそこも味わっていた。彼女は甘いものに関しては実に細かいところまでその舌で分析することを得意としているのである。それも細部まで。
「スポンジもね」
「クリームとスポンジのバランスもいいですね」
「そうね。それも及第だわ」
金は述べた。
「絶妙ね。そこも」
「そうですね。ですから味が余計に」
「際立っているのよ。考えているわね」

「美味いですね」
「ええ」
金は眼鏡の奥の目を細めていた。
「トライフルは自分でも良く作るけれどね。それよりもいいわね、やっぱり」
「自分でも作られるのですか」
「そうよ」
金は答えた。
「今の職務になってからは忙しくてできないけれど。お菓子を作ることは好きよ」
「はあ」
コズイレフはそれを聞いて意外といった顔であった。
「料理は好きよ。自分でも美味しいと思うわ」
「そうだったのですか」
「どうしたの、一体」
コズイレフがぽかんとした顔になっているのに気付いた。
「そんな顔をして」
「いえ、何か意外だなって思いまして」
彼女はその言葉に答えた。
「意外？私が料理をすることが？」
「はい、失礼ですがそうした感じには見えませんので」
「嫌ね、私だって料理はするわよ」
その知的な美貌の顔に苦笑を浮かべていた。
「普通にね。子供の頃から」
「そうなのですか」
「ただね」
ここで苦笑いが少し変わった。自分に対するものになった。
「味付けがね。言われるのよ」
「何とでしょうか」
「甘いって」

「ははは、それですか」
これはすぐにわかった。彼女の甘党ぶりはもうかなりのものであるからだ。これは中央政府はおろか連合ではかなり有名になっている。美貌の秘密はお菓子にあると全然見当違いなことまで言われる始末である。少なくとも話の種にはなってしまっている。
「韓国料理は辛いものだって評判があるわよね」
「はい」
これもまたあまりにも有名である。韓国料理と言えば大蒜と唐辛子である。特に唐辛子を使うことにおいては連合随一なのである。
「それもちゃんと入れているのだけれど」
「では問題ないのでは？」
「ただね。お菓子が」
お菓子の話が出た。
「それですか」
「甘過ぎるって言われるのよ。それと量が」
「そちらでしたか」
「父に言われたの。御前のお菓子は食べていると気が遠くなるって」
「何故ですか？」
まずいというわけではないらしいというのはわかった。勘であるが。
「甘過ぎるって。そうかしら」
「実際に召し上がらせてもらったわけではないので何とも言えませんが」
口ではこう応えたが実際にはよくわかる話であった。金の甘党ぶりは際立っているからだ。

## 第二十一部第五章　舞台の終わりその三

「それに量も」
これもよくわかった。主食と同じ位お菓子や果物を食べているのだ。太りもせず、病気にもならないのが不思議で仕方ない程である。少なくとも彼女は平気であるようだ。
「私はそうは思わないけれど」
「そうなのですか」
「韓国のお菓子もね。作るわよ」
「韓国のお菓子！？」
「あら、知らないのかしら」
「そういえば」
言われてみれば何故かあまり知らなかった。韓国料理は何度も食べているがお菓子はノーマークであったのだ。
「知りませんでした」
「そうなのよね。どういうわけか韓国のお菓子は皆知らないのよ」
「何故でしょうか」
「カバリエ外相が仰るにはキムチやチゲ、焼肉とかが有名だから」
「それに隠れてしまうと」
「そうらしいのよ。けれど確かにそうよね」
「ですね」
それに隠れてしまう。それは何となくわかった。
「それでそのお菓子ですが」
「ええ」
「どういったものなのですか？興味があります」
「お餅や小麦をあんこやきな粉で味付けしたりしたものが多いわね」
「お饅頭とかそういった感じですね」
「そうね。日本や中国みたいな感じで」
「成程」

言われてみるとよくわかる。
「家庭的なのが多いわ。ただね」
ここで言葉を濁してきた。
「あまり甘さは前面に出さないのよ。韓国のお菓子は」
「ほのかにでしょうか」
「そうなの。それが残念で」
これには事情があった。お菓子というものはお茶とセットになるものである。だが韓国では李氏朝鮮の時代に仏教を弾圧し、その時にお茶の文化も破壊したのである。これでお茶を飲む風習が廃れてしまった。当時禅宗でお茶を飲んでいた。これを通じてお茶が広まったのだがそれを破壊したのである。そのせいでお菓子も広まらなかったのである。
それともう一つ事情があった。砂糖が貴重品だった。だから甘さを前面に出せなかった。韓国のお菓子が弱いとされているのはそうした事情からなのだ。
「もっとチョコレートやアイスクリームみたいな甘さが欲しいのよ」
「それで内相のお菓子には」
「当然砂糖もシロップもたっぷり使うわ」
「左様ですか」
「ええ。お菓子は甘くなくてはお菓子じゃないから」
ここまで聞いて何故彼女のお菓子が気の遠くなるまでに甘いのかがわかった。話を聞くだけで糖尿病になりそうな事情からであったのだ。
「韓国のお菓子には白砂糖ね」
「それをたっぷりと」
「そうよ。たっぷりと」
話す金はかなり上機嫌になっていた。
「入れないと駄目よ」
「そうでないと美味しくないのですか」
「そうなのよ。砂糖はたっぷりとね」

「はあ」
「それが父には不満らしくて。いつも文句を言われるのよ」
それも当然だと思った。だが念の為にさらに尋ねた。
「それでですね」
「ええ」
「他の方は何と仰っていますか」
「母も同じなのよ」
「そうですか」
それを聞いてやはりと思ったのは内緒である。
「韓国にいる時は友人達もね。悲しいわね」
「そうだったのですか」
何となくわかる。とにかく金の甘党ぶりは異常であるからだ。
「けれどね」
「はい」
「和菓子は好評だったわね」
「和菓子ですか」
言わずと知れた日本の菓子である。連合においてはかなり評判がいい。
「あれは甘くし過ぎては駄目なのよ。かえって下品になるから」
「あれはそうですね」
それはわかる。和菓子は難しい。その甘さの加減が。繊細なものなのだ。

## 第二十一部第五章　舞台の終わりその四

だがそれでどうして。他の菓子はそうなるのかが不思議と言えば不思議であった。
「それで調節しているのよ」
「しかし和菓子まで作れるとは」
かなりのものであるのは確かだ。祖国の菓子に関してはどうやら多分に問題があるようだが彼女は和菓子に関しては確かであるらしい。
「コツなのよ」
「コツ」
「そうよ。お菓子を作るのはね。全部コツなのよ」
「それでできるのですか」
「ええ。後は数をこなして」
「何事も経験ですね」
これは重要な言葉だった。
「そういうこと。何度も作っていくとね」
「美味くなっていくと」
「韓国菓子はどうもずっと不評だけれど」
「まあ嗜好の問題がありますから」
そう言って表面上は宥めた。本音は違うが。
「それは」
「そうね」
「そうです。それでですね」
「ええ」
話は和菓子に戻っていく。
「和菓子は確か八条長官もお好きでしたね」
「そうだったの」
「あれ、御存知なかったですか？」

「ええ、初耳だけれど」
金は答えた。
「けれど意外ではないわね」
「はい、むしろ合っているかと」
これは八条が日本人だからではない。彼の性質に和菓子が合っているということである。
「長官もお菓子はお嫌いではないようですね」
「そうね」
「御存知ですか」
「何度か仕事で一緒になったから」
「お仕事でですか？」
「そうだけれど」
金は答えた。
「それがどうかしたの？」
「いえ、別に」
そこから先はまずは言わなかった。
「ただ・・・・・・いえ」
「何か言いたいのかしら」
「特にありません」
「だったらいいけれど」
コズイレフの言いたいことはわかっている。金も自分の気持ちには気付いている。だが八条はそれには気付いてはいない。そこが厄介であった。
「しかし。噂になれば厄介ですよ」
「その心配はないわ」
金は落ち着いた声でそう返した。
「私はかえって同性愛疑惑まで出ている程だし」
「はあ」
それ程までに金の異性問題はないのだ。同性愛者だからといってイスラエル以外の国ではどうなるということもないのであるが。

「長官もね」
「私は思うのですが」
「何かしら」
「人はある部分に対しては非常に敏感であるのに他の部分では鈍感になったりするのですね」
明らかに八条のことである。
「何と申しましょうか。長官は」
「当人は異性にはもてないと思っているのよ」
「あれでですか」
「学生時代からそうだったと。いつも言ってるでしょ」
「そんな筈がないと思いますが」
「自分ではわからないものなのよ、それは」
どうやら金の方がそうしたことはわかっているようである。
「中々ね」
「恵まれ過ぎていると、でしょうか」
「正直に言わせてもらうと彼はもてない筈がないのよ」
金は述べる。
「あの経歴に容姿で性格だとね」
「そうですね。立派なものです」
「きっと今までも想いを寄せている人が多かったと思うわ。けれど」
「それに気付かないと」
「それでね」
金は少し表情を変えた。いつもの生真面目な顔ではない。
「これはオフレコよ」
「ここに来た時からそうですが」
「有り難う」
まずは紅茶で喉を潤した。それからまた述べた。

## 第二十一部第五章　舞台の終わりその五

「私だって何度か食事に誘っているけれど」
「はい」
これがどういう意味なのかわからない女はいない。男でもそうである。それがわからないのが八条という男である。政治や軍事に関する冴えと鋭さは他のことにも発揮されると決まったわけではない。
「全く駄目ね」
「やはり」
「パーティーの度に女優やダンサーに声をかけられるけれど」
「それもですか」
「ある意味凄いわね。普通はそういう状況だったら」
「ドン＝ジョヴァンニですね」
モーツァルトのオペラの有名な主人公だ。
「それかカサノバね。同じだけれど」
「はい」
カサノバをモデルにしたのがドン＝ジョヴァンニだというのは昔からよく言われていることである。色事師の代名詞は伊達ではないということだ。
「同性愛者からも声をかけられているわ」
「それもですか」
「どちらもね。何もなしなのよ」
「難儀なものですね」
「本当にここでの言葉は内緒よ」
金は何故か少女っぽい声を出していた。顔も。
「私だってその、女なんだし」
「わかっていますよ」
コズイレフはにこりと笑ってそれに返した。
「内相にはそちらでも御恩がありますし」

実は彼女の夫と会わせてくれたのが金なのである。彼女が結婚出来たのはひとえに金のおかげであったのだ。オールドミス寸前とまで言われていたが今では一児の母である。金が内心でコズイレフに想いを寄せているスタッフの一人に気付きそっと会わせたのである。厳しいだけではないのだ。

「内密にしておきます」

「有り難う」

金はその言葉にほっとした顔になった。

「それにしてもあの長官にも困ったものです」

コズイレフはあらためて深刻な顔になった。

「誰の気持ちにも気付かないとは」

「日本では良家の嫡男だし」

「はい」

言わずと知れた長男である。

「縁談がそのうち来るでしょうね」

「ではその前に」

「できたらいいけれど」

悲しい笑みになった。

「難しいでしょうね」

「もっと積極的に言われては」

「それが出来たらね」

笑みは苦笑いも含んだものになった。

「私に」

連合きっての才媛と言われている彼女がそうそう積極的になれるわけもなかった。幼い頃から厳しい教育を受け女性とはかくあるべき、と言われてきている。それでどうして自分から積極的にアタックができようか。今でもかなり勇気を振り絞っているのである。

「無理ですか」

「あの人に縁談が来るまでだけれど地道にやっていくわ」

金は述べた。

「それまではね」
「ですが内相も」
「その時はその時よ」
自身に縁談が来るかも知れないというのも察していた。

## 第二十一部第五章　舞台の終わりその六

「仕方ないわ」
「割り切れるものなのですか？」
「割り切れるものじゃないわ」
まずはそう前置きした。
「割り切るしかないものなのよ」
「割り切る、しかですか」
「人生なんてそういうところがあるし。それでね」
「難儀ですね」
困った顔をして述べる。
「何もかもが思い通りにいくとは限らないのよ。それが何であれね」
「はあ」
「私の場合は今までかなり思い通りにいってきたから。こちらではってことになっても仕方ないわ」
「ドライですね」
「ドライになるしかないし」
こう返した。
「そう考えているのよ」
賢いといえば賢いが何処か自分に対して言っていた。言い聞かせて納得させているといった感じであった。彼女も納得し難いものだと自分ではわかっているのだ。だからこそであった。
「そちらはね」
「ですか」
「それでね」
「はい」
もうトライフルは殆どなくなっていた。
「今度もまたね。声をかけてみるわ」
「再度攻撃ですか」

「何度でもね。してみるわ」
「よいかと」
「難攻不落だけれど」
「多くの人間が一度で諦めています」
要塞というよりは山にも思える。
「ですから」
「厄介なことね」
「あの鈍感さは説明のしようがありません」
「そうね。私もよ」
苦笑いだけでなく溜息まで出る。
「どうしたものかしらね」
「内相でも無理ですか」
「不可能はないと言いたいから。やってみるわ」
「では応援しております」
「有り難う。けれど意外かしら」
くすりと笑って問う。
「何がですか？」
「私がこうした話をすることよ」
「いえ、別に」
それには違和感を覚えていないようである。
「私はそうではありませんので。御安心下さい」
「よかったわ。じゃあ出ましょうか」
「そうですね。デザートも終わりましたし」
「ええ。長居するのも何だからね。今日はもう仕事もないし」
「早く終わって何よりです」
内務省はかなり忙しい。そのトップである長官ともなればかなりのものだ。だが金はその際立った事務処理能力でそれを進めているのである。
「ではこれで」
「ええ」

二人は席を立ち店を出た。そして別れて家に帰るのであった。
金の家はマンションにある。装飾もない質素なものである。マンション自体もセキュリティはしっかりしているが特に贅沢なものではない。彼女は華美な生活には興味がないのだ。
そのマンションの自分の部屋に帰るとまずはシャワーを浴びた。そして長い髪を纏めてパジャマを着た。意外と少女的な白いパジャマである。それを着てからベッドの中に入った。ベッドもまたフリルが目立ち少女趣味であった。全体的に少女趣味が見てとれる。
ベッドの中に入るとそのまま眠った。何もなく一日を終え次の日に備えるのであった。

## 第二十一部第五章　舞台の終わりその七

エウロパではかなりの騒ぎが続いていた。バチカン移転に反対する者がまだ残っておりずっとバチカンの前で頑張っているのである。
『教皇様行かないで』
『連合になんか行かないでここにいて』
『私達と一緒に』
ラテン語で書かれた看板を掲げている。様々な抗議のパフォーマンスが行われながらそこに居座っていた。
これは連合でも放送された。だが話は粛々と進んでいたのであった。
「今更やっても無駄だろうに」
ハンニバルはその映像を自身の部屋で見ていた。そしてこう言った。
「そうは思わないか？」
そのうえで自身のスタッフ達に問うた。
「無意味だと」
「それでもせずにはいられないかと」
その中の若い男が述べた。
「しなければ気持ちが落ち着かない」
「ふむ」
「それにこれは戦争が終わりバチカン移転が決まってからですし」
「おそらく正式に移転されるまで続くでしょう」
「だろうな」
ハンニバルはスタッフ達の言葉を聞いたうえで言った。
「それだけのものがある」
「はい」
「信仰の問題ですし」
「信仰というものは恐いな。だが」

「何でしょうか」
「かっては悪の限りを尽くしたローマ＝カトリック教会だがえらく人望があるのだな」
「ですからそれが信仰なのですよ」
若い男がまた述べた。
「悪は目に入らないのですよ。それだけではありませんが」
「それだけではないか」
「そうです。やはり素晴らしい人間も大勢いましたから」
「確かにな。腐敗だけではなかった」
「バチカンが何故今もあるのか。秘密はそこにあります」
彼は言う。
「確かに腐敗していましたがゆっくりと、しかし確実に自浄していく」
「うん」
「過ちは認めないという場所でしたが。長い間」
バチカンに誤謬はない、バチカンは決して過ちを犯さないというのが長い間のバチカンの考えであった。これが実に長かった。こうした考えでバチカンは動いてきたのである。問題が無い筈がなくそれもまた腐敗の大きな原因であったのだ。だがバチカンはそれだけではない。
「しかしその過ちは何時の間にかなおしている」
「そうみたいだな」
「腐敗も消えている。そうした組織なのです」
「だから今まで生き残っていると」
「私はそうだと思います」
「強かだな」
ハンニバルは考える顔になっていた。
「そこまでできるとな」
「それが連合に来るのです」
「連合には三百の国がある」

まずはそれを言った。
「その中には強かな国なぞ幾らでもある。いや」
言葉を訂正した。
「どの国もかなりなものだな、そこは」
「そうですね。それはよくわかります」
スタッフは皆頷いていた。
「私の国もそうだしな。フェニキアもまた」
「ははは、何千年も前からそれで定評がありますね」
スタッフの中で最も高齢と思われる男が笑って言った。
「嘘つきフェニキア人だと」
「カルタゴ人の商才をやっかんでの言葉だったか」
「当のカルタゴでは妙な曲解をして誇りにしているようですが」
「困った連中だ。兄弟国ながら」
カルタゴのルーツはフェニキア人の殖民都市である。だから彼等フェニキア人とは兄弟国として考えられているのである。実際はそもそも今のフェニキア人達が本当に古代フェニキア人の末裔かどうかは疑わしく、カルタゴ人にしろそうなのであるが。そもそもカルタゴがローマによって滅ぼされ、その時に生き残ったカルタゴ人達は奴隷にされたのは歴史に残っている。それで歴史から消えているのにどうして今いるのかという謎もある。だからそのルーツはかなり胡散臭いものなのである。それを言うと他の古代民族の末裔だという国家も同じであるが。
「しかしだ」
ハンニバルはここでまた言う。
「我々でもバチカンよりはましだぞ」
「ましですか」
「遥かにな。そう思うが」
「まあ確かに」
その言葉に頷く。
「歴史を見るとあれは」

「あまりにも酷いとしか言いようがないのは事実ですね」
「日本の特撮の悪役より酷いのではないのか」
「というと仮面ライダーでしょうか」
「いや、あのシリーズの悪役はそれ程ではないのではないのか」
年配の男が述べた。

## 第二十一部第五章　舞台の終わりその八

「むしろウルトラマンのシリーズの方が」
「確かに」
若い男もそれには頷くものがあった。
「あのシリーズの悪役はあまりにも」
「異星人ではかなり悪質なものがいたな」
ハンニバルも話に入ってきた。
「それも二十世紀のシリーズにな」
「最初のあれですよね」
「あれは酷かった」
どうやらハンニバルは特撮ものが好きらしい。結構詳しいようだ。
「何をどうしたらあそこまでなるのか」
「モデルがいるらしいですね、それぞれ」
「そうなのか」
「あの光の巨人になってからのシリーズ四作目の前半の悪役ですが」
「確かヤプールとかいったな」
悪名高き悪役である。極めて卑劣で陰険なことで知られている。
「はい、それです。あれのモデルはナチスやソ連のようです」
「あの頃だったか、ソ連があったのは」
「ナチスもまた二十世紀です」
「だからだな。あそこまで悪質だったのは」
「はい」
「後ウルトラマンのメフィラス星人のモデルはイギリスだったそうです」
「それはよくわかる」
ハンニバルはそれに頷いた。
「如何にもという感じだからな」
「そうですね。一軒紳士的ですが狡猾で卑劣です」

「実にあの国らしい」
そもそも連合はエウロパ自体をそう見ているのであるが。
「全く。昔から変わっていません」
「バチカンは変わったでしょうか」
「内部で恐ろしいまでの権力闘争は聞くな」
これは変わってはいない。
「あれは変わらないか」
「手出しをしたならば」
「火傷では済まないだろうな」
「騒動の種でもありますが」
「だがエウロパに置いておくよりはずっといい」
ハンニバルは述べた。
「このまま放置しておいてはまた利用される」
「ですね」
「それは間違いないです」
「エウロパのことです。何をしてくるかわかったものではありません」
スタッフ達は口々に述べる。彼等はエウロパを警戒していた。
「ここはそれを防ぐ為にも」
「そういう話ではじまったものですから」
「そういうことだ」
ハンニバルは彼等の言葉を纏めた。
「それに権威も奪えるしな」
「バチカンという権威を」
「これで長い間欧州を欧州たらしめていた権威が我々のものとなる」
バチカンはそれだけのものがある。キリスト教は欧州の心だった。その心の最大の拠点であったからだ。その権威を奪うということはやはり非常に大きい。
「違うか」
「確かに」

「それもあります」
「そうしたことも考えるとやはり今回のことは大きいな」
「ええ」
「エウロパがなくしたものは非常に大きいです」
「これで当分立ち直れなくなる」
ハンニバルの声が鋭くなった。
「いや、かなりの間か」
「かなりですか」
「それか変質するかもな」
「何か悪影響を与えるのですね」
「そうなればいいのだ」
今度は冷淡な声になった。
「何しろエウロパは敵なのだからな」
「ううむ」
「ではそれ以外の何だというのだ？」
唸った中年のスタッフに逆に問うた。
「それそのものではないか。千年の間」
「言われてみれば」
「敵の不幸は我々にとっては幸福だ。それが政治だ」
「それがですか」
「幸福を掴み取る為に敵を不幸にするものだ。政治家はその幸福を市民に提供しなければならない。それが仕事なのだ」
極論すればそうであった。
「若しくは幸福を作り出すか実現する」
「それが出来ない政治家は失脚する。実に簡単だな」
「全くです」
「それを考えると政治家の仕事というのは単純なのですね」
「単純だな、本当に」
ハンニバルもその言葉には納得した。
「それしかないのだからな、原理は」

「ええ」
「しかし実際にやるのは難しい」
だがここでこう言った。
「何かとな」
「今回は何処に置くかで内務省と開拓省の間で議論がありましたし」
「大国がまた動いていたしな。これはいつものことだが」
「前から思っていたことなのですが」
「何だ？」
若いスタッフに顔を向けた。
「連合は一つの世界ではないのですね」
「何を今更」
ハンニバルはその言葉に悪戯っぽく笑った。
「政治の世界でも。中央政府と各国の政府があります」
「それだけではないな」
「はい」
そこにもまだあるのだ。

## 第二十一部第五章　舞台の終わりその九

「各国の地方政府もあるな。それ等が複雑に絡み合っている」
「ですね」
「エウロパは中央政府の力が強いがな。まあ我々も中央の力はかなり強くなったが」
「それでも三百国もありますし」
「それぞれの国家の権限が強いのは変わりがない」
「そうですね。それが連合の最大の特徴です」
「うむ。それが連合だ」
　ハンニバルは頷いてみせた。
「我々は国家連合なのだからな」
「中央集権ではなく地方分権ですか」
「その二つも常に綱引きをしている」
「どちらが優勢になるか」
「今は中央集権の時代だ」
　彼は言う。連合の千年の歴史は中央に権限を集めようとする中央政府と各国の権限を維持しようとする各国政府の間のパワーバランスでもあるのだ。この二つの軸により連合は少しずつ形を変えて一千年の間生きてきている。時として中央政府が強くなりまた時として各国政府の権限が強くなる。こうしてやってきたのである。
「改革派はそれを望んでいる」
「やり過ぎと思いますが」
「そうだな」
　それはハンニバルの考えであった。
「中央軍もどうかと思ったしな」
「あれは成功しているでしょうか」
「成功していると言っていい」
　そう評価を下した。

「僅かな期間であそこまでの組織を作り上げ戦いにも勝ったのだからな」
「それを考えると凄いことですか」
「あの長官の力によるものだがな」
「八条長官ですね」
「何度も話しているが出来物だ。切れる」
「ええ、それは確かに」
スタッフ達もそれに頷く。
「彼は間違いなく切れ者です」
「彼を国防長官にしたのはかなり大きいです」
「それが今の中央集権の象徴だ」
「中央軍は」
「私はかっては中央軍はどうかと思った」
ハンニバルの目の色が少し複雑になった。
「各国の軍で今まで通りいけばいいと思っていた」
「はい」
「しかし実際に設立されてみるとな」
「よい組織です」
「少し頼りなくも見えるが」
顔が苦笑いになった。
「訓練も何処かのどかだしな」
「それは仕方ありません」
年配のスタッフが言う。
「彼等は連合の人間なのですから」
「平和に慣れておりますしやはり訓練をハードにすれば」
「それだけで人がいなくなってしまいかねないか」
「そうです」
「他に仕事もありますし」
「難儀なものだな、軍の維持というのは」
溜息混じりに言う。

「規律だけは厳しいのですが」
「軍が悪事をしては洒落にならないからな」
これは歴史が証明している。将兵の略奪暴行の惨劇は過去幾多存在した。かっての軍は傭兵だったり犯罪者を兵士にしたりしていた。これで軍規がよくなる筈もない。今でもサハラではこうした例が存在した。それによる惨劇もやはりあったのだ。
だが連合軍は完全志願制であった。だからまずは軍規の維持は徹底させている。訓練よりもまずは規律を重視した軍なのである。
「それを徹底させてくれているのはいいことだ」
「訓練は二の次でしょうか」
「まずは品行方正な軍を念頭に置き次にシステム」
「精兵はそれからですか」
そこが問われた。
「あの長官の考えはおおよそこうみたいだな」
「そうでしょうね、私は軍事には詳しくはないですが」
「それに損害を出さないことを心掛けているのがわかります」
「志願制だからな」
ここでも志願制の軍隊であるということが浮き出ていた。
「戦死者が多ければ志願者が減る」
軍にとっては致命的である。また政治家にとっても自分が主導する戦争で戦死者が多いというのは自身の政治生命に直結する。これで失脚した政治家も枚挙に暇がない。
「私だってそれは勘弁願いたい」
「後味が悪いですし」
連合は決して好戦的ではない。実利主義ではあっても。
「それもあるな。やはり人が死ぬのはな」
これはハンニバルも同じであった。納得したように頷く。

## 第二十一部第五章　舞台の終わりその十

「こうしたことも考えていくと妥当か」
「連合軍のあの考えは」
「最低限の盾も止むを得まい」
「ええ」
　義勇軍のことである。彼等が正規軍の盾であることはやはり当然のことであった。これはこれで複雑な話だがこの義勇軍もまた志願制であるのでこれも本人の意志である。難民達の部隊ではあっても。
「彼等の存在はな」
「エウロパとの戦争ではかなりの貢献を見せてくれました」
「戦死者の殆どが彼等だったそうだな」
「はい」
「素直に喜べないものもあるが」
「ですが先生」
　若いスタッフが言った。
「こう言っては何ですがやはり彼等は」
「わかっている。連合の者ではない」
「市民権は持っていますがやはり」
「連合の者ではにというのはな。やはり大きいな」
「そういうことです。彼等は異邦人なのです」
「異邦人か」
　ハンニバルはそれを聞いて考える目になった。
「バチカンもそうなのだがな」
「ですがバチカンは」
「正規の手続きで正式に参加する。しかし難民達は」
　さらに述べられる。
「あくまで居候です。既に彼等のうちの結構な数がサハラへの帰還を望んでいますし」

「帰りたいのなら帰ればいい。だが」
「何でしょうか」
「帰りたくはない者もいるな」
「連合に留まりたいと」
「そうした人々は連合に受け入れられなくてはな。そうは思うが」
これは純粋に彼の倫理観から来る言葉であった。彼としても何も良心がないわけではない。良心がない人間というのは悪心がない人間と同じ様に非現実的な存在である。
「市民権はもうあるのだしな」
「それはそうですが」
「まあそちらの話もこれからだな」
「はあ」
「正式な国家を作り上げるのもまたよしだ」
「新国家ですか」
「そうだ」
ハンニバルは言った。
「その場合はまた議論になるが」
「今度もまた揉めるでしょうか」
「まあ揉めるだろうな」
ハンニバルの予想ではこうであった。
「揉めない筈がない」
「そうなりますか」
「だが何も頭を抱えるものでもない。今回の様にな」
「それは何故」
「利権が存在しないからだ」
「利権が！？」
「成程、確かに」
若いスタッフはそれに声をあげたが年配のスタッフは納得したかの様に頷いた。彼はそれだけで全てを察したのである。これが年季というものであろうか。

「彼等は難民に過ぎませんからな」
「何も持ってはいない」
「何もですか」
「そうだ。だから義勇軍にも入るしかなかった」
ハンニバルは若いスタッフにこう述べた。

## 第二十一部第五章　舞台の終わりその十一

「違うか？何もないから何かを得る為にだ」
「戦場に」
「まだそうしたことはわからないか」
「何かを得るのなら開拓地へ向かえばいいのでは」
実に連合的な考えであった。戦争ではなく開拓と開発に明け暮れてきた連合らしい言葉である。
「そうすれば好きなだけ欲しいものが得られます。努力次第で」
それと運も必要であるが。
しかしこれはハンニバルによって否定された。
「それは我々の考えだ」
「我々の！？」
「そうだ、彼等は何処から来た」
「サハラですが」
その問いに答える。
「そうだ、サハラだな」
「ええ」
「サハラでは何かを得るのは銃によってだ。千年の間戦乱に明け暮れた場所だぞ」
「だから彼等は義勇軍に入ったのですか」
「そうだ、十億のうちの一億がな」
かなりの数である。難民だからこそ可能であったと言ってもいい。戦える者は全て参加したのだ。その何かを得る為にだ。そしてかなりの数が死んだ。これが現実である。
「これでわかったか」
「信じられません」
「我々とは世界が違うからな」
「サハラはですか」

「同じと思うと間違いのもとだぞ」
ハンニバルの口調は教え聞かすものになっていた。
「それは覚えておくのだ」
「はあ」
「まあまだわからないのも意味はない。連合と違う世界があるのもな」
「マウリアならわかりますが」
「あそこは私もわからない」
身も蓋もない言葉であった。
「だが違う存在で違う考えを持っている。それは頭には入れているつもりだ」
「左様ですか」
「そうでなくては政治家は務まらない」
「それでは先生」
彼はここでふと気付いた。
「何だ」
「バチカンもまたそうですね。彼等も異邦人であり」
「うむ」
「異なる存在です。これからどうなるでしょうか」
「連合にもカトリックは多いのは事実だ」
ハンニバルはまずはこれを述べた。
「だからある程度は同じ存在もいる。しかし」
「しかし？」
「やはり異邦人だな」
「そうですか」
「彼等もそのことで苦労するかもな。だが難民達よりはずっとましだな」
「何かを持っているからですか」
「そうだ、それに国家も持つ」
その為に今まで話をしているのである。

「独自の世界を持てるからな」
「それでは彼等に関しては問題はありませんか」
「そうした意味ではな」
「わかりました」
「さて、彼等が連合に来てからまた話になるぞ」
「本格的にですか」
「そうだ、何かとな。それでだ」
彼は言う。
「中央議会としても忙しくなる。君達にも頑張ってもらう」
「はい」
「お任せ下さい」
スタッフ達は笑顔でその言葉に頷いた。
「頼むぞ。これで成功したらまた名前があがるしな」
政治家にとって知名度と名声は死活問題である。それがないと政治家として終わりだ。だから漫画や雑誌で書かれるべきなのである。
「そうなれば選挙への費用もな。負担が減るな」
「まあそれは仕方ないですね」
中年のスタッフが述べた。
「政治にはお金がかかりますから」
「そうだな。わかっているが」
「まだ先生はましな方ですぞ」
「それは自覚している」
ハンニバルはその言葉に頷いた。
「何だかんだでな。講演に執筆に」
これもまた資金調達である。他にはパーティーや事業、阻止適齢ではない金もやはりある。とにかく政治には金がかかりそれの調達もまた政治家の能力の一つである。民主政治というのは金がかかるものなのだ。これは揺るぎようのない事実であった。

## 第二十一部第五章　舞台の終わりその十二

ハンニバルはそちらは得意である。あれこれと豊富な資金を調達し、それで保守派でも頭角を現わした。彼自身も資金は豊富である。だが生活はそれ程裕福でないのはそこまで金を回せないからだ。政治家の金は殆どが政治に消える。因果なものなのである。

「それでも苦労しているがな」

「エウロパの貴族の様にはいきませんか」

「連合の汚職も貴族制度なら減るかもな。だが」

ハンニバルは言う。

「貴族ばかりが上にいる社会なぞ連合には合わない」

「全くです」

スタッフ達は一様に頷いた。

「ああした社会はどうも」

「やはり我々は大衆社会ですから」

「そうだな、階級などというものは連合ではあってはならない」

「はい」

「人間の社会であり実際にはあったとしてもな。それを制度化するとしないのとでは」

「全く違いますな」

そういうことになるのだった。連合では。

「そういうことだ。それを考えるとバチカンへの対処も文明を巡るものになるかもな」

「文明を」

「エウロパから来るのだからな。可能性はある」

「ですか」

「しかしだ」

ここでまた言った。

「王はまた別だからな。皇帝も」

「教皇は皇帝と呼んで差し支えないですな」
「それどころかかっては皇帝より上にあったな」
「教皇は太陽、皇帝は月」
「それだけの存在だということだ」
インノケンティウス三世の言葉である。
「皇帝や王の仕事は政事ではない」
「では一体」
「祭事だ」
「祭事、ですか」
「教皇もまた同じだな。バチカンの仕事とは要するに祭事だが」
「その頂点にあるからこそ」
政事と祭事が分離されて久しい。だが祭事を司る存在もまた必要ということなのである。
王の存在とは権威や象徴だけではない。祭事もまたそのうちの一つなのである。だからこそそこに謎もまた生じる。日本の皇室が竹のカーテンに覆われているとか連合で最も謎の多い存在だとも言われているのはこれがあるのである。その謎は何千年にも渡って秘められ多くの者はその片鱗すら知らない。
「教皇は尊いのだ」
「左様ですか」
「そういうことだ。その座す位置もな」
「それがいよいよ議決にかけられると」
「既に話は決まっている」
ハンニバルの声はクールであった。
「東北の辺境でな」
「星系は」
「ヨハネ星系という場所だ」
「ヨハネですか」
「知っているか？」
「はい、名前だけは」

中年のスタッフがそれに答えた。
「確かかなり豊かな星系です。資源も豊富で土地も肥え、緑も豊かです」
「中央政府も気を使ったということか」
「バチカンに資源が必要かどうかとも思いますが」
「まあそれは配慮というものだろう」
ハンニバルはそれに答えた。
「仮にも教皇だ」
「はい」
「無下には出来ない。だからな」
「豊かな星系を選んだと」
「そういうことだろう。だがそれでいい」
いいとあえて言ってみせた。
「宜しいのですか」
「私でも同じだからだ。教皇に失礼があってはならない」
「それは礼儀からですか？」
「いや、それだけではない」
そこに付け加えた。
「連合としての鼎の軽重を問われるからな。国家とはその行動一つ一つが鼎の軽重を問われるものだ」
「そうですね」
「それはあります」
スタッフ達もその言葉に頷いた。
「それでいい。バチカンにはいい場所を」
「わかりました」
「それに星系も一個だろうしな」
「一個なのですか」
「多くは要らない筈だ」
ハンニバルは言う。

## 第二十一部第五章　舞台の終わりその十三

「まさか教皇領を復活させるわけでもあるまい。星系一個で充分の筈だ」
「言われてみれば」
「それ程多くの場所が必要ではありませんな」
「ローマ＝カトリックの総本山であればいいだけだからな」
それを考えると星系一個でも広過ぎるのではないのかとすら思えるものがある。だがエウロパでも星系一個を有していた為ここはそれにも倣ったのである。
「それでいい」
「宮殿は」
「議決と同時に仮の宮殿を建造する。中央政府の負担でな」
「そして信者の寄付で本格的な宮殿を建設するのですか」
「そういうことになる。大規模な宮殿になるぞ」
「あちらの宮殿はどうなりますか」
「あちらとは？」
「エウロパの方です」
若いスタッフがそう問うてきた。
「宮殿が残る形になりますが」
「壊しもせずそのまま置いておくことになるだろう」
「そうなのですか」
「別に壊す必要もないしな。むしろ置いておいた方がいい」
「それは何故」
「そのまま使うからだ。あそこにエウロパに送る人間が入るだろう」
「ああ、成程」
言われてようやく気付く。
「そういうことですか」
「気付かなかったのか？」

ハンニバルは彼の反応を見ていぶかしがる目を向けた。
「わかっていると思っていたのだが」
「すいません、エウロパにとってはもう忌まわしい記憶だと思いましたので」
「エウロパが破壊するのは他の宗教のものだ」
ここには侮蔑があった。自分達は違うとも言葉に含ませているのである。
「ローマにしろ自分達にあるから壊しはしない」
「左様ですか」
「そうだ。あそこは枢機卿か誰かの宮殿になる」
「ではそこに負けないものがヨハネに築かれますな」
「さて、どれだけのものになるかな」
面白いものを期待する笑みになった。
「ヨハネに出来上がるローマ＝カトリック教会は」
「楽しみですか」
「それもまたな」
少し面白そうな笑みになった。ハンニバルは案外表情豊かなことで知られている。笑顔に愛嬌があるとも言われている。決して堅物というわけではないのだ。
「白亜の大宮殿しょうか」
「バチカンの傾向からしてそうか」
「壮大な宮殿になるでしょうか」
「バチカンらしい」
「しかし」
年配のスタッフがふと言葉を出した。
「どうした？」
「バチカンの宮殿は恐ろしいまでに壮麗ですが連合の二人の皇帝のそれはそうでもありませんな」
「エチオピア皇室然り」
「日本の皇室も」

「言われてみればそうだな」
ハンニバルもそれが言及されてやっと気付いた。
「とりわけ日本の皇室のものは」
「あれはな」
ハンニバルはその言葉に頷く。
「あまりにも質素だな」
「三千年以上の歴史を誇る古い家のものとは思えません」
「そして連合の四大国の元首のものとしても」
「恐ろしいまでに質素ですな」
スタッフ達がそれぞれの口で述べる。
「あれが日本の皇室の伝統なのでしょうか」
「あの家は少し特別なのだろう」
ハンニバルは考える目をして答えた。
「特別ですか」
「それこそが伝統だ」
若いスタッフの言葉に応える形となった。
「伝統、ですか」
「そうだ。それがあるからな。日本の皇室の伝統は質素らしい」
「はあ」
「明治帝と昭和帝だったか」
歴史の知識を手繰りながら言う。
「今の日本の皇室の基礎を築き上げたとされているのは」
「そうされていますな。それでも千年以上も前の皇帝、いえ天皇ですが」
「そんなに昔だったのか」
「宇宙に出る前の話です」
「それで影響が残るというのか」
「それだけのものがあるということなのでしょう」
年配のスタッフが語る。
「あの皇室は質素であれ」

彼はまた語った。
「そうした伝統を築き上げる一因になったのは間違いないです」
「成程な」
「バチカンは違うのでしょうか」
「今のバチカンは質素らしいがな」
ハンニバルは若いスタッフの言葉に返した。

## 第二十一部第五章　舞台の終わりその十四

「一応は」
「一応、ですか」
「それでも日本の皇室よりは贅沢だろうな」
「やはり」
「かっては信じられない有様だったが」
「中世ですか」
「そうだ。あの時は酷かった」
贅沢三昧という言葉では済まない状況であったのだ。腐敗と荒淫に満ちた背徳の場所となっていたのである。あのチェーザレ＝ボルジアを生んだボルジア家やメディチ家の教皇が出ているということからもその腐敗の程がわかる。教皇という名の第一級の政治家であり、贅沢を楽しんでいた。そういう時代だったのである。
「今はあの時とは違う」
「程度の問題ではないですよね」
「大丈夫だ、あの時とは比べ物にはならない」
「それを聞いて安心しました」
「まあ神父もこっそりと妻子を持ったりはしているがな」
「そればかりはどうしようもないですか」
「カトリックは男色も建前は禁じているしな」
連合では有名無実となっている。もう同性愛にはキリスト教も言及しなくなって久しい。禁じているのはイスラエル位である。なおサハラでは同性愛は法度となっていることが多い。
「神に仕えていても恋はする」
「好意的な言葉に見受けられますが」
「その程度は大目に見ねば」
「はあ」
「流石に妻を二人も三人も持つ神父だと困るがな」

そこまでいくともう無茶苦茶である。かってのバチカンには愛人を山の様に持っている教皇もいるにはいたが。当然子供がいる教皇もいた。
「まあそれは例外だ」
「はい」
「今の教皇は至って清潔な人物らしいがな」
「何か意外ですね」
若いスタッフはそれを聞いて述べた。
「意外か？」
「そうした聖人君子の教皇が本当に出るとは」
「出ないわけではない」
ハンニバルは彼に言う。
「そうした教皇も実際には多い」
「そうなのですか」
「バチカンは腐敗だけではないのだからな」
「そういうイメージが強いので」
「バチカンの顔の一つに過ぎないのだ、腐敗も」
「腐敗もまた」
「バチカンに誤謬はない」
言わずと知れた言葉である。
「バチカンの為すことは全て正しい」
「かっては自らそう述べておりましたな」
「だがバチカンとて過ちは犯す」
「ええ」
「過ちどころでは済まない事柄も多くありましたが」
腐敗に弾圧、虐殺。バチカンが行ってきた悪はあまりにも多い。世界で最も悪徳の歴史を持っている場所の一つであるとも言われている。
「だがそれは何時の間にかなおっているのだ」
「過ちを認めずに」

「バチカンには自浄能力もある」
なければとうの昔に滅んでいる。
「それを担っているのがそうした清廉潔白な者達なのだ」
「今もですか」
「そうだ。バチカンは確かに神の代理人でもあるのだ」
「ややこしいですね」
「そうか？人間と同じだ」
「人間と」
若いスタッフにはまだ今一つピンとこない言葉であった。
「そうだ、人間も様々な顔を持っている」
「はあ」
「よい一面もあれば悪い一面もな。バチカンも然り」
「では」
「バチカンは善でもあり悪でもあるのだ」
「そして薬でもあり毒でもある」
「その通りだ」
中年のスタッフの言葉に楽しそうに微笑む。
「ではわかるな」
「はい」
「その薬にも毒にもなる存在を連合に迎え入れる」
「どちらにしろ連合にとっては大きい」
そこまで言うと立ち上がった。
「既に賽は投げられたのだ」
「どうなるかは」
「これからだ。明日だ」
「明日」
「議決はな。わかったな」
「それでは」
「今日はもう休むとしよう」
ハンニバルはスタッフ達に対して言った。

「ゆっくりとな。後はプライベートだ」
「わかりました」
「解散だ。ではまた明日だ」
こう言って三人を下がらせた。ハンニバルも部屋を後にしてそのまま自分の家族のところへと向かった。三人の可愛らしい娘が彼を出迎えてくれた。まだ少女の美しさをそのままにしている妻と共に彼の宝物である。彼もまた幸せな家庭を持っているのである。

## 第二十一部第五章　舞台の終わりその十五

議決自体は速やかに終わった。圧倒的な賛成によりバチカンの東北辺境への移転が決定されたのである。
「バチカンのフランチャイズはド田舎かよ」
ネットでこうも書き込まれた。
「またえらいところだな」
「中央政府としてはあそこの開発のテコ入れにするんだろ」
それは図星であった。
「そんなに上手くいくかね」
「さてな」
それには懐疑的な言葉も書き込まれる。
「どっちにしろ少しは人も増えるだろ、あそこも」
「少しはかね」
「まあそれはこれからだな」
「どうなっていくかはな」
ネットでは成功するとも失敗するとも色々言われていた。それは八条も見ていた。
彼にとっては移転は一つの問題を伴うものであった。連合全体の軍管区を見ていた。
「そういえば東北辺境の防衛や警備は弱いな」
「ですね」
それにシャリアピンが応える。
「ではすぐに手を」
「はい、そうしましょう」
彼に言葉を返す。
「防衛計画は当の軍管区に任せますか」
「中央でしないのですか」
「この場合はそれでいきたいと思っています」

八条は述べた。
「今のところあの辺りには海賊もテロリストもいないも同然ですし」
人口が少ないせいである。やはり人の集まるところにそうした輩も出るものなのだ。
「まあこちらでもある程度はしますか」
「ですがメインは軍管区でですか」
「そう考えています」
「上手くいくでしょうか」
シャリアピンは少し不安そうな顔を見せた。
「まあ大丈夫でしょう。現場の方がよりものを知っていますし」
「ですか」
「問題はこれからなのですよ」
「これから」
「人が増えてからですね」
「その為の事前の策として」
「それもあります」
八条は応えた。
「まあ今のところは事前整備ですね」
「左様ですか」
「バチカンが置かれてから本格的に話をしていく予定です」
「ところで警備と言えば」
「はい」
ここで話は独自のものとなった。
「バチカン自身の警備ですが」
「ああ、彼等ですね」
「そうです、スイス傭兵はどうしましょうか」
「別に構わないと思いますよ」
八条はそれを拒みはしなかった。
「詳しい話は大統領と調整ですが問題はないかと」
「左様ですか」

「持っているのはハルバートですよね」
「そうです、それです」
かって欧州で使われた長柄の武器である。突くことも斬ることもできるかなり便利な武器である。中国で言う矛と同じ役割をするものである。
「多分に儀礼的な武器となっていますが」
「今ではね」
「はい」
宇宙で戦う時代でハルバートも何もない。格闘戦用に長柄の武器が実際にあってもだ。
「そういうものなら」
「それでは」
「私はいいと思います。バチカンの武器は武力ではありませんしね」
こう述べる。
「信仰ですか」
「それを考えるとかなりの力があります」
「ですが危害を加えようとする輩は」
「いるでしょうね、おそらくは」
「残念なことに」
世の中いい意味でも悪い意味でも様々な人間が存在している。そうした意味でテロリストという存在はなくなりはしないのである。困ったことであるが。
「それへの備えはしておかないと」
「それも確実に」
「それをしておいて」
「教皇を迎えると」
「打てる手は全て打っておきましょう」
八条は述べた。
「万全にしてからです」
「では軍管区に通達を」

「はい。さて、そろそろですよね」
八条は話が終わったところで言った。
「議会での議決は」
「今日でしたか」
「はい、今日です」
そして答える。
「もう議決がはじまっているでしょうか」
「テレビをつけられますか？」
「はい、では」
手元にあったリモコンを手に取る。そしてテレビのスイッチを入れた。
すぐに画面に中央議会の映像が現われる。もう既に議決が行われたようである。
「賛成多数により」
下院議長が語っていた。今は下院での議決であったのだ。
「可決されました」
「これで決まりですね」
「はい、下院は」
八条とシャリアピンは向かい合って話をしていた。
「決まりました。そして」
「次は上院、最後に各国首脳」
連合は実質的に三院制である。だからそうした流れになるのである。
「ですがほぼ決まりですね」
「はい、バチカンが来ます」
八条の目が真剣なものになっていた。
「エウロパ最大の権利が」
暫く後で上院、そして各国首脳の間で審議され議決した。バチカンが連合の東北辺境に来ることが正式に決定したのであった。

## 第二十一部第五章　舞台の終わりその十六

これは当然エウロパにも伝えられていた、マウリアの外交官がラフネールに伝えていた。
「左様ですか」
「はい、あちらの中央議会で正式に決定されました」
話は総統の私邸で行われていた。客という形で迎えて話を聞いているのである。
「これでバチカンはどちらから離れます」
「わかりました」
ラフネールはそれを聞きまずは大きく息を吐き出した。それから述べた。
「遂にですな」
「そうです、遂に」
「バチカンがエウロパを去る」
「残念なことですか」
「かってバチカンはローマを離れました」
「はい」
宇宙の時代になり移動したのである。これは時代の流れを受けてであった。
「その時も大きな問題になりましたが。今はそれよりも遥かに」
「エウロパを離れるから」
「その通りです」
ラフネールは答える。
「キリストは我々にとっては心なのですから」
「その心を奪われると」
「そういうことになりますな」
ふう、とまた息を吐き出した。
「ですがもう覚悟はできておりますので」

「左様ですか」
「はい、慌ててはおりません」
「それを聞いて安心しました」
マウリアの外交官は表情を変えることなくそう述べた。
「政治はやはり」
「正常心ですからな」
「そういうことです。それで連合としては」
「はい」
「もう準備ができているそうです」
「バチカンの受け入れのですか」
やはり話はそれであった。
「すぐにでもといった感じです」
「早いですな」
「このことはおそらくバチカンにも届いていると思います」
「そうですか」
「どうされますか？」
「我々としては一度決められたことを破るつもりはありません」
これは倫理観から来るものではなかった。決められた話に従わないというのはそれだけで信頼関係を大きく損なうものである。これは外交でも同じでありラフネールがそれを知っているからに他ならないのである。
「ですから拒みはしません」
「それでは」
「はい、バチカンが望む時に出発してもらいます」
彼は述べた。
「それだけです」
「わかりました。それでは」
「ええ」
「バチカンがなくなると」
「もう決まったことですから」

残念さがにじみ出ていた。
「今はですな」
「今はとは？」
「このことが何に例えられているか御存知だと思いますが」
この外交官はそう話をしてきた。
「何と」
「教皇のバビロン捕囚ですか」
ラフネールもそれは知っていた。
「かってフランス王がアヴィニョンに移した」
「はい、それです。そして」
彼はさらに言う。
「後で何が起こったのかは」
「教会の分裂ですな」
フランス王が支持、いや傀儡としているアヴィニョンの教皇に対してイングランドと神聖ローマ帝国が立てたローマの教皇が並立したのである。後に統一されることになるがこのことが教会の権威の失墜と腐敗をさらに助長させてしまうことになるのである。
なおここで面白いのはフランスと対立したのがイングランドと神聖ローマ帝国ということである。この二国はこの頃からフランスと対立していたのである。
「教皇が二人ですか」
「確かにバチカンは移転しました」
「はい」
「ですが教皇は一人だと書かれてはおりませんな、確か」
「さて」
ラフネールはその言葉にまずは惚けてみせた。

## 第二十一部第五章　舞台の終わりその十七

「何のお話でしょうか」
「今すぐには無理でしょう」
彼はまた言う。
「ですがいずれは」
「どうですかな、それは」
あえて惚け続ける。
「私にはよくわかりませんし」
「おやおや」
マウリアの外交官はその言葉に微笑んでみせる。
「前例があるというのに」
「前例は前例ですな」
ラフネールは述べる。
「そうなるとは限りません」
「しかしそれを持ち出すことは可能ですね」
「忌まわしい前例であったならば？」
「正当化すればいいだけです」
そうして繕われることもまた非常に多い。世の中とはそういうものなのである。
「違いますか？」
「まるで悪魔の様な囁きですな」
「政治とは悪魔でさえ利用するものではないのですか？」
「初耳ですが」
二人は微笑みながら腹黒い話を続ける。
「悪魔を退けるものでは」
「それは宗教です。政治はまた別です」
「まあ悪魔と言いましてもそちらでは少し違うのですな」
「アスラやラークシャサのことですか？」

「はい」
アスラとは仏教で言う阿修羅、ラークシャサは羅刹である。アスラは別の系統の神でありラークシャサは魔物の類である。他には夜叉であるヤクシャや餓鬼であるピシャーチャ等が存在している。
「あれは他の神々や異民族でしたな」
「それが元です」
「我々の世界の悪魔は少し違いまして」
「キリスト教の悪魔はですね」
「ギリシアや北欧もまた違います」
「そうですね。かなり」
ギリシアでは怪物やガイアが生み出した巨人が多い。北欧神話では完全に巨人族が敵となっている。聖書でも巨人は出るがポジションが違っている。
「悪魔は倒すものなのです」
「ですが味方したならば？」
「それはもう悪魔ではありません」
ラフネールはまた笑った。
「悪魔は敵なのですから」
「敵は利用しないのですか？」
「利用できるものは駒ですから」
かなりの詭弁であったがあえて相手に腹の底を探らせない為であった。
「また違います」
「その駒はどうして使いますか？」
「楽しく」
悪魔的な笑みになった。
「相手に気付かれることなく」
「しかもすぐに打たない場合もありますね」
「駒を動かすのは機会を選ばなくてはなりませんから」
「それでは」

「はい」
目も笑ったがやはり悪魔的であった。
「後のことはわかりません」
「転んでも唯では起きず」
「エウロパは何度でも蘇りますぞ」
しれっとした顔になって述べた。
「御安心を」
「この程度の国難は何度もあったと？」
「意外と受難の多い歴史でしたから」
「左様ですか」
「何、心配は御無用です。我々は立っております」
笑顔での言葉だけに説得力があった。
「その言葉を聞いて安心しました。そうでなくては」
「しかし貴方達もどうして中々」
「何か？」
「連合との関係だけではないのですな」
「マウリアはマウリアです」
彼はそれに応えて言った。
「連合とは違いますので」
「そういうことですな」
「そういうことです。そして」
さらに言う。
「我々は一つの世界なのですから」
「マウリアという」
「他の何でもありません。違いますか？」
「いえ」
それは否定しなかった。
「我々もまたそうですから」
「我々は自分達の世界を維持したいだけなのですよ」
「その為に動いておられるのですか」

「そういうことです。それは貴方達と同じです」
「ふむ」
その言葉には頷いてみせた。
「そのうえで申し上げているのですよ」
「この世界を維持する為に」
「連合とは違うということは御存知下さい」
「わかりました。ではそのうえでこれからも」
「ええ」
「ところで」
話は変わった。

## 第二十一部第五章　舞台の終わりその十八

「何でしょうか」
「これからサハラはどうなると思われますか」
「サハラですか」
「そうです。今のところは均衡を保っていますな」
ハサンとオムダーマン、ティムールの間で。今のところサハラは平穏なのである。
「はい」
「それは続くと思われますか？」
「いえ、それはないかと」
彼はそれを否定した。
「近いうちに崩れます」
「崩れますか」
「既に三国は軍備を整えております」
「ほう」
知ってはいるがまたしても知らないふりをした。マウリアの情報収集能力を試しているのだ。無論相手もそれはもう読んで話をしている。
「衝突は近いでしょう」
「それによりどうなるかですな」
「天に二日なし」
彼は言った。
「それから言えば」
「残るは一国でしかならない」
「しかしです」
彼はここでふと言葉を変えた。
「マウリアは何度も集合離散を繰り返してきた世界です」
「ですな」

「こういった状況になったことも何度か。ですがその度に」
「分裂して元の木阿弥となってしまっていた」
それがサハラの歴史であった。
「そういうことです。ですから今回も」
「可能性はあると」
「否定は出来ないかと」
「成程。それに対する介入は？」
「我々は考えてはいません」
彼は述べた。マウリアは伝統的にサハラに対しては不干渉主義なのである。これは連合も同じだ。従って問題はエウロパであるが今のエウロパにそんな力がないのは誰もがわかっていた。
「そうですか」
「どうなるかはあくまで彼等次第です」
「成程、わかりました」
ラフネールはそれを聞いて頷いた。
「サハラも大きく動こうとしておりますな」
「はい、これからで彼等の運命は決します」
「統一か分裂か」
「全てはこれからです」
こう言ってみせる。
「わかりました。では我々は一刻も早く復興を果たします」
「期待しております」
「連合の同盟国とは思えないお言葉ですが」
「同盟国だからの言葉です」
またこういったことを述べた。
「同盟国だからとは？」
「連合は極めて雑多な勢力です」
「ええ」
これは一見してわかることであった。連合の中には様々なものが存在している。それが連合であるのだ。

「それが一つになる為には」
「敵が必要と」
「貴方達にもまた敵が必要でしょう」
「我々もまた」
「そうです。国を纏める為には」
「我々は統一された勢力としては一番小さなものです」
エウロパは一千億しかいない。対する連合は四兆だ。マウリアも二千億以上いる。この場合サハラは除外している。統一されてはいないからだ。
「ですが中では色々ありまして」
「はい」
「纏まる為に苦労はしています」
「だからこそですか」
「否定はしません」
彼は述べた。
「連合はよりそうだということも想像がつきます」
「秩序の為には対立も必要なのです」
「成程」
「ですが出来ることなら今回の様な戦争は」
「起こってしまったことは収めるしかありませんが」
「まあ確かに。止むを得ない場合もあります」
それが今回の戦争だった。一千年の対立が工作員問題で一気に危険水準に達したのである。
「ですが今後は」
「起こらないにこしたことはありませんか」
「マウリアとしてはそうです」
「わかりました。それで」
「何でしょうか」
彼に対して問うた。
「そちらはサハラ各国とはどうなのでしょうか」

「相変わらず不干渉主義です。貿易や経済交流だけです」
「左様ですか」
「はい、それだけです」
「ふむ」
今度は頷いてみせた。
「我々としては平和を望んでおりますし」
「そういうことですか」
「平和だからこそ利益をあげられるのです」
経済活動によりである。戦争になればその活動が著しく制限される。そうした事態はそもそもが利益を求める立場としては問題なのである。

## 第二十一部第五章　舞台の終わりその十九

「だからこそ」
「わかりました。ただ」
「何か？」
「私とその賛同者が政権にある間はもう戦争はないでしょう」
エウロパからは戦争をしないということである。
「ですが政権が変わるとわかりませんぞ」
「そういえば最近ギルフォード侯爵が出て来ておりますな」
「御存知でしたか」
「急激にその名を知られるようになっているとか」
「そうです。果たしてどうなるか」
「今のままですと戦争はまずいということをお忘れなく」
「はい、エウロパとしては」
あまりにも国力が疲弊したからだ。その疲弊はエウロパはじまって以来のものであり二十世紀での二度の世界大戦のそれに匹敵するとまで言われている。犠牲者の割合が少ないだけで。
「そういうことです。それでは」
「いや、待たれよ」
一礼して退出しようとする彼に声をかけた。
「まだ何かあるのですか」
「卿のお名前ですが」
「カリヤ＝プーラです」
彼は自分の名を答えた。
「カリヤ＝プーラですか」
「はい、改めて御存知を」
「わかりました。では」
「はい」
こうして彼はラフネールの下から去った。後にマウリア首相とな

り辣腕を振るう彼の若き日のエウロパ総統とのエピソードであった。
連合中央政府上院でも各国首脳の間でも議決が為された。こうして遂にバチカンは連合の東北辺境に移動することが正式に決定したのであった。
「教皇様、行かれないで！」
「ずっと私達と一緒に！」
バチカンには今日も多くの信者達が詰め掛けていた。そして教皇に嘆願していた。
だがそれは無駄なことであった。既に全ては決まってしまったのだ。それも国家と国家の取り決めである。今更破れる筈もなかった。
枢機卿達も浮かない顔をしていた。緋色の衣が色褪せて見える日々であった。
「幾ら悩んでいても」
「祈っても最早変わらないのか」
「神よ、これも試練なのでしょうか」
「何を言っているのですか？」
枢機卿達が沈んでいるとそこに教皇がやって来た。
「教皇様」
「これは試練ではありません」
彼は穏やかな声でそう述べた。
「といいますと」
「神は常に私達と共におられます」
「私達と」
「ですから。これは試練ではないのです」
本心を隠した言葉であった。彼としても辛いのだ。だが神の代理人として今はあえて強く振舞っていた。そういうことなのである。
「何処であろうと神はおられるのですから」
「それでは」
「はい、参りましょう」
そして言った。

「連合へ」
「教皇様・・・・・・」
「悲しむことはありません」
慈愛に満ちた顔で緋色の衣の者達を見やる。まるで宗教画の様な姿であった。
「さあ、そして」
「連合へ」
「参りましょう」
そう言って彼等を励ます。もう彼は悩んではいなかった。少なくとも表では。彼は嘆きから神の代理人に戻っていたのであった。その姿は神々しさすらあった。
バチカンの外には今も信者達がいる。そして教皇に訴えかけていた。中には心無い考えに至ろうとしている者もいた。
「こうなったら」
中年の男であった。彼は思い詰めた顔で呟いた。丁度夜になりテントの中で休んでいる時だった。多くの者が泊り込みで請願していたのである。
「迎えに来る連合の奴等を追い返すか殺して」
「そうだな」
「そうすれば教皇様だってこちらに留まって下さる」
同じく思い詰めた顔の者達がそれに賛同する。
「そして」
「ああ、教皇様は俺達とずっと一緒だ」
「それはなりません」
しかしそこに一人の神父がやって来た。そして彼等にこう述べた。
「神父様」
「どうしてこちらに」
「貴方達の健康が気懸かりで来たのですよ」
神父は優しい声でそう述べた。
「教皇様は貴方達のその想いを御存知です」

「そうなのですか」
「教皇様・・・・・・」
「ですがもう決まったことなのです。バチカンは約束を守らなくてはなりません」
「はい・・・・・・」
神の代理人としての務めであった。それ以上に教皇は彼個人の人間性として決められたことを破ることは出来なかった。

## 第二十一部第五章　舞台の終わりその二十

「ですから。そして」
「そして？」
「他の者を傷つけることは。教皇様が最も望まれないことです」
「はい・・・・・・」
「そうでした」
信者達は俯いてその言葉を聞いていた。
「おわかりですね」
「それではここは」
「はい、思い詰められないで下さい。教皇様は何時でも貴方達を見ておられますよ」
「そして神も主も」
「その通りです」
「わかりました」
中年の男もそれに頷いた。
「それではもう私達は」
「教皇様を笑顔でお送りします」
「有り難うございます」
神父もその言葉に目頭を熱くさせていた。
「では」
「はい」
「もうこれで」
彼等は身支度を整えはじめた。
「教皇様にお伝え下さい」
そして述べた。
「連合でもお元気でと」
「エウロパでもずっとお慕い申しておりますからと
「わかりました」

神父はその言葉に応えた。
「その言葉必ずや教皇様にお届け致します」
「神父様はどうされるんですか？」
信者の一人が彼に問うた。
「私はとは？」
「神父様も連合に行かれるんですか？どうなのでしょうか」
「私は残ります」
彼は答えた。
「皆さんと一緒です」
「では教皇様とお別れですね」
「いえ、教皇様はこう言っておられます」
「何と」
「神は常に私達と共にあると」
「教皇様・・・・・・」
「何と素晴らしい御心」
信者達はその言葉に打たれた。
「その様に思われていたとは」
「何処までも尊い方だ」
「ですから私は悲しんではおりません」
神父はまた言った。
「何処にあっても教皇様と共ですから」
「そうですね」
「では私達も」
「はい、今は静かにしましょう」
彼は述べた。
「教皇様の為に」
「わかりました」
「では私達は」
「ああ」
彼等は急に静かになっていった。

「これで」
「お騒がせしました」
彼等は去って行く。他の神父達もおり、彼等もまた信者達の説得にあたっていた。こうして彼等は帰っていった。騒ぎは何とか収まったのであった。
「そうですか。御苦労様です」
その話は教皇にも伝わっていた。彼はそれを聞くと静かに述べた。
「私なぞの為に」
「いえ、教皇様だからです」
神父達はそれに応えて言う。
「私だからとは」
「教皇様の様な方だからこそ私達も」
「お慕い申しているのです」
「かたじけないお言葉です」
あらためて心に滲みる。
「私はこれから連合に向かいます」
「はい」
「ですが心は皆さんといつも共にあります」
「わかっております」
「それでは」
「ええ。何時までも一緒です」
彼は述べた。
「ですから別れの言葉は言いません」
彼は述べた。
「また。御会いしましょう」
「それまでお元気で」
教皇がエウロパを後にしたのはそれから暫く後であった。銀河の歴史がまた一つ大きなページを刻み込んだ。これが連合とエウロパの戦いの最後の一幕であった。全ては終わったのであった。

第二十一部　完

2006・10・24

# 第九部設定資料集



ドン＝ファブリチーニ
　ニーベルング要塞防衛司令官。太い眉に彫の深い顔の男。

連合大国の人口
　中国の人口は一千五百億、アメリカは八百億、ロシアは六百億、日本が三百億。インドネシアやメキシコで四百億である。

ゴンガーザ少将
　ファブリチーニの腹心の部下。

フィリップ＝ド＝ジェラール
　フランスの子爵家の出身であり階級は元帥。ニーベルング要塞駐留艦隊司令官。ファブリチーニとは縁戚関係にある。士官学校でも同期。

ニーベルング要塞司令
　駐留艦隊司令よりも地位が高い。同じ元帥の階級であるが席次によりそう決められている。

メアリー＝ボニング
　連合軍の艦長。女性。ツバル出身で赤い髪に緑の瞳、浅黒い肌を持っている。

ガリバルディ
　ジェラールの乗艦。

グリルパルツァー
　ニーベルング艦隊司令官の一人。

マリオ＝ディ＝シリアーニ
　エウロパ軍中将。シリアーニの息子。

ハサン＝マシュハド
　サハラ義勇軍司令官。元帥。黒い肌の老人でありかつてはアッバース共和国の提督であった。白い髭を生やし左手は義手である。猛将。

マラケシ
　かつてサハラにあった国家。エウロパに滅ぼされた。

ジャービル＝ワフラ
　義勇軍中将で参謀。口髭の男。

エル＝ヴァン＝フランド
　ニーベルング副司令。上級大将。

ダミヤーノ
　ジェラールの乗艦ポンペイウスの艦長。大佐。

シマル＝ザーヒダン
　サハラ義勇軍のエース。黒い髪に切れ長の目。

クリス＝ローズマン
　エウロパ上級大将。地上部隊を率いている。

エル＝ド＝ベルジュラック
　エウロパの召集兵。父はノーベル賞受賞。後に歴史学者として大成。

マラケシ＝デ＝ファブリチーニ
　ファブリチーニの甥。

マジュワーン＝サチフ
　サハラ義勇軍陸戦部隊総監。大将。顔中髭だらけの巨漢。

ハルーン＝ジナール
　義勇軍将校。

エルネスト＝リスト
　エウロパの医師。

カール＝グラッセ＝フォン＝マグデブルグ
　エウロパ軍中佐。

ヤルカンド星系
　チベット領。災害があった。

マフメット＝アッサルーム
　サハラ義勇軍大将。鷹揚な人物。

山下実盛
　銀行員に似た生真面目そうな外見の男であり一見地味であるが実際はかなり性格が悪いことで各国では有名な男。日本国官房長官。

ムワミ＝サガモ

ザイール共和国国家主席。赤い髪の中肉中背の黒人。

ハシム＝ジャネンドラ
ネパール首相。

コリアノフ＝ジリノフ
チェチェン連邦執政。

ヨブ＝フェレス
イスラエル大統領。策士。

ナブッコ＝サドム
アッシリア連邦執政。

オルシャ星系
グリーニスキーが難民に提供しようとした星系。

エレナ＝オーウェル
銀色の髪に青灰色の目、そして黒い肌を持つアボリジニーの血の濃い中年の女性。姓が父方の祖父はアイリッシュ、母方の祖母はスラブ系。アボリジニーの血も濃い。オーストラリア首相。

パームバレー星系
連合の領土の北東の端にある。米中豪が難民に提示した星系。

ハールーン＝マーシャル
難民達のリーダー。後のアラブ連合初代主席。

プラシド＝ロベルト
黒い髪に瞳、そして低い鼻の白人。ブラジル大統領。

タイタンズ
　連合のプロ野球チームの一つ。かつては人気チームであったが様々なスキャンダルとオーナー会社の悪事により今では連合でも最もアンチの多い球団となっている。

ブリックス
　タイタンズ監督。

リョン
　タイタンズのショート。ショートだが鈍足でチームプレーをしない。我儘で卑劣な人間。

モントローズ要塞
　エウロパ本土と総督府を結ぶモントローズ星系にある要塞。サハラ北方侵攻の足掛かりになった場所だけでなく今も中継地として重要な場所となっている。エウロパの重要な軍事拠点の一つ。

ヴァルハラ
　エウロパ第二の星系。北方にある。

ブレシア
　エウロパ中央部にある星系。

キョヤム＝シャイターン
　シャイターン達の母。故人。

オムダーマン軍の軍服
　青。マントは赤と白がある。白は礼装用。

竜騎士団
　エウロパの精鋭。それぞれの色で塗装された艦隊を持っている。

金青虎
　テスカトリポカ艦長。大佐。韓国人。基本的にアジア系の顔立ちだが髪がやや縮れている。

サロメ＝クレンペラー
　イスラエル人。連合軍中尉。金色の髪をした白人の女性。目は青灰色であり背も高い。モデルとしても通用する顔立ちとプロポーションを持っている。

ネルソン＝リバーグ
　コロンビア出身の連合の軍人。元帥。北方方面軍司令官。慎重でかつ無駄な指揮のない人物として知られている。人間としても上司には忠実で部下の意をよく汲み心優しい男である。

ヘンリー＝テューダー
　エウロパの教師。

オランケ＝ヴァン＝ホーリック
　モントローズ要塞司令官。元帥。かつてはモンサルヴァートの上官。オランダの侯爵家の男。

エーリッヒ＝クナッパーツ
　エウロパの幻の指揮者。

ホー＝ウェン＝チョム
　連合軍元帥。カンボジア人。

ブラショブ星系
　ブレシアの前方にある星系。多くの惑星と衛星を持っている。

イワノフ＝グルーチン
　月開発時のロシア大統領。

セルゲイ＝コリーニスキー
　当時のロシア外相。

ルチアーノ＝デル＝ライモンディ
　ニーベルング要塞を作った当時のエウロパ軍務相。

# 第十部設定資料集



サラム＝フット
　ヒッタイト王国の文化人類学者。

ヒッタイト王国
　連合の一国。ヒッタイト人の末裔と称する者達が建国した。

フス＝サント
　ハンガリー人の枢機卿。

イサム＝アリトウ
　日系アメリカ人。プロテスタントから次第に信仰を変え異神教を興す。

異神教
　ミルトンの失楽園の如くサタンを重視している。キリスト教の悪魔達を神としサタンを主神としている。多神教。

ベリサル＝コワッカ
　チャドの宗教学者。

マサモ＝イブラン
　ニジェール出身の学者。白い肌に黒人の短い髪。その髪をさらにアフロにしている。現在の異神教の代表。

イバロ星系

ヴァルハラ星系南方にある。エウロパ北方の激戦地。

イデラ＝カーネルキン
エウロパ軍上級大将。赤い髪に茶色の目、高い鼻を持っている。細身。スウェーデン出身。

ジョージ＝ウェリントン
エウロパ軍中将。アイルランドの名門出身。紫の瞳の勇将。ローズの従兄弟。

フェリペ＝ジェリオ
リバーグの主席参謀。連合軍大将。アルゼンチン人。白い肌に低い鼻。アジア系の血が濃い。

ミヒャエル＝フォン＝カイザーリング
ウェリントンの参謀。デンマーク人。

スポレッタ
エウロパ軍中将。乗艦のエンジンが故障する。

シャルオーネ
スポレッタの乗艦の艦長。大佐。

プロヴァンス星系
エウロパの煙草の産地。フランス領。

アイヌ連邦
アイヌ民族の国。

琉球王国

沖縄王家尚氏を王とする国家。アイヌ連邦と共に日本の兄弟国家。

アステカ＝マヤ連合王国
インデイオ達の国家。王制を採用している。

神崎亜矢
連合のアイドル。日本人。黒いショートヘアにアーモンド形の黒い目。わりかし小柄で胸は大きい。抜群のスター性を持っている。

クルシラ＝ペーチ
エウロパ首相。外見は目立たない。ハンガリー人。戦争に入ってからエウロパの為に奔走する。その為に全てを賭ける。

チベット教国
連合の一国。

ウイグル回教共和国
連合の一国。

アルテミス星系
エウロパ中央部の星系。エウロパ軍の大規模な補給基地が置かれている。

ラドン星系
エウロパギリシア領。龍がいる。

竜騎士団の編成と指揮官
赤騎士団　リチャード＝オーティス元帥
青騎士団　シャルル＝モンフェラート元帥
黄騎士団　エリオット＝スチュワート元帥

緑騎士団　ロドリーゴ＝アビラ元帥、
紫騎士団　グラド＝プロエシュチ元帥
黒騎士団　ルードヴィッヒ＝シュヴァイク元帥
白騎士団　グスタフ＝ゼーダーシュトレーム元帥
灰騎士団　ヨーツン＝テールベルク元帥
青銅騎士団　チャールズ＝プール元帥
赤銅騎士団　フリッツ＝エルハルト元帥
真鍮騎士団　ジル＝アシャン元帥
銀騎士団　カルロ＝タファリア元帥
金騎士団　エルナーニ＝コレッリ元帥
白金騎士団　ヨセフ＝ダム元帥

エヴァ＝プロコフィエフ
　プロコフィエフの妹。蜂蜜色の髪に青灰色の目の美女。元は法学部の学生で裁判官を志望。

ワレンシュタイン
　シュバルツブルグの旗艦。

ブレス
　ティアマト級巨大戦艦。マクレーンの乗艦。

ニカワ＝ザレボ
　連合軍大将。トーゴ人。高い鼻を持つ黒人。

エルドラ＝ポンス
　連合軍大将。やや褐色のアジア系の南方の肌に黒人の低い鼻にまるっこい顔立ちをしている。髪は白く目は黒い。エクアドル人。

ミハエル＝ゴリュチャコワ

連合軍大将。リトアニア人。赤い髪に褐色の目のアジア系の男。

プミトル＝チャンカ
連合軍大将。タイ人。日に焼けた褐色の肌に白人の顔。

アブラヒム
グータルズの乗る艦の名前。

マーガレット＝カラス
フェニキアの女優。鼻と背が高い。

# 第十一部設定資料集



イスファーン＝ラバト
　サハラ義勇軍のエースパイロット。

サハラ義勇軍の特徴
　攻撃力重視の艦艇、機動力も連合軍のそれより高い。またカラーリングは漆黒で統一されている。

ホズ星系
　エウロパの北方と南方、中央部の接点となっている星系。

ジェームス＝サンドイッチ
　エウロパの軍人。イギリス人。プライドの高い男。

ハルシャ＝アスマラ
　連合の軍人。エチオピア人。

フランシス＝サワムラ
　連合軍の過激な参謀。パラオ人。顔はかなり赤いアジア系の男。

経済の中心地
　アメリカはグレートバーン、中国は神江にある。

シュトラウス
　エウロパ軍人。

バニモ星系

パプワニューギニアの星系。

李白梅
中国通商相。元ボディビルダー。

ポール＝バトル
アメリカ商務相。ヒスパニックとウェールズ系のハーフ。

ウォール＝ピープル
連合の雑誌。

北安新報
中国の新聞。

カーチャ＝コズイレフ
ロシア商業相。大柄な金髪の美女。実は小柳とは親友同士である。

小柳真理
小柄な黒い髪の女性。日本通産相。ショートヘアの可愛らしい顔立ちながら毅然とし優れた事務処理能力で知られている。

真壁星系
日本の鉱産資源の産地の一つ。良質の宝石を多量に有している。

ヨセフ＝シャイエック
イスラエル通商相。白髪に黒く鋭い目、そして痩せた顔と身体の持ち主。

小柳清三
小柳の父。政治家であった。豪快な人物。

ヨブ＝フェレス
　イスラエル大統領。一見温厚そうな老人。

マーシャー＝マスルール
　オムダーマン軍情報部長。

サハラの兵力
　オムダーマン七〇個艦隊、ティムール三〇個、ハサンとその属国一六〇。

アグニ＝バシュト
　マウリアのマハラジャの一人。髭の長身の男。

カスム＝コイケット
　幼女を暴行して処刑される連合軍の兵士。

ロト＝フナフチ
　連合中央政府法務相。四十代後半の厳しい顔付きの男でありツバル出身。元は裁判官だった。法に厳格な男。

シュタイナー子爵
　エウロパの貴族。

メッケン
　連合軍の理知的な兵士。後に教師となる。

アウン＝ホア＝ケントゥン
　連合軍大将。ミャンマー人。東南アジア系の顔に白い肌。

ボリス＝タラーソワ
　連合軍大佐。ケントゥンの副官。リトアニア系ホンジュラス人。肌は赤い。

曹黒蛟
　連合軍の中国人のエース。黒い肌のアジア人。

ジャック＝ボニング
　連合軍のオーストラリア人のエース。イギリス系とフランス系をルーツに持つ若者。理知的な容姿と穏やかな性格の持ち主。一見音楽家、若しくは学者に見える。

リャム＝トワンキン
　連合軍のラオス人のエース。小柄な美人でバンドではヴォーカル兼作詞。

ネルソン＝アクジュジト
　連合軍のモーリタリア人のエース。二メートルを越える黒人の偉丈夫で何度撃墜されても生き残る。不死身とも言われている。

後藤秀昭
　連合軍の日本人のエース。アジア系の顔であるが肌は白い。黒い髪は直毛ではなくやや縮れている。

連合軍の艦載機の編成
　五機で一個小隊、五を基本単位として編成されている。

# 第十二部設定資料集

第十二部設定資料集

ブワイフ＝アクルク
　インドネシア人。連合の国境を制定した人物。

グレゴール＝ホロトフスキー
　ロシア系カナダ人。連合中興の祖と讃えられている人物。

アレクサンドル＝ドボルスキー
　エウロパ軍元帥。スロバキア人。エウロパ軍首都防衛軍司令官。

ジョージ＝ウィンザー太子
　イギリス王太子。階級は中佐。

エーリッヒ＝シコースキー
　連合軍中将。ロシア人。細い長身の金髪碧眼の白人。父はスラブ系で母はゲルマン系。いささか短気な突進型の指揮官。

アントニア＝ローレンガー
　連合軍准将。チリ人。イーゴリの艦長であり女性でもある。

ユウイチ＝ムラコシ
　連合軍大佐。日系キリバス人。剣の達人。

イーゴリ
　シコースキーの乗艦。ティアマト級。

チェンカ＝タウデニ

マリ人。黒人の女性学者。

オヨ＝リンガル
セネガル人。黒い肌のアジア系の人物。有名な生物学者。

ジャービル＝ワコイ
ティモール人。赤い髪の灰藍色の目をした褐色の肌の青年学者。

リュークロコッタ
エウロパの生物。連合にもいる。

セチフ＝ハンニバル
保守派のホープとされている新進気鋭の政治家。行動力と鋭い論理性で知られている。祖国フェニキアでは評判の人物。相撲の力士の様な巨漢。

アサド＝アッカラム
保守派の幹事長。黒い肌をした白人。茶色の髪も青い目も白人のものだが肌は黒い。アルム王国の出身。

コヤル＝アトル
保守派の女性政治家。アジア系の切れ長の緑の目に黒い髪を持った美女。インカ人。

アントニオ＝ドミンゴ
ブラジル出身の下院議員であり改革派の重鎮の一人とされている。今まで多くの委員会の委員長を務め改革派の政策の実現に尽力してきている。策士としても知られており寝業師の異名もとっている。保守派にとっては難敵の一人とされている。

雷丸
　力士。グルジア人。

デマーヴァント
　サハラ北方のワインの産地。青葡萄で有名。

ソアン＝パディ
　マウリアの薔薇を使った菓子。

シータ＝サーガル
　マウリア諜報部長。黒い肌に彫の深い顔立ち。長い髪を後ろに束ねておりその細長い顔がさらに映えている。階級は中将。マウリアの士官学校で最高峰と言われるクリシュナ士官学校を優秀な成績で卒業した才媛。

ムアー＝ギルギット
　ティムール情報部長。大将。黒い目をした美男子。

オサム＝ウーアンザ
　ティムール首相。頭の禿げ上がった小柄な老人。

ティムールのシステム
　国家元首である主席、即ちシャイターンの力が強い。独裁国家とみなされることもある。

連合の平均寿命
　男で九十二歳、女で九十五歳。

平均身長
　連合一八七、エウロパ一七五。

ミネハタ＝シンカム
連合軍大将。アイヌ連邦出身。気品のある女性。

ペーター＝アンカイヤ
ミネハタの夫。タンザニア人。ロックとクラシックの音楽家。黒人の肌をした白人の美男子。髪はアジア系のもの。

クロノス星系
暗赤色の巨大な二つの太陽を中心に三十の惑星と無数の衛星を持つ巨大な星系。オリンポス星系の手前にある。

リューベック士官学校
シュバルツブルグの出身校。

ノルトハウゼン大学
ペーチの出身校。

# 第十三部設定資料集



メリュジーヌ＝ド＝アランソ
　エウロパ総統首席補佐官。フランスの名門貴族出身。ボーイッシュな美貌と鋭利な頭脳を持つレズビアン。

コンスタンツェ＝シェルヘン
　オーストリアの農家の出。豊かな金髪に緑の瞳の美人。アランソの恋人。

ヘルモーズ
　エウロパのヘビメタバンド。アランソが好きなグループである。

アンネローゼ＝フォン＝メルヒオール
　エウロパの官僚。ノルウェーの騎士階級出身。教師志望の美女。

フランツ＝ヨーゼフ三世
　オーストリア王。ハプスブルク家の王。古風な顔立ちの老人で細長い顔に丸い目、鷲鼻、厚い唇とやや突き出た顎を持っている。その気質は質実剛健。

ウルヴァシー星系
　ドイツ領。ワーグナー家の本拠地でもある。ワグネリアンの聖地。

ワグネリアン
　狂信的ワーグナーファンのこと。

ゴッドフリート＝ワーグナー

バイロイトの現当主の一人。

ジークムント＝ワーグナー
バイロイトの現当主の一人。

タントリス
クロノス星系第三惑星。名はギリシア神話の地獄に由来。

ニョルズ星系
エウロパの星系にしては異様に複雑な状況にありブラックホールや超新星等がその周辺に散らばっている。

ジェームス＝パレス
連合の指揮者。眼鏡をかけアフロヘアの巨漢。

陸奥星系
日本の星系。日本の穀倉地帯である。

シレーナ＝アグリハン
マーシャル出身。連合外務省マウリア局長。銀髪に黒い肌、緑の目を持つ女。

テティス星系
クロノス星系に隣接する星系。ギリシア領。

ブレス
マクレーンの旗艦。

イーゴリ
シコースキーの旗艦。

ロシアゴーリキー士官学校
　ロシアにある士官学校の一つ。シコースキーの出身校。

ペドロ＝コレッリ
　連合軍元帥。コロンビア人。エウロパ戦線南方軍司令官。黒い髪を後ろに撫で付け座っていてもわかる程の長身でスラリとした身体をしている。目は黒く顔立ちはまるでギリシア彫刻の様に整整っているがはどういうわけか左半分は右半分に比べて僅かに歪んでいる感じがする顔を持っている。

ナム＝ホウサイ＝エイサイ
　連合中央政府国防省次官補。ラオス人。女性であり赤い髪と青い目を持つ少し赤い肌の持ち主。四十代であり離婚暦が二回程ある。その理由はどれも夫の浮気であった。今は十歳程歳の離れた年上の夫と一緒になっている。酒豪で蛇ースモーカーでもある。

ダナン星系
　ベトナムの星系。唐辛子の産地。

バイラヴァ＝ビガーチャル
　マウリア外交官。

マガバーン＝ボラーン
　マウリア外交官。

ダーバン＝モーリシャス
　連合中央政府財務相。マダガスカル人。長い間中央政府において財務官僚として辣腕を振るってきた。派手ではないが実務に優れ安定感のある冷静な性格で知られている。

イブヌル＝アブサーファ

ティムール保安本部長であり大将。シャイターンの影の懐刀として恐れられている。その顔は鋭利で美しくサハラの男の理想とも言うべき美貌の持ち主で身体も長身で引き締まっている。南方の裕福な家に生まれたと言われているが確かなことはわからない。ふらりとシャイターンの傭兵隊に入りそこで彼の配下となった。謀略及び諜報活動で活躍しシャイターンの天才的な活躍を影で支えてきているとさえ言われている人物。

# 第十四部設定資料集

第十四部設定資料集

アラン＝ハイド
　連合の軍事評論家。その言ったことや予想がことごとく外れることで有名。通称『天才的な軍事評論家』『無敗の名将』。

ジュリア＝リーブル
　ザイール出身の今売り出し中のアイドル。長身でスリムな身体でいささか現実離れした彫刻の様な美貌を持つ黒人の少女。神崎亜矢のライバル。

ウィリアム＝マウントバッテン
　エウロパ軍大将。ウェールズ人。マールボロの主席参謀。

イージス艦
　連合軍の艦艇の種類の一つ。巨大な円盤状の艦艇。連合軍の護りの要でもある。

スチュワート
　エウロパ軍元帥。

スコット
　エウロパ軍上級大将。

マカモ＝ブーメル
　連合軍中将。会計部長。アジア系の肌にやや厚い唇とはっきりとした目の黒人。少し縮れた髪が似合う美人。はマリ出身。

ゼノビア＝カラトヴァ
　連合軍準佐。パルミラ連邦出身。赤がかった蜂蜜色の髪に青い目の美人。経理だが工作も行う。

ジャスティヌ＝サフラワーズ
　連合軍航空総監。元帥。ケベック王国出身。黒い髪と瞳のアジア系の肌を持つ白人の美人。五十代。若き日はエースだった。

カーロス＝ポンス
　連合軍陸戦総監。元帥。ベネズエラ出身。ラテン系の髭の濃い顔の大柄な黒人。

ヨハネス＝ヴァン＝レンブラント
　エウロパ軍大将。航空参謀長。ベルギー人。灰色の目に白い髪の男。胸にベルギー国王から授けられた勲章がある。

電子戦機
　連合軍の艦載機の種類の一つ。敵の電子妨害を担当する。

ハシム＝ギネット
　連合軍整備士官。アルム王国出身。金髪に岩石の様な顔で目はダークブルー。

イポー＝コタバル
　連合軍大将。マレーシア人。パイロット出身。浅黒い肌にライトグリーンの目。

マハティール
　コタバルの乗艦。ティアマト級。

オーステンデ
　ダムの乗艦。騎士団の中心的存在の艦艇でもある。白金騎士団の旗艦。

パレオ＝ビスマーク
　ナウル人。連合軍少将。赤い肌に赤い髪だが赤といっても肌と髪でその色が違っており肌は赤銅色だが髪は人参の色に近い。計算に強い。

# 第十五部設定資料集



セオニ＝ボパール
マウリア首相補佐官。黒に赤がかった髪の彫の深い美男子。切れ者。

マルン＝バンプール
ティムール大蔵相。細い顔に鋭い目の狐によく似た男。

ハルツーム＝シャイターン
シャイターンの従弟。父の妹の子。国家主席補佐官。

ティムール保安情報部
シャイターン直属の秘密組織。諜報や工作、用心暗殺等を担当する。アブサーファが長官である。

ザーヒダン
ハサン王国軍大将。

マクラン
サハラ義勇軍大将。

ヴァドゥーヴァ
エウロパ軍少将。ルーマニア人。アローニカの宙理参謀。

エボニ＝カタヤイネン
フィンランド連合加入当時のフィンランド共和国大統領。

フィンランドの裏切り
　フィンランド連合加入事件のこと。同時にアルバニア、ブルガリアまで連合に参加してしまう。

バルカン問題
　バルカン各国の欧州離脱、連合加入の事件。同時期にポーランドも分裂し一部が連合加入している。

ヘルメス
　ジャースクの旗艦。

イブン＝アルガイダ
　サハラ義勇軍大将。濃い頬髯と口髭の持ち主。

カフジ
　アルガイダの同僚。サハラ義勇軍大将。義勇軍第七軍団司令官。

グンナル
　ターフェルの旗艦。

ムアーウィア
　アルガイダの旗艦。ティアマト級。

ヴェスター＝フォン＝クルーゲ
　タンホイザーの参謀。金色の髪を後ろに撫で付けた端整な顔立ちの男。緑の目は何処か猫を思わせる。

ウォルター＝ギルフォード
　黒い髪と瞳の美男子。彫が深く高い鼻を持っており唇は薄い。顔は白く透き通る様。スラリとした長身である。イギリスの侯爵家の

主。資産家でもありイギリス政界において有名であった。類稀な様々な能力とカリスマ性を持つ人物。英雄の素質がある。

# 第一部あらすじ

第一部あらすじ

## 第一章　若き将星

銀河暦八四八年四月、オムダーマン共和国とサラーフ王国はサハラ西方における交易の要地カッサラ星系においてその領有を巡って戦闘状態に入っていた。戦況は地の利を心得るサラーフ有利でありオムダーマン軍の司令官ムスタファ＝アジュラーン元帥は撤退を考えそれを実行に移そうとしていた。しかし僅か二十歳の巡洋艦アタチュルクの艦長アクバル＝アッディーンはここで果敢に進撃途中の敵艦隊の前に出て一斉攻撃によりその動きを止めた。これにより戦局好転の機会を見て取ったアジュラーンは方針を転換して反撃に移った。これによりオムダーマン軍は勝利を収めカッサラ星系を手に入れた。この功績によりアッディーンは技術大将ルクマーン＝ハイデラバート率いる技術部の誇る新型戦艦アリーを貰い受けた。これが彼の輝かしい軍歴のはじまりであった。

## 第二章　銀河の群星

アッディーンのことは瞬く間に各国に伝わりエウロパ総統フランソワ＝ド＝ラフネールの耳にも入った。彼等は今後のサハラ西方の情勢について思案を巡らせる。また連合においては日本国軍務大臣である八条義統が連合中央政府大統領ラゴス＝キロモトに呼ばれていた。彼は一旦昼にキロモトに呼ばれた後で夜に再度呼び出され話を聞く。そこで何と連合中央軍設立の構想を聞かされたのである。一ヵ月後キロモトは日本国首相である伊藤佐知子と会談し八条を初代の中央政府国防長官にすることを決定した。中央軍設立の流れは瞬く間に連合を覆い大きなうねりとなっていくのだった。

## 第三章　海賊討伐

カッサラ星系を占領したオムダーマン軍は星系の基地化と周辺に潜む宇宙海賊の討伐を進めていた。アッディーンはその中でまた功績をあげ准将に昇進し分艦隊司令官にも就任した。オムダーマン軍は海賊を取り込んでいき戦力を増強させる。その中でミドハド連合主席であるイマーム＝ハルドゥーンはオムダーマン軍を叩くべくカッサラに兵を進めさせる。アジュラーン率いるオムダーマン軍は彼等を迎え撃たんとする。

## 第四章　若き獅子

エウロパ総督府にいるエウロパ軍大将ヴォルフガング＝フォン＝モンサルヴァートは内紛状態に陥っているサハラの一国アガデス連邦に攻め込み彼等を一蹴した。それによりアガデスは滅亡しエウロパに組み込まれることとなった。これによりアガデスから多くの難民が出るがモンサルヴァートはこの功績により上級大将に昇進する。

また連合では米中露の三大国において大統領選挙が同時に行われていた。この選挙は連合軍の如何を問うものであったが三国共かろうじて賛成派が勝利しこれにより連合軍の設立も決定的なものとなったのであった。八条は伊藤とそのことを祝うが話はこれからであった。またマウリアも連合のその様子を冷静に見守っているのであった。

## 第五章　電撃作戦

アッディーン率いるオムダーマン軍はミドハドの属国的存在であったカジュール公国に攻め込んだ。海賊だった者達の先導を受け隠密かつ迅速に兵を進め首都までの二つの要塞を陥落させ僅か二十日でカジュール自体を降伏させたのであった。

正式な艦隊司令に就任し同時にカジュール駐留軍の責任者にもなった彼はすぐにミドハドとの戦いにも参加することが決定したのであった。
その時連合中央政府は米中の首脳達の動向を注意深く見守っていた。
エウロパでは連合中央議会の政治家で改革派のキリ＝テ＝マウイ、保守派のランティール＝モハマドに注目していた。同時にそのエウロパのサハラ総督府においてはオムダーマンとミドハドの戦いの行方が見守られていた。

## 第六章　疾風怒濤

アッディーン率いる艦隊はカジュール方面から進攻していた。彼はサルチェスでの戦いを予測するとすぐに指揮下にある司令官や幕僚達を集め今後の方針を話し合った。彼はここでサルチェスの後方にある補給基地を陽動として狙うことを告げる。
すぐに数に勝るミドハド軍が攻めて来る。しかしアッディーンは敵軍に対して一点集中砲火を浴びせた後でその中に自らを先頭にして突入しまずは空母を破壊していった。続いて混乱する敵の前面に対して砲撃を加え中で暴れ回るアッディーンもミサイルを放った。
これによりまずは一個艦隊を降伏させたアッディーンは陽動により補給基地に向かっていた残る敵艦隊を捕捉し補給基地に向かわせていた別働隊と共に撃破する。ミドハド軍は止むを得なく撤退するがその中でアガヌという男が奮戦を見せるのであった。

## 第七章　壁と鉄槌

エウロパ軍では相変わらずオムダーマンとミドハドの戦いの行方が注視されていた。
その頃八条は連合軍設立にあたり様々な事務処理等に追われ多忙

を極めていた。
サルチェスを手に入れたアッディーンはそこから敵の残存艦隊が逃げ込んだケルマーン星系への進攻を計画する。またそれと同時に更なる進攻によりオムダーマン全体の勝利を手にするつもりであった。
ケルマーンのミドハド軍はケルマーンの主星において万全の布陣を敷いていた。しかしその中でアガヌだけは危惧を憶えていたのであった。
アッディーンはその彼等に密かに近付き奇襲を仕掛けた。これにより混乱に陥ったミドハド軍は艦載機での戦いにも敗れ撤退を開始する。その殿軍をアガヌが果敢に務める。だがここで乗艦のエンジンを破壊され止むを得なく降伏するのであった。
ケルマーンでの敗北を聞いたミドハド軍の主力は首都シャーハバードの手前にあるバンプール星系において布陣することにした。アッディーンは今回の作戦の司令官であるメフメット＝マナーマと合流しバンプールに入った。そこでアッディーンは彼にある作戦を提案する。
バンプールで両軍は激突する。まずは数に勝るミドハド軍が優勢になった。ここでアッディーンは波に乗ろうとするミドハド軍が自身の率いる軍の側まで来たところで急進しその側面を攻撃した。これにより自軍に勝利をもたらした彼は大将に昇進しオムダーマングンもシャーハバードへの入城に大きく前進した。だがここでサラーフ軍が不気味な動きを見せアッディーンは彼等に向かうのであった。

# 第二部あらすじ

第二部あらすじ

第一章　策略

ミドハド連合の首都ハルツームに入城しその降伏を受け入れたオムダーマン軍。しかし国家元首であるハルドゥーンの姿は見えず不穏な空気が残っていた。すぐに彼の潜伏先がその基盤であるブーシルだと察したオムダーマン軍上層部はすぐにブーシルに対して対処することにした。モンサルヴァートも美貌の参謀エレナ＝プロコフィエフから彼等のレジスタンスとサラーフ軍の介入の可能性の話を聞いていた。またモンサルヴァートは同時に配下の提督達を集めあらたな侵攻計画を練るのであった。

八条はグエン＝バン＝チョムやレイミーといった技術将校等を集め艦艇や陸上兵器の開発を進めていた。それはかつてないものとなることを予感させる話であった。同時に人材育成についても考える八条であった。

ハルドゥーンはこれからのことについて同志達と策を練っていた。しかしアッディーンはそれに対してある手を打とうとしていたのであった。

第二章　狐の登場

カッサラに風変わりなオムダーマン軍の軍人がやって来た。

またサラーフ首相ムスタフード＝サレムは軍務大臣であるオストゥール＝ハルージャを呼び今後の方針を考えていた。その頃ハルドゥーンはブーシルのスラム街に入り暗躍を行っていた。

ハルドゥーンに対する対策を講じるアッディーンのところに二人の将校が来た。それはハルヴィシーとウルドーンであった。カッサラのあの風変わりな男である。彼等はアッディーンに挨拶を済ませ

るとすぐにブーシルのスラム街に彼等も入るのだった。
　またモンサルヴァートはマールボロとの話の中である男の名を聞いた。その男の名はメフメット＝シャイターン。南方の傭兵隊長であった。モンサルヴァートは取り寄せた彼に関するデータを見てそこに邪悪なものを感じ取るのであった。

第三章　魔王

　シャイターンはブワイフ共和国に到着した。彼はブワイフの軍事を任されるとすぐに行動の準備をはじめた。豪奢な生活の中で作戦を講じる彼はさながら王侯であった。すぐにマヤムーク王国で親エウロパ派の要人達が謎の爆発で全員死亡しシャイターンはマヤムークの軍事権も譲り受けた。
　こうして同盟諸国の司令官となったシャイターンとモンサルヴァートとの対決の時が迫ろうとしていた。シャイターンはその中でも己の縁組と今後の粛清のことを計画していた。またアッディーンのことも口に出すのであった。
　エマムルド星系において両軍は激突した。正面から攻めようとするモンサルヴァートに対してシャイターンはトラップを多用した防御と補給路を脅かす戦術で応じようとする。だがそれを見抜いたプロコフィエフの策によりエウロパ軍は動かず兵を退いた。シャイターンはすぐに侵攻してきたサラーフ軍との戦いに入るが彼はこの敵軍を鮮やかな電撃戦で殲滅するのであった。僅か数日でサラーフの六個艦隊を殲滅した彼は北方の実力者ハルーク家の未亡人との婚姻を進めることを決意するのであった。

第四章　二つの戦い

　ハルヴィシーは部下達と共に下水道の中を進む。そこであるものを探していたのだ。レジスタンスの一人を捕らえた彼はそこから情

報を得て下水道の奥の廃墟に辿り着いた。彼はその廃墟の中を少しずつ進みながら捕虜から情報を聞き出し寺院の地下に向かう。そこで彼は自決したハルドゥーンを見たのであった。
アッディーンは自軍と倍する敵と対峙していた。彼はあえて敵の正面に布陣し迎え撃つ。それを見た敵軍はすぐに兵を二つに分け挟み撃ちにかかる。だが後方から攻める軍は側面から奇襲を受け崩壊した。
まずは挟み撃ちを封じたアッディーンは今度は自らの部下に入れたアガヌに防衛戦を命じ次第にサラーフ軍を焦らせる。焦ったサラーフ軍は数を頼みに突進するがアッディーンはそこで再び側面攻撃を仕掛ける。これにより勝利を得たアッディーンは悠々と帰還するのだった。

## 第五章　次なる戦いへの蠢動

連合の中で大きな力を持つ旧太平洋諸国は最近の日本の動きに不快を示していた。伊藤もそれを察している。またそれを日本外相である東宗久と話もしていたがここで面白いこともわかるのであった。太平洋諸国へ手を打った伊藤はこれで彼等の不快を打ち消すのだった。それを終えた伊藤は夫と休息の時間を過ごすのであった。その頃八条は相変わらず仕事に終われていた。
また今回の武勲を認められたアッディーンは上級大将に昇進すると共に十四個艦隊を率いてサラーフ侵攻を命じられたのであった。
シャイターンはハルーク家の美貌の未亡人を口説きその心を捉えていた。彼は今後のことを講じると共にまたしてもオムダーマンについての話を聞くのだった。

# 第三部あらすじ

第三部あらすじ

## 第一章　侵攻作戦

オムダーマン軍第二艦隊司令官ハルシメルはアッディーンのいるアリーに入った。そこでは既に歴戦の提督達が集まっていた。参加戦力は艦隊にして当初予想された十四個よりもさらに多い十六個、艦艇数は二十万、参加兵力は五千万というオムダーマン軍にとっては空前絶後のものであった。アッディーンは彼等をカッサラから進撃させた後でラサーフの重要拠点であるムスタファ星系に兵を進ませることを考えていた。この際彼は多くの補助艦艇を連れていた。それは今後起こるであろう焦土戦術に備えてのことであった。それを連合もエウロパも見守るのであった。その戦いがどうなるのか。それはあのシャイターンも同じであった。

## 第二章　緒戦

オムダーマン軍の進撃がはじまった。まずは星系を次々と陥落させていく。援助物資を市民達に供給しながら的確に兵を進めていく。その彼等のもとにサラーフ軍がムスタファ星系の手前で十万の艦艇をもって防衛ラインを敷いているとの情報が入った。それを聞いたアッディーンはすぐに攻撃を指示し急襲攻撃によりこれを退けムスタファ入城を果たしたのであった。だがそこにある筈の軍事施設は全て破壊されていた。しかしこれを想定していたアッディーンは速やかに連れて来ていた補助艦艇にその修復を命じる。またオムダーマン本土からも援軍の派遣が決定された。

また参謀本部のムアーウィア＝タルジークはマナーマにサラーフの癌であるナベツーラ一派について話し彼等が権力を持つように工作することを彼に具申するのであった。またこのことはムスタファ

にいるアッディーンの耳にも入るのだった。同時にアッディーンはバヤズィトから将にとって必要なものを聞かされる。また慣れないホテルでの豪奢な生活も送るのだった。

第三章　獅子身中の虫

オムダーマンの工作もありサラーフではマスコミの支持をバックにしたナベツーラ派がその力を強くさせていた。それは軍にも及びミツヤーン、ホリーナム、キヨハームといった下劣極まる愚か者達が幅を利かせるようになっていた。

八条は伊藤とオムダーマン軍の動きについて話していたが何時しか話は彼が日本の皇居に向かうということになった。その質素な宮殿を見ながら進みその中で女帝後明正天皇と会う。そこで帝御自らから大勲位を頂くのだった。それを胸に授かった彼はすぐに伊藤からことの次第を聞く。これは彼に箔を付けて動き易いようにしようという伊藤の配慮であった。だがこの時密室やネットにおいて八条を疎む勢力から工作が仕掛けられだした。やがてその勢力が宇宙海賊やテロリストと関係があることが浮き彫りにされてきた。その結果彼等は逮捕され裁判にかけられ実刑判決を受けていった。それに危惧を憶えたモンサルヴァートはラフネールに大規模な防衛計画を上申する。彼はその場で何と元帥の称号を授かるのであった。

サラーフ軍は焦土戦術を挑んでいたがそれはマスコミに不評でありサレムは危機と焦燥を同時に感じていた。彼は意を決して七個艦隊を出撃させたのであった。

第四章　命運は決する

サラーフ軍が動いたとの話はすぐにムスタファのアッディーンのところにも届いた。話を聞いた彼はすぐに作戦会議を開きオーレフ星系に向かうのだった。ナベツーラ達はそれを醜く汚れきった目で

見守るのだった。
　ムスタファで留守を守るガルシャースプはナベツーラ一派の一人テリームの罵詈雑言に呆れていた。同時にサラーフの新聞を見るがその下品さだけではなくナベツーラ達がマスコミにリークした進撃中のサラーフ軍の動向までが書かれていた。このことに完全に呆れたガルシャースプはテリームが出ているテレビを忌々しげに消した後で新聞もシュレッダーにかけサラーフのマスコミを戦後に始末することを誓うのだった。
　サラーフ軍の動きはアッディーンにもそのサラーフのマスコミの記事からわかっていた。オーレフでサラフ率いる士気の劣るサラーフ軍を待ち構え釣り出したうえで一気に挟撃しその兵を退かせた。これによりサラーフ軍はオーレフから撤退しアッディーンは勝利を収めた。この時行われた選挙でナベツーラが政権に就くことになった。

第五章　雑軍

　ナベツーラはマスコミの提灯記事の中で首相官邸に入った。すぐにその内装を悪趣味極まるものにしすぐに取り巻き連中を国の要職に就けた。その彼の指示によりミツヤーン達と出鱈目に集められた三十個艦隊が出撃した。
　このことはやはりサラーフのマスコミの記事を通じてアッディーンの目に入った。彼は一個艦隊をカッサラ防衛に置いた後で十五個艦隊を率いて迎撃に出た。彼は敵が烏合の衆であると確信していた。またこれはシャイターンも見ていた。彼はナベツーラ達を侮蔑すると共にサラーフ侵攻も命じるのだった。また同時に未亡人シャハーダとの結婚も果たすのだった。
　サラーフ軍は進むがその中でもキヨハームやモトキーラムといった愚か者達の蛮行が続いていた。彼等は兵士達を虐待していたのだ。幼女を慰みものにさえしていた。アッディーンはその彼等の動きを

テレビからも知りそれへの対策を講じながら戦場に向かうのだった。
サラーフ軍の布陣は出鱈目なものであった。アッディーンも呆然とする程の。酒に酔ったミツヤーン達の降伏勧告を無視するとすぐに戦闘に入るのだった。
ただ向かって来るだけのサラーフ軍を倒していく。その中でキヨハームは部下を殴り殺し退こうとする僚艦を撃沈した。そうして自ら前に出るがそこで無様な死を遂げる。モトキーラム等他のナベツーラ派の提督達がその下劣さと醜悪さに相応しい無様な最期を遂げる中でサラーフ軍は包囲されていく。包囲した彼等に降伏勧告を送り返すがそれは無視された。その中でサラーフ軍の中でナベツーラ一派に対する攻撃が激しくなりその中でミツヤーン達は逃げ惑うが遂にアッディーンに完全に包囲され死を宣告される。尚も部下達を楯にして生き延びようとするが逆にその部下達に寸刻みにされて殺された。アッディーンは投降してきた捕虜達を後方に送ると共にさらなる進撃を決意するのであった。

# 第四部あらすじ

第四部あらすじ

第一章　欺瞞の国

ムスタファ星系外でのサラーフ軍の無様な敗北は人類世界全体に伝わった。しかしサラーフではそれは大勝利と宣伝され俳優まで使われる始末であった。これには八条も不快感を見せ自国におけるマスメディアの歴史を思うのだった。同時に彼は艦艇の開発状況をチャムに問う。その中には恐るべきものもあった。

モンサルヴァートはデスクワークにいそしむ中でロギ＝フォン＝タンホイザーと会っていた。彼の戦術家としての能力は認めつつもいささかその気性には違和感を感じていたが彼に新造艦グングニルを見せそのうえで己が去った後のサハラ総督府を託すのであった。

またナベツーラはこの期に及んで取り巻き共と謀略を策謀する中で同志とも言えるサラーフマスコミ界のドンであるクマラと会っていた。この男もまた下種であった。外道同士の集まりが続いていたのだった。

第二章　愚か者の戦い

シャイターンは薔薇を楽しみながらサラーフ軍の動きを聞き彼等を冷笑しそのうえでサラーフ領への侵攻を決定する。同時にタンホイザーのことも聞くのだった。

サラーフ軍はアッディーンが新たにサラーフ攻略の足掛かりに定めたアルマザール星系を目指していた。これに対してアッディーン戦うより前に降伏勧告を送った。士気なぞ最初からなかったサラーフ軍はすぐにそれを受諾し降伏したのだった。

アッディーンはサラーフ各地に軍を派遣し占領地を次々と拡大させていく。そうして遂にサラーフの首都であるアルフフーフに兵を

進めた。アルフフーフには移動要塞衛星であるブラークがあるがアッディーンはそれを攻略することを決定するのだった。だが高速戦艦と同じ速度で移動するブラークを攻略することは困難だった。しかしアッディーンはここで秘策を部下達に告げるのであった。またシャイターンもブラークの陥落を予言したうえで己の軍を進めていくのであった。同時にアッディーンと会うことを期待しながら。

## 第三章　愚か者の楯

アジュラーンはアッディーンの武勲に感嘆しつつも同時にあまりにも多い捕虜への対策に頭を悩めていた。また休息の時にお茶とお菓子を楽しみながら他の文明の料理についての話、とりわけ日本のそれに興じるのであった。これは連合軍でも同じで蛙料理に兵士達は目を丸くさせたりしていた。また八条も秘書官の木口と食べ物の話をしていた。その後でロシアの大企業であるアナハイム社の社長アナハイム＝ベニョーコフと話をし設計図を見せたうえで補給艦の発注をするのであった。またその後で木口と連合とエウロパの違いを話すのだった。

タンホイザーはサハラ東方の小国マガバーン王国の軍と戦い鮮やかに勝利してみせた。彼の軍事的才能をここで銀河に見せるのであった。

## 第四章　楯砕き

アッディーンからの降伏勧告をナベツーラ達は拒絶した。それを確認したアッディーンはすぐにブラーク攻略にかかるのだった。隕石をぶつけそれによりブラークを破壊するのであった。シャイターンはそれを聞いても当然であるとするだけであった。彼が思うのはこれからアッディーンと会うということであった。

またシャイターンについて八条は中央軍宇宙艦隊司令長官ローラ

ン＝マクレーン、参謀総長劉白鳳と話をしていた。二人は八条に対してシャイターンは危険であると言っていた。しかし二人はサハラ統一の可能性は一笑に伏すのであった。また八条が同性愛者であるという噂についても語られた。だがここで他の勢力を仮想敵国として戦略を立てていくというプランもまた語られるのであった。

ナベツーラは一派は腐敗の極みの宴の中で使用人に撃たれて死んだ。その屍は怒り狂った群衆の手で細切れにされた、これでサラーフの悪は滅び去ったのであった。マスコミも群衆によって破壊され落ち着いたところでアッディーンが入城する。これによりサラーフは滅亡したのであった。

## 第五章　英雄と梟雄

エウロパの復活祭。ラフネールもそれを楽しんでいたがモンサルヴァートも同じであった。彼は婚約者エルザの家であるヴァンフリート家に入っていた。そこで婚約者の父達とささやかな宴の場を持つのであった。食事に酒に音楽。それは彼にとってはかけがえのない憩いの存在であった。

連合ではバレンタインであった。八条は連合軍の将官達とチョコレートや相手について様々な話をしていた。するとそこに日本の宮内省の侍従がやって来て彼にチョコレートを渡した。何とそれは天皇陛下の手作りのチョコレートなのであった。

アルフフーフに入ったアッディーンはまずはナベツーラの宮殿の悪趣味さに絶句した。その彼にシャイターンから会談の申し入れがあったが彼はそれを受けることにした。

彼等のはじめての会合はとりあえずは差し障りのないものであった。当初は社交辞令と政治戦略に関する取り決めに終始した。だが途中からシャイターンはアッディーンを英雄だと褒め称え出した。だがそれは己もまた、という言葉をも含むものであった。アッディーンはシャイターンのとの会合の後でその英雄について思う。しか

しそれをあえて消して次の戦いに思いを馳せるのであった。

# 第五部あらすじ

第五部あらすじ

第一章　新たなる幕開け

西方を統一したアッディーンは元帥に昇進しアスランにおいてデスクワークに専念していた。オムダーマンは今は内政に力を注いでいた。それと共に今後の補給戦略について計画を練る。またそれはエウロパも同じであり今後の防衛について入念に話をしていた。またそれと同時にタンホイザーのカリスマや今後の内政開発についても話が及んだ。

また連合ではアメリカの首都ニューワシントンにおいて加盟国会議が開かれていた。伊藤はこの会議でのシナリオのことを八条に話す。また八条は開発中の艦艇の開発状況を尋ねるのだった。また今後に対してテロリスト対策も慎重に講じられていく。アサム＝ンガバがそれの実際の任務を担当するのであった。

第二章　狩り

マウリアは今の銀河、とりわけ連合の趨勢を見極めようとしていた。それは細部にまで至りクリシュナータも連合の情報収集に腐心していた。

連合でもマウリアの諜報部員の情報を掴んでいた。しかし八条もキロモトも彼等にはそれ程注意を向けずむしろエウロパや国内のテロリストに目を向けていた。とりわけ八条は観艦式にかけていた。その為のテロ対策もかなりのものになっていた。二つのチームに念入りに連絡をして水も漏らさぬ警戒体制を作り上げようとしていた。実際にアラガルはその中のテロ組織を自分の手で潰すのであった。同時にその中でエウロパの大物スパイステッラの影も感じていた。しかし彼女の摘発までには至らなかった。

## 第三章　巨大戦艦

モンサルヴァートとプロコフィエフがステッラについての噂に近い話をしていた。彼等もあまり知らなかったのだ。同時に宗教団体を使った潜入ルートについてもわかる。また連合軍の新型艦艇の資料を見て驚愕した。巨大な戦艦がそこにあったのだ。またそれぞれの艦艇も大型であることに気付く。

アッディーン達もこの艦艇に興味を持つが詳細はわからない。軍事専門家達にしろジャーナリストにしろそれは同じであった。

観艦式はまずは陸上兵器からはじまり艦載機、そして艦艇という流れであった。そして最後に現われたのは。要塞の如き異様な巨大戦艦であった。

## 第四章　神の名

巨大戦艦のことはすぐに連合全体に伝わった。とりわけエウロパでは大きな衝撃となっていた。深刻な会議が軍の中でも行われる。同時に軍備増強計画も出される。かなり現実味のある深刻なのであった。

アッディーンは連合のその巨大戦艦の話を聞きながら今後の計画を考えていた。小国の林立する南方に目を向けていた。すぐに外交部とも打ち合わせをすることにした。

シャイターンは圧倒的な支持を受けていた。その中で彼は北のエウロパ総督府を見据えていた。

アッディーンは首脳部とも話し合い南方侵攻の話を進めていく。

連合軍では兵器の名称が考えられていた。その結果巨大戦艦はティアマト級となるのであった。

第五章　次なる戦いの幕開け

マウリアでは不況の気配が見られた。しかしそれは設備投資等で資金の動きを活性化させることで乗り切ったのであった。

連合では兵器の大量生産に入った。その国力を発揮して凄まじい速さで建造していく。とりわけ巨大戦艦の建造は何とあの巨大さで三千にも及んでいた。同時に八条は伊藤と海賊やテロリストへの対策を相談していた。マウリアとの境にいる解放軍という海賊とテロリストを合わせた組織も問題になっていた。

オムダーマンでは議論の後で方針が決定した。アッディーンの案通りに南方侵攻作戦が実行に移されることになったのだ。細部の調整の後それがいよいよ発動されようとしていた。

# 第二十二部第一章　戦雲の歴史その一

戦雲の歴史

連合とエウロパの戦いはバチカン移転により完全に幕を下ろした。だがこの二つの勢力の間で本格的な戦いになったのはこれが最初であり今まではなかったことであった。

本当の意味で戦乱に覆われていたのはやはりサハラであった。長い戦いの歴史を持つこの地域は今また戦雲に覆われようとしていたのであった。

「最近サハラ各国の動きが活発化している」

そういった報告が連合にもマウリアにも届いていた。それはハサンにいる連合のビジネスマン達も感じていた。

彼等の一部が同僚のマンションに集まっていた。そして話をしていた。

「何か最近変な動きが多いな」

「そうだな」

夜なので酒を飲みながら話をしている。このマンションの主は独身か単身赴任か。どちらにしろ他に家族はいないようであった。だから男だけで飲んでいた。

「テロが相次いでいるな」

「それは最近は静かになったけれどな」

「お偉いさんが大分死んだな」

「ああ、不思議な程な」

「あれ絶対普通のテロリストの仕業じゃねえな」

仲間内の一人がウイスキーのグラスを手に述べた。

「幾ら何でも不自然だぜ」

「こんなにハサンのお偉いさんばかり死んでるからか？」

「それも狙ったみたいにな。もうハサンはかなり人材がいないんだろ」

「減ったのは事実だな」
一人がこう返した。
「それもかなりな」
「やっぱりおかしいんだよ」
「そこがか」
「ああ。絶対何かあるぜ」
「黒幕がいるってのか？」
赤い髪の男がウイスキーの男に問うた。
「そうじゃないのか？」
「じゃあ一体誰なんだ、それは」
「これだけのことがやれるなんて相当な奴だぞ」
黄色い髪の男も身を乗り出してきた。青い目の男もそこにいた。
「これは俺の予想だぞ」
「ああ」
「誰だと思ってるんだ？それか何処の組織か」
「組織って言えば組織だな」
持っているウイスキーを眺めながら述べた。氷がブラウンの海の中に漂っている。
「組織か」
「その組織は」
「ティムールだろうな」
「奴等がか」
「最近あそこも軍備を整えているよな」
「そうだな」
これは残ったサハラ三国共に言えることであるが。オムダーマンもそうであるし当然ハサンもだ。彼等は今来たるべき戦いに備えて兵を集めているのである。
「だからだ」
「もうすぐ戦争がはじまるから」
「その前にハサンの人材を消していってるってわけか」

「そういうことなんじゃないかな。あくまで予想だぜ」
「わかった」
「しかしな」
ここで青い目の男が述べた。
「何だ？」
「オムダーマンとは考えられないか？」
「オムダーマンか？」
「ああ。ティムールが怪しいのは事実だ」
「そうだな」
それは流石に否定出来なかった。ハサンの要人が死んで得をするのは誰か、そうしたことを考えていくとやはり疑わしいのである。
「しかしそれを言うとオムダーマンもだろ」
「オムダーマンもか」
「そうじゃないのか。オムダーマンだって怪しいだろう」
「確かにそうだな」
ウイスキーの男は答えた。答えた時にグラスの中の氷が割れた。
「しかしな」
「何だ？」
「オムダーマンの今の軍事責任者だが」
「アッディーン副大統領か」
「彼はそんな人間か？暗殺をするような」
「アッディーン副大統領か」
連合の者達の間でも彼の名はよく知られていた。シャイターンと並ぶサハラの英雄と考えられている。
「どう思う、そこは」
「ううん」
赤い髪の男はそう問われて腕を組んで考え出した。それから述べた。
「多分ないな」
「やっぱりそう思うか」

「アッディーン副大統領は純粋な軍人だろ」
「ああ」
「だったらな。考えられない」
「イメージ的にも合わないな」
黄色い髪の男も述べた。ウイスキーの男は話の間にウイスキーを一杯飲んでそれからまたグラスに注ぎ込んでいた。また氷が割れる音がした。

## 第二十二部第一章　戦雲の歴史その二

「じゃあやっぱり考えられるのは」
青い目の男が述べた。
「一人しかいないか」
「あいつか」
「あいつだろうな」
この場合その『あいつ』とは一人しかいなかった。彼等は一様にうなずいた。
「シャイターン主席がか」
「あの御仁は手段を選ばないところがあるからな」
「それだけで済めばいいがな」
「どういうことだい、それは」
「いや、シャイターン主席だろ」
黄色い髪の男がウイスキーの男に応えた。
「ああ」
「かなりダーティーって言えばダーティーだよな」
「暗殺だからな」
「けれどそれがやたら絵になっていないか？」
「絵になってる？」
「そうさ。殺し方もな」
「そういえばそうだな」
青い目の男がそれに賛同を示した。
「シャイターン主席のやり方ってのはな。何処が優美なんだよ、何もかもな」
「何もかもか」
「そういう感じがしないか？奇麗っていうか」
「芸術的っていうことかい？」
ウイスキーの男はそれに問うた。

「まあそうなるな。どんなことをしても」
「ふむ」
「戦いだって奇麗だしな」
「そうだな、華麗に勝ってみせている」
「エウロパとの戦いなんか見事だったよな」
「全く」
　それから出て来た人物である。彼は元々軍人であったのだ。言うならば馬上から天下を握ろうとしているのである。今では連合やエウロパではないことだが馬上から天下を目指すのはサハラでは普通なのである。
「それを暗殺でも見せている」
「批判はさせないしな」
「そういうことだ」
「それでだ」
　黄色い髪の男が述べる。
「俺達にとっては実は華麗かどうかはどうでもいいことだ」
「あれだな。それがビジネスに影響するかどうかだな」
「そういうことだ」
「で、影響すると思うか？」
「派手な戦争になればそうなるだろう」
　ウイスキーの男が述べた。
「派手になればな」
「派手に、か」
「最近サハラの戦争はどっちかの国が潰れるまでやってるからな。派手になるんじゃねえのか？」
「だとしたら俺達も危ないか？」
「そうだな。本社にはもう連絡を入れておくか。戦争が近いかもってな」
「そうしておくか」
「じゃあ俺が連絡しておくよ」

赤い髪の男が名乗り出てきた。
「明日にでもな」
「ああ、頼む」
「それでだ」
彼等はさらに話を続ける。
「何処が最後まで残るかだよな」
「国力じゃハサンだけれどな。どうかな」
「いやあ、この国はやばいぞ」
青い目の男の言葉はすぐに赤い髪の男に疑問符を打たれた。
「できる奴がどんどん死んでいってるだろ」
「そのテロでな」
「それだよ、それが大きい」
薄暗い部屋の中で話は続く。
「それにな。オムダーマン、ティムール両方から攻撃を受ける位置にあるだろ」
「ああ」
「やばいぜ。両方から攻められたらな」
「じゃあこの星もやばいってことか」
彼等が今いるのはハサンの首都である。首都が狙われるのは言うまでもない。
「まずいだろうな」
「どうする？撤収も検討してもらうか？」
「何かサハラでの仕事がどんどん減っていくな」
「仕方ないだろ、こういうところなんだからよ」
ウイスキーの男が仲間達にそう述べた。
「戦争が絶えないってのはわかっていた筈だぜ」
「まあな」
「給料がよかったから来たんだが」
「西方から撤収して南方も」
「そっちの再進出はどうだ？」

それについても問うた。
「本社がオムダーマン政府と話中らしい」
「ここのトップもな」
「上手くいってるのかね」
「一応はいってるみたいだぞ」
「どうだか」
彼等は現場なので上のことはあまりよくはわからない。だからこうしたぼやきも混じるのである。

## 第二十二部第一章　戦雲の歴史その三

「まあ期待しないで待ってみるか？」
「というかハサンから逃げないと駄目かもな」
「国境でのビジネスはもう止めてるしな」
「それが正解だろうな」
青い目の男が言った。
「戦争やるんなら近い可能性があるからな」
「可能性か」
「何時はじまるかはわからないんだな、まだ」
「おいおい、一介のビジネスマンがそこまでわかるかよ」
青い目の男は仲間の言葉に苦笑いを浮かべた。
「わかったらこんなところにいはしないよ」
「それもそうか」
「その時になったら撤収だな」
「そうしたいな。本国に家族がいるしな」
「いいよな、所帯持ちは」
赤い髪の男がウイスキーの男の言葉に苦笑いを浮かべた。
「俺なんか三十過ぎてもまだかみさんもなしだぜ」
「御前は早く結婚しろよ、彼女とよ」
「こっから帰ったらそうするか」
「安全なうちにな」
「そうだな、安全なうちにおさらばだ。外国人はな」
「さて、それで高みの見物といきたいが」
「どうなるのかな、ここも」
「さあな。戦争がないサハラってのもあまりな」
想像がつかないというのだ。何しろ一千年の間常に何処かで戦争があった地域である。今こうして平穏な状態にあるのも実は非常に稀なのだ。サハラはそうした場所なのだ。

「考えられないっていうかな」
「マスタードがないソーセージみたいなものか」
「面白いことを言うな、おい」
皆黄色い髪の男の言葉に思わず笑ってしまった。
「戦争はマスタードかよ」
「ここじゃそんなもんじゃないのか？」
彼は言う。
「今まで滅茶苦茶戦争があっただろ」
「連合の海賊より多いかもな」
「だからだよ。ここはそういうところだしな」
「何か嫌だな、戦争がマスタードみたいについてくるってよ」
「戦争ばっかりだけれどな、そりゃ」
「それも終わるのかね、どっかが統一したら」
「実感沸かないな、どうも」
それは確かにあった。戦争は結局サハラから外れないというのがイメージとして根付いてしまっているのだ。連合にとっての開拓と雑多性、エウロパの貴族主義と共にサハラといえば戦争であった。それとイスラムであるがこれは連合やマウリアにもある。もっともサハラのイスラムは連合やマウリアのそれと比べるとかなりの違いがあるが。具体的に言うと本来のイスラムに近いのである。
「戦争がなくなったらここの産業はかなり発展するだろうな」
「戦争がないとな。確かにな」
「ハサンだってここまでなったのはずっと平和だったしな」
「ハサンはな」
戦争があれば産業活動が制約される。だからこれは当然であった。
「オムダーマンやティムールも最近かなり成長しているらしいしな」
「どれ位だったっけ」
「年で十五パーセント程らしいな」
「またそりゃ凄いな」
この数値は驚くに値するものであった。皆ウイスキーの男の言葉

に驚きを隠せない。
「それだけ今まで戦争で動きが制約されてたってことか」
「そういうことだろうな」
「じゃあだ」
青い目の男がその目を光らせた。
「サハラが統一されて平和になったら」
「すげえ違和感あるな」
「それでもだよ」
そのうえであえて話をしているのだ。
「どうなると思う？」
「大国の誕生だな」
ウイスキーの男が述べた。

## 第二十二部第一章　戦雲の歴史その四

「大国か」
「ああ、こっちで言うと中国に匹敵するだけのな。いや、資源とかを考えたら中国以上になるかもな」
「あの国よりもか」
「それどころかアメリカよりも上になるかもな」
「連合のどの国よりも上になるっていうのか」
「可能性はある。ずっと戦争で産業が発達しなかった」
「技術もな。ただ産業も技術も軍事でだけはかなり凄いことになっている」
サハラの特色となっていた。戦争のせいである。
「それが民間に移転されると」
「やはり大きいな」
「連合との関係だな、問題は」
「友好か敵対か」
二つの対立する言葉がそれぞれ出た。
「どっちにしろサハラを意識しなくてはならなくなってきたな」
「そうだな」
「ここがどうなるか、か」
「それがこっちにも影響を与えるってわけか」
「できれば金儲けに専念したいからな」
「それはな」
ビジネスマンとしては当然の言葉であった。
「戦争で死ぬより仕事でヒイヒイ言っている方がずっといい」
「全くだ」
連合の者らしい言葉であった。やはり戦争は彼等にとっては忌むべきものでありそれで命を落とすというのは馬鹿馬鹿しいことなのである。

「特にサハラは強いからな」
「ずっと戦争してきているしな」
「どう思うよ」
黄色い髪の男が皆に問うた。
「どう思うって？」
「いや、こっちの軍とサハラの軍って。やっぱりかなり違うよな」
「俺達が知ってるハサン軍って弱いって話だぜ」
「いや、それでもだよ」
彼は言う。
「何ていうか連合軍よりもハサン軍の方が強く見えないか？俺の気のせいかな」
「いや、気のせいじゃないな」
それはウイスキーの男が否定した。
「俺達はやっぱり戦争を知らないんだ。エウロパとの戦争だってやばいのは殆ど義勇軍がやっていただろ」
「ああ」
それは損害を見ればわかる。正規軍が百万程度、全体のごく僅かしか死んでいないというのに義勇軍は九百万と一割近くが戦死しているのである。この差が如実に物語っていた。
「義勇軍がなければ損害だってあんなものじゃなかったしな」
「俺達って結局戦争を知らないんだな」
「そういうことになるな」
「それは大きいってわけか」
「ハサンだって戦争を知っているからな」
ウイスキーをまた飲んだ後で述べる。その焼けるような感触が喉を刺激する。
「俺達なんて先年の間ずっと戦争していなかっただろ」
「幸か不幸かな」
「まあ幸福だな。戦争を知らないで済むってことは」
そのかわり宇宙海賊やテロリストといった存在があったがこれは

どの勢力にも存在していた。時としてそれが問題になることがあっても戦争とはまた違うのだ。
「有り難いことだ。だが」
「それがそのまま軍隊に出るってわけか」
「連合軍の兵隊さんの顔見てみればわかるだろ」
またウイスキーを注ぎ込んで述べる。
「あの顔をよ」
「穏やかな顔をしているな」
「ハイスクールから出たばっかりみたいなな」
仲間達は口々に述べる。当然彼等も飲んでいる。
「それで済むんだよ、うちは。けれどここは」
「そうじゃいかないってか」
「それだけそういうことは緊張した世界なんだよ」
そのうえでウイスキーを飲んだ後で語った。サハラをよく知っていた。
「数も兵器の質もこっちが圧倒的だぜ」
「ああ」
「それはな」
如何にサハラ各国が軍事技術を発達させていようともやはり連合の方がそれは上であった。もっとも連合は民間の技術を軍事に転用したパターンが多いのであるが。
「けれどな。将兵の質はな」
「お話にもなりませんってか」
「そういうことだ。戦争を知っているのとそうじゃないのとじゃな」
「勝てるのかよ、俺達」
赤い髪の男が述べた。
「若しその統一されたサハラと戦争したら」
「戦争は数だけれどな」
基本原理である。これは青い目の男の言葉であった。
「数持ってる方が勝つっていうけれどな」

「それでも質があるからな」
ウイスキーの男がここで述べた。
「それが問題なんだよ」
「勝つには勝つけれど苦戦ってところか」
黄色い髪の男が述べた。
「けれど苦戦だったらよ」
「こっちにも犠牲者が出るよな」
「結局戦争はしないに越したことはないってか」
「そうなるか」
皆そういう結論に達しようとしていた。ウイスキーの男もそれは同じであった。
「やっぱり平和がいいぜ」
「安心して金儲けができるしな」
「サハラともな。まあ今まで通りやっていきたいよ」
「好意的中立関係ってところだな」
「そうそう」
「まあ今のところはそれでいけるだろうな」
ウイスキーの男がまた述べた。
「ただ。サハラで何か見つかったら」
「その時は？」
「大変なことになるだろうな」
「戦争もか」
「かもな」
統一されたサハラというのを意識しはじめていた。エウロパとの戦いを終えた連合にとっては新たな対立相手となる可能性を持っている存在であった。彼等はそれを半ば無意識のうちに感じてきていたのであった。

## 第二十二部第一章　戦雲の歴史その五

それは中央政府も各国政府も同じであった。サハラに関する情報が様々なルートで入ってきていた。それをもとにして多くの専門家が分析を行っていた。

それによるとサハラでのオムダーマン、ハサン、ティムールの三国が近いうちに衝突するということであった。これはすぐに結論が出ていた。

「サハラの三国が大規模な衝突かね」

「はい、軍事的な」

キロモトは官邸の一室で食事を採っていた。向かいの席にはカバリエがいる。彼女が外相として自分のスタッフに分析させたものをキロモトに提示したのである。

「ふむ、遂にか」

キロモトはそれを聞いても驚いた様子はなかった。

「予測しておられましたか」

カバリエは大蒜をかなり利かせたビーフステーキを切りながら問う。キロモトのものも同じであった。かなり分厚く、それでいて柔らかい肉であった。

「こちらもスタッフに分析させていたんだ」

「左様ですか」

「それでだ」

キロモトも肉を切っていた。切りながら述べる。

「結論として三国の軍事衝突は出た」

「はい」

「問題はどういう形で起こり、どういった結末を迎えるかだな」

「はじまりも終わりも何パターンか提示されていますが」

「その中で一番現実味があるのはオムダーマン、ティムールが同盟を結びハサンと戦うといったものだな」

「そうですね。地理的状況や国力を考えるとそうなります」
カバリエはステーキを口の中に入れた後で述べた。
「そして結果は」
「長期戦か」
「国力を考えますとそうなるのが必然かと」
「では向こうに滞在している旅行者やビジネスマンは全員引き揚げさせて」
「安全な場所で成り行きを見守るのがいいと思います」
「そうだな。それで考えていこう」
「わかりました」
キロモトは大蒜を口に入れた。赤い大蒜である。これはアルム原産だ。
「さて、最終的にはどちらが勝つかな」
大蒜を食べた後で述べた。
「三国のうち」
「それはまだわかりません。そもそも統一すらも」
「わからないというのか」
「はい。一体どうなるか」
「混沌となっていく可能性もあるな」
「それが一番大きいのではないでしょうか」
カバリエは述べた。
「今までの歴史を踏まえますと」
「サハラの歴史か」
「はい。地球にあった頃から彼等はそれぞれ分かれ争ってきましたし」
「何度か強力な国家は現われたがな」
「統一には至りませんでした」
「アッバース朝もオスマン＝トルコも」
「はい」
なおトルコは今では連合の大国の一つである。かってのオスマン

＝トルコに匹敵する隆盛を誇っているとさえ言われている。連合に参加してよかったというのが彼等の意見だ。
「ああした大国ですら統一は為し得なかった」
「ですからそう容易ではないと思います」
「果たして可能だと思うか？」
キロモトはまた問うた。
「サハラの統一は」
「現実的な視点で述べますと可能ではあります」
「だが」
「はい。その度に何かが起こってきましたから」
「今回もな。わからんな」
こう言うのだった。
「どうなるかは。本当に神のみぞ知ることです」
「彼等の神であるアッラーだけがか」
「全てはアッラーの思し召しといいますが」
「ふむ」
「アッラーが統一を望むのならば統一されるでしょう」
「そして連合にあるどの国よりも強大な国家がまた一つできあがる」
「そうなります」
もう一つはマウリアのことである。実はマウリアは人類世界の中で最も強大な国家なのである。ただその実態が極めて掴みにくいだけである。
「厄介な存在になるだろうか」
「それは双方の思惑次第かと」
「対立すべきか、彼等と」
「何もなければそれは愚です」
きっぱりと言い切った。
「サハラの兵士は強いです」
「精悍で逞しい」
それが連合から見たサハラの者達への評価である。それがそのま

ま彼等の軍隊にも反映されているのである。というよりは軍のイメージがそのままサハラの者達への評価となっていた。

## 第二十二部第一章　戦雲の歴史その六

「そのうえ慣れております」
「戦争を知っている」
「そうです」
「我々はエウロパとの戦争を経験しただけだが」
「彼等は千年の経験があります」
　これが大きいのだ。
「何十世代にも渡って」
「それを考えますと強敵になります」
「戦うべきではないか」
「数と装備では我々の方が圧倒的なのは事実です」
　これは動かしようのない事実であった。連合は四兆。サハラ全土でも二千億しかいないのだ。二十倍の差は歴然としたものであった。
「有事には国境で衝突しても数で防げます」
「それは彼等が攻めてきた場合だな」
「その可能性は殆ど、いえ皆無であると思いますが」
「彼等が相当愚かか、或いは我々が相当愚かな場合にか」
　まず有り得ない話ではあった。国政を預かる人間は流石に極端な無能ではそもそもそこまで辿り着けないからだ。
「国力差も人口差も何もかもが歴然としています。これで攻め込むのは相当な条件が揃ってからです」
「ではそれはないな」
「一応の備えは必要でしょうが」
「では今ハサンとの境になっている場所には防衛ラインを敷いておくか」
「念を入れてそれがよいかと」
「わかった」
　今ここで一つの防衛計画が決定した。後に本格的な審議に入るこ

とになるのであった。
「ではそうしておく」
「はい」
「そして我々が彼等の中に攻め込む場合は」
「深刻な衝突があった場合か若しくはサハラで何か我々にとって利益と成り得るものが発見された場合でしょう」
「あると思うか」
「レアメタルでもあれば」
「ふむ」
キロモトはその言葉を聞いて考える目になった。もうステーキは食べ終えてしまっていた。
「レアメタルか」
「さしあたって連合で採れないものはありませんが」
「だが少ないものや未発見のものはあるだろうな」
「それがサハラで見つかれば」
「やはり欲しいな」
彼は述べた。
「その為には出来るだけ平和的にいきたいが」
「それで話が収まらなければ」
「やはり武力も考慮しなければならないだろう」
政治家としての判断であった。連合の中と外では対処も違ってくる。
内部では話し合いや調停で充分なのだ。あくまで内政だからである。だがサハラが相手となるとそれは外交となる。外交は時として武力も考慮するものである。エウロパとの戦争はその一例である。今まで連合が戦争をしてこなかったのはサハラがほぼ化外の土地でありマウリアとは平穏であったからだ。エウロパとは確かに対立があったが要塞を挟み合ってのことでお互い焦眉でなければ兵を動かさなかっただけなのだ。誰も連合のような巨大な勢力に進んで武力行使を仕掛けたりはしない。彼等の平和は彼等が巨大勢力であるこ

とも大きかったのだ。
「必要ならばな」
「必要とあらばですか」
「そうだ。いざとなれば」
「ですが閣下」
カバリエはここで述べた。

## 第二十二部第一章　戦雲の歴史その七

「サハラの宙形はいずれもかなり複雑です」
「険阻だったな」
「そうです。それは連合とは比較になりません」
「アステロイド帯や磁気嵐、そしてブラックホール」
キロモトは述べた。
「超新星や変色した太陽も多いというな」
「その中での戦いはやはり」
「困難だろうな。だが必要とあらばだ」
「攻めると」
「それも考えなくてはならない。侵略であっても」
「やると」
「それが政治ならばな」
キロモトの言葉はかなり冷徹なものとなっていた。
「間違っているだろうか、それで」
「いえ、私はそうは思いません」
カバリエはキロモトの顔をしかと見て応えた。
「政治はある意味道徳とは無縁の世界です」
「うむ」
「同時に道徳が非常に重要な世界でもありますが」
要するに表と裏なのである。それは簡単には別れてはおらず複雑に入り混じっている。それが政治というものなのである。彼等はそのことを話しているのだ。
「この場合の道徳とは」
「連合に利益をもたらすことでいいな」
「それこそが政治の道徳ですので」
「わかった。それでは」
キロモトは決めた。

「その時になればな。それでだ」
「はい」
「前以って計画を練っておきたい」
「計画をですか」
「それぞれの国との軍事衝突が起こった場合のだ。どうだ」
「そうですね」
カバリエはそれを聞いて考える目をした。それから述べた。
「かってアメリカがやっていたカラープランのようなものですね」
「そうだな」
キロモトはそれに頷いた。
「ああした感じでだ」
「わかりました」
カバリエはその言葉に頷いた。カラープランとはアメリカと衝突する可能性のある国をそれぞれ色で表わして武力衝突が起こった場合にどう対処するべきかを防衛、侵攻両面から考えたものである。アメリカをブルーで表わし、日本はオレンジ、ドイツはブラック、イギリスはゴールドとしていた。アメリカという国の戦略思想を語るうえで欠かせないものである。アメリカという国は宇宙に出る前から冷徹で合理的な国でありこうしたことも考えていっていたのである。
「やっていくか」
「だとすれば我が連合の色は」
「モザイクだな」
キロモトの声が少し笑った。
「そう言うしかないのではないのか？」
「モザイクですか。成程」
カバリエもそれに応えて笑った。そこへデザートがやって来た。
デザートはトルコアイスであった。独特の粘りのあるアイスクリームである。
「何かおあつらえ向きというか」

「トルコは連合の貴重なメンバーですね」
「同じムスリムであっても。そういえばトルコはスンニー派だったな」
「ええ、それだけではありませんが」
トルコは昔から多民族国家でありその数だけの宗教を抱え込んできた。イスラムだけではないのである。あのイェニチェリもキリスト教徒達を徴用したものだったのである。
「ですが主流はそうですね」
「うむ」
「それはサハラと同じです」
「スンニー派といえどもかなり違うな」
「それは確かに」
カバリエもそれに頷いた。

## 第二十二部第一章　戦雲の歴史その八

「今では全くの別物と言っていいまでです」
「同じ派であってもな」
「我々とサハラでは全く違う世界になっているのは事実です」
「そこに攻め込むとなると」
「おそらくエウロパとの戦い以上のものとなるでしょう」
「ではその場合どうするべきか」
キロモトは言う。
「そこも考慮していく必要があるな」
「カラープランにはそれがありませんでしたね」
「アメリカらしいと言えばらしい」
キロモトの言葉は少しシニカルな響きを含んでいた。
「そうしたことを考慮しないのはな」
「あくまで自分達が基準ですから、彼等は」
「君の祖国もそれで大変な目に遭っていたな」
「建国当初ですね」
「うむ。アラモか」
「よくもまああんな蛮行が出来たものです」
カバリエはそう述べて顔を顰めさせた。
「我々の領土に無理矢理移住してきて正義とか言うのですから」
カルフォルニアやテキサスはかってはメキシコ領だったのである。それがアラモの砦の攻防を発端とする米墨戦争によりアメリカ領となった。メキシコはアメリカとの戦争により領土の五分の二を失ったのである。カバリエはそのことを言っているのである。
「宇宙に出てからも」
「メキシコはアメリカと度々衝突してきたな」
「はい」
宇宙に出てからもアメリカとメキシコは何かとあったのである。

旧太平洋の同胞であったがその同胞に対してもアメリカの横暴は相変わらずだったのである。アメリカの横暴なぞはどの国に対しても同じなのであるが。それを一千年続けてきているということにアメリカという国の凄さがある。これは中国とロシアも同じである。連合で横暴な国といえば誰もがこの三国を真っ先に挙げる。
「あんな国でなければよいです」
「大丈夫ではないか？」
キロモトはトルコアイスを口に入れながら述べた。
「ああした国はそうは存在しない」
「ですが連合には三国もあります」
「まあそれは」
カバリエの返答に言葉を少し詰まらせてしまう。
「例外として」
「現実にはその可能性は低いでしょうが」
「低いか」
「米中露はああなるべくしてなった国です」
巨大な力と資源、人口に恵まれ周辺国を圧倒している多民族国家。言うならば帝国であるのだ。
「ですがサハラは」
「比較的統一はされている」
「同じ宗教、同じ文明で」
「うむ。民族も同じか」
「そうですね。混血の結果ですが元々同じアラブ人達でしたから」
「クルド人達もいたな、あそこにも」
「はい」
クルド人の国家は連合に存在している。クルド共和国だ。国を持たなかった彼等は連合に入りそこで国を持ったのである。連合においては中堅国家である。
「しかし混血してそのルーツは消えました」
「彼等は多くの国家に迫害されていたが」

「あれは民族による迫害ではなかったですからね」
「その国の政権に批判的だったからか」
「それだけです。当時のイラクの政権ですが」
二十世紀後半から二十一世紀初頭のイラクの政権はフセイン政権である。所謂独裁者として辣腕を振るった人物だ。批判も多いが見るべきところも多いとされている。他の地域では悪漢であってもアラブでは英雄なのである。なお彼は日本が自分達と敵対してアメリカと手を結んでいることが最後までわからなかったと言われている。口髭がトレードマークでその顔立ちはかなりの美男子でもあった。特に若い頃は端整であった。
「彼等は逆らうクルド人には容赦しませんでした」
「うむ」
それこそ恐ろしいまでの無差別攻撃を加えた。だがそれはクルド人だからではないのだ。
「しかし従うクルド人には寛大でした」
「クルド人だからではなかったのだな」
「自分達に従うか従わないかだけで」
「ある意味わかりやすいな」
「普通の飴と鞭の政策ですね」
そのものであったのだ。他民族に対する政策としては実にオーソドックスである。
「典型的な」
「サハラはそうした問題はないのか」
「一応は同じ民族であるとされていますから」
「ふうむ」
「おそらくは他の勢力よりも」
「我々は言うまでもないな」
「ええ」
連合の雑多性は最早その特徴とまでなっている。

# 第二十二部第一章　戦雲の歴史その九

「マウリアもだ」
「未発見の民族がまだいるそうです」
「あそこはまた特別だな」
「何があるかわからないのがマウリアですから」
「マウリアはマウリアで置いていこう」
「はい」
特別に考えないと混乱や支障をきたすからである。
「エウロパは比較的同質だな」
「そうですね。貴族社会として」
「複数の国家があっても中央の力が強かった」
連合とは全く違う世界だったのである。先の戦争でそれをあらためて認識する形となった。
「サハラはどうなるかな」
「おそらくはかなり強力な中央集権国家になると思われます」
「中央集権国家か」
「ええ。我々とは全く違うような」
「強力な指導者を擁する」
「それを担うのは」
「皇帝だな」
これは不文律であった。サハラを統一したものはその皇帝となる。宇宙に進出した頃より預言であったとされているものである。
「それも絶対的な存在としての皇帝です」
「唯一にして不可侵の存在か」
「そうなるかと」
「そう言われても今一つ実感がないな」
連合の者としての言葉であった。
「そうした存在が出るというのは」

雑多な社会で様々な勢力が錯綜する連合にいるからそう思うのであった。中央政府といえど決して絶対の存在ではないし各国政府にしろそうであるのが連合であるからだ。
「ですが出るとなれば」
「絶対者との戦いか」
「ならば」
「その絶対者を倒せばサハラは終わりだな」
「では」
「一応暗殺もプランに入れるべきか」
目が鋭くなった。
「若しくは無力化を」
「だが。そんなものにかかるとは思えないな」
アイスを口に入れた後で述べた。
「一代でそこまでなった存在がな」
「一応計画に入れておいてよいかと」
「それはな」
自分で言い出したこともあり頷いた。
「国防省に伝えておこう」
「八条長官はあくまで正攻法を得手としますが」
「彼には向かないだろうか」
「案が出ても認めない可能性があります」
カバリエは言った。
「その場合はどうされますか」
「そうだな」
それを聞いてからまた考える目をした。
「それならばもうそれでいいだろう」
「強制はしないと」
「彼がそう判断すればな」
キロモトは答えた。
「それは行わなくてもいいな」

「暗殺はお嫌いでしたか」
「どうもな」
自分でもそれを認めた。
「好きにはなれないのは事実だ」
「左様ですか」
「それでだ」
彼はさらに言う。
「やはり強力な権限を持っているとよくあるスキャンダル工作も効果がないか」
これで政敵の影響力を削いだり失脚させたりといったことが多い。暗殺をしなくともこういった手段で目的を果たす場合も多いのである。
「どうなのだろう」
「それは期待薄だと思われます」
カバリエはそれにも述べた。
「若しあっても揉み消されます」
「そうか、やはりな」
「絶対者というのは完璧であることを求められますから」
「生きた神話というわけだな」
あえてこの表現となる。
「そういうことになりますね」
「ヒトラー然り、スターリン然り」
「何か穢れがあってはならない存在なのです」
「そうなるとだ」
「はい」
その言葉に頷く。
「スキャンダル等で貶める方法も効果がない」
「そういうことになります」
「では有事の際は失脚させるのではなく」
「正面から倒すしかないかと」

「わかった」
キロモトはそこまで聞いたうえで頷いた。
「ではそうするとしよう」
「それでは」
「戦争を念頭に置いたプランを立てていく」
結論はそれであった。
「これからは各国との衝突の際も考えていかなければな。中央軍を使っての」
「そうですね。エウロパだけが相手ではありませんから」
「そういうことだな。それでは」
丁度デザートを食べ終えた。
「帰るとしようか」
「わかりました。では」
「ところで」
「何でしょうか」
ここでキロモトはまた声をかけてきた。
「外務省は最近どうなのかね」
「こちらですか」
「そうだ。静かなようだが」
「いえ、実はあまりそうではありません」
否定するのだった。
「サハラ関連でか」
「只今水面下で何かと調査中です。それによっては」
「また動くというのか」
「さしあたっては動向を注視ですね」
彼女は述べた。
「それからです。ですが動く準備は」
「整えておいた方がいいな」
「はい」
「そういうことか。それでは」

「そのラインで」
「うむ」
話は終わった。カバリエはその日は自宅に帰った。そこで夫と二人の子供達のもとへと帰った。兄と妹の組み合わせである。兄は夫の、妹は自分の名を受け継いでいる。ラテン系では昔から親が自分の名前を子供につけることがあった。それをそのまま使ったのである。

## 第二十二部第一章　戦雲の歴史その十

連合中央政府がサハラの動きを注視しだしていた頃エウロパにおいても同じ動きが見られた。彼等もまたサハラの動向を注視していたのだ。
「こちらに兵は向けるつもりはないのだな」
「どうやら」
プロコフィエフが作戦指導室においてシュバルツブルグ、モンサルヴァートに説明を行っていた。前の三次元ホノグラフィーにはサハラ全土の地図が浮かび上がっている。
「その兵をハサンとの国境に向けております」
「ふむ」
シュバルツブルグはその言葉を聞いてまずは一言漏らした。
「むしろ我々に対しては最低限の備えしかしなくなっております」
「そしてその分をハサンにだな」
「それから考えられることは」
「ハサンとの戦争だな」
「それが最も可能性が高いかと」
プロコフィエフは述べた。
「好都合といえば好都合だな」
シュバルツブルグの次の言葉はこうであった。
「彼等がその中で争っているうちに」
「ええ」
「我々は力を回復させよう。今のうちに」
「新たな軍備計画ですが」
ここでモンサルヴァートが口を開いた。プロコフィエフは立っておりモンサルヴァートはシュバルツブルグと向かい合って座っていた。
「今我々は三百五十個艦隊を基幹戦力としております」

「そうだったな」
連合との戦いでそこまで減らされたのである。総動員して集めた五百個艦隊はその三割を失うという大きなダメージを受けていたのだ。
「それは現状維持とします」
「減らさないのか」
「はい。急激には減らしません」
モンサルヴァートはシュバルツブルグにそう答えた。
「それよりも」
「それよりも？」
「ニーベルングの割譲、そしてその周辺の非武装化への対処を行いたいのです」
「ニーベルング周辺か」
「今まではニーベルングという大きな存在があったのですがそれがなくなりましたので」
彼は述べる。
「それにかわる存在としてそれだけの規模の戦力が必要だと思われます」
「成程な」
シュバルツブルグはそれを聞いたうえで頷いた。
「それでは」
「ですからこれだけの規模の艦隊が必要となります」
「ニーベルングの穴は大きいか」
「残念ながら」
モンサルヴァートは苦さが混じった声で答えた。
「おそらくはそれが連合の狙いだったのでしょう」
プロコフィエフも述べた。
「今まで我等の防衛の基幹はやはりあの要塞でしたから」
「それがなくなったどころか敵の前線となった」
「その違いはあまりにも大きいものです」

「参ったものだ」
シュバルツブルグはあらためて述べた。
「このようなことをされるとはな」
「非武装地帯もありますし」
「全ては計算づくというわけか。連合もよく考えてくれた」
「閣下、そのうえで」
モンサルヴァートがここでまた述べた。
「これからの防衛計画はそれまでのものとは全く違ったものとなります」
「わかった。それでだ」
「はい」
「その三百五十個艦隊をどちらに重点的に振り向けるべきだと思うか」
「やはり連合側です」
モンサルヴァートの返事は既に決まっていた。

## 第二十二部第一章　戦雲の歴史その十一

「彼等を何とかすることからはじめなければ」
「既に回廊にも基地を建設にかかっているそうです」
プロコフィエフも報告した。
「その規模は」
「中継基地だそうですが」
「我々の基準ならば相当なものだな」
「おそらくは」
彼女も答える。
「ガンタースとニーベルング、そしてその中継基地での三重の備えか」
「連合の力を使えば容易いということでしょうか」
「そういうことだろうな。戦争は国力だ」
彼は言った。
「特に連合は。それを使った戦争を仕掛けてきた」
「ええ」
それこそが彼等エウロパとの全面戦争であった。エウロパはその圧倒的な戦力差、国力差に対して敗れたのである。それは誰の目にも明らかであった。
「今度はそれを防衛に使ってきている」
「そうです。だからこそ」
プロフィエフは述べた。
「脅威なのです」
「圧倒的な脅威だ」
シュバルツブルグはまた述べた。
「数の差がな。それがはっきりと出ている」
「はい」
「守る為にはこちらも兵が必要だ」

「その為にはやはり三百五十個艦隊が」
「必要だというのだな」
「そう考えております」
「わかった」
シュバルツブルグはモンサルヴァートの言葉に頷いた。
「では私はそれでいい」
「では」
「そうだ。軍事関連が以前と比べてかなりの負担になるがな。止むを得まい」
「エウロパを守る為には」
「うむ。そしてだ」
話はさらに続く。
「防衛ラインはどうなるか」
「まずは先の防衛ラインですが」
モンサルヴァートは戦争前の防衛ラインについて述べた。彼が計画して築き上げたものである。これは連合の侵攻を大幅に弱めたとされている。
「その殆どが連合軍によって破壊されてしまいました」
「そうなのか、やはりな」
「それで考えますに」
「再建するか？」
「いえ」
それは否定した。
「あの時とはまた事情が違います。従って」
「新たなものを築きなおすのか」
「そう考えております」
彼は答えた。
「まず先の防衛計画はニーベルング要塞に頼らないことを前提としていましたが」
「エウロパ全体の防衛だったな」

「これはそのまま受け継ぎます」
「やはりエウロパ全土の防衛か」
「はい。やはり一つのものに頼り切るのは危険でありますので」
彼は言う。
「ここは全体として考えるのが妥当であると思われますが」
「確かにな」
シュバルツブルグはそれに頷いた。
「それはいいと思う」
「はい」
「だが」
ここで彼は付け加えてきた。
「それだけではないな」
「状況が変わっています。それが影響するのは事実です」
「ふむ」
それを聞いて考える目を作る。
「この場合はニーベルングの喪失と非武装地帯ですが」
「だからその周りに築くというのだな」
「それもあります」
彼は述べた。
「そして」
さらに話を続ける。
「オリンポスまで多重に築きます。これは先と同じですが」
「違いがあるのか？」
「はい。今までは陣地には重点を置いていませんでした。艦隊運営を念頭に置いておりましたが」
「それを変えるというのだな」
「艦隊運営はそのままです」
変えるというのではないと明言した。

## 第二十二部第一章　戦雲の歴史その十二

「しかし」
「ふむ、では陣地も並行させていくと」
「そうです。重厚な要塞線を築き上げます。艦隊だけでなく」
「成程な。犠牲を強いるか」
顔を曇らせつつ述べる。
「コロニーレーザー等を増やすだけでなくその連携も強化しまして」
「彼等が進めなくしていくというのだな」
「それを考えています。如何でしょうか」
「悪くはない」
シュバルツブルグもそれに賛同の意を示した。
「むしろいい。おそらくこれで大丈夫だろう」
「有り難うございます」
「しかしだ」
だがここで付け加えてきた。
「先の戦いでも我々は出来うる限りの防衛をしてきた」
「はい」
「だが結果としてそれ等は全て突破された。連合軍の圧倒的な物量と技術の前にな」
「ええ」
当然ながらそれを忘れるモンサルヴァートではなかった。深刻な表情で頷いた。
「ニーベルングでもそうだった。機雷源も突破されたし無人艦隊と火力で突破されていった」
このことはエウロパ軍にとっては決して忘れられるものではない。難攻不落と言われたニーベルング要塞のまさかの陥落であったからだ。
「それからもな。同じだった」

「その物量により」
「全てが押し切られた。ニョルズにおいても」
「あの戦いではテューポーンを退けられました」
「巨神もな。彼等の前にはかたなしだったな」
「残念ながら」
「あの時私はこれで防げると確信していた」
その時のことを述懐して述べた。あの時彼はエウロパ軍の総指揮官だったのだ。
「だが。それは無残にも打ち砕かれた」
「連合軍のあの火力の前に」
「巨大戦艦が一千隻だ」
彼は言う。
「その集中砲火により。呆気なく動きを停止してしまった」
「二十世紀のクリミアの戦いのように」
「あの戦いか」
モンサルヴァートの言葉に目が光る。
「独ソ戦の一幕だったな」
「はい」
「セバストポリ要塞ですね」
プロコフィエフも述べた。
「そうだな。あの要塞攻略戦だ」
「圧倒的な火力で粉砕していく。まさにそれでした」
「我々はそれに敗れた。数が違い過ぎた」
「数ですか、やはり」
「戦争は数だ」
シュバルツブルグはそれを強調する。
「彼等を相手にするにはまずそれだが」
「それには限度があります」
モンサルヴァートの言葉は現実を見据えたものであったがそれだけに空しさが漂っていた。

「ですが数となると」
「連合には勝てないか」
「彼等は今四兆の人口を誇っております」
「また増えたのだったな」
それを溜息と共に言う。
「はい。このままいけば百年後には十兆に達すると思われます」
「我々は精々千二百億か。これでも一杯だな」
「はい。人口差はどうしようもありません」
「それで勝てると思うか」
「困難なのは事実です」
あまりにも無慈悲な差であった。広大な連合に対してエウロパは余りにも狭い。それだけでエウロパという勢力の苦しさが伝わる程にまで。
「しかし」
「やらなければならないな」
「そう考えます」
「それでだ」
シュバルツブルグはまた述べた。
「その四兆の人口でだな」
「はい」
モンサルヴァートは頷いてからまた述べた。
「今度はその兵力を百三十億にまで増やすようです」
「百三十億か」
「後方を強化したうえで」
連合軍は後方にもかなり重点を置いている軍なのである。
「恐ろしい数だ。それで攻め込んで来るのだな」
「そうです」
「それを防ぐとなると。やはり陣地の整備も重要だな」
「ここでポイントとなる部分ですが」
「何処だ？」

プロコフィエフの言葉に目を向けさせた。
「やはりオリンポスです」
「ふむ」
その言葉にシュバルツブルグは大いに納得した顔を見せた。それから述べた。

## 第二十二部第一章　戦雲の歴史その十三

「やはりそうなるか」
「はい、首都を第一の要とするべきかと存じます」
「そうだな。そうあるべきだ」
「有り難うございます。今回の防衛計画は二つの軸から成っていますので」
「艦隊と陣地だな」
「そうです」
今度はモンサルヴァートが答えた。
「如何でしょうか」
「それでいい」
シュバルツブルグはそれを即座に認めた。
「だがな」
「はい」
「それだけでは。まだ不十分ではないのか」
「といいますと」
「要塞だ」
彼は言った。
「防衛拠点を設けていかなければならないと思うのだが。どうだ」
「それでしたら」
モンサルヴァートはそれにも述べた。
「複数のポイントに今数々の要塞を設ける計画も入れようと考えています」
「複数か」
「はい、それ等の要塞をそれぞれにリンクさせ」
「全体的な防衛ネットワークを築き上げるのだな」
「それでどうでしょうか」
「考えたな」

シュバルツブルグもそこまでは考えていなかった。思わず唸った。
「そこまで考えていたとは」
「先の戦争では将兵の奮戦に頼るしかありませんでしたので」
少なくともその奮戦と規律においてエウロパ軍は批判されるようなことはなかった。その殆ど全員が勇敢で怖れを知らぬ素晴らしい戦士達であった。それは敵であるエウロパ軍も認めるところであった。
「ですから今度は。陣地と要塞も含めた防衛ラインを築き」
「より堅固なものにするというのだな」
「そうです。これは前回の反省ですが」
「うむ」
「前回は艦隊の的確な運営と移動に重点を置いておりました」
「あれは非常に助かったぞ」
シュバルツブルグはほんの微かに笑ってそれに応えた。これは事実である。モンサルヴァートが整備した防衛ラインによりエウロパ軍は合理的に守れたのである。
「ですがそれだけではなく」
「今度はそうしたことも含めてか」
「そう考えております」
「いいぞ、それは」
「はい」
「ですが本部長」
ここでプロコフィエフが話に入ってきた。
「どうした？」
「一つ問題がありますが」
「予算か」
「はい。それだけのものを築き上げるとすればかなりの予算が予想されます。ですが今のエウロパは」
「余計な力がないな」
「残念なことに。復興にもかなりの力が必要ですし」

それはエウロパにいれば誰もが知っていることである。敗戦のダメージはかなりのものなのである。連合軍が経済活動に関しては市民の生活を守るという意味で手をつけなかったので餓えやそうしたことは一切なく、民生は安定していたがそれでもダメージは大きいのである。
「それを考えますとそれだけの予算は」
「難しいか」
「私はそう思います」
プロコフィエフは述べた。
「確かにそれでエウロパ全土の防衛力は飛躍的に上昇するものと思われますが」
「予算がなければ。どうにもならないか」
「はい。全ては予算です」
冷徹な言葉に聞こえた。
「それのない軍隊は意味のない存在です」
「厳しいな、現実は」
シュバルツブルグはそれを聞いてあらためて述べた。
「ではエウロパを守ることはできないのか」
「そこまでは言いませんがやはりその計画を完璧に果たすのは無理かと思います」
「どうしたものかな」
「そうですね」
モンサルヴァートは難しい顔をしながらまた述べた。
「ここは最も予算のかかる要塞ネットワークを諦めるしかないですか」
「それをか」
「はい。後は陣地ですがこれは比較的低予算で進められますので」
「ふむ」
「それと艦隊運営に集中させようかと。如何でしょうか」
「そうだな」

シュバルツブルグはそれを聞いて考える目をした。それから述べた。
「悪くはないな。それしかないのだろうし」
「では」
「だが考えていきたいな」
それでもシュバルツブルグは要塞の方に未練を見せた。
「要塞を使った防衛ネットワークの方は。一応計画は立て続けてくれ」
「わかりました」
モンサルヴァートもそれに頷く。
「それではそのように」
「頼むぞ。それでだ」
「はい」
話はさらに進んだ。
「これは主に連合軍を意識したものだな」
「そうです」
即座に返答が返って来た。

## 第二十二部第一章　戦雲の歴史その十四

「その為非武装地帯周辺にもかなりの備えを置きます」
「やはりな」
「今のところサハラ方面の備えはモントローズ星系を非武装化されましたのでガラ空きとなっています。ですが」
「ですが」
　こう前置きしたうえでまた答える。
「そのままにしておいてはならないのもわかっているつもりです」
「ではどうする？」
「そこにもオリンポスから多重に連なる防衛ラインを築き上げます」
「多重か」
「はい」
　答えてからまた述べる。
「やはり艦隊運営と陣地を組み合わせたもので」
「そこにできれば要塞をか」
「そう考えております」
「サハラの将兵は連合軍と比べて戦争を知っている」
「ええ」
　これは彼等もよくわかっていた。かってはサハラ北方で幾度も戦ってきたからである。そのことは因縁にもなっており根が深い話である。
「だが数は連合軍程ではない。そして兵器は攻撃力、防御力より機動力を優先させている」
「そこは我々と似ていると言えます」
「その似た兵器への対処だが」
「連合軍への備えはコロニーレーザー等を重点的に配備しようと考えております」
　圧倒的な火力を、である。連合軍の艦艇のあまりもの防御力、生

存能力の高さに苦労させられた実績からである。それ程までに連合軍の艦艇の堅固さは凄いものだったのである。なお連合軍の艦艇はそれに加えて射程、攻撃力、電子能力や索敵能力でも相当な差をエウロパ軍に対してつけていた。エウロパ軍が勝っているのは機動力だけであると言っても過言ではなかったのである。
「それで一気に」
「吹き飛ばしていくというのだな」
「あの鎧を叩き潰すにはそれしかないかと」
「成程な、確かに」
「彼等は言うならば重装歩兵です。それを倒すとなると」
「そうした重火力が一番だな」
「そう考えます」
プロコフィエフも己の考えを述べてみせた。ひそかに。
「そしてサハラに対しては」
「機動力を考慮した兵器を配備していきます」
モンサルヴァートは述べた。
「無論要塞も配置していきますが」
「それで彼等への備えとするか」
「どうでしょうか、これで」
「それでいくべきだ」
シュバルツブルグは言った。
「それもよく考えられているな」
「有り難うございます。やはりそれぞれの勢力の性質を考えまして」
「ふむ」
「計画したものです。スタッフには苦労をかけましたが」
「だが苦労しなくてはエウロパは守れない」
またしても厳然たる事実がそこに現われた。
「そうではないのか」
「確かに」
「その通りです」

二人もまたそれに頷くしかなかった。
「正直苦労しても守れるかどうかだ」
「ええ」
この言葉にも頷くしかなかった。それだけエウロパは苦しいのだ。
「しかしだ」
「はい」
「それでもやるしかないのもまた事実だ」
「それが我々の務めですから」
「そうだ、務めだ」
シュバルツブルグもそれを強調した。
「それをせずして軍人ではない」
「また貴族でもない」
「我々は何だと問われたらどう返事をするか」
「やはり貴族でしょう」
プロコフィエフの言葉は決まっていた。

## 第二十二部第一章　戦雲の歴史その十五

「そう答えるしかありません。グン人でもありますがそれよりも前に」
「そう、貴族だ」
彼等はアイデンティティはそれなのだ。貴族であること、これが最も重要なのである。
「貴族だからこそ」
「責務を果たさなくてはならない」
「我々にとっての責務は軍だ」
シュバルツブルグはそれを強調する。
「それだからこそ。今もまた」
「せずにはいられません」
「わかってくれていればいい。それにしてもだ」
「何でしょうか」
「数がな」
言うのはそこであった。
「圧倒的過ぎるな」
「数ですか」
「今で我々は一杯だ。集められてこれだけだ」
「ええ」
かつてのように市民を総動員して戦うといったことは不可能な時代になっていたのだ。軍人は高度な専門職であり宇宙を行き来するのだ。それで中学生に銃を持たせて兵士とするようなことは不可能になっていたのだ。だからエウロパでは志願制なのだ。サハラの徴兵制もその殆どが選抜徴兵制である。優れた人間を選んで専門職にするのである。
「だが連合は違うな」
「百三十億です」

「それだけの規模の軍隊を保有した例は今までない」
「ええ」
「それだけの数を防げるかだ。問題は」
「ただ、ここで問題になるのは」
「何か」
モンサルヴァートの言葉に顔を向けさせた。
「連合に対しては決して勝つ必要はないと存じます」
「それはどういうことか」
シュバルツブルグには耳慣れない言葉であった。眉を少し顰めさせた。
「連合は大衆社会です」
「うむ」
最早言うまでもないことであった。エウロパの感覚では全員が平民という社会である。彼等にはどうもピンとこない世界なのである。
「かつ民主主義国家です」
「我々と同じだが」
「階級のない大衆社会でもあるからこそここでやり方が生じます」
「それは一体」
「損害です」
「損害！？」
「はい、連合軍が最も恐れるのは正規軍の消耗です」
モンサルヴァートは述べた。
「彼等にとってはそれこそが最も恐ろしいことなのです」
「敗戦よりもか」
「敗北は取り返せますが損害は取り返せない。そう考えているようです」
「確かにな」
これはシュバルツブルグもわかった。
「死んだ将兵は帰っては来ない。ヴァルハラへ旅立ってしまう」
「その通りです。だからこそ連合軍は」

「あれだけダメージコントロール、防御、そして生存能力を重視した設計の艦艇を使っているのか」
「おそらくは。あの索敵能力も」
それについても述べられた。
「全ては生きる為か」
「戦場でも損害を出さない。これが彼等の考えです」
「随分虫のいい考えではあるな」
シュバルツブルグはそれこまで聞いて述べた。

# 第二十二部第一章　戦雲の歴史その十六

「戦争で死にたくないというのは。戦死もまた名誉だというのに」
「彼等の考えではそうではありません」
「平民の考えか」
「少なくとも我々とは違います」
エウロパ貴族とは違うということである。連合軍の軍人達とエウロパ貴族達の考えもまた全く違っているのである。これが立場の違いでもあった。
「損害が出ればそれで志願者が減りますし」
「それもわからんな」
シュバルツブルグは今度は首を傾げさせた。
「軍を名誉とは考えないのか」
「彼等にとっては仕事の一つでしかないのです」
今度はプロコフィエフが述べた。
「軍人というものも」
「ドライだな。いや、これも考えの相違か」
「そうなります」
プロコフィエフはそう返した。
「かなりの相違ではあります」
「そうだな。正直驚いている」
彼はまた述べた。
「これ程まで違うとは」
「それで」
モンサルヴァートの言葉はさらに続く。
「損害が多ければそれが政治家への批判に直結します」
「それはわかる」
これはシュバルツブルグもわかった。彼は軍務相という政治家でもあるからだ。エウロパでは現役武官であっても政治家になる場合

があるのである。連合の様に完全な文民主義ではないのである。八条は軍人出身であるが退役している。だから文民となるのである。
「遺族達が黙っていないだろう」
「だからです。政治家達もそうしたことで自身の評判を落としたくはないですから」
「選挙にも影響しかねないからな」
「そういうことです。ですから」
また言う。
「損害を恐れるというのか」
「連合軍に対してはそれだけのものを見せればよいのです。無論本気で守るつもりで」
「損害の覚悟を認識させるか」
「はい」
それこそがモンサルヴァートの連合への防衛戦略なのであった。彼は連合の性質を見切った上でそう計画してきたのである。慧眼と言うべきであった。
「如何でしょうか」
「見事だ」
シュバルツブルグはそれを見ていた。
「思えばそうだったな、先の戦いでも」
「ええ」
「ニーベルングの時の無人艦隊、そして義勇軍」
「そうした存在もこうした背景があるのでしょう」
「だがその場合もやはり義勇軍が出て来るのではないのか」
シュバルツブルグは問うた。
「正規軍の前面には常に彼等がいるのだからな」
「それはもう想定しております」
モンサルヴァートは述べた。
「ですからまずは彼等を減らし後方にいる正規軍が露わにならざるを得ないようにするのです。それを意識させるだけで我々の勝利で

す」
「勝利か」
「戦場で勝つだけが戦いではありません」
時として戦略的勝利は戦場以外でも得られるものなのだ。戦術的勝利とはそこが違うのだ。
「ですから」
「よし、わかった」
シュバルツブルグはそれに頷いた。
「ではそれでいこう。連合に対してはな」
「はっ」
モンサルヴァートはその言葉を受けて一礼した。
「わかりました」
「軍としてはこれで行こう。財務省や総統が何と言われるかわからないが」
「かなりの議論になると思います」
それはモンサルヴァートも承知している。
「しかし」
「これ位しなければな。無理だろうからな」
「その通りです。ですから」
「だが。財務省にも事情があるからな」
これが一番の問題であった。
「彼等は決して邪悪な存在ではないのだ」
「ええ」
あくまで彼等の立場で動き軍務省と対立しているのである。それだけだ。それだけのことで互いに嫌い合うのであるがこれはどの国でも同じである。財務省にとって軍隊とはとてつもない金喰い虫で予算編成のうえでの深刻な問題なのだ。支出ばかりで収入もない。厄介な存在だと認識しているのだ。
「それだからこそでもある」
シュバルツブルグは口を真一文字にして言う。

「何とかして予算を回してもらわないとな。さもないと」
「エウロパを守りきれません」
「問題は彼等にも正当な反論があるということです」
プロコフィエフがまた述べた。
「他の部門に財政を回してそれを復興にあてるという」
「そうなのだ」
それがわからぬシュバルツブルグではなかった。だからこそ頷いたのだ。
「難しい。復興も必要だ」
「我々は今建国以来の国難にいます」
モンサルヴァートはその彫刻の様な端整な顔に暗い影を落とさせていた。
「それを乗り越えるのはやはり困難なもののようです」
「だが乗り越えなくては」
シュバルツブルグは言う。
「何ともならないぞ」
「はい」
「必ずや」
二人はそれに応える。
「多少の無理は承知だ。何としても防衛計画を実行に移さなくては」
シュバルツブルグの考えはこうであった。今エウロパは他者に関わっている余裕はなかった。まずは自分達に関してであった。それはサハラ側からもはっきりと見て取れていたのであった。

## 第二十二部第一章　戦雲の歴史その十七

「さて、エウロパだが」
ティムールの首都にある空中庭園。文字通り宙に浮かぶこの庭園は建物をそのまま宙に浮かしているのだ。その中にシャイターンはいた。幕僚達と花々を前に優雅にワインを楽しんでいた。彼が好むワインの飲み方の一つである。実は彼は花を愛しているのだ。このことはサハラ、とりわけティムールでは有名になっており彼に花を献上する市民達も多い。意外な趣味だという意見もあるがその反面非常に似合っている、相応しいといった意見も存在している。どちらかというと後者の方が多い。
「今は動かぬ」
「動かないのですか」
「そうだ」
彼は安楽椅子に座っていた。そこで噴水のせせらぎと赤や黄色の花々を眺めている。紅のワインがその喉を潤すのであった。ワインの濃厚な味が口の中だけでなく彼の心全てを支配していく。そのえも言われぬ高揚感を楽しみつつ話すのであった。
「今はな。到底無理だ」
「やはり戦争の結果ですか」
「それ以外に理由はない」
彼は述べた。
「違うか」
「いえ」
幕僚達はそれには異を唱えなかった。彼の言う通りであったからだ。
「だからこそ好機なのだ」
次に彼はこう述べた。
「動くにはな。今だ」

「それではいよいよ」
「そうだ。兵は整っているな」
幕僚達に問う。
「勿論です」
「何時でも」
「そうか、何時でもか」
その報告を聞いて満足気に笑う。笑みに何かを企むものが浮かんだ。
「目標はわかっているな」
「はい」
幕僚達はまた答えた。
「ハサンです」
「違うな」
だがシャイターンはそれは間違いだと述べた。
「違うのですか？」
「そうだ。ハサンだけではない」
彼は言う。
「私の望みは何だ？」
グラスを手にしたまま幕僚達に顔を向けて問う。
「答えてみよ。私は何を望んでいる？」
「サハラです」
幕僚の一人が答えた。
「このサハラ全て。そうではないのですか」
「その通りだ」
その言葉にまた満足気な笑みになった。
「わかっているではないか。それでは」
「ええ」
今度は誰もが彼が次に何を言うのかわかった。それだけの鋭さは彼等も備えていた。そうでなくてはシャイターンに側に置かれる筈もなかった。

「サハラ統一の為に計画を立てよ。よいな」
「はっ」
「それでは今より」
「皇帝になるのは私だ」
シャイターンはこうも言った。
「私以外にはない。よいな」
「御意」
「では今から」
「ハサンはその段階の一つに過ぎない」
彼にとってはサハラ最大の国家もその程度の存在でしかなかった。
「むしろその後が問題なのだ」
「その後こそがですか」
「そうだ。これまでにない大きな戦いになる」
彼は今それを感じていた。

## 第二十二部第一章　戦雲の歴史その十八

「そしてそれに勝ち抜いた者こそが」
「サハラの覇者となると」
「マウリア朝崩壊より一つになることのなかった砂漠の民はようやくここで一つになるのだ」
その目に鋭い光が宿っていた。
「私の手によりな。そして貴官等は」
「はい」
幕僚達は彼の言葉に応える。
「その名を歴史に永遠に名を残すこととなる。サハラに統一と繁栄をもたらせた栄光の戦士として」
「かってのマムルークの様に」
「マムルークか」
十字軍と果敢に戦った戦士達である。元々は白人の子弟の奴隷を戦士にしたものである。当時のイスラム社会ではムスリムになれば奴隷ではなくなるので奴隷出身と呼ぶべきであるが。イスラム社会の奴隷に対する考え方はかなり寛容であった。オスマン＝トルコにおいても奴隷になってもムスリムに改宗すれば許してもらえた。これをイスラムの普及にも役立てたのは言うまでもない。
「違うだ」
だがシャイターンはそれも否定した。
「違うと言われるのですか」
「あのマムルークとも」
「諸君等はより誇り高く素晴らしい戦士だ」
シャイターンは目の前にいる幕僚達をこう評した。
「マムルークよりもな。だからこそ」
そしてまた言った。
「私も満足に戦えるのだ」

「主席・・・・・・」
「そこまで我等を」
「ではすぐに取り掛かってくれ」
彼は命じた。
「サハラを私の下に統べる戦略をな。よいな」
「わかりました」
「それでは今から」
「頼むぞ。おそらく最後の相手は」
彼の目は今度は未来を見ていた。
「彼等だ。あらゆる方面から調査も行え」
「了解」
「戦術も宙形も兵器もそして人もだ」
ありとあらゆるものを調べ上げてから戦略を組み立てていく。これは戦争の基本であった。シャイターンもまたそれを忠実に守っていた。だがそれだけではなくそこに天才も備わるのが彼であるが。
「よいな」
「まずはそれからですか」
「ハサンはもう終っているな」
「はい」
「最新のデータも既に入手しております」
「よい。ハサンにはこれで間違いなく勝てる」
彼は勝利もまた見ていた。
「ハサンはな」
「ハサンも今戦力を必死に増強してきています」
幕僚の一人が述べた。
「属国も動員して」
「当然だな」
シャイターンはそれを聞いても平然としていた。
「彼等とても敗れるわけにはいかない」
「確かに」

「ハサンもまたサハラの統一を考えているということでしょうか」
「それはある」
シャイターンはそれに応えた。

## 第二十二部第一章　戦雲の歴史その十九

「しかしな」
「そこに何かあるのですか」
「彼等はそれ以上に現状維持を望んでいるようだな」
「統一よりもそちらだと」
「今のままで満足しているのだ」
シャイターンは言った。あっさりとした言葉であったがそこには侮蔑もあった。どうやらハサンのそうした野心のなさに対して失望もしているようである。野心がないということはそれだけで面白くとも何ともないものであると考えているかのようであった。
「本来ならより勢力圏を拡げていた」
「確かに」
「ハサンはそれが可能でした」
「しかしだ」
シャイターンはさらに述べた。
「彼等はそれをしなかった。そして」
「安穏としていた、ですか」
「それが決して悪いとは言わないがな」
それは認めていた。そうした国家運営の仕方もあるということは彼もわかっていた。侵略し、無限に膨張していくことは不可能なのである。連合としても常に拡大していっているわけではないのだ。
「だがそれが我等には」
「有利になっていると」
「ハサンが北に介入していればここまで容易にはならなかった」
「確かに」
幕僚達はそれに頷く。
「エウロパ総督府だけでしたから、我等の相手は」
「オムダーマンに対してもハサンは動かなかったな」

これも事実であった。
「やはり動いていればそれで今のサハラはなかっただろう」
この三国鼎立の状態はハサンが作り出したと言っているのである。
それは確かに真理であった。
「それはその時のハサンにとっては別によかった。だが」
「さて、問題はこれからですな」
「そうだ」
シャイターンは幕僚の一人の言葉に頷く。
「ハサンにとってもな」
「ハサンは総動員令をかけ予備兵力まで動員しております」
「艦艇も既にかなりの数が」
「面白くなってきたではないか」
シャイターンはその報告に何故か満足していた。
「これからだ、全てが決する」
そして言う。
「誰がサハラの覇者となるかはな。全軍に伝えよ」
立ち上がった。
「第一種戦闘配備につけと。よいな」
「はっ」
「わかりました」
幕僚達はそれに応えて敬礼する。
「サハラを統べる者は既に決まっている」
彼にとってはそれは最早定められた未来であった。
「後は。その座につくだけだ」
「ティムールの為に」
「シャイターン主席の為に」
幕僚達は口々にこう述べる。シャイターンの野望に燃える目には遥かな戦火が見えていた。
彼の野望が何処にあるのかは彼だけが知っている。それを他者に見せることは決してない。だが彼はそこにあるものを必ず掴み取る

ことを確信していた。他ならぬ己自身の手によって。

# 第二十二部第二章　のどかな王様その一

のどかな王様

サハラに戦雲が近付いている頃既に連合では終戦気分、勝ち戦ムードは終わろうとしていた。それは大国の一つケベック王国においても同じであった。

この国はカナダからフランス系市民が独立したのがはじまりである。彼等の努力と領有する星系の豊かさで大国となり今ではかって同胞であったカナダと同等とも言われる存在になっていた。国家元首はその時カナダにいたブルボン家の人物を王に迎えている。フランス系が多い国でブルボン家の王を頂くというのは昔に戻るようであった。

フランス系の多さとブルボン家、そして気位の高さから彼等は『連合のフランス』と言われることもある。だが決して嫌われてはいない。

とりわけ王室は。ケベック王室は各国の王室と仲がよくその関係は良好であった。とりわけ今の国王ルイ八十世はおおらかで良心的な王として人気がある。

彼は取り立てて取り柄のある男ではない。太っていて決して美男子ではない。鈍重そうな外見で声もやたらとかん高い。善人だがあまり鋭い男ではなくのんびりとした性格である。だが象徴としての王としては及第点の人物であった。

彼の趣味は狩猟、そして食事である。とりわけ食事が好きで大食漢として知られている。

「デブの王様」

絶対王政の時代ならそれだけで不敬罪になりかねない仇名で呼ばれる。彼は市民からもそう呼ばれている。だがそれに決して怒ることはなかった。

「王様、ダイエットされたらどうですか？」

ある時彼は行事に参加した後で市民の一人にこう言われた。
「痩せられた方がいいですよ」
「そうそう、さもないと健康にもよくないですよ」
「そんなことを言われても困るよ」
何と王は周りの者達がそのあまりにも不敬な言葉に顔を顰めているところに自分で言葉を返してきた。
「僕だってスポーツはやっているんだよ。だから健康に不安はないんだ」
「けれどお身体はまるでビア樽みたいで」
「歩くのもおっくうで」
「大丈夫、脂肪率はチェックしているから」
これが一国の王、しかも連合においても屈指の名門とされているブルボン家の主の言葉である。
「四十まではいっていないよ」
「それが駄目なんですよ」
「三十二までいかないと」
市民達はまた言う。実に口が悪い。
「そんなに痩せたら死んじゃうよ」
王は彼等の言葉に目を丸くさせる。
「腹ペコになって」
「ダイエットになっていいじゃないですか」
「御爺様はもっと痩せておられましたよ」
「御爺様の事は出さないでくれよ」
王はそれを言われると困った顔を見せてきた。彼の祖父はルイ七十八世である。前の前のケベック王であり美男子で女好きの王として知られていた。ブルボン家の好色はこの時代においても健在であったのだ。
「僕は違うんだから」
「確かになあ」
「お顔もあれだし」

彼は母方の血に似てしまったのだ。それもあまり美男子でなかった母方の祖父に。実についていない男であるがそのことも気にはしていなかった。母方の祖父はヒッタイト王家の者である。
「全然違うな、本当に」
「特に女性に対して」
彼は女性には淡白である。この王家の伝統としては珍しいことに王妃だけを愛している。代々凄まじいまでの浮名を残すブルボン家の者とは思えない程に一途なのだ。
「とにかく痩せられないんですね」
「だから気をつけているんだよ、僕なりに」
その太い指を振って言う。見ればその指は太いが骨は細そうであった。典型的な肥満児体型であった。だが何処かユーモラスで愛嬌がある。
「困るなあ、それでそんなの言われるなんて」
「まあまあ」
「御気になさらずに」
市民達は都合よく述べた。
「けれどダイエットにいい方法がありますよ」
「何だい、それは」
王は市民達に尋ねた。
「日本の皇室に一年程遊学されては」
「おお、それはいいな」
その言葉に乗る者が出て来た。
「ダイエットに最適だな」
日本の皇室で太っている者、成人病の方はおられない。明治帝が糖尿病で崩御されてからそれには気をつけているようである。代々ストレスを抱えておられる方はいても。
「どうでしょうか、王様」
「それか日本の宮内省の人に来てもらうとか」
「怖いことを言うな、全く」

王はその言葉に震え上がった。見れば本気であった。

## 第二十二部第二章　のどかな王様その二

「日本の皇室だって！？」
「はい」
市民達は答える。
「それか宮内省なんて。怖いことを言わないでくれよ」
「だって同じですよ」
「我が国にも宮内省はあるじゃないですか」
「彼等と日本の宮内省は違うよ」
今王の周りにいるのもケベック王国宮内省のスタッフである。
「彼等は僕の忠実で寛大な友人でもあるけれど」
だから王はここまで太れたのである。
「日本の皇室って・・・・・竹のカーテンじゃないか。凄いよ、あそこは」
「だからです」
「いっそそれで心身共にダイエットを」
「いやあ、それは御免被る」
彼は頑としてそれを受けようとはしない。
「僕には無理だよ」
「おや、王様でも」
「陛下、国家元首として弱音はどうかと思いますが」
「無理を無理と知っているのは弱音じゃないと思うけれど」
彼はそう反論する。完全に市民と一緒になっている。
「だから辞退させてもらうよ、それは」
「あら、残念」
「何か面白くないなあ」
「そうだよな。折角ダイエットになると思ったのに」
「あそこはまた特別なんだよ」
彼は言う。

「要塞だよ、ガンタース以上の」
「ううむ、確かに」
「とんでもないところですからなあ」
彼等はわかってて言っているのである。王をいじって楽しんでいるのだ。
「しかしだからこそ」
元々はフランス系だからであろうか。どうもケベックの市民達は意地が悪いようだ。それでも言ってくる。
「ダイエットには最適ですぞ」
「そうだよなあ。効果あるぞ」
「少なくとも食事制限が」
「ヘルシーにね」
「それが一番怖いよ」
王はそれを聞いて真っ先に顔を青くさせた。
「食事制限だって！？何て恐ろしいんだ」
「そうですか？」
「日本の皇室って皆健康ですよ」
「少なくとも御身体は」
「なあ」
「その前にストレスでやられてしまうよ。食事制限なんて」
王ははっきりわかる程身震いをしていた。
「怖いったらありゃしないよ」
「やれやれ」
「そんなんだから太るんですよ、王様」
「太ってたっていいじゃないか」
彼はその大きな口を尖らせて言う。
「別に。今のところ成人病も患っていないし」
「まあそうですけれどね」
「けれど折角お美しい王妃様なのに」
「ふふふ、それは僕の自慢だよ」

王は王妃のことを言われると急に機嫌がよくなってきた。
「いいかい、君達」
そして自身の市民達に対して語る。市民となっているのは連合は市民と称するからである。これはどの国でも同じだ。共和国であっても王国であっても。
「よき妻を持つということはそれだけで幸福なんだよ」
「わしの妻はガミガミですがこれは」
「ならば哲学者になれる。これはソクラテスの言葉だったかな」
「ええ、確か」
これには周りの者が答えた。彼等も何時しか話に入ってきていた。
「そうだな。それでだ」
彼はさらに言う。
「よき妻なら幸せになれる。僕は今とても幸福だよ」
「恐妻家なのにですか？」
「僕は妻を怖いと思ったことはないよ」
「おや」
「だって僕は浮気も何もしないからね」
「それが駄目なんですよ」
しかしそれには市民からクレームがついた。
「何故だい？」
「全く。ブルボン家だというのに」
誰かが言った。

## 第二十二部第二章　のどかな王様その三

「何で浮き名を流さないのか。御先祖様は皆凄かったのに」
ブルボン家は開祖のアンり四世からずっと好色な王が続いた。彼にしろそうだしルイ十三世も愛人を持っていた。太陽王ルイ十四世やルイ十五世に至ってはどれだけの子供がいたのかわからない程である。これはフランス王家の伝統のようなものでありカペー家の王もヴァロア家の王も同じである。カペーもヴァロアも実はブルボンの親戚筋なのであるが。凄いことにこれは帝政でも同じであった。ナポレオンもナポレオン三世も女性に関しては積極的であった。ナポレオンはジョゼフィーヌ第一で浮気は程々であったがそれでも結構話が残っている。
「そんなのじゃ」
「寂しいものです」
「寂しいのかい」
「はい」
「全く。代々の王様のお盛んなことにいつも楽しんでいたのに」
今のブルボン家もそれは同じで何かと女優や歌手、美女達と浮き名を流す。ケベック王家と言えば連合ではお騒がせ王家として有名である。
「寂しいことです」
「けれど僕は浮気はしないよ」
それは頑として譲らなかった。
「他の女性には興味はない」
「これが嘘じゃないから」
「面白くないっていうか」
「僕は嘘は言わない主義なんだ」
少なくともこの王は誠実な人物である。かなりユーモラスでもあるが。

「だから絶対に浮気はしないよ」
「それにできる風采でもないか」
「おい、それは幾ら何でも」
「ああ、それは構わないよ」
お世辞にも美男子とは言えない自分の容姿も彼はわかっていた。そのうえで口さがない言葉も受け入れている。
「僕は自分のことはわかっているつもりだからね」
「左様ですか」
「うん、子供達は皆妻に似ている。いいことだ」
「王様に似ていなくていいんですか」
「髪の色は皆一緒だしね。顔は妻で。それでいいじゃないか」
こう述べる。
「まあ確かに」
「自分が父親でさえあればってわけですか」
「妻も妻で五月蝿いけれどね」
ブルボン家なのに今のファミリーは浮名がないことで有名だ。王妃は王妃で両親の教育を受けて浮気とか愛人とかいう言葉は嫌いなのだ。スキャンダルの多い女優をパーティーで見て暗い顔をしたというエピソードもある。
「穏やかで平和な家庭でいいんだよ」
「だからこそ日本の皇室のように」
「だからそれだけは駄目だよ」
頑として聞き入れない。
「何で君達はそう竹のカーテンにこだわるんだ!?ブルボンはブルボンでやればいいじゃないか」
「いやいや、やはり数千年の伝統を見習い」
「我々も毅然と」
「毅然として僕の胃に穴が空くよ」
「御心配なく」
「日本の皇室の方々は普通にやっておられます」

またこう言うのだった。王をからかって。
「僕は日本の皇室じゃないから」
「おやおや、御謙遜を」
「ここは王様として」
「じゃあ君達がいっそ日本の宮内省に体験勤務してみる？」
王はいい加減こう返してきた。
「それでわかると思うよ」
「相当らしいな、あそこは」
「奥に何がいるのかわからないって話だな」
日本の宮内省はかなり誤解されている。少なくとも連合で最も謎の多い官公庁の一つではある。
「陰陽師だったっけ」
「仙人か生き仏がいるんだろ？」
「空海だったっけ。それか安部清明」
「どっちにしろとんでもないのがいるんじゃないのか」
「質素な宮殿なのにな」
「地下とかあるのかもな」
「とにかく僕は嫌だよ」
王は言う。
「日本のようにやるのは。ブルボンはブルボンで」
「どうしてもですか」
「そうだよ。今みたいにオープンにさ」
彼は言う。
「やっていきたいよ。じゃあこれでね」
市民達に別れを告げる。

## 第二十二部第二章　のどかな王様その四

「これから宮殿に帰って仕事なんだ。悪いね」
王の仕事とは祭事である。政治ではない。これははっきりと切り離されて久しい。日本の皇室もブルボンの王室も仕事は祭事なのだ。
「王に休みってないからね」
これもまた事実だ。王の仕事とは生活そのものが仕事である。食事も休息も全てが仕事なのだ。大統領とはここが違うのだ。
「それじゃあ」
「わかりました」
「じゃあお元気で」
「うん、今度皆で一杯やろう」
王は言う。
「その時は宜しく」
「まあその時は」
「ワインで」
「そうだね。上等の赤ワインでね」
王はワイン派である。フランス系らしい。
別れの挨拶の後で王宮に戻った。巨大でかなり絢爛な宮殿だ。美術館としても使えそうである。
かなり金をかけているがこの時代ではこうした程度の建築物はさして出費ではない。かつてはベルサイユ宮殿を建造するのに国庫からかなりの金を出したが今は違う。王宮一つなぞさした浪費ではない。いや、浪費のうちにも入らない。巨大な宮殿も生活そのものが仕事の王室に対する市民からのプレゼントであり、また行事の為に必要なものなのだ。
「この宮殿を見て時々思うんだ」
「何がですか？」
周りの者が彼の言葉に顔を向けてきた。

「いや、ブルボン家の宮殿はこうして大きいよね」
「ええ、まあ」
共の者がそれに答えた。
「日本の皇室は質素だからねえ」
「あれはまた特別です」
共の者の一人が述べた。
「ブルボン家は昔より権威としての一面がありましたが」
「うん」
「日本の皇室はかっては忘れ去られた存在でしたし」
「江戸時代だったっけ」
「はい」
この王も各国の歴史は頭に入っている。あまり利発ではないのは確かだが愚鈍というところまではいかないのである。そこまで愚かな人物ではない。
「あの頃はかなり質素な生活を送っていて」
「それで今もまた」
「確か明治帝や昭和帝の生活がかなり質素だったんだよね」
「我々の考えからは想像できないまでに」
共の者が述べる。
「大食なぞもっての外」
「それだけで嫌になるよ」
王は言った。大食漢の彼にとってはそれだけでぞっとすることであった。
「衣食住全てが質素であられたそうです」
こんな逸話がある。明治帝の軍服の裏が破れていた。だが帝はそれで軍服を替えようとはされなかった。破れたところを縫われるだけであった。
そして皇太子殿下、後の大正帝の東宮の立案を御覧になられて贅沢だと仰った。質素倹約を旨とされる方であられたのだ。
昭和帝も同じであった。その地位にあられれどその御生活はまこ

とに質素であられた。この時代においても皇居を見た各国の者がその質素さに驚きを隠せない程である。

## 第二十二部第二章　のどかな王様その五

「凄いね、また」
「まあブルボンにはブルボンの伝統がありますし」
「それに今は王室の財政はガラス張りじゃないか」
「はい」
これはどの王室でも同じである。昔のようなことはないのだ。
「それを考えるとね。ブルボン家だって贅沢じゃないよ」
「あくまで全てが行事ですから」
「そうだよ。それが王の務め」
「ですが陛下」
侍従長が言ってきた。彼を幼い頃より知っている者である。
「市民達の言葉ですが」
「ああ、あれだね」
さっきの言葉である。
「決して悪意はないのですぞ」
「悪意があったら今頃僕は撃たれているね」
「その通りです」
流石にそれはない。この王は害のない人物とされているせいもある。
「それだけは勘弁願いたいからね」
「それへの警護も怠ってはいませんが」
「有り難う」
「ですがそのうえで市民達は陛下を愛しているのです」
「それはわかるよ。だから僕もデブって言われるのは嫌いじゃないさ」
笑って述べると彼もすぐに答えてきた。
「それを聞いて安心致しました」
「王妃とのこともね。しかし御爺様は贅沢だったと思うかい？」

「ルイ七十八世陛下は確かに女性に関しては積極的な方でしたが」
「うん」
ブルボン家の伝統である。ケベック市民達はかえって自国の王のそのプレイボーイぶりに喝采を送るのが常であった。やっかみも多分にあるが。
「我儘を申される方ではありませんでしたし」
「普通に生活されていたんだね」
「女性以外は」
とにかく女好きな王であったのだ。幼い頃から美男子でありそれもあって女性にもてた王なのである。少なくとも今の彼とは全然立場も考え方も違う。同じブルボン家の王であってもだ。
「僕は食事か」
「陛下はケベックの食べ物についてどう思われますか」
「いいね」
市民が作ってくさたものを食べる、彼はそれも王の務めだと思っている。
「この前のジャガイモだけれどね」
「はい」
「あれは凄く美味しかったよ。海外に輸出してもいいかもね」
「左様ですか」
「美味しいものは皆で食べないと」
それが彼の考えであった。
「誰かが独占するなんて意地悪な事はやっぱり駄目だからね」
「ではこの話は流しておきましょう」
侍従長は述べた。
「流すの？」
「陛下がジャガイモにいたく満足しておられたと。それだけで効果があります」
「そうなんだ」
彼は連合においてはカバリエと並ぶ美食家、食通とされている。

食べることが彼の生きがいだとされている。彼の日記には常にその日の食事のメニューや味について細かく書かれておりそれはまるでレシピのようである。その為王の日記はグルメガイドだとされからかわれている。王も王でそれに応えてさらにそれに磨きをかけてきているのだ。
「ですから」
「それじゃあ頼むね」
「わかりました」
侍従長は頷く。
「じゃあもうすぐあれだね」
彼等は廊下を歩いていた。そして宮殿内の何処かに向かっていた。

## 第二十二部第二章　のどかな王様その六

「お茶の時間か」
「王妃様がお待ちですぞ」
「妃も今日は忙しいみたいだね」
「王妃様も王妃様でやらなければならないことがあまりにも多く」
「ブルボン家の王妃としてだね」
「そうでございます」
「最初は妃も随分戸惑っていたけれどね」
彼は言う。王妃はロマノフ公爵家の出身である。そこの末娘でこのブルボン家に嫁いできたのだ。ロマノフ家は形式ばった教育はせずどちらかというとアウトドア志向だったので最初ブルボンの何かと細かいしきたりや伝統に困っていたのである。
「今は充分やってくれているね」
「はい。ただ」
「あれは仕方ないんじゃないかな」
王は笑って言葉を返す。
「コンピューターゲームだろ？」
「そうです」
周りの者達はここでいぶかしがる顔になっていた。
「お時間がありますとテレビの前で」
「ドレスのままでも」
「また今は随分熱中しているんだね」
王はにこやらに笑って語っていた。
「何のゲームかな、今やっているのは」
「シューティングゲームです」
「我が国のゲーム会社から贈られたもので」
「シューティングか」
「はい」

共の者達は述べた。
「最近はそればかりされています」
「暇な時は」
「けれどあれはお金がかからないからね」
王は言う。
「それに周りの者の言葉には従って休んでいるんだろう？」
「はい、それは」
「夜にはちゃんと休まれています」
「うん、いつも一緒だからね。夜は」
王と王妃は今でも同じ部屋で寝ている。
「それはわかるよ。しかしゲームか」
「そこに何か」
「僕はあまりしていないな、と思って」
「まあそうですな」
侍従長がそれに答える。
「陛下は狩猟とお食事だけですから」
「うん、ゲームも嫌いじゃないんだけれど」
彼は言う。
「何となくしないんだよね。それでも今の話題は」
「ええ」
「妃とはゲームの話でもしよう。では行くか」
「はい、こちらです」
「今日は天気もよいので外でどうでしょうか」
「いいね」
周りの者達の言葉を笑顔で受けた。
「それじゃあ庭でゆっくりとね」
そうして過ごすのもまた仕事なのである。王としての仕事だ。
「妃と二人で過ごすよ」
「いえ、二人ではありませんぞ」
「おっと、そうだったね」

彼等もいるしマスコミもやって来る。王にプライベートはない。
「じゃあそれもいつも通りに」
「そうです。それでは」
「こちらに」
王は中庭に案内された。そこにはもう王妃が待っていた。
王妃の名はアレクサンドラという。ロシア系の名前なのは彼女がロマノフ家の出身だからである。かってロシア皇帝であったロマノフ家は今ではロマノフ公国の元首となっているのである。
彼女は十六人兄弟の末娘だ。小柄で金髪碧眼、豊かな胸を持っておりやや面長の顔に高い鼻、そして厚い唇で知られている。まず美人といっていい外見である。
ゲーム好きだが実は厳しいところもある女性である。愛人とかそうしたスキャンダルが嫌いで王との結婚の際はまずそれを気にした程である。これはスキャンダルを嫌うロマノフ家の伝統からくるものであった。その王妃が今穏やかな服装で王の前に立っていたのである。
「お待ちしておりました」
「待たせて済まないね」
まずは儀礼的な挨拶が交わされた。それから二人はテーブルに着く。
暫くはマスコミを前にした仕事としての会話が行われた。だがマスコミが去り宮内省のスタッフだけになると王妃は少しくだけてきた。
「陛下」
「何かな、妃よ」
「この前聞いたことですが」
「うん」
二人は家庭の話に移っていった。
「子供達を日本の皇室に遊学させるというのは本当ですか？」
「誰がそんなことを言ったんだい？」

王はそれを聞いて顔を急に曇らせていった。
「日本の皇室にって」
「週刊誌ですが」
「そんなのは適当に書いているだけだよ」
王はそう妃に返した。
「何処からそんな話が出て来たんだね、一体」
「私達も初耳です」
「それは本当ですか！？」
宮内省の者達もそれを聞いて目を丸くさせていた。
「何処からそんな話が」
「不可思議な」
「先程友人からその週刊誌を渡されまして」
「何て週刊誌かな」
「週刊ガロアですが」
「週刊ガロア！？」
王はその雑誌の名を聞いて首を傾げさせた。

## 第二十二部第二章　のどかな王様その七

「何の雑誌だったかな、それって」
王といっても全てのことを知っているわけではない。ましてや週刊誌といったものを細かく知っている筈もないのだ。むしろ週刊誌を書く記者の方が王のことをよく知っている程である。
「プロレス雑誌ですが」
「プロレス雑誌かね」
スタッフの一人の言葉に顔を向けてきた。
「はい、派手な記事で人気の」
そのスタッフは述べる。
「ですがそんな王室関係の記事が載るような雑誌ではありません。あくまでプロレスファンの為の雑誌ですが」
「そうなのか。プロレス雑誌に」
「載っていたのですか！？王室のことが」
「ええ」
王妃はスタッフ達にも答えた。
「宮内省のスタッフは語ったとして。嘘ですよね」
「嘘も何も」
スタッフ達は述べる。
「そんなことは前例もありませんし」
「三ヵ月後に陛下御夫妻が訪日されるだけですが」
「ですよね」
「はい」
スタッフ達は王妃に頷く。
「そんなことはありません」
「どうしてそんな話がプロレス雑誌等に」
「何でもコラムに載っていたそうで」
「コラムにですか」

「そうです」
王妃は気品があるが何か狐につままれたような顔で応えた。
「書いてあったそうなのです。書いていたコラムニストは確か」
そしてそのコラムニストの名を述べる。
「シャバキといいました」
「シャバキですか」
それを聞いた宮内省の面々の顔が急に呆れたものになっていく。
「はい、それが何か」
「王妃様。そのシャバキという者ですが」
侍従長が彼女に対して述べる。
「コラムニストではありません」
「そうなのですか！？」
「言うならば狂人です」
彼ははっきりと言った。
「頭がおかしいですから。御気に召されずに」
「頭がですか」
「はい」
侍従長は真顔で答える。
「誰がどう見ても。ですから気になされぬよう」
「はあ」
王妃はそれを言われてキョトンとした顔になっていた。
「どういった者なんだね、そのシャバキというのは」
王もそれを問うてきた。彼もそのシャバキという人物が気になったのだ。
「自称ですが」
「うん」
侍従長が王に語る。
「予言者らしいです」
「予言者！？」
「そうです。例えばですぞ」

「例えばだね、うん」
王も王妃も彼の言葉に耳を傾けていた。そして話をしかと聞く。
「今陛下が紅茶を飲まれています」
アーモンドを入れたクッキーをおやつに紅茶を飲んでいる。ロイヤルミルクティーである。
「シャバキはそれを一目見るとあることを言い出すのです」
「あることとは」
「人類滅亡をです」
「！？」
王はそれを聞いてまた首を傾げさせた。
「ちょっと待ってくれないか」
そして狸に化かされたみたいな顔をして話してくれた侍従長に対して問い直した。
「僕がロイヤルミルクティーを飲んだだけでかい」
「そうなのです」
彼は言う。
「そこから話が飛躍してそうなっていくのです」
「訳がわからないのだけれど」
「それがシャバキという男なのです」
「ううん」
それを言われてもやはり訳がわからなかった。

## 第二十二部第二章　のどかな王様その八

「話が見えないのだけれど」
「誰もがそう思います」
侍従長の言葉もかなり意味不明なものになっていた。
「有り得ないのです。何から何まで全てを人類滅亡や銀河の破滅に結び付けるのですが」
「キルスト教の終末論みたいなものかな」
「元はそうだと思いますが今では完全にあれです」
「あれなのか」
「はい」
これは実にわかりやすい言葉であった。
「それでですね」
今度は王妃が問うてきた。
「どうして人類が滅亡するのでしょうか」
「色々です」
「色々！？」
また変な説明であった。
「滅亡は普通一回ではないのでしょうか」
普通の人間の思考回路ならこうである。一回滅亡すればそれで終わりだ。誰もがそう考える。王妃は王族だというのにゲーム狂であるが普通の人間であった。
「それがどうして何度も」
「まず一度人類滅亡を言います」
「ええ」
「そして次の話ではまた別に人類滅亡を言うのです」
「あの」
王妃も話がわからなくなってきた。
「話が矛盾しているように思えますが」

「誰もがそれを感じるのです」
侍従長はまた述べた。
「例えばです」
そしてまたしても例え話だ。
「一度異文明の勢力で人類が滅亡したとします」
「はい」
これ自体はＳＦの定番であるから驚くに値しない。
「次の話では銀河規模の災害で滅亡するのです」
「おかしくはないかい？」
王はそれを聞いてすぐにこう言った。
「一度滅亡しているのに」
「お待ち下さい」
だが侍従長はここで王に対してこう返した。
「話はまだなのです」
「まだあるのか」
「そうです。それで今度はブラックホールなりで滅亡します」
「うん」
王はまた話を聞いた。
「それで次は怪しげな組織が暗躍して人類を粛清するのです」
「怪しげな組織、ねえ」
王はそれを聞いて首を傾げさせた。
「またＳＦや特撮の定番だね」
「まあそうですが。それによりまた滅亡します」
「三度もかい」
「ええ。さらに次の話では」
「また滅亡するのですか」
王妃はいい加減呆れてきた。
「そうです。また異文明によって」
「ループしていると」
「はじまりは何でもないことからそうした結論を導き出して」

「その結論の出し方が気になるのですが」
王妃が気付いたポイントは誰もが思うことであった。
「一体どういったものでしょうか」
「断言です」
侍従長は述べた。
「それによって導き出します」
「断言ですか」
「そうなのです。全てはシャバキの断言によって決まるのです。参考資料は予言の本です」
「胡散臭いな」
王はそれを聞いて呟いた。
「そんなものが参考資料だと何か」
「彼の辞書には眉唾という文字は存在しませんので」
「そうなのですか」
「そうなのでございます」
また王妃に答えた。
「残念ながら」
「それでだ」
王はふと問うた。
「そのシャバキという人物が言い出したのかい？僕の子供達が日本の皇室に遊学に行くという話は」
「おそらくはそうです」
「それはないよ」
王はそれを完全に否定した。
「我が王家の伝統ではないし。それにあちらからもそうした話はないしね」
「無論私達も考えてはおりません」
「そうなんだよな。変な話になっていると思ったら」
「シャバキなる男は他にも癖がありまして」
「癖！？断言以外に」

「左様です。それは物事が起こります」
また説明がはじまった。
「するとそれは予言されていたと強引に言い出すのです」
「強引にだね」
「そうです。全ての事象が」
「しかしそれは卑怯じゃないのかい？」
王は不快そうな顔になってそう述べた。
「後になってこれは予言されていたとか言い出すのは。僕はそう思うんだけれど」
「確かにそうですわね」
王妃もそれに同意した。
「後ではどうとでも言えますから」
「そうなのです。ですから言い出すのです」
侍従長も言った。
「後でこれは予言されていたと。妙な予言書や占いの本を持ち出してきて」
「何とても言えることを飾る為の装飾だね」
「そうです」
「それで人類滅亡だ、とか言い出すだね」
「はい。それも何度も」
「こう言っては何だけれど」
王はそこまで聞いて自分の考えを口にした。
「あからさまにおかしいね」
「はい」
「誰か信じるのかい？そんな人物の言うことを」
「子供でも最近は」
侍従長は言う。
「信じてはいないでしょう」
「だろうね。はっきり言えば変人、いや狂人としか思えないよ」
「そうした方のお話だとわかっていれば」

「おそらくはそこから人類滅亡へと話がいきますので」
何でも人類滅亡へと話を持って行くのがこのシャバキという人物である。そうした強引というか滅茶苦茶さが彼の定番なのである。
「御気をつけ下さい」
「どうして遊学が人類滅亡へとなるかわからないんだけれどね」
「それにどうしてその様な方が普通に暮らしているのか。不思議です」
「殆どの者が信じていないからです」
また身も蓋もない言葉であった。
「誰も。流石におかしいので」
「やっぱりね」
「子供だけですか、それも近頃は」
「おもしろい人で通っております。若しくはやはり狂人であると」
世の中実に素直である。
「世間では変人として通っていますので。御安心下さい」
「わかったよ。まあ変な話だとは思ったけれど」
王はこれで全てを納得した。

## 第二十二部第二章　のどかな王様その九

「じゃあこの話はこれで終わりだね」
「はい」
「よかったよ。最初聞いた時は何かと思ったよ」
「あの皇室だけは。少し」
王妃は困った顔をしていた。
「凄いですから」
「そうなんだよね」
伝統あるブルボン家の王から見てもそうなのである。
「あの皇室は特別だよ。宮内省の厳格さが特別だ」
「古いというレベルではなくて」
「何かが違うと言うのかな。皇室そのものも宮内省も」
「あの皇室は既に範があるのです」
スタッフの一人が述べた。
「明治帝と昭和帝だね」
「左様です、その二人の帝こそが最高の君主であると考えるのが日本の宮内省でありまして」
これは千年前から変わってはいない。それだけこの二人の天皇が偉大な方であられたという証明の一つでもあるがそこに宮内省の頭の硬さが加わってどうにもならないのだ。無論今の皇室にもこの二人の帝のようにという考えがある。そしてそれに近付けるべく臣下として全力を尽くす。それが日本の宮内省の考えである。
「その時からあまり、いえ殆ど変わってはいません」
「千年もか」
「援護、いや叱責する勢力もありまして」
「あるのかい」
王はそれを聞いて少し引いた。
「保守系言論人は開かれた皇室を嫌っていまして」

「迷惑な話だね」
ブルボン家の視点では迷惑そのものの存在である。
「そんな勢力があるなんて」
「彼等もまた明治、昭和両帝の存在を理想としているのです」
「それで宮内省にも意見を言うと」
「中にはその宮内省にも煙たがれるまでに至っている学者もいます」
「凄い人みたいだね」
「まあ我々から見ましても」
やはりケベック宮内省は日本宮内省とは違う。穏やかで開放的である。
「シャバキ程ではありませんが変人です」
「そうなんだ」
「彼は今は日本にいて相変わらず何かと古いことを言っています」
「ふむ」
「結果としてやはり閉じられた皇室に話を持っていっています。全てはそれなのです」
「竹のカーテンの守護だね」
この言葉が出た。日本の皇室を表わす何よりの言葉である。宮内省のガードをこう評するのだ。
「あのカーテンは竹だけに護られているわけではありません」
「多くの人々がそうしていると」
「だからこそ千年もああしたふうに難攻不落を誇っているのです」
「あの中ではがんじがらめの生活なのですね」
王妃は怖気を振るう感じになっていた。
「ゲームなぞも」
「勿論ないでしょう」
「やっぱり」
「食事制限も厳しく周りには常にそうした宮内省のスタッフが」
「いるのかね」
王も王妃もその話を聞くだけで何かうんざりとした気分になって

いた。

## 第二十二部第二章　のどかな王様その十

「凄いものだ」
「それでは何が楽しみなのでしょうか」
「テニスやお茶等を」
「お茶といってもあれだよね」
王はそれが今自分達が楽しんでいるものではないのはすぐにわかった。
「茶道だよね」
「はい」
思った通りであった。日本固有の文化である茶道だ。紅茶ではなく緑茶を決まった作法で飲むのである。気軽に飲めるものではない。
「やっぱりそうなのか」
「私はあれはどうも」
王と王妃で反応がそれぞれ違っていた。王は納得したようであったが王妃は何か嫌なものを思い出したような顔になっていたのである。
「何かあったのかい？」
「結婚する前ですが」
王妃はその時の忌まわしい記憶を語りはじめた。
「茶道は茶室で飲みますね」
「うん」
言うまでもないことであった。
「日本の皇室で催されるそれに参加したのです。来賓として」
「名誉なことじゃないか」
普通はそう思うものだ。しかし」
「ですが」
「ですが！？」
王妃の反応は普通ではなかった。

「その時正座しますね」
「ああ、そうだったね」
王は言われてそれに気付いた。
「茶道はね。そうだったね」
「茶道だけではなく日本の文化ではそうしたものが多いですな」
侍従長がそれに応えて述べた。剣道でも柔道でもそうである。日本文化のものは正座して行うものが多いのである。茶道もまた然りである。
「それじゃあ」
「そうです。脚が痺れて痺れて」
「大変だったんだね」
「お茶はともかくあれは」
王妃は完全にお手上げといった感じであった。
「二度とは参加したくありません」
「僕はそれには参加する機会がなかったけれどね」
「運がよろしいですね」
「けれどだね」
王はここで述べた。
「日本のお茶とお菓子はいいね」
「まあ」
王のその暢気な言葉に王妃は顔を顰めさせた。
「呆れた」
「呆れたと言われても日本のお茶とお菓子が美味しいのは本当だろ？」
王は言う。
「違うかな」
「まあそれはそうですが」
王妃もそれは認めた。
「ですが何か」
「駄目かな、それは」

「いえ、それは別に」
スタッフの一人が顔を綻ばせて王に賛成してきた。
「いいと思いますよ」
「日本のお茶とお菓子が美味しいのは事実ですし」
「そうだよね。だからさ」
彼は言う。
「とりあえず正座はしたくはないけれどそれには一度お呼ばれもしたいな」
「そうなのですか」
「うん、ただやっぱりね」
ここで難しい顔をしてきた。
「あれだね。日本の皇室のあの作法の細かさにはね、馴染めないものがあるよ」
「ブルボン家もかなり細かいと言われておりますが」
侍従長がそう言葉を入れてきた。これは実際に言われていることでケベック王室の作法もかなり細かく複雑になっている。これはフランス王家であった頃からの積み重ねの結果である。連合内部の新興王家がブルボン家の作法の複雑さと細かさに驚いている程である。もっとも日本の皇室に対しては悲鳴と泣き言になるからもっと凄いのは事実である。
「そうかなあ」
だが当の王にはその自覚がない。
「そう思うかい？」
「思います」
王妃の返事は実に率直であった。
「ロマノフよりも細かいです」
「けれどロマノフも」
実はロマノフ家のしきたりもかなり細かい。王はそれを言った。
「かなりのものだと思うけれど」
「そうでしょうか」

だが王妃はそれには懐疑的であった。

## 第二十二部第二章　のどかな王様その十一

「お父様もお母様も周りの者達も皆親切でおおらかでしたよ」
「そうなのかい？」
あまり信じられない言葉であった。
「僕にはそうは思えなかったけれど」
「それは気のせいです」
王妃はそう主張する。
「ロマノフ家はおおらかな家風なのです」
「おおらかというか」
王はそれに反論する。
「アットホームじゃないかな」
「それをそう言うのならそうなのでしょう」
「それなら」
「ですがそれ程厳格ではないですが」
「どうかな」
「ブルボン家よりは」
「ブルボン家もそんなに細かいつもりはないけれど」
自分ではこう言う。自覚はないのだ。
「食事中のワインのおかわり一杯に凄く時間がかかりませんか？」
「そうかな」
この言葉にはキョトンとした顔を見せてきた。
「そう思うかい？」
「いえ、別に」
侍従長もそうは思わない様子であった。
「頼んだら来るしね」
「ええ」
「頼んで人に取り次いで数分で来るというのはあまりではないですか？」

「普通だよね」
「はい」
王の言葉に対して頷く。
「ロマノフ家では頼んだらすぐに出て来ます」
「うちの宮殿のせいかな」
「おそらくは」
ワインの冷蔵庫と晩餐の間の距離が結構あるのである。その関係であった。ブルボンの宮殿はかなりの広さだからそのせいなのである。
「けれど日本の皇室はもっと凄いよ」
「あそこは決められたものしか出ないではないですか」
「そうなんだよね」
王は困った顔になっていた。
「おかげで僕はいつも後でお腹が空いて」
日本の皇室の晩餐会は健康にも配慮している。量は普通の人間が満腹するだけである。だが大食漢の王にとってはそれがいささか物足りないのである。彼は名うての大食漢であるからだ。
「後でまあ色々と頼むんだけれど」
「それも少ないのでしょう？」
「ああ、大使館のスタッフに作ってもらうんだ」
「我が国のですか」
「うん。それでもっているけれどね」
「そういえば日本に行かれる度に何かと食べておられると思えば」
「和食はどうもあっさりし過ぎていてね」
王は自身の嗜好も述べだした。
「食べる量も多くなるよ」
「お寿司にお蕎麦ですか？」
「どちらもいいね」
意外と和食にも造詣が深いようである。
「特に天ざるがね」

「天ざる・・・・・・ああ、あれですか」
王妃にもそれがどういう料理かわかった。
「あれは確かに」
「いいよね」
「はい、天麩羅とざる蕎麦が絶妙に合って」
「和食はいいんだけれどね。本当にマナーが」
すぐに困った顔に戻った。
「ややこしいから」
「ですか」
「うん。それが難点だよね」
この王も箸は使える。連合では箸はフォーク、ナイフ、スプーン等と共に使われるものである。
「まあね。それさえなければ」
「そうですか」
「うん。それにしてもその話が根も歯もないことでよかったよ」
「心配しましたわ」
王妃もすっかり安堵していた。
「何もないということで」
「いえいえ、まだまだかと」
「あれっ、まだあるのだ」
「そうです。ですからシャバキは」
侍従長は述べる。
「何でもかんでも滅亡に結び付けるのですから」
「あの」
王はまた訳がわからないといった顔を見せてきた。
「聞くよ。僕の子供達を日本の皇室に遊学させるって話だよね」
「はい」
「それが人類滅亡になるの？」
「全然関係ないのでは」
「シャバキの頭の中では関係あるのです」

「ううん」
そう言われてもどうしても理解出来ない。

## 第二十二部第二章　のどかな王様その十二

「そうなの」
「はい。話が巡りに巡って」
「人類滅亡へとなるんだね」
「そうなのです。しかもそれが何度もです」
「あのさ」
王はその話をまた聞いて再度問うた。
「何でしょうか」
「彼は正気なのかい？こう言っては何だけれど」
誰もが思うことである。王もまたそれを思ったのである。これは至極当然のことであった。
「アルコールかドラッグに溺れているということはないよね」
「それはまず調べられました」
「やっぱり」
それも何度もである。流石にシャバキのような男を正常と思える人間はそうはいない。誰が見ても異常な発言を繰り返しているからである。無理もない。
「ですがその結果は」
「アルコールもドラッグもなしか」
「どうやら自分の脳でドーパミンを多量に分泌していまして」
所謂かなりあれな人物ということだ。
「ふむ」
「そのせいでそこまでの妄想が働くようなのです」
「そうだったのか」
「精神病院に隔離されたことも何度もあるそうです」
「やっぱりね」
「そうなるのですか」
これは誰もがすぐに結論付けることであった。シャバキは明らか

に異常だからだ。
「今も危ないそうですね」
「凄い話だね」
王はそこまで聞いて言葉を弱くさせた。
「そこまでとは」
「ですから御気になさることはないのです」
侍従長はあらためて述べる。
「両陛下は」
「いや、かえって気になるよ」
王は少し笑ってこう返した。
「何故ですか？」
「そこまで凄いとね。一度彼の本を読んでみたくなった」
「御覧になられるのですか？」
「うん、面白そうだからね」
彼は言う。
「是非一度ね。一通り」
「それならそう手配も致しますが」
「ですが陛下」
周りの者達がここで述べる。
「あまりにも現実性が乏しい作品ですし」
「どれだけ出鱈目な内容が書かれていても御気持ちは確かに」
「それを楽しむ為にあるんじゃないか」
王はその口を大きく開いてこう述べた。
「そうじゃないのかい？」
「そうですか」
「ではそれで」
「うん、早速頼むよ」
「わかりました」
「では明日にでも本屋から取り寄せます」
「さて、では楽しみにしているよ」

王はにこやかに笑って言った。
「この本について僕が何か言えばまたマスコミが色々と言うかな」
「あっ、それはないかと」
周りの者達の言葉は素っ気無いものであった。
「そうなの？」
「あまりにも異常な内容の本だということは誰もが知っていることですので」
「それは御安心下さい」
「とにかくとんでもない本なんだね」
「私共が申し上げた通りです」
念を押してきた。
「くれぐれも笑われないで下さい」
「わかったよ。じゃあ明日早速」
「はい」
「読ませてもらうよ。楽しみにしているからね」
「畏まりました」
こうして王はそのシャバキの本を読むこととなった。夕食の後のガラス張りのプライベートの時間に彼は周りの者達が取り寄せたその本を手にした。
「これなんだね」
「はい」
宮内省のスタッフが答える。意外とシンプルな私室で彼はその本を受け取っていた。

## 第二十二部第二章　のどかな王様その十三

金や宝石、装飾で飾られた宮殿の中であるが彼の私室は意外と物静かなものであった。彼はそこのこれまた質素なテーブルに座ってその本を手にしていたのだ。それは漫画であった。
「コミックなのかい」
「左様です」
「ふん、彼は原作か」
王は表紙を見ながら呟いた。ブルボン王家は漫画も平気で読むのだ。
「絵は奇麗で迫力もあるね」
「画力のある漫画家をわざわざ呼んだのです」
「そうなのか。それでだね」
「そうです。ですから余計に読み応えがあります」
「そうみたいだね。それじゃあ読むよ」
「どうぞ」
ページを開き読みはじめた。王はここでふと気付いた。
「あれ、飲み物は？」
「お出ししておりません」
「お菓子もないけれど」
「その本を読む間飲食は謹んで下さい」
執事の真剣な言葉であった。
「気分が悪くなるのかい？」
「すぐにおわかりになられます」
「何かわからないけれどじゃあいいよ。とにかく読むね」
「はい」
読み出してから暫く経った。王は最初に口を開いた。
「あのさ」
「何でしょうか」

「言っていることが滅茶苦茶なんだけれど」
王はすぐにそう言った。
「何でこのシャバキが断言するとそれを皆信じるんだい？おかしくはないかい？」
「その世界ではそれが普通なのです」
「普通なのか」
「そうです」
「しかもだよ」
王はさらに言う。
「そ、そうか・・・・・・とかわかったぞ、とか言ってすぐにとんでもない結論に話が飛躍しているんだけれど」
「その作品の王道です」
「王道なのか」
「ええ。そしてその結論は」
「いや、壮絶だね」
王はその結論を壮絶とまで評した。
「よくこんなふうに考え付くね。予言をもとに」
「その世界では予言は聖書よりも遥かに重要なのです」
なおブルボン家はキリスト教に関しては昔から変わらずカトリックである。これは変わりはしない。
「その予言を使い回していないかい？」
王は次の話も読んでいた。
「しかも前の話は他の知的生命体の侵略で滅ぶのに次は訳のわからない組織の人類総洗脳計画か」
「矛盾してると仰りたいのですね」
「そうとしか思えないよ」
王は言った。
「そうだろ？しかも同じ本の中で」
「その作品は過去を振り返らないのです」
「何だって！？」

この言葉にまた絶句した。
「ちょっと待ってくれ。予言を題材にしているんだよね」
「はい」
「それで何で過去を振り返らないんだよ。不自然じゃないか」
「そういうことは御気にならずに」
スタッフの者は述べる。
「些細なことですから」
「些細って」
「大事の前の小事です」
「何ということなんだ」
この言葉にどれだけ呆れているか自分でもわからない。王はまたしても絶句した。
「異常だ」
「この漫画そのものがですが」
身も蓋もない言葉であった。
「それでよく漫画として、話として成り立っているね」
「何せギャグ漫画ですから」
「ギャグ漫画か」
「はい。書いている本人達はどう思っているかわかりませんが」
「ううむ」
「一応担当の編集者はいました」
「彼は今病院に隔離されていないんだね」
あまりと言えばあまりであるが言われても仕方のないことであった。

## 第二十二部第二章　のどかな王様その十四

「いえ、今では雑誌の編集長になっています」
「どんな雑誌を作っているのやら」
「オカルト雑誌です」
「ああ、やっぱり」
実に頷ける言葉であった。
「それしかないだろうね、やっぱり」
「そういうことです」
「しかしだね」
王はまだ言いたかった。
「これだけ前の話と次の話が矛盾しているとテレビのバラエティ番組でも批判を受けるよ。ましてや一応ドキュメント漫画形式なんだし」
どうにも漫画評論に長けた王である。
「これはまた」
「ですから御気になさらないことなのです」
スタッフの者はまた言った。
「気にされたら負けです」
「負けなのか」
「考えては駄目なのです。感じるのです」
またえらい言葉であった。王はその言葉の前に首を傾げさせた。
「じゃあ感じるよ」
「はい」
「感じて読むと確かに面白いよ」
「ええ、その漫画は確かに」
面白いのだ。ついつい読んでしまう。
「しかし世が世ならこの登場人物達は騒乱罪で逮捕だね」
「それはないかと」

「ああ、病院行きだね」
「実際にシャバキは何度も精神病院に送られていますし」
「そうだったね。無理もない。それで」
本を置いた。読破したのだ。
「この本は売れているんだよね」
「それもかなり。ベストセラーです」
「予言の本ってのは随分売れるらしいね。ノストラダムスとかで」
「御存知でしたか、彼は」
「元々ヴァロワ家と関係があったそうだしね。名前は知っているよ、僕も」
この時代にもノストラダムスの名前は残っている。千年前に人類を震え上がらせたお医者さんであり美容コンサルタントであったこの人物は何故か予言者として名前が残っているのだ。千年前に人類が滅亡すると言われていた予言が今度は千年ずれたままでそのまま残っているのだ。他にも色々な予言者の予言が残っている。
「一応はね。けれど」
「彼は予言は残してはいないのです」
「それも知っているよ」
「あの有名な黒髭も」
「彼にしろ何者なんだろうね」
これまたよくわからないのだ。この黒髭は本によって征服したりされたりだ。しかも役柄がそれぞれの本で微妙に、あるいは全く違っていたりする。そもそも黒髭の男なぞ世の中に幾らでもいる。
「わかりません、少なくとも予言では」
「適当に訳がわからないことを言えば売れるのかな」
「若しくはこの漫画のように」
「大々的に煽るか」
「煽られる者も実はそうはいませんが」
世の中そこまで馬鹿はいないということだった。
「そうだろうね。単行本でわかるんだから」

「はい」
「それにしてもこのシャバキという男」
「どう思われますか？」
「変わってるなんてものじゃないね。一言で言い表せないよ」
王にしろかなりのことを言う。これでも言葉を選んでいるのだ。
「はっきり言えば本当に変人です」
「うん」
それ以外、それ以下の何者でもない。
「若しくは狂人か」
それ以上の場合はあってもだ。
「どれかでしょう」
「連合も四兆人もいるからね」
王は首をまた首を傾げさせていた。そのうえで述べていた。
「そりゃこういう人もいるだろうけれど」
「困ったものですか」
「ケベック王としては何も言うことはないよ」
政治に関わらないという配慮は彼もわきまえていた。取り立てて派手な王ではないがその程度の分別は普通に備えてはいるのである。
「それだけだ。けれど感想としては」
「読者としては」
この程度ならまあ許される。ブルボン王家では。

## 第二十二部第二章　のどかな王様その十五

「これは恐ろしいギャグ漫画だ。連合の漫画史に残るね」
「わかりました。ではそのように」
「誰かに伝えるのかい？」
「いえ、そういう話になるだけです」
「そう、いつもみたいにだね」
「はい」
　こういうものである。話は漏れ伝わるもの。その話も出来るだけ微笑ましいものならばかえって評判がよくなったりするものだ。それを見越してのことであった。
「じゃあそれでね」
「畏まりました」
「それで後は」
「何か」
「続きがあるんだよね」
　王は彼の顔を見て問うてきた。
「続くって書いてあるし」
「はい、あります」
「そう。じゃあ続きを読ませてくれるかな」
「わかりました。それでは」
　王のその言葉に応えて頷く。
「翌日お持ち致します」
「有り難う。ではそれを読ませてもらうよ」
「ええ」
「それにしても今だと」
　王はそれまで頼んだ後でまた述べた。
「普通にエウロパとの戦争で連合の勝利は予言されていたとか言っているだろうね」

「既に言っております」
「ああ、やっぱり」
それを言われて妙に納得してしまう。恐ろしいことに。
「そしてやはり人類滅亡へと」
「どうしてもそこに話を持っていくんだね」
「この漫画の絶対のオチですから」
「このシャバキという人物の断言と一緒だね」
「そうです」
そうなのである。この漫画の主人公はシャバキ本人だ。彼が直接出て来て話を進めるのである。ここぞという時の絶対の決め付けと推理、断言に何故か作中の人物はおかしいと思うことはない。
「ですから様式美と思って下さい」
「わかったよ。それにしてもこの本の通りになると」
「私達は何度も滅亡しなくてはいけません」
「忙しそうだね」
王はこう述べて苦笑いを浮かべた。
「何かと」
「忙しいというものではありません」
スタッフも言う。
「何度も死ぬことは誰も出来ません」
「誰だって死ぬのは一回だよ」
王の言葉は自明の理であった。そもそも何回も死んでいては死ぬ方もたまったものではない。滅亡するにしろ同じだ。滅亡は必ず一回だ。何度も、しかも一日に何度も滅亡するということは絶対に有り得ないのだ。それを言えるとすればそれこそ頭が異次元空間に飛んでいるからであろう。
「滅亡するのだってそうじゃないか」
「まあ御気になさらずに」
「またその台詞なんだね」
「それしか言い様ががいので」

「そうだね。しかし」
最後に溜息が出た。
「こんな凄い本があるなんて思わなかったな」
「はい」
王がこうして溜息をついている頃地球では八条が同じ話を元に困った顔をしていた。

## 第二十二部第二章　のどかな王様その十六

「あの」
彼は立体テレビを前に難しい顔を周りの者に見せていた。
「この番組ですが」
「はい」
「一人だけ凄い浮いていませんか？」
そこには眼鏡をかけ、黒い髪を七三分けにした男がいた。何やら色々と言っている。
「つまりノストラダムスのこの予言によると」
その番組は朝の政治番組である。こうした番組には普通政治家や学者が出てそれぞれの見解を述べる。だが何故かシャバキが出ているのである。
「連合の勝利は予言されていたんですよ！」
「絶対こう言い出す人はいますね」
八条はシャバキの話を聞いて述べた。
「何かが起こった後で。何故でしょうね」
「誰も事前に起こることはわかりませんから」
凄い返答であった。予言に対してとしては。
「ですからそうなるのです」
「誰にもわからないですか」
「はい、そうです」
彼は八条に対して答える。
「それが普通です」
「ですよね。ではこれは一体」
「夢を見ているのではないでしょうか」
また身も蓋もない言葉であった。
「若しくは彼は」
「確か何回か精神病院に入院しているのでしたね」

「そうです」
これは八条も聞いていた。シャバキは連合ではかなりの有名人になっているのである。
「なおらないのですか」
「どうやら不治の病らしくて」
「困ったことですね、また」
「けれどこれだけじゃないんです！」
テレビの向こうの八条の呆れた声を無視してシャバキの言葉は続く。
「連合の勝利が大変な事実を巻き起こしてしまうんです！」
「言葉の文章が変になりましたよ、今」
「ですね」
八条の突っ込みに返事が返って来た。
「確かに今」
「それは何だと思いますか！？他の知的生命体の警戒心です」
「ええと」
八条はそれを聞いて考える顔になった。
「確かですね」
「ええ」
「他の知的生命体は何十万光年も向こうにいる筈です、いるとすれば」
「はい」
八条の言葉を聞いていた。
「それでどうしてこういう話になるのでしょうか」
「理解不能ですか」
「飛躍し過ぎていてどうにも」
「ですね。私もです」
「ですがわかるものではありませんから、予言というのは」
「ではどうするものですか？」
八条は別のスタッフに問うた。

「わかるものでなければ」
「楽しむものです」
ケベック王国宮内省のスタッフと同じであった。
「その内容を」
「よく言われていますね。私も日本の伊藤首相によく言われました」
「やはり」
「はい、そして今それを見ているわけですが」
それでも実物は噂とは全然違っていた。八条の予想を遥かに越えていたのだ。
「それにしても」
そのうえで呆れているのだ。
「これは一体どうして」
「そ・・・・・・そうか」
「おおっ」
シャバキが突然声をあげだしたのを見て何人かが注目しだした。
「わ・・・・・・わかったぞ」
「いよいよだな」
「はい」
「何が起こるんでしょうね」
八条はそれを見て結構期待していた。共演者達はテレビの中でシャバキの突然の呟きを見てかなり引いていた。だがシャバキにはそんなものは全く目に入ってはいなかった。
「これは陰謀だったんだよ！」
「ううむ」
この論理というか断言には八条も何も言えなかった。
「人類を滅亡させようとする組織の陰謀だったんだよ！」
「あの、シャバキさん」
司会者がかなり引きながらもいきなり叫びだしたシャバキに問う。
「組織って何なんですか、いきなり」
司会者の他は何も言えない。絶句していた。

「わからないのか、貴方達は！」
「あの、ですから何が」
司会者は呆然として何と言っていいかわかってはいないようであった。テレビを見てもそれがよくわかる有様であった。もう政治番組にはなっていない。

## 第二十二部第二章　のどかな王様その十七

「一万人委員会だよ！」
「何かの会員ですか、それは」
「何故知らないんだあんたは！」
「いや、そうは言われましても」
「一万人委員会とは？」
「何でも人類滅亡を企む謎の組織だそうです」
周りの者が八条にそう説明する。
「よくオカルトものに出て来る」
「ああ、そういえば聞いたことがあります」
八条もそれを言われて少しだが思い出した。
「他の知的生命体と結託して人類を滅亡させようと企んでいる組織ですね」
「左様です」
「彼は今それを言っているのですよ」
「いきなり何かと思いましたよ」
八条も流石に引いていた。
「一万人委員会とか政治番組で言うのですから」
「いや、普通はないですよね」
「全く。何処まで突き抜けているのか」
「八条長官はそれのメンバーなんだよ！」
「へっ！？」
いきなり自分の名前が出て思わず目が点になった。
「あの、今何と」
テレビの向こうのシャバキに問う。
「それで謎の知的生命体と結託しているんだ！人類滅亡の為に！」
「何を根拠にそんなことを」
「それでですねシャバキさん」

八条と司会者はテレビの外と中でそれぞれシャバキに問うた。シャバキに聞こえたのは司会者の言葉だけだが彼にはそれもあまり意味がなかった。
「その知的生命体ってのはどんな人達なんですか？」
「詳しいことは俺にもわからない」
「いや、わからないって」
八条はその言葉に絶句していた。
「今出したじゃないですか、自分で」
「だがある程度はわかっている」
「そうなのですか」
司会者がそれに応える。
「それでどんな知的生命体なんですか、それは」
「こんなのだ」
ここで彼は写真を取り出してきた。そこに映っているのはやたらと頭と目が大きい小さな宇宙人であった。
「こいつなんだ！こいつが人類を滅亡させようとしているんだ！」
「はあ」
司会者は彼の話を呆れながら聞いている。
「そして今も！この銀河の何処かにいる！」
「私は知りませんが」
国防長官が言うのだからまあ間違いはないと思うのが普通である。
「嘘発見器で調べて下さってもいいですが」
「わからないのか、あんた達には！」
シャバキはまた叫びはじめた。
「今迫ろうとしている危機が！一万人委員会が！」
「あの、ですからね」
司会者は呆気に取られながらもそれでも司会者としての責務を果たそうと彼に声をかける。
「その委員会っていうのが」
「世界を脅かそうとしているんだ！そいつ等が！」

「はあ」
「今そいつ等がパソコンやテレビから人類を洗脳しようとしているんだ！それを放っておくと世界が滅亡してしまうんだ！いや」
「いや！？」
「連合だけは助かるかも知れない」
「何か話がさらにあさっての方向に行きそうですね」
八条はそれを見ながら述べた。
「どうなるやら」
「連合は神々に護られた国々だから」
「そうだったんですか」
「そうなんだ。だが今のままじゃ」
結局話は元に戻るようである。
「滅亡する。何てことなんだ」
「滅亡するんですか。やっぱり」
「そうだ、巨大ブラックホールが銀河系に近付いて」
「ブラックホールがですか」
「それは予言されているんだよ！」
話が変わったことにはもう誰も突っ込まなくなっていた。完全に呆れていた。
「エドガー＝ケイシーの夢の中に！」
二十世紀のアメリカの予言者である。夢からアカシック＝レコードにリンクしてそこから予言を行っていたという。確かに予言はしたであろうがそれが果たして正確に人々に伝わっているかどうかはわからない。下手をすれば強引極まる解釈が為されているかも知れない。そういうものである。

## 第二十二部第二章　のどかな王様その十八

「夢の中に」
「そうだ！偉大なる予言者エドガー＝ケイシーは見ていたんだよ！人類の行く末を！」
「だったんですか」
「このままじゃ危ない！五年後に何かが起こる！」
「五年後に」
「人類は滅亡する！それがわかっているんだ！」
なお五年後に世界には何も起きなかった。他の知的生命体もブラックホールもやっては来なかった。そうしたことは結局起きはしなかった。
「それにどう向かっていくのか。課題はそれだ」
「左様ですか」
「どうしようもないかも知れないが」
「じゃあ駄目なんじゃないですか？」
八条はそれを聞いてふと口に出した。
「それじゃあ」
「しかしですね」
周りの者もかなり呆れていたが述べだした。
「今長官がその一万人委員会のメンバーだとか」
「はい」
その言葉に応える。
「あれって名誉毀損か何かなのでは？」
「抗議することも可能ですよ」
「いや、それには及びませんよ」
だが八条はあえてそれをしないことにした。
「宜しいのですか？」
「幾ら何でもあれは信じる人はいないでしょう」

「まあ確かに」
「明らかに異常な発言ですから」
今番組は中断している。暫く美しい画像を御堪能下さいと花が映し出されている。
「それに銀スポでも私は結構書かれていますからね、ああしたことは」
「銀スポ！？ああ、あれですか」
スタッフの一人がそれが何か解した。
「あのスポーツ新聞ですね」
「はい、それです」
「あれはまた。特別ですね」
「そうです。あの新聞はとりわけ凄い」
八条は述べる。
「あそこでは私は同性愛者だの宇宙人と接触しているだの色々書かれていますよ」
「あの新聞に書いてあることは全部嘘ですよ」
「幾ら何でもあれを信じるのは」
「皆笑う為に読んでいますからね、あれは」
そういう漫画もあるのだ。
「そうです。ですから今度も」
「気にされていないのですね」
「ええ。ところで」
「はい」
「中々再開しませんね」
テレビを見て言う。
「何があったんでしょうか」
「放送事故ではないようですね」
「とすると」
「あっ、はじまりましたね」
「ええ」

また番組がはじまった。するとそこにはもうシャバキはいなかった。
「あれっ、何処へ」
「消えたかな」
「まさかとは思いますが」
八条はそれを見て述べる。
「何処かに連れて行かれたんじゃないですかね」
「その一万人委員会にですか」
「私は何も言っていませんよ」
八条はここで笑って言った。一万人委員会のメンバーだと言われたことを逆に使ってきたのである。
「言っておきますが」
「わかってますよ」
「ではもっと上にいる誰かが」
「誰なんでしょうね、それは」
「さて」
「サン＝ジェルマン伯爵でしょうかね」
十八世紀のフランスを中心に活躍していた謎の人物である。外交官であるとされているがその正体は誰も知らない。恐ろしいまでの知識と教養を誇りあらゆるものを知っていて、何でもできた。一説によると錬金術師で不老不死になっているとも言われているがそれが本当なのかは誰も知らない。
「私ではないのは確かです」
「それでは一体」
「誰が」
実は真相はあっさりとしたものであった。それは楽屋裏で行われていた。

# 第二十二部第二章　のどかな王様その十九

「離せ！俺は正気だ！」
シャバキはその両手を屈強な男達に捕まれて何処かに連れて行かれていた。何処か暗い場所に案内というか連行されている。
「御前達には見えないのか！ノストラダムスが笑っているのが！」
彼は暴れながら喚く。ノストラダムスに一万人委員会にエドガー＝ケイシーに宇宙人にナチスやソ連の残党といった言葉が次々に出ている。
「このままじゃ人類は滅亡するんだぞ！だから離せ！」
「はいはい、わかったからね」
「大人しくして下さいよ」
「この凡人共が！まだわからないのか！」
勝手に凡人と定義する。根拠は彼の主観である。
「今度は凡人か」
「何か色々言われてるな、俺達も」
「人類滅亡の序曲が聞こえないのか！誰にも！」
「聞こえるか？」
「いえ」
屈強な男達のうち年配の男が若い男に問うた。若い男はすぐにそれを否定した。
「別に何も」
「そうだよな、俺にもだ」
「この人にだけ聞こえるんでしょうね」
「俺を何処に連れて行く！国家権力の陰謀か」
シャバキの鋭い洞察力が危機を知らせていた。
「俺に見抜かれたからだな！そうだな！」
「ええと、病院はそこでいいんですよね」
「ああ、そこだ」

喚くシャバキをよそに手続きが行われていく。
「じゃあそこに入院してもらうってことで」
「御家族にも伝えておかないとな」
「家族いるんですかね、この人に」
「そりゃいるだろ。どっかから自然発生したわけでもないし」
「一応はニカラグア出身ってことになってますね」
シャバキのプロフィールにはそう書かれている。
「これ本当ですかね」
「一応はそうなんだろう。何なら一応ニカラグア政府に連絡取ってみるか？」
「そんな奴知らんって言われそうですね」
「それは危ないな」
何か嫌な予感がするのだ。
「こんなの自国民だって言いたくないな、誰も」
「そうですよね」
「うおおおおお！見える、見えるぞ！」
シャバキはその横でまた騒いでいる。
「人類の破滅が！滅亡が！」
「けれどとりあえずは病院に入院させましょう」
「そうだな。そこだと脱獄も無理だしな」
「ですね」
彼等はシャバキを無視して話を続けていた。
「そこに入れておくか」
「しかしですね」
「何だ？」
年配の男は若い男の言葉に顔を向けてきた。
「話には聞いてましたけれど」
「ああ、凄かったな」
「まさかテレビでも言うなんて思いませんでしたよ」
「全くだ。これは記録に残るだろうな」

「でしょうね」
若い男はその言葉に頷く。
「迎えが来るまでの辛抱ですね、後は」
「そういうことだ。それまでは抑えておこう」
「はい」
「何故誰にもわからないんだ！」
シャバキはまだ喚いていた。
「人類の危機が迫っているのに！それがわからないのか！」
彼はそのまま精神病院に入院することになった。そこでも色々と騒動を起こすのだがそれはまた別の話になる。これもシャバキにとっては普通にあることであった。これもまた彼にとってはという意味であり他人にとってはそうではないのであるが。

## 第二十二部第二章　のどかな王様その二十

そして一万人委員会にいると告発された八条であるが。彼にコメントを求める声もあった。
「私が一万人委員会にですか」
「はい。あのテレビのことで」
「あれは私も見ていましたよ」
インタビューをするマスコミ関係者に対してまずはこう述べた。
「そうだったのですか」
「いや、驚きましたよ」
彼は苦笑いを浮かべてそう述べた。
「私の秘密をどうして知っていたのかと」
「というと一万人委員会は実在したのですか」
冗談とわかったうえでの質問である。
「実在すると思いますか？」
八条もその顔は笑っていた。
「実在します」
言葉は真面目でも声は笑っていた。
「あの人の心の中には」
「そうです。勿論私は一万人委員会という組織には入っていません」
自分でそれを言った。
「そもそもそんな組織が存在するのですか？」
「この世の何処かには存在するかも知れません」
実に使える言葉である。
「誰かの頭の中には」
「そういうものです。パラレルワールドを探せばあるでしょう」
八条も言う。
「ですがこの世界にはありません。よく陰謀論で出ますが」
「そうですか」

「では私が人類を滅亡させて何かメリットがありますか？」
「話題になります」
それが最大の理由であった。
「こうした話においては」
「実際にはありませんね」
「はい」
彼もそれは認めた。
「それに何度も人類は滅亡するそうなので」
「同じ時にですね」
「十年後ですか」
彼はふと言った。
「その六月に滅亡します」
「十年後の六月が忙しそうですね」
「我々は何度滅亡しなくてはならないのでしょうか」
「それへの対策ですが」
「ええ」
そもそもそれが連合軍の主な仕事である。災害をどうするかは政治の基本中の基本であるからだ。
「他の知的生命体は数十万光年の彼方で災害といいましてもどんなブラックホールが来ても」
「大丈夫ですか」
「連合の技術ではブラックホールも消せます」
これは事実である。実際にそうして宇宙開拓を進めていっているのである。連合の技術はかなりのものであるがその中にはこうしたものもあるのである。
「ですから御安心を」
「わかりました。と言いたいですが」
「何か」
「そもそもあんな話を信じる方がおかしいので」
シャバキの話をである。

「幾ら何でもあれは」
「まあ安心出来るというのは覚えておいて下さい」
「わかりました」
「そしてですね」
八条は言う。
「ノストラダムスも実際には人類の滅亡を予言しているかというと」
「ええ、それははっきりしています」
インタビューをする彼もそれはわかっていた。

## 第二十二部第二章　のどかな王様その二十一

「本人は予言者とは思っていなかったのですし」
「そうです」
実はノストラダムスは自分を予言者だと思ったことはない。彼はユダヤ系の家に生まれた医者であり裕福な育ちである。医者としてはかなり優秀でありフランスにおいてのペスト撲滅の貢献者でもある。また星占いに関しては医者としての職業上必要だから覚えたのである。当時は占星術は医者としての必須技術であったのだ。
彼は美容コーディネイターでもありジャムの作り方の研究者であった。当時ではかなり有名な知識人であっただけだ。予言者ではないのである。
「あれは一体」
「まあ人間何かと破滅願望があったりしますよね」
「それはそうですね」
それは大なり小なり誰にでもあるものである。人間という生き物は複雑であり繁栄を願いながらも心の何処かで破滅したいと思ったりするものなのである。
「それではないでしょうか」
「それですか」
「はい、シャバキ氏もまた」
八条は述べる。
「それなのでしょう」
「しかしそれにしても」
記者は困った顔をして述べる。
「あまりにも人騒がせですな」
「ですがテロ等はしていないですよ」
「喚いているだけですからね」
それを考えるとシャバキはまだ害がない。子供でも信じない与太

話でしかないのだし。
「困ったことですが」
「連合は民主主義ですから。言論に責任が持てれば何を言ってもよいでしょう」
「それはね」
ジャーナリストだから最もよくわかることである。
「当然です」
「ですからあの人が何を言ってもいいのです。ただ」
「ああなるケースもありますか」
「精神病院には何度も入っておられるそうですね」
「あれが最初ではありません」
「それは私も聞いていましたが。何度もですか」
「病院の中でもああした感じだそうです」
記者は述べる。
「ノストラダムスや人類滅亡や何とかは予言されていたとか。騒いでいるそうです」
つまり入院しても全く変わらないということである。
「やはり」
「お医者さんは困っているそうです」
「御家族はおられるのですよね」
「さて、それは」
その質問には首を傾げてきた。
「おられないのですか？」
「当然両親はいるかいたのでしょうが」
シャバキといえどわいて出て来たわけではない。人間ならば両親がいる筈なのである。少なくともシャバキもまた人間であるからだ。
「プライベートなことまではわかりません」
「そこからの検索は犯罪者でもない限り」
「そういうことです。ですが」
「ですが！？」

「あの様な夫や親だと家族も大変でしょうね」
「でしょうね」
流石に家族までシャバキと同じとは考えたくはなかったのだ。内心不安はあるにしても。
「少なくとも私だと勘弁願いたいですね」
記者は言った。
「少しどころではなく困ります」
「左様ですか」
「ええ。これはオフレコですが」
そう断ったうえでのコメントである。

## 第二十二部第二章　のどかな王様その二十二

「親子の縁を断ちたいですね」
「成程」
「まあ家族はいると思いますよ」
「いますか」
「プライバシーに関しては犯罪者でもない限り調べることはよくありませんがね」
「ですね」
これは八条も同じ意見であった。もっとも軍にいればプライバシーなぞそうそうはないものなのであるが。
「彼は犯罪者ではないですから」
シャバキは犯罪は犯してはいないのだ。言っていることがかなりおかしいだけである。
「ですからね」
「そういうのは調べないと」
「必要でもないでしょう？」
「これはオフレコですが」
八条もオフレコを出してきた。
「国防省の仕事はあくまで国防省の範囲内だけです」
「はい」
「犯罪者の取り締まりは警察の仕事です。ましてや犯罪を犯していない人には」
「関係がないですか」
「そうです。言うまでもないと思いますが」
「では一万人委員会はやはり」
「国防省としては存在を確認していません」
当然の結論であった。
「中央政府としても」

「はい。おそらくは各国政府も」
彼ははっきりと言い切った。
「ただ、それをあの人が信用するかどうか」
「絶対にないですね」
これもまたわかりきったことであった。
「おそらくは何があっても陰謀論を主張するでしょう」
「やはり」
「各国政府は隠しているだけだと。証拠を出していないと」
「証拠も何も」
八条はまた言う。
「実際に何十万光年も離れていてですか。他の知的生命体とは」
「それでもです」
記者はそれも否定する。
「言うならば悪魔の証明です」
救いのない言葉であった。この場合は。
「証明出来ないならばいる筈だと。そういう訳なのです」
「困ったことですね」
「ですが御安心下さい」
そのうえで述べる。
「そもそも信じている者はいませんから」
「でしょうね」
これもまた言うまでもないことであった。
「ほら、いますよね」
ここで記者はまた一人変人を出してきた。
「一年に一回ＵＦＯ番組を放送している」
「ミステル＝イオヤですか」
「そう、彼です」
シャバキがニカラグアが生み出した史上最強の変人ならばこのイオヤという人物はパナマが生み出した最悪の変人だと言われている。どちらにしとまともな人物ではない。

「彼にしろそうですね」
「あの番組は凄いですね」
八条の感嘆は皮肉ではない。
「何と言いますか」
「あれを信じているのは小学生か」
記者がそれに応えて述べる。
「小学生並の思慮分別の持ち主だけですね」
もっともそうした輩も案外多いものであるが。中には実生活で幼稚園児以下の思慮分別と法律への理解力が何を言っても実に着かない輩もいる。そうした輩は遅かれ早かれどうしようもない事態を引き起こして破滅するものであるが。このミステル＝イオヤという人物は少し違う。
「あれですよね」
八条は言う。
「シャバキ氏の話にも出て来るあの宇宙人」
「それですね」
あまりにも有名になってしまっている頭が大きく体毛が全くない宇宙人である。眼が異様に大きく爛々と光っている。そして身体は痩せている。あの宇宙人である。どういうわけか一千年も前からその存在は一部で噂になっている。この時代でも見た者はいないのであるが。
「あれが潜入しているとのことです」
「シャバキ氏と同じことを言っていますね」
「それは当然でしょうね」
記者はさもあらんといった顔であった。
「どうしてですか？」
「二人は顔見知りなのですよ」
「そうだったのですか」
「はい、そしてお互いに影響し合い」
「さらに力を増していくと」

それを力と呼んでいいのか甚だ疑問ではあるが。
「そうです。そういう関係なのです」
「困ったものですね」
「このイオヤという人物は最近どうも深刻な躁状態にあるそうです」
「鬱ではなくてですか」
「はい、躁です」
記者ははっきりと言い切った。
「実はシャバキ氏もそう診察されています」
「躁とはまた」
「いや、鬱ではないと思いますが」
記者が突っ込みを入れる。
「あの状態は」
「言われてみればそうですね」
八条もそれに頷くものがあった。
「あの状態でいつも騒いでいるのですからね」
「そういうことです。そして躁で騒いで番組を作っているのです」
「はあ」
「だからああした番組になるのです」
「あの番組は一応ドキュメントということになっているのですよね」
「スタッフだけでしょう。そんなことを信じているのは」
類は友を呼ぶ。ミステル＝イオヤのことを信じられるのも同類だけなのである。やはり何処にでも奇人変人は存在するものなのである。
「あれはバラエティー番組です」
世間の評価はこうである。
「私はそう思っています」
「バラエティーですか」
「そうです」
彼は語る。
「どう見てもあれはインチキ番組か、そうでなくてはお笑い番組だ

からです」
「お笑いですか」
八条はその言葉に思わず苦笑してしまった。

## 第二十二部第二章　のどかな王様その二十三

「違いますか？」
「まああの番組は」
それを受けて語る。
「爺やと婆やが毎年楽しみにしています」
「爺やと婆やですか」
「ええ」
ここでは八条は自分が何を言ったのか気付いてはいなかった。
「それはまた」
「何か？」
「いえ、別に」
こうしたところに育ちは出るものであった。八条はやはり良家の出身だということがあらためてわかる。
「それでですね」
「はい」
「あの番組の見所は突っ込みなのですよ」
「突っ込みですか」
「見ながら何でそうなる、と。言いながら見るのですよ」
「成程」
これには八条も大きく頷いた。
「そうした楽しみ方がありましたか」
「そうです。おわかりになられましたか」
「ええ。そういえば」
八条もここではたと気付いた。
「爺やと婆やもそうでした。これはないだろう、それは嘘だと言いながら見ています」
「そうなのですか」
何故か爺やとか婆やとか聞くと記者は微妙な顔をした。実はこの

記者は普通の家庭の出てある。だからそうした世界の話には引いてしまうのである。
「はい、そうです」
「楽しみ方としては正解ですね」
「ですか」
それに頷いてからふと思った。
「しかし」
「何でしょうか」
「本人達は大真面目なのですよね」
「そうですが」
記者はすぐに答えた。
「しかし傍から見れば笑えます」
「これもオフレコですが」
八条は慎重に言葉を選んでいく。そして言う。
「だからこそですよね」
「そうなのですよね。真面目なだけに」
「どうしても笑えてしまうのです」
「ええ」
「本人達はそれには気付いていませんが」
「それで他の知的生命体に関しては」
「おっと」
この言葉に反応を示してきた。
「それですか」
「はい。対策等は」
「今のところはっきりした情報はありません」
そう述べるしかなかった。事実なのであるから。
「ですから今は」
「何もなしですか」
「辺境に防衛艦隊がいますがこれはね」
彼は述べる。

「他の地域と同じですから。惑星の防衛施設も」
「左様ですか」
「はい」
連合では惑星開拓は中央政府の許可の下各国政府が主導で行うものとなっている。誰かが勝手に出て行ってそこに住み着くといったことは禁止されているのだ。だがこれは法律上の問題であって無法者がいたりするのも残念な話である。犯罪者はどの国にもいるのだ。
まずは惑星の防衛施設である衛星等を置いてから進出、開拓を行っていく。それが連合の開拓のやり方なのである。これはどの国でも変わりはしない。
「同じです」
「しかし相手がわかっていない」
「そうです。何しろ何十万光年の距離ですので」
それだけの距離は流石に如何ともし難いものである。距離とは最大の要塞の一つであるからだ。
「とりあえずの防衛はしておくといったところです」
「ということですか」
「間違ってもその知的生命体と結託しているということはないです」
「相手が何者かも、正確には何処にいるのかもわからないというのに」
「そうです。ですが」
八条は苦い笑みを浮かべて述べた。
「彼等はあまりそうしたことは考えていないようですね」
「人は見たいと思ったものしか見えないのです」
記者は言った。
「そういうものですから」
「だからですか」
「はい。ですから仕方のないことです」
「やれやれといったところですね」
「とりあえずはお話は終わりました」

記者は述べた。
「他の知的生命体と国防省の接触はなかったと」
「最初からわかっておられたのでは、それは」
「実際にそれを確かめないと騒ぎ出す人達もいるのですよ」
彼は八条の言葉に対してそう返す。
「例えば」
「その人達もでしょうか」
「いえ、彼等はそれを謀略だとか陰謀だとか言い出しますので」
論外だというわけである。そうした者達なのだ。おおよそ言っても無駄なのである。
「また別です」
「ですか」
「はい。それではそちらで責務を果たされてくれることを願います」
「わかりました。それではまた」
「今日は有り難うございました」
これで最初から殆ど誰も信じていなかった八条の嫌疑は晴れた。
だが元々陰謀論に捉われている者達を納得させるのは誰にも不可能なことであった。世の中は実に難しい。

# 第二十二部第三章　兵器と作戦その一

兵器と作戦

シャイターンはこの時連合とエウロパの戦いを緻密なまでに検証していた。そこから何かを掴もうというのだ。

自身の部屋に双方の膨大な資料を持って来させて自身で検証をしている。その中でも今は兵器に注目していた。

「凄いものだな」

丁度部屋に来ていたアブーに対して述べた。

「連合の兵器というものは」

「ティアマト級のことでしょうか」

アブーはそれに対してこう言葉を返してきた。

「あの巨大戦艦は確かに」

「それだけではない」

だがシャイターンはその言葉を完全なものではないとした。

「といいますと」

「わからないか。他の兵器の質の素晴らしさも」

「まず述べさせて頂きますと大型ですね」

「そうだな」

弟の言葉に頷いてきた。

「そして武装と防御力がかなりのものになっています」

「生存能力もな」

「その結果ですね。損害が異様なまでに少なかったのは」

「一因ではあるな」

兵器への配慮が損害を少なくさせたというのである。

「間違いなく」

「そうですね。ですがそれだけではないのではないでしょうか」

アブーは考えながらまた述べた。

「というと何だ、他にあるものは」

シャイターンは弟に対して問うた。
「連合軍の艦艇はどれも大量生産を前提として開発されています」
「うむ」
「そのうえ開発に余裕があります。ですから」
「後で換装や改造が容易だな」
「そう思います。そこまで考慮されていますね」
「いいものを見ている」
シャイターンは弟に対して正解だと述べた。
「その通りだな。連合の兵器は実によく考えて設計されている」
「はい。戦争を知らない軍隊だと思っていたのですがそれがどうして」
「兵器に関しては知っていたということなのだろうな」
シャイターンの声が冷徹に部屋に響いた。
「少なくとも技術はあった」
「技術が」
「そうだ。だからこそ開発が可能だったのだ」
彼は言う。
「違うか」
「いえ」
それがわからないアブーではなかった。わからないでどうして一軍を率いることができようか。
「その通りだと思います。ですが問題は」
「その技術の根拠だな」
「それはやはり連合の元々の技術なのでしょう」
「だな」
シャイターンは弟の言葉にまた頷いた。
「民間の技術をかなり応用している」
「はい」
「連合の技術班も考えたものだ。そのうえでここまでの兵器を作り上げた」

「基本的に重武装、防御力多大ですね」
「攻撃と防御か」
その二つが出たのだった。
「機動力は弱いかと。実際に追撃戦で振り切られたことも何度か報告されています」
「そのかわり索敵、哨戒能力は高いな」
「そうですね。それで勝利を収めたケースも報告されています」
「あえて機動力を無視したというのか」
「その分を他に回して」
「つまりだ」
シャイターンはそのまで話したうえでまた述べた。
「彼等は重装歩兵なのだ」
「重装歩兵ですか」
「そうだ。その攻撃力と防御力はな」
「成程」
アブーは言われてみればその通りだと思った。妙に納得できる例えであった。
「まさしくそれだろう」
「そしてその射程は」
「弓だな」
シャイターンは言う。
「それもかなりの射程の」
「そうなりますか」
これもまた非常に頷ける例えであった。確かにそうである。
「長槍と投槍、そして剣まで持っている。どの兵士も」
「強い筈ですね」
「そうだな。しかも方陣で固めている」
「はい」
「攻略は容易ではない。おまけに数が違う」
何もかもが揃っているというわけである。連合軍の強さの秘密の

一つであった。
「後ろに回り込もうにもな。見つかってしまう」
「それです」
アブーもそこに注目していた。
「確かに連合軍の船足はかなり遅いです」
「ああ」
そうした面から見てもまさに重装歩兵であるのだ。シャイターンの言葉は慧眼であると言えた。
「ですがそれを補うのがこの索敵能力と哨戒能力です」
「それぞれの艦艇に無人の偵察機を持っている」
「そして無人偵察艇も」
「用意周到だな」
シャイターンは偵察機や偵察艇の話を聞きながら述べた。

## 第二十二部第三章　兵器と作戦その二

「そこまで考えているのだ」
「速度を補う為だけではないでしょうね」
「それは第二の理由だな」
「では第一は」
「損害を出さない為だ」
シャイターンは末弟に対してそう述べた。
「連合軍は志願制だな」
「ええ」
これはもう言うまでもないことであった。どの国の軍関係者も誰もが知っていることであった。
「だからだ」
「だからなのですか」
「損害を出すことは避けたい」
これはどの軍でもそうであるが連合軍はとりわけそうなのである。これには連合の事情があるのだ。
「連合には様々な産業がある」
シャイターンは言う。
「働く場所は幾らでもある。いざとなれば開拓地に行けばいい」
「そこで新たな土地を切り開くと」
「そうだ。現にそうやって連合は人口問題も職業問題も解決してきた」
過剰な人口は開拓地に送り込む。かってアメリカがやってきたことを今では連合全体で行っているのである。即ちフロンティアの開拓である。
「他にも産業は多くある。人材はあらゆる方面に行けるのだ」
「軍隊だけではなく」
「そういうことだ。そこまで言えばわかるな」

「はい」
兄の言葉に対して頷いた。
「連合では何も軍に入らなければいけないということはないのだ。他に才能を活かせる場所は幾らでもあるし働き口もあるのだ」
「それで損害を出したくはないのですか」
「命を賭けなくて済む場所が幾らでもあるからな」
ここがサハラと大きく違うのである。
「身を立てるにしろ連合では軍人で身を立てるのは限られている」
「さらに人材が集まらないと」
「そうだ。あくまで連合の事情が大きく影響しているな」
「そうですね」
「そして志願制だから」
「損害が出ると志願者が減る」
「そうなれば軍の維持にまで影響が出る。だから損害を嫌うのだ」
思えばかなり生々しい事情である。だが連合らしいと言えばらしい。
「これは覚えておくのだ。連合はサハラとは違う」
「サハラとは」
「全くの別世界だ。その別世界で考えられていることなのだ」
シャイターンはそれを強調してきた。
「いいな」
「そうなのですか」
「まだよくわからないか」
弟のいぶかしがる顔を見てうっすらと笑ってきた。
「申し訳ありませんが完全には」
「まあいい。どちらにしろ連合と正対するようになるのは暫く後だ」
シャイターンはここで正対という言葉を使ってきた。アブーもその言葉に気付いた。
「正対ですか」
「そうだ」

彼はそれに頷く。
「ということはいずれ連合とも」
「実際のところ可能性はほぼないに等しい」
あらかじめそう前置きをする。
「連合は西には関心はない。彼等の関心はあくまでその広大な開拓地だ」
「ですね」
連合に侵略性がないのは何も彼等が無欲で善良だからではない。単に侵略する必要がないからなのだ。無限の開拓地に広大で豊かな無数の星系、そしてどの様な惑星も居住可能にしてしまう技術があるからなのだ。そういったものがあるから侵略する必要がないだけである。連合内部での対立が紛争や抗争に発展しなかったのもそこに大きな理由がある。人というものは満腹ならば他人の飯を奪おうとはしないものだ。空腹で誰のものでもない食べ物が前にあればそれに手を伸ばす。そういうものだからである。

## 第二十二部第三章　兵器と作戦その三

むしろ連合はサハラよりも遥かに貪欲な一面が強い。物質文明であり大衆文化である彼等は何でも手に入れようとする。派手に遊び、派手に振舞うのが粋とされる場合もある。かなり発達した資本主義でありそういったところが欲望を肯定させているのである。

「我々ではない」

当然シャイターンもそれは認識していた。

「幸運なことにな」

「幸運ですか」

「サハラ全土で二千億だ」

今度は人口の話を出してきた。

「しかし連合は四兆。比較にもならない」

これが現実であった。

「戦わばどうなるかは自明の理だと思うが」

「確かに」

「その彼等と正対するならば」

「こちらは圧倒的に不利ですね」

「それはあってはならない。だが幸運なことに」

「彼等は西には興味がないと」

「そういうことだ。だが可能性としては皆無ではないのだ」

ここに大きな問題があるのだ。ありとあらゆるケースが考えられるのだ。

「いいな、皆無ではない」

シャイターンはそこを強調してきた。

「連合との衝突の可能性はやはりあるのだ」

「正対してですか」

「まず連合は巨大だ」

それをまた述べてきた。

「衝突すればひとたまりもない。しかもマウリアまでいる」
「彼等もですか」
言うまでもなく連合の長年の同盟国である。
「彼等も敵に回ったならばさらにまずいことになるだろう」
「二方向から攻められ、さらにその勢力は我々を遥かに凌駕している」
「よく言われることだが連合の兵は弱い」
シャイターンの目が静かに光った。
「しかしだ。戦争は数だ」
そのうえでこう述べる。
「わかるな。数こそが最大の力だ」
「はい」
アブーもまたそれを熟知していた。だからこそ頷いたのだ。
「連合にはその数がある。だからだ」
「敵に回すべきではないと」
「可能性は殆どないにしろだ。ただ」
「ただ？」
「我々の方に何かあればな」
「攻めて来ると」
「連合は決して平和的な勢力ではないのだ」
それをかなり強調する。
「それは覚えておけ」
「エウロパとの戦争まで一千年の間内乱や国家間の紛争すらなかったのにですか」
わかってはいたがあえて問うてきているのだ。そうした意味でアブーの今の質問は中々意地の悪いものであると言えた。無論意識してのことである。
「それでもだ。戦争をしないのと平和的なのはまた別だ」
「つまり戦争を行うには必然があると」
「そうだ。連合はその必然がなかっただけなのだ」

「今までは」
「幸いにしてな」
あえて幸いにしてとまで言った。
「だがこれからはどうかわからない」
「どうなるのでしょうか」
「少なくとも今のままならば戦争はない」
シャイターンは述べる。
「連合にとって戦争を行う必然が見当たらないからだ」
そうなのであった。連合は戦争を好まないのではないのだ。戦争をする必要が無いから戦争をしないだけなのである。これは非常に大きな意味を持っている。
「従ってだ」
また言う。
「必然があればわからない」
「我々との間も」
「そういうことになるな」
声は落ち着いているがシビアなものであった。
「そもそも人なのだ」
シャイターンはさらに冷徹な声で述べてきた。

## 第二十二部第三章　兵器と作戦その四

「誰もが同じだ」
「同じですか」
「アッラーは言い給うた」
　アッラーの名を出したのはあえてその言葉の根拠を強く思わせる催眠的な効果があるからであろうか。サハラではアッラー、すなわちイスラムは絶対的な存在であるから。この前提がなければイスラムではない。イスラムとは『神に絶対的に帰依する』という意味であるからだ。すなわち絶対という定義の肯定からイスラムははじまるのである。
「人はアッラーの下に皆平等であるとな」
「はい」
　無論これはアブーも知っている。知らない筈がなかった。
「そうした意味で人は皆同じだと」
「向き不向きがありそれに関する能力の差があるとしてもだ」
　それでも同じ人間だというのである。この考えはまさにイスラムであった。
「だからだ」
　そこまで言ってからまた述べた。
「サハラの者も連合の者も同じなのだ」
「信じている神は違えど」
「持っているものは同じ。ならば」
「決して彼等が戦争を好まないわけではないということなのですね」
「そうだ。彼等も必要とあらば戦う」
　シャイターンははっきりと言い切った。
「守る為の場合もあれば」
「己の利益の為に」
「それが人の本質だからな。人は利益の為に動く」

シビアで辛辣な視点だが確かにそうであった。シャイターンの見方は正しいと言えた。
「特にこうした政治に関してはな。良心もこの場合は違う」
「政治家にとって良心とは」
「どれだけその所属する国家、若しくは勢力に貢献するように意識するということだ」
それこそが政治家としての良心であった。他のものは必要ないのである。そうした世界なのである。余計な道議などはかえって邪魔になる場合も多々ある。そうした世界である。
「わかるな」
「はい」
アブーはその言葉にも頷いた。
「我々と同じだと考えるといい」
「それでは勢力が大きいだけに」
「だからこそ彼等は危険なのだ」
シャイターンの連合に対する危惧は変わらない。
「何かしてくればそれだけで」
「大きな脅威になる」
「だからだ」
そしてまた言う。
「その危機を乗り切り生き残る為には」
「連合だけは何があっても敵に回さないと」
「そしてことが起こればすぐに収めたい」
こうの述べた。
「長期戦になればそれだけ厄介なことになるからな」
「ええ」
軍人であるアブーにはこれはよくわかった。むしろ専門分野である。
「しかし」
そのうえで述べる。

「ああした敵とは戦いたくはないですね」
「二十倍の差はあまりにも大きい」
「そうですね。ですが」
「ですが？」
シャイターンは弟の言葉に目を向けてきた。

## 第二十二部第三章　兵器と作戦その五

「どうした」
「あれだけの国力がありながら保有している戦力は」
「あまりないと言いたいのだな」
「その力に比して。どう思われるでしょうか」
「いいところに気がついた」
シャイターンは弟の言葉に口元に笑みを浮かべてきた。彼にしては珍しい穏やかな笑みであった。彼もそうした顔をすることがあるのである。
「アブー」
次に弟の名を呼んだ。
「はい」
「御前はシャイターン家の剣となるべく育てられた」
つまり軍人として育てられたということである。
「だが同時に書のことも知らなくてはならない」
政治家としての知識も必要というのである。軍人はただ軍人として生きるのではない。高級軍人ともなれば政治的な知識や素養も要求されるのである。
「今の言葉は。書に関するものだ」
「政治的なのですか」
「そうだ。つまりその国力を以ってすればより多くの兵力を集められるというのだな」
「そうです」
彼は言う。
「確かに志願制で志願者も少ないですが」
最初の話とも絡み合っていた。話は一つではないのだ。
「それでもです」
だがあえて言う。

「兵士は揃えようと思えば揃えられます」
「どうやってだ」
「それこそサハラ義勇軍のそれのように。或いは傭兵を雇うなり」
「我々のようにか」
「方法は幾らでもあります。それであえて兵力を小さく計画立てているように思えます」
「理由はある」
シャイターンはそれに応えて述べた。
「それはどのようなものでしょうか」
「まずはだ」
「はい」
「先に述べた理由だ」
「他の産業へ人材が優先的に回るとのことですか」
「そうだ。まずはこれが大きい」
彼は言う。
「連合は様々な産業が発達し、それにより豊かさを維持している。だからこそ」
「まずはそれ等の産業に」
「それから軍に人が回る。そうした形になっているな」
「ええ」
まさに先の話の通りであった。何処にもおかしなところはない。
「そしてだ」
「次は」
「元々連合軍は防衛主体の軍だ」
「ではエウロパとの戦争は」
「それでもだ」
彼は述べた。
「連合軍の主な役割は海賊やテロリストへの対処だ。それを目的として設立されているしな」
「成程」

「それを考えてああした組織になっているのだ。兵器もまた」
「そういえばパトロール艦という兵器もあります」
「うむ」
辺境や治安が不安視されている宙域を十隻単位でパトロールしたり民間の艦艇の護衛をしたりする艦艇である。それの存在もまた連合の治安の好転に大きな役割を果たしている。
「それもまたその一環だ」
「そうなのですか」
「その十の軍管区に今は四百個艦隊ずつか」
「確かそうです」
「それで一個軍集団だったな」
次に述べられたのはそれであった。
「はい」
「それだけでサハラに匹敵するがそこにいるのはより多くの人口だ」
「平均して四千億の」
サハラの全人口のざっと二倍である。やはり尋常な数ではない。

## 第二十二部第三章　兵器と作戦その六

「彼等を守る為なのだ。システムもまた」
「だからですか」
アブーはそれを聞いてまた一つのことに気付いた。
「何がだ？」
「連合軍の軍律のよさです」
彼は言う。
「彼等はエウロパとの戦いで犯罪行為を殆ど犯しませんでした」
「そうだな」
そのことはあまりにも有名になっておりシャイターン自身も自軍の軍規に対して適用を考えている程である。連合軍はその強さはともかく数と軍規に関しては誰にも批判されない軍であった。
「それにはこうした事情があったのですか」
「そもそもが市民の軍隊だ」
シャイターンはこうも述べた。
「中央政府に所属しているがその将兵は全て市民だ」
「そこからの志願者からですね」
「そうだ。エウロパのように貴族達が指揮したり我々の様に徴兵された者達がいたりするものではない。皆志願した市民の将兵だ」
「自分と同じ市民を護る為に」
「だから軍規が正しいのはわかるな」
「そういうことでしたら」
彼にもよくわかった。
「やはり防衛を目的にしている軍と攻撃を目的にしている軍は違いますから」
「うむ」
シャイターンは口元に笑みを浮かべて弟の言葉を聞いていた。
「しかしです」

だがここで彼は述べた。
「彼等は対外戦争でも成功を収めました。これは大きいかと」
「あれはシステムもあった」
「システムですか」
「戦争は人や兵器だけでするものではないな」
「はい」
かつてはそうであったが二十世紀後半以降、とりわけこの時代では戦争はただ人や兵器でするだけではなくなっているのである。戦争を行うのはシステムによってでもあるのだ。もう一握りの名将や勇者によって行われる時代ではなくなっているのである。連合軍の考えはこうである。
「彼等はそういう考えだ」
「その考えによりあの戦いを進めていったと」
「そういうことになる。彼等は名将を必要としない」
「システムを必要とする」
「システムなのだ、それに基づき戦争を行い」
「誰が軍を率いても最小限の損害で勝利を収める」
それが連合の戦争なのであった。
「そういう戦争を目指しているのだろうな」
「随分と虫のいい話にも思えますが」
「しかし戦争に対する究極の要求でもある」
シャイターンは言った。
「違うか」
「確かにそうですが」
「それを人にではなくシステムに求めた。それだけなのだ」
「そうなるのですか」
「そしてそのシステムが動かすのはあれだけの数だ」
アブーはそれを聞いて自らの喉がゴクリ、と鳴るのを感じていた。その脅威をはっきりと感じ取ったからであった。
「だからこそ彼等は強いのだ」

「強いですか」
「個々の将兵の質には頼らない強さだ」
「それも強さになるのですね」
「軍の強さとは何だ」
シャイターンは弟に対して問う。
「何だと思うか」
「戦争に勝利を収めることです」
それに対するアブーの返事は明快な即答であった。
「それ以外の何でもありません」
「そうだな。勝利を収めることだ」
「はい」
「では最小限の損害で勝利を収める軍隊は何だ」
「言うまでもありません」
彼は答えた。
「そういうことだ。だから連合軍は強いのだ」
「強いですか」
「そのうえ規律も正しい。非常に優れた軍であると言える」
「まるで蜃気楼の様に現われたというのに」
「蜃気楼か」
「ええ」
アブーは述べる。
「その出現はまさに蜃気楼でした。今まで国防省すらなかったというのに忽然と」
「各国の軍を合わせただけだがな」
連合軍の設立は実は案外単純なのである。連合各国の軍を編入して出来上がったものである。それで人員ととりあえずの設備を手に入れて連合軍の設立となったのである。
だがそれだけで今のような軍にはなりはしない。むしろ連合軍はそこから出来上がったものなのである。

## 第二十二部第三章　兵器と作戦その七

設備や航路を整備し、そのシステムを整えていった。新たな兵器を開発していった。僅かの間に極めて機能的な軍を作り上げた。それは八条が中心となって行われたのである。
「だがそれでもああした軍になった」
「見事ですらあります」
「それを成し遂げたということは事実だ」
「そうですね」
兄の言葉に応える。
「連合の力、侮れませんか」
「そしてだ」
シャイターンはさらに言う。
「それを行ったのは軍人ではない」
「政治家ですか」
「そうだ。八条義統」
シャイターンもまた彼のことは知っていた。
「恐ろしい男だ。かって日本軍にいたそうだが」
「それはあまり長くはなかったそうです」
「それでもあれだけのことを成した」
それをあらためて述べる。
「見事なまでにな」
「確かに。彼は恐ろしい軍を作り上げました」
「僅かの間にな。恐ろしい戦略家だ」
「兄上がそこまで仰るとは」
アブーはサハラにおいて英雄と讃えられる兄が他の者をそこまで評価するのにかなり驚いていた。
「余程のことなのですね」
「そうだ、彼もまた英傑だ」

シャイターンは八条をそう認めていた。
「剣を持たぬ英雄だ。例えて言うなら剣を持つ者達を統べる英雄だ」
「剣を持たずにですか」
「そうだ。戦争は剣を持つだけではない」
そして言う。
「その剣を持つ者達を動かすのもまた戦争だ」
同じ立場にあるからこそ言える言葉であった。
「そういうことだ」
「成程」
「わかるな」
そしてアブーに目をやってきた。
「彼のことが。連合のことが」
「はい」
真剣な顔でそれに頷いてきた。
「連合は偉大な勢力だ。様々な問題があるにしろ」
「少なくとも戦うべきではない」
「そうだ。しかしだ」
その漆黒の目が赤く光ったように見えた。
「有事のことも考えておかなければならない」
「ですね」
これは当然のことであった。どういった稀と思われるケースも最悪の事態も考えておくのが危機に対する対処である。そしてそれへの対策を立てるのが政治家であり軍人であるのだ。二人はそれをよく踏まえていた。
「連合のあらゆるもののさらなる研究だ」
シャイターンは言った。
「特にシステムをだ。いいな」
「はっ」
アブーは敬礼でそれに応えた。
「わかりました。それでは」

「頼むぞ。我等が統一した暁には連合と接する」
彼にとっては近いうちにやって来る未来であったのだ。
「その時にきっと役に立つだろう」
「ですね。その時こそ」
アブーの声もまた兄と同じ色を帯びてきていた。それはシャイタ
ーン家の血であろうか。
「サハラを統一しただけでは終わりはしない」
彼はただサハラを統一して全てが終わると考えている凡百の輩で
はなかった。そこから先のことも見ていたのだ。そこが彼を英傑た
らしめているものであった。
「だからだ。わかったな」
「はい」
こうして彼等の話は終わった。そして連合軍への研究も行われて
いく。風雲急を告げるサハラにおいても連合軍の存在が影響してい
た。

## 第二十二部第三章　兵器と作戦その八

それはオムダーマンにおいても同じであった。アッディーンは大統領であるブワイフと大統領官邸で食事を採りながら話をしていた。
「連合とエウロパの戦いは完全に終わったな」
「そうですね」
フォークとナイフで羊を香料を効かして焼いたものを食べている。見れば二人共同じものである。
「思ったより激しい戦いだったと言うべきかな」
「エウロパ軍も確かに奮戦はしましたが」
シャイターンはそれに応えて述べる。
「ですが結局は連合軍に圧倒されました」
「圧倒か」
「はい」
アッディーンはその言葉に頷いた。
「損害は連合軍が義勇軍のそれを入れて十個艦隊程度であったのに対してエウロパ軍のそれは一五〇個艦隊に相当します。人員の損害も連合軍は一千万でしたがエウロパ軍は二億を越えます」
「比較にならないか」
「はい。結果を見ますと連合軍の干渉と言っていいでしょう」
「やはりそうなるか」
ブワイフはそれを聞いて顔を少し上げた。それからまた述べた。
「数のせいかな」
「それは確かに大きな要因です」
アッディーンはそれに応えて述べた。
「ですがそれだけではないのです」
「補給か」
ブワイフにもそこに考えを及ばせるだけの軍事的素養はあった。伊達に大統領をしているわけではないのである。文官といえどもそ

の程度の素養は必要なのだ。
「それも大きかったです」
かつて補給路を守りながら戦いをしただけはある。アッディーンもそれはよくわかっている。
「ですが」
「後は何があるかな」
「システムです」
奇しくもシャイターンと同じところに目を向けてきていた。
「システムか」
「そうです。連合軍はその組織力もまた凄いものがあります」
「ふむ」
ブワイフはそれを聞いて目を鋭くさせた。
「ではあれか。官僚機構と同じで」
「全く同じものと思われます」
アッディーンはそう述べた。
「連合軍はシステム化されているのです」
「だがそれでは」
ブワイフはそれを聞いてあることに考えを及ばせた。
「官僚主義と同じく弊害もありそうだな」
「そのままでしたらおそらくはそうでしょう」
アッディーンもそれは認識している。官僚機構の難点としては前例主義に陥りやすく硬直化しやすいといったものがある。だがこれは官僚機構の問題の一つではあるが対処方法がないわけでもない。
「ですが連合なのです」
「あそこではスポイルズ＝システムも強いな」
「はい、それです」
アッディーンもそれに言及してきた。スポイルズ＝システムとは官僚をトップ自らが任命するという形式である。試験により登用していくメリット＝システムとはまた違う。メリット＝システムだけになるとどうしても制度化、硬直化し風通しが悪くなってしまう。

こうしたものも必要なのである。
「それをバランスよく使っていっています」
「連合の官僚システムと同じか」
「おそらくはそれを応用したものかと」
八条のシステムをそう分析していた。

## 第二十二部第三章　兵器と作戦その九

「連合ではそれはやりやすいようです」
「シビリアン＝コントロールだからか」
「はい」
軍の最高司令官を文民である大統領とし指揮権限や人事権といったものは文官である国防省の背広組が持っている。それで軍の暴走等を抑えていく。そうした形式である。これは民主主義国家群である連合では最初から各国で取り入れられてきた形式であり何も連合軍がはじめてではない。だがシステム化にも非常に都合がよいものであるのだ。
「軍人は皆メリット＝システムから登用されますが」
「そうだな」
軍人に関してはこれが基本である。高度な専門職であるからだ。
「文官は違います」
「スポイルズ＝システムもある」
スポイルズ＝システムで登用されるのは概して高級官僚であり風通しがよくなり、また独特の発想が入ったりして前例主義や硬直化を防げるという利点がある。だが問題点としてはトップが自らの腹心を任命して専横的になったり無能な人材が来る危険があったりするのである。また問題のある人物が登用されて腐敗の元となったりする場合もある。これはこれで問題を抱えているのである。従ってこの二つのシステムをバランスよく使う必要があるのだ。口で言うのは容易いのだがそうそう容易なことではない。
「システム化し、それをコントロールするには都合がいいな」
「そうなのです、連合は」
「成程、わかった」
そこまで聞いたうえで頷く。
「そういうことだな」

「そうです。それで軍の補給体制や整備体制を整えたことが大きな勝因です」
「エウロパもそれはあったが連合程ではなかった」
「連合は言うならば誰が指揮していても勝てる軍を目指しているようです」
アッディーンの言葉にはいささか不快感が見られた。
「人ではなくシステムで戦うことにより」
「人で戦うわけではないのか」
「そうやら」
彼はまた述べた。
「戦術もそうです。やはりシステム化しております」
「そういえば以前制服組が言っているのを聞いたことがある」
ブワイフはここで言ってきた。
「連合軍の戦術にはいささかパターンが見られると」
「ええ」
それはアッディーンにもわかっていた。
「攻撃の際にも防御の際にもパターンがあります」
「パターンか」
「あらゆるケースを想定し、その際への最も合理的と思われる対策を採る」
「それを行っているのだな」
「エウロパとの戦闘を見ますとそうです」
その言葉はまるで研究者のようになっていた。何処か金属的な響きさえ感じられるのはブワイフの気のせいであろうか。少なくともアッディーンは意識してやっているわけではない。
「それでですね」
「うむ」
二人はほぼ同時に肉を切りそれを口の中に入れた。羊の独特の匂いと味が口の中を支配する。牛肉とはまた違う濃厚な味がした。ソースやスパイスと上手く混ざり合い絶妙なハーモニーを醸し出して

いた。

## 第二十二部第三章　兵器と作戦その十

「例えば後方に回られます」
「その場合はどうなるのだ？」
「後方へ向けて素早く機雷を放つかそれを行っては厄介な場合は後方にバリアーを集中させながら反転しすぐに方陣を組みます」
「妥当だな」
「やはりそう思われますね」
「それが一番いいと思うが」
ブワイフは話を聞きながらそう述べた。
「確かに私は文官で軍事のことはそれ程深くは知らないが」
それでもこれ位はわかるのである。勉強もしてきている。
「この程度はわかるつもりだ」
「ええ」
「そのうえで考えたが妥当ではないかな」
「閣下もそう思われますね」
「うむ」
「その通りです。ですがこれはパターンの一つです」
アッディーンは述べた。
「他にも多くのパターンがあります。その時で最も効果が期待できる方法をすぐに採るようになっているのです」
「戦術までシステム化されているのか」
「はい」
アッディーンは答えた。
「無論人間も考え、それを実行に移しますがあらかじめ設定されています」
「そうだったのか」
「どういった時にどういった対処を為すべきか。コンピューターに入れマニュアル化もされています」

「凄いものだな、それは」
それが近代以降の軍というものである。だが連合軍はそれでもサハラ以上のシステム化を行っているのである。ブワイフはそれに驚いているのだ。
「人はそれに基づいて考え判断を下す」
「コンピューターのサポートを受けてか」
「そういうことです。これでおわかりでしょうか」
「ふむ」
ブワイフはそれを聞いてどうにも面白そうな顔をしてはいなかった。
「では聞きたいことがある」
「はい」
そのうえでアッディーンに問うた。
「私が見たところあの戦争では連合軍はかなり自分の考えで動いていた」
「ええ」
「特にクロノスやアルテミスの戦いではそうだった。あれは違うというのか」
「それもまた事実です」
アッディーンはそれに答えた。
「ですがそれだけではなく」
「先にそうしたシステムがあったというのか」
「そういうことになります。数ある中で最も効果があるものをコンピューターが選び人がそれを選別し判断を下す」
「そうして戦っていく」
「最小限の損害で勝利を収める為にです」
彼は言う。
「そういうことだったのです」
「あの戦術戦略はかなり見事なものだと思ったがな。人だけが考えていたわけではないのか」

「人が選ぶ際のミスを極力抑えていったものです」
「成程な」
それを聞いてあらためて考える顔になっていた。考えながらまた肉を口に入れる。
「凄いものだ」
「はい」
「しかしだ」
だがここでブワイフは言った。
「それはあくまで連合に合ったものだな」
「それは確かに」
アッディーンもこれに頷いてきた。
「サハラにそれを入れても合うものかな」
「まず技術的な問題で完全には無理なのです」
「コンピューター技術か」
「はい、それです」
アッディーンはそれに答えた。

## 第二十二部第三章　兵器と作戦その十一

「やはりこれに関しては連合の方が遥かに上です」
「民間用の技術の転用がかなりの効果を示しているようだな」
「その通りです。これは連合軍の全ての技術に言えます」
「やはりな」
ブワイフもそうだと思っていた。だからこそ頷けたのである。
「そうなるか」
「はい」
「連合軍の技術はかなりのものだしな」
そして次には連合軍の技術をこう評した。
「さもあらんだ」
「ええ」
「そしてです」
アッディーンは話を続ける。
「兵器の性能もまたかなりのものですし」
「艦艇等だな」
「連合軍というとどうしてもあの巨大戦艦に目がいってしまいますが」
ティアマト級巨大戦艦のことである。この巨大戦艦は最早連合軍の象徴となっている。二十キロを越えるその大きさと重装備によってである。艦隊の旗艦となっておりこの艦なくしては連合軍ではないとまで考えられている程である。そこまでの存在になっているのだ。
「他の兵器もまた」
「我等よりも上か」
「攻撃力、防御力に関しては圧倒されています」
「圧倒か」
「駆逐艦で巡洋艦に匹敵する戦力があります」

こう表現する。
「巡洋艦に」
「その巡洋艦は戦艦に相当しますし」
「凄いものだな」
それを聞いてあらためて述べる。
「そこまでいくと」
「はい。戦艦に至っては」
「比較にならないか」
「空母にしろ彼等のそれは巨大です」
「二百機搭載可能だったな」
「そうです」
アッディーンはそれにも答える。
「我々が百機程度なのに対して」
「艦載機の性能も相当なものらしいしな」
「大気圏内にも突入可能です」
「そして普通に動けるのだな」
「エウロパとの戦争ではそうでした」
アッディーンはまた答えた。
「そして電子能力も索敵能力もまた」
「我々よりも上か」
「ただ、速度は我等の方が遥かに上です」
アッディーンは述べた。
「それだけは」
「それだけなのだな」
それを聞くとブワイフは苦い顔になってしまった。どうにもやりきれないものがある。
「では有事には」
「数の問題もあり勝利は難しいでしょう。数とシステム、兵器で圧倒されているだけに」
「それではだ」

「はい」
話は移った。
「連合軍との戦いは何があっても避けなければならないな」
「その通りです」
結論はシャイターンのそれと同じであった。これは彼等が共に現実を見据えて判断しているということの証左であった。誰も圧倒的な力の差がある相手に対して喧嘩を売ろうとは思わない。そういうことなのである。
「若し今後連合と境を接することになれば」
「何としても衝突を避けなければならない」
「私はそう考えます。如何でしょうか」
「それは軍人としての言葉か」
「半分はそうです」
アッディーンはまずはこう答えた。
「ですが後の半分は政治家としての言葉のつもりです」
「副大統領としてか」
「ええ」
彼は頷く。
「如何でしょうか」
「うむ、その通りだ」
ブワイフはその答えに満足そうに頷いた。

## 第二十二部第三章　兵器と作戦その十二

「確かにな。そうならなければならない」
「有り難うございます」
アッディーンはその言葉に礼を述べる。
「だが。衝突の危険はあるな」
国境を接するならばその可能性は皆無とはならない。皆無ではないということはそれだけで非常に大きいのである。有事を考慮しなくてはならなくなる。
「その場合は」
「その場合はおそらく国境での防衛は不可能でしょう」
「不可能か」
「仮にサハラと連合の境に我々の全ての戦力を集結させても無理です」
アッディーンは言う。
「おそらくは易々と突破されるでしょう。そうなれば終わりです」
「国境での防衛は無理か」
「やはり数が違いますから」
「ううむ」
もう肉は食べ終えている。そのうえで呻く。
アッディーンはアラブ風のパンを食べている。それで話をしていた。サハラ風のメニューをフルコースで食べているのだ。順当にいけば次はデザートとなる。
「押し切られます」
「では国境は捨てるしかないな」
「はい」
彼は頷いた。
「残念ですが」
「ではどうするかだな」

ブワイフはそのうえであらためて考える。
「有事の際は」
「国境は捨てて領土内に誘き寄せるべきです」
「中にか」
「それしかないでしょう」
述べるアッディーンの顔は苦いものになっている。それはどうやら彼にとっては面白くない作戦なのであろう。これは無理もないことであった。自国領に敵を入れるということはかなりの危険を伴うことは言うまでもないことであるし政治的にも非常にリスクが高いからだ。
「そして地の利を生かして」
「戦うというのだな」
「私はそれしかないと思います」
そこまで語ったうえでブワイフの顔を見据えてきた。
「若し戦わば」
「こちらからは何としても避けたいな」
「はい、こちらからは」
二人のこのやり取りにはある意味が含まれていた。
「しかし」
ブワイフはその意味に触れてきた。彼はパンを食べ終えナツメヤシを受け取っていた。今日のデザートはフルーツであったのだ。ナツメヤシの他にもオレンジやメロンがある。
「相手はどうかな」
「それが最大の問題です」
アッディーンは述べる。
「戦争は一方が拒むだけでは防げません」
「相手があってはじめて行われるものだからな」
「そうです」
語るアッディーンの目は厳しい。
「連合がどう出るか」

「今のところはだが」
ブワイフはそれに応える形で口を開いてきた。
「衝突する材料はないな」
「はい」
これはアッディーンもわかっていた。
「思い当たるものはありません」
「そうだな。さしあたっては大丈夫だが」
「長期的には」
「殆どないと思うがな」
ブワイフは考える目と顔でこう言った。ナツメヤシはもう一個食べている。アッディーンはグレープフルーツを食べている。グレープフルーツはブワイフの前にもあった。
「ですが連合は決して」
「戦争を好まないというわけではないな」
「そうです」
これもまたシャイターンと同じ見方であった。アッディーンもまた連合は決して平和的な勢力ではないと考えていたのである。これもまた現実を見据えていたからの結論であった。

## 第二十二部第三章　兵器と作戦その十三

「連合はかなり現実的な思考で動く勢力です」
彼は連合をそう評した。
「そこに利益があれば」
「来るか」
「私はそう見ています」
「それではだ」
ブワイフはそれを聞いたうえでまた言った。
「連合がそれを交易や外交で手に入れられるならば戦争にはならないな」
「そうですね」
これははっきりとわかっていた。だから頷けた。
「その場合は」
「そうだな。しかしだ」
ブワイフはまた言葉を変えてきた。
「そうでない場合は」
「武力に訴えることも辞さないでしょう」
アッディーンは言った。
「まず確実に」
「そうだな。それは考えておかなければな」
ブワイフも目を光らせていた。警戒する目であった。
「それではだ」
彼は言う。
「いずれ防衛計画は連合に対するものも考えていってくれ」
「統一された後は確実にそうなるかと」
「その場合はな。まず連合が第一の脅威になる」
圧倒的な国力差の相手というのは隣にいるだけでそうなってしまう。これは何時の時代のどの場所においても変わらない普遍的なも

のであった。
「それはわかった」
「はい」
「連合は脅威だ」
「確かに連合は纏まりに欠ける勢力です」
これは言うまでもないことであった。連合は一千年の間その中にある多くの国家が互いに衝突を繰り返してきた勢力である。戦争に至らなかったのは法律的、制度的には各国に交戦権や宣戦布告権がなかったからでもあった。これが連合の維持に大きな貢献をしてきているのである。全ての問題を連合法廷や様々な機関で収めてきたからである。
「ですが強大なのも事実」
「うむ」
ブワイフはその言葉にも頷いた。
「その強大な相手を隣に置くということは念頭に置いておかなければな」
「だからこそです」
「どうやら我々はまだまだ長い歴史を歩まなければならないようだな」
「それは一体」
どういう意味なのかとブワイフに問うた。
「我々はこの一千年の間絶えず戦ってきた」
「ええ」
これもまた言うまでもないことであった。サハラの戦乱の歴史もまた動かすことのできぬ事実であるからだ。
「統一されれば戦乱が終わるかといえばそうではないのだな」
「戦いがアッラーの望まれたものであるならば」
アッディーンもまたムスリムである。アッラーの名を出すのは当然であった。
「戦いはこれからも続くでしょう」

「それが運命というものだな」
ナツメヤシを口に入れて飲み干してから述べた。
「サハラの」
「全てはアッラーの思し召しです」
ムスリムとしての言葉であった。
「我々はその中で己の運命を真っ当するだけです」
「我々が今こう語り合っているのもまた運命なのだろうな」
「無論そうでしょう」
イスラムではそういうことになるのだ。アッラーは唯一にして絶対の存在だ。その行動には無謬なぞ存在しはしないのだ。全てにおいてヤハウェの神よりも偉大な存在とされている。同じ神であってもだ。
「全てはアッラーの下に」
「我々はある」
そのアッラーの言葉を今胸の中で思い出す。
「そうだな」
「はい、私が宗教めいたことを口にするのは妙でしょうか」
「いいことではないか」
サハラではそれは非常によいことであるとされている。ムスリムがアッラーの名を頻繁に口にするのは信仰の現われなのであるからだ。ここはユダヤ教とは全く違っている。
「アッラーは偉大であることを常に思わなくてはな」
「そしてその御意志に従い」
「戦いを進めていこうではないか。それでいいな」
「わかりました。では」
アッディーンはそれに応えた。彼はもうデザートを食べ終えていた。
「戦闘準備は整いつつあります」
「攻撃目標は」
「ハサンです」

彼はここではじめてハサンとの戦争を言及した。以前からわかっていることであるがそれをはっきりと口にしたのは今がはじめてであった。
「それを今計画中です」
「そうか、頼むぞ」
ブワイフはそれを聞いてアッディーンを見据えたまま述べた。
「いよいよサハラが一つになろうとしている」
「はい」
アッディーンもその言葉に頷く。
「そしてそれをもたらすのは」
「剣です」
それ以外にはない。それがサハラであった。
「そう、剣だ。それを使いこなす者こそがサハラでは王者だ」
「その通りです」
これは彼が軍人だからこその言葉であった。その声もまた剣の様に鋭くなっていた。
「ではな。頼むぞ」
「お任せ下さい」
デザートも終わりそこで話を収めにかかっていた。
「サハラの為に」
「オムダーマンの為に」
彼等は言い合う。そしてその場を去るのであった。

## 第二十二部第三章　兵器と作戦その十四

食事が終わるとアッディーンはすぐに国防省へ向かった。そこで軍の責任者としての務めを果たすのであった。

まずは国防省の自身の執務室に入った。そしてデスクワークを終わらせると次は作戦会議であった。既にそこには歴戦の将達が集まっていた。

「皆来ているな」

「はい」

機能的な作戦会議室に入った彼をガルシャースプが迎えた。彼ももう上級大将になっている。今までの功績から歴戦の参謀や提督達も栄達を果たしていたのである。

「それでははじめるとしよう」

アッディーンはそれを聞いたうえでこう述べた。

「次の作戦についてな」

「了解」

「わかりました」

参謀と提督達がそれに応える。そしてアッディーンを上座に左右に細長く置かれた席について話をはじめるのであった。

「まずはだ」

アッディーンが口を開いた。

「既にティムールも戦争準備の最終段階に入ったことを伝えよう」

「遂にですか」

「そうだ」

彼は提督達に述べた。

「遂にな。おそらく近いうちに彼等とハサンは戦闘に入るだろう」

「そして我々もまた」

ラシークがそれを聞いたうえで言う。

「戦争準備は最終段階に入ろうとしております」

「そうだ。そのことはさっき大統領閣下にお伝えした」
「左様ですか」
「副大統領としてな」
アッディーンは彼等にこう答えた。
「賽は投げられようとしている」
アッディーンはまた言った。
「二つの賽がだ」
「南と西から」
ガルシャースプはここではあえてハサンの視点に立った見解を口にした。
「放たれますな」
「そうだ、二つな」
アッディーンもそれをあえて強調する。
「さて、これに対するハサンの体制だが」
「はい」
それが最大の問題であった。相手が何をしているのかを知るのが戦争というものの最も重要な問題の一つであるのだ。これがわからない限りは勝利はあまりおぼつかない。敵を知り己を知れば百戦危うからずというわけである。それを怠って敗れ去った者は実に多い。これは戦争だけに限らない。
「わかっていることを述べてくれ」
「わかりました」
シンダントがそれに応えた。そして口を開いた。
「まず最高司令官ですが」
「うむ」
話はスタッフの面に関するものからはじまった。まずは人材ということである。
「形式上は国王ということになっていますがやはりこれは形式的なものです」
「あくまで名目上はか」

「はい、国家元首としてです。あくまで」
これは当然のことであった。その国家の元首が軍の最高司令官であるのは常識である。
「それで実質的な司令官は彼か」
「はい」
シンダントはそれに答えた。
「ルクマーン王太子です」
「彼しかいないか、やはり」
「ええ。ですが」
ここでシンダントの言葉がやや曇った。アッディーンもそれに気付いた。
「どうした？」
「人材が減り彼はそれへの対処に追われています」
「そういえばテロが多発したな」
これがティムールのものであることはここにいる者達は皆薄々気付いていた。だが確たる証拠は掴んではいないのであえて口には出さなかった。
「それのせいだな」
「はい。今ハサンはソフトウェアの面でいささか深刻な状況にあります」
「それまで政府や軍の中枢にいた者達が減ってか」
「ええ」
それは同時に王太子の腹心の者達が減ったということである。これが彼、そしてハサンにとって深刻な事態であることは言うまでもない。
「その結果止むを得なく二線級と目される人物が要職に就いていたりします」
「ふむ」
アッディーンはそれを聞いて考える目を見せてきた。
「止むを得なくか」

「そうです」
シンダントもそれに答える。
「中には明らかに問題のある人物も見受けられます」
「それでも使わなければならないのだな」
「そういうことです。これがハサンにとって深刻な事態になっています」
「成程な。中には意外な人材もいるかも知れないな」
「意外な人材ですか」
ハラスがそれを聞いて声を出してきた。

## 第二十二部第三章　兵器と作戦その十五

「そうだ。実際に何かをしてみないと人というものはわからないものだろう」
「確かに」
「そのままの評価の人間もいるがな。急に才能を開花させる人間もいる」
　だからこそわからないのだ。戦争というものは時としてそうした者が出て来るものである。だからこそアッディーンは今こう言っているのである。
「連合はそうしたことを否定しているようだがな」
「あそこは軍事に関してはそうですな」
　ムーアがそれに応えた。
「そうしたイレギュラーの要素を排除しようとする」
「まるで機械のようにな」
　アタチュルクの言葉はそれを不快に思っているものであった。
「あれがわからん」
　そしてこうも言った。
「戦争とは何が起こるかわからないものだ。それでああして何でもパターン化していくというのはな」
「それが連合の戦争だということだ」
　だがアッディーンは不平を口にする彼に対してこう述べた。
「だから一概には言えない」
「左様ですか」
「連合には連合の、サハラにはサハラの戦争の方法がある」
　こうも述べる。
「それだけだ。いいな」
「わかりました。それでは」
「うん。ここでそれを言っても仕方がない」

「はい」
「それでだ」
話を元に戻してきた。
「今実際にハサンの人材が枯渇しているのは事実だ」
「ええ」
「それは」
このこと自体はもうどうしようもないことである。彼等もよく認識している。
「しかしだ」
だがアッディーンはそのイレギュラーに目を向けているのである。そのうえで、である。
「そうした人材がいる場合は注意した方がいい」
「念の為に今のハサンの要人達をもう一度洗い直してみますか」
「そうだな」
ガルシャースプのその言葉に頷いてきた。
「それがいいな。念の為だ」
「わかりました」
彼もそれに頷く。そのうえで話は続く。
「だがそれでもわからないものはわからない。イレギュラーというものはな」
「人がそのまま筋書き通りの存在ならばこの世の中というのは存外つまらないものになります」
シャルジャーがそう述べた。彼もこの作戦会議に参加しているのだ。
「ですがそうではないからこそ」
「面白いのだと」
「はい。私はそう考えます」
「そうだな」
アッディーンはその言葉に頷いた。
「不確かな要素が多い。戦争は特に」

「果たしてハサンにも我々の脅威となる者がまだいるでしょうか」
「それは確かにいる」
アッディーンはラシークにそう述べた。
「王太子にしろそうだしな」
「ええ、彼はそうですね」
彼のことはよく知られていた。若くして国のほぼ全権を統括する俊英としてサハラ全土にその名を知られている人物である。王族というだけで今の地位にある人物ではないのである。
「彼だけは確かな脅威です」
「彼はな。確実に」
「はい。司令部はしっかりしていますか」
「やはりそれを考えるとハサンは手強いな」
「あの王太子が総指揮にあたるとなると」
艦隊司令達も口々に言う。皆彼のことはよく知っているのである。トップがよいというのはそれだけで強力な軍になるということなのである。
「ハサンが手強いのは事実だ」
アッディーンもそれに言及する。
「だからこそ油断をしてはならない。それはわかるな」
「無論です」
「例え人材が消耗していたとしてもまだまだ健在ということですな」
「そのハサンとことを構える」
今はっきりとそれを言った。
「かなりの戦いになるのは覚悟しておこう」
「既に双方国境にかなりの戦力を配しております」
シンダントが述べた。
「間も無く何時でも宣戦布告可能な状況になります」
「そうか、いよいよだな」
「はい。それでですが」
彼は言葉を続けてきた。

「今ハサン軍は国境の防衛ラインの強化に努めています」
「あの多重の防衛ラインだな」
それのことはアッディーンも知っていた。
「はい。それを我々に対する防衛の中心にするようです」
「ふむ」
「そしてもう一つの防衛の中心は」
ここで一同の目が彼に集中した。次の言葉が何なのかを待っているのである。
「国境のアステロイド帯です」
「あそこか、やはりな」
アガヌはその言葉を待っていたかのように呟いた。
「この二つを使って我々への守りとしています」
「それでだ」
アッディーンはここで言った。
「ここで今一度国境をチェックしておきたい。いいか」
「わかりました。では」
シンダントはそれに頷く。そして自分のところにあるボタンの一つを押した。
「こちらで」
「うん」
アッディーンの後ろにホノグラフィーの宇宙図が浮かび上がる。それは確かにオムダーマンとハサンの国境を映し出したものであった。

## 第二十二部第三章　兵器と作戦その十六

そこにあるのは確かに深く長いアステロイド帯であった。両国の間に長々と横たわるそれはまさに長城そのもののようであった。それを今見ているのだ。
「これですね」
「そうだな」
アッディーンは彼の言葉に応える。
「そして防衛ラインですが」
シンダントはまた言葉を述べてきた。
「この辺りにあります」
手にするレーザーで指し示す。そこはアステロイドの隣にある。
「アステロイド以外の国境全てに敷いております」
「用意がいいな」
「はい。それだけ彼等も必死ということです」
シンダントはこう述べた。
「だからこそ」
「それをどうにかして攻略する必要がある」
「何か策がおありで」
「いや」
だがアッディーンノ言葉はそれを否定するものであった。
「まだだ。このままでは」
「この多重の防衛ラインを突破しなくてはなりません」
「そうすれば損害が甚大なものになるでしょう」
「甚大で済めばいいが」
ガルシャースプが最も危惧していた。
「これだけの防衛ラインとなると突破も」
「難しいだろうな。突破してもそれから後の軍事行動が不可能になってしまう」

アッディーンが答えた。
「そうだな」
「はい」
ガルシャースプもそれを認めた。
「その通りです」
「考えたものだ」
アッディーンはあらためてこう述べた。
「我々の取るべき軍事行動を読んでこうしてきたのだ。敵もさるものだ」
「ですが閣下」
カーシャーンが彼に対して言う。
「そうも言ってはいられないかと」
「それはわかっている」
アッディーンは一旦はそれに応えた。
「これは国境を越えることすら容易ではない」
「そうです」
「しかしだ」
「しかし？」
「方法がないわけでもない」
「それは一体」
皆それが気になった。彼が何を考えているのか。それが問題となっていた。
「そうだな」
彼はこの時アステロイド帯を見ていた。
「参謀総長」
ガルシャースプに声をかけてきた。
「はい」
「あのアステロイド帯をもう一度調べてくれるか」
「アステロイドをですか」
「そうだ。全てはそれからだ」

彼は述べた。
「それからまた考える。よいな」
「わかりました。それではそのように」
「うむ。頼むぞ」
アッディーンはガルシャースプに声をかけた。それから他の者達に顔を戻した。
「次の話はその調査結果が出てからだ。それでいいな」
「わかりました。それでは」
「それまでは作戦準備にかかるということで」
「ただしだ」
だがここで彼はまた言った。
「何か」
「今我が軍の主力はハサンとの国境に集結しているな」
「はい」
「その通りです」
参謀達がそれに答えた。アッディーンはもうそれを把握していたがあえて聞いたのである。
「わかった。それではだ」
そして次の言葉を発する。
「兵の幾らかはアステロイド帯の方に向かわせる準備をしておけ」
「何か御考えが」
「すぐにわかる」
アッディーンはまだ胸のうちを明かそうとはしていなかった。
「いいな、すぐにだ」
「わかりました。それでは」
「うむ。若しかしたらだ」
彼は言う。
「作戦の第一段階はすんなりといくかもな」
「すんなりとですか」
「まだはじまってもいないがな。ただその部隊は」

「どの様な部隊で」
「高速戦艦や巡洋艦を主軸とする。いいな」
足の速い艦艇ばかりを選ばせた。これだけ聞けばアッディーン得意の機動戦術と聞こえないわけでもない。だが今回は何か考えが違っているように聞こえるのだ。
「それをアステロイドの方に」
「そうだ。さて」
ここでアッディーンの黒い目が鋭い光を発する。
「戦いとは宣戦布告前にもうはじまっているが」
「まずは国境からですか」
「全てはな。そこからはじまる」
「それではそれに快勝して戦いを進めていきましょう」
「そうすれば後々楽なものとなります」
艦隊司令達が口々にそう述べる。
「それではそのように」
「うむ。それでは」
「また御会いしましょう」
彼等は一旦解散した。そしてそれぞれの持ち場に戻る。アッディーンもまた自身の執務室に入った。
「さて」
彼はその中で一人宙図を見ていた。当然と言うべきかそこで見ているのはオムダーマンとハサンの国境であった。
「考え通りにいけばいいがな」
見ているのはアステロイドであった。そこに何かを見出していたのであった。

# 第二十二部第四章　情勢その一

情勢

サハラの風雲急を告げる事態は周辺各国にも伝わっていた。エウロパではそれを見ても特にこれといった動きもどうといった発言もなかった。

「止むを得んな」

ラフネールはそれを見ても諦めた顔をするだけであった。

「今の我々では。どうすることもできん」

「残念ながら」

臨時で首相を務めているボーデンがそれに応えた。今彼は内相と兼任でそれを果たしているのである。

「今の我々は国力を回復させるのが第一ですから」

「そうだ。それに今まで前線基地であったモントローズは非武装化されている」

「はい」

そうした問題もあった。軍事的にも無理な状況になっていたのだ。エウロパがそれだけ苦しい状況に置かれているということである。

「厄介な話だ」

「全くです」

「しかしだ」

ここでラフネールは言う。

「我々が動けない間にサハラが大きく変わるのは間違いない」

「ええ」

ボーデンは残念そうに言葉を返した。

「それは確実だと思われます」

「どうやらその時を待っていたな」

ラフネールは次にこう述べた。

「我々が動けなくなるその時を」

「それはティムールだけでなく」
「そう、彼等自体がだ」
この場合の彼等とはサハラ全体を指すのである。
「この機会を狙っていたか」
「彼等も考えたものです」
ボーデンはあらためてそう述べた。
「時を待っていたとは」
「おそらく我々が動けなくとも今の状況にはなっていたと思うがな」
「戦争ですか」
「そうだ。それは間違いない」
ラフネールはクールな声でこう語るのであった。
「しかしだ」
「はい」
そのうえで話を続ける。
「その場合はティムールが北を完全に占領してからだったな」
「我等が総督府を」
もうなくなったエウロパのサハラ総督府である。これの喪失もまたエウロパにとってはかなりの痛手となっているのである。連合との戦争で彼等が失ったものは非常に大きい。
「その場合は激しい戦いとなっていただろうが」
「しかし彼等はそれを無傷で手に入れることができた」
「そう、我々と連合の戦争のおかげでな」
ラフネールは忌々しげに言う。
「思えばサハラの今は我々が作ってしまったものだな」
「そうですね」
ボーデンの言葉もまた忌々しげな響きになっていた。
「北の統一も我々が介入出来なくなったことも大きく影響している為だ」
「ええ」
「そのことが今彼等が安心して統一戦争に向かわせている」

「あの戦争がなければその流れもかなり違っていたでしょうね」
「ああ」
ラフネールは忌々しげな響きをそのままにしていた。落胆さえ窺える。
「その通りだ」
「ですが」
ボーデンはそのうえで述べる。
「どちらにしろ彼等は今の事態を迎えていたでしょう」
「それはな」
これはもう述べた通りであった。ラフネールはそれに頷いた。
「さて、どうなりますかな」
ボーデンは言う。
「どの勢力が最後まで残るか」
「これは私の予想だがな」
その言葉を受けてラフネールは考える目をして述べた。
「おそらくハサンは消える」
「消えるのはまずはハサンですか？」
ボーデンはその言葉にはあえて疑問符をつけてきた。
「国力では最も上ですが」
「戦争は国力だけでするものではない」
ラフネールは冷静な声でその言葉を出した。
「それがわからない卿ではないと思うが」
「はい」
実はこの言葉を待っていたのだ。ボーデンはあらためてそれに応える。穏やかながらこうした言葉の駆け引きができる人物でもあるのだ。
「ハサンには致命的な弱点がある」
ラフネールはまた言った。
「西にティムールを置き」
「南にオムダーマンを置いている」

「双方から攻められた場合は対処しきれないかも知れないな」
そこであった。ラフネールはその弱点を冷静に見抜いていたのだ。だからこそ今の彼の言葉は相当な重みが感じられるものであるのだ。
「国力では対抗できてもだ」
「問題はどちらに重点を置くかですね」
ボーデンの目に思慮深い光が宿っていた。その光を宿らせたまま言う。

## 第二十二部第四章　情勢その二

「オムダーマンか。はたまたティムールか」
「防衛ラインはオムダーマンに対するのがかなりの規模になっているそうだな」
ラフネールは彼に問うた。
「どうなのだ、そこは」
「はい、それは」
ボーデンはそれに頷いてきた。
「その通りです。国境に何重もの要塞線を築いているようです」
「オムダーマンにはそれで以って当たるつもりなのだな」
それを聞いて口に手を当てて呟く。
「まずは彼等をそれで足止めし」
「主な兵力はどちらに向けられているか」
「かなりの予備兵力を後方に置いたうえでティムールに属国の兵全てを向けているようです」
「属国のか」
「オムダーマン側にはその防衛ラインを置き兵力そのものはそれ程ではないようです」
「成程な。考えてはいるな」
ハサンの戦略が今手に取るようにわかってきた。それを確かに感じていた。
「あの王太子も馬鹿ではないということか」
「むしろ中々の戦略家では」
ボーデンはそう注釈を入れる。
「そこまで考えられるとあっては」
「ふむ」
その言葉を受けてまた考える。
「そうだな。確かに戦略家だ」

「ええ」
「ただしだ」
だっがここで彼は言った。
「中々止まりだな」
「そこまでですか」
「そうだ。確かに戦略というものはわかっているようだ」
まずはそれを認めた。それにあたってはやぶさかではないようである。
「しかし。こうしたことは限りがない」
「といいますと」
「より上がいるということだ。どうだ」
「ということは」
その言葉を受けてすぐに二人の男が脳裏に浮かんだ。
「彼等ですか」
「そう、彼等だ。彼等は中々で済むと思うか」
「いえ」
その言葉に対してすぐに首を横に振る。
「とんでもない。彼等は天才です」
「そうだ、天才だ」
ラフネールはそこを強調してきた。語る目に熱いものが宿っていた。
「天才がいるのだ。それも二人もだ」
「彼等がハサンを狙っていると」
「そういうことだ。それではわかるな」
「はい」
ボーデンはまた頷いた。話はさらに緊迫したものとなっていた。
「人材の面でもハサンは厄介なことになります」
「既にかなりの人材を失っているしな」
「一連のテロによって」
「あれはおそらく」

ラフネールの目がまた光った。
「ティムールの仕業だな」
「そうですね。彼等以外に有り得ません」
それはボーデンも同じ考えであった。彼等はハサンで起こっていた一連の要人暗殺事件はティムールの仕業だと睨んでいた。そしてそれは事実であった。
「狡猾と言うべきだな」
「確かに。シャイターン主席は恐るべき人物です」
「例えて言うならローゲだ」
ここでラフネールは自分達の神の一人を出してきた。
「ローゲですか」
「そうだ。あの炎と奸智の神だ」
「言われてみれば」
似ていると。ボーデンも頭の中で納得した。

## 第二十二部第四章　情勢その三

「その通りです」
「そしてアッディーン副大統領はヘイムダルだな」
もう一人神を出してきた。北欧神話における神々の城ヴァルハラの門を守る神である。なおこのヘイムダルという神に関しては様々な説がありローゲと仲が悪いという説やラグナロクの後の絶対者とは復活した彼ではないかという説まである。ある意味北欧神話における現在の主神ヴォータンや本来主神であったとされるトールよりも重要で謎の多い神だとも言える。なお彼はローゲと同じく純粋な神ではない。九人の巨人の母親から生まれているのだ。その出生の話もまた非常に奇妙なものである。かなりの部分に秘密がある神なのだ。
「ヘイムダルですか」
「感じではな。そうだと思うが」
「バルドルではなくですか」
北欧神話の光の神だ。裁判の判決以外の全てにおいて完璧な神であるとされている。
「あれは理想だ。そう簡単になれるものではない」
ヴォータンやトールにはなれてもである。
「ローゲとヘイムダルですか」
「彼等が今ハサンに攻め込もうとしている」
「並大抵のことでは防げませんな」
「そうだな。人という面でもハサンは苦しい」
「これをカバーできるのは何でしょうか」
「やはり国力だろう」
話はそこに戻った。
「また言うがハサンの国力は彼等より上だ」
「はい」

「おそらくはオムダーマンとティムールを合わせたのと同じ位だろう。属国を含めるとな」
「ほぼ互角ですか」
「そう、互角だ。しかし」
あえてここで話に重みを持たせてきた。彼は慎重に話を進めていた。
「二方向から攻められることと二人の天才を相手にすることは変わらない」
「厄介なことですな」
「ハサンとしてはあれだろう」
ここまで言ったうえでまた述べた。
「各個撃破といきたい。国力で有利にあるだけにな」
「果たしてそう上手くいくでしょうか」
「さてな」
ボーデンのその言葉に対する返答はハサンにとっては非常に悲観的な響きを持っているものであった。これに全てが要約されていた。
「各個撃破を避けるには」
「その為には」
「この場合同時に攻めればいい。どうだろう」
「その通りだと思います」
ボーデンはそれに頷いてきた。
「私は文官であり戦争のことは知りません」
そう断ったうえでの言葉である。
「ですがこの程度のことは容易に想像がつきます。素人であって」
「わかるか」
「はい、伏線もありましたし」
「伏線とは」
「あの婚礼です」
ボーデンはその目にあるものを見ていた。そしてそれを今ラフネールに対して語ったのであった。

「あれか」
ラフネールにもその婚礼が誰と誰のものであるのかすぐにわかった。それはアッディーンとマルヤムの婚礼のことである。オムダーマンとティムールの英雄の家同士の婚礼である。サハラではアラブからの伝統で婚礼とは個人と個人のものではなく家同士のものであるという考えが根強いのである。
「はい、そうです」
ボーデンもそう答えてきた。
「あの婚礼は今の事態を見据えてのことだったと思われます」
「だとすれば見事だな」
ラフネールはそれを聞いてあらためて思った。
「あの時点でそこまで考えていたとは」
「シャイターン家は謀略の家です」
かなり聞こえの悪い言葉ではあるがこの場合は決して悪いとも言えはしないものであった。謀略が時として大きな政治的利益をもたらすことをわかっているからである。
「その動きには常に計算と分析があります」
「その結果娘を彼にやったのか」
「はい、それによりオムダーマンでのティムールに対する感情がかなりよいものになったのは事実です」
「それに結び付きともなったしな」
「ええ、両国の」
「そして二人の英雄の」
その婚礼は多くの意味を持つものであるということだがその中でもラフネールが注目したのはそれであった。今サハラで雄飛する二人の英雄、彼等を結び付けているものであるからだ。
「つながりとなっているな」
「そうです、それもまた大きいです」
ボーデンもそれを見ていた。彼等はあらゆる方向からこの婚礼を見据えていたのである。

## 第二十二部第四章　情勢その四

「これは連合にはわかりにくいことのようですが」
「連合はな」
ここれラフネールの声に微かな侮蔑が見られた。
「彼等にはこうした家同士の婚礼という考えはないからな」
「はい。結婚はあくまで個人のものであると。そう考えています」
「それが大衆社会、大衆文明というものなのかな」
そして大衆文化でもある。連合という勢力は何処までいっても大衆というものが全てを構成しているのである。階級がなく家の存在もエウロパやサハラと比べるとかなり希薄である。そのうえ個人主義の風潮が強い。だから婚礼というものもそういうふうな考えに至るのである。
「そうなのでしょうな」
「軽薄に見えるが」
「彼等にして見れば我々は古い因習に捉われているそうです」
「それは貴族というものを知らないからだ」
ラフネールはその言葉を聞きこう言った。
「貴族社会とは家によって成るからな。連合の者達にわかる筈もないか」
「まあそれが文明というものなのでしょう」
「オリンポスにまで来て散々飲み食いされたがそれでもわからんな」
ラフネールが見た連合の者達というのは大柄で粗野な者達でしかなかった。その中で八条は少しだけ気品のある者に見えたのである。もっとも彼の娘は八条と一緒に踊ってその美貌に参ってしまったので個人的感情や偏見もそこに混じっているのであるが。
「その違いが」
「致し方ないかと」
ボーデンは彼のそのいぶかしりにそう答えた。

「彼等もまた我々のことを理解しようともしておりませんし」
「そうだな」
これはよくわかる。自分達もそうであるからだ。
「それはそれでいいでしょう」
「つまりこの婚礼の意味は連合の者達にとっては深く理解できないものなのだな」
「どうやらそのようです」
それにも答えた。
「彼等は美しい妻をもらって羨ましいとかそういう話しかしておりません」
「家同士の婚礼というのには思い至らないのか」
「それを言う者もいますがどうも今一つ理解してはいないようです」
「実感が沸かないのだな」
「そうかと。結局のところは」
結局は連合は何処までも大衆社会でそうした家同士とかそういう考えには至らないということである。どうしてもそうなってしまうのである。
「宗教的な意味もわかってはいませんし」
「カトリックとプロテスタントの婚姻はエウロパでもあるがな」
「ええ、まあ」
エウロパも婚姻にあたっては宗教的な問題は希薄になっている。なおマウリアは家同士や階級に加えて宗教とかそういうものも入って来て余計に複雑なものになってしまっている。ここまで来ると連合の者達にとっては異次元のように思えてしまうのかエウロパのそうした事柄は何かにつけ批判するのに対してマウリアのそれは敬して遠ざけている。
「シャイターン家はシーア派だったな」
「ええ、確か」
元々イスラムでは聖職者は存在しない。他の宗教の聖職者達の腐敗を見てムハンマドがそう定めたのだ。イスラム社会では聖職者は

おらず市井の法学者等が存在しているだけであった。なおこの法学者の権威はかなり大きく夫が寝言で妻を三回離婚すると言った為にならばそれでよいと離婚を認めさせたという笑うに笑えない話が二十一世紀にあったりしている。
　シャイターン家が聖職者の家であるのは彼等がシーア派だからだ。シーア派の中には聖職者がいる派もあるのである。ここがスンニー派との大きな違いの一つともなっている。
「アッディーン家はどうだったかな」
「確かシーア派だったかと」
　ボーデンは述べた。ここの違いも連合ではあまりよくわかっていなかったりする。連合にもムスリムは多いがサハラのそれと比べると全くの別物であると言っていい程フランクなものになってしまっているからだ。
「そうか、シーア派か」
「はい。ですから婚礼が可能でした」
「そうでなかったらどうなっていたかな」
「あのシャイターン主席のことです。おそらくは何らかの手段を使って婚礼に持っていったかと」
「彼はかなり信仰心が篤いと聞いているが」
「それでもです。むしろ」
「むしろ？」
　ラフネールはボーデンの次の言葉を注視した。
「それを利用している節があります」
「信仰をか」
「はい。それで自身の行動を正当化しているかのような。そうではないでしょうか」
「そう言われてみればな」
　ラフネールにもそう見えないでもなかった。
「そういうところが見られるな」
「信仰心があるのは事実でしょう」

ボーデンもそれは認めた。
「ですがそれでいて神の言葉を利用している。そういう節が見受けられます」
「複雑なものだな」
そこまで話を聞いたうえで言う。
「相反する行動を取っているのだからな。それも同時に」
「はい。おそらく彼自身もそれをわかっています」
「わかっていてか」
「ええ。そのうえで全ての行動を行っているのかと。ですから」
「迷いはない」
「そうです。彼に迷いはありません」
今度はそれを指摘してきた。

## 第二十二部第四章　情勢その五

「何故ならイスラムでは全てが既に定められているのですから。そう考えているようです」
「予定説だな」
「はい」
　プロテスタント、カルヴァン派の考えである。人の運命は全て神によって定められている。それを人が変えることはできないのだと。同時にそこで神によって与えられた仕事を精進しろというのである。それこそが神の教えであると。そう説いているものである。これはイスラムではかなり強い。何故ならアッラーはヤハウェよりも強い力を持つ唯一神だからである。
「イスラムは予定説の宗教ですから」
「そうだな、それはプロテスタントよりも強い」
「そして戦場で勇敢に戦うことが最大の善なのです」
「ではシャイターンの様な神の言葉でさえも利用する者でも天界へ行けるのか」
「イスラムを信じ、そして勇敢に戦えばそうなるようです」
「そういうことか。だから迷いはないのだな」
「ええ」
　ボーデンはまた答えた。
「彼にとってかなり都合のよい解釈でしょうが」
「だがイスラムではそれでもいいのだな」
「その辺りは断言はできませんが」
　言葉が少し鈍った。
「おそらくはそうかと」
「梟雄でもか」
　ラフネールはまた呟いた。
「いや、むしろそれだからこそ魅力があるのかもな」

「カリスマですか」
「彼のカリスマ性は素晴らしいものだ」
だからこそ今サハラ全土で圧倒的な支持を得ているのだ。そのカリスマはこの時代においては稀にみるものであった。
「その言葉の力は絶対ですらある」
「そうですね」
「演説も見事だ。確かに全てを正当化できている」
「欺瞞でもですか」
「欺瞞を真実に変えるのもまた人の世だ」
とりわけ政治の世界は。嫌な言葉であると感じる者も多いが所詮人間というものは真実と欺瞞の間で揺れ動く存在なのである。欺瞞の中に真実が。真実の中に欺瞞が混ざっていることすら多々ある。
「その意味では彼は正しい」
「そうなりますか」
「それでだ」
さらに話を続ける。
「その欺瞞を大義名分に変えられるという能力は」
「かってのヒトラーやスターリンのようなものですか」
「そうだ。これは大きいのだ」
政治家だからこそ余計にそれがわかる。
「アッディーン副大統領にはそれはないな」
「彼はどちらかと言いますと正統派ですね」６
ボーデンはアッディーンをそう分析していた。
「軍人としても政治家としても」
「正統派か」
「違いますか？」
「いや、それは私も同じだ」
ラフネールはそれに応えて言った。
「やはりな。彼は正統派だ」
「手段を選ばないというわけではありませんし」

「卑劣な策略等は好まないようだな」
「そうですね。戦場にあっては知略も使いますが決して卑劣ではない」
「うむ」
「そうした欺瞞を操る能力もありませんし。実務能力も長けていますが」
「だが彼は実務は好きではないそうだな」
その話もラフネールの耳に入っていた。エウロパもサハラのことはよく知っているのだ。敵を知らずして戦略を立てることはできないからだ。
「そのようですね。ですが」
「うむ。できることはできる」
それだけの能力は備わっているということである。そうでなくては副大統領は務まらない。
「政治家としてはだ」
「はい」
さらに話を続ける。
「特に独創性はないかな」
「軍政を見てみますと」
ボーデンはまた述べた。

## 第二十二部第四章　情勢その六

「そつなく合理的にこなしているという印象ですね」
「合理的にか」
「はい。無理はせずに的確に」
言うは易いが実際にそれを行うとするとかなり難しいことである。言動と行動は時としてその難しさが異なるものであるからだ。とりわけ政治ではそうである。
「進めていっているという印象があります」
「ふうむ」
ラフネールはそれを聞いてあらためて考える顔をした。
「政治家としては平凡なのか？シャイターン主席とは違い」
シャイターンはティムールの内政においても華々しい成功を収めている。公平な税制を作り産業を発展させ、農業を振興させることに成功している。それによりティムールはその力を飛躍的に上昇させているのだ。
「いえ、そうでもないようです」
ボーデンはそれには注釈をつけてきた。
「平凡というにはあまりにも合理的に話を進めています」
「合理的にか」
「オムダーマンは彼の勝利により今の勢力となりましたが」
「うむ」
これは言うまでもない。今のオムダーマンはアッディーンあってのオムダーマンである。銀河にいる全ての者がそれをわかっていた。
「急激に膨張した国土に張り巡らせた防衛体制と連絡体制は見事なまでです」
「それを瞬く間に整えさせたということは、か」
「はい。彼の政治能力の証左になるかと思います」
「そうなのか」

そこまで聞いて考える顔になった。
「確かにな」
シャイターンの派手さのせいでそれを見落とそうとしていた。わかってはいたが完全にはわかっていなかったことを自分でも自覚したのだ。
「はい、私はそう思います」
「言われてみればな」
自分で自分に言い聞かす。
「その通りだ。それでだ」
「はい」
さらに言う。
「彼が築き上げた体制で今オムダーマン軍は動いているな」
「そうです」
ボーデンは述べる。
「西方と南方に。あれだけの複雑な宙形の南方から西方まで瞬く間に兵を動かせるようになっています」
「南方から西方にか」
「無論その逆も。アスランからハサンとの境までの直通ルートも複数築かれています」
「ハサンまでもか」
「アスランを中心として。兵の移動も補給システムも」
「全てを的確にか」
「その通りです」
「戦争は前線だけでするものではない」
ラフネールの言葉は正論であった。とりわけ近代以降はそうであった。前線では決着をつけるだけ、という状況になっていることが多々ある。連合軍はその最たるものであり彼等はそのシステムにより的確な動きをしている。これでエウロパ軍との戦いを圧倒的優勢に進めていたことは彼等と対したラフネールが最もわかっていることであった。正確に言うとわからさせられたと言おうか。

「彼もそれをわかっているのか」
「それを踏まえますとやはり彼は」
「政治家としても優れているか」
「そう思います」
「軍人出身者はどうしても専門的になってしまう」
ここに近代以降の軍人出身の政治家の問題がある。軍人が政治家に転身するのもまたよいことであるがその個々の資質としてはそこが問題になり易いのである。
「だが彼はそれ以上の存在か」
「それを考えますとやはり彼もまた英雄です」
「二人の英雄か」
ラフネールはその言葉を聞きあらためて述べた。
「サハラに現われた二人の英雄」
「彼等の動向がサハラを決めるでしょう」
「そうだな。そしてだ」
「そして？」
ボーデンはラフネールの言葉に目を向けさせた。
「両雄並び立たずという言葉があるな」
「中国の古い言葉だったでしょうか」
「確かな。出て来た国の名は忌々しいが」
だが実際にその中国から出ている言葉だから認めるしかない。エウロパの者達にとって連合の中の大国達は実に忌々しい存在なのである。これは中国だけでなくアメリカも日本も同じである。

## 第二十二部第四章　情勢その七

「他には天に二日なしという言葉もあったな」
「ええ」
これも中国の言葉である。
「サハラで言うと月になるか」
イスラム世界では昔から太陽は厳しい光を浴びせる厄介な存在である。だが月は優しい光を与えてくれる有り難い存在なのである。これもまた文明、文化の違いというもんどえある。
「では天には月は二つもいらないというわけでしょうか」
「そういうことになるな」
ラフネールはボーデンの言葉に頷いた。
「つまりだ」
そして言った。
「いずれ彼等もまたな」
「ですね」
これはボーデンも予測していた。
「ハサンとの戦いが終われば」
「その戦いでどちらかが死ねば別だがな」
「さて、どうなるでしょうか」
ボーデンは問うように述べた。
「この戦いの趨勢は」
「長引くだろうとは思う」
ラフネールは考える目をしてそう返した。
「長期戦ですか」
「ハサンの国力を考えるとだ。緒戦で負けたとしても彼等には国力がある」
ハサンは国力だけではサハラ一の国である。それだけにかなりの力があるのもまた事実である。

「その国力があるからこそ」
「中々負けないですか」
「常識で考えれば勝てる」
ラフネールはそこまで言い切った。
「本来ならな。ハサンはサハラを統一できていただろう」
「確かに」
ボーデンはその言葉に応える。
「ハサンの力は長い間他の国に対して隔絶していたものですから」
「そうだ。それも圧倒的なまでにな」
それで動かなかったのはハサンがあくまで東方の大国としての地位に満足し、戦争よりも貿易による富を望んだからである。つまり地域大国としての地位を望んでおり、それを実行していただけなのである。
「しかし動かなかった」
「はい」
理由は彼等もわかっているので言いはしなかった。
「今もその国力は健在だ」
「それでオムダーマンとティムールに対する」
「やはり戦いは長引く」
そう言えるだけのはっきりとした根拠であった。
「この戦い、長いものになるな」
「それに介入する勢力は」
ボーデンは次にはサハラの外の勢力に関して言及してきた。
「どう動くでしょうか」
「そうだな」
ラフネールはそれに応えて述べた。
「まず我々だが」
「ええ」
最初に言及したのは自分達に関してであった。その口調は極めて冷静で客観的なものであった。そこにラフネールの知性が見て取れ

た。
「動けはしないな」
「そうですね」
自分達が最もそれをわかっていた。
「連合との戦争による一連のダメージが大きい」
「はい」
「それもかなりだ。そのせいだな」
「ダメージが大き過ぎます、確かに」
内相、そして今は首相と兼任でそれをしているだけによくわかることであった。ボーデンもそれを今はっきりと認識していたのである。
「我々は介入どころではない」
彼は言い切った。
「今はそのダメージを癒すことで精一杯だ。どうしてサハラに介入できようか」
「そしてサハラもそれを見抜いている。だからこそ」
「長い戦争に入ることができるのだ。忌々しいことだがな」
「ですね」
その言葉にこくりと頷く。
「彼等にとっては最大の脅威の介入がないのだからな」
それは先程話した通りであった。このことが非常に大きいのである。
「よってまずは我々は消えた」
「はい、そうなります」
「となると残りは二つだが」
「マウリアは外には向かわないですね」
ボーデンが次に言及したのはマウリアであった。
「彼等は自分達の勢力圏からは出ません」
「そうだな」
このことは当然ながらラフネールも把握していた。

「彼等の伝統か」
「そうだと思います」
ボーデンもその言葉に頷いた。
「マウリアはインドであった頃から自分達の文明圏から外には出ません」
「平和的と言っていいのかな」
「少し違うと思います」
ボーデンはそれには異議を呈した。

## 第二十二部第四章　情勢その八

「違うのか」
「人間というのは案外変わらない生き物です」
　確かにその通りではある。人間という存在には何処か共通するものがあるのだ。これはどんな文明にあっても見られるものであったりする。
「ですから」
「マウリアも決して平和的ではないというのだな」
「完全に平和的、好戦的な勢力というものは有り得ないかと」
　ボーデンはまた述べた。
「それを構成するのが人である限り」
「天使やワルキューレでもない限りか」
　ここでラフネールは平和の存在として天使を、戦争の存在としてワルキューレを出してきた。その例えは確かに印象としては強いものであった。
「その天使やワルキューレにしろ完全にはそうではありませんし」
「そうだな」
　そしてボーデンの言葉を受け入れてその考えに訂正を入れた。
「天使もまた戦いワルキューレ達は人を癒してくれる」
　黙示録においては天使達は剣を振るい炎を操る。そして全てを破壊する存在となる。ワルキューレは人を助け、その妻となり子を育てることもある。完全に平和と戦争を司るというわけではないのである。
「ですから平和勢力というものは存在しないのです」
「二十世紀にはソ連が平和勢力と呼ばれていたな」
「愚かな話です」
　ボーデンはその話を忌々しげな顔で切って捨てた。
「あのソ連が平和勢力ですか」

「そう言われていたのは事実だ」
ラフネールはボーデンにそう述べた。
「それを主張する多くの発言が残っているのは知っていると思うが」
「はい」
まずはそれに頷く。
「その通りです。だからこそです」
彼は立腹しているのだ。
「あの様な勢力が平和勢力ですか」
「むしろかなり好戦的な勢力だな」
「そうです。ソ連は全体主義国家でありました」
だがかっては民主主義国家とされていた。そうした歪な時代も人類にはあったのである。
「周辺勢力と常にことを構え、そして隙あらば侵攻を繰り返す」
「そうした存在だったな」
「陰謀や謀略も得意でありましたし」
概して全体主義国家というものは謀略を好み平気で嘘をつく。自分達以外の存在を認めてはいないからどの様な悪事を働いても平気なのである。そうした意味で邪悪な存在であるとも言える。
「決して平和的な勢力ではありませんでした」
「そうだな」
ラフネールはその言葉に我が意を得たといった感じで頷いていた。
「その通りだ。全体主義国家はむしろかなり好戦的な勢力だ」
「そうです」
ボーデンは学者のような顔でそれに頷いた。
「その通りです。無論完全に好戦的な勢力でもありませんが」
「そうだな。利があるかどうかだ」
結局平和的になるのも好戦的になるのもそこに根拠がある。利があるかどうかだ。人はそれによって平和的にもなり好戦的にもなるのだ。そういうものである。
「マウリアにとっては平和に利がある」

「そうです。彼等は自分達の勢力圏で満足していますし」
「だから動かないだけだな」
「そういうことになるかと」
ボーデンは応えた。
「彼等にとってはサハラはあくまで外の世界です。興味を抱く存在ではありません」
「ふむ」
「ですから今まで難民が来てもまずは助けましたが」
「ことが収まればすぐに返していた」
「所詮は異なる世界であると考えているのでしょう」
彼は言った。
「それだけのものでしかないのです。彼等にとってサハラとは」
「どうでもいいのか、本質的には」
「自分達を害しなければ」
ボーデンはまた言った。
「それでよいと考えているのでしょう」
「所詮はその程度でしかないというのだな、彼等にとっては」
「はい」
ボーデンは答えた。
「異世界ですから。少なくとも関わる世界ではないということでしょう」
「交易さえできればよいということか」
「そうですね」
ラフネールのその言葉に頷いてきた。
「交易ができればよいからこそ」
「平和的になる」
「それは連合も同じですが」
「連合か」
ここで最後の勢力の名が出て来た。
「彼等はどう動くかな」

「まずサハラにとって表面的な脅威は我々です」
ボーデンはまずはそれを述べた。あえて自分達がサハラにとって脅威になっているということをあらためて述べてきたのである。ここには計算がある。

## 第二十二部第四章　情勢その九

「ですが最大の脅威となりますと」
「連合になるのだな」
「はい、そうです」
答えるその顔が微かにニヤリと笑った。ラフネールもそれを見逃さなかった。
「彼等は今そのプレッシャーを感じているでしょう」
「ハサンとの国境にか」
「そこを中心としましてサハラ全体で」
ボーデンは言う。
「ひしひしと感じていることでしょう」
「そうなのか」
「はい、そのきっかけはやはり我々と連合の戦いです」
だからこそアッディーンもシャイターンも連合に関しての研究に携わったのである。そうでなければそのまま放置していたことは想像に難くない。
「あれが大きかったです」
「やはりそれか」
ラフネールはそれを聞いてその目を光らせた。
「連合を脅威と認識するようになりだしたのは」
「おそらくは」
ボーデンは述べる。
「それで間違いはないかと」
「そういえばこういう意見があるな」
ラフネールの目はその光を維持したままであった。それどころか輝きを増してきている。
「連合は千年戦争をしたことが無い。その為エウロパより平和的だと」

「それはどうでしょうか」
ボーデンはすぐにそれに異議を呈してきた。
「違うか」
「連合が戦争を行わなかったのは必然がなかったからです」
彼の意見はこうであった。
「連合は満ち足りております」
「うん」
伊達に四兆もの人口を養っているわけではない。人口はさらに増え続けるとまで予想されている。それだけの人口増加もやはり豊かさがあってのものなのは言うまでもない。
「何もかも」
「食料も土地も水も資源もな」
「はい、全てが満ち足りています」
この時代は流石に飢饉等で集団的に餓死することはなくなっている。連合でもエウロパでも成人病やそうした心配が危惧されていたりする。
「ですから」
ボーデンは言う。
「彼等は戦争をする必要がなかっただけです」
「内部でもな」
「そうですね」
ラフネールのその言葉にも応えた。
「豊かだからこそ話し合いで済んだのです」
壮絶なまでの謀略や応酬があったとしてもだ。交戦権の禁止が定められていたことも非常に大きかったにしろ。やはり連合が平和であったのは豊かだったからである。
「私はそう考えますが」
「そうだろうな」
ラフネールもそれには同意であった。
「つまり決して平和的な勢力ではない」

「そうではないかと」
ボーデンはまた述べる。
「完全に平和的な勢力なぞこの世には有り得ないのですから」
「そうだな。むしろ」
ラフネールは連合に対する自身の意見を口に出してきた。
「彼等は好戦的になれる要素が大きい」
「そうです」
ボーデンも同じ見方であった。
「彼等は欲望を肯定していますから」
「そうだ、欲望をだ」
ラフネールもそこに言及してきた。
「連合は資本主義だ」
「はい」
言うまでもないことであった。
「そして同時に拡張主義でもある」
拡張とは何も侵略やそうしたものばかりではない。開拓も立派な拡張である。武力を伴うイメージばかりではない。プラスの場合も多い。だが容易に武力を伴う性質になり得るのはアメリカの開拓期を見てもわかる。
「無限の開拓地があるが」
「それで飽き足らない、若しくは」
ボーデンの目もまた光を増してきた。
「連合にはないものが他の勢力圏に出たならば」
「彼等は容易に侵略国家に変わるな」
「そう思います。そして彼等はそれを合理的に行うでしょう」
「合理的にか」
「かつ理知的に」
こうも言い加えた。
「連合は確かに粗野で豪放な勢力です」
イメージとしては確かにそれがある。少なくとも気品という一面

ではエウロパに比べるとかなり落ちるのは否めない。もっとも連合はエウロパの気品を見せかけだけであるとして嘲笑っているのであるが。
「おまけに雑多です」
「しかし知性はあるというのか」
「我々は今までそれを侮っていました」
これは敗戦からの反省であろうか。言葉には何処か悔恨が見られた。
「ですが彼等もまた人間ですから」
「当然ながら知性があると」
「そうです。その連合の知性とは」
「理性的であり、かつ合理的なのだな」
「その行動を見ていますと」
「確かにな」
ラフネールはその話を聞き考える目をしてきた。

## 第二十二部第四章　情勢その十

「連合はな」
「ですから」
「その際にも平気で行うか」
「その場合にまず問題となるのが道義です」
　これが問題視されるのは結局は政治の世界でも同じである。確かに道徳観が他の世界とはいささか違うとはいっても良心や道徳が問題にならない世界はないのである。人には良心というものが誰にでも存在しているからである。それが全く無い人間というのは殆ど存在しない。実際にそうした人物を見られた者はある意味貴重であろう。完全な邪悪なぞは完全な善人と同じ位有り得ないものだからだ。
「それをどう克服するかですが」
「道義は色々とあるな」
　ラフネールもここではその合理的な考えに至っていた。政治家として。
「侵略を悪と考えるものや他人からものを奪うことの是非等だな」
「そうです。ですからこそ」
「そこに理由をつける」
「人は良心と共に欲望も持っています」
　連合が肯定しているその欲望をである。
「その欲望に対する良心をどう抑えるかですが」
「そこにはその道義を効かせるものだ」
　それこそが政治なのだ。
「我々の総督府と同じだな」
「はい」
　実際に彼等は色々な理由をつけてサハラ総督府を拡張していっていた。細かい大義名分なぞはもう覚えていられない程だ。尚連合はその大義名分を常に侵略の口実の為の詭弁であるとして非難してき

ていた。
「ではどうするか」
「極めて連合的な方法ですと」
「連合的か」
ある意味わかりやすい言葉であった。
「その対象を悪であると定義します」
「悪か」
「そうです、連合にとっての悪です」
彼は言う。
「例えば我々に対するような悪の定義です」
「階級社会や侵略だな」
「そうした悪の定義を対象に与えて」
「それを攻撃するのだな」
「その通りです」
これは古来より多くの国で為されてきたことである。中にはモンゴル帝国の様に一切の理由を不要としてただ侵略してくる国家もあることにはあった。これはこれである意味清々しいと言えるが。
「理由は色々と付けられるな」
「はい」
これもまた事実であった。
「何とても言えるものだ」
「我々に対してもそうでしたし」
「そもそもだ」
ラフネールは言う。
「連合は極めて雑多な勢力だ」
「ええ」
連合を語るうえで重要になるのはまずそこなのである。
「そしてその雑多な勢力を纏めるには」
「敵が必要です」
この国家や勢力の纏め方も人類古来の方法である。結局こうした

ことでは人類というのは殆ど進歩しないのである。人間の歩みというのは案外遅い場合もあるのだ。
「今までの敵は我々だったな」
「貴族主義であり階級社会である我々が」
連合にとってはそれこそが絶対悪であった。連合から見た彼等は憎むべき差別主義勢力であったのだ。実際にどういうわけかわからないが連合各国の教科書ではエウロパの貴族主義は非常に悪辣に書かれている。イギリスやフランスの貴族はとりわけ醜く、何処かの特撮ものの宇宙人なのかと思える程である。

## 第二十二部第四章　情勢その十一

それでいて日本の平安時代の貴族達や江戸時代の武士達はその時代では当然のことで彼等はその中でよくやっていたと書かれる。中南米の旧国家にしろそうである。エウロパの貴族達だけ異様に醜く書かれているのである。それを見てエウロパ貴族とは悪そのものであると考えるようになっているのである。手の込んだことに道徳等でもエウロパ貴族が悪人として出ていたりする。

「絶対の悪でありました」

「それは変わると思うか」

「いえ」

そんなことは想像も出来ないことであった。

「絶対に変わらないでしょう。我々がそれぞれ存在している限り」

「そうだな」

言うまでもないことではあった。

「我々にとってもそうだしな」

「はい」

ボーデンは当然といった顔でそれに応えた。

「お互い様といったところでしょうか」

「そう言えばそうなるか」

「ですね。しかし」

そして言葉を加える。

「彼等の方が強烈なのは事実だと思われます」

「敵への攻撃性だな」

「はい、それもかなり」

彼は述べる。

「やはり勢力を纏める必要があるからでしょう」

「雑多な連合をだな」

「そういうことでしょう」

ボーデンの言葉は的を得たものであった。その通りであるのだ。
「確かに連合は雑多です」
「うむ」
「それを認めているのは事実、ですが」
「それだけではないということだな」
「そうです、そして纏める為に」
「敵を欲しているというのだな」
「そうなるのでしょう」
古来からの方式が今にも行われているだけである。単純と言えば単純であるがだからこそ効果があるとも言えるのである。連合はそれをわかって長い間エウロパを敵視しているのである。
「最近ではその敵対意識がやや弱まっているようだな」
ラフネールもそれに気付いているからこそ述べた。
「その辺りはどうなのだ」
「いささかといったところでしょうか」
ボーデンの言葉は穏やかな分析であった。
「当然ながら消えているわけではありません」
「それはな」
消える筈のないものだ。それも言うまでもない。
「ですが」
そしてボーデンはまた述べる。
「弱まっているのもまた事実です」
「何故だと思う？」
ラフネールは彼に問うた。
「その理由は」
「やはり我等との戦争に勝利したからでしょう」
その理由は実に直接的なものであるというのだ。やはり勝利を収めるということはそれだけ大きなことなのである。実際に連合は今はじめての戦勝ムードに酔いしれている。
「勝ったのですから、彼等は」

「そして我等は敗れた」
「勝者と敗者がはっきりした今」
「それで敵対心が弱まっているというのだな」
「侮蔑はしているでしょうが」
「ふん」
この言葉を聞いて無意識のうちに顔に嫌悪の色が浮かぶ。
「一度勝っただけでか、と言いたいな」
「ええ」
それはボーデンも同じ気持ちであった。敗れた側はその屈辱を決して忘れはしない。勝者は教訓を忘れることはままあったとしてもだ。
「だがそれでも敵愾心が消えないか」
「永遠に消えはしないでしょう」
彼は言う。
「連合と我々が存在し続ける限り」
「永遠にか」
「はい、ですから」
言葉に真剣なものが加わる。
「あの戦争の敗北もまた」
「その中のほんの一ページに過ぎないか」
「重要な場面ではありますが」
それは確かである。否定しきれない。
「ですが」
「それでも悲観し過ぎては駄目なのだな」
「そういうことです」
彼が言いたいのはそれであった。過度な悲観は何の役にも立ちはしない。それよりも前に向かって歩くことが何よりも重要なのである。そうした意味で過度に悲観的、破滅的な予言の類は信じるよりもまず検証しなくてはならない。もっともシャバキはそれ以前なのであるが。

「だからこそ」
「そうだな」
ラフネールは頷いた。
「ここは気を落ち着けて行こう」
「はい」
今彼等は同時に頷いた。
「そういうことです。それでは」
「各産業の復興状況はどうなっているか」
ラフネールはあらためて問うた。
「はい、今のところは」
ボーデンはそれを受けて説明をはじめた。エウロパの時間も決して止まっているわけではない。むしろかなり激しく動こうとしていた。次の動きに向けて。

## 第二十二部第四章　情勢その十二

サハラの動きは当然ながらエウロパ以外も知っている。マウリアもそれを受けて目をサハラ各国に向けてそれぞれの動向を注視していた。

その中心は言うまでもなく大統領府である。クリシュナータは日々送られてくる報告に目を通し事態の進展を見守っていたのである。

「今度はサハラか」

クリシュナータは仕事が終わった後の官邸でそう呟いた。マウリア風の何処か厳かな内装の部屋の安楽椅子に座りワインをかたむけながら呟いていた。

「戦争というものは終わらないのだな」

「あら」

それを聞いた中年の美しい女性が彼に顔を向けてきた。彼の妻であるミナーマ夫人である。

「いきなりどうしたの？」

くすりと笑って夫にそう声をかけてきた。

「急に神妙なことを言い出して」

「実はね」

クリシュナータは妻に穏やかな笑みを浮かべて応えてきた。

「また戦争になりそうでね」

「サハラね」

「わかるかい」

「勿論よ」

また笑ってそう述べた。

「新聞やテレビでも話題だからね」

「そうだね」

サハラで戦争が近いことは最早誰の目から見ても明らかであった。だからこそ夫人もそのことを知っているのである。戦いは間も無く

であったのだ。
「それでだよ」
彼はそのうえでまた述べた。
「これからマウリアとしてはどうするかだな。どの国が勝つか」
「それによって政策が変わるの？」
「そういうことなんだよ」
流石に家の中なので穏やかな顔になっていた。その顔で妻に述べる。
「どの国が残るかでね」
「マウリアとしてはどうなのかしら」
夫人はここでふとこう述べてきた。
「どの国が生き残って欲しいの？」
「どの国がかい」
「そうよ。結局はそれが焦点なのでしょう？」
何気ないようでいて実に率直なことを述べてきた。その笑みは穏やかだが言っていることは鋭かった。
「そうじゃなくて？」
「まあね」
クリシュナータもそれは認めた。妻のことは彼が最もよく知っているのでそれは驚かない。だが彼女の鋭さを知っているのは実はごく僅かな者しかいない。殆どの者が大人しい細君として見ているのである。
「マウリアとしては」
「ええ」
「ハサンが残ってくれるのが一番望ましいかな」
「ハサンね」
「そうだな。これは連合も同じだと思うけれど」
ここで同盟勢力のことも口に出してきた。
「ハサンとは長い付き合いだ」
「それで様々な権益があるのね」

「そう、そのせいでね。彼等には思い入れがある」
これはマウリアという国としての利益からである。個人的な感情や親近感というものは考慮には入れてはいない。
「だからこそ」
「ハサンを応援したいのね」
「そういうことだね。ただ」
「ただ？」
夫人はここで夫の言葉の色が変わったことに気付いた。
「あくまで権益だからね」
彼はそこに言及してきた。
「それが無事ならば」
「それでいいのね」
「マウリアとしてはね」
彼は言い切った。
「連合にしろそうだろうね」
「何事も権益だということね」
夫人はそれを聞いて少しシニカルに笑った。
「何かね」
「けれどそれが政治じゃないのかい？」
クリシュナータはその妻に対して述べた。
「それにそもそもサハラに特別な思い入れがあるわけじゃない。違うかい？」
「まあそうね」
それには述べた。
「そういうことね」
「そうさ。だから」
彼は言う。
「ここはね。クールにいかせてもらうよ」
「成程ね」
「それでいいと思うけれど」

彼は言った。
「どうかな」
「ハサンに寄るけれど臨機応変ね」
「だから他の二国にもね。パイプを持っておくよ」
彼は述べる。

## 第二十二部第四章　情勢その十三

「既にオムダーマン、ティムール双方とパイプを築いているよ」
保険というわけである。ハサンとの友好関係を維持しつつである。これが政治というものだ。いざという時には色々と用意をしておくものである。
「それはより強いものにしていく」
「何処が勝ってもいいようにね」
「それでどうかな」
彼はそこまで言ったうえであらためて述べた。
「そう考えているのだけれど」
「いいと思うわ」
そして妻はそれに賛成してきた。
「それでね。ただ」
「ただ？」
「一つ気になる勢力があるわね」
その整った顔がふと歪んだ。
「どうにもね」
「気になる？」
「ええ。ティムールよ」
そして次には国名も出してきた。
「シャイターン主席には。あまりいいものを感じないわね」
そのうえでこう言うのであった。
「彼か」
「そうよ。何か色々なものを含んでいるわね」
彼女もそれに気付いたのだ。シャイターンは多くの者に英雄と呼ばれているが彼をよく知る者には梟雄と呼ばれているのである。そこに大きな秘密があるのだ。
「それについてはどうかしら」

「唯の英雄ではないと」
「確かに英雄なのでしょうね」
それは彼女も認めた。
「ただ」
「ただ？」
「それだけじゃないわね、絶対に」
そしてこう述べた。
「ハサンではテロが相次いだわよね」
「ああ、あれだね」
このことは当然ながらクリシュナータも気付いていた。これで得をするのは誰かということも既に分析している。彼は一連のテロ事件のことを詳しくは掴めなかったがシャイターンの影は感じていた。
「あれも怪しいわよね」
夫人は夫がそれを感じているのは知らなかったが勘では感じていた。
「誰が得をするのかも考えれば」
「じゃああれはシャイターン主席がやったのだと言いたいのだね」
「ええ、そうよ」
彼女は述べた。
「私はそう思うのだけれどどうかしら。あまりにも都合がいいのだし」
「そうだな」
彼もまた同じ考えだったので納得する顔で返した。
「私もそう思っていた。では」
「彼はこれからも注視した方がいいわ。唯の英雄ではないわね」
「じゃあどういう英雄なんだい？」
彼はそれに尋ねた。
「英雄といっても一つじゃないわ」
彼女はまずはこう述べた。
「一つではね。そう、彼は」

そして言った。
「悪を持っている英雄ね。それは確か連合では」
「ダークヒーローだったね」
夫はこう述べた。マウリアにはない言葉である。所謂暗黒面を持つ英雄である。そう言いたいのだ。
「そう、それよ」
夫人は夫のその言葉を聞いてこくりと頷いて応えた。
「まさしくそれね」
「インドラやシヴァもまた悪の側面を持っているけれどね」
そこに自分達の神に関して付け加えてきた。これは話を理解しやすい為だろうか。妻に対する夫のささやかな気遣いであった。仲のいい夫婦であった。
「それとはまた違うと」
「奸智ね」
夫人は目を鋭くさせてこう言った。
「彼にあるのは奸智よ。目的の為には手段を選ばない」
「確実に最も合理的で確実な方法を選択すると」
「そうね、それよ」
こうも述べた。
「それが彼なのよ。だから」
「注意した方がいいと」
「オムダーマンにもハサンにもそれは感じないのよ」
この二国に対しては彼女は特に思うところはなかった。これも勘によるものであるが。
勘というと馬鹿にされる場合があるが決して侮れるものではない。政治にも勘が必要であるのだ。
例えば独裁者というものはえてして超人的な勘を持っている。ヒトラー然りスターリン然りだ。だからこそ彼等は絶対的な力を振るうことができたのである。それにはこうした理由があったのだ。

## 第二十二部第四章　情勢その十四

「ただね」
「ティムールとシャイターン主席は違うと」
「そうよ。だから」
「よし、わかったよ」
彼はそこまで聞いたうえで妻に対して頷いた。
「シャイターン主席にはこれからもよく見ておこう」
「ええ」
「必要とあらば我々にも牙を剥きかねないしね」
「そうね。しかもその牙は」
声が剣呑な警戒を含んだものになった。
「毒があるわよ」
「毒か」
「そうよ、だから彼は」
「毒蛇の様に危険な男だと。そう言いたいんだね」
「そういうこと。わかってくれたかしら」
「うん」
妻の言葉にやはり警戒する顔で頷いた。
「どうやら彼はね」
そして述べる。
「かなり危険な人物か。その彼がサハラを統一した場合は」
「どうなるかしらね」
「銀河で最も危険な男になるかも知れない」
「危険な男ね」
「そう、だからこそ魅力ある存在なのだろうけれど」
こうも述べた。
「そこにあるのは」
「危険な香り」

魅力もまた一つの種類ではないのだ。複数の種類がある。危険な香りにもまた魅力というものが存在する。二人もそれはよくわかっていた。悪い男や女に魅力があると言われているようにだ。それもまた真実なのである。
「しかし」
だがここでクリシュナータはまた述べた。
「権益さえ保障されれば、そして我々に対して牙を剥かないならば」
「それでいいのね」
「普通に考えてだね」
クリシュナータは先を見渡す遠い目になった。
「彼はサハラ統一で満足するだろう」
「そうなの」
「サハラはそれだけで一つの世界だ」
次にこう述べた。
「だからこそ」
「そこで落ち着くと言いたいのね」
「それに力の差が歴然としている」
力関係についても指摘してきた。
「連合とサハラでは」
「それぞれの全勢力を合わせてもね」
「そうだ」
彼は今それを妻にはっきりと言った。
「やはり連合は巨大だ」
それをまず認識しないとどうしようもないのだ。連合はまるで巨獣のように銀河に存在している。これは紛れもない現実なのである。
「サハラの人口は二千億」
「全土でよね」
「そうだ。若干我々より少ない」
マウリアは一応二千億になっているが実際はさらに多いと言われているのだ。三百億は多いと言われている。ここにマウリアの他の

勢力とは大きく違う独自性があった。彼等は他の文明圏と比べて一言で言うとアバウトなところが少なからずあるのである。
「我々とはほぼ互角かな」
「けれど連合は四兆よね」
「そうだね、全然違う」
「ええ」
夫人はその言葉に頷く。
「二十倍もあるのね、差が」
「それで勝てるとは誰も思わない」
「そういうことね」
「そうさ。それにシャイターンはあくまでサハラの人間」
「サハラ以外の世界には関心がないの？」
「少なくとも領土的にはないだろうね」
ここが極めて重要なのである。領土的な野心の有無、それがその人物が危険かどうかの重要な要素となるのだ。それにより対処も大きく変わる。
「だからこそ」
「他の勢力には介入はしないということね」
「これはオムダーマンも同じだね」
「あのアッディーンという人ね」
「そう」
夫は妻に答えた。
「彼にはこれといって野心も感じない」
「生活はかなり質素らしいわね」
「普通の家庭で生まれ育ったらしいしね」
アッディーンの生い立ちも今ではよく知られている。アスランのごく普通の家庭で生まれ育ち幼年学校から軍人になり今に至る。華々しい生い立ちのはじまりはごく平凡なものであったのだ。

## 第二十二部第四章　情勢その十五

「それで贅沢を知らないのだろうね」
「贅沢を知らない」
「それがいいことか悪いことかはわからないけれど」
「いいことじゃないかしら」
夫人はごく普通の世間一般の良識を述べた。
「浪費家でないというのは」
「いや、あながちそうとは限らないじゃないか」
クリシュナータは妻にそう返した。
「そうなのかしら」
妻はその言葉に首を傾げさせる。
「それはやっぱり」
「普通に生きていてもだよ」
彼は言う。
「質素な生活も贅沢な生活もそれぞれ教わることは多い」
「ええ」
これは事実である。質素な生活からは生活の知恵を、贅沢な生活からは華々しさを知ることができる。結局はどちらもれっきとした文化なのである。
「そうじゃないかな」
「まあそうね」
それは何となくわかった。
「貴方と結婚してからそれがわかったわ」
彼女もクリシュナータもカーストとしてはかなり上の方に位置している。生活そのものは裕福である。だがクリシュナータは質素な生活を営んでいるのだ。それに対して夫人の家はかなり贅沢であった。そこで全く異なるものを見て学んだのである。これは二人にそれぞれ言えることであった。

「そうなのね」
「そう。どちらかしか知らないとなると」
「それだけで狭まるわね」
「これは政治家だけに言えることじゃない」
まずはそう前置きした。
「けれど政治家には余計に言えることで」
「視野が広くないと駄目ということね」
「そう。アッディーン副大統領は多分贅沢もそこから学べるものも知らない」
「それがネックとなるかしら」
「そうだね」
そこまで話してあらためて思索に入った。
「それが訳のわからない統制政策につながらなければね」
「引き締めに？」
「よく贅沢は敵だという人間が出て来たよね」
「ええ」
江戸時代の日本では度々緊縮財政の下かなり質素な生活が強要されたことが何度かある。これは当時の武士の価値観によるものであるがそれで贅沢や華美が敵視されたのである。もっとも江戸幕府のよいところとしてそれが主に武士に行き、町民や農民にはまだ寛容であったのであるが。しかもこれは江戸近辺だけで大阪等には殆ど影響がなかったのである。
またクーデターで軍人が政権を握ったりしてもこうしたことはよくあった。革命家であってもだ。彼等は大抵前の政権を贅沢で腐敗していると糾弾するのでそうしたものを一切排除しようとするのである。ロベスピエールがそのいい例だ。彼等はそれを強要するから問題なのである。
「それはそれで問題なのだよ」
「行き過ぎるからね」
「そう、それでそれが統制政策になる」

彼は言った。
「それで国家が硬直してしまうからね」
「オムダーマンが勝ったらそうなるのかしら」
「どうかな」
クリシュナータはまだ考える顔になっていた。
「そうなったら我々の権益にも影響が出るね」
「今のところはどうなの？」
夫人はそれを問うてきた。
「オムダーマンの政策は」
「特にこれといってはないね」
彼は述べた。
「引き締めも統制もない。オーソドックスだよ」
「そうなの」
「アッディーン副大統領の軍政もね。しっかりしているし」
「しっかりしているの」
「バランスが取れていて決断が早い」
政治家として非常に重要なことであった。それはクリシュナータもわかっている。
「そこだね、いい点は」
「そうなの。けれどまだ詳しいことはわかっていないのね」
「うん、我々の権益に関する考えはね」
クリシュナータは言う。
「そこがはっきりわかればいいけれど」
「若しもよ」
ここで夫人は言った。
「彼等が我々の権益を排除しようとしたら？」
「その時は簡単さ」
彼は妻のその言葉に対して迷うことなく答えた。
「それは断じて認められない」
「それじゃあ」

「戦争になるだろうね」
それを今はっきりと述べた。
「交渉してそれが決裂したら」
「やっぱりそうなるのね」
「当然だね。今まではそんなことはなかったけれど」
サハラのある国が連合やマウリアの権益を接収してそれを自分達のものにして利益を得ようとしたことは過去何度かあった。だがその都度連合やマウリアは他の国をけしかけてそうした国を滅ぼすか黙らせて言うことを聞かせてきたのである。そうした歴史もある。

## 第二十二部第四章　情勢その十六

「若しそうなったら」
「可能性はあるのね」
「そういうことだよ。戦争に至る可能性は常に存在している」
それが現実であった。戦争は念仏の様に平和だの戦争反対だのを唱えて避けられるものではないのだ。そこには必ず必然性があるのだ。それを理解しないと戦争を避けることは出来ない。
「だからこそ」
「考えておくのね」
「そう。しかし」
彼はさらに言う。
「普通に考えてオムダーマンも我々とは衝突しようとは考えないね」
「そうね」
これは先程のティムールに関する結論と同じであった。
「後のことを考えるとリスクが大き過ぎる」
「じゃあとりあえずは私達は様子見ね」
「そうだね。表立って動くことはない」
それが結論であった。
「権益さえ保障されれば」
「サハラに関しては言うことはないね」
「そういうことね。それじゃあ」
「うん」
夫は妻の言葉に頷いた。
「三国とそれぞれパイプを深くしていって」
「約束を取り付けておく」
「けれど間に合うかしら」
夫人はここでふと心配になってきた。
「それまでに戦争にならないかしら」

「いや、まだ時間は充分にあるよ」
だがクリシュナータはそう言って妻を安心させた。
「そうなの」
「確かに戦争は近い」
それははっきりとしていることだった。言うまでもない程に。
「けれどね。そのことについて話をする時間はあるんだ」
「そうなの。それじゃあ」
「うん、もうはじめていかないといけないけれどね」
「そうね。それでもね」
「だから」
彼は言った。
「すぐに手を打つよ」
「三つの国とそれぞれ話をしていくのね」
「そういうことだね」
「私達はそれでいいわね」
夫人はそれを聞いてまずはこう述べた。
「けれど」
「けれど？」
「連合はどうするのかしら」
そして同盟勢力について言及してきた。
「彼等もこの状況は見ているわよね。どうするのかしら」
「それはまずは彼等自身の問題だね」
クリシュナータは一旦はそう述べて突き放した。
「けれど」
「けれど？」
「彼等にも話は伝えておくよ。こちらはこう動くと」
「優しいのね」
夫人は彼のそんな言葉を聞いてにこりと微笑んできた。
「そういうところは」
「いや、これは外交辞令だからね」

まずはその通りなのである。こちらはこの場合にこう動くと同盟国等に伝えておくことは差し障りがない場合は外交辞令としていいのである。
「だからね」
「成程」
「まあ実際のところは」
クリシュナータはここでまた考える顔になった。そのうえでまた述べた。
「既に話をしていると思うよ、彼等も」
「そうなの」
「こうしたことには目先が利くからね」
彼は連合がことの他利権といった話に五月蝿いのをよくわかっていた。伊達に交流をしているわけではない。交流も何も友好の為だけではない。相手を知るということはそれだけで外交に大きなプラスとなるのである。だからこそ進めていくべきということでもある。
「彼等は」
「それじゃあもう動いているかしら」
「可能性は高いね」
妻にそう述べた。
「けれどそれはそれでいいから」
「私達は私達で」
「そうしよう。そういうことだね」
「ええ。じゃあ」
「うん」
マウリアの動きは決まった。彼等はすぐに三国との交渉をはじめた。そしてそれはクリシュナータの予想通り順調に進んだのであった。開戦前の一幕であった。

# 第二十二部第五章　舞台は整いその一

舞台は整い

エウロパ、マウリアのサハラに対する動きが見えだしていた頃連合も当然ながら休んでいたわけではなかった。彼等は彼等で独自に動いていたのである。

オムダーマンの首都アスランにも連合中央政府や各国の外交官達の姿がしきりに見える。それぞれいそいそとあちこちを動き回っていた。

「やはり活発になってきたな」

アッディーンはそんな彼等を見て呟いた。

「彼等も彼等で必死だということだ」

「そういうことですね」

それにシンダントが答えた。アッディーンはこの時大統領府にいた。大統領との話の後で彼等を窓の上から見下ろしているのである。

「利権がかかっていますから」

「利権と言うと聞こえが悪いな」

この時代ではアラビア語でもそれは決していい響きを持ってはいないのである。

「だが正しいな」

「はい」

アッディーンにもそれがわかってきたのだ。政治というものが。

「それを追い求めるのは勢力や国としてはな」

「そういうことです。ですが」

「ですが。何だ」

ここでふと口調を微妙なものにさせたシンダントに問うた。

「彼等がサハラに持っている利権はそれだけ実があるものなのでしょうか」

そこが少し不思議になっていたのである。

「そこまであるとは思えませんが」
「確かにな」
アッディーンはまずはそれに頷いてきた。
「連合と比べればサハラ全体が微々たる存在だ」
「ええ、確かに」
言うまでもないことであった。連合を像とすればサハラは犬に過ぎない。そこまでの圧倒的な差が両者の間には歴然としているのである。
「そこにある利権も同じだ」
「それでは」
「しかしだ」
だがここでアッディーンは言った。
「少しでも利権を失いたくはないのだ」
「少しでもですか」
「そうだ、例え僅かなものでもな」
ここには人間という存在の浅ましいと言えば浅ましい一面がかいま見られた。人というものは例え僅かな利益でもそれが手に入れられる、守られるものであればそれを果たそうとするのである。もっとも多ければ多い程よく、大きな利益ならばそれがさらに強くなるのであるが。
「守ろうとする。そうだろう」
「言われてみればそうですね」
シンダントはここで面白い例えをしてきた。
「子供がその手に持っている飴玉を決して離そうとしないように」
「そういうことだ」
アッディーンはその例えに乗ってきた。
「貴官も子供の頃はそうだったのではないか？飴玉やお菓子が手に入ったならばそれを必死に手放そうとはしなかった」
「ええ」
それは事実であった。誰もがそうした過去がある。

もっともこれは人によるが。こんな話がある。
二人の子供が蛙を捕まえようとした。赤い服の子供がそれは自分のだと言って青い服の子供がそれに頷いた。そして二人で追い込んでその蛙を捕まえた。
捕まえたのは青い服の子供であった。彼は急にこの蛙は自分のものだと言い出した。
当然赤い服の子供はそれに抗議する。だが急に出て来た女の子に捕まえた人のものだと言われ負けてしまった。こうした話である。
よく考えればこの青い服の子供は約束を破っている。そして女の子はその裏切りに加担している。だが蛙が青い服の子供の手にあるならばそれで終わりなのだ。子供の世界ではこうなってしまうのだ。

## 第二十二部第五章　舞台は整いその二

しかしこれは子供の世界だけではなく大人の世界にもある。だから人はどうしてもその利権を守ろうとするのだ。無論約束を破られない為の手も打っておく。それを子供の頃の経験で学んでいる者もいる。

「そういうものだ」

アッディーンはここまで話したうえで言った。

「人間というものはな」

「そうなのですか」

「だから彼等は必死にこだわる」

一国が去ったかと思えばもう一国が駆け込んで来る。実にめまぐるしい。

「掴んだものを放すまいとな」

「滑稽と言えば滑稽ですね」

シンダントは言った。

「何か」

「だが我々も同じだ」

しかしアッディーンはそれには賛同しなかった。

「さっき言ったな。連合とサハラではあまりにも歴然としていると」

「ええ」

話が戻ったように感じられたがそれは違っていた・

「しかしだ」

アッディーンは言う。

「そのちっぽけなサハラの中で我々は戦っている」

「はい」

その言葉に頷く。

「必死にな。それも同じなのだ」

「同じですか」

「だからだ。人は皆同じだ」
こうも言った。
「考えることも行うこともな」
「連合にいれどサハラにいれど」
「そうだ。そういう意味ではな」
「成程。ですが」
ここでシンダントは考える顔を見せてきた。
「どうした？」
「いえ、連合の場合はかなり利に走る一面が見受けられますので」
「それはあるな」
偶然かどうかわからないがクリシュナータと同じ意見であった。
「彼等はな」
「そうですね」
「しかしそれは誰にでもあるしな。それで彼等を特に言うつもりはない」
「左様ですか」
「ただしだ」
ここでアッディーンの目の色が変わった。
「何か？」
「連合の者達のそうした傾向は覚えておきたい」
「今後の為ですか」
「そうだ」
その言葉に答えた。
「連合といえばだ」
シンダントは合理的、物質文明、消費社会というキーワードを頭の中に思い浮かべた。サハラの者達にとって連合のイメージとはそうしたものなのだ。
「物欲が強いというイメージがどうしても強いが」
消費社会や物質文明というキーワードがそれに当たる。
「それだけでもないしな」

「複雑ということですか」
「信仰もある」
「あるのですか？」
だがシンダントはそれには懐疑的であった。
「私の見たところ彼等は」
「それはあくまでサハラから見た場合だ」
そう断った。
「我々から見た場合だ」
「では彼等なりの信仰心が備わっていると」
「うむ。これはキリスト教の言葉だったか」
啓典の民ということで知っていたのだ。
「人はパンと水のみに生きるにあらず、と」
「ええ、確かそんな言葉でした」
シンダントもそれに頷く。
「心ある存在なのだと。そう言っています」
「そういうことだ。そういう意味でも彼等は我々と同じなのだ」
「どうもそうしたイメージが湧きませんが」
シンダントは首を傾げさせた。
これは無理のないことであった。連合は様々な宗教が存在し銘々がそれ等を信仰している。そして宗教人口は連合の人口の優に数倍だ。こうしたことを知っているからこそどうしても連合に信仰があるとは思えないのである。サハラの者から見ればそうなのだ。

## 第二十二部第五章　舞台は整いその三

「世界が違うのは事実だ」
またそれを述べた。
「だからな」
「はあ」
「その割合や形式が違うのは当然だ。だが信仰は確かにある」
「無神論者ではないのですね」
「いることはいるがごく少数派だな」
アッディーンはこうも言った。なおサハラにおいては無神論者というのはことの他疑われ、嫌われる存在である。元々イスラムというのは他の宗教を信じている者は地獄に落ちるとされているがそれでも他の宗教を認めている。昔からジズヤさえ払えば信仰は認められた。ここで重要なのは他の宗教を認めると共にムスリムになった場合の特典を提示していたということである。同時にジズヤもなくなる。そうした柔軟な布教がイスラムを広めたのである。
他の宗教であっても信じるものがあればそれが良心の拠り所になっていると考えているのだ。だがそれがない者は何か。それがどの様な悪事を行っても全く平気な者であると。そう認識されるのだ。
「そうした者は」
「ならいいのですが」
それを聞いてまずは安心した。
「しかしですね」
「まあそれは今ここで言っても仕方ない」
話が極端に長くなりそうなので止めさせた。
「それでも信仰はあるということは覚えておけ」
「わかりました」
シンダントはアッディーンのその言葉に頷いた。
「そういうことでしたら」

「彼等の価値観が我々のそれと大きく違うのは確かだしな」
「それがどう影響するでしょうか」
「今回にか」
「はい」
シンダントは答えた。
「どうにも中央政府と各国が活発に利権の維持に動き回っているのでその姿を見ているだけで神経がそちらに行ってしまって」
わかりにくいと述べる。
「どうにも」
「落ち着いて見ればいい」
しかしアッディーンはここでこう言った。
「そうすればわかる」
「わかるのですか」
「そうだ。よく見ておくのだ」
そしてまた言う。
「よくな。彼等がどう動いているか」
「法則か何かがありますか？」
「それを法則と言えばそうなるかな」
シンダントのその言葉に考える目を見せてきた。
「それは否定しない」
「それはやっぱり利に敏感ということですね」
「そうだ。彼等は利権は全てを守ろうとする」
アッディーンは連合の者達のそうした性質を見事なまでに見抜いていた。そのうえでの言葉であった。
「それが出来ない場合は最小限の犠牲で何としても済ませようとするな」
「はあ」
「現に国境からはもう人も設備も退きだしている」
「そのことは報告があがっています」
シンダントはそれを述べた。

「既に連合各国もマウリアもその人員と設備を辺境地域からは撤収させていると」
「危険を察しているからな」
「そうでしょうね」
「さて」
ここでまた考える目を見せてきた。
「我々としてはどうするべきか」
「何かお考えが？」
「私としては利権はそのまま認めるつもりだと思う」
それがアッディーンの考えであった。
「どうか」
「認められるのですか」
「貴官は違うのか？」
「いえ」
だがシンダントもそれは同じ考えであった。
「私も基本的にはそうです」
「そうか」
アッディーンはその言葉を聞いて納得した顔になった。現実にそれしかないのである。連合とサハラではあまりにも力の差があるからだ。それに利権と言ってもかっての帝国主義時代のようなものではなくあくまでビジネスの提携である。認めても何も問題はない種類のものばかりなのだ。
「ですが」
「ですが。何だ？」
シンダントの声の色が変わったのに気付いた。

## 第二十二部第五章　舞台は整いその四

「無条件でといくのはどうかと思います」
「それも交渉の駒とするのか」
「それでどうでしょうか」
あらためてアッディーンに問うた。
「利権を認めるかわりに見返りも」
「それは確かにいい考えだろう」
アッディーンはまずはそれを認めた。
「悪くはない」
「それでは」
「しかしだ」
だが彼はここで言った。
「何か？」
「それで連合やマウリアと不必要なトラブルを作ったり悪感情を抱かせてはならない」
冷静な声でそう述べた。
「それはどう思うか」
「ふうむ」
シンダントはその言葉を聞いてまた考える顔になった。
「確かに」
「それでトラブルを抱えては元も子もないな」
「はい」
これはすぐにわかった。
「条件等はつけなくていい」
「わかりました」
アッディーンもまた連合の力を警戒していたのである。その力はやはりサハラを圧倒している。それを知っているからこそ彼等に対して無闇な行動は避けるべきとしているのである。

「それでもだ」
「それでも？」
「侮られてはいけない」
彼はこうも付け加えた。
「それはわかるな」
「ええ」
これもまた外交においては常識であった。外交において侮られればその相手国が何処までも過剰に要求してくるからだ。これもまた外交のポイントなのである。
かって二十世紀後半の日本において第二次世界大戦のことを反省し謝罪、賠償するべきという『良識』が出て来たことがある。その考えが政治や外交にまで影響を及ぼし国益を大きく損なったことがある。それどころか国益を考えてはいけないという風潮さえあった。日本は悪だったのだからと。
だが戦争はどの国も行うものでありそれに伴う戦争犯罪も同じだ。エウロパとの戦争においても連合もエウロパも僅かだがそれを犯す不心得者がいて処罰されている。問題はそれの検証と対処であり検証の結果当時の日本はその点に関しては比較的まともであったことがわかった。ナチス＝ドイツがあったドイツとの比較がよく行われたが何を言わんやであった。
ナチスの問題点はその行為が『戦争犯罪とは別の』行為であったことが何よりの問題だったのである。その悪は否定出来ないものであったのだ。当然戦争犯罪もありそれは日本の比ではない。日本は戦争犯罪を犯しただけなのだ。こうした大きな差があるのだ。
調べていくと面白いことがわかってきた。謝罪しろ賠償しろだの言っている者達の素顔だ。彼等は特定の国と結び、かつてはナチスと同じ全体主義国家のソ連を崇拝していた者達だったのだ。彼等は国家を崩壊に導き日本を共産主義国家にしようと目論んでいたとさえ言われている。つまり国を売ろうとしていたのだ。これがはっきりした時謝罪主義なるものは急激に廃れていった。良識という仮面

が剥がれその下の下劣な素顔が露わになった時全てが終わる。その素顔が醜ければ醜い程それを見た者の怒りは大きくなる。それが世の中だ。彼等は今歴史に永遠にその醜悪な心と名前を刻み込まれている。自業自得である。
「確かに連合は強大だが」
「はい」
「侮られてはならない」
アッディーンはこう主張する。
「侮られればそれで終わりだ」
「そうですね」
シンダントもそれはよくわかっている。
「だからこそだ。侮られない為にも今の利権以上のものは与えない」
「与えませんか」
「連合は物質文明だな」
「ええ」
「すなわち物を追い求める。つまりだ」
「我々のものであっても」
そう語るシンダントの顔に影がさした。
「そう仰りたいのですね」
「その通りだ。彼等は必要とあらば狙ってくる」
アッディーンは言う。
「隙あらばな」
「特に彼等ですか」
シンダントの目が剣呑に光った。
「アメリカ、中国、そしてロシア」
彼等のことはサハラにおいてもよく知られている。連合における主導的な大国でありその横暴さでもってよく知られているのである。

## 第二十二部第五章　舞台は整いその五

「そうですね」
「彼等はその中でも筆頭だ」
アッディーンもそれに頷いた。
「しかし彼等だけではない」
そのうえでこう述べる。
「連合は三百国ある」
「はい」
「その中には実に様々な国がある。油断出来ない国も多い」
「旧ＡＳＥＡＮ諸国等もですね」
「日本もな。厄介な国が多いな」
「全くです」
あらためてそのことに思いを馳せ嘆息した。
「ああした勢力なのですね。厄介な国を多く抱え込んだ」
「そうだ。我々が相手をするのは中央政府だけではない」
「各国の政府とも」
連合で複雑なのは中央政府だけでなく各国も動くということだ。交戦権は最初からないがかつてのアメリカの各州のように独自に通商や交流を行うことができるのである。それが話を複雑にしているのだ。
「何か数が異様に多く」
「わかりにくいか」
「そうですね。これは前から思っていたことですが」
シンダントの顔が少し顰められたものになった。考える顔になっていた。
「連合は一つではないのですね」
そこに考えが及んでいた。
「どうにも」

「そうだな」
アッディーンはその言葉に応えた。
「彼等は一つではない。無数の存在がその中にある」
「それでいて一つの勢力なのですね」
こう言うとさらにわからなくなる。
「無数の存在を中に抱きながら」
「我々とはそこが全く違うな」
アッディーンは言う。
「一つになろうとしている我々とは」
「そうですね。そしてエウロパとも違う」
エウロパも国家連合であるが各国政府の権限は弱く中央政府の権限が強い。実質的には中央集権型なのである。だから総統なのである。
「マウリアともまた」
「マウリアはマウリアで理解しにくいがな」
「ですね」
マウリアは彼等にとっては異次元であった。何が何なのかわかりにくいのだ。それを理解する為にマウリア研究者達は四苦八苦しているのはサハラも同じなのである。
「連合もまた同じだ」
「理解しにくいですね」
「彼等はそれだけで人類社会と言える」
アッディーンは彼等をしてこうまで評した。
「それも主流だ」
「主流ですか」
「人類の殆どが中にいる」
何と言ってもこの現実が何よりも大きかった。
「そして様々なものを内包している。彼等もそう考えている筈だ」
「自分達こそが中心だと」
「それを意識しているかどうかはわからない」

だがこの言葉はかなり正鵠を得ていた。実際に連合の者達は自分達の圧倒的な人口と国力を意識していて周りの勢力を何処か辺境と意識しているのである。
「だがそれでもだ」
「無意識の中にもありますか」
「そう、そして辺境の我々に対しては」
「それが出て来ることもあると」
「そういうことだ」
アッディーンは答えた。
「では今回の交渉は」
「こちらが隙を見せれば付け込まれていくな。どんどんと」
「大丈夫でしょうか」
シンダントはそれを聞いて不安を募らせていった。
「そんな状況で」
「だが大丈夫だ」
しかしアッディーンはここでそんな彼を落ち着かせた。
「我が国の外交部がそれに当たっているからな」
「彼等がですか」
「そうだ。ここは彼等に任せてもいい」
こうも言い切った。
「アッバース外相にな」
「わかりました。ではここは軍を信じましょう」
「うむ」
アッディーンは頷く。

## 第二十二部第五章　舞台は整いその六

「しかしですね」
シンダントは窓の下を見下ろしてまた言う。
「本当に多いですね」
ひっきりなしに来る連合の者達を見て息を吐き出した。
「次から次へと」
「ここでも数が出ているな」
アッディーンはそれを見て述べた。
「これだけを見ても彼等の巨大さと複雑さがわかる」
「はい」
「出来れば彼等とは揉めたくはない」
こうも言った。
「今後もな」
「そうですね。敵に回すにはあまりにも危険です」
「そうだ。しかし」
だがここでアッディーンの目が光った。
「侮られてもならない」
「実に難しいですね」
「要は匙加減なのだ」
そしてまたそれを言う。
「何事もそうだが外交はそれが特に難しい」
「そうなりますか」
「そうだ。何かとな」
アッディーンの言葉は戦争を語る時と同じく実に鋭いものであった。
「最近それがようやくわかってきた」
「最近ですか」
「そうだ。副大統領になって暫く経つがやっとだ」

そこには少し自身の至らなさを悔やむ気持ちが見られた。
「何とかわかってきた」
「それでは」
シンダントはそれを聞いたうえでさらに尋ねる。
「今後はどうなると思われますか」
「我々と連合の外交か」
「はい、匙加減を一つ間違えればそれが大きな過ちになりかねないものであるとわかりましたが」
だからこそ不安を抱きはじめたのだ。彼は軍人であり外交官ではない。だからよくわからない部分もありそれを聞きたくなったのである。
「どうなっていくでしょうか」
「実はそれ程悲観するものではない」
それがアッディーンの返答であった。
「そうなのですか」
「実はな。それ程ではない」
「はあ」
「実際のところ連合もそれ程貪欲には来ないだろうしな」
「来ないですか」
「既存の利権だけだしな」
「では」
「そうだ。確保と保護を保障するだけでいいのだから」
つまり既存のままでいればいいというのだ。そう考えれば実に簡単な話である。
「そうではないのか」
「確かに」
それは話がわかった。
「だからだ。要は侮られなければいい」
「ではここは外交部に任せて」
「そうすればいい。軍部はこのことに関しては何も言わない」

「閣下もですか」
「見させてはもらうがな」
これは政治に関して学ぶ為でもあった。軍事担当とはいえ副大統領ともなればあらゆることに携わっていくことになるのだ。要職故である。
「では色々と見せてもらおう」
アッディーンは下に出入りする連合の者達を見ながら述べた。
「彼等もな」
「連合もですか」
「三百国、四兆の知恵をな。見せておらうとする」
そう言うと窓の前から姿を消した。そしてそのまま自身の鑑定へと戻るのであった。

## 第二十二部第五章　舞台は整いその七

サハラ各国と連合の外交は活発化していた。当然ながら連合中央政府もそれの中心におり何かと忙しい日々を送っていた。それを見てあの三人の長老達が話をしていた。

イーグルグループの経営するホテルのロイヤルスイートであった。彼等は今そこに集まりそのことについての意見交換をしていた。

「ふむ」

まずはカレーラスが口を開いた。青を基調とした穏やかな雰囲気の部屋の中でその身を委ねている形で他の二人と対しているのである。

「美味いな、この茶は」

手にしている青い茶を飲んでから述べた。

「すっきりとしておる」

「そうじゃろう」

ポートがそれを聞いて満足そうに微笑む。

「わしの孫のお気に入りでな」

「ほう、お孫さんのか」

「末のな。高校生じゃ」

「可愛い盛りじゃのう」

マウムがそれを聞いて目を細める。

「その孫が教えてくれたのじゃ。このお茶が美味しいとな」

「いいお孫さんじゃの」

カレーラスはそれを聞いてからまた茶を口に含んだ。

「持つべきものは家族じゃな、やはり」

「それとスタッフじゃな」

「あとは情報じゃ」

マウムがそこに情報を付け加えさせた。

「そうであろう」

「その通りじゃ。まあこれも孫から教えられた情報じゃな」
「そうじゃな」
「ところでじゃ」
カレーラスがまた口を開いた。
「この茶は元々連合にはなかったものじゃな」
「うむ」
ポートはマウムの言葉に頷いた。
「サハラにあったものじゃ。南方のな」
「そこから伝わったものか」
「左様。そして今は我が国の名産の一つになっておる」
ポートの故郷パプワニューギニアの。ニューギニアはこの時代では中々裕福な国家である。
「甘みがありながらそれでいてすっきりとした味でな。評判がいいそうじゃ」
「ふむ」
「確かにいい味じゃな」
マウムもそれを飲み頷いた。
「だが御主がこうして茶を語るとはな」
「イーグルグループは茶もやっておったのか？」
「いや」
ポートは二人の言葉に首を横に振ってきた。
「専門にはしたことがない。この茶が我が国の名物になっているのは知っておったがな」
「そうか」
「そもそも御主はコーヒーが好きだったしな」
「そうじゃ。じゃが」
ここで彼は言う。
「この茶は中々気に入った。それで今飲んでおるのじゃ」
「成程な」
「お孫さんに感謝せねばな」

「そうじゃな。それでじゃ」
話を本題に入れてきた。カレーラスもマウムも茶を飲みながらポートの話に耳を傾けてきた。
「今後のことじゃ」
彼は言う。
「サハラで戦争が起こるぞ」
「だろうな」
「それは避けられぬだろう」
二人もそれはよくわかっていた。
「ハサン、オムダーマン、そしてティムール」
「三国の間でな」
「我々はサハラにはさして権益はないが」
「かといって影響が全くないわけではないしな」
「そういうことじゃ」
彼等のグループは主に連合内でのビジネスである。だから直接的にはサハラでの戦争では影響を受ける立場にはいない。だがビジネス相手にサハラと関わりの深い者達もいて彼等とのビジネスに影響しかねないという懸念があるのである。
「それでじゃ」
ポートもまた青い茶を飲みながら語る。お茶菓子はチーズのクッキーである。硬く焼いておりそれがこの青い茶に実によく合っている。
「仕事相手に関しては」
「わしはもう話はしておる」
マウムが言った。

## 第二十二部第五章　舞台は整いその八

「安全なところに拠点を移して被害を出さないようにとな」
「そうじゃな」
それにカレーラスが頷いて同意を示す。
「それがよい。わしもそうしておこう」
「わしもじゃな」
ポートも同じ考えであった。
「ここで彼等に何かあってはな」
「我等としても支障が出る」
「そういうことじゃ。それでじゃ」
彼等はさらに話を続ける。
「三国共に話をしておかなければな」
「権益の話じゃな」
「今それは中央政府と各国政府が忙しく動いて確保に躍起になっておるな」
「どうやらな。問題は向こうじゃな」
ポートの目が少し光った。
「約束を交わしてそれを守るかどうか」
「信用できんというのか？」
「引っ掛かる者がおる」
ポートはマウムにそう返した。
「あの男じゃ。シャイターン主席じゃ」
「あの男か」
「そうじゃな」
他の二人もその名を聞いて目の色を変えてきた。
「あの男は危険だと思わぬか」
「少なくとも今まで見た顔ではない」
マウムの言葉に剣呑なものを探る色が混ざってきた。

「危険な男でも言うべきかな」
カレーラスも言う。
「そういう男じゃな」
「それもただ危険なだけではない」
ポートは二人の言葉を受けたうえでまた述べる。
「野心が強い。他の者よりもな」
「野心か」
カレーラスはその言葉を聞いて慎重な、何かを探る声を出してきた。
「そう、唯の野心ではない」
ポートはまた言う。
「全てをその手に入れんとするような。そうした野心じゃ」
「しかしじゃ」
ここでマウムが言ってきた。
「何じゃ」
「あの男は少なくともわかっておる」
「わかっておるか」
「うむ」
ポートに対して頷いて返す。
「よくな。サハラのことも、そして連合のこともじゃ」
「では我等に対して牙は剥いて来ないと考えているのか？」
カレーラスがマウムに問うた。
「普通はない。ましてやさらに頭の回る者なら尚更な」
「ふむ」
カレーラスはマウムの言葉を聞いて今度は考える目の光になった。
「左様か」
「わしはそう見る」
「ではわしの杞憂かの」
ポートはマウムの話を聞き終えてこう述べた。
「いや、あながち杞憂でもない」

しかしマウムはその言葉にはこう返した。
「実際にあの男は危険じゃ」
「わし等にその刃を向けないだけでか」
「そうじゃな」
「それではじゃ」
カレーラスが言ってきた。
「あの男がサハラを握ったならば極めて危険な勢力になるな」
「可能性は高いな」
やはりマウムもまたシャイターンを警戒していた。それを隠そうとはしていない。
「わしとしてはじゃ」
そして彼は言う。
「できるならサハラはこのままでいて欲しいのじゃがな」
「統一は望まぬか」
「これは個人的な感情は抜きじゃ」
ポートにそう返す。
「連合としてはそうではないかの」
「そうじゃな」
「確かに」
他の二人も考えた後で述べた。
「その統一した勢力が連合と対立するならば」
「サハラとのビジネスに差し障りが出来るからのう」
カレーラスとポートはそれぞれそう答えた。
「確かにわし等はサハラでのビジネスは直接はしていないがな」
「それでもな。影響はやはりあるからのう」
「そういうことじゃ。少なくともハサンとは衝突することはない」
だからこそマウムは今の状況のサハラであることを望んでいるのだ。
「このままいくかハサンが統一すればよいのじゃが」
「さて」

「どうなるかのう」
カレーラスとポートは答えながらまた青茶を口に入れた。その旨味が口の中を支配する。
「しかしじゃ」
今度はカレーラスが口を開いた。
「サハラでそこにしかない貴重なものが見つかったならばどうじゃ」
「貴重なものとは？」
「何じゃ、例えば」
「そうじゃな、例えるならば」
その言葉に応えて言ってきた二人に言葉を返す。
「レアメタルとかじゃな。それこそかつての石油や原子力のように人のあり方を変えてしまうようなものじゃ」
「そういったものか」
「それが見つかればどうかな」
「その時は簡単じゃな」
今度はポートが答える役になっていた。
「ビジネスで手に入れる」
「そうじゃな」
マウムもそれに頷く。それにこしたことはないのは言うまでもない。
「しかし」
だがカレーラスはここであえて言ってきた。
「どうした？」
「そうは行かない場合はどうなるかな」
彼は二人にそう問うてきた。
「サハラがどうしても渡さないとしたならば」
「その時は対立じゃろう」
マウムが答えた。
「それしかない」
「そうじゃな」

ポートも同じ答えであった。
「そうなるしかなかろう」
「そうなった場合はな」
「そうじゃな」
カレーラスは二人の言葉を聞いてまた頷いた。

## 第二十二部第五章　舞台は整いその九

「そうなるな」
「何が言いたいのだ？」
ポートはまた問うた。
「そんなことを言って」
「左様。話が掴めんぞ」
「いや、わかっておると思うが」
だがカレーラスは二人に対してまた言った。
「サハラとの対立の可能性はな」
「それか」
「言われてみればな」
そう言われると二人は頷いた。
「ではだ」
マウムが言った。
「サハラとはどうした形で統一されても対立する可能性はあるか」
「うむ」
カレーラスはマウムの問いに頷いた。
「ことと次第によってはな」
「そういうことじゃな」
ポートがそれに頷く。
「だが」
そして彼は言った。
「その可能性はまだ高くはないぞ」
「むしろゼロと言ってもよい」
マウムも続いた。
「そう思うのだが」
「確かにそうじゃ」
カレーラス自身もそう見ていた。

「だが皆無ではない。ましてやサハラは未開発、未開拓の惑星も多い。碌に調査も行っておらぬようなな」
「そうしたところでか」
「見つからないとは限らないじゃろう」
「まあ確かにそうじゃ」
マウムが述べる。
「何があるかわからない」
「では今後はその可能性も考えてサハラに関しては見ていくとするか」
「それがよいな」
カレーラスはマウムとポートにあらためて述べた。そしてクッキーを口にした。
「ふむ」
そのクッキーを食べてみて目を少し動かす。
「これも実に美味いな。よく焼けておる」
「そうじゃろう」
ポートはその言葉には素直に目を細めてきた。
「そのクッキーはこのホテルの売りの一つじゃ」
「そうだったのか」
「料理自体がそうじゃな」
ポートは得意げに語る。
「見事なものじゃぞ」
「ほう」
「そうだったのか」
「それでじゃ」
ポートは次第に何か誘うような笑みになって二人に語り掛けてきていた。
「二人共もう食べたか」
「昼食か？」
「そうじゃ。まだか」

こう二人に尋ねてきたのだ。
「いや、まだだが」
「それでは」
「うむ、そうじゃ」
カレーラスとマウムに対して言う。
「ルームサービスでな。どうじゃ」
「悪くはないな」
「それでは」
「それでメニューは何がよい？」
ポートはそれを尋ねてきた。
「何でもあるが」
「そうじゃな」
カレーラスはそれを受けて考える顔をしてきた。それから答えた。
「実は最近和食に凝っておる」
「ほう」
「特に豆腐にな。あるか」
「和食の板前もいいのがいるぞ」
「流石じゃな」
カレーラスはポートの言葉を聞くと満足そうな笑みを作った。
「それでは御主は和食じゃな」
「うむ」
ポートに対して頷く。まずは彼の食事が決まった。
「それで」
次にマウムに顔を向ける。
「御主は何がいいのじゃ」
「わしもな」
マウムはそれに応えて述べた。
「最近健康に気を使っての」
「おお、そういえば」
カレーラスはマウムのその言葉を聞いて言ってきた。

## 第二十二部第五章　舞台は整いその十

「最近健康診断の結果が思わしくなかったそうだの」
「そうなのじゃ。どうもな」
マウムは渋い顔をしてそれに言葉を返した。
「よくはなかった。コレストロールがな」
「厄介じゃのう」
「それはまた」
二人はそれを聞いてどうにも他人事とは思えなかった。どうしてもコレストロールや脂肪率、血圧といった問題はついて回る。この時代は痛風や糖尿病への薬があるといってもならないにこしたことはないのは言うまでもないからである。実際に食事で事前に防ぐ方法が奨励されている。
「豆腐はそれによかったな」
「よいも何も」
カレーラスはそれに答えて言う。
「最高じゃ。和食には痛風等の心配はない」
「ほう」
それは今のマウムにとっては実に魅力的な言葉であった。
「そうなのか」
「そうじゃ。どうじゃ、それで」
「よいな」
断る筈もなくそれに頷いてきた。
「ではわしもそれじゃ」
「それでよいのじゃな」
「うむ」
ポートに対してもそれで頷く。
「それで頼む」
「わかった。ではわしもじゃな」

ポートも決めた。
「御主等と同じものをもらうとしよう。それでは」
「頼むぞ」
「わかった」
こうしてメニューが決められ暫くして料理が運ばれてきた。見れば頼んだ通り豆腐料理であった。
湯葉に豆腐と若布の味噌汁、豆腐の天麩羅に刺身、揚げ、そしてひじきと和えたもの、そこに白米と和菓子、緑茶といったメニューであった。質素なようでいて豪勢な組み合わせであった。
「カロリーは高そうだな」
マウムはまずは揚げと天麩羅を見てこう述べた。
「実はそうでもない」
「そうなのか」
「植物油じゃからな。ささ」
マウムだけでなくカレーラスにも食事を勧める。
「早く食べるがいい。折角の豆腐料理じゃからな」
「わかった」
「では」
二人はそれを受けて箸を手にした。そのまま食事に入った。
やはり豆腐らしくあっさりとした味わいであった。生姜醤油が揚げによく合う。味噌汁もいい具合に口当たりがいい。その中でひじきとの和え物が絶妙であった。マウムはそれがいたく気に入った。
「よいな、これは」
「満足したか」
応えるポートの方が満足した顔であった。
「うむ、中々」
「確かに」
カレーラスもそれは同じであった。
「これは実にいい」
「気に入ってもらって何よりじゃ」

「それにこの湯葉もな」
カレーラスは湯葉に言及してきた。
「わしはこれでも湯葉が好きでな」
「ほう」
ポートはカレーラスのその言葉に楽しそうな目を向けてきた。
「そうだったのか」
「そうじゃ。それでも湯葉というものは難しくてな」
「そうなのか？」
マウムはそれを聞いて顔を上げてきた。
「初耳じゃぞ」
「いや、その通りじゃ」
ポートがマウムに答えた。
「よく和食は難しいと言うな」
「そもそも日本の料理だしな」
マウムはここで日本の国そのものを出してきた。
「やれ素材だの繊細だの隠し味だので。何かと五月蝿いのう」
「まあその中でもな」
「湯葉は別格だというのじゃな」
「その通りじゃ」
ポートは静かに笑ってそう述べる。
「何せこれはそもそも上方の食べ物らしい」
「上方！？」
「千年以上前の言葉じゃ」
カレーラスがいぶかしがるマウムにそう説明した。
「日本の昔の街の大阪や京都のことじゃ」
「ああ、そこは知っている」
マウムもそれは知っていた。財界の長老ともなればそれなりの知識が要求されるからだ。もっとも彼はあまり和食への造詣は深くはないようであるが。
「江戸時代にはかなりの繁栄を見せていたのじゃったな」

「そうじゃ」
カレーラスは答える。
「そこの京都での食べ物だったのじゃ」
「ふうむ」
マウムはそれを聞いてまずは唸った。
「そこの食べ物か」
「京都の料理はとりわけ繊細だそうでな」
カレーラスはまた説明した。
「この湯葉にしろ。そうらしいぞ」
「だから難しいのか」
「うむ。そもそも豆腐は繊細な食べ物じゃしな」
「確かにあっさりした味じゃな」
豆腐の刺身を山葵と醤油で食べながら答えた。
「外見も白くて。あっさりと食べられる」
「だからこそ難しいのじゃよ」
ポートはまた述べた。
「料理するのがな」
「そういうことなのか」
「わかってもらえたかのう」
「うむ、少しじゃがな」
マウムは次には御飯を食べて答えた。
「わかったような気がする」
「和食は奥が深いからのう」
「それはよくわかるぞ」
カレーラスにはこう答えた。

## 第二十二部第五章　舞台は整いその十一

「わしもこれでもかなり食べてきておるからな」
「そのわりには湯葉を知らんかったな」
「それはな」
少しバツの悪い顔をしてみせた。
「たまたまじゃ」
「湯葉と言えば結構メジャーだと思うがな」
「そうなのか？」
マウムはそれには懐疑的な言葉を返した。
「豆腐はそうだが」
「そうかのう」
そう言われるとカレーラスも辛い。
「いや、実際に湯葉は思ったより少ないぞ」
ポートも言ってきた。
「豆腐は確かに多いがな」
「そうなのか」
「左様。大豆を使ったうちの一部でしかないしな」
ポートはそう述べる。
「案外知られてはおらん」
「そういうものなのか」
「そういうものになっておるな。わしも少し残念じゃが」
「こんなに美味いものが」
「確かに美味いな」
マウムもそれは認めた。その湯葉は確かに美味かった。
「食べるとな。病み付きになるな」
「そうじゃろ、そうじゃろ」
カレーラスがその言葉に笑顔を見せる。
「これは実に美味いのじゃ」

「それが今一つ有名になれないのはやはり難しいからだろうな」
マウムはそう見当をつけてきた。
「そこはどうなのかな」
「やはりそれじゃな」
ポートがその指摘を認めてきた。
「この料理は実に難しい」
「うむ」
「それがはっきりと出ている。繊細な料理じゃ」
「確かにな」
マウムはその言葉に頷いた。
「和食らしく」
「和食といっても色々あるにしろ」
ポートはさらに言う。
「これはとりわけそうじゃな」
「そういうわけか」
「これをメジャーにできれば面白いかもな」
カレーラスの頭の中でふとそれが閃いた。
「どうじゃろうかな、そこは」
「それはわしも昔考えた」
その閃きにポートが返した。
「じゃがな」
「駄目だったか」
彼の言葉からそれを察した。
「うむ。どうにもな」
そしてポートの言葉は予想通りであった。
「難しい。専門に作る者が必要だからな」
「機械では無理か」
「できんことはない」
この時代の機械は確かに精巧である。千年前のそれなぞ比較にもならない。ナノテクまで発達しておりそれが軍事関連にも使われて

いる。
「しかしだ」
「ここまでの味は出せぬのか」
「やはり人の持っているものは独特だ」
ポートはそれに言及してきた。
「機械ではそれは出せんのだ」
「それはあるな」
「うむ」
そしてそれがわからぬ二人ではなかった。そうでなくてはここまでの経営者にはなれはしない。そういうことである。
「機械はやはり機械とかそういうことは言わぬ」
ポートはそう前置きした。
「しかし人にしか出来ぬこともまたある」
「その通りだ」
マウムはそれに頷いた。
「同じものを機械が作るとするぞ」
ポートは次に今食べている和食に例えてきた。既に三人共相当のものを食べ終えており後はデザートだけといった状況になっている。
「美味いことは美味いのだが味気なくもある」
「その通りだ」
その言葉にカレーラスが頷く。
「機械ではな。どうしてもそうなる」
「そこじゃ」
ペーチが言いたいのはそれであった。左の人差し指が伸びる。
「湯葉はそれが特に出るのじゃ」
「繊細であるが故にか」
「左様。じゃからな」
「無理だったのじゃな」
「そうだったのじゃ」
そこまで述べたうえでカレーラスに対して答えを出してきた。

「無理じゃった」
「結局そうなるのか」
カレーラスはそこまで聞いてあらためて息を大きく吐き出した。
「難儀なものじゃな」
「コストが合わぬしな」
「そうじゃな」
カレーラスはそれに関しても思案を巡らせていた。
「所詮は大豆じゃ」
「うむ」
そこが重要である。
「原材料にかかる金はたかが知れておる」
「それに湯葉を作るだけで食ってるわけではないしの」
「そうなるか」
カレーラスはポートのの言葉に目を向けてきた。

## 第二十二部第五章　舞台は整いその十二

「当然作る側も馬鹿ではない。豆腐も同じく作っておる」
「あくまでそのうちの一つということじゃな」
マウムはそれを聞いて言う。
「そういうことじゃ。これだけを作っているわけではない」
「そういうものか」
「結局はたかが湯葉じゃ」
ポートの言葉は残念そうでもあり達観を感じられるものでもあった。妙なニュアンスの言葉であった。
「そういうものじゃ」
「ううむ」
マウムは彼のその言葉を聞いて考え込んだ。
「されど湯葉じゃがな」
「そうでもある」
ポートはそれも認めた。
「たかが、されど」
「そこが難しい」
カレーラスはそこを指摘する。
「たかがのものでありながらされどでもある。だがそこで」
「どうにかするのが」
「経営者というわけじゃな」
ポートとマウムはそう続けた。
「やはりわかっておるな」
カレーラスはその言葉を聞いて面白そうに笑った。
「流石じゃな」
「褒め言葉はよせ」
「今更そんなことを言い合う仲でもあるまい」
「ははは、確かに」

二人にそう返されて顔を崩して笑った。三人の付き合いはもう半世紀を越えている。何もかもがよくわかった仲だ。そんなことを言うまでもないのである。
「まあこれはこれで使い様じゃ」
ポートはまた湯葉に言及してきた。
「どうしようもないものでもないしな」
「そういうことか」
「結局はそうなる」
ポートの言葉はやはり何処か達観したような響きがあった。
「サハラも同じになるな」
マウムは和菓子を食べながら話をそこに戻してきた。
「連合にとってはあそこの権益も・・・・・・むっ」
食べながらその和菓子に気付いた。
「これは」
「そう、それもじゃ」
ポートはマウムが気付いたのを見て得意げに笑ってきた。
「豆腐料理じゃ」
「ううむ」
マウムはそれを聞いてあらためて唸った。感嘆の唸りである。
「まさかとは思ったぞ」
「意外じゃったか？」
「いや、これは」
彼はそのまま感嘆の唸りを続ける。
「ここまでとはな」
「大豆はのう、使い道が多くてな」
「湯葉だけではないのか」
「無論それもある」
ポートは言う。
「じゃがこうした使い方もあるのじゃ」
「そうじゃったのか」

「美味いじゃろう」
ポートはあらためてマウムだけでなくカレーラスにも問うた。
「この菓子は」
「確かにな」
まずはマウムが頷いた。
「これは意外な伏兵じゃったが中々」
「あるじゃろうが」
ポートはさらに述べる。
「大豆からできたハンバーグとかが」
「あれじゃな」
「そういえばあったのう」
二人はその言葉に応える。
「あれと同じじゃよ、結局はな」
「しかしじゃ」
ここでマウムは言った。
「これ程使い道のある食べ物もないな」
「うむ」
カレーラスもそれに同意して頷く。
「そうじゃな。しかも美味いし栄養もある」
「じゃから豆腐はよいのじゃ」
ポートはさらに言う。
「料理人に言わせれば工夫しがいのあるものらしい」
「経営と同じじゃな」
マウムはそこまで聞いて笑ってこう述べた。
「そういうところは」
「ほう、そう例えてきたか」
カレーラスはその言葉を聞いて笑みを浮かべてきた。
「いい例えじゃと思うが」
「まあな」
「では我等も一工夫じゃな」

ポートは述べる。
「ここは少し」
「いやいや、少しでは面白くはない」
カレーラスが言ってきた。
「ここは念入りにな」
「そうか。では三国の政府だけでなく」
「あちこちに話をしていくべきじゃな」
カレーラスがポートに話しているのは当然ながらサハラにおける話のことである。財界の長老としての話であった。
「それでは」
「そうして周到に根回しして」
「話を進めていくとしよう」
三人はそれぞれ述べた。
「この菓子みたいにな」
「ははは、本当に気に入ったのじゃな」
ポートはマウムの最後の言葉にまた笑った。彼等は豆腐料理を楽しみながら今後のことを練っていたのであった。

## 第二十二部第五章　舞台は整いその十三

財界の長老達の話は当然ながらキロモトの耳にも入ってきた。というよりは耳に入れる為に話をしているのである。これもまた駆け引きである。

「ふうむ」

キロモトはその時ブラジルで話を聞いていた。バチカンの移転に関する細かい打ち合わせの為にブラジルの首脳達を会談していたのである。

「そういう考えか、彼等は」

「はい」

報告をする大統領府の官僚が答えた。

「どうやらそのようで」

「巧妙だな」

彼はそれを聞いて静かに述べた。彼は今ホテルのロイヤルスイートにいる。そこで話を聞いているのだ。

「まずはそう言っておこう」

「巧妙ですか」

「しかしだ」

そして付け加えてきた。

「時間があるかな」

彼が心配しているのはそこであった。三国は一触即発の状態であるからだ。

「そこまで話をする時間が」

「ギリギリですね」

その官僚は述べた。

「時間は」

「ギリギリか」

「はい」

そしてまた答えた。
「中央政府としても動くべきではないかと」
「念の為にか」
「はい、如何でしょうか」
「よし」
彼はそこまで話を聞いたうえで頷いてきた。
「それではな。話を進めてくれ」
「わかりました。では総理にお伝えします」
「迅速にな。今回は速ければ速い方がいい」
「ではそのように」
「しかしだ」
彼はそこまで話したうえであらためて述べるのであった。
「サハラのことは思ったことより知らなかったな」
これは自省の言葉であった。
「知らなかったのですか」
「うむ、私も三国の政府にそれぞれ話をすればいいと思っていた」
そのうえでそれまでの自分の考えを言うのである。
「連合とは違いそれぞれの政府の権限が強いからな。それで」
「確かに」
官僚もその言葉に頷いてきた。
「サハラでは中央集権t的国家が多いですから」
「オムダーマン然りティムール然りな」
とりわけティムールである。この国は実質的にシャイターンの独裁体制である。彼なくしては何も動かない国家となっているのである。
「ハサンにしろそうだ」
「ええ」
官僚はその言葉にまた頷いた。
「中央の権限はかなり強い」
「それに目を奪われがちになりますか」

「うむ」
苦い顔で頷いてきた。
「それは反省する。自分でもな」
「わかりました」
「そのうえでだ」
そしてまた言う。
「あらためて手を打ちたい。いいな」
「それでですね」
「そうだ。間に合えばよいがな」
「この場合は違うかと」
「どういうことだ？」
キロモトはその秘書官の言葉に顔を向けて問うた。
「間に合わせるのです」
それが彼の言葉であった。
「それも完璧に」
「できるのか？」
「するのです」
彼はまた述べた。
「そのつもりでなければ成功するものも成功しないかと」
「厳しいな」
キロモトはそれを聞いてあらためて述べた。
「そうした考えとは」
「とにかくすぐに総理にお伝えしましょう」
彼は淡々とした調子で言葉を続ける。
「それは宜しいですね」
「今さっき言った通りだ」
キロモトはそう返した。
「それで頼む。いいな」
「わかりました」
「そしてだ」

キロモトはさらに問うた。
「何か」
「君の名前だが」
「はい」
彼はそれに答えた。
「何というのかね」
「ポーザと申します」
「ポーザか」
「はい、出身はアルゼンチンです」
「そうか、わかった」
キロモトは名前を聞いたうえで頷いた。
「ではポーザ君」
そのうえで言う。
「この件は君に任せた」
「やらせて頂けるのですか」
「そうだ。間に合うのだな」
「ええ」
ポーザは再び答えた。やはり淀みのないはっきりとした返答であった。

## 第二十二部第五章　舞台は整いその十四

「でなければ最初から申し上げません」
「よし」
その自信が気に入った。キロモトは彼の名前を覚えることにした。
「では頼むぞ」
「わかりました」
「上手くやってくれ」
「はい。それで」
「どうしたのかね」
「今後のサハラですがおそらく長い戦いになるでしょう」
「そうだろうな」
キロモトはそれを聞いて頷いた。これに関しては容易に想像がつくことであった。
「三国共な。かなりの力を持っている」
「そうです」
その力が最大の問題であったのだ。
「よく言われているな。強者同士が闘えば」
「その闘いは激しく、そして長いものになると。そうですね」
「そうだ。一方が弱ければ戦争は楽なものになる」
「お互いにとって」
「その方がかえって損害は少なくなる」
キロモトの言葉は真実であった。戦争はどちらかの圧勝で迅速に終わればそちらの方が損害はずっと少なくなるのである。がっぷりと四つに組んでの相互の激しい死闘が何度も続けばそれだけで損害も大きくなるのである。これは自明の理であった。
「そして勝ち残るのは誰か」
「そこまでは私も」
ポーザは首を傾げてきた。

「わかりかねます」
「読めないか」
「はい」
彼は答えた。
「残念ながらそこまでは」
「だが激しい戦いにはなるか」
「それは間違いないかと」
彼がわかるのはそこまでであった。流石に最後の勝利者まではわかりかねるものがあった。
「ただ」
しかし彼は言った。
「ただ？」
「あのアッディーン副大統領は天才と言えるでしょう」
「彼か」
キロモトはアッディーンの名を聞いて考える目を見せてきた。
「その天才が発揮されればオムダーマンの勝利になるのではないでしょうか」
「さてな」
「無理でしょうか」
キロモトの懐疑的な目を見て問うた。
「それでも」
「天才は一人とは限らない」
キロモトはあらためて述べた。天才は稀にしか現われないからこそ天才である。だがその時代に一人しか現われないとは限らないのである。運命の神というものは非常に気紛れでしかも悪戯心に満ちており時として人には思いも寄らぬ状況を作り上げたりするものである。
「もう一人の天才は」
「シャイターン主席ですか」
「そうだ。彼もいる」

キロモトは述べた。
「二人の天才が今サハラにいる」
「では彼等のうちどちらかがでしょうか」
「ハサンはまずは彼等を一度に相手にすることになるな」
「ええ」
これはハサンの置かれた位置からすぐに結論が出ることであった。
だからハサンが不利な状況にあるとの分析も多く出ているのである。
「それでもな。ハサンもまた強い」
「はい」
だが国力がある。それが余計に話を複雑にしているのである。
「だがどちらが勝つにしてもだ」
「権益の確保ができるようにして」
「そして備えもしておこう」
「備え？」
ポーザはその言葉に目を動かした。
「大統領」
そして大統領に問うた。
「今備えと仰いましたが」
「そうだ」
キロモトはそれに返した。
「確かに言ったが」
「それはサハラに対する備えでしょうか」
もう一度それを問うた。
「それ以外の何に聞こえるのだ？」
キロモトはそれに返す。
「それ以外にはないだろう」
「サハラに対する備えですか」
「そうだ、サハラが統一されたとする」
彼は話をはじめた。
「その場合一大勢力が姿を現わすな」

「ええ」
これは自明の理である。二千億の巨大な勢力がまた一つ誕生するのである。連合もキロモトもそれを当然のように頭の中に入れていた。
「それが我々の敵になったならば」
「言うまでもありません」
ポーザはそれに答えて述べた。
「それは大きな脅威です」
「そうだな」
キロモトはポーザのその言葉を聞いて頷いた。
「その脅威への備えだ」
「今のうちにですか」
「今だからこそだ」
その言葉が鋭くなる。
「統一されてからでは遅い」
「そうなのですか」
「壁は敵が来てから築いても遅い」
これもまた古来から言われている言葉であった。

## 第二十二部第五章　舞台は整いその十五

「安全なうちに築いておかなければならない」
「それが今だと」
「そういうことだ。では」
彼は言った。
「その場所だが」
「ハサンとの国境ですか」
「それは八条長官に話しておこう」
連合の新たな防衛計画であった。今それが浮上してきたのである。
「いいな」
「わかりました。それでは」
「うむ」
キロモトは頷いた。
「すぐに対策を練ってもらう」
「八条長官ならば的確な判断を下されるでしょう」
「そう思うがな」
だがキロモトはここでポーザに言いたいことがあった。
「ポーザ君」
「何でしょうか」
「君は軍事には詳しくはないか」
「ええ」
返答の言葉が少し弱くなっていた。
「申し訳ありませんが。私は元々経済畑でしたので」
「そうか」
キロモトはそれを聞いてその目に思案の色を見せてきた。
「一つ言っておく」
そのうえで彼に述べた。
「より広く思考を持ちたいのならば軍事のことも学んでおくことだ」

「軍事もですか」
「そうだ」
キロモトは答えた。
「軍事に関してもな。知ると視野が広がる」
「それはつまり」
ポーザはそれを聞いて考える目を見せてきた。そして述べた。
「軍事的思考ということでしょうか」
「そうとも言う」
キロモトはその言葉を認めてきた。
「別に特別視するものでもない」
「ですが」
だがポーザはそれを特別視していたのは事実である。
「それは何か」
「違うというのか」
「はい」
それを自分でも認めてきた。はっきりと頷いてきた。
「これは私が連合の人間だからでしょうか。軍事というのはどうも」
「そうした考えは確かにあるな」
「ええ」
キロモトの顔が憂慮するものになってきていた。それを不満に思っているのがわかる。
「軍事を通常のものと考えないのが」
「やはり我々は長い間戦争というものを知りませんでした」
何と言ってもこれが非常に大きいのである。連合では戦争というものが絶えてなかった。それにより戦争や軍事というものに対する考えが希薄となってしまったのである。
「それを考えますと」
「仕方のないことだがな」
「申し訳ありません」
「いや、謝ることはない」

それはよいとした。
「それはいいのだ。しかしだ」
彼はそのうえで言ってきた。
「軍事を知らないということもまた問題だ」
「ではどうされますか」
「そのことに関して国防省に話しておこう」
「八条長官にですか」
「彼には何かと負担をかけているがな」
言葉が申し訳なさそうなものになてしまっていた。
「どうしてもな。今は」
「国防省はできたばかりですし」
「中央軍もまた。今が一番大変な時だろうな」
「それはわかります」
仕事の大変なことはポーザにも予想がついた。その内容までは知らないとしてもだ。それはわかるのであった。
「ですが国防省はその中で」
「よくやってくれている」
「長官もまた」
「では今回も頼むとしよう」
キロモトは決断を下した。
「それでよいな」
「はい」
ポーザはその提案に対して頷いた。
「ではそのように」
「うむ。これでだ」
彼はさらに言う。
「国防省には今二つの仕事ができた」
「サハラへの備えと」
「そして軍事関係の通常社会への親密化だな」
「どちらかというとサハラへの備えが優先されそうですね」

「さてな」
しかしキロモトはこの言葉には何故か思わせぶりに笑ってきた。
「それはどうかな」
「違うのですか」
「そうともばかり言えないぞ。案外な」
「はあ」
「まあここは任せておこう」
キロモトは部下に仕事を任せる時は思い切って任せる男である。それだけの胆力があるのだ。
「それでいいな」
「わかりました。では
「うむ」
こうして国防省の仕事が二つできた。それはすぐに八条にも知らされたのであった。

## 第二十二部第五章　舞台は整いその十六

「ふむ」
八条はそれを国防省で聞いていた。丁度彼は会議が終わった直後で会議室にいたところであった。
「二つですか」
「はい、二つです」
報告に来た国防省の黒人の女性スタッフが答える。
「これがその資料です」
「成程」
八条はその女性スタッフからファイルを受け取った。見れば確かに目次ではおおまかに二つの事柄についてはっきりと書かれていた。間違いなかった。
「まずはサハラへの備えですか」
最初にそれが目に入った。
「そして・・・・・中央軍の通常社会への緊密化ですか」
「それはどういう意味でしょうか」
女性スタッフはそれを聞いて目をしばたかせていた。
「今一つ意味がわかりませんが」
「いえ」
しかし八条はそんな彼女に対して答えた。
「これはわかりますよ」
「おわかりになられますか」
「確かに軍は特別な組織ですね」
「はい」
これは彼女にもわかった。そもそも軍は兵器を取り扱い戦争を行う組織である。特別でない筈がないのだ。
「それは事実です。ですが」
「そのうえで一般社会と関係を深くしていけということでしょうか」

「そうなります」
八条はその言葉に頷いてきた。それから彼女に声をかけてきた。
「あの」
「何でしょうか」
「さっきから立たれたままですね」
「ええ、まあ」
女性スタッフはそう言われてやっと自分でもそれに気付いた。
「それが何か」
「座られてはどうでしょうか」
八条はそう勧めてきた。丁度会議が終わったところで席は空いていた。
「話が長くなりそうですので」
「いえ、それは」
だが女性スタッフはそれを断ってきた。
「申し訳ありませんがお断りさせて頂きます」
「どうしてですか？」
八条はその言葉に目を少し驚かせた。
「あらぬ噂の元になります」
女性スタッフの声がシビアなものとなった。
「あらぬ噂」
「はい、今この部屋は私達の他には誰もいません」
「そうですね」
八条はこの言葉の意味を理解してはいない。ここが彼の鈍感と言われる由縁であった。実際にかなり鈍感であるから困ったものなのである。
「だからです」
彼女はまた言った。
「場所を変えるべきです。ここでは変な噂になります」
「噂というと」
「スキャンダルです」

何故か答える声が少しいらついたものになっていた。
「そうなっては厄介です。すぐに場所を変えましょう」
「はあ」
「あえて言わせて頂きますが長官」
スタッフはここで述べてきた。
「そうしたことにも配慮して頂かないと後々不要なトラブルを抱え込んでしまうことになりますよ」
「そうなのですか」
「全く。わかっておられないようですね」
「どうもですね」
八条はまだよくわからないといった顔のままであった。
「何かこう。仰ることが」
「困ったものですね」
彼女はそんな彼の言葉を聞いて溜息をついてしまった。両手は自分の腰につけていて如何にもといった姿勢になってしまっているのが何処かユーモラスであった。
「そういうことですと。壁に耳あり障子に目ありです」
日本の古典的な諺であった。
「御気をつけ下さい。それでですね」
「はい」
話は何時の間にか彼女主体で進んでいた。八条は引き摺られる形になっている。
「場所は。ここでは駄目ですから」
「どちらへ」
「私のスタッフを集めます。場所は別の会議室で」
人を集めて場所を変える。これでスキャンダルの噂を消すということだ。中々考えている。
「別の場所ですか」
「それともスキャンダルがあった方が宜しいですか？」
「いえ」

そんなものを欲しがる政治家はまあいない。洒落にならないスキャンダルで政治生命を終わらせてしまった政治家は枚挙に暇がない。それは八条もよくわかっている。
「それでは宜しいですね」
「はい。しかし」
だがここで八条は言った。
「何か」
「いえ、そのスキャンダルですが」
彼はさらに言う。

## 第二十二部第五章　舞台は整いその十七

「私はどうもそうしたスキャンダルが出てすぐに根も葉もない作り話だったとわかることばかりでして」
「そうなのですか」
「ただ、その内容がね」
困った笑いを浮かべてきた。
「同性愛者とかそういうものまであって。多彩でして」
「長官が同性愛者に好かれているという話は私も知っています」
彼女は平然とした声で述べた。
「ですから特に驚くまでもないと考えています」
「そうなのですか」
「ええ」
彼女は答えた。
「ユダヤ教徒でもない限り同性愛は取り立てて騒ぐ問題ではないと思いますが」
「まあそうですね」
八条はその言葉に頷いた。実際に彼も同性愛者に対する偏見はない。そうした趣味はなくともだ。
「では参りましょう」
「わかりました」
彼女の言葉に応える。
「それではそちらに」
「はい」
こうして八条は彼女の言葉に応えて場所を替えた。そして別の会議室でスタッフ達と話に入ったのであった。
「あの、長官」
会議にはシャリアピンも出席することになった。彼はその席で八条に対して囁いてきた。

「会議は終わった筈ですが」
彼は何故八条がまた会議に出ているのかわかっていなかったのである。
「どうしてまた」
「新たな仕事が入りまして」
八条はそれに返して答える。
「それでこうなったのですよ」
「新たな仕事ですか」
「はい、二つです」
彼は言う。
「サハラへの備えと一般社会との緊密化に関するものです」
「また大きな話になりそうですね」
「ぞれについて資料を受け取ったのですがね」
「ええ」
シャリアピンはそれに頷く。
「何時の間にかこうした会議になったのですよ」
「そうだったのですか」
「はい、そういうことです」
彼は述べた。
「私も今一つ流れが掴みかねているのですが」
「彼女の言うがままに話が進んだようですね」
シャリアピンはここまで聞いてチラリと今スタッフに対して説明しているその彼女を見た。
「ステラ＝オサリバン女史の言うがままに」
「はあ」
八条の返事は今一つ覇気の弱いものであった。
「何か気が着いたら」
「最近彼女が凄く張り切っているのですよ」
「そうだったのですか」
八条はシャリアピンのその言葉に目を向けてきた。

「はい、御主人との仲が非常にいいそうで」
「それで」
「そのようですね。これで仲が悪いと」
「調子が悪くなると」
「どうやら。しかしまあ」
シャリアピンもまた彼女がどんどん仕切っていく話を見て驚きの声をあげた。
「これだけ見事に仕切れるとは。意外な才能ですね」
「そうですね」
八条もその言葉に賛同して頷く。
「これはちょっと意外でした」
「金内相に匹敵するといいますか」
「金内相にですか」
「はい、流石にあそこまで厳格ではないでしょうがね」
何故か言葉が予測するものになっていた。
「これはまた」
「長官」
ここでそのオサリバンが八条に声をかけてきた。
「はい」
「以上がサハラとの国境における我が国の状況です」
「つまり今のところは何も備えがないと」
「そういうことです」
オサリバンはその言葉に満足して頷いてきた。シャリアピンは八条の返答を見て顔を顰めさせてきた。
「あの」
「何か」
「何時の間に話を聞いておられたのですか。私と話をしていたのに」
「コツです」
「コツ」
「そうです。人の話を複数聞くように」

八条は述べる。
「関心を周囲にも向けていたのですよ」
「そうだったのですか。何かあの話を思い出しましたよ」
「あの話とは」
八条はオサリバンの話を聞きながらシャリアピンの話に耳を傾けていた。実に器用な行動であった。
「聖徳太子の話です」
「ああ、我が国の」
「そうです。あの何人もの話を一度に聞いたという」
日本ではよく知られた話である。この時代では連合でかなり知られた話になっている。
「あれを思い出しました」
「ははは、幾ら何でもそれは」
八条はその話を聞いてついつい笑ってしまった。

## 第二十二部第五章　舞台は整いその十八

「私はそこまでできませんよ、超人ではありません」
「しかし本当に」
「いえいえ」
八条は笑って返す。
「これは本当にコツですから」
「そうですかね」
「そうです。まあ難しいことは難しいですが」
「それはわかります」
そもそも人の耳は一つのことを聞くようにできているのである。それで複数同時に聞けるという方が普通ではないのである。シャリアピンも当然聞ける話は一つである。
「けれどまあやれないことはないんで」
「はあ」
「それでですね」
八条は言ってきた。
「今の話も」
「サハラとの話と一般社会との話ですか」
「そうです、まずは一般社会とですが」
「はい」
それを聞いてオサリバンが八条に顔を向けてきた。
「何か御考えが」
「ええ。まずはそちらについて述べさせて頂きたいのですが」
「そうなのですか」
「宜しいでしょうか」
「わかりました」
オサリバンはその言葉に応えてきた。
「ではお願いします」

「わかりました。それでは」
八条はそれを受けて話しはじめた。落ち着いた声で述べていく。
「まず今我々は様々な催しものもしております」
「イベントに親善パーティー等ですね」
「そうです。ですがそれだけでは不十分であるようです」
彼は述べる。
「だからこそこういう話が出たのだと思います」
「ふむ」
スタッフ達はその言葉を聞いて考える顔を見せてきた。中には顎や口に手を当てて思案に入っている者もいる。
「これだけしていればいいという感情があったのではないでしょうか」
「つまり自己満足に陥っていたと」
オサリバンがここでこう言ってきた。
「そう仰りたいのですね」
「そうした一面があったのではないでしょうか」
八条もそれを認めてきた。
「我々に」
「ううむ」
皆それを聞いて難しい顔になった。
「言われてみれば確かに」
「何処か自己満足をしていたきらいはあります」
「そうなのですよね」
八条はここでは自分に対して言っていた。
「これでいい、かなりやっていると」
「それでは駄目なのですね」
「何か積極臭い話になって申し訳ありませんが」
「いえ」
だがそれに対して何かを言う者はいなかった。
「別にそれは」

「確かに我々はここでも努力してきました」
「はい」
これもまた事実である。八条は今度はその事実を述べてきた。
「ですが」
「それではまだ不十分であった」
「そういうことです。それでですね」
彼はあらためて述べる。
「一般市民との交流をさらに深めていきましょう」
「今まではアトラクションやパーティーもしていましたが」
「それの回数をさらに増やして」
「さらには」
「パレードや音楽祭もですね。していきましょう」
「軍が主催のですか」
「そうです」
八条の声がはっきりしたものになった。
「後は一般社会への研修も導入しましょう」
「訓練の時間が減りますね」
誰かが言った。
「それですと」
「これもまた軍の仕事です」
だが八条はその言葉に対してこう返した。
「確かに訓練は重要です」
「ですね」
軍である以上精強でなくてはならない。しかしそれだけではないのが軍なのである。特に連合軍は様々な要因からその他のことが多くなっている軍隊である。
「ですがそれだけではない」
八条もそれを述べてきた。
「まず連合軍にとって重要なのは」
「規律」

オサリバンの言葉であった。
「そうですね」
「その通りです」
八条の目の光が強くなった。
「連合軍は市民の軍隊です」
「そうです」
オサリバンはその言葉に頷く。これが連合軍の看板であり何よりも重要なことなのだ。連合軍は連合の市民達を守る軍隊である。それが第一の仕事である。
その市民の軍隊が規律を維持していなければ話にもならない。その為に八条は連合軍の中でも最も軍律が厳しいと言われた日本軍に匹敵する規律を定めたのである。
「それがまずあります」
「そして次に来るのが訓練ですか」
「そして市民とのつながりです」
そういうことであった。連合軍にとってはこうした交流もまた重要な仕事となるのである。やはり市民の軍隊であるというのは大きかった。そこにまた一つの要因が加わるのであるが。
「しかもこうしたことはよいＰＲになります」
「むっ」
皆それにあるものを察した。
「成程」
まず満足そうに頷いたのはシャリアピンであった。

## 第二十二部第五章　舞台は整いその十九

「つまり広報にもなると」
「そうです」
八条はその言葉に頷いた。
「おわかりですね」
「ええ」
シャリアピンもまた頷き返してきた。
「それでは積極的にやる充分な理由になります」
「そうです。それに」
八条はさらに述べた。
「市民に好感情を持ってもらえればそれが志願者の増加になりますしね」
「そうですね」
スタッフの一人がそれに応えた。
「交流が深まり我々がより理解されれば」
「これはもっと積極的に動かなくてはいけませんな」
「全く」
彼等も話にかなり乗ってきた。
「これなら」
「一層の努力を」
「そうです。だからこそ」
八条はさらに言う。
「積極的に行っていくべきでしょう」
「細かいところは現場に任せるとしまして」
オサリバンがここで述べてきた。ここで決まるのはやはりおおまかなことであり細かいことは現場でやるしかないというのが組織の常である。
「おおよそのところはそれでよいですね」

「はい」
八条はその言葉に頷いてきた。
「それでいいと思います」
「ではそういうことで」
「しかし」
「しかし？」
オサリバンはシャリアピンの言葉に気付いた。
「次官、何か」
「いえ」
シャリアピンはそれを受けて口を開いてきた。
「先程訓練の話が出ましたが」
「ええ」
話はそこに移ってきた。
「これに関しても憂慮するものはないと思います」
「何故ですか？」
「そういう交流があれば準備が必要ですね」
当然の話である。何事も準備が必要なものだ。だがシャリアピンはそこにあるものを見出していたのである。
「そこです」
「そこですか」
「そうです。そういう準備とショー等の用意、実演もまたいい訓練になるのではないでしょうか」
「ふむ」
スタッフ達はそれを聞いて目を動かしてきた。
「船や車両を動かすことになるのですから」
「言われてみればそうですね」
八条もそれに応えてきた。
「ではそれは憂慮することはないですね」
「そうではないかと」
「わかりました」

八条はここでも断を下した。
「それでは訓練時間自体は増やしません」
「はい」
話は決まった。
「減ることになるでしょうがそれでもよいということで」
「了解」
「そういうことで。それでは交流に関してはこれでいいですね」
「そうですね」
皆それに頷いてきた。
「それではこれで決まりということで」
「はい、そして」
話は次の用件に移ってきた。
「次はサハラに関してですね」
「サハラとの境ですか」
「はい、それです」
八条はオサリバンの問いに返してきた。
「今我々はサハラ方面にはこれといって備えをしておりません」
「連合軍設立前の防衛ラインがあるだけです」
スタッフの一人が述べた。
「その他にはこれといってありません」
「しかもそれもかなり老巧化しております。監視の役目が精々です」
「それですね」
八条はそこに注目してきた。
「それをどうするかです」
「ええ」
皆それに頷いてきた。
「ですが最初に申し上げておきますが」
「はい」
「この問題は焦眉の問題ではありませんね」
八条はそう前置きしてきた。

「急いでやる話ではありません」
「そうなりますか」
「はい、まずサハラはまた中で争います」
それは間も無くであった。焦眉の急はこちらになっている。

## 第二十二部第五章　舞台は整いその二十

「それが終わるまでにかなりの時間がかかるでしょう」
「やはりそうなりますか」
シャリアピンはそれを聞いて眉を動かしてきた。
「そうでしょうね」
八条もそれに返す。
「間違いなく。長期戦になります」
「まずは三国になり」
オサリバンも述べてきた。読む声になっている。
「それから二国」
「どちらにしろサハラ全土を巻き込む激しい戦いです」
「それではそれを受けて」
「そうです」
八条はまた述べた。
「戦いはかなり長期化します」
「ではその間に整えてもよいと」
「私はそう思います」
八条は穏やかな声でこう言うのであった。
「如何でしょうか」
「そうですな」
それを聞いたスタッフの一人が言ってきた。
「確かに焦眉の急ではありません」
このことはすぐにわかった。サハラでの戦いは長いものになる。
その間に充分整えられるものであるのはすぐに察しがつくことであった。
「しかし必ず備えておかなければ」
「そういうことでもあります」
焦眉の急ではないがしておかなければならないことでもあった。

ここが極めて重要なのである。急がずともよいが果たさなければならないこと、それが彼等にとってのサハラへの備えであった。
「だからこそ」
八条はまた言う。
「確実にしておきたいですね」
「それでどうされますか？」
オサリバンは彼に問うてきた。
「それに関しては」
「まずは現地を見てみることにしましょう」
八条は述べた。
「全てはそれからですね」
「そうなりますか」
「はい、現地を見てどんなものにするかです」
彼はここでは現地主義を採ることにした。
「話はそれからです」
「それでは長官」
シャリアピンが話を纏めるように言ってきた。
「はい」
「まずは一般市民との交流の時間や行事の種類をさらに増やし」
「ええ」
これは話が既に纏まっていた。
「そして一般社会の企業等への研修も導入していくということで」
「それで問題ないと思います」
八条もそれによしのサインを出してきた。
「それではそういうことで」
「わかりました、そういうことで」
「話を進めていきましょう」
「了解です」
一般市民との交流に関しては話は終わった。後はサハラとの境であった。これは今からはじまる話であった。

「ではサハラに関しては」
シャリアピンもそれに言及してきた。
「あくまでこれからですね」
「ええ。現場を見てからです」
「わかりました」
シャリアピンも他の者達もそれに頷いてきた。
「それではそのように」
「そういうことで」
「では会議は終わりですね」
オサリバンはそれを見極めてから述べてきた。
「ええ、そうですね」
八条もそれに応えた。
「そういうことで」
「はい」
こうして会議は終わった。八条は最後の挨拶の後で長官室に戻った。そこにはシャリアピンも同行していたのであった。

## 第二十二部第五章　舞台は整いその二十一

「実はですね」
八条は自室に戻るとシャリアピンに話をしてきた。
「会議をするつもりはなかったのです」
「私も驚きました」
シャリアピンもそれに応えてきた。
「いきなりそんな話になり」
「あのオサリバン女史に言われましてね」
「はあ」
「最初は二人で打ち合わせをしようと思っていたのですがそれはよくないと」
「それででしたか」
「そうなのです」
八条は答える。
「それでああした事態になりました」
少し昔のことを思い出すような言葉に聞こえるのは慎重に話しているからであろうか。シャリアピンは彼の言葉を聞いて心の中でそう思った。
「左様でしたか」
「何でもセクハラを疑われると」
「そういえば」
シャリアピンは八条のその言葉を受けてふと何かを思い出したようであった。
「何か」
「オサリバン女史ですがね」
「ええ」
話が面白い方向に転がってきた。だが八条はそれには気付かない。
「最近金内相を模範とすべきと考えているようですね」

「金内相をですか」
「はい。あの方は女性に絶大な人気がありまして」
金は厳格で融通が利かないが女性の権利についてはしっかりとした考えを持っており、なおかつセクハラといったことには非常に厳格なことで知られている。その潔癖で公正な性格もあり女性、特にうら若き女性達からは絶大な人気を得ているのである。彼女達からアンケートを取ってみると上司にしたい女性のナンバーワン、それも他の者から圧倒的な差をつけてのトップであったのだ。ちなみに彼女達は同時に上司にしたい男性には八条をトップに選んでいたりするからここが中々面白いとも言えた。
「国防省でも人気が高いのですよ」
「それは聞いていましたが」
「オサリバン女史も同じです」
シャリアピンは言った。
「そうでしたか」
「セクハラ厳禁で規律正しく」
「国防省でもそれは徹底している筈ですが」
「より厳格にと考えているようですね、女史は」
「それはまた」
八条はそれを聞いて目をしばたかせてきた。
「そういう事情だったのですか」
「金内相は他にも影響を与えていますよ」
シャリアピンはまた述べた。
「色々な場所に」
「この国防省にもですか」
「ただ」
「ただ？」
シャリアピンの思わせぶりな笑みに八条も気付いた。
「オサリバン女史は甘いものはそれ程お好きではありません」
「ああ、そうなのですか」

八条はその言葉に妙に頷けるものがあった。
「けれどよく考えればそうですね」
「これはね」
シャリアピンも当然だと考えていた。
「そうそう真似できるものではありません」
金の甘党ぶりは連合中に知れ渡っている。真似をしたら急性糖尿病になるとまで言われていたりする。そこまで極端なものであるのだ。
「病気になります」
これに関する考えは八条も同じであった。
「その前に胸焼けしませんか？」
シャリアピンはこう述べてきた。
「あれだけ甘いものを食べていると」
「どうでしょうかね」
八条はその言葉に妙に擁護めいた感じを見せてきていた。
「いや、あれはまずいでしょう」
「人それぞれでは？」
八条はまた言う。
「こういうのは」
「そうでしょうか」
「はい」
あらためて頷いてみせる。

## 第二十二部第五章　舞台は整いその二十二

「体質です」
「そういえばあの方は痩せておられますね」
金はすらりとした体型で知られている。あれだけ甘いものばかり食べて有り得ない程痩せているのである。
「そうですね」
それに八条も頷く。
「やはり体質でしょうか」
「ええ」
「私だったらあれだけ甘いものを食べれば」
「おかしくなりますか？」
「はい、身体も」
彼は答えた。
「その前に舌が」
「甘みでですか」
「おかしくならない方が不思議でしょう」
そう述べる。
「少なくとも私はそうなりますよ」
「ところが内相はかなり味覚も鋭いのですよ」
「余計にわかりませんね」
思わず唸ってしまっていた。心から不思議といった感じであった。
「どうしてなのか」
「まあ本当に人それぞれですから」
またその言葉を言う。どうもそれに頼っているのではと思える程である。
「甘いものに関しては」
「韓国人にしては、とは思いますね。あと」
「韓国人にしてはですか」

「はい」
シャリアピンはここであえて金が韓国人であるということを指摘してきた。
「韓国料理と言えば」
「辛いと」
「そうです、ですから何か違和感もあります」
そうも述べた。
「そこはどうなのでしょうか」
「言われてみればそうですね」
八条もそれに応えてきた。
「確かに韓国料理と言えばそれです」
「そうですよね」
辛い。韓国料理に対して連合の者がイメージするのはまずそれであった。それは誰もが同じである。
「内相は韓国料理も召し上がられますよ」
「はあ」
「ですから別に」
「特に甘いものだけではないと」
「そう思います」
八条はそう己の考えを述べた。
「別に味覚に何かあるというわけではなく」
「それを好んでいるだけであると」
「私はそう思います」
「そうなるのですか」
そこまで聞いてあらためてシャリアピンは何か釈然としないものを感じた。
「どうにも」
「やはり何か納得できませんか」
「私は食べたらすぐ身体に出てしまう体質ですからね」
ここで苦笑いを見せてきた。

「それだけに食べても普通に変わらないのはどうにも」
「不公平だと」
「そう思います。まあ言っても仕方ないことですが」
「これは男だから笑い話で済むのですがね」
「ところがレディーですと」
そうはいかない。男と女では何かと違ってくる。特にこうした太る太らないでは男では笑い話になっても女ではそうはいかないものなのである。
「まだ男でよかったですかね」
「ですね。オサリバン女史の前でそれを言えば」
「ことです」
「そういうことでしょうね。それでですね」
八条はここで話を戻してきた。
「はい」
「サハラとのことですが」
「長官はサハラと軍事衝突の危険性も考えておられますか」
「皆無ではないですね」
八条はその問いに落ち着いた声で返した。
「可能性はやはりあります」
「そうですか」
「それだからこそですね」
彼は述べた。
「備えはしておいた方がいい。いや、しておかなくてはならない」
「ですか」
「ええ、さもなければ取り返しのつかないことになります」
語るその目が光っていた。

## 第二十二部第五章　舞台は整いその二十三

「一方に戦意がなくともう一方に戦意があればそれで戦争になります」
　戦争とは相手があってはじめて成立するものである。それだからこそ絶えることがないのである。連合もエウロパがあったからこそ戦争になった。これはサハラとの関係においても同じである。それを考えればやはりサハラに対してもエウロパに対するのと同じように備えが必要なのであった。
「ですから」
「それでですね」
　シャリアピンはさらに八条に問うてきた。
「どの様な備えを御考えでしょうか」
「まだ実際に現地を見ていませんが」
　そう前置きはした。
「ですが」
「はい」
「一応モデルは考えています」
「どういったものでしょうか」
「はい、ここはオーソドックスにですね」
　そう言って述べはじめた。
「要塞線ですね」
「要塞線ですか」
「エウロパに対してはやはり回廊でしたから」
「出入り口に要塞を置けばよかった」
　だから連合もエウロパもそれぞれ要塞を置いたのである。連合軍のガンタース要塞群はまさに難攻不落の要塞と化していた。これは連合軍の不断の努力によるものである。
「ですがサハラとの境は」

「長いですね」
シャリアピンはそれを指摘してきた。
「そのラインが横にも縦にも」
「そうです」
八条もそこを見ていた。そうしたところにも抜かりがなかった。
「そこなのです。問題は」
「だからこそ要塞線ですか」
「そうです、強いて言うのならマジノ線でしょうか」
考える目をしながら述べてきた。
「参考としたいのは」
かつてフランス軍がドイツとの境に築いた要塞線である。難攻不落と豪語したのであるが実際にはドイツ軍はそれをアルデンヌの森を突破してそれを無力化している。これはドイツ軍の知将マンシュタインの考え出した知略であった。要塞線はそれが抜けられないのならば迂回すべし。戦略の基本ではあるがそれを実際にやるのは非常に難しいのである。
「それでは長官」
シャリアピンはそれを聞いてまた述べた。
「はい」
「調べるのはその境だけではないかと」
「といいますと」
「その周りも。調べておくべきです」
「アルデンヌですか」
八条はシャリアピンが何を言いたいのかすぐに察してきた。そしてその名前を出してきた。
「その通りです。マジノ線とするならば」
その通りであった。シャリアピンもそれを認めてきた。
「やはりそれを考慮すべきだと思いますが」
「そうですね」
八条としても同じ考えである。それに頷いてきた。

「ではそちらも」
「サハラはエウロパの二倍の人口があります」
「そしてその戦闘力はかなり高い」
二人はサハラに関しての分析もはじめていた。
「備えは厳重でなければなりませんね」
「ええ」
二人は目で頷き合う。だがその目の光は非常に強い。
その光をたたえたまま言う。言葉もまた強くなっている。
「サハラを侮ってはいけません」
「その通りです。彼等は強力な兵士達です」
二人共それはよくわかっていた。だからこその言葉であった。
「だからこその備えですね」
「そうですね。それでは」
「はい」
八条は頷く。言葉がさらに強くなる。
「今の仕事が終わりましたらすぐに境に向かいましょう」
「そしてそこで視察されてからですね」
「そうです、全てはそれからです」
「おそらく今度の戦いはかなり長くなるでしょうし」
「その間に防衛体制を整えておきましょう」
「わかりました。しかし」
「しかし？」
八条はシャリアピンの言葉に反応を見せてきた。
「エウロパの脅威が弱まったと思ったらサハラもですか。悩みは尽きませんね」
「そういうものです」
八条は彼のぼやきに笑ってみせた。
「仕方ありませんね。ですがそれに備えるのが」
「政治であると」
「ええ。ですから」

彼は言う。
「ここはその責務を果たしましょう」
「わかりました」
こうして国防省はサハラとの境にも防衛ラインを築くことにした。話はまた動こうとしていた。サハラも連合も。彼等はそれぞれ時の神の支配する歯車の中に置かれ、動かされていたのであった。

第二十二部　完

２００６・１２・１９

# 第二十三部第一章　風雲を前にしてその一

風雲を前にして

サハラでの戦乱が再び起ころうとしていた。サハラにいる者達もその外にいる者達もそれから目を離せなくなっていた。今銀河はサハラをその軸として動いていた。

その中でハサン、オムダーマン、ティムールの三つの勢力はそれぞれ兵を動かしていた。宣戦布告はなくとももう戦いは幕の中ではじまっていると言えた。

「まずはだ」

シャイターンは自身の宮殿の奥深くにいた。そこに腹心達を集めて話をしていた。

「国境を破る。よいな」

「はい」

腹心達はそれに頷いてきた。見れば集まっているのはシャイターン家の者とごく僅かの腹心達だけであった。それだけにこの会議がどれだけ重要なものであるのかがわかる。

「それからハサンの首都ブルジルトを目指すぞ」

「首都を第一の攻撃目標とされるのですね」

「そうだ」

シャイターンはハルシークの言葉に頷いた。やはり彼はここにいた。

「ですが閣下」

しかしハルシークはそれに異議を呈してきた。

「何だ」

「それはいささか無理があるように思えますが」

「それはどうしてだ」

シャイターンはその言葉に問うてきた。

「距離的な関係です」

ハルシークはそこに根拠を求めてきた。
「このアレクサンドリアからブルジルトまではかなりの距離があります。むしろオムダーマンの方が近い程であります」
「それはわかっている」
だがシャイターンは彼の言葉にそう返した。
「それでだ」
「しかしだ」
そして彼は言う。
「だからこそだ。ここはそれを目指したい」
「あえてですか」
「確かにハサンは広大だ」
「はい」
これには親族達も腹心達も頷いた。
「だがここでブルジルトを目指すと言えば将兵もそれを考慮して戦う。作戦も立て易い」
「成程」
これはシャイターンの冷徹な読みであった。
「そのまま首都を目指せばハサンもそれに備えるだろう」
「確かに」
これもまた頷けるものであった。首都は国家の心臓である。そこをまず護るのは言うまでもない。シャイターンはそこも頭に入れていたのである。
「だからだ」
彼は言う。
「第一目標はブルジルトにする。わかったな」
「はっ」
「それではそのように」
「それにだ」
シャイターンはさらに言ってきた。
「ここでブルジルトを目指すと我々にとって非常に都合がいいのだ」

「それは一体どういうことですか」
フラームがそれに問うてきた。本来は軍事のことに携わらない彼もこの会議に出席しているのである。
「それはだな」
「ええ」
シャイターンは弟にその理由を話しはじめた。彼だけではなく他の者達に対してもだ。
「我々が首都を目指す。するとハサン軍はそれを懸命に防ごうとするな」
「はい、それは」
「当然の流れかと」
皆それは容易にわかった。首都を護るのが第一であるからだ。
「だからだ」
シャイターンはここで笑ってきた。
「だからとは」
「そうすればオムダーマンに手薄になる。だがそれも許されない」
「兵力が分散されるというわけですね」
「そうだ。だが緩やかに攻めればどうなるか」
「兵力をどちらかに集中させてきますね」
それが読めてきた。ハサンはオムダーマン、ティムール双方を相手にしている。だから普通に考えればどちらかに戦力を集中させて先に叩かねばならないのだ。シャイターンはそれを叩かせないように考えているのである。これが彼の読みであったのだ。

## 第二十三部第一章　風雲を前にしてその二

「そうさせないことがこの戦いでは肝心なのだ」
「ふむ」
アブーは長兄のその言葉に頷いてきた。
「それが上手くいけば我々は容易に戦いを進めることができますね」
「その通りだ。だが」
「だが？」
ここでシャイターンの声の色が変わったのを皆見逃さなかった。
「これは向こうも読んでくる」
「ハサンもですか」
「あの太子はな」
シャイターンはその脳裏に一人の男の顔を思い浮かべてきた。
「ルクマーン＝ラシード。彼はこれを読んでいるだろう」
「では的確に対処してくると」
「少なくとも彼はそれを目指す」
シャイターンはアブーに対して述べた。
「彼自身はな。しかし」
「しかし！？」
「何かあるのですか」
末弟に続いてフラームも問うてきた。シャイターンは弟達の言葉に静かに述べてきた。
「彼だけが動いても何にもならないのだ」
「成程」
ウーアンザがそれに応えてきた。宰相として彼も出席しているのだ。
「つまりあれですな」
彼は応えたうえで話をしてきた。
「下の者はそう上手くは動けないと」

「その通りだ」
シャイターンはその言葉を聞いて不敵に笑ってきた。
「それでわかったな。何故アブサーファを動かしてきたか」
「はい」
皆それに頷いてきた。話は全てつながっていたのである。
「そういうことだったのだハサン軍の手駒を減らしていく」
シャイターンは述べる。
「そうして王太子の采配に忠実に動ける人間をなくしていったのだ。戦争は兵器だけでするものではない」
「人でするものです」
ハルシークがこう述べてきた。
「そういうことですな」
「その通りだ。今ハサンはその人が減った」
正確に言うならばシャイターンが減らした。そういうことである。
「これがかなり大きいのだ」
「ハサンの弱体化は著しいと」
「そこまではいかないだろうがな」
それでもまだかなりの余力がある。シャイターンはそれもわかっていた。
「だが我々の付け入る隙を作ったのは事実だ」
「それを利用していくと」
「いいな」
彼の声が鋭くなった。
「そこに入っていく」
「そして攻めていくと」
「全てはその為だったのだ」
冷徹だが極めて明哲な言葉であった。まるでシャイターンそのものであるかのように。
「全てのことはな」
「それでは」

「うむ」
そのうえで頷いてきた。
「作戦は実行に移す」
彼ははっきりと言った。
「ハサンを滅ぼす、それを最大の目標とする」
「わかりました」
そこにいる者全てがその言葉に応えた。皆その目に強い光を湛えていた。
「ですが兄上」
そのうえでフラームが兄に声をかけてきた。
「ハサンだけではありますまい」
「何が言いたいのだ」
シャイターンはその言葉に思わせぶりに笑ってきた。
「私はハサンを倒すと言ったのだが」
「その後です」
彼はそれでも言ってきた。
「それで我々の、兄上の目的は達せられるのでしょうか」
「面白いことを言う」
そう言ってまた笑ってきた。
「それからか」
「はい、それからです」
フラームはそれに応える。彼もまた思わせぶりに笑っていた。
「無論それだけではない」
シャイターン自身でそれを認めてきた。
「よいか」
「はい」
これはフラームだけでなくこの場にいる全ての者に対して言った言葉である。それだけに強い言葉であった。
「サハラは長い間統一されることがなかった」
またサハラの歴史について語りはじめた。まずはこれが問題とな

るのである。
「ウマイア朝以降な。それが我等の苦しみのもとだった」
「十字軍然り列強の侵攻然り」
「そしてアメリカ軍の侵攻も」
「その後の太平洋諸国とＥＵ諸国の石油利権を巡る争いもだ。そして今も」
シャイターンは言う。

## 第二十三部第一章　風雲を前にしてその三

「エウロパの侵攻を招いてしまった。それは何故か」
「我々に力がなかったからでございます」
アブーはきっと顔を上げて言ってきた。非常に言い難い言葉であったが彼はそれでもあえて平然と言ったのである。これは彼でなければ出来ないことであった。
「そうだ」
そしてシャイターンもその言葉に頷いた。
「その通りだ。わかるな」
「はっ」
皆またその言葉に応えた。
「我々に力がなかった。だからこそ攻められ奪われたのだ」
「そしてそれを防ぐものこそ」
「力だ」
その言葉に迷いはなかった。
「力だ。それ以外にはない」
「それではその力を手に入れるのは」
「決まっている」
ハルシークにそう返した。
「だからこそ統一するのだ。サハラを一つにする」
サハラ統一、アラブの頃からの果たせぬ悲願を今宣言した。
「私の手によってだ。だからこそだ」
「はい」
「それでは」
「オムダーマンとも戦うことになるかも知れない」
今それをはっきりと言った。
「これからの流れではな。しかしそれに躊躇うつもりはない」
「アッディー副大統領がおられてもですな」

フラームがそれを問うてきた。
「それでもやはり」
「ふふふ」
シャイターンは次弟のその言葉に今度は声を出して笑ってきた。
「妹マルヤムのことか」
「そうです」
「姉上がおられても」
「案ずることはない。今は時代が違う」
シャイターンは笑ったまま述べた。
「命が奪われることはない」
「それでは」
「そうだ」
また強い言葉で返してきた。
「必要とあらば戦う。それだけだ」
「わかりました」
「では」
「サハラは統一されなければならない」
そう語ったうえでまた述べた。
「その為には躊躇ってはならないのだ」
「サハラが一つになれば」
ウーアンザがぽつりと言葉を出してきた。
「その力は銀河における一つの勢力となります」
「二千億の人口を持つ一大勢力です」
「そうなれば」
フラームとアブーもその呟きを聞いて声を弾ませていた。
「我々はもう恐れるものはありません」
「いた」
しかしシャイターンはここで笑みを消して冷徹な声を送ってきた。
「それはどうかな」
「違うと仰るのですか」

「それは何故」
「確かにそれで力は得る」
彼はそれは確かに認めていた。
「しかしだ」
「しかし」
「そこに何か」
「あるのだ。まずはだ」
「はい」
言葉は続く。皆それを固唾を飲むようにしてまんじりともせず聞いていた。
「連合だ」
「連合ですか」
「彼等とは到底戦えはしない」
シャイターンはそう判断していた。これは勢力差を考えれば至極妥当な結論であった。
「我々は二千億」
「ええ」
これをあらためて確認させる。それからまた述べた。
「連合は四兆。二十倍だ」
「数ですか」
「資源や技術でもな。我々を圧倒している」
勢力差がそのまま影響しているのである。嫌になるまでそれがわかるのだ。
「我々が勝っているのは戦争に関する知識だけだな」
「軍事技術は」
ハルシークが付け加えてきた。
「そうだ。民間の技術が転移されればそれで容易に引っくり返ってしまうのだ」
「連合の民間技術をですか」
「彼等の技術を侮ってはならない」

そう弟達に言い伝えた。
「そうなればそれもまた容易に逆転する」
「そもそもですな」
ウーアンザが言ってきた。
「先のエウロパとの戦争を見る限り連合の軍事技術もまた」
「かなりの域にある。既に我々を凌駕しているのかも知れないな」
「ええ」
シャイターンに言い伝えたうえで頷いてきた。
「そうです。特にあの巨大戦艦を見ると」
「いや、あれだけではない」
彼は巨大戦艦の威容に誤魔化されはしなかった。あのティアマト級巨大戦艦は連合軍の象徴である。だからどうしても目がいくのであるが彼はそれに惑わされはしなかったのだ。
「確かにあの巨大戦艦の戦力は大きい」
「それだけではないと」
「そもそのあの巨大戦艦の能力の恐ろしさは戦闘力にあるのではない」
確かな声で述べた。
「その統制能力と通信能力にあるのだ」
「艦隊の旗艦としてですか」
「その通りだ」
アブーにこう返した。
「あの戦闘能力につい目を奪われてしますがな」
「それで艦隊をコントロールしているというのですね」
「その通りだ」
末弟に対してそう述べた。
「完璧なまでにな」
「そうだったのですか」
「しかし」
軍事に疎いフラームもそれを聞いて険しい顔をしていた。そのう

えで兄に言う。

## 第二十三部第一章　風雲を前にしてその四

「それだけの艦艇を何千隻も建造するとは」
「それが連合ということだろうな」
シャイターンはまた言った。
「我々にあの艦艇が作られるか」
「いえ」
ハルシークがその言葉に首を横に振ってそれを否定した。
「幾ら何でもそれは無理です」
「そうだな。その通りだ」
そしてそれはシャイターンも認めた。
「あれだけのものを建造する国力も技術も我々にはない。不可能だ」
「それを何千隻も建造する連合というのはやはり」
「恐るべき力を持っているということだ」
またアブーに返した。彼のこの件に関する答えは決まっていた。
「だからだ」
「はい」
そこにいる全ての者が応えた。
「戦いはしない、彼等とはな」
「何があってもですか」
「そうだ。戦えばそれは破滅に直結する」
こうまで言い切る。その言葉には有無を言わさぬ説得力すらあった。
「よいな」
「はい」
「確かに」
皆それを聞いたうえで頷いた。頷くしかなかった。
「連合とは戦わぬ。統一されていようとも」
「ですが兄上」

ここでフラームが兄に対して言ってきた。
「何だ」
「そもそも連合は我々に対して特に思うところはないのではないでしょうか」
「確かにな」
シャイターンもそれはわかっている。次弟の言葉にも何も含むところなく答えてきた。
「このサハラは連合にとっては言うならば化外の地」
フラームはあえてこうしたサハラにはない概念の言葉を用いてきた。この化外の地という言葉は中国の言葉である。中国の領土でない場所をそう呼んでいたのである。南方の島や万里の長城より北がそれにあたる。ここで重要なのは万里の長城の存在だ。中国人は古来この城を境としてきた。彼等はそこより北は領土とは考えずそこで何があろうとも全く意に介してこないというのがその歴史であった。満州や北方で何があっても自分達に影響がなければ基本的には放置してきた。これが連合とサハラの関係にも言えるというのである。
「我々が何かしない限りは彼等も」
「普通に考えればそうだな」
シャイターンもそれは認めてきた。
「だが何が起こるかわからないものだ」
「何が、かですか」
「そうだ」
次弟に対して言う。
「備えておけば問題はないであろう」
「では今回もですか」
「隣接していることには変わりがない」
これが重要なのであった。隣に連合がいること、それこそが最も問題なのである。
「何かあってからでは遅い」

「成程」
「常に衝突を避け備えはしておく」
「それでは」
フラームはそこまで聞いてからまた兄に対して言ってきた。
「今しきりに来ている中央政府及び各国の権益に関する交渉については」
「言うまでもないと思うが」
シャイターンは言った。
「無条件で認めればいい。違うか」
「そうですね」
これはフラームも同じ考えであった。確認の為にも問うたのである。そしてそれは他の者にも伝わっている。そうした多重の意味を含んだ問いであった。
「それではそういうことで」
「それに関しては連合の望むままだ」
「望むままですか」
それを聞いたウーアンザが声をかけてきた。
「無条件ということですな」
「何か問題はあるか？」
「いえ」
彼もこれに関しては賛成であった。連合の圧倒的な力を考えると些細なことでトラブルの種を撒くことは何としても避けなければならないからである。

## 第二十三部第一章　風雲を前にしてその五

「ではそれで」
「うむ。おそらく連合は我々にだけ来ているのではない」
「はい」
これにはハルシークが答えてきた。
「情報部に話が入っております。ハサンにもオムダーマンにも。そして各地にも中央政府及び各国の者がしきりに出入りしております」
「だろうな」
シャイターンの読み通りであった。それを聞いて満足そうに頷いた。
「そうだと思っていた」
「両国も各地の要人達もそれを認めるつもりのようです」
「断ることはできまい」
シャイターンはハルシークの言葉に対してこう返した。
「普通の思慮分別があればな。私と同じ判断を下す」
「ですね」
「だからだ」
シャイターンはまた言った。
「彼等に関しては無闇に刺激するな。いいな」
「はい」
「そしてだ」
さらに言う。
「もう一つ問題がある」
「もう一つ」
「それは一体」
参列者が皆彼に問うてきた。何があるかと思っていたのだ。
「衝突が双方がいて成るもの」
彼はまずはこう切り出してきた。

「そうだな」
「はい」
「ではこの場合は」
「連合がこちらに仕掛けてくる場合だ」
「それはさっき」
フラームがその言葉を聞いて顔を少し顰めさせてきた。
「申し上げて筈ですが」
「我々に何かあればどうなる？」
シャイターンはその彼に対して問うた。
「その場合はどうなるか」
「その場合ですか」
「そうだ。例えばかつての石油の様な事態だ」
十九世紀後半から二十一世紀まではアラブが狙われた理由はこれにあった。石油を巡って大国が次々に介入してきたのである。これもまたアラブの屈辱の歴史の一つであった。
「ああしたものがサハラに出ればわからない」
「連合はそれを奪いに来ると」
「言っておく」
シャイターンは連合に関して言及してきた。
「連合は決して平和的な勢力ではない」
「一千年の間戦争をしてこなかった勢力がですか」
「それは必然性がなかったからだ」
彼は冷徹な声でアブーに返した。
「それだけでのことだ。それは前にも言ったな」
「はい」
実はアブーもわかっている。もう一度それを自身に刷り込む為の問いであったのだ。そしてやはり他の者に聞かせる為でもあった。
「必要があれば戦争になる」
「それが我々としても引き渡せないものであるのならば」
「余計にだ」

フラームにも言った。
「そういうことだ。そうはさせないに越したことはないが」
「そうなった場合は」
「戦うしかない」
結論はこれであった。これしかなかった。
「そしてそれを守るしかない」
「そうなりますか」
「やはり」
皆その言葉を聞いて嘆息した。シャイターンの言葉を理解した嘆息であった。
「連合はエウロパとは比較にならない程の存在ですね」
フラームはそれを思い知るのであった。
「そういうことを考えれば」
「下手をするとだ」
シャイターンの目が剣呑に警戒するものとなった。
「はい」
「彼等に飲み込まれてしまう」
「飲み込まれる」
「そうだ」
シャイターンは彼等の言葉に応えてきた。
「言ったままだ。飲み込まれる恐れもある」
「それはつまり」
ウーアンザが暫し考えてから彼に述べてきた。
「連合の人の海の中に我がサハラが飲み込まれていくということですか」
「さて、それは」
フラームは兄のその言葉に懐疑的な声と反応を示してきた。首を少し傾げさせていたのだ。
「まずはないのではないでしょうか」
「そう思うのか、御前は」

「ええ」
彼は自分でもそれを認めてきた。自分の考えが特に間違っているとは思っていない様子であった。
「つまりですね」
彼は兄に対して語りはじめた。
「我々の文明が連合の文明の中に飲み込まれていくと。そういうことですね」
「わかっているではないか」
シャイターンは弟の言葉を聞いて答えてきた。

## 第二十三部第一章　風雲を前にしてその六

「その通りだ」
「それはないと思います」
彼はあらためてそれを述べた。
「我々と連合は完全に別世界です。ですから」
「そうですね」
次兄のその言葉にアブーも頷いてきた。
「そうして我々を飲み込んでいくのは。幾ら何でも」
「時間だ」
だがシャイターンは二人の弟達に対して時間を出してきた。
「時間！？」
「そうだ。本気で侵略するつもりならな」
「はい」
弟達だけでなく他の者も彼の言葉に耳を傾ける。そして聞くのであった。
「幾ら時間をかけてもいいのだ」
「幾らでもですか」
「そうだ、最終的にその場所を自分達のものにすればよいのだからな」
侵略の究極的な目的である。何も武力のみを使って行うのが侵略ばかりではないのである。方法は他にも何かとあるものである。
例えば文化侵略だ。自国の文化を輸出してその国の文化を乗っ取ってしまう。そうした意図的な文化輸出を行う国も過去にはあった。
もう一つ宗教もある。ローマは三回世界を征服したと言われている。一度は武力、二度は法律。法律や政治もまた文化であるからこれを文化と言い換えてもいい。ローマの法は非常に完成されたものである。後の欧州の方に絶対的な影響を残したのである。
そして宗教だ。キリスト教は世界に広まり多くの者の心となった。

これが侵略にも使われたのは歴史にある通りである。侵略とは何も武力だけを使うものではないのである。シャイターンはそれがよくわかっていた。
「連合が本気ならばそれを仕掛けて来るだろう」
「そこまでやりますか」
「必要ならばな」
そう他の者に語った。
「連合に入りたいのならばそれでよいがな」
「まさか」
だがそれはそこにいる全ての者によって否定された。
「我々はサハラの者です」
アブーが最初にこう述べてきた。
「それでどうして連合に入るなどと」
「そうした者も探せばいるでしょう」
次にフラームが口を開いた。
「ですがサハラには自然な愛着があります。ですから」
「ではわかるな」
シャイターンは弟達の言葉を聞いてまた言うのであった。
「それに関する警戒の必要も」
「はい」
「ではそちらもまた」
「しかしだ」
だがシャイターンは一つ釘をさしてきた。
「何でしょうか」
「だからといって連合との交流も文化規制もするつもりはない」
「そうなのですか」
「それもまた愚かなことだ」
彼は排外主義者でもない。そうしたバランス感覚は当然の様に備えていたのである。
「イスラムは寛容であるべきだ」

ムハンマドの頃から言われている考えを今ここで出してきた。
「それがまずある」
「それと共にですか」
「その通りだ」
また弟達に答えた。言葉がまるで預言者のそれのように強い説得力があった。
「連合のものであろうとな。よいものは次々に取り入れていけばよいのだ」
「ですがそれが過ぎると」
「そこだ」
ウーアンザの今の言葉を指摘してきた。人差し指も動いた。
「その文化を認め、受け入れるのはいい。しかしだ」
「溺れてはならないと」
「そうだ。受け入れるのと溺れるのは違う」
シャイターンが言うのはそれであった。彼はその境目をはっきりとさせてきたのである。

## 第二十三部第一章　風雲を前にしてその七

「よくある話だが。その文化を愛するあまり他の文化をないがしろにする」
「はい」
これもまた問題なのである。それにより視野が狭まってしまうからだ。例えば西洋文化に耽溺するあまり日本文化をないがしろにするような。そうした話は実際に明治維新以降あった。谷崎潤一郎の友田と松永の話にもそれが出ている。この作品は当時の谷崎の西洋文化耽溺への懐疑が書かれた作品である。
こうしたことは日本だけでなく他の国にも見られる。連合にもサハラの文化やマウリアの文化に耽溺する者もいれば連合の文化しか認めない者もいる。何時の時代のどの場所にもそうした人物はいるものである。
「それでは駄目なのだ」
「それぞれの文化を認め、学んでいくと」
「うむ」
そしてまた頷いてみせた。
「わかったな、それで」
「それが即ちサハラの発展になると」
「そういうことでしたか」
皆シャイターンのその考えにまた嘆息した。今彼はその確かな視野をそこにいる者に見せていたのである。
「しかしだ」
「ええ」
シャイターンは警戒を解く声を出してきた。
「おそらく連合はそこまでは考えはしない」
「文化侵略まではですか」
「うむ。彼等が興味を持つとすればサハラ自体ではない」

「そこにあるものだと」
「そうなるだろうな。あらゆるケースが考えられるにしろ」
顎に左手を当てて考える顔をしていた。
「それでもだ」
「連合だけではありませんからな」
ハルシークが言った。
「我等の周りには他にも」
「そうだ。エウロパもいる」
「彼等もですか」
エウロパの名を聞いて皆顔を曇らせてきた。サハラにとってエウロパが不倶戴天の敵であるのは彼等が敗れ衰えている今でも変わりはしないのである。
「彼等が一番問題か」
シャイターンも述べてきた。
「おそらく諦めてはいない」
「やれやれですな」
ウーアンザはその言葉を聞いて呆れたような声を出してきた。
「あれだけ手酷くやられたというのに」
「彼等も生きなければならないからな」
「あの狭いエウロパの中では限られているということですか」
「中で努力すればいいと思うのですがね」
フラームの言葉はここではシニカルであった。
「それをどうして」
「技術的な問題が大きいな」
シャイターンがここで述べアブーがそれに問うた。
「技術的なですか」
「この場合は惑星開発だ」
彼は言った。
「惑星開発」
「エウロパのそれはかなり未熟だ」

彼はそれを指摘する。
「だから人口問題が深刻になっているのだ」
「そういうわけですか」
「そういうことだ」
シャイターンの言葉は辛辣な色彩も帯びてきていた。
「例えばだ」
「はい」
彼等に対して話は続く。
「連合の惑星開発能力は冥王星の様な星でも居住可能にするな」
「ええ」
このことはつとによく知られている。連合はただ惑星を開拓していくのではないのだ。そうしてどんな惑星も居住可能にして進出していける能力があるのである。

## 第二十三部第一章　風雲を前にしてその八

「エウロパにはその技術がないのだ」
「それが今野エウロパの状況に直結していると」
「そういうことだ」
「成程」
皆それを聞いてあらためて頷いた。
「それは知っていましたが」
ウーアンザが述べてきた。
「そこまで深刻な事態になっているとは」
「技術も重要であるのは言うまでもない」
人類の発展は技術によって支えられてきている。それを考えると当然のことであるがシャイターンはそれを今あえて口にしているのである。
「それが如実に現われているのだ」
「だから我々のサハラに侵攻してきた」
「そしてそれから撃退された今」
「また侵攻を考えてもおかしくはないですな」
「これでわかったか」
皆に問うシャイターンの目は鋭い光を放っていた。
「力では連合の方が遥かに上だ」
「はい」
「しかし戦争の可能性となると」
「エウロパの方が上となると」
「それもかなりな」
言葉がさらに冷徹なものになったと思われた。何か今のシャイターンの言葉はそれだけの響きがあった。
「ですが兄上」
アブーが言う。

「今のエウロパにはそんな力は」
「そうです」
フラームもそれに続く。
「連合とのダメージで受けた傷はかなりのものです。それからの復興は容易ではないでしょう」
「それはある」
シャイターンもそれはわかっている。わかっているうえでの話なのである。
「回復には当分かかる。彼等の再度の侵攻は今ではない」
「今後ですか」
「そう、それはな」
それがわかったうえでの話であるから実に遠くを見ている。シャイターンの読みの特徴として今そこにあるものだけを見ないということがある。彼は遥かな将来のことも見据えて考える男なのだ。
「おそらくはな」
「ええ」
言葉を続ける。
「それは統一が成ってからだ」
「サハラの統一ですか」
「このままだと確実に統一が成る」
今それをはっきりと断言してきた。確かな声で。
「無論それは私の手によって為されるべきなのであるがな」
「それは」
シャイターンに仕えているのは何故か。彼に魅せられているからだ。その彼等がシャイターンのその言葉に頷かない筈がなかった。これはシャイターンのカリスマ故である。
「統一が成って終わりではないのだ」
彼は今それを言う。
「それからも戦いは続く」
「それがサハラとの戦いですか」

「おそらくはそうなる」
シャイターンの目は未来を見据えていた。彼の戦略は既に統一の後にも目を向けたものになっていた。
「その時が問題なのだ」
「その時ですか」
「エウロパの者がどうなっているかだ」
その言葉はただサハラのことだけを見ているものではないということの表われであった。
「エウロパにもまた人がいる」
「そういえばですね」
ふとフラームがあることを思い出してきた。
「今イギリスの貴族でスタンフォード侯爵という人物が出て来ています」
「彼か」
「御存知でしたか」
「話は聞いている」
流石であった。シャイターンの耳は地獄耳である。彼はその耳であらゆる情報を集めているのであった。
「先の連合との戦いでの英雄だったな」
「はい」
フラームは兄の言葉に頷く。
「ニョルズの戦いであのタンホイザー元帥と共に活躍した者です」
「それだったな」
当然ながらシャイターンはその戦いのことも調べている。
「彼が出て来たのは」
「そもそも軍人ではなかったのですがその戦いで一気に名を知られ」
「あの義勇軍相手に一歩も引かず水際立った指揮を見せてきた」
サハラ義勇軍は連合軍きっての精鋭として名高い存在になっていた。正規軍のそれとは比較にならない程の訓練を経て精鋭となっている。まさに連合軍の切り札である。その彼等に対して互角に渡り

合ったというのはやはり凄いことなのであった。だからこそ彼の名が知られたのである。

## 第二十三部第一章　風雲を前にしてその九

「それだけでもかなりのものだったが」
「ええ」
話はそれで終わらなかった。彼等はさらに話を続ける。
「その後だな。問題は」
「その後ですか」
「そうだ、その名声を利用して表に出てきている」
「それは確かに」
皆その言葉に気付く。
「かなりですね、それも」
「そうだな。上手く使っている」
シャイターンもそこをさらに指摘してきた。
「利用できるものならば利用するに越したことはない」
彼はそう言ってのけた。これは彼自身の考えでもある。
「だが彼はその中でもかなり上手くやっている」
「かなりですか」
「かなりだ」
それをそこにいる全ての者に述べる。
「演説も見事だ」
そこも指摘してきた。
「人の心を掴むのも上手い。資金もあったな」
「はい」
これにはウーアンザが答えた。
「何しろ名門の出ですので」
「スタンフォード家はイギリスではかなりの資産家だったな」
「はい、地球にあった頃からかなりの」
「それもある。ないものはない」
「後はスタッフだけですが」

ハルシークが言及してきた。
「それはどうなっているのでしょうか」
「おそらくは今集めているところだ」
シャイターンはそう返した。
「今な。だがそれはまだ水面下の状態だ」
「本格的には動いてはいないと」
「動くのもこれからだ」
徐々に読みを述べていく。その読みはやはり冷徹であるが鋭い。
「彼等が動くのはな」
「そうなりますか」
「では彼が動いてからのエウロパは」
「それが問題となる」
今それをはっきりと述べた。
「どう動くのかがな」
「ふうむ」
弟達も他の者達もそれを聞いてまたしても大きく嘆息した。そんな先の話であるがあえて考えを巡らすシャイターンの先見に唸らずにはいられなかったからだ。
「それではですね」
アブーが言ってきた。
「統一されてからも我々は戦乱から逃れられないのですか」
「それがアッラーの思し召しならばな」
シャイターンは答えた。
「そうなる」
「その場合ですが」
次に口を開いたのはハルシークであった。彼もまた今将来のことにその目を向けてきていた。
「エウロパならば撃退は可能かと」
「うむ」
シャイターンはその言葉に頷く。

「彼等ならばな。大丈夫だろう」
「はい」
「ただしだ」
しかしここで付け加えることも忘れてはいない。
「油断をしてはならない」
「油断ですか」
「それこそが最大の敵なのだ」
彼は今それをはっきりと述べる。
「それにより敗れ去った者は多い。それは肝に命じておくことだ」
「はい、それでは」
「うむ、それではな」
話が収まった。シャイターンはそれを見計らって言葉を出してきた。
「これで終わろう。今回は御苦労だった」
「はっ」
会議は終わった。シャイターンはそれを受けて宮殿の奥深くへと入っていく。そして自身の仕事へと取り掛かるのであった。彼もまた多くのやるべきことを持っていたのであった。

# 第二十三部第一章　風雲を前にしてその十

サハラでの動きはエウロパも見ていた。カミュはそれを見て様々なことに思いを巡らせていた。
ある宴の場でのことである。にこやかに着飾った貴夫人達と話していた彼のところに一人の若い男がそっとやって来た。そして彼に囁いてきた。
「どうした？」
「はい」
彼は静かだが何かいわくありげな様子でカミュに囁いてきた。
「ここでは」
「そうか」
カミュはこの言葉だけで事情を察した。そのうえで貴夫人達ににこやかな笑みを返して述べてきた。
「失礼、奥様方」
「どうされたのですか、一体」
「いえ、実は野暮用でしてね」
笑顔のままそう答える。
「暫し席を外して宜しいでしょうか」
「はあ」
「すぐ戻って来られますよね」
「ええ」
彼は夫人達の言葉に返す。あくまで優雅な様子を変えはしない。
「それではまた」
そして一旦宴の場から姿を消した。シャングリラの光の下から姿を消してそっと誰もいないバルコニーの隅に移った。そこで夜空を見ながら先程の若い男と向かい合った。
「ここでいいか」
「そうですね」

若い男はまだ周囲に警戒を払いながら彼に述べてきた。
「ここでしたら」
「それで話というのは」
カミュはその彼に声をかける。
「やはりあれか」
「そうです」
男はその言葉に応えた。
「サハラのことです」
「連合が動いているそうだな」
その緑色の目が夜の中で光ってきた。
「サハラでの権益を何とか維持しようと」
「とりわけ東方のですね」
「ハサンにおけるものをか」
「はい、連合中央政府及び各国とハサンの関係は深く長いものがありますから」
「そうだったな」
カミュはその言葉を聞いて静かに頷いた。その手にはグラスがある。中には赤ワインがたたえられている。ボトルもちゃんとボックスに入れられて持って来られている。氷でいい具合に冷やされたものだ。
「そうだ」
ここで彼はふと気付いた。
「飲むか。卿も」
「グラスは」
「ここにある」
そう言ってボックスの側に置かれていたグラスを手に取ってきた。それから彼にそれを差し出す。
「まあ飲みながら話をしよう」
「有り難うございます」
「宴の場だからな。ここは気楽にな」

「はあ」
「それでだ」
彼は男にグラスを差し出し彼がワインをそこに注ぎ込むのを見てからまた話をはじめた。
「連合はやはりあれか」
カミュは言う。
「その権益を守る為にあちこちを動き回っているのか」
「ええ、それもかなり活発に」
男もそれに応える。
「始終サハラ各国の省庁や要人の邸宅に連合の者達が出入りしております」
「ふむ」
カミュはそれを聞いてその目を少し動かしてきた。そのうえでまた話を聞く。
「そしてですね」
「何か妙な動きでも見られたか」
「それはないです」
男はそれを否定した。
「ただ」
「ただ？」
「やけに慎重な動きです」
そのかわりにこう述べてきた。彼の言葉遣いも妙に慎重なものになってきているのが面白いと言えば面白いものがある。

## 第二十三部第一章　風雲を前にしてその十一

「慎重か」
「はい、それぞれの政府に話をしているだけではありませんから」
彼は述べる。
「それぞれの地域の有力者にまで」
「それは今言ったな」
カミュはそれを聞いてこう返してきた。中央集権的な国家が多いサハラ各国であるがそれでも地方に独自の権力を持つ者は存在する。元々アラブは部族社会でありそうした血縁的な伝統が残っているのである。これはサハラ各地に見られる。南方はそうした存在が銘々で国家を築いていた程である。もっとも連合はそうした地方の勢力がさらに多く、複雑化しているのであるが。各国の中でも様々な勢力が存在している。これはサハラ以上であり連合という勢力の多様性と複雑さの一面でもあるのだ。
「はい、それを見ていると」
「権益を守るのに必死か」
「彼等にとってみればサハラでこれ以上の戦争が起こるのは望ましくないようです」
「権益が脅かされかねないからか」
「はい」
男はその言葉に頷く。
「それだけではないでしょうか」
「いいところに気付いたな」
カミュは男の今の言葉に笑みを返してきた。
「といいますと」
「これはもう時代の流れで止められないだろうがな」
カミュはそう前置きしたうえで述べはじめた。その言葉の持ってきようが何処か哲学者めいていた。それを見ると普段の傲慢とも見

える自信が消えて別の人間に見える程である。
「実は彼等にしてみてもサハラは別れている方がいい」
「それはどういった理由からでしょうか」
男は今度はカミュの話を聞く側になっていた。だがそれが妙に自然に見える。
「それがまずある」
カミュはまずはそれを認めた。
「連合は実益を何よりも重視する場所だからな」
「ええ」
「しかしだ」
彼の言葉はそれで終わりではなかった。
「もう一つ理由がある」
「それが問題なのですか」
「そう、その理由こそがな」
それをまだ言わずにそれでも強調してくる。妙な言葉遣いではあった。
「何だと思うか」
「サハラの強大化でしょうか」
男は少し考えてからこう述べてきた。一旦エウロパの立場を考えてからの言葉である。
「やはりここは」
「そうだ」
そしてカミュはそれを認めてきた。
「連合にとってもサハラが強くなっては困るのだ」
「やはり」
隣国が強くなること、とりわけ政治的、軍事的にそうなることを喜ぶ者はいない。経済的にならばそれと交易することにより多くの利益を得られる場合もある。文化的ならば恩恵も得られる。もっともどちらも油断すれば飲み込まれてしまう危険性があるのであるが。
「それは我々と同じだ」

「統一サハラの誕生」
「我々にとってはもう一つ脅威が誕生することになるがそれは連合も同じだ」
カミュはこう述べた。
「政治的、軍事的に強大な勢力が隣に誕生する」
「だからですか」
「そういうことになる」
カミュはまた述べた。
「二千億の勢力だ」
「連合は四兆でしたな、今は」
「うん」
カミュはまずは彼の言葉に頷いてみせた。
「その通りだ」
「二千億と四兆ではやはり力の差が歴然としているのでは」
彼はそう思いカミュに問うてきた。だがカミュの言葉はそれでもはっきりとしたものであった。
「数の上ではそうだ。しかしだ」
「何かあるのですか」
「この場合は連合にある」
彼は述べた。

## 第二十三部第一章　風雲を前にしてその十二

「連合にですか」
「そうだ。彼等にしてみればどうだ。二千億とはいえ統一された勢力が隣に誕生するのだ。その心境は穏やかではいられまい」
「どんな勢力であってもですか」
「そうだ。そこにあるだけで脅威となるのだ」
カミュは言う。彼はここでは数字ではなくプレッシャーを語っていた。
「そこにあるだけでな」
「そういうことでしたか」
「人は数字だけで生きるのではない」
またしても哲学的なニュアンスを持つ言葉であった。どういうわけか今のカミュは普段のシニカルな様子とは違い何処か哲学的なおもむきであった。
「むしろ心の方が重要だ」
「そしてその心がエウロパを警戒せずにはいられないと」
「そういうことになる。これでわかったか」
「はい」
彼もこれでよくわかった。
「そういうことでしたら」
「既に備えはじめている筈だ」
「備えですか」
「そうだ、連合とサハラの境があるな」
「ええ」
カミュは奇しくも八条と同じ部分に注目してきていた。かつて今までにないまでに毛嫌いした男と同じものを見ているということに彼はどう思っていたであろうか。しかしここでは彼はそれを顔に出すことはなかった。

「そこに備えを置く筈だ」
「要塞でしょうか」
彼は少し考えてからこう述べた。
「あの忌まわしいガンタースのような」
「さてな」
しかしカミュはそれにはあえてかどうかはわからないが懐疑的な様子を見せてきた。
「そこまではわからない」
「といいますと」
「私は軍事のことはあまり知らないのだがな」
カミュはまずはこう前置きした。そのうえでまた述べてきた。
「しかし様々な備え方があるというのはわかる」
「ではこの場合の連合の備えは」
「おそらく要塞ではない」
彼は男に対してそう述べた。
「防衛ラインだ」
「防衛ラインですか」
「そう、それも」
そしてさらに言葉を続ける。
「かつての万里の長城やマジノ線のようなものだ。言うならば敵の動きを食い止めるものだ」
「成程」
彼はそれを聞き納得したように応えてきた。
「ああした感じのものですか」
「おそらくはな。連合とサハラの間にあるのは回廊ではないのだ」
宇宙地政学の話になってきた。かつて人類が地球にあった頃地政学という学問があった。その国はどういった場所にあるかで戦略や運命を考えなければならないというものである。例えばイギリスは欧州の外にある島国であるから海軍を強大化させ交易国家になった。ドイツは欧州の大平原の真っ只中にある。西には大規模な炭田を持

っていた。その為に陸軍国家となり一大工業国家となったのである。エリザベス一世やビスマルクといった指導者達だけで全てが決まるのではないのである。こうした国の場所もまたその国家の大きな運命の要因となるのだ。

## 第二十三部第一章　風雲を前にしてその十三

ここでは連合とサハラである。両者は広い国境を持っている。そのことがまずあるのである。
「広い国境がある」
カミュはそれを言ってきているのだ。
「これをどうするかだ」
「それが連合の課題ですか」
「そうだ」
今それをはっきりと言った。
「備えだ、彼等に対しての」
「ふむ」
「我々にしても備えは用意しておかなければならないのだがな」
「それはそうですが」
「勿論連合にとってみれば我々のことはどうでもいい」
これが動かしようのない現実であった。どうあがいても変わりはしない。
「何があろうとな」
「仇敵だからというだけではなく」
「国家というのは基本的にエゴイストな存在だ」
ここでも哲学めいたことを口にしてきた。
「自分達がよければいいのだ。人間というエゴイズムを持つ存在によって作られているものなのだからな」
「はあ」
「備えはそうして用意されていくだろう」
カミュはあらためてそれを述べた。
「そしてだ」
さらに言葉を続ける。
「同じ理由で権益も守ろうとする」

「そうなりますか」
「そうなる。だから今彼等は動いているのだ」
「それは吉と出るでしょうか」
「連合としては吉としたい」
当然と言えば当然であった。だからこそ今必死に動き回っているのである。
「中央政府も各国もな」
「やはり」
「そしてだ」
さらに言葉を続ける。
「これはサハラも同じだ」
「サハラもですか」
「そうだ。サハラとしてもこれを吉としたいのだ」
「連合の権益を守りたいと」
これは少し不思議なニュアンスに聞こえた。サハラ各国が自国にある連合の権益を保護したいというのだ。これはどういった理由であるのか。それに考えを巡らせたのである。
「それは何故でしょうか」
「連合は巨大だ」
カミュはここでも既に誰もが知っていることを述べてきた。
「途方もなくな」
「ええ」
彼もそれに頷く。だが心の中で頷くまでもないと思ってはいた。
「相手にすれば押し潰される」
「それを避ける為ですか」
「そうだ。衝突の要因を作るよりは権益を確保した方がいい」
そうした判断から来るものであったのだ。今カミュはそれを言ってきていた。
「そういうことなのだ」
「自分達を守る為ですか」

「サハラにとっても連合は脅威なのだ」
「お互いにとってですか」
「むしろサハラの方が負担に感じているだろうがな」
これは少し考えればわかることであった。連合とサハラの力の差を見ればだ。答えはすぐに出るものであった。
「そうなる」
「サハラとしては連合とは上手くやっていきたいのでしょうか」
「今後共な」
カミュは答えた。
「そして連合もまた。それは変わらない」
「そのうえでの備えであると」
「備えあればという言葉があるな」
「はい」
彼はカミュの言葉に応えた。
「そういうことなのだ」
「そうなりますか」
「そうだ、サハラはまだ備える余裕がないがな」
「いずれは、ですか」
「それは我々も同じなのだがな」
カミュは少し苦い顔を見せてきた。
「今は難しいな」
「残念ですが」
男もこれはわかっていた。だから彼も苦い顔になっていた。

## 第二十三部第一章　風雲を前にしてその十四

「今は」
「エウロパもな」
カミュは少し遠くを見た。そこには夜空がある。
空には無数の星が瞬いている。赤い光の星もあれば青い光の星もある。その瞬きは無限であるが人の世はそうはいかない。それが理不尽と言えば理不尽になるのであろうか。
「今はな」
「堪え時ですね」
「そうだな」
それは認めるしかなかった。如何にカミュといえど。だから彼は頷いた。
「今はな」
「それが過ぎたならば」
「また動くべきだ」
彼はそう言った。
「すぐにでもな」
「できるでしょうか」
「できるのではない」
カミュのその言葉が鋭いものになった。そのうえでまた言う。
「するのだ」
「する、ですか」
「人は待っているのでは駄目なのだ」
彼はこうも言う。言葉がさらに鋭いものとなってきていた。
「しなければならないのだ」
「何があってもですか」
「万難を排してという言葉があるな」
「ええ」

比較的そうした類の言葉は使われる。だがカミュはその言葉を陳腐な意味で使う男ではなかった。それは彼の誇りが許さないのだ。
「万難は排するものではない」
「ではどうされるべきなのでしょうか」
「乗り越えるものだ」
彼にとってはこうなのである。
「何があってもな。今のエウロパもまたそうだ」
「それを乗り越えるには力が必要だと思われますが」
「力はある」
迷うことも躊躇うこともなく言ってみせた。
「我々は何だ」
(我々ですか」
「そうだ、我々は何だ」
カミュは彼に対してその鋭い声で問うてきた。
「何か言ってみるのだ」
「エウロパでございます」
彼はそれに応えてこう言ってきた。
「そうだ、エウロパだ」
言葉は正解であった。カミュは今それをはっきりと述べてきた。
「エウロパはかつて世界を指導してきた」
「はい」
十九世紀から二十一世紀前半のことである。これは彼等にとっては輝かしい歴史であるが連合やサハラの者、とりわけ連合の者にとっては忌々しい歴史である。彼等はこの時の歴史とエウロパ貴族の傲慢を学ぶことによってエウロパを敵とみなしているのである。
「その誇り高きエウロパだ」
「だからこそですか」
「そうだ、必ずや乗り越える」
今それをはっきりと宣言してきた。
「わかったな」

「それでですね」
男はまた尋ねてきた。
「うむ」
カミュはここでグラスの中のワインを飲み干した。それからまたワインを注ぐ。こうした場なので自分で注ぎ込んでいるがそれが意外と絵になっていた。
「連合に復讐を挑むのでしょうか」
「無理だな」
彼はそれは否定した。

## 第二十三部第一章　風雲を前にしてその十五

「別の方法を考えるべきだ」
「別の方法ですか」
「連合の力はわかった筈だ」
彼は今それを言ってきた。
「その力は我々を圧倒している」
「ええ」
男の顔が苦いものになる。それを嫌な程思い知らされたのが先の戦争であったからだ。
「おそらくはサハラでの権益も確保することになるだろう」
「やはりそうなりますか」
「きっとな。あの戦争で連合が傷を受けることはない」
「このまま彼等はさらに巨大化していくということですか」
「そうなっていくな」
連合のこれからにも思いを馳せていた。憎い敵であるがその未来を見据えるのもまた政治家として重要なことであるからだ。
彼はそれをわかっていた。
「だが我々はだ」
「エウロパであると」
「かつての召使に膝を屈することができるか？卿は」
そう男に問うてきた。
「どうだ、それは」
「閣下」
男はその言葉を聞いて目を光らせてきた。夜空の中にその目が輝きグラスを握る指が白くなっていた。それこそが彼の言葉であったが彼はそれを言葉でも出してきた。
「私もまたエウロパの者です」
「うむ」

カミュはそれに応える。男はさらに述べてきた。
「そして貴族であります」
「そうか。では」
「はい。屈するつもりはありません」
今それをはっきりと述べてきた。
「そうする位なら喜んで死を選びましょう」
「死か」
「誇りある死を」
「そうだな」
カミュもその言葉にある程度は賛同の様子を見せてきた。しかしそれは全面的なものではなかった。
「それは確かにいい」
「ええ」
「しかしだ」
だが彼は完全に賛成していたわけではない。今自分でもそれをはっきりと述べてきた。
「死ぬばかりが道ではない」
「といいますと」
「生き延びるのもまた道だ」
彼は今それをあえて口に出してきた。言いながらまたその緑の目が複雑に輝く。哲学的な光と言おうか。それを今放ってきていた。
「わかるか」
「そうなのでしょうか」
しかし彼はその言葉にはいささか懐疑的であった。どうにも首を傾げている。
「恥を受けて生きるよりは潔く死を選んだ方がいいのでは」
「それで話が済むのならばな」
カミュは冷徹なまでに落ち着いた声でそう述べた。
「しかしそれで事が成らない場合は」
「生きるべきだと」

「そうだ」
彼はそれを言う。
「今もだ。それはわかるな」
「今もですか」
「今はエウロパにとっては恥を受けている時fだ」
「はい」
男もその言葉には頷くしかなかった。実際に今は敗戦の後で耐え忍んでいる時だからだ、その言葉もまた骨身に滲みてわかるのがまた辛かった。
「それに耐えて」
「次の栄光にですか」
「また連合を屈服させてやるのだ」
カミュは言った。ワインを一口飲んだ後で。
「いいな」
「かなり長い道のりになりそうですね」
「そうかも知れない」
まずはこう返した。
「力の差がここまで歴然としている以上な」
「ですね」
「しかしこの世には不可能という言葉もまたないのだ」
かつてナポレオンが言った言葉と同じである。ナポレオンは自身の辞書に不可能という言葉はないと断言した。カミュは今自国の英雄に合わせて言っているのであろうか。
「方法はある」
「まずはどうされるべきでしょうか」
「今エウロパは傷を受けそれを癒している」
「ええ」
これは変わりはしない。何を言っても深い傷を負っているのは明らかだからだ。
「それを完全に癒し」

「それには薬が必要ではないかと」
「薬ならばある」
カミュは今それを述べた。
「それは一体」
「私だ」
彼は今それを自分自身だと断言してきた。
「エウロパを救うのは私なのだ」
「閣下が」
「そうだ」
そしてまた断言する。
「私以外にない」
「それでは」
男はそれに問う。
「そうだ、次の総統は私だ」
今それを述べてきた。これは彼のはじめての総統の座への意欲の告白であった。

## 第二十三部第一章　風雲を前にしてその十六

「わかったな」
「総統にですか」
「いずれラフネール閣下にはお話する」
「ううむ」
「私では不適格か？」
「いえ」
その問いにはそうではないと返した。
「宜しいでしょう。ただ」
「何かあるか」
「このところイギリスのギルフォード侯爵が候補にあがっていますが」
「ザリガニの国の侯爵殿か」
カミュは彼の名を聞いてまずは笑ってみせた。イギリスやイギリス人をザリガニと呼ぶのはフランス人のスラングである。これは十八世紀末からであるがこの時のイギリス軍の軍服が赤かったせいである。なおフランスやフランス人はカエルと呼ばれていた。これはフランス軍の軍服が青かったせいである。何かにつけていがみ合い続けてきたし今もそうである両国であるが水生生物においてもそれは変わりはしない。
「一つ言っておく」
「ええ」
男はそれに応えた。
「フランス人は欧州の盟主だった」
これがフランス人の昔からの謳い文句である。実際には神聖ローマ帝国やオーストリア、ドイツといったハプスブルク家やゲルマン民族の勢力と常にその座を争い、同時にそのイギリスと戦ってきており盟主とは自称であったがそんなことをいちいち意に介するフラ

ンス人ではない。
「本当にこんなに性格が悪かったのか」
先の戦争でフランスに来た連合軍のある兵士の言葉である。彼等はイギリスやフランスにも入り込んだのだがそこでイギリス人やフランス人を見て大いに驚いたのである。とりわけフランス人を見て彼等は驚きを隠せなかったという。
「高慢で女好きでシニカルで底意地が悪い」
「ここまで性格の悪い国は連合にもない」
「米中露より傲慢な奴等をはじめて見た」
兵士達はかなり凄い評価を下した。連合の者から見てもフランスはそう見えた。なおエウロパにおいては相当な嫌われ者である。だからといってそれを気にかけるわけでもないからかえって尊敬に値する。こうしたフランス人の性格はこの時代でも同じであるのだ。
「ラフネール閣下もそうであるし私もまた」
「フランス人はエウロパを指導するべきということですね」
「卿もフランス人ならわかるだろう」
「はい」
何とこの男もフランス人であるようだ。カミュの言葉に応えてきた。
「フランスこそがエウロパを導くべきなのです」
「ヴァロアの時代からな」
なおヴァロア朝の時代のフランスは欧州の田舎であり文化の中心地はイタリア半島であった。そしてブルゴーニュ争奪以来ハプスブルク家との激しい対立にあった。フランスは無敵というわけではなく常にイングランド、神聖ローマ帝国という二つの敵を抱えて生きてきたのである。その結果として外交手腕はかなりのものになった。フランスの外交は伝統的に欧州の中でもかなりのものである。外交においては西のイギリス、東のオーストリアとも言っていいがフランスのそれも彼等に比肩し得るものであった。ナポレオン時代にはタレーランというこれまた人間的には煮ても焼いても食えない部下

にも友人にも同僚にも上司にも絶対に欲しくないような人物がいたが彼は外交官としては天才的であった。そうじょそこいらにある性格の悪さではなかったが彼はその彼と同じ位関わりたくない人物であるフーシェと共にナポレオンの後のフランスを救っている。こうした人物が出たのもフランス外交の蓄積があればこそであった。

「ザリガニ侯爵殿にはここは退いてもらおう」

「勝てるのですね」

「私は敗れるつもりはない」

簡潔に述べた。

「それだけだ」

「それでは」

「うむ」

そのうえで頷く。

「まずは資金だな」

「わかりました」

政治はまず資金である。これがなくては話にならない。よいか悪いかは別にして民主政治ならば尚更そうである。それが為に連合では不正資金の話が絶えないがエウロパではそうした話はあまりない。少なくとも貴族達にはそれだけの資産があるからだ。これはカミュも同じである。

「カミュ家の資産はそれでも余りあるが」

「ええ」

「ギルフォード家も資産ではかなりのものらしいな」

「そのようで」

男はそれに答えた。

「何しろ地球にあった頃からかなりの勢力を維持していたそうなので」

「海賊でか」

これまたフランス人がイギリス人を馬鹿にする時の言葉である。

「それともアイルランド人を搾取してか。もっとも連合の者達なら

ばどうでもよいが」
「そこまではわかりませんがかなりの資産を持っているのは事実です」
「その資産で勝負に出るというのだな」
「おそらくは」
彼は述べる。
「既にかなりの資産を出そうとしているそうです」
「面白い」
カミュはそれを聞いて笑みを浮かべてきた。そのうえでまた言った。
「では今回の選挙はザリガニ達の無駄な努力になる」
「無駄なですか」
「敗れるのだからな。そうでしかあるまい」
実に嫌味に満ちた言葉であった。こういうことがフランスらしいと言われるのである。
「我々にとっては輝かしい勝利だ。そしてエウロパにとっては」
「復活のはじまりですか」
「いや、違う」
その言葉には首を横に振ってみせた。
「黄金時代のはじまりだ」
「黄金時代のですか」
「復活は一時のことでしかない」
自信に満ちた声で語る。
「それからすぐに黄金時代が幕を開けるのだ」
「フランスの手により」
「そうだ」
フランスの手により、それこそがフランス人の心の琴線に触れる最高の言葉であった。

## 第二十三部第一章　風雲を前にしてその十七

しかしカミュはそれだけで満足する男ではなかった。さらに述べる。
「そして私の手により」
「閣下」
男はそれを聞いて彼に声をかけてきた。
「是非このエウロパを」
「わかった」
グラスを手に自信に満ちた声で笑みを浮かべてきた。
「任せておけ。何もかもな」
「はい」
「エウロパは正当な地位を取り戻す」
彼は言う。
「私の手によりな」
「連合とサハラを屈服させ」
「まずはサハラだな」
自身の戦略も述べた。
「まずは、だ」
「左様ですか」
「それから連合だ。見ているがいい」
グラスを持つその指が白くなる。力を入れている証拠であった。
「私の前に、エウロパの前にまた膝を屈する己の姿を。とくとな」
彼は連合の者を認めてはいなかった。先の戦争の後での一連の交渉でも彼等に対する悪感情を隠すことはなかった。それは今でも変わりはしない。
「閣下」
男はまたその彼に声をかける。
「そろそも戻られますか」

「むっ」
彼の言葉にふと我に返る。
「御夫人方が待っておられますので」
「そうだったな」
女性を愛する彼にとっては従わなくてはならない言葉であった。
笑みが優雅なものとなった。
「では戻るとするか。彼女達の下へ」
「それが宜しいかと」
「しかしだ」
彼は言う。
「美女もまたエウロパの美女に限るな」
「他の女性はどうでしょうか」
「論ずるに値しない」
一言でばっさりと切り捨てた。
「特に連合のそれはな。何の価値もない」
「そうですか」
「あの様な者達を側に置いて何が楽しいのか。マウリアの女もサハラの女もだ」
「女性はやはりエウロパですか」
「それもフランスの美女なら最高だ」
今それを断言してきた。
「それが第一で」
「次は」
「イタリアだな」
イタリアは昔から美女の多い国で有名だ。なお彼女達は世界一、今では銀河一と言われる女好きと言われるイタリア男のパートナーになることが多い。
「彼女達ですか」
「イタリアの女性もいいものだ」
エウロパきってのプレイボーイならではの言葉であった。彼もま

た女性に関しては造詣の深い男である。フランス男のライバルはイタリア男である。
「イタリア男に独占させておくのは勿体ない」
それを彼も言う。これはかなり自分勝手な言葉ではあるが。
「左様ですか」
「私はそう考えるな」
「成程。それではですね」
男はさらに問うてきた。
「次は」
「ポーランドだろう」
ここもまた昔から美人の多い国である。金髪碧眼で白く透き通った肌を持つ小柄な女性達が多い。スラブ系独特の美人で知られている。ノーベル化学賞を二度も受賞したキュリー夫人は美人でもあったが彼女もまたポーランド出身である。なお彼女は愛国者でもありポーランドの独立を心から喜んでいた。

## 第二十三部第一章　風雲を前にしてその十八

「私は赤ワインも白ワインも愛する」
ここであえてワインを出したのは根拠がある。フランスきっての美男子と言われ同時に稀代の漁色家であったルイ十五世が家臣に同時に二人の女性を愛せるものかどうか尋ねられた時に答えた言葉なのである。この時彼は落ち着いてこう答えたと言われている。
「当然ではないか」
と。そのうえで続けてこう述べてきた。
「我々は赤ワインも白ワインも同時に愛しているではないか」
そういうことである。カミュは今その言葉を出してきたのだ。
「それと同じだ」
カミュも同じ考えであった。それを今出してきたのだ。
「違うか？」
「いえ」
男はそれには反対しなかった。むしろ同感であると言ってよかった。彼もまたフランスの男であるからだ。その言葉も知っていたし共感もしていた。
「その通りです」
ニヤリと笑って答えたのが何よりの証であった。
「後はどうなのでしょう」
「後は人それぞれだな」
カミュはそう返した。
「どの国にも美人がいればそうでない女性もいる」
「はあ」
「それにだ」
彼はまた述べた。
「人の好みもあるしな」
「そういうことですね」

これもまた事実である。女性の好みが非常に五月蝿い男もいれば全くの正反対で女なら誰でもいいという男もいる。カミュは前者だが後者の考えもわかるのである。
「ただ、連合やサハラの女は好みではない」
彼の好みはあくまでエウロパの白い女達であったのだ。
「やけに背が高く、そしてモザイクの様に肌と髪と目の色が混ざっているのはな」
「それが連合なのですが」
「だからだ」
彼は言葉に強い拒否感を見せてきた。
「私は連合を好きにはなれない」
「女性でもですか」
「そう、女性でもだ」
それを認める。そのうえでまた言う。
「好きにはなれないな」
「あの性格も」
「実に気に食わない」
結局連合の全てが気に入らないのだ。嫌いなものは全否定するタイプであるのだ。
「今に見ているがいい」
彼は言った。
「次に勝つのは我々だ」
「その為には」
「力と技術を蓄える。そして」
「そして？」
「進出だ」
言葉がはっきりとして強いものをさらに含んできた。ここに彼の考えの根幹があった。
「サハラに。そして」
「何処に」

「宇宙の果てにだ」
そう言いながら上を見上げた。そこには無限の星達が瞬いている。カミュは今その星達を見上げたのであった。
「宇宙の果てに」
「そうだ、あの何十万光年もある暗黒宙域を越えて」
彼は言う。
「その先にある無限の星達を我々のものとするのだ」
「それは流石に」
男はそれを聞いて懐疑的な様子を見せてきた。
「無理ではないでしょうか」
「今さっき言ったな」
だが彼は男に対してこう言い返してきた。
「私に不可能はないと」
「ですが」
「同じなのだ」
彼はまた言った。
「同じとは？」
「かつてとな。かつて我々の祖先は遥かな大海原を乗り越えた」
バイキングや大航海時代である。とりわけ大航海時代により欧州の雄飛がはじまった。もっともこれは今の連合各国にとっては忌々しい苦難のはじまりであり実際に教科書ではそれをエウロパの者達の祖先の野蛮な侵略と虐殺、収奪だとしている。これは確かにそうである。同時に自分達が先の戦争でエウロパの文化や産業、資源に一切手をつけず一般市民に対して紳士であったのを立派だとしている。実際は連合軍にかかる悪名やそれによりエウロパ軍がさらに敵意を燃やし戦争を長期化させることや被害を蒙った民衆のパルチザン化を恐れた中央政府、とりわけ八条の政策によるものであったのだがそういう宣伝も為されたのである。実際に連合軍は完璧なまでに規律の行き届いた軍隊とされその評判はかなりよいものになったのである。

「そしてまただ」
カミュは述べる。

## 第二十三部第一章　風雲を前にしてその十九

「大海原を乗り越えるのだ」
「そして力を手に入れると」
「その通りだ」
彼はその言葉に応える。
「それでわかったな」
「賭けになりますな」
「賭けとは？」
「いえ、かなりの大事業になりますしそれに」
男はカミュに対して自身の考えを述べてきた。
「その先には何があるのかもまだわかってはいませんし」
「確かにな」
カミュも賭けであるというのは認めたようであった。それに応える。
「リスクはかなり大きい」
「はい」
「何があるかわからない。それにそこに辿り着くまでも大変だ」
「それでもやるというのですね」
「まず動かなければならない」
彼はそれを言う。
「それに事前に調査彗星を出す。それをもとに動く」
「成程」
「連合と同じようにな。それだとリスクは減る」
「そうですね」
その通りだった。それには頷けた。
「そうして進めていくつもりだ」
「どちらにしろ進出しかありませんか」
「今のエウロパではな」

カミュはそれに対しても述べてきた。
「限界だろうな」
「やはりそうですか」
「だからだ。進出するしかないのだ。そうした意味でサハラへの進出は必然だったが」
この場合そこにいるサハラの者達のことは考えてはいない。考えるつもりもなかった。進出とは時としてそうなってしまう。侵略にもなり得るものなのである。侵略の是非は置いてだ。
「それが失敗したしな」
「そちらもまた考慮すべきではないでしょうか」
男は言ってきた。
「再び」
「ふむ」
カミュはその言葉に目を光らせた。
「再びか」
「はい。それもいいかと思うのですが」
「それは今さっき私も言ったな」
「そうです。ですが今回は」
彼は述べる。
「また違う方法で」
「武力を使わずにか？」
「いえ」
それは否定した。やはり武力は必要なのだという。
「無論それは使います」
「以前は外交や謀略も使っていた」
カミュもそれに携わってきた。エウロパのサハラ侵攻は彼等の対立や抗争を利用した実に狡猾なものであった。その為サハラは侵食されていたのである。
「今回は何を使うのか」
「連合を使ってはどうでしょうか」

「連合を！？」
「ええ」
ここで男は不敵に笑ってこう言ってきた。
「中国の言葉ですが」
「何だ？」
「夷を以って夷を制すです」
彼は言う。
「そういうことです」
「ふむ」
カミュにもその言葉の意味はわかった。それだからこそ応えることができた。
「連合をか」
「当然それには火種が必要ですが」
「作るのは困難だな」
それは最初に打ち消した。とても無理だと判断するしかなかった。
「今の連合、サハラにも工作員を送り込めない状況では」
サハラ総督府を失いバチカンも連合への移転が決定している。結果としてエウロパの情報収集能力、工作能力はかなり落ちているのである。それは外相であるカミュが最もよくわかっていた。
「ですか」
「しかしアイディアとしてはいいな」
カミュはそれは認めた。
「機会があればか」
「はい。それでは」
「狙っていくべきだな。それでは」
「どうされますか？」
「それも頭の中に入れておこう」
彼は決して清廉潔白な人物ではない。むしろあらゆる手段を用いて目的を果たすタイプである。だからこそ今回も同じことをするのであった。

## 第二十三部第一章　風雲を前にしてその二十

「いいな」
「どうぞそのように」
男もそれに応える。
「是非共」
「うむ。それでだ」
カミュは問いを変えてきた。
「ここで一つ尋ねたいことがある」
「何でしょうか」
男はその言葉に目を向けてきた。
「卿の名を聞きたい」
カミュはそう男に尋ねてきた。実はまだ名前を聞いていなかったのだ。
「何というか」
「ミラボーです」
彼はそう名乗って答えた。
「ラサール＝ド＝ミラボーといいます。お見知り置きを」
「ミラボーか」
カミュはその名前を自分でも口にした。
「左様です」
「わかった、今覚えた」
彼はそのうえで答えた。
「伯爵であります」
「うむ。ではミラボー伯爵」
「何でしょうか」
今度はお互い爵位を持つ貴族としての応対になった。こういうところがエウロパという場所はかなり五月蝿いのである。これも貴族社会故であった。

「今後も宜しく頼むぞ」
「わかりました、侯爵」
「うん。しかしだ」
「はい、今度は何を」
彼等は笑みを浮かべ合って話を続ける。妙なまでに上機嫌になっていた。
「どうやら今回は英仏の対決となるな」
「スタンフォード侯爵ですか」
「そうだ。さて、相手に不足はない」
彼はこう述べてまた笑う。
「イギリスならばな。尚更」
「ジョンブルもあれで中々骨がありますからな」
「全くだ」
ジョンブルというのはイギリス貴族に対する蔑称である。一応は蔑称であるが常に言われているので愛称に近いものになっている。フランス人は確かにイギリス人は嫌いだが結構認めているところは認めているのである。これは長い間の関係が彼等をそうさせている。永遠のライバルであるからこそお互いを知り認め合っているのだ。簡単に言うならば強敵と書いて『とも』と読むようなものである。これは日本にある古典的名作漫画から来ているものである。この漫画が連合、とりわけ日本に与えている影響はかなりのものである。
「だからこそ相手のしがいがある」
「しかし勝つのは」
「我々に決まっている」
この言葉には実は根拠はない。見事なまでにない。フランス人得意の虚勢であるが何故か彼等はこうしたことに関しても絵になる。不思議と言えば不思議である。
「彼等には今回は悔し涙を流してもらおう」
「それはよいことです」
フランス人は自分達が最も偉大で賢明だと確信している。なおそ

れでかつて地球にいた頃は非常に多くの人間の反感を買っていたがそれを気にするようなフランス人でもなかった。彼等は千年以上その性格を変えていないのである。連合で言うならば米中露といった面々と同じである。もっとも彼等程横柄でもないが。その分嫌味で実に慇懃無礼である。どちらにしても人気はない。

「では総統になられて」

「エウロパを蘇らせる」

その為には手段は選ばないつもりであった。だが今はそれを最後に隠すことにした。

「では伯爵」

「はい」

「戻るとするか」

こう彼に声をかけた。

「御夫人方のところにな」

「おっと、そうでしたな」

「フランスの男でやってはならないことは幾つかある」

カミュは得意げな顔でこう述べてきた。

# 第二十三部第一章　風雲を前にしてその二十一

「一つはイギリス人に敗れること」
「ええ」
実際には何度もある。実際にはフランスの戦争での勝率はいいとは言えない。よくスポーツの弱小球団と比較されて連合では馬鹿にされている。口だけだというのだ。イギリスに対しても同じだ。実は案外以上に負けているのがフランスという国なのである。
「一つはまずい料理を口にすること」
かつてはどうしようもない程のものを口にしていた。それが変わるのはイタリアの富豪メディチ家から王妃を迎えてからだ。それまでは素材を潰すような劣悪な料理を食べているに過ぎなかった。
「そして一つはレディーを粗末にすることだ」
これだけは嫌になるまで守る。フランス人は三番目には五月蝿い。これにかけては銀河一とまで言われる程である。他の二つよりも遥かにだ。
「それでは行くか」
「はい、結論は出ていますし」
「その辺りがジョンブルはわかっていない」
ここでまたイギリス人に対する皮肉を述べてきた。
「ペットにばかり目がいってな」
「いえ、侯爵」
ミラボーがこの言葉には笑って突っ込みを入れてきた。
「王室は違いますが」
「そうだったな」
カミュはその言葉を聞いてまたしても笑みを浮かべた。シニカルな笑みである。
「あの王室は常に一人お盛んな方がおられるからな」
「そういうことです」

イギリス王家はどういうわけかわからないが昔から女性問題を多く作り出す人物が一人は常にいる。テューダー朝のヘンリー八世もそうであったしそれはハノーヴァー朝、後のウインザー朝でもそうであった。今の王朝でもそれは変わりはしない。思えば奇妙な話である。それが王でもいたりする。もっともかつてのヴァロア家やブルボン家の国王達の絶倫ぶりに比べればイギリス王家のそれは些細なものであるが。ブルボン家では女性関係に清潔であった王は大人しい性格のルイ十六世だけである。今連合のケベック王であるその末裔のルイ八十世もどうして先祖がそこまで好色だったのか理解に悩んでいる程である。

「そういうわけもないな」

「そういうことかと」

「ではそれは訂正しよう」

といってもまだシニカルなものは残っている。

「彼等は時々女性のことも思い出すと」

「やはり我々程ではありませんな」

「所詮はな」

またイギリス人を馬鹿にしてきた。はっきり言えばこの関係はエウロパの他の国からはどっちもどっちだと思われている。連合では馬鹿貴族同士の下らない喧嘩だと茶化されている程だ。それを気にする彼等ではないが。

「では我々は優雅に」

「うむ、行くとしよう」

カミュは述べる。そして会場へ戻ろうとする。その時にまたミラボーに声をかけた。

「また何かあったら教えてくれ」

「わかりました」

そう話し合ってその場を後にする。彼等もまた水面下で動きだしていた。

# 第二十三部第二章　権益その一

権益

連合中央政府及び各国はサハラでの戦乱を前に今その権益を確保する為に動いていた。彼等の権益はもっぱら東方のハサンに集中していた為にこれまでは戦禍を被ることはなかったが事情が変わってきたからである。彼等はサハラ各国だけではなく地方の有力者達にもしきりに声をかけていた。

ハサン南方のチグリス星系。ここは鉱産資源が豊富なことで知られているが地元の企業の存在がかなり大きい。そこにも今連合のアッカド王国の者達が来ていた。

「ええ、勿論いいですぞ」

その企業の一つサリマン社の代表取締役であるムアフ＝フセインはアッカド王国の外交官達の言葉に満面の笑みを浮かべて応えていた。口髭を生やした初老の男である。中々端整な顔をしている。

「こちらとしてもこれからも貴国との仕事は進めていきたいですので」

「そうですか、それは有り難い」

アッカドの者達は彼の言葉を聞いて笑みを浮かべてきた。フセインはさらに彼等に対して言ってきた。

「これからもこれまで通りのお付き合いで宜しいでしょうか」

「いえ、それは」

「それもかえって困ります」

アッカドの者達はそうフセインに返してきた。彼等は笑みを浮かべているがその目の光は結構鋭いものがあった。

「といいますと」

フセインも彼等の目の光には気付いていた。だがその気付いているのを隠しながら彼等に問うてきた。

「実は我々は貴社の営業方針にこの上ない好意を抱いておりまして」

「貴方も高く評価しているのです」
あからさまなおだてである。だが相手をおだてて利益が得られるならば安いものだ。媚とは違いこうした社交辞令もまたビジネスには必要なのである。
「ほう」
フセインはそれを聞いて目を笑わせてきた。しかしこれは芝居である。彼はあくまでアッカドの者達の真意を探ることに集中させていた。
「だからですね」
「ここはより親密な交流をしたいのですが」
「といいますと」
フセインはその話を聞いたうえで述べてきた。言葉を慎重に選びながら。
「これまで以上にビジネスを進めていきたいということですな」
「そうです」
「宜しいでしょうか」
「ふむ」
フセインはその話を聞いてまた目を細める。これもまた芝居である。
「左様ですか。実はですね」
「はい」
「何か」
アッカドの者達も彼の言葉に注視する。丁々発止のやり取りになっていたが表ではそれは見えはしない。
「我々としてもそのつもりだったのですよ」
フセインはにこやかに笑ってこう言った。アッカドの者達にまずは笑みでジャブを仕掛けてきたのだ。
「我がサリマン社としても貴国の誠意には感じ入っていまして」
「そうだったのですか」
「はい。より深い交流を考えていたところです」

これでお世辞である。無論その奥底では別のことを考えているのであるが当然ながらそれはお互い見せはせずに話を進めていく。
「願ってもない申し出です」
「そう言って頂けると何よりです」
「こちらも助かります」
アッカドの者達も笑みを作る。それでもスーツは鎧兜になっていて言葉は弓となっていた。彼等のビジネスは戦場にもなっていたのであった。
「それでですね」
フセインは剣を抜いてきた。だがやはりそれは見えはしない。
「ここで一つ取り引きといきたいのですが」
「何でしょうか」
アッカドの者達はにこやかにそれに応える。顔はにこやかだが考えていることは中々剣呑であったりする。それでも実際に剣を抜いたりはしないが。
「我々としてはそちらに優先的に採掘権を提供します」
「ええ」
「有り難うございます」
「それでですね」
フセインは本題に入ってきた。
「こちらとしては貴国に教えて頂きたいことがあるのです」
「何でしょうか」
やはりこうなってきた。ビジネスである。どちらかに一方的に有利な話というのはなかった。アッカド側もそれはわかっていたからこそ話をしているのだ。
「そちらの採掘技術を学ばせて頂きたいのです」
「それですか」
「はい、宜しいでしょうか」
フセインは表面上はにこやかに尋ねてきた。
「どうでしょうか」

「そうですね」
アッカド側の一人がそれを聞いて目を動かしてきた。それは明らかに考える目であった。
「採掘技術ならば現場で一緒にですね」
「はい」
フセインもそれに頷く。

## 第二十三部第二章　権益その二

「我が社のスタッフを同行させて頂けるでしょうか」
「ええ、それでしたら」
彼はそれを快諾してきた。
「いいと思います」
「各社とも話の調整もありますがまずは基本として」
「ええ、宜しくお願いします」
ここで重要なのはまだ彼等は具体的な話をしているだけである。細かい重要な部分にはまだ一切触れてきてはいないのである。お互いそれがわかったうえでの話である。
「それではそういうことで」
フセインが言ってきた。
「宜しくお願いします」
「ええ」
「こちらこそ」
アッカド側もそれに返す。こうして話は一旦は友好的なまま終わったのであった。
アッカド側が帰ってから暫く経ちフセインは自身の執務室にスタッフを集めた。そして先程の会談のことを話したのであった。
「ということだ」
「ふむ」
「左様ですか」
スタッフ達はそれを聞いてまずは考える顔を見せてきた。そのうえで答える。
「よいのではないですか」
「そうですな、まだ具体的にですが」
「普通の状況ならばな」
フセインはスタッフ達にそう述べてきた。

「今でなければだ」
「ですね」
「向こうもそれを見越してのことですか」
「そういうことだ」
彼は述べた。
「つまり戦争において実際に自分達の権益を保障するのかどうか見極めるつもりなのだ、彼等は」
「成程」
「上手いことを考えますな」
スタッフ達はそれを聞いて述べる。そう言われると実にわかりやすい。
「そういうことですか」
「ですが社長」
スタッフの一人がフセインに問うてきた。フセインもそれに顔を向ける。
「何だ？」
「その権益に関しては既にアッカドはハサン政府やオムダーマンにも話しているのでは？」
「それは充分考えられますが」
「考えられるのではなくおそらくはそうだろう」
フセインは彼等に対して述べた。
「間違いなくな。そうしている」
「ですか」
「それではやはり」
「うむ」
フセインはここで応えてきた。そのうえでまた述べる。
「全てに手を回している」
「それはまた慎重ですな」
「どう転んでも損はしないようにしているということだ」
彼はまた言う。確かにその通りであった。

「そういうことだ」
「それでは社長」
スタッフの一人がまた彼に声をかけてきた。
「我々も今回は」
「話をこれ位で納めるべきだな」
フセインもそう判断していた。そうした意味で彼等の分析も判断も一致していたのであった。
「頃合だということだ」
「そういうことですな」
「ではそのように」
「しかしだ」
だがフセインはまた付け加えてきた。その目に鋭い光が宿る。
「何か」
「戦争が終わってからは話は別だな」
彼は鋭い目のままそう述べる。声もまた同じであった。
「どうなるかだ」
「ですな」
「しかし我々もまた」
スタッフ達はフセインに対して言葉を出す。スタッフとしての役割を果たす為だ。
「見極めが重要になります」
「うむ」
フセインもまたその言葉に頷いた。彼もわかっていたのだ。
「どの国が生き残るのか」
「それが問題です」
「私の予想だがな」
フセインは彼等の言葉を受けて言ってきた。目は完全に真剣なものとなっていた。まんじりとすらしない。その目が実に印象的であった。
「ハサンではない」

「ハサンは生き残れないですか」
「うむ」
彼はスタッフ達に対して答えた。やはり真剣な声で。
「無理だな。まずオムダーマンとティムール双方を相手にすることになる」
「まずはそれですか」
「それだ。私は戦争のことはよくは知らないが」
経営者としての言葉になっていた。そのうえでの言葉であるからいささか至らない部分はあるがそれでも彼なりに言うのであった。
「経営においても一度に二つの大事業をやるのは辛い」
「確かに」
「そうでありますな」
こう言われるとわかりやすかった。ビジネスをやるうえで重要な問題の一つとしてそれが果たせるかどうかというものもあるのだ。それができない場合や無理な場合にやると取り返しのつかないことになってしまうのだ。今フセインはこのことを踏まえて話をしているのである。
「そう考えるとだ」
フセインはさらに述べる。
「ハサンもオムダーマンだけ、ティムールだけなら何とかなるだろう」
「いえ、それもどうでしょう」
「どうした？」
またスタッフの一人が言ってきた。

## 第二十三部第二章　権益その三

「オムダーマンとティムールですよね」
「そうだが」
「そうそう容易に対処できる相手ではないかと」
彼は言う。
「人材の面でか」
「はい」
フセインもそれはわかっていた。そのスタッフもそれに応えてきた。
「オムダーマンにはアッディーン副大統領がいて」
「ティムールにはシャイターン主席がいるというのだな」
「そうです、二人は紛れもなく一代の名将です」
これはサハラだけの評価ではなかった。連合やエウロパでも同じである。彼等もまたそうした意味で二人に対して注目しているのである。
「その彼等に対することができる人物は」
「ハサンにはいないか」
「そう考えます」
そのスタッフは述べた。言葉は短いがそれでも確かなものがあった。
「おそらく今のままでは。やはり社長の仰る通り」
「そうだな。やはりハサンは生き残れまい」
フセインはその言葉を聞いてこう結論付けた。やはり結論も変わりはしない。
「しかしだ」
彼はそのうえで述べる。
「我々は生き残らなくてはならない」
「はい」

皆この言葉に頷く。
「我がサリマン社はな。何があっても生き残らなければならない」
「そうですな」
「従業員のこともありますし」
国家が全てではない。他にも様々な組織や勢力があるものである。それは何処においても同じである。連合でもそうであるしサハラでもそうだ。フセインも彼のスタッフ達もそれがわかっていた。だからこそ今こうしてハサンの行く末も戦いの流れも考えられるのである。一つのことを絶対とすると話は見えなくなることが多い。彼等は今ハサンにいることとサリマン社にいることの二つを同時に見ていたのであった。
「その生き残る為にだ」
フセインはあらためて言う。
「どうするべきか」
「まずはオムダーマンですが」
「うむ」
話はまずはオムダーマンに関してからはじまった。
「一般市民や企業には手出しはしません。アッディーン副大統領はそうしたことを好まない人物のようです」
「そうだな」
フセインもその言葉には頷いた。
「私もその話は聞いている。西方でも南方でもそうだったらしいな」
「ええ」
赤い髪のスタッフが頷く。
「また軍規も正しくしています。これはティムールもそうですが」
「そうだな。では軍による無差別攻撃や狼藉の恐れはないか」
「そう思います。ただ」
その赤い髪のスタッフは述べる。見れば赤といっても黒に少し赤がかかっている程度だ。連合やエウロパに見られる完全な赤髪ではなかった。サハラでは黒が殆どでありそうした色の髪は殆どないの

である。

## 第二十三部第二章　権益その四

「ただ、何だ」
「我々がおかしな動きをした場合は別でしょう」
「それはな」
これは言うまでもなかった。今更といった言葉であった。
「では彼等が来ても我々はおかしな行動はしないでおこう」
「そうですな。それが一番かと」
「それでだ」
フセインはここで言い加えてきた。
「何か」
「戦争にはあらゆるケースが考えられる」
彼は言葉の色を少し変えてきた。警戒を含ませているような感じになっていた。
「例えばだ」
「はい」
スタッフ達は彼の言葉を聞いている。何を言うのか見ているのだ。
「我々がオムダーマン軍の手に落ちる」
これは今話していることである。実際のことだ。
「その後だ。オムダーマン軍が劣勢になり」
「ハサン軍が奪回したとなると」
「下手にオムダーマン軍に協力していては後で何かと不都合になるな」
「政府にも睨まれるかも知れませんし」
「風見鶏だの言われて社の評判が落ちるかも知れない。そうすればだ」
「ラマムール社にそこを付け込まれますな」
「そういうことだ。だからだ」
彼は述べる。

「下手にオムダーマンに協力するわけにもいかない」
「まあそこは簡単ですね」
白い口髭のスタッフが言ってきた。
「簡単なのか？」
「はい、いつも通りしていればそれでよいかと思います」
彼の考えはこうであった。
「それでは特に何も言われることはないと思いますが」
「うむ」
フセインはその言葉に頷いた。その通りであった。やはりそれが一番なのだ。
「ではそうするか。いつも通りだな」
「ええ」
「そうするべきです」
白い口髭のスタッフもそれを言う。
「それが我が社にとっては最もよいかと」
「わかった」
これで彼の考えは決まった。
「ではそうしよう。いつも通りだ」
「では従業員達にも普通に仕事をするようにと」
「そうだな。いざとなれば伝えよう」
「労働組合にも話しておきますか」
「おっと、そちらもあったな」
言われてそれを思い出した。当然ながらサハラにも労働組合は存在する。といってもエウロパのそれにように強くはない。それぞれの国で労働組合があり今はオムダーマンやティムールの中で統合が進んでいる状況である。ここでも政治や戦争が大きく影響している。労働組合は政治的な組織でありやはり政治情勢が大きく影響するのである。組合が政治に影響を及ぼす場合も多い。これは二十世紀からの流れである。
「では組合の議長には私から話しておこう」

「それがいいかと」
「もっともあちらにも連合各国の人間から連絡が来ているようです」
「権益のことか」
「はい」
「それです」
スタッフ達はまたフセインに述べる。
「少しだけのようですが」
「抜かりはないか、彼等も」
その話を聞いて連合に感心すら覚えた。やはり彼等も愚かではない。
「では我々も抜かりなくいきたいところですな」
赤髪の男が言ってきた。
「彼等もそうするならば」
「その通りだ」
フセインはむべもなくそれに答えた。答えながら考えを巡らす。
「しかしだ」
「何か」
「ここはおそらくオムダーマンとハサンの争奪地になるだろうが」
「ええ」
「今後も戦乱に巻き込まれるかも知れないな」
「といいますと」
スタッフ達はそれを聞いて述べてきた。
「ハサンとオムダーマンだけではないということですか」
「サハラ統一まで戦いは続くだろう」
フセインは彼等に対してそれを述べてきた。これはもうサハラにおいては規定事項であった。
「とすればだ」
「生き残った二つの勢力が次に争うと」
「そうだ。それに」
「それに？」

「いや、これはないか」
言おうとしたところでそれはすぐに引っ込めた。
「有り得ないな、流石に」
「何がでしょうか」
スタッフ達は彼の様子を見て声をかけてきた。
「いや、何でもない」
「何でもないということはないかと」
「そうです、折角ですからお話下さい」
彼等は口々に言う。そうしてフセインに対して語るように頼んだのであった。彼等としても一度引っ込められたことは聞かずにはいられなかった。

## 第二十三部第二章　権益その五

「うむ、実はな」
彼はそれを受けて述べてきた。
「あれだ。そのアッカドだ」
「といいますと」
「連合ですか」
彼等はそれを聞いてすぐにピンときた。こう言われるとすぐにわかった。
「そうだ、連合は近いしな。若しかすると」
「社長、若しそうならば」
スタッフの一人がそれを聞いて言ってきた。顔が少し苦笑いになっている。
「今攻めてきませんか」
「そうです。そして我々の権益を全て強奪にかかるでしょう」
「まあそうだな」
フセインはスタッフ達の言葉に応えた。言われてみればその通りである。
「ああして細々と動いて権益を守ったりはしないか」
「そうです」
「あの権益に五月蝿い彼等が」
権益で戦争になるケースも実に多い。サハラでもそれが元で戦争になったことは枚挙に暇がない。戦争は様々な要因で起こるものだ。権益はその中でもとりわけ多いケースの一つである。
「何かしてこない筈がないです、この場合」
「そうですな」
口髭の男も述べてきた。
「それでしたらエウロパの方が可能性は高いでしょう」
「エウロパか」

「はい、どうせまた侵略を狙っているでしょう」
「お高くとまっていてやっていることは強盗と変わりない連中ですからな」
中の一人が忌々しげに言った。彼等にとってエウロパの貴族達とは外面がいいだけの連中に過ぎない。だから彼等が何としてもやはりそうしたか、と平気な顔で受け止めることが多い。サハラで最も嫌われるものが二つある。一つは無神論者でもう一つがエウロパ貴族なのである。どちらもどの様な悪事を働いても全く平気な連中だと認識されている。サハラで無神論者が嫌われているのは拠って立つものがないからである。サハラでは信仰が絶対だからだ。エウロパ貴族はそうした者達と同じだと思われているのである。
「油断できない連中ですからな」
「連中ならそうして来るかと」
「そちらの方が遥かに可能性はある、確かにな」
フセインもそれは認めた。
「今は連合との戦争でかなりの痛手を被ったからな。まずは動きはしないだろう」
「ですね」
「少なくとも今は」
今は、である。ここが極めて重要なのはもう言うまでもないであろう。
「ですから社長」
赤髪の男も言ってきた。
「流石にそれはないかと」
「まあ流石に皆無ではないでしょうが」
様々なケースが考えられる。だからそうした可能性も皆無ではないのである。あくまでも皆無ではないのであり非常に可能性の少ない話なのは変わりがないが。

## 第二十三部第二章　権益その六

「ですが殆ど考えなくてよいかと」
「そうだな」
フセインもそれは否定することにした。
「彼等とはこれからも仲良くやっていけるな」
「そうですな」
「抜け目のないビジネス相手として」
「全くだ」
フセインはその言葉を受けて口髭を生やした端整な顔に笑みを浮かべてきた。これは表面からはわかりはしないが明らかにビジネス用の笑いであった。その本心は隠している。今はその必要がないのであるがそれでも自然にそうなっているのであった。これもまた職業病であろうか。なおサハラはイスラム教であるがイスラムという宗教は商人であるムハンマドからはじまっており都会の宗教であると共に商人の宗教でもある。だからこうした笑みも完全に否定されるわけではないのである。ここがイスラムの奥の深さの一つである。
「彼等はな。実に手強い」
「強かで粘り強いですな」
「ことビジネスとなると」
「多分に個人主義だがな」
彼等も連合の個人主義は察していた。だからここで述べた。
「それでも手強いことは事実だ」
「はい」
「我々も気が抜けません」
スタッフ達もそのうえで述べる。
「しかし我々の利益は何とか守られそうですね」
「そうだな」
フセインは話をしているうちに情勢を理解してきた。そのうえで

述べた言葉である。自然と理知的な言葉になるのは当然のことであった。
「ここはな」
「今後も何かあるとなると」
「まずは軽挙妄動を控えていこう」
そう述べてきた。
「それが第一だ」
「全てにおいて慎重に、ですか」
「そういうことだ」
彼は言う。
「軽はずみに動いては損をする」
「あれですな」
スタッフの一人がその言葉を聞いて言ってきた。
「連合の諺にある」
「確かだ」
フセインもそれを受けて述べる。目を上にやっている。
「慌てる乞食は貰いが少ないか」
「急いてはことを仕損じるという言葉もありましたな」
「うん」
この場合二つの意味が同時にあった。彼等にとっては外来の諺であったがそれでもこの場合に関しては非常に合ったものであった。
「そうだ。だからこそ」
「ええ」
「万事に慎重にいきましょう」
彼等は述べる。
「そういうことで」
「では話は終わりだな」
フセインは言ってきた。
「わざわざ集まってもらって御苦労だったな」
「いえいえ」

「これも仕事ですから」
彼等は口々に述べる。述べながらも話は確かに終わりに近付いていた。
「では連合とはこのまま話を進め」
「そしてハサン、オムダーマン両政府にも連絡を取り」
「我々の権益を守っていくということで」
「そうだ。あくまで中立でな」
「それでは」
話は終わった。こうして彼等は席を外し部屋には誰もいなくなった。
戦争は近付いてきている。皆その中でそれぞれの役割を果たそうとしていたのであった。

## 第二十三部第二章　権益その七

戦乱が迫るにつれアクター達の動きは活発になる。それはマウリアにおいても全く同じであった。
マウリア通産省の官僚達はサハラだけでなく連合にも向かっていた。そしてそこで責務を果たすのであった。
「何か最近あちこちが慌ただしいな」
「そうだな」
マスコミ関係者達もそれを察していた。集まって話をすることもおおよそ定まってきていた。
「やっぱりあれか」
「あれしかないだろう」
彼等は口々に言う。
「サハラでの戦争か」
「それだな」
「ハサンはもう守りを固めているしな」
「それだけじゃない」
すぐにそれに注釈が入ってきた。
「オムダーマンとティムールもな」
「動きはじめているか」
「ああ。既に大軍が動きはじめているらしい」
「正規軍だけか？」
「いや」
すぐにそれにも付け加えが加わった。
「予備役にも声がかかっているらしい。こちらは前線には出ていないがな」
「三国共にか？」
「そうだ」
その話にもすぐに声がかかった。

「ここまで来たら間違いないだろう」
「戦争だな」
誰かが言った。
「確実に」
「わかっているんじゃないのか？」
その声にはすぐにこう返ってきた。
「そんなのは。やっぱり今の状況だと」
「それもそうか」
「そうだ」
彼等はそう話をしていく。
「大体サハラであれだけの期間何もなかった方が不思議だ」
「何事もなくか」
「今までいつも何処かで戦争をしていた場所だったからな」
中の一人が言った。
「しかしオムダーマンの南方統一とティムールの北方併合以降は」
「何もなかったな」
「その方が不思議なんだ」
そう見ている者もいた。実際にそう見ても不思議ではなかった。
「今の状況はな」
「成程」
「そういうことか」
「じゃあ今から正常になるんだな」
すぐに誰かがそう言い出した。
「戦争がはじまって」
「何か凄い話だな」
その言葉を受けて苦笑混じりに述べる者がいた。
「戦争が通常の状態というのもな」
「いや、何処でも同じだろう」
また誰かがそれに対して言い返してきた。
「何でだよ」

「万人の万人に対する闘争」

ホッブスのリヴァイアサンの言葉である。人間というものは常に争っているものである。だから権威や法律が必要なのだと。そう位置付けているのである。なおホッブスは近代法を確立させた人物の一人であるが当時は絶対主義の擁護者だとも批判された。これは彼が人の理性というものを信頼しておらず国家や社会を纏める権威として王の存在の必要性を認めていたからである。これはこれで正しい見方であると言えよう。人の理性というものは非常に危ういバランスの中に常に存在しているからである。

## 第二十三部第二章　権益その八

「そうだろ？」
「まあな」
流石にこれはここにいる全ての者が知っていた。似非も非常に多いがマスコミは一応は知識人である。だからこれは知っていたのである。知らないとかえっておかしい。もっともこの業界には知性も教養も品性もないゴロツキの様な輩も非常に多いのであるが。
「連合だってそうだろ」
ホッブスのその言葉を出した男が言った。
「結局常にそれじゃないか」
「そう言われればそうか」
別の者がそれに頷いた。
「何かっていうと競争競争だからな」
「そういうことだ」
「商売もスポーツも学業も何でもな」
「ものを書くのだってそうだな」
ジャーナリストならではの言葉も出た。
「何処のどいつよりいい文章を書くか、より売れるかどうか」
「そうだろ。まあ法律やルールの中で一応やってるがな」
中にはその法律やルールを全く理解できない者もいる。こうした愚者は自分の主観によってのみ動く。それでいずれは破滅するのであるが。自分の主観だけで何かをできる世界なぞない。そう考える者は愚かであるだけでなく狂人である。それで誰かに何を言っても信頼もされない。恐ろしいことにそうした輩というのは自分が信頼を完全に失っても気付かないか平気なのである。だからこそ破滅するのであるが。
「結局は同じだな」
「連合もサハラもか」

「そうなるな」
話がやや哲学的なものになってきていた。
「そう考えるとわかりやすいか？」
「いや」
その言葉には首を横に振られる。
「それでもあれだぞ」
中の一人が言ってきた。
「連合とサハラじゃ考え方が全然違うだろうが」
「そうか」
「そうだ。向こうは完全にイスラム世界だからな」
これが大きかった。連合は様々な宗教や思想が存在しているがサハラはイスラムしかないのである。ここが非常に重要であるのだ。
「そこだ」
「そこか」
皆その言葉に目を動かした。考えるものがそこには確かにあった。
「イスラムは戦争を肯定しているしな」
所謂ジハードである。異教徒との戦争がその意味であるが実に広範囲に使われる言葉である。各国の間での戦争でもつ買われてきている。
「やはり全然違うぞ」
「成程な」
「だからだ。今だってな」
そのうえで語られる。
「それに基づいて動くだろう」
「三国共にか」
「ああ。ただしだ」
ここで哲学から軍事に話が戻る。
「ハサンは守りに徹しようとしているな」
「ああ、そうだな」
これはある程度の軍事知識があればすぐにわかることであった。

だから彼等もわかった。
「国境に軍を集めて防衛ラインを築いてな」
「それだけだからな」
彼等は話し合う。
「それで後の二国は」
オムダーマンとティムールのことである。これは誰もがわかっている。
「攻めようとしているな」
「ああ」
皆その言葉に頷く。

## 第二十三部第二章　権益その九

「戦場はハサンと両国の国境になるな、まずは」
「長期戦になるな」
誰かがまた予想を述べてきた。
「この戦いは。ハサンと二国の国力を考えるとな」
「そうだろうな」
これには多くの者が頷いた。妥当な分析であると言えた。
「少なくともすぐには終わらないな」
「それ次第で結構色々な動きがあるだろうな」
「いや」
しかしここでその長期戦の予想に異議を述べる者が出て来た。
「それはどうかな」
「誰だって戦争はすぐに終わらせたいさ」
それに対してこう言う者がすぐに出て来た。
「けれど今回はそうはならないだろう」
「三国の力関係を考えるとな」
「そうだろうな」
「いや、それはどうかな」
しかし彼は言う。
「そうなるかどうか」
「すぐに終わるという根拠は？」
「あの二人だ」
彼は今度は人物を出してきた。
「二人！？」
「というとだ」
今のサハラを知る者にとってその二人を導き出すことは至極簡単なことであった。だからすぐに察した。
「アッディーン副大統領とシャイターン主席か」

「ああ。あの二人は今までかなりの劣勢でも勝利を収めてきているな」
「まあな」
「鮮やかなまでにな」
それもよく知られていた。彼等の軍事的才能もまた有名であった。
「だから今回もな」
「やるっていうのか」
「できるんじゃないのか？」
二人の軍事的才能を強く主張する男は言ってきた。
「鮮やかにな」
「いや、それはどうかな」
だがそれに関しては議論になった。異議を呈する者が現われたのであった。
「今回はならないんじゃないのか」
「どうしてだ？」
「敵が強いからな、今回は特に」
「特にか」
「まあアッディーン副大統領は今までも少数で多数の敵を破ってきているけれどな」
それを認めたうえでの言葉である。西方統一においては彼は少数の兵を率いて多数の敵を何度も打ち破ってきている。ミドハドとの戦いでもそうであったしサラーフでも同じであった。とりわけ有名なのはミツヤーン達との戦いであったがこれは敵があまりにも愚劣だったという一面もある。
「ハサンが相手だとな」
「既にハサンはオムダーマンとの境にかなりの防衛ラインを敷いているな」
誰かが言った。
「それを突破できるかな」
「できたら本物だ」

また誰かが言う。
「どうにかしてな」
「できるだろう」
アッディーンを推す者はまた述べた。
「今回も」
「まあそれがわかるのはこれからだな」
「そうだな。いよいよはじまるしな」
「さて、どうなるかだ」
また話がされた。
「何処が生き残るかだよ」
「その生き残った勢力によってサハラは統一されるっていうことか」
「そうだ」
「そういうことになるな」
これは皆わかっていた。予定されていることに等しい。
「それぞれでどうなるかな」
議論が変わった。今度はこれからのサハラに関してであった。
「どうなるかとは？」
「ハサンにオムダーマン、ティムール」
まずは三つの勢力の名がそれぞれ出された。
「この三つの勢力のいずれかが統一するな」
「このままいけばな」
「余程のことがない限りな」
彼等はそれに応えて述べる。それは読んでいた。だがサハラは今までその余程のことが幾度も起こってきているのである。クーデターも数多く起こってきたし政変も常にであった。そうした非常に不安定な政治状況が続いてきているのである。それがサハラであった。まさに万物が流転する場所であったのだ。
「その三国のうちのどれかだ」
「ハサンが統一すればどうなるかな」
まずはハサンが議題に出された。

## 第二十三部第二章　権益その十

「あそこは」
「ハサンか」
「そうだ。どうなると思う？」
「あそこが一番穏健だろうな」
そう評価が下された。連合は中央政府も各国もハサンと交流が深い。だからこれははっきりと言えるのであった。ハサンのことはよく知っているのである。
「穏健か」
「決して好戦的な勢力じゃない」
東方は長い間平穏であった。それはハサンがその中枢にいて穏健かつ万全の統治を続けてきたからである。北方は抗争とエウロパの侵攻が続き西方と南方もまた複雑な戦乱の中にあって東方だけが穏やかな状況であったのはハサンの功績によるところが大きいのである。
「それを考えるとそうなるだろう」
「平和なサハラか」
「この場合は対外的にだな」
そう注釈が入れられた。
「連合やマウリアとはこれまで以上の交流が進み」
「エウロパとだけ対立するか」
「エウロパともあまり戦争する気はないようだがな」
「そうなのか」
「元々エウロパとサハラは何の関係もない」
そのことが出されてきた。
「彼等に対しても国境の守りを固めるだけだろう」
「それだけか」
「ああ、多分な」

そう予想が出された。
「エウロパはまた侵攻しようとするがな」
「では国境の紛争だけで終わりか」
「そういうところだ。まあハサンが統一したならば最も平和になる」
「連合にとってもいいな」
「ああ」
これには多くの者が同感であった。彼等はハサンの穏健体質には非常によい感情を持っていた。本心はハサンが統一してくれることを望んでいたりする。だがそれでも国と国の関係、勢力と勢力の関係はシビアでドライなものである。あくまでそれを踏まえたうえでの付き合いなのである。
「これがベストか」
「ベストではなくとも最もよいベターだ」
あくまで連合にとってはである。サハラのことはここでは触れていない。
「だがサハラ全土ではどうかな」
そしてそこにも触れられた。
「そこのところは」
「難しいな」
すぐにそれに関しても述べられた。
「ハサンは穏健だ。だからこそ東方を長い間治められてきた」
「そうだな」
これがまた述べられる。
「しかしだ」
そしてそこにメスが入れられる。鋭い批評というメスが。このメスは多くはなまくらで使い物にならなかったりするが本物であるならば実に恐ろしいものとなる。今回はどうであろうか、そこにいる全ての者がそのメスの動きと鋭さに注視するのであった。その目と耳が集中する。
「それをサハラ全土に適用できるかな」

「無理か？」
「そこがわからないのだ」
そう論ぜられる。

## 第二十三部第二章　権益その十一

「ハサン型の統治がサハラ全土を治められるのか。ハサンは今まで自国とその勢力圏だけの利益を考えてきた」
「うむ」
「他の地域に関しては知ろうともしていなかった。言うならば分裂したままのサハラを望んでいた」
「統一よりも自分達の繁栄か」
「そういうことだ。それで急に統一してもだ」
「無理が出るな」
すぐにそういった意見が出された。
「やはり」
「彼等は統一した後のビジョンついて疑問だ」
内を治めるにあたってである。これまで通りのやり方でいけるかどうかということである。膨張、巨大化すればそれに相応しい統治が必要なのだ。連合がその一千年の歴史で中央集権と地方分権の二つの勢力が交差してきたのはそれである。彼等はその時に応じて最もよいと思われる形式を選んできたのである。当然選択ミスもありそれが停滞を生んでしまったこともある。だがそれでもそうして中央集権と地方分権を入れ替えることによりその政治システムもまた変えてきた。そうして今まで発展してきたのである。ハサンはそれを今求められているのだ。
「あると思うか」
「あの王太子はあるかも知れないが」
ハサンきっての切れ者でありまた実質的な指導者である彼のことは連合の者達も頭に入れていた。
「しかしだ」
「それを理解して動ける者が充分いるかというと」
「疑問だな」

「そうだな」
そういう問題もあった。ハサンはそこに問題を抱えているのだ。
「それによってはまた分裂かも知れないな」
「統一するだけでは駄目か」
「創業と維持の問題だ」
この問題が出て来た。
「この場合は統一と治世だが」
「統一の方が大変だな」
中の一人がすぐに言ってきた。
「一つに纏めることこそが」
「いや、それは違う」
しかしその言葉にはすぐに訂正が入った。
「違うのか？」
「違う。確かに統一は大変だ」
「ああ」
「しかしそれと同じ位その統一を維持する治世も大変なのだ」
「そうなのか」
「そうだ。一つになったものを同じ力で維持しなければならないからな」
これは中国唐代の政治家である魏徵が言った言葉である。中国の歴史にその名を残す優れた政治家である彼はそう言って内政の重要さと国家の維持の難しさを説いたのである。彼は謹厳実直清廉潔白な人物として知られ皇帝に対しても臆することなく言葉を述べた。だからこそ重みのある言葉であった。
「それを考えるとハサンには維持できないかもな」
「そうなるか」
「ハサンにどういったビジョンがあるかわからないからな」
「あるんじゃないか？」
中の一人が言った。
「何だかんだ言って」

「けれどあってもそれが実効性のあるシステムかどうかはわからないだろ」
「まあな」
そうした問題もある。ビジョンを出してもそれが果たして実効性があるかどうかというとわからないのだ。実効性があればいいがなければ破綻してしまう。政治とはそういうものである。
「そもそもハサンには長い間領土を拡張するということもなかっただろう。それでいきなり拡張してそれを治めるというのはかなり難しいことになる」
「他の二国よりもか」
「それは言えるんじゃないかな」
そう言われてきた。ここでその二国の名が出される。

## 第二十三部第二章　権益その十二

「オムダーマンやティムールに比べてな」
「あの二国はな」
また誰かが言った。
「それはあるか」
「あると思った方がいい」
ハサンに疑問を持っている男はこの二国に対してはそれを持ってはいなかった。どうやらこれにもちゃんとした根拠があるようである。
「オムダーマンは西方ではそれなりの勢力だった」
「そうだったな」
「確か第三勢力だった筈だな」
「ああ」
これまでのサハラ西方の情勢が復習される。皆その頃のことを頭の中に置きながら話をするのであった。そうしてオムダーマンについての分析を進めていく。
「それがミドハドとの戦いに勝ち他の勢力を併合していき」
「ミドハド、そしてサラーフも破り」
「西方を統一した。鮮やかなものだった」
「その過程でだ」
話が重点に移った。
「見事な統治をしているだろう」
「ふむ」
皆その言葉に目と顔を向けてきた。軍事的成功だけでなく今度はそれにより得た領土の維持、統治に関する考察に移っていったのだ。
「その領土は急に拡張したが」
「的確に統治しているな」

「そうだ。それぞれ別だった政治システムをオムダーマンのものに組み入れ」
「しかも軍の管轄、管理システムもオムダーマンのものにしていっている。政治と軍事双方でそつなくこなしていっているな」
「見事なものだ」
そう結論付けられた。
「南方においてもそうだったしな」
南方も同じであった。彼等はそこでもそつなくこなしていたのである。そつなくと一言で済むがそう言われる為にはかなりの事柄が必要なのである。
「それを考えるとオムダーマンには統一後もそれを維持することは可能か」
「これまで通り行けばな」
中の一人がここで言ってきた。それはやはりハサンに関して疑問を呈していた男であった。彼はハサンをあまり高く評価はしていないようにも見える。
「大丈夫だと思う」
「そうか」
「それでだ」
話は今度は最後の一国に移ってきた。皆それに関心を移す。
「最後のティムールだが」
「あそこは人治的かもな」
「人治か」
「そうだ。全てはシャイターン主席次第だ」
オムダーマンがその統治形態に注目されているのに対してティムールはシャイターンという人物にそれが向けられていた。これが両者の大きな違いであった。
「あの国は共和制だが実質的には独裁だからな」
「シャイターン主席の」
連合では独裁者という言葉は死語になっている。民主制の国しか

なく立憲君主制、共和制の様々な国家があるが独裁者というものはなくなっている。それがよいか悪いかは別にしてそうした人物はいなくなっているのだ。中央政府にも各国にも存在しない。独裁的だという批判の言葉はあるにしてもだ。

だがサハラには存在し続けてきた。戦乱の中では強力な指導者が必要である。独裁者であってもだ。今までにも多くの独裁者が存在したし今もシャイターンがいる。そうした世界なのである。

「そう、彼のな」

「彼は北方ではかなり上手くやっているな」

「その統治システムといい。見事なものだ」

オムダーマンにしろティムールにしろその統治形態はかなり中央集権的である。強力な政府である。なおハサンは連合各国程ではないにしろ地方分権的である。これはそれぞれの国が置かれている状況も現わしていた。言うまでもなく最も中央集権的なのはティムールである。

「だがそれは全て一人が作り出しているものだな」

そこに指摘が入った。

「シャイターン主席が」

「そうだな」

「確かに」

皆その言葉に頷く。

## 第二十三部第二章　権益その十三

「彼がいなくてはティムールは存在しない」
「独裁者だからか」
「そうだ」
結論ははっきりと出た。いや、既に出ていたと言っても過言ではない。彼が独裁者だということはもう言われていたからである。
「独裁者のいる国は彼が全てだ」
「その彼がいなくなれば」
「それで終わりだ」
有力な後継者がいない限りはだ。それで多くの国が費えている。独裁をシステムにするにしろかなり無理がある。スターリン時代のソ連は確かにスターリンという独裁者が存在したがその後はその独裁システムを採ることはなかった。むしろ後継者達はそれを批判している。
「ティムールもまた」
「ではティムールの場合は彼の生死が全てか」
「そうだな」
それも結論が出ていた。やはり独裁者だからだ。
「彼が生きていて統一しそれからももてばいいが」
「いなくなれば」
「終わりだ。何もかもな」
「辛いな、ティムールは」
「しかしだ」
確かに辛いが別の一面も指摘されてきた。
「最も強力なリーダーに率いられている」
「リーダーに」
「これはやはり大きい」
そこがティムールの利点であった。強力なリーダーを擁している

ことが。
「シャイターン主席が生きていればそれだけでな」
「統一の後もか」
「彼が万全のシステムを築き上げるだけの時間があればな。大丈夫だろう」
「では大丈夫ではないのか」
こうした声が出て来た。
「彼は若いのだしな。それを考えると時間は彼のものか」
「若さか」
「これは大きいだろう」
シャイターン個人に関してはその若さも言及されてきた。
「若いということはな。それだけ時間があるし」
「健康でもある」
若さはそれだけで武器になる場合がある。時間と強さがそこに備わっているからだ、シャイターンはそれも持っていたのである。これもまた大きなことであった。
「事故や暗殺でもされない限りはな」
「まずはないと」
「そうだ。ティムールで統一されてもまず大丈夫だ」
ティムールに関しても結論が出された。
「余程のことがない限りな」
「そういえば事故に暗殺が出たが」
「どうした？」
話は剣呑な方向に向かった。皆それに顔を暗くさせてきた。
「シャイターン主席の周りでは前から事故や不審な死が目立つな」
「そういえばそうだな」
言われてそれに気付いた者がいた。
「昔からな。何かとな」
「南方で傭兵隊を率いていた頃にしろ」
「北方に入ってからにしろ」

「そして今も」
話は続く。剣呑な方向に。
「多いな、今はハサンで起こっているが」
「そうだな。何かと」
思い当たる節が実に多かった。確かにシャイターンの周りではそうしたことが多いのである。これを偶然で済ませる程彼らの洞察力は鈍くはなく好奇心は弱いものではなかった。
「やはりこれは」
「間違いないだろう」
そこにいる全ての者が同じ結論を出してきていた。
「彼の手によるものだな」
「ああ」
これに関する結論もはっきりと出た。
「間違いないだろうな」
「だとするとだ」
彼等はそこからさらに話を進めてきた。
「油断ならない人物だな」
「そのようだな」
結論が出て来た。やはりシャイターンにはそういう認識を持つ人物が多いのである。
「目的の為には手段を選ばないか」
中の一人が剣呑な声を漏らした。
「悪いことか？それは」
すぐに別の一人がそれに異議を呈してきた。
「普通だろう」
「普通か？」
「俺はそう思うがな」
彼はそう述べてきた。
「政治の世界だぞ」
それを出してきた。

「手段ではなく結果が求められる世界だろう？」
「まあな」
「言われてみればな」
そこにいた者はそれに応える。これはわかっている。政治はその志が高いに越したことはないが理想があればよくなるとは限らないのだ。むしろ理想ばかりを見て現実を見ずに失敗したことの方が遥かに多い。これは他の世界でもそうだが政治の世界ではさらに現実が重要になっているのである。

## 第二十三部第二章　権益その十四

「だからそれでもいいだろう。それに」
「それに？」
「連合でのことじゃない」
かなりエゴイズムな言葉を出してきた。
「そうだろう？」
「連合じゃないからいいか」
「ではシャイターン主席の道義を追求する」
「ああ」
「それで何かなるか？あそこはサハラなんだぞ」
彼はそれをまた言うのであった。
「俺達が何を言っても意味がないだろう。違うか？」
「ううむ」
「それは向こうの人間がやることだ」
その通りだがやはりそこにエゴイズムがあるのは事実だった。それの良し悪しは別にしてだ。とにかく自分達には直接関係がないと言っているのである。
「だろう？」
「それではだ」
また別の一人が言ってきた。
「俺達は結局見ているだけなんだな」
「今はな」
しれっとして言葉を返す。
「騒いでも仕方ないだろう。ただ」
「ただ。何だ？」
「分析はしておくべきだな」
「分析をか」
「だから今こうして話をしていることは決して無駄じゃない」

彼は言う。
「俺はそう思う。どうだ？」
「ふうむ」
そこにいる者全てがその言葉に考える様子を見せてきた。そのうえで慎重に言葉を選びながら述べるのであった。
「統一の後か？」
一人がこう言葉を出してきた。
「ここは」
「そう思うか？」
別の一人がそれに言葉をかけた。
「やはり」
「ああ。統一したら嫌でも向き合うからな」
「そうだな」
「やはり」
他のメンバーもそれに続く。彼等の考えていることは結局は同じであった。連合としてはサハラは身内ではない、相手なのだ。だからどうした相手なのか見ているというわけである。
「相手としてはだ」
今度はその視点から語られる。
「ハサンは普通に付き合えるな」
「武力対立もなくか」
「これまで通り通商中心だな」
「それはそれでトラブルもあるだろうがな」
実際にハサンとは中央政府も各国も幾度か通商問題が起こっている。その都度綿密な話し合いにより解決してきた歴史があるのである。
「だが戦争をするよりはいい」
こう結論が出された。
「そういうことではないのか」
「そうだ」

「通商問題は利益を生む」
誰かが言った。
「しかし戦争はな」
「破壊だけだ」
よくある言葉がここで交あわされた。彼等は戦争に対して必要性をあまり見てはいない。エウロパとの戦争は別にしてだ。あれは工作員の跳梁跋扈を許さない為の戦争であったから利益があると判断ができるのだ。彼等は戦争にも利益を見ている。しかしあくまで政治の一手段としてである。そうした観点から必要性をあまり見てはいないのだ。そういうことなのである。シビアな視点であった。
「少なくともサハラとの戦争はな」
「そうだな」
「少なくとも通商ならそれはない」
「もっと極端に言えばこのまま戦争にならずに三国で止まってくれればいいのだがな」
一人が述べた。
「それに越したことはないが」
「おいおい」
皆それに苦笑いを浮かべて突っ込みを入れる。
「それは完全にこちらの事情だろう？」
「幾ら何でもな。そうは動いてくれないさ」
「それはわかっているさ」
彼は冷静に言葉を返した。
「あくまでこちらの事情だ。しかしな」
「分裂させることが後でもできるかもな」
狡猾な意見が出て来た。
「分裂させるか」
「少なくとも内部に不安の種を撒いておく」
工作の基本である。なおエウロパが連合に散々仕掛けてきたものである。エウロパは時には連合内の宇宙海賊やテロリストに手を回

して連合を混乱させるようなこともしてきている。無論それをばれないようにしてである。彼等はそうした狡猾な一面もあるのだ。
「統一した後にな」
「それもあるか」
「一応はな。しかし通商ならそこまでする必要はないな」
「そうだな」
「コインで済む話だ」
金は使いようである。様々な使い道がある。賄賂といった手段もある。汚いと言えば汚いが少なくとも暗殺よりはずっといいであろう。
「ではハサンとはコインや札束、ついでにカードでの話だな」
「そうなるな。だから特に危険はない」
「上手くやっていけるか」
「ではオムダーマンはどうかな」
話は今度はオムダーマンに関してのものになった。
「オムダーマンか。あそこもな」
「大丈夫か？」
「多分な」
いささか不安定な言葉が出されてきた。
「これからあの国で最高権力者になると言えば彼しかいないが」
「アッディーン副大統領か」
「ああ。彼しかいないだろう」
これは殆どの者と同じ見方であった。サハラ内部でもその外でもアッディーンはいずれオムダーマンにおいて最高権力者の地位に就くものとして見られているのである。これは彼の今までの輝かしい功績によるものである。やはり英雄だと思われているのである。
「その彼だが」
「不安はないか」
「政治家としても優れている」
副大統領としてそちらにも、特に軍政で大きな実績を挙げている

のである。それが広く知られているのだ。

## 第二十三部第二章　権益その十五

「問題はないだろうな」
「そうか」
「そう思う。やはり彼等との交流も無難にいけるだろう」
「まあ極端なことがない限りな」
ふとこの言葉が出た。
「大丈夫か」
「とりあえずはな。しかしだ」
「しかし！？」
「問題は最後の一国だ」
ティムールのことであるのは言うまでもない。
「ティムールはな」
「危険か」
「少なくともあの三国の中ではな」
やはりそうした見方がティムールには為される。これは当然と言えば当然であった。
「最も危険だろう」
「そうだろうな」
そして誰もがそれに頷く。
「シャイターン主席だからな」
「我々に対しても何をしてくるかわからないか」
「いや」
しかしそれにも異議が入った。
「それはあくまで必要な場合だ」
「必要に応じて仕掛けてくるということか？」
「そうだ。彼は確かに目的の為には手段を選ばない」
その認識の他にもう一つある。それが今出て来た。
「その手段もまた選ぶのだ。冷徹なまでにな」

「ということはだ」
中の一人がそれを聞いて述べた。
「あれか？常に謀略を使うわけではないと」
「そういうことだ。実際に彼は表の仕事で済む場合は表だけで済ませている」
「ふむ」
「そういうところが極めて巧みだ。政治家と言うべきかな」
「政治家か」
「そういう意味でだ」
彼は述べる。
「いいか悪いかは別だがな」
聞いていると悪い意味にしか聞こえはしない。だが政治の世界では決してそれだけの意味ではないのだ。それがわかっていないと政治は語れない。
「アッディーン副大統領とは違う意味で優れた政治家だ」
政治家もまた一つのタイプがあるわけではない。そういうことである。
「違うか」
「いや、それは真実でもある」
「そうだな」
皆それに頷く。
「ああした政治家もまた政治家だな」
「そうだな」
「しかしだ」
彼等は話を続けていく。
「敵に回すと厄介だぞ」
「常に寝首をかかれないかどうか不安にはなるな」
「それが問題だ。できれば彼には統一してもらいたくはないな」
「そうだな。しかしだ」
「しかし？」

「我々にとってはして欲しくない程度だな」
「！？」
他の者はその言葉に目を集中させた。耳も。
「どういうことだ？何が言いたいんだ、一体」
そのうちの一人がそれに問うた。
「程度とは」
「だから言ったままだ」
その男は述べた。
「我々にとっては言うなら嫌いな奴が隣に来たらどうしよう、そんなところだろう」
「まあそうだな」
「嫌なら無視すればいい。向こうも好き好んで害を加えたりはしないだろう」
「マウリアにとってもそうだ」
その男はまた言った。
「結局我々にとってはサハラはそうして無視できる。しかしエウロパにとっては」
「無視できないか」
「遺恨もあるしな」
言うまでもなくサハラ侵攻と総督府の件である。このことは今でもサハラにとっては晴らすべき雪辱となっている。アラブの頃から彼等は報復は血によって為されると考えている。その彼等が遺恨を晴らさないと考える者は少なくともこの場には存在してはいなかった。
「彼等にとっては誰が統一するかで死活問題になる」
「では介入してくると？」
「いや」
これもまた否定された。
「それもできない。今のエウロパはな」
「俺達との戦争のせいか」

「そうだ」
それ以外に理由はなかった。連合との戦争によりエウロパは大きなダメージを受けている。戦争により直接のダメージだけでなくニーベルング要塞の割譲と多くの星系の非武装化による防衛計画の変更、バチカン移転による宗教界の混乱、連合への支払金での経済的負担とその受けた傷はかなりのものなのである。これをどうするかで今かなり厄介なことになっているのである。
「そのせいでサハラでの介入どころではない」
「無様なものだな」
誰かがそれを聞いて笑った。

## 第二十三部第二章　権益その十六

「貴族共には相応しい」
「二十世紀の共産主義者みたいなことを言うな」
「何、そう思われてもいいさ」
彼は仲間の言葉にこう返した。
「共産主義は信じないし認めないが貴族は反吐が出る程嫌いなんでな」
「そうか」
「そうさ。連中の惨めな姿を見るのが一番楽しいんだ」
彼はこうまで言った。
「だから今俺は機嫌がいい」
「それは何よりだな」
「それで今度は統一サハラに怯えるか」
「エウロパにとっては災難だ」
「俺達にとっては幸福だな」
「しかしだ」
また誰かが言った。
「何だ？」
「もっと面白いことができるかもな」
「もっと面白いこと？」
「つまりだ。サハラは連合にとって脅威に成り得るな」
「ああ」
これはもう結論が出ている。彼等が危惧していることはそれなのだ。それをどうするかで今話をしているのである。そこで気付いたことなのだ。
「そしてエウロパは我々にとっては」
「敵だ」
言うまでもなかった。不倶戴天の敵同士である。どれだけ力の差

があってもこれは変わらない。変わりようがないことであった。
「そうだな、敵だな」
彼はそれを聞いて納得したように頷いた。それからまた述べた。
「それじゃあな」
「それで。何だ」
皆次の言葉を待つ。彼はそれに応えてまた述べた。
「敵同士なら戦わせてはどうだ」
「敵同士をか！？」
「そうだ。中国の戦略だったか」
連合の中でも最強の大国の一つだ。古い歴史を持つだけありやはりこうしたことでは名が知られている。
「夷を以って夷を制す」
「それか」
つまり敵に対して別の敵を当たらせて双方の力を弱体化させるのである。そこから漁夫の利を得る。中国が北方の遊牧民に対して使ってきた戦略である。他にはアメリカがネイティブに対して使ってもいる。彼等は力だけで勢力を拡大してきたのではないのだ。戦略を駆使して強大になっていったのである。もっともその過程で力を弱めた異民族は次々と駆逐されるか吸収されていったのであるが。
「それだ。使えないか」
「使えるな」
また中の一人が言った。
「それもかなり効果的にな」
「そうだな」
「これは使えるぞ」
「ああ」
皆それに頷いてきた。その顔には笑みさえ浮かんでいる。
「それがあったな」
「そうだ。敵が二つある。それだけで充分だ」
「効果的だな」

「それもだ」
言葉が付け加えられた。
「こちらが謀略を使わなくともいい」
「何もしなくていいのか？」
「双方に抜き差しならない対立があるからな」
これが非常に大きい。
「自然となるだろう」
「ならよしか」
多くの者がそれを聞いて安心したように笑った。
「動く手間が省ける」
「しかしだ」
だが言い出した本人はまだ思うところがあった。それを口に出す。
「どうした？」
「いや、そうなるとだ」
彼は言う。
「下手に手出しは本当にまずいな」
「まずいか」
「エウロパもサハラも馬鹿じゃない」
彼は決して彼等を侮ってはいない。それ故の言葉であった。
「気付く可能性が高い」
「こちらの動きにか」
「そうだ。そうなれば元も子もないだろう？」
「確かにな」
「その矛先がかえってこちらに向く」
謀略と言っても難しいのだ。それが明るみになれば謀略ではなくなるし陰険なことを企んでいると外から認識され信用を落とす。それに相手からは警戒され敵意を持たれる。そういうことである。
「だからな」
「やりぬくいか」
「むしろだ」

彼は言う。
「自然と双方がいがみ合う状況を作った方がいいな、こちらが仕掛けることなく」
「どうやってだ？」
その話が見えない者が出て来た。

## 第二十三部第二章　権益その十七

「そうするのは」
「仕掛けはしない」
まずはそれを断った。
「だが動くことはできる」
「動くのか」
「そういうことだ」
それに対して述べる。
「それでどうだ？」
「ふむ」
「それならな」
他の者もそれを聞いて応える。話に見るところがあると思ったのだ。
「こちらが動くだけでな。影響がある」
「仕掛けなくてもいいんだな」
「そうだ。向こうがこちらを意識しているのはわかるな」
「ああ」
「それはな」
意識されない筈がない。彼等もそれをわかって話をしちえるのである。
「だからだ。こちらが何か動けばそれで」
「向こうも動くか」
「そういうことだ」
こうしたやり方もあるのだ。仕掛けずとも動けばそれが影響する。大国ならば尚更だ。一国の動向が他の国々に影響を及ぼすということを踏まえたうえでのことである。
「とりあえずエウロパには備えは置いてある」
「そうだな」

「アタチュルク要塞とマラッカ要塞だな」
「その二つだな」
「この二つがあれば充分だろうな」
彼等は言い合う。しかもガンタース要塞群も健在だ。彼等にとっては備えは充分であった。エウロパもこの三重の護りを抜くのは不可能だと考えていた。
「サハラには」
「今あの長官殿が動いておられる」
「八条長官か」
「そうだ」
彼等の中の一人が答える。
「もうな。動いているそうだ」
「相変わらず動きが速いな」
「それだけ勤勉だということだろうな。御苦労なことだ」
「俺にはわからんな」
一人がそれを聞いて笑って述べた。
「あれだけ働き者だというのはな。まあ結構なことだが」
「有能な働き者だな」
また誰かが言った。
「本当にな。そう言うに相応しい」
「俺は無能な怠け者か、じゃあ」
「それならまだいいな」
「いいのか」
「無能な働き者よりはな」
「そういうものか」
戦争ではそう言われることが多い。だがより悪いのは邪悪な働き者であろうか。人を追い落とす為には手段を選ばぬ輩だ。無能な働き者ならばまだ抑える方法がある。邪悪な行動を取り続ける働き者は抹殺しなければならない。さもないと恐ろしい災厄を引き起こすからだ。善良で有能な働き者が最高と言えばそうなる。邪悪で無能

な働き者は自滅する。だが邪悪で有能な働き者は災厄となる。そして善良で無能な働き者は時としてその邪悪で有能な働き者よりも有害となる。政治にしろ何にしろだ。だがエゴイズムのみの邪悪な輩には誰もついて来たりはしない。そうした輩だけで集まるのこそ類は友を呼ぶということである。

「ましだよ」

「じゃあこれからも怠けさせてもらうか」

彼は笑って述べた。

「そういうことならな」

「じゃあまあそうしておけ」

突き放したように言われた。

「好きなようにな」

「そうだな。とは言っても」

「何だ？」

「あの長官殿に何か興味を持ってきたな」

「男なのにか」

八条が同性愛者にも人気があるのを茶化しての言葉であった。長身痩躯で気品のある美貌の持ち主である彼は女性からだけではなく男性からも人気があるのだ。その筋の高校生や中学生からは『お兄様』とすら呼ばれている。美男子はそれだけで災厄を被ったりもするのだ。

「言っておくが俺はその趣味はないぞ」

「ああ、それはわかってるさ」

一応わかったうえでの言葉であった。つまり冗談なのである。

「けれどな」

「ああ」

話は続く。

「何か結構こっちも動いているよな」

「そうだな」

それに頷く声が出て来た。

「何かとな」
「エウロパとの戦争が終わって万々歳と思ったんだがな」
「そうはいかないということだな、現実は」
「やれやれだ」
肩をすくめさせた溜息が誰かの口から出て来た。
「困ったものだ。英雄物語なら戦争に勝って終わりなんだがな」
「実際はそこからだな、話がはじまるのは」
「全くだ」
それが政治であり現実であった。戦争が終わりそこから何があるのか、それが重要なのだ。それがわからずして政治はなく戦争も行うべきではないのだ。軍人に軍人としての限界があるのはそこであるとも言われている。彼等は戦争に関しては専門家である。だが政治には詳しくはない。文民統制化において特にだ。政治への知識や素養も求められる。しかしアドバイスや意見を出すことはできてもさ異臭決定権は文民にある。そこが難しいのだ。連合においては議会が軍人の意見等を聞いてそれを政府の軍事行政に対するチェックの材料にすることでバランスを取っている。さもないと軍人を統括する政府が暴走する怖れがあるからだ。昔は将軍であれば政治に参加することも可能であったが今は違うのだ。軍人と政治家がはっきりと分けられているのが文民統制だ。結果としてそれが軍人の限界というものを顕著にさせてしまっていた。政治も高度化しやはり専門的になっていた。軍人が戦争を行えばそれを終わらせるのは政治家である。外交官である。それをわからずして政治は語れないのだ。

## 第二十三部第二章　権益その十八

「さて、戦争をはじめる前でもそれは同じだが」
「備えも」
「色々とやることがあるな」
また誰かがぼやいた。
「あれこれと次から次へと」
「平和でもな」
「まあそれが世の中ってやつなんだろうな」
達観したような言葉が出て来た。
「何かとな。色々なことがあって」
「そんなものかね」
「面倒だよな」
「面倒だからこそ仕事がある。俺達の仕事がな」
マスコミ関係者らしい言葉もあった。
「そういうものだろ」
「まあそうだ」
「それを飯の種にしているのが俺達だ」
自嘲めかした様子になってきた。かつてはマスコミといえば絶対権力者であったがこの時代では違う。それでもかなり腐敗し易い世界であり尚且つ自浄能力に乏しいのは残念ながら変わりがない。時に二十世紀型の独裁者を彷彿とさせるおぞましい醜悪な怪物が出るのもこの世界の問題点である。その最悪の雛形はやはり二十世紀の日本であった。この時代の日本程マスコミの問題点を語るうえでの格好の材料はない。
「何か卑しいねえ」
「それでも気品を持って仕事をしないとな」
だが少なくともここにいる者達はある程度以上の品性と分別を備えていた。それが救いであった。

「そうだよな。全く」
「エレガントにね」
「そりゃ意味が違う」
冗談に突込みが入った。
「おっと、そうか」
「そうだよ。しかしまあ」
ここで自嘲とも取れる言葉が出て来た。
「俺達ってのは本質はやっぱり卑しいのかね」
「どうかね、それは」
その言葉には少し答えにくいものがあった。
「人の尻追っかけてそれだからな」
「いや、それは違うな」
しかしこれにも異議が出て来た。
「違うのか？」
「違うな。確かにイエローペーパーはそうだが」
イエローペーパーでも良質なものと悪質なものがあるのは言うまでもない。悪質なものになると独裁国家のプロパガンダのようになってしまっている。良質なものはやはりそれなりの品性があるのだ。
「俺達は真実を報道するのが仕事だ」
「ああ」
言うまでもないマスメディアの看板文句だがこれを実行するには非常に困難が伴う。
「嘘を書くのが仕事じゃない」
「嘘しか書かないのもいるがな」
それが問題なのである。マスコミというものは一歩間違えればこの世で最も醜悪な存在になってしまう。そういうことなのである。
「そうだ。そうなってはならない。それに」
「それに？」
「報道の自由はあるが報道の責任もあるな」
「そうだな」

前者は実に都合よく常に引き合いに出されるが後者は実に都合よく忘れられる。日本のとある偉大な学者はこう言い残している。言論の責任を問うては言論の自由は成り立たないと。この言葉を言った人物は共産主義華やかなりし頃は論戦相手にその言葉を言うと革命が起これば御前は革命裁判にかけられるぞと恫喝したこともある。なお彼は民主主義を標榜する学者であった。悪質なブラックユーモアかと思えるような話だが事実である。これこそが共産主義の本質であり戦後の日本の学者や知識人の多くの正体であったのだ。悪いジョークは続くもので彼は一時国会議員でもあった。怪奇現象と言うべきであろうか。

「それを忘れるとな」

「そうだな」

「人の人生を潰しかねないからな」

「それでも今はそれはかなりましになっているだろう」

一人が言った。

## 第二十三部第二章　権益その十九

「何せ今は二十世紀じゃないからな」
「まあな」
「パパラッチもいない」
「タレントのプライベートを暴く蛮人もいない」
蛮人とはその暮らしによってなるものではない。その人物の生き方によって決まるのだ。その蛮人の格好の例が二十世紀末期の日本のある美食漫画にある。この漫画での主人公がまさにそれだ。マスコミという国家権力をも凌駕しかねない権力をバックに蛮行の限りを働いている。これこそが真の意味での蛮人なのだ。戦後の日本というのは非常に不可思議な世界でありこうした蛮人や前記の全体主義者が『良識派』とされていた。卑劣漢が良識派の仮面を被り悪事を働くのはよくあることだ。だが蛮人が良識派ともてはやされるというのはやはり異常なのである。実に戦後の日本はそうしたことを学ぶには格好の材料である。
「いることはいるがすぐに罰せられる」
「まあ二十世紀よりはずっとましだな」
「それはな」
認められるものであった。
「しかしだ」
ここで注釈が入った。
「ナベツーラ一派の例もあるしな」
サラーフを滅亡に追いやった愚か者達の話はここでも残っている。
「用心しておこう」
「それはな」
「以って他山の石とすべきということか」
「そういうことだ」
結論が出された。

「やはり俺達は腐敗し易い世界なんだ」
マスコミの世界は人は少なく済み情報が集まりそれを動かすことができる。権力も富も集まりやすい。そして秘密主義になることも実に可能だ。情報を独占できるからだ。これで腐敗しない筈がないのだ。社会の木鐸こそが最も腐りやすいのだ。
「それを肝に命じてな」
「これからも仕事をしていくか」
「そうだな」
「幾ら何でもナベツーラみたいにはならないと思うがな」
「いや、それはわからない」
それにも忠告が入る。
「あいつも人間なんだからな」
「そうか」
皆その言葉を聞いて苦い顔になった。薬を飲んだわけでもないのに。
「同じ人間なんだよ」
「人間として最低最悪な連中だったがな」
「それでも同じ人間か」
「そうだ」
言葉が実に苦い。
「だからだ。ああならないようにいつも気をつけていこう」
「わかった」
皆苦い顔のままそれに頷いた。
「じゃあそういうことでな。しかしな」
「俺達ってのは何かと因果な商売だな」
「まあ色々とあるのは事実だな」
そう結論が出された。
「それは忘れないでいこうぜ」
「わかった」
「とりあえずは今度は」

「御前は何処に行くんだ？」
「サハラとの国境に行きたいな。上にその話をしてみる」
「というと」
「あの王子様のところさ」
言うまでもなく八条のところである。彼は気品と美貌で王子と呼ばれることもあるのである。ここでもやはり同性愛者の羨望が混じっている。彼にとっては迷惑であろうが。
「何をするか楽しみだ」
「そこにか」
「きっと凄いものを作ってくれているぜ」
彼は笑いながら述べた。
「それを期待しているんだ、実はな」
「けれどよ」
しかしここで先程の話と同じ忠告が彼に出された。
「わかってると思うが」
「ああ、わかってるさ」
彼はそれに応える。
「嘘は書かないよ。ありのまま書く」
「そういうことだ。わかってるじゃないか」
「俺にだって恥の心はあるんだよ」
戦後の日本のマスコミに最もないものの一つであった。他には責任感もなかったがこの恥の概念がないのが恐ろしいことであったのだ。恥知らずはどんな悪事でもするからである。
「それに従うさ」
「よし」
「じゃあ期待しているぞ」
仲間達は口々に言う。
「御前の報道をな」
「ああ、任せておけ」
啖呵を切ってきた。

「やってやるからよ」
「言ったな」
「その言葉忘れるなよ」
次々に言葉がかけられる。
「ああ、だからよ」
「よし、飲め」
「どんどんな」
「おう」
彼は笑顔でその杯を受けた。彼等もまた戦っていたのである。報道の責任ということに対して。それは良心との戦いであった。だからこそ辛い戦いなのである。

# 第二十三部第三章　長城その一

長城

八条はサハラとの国境に向かっていた。今回はごく普通の政府専用船である。
「まああれですね」
彼はその船の一室にいた。質素な内装の中にいる。
「ティアマト級は確かに凄いですが」
「物々しいですな、あれも」
「そうなのですよ」
苦笑いをして周りの者に応えた。制服組も背広組もそこにいる。
「あまりにも巨大で」
「確かに」
「あの大きさはかなり」
皆その言葉に頷く。
「戦場においては無類の強さを発揮するのですが」
「はい」
それは設計、開発を命じた八条本人も認めるところであった。
「先の戦争では撃沈は一隻もありませんでしたからね」
「ええ」
背広組の一人がその言葉に応えた。
「驚きました、あれには」
「いえ」
しかし八条はそれには驚くに値しないといった顔を見せてきた。
「それが普通でしょう」
「そうでしょうか」
「はい、あの巨大戦艦の防御力はこれまでにないものです」
彼は述べる。
「少なくともエウロパの艦艇の攻撃は受け付けません」

「エウロパの」
「そうです。ですから当然の結果なのです」
「そうなのですか」
それを聞いてその軍人は感嘆するしかなかった。沈まない艦艇なぞないと思っていたからである。だがそれを察した八条はまた言ってきた。
「しかしですね」
「何か？」
「沈まない艦艇なぞこの世には存在しません」
彼は今それをはっきりと言った。
「かつて不沈戦艦と呼ばれた艦艇は多く存在しました。しかし」
「いずれも沈んだ」
「そういうことです」
第二次世界大戦のプリンス＝オブ＝ウェールズ然り大和然りだ。これ等の戦艦は航空機の攻撃により沈んだ。だが他の方法でも沈めることは可能だった。形あるものはいずれ潰えるのが世のさだめである。だからこそ沈まない軍艦も存在しないのである。
「ですからティアマト級にしろ」
「沈むのですね」
「それは念頭に置いて運用して下さい」
「わかりました」
軍人はその言葉に頷いてみせた。
「それではそのように」
「はい」
「それでですね」
話は移った。
「これからの建造計画ですが」
「ええ」
建造計画は常に存在する。それの責任者は言うまでもなく防衛長官である八条であり彼はその方面でも多忙な立場なのであった。

「まずは新たに増員した一千個艦隊の分はすぐに整いました」
「それは何よりです」
八条は背広組の一人の言葉にまずは満足した笑みを浮かべてきた。
「しかしですね」
「しかし？」
「もう一つは少し」
その官僚は難色をそのまま顔に見せてきた。
「難航しております」
「そうなのですか」
「やはり開発にかなりの困難が伴っております」
「ふむ」
八条はそれを聞いてその目の光を微妙に変えてきた。

## 第二十三部第三章　長城その二

「規模がティアマト級よりも遥かに巨大ですし。それに」
「それに？」
「装備等の開発もまた。かなり苦労しております」
「難しいですか」
「一応進んでいることは進んでいますが」
官僚は述べた。
「ですが遅れていることもまた事実です」
「わかりました」
八条はそれを聞いてまずは頷いた。
「ではスタッフに伝えておいて下さい」
「何と」
「遅れてもいいです。ですが慎重に話を進めていって欲しいと」
「慎重に、ですか」
「そうです。焦る必要はありません」
彼は述べた。
「じっくりとやって頂いていいですから」
「わかりました。では彼等にそう伝えます」
「ただし」
しかし八条はここで付け加えてきた。
「何か」
「設計及び開発に関して注意して頂くことが」
「それは一体」
「幾つかあります」
彼は述べてきた。
「まずは設計での余裕」
兵器の開発ではそこに幾分かの余裕を持たせるのが基本であると言われている。それは後の改良や装備の補充がしやすいからである。

兵器は常に改良されるおのだ。連合軍の兵器はそれをかなり重視しているのである。これも八条の考えである。
「そして量産性」
「それですね」
これもまた重要である。兵器は多量に造られる。それで量産性がなくては全く話にもならない。そういうことなのである。これもまた基本である。
「最後に整備性」
八条の指摘は基本的なものであったがだからこそ重要なものであった。彼はそうしたところを全て冷静に見て指摘してきているのである。
この三つが兵器の開発には不可欠の重要要素である。無理に詰め込んだり性能だけを追い求めていいものではないのだ。この三つが合わさってそこに性能も加わってようやく優れた兵器になるのだ。八条はそうした総合面を考えて兵器開発を命じているのである。
「それ等ですね」
「はい、わかっております」
官僚達からも軍人達からも返事が返って来た。
「それは常に」
「念頭に入れてあります」
「ただ」
「ただ？」
その中の一人の言葉に顔を向けた。
「今度はあまりにも巨大なので汎用性が乏しい面が幾つか見られます」
そう述べたのが軍人であった。階級は中将であった。
「やはりそうですか」
「残念ながら」
彼は答えた。
「ですが数十隻しか建造されないので」

「大丈夫ですか」
「はい。しかしまた途方もない巨大な艦艇になりますね」
「それもまたいいのです」
八条はこう答えた。
「威圧感があり」
「威圧感ですか」
「ティアマト級巨大戦艦もそうでしたね」
彼はまた巨大戦艦を話に出してきた。やはり連合軍と言えばこれなのであろうか。
「大きいとやはりそれがありますから」
「では今回も」
「そうです」
彼は答えた。
「それもまた考慮してもらいたいのです」
「わかりました。しかし」
「しかし？」
「まるで要塞が動き回っているようですな」
軍人の一人が感嘆めいた言葉を述べた。
「これが建造されると」
「ティアマト級もかなり巨大でしたが」
また言葉が出て来た。今度も軍人からであった。
「これはさらにですからな」
「巨大でなければなりませんしね」
八条は述べた。
「今も述べさせて頂きましたがい相手に与えるプレッシャーという意味でも」
「プレッシャーですか」
「はい、それが大事ですからね」
彼は言う。
「先のエウロパとの戦いでもエウロパ軍に我が軍の艦艇や陸上兵器

の大きさはかなりの心理的衝撃になっていたそうですね」
「はい、それは」
青いスーツの官僚が述べてきた。

## 第二十三部第三章　長城その三

「既に調査報告があがってきております」
「そうですか」
「はい、後で詳しい資料をお渡ししますが」
彼は言う。
「長官の御言葉通りです。彼等は我が軍の兵器の大きさにかなりの精神的負担を感じていました」
「やはり」
「そして数にも」
「それは捕虜達を調べてのことですね」
「はい」
青いスーツの男は答えた。
「その通りです」
「自白剤を使って」
「成程」
この時代の自白剤は副作用がない。だから人道的批判を気にすることなく使用できるのである。これが軍関係者には大きな脅威となっているのは言うまでもない。今回は連合軍がそれで利益を得たが言うまでもなく一歩間違えれば彼等が被害を被ってしまうのである。
「それは間違いありません」
エウロパ軍の捕虜達は停戦と共に返されている。これは連合軍の捕虜に対しても同じである。エウロパ軍の捕虜の数はかなり多く戦死者よりも多い程であった。
「そうだったのですか」
「大きい兵器であることと数に」
「数はね」
言うまでもないことであった。戦争は数だ。八条はそれをよくわかっていた。

「彼等に対して最初から圧倒していました」
「はい」
「これも彼等に対してかなりのプレッシャーを与えていたと思いますが」
「それもありました」
予想通りであった。エウロパ軍は連合軍の数に大きなプレッシャーを受けていたのである。やはり数の差は大きいのである。それがはっきりと出ていたのだ。
「ふむ、やはり」
「それでですね」
青いスーツの男は言葉を続ける。
「ここの戦闘ではその大きさにプレッシャーを受けていました」
「いいことです」
八条はそれを聞いて満足した笑みを浮かべていた。
「剣を交える以前からそうした心理的負担を与えているならば。勝利に直結しますからね」
「そういうことですね」
「ただ」
「ただ？」
ここで八条はふと呟いてきた。青いスーツの男だけではなく他の面々も彼の言葉に顔を向けたのであった。それは何故であろうか。
「いえ。その割には彼等は勇敢だったと」
「それは確かに」
連合軍はエウロパ軍の勇敢さに驚いていたのである。彼等はどれだけ不利な状況でも果敢に戦い市民達を守り抜こうとした。その勇敢さは彼等も目の当たりにしていたのである。
「あの勇敢さは恐ろしいまででした」
軍人の一人が述べた。彼は少将であった。
「我々は何倍もの数で攻め込んでいましたが」
「ええ」

「一歩も引かず戦っていたのですから。クロノスにおいても」
「そのようですね」
「実に粘り強かったです。少なくともそれは」
「騎士であったと」
「はい」
彼は答えた。今まで連合ではエウロパ貴族に対する見方は特権に胡坐をかく無能な輩達でしかなかった。だがその見方が誤りであることをその戦いで以って教えたのである。エウロパ貴族達は誇り高い騎士であり貴族達であった。恥ずべき行いをした者達はほぼいなかったのだ。
「見事な騎士でした」
「ですね」
それは八条も見ている。モントローズ要塞での会談で。
「あれは確かに見事でした。敵の艦艇に乗り込んで」
「モンサルヴァートエウロパ元帥ですね」
「そうです」
官僚の一人の言葉に答えた。
「まさかとは思いましたが。あそこまで毅然としているとは」
あの時はあえて自軍の艦艇に入れてその威容を誇示させることも目的だったのだ。だがモンサルヴァートも他の者達もそれに全く臆してはいなかったのである。そのことが八条をしてもかなりの衝撃であったのだ。少なくとも彼もまたエウロパを侮る気持ちはなかった。

## 第二十三部第三章　長城その四

「思いませんでした」
「そうです」
「だからこそ彼等には備えが必要です」
「アタチュルク要塞」
八条はその名を口にした。
「それですね」
「はい」
「今あの要塞は要塞群に強化されようとしています」
少将が述べた。
「全ての惑星を要塞化し」
「衛星もまた。それとリンクする形で」
「つまりガンタースと同じになるのですね」
八条は軍人達の言葉を聞いて述べた。
「ということは」
「そう言われればそうですね」
「否定はしません」
軍人達もそれに応えた。否定するつもりもないようであった。
「つまり二つの要塞群で守りとします。その間には中継基地も置き」
ブラウベルグ回廊からその名を変えたマラッカ回廊において。そうした三重の備えで以って宿敵エウロパに対する備えとしているのである。
「何としても防ぎます」
「難攻不落の要塞群が二つ」
八条はそうした話を聞いたうえで述べた。
「まずは大丈夫ですね」
「そう思います」
「無論油断は禁物ですが」

軍人達は次々に述べた。
「勇敢で誇り高いエウロパ貴族達には。万全を以って挑みましょう」
「そうですね。そしてそれは」
八条は話題をスライドさせてきた。それがこの時であった。
「サハラの戦士達に対しても」
「はい」
皆その言葉に頷いた。
「だからこそ我々は今国境に向かっているのですからな」
「そうです。サハラの戦士達は精悍と聞いています。いえ、それは」
八条はここで言葉を変えてきた。目の光も強くなっていた。
「義勇軍を見ればわかりますね」
「彼等は死を恐れません」
それが大きかった。戦死すれば無条件で天国へ行くことができる。ジハードの思想が彼等をして死を恐れないようにしているのであった。これが非常に大きかった。
「エウロパ貴族達とはまた違った勇敢さです」
「はい、確かに」
八条はその言葉にこくりと頷いた。
「宗教的な誇りですから」
「それもまた強固なものです」
「エウロパのそれはノブレス＝オブリージュですね」
八条が今言った言葉は『高貴なる者の務め』である。エウロパ貴族達の思想のバックボーンであり彼等はこれを胸に抱いて戦っているのである。
「ですがサハラは」
「ジハードです」
「そうです。だからこそ死を恐れない」
「こちらからは仕掛けなくとも脅威ですね」
青いスーツの男が述べてきた。
「それに対してどうするかです」

「だからこそ今こうして国境に向かっているのですしね」
八条は言う。
「彼等との有事の際の備えとして」
「有事ですか」
「どの勢力とも有事の可能性はあります」
他には内乱の可能性も。あらゆる最悪のケースを想定して備えておくのが国防というものである。だからこそ八条は今サハラに対してもその備えを考えているのである。
「サハラともまた」
「ハサン、オムダーマン、ティムール」
ダークブラウンのスーツの男が呟いた。

## 第二十三部第三章　長城その五

「どの国が統一しても」
「そうです。可能性は皆無ではありません」
「むしろ今までなかった方が奇跡だったのでしょうかね」
中将が述べてきた。
「連合一千年の歴史において」
「エウロパに関してはガンタースがありましたし」
まずはこれでエウロパを防いでいた。
「マウリアとは友好関係を保ち続けていてサハラは」
「内部で争い続けてきたので」
「だからこれといって考える必要はなかったのです。互いに交戦権のない各国軍があるだけでしたし」
それが中央軍設立前の連合の様子であった。彼等は至って平和に開発と繁栄を享受していたのである。幸運と言えば幸運な立場であった。
「ですがね。備えを怠っていたのは事実です」
「そうです」
「それで今」
官僚達も軍人達も言う。
「サハラに対する備えを」
「はい。ただ」
「ただ？」
「今度は要塞はそぐわないかと」
これは軍人達の意見であった。
「国境のラインは広く高いです。ですから」
「要塞では通過さえるということですね」
「はい、ですから他の方法で行くべきであると考えます」
「如何でしょうか」

「確かに」
これには八条も頷いた。要塞では広い防衛ラインである場合突破されてしまう怖れが充分にある。軍人達はそれを危惧しているのである。
「その通りです。ではここは」
「はい」
「エウロパへの備えとはまた別のものにするべきかと」
「わかりました」
まずはその言葉に応えて頷いた。
「ではまずは視察してから」
「ええ」
「それから決められてよいかと」
「そうですね」
話はさらに進む。
「まずは視察から」
「それからどうするか決められるべきかと」
「わかりました。ですが既に考えはあります」
「それは一体」
軍人達だけでなく官僚達も八条のその言葉を受けて顔を向けてきた。八条が決定権者である以上その発言が決め手となるのは言うまでもないからだ。
「長城です」
「長城！？」
「そうです」
八条は答えてきた。
「それを考えています」
「といいますとあれですか」
青いスーツの男が言ってきた。
「万里の長城ですね」
「ああ、あれか」

ダークブラウンのスーツの男がそれを聞いて顔を向けてきた。
「かつて中国にあったあれだな」
今でも地球に残っている。完全に観光になってしまっているがかつては外敵を防ぐ為のものであった。中国人にとっては特別な存在でありこれを以って境としていた。中国の領域は万里の長城より南でありそれから北は化外の土地であると考えられてきたのだ。だからそれより北で何があろうと構わないのである。これは中国史を考えるうえで非常に重要である。漢民族はそれより北には関心がない。満州もである。日本が満州に進出した時中華民国が強い抗議をしなかったのはこれである。自分達の土地とは思っていなかったからである。
「あれを築かれるのですか」
「無論そのままではありませんが」
八条はまた断りを入れてきた。

## 第二十三部第三章　長城その六

「それを考えています」
「ふむ」
「それでサハラへの備えとしますか」
「どうでしょうか」
彼は周りの者達に問うてきた。
「それでは」
「そうですな」
中将が口を開いてきた。
「悪くはないと思います。むしろ宜しいかと」
「ですな」
少将も述べてきた。
「それで境であるということを彼等にも認識してもらう為にもそれがよいかと」
「境か」
ダークブラウンのスーツの男はそれを聞いて考える目を見せてきた。
「そういえば境は今まではそこまではっきりと決められていませんでしたな」
「少なくとも備えはなかった」
青いスーツの男も言った。
「無防備と言っていいもので警備隊がパトロールしている程度でした」
「そうでしたね」
八条もそれを知っている。だからこそ頷く。
「パスポートを提示され。難民のチェック等」
実におおらかなものだったのである。それはサハラとの武力衝突の可能性がほぼ存在せずサハラ側もっこれといって動きを見せてこ

なかったからである。だが今それを変えようとしているのだ。
「その程度でした」
「そうです」
「しかしこれからは違うのですな」
「備えとはっきりしたものという意味で」
八条は今それをはっきりと言った。
「置きたいと思います」
「その為にも今こうして」
周りの者達は述べる。
「向かっているのですからな」
「そうです。しかし」
だがまだ話は続く。八条の考えも巡らされていく。
「防衛ラインが長いと。守るべきものも多くなります」
「はい」
「予算で問題が出るかも知れませんな」
「その問題もね」
八条は少し息を吐き出した。
「頭が痛い話です、実に」
「全くです」
青いスーツの男が言う。
「財務省は吝嗇で。困ったものです」
「そういえばまた国防費を減らそうという案が出ていたな」
ダークブラウンのスーツの男は彼の言葉を聞いてふと思い出した。
「財務省の若手スタッフの間で」
「そうだ。その分を教育費に充てるべきだと」
「今でも充分だろう？」
ダークブラウンの男はそれを聞いて口を尖らせてきた。
「教育費も他も」
「予算に充分というものはありませんよ」
八条は苦笑いを浮かべて述べてきた。

「何処も常に予算不足です」
「そうなのですかね」
「あるだけ使いたくなるのが人間ですから」
彼は述べる。確かにその通りである。予算が多ければ多い程人は色々なことをしたがりその内容も充実させたくなるものである。それは連合中央政府国防省も同じなのである。
「むしろですね」
「ええ」
皆また八条の言葉に顔を向けてきた。
「国防省は予算が充分ではないかと」
「そうでしょうか」
少将がそれに顔を顰めさせて異議を呈してきた。
「私はそうは思いませんが」
「そうなのですか」
「かなりハードな予算編成かと」
「全くです」
青いスーツの男も述べてきた。彼も顔を顰めさせている。
「おかげで毎度毎度何をするにしろ苦労のしっぱなしですが」
「そうでしょうかね」
しかし八条は彼等の話にどうも懐疑的な様子であった。
「私はそうは思いませんが」
「そうですか！？」
皆それにはかなり懐疑的な顔を見せてきた。八条のそれ以上にである。
「ええ。日本はもっと予算が少なかったですし」
彼は答える。
「現場もまた。ですから」
「日本軍は予算不足だったのですか」
「はい」
八条は彼等に答える。

「そうです。他に予算がかなり回されていました」
「しかし日本軍といえば」
中将が言ってきた。
「連合では精鋭だった筈ですが」
「それもかなり」
「上に少数が抜けていますよ」
八条の顔が苦笑いになっていた。その通りなのである。日本軍は少数精鋭を以って成る軍隊であったのだ。これは聞こえはいいが実は多くの問題をオブラートに包み込んでいるのである。

## 第二十三部第三章　長城その七

「残念ですが」
「といいますと」
彼等もそれを察していた。だからこそ問う。
「人が少ないので。予算もかなり意図的に減らされるのですよ」
彼は述べた。
「そのせいでね。かなり予算では困っていました」
「成程」
「そうだったのですか」
意外な日本軍の内幕であった。誰も知らないような話であった。
「予算不足はね。深刻なもので」
「そういえば何か聞いたことがあるような」
青いスーツの男が述べてきた。
「日本軍はやり繰りに苦労していると」
「そうだったのですよ」
苦笑いをして彼に応える。
「全くね。何かと」
「そういえば長官は経補担当でしたね」
中将が言ってきた。
「ならば余計に」
「とにかく部隊や艦艇ごとの予算が深刻でした」
それを認めてきた。真実であるのがよくわかる。
「やっていけるのかどうかというレベルで」
「はあ」
「実際やっていけるのが奇跡でした。とにかく苦労しました」
「ですか」
「それを考えれば。今は」
「かなりましですか」

「ましです」
身も蓋もない言葉であった。だからこそ説得力がある。
「本当に今の国防省はいいですよ。予算面では」
「だからですか」２２
ダークブラウンのスーツの男はそこまで聞いて述べた。
「今の予算割当てで長官がそつなくこなしておられるのは」
「まあそうかと」
自分でそれを述べる。
「かなりあるというのが私の認識ですから」
「成程」
「しかしですね」
彼はまた言う。
「それだけの予算を獲得するのは一苦労ですね」
「それは確かに」
「全くです」
皆それに頷く。実際どの国でも予算の割り当ては難しい、頭の痛い話なのだ。特に支出だけで歳入のない軍事費に関してはそうである。これは連合中央政府においてはかなり顕著である。一千年の平和の弊害とも言えるものであった。
「予算がないと何もできないのに」
八条は少し嘆息した。
「それの獲得にまず苦労するとは」
「予算ですね、本当に」
「全くです」
周りのスタッフの言葉に応える。
「今回の防衛計画も」
「どうなるでしょうかね」
「こちらとしては何としても予算が欲しいものです」
八条は本音を述べてきた。
「さもないと有事には」

「それを言えば通るのでは？」
少将が多少楽観的な意見を述べてきた。
「有事と言えば」
「いや、それはないでしょう」
青いスーツの男がそれを否定した。
「ないか」
「それですんなりと話を通してくれる程うちの財務省は甘くはないですよ」
「そうか」
「残念ながらそうです」
それを八条が認めてきた。彼が言うのならば本物であった。
「財務省としては教育に予算を入れたいそうで」
「文部省との話の兼ね合いでしょうか」
「ですね」
八条は少将に答えた。
「今予算をかなり使っています」
「何に使うのでしょうか」
「学校の大幅な増加と援助の教化のようです」
「ああ」
この言葉を聞いて何人かはピンときたようであった。それで納得したように頷いた。
「成程」
「あれですか」
「はい、人口が増えていますので」
八条は答えた。
「その関係です」
「ううむ」
「では仕方ないですな」
「予算の獲得がかなり厳しくなりそうですな」
「ですね」

八条はまた答えた。
「それもかなりです」
「困った」
青い男は残念そうに述べた。
「流石に学校はなくてはなりませんから」
「その通りです。それならば」
軍人達もこう言うしかなかった。
「ですが」
それでもこうも言うしかなかった。彼等の立場から。
「それでも国境は」
「その通りです」
口々に言葉を続ける。彼等も国を守らなくてはならないのだ。
「中々厄介な問題になりそうですね」
そして八条もなのだ。とにかく複雑に事情が絡み合っている。これが政治というものであるのだが。
彼は言う。スタッフ達もそれに顔を向ける。
「一応軍事費は戦費の分はクリアーされています」
「はい」
「まずはそれが幸いです」
彼等は述べる。エウロパとの講和の際の所謂賠償金でそれが足りているのである。そのことがかなり大きいと言えるのである。これがまず幸運であった。
「しかしですね」
だがダークブラウンの男は言葉を付け加えてきた。

## 第二十三部第三章　長城その八

「それを向こうも交渉材料にする可能性も」
「それです」
他の者もそれに続く。
「交渉の際はそれに気をつけないと」
「まずいことになりかねません」
「ええ」
それは八条もわかっている。だからこそ頷いた。
「その通りです。それにしても」
「中々軍には予算が回りませんね」
「あれでもかなり回してるつもりなのですよ、財務省としては」
「そうなのですか」
「はい、彼等にしてみれば」
それでも皆八条のその言葉に納得しかねていた。他人と当人ではわかることとわからないことがあるのである。これは予算等になると特に顕著になる。今回がまさにそれであった。
「唯でさえ我々はさらに兵力を増員します」
「九十億から百三十億に」
「それにシステムの拡充、艦艇の増強、新型艦の開発」
行われることは実に多い。ということはそれだけ予算が必要だということでもある。
「そして今回のことです」
「財務省にしては困った話ですか」
「そうなります」
財務省から見ればそうなるのだ。立場が違うと見方も変わる。
「彼等にしてみれば教育や福祉に予算を回したいのです」
「後は惑星開発ですな」
「惑星開発は後で跳ね返ってきます」

これが大きいのだ。後で歳入が期待できる。そうなれば誰もが予算を投入したくなるものだ。
教育と福祉は歳入はないが長期的に見ればこれも必要なのである。もっとも惑星開発にしろこの二つにしろどちらも利権もあり生臭い話もある。だが連合の考えとしてやはり軍事費よりはこちらに回したいとするものがあるのだ。ここもまた複雑なものがあった。
「そちらにより予算を」
「困ったものです」
中将が呻くようにして述べた。
「軍事も必要なのですがね」
「ですから最小限に」
青いスーツの男が付け加えてきた。
「財務省としてはこうしたいのでしょう」
「必要最小限か」
「そうです」
「それで話は済まないのだが」
「何とか予算は獲得しましょう」
八条が述べてきた。
「さもないと何もできはしないですから」
「ですね」
「お願いします、そちらは」
「はい。それでですね」
話は辛気臭い方向から少しは明るい方向に向かうことになった。
「サハラはどう見ているのでしょうか」
「この件に関してですか」
「そうです」
彼は応えた。
「防衛ラインを目の前に築かれてやはりいい気はしてはいないと思うのですが」
「それがですね」

少将がそれに答えてきた。
「ええ」
「別に何も思ってはいないようです」
「そうなのですか」
「というよりは」
ここで言葉を変えてきた。
「それどころではないようです」
「中の方が大事ですか」
「間も無く戦乱ですので」
誰の目にも明らかであった。サハラで大きな戦争が起こるのが。
当事者達がそれから目を離していないということなぞは有り得なかったのだ。

## 第二十三部第三章　長城その九

「そちらに関心が集中しています」
「ふむ」
「ハサンもまた同じです」
連合と国境を接している国はハサンである。元々ハサンは連合とは友好関係にありその国境には兵は少なかったが今はとりわけ少ないのである。
「ですから」
「そちらの心配はないと」
「そうです」
彼は述べる。
「ですからそちらに関してましては」
「わかりました。それでは配慮はしますが」
「極端なものでなくてよいかと」
「しかしです」
八条はここで言葉を付け加えさせてきた。
「何か？」
「ハサンがこのまま残ればそれで問題はありませんが」
彼はこれからのことにも目を向けていた。元々この防衛ラインは一時的なものではない。永続的なものである。従って長期的な見方をしているのである。
「若しハサンが敗れれば」
「国境を接する相手が変わると」
「そうです」
答えてきた。
「それも考えていきたいですね」
「相手の兵器の種類も考えてですか」
「そういうことです。やはり三国でそれぞれ傾向が違いますね」

「そうですね、サハラといえば機動力中心ですが」
青いスーツの男がそれに応えて述べてきた。
「やはりそれだけではありません」
「それに加えてそれぞれの個性があるのですね」
「そうです」
青いスーツの男はまた述べる。
「それが中々面白いと言えば面白いのですが」
「そうですか。具体的にはどんな感じですか？」
「まずハサンは諜報能力が高いです」
最初に出されたのはハサンに関してであった。
「その為ビジョンが広い戦術が多いです」
「ふむ」
「そしてオムダーマンはさらに機動力が高く」
「最後のティムールは」
「攻撃力です」
彼は述べた。
「おおむねそうした傾向にあります」
「そうなのですか」
「少なくとも機動力に関しては我々よりも遥かに上です」
「三国共」
これは事実であった。連合軍の艦艇の機動力の遅さはとりわけ機動力を重視しているサハラ各国の艦艇と比べるとかなり落ちる。小回りという点でも大型の割にはいいと言ってもいいがそれでも同じタイプの艦艇、例えば駆逐艦と駆逐艦では大きな差がある。これはサイズも大きく関係していた。そもそも連合軍の艦艇は単独行動を意図してはいないのである。あくまで集団戦闘を考えているのである。
「はい、特にオムダーマンは」
「わかりました」
八条はそれを聞いて了承した。

実は連合の兵器はそもそもが機動力を犠牲にした設計なのである。大型で居住性に今後の武装増加や開発の為の余裕があり攻撃力と防御力、そして電子能力を追求している。その為機動力はかなり犠牲にしているのである。エウロパとの戦いにおいても速度では負けていたのである。それで迂回攻撃を許さなかったのはその索敵能力の高さ故であった。そうしたことを全て踏まえての設計であったのだ。

## 第二十三部第三章　長城その十

「つまりは馬ですね」
「馬ですか」
「そうです」
彼は述べる。
「彼等は馬、騎兵です。それに対して我々は」
「歩兵であると」
「そうです。重装歩兵ですね、簡単に言うならば」
「重装歩兵ですか」
「言われてみれば確かに」
これには多いに納得できるものがあった。皆その言葉を聞いて納得したように頷いている。
「そして重装騎兵に」
「つまりは」
中将が言ってきた。
「全てにおいて攻撃力と防御力が特化していると」
「それを念頭に置いて開発しましたしね」
「ええ」
「全ては将兵の安全の為に」
連合の兵器の特徴は他にもありその生存能力、ダメージコントロールの高さだ。それはエウロパとの戦いにおいても非情に少ない損害率となって出ていたのである。
「サハラ各国はそれはあまり考えていないですか」
「当然考えていないわけではないでしょう」
青い男が述べてきた。
「将兵とて湧き出るものではないのですから」
「そうですね」
今時それがわからないのは一部の愚か者達だけであった。資源に

は限りがある。人材もまた然りだ。だからこそ連合も将兵の数を揃えるのに苦労しているのである。こうした現実があるからこそよくわかるのであった。
「しかし我々程ではないのですね」
「そうです」
青い男はまた答えた。
「そういうことです。ですから」
「機動力にその分を回していると」
「そういうことになります」
「ですか。それならば」
そこまで聞いて八条の頭の中に何かが宿った。
「考えがあります」
「それは一体」
「はい、まずは現場へ向かいましょう」
彼は言ってきた。
「それからです、話を進めるのは」
「では」
「肝心なのは現地に沿ったものですからね」
それが重要不可欠であるのはどの時代でもだ。現場に適応した防衛ラインでなければ守れない。海の上に城壁を築いても何にもならないのと同じだ。海の上に城壁を築いたとする。確かに海の上を行く艦艇には有効かも知れない。現実性はともかくその行く手を阻むことはできるだろう。だが海中の相手に対しては効果が期待できない。それをするならば海中にも城壁を築かなければならない。実際にはそういう相手には機雷を撒いていた。ケースバイケースで言うならば城壁よりもこちらの方が遥かに効果的であるし実際にそうされてきた。何ごとも現場に適応していなければどうにもならないのだ。
「そういうことで」
「はい、では」

「それまでは宙図を見て考えていきましょう」
こう述べてきた。
「それで宜しいでしょうか」
「ええ」
「それでは」
周りの者達も頷いた。こうして彼等は国境に向かうのであった。

## 第二十三部第三章　長城その十一

連合とサハラの国境は比較的穏やかどころではない。国境とは思えない程のんびりとしている。連合軍の警備隊も穏やかな警戒態勢しか敷いてはいない。パトロール艦は始終出ているが彼等のそのパトロールも呑気なものだった。何もないと信じきっているのだ。
「今日も何もなしだな」
そんなパトロール艦の一隻で艦長がぽつりと呟いていた。
「平和なものだ」
「全くです」
それに副長が応える。
「エウロパとの戦いを思えば」
「あの時はな」
艦長はそれに応えて述べた。
「大変だったな、後方も」
「何が起こるかわかりませんでしたからね」
「ああ」
副長の言葉に頷く。
「ゲリラ戦術も心配したな」
「住民の蜂起も」
「結局どちらも殆どなかったがな」
彼等にとってはそれは幸いであった。何時何処から襲われるのかわからないということこそが戦争においては最も恐ろしいことだからである。
「それでも心配したものだ」
「はい」
実際に起こらないにこしたことはない。だがそれを警戒するのは当然である。世の中というものは何が起こるかわかりはしない。特に戦争というものはそうである。そして軍人というものは最悪の事

態を予想して行動しなければならないものなのである。
「杞憂に終わったがな」
「それは運がよかったと言うべきでしょうね」
副長の考えはこうであった。
「何もないことが」
「そうだな」
艦長もその言葉には頷いた。
「その通りだ。エウロパがそのような戦術を採らず市民にも軽挙な行動を許さなかったから」
「助かりました」
ゲリラ戦術は確かに敵軍に心理的なダメージを与えていく。しかしそれは一般市民への無差別攻撃にもつながってしまう。ゲリラが市民の中にいるならば市民を攻撃してでも彼等を排除しなければならないと考えられてしまうからだ。エウロパ軍はそれがわかっていたからこそそうした行動を許さなかったのである。これは彼等の英断と言えた。結果として連合とエウロパの戦争は軍人同士だけの綺麗な戦争で済んだからである。
「おかげで」
「そうなるばかりではないしな」
「ええ」
副長は頷いた。
「残念ながら」
「できれば綺麗な戦争をしたい」
これは艦長の本音であった。
「全くです」
それに副長も賛同する。
「さもないと陰惨なことになります」
「それは避けたいからな」
「ですね。あの戦争はそれが避けられて何よりです」
「そうだったな。それを思うと今は」

「平穏なものです」
「しかしだ」
ここで艦長は言ってきた。
「ここに防衛ラインを築くそうだな」
「そうなのですか」
「うむ、あらたにな」
彼は述べた。
「防衛ラインですか」
それを聞いた航海長が艦長と副長に声をかけてきた。声はかけても顔は正面のモニターを見ている。目を離すと艦長にどやされるのである。艦の運用も大変なのだ。
「そうだ。それがどうかしたのか？」
「既にあることはありますね」
「一応はな」
艦長もそれに答える。
「だが」
「ええ。古いものですしね」
航海長は答えた。彼等の会話は事実である。今サハラとの国境に置かれている防衛施設はどれも中央軍が設立される前のものであり古いものだ。それに各国で築いたものなので今一つ整合性がないのである。そうした問題点があるのだ。そこが問題なのである。
「やはりここは」
「一環したものが欲しいな」
「難民がまた来ますかね」
今度口を開いたのは船務長であった。
「かつてのエウロパの侵略の時のように」
「それはないだろうな」
艦長は彼に答えた。
「あれはエウロパが彼等を追い出したからだったしな」
「確かに」

「だからそれはない。むしろだ」
「むしろ？」
「ここまで戦争が及んで巻き添えは受けたくはないな」
「それですか」
士官達は艦長の言葉に顔を向けさせてきた。あらゆるケースが考えられるしそれへの対処をしなければならない。そうなるとここでの戦闘もまた予想されるのである。
「それに将来も」
「はい、それもあります」
今度応えたのは副長であった。

## 第二十三部第三章　長城その十二

「サハラが統一されれば」
「力が内にいかなくなるからな」
ここが重要なのである。内で戦争していたのがなくなればどうなるか。その力が外に向かうのではないのか、彼等はそれを危惧しているのである。
「エウロパと対立するのが一番ありそうですが」
「幾ら何でも我々とは可能性は少ないでしょう」
航海長はそう見ていた。
「皆無ではないにしろ」
「皆無ではないにしろ脅威になる」
これが大きいのだ。皆無ではないのだ。そうならば備えをしておかなくてはならない。備えとはそういうものである。諺でも『備えあれば憂いなし』というがその通りなのである。
「それが問題だな」
「だからですか」
「今長官がこちらに向かっておられる」
艦長は述べた。
「それからだな。話が動くのは」
「動きますか」
「うむ、動くな」
そして船務長の言葉に応える。
「この件はな。しかし」
「しかし？」
「どうにも。話がややこしいことになっているようだ」
「予算ですね」
副長が言ってきた。このことは既に彼等の耳にも入っている。それどころか末端の兵士達まで知っていることだったりするのだ。国

防省と財務省はあまり仲がよくなく彼等は財務省をケチと評しているのである。財務省は財務省で国防省を金食い虫と考えているのだからお互い様なのであるが。
「そう、予算だ」
「全く。気前よくとはいきませんな」
「それが一番難しいな」
艦長の言葉は身も蓋もない。しかし事実であった。
「金の問題が一番ややこしいのだ」
「確かに」
「女房の財布が一番開かないだろう」
艦長の例えは一見するとふざけたものに聞こえる。しかしその通りなのだ。金を預かる者はその財布の口を容易に開いたりはしない。これは主婦も財務省も全く同じである。それが出してもらう側としては実に厄介なのだ。もっとも好きに使わせる人間もそうはいない。
「そうだな」
「その通りです」
新婚の航海長がそれに応えてきた。
「全く。結婚したらすぐに」
「変わったか」
「今では別人です」
超えに嘆きが加わっている。
「結婚するまではあんなに大人しかったのに」
「それに可愛かったか」
「段々太ってきています」
結婚するとすぐにそうなってしまう。かつてイタリアの女は結婚するまでは細くて可愛いのに結婚したらビア樽になってしまうと言われた。これは多くの女がそうである。結婚すれば女は逞しく豹変する。そういうものだ。男は中身は大して変わらない。しかし外見はやはりビア樽になることが多い。この時代は解決されているがかつてはここで頭髪が薄くなるという問題まであったりした。

「困ったことに」
「そういうものだ」
艦長はそれを聞いて納得したように頷いた。

## 第二十三部第三章　長城その十三

「女というのはな。そういうものだ」
「そういうものですか」
「言われなかったか？誰かに」
「いえ」
航海長は顔を前に向けたまま首を横に振る。
「それは」
「ないか。そうか」
「少なくとも私の妻だけは別だと思っていました」
「だが同じだったのか」
「残念なことに」
これもよくあることだ。自分達は違うと思っていても結局は同じだったと。こうしたことは結婚だけでなく他のことでも多々見られるものである。
「まあそれも経験だな」
「ですか」
「奥さんにはまず痩せてもらえ」
話はまずはそこからであった。
「そして財布は」
「辛抱強くですか」
「そういうことだ。わかったな」
「戦争よりも大変そうですね」
航海長の言葉は深刻なものであった。深刻にならない筈がないことではある。
「全くもって。お金だけは」
「ままならないものだな」
軍人の財布は昔から軽いものだと言われている。連合軍は人材確保の面からも高給を約束しているし実際にそうだ。他には様々な手

当てもある。だがそれでも彼等は公務員でありその給与は決められている。そうしたことも考えればやはり結婚すれば彼等の財布は軽くなるのである。
「ですね。それでは」
彼等は話を続ける。
「私はこれから辛い戦いをということですね」
「そうだ。覚悟するのだな」
艦長はそう航海長に対して述べた。
「誰もが戦うことだ」
「そう言われると特撮のヒーローになった気分です」
これは無論冗談である。だがここから彼が中々の特撮好きであることがわかる。
「全く以って」
「しかし相手は悪の組織よりも手強いぞ」
「はい」
これもわかっていた。わかりたくはないものだが。
「覚悟しておけ」
「全く。財務省といい女房といい」
「金の問題は如何ともし難いな」
「ええ。それにしても」
「何だ？」
艦長は副長に顔を向けてきた。
「ここに防衛ラインを敷くとしてもどういったものになるでしょう」
「さてな」
艦長もそこまではわからなかった。
「そこまではわからないが。ただ」
「ただ？」
「相当な規模のものになるな」
「そうですか」
「俺がわかるのはそれだけだ」

彼はこうも述べる。
「それ以上になると。予測がつかない」
「後は長官次第ですか」
「そうなる。しかしあの長官は」
彼は言葉を続ける。
「時として我々の想像以上のことをするからな」
「そうですね。やはり日本軍ということでしょうか」
「うむ。日本軍か」
「ええ」
この固有名詞は実はかなり一人歩きしている。日本軍と言えば精悍で規律正しく厳格な軍隊として知られていたのだ。これに対して連合軍はかなりのどかなところがある。義勇軍が全体的に血走った感じがあるのに対して連合軍は何かと穏やかなのだ。規律こそは厳しいがそれ以外は至って平穏な軍隊であるのだ。

## 第二十三部第三章　長城その十四

「彼等は鬼だったからな」
艦長のこの言葉は幻想である。
「鉄拳制裁もあったそうだな」
「それは二十世紀ですが」
「おっと、そうか」
船務長に言われて表情を変える。
「そうだったのか」
「今頃そんなことをしている軍隊はありませんよ。問題になります」
「それもそうか」
これは連合の話である。といっても今頃そういった教育をしている軍隊は流石に人類社会にはない。だが時折いじめの話が出て来るのはどの組織でも同じである。軍とて例外ではないむしろ軍というのは学校と同じく閉鎖的な場所であるのでどうしてもそうした話が付き物だ。特に古参兵が新兵を苛めるという話はよくある。こうした話があればすぐに憲兵隊が動くのであるがやはり完全には減らない。
「かつての日本軍のイメージがあるからな」
艦長は述べる。
「どうしてもな」
「長官は厳しい方ではないですがね」
「うむ、それはな」
誰もが知っていることであった。
「しかしだ。どうにもな」
彼は言う。
「心配なのは財政だ」
「防衛ライン施設の費用ですか」
「財務省が出してくれるかどうか」

「出しても必要だけかどうか」
「それが問題だ」
いささかハムレットめいた表現さえ出て来た。当然ながらこの時代でもハムレットは読まれている。シェークスピアの作品は永遠の古典と位置付けられているのである。
「しかし金のない軍隊だな」
「全くです」
彼等の嘆きは深い。
「俺はグアテマラにいた」
艦長は言った。
「グアテマラ軍はもっと金はあったぞ」
「そうなのですか」
「少なくともここまで苦労してはいなかった」
彼はそう述べる。
「軍の規模も小さいせいもあったが。それでもな」
「私もですよ」
副長も述べてきた。
「全く。どうしてこんなに金がないのか」
「あっても消えるものなのか」
その通りである。連合軍はあちこちに金を使っている。だから減るのはかなり速い。かつての各国軍はどちらかというとその国内での警備隊に近いものでありそれなりのことをしていればよかった。だが中央軍になると仕事の幅も大幅に変わった。だから予算もそれだけ物入りとなったのである。
「どうであるにしろ困ったものだ」
「本当に。ただ」
「ただ？」
「防衛ラインはやはり欲しいですからな。これは連合の為にも」
「うむ」
艦長は副長の言葉に頷く。

「だからここはまた長官に頑張ってもらおう」
「我等が長官に」
「是非共な。そういうことだな」
「はい」
彼等はパトロールの中でそんな話をしていた。それからすぐに八条が国境に到着した。そしてすぐに国境の視察を開始したのであった。
彼は国境の細かいところまで見回っていた。その中であることに気付いた。
「どうにも」
「どうされました？」
「いえですね」
彼は軽巡に乗って各地を見回っている。その艦橋でふと言葉を漏らしたのである。
「思ったより設備が老巧化していますね」
「ええ」
「それは」
周りにいる軍人達がそれに応える。
「各国が築いたものですが」
「設立以来主軸ではなく。どうしてもなおざりになっていたのです」
「迂闊でした」
彼はそれを聞いて呟いた。
「私もここのことは関心から外れていましたし」
「そうでしたか」
「ええ。これは言い訳になりますがね」
彼は話しはじめた。
「設立から兵器建造、そしてエウロパとの戦争、それに戦後処理と重なりましたので」
「その結果ですか」
「申し訳ないです。ただ」

「ただ？」
ここで八条の目の色が変わった。周りの者もそれに気付いた。

## 第二十三部第三章　長城その十五

「はい。老巧化が進んでいるとはいえその配備状況や防衛施設は適切な場所に置かれていますね、どれも」
「ええ、それは」
大佐の階級を持つ軍人の一人がそれに応えた。
「各国が念入りに考えて置いたものなので」
「ですか」
「そうです。ですからその内容自体はいいものであります」
「わかりました。ただ」
「ただ？」
「より堅固な防衛にするべきですね」
八条はその話を聞いたうえでこう述べた。
「今のままでは現在のサハラの勢力、ハサンなら防ぐことはできても」
「それ以上は、ですか」
「そうです。だからこそ」
彼は言う。
「より堅固にするべきです」
「それでは」
「はい、まずは老巧化した設備の一新」
まずはこれを出してきた。
「そしてさらなる合理化ですね」
「合理化ですか」
「こう言うと縮小にも聞こえますか」
「ええ、何か」
周りにいる軍人の一人が答える。彼の階級は准将であった。参謀や幕僚と呼ばれる者達が今彼の周りを固めていた。無論そこには背広組もいる。

「ですが決して縮小ではないのです」
彼はそれを否定した。
「何故ならば」
「ええ」
話は続く。八条も述べていく。
「やはり各国ごとですとばらつきが出ますね」
「ええ、確かに」
軍人達がそれに応える。
「それです。ですから中央軍で一環したものにしたいのです」
「そうして合理的なものにすると」
「そうです」
彼は述べた。彼の考えはそこにあったのだ。
「そこです。やはり各国でそれぞれにやると足並みが揃わない怖れもありましたし」
「はい」
かつて各国の軍隊に分かれていた時がそれであった。そうしてばらばらにやっても何の効果もない場合が多いのだ。これは特に軍事については言えることであった。圧倒的な戦力を持ちながらも足並みの乱れから敗北した例も失敗した例も枚挙に暇がない。八条は今それを言っているのである。
「そこを注意したいのです。
「では国境全体に」
「そうです」
彼はそれも言い切ってきた。言葉に迷いはない。
「全体を対象として防衛ラインを敷きます。いいですね」
「わかりました」
軍人達も官僚達もそれに頷く。八条は続いて述べた。
「まずは」
「どうするのでしょうか」
皆それに問う。

「防衛施設ですね」
「どういったものを」
「コロニーレーザーに」
まずはそれであった。
「機雷。それを置き」
基本であった。防衛ラインを敷くにあたっては当然であった。
「各星系の防衛衛星のさらなる充実化」
これもまた基本であった。彼は基本を忠実に守っていると言える。ここが八条らしかった。彼は決して派手さを好む人物ではない。オーソドックスに動いているのである。
「まずはそういった事柄を充実させ」
「そして？」
「各星系の防衛の連携の強化です」
「連携ですか」
「そうです」
彼は応えた。
「通新体制の強化に駐留艦隊の航路の整備」
艦隊にまで話が及ぶ。あくまで基本を踏まえ続けていた。

## 第二十三部第三章　長城その十六

「そういったことですね。それも各国でやるのではなく」
「中央軍で」
「各国の国軍は国軍でそういった体制を整えているでしょうが」
それも彼の頭の中にあった。連合にある軍隊は中央軍だけではない。少数だが各国の国軍も存在しているので遭ある。彼等は貴重な予備戦力、治安維持部隊となっている。
「彼等とも協力して」
「現地に適応した守備態勢をですね」
「そうあらなければならないですね」
それもはっきりと述べた。
「やはり現場主義ということで」
「わかりました。それでは」
軍人達がそれに応えた。
「そのように防衛体制を計画していきます」
「そしてですね」
八条はさらに述べてきた。
「何か」
「肝心のものが抜けています」
彼は言ってきた。
「肝心のもの？」
「そうです。これを防衛の基幹としたいのですが」
「一体何を」
軍人だけでなく官僚達もそれに問うてきた。
「はい、サハラの艦艇ですが」
自分達だけではなく仮想敵国についても目が向けられだした。
「彼等は足が速いですね」
「ええ」

「確かに」
皆それに頷く。連合軍の艦艇に比べてサハラ各国のそれはかなり速度が速い。彼等は機動力を重視した設計、戦術を心掛けているせいである。ここにそれぞれの戦術思想が見られた。あくまで生存能力を念頭に置き慎重に進む連合軍と機動力を重視し一撃必殺を旨とするサハラ各国軍。そうした思想の差がそこにはあった。
「そこです」
八条はそこを指摘してきた。
「そこをどうするかです」
「つまり足止めですか」
「その通りです」
官僚の一人に応えてきた。
「前にも言いましたがここは長城ですね」
「長城ですか」
「そう、万里の長城」
今それをはっきりと言った。
「それを築きたいのです。ここに」
「ふうむ」
准将がそれを聞いて考える顔を見せてきた。
「即ち壁ですね」
「ええ、壁です」
八条もそれに頷く。
「どうでしょうか」
「悪くはないです。ただ」
「ただ？」
「問題はどういった壁かですね」
准将は述べた。
「問題はそれです。どういったものかです」
「壁の質ですか」
「バリアーにされますか？」

准将は八条に問うてきた。
「ここはやはり」
「そうですね。それで行きましょう」
八条もそれに頷いた。この時代の防衛施設としてバリアーは非常に有効なものである。しかも艦艇に使うものよりも遥かに堅固なものになっているのだ。言うならば城壁であり各惑星にも危急の時にバリアーを張りそれで宇宙海賊を防ぐのだ。連合は海賊やテロリストに悩まされてきた為に様々な惑星防衛用の兵器が充実している。その中にあるものの一つがバリアーなのである。
「縦にも横にも敷き」
「はい」
「そしてですね」
八条はさらに言葉を続ける。彼の考えはそれで終わりではなかった。
「磁器嵐も人工で敷き」
「人工でですか」
「そうです。バリアーの前に。言うならばこれは」
「水掘ですね」
「そうです」
大佐の言葉に応える。
「それもまず敷いて」
これも惑星防衛に使われる。連合においては海賊対策はかつては各国ごとに星系単位で行われていた。星系単位で守りを固め次に惑星単位だ。かなりの大規模な海賊でなければこれには対処できない。だから惑星にいるうちはまずは安全でありもう一つの問題として航路の問題があった。これが深刻で襲われる商船は今でもある。不思議なもので海賊を一つ壊滅させそれで治安を回復させればまた別のところで出るのは出るのはその時の辺境地域が多い。これもまた法則であった。だがこれも中央軍設立以降全体的な合理的対策が進み劇的に減っているのだ。この時代の海賊はかつてあった食い詰め者

というのではなく単なる犯罪者である場合が多い。連合では食い詰めれば簡単なもので開拓地に行けばいいからだ。それをせずに他人からものを奪って生きようとする連中である。当然ながら容赦なく掃討され裁判の後で惨たらしい処刑を時間をかけて加えられて消されている。

「警戒には警戒を怠らずです」

「いいことです。ただ」

「ただ？」

八条は青いスーツの官僚の言葉に耳を止めた。地球から同行している男である。

## 第二十三部第三章　長城その十七

「基本的な思想は惑星防衛と同じですね」
「はい、確かに」
本人もそれを認めた。
「かなり参考にしています」
「やはり」
「基本はやはりそれでしょう」
そのうえでこう述べる。
「惑星防衛の要領で」
「成程」
「つまり国境防衛をそのまま星系防衛に当てはめていくと」
「そういうことになります」
八条の考えはそこを確固たるものにしていた。だからこそ話の筋がしっかりしていたのだ。
「どうでしょうか」
「そうですな」
軍人達がそれに応えて言葉を出してきた。
「それで宜しいと思います」
「要は敵の機動力を封じて動けないようにすればよいのですから」
「はい。そのうえ」
「そのうえ？」
「機雷源も用意しておこうと思います」
「機雷もですか」
「はい」
八条は答える。
「通常時に既に撒いているのではなく何かあった時に即座に撒けるようにして」
「敵を止めると」

「それはどうでしょうか」
「それも悪くないと思います」
機雷についても合格の言葉が出た。やはり機雷は何かと有効な兵器であった。足止めにもなるし実際にそれで敵艦も破壊できる。連合とエウロパとの戦いにおいても両軍はこれをふんだんに使っているし連合軍はこれを警戒して掃海艇をかなりの数を配備していたのである。
「ではそれで」
「はい」
話はそれで纏まった。
「機雷散布態勢も整え」
「敵を入れないようにしておくと」
「そういうことですね」
官僚達もそれに頷く。だが話はこれで終わりではない。
「そしてですね」
八条はさらに話を進めてきたのだ。動きはかなり速いだけでなく細かかった。
「アステロイド帯ですが」
「アステロイド帯！？」
「はい、連合とサハラの間の」
彼はそこにも言及する。連合とサハラの間は国境線だけでなくアステロイド帯でも隔てられているのだ。それはかなり広範囲に渡っておりその中は磁気嵐やブラックホール等様々な障害がある。そこを突破して行くことは到底不可能であるというのが専門家達の意見である。
「そこにも備えをしておきましょう」
「いや、それは大丈夫でしょう」
准将が言ってきた。
「幾ら何でもあそこは」
「そうです」

他の者達も同じ考えであった。
「あそこの突破は無理です」
「やはり国境だけで備えは充分であるかと思われますが」
「いや」
しかし八条の考えは変わりはしなかった。
「それでもです。過去不可能を可能として勝利を収めた例は数多く存在するではないですか」
「それは確かにそうですが」
「それでも」
「それでもです」
八条はその言葉の調子を強くさせた。そのうえでさらに言うのであった。
「備えをしておけば何の憂いもないではないですか」
「ではアステロイド帯にも」
「はい」
彼はこくりと頷いてきた。
「備えをしておきましょう。具体的にはですね」
「どういったものを」
「簡単なものでいいです。こちら側のアステロイド帯のところにやはりバリアーと機雷散布態勢を整えておきます」
「それですか」
「はい、これで問題はないかと思います」
彼は述べた。
「それでどうでしょうか」
「成程」
「あくまで簡単なものですな」
「奇襲を封じ込めるのですよ」
それこそが彼の考えであった。奇襲とは戦術的なものではなく戦略的なものもあるのだ。だからこそ八条はその戦略的奇襲の可能性を摘み取ろうとしているのである。

「如何でしょうか」
「検討してみる必要はありますな」
「ええ」
軍人達がその言葉に応えた。だが決定というわけではなかった。しかしこれは後に正式に採用されることになる。それは因果なことに他ならぬオムダーマンのアッディーンの戦略を見た結果であった。その鮮やかなまでの戦略を見て国防省も連合軍も備えを固めることを決意することになるのである。だがこれは後の話であり今は検討の段階でしかなかった。そこまで話は動いてはいなかったのである。

## 第二十三部第三章　長城その十八

「これでおおよそは決まりですか」
「そういったところですね。それでは」
「はい。そして」
八条はさらに言葉を続ける。
「守りだけではなく索敵も考えておきましょう」
「索敵ですか」
「そうです、これは偵察衛星を考えています。そしてパトロール艦」
それに使えるものは多い。連合軍の備えは実に多いのでそれを最大限に活用しようとしているのである。
「それ等を使って」
「壁の内側でですね」
「無論です」
それも決まっていた。
「それでどうでしょうか」
「よいことです」
「ただそれを言いますと」
「何か」
大佐の言葉に耳を傾けさせた。
「欲が出ますな」
「欲ですか」
「はい、偵察衛星も国境に配備するのですね」
「ええ」
これは今述べた通りである。八条も否定しなかった。
「それではですね。もう一つの備えとして」
「何を置くというのでしょうか」
「防衛衛星も置いてはどうでしょうか」
「それもですか」

「はい、偵察衛星とセットで」
大佐はそう主張する。
「それですと万全だと思われます」
「確かに」
隣にいた准将もそれに頷いてきた。
「彼の言う通りです。閣下」
そのうえで八条に対して言ってきた。じっと彼に顔を向けている。
「これは非常にいいと思いますが」
「そうですね」
八条もそれに納得した。
「それではそれも」
「はい」
「ではそのように」
「しかしそれにしても」
八条は話が一通り進んでから言うのであった。
「これはまた随分。費用がかかりそうですね」
「それはそうですね」
「それもかなり」
今度は官僚達の言葉であった。彼等は予算面からこの壁について考えていた。兵器も防衛体制も結局はコストの問題から逃れられないのである。そうしたことも考えていく為に文官もまた必要不可欠なのだ。戦争は軍人がいなくては話にならないがだからといって軍人だけでできるものではないのである。銃後もまた戦争でありそこが万全でなければならない。当然それはコストに関してもそうである。
「しかし」
八条はここで言う。
「これだけの備えが必要だと思いますので」
「ですね」
「要求はしなければ」

「そして認めてもらいます」
八条は強い声で述べた。その言葉もやはり強いものであった。
「さもなければ万全ではありませんので」
「はい。そうです」
「ここは何としても」
「それでコストのことですが」
軍人達が言い終えると官僚達が口を開いてきた。
「はい、それですね」
八条もわかっていた。それですぐに彼等に顔を向ける。
「合理化をお願いできますか」
「無論です」
彼等もそれに答える。その声にはやはり迷いがない。
「そちらはお任せ下さい」
「ただ、人も兵器も減らすということではないです」
ただのリストラは決して合理化ではないのだ。それをわかっていない人間が実に多かったりもするのであるが。八条はそれを踏まえて今言ったのである。
「むしろ充実させなければなりません」
「はい」
何かと金が入り用なのがここでもわかる。今連合軍は連合自体の人口増加に伴う増員の為に軍備拡大を行っている最中なのである。具体的には九十億の総兵力を百三十億までにする。かなりの増員であり軍事費もかなりの増加を見せているのが実情なのである。
「つまりですね」
「兵器の集中製造等で金を浮かせていきますか」
「そして無駄な出費の削減」
塵も積もれば方式でいっているのがよくわかる。だがこうしないと案外金というものはできはしないのだ。特に軍隊においてはそうである。出費しかないのだから。
「ただ長官」

「ええ」
官僚の一人である赤いネクタイの男が言ってきた。
「節約はいいですが」
「市民との交流は別だと」
「流石にそれは。いや」
言ったところで赤いネクタイの男は自分でも気付いた。

## 第二十三部第三章　長城その十九

「ここが一番合理化が可能ですか」
「はい、そこです」
八条もそこを言う。実はこうした催しものこそ無駄な出費が一番多いのである。
「催しの質を落とすのではなく」
「そこを合理化していくと」
「例えば食材や設備の調達費ですね」
話がかなり細かい方向に行く。経補将校時代の八条の顔にいささか戻っていた。
「そこを上手くすれば費用はかなり浮きます」
「はい」
「そして艦艇や航宙機の見世物もですね。無駄なくやっていけば」
「動かす費用も減ると」
「そうなのです。そこが肝心である」
彼は述べる。
「意外とそういうところを軍全体でしていくとコストが浮くのですよ」
「はあ」
「装飾はそのままで。実はああした看板はあまりお金がかからないので」
実際に表では費用は思ったよりかからないのが連合軍の催しである。むしろ食材や機材の調達費に兵器の運用費にかなりの費用をかけてしまっているのだ。ここが問題なのである。
「裏方でですね」
「わかりました。しかし」
赤いネクタイの男は少しぼやいたような顔を見せてきた。
「何か」

「いえ。かなりせこい話になっていますね」
「ロシア軍とは偉い違いですな」
やたらと大柄な軍人が言ってきた。彼の階級も大佐である。
「ロシア軍といえばあれです」
「あれというと」
「派手に出して派手にやるのです」
その大雑把さが実にロシアらしいと言えた。ただロシアの面白いところは芸術関連では異様なまでに繊細であったりするところだ。しかし催しに関しては少なくともあまり繊細にはやらない。
「ですから費用もまた」
「節約はなしですか」
「その通りです」
いささか胸を張っていた。なおこれはどの軍でもある話だがこうした行事でできた金を懐に入れるということもあったりする。連合軍でもこれは僅かながらある。それでもかつての各国軍に比べれば減っていると言えた。もっとも懐に入る額は僅かではあるが。連合における軍の利権は非常に小さなものなのである。だからこそ今彼等は頭を抱えて費用を浮かそうとしているのである。
「ですがそれだと駄目なのですね」
「残念ながら」
その大柄な大佐に答える。
「これは日本軍方式で行きますか」
「日本軍はどんな軍隊だったんですか？」
流石に皆いぶかりだした。八条のやっていることがあまりにもせせこましくもあったからだ。
「お金がなかったようですが」
「連合軍が潤沢で仕方なく思える程です」
それに対する八条の言葉はいつも通りだがそれでも信じられる話と信じられない話がある。残念ながら今回は後者にあたるものであった。

「ですから今結構楽観視しています」
「ですか」
「ええ」
周りの者に答える。
「これでいささか費用はできると思います。そして何とか残りの予算を貰って」
「長城の建設ですか」
「そうです。さて」
あらためて窓を見る。そこには無限の銀河が拡がっている。八条はその銀河を見て言う。
「サハラとは。出来れば衝突はしたくはないですが」
「はい」
「確かに」
周りの者もそれに頷く。

## 第二十三部第三章　長城その二十

「我々はあの地に興味はありませんし」
「サハラはサハラの市民のものですし」
普段は彼等はこう考えている。これはサハラを害するのはもっての他である、エウロパとは違うのだという良心から来る言葉でもあるがそれ以上にサハラに対する無関心からの言葉であった。結局彼等にとってサハラはそうした存在なのだ。脅威とは感じてもだ。サハラで何があろうと意に介してはいないというのが彼等連合の者の感情である。権益とそこにいる連合の者の安全さえ守れれば。後は何が起こっても構わないのだ。
「平和にやっていければいいですな」
「ええ。できれば備えなしといきたいものです」
「しかしそうもいかないので」
「備えを」
だからこその長城なのだ。わかっているからこそなのだ。
「しておかなければ」
「そうですね。さて」
准将が言ってきた。
「サハラではこれから誰が生き残るでしょうかな」
「正直予測しきれないですね」
八条がそれに応えて述べる。
「今の彼等は」
「そうですね」
「最後まではわからない」
「しかし生き残った者がサハラの全てを統べます」
しかしこうも言う。八条もその整った切れ長の眼を鋭くさせる。
「それだけは確かです」
「預言者の言い伝えによれば」

青いスーツの男が述べてきた。彼も目を鋭くさせている。
「サハラを統一する者は英雄の名を持ち」
「そして皇帝となると」
ダークブラウンのスーツの男も言った。実はここでいささか矛盾がある。
イスラムは本来王を認めていないのである。全ての者がアッラーの前に等しいというのがイスラムである。それもありかつては原理主義者達は各国の王の命を狙ったりもしている。その一方でトルコ皇帝のような存在もいたりするのである。矛盾しているがこうした矛盾は何処にでもある。共産主義国家で世襲をした北朝鮮の様な異常なケースも存在する。例外は忌まわしいものもそうではないものも含めて実に多岐に渡るのである。
「皇帝ですか」
それを聞いた八条の目がまた微妙に動いた。
「皇帝は今は二人おられますが」
「はい」
「エチオピアと」
「そして日本に」
周りの者達が八条にこう声をかける。
「そうですね」
言うまでもなく日本はその皇帝、即ち天皇陛下が座す国である。だからこそ皆八条に顔を向けたのである。そして八条もそれに応えた。
「つまり銀河に皇帝が三人となるのです」
「三人ですか」
「そうです」
八条はまた述べる。
「今までは二人、そしてあくまで象徴でしたが」
「サハラでは違うのでしょうか」
「誕生してからでなければわかりませんがね」

前以ってこう断りを入れながらも言う。
「ただサハラの今までを考えますと」
「親政も考えられますか」
「はい、ある程度以上の」
実際にサハラでは今まで国王による親政もよく見られてきている。そうしたこともあり八条は今その可能性を指摘しているのである。
「ましてや建国当初となると」
「余計にそうなり易いと」
「あくまで傾向ですが」
また断りを入れた。皇室関連になるとさらに慎重になっているのがわかる。

## 第二十三部第三章　長城その二十一

「そうなるのではないでしょうか」
「皇帝親政ですか」
連合では実感の沸かない言葉であった。実際誰もが今一つピンと来ていない様子であった。
「そう言われましても」
「実感がないですか」
「はあ」
「そうですね」
八条はそれを聞いて述べた。
「私もです」
「やはり」
結局八条もそれは同じであった。全ての国が曲がりなりにも議会による民主政治を行っている連合において皇帝親政というのはやはりどうにも想像がつかないものであったのだ。人は知らないものに対してはイメージを持ちにくい。とりわけ異なる文明のものに対してはそうである。
「ですよね」
「悪く言えば独裁ですが」
八条はまた述べる。
「しかし独裁と言ってもこの場合は血筋によるもの」
「やはり連合にはないですな」
「我々の間で血筋と言えば」
「ええ」
象徴になる。連合では皇室や王家であってもあくまで象徴なのだ。だからそうした存在が政治を行うというのはやはりわからないのだ。少なくとも連合においては象徴でしかない。だがサハラでは違うのだ。

「ですがサハラでは違うと」
「独裁も残っていますしね」
これも連合ではないものである。歴史で知っているのと実感するのとは全く違う。彼等にはその実感がないのである。
「さて」
八条はどうにも実感をまだ掴めないまま言った。
「どうなるのでしょうかね、サハラは」
「どうでしょうかね」
それにはっきりと答えられる者もいなかった。やはり実感がどうにも湧かないのだ。皇帝新政というものに。
「どちらにしろ独裁ですな」
青いスーツの男が述べた。
「そう考えると」
「いや」
それにはすぐに異義が呈された。言うのはダークブラウンのスーツの男であった。
「普通の独裁ではなく血筋のものだからそれは権威もあるだろう」
「そうでしょうか」
「それも違うと思いますが」
今度はあの大柄な大佐が言ってきた。
「というと」
「かつての中国や欧州の王朝と同じような存在では？」
「ああした形式ですか」
「はい、それにやはり議会はあるようですし」
「では皇帝が大統領のように存在していると」
「ということではないでしょうか」
そう官僚達に述べる。
「どうでしょうか」
大佐はあらためて述べた。
「そうですかね」

八条もそこまで聞いて考える目をして呟いた。
「皇帝が実験を握り議会や官僚の助けを借りて」
「ええ」
「どちらかというとそれは」
八条は考える目のままでまた述べる。彼の記憶の中に二つの歴史上の国家が浮かび上がってきた。
「あれですね。第二帝国の頃のドイツと」
つまりプロイセンにより統一されたドイツである。このドイツ帝国は皇帝が強い権限を持ち彼が首相を任命し議会や官僚、そして軍の上にいた。強固な官僚体制と欧州最強を誇ったプロイセン軍により支えられていた。ビスマルク、モルトケを擁して欧州に覇を唱えたのである。
そしてもう一つは。八条と縁のある国家であった。
「第二次世界大戦までの我が国ですね」
実際にこの時の日本はプロイセンをモデルにはした。しかしその実情はかなり穏やかで柔軟な側面もあった。これは日本人の特質でもあろうが。何処かソフトであった。また天皇はドイツ皇帝のように国家を指導はしなかった。明治帝も昭和帝も実質的には象徴であられた。むしろ天皇が信頼される元老により指導されていた。その元老が伊藤博文であり桂太郎であり山縣有朋であった。他の者達はともかく山縣は歴代の天皇にも好かれていなかったが。山縣は生前からすこぶる人望のない男であった。昭和帝はことの他彼を嫌われていた。あまりにも強固な官僚主義者である山縣と欧州で立憲君主制を学ばれた帝とはそりが合わなかったのである。皇太子時代昭和帝は宮中某重大事件において山縣と徹底的に対立された。その結果山縣は失脚し失意のうちに亡くなることになる。死の際には軍や警察の関係者の他は参列者もいなかった。それどころか『死ぬのも奉公のうち』とまで言われる始末であった。すこぶる人気のない男であった。謀略家であり傲岸不遜で無愛想な人柄、権力志向、そして山の様な汚職が彼を不人気にしていた。

## 第二十三部第三章　長城その二十二

だがそんな山縣も国を主導する力はあった。何だかんだで一級の政治家であり功績もあるのだ。だからこそ元老になれた。その彼にしろ伊藤にしろ日本を上手く運営していた。帝は彼等の上に象徴としておられたのである。ここがプロイセンとは違うのだ。大正には議会が、戦争中は軍部が帝の下で国を指導した形になる。言うならば皇室は神輿なのである。これはこの時代においても変わりはしない。

「ああした感じですか」

「そうではないでしょうか」

「そう考えるとわかりやすいですな。ただ」

「ただ？」

「やはりサハラです」

准将が言ってきた。

「プロイセンや日本とは違う部分も多いでしょうな」

「でしょうね」

それは八条もわかっていた。わかったうえで頷く。

「ただ、おおむねそんな感じだと思います」

「議会の力は弱くですか」

「今のティムールみたいな感じですな」

「ええ」

「ふうむ」

皆八条の言葉を聞きまた思索に入った。

「皇帝に権限を集中させる民主主義」

「やはり我々のものとは違う」

「かといってエウロパのそれともまた違います」

八条はこうも述べた。

「ですね」

「はい」
「それはわかります」
官僚達も軍人達もそれに頷く。これはわかる。
エウロパの民主主義は貴族制と並存している。階級ある民主主義だ。だから連合の大衆型民主主義とは全く違うのである。なおサハラにも階級はない。アッラーの前に人は皆同じであるからだ。
「何処となく形はかわってきました」
ダークブラウンの男が述べた。
「それがわかれば」
「対策も立てやすくなりますね」
八条はそこを見ていたのだ。彼はただ単にサハラの国家システムの予想をしていたのではないのだ。そこからどうした対処を取るべきなのかを考えていたのである。彼はあくまで政治的な視点で見据えていたのだ。
「ですがそれは政治においてです」
「国防では」
「やはりここですね」
あらためて国境について言う。
「どうするべきか」
「そうですね」
軍人達がそれに頷いてきた。
「おおよその考えはこれで纏まりましたし」
「後は」
「地球に戻りましょう」
八条は言った。
「これで現地の視察は終わりです。後は細部の計画と予算の見積もりを作成し」
「それを大統領に提出すると」
「そうです。さて」
八条はまた考える目を見せてきた。その目で述べる。

「サハラがどうなるかですね」
「はい」
「どうなってもいいように」
「備えはしておきましょう」
「わかりました」
皆それに頷く。これで視察は終わった。
だがこれは連合にとってはまた政治の舞台が幕を開いたということであった。連合もまた常に動いている。その動きは止まることがなかった。

## 第二十三部第一章　舞台は複数ありその一

舞台は複数あり

サハラ内部では緊張が弱まることがなかった。それどころか増すばかりであった。

三国は軍をそれぞれ国境に回しマスメディアの報道も暗く、それでいて過激なものになっていっていた。その中で何処かハレのものもあった。

「ぶっ潰してやる！」

軍の飲み屋ではそんな声が聞かれるようになっていた。この時代はムスリムでも酒を飲むのでこうした店もあるのである。もっとも過度に飲むのは褒められたものではないとされているが。

「オムダーマンの奴等をな！」

「ハサンの奴等をな！」

兵士達がそれぞれの場所で叫ぶ。ジョッキを手に高らかにだ。

「一気にアスランまで陥落させるか」

「ああ」

ハサンの兵士達はビールをゴクゴクと飲みながら話をする。その側から肉や魚が次々と消えていく。

「その後でティムールだ」

「俺はそっちに行きそうだ」

仲間のうちの一人が言う。

「そのままエウロパまで攻め込んでみたいぜ」

「おお、それいいな」

できないのはわかっているが景気付けで誰かが言った。

「おお、いいな」

「よし」

それを言われて冗談であるがその気になってみせる。あくまで酒のうえでである。

「じゃあオリンポス一番乗りは俺だ」
「二番は俺な」
「それで末は提督だな」
「ははは、そうなったらいいな」
彼等はそんな話をして笑う。サハラでは実際に一般兵士からの叩き上げで提督にまでなった人物も多い。功績があれば出世も可能なのだ。これはどの世界でも変わりはしない。無論例外もあるが。
「とにかく戦争はもうすぐだしな」
「うちが勝つさ」
これはどの勢力の将兵達もそれぞれの部隊の中で言っている言葉であった。
「絶対にな」
「そうだ。それで金も出世も思いのままだ」
「あの威張り腐った曹長も顎で使ってやるぜ」
「おいおい、それは幾ら何でも無理だぜ」
軍隊では下士官、とりわけ先任下士官の力が強い。だから彼等に対して何かを言うことは不可能に近いのだ。艦長でも彼等を無下にはできないのだ。
軍隊というのは不思議な世界で二つの世界が並存している。兵士の世界と士官の世界だ。士官の世界は艦艇ならば艦長がトップにいる。兵士の世界はやはり先任下士官達だ。こうした二つの世界が並存しているのである。これを踏まえて考えていかないと軍隊は理解出来ない。
「ましてやあの曹長はな」
「凄いよなあ」
「まるで牢名主だぜ」
そういう風な存在になってしまうのだ。長年の経験と実績はやはり大きいのである。
「やっぱり曹長になるか」
「それでずっとか」

「ああ」
笑いながらそんな話をする。
「それが軍隊では一番だろうな」
「何か夢がねえなあ」
「そうか？」
それには異義を返す。
「俺にとっちゃそれが最高なんだけれどな」
「安定した生活か？」
「その上威張れる生活だな」
それだけ先任下士官の存在と位置は特別なものなのである。それがわかっているからこその言葉であった。彼等も軍のことがわかっているのだ。
「最高じゃないか」
「それには仕事ができないとな」
「まあそれはな」
言葉に苦笑いが入る。
「言いっこなしだぜ」
「御前とろいもんな」
「戦死するなよ」
「死ぬ時は船も一緒だろうが」
笑ってそう返す。実際に船が沈む時は乗組員全員が命の危険に曝される。宇宙空間に放り出されて生きていられる人間なぞ存在しない。死ぬ時は一瞬であるのだ。それが宇宙の戦争である。
「そうだろう？」
「まあそうだ」
皆それに頷く。
「戦争の後でもこうして皆で飲みたいな」
「ああ」
急に話がしんみりとしてきた。皆死のことを考えてしまったからだ。

「絶対にな」
「それでだ」
話は続く。苦くなったワインを飲みながら。何故かさっきまで甘かったワインを苦く感じている彼等であった。
「出撃は何時なんだろうな」
「さてな」
それはここにいる者達にはわからなかった。今どの国の軍も第一種警戒態勢に入っている。だがそこから動かず皆何時か何時かと痺れを切らそうとしていたのである。
「近いことは近いだろう」
「近いか、やっぱり」
「当然な」
そんな話をする。話をしながらその輪を小さくさせていく。

## 第二十三部第四章　舞台は複数ありその二

「艦長達もピリピリしてきているしな」
「その先任下士官のお偉方もな」
「もうすぐなのは間違いないか」
「それはな」
話がヒソヒソとしたものになる。そんなに声を小さくする必要はないが無意識のうちにこうなっているのである。話が真剣で深いものになると人は無意識のうちにそうしたふうになってしまう。
「ただ、明日いきなりってわけじゃないらしい」
「それはないか」
「流石にな。ただしだ」
ここで言葉が入った。
「どうした？」
「間も無くなのは事実だな」
「それはもうわかってるだろう？」
中の一人が述べた。
「違うか？」
「その通りだから始末が悪い」
こうした言葉も出て来た。だから上が緊張しているのだ。話がいささかループしている感じがあるがそれでも彼等は酒と話の深刻さのせいかそれに気付かない。
「最悪なまでにな」
「それ言うな」
暗い顔で述べる者もいた。
「酒がまずくなってきたぞ」
「いや、もう充分まずくなってるぜ」
そうは言っても飲む。これは変わらない。
「何かよ」

「しかしどうなるのかね」
また誰かがぼやいた。
「いい加減はじまらないのかね」
「それは上の都合だな」
身も蓋もない返事であった。実に素っ気無い。
「俺達兵隊があれこれ言っても仕方ないさ」
「そうか」
「そうに決まってるだろ。それを決めたければ偉くなるんだな」
「じゃあやっぱり俺提督になるぜ」
話が元に戻った。
「それですぐにはじめてやるぜ」
「馬鹿、何言ってやがる」
その言葉にはすぐに突込みが入った。突込みを入れた人間はワインを飲みながら言う。
「提督でもそんなの決められねえよ」
「そうなのか」
「それを決めるのは政治家だ」
文民統制だからだ。ティムールならシャイターンが、そしてハサンなら王太子、オムダーマンならば大統領であるが今はそうしたことは全てアッディーンが取り仕切っている。そうした状況になっていた。
「そうだったのか」
「御前そういうのもわかってないで提督になるって言ったのかよ」
これには流石に呆れてしまった。
「頼むぜ。そんなんだとよ」
「わかってるさ」
「わかってねえじゃねえか」
また突込みが入った。
「だから言うんだろ」
「何か俺散々な言われようだな」

「じゃあ言われないようにしろ」
また身も蓋もない言葉をかけられた。これは言われても当然であろうか。
「そうだろ？」
「じゃあ政治家になるか」
「勝手にしやがれ」
いい加減呆れたといった口調で切り捨てられた。
「政治家になるのは大変だがな」
「選挙か」
「そうだよ」
当然サハラ各国でも選挙がある。それに当選しないと政治家になれない。これは何処の勢力でも同じである。こうしたことは連合やエウロパと同じである。もっとも閣僚になるのはトップの任命であったりする場合も多い。議院内閣制は連合でもかなり少数となっている。サハラ各国では議院内閣制はない。しかし政治家になるには大抵は選挙の洗礼が必要なのである。これは事実だ。
「それに勝ってみろ」
「何か提督になる方が簡単そうだな」
彼は実に暢気な調子で言った。

## 第二十三部第四章　舞台は複数ありその三

「そうしたことを考えると」
「そうだな。少なくとも御前の頭じゃな」
「ちぇっ」
その言葉には口を尖らせる。
「好き勝手言ってくれるな」
「じゃあ言われるな」
またしても言い返される。
「違うか？」
「わかったよ。まあとにかくだ」
そこから話を逸らす。彼にしてもこれ以上言われるのは不本意であった。
「生き残ってまた皆で飲もうぜ」
「ああ」
「勿論な」
兵士達は酒場で意気上がっていたり不安になっていたりと様々であった。それは上層部にも伝わっていて少し話にもなっていた。
「そうか、兵士達が」
アッディーンもそれは聞いていた。その報告を首都アスランで聞いていた。
「はい。何時か何時かと待っている状況です」
「だが近いのは感じているのだな」
「はい」
報告する将校はそう述べた。見れば大佐である。
「その通りです」
「そうか。気持ちはわかる」
アッディーンは話を聞いてまずはこう述べた。
「しかしだ」

そしてそのうえで語った。
「それを実際に言うわけにはいかないな」
「左様ですか」
「そうだ。あくまで秘密にしなければならない」
彼は言った。
「それは当然だと思うが」
「確かに」
大佐もその言葉には頷いた。
「何時はじめるか、それは極秘ですから」
「その通りだ。私も間も無くこのアスランを発つが」
「ええ」
「極秘にだ。特に我々は戦争開始時期を今は知られるわけにはいかないのだ」
「その通りです」
どうやら大佐は何時はじめるのかを知っているようであった。だがそれは決して口には出さない。あくまで秘密にしている。アッディーンを前にしてもだ。
当然アッディーンは何時はじまるのかを知っている。というよりは彼が考えているからだ。しかしそれでも彼等はそれを口に出すことはしない。それは何故か。壁に耳あり障子に目ありということだ。何時誰が話を聞いているのかわかったものではないからである。
「ですから今は何があっても」
「内密にしなければならない」
「そういうことです。どうやらアスランにもハサンやティムールの情報部員が潜入しています」
「見つけ出しているか？」
「完全にはいっておりません」
大佐は述べた。
「捕まえた者達はどれも下っ端ばかりで。多くを知りませんし」
「そうか」

「片っ端から捕虜収容所に放り込んでいます。それで宜しいですね」
「うむ、それでいい」
アッディーンはその処置に合格印を与えた。
「後で外交にも使えるしな」
「はい」
これはイスラムではわりかし伝統的な外交である。かつてオスマン＝トルコは捕虜を殺さない国家であった。これは人道的な理由よりも政治的な理由から来るものであった。捕虜を殺しては何の利益もないことを彼等はわかっていた。では捕虜をどう利用したのかというと彼等でその祖国に対して身代金を要求したのだ。支払えば釈放する。支払わなければ奴隷にする。随分悪どくも見えるがそれでも当時の欧州各国に比べれば遥かに人道的である。そもそも奴隷にしろムスリムになれば解放されるしその扱いも決して悪くはなかった。こうしたやり方がサハラでは主流なのである。捕虜は殺すよりも政治的に利用するということなのである。
「生かしておけ」
「わかりました。ただ」
「ただ。どうした？」
「捕まるのはハサン側ばかりでティムールの者達は」
「そうはいっていないのか」
「残念ながら」
大佐は苦い顔で答えてきた。

## 第二十三部第四章　舞台は複数ありその四

「一向に捕まりません。どうやら毒別なルートや工作網を持っているようです」
「そうなのか」
「はい。友好国とはいえ油断できない相手です」
「そうだな」
アッディーンは大佐のその言葉に頷く。頷いたうえでまた話をする。
「それも今後捜査を進めていくか」
「そうあるべきかと」
「よし。それでだ」
話を元に戻してきた。また開戦についてだ。
「既に文章にはなっているな」
「はい」
大佐はその言葉に応えてきた。
「外務省は既に。完成させています」
「わかった。それではだ」
アッディーンはそれを聞いたうえでさらに言う。
「私が現地に到着する」
「ええ」
打ち合わせに入る。アッディーンの目が光る。大佐の目も。
「そして既に配備を完了させている兵に動くように指示を出す」
「それと同時に宣戦布告を行う」
「今回はこれで行く。いいな」
「わかりました。既に国境の軍は全軍何時でも戦闘態勢に入られるようになっています」
「うむ」
その言葉を聞いて頷いた。満足した頷きであった。

「いいことだ。それでだ」
彼はさらに言う。
「アステロイド帯だが」
「本当に可能でしょうか」
「可能だ」
アッディーンは言い切った。有無を言わせぬ強いものがその言葉にはあった。
「必ずな。そして」
「勝利を収めると」
「わかったな。それでは」
「はい」
「貴官はこのまま軍内部や各国の諜報機関への調査に当たってくれ」
「わかりました」
大佐はその言葉に答えた。
「ハルヴィシー大将の下で」
「彼もよくやってくれているようだな」
「いえ、相変わらずです」
しかし大佐はここで苦笑いを浮かべてきた。
「どうにも。性格は容易には変わらないものでして」
人によるが人の性格というものは中々変わらないものである。どういうわけか悪い部分程変わらないようである。これも実におかしなことであるが。悪いもの程残りやすいということではないであろうが。
「真剣みが足りないとウルドゥーンもぼやいています」
「彼は中佐になったそうだな」
「ええ」
大佐はアッディーンのその言葉にも答えた。
「その通りです。そして近いうちに大佐に」
「そうか」
「ハルヴィシー閣下は今の階級で満足しておられますが」

「あの人は欲はないからな」
「はい、出世欲や権力欲の類はありません」
「それはいいことだな」
アッディーンはそれを聞いて述べた。人はそれぞれ欲しいものがあるのだ。権力が欲しい者がいれば地位が欲しい者、金銭が欲しい者がいる。ハルヴィシーはそのいずれにも欲がないのだ。彼が興味を持っているのは若い女だけである。こうした人物もよくいるものだ。
「ですがね」
大佐はそれまでの厳しい顔を崩して苦笑いを浮かべてきた。
「あれでは」
「まあそう言うな」
アッディーンはこう述べて彼を宥めてきた。
「完璧な人間なぞこの世には存在しない」
「はい」
これは真理である。人という存在は完璧ではない。これは絶対の摂理である。それは何故か。人は神ではないからだ。神ですら完全ではないのだ。これはそれぞれの神話を見ていけばわかることである。その完全ではない神に創られたとされる、そして進化論では進化の途上である人間が完全である筈がないのだ。完全を目指すことはできるが完全ではないのである。それが真理であるのだ。
「あの人もそうだ。当然私もな」
「ですか」
「そうだ。だからそれは気にすることはない」
「わかりました」
大佐は彼のその言葉を受け入れた。これで納得することにしたのだ。
「さて」
アッディーンはさらに話を続けてきた。
「ハサンも手強いだろうな」

「少なくとも数では我が軍より上です」
大佐の目がまた光ってきた。
「こちらに向けられている兵力だけでも」
「ハサン軍は二〇〇個艦隊だったか」
「確かその位だったかと」
大佐は述べた。
「無論まだ動員は可能でしょうが」
「そしてこちらに向けられているのは」
「およそ一〇〇個艦隊」
大佐は言う。
「それに対して我々は七十個艦隊です」
「数の上では不利だな」
「はい」
大佐はアッディーンの言葉に頷いた。

## 第二十三部第四章　舞台は複数ありその五

「その通りです。そしてこれはティムールもまた同じことでして」
「やはり彼等も優勢なハサン軍を前にしているか」
「その通りです。ハサン軍はやはり数が多い」
「その数を頼みに守ろうとしている」
「そうです。そして守り切った時には」
「反撃に出て来るな」
アッディーンは静かだが確かな声で述べてきた。
「我々の戦力の消耗を見計らい」
「おそらくは」
大佐も同じことを考えていた。そのうえでアッディーンに答える。
「そうしてくると思います。それが彼等の考えかと」
そして言う。
「長期的にはそうしてきます」
「そうだな。それは防がなくてはならない」
つまり勝つしかない、彼はそう言ったのである。そこには強い決意がはっきりと見えていた。そのうえでの強い言葉だったのである。
彼はさらに言う。その強い言葉のまま。
「それだからこそ」
「ええ」
「策がある」
彼は言った。
「策がですか」
「そうだ。開戦と同時に仕掛ける」
そう述べる。
「それが果たせれば勝利の可能性は大きく開けてくる」
「閣下」
大佐は冷静な言葉を彼にかけてきた。

「ハサンはその国境に堅固な要塞ラインを敷いております」
「わかっている」
アッディーンはそれもわかっていた。しっかりとした顔と声で頷いてきた。
「それもな」
「では」
「だからこそだ」
しかし彼はここで言う。
「だからこそ。策があるのだ」
「どういうことでしょうか」
「すぐにわかる」
今は多くを語ろうとはしない。それもまた策であるかのように。
大佐は今一つ話がわかりかねていた。だがそれでもアッディーンの言葉を聞いていた。
「すぐにですか。では」
「まずは前線に向かう」
彼は宣言する。
「それからだ。いいな」
「わかりました。それでは」
「うむ」
彼は頷く。そしてそれから間も無くして旗艦アリーに乗艦し前線へと向かうのであった。このことはすぐにハサン王太子であるルクマーン＝クシードの耳にも届いた。彼はその報告をハサンの首都にいた。そこで全体の指揮、統率にあたっていたのである。
彼はその報告を武官達から聞いていた。そのうえで目を動かしていた。
「そうか、彼も来たか」
「はい」
彼は今国防省の作戦会議室にいた。周りには軍服の将官達が控えている。その機能性のみを重視した簡素な部屋の中で武官達の報告

を受けていたのである。
「いよいよだな」
「おそらくは」
彼の言葉に周りにいる将官達が頷く。皆ハサンの者達である。
「まずは前線ですが」
早速作戦会議に入る。宙に映像が映し出される。ホノグラフィーによる三次元映像でハサンとオムダーマンの境を映し出していた。

## 第二十三部第四章　舞台は複数ありその六

「こうなっております」
そこには全軍の配備状況が映し出されていた。それを見れば国境に双方の軍隊が集結しておりまたかなりの堅固な防衛ラインが敷かれていることも映し出されていた。それはかなりのものであった。
「オムダーマン軍も我が軍の防衛ライン上に集結しているな」
「そうです」
将官の一人がそれに応える。
「その数は七十個艦隊」
アッディーンの言葉と同じであった。
「対する我が軍は百個艦隊です」
「まず数の上では優勢だな」
「それだけではありません」
言葉はさらに続く。
「我が軍の防衛ラインはコロニーレーザーや人工衛星でその護りを固めており」
「かなり堅固なものとなっている」
「易々と突破できるものではありません。突破できたとしても」
「その損害はかなりのものだな」
「その通りです」
将官は自信に満ちた声で返してきた。
「まず彼等はハサンに入ることはできないでしょう」
「そうだな。しかしだ」
ルクマーン太子はここで言う。オムダーマンとハサンの境にあるのは防衛ラインだけではない。アステロイド帯もある。それに注目してきたのだ。
「アステロイド帯は大丈夫だな」
「はい」

またしても自信に満ちた返答であった。
「このアステロイド帯はとても軍艦では通り抜けられるものではありません。天然の要害です」
「それと防衛ラインで防ぎきるのか」
「そうです。ですから」
「オムダーマンには万全だな」
「御安心下さい」
「わかった。それで」
彼は次は前に控えている武官達に顔を向けてきた。先程アッディーンのことを報告した者達である。
「ティムールはどうなっているか」
「はっ、ティムールですか」
「そうだ。どうなっている」
「シャイターン主席もまた動きだしたようです」
その中の一人が言ってきた。
「そうか」
「はい、そして国境の自軍との集結に向かっています」
「やはりな。そこにいるティムール軍の数は」
「およそ四十個艦隊」
「それに対する我が軍は六十個艦隊です」
ハサン軍は二百個艦隊だ。首都とその近辺に四十個艦隊を呼び兵力として置いている。そのうえでさらなる動員態勢も整えている。そうした多重の備えを用意してきていたのだ。全ては戦いに勝つ為だ。
「こちらには彼女がいます」
「彼女か」
女と聞いた太子の目の色が鋭いものになった。
「そうです。彼女ならば見事防いでくれるかと」
「そうだな」
太子はその言葉に頷いた。

「彼女ならばな。必ずや」
「はい。これで備えを磐石なものにしています」
「オムダーマンもティムールもこれで攻められることはできないかと」
「そうだな。だが」
太子はここでそこにいる全ての者達に言った。
「油断はするな」
「はい」
「それはもう」
だがその返事は何処か真剣みが足りないように聴こえた。今ハサンは事故や急死で多くの有能な人材がなくなっている。それは当然ながら軍にも及び太子の周りでもそれまで彼が信頼してきた多くの有能な人材が消えている。その結果二線級の人材を用いなければならなくなっている。このことが影響しているのだ。
「御安心下さい」
「ならばいいがな」
それはわかっているが顔には出さなかった。言っても仕方がないと思ったからだ。
「しかしオムダーマンもティムールも」
「まだ彼等に何かが」
「ある」
はっきりと述べた。
「アッディーン副大統領とシャイターン主席だ」
彼が注視しているのは人であった。
「彼等が前線に来る。それだけで脅威だ」
「しかし殿下」
将官の一人が彼が危惧している通りのことを述べてきた。思わず顔を顰めそうになったがそれをすんでのところで止めた。それには一瞬のことであるがかなりの努力が必要であった。

## 第二十三部第四章　舞台は複数ありその七

「数は我等の方が優勢です。戦争はやはり数です」
「そうです。それに」
太子が危惧していた言葉が次々と出る。そして彼はそれを聞くしかなかった。止めることもできなかったしそれに気付く者もいなかった。
「護りは固めています。今や我がハサンは国全体が要塞です」
「要塞か」
「はい」
ここで太子は言葉にシニカルなものを入れたがやはり誰も気付かない。
「そうです。しかもそれは難攻不落です」
「殿下、我等の勝利はもう決まっています」
「サハラが我等のものに」
「そうなればいいがな」
しかし彼は周りの者にとっては何故かといった感じで懐疑的な言葉を述べてきた。
「果たして上手くいくかどうか」
「無論です」
「疑う余地はありません」
彼等は気付かないまま述べる。
「ですから」
「それは我々が要塞となったハサンにいるからだな」
「その通りです」
「それ以外に何がありましょうか」
また彼に答える。
「勝利が今我等に」
「一つ言っておく」

太子は多くは語らなかった。だがあえて一言だけ言うことにしたのであった。
「何か」
「要塞だな」
「ええ」
将官の中の一人がそれに答えた。
「その通りです」
「そうか。要塞は言うならば城だな」
彼はそれを確認してきた。
「そうだな」
「そうですが」
「殿下、一体何を」
「聞いているのだ」
彼は周りの者の言葉に構わずに続けた。
「城だと今確かに言ったな」
「そうですが」
問われている将官はさらに述べる。自分が当然のことを言っているといった顔をしている。
そして太子も咎める顔でも声でもなかった。ただ問うているだけだ。しかしその問いの内容が問題なのである。彼にはそれがわかっていたが周りの者にはわかってはいない。
「これは昔の日本の戦国大名が言った言葉だ」
「戦国大名？」
「言うならば豪族だ」
問いにこう返した。
「そう考えればいい」
「豪族の一つですか」
「そうだ。武田信玄といった」
戦国大名は戦国時代にその国の主となった大名達のことである。室町時代の守護大名がなった場合もあれば下克上により守護代や豪

族がなった場合もある。中には一介の僧侶が流れ着いてその子孫がなった場合や油売りからなった場合もある。そのケースは実に多岐に渡る。

武田信玄はその中でも最も有名な一人である。甲斐の国の戦国大名で元々は甲斐源氏の血を引く名門であった。守護大名がそのまま戦国大名になった例の一つである。

彼は政治家としても武将としても非常に優れていた。教養もあり実に人間として深みがあった。その彼の言葉を太子は出そうとしていたのである。

「人は城というのが彼の言葉だ」

「人は城ですか」

「そうだ」

周りの者達に述べる。

「わかったか」

「はい、勿論です」

問われていた将官がまず答える。太子はその言葉を聞いてもわかっているとは思えなかったがそれでも黙って聞くことにした。その心を隠して。

## 第二十三部第四章　舞台は複数ありその八

「だからこそ我々は今こうして動員をかけているのです」
「そうです。我が軍は数で圧倒しています。だからこそ」
「何の問題もありません」
「そう思うのだな」
「ええ」
太子の問いにも表情を変えたりはしない。
「その通りです」
「ですから御安心下さい」
「わかった」
真意は隠して頷くことにした。
「では頼むぞ」
「はい。人は城ですな」
「そうだ」
「では人をして城とします。それでは」
「お任せ下さい」
こうして彼等は自信に満ちた顔でそれぞれの任務に向かった。太子は彼等と別れ自身の官邸の執務室に入った。王太子府はハサンにおいては実質的に国を取り仕切る存在となっているのだ。
「お帰りなさいません」
「うむ」
出迎える周りの者達に応える。やはりこれといって表情は見せてはいない。
「留守の間何かあったか」
「いえ」
「何もありませんでした」
「そうか。ならいい」
その言葉に頷く。そして自分の椅子に就く。すぐにサインを求め

る書類が前に出されてきた。
「軍事関係だな」
「はい」
書類を差し出してきた若い官僚が答える。
「西方の防衛に関するものです」
「そういえばあの方面は属国にかなり任せていたな」
「ええ。彼等もかなり健闘してくれているようです」
官僚はこう述べてきた。
「それもかなり」
「いいことだ」
それを聞いて言った。
「彼等には今回はかなり協力してもらわなければならないからな」
「全くです」
官僚はその言葉に頷いてきた。
「特にですね」
「どの国が一番いいのか」
「アヤグーズ王国です」
「あそこか」
その国のことは太子も知っていた。サハラ西方の属国の一つであり国王は女だ。名をグルド＝アルマルジという。美貌の女王として知られている。
「はい。防衛ライン建設においてかなり見事な指揮を見せています」
「やはりな」
太子はそれを聞いて当然だとした。
「彼女ならばな」
「そうですね。流石です」
官僚もこのことに同意する。彼女は女でありながら軍事的才能に恵まれこれまでハサン内部での暴動鎮圧や海賊征伐、属国での内乱鎮静等に多大なる貢献をしてきたのである。その勇敢さもまた有名で惑星制圧戦で目の前をビームが通り抜けても平然としてこう言っ

たのである。
「この程度で私を恐れさせると思うとは片腹痛いことです」
と。これを聞いたアヤグーズの者達は美しく勇敢な自分達の女王に感激しハサンも彼女に賛辞を送り様々な栄誉と褒章を与えたのである。そうした女であった。
「彼女にはやってもらうか」
太子の目に少し望みが宿ったように見えた。しかしそれに気付くことができるのは彼しかいないということもまた問題であったが。
「今回も」
「西方も不穏なものになってきています」
「わかっている」
彼はまた官僚に答えた。
「そろそろ来るな」
「何時来てもおかしくはないです。既にシャイターン主席も」
「アレクサンドリアを出たか」
「はい」
ティムールの首都である。彼がそこを出たということが何を意味するのか位は誰もがわかることであった。軍人ではないこの若い官僚にすらである。

## 第二十三部第四章　舞台は複数ありその九

「では西方もいよいよだな」
　この場合はハサン王国の西方をさしサハラ全体の西方ではない。サハラ全体の西方はオムダーマンをさす。同じようにハサンが使う南方はハサン南方でありサハラ全体の南方ではないのだ。なおここでもサハラ全体の南方はオムダーマンになる。こうしたのはアッディーンの軍事的成功によるものであった。
「開戦か」
「実質的な宣戦布告も間も無くですか」
「そうだ」
　場に緊張が走る。
「そして南方も」
「二正面作戦ですね」
「そうだ、敵は二人」
「しかし恐れることはありません」
　官僚はここでかなり楽観的なことを言ってきた。奇しくも先に太子が話していた軍人達と同じようにだ。
「数のうえでは圧倒しています」
「数はか」
「はい」
　やはりここも同じであった。
「我々は勝てます」
　少なくとも彼はそう確信していた。
「それも確実に」
「確実に、か」
　太子はそれを聞いてまた顔を一瞬だが懐疑的なものにさせた。しかし若い官僚はそれに気付きはしない。
「そうではないですか」

彼はそれを言葉にも出す。
「我々はオムダーマン、ハサンよりも国力は上なのですから」
「国力はな」
彼もそれは認めた。
「確かにそうだ」
「それで充分ではないでしょうか」
官僚は気付かないまま述べる。
「戦力的にも揃っていて守りも固めています。それでどうして負けましょうか」
「そう思うのだな、本当に」
太子はあえて問うてきた。
「君は」
「？何かあるのですか」
「いや」
しかしそれには答えはしない。これも意図してのことであった。
「何もない。しかしだ」
「はい」
「油断はするな」
彼にもわかることを述べた。これならわかるだろうと思ったからだ。
「いいな、決して」
「はい、それはもう」
はっきりと明るい声で答えてきた。笑みさえ浮かべている。
「私もそれは肝に命じております」
「ならいい」
確かに彼は油断していないのはわかった。しかしである。それは気付いていることに対してだけで気付いていないものにはそうではない。太子はそれもわかっていたがやはり言わなかった。いえなかったと言ってもいい。
「よく肝に命じておいてくれ」

「わかりました」
「それでだ」
さらに話を進める。
「防衛ラインと首都までの連結は上手くいっているのか」
「私はそこまでは知りませんが」
彼は答えた。
「申し訳ありませんがそれは専門外ですので」
「そうだったか、済まない」
「いえ」
実はこれもテストだったのだがやはりこの若い官僚は不合格だった。太子はその専門外のことにも精通している者を欲していたのだ。だが彼はそうではなかった。これが今のハサンの問題点なのであるがそれに気付いている者は太子にとっては残念なことに少なかった。
「それは他の者に聞く」
「そのようにお願いします」
「話はそれで終わりだ。御苦労」
「わかりました」
彼は気付くことなくその場を後にした。やはり最後まで気付いてはいなかった。太子はそれを見送ってどうにもやりきれない気持ちであった。

## 第二十三部第四章　舞台は複数ありその十

その気持ちを抱いたまま己の仕事に取り掛かる。それを終えて宮殿に戻ったのはもう遅くであった。
自身の宮殿に入ると宮内省の者達が待っていた。そして彼に声をかけてきた。
「どうした？」
「陛下が及びです」
「陛下が」
言うまでもなく彼の父である現国王だ。
「どうしたのだ、一体」
「夜食を共にしたいとのことです」
「夜食を」
「はい。どうされますか」
「よし、行こう」
彼はすぐにそう決めた。
「陛下のお誘いだ。お断りするわけにもいくまい」
「では」
「うむ。陛下にお伝えしてくれ」
彼は宮内省の者に命じた。
「すぐにそちらに向かうと。よいな」
「わかりました。では」
「しかし。夜食か」
それを聞いてどうにも引っ掛かるものがあった。
「珍しいこともあるものだ」
王は夕食の後はあまり食べないのだ。それは彼も知っていた。だから今こうして声をかけてきたのが非常に引っ掛かるのである。
暫くして宮内省のスタッフに案内されて王の側まで向かう。部屋に入るともうそこには王が待っていた。

「お待たせして申し訳ありませんでした」
「よい、ここでは王でも太子でもない」
王は顔を崩していた。服装もリラックスしたものである。
「よいな」
「はあ」
そう言って彼もリラックスさせてきた。そのうえで食事となった。
小さめのテーブルに向かい合って座る。夜食はクスクスであった。小麦の上にソースをかけたカレーに似た食べ物である。サハラではポピュラーな料理である。
二人はそれにスプーンをつけた。そして食べながら話に入るのであった。
「最近忙しいようだな」
王は我が子にそう問うてきた。
「いえ、別に」
だが彼はそれは否定してきた。
「いつも通りです」
「いつも通りか」
「ええ、ですから」
「わかった。では任せておいていいのだな」
「はい」
こくりと頷いて答えた。
「御安心下さい」
「わかった。最近どうにも帰るのが遅いようなのでな」
王はとりあえずは安心した声で述べてきた。
「心配していたのだ」
「そうだったのですか」
太子はそれを聞いてまずは王の親心に感謝した。
「お気遣いかたじけのうございます」
「だから他人行儀にならなくともよい」
王は穏やかな声でまた言った。

「今はな。公式の場ではないのだから」
「はあ」
「くつろげばいいのだ。その為に呼んだのだからな」
「左様でしたか」
「うむ」
穏やかな顔で頷いてきた。どうやらそれで間違いではないらしい。
「そうなのだ。どうだ、このクスクスは」
「はい」
銀のスプーンで口に入れながら答える。その黄色い麦と茶色のソースが口の中で絶妙な調和を見せる。香辛料が程よく効きその調和を生み出していたのである。

## 第二十三部第四章　舞台は複数整いその十一

「よいですね」
「そうだろう、シェフに無理を言って作ってもらったのだ」
「そうだったのですか」
「そなたが疲れていると思ってな。それで」
「勿体なきことでした」
「それもよい」
また穏やかな声で答えてきた。
「いつも国の為に働いてもらっているのだ。この程度は」
「それでも」
「しかしだ」
王はここで言う。
「そなたは最近一人で全てを抱え込んではいないか」
「それは」
少し否定しにくくなった。今の場が穏やかなものになっていたのと実際に彼は最近一人よがりになってきていたからだ。それも自覚はしていたのだ。
「どうなのだ」
「そうかも知れません」
自分でもそれは今はっきりと認めた。
「しかし私は」
「それもわかっている」
王はまた答えてきた。
「そなたは摂政であるからな」
「はい」
実質的に国を動かしているのだ。だからこそあらゆることに目を向け耳を傾けているのである。しかしそれでも彼は人間なのだ。限界もあり疲れも感じるのである。王はそこを指摘してきているのだ。

「どうしても無理をしてしまう」
王は言う。
「だからそれを気を着けるのだ。いいな」
「わかってはいますが」
彼も苦い顔で述べる。
「どうしても。その」
「やはり今は無理か」
「ええ、今は」
その言葉に頷くことしかできなかった。
「どうにも何事も焦眉の急でして」
「こんな時期だからか」
「ええ、どうにも」
苦い顔でそう述べるのであった。それは変わらない。
「仕方ありません」
「確かにそうだ」
王は一旦はそれを認めた。
「しかしだ。それでも最低限の休養は必要だ」
「一応は取っているつもりですが」
「そうかな。わしにはそうは見えぬが」
王の目が光る。普段の温厚な目とは違っていた。
「だからだ」
「もっと休めと」
「そうだ。しかし難しいか」
「はい、申し訳ありませんが」
またクスクスを口に入れた。食べることよりも話す方に重点を置いていた。
「やはり時間が」
「それではだ」
王はそれを受けてまた言ってきた。
「別の方法で身体を養うべきだな」

「といいますと」
「だから今だ」
「今、ですか」
「そうだ。食べることだ」
王は自らもクスクスを口に入れながら言う。
「食べて身体を整えてはどうかな」
「それで私をここへ」
「うむ。疲れを取ってもらいたくてな」
ここで笑みを浮かべてきた。
「そう思ってのことだ。どうだったかな」
「いえ、陛下」
太子はその言葉を受けて態度を畏まらせてきた。
「有り難きお気遣い」
「だから他人行儀でなくともよいと言っているのだが」
「はあ」
「それは昔から変わらぬな」
こう述べて笑ってきた。父親の笑みであった。
「仕方ないか、それは」
「申し訳ありません」
「まあよい。それでこのクスクスだがな」
クスクスに話が移る。一見ごく普通のクスクスである。味もそうだ。確かに美味いが普通のクスクスにしか思えない。

## 第二十三部第四章　舞台は複数整いその十二

「薬膳なのだ」
「薬膳といいますと」
太子はそれを聞いて目を見開いた。それが何かは彼も知っている。
「中華料理のあのようにな」
「しかし味が」
「変わらないというのだな」
「ええ。しかしですか」
「うむ。それでもな」
王は笑ったままであった。やはり太子から目を離しはしない。料理を語るよりも太子を見ているといった感じであった。
「はあ」
「入れておるのだ。それも精のつくものを」
「精をですか」
「そうだ。麦にもソースにも混ぜてある」
王は今度はクスクスを中心に語った。しかしそれでも太子から目を離しはしないのであった。
「味を隠してな」
「私の為に」
「確かに働くのはいい」
王はまた言う。
「しかしな。それと一緒に身体を労わることだ」
「何かしらですか」
「仮眠もあまり取ってはおらぬだろう」
王はそれも指摘してきた。どうにも細かいところをよく見ている。
「だからこそだ。そうしたことで身体を労わっていかねばな」
「それで今日」
「これを食べて疲れを癒せ」

王は率直に述べた。
「よいな」
「わかりました」
彼もそれに頷く。王はそんな彼にさらに言う。
「普段からも心掛けると尚よい」
「普段からですか」
「そうだ、食べ物に気をつけてな」
王はそう我が子に言い含めてきた。気遣う声で。
「わかったな」
「はい、有り難うございます」
太子はその言葉に頷く。
「ではそのように」
「そうだ。まずは健康管理からだ」
何か教科書に書かれているような言葉であった。しかし実際にそうした健康管理が重要なのは言うまでもないことなのである。
「それを為してこそなのだ」
「戦えるのは」
「兵士達の食事もだぞ」
今度は戦場の兵士達に気を配ってきた。
「わかっているな」
「はい、それは勿論」
クスクスはかなり食べられていた。そのうえで彼は答える。
「レーションも含めてそれは配慮しています」
「そういえばだ」
王はふと話題を変えてきた。
「何か」
「連合軍の食事はかなり凄いそうだな」
「そのようですね」
太子もそれに答える。その話は彼も耳にしていた。もっとも直接見たことも食べたこともないのであるが。それでもおおよそのこと

は知っていたのだ。
「連合軍は食事でも人を集める材料にしていますから」
「食事でもか」
「はい、これだけ色々ないい食べ物が食べられるということを宣伝にして」
彼は述べる。
「人を集めています」
「集まるのか？それで」
「さて、それは」
現場にいないのでそこまではわからない。そもそも徴兵制のサハラと志願制の連合ではそこへの発想も大きく異なるのだ。それを理解するのはかなり困難である。
「どうなのでしょうか」
「わからぬか」
「連合は様々な料理店も多いですし」
彼はそれは知っていた。

## 第二十三部第四章　舞台は複数整いその十三

「外に出れば食べられるものですが」
「そもそも連合軍は常に人員確保に苦労しているそうだな」
「はい」
これは有名であった。
「ようやく定員といった状況だとか」
「深刻な事態だな」
サハラから見ればそうなる。軍隊が定員割れとはそれだけで国防の危機であるというのが戦乱の中にいる彼等の見方だ。これはハサンにおいても変わりはしない。
「よくそれで軍としてやっていけるものだ」
「実際彼等はその人口のせいで数が多い軍隊でありますし」
「うむ」
「人口比では決して多くはありません」
「そうだな。むしろ小規模だ」
「ええ」
連合は人口が多い為に数が多い軍隊なのだ。実際は防衛費も予算での割合では微々たるものであるし質素な軍隊なのである。それをわかっている他の勢力の者は実に少ないのであるが。
「連合のような勢力では軍隊は強い力を持ちませんし」
「想像できんな」
王は思わずそう呟いた。
「それ自体が」
戦乱のサハラでは軍が強いのが当然である。軍事政権も多く存在してきた。所謂軍国主義である。連合では有り得ない政治システムと思われているがこれもまたサハラだからこその話であるのだ。
「それも平和だからです」
「ふむ」

王はその言葉を聞いて頷いた。
「平和か」
「はい、一千年の平和」
連合を評して言われる言葉である。太子も今それを言った。
「それにより、です」
「こう言っては何だがな」
王はその一千年の平和という言葉を聞いて述べてきた。
「何か」
「アッラーは我等に戦いという試練を与えられたのだな」
「戦いですか」
「そうだ。そしてそれにより我等は戦ってきた」
「千年の間」
連合が一千年の平和ならばサハラは一千年の戦乱であった。運命は同じではなく歴史も同じではない。連合が歩んだ歴史とサハラが歩んだ歴史は違う。連合は一千年の間発展のみを考えてきてサハラは戦争を考えなければならなかった。その運命の違いを彼等は今思ったのである。
「因果なものです」
太子は一言言った。
「これは失言ですが」
「いや、それはどうかな」
「といいますと」
アッラーに異議を呈したような今の発言であったが王はそれをかえって指摘してきた。咎めはしなかったがより深い意味w見出したようであった。
「全てはアッラーの思し召しだ」
「はい」
まずはこの言葉が出された。太子もそれに頷く。
「そしてだ。ジハードで死んだ者は天国へ行く」
「即ちアッラーは我等を天国に導いて下さっていると」

「そう考えることもできるのではないか」
王は言う。
「一方だけで見て言ってはどうか」
「確かに」
太子もその言葉に頷いた。

## 第二十三部第四章　舞台は複数整いその十四

「そうなりますね。これは宗教としての見方ですが」
「政治にも使える」
王はこうも付け加えてきた。
「そう思うが」
「つまり一面的に見るなということですが」
「そうだ」
王はまた言った。
「そして他の者を羨むのもな。よくはない」
「確かに」
太子はその言葉にも頷いた。どうにも父に教えられることばかりであった。この王は父としてはそれなり以上のものを持っているようである。
「羨めば目が暗む」
これはアッラーの言葉ではない。彼自身の言葉だ。それをあえて今口にする。我が子に言い聞かせるかのように。今言うのであった。
「よいな」
「ええ」
「目が暗くなってはそれで何もかもが見えなくなってしまうのだ」
「詰まらない感情により」
「それがあってはならない」
また言葉が強くなる。彼は我が子につとに言い聞かせる。
「連合は確かに平和だ」
これは確かだ。覆らない真実だ。
「しかしだからといって彼等を羨むことはない」
「サハラはサハラですか」
「そういうことだ。羨めばそれで終わりだ」
「目が曇り」

話がわかってきた。太子は正直連合の平和を羨んでいた。それが父王の言葉により晴れようとしていたのだ。重い言葉であった。
「見えなくなるからですね」
「戦争が終われば」
全てに終わりがある。サハラの戦乱も。今はそれが見えてきた時代だ。しかしそれはそれで問題がある。平和をどう維持していくかである。
「連合になるか。それとも」
「それとも」
「サハラであり続けるか。それもまた問題だ」
「サハラであらねばならないでしょう」
彼は言った。
「やはり我々は」
「そうだ。我等はサハラの者」
「サハラであるべきですね」
「そうだ。サハラの平和でなければならない」
「連合の平和ではなくですか」
これには複数の意味があった。連合に取り込まれないこと、サハラに合った政治システムであること、サハラの文化を守ること。そうした複数の意味があるのであった。
「わかるな」
「はい。では」
「サハラであるのだ」
王はまた言った。
「それが大事なのだ。それを為す為にも」
話が元に戻る。太子もそれを受ける。
「身体を保つべきであると」
「酒もな。過度に飲むのはな」
「それは慎んでおります」
太子は返した。これには元々イスラムは酒に関して戒めのある宗

教であることも影響していた。実際にはイスラムで禁酒というのは守られている時代もあれば守られていない時代もある。というよりはその時代のイスラム法学者の見解で変わるのである。トルコにおいてはかなり酒が飲まれていた。ケマル＝アタチュルクは酒好きとしても知られていたし今の連合では酒を飲まないムスリムの方が主流であった。もっともサハラから見れば連合のイスラム教はかなり変質したものであるのだが。

「元より」

「ならばよいが。そういえばだ」

「何か」

ここで王はあるものを思い出してきた。それを息子に対しても紹介する。

## 第二十三部第四章　舞台は複数整いその十五

「連合には面白い酒があったな」
「面白い酒といいますと」
「うむ、蝮酒だ」
王はそれを出してきた。
「あれは滋養にいいらしいな、それもかなり」
「どのようなものですか、それは」
「私も実物は見たことはないのだがな」
そう前置きをしたうえで息子に対して言う。
「焼酎や老酒にな」
「確か芋で造る酒とコーリャンという雑穀で造る酒ですね」
「そうだ。そこにな。蝮を入れるのだ」
「それはまた」
太子はそれを聞いて顔を顰めさせてきた。かなり露骨な顔になっている。
「かなり精がつくらしいな」
「蝮がですか」
「そうらしい。連合では蛇は滋養に効くと言われている」
連合では食べないものはないと言っていい。当然蛇も食べる。そもそもこうした酒は昔からある。漢方医学では蝮は滋養に非常によいとされてきているのである。それであった。
「どうだ、一度飲んでみたら」
「いえ、それは」
しかし彼は難しい顔をしてみせてきた。
「遠慮致します」
「そうか、いいのか」
「どうにも。そうしたゲテモノは」
「ではクスクスでいいのか」

既に食べ終えた夜食に話が戻った。
「はい、それで滋養が取れるのなら」
彼はそう答える。
「何も蛇なぞ食べなくとも。そもそもそれは」
「おっと、そうだったな」
王はここで苦笑いを浮かべてきた。
「サハラの風習ではないな」
「イスラムでは蛇は食べなかった筈ですが」
「そうだった。まあ連合のムスリム達は食べているようだがな」
「まさかそれも刺身にはしないですよね」
「するらしいな」
「何と」
それを聞いて今度は目を顰めさせた。信じられない言葉であった。
「では日本人が」
「そのようだ。彼等の生ものへの信仰は相変わらずだ」
「恐ろしいことです」
「何しろ羊も刺身にするしな」
こう言われてサハラでは気味悪がられていたりする。実際に日本人は羊の刺身を食べるから反論も何もできはしない。なお兄弟国家である琉球王国から伝わった山羊の刺身もある。日本人と琉球人は互いに山羊の刺身で乾杯したりするのである。
「蛇も。それどころか豚もな」
「そのようですな」
この話も聞いていた。流石にこれはムスリムとしては怖気を奮うものであった。
「とにかく何でも食べると」
「そうだな」
王はその言葉に応えて頷いてきた。
「日本人というものは。恐ろしい」
「疫病にはかからないのでしょうか」

太子はふとかなり古い言葉を使ってきた。この時代でも伝染病という。ここでは彼はムスリムの観念を心に抱いていたのでついそれに出て来る言葉を使ったのである。

「疫病か」

「病気と言い換えてもいいでしょう。とにかくそんなに生のものを食べておかしな病気にはならないのでしょうか」

この時彼は病気に虫も入れていた。寄生虫のことだ。寄生虫はかなり厄介なもので死に至るような事態を引き起こす種類もある。彼はこれについても言及していた。

「連合はそちらの技術も発達していてな」

「殺菌ですか」

「そうだ。そうして生ものを食べているらしい」

「左様ですか」

「特に日本はな。五月蝿いそうだぞ」

王は述べる。

## 第二十三部第四章　舞台は複数整いその十六

「それにだ」
「それに？」
「連合の医学は知っているな」
彼はまた連合について述べる。目が深いものになっていた。
「連合の医学ですか」
「彼等はそちらにも、特に衛生や細菌に関しては発達している」
実はこれは必要にかられてのことである。それは彼等も知っている。王は今それをあえて言うのであった。それが話の今の本題だからである。
「惑星解発の為にな」
「そうしたものは我々も欲しいですな」
太子は述べた。
「サハラらしさとはまた別に」
「そうだな。そうした技術は平和になった時にこそ必要だ」
「繁栄の為に」
「サハラはこれから繁栄を目指すべきなのだ」
戦争が終わった後は繁栄を。彼等の目指すべきものは実に大きなものである。だがそれを求めるにはやはり彼等はまずは戦争を終わらせなくてはならなかった。今度はそれについてまた話すことになった。
「それでだ」
「はい」
太子は王の言葉を受けて声をあげた。
「どうだ、今は」
「間も無くです」
彼は答えた。これまでよりもさらに真剣な顔でである。
「開戦の時は」

「そうか、いよいよか」
「我々は受けて立つ側になります」
彼は言う。
「オムダーマン、ティムールが宣戦布告をしてくることになるでしょう」
「ふむ」
「既に守りは整えていますが」
ここで彼は浮かない顔をしてみせた。
「しかし」
「何かあるのか。不安なものが」
「はい。実はですね」
彼は父王を前にしてようやく今まで言わすにいたことを言うのであった。それは今まで心に収めていて言うに言えないことであった。誰にも。
「今我々は人材がいないのです」
「そうなのか？」
王はそれを聞いて目をしばたかせてきた。
「そうは思えないが」
「一連のテロ等によって」
彼は答える。
「それまで頼りにしていた者達がいなくなりました。そのせいで」
「困っているか」
「はい」
その言葉に答える。彼の悩みはそれであった。
「おそらくティムールのものによると思われます、一連のテロや急死は」
急死とは実に都合のよい言葉である。原因不明の死去というものだ。歴史上それにより死んだ者は数多い。事態の真相は闇の中というわけである。だがそれを知ることは容易ではない。そういうことなのである。

「それにより今は二線級の人材が主流になっています」
「そうか」
「左様です。困ったことに」
ハサン、いやサハラ自体が人で戦う世界なのだ。連合のようにシステムを完成させてそれで完全にその中で戦うといったことはないのである。
「しかも相手はあの二人です」
「アッディーン副大統領にシャイターン主席か」
「はい、彼等に対してどう向かうか」
彼の悩みはそれであった。今それを述べる。
「それなのです。ですから私は」
「だからこそだ」
王はここで述べてきた。毅然とした声で。
「だからこそとは？」
「身体を保て。彼等に対抗できるのは御前だけなのだからな」
「私だけと」
「そうだ。ハサンには御前がいる」
王はそう言う。
「御前こそが二人に対抗できる者だ。だからこそ」
「身を保てと」
「わかったな。そういうことだ」
「わかりました」
それを言われてようやく完全に理解した。太子はそのやり取りの後で自分の鈍さを歯がゆくも思うのであった。だがそれは父を前にしても顔には出さない。

## 第二十三部第四章　舞台は複数整いその十七

「では」
「うむ。それでだ」
王はまた言う。
「この後はどうするのだ」
「まずはまだ仕事が残っていますので」
彼はそれに応えて述べる。
「一旦また執務室に戻ります」
「そうか」
「しかしそれは早いうちに切り上げます」
こうも述べた。やはり父王の言葉を受けてのことであった。
「そして休むことにします」
「そうだ、それがいい」
王はその言葉を聞いて満足げに頷いた。
「わかるな。休養の大切さが」
「はい。それではそのように」
「身体を大事にしろ。これからが肝心なのだしな」
「ええ」
太子もまたその言葉に頷く。確かな顔で。
「戦いに勝利を収めた者こそがサハラを治める。そして」
「皇帝になると」
預言の通りであった。彼等もそれを知っていた。だから今それを言うのであった。
「皇帝になるのは御前だ」
王は今また太子を見据えてきた。
「よいな、それは」
「私がですか」
「そうだ。そうなったならばわしは王位を退く」

彼は言う。
「そして御前が皇帝になるのだ。よいな」
「宜しいのですか、それで」
太子は父に問うた。
「父上が皇帝になられなくて」
「この様な老いぼれが皇帝になって何とする」
王は我が子の言葉に自嘲めかして笑ってきた。彼は自らの衰えを誰よりもわかっていた。彼にしてみればこの言葉は自然な言葉であった。
「そうではないのか？それに今ですら御前にかなりのものを任せているのだ」
「はあ」
実際に太子は摂政となり実質的な国政の指導者となっている。王が以前病に倒れ健康を損ねてからそうしてきているのである。
「だからだ。御前が皇帝になるがいい」
「わかりました」
彼はその言葉に頷いた。そしてまた言う。
「では私が。サハラを治める者に」
「よいな、それで」
「わかりました」
彼は今意を決した。それをはっきりと述べたのであった。
「では」
「だからこそだ。これからは激しい戦いになる」
王は言う。
「サハラの全てを巻き込んだな。かつてないものになる」
「はい」
太子もその言葉に応える。これはわかっていた。
「わかっております。長い戦いになるでしょうが」
「勝たなければならない」
それは絶対であった。戦うからには勝たなければならないのだ。

それが政治の一手段としての戦争なのだ。負けていいというわけにはいかないのだ。特に今回はである。
「ではわしが言うのはこれで終わりだ」
「はい、それでは」
「うむ。またな」
夜食は終わり太子は父王の下を離れた。それからは食事に気を使いかなり身体に注意するようになっていた。こうして彼も戦いに備えていたのであった。三国の戦いの火蓋が切られるのは時間の問題であるのは彼もよくわかっていたからであった。
全てははじまろうとしていた。

# 第二十三部第五章　時は迫れりその一

時は迫れり

アッディーンもシャイターンも前線に向かって行く。戦いの時が迫ろうとしているのは誰の目にも明らかであった。

しかしまだ公には戦闘状態ではなく平和な状態であった。まだ宣戦布告も為されていないからだ。

前線には将兵が集まり艦艇が剣呑な気配を放っている。しかしそれでも戦争にはまだ至ってはいない。ギリギリの状態で維持されているだけであった。

そのギリギリノ状態が続く。しかしそれは今にも終わりそうな気配であった。戦いが近いのは誰の目にも明らかなことであった。これもまた事実であった。

それを見る連合の者達はまだ自分達の権益の確保に忙しかった。とにかく最後の最後まで働くつもりであった。彼等はその為にあちこちで動き回っていた。しかしそれも遂に終わる時が来た。

「そうか、遂にか」

「ああ」

オフィスでやり取りが行われていた。ハサンとティムールの国境にある星系の一つにおいてだ。そこで彼等は顔を見合わせて話をしていたのである。

「本社からだ。もう全ての権益の安全を確保した」

「それで俺達も退避か」

「ああ。後方までな」

「わかった」

話を聞く男はそれに頷いた。それから述べた。

「じゃあ下がるか」

「会社の方で便は用意してくれている。後はここの荷物だけだな」

「そうだな」

オフィスを見回して言う。既にかなり片付けられている。
「ここも引き払うか」
「戦争に巻き込まれないうちにな」
「戦争か。今度のはかなり激しいものになりそうだな」
「そうだな」
話をする男は彼の言葉に頷いた。
「だから下がるんだしな」
「出来ればここでずっとビジネスがしたかったがな」
「残念だがそうもいかないらしい」
「やれやれだ」
彼はそれを聞いてあらためて溜息をついた。
「まあ余所者が何を言ってもはじまらないしな。何かあったら逃げるしかない」
「逃げられるだけましさ」
男はそう言って苦笑いを浮かべてきた。
「本当に悲惨なのは逃げられない連中さ」
「そうか。その連中に比べたら」
「俺達はな」
連合の者達は次々に国境から下がっていく。残っているのはジャーナリストだけで彼等も何とか報道の可能な安全な場所を探している状況であった。
「チーフ、ハサン軍から場所を提供してもらいました」
「そこ、大丈夫か？」
ホテルの一室でスタッフが集まって打ち合わせをしている。彼等は報道と安全を天秤にかけて話をしているのであった。彼等にしてみればどちらも考慮に入れなくてはならない死活問題であったのだ。
「全てのジャーナリストが集められていますから」
「連合とマウリアのか」
「あとサハラ各国の。いないのは戦場カメラマンだけですね」
「連中はまた特別だな」

チーフはそれを聞いて述べた。
「命懸けで行っているからな。ある意味神だ」
「全くです」
スタッフの一人がそれに頷く。
「遠隔カメラでノ撮影ではなくあえて間近で、ですからね」
「勇気がある。フリーでないと出来ない仕事だ」
「はい」
そうしたジャーナリストはこの時代も健在であった。ロバート＝キャパの名はこの時代においても不滅のものであった。もっとも死傷率もかなり高いのであるが。それでもなる者が後を絶たないのは間近で撮る戦場写真の凄みに惹かれるからであろう。これは理屈ではなかった。
「連中も必死か」
「俺達もですよ」
別のスタッフがチーフにそう述べてきた。

## 第二十三部第五章　時は迫れりその二

「命までは流石にですけれどやっぱり」
「そうだな」
　チーフもそれに頷く。
「これで飯食ってるしな。何としても」
「ええ」
「ですから」
「わかっている。それでここはだな」
「はい」
　話が再開される。打ち合わせは細かいところまで行われる。そうして話を進めていくのであった。彼等もまた真剣であった。少なくともジャーナリストの誇りはそこにあった。
　戦いがはじまるのを嗅ぎつけるわけではないがそれぞれの者達がそれぞれの動きを見せている。それは外でも同じであった。連合では中央政府をはじめとして各国政府もあらゆる機関もしきりに国境からの退避を勧告していた。そうして自分達の市民の安全を計っていたのだ。
「一応殆どの人間がそれぞれの国境から退避したようだな」
「ええ」
　アッチャラーンがキロモトの言葉に頷いていた。
「残っているのはそこに根付いていてどうしても離れたくない人間か行方不明者だけです」
「行方不明か」
「残念ながら何処にでもあるものです」
　浮浪者になっているか野垂れ死んでいるか。どちらにしろ身を持ち崩したりしてそうなる人間は多い。そうした話は何時の時代の何処にもあるものである。
「なるべく探していますがやはり限界もありまして」

「そうか。そろそろリミットだしな」
「はい、後は責任を持てないかと」
「わかった。とりあえずは避難は間も無く終わりだ」
「わかりました」
アッチャラーンはその言葉に頷く。
「これで打ち切りだな」
「ですね。既に殆どの市民は退避していますし」
「権益も確保されている。我々がこの戦争で受けるダメージは皆無に近くなった」
「後は高みの見物ですか」
「いや」
しかしキロモトはここで言った。彼はそれだけでは済まないと見ていたのだ。
「もう一つ用意しておくことがあるな」
「それは一体」
「亡命者の受け入れだ」
彼は言う。
「亡命者ですか」
「そうだ。この戦争で少なくとも一つの国がなくなる」
「ええ」
これは確実であった。戦争になり国がなくなるのは。ならばそれにより亡命者が出るのは当然であった。彼はそれを読んでいたのである。
「だからだ。それも用意しておこう」
「わかりました。それでは」
「難民も出るかもな」
キロモトはさらに付け加えてきた。
「戦局自体では」
「それはないと思いますが」
「ないか」

「はい。かつてのエウロパ軍のサハラ侵攻の様な事態を想定しておられるのですよね」
「そうだが」
キロモトはそれに応えて述べた。
「流石にああしたことはないでしょう。何故なら今度の戦いはサハラの者同士の戦いですし市民を追い出してはその後の統治もままなりませんから」
「それはないか」
「はい。安心していいと思います」
彼は言う。
「難民は今回は出ません。兵士による蛮行もないでしょう」
「それは厳しく取り締まられるか」
「オムダーマン軍もティムール軍もそうした軍隊ではありませんし」
これが重要であった。規律が確かな軍隊ならば蛮行も行われないのだ。八条がまずそれを意識して軍を統括しているのはこれを念頭に置いてのものである。その結果として連合軍は規律が行き届き戦場においても紳士であることができたのである。彼は訓練よりも規律に重点を置いている程であった。連合軍は規律の軍隊であった。
「またハサン軍もそうです。今回は醜い話はないかと」
「そうか。では亡命者の受け入れ準備だけで」
「よいでしょう。まあ彼等は程なく何処かの国に落ち着くでしょう」
「我々の中のな」
「はい。おそらくはシャプール連合王国かと」
連合の新興国家の一つである。サハラからの亡命者により建国されている。サハラ内部での敗残者達が集まり国家を形成しているのだ。かつての王家がそのまま入って王となる。その王達の連合なのである。
「やはりあそこになるか」
「そうかと。シャプール政府にも話をしておきますか」
「そうだな」

キロモトはその言葉に頷く。
「そうすれば後々問題も起こらないだろう」
「はい。ではそのように」
「既にシャプールは動いているかな」
「いえ、それはまだです」
アッチャラーンはそう答える。
「水面下ではわかりませんが」
「そうか」
「はい。まだ戦争ははじまってはいませんし」
これが重要なのであった。戦争はまだなのだ。つまり誰が負けるのか、それすらもはっきりとはしていないのだ。だから今何を動いてもそれは徒労になるものが多いのだ。だからシャプールも表だっては動いてはいないのである。
「そこまでは至っていないようです」
「わかった。ではこの件に関してはこちらは動かないでおくか」
「それが宜しいかと」
「それでだ」
キロモトはそれでも言う。

## 第二十三部第五章　時は迫れりその三

「今後か」
「はい、どの勢力によりサハラが統一されると今後どうなるか。それを想定しているようです」
「そうか、流石だな」
キロモトはそれを聞いて満足そうに頷いた。むしろ八条のその動きは彼の予想を上回るものであったのだ。嬉しい誤算と言えるものであった。
「私の予想だがな」
キロモトはまた言った。
「一番穏健なのはハサンかな」
「おそらくは」
アッチャラーンもそれに同意して頷いてきた。
「我々としてはハサンが統一してくれるのが一番望ましいですな」
「そうだ」
キロモトも同じ考えであった。彼等は同じことを願っていたのである。これは連合全体の利益を考えてのことであった。
「中央政府及び各国とはつながりが深いですし」
まずはそれであった。これまでの交流を重視していたのだ。その間に彼等が築いてきたものがそのまま受け継がれるのならそれに越したことはないからである。
「このままサハラ全土にまでそれを及ぼせることができれば」
「それに越したことはないわ」
「その通りです」
アッチャラーンはまた頷く。
「勢力的にはハサンが一番統一の可能性がありますが」
「不確定要素も多いしな」
キロモトはサハラの者達よりも遥かに冷静にものを見ていたのに

は訳がある。それは彼自身の能力や持っている情報によるものも大きいがこの場合は立場が大きく影響していた。直接の関係者ではなく周りにいる者として客観的に見ることができたのである。当事者でないならばそれだけに離れた場所からそれを見て判断を下すことも可能なのだ。人はその時の立ち位置から判断を下すことが多いのである。

「そうはなるかな」

「さて。どうですかな」

その見方はアッチャラーンも同じであった。だから彼も即答は避けた。

「やはり後の二国の可能性もあります」

「オムダーマンはどうかな」

「正直我々はあまり知らないところがあるかと」

それがアッチャラーンの意見であった。

「知らないか」

「はい」

そのうえで答える。

「オムダーマンは西方の端にいました」

「うむ」

「西方においてはそれなりの勢力でありましたが我々にとっては」

「僻地でしかなかったな」

「その通りです」

キロモトの言葉に応える。そのうえで話を続ける。

「サハラ辺境の一国家でした。取り立てて見ることのない」

「そうだったな。注目されだしたのは」

「やはり西方統一の経緯からでありました」

これまでのオムダーマンの動きを回想するようにして述べてきた。実際に彼は今己の頭の中にあるオムダーマンについての知識を回転させてきていた。

「ミドハド連合との戦いからでしたな」

「オムダーマンの躍進は」
「はい、一人の若者によって」
その若者こそが今のオムダーマンを築き上げたのだ。非常に大きな位置にあるのは間違いなかった。彼も今それを言っているのである。
「アッディーン副大統領により」
「まさに英雄か」
キロモトはその名を耳にして述べた。
「相次ぐ勝利でミドハドを倒し」
「そしてサラーフも倒しました」
「サラーフか」
その名を聞いてキロモトの眉が僅かだが動いた。
「愚かな話だった、あれは」
「彼等の破滅ですか」
「そうだ。ナベツーラだったな」
彼はナベツーラの名前を口にした時嫌悪感を露わにさせてきた。心の奥底から彼を嫌悪しているのがわかる。実際に連合においてもナベツーラといえば愚劣極まる男として知られている。サハラでは尚更であるが。
「あの破廉恥漢は」
「あの男のせいでサラーフは滅亡しました」
アッチャラーンも嫌悪感を言葉に滲ませていた。
「しかしそれ以上に」
「そうだ」
彼は言う。
「アッディーン副大統領は見事な活躍を見せたな」
「はい」
アッチャラーンはあらためて頷く。

## 第二十三部第五章　時は迫れりその四

「あれは確かに見事でした。その結果として西方はオムダーマンに完全に統一されました」
「その通りだ」
「そして南方。やはりその軍事的才能は非凡です」
「彼なくしてオムダーマンはなかったな」
「おそらくは」
そう語ったうえで話を続ける。
「その彼が今前線に向かっているそうです」
「オムダーマンとしては本気か」
「間違いなく」
アッチャラーンも頷く。
「確実にハサンを倒すつもりです」
「そういえばだ」
ここでキロモトはふと言ってきた。
「何か？」
「いや、そのアッディーン副大統領だ」
「はい」
話は彼に重点が移っていた。アッチャラーンもそれに応えてきた。
「彼は今軍事のトップ、そしてオムダーマンにおいても第二の地位にある」
「ええ、確かに」
まずその前提について述べられた。
「だがそれから先はあるかな。例えば大統領だが」
「そうですな」
アッチャラーンは考える目をして上を見た。それから述べた。
「可能性としてですが」
「うむ」

「大統領職を譲られる可能性があります」
「大統領を」
「はい、サハラは全体として流動的な政治体制ですし」
これは連合ではないことである。連合は選挙によって国家元首は任期をまっとうするのが常である。君主制の国は別にしてだ。しかしサハラにおいては職を譲られる場合もあればクーデターの場合もある。クーデターは安定している連合ではないがサハラでは普通にあるのだ。彼等はそれも考慮に入れているのである。
「有り得るかかと」
「これまでの功績でか」
「はい、彼の人気は最早カリスマ的でありますし」
これも非常に大きかった。
「充分に考えられます」
「そうか」
キロモトはその言葉に応えた。
「ハサンに勝利を収めればその可能性はさらに」
「それだけの英傑であると認められてか」
「そうなります」
「アッディーン副大統領についてさらに調べておく必要があるな」
彼はそこまで聞いて述べた。
「連合の為にも」
「はい、今までノーマークの部分も多かったですし」
アッチャラーンも言う。
「彼に関する調査がオムダーマンが統一した場合に直結するでしょう」
「わかった」
キロモトはその言葉にも頷いた。こうしてオムダーマンに対しても決まった。
だが最後に一つ残っていた。問題はその勢力であった。
「そしてだ」

キロモトもその目を光らせて述べる。
「ティムールだが」
「シャイターン主席の」
「英雄とは聞くな」
何故かここでキロモトは前置きを置いた。目も言葉も剣呑なものに対するものになっていた。
「サハラ、特に北方では熱狂的な人気を誇ると」
「はい」
アッチャラーンもそれに頷く。
「しかしだ」
「彼には。あまりにも厄介な話が多いです」
「手段を選ばないというのは事実らしいな」
「それです」
アッチャラーンもそれを指摘してきた。
「富豪の未亡人と結婚したのはいいですが」
「それはな」
キロモトもそれには何も思うところはなかった。
「別に構わない。所謂政略結婚だからな」
「そうです」
政治の世界ではままあることだ。これは連合でもないわけではない。政治家の子供同士がそれぞれの家の都合で結婚することは見られないわけではない。これは財界でもあるし巷でもないわけではない。どの世界でも結婚は本人同士のつながりでもあるし家同士のつながりでもあるのだ。
「それはいいのですが」
「おかしいのだな」
キロモトは話を本題に入れてきた。
「彼の周りでは不穏な死が実に多い」
「シャイターン家の周りでは」
「その通りだ」

それであった。キロモトとアッチャラーンが警戒しているのはそれであったのだ。

## 第二十三部第五章　時は迫れりその五

「ハサンの件、どう思うか」
「間違いないかと」
アッチャラーンの声もキロモトと同じものになっていた。
「証拠はありませんが状況等を考えますと」
「そうだな」
キロモトもそれに頷く。
「そう考えるのが妥当だな」
「ですが証拠はない」
政治の世界は状況だけで判断して対処しなければならない。だが追い詰めるにはやはり証拠が必要なのである。シャイターンもそれがわかっているのだ。
「証拠は」
「それはおそらく絶対に出ない」
キロモトは断言した。
「少なくとも今の時代にはな」
「ですな」
「特に彼は。そういうのはわかっている」
「わかっているからこそ、ですな」
アッチャラーンの言葉がさらに剣呑なものになった。
「頭がいいというか」
「彼が頭が切れる男なのは事実だ」
キロモトはそれは認めた。
「しかしだ」
それでも言う。
「その切れ方は悪魔のそれだ」
「言うならば魔王であると」
「そこが普通の英雄とは違うな」

キロモトはシャイターンをそう評していた。英雄ではあってもそれは巷で言われるような英雄ではないのだ。そう評するには彼はあまりにも影があり過ぎるからだ。
「梟雄か」
「そうですな」
その例えにアッチャラーンも同意してきた。
「彼はどちらかというとそれです」
「油断の出来ない男だ」
「彼が統一したならば。危険でしょうか」
「いや、おそらくは」
キロモトは顎に手を当てた。そのうえで考えを巡らせながら述べる。
「彼はわかっている。連合とサハラの勢力差を」
「人口にして二十倍」
一口に言うがそれが途方もない差であるのは言うまでもない。そしてそれと共に資源や経済力、軍事力、技術力等で隔絶たる差ができているのである。それは百年や二百年で埋められるものではない。ましてや一人の人間で対抗できるものではないのだ。
「彼程の男ならばわかっているでしょうな」
「そうだ」
キロモトは頷く。
「こちらから仕掛けない限りは大丈夫か」
「利害関係が起こらない限りは」
「だがそれが起こったならば」
その可能性についても触れる。触れざるを得ないのが政治の世界だ。あらゆるケースを想定してあらかじめ手を打っておくということである。
「実に厄介なものになる」
「全くです」
「どうするべきかな」

キロモトは考える目をそのままにして言う。
「彼に対しては」
「相手が手段を選んで来ないとなると」
アッチャラーンも考える目をさせている。まるで鷹の目のようである。
「それなりの備えが必要でしょう」
「テロへのか」
「はい」
アッチャラーンは頷く。
「既に各種テロへの対策は中央軍及び中央警察によって為されていますが」
「それ以上のものを」
「考えておいた方がよいかと」
「わかった」
キロモトもそれに頷いた。
「ではな。その場合の事態もシュミレーションして」
「手を考えておきましょう」
「どちらにしろテロ対策は見直す必要はあるな」
キロモトは言った。
「今の状況で充分かどうかな」
「そういえばですな」
アッチャラーンがここでふと思い出したように言ってきた。
「どうしたのかね」
「そろそろ教皇がこちらに来ます」
「遂にか」
バチカンの移転と移転先は既に決定している。だが正式な移動はまだだったのだ。しかしそれがいよいよ行われようとしているのである。
「はい、遂にです」
アッチャラーンも言う。

「当然テロ対策が考えられますが」
「そうだな。それと共に」
「行っていけばいいかと」
「わかった、いい機会だ」
キロモトは言った。

## 第二十三部第五章　時は迫れりその六

「すぐに中央警察、中央軍に対策を取らせよう。そしてそれをそのまま適用させる」
「はい」
抜かりはなかった。すぐにそこまで判断を下したのだ。
「それでいいな」
「国防省と内務省は休まる間がありませんな」
「確かにな。彼等には苦労をかける」
それはキロモトもわかっている。しかしだからといって負担を減らすことはできなかったしそうするつもりもないのであるが。もっとはっきり言えばそれが不可能な話である。
「しかしその苦労が」
「連合を守る」
「そうだ。では」
「テロへの対策を」
「ここで問題になるのは」
キロモトはふと言葉を出してきた。
「市民団体か」
「言い出す団体は出て来るでしょうな」
アッチャラーンもそれに応える。
「間違いなく」
「どういった団体かだ、問題は」
キロモトは実は彼等に疑いの目を向けているのだ。今まで市民団体がテロリストと結託していたりそれどころかテロリストの隠れ蓑に過ぎないということがよくあったからだ。連合の頭痛の種は中央軍や中央警察設立でかなり減ったにしろやはり残っているのだ。
「それも洗い出していくか」
「ああした連中はなくなりませんな」

「言うならば害虫と同じだ」
はっきりと言い切った。
「なくなりはせんな」
「ですね。困ったことに」
アッチャラーンも述べる。同意であった。
「まあついでにはなりますな」
「ついでか」
「はい。そうした輩を炙り出すのにもいいかと」
「炙り出して一斉に捕まえる」
所謂害虫駆除そのものであった。キロモトは実際にそう心の中で思った。しかしそれは言葉には出さずに心の中で留めたのであった。
「そういうことか」
「なくなりはしませんが放置していいものではありませんし」
「それはな」
アッチャラーンの言う通りであった。なくならないからと放っておいては後々どうしようもないことになってしまう。常に対策を講じて実行していかなければならないのだ。ゼロにするのは無理でも一〇〇を一〇にすることはできる。そうすれば被害も減る、そういうことである。
「ではそういうことで」
「洗い出すと」
「そうだ。しかし」
キロモトはあらためて述べる。
「それを擁護する知識人やマスコミがいるというのが怖いな」
「同じ穴の狢ということでしょう」
古い諺が出て来た。あえて出したのである。
「彼等もまた」
「良識ぶって裏で悪事を働く、若しくは悪事を行う輩と結託する」
残念ながら人の世にはよくある話である。善人の仮面を被り裏では卑劣の限りを行う。もっともその仮面が剥がれた時は周りの者に

裁かれるが。
「汚い話だな」
「そうですな。しかしそうした輩を減らすのもまた」
「人だな」
「人は善であり悪でもあります」」
仏教徒でもあるアッチャラーンが言うと実に説得力がある。人は大なり小なり善であり悪であるのだ。だから善人もいれば悪人もいるのである。神の様に素晴らしい心の持ち主もいれば唾棄すべき卑劣漢もいる。だからこそ人の世は面白くもあるのだ。しかもそれ等が万華鏡の様に複雑な彩色を為しているのである。
「では我々はこの場合は善になるのか」
「少なくとも今は善を信じるべきことになります」
また言った。
「治安を護る為に」
「そういうことか」
「はい。そうです」
また答える。
「そのうえで思うのです。あのシャイターン主席は」
「彼か」
話が戻った。
「善と悪を共に巨大なまでに持っています」
「両方をか」
「確かに目的の為には手段を選ばず非道も辞さないです」
それがシャイターンであった。彼はあくまで成功の確実性とその効果を念頭に置き実行に移していく。そこには一切の道徳性もないのだ。

## 第二十三部第五章　時は迫れりその七

「しかし同時に」
だがそれだけではないのだ。
「イスラムの教えからは外れていません。憎いまでに」
「決してか」
「はい。彼は信仰心篤いムスリムでもあります」
それもまたシャイターンであった。彼はアッラーへの信仰を常に持っている。これは彼の家が聖職者の家であることも非常に大きいであろうが彼自身もムスリムとして非常に強い信仰心を持っていたのである。それがシャイターンをシャイターンたらしめていたのである。
「これはイスラムでは絶対の善です」
「そうだな。イスラムとしては」
「彼の善の顔と悪の顔はそれなのです」
ムスリムとしての顔と謀略家としての顔。その二つがシャイターンにはあるのだ。アッチャラーンはそれを言っているのである。
「いえ、むしろ」
しかしここでふと思った。
「サハラの考えではシャイターンは善であるかも知れません」
「謀略家の顔は消えてか」
「はい。イスラム世界ではまずアッラーに仕えることであります」
「そうだな」
とりわけサハラではそうである。イスラムの戒律こそが絶対で無謬性のないものであるのだ。イスラム世界が何故イスラム世界となっているのか。それはアッラー、コーランへの絶対的な信仰があるからだ。これにより彼等はイスラム世界を作っているのである。
「一人の人間の悪はアッラーの前では大したものではありません。むしろ」

「信仰とそれに基づく善行を行っているかか」
「それを考慮しますとシャイターンは善人であるということになります」
「不思議なものだな」
キロモトはそこまで聞いてあらためて述べた。
「我々から見れば善と悪の二つの顔を持つ油断ならない男だというのに」
「サハラから見ればそうではない。むしろ」
「英雄か」
「それは政治の上でもです。我々にとって強敵、警戒すべき相手ならば」
「彼等にとっては英雄か」
「そうなります」
一つの自明の理であった。敵に英雄が出るということはそれは相手にとっては強敵が現われるということに他ならないのである。逆に敵に無能な人物が出ればそれは相手にとっては大助かりとなる。。それを利用した戦略も古来より行われてきている。相手の国の有能な男が来たならばこれを冷遇し無能な男を厚遇してみせる。そうして相手の国で無能な男が厚遇されるように仕向けるのだ。中国をはじめとして様々な国で行われてきたことである。なおそれを逆手に取ってあえて無能なふりをする人物もいる。
「その英雄シャイターンですが」
「彼がサハラを統一した場合が最も危険となる」
「おそらくは」
「それを考えるとハサンを応援したいがな」
「ですがそうもいきません」
アッチャラーンは述べる。
「兵を動かすにしても」
「それはわかっている」
キロモトは言葉を返す。実際に連合はサハラには不干渉主義を貫

いてきた。特定の国を資金援助することもなかった。これは中央政府だけでなく各国政府もそうであった。彼等にとってはサハラは化外の地だ。だからどうなってもいいと思っていたからである。
　これは今でも変わらない。それにもう一つ理由があった。
「余裕もありません」
　これであった。今のアッチャラーンの言葉であった。
「やはりエウロパとの戦争は高くつきました」
「確かにな」
「それにサハラとの境に防衛ラインを築くという話も出ていますし」
「むしろそれを考えた方がよいか」
　防衛ラインに目を向けることにした。
「それで対処すると」
「そうですな」
　アッチャラーンもそれに同意して頷く。
「こちらから何かする理由もありませんし」
「うむ。それでは」
「そういうことで。しかし」
　アッチャラーンはここで息を少し吐き出してきた。
「何かとサハラも厄介になってきましたな」
「うむ」
　アッチャラーンのその言葉に頷く。
「気を向けなければならなくはなった」
「そうです。今までは無関心でいられましたが」
「そうはいかなくなってきたか」
「将来サハラが大勢力となれば」
　その可能性も皆無ではないのだ。統一されれば。アッチャラーンはその可能性を信じていたしそうなった場合のことも考えていたのだ。
「それを今話したが。まだ不確定要素が多いな」
「ええ。しかし」

彼は言う。
「ある程度は想定しておいてよいかと」
「そうだな。では今の話は無駄ではない」
「そうです。だからこそ」
それを実行に移さなくてはならない。これは政治の基本であった。
「国防省と内務省には私から話をしておく。それでいいな」
「はい」
「さて、それでは」
最後に言った。
「これから見せてもらうか。サハラでの英雄達の戦いを」
「サラディンが出るかバイバルスが出るかは」
「これからわかることだ」
そう言って話を終わらせた。連合は連合でサハラから目を離してはいない。彼等への手も着々と打っていたのであった。目立たないようにして。

## 第二十三部第五章　時は迫れりその八

シャイターンはこの時前線に向かっていた。旗艦に乗り込み周りを幕僚達が囲んでいる。艦橋で腕を組み立っていた。顔は正面を見据えている。

「閣下」

幕僚の一人が彼に声をかけてきた。

「どうした？」

「間も無くです」

その幕僚は述べる。

「前線への到着は」

「そうか」

幕僚はそれを聞いて応える。

「いよいよだな」

「はい」

今度は頷く。頷きながら話を続ける。

「既に前線では戦闘用意は整っております」

「宣戦布告の用意は？」

「そちらもです」

別の幕僚が答えた。この幕僚はどうやら軍事だけでなく政治関連に関しても知識の深い者のようである。

「閣下の御言葉一つで」

「そうか」

シャイターンはそれを聞いて感情を表に出さずに頷いた。

「よい。では全て整っているな」

「そうです」

幕僚達は応える。

「戦いは何時でもはじめられます」

「閣下の御言葉一つで」

「はじまりだな」
シャイターンは言った。
「全ての」
「はい、全ての」
幕僚達も彼の言葉がわかっていた。そのうえで話は続く。
「私の覇業の新たな舞台がはじまったのだ」
シャイターンはそれがはじまったと言ったのだ。彼にとっては今からはじまろうとしている戦いでさえ己の英雄譚に他ならなかったのだ。それを今言い切ったのであった。
「いいな」
「無論です」
「では戦線に到着し次第」
幕僚達は口々に言う。その中心には当然ながらシャイターンがいる。そして彼等に応えていたのであった。
「宣戦布告を行う」
シャイターンは言った。
「わかったな」
「御意」
「ではそれまでは身体を休めておけ」
彼は周りの者にそう伝える。
「じきに命のやり取りを行うことになるからな」
「ええ」
「もうすぐ」
「私もまた休む」
彼はそれを述べた。
「それまでな。ではな」
そう言い残して自室に入った。軍艦の中とは思えないその部屋に入っるとすぐに従者達が彼の前に現われた。
「お待ちしておりました」
従者達はそう主に述べる。シャイターンは無言で従者達に頷くと

テーブルに着いた。すぐに料理とワインが持って来られた。アラビア風の料理によるフルコースで漆黒のワインも同時に出された。シャイターンはそのワインを見て言った。
「今日のワインはこれか」
「はい」
従者達はそれに頷く。
「如何でしょうか」
「いいな」
水晶のグラスに注ぎ込まれたワインを見て述べる。それは琥珀の輝きをクリスタルの中に湛えて瞬いていた。
「戦いの前はワインに限る」
「左様ですか」
「それもだ」
彼はさらに言葉を続ける。
「その色も選ばれるのだ。わかるか」
「といいますと」
「赤、若しくは黒」
シャイターンはグラスを手に取って言った。

## 第二十三部第五章　時は迫れりその九

「それがいいのだ。赤はな」
「何でしょうか」
「血の色だな」
笑みを浮かべる。だがその笑みは酷薄なものであった。血をそこに見て笑うような。そしてそこに見ているのは実は血ではなかった。別のものを見ているのだった。それは何か。
戦いである。彼は戦場に駆けそこで己の野心を果たしてきた。もっともそれは戦場に留まらず謀略においてもだ。彼の謀略は既に知る者は知るようになっている。少なくとも連合やエウロパといった彼のカリスマとは直接的には無縁でしかも離れた位置から見ることのできる勢力にいる者達の多くは彼を謀略家とも見ている。それもまた当然のことであった。確固たる証拠はないがそこには明らかに彼の影が見えるからだ。それで疑わないという方が無理な話である。
「では黒は」
「鉄だ」
今度は鉄であった。
「戦場において古来より鉄はなくてはならないものだ」
この場合の鉄とは広い意味での金属をさす。彼は今その鉄の色を手にしているワインに見ていたのである。そうしたものを見るのもまた彼であった。どういったものからも己の目指すものを見出すことができる、英傑の一つのタイプなのは確かだ。そう、確かに彼は英傑なのであった。例えどの様に周りから見られ言われているとしてもだ。もっともそれを気にする彼でもないのであるが。
「だからだ。赤と黒でなくてはならない」
「そうなのですか」
「そして今黒を出してくれた。礼を述べるぞ」
「いえ」

従者達はその言葉には謙遜してみせた。
「それは」
「よいか」
「ええ。当然のことでありますから」
彼等は述べる。
「御気になさらずに」
「いや、その心配りが気に入った」
笑みが変わった。酷薄なものから悠然としたものに。その笑みで以って従者達に対するのであった。そうした笑みもできるのであった。
「褒美をやろう。いいか」
「それは一体」
「まずは宝石だ」
彼は目にまで笑みを湛えていた。その目には黒いワインが入っている。
「一人ずつにルビーをな」
「ルビーを！？」
「そうだ。そして」
今度はワインを出した。また彼等に対して述べる。
「ワインも一本ずつだ。私が今飲んでいるものと同じものをな」
「有り難き幸せ」
「よい。大したことではない」
シャイターンはそう彼等に返す。
「この程度のことはな」
「そうなのですか」
「これからさらに褒美をやらなければならないしな」
シャイターンは悠然として言葉を続ける。彼は今は戦いに目を向けていた。
「些細なことだ」
「はあ」

従者達は少し呆然として応える。
「これから得られるものの前ではな。私がこれから手に入れるのは」
ワインを飲む。濃厚な漆黒の味が口の中を支配する。辛口のワインでありそれがシャイターンの嗜好の一つにも合っていた。

## 第二十三部第五章　時は迫れりその十

「至高の座なのだからな」
「至高のですか」
「そうだ。私は何だ」
従者達に問う。
「えっ」
「私は何だと聞いているのだ。何なのだ、私は」
「はい」
従者の一人がそれに応える。
「メフメット＝シャイターン様です」
「そうだな。その私が手に入れるものと言えばわかるな」
「勿論です」
彼等は答える。
「私が目指すものは一つだ」
「皇帝であると」
「その通りだ。サハラは私によって一つになる」
それが彼の究極の野望であった。その野望の前にはどのような障壁も意味はなかった。彼にとっては覇業以外はなかったのだ。
「いいな」
そしてワインをまた飲む。それから今度はマトンのステーキを切ってから口に入れる。
「それにしても」
ステーキを食べてから述べた。
「ステーキもな。いい味だな」
「有り難うございます」
「しかしな」
彼はさらに言う。
「これは完全なものではないな」

「といいますと」
「最高の胡椒を使っている。最高の技術でな」
「はい、それは」
従者の一人がそれに応える。
「シェフの自慢の料理です。スパイスも念入りに選んだ」
「シェフの腕は最高だ」
シャイターンはそれは認めた。
「しかしだ」
「何か」
「この胡椒は北方では確かに最高だ。だが」
そして言う。
「サハラで最高ではないのだ」
「では」
「そうだ。胡椒はやはり」
彼は言う。
「南方のサダム星系のものが一番いいな」
「それもまた統一が成ればですか」
「そういうことだ。わかるな」
「はい」
従者達はその言葉に頷く。
「それでしたら」
「無論それだけではないがな」
シャイターンはさらに言葉を続ける。
「サハラにはあらゆるものが存在している」
この言葉は間違いではなかった。実際にサハラは元々も豊富な鉱物資源に開発に適した惑星を多く持っている。その豊かさは連合のどの国にも負けてはいない。マウリアにも匹敵するかそれ以上と言われ長い間その潜在能力を言われ続けてきているのである。
「しかしそれは眠ったままだ」
「それを引き出されるのですね」

「それが私だ」
不敵な笑みが顔に浮かんだ。
「この羊にしろそうだ。最高の味にしてみせる」
「最高の味にですか」
「最高の肉に最高の調味料」
料理には欠かせないものだ。これは料理を少しでも知る者にとっては常識である。
「最高のシェフは既に我が手にあるのだからな」
これは単にシェフを言ったのではない。人材そのものを評しているのである。サハラの人材は優れていると。言っているのである。
「ならば恐れるものはない」
「後は統一されればですか」
「サハラの栄光がはじまる」
シャイターンは述べる。
「この私の手によってな」
魔王の笑いであった。しかしこの魔王の笑いは。サハラを栄光へと導かんとする魔王の笑いであった。ただの魔王の笑いではなかったのである。

## 第二十三部第五章　時は迫れりその十一

シャイターンが前線に向かっている頃アッディーンもまた前線に向かっていた。到着まで間も無くであった。
「いよいよだな」
彼はアリーの艦橋でガルシャースプに対して声をかけてきた。
「はじまりだ」
「はい、既に我が軍もハサン軍も国境に兵力を集結させています」
「うむ」
「そして防衛ラインも」
彼はそれにも言及してきた。その目が光る。
「既に整っております」
「わかっている」
アッディーンはそれに応えた。そのうえでこくりと頷く。
「それもかなり堅固なものがな」
「はい。それで兵士達に危惧する声があがっているそうです」
「前線にいる兵士達にか」
「この戦いは勝てるのかどうかと」
ガルシャースプは述べた。
「それを危惧しています」
「そうなのか」
「やはりハサンの防衛ラインはそれだけのものがあるということです」
ガルシャースプはまた述べた。
「今度ばかりは無理ではないかと。彼等は不安になっているようです」
「杞憂になる」
しかしアッディーンはその言葉にこう返した。
「杞憂ですか」
「そうだ。既にハサンのことは全てわかっている」

彼は言う。
「このことをまず情報部に感謝したい。そう、全てわかっているのだ」
「全てですか」
「その通りだ。そして」
彼はさらに言葉を続ける。
「何も守りの固いところから攻めなくてもいいと思うが。どうなのだ」
「といいますと」
ガルシャースプはその言葉に考える目を見せてきた。
「そのままだ。確かに今ハサンは堅固な守りを固めているな」
「はい」
あらためてアッディーンの言葉に頷く。
「既に」
「そう、そこは確かに完璧だ」
それはアッディーンも認める。
「しかしだ」
「ですが閣下」
ガルシャースプは言う。
「突破できるとすればそこしかありませんが」
「防衛ラインだけか」
「そうです。だからこそハサン軍はそこに戦力を集結させているのです、その数百個艦隊」
一口に言うがかなりの数である。アッディーンは今までそれだけの艦隊を前にしたことがない。エウロパもそれだけの数を一度に動員したのは連合との戦いだけである。連合があまりにも規格外れな数を持っているだけなのだ。まずその前提があるのだ。数は力だ。
「そのうえ守りも固めていますから」
「安心しろ」
アッディーンは笑うことなくそう返した。

「それもわかっている」
「御言葉ですが」
今度はガルシャースプも心配しているのか引かない。まだ言う。
「今度ばかりは」
「まずは前線に到着してからだ」
しかしアッディーンは自分の言葉を続ける。ガルシャースプもそれを聞くしかなかった。
「いいな。それから全てがはじまる」
「全てが」
「既にオムダーマン全土に補給ラインも整えていたな」
「はい」
今度は補給ラインを確認してきた。どうやらここに何かがあるらしい、ガルシャースプも内心そう思ったがアッディーンの真意まではわかりかねていた。
「ならいいのだ。まず緒戦は勝てる」
言葉は断言であった。前を見据えての。「確実にな」
「では閣下」
「前線への到着は三日後だったな」
「ええ」
ガルシャースプは答える。
「前線到着と同時に宣戦布告だ。そして」
「そして」
「動く」
今度は一言であった。
「動くぞ、いいな」
「わかりました。では」
「そうだ。既に全てがはじまっている」
また言うのであった。
「戦いはな」
「向かうのはどちらですか？」

ガルシャースプは今度はそれを問うた。
「ハサンなのは間違いないと思いますが」
「そう、ハサンだ」
その言葉には偽りがない。絶対に。

## 第二十三部第五章　時は迫れりその十二

「まさかティムールではあるまい」
「ですな」
「ハサンでしかない。それは変わらない」
「ううむ」
ガルシャースプはアッディーンの真意をわかりかねていた。どう考えてもわからないのでつい彼に問うてしまったのである。幾ら考えてもどうにもわからなかった。
「ではヒントを出そうか」
アッディーンはそんな彼を見て言ってきた。
「ヒントですか」
「そうだ。兵法の基本だ」
言葉を出すその目も顔も笑ってはいない。やはり前を見据えている。その視線の先は揺らぐことがない。ただ一つのものを見据えていた。
「裏をかく」
「裏を！？」
「それだけだ。そしてだ」
そこに言葉を付け足してきた。補足するように。
「不可能と思えることでも可能であることが多いのだ」
「それは聞きます」
「しかし実際にやった者は少ない」
これもまた真実であった。多くの者はどうしてもやる前に不可能だと決め付けて実行には移さないのだ。やってみて案外簡単だったということになる。マリア＝テレジアの時代のオーストリアの宰相カウニッツはそう述べて長年いがみ合ってきたフランスとの同盟を成功させている。なおこの時に結ばれたのが後のフランス王ルイ十六世とその妃マリー＝アントワネットである。無論二人はこの時は

後の自分達の運命は知らなかった。
「そうだな」
「それはそうですが」
「しかし今回もそうなのだ」
アッディーンの言葉は相変わらず自信に満ちていた。それはこれまでの彼とは少し様子が違っていた。どうやら何か会心の秘策があるようなのである。
「意外と簡単なことだ」
「簡単ですか」
「そうだ。では国境に着いたならば」
はじまりであった。今また銀河が動こうとしていた。サハラ全土が戦乱に覆われようとしていた。オムダーマンからハサンに宣戦布告が行われたのはそれから間も無くのことであった。
「はじまったか」
それは瞬く間に銀河に伝わった。程なくしてティムールもハサンに宣戦布告した。ギルフォードはそれをイギリスにある自宅で聞いていた。巨大な宮殿において。
「はい、今まさに」
「遂にという感じだな」
彼は自分の部屋にいた。そこでワイングラスを手にくつろいでいた。そのうえで執事の言葉を聞いていたのである。着ているのは部屋着だが豪奢なものである。部屋は絹の黄金色がかかった黄色いカーテンと赤い仕立てのよい絨毯で飾られている。リビングに座って執事を横に立たせていた。
「これから面白くなるぞ」
「面白くですか」
「そうだ。戦争は何だ」
ワインを口に含みながら執事に問うてきた。
「華でございます」
執事は述べてきた。

「まさに」
「そう、華だ」
ギルフォードは彼の今の言葉に頷いてきた。
「華だ。戦こそが人の歴史を彩るものだ」
「それがまさにはじまろうとしていると」
「その通りだ。そしてそれにより」
彼はさらに言葉を続ける。
「サハラが決まる」
「サハラがですか」
「おそらくはこのまま統一される」
彼はそう読んでいた。長きに渡って分裂していたアラブの者達が遂に一つになると。そう述べたのである。述べるその声は落ち着き冷徹ですらあった。

## 第二十三部第五章　時は迫れりその十三

「それが誰によるものかまではわからないがな」
「左様ですか」
「私の敵が決まるのだ」
彼はまた言った。
「それによりな。わかるな」
「はい」
「そしてだ。さらに」
執事に対して言葉を続ける。目は遥か前を見据えていた。
「エウロパとサハラはまた争う」
「華ですか」
「それもまた華だ。エウロパの新たな栄光のはじまりを飾る華だ」
彼はそう述べる。今彼自身の手によるエウロパの新しい栄光の時代を見ていたのである。
「そして勝つ。勝つのは私だ」
「サハラに勝利を収めたならばその後は」
「今は無理だとしても」
「そこには」
執事は問う。まるで彼の言葉を待っているかのように。あえて問うのであった。そしてギルフォードはそれに応えて口を開いたのであった。
「連合に勝利を収める」
それが彼の究極の望みであった。
「連合を倒し彼等に教えてやるのだ。世界はエウロパによってこそ正しく導かれるのだと」
「かつてはまさにそうでございましたな」
執事は述べる。彼はこの時十九世紀から二十世紀の輝かしい欧州の時代のことを思っていた。大航海時代からはじまった進出がピー

クに達し世界は欧州列強の手の中にあった。その時代のことはエウロパの者達にとっては黄金時代に他ならなかったのである。エウロパの国父とされるブラウベルグもそれを主張していた。輝かしいエウロパの復活を唱えていたのだ。もっともこれは連合の者達にとっては忌まわしい歴史であった。先の戦争はシンガポール以上の輝かしい歴史的勝利になろうとしていた。言うまでもなくこの二つはエウロパの者達にとっては忌々しい敗北に他ならない。それぞれで認識が違うということである。

「その時代の復活ですか」

「連合の衆愚共に何ができよう」

ギルフォードは言う。彼もまた貴族主義者であった。その彼から見れば連合の大衆社会は衆愚社会に他ならなかった。愚か者達が銘々好き勝手さえずっているだけにしか見えなかった。

「数だけではない」

「個々の優秀さですか」

「先の戦争においてもだ」

彼はまた言う。

「我々は勝っていた、個々ではな」

「はい」

「数に負けただけだ。その数を補うのは」

「頭脳であると」

「他に何があろうか」

彼はそこに絶対の自信を置いていた。個々の優秀さではエウロパの者達は連合の者達を凌駕していると。そう確信していたのである。

実際に先の戦いではエウロパ軍はかなり奮闘した。その結果圧倒的な物量を誇る連合軍に対峙することができていたのである。これは事実であった。

「衆愚に知恵はない」

彼は言い捨てる。

「優れた指導者をいだけばエウロパはそれだけで栄光の歴史を歩む

ことができる」
「そしてその指導者とは」
「私だ」
これまで以上に絶対の自信を以って述べてきた。
「私の他にいるというのか」
「いえ」
それに対する執事の言葉にも絶対的な響きがあった。
「旦那様こそが。エウロパを導かれる方」
「その通りだ。だからこそ」
ワイングラスを置く。そこに執事がワインを注ぎ込む。彼はそれを見ながらまた言うのであった。
「動いているのだ。いいな」
「はい、それでは」
「また屋敷を出る」
彼は言った。
「殿下が御呼びだ」
「殿下がですか」
「皇太子殿下も応援しておられるのだ」
この場合はイギリス皇太子だ。所謂プリンス＝オブ＝ウェールズである。この名称はこの時代も健在である。元々はウェールズ人への配慮としてこの爵位になった。イギリス軍大将でありガーター勲章を持つ。その地位は言うまでもなくエウロパにおいては途方もなく尊いとされている。彼の支持があるということはギルフォードにとってはこの上ない援軍なのである。彼がイギリス貴族である限り。
「その殿下と観劇だ」
「殿下はあまり劇は好まれないと聞いておりますが」
「シェークスピアは別らしい」
ギルフォードはこう返した。

## 第二十三部第五章　時は迫れりその十四

「殿下はあれをご幼少のみぎりより愛しておられるのだ」
「シェークスピアですか」
執事はそれを聞いて目を微かに動かしてきた。
「それはまた」
「よいご趣味だな」
ギルフォードは述べた。
「我が英国の次の王となられる方だけはある」
「私としては悲劇が好きなのですが」
「シェークスピアのか」
「はい。特にオセローが」
彼は言う。
「オペラでもそれが好きです」
「というとヴェルディのか」
「ロッシーニのものでも」
ロッシーニの方がヴェルディより先に作曲しているのは言うまでもない。ロッシーニのそれも傑作とされているがヴェルディ渾身の作品である彼のオテロには負けるとされている。なおオテロとはオセローのイタリア語読みである。
「私はヴェルディのものの方が好きだ。殿下に同席させて頂くのもそちらだ」
「そちらですか。あれは」
「テノールを選ぶと言いたいのだな」
「はい」
執事は答える。ロッシーニのものもテノールのいいのを三人揃えなくてはならないとされている。だがヴェルディのオテロはまた違う。最高のテノールを一人用意しなくてはならないのだ。その最高のテノールが中々いないのだ。かつては一つの時代に一人いるかど

うかであった。あのカルーソーも歌ってはいない。高音とすらりとした美貌で知られた長身のテノールフランコ＝コレッリも何年も温めていながら結局は歌わなかった。歌ったのは伝説とまで言われた二十世紀最大のテノールの一人マリオ＝デル＝モナコ、そしてオペラに革命をもたらせた一人であるプラシド＝ドミンゴ。数える程しかいないのだ。彼等のオテロはそれだけに神話となっているのである。デル＝モナコに関してはギルフォードも知っていた。

「安心しろ。今宵の歌手は」

「どういった歌手でしょうか」

「マリオ＝デル＝モナコの再来だ」

こうまで言った。

「まさにな。あそこまでの歌手はそうはいない」

「そこまでですか」

「そうだ」

そう言ったうえで断言する。

「やはりオペラはエウロパのものだ」

「エウロパの」

「では聞くが連合のオペラは何か」

執事に問う。

「何だと思う？」

「単なる大衆演劇でしょうか」

「そうだ、オペラはミュージカルではない」

彼は言う。

「連中はそれすらもわかっていないようだな」

「そういえばやけに派手な演出が目立ちます」

「愚かなことだ」

ここでも連合に対して嫌悪感を見せる。本質的に連合とは相容れないものを持っているのがはっきりとわかる。やはり連合とエウロパはそれぞれが違う世界なのである。

「彼等は芸術がわかっていない」

「はい」
「だからデル＝モナコも生まれはしないのだ」
「エウロパにこそ生まれるものであると」
「その通りだ。彼はエウロパにしか現われない」
マリオ＝デル＝モナコはイタリア出身である。しかしその歌は全世界で聴かれた。日本に来た時は何と港に入る船の中からオテロの最初の『喜べ！』の歌を聴かせたという。アメリカのメトロポリタン歌劇場においてもその熱唱を聴かせた。だがギルフォードはそれをエウロパのものであると断言しているのである。
「連合に芸術はない」
こうまで断言した。
「あるのは衆愚の遊びだけだ」
「ですか」
「いずれそれを彼等自信に教えてやる」
嫌悪に満ちた目で語る。
「そしてその時こそ」
「エウロパがもう一度世界を指導する時ですか」
「その通りだ。我々こそがな」
目の光を鋭くさせる。その鋭さを保ちながら述べる。
「それに相応しい」
「そしてそのエウロパを導くのが」
「私だ」
それこそが彼の野心であった。
「いいな。私は勝つ」
今ここで断言した。
「そしてエウロパも」
野心に燃える男はここにもいた。その野心に満ちた目で遥かな星の大海原を見据えているのであった。

第二十三部　完

2007・2・6

# 第二十四部第一章　戦いの幕開けは静かにその一

戦いの幕開けは静かに

サハラの歴史は長い。それと同じだけ戦いの歴史も続いている。アラブ人達が開拓したこのサハラはその成立当初から多くの国に分かれていた。統一機構といったものは存在せず最初から戦争や対立が絶えなかった。その中で多くの国が興亡し建国された国が瞬く間に滅び去るのも政権を取った者がすぐに姿を消すのも日常茶飯事であった。

そのサハラにおいて統一は悲願であった。だがそれを果たせる者は出て来ることはなく今に至る。戦いは遂に三つの勢力を残すのみとなったがそれでも戦火は絶えない。サハラにおいて戦火が止んだ日はなかったのである。

今またその戦火が起ころうとしていた。オムダーマン、ティムール、ハサンの三国はハサン国境にそれぞれ兵を進めていた。今将に一触即発の状況であった。

宣戦布告が今為されようとしている。皆それを固唾を飲んで見守っている。

「よいか」

シャイターンは旗艦の会議室に主立った提督、参謀達を集めていた。彼等を前にして語っている。

「宣戦布告は二時間後とする」

「二時間後ですか」

「そうだ」

参謀の一人の言葉にこくりと頷く。

「国境に配置した全艦隊をハサン領に向けて進軍させる。いいな」

「既に全艦隊何時でも攻撃できるようになっています」

別の参謀が述べた。

「後は閣下の御言葉一つです」

「うむ」
シャイターンはその言葉に頷く。頷いてからまた述べる。
「宣戦布告と同時にだ」
「同時に」
「軍を動かす」
これは予定通りであった。
「おそらくはハサン軍も既に戦闘配置についている。特にアヤグーズはな」
「まずはあの国を陥落させますか」
「大樹を倒すにはまず枝からという」
シャイターンは今度は腹心の提督の一人に言った。
「その最も大きな枝を払う」
アヤグーズ王国はハサンの主要な属国だけではない。その宙理的場所もまた非常に重要なのであった。そこを抑えればそのまま国境宙域全体を掌握できる程なのだ。だからこそシャイターンはまずはそこを攻撃するつもりであったのだ。
「いいな、それから大樹にかかる」
「わかりました」
幕僚達はそれに答える。提督達も。
「アヤグーズには私が行く」
「なっ」
「閣下が」
「何か不満か？」
驚く他の者達を目だけで見回す。そのうえで彼等に問う。
「そうすることが」
「いえ、それは」
「閣下御自身が行かれるとは」
「私でなくてはなるまい」
シャイターンはそう彼等に述べた。
「アルコルジ女王はその軍略を謳われた人物だ。生半可な者では相

手にはならない」
「しかし自ら前線に立たれるというのは」
「今までもそうだったが」
シャイターンは躊躇を見せる提督の一人にそう返した。
「違ったか。私は常に自ら剣を取る」
「剣を」
「そうだ。兵士達の後ろに隠れて戦うのは私の流儀ではない」
これは本当のことであった。シャイターンは今まで自ら兵を率いて戦ってきた。その結果が今のティムールなのだ。彼は剣で全てを築いてきた男なのだ。そのことを彼自身が最もよくわかっていた。当然政治家としても卓越したものを持っているのだが、
「だからだ」
「ではそのように」
そこにいた者達はシャイターンのその言葉を受けることにした。
「主力をまずアヤグーズに向ける」
彼は今それを言った。
「よいな」
「はっ」
こうして二時間後宣戦布告が為されティムール軍は動きはじめた。ハサン西方では戦いがはじまった。

## 第二十四部第一章　戦いの幕開けは静かにその二

同じ頃オムダーマンもハサンに対して宣戦布告を行った。そして彼等も兵を動かしはじめた。

「いよいよだな」

オムダーマンとの国境を守るハサン軍の司令官はアブ＝ダビデブという。ハサン軍元帥であり口髭を生やした太った男だ。彼は太子の信頼も篤いハサンの宿将の一人である。ティムールのテロからも身をかわすことのできた有能な人物だ。だから今境を任されているのである。

彼は今防衛ライン後方のマスジェド星系にいる。そこはハサンの軍事拠点の一つであり彼はここから国境にいるハサン軍全体の指揮と採っているのである。

「ハサンは動いたか」

彼は司令室にいた。機務的であり無駄な装飾は一切ない。その司令室において報告をしてきた若い将校に問うてきたのである。

「はい」

その将校は彼の問いに答えてきた。

「全軍を挙げて来ています」

「そうか」

ダビデブはその報告を聞いて頷いた。

「ではこちらは予定通りいく」

「はい」

彼の左右に控える幕僚達がそれに答えた。

「いいか、無闇に動くな」

これが彼の作戦であった。

「予定通り国境に兵を配している。守るだけでいい」

「そして敵の消耗を待つと」

「その通りだ」

彼は幕僚の一人の言葉に応えた。
「それだけでいい。まずは敵の矛を削らせる」
彼は述べた。
「そうしてな。矛が使えなくなったその時こそ」
「反撃に転じると」
「焦る必要はないのだ」
こうも述べた。
「こちらは万全の守りを敷いている。それを突破することは如何に彼でも無理だ」
「アッディーン副大統領であっても」
「そうだ」
ダビデブはアッディーンの名を耳にしても動ずるところはなかった。平然としたものであった。
「何を恐れることがある。彼もまた人間だ」
「人間ですか」
「では他の何だというのだ？」
そしてまた幕僚達に問うのであった。今度は問い返しであった。
「英雄なぞいない」
彼は問い返したうえでこう断言してきた。
「誰もが同じ人間だ。違うか？」
「確かに」
「そうでありますが」
「優れた者は確かにいる」
それはダビデブも認める。認めることにやぶさかではなかった。
「しかしだ。絶対者なぞいないのだ。アル＝アミンは何だ」
ムハンマドのことである。イスラムではムハンマドにニックネームがあるのだ。このアル＝アミンとは誠実な人という意味である。これはムハンマドが生前からの仇名であり彼が商人をしていた時に実に真面目で誠実な人となりであったことから言われたものである。

## 第二十四部第一章　戦いの幕開けは静かにその三

「預言者であります」
「市井を歩くごく普通のな」
「はい」
　これは常に言われていることである。イスラム世界においてムハンマドは預言者でしかない。彼もまたあくまで市井の人間でしかないのである。だから妻も持っていたのである。妻帯は最も印象的な世俗化である。ヒトラーはその生涯、死ぬ間際まで独身であったがこれは己の神秘性とカリスマを高める為であった。ただしヒトラーのこれにはさらに複雑な理由があると言われ幼い頃父に虐待され母に可愛がられていた彼は父を本来の祖国オーストリアに、母を心の祖国ドイツに無意識下でなぞらえていたとも言われている。普通ドイツ人は祖国を父なる国と言うが何故かヒトラーはドイツを母なる国と呼んだ。彼は自らをその母なる国ドイツを妻とした男と考えていたのかも知れない。だとすればここには近親相姦的なものもある。この独裁者には実に色々な謎や分析できる余地がありこの時代においてもそれは行われている。少なくとも彼の尋常ではない統率力と天才的な政治力、どの様な難解な本も読破し複数の言語を操り一度聞いたことは忘れない知性と記憶力、特に絶対的なカリスマ性は認められている。彼は英雄であったのであろう。しかしこのダビデブはその英雄自体を否定しているのである。
「誰かを特別視してはならない」
　彼は言う。
「その能力はな。認めることはいいが」
「そうなのですか」
「私はそう思う」
　部下達にクールに述べた。
「違うか」

「はあ」
これには即答できる者はいなかった。それぞれ考えがありそれについてとやかく言えたりはしないからだ。ダビデブは元帥でありハサン軍の宿将である。その彼に対して何かを言うのは困難でもあったのだ。
「敬意は払うべきでもあるが」
「左様ですか」
「特に王室にはな」
王国であるハサンの軍人ならばこれは当然のことであった。
「これは言うまでもないか」
「はい」
「確かに」
これに異論のある者はいなかった。ハサンでは王室の立場はかなりのものである。連合やエウロパのそれのように象徴に留まるものではないのである。こうした王室が存在するということもサハラの特徴であった。なおハサンには不敬罪というものも存在する。
「私はアッディーン副大統領の能力は認めているつもりだ」
そのうえでの言葉であった。
「彼は優秀な軍人だ。しかし」
「英雄視はしないと」
「そうだ。だからだ」
彼は言う。
「冷静に対処せよ。よいな」
「はっ」
「了解です」
幕僚達はそれに応えた。
「それだけだ。まずは防衛ラインに閉じ籠るのだ」
彼の今の作戦はそれであった。
「わかったな」
「そのうえで敵の消耗を待つという当初の作戦通りで」

「そういうことだ。軽挙妄動はないようにな」
「既に前線には厳命しております」
幕僚の一人が述べてきた。
「ですから御安心を」
「迂闊に出た場合はその指揮官を軍事法廷にかけよ」
かなり厳しい言葉であった。その口調も内容も。
「よいな。罪状は命令違反だ」
「充分適用に値すると」
「そうだ。特に今はな」
彼は述べる。

## 第二十四部第一章　戦いの幕開けは静かにその四

「そうなる。一人の軽挙な行動が全てを潰えさせることもあるのだ」
特に戦場ではそうである。ダビデブはそれを最も恐れていたのである。これは指揮官として当然のことであった。やはり彼は軍人であった。それも優秀な。
「わかったな」
「はい。防衛ラインだけですね」
「他に何処かあるのか？」
問うてきた幕僚にそう返した。
「他に場所が」
「アステロイド帯はどうなりますか」
「あそこか」
ダビデブの言葉は今までとは違い少し警戒の緩んだものになっていた。
「大丈夫だ」
「大丈夫ですか」
「あそこは軍艦での突破は無理だ」
彼はそう断言した。
「あまりにも複雑で細かい状況になっている。普通の航路もないな」
「はい」
「誰も通りません」
「そういうことだ。一般の艦艇も通過出来ない場所だ。小さなな」
「ではあそこには警戒は不要ですか」
「不要だ」
断言であった。
「何をする必要もない。下手に突破しようとすれば怪我をするのは彼等だ」
「オムダーマン軍であると」

「そうだ。偵察を送る必要もないだろう」
これは迂闊であった。これはダビデブにしては軽率なミスであった。このミスが後で彼を窮地に陥れてしまうことになる。しかし彼はこの時己の運命を知らなかった。
「その余裕があれば余計に前方のオムダーマン軍に警戒を払いたい」
「わかりました。それでは」
「うむ。彼等が来たならば容赦するな」
彼はそう言い伝えた。
「消耗させろ」
「了解」
ハサン軍は打って出ることはなくそのまま守りを固めるだけであった。それに対してオムダーマン軍も攻勢は仕掛けず動く気配もなかった。
「無駄な消耗は避けよ」
それがアッディーンの言葉であった。
「よいな」
「それはよいことですが」
マトラがそれに対して言う。今アッディーンはアリーの会議室に主立った提督達を集めていた。そのうえで彼等に対して話していたのである。
「何も仕掛けないならこのまま膠着したままですが」
「前線はな」
アッディーンもそれは認めた。
「しかしだ」
彼は言う。
「前線だけで戦うのではない」
「ゲリラ戦術ですか？」
ベニサフがそれを聞いて声をあげた。
「それならば」
「違うな。私の策はだ」

「はい、それは」
提督達が彼のその言葉に顔を向ける。ここでようやく今まで隠されていた彼の策が話されるだろうと思ったからである。そしてその通りであった。
「アステロイド帯を突破する」
「なっ」
「アステロイドをですか」
これには皆驚きの声をあげた。一斉にアッディーンに顔を向けてきた。

## 第二十四部第一章　戦いの幕開けは静かにその五

「それは不可能でしょう」
アタチュルクが言う。
「あそこは」
「そうです。普通の小型艦艇ですら航行が無理だというのに」
今度はアガヌが言った。
「無理です、あそこは」
「お止めになった方がいいかと」
「安心しろ」
しかしアッディーンは提督達の言葉を退けた。そのうえで述べるのであった。
「既に調べてある。あの宙域はな」
「はい」
アッディーンの強い言葉で反論はまず止められた。提督達はその流れのまま彼の言葉を聞くのであった。
「僅かだが細かい道が続いている。そこを抜けるつもりだ」
「そこをですか」
「そうだ、そして」
彼は言葉を続ける。
「そこを通り抜け国境にいる敵の後方に現われるのだ」
「補給は？」
「ガズニーだ」
彼はそう答えた。ガズニーとはハサンの星系の一つでありアステロイド帯のすぐ向こう側にある。ハサン軍の重要な補給基地の一つである。
「まずはそこを陥落させてから」
「敵を衝くと」
ムーアが問う。

「これは奇襲だ」
アッディーンの声が鋭くなった。
「一気に仕掛ける」
「成程。では艦隊は」
「十個艦隊」
アッディーンはまたムーアに言う。
「それも高速機動部隊ばかりだ。それでアステロイド帯を一気に抜いてガズニーを陥落させるつもりだ」
「では隠密にですな」
「その通りだ。私自らその十個艦隊を率いる」
今度はアガヌの問いに答えた。
「残り六十個艦隊は諸君に任せる。全体の指揮は」
「指揮は」
一同その言葉に注視する。次の言葉でその六十個艦隊の運命が決まる、そう言っても過言ではなかった。
「ラーグワート上級大将」
「私ですか」
「そうだ。貴官に残りの六十個艦隊を任せたい。どうだ」
彼の方を見て問う。ラーグワートは提督達の中では最年長であり実績も経験もある。その用兵は堅実であり慎重だ。アッディーンはそこに注目したのである。
「わかりました」
ラーグワートは鋭い目でそれに返した。
「では六十個艦隊、お任せ下さい」
「うむ、これでまずは割り当ては終わった」
「しかし閣下」
ハラスが彼に問う。
「どうした？」
「後方からその十個艦隊で攻撃を仕掛けるのですね」
「そうだが」

「対するはハサン軍は十個艦隊。相手にするにはかなりのものですが」
彼はそれを危惧していた。
「後方に回り込めても上手くいくでしょうか」
「十個艦隊だけでは無理だ」
アッディーンの言葉は簡潔であると共に的確であった。
「十倍の相手に冷静に対処されるとな。まして敵将はダビデブ元帥だ」
彼のことはアッディーンもオムダーマン軍の諸将も知っている。
「その程度では動じはしないだろう」
「では無理だと」
「いや」
しかしアッディーンはハラスの言葉に首を横に振る。
「その為に諸君等がいるのだ」
「我々が」
「そうだ。私が後方から攻撃を仕掛ける」
まずはそれに言及する。
「それと同時に全面攻撃に出るのだ。よいな」
「挟撃ですか」
ベニサフがそれを聞いて述べる。
「タイミングが大事ですが」
「そこだ」
アッディーンは言う。
「当然通信は利かない。連絡は不可能だ」
「はい」
提督達もその言葉に応える。これは言うまでもなかった。
「だからだ。敵の前線を見るのだ」
「敵の？」
「どういうことでしょうか」
提督達はいきなりそう言われ目を少し丸くさせた。そのうえでア

ッディーンをまた注視した。

## 第二十四部第一章　戦いの幕開けは静かにその六

「敵将はダビデブ元帥だ」
アッディーンは何故かまた同じことを述べた。それが提督達には妙に思えた。しかし彼はそれに構わずに話を続けてきた。
「彼は優れた人物だ。とりわけ兵の統率がな」
「ええ、確かに」
「そこに何が」
「それだ。私が後方から攻撃を仕掛ける」
ダビデブの統率について言及したうえで話を元に戻してきた。
「そうすればその見事な統率にも一瞬だが乱れが生じるな」
「成程」
「そういうことですか」
そこまで聞いて提督達も理解した。彼は挟撃を言っているのだ。
「そこだ。一気に攻めるのだ」
アッディーンは言う。
「わかったな」
「わかりました」
「それでは」
提督達はそれに頷く。
「ではそのように」
「まずは動かずに」
「決してな」
アッディーンはまた言った。
「軽はずみこそが敗北につながる。それだけは心得てくれ」
「そして敵の動きが乱れたならばですか」
ラーグワートは再びそれを問うた。
「そこで六十個艦隊が」
「勝敗は一瞬で決する」

アッディーンはこうも述べる。
「それを見誤らないようにな。見誤ればその時は」
「敗北、ですか」
ナクールが呟く。
「それで」
「そうだ。だからこそ」
「慎重に、かつ機を逃さず」
ナクールの今の言葉は言うのは容易いが実行にはかなりの困難が伴う。そういった言葉であった。
「ですな」
「わかったな。ではすぐに作戦に取り掛かる」
アッディーンは提督達に告げた。
「いいな」
「はっ」
「わかりました」
諸将がそれに応える。こうしてアッディーンは十個艦隊を連れ本軍と分かれた。その際の行動も徹底的に隠蔽していた。ハサン軍に気付かれないように注意を払いながら分かれたのである。
アッディーンはアリーに乗艦しアステロイド帯に向かう。その中でガルシャースプが彼に問うのであった。
「また今回も大きな賭けですな」
「賭けではない」
しかしアッディーンは落ち着いた様子でこう返す。
「成功の可能性は？」
「私の考えは知っていると思うが」
アッディーンは今度はこう返した。
「確実に成功するものでなければそれを実行に移しはしない」
「では確実に為し得ると」
「その通りだ」
彼は前を見据えて断言する。目の前に広がる無限の星の大海原を

眺めながら。星の海は目に見える限りでは平穏としている。しかし今その海は戦乱により荒れている。それはアッディーン自身が最もよくわかっていることであった。兵を動かしているのは彼であるからだ。
「既に道も見つけてある」
「道もですか」
「そこを通りガズニーに急行する」
彼は言う。
「そこで補給を整えなおすと共に拠点にし」
「防衛ラインを衝く」
「そして敵陣を乱す」
そこまでが彼の受け持ちであった。
「後は主力艦隊が動いてくれれば。それでよい」
「ですか」
「本当に全ては一瞬で決まる」
アッディーンはまたそれを述べた。

## 第二十四部第一章　戦いの幕開けは静かにその七

「少なくとも国境においてはな」
「戦いはまだ続くでしょうな」
「ハサンは大国だ」
アッディーンはそうガルシャースプに述べる。前を見据えると共に腕を固く組んでいる。そこには英気と決意があった。
「一度の敗北で揺るぎはしない」
「さらなる勝利が必要ですな」
「その通りだ。だから」
彼は断言する。
「この勝利をハサンに対する勝利とは思わないことだ」
「まだまだ先はありますか」
「そうだ。ハサンは広い」
こうも述べた。
「広いだけでそれは脅威になる」
「距離ですか」
実はこれは戦争においては非常に重要な問題となる。空間はそれだけで戦略の障害になるし防衛要素にもなるのだ。かつてナチスドイツがソ連を攻めあぐねたのはその圧倒的な広さにあった。彼等はその広大なロシアの平原を突破しきれなかった。沼沢地と舗装なぞされていない道に足を取られ冬に覆われた。その結果として彼等は敗北した。広大さはそれだけで重要な防衛要素となるのだ。
「そう、距離がある。これが重要だ」
「ここは慎重に戦いを進めていきますか」
「うむ」
アッディーンは頷く。
「私もまた軽率な動きを避けなければならない」
「それではまずは」

「一つずつ駒を進めていこう。まずはガズニーだ」
「はい」
彼は話を段階的に進めていくことにした。最初は予定通りアステロイド帯を突破してそこからガズニーを陥落させることを狙っていたのだ。
「いいな」
「わかりました」
こうしてアッディーンはアステロイドに向かう。このことに気付いている者はまだ誰もいなかった。しかし戦いは進められていたのであった。
前線で戦いが行われているその時統合作戦本部長であるアジュラーンはマナーマと会っていた。二人で統合作戦本部の作戦会議室で話をしていた。話されている内容はやはり戦局に関してであった。
「遂にはじまりましたな」
「うむ」
アジュラーンはマナーマの言葉に頷いた。
「まだ干戈も交えてはいないがな」
「それでもはじまりははじまりです」
マナーマはそう返す。
「これが我がオムダーマンの命運を決する戦いの一つになります」
「とりわけな。今までそうした戦いが幾度もあったが」
「サラーフやミドハドとの戦いもそうでしたし」
「南方攻略もだったな」
アジュラーンは述べる。
「全てはそうだった。いずれの戦いも我がオムダーマンの運命を賭けたものだった」
「しかし我々は全てに勝利を収めてきた」
「言い換えると副大統領がな」
かつては部下であったアッディーンも今では彼等の上司である。
このことも二人は世の流れの恐ろしさを感じずにはいられなかった。

あれよこれよという間に話が進んでいたからである。
「閣下が勝利を収めてきたおかげだ」
「確かに」
マナーマはアジュラーンのその言葉に頷く。
「だからこそ我々はここまで来ました。西方の一国に過ぎなかった我々が」
「その通りだ」
アジュラーンも彼の言葉に頷く。
「閣下に全てはかかっているか」
「若い力に」
「そう、若い力だ」
アジュラーンはそれを述べて少し複雑な顔になった。
「我々の出る幕はあまりないか」
「それが時代の流れならば」
マナーマの言葉はかなり達観したものであった。
「受け入れるしかないでしょう」
「そうか」
「はい。それに我々も若い頃は」
マナーマはかつてのオムダーマンであった頃について述べてきた。

## 第二十四部第一章　戦いの幕開けは静かにその八

「かなり派手にやったではありませんか」
「それなりにな」
その言葉を聞いたアジュラーンは微かに笑みを浮かべてきた。
「私のやれるだけのことをやってはみた」
「それは私もです」
マナーマもそう述べる。
「それなりには」
「そう思うと満足するべきなのかな」
アジュラーンの言葉も達観したものになった。
「若いうちにやれるだけのことをやれて」
「そうかと。少なくとも悔いはありませんな」
「ああ、それはない」
アジュラーンはそれはきっぱりと否定した。その言葉に偽りはなかった。これはマナーマも同じであった。やはり彼等には悔いは存在しなかった。
「戦場を駆け巡ってきたからな」
「あまり広いとは言えない戦場でしたが」
ここでは今アッディーンが駆けている戦場を指し示していた。彼が駆け巡ってきたのは西方だけでなく南方もでありそして今は東方にいる。それを考えると彼等のいた戦場は西方の狭いエリアに限られており小さなものであるのだ。しかしあの頃はそれに気付かなかったのである。
「それでも思う存分に戦いましたな」
「あの頃は必死だったな」
「今と同じく」
そう語るマナーマの目が懐かしむものであった。
「オムダーマンの為に」

「つい最近まではそうだったな」
アジュラーンも懐かしむ目になった。
「カッサラの奪い合いをしてな」
「あの星系を手に入れるのにかなり苦労しましたな」
「そうだったな」
それが遠い昔のことに思える。今ではサルチェスは完全にオムダーマンのものになっている。それもまたアッディーンの功績によるものであった。彼の名が知られるようになったのはこの星系における戦いで鮮やかな攻撃を見せたことによる。今や人類社会にその名を知られる彼の華々しいデビューであったのだ。
「それもな。今は昔だ」
「そうですな。本当に」
「ミドハドが滅びサラーフが滅んだ」
アジュラーンは述べる。
「私が若い頃は考えられなかった。両方共我々にとっては目の上のタンコブだった」
「脅威でもありました」
「その脅威がなくなり西方は完全に我々のものとなった」
そのことだけでも信じられなかった。
「その後の軍政が大変だったな」
「しかも南方もでしたから」
マナーマにとってはその苦労もいい思い出になっていた。
「瞬く間に我がオムダーマンは広がった」
「それと共に軍もまた」
「今やサハラを統一しようとするか」
「私は思うのです」
マナーマは目元を緩ませながら述べてきた。
「何をだ？」
「今のことは果たして真実なのだろうかと。あまりにも境遇が変わっていきますので」

「真実なのだ」
アジュラーンはそれに対して答える。
「間違いなくな」
「国が一夜にして出来上がり一夜にして潰える」
「それが世というものだからな」
これはサハラにおいてはアラビアンナイトの頃から変わりはしない。全ては一瞬のうちに興って消え去るものなのだ。まるで砂漠の蜃気楼のように。何もかもがそうなのであった。だがそれでいて真実なのだ。即ち真実もまた一瞬のうちに興って消え去るものなのである。
「我々もまたその中にいる」
「では敗れれば」
「今度は我々が消え去る番だな」
アジュラーンはそう返す。
「ミドハドやサラーフのように」
「ではそうならないように手を打っておきますか」
「万が一の場合にか」
「ええ」
マナーマは答える。

## 第二十四部第一章　戦いの幕開けは静かにその九

「既にハサン軍が侵攻してきた場合も考えておりますが」
「予備兵力の動員と兵器の補充を」
「如何でしょうか」
「今の状況では不充分か」
アジュラーンはそう彼に問うてきた。
「やはり」
「いえ、今のままでもいけることはいけるでしょう」
「しかし完璧ではないか」
「はい。不備も多くあります」
彼は答える。
「特に南方からの兵力の増員が上手くいっていません」
「そうだな」
それはアジュラーンもわかっていた。そのことに少し息を吐き出して応えた。
「そちらはな。全くだな」
「そうです。ですから」
マナーマは述べる。
「何とかしておきたいのですが」
「少し問題が出て来たな」
アジュラーンは何かに気付いたように呟いた。
「どうにも」
「確かに」
マナーマもそれに頷く。
「アスランは西方にある」
「はい」
「そこに限界が出て来たな。やはり場所が」
元々オムダーマンはサハラ西方のさらに端にあった。その首都ア

スランもまたサハラ全土から見れば辺境にある。今もオムダーマンの首都だが西方と南方を掌握し東方にも向かおうとするには場所的に不都合が生じてきているのである。彼等は今それを認識したのである。

「はい。徴兵もそうですし」

「補給や統制にもな。問題が出て来ている」

アジュラーンは述べる。

「行政面でも出ているな」

「少なくとも軍政ではそれが見えています」

「首都の場所も大事だということか」

アジュラーンはそれをまた口にした。

「今の我々の技術では」

「連合のように流通も何もかもが発達した状況ではないのですから。そこを考慮しますと」

ここで二人は流通やそうしたものにについて述べた。連合はサハラと比較すると流通や通信において隔絶したものがある。これは航路や整備体制、それを支える技術が整っているからだ。サハラは残念ながらそれへの整備が充分ではない。それが軍事にも影響しているのだ。

サハラのそれは軍事に偏重している。これはサハラの情勢を考えると当然である。しかしそれだけで正常な整備システムになる筈がなく悪影響を与えているのだ。全体的にそうした通信や流通、航宙への悪影響が問題になってきていたのだ。

そうした問題もあるし政治システムの問題もある。連合は各国の権限が強い連邦制である。その為中央政府の場所がどんな場所にあっても構わないところがある。しかしオムダーマンは中央集権体制だ。首都の場所が重要になる。それもまた問題なのである。

「首都の場所は」

「それに関しては今後の課題になるな」

「ええ」

マナーマもそれに同意して頷く。

## 第二十四部第一章　戦いの幕開けは静かにその十

「ですがそれは」
「この戦争の後か」
「はい。今後を踏まえて場所を選ぶべきです」
「その通りだ」
彼等はさらに話を続ける。
「このアスランには愛着もあるがな。それだけでは」
「戦争はできませんので」
「それ以上に政治もか。こんな問題が出て来るとはな」
アジュラーンも正直戸惑っていた。彼にしても今のオムダーマンは勢力を急に伸張させている。その為こうした問題も浮き彫りになってきているのである。
「それを解決してこそか」
「そうかと。あとは」
「何だ？」
「西方の開拓地にも手をつけたいというのが政府の考えです」
「西方のか」
新たな話が出て来た。連合と同じように惑星開発もまた浮かび上がってきたのである。この場合軍としては移民達を警護しなくてはならない。それへの人員割り当ての問題である。
「はい、落ち着いてから進めたいということですが」
「では後でか」
「ええ、そうかと」
流石に今は無理であった。今はハサンと国を賭けた戦争をしているからだ。だから今はそうした惑星開発への余裕はなかった。オムダーマンにはそこまでの力はない。
「何かそちらに話を集中させたいな」
「全くです」

二人の意見がここでも一致した。
「穏やかになることがな」
「何よりですから」
今までオムダーマンは膨張し、戦争するだけだった。しかし何時かはそれも終わる。その先の穏やかなものを彼等は今見たのである。
「だがそれも全ては」
「戦争に勝利してからです」
「そうだ。まずは何よりも」
アジュラーンは話を戻す。
「いざという時に備えておこう」
「具体的には南方ですが」
「どうする？」
アジュラーンはあらためてマナーマに問うた。
「これからは」
「まずは特別にスタッフを派遣します」
彼はそう述べる。
「そして各地で人員を集めて」
「防衛体制に就かせるか」
「はい。国境から離れた後方に」
「予備兵力及び治安維持として」
「それで行こうと考えています」
「よし、ではそれで行こう」
アジュラーンはそれに賛同してきた。彼が今軍政を任されている。アッディーンは戦場に向かう際に彼に軍政面でかなりの権限を任せていたのである。
「いいな」
「はい、それでは」
マナーマは応える。
「宜しくお願いします」
「それでだ」

アジュラーンは話を続ける。
「南方にはまだ抵抗勢力はいないか」
「どうでしょうか」
言葉が少し懐疑的になった。
「あの辺りは複雑に入り組んでいてそうした勢力の発見も困難ですし」
サハラ南方は複雑な宙形で知られている。元々サハラ全土がそうであると言えるが南方はとりわけそうである。アステロイドやジブリ、ブラックホールに変色光星、磁気嵐、様々なものが入り組んでいて航宙を困難なものにしているのである。アッディーンもここを攻略する際には慎重に兵を進め外交も駆使した程である。
「ですから」
「発見しづらいか」
「今のところはそうした戦力は見当たりません」
あくまで今のところは、である。
「ですが実際は」
「わからないか」
「とりあえずは何かしらの海賊がいるのは確認されます」
「それへも兵を向けておくか」
「はい」
マナーマは頷く。
「それでかなりのものが出て来るかも知れないがな」
「その可能性は皆無ではありませんな」
「やれやれだ」
アジュラーンは溜息をついて述べた。
「何かと苦労が多い」
「仕方ありませんな、それは」
「そうだな。だがそれを乗り越えてこそだな」
「そうです、オムダーマンの本当の意味での発展があります」
彼等もそれを考えている。だからこそ今こうして熱心に話をして

いるのである。

## 第二十四部第一章　戦いの幕開けは静かにその十一

「ハサンを倒せば」
「また勢力が大きくなる」
「そしていよいよ」
「いや、待て」
そこから先は言わせなかった。あえてである。
「あまり果てない先を言うのも名。足元を固めていってからにしよう」
「おっと、そうでしたな」
マナーマも笑ってそれに応える。
「それでは」
「むっ」
ここで声が聞こえてきた。その声は。
「そうそんな時間か」
「ですな」
礼拝の時間を知らせる放送であった。オムダーマンもムスリム国家であるから当然ながら礼拝の義務がある。従って彼等はここで礼拝をすることになったのだ。
「では私達も」
「うむ」
二人は席を立つ。そのまま跪きメッカの方へ向いた。
「そういえばメッカはハサン領だったな」
「そうです」
二人は跪いて顔を見合わせてそう話をした。
「今は彼等もまた礼拝に向かっているか」
「おそらくは。今の我々と同じように」
これはムスリムならば同じである。メッカの石に向けて礼拝をしなくてはならない。メッカは都市ごとサハラに持って行かれて今は

ハサンが守護しているのである。
「祈ろうとしているでしょう」
「それは同じだな」
アジュラーンはそう言ってふと笑みを作った。
「ムスリムとして」
「これも因果でしょうか」
マナーマもふと言葉に出した感じだった。
「同じムスリムが争ってきたのは」
「それはどうかな」
しかしアジュラーンの言葉はそれに対して否定的なものはなかった。むしろ肯定するような響きさえ聞こえるものであった。それはマナーマにもわかった。
「人間はそれは皆同じではないのか」
「同じですかな」
「キリスト教徒達もそうだったしな」
「彼等はまた特別では」
マナーマはそう思っているふしがある。歴史においてはキリスト教徒達は自分達の教義こそが絶対の正義と信じ互いに殺し合い血を流し合った。アルビジョワ十字軍もそうであるし異端審問もそうであった。三十年戦争も同じである。その内幕は実際には侵略戦争であり権力闘争であり不満を逸らす為の政治的配慮であり名門同士の対立だった。しかし宗教が看板になったことにより戦いは血生臭いものになったのも事実である。
ここで特筆すべきはそのキリスト教徒達が野蛮と蔑んできたイスラム教徒達の方が血を好まず寛容であったことだ。
それは歴史にはっきりと書かれている。キリスト教世界においては惨たらしい拷問や処刑が実に多い。その恐ろしさはイスラム世界の比ではない。十字軍やそうした戦争では食人も行われていた。カニバリズムは中国だけではないのだ。アメリカやオーストラリアでも原住民をその対象としてきた。第二次世界大戦においてアメリカ

やヨーロッパの国々がどうして日本軍の残虐行為を宣伝する中国の言葉を信じたか。それはここに秘密があるのだ。

日本人のそれとは明らかに異なる行動を取る日本軍が第二次世界大戦においては多々言い伝えられてきた。それを他の国の者達が信じたのは彼等の過去に同じことがあったからなのだ。

## 第二十四部第一章　戦いの幕開けは静かにその十二

従軍慰安婦についても細かい検証が行われその虚無が暴かれている。しかしその数多い虚無の中で面白いことが一つある。それは日本軍が人の首を切りそれからスープを取って慰安婦達の飲ませたというのだ。

これは明らかにおかしい。日本人はそうしたものは普通昆布や煮干といった乾物から取るのである。明治になってからそうした中華風のスープの取り方は入ってきていたが決してメジャーなものではない。その中華風にしろ豚骨やトリガラ等骨からだ。頭で取るというのは見られることは見られるが決してメジャーなものではないのだ。可能性がないわけではないがまず有り得ないレベルの話だ。若し人からダシを取るというのなら一旦干物か何かにしていたのが当時の日本人なのだ。そもそも日本人では食人は他の国に比べて非常に少ない。大戦中では生魚を食べて寄生虫で死んだ話はある。そちらの方が多い。

そうしたことがヨーロッパとアラブの関係にも言える。ヨーロッパ人の言う残虐なアラブ人とは自らへの投影であったのだ。

「あの残忍さは」

「特別か」

「少し異常ではないかと思います」

それがマナーマの考えであった。今それを述べる。

「今のエウロパはかなり人道的ですが」

「むしろ連合の方がな」

「連合のあれもまた」

マナーマは連合についても言及してきた。連合の処刑の惨たらしさはサハラにおいてもよく批判されている。残虐だということでだ。

「酸鼻に過ぎます」

「我々と同じか」

少しシニカルな言葉になった。
「残虐で野蛮というのならな」
「同じムスリム同士で争うのもまた野蛮ですかな」
「私はそうは思わないがな。理由はもう言ったな」
「はい」
マナーマはそれに答える。
「それもアッラーの思し召しかも知れないしな」
「ムスリム同士で戦うことがですか」
「そうだ」
アジュラーンは答える。
「その中で、それから生まれ出るものを望まれているのかも知れない」
「それが運命ですか」
「そう、戦いのな」
彼は言う。
「そう言うと何か他の宗教の聖職者みたいになってしまうな」
つい苦笑いを浮かべた。
「それは」
「まあそこから何ができるかはわからない」
彼は述べる。
「しかし必ず戦いの結果は出る」
「それがアッラーの思し召しですか」
「そうだ。話はな」
彼はさらに言葉を続ける。
「若しかするとだ」
ここで話が微妙に変わった。
「その中に副大統領がいるかも知れない」
「閣下が」
「そうだ。少なくとも今度の戦いは彼にかかっている」
「成程」

マナーマもその言葉に思案を向ける。
「しかし結末はアッラー以外にはわからないな」
「オムダーマンの運命も」
「オムダーマンもな」
アジュラーンの目にも思案の色が浮かんできた。
「わからないぞ」
「運命の中では」
「そうだ」
彼も答える。
「しかし戦わなくてはならないからな」
「それはわかっています」
マナーマも同じ考えだ。
「ではその態勢を整えましょう」
「ハサンもまた必死だしな」
アジュラーンはハサンも見据えていた。それを言葉にも出す。
「そして先には」
「ハサンとの決戦ですか。それとも」
「うむ」
マナーマの今の言葉に頷く。
「もう一つの相手が」
「シャイターン主席もな」
目が光る。剣呑なものを見ている光であった。
「彼もまたオムダーマンに立ちはだかるかもな」
「そうですね」
シャイターンのティムールとは今は友好関係にある。しかしそれが何時か壊れる可能性があることもまた彼等は感じていたのである。

## 第二十四部第一章　戦いの幕開けは静かにその十三

「危険さでは彼が一番だな」
「はい」
マナーマもシャイターンをそう見ていた。同じものを。
「敵に回すならば」
「実はですね」
「どうした？」
マナーマの言葉に顔を向ける。彼が言おうとしていることを注視する。
「最近アスランに謎の諜報員達が出入りしていまして」
「謎の！？まさか」
「そうです」
彼は言う。
「おそらくは」
「既にこちらにも仕掛けているというのか」
「どうされますか？」
「水面下だな」
アジュラーンはここで何かを思い止まるものがあった。友好国であるので表立っては動けない。だからこそ思い止まったのである。
「ではこちらも内密にだ」
「処理すると」
「それでどうだ」
鋭い目でこう提案してきた。
「見せることはできないしな」
「そうですね。お互いに」
「お互いに見せるわけにいかないというのはある意味有り難い」
言葉はクールであった。クールではあってもそれは剣呑なクールであった。それが諜報というものであった。

「お互い表に出ているのと同じだな」
「裏であってもですか」
「どちらか一方が表で裏ならば困っていたことになった」
アジュラーンは述べる。
「非常にな」
「それを逆手に取ることもできますがこちらもやられます」
表立たせればそれを政治問題にできる。今それをしなくても後々カードに使えることになる。諜報というものは軍事に関することではとりわけ政治的な問題の強いものであるからだ。
「ましてやシャイターン主席ですし」
「彼は目的の為には手段は選ばない」
「はい」
二人も彼をそう見ていた。
「ならばな」
「我々よりもそれが上手いですから」
「余計に油断はできないのだ」
「ですから今の状況を感謝して」
「手を打とう」
落ち着いているがクールから冷徹なものに変えて声を出す。
「いいな」
「わかりました」
マナーマは頷く。
「ではそのように」
「うむ。とにかく今は尻尾は見せないでおこう」
何故か自分達がそうするべきだと述べてきた。これにも理由がある。それはやはり政治的な理由によるものであった。元帥ともなればそれを見ないわけにはいかず実際にアジュラーンもマナーマもそれを見ていた。だからこそ今のような話もできるのである。
「シャイターン主席はきっとそれを覚えている」
「ええ、おそらくは」

「後で何を仕掛けてくるかわからない。弱みは掴ませないことだ」
「それが政治ですか。どうも私は馴染めませんな」
「駄目か？」
「はい」
マナーマは答える。
「やはり私が軍人ですので。あまりこうしたことは」
「そうだな。私もだ」
「閣下もですか」
「実はそうなのだ」
彼はいささか困ったような顔をして述べる。
「軍事とはまた違うな」
「そうです。それです」
マナーマはそれこそが問題なのだと言わんばかりに述べてきた。
「何と言いますか。人のしがらみと」
「様々な利害調整がな」
「そういうのを見ていますとどうにも。馴染めるものではありません」
「何処の場所でもそうなのだがな」
アジュラーンはそう前置きもした。これは事実である。
「しかしだ。それでも」
「政治の世界はそれがさらに」
「複雑になっている。私もあの空気には慣れない」
「シャイターン主席はそれを上手く操っているようですな」
「彼はな」
言葉の調子が変わる。剣呑なものを感じるものだ。アジュラーンはどうにも彼について語る時はそうした調子になることが多いようである。
「また特別にな。そういうものが上手い」
「やはり家の関係ですか」
「そうだな」

そのうえでマナーマの言葉に頷く。
「シャイターン家は権謀術数の家」
「はい」
これはサハラでよく言われている。南方にいた頃からも北方の覇者となった今でもこう言われ続けているのだ。この家の周りでは昔から非常に奇怪なことが起き続けている。それを以って確実な証拠とは言えない。だが状況を見る限りかなり黒に近い灰色であるということが多いのもまた事実なのだ。
「それが自然というわけだ」
「政治でも裏の世界が自然ですか」
「最初から住んでいればそうなる」
アジュラーンは言う。

## 第二十四部第一章　戦いの幕開けは静かにその十四

「深海魚にとっては深海こそが自然であるようにな」
「成程」
「そう、彼は影の世界にいる」
そうシャイターンを評した。こう言えばいい評価ではないが政治の世界ではあながちそうとも言えないものがあるのも事実だ。何故なら謀略もまた政治の世界においては常套手段の一つであるからだ。これは何時の時代のどの国でも変わりはしない。普遍の原理であると言ってもいい。そうした意味でシャイターンという男がやっていることもまたごく当たり前のことなのである。少なくとも政治の世界においてはそうなのだ。
シャイターンはそうした意味において実に政治的な人物である。少なくともアッディーンと比較してもかなりのものだ。表では善政を行い民衆の支持を掴み国を豊かにしその裏で様々な謀略を駆使して己の地位を高め邪魔な政敵や他国の有能な人物をスカウトしたり消していったり失脚させていく。まさに政治的なのである。
「しかしだ。副大統領は違うな」
「閣下はどちらかと言いますと」
この場合閣下とはアッディーンのことだ。オムダーマン共和国副大統領だからこそこの呼び名になっているのだ。閣下と呼ばれるのは大臣や提督であるが当然大統領や副大統領もそれは同じである。彼はその為にあえて閣下と呼ばれているのである。そういうことなのだ。
「表の世界におられますな」
「政治の表だな」
「ええ、そうです」
マナーマはそう答える。
「違うでしょうか」

「いや、その通りだ」
アジュラーンはその言葉に頷く。はっきりと肯定してきた。これはアッディーンという男をよくわかっているからこその言葉である。伊達にかつて彼の上司であったことはないのである。そしてそれがわからないアジュラーンではなかった。当然ながらマナーマについても同じことが言えるのであるが。
「閣下は裏の世界におられる方ではない。完全に表の世界の方だ」
「そうです」
マナーマはその言葉に頷く。
「それはいいことですな」
「さてな」
しかしアジュラーンはそれには首を傾げさせた。
「馴染める馴染めないは別にしてだ」
「ええ」
ここでその問題が出て来た。
「それでも知らなければいけない立場に閣下はおられる」
「副大統領として」
オムダーマンの副大統領の権限は大きい。アメリカ副大統領よりも遥かにだ。アッディーンは軍事のほぼ全般を任されているし政治の会議にも出席する。裁可を求められる政治的な事柄も多い。そうしたあらゆる意味で彼はかなり政治に関わってきているのである。
「政治に深く関わっておられるからな」
「裏も知らなければならないと」
「そういうことだ」
そう彼は述べる。
「戦うだけではない」
そしてこう言った。
「あらゆるものを見なければいけない立場におられる」
「裏もまた」
「上手くいけるかな、果たして」

考える目になった。この考える目こそが重要なのであった。そこに全てが宿っているからである。

## 第二十四部第一章　戦いの幕開けは静かにその十五

「裏では」
「表だけではやれませんか」
「軍事にしろそうではないか」
軍事に例えてきた。
「表で華々しく戦場で戦いながら」
「裏では諜報員同士が暗躍する」
「今がそうだな」
「むっ」
マナーマは今の言葉を聞いて目を光らせた。こう言われるとわかる。
「そうなりますか」
「軍事の表と裏は政治のそれとはまた違ったものではあるがな」
「それはそうですな」
参謀総長としてそれはわかる。政治の表と裏には馴染めはしなくとも軍事に例えられるとわかる。そうした意味で彼はやあｈり軍人であると言えた。しかも生粋の。
「やるしかないのだ」
「ふむ」
それを言われてまた考える顔になる。
「立場により求められるものが違うにしろ」
「それが政治なのだろうな」
「厄介なものです」
この言葉はマナーマの本音であった。
「そうした様々なものが求められるのは」
「やはり君は好きにはなれないか」
「はい」
それにははっきりと頷く。

「やはり私は。軍人でありますので」
「そうか。私もだ」
アジュラーンも言う。
「やはり軍人でありたいしそのままでいい」
「政治家ではないと」
「どうにもだ」
彼はまた述べる。
「政治というのは本質的に軍事に深く関わる」
「ええ」
戦争が政治の一手段であるのだからこれは当然だ。しかしそれと共にもう一つ問題がある。これが政治と戦争の関係をさらに複雑なものにさせているのである。
「軍人は本質的に今の政治には向かないのかもな」
「連合では議会が軍人の意見を聴取してそれを政府へのチェックとしているようですな」
「それが最もいい形なのかもな」
アジュラーンはそれを聞いて納得したように述べた。
「どうにもな」
「そうなりますか」
「なると思う」
彼は答えた。
「軍人は軍事という専門分野に特化している」
そうならなくてはならない。そういう前提もある。
「だから政治には疎くなる。そうだな」
「その通りです」
二人が戸惑っているのはそれである。そのうえ軍事に求められるセンスと政治に求められるセンスは違う。この問題もあるのだ。政治と戦争にあるものは何処までも複雑だ。
「それを考えると連合は上手くやっているか」
「八条長官ですか」

「彼は元軍人だが本質は政治家だ」
「しかも表の世界の」
正確に言うならば八条は政治の表の世界しか歩けないでやっていける幸運な男なのだ。資金に困っておらず本人の資質によりその世界を歩いていられたからだ。そうした意味で彼は幸運なのである。
「軍事をある程度知ってそこから政治家になる」
「そうするとああなるのですか」
「あまり深く軍事を知ればまた違ったものになっただろう」
アジュラーンの分析はそうであった。
「ただしだ。この場合は意味が少し違うな」
「専門家になってしまうということですか」
「そういうことだ」
アジュラーンは述べる。
「そうなると政治家としては影響が出かねないのだが」
「彼はそうではないですね」
「いい意味でのゼネラリストだ」
つまり広範囲でものを見られるようになっているというのである。これは八条をよく言い表していた。実際に八条は確かに元軍人だがそれ以上に政治家であった。このことが彼をして今の国防長官としての活躍をさせているのである。
「閣下とはまた違った意味でな」
「文民としての政治と戦略ですか」
「そうなる。彼はあくまで文民だ」
八条の着ているものはスーツである。軍服ではない。文民とは軍服を着ていない現職ではない軍人のことである。そうなると八条は文民になりアッディーンは軍人ということになる。

## 第二十四部第一章　戦いの幕開けは静かにその十六

「我々のそれとは明らかに違うな」
「そうなりますか」
「連合は我々とはまた違う」
アジュラーンはまたそれを述べる。
「彼等はあくまで文民によりコントロールされた軍隊なのだ」
「軍人が動かしていてもですか」
「彼等は官僚だ」
この言葉もまた連合軍を的確に言い表していた。連合軍というのは軍人を公務員、即ち官僚であると考えているのだ。軍人ではあるがやはりそこにはそういう考えが念頭にある。軍人に対する考えがサハラのそれともまた違っているのである。
「官僚ですか。そう言われると」
「違和感はあるな」
「ええ」
マナーマはそれに頷く。
「だから戦略も違っているのですか」
「そうだな。軍人が考える戦略とはまた違ったものになる」
「文民の考えた戦略」
「軍人が考える政治もだ」
相反すると思われるものが出て来た。
「そう考えるとわかるか」
「それはわかります」
軍人の政権はサハラでは時折見られるものだ。だからそれには想像がいく。
所謂軍国主義というものである。第二次世界大戦後の日本では批判的な言葉として使われてきてきた。軍人が政権を握り軍部主導で政治が行われる。そこでは指導者による独裁や軍人による弾圧とい

ったことが起こる場合も多い。
　連合では存在しないものである。一千年の間どの国でも軍のクーデターやそういった政権の誕生はなかった。あくまで選挙で選ばれるものであってきた。選挙の洗礼により文民が選ばれてきたのだ。それが連合であった。連合は中央軍が出来上がる前から軍という存在にはあまり政治的な力はなかったのである。
「軍人の行う政治は」
「では逆に考えてみればいい」
　アジュラーンは述べる。
「文民が考えて立てる戦略というものをな」
「何処となくわかってきました」
　マナーマは言う。
「何か軍人をユニットとして考えそうですね」
「そういうところはあるな」
　アジュラーンもそれは感じていた。
「彼等は何処か軍人をユニットとして考えている」
「ふむ」
　ゲーム感覚ということか、マナーマは話を聞いて思った。
「それがあるな」
「危うさもあるようですな」
「それは確かにあるだろうな」
　アジュラーンもその言葉に頷いてきた。
「八条長官のように軍事を知っている者でなければな」
「大変なことになりますか」
「だからこそチェックする態勢も整えているがな」
「それでもですか」
「危険もあるのは事実だ」
　だからこそチェック態勢もあるのだ。一歩間違えればそれが国家の一大事となるのもまたわかっているからである。議会が軍人の意見を聞いてそれを政府へのチェックに使っているという体制がそれ

である。

## 第二十四部第一章　戦いの幕開けは静かにその十七

「しかしそれは我々にも言えることだからな」
「軍部の暴走ですか」
「そうなる」
アジュラーンは冷静な声で言った。
「政権を握った状態でもな。そうなれば」
「やはり国を誤りますな」
「そうだ。そこがな」
アジュラーンの目が光る。
「重要になってくる」
「我が国では今は閣下は副大統領であり大統領がおられますが」
「大統領がチェックをされ、制止する役割になっている」
「はい」
これは連合のそれとはまた違った形式の文民統制であった。軍の最高司令官をあくまで大統領としているのはここに大きな理由があるのだ。
「これは維持するべきというのが考えだな」
「大統領のですか」
「それでいいと思う」
アジュラーンはこの時軍人ではあってもより広範囲でしかも高所からものを見て語っていた。
「今後それもしっかりと整えていくことになるかもな」
「軍人政権は多くがそれで崩壊していますしね」
軍部に財政を過重に置き、それから民生を崩壊させそこを他国に付け込まれ滅亡する。軍人政権はそうやってその多くが崩壊しているのがサハラなのである。
「それもないようにな」
「はい。そうですね」

マナーマもまた高所から見ていた。だが彼はあくまで軍人であった。
「ですがやはり」
そのうえで首を傾げるのであった。
「軍人を官僚として扱うのは」
「問題があるか」
「少なくとも愉快なものではありません」
マナーマは顔にも不快なものを見せていた。
「それが連合の考えと言えばそれまでですが」
「待遇はかなりいいがな」
「そこに誇りはあるのでしょうか」
「さてな」
その言葉にはアジュラーンも首を傾げさせた。
「どうなのかな、そこは」
「私はあるとは思えませんが」
「ふむ」
マナーマの話を聞いて考える目になった。
「少なくとも我がサハラにある軍人の心というものは見られないな」
「はい。それです」
マナーマはそこをまた述べる。
「どうにも」
「エウロパの騎士道もありませんし」
「日本にはあったようだが」
アジュラーンはふと思い出した。
「武士道だったか」
「ですがそれは連合全体にあるものではないですし」
マナーマの言う通りであった。武士道は確かに残っていることは残っているがそれは連合全体にあるものではない。それは彼等もわかっていた。
「軍人としての誇りはないのでしょうか」

「そういうわけでもないと思うがな」
アジュラーンは考えながら述べた。
「それはな」
「そうですか」
「連合軍の軍規はかなり厳しい」
このこともよく知られていた。連合軍はかなり厳しい軍規なのだ。
「そこに軍人としての誇りを持てとはっきり書かれている。しかしそれは」
「やはり我々のそれとは違いますか」
「軍人というよりはだ」
アジュラーンはまた言う。
「職業倫理か」
「どうしてそうなったのでしょうかな」
「そうだな。連合の事情が大きいのだろう」
その通りであった。連合においては軍人は職業の一つでしかないと考えられているのだ。だからマムルークとしての精神や騎士道はそもそも存在しないのである。

## 第二十四部第一章　戦いの幕開けは静かにその十八

「我々には我々の事情があるようにな」
「成程」
「だが決して軍人でないわけではない」
そこはわかっていた。
「考え方は根本的に違ってはいてもだ」
「その彼等とは今は中立ですが」
好意的中立と呼ぶべきであろうか。今のオムダーマンと連合の関係はそうした状態であった。少なくともそこに信義やそういったものがあるわけではない。そもそも国家と国家の間にそういったものがあるということは本質的にないのであるがこれについては彼等、つまりオムダーマンとティムールについても同じであったのだ。そういうものである。
「対立の可能性もないわけではないな」
「はい」
「だが今はだ」
アジュラーンは話をここでハサンに移した。
「それはない。仮定でしかない」
「想定はしておきますか」
「一応はな」
アジュラーンもそれを考えている。考えを進めていく。そうすると次第に考えがまとまっていくことが彼自身にもわかった。
「参謀本部に担当を作っておいてくれ」
そうマナーマに述べる。
「頼むぞ」
「わかりました。それでは」
彼はそれに頷いて返す。
「そちらも」

「そしてだ」
彼は言葉を続ける。
「それ以上に想定されることは」
「ハサンの後ですね」
「そう、ハサンを倒した後は」
アジュラーンの言葉が険しいものになる。険しい中で言葉を続けていく。
「生き残った方と戦いになるな」
「ハサンかそれともティムールか」
彼は言う。
「どちらかと戦うことになるな」
「どちらにしろ厄介な戦いになります」
マナーマの目がこれからのことを見ていた。それは決して楽しげなものではなく深刻なものを見る目になっていた。その目で語り続ける。
「これからも」
「そうだ。ハサンは国力がある」
「ティムールは」
「それだ」
アジュラーンの言葉が続けられる。
「ハサンの高官が次々に死んでいるな」
「はい」
「それは怪しいと思うか」
マナーマに問う。そこには明らかにシャイターンがいる。しかし見ているものはサハラの多くの者が見ているシャイターンではなかった。悪魔的なシャイターンであった。少なくともサハラの者達、とりわけティムールの者達が見る彼ではなかった。これは確かであった。
「答えは決まっているかと」
マナーマは述べる。

「やはり彼は」
「そうだな、彼は手段を選ばない」
アジュラーンは述べる。
「やはりあれは」
「はい、ですから」
マナーマも言う。
「警戒が必要ですね」
「水面下だからこそ警戒を続ける。いいな」
「わかりました」
二人の元帥の話は続く。そこには次の戦いへの目もあった。戦いはなおも続く。彼等はその中を生きそれぞれの運命を抱いていたのであった。

# 第二十四部第二章　北の嵐その一

北の嵐

シャイターンは宣戦布告の後兵をアヤグーズに向けていた。最低限の部隊を守りに置き主力を率いていたのである。指揮官は他ならぬ彼自身であった。

旗艦イズライールはティムールの艦艇の中にあった。宇宙を進むその艦隊は威風堂々といった趣きがありその姿を見る者を威圧するのに充分であった。

シャイターンもまたそうであった。彼は今戦場に対して想いを馳せていた。その目は楽しげでさえあった。

「いよいよだな」

自室で小姓達に対して言う。優雅にワインとチーズを楽しんでいる。

「この世での至福の時だ」

「至福ですか」

「そうだ。この世には多くの楽しみがある」

紫苑の色のワインをその手に掲げつつ述べる。

「酒も然り、美女も然り」

彼は酒を愛している。同時に女もまた愛している。だが彼が愛しているものはそれだけではないのだ。それ以上に愛しているものもある。それが戦いと覇業なのであった。

「だがそれ以上に」

「戦いですか」

「華だ」

彼は戦いを評してこう述べる。

「戦いとは華なのだ。わかるな」

「はい」

「それは」

小姓達もその言葉に頷く。皆眉目麗しい少年達である。彼等は幼年学校の生徒達でもある。その中から選りすぐりの少年達を研修も兼ねてシャイターンの側に置いているのである。
「サハラを彩ってきた戦いの歴史だ」
「それが今また」
「そうだ」
シャイターンはその小姓達にまた述べる。
「しかしただの戦いではない」
彼はこうも述べる。
「といいますと」
「無益な何の利ももたらさない戦いではないということだ」
これが彼の言う今の戦いだった。
「いいか」
「ええ」
小姓達もそれを聞く。
「これは全てサハラが一つになる為の戦いなのだ」
「一つにですか」
「そうだ、私の手によってな」
飲み干されたグラスに小姓の一人がすぐに紫苑の酒を注ぎ込む。微かに泡立つその酒を眺めながらシャイターンはさらに言葉を続けていく。
「ウマイア朝からだ」
遠い昔の国家を口に出してきた。
「サハラは一つになったことはない。サラディンもバイバルスもそれを果たしてはいない」
幾多の英雄達がアラブには現われた。それはサハラになってからもだ。しかし彼等もアラブを一つにすることは適わなかった。
「オスマン＝トルコを以ってしてもな」
「二十世紀にもまた」
「それなりの男達は出た」

梟雄であったナセル、カダフィ、アサド、フセイン。皆それなりの力はあった。独裁者ではあっただろう。しかし同時に英雄でもあった。独裁者にはただ己がそうなりたいと思うだけではなれないものがあるのだ。それには能力とカリスマが必要なのだ。英雄と同じく。独裁者には英雄の風格があるのだ。それを考えると日本という国にはあまり英雄がいない。むしろ英雄がいなくても成り立つというのが日本であろうか。連合もまたそういうところがある。リーダーは確かに欲しておりそれがいる為に時代が進んだことはある。しかしそれはサハラのそれのように渇望されているものではないのだ。

## 第二十四部第二章　北の嵐その二

「だがいずれも一国だけの英雄だった」
「一国だけですか」
「そうだ、結局はな」
シャイターンは言う。
「残念なことにな」
「銀河に移ってからもそれは同じでした」
「多くの国家で英雄が生まれた」
一千年の間に多くのことがあった。しかしそれは結局は果たせぬ夢に終わってきた。多くの英雄がサハラ統一を掲げ志半ばで去って行った。そして今に至る。
「今のように三国にまでなったことも幾度かあったな」
「ええ」
「歴史のうえで」
小姓達はまた彼の言葉に頷いた。
「ですが常に」
「その度に」
言葉が無念なものになっていく。
「アッラーはまだ我等にそれを授けては下さらなかった」
「アッラーが」
「そうだ、アッラーは全てを司っておられる」
シャイターンが常に言う言葉であった。彼だけでなくサハラのムスリム達にとっては絶対的な存在であるのがアッラーであるからだ。だからこそ彼もまた今ここで言うのだ。
「全てな」
「ではこれまでのこともアッラーの思し召しであったと」
「試練だったのだ」
シャイターンはそう考えていた。

「幾多のジハードを経て我等が一つになるということはな」
「その中で英雄が生まれるのですね」
「サハラを一つにする英雄が」
「そう、そしてその英雄は」
シャイターンはまた言う。
「わかるな」
「はい」
「無論です」
小姓達は述べる。既に彼等はシャイターンの圧倒的なまでのカリスマの中にある。独裁者が備えていなくてはならないものは多くある。そのうちの一つがこのカリスマである。
かつてのナポレオンもヒトラーもそうであった。ヒトラーはその姿は普通の中肉中背の男であった。あの髭がなければ恐ろしいまでに眼光の鋭い異様な顔であった。見る者によっては美男子に見えたかも知れないがその眼光には誰もが竦むものであった。少なくとも容姿ではカリスマ性を発揮する男ではなかった。
その彼が絶大なカリスマ性を持ったのは演説によってであった。同時に自然と彼から出ていたのだ。やがてヒトラーの名前だけでドイツ国民は彼に従うようになった。これが彼のカリスマであった。
シャイターンは陰のある美貌を持っている。それによるカリスマもある。しかしそれだけではない。彼もまた演説の才があり自然と沸き立つものを持っていた。そうした意味で彼もまたヒトラーと同じであった。
「私なのだ」
今それをはっきりと己の口で言い切った。
「わかるな」
「ええ」
小姓達はまた頷く。
「サハラは待っていたのだ」
「アッラーは」

「選ばれたのだ」
アッラーは自分を選んだのだと。ハッキリと言った。
「ようやくな」
「長い時でした」
小姓達は述べる。
「これ程までの時間が置かれるとは」
「時間か」
ここでシャイターンはふと表情を変えてきた。
「不思議なものだな、時間とは」
「といいますと」
「いや、一千年と言えば気が遠くなるように長い」
「はい」
「まことに」
小姓達はその言葉に頷く。
「ウマイア朝からすると二千年近くにもなります」
「それまでの間我々は一つになることはなかった」
確かに長い時間だ。しかしだ。

## 第二十四部第二章　北の嵐その三

「その時間もアッラーにとってはだ。一瞬のことなのかも知れない」
「二千年がですか」
「そうだ。アッラーは永遠の時を生きておられるからだ」
アッラーは唯一にして無謬の存在である。その時間もまた無謬のものなのだ。シャイターンは今それを述べているのである。小姓達に対して。
「だから二千年の時間も」
「一瞬でしかないと」
「ユダヤ教では世界は六千年前にできたというな」
「確かそうだったかと」
小姓の一人が答える。その為恐竜の化石があるのはおかしいとユダヤ教のラビの一人が言ったことがある。ダーウィンの進化論がおかしいと主張するのも同じような理由からである。即ち聖書に書かれていることが絶対であり無謬のものであるからだと考えているのだ。これによりガリレオ＝ガリレイへの弾圧やコペルニクスの話での激論があった。コペルニクスに関しては欧州の知識人を巻き込んだものになり経験論のベーコンはこれを一笑に伏した。ルターは頭から否定してコペルニクスをその過激な論調で批判した。ルターは世話焼きでビールを愛する子煩悩な男であったが過激な男なのは事実である。ただしコペルニクスに賛同する者も多くデカルトもその一人であった。
これに似た話で面白い話が日本にある。日本に地球儀や西洋の学問が入り様々なことが知られるようになった。その中には地動説もあった。だが朱子学者である林羅山はそれはおかしいのではないかと主張した。やはり天動説が正しいのだと。林羅山は徳川幕府のブレーンでもありその影響力は大きかった。だがこれにより誰かが弾圧されたという話はない。あくまで彼がそう主張していたと残って

いるだけである。同じ話がその地動説を伝えた西洋ではバチカンが出る恐ろしいまでの激論、いや弾圧騒ぎにまでなっていたというのにだ。
人間は何処か矛盾していて科学と宗教の知識を共に正しいと信じたりもする。一方だけを信じる者もいる。かと思えば科学もまた神の御心に従っていると主張する科学者もいる。シャイターンも科学と宗教を両立させる男であった。
「その六千年も一瞬なのであろう」
「そうしたものですか」
「世界の開闢は遥かな過去だ」
そのシャイターンが語る。
「その過去においてアッラーが為されたことも多い」
「はい」
小姓達はそれに頷く。
「そのアッラーから御覧になられれば二千年なぞ」
「目を瞑るようなものでしょうか」
「そうだな、そんなものだ」
そう小姓達に語り続ける。
「もっとも私でもマウリアのあの時間の概念はわからない」
「マウリアですか」
その名を聞いた小姓達の顔が難しいものになった。
「閣下」
「何だ」
シャイターンは彼等の問いに顔を向けてきた。またワインが注ぎ込まれそれが飲まれる。
「マウリアにもイスラムはあるのでしたね」
「確かな」
その質問に答える。
「少数ながらいた筈だ。あの国には歴史的な理由でムスリムは少ないがな」

「そうでした」
第二次世界大戦後インドが独立した時にイスラム教徒はパキスタンとして独立しているのである。後にバングラデシュも独立する。これにはイギリスが引き揚げる時に火種を残していったとも言われている。元々イギリスはヒンズー教徒とイスラム教徒を分割統治しておりその対立を利用して漁夫の利を得ていたのだ。これが非常に狡猾かつ巧みであった。異民族統治をするという点においてイギリス、そしてフランスは確かに見事である。同じく容赦ないと言っても米中露、特にロシアの過酷極まるだけの統治とは違う。
そのイギリスからの独立時に分かれて以来だ。もっともマウリアはかなりの宗教モザイクと言っていい国家でありイスラム教徒も存在するのは事実である。

## 第二十四部第二章　北の嵐その四

「それでもいる筈だ」
「ですか」
「あまり実感が沸きませんが」
「私もマウリアについてはよくわからない」
シャイターンですらである。やはりマウリアは完全に異世界というわけである。少なくともそこはサハラから見て容易に理解できる世界ではない。理解するにはあくまで相当な研究や学問が必要となる。そういうことである。
それがマウリアでありだからこそ今も独立勢力となっているのだ。しかも唯一の単一国家での独立勢力である。連合もマウリアもその中身こそ違えど複数の国家による連合勢力である。サハラに至っては地域であり文明圏でしかない。だがマウリアは違う。その勢力だけで一つの独立勢力となっているのである。
「何が何なのかな」
「左様ですか」
「その時間の概念もだ」
少し考える顔になっていた。
「千年や万年という単位ではなかったな」
「途方もない桁だったかと」
小姓の一人が答える。
「それが一日かその辺りであり」
「私はそこまでは想像してはいない」
シャイターンは述べる。
「確かにアッラーにとって二千年は束の間だ」
「はい」
これは先程から述べている通りである。そもそもアッラーとは何かといえば神であるがそれは多神教における神とは全く違う。まさ

に絶対にして唯一の神なのだ。イスラムはまずその唯一にして絶対の存在を認めるところからはじまる。そのうえでその唯一にして絶対なる存在に完全に帰依するのだ。そこから全てがはじまるのがイスラムなのだ。

そのアッラーにとっては二千年なぞまさに瞬きをするような時間でしかないということだ。そこまで絶対であり圧倒的な存在なのだ。いや、圧倒的と言ってもまだ足りない。まさに世界の全てなのである。イスラムにおいては所謂キリスト教プロテスタントの中でも先鋭的とされるカルヴァン派の予定説なぞ既に当然のこととして受け止められている。

アッラーが絶対であるならば必然的に人間の運命もまたその中にあるのだ。だから人間が何をしようとそれは儚いものでしかないのだ。そこまで絶対の存在なのがイスラムにおける神、アッラーなのだ。その絶対なるアッラーの二千年はまさにほんの一時だ。この辺りはマウリアで信仰されているヒンズーの神々もまた同じである。マウリアにおいて時間とはまさに悠久のものである。数字の概念もまた途方もないものになってしまっており兆という単位ですら遥かに足りない。神の時間というものはまさに無限に等しいものとなってしまっている。創造神ブラフマーの一日の時間が今ある宇宙の時間でしかないとされている。だとすれば神の時間というものは人間の概念では計ることすら不可能なものなのだ。

「だがそこまでの時間となるとな。想像がつかない」

「想像がつかないのがマウリアですか」

「そうだな」

あらためて述べる。

「その想像のつかない世界もまたある」

「ですがサハラは」

「それははっきりとわかる」

一転して不敵な笑みを浮かべる。

## 第二十四部第二章　北の嵐その五

「何もかもな」
「何もかも、ですか」
「そうだ。サハラに関しては」
彼は述べる。
「何もかもがわかる」
「それは素晴らしい」
「これからのこともな」
「これからとは」
「北だ」
シャイターンはまたもや表情を一転させた。顔も声も鋭いものになる。そこには今までとはまた別のものを見据えていた。そうした瞬時の変貌もまた彼の特徴ではあった。考えをすぐに切り替えることができるのである。
「北といいますとまさか」
「エウロパでしょうか」
小姓達は問う。シャイターンもその問いに静かに答える。
「そうだ、彼等だ」
「しかし彼等は」
小姓のうちの幾人かがおずおずと述べてきた。
「連合との戦いでかなりの傷を負っています」
「ですから動くまでにはかなりの時間がかかると思いますが」
「普通の者ならばな」
シャイターンは鋭い声を返した。
「普通の者といいますと」
「エウロパにもまた英雄が現われるかも知れない」
それが彼の言葉であった。
「既にそれは幾人かいる」

「その英雄といいますと」
「まさか」
小姓達はここで二人程エウロパの人物で思いつく者をあげた。
「ウォルフガング＝フォン＝モンサルヴァート国家元帥」
「ロギ＝フォン＝タンホイザー元帥。彼等でしょうか」
「彼等も確かに英雄だ」
シャイターンもそれを認める。
「だが彼等の他にも英雄はいる」
グラスを手にしたまま言う。
「そう、彼等以外にもな」
「それは一体」
「誰なのですか？」
小姓達はまた問う。
「もうすぐ現われる」
シャイターンは彼等に答えた。
「もうすぐな。彼が現われた時」
「現われた時に」
「エウロパはまた蘇るだろう」
「そして北に脅威が再び」
小姓達の言葉が暗いものになる。
「その前に終わらせねばならない」
「サハラでの戦いを」
「うむ」
シャイターンは頷く。
「わかるな。エウロパはまた攻めてくる」
「はい」
小姓達はそれに頷く。頷きながら青い顔を見せていた。
「彼等は諦めはしないからだ」
「あくまで我々に向かって来るというのですか」
小姓達はそれを聞いて暗澹たる顔になった。サハラとエウロパの

戦いは十字軍の頃からの因縁であった。エウロパの者に言わせればそれはトゥール＝ポワティエからであった。メルヴィング朝の宮宰であるカール＝マルテルがイスラム軍を退けた戦いである。この時からエウロパにとってはイスラム教国というのは全くの異世界であった。そして十字軍によりそれは決定的となった。その時からお互いに相容れぬ存在となったのである。

## 第二十四部第二章　北の嵐その六

「彼等は」
「間違いなくな」
「何ということだ」
「驚くことはない」
シャイターンは恐るべき脅威を話しながらも自身は落ち着いたものであった。その手にワインを持ち優雅なことばをそのまま続けていた。それだけだった。
「それが常だったではないか」
「常だったと」
「十字軍然りオスマンの衰退時然り二十世紀然り」
彼は言う。
「常に彼等は来た。我々から奪いにな」
「そして我々はそれを防いできた」
「時には攻め込んだ」
これはそのウマイア朝の拡張とオスマン＝トルコの躍進である。とりわけオスマンの脅威はキリスト教徒達にとってバイキングやモンゴルのそれに匹敵する恐るべき脅威であった。ビザンツ帝国を滅ぼされ瞬く間に東欧を席巻された。ウィーンまで迫られローマまで攻められるのかと思われたのである。これは大きな脅威であった。
「因縁が多い」
「あまりにもですか」
「その因縁は容易には終わりはしない」
「これからも」
「そう、これからもだ」
やはり語られることは厳しい。しかしそこには真理があった。
「おそらく我々が残っている限りな」
「では閣下」

小姓の一人がここで述べてきた。
「エウロパがなくなれば」
「そうだ、連合がエウロパを滅ぼしてしまえばあるいは」
「それもよくはない」
小姓達の言葉にそう返す。
「何故ならだ」
「彼等も危険なのですか」
「その性質はエウロパとは違う」
まずは性質と述べてきた。連合の性格を見た言葉であった。
「彼等は暴力的ではない」
それをまず述べる。
「決してな」
「ええ、それは」
「確かに」
小姓達はシャイターンのその言葉に応える。連合は長い間戦争というものを知らなかった。
これは紛れもない事実である。そこがエウロパとは違う。
「しかしだ」
シャイターンは連合のもう一つの性質も見ていた。それを今述べる。
「彼等は強欲でもある」
「強欲、ですか」
「そうだ。彼等は欲望を肯定している」
それが資本主義というものである。連合はあくまで資本主義なのだ。エウロパやサハラもそれは同じであるが連合のそれは少し違うのだ。
俗に『大衆型資本主義』である。アメリカ等にルーツを持つ資本主義でありエウロパの階級社会もサハラの宗教性もない。あくまで独自の倫理にあるのだ。それはサハラのそれとは明らかに異なるものである。

欲望をセーブしているがそこにあるものが違うのだ。サハラにおいてはそれはイスラムであるが連合のそれは倫理というものだ。宗教に拠るものではなく欲望もある程度過度でいいとしている。サハラのそれがイスラムによってセーブされているのとは大きく違う。
「それがサハラに向けられたならば」
「エウロパまで併合している連合ですか」
「彼等は東にだけいた」
また小姓達に述べる。
「それが北と東になったならば」
「想像するだけで恐ろしいものがあります」
小姓の一人が呟くように言った。
「その欲望が我等に向けられるとなると」
「どちらがいいか」
シャイターンは小姓達に問う。
「連合だけがいいかエウロパがいるのがいいか」
「一概には言えません」
小姓達は彼等だけで顔を見合わせた後でシャイターンに述べてきた。
「エウロパも連合も脅威です」
「それに状況も関係しますし」
「合格だ」
シャイターンは彼等の言葉を聞いて笑みを浮かべてきた。
「その通りだ。その時によって違うな」
「連合の力は確かに脅威です」
中の一人が言ってきた。
「ですが場合によっては」
「それも使えるのだ。それに」
シャイターンはさらに言う。

## 第二十四部第二章　北の嵐その七

「それに？」
「分かれていていい場合もあるしな」
「互いを争わせる」
「毒を以って毒を制す」
今まで数多く見られていた戦略である。敵が二つあればその二つの敵を争わせる。それである。シャイターンはそれも考えているのだ。
彼の特徴としてその場にありながら同時に二つのことを考えることができるのである。こういった器用さと言っていいものを備えており、またそれは戦場においてのことだけではなくさらに後方のこと、ひいては政治のことまでも考えられる。こうしたビジョンの広さだけではなく思考回路の柔軟さ、そして多次元さが彼を彼たらしめているのだ。シャイターンはただ戦場においての天才ではないのである。
「それができないならば一つにしても方法がある」
「そうなのですか」
「いいか」
またシャイターンは述べる。
「あらゆるケースを考えていくのだ」
「あらゆるケースをですか」
「軍人は戦争だけを考えるものではない」
こうも述べる。述べる口調はそのままであるがその深さが徐々に増していっている感じであった。これは彼が意図したものであるのだが小姓達には言葉が深くなっていっていることすら気付かせてはいない。そのうえで浸透させているのである。彼等の心の中に対して。
「政治も考えていくのがいいのだ」

「政治もですか」
「視野を広く持つ」
また言う。このこと自体はどの職業についても言えることであり実に自然なものである。だが彼が今ここで言っているのはかなり広範囲なことであった。軍人に対して政治家としての素養も学べというのだからだ。それが小さなものではないのは言うまでもない。彼はこのことをわかってあえて彼等に対して言っているのである。それを言えるのはシャイターンがそういったものを備えているからに他ならない。そう、彼は備えているのだった。軍人としての視野も政治家としての視野も。まさに政戦両略の男であった。
「一つを考えるだけでは全ては見えないからだ。いいな」
「わかりました」
小姓達は頷く。
「ではこれからも」
「学んでいくといい」
シャイターンはそう声をかける。これは教師めいた口調ではなかった。あくまで政治家、それも独裁者としての言葉だった。
そもそもシャイターンという男は教師というタイプの男ではない。そこにあるのは覇道であり野心である。そのような男にとって教師になれと言われてもそれ自体が無謀なことであるのだ。シャイターンが目指すものは誰かを教え導くことではなく己が覇道を突き進みそこにある敵を倒し戦いに勝ちそのうえで己の野心を完璧なものにする。こういったものがあるだけだ。つまり教育というものは政治の中で政策の一環として考えるものなのだ。教育者になるということは彼の中には最初から何もないものであるのだ。
「いいな」
「はい」
「わかりました」
小姓達への話は終わった。それが終わると彼は一旦休息に入った。戦いの前の休息であった。

## 第二十四部第二章　北の嵐その八

その北、エウロパにおいては何かと騒ぎが起きようとしていた。ラフネールの下にも何かと人の出入りが多くなってきていた。
ラフネールはその者達と話をする。話は一つでは終わらない。
「またか」
「はい、またです」
その中の一人が述べる。
「教皇の連合行きを止める声明です」
「もう決まったことなのだがな」
ラフネールはその言葉に苦い顔を浮かべる。そのうえで述べていた。
「残念なことにな」
「まことに」
報告した男もそう返した。
「厄介なことです」
「予想はしていた」
彼は言う。
「しかし。実際にこう続くと」
「精神的に参りますか」
「それが大きいな」
その通りであった。実際に顔を苦くさせていた。
「気持ちはわかるが。私もキリスト教はカトリックだ」
「ええ」
「しかし。条約で決まってしまった。それを遵守しなければ」
「連合軍が来ます」
それが現実であった。敗北したエウロパにそれを止めることは無理である。それが最もよくわかっているのはラフネール自身である。
ラフネールはそんな彼等の説得にあたっていた。しかし納得しな

い者達も当然ながらいるのだ。彼等は軽挙妄動に走る危険性も充分にあった。それへの危惧も報告されていた。
「バチカンはもう移転の準備は完了しているのか？」
「はい」
報告をした官僚は彼に答える。
「既にもう」
「そうか」
ラフネールはそれを聞いてまずは頷いた。
「それは何よりだ」
「しかし閣下」
その官僚は彼に述べる。
「やはり納得しない者達が」
「デモを起こしているな」
「それだけならいいのですが」
言葉に苦いものが含まれる。
「彼等の中には」
「テロか」
「その噂もあります」
「その目標は何処だ？」
ラフネールはそれに問うた。
「我々か？それともバチカンか？」
もう去ってしまうのなら一思いに、そう考えるのは人としてよくある感情である。思い詰めた結果としてそう考えてしまうのだ。人というものは複雑なものである。その複雑な感情は時としてそうした愚かな行いに駆り立てるものだ。
「狙いは」
「両方のようです」
官僚はまた述べた。
「色々な過激派が出て来ていますので」
「そうか」

「はい。どうされますか？」
「テロだけはあってはならない」
ラフネールの考えは国政を預かる者として当然の決断であった。彼は国の治安の為にここは断固たる処置を選んだのであった。それは正しい決断であった。
「まずは警護を増強する」
「そして？」
「次にそうした者達を炙り出す。片っ端から検挙するのだ」
「わかりました」
官僚はその言葉に頷いて応えた。
「では内務省にも伝えるのですね」
「うむ」
その言葉に頷く。
「ボーデン首相とも話をしたい。いいか」
「それではすぐに手配を」
「いや、待て」
しかし彼はここで一旦止めた。
「何か」
「補佐官も呼んでくれ」
「アランソ補佐官もですか」
「そうだ。わかったな」
「はい、それでは」
こうしてボーデンの他にアランソも呼ばれることになった。二人は夜に呼ばれた。それぞれ夕食を終えラフネールの私邸に集まった。

## 第二十四部第二章　北の嵐その九

そこはバロック調の屋敷であった。壮麗な装飾が至るところも施され美麗な絵画や彫刻があちこちに飾られている。三人はその中の一室で話をすることになった。
白い壁に巨大な絵画が飾られている。それはギリシア神話のものであった。
「ヘルメスですか」
アランソはその絵画の中で美女達に声をかけている若く美しい男を見て述べた。見ればその手には蛇を飾った杖が握られている。
「これは」
「わかるか」
ラフネールは彼女の言葉に応えて述べた。
「はい、杖で」
「そうだな、杖でわかるな」
ラフネールは彼女の言葉に満足げに微笑んだ。
「この絵はな。何代か前に絵師に描いてもらったものだ」
「そうなのですか」
「今では家宝だ。この絵師のものは他にも屋敷に置かれている」
「ふむ」
「大抵はギリシアのものだ」
ラフネールは述べた。
「彼はギリシアの神々を信仰していたそうだからな」
「左様ですか。それでは」
ボーデンはその話を聞いたうえで問うてきた。
「北欧のものはないのでしょうか」
「あることはある」
ラフネールは彼にそう答えた。
「トールのものがな」

「ほう」
ボーデンはそれを聞いて声をあげた。それは興味がある素振りであった。
「ヨルムンガルドと戦う場面だ。海でな」
ヨルムンガルドとは北欧神話に出て来る世界を取り囲む巨大な蛇だ。ローゲ、即ちロキと巨人アングルボザの間に生まれた子供達のうちの一つでありラグナロクにおいてはトールと相打ちになる。そのことからもわかるようにトールにとっては宿敵とも言える存在なのだ。
「それはよさそうですな」
「何ならこの話の後で見てくれればいい」
そうボーデンに返した。
「それでいいかな」
「はい、ではお話ですね」
「うむ」
今度はアランソの言葉に応える。
「バチカンのことでしょうか」
「その通りだ」
またアランソに応える。
「やはりわかっていたか。相変わらず察しがいい」
「既に情報はこちらにも届いていましたので」
アランソはラフネールに対してこう述べる。
「数自体は多くはないようです」
「そうか」
「しかし過激さはかなりのもので。既に水面下でかなりの武器を用意しているようです」
「では警察だけでは不安ですな」
ボーデンはそれを聞いて述べた。
「軍も必要でしょう」
「憲兵と諜報部だな」

ラフネールはこの二つを出してきた。
「彼等にあたってもらうか」
「それが宜しいかと」
ボーデンがそれに応える。
「ですが彼等だけでもやはり限界がありますので」
「警察と協同してたな」
「はい、そうするべきです」
ボーデンはそうラフネールに述べた。
「それで如何でしょうか」
「そうだな。ではそれで行こう」
ラフネールはその言葉に頷く。そのうえで決断を下してきた。
「責任者は首相」
「はい」
ボーデンは彼に目を向ける。彼等は今立ったまま話を続けていた。
ヘルメスの下に集う形になっている。奇しくもヘルメスという神は
そうした密談を聞き集める神でもある。
「卿に頼みたい。いいか」
「お任せ下さい」
一礼して応える。
「それではそのように」
「うむ、頼むぞ」
ボーデンに言葉を返す。
「それではこの件はまずはこれで終わりだ」
「しかしそれだけではありませんね」
アランソはラフネールに顔を向けて問うてきた。
「今は」
「そうだ。もう一つ気になることがある」
ラフネールは警戒する目で彼女に言葉を返した。

## 第二十四部第二章　北の嵐その十

「次の総統選挙だが」
「やはりそれですか」
「そうだ。どうやら一人の候補者が現われるらしい」
「それは誰ですか？」
ボーデンがラフネールに問うた。
「近頃イギリスのギルフォード侯爵が活発な動きを見せておられますが」
「そう、彼だ」
ラフネールはボーデンに顔を向けて述べてきた。
「その彼だ。総統選挙に立候補するというのだ」
「所属する政党は？」
「我々ではない」
ということは敵になる。それは確実だった。
「かといって保守派でもない」
「どういうことですか？」
アランソはそれを聞いて怪訝な顔を見せてきた。政党に属さずに選挙に出るのだろうかと考えたのだ。そしてその考えは当たっていた。
「どの政党にも所属しないつもりのようだ」
ラフネールは述べる。
「何処にもな」
「成程」
「それはまた何故」
アランソとボーデンはそれに問う。これは二人には理解しにくいものであった。
エウロパでも政党政治となっている。それぞれの政党に属して政治活動を行う、一千年前からあるそれはこの時代でも続いている。

これは連合と同じだ。6
連合もエウロパも政党政治である。ただし階級社会であるエウロパはそこでも貴族出身者がかなりの割合を占めている。連合では当然ながらこれはない。様々な出身の者達が存在している。キロモトは下士官出身であるし八条は軍人出身であると共に代々政治家を出している家である。金は官僚出身だ。他にも企業家や農民、労働者、宗教家、猟師、船乗り出身の政治家もいる。実に千差万別である。
こうした違いはあれどエウロパもまた政党政治だ。だからこそギルフォードのその行動が理解できないのだ。
「それで資金は大丈夫なのですか？」
何故政党政治が行われるかというと理由の一つとしてこれがある。政治はどれだけ立派な理念、政策、能力があってもやはり資金がなくてはどうにもならない。これは民主政治の宿命である。資金の確保に誰もが苦労しているものだ。
ボーデンは怪訝な顔でそれに問う。なおエウロパで貴族出身者の政治家が多いのは家が裕福な為資金に困らないからだ。それに代々の人脈も大きく影響している。資金と人脈が政治において重要なのは言うまでもない。この時代においてもだ。
「彼は」
「それだ」
ラフネールもそれについて述べてきた。
「元々ギルフォード家はかなりの資産がある」
「そうなのですか」
「そして人脈もかなりのものだ」
そう二人に説明する。
「ギルフォード家はイギリスでかなりの力を持ってきていた。首相を出したこもあるし財界や官界、知識人界においても人物を出している」
「イギリスのですか？」
アランソがそれに問う。

「そうだ。エウロパ全土ではないがな。それでも全土に人脈はあるのだ」
「ギルフォード家の名前は私も聞いてはいましたが」
ボーデンも述べる。
「それに今まで気付かなかったのは」
「隠然たる部分も多かったからな」
ラフネールはそう説明する。
「だからだ」
「影の世界にも顔が利くというのですか？」
「いや、そうではない」
アランソの問いは否定された。そうではないというのだ。

## 第二十四部第二章　北の嵐その十一

「ギルフォード家は表の家だ」
何事にも表と裏がある。貴族社会でもそれは同じで裏の世界で動く貴族達もいるのだ。貴族社会も華々しいだけではない。その華やかな世界の裏には恐ろしい陰謀や謀略も存在している。かつての宮廷のようなものもないわけではない。例えばカミュはそちらにも関わっている家である。彼の傲慢さと何かを見透かした目はそこから来ているものなのである。
「しかしそれでもな」
「それだけの力があると」
「そういうことだ」
今度はボーデンに答える。
「特に彼はな」
「確か連合との戦争で活躍していました」
アランソが言った。
「ニョルズの戦いでは見事な武勲を挙げていました」
「うむ」
「それで知られるようにはなってきています」
「それが大きかったな」
実際に彼はエウロパでかなり有名になってきている。先の戦争での英雄の一人としてだ。辛い時代にこそ英雄が必要なものだからだ。かつてのヒトラーがそうであったように。
「私も彼を知ったのはそれからだったしな」
「それからですか」
「そうだ、多くの者と同じだ」
そう述べる。
「彼に気付いたのはな。ギルフォード家についても知らないわけではなかったが」

エウロパの貴族界は案外広いものだ。それぞれの国、それぞれの社会に分かれているしそれぞれの爵位によっても違ってくる。そこに人脈もあり細分化され、それぞれのリンクも多岐に渡っている。その全貌について書かれた本も存在するが当然そこに書けないこともあり実際の人望は不明であると言っていいのが現状である。
「それで知られたな」
「名が知られるのが第一です」
アランソはここで真理を述べてきた。
これはタレントにも言えることであるが政治家も名前が知られることが第一歩なのだ。悪名は無名に勝るとまで言われている。そこまで名前が知られることは重要なのだ。スキャンダルで名声が落ちることはあるにしろだ。それでも全くの無名であるならば話にもならないのが現実であるのだ。そういうものである。
「それが名声であれば最高のものになります」
「彼は最高の形で名前が知られたな」
「はい」
アランソはそれに頷く。
「まるでナポレオンのように」
「ナポレオンか」
フランス人であるラフネールはナポレオンという名前に微妙な反応を見せてきた。アランソもフランス人でありそれを見せていた。
「彼も英雄になるというのか」
「既にかなり言われているかと」
アランソはまた述べた。
「それも大きいな」
ラフネールはその言葉に応えた。
「その名声で政党を凌駕できるというのか」
「そう考えているのではないでしょうか。それに」
「それに？」
ボーデンの言葉に顔を向ける。ギルフォードにあるのは家の力と

名声だけではないのだ。それだけでは英雄になれはしない。
「彼の演説はかなりのものだとか」
「演説か」
政治家にとって不可欠のものである。演説で人を惹きつける。ヒトラーはこれにより英雄となった。ナポレオンもまた演説を得意としていた。口下手な政治家もいるにはいるがやはり演説が上手いならばかなりの力になるのは確かだ。
「人を魅了して離さないとか。その容姿もあり」
「カリスマもあるか」
今度はカリスマに注視された。

## 第二十四部第二章　北の嵐その十二

「それもまた」
「しかしやはり一人です」
アランソはそこに限界を見ていた。
「一人ならば」
「いや」
だがそれはラフネールによって否定された。彼は鋭い目と言葉で述べるのであった。
「人は時として恐ろしいことを果たす」
「英雄ならばですか」
「そうだ」
彼は応える。
「カエサルもそうだったな」
「それはそうですが」
「しかしカエサルというのは」
アランソもボーデンも流石にこれには賛同できないものがあった。カエサルというのはエウロパの歴史において最大の英雄の一人だからだ。その彼に匹敵する人物というと彼の出現から三千年以上経ってはいるがそれでもそうはいないからだ。
「今のエウロパはかつてないまでの苦境にある」
ラフネールは今度は今のエウロパについて述べた。
「英雄は時代が作る」
「時代がですか」
「カエサルもそうだった」
また彼を出す。
「若しかするとだ。今はまだ何も言えないが」
「どちらにしろですな」
ボーデンは言う。顔には困惑したものがあった。

「今のエウロパは苦境にあります。それに彼が英雄視されてきているのも事実です」
「うむ」
「このままいけばわかりませんな」
「しかしだ。政党に属していないならば」
ラフネールはそこをまた言う。
「我等にとっては厄介だな」
「はい」
「その通りです」
これにはボーデンとアランソもすぐに言葉を返した。
「政党政治を破壊するものにもなります。それに」
アランソは言葉を続ける。
「我々の次の選挙にも当然ながら影響しますし」
それもまら重要なのであるのは当然だ。政治家は選挙に勝たなければどうにもならない。それに勝つ為の資金と名声であるからだ。民主政治は即ち選挙である。
「どうされますか？閣下」
「だからといって彼を害するつもりはない」
ラフネールにはその考えはなかった。今それをはっきりと述べた。
「それはいいな」
「スキャンダル探しの類はしないということですか」
「そうだ」
元々ラフネールはそうしたことはしない男だ。目的の為には手段を選ばない世界ではあるがそれでも彼はそうしたことよりも正攻法を選ぶ男であるのだ。
「それはしない」
「左様ですか」
「戦うならば正々堂々とだ」
古典的と言うべきであろうか。俗によく言われる言葉を出してきた。

「それがラフネール家の家訓だしな」
貴族の世界ではかなり重いものである。貴族は家に拠って立つものであるからだ。
「もっとも政治の世界ではそれは意味はないがね」
少しシニカルに笑ってこう述べたうえでまた言う。
「しかしそれでもだ」
「それを守っていきたいと」
「うむ」
彼は頷く。
「そう考えている。それに」
「それも？」
ラフネールはさらに言葉を続ける。個人的な、しかもおおむね受け入れられやすい考えを述べた後で今度は別の視点から語るのであった。
「本当の英雄ならば謀略なぞ通用しない」
「やるだけ無駄であると」
「その時間があれば選挙活動に使いたいものだ」
こうアランソに返す。
「それが今の私の考えだ」
「左様ですか」
「間違っていたならば、不適当ならばあらためるが」
「いえ」
しかしアランソはその言葉に首を横に振る。この場合はいい意味での否定であった。倫理という意味においても政治戦略という意味においてもだ。

## 第二十四部第二章　北の嵐その十三

確かに政治の世界には道徳や倫理は不要だが人とは複雑なものだ。その中にもそれ等を求めるのだ。矛盾しているがその矛盾こそが人を人たらしめている。あまりにも卑劣な者は政治家の世界においても信用されない。

フーシェがそうであった。あまりもの政治的倫理性のなさと酷薄さにより人望は全くなかった。彼は教師としては人に慕われよく夫、父親であってもだ。政治家としての評判は最低でありその最期もいいものではなかった。

さらに極端な例を挙げればハイドリヒである。ナチスの高官の中でもその美貌と鋭利な頭脳は知られていたがあまりにも冷酷非情であり己にとって不要な者、障害となる者は容赦なく排除していっていた。彼が側に来ると人は避け上官であるヒムラーですら彼を嫌っていた。もっともヒムラーもまた多くの敵を持っていたのであるが。

ここでその倫理というものが出て来たのだ。今さっき否定されたものが出て来るというのも政治の世界、いや人の世界であるからであろうか。

「それで宜しいかと」

アランソは落ち着いた声で述べてきた。

「そうか。首相はどう思うか」

「私もです」

ボーデンもそれに頷いてきた。

「この場合はそれで行くべきでしょう」

「そうだな。ではそれで行こう」

ラフネールはそれで行くことに決めた。そのうえでまた述べるのであった。

「ただしだ」

彼は言う。

「彼についての情報は集めておきたいな」
「情報ですか」
「既に個人的なことはおおよそわかっている」
またアランソに対して述べる。
「家のこともな。しかしだ」
彼はその他のことも見ようとしていた。本人を見るだけではわからないこともあるしそれだけで彼と対峙できるわけではないのだ。幹だけを見て木全体を語れないのと同じだ。
「周りはどうか」
「周りですか。そうですな」
ボーデンがその言葉を聞いて納得したように頷く。
「側近やスタッフを」
「後は家の者達も調べておきたい」
情報収集をそこまで伸ばす。徹底させるつもりであった。
「いいな」
「わかりました」
アランソが彼に応える。
「ではそのように」
「うむ、頼む」
彼女の言葉に頷いて応える。そのうえでふとヘルメスの絵を見上げる。
そこにいるヘルメスは優雅な笑みを見せている。しかしその目は彼等を見てはおらず美しいニンフ達を見ている。まるで人間には興味がないように。
「知恵だ」
そのヘルメスを見上げながら述べる。
「ここで使うべきはな」
「知恵ですか」
「知る為の知恵だ」
ボーデンに対して述べる。

「ここはな」
「その知る対象こそが彼ですか」
「ギルフォード侯爵」
彼の名を呟く。

## 第二十四部第二章　北の嵐その十四

「果たして英雄となるかそれとも」
「歴史上多くの英雄が誕生してきました」
アランソはここで思わせぶりな言葉を口にしてきた。
「それは事実です。しかし」
そのうえでまた言う。
「それ以上に英雄になれなかった者達も大勢おります」
「失敗した者達か」
「はい」
その硬質な声に冷たさが宿る。機械の声にすら聞こえた。
「若しくは英雄になろうとも最後で敗れた者達も」
「ナポレオンもそうだったな」
ラフネールはそれを聞いてまたナポレオンを思い出した。
「彼は確かに偉大な英雄だった。しかし」
「スペインで躓きロシアで敗れ」
「ワーテルローで全てを失った」
瞬く間にフランス皇帝となったナポレオン。その彼もトラファルガーでネルソンに阻まれスペインに足を捉われた。ロシアで致命的な敗北を喫しライプチヒで失脚した。復活してもそれは百日天下でありその命運は覆らなかった。
ワーテルローでウェリントンに敗れ遂に全てを失った。セント＝ヘレナで孤独のうちに死んだのである。偉大な英雄も最期は儚いものであった。ネルソンはその死により、ウェリントンは勝利により英雄となったが。
「彼もまた」
「英雄になれるのも難しく英雄であり続けるのはさらに難しい、か」
「そうではないかと」
アランソはまた述べる。

「彼もまた」
「それも見極める必要があるな」
ラフネールはそれを聞いたうえでまた冷静に述べた。
「彼が英雄になれ、それを最後まで続けられるのかも」
「はい。それでは」
「よし」
彼はその目を絵画から戻して述べた。
「では話はこれで終わる。まずは調査だ」
「わかりました」
アランソが一礼してそれに応える。
「ではそのように」
「うむ。それで首相」
「はい」
今度はボーデンが応える。
「卿は次の選挙での戦略をスタッフと共に考えてくれ」
「畏まりました」
ボーデンはその言葉を聞いて頭を垂れた。
「それではそのように」
「実はな」
ラフネールはふと何かを惜しむ顔を見せてきた。その顔で語る。
「私は次の総統への候補者はペーチ首相を考えていたのだ」
「ペーチ首相をですか」
「これまで彼には何かと助けられてきた」
顔を上げて述べる。
「それは事実だ。彼ならばと思ったのだがな」
生前はこれといって人気のなかった彼だがその戦死の如き最期で絶大な人気を得るようになっていた。そうした意味で彼もまた死して英雄となったということであろうか。
「しかし」
ラフネールの声が惜しむものになる。

「残念だが彼は」
「ええ」
「首相は」
話を聞く二人の顔も暗くなり声も惜しむものになった。

## 第二十四部第二章　北の嵐その十五

「立派な方でしたが」
「今はもう」
二人の言葉が何よりの証であった。過去形になっている。過去はもう戻りはしない。ペーチはもう二度と戻りはしないのである。そういうことであった。
「卿は駄目か」
「私はその器ではありません」
ボーデンはラフネールに答える。
「御言葉ですがそれは自分が最もよくわかっているつもりです」
「そうか」
「申し訳ありません」
そう述べて謝罪する。
「謝らなくてもいいが。しかしだ」
ラフネールはここで難しい顔を見せてきた。
「我々からは立候補者を出すことになるが」
「カミュ外相は如何でしょうか」
アランソが提案してきた。
「外相か？」
「はい。外相ならば的確だと思いますが」
「それはそうだが」
どういうわけかラフネールはこの推挙に難しい顔を見せてきた。それには理由があった。
カミュの評判である。能力はともかく人間としては決して評判のいい男ではないのだ。それはラフネールもよく知っておりそれが彼の決断を躊躇わせていた。
「彼しかいないか」
「どうでしょうか」

「わかった」
ラフネールは彼女の言葉を入れることにした。
「では彼で行こう」
改革派からの候補者は彼にする。そう決めたのであった。決めたからには躊躇うつもりはなかった。
「それでいいな」
「それでは」
アランソもそれに応える。
「その方針で」
「しかしな」
ラフネールはどうにも難しい顔をまだしていた。その顔で述べるのであった。
「果たして問題にならないかどうか」
そう言う。
「女性問題にしろ金銭問題にしろ」
カミュは少なくとも清潔な男ではない。傲岸不遜であり女性にしきりに声をかけ賄賂を平然と貰うような男である。連合に対しても貴族主義を堂々と見せて明らかに見下していたような男である。当然ながら連合側もそれは敏感に察し連合の者達の間では最も評判の悪い男であった。
「浮上すると厄介だぞ」
「それを出させるような方だと思いますか？」
アランソは思わせぶりな笑みを浮かべて述べてきた。
「そこはどうでしょうか」
「いや、それは大丈夫だな」
考えてみればそれを見せるような迂闊な男でもない。能力は図抜けているのだ。その力は悪魔的なまでだ。だからこそ若くして外相になっているのである。
「彼に限っては」
「そういうことです。それでは」

「そうだな。彼が一番か」
「次の政権でエウロパを立て直さなければなりませんな」
ボーデンの言葉はここではかなり客観的でクールなものであった。下手に見ると無責任ではないかと思えるような発言であったがそれは違う。彼はあくまで客観的に述べただけなのである。
「さもなければ」
「サハラが統一されれば」
その危惧はラフネールも持っていた。それを今はっきりと口にする。
「我々は東と南から大きな脅威を受けることになる」
「東には連合」
ボーデンは言う。
「南にはサハラ」
「どちらから攻められればもう一方も動くだろう」
それが戦略というものである。戦争とは二つの勢力の戦いだけとは限らない。複数の勢力が入り乱れることもあるのだ。それを考慮しなければ国を誤る。実際にそれを理解せず誤った話も理解して国を伸張させた話もある。それを理解することが肝心なのである。

## 第二十四部第二章　北の嵐その十六

「だからこそ次の政権では」
「まずエウロパを中から確かなものにしなおすべきなのです」
「それには英雄が必要なのか」
「さて、それは」
ボーデンはあえて積極的には答えはしない、だが言葉は出す。
「少なくとも強力なリーダーが必要です」
「そうだな」
ラフネールもそれに頷く。
「では外相は適任か」
「能力においては」
今度はアランソが言ってきた。彼女は冷静にカミュの評価を下してきた。
なお彼女とカミュの間には個人的な関係は存在しない。彼女は純粋なレズビアンでありカミュは恋人のいる女には手を出すことはしない。彼女に同性の恋人がいることはよく知られているからだ。
「それにカリスマもありますし」
人間性とカリスマはまた別であることがあるということだ。
「やはり第一は彼です」
「では私からそれは伝えておこう」
ラフネールは述べる。
「確かにな」
「お願いします。もっとも」
ここでアランソはまた言う。
「外相も既にその気であられると思いますが」
「そうだな。おそらくは」
ラフネールはこの言葉にも妙に納得するものを見ていた。
「彼は野心家でもある」

「はい」
アランソはその言葉に頷く。実際にカミュはかなりの野心家でありゆくゆくはエウロパの指導者になろうと考えている。これは常日頃から公言して憚らない。彼は英雄になりたいのではない。既に自分は英雄であり不世出の天才であると確信している。そうした男である。
「既に考えているか」
「そう思います」
アランソは答える。
「おそらくこの話は進んで受けられるでしょう」
「ならそれはそれでいい」
ラフネールは言う。
「話に乗ってくれるのならな。それに越したことはない」
「そうですね。それでは」
「うむ。これで決まりだ」
二人に対して声をかける。
「それではな。わざわざ来てもらって済まない」
「いえ」
「それはお気遣いなく」
ボーデンもアランソもそれぞれ彼に言葉を返す。
「これからどうするのだ？」
ラフネールはそう二人に問うてきた。
「時間はあるか？」
「はい、少しは」
ボーデンはこう答えた。
「私もです」
そしてアランソも。二人は充分に時間があった。今それを述べたのであった。
「では少し付き合ってくれ」
ラフネールは口元を少し綻ばせて二人に言ってきた。

「実はいいワインが入ってな」
「ワインですか」
「そうだ。プロヴァンス星系のな」
ラフネールは笑って述べてきた。ワインの名産地の一つである。なおフランス人達はこの時代においてもワインは自分達のものが最高であると思っている。他のものもだ。
「オレンジのいいのが入っている」
オレンジ色のワインだ。その葡萄は青だが搾るとオレンジになるものである。発泡性で酸味と甘味が同時にある独特のワインである。
「どうだ」
「宜しいですね」
アランソはそれを聞いて目を細めさせてきた。
「それでは御相伴させて頂いて宜しいでしょうか」
「そうか。では首相はどうかな」
「私も。宜しければ」
ボーデンも応えてきた。
「お願いします」
「うむ。それではな」
ラフネールは二人が頷いたのを見て彼も目を細めさせた。そのうえで呼び鈴を鳴らす。
すぐに家の使用人達がやって来た。ラフネールは彼等に対して言う。
「あのワインを用意してくれ」
「畏まりました」
「六本だ」
本数まで述べる。
「ストックも用意しておいてな」
「はい」
こうしてワインが用意される。彼は使用人達に言った後で二人に顔を戻してきた。

「それではな」
「ええ」
「では」
二人は彼に付き合う。そしてヘルメスの下から去るのであった。

# 第二十四部第三章　各国の思惑その一

## 各国の思惑

言うまでもないが連合は一国だけではない。三百もの国々の連合国家である。従ってその中には実に多くの勢力が存在するのである。

その中で最も大きなものの一つが国家というものなのである。他にも様々な勢力が存在するがまずこの国家というものが存在するのはこの時代でも同じである。

その各国もまたサハラでの戦争を前にその権益を確保することに必死であった。そしてそれは何とか開戦までには上手くいった。まずはそのことに安堵の息を漏らしていたのであった。

その中の一国にカルタゴ共和国がある。彼等自身が言うにはあのローマと戦ったカルタゴ人の末裔だという。しかしこの主張は多くの、というよりは人類の殆どから疑問視されている。

そもそもカルタゴはフェニキア人の殖民都市であった。それが発展し地中海を支配するまでになったのだ。商業と海運に才能を示しその隆盛は他国が羨む程であった。

だがそのカルタゴはローマによって滅ぼされている。ローマとカルタゴのポエニ戦争は三回に渡って行われ三度目でカルタゴは陥落しその街は徹底的に破壊され生き残った者達は奴隷にされた。こうしてカルタゴ人達は歴史から消え去ったからだ。同じく謎の海の民に滅ぼされた筈のヒッタイト王国と共にその出自はまず嘘かホラの類であろうと見なされているのだ。もっともそれはアッシリアやアルム、シュメールやアッカドといった多くの古の民族が復活したとされる連合の諸国家に言えることではあるが。ましてやバビロニア連合なぞ普通に考えてまだバビロニア人が残っている筈がないのでそれは自称である。ユダヤ人ですら混血しその本来の血筋は失われているというのにだ。

そのカルタゴだが商業に秀でている。連合ではそこそこの国家で

ある。商業や貿易を得意としているのは昔の血だというのがカルタゴ人達の主張だがやはりそれは誰も信じてはいない。
カルタゴもまたサハラでの権益について必死になっていた。その結果何とかサハラにある多くの権益を守ることには成功していたのであった。まずは一安心といったところであった。
ところがだ。ここで厄介な話になっていたのだ。
「ヒッタイトがか」
「はい」
カルタゴ大統領はムオイ＝ハシクという。かつてのブラックアフリカの名前で実際に彼は青い目の黒人であるが彼もカルタゴをルーツに持っていると主張する。カルタゴよりはその隣にあったヌミディアと主張した方が筋が通るとまで言われているが本人はそれを気にはしていない。
「文句を言っています」
側近の一人がそう述べる。ハシクは丁度食事中であった。クスクスでの朝食である。
そのカレーに似た小麦の料理をスプーンで食べながらハシクは青い目を顰めさせていた。不機嫌さが増していくのが自分でもわかる。
「サハラでのことか」
「はい。ハサン西方での共同出費で行っていた探鉱のことで」
「あれは最初に話が済んだのではなかったのか？」
ハシクは食事を採りながら側近に述べる。
「確か」
「私もそう思っていたのですが」
側近も困惑を顔に見せて言う。
「彼等にしてみればそうではなかったようです」
「出費額でか」
「はい、半々だったのに何故我々が六割も支払うのだと。そう抗議してきています」
「ほんの一割ではないか」

ハシクはこう返す。
「かつては鉄器で席巻していた大国だというのに。度量の小さい」
かなり身勝手なことを言い出す。それを言えばカルタゴも大いに潤っていたことを揶揄されるのだが彼はそれは気にはしない。連合でカルタゴ人は面の皮が厚いとよく悪口を言われる。嘘つきだとも言われる。なおかつてのカルタゴもよく嘘つきだと言われていた。
「額が額だからということでしょうか」
側近はまた述べてきた。
「西方の探鉱にはかなり出費していましたし」
「そうだったな」
ハシクはその言葉に思い出したような顔を見せてきた。
「そういえばだ」
「だからかと」
側近は応える。
「彼等の抗議もまた」
「話をつけるしかないか」
「どうされますか？」
「このまま二国間で話をしても難しいな」
ここは仲介役を立てようと。そう考えてきたのだ。これはかなり妥当な考えであった。カルタゴにしろこうした問題で仲介役をすることが多い。

## 第二十四部第三章　各国の思惑その二

「どの国がいいか」
「そうですね。ここは」
側近は暫し考えながら述べてきた。
「消去法でいきますと」
「何処が消える？」
「四大国は止めておきましょう」
まずは日米中露が消えた。
「とりわけ米中露は」
「あの三国はハサン西方にかなりの権益を持っているしな」
それが念頭にあった。同時に彼等の強欲さもだ。
「下手に仲介を頼んだら後で何を要求されるかわからんな」
「そうです。ですからあの三国は絶対に」
「言われなくても出て来る可能性があるしな」
そうした国々である。世の中言われなくても出て来ては何かと自分の都合のよいようにする人間もいる。それは国家においても同じである。
「日本はどうだ？西方にはそれ程権益もないし強欲でもないが」
「あの国は今他で忙しいですし」
「タイとベトナムの貿易摩擦での仲介か」
「相手の国が国ですし」
「そうだな。実に剣呑だ」
「ええ」
タイとベトナムといえば連合の数多い国々の中でもとりわけ外交が上手く抜け目ないことで知られている。狡猾とさえ陰口を叩かれている。その二国が衝突するだけでもかなり厄介な話でありそれの仲介ともなればかなりの苦労が伴うことはわかっていることであった。

「ですから日本は無理かと」
「では何処がいいか」
「ヒッタイト寄りの国でも厄介ですし」
「かといっても我々の友好国だと後で色々と言われるな」
「ですから大国がいいのですが」
「そうだな。ここは」
ハシクは考えながら述べてきた。既にクスクスはかなり食べられている。やはりその色といい外見といいかなりカレーに似ている。昔からアラブではよく食べられているものである。
「オーソドックスにいくべきか」
「オーソドックスですか」
「そうだ、中央政府だ」
彼は言ってきた。
「あそこに仲介を頼むか」
「そうですね」
側近もそれには賛同したかのように頷いてきた。
「それがベストかと」
「そうだな。それでは中央政府に申請しておく」
「はい」
話は纏まった。
「しかし。ヒッタイトも相変わらずだな」
ハシクはいささか勝手なことを述べてきた。
「このまま話が終わるかとおもったのだが」
「あちらも権益を守るのに必死ですね」
「考えれば当然か」
少し思案してから述べてきた。
「それを守るのが国家の仕事だからな」
「ええ。しかしサハラは」
側近は考える顔で述べてきた。
「何かと進出し難い場所であります」

「その通りだ」
それにハシクも同意する。
「戦争が多いからな。それでどうしても」
「ええ。困ったことに」
実際に連合各国の権益はハサンに集中している。この国が長い間安定してきたからである。安定なくして経済活動も発展も権益もないからである。
「統一されればよくなるかな」
ハシクは言う。

## 第二十四部第三章　各国の思惑その三

「それはどうかな」
「そうですね。普通にいけば」
側近はその問いに答えてきた。
「そうなるかと」
「では今後に期待か」
彼はそれを聞いて言う。
「その政権によるがな。今度も」
「どうしても賭けの要素が強いのが」
側近はまた困った顔を見せてきた。
「サハラの進出というものは」
「そうだな、賭けだ」
ハシクもその言葉に同意する。
「サハラへの進出は。ハサンは比較的リスクが少ないが」
「ええ」
「やはり連合が一番だな」
彼は言う。
「知った場所だしな」
「その我が国ですが」
ここで側近は中について述べてきた。
「カニバ星系での開拓が順調に進んでいます」
「食糧生産は？」
「それもまずまずです」
こう報告される。
「水稲も水麦も順調に育っています」
「そうか。それは何よりだ」
ハシクはそれを聞いて目を微かに綻ばせてきた。水麦とは水田のように水で育てられる麦である。品種改良の結果生まれたものであ

りその収穫量は米のそれに匹敵する。この時代は米も品種改良され白米でも玄米と同じだけの栄養が摂れるようになっている。連合各国、いや人類の栄養事情がこうしたことから二十世紀のそれと比較しても飛躍的によくなっているのだ。特に連合の者達のそれはよく彼等の体格のよさにつながっている。
「まずは主食だしな」
「はい。あと野菜や果物の収穫も軌道に乗ろうとしています」
「野菜もか」
「はい。特に西瓜の栽培が順調です」
「西瓜がか」
「青い西瓜か」
それを聞いたハシクの目の色が興味深げなものになる。青い西瓜というものに対して向けられていた。
「はい。それです」
側近は答える。
「テストで栽培をはじめたのですが予想以上に発育がいいのです」
「土や水が合っていたのか」
「他にはメロンや柘榴も」
彼は答える。
「順調に発育しています」
「熱帯だったな」
「はい」
側近はまた答える。
「そのせいでしょうか。どうやら農業に適した惑星が多いようです」
「工業に適した惑星はあるか」
「最も外縁にある第十三惑星がそうですね。鉱物資源が豊富です」
「それはいいが一つだけなのだな」
そのことにいささか不満を感じているようであった。それが顔にも少し出ていた。
「もう一つは欲しいが」

「あることにはありますが木星タイプですが」
「木星か」
「はい。如何でしょうか」
「衛星は多いのだな」
彼はそこに目を向けてきた。月のことからもわかるように星系の開発は惑星に対して行われるものではない。衛星に対しても同じように行われるものなのである。
「ええ。十あります」
「ではそこを開発すればいいな。それに」
「それに？」
「木星タイプでも開発はできる。そこを使おう」
「わかりました。それでは」
「中央政府と我が国のそれぞれの開拓省にそれぞれ話をしておいてくれ」
そう話をつける。話をしてから少し考え込む。ふと気付いたことがあるのだ。

## 第二十四部第三章　各国の思惑その四

「木星タイプならガスが豊富だな」
「そうです」
側近もそれに答える。木星はガスの塊であると言ってもいい。それを上手く使うかどうかが木製型惑星の開発の要点となるのである。即ち工業に適しているのである。
「それだな、やはり」
「それでは」
「うむ、話をしておこう」
彼の方針は決定した。
「何かと中央政府には借りができるな。ヒッタイトのことといい」
「ええ」
側近はあまりいい顔をせずに答える。見ればハシムも同じ顔をしている。
「アメリカや中国に貸しを作るよりはいいがな」
「彼等はまた」
側近はその顔をさらに変える。今度は憮然としたものになる。
「昔から変わっていませんから」
「そうだな」
ハシクもその言葉に頷く。
ロシアもそうであるがアメリカや中国といった国々は一千年前、いや彼等が国というものを形成してからほぼ変わっていないとさえ言われている。覇権主義的思考があるのだ。今では武力を使わないが経済力で動く。それを使って他国に圧力をかけるのが彼等の常になっているのだ。
謀略を使い恫喝が多い。かなり剥き出しの欲望がそこにある。そうした性格を風刺されたり揶揄されることも多いがそれに対しても平気である。連合の数多い国の中でかなり厄介な部類の存在である

と考える者は多い。ロシアは幾分ましだと言われている。それは彼等が謀略は今一つ得意ではなくかつての伝統であった苛酷極まる異民族統治というものがないことが多い。尚且つロシア人の特性もあるであろうか。

ロシア人の民族性として利害関係のない相手には極めて親切で好意的というものがある。利害関係が生じると徹底的に敵意を剥き出しにする。それを隠すことはない。非常に理解し易いのだ。

アメリカや中国は違う。利害関係が生じると表面では友好的に取り繕うが裏で謀略を企てたりする。友好関係にあってもいざとなれば平気で裏切ることも陥れることも多い。それを外交、政治と割り切っている。ロシアではここまではないのだ。もう一つの大国日本は彼等とは全く性格が違いあれこれと言って時間と態勢を整えそこから自分達の利益に引き込んでいっていると言われている。日本はあまり謀略は使わず恫喝もしない。しかしその粘り強くしたたかな外交で知られている。

「ある意味貴重だ」

「全くです」

彼等は言い合う。なお彼等カルタゴ人もよく嘘つきだと悪口を言われるがこれは商業の得意さと外交姿勢から言われることである。歴史におけるカルタゴの評判がまず念頭にあるが。

「あそこまで変わらないものでしょうか」

「変わる必要がなかったのだろうな」

ハシクは述べる。

「彼等にとっては」

「周りの者はいい迷惑です」

「彼等が他人を気にする性格か？」

「いえ」

この言葉を肯定できるのは連合においては彼等自身以外には存在しない。まず無理な言葉である。

「そんな筈がありません」

「不可能だな」
ハシクも同じ考えである。
「それは」
「考えること自体がですね」
「そういうことだ」
彼は述べる。

## 第二十四部第三章　各国の思惑その五

「彼等自身がな」
「その彼等には今回は声をかけない方針でいくのは正解でしょうね」
「間違いなくな」
ハシクまた言った。
「別に急ぐ話でもないしな」
「急ぎませんか」
「既に利権は守られている」
彼はそう言う。
「まずはそれがある。後は話し合いだけだ」
「アブメク＝ジーン首相ですか」
「話がわからない人物でもあるまい」
「はい」
側近はその言葉に頷く。
「それは大丈夫です。温厚な紳士でしたね」
「そうだ。少なくとも品性はまともだ」
「よいことです。下手な人間が出て来たら困るところです」
世の中は広い。中には暴力団やゴロツキと変わらない人格や品性の輩もいる。何をどうしたならばここまで腐り果てた卑しい輩になるのかと首を傾げたくなる人物がいたりする。より恐ろしいのは生半可な見方でそうした輩を普通の人間とみなし味方をする思慮分別が全く欠ける者もいることである。世の中というものはそうした意味でも非常に広いものなのである。卑しい輩、愚劣な輩についても底が知れないものなのだ。
「連合ではそこまでの国家はありませんが」
「いいことだ」
それだけは確かであった。かつてのサラーフのナベツーラ一派の如き国家は流石に連合にはない。問題のある国家は多いにしろだ。

「ただヒッタイトはプライドが高いがな」
「ええ」
それはある。
「偉大なるヒッタイト人の末裔ですから」
「あれを本気で信じている人間がいるのか？」
「さて」
それについては疑問符が打たれる。突如として滅び姿を消したことで知られている民族であるからだ。彼等を滅ぼした海の民についてはこの時代でも諸説ある。
「それを言うならば我々もですが」
「お互い様ということか」
「少なくとも心は受け継いでおります」
側近の言葉はかなり身勝手であった。
「それでよいかと」
「そうか」
「はい、私はそう考えます」
「ふむ、ならそれでいい」
ハシクもそれに頷くことにした。それからまた述べる。
「どちらにしろ話をまとめなければな」
「そうですね」
「一応今考えているのは」
「どういったものでしょうか」
「この際だ。半々でいくか」
ハシクはそう提案してきた。
「どうだ」
「半々ですか」
「それが一番だろう。やはり欲張り過ぎたと思う」
少し反省めいたことを述べる。
「それを考えるとな。やはり」
「それでは」

「うむ。ここは我々が退く」
彼はそういう考えであった。無闇に利益を貪るだけでは後に恨みを残すだけだと考えているのだ。
「それにあの話はそれ程大きな権益がないしな」
「それは確かに」
側近もその言葉に応える。実際にカルタゴをはじめ連合各国がサハラで持っている権益は副次的なものである。命運を賭けたものでは決してないのだ。
「ヒッタイトも手強い。無闇に揉める必要はない」
「それではそのように」
「うむ。それではだ」
ここでナプキンで口を拭う。それからまた言う。
「本格的に一日をはじめよう。エネルギーを補給したしな」
「わかりました」
こうしてハシクは一日をはじめた。そのはじまりは最初からかなりの話になったがこれは彼にとっては日常茶飯事であった。大統領というのは実に忙しいものであるからだ。

## 第二十四部第三章　各国の思惑その六

カルタゴの話を受けた中央政府は早速ヒッタイトとの調停に動くことになった。外相であるカバリエと法務相であるコサイン＝ブルームが法務省の会議室において会っていた。事務的な事務室にアジア系の顔に金髪と緑の目の初老の男がおり彼がカバリエと対していた。

このコサイン＝ブルームはアッカド共和国出身である。アッカドもまた古の民族の末裔達が復活した国家であるがやはりその信憑性は疑われている。アッカド人もまた歴史の中に消えた筈だからだ。

しかしそれでも今実際にアッカド共和国は存在する。そして今ここにそのアッカド人がいる。ブルームは元々検事でありかなり法律に強い。行政手腕も確かで長い間中央議会の下院議員において様々な政策を提案、実現させてきている。その腕を買われて今は中央政府の閣僚になっているのである。

その彼とカバリエが話をしている。やはりカルタゴとヒッタイトに関するものであった。

「カードだけを見れば面白いわね」

カバリエはまずこう述べてきた。

「カルタゴとヒッタイトとは。古代史のファンは名前だけで喜びそうね」

「確かに」

ブルームはその言葉にまんじりともせず答えた。よく見れば唇の端が微かにほころんでいる。しかしそれは中々わからないものであった。

「その彼等が今対立しています」

「そうね。話を持って来たのはカルタゴ側だけれど」

「ところがです」

しかしここでブルームが言ってきた。

「実は法務省にはヒッタイトから話がリークされてきました」
「あら、ヒッタイトからも」
「そうです。彼等も話を終わらせたいようで」
そうカバリエに述べる。
「それも半々で」
「あら、カルタゴと同じことを言ってるのね」
カバリエはそれを聞いて目を少し丸くさせる。
「考えに至る経緯は違うけれど」
「ええ。ですがこれは話がわかり易いと思います」
「そうね。中央裁判所も楽だわ」
連合も当然三権分立である。言うまでもなく裁判所も存在する。中央裁判所は国際問題の解決、調停にあたる。その権限や発言力は大きなものがある。
「それだと」
「ただ」
ブルームはここで付け加えてきた。
「お互いすんなりとはいかないでしょう」
「そうでしょうね」
カバリエもそれは読んでいた。当然といったふうにである。
「彼等にも考えがあるのだから」
「しかし今回は話がスムーズに行くでしょう」
「大国が関わっていないからね」
「その通りです」
カバリエのその言葉に頷く。彼が見ているのはそこであった。
一旦手元に置かれているカップに口をつける。そこにあるのはコーヒーであった。普通の黒いコーヒーである。それで喉を少し濡らした後で話を再開させる。
「真っ先にそれを外したそうです」
「賢明ね」
カバリエはそれを聞いて述べる。

「それこそ大変なことになっていたと思うわ」
「今回はある意味幸運でした」
ブルームは丁寧にそう言ってきた。
「大国の利権がハサン東方に集中していますから」
「そうね。西方に進出している国はあまりなかったから」
「はい」
あらためてブルームは頷いた。実はここにも連合内の様々な力関係があり安全な東方に対する進出は大国が独占してきたのである。新興国家や小国はその他に行かざるを得なかったのだ。こうした事情があったのである。カルタゴはその中では例外であえてその西方に見るべきものを見出して進出したのである。無論いざという時にはすぐに撤収できる状況にしておいてである。

## 第二十四部第三章　各国の思惑その七

「それがいい方向に働いたのね、今回は」
「ですね。それはよかったです」
ブルームもそれに同意する。カバリエはここで自分のコーヒーを口にした。美食家の彼女はコーヒーにも造詣が深い。その彼女だが今飲んでいるコーヒーは中々気に入った。
そのせいか上機嫌になっていた。その顔で述べる。
「それでだけれど」
彼女は言う。
「サハラ西方はどんな感じなのかしら、今は」
「まだ本格的な戦闘には入っていないようです」
「そうなの」
「ええ。まだ軍を動かしているだけです」
ブルームはそう語る。まだはじまったばかりだということである。
「話はこれからですね」
「そう。これからね」
「どうなるかはわかりませんが」
「それでもカルタゴもヒッタイトも焦っていないのは」
少なくともハシクはそうであった。彼は戦乱を前にしても焦る必要はないとまで断言している。しかしこれには根拠があるのである。
「利権の保護が保障されたからね」
「それですね」
ブルームもそれに頷く。
「彼等も我々とは無闇に揉めるつもりはないようです」
「彼等も賢明ね」
カバリエは彼等に関してもそう述べた。
「それは」
「そうですね。サハラは二千億」

「連合は四兆」
その差は何処までも付き纏う。サハラにとってはこのどうしようもない差が見えるのだ。またそれを覆せないということもわかっているのだ。
「対立するにはあまりにも我々は巨大であると」
「わかっているのでしょうね」
「ええ。ですから」
「それを避ける為にもね」
権益が保障されたのだ。若し連合がサハラにとって取るに足らぬ勢力であったならばこうはいかなかったであろう。政治において力関係は絶対であるからだ。
「ハサンもティムールも」
「そしてオムダーマンもね」
「その通りです。そしてそれが」
「各国の権益を守っている」
カバリエは述べる。
「ただ。惜しくはあるわ」
「何がでしょうか」
ブルームはカバリエが少し目線を落としてこう述べてきたのに目を向けてきた。
「惜しいというのは」
「サハラの開発についてよ」
カバリエはそこを指摘してきた。彼女は今それを見ていたのである。
「平和であれば今とは比較にならない位に発展しているでしょうにね」
「確かに」
ブルームはそれに同意する。連合の政治家達はサハラを見てそう思うことが多いのである。戦乱がなければサハラはより豊かになっていたであろうと。

サハラは軍事に突化した世界となっている。一千年の戦乱がそうさせた。それが為に多くの惑星の開発がなおざりになっている。ハサンは比較的ましであるがそれでも連合から見ればまだ未開なのだ。
「惜しいことです」
「そうね。ただ」
「ただ？」
ここでカバリエの口調が変わったことを見逃さなかった。それに問う。

## 第二十四部第三章　各国の思惑その八

「何かありますか？」
「ええ。サハラが発展したらだけれど」
カバリエはそれを受けてまた述べてきた。
「このまま大国になるわよね」
「はい」
彼女のその言葉に応える。
「そうなればそうなればで。脅威になるわね」
「連合にとって」
これもよく言われていることである。統一されたサハラがどうなるのか。今までは夢物語であったが今はそれについても語られるようになってきているのである。
「そうなのよ。それよ」
「サハラが脅威となるかどうか」
「それが肝心なのよ」
「今のところ敵はエウロパだけですが」
ブルームは言う。
「それが変わっていくというわけですね」
「状況次第ではね」
カバリエはまた述べる。
「サハラもまた
「そうした意味で八条長官の国境視察は正解でしょうか」
彼はカバリエに問う。
「やはり」
「そうね。悪くはないわ」
カバリエもそれに答える。
「ただ」
「ただ？」

「問題はそれが実現するかどうかだけれどね」
「実現ですか」
「どうかしら」
あらためてブルームに問い掛ける。
「実現の可能性は」
「今のところは何も言えないかと思います」
彼は静かにそう述べてきた。
「そうなの」
「はい。予算が出るかどうかが問題ですが」
「議会の説得が肝心ね」
「ええ。これは軍部も主張していますが」
連合議会は軍人の意見を聴取してそれにより政府の軍事行政をチェックする。文民統治と言えど政府が軍部を好き勝手に扱うことを警戒しているのである。こうなったのはベトナム戦争のアメリカからである。当時のアメリカ政府が軍人、そして軍部をかなり勝手に扱いそれがベトナムにおける消耗、敗戦につながったからである。それまではそうした相互チェックの文民統治体制にはなっていなかったのである。
「受け入れられるかどうかは」
「野党ね」
「野党だけではありません」
ブルームは今度は己の声を鋭くさせてきた。
「我が与党の開発重視派も」
「そう、彼等も」
「はい。いい顔をしないようです」
「そちらに予算がいくからね」
しかも莫大なものがだ。彼等はそれを警戒しているのである。軍事費というものは常に莫大な予算がかかるものである。ある国はかつて他国の救援に莫大な援助を出して称賛を浴びたが何とそれはその国の軍艦一隻の建造費の半分以下の値段であったのだ。世界に称

賛を浴びるだけの援助をしてもその費用は軍艦の半分以下であった。
これはその国の軍艦の建造費の高さもあったがどれだけ軍事という
ものに金がかかるかということであった。

## 第二十四部第三章　各国の思惑その九

もう一つ問題がありそれを請け負える企業が少ないのだ。軍需産業というものは設備や研究に常に莫大な投資をしなくてはならない。人手もいる。しかし実入りは少ない。ベイパックの割合が他の産業に比べて小さいのだ。市場が限られているのである。戦争になればまず弾薬やエネルギーを消費する。消費の割合も限られている。そもそも好き好んで兵器を消耗させる軍人なぞいない。それこそ芸能プロダクションやスポーツチームを持つ方が余程実入りがいい。しかも宣伝になる。実入りがない部門でしかないのだ。

「彼等はそれを気にしているのよ」

「惑星開発は返ってくるものが莫大です」

「ええ」

これは凄まじいまでだ。軍事なぞ問題にはならない。開発で様々な技術と人手が動き産業ができあがる。人の移住と往来、定住もある。これでまた産業が発展する。それこそ何もベイパックがない軍事よりこちらに目がいくのは当然である。連合の発展の土台でもある。

「やはりそちらを優先させたいのでしょう」

「それ自体は非常にいいわ」

カバリエモそれを認める。

「けれどね」

「それでも、ですな」

「そういうことよ。それも備えがあってようやくできるもの」

カバリエは述べる。

「国防があってね」

「その通りです。ただ」

「彼等がそれを必要とみなすかどうかは別問題ね」

「そうです。連合軍は一三〇億」

エウロパでもサハラでもこれだけの数がいる星系は存在しない。精々何十億といったところである。当然ながらかなりの差があるがこの時代の惑星一つあたりの人口は地球型惑星でおおむね十億であるとされている。
「その数があってまだ必要かと反対派は言うでしょう」
「それだけで大丈夫だとね」
「これは充分考えられることではないでしょうか」
彼は述べる。
「どうでしょうか」
「そうね」
カバリエもそれに同意して頷く。
「確かにね」
「反対する理由では充分です」
「それはわかるわ。けれどね」
しかしそれでもカバリエはあえて言うのであった。
「私はそれだけでは万全ではないと思うわ」
「つまり長城ですね」
「ええ」
ブルームの言葉にはっきりと答える。万里の長城、かつて中国が北方の異民族との境に築き上げたものである。明代まで築かれ今も地球に残っている。同様のものはローマがブリテンに築いている。
「それを築いておかないと」
「それを以って最大の備えとする」
「後は好きなだけ開発ができるわ」
敵を完全に防いでこその開発であると。そう言いたいのだ。
「私はそう考えるけれど。どうかしら」
「その通りだと思います」
ブルームもそれに頷く。彼もそう考えているのだ。
「やはり。守りを固めましょう」
「そうね。けれど私達は直接的には何もできないわ」

「ではできるのは」
「彼よ」
八条である。国防長官である彼しかいないのだ。その為の国防長官なのだ。
「彼しかいないわね」
「ではまた長官のお手並み拝見といきましょう」
ブルームはこう述べた。
「そういうことで」
「ええ。それでこの件は終わりね」
「はい」
彼はあらためて頷く。
「さて。それじゃあ」
「カルタゴとヒッタイトについて」
「話を進めていきましょう」
そちらに話を移していく。この話はスムーズに進む。その時八条は国境において様々な視察、そして検証の最中にあり多忙な日々を送っていた。

## 第二十四部第三章　各国の思惑その十

「ふむ」
彼はこの時自室であるものを見ていた。それはサハラ東方のある場所の宙図であった。ノートパソコンの映像を三次元にして見ていた。
「成程な」
「入ります」
ここで扉をノックする音が聞こえてきた。
「どうぞ」
入るように言う。するとスーツの男が入って来た。同行している国防省のスタッフの一人である。
「本日のスケジュールの詳細をお持ちしました」
「有り難うございます。それでは」
「はい」
書類を受け取る。ここでスタッフはテーブルの上のノートパソコンの映像に気付いた。
「おや、これは」
「はい、オムダーマンとハサンの国境です」
そうスタッフに答える。
「中々面白い場所ですね」
見れば今施設されている防衛ラインの類はそこにはない。しかし様々な宙形がそこに映し出されていた。
「特にここです」
「そこですか」
「ええ」
彼が指差したのはアステロイド帯であった。見ればかなり複雑な場所になっている。八条は今そこを指差しているのである。そのうえで何かを見ていた。

「ここはかなり厄介な場所ですね」
「攻める側にとってはですね」
「はい、これだけで障害になります」
彼は言う。
「防衛側にとっては護りになり。しかし」
「しかし？」
「突破も可能です」
「まさか」
スタッフはそれを聞き目を顰めさせた。見れば軍艦でも突破は不可能な、デブリだけでなく磁気やブラックホールもある非常に航行が困難な場所であった。
「いえ、できます」
しかし八条は言う。
「これは盲点ですね」
「盲点ですか」
「はい、このアステロイドを突破できるかどうかを検証することがです」
「そうなのですか」
スタッフはそれを聞いて怪訝そうに目を動かせる。動かしながら八条を見ていた。
「それでどう思われますか？」
八条は彼に問う。
「このアステロイド帯を突破できるかどうか」
「そうですね」
彼はそれを見ながら考える目になっていた。じっと宙図を見ながら述べる。
「若しかしたら」
「そうですね、若しかしたら」
八条はそれに応えて述べる。
「出来るかも知れませんね。そこが肝心なのです」

「肝心なのですか」
「戦争は確実性が何よりも尊ばれます」
この前提が確かに存在する。確実に勝利できなくては意味がないのだ。敗北することは許されない。それは国家の存亡に直結するからだ。彼はその前提をそこに置いてきた。
「しかし。検証することは重要です」
「検証ですか」
「検証してはじめて何があるかわかりますね」
「はい」
スタッフは八条の言葉に頷く。
「確実かどうかも」
「では確実ならば」
「それを実行に移すべきですね。そういうことです」
「成程。それでは」
スタッフはそれを聞いてまた考える目になる。それからまた述べた。

## 第二十四部第三章　各国の思惑その十一

「オムダーマン軍がアステロイド帯を突破する可能性があるのだと」
「否定はできません。いえ」
八条は言う。
「アッディーン副大統領ならば」
「それを実行に移すと」
「そうです、彼ならば充分に考えられます」
「そうなりますか」
スタッフはそれを聞いてからまた八条の言葉に目を動かせる。その思案を巡らせているのであった。
「問題はハサンがそれに気付いているかどうかですが」
「気付いていないのでは？」
彼は答える。
「あくまで私の予想ですが」
「気付いていないですか」
「はい、そうではないかと考えます」
そう八条に述べる。そこには根拠があった。
「守りは国境だけでしたね」
「ええ」
八条もそれに答える。
「そうでしたら。やはり考えていないかと思います」
「あのアステロイドは天然の要害ですからね」
次に八条が指摘してきたのはそれであった。天然の要害というものは実に有り難いものだ。その例として河というものがある。かつてローマ帝国はライン河をゲルマン民族への護りとしてきた。イギリスはジブラルタル海峡でフランスを阻んできた。ナポレオンもそれを越えることは適わなかった。それがあるのとないのとでは全く話が違う。日本軍のインパール攻略もミャンマーの山地とジャング

ルがなければあそこまでの損害はなかったであろう。日本軍の損害は九割を超えるという空前絶後のものであった。これは指揮官である牟田口の失態もあるがその地形があったからこそなのである。
「越えられないと考えているのでしょう」
「それは自然ですね」
八条はそれは肯定した。
「しかしそれに頼りきるのもまた危険なのです」
「ハサンはその危険を犯していると」
「ええ。それが彼等にとって残念な結果にならなければよいのですが」
まるで見透かしたような言葉であった。実際には八条は未来を完全に読んだわけではない。幾つかの予想を立ててその中の一つを出しているに過ぎない。しかしその一つが極めて説得力のあるものであるのだ。
「さて、どうなるか」
「ハサンは一歩間違えれば危機にあるのですね」
「そういうことです。そしてそれは我々も同じです」
八条は述べる。
「今回の防衛ラインの話はそれが前提としてありますから」
「サハラに対する備えですね」
「はい」
スタッフの言葉に答える。
「今のサハラの流れを連合にも適用したいのです」
「それでしたら長官」
スタッフは述べてきた。
「この場合はオムダーマンが成功した場合がいいのでは？」
「そう考えられますか」
「はい。私はそう考えます」
彼は言う。
「彼等が防衛ラインを突破したのならばそれを研究して。その結果

を建設する防衛ラインに適用すればいいのです」
「それは軍事的な視点ですね」
「ええ」
スタッフもそれを認めた。彼は今軍事的な視点からだけで語っていた。それは自分でもわかってやっていることであった。防衛だから当然である。

## 第二十四部第三章　各国の思惑その十二

「それだけではありません」
「といいますと」
「オムダーマンが勝利を収めたとすると衝撃的な話になります」
「衝撃的ですか」
「そうです。それは政治的にも」
「成程」
彼は八条の政治的という言葉を聞いて大いに頷いてきた。
「そういうことですか」
「そうです。連合軍は百三十億」
四兆の膨大な人口がそれを支えている。四兆の人口から見れば百三十億はほんの一握りであるが他の勢力から見ればそれは悪夢のような数である。
「軍事はもう充分ではないのか」
その数を見てこう主張する政治家も多い。数だけ見れば確かにそうなる。戦争は数だ。しかし数だけで全てを賄えるかというとそうでもないのだ。やはり備えが必要なのだ。
「それに胡坐をかいていてはなりません」
八条もそれを言う。
「それをどうにかするには政治的なインパクトが必要なのです」
「それがオムダーマンの勝利ですね」
「そうです。防衛ライン施設を考えるとそれが一番いいのです」
「しかし」
「ええ、ここでしかしがつきます」
八条は今度は苦笑いになってきた。
「連合としてはハサンが勝利を収めるのがベストです。関係も権益もそのままスムーズに継承、拡大されますからね」
「下手な人間が出たならば困りますからね」

今まで連合中央政府や各国の権益をいきなり強奪しようという政治家もサハラには出たことがある。所謂革命外交というものだ。だがそれを実行しようとしたり宣言した政治家はどういうわけか『急に』世を去ってしまうのだ。そこに何があるのかはわからない。しかし幾ら何でも朝起きてみれば死んでいたり妻に刺殺されたり歯を磨いていて倒れ込んだり靴の中に毒が滲み込ませていたりというのは尋常ではない。アラファトやカストロでも生き延びられないであろう何かがあるのではというのが一応の『噂』である。今は流石にそういうことはない。表向きは。

「そうです。ですから」

「ハサンの勝利を祈りたいものです」

「国力ならばハサンは勝利を収めます」

八条は国力を指摘してきた。

「オムダーマンとティムール双方を相手にしても」

「ですね。しかし国力だけではありませんので」

「はい」

話はそこなのであった。それだけで勝てはしないと。八条が先程から言っていることである。

「予断を許しませんね」

「そういえば」

ここでスタッフはまた言う。

「連合はこの戦争には介入しないのですね」

「ええ、一切」

八条は即答してきた。そこには一切の迷いがなかった。

「それは考えていません。誰も」

「そうですね。別にサハラで何があろうとも権益が守られ我々の脅威にならなければ」

「というのが私達の考えですからね」

「ええ」

スタッフも彼の言葉に同意する。連合にとっては結局はそうなの

だ。サハラで何があろうと基本的には不介入なのである。これは一千年の間不変であり今でもそうである。連合にとってはサハラは化外の地である。何があろうとも構わないというのが考えなのである。
「サハラはサハラで、ということです」
「しかし備えはしておくと」
「備えさせてくれればいいのですが」
「どうなるでしょうか」
「それはやはり彼等次第です」
結局はそれであった。
「ある程度は受動的になっていますね。彼等が強ければ備えられますが」
弱い相手には誰も備えはしない。これは政治の世界でもスポーツの世界でも同じことだ。連合のとあるチームの監督は弱いチームにこそ徹底的に勝てと言っている程である。

## 第二十四部第三章　各国の思惑その十三

強いか弱いかは政治の世界では重要ということである。だがここで難しいのは強ければそれでよしというのではないのだ。強いなら強いで、弱いなら弱いでやり方があるし問題も起こるのである。それは自分自身だけでなく相手にも影響するものである。相手がいてこそ起こるのが政治であるからこれは当然と言えば当然であった。

今回も同じであった。八条にとってはオムダーマンが「国境での」戦いにおいては勝利を収める程強くあって欲しいのである。これは防衛の為であった。

「弱ければ困りますね」

「そうですね。この場合は」

スタッフも答える。防衛ラインをどうするかが肝心であるがそれは相手があればこそだからだ。

「オムダーマン次第なのが辛いです」

「さて、アッディーン副大統領は勝利を収めるでしょうか」

「アステロイドを突破すれば大きいですね」

八条は述べる。

「それが成功すれば」

「今の両軍の動きはわかりますか？」

八条はここでスタッフに問うた。

「どうなっているか」

「詳しい話は今は」

スタッフはその問いには答えられなかった。困った顔をして述べる。

「わからないです。わかるのは恐らく暫く後です」

「後になりますか」

八条はそれを聞いて考える顔になった。考えながら言ってきた。

「それではですね」

「はい」
「幾つか防衛計画を考えておきましょう。防衛ラインの」
「オムダーマンが突破に成功した場合とそうでない場合」
「例えばです」
ここで八条はまた言う。
「オムダーマン軍があの防衛ラインを正面から突破したならば正面にかなりの備えが必要でしょう」
「そうですね。普通より遥かに上の」
「そうです。それに」
八条はまた述べる。
「国境に配備する戦力も」
「サハラ義勇軍ではどうでしょうか」
スタッフはここで義勇軍の名前を出してきた。
「やはり彼等の戦力はかなりのものです」
「それはそうですが」
しかし八条はそれには懐疑的な顔を見せてきた。そのうえで言う。
「正規軍が反対するでしょう」
「正規軍がですか」
「そうです。彼等が」
八条は言う。
「賛成するとは思えません。その理由は」
「彼等がサハラ出身だからですか」
「そうです」
その言葉に頷く。それこそが問題であるのだ。
彼等はサハラからの難民達なのだ。それでサハラの者達と対峙できるかどうか。それが問題なのだ。連合としては自分達の勢力圏に敵を入れることは断じてならないことだ。それを防ぐ為の戦力が万が一寝返れば。恐ろしいことになるのは目に見えていた。それで反対しない軍人はいない。八条はそれを読んでいるのだ。
「ですから無理かと」

「難しいですね、それは」
スタッフはそれを聞いて困った顔になる。八条としてもそれは望むことではないのだ。
「私としてはですね」
「ええ」
八条はここで言ってきた。

## 第二十四部第三章　各国の思惑その十四

「正規軍と義勇軍の間に溝は欲しくないのです」
「余計な対立を産むからですね」
「そうです。そうなれば作戦や運用にも支障をきたします」
「確かに。しかしそれは既にエウロパとの戦いでも見られていますし」
その通りであった。エウロパとの戦いにおいて義勇軍は常に前線で戦ってきた。連合軍の鮮やかなまでの勝利は彼等あってのこそであるが同時にその損害はかなりのものであったのだ。連合軍のエウロパでの損害は十個艦隊規模、人員にして一千万程度であったがそのうちの九割、九百万は義勇軍の損害である。義勇軍は百個艦隊、一億程度である為どれだけ酷使されたかわかる。彼等は正規軍の盾として使われてきたのである。これは正規軍の将兵達が彼等に対していささか偏見を抱いておりその為常に前線に立たせたことも大きい。
元々義勇軍は前線に立つ精鋭部隊を意識して設立された。サハラの者達は戦争を知っているからだ。だがそれが異邦人である彼等に対する偏見もありそうした事態につながったのは八条としては望ましいことではなかったのである。
「今もまた」
「末端の兵士の間でも衝突があるそうですね」
「そうです。それが軍全体に拡がっている傾向も見受けられます」
「だからです」
八条は言う。
「彼等はあそこに配備することはできません」
「そうなりますか」
「あそこは正規軍の管轄とします」
彼はそう結論を下した。

「アタチュルク星系と同じく」
「ではそういうことで」
「ええ。そのうえで計画を進めていきますが」
「これを解消することはできるでしょうか」
「正直難しいですね」
八条は苦い顔で答える。
「世の中で最も難しいことは」
「はい」
「人の心ですから」
「心、ですか」
「そうです。それは如何ともし難いもの」
彼は述べる。
「ですね。ですから」
「差別も同じですか」
「将兵を戦場に向かわせるにあたってはその恐怖心を取り除くことが肝心ですが」
死の恐怖だ。それをどう克服するかが問題なのだ。
これは昔から様々なことが為されてきたがこの時代でも解消されてはいない。ましてや連合軍のような志願制で軍人が職業の一つであると考えられている世界ならば尚更である。彼等は戦場で命を賭ける為に参加しているのではなく生活の為に参加している。また連合軍は命を捨てろと教える軍隊でもない。そこに大きなジレンマがある。
その為に兵器の生存能力、ダメージコントロールをかなり考慮してあるのだ。彼等は生きることがまず重要なのだ。安全を保障して戦わせているのである。これは八条の考えであった。
「それと同じことです」
「偏見というものはですか」
「異邦人ですからね」
八条は異邦人という言葉を出してきた。かつて数多く使われてき

た言葉だ。

## 第二十四部第三章　各国の思惑その十五

「彼等は」
「その偏見は消え難いですか」
「だからこそ厄介です」
彼はまた言う。
「連合にいた人間ではありませんからね」
「数においても少数派ですしね」
「そう、少数派です」
八条はそこも指摘してきた。
「数は力です。多数派ならば」
「力になる」
「ネットでもいますね。多数派工作を仕掛けて己の意見を押し通そうとする輩が」
「はい」
それはスタッフも知っていた。何故こういう卑劣なことをするかというと目的の為には手段を選ばない輩であるか己の考えが本当は間違っているとわかっているかである。両方の場合もある。どちらにしろ卑劣な性根の輩のすることである。こうした輩はいずれそれが明るみになって破滅するのがパターンである。卑劣は正道には勝てないものだ。それは何故か。決して人の信頼を得られる行為ではないからである。
「多数派というのはそれだけで大きな力なのですから」
「ですね。我々は多数派ですか」
「四兆です。それに対して難民は十億」
それだけの差がある。歴然としたものが。
「大きいでしょう、圧倒的というのもおこがましい程にまで」
「ですね。ならば」
「彼等に対する数のうえでの優越感があります。しかし同時に彼等

に助けられているという劣等感もまた存在します」
優越感と劣等感というものは実に不思議な関係にある。相反するようで実は同じなのだ。だから同じことに対してそれを同時に持つこともあるのだ。
「それが偏見を余計に助長し」
「どうにもならなくなると」
「相互理解の為の交流の場を増やすことにはしています」
八条は地道だが現実的な考えを出してきた。
「一応の効果はあるでしょうが」
「完全ではないと」
「完全には無理です」
残念だがこう断言するしかなかった。
「人の心ですから」
「ですね」
スタッフにもそれはわかる。そのうえで頷くしかなかった。
「しかし黒であるものを薄めていって灰色にしていくことは可能です」
完全な白は無理でも白に近付けていくということだ。
「ですからここは少しずつ白に近付けていきましょう」
「それしかありませんか」
「ええ」
それが世界というものである。完全なものはない。それを完全に近いものにはできるが。若しやろうとすると全体主義国家になる。そうなっては元も子もない。
そもそも完全な白がなければ完全な黒もないのだ。人間というものは誰しも善であり悪であるものだ。吐き気を催す卑劣漢は存在してもである。完全な善人も完全な悪人もいない。
「どちらにしろ暴発しては取り返しがつきません」
彼は述べる。
「軍としては崩壊です」

「義勇軍もまた必要ですし」
「そうです」
八条はその言葉に頷く。
「連合軍は正規軍と義勇軍より成ります。しかし」
「しかし」
八条の次の言葉に問う。
「その二つがそれぞれ異なったものになっていますし」
「連合とサハラにより」
これは最初からわかっていたことだ。だが実際に組織してみて出て来ることもあるのだ。お互いの感情的な衝突もそうである。
これは実際に八条の予想を越えていた。彼等、特に連合側がここまで感情的に義勇軍の者達を遠ざけたりするとは思っていなかったのだ。
「実はですね」
「はい」
スタッフは頷く。
「先の戦争でかなり感情的な融和が進むと思っていたのです。戦友という意識で」
「それは確かにあります」
スタッフもそれは見ていた。
「ですがそれとはまた別の感情を抱いてもいます」
「それが偏見であると」
「そうです。それも同じ人間の中にあり」
「それがせめぎ合う」
人間というものは二つの感情が同時に存在にするものだ。優越感と劣等感も然りだ。一つしかないのならば人というものはどれだけ簡単で詰まらないものであるだろうか。

## 第二十四部第三章　各国の思惑その十六

「今連合軍はそうした中にあります」
「困ったことです」
八条は腕を組んで述べた。
「交流等で地道にしていくしかありませんが」
「それでもしこりは何時までも残る」
「思えばこういう話は何処にもありますね」
「はい」
スタッフも人の世の中を知らないわけではない。むしろそれなりに知っている。人の世の中で感情的な対立というものは何処にもあるものなのだ。
「国防省と財務省にしろ」
「感情的なものが確かにありますね」
「向こうは我々を金喰い虫と考えています」
どうした国においても国防省と財務省は関係が悪くなってしまうものである。理由は簡単で国防省関連の出費が戻ってくるものではないからだ。採算が取れないものだから財務省が予算を回したがらないのである。それを国防省が無理をしてでも取る。これで関係が悪化しない方がおかしいというものである。実際に中央政府の財務省と国防省も仲が悪い。各国の政府もそれは同じだ。国軍でも採算の取れない出費は出費だからである。
「個人的なものも組織に影響する、これは事実なので」
厄介な事実だ。八条は内心そう思っていた。
「消えませんね」
「本当に完全には」
「しかし義勇軍はなくてはならない」
彼等は連合軍最強の精鋭部隊である。戦争を知っているうえに実戦さながらの訓練と前線での死闘により鍛えられているからである。

平時においても手強い海賊やテロリストに向けられることが多いのである。
「それも事実ですし」
「正規軍の士官の中にも偏見はありますので」
「あるでしょうね」
言わずともわかることであった。士官も人間だ。
「提督の中にも」
「そうした偏見のチェックをしますか？」
「しておきますか。セクハラと同じで」
八条もそれに頷いてきた。
「それを自分自身でも気付かせる為に」
こうした感情は自分ではわからない場合も多いのだ。自分では差別感情や偏見がないと思っていてもあるものなのだ。それもまた人間であるのだ。
「気付かないとなおりません」
「そうです」
スタッフは八条の言葉に頷く。
「だからこそ」
「そうですね。しかし」
八条はここで溜息を出してきた。彼にしては珍しく。
「何か」
「いえ。連合は様々な人種や民族、宗教があります」
「はい」
それが連合である。四兆の人口の中にはそれこそモザイクそのもので多くの者が存在している。全ての者が平穏に暮らしている、そう思われていた。
「それをかなり認めていると思っていたのですが」
「連合の中ではそうです」
ここでスタッフは連合の『中』という表現を出してきた。
「あくまで我々は連合ですから」

「各国に分かれていても」
「はい、連合なのです」
「しかし彼等はサハラですね」
それが問題なのだ。彼等は連合の者ではないのだ。連合にはおらずサハラにいた。異邦人なのである。異邦人というものはそれだけで異質なものとなる。
「だからこそ」
「そういえばです」
八条はまた気付いたものがあった。
「彼等は連合の市民権を持っていますが」
「ええ」
「サハラに戻りたいという方もおられるのですね」
「あくまで連合の市民権は便宜的なものですし」
スタッフは言う。

## 第二十四部第三章　各国の思惑その十七

「やはり何時かは故郷に帰りたいというのも当然ではないかと」
「確かに。それも自然な感情です」
「そうですね。戻りたい難民に援助するのも中央政府の方針ですし」
「無碍にはできません」
八条はまた述べる。
「それが余計に感情的な対立になるのでしょうね」
「話は複雑になっていきますね、余計に」
スタッフも困った顔になっていた。
「話はまとまっていかないものです」
「まあ今は大丈夫でしょう」
八条はそう前置きしてきた。
「サハラが戦争になっている間は」
「そうですね。今のところは」
スタッフもその言葉に頷く。
「ですがいずれは」
「はい、その問題もまた起こるでしょう」
話は高度に政治的になっている。軍での問題は時として高度に政治的な問題になっていくのだ。今回こそがまさにそれであった。
八条は防衛ラインの計画だけでなくそうした複雑な問題についても話を進めていくことになるのだった。だがその中にあっても逃げることはできなかった。それは彼が中央政府国防長官であるからに他ならなかった。
一旦は視察を終え地球に戻る。その途中においてであった。
防衛ラインの計画をチェックしている八条のところに軍服の軍人が一人やって来た。そのうえで彼に報告する。
「オムダーマン軍がアステロイド帯を突破しました」
「そうですか」

八条はそれを聞いて頷く。
「遂に」
「予想しておられたのですか」
「はい」
軍人の言葉に応えてきた。
「そして今彼等はどう動いていますか？」
「今の時点ではそこまでしかわかっていません」
軍人はそう述べる。
「残念ですが」
「そうですか」
「しかしです」
彼はまた八条に言ってきた。
「ハサン軍はかなり混乱状態に陥っております」
「そうでしょうね」
八条もその言葉に頷く。
「予想していなかったことですから」
「まずはここまでしかわかっていないです」
彼はまた述べる。
「しかし大きな混乱になろうとしています」
「混乱ですか」
八条はそれを聞いてまた考える顔になってきた。
「それが今後に大きく影響しますね」
「緒戦での混乱ですね」
「それをハサンは乗り越えるでしょうが」
「乗り越えられますか」
軍人はその言葉に目を向けてきた。意外といった顔であった。
「そのまま押し潰されるのでは？」
「いや、それはならないです」
だが八条はそれを否定する。そこには深い洞察があった。
「ハサンの国力はかなりのものです。緒戦を落としたとしても」

「まだ挽回できると」
「そうです。どちらにしろ戦いは長期化します」
それは確かであった。八条は戦いが長期化することを予想していた。どちらにしろ激しい戦いになる、それだけは間違いなかった。
「そして」
「そして？」
「これで決まりです」
そう述べて微笑んでみせた。
「防衛ラインがどういったものになるかは」
オムダーマンの行動が連合の守りも決めた。全ての動きはつながっていたのであった。それはまるで神の見えぬ手で操られているかのようであった。

## 第二十四部第四章　アッディーンの機略その一

アッディーンの機略

アッディーンは高速の部隊を率いてアステロイド帯の突破を目指していた。既にその航路は決定されオムダーマン軍は彼の指示の下粛々とアステロイド帯を進んでいた。

「いいか」

彼は兵を進ませながら指示を出していた。

「決して気付かれるな。いいな」

「了解」

この指示はシャトルによって出された。通信が傍受されることを恐れてのことであった。アッディーンはアリーの艦橋から全軍を見据えていた。そうしてこれからの戦いを見ていたのであった。

その周りには幕僚達がいる。彼等はそこで軍全体の動きを見ていた。

「閣下」

ラシークが彼に言葉を述べてきた。

「どうした」

「ここを突破すればすぐにガズニーですが」

「うむ」

アッディーンは艦橋から複雑に様々なものが漂っているアステロイドを見ていた。それを見ながら彼に応える。冷静な声であった。

「何があるのかは詳しいことはわかってはおりません」

「いや、わかっている」

しかしアッディーンはそう返してきた。

「ガズニーには防衛戦力は置かれていない」

「それは前の情報ですが」

「今もだ」

しかし彼は言う。

「何故なら前線に実戦部隊を集結させているからだ。あの場所には戦力は殆ど残ってはいない」
「そうなのですか」
「あの辺りの管轄はサハラ軍第二十七艦隊だったな」
「ええ、確か」
ラシークはその言葉に答える。
「データによれば」
「その第二十七艦隊の司令部もガズニーにあったな」
「はい」
全てはデータ通りである。しかしそれは少し前なので戦局が動いている今もそうだとは限らない。アッディーンもそれはわかっているが全てをみすこしていた。
「だが今彼等はそこにはいない」
「いませんか」
「前線だ」
また言った。
「可能な限り前線に向かえるようにしている。ダビデブ元帥は今前線を守りきることに全神経を集中させている」
今度は敵の指揮官であるダビデブについて述べてきた。
「だからだ。本来は防衛戦力である第二十七艦隊もまた」
「前線に向かえるようにしていると」
「ダビデブ元帥は確かに優れた指揮官だ」
それも認める。彼はダビデブを決して侮ってはいなかった。
「しかし。今は前線のことだけを考えている」
「それで第二十七艦隊も」
「ガズニーの占領自体は容易に抑えられる」
彼はそのことには絶対の自信を持っていた。しかしそのことに安心してはいなかった。
「しかし。問題はその先だ」
「その先ですか」

「手は打っている」
こうは述べる。
「後はそれが上手くいくかどうかですか」
「まずは国境だ」
ラシークの言葉を聞いてまた述べる。

## 第二十四部第四章　アッディーンの機略その二

「そこを抜けなければこれからもない」
「ですね」
「今はその第一段階を済ませる為の最初の一手に過ぎない」
アッディーンはこうも言う。静かにものを見据えた声で。声だけでなく目もである。目は戦場だけを見てはいなかったのだ。他のものも見ていた。
「ガズニー占領は次の一手ですか」
「そうだ。その次の一手の後でまた」
言葉を続ける。
「勝利を収める」
「国境にはかなりの艦隊が展開していますね」
「予備兵力や周辺の戦力を合わせると百個艦隊に達する」
アッディーンは次は戦局について言及した。
「我々は七十個艦隊」
「その七十個艦隊で勝利を収める」
口で言うのは容易い。しかし実際にそれを為すのは困難である。今はそうした状況であったのだ。彼は今それを述べる。
「難しいことなのはわかるな」
「はい」
ラシークだけでなく他の者もそれに頷く。
「だがそれは数だけのこと」
そのうえでこうも述べる。
「数は重要だ。しかしそれだけではない」
「守りと将も」
「今のハサンは全て備えている。少なくともこの国境においては」
そうでなければ正面から攻めていた。アッディーンも愚かではない。敵を見ることを忘れてはいない。そうでなければ今こうし若く

してオムダーマン軍を率いサハラにおいて若き英雄と称えられるまでには至っていない。彼もまた多くを見ていたのである。
「しかしそれは」
「それは」
「一方面においてだけだ」
そのうえで言う。
「前だけだ。ならばその前以外から攻めることだ」
「それでアステロイド帯突破を考えられたのですか」
「奇抜だったか？」
すっと笑って今度はシンダントに問うた。
「この作戦は」
「まさかアステロイド帯突破を考えられるとは思いませんでした」
その問いに対して彼は素直に答えてきた。
「ですから」
「そうか。しかしこれが最も都合がよかったのだ」
そう述べた。
「何よりも敵が予想していない」
「それですか」
「兵は軌道だ」
孫子の古い言葉だった。それを今言葉にして出した。
「どうして隙を衝いて攻めていくか。特に攻撃側はな」
「守る側はそれを予測して手を打つ」
「ハサン軍は今それを読んでいない」
声が厳然としたものになる。
「それが我等の勝利になるのだ」
「閣下」
ここで一人の若い将校が彼の前に現われた。
「どうかしたか」
「前線部隊がアステロイド帯を突破しました」
報告であった。それはアッディーンにとってよい報告であった。

「そのまま作戦通りガズニーに向かっております」
「そうか。それは何よりだ」
「はい」
「では最後まで予定通りだ」
こうも述べる。
「そう伝えよ。いいな」
「はっ」
「そして全軍に告げる。
アッディーンはまた述べた。

## 第二十四部第四章　アッディーンの機略その三

「ガズニーを占領したならば最低限の防衛戦力を置いてすぐに国境に向かう」
「国境にですか」
「そうだ、今度は姿を隠しはしない」
作戦を変えてきていた。
「堂々と姿を現わして進むぞ」
「堂々とですか」
「一転して、ですな」
周りにいる参謀達はそれを聞いて述べる。彼等もその言葉に何かを見ていたのである。
「そうだ。姿を見せる時ならな」
アッディーンもそれに応えて述べる。
「見せる。それだけだ」
それが相手に精神的な衝撃を与えるからだ。戦争とは相手に与える心理的衝撃も考慮しなければならない場合がある。それが今であった。アッディーンはこのことも考慮に入れて戦略、戦術を立てているのであった。それができるかできないかで軍略家の能力は大きく変わるがそうした意味においてアッディーンはやはりかなりの軍略家であると言えるのであった。
「だからこそ」
「そして何処に向かいますか？」
「それは決まっている」
彼は今度はガルシャースプに答えた。
「国境を後方から襲う。いいな」
「予定通りですか」
「そうだ。全てはな」
そう述べる。述べながら彼はこれからの戦いを見ていた。それは

ガズニーの占拠、国境での勝利だけではないのだ。それもまた戦いの中の一ページに過ぎないものであったのだ。
戦争は時として長期戦になるものである。とりわけこのハサン王国との戦争はそれが予想される、いや間違いない戦争であった。何しろハサン王国の王都はオムダーマンから見て遠くティムールから見てもそれは同じである。これで長期戦にならないと考える方がどうかしている。それに対する備えを用意しておき全体の戦略をアッディーンもまた考えているのであった。
「ではまずはガズニーだ」
それがまずはじまりであった。そのことは変わらない。
「わかったな」
「はい」
参謀達がそれに頷く。戦いはこうして干戈を交えないまま続けられていっていた。駒が配されていきそれはまだ表には出ていない。だが確実に動いていたのであった。
アッディーンの乗るアリーはアステロイドを進む。もうすぐそのアステロイドを抜けようとしていた。
「アリー、間も無くアステロイドを抜けます」
幕僚達が報告する。
「よし、では次は」
アッディーンは述べる。
「我々もガズニーに向かうぞ」
「はっ」
ガルシャースプ達はその言葉に頷く。
「わかりました」
「前線の艦隊はどうしている？」
「間も無くガズニー星系です」
シンダントが答える。
「そうか。ではそのまま向かえと伝えておけ」
アッディーンは前を見据えながら言った。

「いいな」
「わかりました」
シンダント達はその言葉に頷く。その時前線では既にガズニーに入らんとしていた。
だがガズニー星系のハサン軍は平穏としたものであった。戦闘態勢にはあったが前線とは違い穏やかな中に身を置いたままであった。

## 第二十四部第四章　アッディーンの機略その四

ここを守る第二十七艦隊も前線に近い場所に進出しておりガズニーには殆どいない。最低限の守備隊もその警護は緩やかでまるで緊張感がない。その緊張感のなさの中で彼等はまるで戦争中とは思えない程の空気の中に身を置いていた。

「国境は大変なのだろうな」

星系をパトロールするパトロール艦の艦長が自室で休みながら述べた。テーブルの上にはチェスがあり副長と一緒にやっていた。

「今は」

「戦闘には入っていませんがね」

副長はそう返した。流石に酒こそは飲んでいないがコーヒーとチョコレート菓子を楽しみながら気楽にチェスをやりながらの話であった。

「相当緊張した状態のようです」

「やはりな」

艦長は副長のその言葉を聞いて頷く。

「ここの艦隊の主力も前線に近い場所にいるしな」

「はい」

副長は答える。

「このまま何もなければいいのですが」

「そうだな」

ナイトを動かしてきた。

「オムダーマンも諦めないだろうがな」

「結局はどちらが生き残るかどうかなのですがね」

「奴等でもあの国境は無理だろう」

艦長はボード全体を見ながら述べた。

「突破できんさ」

「ですね」

副長も駒を動かしながら応える。彼は艦長が今さっき動かしたナイトを取ってきた。彼はそれを見て顔を顰めさせてきた。
「そうくるのか」
「何か？」
「いや、待ってはくれないか」
「そういう決まりではないですか」
副長は笑って返す。笑いながらチョコレートを口に入れる。
「違いますか？」
「確かにそうだが」
しかし彼は取られたナイトの駒を口惜しそうに見ていた。艦長が黒で副長が白だ。白と黒の対比がボードの上で実に対象的に描かれていた。
「それでもな。やはり」
「戦場では待ったはありませんよ」
副長は笑いながら過酷な現実を出してきた。
「そうですね」
「それを言われるとはな」
艦長も苦笑いを浮かべるしかなかった。軍人としては沈黙するしかない。
「全く」
「何、盛り返せばいいだけですよ」
副長は軽い調子でまた述べた。
「単なるゲームですから」
「そうだな。単なる暇潰しのゲームだ」
それは艦長も認める。といってもこれで結構迂闊なことはできないものであるが。将棋もチェスもかなりのめり込むものであるからだ。ここから喧嘩、かつては刃傷沙汰になることも多かったのである。
「気楽にいくか」
「そういうことです。では」

「これではどうだ？」
艦長は仕返しとばかりに副長のビショップを奪ってきた。白い駒がボードの上から消える。今度難しい顔をしたのは副長であった。

## 第二十四部第四章　アッディーンの機略その五

「待ったはなしだぞ」
艦長は得意げに笑って言う。
「いいな」
「わかっています。それでは」
勝負を続ける。暫く続けて途中で止める。そうして仕事に戻る。
艦橋に戻ると当直士官である船務長の敬礼を受ける。返礼しそれから彼に尋ねる。
「何か異常はあったか？」
「今のところは何もありません」
彼はそう報告してきた。
「そうか。ならいいな」
「このまま何もなしならばいいのですがね」
副長は笑いながら述べた。
「オムダーマン軍も国境から去り我が軍がそれを追い」
「そうだな。まあここまでは来ることはあるまい」
「はい」
副長だけでなく他の艦橋スタッフ達もそれに応える。
「まさかな」
そう話していた時であった。突如としてモニターに巨大な艦艇が無数に現われた。
「何っ！？」
「何だ！？」
艦長や副長だけではない。他の艦橋スタッフもそこに異変を見ていた。
「これはオムダーマン軍です」
下士官の一人が言った。
「間違いありません。識別反応が一致しています」

「馬鹿な」
艦長は青い顔をしながらもそれを否定する。
「ここまで来る筈がない。彼等は今国境にいる筈だ」
「ですが」
下士官は言う。
「識別信号は」
「有り得ん」
そこまで聞いては頷くしかなかった。だがそれでもまだ信じられなかった。
「ここに出て来るとは。どういうことなのだ」
「艦長、どうしますか」
呆然としかけたところで周りの者が彼に問うてきた。
「戦いますか？やはり」
「それとも」
「待て」
一旦は焦る彼等を落ち着かせる。艦長としての最低限の務めを果たしていた。
「周りには何隻いるか」
「敵でしょうか味方でしょうか」
「両方だ」
そうレーダー員に返す。
「どうなっているか」
「味方は星系全体で五十隻です」
レーダー員は答えた。若い兵士であった。
「そして敵は」
「うむ」
「一万隻です。一個艦隊に相当します」
「そうか。もうそれだけの数がか」
「どうされますか？」
「囲まれているのだな」

「はい」
レーダー員は答える。
「完全にです」
「そうか。ならばどうしようもない」
呻くような言葉だった。こうなっては答えは一つしかなかった。
「降伏する」
彼は言った。
「いいな」
「降伏ですか」
「生きていればまた何かできる」
艦長はそう述べる。
「そうだな。だから」
「わかりました」
「それでは」
部下達もそれに頷いた。頷くしかなかった。
こうしてこの艦はオムダーマン軍に降伏した。他のパトロールにあたっていた艦も次々と降伏していく。オムダーマン軍は瞬く間にガズニーを包囲していったのであった。
ガズニーの基地司令はイスム＝ムワヒド中将である。経補の出身であり実務派として知られている。実戦経験は乏しいが補給やそういったことには定評がある。その為ガズニーを任されたのである。軍人というよりは官僚と言うべき人物であった。
その彼は今司令室でデスクワークにかかっていた。その内容は特に変わったものではなくどの物資をどれだけ調達するとかそういった話であった。補給基地としてはごく普通のものであった。

## 第二十四部第四章　アッディーンの機略その六

彼はそれに裁可やサインを行っていた。コーヒーを飲みながら暖かい部屋で仕事をしている。
今彼のいる惑星ガズニーの北方は冬であった。しかしその寒さもこの部屋においては無縁のものであったのだ。少なくとも暖房とコーヒーがある限りはだ。
「閣下」
若い将校が彼に声をかけていた。
「どうですか、物資は」
「前線はまだ戦闘には入っていないからな」
彼はそう将校に述べる。
「それ程多くはない。だがこれからはわからないな」
「そうですか」
「オムダーマン軍が動けばな」
そう彼に述べる。
「違うが。まだ動かないのか」
「そのようです。一向に動く気配はないとのことです」
「そうか」
ムワヒドはそれを聞いても特に気にするふうもなかった。実戦の勘に乏しい彼はそれを聞いても特に思うところはなかったのだ。
「今のところは」
「今のところは、か」
ムワヒドは首を傾げる。傾げながらまた述べる。
「はい。何を考えているのかはわかりませんが」
「アッディーン元帥も怖気付いたのか？」
「流石にそれは考えられません」
「そうだな」
如何に実戦の勘がなくてもそれは考えはしない。アッディーンが

そこで怖気付くと思う程彼は何も知らないわけではなかったのだ。彼としても無能ではないのだ。
「やはり何かあるのだろうな」
「何を考えているのでしょうか」
「だがあの国境を突破することはできないだろう」
ムワヒドは言う。彼はオムダーマン軍が国境から攻めて来るとばかり考えていた。それ以外に方法はないと考えていたのだ。これは固定観念であった。
「どうするつもりかな」
「あの国境は無理です」
将校も断言する。
「何があっても」
「そうだな。さしものオムダーマンもあの国境は抜けられない」
ムワヒドは断言した。
「あの堅固さはな」
そう言いながらコーヒーを口にする。苦さと甘さが口の中を支配する。
「流石に連合のガンタース要塞群程ではないがな」
「そういえば連合は今回も動きません」
「彼等にとっては我々は異世界か」
少しシニカルな言葉になった。
「介入して来ないのはともかくそれはな」
「そうですね。しかし連合は国境を見ているようです」
「我々とのか」
ムワヒドはそれを聞いて目をしばたかせた。
「またどうしてだ。今まで最低限の備えさえしていなかったというのに」
「さて、何を考えているかはわかりませんが」
「難民対策ではないかな」
「そうではないかと」

彼等は連合について細かいことまで知っているわけではない。だから連合、そして八条が何を考えているかまではわからなかったのである。
「この戦争次第で」
「どちらにしろ我が軍が勝利を収める」
ムワヒドはそれを純粋に信じていた。
「あの国境は絶対に突破できない」
「ええ。ですから」
「閣下！」
ここで基地付の参謀が司令室に飛び込んできた。
「大変です！」
「何があったのだ？」
ムワヒドはペンを止めて彼に顔を向けた。
「そこまで慌てて」
「オムダーマン軍です」
彼は言う。慌てた声で。

## 第二十四部第四章　アッディーンの機略その七

「オムダーマン軍が現われました！」
「馬鹿な」
ムワヒドはその言葉を最初に聞いても信じはしなかった。
「何を言っているのだ、一体」
「そんなことは有り得ません」
若い将校も言う。
「このような場所までは幾ら何でも」
「いえ、それが」
しかし彼はそれでも述べる。
「来ているのです。既にガズニーは包囲されています」
「馬鹿な、どうしてそうなるのだ」
ムワヒドはそれを聞いて目を顰めさせる。夢物語のようであるがそれでもその話を偽りだとは思えなくなってきていた。それだけ説得力のある言葉であったのだ。何故なら伝令のその者の言葉があまりにも動揺し狼狽し己を失っていたからである。軍人としては確かにあるまじきことであるがそれでもその言葉が説得力があるのは間違いのないことであった。時として説得力というものは己を失う有様からも語ることができるものであるがこの時こそまさしくそれであるのであった。
「まさか国境が」
「いえ」
それは否定する。
「そうではないようですが。しかし」
「閣下、ここは」
「うむ」
将校の言葉に頷く。彼は作戦指揮室に向かった。廊下は既にかなり慌しくなっていた。

「閣下、こちらです！」
「お急ぎ下さい！」
「わかっている」
ムワハドも彼等に応える。応えながら足早に部屋に向かう。
部屋に入ると既にスタッフが慌しい動きを見せていた。あちこちから報告があがっているようであった。
「オムダーマン軍は何処だ」
「既にガズニーの上空まで」
「馬鹿な、もうか」
彼は部下の報告を聞いて声をあげた。
「そこまで来たというのか」
「既に宇宙は彼等のものです」
参謀の一人が告げた。
「ガズニーの全ての惑星が包囲されています」
「パトロール等にあたっていた艦艇も全て拘留され」
「宇宙港も抑えられました」
「何ということだ」
それを聞いて呻くしかなかった。
「どうやってそこまで」
「司令」
部下達はまた彼に問う。その顔は焦り、強張っていた。
「どうされますか」
「既に揚陸部隊まで発進しだしております」
「こちらの迎撃は？」
ムワヒドはまずそれを問うた。
「どうなっているか」
「無理です」
参謀の一人が答える。
「備えはできていません。既に」
「そうか。最早手遅れか」

「残念ながら」
「では致し方あるまい」
こうなっては取るべき手段は一つしかない。抗戦が無駄ならば。彼は最後まで戦うタイプの男ではなかった。このことが決定打となった。
「降伏だ」
彼は言った。
「わかったな」
「はい」
「仕方ありませんな」
部下達もそれに応える。こうして彼等は降伏しガズニーはオムダーマンの手に落ちたのであった。アッディーンにとっては第一段階であった。

## 第二十四部第四章　アッディーンの機略その八

アッディーンはすぐにガズニーに入った。まずは強行軍の補給を行わせた。それと共に突貫的であるが整備も行わせていた。
「司令」
それを見てガルシャースプがアッディーンに声をかける。彼等は今はガズニーの宇宙港を見てその整備を見守っていた。その中での言葉であった。
「整備をされていますが。間に合いますか？」
「あくまで突貫だ」
アッディーンは彼にそう返した。
「時間はない。しかし行わせておく」
「それは何故ですか？」
「次の行動の為だ」
こう返す。
「国境にいるハサン軍を倒す為にな。今はその為に」
「それが終わり次第すぐにですか」
「そうだ、行くぞ」
艦艇を見る。艦艇の整備は急ピッチで進んでいた。この時代の艦艇はナノテクも導入されてそれがかなり進歩している。事故修復機能もかなりだがそれでも整備は必要なのであるのは変わらない。
「すぐにな」
「私としましては」
ガルシャースプはここで顔を曇らせてきた。
「どうしたのだ？」
「いえ、すぐに進むべきだと考えていましたが」
そうアッディーンに述べる。
「ここで整備ですか」
「あくまで最低限だがな。また強行軍になるしな」

「かなり強引な侵攻なのは事実ですね」
ガルシャースプもそれをよくわかっていた。
「奇襲ですし」
「そうだ、あくまで奇襲だ」
アッディーンも自分でそれを述べる。
「そして今度は強襲でもある」
「強襲の為には整備も必要ですか」
「むしろだからこそか」
こう言い替える。
「それを成功させる為に」
「成程」
ガルシャースプはその言葉に応える。応えながら話を進める。
「本来の整備は国境での戦いが終わってからだ。ただしそれは」
「勝利があってこそ、ですか」
「そうだ。勝利だ」
アッディーンの目が光った。
「勝利なくして整備も何もない。今の我々はそういう状況にある」
「大変な状況ですな」
ガルシャースプはあらためて目を鋭くさせる。確かにガズニーを手中に収めたがそれでも敵中にあるのだ。生き残る為には勝利こそが必要なのだ。そうした中に今彼等はいるのだ。
「実に」
「しかし勝てる」
彼は言う。
「これで国境にいるハサン軍は恐慌状態に陥る」
「そうでなくともかなり動揺しますな」
「そうだ」
アッディーンは言う。その間も周りにいる将兵達は次々と艦艇を整備し燃料や弾薬を補給していく。次の戦いの準備を着々と進めていた。

「そこを衝く。それが狙いだ」
「それではすぐに」
ガルシャースプは声が上がっていた。その声でまた述べる。
「整備が終わり次第」
「そうだ。しかし」
アッディーンはここでガルシャースプに返す。顔も彼に向ける。
「整備に抜かりがあってはいけない」
「わかっています」
ガルシャースプはそれに頷く。
「だからこそ、ですね」
「整備はしても抜かりがあっては何にもならない」
軍において整備は何があっても欠かせないものだ。どんな優れた兵器も動かなくてはただのガラクタだ。だからどの軍でも整備は最重要項目の一つだ。連合においては常にその整備状況に完全を期しその技術もかなりのものにしている。連合の技術の粋を集めていると言っても過言ではない。

## 第二十四部第四章　アッディーンの機略その九

「そうだな」
「はい。それでは」
「整備にあたっている将兵には特別にボーナスを出せ」
アッディーンは全軍に告げる。
「ただし、細分もミスがないようにな」
「わかりました。それでは」
「うむ」
アッディーンは頷いて応える。
「しかしだ」
応えたうえであらためて言う。
「整備もまた。より向上させていきたいな」
「整備もですか」
「今も確かにかなりのものだ」
自軍の整備部隊や技術について不満はなかった。それなり異常の技術があることも彼等の健闘も知っている。しかしそれに安心しているというわけではなかったのだ。
だからこそ向上を考えていた。今よりもさらなる整備状況をである。
「それを考えるとだな」
「はい」
「連合軍はやはり凄いものがある」
彼も連合軍について言及した。
「あの整備状況はな。素晴らしい」
「それもまた技術ですか」
ガルシャースプはそれに問う。
「連合の」
「そうだ。彼等の技術、せめて整備システムを知りたいものだ」

「ですがそれは不可能かと」
ガルシャースプはそう返す。
「システムは学べば済むでしょうが技術は」
「教えはしないか」
「はい、やはり」
ガルシャースプは告げる。
「提供してもそれは最早連合にとっては何でもないものでしょう」
「やはりな」
それは予想がつく。重要な技術を容易に他国に渡す国はない。そういうわけである。
このことに関しては連合も同じである。ティアマト級巨大戦艦等を開発した技術もその整備技術もである。そうしたものを自分達から漏らす筈もないのである。
「盗むにしろ」
「下手にやれば見つかってしまいます」
「そして厄介な状況になってしまう」
政治的、外交的にだ。それも厄介なのだ。
「しかし学んでおきたいが」
「とりあえず落ち着いてから考えましょう」
ガルシャースプはこう述べてきた。
「どちらにしろ今のところはこの技術で戦うしかありませんし」
「そうだな」
アッディーンもその言葉に頷く。
「それならば」
「はい、それでは」
ガルシャースプも述べる。
「そのように」
「しかし技術というものは果てしがないな」
アッディーンはそうガルシャースプに語る。
「我々の整備技術はかなり優れたものだと思っていたが」

「連合はその遥か上をいっていた」
「どうやら。少し井の中の蛙になっていたようだ。
そうも述べる。
「それではよくない」
「ですね。ですから」
「ここでも学んでいこう」
「そうですね。そして」
ガルシャースプはまた言った。
「さらに精強な軍を」
「戦えること、勝つこと」
アッディーンは述べる。
「その二つができる軍が精強な軍だ」
「ええ」
「それを考えると連合軍は精強なのだ」
「精強、ですか」
その言葉に今一つピンとこないといった顔であった。ガルシャースプはそれを隠そうとはしない。というよりは隠せないものがそこにあった。

## 第二十四部第四章　アッディーンの機略その十

「あの連合軍が」
「違うのか？」
「どうもそういった印象がありません」
それを口にも出して述べる。
「連合軍に関しては」
「だがそれは違う」
アッディーンはそれをはっきりと否定してきた。その言葉には確かな説得力が存在していた。
「連合軍のあの雰囲気と穏やかさを見てのことだな」
「はい」
ガルシャースプはまた答えた。
「それを見ていますとどうにも」
「錯覚だ」
しかしアッディーンはそれをまた否定してきた。
「錯覚、ですか」
「確かに連合軍の訓練は穏やかだ」
「ええ」
自分でもそれを述べる。
「志願制で雰囲気も穏やかだ。個々の戦闘力では確かに我々の比ではない」
「それでも、なのですか」
「兵が強いだけで勝てるわけではない」
こう言い切る。
「強いだけではな」
「それは確かに」
ガルシャースプにもそれはわかる。個々の戦力だけが軍隊だけではない。しかしアッディーンはそれをさらに深く見ているのである。

「システムだ」
アッディーンは言った。
「連合はシステムで戦っているのだ」
「そのシステムが強いということなのですか」
「そうだ。連合軍を支えているのはシステムだ」
アッディーンは言う。
「簡単に言うと体制だ。全てにおいて」
マニュアルを完成させているということである。これは八条ができるだけ損害を軽微にして勝利を収めるという究極の目的を前提に整えさせたものなのである。連合軍はとりわけ損害を嫌う。それが彼をしてシステムというものを整備させたのである。これには連合軍自体が実戦経験がないことも踏まえていた。様々な要因があって整えられたものなのである。
「補給も整備もな」
「だから強いのですか」
「そういうことだ」
そう答える。
「だから連合は強いのだ」
「数だけではなく、ですか」
「確かに数は重要だ」
それは大前提だ。アッディーンもそれはわかっている。これは逆説的になるが彼が今まで自身が率いるよりも多くの敵を相手にすることが多かったせいである。
「しかしそれだけではない」
「数を支えるものですか」
「そうだ」
それに頷く。
「連合軍はそれを整えている。だからこそ強いのだ」
「その強さですか」
「そういうことになる。連合軍の強さは」

「学んでおきたいですね」
「ああ」
アッディーンの目が鋭く光る。光は連合を見ていた。
「この戦争が終わればシステムも整えておく」
「わかりました」
「全ては我が軍の為に」
「はい、真の意味で精強な軍を作り上げる為に」
ガルシャースプはそれに応える。応えてからまた述べる。
「連合軍もまた」
「学ぶべき相手にしよう」
「はい」
「司令」
そこにバヤズィトが来た。アッディーンの前に来て敬礼をしてから述べる。
「どうした？」
「整備状況の報告に参りました」
そうアッディーンに述べる。
「明日の早朝にも全て整います」
「そうか、早朝か」
「はい」
「わかった。では明日出撃だ」
彼は述べる。
「わかったな、攻撃目標は国境」
「予定通りですね」
「そうだ、予定通り攻める」
そう述べる。
「それでいいな」
「はい」
「わかりました」
バヤズィトだけでなくガルシャースプもそれに応える。

## 第二十四部第四章　アッディーンの機略その十一

「ではそれで」
「まずは国境で勝つ。いいな」
戦いは進む。その中でアッディーンは勝利を見据えていたのであった。
次の日慌ただしく出撃の為に動きが整えられる。アッディーンもアリーに乗艦していた。
「全艦隊出撃準備完了」
「全員乗り組み終わりました」
「抜かりはないな」
アッディーンは艦橋にいた。そこから報告を聞いていた。
「全ては順調です」
「このままいけます」
「よし」
それを聞いて頷く。目の光が強い。
「全速力だ」
そして言う。
「全速力で国境に向かうぞ」
「姿を見せてですね」
「見せることこそが目的だ」
今までとは違うと。はっきりと述べる。
「今回はな」
「陰から陽にですね」
参謀の一人がふと言ってきた。
「今回は」
「陰陽思想か」
元々中国の思想だ。それがふと出て来たのだ。
「それは」

「はい」
言った参謀はそれに応える。
「そうなります。アステロイドでは姿を隠し」
「今は姿を見せるのだからな」
「それが彼等をしてどうさせるでしょうか」
「私は彼等を動揺させるつもりだ」
アッディーンのその考えは変わらない。
「心理的に負担をかけさせ」
「そこからも攻める」
「これは大きいだろう」
前を見据えて述べる。
「人は心で動くのだからな」
「そうですね。とりわけ今は」
「動揺しているのは間違いない」
彼はガズニーを奪われ急に出て来たオムダーマン軍に対して極端に狼狽している。そう見ていたのである。狼狽させること自体もガズニー奪取の目的であった。
「それを拡げる」
「そしてまた」
「さらに攻める」
勢いをそのままにということであった。今それを実際に口に出す。
「そのまま一気に潰す」
「一気に、ですか」
「国境だけでは終わらないにしろだ」
ハサンは一度の戦いで崩壊する程脆い国家ではない。それだけの蓄積があるのだ。一度や二度敗れただけで終わる戦いではないのだ。
「国境での戦いは完全に勝つ」
「その為に姿を見せるのですか」
「隠れるのも一手だがな」
ふとここで述べた。

「見えないのもまた不安を煽る。だがアステロイドで使った」
「だから今度は、ですか」
「流石に続けてやると慣れてしまう」
人とはそういうものだ。慣れるとそれで動じなくなってしまう。
アッディーンは今そのことを考えているのである。戦いは心理的な側面もあるのだ。
「だからな」
「わかりました。それでは」
ガルシャースプがそれに頷く。
「それで」
「うむ。ではな」
「はい」
「総員出撃」
アッディーンの手が掲げられた。
「では行くぞ」
こうしてアッディーンの率いるオムダーマン軍は国境に向かうことになった。戦いは新たな局面に入ろうとしていた。銀河の星達がそれを見据えていた。

# 第二十四部第五章　挟撃その一

挟撃

オムダーマン軍がガズニーを占領したという話はすぐに国境にいるハサン軍にも伝わった。ダビデブはその話を作戦指揮室で聞いた時我が耳を疑った。

「嘘ではないのか？」

「いえ」

報告する作戦参謀が首を横に振ってそれを否定する。

「間違いありません。ガズニーは確かに」

「馬鹿な」

それを聞いてもまだ信じられなかった。

「そんな筈がない。あのアステロイドは」

「ですが」

「有り得ない」

呆然として述べる。

「そんな筈が」

「しかしこれは事実です」

参謀も我を失った顔であった。しかし彼は何とか冷静さを保ちながら述べた。

「残念ながら」

「それでガズニーからどうして来ているのだ？」

「こちらに向かっています」

彼は言う。

「国境に」

「数は」

ダビデブは何とか落ち着きを取り戻してきた。それから敵の数を問うたのであった。

「まだ詳しいことはわかっていません」

参謀は答える。
「残念ながら」
「そうか。では第二十七艦隊を向かわせろ」
そう指示を出した。
「まずはな」
「あまりに数が多ければ一個艦隊では問題があるかと」
「足止めだ」
ダビデブはそう答えた。
「とりあえずはだ。その間に詳しい情報を集めて対処を講じる」
「左様ですか」
「そうだ。今の間はな」
ダビデブの案は基本的な戦略であった。その戦略を以ってアッディーンに対しようとしていた。
「確かなことがわかり次第前方にいる敵か、ガズニー方面の敵、どちらかを叩く」
「わかりました。それでは」
「うむ、いいな」
「はっ」
「おそらくは、だ」
ダビデブはここで予想を立ててきた。
「ガズニー方面の敵は決して多くはないな」
「決して、ですか」
「十個艦隊程度であろう」
彼はそう読んでいた。
「多くとも二十はとてもない。あのアステロイドを越えるのはほぼ不可能だったからだ」
「その程度ですか」
「対処は可能だ」
彼は言う。
「第二十七艦隊には然るべき場所で専守に務めるように言え」

「場所は」
「パンフィロフだ」
彼は述べた。
「あそこならばガズニー方面から来る敵軍を迎え撃つのに最適だ」
堅固な星系である。そこで敵の足止めをする、それがダビデブの考えであった。彼は今それを実際に述べたのであった。これもまた彼の戦略である。
「そこで援軍が来るまで持ち堪えるように言え」
「はい」
「その間に情報を集める」
彼はまたそれを言った。
「それでいいな」
「まずは情報ですか」
「攻め取られたのは仕方がない」
まずはそれを前提にした。
「しかしそれを覆すことは考えなくてはならない」
「そうですね。今がその時です」
「どちらにしろオムダーマン軍は倒す」
この戦略目標自体は覆らない。

## 第二十四部第五章　挟撃その二

「いいな」
「問題はどちらを先に倒すか、ですか」
「必要とあらば私も出る」
ダビデブはこうも述べた。
「勝たねばならないのだ」
「勝たねば、ですか」
「軍人は何の為にいるか」
ダビデブはそう参謀に問うてきた。
「何の為だ？」
「勝つ為です」
参謀の返答は簡潔なものであった。だがそれだけに説得力のあるものであった。
「それ以外にはありません」
「そうだな。ではわかるな」
「はい。勝ちましょう」
今度もまた簡潔な返答であった。
「この戦いは」
「しかし。考えたものだな」
ダビデブはあらためてこう述べてきた。
「何がですか？」
「敵の動きだ」
彼は言う。
「正面から国境を突破するしかないと考えていたが。まさかアステロイド帯を越えるとはな」
「盲点でした」
参謀はダビデブのその言葉に顔を俯かさせた。そうならざるを得なかった。

「まさかこのような」
「敵も愚かではないということだな」
あらためてそれを認識する。
「盲点をあえて見つけてそれを突いてくる」
「流石はアッディーン元帥でしょうか」
「若き名将か」
言葉が少しシニカルめいたものになっていた。だがそのシニカルはアッディーンに向けられたものではない。自分に向けたものである。
「噂だけはあるか」
「青き獅子とも言われていたでしょうか」
これはオムダーマンの軍服が青であることから来ている。オムダーマンの青はそのままアッディーンの青となっているのである。
「確か」
「私もかつては若かった。しかしそこまで言われたことはない」
「若き、ですか」
「その若さで果たしてこの国境を潰せることができるか」
「それはこれからですな」
「うむ」
彼等はすぐに情報収集に取り掛かった。それは急ピッチで進められガズニー方面はにわかに慌しくなった。兵士にはこれからのことを不安視する動きも見られそれへの対処も進められていた。しかしダビデブの動きは落ち着いたものでありまだぶれてはいなかった。
その根拠になっているのが第二十七艦隊であった。彼等はダビデブの指示通りパンフィク星系に向かっていたのであった。
指揮官はムワールフ中将である。濃い顎鬚の初老の男で長い間国境警備にあたっていた。将としては可もなく不可もなくといった男であった。命令に忠実なことで知られる謹厳な人物である。
彼はパンフィクに向かっていた。その中で周りにいる部下達に問うた。

「ガズニーからの敵の情報はどれ位集まったか」
「はい」
部下の一人がそれに応える。
「およそ十五個艦隊程のようです」
「十五個艦隊か」
彼はその言葉を聞いて顔を曇らせてきた。
「思ったより多いな。十個艦隊規模と思っていたが」
「ですが司令」
横から別の部下が述べてきた。
「パンフィクに入れば何とかなります」
「そうです」
他の部下も述べる。
彼等の自信には根拠があった。パンフィクはアステロイドに磁気嵐、そしてブラックホールや変光惑星といった様々なものがある複雑な星系であり僅かな道に軍事拠点を設けている。言うならば天然のものと人口のものを重ね合わせた要害であったのだ。

## 第二十四部第五章　挟撃その三

そこにいれば何とかなる、そう考えていたのだ。だから彼等はそこを目指しているのである。
「あそこならば」
「そうだな」
ムワールフもそれに同意して頷く。
「あそこならば」
「はい、だからこそ」
「急ぎましょう」
「わかっている。地の利は我々にある」
それもまた彼等の強みであった。他の軍ならばいざ知らずこの辺りはハサン軍にとって遊び場も同然である。だからこそ今向かっているのである。
「これはオムダーマン軍でもな。覆せない」
「そうです。如何に彼等といえど」
「それは覆せません」
彼等とてオムダーマン軍を侮っているわけではない。むしろその強さはよく認識している。そのうえで今こうして語っているのである。彼等にしてみれば冷静に分析しているのだ。侮ってはいなかった。しかし過信はあったであろうか。
「必ず」
「彼等にしてもだ」
中将はまた述べてきた。
「勝利を収めなくてはならない。しかしそれは我々も同じだ」
「因果なものです」
また部下の一人が言った。
「ですがそれが戦いなので」
「勝つしかない」

「はい、あそこで守っていれば援軍が来ます」
「それと合流して本格的に反撃に出ましょう」
彼等の作戦はそれであった。一時持ち堪えてその間に本格的な反撃に転じる。地の利と時間を使った戦略であった。その二つは彼等にあるのだ。
「予定通り」
「そう、予定通りな」
中将はその言葉にも頷く。
「していけば勝てる。抜かるなよ」
「わかりました」
「それでは」
彼等はそのままパンフィクへ向かう。彼等は勝利を確信していた。
しかしハサンの勝利を見ていない者がいた。モンサルヴァートはオリンポスにおいてサハラの動静を見ていた。
その日は艦隊を使っての軍事訓練にあたっていた。それが終わってからリェンツィの司令室に戻ってベルガンサと話をしていた。
「オムダーマン軍はガズニーを占領したらしいな」
「はい」
ベルガンサは答える。
「その通りです」
「そうか。確か」
モンサルヴァートは椅子に座りベルガンサは立っている。そこで彼は椅子の上にあるボタンの一つを押した。すると部屋のモニターに宙図が浮かび上がった。それはハサンの宙図であった。
「ここだったな」
「はい」
南方の宙図だ。そこにはガズニーもある。そしてパンフィクもあった。
「今オムダーマン軍はここにいます」
彼がレーザーで指差したのはガズニーであった。モンサルヴァー

トはそこを見る。
「そしておそらくは」
「国境にだな」
「そうだと思われます。つまり」
レーザーを見る。ガズニーから国境へとラインを動かしていく。

## 第二十四部第五章　挟撃その四

「ガズニー方面と国境、二つの方角からハサン軍を撃つつもりのようです」
「つまり分進合撃なのだな」
「ええ。ですから」
「ガズニーを占領したと。そういうことだな」
「そうなります」
ベルガンサは答える。続いて彼はパンフィクを見据えていた。
「両軍の規模はわかりませんがハサン軍はここにかなりの規模の軍事基地を設けております。ガズニー方面から来るオムダーマン軍に対してはここで迎え撃つものと思われます」
「そこでか」
「はい」
こくりと頷いて答える。
「そしてその間に援軍を迎え入れて立ち向かうものと思われます」
「そうか」
その言葉を聞いて頷く。
「ガズニー方面のオムダーマン軍をこうして倒すつもりのようです」
「そしてガズニーを奪還し」
「返す刀で国境にいるオムダーマン軍も叩く。こういう流れでしょうか」
「わかった」
モンサルヴァートはそこまで聞いたうえで応えてきた。
「彼等の考えはわかった。しかし」
「しかし？」
「そう上手くいくかな」
鋭い目でそう述べる。
「ガズニー急襲自体が奇襲です」

ベルガンサはこう前置きしてきた。
「それでかなり無理をしていますから」
「オムダーマン軍は限界だというのだな」
「そうではないでしょうか」
彼はそう見ていた。つまりハサンが勝つと思っているのだ。
「どうでしょうか」
「普通に考えればそうだな」
モンサルヴァートはまずはそれを認めてきた。
「オムダーマン軍がアステロイドを突破させた戦力はおそらく少ない。堅固な星系にこもればそれだけで相手ができる」
「ええ」
「ガズニー方面の軍は敵中にある」
つまり孤立しているということだ。彼等の問題点は実に多いものであった。
「パンフィクにハサン軍の艦隊が一個でも入ればそれで終わりだな」
「やはりオムダーマン軍の勝機は薄いです」
「しかしだ」
だがそのうえでモンサルヴァートは言うのであった。
「それでもなおオムダーマン軍はわからないのだ」
「わかりませんか」
「そうだ。彼が率いているのだからな」
ここで人について言及してきた。
「アッディーン元帥。彼はわからないぞ」
「そういえばアッディーン元帥の所在がはっきりしません」
ベルガンサはふとそのことに気付いた。
「彼が今何処にいるのか」
「見当がつかないか？」
「ええ。どちらなのでしょうか」
「愚問だな」
しかしモンサルヴァートはその言葉に笑ってきた。

「わかっておられるのですか」
「考えてみればいい」
そうベルガンサに述べる。
「卿が彼の立場ならばどちらに向かう？」
「どちらといいますと」
「ガズニーか国境か」
そう言葉を告げる。
「どちらだ？」
「そうですね」
ベルガンサはそれに応える形で少し考えてから述べてきた。
「ガズニーです」
「それはどうしてだ？」
「ガズニー方面での行動如何によって作戦が大きく変わるからです」
それが彼の答えであった。
「あの方面からの侵攻を成功させることこそがこの作戦の成功の絶対条件です。ですから」
「そうだな」
モンサルヴァートはその答えに笑ってきた。

## 第二十四部第五章　挟撃その五

「そちらに向かうな。私も同じだ」
これは指揮官の心理であった。作戦を成功させる為に最も重要な場所に自らを向かわせる。自分がやらなくては不安になるからだ。
モンサルヴァートは今それを見据えていたのである。
「彼はガズニー方面にいる」
それをはっきりと言い切った。
「間違いなくな」
「ようやくわかりました。それだからこそ」
「そうだ。彼はやる」
モンサルヴァートは力強い声で言う。
「何があってもな。おそらくもう動いているだろう」
「次の一手ですか」
ベルガンサも己の思考を巡らせる。そうしてアッディーンを追っていく。
「若しそれが可能ならばですが」
こう前置きしてきた。
「私でしたらまずパンフィクに向かいたいですね」
「そこを押さえるのだな」
「はい」
モンサルヴァートの問いに答えて頷く。
「あくまでそれが可能ならば、という前提が必要ですが」
「その前提は作るものだ」
「前提をですか」
ベルガンサはその言葉に顔を向ける。
「そうだ。それがないのなら場作る。違うか」
「この場合は」
「やり方はある」

モンサルヴァートは前を見据えて述べる。目の前にあるサハラの広大な星達を見ていた。
「面白い方法がな」
「それはどういったものでしょうか」
「パンフィクだ」
またパンフィクの名前が出る。
「そこにハサン軍が到着する前に辿り着き占領する。それだ」
「それは不可能では」
ベルガンサは彼のその言葉に顔を顰めさせる。
「幾ら何でも」
「艦隊の運用だな」
モンサルヴァートはそれに応えて述べた。
「それ次第だ」
「迅速に動き一気に、ですか」
「そうだ」
ベルガンサはそれを聞いて言う。モンサルヴァートはそれに返す。
「そして護りをなくしたハサン軍を倒す。それだけだ」
「言うのは簡単ですが」
彼は顔を曇らせている。曇らせながら言葉を続けていく。
「実行するのとはまた別です」
「いや」
しかしモンサルヴァートはまた言う。
「敵艦隊の場所にもよるがガズニーとパンフィクの場所は目と鼻の先だ」
次に言及したのはガズニーとパンフィクの距離について述べてきた。
「高速機動部隊を迅速に進めさせればな。いける」
「そうですか」
「果たしてどうなるかはわからない」
彼は言う。

「アッディーン元帥がどう動くのかはな」
「あくまで可能性の一つとしてですか」
「私ならばまずパンフィクを押さえる」
「そしてそこで決戦をですね」
「そう考えるが。果たしてどうかな」
彼等はハサンでの今後も見据えていた。見据えながら今後の戦いを見る。モンサルヴァートはアッディーンの動きをある程度は見ていた。しかしそれはあくまである程度であり全てではなかった。アッディーンは今彼の予想すら越えて塀を動かしていたのであった。

## 第二十四部第五章　挟撃その六

「果たして大丈夫なのか」
コリームアはガズニーから出撃していた。その中で彼は言うのであった。
「司令だけで」
「大丈夫なのであろう」
それにニアメが答える。
「司令にも充分な勝算がおありだからこそああ動かれたかと」
「勝算か」
「はい」
ニアメはまた答える。
「今我が軍にとっては時間が敵です」
「時間はない」
コリームアはその言葉を述べる。
「それはわかっているが」
「このままパンフィクに敵が入るとそれでかなりの時間を与えてしまいます」
「時間も敵だからだな」
コリームアはまた顔を顰めさせる。
「それを考えると致し方ないか」
「そういうことです。パンフィクはかなりの要害」
ニアメは述べる。
「あそこに一個艦隊でも入られればそれで我が軍はかなりの時間を消耗しその間に援軍が向けられてしまえば」
「我々は窮地に陥りかねない」
「そうです。司令としては何としてもそれを避けたいのです」
「それでも」
コリームアはそれでも言う。

「またしても。賭けに出られるとはな」
「そもそもこの作戦自体が賭けではないですか」
ニアメはここで笑った。賭けとは言ってもそれは勝算確実なものを見ているといった笑みであった。その笑みで以ってコリームアに語るのであった。
「ですから」
「毒を食わらばといった感じだな」
連合の諺が出て来た。
「それにしても」
「ただしです」
ここでまた述べる。
「賭けが確実ならばどうでしょうか」
「司令は勝算がおありだということか」
「そうです。ですから」
「お任せするか」
彼は決断を下してきた。
「ここはな」
「ええ。必ず勝たれますよ」
ニアメはまた言った。それと共に付け加えるのであった。
「それでですね」
コリームア自身に対して向けた言葉であった。
「我々もまた」
「行くか」
「そうです」
そう述べたうえで頷く。
「戦いは常に動いていますから」
「動いている、か」
コリームアはその言葉に思案を向けさせた。そのうえでまた言う。
「私は用兵が速いと言われるが。どうもそれを忘れてしまっていたのかもな」

「そうでしょうか」
「少しな」
首を捻って述べる。
「いかんな、これでは」
彼も苦笑いになった。
「そんなことでは。戦いは動いているというのに」
「何、今それを思い出されるのはいいことです」
しかしニアメはそんな彼をフォローして述べた。
「今ならば幾らでも、です」
「気付くタイミングがよかったのだな」
「そうです。まだ我が軍は兵を進めさせはじめたばかり」
出だしである。ここでことに気付くのと気付かないのとでは大きな差がある。ニアメはそのことをコリームアに告げたのである。ここにも深い考えが実はある。
「それではこのままパンフィクに進みましょう」
「そうだな。全艦隊に告ぐ」
コリームアは指示を出した。
「このままパンフィクに向かう。速度を少しあげていくぞ」
「それでは私も」
隣にいたニアメはうっすらと笑って彼に声をかけてきた。
「自分の艦艇に戻りますので」
「うむ。それではな」
「はい」
こうして彼等はそれぞれの艦隊を率いてパンフィクに向かうのであった。しかしその頃にはアッディーンは一個艦隊を率いてそのパンフィクに到着していたのだった。

## 第二十四部第五章　挟撃その七

実はここで彼はトリックを仕掛けていた。後続の艦隊は大々的に姿を見せさせていた。これは当初の予定通りである。
しかし彼の率いる精鋭一個艦隊はそうではなかった。姿を消して隠密裏にパンフィクまで達していたのである。これに気付いている者はいなかった。
「パンフィクに到着しました」
ガルシャースプが報告する。
「どうされますか？」
「進む」
アッディーンはその問いに一言で答えた。
「それだけだ。目標は前だ」
「前ですか」
「そうだ、抜ける」
彼は言った。
「星系の占領には取り掛からない」
「その先を目指されるのですか」
「そうだ、一つのルートだけを作る」
あくまで補給ルートの確保だけに留まるつもりであった。それをはっきりと断言した。
「そこを進んでいく」
「途中ルートを侵害される怖れがありますが」
パンフィクにいる部隊がである。それも充分に考えられることであった。しかしそれでもアッディーンは彼の作戦を採るつもりであった。
「それでもだ。まずは第二十七艦隊を叩く」
「それが先ですか」
「実戦力を叩けば後はどうにもなる」

こう主張する。8
「パンフィクにいる敵は僅かだ。あくまで敵艦隊がいてこそだ」
「だからですか」
「駄目か、それで」
「いえ」
しかしガルシャースプはそれには反対しなかった。
「ただ、リスクを伴いますね」
「そのリスクを確実にクリアーすることこそが戦争だ」
「はい、ならばこそですね」
「いいな」
ガルシャースプに顔を向けて問う。
「この場合最大のリスクは」
「補給線ではなく」
「敵の艦隊だ。まずは時間だ」
補給線を確保することは確かに戦争においては絶対のものである。しかしそれと共に時間もまた絶対のものであるのだ。彼はそれを見て今は時間を取ったのである。
今第二十七艦隊をパンフィクに入らせればそれだけで敵に時間を与える。そうなればガズニーだけに頼っている今の補給ラインも意味がない。まずは国境にいるハサン軍を倒し友軍と合流する。そうしなければ元も子もないのだ。今の補給体制の脆弱さも彼はよくわかっていた。だから今は時間を選んだのである。
「今は敵を倒さなければならないのだ」
「わかりました」
ガルシャースプはその言葉に答える。
「それでは」
「パンフィクは後続に任せておく」
そのうえで述べる。
「艦隊さえいなければな」
「堅固な防衛ラインも効果がないと」

「そうだ。要害はそれだけで要害とはならないこともある」
パンフィクこそがそうである。彼はそう言っているのだ。
「敵艦隊がいないならばな」
「そしてパンフィクを抜けて後は」
「国境だ」
次の目標も決まっていた。既に作戦は全てアッディーンの頭の中にあったのだ。
「第二十七艦隊とパンフィクの後でな」
「作戦は第三段階ですね」
第一段階がアステロイド突破、第二段階がガズニー占領である。この二つの段階を経て今度の段階で敵を倒すというのであった。
「そしてそれを終えていよいよ」
「そういうわけだ。だからこそ」
「行くのですね」
「そうだ。パンフィクへの距離は」
「あと三時間後です」
参謀の一人が答える。航宙参謀であった。
「三時間で到着します」
「ルートはわかってるな」
「無論です」
アッディーンのその言葉にも答える。モニターにパンフィクの宙図が映し出される。そこには各種の防衛ラインもあった。

## 第二十四部第五章　挟撃その八

そのうちの一つに赤いラインが敷かれる。それはパンフィクを一直線に抜けていた。アッディーンはそのラインを見据えていた。
「そこを抜け一気にだ」
赤いラインを指差しアッディーンは言う。
「突き抜けて先に進むぞ」
「了解」
「おそらく敵とはマスカートで会う」
「マスカートで」
パンフィクの向こうにある星系だ。アッディーンはそこで敵に会うことを予測していたのであった。
「パンフィクを抜けたならばすぐにだ」
「すぐに戦闘ですか」
「用意しておけ」
こう告げる。
「わかったな」
アッディーンはそのまま艦隊を進ませる。まずは予定通り赤いラインの防衛ラインを突破した。
パンフィクの防衛ラインの特徴は天然の要害を利用してそこに兵力を集中させ易くしているというものである。コロニーレーザーや機雷といったものは非常に少ない。艦艇が少ない戦力で多くを足止めできるようにしているのだ。宙形を利用して関所のようなもの、城壁のようなものを多数備えていると言うべきか。従って兵がいなければ空城に過ぎないのである。
アッディーンはその空城を一気に抜けた。止まることなく防護壁を集中砲火で崩し突き抜けていく。止まることはなくそのままマスカートに向かった。
「第二十七艦隊に連絡しろ！」

パンフィクの基地司令は突破したアッディーンの軍勢を見て叫ぶ。
「駄目です！」
しかしそれは部下によって否定された。
「間に合いません！」
「それでも構わん！」
それでも彼はこう言った。
「敵が向かっていることを知らせよ！いいな！」
「は、はい！」
こうして慌しく通信が出された。しかしその彼等のところに恐るべき報告が伝わったのであった。
「大変です」
「どうした？」
司令は報告してきた部下に問うた。
「今の突破で防衛ラインに大きな穴が開きまして」
「それはわかっている」
「それで」
報告する部下は恐る恐る述べる。
「敵が攻めて来たならば」
「防げぬか」
「はい」
部下は苦渋に満ちた顔で述べるのであった。
「今ガズニー方面から来ている敵に対してもこのままでは」
「修復を急がせよ」
こう言うしかなかった。
「よいな」
「わかりました。何としても間に合わせます」
「さもなければ第二十七艦隊が来ても守りきれぬ」
司令はそれを危惧していた。パンフィクの防衛体制がどういったものであるのかを熟知しているが故の言葉であった。その危惧が彼を動かしていたのである。

「応急でもよい。とりあえずはしろ」
「了解」
「後は第二十七艦隊だな」
「勝てればいいのですが」
「彼等にかかっている」
彼はこうも述べた。
「全てはな」
こうなってはもう祈るしかなかった。第二十七艦隊の勝利をである。勝利か敗北か。彼等にはそのどちらかしか許されない状況となってしまっていたのだ。

## 第二十四部第五章　挟撃その九

マスカート星系。今第二十七艦隊はそこに到着していた。ムワールフ中将はそこに到着するとすぐに部下達に問うてきたのであった。
「パンフィクからは何と言ってきている」
「パンフィクからですか」
「そうだ。我々が来るのを待ち望んでいるだろうな」
彼は部下の一人そう述べた。その声は極めて落ち着き冷静沈着なものであった。
「おそらくは。それに応えなければならないな」
「そうですね。それでは」
別の部下がそれに応える。
「パンフィクからの通信を調べてみます」
「うむ。パンフィクに到着したならばすぐに防衛に入る」
既に作戦は決まっていた。
「いいな、そこで敵軍を防ぐぞ」
「わかりました」
部下達はその言葉に頷く。
「時間はこちらにある」
彼も時間について言う。
「守りきればいいのだ。わかったな」
「はい」
「司令！」
ここでパンフィクからの通信を調べると言った部下が驚いて彼に言ってきた。
「どうした、騒がしい」
「大変です！」
その部下は血相を変えてこう叫ぶ。
「パンフィクが突破されました！」

「馬鹿な」
ムワールフはそれを聞いてまずはその言葉を信じなかった。しかしそれは顔には出さなかった。また声の色にも出しはしなかった。あくまで動揺していると思われるような行動は避けたのである。しかも半ば軍人として本能的にである。
「そんな筈が。彼等はまだ」
「ですが」
それでもその部下は言う。
「連絡が来ています。そして」
「そして！？」
「オムダーマン軍の艦隊が迫っていると」
「嘘ではないのか」
「司令！」
ここでまた部下の声がした。それは悲鳴になっていた。
「前方に敵艦隊です！」
「くっ、本当だったか！」
「こちらに迫って来ています！」
「何がどうなっているんだ、一体」
「どうされますか？」
部下達は狼狽しきった顔でムワールフに問う。彼等にとってはムワールフが頼りなのであった。司令とは頼られるべき存在なのだ。またそうなっている司令こそが軍においては必要なのである。そうした意味で彼は実に優れた司令官であると言えた。
「このままですと」
「全艦戦闘用意」
ムワールフは何とか理性を保っていた。その理性が彼に言わせた。
「攻撃目標は前方の敵艦隊だ。いいな」
「はい」
部下達もその言葉で落ち着きを取り戻す。そのうえで動きだした。
「敵艦隊との距離は」

「間も無く攻撃射程に入ります」
「よし、ならば」
ムワールフはその言葉を聞いて断を下す。次の指示を出した。

## 第二十四部第五章　挟撃その十

「攻撃用意だ。いいな」
「わかりました」
彼等は何とか落ち着きを保って迎撃に入った。彼等が対峙する敵艦隊はアッディーンが率いている艦隊であった。
「まずは彼等を倒す」
アッディーンはアリーの艦橋にいた。そこから正面のハサン軍を見据えていた。
「いいな」
「あれが敵の第二十七艦隊ですね」
傍らにいる参謀のシンダントが彼に問うてきた。
「そうだ。あれだ」
「そうですか。あれが」
「このまま進む」
アッディーンの言葉は簡潔であった。
「正面からな」
「正面からですか」
「そうだ、迷っている時間はないぞ」
「既に敵艦隊は戦闘態勢に入っていますが」
シンダントはまた彼に問うた。その言葉通りハサン軍は砲門を開いており戦う準備を整えていた。アッディーンはそこにあえて突っ込もうというのだ。
「構わない。こちらも砲門を開け」
しかしアッディーンはそれでも言う。
「いいな」
「わかりました。それでは」
「全艦砲門開け」
アッディーンは言った。

「攻撃目標は敵艦隊の中央」
「中央ですか」
「そうだ」
彼は言葉を続ける。
「中央に攻撃を集中させる。まずはな」
「それからどうされるのですか？」
今度はバヤズィトの言葉であった。アッディーンはその言葉に対して正面を見据える。見据えながら言葉を続けていた。
「既に頭の中にある」
アッディーンはこう返した。彼はここでは多くを語ろうとはしなかった。
「任せておけ」
「それでは」
「うむ。攻撃を仕掛けながら前進する」
彼はまた指示を出す。
「攻撃はあくまで一点に集中させてだ。いいな」
「はっ」
オムダーマン軍はアッディーンの指示に従い前に進む。両軍が攻撃に入ったのは同時であった。
両軍の激しい砲撃の応酬がはじまった。ここで一つ大きな差が出た。
ハサン軍第二十七艦隊は砲撃を全体的に加えていた。しかしオムダーマン軍は一点に集中させている。そこが彼等の明暗を分けた。
ハサン軍の攻撃の一点を突きぬけそのまま攻撃が加えられる。オムダーマン軍はハサン軍の一点を貫きそこに穴を開けた。
「もう一撃だ！」
アッディーンはすぐに次の攻撃命令を下した。その動きはハサン軍のそれよりも早かった。
「今度はあのポイントだ！」
別のポイントを指し示す。敵の攻撃が浴びせられる前にすぐに攻

撃に移っていた。
　ここに両軍の攻撃の差が出て来ていた。ハサン軍の攻撃も決して遅くはない。ムワールフの指示も迅速であったし将兵の練度もだ。だがムワールフは全面攻撃を仕掛けたのに対してアッディーンは一点に集中させた。そのうえ彼の指示の速さ、ポイントの指定はムワールフの速さをも越えていた。ここに勝敗を決するものがあった。
「撃て！」
「撃て！」
　攻撃が復唱される。またしても攻撃が放たれた。
　膨大な量の光がハサン軍を貫く。二撃目を受けたオムダーマン軍はその動きを止めてしまっていた。
「くっ、損害が！」
「一割を突破しました！」
　ムワールフのところに報告があがる。
「敵艦隊このまま来ます！」
「どうされますか！？」
「艦載機を出せ！」
　ハサン軍の艦載機はシームルグという。性能ではオムダーマン軍のイェニチェリよりも上であるとされている。その為ムワールフはここで艦載機を出すことを命じたのである。
「いいな！」
「了解！」
　オムダーマン軍の突撃を前にして艦載機を出そうとする。しかしそれはアッディーンの予想通りであった。彼は既にそれを頭の中に入れていたのだ。

## 第二十四部第五章　挟撃その十一

「やはりな」
表情を変えずに敵の動きを見ていた。
「ならば」
そう呟いたうえで部下に対して命じた。
「砲撃を艦載機に集中させよ」
「わかりました」
部下達は彼の言葉に頷く。
「艦載機を出したのはいい」
彼は言う。
「しかしそれに気を取られたな。動きが遅くなった」
「確かに」
その言葉にガルシャースプが応える。
「だからこそ今を狙うと」
「そうだ」
彼に答える。
「我が軍がまずは艦載機は出さない」
彼は言う。
「このまま突撃し」
「突撃し」
「周囲に砲撃を浴びせる。いいな」
「わかりました。それでは」
「うむ、全速力だ」
言葉に迷いはなかった。それこそが彼の頭の中にあるものであった。
オムダーマン軍はそのまま突き進む。同時に出て来たシームルグ達に砲撃を浴びせる。
「ミサイルもだ！」

アッディーンはさらに近付くとこうも指示を出した。
「ここで全てのミサイルを放て！」
「全てですか！」
「そうだ！」
はっきりと言い切ってきた。
「ミサイルはここで全て使い切るつもりで使え！いいな！」
「わかりました！」
皆それに頷く。その言葉通り今度はミサイルが一斉に放たれた。
シームルグを止められ動きが緩んだところで今度はミサイルであった。回避運動が間に合わずさらに損害を受けていく。ハサン軍の混乱はさらに増していた。
混乱するハサン軍の陣に突撃する。そのまま一気に突き抜ける。
ここでオムダーマン軍はまた攻撃を変えてきた。主砲ではなく副砲や銃座での細かい攻撃にシフトさせてきたのだ。正面の戦力には今まで通り主砲を向けながら。
一気に抜けた。混乱していたハサン軍にそれを遮ることは不可能であった。突き抜けて迅速な艦隊運動を示しながらハサン軍の後方に艦首を向けていた。
「司令、敵軍が！」
参謀達がムワールフに告げる。既にその言葉は悲鳴になっていた。
「後ろに出ました！」
「くっ、既にこちらを向いているか」
ムワールフはその敵を見て呻いた。見ればオムダーマン軍はまた攻撃に入ろうとしていた。
「何という素早さだ」
「どうされますか？」
「敵はまた向かって来ますが」
「どれだけ残っている」
「七割です」
部下の一人が報告する。

「一瞬でそこまでか」
「どうされますか？」
別の部下が問う。その顔を強張らせている。
「また攻撃を受けたならば」６
「既に艦載機もかなりの数を減らされた。このままでは」
この時だった。オムダーマン軍から通信が入った。それはすぐにムワールフにも伝えられた。
「何だ、今から戦いの時ではないのか」
「ですが実際に」
報告に来た部下が述べる。
「来ていますが」
「わかった。ではどんな内容か伝えてくれ」
「わかりました。どうぞ」
その部下は彼に通信を見せる。それは降伏勧告であった。
「降伏勧告だと！？」
ムワールフはそれを見て声をあげた。
「降伏勧告ですか」
「うむ、そうだ」
ムワールフは部下達に答えた。
「どうされますか？」
「まだ戦力は残っていますが」
「いや」
しかし彼はその言葉には首を横に振る。

## 第二十四部第五章　挟撃その十二

「最早戦いは無駄だ。こうなっては」
「降伏されるのですね？」
「そうだ。反対するのなら文句は勝手に戦うといい」
「いえ」
しかしそれに反対する者はいなかった。いきなり強烈な一撃を受けたのは大きかった。アッディーンの狙いもそこにあったのであろうか。
「私は司令と同じ考えです」
「私もです」
彼等は口々に言う。
「このまま戦っても無駄な損害を生むだけです」
「生きていればまた機会もあります」
彼等の考えには生きて虜囚の辱め、といった考えがない。捕虜になってもそれもまた軍人としては当然あることだと考えているのである。
「ですから」
「そうだな。それでは」
「はい」
「それでは」
皆その言葉に頷く。こうして第二十七艦隊はオムダーマン軍に降伏したのであった。
第二十七艦隊を下したアッディーンはすぐに彼等の武装を解除した。そのうえでそのことをパンフィク星系に言い伝えたのであった。
「さて、どうなるでしょうか」
シンダントはアリーの艦橋でアッディーンに問うた。
「この勝利が彼等にどう影響を及ぼすのか」
「私の計算通りならばな」

アッディーンはそれに応えて言う。
「これでパンフィクも降伏だ」
「降伏ですか」
「前からは我が軍の主力」
アッディーンは最初にそれを告げる。
「そして後ろからは我が軍だ。我が軍はパンフィクに入るべき敵艦隊を破った」
これが狙いであったのだ。アッディーンはパンフィクに入るべき援軍を見越して敵を倒したのである。その為の今の戦いであったのだ。
「既に守るべき兵がいないのでは。どうしようもあるまい」
「それでは」
「そうだ。これで我が軍の勝利だ」
彼は言う。
「この戦いでな」
「この戦いで」
「では司令」
バヤズィトも口を開いてきた。
「パンフィクは降伏に応じると」
「そうだ。これでな」
アッディーンは前を見据えていた。そのうえで言葉を続ける。
「パンフィクも抜けた」
「第四段階もですか」
第三段階は今の第二十七艦隊の撃破だ。彼の作戦はここまでは順調に進んでいたのである。そして次の段階に取り掛かっていたのだ。
「今それに入っている」
「この降伏勧告が」
「いいか」
また述べる。
「万が一に備える」

「万が一とは」
「パンフィクにまた進むぞ」
彼はそう告げた。
「後ろからな。総攻撃を仕掛ける」
「ですか」
「そうだ。降伏勧告に従わないのなら仕方がない」
それならそれで考えがあり取るべき手段もある。アッディーンは軍人だ。彼は軍人として複数の手段を用意していたのである。そういうことである。
「いいな」
「わかりました。それでは」
ガルシャースプがそれに応えた。
「進撃用意を整えておきます」
「戦いはまだある」
彼は言う。
「国境を占領するまでは寸分のミスも許されないからな」
「ですね」
ガルシャースプはその言葉に頷く。
「それでは」
「すぐにでも」
「全軍進撃用意」
アッディーンはあらためて指示を出す。
「降伏勧告が拒絶されたならば即座に向かうぞ」
「了解」
彼等は降伏した第二十七艦隊を武装解除して一部の艦隊で監視する。そうして主力でパンフィクに進む準備にあたっていた。その時だった。
「司令」
若い将校が彼のところにやって来た。
「どうした？」

「パンフィクから返信です」
「そうか、早いな」
アッディーンはそれを聞いて述べた。
「それで返答は」
「降伏です」
一言で返してきた。

## 第二十四部第五章　挟撃その十三

「降伏勧告を受諾すると。そう言っています」
「そうか、わかった」
アッディーンはその言葉を聞いて楽しげに笑った。
「これでまた一つ関門は越えたな」
「はい、これでまた一つ」
「まずは降伏した敵の将兵を後方に送れ」
彼が次に出した指示はこれであった。戦いが終わったならば速やかに捕虜を危険ではない場所に一時収容する。アッディーンは捕虜に対しては寛大な男であった。降伏した者に対して危害を加えるといった考えはなかった。
「ガズニーにな」
「わかりました。それでは」
「うむ、そしてだ」
さらに言葉を続ける。
「パンフィクで主力と合流するぞ」
「パンフィクでですか」
「そうだ、そこで合流する」
彼は今度はこう指示を出した。
「わかったな」
「わかりました、それではそのように」
「わかったな」
「はい」
命令が次々に伝えられる。アッディーンはその命令を伝えながら次の行動を視野に入れていたのであった。
「合流したならば国境への進撃を再開する」
「そして後ろから敵を狙う」
「その通りだ、いいな」

琥珀の目が輝いていた。その先に見ているのは。
「戦いはまだはじまったばかりだ」
アッディーンは先にあるものを見据えながら述べる。
「まだ掴むべき勝利は多い」
「その勝利を全て掴み」
「戦争そのものに勝利を収める」
言葉が強くなる。その言葉もまた先を見据えていた。
「いいな」
「わかりました。それでは」
「うむ、それではまず」
「パンフィクに降伏勧告を」
予定通りパンフィクに降伏勧告が出された。第二十七艦隊の援軍がなくなったパンフィクに選択肢はなく彼等は程なく降伏した。降伏勧告を受けるとアッディーンはパンフィクに入りそこで自身の軍と合流した。彼等はそこで手を握り合うのであった。
「よし、すぐに進撃を再開する」
アッディーンは合流を果たすとすぐに全軍に告げた。
「わかったな」
「国境から敵軍が迫ってきているようですが」
「わかっている」
アッディーンはそれに応える。
「彼等も破る。そのうえでさらに進むぞ」
「わかりました」
「それでは国境まで」
参謀達がそれに応える。早速集結を進めていく。
「一直線に」
「一直線にですか」
「そうだ。しかしだ」
アッディーンはここで別のものに目を向けてきた。それは決して忘れてはならないものであった。

「ガズニーの守りはどうなっている？」
「ガズニーですか」
「そうだ、守りは備えておけよ」
アッディーンはそう部下達に言う。
「ガズニーを失くしては全てが終わるのだからな」
「そのことですが」
「どうした？」
参謀の一人の言葉に。彼は顔を向けてきた。
「どうやらハサン軍には余裕がないようです」
「余裕がか」
「はい。どうやら西方にかなりの戦力を向けているようなので」
「ハサン西方か」
彼はそれを聞いてその理由をすぐに見抜いた。
「成程な。西方でもか」
「詳しい状況はまだわかりませんが激戦になっているようです」
「だろうな」
参謀の一人のその言葉に応える。
「シャイターン主席も順調なようだな」
「おそらくは」
「ならば我々もだ」
それを聞いたうえでまた述べる。
「いいな」
「わかりました。では早速」
「行くぞ」
彼は全軍に命じた。
「進む先は一つだ」
「ええ。それでは」
「補給が終わり次第、いや」
アッディーンは言葉を換えた。
「進みながらだ。いいな」

「わかりました。それでは」
「うむ」
アッディーンは国境への進撃を開始した。一つの成功を立ち止まるものとは考えずそのまま先へと兵を進めていく。その先にあるものを見据えながら。国境は風雲急を告げようとしていた。

第二十四部　完

２００７・３・１２

# 第二十五部第一章　国境の動揺その一

国境の動揺

サハラでのことはサハラだけでは済まない。各勢力、各国家にも影響を及ぼす。それは当然ながらマウリアに対しても同じことであった。

マウリアは連合と同じくまずは自分達の権益を確保した。そのうえでこの戦争の行く末を見守っていたのである。

「まず御聞きしたい」

マウリア中央議会において野党の議員がクリシュナータ率いる与党に対して質問していた。マウリア風の建物の中にあるその議会はイギリス形式であり左右に分かれてある程度の距離を保って席がある。その議員はそこでクリシュナータ達を前にして立って問うていたのである。

「今のサハラでの戦いでの備えはあるのでしょうか」

「備えといいますと」

国防大臣であるラーンチが問い返した。

「何のことでしょうか」

「言うまでもありません」

その議員はラーンチに顔を向けた。そのうえでまた言うのであった。

「今サハラは激しい戦闘の中にあります」

「はい」

ラーンチはまずその言葉に頷いた。

「確かに」

「それへの備えであります。それは万全でしょうか」

「少なくとも彼等は我々へ攻め込むことはありません」

ラーンチは穏やかにそう述べた。

「それはおわかりかと」

「無論です」
議員もそれはわかっている。サハラはサハラ内部でだけ争ってきたし今でもそうだ。マウリア政府も各国とは不可侵協定を結んできている。その為サハラでの戦禍がマウリアに及ぶことはなく今もそれは変わらないのだ。
「しかしです」
彼はそれでも言う。
「それでも問題はあるではありませんか」
「難民ですか」
「左様」
議員はラーンチにまた述べる。
「それへの備えは。大丈夫なのですか？我が国に大量の難民が押し寄せるということは」
戦乱の結果多量の難民が出る。これはよくある話だ。実際にサハラではそうしたことが度々あった。その中で最も深刻な問題になったのはエウロパのサハラ侵攻であった。これは連合にまで及びサハラ全土に及んだ問題であったのだ。
「ないでしょうか。ハサンは実際に我が国と国境を接していますし」
「それですな」
別の野党の議員もそれに気付いて声をあげてきた。
「若し彼等が我が国にまで流れてきたならば」
「深刻な問題が生じますな」
「御安心下さい」
しかしラーンチは彼等にこう答えた。
「それへの手は既に打っております」
「それは一体」
最初に問うた野党の議員はその言葉に顔を向けてきた。黒く輝く目で彼を見据えている。
「まずは条約です」
それが彼の最初の返答であった。

「条約ですか」
「既に各国と条約を結んでおります。難民が発生した場合は」
「それはよく存じております」
議員もそれには納得した顔で頷いてきた。

## 第二十五部第一章　国境の動揺その二

「ハサン、オムダーマン、ティムールとの条約は」
「はい」
「この間のことでありましたから」
三国それぞれとの間に結んだ難民に関する保護条約である。ついこの前に議会でも承認したばかりである。それで忘れていない筈がなかった。
「条約で難民は彼等が保護することになっていますので」
「ですがまだ問題があります」
「それは何でしょうか」
「難民であります」
議員はこのことをあえて強調してきた。
「彼等がどういった行動に出るかといいますと予想もつかないわけであります」
そう述べてラーンチに顔を向けてきた。
「そうではないでしょうか。彼等も必死であります。ですから」
「それについても御心配なく」
だが彼はあえてこう述べる。
「心配無用ですか」
「既にサハラとの境に兵を配備しております」
ラーンチはそれについても言及してきた。言葉は簡潔だがそれだからこそ説得力のあるものだった。
「彼等を以って難民への備えとしております」
「雪崩れ込むのを阻止すると」
「その通りです」
そう答える。
「ですからそれについては御安心下さい」
「いえ、まだそれはできはしません」

しかし議員はまだ言う。
「問題はそれで全て終わるわけではないでしょう」
「といいますと」
「難民の人権です」
それについても言及してきた。
「どういった扱いにするのか。まさか戦場に送り返すのですか？」
「いえ」
ラーンチはその言葉に首を横に振ってきた。
「そのつもりはありません」
「ではどうされるのですか？」
「一時保護します」
それが彼の返答であった。
「保護ですか」
「そうです、戦乱が収まるまではこちらで保護をして然る後に」
「成程」
議員はまずその言葉に頷いた。そのうえでまた述べた。
「それでですね」
「ええ」
さらにラーンチに問う。
「保護する場所は何処でしょうか」
「マウリアとハサンの境の星系を考えています」
ラーンチはすぐにそう返した。
「これは問題はないと思いますが」
「確かに。その通りであります」
野党からの言葉としてはいささか粘りのない質疑であった。こうした議会での話は往々にして揚げ足取り、重箱の隅を突付くものになるからだ。これは姑息にも見られる場合もあるがやはり民主議会での特徴の一つではある。それを真っ当な戦術と見ると姑息な小手先の技と見るかは時と場合、そして見る者とそれを使う者による。
「では問題はないのですね」

「既に問題がないように国防省としてはしております」
ラーンチは胸を張ってそう述べる。
「ですから御安心下さい」
「一応はわかりました」
議員は何かと引っ掛かる言葉を出してきた。
「ですが。成功しますかな」
そのうえでこう言ってきたのである。
「果たしてそう上手くか」
「そうでなければしませんが」
ラーンチも負けずとこう言い返す。
「どうでしょうか」
「ふむ、確かに」
議員はその言葉にまた頷いてみせた。無論ただ頷くだけではない。

## 第二十五部第一章　国境の動揺その三

「それはありますな。ただしです」
「何か」
「私はそれでは不十分と考えますが」
「ほう」
ラーンチは彼の言葉に目を向けてきた。そのうえで問う。
「それは何故でしょうか」
「難民達自身の問題です」
彼はそう返してきた。その目が鋭く光る。
「彼等が普通の市民であるならいいですが。そうでない場合も考えられます」
難民と一口に言っても様々なケースがある。よくある何とか船で流れ着く者達もいれば軍艦でやって来る元兵士や素性の知れない者達もいる。兵士ならまだ素性がはっきりしているがいいが問題は素性の知れない者達である。犯罪者がどさくさに紛れて潜り込んでいるケースが考えられるのだ。当然彼等はマウリアに入るとそこに潜り込んで悪事をすることが考えられる。議員はそれを危惧しているのである。
「それはどうでしょうか」
「それは厳しくチェックします」
ラーンチはそう返してきた。
「市民達も将兵達もその身元をチェックし」
これは可能である。各国から市民達のデータをあらかじめ受け取っているからである。人口統計の際にそうした身元チェックも行われているのである。これにより連合はその四兆という人口の統計を出しているのである。なお勢力圏外の惑星に不法に脱出しそこに定住している者達は統計に入れられてはいない。だが彼等にしろ百億程度が存在しているのが実情だ。

「それを使って怪しげな人物の侵入を防ぎます」
「抜かりはないというわけですな」
「その通りです」
胸を張って答える。
「これで如何でしょうか」
「素性の知れない者は入れないというわけですな」
「致し方ないかと」
そう述べる。
「難民もまた資格がいるものですから」
素直に難民と言われて彼等を救助するわけではないということである。どの場合でも考えられることであるが『自称』であることが往々にしてあるからだ。これはネット等を見てもわかる。『自称』何とかを名乗って自分達の思うがままにしようとする輩が氾濫していたりする。
「そこのチェックは厳しくしていくべきかと」
「治安対策として、ですね」
「内務省の管轄でもあるのでそこは細かく調整を進めています」
「その結論は」
「間も無く出ます」
こう議員に返す。
「ですから御心配なく」
「わかりました。それでは」
議員はそこまで聞いて納得して頷いた。それから述べた。
「私の質疑を終わらせて頂きます」
「はい。お疲れ様でした」
まずは紳士的に終わった。この議員にしても特に難癖の類をつけるつもりもなかった。だからこれで納得したのである。話は程なくといった感じで終わった。

## 第二十五部第一章　国境の動揺その四

しかし国会での討議そのものは続く。内政にも話は及んでいた。
「近年のマウリアの財政ですが」
ここでも国防省が関係する。
「防衛費の上昇が不自然ではないでしょうか」
「といいますと」
またラーンチが出て来た。すっと議論の場に出る。
「どういったことでしょうか」
「はい」
問題を提起してきた別の野党の議員がそれに応える。
「今までは防衛費の上昇は殆どありませんでした」
彼は言う。
「ですが近年は二桁の上昇を続けています。これはどういった理由でしょうか」
「それは軍の近代化です」
ラーンチは一言述べてきた。
「近代化ですか」
「いえ、これは言葉のあやです」
しかしここで言い換える。
「正確に言うならば現代化です」
「現代化と」
「その通りです」
そう答えて述べる。またその目が鋭くなってきていた。
「今まで我がマウリアは軍事を軽視してきました」
これには理由があった。平和だったからだ。平和ならば軍備に金も注意も向けることが少なくなる。その為財政に占める割合も少なかったのである。
「ですがその間にかなり旧式化していましたので」

「兵器の刷新を行っていると」
「その通りです」
はっきりと答える。
「だからこそ防衛費が上昇しているのです。それはデータにもはっきり出ています」
「成程。透明性も確かであると」
「何も不透明にする必要はありませんので」
こうも付け加える。
「我々は純粋に兵器を新しくしているだけですから」
「それで伸びているのですね」
「それも今年までです」
そのうえで言ってきた。
「今年でその兵器の刷新が完了します。ですから」
「予算の上昇はなくなるのですね」
「上昇はなくなりますが費用はそのままです」
だがラーンチはこう述べてきた。冷静な声で。
「そのままとは」
「維持費や人件費の関係です」
「人件費ですか」
「軍もまた人がいなくてはどうにもなりません」
彼は言う。
「彼等の待遇も考えておきたいので。具体的には厚生施設の充実です」
「御言葉ですが長官」
その議員はここで自分の目を光らせてきた。その目でラーンチを見ていた。
「何か」
「そちらでも旧式化が進んでいると言われるのですか？」
「その通りです」
ラーンチはそれにも答える。実際に厚生施設も人が作ったもので

あり旧式化、老巧化するものである。永遠にあるものではないのだ。
「ですからそれを再構成する為にも」
「ふむ、わかりました」
千年前の日本の議員の中にはこうしたものに費用を使うなと言い出しかねない者達もいた。自衛官のことを全く考えていなかったのである。だがそれは大きな間違いだ。何故なら自衛官もまた人間であるからだ。
「それではそのようにされるといいでしょう。ただ」
「ただ。何でしょうか」
「この一連の国防省の刷新ですが」
その議員はまた述べてきた。
「連合の影響を強く受けていると見受けられるのは気のせいでしょうか」
「いえ、気のせいではありません」
ラーンチもはっきりと述べてきた。
「この刷新は連合軍をモデルにしています。それは認めます」
「やはりそうだったのですか」
「はい」
こくりと頷いてみせる。
「しかし。全てを入れているわけではありません」
「といいますと」
「マウリアはマウリア、連合は連合ということです」
そう述べてきた。
「連合軍は確かによいモデルとなります。ですが」
「ですが？」
「マウリアとは別の世界ですので」
連合とマウリアは同盟関係にありその交流も深く長いがそれでも全く別の世界なのである。それは言うまでもないがラーンチはあえて言うのであった。

## 第二十五部第一章　国境の動揺その五

「そのまま取り入れられないところもあります」
「つまりマウリア風にアレンジすると」
「その通りです」
また述べる。述べる言葉に力がこもっている。
「ですからここは」
「ふむ。成程」
その議員はその言葉に頷いてきた。それからまた述べる。
「それでは軍備に関しては妥当な改革であると」
「そうです。この予算もまた然りです」
「わかりました」
そこまで聞いたうえでようやく頷いてきた。
「そういうことでしたら。ただ」
「ただ。何か」
「聞いた話では連合軍に派遣しているマウリアの若手将校の間で戸惑いの声も出ていると聞いております」
流石にはいそうですかと引き下がるわけではなかった。対立関係にあるからこれは当然であった。与党と野党であるからこれは妥当であった。
彼はここで連合軍とマウリア軍の間に起こっているトラブルについて述べてきたのだ。話の本題はむしろここにあると言ってもいいのである。
「それは事実でしょうか」
「はい、事実です」
ラーンチはそれを正面から受けたのであった。
「紛れもなく」
「左様ですか」
具体的には生活や風習に関するものである。連合の風習はマウリ

アにとっては実にわかりにくいものであった。これは連合にも言えることであるが彼等はマウリアの者であるからマウリアの視点から見ているのである。だからこうした話になっているのである。
「ですがそれも計算のうちです」
「といいますと」
「連合軍、ひいては連合というものを知る為です」
ラーンチは今ここではっきりと言い切った。無論これは連合もまた認識していた。そのうえでの言葉であった。だからこその留学なのである。
「参考とするにあたってこれは問題ないでしょう」
「問題ないのですか」
「ないのです。むしろトラブルがあった方がです」
大胆な言葉であった。その言葉もまた彼の計算のうちであったのだ。
トラブルを越えてそこから理解を得るのもまたそうなのだ。彼はそうしたことも含めて若手将校達を研修に行かせているのだ。
「何かとわかるものです」
それを自分でも述べる。
「トラブルを肯定されると」
「悪いのでしょうか。それが乗り越えられるものであるのですから」
「全面的な衝突にはならないと」
「ええ」
そこまで完全に読んでいた。彼の計算は深いところにまで及んでいた。
「むしろ何もない方がおかしいですしね」
「連合軍の全てを知るおつもりですか」
「そのつもりです」
大胆な言葉だった。その言葉もまた深い読みに基くものであった。
「知ることができる限りは」
「ううむ」

連合の者達もそこにいた。議会の傍聴席にいたのである。主にジャーナリスト達も存在していたが彼等は今のラーンチ達の言葉を聞いて目を鋭くさせていた。
「なあ」
その中の一人が同僚に声をかける。
「何気にとんでもないこと言ってないか？」
「そうか？」
しかしその同僚はその言葉を聞いても何ともないようであった。
「別にそうは思わないが」
「思わないのか」
「ああ」
同僚はむべもなくまた答える。
「わかりきっているだろう？何の為の留学か」
「まあな」
彼もそれはわかっていた。わかっているからこその言葉であった。

## 第二十五部第一章　国境の動揺その六

「ただの交流で送るわけがないしな」
「そういうことさ。それにだ」
ここで筆記に変えてきた。議会にいるので迂闊な言葉は出さないようにしてきたのだ。それだけの気配りができる男であるということであった。
『大事なことまでは教えないだろう』
『そういえばそうか』
彼もそれはわかった。同じく筆記で返しながら頷く。
『それは常識か』
『そういうことだ。向こうもわかってるさ』
『スパイでもしない限りはな』
「知ることは力です」
ラーンチは言う。
「我々はその力を得る為に連合軍を学んでいるのです」
「それでですな」
議員はそのラーンチにさらに問う。
「その連合軍との軍制を取り入れ」
「はい」
「連合軍との関係はどうされるおつもりでしょうか」
今度はこの問題について問うてきた。問題は実に多いのであった。
「どうされるとは」
「今後何か予定がおありですか？」
ラーンチの目を見据えた。そのうえでの問いであった。
「如何でしょうか、それに関しては」
「共同訓練を予定しています」
ラーンチはこう答えた。
「連合軍と共同の」

「それでさらにお互いを学んでいくわけですな」
「そのつもりです」
そう言葉を返す。
「如何でしょうか、既にこれは連合軍のプランにも我々のプランにも発表されていますが」
「先月のものですな」
「そうです」
実はこれについては既に発表されていた。議員はこれについて聞く為にあえて知らないふりをしてみせたのである。ここが中々巧みであった。
「両国の境においてです」
「わかりました。ならば関係はより深いものにしていくと」
「その通りです」
その言葉にも頷く。
「ですから緊張を促すものではありません」
「ふむ、わかりました」
議員はそのまで聞いて納得して引き下がった。
「そういうことでしたら」
「おわかり頂けたようで何よりです」
儀礼的な言葉が交あわされた。何はともあれ話は終わったのであった。連合のジャーナリスト達はそんなやり取りを見てまた話をはじめた。
「小競り合い、か？」
「そこまでもいかないだろうな」
そうヒソヒソと話し合う。
「ここは」
「そうか。なら問題はないな」
さっきのジャーナリストが同僚の言葉を聞いて呟く。
「それだと」
「そうだな。しかしいつも思うが」

同僚はここで思案の色を浮かべながら彼に対して述べる。
「何だ？」
「いや、マウリアの議会のことだ」
彼はそれについて言及してきた。
「マウリアのか」
「そうだ。いつも思うがな」
「ああ」
「連合のものとは全く違うな」
「確かにな」
彼は同僚の言葉を聞いて議会の中を見回す。見ればあちらこちらにマウリアのものをイメージさせるものがある。連合中央政府のそれ程巨大ではないが何処か落ち着かない。そうした雰囲気の中に彼等はいたのである。
「雰囲気も政治家の話し方もな」
「放送されるエウロパ議会ともまた違うな」
「ああ。完全にマウリアだ」
同僚はこう表現してきた。
「この感じはな」
「そうだな。これがマウリアだな」
同僚の言葉に頷く。連合とは明らかに違うものを感じているからこその言葉だった。彼等はまだ周囲を見回している。やはり連合の議会ではなかった。
「何か落ち着かないな」
「向こうは連合で同じことを言ってるぞ」
同僚は彼にそう突っ込みを入れた。
「多分な」
「そんなものかね」
「そんなものさ。お互い様ってわけでね」
同僚はまた述べる。述べながらまた何かを考えていた。
「マウリア人にとってはこの雰囲気が落ち着くんだろうな」

「落ち着くのか」
「だろう？まあここで話をしても仕方がないさ」
ここで話を止めてきた。
「丁度昼だしな。何か食べに行こうぜ」
「ああ、もうそんな時間か」
腕時計を見ると確かにそんな時間だった。それを見て食事に行くことにした。
「じゃあ何食う？」
「カレーでどうだ？」
同僚は彼にこう提案してきた。
「カレー？どっちのだ？」
しかし彼の言葉は今一つ要領を得ないものであった。カレーと言われてどっちのだと問うところにそれが出る形となっていた。
「いや、どのカレーか。マウリアか？それとも」
「タイのか日本のでどうだ？」
彼にまた提案する。提案しながらその目を向ける。
「どっちかで」
「じゃあ日本のやつだな」
彼は少し考えながら述べる。日本人ではないがそれでも日本のカレーが好きなのだった。なおマウリア人の間では日本のカレーはあまり評判がいいとは言えない。
「シーフードカレーでな」
「こっちじゃ結構高いけれどいいのか？」
「何か慣れたものをな。食べたいんだ」
そう同僚に告げる。
「別にいいだろ、それでも」
「ああ、別にな。じゃあ行くか」
「よし」
彼等は席を立つとそのまま議会を後にして食事に向かう。そこで日本料理のレストランを探してカレーを食べに向かうのであった。

## 第二十五部第一章　国境の動揺その七

彼等が席を立った頃には議会の話は一旦終わりになっていた。中断の時間の間マウリアの議員達はのんびりとした様子でそれぞれの部屋に戻り部屋で食事を採ったり食べに行っていた。その中でクリシュナータは自分の昼食を食べ終えてラーンチと午後の打ち合わせを行っていた。

「何か今回は野党の追及が弱いな」

「国防関係だからでしょうか」

二人はクリシュナータの部屋にいた。そこで応接用のソファーに向かい合って座り話をしている。部屋の中はカレーの香りが充満している。マウリアの者達にとっては慣れた香りであったが他の国の者達にはそうではない場合も多い。強く残るということもありこれはこれでかなり厄介な香りであるがマウリアの者達にとっては自然の香りである。連合の者達はマウリア人からはカレーの匂いがすると言うこともある。

「やはり」

「国防だからか」

クリシュナータはそれを聞いて少し困った顔になった。

「関心がないのは」

「私はそう見ていますが」

「ふむ」

ラーンチの言葉を聞いて考える目になったがそれでも困った顔は変わらない。どうにもそこに憂いというものを感じているようであった。

「どうにも。財政や通商と比べて関心が薄いのは」

「心配ですか」

「野党だからというのは理由にはならないだろう」

クリシュナータはこうも言う。

「我々の中にも国防を軽視する者がいるが」
「注意は促しておりますが」
「中々進んではいないか」
「残念ながら」
ラーンチもここで困った顔になってきた。彼もクリシュナータも同じ表情になっていたのは偶然ではない。
「やはり戦争も脅威もなかったせいでしょうが」
「自覚がないのだな」
また首を傾げて言う。
「サハラとの最低限の備えだけをしていればいいというのか」
「そうやって千年を過ごしてきましたから」
「千年か」
その言葉をあらためて述べる。
「神々の世界においては瞬きする時間ですらないが」
「はい」
「人間の世界ならば少し時間があるな」
「十五回程の転生ですな」
「そうだな。それだけ転生していればぼやけてしまうか」
考えながら述べる。
「仕方ないのかもな」
「しかしです」
ラーンチは困った顔のままま述べる。
「脅威はサハラだけではないというのに」
サハラでの戦火がこちらに及ぶことだけを避ける、マウリアの国防の関心は長い間それが殆どであった。海賊やテロリストへの対策もあったがそれでも連合程ではなかったのが実状である。
「そうです。脅威は」
「連合もだ」
ここで連合の名をはっきりと出してきた。
「同盟国でもあり脅威でもある」

「それには気付かないのでしょうか」
「噂によるとだ」
クリシュナータはまた言ってきた。
「連合は各国に対するそれぞれの防衛計画を考えているらしい」
「各国の、ですか」
「簡単に言うとだ」
彼はさらに言葉を続ける。

## 第二十五部第一章　国境の動揺その八

「アメリカが二十世紀に考えていたカラープランのようなものをな。考えているらしいな」
「あれをですか」
ラーンチはその言葉を聞いて目を光らせてきた。アメリカをブルーとしてそれぞれの国をそれぞれの色で暗号として戦略を練る。そこには日本もあればイギリスやフランス、メキシコもあった。アメリカはこれに基いて第二次世界大戦や様々な戦略を立ててきていたのである。
「防衛的、攻撃的なもの双方をな。国防省は考えているようだ」
「あの日本の貴公子がですか」
「そうだ、八条義統がだ」
八条の名前が出た。彼の名はもう連合はおろかマウリアやサハラの間にまで広まろうとしていた。エウロパでは既にその名を知らぬ者さえいない。
「彼の手によって連合の軍事体制は大幅に変わった」
「中央軍を設立して間もないというのに」
「見事なものだ」
感嘆の言葉を漏らした。
「連合の国防意識は我々とは変わらないのだがな」
悪く言うと平和ボケになる。連合もマウリアも戦乱というものを遠い彼方のものにしか考えられなくなっているのだ。連合はエウロパとの戦争があったがそれまでは内戦一つなかった。これはマウリアも同じである。実はエウロパもサハラ北部への侵攻までは戦争を経験してはいない。人類の戦争はサハラに極端なまでに集中していたのである。
「今もそうか」
「そうですね」

ラーンチはクリシュナータの言葉に頷いてきた。頷きながらテーブルの上の紅茶のカップに手をやる。
「その点では連合も我々と同じです」
「国防意識が低い」
クリシュナータはまたそれを述べた。
「それが問題か」
「しかし連合はそれを改革しあのような巨大な軍を作り上げた」
「それを脅威とは感じないのか」
クリシュナータにはそれが鈍感に見えるのだ。彼は連合軍の存在にプレッシャーを感じていた。それを今ラーンチに見せていたのである。
「連合は決して攻撃的ではありませんし」
これも大きかった。豊かな連合は好き好んで他の勢力と衝突する勢力ではない。これは長い歴史からも言えることであった。その国や勢力の歩んできた歴史はそのまま信頼にも成る場合があるのだ。
「それもあるのでしょう」
「確かにな」
クリシュナータもそれに頷く。
「しかしだ。それでも」
「脅威であることには変わりない」
「だからこそ連合軍のことも知っておきたい」
彼は言う。
「そしてサハラとの国境で国境警備も知っておきたいな」
「より深く」
「そう、深くだ」
それをまた言う。あえて。
ここで二人は紅茶を一口飲んだ。それから話を再開させる。
「連合との境には今はあえて最低限しか備えさせてはいないが」
「それが賢明でしょう」
ラーンチはクリシュナータにそう答えた。

「連合とは友好関係にあるのは事実ですから」
「そうだ」
この前提は変わりはしない。やはりマウリアにとって連合は友好勢力なのである。しかしその前提があってもまだ警戒する必要があるのであった。

## 第二十五部第一章　国境の動揺その九

政治においてはどれだけ友好関係にあったとしても全面的な信頼を築くということはない。それは有り得ないことだ。個人と個人の関係ではないのだ。彼等はそう認識していた。

「それでも、だな」

「そういうことです。我々が警戒しなくていいのは」

「境を接していないエウロパだけだ」

「そうです。まず彼等は脅威ではありません」

ラーンチは述べる。述べながら連合から頭を離さない。

「連合と違い」

「そうだな、境を接していない彼等だけは」

それだけで脅威となるかならないか、その差もまた大きい。国境を接していればそれだけで緊張が生まれる。これはこの時代においても同じである。

「何もありません」

「彼等は彼等で厄介な存在だがな」

「目的の為には手段を選べませんし」

選ばないのではなく選べない。エウロパは閉鎖された場所にあるからだ。勢力圏は狭く連合に圧迫されている。ここでも連合が出て来る。

「ですから」

「サハラ侵攻といいな」

「連合は無限の開拓地があります」

連合にあるのはそれだけだ。エウロパにはない。この大前提もまた存在している。

「彼等はそれがある故に攻撃的にならなくてもいいですが」

「全く以って連合は複雑だな」

クリシュナータはあらためて連合について述べる。

「脅威ではあっても友好関係にあり」
「そのうえ多くのものを持っている」
ラーンチも言う。
「その彼等とどう対するかが我が国の命運を分けるのも事実です」
「読みにくい脅威です」
「それが不思議でもある」
クリシュナータはふとした感じで漏らした。
「中にある国々は分かり易い国が多いのだがな」
「それは確かに」
マウリアにとっては実に分かり易く馴れた相手であるのだ。米中露といった大国ともそれぞれ交流がある。これ等の国々はマウリアにとっては実に分かり易い国である。行動パターンがはっきりしているからだ。
「横暴な国もあればのらりくらりとした国もある」
日本のことである。マウリアにとってはどちらかと言うと日本の方がやりにくかったりする。それを口に出すことはないが。
「しかしどれもがキャラクターがはっきりしているな」
「そうです」
ラーンチはその言葉にも同意した。
「彼等の思考も行動も手に取るようにわかりますが」
「連合として一つの勢力となると」
「わかりにくいものがあります」
「そうだ。だからこそ」
クリシュナータはここで言葉の調子を強くさせてきた。
「連合に対しては慎重に、だな」
「決して悟られることなく」
「話を進めていくとするか」
「ええ」
二人は頷き合う。これで話は決まった。
「それでだ」

クリシュナータはあらためて口を開いてきた。
「今日は一日議会にいるが」
「それが終わりましたら」
「今年の防衛計画の発表だな」
「国防費に関しましても」
「それについてはどうだ？」
ラーンチに対して問うてきた。
「我が国の国防費の上昇率について連合の反応は」
「一応報道はされています」
ラーンチはそう述べてきた。
「その報道は正確なものですが」
「我々を脅威とは感じていない、そうだな」
「ですね」
その問いにこくりと頷いてきた。
「彼等は我々の真意には気付いていません。ただの近代化のせいだと思っているようです」
「気付いたとしても」
クリシュナータは腕を組んだ。そのうえでまた言葉を続けてきた。

## 第二十五部第一章　国境の動揺その十

「どう思うかな」
「案外こう言い出すかも知れません」
ラーンチは彼に応えて言ってきた。
「何故我々を脅威に思うのか不思議でならない、と」
「だろうな」
クリシュナータはラーンチの今の言葉を聞いて面白そうに笑った。これは今ここで彼等が予想していることそのままである。やはり彼等に自覚はないと見ていた。
「自分では本当にわからないからな」
「鏡があれどもそれを見るとは限りません」
ラーンチは言った。
「それが壁にあると気付かない場合もありますし」
「鏡か」
鏡という言葉を聞いたクリシュナータの目がぴくりと動いた。
「はい。それが何か」
「いや、ふと思ったのだが」
彼は述べてきた。
「連合は我々にとって鏡かも知れないな」
「連合が、ですか」
「我々の至らない部分をそのまま向こうに見せてくれる」
こう述べるのだ。
「軍にしろそうだな。確かにいい勉強になっている」
「ええ、それは」
国防の責任者として頷くべきものがあった。まさにその通りであった。それは午前の国会の答弁を見てもわかることであった。連合から学んでいることこそがその証拠であった。
「確かにそうですね」

「そうだな。それに」
さらに言葉を続ける。
「備えもさせてくれる。軍事だけでなく経済も」
「学ぶべき存在でもありますし」
「その部分も教えてくれる」
それを考えると有り難くもある。話は実に複雑なものがあった。
「有り難いと言えば有り難いか」
「その彼等は我々をどう見ているのでしょうか」
「さてな」
この問いには今一つ要領を得なかった。
「どうかな。案外胡散臭いものと考えているのかもな」
「胡散臭い、ですか」
「そうかもな」
考える顔と目で言うのであった。
「そもそも我々は最初から別の存在だったからな」
話は根が深い。連合設立の時にマウリア、当時はインドが入るのかどうかという議論が行われた。結局インドは参加を宣言せずにそのまま独自の勢力となったという経緯があるのだ。彼等は連合に入るにはあまりにも文明的に異質であり過ぎたのである。
「お互いに根本から違うものがあまりにも多い」
「神々にしろ」
「仏教だったか」
クリシュナータはまたふと言葉を出してきた。
「ヒンズー教の一派の」
「ああ、あれですな」
ラーンチもそれに応える。
「ゴータマ＝シッダルタが興したあの」
「そう、ヴィシュヌ神の生まれ変わりのな」
マウリアにおいては釈迦はそう考えられているのである。人であるが神の生まれ変わりの一つである、マウリア独自の思想形態の一

環である。
「あれをヒンズーの一派だと言ってもわからないしな」
「また面妖な」
ラーンチにとってもマウリアの者達にとってもそうとしか言えないことであった。
「あれをヒンズーとは考えられないのですか」
「やはりそう思うか」
「はい」
彼は真顔でクリシュナータに答える。
「ヴィシュヌ神の生まれ変わりであるというこのことこそが何よりの証拠でしょう」
「そうだ。そもそも彼等はヒンズーを理解できないようだしな」
「ふむ」
それを聞いてまた考える顔になった。
「哲学が違うのはわかっていますが」
「我々のそれはウパニシャッド哲学だ」
紀元前からあるマウリアの哲学だ。簡単に言うとバラモン、そしてヒンズーの教理でありその中から仏教も生まれたのである。マウリアをマウリアたらしめているものだ。
「彼等はそれではないからな」
「連合には様々な哲学があります」
ラーンチは連合の多様性を指摘してきた。

## 第二十五部第一章　国境の動揺その十一

「ですからこれが連合のものとは言えません」
「所謂二十世紀の実存主義哲学もあるな」
十九世紀に欧州で生まれたものである。キルケゴールやニーチェにはじまる。神の存在を肯定するものと否定するものの二種類があるがどちらもキリスト教がそのルーツにあるのは否定できない。連合にその実存主義が流れ込んだのである。
「あとは」
「宗教ではさらに多彩です」
「多彩どころではない」
クリシュナータは言った。
「エジプトにケルト、メソポタミアの古い神々もいるな」
「はい」
その言葉に頷く。
「彼等の哲学もまた」
「哲学は一つではありません」
ラーンチはその言葉を出してきた。出しながら述べる。
「連合そのものが多様でありますし」
「その多様な連合を見極める為にもな」
「軍人だけではなく留学そのものも進めていくか」
彼はさらに言葉を続ける。
「よりな」
「連合を学びそれをマウリアに活かし」
「同時に彼等を知る。敵を知るには」
彼等の言葉には政治と戦略があった。彼等はただ交流や親善、学生達個人を高める為に留学を推し進めているのではないのだ。そこには深い読みがあるのである。
「敵の中に入る」

「連合もそれは気付いているでしょうね」
「気付いている人間がいるのは間違いない」
クリシュナータもそれは読んでいた。連合とて愚かではない、彼は連合を侮ってはいなかった。相手を侮ればそれは必ずや致命的な失態につながる。それをよくわかっていたのである。
「それでもあえて受け入れているのだろうな」
「器が大きいということでしょうか」
「学びたければ学べ、そういうことだな」
確かに度量はある。しかしそれだけではない。何故ここで多くの留学生を入れているのか。連合にも考えがあるということだ。
「自分達の力を見せつける」
「思えば露骨な誇示であります」
相手に自分の力を見せる為に留学を受け入れる。だがここでもまた駆け引きがある。話はかなり複雑で迷路のようになっていた。その迷路の中で連合もマウリアも互いの腹を探り合っていたのだ。
「しかも肝心なものは教えない」
「既に技術供与されているものや彼等にとっては常識のシステムばかりだな」
「はい」
機密を教えたりはしない。そこが老獪なのだ。マウリアと比べれば歴史の浅い連合であるがそこにある知恵は既に老獪の域に達していた。
「食えない話です」
「御馳走はそう簡単には食べられないものだ」
こう評してきた。
「中々な」
「それを食べるには」
「それなりの知恵がこちらにも必要だ」
そういうことであった。連合とマウリアは化かし合いをしているのであった。まさに狐と狸であった。その化かし合いは技術の争奪

でも行われていたのだ。
「彼等のことを全て知るのはな」
「思えば簡単なのですがね」
続いてこう述べたラーンチであった。
「連合に入ればすぐにでも」
「入りたいのか？」
しかしクリシュナータはここでその彼に問うてきた。
「連合の中に」
「いえ」
しかし彼はそれを否定してきた。すぐに首を横に振る。

## 第二十五部第一章　国境の動揺その十二

「それはないです」
「そうだな」
クリシュナータは彼のその言葉を読んでいたかのように納得した顔で頷いてきた。
「彼等と我々はあまりに違い過ぎる」
「はい」
ラーンチは頷く。
「そういうことだ」
「そのまま入れば何かと不自由を感じることになっていたでしょうね」
「その通りだ」
その指摘にも答える。
「国家形態も何もかもが異なるのだからな」
連合とマウリアは完全に別世界である。それをよく踏まえたうえでの言葉であった。クリシュナータはその言葉を自分で述べてからさらに話を続けてきた。
「入ればお互いにとって悪いことになる」
「そうです。ですから今まで入らなかったのはよいことだと思っています」
「これからもだ」
クリシュナータはこう言葉を返した。
「我々はあくまで連合とは同盟国であるべきだ」
同盟国に留まっておく、それが狙いであった。マウリアはそうして連合と密接な関係にありながら独自勢力として動いてきた。それはマウリアの戦略であったのだ。
「これからもな」
「はい、これからも」

ラーンチは応える。
「よき関係としていきたいものです」
「友人としてな」
「思えば友人には事欠きません」
ラーンチはふとこう例えてきた。面白そうに笑みを浮かべている。
「三〇〇もいるのですから」
「そうだな、彼等は一つではないのだから」
連合は一つの勢力ではない。その中にある国家だけでも三〇〇存在している。国会外にも様々な勢力がその中に存在している。それをわきまえたうえでの言葉であった。
「友人は多いということになるな」
「ええ」
「それは喜ぶべきか」
友人としての言葉では当然ながらない。それだけ勢力が多ければいざという時には互いを混乱させて漁夫の利を狙うことも可能だ。マウリアは過去そうして連合各国との関係において利益をあげてきた歴史もある。そうしたことが実に巧みな国でもあるのだ。
「それでだ」
そしてまた言う。
「サハラだが」
「次は彼等ですか」
「そうだ、どうやらかなり大きく動くようだな」
その目が再び鋭く光りだした。そこにはあるものを見ていた。
「三国がな」
「オムダーマンがハサンに対して奇襲を仕掛けています」
「アステロイド帯を突破したそうだな」
「はい」
クリシュナータのその言葉にこくりと頷いて答える。
「その通りです。そのまま国境に向かっています」
「考えたものだ」

オムダーマン、ひいてはアッディーンの知略に感嘆の言葉を漏らす。
「普通に国境を突破するのがオーソドックスなのにな」
「それだと損害は無視できないものになっていたでしょう」
ラーンチは自分のビジョンからこう述べてきた。
「下手をすればオムダーマン軍の存亡すら左右するまでに」
「それだけ堅固なのだな、ハサンが築いた防衛ラインは」
「そうです」
その問いにも頷く。頷くラーンチの顔が真剣なものになっている。

## 第二十五部第一章　国境の動揺その十三

「あれは簡単には抜けられません。いえ、普通にやったのならばオムダーマン軍では不可能でしょう」
こうまで言い切る。
「連合軍位でないと」
「そもそもそれだけの戦力があればとうの昔にサハラを統一しているか」
クリシュナータは連合の名前が出たところで呟いた。サハラには連合程の勢力が存在したことは今だかってない。そこまでの人口を養えないのも大きい。
「ではあれはサハラでは最大だな」
「そうです。ハサンはそれをオムダーマンにあえて向けてきました」
ラーンチはまた述べる。
「その持てる力を動員しまして」
「しかしそれは奇襲により破られた」
クリシュナータの言葉が峻厳な響きを帯びたものになった。
「果たしてこれがどうなるかな」
「確かに大きな動きです」
ラーンチもそれは認める。
「ですがさらに大きな動きになるのはまだ先でしょう」
「先か」
「戦いはまだはじまったばかりです」
今度はこのことを指摘してきた。
「こちらへの影響もまだ未知数ですしね」
「未知数か」
「そうです。不確定要素があまりにも多いのが現状ですし」
「ふむ」
そこまで聞いてまた考えを巡らせるクリシュナータ。彼はそれで

も解決案を探っていた。
「マウリアとしてはだ」
まずはマウリアの立場を述べた。
「連合と同じだ。ハサンがこのまま安定してくれる方が有り難い」
「そうですね。ハサンとの間には多くの権益の保障を結んでいますし」
「それを反故にされることもない」
それだけの信頼関係もできているのだ。オムダーマンやティムールともいざという時の為に話を進めてはいるがそれでもハサンとこのまま関係を維持しておきたいのである。
しかしサハラの事情はまた違う。連合でもマウリアでもない為相互の影響が及ぶことはないのだ。介入すれば事態が泥沼化する危惧もある。だから連合もマウリアも一千年の間介入することはなかったのだ。
そうした事情もあり連合もマウリアもオムダーマンには何もしないのだ。あえて不介入を決めたうえで話を見守っているのである。だからこそ不確定要素も多くなっているのだ。
「国境でのことがそのまま戦局に影響すれば」
「オムダーマンの勝利になります」
「オムダーマン政府とは既に話がついているが」
「それでも」
彼等にとっては不確定要素であり続けている。それが問題であった。
「まだ完全に知ったわけではないしな」
「そうです。どうやらアッディーン副大統領は信頼できる人物のようですが」
「少なくともシャイターン主席よりは」
「そうです」
シャイターンに対する認識は彼等は同じだった。危険な人間と見ていたのだ。

「彼はいざとなれば裏切るぞ」
「裏切るな」
クリシュナータはそう見ていたがこれは当たっていた。既にシャイターンのことは彼等も情報を集めていた。集めたうえで全てを知っていたのだった。
「彼に関しては決して隙を見せられない」
「隙を見せ、そして彼にとって利益があるならば必ず牙を剥く」
ハサンの要人の多くの死の原因も知っていた。そのことは彼等をして警戒を抱かせるのに充分であったということだ。シャイターン自身もそれを承知のうえでそうしたことを実行したのである。彼にとっては利益こそが大事でありそこから得られるものだけを冷徹に考えていたのであった。あくまで冷徹な合理主義者であったのだ。
「それを考えるとアッディーン副大統領はな」
「信頼できますか」
「彼にはこれといって野心はないな」
クリシュナータは見抜いていた。
「むしろ自然に立場が出来てきている。それが彼だ」
「勝利と栄光が彼を上にあげていく」
「そうだな。それで」
「将来どうなるかな」
アッディーンの将来に目を向ける。既にオムダーマンの副大統領であり軍事だけでなく政治にもかなり関わりそこでも実績をあげだしている。彼もまたサハラにおいて絶大な人気を集めている英雄なのであった。

## 第二十五部第一章　国境の動揺その十四

「彼とシャイターン主席は」
「我々にとっては」
「有益な存在になるか、それとも」
「それもまた未知数です」
まだあらゆることがわかっていないのだ。未来のことは見られない。それは人が神ではない証拠の一つでありだからこそ人であるということでもある。その見られない未来を探って今彼等も話をしているのである。
「無欲であってもその存在が有害になる場合もありますし」
「そうだ」
これもまた真実である。無欲だからすぐに善なるとは限らないのだ。ヒトラーもまた野心家ではあったが無欲な人間であった。それでも他国の人間にとってはあまりにも危険な男であったのだ。
「それを考えてもやはりハサンがこのままいくか統一してくれるといいのですが」
「そうだ。ハサンのことはよくわかっているしな」
よくわかっていることもまた重要であったのだ。彼等はハサンのことはよくわかっていた。だからあの国による統一をも望んでいたのである。
「援助するか」
クリシュナータはふと述べた。
「彼等を」
「いえ、それは」
しかしそれはすぐにラーンチによって止められた。
「止めた方がいいでしょう」
「いいか」
「はい。連合も援助をする気はないですし」

「援助してもそれは資金的なものに留まるしな」
兵は送れない。それをすれば将来に禍根を残す。それも見極めているのだ。
「それをオムダーマンやティムールに気付かれてもまずいか」
「ですから」
「止めておくか」
クリシュナータはまた言った。考えはそこに至った。
「やはり今まで通り」
「はい。それが宜しいかと」
「サハラはサハラか」
そこまで話したうえで顔をあげた。
「これまで通り」
「その場その場に応じた戦略を研究していきましょう」
そうクリシュナータに告げる。
「彼等に関しては」
「わかった」
そこまで聞いたうえで頷いた。
「では国防部にそれを任せたいが」
「既に取り掛かっています」
ラーンチは不敵な笑みを浮かべて述べてきた。
「読んでいたということか」
「はい」
そのうえで答える。
「その通りであります」
「わかった。ではこの件は任せる」
それを聞いて完全に彼に任せることにした。その決断の早さは流石であった。
「それでいいな」
「わかりました。それでは」
「うむ。それでだ」

彼はさらに話を続けるのだった。
「そろそろまた議会の時間だが」
「早いですな」
二人は時計を見て話をする。それへのチェックも怠らない。マウリア人は時間への概念が連合とは全く違うがそれでも時間を意識してはいるのである。時折連合の者達を驚愕させるようなことを言い出したりもするが。
「もうそんな時間だとは」
「時間は待ってはくれない」
哲学的な言葉を述べる。
「だから我々は時間に合わせないとならない」
「悠久の時の中を」
「そうだな。時間は永遠だが人の一回の生は限られている」
ここでも輪廻の思想が出る。この思想はインドからはじまったものであり仏教においても主軸の一つとなっている。輪廻転生の中で全ての生はある。それがマウリアの思想なのだ。
「生は忘れずにな」
「そうあるべきですな。それでは」
「うむ」
二人は同時に立ち上がった。もう紅茶はなくなっていた。

## 第二十五部第一章　国境の動揺その十五

「行くとするか」
「ええ」
二人はそのまま部屋を後にして議会に向かう。その頃議会では食事を終えた連合の記者達があくびをしたり背中を伸ばしながら席に座っていた。
「まだ来ないのか」
「相変わらずだな」
口々にそう言い合って退屈な顔をしていた。既に議会がはじまる時間をとうに過ぎているので議会に来ている議員の数がまばらでまだはじまってはいないからだ。
「はじまるのが遅いな」
「マウリアだからな」
ここに一旦帰結する。
「時間の概念が俺達とは全然違うからな」
「議会でもかも」
誰かがそれに突っ込む。どうやらここに気手間も無いらしい。
「当たり前だろ」
それに同僚達が突っ込みを入れる。
「マウリアだからな」
「他はもっと凄いぞ」
「ああ、わかってるよ」
その新入りは苦い顔で応えてきた。
「八時つったら朝の八時とかな。そういうのもあったよ」
「マウリアでの時間じゃいいんだよ」
それだけ時間の概念が連合とは違っているのである。
「それで文句言ってもよ」
「前世がどうとか言われたんだな」

「そうだよ」
憮然とした顔で答える。
「何だよ、前世って」
「だからそれがマウリアなんだよ」
そう返事が返ってきた。
「連中はな。理解しにくい」
「というか不可能なところがあるよな」
別の同僚が笑いながら述べてきた。
「あれはな」
「何かえらいところに来たみたいだな」
新入りの記者はそう言ってぼやくのであった。
「全く。どうなるのかね」
「まあえらいことにはなるな」
「えらいことかよ」
「ああ」
全くフォローがないのにかなり辟易した。こうした場面では普通はあるものだからだ。
「けれどそれなりに楽しめるぜ」
「テーマパークの絶叫マシンか？」
「いや、お化け屋敷さ」
またしてもフォローのない言葉であった。
「化け物は出ないけれどな」
「無茶苦茶だな、おい」
「向こうは向こうでこっちをそう思っているかもな」
彼等のやり取りには何もフォローをしようという気持ちがないのが明らかであった。それは新入りの記者も似たようなもので何処か達観しながらもふてくされていた。
「困った話だ」
「お化けといってもあれだぜ」
まだそっちの話は続いていた。

「こっちのお化けじゃないからな」
「やれやれだな」
また憮然とする。憮然としながらも話を聞くのであった。
話を聞きながら議員達がやって来るのを見ている。非常にまばらで時間が三十分を過ぎていてもまだまばらな有様であった。それを見ていると明らかに普通ではなかった。
「来たぜ」
その中で同僚の一人が言った。
「主席がさ」
「やれやれ、やっとかよ」
新入りの記者は彼の姿を見て呆れた顔で溜息をつく。
「どれだけ待たせるんだ」
「だからそれがマウリアなんだよ」
「今日は早い方だろ」
「まあな」
その言葉には頷く。頷くことができたのは経験故であった。
「いつもはもっと遅いからな」
「そうだろう？けれどこれはこれで楽しいよな」
「ああ」
同僚達は呑気なものであった。そこに理由があるのも彼はわかってきていた。
「落ち着かないが何か楽しめるよな」
「少なくともこののどかさは連合にはないよな」
彼等はそう話をする。顔はくつろいだものになっていてその中で話をする。
「これがいいっていうかな」
「腰を落ち着けて見てみるか」
新入りも何かを納得したようであった。
「ここはな」
「いやいや、まだわかっていないな」

「マウリアは奥が深いぜ」
彼等は新入りのその言葉を聞いてもそう言うのだった。何か蕎麦のような奥の深い求道的な食べ物を味わう顔になっていた。そうしてマウリアの者達を見ていたのであった。
「じゃあその奥の深さ」
新入りは腹を括った顔で言った。
「見てやるか、何処まであるのかな」
議会が再開される。彼はそれを見ながら今マウリアと本格的に対峙するのであった。彼の長い長い戦いのはじまりでもあった。

## 第二十五部第二章　国境の異変その一

国境の異変

ガズニーが陥落し第二十七艦隊とパンフィク星系の降伏はハサン中枢にも伝わった。太子はそれをすぐに父である王に伝えたのであった。

二人は今王宮の王の間にいた。太子は玉座に座る父王の前に控えていた。

「敵の侵入を許したというのだな」

「はい」

そう父に述べる。

「ガズニーから侵入してそこから国境に向かっております」

「あのアステロイドを抜けたというのか」

王はそれを聞いてまずは眉を顰めさせた。

「信じられぬな」

「ですが事実です」

しかし太子はまた父に述べるのであった。その顔は険しく深刻な気配に満ちていた。

「その証拠に今国境にいる我が軍は危機に陥っています」

「国境には百個艦隊がいたな」

それは王も知っていた。知っているからこそ今王も険しい顔になっていた。

「その百個艦隊が危機に陥っているというのか」

「今彼等は国境とガズニー方面から攻撃を受けようとしています」

太子はまた述べた。

「至急対処が必要かと」

「わかった」

王はそれを聞いてすぐに断を下した。いや、断を任せたのであった。

「そなたの好きなようにせよ」
そう息子に述べてきた。
「よいな」
「わかりました」
右手を恭しく胸に添えて一礼する。
「それではこちらで対処させて頂きます」
こう述べたうえでまた言う。
「ただ、指揮官はダビデブ元帥ですので」
「彼ならば正しい判断を下すというのだな」
「はい」
そう父王に答える。
「彼にはかなりの権限を与えています。ですから」
「ふむ」
それだけ彼を信頼しているということであった。太子にとって彼はテロの中で残っている数少ない信頼の置ける将であったのだ。だからこそであった。
「ここは彼に一存します。ですが」
「ですが。手を打っておくのだな」
「無論です」
しかし最悪の事態には備えておく。これは最低限の備えであった。
「中央部にいる予備兵力に救援に南下するよう言い伝えます」
「いざという時の為にか」
「左様です。如何でしょうか」
「ではそのようにせよ」
彼は我が子に全てを任せることにしていた。だから決断は変わらなかった。
「よいな」
「わかりました。それでは」
「国境を失うことになるな」
王はそこまで聞いたうえで暗い顔をして述べてきた。

「これは」
「残念ですが」
太子はまた畏まって父王に対して言う。
「すぐにそれを取り返す所存でありますが」
「頼むぞ。そなただけが頼りだ」
「勿体なき御言葉」
「いや、まことだ」
謙遜する我が子に対して述べる。
「今は少しでも多くの者が欲しいというのにな。だが」
「過ぎたことを悔やんでも仕方がありません」
一連の事故、その実態はティムールのテロにより多くの人材を失ってしまったことを言っているのだ。これは彼等にとっては非常に大きな痛手であったのだ。今それが影響してオムダーマンに押されているという面もある。高級将校という人材の面で今ハサンは深刻な状況にありその負担が他ならぬ太子にかかってきているのである。
「それよりも少しでも」
「備えをしておくのだな」
「はい、言うより動けであります」
こう返してきた。

## 第二十五部第二章　国境の異変その二

「ここはやはり」
「内閣や議会はどうなっているか」
「そちらもかなり人材が払底しています」
　これもティムールのテロによるものだった。ティムールはそうしたテロによりハサンそのものの運営能力、事務処理能力等の低下を誘い、それを成功させているのである。
「今の事態を解していない者が多いのが現状です」
「困ったことだな」
「ですから意見の統一にいささか時間がかかっております」
「いざという時は大権を使うのだ」
　王はそう太子に告げた。
「摂政として。よいな」
「既に非常事態宣言と総動員令を発し私が権限を握っていますが」
　あくまで戦時体制だからである。そうした国家の危機には明確な指導者が必要でありハサンでそれが果たせるのは彼しかいない為の処置であった。
「それを完全に理解できていない者もまたいるのです」
「厄介なことだ」
　王も嘆くしかなかった。
「人が減ったものだ」
　そのうえで息子である太子に顔を向ける。
「今はそなただけが頼りだ」
「勿体なき御言葉」
　父王に対して頭を垂れる。
「いや、真にだ。我がハサンの手足となる者達がここまでいなくなるとは」
「おそらくは」

「今はそれを言ってもはじまりはしない」
王もこの事態はどの者の手によるものかはわかっている。しかしそれ以上にそのことを言っても詮なきことだということもわかっていたのである。わかっているからこそ言いはしないのであった。
「よいな」
「わかりました」
「それでだ」
そう話したうえでさらに話を続ける。
「どちらに重点を置いて戦略を立てているのか」
そこが肝心であった。オムダーマンかティムールか。どちらに戦略対象の中心にしているかであった。優先順位をつけずして戦略は立てられはしない。
「オムダーマンです」
太子は即答してきた。
「彼等か」
「はい、まず第一にティムールはその国力がオムダーマンと比して低いものです」
「うむ」
王は太子のその言葉に対して頷いてみせた。相手を考えるにあたってその力を見極めるのは戦略の常識である。彼は今それを忠実に述べてきたのだ。そのうえそれを既に実行に移している。このことも大きかった。
「それを考慮すると共に西方の情勢を考えました」
「彼等だな」
「そうです」
毅然として述べてきた。
「とりわけアヤグーズを」
「彼女ならばやってくれるな」
「少なくともかなりの活躍はしてくれるでしょう」
王も太子もアヤグーズに関してはかなりの信頼を置いていた。そ

れだけアヤグーズの力とその主であるアルコルジの才を頼りにしているということであった。それは言葉にもはっきりと現われていた。
「彼女がティムールの足止めをしてくれている間に我々は」
「オムダーマンを叩く」
「その通りです。確かにアステロイドは破られましたが対処は可能です」
「ダビデブ元帥ならば」
「ええ。彼に任せます」
こうまで断言する。断言すると共に父の顔を見てきた。
「そのうえで援軍を送り」
「万全の備えとする」
「戦いはまだこれからです。我等の力を見せてやりましょう」
「頼むぞ。せめてわしが動ければいいのだが」
「父上」
嘆きを見せてきた父王に対し声をかけてきた。

## 第二十五部第二章　国境の異変その三

「それ以上は」
「おっと、済まぬ」
自身の子に言葉を指され言うのを止めた。どうやら彼はあまり身体がよくないようであった。見れば顔色がよくはない。何処かが悪いようである。
「そうだったな」
「そうです。それでは私はこれで」
「官邸に戻るのだな」
我が子に問う。
「これから」
「その予定です」
彼もまた父王に対して答える。
「まだ仕事が残っていますので」
「そうか。では頼むぞ」
「わかりました。それでは」
「うむ。いや、少し待ってくれ」
王は最後に彼を呼び止めた。
「何か？」
「連合とマウリアだ」
その二国について言及してきた。王の目は再び考えるものになっていた。
「彼等は今回の戦争についてどういう動きを見せているのだ？」
「相変わらずです」
太子はそう答えた。
「相変わらずか」
「はい。権益の確保以外には興味を示しません。不介入です」
「何時までもか。彼等にとって我々の世界は化外の地であるという

ことはわからないのか」
「そのようです。彼等は我々にとって別世界でしかありません」
「だから何があってもよいのだな」
人間は基本的に自分達の中だけで過ごしたいものである。それは連合も同じであり彼等にとっての世界とはあくまで連合なのである。サハラは常に彼等とは全く別の世界であり何があろうとも構わない存在であった。エウロパのサハラ侵攻には中央政府も各国も激しい抗議を行ったがそれでも実際に何かをするということはなかった。彼等にとってはサハラはあくまで外の存在だったからだ。何が起ころうとも平気なのである。
「勝手な話だ」
「ですがそれは我々も同じです」
太子はそう父王に述べてきた。
「我々にとって連合もマウリアも別世界です」
「そういえばそうか」
王はその言葉にふと気付いた顔を見せる。
「わしも連合にはあまり考えることがないな」
「あくまで外の存在ですね」
「そうだな」
あらためて太子の言葉に同意して頷く。
「お互い様か」
「はい。それを考えると我々もまた」
「彼等と同じだな」
話しているうちにわかってきた。しかしだからといって何かができるというわけではない。そういう話ではなかったのだ。やはり連合とサハラの違いであった。
「考えればわしも連合にいれば同じことをしたか」
「それは私もです」
太子も答える。
「彼等の場所で何があろうとも。構うことはなかったでしょう」

「そうだな。我々は我々か」
またそのことを述べた。

## 第二十五部第二章　国境の異変その四

「彼等の場所で何があろうとも。構うことはなかったでしょう」
「そうだな。我々は我々か」
　またそのことを述べた。
「やはり」
「それをオムダーマンやティムールに当て嵌めていくと面白いものがわかります」
「考えがわかるか？」
「ある程度ですが」
　そう述べる。
「ではこれから彼等はどうすると思うか」
「まずはティムールですが」
「うむ」
　太子の予想に耳を傾ける。傾けながら話を聞くのであった。
「まずはアヤグーズの攻略に取り掛かるでしょう。あの国を」
「そうか」
　それにまず答える。
「あの地は戦略上の要地ですから。まずはあの地を攻略してからでしょう」
「言われてみればそうだな。まずはあの地だ」
　王はその言葉に確かな説得力を感じていた。そうした意味で太子の読みは当たっており実際にシャイターンはアヤグーズに攻撃を仕掛けていたのである。
「あの国を攻略し」
「アヤグーズには援軍を送ります」
　太子はそのうえで言ってきた。
「彼等はそこで食い止めます」
「わかった。ではティムールの動きは読めるな」

「ええ」
これに関してははっきりとしていた。だが完全に読んではいなかった。これは彼がシャイターンではないせいであったが当然のことであった。そのことが読み落としを生んでいたのであった。
「ですからあの地で足止めをします」
「よし」
その言葉に頷く。そこでまた言葉を続ける。
「次はオムダーマンだが」
「やはり挟み撃ちです」
それを指摘してきた。
「ガズニー、そして国境から」
「その後は」
「北上です」
この読みは当たっていた。むしろそれしかなかった。
「我々の今いるこの場所を目指して」
「ガズニー方面への備えは最低限だな」
「あの方面から兵を向けるのは今の我々にとっては困難です」
彼はそう王に告げた。
「その余裕があればやはりオムダーマンの主力とティムールに向かわせます」
「そうだな」
王もそうする。これもまた同じであった。
「我々とて兵は無尽蔵ではないのだからな」
「何事にも限りがあります」
「その通りだ。しかし」
王は難しい顔で言葉を続ける。
「幾らあっても足りないものだな、全てが」
政治というものに関してはそうである。戦争も同じだ。資金と人員は幾らあっても多過ぎるということはない。圧倒的な力を持つ連合ですらそうであり彼等も資金と人員が足りないと感じているのだ。

あくまで主観的な見方であり他から見ればそうではないがどうしてもそう思えるものであるのだ。
「資金と人員が倍になってもこう思うものかな」
「おそらくは」
太子は述べる。
「それが三倍になっても四倍になっても」
「同じなのだろうな」
「はい、どうしてもそうなります」
「今あるだけで戦うことが大事なのだな。やはり」
「はい」
今度は答える。答えるその顔は思慮深いものになっていた。
「その為にも今は」
「うむ、頼むぞ」
こうして太子は己の執務に戻った。そうして仕事に向かうのであった。

## 第二十五部第二章　国境の異変その五

自身の官邸に戻り執務にかかる。そこであることに気付いた。
「待て」
書類を持って来た文官に声をかけた。
「何か」
「費用が多過ぎないか」
「そうでしょうか」
その文官は太子の言葉に目をしばたかせてきた。自覚はないといった顔である。
「的確だと思いますが」
「的確か」
「はい、やはりこれだけの費用がかかるものだと思います」
太子にそう述べる。述べるその顔も目も特に隠したものではなく純粋に財政面から語っているのがわかる。やましいことがないのがわかる。
「違うでしょうか」
「君はそう思うのだな」
「はい」
やはり淀みなく答えてきた。
「違うでしょうか」
「いや」
思うところはあった。しかしそれをあえて隠してこう返した。文官は彼が何を言いたいのかもわからないといった様子であった。
「違わない。ではこのまま行ってくれ」
「わかりました」
文官はその言葉に一礼する。一礼してからまた述べた。
「国防省とも調整済みです」
「国防省ともか」

「はい、彼等もまた同じ考えでした。これだけの費用は最低限かかると」
今彼等が話をしているのは戦時における国防費全体に関してである。太子はそれを見て費用が多いのではと問うているのだがその文官には自覚がないのである。彼は財務省の者であり財務省として彼に報告にあがったのである。
「意見は一致しました」
「一致したのか」
「そうです、今は非常時です」
やはりその言葉には何の淀みもない。彼はあくまで純粋に見積もりや計画等に基いて述べているだけなのである。しかし太子の目には気付いてはいない。
「ですから」
「どうしてもというのだな」
「そうです」
また答える。
「ですから。これでいきたいと考えます」
「ふむ。しかしだ」
太子はここで話を深くさせてきた。
「これでは教育費や社会保障費等を圧迫するな」
「致し方ありません」
文官は険しい顔になったがそれを押し殺した声で述べた。顔には出ているが言葉では殺していた。彼としても苦渋の決断であったことがわかる。
「今は戦時なのですから」
それをまた述べる。太子は目の前に立つ彼のその顔をみながら話を聞いているがあえて表情は消している。ここにも彼と今目の前にいる文官の差が出ていた。
「仕方ないのです」
「やはり仕方ないか」

「残念ですが」
「わかった」
太子はそこまで聞いて一旦は納得した。そのうえで頷く。
「それではこれでいい。受け取っておこう」
「後は殿下がチェックされて出されるだけですので」
「私がチェックしていいのだな」
「是非共」
はっきりとそう述べる。
「宜しくお願いします」
「わかった。ではこちらでチェックさせてもらおう」
太子は落ち着いた顔と声で述べる。静かな声でありそこには表情というものを一切見せはしない。
「それでいいな」
「はい」
こうして話は終わった。文官は再び一礼してその場を後にする。
太子は一人になるとまずは大きく息を吐き出したのであった。
「十二分にやってくれている。だが」
溜息と共に述べる。
「限界があるのも事実だな」
そのことがを痛感せざるを得なかった。その後国防費は同じ内容でありながらその費用を大幅にスリム化させたものが太子によって出された。ハサンは彼の双肩に全てがかかっているといった状況であったのだ。

## 第二十五部第二章　国境の異変その六

太子が首都であれこれと苦心しているその時に前線ではダビデブが会議室において難しい顔をしていた。その顔で参謀達に対していたのであった。
「パンフィクが陥落したか」
「はい」
「そして第二十七艦隊も」
「降伏したのだな」
「左様です」
「このままでは」
参謀達はダビデブに述べる。ダビデブはそれを微動だにせず彼等の話を聞いていたのだ。
「ここに来るのも時間の問題だな」
「どうされますか、司令」
参謀達は彼に問うてきた。
「一応はガズニー方面に部隊を送っていますが」
「しかし。パンフィクが陥落した今は」
「守りきれるとは限らないな」
「その可能性は少ないかと」
「パンフィクがなくては」
全てはパンフィクがあってのことだったのだ。しかしそれがなくてはどうしようもない。彼等のガズニー方面における戦略は根本から破綻してしまっていたのである。
「わかった」
ダビデブは彼等の言葉を聞き断を下した。
「ガズニー方面に向かわせている部隊にすぐに通信を入れよ」
「帰還ですね」
「そうだ、それも全速力でだ」

険しい顔でそう述べる。
「躊躇していてはオムダーマン軍に追いつかれ倒されるぞ。いいな」
「わかりました」
「それでは」
参謀達はそれに頷く。そうしてその中の一人がすぐに退室して何処かに向かった。ダビデブはそれを見届けた後でまた言葉を続けるのだった。
「彼等が戻ったならばだ」
「はい」
参謀達は彼の言葉に顔を向ける。それぞれの目の光が彼を見据えていた。
「すぐに国境を下がるぞ」
「国境をですか」
「そうだ」
彼は告げる。
「挟撃されては不利だ。まして我々は今動揺している。この状況で戦ったならば」
「恐ろしいことになると」
「そうだ。敗北は必定だ」
今それを参謀達に告げてきた。それは厳然たる事実を見越したものであった。
「今ここで敗北するわけにはいかない」
またそれを言う。
「それならばこそだ。勝利の為に」
「国境を捨てるのですね」
「ですが司令」
参謀の一人が彼に対して述べてきた。
「何だ？」
「国境にある防衛施設を放棄されるのですよね」
「残念だがな」

ダビデブは苦い顔を一瞬見せた。しかしそれはほんの一瞬でありすぐに消した。
「そうするしかあるまい」
「左様ですか」
「全ての責任は私が持つ」
覚悟は決めていた。司令官に必要な資質として覚悟がある。彼にはそれがあった。そうした意味でも彼は優れた人物と言えた。
「それでいいな」
「は、はい」
参謀達はやや驚きながらダビデブのその覚悟に応えた。
「わかりました。それでは」
「宜しいのですね」
「私一人の責任と国境にいる全ての将兵の命」
ダビデブは彼等に応えて述べてきた。その目が強い光を放っている。それこそまさに覚悟を決めた光であった。無言の迫力さえ備えているものであった。

## 第二十五部第二章　国境の異変その七

「そしてハサンの命運」
「ハサンの」
「どちらが大事か。言うまでもないな」
「確かに」
参謀達は今度は彼の言葉に頷いた。彼等も軍人であるからわかる。その通りであったのだ。
「それでは全ての施設を破棄して」
「使用不能にしておくのだ」
ダビデブは告げた。
「市民の生活に必要なもの以外はな。全て使用不能にして撤退せよ」
「焦土戦術ですか」
参謀の一人がそれを聞いて述べてきた。かつてサラーフ軍がオムダーマン軍に対して行った戦術である。撤退する場合には非常によく行われる。ダビデブはここでは軍事関連にのみそれを行うと告げたのである。彼は国民をないがしろにする軍人ではなかったのだ。
「そうだ。あえて敵に何かをやる必要はあるまい」
「その通りです。ですが」
市民のものをオムダーマン軍が使う可能性もある。参謀の一人がそれを危惧しているとダビデブは彼にも言った。まるでそれをみすこしていたかのように。
「その場合は構わん」
「えっ、いや。私はまだ何も」
「貴官の言いたいことはわかっている」
その参謀に告げた。
「オムダーマン軍が市民生活を脅かしてまで進もうとしかねないというのだな」
「はい、その可能性は否定できません」

「そうだな。その選択肢もある」
ダビデブもそれは認める。戦争というものは究極的には勝利を収めればそれでいい。勝たなければ意味がない。例えどれだけ高潔で素晴らしい行動を取っていても敗れてしまえばそれで何の意味もなくなるのだ。結果が全ての世界である。そしてその結果は勝利だけが求められる。その為には手段を選ぶ必要はない。それが戦争なのだ。確かに国際法やそういったものも存在しているがこれも無視してその後で理由をつけるという方法もある。事実二十世紀においては勝者である連合国側は数多くの国際法違反を犯している。とりわけソ連軍のそれはかなり悪質であり彼等の行くところ筆舌に尽くし難い惨劇が起こり多くの血と涙が流された。何しろ軍の先頭に犯罪者や何らかの問題があるとされた者達で構成される懲罰大隊を置き地雷原を歩かせたりしていたのだ。他にも略奪等も公然と行っていた。連合軍の軍隊はアメリカ軍然り中国国民党軍然りその軍律はお世辞にもいいと言えるものではなかったが彼等のそれは問題外であった。それこそ枢軸国側なぞ比べ物にならない程であった。しかもその彼等が戦争終了後『平和勢力の軍隊』とされたのである。人類史上最も悪質なブラックジョークとも思える話だが残念なことにこれは事実だ。しかも喜劇でもない。現実であった。現実にこうした軍隊を平和の天使か何かと思い込んでいた連中がいたのだ。しかも知識人達にだ。現実は時としてあまりにも滑稽なドラマを上演する。俳優達に自覚はなかったとしてもだ。
その勝利至上主義に従えばそれも有り得ることであった。勝てばいのだから。ダビデブが言うことは軍人だからこそわかる冷然たる現実が存在していた。勝利の前には非道も悪辣も許される、戦争はそういうものでもあるのだ。
「しかしだ」
「しかし？」
「我々がそれをすることはない。それにそうしたことをオムダーマン軍が行ったならば必ずや彼等にとって不利益が生じるだろう」

ダビデブの言葉は予言めいた響きさえあった。

## 第二十五部第二章　国境の異変その八

「彼等がな」
「市民を脅かしたことにより大義を失うと」
「それでゲリラが起こる可能性もある。それに我々もそこに付け込むことが可能だな」
「それでは彼等はそれは行わないですか」
別の参謀が言うとダビデブはここで一人の男の名を出してきた。
「敵の司令官はアッディーン元帥だ」
「はい」
誰もが知っている。オムダーマンの副大統領で軍の司令官である。言うまでもなくオムダーマンが誇る若き名将である。
「彼は市民を脅かす男ではない。それに軍律を徹底させている」
「それではその可能性はないと」
「ないな。オムダーマンも愚かではない」
奇妙なことにダビデブはここでは敵を信頼していた。むしろアッディーンが敵を信頼させていたと言うべきであろうか。どちらにしろかなり変わってはいた。
「だからだ。ここは市民生活には手をつけない」
「わかりました。それでは」
「ただし市民には厳格に注意しておいてくれ」
彼はまた注文をつけてきた。
「くれぐれも早まった行動はしないでくれとな」
「了解」
ゲリラ活動等である。ゲリラはこの時代においても正規の軍隊とは見なされない。即ち捕かまえたならばその場で殺してもよく、捕虜になる権利がないのである。強力な敵に対しては心理的にも圧迫を与える効果があるのは事実だがリスクも多い。その敵が疑心暗鬼にかられ無関係な一般市民にも攻撃を仕掛けたりもするからだ。こ

れはゲリラが最初に起こった十九世紀のスペインですぐにあったことだ。スペインに駐留していたフランス軍が一般市民にまで攻撃を仕掛けるようになったのだ。これによりフランスは大きな内憂を抱えてしまったが同時にスペインの民衆が受けた被害も大きかった。ゴヤの絵にもそのことが書かれている。もっともこれにより敵の威信や信頼を損ねる狙いがあるというのならば話は別であるが。

「それは徹底させてくれ」

「ええ」

「くれぐれもだ」

「市民達には申し訳ないことですが」

「わかっている」

ダビデブは今度は苦い顔になった。厳しい顔をそう変えてきた。

「わかってはいるが。全てはハサンの為だ」

「最後の勝利の為に」

「最後に勝てればそれでいいのだ」

それこそが戦争である。幾ら勝とうとも最後の戦いに敗れては何にもならない。

「だからこそ。今は退く」

「そういうことですね」

「そうだ。ではいいな」

「はっ」

参謀達は皆ダビデブの今の言葉に応えた。

「それではすぐにでも」

「うむ、ではな」

こうしてダビデブは撤退を決定した。国境のハサン軍は速やかに撤退行動を開始し同時にガズニーに向かっていた軍も踵を返した。アッディーンにもそれはわかった。

「兵が退いていくな」

「はい」

彼はこの時国境に向かって進軍していた。アリーの艦橋でシンダ

ントに問うたのであった。
「勝てぬと判断したのか。違うな」
「おそらくはそうではないと思います」
シンダントの考えもアッディーント同じであった。
「国境の方で何かしらの判断があったのかと」
「国境の防衛ラインに立てこもるのか？」
アッディーンはこう述べてきた。
「その守りで我等に対するか」
「国境にいる我が軍にはそれは友好でしょう」
シンダントは話を限定させてきた。
「しかし我々に対しては」
「そうではないな」
「はい、ああした守りはあくまで前を向いたものです」
後ろには向けられていない。アッディーンもそれを見抜いているからこそ今こうして後ろから攻めているのである。それがわかったうえでのことなのだ。
「ですから」
「それもない。それでは」
「撤退かと」
シンダントは述べてきた。
「おそらく然るべき場所で我々を迎え撃つつもりなのでしょう」
「そうだな。では国境を放棄か」
「ですね」
アッディーンの言葉に頷いた。

## 第二十五部第二章　国境の異変その九

「ここは」
「わかった。それでは作戦を変更する」
アッディーンはそこまで聞いてすぐに断を下してきた。
「軍の進撃速度をあげる」
彼は言った。
「そのまま国境に一直線に向かう。そして撤退にかかっている敵を」
「撃つ」
「そうだ、彼等を急襲する」
彼の作戦は決まった。こうなれば後の動きは速い。それがアッディーンであった。
「わかったな。すぐに動きを速めるぞ」
「わかりました。それでは」
「全軍全速前進」
自分で指示を出した。
「速やかにだ。いいな」
「了解」
アッディーンもまた作戦を決定した。オムダーマン軍は光を遥かに超えて幾度もワープを繰り返しながら国境に向かう。だがそれはハサン軍も同じであった。
その踵を返したガズニー方面に向かっていたハサン軍である。彼等は撤退に際して細工を忘れてはいなかった。
「全て出しているな」
「はい」
艦隊司令の一人が部下達に問うて彼等がそれに応えていた。
「既に全て撤き終えました」
「よし」
司令はそれを聞いて満足した顔で頷いた。

「ならばいい。それでだ」
そのうえで言葉を続ける。
「我々も国境に戻るぞ。いいな」
「オムダーマン軍に追いつかれないうちに、ですな」
「そういうことだ。急げ」
司令は言った。
「オムダーマン軍の動きは速いからな」
「そうですね。ここは」
部下もそれに頷く。オムダーマン軍の迅速な動きは彼等もよく知っていた。彼等とて愚かではない。オムダーマン軍のことは彼等なりに研究している。その中でも機動力はよく知っていたのだ。
「追い付かれれば危険だ」
「ですね」
わかっているからこその言葉だ。それを今言うのだ。
「ならば早いうちに」
「今のうちにというわけだ」
彼はまた言う。
「わかったな」
「わかりました。速やかに国境にな」
「はい」
彼等はすぐに踵を返し国境に戻った。このことはアッディーンも知った。しかし彼は積極的に追撃を仕掛けようとはしなかった。
あえて自軍の速度をそのままにさせる。通常の進撃速度で国境に兵を進めそこまでの星系を占領していくのであった。占領自体は何も備えのない星系ばかりだったので通過するだけだった。無血占領が続いていた。
「宜しいのですか、これで」
「そうだ、予定通りだ」
進撃を進める中で部下に答える。場所はアリーの艦橋だった。
「これでな」

「予定通りですか」
「このままで」
「そうだ。彼等が撤退するのならそれでよし」
彼は言う。
「今はな。それよりも国境に向かわなくはならない」
「国境にですか」
「まずは国境を完全に占領する」
作戦の目標だ。その為に彼はアステロイド帯を越えガズニーを占領したのだからこれは当然の言葉であった。しかし彼は無闇に戦闘はしないとまで言い切ったのだ。
「戦いはそれからでもいい。いや」
「いや？」
「むしろ本格的な戦いはそれからだろうな」
「国境占領からですか」
「ハサンの首都ブルジルトはまだ先だ」
アッディーンはこうも言った。
「距離はかなりだ。ならば」
「その過程で幾度の戦いがあるということですな」
「そうだ」
返答は断言であった。
「それならば今はな。無傷で国境を占領し」
「補給体制等を整備しておきたい。どう思う？」
「そうですな」
アッディーンのその言葉にハリージャが応えてきた。

## 第二十五部第二章　国境の異変その十

「それでよいと思います。ハサンとの戦いはまだはじまったばかりですし」
「そうだな」
「それに」
「それに？」
今のハリージャの言葉にはアッディーンではなく参謀達が彼に問うてきた。アッディーンはわかっているようだが彼等はそうではなかった。
「おそらく彼等は然るべき場所で戦いを挑んでくるでしょう」
「然るべき場所ですか」
「左様。その通りです」
ハリージャは答える。
「ダビデブ元帥もそれを考えているでしょう。おそらく今頃退却を進めている筈です」
「そうだな」
暫く沈黙を守っていたアッディーンはここでまた口を開いてきた。
「おそらくはな。少なくとも今は戦闘はない」
「今はですか」
「ならばこちらとしても好都合だ。やることもあるしな」
「それが補給体制の整備ですか」
補給と整備なくしては戦いは行えない。これは言うまでもないことだ。アッディーンは機動力と共にそれを重視する考えの将である。だからこそ今はそれを念頭に置いているのである。
「わかったな。戦いは長い」
それをまた述べる。
「その長い戦いに勝つには焦りは禁物だ。じっくりと体制を整えながらだ」

「わかりました」
部下達は彼のその言葉に頷いてきた。
「それではそのように」
「このまま国境へ」
「そうだ。全軍このまま国境へ進め」
アッディーン自身もそれを言った。
「了解」
「それでは」
部下達もそれに頷く。彼等は積極的にハサン軍を追うことはなくそのまま進撃を続ける。ハサン軍は彼等に対せずダビデブの指示のまま撤退を進めていた。次々に艦艇も人員も後方に下がり施設の破壊も進めていた。
「そっちはいいな」
「はい」
兵士達が今までの自分達の持ち場を破壊していた。先任下士官の指示に基いてそれを行っていた。
既に持ち場はスクラップの山と化している。使用できるものは全て持ち去り持ち運びも移しては使用できないものは破壊していた。そうして何もかもを使えなくしていたのである。
「順調です」
「もうこっちは終わりです」
「そうか、ファイルはどうした？」
「後方の星系のデータに移送しました」
若い兵士が下士官に告げる。
「こちらはこれで終わりです」
「そうか。なら俺達もこれで撤退だな」
下士官はそれを聞いてこう述べた。
「隊長にはそう報告しておくか」
「はい」
兵士達もそれに頷く。彼等の仕事は終わったようである。

「しかしあれですね」
兵士達はここで述べてきた。
「オムダーマンの奴等ってのは何するかわかりませんね」
「全くだぜ」
下士官の前で話をする。下士官はまずはそれを黙って聞いていた。
「いきなり後ろから仕掛けてきて」
「おかげで俺達はこうして逃げ出す羽目になったんですからね。厄介なことです」
「御前等はそう思うか」
下士官は腕を組んでいた。それを解かずに彼等に対して言ってきた。
「敵は前から来ると思っているのか」
「いや、それは」
そうともばかり限らないのは彼等もわかっている。だからこそ下士官の今の言葉には頷くものがあった。少なくともその程度はわかってはいた。

## 第二十五部第二章　国境の異変その十一

「やっぱり違いますよね」
「奴等だって必死ですし」
「そういうことだ。じゃあわかるな」
下士官は彼等の言葉をまとめるようにしてまた言った。
「敵は何処から来るかわからない」
「だからですか」
「あいつ等があそこに出たのは」
「そうだ」
彼は言う。
「今は退くしかない。俺達はここでは負けた」
「それを言われると」
「ちょっと」
敗北という言葉には口を苦くさせる。そうしてまた下士官に述べる。
「辛いですね」
「負けるっていうのは」
「しかし事実だな」
それは認めるしかなかった。憮然として頷く。
「奴等の勝ちだ、今回は」
「今回は」
「あくまでな、今だけだ」
しかし下士官は自分の言葉の域を限定させてきた。そこにも何か考えがあるようである。兵士達はそれも察していた。
「次はわからないぞ」
「次があるんですか」
兵士達は彼の言葉に目を丸くさせた。
「それじゃあ」

「当たり前だ」
彼は何を今更といった感じで笑みを浮かべてきた。そうして兵士達に語るのであった。
「戦いはまだはじまったばかりだ。ただ国境を失っただけだぞ」
「そうですか」
「そうだ。わかったらすぐに行くぞ」
兵士達に告げる。
「いいな、それも命あってのことだ」
「命あってのですか」
「当たり前だろうが」
ここでは顔を崩して笑ってみせた。あえて若い兵士達をリラックスさせてきたのだ。
「確かにな。死ぬと天国に行けるぞ」
戦死ならばだ。イスラム世界においては聖戦、ジハードで死んだのならば確実に天国に行くことになる。聖戦の定義はかなり曖昧になっているのでオムダーマンとのこの戦争もハサンにとっては聖戦となっているのである。だから彼は今こう兵士達に言ったのである。彼なりの根拠があったのだ。
「しかしだ」
それを出してから本題に入る。
「それはここぞという時にしろ」
「ここぞって」
「自分の命はあれだ。最大の切り札だ」
下士官は命というものをそう言ってきた。
「ここぞという時まで温存しておけ。粗末にするな」
「はあ」
「そう言われるんなら」
「確かにハサンも大事だ。その為に俺達は戦ってる」
これは事実だ。打ち消すことは彼等が軍人である限りできはしない。兵士は何であるべきか、それは自分の国の為に、国民の為に戦

うことだ。だからそれは打ち消されないのだ。
「しかしそれでもな。御前等あってのハサン軍だしな」
「あの、曹長」
彼の言葉を聞いて兵士の一人が声をあげてきた。
「何だ？」
「少し矛盾していませんか？御言葉ですが」
彼はおずおずとした調子で述べてきた。
「何か？」
「そうかもな」
彼もそれは認める。
「兵隊に戦えと言って命を粗末にするなって言うんだからな」
「そうですよね。やっぱり」
「だからだ。命を捨てなければならない場合以外はそうするな」
「それ以外はですか」
「いいか、何故俺達は戦える」
今度はこれを兵士達に問うてきた。
「何故だ。どうして戦える」
「それはまあ」
「やっぱり」
彼等もそれに応えて戸惑いを見せながら答えてきた。
「命があるからですよね」
「そうじゃないとやっぱり」
「その通りだ」
彼等の言葉にニヤリと笑ってきた。正解を知らせる笑みであった。
「そういうことだ。戦う為に生きろ」
「戦う為に」
「何があってもハサンも家族も守る。その為に命を粗末にするな。
わかったな」
「わかりました」
兵士達はその言葉に毅然として頷いてみせた。

「それならここは」
「撤退して」
「そうだ。ではいいな」
あらためて彼等に声をかけた。
「撤退するぞ」
「了解」
「わかりました」
彼等は下士官の前に横一列に整列して敬礼した。下士官もそれに返礼して速やかにその場を後にする。国境にいるハサン軍は混乱もなく粛々と撤退に取り掛かっていた。

## 第二十五部第二章　国境の異変その十二

アッディーンは刻一刻と国境に迫っていた。その中で彼はこれからのことについて考えていた。
アリーの作戦会議室に主だった参謀達を集めていた。そこでこれからの戦略方針について彼等に自分の考えを述べていたのである。
「まずは国境にある軍事施設だが」
「はい」
参謀達は彼の言葉を聞いている。その視線を彼に集中させながら。
「整備と補給以外は置いておく」
「放置ですね」
「さしあたってはだ。いや」
ここで言葉の色を少し変えてからまた述べた。
「そのまま放置しておいてもいいな。無用の長物だ」
「国境そのものがなくあるからですね」
「そうだ。むしろ再びハサンに使われる方がまずいな」
「それでは破壊しますか？」
参謀の一人がそれに問うてきた。
「それならば」
「ううむ。それには及ばないだろう」
しかし彼はそこまでするつもりはなかった。懐疑的な声を含ませて述べてきた。
「差し当たってはだ。それに時間もない」
「時間も」
「今はどういう時かは言うまでもないな」
今度はこう言うのだった。
「戦いは国境地帯を占領しただけで終わりではない。むしろこれからだ」
「その為に今は余計な行動は慎むのですか」

「できれば再利用したいとも考えているしな」
今度はこう述べてきた。
「再利用ですか」
「今はおそらく使用不能にしている筈だ。それで構わない」
アッディーンはそう読んでいた。この読みは当たっていた。むしろ撤退においては基本であった。敵に施設をそのまま使わせる軍隊なぞ存在しない。壊走して施設を使用不能にし損なったものを使われることはあってもだ。
「構いませんか」
「そうだ。だから破壊するにはな。及ばない」
「わかりました。それでは」
「うむ」
アッディーンはその言葉に頷く。それからまた話を続けた。
「補給と整備の施設は何があっても回復させろ」
「まずはそれを」
「そうだ。これがなくては話にはならない」
「そうですね。それを考えると国境はいい補給体制になりますね」
参謀の一人がその言葉に頷く。
「我々の国境ラインと合わせて」
「合わせてハサン侵攻の最大拠点としたい」
アッディーンはまた述べた。
「それについてはどう思うか」
「宜しいかと」
「そこを起点として北上していくのならば最適です」
「わかった」
その言葉を聞いて意を決した顔で頷く。
「それでは決定だ。オムダーマン側、ハサン側両方を連結させ一大拠点とする」
「はい」
「しかしだ。それだけで終わりではないな」

目を光らせてそう語る。
「それだけではありませんか」
「やはりハサンは広い」
この前提がある。広さはそれだけで大きな武器となることをアッディーンもよく認識していた。空間要塞という言葉もある程である。
「あの一帯だけで達せられるものではない」
「それでは閣下」
それを聞いたハルージャが述べてきた。
「他にも築いておくことを考えましょう」
「そうだ」
アッディーンもそれに頷く。いあ、彼の考えは最初からそこにあったのだ。

## 第二十五部第二章　国境の異変その十三

「何個かな。それを築きながら北上したい」
「ハサンの首都ブルジルトまでに」
「ハサン最大の基地はだ」
　これは最早言うまでもない。首都ブルジルトだ。首都が最大の防衛対象であり軍事拠点であるのは何時の時代でも同じである。ハサンも例外ではない。
「ブルジルト」
　アッディーンもそれを述べる。
「そこを相手にする。それには国境はあまりにも遠い」
「それでは今後は拠点を奪い、築きながらの戦いになりますね」
　別の参謀が言ってきた。
「北上しながら」
「そういうことになる。そしてだ」
　アッディーンは言葉を続けてきた。
「それを連結させていくぞ」
「補給基地全体を」
「さながら蛇のようにだ」
　連合ならば龍に例える要素もあった。しかしサハラでイメージされる龍は西洋の龍のそれに近くそれはなかった。あの長い龍は中国文化圏のそれだからだ。他には古代ヒッタイトのイルルヤンカシュもそうであるがどちらにしろ今は連合の中にあるものである。
「全ての基地をつなげていく」
「獲物はブルジルト。そうですな」
「敵の頭を狙っていく。こう言えばいいか」
「はい」
「まさに空をあがる蛇のように」
「それは連合の話だったか」

参謀の一人の例えにふと顔を向けてきた。
「龍だと中国だがそれは」
「はい、オーストラリアです」
その参謀は彼にそう答えた。
「虹蛇です」
これはオーストラリアでは水を司る精霊であり神にも等しい存在である。今ではオーストラリアだけでなく他の国の者にも信仰されている。なおこれは今でもオーストラリアの主流を占めるコーカロイドやモンゴロイド、そして彼等の混血ではなく元からいたアボリジニーの信仰である。彼等はシャーマニズムを信じているのである。
「あれか」
「御存知ですか」
「名前だけはな」
そう述べる。
「そうした存在が連合では信じられていると」
「変わった考えではあります」
ムスリムである彼等から見ればそうである。アッラーは精霊ではないからだ。全知全能の唯一の神だからだ。それがアッラーなのだ。
「しかし面白くはある」
「はい。だから例えてみたのですが」
「成程な。しかしだ」
アッディーンはここでまた言う。
「虹蛇は天に昇って一旦終わりだったな」
「話の上では」
参謀はそう述べる。
「一旦はそこで終わるのです」
「そこが違うな」
アッディーンはこう返した。
「違いますか」
「違うな。ブルジルトを攻略してもまだ戦わなければならない可能

性もある」

そのことを言ってきた。戦争において敵の首都を攻略することは非常に重要だ。敵の中枢部を攻略したならばそれだけで戦略的に大きな価値を持つし敵の戦意も大きく減退する。実際に連合もエウロパとの戦争においては彼等の首都オリンポス攻略を第一目標に掲げそれが果たされた時こそが講和の時だったのだ。だが戦争は多くのケースがあり常に首都攻略だけで終わるとは限らない。今回もである。

## 第二十五部第二章　国境の異変その十四

「若しかするとな」
「ブルジルト以降ですか」
「そうだ、それ以降もな。有り得る」
アッディーンは言う。その鋭い目の光が未来を見据えていた。
「若しかすると」
「そうですか。しかし」
「あくまでブルジルトは攻略する」
それは変わらない。
「さもないと話は終わりを迎えないからな」
「それは確かに。それでは」
「首都攻略とそれ以降のケースも考えておくことだ」
彼はそう参謀達に告げる。
「わかったな。あらゆるケースを」
「わかりました。それでは首都攻略で終われればそれはそれで越したことはないと」
「ないに越したことはない」
今はそのケースであった。戦争は最後までやるならば果てしない消耗戦になる。第一次世界大戦や第二次世界大戦の様にだ。それは政治的な視点から言っても軍事的な視点から言っても最悪の事態だ。どちらの国力も最低にまで落ち後には何も残らないからである。
「だがそれで考えなくていいというのでもないしな」
「はい」
「それでは」
「まずは双方の国境ラインの整備及び補給システムを連結させる」
アッディーンはそれをあらためて述べた。
「わかったな」
「わかりました」

参謀達はそれに頷く。
「国境に辿り着き次第だ。それに取り掛かる」
「追撃は」
ハルージャがアッディーンに問うてきた。
「どうされますか」
「暫くはオムダーマン側の施設を使って行う」
それを述べてきた。
「今ここで立ち止まっては敵に余計な隙を与える。それもまた避けなければならない」
「その通りです」
ハルージャはそれを聞いて納得したように頷いた。
「時間を与えればその間に守りを固めるだろう。そうなれば厄介なことになる」
「それだけこちらの消耗を強いることになりますから」
「長い戦いになる。しかし不用意に消耗はしたくない」
政治家として当然の考えだった。そこをまた言うのだ。アッディーンは軍人としてだけでなく政治家でもあったからだ。正確に言うならば政治家になったのだ。副大統領になってからそうなったのである。
「そういうことだ」
「わかりました。それでは」
その言葉にこくりと頷く。頷いてからまた述べた。
「追撃は即座に」
「そうだ。国境に達したならば集結してすぐに北上する」
アッディーンは述べた。
「全軍を以ってな。いいな」
「了解」
「それでは」
「ただしだ」
そのうえで言葉を付け加えてきた。

「何か」
「ガズニー方面には最低限の備えを回しておこう」
「ガズニーですか」
「一応はな。備えておかねばなるまい」
アッディーンはそう告げる。
「あの方面にまで兵力を回せる余裕は流石にハサンにもないだろうがな」
「万が一に備えて」
「そういうことだ。それはいいな」
そう参謀達に問う。
「備えとして」
「了解です」
「それではそちらも」
参謀達はその言葉にも頷く。こうしてガズニー方面にも最低限であるが兵が回されることになったのであった。アッディーンはそこまで言ったうえでそこにいる全ての者に伝えた。
「では国境だ」
彼は言う。
「国境において友軍と合流する。いいな」
「はい」
参謀達はそれに頷く。こうして彼等はハサンの星系を一つずつ占領しながら国境を目指していた。彼等が国境に辿り着いたのはそれから間も無くであった。

## 第二十五部第二章　国境の異変その十五

国境に辿り着くとすぐに次の行動に移ることになった。しかしアッディーンはまずは友軍の将兵達の厚い歓待を受けたのであった。
「やりましたな」
「これで第一の障害は越えましたな」
「そうだな」
アッディーンは出迎える彼等の言葉に頷いた。まずは合流を喜んでいた。それはアッディーンも同じであった。それは変わらない。
「だがあくまで第一だ」
アッディーンはそう述べる。
「先はまだあるぞ」
「無論わかっております」
「それでは」
「北上だ」
彼は告げた。
「先に進む。いいな」
「無論です」
彼等はそれに頷く。アッディーンは国境での勝利を喜んではいなかった。そこから先のことを見据えていたからこれは当然であった。
「それではすぐに」
「まずはガズニー方面からの部隊の補給と整備だ」
アッディーンは告げる。
「それが整い次第だ。いいな」
「話は聞いています」
国境側にいた参謀達のうちの一人が述べてきた。
「双方の国境の施設を連結させるのですね」
「そうだ。戦闘を続けながらだ。できるか」
「お任せ下さい」

後方参謀の一人が彼に答えてきた。
「今から取り掛かります」
「わかった。では頼むぞ」
「はい」
後方参謀はそれに頷く。アッディーンは港の中の全軍を見据えて言葉を続けるのだった。
「オムダーマンの将兵達よ」
彼等全てに告げる。
「この勝利は勝利ではない」
そう言う。
「最後の勝利の前のほんの一合に過ぎないのだ」
「ほんの！？」
「そうだ」
兵士達の声に応える。
「戦いはこれからだ。だが我々は必ず勝つ」
彼は断言してみせた。
「何故か。それは諸君等だからだ」
「我々の力でですか」
「その通りだ。諸君等ならばこそ」
兵士の士気を鼓舞させる。彼にしては珍しい発言であった。そもそも演説を行うということ自体が彼にとっては珍しいことだった。彼はどちらかというと寡黙な男だからだ。
「できる」
また断言する。
「何があろうともな」
「我等が」
「できる」
「勝利を掴むのは何か」
また将兵達に語る。
「何が必要なのか」

「勇気です」
「そして知略」
「それを発揮させるものは既にある」
アッディーンは次々に声をあげる兵士達に述べる。彼はそのまま言葉を続ける。ここで彼が言った勇気と知略を発揮させるものとは補給である。それなくしては戦うことができないのは彼もよくわかっている。だからこそ言ったのだ。あえてその言葉を口には出さないがだ。

## 第二十五部第二章　国境の異変その十六

「後はそれを出すだけだ。いいな」
「わかりました」
「それでは」
「迷わずに進めばいいのだ」
こうも言う。
「私は勝利に誘おう。いいな」
「閣下が」
「それでは我々は」
「私を信じて来るのだ」
彼は言う。
「勝利へ」
「最後に勝つのは我々であると」
「そうだ、全ての勝利は諸君等に」
また彼等に語る。
「いいな。それでは栄光と勝利に向かって」
「はい！」
「是非共！」
港にいる全ての将兵達から喚声があがった。これはすぐにオムダーマン軍全てに伝わった。彼等は戦意を最高にまで高めたまま進撃を再開させる。そうして北に向かうハサン軍を追撃にかかったのであった。
この演説のことは他の勢力にも伝わった。シャイターンはそれを聞いて少し考える顔になったのであった。
彼は自身の艦の司令室においてその話を聞いていた。伝えたのはハルシークであった。
「そうか、見事な演説だったのか」
「はい」

ハルシークはその言葉に敬礼で応える。軍人らしい返答であった。
「それによりオムダーマン軍の指揮は頂点にまで達したそうです」
「見事と言うべきかな」
アッディーンはそれを聞いて呟いた。
「彼もまた」
「青き獅子の実力はここでも発揮されたということか」
「そうかと」
ハルシークはその言葉に頷く。
「やはり彼は英傑であると思います」
「英傑か」
シャイターンはその言葉に顔を向けてきた。英傑という言葉に何かを見たのである。
「この演説によりそれがさらに確かになったかと思います」
「そうだな」
シャイターンはまたその言葉に頷く。
「それだからこそ」
「はい、閣下もマルヤム様を娶わせたのですね」
「そうだ」
彼もそれに頷く。否定するつもりはなかった。
「彼は確かに英傑だ。だが」
「だが？何か」
「こういう言葉がある」
シャイターンは述べてきた。
「両雄並び立たずとな」
「といいますと」
ハルシークはその言葉に目を鋭くさせた。彼が何を言いたいのかわかっていた。だからこそ目を鋭くさせたのである。シャイターンもそれに気付いていた。
「ハサンの後だな。どうなるか」
「ハサンですか。やはり」

「そうだ。この戦いはおそらく長いものになる」
彼もまたハサンとの戦いはそう見ていた。ハサンの力は尋常なものではない。長きに渡ってサハラにおいて第一の強国であり続けた国だ。例え多くの人材がいなくなってはいてもその力そのものは健在であるのだ。だからこそ侮ってはいなかったのである。
「しかしだ。その後は」
「どうなるでしょうか」
「いや、そこから先はまだ確かではない」
それを言う。
「しかしだ。それでも」
「可能性としてはですか」
「有り得る。どんな事態もな」
またそれを言う。言いながら先にあるものを見ていた。

## 第二十五部第二章　国境の異変その十七

「いいか」
彼は言う。
「サハラを統一する」
「はい」
これは変わらない。そうなれば自然と向かう流れがあるのだ。
「その先にあるものは全て滅ぼす。それならばな」
「左様ですな」
「無論戦わないに越したことはない」
こうも述べるがそれでもその目は光っていた。黒い瞳であるというのにそれは何故か赤く見える。その赤い光は戦場で輝く戦いの天使の輝きそのものであった。
「しかしだ」
「あらゆることが考えられるならばですか」
「戦うことも有り得るな」
「そうですな。それでは」
「わかったな」
シャイターンはハルシークに対して告げる。戦いはやはり続くのであった。
「それにしても青か」
シャイターンはふと色のことを口に出してきた。
「青き獅子ですね」
「そうだ。それに対して私は」
彼は言う。言いながら不敵に笑いだしていた。
「赤い魔王だったか」
「そう言われていますな」
ハルシークは応える。彼はその妖しいまでの絶対的な力によりそう呼ばれているのだ。何故彼が魔王とされているのかはその雰囲気

によるところが大きかった。彼は何か陰がある。多くの者もそれを感じているということである。
「世間では」
「いい呼び名だ」
不敵な笑みを続ける。悪い気はしてはいなかった。
「私に相応しい」
「御気に召されたのですな」
「ではアッラーはどちらを選ばれるかな」
不意にまた言ってきた。
「赤か青か。それとも」
「もう一つか」
「全てはアッラーの思し召しだ。ならば私も」
「アッラーに導かれることにより魔王となっていると」
「エウロパでは魔王とは神に背く存在だったな」
キリスト教的な視点ではそうである。キリストの教えにおいてはサタンという反逆者の存在があるのだ。それはイスラムでも同じのようだが実は違う。イスラムの悪魔は神の僕であるのだ。全ては神の下にある。人の邪なる心を試す存在として悪魔や魔王といったものは存在しているのだ。
「はい、そうです」
ハルシークもそれに応える。
「他にも悪しき存在はそれぞれの教えでありますが」
「十字架の下ではな。そうだったな」
「その通りです」
また頷く。
「では私は悪なのか。面白い」
やはり不敵な笑みは変わらない。その笑みのままで述べるのだった。
「赤は悪、青は善とでもいうのかな」
「赤と青は」

「どちらも相容れない」
こうも言う。
「混ざれば互いではなくなるものだが。アッラーはそこからまた別のものを見出されるかも知れないな」
「赤と青からですか」
「そうだ」
彼はまた言う。
「そこからもな。アッラーは全てを司られているのだから」
「全く正反対のもの同士でもですな」
「アッラーは偉大なリ」
イスラム世界で非常によく使われる言葉がまた出された。ユダヤ教では神の言葉をみだりに使ってはならないがイスラムでは違う。よく唱えられる。
「全てはアッラーの思われるままだ」
シャイターンはそう告げる。
「しかしだ」
そう語ったうえでまた述べる。不敵な笑みを浮かべながら。

## 第二十五部第二章　国境の異変その十八

「私はそのアッラーの運命に従い道を進んでいる」
「サハラを統一するという」
「そうだ。アッラーは私がサハラを統一されることを望んでおられるのだ」
　これは彼にとっては定まったことである。彼は自分でアッラーにサハラを統一する為に選ばれたと思っているのだ。他の者にとっては妄想に思えるものであるが彼にとっては違うのである。
「そうだな」
「はい。それでは」
「今もまたそのうちの一つだ」
　一つだと言う。
「この戦いもな」
「それですが」
　ここでハルシークは聞き役から役柄を変えてきた。
「どうした？」
「アヤグーズにハサンからの援軍が送られることが決定したとノ情報があります」
「ふむ」
　シャイターンはその報告を聞いて目を少し動かしてきた。
「援軍か」
「今の時点では話だけで詳しいことは伝わってはいませんが」
「だがおそらく来るな」
　彼は言った。
「彼等にしろこのまま何もしないというわけにはいくまい」
「左様です。ただ問題は」
　ハルシークはここで言葉を鋭くさせてきた。そこに何かを見ている声であった。

「数と率いる将ですが」
「おそらくは大したものではない」
シャイターンはハルシークにそう返してきた。
「どちらもな」
「そう読まれていますか」
「西方は東方と違う」
次にこう述べる。
「西方は多くの属国がある。彼等に任せることも可能だ」
実際にアヤグーズがそうである。ハサンは北方と接している西方に多くの属国を持っている。彼等もまたハサンにとっては貴重な戦力なのである。
「それに東方のオムダーマンもあるしな。こちらに向けられるのは二流といったところだろうな」
「二流ですか」
「今のところはだ」
ふと言葉の調子を変えてきた。二流という言葉を出してきたのである。
「むしろ彼等にとってはオムダーマン軍が脅威だからな。そちらに主力を向けるのは間違いない」
「国境から北上する彼等を迎え撃つ」
「我々はまだハサン領自体には入ってはいない。だがオムダーマンは違う」
「確かに」
こうした現実がある。国境を突破されているのといないのとでは意識が全然違ってくる。実際にハサンは今はオムダーマンを第一の敵としている。これは直接国境を接していたのと今の状況からだ。ティムールへの警戒がまだ緩やかなのは領内に入られてはいないことも大きいのだ。
「こちらにとっては都合がいいと言うべきか」
「いえ、それはどうかと」

ハルシークは今のシャイターンの言葉には異議を呈してきた。
「違うというのか」
「あながちそうとも言えないと思います」
彼はこうシャイターンに言ってきた。シャイターンもその言葉に耳を傾けさせてきた。
「その根拠は何だ？」
「アヤグーズ軍です」
今侵攻しているその相手に対して述べる。
「彼等はハサンの数多い属国の中でもかなりの強さです」
「実績があるな」
「はい」
彼は告げる。アヤグーズ軍は今まで数多くの勝利を収めてきている。ハサンにとっては西方の属国の中での要であったし最も頼りになる軍勢でもあった。そしてそれを率いる将もまた手強い存在であったのだ・
「それに指揮官は」
「アルコルジ女王」
「幾多の戦いに勝ち」
「不敗を謳われているな」
「はい、彼女もまた強敵です」
ハルシークは言う。その言葉が何よりも重要なのである。
「だからこそだと思いますが」
また問うてきた。
「最初にここに攻め込んだのは」
「わかるのか」
シャイターンは今のハルシークの言葉に笑ってきた。あの不敵な笑みを彼に向ける。その笑みの意味は最早言うまでもなかった。

## 第二十五部第二章　国境の異変その十九

「やはり」
「無論です」
ハルシークも笑って返してきた。しかし彼の笑みはシャイターンのそれとはまた違う笑みであった。
「扇を潰すのに最もいい方法は」
「その要を壊すことだ」
シャイターンはそう述べる。それはその通りであった。
「要を壊せばな。それで終わりだ」
「だからこそであると思いますが」
それがハルシークの見方であった。それを今他ならぬシャイターンに対して言うのだった。彼は言葉を進めていく。そうしてシャイターンに述べる。
「アヤグーズ侵攻は」
「その通りだ」
そしてシャイターンもそれに応える。
「アヤグーズこそが扇の要」
「その要を潰せば」
「後は各個に潰すことも可能ですな」
「要さえ費えれば後はどうということもない」
それをまた述べる。
「それだけだ。しかしだ」
また言う。
「向こうもそれはわかっているだろうな」
「女王もですか」
「面白いと思わないか」
シャイターンは笑みを浮かべる。その笑みはただ勝利を見ているだけではなかった。また別のものも同時に見ていた。それを見せる

笑みであった。
「武器を手にする女はいい」
それを今言ってきた。
「そしてその女と戦うのもまた」
「よいものですか」
「アッラーは本来女が剣を持つことを好まれぬがな」
「はい」
イスラム世界では戦場に赴くのは男であると考えられている。連合ではムスリムの女性兵士もざらだが古来のイスラムが色濃く残るサハラにおいてはそうした考えなのである。無論例外もあるにはある。その一例が他ならぬアルコルジというわけである。
「しかしだ。それでも一つ思わせてくれるものがある」
「それは一体」
「ゼノビアだ」
その名を出してきた。かつてパルミラの女王でありその軍略と美貌で謳われた女傑である。ローマに敢然と立ち向かったことでも知られる稀代の野望の女でもある。最終的にはそのローマに敗北しているがそれでもその名は歴史に残っている。そうした稀代の英傑ではある。
「私はゼノビアが好きだ」
シャイターンははっきりと告げた。
「歴史について学ぶ度に思ってきた。何時か彼女を倒してみたいと」
「ゼノビアを」
「そうだ。手強い相手と戦いそれを倒す」
それを今述べる。
「面白いと思わないか」
「それこそが戦いの世界に生きる者の楽しみですか」
「そうだ」
また告げる。
「しかも強い女というのは。美しい」

「美しい？」
その言葉には眉をピクリと動かしてきた。
「美しいのですか」
「私はそう思う」
こうも述べる。述べるその言葉の調子はやはり楽しむものであった。
「そしてだ」
また言葉を続ける。
「私はその美しいものを手に入れるのが好きだ」
「といいますと」
「アルコルジ女王」
その名を口にする。
「彼女もまたな」
「ではゼノビアを捕らえたローマ皇帝のように」
「ローマか」
その言葉には懐疑的な響きを含む言葉を向けてきた。
「何か」
「ローマ帝国は確かに偉大な国だった」
それは認める。やはりローマ帝国というのは多くの遺産を残した国であり人々の心にも永遠に残る国だったのだ。だがシャイターンはここで何かを見せてきたのだ。
「だが」
「何かありますか？」
「私の築く帝国はローマの比ではない」
そう言うのだ。
「だからだ。わかったな」
「そうでしたか」
「そうだ。しかもだ」
シャイターンは言葉を続ける。
「あの女王はゼノビアよりも美しく素晴らしい。その彼女を手に入

れる私は」
「アウエリアヌスは確かに偉大な英雄だった。だが私は」
そのゼノビアと戦ったローマ皇帝である。当時混乱状態に陥っていたローマを立て直した中興の祖でもある。名君と謳われ同時に一流の戦略家でもあった。
「それ以上ですな」
「その通りだ。カエサルさえもな」
「それでは我等の掴むものは」
「決まっている。勝利だ」
断言してきた。
「わかったな」
「はい。それではこれからの進路は」
「進軍だ」
迷わずに告げてきた。
「わかったな」
「はい。今アヤグーズ軍はこちらへの迎撃態勢を整えています」
ハルシークは報告してきた。
「既に集められるだけの軍勢を集めているようです」
「流石と言うべきかな」
その報告を聞いて楽しげに笑みを浮かべる。
「女王だけはあると」
「ですがここで退いては」
「その女王を手に入れることはできない。行くぞ」
「はっ」
ハルシークは彼の言葉に敬礼で返した。
「全軍進撃だ。よいな」
「了解」
ティムール軍、そしてシャイターンもまた戦いに赴いていた。戦う場所も相手もアッディーンとは違っていた。しかし彼と同じように戦場に赴くのであった。

## 第二十五部第三章　名も無き批評家その一

名も無き批評家

オムダーマン軍がハサンの国境をほぼ無血で占領したという話はすぐに全ての勢力に伝わった。そこから北上しているということもまた知れ渡たりだしていた。それはエウロパでも連合でも同じであった。

エウロパではモンサルヴァートがそれを聞いてすぐに軍務省に向かった。軍務省に入るとシュバルツブルグの下にやって来た。そのうえで彼とこのことで話をはじめたのである。

「それは私も聞いている」

シュバルツブルグは厳しい顔でそれに応えた。

「まさかとは思ったがな」

「激しい戦いになると思っていました」

モンサルヴァートはそう述べる。

「それがああまで簡単にオムダーマンにとって有利に進むとは」

「有利に進めたと言うべきだろうか」

シュバルツブルグは述べる。思慮深い声になっていた。

「ここは」

「そうですね。やはり」

モンサルヴァートはその言葉に頷く。

「まさかとは思いました、本当に」

「しかしだ」

ここでシュバルツブルグはさらに言葉を続けてきた。先を見据えようという目になっていた。彼もモンサルヴァートもそこに何かを見ていた。

「行動自体は彼のいつもの形式だな」

「敵の虚を衝く」

「そうだ。アステロイド帯の突破」

彼はそこを指摘してきた。アッディーンは常にそうして勝利を収めてきた。シュバルツブルグもモンサルヴァートもそれは知っていた。
知っているだけではない。そこからさらに見ようとしていた。二人はそれについても話そうとしているのだ。
「あれは盲点だったな」
「はい」
モンサルヴァートもそれに頷く。
「まさかとは思いました」
「あのアステロイドは突破が不可能だと見ていた」
シュバルツブルグはかつてサハラへのさらなる侵攻を考え東方も調べさせていた。その時にサハラとオムダーマンの間のアステロイドも調べていたのだ。その結果として彼はそのアステロイド帯のこともわかっていたのだ。
「連合軍でもなければ突破は無理だったろうな」
「連合軍でもなければ、ですか」
モンサルヴァートはその言葉に顔を暗くさせてきた。
「それはまずいのでは」
「そうだ」
シュバルツブルグもそこに気付いていた。顔を険しくさせる。
「連合軍はいざとなればサハラ方面からも我等を侵攻できる」
「サハラを蹂躙して」
いざとなればである。実際には政治的に様々な制約があるし連合もその考えはないがいざとなればそういうことも可能だということである。二人はそのことに戦慄を感じずにはいられなかったのだ。
「それでは厄介ですね」
「モントローズのことは」
「連合はそこまで考えていたのか」
モントローズは講和条約の時に非武装地帯にされている。二人はこのことに大きな脅威を感じだしていたのだ。

実はこの講和条約での条件はエウロパとサハラの戦闘をし易いものにさせる為だと見ていた。だがそうしたことも可能だということに今気付いたのだ。
「まさか」
「意識していたとしたら恐ろしいことです」
モンサルヴァートは述べる。
「あくまで意識していたならば、ですが」
「どうだろうな」
シュバルツブルグは深刻な顔のまま述べる。
「例えばだ」
「はい」
「サハラでの戦争が終わり残った国と条約を結んでサハラから我々の南方を衝く。それと同時にニーベルング・・・・・・いや、アタチュルクだったか」
この名称に忌々しさを感じずにはいられなかった。連合により奪われたニーベルング星系はその名称を変えられてしまっていた。それはニーベルングが今や連合のものになっているという何よりの証であった。そのことを忌々しく感じずにいられなかったのだ。
「あちらからと二つのルートでな」
「まだアタチュルク方面からの備えも整っていません」
モンサルヴァートも顔を苦くさせていた。

## 第二十五部第三章　名もなき批評家その二

「費用が莫大なものになりますがその費用でさえ」
「ないな」
「はい」
言葉も顔も忌々しげになる。戦いに敗れその復興に莫大な費用を投じざるを得ず軍事費の用途もかなり制限されている。今エウロパ軍を取り囲む状況は決して芳しいものではないのである。それを彼等もよく認識していた。
「連合はそれを知っているか」
「知っているでしょう」
モンサルヴァートは答える。
「そして動けば」
「我等は滅びます」
それが真実だった。連合ともう一度戦えば間違いなくそうなる。戦争前の備えは殆どなくなりそれの修復も行われてはいない。備えがあっても敗れる一歩手前だったのだ。今の彼等に連合軍に打ち勝つことは不可能だったのだ。
「どうすればよいのか」
「刺し違えますか」
モンサルヴァートの言葉は深刻な響きを増していた。
「いざという時は」
「その覚悟か」
シュバルツブルグもそれに頷く。
「これまで以上にな」
「はい。このままでは」
「それでも勝てはしない。どうするべきか」
「総統にお話すべきでしょうか」
モンサルヴァートは深刻さをさらに深める。

「このことを」
「そうだな」
シュバルツブルグもそれに同意して頷く。
「さもなければ。我々は生きられない」
「民生の復興もまた重要ですが備えもまた」
問題は山積みであった。戦争に敗れた国というのはそうしたものである。彼等は今それを噛み締めさせられていた。何をするにしても資金も何もかもが足りない状況だったのだ。
「必要なのですから」
「ではそれはまず決まりだ」
シュバルツブルグは言った。
「総統にお話してみよう」
「そうですね。しかし」
モンサルヴァートの顔は怪訝なものになった。その顔でまた述べたのだった。
「おそらく総統はこの件に関しては」
「そうだろうな」
シュバルツブルグも今一つ浮かない顔で言葉を返した。
「総統は民生を重視されている。だから」
「そうです。ですからこそ」
「そこは如何ともし難いか」
シュバルツブルグもまた怪訝な顔になっていた。その顔でさらに言うのであった。
「民生もまた復活させねばならない。それなくして軍政もないしな」
「はい」
民生があっての軍政である。軍は軍だけで成り立っているのではないのだ。それを支えるのが民生だ。軍というものの基盤は案外脆いものなのである。これは連合においてはさらに顕著で軍の立場も弱いものになっているのである。
「それでもだ」

「やはり守りがなくては」
「そうです。ただ」
ここでモンサルヴァートはあることに言及してきた。
「民生の傷はそれ程ではありません」
「そうだな。連合軍は民には手を出さなかったからな」
これは幸いなことであった。連合軍は一般市民に攻撃を浴びせる性質の軍ではない。八条はそのことを徹底させた。その為エウロパの民衆や経済の損害は最低限のものに収まったのである。これはエウロパにとって幸いであった。
民生の回復は充分可能なレベルであったのだ。実際に復興の兆しも見えている。しかしそれだけではなかったのだ。軍を支える民生は復興してもそれは完全ではない。結果としてそれがラフネールをそちらに目を行かせることになり軍政がなおざりになっている事態を招いているのだ。

## 第二十五部第三章　名もなき批評家その三

「民生が回復すれば軍政もよくなる」
シュバルツブルグもそれはわかっていた。伊達に軍務相を務めているわけではない。彼は政治家でもあるのだ。
「しかしだ。下手をすれば」
「はい、そのままなおざりになってしまいます」
「総統にそのことをお話せねばな」
彼は決めた。しかし絶望視してはいなかった。
「わかって下さるだろうがな」
ラフネールとて愚かではない。文官出身であるが軍事にも理解がある。戦争前の防衛計画を許可もしている。だからここは話ができると彼も判断したのである。
「しかしだ。それでも」
「予算が充分に行き渡るかというと」
「疑問だ」
シュバルツブルグは述べた。
「全てが足りない状況だからな」
「経済成長率は相変わらず下降していますし」
例え敵が一般市民を攻撃していなくとも戦争のダメージはあるのは言うまでもない。それがエウロパの国力を落とし続けているのだ。
「そうしたこともまた」
「あるな」
「はい、資金難もまた深刻です」
モンサルヴァートは暗い顔で述べる。
「将兵に支払う給与も何とか維持している状況です」
「かつてのロシア軍ではあるまいにだ」
シュバルツブルグは連合の大国の一つを出してきた。一千年も前の話であるがロシアは国が混乱すると兵士への給与の支払いが滞る

のだ。こうしたことが過去何度もあった。中にはピョートル三世のように軍服を全てプロイセン式に変えたのはいいが給与を支払わずに軍の反感を買った例もある。彼は異常なプロイセン崇拝主義者でオーストリア、フランと共にプロイセンと戦い勝っていた七年戦争をあろうことかプロイセン有利の条件で講和しプロイセン王を喜ばせオーストリア、フランスを呆れさせた。前のロシアの主襟ザベータ女帝もオーストリアの主マリア＝テレジアもプロイセン王であるフリードリヒを国としての関係からも人としても嫌い抜いていたがそれとは全く正反対のことをしたのだ。しかもデンマークを攻撃しようと言い出したりしていたので流石に周りの者は呆れて彼を見捨てた。これが彼がなおざりにしていた妻エカテリーナのクーデターを生むことになる。

「嘆かわしいことだ」

「連合の者は言っているそうです」

モンサルヴァートはまた言った。

「エウロパは自分自身も養えなくなった没落貴族だと」

「言ってくれるものだ」

シュバルツブルグは忌々しげに呟いた。

「勝ったからこそか」

「そういうことでしょう。勝ったからこそです」

「勝者だからか」

そのことは変わりはしない。そしてエウロパは敗者だ。このことも変わらない。今の状況もだ。彼等にとっては忌々しいことこの上ないことに。

「その没落貴族を滅ぼすつもりか」

「機会があれば」

モンサルヴァートはこう答えた。

「そうして来るでしょう。いえ」

ここで言葉を変えてきた。

「それが可能です」

「そうだな、可能だ」
シュバルツブルグもそれを指摘してきた。連合は何時でもエウロパを滅ぼすことができるのだ。例え意志がなくともその力がある。そのことが何よりも重要なのだ。
「彼等は」
「それをさせないことが肝心です」
モンサルヴァートの言葉は防衛における常識であった。彼は連合に潰されないだけのものを欲していたのだ。シュバルツブルグもそれは同じだ。
「軍の規模もな」
そこにも言及してきた。
「今我々は三五〇個艦隊だ」
かつては五〇〇個であった。だが連合との戦争でその数が大きく減ったのである。

## 第二十五部第三章　名もなき批評家その四

「対する連合は」
「四〇〇〇個艦隊になりました」
「増えたのか」
「はい、人口増加と共に」
モンサルヴァートは言った。
「彼等自身が公表しています」
「連合軍の発表は透明性が極めて高いらしいな」
これは有名であった。何も隠すものがないからだ。民主主義国家の軍隊の特徴というよりは自分達の強さを誇示する性質のものである。
「はい、それもかなり」
モンサルヴァートも答える。
「ですから」
「わかった。数は十一倍以上の差か」
言葉では一口だが実際には絶望的な差だ。二人はこのことを強く意識せざるを得なかい。
「そのまま来られてはな」
「瞬く間に踏み潰されます」
「しかもだ」
憂いの種は尽きない。今のエウロパ軍の状況がそうしていた。
「最早ニーベルングもモントローズもない」
「それどころか」
今はアタチュルクになっている。連合の要塞になっているのだ。既にかなりの設備が整い一大要塞基地となっているのだ。
「連合の牙になっています」
「何もかもが絶望的です」
「連合はそれを狙っていたのだろうな」

シュバルツブルグは今八条の、連合の考えが手に取るようにわかった。彼等はエウロパを絶望的な状況に置きその焦燥を誘っていたのだ。そうしてそこからどうなるかによって対処を考えているということもだ。
「やはり」
「おそらくは」
モンサルヴァートもそれは同じだった。呻く顔になる。
「連合にはこのまま倒されるのか。それとも自滅か」
「そうさせない為にも」
「手を打たなければな」
彼は言った。
「そうだな」
「はい、何としても」
「こちらは防衛計画を出そう」
軍としても引けなかった。
「軍としてな」
「はい」
モンサルヴァートはシュバルツブルグの言葉に頷いた。
「それしかありません」
「国難は続くか」
シュバルツブルグはあらためて述べた。溜息もそこにあった。
「終わることはないか」
「当面は」
「こうした時はだ」
シュバルツブルグはふと言葉を出してきた。
「救世主を求めるものだな、人というのは」
「救世主ですか」
「英雄と言ってもいいか」
どちらにしろ頼れる存在を待っている。そういうことであった。人も国家も危機の際には絶対的な存在を望む。エウロパもそれは同

じなのだ。このことはそれこそ古代から変わりはしない。その代表とも言えるのがジュリアス＝シーザーであったしナポレオンであった。彼等は確かに英雄であったが時代が求めた英雄でもあったのだ。このこともまたよく言われることであるが。時代が時代ならばナポレオンはただのしがない砲兵士官で終わっていただろうとさえ言われることがある。

「やはり」

「かつてのカエサルやシャルルマーニュのような」

モンサルヴァートはふと昔の英雄を出してきた。

「若しくはキリストのようなですね」

「ブラウベルグか」

「どちらにしろ絶対的な存在をだ」

シュバルツブルグはまた述べた。

「人は求めるものだ」

「英雄というものを」

「卿もそう見られているぞ」

「私がですか」

この言葉はモンサルヴァートにとって心外な言葉であった。彼はただエウロパ軍の軍人として戦ってきただけでありそうした意識はなかったのだ。だから今のシュバルツブルグの言葉に驚いていたのだ。

## 第二十五部第三章　名もなき批評家その五

モンサルヴァートは彼に問う。表情は普通であるが心は違っていた。
「そうだ」
シュバルツブルグはまた彼に言う。
「先の戦争でのことでだ」
「あの戦争でですか」
「他に何があるというのだ」
モンサルヴァートに対して少し笑みを浮かべてきた。そのうえで声をかけているのである。
「あの戦争での奮戦が卿を英雄にしている。そういうことだ」
「そうだったのですか」
「他にもタンホイザー元帥もそうだ」
シュバルツブルグは彼の名前も出してきた。
「彼もですか」
「強大な連合軍に果敢に立ち向かいエウロパを守った」
「いえ、それは」
その言葉には頷けるものはなかった。彼はあと少しで敗れていたからだ。連合軍、その先頭にいる義勇軍に対して押されっぱなしであった。それはシュバルツブルグも同じであった。連合軍の圧倒的な物量と装備の前にはどうしようもなかったのだ。
「あれはマウリアに助けられたものですし」
「それでもだ。いいか」
ここでシュバルツブルグはまた言った。
「重要なのは事実ではないのだ」
「事実ではないのですか」
「そうだ、それよりもどう見られているかだ」
彼はそう述べた。

「つまり主観ということですね」
「その通りだ。エウロパを救う英雄に見られる。それだけだ」
「成程」
それを聞いてようやくわかった。彼は英雄と『みなされている』のである。そううことであったのだ。
「英雄であると。人々に思われる」
「誰の言葉だったかな」
シュバルツブルグはまたふと述べた。
「英雄は自分でなろうと思ってそうそうなれるものではない」
「人に思われてなるものですか」
「無論そうではない者もいる」
彼は歴史を辿ってきた。
「自分からなりたいと思いなる者もな」
「例えばナポレオンですか」
「そうだな」
ナポレオンもまたその一人だった。彼にとって必要なのは名誉であった。実際に彼は英雄になれた。これは紛れもない歴史の事実である。フランスの者にとっては今でも英雄である。
「彼もそうだしカエサルもそうか」
「彼はまた特別ですね」
モンサルヴァートはカエサルをこう評した。
「何処か達観したところがありました」
「達観か」
「はい、確かに英雄ですがそれだけではない」
彼は言う。
「自身を常勝の天才とは考えていません。絶対の自信がありましたが」
「達観した英雄か」
「だからこそああなったのでしょうが」
実は彼は若くして英雄となったのではない。結構歳をとってから

英雄になっている。アレクサンドロスの像を見て彼の歳になったのに自分はまだ何もしていないと嘆いたという伝説も残されている。彼は決して焦らないという不思議な性分の持ち主だったのでそうした感情を持っていたとはあまり思えないものではあってもだ。
「彼に関しては」
「そうかもな」
シュバルツブルグもそれに頷く。
「連合では彼は英雄になっているな」
「あの若い日本人ですか」
「そうだ、八条義統国防相だ」
その名はエウロパにとっては忌まわしい名前の一つになっている。彼の卓越した軍政によってエウロパは窮地に追い込まれたからである。
「彼はカリスマ的な人気を得ているらしい」
「カリスマですか」
「そうだ、彼の場合は自分で望んではいないがな」
「英雄になったのは」
八条の場合はそうである。モンサルヴァートもまたそうであった。しかしそうではない者もやはりいた。シュバルツブルグは彼の名前を出してきた。
「だがギルフォード侯爵は違うな」
「ああ、彼ですか」
モンサルヴァートもその名を耳にしていた。
「最近よく顔を見ますね」
「彼は自分が英雄になろうとしているな」
そう述べてきた。
「おそらくは」
「英雄になろうとしているのですか」
「そうだ。成功するかどうかまではわからないがな」
シュバルツブルグはそこは疑問に思っていた。だがこうも言って

きた。

## 第二十五部第三章　名もなき批評家その六

「ただ。演説は見事だ」
そう評していたのだ。実際にそれを口にする。
「人を惹きつけて離さない」
「彼もまたカリスマを持っていると」
カリスマについて述べる。英雄というものの条件の一つにカリスマが存在する。シュバルツブルグは彼にそれを感じていたのだ。
「無論それだけではない」
「その演説の内容ですか」
「うむ。一度聞いたがな」
シュバルツブルグは述べる。
「見事なもの。現状を全て的確に把握している」
「今のエウロパを」
「そうだ。そのうえで全てを語っている」
それはかなりのものである。現状を把握しているということはそれだけで大きな武器である。彼がその武器を持っていることは大きかった。
「強いぞ」
「強いですか」
「卿は政治家になれるかどうかはわからない」
今目の前にいるモンサルヴァートに直接言った。
「卿は優れた軍人だ。軍政も優れている」
「それだけでは駄目だというのですね」
「それはわかっていると思うが」
シュバルツブルグはまた述べる。
「今までの経験で」
「はい」
その言葉に頷くことができたのはその経験故であった。統帥本部

長として軍政に携わってきた。そこで実績も挙げている。その経験がここで彼を頷かせたのである。
「その政治力は確かだ」
それはシュバルツブルグも認める。
「だが。政治は実務だけではないからな」
「総合的なものですか」
「そういうことだ。閨閥もあるしな」
エウロパは貴族社会である。そうした閨閥も非常に大きく作用するのだ。モンサルヴァートの家は代々軍人である。政治家の閨閥ではないのだ。
「一つだけではない」
「私は文官ではありません」
彼もそれを認めるかのようにしてこう言ってきた。
「あくまで武人であります。ですから」
「そうした方面には関心がないか」
「軍にいたいですね」
そのうえでまた言った。
「やはり」
「そうか」
その言葉を待っていたかのような様子であった。
「軍人でいたいか」
「最後まで。やはり政治家としてよりも」
「今はか」
「変わることはないと思いますが」
「いや、それはわからないぞ」
シュバルツブルグはその言葉には懐疑を示してきた。
「将来はな」
「そうなのでしょうか」
「人は変わるものだ。それに卿はまだ若い」
こう述べる。

「だからだ。それでも今は軍人だな」
「はい」
やはり毅然としたまま頷いてきた。
「英雄かどうかよりも武人として生きていたいです」
「武人か」
「そうです」
その言葉には迷いがない。彼の心の言葉をそのまま述べたからに他ならない。
「私は自分が英雄であるかどうかはどうでもいいのです。それよりも」
「卿らしいな」
シュバルツブルグはその言葉に納得して応えるのであった。
「その言葉は」
「有り難うございます」
「しかしだ。それでは総統になるつもりはないのか」
「総統ですか」
モンサルヴァートはその言葉には頷かなかった。懐疑的な目を見せるだけであった。
「それは興味がありません」
「ふむ」
それを聞いてまた目を向けるのであった。シュバルツブルグは彼の心をじかに聞いていたのであった。それは心でもあった。

## 第二十五部第三章　名もなき批評家その七

「実はだ。卿を次の総統に望む声もあるのだ」
「初耳ですが」
「インターネット等でだ。出て来ている」
「はあ」
それを聞いて少し面食らった顔になっていた。不本意であるのがすぐわかる顔であった。政治家という地位には関心がなく武人でありたい彼には当然のことである。
「そうなのですか」
「しかし関心がないのならいい」
シュバルツブルグはそれを聞いてこう返した。特に表情は見せはしない。
「しかし。あの侯爵は違うようだ」
「ギルフォード侯爵がですか」
「そうだ。彼は野心家でもある」
モンサルヴァートにはなくてギルフォードにあるものがそれであった。別にそれが悪いことではない。人間には大なり小なりそれがあるものだ。特に政治家という存在はその野心が大きいものだ。これはギルフォードもまた同じである。
「その野心が彼を動かしているのだ」
「総統になるつもりですか」
「間違いない」
モンサルヴァートの問いに頷いてきた。
「その為に今各国、各界の貴族達の間を動いているらしいからな」
「資金も集めているらしいしな」
「資金ですか」
「何をするにしろこれは必要だろう」
こう述べてきた。

「特に政治においてはな」
「それはよく言われていますね」
「どうしてもそうなるものだ」
　それは連合でもエウロパでも変わりはしない。だがエウロパは貴族社会であり貴族出身の政治家達はその資金を家の資産に頼ることがもっぱらである。連合の政治家達は資金調達に四苦八苦しているが彼等は違う。家にその資金があるのだ。このせいでエウロパでは汚職が少ないとされている。もっとも連合から見ればそれは階級社会のせいであり汚職が少ないことの言い訳にはならないということになる。それにエウロパにおいては何かしらの贈り物が多い。これは賄賂にあたると連合ではよく指摘される。実際に連合では賄賂にあたるものである。
「ギルフォード家は資産家だがな」
「イギリスの名門でしたね」
「そうだ。かなり古い家らしいな」
　モンサルヴァートもシュバルツブルグもその名からわかる通り『フォン』がつくドイツの貴族である。だがギルフォードは『サー』なのである。即ちイギリスの貴族であるのだ。
「資産もかなりだ」
「千年前のイギリス貴族は相当没落したのに元に戻って久しいですしね」
「あれはまた異常だっただろう」
　シュバルツブルグはモンサルヴァートのその言葉に顔を曇らせた。二十世紀後半のイギリスはかなりの高額の相続税と累進課税がかけられた。貧富の差をなくす為であった。階級社会への反発もあった。これにより多くの貴族が没落した。だがこれにより購買力や投資力のある資産家が減り経済自体を停滞させたりもした。社会主義にその原案がある政策であるがかえってデメリットも多かったのだ。同じく二十世紀後半の日本もそれを行っている。この時の日本は世界で最も成功した社会主義国家であると言われており本質的に社会主

義的性格の多い国家であったからイギリス程のデメリットはなかったようである。もっともその社会主義的性格から脱するのにかなり苦労した経緯もあるが。

「今ではそれはないしな」

「貴族の復権以降は」

「イギリス貴族は粘り強い」

今度はこう評してきた。

## 第二十五部第三章　名もなき批評家その八

「そのうえ頭の動きが速い。それもあるしな」
「容易ならざる人物のようですね」
「そうだな。少なくとも尋常な相手ではない」
それを言う。
「どういったことになるかな、果たして」
「彼は軍事に関してはどう考えているのでしょう」
「口では随分強硬派のようだがな」
ギルフォードの主義主張は所謂タカ派である。連合においてもかなり強気な発言を行っており軍の復活を主張している。軍にとってはいい言葉ではある。
「彼は」
「そうなのですか」
「あくまで口ではだ」
そう断る。
「実際にそうした政策を実行に移すとは限らない」
「確かに」
口では何とも言えるものである。しかし地際に実行に移すには制約がつきものだ。特に政治の世界においてはそうである。だからこそ公約を実現させるのは難しいのだ。元々実現できる契約でなくてはならないがそれを実現することもまた困難なのである。
「だが連合の脅威には向かいたいな」
「そうした意味では我々と彼の考えは一致はしているがな」
「言葉のうえでは」
「そういうことになる。しかし」
また言葉を出す。
「連合だけでもないしな」
「サハラもまた」

「そうだ。南だな」
南のサハラである。今の彼等の話のもとがサハラでのことであるからそこに話が戻るのは当然と言えば当然であった。
「暫く南は騒がしいが」
「我々には刃が向けられることはありませんね」
お互いで戦いを繰り広げる。それは既に読みきっていた。
「彼等は」
「そうだ。だが生き残るのは誰か」
「シャイターンはとりわけ危険のように思います」
モンサルヴァートも彼をそう見ていた。やはりシャイターンという男は敵に回すと非常に危険な男であった。そうした認識を抱かせる男であった。
「彼が生き残れば」
「我々にとって剣呑な相手になるな」
「はい」
モンサルヴァートはシュバルツブルグのその言葉に頷いた。
「ハサンならば最も危険は少ないですが」
「だが。どうなるかな」
「国境を突破されたとはいえまだ挽回は可能ですが」
「そうだな。だが」
シュバルツブルグは軍人としての長年の経験によりあるものを感じていた。それはハサンにとってあまりいいものではなかった。
「だが？」
「アッディーン元帥は天才だ」
彼は言う。
「今まで僅かな戦力で多くの敵を倒してきている」
「西方においても」
「そうだ。今ハサンは多くの戦力を持っているが」
「それに安穏とはできませんね」
「その通りだ」

はっきりと答えを返す。シュバルツブルグはオムダーマンとハサンの戦いにおいてもアッディーンの軍事的天才を見ていたのである。
「果たしてどうなるかな」
彼はまた述べた。
「ハサンは人も減っていますしな」
「流れはわかりませんか」
「下手をするとハサンは負ける」
それを隠さずに述べた。
「ティムールの存在もあるしな」
「今窮地にある。そういうことですね」
「そうだ」
また述べる。
「挽回できるものはまだあるがな」
「まずあのアステロイド帯の突破は二度はないでしょう」
それはわかる。二度も同じ手段を使う程アッディーンは愚かではないのがわかっているからだ。それに宙形の問題もある。二度できる状況ではないのだ。
「ですが他の手段で来ますね」
「ハサンにそれを見抜ける人物は一人しかいない」
太子である。ハサンの実質的な指導者である彼がハサン第一の人材である。しかし彼は一人しかいないのだ。二人も三人もいるわけではない。ここにもハサンが抱えている問題があるのだった。

## 第二十五部第三章　名もなき批評家その九

「一人だ」
「その彼はブルジルトから動くわけにはいきませんし」
「それへの対処はどうしても限られたものになってしまう」
「ハサンは数では上ですが対処が限られている」
そこがハサンにとってネックだった。そのネックもまたハサンにとって辛いことであったのだ。
「そういうことだな」
「はい、ですが戦力はありますので」
これは長所だった。ハサンは長所もある。これがこの戦いの流れを読みにくいものにしていた。だからシュバルツブルグもモンサルヴァートも今一つ歯切れがないのだ。
「どちらにしろ長くなりそうだがな」
「はい」
それだけはわかる。だがそれ以上はわからない。サハラの趨勢はかなりわからなくなってきていた。それを読みきれていないのは連合でも同じであった。
ネットの掲示板でも色々と話が為されている。だがその話は紛糾はするが進んではいなかった。
『ハサンが勝つに決まっている。国力が違う』
誰かがこう書くとすぐに反論が書かれる。
『オムダーマンもティムールも自分達より強い相手に勝ってきているぞ』
『そうだな。それもかなりな』
こう書かれる。しかし今度もまた反論が書かれる。
『今までは運がよかっただけだ』
今までのことは運に過ぎないと書かれるのだ。しかしそれだけではなかった。

『運だけで勝てるものか。あの二人は本物だろうが』
アッディーン、シャイターンのことである。最早連合においてもこの二人の名前は知れ渡っていた。サハラの英雄であるとされている。
『ハサンは最近人材も減ってるだろ。戦争は人がするんだぞ』
『おいおい、何時の時代の話だよ』
戦争は人がするという言葉にはすぐに反論が書き込まれた。
『戦争は機械でするものだろ。そんな話が通用するのは二十世紀までだ』
連合の者らしい書き込みであった。連合においては戦争は天才的なソフトウェアよりも優れていて安定性のあるハードウェアに重点を置いている。そのことを今出してきたのである。
『前のエウロパとの戦争だってそうだっただろうが』
『あの時の戦争もちゃんと人材いただろうが。何言ってるんだよ』
『そうだよな。御前ちゃんと見てないだろ』
この書き込みにもまたしても反論が書かれた。
『こっちは指揮官も将兵もそれなりの質があったぞ』
『傑出してはいないがな』
連合軍の将兵の質はある程度しかない。サハラの将兵のようにそれ程高くはない。だが最低限の質がある。それ以上に軍律を徹底させることを優先させる教育を心掛けているのが八条であるが。彼はまず軍の規律を意識しているのだ。これはこれで正しい。略奪暴行を好む軍程迷惑な存在はないからだ。
『けれどそんなに高くはないな』
『それはあるな。義勇軍は別にしてな』
『そうだな』
これには多くの者が頷いた。このことは他ならぬ連合の者達が最もよくわかっていた。
『マニュアル重視みたいだしな』
『マニュアルか』

ここで連合軍を特徴付けているマニュアルが出て来た。連合軍はそれをもとにあらゆるケースの事態に対応しているのである。そうした意味で連合軍は二十世紀型の軍隊の正統な継承者であった。八条はどんな状況でもどんな指揮官でも確実に勝利を収められることを願っていた。その結論がこうしたマニュアル重視の軍であったのだ。言うならば機械化された軍である。

『サハラにはそれはあまりないな』

『それよりもあれだな』

また書き込みが為された。

『人で戦っているからな』

『そうだな』

『それはあるな』

この書き込みに賛同する書き込みが続いた。

『その人が減ったハサンはまずいだろ』

『減ったのは上の人間だけだろ？大丈夫じゃないのか？』

『馬鹿か御前は』

楽観的な意見には罵倒が返ってきた。

『おい、馬鹿とは何だよ』

『馬鹿に馬鹿って言って悪いのかよ』

少しずつ掲示板が荒れだしてきた。

『何っ！？もう一回言ってみろよ』

『何度でも言ってやるよ。馬鹿ってな』

『おい、止めろよ』

彼等を止める者が出て来た。これで話は少し穏やかなものに戻った。

『お互い落ち着け。いいな』

『あ、ああ』

『済まない』

ここはお互いに一旦静まった。そのうえで話を再開させた。話はその人材の話に戻ったのであった。

## 第二十五部第三章　名もなき批評家その十

『魚だって何だって頭がなければどうしようもないだろ』
その上層部の話であった。ここで魚に例えられてきたのは書き込んでいる者が魚が好きだからであろうか。その詳細は不明であるがこう書かれたのは事実であった。
『そういうことだ。今ハサンの上の方は太子しかいないだろ』
連合においてもハサン太子のことはよく知られていた。優れた人物として有名である。しかし彼だけでは辛いのもまたわかっていた。
『何か急に事故とか急病とか続いたからな』
『ああ、あれおかしいな』
このことについてすぐに指摘が書かれた。
『何であんなに事故やらが続いたんだ？』
『テロか何かじゃないのか？ひょっとしたら』
そう見る者もいた。実際にシャイターンが仕掛けた工作であるからこれは当たっていた。しかしそれは確かな根拠はないのでここでは細かいことは書かれなかった。
『何かキナ臭いな』
こう誰かが書いただけであった。それ以上は誰も書かなかった。
『まあハサンにとっては災難だな。何か動きが鈍いって言われてるしな』
『それも人材がいないせいか』
『そういうことだろ。頭が悪いからな、今のあそこは』
身も蓋もない書き込みであった。しかし実にわかりやすい。
『実際それで困ってるみたいだな』
『そのせいか。国境を奪われたのは』
『ああ、あれな』
それについても書かれる。
『まさかとは思ったけれどな』

『ハサンも油断したってことか？』
まずはハサンへの批判に及ぶ。しかしそれだけではないのだ。ハサンはこの場合は落ち度はなかった。それ以上にアッディーンが凄かったのだ。
『あれはアッディーンが凄過ぎたんだよ』
それが今書かれた。
『あんなこと考え付くかよ』
『あれ連合軍だったら突破できるだろ』
連合軍に当て嵌めて書かれた。
『間違いなく』
『連合軍とあっちの軍じゃ違うからな。その分作戦だって違ってくるぜ』
『あっ、そうか』
『そうだよ。だからあれはマジで規格外なんだよ』
そう書かれた。書かれることが連合から見たサハラであるがそれでも彼等はかなり細かく的確にサハラというものを見ていると言えた。無論玉石混合であるがこれはネットであるから当然であった。
『アッディーン元帥はな』
『その規格外の御仁が今度は何をするかな』
『楽しみだな』
『ああ、そういえば元帥つったらよ』
ここで話題が変わってきた。
『あの元帥閣下はまた外れたな』
『あの人はいつもだろうが』
『シャバキも色々言ってたみたいだしな』
あまりにも発言が過激過ぎてそのまま精神病院に隔離されていたが俺は正気だと言い張って無理に退院していたのだ。ところが発言は相変わらずで今ではある意味で連合の人気者になっているのである。
『あいつヤクやってるだろ』

話がそのシャバキの方に流れた。
『変な電波受信してるんじゃないのか？』
『俺はカルトの教祖だって聞いたぞ』
『いや、訳わからねえ異文明の異種族に精神乗っ取られているんだろ』
どれにしろ滅茶苦茶な言われようである。だが実際にシャバキを正気だと思っている人間は存在していない。唯の戦争をそこから人類滅亡への序曲につなげられる脅威の推理力を見てそう思える人間はいはしない。
『どっちにしろあいつはまともじゃないからな』
『それで何て言ってるんだよ』
『アッディーンはメフィスト星人に精神を支配されているらしい』
実際にこれをテレビで堂々と叫んでいたのだ。しかも本気で。
『メフィスト星人！？何だそりゃ』
『特撮ものの悪役か？』
その名前を聞いてこう思わない者はいない。普通はそう思う。

## 第二十五部第三章　名もなき批評家その十一

『いや、あいつの頭の中では違うらしい』
ところがそうではないという。少なくともシャバキの頭の中ではそうなのであろう。
『何でも人類制服を企む悪の宇宙人だそうだ』
『おい、字が違うぞ』
すぐに突込みが書かれた。
『征服だろ、何で制服なんだ』
『ちょっとは落ち着けよ』
『いや、シャバキはこう言ってるんだよ』
何とその通りであった。これもまた滅茶苦茶な話であった。
『制服ってな』
『意味わかんねえな』
『最近さらに凄くなってるな』
シャバキだから納得できるとさえ言われる。ある意味凄いことではある。
『とにかく宇宙人が出るらしい』
『それであれだろ。一万人委員会か』
『あれ、三〇〇人じゃなかったか？』
その辺りはシャバキのその場その場での発言でころころ変わる。シャバキの発言の特徴として過去を決して振り返りはしないということがある。
『千人だろ』
『二万人じゃなかったか？』
彼等もそこはよく覚えてはいない。何しろ昨日テレビで言った発言と今日ラジオで言った発言が全く矛盾していることがざらなのだからだ。それがシャバキであるのだ。
『何か滅茶苦茶なことになってるな』

『本当に訳のわからない宇宙人に意識を乗っ取られているのか？』
こうした意見まで書き込まれた。そう書かれても当然である。
『とにかくそのシャバキが言うんだよ』
『今度は電波か？』
また言葉が書かれる。
『いや、何か絶対神のお告げらしい』
どちらにしろ碌なものではない。シャバキは何か得体の知れない言葉を聞くことも多いのだ。一番恐ろしいのは彼は何も薬物を使用していない。今度は遥かな高次元の最終解脱をした如来の言葉で健康食に目覚めたと主張しているのだ。身体が健康であっても心まで健康であるとは限らないのが悲しい。
『アッディーン元帥は宇宙人に操られているってな』
『そんなの誰が信じるんだ？』
『オカルト雑誌がだろ？アトランティスだったか』
連合にはオカルト雑誌も多い。それなりに好評でカルト的な人気を維持している。もっとも多くの者はそれを事実としては読んではいない。つまりシャバキと同じようなものとして認識され読まれているのである。
『アステカじゃなかったか？』
『シャバキはどっちでも書いてるぞ』
シャバキはそうして生計を立てている。悲しいことに精神病院関連でその収入はかなり費やされているのが実情であるが。
『それも毎月な』
『どっちもかよ』
『ああ』
『そこでそのメフィスト星人が出るんだな』
その実在するとすればシャバキの頭の中であろう宇宙人についてまた言及される。
『どっちかに』
『どっちかは忘れたがな』

しかしそんなことはどうでもよかった。事実としてシャバキが言っていることが滅茶苦茶なのだ。支離滅裂で破天荒になっているのである。しかもそれは悪化する一方であるから厄介なのだ。
『シャバキの頭の中に』
『違う違う、アッディーン元帥に取り憑いているんだ』
すぐに訂正が入るが訂正される方が真実であった。
『それで人類を滅亡に誘っているらしい』
『マジかよ』
『あいつにとってはマジだ』
そういうことである。シャバキにとっては事実なのだ。もっとも彼だけの事実であり他の者達にとっては事実ではない。そこが大きな問題なのだ。
『少なくともな』
『それでシャバキはあの戦いどうなると思ってるんだろうな』
『わからないな』
いきなり言われた。
『あいつ後で予言されていたとか言うからな』
『エドガー＝ケイシーがだったか？それともジーン＝ディクソンがか？』
どちらも二十世紀のアメリカの予言者である。この時代における予言も多数行っていたと『何時の間にか』言われている。本人達がそれを本当に行っていたかどうかはまた別問題である。一説には彼等の残した言葉を適当に歪曲していい加減に創作しているのだとも言われているが実はそれは違う。創作している人間が何時の間にかそれを唯一にして無謬のものと確信してしまうのだ。シャバキは最初から確信しているところが違う。

## 第二十五部第三章　名もなき批評家その十二

『それかノストラダムスがか』
『けれどそんな宇宙人に操られているのがいたらやばいだろ』
『ハサンは勝てるのか？』
『あの元帥は勝つって言ってるぞ』
シャバキから離れて今度はその予想がことごとく外れるある意味奇跡の軍事評論家について述べられた。連合は実に様々な人間がいる。四兆もいればそれだけ奇人変人がいるのだがそれでも連合は昔から奇人変人には事欠かなかった。
『ハサンがな』
『じゃあハサン負けだな』
すぐにこう書かれた。
『閣下の御神託が下ったし』
『真面目に言うとどうなんだろうな』
『オムダーマン危ないだろ』
誰かがそう書いた。
『ハサンの方が国力高いしな。しかもあと何個も防衛ラインあるしな』
『それで防ぐつもりか、ハサンは』
『だってそうだろ』
そこを指摘された。実際にハサンは無数とも言える防衛施設を置いている。そのことはハサン軍自身も宣伝している。あえて敵を威圧する為にだ。
『その為にあるんだしな』
『アッディーン元帥も随分そういうの破ってきているけれどな』
『今度ばかりはってあるぞ』
また書かれた。
『やっぱり冷静に見てハサン有利だよ』

『そうか』
『それに主力は健在だしな』
それが指摘された。ハサン軍はダビデブの的確な指揮により速やかに国境の兵を北に逃がしたのだ。その為彼等はその兵力のほぼ全てを温存できたのである。これはハサン軍にとっては大きな戦略的要素でありオムダーマン軍にとってはあまりにも大きな戦略的脅威であった。それもあった。
『まだまだわからんぞ』
『それに例え今度負けてもハサンはまだまだ挽回できる』
国力に基いた言葉がまた書かれた。
『全滅してもまだな』
『全滅してもか』
それがまた問題であった。ハサンは全滅しても極端な場合また兵力を動員して集めることが可能だ。その国力がそれを可能している。
『まだ幾らでもな』
『オムダーマンと比べてもそれができる力が多いな』
それがまた大きかった。力の差もやはり歴然としていた。そうしたものを見て彼等はハサンが有利ではないのかと予測を立てていたのである。
『オムダーマンとしては短期決戦でいきたいだろうがそれは無理だしな』
『ああ、それは無理だな』
『絶対にな』
これは誰もが考えていた。
『ハサンは広いしな』
この広さも問題である。ハサンはその広さもまた問題なのであった。距離はそれだけで大きな戦略的価値である。それがオムダーマンとハサンの戦争に横たわっているのだ。
国力と距離、オムダーマンはその二つの要塞も相手にしなければならない。この二つはアッディーンといえどもどうにもならないこ

とであるのだ。
『短期は絶対に無理だ』
それが結論であった。
『誰でもな。シャイターン主席も』
『ああ、そっちでも戦争がはじまってるんだったな』
ふとそれを思い出してきた。
『アヤグーズに攻め込んでいたよな』
『あっちもかなり苦労するだろ』
今度はこう書かれた。
『アヤグーズはハサンの属国の中でもかなり強いしな』
『あの女王様もな』
アヤグーズのことも彼等はよく知っている。そうしたことに興味がある者達が集まる掲示板だからこれは当然である。彼等は総合掲示板において話を書き込んでいるのである。連合においてはかなり有名な掲示板群である。
『シャイターン主席でも難しいだろう』
こう書かれた。
『勝つのは』
『いや、あの人わからんところがあるな』
シャイターンにとっては戦争だけではないのだ。政治もまたある。政治を戦争に入れることがシャイターンのやり方であるがそれはかなり独特である。

## 第二十五部第三章　名もなき批評家その十三

『ハサンの要人がどんどんいなくなったもな』
『あれあの人がやったのかよ』
『そうじゃねえのか？』
かなり鋭い書き込みであった。その通りなのだ。彼等はただ予想を何となく立てただけだがそれは当たっていた。ネットの恐ろしいところはこうした真実も入り込むということである。ただしそれを見つけるのは決して容易なことではないが。
『アッディーン元帥もオムダーマン政府もそうしたことするタイプじゃないだろ』
『それはな』
『オムダーマンは外交は上手いけれどな』
謀略を使うタイプではないというのも知られている。なお連合内部では各国が様々な謀略を駆使している。大国の中では米中の謀略好きが知られている。ＡＳＥＡＮ諸国はさらにそうであるが。もっとも彼等の間の謀略は買収やハニートラップやスキャンダルを握っての恫喝等であるが。
『そういうことは昔からしないしな』
『シャイターン主席はどうも違うな』
すぐにそれが指摘された。
『あの人は手段を選ばん』
『じゃあ今回も』
『可能性はあるだろ』
こうも書かれた。
『今までが今までだしな』
『あの未亡人の結婚といいな。周りでも不審なことが多いな』
『というよりは不審なことしかないぞ』
これもまたシャイターンに対する評価であった。やはり彼に対す

る疑念は連合にも強くあった。彼等はサハラの外にいるだけによく見えるのだった。
『あの人に関してはな』
『というよりは何か事前に訳のわからないことが多いんだよ』
『訳のわからないこと？何かあったか？いや』
書いた本人が気付いた。よく考えれば言うまでもない。
『そればかりだな』
『そうだろ？周りで急死する人間が多いしな』
『北方に来る前からだな』
誰かがこう書いた。やり取りが剣呑でひそひそとしたものになる。それには訳がある。こうした話になるとその必要はなくてもそうなるものだ。
『戦う前に相手の指揮官が事故死したりとかな』
『病死ってのもあったよな』
この指摘も書かれた。
『元気だった人間が朝起きたら死んでいた』
『怪しいと思わない方が無理だな』
実際に歴史においてはこうした話もないわけではない。というよりは非常によくある話である。酒を飲んでそのまま倒れることも多い。表面上は事故死であるとされるのだ。ところがその真実は誰にもわからない。何故ならそれは決して明かされてはならないものだからである。その時に証拠が全て消されて不明になるということは何時の時代でもあることなのだ。
『そんな話な』
『けれど証拠がないな』
それだけで話を消すには充分である。証拠がなければどうとでも言えるものだ。
『全然な』
『あえて消しているんだろうな』
その通りであった。これを書いても身の危険がない連合だから書

けることであった。
『そういうことがあったとしたら』
『というよりあるだろう』
根拠はないが予測はできる。
『普通にな』
『そうだろうな、やっぱり』
また予測が書かれる。しかしそれが全くの見当外れであるとは誰にも思えないのであった。やはり状況を見ればそう判断できるからであった。
『あの人はな』
『これからも使うのかね、やっぱり』
『間違いないだろ』
これも予想できることだった。
『それが有効なんだからな』
邪魔な相手はその都度消えてもらう、お世辞にも奇麗とは言えないやり方だが有効であり古代から行われてきたことである。シャイターンもまた同じなのである。それが真実であるのならばそれだけのことだった。

## 第二十五部第三章　名もなき批評家その十四

『実際に』
『目的の為には手段を選ばないか』
それもまたやり方の一つである。やはり奇麗ではないが。ただしこれは政治の話であり人と人のやり取りで実際にやる人間は信用されない。政治の世界でもこれが極端ならばやはり信用されなくなる。信なくば立たず、それが世の中である。信用できない相手とは容易に手を組めないのもまだ真実である。
『やばい相手だな、何か』
『そのやばい相手と今戦ってるのがアヤグーズなんだよな』
そこに話が戻る。
『どうなるやら』
『さあな、あの女王様も強いしな』
アヤグーズもまた傑物である。戦場においては常に勇猛果敢で鮮やかな勝利を収めてきている。それを彼等も知っているのだ。
『面白いことにはなりそうだがな』
『また暗殺を使うかね』
誰かが書き込んだ。
『やってるとしたらだけれどな』
『やれたらやるだろ』
また書かれる。
『当然な』
『敵に回したくないな、つくづく』
シャイターンについてはどうしてもそうした言葉が出る。やはり危険な相手であるということを認識せざるを得なかった。そうした相手だった。
『ある意味日本みたいだな』
日本について書かれた。

『そうした裏で何やるかわからないのはな』
『日本はあそこまでしないだろ』
擁護しないまでもそうした書き込みが入った。
『確かに昔から陰湿な謀略使ってるけれどな』
『確かにな』
日本は昔から謀略の上手い国として警戒されている。ただし米中のそれのように露骨で直接的なものではない。あえて見せずに影から攻めてくる。それもやわらかにだ。日本の謀略はまるで化かすようにして仕掛けてくるのである。他国にとってはかなり厄介な謀略である。微笑みながら向かい合い後ろに仕掛けている謀略なのだ。
『人は殺さないからな』
『政治的に抹殺するだけだな』
よくやるのは弱みを握ったり買収することである。これはこれで効果がある。そうした謀略も可能なのである。やはり奇麗な話ではない。だがやはりこれも政治なのであった。
『それがかなり陰湿だけれどな』
『食えない国だ』
それをあらためて書かれる。
『何するかわからないしな』
『何を考えているのかもな』
それも日本であった。腹の底が見えない。ＡＳＥＡＮ諸国は何か仕掛けてくる場合は独特の笑みを浮かべるとされている。彼等は微笑みの国だがその微笑みの中で目の笑みが消えると言われている。あえてそうしているとも言われるがその笑みが出ると相手の国は既に仕掛けられていることも多い。彼等と日本もまた微妙に違う。
『わからせないよな』
『嫌な相手ではあるよな』
こうも書かれる。
『敵に回したら嫌なタイプだ』
それもはっきりと書かれる。

『味方にしている時は結構以上に頼りになるのにな』
『まあ向こうから喧嘩売る国じゃないしな』
これが救いであった。日本は決して好戦的でも貪欲でもない。あらゆる分野で恵まれた立場にいるからであるがそれは各国にとっては幸いなことでもあった。
『ティムールはわからんがな』
『というかこっちが何もしなくてもあの御仁はやるだろ』
そこが大きな違いであった。仕掛けられる方にとってはたまったものではない。
『必要ならな』
『ハサンみたいにか』
『嫌な話だな』
『しかしあれだぞ』
また誰かが書き込んだ。
『ハサンもアヤグーズもまだまだ強いしな。こっちもわからないぞ』
『わからないか』
『ああ、全てはこれからだな』
まだ戦いははじまったばかりである。判断できかねないことが多かった。それでも彼等は彼等なりに読んでいた。戦いの流れをである。

## 第二十五部第三章　名もなき批評家その十五

彼等の読みはある者にチェックされていた。それは他ならぬ八条であった。彼は自身の執務室のノートパソコンでそれを見ていた。側には由良がいる。

「何か色々書いていますね」

彼は八条の後ろに立っていた。そこからパソコンを覗いている。

「あれこれと」

「そうだな。しかし」

八条はマウスに手を添えている。書き込んではいない。ただ見ているだけであった。

「勉強になる」

「これはこれでそうですね」

由良もその言葉に頷く。彼等もネットを使っての学び方はわかっていた。

「かなり」

「しかしあの戦いの流れは読めないな」

「そうですね」

由良はその言葉に頷く。

「まだ何も」

「そうだな、何も」

八条もそれに応える。応えながら左手の指を唇にもやる。

「読めはしない。誰にも」

「とりあえずオムダーマン軍は北上し、ティムール軍はアヤグーズに展開しています」

由良は彼に報告した。

「新しい情報はまだですが」

「わかってはいないか」

「リアルタイムでは」

そう断りを入れた。
「多少のタイムラグがあるのは仕方ないか」
「ええ。しかし」
由良はまた述べた。
「ハサン軍がどちらに重点を置こうとしているのかは読めました」
「オムダーマンだな」
八条は言った。掲示板をそのままにハサンの宙図を開く。二つの画面が一緒に出た。
「まだティムール軍は本土には入っていないが」
「オムダーマン軍はやはり」
「そうだ、入っている」
そこが大きな違いだった。オムダーマン軍はハサン本土に入っている。どちらが問題なのかは言うまでもないことであった。
「そこが問題だな」
八条は画面の宙図を見て述べた。そこには当然ながらオムダーマンとハサンの国境もある。今オムダーマン軍がそこにいるのであった。
「言うまでもなくな」
「はい。しかしあれですね」
由良はここで言ってきた。
「オムダーマン軍は何かと機先を制するのが好きですね」
「先んずれば人を制す」
八条は古い諺を出してきた。表情は特に変えない。
「項羽の言葉だったか」
「確かそうでしたね」
由良はその言葉に頷く。項羽はその圧倒的な武勇と軍略により一度は天下を制した男である。力は山を抜き気は世を覆う。覇王と呼ばれた男である。
「アッディーン副大統領も覇王になるのでしょうか」
「今のところはな」

やはり画面を見ている。そのまま述べるのであった。
「まさに覇王だ」
「その戦術戦略といい、ですね」
「戦術と戦略両方が優れている」
そうも言う。八条は彼をかなり高く評価していた。だが少し部外を見るような目をしていた。それは連合とサハラという異なる世界の間にあるからだ。
「軍人としてだけではないしな」
「政治家としても」
「見事だ。しかしそれだけではない」
続いてこう言ってきた。
「それだけではないと」
「カリスマも備わってきている」
「カリスマも」
その目が光る。鋭い目の光がパソコンの画面に向けられている。彼は今そこに映っている宙図も掲示板も見てはいなかった。アッディーンを見ていたのであった。
彼もまたアッディーンを意識していた。そのうえで見ていた。それは敵を見るというよりは何処か歴史上の人物や物語の人物を見るものに似ていた。

## 第二十五部第三章　名もなき批評家その十六

その理由はやはり彼がサハラにいるからでありまだ連合とは直接対峙していないからであった。既に権益は確保されている。最早利害関係はない。こうなってしまえば彼に対して直接的に考えることはない。だから彼は今アッディーンをそうした目で見ているのである。だがこれはかえってアッディーンという男を客観的に見るようにもなっていた。

「既にそれは西方を統一した時から見られていたが」

「かなり早くからですね」

「それが増してきている」

こう評価してきた。

「今や彼がそこにいるだけで圧倒的な歓声が起こるようにまでなった」

「まさに英雄ですか」

「それはシャイターン主席も同じだ」

シャイターンの名も出た。それは掲示板にも名前が出ている。

「彼もまたな」

「それならば」

今度は由良が言葉を出してきた。

「天に二日なしにもなりますね」

「今太陽は三つだ」

八条は言った。

「オムダーマン、ハサン、ティムール」

この三国こそが三日だった。星系によっては幾つも恒星がある場合があるがそれでも彼等はここではあえて古い諺を出してきたのだ。

人もまた太陽であるということであった。彼等は今それを言っているのである。

「この三国の中で生き残るのは一国だけだ」

「後の二国は滅ぼさなくてはならない」
それは掲示板には書いていない。宙図にもだ。しかし宙図はサハラ全体にも切り替えられる。八条はここでマウスをクリックさせてサハラ全体に切り替えた。八条も由良もその宙図に目をやった。
「いや、滅びるのが運命か」
八条は言葉を言い替えた。また言うのだった。
「サハラ統一の中において」
「一千年の間統一されなかったサハラがですか」
「アラブの時代から考えると二千年以上になる」
八条はそこにさらに時間を付け加えさせてきた。
「二千年の間彼等は統一が果たされなかった」
「極端に言うとですね」
「むっ」
由良の言葉に顔を向ける。目が一瞬しばたき首の動きが普段よりほんの少しだが速かった。
「人類全体もですね」
「連合も統一されているとは言えないか」
「確かに」
一応は一つになっているがその中に三百の国がある。所謂国家連合である。しかもつい最近まで各国が交戦権こそないもののそれぞれの軍を持っている程独立した存在になっていた。国家だけでなく様々な組織や団体が存在している。連合は一つの勢力ではなく無数の勢力が存在している多層国家、多層勢力なのである。それが連合なのだ。
「統一とはまた違いますね」
「エウロパも国家連合だしな」
八条はエウロパにも言葉を及ぼしてきた。椅子を回して身体も由良に向けてきた。足を組まずに穏やかな顔をしていたがその表情は真剣なものであった。
「だがエウロパは我々よりも中央集権的だな」

「我々がまた極端に多層なのですが」
由良はまたそれを述べた。
「それでもそうしたところは同じですね」
「そうだな。だがサハラは違う」
連合とエウロパを出したうえでサハラについてまた述べた。
「あくまで統一国家を目指している」
「統一国家を」
「そうだ」
八条は言った。強い言葉になっていた。
「中央集権的な統一国家を。サハラは目指してきた」
「そうなのですか」
「オムダーマンもティムールもそうだな」
二国に対して述べてきた。
「そしてハサンもまた。中央集権的国家だ」
「まとめるのはイスラム教ですね」
これだけは外せなかった。サハラが何故サハラかというとイスラム世界だからだ。それにより彼等はサハラになっているのである。

## 第二十五部第三章　名もなき批評家その十七

「そのイスラムによりサハラは一つになるのを目指していた。二千年の間」
「かつてのウマイヤ朝のように」
「ウマイヤ朝か」
八条はその古い国家を聞いてふと目を動かした。微妙に。
「あの国家がアッバース朝に倒されてからだったな」
アッバース朝のクーデターめいた攻撃によりウマイヤ朝は滅んだかに見えたが何とかイベリア半島にまで逃れて生き残ったのである。だがここからアラブ世界は長らく分裂したままだったのだ。それが今に至る。しかし今それが一つになろうとしていたのだ。八条はそれを見据えているのである。
「サハラの分裂は」
「何度か統一されようとしましたね」
由良はまた述べた。
「これまでにも」
「そうだな。しかしそれは適わなかった」
八条の言葉は一抹の寂しさを含んだものになっていた。表情は変わりはしていないが。
「その度にそれは潰えた」
「何故だったのでしょうか」
「理由は様々だったな」
歴史を振り返る。そのうえでの言葉であった。
「暗殺に叛乱、急死、分裂、裏切り。全てあったな」
「ええ」
その都度サハラ統一は夢と消えていった。実ることはなかった。これがサハラの歴史であった。夢は常に消える。それでもまた統一を目指す。それがサハラであったのだ。

「今度もその可能性はある」
「ありますか」
「それは否定できないと思うが」
由良を見ての言葉であった。
「今までの歴史からな」
「確かに」
そして由良もそれを認めるのであった。歴史を見ればそれは当然であった。
「英雄だけでは駄目なのだろうな」
八条はふと達観したような目になり声もそうしたものにした。
「やはりな」
「といいますと」
「また中国の言葉だが」
そう断った上で述べる。
「地の利と人の和」
「そして天の時ですか」
「その三つがないと駄目だとされているな」
「ええ、確かに」
あまりにも有名な言葉である。この時代においても何かにつけ小説や漫画、ゲームに出て来る。主人公達に相応しい言葉となっているのが常である。
「今まではそのうち天の時がなかったということだろう」
「だから統一できなかったのですね」
「そうではないかな」
八条は言った。
「時期というものは大事だ」
「時期ですか」
「そうだ。連合もそうだったしな」
八条はここで連合について言及した。
「連合軍が設立されるまでの間はかなりの時間が必要だった」

「それは確かに」
それを言われると納得できる。連合はあまりにも多くの勢力が存在している為そこに至るまで多大な時間を要したのだ。各国の軍の存在も大きかったのである。
「ようやく、ですからね」
「その天の時がなかった。サハラには」
「だから統一されなかったのですか」
「実はあったのではないかと思う」
しかし八条は首を傾げながら述べた。述べながらまたサイトを開いた。そこはオスマン＝トルコに関するサイトであった。かつてアジア、ヨーロッパ、アフリカに覇を唱えた大帝国である。広大な領土と長い繁栄を誇ったイスラム世界最後の世界帝国である。言うまでもなく今の連合の大国の一つトルコの前身である。

## 第二十五部第三章　名もなき批評家その十八

「この時にな」
「統一は可能でしたか」
「欧州に行ったからな。それはそれで正解だったと思うが」
オスマン＝トルコはコンスタンティノープルを占領し自らの都とした後バルカン半島から欧州に進出していっていた。イラクにまで進出しペルシアとも争いアフリカもチュジニアまで進出していたが欧州がメインであった。
「あの時には可能だっただろう」
「しかし彼等はその選択肢を選ばなかった」
「ローマを目指していたとも言われているな」
コンスタンティノープルを占領したメフメット二世の頃は漠然とだがそう考えていたと言われている。実際には流石に困難でありメフメット二世の死でそれは適わなかったがこの帝国がローマに匹敵するだけの力と繁栄を誇っていたのは事実である。オスマン＝トルコは当時世界最強の軍隊と最高の文化を持っていた。全てにおいて欧州を圧倒していたのだ。
「しかし彼等はイスラムを統一せず」
「今に至る。結局はウマイヤ朝だけか」
統一王朝は、という意味である。八条は画面のオスマン＝トルコの領土を漠然と見ながら語った。あえて三次元にはせずそのまま見ている。
「今のところ統一したのは」
「だからこそそれを果たしたならば絶対的な英雄となります」
「その通りだ」
八条はその言葉に頷く。
「確実にな」
「その英雄が誕生するかどうかは」

「まだわからないな」
八条はモニターを見て述べる。述べながら話を続ける。
「統一したとしてもまだ大変なものがあるしな」
「創業だけではなく治世もですか」
その困難は八条はよくわかっていた。何故なら今連合軍を創業し、それを維持する為に多大な苦労を払っているからである。
既に連合軍を維持するシステムは完成している。後はそれを軌道に乗せるだけであるがそれが実に厄介なのだ。そこにようやく至ろうとしている。だからこそ維持することの難しさを認識しているのだ。
「だがそれは置いておいてな」
八条は一旦はそれは置いた。
「まず創業ｆだ」
「そうですね」
由良も八条の今の言葉に頷く。
「まずはそれがなくては」
「まずはだな。結局サハラは統一に関しては何もはじまってはいない」
「行おうとしているだけで」
結局はそういうことであった。彼等はまだ何もしてはいないのだ。統一の為に戦っているだけで統一は果たしてはいないのだ。まだ何も。
「その為の戦いだな」
「流れを掴もうとしているだけですね」
「それを言うと小さいものでしかない」
八条は達観しているのか突き放しているのかわからないような言葉を出してきた。既にオスマン＝トルコのサイトは閉じられまたサハラの宙図が出て来ていた。今度は完全に三次元にしている。それで宙図を眺めながら由良と話をしていた。
「だがその小さなことですら」

「これだけ大きなことになる」
また達観したように述べた。
「実際に大きくもある」
「小さくもあり大きくもある」
口に出しただけでは矛盾しているようにも聞こえる言葉であった。だがそれこそが人の世を現わすものである。結局世の中とは大きくもあり小さくもあるものなのだから。
「だから皆見ているのだ」
「サハラでの戦いを」
「それを考えると」
あの掲示板をまた開いた。そこにはさらに書き込みが為されていた。
「この掲示板を見るのも役に立つな」
「正直かなり質の悪い書き込みもありますがね」
由良は少し苦笑して述べた。実際にこの掲示板群は質の悪い書き込みも多く落書き呼ばわりされることもある。だがその中に得られるものも多いのも現実である。

## 第二十五部第三章　名もなき批評家その十九

「それは確かにな」
八条もそれは認める。
「私も随分書かれている」
「同性愛者の板にも名前があるそうですよ」
「困ったことだ」
これには真顔で述べる。彼は同性愛者に好かれたり同性愛者のように書かれたりするが同性愛者ではない。同性愛を否定はしないが同性愛者ではないのである。
「そんな趣味はないのだがな」
「それは殆どの者が承知ですが」
「そうかな」
その言葉にはどうしても懐疑的にならざるを得なかった。実際に首を傾げる。
「そうは思えない時がある」
「何故でしょうか」
「私の掲示板ができるな」
八条は真顔に憂いを含ませてきてまた述べる。
「するとだ。同性愛を思わせる書き込みが必ず出る」
「ああ、あれですね」
同性愛は一つの世界でありそれを思わせる言葉も存在しているのだ。この時代では売れない頃に同性愛のアダルトな映画に出ていた映画俳優がその映画で話した言葉がそのままそれを暗喩するものになっている。
「これだな」
自分の掲示板の一つを開いて言う。その整った顔が不機嫌なものになっている。
「美しい・・・・・・君の全てが」

「それ毎日何処かで書かれている言葉ですね」
「私だけではなくな」
「はい、何しろ連合は同性愛についても寛容ですから」
イスラエル以外の全ての国で同性愛を法的に認めている。なお日本では昔から同性愛は公に認められているので問題はない。日本の長い歴史において同性愛で罪に問われた人間はこの時代においても一人もいないのである。これをどう捉えるかはその者それぞれである。
「実際に長官はそうした嗜好の持ち主にも人気がありますよ」
「いいことなのか悪いことなのか」
「当然いいことです」
今の問いへの返答はこうであった。
「人気がないよりはある方がいいのは間違いありません」
「確かにそれはそうだが」
言う通りだ。しかしその嗜好がない者にとってはこれはあまりいい話ではない。だからどうしてもいい顔をできないでいるのだ。
「何かな。皮の服を着た逞しい男や女装した男は」
「お好きではないですね」
「そうだ」
それをはっきりと言う。否定せずに即座に肯定してきた。
「私はどうしてもな」
「まあ仕方がないですね」
由良はそう述べてきた。
「それに関しては」
「仕方ないか」
首を傾げて憮然としながら述べた。
「それに関しては」
「はい。それでですね」
また言葉を続けてきた。話を掲示板に戻す。
「今そこに書かれていることですが」

サハラでの戦争について書かれている掲示板だ。そこには今も様々なことが書き込まれている。所謂煽りもあるし荒らし行為もあるがその中において光る書き込みがあるのも事実であった。それを見ながら話をするのだ。
「確かにいい意見もありますね」
「それを拾っていくことが重要だ」
八条もその書き込みを見ている。そのうえで述べる。
「よい書き込みを見つけてな」
「それがこの掲示板の使い方ですね」
「そうだな。中々難しいが」
どれがよくてどれが悪いかを見極めるということである。それは確かに難しいことである。
だがそれができなくてはネットはできない。特に今彼等が見ている掲示板ではそうであった。
「見極めるしかない」
「無名の人間の無数の書き込みからですね」
由良はまた述べた。
「探し出すのは」
「そうだな。無名の評論家か」
八条はそうした彼等をこう評してきた。
「いい評論家もいれば悪い評論家もいる」
「世の中の縮図のように」
「そうだ。それを探すことこそ」
「いいのだな」
「はい。そういうことです」
そう八条に述べる。
「それができなければネットをする意味がありませんし。質の悪い書き込みや荒らしを取り除くだけでもかなりの労力を要してしまいますがね」
「それも面白いのだがな」

八条はそれも楽しんでいた。面白いことは面白いのだがそれでもかなりの労力を要してしまうのは由良の言った通りである。見極めるだけでも目が必要であるしだ。
「そこから見つけた批評家は」
「かなり有益ですね」
「そうだな。ここにも有益な書き込みがあるしな」
掲示板を見ながらまた述べる。それを丹念にチェックする。
「しかし。彼等の予想も当たるかな」
「それはわかりませんね」
由良はその言葉には首を傾げさせる。あえてそうしてきたのである。
評論家が全て合うのなら話は容易い。同じように神の言うことが正しいのならば世の中は非常に単純である。ところがそうはいかないのが世の中というものである。評論家も同じだ。外れることもある。
「しかし当たる可能性もありますので」
「冷静に見ていくか」
「それがよいかと」
二人はそう言い合いながら掲示板を見ている。そこに書かれているものが果たして当たるのかどうかはまだ誰にもわからないことだった。

# 第二十五部第四章　第二の関門へその一

第二の関門へ

国境地帯を制圧したアッディーンは主力部隊を率いてハサンを北上していた。彼は主立った提督達と共にハサンの首都ブルジルトを目指していたのである。

しかしブルジルトまでは遠くそれまでにハサンの防衛ラインが多々あることが予想される。その為彼はその防衛ラインでの戦いに関して何かと予想も立てていたのである。

「気は抜けない」

そう述べる。

「もうすぐしたらダビデブ元帥の防衛ラインだしな」

「そこで最初の本格的な戦闘ですね」

シンダントがそう彼に声をかけてきた。彼等は今艦橋にいる。そこで全軍の指揮にあたっていたのである。その数は六十を優に越える。アッディーンが今まで率いた中でもっとも大きな規模も軍であった。それでも連合軍のそれと比べると桁が一つ違うのであるが。

しかしサハラでは充分過ぎる程の大艦隊である。その大艦隊でハサン領を進んでいるのである。

「そうだな。それも大規模の」

「はい」

シンダントはそれに頷く。

「第二十七艦隊との戦いは今思うと小競り合いでしたか」

「奇襲だな」

アッディーンは考える目をした後でこう述べてきた。モニターに無数の銀河の大海原を見ながら語る。その遥かな先に目指すものがあるのを見据えながら。

「あの戦いは」

「軌道に添った」

「そうだ、だが今度は軌道を使えない」
こう述べる。
「正面から戦うしかない。おそらくはな」
「予想される戦闘ポイントは何処になるでしょうか」
「それについてはこれから述べる」
アッディーンは幕僚の一人に答えた。やはりここでも銀河の大海を見ていた。その中の一つの星を見ていたのである。
「だが。ある程度以上に予想はついているだろう」
「無論です」
幕僚達はそれに答える。
「ダビデブ元帥は兵を集結させています」
「この辺りの守備隊まで」
「そういうことだ。集結させている先は」
「ジェルム星系」
ハサン軍の軍事拠点の一つである。ダビデブはそこに司令部を置き周辺の軍を全て集結させてきているのである。それを見れば容易にわかるというものであった。
「そこだろうな」
「おそらくは」
ガルシャースプが述べる。
「あそこでもかなりの防衛施設がありますし」
「彼等はそこを頼りにして守る」
アッディーンは言った。
「守りは固い。そして兵の数もな」
「かなりのものでしょう」
幕僚の一人が答える。百個艦隊では済まないのではないのか、そうとさえ思える規模の軍が集まっているであろうと考えているのであった。
「対する我等は六十五個」
五個艦隊程をガズニー方面に守りとして置いている。その指揮官

はハラスである。防衛戦に秀でている彼をそちらに向かわせたのである。
「やはり数では劣っているな」
「そのうえ彼等は守りを備えている」
それについて再び言及された。
「不利であることは否めませんが」
「国境での戦いとどちらがでしょうか」
「わからんな」
その質問にはあえてぼかした。一概には言えないことであった。だからアッディーンはこう述べたのである。前を見据えて銀河を見たまま。
「あれだけの絶対的な守りではないだろうが」
「しかし今回は正面から攻めるしかない」
「これは我等にとって不利かと」
幕僚達はそう述べる。しかしアッディーンはここで言うのだった。

## 第二十五部第四章　第二の関門へその二

「そうかな」
「何か御考えが？」
「やり方は幾らでもある」
あえてこう言った。言葉も目もそのまま前を見ている。
「何度も言うがこの世に絶対のものは存在しない」
「絶対のものは唯一つ」
「アッラーの御教えだけ」
サハラにおいてはそうである。イスラムこそが絶対の教えであるのはサハラならではだ。彼等はその中で語るのである。そのイスラム教徒同士の戦いだった。
「それ以外には何もない、絶対のものはな」
「ではジェルムも」
「不可能ではない」
あえて言う。
「決してな」
「ですが困難なのは事実です」
タルジークはまたアッディーンに述べる。しかし彼はオムダーマンの知恵袋の一人である。ただそう述べたのではなかった。
「しかし。既にジェルムのことは全てわかっています」
「全てだな」
「そうです。だからこそ」
彼は言葉を続ける。目には強い知性の光があった。
「困難を解決することもできます」
「その通りだ」
アッディーンはその言葉に頷く。ここではまだ表情は出していない。
「これも孫子の言葉だな。敵を知り己を知れば」

「百戦危うからずですね」
「そういうことだ。既に我が軍のことはわかっている」
彼は言った。
「そしてジェルムのことも」
「では閣下」
参謀達が彼に声をかけてきた。
「後の作戦会議では」
「そうだ」
それに答えて述べる。
「それについて話したい。その時には」
「その時には」
参謀達は問う。アッディーンもさらに言葉を続ける。
「詳しく話そう。今日な」
「はい、今日に」
「話をしたい。いいな」
「わかりました」
参謀達は頷く。これで話すことは決まった。
アリーでの作戦会議室に主立った提督達が集う。そしてそこでアッディーンの話を聞くのであった。皆席に座しアッディーンに顔を向けている。
「さて」
アッディーンはゆっくりと口を開いてきた。
「まずは敵について述べよう」
「はい」
その言葉に緒将が頷く。そのうえでアッディーンの言葉が続けられる。
「まず敵はジェルム星系に集結している」
参謀の一人が円卓となっている会議の席の中央に三次元ホノグラフィーを映し出す。それはハサンの宙図であった。そこにジェルメも今のオムダーマン軍の場所もある。

「周辺の兵力を全てな」
「国境から撤退した艦隊だけでなく」
「そうだ、全てだ」
マトラの問いに応えて述べる。その間誰もピクリとも動かない。
「防衛部隊も含めて全てだ。だからこそ我が軍はここまでスムーズに来ることができた」
「ここまでは、ですな」
「そう、ここまでは」
アッディーンもマトラの言葉に頷く。冷静な顔で述べた。
「だがこれからはわかりはしない」
「そうですな」
今のアッディーンの言葉にナクールが頷く。
「問題はこれからというわけです」
「ジェルムにいる敵はおそらく百を越えるでしょう」
ラーグワートの声が出された。彼はこの時クールなまでに長年の経験から戦局を見ていた。そのうえで言葉を発してきたのである。
「数においても防御においても我が軍は劣勢です」
ラーグワートはそれについても言及する。
「そこに我等は攻撃を仕掛けなくてはならない。不利は否めません」
「閣下」
ベニサフがアッディーンに声をかけてきた。
「ここはジェルムを通らなくてもよいのでは」
そう彼に提案してきた。
「そこをあえて攻撃を仕掛けずに先に進み」
「ジェルメから出て来たところに攻撃を浴びせるというのだな」
「はい」
ベニサフはそうアッディーンに述べてきた。これもまた選択肢の一つであった。

## 第二十五部第四章　第二の関門へその三

「如何でしょうか」
「それは私も考えた」
アッディーンはそれに応えて述べてきた。相変わらず冷静なままである。
「しかしだ」
「しかし？」
「それだと後で厄介なことになる」
「厄介なことですか」
「そうだ」
そうラーグワートに述べた。彼はじっとハサンの宙図を見据えている。そのうえで言葉を述べるのであった。彼はそこにこれからの自軍の動きを見ていた。
「ブルジルトから来る敵の援軍と挟み撃ちにされる危険性もある」
彼はそれを指摘してきたのだ。確かにその可能性は十二分にある。だからこそ問題でありアッディーンもそれを危惧していたのである。
「タイミングよく敵を倒せればいい」
アッディーンはまた述べる。
「しかしそれが果たせないならば」
「我が軍はハサン軍の挟み撃ちに遭うと」
「そうだ。それは何としても避けたい」
そう述べる。彼は冷静にこれからの戦いを見据えていたのだ。
「ラーグワート提督」
ラーグワートに言葉を述べてきた。
「はい」
「ハサン軍の情報は掴んでいると思うが」
「タイミングがずれているのです」
そう述べてきた。彼もブルジルトにいるハサン軍の情報は掴んで

いた。そのうえでの提案なのである。
「先にブルジルトから来るハサン軍を叩き」
「返す刀でジェルムの軍を倒す。そうだな」
「如何でしょうか」
「賭けの要素が強いな」
アッディーンはそれを聞いて述べた。
「どうにも」
「少なくともジェルムで戦うよりは勝算はあります」
彼はそう述べるのだった。それはジェルムでの守りの高さを強く意識してのことである。ジェルムの守りはかなりのものだからだ。それを知ったうえでの言葉であった。
「如何でしょうか」
「確かにな」
アッディーンは一旦はそれに頷いてきた。
「このまま戦ってはジェルムは陥落させられない。そして」
「その間にブルジルトからの援軍が来て我等の勝機はさらになくなります。ですから」
「いや」
しかしアッディーンはその言葉に首を横に振ってきた。まるで完全に勝機を見ているかのようにだ。そうした音色を持つ言葉になっていた。
「それはかえって勝機が薄い。それよりも」
「ジェルムを狙うべきだと」
「そうだ」
アッディーンの考えはそれであった。やはりそこにあった。
「だからこそ」
「狙うと」
「安心するのだ。勝てる」
今度は断言してきた。相変わらず冷静な声であったがそこには絶対的な自信もあった。

「それも確実にな」
「どういった作戦ですか？」
「まずは囲む」
彼は言ってきた。
「ジェルメをな。そして」
「そして？」
「そこから攻める。そう考えている」
「艦隊だけで百個艦隊を越えるジェルメをですか」
カーシャーンはそれを聞いて驚きの声をあげた。思わず目を瞠っている。
「そうだ」
また強い声で答えてきた。
「今ここにいる全軍でな。いいな」
「できますか？」
カーシャーンはアッディーンのその言葉に眉を顰めさせる。彼には不可能なことではないかとさえ思えることであった。それを言葉に出してきたのである。やはり彼も考える目をしていた。その目でアッディーンに対して言うのであった。

## 第二十五部第四章　第二の関門へその四

「普通にやれば不可能だ」
それはアッディーンもわかっている。自分でも言う。
「まず敗れる」
「ではどうして」
「そのまま向かうのではない」
こう言う。
「それは既に考えてある」
「そうなのですか。それでは」
「そうだ、ジェルメに攻撃を仕掛ける」
それをはっきりと述べた。今オムダーマン軍の作戦が決まった。
「それでいいな」
「はい」
「それでは」
提督達はそれに頷く。ここはアッディーンの言葉に従うことにした。これは彼が今までの戦いにおいて見事なまでに勝利を収めてきたことに根拠があった。だからこそ彼に従っているのである。そういうことである。
「ですが司令」
ニアメが口を開いてきた。
「言うまでもないですが持久戦は」
「わかっている」
アッディーンもそれに頷く。
「ここで下手に攻撃を控えてはな」
「窮地に陥ります」
「ブルジルトからの援軍が来ているのは事実です」
ラーグワートはそれを再び言ってきた。この情報は確かであった。だからこそ彼はかなり危険な作戦案を出してきたのである。彼なり

の考えがあってのことだったのだ。
「ですからこそ」
「そうだ」
ラーグワートのその言葉に頷いてきた。今彼はブルジルトを見ていた。
「速攻でなければならない」
「そうです」
ニアメもそれに応えて述べる。
「だからこそ」
「全ては私の中にある」
アッディーンはこうも述べる。
「全てな。だからこそ勝つ」
「勝つのですな」
「ジェルメは素晴らしい後方基地となる」
アッディーンはジェルメの存在価値がよくわかっていた。そこを陥落させればハサンとの戦いにおいて貴重な基地となる。それがわかっているからこそ彼はジェルメにこだわるという一面もあるのである。ジェルメを第二の拠点としてそこからまた北上するつもりだったのだ。
「だからこそ」
「わかりました。それでは」
「うむ」
彼等の言葉に頷いて応える。そうしてまた述べる。
「ジェルメを確実に攻略する」
それをまた述べてきた。
「いいな」
「ダビデブ元帥と正面きっての戦いとなりますな」
アタチュルクが楽しそうに言ってきた。
「いよいよ」
「そういえばそうですな」

彼の言葉にコリームアが頷く。
「国境では精々小競り合い程度でしたが」
「楽しみではある」
アタチュルクはこれからの戦いのことを考え笑っていた。生粋の武人である彼らしい笑みであった。
「大規模な戦いとなるとな」
「戦いは勝たなければ意味がない」
その横でムーアが述べてきた。
「アタチュルク提督、それはわかっておられるな」
「無論」
その返答には何の淀みもなかった。満面に笑みを浮かべての言葉であった。

## 第二十五部第四章　第二の関門へその五

「だからこそ戦う。それはわかっているつもりだ」
「ならいいが。しかし」
ムーアはさらに言葉を述べてきた。彼はこの戦いに危ういものを感じているようであった。
「不安ではありますな」
アッディーンに顔を向けて実際にそれを言う。
「これからのことを考えますと」
「勝利に関してか」
「はい、それは果たして可能なのかどうか」
アッディーンをじっと見据えていた。見据えながらの言葉であった。
「国境と同じようなやり方はできないのですから」
「何も同じことをする必要はない」
アッディーンはムーアに対してそう述べてきた。
「勝利に至るまでの道は一つではない」
「それは確かに」
アッディーンのその言葉にまずは頷く。しかしそれには明らかに含むものがあった。それを微妙に見せながらの言葉であった。アッディーンもそれは見抜いていたが彼の意図を察してあえて言わなかったのである。
アッディーンはムーアに顔を向けている。そうして話を聞いていた。
「ですが」
ムーアはさらに口を開いてきた。
「敗北もまた一つではありません」
「それはわかっている」
アッディーンもその言葉に頷く。彼の言わんとしていることがお

およそわかってきた。しかしやはりそれはあえて言わないのであった。まるで何か言質を取ろうとしているかのように。
「今我が軍は補給体制は整っています」
彼はまずそこを押さえてきた。
「これは万全にあります」
「それは御安心下さい」
後方参謀長であるバヤズィトが彼に応えてきた。当然ながら主な参謀達もここに集まっていたのである。作戦会議ならば当然のことである。
「オムダーマン側とハサン側双方の国境の補給システムを使っていますので」
「それは承知している」
ムーアはそれに応える。
「既に双方を連結させる作業にもあたっていたな」
「はい」
バヤズィトはその質問にもすぐに頷いてきた。
「そちらも順調に進んでいます」
「いいことだ。そして」
ムーアはさらに言う。言葉を鋭くさせながら続けさせていく。
「情報もおさえた」
これについても言及してきた。
「敵に関することも我が軍に関することもな。万全なまでにだ」
「補給と情報が整っている」
アッディーンはここでようやく口を再び開いてきた。
「戦争に勝利を収める二つの要素が今揃っているな」
「しかし我が軍にないものがあります」
ムーアはアッディーンの言葉を受けて口を開いてきた。まるで言葉を待っていたかのようにだ。実際に彼はアッディーンの言葉を待っていたのである。
「それは数です。こればかりはどうしようもありません」

「今更とは思うが」
アタチュルクはその言葉に少し眉を顰めさせた。何か面白くないものを感じているようであった。
「それはわかっているだろう」
「戦争は数」
ムーアはそれを言った。
「それは絶対だ。しかし覆すこともできる要素がある」
「覆せるものか」
「そう、それもまた二つある」
アタチュルクに言葉を返す。同時にアッディーンを見ていた。
「一つは勇気。そしてもう一つは」
「戦術だな」
アッディーンはここで再び口を開いたのだった。ムーアをじっと見据えて言葉を述べたのである。
「それは」
「そうです。知略と言ってもいいでしょう」
ムーアはそれに応えて言ってきた。彼が言いたかったのはそこなのであった。これは知将と謳われる彼らしいことであった。
「補給と情報を手に入れていて数で劣るならばこの二つをどう使うかです」
「そういえば」
アガヌがここで口を開いてきた。
「連合軍はエウロパとの戦いにおいては補給と情報を何よりも重要視していましたな」
「はい」
シャルジャーがそれに答えてきた。

## 第二十五部第四章　第二の関門へその六

「その通りです。連合軍は進軍は遅かったですがそれだけはしっかりとしていました」
「それだけはか」
「既に彼等は数がありました」
シャルジャーはまた述べる。
「圧倒的な数、それを支える補給と情報」
ムーアはそれを口にする。情報においても連合軍はエウロパ軍を寄せ付けなかった。彼等の動きを事前に読んで先手を打つことがよくあった。それが可能だったのは連合軍がその情報収集により彼等の動きを掴んでいたからに他ならない。そうした事情があるからだ。
補給は連合軍にとっては最も力を入れているものの一つであるからその体制は見事なまでであった。それだけでも特筆に価する。これだけの万全の体制を整えていた。六十億の大軍を敵地に送り込み力はエウロパ軍にはないのは言うまでもないことであった。
「エウロパ軍はその三つにおいて負けていた、それもかなりな」
「そうだな」
アッディーンはまたそれに頷く。
「エウロパ軍はこの三つに完敗していた。勝っているのは勇気だけか」
「知略では互角だったでしょうか。しかし」
ムーアは言葉を濁らせる。それだけで勝てるような状況ではなかったからだ。
「あくまで互角でした。勇気だけではどうしようもなかったのです」
「それを今の我々に当てはめる」
アタチュルクはまた述べてきた。
「我が軍は補給では互角か」
「そうだな」

ムーアはアタチュルクの言葉に応えて頷く。
「敵もまたそれは万全だ。そしてその補給路を脅かすことは今の時点では不可能だ」
「そう、そして情報は」
「我が軍が勝っているな」
アッディーンは言ってきた。
「我が軍は既に敵の配置までわかっている。援軍のことも掴んでいる」
「そうです、それは整っています」
ムーアもそれはわかっていた。アッディーンに頷いてきた。
「それもまた」
「情報では勝っている」
アッディーンはそれを確かなものとした。
「次に勇気だが」
「言うまでもないと思いますが」
アタチュルクとマトラが胸を張って述べてきた。
「我が軍の将兵の士気は国を覆わんばかりです」
「これもまた問題はありません」
「そうだな」
「悪くて互角だ。ここは互角でもいいか」
「そうしますと我々が勝っているのは今の時点では一つしかありません」
ムーアはまた述べてきた。
「情報だけです」
「数、即ち戦力では負けている」
アッディーンはここをまた指摘してきた。これだけは変わりはしないし変えられないものであった。戦力において劣っているというのは今の彼等にとっては絶対のことだった。
「一つに勝って一つで敗れている」
「ですからここで問題になるものこそ」

「知略。そうだな」
「そうです。だからこそこの戦いは知略の戦いです」
ムーアは述べるのだった。
「閣下、だからこそ」
「正面から戦うことに変わりはない」
アッディーンはそれもまた言うのだった。あえて強調するかのように。
「それは言っておくぞ」
「そのうえで知略をですな」
「そうだ」
ムーアに対してだけでなく緒将にもはっきりと述べた。これは断言であった。
「これに勝ればジェルムの戦いも勝利を収めることが可能だ」
「知略で決まる」
「今度の戦いは」
「それはあえて最後まで明かしはしない」
こうも言うのだった。
「知略は隠しておくもの。だからこそだ」
「わかりました、では戦いにおいて」
「お知らせ下さい」
提督達も参謀達もそう返す。彼等は今アッディーンに全てを任せることにしたのだった。青い獅子に。

## 第二十五部第四章　第二の関門へその七

「うむ、全てはそれからだ」
アッディーンはあらためて述べる。
「それでいいな」
「はい」
「それでは」
緒将はそれに頷く。こうして作戦会議は終わった。
会議は終わった。その後でアッディーンはすぐにアリーの艦橋に戻った。そうして全軍の指揮に戻ったのだった。じっと前を見据えている。
「もうすぐだな」
腕を組んで前を見ていた。そのうえで言う。
「次の戦いは」
「ジェルメですか」
「さっき会議で話したようにな」
そう参謀達に述べる。
「そこしかない」
「ハサン軍とそこで最初の決戦ですね」
「あくまで最初のな」
そう断る。
「最後ではない。わかるな」
「つまり先は長いと」
参謀達はそれを聞いて言う。視線はアッディーンに集中している。アッディーンはそれを背にして彼等の言葉を聞いているのである。やはり前を見据えて。
「そうだ」
あらためてまた述べる。
「これからだ。国境のことは前ふりに過ぎない」

「あれだけの作戦がですか」
参謀の一人がその言葉に眉を顰めさせてきた。
「そうだ、これからのことを考えると」
「左様ですか」
「ハサンが大国なのは言うまでもない」
この大前提がある。アッディーンがこれを前提の一つとして考えているのは既に会議等で話をした通りである。それを忘れることは決してない。
「勢力圏も広い。ブルジルトまでも」
「まだかなりありますな」
「ジェルメで最初、そして」
さらに言う。
「ブルジルトまでにも決戦の時があるだろうな」
「そうですな」
それにガルシャースプが応える。
「ハサン軍はそのままブルジルト方面に北上が可能ですから」
「我々はそれを追う」
アッディーンはガルシャースプの言葉を聞いてまた述べる。
「そういう形だ。ジェルメを陥落させても彼等は次の防衛ラインに立て篭もり我等に決戦を挑む」
「やはりそう来ますか」
「戦力を建て直しながらな」
そうも述べる。時間がかかればかかる程ハサン軍は戦力を建て直せる。時間もまたハサン軍にとって味方なのである。攻撃側であるオムダーマン軍としては速攻策を採りたい。アッディーンも本音はそうである。しかしそれは適わない。だからこそ彼は慎重に作戦を進めているのである。
「だが迂闊に先に進めば」
「ハサン軍に付け込まれる」
「そこだ」

アッディーンもまた言う。
「先に進んでも我々の準備が整っていなければ駄目だ」
「だからこそですね」
「そうだ。この戦いは慎重に進む」
また述べる。やはり前を見据えている。彼等が向かっているのは北でありその先にはハサン軍がいる。無数の銀河の中に彼等がいるのだ。
「あえてな」
「少しずつですか」
「本音を言うならばハサン軍の主力を倒して一気にブルジルトまで向かいたい」
アッディーンは本来軍の機動力を重視する男である。それを活用することにより今まで自分が率いてきたよりも多くの敵を倒してきたからだ。だが今回はそれをあえて使わないという。そう決断させるものが今の戦いにあるのだ。
「だがそれはできない」
表情を変えずに述べる。表情は変わらないが声は硬くなっている。

## 第二十五部第四章　第二の関門へその八

「今はな」
「迂闊に進めば敗北ですか」
「それこそハサンの思う壺だと」
「敵の手に乗る必要はない」
また言った。
「無論こうして慎重に進むのも敵は考えているだろうがな」
「それでもですか」
「そうだ、こうした戦いもある」
慎重に先に進むのもだ。臨機応変ということである。
「敵の想定内にあえて入り」
「それを破っていく」
「これもまた戦いだ」
落ち着いてはいるが硬質の言葉が続く。やはり前を見据えていた。
「ジェルメでもな」
「ジェルメでの戦いは熾烈なものになると思われます」
またガルシャースプが口を開いてきた。やはり彼もアッディーンを見ていた。
「間違いなく」
「それはわかっている」
アッディーンもそれに頷く。
「当然な」
「左様ですか」
「そのうえでだ。ジェルメは今後使いたい」
ジェルメの今後についても話す。基地として使うという構想である。
「ジェルメを陥落させればそれだけで拠点を築くことができる」
「そうですね」

「だからこそ我々は今」
北に向かっているのだ。アッディーンはさらに命令を下した。
「全将兵に伝えろ」
彼は言う。
「交代で休息を取れと。いいな」
「はっ」
「わかりました」
参謀達もそれに頷く。それには彼等も入っているのだ。
「それでは」
「司令もまた」
「いいのか？」
「はい、時には休まれることも必要です」
参謀達はそう述べる。アッディーンは顔を彼等に向けていた。
「時にはか」
「琴も常に弦を張っているわけではありません」
誰かが言った。
「ですから」
「戦いの前に英気を養われるべきかと」
「わかった。それではな」
アッディーンはそれに頷くことにした。
「頃合を見てそうさせてもらう」
「それが宜しいかと」
「そして戦いの前には」
「全ての将兵の気力と体力を最高の状態にしておきたいものだ」
将兵のコンディションの管理もまた指揮官の義務の一つである。
彼は今それにも目を配っていた。それを忘れて敗北した例も当然ながら多い。士気もその一つであるし疲れの問題もそうである。人が戦うものである以上この問題から離れることはできない。
「可能な限りな」
「はい」

「だからこそ」
「私もというわけだな」
指揮官もその中に入っているのは言うまでもない。言い換えれば自信のコンディション管理もできない指揮官はそれだけ失格というわけである。
「無論です」
「ですから機を見て」
「よし」
その言葉を聞いて頷いてきた。
「ではそのようにしよう。貴官等もな」
「わかっております」
「頃合を見て」
「うむ」
オムダーマン軍は英気もまた養っていた。戦いは続きその中でも様々なことが行われていたのであった。これはハサン軍も同じであった。彼等とて決して愚かではなかった。

## 第二十五部第四章　第二の関門へその九

オムダーマン軍の北上を受けて護りを固めてきていた。ジェルメ星系は一大軍事要塞と化しておりそこに百個以上の大艦隊が集結していた。

その中心にいるのはダビデブであった。彼は自ら視察して回り指揮にあたっていた。既にその護りはかなりのものとなっていたがそれでも油断はしていなかった。

「いいか」

周りにいる幕僚達に顔を向けて言う。

「間も無く戦いだ、オムダーマン軍とな」

「やはりここですか」

「そうだ」

ダビデブの予想はアッディーンと同じだった。彼もまた戦闘予想星域はジェルメであると予想していたのだ。そこしかないと見ていたのである。

「このジェルメだ」

「ではここの護りを固めて正解でしたな」

参謀の一人が述べてきた。彼がこのジェルメの防衛計画の立案者なのである。だからこそダビデブのこの言葉が有り難かったのだ。

「そうだ。しかし問題はだ」

「敵がどう来るかですか」

「敵将はアッディーン副大統領だ」

ダビデブもまたそれに言及する。決してアッディーンを甘く見てはいない。甘くみるにはガズニーと国境の敗北は彼にとってはあまりにも重いものであったからだ。

「何を仕掛けてくるかわからないぞ」

「何を、ですか」

「そうだ、ガズニーでもそうだったしな」

「我々の虚をつくと」
これを言われるとその通りなのだ。アッディーンは劣勢であってもそうして勝利を収めてきている。その現実を彼等も味わっている。それでどうして彼を侮れるというのか。
「それでは隙を消していきましょう」
参謀の一人が静かに述べてきた。
「絶対の要塞を築き上げて」
「絶対のか」
「はい」
彼は自信に満ちた声で述べる。細い目が鋭く光る。
「彼が隙を衝くのならばその隙を消していき手出しをさせなければいいだけです」
「自信があるのだな」
ダビデブはその彼に声をかけた。彼もまたその目を鋭くさせる。
「ギーブ中将」
「無論です。そうでなくてどうしてこう言いましょうか」
彼はその鋭い声でまた述べる。全てを見据えて貫くかのような強い光はそのままである。
「違いますか？」
「いや」
ダビデブは笑わない男である。まんじりともせずそれに応える。
「その通りだ。では貴官に聞こう」
「ええ」
ギーブはそれに応えてきた。そこにいる全ての者の顔が彼に向けられている。
「まだ隙はあるか？」
「ないとは思えません」
彼ははっきりと答えてきた。
「東方及び西方の数点もまた」
「隙があるのだな」

「そうです。そこを補強する必要があります」
彼ははっきりと述べる。実際に宙図にある数点をレーザーで指し示してきた。
「これ等のポイントにコロニーレーザー及び各砲座をすぐに設置するべきです」
「すぐにか」
「はい、至急に」
言葉はさらに鋭くなる。その鋭い言葉でまた述べる。
「護りを固めましょう、敵は待ってはくれません」
「わかった」
ダビデブはその言葉に頷いた。これでまずは護りの補強が決定された。
しかし言葉はそれで終わりはしない。ギーブはさらに言う。
「次に艦隊です。今こちらに集結させている周辺星域の防衛艦隊ですが」
「ふむ」
ダビデブだけでなく提督や参謀達も彼に顔を向ける。そのそれぞれの目の光を受けながらも彼は言葉を出す。そこには絶対の自信があった。
「彼等は護りに専念させます」
「護りにか」
「そうです、そして基幹艦隊は」
「攻勢にも使うのだな」
「何も護るだけが戦いではありません」
彼は言う。積極的に攻撃を仕掛けようというのである。その考えは積極的防衛であった。護りに徹さずに果敢に攻める、それが彼の考えだったのだ。
「攻めて護るのもまた」
「そうして敵を退けるのだな」
「そうです、一気に敵を国境まで押し戻す勢いでです」

彼は何処までも過激であった。護りに入っているとはいえ決して護りに入ろうとはしてはいなかったのである。そこが他の参謀達とは全く違っていた。

## 第二十五部第四章　第二の関門へその十

「それでどうでしょうか」
「では一つ面白いことを考えた」
ダビデブは彼の言葉を聞くうちにあることを思いついてきた。
「ギーブ中将」
そうしてあらためて彼の名を呼ぶ。そこにはある考えがあった。
「何でしょうか」
「私は護りに徹するつもりだ」
まずはこう述べた。ギーブはその言葉を聞いて己の眉を微かに動かしてきた。それがどういった感情を示すものであるかはその動きだけでわかる。
「それでは」
「話は最後まで聞いてくれ」
しかし彼はこうも言ってきた。
「全ての軍をそうするのではない」
「といいますと」
「遊撃だ」
そう述べてきた。彼のその巨体の中に鋭い目の光だけが不気味に輝いていた。少なくとも提督達にも参謀達にもそう見えるものであった。
「遊撃ですか」
「そうだ、高速艦隊を編成する」
彼の考えはそれであった。遊撃艦隊を出すというものである。
「それで攻撃してくる敵の側面や後方を衝き」
「防衛部隊の援護をすると」
「そうだ。それではどうかな」
「よい御考えだと思います」
ギーブのその言葉には偽りはなかった。彼は実際にそう思ってい

た。
「ただ」
「ただ。何だ？」
「指揮官はどうされますか」
それが問題なのだ。艦隊を編成したならば必ず指揮をする人物が必要となる。ギーブはそれが誰なのか問うたのだ。これは当然のことであった。
「バンダル提督」
「はい」
ここでダビデブは一人の老将に声をかけてきた。バンダルもそれに応える。
「頼めるか」
「わかりました。それでは」
ダビデブに対して答える。彼はその言葉に一礼した。彼は過去何度か前線において高速戦艦の艦隊を率いて戦っている。その経験を買ったのである。
「是非共」
「うむ、頼むぞ」
「司令」
ギーブは少し考える目をしてからダビデブにまた声をかけてきた。
「どうした？」
「いえ、バンダル提督だけでは」
「問題があるというのか」
「まずは申し訳ありません」
最初にこう謝罪してきた。そのうえで話をするのだった。
「高速機動部隊は複数用意すればいいと考えていまして」
「複数か」
「はい、今考えているのは一つの部隊ですね」
ダビデブに対して問う。問いながらその目をギーブに向ける。その目はさらに鋭くなり剣のようになっていた。しかし何かを貫こう

というものではなかった。少なくとも今ここにいる者達に対して向けられているものではなかった。向けられているとしたらその者達はここにはいない者達である。
「そうだが」
「できれば二つ欲しいのですが」
ダビデブに対して言う。それを受けたダビデブは考える顔を見せてきた。
「二つか」
「はい、その二つで臨機応変に」
「難しいな」
しかしダビデブの言葉はこうであった。ギーブにとっては不本意なことにだ。
「そこまでの数はない」
「巡洋艦だけでは・・・・・難しいですね」
「止めた方がいいな」
バンダルが言ってきた。実戦部隊を率いる者として言ってきたのだ。
「巡洋艦と駆逐艦だけではな。攻撃力と防御力に難がある」
「そうですね」
それはギーブもわかっていた。腕を組んで難しい顔を見せてきていた。
「かえって無駄な損害を出すだけですね」
「それならば護りに向けた方がいい」
「全くです。しかし高速戦艦がないのですか」
ギーブはそのことに浮かない顔を見せた。その理由は高速機動部隊には高速戦艦は欠かせない存在だからだ。通常の戦艦では機動力が落ちるのはハサンにおいても同じである。

## 第二十五部第四章　第二の関門へその十一

「西方に向けられている」
ダビデブは苦い顔で言った。
「高速戦艦はな。そのかなりの数が」
「それは知っていますが」
「無理なのだ。確かに役立つがな」
ダビデブは苦い顔のままであった。実は彼も防衛には高速戦艦もまた必要なのはわかっていたのだ。しかしだからといってすぐに来るものではない。彼にとっても苦しい話だったのである。ギーブも今それがわかったのであった。わかりたくなくとも。
「困ったことですな」
「そうだ、ないならないで戦うしかない」
ダビデブは告げるようにして言った。
「わかったな」
「はい。ではその高速機動部隊を」
「お任せ下さい」
バンダルは名乗りをあげるようにして述べてきた。
「是非共」
「頼むぞ。それではすぐに編成にかかる」
ダビデブは指示を下した。
「守る為にな」
「はっ」
「わかりました」
提督達も参謀達もその言葉に頷く。彼等もまた戦いに備えていた。両軍は今まさに互いの刃を研いでいたのであった。ダビデブは不眠不休でそれにあたっていた。
司令室に戻る。するとすぐに部下が書類を持って入って来る。そうした有様であった。

「今度は何の書類だ？」
「弾薬に関するものです」
見ればスーツの男である。それから彼が軍人ではなく文官であることがわかる。
「弾薬か」
「はい、物品受領のサインです」
「そんなにあるのか」
ダビデブは彼が持っている分厚いファイルのような書類の束を見て思わず言った。言わずにはいられない程の量だから当然であった。
しかも机の上にはまだ書類が山のようにあるのである。デスクワークにおいても多忙を極めているのが今の彼であった。司令官というものはデスクワークから離れられないのだ。
「この前処理したと思ったが」
「あらたにこちらに来た部隊のものです」
「そうか。それにしても多いな」
前に提出されたファイルを見てまた言う。
「ここまでとは」
「まずはこれで終わりです」
事務官はそう述べる。
「御安心下さい」
「いや、弾薬はまだでも他にもまだあるのだろう？」
ダビデブは苦笑いと共に述べた。
「書類は」
「はい、何せ今は大勢の部隊がこのジェルメに集まっていますので」
「仕方ないというわけか」
「ブルジルトも書類の山に埋もれているそうです」
「ああ、それは聞いている」
それにはダビデブも頷く。実際にブルジルトは今書類の山に囲まれ業務に支障を見せている程なのである。それが前線にも深刻な影響を与えているのである。

「業務の処理は進められないのか？」
「皆頑張ってはいるのですが」
言葉を濁らせる。無論彼等とて怠けているわけでない。少なくとも誰もがあまりにも働かずムッソリーニが無理矢理労働時間を増やしたかつてのイタリアとは違う。
「中々。あまりにも多く」
「人材がいなくなったからな」
ここでもシャイターンの謀略が効いているのである。彼はデスクワークの遅延がもたらす効果もわかっていたのだ。ダビデブはこのことにも頭を悩ませていた。
「万全の人材がいない」
「はい」
事務官も苦い顔で頷くしかなかった。
「残念ですが」
「何もかもがな。人材がいない」
ダビデブは困り果てた顔で言う。

## 第二十五部第四章　第二の関門へその十二

「困ったことにな」
「いなくなった人材が戻りません。残った人間だけでやるしか」
「その通りだ。今ハサンにいるのは」
二流の人材ばかりであった。彼等も彼等なりに頑張ってはいるがそれでも多くの一流の人材を失ったことがこうしたデスクワークにも影響していたのである。シャイターンはそうしたこともまた見ていたのだ。狡猾な策士としての顔を闇の中で見せていたのだ。
「ですから司令は」
「私はただの老人だ」
そう事務官に返す。苦笑いと共に。
「その老人に頼るか」
「いえ、頼りにしております」
しかし彼は言う。
「司令いなくてはここまで護りは固められませんでしたから」
「そうかな」
「そうです、このジェルメは今でも大変なことになっていたでしょう」
「手筈が整わずにか」
「おそらくは。そうなれば」
「オムダーマン軍が急襲を仕掛けていたな」
「間違いなく」
護りがなければそこに雪崩れ込んでくる。オムダーマン軍、とりわけ彼等を率いるアッディーンはそうである。それがわかっているからこそダビデブも必死になって備えを進めたのである。戦争は必ず相手がいる。それを意識して進めるものなのだ。相手を意識せずに何かを行う軍事というのもまたないものである。そうした戦争も軍事もかつて存在したことはない。

「ですから司令がおられて助かったのです」
「私がいなければ無理だったというのか」
「はい」
その言葉にこくりと頷く。
「間違いなくそうだったかと思われます」
「信じられんな」
ダビデブはあらためて深刻な顔になった。
「かつてのハサンならばよりスムーズにいっていただろうに」
「人がいないというのは。辛いことですな」
「抜擢するという方法もある」
これは常に行われることである。賭けの要素も強いが組織を活性化させたり強化させるには時として必要なことでもあるのだ。しかし今のハサンには。
「時間がないな」
「はい、オムダーマンとティムール両方を相手にしていますので」
「それにだ」
彼はさらに言う。
「賭けができるか、今」
「今、ですか」
「そうだ」
ぞう事務官に問う。
「どうだ？オムダーマンとティムール両方を相手にして」
「難しいですな」
事務官は強張った顔でそう応える。
「賭けに失敗すればそれが直接」
「敗北につながります。あまりにも危険です」
「そういうことだ」
ダビデブは述べる。今ハサンは賭けをするにはかなりの勇気がいる時であったのだ。そして賭けをするには個人的な嗜好も大きく影響するものである。この問題もあった。

## 第二十五部第四章　第二の関門へその十三

「殿下は賭けを好まれぬ」
王太子のことである。
「慎重な方だぞ」
「はい、それはわかっております」
事務官もその言葉に応えて頷く。
「だからこそ」
「それはまずないな」
「ですがこのままですと我々は」
「乗り切るしかない」
苦い顔のままで事務官に述べる。
「今はな」
「今は、ですか」
「そうだ、辛くともな。それはわかるな」
「わかりたくはありませんがね」
事務官もまた苦い顔をしていた。その顔で彼に返す。
「死んだ者は戻りませんがせめて助っ人でも現われれば」
「英雄か」
その言葉にダビデブの老いた目が輝いた。そうして彼はふと哲学的な言葉を述べてきた。
「英雄というのには不思議なイメージがあるな」
「といいますと」
「君は英雄にはどんなイメージがあるかな」
そう事務官に問うてきた。目の光も哲学的なものになっていた。
「とりあえず言ってみてくれたまえ」
「そうですね」
暫し上を向いて考えてから述べてきた。
「人としての力が及ぶ限りで万能でしょうか」

「他には」
「外見的にも整っていて」
「若々しいイメージがあるな」
「はい」
ダビデブの問いにもすぐに答えた。
「確かに」
「英雄というのは颯爽としているものだ」
ダビデブもまた同じものを英雄という存在に対して感じていた。彼等は英雄というものをあまり意識してはこなかったが今は違っていた。
「その英雄と戦う我々は何なのかな」
「引き立て役でしょうか、そうなると」
事務官の言葉には少し自嘲があった。英雄と戦う者はその物語において端役でしかない。盛大に倒されるだけである。竜にしろ悪者にしろそうである。
「そういうところか。彼が英雄ならな」
「はい、そうなるかと」
「私は英雄ではないがな」
ダビデブはここで苦笑いになった。
「そうした存在には憧れを抱いたことはある」
「誰でもそうではないですか？」
事務官はその言葉に自然に言葉を返した。英雄というものに対して憧れるのは人として当然のことである。とりわけ子供の頃はそうである。誰もが憧れる。
「それになりたいとも思う」
「私も子供の頃はそうだった」
それをまた言う。
「若い日もな。そうだった」
「若い日もですか」
「士官学校にいた頃だったか」

少し懐かしむ目になっていた。その目でかつての頃を見ながら話をしているのであった。
「英雄になろうと思っていた」
「ですが今は、ですか」
「私には向かない話だ」
笑って言う。
「そうした英雄になるとかそうした背伸びはな。土台がないものだ」
「土台でといいますと」
「何になるにも土台が必要だな」
ふとこう言ってきた。これは人としてだけでなく他のことに関しても当てはまるものであったが彼はそれをあえて言葉に出してきたのである。
「私にはその土台がない」
「土台がですか」
「そうだ、英雄になるにはな。そうしたものがなかったのだ」
「それに気付かれたのですか」
「幸か不幸かな」
それに関してはあえて言わなかった。ただ顔は苦笑いのままだった。
「英雄にはなれないと気付いた。初陣でな」
「最初でですか」
「その時に死線を彷徨ったのだ」
若い日のことを思い出す。彼は士官学校を卒業してすぐに戦艦の砲術士になった。そこで敵の砲撃を受け中破した艦の中で部下と共に艦内で逃げ惑っていたのである。その時に彼は自分が英雄になれる素養がないことに気付いたというわけなのだ。

## 第二十五部第四章　第二の関門へその十四

「それでな」
「わかったのですか」
「そうだ、英雄はこうした時鮮やかに動くものだな」
「まあそうは言われています」
実際にはそれとはかけ離れている場合もある。ナポレオンはある戦いにおいて旗を持って先頭に立つどころか橋から川に落ちて溺れかけたことがあった。実際にナポレオンという男は背が低く容姿も野暮ったく一見では英雄とは思えない男であったのだ。
「私はそうした男ではなかった。それでわかったかな」
「そう自分で思われたのですね」
「そうだ」
あらためて頷く。
「少なくともアッディーン副大統領とは違う」
「中佐の時にいきなり劣勢の戦いを覆したのを皮切りに」
「鮮やかな勝利を収め続けている」
「私とは全く違うな」
それを自分でも言う。わかっているからこその言葉であった。
「英雄とは。自分に対しても格好よさを見せなければならないのだろう」
「自己陶酔であると？」
「それも大事なものだ」
彼はそれを肯定した。否定はしなかった。
「彼はそれはあまりないのかも知れないが」
「そうですね。アッディーン副大統領は自己陶酔型ではないかと」
「周りはともかくとしてな」
「ええ」
アッディーンは自分が英雄であると意識してはいない。しかしそ

れでも自分に対して弱さは見せない。それもまた英雄の条件の一つである。
「自分のよい場面を自分にも見せる」
「かつてのカエサルのように」
「そうなるのが条件なのだろうな」
「そうですか。閣下はそれがないと御自身でわかられたのですね」
「そういうことだ」
その苦笑いで述べる。
「英雄のそうしたものはその英雄にとっていいものだ」
「自分だけでなく周りにも頼らせるものがあると」
「そうだ、今オムダーマン軍はそのアッディーン副大統領に絶対の信頼を寄せてこちらに来ている。その士気は極めて高いぞ」
「はい」
事務官は文官であり戦場に立つわけではない。しかしそれでもそうしたことはわかっていた。肌である程度のことはわかるものだ。文官であっても武官であっても。
「彼を倒せればいいが。そうすれば」
「オムダーマン軍は崩れると」
「もっともそれができればな。苦労はしないが」
「そうでないからこそ辛いと」
「そうなのだな、結局は」
その執務用の机において首を傾げてきた。やはり困った顔になっている。
「英雄でない者が英雄を倒さなくてはならない」
「物語では適わないことですが今は現実です」
事務官はまた言う。
「現実ですからこそ」
「何とかなるかも知れない、か」
「ええ。どうされますか？」
「無論戦う気持ちは変わらない」

それは事実だ。既にそれは決めている。だからこそこのジェルメを針鼠すら通れないような厳重な防衛体制に置いたのである。全ては戦う為だ。

## 第二十五部第四章　第二の関門へその十五

「それは既に決めている」
「我が軍が百十個艦隊」
事務官はここで話を戦力に移してきた。まずは自軍について言及した。ハサン軍は周辺の戦力を集結させた為にその数を増やしていたのである。数、即ち国力を背景にした戦略でありハサン軍はまずオムダーマン軍に対してその優勢な国力であたることにしたのである。これは戦略的に言って妥当であった。この時代においては連合が得意としている戦略であるがまず相手を国力で圧倒しそのうえで相手の兵力を上回る兵力を動員してそのうえであたる。戦争はまず国力であるという思想にのっとればこれ程合理的かつ妥当な戦略はない。ハサンも今回それを踏襲したのである。戦略的に言って極めて妥当であった。
「それに対してオムダーマン軍は六十五個艦隊ですか」
「そんなところだったな。数は」
「そのうえ我等は地の利がありそれに沿って守りを固めました」
「敗れる筈がないか、普通はな」
ダビデブもそれはわかっていた。わかっていてもあえて言うのだった。言わなければならない事情がありそうして言う。これもまた指揮官の務めであるがもっと言ってしまえば人を使う立場の人間としては当然のことであった。人は誰かを動かすにあたっては時としてあえてその何かを言わなければならない。言ってようやく動かすことができる。だからこそ彼は今ここでその言葉を出してみせたのである。そういうことであった。
「これで勝てる筈だ」
「はい、普通は」
「彼が本物の英雄ならばわからないがな」
あえて英雄をまた出す。

「どうなるかな」
「そのどうなるかをどうかさせないのが我々の仕事です」
「そういうことだ」
また頷いてみせた。今度は真面目な顔であった。
「今はな」
「はい。それでは」
「第一種戦闘態勢に入る」
戦闘に入ることは規定であった。よってこの指示もだ。
「いいな」
「はい」
「君達はあらかじめ安全な場所に入ってくれ」
文官は戦闘ができない。ならば邪魔な存在としかならない。だから彼は今こうしてこの指示を出したのである。それに彼等の安全も配慮していた。
「いいな」
「申し訳ありません。それでは」
「実は仕事を引き継いでもらって下がって欲しいのだがな」
今度は唇を噛んでいた。それが本来の考えであるということをその顔で知らせていた。
「残念だが」
「そうはいかないと」
「できたらそうしていた」
彼は言う。
「しかし時間がなかった。あまりにもな」
国境から撤退してジェルメの守りを固めるまでに時間がなかったのだ。だから引継ぎもできなかったのだ。彼等も無限の時間があったのではなかったのだ。
「今はな」
「確かに。今は」
事務官もその言葉に頷いた。

「仕方ありませんか」
「そうだ。だがせめてな」
唇を噛んだ顔のまま述べる。
「最低限のことはしておきたいからな」
「そうですね」
戦いの時は近付いてきていた。オムダーマン軍はジェルメに迫りハサン軍はそれを迎え撃つ。両軍の最初の決戦が今はじまろうとしていたのだった。

# 第二十五部第五章　ジェルメ星域会戦その一

ジェルメ星域会戦

オムダーマン軍はジェルメまで僅かの距離にまで達していた。そこに至るまで敵影は全くなく到って順調な進撃であった。

だがアッディーンはこれに関してはあえて何も言わないのであった。無言で指揮にあたっておりその先にある戦いを見据えていたのである。

「これからだ」

彼は言う。

「ジェルメの戦いこそが肝心なのだ」

「それを敵もわかっているからこそ」

「うむ」

あらためて部下達に応える。

「国境からここまで進むことができたのだ」

「少なくともジェルメまでは」

「そう、ジェルメだ」

彼はジェルメについて強調する。

「ジェルメを陥落させられれば我等は重要な拠点を手に入れることができ」

「敗れれば国境まで退かなければなりません」

「下手をすればオムダーマンの命運まで決してしまう」

アッディーンの言葉は険しい。その言葉は現実を厳しく見ているものであった。戦いを見据えて冷静に判断を下していたのである。

「だからこそ。敗れるわけにはいかない」

「だからこそですか」

「そうだ」

部下のその言葉に応える。

「敗れるわけにはいかない。戦いは全てそうだがな」

「全てですか」
「戦争というものは政治だ」
アッディーンもそれはよく認識していた。戦争とは政治の一手段である。政治的解決の方法として武力を選択するだけのことなのだ。連合においてはそれが極めてよく認識されていることである。連合が極めて政治的な色彩の強い勢力であることがその要因である。
もっとも連合では連合各国間における武力行使は禁じられそれを破った国があったならばその時点で参加国全てからの国交断絶、経済交流の破棄、連合からの除名といったあらゆる制裁が加えられることになっている。それは連合参加国にとって死を意味するものである。だからこそ連合では各国での戦いが起こったことはないのである。ただしテロリストには長い間悩まされてきている。テロリストやクーデター等よからぬことを目論む勢力に対して武力が行使されてきたのである。政治的解決としてだ。
「政治ですか」
「聖なるものであると共にな」
ここではムスリムとしての顔も出た。やはり彼もイスラムからは離れていない。
「政治的なものでもある。政治が汚れているとは思わないが」
「政治もまたアッラーに導かれてのことでありますからな」
「その通りだ」
その言葉に頷いてきた。
「戦争もまた。だが政治の手段として戦争を認識することは」
「決して悪くはないと」
「私はそう思う」
話しながら前を見る。アッディーンはそこにあるジェルメを見据えていたのだ。
「それがわかったのは最近までだがな」
「最近ですか」
「軍人だけではわからないことがある」

そう述べる。
「軍人は専門職だな」
「はい」
皆それはわかっている。軍人というのものは戦争に関しての専門家である。軍人以外に戦争をする権利は許されてはいない。それだけ特別な存在でもある。
しかしあまりにも専門化している為に軍人はそれだけに特化していることも事実だ。軍人が政治家になることは連合でも選挙に立候補してそうなるしエウロパやサハラでは現役武官が政治家になることすらある。しかしどうしても軍人としての面だけでは政治をしきれないのだ。これはそもそも彼等が武官であり文官である政治家とは色彩が違うから仕方のないことであった。アッディーンもそれがわかってきていたのだ。
「政治のことには疎い」
「また疎くて当然ですな」
「そうだ。政治家ではないのだから」
「ですが官僚でもありますが」
別の者が述べてきた。
「我々もまた官僚であります」
軍人は『武官』である。やはり彼等もまた官僚であるのだ。そうした意味でやはり政治に関わる。しかしそれは普通の武官とは違って特別な立場なのである。

## 第二十五部第五章　ジェルメ星域会戦その二

「ですがそれは」
「普通の文官のそれとは違うからな」
「はい」
部下達は頷く。やはりかなり特殊な位置にあるのが軍人なのだ。
「だからどうしても政治に携わると支障も出てしまう」
「それはありますな」
部下の一人がそれに頷く。実際に軍人が国のトップになり国家運営に支障をきたしたことはこの時代でもサハラにおいてままあることであった。軍人としての資質のみに頼り政治家としての資質に気付かなかった結果がそうさせたのである。
「副大統領になり政治を見るとな。少しだがわかってきた」
「少しでしょうか」
部下達にはそうは思えなかった。アッディーンはかなり理解しているのではないかと思ったのだ。それは彼の今の言葉からである。
「政治は奥が深い」
「それはそうですが」
「だからだ。私は政治についてはまだ何もわかってはいない」
しかし彼はこう言う。
「あまりにもな」
「それもまた学ばれているのでしょうか」
「学んでいる」
それを認める。
「その政治家としての考えだが。ジェルメは」
「極めて重要なのですね」
「政治的、戦略的に極めて重要な場所だ。だからこそ」
「手に入れたいのですね」
「やはり」

戦略となると彼等もわかることであった。戦略を解さない軍人もいることにはいるが少なくともここにいる者達はそれがわかっていた。
「それでは。いいな」
アッディーンは部下達に対して告げる。
「ジェルメを手に入れる」
「はっ」
「わかりました」
周りの者達が一斉にその言葉に頷く。そこに報告が入る。
「司令」
伝令の若い将校がやって来た。そうして告げる。
「明日に全軍ジェルメに到着します」
「そうか」
アッディーンはそれを聞いて頷く。表情自体は変えない。
「いよいよだな」
「はい、それでは」
「全軍半月型に陣を取れ」
アッディーンはそう指示を出す。
「そうしてジェルメを半包囲状態に置く」
「ジェルメをですか」
「そうだ」
部下達の問いに答える。彼は遂に作戦を伝えたのだった。
「まずはそうせよ。よいな」
「わかりました」
「それでは」
部下達もまたそれに頷く。頷きながらアッディーンの次の言葉を待っていた。
「それが整い次第次の指示を出す」
「次ですか」
「そうだ、私には策がある」

こうも言う。
「わかったな」
「はっ」
「それではそのように」
部下達は動きだした。戦いが歯車の中に入ろうとしていた。オムダーマン軍はハサンに入りそのままアッディーンの言葉通りに展開をはじめたのであった。
ハサン軍もまたそうであった。既に陣形を整えオムダーマン軍を待ち受けていた。
将兵達は既にその持ち場についていた。そうしてオムダーマン軍が来るとの報告を受けていた。
「正面から来るらしいぜ」
「おいおい、それは本当か？」
その中の兵士の一人が同僚の言葉に思わず笑った。彼等は惑星において人工衛星のコントロールにあたっていた。
「それが本当ならオムダーマン軍は負けだぜ」
「そうだよな、何考えてるんだか」
同僚の兵士もこう言って笑う。
「アッディーン司令もとうとうヤキが回ったかな」
「そうだな」
彼等はそう言い合って笑っていた。アッディーンの考えを読んではいなかった。
「まあいいさ。それならな」
「ああ」
「この戦いに勝ってハサンから帰ってもらおうぜ」
「何だ、欲ないな」
同僚の兵士はそう言って戦友の言葉を笑った。
「何だ？欲ないか？」
「あれだろ？ここはやっぱり」
「アスランまでか」

「そうだよ、戦争やってるんだぜ、生きるか死ぬかだしな」
この場合はハサンが死ぬか、オムダーマンが死ぬかである。実際に彼等は最終的にはそれぞれの首都を狙う計画も立てているのだ。オムダーマンは最初からそうである。

## 第二十五部第五章　ジェルメ星域会戦その三

「それで追い出すだけってのは欲ないだろ」
「それもそうか」
「ああ。ここはでっかく行こうぜ」
「でっかくか。何か俺には向いていないな」
彼は首を傾げてそう述べてきた。
「慎重にな」
「何だよ、夢がないな」
同僚はその言葉に苦笑いを浮かべる。
「やっぱり派手にいかないと駄目だぜ」
「御前派手にやるの好きだな」
「否定はしないさ」
ニヤリと笑って述べる。
「それはな。男はやっぱりあれだぜ」
「それで武勲をあげて末は司令官か」
「ははは、悪くないだろ。一兵卒からっていうのもな」
「まあ頑張れ」
彼は笑ってそう返した。
「それも生き方だしな」
「ああ。しかしあれだな」
「あれ！？」
「長い戦いになりそうだな」
目の前のデータを打ち込みながら述べる。
「この戦いは」
「まあそうだな」
彼もそれに頷く。彼は目の前の機械のチェックをしている。
「アスランまで行くとなるとな」
「遠いよな、ったくよお」

同僚はそう述べて溜息をつく。オムダーマンの首都アスランは西方の端の方にある。ハサンの首都ブルジルトは北にある。その距離はかなりのものだ。距離が問題になるのはハサンとて例外ではないのである。特に攻める場合はそうである。
「行くとなるとな」
「先にティムール倒した方がいいかもな」
「ああ。そっちもな」
ハサンが戦っているのはオムダーマンだけではないのだ。彼等は南と西で二正面作戦を展開しているのである。だからこその言葉だった。
「まあそこは上の話だ。俺達は戦うことだけ考えればいいな」
「武勲のことだけか」
「簡単でいいだろ。どうだ？」
「兵隊はな」
彼はそう言葉を返す。
「戦って敵を倒せばいいんだからな」
「勝って武勲を挙げればそれで昇進だ、ボーナスもあるぞ」
「ボーナスか。そっちだな、俺は」
「おいおい、御前は金かよ」
「ああ、そうさ」
彼は同僚の言葉に笑う。笑いながら機械のチェックを続ける。
「金が入ったらバイクでも買うさ」
「御前この前車買わなかったか？」
軍人で車やバイクを好きな者はかなり多い。連合では給料の殆どをそこに注ぎ込む者もいるしそれを手に入れる金をすぐに貰う為に軍に入る者もいる。連合軍らしいと言えばらしいがこれはサハラでも同じ者がいたりする。こうしたところは連合もハサンも同じなのだ。
「だから今度はバイクなんだよ」
彼は言う。

「アメリカのバイクを買う、その金でな」
「何だ、連合のかよ」
「バイクはやっぱり連合のだろう」
そう同僚に問う。その顔を見ているとかなりのこだわりが彼にもあることがわかる。
「迫力が違うぜ」
「まあそうだな」
同僚もそれに頷く。
「大きさもデザインもな。連合のものの方がいいか」
「サハラのはな。何か弱いんだよ」
彼は困った顔をして述べる。どうやらサハラのそれをかなり嘆いているようである。それは愛国心によるものであることもわかる。この場合はサハラ全体に向けられている。
「小さいし性能もな」
「性能もか」
「ああ、全然違う」
困った顔のままで言う。連合とサハラの技術の差がここでも出ていた。
「連合のそれが羨ましいな」
「俺達もあんなの作られるかな」
「それはできるだろ」
彼もそれは可能だと思っていた。しかし今は無理だとも思っていた。軍事に技術を向けておりしかも戦乱で産業も停滞する傾向にある為どうしてもそうした分野で平和な連合とは大きく差が出てしまうのである。サハラの弱みでもある。

## 第二十五部第五章　ジェルメ星域会戦その四

「今は無理な話だがな」
「連合並のバイクか」
「御前も乗ってみたいだろ、凄いバイクに」
「俺はクルーザーだな」
同僚は笑ってそう返す。
「連合はクルーザーもいいしな。何でもいいんだろうが」
「ああ、何でもいい」
彼は言う。羨望が入った声で。
「ああした豊かな国でいいバイク乗り回したいものだ。車にしてもな」
「いい車に派手なバイクか」
「俺はそうしたものさえあればいいんだがな」
「その為にも頑張ろうぜ。ボーナスにしろ昇進にしろ」
「勝ってからだな」
そんな話を交えながら敵を待っていた。戦いを前にしてほんの楽しい一時の会話であった。それが終わるともう戦いの時になっていた。
オムダーマン軍はジェルメを半月型に囲んでいた。アッディーンはその状態で今彼等を見ていたのである。ハサン軍をじっと見据えていた。
「見事な布陣だな」
まずはそれを認める。
「寸分の隙もない」
「予備戦力まで整えていますな」
ガルシャースプがそれに応える。
「いざという時の為に。そこまでも万全というわけです」
「そうだな。完全に守りきるつもりのようだ」

アッディーンもそれがわかっている。それを見ていると勝機はないようにしか見えない。しかし彼はそれでも平然と戦いを見ていたのであった。
「だが。隙がないのならば作ればいい」
「作ればですか」
「そうだ。コリームア提督とカトラナ提督の部隊に伝えよ」
「両提督の！？」
「そうだ、私の指示に従ってもらいたいとな」
そう言う。言いながら前を見据えていた。
「左右でだ。そして」
「そして？」
「各提督にも陽動に務めよと言え、いいな」
「陽動ですか」
「まずはだ。攻撃はまずは控える」
彼の作戦は普段とは違っていた。少なくとも他の提督達にはそう見えるのであった。だがそれでも動じてはいなかった。指示を出したうえで自らも動いた。
「私もまた進むぞ」
「閣下もですか」
「そうだ、直率艦隊と共にだ」
そう述べる。強い声でだ。
「派手に動くぞ。いいな」
「派手にですか」
「閣下、一体何を」
部下達は彼の考えが読めなくなっていた。しかし彼は平然と部隊を動かす。
「コリームア提督の艦隊は右、カトラナ提督は左だ」
彼はそれを頭に入れていた。頭に入れながら次の策を述べる。
「そして私は中央だ」
「中央に、ですか」

「まずはな」
毅然として言う。その中で兵を動かしていた。
「両提督の部隊はあくまで私の指揮下、そして他の提督は各自陽動に専念させ続けろ、それがこちらの作戦だ」
「そうしてどうされるのですか」
「それはこれからわかる」
やはり毅然としていた。彼の言葉に迷いはない。
「これからな。いいな」
「左様ですか」
「そうだ」
アッディーンは指示を出した。そうして戦いに向かうのだった。
「司令」
すぐに報告が入った。
「右翼での陽動にかかりました」
「来たか」
「はい」
報告した部下がそれに頷く。アッディーンはそれを受けてすぐに右翼に向かう。見れば陽動にかかった敵軍が少し突出していた。アッディーンはそこに攻撃を仕掛けさせた。
「コリームア提督に指示を出せ」
アッディーンは言う。
「同時に左右から仕掛ける。いいな」
「了解っ」
部下達はそれに応えて指示を出す。そうしてその突出した敵を叩こうとする。しかし敵はそれに気付きすぐに後ろに下がるのだった。その動きはかなり速かった。
「ダビデブ司令の指示だな」
「おそらくは」
部下がその言葉に頷く。
「この動きの迅速さは」

「見事なものだ。敵もさるものだということか」
アッディーンはそのことにあらためて頷く。
「動きを読むとはな」
「ここで一つ気付いたことがあります」
「敵陣か？」
「そうです」
今度はガルシャースプが応える。見ればハサン軍の陣地で後方から凄まじい速さで動く敵の部隊があったのだ。アッディーンもそれに気付いた。

## 第二十五部第五章　ジェルメ星域会戦その五

「高速機動部隊を編成しているようです」
「遊撃戦力としてか」
「おそらくは」
ガルシャースプはまた応える。アッディーンはそれを聞いたうえで述べてきた。
「予想はしていた」
「そうなのですか」
「防衛戦においても遊撃戦力があるのとないのとでは重要性が違う。閉じ篭もってばかりが戦いではないのだからな。しかしだ」
「しかし？何でしょうか」
ガルシャースプだけでなく他の幕僚達も彼に顔を向けてきた。そのうえで彼に問う。
「その数は思ったより少なかったな」
「少ないですか」
「二つはあると思っていた」
彼は言う。
「それが一つとはな。高速機動部隊はティムール方面に回しているということか」
「ティムールにですか」
「おそらくはな」
そう部下達に答える。
「だからこそだ。しかし機動部隊がそれだけしかないとなると」
「相手の戦術に限界があると」
「そうだ」
アッディーンは言う。
「一つならば。方法がある」
「やり方を変えられると？」

「そうだ。コリームア、カトラナ両提督の艦隊を集結させよ」
「両提督の艦隊をですか」
「そうだ、私のところにな」
彼の今の指示はこうであった。その指示に基き今両軍を集結させる。それは中央においてであった。
兵を集結させるとすぐに次の指示に移る。それこそが彼の策であった。
「右翼に向かう」
アッディーンは言う。
「敵の最左翼に向かう。全速でな」
「全速ですか」
「そうだ、いいな」
アリーの艦橋モニターにはハサン軍の陣地が映し出されている。その最右翼こそが守りの帰結点である。彼はそこを狙おうというのだ。
「守りが一番薄い。そして」
「そして？」
「そこにすぐに援軍に向かえるハサン軍はその機動部隊一つだけだ。仕掛けるぞ」
「わかりました。それでは」
これで作戦は決まった。オムダーマン軍はすぐに動く。自軍の右翼の後方を迂回して敵の左翼の終着点に向かう。その動きはダビデブも察知していた。すぐに高速機動部隊を向かわせるように指示を出すのだった。
「一個しかないのがな」
だが彼はここで苦い顔を見せてきた。
「辛いものだ」
「仕方ありません」
幕僚達がそれに応える。
「数がありませんから」

「予備戦力も向かわせろ」
ダビデブはまた指示を出した。
「全速でだ。いいな」
「わかりました。それでは」
「うむ」
(しかしだ)
ダビデブは指示を出しながら心の中では違うことを呟いていた。この呟きは司令としては表には出せないものだった。それをわきまえてのことであったのだ。
(予備戦力が間に合うかどうか疑問だ。このままでは)
このとき彼は戦局に危惧を感じていた。それを口に出さずともだ。戦いはハサン軍にとって少しずつ危険な局面に向かおうとしていた。だがそれに気付いている者は僅かであった。
オムダーマン軍はハサン軍の左翼の付け根に現われた。そこへ総攻撃を仕掛ける。
「損害は恐れるな!」
アッディーンは自ら陣頭に立ち指示を出す。
「そのまま敵の陣地を突破せよ!いいな!」
「わかりました」
部下達もそれに頷く。アッディーンは同時にこうも言った。
「総攻撃だ!」
「総攻撃ですか」
「そうだ、全軍を以って敵の全ての部隊にだ」
今ジェルメを囲んでいる全ての部隊にそう指示を出す。その言葉を受けてオムダーマン軍全軍は果敢に動きを開始した。それはさながら波濤のようであった。
「オムダーマン軍が総攻撃に移りました!」
「損害をものともせず来ます!」
「勝負に出たというのか」
ダビデブはそれを聞いて呻くように呟く。

「賭けではないな」
「まさか」
「我々の戦力を見切ったのだ」
その呻く声で部下達に述べる。

## 第二十五部第五章　ジェルメ星域会戦その六

「高速機動部隊が一個しかないのをな」
「それではすぐに各方面に援軍を」
「いや」
しかし彼はここで違う考えを見せてきた。
「援軍を送るのは左翼のみだ」
彼は言う。
「それも最左翼にだ。他の方面はそのまま守るように言え」
「まさか」
「司令、それでは」
「いや、それで勝てる」
部下達の言葉をここでは突っぱねるようにして返した。
「守りきれる。安心していい」
「そうでしょうか」
「そうだ、各方面には何としてもそこを動くなと伝えよ」
少なくとも彼はその考えであった。確かにハサン軍の戦力は全ての方面においてオムダーマン軍を凌駕していた。しかしだ。ダビデブはここで見落としがあった。
「駄目です司令！」
すぐにダビデブにとって思わしくない返事が返ってきた。
「どうした！？」
「前線の司令官達からそれぞれ援軍を願う要請が絶えません！」
「耐えろと伝えろ」
それでもでビデブはその要請を頑ななまでに拒もうとした。そうでなければ今は勝てはしない、そう確信していたからだ。その読みは正しかった。しかしそれ以上に敵軍の攻撃に怯える自軍の兵士達の心理が彼の計算を狂わしていたのだ。
「敵の攻撃は想像以上で」

「しかも退かないので」
前線の指揮官達の言葉がダビデブの下にも届く。
「御願いです、このままでは」
「我々の損害も無視できなくなってきました」
「無理だというのか」
ダビデブは彼等の言葉を聞き呻くようにして言った。その呻きは最早何処にも逃れようのないものを意識した呻きであった。彼もそれを意識した。
「このままでは」
「至急御願いします！」
「今もオムダーマン軍が迫ってきています」
「司令！」
また部下達が言う。
「ここは決断の時です」
「ですから」
それが間違った決断としてもだ。だがそれに気付く者はやはりいなかった。
「ここは何としても援軍を！」
「さもなければ」
「どうしてもか」
ダビデブは苦い顔でそれに応える。
「耐えられないか、今は」
「申し訳ありません」
「しかし何としてもここは」
彼等の言葉は変わらない。それを聞いてダビデブも決断を下すしかなかった。彼の本意ではなくともだ。このままでは将兵がパニックを起こして壊走することが危惧されかねなかったからだ。彼にしては実に苦しい選択を選ばざるを得なかった。
「・・・・・・わかった」
苦い顔で応える。

「すぐに援軍を各方面に送る。それでいいな」
「御願いします」
「それでは」
前線の将兵達はそれを聞いて満面の笑顔になる。彼等はこれで救われたと感じたのだ。
ダビデブは前線に援軍を送る。これでハサン軍の勝利は確実なものになったと誰もが思った。ハサン軍ではダビデブ以外の者がだ。
「最左翼をどうするかだな」
「はい」
ダビデブの言葉にギーブが応える。彼も各方面に援軍を送るのには消極的だった。しかしこの場合を止むを得ないのではないかとも思っていた。
「高速機動部隊を向かわせていたな」
ダビデブはギーブに問う。
「はい、そうですが」
「残った予備戦力も向かわせろ」
彼はそうギーブに告げた。
「いいな」
「残りの戦力もですか！？」
「そうだ、すぐにだ」
彼は言う。
「至急だ。さもなければここから前線が崩壊しかねないからな」
「それではすぐにも」
ギーブも顔色が少し変わった。上官の顔を見て彼も危険を察したからだ。

## 第二十五部第五章　ジェルメ星域会戦その七

「最左翼に残りの援軍を」
「できれば私も行きたいがな」
ダビデブは重厚な声でそう述べてきた。
「あそこにいはアッディーン司令自ら参戦していたな」
「はい」
ギーブはダビデブのその言葉に頷く。
「そうした報告が入っています。司令官自ら果敢に攻撃に参加していると」
「無鉄砲ですらあるな」
それを聞いてあらためて言う。
「指揮官自ら乗艦を前線に出すとは。将兵の士気の鼓舞の為か」
「おそらくは」
ギーブはそれに答えて述べる。何時の時代でも将兵の士気は戦闘において極めて重要である。士気のない軍はそれだけで危機にある。だが逆に士気の高い軍は大きな力となる。そういうことなのである。アッディーンもそれがわかっているからこそ自ら前線に出ているのである。危険を侵す意義はあるということであった。
「だからこそ命を張って」
「出ているというのだな」
「おそらくは」
ギーブはまた頷いて述べる。
「だからこそですか。前線を突破されると」
「それだけは許すな」
ダビデブは険しい顔で言う。
「一つの前線を突破されればそこから大きく崩れる」
「そうですね」
これは言うまでもなかった。防衛線というものは一つが崩れると

そこから全てが崩壊するものである。蟻の一穴が堤防を崩すというのと同じである。アッディーンもそれを狙っているのがすぐにわかった。
「ここは」
「援軍を送りどうにかなればいいが」
ダビデブは宙図を見る。見ていると敵の動きはかなり速い。
「どうなるかな」
「大丈夫だと思いますが」
ギーブは少し楽観的な言葉を述べてきた。実際に彼は自軍の数と防衛体制にかなりの自信を置いていた。だからこそ大丈夫だと思っているのである。しかしそれは甘かった。
「どうでしょうか」
「どうかな。油断は禁物だ」
それに対するダビデブの言葉は険しい。
「絶対のものは戦争においてはないのだからな」
「絶対はない、ですか」
「この世の全てがそうかも知れない」
ダビデブは思い出したようにこう言葉を変えてきた。
「コーランとアッラー以外はな」
「無謬なものはないと」
「そうだ。人の為すことには絶対はない」
サハラではそう考えられている。人は不完全な存在であると。連合でもこう考えられてはいるが根本から違うのはサハラではその考えの根幹にやはりイスラムがあるということである。彼等にとってイスラムは絶対であり無謬の存在であり続けているのだからだ。
「だとすればだ」
「この防衛線もまた」
「その可能性は皆無ではない」
それをまた告げる。
「下手をすればだ。敗れるのだ」

「今のところ最左翼は持ち堪えていますが」
ギーブは宙図を見て言ってきた。
「それも限界がありますし」
「限界は近いな」
ダビデブはオムダーマン軍の動きを見て述べる。見れば彼等は一点集中攻撃を仕掛けてきておりそれにより前線の将兵達、防衛施設の損害が無視できないものになってきているのだ。
「このままでは」
「ではすぐにも援軍を。ですな」
「それしかあるまい。だが」
「だが。何か」
「それまで破られれば。我が軍は終わりだ」
重苦しい声でそう述べる。
「ジェルメは陥ちるぞ」
「その際はどうされますか？」
「どうされますかと言われてもその場合は選択肢は一つしかない」
ダビデブはやはり重苦しい声で述べてきた。顔もそうしたものになってしまっている。
「撤退だ」
彼は言う。
「全滅するわけにもいくまい」
「そうですな。それしかありません」
「その時はその時で動かなければならない」
そうも述べる。述べながら戦局を見守りどう指示を出すのか考えていた。しかしその顔は険しい。決して楽しむものではなかったのであった。

## 第二十五部第五章　ジェルメ星域会戦その八

アッディーン率いるオムダーマン軍の攻撃は過激ですらあった。損害をものともせず突っ込み本気で前線を突破しようと狙っていたのだ。

「いいか！退くことは許さん！」

マトクはそう部下達に激を飛ばす。

「最初に敵の前線を突破できた者には俺から褒美をやる！特別ボーナスだ！」

「それは一体！？」

「欲しいものは何でも言え！」

こう豪語してきた。

「何でもやる！政府が出せる可能な限りはな！」

「では家等は」

「いいぞ！」

将兵の一人の言葉に応える。

「将校にもなれる！十年分のボーナスもな！」

「おお！」

「それなら！」

「わかったなら行くぞ！」

乗艦の艦橋で思いきり叫ぶ。腕を組んで。

「敵を倒しにな！いいな！」

「了解！」

「ボーナスの為に！」

将兵はその言葉に士気を上げ戦いに向かう。その突撃がハサン軍をして強行寸前に追い詰めているのであった。退かない敵は実に恐ろしいものである。

「妙だな」

彼等はその中であることに気付いた。

「敵の損害が思ったより少ない」
「確かに」
前線にいる参謀の一人が言うと同僚達もそれに気付いた。
「これだけ派手な攻撃を仕掛けているというのに」
「敵の損害は思った程ではない。どういうことだ？」
「散陣か」
すぐにそれに誰かが気付いた。
「散開と集結を繰り返している。それでだ」
「それで損害を減らしているのか」
「おそらくはな。見事なものだ」
「それもこれもアッディーン元帥の采配か」
そのことにあらためて唸る。しかしそれだけではなかった。
「いや、違うな」
ある参謀が答えてきた。
「それだけではない。確かにアッディーン元帥の采配は大きいがな」
「というと？」
「彼の部下の司令達の采配も。見事なものだ」
「彼等もか」
そこにあらためて視点を向ける。見てみればその通りだった。前線のオムダーマン軍の動きは個別に見てもかなりのものだ。彼等はそれを見て同僚の言葉に頷くのであった。
「そうだ。かなりのものではないのか？」
「言われてみればそうだな」
彼等も同僚のその言葉に頷く。見れば目の前で今も見事な動きを見せている。
「練度と経験だな」
「そうだな」
参謀達はあらためてそれを認識した。
「伊達に西方、南方を統一したということでないな」
「それだけではないな」

彼等はさらにオムダーマン軍への分析を続けていく。そこに見ているものはかなり的確なものであった。彼等も愚かではないということである。
「末端に到るまで。指揮が優れている」
「そうだな」
「確かに」
またしても頷く。頷きながら戦いを見ていく。
「オムダーマン軍は何処までも。水際立っているな」
「特に司令達がな。優れているな」
「我が軍とどちらが上かな」
それについて言及された。言及すると嫌な気分になっていくのは彼等も否定できなかった。自軍の動きはそれに比べてやはり鈍いのである。
「このままでは。まずいぞ」
「いや、それでも我が軍の方が数も護りも勝っている」
この言葉にはすぐに反論が来た。
「指揮や動きはそれでカバーできる」
「そうだ、装備は互角なのだしな」
「援軍もある」
これについても言及された。指揮官達が無理を行ってダビデブに取り付けた援軍である。これは彼等も同じでかなり無理を言ってダビデブに頼み込んでいるのである。彼等も勝利を得る為に必死であった。ただ読み違えをしていただけなのだ。そしてその読み違えがハサン軍を窮地に陥れることになってしまうのだが。
「勝てる、間違いなく」
「それは過信ではないのか？」
オムダーマン軍の動きを指摘その参謀はそれにも異議を呈する。
「過信できる相手ではないぞ。用心に用心を重ねるべきだ」
「馬鹿な、今は確かに苦戦しているが」
「数が備われば」

「数は確かに力だ」
その彼もそれは認める。戦争は数、これは古代からの普遍の原理である。数を揃えた方が勝つのだ。それに対して少数で多数を破るのは容易ではない。だからこそ歴史にも残るのだ。そのまま敗れれば単に敗れたという記述だけで済むことである。それだけのことだ。

## 第二十五部第五章　ジェルメ星域会戦その九

「しかしだ。それだけではない」
「総合力か」
「そこには指揮官の能力も加わる。特に」
彼の目が光った。鋭く。
「最高司令官のそれはな。アッディーン元帥は」
「今最左翼だ」
ハサン軍から見て、である。今彼はそこに果敢に攻撃を加えてきている。これは彼等も嫌になる程認識していることであった。せざるを得ないことと言うべきか。
「そこから派手に攻撃を仕掛けている。護りは破られる寸前だ」
「寸前か」
「援軍は向かっている」
それも言及される。高速機動部隊が動いているのは彼等もわかっていた。
「彼等はな」
「確かバンダル提督だったか」
その高速機動部隊の指揮官についても言及される。
「あの部隊の指揮官は」
「そうか。あの人ならば大丈夫か」
「そうだな」
これには彼も頷いた。バンダルに対しては確かな信頼があった。それが言葉にも現われていたのである。彼ならば安全だと考えたのだった。
「あの人ならば」
「大丈夫か」
「あそこを防げれば我が軍は勝利に大きく動く」
参謀のうちの一人が言った。

「その後で反撃に転じればな。まずは」
「防ぐ、そうだな」
「よし」
彼等もまた頷く。戦いは彼等の前でも行われていた。熾烈なものであり炎と光が激しく交差する。戦いは一進一退の有様となっていた。ハサン軍にとっては決して望ましい状況ではなくなっていた。
しかしそれはオムダーマン軍も同じであった。しかしマトクはその中で轟然と胸を張り指揮にあたっているのだった。その顔には怖れなぞ微塵もありはしなかった。
「面白いものだ」
不敵な笑みで言う。
「これだけ派手な戦いは久し振りだ」
「全くですな」
傍らにいる副官がそれに頷く。アバドラという男である。マトクとはもうかなり長い付き合いになる。彼が最も頼りにする部下の一人でもある。
「血湧き肉踊るというやつですな」
「楽しい言葉だな」
マトクはその言葉にも笑みを向ける。戦いが実に楽しいようだ。
「生きれば武勲」
「死ねば極楽」
「戦いとはいいものだ。どちらにしろ栄誉が待っているのだからな」
ここでもまたムスリムの思想が出る。彼等が何故死を恐れず勇敢なのか。それは聖戦、ジハードの思想があるからに他ならない。本来は異教徒との戦いを指すのであるが実際はあらゆる戦争に適用されているのが現実なのである。
「これで楽しめない筈がない」
「それも激しければ激しい程」
「その通りだ」
アバドラのその言葉にまた頷く。

「だからこそ」
「果敢に攻撃ですか」
「それしかない、ここはな」
そう言うと自身が率いる全軍に対して指示を出した。
「突撃、攻撃、それだけだ！」
「前にいる敵はどうされますか！？」
「愚問だ！」
部下達の問いに笑って返す。
「踏み潰せ！蹴散らすのみだ！」
「はい！」
「それでは！」
彼等もその言葉に笑顔で従う。そうして全軍果敢にハサン軍の陣地に攻撃を浴びせる。それは彼等だけでなく全軍同じであった。アッディーンの率いる軍も同じであった。
「進め！」
アッディーンは叫ぶ。

## 第二十五部第五章　ジェルメ星域会戦その十

「敵はただ前にいるのみだ！剣を振るえばそれだけで武勲が諸君に与えられる！」
「武勲が！」
「恩賞は思いのままだ！」
アッディーンもまた恩賞について言う。サハラの軍の特徴として恩賞というものの存在が大きいということがある。連合軍ならば戦場手当てという特別支給がつくがこれともまた違う。考え方は昔からの戦いと同じということなのだ。
「だからだ！前に進め！」
「了解！」
部下達もそれに頷く。そうして全軍アッディーンの指示の下果敢に突き進む。損害は恐れずに一丸となって。次第にハサン軍の陣地に肉迫する。アッディーンはそこにも攻撃命令を下す。
「間も無くだ」
アッディーンは敵の陣地を見て言う。既にそれは目の前だ。
「敵の陣地だ。これを突破すれば」
「我が軍の勝利が決まります」
ガルシャースプが横から述べてきた。
「それで」
「そうだ。だからこそだ」
彼は言う。
「突き進め、間も無く我が軍の勝利が決まる」
目の前の敵軍と陣地を前にしても臆してはいない。そのうえでの言葉であった。
「これでな」
「それでは閣下」
「このまま」

「総攻撃だ！」
部下達に応えて言う。
「全軍の攻撃を一点に集中させよ！」
「一点に！」
「まずは風穴を開ける」
毅然として言葉を出した。
「そしてそこに雪崩れ込むぞ。いいな」
「了解！」
「ではこのまま！」
「うむ！合図を待て！」
まずは間合いを詰めさせる。敵も果敢に攻撃を仕掛けて来るがそれでも進んでいく。間合いに入っていくと遂に。アッディーンは大きく掲げた右手を振り下ろした。
「撃て！」
「撃て！」
攻撃が復唱される。そうして艦隊から無数の光の帯が放たれる。
それはハサン軍の防衛ラインの一点を直撃した。そこにあったコロニーレーザーも人工衛星も何もかもを薙ぎ払ってしまった。これによりオムダーマン軍は最初の大穴を開けたのであった。
それで終わりではなかった。アッディーンはさらに攻撃を命じる。再び一斉射撃を命じるのだった。
「次だ！」
「次ですか」
「そうだ、連続で攻撃を浴びせる」
彼は昂然として言った。
「そして敵の陣地を完全に突破する、時間はない」
「時間は？」
「敵が来ている」
彼はここでモニターに顔を向けた。見れば敵の部隊が高速で向かってきていた。

「前線を突破して彼等の相手に向かわなくてはならない」
「だからこそですか」
「そうだ、いいな」
そう部下達に述べる。
「だからこそだ。もう一撃を浴びせよ！」
「わかりました！」
部下達も敬礼でそれに応える。そうして今再び攻撃が繰り出された。
「撃て！」
「撃て！」
再び一斉射撃がハサン軍の防衛ラインに浴びせられる。それが済むともう一撃。こうしてハサン軍の防衛ラインに大きな穴が開けられたのであった。
アッディーンはそこに自軍を雪崩れ込ませた。これでハサンの誇る防衛ラインは完全に突破されてしまった。しかし戦争はそれで終わりではなかった。
ハサン軍の高速機動部隊がもうそこまで迫ってきていたのだ。防衛ラインを突破したところでアッディーンは彼等を目の前にすることになったのである。
「来たか」
「数は五個艦隊といったところです」
ガルシャースプが答えてきた。
「それに対して我が軍は九個艦隊」
「上手くいったと言うべきか」
アッディーンはここでガルシャースプにこう応えてきた。
「上手くいったとは？」
「全ては防衛ラインがあってのことだった」
彼はこう言うのだった。
「あの防衛ラインがあってこそ高速機動部隊もある。遊撃戦力としてな」

「遊撃戦力ですか」
「そうだ。守りがなくてはそこにあるのはただ足の速い部隊でしかない。しかも数は我が軍の方が有利だ」
「それでは」
「勝てる」
アッディーンは言った。
「このまま正面に進むぞ。いいな」
「正面から粉砕すると」
「先の防衛ラインへの攻撃と同じだ」
これがアッディーンの基本戦術であった。今それを伝える。
「三連で一斉射撃を浴びせる。まずはな」
「それからは」
「一気に突撃し突き崩す」
それもまた決めていた。オムダーマン軍の基本戦術である。それで一気に勝負を決めようというのだ。ガルシャースプ達はその言葉を聞いて覚悟を決める顔になった。
「それでこのジェルメでの勝敗は決する」
「この死闘が今」
「だからこそだ。行くぞ」
将兵達を鼓舞するように声をかけてきた。
「このまま正面から突き崩す」
「わかりました。では」
「一斉攻撃用意！三段だ！」
「了解！三段攻撃用意！」
すぐにそれが指揮下の全軍に伝わる。再び全軍に緊張が走る。
「それからすぐに突撃に入る！いいな！」
「了解！併せて突撃も用意！」
「突撃用意！」
この指示も全軍に伝わる。今軍が動こうとしていた。
「来るぞ」

アッディーンは今迫る敵の高速機動部隊を見て言う。
「勝利の時が」
それが今すぐそこにまで来ているのを確信していた。オムダーマン軍の弓が一斉に放たれようとしていた。

## 第二十五部第五章　ジェルメ星域会戦その十一

ハサン軍の高速機動部隊もまた突き進む。彼等も総攻撃に入ろうとしていた。
「やるしかありませんな」
「今ここで退くわけにはいかない」
バンダルはそう自身の幕僚達に述べる。
「退いてはそれだけ彼等を自由にさせてしまう」
「足止めですか、ここは」
「そうだ、今援軍がこちらに向かっている」
ダビデブはここにも援軍を向かわせていた。残る最後の予備戦力である。彼等が到着するまで時間を稼ぐ、それがバンダルの考えであった。
「だからこそだ。しかし」
「しかし！？」
「果たしてそれができるかな」
モニターに映るオムダーマン軍を見て呟く。防衛ラインを突破したばかりのその軍はバンダルの目には血に餓えた獣の集まりに見えた。
「ここで」
「やるしかないでしょう」
部下の一人が真剣な顔でそう述べてきた。
「迷っている暇はないかと」
「そうだな」
「そうです。では我々も」
「一斉射撃用意」
「一斉射撃用意」
ハサン軍でもまた攻撃が命じられる。そしてその指示が復唱される。

「目標全面の敵だ。三段攻撃を浴びせる」
「三段攻撃用意」
奇しくもバンダルもまたアッディーンと同じ攻撃を命じるのだった。これはサハラにおいては基本戦術だからだ。彼等は今それを忠実に守っているのであった。
「いいな、それが終わり次第遊撃戦に変える」
「遊撃戦ですか」
「戦力では劣る」
バンダルは苦い顔で部下達に述べる。
「それで激戦は無理だ。ならば」
「相手を惑わせて時間を稼ぐ。そうですな」
「その通りだ。では仕掛けよ」
彼はあらためて言った。
「総攻撃三段だ。それから次の動きに移るぞ」
「はっ！」
ハサン軍も攻撃に取り掛かった。そして今前面にエネルギーを集中させてきた。
双方力を極限にまで高めていた。そうして今攻撃を放つ。
「撃て！」
「撃て！」
双方アラビア語で攻撃命令を出し右手を振り下ろす。それと共に無数の光が今壁となってお互いに向かう。
光の壁はそのまま力となった。オムダーマン軍のそれはハサン軍のそれを大きく退けていく。そうしてそのまま押し切りハサン軍を撃った。
光の壁に艦艇が次々と押し潰されていく。無数の光球が死と共に起こり瞬く間に消えていく。それによりハサン軍はその動きを止められてしまった。
「よし、続けろ！」
「はっ！」

アッディーンはさらに攻撃命令を下す。そうして二度、三度と攻撃が浴びせられる。その度に光の壁が襲いハサン軍の艦艇がその中で消え去っていき将兵もまた夥しい数を失っていく。そうしてハサン軍高速機動部隊はその数を大きく減らしてしまった。

バンダルは何とか生き残っていた。だが彼の艦隊は継戦能力を失ってしまっていた。

「戦力がどれだけ残っているか」

「かろうじて七割です」

「全滅、か」

損害程度で言えばそうなる。対するオムダーマン軍はまるで減ってはいない。

「司令、これ以上の戦闘は」

「わかっている」

参謀の一人の言葉に答える。

「後方に下がる。そして」

「そして？」

「援軍と合流する。いいな」

「それしかありませんか」

言葉が苦い。だが彼もそれしか考えられない。

このままでは戦ってもさらなる損害を出すだけなのは目に見えていた。それならば。彼等はたった一つしか採る方法を見出せなかったのである。それを採ったのだった。

# 第二十五部第五章　ジェルメ星域会戦その十二

高速機動部隊は下がる。ダビデブはそれを見て思わず叫んだ。
「馬鹿な、ここで下がるというのか」
「ですが司令」
ギーブがその彼に言う。
「このままでは彼等もまた。更なる損害を出すだけです」
「それはわかっている」
ダビデブもそれに頷く。しかしだからといって納得できることではなかったのだ。少なくとも彼の考えではそうだったのだ。これは譲れないことであった。
「しかし」
「しかし？」
「ここでは撤退するわけにはいかなかったのだ」
「犠牲になれと、ですか」
「止むを得ない場合はな」
ダビデブは苦い顔のままで述べる。前にある宙図を眺めながら。そこでは後ろに向けて退いていく自軍の動きがはっきりと映し出されていた。
「そして今がそうだった」
「犠牲になってでも足止めをするべきだったのですか」
「できないことだとはわかっている」
それはダビデブもわかっている。わかっているからこその言葉だった。苦い顔であるのもそのせいだ。ダビデブはそうした決断を下すべきなのはわかっていた。しかしそれをするには彼はあまりにも人としての情けがあった。だから今何も言えなかったのである。
「止むを得ないな」
「そうです、ここは」
「だが。これで戦局は我々にとって不利になった」

宙図を指し示して言う。
「開いた場所から次々と敵軍が入って来ている。このままでは」
「どうされますか、これから」
ギーブはダビデブに顔を向けて問う。
「このままでは我が軍は」
「戦線の縮小だ」
ダビデブはそう決断を下した。それしかなかった。
「アッディーン司令の艦隊に向かわせている軍勢で彼等を足止めしろ」
「足止めですか」
「そうだ」
彼は言う。
「その間に各部隊を後ろに下がらせる。いいな」
「それはかなり困難かと」
ギーブは難しい顔でそうダビデブに告げる。
「今下がるとさらなる損害が」
「いや、今のままではさらに損害が出る」
しかしダビデブはそう言ってギーブの言葉を退ける。
「下手をすると開いた戦線からさらに侵入を受ける。このままでは」
「下がるしかありませんか」
「損害を出してもだ。だがそれでも」
「追撃を受ければそれはそれで」
ギーブはそれを恐れていたのだ。前線でのオムダーマン軍の攻撃は熾烈なものである。下手に退けばそこで大きな損害を受ける。どちらにしろ今ハサン軍は深刻な危機の下にあったのである。留まるも地獄、退くも地獄というわけであった。このままではどうしようもない、そうした状況に置かれていたのだ。
「このままでは下がっても」
「機雷を撒け」
ダビデブはオーソドックスな指示を出した。

「そして防衛施設で最後の攻撃を浴びせろ。人員を収容すると共にな」
「人員もですか」
「当然だ」
ダビデブは今回は迷わなかった。撤退にあたって誰も見捨ててはならない、可能な限りの者を下がらせていく。それが彼の考えだからだ。
「左翼からだ」
撤退する順番まで命じた。
「徐々に中央に向かい、そして」
「下がると」
「いいな、右翼もまた」
続いて右翼に対しても言及する。宙図において左翼も右翼も激しい攻撃にさらされている。それを見据えながら指示を出すのであった。
「足を止めながら少しずつだ」
「時間はあるでしょうか」
「二日だ」
そう定めた。
「二日の間に全ての戦力を今の戦線から下がらせる、いいな」
「わかりました」
ダビデブのその言葉に頷く。
「それではそのように」
「アッディーン司令の部隊はその二日の間一歩も動かさせるな」
「わかりました。それでは」
「上手くいかせる、何があっても」
ダビデブは珍しく強い声で述べてきた。
「さもなければ今後の戦いにも支障が出ることになるからな」
「今後ですか」
「そうだ。戦いはここで終わりではない」

ダビデブはここでジェルメから全ての戦いに向けていた。オムダーマンとの戦い全てに目を向けていたのである。それはジェルメだけではなかったのだ。
「いいな、だからこそ」
「ここで無闇に損害を出すわけにはいかないと」
「兵は無限ではない」
険しい言葉になる。

## 第二十五部第五章　ジェルメ星域会戦その十三

「限りあるものだ。まして相手はオムダーマンだけではない」
「ティムールもまた」
「敵は一つではない」
そして手強い、ダビデブは言うのだった。
「多くの敵がいる、だからこそ」
「無闇な損害は避けなければなりませんね」
「わかっているならいい。いいな」
「はい」
こうしてハサン軍はオムダーマン軍にそれと悟られないように撤退に取り掛かった。それは順調に進み何とか少しずつ左翼から中央に向かっていた。
同時に右翼も下がっていた。しかしオムダーマン軍はここで果敢に動こうとはしなかった。何故か彼等に対しての攻撃を緩めていたのである。
「よし、まずは行かせろ」
アッディーンは戦局を見渡しながら述べてきた。
「いいな、今はだ」
彼は今ハサンの援軍と戦っていた。その戦闘は苛烈なもので一歩も前には出れないでいた。しかしその戦いの間も全体の統率は執っていたのである。
「それよりもだ。右翼の軍をこちらに向けろ」
「はっ」
参謀達はアッディーンの今の言葉に頷く。
「敵は下がるに任せてだ。いいな」
「了解」
「それでは」
「彼等は下がらせていればいい。それよりも目の前だ」

今戦っている敵軍を撃破しようとしていた。それには理由があった。
その為に今さらなる軍を向けさせる。そして彼等は来た。
アルマザールの部隊であった。マトラも部隊もいた。
「アルマザール、マトラ両提督の部隊が来ました！」
「よし、勝ったぞ！」
アッディーンはその報告を聞いて会心の笑みを浮かべる。
「両提督の部隊と合流し正面の敵を倒す！いいな！」
「はい！」
「そして敵の後方に回り込む！それで我が軍の勝利は決定する！」
今二人の軍が到着した。全てが決しようとしていた。
「撃て！」
援軍を得たうえで一斉攻撃を命じる。それで目の前の敵を一気に倒した。
そのまま敵全体の後方に回り込む。司令部と敵の本軍を寸断し包囲攻撃に移る。
「全軍敵をこのまま殲滅せよ！」
アッディーンは目の前の敵を粉砕しながら叫ぶ。
「一隻も撃ち漏らすな！ここで戦い自体を決めろ！」
ここで言う戦いとはオムダーマンとサハラの戦い全体を言っていた。彼はそれを見据えて決定的な勝利を得ようとしていたのであった。だがそれには時間が味方しなかった。言い方を変えれば時間は最後にはハサン軍を救ったのである。
「司令」
シンダントがここでアッディーンに報告してきた。
「どうした？」
「敵の援軍です」
ブルジルトからの援軍であった。それが今遂に戦場に到着したのである。
「今ダビデブ司令のところに到着しました」

「ここでか」
「はい。どうされますか？」
「残念だな」
この言葉が全てを決していた。
「今これ以上の敵を相手にはできはしない。攻撃を止めるしかないか」
「はい」
「その援軍の動きは」
あらためてそれを問うてきた。
「どう来ている？」
「やはりこちらに向かってきています」
参謀の一人がそう報告する。モニターにはこちらに来ている敵のあらたな大軍がいた。明らかにアッディーンが直率する軍を狙ってきていた。
「狙いは我々か」
「このまま頭を潰すつもりのようです」
「そうだな。少なくとも退けるつもりのようだ」
「どうされますか、ここは」
「このままでは挟み撃ちに遭ってしまう」
彼は冷静に敵の動きを見ていた。既に敵は南下してきているその援軍だけでなく包囲下に置かれだしていた元からジェルメにいる軍勢も脱出を計り北に戦力を集中させようとしていた。今アッディーン自身が率いる部隊では彼等の相手をすることが難しいのは明らかであった。
「退くぞ、一旦な」
「それで敵の矛をかわすと」
「その通りだ」
彼はそう部下に返す。その考えは変わってはいなかった。
「しかも矛は二本だ。あえてその先に身体を晒すこともあるまい」
「それでは」

「我が軍は退く。そして包囲している敵を逃がしてやれ」
「はっ」
「ついで南下して来ている敵軍からの攻撃もかわす。いいな」
この指示も下した。まずは敵の矛先をかわす。無駄な損害を避けて次の攻撃に備えることにしたのである。これは合理的な判断であった。
「わかりました。それでは」
「うむ」
アッディーンは一旦自分が率いる軍を退かせてジェルメのハサン軍を逃がさせた。しかしただ見逃すというのではなかった。最初からそのつもりはなかった。戦場においては撤退する軍は極めて脆いものだ。彼はそれがわかっているからこそあえて逃がしたのだ。そうした狙いもあってのことであったのだ。

## 第二十五部第五章　ジェルメ星域会戦その十四

ジェルメのハサン軍は一目散に逃げていく。彼等はそのまま北上する。その彼等に対してアッディーンは追撃命令を出した。明らかに狙っていた。

「追え！できるだけ損害を与えよ！」

そう指示を出す。しかしその動きは決して執念深いものではない。深追いはするつもりはなかった。敵の援軍の存在があるからだ。だからここは順調に敵を進ませその間に攻撃を浴びせるつもりだったのだ。そしてそれを実行させた。

「一斉射撃でもいい」

彼は追撃を続けながら言う。

「しかしその一斉射撃で出来るだけのダメージを与える。いいな」

「了解！」

部下達はそれに頷く。そうして今撤退する敵に対してありったけの攻撃を浴びせた。

「撃て！」

「撃て！」

また一斉射撃を浴びせる。そうしてハサン軍の背を切り裂いた。これでかなりのダメージを与えた。しかしこれまでだった。そこに援軍が来た。アッディーンは深追いすることはせず彼等の後詰には対峙するだけで退かせたのであった。

ハサン軍はジェルメから退いていく。それを行かせるままにしてオムダーマン軍は集結した。今ジェルメに残っているのは彼等だけであった。

「やりましたな、閣下」

「うむ」

参謀の一人の言葉に頷く。

「これでジェルメは我が軍のものとなった。しかし」

「しかし？」
「損害も大きかったな」
集結する自軍を見て言う。見れば勝利したオムダーマン軍はその数を何時になく減らしており損害を受けている艦艇も実に多い有様であった。勝利はしたが傷も多く受けた戦いであった。
「それは否定できません」
ガルシャースプがそれに応えて述べる。モニターに映る艦艇の多くが傷ついている有様ではその言葉も残念なことに事実であった。
「これだけ損害を受けたのは」
「全体としての損害はどれだけになる？」
「そうですね」
バヤズィトがそれに答える。
「一割、いえ二割に達しているかも知れません」
「二割か」
「お世辞にも少ないとは言えませんな」
「そうだな」
ガルシャースプの言葉に頷く。
「ジェルメを掌握できたのはいいが。受けた傷は大きかったか」
「再び軍事行動を取るには少し無理があるかと」
ガルシャースプはまた述べてきた。
「戦死者は帰っては来ませんが受けた傷の回復はできますから」
「その傷が回復するまでか」
「はい。それでは」
参謀達は頷く。アッディーンはその彼等に対して言う。
「今はジェルメの掌握と基地を完全に我々のものにすること、そしてダメージの回復に努める。このジェルメを前線基地としてな」
「わかりました。それでは」
「そのように」
こうしてオムダーマン軍の方針は決定した。確かに彼等の受けた傷は深かったがそれでも得たものは実に大きかった。損害だけはあ

ったと言えるものだった。
　ジェルメ星域会戦はオムダーマン軍の勝利であった。参加兵力はオムダーマン軍六十五個艦隊、人員にして約七〇〇〇万でありハサン軍は百十五個艦隊、一三〇〇万であった。損害はオムダーマン軍の損害は予想通り二割近くに達し一〇〇〇万を越える死傷者を出した。しかしハサン軍の損害は三割近くであり三千万を優に越える損害と多くの艦艇、何よりも重要な軍事拠点であるジェルメを失った。ハサン軍の戦略的敗北は明らかであり彼等はこのことで今後の戦局に悪影響を及ぼすことになった。勝利者は誰の目にも明らかであった。このことはすぐに銀河全体に伝わることになった。

## 第二十五部第五章　ジェルメ星域会戦その十五

「そう、勝ったのですか」
「はい」
伊東がいた。金髪碧眼の黒人に対して述べていた。
「大方の予想に反しまして」
伊東はこのことについての話をマックリーフ、李、グリーニスキーの四者会談の中でお互いの私的な会話の場で話していたのである。
「オムダーマン軍の勝利です。損害は大きかったですが」
「左様ですか。まさかとは思いましたが」
李はそれを聞いて唸っていた。首も捻っている。
「彼等が勝つとは」
「全くですな」
それにグリーニスキーが頷く。何かとその関係が噂される日米中露という連合の四大国であるがここでは意外と温和なムードで話をしていた。
「戦力的にも戦略的にもハサンが有利でした」
マックリーフはそれを指摘してきた。
「それは揺るぎないものでした。しかし」
「鮮やかな勝利でしたね」
伊東が述べる。四人は円卓で互いに向かい合っていた。この顔触れを見て剣呑なものを感じない連合の者達は流石にいない。彼等は定期的にこうして話し合いの場を持っているのである。そうしないとそれはそれで厄介なのだ。大国は何かをしても何をしていなくてもあれこれと注目される。こうして定期的に話し合いをしていけばそれだけで対立が縁和されたり相互理解にもなるし親善の宣伝にもなる。話し合って悪いことはないのだ。
「流石はアッディーン副大統領と言うべきでしょうか」
「全く以って」

「青き獅子はまたしても不可能を可能にしましたな」
「はい」
そうマックリーフと李に返す。話は伊東が中心になって進めていた。
「これでハサンは国内深くに敵を入れることになりました」
「オムダーマンを」
グリーニスキーは言った。
「少なくともこれで悠長な立場ではなくなりましたな」
「連合ではすぐに政権交代でしょうかな」
李は笑いながら述べてきた。
「こんな事態になると」
「国境を越えられた時点で危ないのではないでしょうかな」
マックリーフが楽しそうに返す。
「あれだけ見事なものを破られたとなると国防省への責任問題に直結するかと」
「おや、そういえば」
ここで三人は意地悪そうな笑みで伊東を見てきた。
「中央政府の国防長官は確か」
「貴国の八条長官でしたな」
「はい」
伊東はその意地悪い笑みを平然と返して述べる。流石に肝が座っている。この時代の日本は図太さと繊細さを併せ持つ国として知られている。だからこそ狐だの狸だの言われるのだ。風刺画の中には日本を尻尾が九本ある狐や猫に描いたりする。それだけ狡猾で騙すのが上手く油断のならない相手だとみなされているのである。
「そうですが」
「さてさて。いざという時の守りは大丈夫でしょうか」
李はその意地悪い笑みのまま言う。
「サハラとの国境の守りを固めていますが」
「そちらの方はあの御仁にお任せしていいのでしょうか」

マックリーフも参戦してきた。やはり彼の顔も意地悪い笑みである。
「国防省の予算もありますし。まあ今までの実績から信頼はしていますがね」
「それは有り難いことです」
その九尾の狐が答える。なお今の日本は狐とされるがそれを決定的にしているのが他ならぬ彼女の存在である。女狐だと言われているのだ。
「彼は信頼して下さって結構です」
「ならばいいのですが」
グリーニスキーはまた述べる。
「そうであればね」
笑って伊藤に述べる。やはりシニカルな顔であった。
「ただ、中央議会は紛糾しているようですな」
マックリーフは今度は議会を出してきた。今議会では軍事費に関しての議論が紛糾しているのであった。軍事費を多く使ってきた勢力ではないのでそれで議論になっていたのだ。

# 第二十五部第五章　ジェルメ星域会戦その十六

「国境での防衛計画の軍事費に関しては」
「そうですな。これが議会を通るかどうか」
李もそれに言及する。
「それが問題でありましょうな」
「通らないというのですか？」
「いや、我々も中央議会に関してはです」
三人はここで中央議会ついて述べてきた。やはり思わせぶりにだ。
「いささか疑問に思ったりもしたりしています」
「それはこちらもです」
伊藤もうっすらと笑って三人に返す。
「中央議会にも中央政府にも問題がありますね」
「ほう、貴国がそう言われるとは」
グリーニスキーは伊藤の今の言葉に意外だと言わんばかりの顔を見せてきた。日本が国連に最も忠実な大国であるからだ。なお米中露の三国は中央政府にも中央議会にも最も反抗的な国として知られている。連合三百国の中で最も中央政府に反抗的なのがこの三国である。
「意外ですな」
「そうでしょうか」
「意外です」
李が言葉を返してきた。
「貴国は中央政府中心主義ではなかったのですか？」
「確かにそうです」
伊藤もそれは認める。
「中央政府と議会があってはじめて成り立つものですから」
「それでどうして」
マックリーフが面白そうに笑って伊藤に問う。

「ここで中央議会に対して批判的なのですか？」
「別に批判的ではありません」
それは否定する。彼女はそうした考えではないようである。これが三人には今一つわからないといった感じであった。日本に関してはこうした掴み所がないというのは十九世紀から言われているしこの時代でもそうである。また日本側もそれをあえて外交の武器にしている一面もある。
「ただ連合全体のことを考えているだけです」
「全体の」
「はい。守りは固めておくべきです」
にこりと笑って三人に述べる。
「防衛なくして国家はありませんから」
「それは確かに」
「その通りであります」
マックリーフと李がそれに頷く。これがわからない政治家は流石にいない。幾ら連合が長い間戦争がなくともだ。エウロパと対峙してきたからそれはわかるのだ。
「しかし。常に予算は考えなくてはなりませんな」
グリーニスキーは述べる。やはり伊藤の反応を笑顔の下で見ながら。
「予算がなければ何もできませんから」
「左様、それです」
「予算の負担が問題であります」
李とマックリーフはグリーニスキーと息を合わせて言う。この三国は互いにあまり仲がいいとは言えないものがあるがそれでも国益が絡めば連携することで知られている。何かと厄介な国々であるのはこの時代においても同じということである。三国の国家としての性格は一千年経てもあまり変わってはいない。日本はより強かになったと言われているが人によっては日本もまた千年前と変わっていないと言う。ちなみにロシアの財政面における大雑把さはこの時代

も健在だ。軍事費への負担はなくなってもそのいい加減とも思える財政計画で時折困ったことになったりする。
「それはどうですかな」
「教訓がありますね」
「そこでアッディーン司令の戦いですか」
「はい」
にこりと笑って三人に答える。
「そういうことです。おわかりでしょうか」
「成程、そういうことですか」
「しかしそれならそれで」
三人は伊藤のその言葉にまたあらたな言及をしてきた。
「何か？」
「オムダーマンを仮想敵国とすることでしょうか」
マックリーフの目が光ってきた。
「それならば」
「ふむ、確かにそうなりますな」
グリーニスキーもその言葉に気付いて頷く。

## 第二十五部第五章　ジェルメ星域会戦その十七

「オムダーマンの動きを見て備えるのですから」
「これはこれで問題ですな」
李も言う。
「オムダーマンを警戒しているということですから」
「言葉に出さなければいいのです」
伊藤は三人の言葉に含み笑いと共に述べてきた。
「ただそれだけです」
「またそれは」
「何と言いますか」
流石にこの言葉には三人も苦笑いを浮かべる。
「口に出さなければそれでわからないのです」
伊藤はまた言う。ここが日本的であるかも知れない。
「少なくともそういうことになります」
「そういうことにですか」
「はい」
また含み笑いで頷く。
「仮想敵国であってもそれを言わなければ敵国とはなりません。そもそも」
「そもそも？」
「国境の防衛計画自体が彼等に対する備えではありませんか」
ここで単刀直入に事実を述べてきた。何故サハラとの境の防衛計画を進めているか、その核心はここである。つまり彼等に対して警戒を抱いているということだ。
「今までは各国と軍管区のみで対処してきましたが統一されそうになると」
「状況が変わり」
「計画が生まれたと」

「そういうことになります」
伊藤はまた三人に言った。
「違うでしょうか」
「最初から言葉には出していなかったということですか」
「そうです」
グリーニスキーに答える。
「だからこそ」
「備えておくと」
またマックリーフは鋭い目になる。その鋭い目で思案をしていた。
「サハラに対して」
「しかし。あれですな」
李は今度はアッディーン自身について言及する。
「あのアッディーン司令のことが我々にも影響してきていますな」
「はい」
伊藤はその言葉にこくりと頷く。
「それは確かです。そしてそれにより」
「我々も動いている」
「彼の動きを見て」
三人もそのことに気付いた。気付けばあまりいい気持ちにはなれなかった。
「そうです。あの若い指揮官についてはこれからも問題になります」
伊藤もまたアッディーンについて言う。
「彼がどう動くかにより我々もまた」
「ふん」
「何かそれは」
三国の首脳達はそれを伊藤にも言われてその不快な心境を顔にも出してきた。
「サハラの一国に連合が動かされるというのは」
「あまり楽しいことではありませんな」
「ですが備えなければなりません」

伊藤はその三人にまた言う。
「彼が連合にとって危険ならば余計に」
「危険になりますかな」
「今後は」
「その可能性はゼロではありません」
ここが問題なのだ。政治においては可能性が皆無でなければ備えなくてはならない。彼等もそれがわかっているからこそ今ここで話をしているのである。
「ただ」
「ただ？」
「彼は政治的にも優れたセンスの持ち主であるようです」
これはこれまでの副大統領としての職務を見ての評価であった。彼女はそうしたことを見抜く目も備えているのである。これは教育者的な彼女の資質によるものである。
「そう容易に我々と敵対するとは思えません」
「つまり戦う可能性は少ないと」
「はい」
三人にも答える。
「しかし。やはり衝突の可能性は皆無ではないので」
またそれを述べる。
「備えはしておくべきでしょう」
「それは確かに。では」
「その防衛計画が実現することを祈りましょう」
「八条長官の為に」
「有り難うございます」
伊藤は三人に微笑みで返した。そのうえで言う。
「連合の為に」
「三百国の為に」
彼等は表面では笑みを作って言葉を交あわせた。だがそれは仮面でその下では相変わらず激しい応酬が繰り返されていた。それもま

た表に出ることはない。あくまで見えないところで行われるのであった。先の伊藤の言葉はそうした意味で真実であった。まるで連合とサハラの関係を述べるかのように。

第二十五部　完

２００７・４・２４

# 第二十六部第一章　女傑その一

女傑

アッディーン率いるオムダーマン軍がジェルメにおいてハサン軍と戦っていたその頃シャイターンはアヤグーズに兵を進めていた。これは当初の予定通りである。

このアヤグーズはハサンの数多い属国の一つである。宙理的にはサハラ東方の端に位置し昔からハサン西方における北方からの重要な楯として存在していた。

その為かこの国は尚武の気風を持つ国であるとされてきている。今まで多くの勝利に勝っておりそれは今でも同じだった。戦争に関しては今一つ華々しくはないハサンとその勢力圏においては数少ない武に関しても華々しいクにであると言えた。

そのハサンの今の主は女王であった。サハラにおいては珍しいようで実はそうではない。案外多いのは十字軍の頃からだ。もっとも欧州のそれ程でもないのだが。

その主であるグルド＝アルコルジ女王。黒く長い髪と挑戦的に見える鋭い琥珀の瞳、浅黒くしなやかな身体を持つ妙齢の女であり今まで多くの武勲をあげてきている。

エウロパが侵攻してきた時にもその鮮やかな戦術で退けており他にも多くの戦いに勝ってきている。ハサン軍においては元帥の階級を持っており太子からも絶対の信頼を得ている。この戦いにおいてはティムール軍との戦線で最初の防衛ラインの中枢を担っていた。

彼女は今アヤグーズの首都アッサルームにおいて自国に入って来たティムール軍の報告を聞いていた。既に軍服を着込み総司令部に身を置いていた。

「その動きは速いようですね」

「はい」

報告した若い将校がそれに頷く。

「瞬く間に国境を越えてこちらに向かっています」
「敵の指揮官は」
「言うまでもないかと」
「そうですか、やはり」
アルコルジはそれを聞いて納得する顔になった。納得してはいたが認めるつもりはない、そうした強い顔を見せていた。凛とした美貌をそこに見せていた。
「ではこちらとしても迷うことはありません」
腕を組んで言う。その目は毅然と前を見据えている。
「こちらも出撃です」
「わかりました」
部下達はその言葉に頷く。
「それではそのように」
「私も一度戦ってみたいと思っていました」
女王は不敵な笑みを浮かべてこう呟いた。
「あの主席と」
「左様ですか」
「はい、武人として」
そう述べる。その目は強い目でありそこに戦乱を見ていたのだった。
「強い者と戦いたいのです」
「強い者ですか」
「そうではないですか？強敵だからこそ戦い倒したくなる」
彼はまた言う。
「そういうことです」
「刃を交えてですね」
「既に刃は備えています」
既にアヤグーズ軍はその数を揃えていた。首都アッサルームには艦艇が集結しておりそこで女王の命を待っていた。それが遂に来ようとしていたのだ。

「それを抜くのが今です」
「それでは陛下」
「はい、総員出撃」
今指示を出した。
「いいですね、攻撃目標はティムール軍。一人残らず銀河の塵に変えます」
「はっ」
こうしてアヤグーズ軍は出撃した。全軍シャイターン率いるティムール軍に向かった。その数は周辺の属国やハサンの援軍を入れて二十個艦隊、ティムール軍の三十個艦隊と比べると数では劣っていたがその指揮は劣ってはいなかった。少なくとも女王が直率するアヤグーズ軍はそうであった。
ティムール軍はアヤグーズ軍の出撃を進撃中に聞いていた。それを聞いても何ら表情を変えはしない。それどころか不敵な笑みさえ浮かべそうな程であった。
「遂に来たか」
「はい、今申し上げた通りです」
ハルシークがあらたまって述べる。
「その数二十個艦隊、他の属国やハサン本軍のものを入れて二十個艦隊です」
「そのうちアヤグーズ軍の艦隊は？」
「五個艦隊程度です」
ハルシークはそれについても報告する。

## 第二十六部第一章　女傑その二

「それが主力となっています」
「そうか、そんなところか」
それを聞いてもやはり表情を変えはしない。ただ艦橋のモニターを見据えているだけである。しかしそこでこうハルシークに問うてきたのだった。
「混成軍だな」
「といいますと」
「だからだ。敵軍は混成軍だな、アヤグーズ軍だけでなく」
「その通りです」
ハルシークはあらためてその言葉に頷いてきた。
「アヤグーズといえど小国ですし。それが限度かと」
「そうだな。それは」
シャイターンもそれは読んでいた。だからこそそれを聞いても特に驚いてはいなかった。驚くのはこの場合だと数が多い場合であろうか。
「わかった。ではこちらも手を打とう」
「どうされるのですか？」
「アッサルームへ向かう」
まずはそう述べてきた。
「おそらくは戦う場所はコム星系だ」
「コムですか」
「そうだ、あそこで戦うことになる」
アヤグーズの星系の一つである。アヤグーズにおいては防衛上重要な星系である。彼はそこで戦いになることを予想していたのである。
「向こうもそのつもりだろう。まずはそこだ」
「コムで戦い。その後は」

「そのままアッサルームに向かう。まずは西方を掌握する」
彼は言う。アヤグーズを倒せばハサン西方の属国は物の数ではない。しかもハサンの属国の軍もアヤグーズ軍に合流している。つまりティムール軍にとって第一の関門はそこであったのだ。今来ている混成軍を倒すかどうかなのであった。シャイターンはそれを完全に認識したうえで話をしているのである。
「ハサンの西方をな」
「それから次ですな」
「今オムダーマン軍はどうしているか」
今度はオムダーマン軍の動向を問うてきた。
「オムダーマン軍ですか」
「そうだ、彼等は今どう動いているか。確か国境をほぼ無欠で掌握し北上していたな」
「その通りです」
ハルシークはその言葉に頷く。頷いてからまた述べてきた。
「今彼等はジェルメに向かっています。おそらくはそこで最初の決戦になるかと」
「ジェルメでか」
「既にハサン軍はジェルメにかなりの戦力を集結させ守りを固めています」
ハルシークはそれを報告した。報告しながら思案する目を見せてもいた。
「そこでかなりの戦いになるかと」
「そうか。オムダーマン軍も決戦の時だな」
「下馬評ではハサン軍有利です」
こうも述べる。これは既に連合でも言われていることである。ネットにおいてもマスコミにおいてもオムダーマン軍は今度こそ敗れるだろうと言われていた。これは純粋に戦力とジェルメの守りを見てのことである。アッディーンの能力は彼等も認識しているつもりだったがそれでも今度ばかりは駄目だろうと見ていたのだ。オムダ

ーマン軍が勝つと思っている者はかなり少数であった。彼等がオムダーマンの勝利を言う根拠はやはりアッディーンの能力であったが根拠が弱いとされていたのだ。
「オムダーマン軍は攻撃を仕掛けかなりのダメージを受けて下がると思われています」
「そしてそのままなし崩し的にだな」
「そうです。ジェルメにおいてオムダーマンとハサンの戦いの趨勢は決まると考えられています」
「ふむ」
シャイターンはそれを聞いて一旦は消していた表情を蘇らせてきた。思案する顔を見せていたがそれも一瞬のことですぐにそれを消したのであった。
「そしてオムダーマン軍は敗れ去るか」
「最終的には」
「オムダーマン軍はジェルメでの戦いに勝たなくては後がない。そして勝ってもまだ収めるべき勝利がある。彼等にとってはそれもまたネックになるな」
「ええ。その通りです」
ハルシークはシャイターンのその言葉にも頷く。
「だからこそ彼等の勝利はそうした意味でも薄いかと」
「その前のジェルメの時点で酷評されているとはな」
「それはやはり当然ではないでしょうか」
実はハルシークもハサンが勝利すると見ていたのだ。それがはっきりとわかる言葉だった。

## 第二十六部第一章　女傑その三

「ハサン軍にとってはあまりにも有利な状況なのですから」
「それは確かにな」
シャイターンもそれは認める。表情を消して述べる。
「しかしだ」
「しかし？」
「絶対ではない」
「といいますとオムダーマン軍が勝利する可能性も」
「ある」
それを今はっきりと言い切ってきた。
「どのような戦いも。絶対に勝つとは言えはしない。そうではないのか」
「確かに」
ハルシークもそれはわかっている。しかし今こうやって主がオムダーマンの勝利を感じるような言葉を言うとは思ってはいなかったのだ。だからこれはいささか驚きでもあった。
「それではオムダーマン軍は」
「私が何故アッディーン副大統領の下にマルヤムをやったと思うか」
シャイターンはまた言ってきた。
「それはわかるな」
「あの御仁が雄飛すると見てのことではないかと」
「その通りだ」
シャイターンはその言葉に頷く。その通りだった。だからこそ彼は妹を彼の嫁にやったのだ。婚姻政策はサハラ、とりわけシャイターン家ではよく使われてきたことである。その中でもチェスで言うならばクイーンを使ったのはそれなりの理由があるからなのだ。
「だからこそだ。彼ならやるだろうな」
「ジェルメの戦いはオムダーマン軍の勝利ですか」

「絶対的な有利はない。同時に絶対の防衛線もない」
ジェルメの防衛線についても言及するのだった。
「破られないものはないのだ」
「しかし。困難ですが」
ハルシークはいぶかしる顔で言ってきた。それを聞いてもハサン軍有利と見る目は変わらなかった。それは多くの者と同じ理由からであった。
「それもかなり」
「その困難を打破しなくて何が英雄か」
シャイターンは言い捨てるように言葉を返してきた。
「違うか。英雄とは困難を打破するもの」
「はあ」
「例えどのようなものでもな。それが出来るからこそ英雄だ」
「アッディーン副大統領は英雄ですか」
「英雄になる」
また言った。
「これからな」
「それがこの戦いなのですか」
「そういうことになるだろうな」
こうも言う。やはりアッディーンを高く評価しているのがわかる。
「伊達に西方、南方を統一し今のオムダーマンを築き上げたわけではあるまい」
「それは確かに」
ハルシークもそれはわかっている。とりわけ西方での一連の戦いは鮮やかですらあった。常に大勢の敵を相手に華麗に勝利して見せたからだ。少なくとも今までの実績を見る限りではアッディーンは既に英雄と言えた。シャイターンの評価はそれを考えるとまだ遠慮しているのではないかと思える程だった。
「次も勝利を収めるだろう。そして」
「そして？」

「我々もだ。勝つぞ」
「はい。その我々ですが」
ハルシークはここで話を彼に合わせてきた。
「既にアヤグーズの国境に入ってかなりの時が経っています」
「国境ですぐに大規模な戦闘になる可能性も考えていたがな」
「はい、それは」
シャイターンのその言葉に頷く。
「考えていましたがありませんでしたな」
「だからだ。アッサルームに兵を集結させていた」
「ええ」
「数としては二十個艦隊。こちらの方が有利と言えるな」
「数のうえでは」
先程のジェルメに関しての話と同じことが話された。やはり数は戦争においてもっとも重要な要素の一つだからだ。それに勝るのこしたことがないのは事実だ。

## 第二十六部第一章　女傑その四

「しかしだ。数だけでは勝てない。ジェルメの話と同じだな」
「はい」
その言葉に頷く。頷きながらまた言う。
「しかも地の利はあちらにあります」
「アヤグーズはそれ程険しい場所ではないがな」
サハラ東方は全体的にそうである。だからこそハサンのような統一国家が誕生したのである。宙理がその国家を形成するのは地球においての地理と同じことである。だからサハラ南方は多くの小国家に分裂していたのだ。サハラではそれが特に顕著に出ている。
「それでもだ。宙理はあちらがよく知っている。それは事実だ」
「我々も調べてはいますが」
「それでもだ。知ってはいても程度がある」
シャイターンはこうも述べる。
「アヤグーズの者達には完全に遊び場だからな」
「アヤグーズにとってはですか」
「そうだ、彼等にとってはだ」
それをまた言う。
「完全に遊び場だ。アヤグーズの者にとってはな」
ここで彼は微妙に言ってきた。そこに何かがあるように。
「いいか、だから慎重に兵を進める」
「はっ」
ハルシークはその言葉に頷いた。
「だが。アヤグーズを陥落させられれば今後にとって非常に大きなことになる」
「今後ですか」
「ここを足掛かりにする」
彼は言ってきた。頭の中に戦略を描きながら。

「そうしてハサンに入り込んで行くぞ」
「あくまでハサンにですか」
「そうだ、我々も目標はブルジルトだ」
目標まで見据えていた。やはりそれは敵の首都しかない。そうした意味で目指すものはオムダーマン軍と同じだった。敵の首都が最大の攻撃目標となるのは当然と言えば当然であるが彼等にしてもそれは同じであった。容易に変わるものでもない。
「東から攻める。さて、それでだ」
ここで左手を自分の口に当ててきた。
「ハサン軍はどう出て来るかな」
「既に高速機動部隊のかなりをこちらに向けているようです」
ハルシークはそう報告してきた。
「その一方で主力防衛艦隊はオムダーマン軍に」
「ふむ」
それを聞いてまた考える顔を見せる。そこにも何かを見ているようであった。
「それぞれ振り向けているようです」
「それは正解だな」
シャイターンはそれを聞いて納得したように頷いた。
「どちらかに主力を向け一方で機動戦を挑む。まだそれを考えられる人材が残っていたか」
「太子は健在でありますから」
「彼か」
太子の存在を耳にしてまた考える目になる。
「彼だけは無理だな。あまりにもガードが固い」
「それに鋭いです。何度か刺客を送り込もうとしましたが」
「無理だったのだな」
「はい、流石にそれは」
首を横に振って述べる。
「適いませんでした。諦めるしかありませんでした」

「あの太子がいなければハサンは成り立たない」
言うならば国の要である。実際に政治も軍事も摂政として指導しており国王に代わってハサンを取り仕切っていた。言うならばハサンにとってのシャイターン、アッディーンなのである。
「決してな」
「決してですか」
「言い換えれば彼がいなければ空中分解だ。そうなればハサンはオムダーマンにも我がティムールにも完全に勝てはしないのだな。しかしそれを言うのは贅沢か」
ここで楽しげに笑ってきた。
「そして楽しみもなくなる」
「楽しみですか」
「敵がおらずして何の戦いか」
不敵なものもここで漂わせてきた。
「とりわけ手強い敵がだ。彼は手強い」
「はい」
これは事実だ。太子は見事な人物だ。それはわかっていた。わかっているからこその言葉だった。シャイターンはそのことを楽しんでいたのだ。

## 第二十六部第一章　女傑その五

「いいことだ。強敵を倒し」
「閣下の野望を実現させる」
「このサハラが私のものになる」
おのれの野望を見ていた。これまで幾多の者が夢見てきた野望である。かつて地球でアラブであった時代からだ。しかしそれを果たした者はまだいないのだ。
「その為に彼は手強い敵であって欲しい」
「英雄譚としてですか」
「そうだな。私の戦いは永遠に残る」
今度は歴史に名を残す恍惚を楽しんでいた。それはどんな美酒よりも彼を酔わすものだった。これは彼だけでなく多くの者にとってそうでもあるが・
「よいことだ」
「では閣下」
ハルシークはその彼に告げる。
「このままアヤグーズ軍に向かって」
「進みますか」
「まずはコムだ」
シャイターンはまたコム星系の名を口に出す。
「そこまで進むぞ。いいな」
「そこで戦いですな」
「そうなる。さて」
彼は腕を組んだまままた言う。
「女王か。今まで多くの敵将と戦ってきたが女を相手にするのははじめてだ」
「そういえばそうですな」
ハルシークも今そのことに気付いた。

「今まで多くの敵と戦ってきましたが女の指揮官とは」
「少なくとも司令官クラスははじめてだ」
あらためてこう述べる。
「中には艦長でいたかも知れないが」
「おそらくは」
また述べる。
「いたでしょう。しかし司令官となると」
「サハラには少ないです」
ハルシークは言う。
「これは致し方のないことですが」
文化圏の関係である。サハラはイスラム教である。イスラムでは女が戦場に出るのを好まない。これは昔からである。連合やエウロパのように女性であっても普通に指揮官を務めていたり男に命令するというのは非常に少ないのである。戦いは男の仕事と考えられているのである。
「中国では案外ありますな」
「木蘭だったか。それとも梁紅玉だったか」
どちらも京劇や小説、ドラマで今でも有名な女傑達である。基本的に男尊女卑の文化であった中国でもこうした話はあったりするのである。
「カラミティー＝ジェーンもサハラにはいない」
「カラミティー＝ジェーンですか。そういえば彼女もいませんな」
アメリカ西部の女ヒーローだ。酒と銃、恋を愛したならず者達の女英雄だ。埃と砂塵の舞う開拓期の西部でその名を馳せ西部の終わりと共に世を去っている。
「それをいいと思うか悪いと思うかはまた別だな」
「少なくとも連合の者達は誇りにしているようですが。とりわけ彼女達を生み出した国の者達は」
「自慢の英雄というわけか」
「そうなるかと」

「英雄になれるのは男だけではないか」
彼はそのことをふと口にする。
「女もまた」
「ですが閣下」
ハルシークは表情を消して呟くシャイターンに声をかける。
「閣下は敗北するおつもりはないでしょう」
「私が敗れるということはない」
やはり表情を変えずに言葉を返す。前を見据えたままで。
「どのような相手でもな。男であろうとも女であろうとも」
「では彼女は英雄にはなれません」
ハルシークはそれを聞いてこう述べてきた。
「最後に敗れるのならばそれは本当の意味での英雄ではありません」
「悲劇の英雄か」
「だからこそ本当の意味での英雄は少ないのでしょう」
冷徹とも思える言葉だった。だが実際にそうであるのだ。最後で負ければそれで本当の意味での英雄ではなくなる、そう考える厳しい者もまたいるのだ。

## 第二十六部第一章　女傑その六

「戦では無類に強くとも敗れれば」
「ふむ」
シャイターンはそれを聞いてまた一人の連合の女ヒーローを思い出した。
「巴御前のようにか」
「剛力と美貌を誇る将でしたな、確か」
「そうだったと思う」
シャイターンは彼女に対しては今一つ歯切れに欠ける言葉を述べてきた。どうやら彼女についてはあまり詳しくはないようだった。巴御前は言うまでもなく平家物語に出て来る木曾義仲の部下であり恋人でもあった女だ。果敢に戦い、最後まで義仲の身を案じて落ちていった。彼女は日本人の間での悲劇のヒロインなのだ。
「今はああした力は不要だが」
「勇猛さは今でも必要です」
ハルシークはまた答える。
「彼女はそれは持っています。これは紛れもない事実です」
「そうだ。勇猛な女司令官か」
ここでふと楽しげな笑みをまた浮かべてきた。
「面白いとは思わないか。強い女を倒すのもまた」
「敵だからですか」
「それもある。しかしだ」
彼は前を見据えて不敵な笑みに変えてまた言う。
「私は気の強い女が好きだ。そうした女を従わせていくのもまたな」
「左様ですか」
「ここでだ」
さらに言う。
「無理強いは決してしない。刃を交えその刃を落とし」

「降伏させると」
「身体だけを求める男は愚か者だ。女の最も美しいものは心だ」
シャイターンは女色についても造詣の深い男であった。男色については興味がないとされているが少なくとも多くの従者を従え慕われている。また若者からも絶対的な支持を得ている。そうした意味で彼は男の心もまた支配するのが上手い男であった。これを男たらしと呼ぶのはいささか品のない揶揄であろうか。
「心は無理に奪えるものではない。陥落させるものだ」
「では閣下はあの女王を」
「悪くはない」
声に野心がこもってきた。
「部下にするもよし。側に置くもよし」
笑いながら言う。
「どちらもな。かつて美女は重要な戦利品だったしな」
「そういう時代もありましたな」
とりわけモンゴルではそうであった。戦争で勝利を収め美女を自らの妻に入れる。そうして多くの妻を持っていることは彼等の社会では誇らしいことであった。あのチンギス＝ハーンもそうして多くの妻を持っていた。これは彼の偉大さを知らしめることであった。
「今は。少し違いますが」
「少なくとも妻は四人までいいがな」
イスラムの戒律が出て来た。
「それも未亡人ならばなおだ」
「あの女王は夫はいたでしょうか」
「確か今はいない筈だ」
シャイターンは答える。
「好都合と言えば好都合だな」
「確かに。それでは問題なく」
「勝利を収めた時彼女は私のものとなる」
今それは豪語になっていた。

「アヤグーズ、そして栄光と共に」
「ではその栄光に向けて」
「進軍だ。全軍に伝えよ」
ここで指示を出す。
「コムまで全速力で進む。そしてそこに辿り着いたならば」
「辿り着いたならば」
「おって私の指示を出す。よいな」
「はっ」
ハルシークがその言葉に対して敬礼する。こうしてティムール軍の方針は決まったのであった。彼等は一路コムを目指していた。

## 第二十六部第一章　女傑その七

ティムール軍がアヤグーズの中で兵を進めているその頃ハサンの首都ブルジルトでは太子が連日連夜戦局に関する報告を受けつつ指示を出していた。それにより彼は多忙を極める立場となってしまっていた。

休むことも眠ることもままならない。激務の日々だった。しかし彼はそれに疲れを見せることなく精力的に動き回り指示を出し続けていた。その姿は銀河中に知れ渡っていた。

「殿下」

執務室で書類の採決をしている彼に武官の一人が声をかける。

「少し休まれては如何でしょうか」

「その心配はない」

しかし彼は右手で彼を制してこう返すのだった。

「体調は万全だ。疲れもない」

「そうなのですか？」

「そうだ。栄養は摂っている」

この場合はよくある栄養ドリンクである。二十世紀からあるものであるがこの時代ではさらによくなっている。少し飲めばそれで疲れが吹き飛んでしまうようなものだ。覚醒剤を思わせるが決して危険なものではない。もっともそれでも身体に無理は禁物なのは言うまでもないことであるが。

「だから大丈夫だ」

「なら宜しいですが」

「そういうことだ。ところで」

武官に顔を向けて問うてきた。

「ジェルメの方はどうなっているか」

「今オムダーマン軍が北上してきています。備えは整いました」

「整ったか」

「はい、そちらはもう」
毅然とした声で太子に報告する。
「援軍もまた」
「よし。ならばそちらは安心していいか」
「まず勝利は確実かと」
そう述べる。彼等はまだジェルメでどうなるか知らなかったのである。
「ですからそちらは」
「安心していいというのか」
「はい、確かに国境の件は残念でしたが」
一応それについても述べる。
「奇襲は一度しか通用しません。二度はありません」
「そうだな。奇襲に関してはだ」
太子は武官のその言葉に静かに頷く。
「彼等も二度は使わないだろう」
「はい。ですから安心していいのではないでしょうか」
「奇襲はいい」
太子もそれに頷く。彼もそれは今更ないと思っていた。奇襲は仕掛ける方にもかなりの心理的負担を負わせるものである。そうしたことも考慮に入れればアッディーンが再び奇襲を仕掛けてくるとは思えなかった。彼も敵の心理を読めることができたのだ。
「向こうもそれはないだろう」
「それでは」
「ただしだ」
ここで彼はさらに言う。
「奇襲以外にも方法はあるだろう」
「正攻法ですか？」
「それで来られても勝てるのだな」
じっと武官を見据えて問うた。
「今の我が軍でも」

「大丈夫です」
彼は安心しきった顔で答えてきた。
「今の我が軍ならばとりわけジェルメの守りは」
「オムダーマン軍を寄せ付けないか」
「正直連合軍ならばわかりません」
彼はここで連合軍を言葉に出してきた。彼等の数と装備、技術に関してはハサンでも大きな衝撃であったのだ。圧倒的なものとして彼等はそれを見ていた。そうした意味ではハサンもまた連合の影響から離れられてはいなかった。事実軍制改革や装備の見直し、とりわけ軍政のあり方についてハサンはおろかサハラ各地で議論が行われ出しているのである。連合軍のエウロパに対する圧倒的なまでの勝利は戦乱に明け暮れてきたサハラにおいても無視できないものとなっていたのだ。
「あれだけの物量ですと。しかしオムダーマン軍ならば」
「充分に防げる、そう言いたいのだな」
「そうです」
強い顔で頷いてみせた。
「ですからここは」
「勝利の報告を待っていればいいというのか」
「殿下が心配されることはありません」
彼はまた言った。

## 第二十六部第一章　女傑その八

彼はまた言った。
「オムダーマンとの戦いはジェルメで決まります。我が軍の勝利によって」
「そうか。それではだ」
彼の言葉を半ば受け流すようにしながらまた問うた。
「はい」
「ティムールはどうだ」
今度はもう一つの敵について言及してきた。
「ティムールについては。彼等はどうなのだ」
「アヤグーズでしょう」
彼はそれまでの上気した感じを消して冷静な口調になってきた。
「アヤグーズで決められればいいかと」
「全てはあの女王にかかっているか」
「援軍も送っていますし」
武官はまた述べてきた。
「あちらは今のところ数においては劣勢ですがそれでも地の利はやはりこちらにあるます。そう簡単に敗れるとは思えません。こちらも深刻な事態にはならないでしょう」
「そうであればいいな」
太子はにこりともせずそれに応えた。
「アヤグーズはアルコルジ女王に全てを任せてある。指揮権もな」
「それですが殿下」
ここで武官の顔が曇ってきた。
「あれで宜しかったのでしょうか」
「どういうことだ？」
「いえ、指揮権のことです」
今太子が口に出した指揮権について言ってきた。

「アヤグーズ陛下は我がハサンの属国の方です」
「それは言うまでもないと思うが」
太子は武官に目を向けて言葉を返した。
「既に何百年も前からそうではないか」
「確かに」
アヤグーズは何百年も前からハサンの属国になっている。ハサンにとってはその頃から重要な属国であったのだ。ハサンにとってはアヤグーズは盾であり剣である。アヤグーズにとってハサンとは頼りになる財源であり後見人である。そうした関係である。
「それを今更言ってどうなる？」
「国家元首とはいえ属国です」
武官はそこを直接述べてきた。今度は率直であった。
「その属国の方に我が正規軍も指揮下に置くというのは」
「それは構わない」
彼はそれはよしとしてきた。
「よいのですか」
「いい。彼女は我が軍の階級も持っているではないか」
それを言及した。実はこうした場合に備えて太子が手配していたものだ。彼女のハサン軍での階級はハサン軍元帥である。アヤグーズの軍服を着るのがアヤグーズでの儀礼の場でのしきたりだがハサン軍の儀礼の場ではハサン軍元帥の軍服を着ている。それが彼女の立場であった。
「だからいいのだ」
「宜しいですか」
「うむ、つまり女王は貴官の上官でもある」
ここでそのことをあえて口に出してきた。
「それはわかっているな」
「勿論です」
武官はあらためて彼の言葉に応える。
「アルコルジ元帥閣下です」

「そうだ。ならわかるな」
「はい」
武官は態度もあらためて彼に答えてきた。
「ハサン軍指揮官の下にハサン軍は指揮される」
「そうだ。それがわかっているならいい」
太子はその言葉を聞いてようやく満足したようであった。
「それではアルコルジ元帥の下で戦うことを彼等に期待する」
「わかりました」
「そしてだ」
また彼に問うてきた。
「あちらに送っている援軍についてだが」
「援軍に何が」
「送っているのは高速機動部隊だ。そのせいでジェルメ方面の高速機動部隊が減っている」
「それは致し方ないかと」
武官は顔を少し苦くさせて述べてきた。

## 第二十六部第一章　女傑その九

「数には限りがありますから」
「実はジェルメには高速機動部隊が必要だと思ってな」
「ジェルメにですか」
「そうだ。必要ではないか？」
武官に顔を向けてまた問うてきた。
「防衛には高速機動部隊もだ。どう思うか」
「確かにそうです」
武官も太子の言葉には同意する。
「遊撃戦力としてですね」
「その通りだ。機動防御もできたならばジェルメは万全だろう」
「はい」
「だからだ。回しておっきたかったが」
残念そうに述べるここでの彼の考えはギーブと同じものであった。彼は今の防衛システムや数だけではオムダーマン軍に対して足りないのではと考えていたのだ。そして彼は他のことも考えていた。
「そしてだ」
頭の中にハサンの宙図を描きながら述べる。
「オムダーマンとティムール」
今戦っている二国の名をここで強調してきた。
「どちらがより脅威だと思うか」
「難しい話であると思います」
武官は真剣な顔のまま答えてきた。
「オムダーマンもティムールもそれぞれ多くの戦いを経て一つの強大な勢力になってきました。兵は強く装備も充実に有能な指揮官も揃っています」
「そうだな」
武官のその言葉に頷く。

「それでだ。その彼等のうちのどちらが我々にとってより脅威か」
それをあらためて問う。問いながら武官の目を見ている。その考えを見極めようとするかのように。鋭く、まるで猛禽類のような目になっていた。
「どちらだ」
「オムダーマンでしょう」
武官は静かに答えてきた。
「国力から考えまして。それに既に我が領内に侵入しています」
それについても述べる。
「そうしたことを考えますと」
「そうだな」
そして太子もそれに同意して頷いてきた。
「しかし。それにしてはだ」
「何か？」
「オムダーマンに重点を置いていないのではないのか？」
彼はそう問う。これは彼にとってはかなり重大な懸念であった。しかし武官はそのことにあまり気付いてはいないような顔であった。それは太子にもわかった。
しかしあえてそれを顔には出さない。普段の顔のままで武官に続ける。
「どちらかというとだ。ティムールに僅かな戦力で属国に任せて」
「オムダーマンに主力を向けるというのですか」
「そうだ。それで行けばいいと思うのだが」
「確かにそれは道理です」
武官もその言葉に頷く。頷きながらまた言う。
「しかし」
「しかし。何だ？」
武官にここで問う。
「戦力をよりオムダーマンに向けるつもりはないのか」
「戦力が少ない方を叩くべきではないでしょうか」

武官はそう述べてきた。
「そうして彼等を倒してから全ての力でオムダーマンを」
「オムダーマンを後にか」
「いえ、それは」
ここで武官の言葉は今一つ歯切れの悪いものになった。その歯切れの悪い声でまた言うのだった。太子はそのことに内心不快感を覚えていたがやはりそれは表には出さなかった。あくまで話を聞くだけであった。真意は隠し続けていた。
「今我々は戦力において双方を合わせたよりも大きいですし」
「充分対処ができるからこの振り分けか」
「いけませんか？」
「高速機動部隊は既にかなりの場所にまで行っているな」
ティムール方面に送った彼等について言及する。
「はい、そうです」
武官もそれに答える。
「アヤグーズでの戦いに間に合うかどうかはわかりませんが」
「そうか。それならいい」
彼等については諦めるような口調で言った。それだけだった。
「だが。他の部隊は戻せ」
「戻すのですか」
「オムダーマンに向かわせろ」
そう武官に言ってきた。
「ジェルメで勝てばそれで一気に国境まで押し戻す。その為には主力をあらかたオムダーマンに向けておくのだ」
「徹底していますね」
「徹底してこそ戦争だ」
太子は言った。彼は戦略面からその判断を下した。これは彼が戦略を解していたからに他ならない。

## 第二十六部第一章　女傑その十

難しいのは軍人だからといって戦略を解しているとは限らないということである。そうであればどれだけ楽であるかわからない。しかしそうとは限らないのが現実なのだ。実はこれにもそれなりの事情があるのだ。

戦略というのは多分に政治的な色彩もある。政治だからこそかなり高度な一面もある。それは戦術とはまた違う。軍人はどうしても専門家になってしまう。えてして戦術家になり易い。これは本人の資質にもよるが戦略は政治なのだ。それをわからなければ戦略は理解できない。

「わかったな」

彼は今その戦略から話す。今実際にそれを武官に告げていた。

「ティムールに関しては守りだ」

「守りですか」

「そうだ、戦略を展開させろ」

こうも言う。

「いいな、まずはオムダーマンだ」

「オムダーマンを」

「そしてその後でティムールを倒す」

「戦力の大きい方をですか」

「より深刻な脅威を取り除きたい」

それが彼の考えだった。

「いいな」

「わかりました。それではそのように」

武官はそれに応えて頷く。

「参謀本部には伝えておきます」

「参謀本部か」

太子は参謀本部と聞いて顔を顰めさせる。

「どうにも最近彼等もな」
「参謀本部がどうかしましたか？」
「いや、実はだ」
話は参謀本部に関するものに推移してきた。太子は眉を微かに顰めさせて参謀本部について言うのだった。その言葉は懐疑的なものになってきていた。
「私もミスを犯してしまった。どうにもな」
「そうでしょうか」
「うむ。最初に決定しておくべきだった」
こう述べてきた。
「オムダーマン優先で戦略を立てることをな。よりな」
「より、ですか」
「そうだ。彼等にも伝え損ねていた」
彼は言葉を続ける。言葉を続けながら後悔の色も顔に浮かべだしていた。
「それは私のミスだった」
ここにも今のハサンの問題があった。太子の考えを完全に汲み取れる人材がいなくなっていたのだ。シャイターンのテロはここでも影響していたのだった。
「迂闊だった」
「そう深刻に思い詰められることもないと思いますが」
武官はまた言ってきた。
「そう思うのか？」
「はい」
やはりその返事も楽観的なものであった。太子の危惧もわかってはいないようである。
「やはり戦力がこちらにはありますし」
「戦力ばかりではないのではないのか？」
「ですが戦力が第一です」
武官はこう反論してきた。

「御言葉ですがそれは事実かと」
「確かにな」
それは認めてきた。
「しかし。オムダーマンもティムールも侮れはしないぞ」
「無論それもわかっています」
少なくともわかっているつもりだった。実際にはわかっているつもりというのが最も恐ろしいのだが彼はそれは気付いてはいなかった。わかってはいないのではなく気付いていないのだ。この差は小さいようでいて大きなものである。
「ですから」
「参謀本部もわかっているのか」
「無論です」
彼はまた答えてきた。
「御安心下さい、ですから」
「わかった」
真意を隠して頷く。
「だが作戦方針は変えるぞ」
「変えられますか」
「そうだ。それはわかったな」
「わかりました。それでは」
太子の言葉にこくりと頷く。
「決定ということで」
「内閣にも話をしておく」
ハサンでは王室の力が強く内閣をコントロールすることも時と場合によって可能なのである。無論それは非常時等に限られるのが常であるが今がその非常時である。だからこそ彼は今ここで内閣についても述べることができたのである。

## 第二十六部第一章　女傑その十一

「それでいいな」
「わかりました。私はそちらには関係ありませんが」
「うむ。ただ、このことも参謀本部に伝えてくれ」
「はっ」
敬礼して応える。
「了解致しました」
「頼むぞ。それでだ」
言葉をまだ続ける。彼にとっては話すことが多かった。
「ティムール軍はエウロパ方面には殆ど備えを置いていないようだな」
「ええ」
このことは既に彼等も熟知していた。その理由もだ。
「やはり連合に対する敗戦は彼等にとっては大きな痛手でありますから」
「ティムールにとっては好都合か」
それを聞いてまた述べる。
「我々にとってはいいことではないがな」
「ですがサハラ全体にとってはいいことです」
武官はこう言う。それは事実だった。エウロパはサハラ共通の脅威であり彼等をサハラより駆逐することが悲願の一つだったからだ。それは自らの力ではなく連合によって果たされる形になったのは彼等にとってはいささか残念なことであったが。
「彼等がいなくなったというのは」
「うむ。あと何十年かは大人しくなるか」
「そう思います」
これに関しては太子も武官も同じ考えだった。そう互いに述べたうえで頷き合う。

「そのまま潰れてくれてもよかったのですが」
「まあそう上手くはいきはしないな」
これについてはある程度妥協した考えを言うのだった。太子は完全を求めることはここではしなかった。ある程度の妥協も政治には必要なものなのだ。
「致し方あるまい」
「連合も完全には潰すつもりはなかったようですな」
「そうだな」
また武官の言葉に頷く。
「彼等の事情でな。今は敵として残ってもらうつもりのようだ」
「敵としてですか」
「そうだ、国家としてまとめるのには敵もまた必要な時がある」
太子は言う。これは昔からあるのだがそれは今も同じである。とりわけ多彩なものを内部に持っている国家や勢力はそうである。連合がまさにそれだ。
「連合にとってのエウロパがそうだ」
「一千年前からのですか」
「そうだ。この場合は国力差の問題ではない」
四十倍もの差がある。この差は如何ともし難いどころではない。絶望的という言葉すら通り抜けてしまっているものだ。とても相手になるものではなく実際にエウロパはその力の差の前に負けてしまっている。当然ながらハサンにいる彼等もそれは承知している。
「イデオロギーとでも言うか」
「イデオロギーですか」
二十世紀によく使われた言葉だ。資本主義と共産主義の対立だ。最後は資本主義が勝った。マルクスの言うようにはならなかった。現実は哲学者、思想家の思うようにはそうはならないということの歴史的証拠の一つとも言えるものである。
「そう、イデオロギーだな。これは」
「といいますと」

武官はこれには首を捻る。それからまた述べた。
「大衆主義と貴族主義でしょうか」
「連合ではそう言っているそうだな」
「はい」
武官は太子の言葉に頷く。
「連合では階級社会は悪と考えられていますから」
「だがそれはマウリアも同じではないのか？」
カースト制のことだ。やはり残っているのである。
「だがマウリアには特に何も言わないな。それは何故だと思うか」
「同盟相手だからでしょうか」
問いに答えるようにして述べてきた。
「やはり」
「そうだ。エウロパ貴族主義を敵視に利用している一面があるのだ」
太子はそう看破した。連合の考えをここでは見事なまでに見抜いていた。

## 第二十六部第一章　女傑その十二

「彼等の敵をはっきりを認識する為に」
「傲慢で独善的な貴族ですか」
武官の言葉はいささか皮肉めいていた。
「思えば連合も古典的な考えが残っていますね」
「古典的か」
「そうです。今時そんな御伽噺のような貴族への見方をしているとは」
これは十九世紀のフランス革命からはじまっているものである。フランス革命は確かに階級社会を破壊した。しかしそれにより多くの無益な血も流している。しかも後のナチスやソ連のルーツとなるジャコバン派も生み出してしまった。人類社会への悪影響も無視できないものである。
「いささか一面的なのでは？」
「敵視の根拠は他にもある」
「確か歴史でしたか」
「そうだ。これも貴族主義に関わるものだが」
太子はまた言う。
「十字軍と帝国主義とサハラ侵攻だな」
「やはりそれですか」
武官はその三つを聞いて納得したように頷いた。
「予想はしていましたが」
「そうだろう。彼等にとってはそうしたエウロパの独善さも批判されるべきものだ。とにかくエウロパは彼等にとっては敵だ、そう定義する為の努力も惜しんではいない」
「エウロパもまたそのようです」
武官はここでエウロパについても述べてきた。
「連合は不倶戴天の敵だと。そう考えていますね」

「その通りだ。もっとも彼等はあそこに逃れるまでの経緯から連合を敵視しているのだがな」
宇宙開拓からブラウベルグの登場までエウロパは連合にやられっぱなしだったのだ。完全に後塵を拝し世界の辺境になってしまっていた。それまでは世界の指導者として振舞っていたのにだ。このことを今でも憎んでいるのである。
「お互いな」
「何かお互い様のような気もしますが」
「私もそう思う」
太子もそれに同意して頷く。
「連合もエウロパもそうした意味では同じだ。所詮は同じ人間だ」
「しかし同じだからこそ」
「いがみ合いもする。そして政治的な動きもする」
ここで人間を政治的な生き物だと述べてきた。人間というものは複雑なものでありその思考は社会的、かつ政治的なものなのだ。これは古代から変わってはいない。
「だから」
「彼等もまた」
「政治的な思考によりそうしている。あくまでそれぞれの事情でな」
「その為にエウロパは残った」
武官は言った。
「そういうことですな」
「そうだ。もっとも連合がエウロパを完全に占領してはこちらとしてもそれはそれで厄介なことになりかねないが」
「左様ですか？」
武官はこの言葉には懐疑的な目を向けてきた。
「あのエウロパがいないことで」
「連合は決して好戦的な勢力ではない」
太子もそう認識している。だからここでもそう言えたのだ。
「しかしだ。利を求めることにおいてはエウロパよりも上だ」

「貪欲ということでしょうか」
「言葉が悪いがな。そうなる」
武官のその言葉に応えた。人は誰しも欲望を持っている。その中身は様々だが誰もが持っているものだ。仏教はこれからの訣別を考えているがそれはそれだけ欲望というものが根深いものであることを根拠にしている。資本主義ではそれを肯定して発展の要因にしている。なお連合では仏教もよく広まっている。ここは一見すると矛盾だが人は欲望を認めながらもその反面それを恥としているという二面性から解釈すると納得がいくものである。連合はその資本主義が極めて発達した社会だ。欲望がかなり前に出る社会なのである。

## 第二十六部第一章　女傑その十三

この場合は物欲や金銭欲等になる。まさしく資本主義の原動力である。
「連合は利益になるならば何でもする」
「中央政府もまた」
「むしろ彼等が率先して動きかねない」
こうまで言う。
「連合市民の良識を受けてな」
「良識ですか」
「あくまで連合の良識だ」
それは決してサハラのそれと同じになるとは限らないものだ。良識もまたそれぞれの中に存在しているからである。
「サハラに利があればそれを狙う。自分達の為に」
「それは良識ですか？」
「言い繕えばな」
そういうことである。良識もまた言い繕えるものなのだ。平和が良識になれば戦争も良識になる。何とでも変わるものでしかないのだ。
「そうなってしまう」
「特に連合では、ですか」
「そうだ。エウロパがなくなれば別の敵を探す可能性もあるのだしな」
「それが我々だと」
「可能性はないわけではない。むしろエウロパがなくなればそうなる」
こうも述べる。
「まとまる為の敵としてな」
「成程。それでは我々にとってエウロパが残ってくれた方が都合が

いいのですね」
「全体としてはそうなるな」
武官の言葉に頷いて述べる。
「四兆の巨大勢力を相手にするよりはな」
「ハサンで一千億を超えますが。それよりも遥かに大きいのが連合ですから」
「相手にしたくはないな？」
「無論です」
その返答は真剣そのものであった。本気であるのがよくわかる。
「相手にすれば滅亡は免れません」
「そういうことだ。そしてそれはだ」
ここでまた言う。
「どのような相手に対してもだ」
「オムダーマン、ティムールに対しても」
「そうだ、これでわかったな」
あらためて武官に言う。
「一つの判断ミス、侮りが敗北につながる。だからこそ」
「万全を期し戦略を確かなものにすると」
「うむ。だからこそだ」
そうして話を戻していく。話の展開は太子の望むようになっていた。
「オムダーマンとの戦いを優先させ戦力を向けていく」
「はっ」
「中心はこのブルジルトだ。ここを軸にして戦っていくぞ」
「わかりました」
これは最初から決められていたことである。首都は国家の中枢だ。それを軸にして戦略を考えていくのは言うまでもない。ハサンもそれは同じだ。太子もである。
「できれば私も前線に赴きたいのだがな。そうして直接に指揮を」
「殿下、御言葉ですが」

しかしここで武官は言ってきた。
「それは為さるべきではありません」
「わかっている」
彼もその言葉に頷く。
「それだけはな」
「はい。お願いします」
太子に念を押してきた。実質的な最高司令官である彼が前線に姿を現わせばそれだけで将兵の士気があがる。しかしそれ以上にその最高司令官を危機に晒すことになる。そうなれば元も子もない。だからこそそれは避けたかったのである。的確な判断であった。
「それだけは」
「わかった。では引き続きこのブルジルトに留まる」
「はい」
そうしてまた頷く。
「そのように御願いします」
「それを思うと彼等は思い切っているな」
太子はそのうえでまたアッディーンとシャイターンについて言及した。何故なら彼等は前線で自分も戦っているからである。最高司令官がだ。

## 第二十六部第一章　女傑その十四

「自ら前線に出るとは」
「あれは常識外れかと」
武官はこう述べてきた。いぶかしむ顔で。
「何かがあればどうするするつもりなのか。もっとも指揮自体は大抵後方において行っているようですが」
それでも戦場にいるだけで危険が伴う。厳密に言えば戦場において安全な場所なぞないのである。太子も武官もそれはよくわかっている。軍に関与する者として。
「そもそも彼等は自ら前線に赴くことも厭わないですし」
「アレクサンダー大王のようにな」
太子はふと古代の英雄の名を出してきた。
「死を恐れずに」
「自分は何があっても死なないという絶対の自信があるのでしょうか、彼のように」
この場合彼とはそのアレクサンダー大王を指す。彼は自らをトロイア戦争の英雄アキレウスの生まれ変わりと信じ戦場で死ぬことは決してないと考えていた。だからこそ自ら前線に立ち剣を振るったのだ。もっとも彼は例外中の例外である。その彼ににしろ戦場で重傷を負ったことがある。リスクがあるものなのだ。
「少なくともシャイターン主席は」
「彼はそうか」
太子はそれを聞いてふと呟いた。
「だからこそ前線に立つというわけだな」
「彼は自身を英雄だと言っておりますし」
これは宣伝である。彼は自らを英雄であると喧伝し求心力を高めているのだ。これは多分に政治的なものによる。ここでは彼は政治家になっていたのである。

「彼に関してはそうでしょう」
「そうだな。そしてだ」
太子は今度はアッディーンについて述べてきた。
「アッディーン副大統領は少し違うようだな」
「彼はまた別かと」
武官もそう述べてきた。どうやら彼はこうしたことに関する分析は得意なようである。冷静にアッディーンに関してもシャイターンに関しても的確に述べていた。
「彼は生粋の軍人です。軍人としての勘でそうしているのではないかと」
「軍人としてか」
「はい、政治家としての顔も最近身に着けているようですが」
こうも述べる。
「基本的に彼は軍人なのでしょう、やはり」
「軍人か」
「だからこそ前線で戦う」
彼は言う。その言葉は今まであまりわかっていないようなことも述べた彼とは全く違うようなものであった。どうやら人を見抜く目は備わっているようである。
「そうではないかと」
「ということはだ」
太子はその話を聞いてまた述べた。
「我々は政治家と軍人を相手にしているわけだな」
「はい」
太子の言葉にこくりと頷く。
「そう考えられればいいかと」
「ではやはり私の戦略的判断は合っているな」
半ば自画自賛になっていた。しかしそれは実際に合っているものであった。軍人に対するのと政治家に対するのとではやり方が違ってくるのは道理である。

「まずはオムダーマンでな。しかしだ」
「しかし？」
「総動員令も出している」
これはハサンだけではない。オムダーマンもティムールも開戦直前にそれぞれ総動員令を発動させている。全面戦争を行うということの宣言と実行に他ならない。かつてエウロパが連合との戦い直前に出したのと同じである。
だがこの時代の総動員令は二十世紀のそれとはまた違う。二十世紀のそれは市民を必要とあらば全て戦場に送り出すものであった。実際に各国はそうした。しかしこの時代は将兵の技能が高度に専門化している為に予備役の将兵を動員するだけだ。ただし産業面においてはむしろ二十世紀よりも遥かに高度に全てを戦争に回すようになっている。こういったふうになっているのである。

## 第二十六部第一章　女傑その十五

「それではだ」
「兵力のさらなる動員ですか」
「艦艇の数はいいな」
そのうえでそれを武官に問う。
「そちらはどうだ？」
「はっ」
武官はその問いに答える。
「既に生産は順調に進み数においては問題ありません」
「質もか」
「無論であります」
その言葉にも答える。
「既にどちらも。万全であります」
「そうか。ならばいい」
太子はそれを聞いて満足したように頷いた。
「では安心して予備兵力を動員できる」
「今ですか」
「早いというわけではあるまい」
武官に対して言う。
「むしろ遅い位ではないのか、今からだと」
「それは」
「兵は多過ぎて困るものでもない」
こうも述べる。
「特に今はだ。だからだ」
「それではすぐにでもですか」
「うむ、予備役にある全ての将兵に伝えよ」
確かな声で指示を出す。
「兵役に就けと。いいな」

「はっ、それでは」
武官はその言葉に頷く。これで予備役の総動員も決まった。
「まずは数だ。それは確かだ」
太子はあらためて言う。
「しかしだ。それでも」
「それでも？」
「いや、考え過ぎか」
しかしそれ以上は言おうとはしなかった。
「いい。今は」
「わかりました。それでは殿下」
「何だ？」
態度をあらためてきた武官の言葉に応える。
「お昼ですが」
「むっ」
その言葉に気付き部屋の壁にかけてある時計を見る。彼の言葉通りもう昼であった。それもかなりいい時間である。昼食のほかにもう一つあるのだが。
「もうこんな時間か。早いものだな」
「まずは礼拝をして」
「そうだな」
言わずと知れたムスリムの礼拝だ。彼等は一日のうちに五回メッカに向かって礼拝をする。なおこれは身体に無理をかけない体勢であればよいとされている。
「それでは今から」
「うむ。それでは」
礼拝の用意をする。
「礼拝の後は確か」
「首相と共に昼食だ」
そう答える。答えながら席を立ち下に敷物を敷く。
「それから正式に今後について述べる」

「わかりました。それでは」
「いいな、それで」
「はっ」
見れば武官も敷物を床に敷いている。そうして礼拝の用意を進めていた。
「それではそろそろ」
「メッカか」
ここで太子はまた言った。
「今メッカは我々の手の中にある」
「はい」
今メッカはハサン領にある。当然石もだ。これはハサンにとって重要な権威の元ともなっている。政治的、宗教的において大きな権威であると言えた。
「これは手放しはしない。一時的にもだ」
「一時的にも」
「そうだ。これだけはな」
強い声で武官に言う。
「それもまた伝える」
「はっ、それではそちらも」
武官はその言葉に応えてきた。
「御願いします」
「何だかんだと守るべきものは多い」
太子はそのことをあらためて認識する。認識するとここでふとある言葉が浮かんだ。
「全てを守ろうとする者は何も守れずだったか」
「フリードリヒ大王の言葉でしたな」
武官はその言葉に応える。プロイセンを大国にした王である。
「確か」
「そうだったか。彼は英雄だったな」
「プロイセンを大国に押し上げた英雄です」

サハラにおいても彼の名はあまりにも有名である。名将であっただけではなく政治家としても優れていた。また学問や音楽を愛しプロイセンをその一面でも繁栄に向かわせた。後のドイツ帝国の土台を作ったことでも知られている。

「彼のような存在が今のサハラには必要なのでしょう」

「果たしてフリードリヒ大王になるのは誰か」

太子は呟く。

「アッディーン副大統領かシャイターン主席か」

自身の敵の名を出す。そして。

「私か」

最後に自分の名を。そこに戦いを見据えながら。

# 第二十六部第二章　観戦者達その一

観戦者達

サハラ全土を巻き込んでいる三国の戦いであるが連合ではこの戦いはニュースでしかなかった。それは軍でも同じで彼等は完全に他人事としてことの成り行きを見ていたのであった。

とりわけ兵士達はそうだった。ある基地でのことである。昼食中に三次元テレビからニュースが流れていた。

「たった今入ったニュースです」

白を基調とした広い部屋に同じく白いテーブルが無数に並べられている。兵士達はそこにそれぞれ座って食事を食べている。食べながらニュースを聞いている。

「ジェルメでのオムダーマン軍とハサン軍は」

「ああ、あれか」

「どうなったんだ？」

将校も下士官も兵士もその言葉に顔を向ける。しかしその顔はやはり厳しいものではなかった。何処か芸能ニュースを聞くような感じであった。

「戦闘に入ろうとしております」

「何だ、まだはじまってはいないのか」

「遅いな、案外」

彼等はそれを聞いて拍子抜けしたような顔になる。そうして食事に顔を戻す。

メニューはジャガイモをスライスしてそれを玉葱、豚のベーコンと炒めたもの、鰐肉のソテーに中華風の野菜スープであった。今日の主食は餅である。餅といっても米のものではなく中国の小麦粉を丸めて焼いたそれであった。彼等はそれを食べていたのだった。

「もうあっちじゃはじまってるんじゃないのか？」

あるテーブルで兵士の一人が言っていた。見れば彼等は作業服で

ある。兵士や下士官の青い作業服と将校の紫の作業服があちこちに見える。
「とっくに」
「そうだろうな」
同僚の兵士が彼の言葉に頷く。
「情報が伝わるのにログがあるからな、どうしても」
「サハラは遠いからな」
同僚達は彼の言葉に頷く。話している彼は眼鏡をかけそれが妙に知的な印象を与えている、そうした兵士であった。兵士というよりは学生に見える。
「どうしてもな」
「もう勝敗ははっきりしているのかもな」
その眼鏡の彼の同僚の太り気味の兵士が言ってきた。
「こっちにはまだ話が伝わっていないだけで」
「そうかもな」
その言葉に金髪の兵士が頷く。
「じゃあどっちが勝ったかな」
「ハサンだろうな」
眼鏡の兵士はこう述べた。
「話を聞くとかなり有利だ」
「そうだな」
「じゃあオムダーマンはこれで終わりか」
彼等は口々にそう述べる。それを黙って聞いていた彼等のリーダー格である少し年長の男がここで言うのだった。階級は第三軍曹のものであった。
「どっちにしろ俺達にはあまり関係ないな」
「そうですね」
「俺達整備屋には」
「あるとしたら施設だな」
軍曹は言う。

「何でもサハラとの境に防衛施設をかなり築くらしいからな」
「ああ、それで最近施設の連中が慌ただしいんですね」
太っている兵士がそれを聞いて言う。
「そっちに回されるかも知れないから」
「そうだろうな。何かかなりのを築くらしいぞ」
「大変ですね、施設の連中も」
「最近大忙しじゃないですか」
「まあそれも当然だ」
軍曹は部下達にそう述べる。
「連中は何か作れと言われたら作るのが仕事だからな。今の長官は作るのが好きだしな」
「確かに好きですよね」
「ニーベルング要塞でしたっけ」
ここで金髪の兵士は要塞の名前を間違えた。
「あそこも随分派手に作り変えたし」
「おい、今はニーベルングじゃねえぞ」
太った兵士が彼に突っ込みを入れる。
「今はアタチュルクだ」
「おっと、そうか」
頭に手を置いて申し訳なさそうな顔になる。
「そういえばそうだったんだ」
「そうだよ。しっかりしろよ」
「あいつ等から奪ったんだしな」
眼鏡の兵士も言う。実は彼等はエウロパとの戦争に参加している。
その時にニーベルング要塞も通っているのである。

## 第二十六部第二章　観戦者達その二

「そのアタチュルクだって随分派手に作り変えていましたよね」
「ああ」
軍曹は眼鏡の兵士の言葉に頷いた。
「何でもガンタース並にしようとしているらしい。エウロパ軍を絶対に通過させないようにな」
「徹底してますね。それはまた」
「しかも回廊にまで基地を置いているし」
マラッカ回廊の基地もかなりのものになっていた。本来はガンタースとアタチュルクの中継基地なのだが八条はそこも要塞化させたのだ。そうして三段の備えでエウロパに対していたのだ。慎重で周到な八条らしい備えであると言えた。
「施設の連中がそれで随分あっちに借り出されていますね」
「しかも今度は国境と来た」
兵士達は次々に述べる。
「金もかかるでしょうし」
「何かと忙しい話です」
「平和になっても仕事はなくならないか」
軍曹は鰐のソテーを飲み込んでから言った。口の中に鰐の淡白な味とデミグラスソースの濃厚な味が漂う。彼はそれを楽しみながら話をするのである。
「暇になるにはなったがな」
「まあテロリストもかなり減りましたし。宇宙海賊も」
眼鏡の兵士が軍曹に応える。
「その分はいいですよね」
「そうだな。それはな」
軍曹も彼の言葉に頷く。連合軍設立以降テロリストも海賊もかなり減っている。連合の治安は目に見えてよくなってきているのが実

情である。これが連合軍の功績であるのは言うまでもない。軍が治安維持に効果的なのは銀河の時代でも同じなのだ。
「命を捨てる危険もかなり減った」
「はい」
「しかしそれでも仕事は減らないな」
そのうえであらためて言う。
「次から次に」
「そこは民間と変わりませんね」
金髪の兵士が言ってきた。
「俺達もそうした意味じゃ同じですよ」
「そうか」
「ええ。そういえば軍曹」
「何だ？」
ここで言葉が変わってきた。
「その民間の業者も結構動いていますよ」
「施設のそれでか？」
「はい。アタチュルクでも今度でも。儲け話があるとかで」
「建築だからな」
軍曹はその言葉に頷く。頷きながら今度はジャガイモを食べる。
「それはあるか」
「裏でも金動いてるんですかね」
太った兵士がふと呟く。
「やっぱり」
「さあな。そこまではわからないな」
こうした話で何かと裏金が動くのは常である。業者も儲けなくてはならない。仕事を手に入れる為に様々な筋に裏金を回すのもまた仕事のうちなのである。それが奇麗か汚いかはまた別の話だ。連合ではこれはありきたりな話である。
「まあ動いていたとしてもな。いい目を見るのは俺達じゃない」
「施設の先任下士官ですか」

「それか経理か補給か」
話が物騒になっていく。
「そっちだろうな。まあ牢名主様達が最初だ」
軍を仕切る彼等に話がいくのが軍では常識だ。彼等は同じ部隊に古くいるのでそこで部隊の裏まで仕切るようになるのだ。そうして絶対的な権限を握る。これもまたかつての二十世紀の軍隊と同じだ。下士官という存在の特徴と言えば特徴だ。しょっちゅう転勤する将校では中々こうはいかない。
「そういう場合はな」
「何か嫌な話ですね」
「聞いていると」
兵士達は軍曹の話を聞いて眉を顰めさせる。しかし軍曹はここでまた言う。
「そういう話があった場合はな」
片目でウィンクして述べてきた。
「そうなるかも知れない。それだけだ」
「そうなるかも、ですか」
「少なくとも俺はそうした話には出会ったこともなければ見たこともない」
こう前置きする。

## 第二十六部第二章　観戦者達その三

「俺が運がいいのか悪いのかはわからないがな。少なくともそれはなかった」
「はあ」
「あっても話せる内容じゃないだろ」
今度は餅を食べながら言ってきた。
「そうだろう？まあもっとも」
ここで剣呑な顔を少し見せて小声になってきた。
「ここの給養の連中はどうかわからないな」
「食材費ですか」
「ああ。何かあるかもな」
餅を食べながら言う。
「質が良過ぎるだろ」
その餅を食べたうえでの言葉だった。味は確かにいい。しかしそれがやけに引っ掛かるのだ。軍の食事にしてはあまりにもいいのだ。彼はそこを指摘してきていた。
「幾ら何でも」
「このジャガイモもそうですね」
太った兵士がジャガイモを食べながら言ってきた。
「何かやけに」
「確かにな。味付けだけじゃなくてジャガイモ自体も」
金髪の兵士もそれに応えて言う。
「今まで食べた中で一番」
「そうだよな。俺もこんなに飯が美味い部隊は知らないぞ」
軍曹も言う。
「これは。何かあるだろ」
「それでしたら軍曹」
眼鏡の兵士がここで軍曹に言ってきた。

「何だ？」
「これ契約している農家が凄くいいそうです」
「農家がか」
意外な言葉だった。なお軍とのこうした話の契約は報酬が高く中々実入りがいいことで知られている。軍需産業はすこぶる儲からないものであるが軍という存在は中々儲けのいいものなのである。特にある分野においてはそうである。
「その農家がですね」
「ああ」
話がそのある分野に向かう。
「服屋のお兄さんらしくて。そのつてで送ってもらってるそうです」
「ああ、あの服屋か」
軍曹はそれを聞いて納得したように頷いてきた。ここで言う服屋とは軍服や靴、階級章を扱っている服屋である。基地があればかならずそこにいる。本来軍服等は軍から支給されるのであるが彼等は国防省から許可を貰って軍服等を販売しているのである。しかも質は当然ながら官給のものよりもいい。
「何かやばいつながりだな」
「コネなのは間違いないでしょうね」
眼鏡の兵士も答える。
「それで特別にいい野菜を回してもらってるそうです。米や麦も」
「そうだったのか」
軍曹はそれを聞いて納得したように頷く。しかしあまりいい顔はしてはいなかった。
「しかし。あれだな」
「あれといいますと」
「兄弟で軍から利益を貪っているんだな、あの服屋」
そう言って不機嫌な顔を見せる。
「とんでもない奴等だ」
そこまで言ってまた餅を食べる。

「あそこの服高いからな」
「そうですよね」
金髪の兵士が軍曹の今の言葉に頷く。
「他の基地の店よりも高いですよ」
「品揃えとか質は確かにいいですけれど」
「ここは日本だからな」
軍曹は不機嫌な顔で今この基地が何処の国にあるかを言ってきた。そう、ここは日本なのであった。軍需産業が最も歪になっていると言われてきた国である。
日本の軍需産業は異様に兵器の値段が高いのと妙に様々な業者が周りにいるというところに特徴があった。兵器の値段は伝統的なものがあり常に他の国々のそれよりも割高であった。これは開発費と製造数の関係とされていたがそれでも異常に高いと評判であった。一説には企業が実入りの少なさから吹っかけていたと言われている。
様々な業者はどの国でもそうだし今でも同じだが日本の場合は服だの食材だのそうした副次的な分野で軍にくっつく形で儲けている者が多かったのだ。とりわけ被服に関してはそうであった。基地のすぐ側、中にいつも服屋がいるのが日本軍なのであった。理由はこれははっきりしていて日本軍がとりわけ身だしなみを気にする軍隊であったからだ。それが軍事マニアから人気であったという一面もあるが。
「どうしてもそういうのはあるか」
「そういえば軍曹」
太った兵士がその服についても言及してきた。
「何だ？」
「この部隊の服装点検は厳しい方ですね」
「教育隊よりも上だな」
軍曹はきっぱりと言ってきた。
「これもよく言われるな」
「日本にある基地は全体的にそうですね」

眼鏡の兵士も言う。
「他の国の基地に比べて」
「そうだな。何かと言われるな」
「俺なんてこの前マニアからあの詰襟を復活できないのかって言われましたよ」
金髪の兵士は言ってきた。
「どうしろっていうんですか、そんなの」
「あれは仕方ないだろ」
軍曹は金髪の兵士の言葉にこう述べてきた。

## 第二十六部第二章　観戦者達その四

「ネクタイの国の方が多かったんだからな」
「それも圧倒的に」
連合軍設立の時に軍服のデザインで悶着があったのだ。兵士のセーラーはどの国でも同じであったしそのままだが下士官、将校の軍服で揉めた。殆どの国では黒と金のネクタイの軍服だったのだが一部の国では詰襟だったのである。連合軍設立前は各国それぞれの軍服を着ていたのだ。
なお詰襟の軍服は皇室や王室を持っている国々だけであった。当然日本もだ。その為この悶着を王制と共和制の対立だと笑って言う者うらいた。
長官の八条は言うまでもなく日本人である。日本の軍服は詰襟だった。しかし数に押し切られネクタイのものに制定された。こうしたいきさつがあったのである。
「一般の兵士に言われてもあれですね」
「何か日本の軍事は絶妙に歪だな」
軍曹の言葉は結構的確に日本の軍事について言っているものであった。彼は今は餅を食べ終えてデザートの苺を食べている。
「何かと」
「そうですね。その名残がどうにも」
眼鏡の兵士も首を傾げさせる。
「他の国の人間には馴染めません」
「全くだ。しかしまあ」
軍曹はその苺を食べながらまた述べてきた。
「飯が美味いのはまあいいことだな」
「ええ、それは」
「確かに」
これには兵士達も頷く。

「それに越したことはありません」
「それを考えるといいつながりですか」
「ああ。しかしまあ」
軍曹はまた言う。
「あちこちの基地で色々と違うものだな」
「全くです」
そんな話をしていた。彼等の基地は穏やかなものであり平和そのものだった。周りにはマニアがうろついており盛んに写真を撮っていた。
その彼等が基地の門のところに向かう。そうして出入りの許可を申請していた。
「それでは身分の証明と」
責任者の厳しい顔の一等曹長が後ろに取り巻きとも言われる部下の下士官や兵士達を並ばせて彼等の応対をしていた。
「サインを御願いします」
「わかりました」
「それでは」
彼等もそれに頷く。そうして身分証明とサインを済ませて基地の中に入る。曹長はそれを見て仕事が終わったといった顔をしていた。
「そういえばだ」
「何か？」
「この国はああした見学者が多いな」
そう取り巻きの一人に言ってきた。
「日本の特徴か」
「どうやらそのようですね」
「ここの牢名主に聞いたところな」
この基地の最先任下士官のことである。言うまでもなく日本人だ。彼等は連合軍設立と共に回されてきた所謂転勤組なのである。
「はい」
「何でも相当なものだから覚悟しろっていことだ」

「見学者がですか」
「五月蝿いらしいぞ」
顔を顰めさせて述べる。
「あれやこれやと。あれらしい」
「オタクですか」
「そう、それだ」
今でも残っている言葉である。所謂マニアの中でも特に趣味が高じてそれへの専門家のようになっている者達である。日本発祥の言葉だがこれは今では褒め言葉になっている。
「オタクが大勢来るらしい」
「流石は日本ですね」
「気をつけろとも言われた」
曹長はこうも部下に言う。
「兵器の細かいところとかまで知ってるらしい」
「我々よりもですか」
「下手をすればな。食事や基地の内部構造にまでな」
「ちょっと待って下さいよ」
今の言葉には流石に顔を顰めさせる。基地の内部構造にまで知識が及んでいるとなるとこれはかなり聞き捨てならないことだからだ。
「基地の中のことまでですか」
「そうらしい。何時何を食べたか、とかな。機密情報に関しても予想されているらしい」
「予想、ですか」
「あくまで予想だがな」
それが予想であればいい、という感情が心の中に入っていた。とにかくどういった手段でそうした機密にまで目がいっているかどうかわからないのだ。オタクという人種はここが怖いのだ。凝り性で知られる日本人が生み出した究極の趣味人とも言えるのだ。彼等の調査能力は軍をして驚嘆させるものすらある。それが怖いのだ。
「してきてネットに書いたりもしているそうだ」

「始末に悪いですね」
取り巻き達はその言葉に思わず顔を顰めさせる。
「それはまた」
「司令はおろか俺達のことも見ているそうだしな」
「はあ」
「服とか食事のことも調べているそうだ。それでここは日本だ」
「ああ、あれですね」
日本の軍事オタクで今でも盛んに言われていることが出て来た。

## 第二十六部第二章　観戦者達その五

「詰襟ですか」
「そうだ、それを復活させろと言うのがいるらしい」
「そんなの俺達に言われても」
「そもそも俺達は」
彼等は元々スーツの軍服を着ていた者達である。詰襟とは違っている。なお日本軍の詰襟はかつての帝国海軍をイメージしたものであった。その為マニア達の間で抜群の人気を誇っていたのである。それが急に粗末な軍服になったとオタク達は嘆いているのである。
「そこもまた厄介だ。国防省にも嘆願書が山のように着ているらしい」
「はあ」
「徹底していますな」
「奴等の執念は凄まじい」
褒め言葉である。
「何としてもやり遂げようとする。本気になった日本人そのままにな」
「けれど曹長」
ここで取り巻きの一人が彼に言う。
「何だ？」
「彼等は今や日本人だけではありませんが」
「他の国にも」
日本起源である。しかし今では連合各国に存在しているのだ。オタクは今では連合の間での称号になっている。それはこういうわけなのだ。
今も見れば様々な髪や目、肌の色の者達が基地に出入りしている。日本人にしろ混血していてそうなっているが国籍が違う者達もかなり来ている。

「日本のオタクは特別だ」
曹長は言う。
「何でも根掘り葉掘りだそうだからな。用心しろよ」
「そうですか」
「そういえば」
中の一人がここでふと気付いた。
「何だ？」
「この前食事、特に携帯食についてやけに聞いてくる奴がいましたね」
「ああ、そういえばいたな」
同僚が彼の言葉に頷く。
「それもかなり」
「あれには参りました」
彼は首を傾げてそう述べる。
「何でそんなに興味があるんだと。携帯食なんかに」
「それだ」
曹長はそこを指摘してきた。
「それらしい。とにかく興味を持ったものに対しては最後まで突き進む」
「それこそがオタクであると」
「凄いぞ。知識だけだったら俺達以上かも知れん」
「我々以上」
「だからだ。厄介だ」
またその言葉を言う。
「誤魔化しとかも効かないからな」
「何かイベントとかも苦労しそうですね」
「実際大変らしいぞ」
別の取り巻きに対して答える。
「何処をどう言ってくるかわからないからな」
「はあ」

「それはまた」
「だからだ。注意しろよ、奴等の相手には」
「わかりました」
彼等は曹長の言葉に頷く。そうしてそのオタク達を見ていた。彼等はしきりに基地の中を見回し色々と調べていた。その目は実に鋭いものであった。
連合軍は今は日常業務に戻っていた。それは八条も同じで戦争から講和までの怒涛のような忙しさは去り今は穏やかに業務を進めていたのである。
今計画中なのはサハラとの国境であった。ここの守りをどうするかということである。今それで予算を巡って野党とも与党の慎重派とも話を進めていたのである。
「つまりです」
今は与党の慎重派と話をしていた。会議室で彼等を前にして宙図や資料を出しながら細かいところにまで話を進めていっていた。
「備えとしましては」
「サハラに対してのですか」
「これはオフレコです」
ここで八条は議員の一人に対してこう前置きしてきた。一応はマスコミはいないがこう前置きしたところに彼のこの件に関する慎重さが出ていた。
「サハラは将来脅威になり得ます」
「それはどういった場合でしょうか」
別の議員がそれに問う。
「どうもお話ですとエウロパ以上の脅威になるようですが」
「その可能性は否定できません」
八条は彼の言葉に頷いてみせた。
「サハラが統一されて我等の前に姿を現わしたならば」
「脅威ですか」
「そうです」

また答える。

## 第二十六部第二章　観戦者達その六

「その可能性は皆無ではありませんので」
「しかしですね、長官」
女性議員の一人が言ってきた。赤い髪に青い目の中年の女性であった。いささかインテリめいた容姿だがそれと共に厳しそうな感じがする。女教師の厳しさである。
「エウロパはともかくサハラとは何もありませんでしたし今も友好的と言ってもいいものがあります。対立関係になればなればそこから備えましても」
「いいと仰るのですか？」
「はい。国力では圧倒していますし」
国力を出してきた。
「彼等対しては急がなくとも」
「私は別に急いではいないのです」
その女性議員に対してこう前置きしてきた。
「そうなのですか？」
「そうです。あらかじめ、ということです」
そう述べる。
「備えなくして憂いなしと言います。だからこそ」
「備えておくと」
「おわかりでしょうか。だからこそ」
「しかしですな」
老人の議員が考える目で口を開いてきた。
「それにしては。あまりにも予算が」
「そうですな」
他の議員もそれに頷く。
「予算がかかり過ぎます。ただでさえアタチュルク、マラッカでの両要塞にかなりの費用を費やしておりますしこれ以上になると」

「軍事費が他に影響を及ぼしかねないのでは？果たしてそこまでする必要が」
「予算は大丈夫です」
しかし八条は彼等にこう述べてきた。
「私が既にデータを出しています。それによれば」
「いけるのですか」
「はい、既に財務省とも交渉を開始しています」
彼等に対して告げる。
「この計画にある予算の配分で行けば問題はないと」
ここで資料を出してきた。それを参加者達に配る。見ればそこには綿密に細部まで書かれた予算計画と配分があったのだった。
「これでどうでしょうか」
八条は一同に対して問うた。
「これならば予算はかなり削減されるかと」
「確かに」
「いや、これは」
老議員が目を瞠って八条に言ってきた。
「このようにできるとは思いませんでした」
「そうなのですか」
「はい。これは革命ですらあります」
思慮深い目をデータと八条それぞれに向けながら述べる。その顔は決して嘘をついている顔ではなかった。公正にデータを分析しながらの言葉であった。
「本来なら倍以上かかるところを」
「無駄を減らしましたので」
八条は彼に答える。
「予算での無駄、配備での無駄、流通での無駄を」
「あらゆる無駄を排してですか」
「そうです。その結果です」
八条はここで軍人時代から培ってきた経理能力を発揮したのであ

る。軍は何をするにしても莫大な費用がかかる。それを極力抑えていくことが運営に重要なのだ。八条は連合軍設立からエウロパとの戦争に到るまで費用を最低限に抑え最高の運営ができるようにしてきた。そのノウハウを国境にも使ってきたのである。

「そうして計画したものです。これならば予算を圧迫しないと思いますが」

「確かに」

「これならば」

慎重派の議員達もこれには頷いた。その通りでありこのままいけば確実にコストが低く済み運営面でも問題はないと思われる。彼等にしてもこれならば問題はなかった。

「しかし」

あの女性議員が言う。

「これだけのものが必要ですか」

彼女は今度は国境に配されている様々な施設を見て言ってきた。見ればアステロイド帯に機雷まで撒いており実に徹底していた。彼女は今度はそれを見て八条に問うたのだ。

## 第二十六部第二章　観戦者達その七

「まさかアステロイドにまで」
しかもアステロイドの終わりにも防御施設が置かれていた。何もかもが徹底していた。
「そうです」
八条はそれに答える。静かな声で。
「これもまたオフレコでありますが」
オフレコの言葉が続く。どれだけ彼が慎重になっているかということであった。
「オムダーマン軍を見まして」
「アッディーン副大統領ですか」
「はい」
議員達の言葉に頷く。
「その通りです。彼がアステロイドを突破して敵の後方を衝いてきましたので」
「あれは確かに」
議員の中の一人が述べてきた。
「驚くべきことでした。まさかああ仕掛けてくるとは」
「そうです。だからこそです」
八条は言う。
「アステロイドにも備えをしておきました。国境全体として」
「左様でしたか」
「しかし長官」
議員の一人がまた言ってきた。
「ということはオムダーマンを仮想敵と見なしているということでしょうか」
「そういえば」
「そうなりますな」

他の議員達もそれを聞いて口々に言う。言われてみればそうなるのだ、
「そのところはどうなのでしょうか」
「やはりオムダーマンを仮想敵国に」
「そうなります」
八条は彼等のその言葉に静かに頷くのだった。
「やはり」
「ではそれは」
「オムダーマンだけではありません」
八条はまた言ってきた。
「ティムールもハサンも。生き残った勢力に対して考えています」
「あらゆる勢力に」
「それならば」
「あえて言いません。ですがこの防衛線そのものが」
「サハラに対する備えですからな」
「確かに」
これは言うまでもない。連合としては統一されたサハラが友好的な勢力になるか敵対的な勢力になるかまだわかってはいないのだ。だからこその備えである。そうしたことを考えると将来の統一サハラを仮想敵国と考えているのは言うまでもないことであった。
「それではこれだけのものが彼等に必要だからこそ」
「そうすると」
「はい」
また議員達に対して頷いた。
「事前にこれだけのものを見せれば流石に彼等も下手な気は起こさないだろう。いや、起こさせはしない。そうしたつもりで考えました」
「成程」
「だからこそこれだけのものが」
「攻めるのに備えるのではなく攻めさせはしない」

八条はこうも言う。かなり大きな考えであった。
「そうして守りとしたいと思います」
「成程」
「そうだったのですか」
議員達は八条のその言葉を聞いて納得したように頷く。聞いてみればそれは彼等が思っていたよりも壮大なものであった。あらためて頷くしかなかったのだ。
「いや、それはかなり」
「壮大な話です」
「有り難うございます」
八条も彼等に対して礼を述べる。
「圧倒的な力を見せれば人は軽挙に走らないものですから」
「それを今ここにですか」
「そうです。だからこそ」
彼はまた言う。
「こうして圧倒的なものを」
「そうして敵を封じる」
「サハラに攻めさせない」
「これで攻めればサハラは確実に滅びます」
八条は声を強くさせる。そうしてその強い声はサハラに向けられていた。彼は今サハラを強く意識したうえで言葉を発していたのだ。
「それを彼等に見せて備えとしたいのです」
「しかも只の張子の虎ではなく」
「本物の虎を配して」
「虎がいるならば人は進みません」
八条はこうも言う。防衛ラインをあえて虎に例えてきた。彼はその虎で以ってサハラとの戦いを避けるつもりだったのだ。これもまた戦略であった。

## 第二十六部第二章　観戦者達その八

「だからこそ」
「攻めさせない」
「そうです」
また語る。
「戦いを防ぐ為にもこれだけのものを」
「この場合はあれですな」
壮年の議員が思慮する顔で述べてきた。
「サハラ側の指導者達の性格は考慮には入れていませんね」
「はい」
八条はその言葉に頷く。
「あえてです。それは考慮から外しました」
「それは何故」
「指導者が変わった場合にです」
八条は彼にそう述べた。
「アッディーン副大統領にしろシャイターン主席にしろ彼等だけです。当然ハサンの太子にしろそれは同じことです」
「彼等以外の指導者が出た場合に」
「その他の者達に対しても対応できるように」
「あえてそうしたことは考慮から外しました」
また述べた。
「無論愚かな指導者も現われるでしょうが攻めて来れば」
「その防衛ラインで撃退すると」
「はい」
また頷いてみせる。
「そういうことです」
「つまり実際の守りで何があってもサハラとは戦争にしないようにする」

「武器を以って、ですな」
「そういうことになります」
八条はそう説明した。
「これならば如何でしょうか」
また彼等に対して言う。
「サハラに対する備えとしましては」
「精神的かつ物理的な備えですか」
「ふむ」
彼等もそれを聞いて言う。皆まんざらでもないといった顔であった。
「それでは宜しいかと」
「予算面でも」
一番の懸念材料についても彼等に関してはクリアーされた。それを見て八条は心の中で会心の笑みを浮かべるのであった。心の中だけだがそれで充分であった。
「わかりました。それではこれで宜しいですね」
「我々としましては」
「それで」
議員達も答える。
「ただ。野党はわかりませんぞ」
「中には何が何でも反対しようという者もおりますし」
「はい」
八条も彼等の言葉に応えて頷く。彼もそれは認識していた。所謂反対の為の反対というのは民主政治においてはどうしても見られるものだがここでもそれは同じだったのだ。よいか悪いかはまた別の問題だがこれもまた政治における戦術のうちの一つなのである。
「そうした議員には御注意下さい」
「とりわけ」
「とりわけ！？」
先程の赤い髪の女性議員の言葉に顔を向けた。女性議員はかなり

真剣な顔になっていた。
「スキャンダルには」
彼女はこう言ってきた。
「そうしたことの妨害にはスキャンダルが最も有効ですので。それに関しては」
「いや、ワトソンさん」
老議員が彼女の名を呼んできた。彼女はソマリア出身であったりする。
「長官に関してはそれは」
「そうですな」
他の議員も笑って述べる。
「金銭的にも異性問題でも」
「何も問題はない方ですから」
「確かにそうです」
ワトソン議員も彼等の言葉に頷く。彼女としてもそれはよくわかっているようであった。それは頷いたことだけでなく表情からでもわかる。しかしあえて言っていたのだ。
「ですが」
「ですが！？」
「同性ではどうでしょうか」
「あのワトソンさん」
この言葉には八条も目を丸くさせた。思わず彼女に対して言ってきた。
「私の同性問題ですか」
「はい。そういう話を聞いていますが」
「馬鹿な」
驚いた顔で言葉を返す。
「私は同性愛者ではありません。そのようなことは」
「噂では日本のアーチストと親密な交際がある側からモデルと」
異性問題でもあるような話である。こうした話は案外性別は問題

ない。江戸時代初期に起こった荒木又右衛門の仇討ちの話は実は男同士の恋愛のもつれから起こっている。
「そう聞いていますが」
「いや、それは」
八条は大真面目な顔でそれを否定してきた。
「それはありません。そもそもそれは誰なのか」
「御存知ありませんか？」
「全く」
首を横に振って言う。
「初耳です。そんな話があったのですか」
「インターネットの掲示板で出ていた話ですが。今の時点では些細な書き込みです」
「ネットですか」
それを聞いた八条の表情が微妙なものになる。その顔で言う。

## 第二十六部第二章　観戦者達その九

「作り話でしょうね」
「ソースとなる確かな情報元も出てはいません」
ワトソンもそれは認めてきた。
「ですがこれがそうした議員の目に止まると」
「厄介なことになりかねない」
「こう言っては何ですが長官は美男子です」
ワトソンはここで八条の顔について述べてきた。確かに長身で貴公子然とした美貌である。実際に女性からだけでなく同性からも人気があるのだ。美貌は得なものであるが時として思いも寄らぬ災厄をもたらしたりするものである。それが今の彼なのだ。
「だからこそ。こうしたスキャンダルを作るのは」
「容易いと」
「特に日本だからですな」
議員の一人は思わせぶりにこう言ってきた。
「同性愛に関しては」
「確かにそうですな」
別の議員もそれに同意して頷く。
「日本にはそうした話が流行り易い」
「ええ」
日本という国は昔から同性愛はタブー視されていなかったからだ。同性愛は普通にある時代になっているがやはり国によって差がある。イスラエルでは今でも宗教的な戒律から全面的に禁止されている程だ。他に同性愛を禁止している国はないがそれでも差がある。なお同性愛が盛んな国は日本の他にはタイ、北米系ネイティブアメリカンの諸国家がそうである。実はネイティブアメリカンの間でも同性愛は普通のものとして考えられていたのである。ただし古代ギリシアや日本のそれとはかなり違っているが。

「だからこそ今回の話も」
「根拠はなくとも広まる可能性も」
「厄介なことです」
八条は心底迷惑そうな顔でこう述べてきた。
「私は本当にそうした話はですね」
「長官が同性愛者でないのは私も存じています」
ワトソンはまた述べてきた。
「ノーマルですね」
「どちらかといいますと」
八条はこう答えてきた。
「そうなります。少なくとも男性に興味を持ったことはありません」
「そうですね。ですがスキャンダルというものはそうしたことに関係なく起こせるものですので」
「用心が必要と」
「そうです。ですから閣下は今は」
「行動を慎むべき、ということでしょうか」
そうワトソンに尋ねる。
「ここは」
「今出来た話は利用されないように手を打っておきましょう」
「どうされるのですか？」
「先手必勝、目には目をです」
彼女はこう言ってきた。
「相手にも同じものを仕掛けるのです。それだけです」
「スキャンダルですか」
「妻をほったらかしにして少年タレントと真夜中の密会、夫も子もある身でありながら今をときめく女性アイドルと深夜のデート。そういったものを」
ゴシップそのものの話である。実際に連合ではこうしたゴシップ記事が多い。
「広めていけばいいのです」

「それは」
「長官がこうしたことを好まれないのも承知しています」
ワトソンはそれについても言う。
「ですから私が」
「やられるのですか？」
「よくあることではないでしょうか」
八条を見て述べてきた。冷静な目のままで。
「ですからそれに関しては」
「何も眉を顰めることはないと」
「はい、こちらにも言えますがこれも戦術なので」
政治においては、である。むしろそうしたスキャンダルをかけられたり消せない方が政治においては問題なのだ。能力がないということだからだ。
「気兼ねされることはありません」
「私はすぐに否定できますが」
八条は次にこう言葉を返した。
「その程度のことでしたら」
「それだけ職務に支障が出ます」
ワトソンは今度はこう述べてきた。
「ですから。今回は事前に」
「事前にですか」
「そういうことです。宜しいですね」
あらためて八条の目を見て問う。
「それで」
「わかりました」
八条とて政治の世界にいる。だからそうしたやり方も知っている。彼は正攻法の政治家でありそうしたことはしないが知らないというわけではないのだ。
「それでは御願いします」
「はい。それでは」

ワトソンはあらためて頷く。そうしてまた述べてきた。

## 第二十六部第二章　観戦者達その十

「それでですね」
「はい」
話は変わる。
「ここからは我々とは離れますが」
「直接的にはでしょうか」
「はい、そうです」
そう八条に答えたうえでまた述べる。
「サハラの戦局です。今はオムダーマン軍は順調に戦いを進めていますね」
「そうですね」
八条はまずはワトソンのその言葉に頷いた。
「国境地帯を掌握した後でそのまま北上しています」
「そうして要衝ジェルメに向かっています」
彼等もそうした情報は的確に把握していた。そのうえで様々なことを考えていたのである。他の地域の戦争であってもそれは参考になるのだ。所謂観戦というものである。
「そのジェルメにおいてハサン軍は守りを固めています。これはかなりのもののようですが」
「そうですね」
八条はワトソンのその言葉に応える。
「オムダーマン軍を凌駕する戦力に万全の防衛基地、まさに星系全体を要塞にしています」
「今度ばかりは彼等も」
「さて、それはどうでしょうか」
しかし八条はオムダーマンの敗北には懐疑的な言葉を述べてきた。
「オムダーマンが勝利を収めると」
「可能性は皆無ではありません」

彼はこう言ってきた。
「これはあらゆる戦いについて言えることですが」
「では今度もまた」
「若しかしたらです1」
八条は言う。
「ジェルメの守りの隙をついて攻めてそれにより」
「勝利を収めると」
「確かに困難ですが」
彼もそれは認める。ある程度観戦武官達からジェルメの情報も聞いている。それを聞く限り確かにかなりの守りでそれを突破することは容易ではない。
「しかしそれでもです」
「破られる可能性は皆無ではないと」
「結局はあらゆる戦いがそうなのです」
八条はこう言ってきた。
「人間の造り出したものに完璧というものはありませんから」
「必ず何かしらの欠陥があると」
「そういうことになります。それを考えますと」
彼は言葉を続ける。
「ジェルメもまた陥落させられることが可能です」
「そうですか。ですが」
ワトソンは八条の考えを聞いたうえでまた言ってきた。自分の考えを述べる。
「オムダーマンはジェルメを陥落させるしかありませんね」
「ええ、それは」
八条もそれはよく認識していた。オムダーマン軍はまずはジェルメを陥落させないと話にならない。そこを拠点としてハサン軍は反撃を考えていたしハサンを北上してブルジルトを目指すにはどうしても通らなければならない場所だったからだ。
「どうしてもですね、彼等には」

「オムダーマンにとっては戦略的に負担が大きいです」
これはそうしたことから導き出される結論であった。
「時間的な制約もありますし」
「ハサン軍は首都ブルジルトから援軍を送っています」
その情報も彼等のところに入っていた。これもまたオムダーマン軍にとっては戦略的に不利な材料の一つであった。彼等は数においても不利なのだ。
「彼等の存在もあり」
「オムダーマン軍はジェルメを迅速に陥落させるしかない」
「そうです」
八条は答える。
「それが果たせなければ彼等は戦略的に敗北です」
「しかしですな」
老議員がここで話に入って来た。
「はい」
「それだけにジェルメを陥落させられれば彼等にとっては大きいですな」
「それは確かに」
「その通りですね」
八条もワトソンも彼の言葉に頷く。ハサンにとってジェルメは戦略的に要衝であるがこれはオムダーマン軍にとっても同じなのである。表と裏の関係であった。
「それが果たせればアッディーン副大統領は本物ですが果たして」
「ここは見せてもらうとしましょうか」
ワトソンは笑って述べてきた。
「我々の今後の参考も兼ねて彼のジェルメでの戦いを」
「ええ。それでは」
八条もそれに応えて頷く。サハラでの戦いは今彼等にとっても重大な関心の一つになっていたのであった。少なくともそれは参考にするべきものであった。

## 第二十六部第二章　観戦者達その十一

説明を終え与党慎重派を説得し終えた八条は満足した顔で国防省に戻っていた。とりあえず彼等に関しては上手くいったのであった。
「これでまた一つですね」
「ああ」
車の中で木口に答える。二人は車の後部座席で並んで仕事に関する資料を見ながら話をしていたのである。
「与党はこれでいい。後は野党だが」
「何が何でも反対だという勢力もいますね」
「それはワトソン議員が何とかしてくれると言ってくれている」
「ワトソン議員がですか」
「そうだ」
木口に答える。
「スキャンダルを仕掛けて動けなくされるそうだ」
「スキャンダルですか」
「方法としてあるな」
あまり好ましくないといった顔で木口に言う。
「それは確かに」
「ええ。ただ」
「私は好きではないがな」
ワトソンに見せたのと同じものを木口にも見せる。
「そうしたことは」
「そうですね。長官には向いていません」
木口もそれは認める。八条はそうした陰謀には似合わないタイプの政治家なのだ。
「ですからそうしたことは」
「下手にはしない方がいいか」
「誰にも向き不向きがあります」

彼は言う。
「ですから」
「わかった。それではな」
八条もそれに頷く。彼とてそれはわかっていた。
「そちらには手は出さないでおこう」
「それがよいかと。あと」
「何だ？」
話が変わったのを見てあらためて木口を見た。
「ジェルメの資料が届いています」
「最新式のものか？」
「そうです、これです」
ここで三次元写真を出してきた。ジェルメ星系の宙図である。そこには惑星などの他に様々なものが書き込まれていた。かなり細かい。
「如何でしょうか」
「少し見せてくれ」
八条はそう応えて木口からその宙図を受け取った。そのうえで見る。
「ふむ」
「如何でしょうか」
「堅固だな」
最初に受けた印象はこうであった。
「これならば容易には陥落はしない」
「容易にはですか」
「そうだ、ここまではな」
そう木口にも言う。
「オムダーマンとしてはこれを破るのは容易ではない」
「では敗北ですか」
「いや」
しかし彼はここで言う。

「それはどうかな」
「何かありますか？」
「確かにこの防衛ラインは堅固だ」
八条はまたそれを言う。しかし彼はそれだけを見ていたのではないのだ。そうでなければここで言葉を止めたりはしない。彼が見ているものとは。
「穴がある」
彼は言った。
「この穴は致命的だな」
「穴ですか」
「より正確に言うと帰結点だ」
そこを指摘してきた。
「ここだ」
指差した場所は星系に敷かれた防衛ラインの最左翼であった。そこを指差している。
「ここが最も弱いな」
「そこですか」
「ここを衝かれればな。ハサンは辛いぞ」
「しかし長官」
木口はここで言う。
「そこを衝いたとしても戦力はハサンの方が」
「問題は遊撃戦力だな」
八条はそこも指摘する。彼もまたそこを見ていたのだ。防衛においてはただ単に守っているだけでは駄目なのだ。高速機動部隊もまた必要なのだ。
「それが充分にあればハサンの勝利だ。なければ」
「危ういですか」
「そうだ。それ次第だ」
奇しくも彼の視点は当たることになる。何処にいても見る者は見るということであった。そうした意味で八条はやはり一級の戦術眼

も備えていると言えた。
「さて」
八条は宙図から目を離し前を見ていた。
「我々もな。仕事をせねば」
「仕事は尽きませんので」
「というとあれか」
木口のその言葉に顔を曇らせる。

## 第二十六部第二章　観戦者達その十二

「また帰れば仕事が山のように」
「無論です。裁決を御願いしたい書類がありますので」
「減らないな、そうしたものが」
「減らす方法はあるではないですか」
木口は笑って八条に告げる。
「仕事をされることです」
「最近また睡眠時間が減っているような気がするな」
「といっても国防省設立の頃よりはましだと思いますが」
「あの時はまた特別だ」
八条は苦い顔をして述べる。
「流石に何かを立ち上げる時は。仕事が多くなる」
「はい。ですがその介があったというものです」
「そうだな。国防省も機能しているかな」
といってもそれを誇るわけではない。八条はそうした男ではない。
「何はともあれ」
「仕事の後には喜びがあるものですぞ」
木口の言葉はかなり日本的なものであった。所謂勤労は美徳なりということでもある。何かを果たせばそれだけ見返りもある。なお八条もそうした考えの持ち主だ。
「ですから長官」
「そうだな。それでは」
「はい、これからも」
また八条に言う。
「どんどん仕事をなさって下さい」
「わかった。しかし」
ここで苦笑いになる。
「しかし？」

「これが終われば少し休暇といきたいな」
「休暇ですか」
木口はその言葉にふと目を丸くさせる。
「それは」
「スケジュールの調整は無理か」
「無理です、当分の間は」
「やはりな。では当分は我慢して働かせてもらおう」
「ですから働ければそれだけ見返りがありますので」
木口はまた言う。
「我が国の陛下はもっと恐ろしい仕事を日常されていますが」
「いや、あれはまた特別だ」
八条はそれにはこう反論する。
「陛下だけではない。皇室の方々にとっては休養までがお仕事ではないか」
「左様です」
その通りであった。日本の皇室だけでなく各国の王室もまた同じである。これに関しては連合もエウロパも同じである。
「私には無理だな」
「私もです」
これに関しては八条も木口も同じ考えであった。
「どうでしょう。陛下のように休暇まで仕事となっては」
「過労死するな、流石に」
誰もが言う言葉であった。
「陛下はよく平気でおられるものだ」
「キロモト閣下もそんなことを仰っていました」
「中央政府大統領よりも辛い仕事なのだな」
「もう一つ同じだけ大変な職業がありますが」
木口はここで言ってきた。
「それは」
「言わなくてもわかっている」

それは八条にもすぐわかった。そんな仕事は一つしかない。
「エチオピア皇帝、エチオピア皇室だな」
「その通りです」
「皇室や王室はまた別ということだな」
「ええ。どうしてもそうなります」
そういうものだ。これもまた連合にしろエウロパにしろ同じことであるが皇室、王室の仕事とは政治ではないのだ。その存在や日常業務が政治的であってもそうではないのだ。その仕事は祭事になっているのだ。言うならば日常の行動そのものが祭事であり仕事なのだ。ここが普通の人間の仕事と違うのだ。睡眠も休暇も祭り事の一環であり仕事であるのだ。

## 第二十六部第二章　観戦者達その十三

「長官のお仕事は政治ではないですか」
「確かにな」
その言葉にこくりと頷く。
「祭事ではなく」
「かつては同じものだったがな。今は違うからな」
「はい。そういうことです」
木口はまた述べる。
「それに休暇も何時か調整がつきますから」
「ううむ」
しかしここで八条は首を傾げさせる。
「日本軍にいた頃よりハードだがな」
「日本軍将校はかなりハードでしたからね」
「そうだ。あんな仕事がよくあるものだ」
首を傾げさせたまま述べる。
「しかし今は」
「その時よりも仕事が多いと」
「どう見てもな。多い」
どう見ても否定できるものではなかった。実は日本軍将校の仕事は各国の軍人の中でも最も多いと言われていたのだ。少尉で普通の国の国防省高官程度はあるとまで言われていた。
「それも考えれば当然か」
「ええ。何しろ一三〇億の軍の実質的な司令官ですから」
「そうだな」
なお連合軍の最高司令官は言うまでもなく中央政府大統領である。しかし実質的に統括しているのが国防長官なのである。
「それではまたやらせてもらうか」
「ですが長官」

「何だ？」
また木口の言葉に応えて顔を向ける。
「何処かで息抜きをされていますよね」
「毎日身体も動かしているしな」
健康の為だ。これでも健康管理には気を使っている。
「それはな」
「他には」
「読書や音楽鑑賞もしているが」
「よいことです。ただ」
「ただ？」
「そろそろ考えられてはどうでしょうか」
事務所のスタッフとしての言葉であった。木口は彼の私設秘書なのである。だからこそそのサポートも公の秘書より多分野に渡っているのだ。
「何をだ？」
「いえ、ですから」
木口は言う。
「結婚に関して」
「それか」
急に興味がないような顔を見せてきた。
「まだいいのではないのか？」
「いえ、結婚は早過ぎるということはありません」
しかし木口も負けずにこう述べてきた。
「長官」
「うむ」
「特に政治家はですな」
今までの話の中でも八条が最も苦手な話に移る。
「生涯の伴侶がいてこそです」
「内助の功というものか？」
「それもあります」

名政治家の後ろに賢妻ありとも言われる。これを夫に変えてもいいがとにかく政治家にとっては生涯の伴侶は不可欠な存在なのである。
「ですがそれ以上に」
「私個人としてか？」
「そうです。何でしたらお見合いの設定も致しますが」
「おいおい、またそんな」
これには慌てた声で返す。
「そこまでは」
「ですが長官」
木口もさらに言ってきた。負けてはいない。
「本当にそろそろ」
「それはわかってはいるが」
それでも乗り気ではないのがわかる。彼はどうしてもそうした話は苦手であった。困りきった顔で木口に返すだけであった。そして遂にたまりかねて言った。
「そのうちな」
「まさかと思いますが生涯独身とかは」
「それはないから。安心してくれ」
そう返す。言葉を返して一旦は話は終わった。
「だからこの話はこれで終わりだ。いいな」
「わかりました。それでは」
「うむ。それではな」
こうして話を終えた。半ば強引に政治の話に戻す。しかし八条の厄介事は終わったわけではない。また起こるのだが今はその時ではなかった。

## 第二十六部第三章　女王の国その一

### 女王の国

サハラは伝統的に男権が強いとされている。それは実際のことであり根拠となるものはやはりイスラムであった。女性の権力者というものは少なくそうした意味でブルコルジの存在は稀なものであった。

彼女は王家の生まれである。兄弟がいた。しかし彼等は相次ぐ戦いの中で戦死してしまい残ったのは彼女だけであった。そうして父も死に残ったのは彼女だけだったのだ。

こうなっては選択の余地はない。王家の最後の一人として王位に就かざるを得なかったのだ。これは決して望んだことではない。またアヤグーズにとっても大変な話であった。

当初アヤグーズの者達はこのことに危惧を覚えていた。皆口々に言うのであった。

「アヤグーズも終わりだ」

「女の方では最早」

この時アヤグーズは北方の国々と激しい戦いを繰り広げていた。正確に言うならばハサンと彼等がそうだったのだ。その為北方の国々の楯であるアヤグーズが矢面に立っていたのである。その結果として王家の者達も次々に戦死していたのである。そうして女である彼女もまた戦場に向かうことなったのである。

だがここで彼女は華麗に戦い、華麗に勝ってみせた。それが続き何時しかハサンにとってなくてならない存在になりまた太子も絶対の信頼を置くようになったのであった。

これでアヤグーズの者達の評価も変わった。彼女はアヤグーズの者達にとって絶対的な存在となったのである。

幾多の戦いにより彼女は名将とまで謳われるようになった。今彼女はその旗艦であるシャハラザードの艦橋にいた。この艦の名は言

うまでもなくアラビアンナイトのヒロインの名前に由来する。その名は優雅であるがその主は優雅な美貌の中に鋭い目を見せていた。
「そうですか、コムですか」
「はい」
ブルジルトはこの時アヤグーズ軍の白い軍服を着ていた。周りの者達はアヤグーズ軍だけではなくハサン軍や他の属国の者達もいた。様々な色とデザインの軍服が集まっていたのである。
彼女は詰襟の軍服に裏地が紅の純白のマントを羽織っていた。白い軍服の所々には黄金色の装飾がある。これこそがアヤグーズ軍大元帥にして最高司令官である者の軍服であった。
ブーツは黒だった。その黒が軍服の白を際立たせ、同時に彼女の美貌も際立たせていた。その長い髪を後ろに束ねて前を見据えていたのであった。
「ティムール軍はコムを目指しています」
「我々と同じですね」
「そうなるかと」
「わかりました」
ブルジルトはその言葉を聞いて頷いた。それからまた述べるのであった。
「では我々もまた予定通りコムに向かいます。それで宜しいですね」
「了解」
「わかりました」
最初はアヤグーズの者達が応え次に他の国々の者達が応える。ハサンの者達は最後であった。ここに何か微妙な空気が存在していた。
「それではそういうことで」
「御願いします。そして」
「はっ」
また最初にアヤグーズの者達が応えてきた。
「いざという時の為にアッサルームには備えをしておきなさい」
「畏まりました」

「そして」
今度はハサン軍の提督達に顔を向けた。彼女はハサン軍元帥でもあるので彼等の上司にあたる。今はアヤグーズ軍の軍服を着てはいるが。
「ハサンからの援軍はあとどれだけでしょうか」
「二週間程でしょうか」
ハサンの軍服を着た男達が応えてきた。彼等はハサンのグレーの軍服である。アヤグーズの白い軍服が多い中ではそれは少し微妙な色であった。
「急いではいますが」
「二週間ですか」
「はい」
彼等は女王の言葉に頷いてきた。
「それだけあればアッサルームにまで」
「わかりました。ではいざという時の予備兵力にさせて頂きます」
彼女はその話を聞いたうえでこう告げてきた。そうしてまた言うのであった。
「できればコムで退けたいものですが」
「コムでですか」
「そうです、戦いは迅速に終わらせるもの」
そう言ってきた。
「だからこそです」
「ですが陛下」
ここでアヤグーズの参謀の一人がブルジルトに問うてきた。
「何か」
「ハサンからの援軍と合流してから進撃してもよかったのでは？」
「そうです」
他の幕僚達もそれに同意して彼女に言ってきた。見れば具申者の中には他のハサンの属国の者達もハサンの者達も混ざっていた。

## 第二十六部第三章　女王の国その二

「数的な優位を確保できますし」
「そうすれば」
「私もそれを考えました」
ブルジルトもそれに応える。そのうえで言ってきた。
「ですが」
「ですが？」
「それは難しいのです」
そしてまた言う。今度は打ち消す言葉を出したのだった。
「難しい？」
「はい、確かに今我々は数のうえでは不利です」
それは彼女もわかっている。しかしそれでも今は兵を進めなければならなかったのだ。今そのことを彼等に対して語るのであった。
「ですがここでコムを陥落させられると」
「我等はそのままアッサルームまで侵攻されるでしょう」
幕僚の一人が答えてきた。
「間違いなく首都での戦いとなるでしょう」
「その通りです」
そうなのであった。ブルジルトはそれがわかっているからこそだったのだ。
「ですから今は」
「兵を進めると」
「コムについては我々は隅々まで知っています」
地の利について述べてきた。
「あそこならば勝てます」
「そうです、勝たなければ」
幕僚達もそれに頷く。
「何としてもシャイターン主席を抑えなければ」

「その為にも陛下には」
「国王陛下にお伝え下さい」
今言ったのはハサンの者達である。彼等に顔を向けて言ってきたのだ。
「必ずや彼等を止めてみせますと」
「わかりました」
グレーの軍服の男達がそれに頷いてきた。
「それではそのように」
「はい。それでは今は」
彼女はまた言う。だが今度は戦いに直接関係する言葉ではなかった。
「暫時急速です。宜しいですね」
「はっ」
「了解」
幕僚達はそれに頷いた。こうしてまずは解散となったのであった。

ハサンの提督達は自身の艦隊へ戻っていた。その移動はシャトルによってであった。
シャトルの中で彼等は話をしていた。それはやはりブルジルトに関するものであった。
「やはり閣下も苦しい選択をされたのだな」
「そうだな」
彼等はここで彼女を閣下と呼んだ。ハサン軍元帥であるからこの呼び名となっているのである。ただし公の場ではアヤグーズ軍の軍服を着ている為陛下と呼んでいる。
「致し方あるまい。ティムール軍の進撃は予想よりも早かった」
「それもまた我等の予想を越えていたな」
実は当初は援軍と合流してそれからティムール軍と戦うつもりであったのだ。しかしシャイターンはそれを許しはしなかった。疾風の如き進撃で一気に進んできたのである。ブルジルトもそれを受け

て今ある戦力だけで戦場に向かわざるを得なかったというわけである。
「これもあの主席の策かな」
「だとするとまずい話だ」
提督の一人がそれに顔を顰めさせてきた。
「既にその策に陥っている」
「しかしだ」
ここで別の者が言ってきた。
「陥っているといっても」
彼は言う。
「地の利もあるし閣下もわかっておられるだろう」
「主席の考えをか」
「そうだ」
彼は同僚の言葉に頷いてきた。
「だから。要は戦場の問題だな」
「勝つかどうかか」
「そういうことだな」
「ふむ」
その彼の言葉に対して皆頷いてきた。あらためて考える。
「ではコムの戦いだな」
「そうだ。勝てるかどうかだが」
「いや、それも危ない」
それを黒髭の提督が言ってきた。
「危ないか」
「確かに地の利はある」
黒髭提督はそれは認める。やはり地の利は絶対のものがある。この場合は宙の利であるが同じ意味である。これは宇宙の時代になってもそれは変わらない。

## 第二十六部第三章　女王の国その三

「しかしだ」
「それだけではないか」
「そうだ。知略は同じか」
黒髭の男は先程戦場で勝てればそれでいいと言い切ってきた細い目の提督に応えてきた。シャイターンが傑物なのはもうわかっているがそれと共にブルジルトもまた女傑なのである。それも認識していたのである。
「少なくともひけを取らないというわけではない」
「そうだな」
「閣下ならばな」
「それでだ」
黒髭提督は同僚達の言葉を聞いたうえでまた言ってきた。そこが彼の言う確信であった。
「後一つの要素がここで問題になる」
「数か」
「そうだ、それだ」
彼は言ってきた。
「そこが問題になる。我が軍は全て合わせて二十個艦隊」
彼は言う。
「対するティムール軍は三十個艦隊だ。一・五倍の差だ」
「それは宙の利で何とかするということではないのか？」
「その通りだ」
同僚達がその言葉にそう突っ込みを入れてきた。
「だからこそではないか」
「何を今更」
「ただ単に数でも不利だ。それにだ」
しかし黒髭提督の危惧はそれだけではなかったのだった。彼の危

惧はまだあった。むしろそれこそが数のうえでも最大の危惧になっていたのである。
「いいか」
「うむ」
「何だ？」
同僚達は彼の言葉に顔を向ける。彼等とて決して頑迷なわけではない。むしろ聞く耳は確かであった。だからこそ聞いているのである。
「我が軍は混成軍だ」
今度はそこを指摘してきた。
「我がハサン軍だけでなくアヤグーズ軍もいれば各属国の艦隊もある。一応はハサン軍元帥でありアヤグーズ女王でもある閣下が全軍の指揮を執っておられるが」
ここが微妙なのである。確かにブルジルトはハサン軍元帥であり今回の戦いの総司令官となっている。しかし彼女は本来はアヤグーズの女王、アヤグーズ軍最高司令官でありハサン軍元帥は副次的なものである。その為結束は今一つであり、同時に指揮系統も複雑化している。彼女が直接率いているのはあくまでアヤグーズ軍なのだ。そうした様々な事情が彼等をして不安定な立場に追いやっていると言えた。
「さて、その中身は」
「まさかとは思うが」
同僚達は黒髭提督の言葉に顔を向けてきた。怪訝な顔で問う。
「閣下の指示に従わないというわけではあるまい」
「それはない」
彼はそれは否定してきた。
「我等とてハサン軍の者だ。それはない」
「属国の同志達もだな」
「そうだ。しかしだ」
そのうえでまた言うのであった。

「我々は通信の周波数も違えば兵器の種類も微妙に異なる。それで的確な戦いができるかどうか。やはりそれが不安なのだ」
「気にし過ぎであろう」
「流石にそれは」
「そうであればいいがな」
黒髭提督は同僚達の言葉に応えて言う。
「果たして」
「杞憂だ」
「その通りだ」
同僚達は笑ってそう返す。
「とりあえずは閣下の指示に従おう。何、閣下も女獅子と謳われた程の方だ」
細目の男が述べてきた。
「だからな」
「そうだ。そうしてコムで勝利を収め」
「西方では安泰といこうぞ」
そんな話をしていた。彼等はおおむねこれからのことには危惧を抱いてはいなかった。だが危惧を抱いている者がいるのもまた事実でありそれが微妙な影を落としていたのであった。

## 第二十六部第三章　女王の国その四

アヤグーズ軍等がコムに向かっていたその頃ティムール軍もまたコムに向かっていた。シャイターンはここで自室において宙図を見ていた。そのうえで言うのだった。
「勝利はまたしても我が手にだな」
「兄上、自信がおありで」
側に控えていた弟のアブーがそれを聞いて問うてきた。
「この度もまた」
「その通りだ」
シャイターンは自信に満ちた笑みで弟に応える。彼は普段のように自信に満ちた顔を見せていたのであった。
「なければ動きはしない」
「それでは」
「後は戦いを進めるだけだ」
こうも述べてきた。
「このままな」
「ほう。それでは」
アブーは兄のその言葉を聞いて楽しそうに声をあげてきた。
「既に敵の動きも読まれていますか」
「動きだけではない」
彼はまた言ってきた。
「その中も何もかもわかっている。全てな」
「ということは」
アブーはそれを聞いてまた述べてきた。頭の中に全てのことが入ってきていた。
「古代中国の兵法そのままに敵を知り己を知れば」
「そういうことだ。だからだ」
そうして弟に対して返す。

「全てわかっているならば後は順調に進めていけばいいのだ。こちらのミスにだけ気をつけてな」
「ミスですか」
「完璧な計算も一つの誤りで全てが崩れる」
高度な数学式を例えてきた。それは真実でありどれだけ見事な式であっても一つミスがあればそれが全てに及ぶ。これは数学だけでなく戦争にも言えるものだ。また機械的なものが多分に要求されると言っていい数学と違い戦争というものは同じく機械的な一面が強いがそれ以上に人間が深く関わる。人間とは過ちを犯すものである。ここが非常に厄介なのである。
「それには気をつけよ」
「わかりました。それでは」
「まずはそれだ」
それを言ったうえでまた述べる。
「そうして順調に進めていく。後は」
「後は？」
「彼女を手に入れる」
優雅であるが何処か悪魔的なものを漂わせる笑みを浮かべてきた。
「あの女王もまた」
「それでどうされるのですか？」
アブーはそこもまた問うてきた。
「彼女を。妻に迎えるのですか？」
「それもよいが。どうだ？」
ここで弟に対して問い返してきた。
「部下に迎えるというのは」
「部下ですか」
「牝獅子、側に置くにはあまりにも見事だ」
笑ってこう言ってきた。
「私はこれからサハラを一つにする。それにあたっては優れた部下達がさらに必要だ」

「成程、そういうことですか」
アブーもその言葉を聞いて笑みを浮かべる。兄の真意がわかったからだ。
「それではあの女王だ」
「彼女だけではない」
彼はさらに言ってきた。
「優れた人材はさらに必要だ。よいな」
その漆黒の目の光が変わった。ルビーの如き赤い光である。その光はまさに野望に燃える一人の男の目であった。今その目で語りだしたのである。
「しかしだ」
そのうえで彼は言うのだった。
「サハラでは女は戦場には出れないものだな」
「はい」
だからこそブルコルジの存在が異様なのである。
「これは変えられないものかな」
「といいますと？」
アブーもその言葉には目をしばたかせる。兄が何を言っているのかわからないといった感じであった。これはサハラの常識に基いているものである。
「一体どういうことでしょうか」
「言ったままだ」
シャイターンは素っ気なく返してきた。
「言ったままといいますと」
「女もまた戦場に立つことができればな」
彼はこう言ってきた。これにはアブーも驚きを隠せない。
「兄上、それは幾ら何でも」
「できないな。それはわかっている」
これは彼もわかっていることだ。全てを変えられる人間なぞ存在してはいない。そんなことは有り得ないのだ。人間が不完全な存在

だからである。
　それができるのは神だけだ。シャイターンもまた人間である。彼は熱心なムスリムでもある。そのムスリムとしての信仰心もまた彼にそれを不可能なものであると教えていた。
「連合やエウロパとは違うからな」
「そうです、何もかもが」
「何もかも、か」
　シャイターンは弟の言葉にまた呟いた。
「どうしてもそうなってしまうものか」
「はい。サハラにおいてはそれは絶対に変えられません」
　アブーはまた述べた。
「兄上だとしても」
「そうだ。私もまたそれはできない」
　苦い言葉で述べてきた。

## 第二十六部第三章　女王の国その五

「思えば難儀なものだ。人口のうちの半分がそれだけで徴兵対象から外される」
「ですが女は戦場には」
「送れはしない。サハラにおいてはな」
「そうです。ですからこれに関しては」
「諦める他ない」
冷徹に合理主義に徹すればそれは可能でありせねばならないことであった。しかし侵攻がそれを阻む。人は機械ではない。信仰という心もあるのだ。心に反することは容易にはできないものなのだから。
「連合では女の元帥もいたな」
「女の国家元首もまたざらです」
アブーはまた答えてきた。連合においては女性大統領もまたごく普通に存在している。言うまでもなく日本の天皇陛下は女性であられる。これもまたサハラから見れば実に奇異なことである。シャイターン達もまたそこに言及してきた。
「日本の皇帝、いや天皇だったか」
「はい」
他の国では皇帝という同義語であるがあえて『天皇』と呼び替えた。なおエチオピア皇帝は紛れもなく『皇帝』と呼ばれている。名称が違うだけであるが。
「女性であったな」
「あの国では過去何人も女帝が出ています」
アブーはそう述べてきた。
「こうしたことはフラーム兄上の方がよく御存知ですが」
「あいつまで連れて行くわけにはいかないからな」
シャイターンはこう返してきた。彼は留守居役を務めていた。本

質的に宗教家であり文官であるのでそういう役になったのである。
「ええ。それでですが」
「女帝だな。サハラでは今まで存在しなかったものだ」
「その通りです」
アブーはまた答える。
「だからこそあの国は私にはわかりません」
「わからないか」
「皇帝とは至高の座」
これはこの時代においても同じである。皇帝とは複数の民族、複数の宗教の上に君臨し、それを治めるものであるがそれだけではない。多分に宗教的な意味もあるのだ。
日本の天皇陛下もそうであられるし中国の皇帝も然りだ。天子という言葉がそれである。また欧州の皇帝はローマ帝国の後継者という意味があった。ロシア皇帝は東ローマ帝国皇帝、即ちビザンツ帝国の後継者であったし神聖ローマ帝国は西ローマ帝国の後継者であった。カール＝マルテルも然りである。
それはサハラにおいても同じでありオスマン＝トルコの皇帝は政治においてはスルタン、宗教ではカリフとなり絶対者となったのである。サハラにおいても皇帝とは絶対者なのである。
「それが女のものでもあるとは」
サハラならではの考えであると言えた。やはり男尊女卑があるのは否めない。
「妙なものです」
「宗教観の違いだ」
シャイターンは弟にそう答えてきた。
「日本では神は多くいるな」
「はい」
連合の多くの宗教ではそうである。一神教と多神教である。
「日本では太陽が最も貴いとされる」
「だからこその太陽の国ですか」

「そうだ」
これもまたこの時代でも変わらない。日本の国旗は日章旗であり太陽がその紋章なのである。その太陽を司る神が重要なのは言うまでもない。
「その太陽神だが」
「確か女性神でしたね」
「その通りだ」
その言葉に頷いてみせる。
「その太陽神が今存在している神の中で最も尊いとされているのだ」
「今存在している！？」
アブーはその言葉にまず注目してきた。
「それはどういうことでしょうか」
「日本の神話は独特だ」
彼はそう弟に述べてきた。
「神が出ては消えていくのだ」
「また異様ですね」
彼はそれを聞いて眉を顰めさせてきた。

## 第二十六部第三章　女王の国その六

「神が消えるとは。どういうことなのか」
「日本の神話はまた特別なのだ」
シャイターンはそう説明してきた。話が妙な方向に向かう。
「特別ですか」
「一環した物語になっているが主人公は一環していないのだ」
「はあ」
「だからこそ神が出ては消える。遠くの彼方に消えていくのだ」
日本神話というものは不思議なものである。重要な神が次々と出ては消えていくのである。そうして物語が進んでいくのだ。それを理解するのは中々難しいことでもある。
「それで今存在している神ですか」
「イザナギ、イザナミにしろそうだ」
所謂兄妹で国を築いた神々である。彼等は何時の間にか物語に出なくなるのだ。それからどうなっているのかは全くわかりはしない。
「消えてしまった」
「それで太陽神が存在している中では、となるのですか」
「そういうことだ。天照大神という」
その神の名を呼んだ。
「それがその神の名だ」
「そしてその神が女性ということですか」
「そうだ、最も貴い太陽神が女性神なのだ」
「日本独自の考えに近いですね。太陽が女性だとは」
実は韓国においてもそうである。なおサハラにおいては太陽はあまりいい存在とはされていない一面がある。これはアラブからであり太陽は日中に世界を焼け焦がす忌まわしいものでありそれに対して月は夜の中で世界を癒してくれる有り難い存在なのだ。サハラでは月の方が尊ばれるのである。

「それがそのまま女帝につながっている」
シャイターンはまた述べてきた。
「最高神が女性なのだしな」
「成程。確かに日本ならではです」
「そういえばだ」
シャイターンはまたあることに気付いた。
「もう一つの連合の皇帝だが」
「エチオピア皇室ですか」
「その租はシバの女王だったな」
「はい」
神武天皇と同じく伝説の域の話であるがはじまりはそうなっている。従ってエチオピアという国の成立は不明とされている場合があるのだ。
「確かスレイマーンとの間の子の子孫で」
「そうだったな」
スレイマーンとはソロモンのイスラム圏での名称である。なおコーランにおける彼は聖書とはその最後がかなり違っており堕落もせず杖を持って立ったまましんでいる。同じようにダビデにも曇りはなくキリストも生きているのだ。ここが暗いものが多い聖書とは全く違っている。ムハンマドという人物の人間性が出ているのであろうか。
「それを考えると彼等も女性の影響下にある。それも強くな」
「そうなりますか」
「また日本を出すがあの国に天理教があるな」
「はい」
「あの宗教の教祖もまた女性だ」
中山みきという。天保九年よりはじまるこの宗教の教祖である。天理教においては『おやさま』と呼ばれている。一説にはキリスト教におけるキリストに近い存在と言われている。
「日本はその中でも女性の力が強いな、やはり」

「女の力ですか」
アブーはそれにはどうも懐疑的なようであった。それが顔にも出ている。
「首相もそうだしな」
「ああ、伊藤首相ですね」
アブーは今度は伊藤のことにも気付いた。
「あの国は天皇も首相も女なのですね」
「オムダーマンも首相は女だがな」
オムダーマンは少なくとも文官の分野では女性の進出が盛んである。もっともこれはサハラ全体で言えることだ。といっても程度で言えば連合やエウロパよりは遅れているのだ。
「はい、そうですね」８
アブーはまたそれに頷いた。
「それを考えれば女もまた多いですね」
「人間の半分だ」
シャイターンはまたこう言ってきた。
「多いのも当然だ」
「それはそうですが」
「何とか使いたいものだ」
シャイターンはまた言う。
「その力を」
「力を上手く使えば私のサハラがより完全になる」
「完全に」
「強く、誰からも攻められることのないサハラ」
これは今までのサハラの歴史から望まれてきたものである。十字軍や列強、エウロパに攻められ侵食されてきたサハラの歴史。それを終わらせたいというのが彼の理想なのである。人は誰しも大なり小なり理想を持っている。シャイターンもまたそうなのだ。

## 第二十六部第三章　女王の国その七

「それを維持する為にもな」
「その為には女の力をですか」
「できればな」
　またそれを述べる。
「力は強ければ強い程いい。それがサハラを守る」
「ですがコーランがあります」
「そうだ。それを考えると限界がある」
　コーランの戒律を破ることはできはしない。シャイターンにとってはそれは絶対のことである。なお彼とシャイターン家はシーア派の一派である。戒律はスンニーに比べて厳しい。
「しかしその限られた中でだな」
「やっていくしかありませんか」
「そういうことだ。もっともこれはどの世界でも言えることだがな」
「制約ですか」
「そういうことだ。全てに制約がある」
　全てについてそれはあるのだ。制約はどの世界にもあり完全に束縛やそうしたものがない世界というものはない。あるとしたらそれは無法である。無政府主義というものがあったがそれの行き着く先は荒野でしかないのだ。制約は人の世ならばあって然るべきものなのだ。
「だからこそ人なのだ」
「サハラにはサハラの制約がある」
「サハラの」
「それを理解することも大事なのだ。サハラを治めるのは何か」
「アッラーです」
　それがサハラである。イスラム世界であるサハラにおいてはアッラーこそが神であり戒律である。誤謬のない全てを司るものである

のだ。
「アッラーこそが」
「そう、アッラーの定められたものを冒すことは何もできはしない」
「悪魔ですらも」
イスラムの戒律では悪魔は人を試す為にアッラーが使役している存在なのだ。アッラーの力はキリスト教のヤハウェの比ではない。カルヴァンの予定説もまたイスラムには既に入っていた。全てはアッラーの思われるまま、それがイスラム世界なのだ。
「だからだ。それを考えれば連合はな」
「非常に制約が少ないですか」
「少なくともサハラよりはだ」
それもまた連合の強みの一つなのだ。連合は多様な世界でありかなり多彩なのだ。制約はその分だけ少ない。一つの世界に支配されていれば制約はその一つの世界だけのものになり強固なものになる。だが多様な世界が錯綜していればその制約が小さくなる。それはそうしなければ動かなくなるからだ。連合は言うまでもなく複数の世界が錯綜している。その中では制約はどうしても少なくなってしまうのだ。
「その連合は我等にとっては」
「どうなるでしょうか」
「少なくともエウロパのように最初からいがみ合っているわけではない」
それはない。エウロパはサハラにとっては怨敵である。しかし連合とは交易でそれなりに深い関係があるがそれ以上のものは今のところはないのである。今のところは、だが。
「しかしだ。いずれは」
「変わるかも知れませんか」
「変わるかもな。しかしだ」
ここでまた言う。
「備えはしておくべきだ」

「備えを」
「連合は巨大だ」
その巨大さを今強く認識する。シャイターンは怖れを知らぬ者ではない。英傑といえど怖れは知るのである。それを知らなければ蛮勇になってしまう。蛮勇で多くのものを見ることはできはしないのだ。
「サハラが一つになった時にその巨大な相手と向かい合う」
「そうです。それは」
「かなりの脅威だ。厄介なことにな」
「統一してからもまだ先があると」
「ないわけがない」
シャイターンの言葉は真理であった。統一して全てが終わるのではないのだ。

## 第二十六部第三章　女王の国その八

「この戦いにしろそうだ」
話がアヤグーズとの戦いに戻った。
「コムでの戦いで全てが終わりではないのだ」
「戦いに勝って万々歳とはいきませんか」
「物語ならばそれでいい」
彼もまたこう言うのだった。一度の勝利でハッピーエンドになるのは物語の世界だけなのだ。それから続きもまた存在するのだ。究極的に言えば人の世にはハッピーエンドもサッドエンドも存在してはいない。人の世界が続く限りは終わりがないのだから。
「しかし人の世はそうはいかない」
「人の世では」
「永遠に何かが続く」
シャイターンはまた言う。
「戦いもそれに基くあらゆるものもな」
「政治もまた」
「果てしないものだ」
今度はこう表現してきた。
「少なくとも人には何時終わるかわかりはしない」
「それを御承知なのはアッラーだけ」
やはりアッラーであった。唯一にして絶対の存在こそがだ。
「さて」
シャイターンはその言葉を聞いて不敵な笑みを浮かべ言うのだった。
「アッラーは私をサハラの主に定められたが。それを真っ当できるかだな」
「兄上ならば」
アブーはそう兄に返す。

「必ずや果たせます。そうアッラーが定められていますので」
「そうだな。それではそれに従おう」
「はい。そして」
アブーはここで言ってきた。
「そろそろ作戦会議の時間ですが」
「むっ」
それを受けて時計を見る。見ればその通りであった。
「そうか、早いな」
「時は休まることがありません」
彼は言う。
「ですから」
「わかった。それではそれに従おう」
シャイターンは悠然と笑って言うのだった。
「時もまたアッラーが定められたものだからな」
「はい。それでは参りましょう」
「そうだな。ここで言うことは一つ」
シャイターンは言ってきた。
「コムでのことだ。いいな」
「やはりそれですか」
「それしかあるまい」
そう返した。
「まずはそれだ。コムでの戦いが我々にとって第一の関門になる」
「第一の」
「関門は一つではない」
こうも言った。
「まだある。だがそれを一つずつ越えることにより」
「果たされていく」
「そういうことだ。さて、あの女王は」
ブルコルジを見据えた。そこにはいなくとも彼女の姿を今はっきりと見ていたのだ。

「おそらく正攻法で来るぞ」
「正攻法で」
「彼女は誇り高い」
彼女の性格について述べてきた。
「牝獅子のその誇りがそうさせるのだ」
「では我々もまた」
「その牙を受けよう」
シャイターンは不敵に笑って述べてきた。
「受けるのですか」
「受けはする」
そのうえでまた言うのだった。笑みと共に。
「それで倒れるのでは？」
「いや、倒れはしない」
そのうえで笑みを続ける。
「それだけではな」
「自信がおありですか」
「人は私を魔王と呼ぶな」
「ええ、そういえば」
兄自身によって兄の話を振られるのはやや奇妙だがそれに応える。
シャイターンは確かに英傑であるがその陰のあるところと謀略を好むという噂から魔王と呼ばれているのだ。もっとも謀略を好むというのは真実であるが。

## 第二十六部第三章　女王の国その九

「魔王は獅子によっては倒れない」
彼は言う。
「決してな」
「それでは兄上」
「獅子の牙、恐れることはない」
言葉は断言に変わった。その断言こそが自信そのものであった。
「いいな」
「わかりました。それでは」
「任せておくのだ。しかしだ」
だがここでまた言った。
「しかし？」
「おそらく一戦では終わりはしないな」
「もう一戦といったところでしょうか」
「そうだ。国を一つ併呑するのは容易ではない」
今度はこう述べるのであった。
「決してな」
「それは承知しています」
アブーもその言葉に頷く。彼とてそれなり以上の政治センスは備えているし素養も身に着けている。そうでなければシャイターン家の者にはなれないのだ。
「それではだ」
その弟に対して問うてきた。冷静な声で。
「その戦いは何処だと思うか」
「そうですね」
彼はそれに応えて述べてきた。彼もやはり冷静であった。
「おそらくは首都アッサルーム近辺でしょうか」
思案する目で述べてきた。

「あそこが西方の最大防衛ラインですし」
「そうだな」
シャイターンもそれに頷く。正解だということだった。
「アッサルームを陥落させなければおそらくは」
「やはりそうですか」
アブーはそれを聞いて納得した。それならば話は早かった。
「それではコムで勝利を収めたならばその後はやはりアッサルームへ進撃していくことになりますね」
「無論最初からそのつもりだ」
シャイターンは当初の計画を述べた。やはり話はそこに至るのであった。
「そうしてアッサルームを今後の戦略拠点とする」
「そこから西方を攻めていくのですね」
「その通りだ。西方において最も重要な場所だからだ」
アッサルームは単にアヤグーズ王国の首都であるばかりではないのだ。ハサン西方、即ち東方の辺境において最も重要な星系の一つでありそこを攻略したならば西方各地へ兵を進めることが可能なのだ。彼がアッサルームを狙っているのはそうした理由からだ。
「だからこそだ」
「それでは兄上」
アブーはそれを聞いたうえでシャイターンにまた問うのであった。
「一気にブルジルトまでは攻めないのですか」
アヤグーズの宗主国であるハサンの王都である。言うまでもなくこの星系こそが彼等の最終的な戦略目標である。アブーはそこまで一気に兵を進めると思っていたのだ。
「そうだ」
シャイターンは弟に対して言ってきた。
「確かに一気に攻め取るのも一つの方法だ」
「はい」
アブーも兄のその言葉に頷く。

「アッサルームを拠点としてブルジルトに攻め込むのが妥当だと思いますが」
「それは最終的な段階だ」
「次の次の段階ではなく」
「幹を斬るにはまずは邪魔な枝を切り取る」
今度はこう言うのだった。
「その枝こそが属国達だ。属国を全て切り払い」
「そうして幹を」
「わかったな。確かにブルジルトは攻略するがそれは今の段階ではない」
「より後であると」
「わかったな」
そこまで述べてまた弟に言うのであった。彼は今完全に宙図を見ていた。アヤグーズとその周辺の宙図をだ。
「それではコムに向かう」
「わかりました。しかし」
アブーは大きく息を吐き出した後で述べるのであった。
「ハサンを倒すのは容易ではありませんね」
「伊達に長きに渡って大国を務めているわけではない」
それを断言する。
「そう簡単に勝てるとは思わないことだ」
「だからこそ一つずつですか」
「チェスでもそうだ」
チェスに話を例えてきた。彼の言葉は順調に全てを進めていっていた。
「キングを攻略する前にビショップやナイトを消していかなければならない」
「ではあの女王は」
「クイーンだな」
不敵な笑みを浮かべてみせてきた。

「それも勇敢な」
「勇敢なですか」
「まずはクイーンを攻略する」
宙理から敵将に話を戻す。彼が果たすべきことが多いことの証であった。
「クイーンを攻め取り次には」
「まだキングは遠いですね」
「最初の段階に過ぎない。だからこそ」
「だからこそ」
「まずは枝からだ」
また宙図に話が戻る。話は複雑に動く。
「わかったな」
「わかりました。それでは」
「しかし。これはどう評価されるかな」
彼は今度は自信の評価について言うのだった。
「後世の歴史家達は」
「それならば容易に想像がつきます」
アブーは答えてきた。
「そうだな。成功すれば見事な戦略になり」
「失敗すれば杜撰な戦略となります」
「そういうことだ」
彼はそれに応えて言う。

## 第二十六部第三章　女王の国その十

「後世の歴史家達は結果を前提にして言う。成功すればそれは見事なものになり失敗すれば杜撰なものになる。ある意味非常にわかりやすいものだ」

シニカルだがクールな言葉であった。実際に歴史家というものはそうしたところがある。だからといって自らを高みに置いて過去の人間を裁くこともまた問題であるが。過去においてはそうした歴史観はマルクス主義的歴史観において顕著に見られたであろうか。何かを絶対的な価値観としてそれにより他のものを低いものとして見るならばそれは傲慢以外の何者ではない。共産主義者達はそうした意味で神を否定して自らを神のような存在と思い込んでいたのかも知れない。人は神にはなれない。だからこそ人なのだから。

「だからだ。つまり」

「これについては気にすることはありませんか」

「気にしたところでどうにもなるものでもない」

今度はこう述べた。

「未来に行くことはできないのだからな」

「はい」

「そしてだ」

今度は別の存在に言及してきた。

「もう一つは」

「もう一つは？」

「現在の批評家達だ。彼等の言うことはそれはそれで面白い」

楽しげに述べてきた。

「実のない、取るに足らない言葉も多いが」

「中には取り入れるべきものもある」

「だから面白いのだ」

笑みもまた楽しげなものになっていた。明らかに彼はそうした自

分への批評を楽しんでいた。そうしたことを楽しめる度量も備えているのだ。
「実のない意見でも見ていて面白いものは多い」
「特にネットでは」
「そう。とりわけ連合のネットが最も面白いな」
「連合のですか」
「そうだ」
弟に対してその楽しげな笑顔で述べてきた。彼もそうした楽しみを知っているのだ。
「実に好き勝手書いている」
「当事者ではないからでしょうか」
「それはある」
当事者でないということはそれだけでかなりの負担ではなくなる。少なくとも精神的な負担はない。その分だけ気がかなり楽なのである。
「しかしだ」
「それだけではないと」
アブーはそこにも何かを感じて問うてきた。
「そうだ。彼等の特徴はそれだけではないのだ」
彼は言うのだ。
「それだけではない。彼等は当事者でもかなり好き勝手に書く傾向がある」
「ほう」
アブーはそれを聞いて面白そうに声をあげる。
「そうなのですか。それはまた」
「面白いか」
「ええ。当事者なのに好き勝手に書けるとは」
「酔狂と言うべきかな」
また言ってきた。
「彼等は」

「酔狂と言うか何と言うか」
アブーは言葉を選びながら続ける。連合はいい意味でも悪い意味でも懐がかなり深い勢力なのである。そうした当事者としての意識を客観的に見る風潮も存在しているのである。
「またそれは」
「独特と思うか」
「独特という以上に」
アブーはまた述べる。
「どうにも。それだけのものがあるように思えます」
「実際に連合のネットを見てみたくなりました」
「銀河語はできたな」
「はい」
兄の言葉に頷いて答える。シャイターン家の者は語学には堪能な方である。アラビア語だけではなく銀河語や新ラテン語も話せるのである。無論ヒンズー語もだ。
「では覗いてみるといい」
兄として言う。
「いい勉強になるからな」
「わかりました。それでですね」
また問うた。
「それ程までに好き勝手に書いているのですか」
「私もかなり書かれる時もある」
「兄上も」
それには顔を顰めさせてきた。目も同じようにさせている。
「御前も書かれているぞ」
「私もですか」
これは意外であった。思わず目を丸くさせる。

## 第二十六部第三章　女王の国その十一

「どうしてですか？」
「御前もシャイターン家の者だ」
そのうえで言ってきた。
「それ自体が名前を知られている。それにティムール軍の将でもある」
「それでですか」
「そうだ」
答えてみせた。それはアブーが自覚していないものであった。
「だからこそだ」
「しかし」
アブーは首を傾げながら述べてきた。
「私が連合にまで知られているとは」
「連合の者達の目はかなり広いぞ」
「広いですか」
「それもかなりな」
また述べる。
「御前のことも細かいところまで知っているしティムールについてもな」
「ティムールについてもですか」
「そう。機密に関わりそうなことまでな」
流石にそれを語る時は顔が剣呑なものになっていた。彼としてもそれだけは看過できないものがあり独自に情報の漏洩場所を探してもいるのだ。
「知られている」
「どうしてそこまで」
「機密に関しては私も調べている」
その漏洩場所を探しているということをアブーにも告げた。やは

り真剣な顔であった。
「もっともそれは我々だけでもない」
「といいますとオムダーマンやハサンもですか」
「そうだ。まさかとは思うが我々の中の誰かの言葉がそのまま連合の誰かの耳に入ってネットにまで流れているのかも知れないな」
「何と」
しかしそれは大いに可能性のあることなのだ。この時代においても結局は口コミというものは大きな存在なのだ。人の噂に戸口は立てられずそれがネットと合わさってティムールからサハラにまで流れてい来るというのも可能性としてあるのも事実なのだ。
「それは大変なことなのでは？」
「流石にトップシークレットまでは流れてはいないがな」
「それでもです」
「連合にはそうした人材も多い」
シャイターンは連合についても語る。
「あらゆる情報が集まっているのだ」
「流石は四兆の人口といったところでしょうか」
一口に言ってもそれはあまりにも膨大なものである。サハラの二十倍である。それだけで驚異的な力であり差なのだ。シャイターンもそれはわかっていた。
「やはり」
「それもあるが。技術もある」
「ネットの技術ですか」
「我々が特化しているのは軍事に関してだ」
サハラは戦乱に覆われ続けている。だからこそそうした技術が進歩してきたのだ。だがそれも今の連合軍の前ではかなり劣るのも実情であった。流石に実戦経験やあらゆるノウハウはサハラの方が上だが。ハードウェアでは凌駕されてしまっているのである。
「そうした方面ではな。ハードウェアもソフトウェアもな」
「はあ」

「残念だがそうした事情がある」
「わかりました。しかし」
それでもアブーは言うのだった。
「そこまで知られているとは。具体的に見れば驚くことになるでしょうか」
「そうだな。そこまで知っているのかと必ず思う」
険しい目で述べる。
「そこを通じてオムダーマンやハサンにも我々のことは知られている」
「第三者を通じてですか」
「無論我々にもそれは言えるがな」
そうも言う。これもまた事実だ。
「私も彼等のことはかなり知った」
「お互い様ですか」
「それもあるがもう一つ面白い使い方がある」
「もう一つ？」
「そうだ。それを言おう」
弟に何かを教えるような言葉になっていた。それこそが最も重要であると言わんばかりであった。実際にシャイターンはそう考えていたのであるが。

## 第二十六部第三章　女王の国その十二

「さっきも言ったが好き勝手書かれている」
「はい」
その言葉にまた応えて頷く。
「だが他人が書いている。それだからこそ」
「だからこそ」
「客観的な目なのだ」
それこそが核心であった。そこを指摘してきたのだ。
「客観的ですか」
「どうしてもわからないものだな。自分の細かいところは」
「ええ、確かに」
その言葉にも頷く。
「それを見ることもできる」
「ということはあれですか」
それを聞いてすぐにあるものを思い出した。
「リア王で言う道化のようなものですか」
「あそこまで品があるわけではないがな」
それは確かだ。ネットはそのままの感情が出る。だからかなり品性に欠ける言葉もよく見られる。酷いものになると罵詈雑言の類まである。
「しかしだ。役割は近いな」
「サハラのものよりもですか」
「そうだな。連合のものの方がそうしたことが顕著だ」
それもはっきりと述べてきた。
「かなり出ているぞ」
「それだけに毒も強そうですね」
ネットは無害なものでは決してない。毒素もまた強く持っているのだ。ネットの毒に耐えられなければネットはできないというわけ

でもないが。
「そうだな」
そしてシャイターンもそれはわかっていた。
「そちらもサハラのものより強い」
「やはり」
「惑星開発の技術もな」
そう告げる。
「彼等はあらゆる分野で我々よりも秀でた技術を持っている。それは事実だ」
「そうなったのはやはり」
「そうだ。平和のおかげだ」
アブーに告げた。それこそが連合発展の要因なのだ。
「一千年の平和。それこそがな」
「今の連合を築き上げたと」
「そもそもが豊かだった」
また言う。
「何かを手に入れるのに争う必要はなかった。別の星系に進出すればよかっただけだからな」
「そこが違いますか」
「人は何かを手に入れる為に窮しているからこそ争う」
それは真実だ。人が争うのには理由があるのだ。何も人が特別好戦的でも残忍でもないのだ。極論すれば生きる為に争わなければならないのである。
「そうした理由がなければな」
「争わないのですか」
「そうだ」
シャイターンは人というものを取り立てて善だとも悪だとも考えてはいない。強いて言うならば中立のものだと考えていると言えばいいだろうか。人というものは所詮は不完全なものであり完全な善にも完全な悪にもなれないものだ。だからこれは言うならば当然だ

った。
「連合は争う理由がない」
こうも述べる。
「何かを欲しければ開拓をすればいいのだからな」
「そうして一千年ですか」
「平和の理由はそれだ」
そう結論付けてきた。
「争わずとも得られるものがあった。そこが我々と違うな」
「確かに」
兄の言葉にまた頷く。
「それに我々は常に覇権を争ってきましたし」
「そうだな。連合では統一国家になろうという考えはない」
そうなのだ。連合の母体はあの国連であり元々そうした考えはないのである。米中露といった伝統的な覇権主義国家もまたあくまで自分達が大国でいたく、そして連合で強大な影響力を行使したいのであり何も連合を統一したいとは考えていないのだ。そうした意味で彼等もまた連合というものを不可欠なものとして考えているのだ。
「そこも我々と違う」
「成程」
「連合の憲法だが」
連合の憲法にも話がいく。

## 第二十六部第三章　女王の国その十三

「各国間での交戦権はなかったな」
「はい」
それは連合設立時にまず決められたことである。内戦防止の為だ。またそれに違反したならば加盟国全ての軍隊でその当事者に制裁を加えることになっている。また経済的な制裁も発動される。だからこそ誰もそうしたことをしなかったのだ中央軍設立までにも一度も内戦が起こっていないのはそうした理由からだ。
「それも法律だけによるものではない」
「争わずともよかったからですか」
「そういうことだ。そしてその結果だ」
「連合の強大化は」
「我々もまた平和にならなければならない」
シャイターンは言った。
「平和になればあらゆるものが発展する」
「ええ」
「だがその為には」
「我々が勝ち残らなければならない」
「平和をもたらす戦争だ」
逆説的だがその通りであった。平和を得るには時として戦わなければならないのだ。それもまた真実なのだ。真実は一つでもない。
「だからこそ。勝利を収めるぞ」
「はっ」
またしても兄の言葉に頷いた。
「それでは」
「コムには既に偵察部隊は送っているな」
「無論です」
その言葉に頷いてきた。

「そうして今調査中です」
「調査中か」
「間も無く結果報告が入ると思います」
そう兄に報告を述べる。
「それで如何でしょうか」
「なるべく迅速に報告が欲しいな」
シャイターンはそれを聞いて言うのだった。
「早ければ早い程いい。だが」
「だが？」
「まずは正確さだ」
そこも重視する言葉を出す。
「いいな」
「無論です」
「サハラもまた栄えるべきだ」
これもまた当然の願いだった。どのような国家も勢力もそうなる資格があるのだ、それがないと言うのはあまりにも傲慢である。その対象があまりにも邪悪でない限りは。
「それだからこそ」
「はい。それでは兄上」
ここでアブーは時計を見て兄に告げてきた。
「そろそろですが」
「食事か」
「はい。どうされますか？」
「ここに持って来るように言ってくれ」
そう弟に告げる。
「それでいいな」
「わかりました。それでは」
兄の言葉に頷く。
「そのように」
「今日は野菜や果物だけだったな」

今度はこう問うてきた。
「確か」
「そうでしたか？」
兄の言葉に目を丸くさせる。はじめて聞いたといった顔であった。
「いや、そこまでは」
「朝もそうだっただろう」
シャイターンはそう弟に言葉を返してきた。
「クスクスだったが肉は入っていなかったな」
「そういえば」
言われてはじめてそれに気付く。
「そうでした」
「そうだな。まあ時にはそれもいい」
「肉がないというのも」
「食べるものは何も肉だけではない」
贅沢に慣れたシャイターンが言うとどうにも嫌味ったらしくも聞こえる。しかしこれもまた贅沢であるというのは彼は自分でわかっていた。

## 第二十六部第三章　女王の国その十四

「しかしだ。贅沢は肉だけではない」
「肉だけでは」
「野菜や果物でもできるものだ」
「高価な食材を使うのもそうですね」
「それもある」
その言葉も認める。
「しかしそれだけではない」
「工夫もですか」
「そうだ。贅沢もまた文化だが」
実際にローマ帝国は贅沢を文化にしていた。あくまで上流階級だけであったがそれを文化としたのは事実である。よいか悪いかは別にしてだ。確かにそれは腐敗と紙一重であるが贅沢もまた文化であるのだ。絶対的な悪かというとそうではないのだ。
「食事はその中でも特にそれが味わえるものの一つ」
「確かに」
「しかし我々はまだ全ての贅沢を知らない」
「全てのものを」
兄の言葉に顔を向ける。
「知りませんか」
「少なくともこれも今のサハラでは無理だ」
また話はそこに向かった。戦乱に明け暮れて贅沢も何もない。真の贅沢というのは平和であればこそなのだ。何故なら文化は平和であれば最も栄えるものだからだ。
「まだな」
「全てのサハラの者が贅沢を知ることができれば」
「だが堕落であってはならない」
シャイターンは言葉を鋭くさせた。

「堕落ではなく」
「贅沢もいい。しかしそれに溺れては駄目なのだ」
厳しい言葉になった。なお連合は贅沢に馴れ、そこに溺れているという批判がサハラにはある。それはある意味真実であり連合軍ののどかさもそれだとサハラの者達は言ったりもする。いささか的外れな批判であるがそうしたふうに見られているのも真実だ。
「そうなれば剣が鈍る」
「鈍りますか」
「そうだ。連合は剣を持つ者達は大したことはなかった」
そう彼等を評する。それは事実であった。連合の将兵は軍律を守ることはかなり厳しいが訓練自体は穏やかなのだ。そのうえ実戦経験もない。これで強い兵士になれというのも無理な話である。八条も強兵は期待していなかったのだ。あくまで数と装備、補給で戦うことを念頭に置いて中央軍を運営していたのである。強兵ではなくシステムによって戦う軍人達をである。
「強い兵士ではなかったと」
「そうだ。あれはあれで戦い方があるのだがな」
「しかしサハラは」
「強い兵士でなくてはならない」
シャイターンは断言する。
「今後もな」
「サハラの者達は精悍です」
アブーは静かに述べた。
「願わくばそれが永遠に」
「千年の戦いがそれを維持してきたが」
シャイターンは言うのだった。
「一つになればどうかな」
「それが消えていくでしょうか」
「永遠に精悍な者達もいるまい」
シャイターンの口調は少し否定的なものであった。その理由もま

たはっきりしていた。永遠にそうであり続けるものなぞ存在しないからだ。
「今後は落ちるかもな」
「そうですか。そうなれば」
「危険だというのだな」
「はい」
静かな声で述べた。
「やはり堕落すればそこから腐っていきますので。精悍で曇りのない今のサハラの兵士達でなければ連合やエウロパを防げはしないのでは」
「我々は数では大きく劣る」
それは否定できない事実だ。どうしようもない。
「それをカバーするのは容易ではないのは事実だ」
「ええ、ですから」
「いずれは我々だけでは存在できないかも知れない」
「兄上」
アブーはその言葉に思わず言わずにはいられなかった。
「それでは我々は」
「違う。まずは落ち着け」
弟が少し落ち着きを失っているのを感じてそう声をかけてきた。

## 第二十六部第三章　女王の国その十五

「焦る話ではない」
「それはそうですが」
「食事は御前の分も用意されている筈だ」
静かなまま笑ってまた弟に述べる。
「二人でまた話を続けよう。いいな」
「はい」
兄のその言葉に頷く。そうして落ち着きを取り戻させてまた言うのだった。
「サハラは一つになればそのままになる。そうして」
「そうして？」
「連合に入る可能性もないわけではないのだ」
「連合にですか」
兄のその言葉に顔を曇らせる。彼にとってはそれは実際にあるならばとても受け入れられないものであった。それだけはである。
「それはやはり」
「あくまで可能性だ」
シャイターンはそう前置きした。そのうえでまた述べる。
「それでだ。可能性としてはあくまで有り得る」
「可能性として。しかし」
「アブー、一つ問うておきたい」
シャイターンは渋い顔になる弟に対して問うてきた。
「はい、何か」
「御前は何を最も大事なものだと思うか」
「何がですか」
「そうだ。何が大事か」
そう弟に問うのだ。それは政治家として最も需要酔うなことの一つであった。

「国を預かる者として」
「それは言うまでもないではないでしょうか」
アブーはその問いに強い目で応えてきた。
「兄上、それは」
「では何だ？」
彼はまた弟に問うた。言葉が鋭く、強いものになっていた。まるで弟を試し、そのうえでその真意を探るようにだ。そこには強い意志が存在していた。
「それは」
「民です」
アブーは一言で述べた。
「やはりそれこそが最も重要です。民なくしては」
「その通りだ」
シャイターンもまた同じ考えであった。その通りである。彼はそれを忘れないような男でもなかった。野心はあるがそうしたものもまた解していた。そうした男である。またアブーも誇り高い男でありながらそれもわかっている男であったのだ。若くはあってもそれは弁えていた。
「民を護る為には」
「連合に下ることもよしだと」
「あくまで時と場合による」
そう付け加えてきた。
「連合が獰猛な存在であったならば」
「それは決してしてはならないと」
「そうだ。だが」
その前置きを置いてからまた言う。言葉を慎重に進めている。
「若し我々が凶猛な相手を前にして連合が我等を護ろうというのなら」
「連合に入るのもよしだと」
「全ては民なのだ」

彼は言う。静かな声で。
「民を護れぬ国になぞ存在する価値はない。全くな」
「だからこそこれまで多くの国が滅んできたのですか」
「その通りだ」
弟に答えて述べる。静かな声のままで。

## 第二十六部第三章　女王の国その十六

「連合はそれはある。だが我々は」
「これからですか」
「だからこそ一つにならなければならない。そうして一つになってからも」
「堕落せずに」
「そうだ。これはかなり難しいが」
やはりここでも否定的であった。将来に関してはどうも不安なものを感じていたのであった。平和を楽しむのはいい、だがそれに溺れてはならない。彼が言うのはそれであった。
「どうにもな」
「はい」
また兄の言葉に頷く。
「難しいですが」
「かつてエウロパに大きく傷を受けた」
エウロパのサハラ侵攻により大きなダメージを受けてきた。それをまた思い出すのだった。この侵攻はサハラにとっては十字軍に匹敵する災厄であったのだ。
「それを使うのもな」
「といいますと」
「教育だ」
彼は言ってきた。
「教育で教えることだな。何故サハラが攻められたのか」
「我々がまとまっていなかったからというだけではなく」
「そこだ」
弟の今の言葉に注意をしてきた。核心はそこだった。
「我々が弱かったからだ」
「兄上、それは」

「待て。ものは言いようなのだ」
また述べる。言葉遊びのようでそうではない。彼は言葉の魔術もまたわかっていた。それは複雑に言い換えることもできるし簡単に述べることもできる。彼はここでは簡単に言い換えることにしてきたのだ。それもまた政治のうちでもある。政治には言葉も必要だからこそ。
「つまりだ。エウロパの剣を跳ね返すには」
「力がなくてはならない」
「そうだ。つまりそこだ」
そこに注意を述べてきた。
「また攻められない為には」
「常に備え、鍛えておくと」
「そうだ。これで強い兵を備えることもできる」
それもまた政策である。強い兵を備えるのも。それに関して教育を使う。こうした政策は十九世紀からだが中々効果があるものなのだ。
「それを考えている」
「それでですね」
アブーはそれを聞いて述べる。
「それをした場合一つ問題が起こりますが」
「エウロパとの関係か」
「そうです」
それについても述べる。
「その教育によりエウロパとの関係は険悪なものとなるのではないでしょうか」
「連合とエウロパの関係のようにか」
「はい。それでもですね」
「今更そうしたことを言っても仕方あるまい」
シャイターンは言い捨てるようにして述べてきた。
「彼等に関してはな」

「それもそうですか」
「そうだ。最早エウロパはサハラにとっては怨敵だ」
こうまで関係が悪化しているのはひとえにあのサハラ侵攻とそれに伴う難民の発生に他ならない。サハラ北方の解放は長い間彼等にとって悲願であったしそれが連合との戦争の結果であれ果たされたというのは喜ばしいことであったのだ。それが密接に関係しているのはもう言うまでもないことであった。
「関係がどうなろうとな。最早問題はない」
「それではそのまま」
「そうだ。しかしそれにしてもだ」
ここでまた客観的な目になった。シャイターン独特の目に。
「エウロパも敵ばかり抱えているな」
「連合、そして我々ですか」
「そうだ。特に連合か」
両者の長きに渡る対立はサハラにおいても非常によく知られている。それこそが人類社会における大きな対立軸の一つであった。これもまた彼等はよく存じていたのだ。
「四十倍の差がある相手と対立するというのは」
「自業自得とはいえ大変なことであります」
「そうだな。だが我々としてはそれを利用させてもらう」
「はい」
「存分にな」
ここでは完全に政治家の顔になっていた。政治においては隙を見せる方が悪いのであり問題を抱えている方が悪いのだ。だからこそ今もこうした話になっているのである。
「使わせてもらう。では」
「食事に」
「そうだ、行くぞ」
「わかりました、それでは」
「うむ」

二人は長い話を終えて部屋を後にした。そうして食事に向かう。戦いの前にも政治は行われていた。シャイターンはそれを楽しみながら戦場にも思いを馳せるのであった。

# 第二十六部第四章　権威の失墜その一

## 権威の失墜

サハラが戦乱に覆われているその頃戦乱を終えたエウロパでは暗澹たる世界がはじまろうとしていた。それは敗戦の結果に他ならなかった。

連合との戦いによる敗北は彼等から領土や金、バチカンを奪っただけではなかった。奪うだけでなく与えたのだ。それは敗戦による衝撃であった。

平民も貴族もそれは同じで誰もが敗戦のことを考えていた。そうしてやるせない気持ちになりその中で沈むばかりであったのだ。

ある貴族のサロンにおいてもそうであった。バロック様式のその屋敷の中で彼等は楽しくパーティーを開いている筈であった。あくまでその筈だった。

「この屋敷もそうでしたな」

「ええ」

貴族達は酒を飲みながらうんざりした顔になっていた。そうして暗澹たる顔で話をしていた。

「連合軍が接収して」

「ここでも馬鹿騒ぎをしていました」

「その通りです」

パーティーの開催者である老貴族が客達に対して言ってきた。

「家の者に危害を加えることはありませんでしたが暇があると叫んで」

「そうですか」

「下品な音楽をかけて歌って騒いでいました」

「全く以って」

「とんでもない話でした」

貴族達は忌まわしげな顔でそれぞれ言うのであった。

「神聖なエウロパがそれによって汚され」
「今も傷跡を残している」
「しかもです」
貴族の一人がここでその忌まわしげな顔のままで述べる。
「我等は奴等にまったく歯が立たなかった」
「数が違いすぎましたな」
「そのせいで」
「いや」
老貴族はここで客達に対して言うのだった。
「それだけではないでしょう」
「といいますと」
「我々はあらゆることで負けたのです」
彼は沈んだ顔でそう言う。全てにおいて絶望したかのように。
「戦争だけでなく政治でも」
「政治でも」
「講和会議でも敗れました」
オリンポスでの会議はおおむね連合の望み通りになった。それでも彼等は己の力を見せつけエウロパを圧倒した戦争もまた政治の一手段であるからそもそも政治においては完敗しているのであるがそれも彼等の心に刻み込まれたのである。
「バチカンも奪われ」
「国父ブラウベルグの名もまた」
「マラッカでしたか」
貴族の一人が沈んだ顔で言ってきた。
「確かあの回廊の新しい名前は」
「その通りです」
別の貴族がそれに答える。
「地球にある地名から取ったそうです」
「それは覚えております」
口髭を生やした洒落た外見の貴族が述べてきた。彼はその名前に

どうやら特別な思い入れがあるようであった。それが口ぶりで何となくわかった。
「我が祖先があそこにいましたので」
「おお、卿は確か」
「イギリス人でしたな」
「そうです」
口髭の貴族は参加者達に答えてきた。
「かつてあそこは我が国の植民地に過ぎなかったのですが」
「それが今では」
「我等が国父の名を消して」
ブラウベルグはエウロパの者達、とりわけ貴族達にとっては神格化されている程の英雄なのだ。圧倒的に劣勢であったエウロパの指導者となって連合の者達を圧倒し彼等を新天地へ導くきっかけとなったからだ。この時彼は沈みきっていたエウロパの者達を励まし指導した。まさに彼はエウロパにとって救世主であったのだ。
「当てこすりのようにその名をつけてくれましたな」
「しかもそれだけではなく」
また貴族の一人が述べてきた。
「ニーベルング要塞もまた」
「あれはアタチュルクでしたな」
「はい」
貴族達はその名も忌まわしげな顔で述べた。
「その通りです、確かあれはトルコの建国の父でした」
「トルコですか」
貴族達は今度は国の名で顔を顰めさせた。

## 第二十六部第四章　権威の失墜その二

「ヨーロッパの病人と言われた耄碌した者達が」
「今では連合の大国の一つですか」
それを実に疎ましく思っていた。心からである。
「彼等が言うにはかつてのオスマン＝トルコ以上の繁栄だとか」
「その病人以上のですか」
「変われば変わるものです」
なおこれはその病人と言われたオスマン＝トルコにも言える。オスマン＝トルコは長い間アジア、アフリカ、ヨーロッパの三つの大陸において覇を唱えた超大国であったのだ。その力は当時の西欧諸国、東欧諸侯を全て合わせたよりも強いと言われていた。
「あの中国にしろアメリカにしろ」
「植民地であったというのに」
清朝末期にアメリカ独立前のことである。やはり彼等にとっては連合の者達は植民地あがりの野蛮人達でしかなかったのだ。教育でもそう教えられてきている。
「日本とタイ、エチオピア位ですか。あとはリベリア」
「植民地でなかったのは」
「そうですな。新興国家にしろ全てかつては我々の情けで暮らしていた」
そういう感覚であった。
「それが千年前からつけあがり」
「今では我等を前にして勝ち誇っている」
「こんな馬鹿な話はありませんな」
彼等にとってはそうである。連合の者達にとっては千年前からまたしても復讐を果たしたことになる。話が完全に逆になっているのである。
「本来ならば今でも我々に仕えている筈だというのに」

「しかもですな」
ここでまた口髭の男が言ってきた。
「仲介役はあのマウリアです」
「そちらの召使であった」
「はい」
イギリス貴族として友人達に答えた。
「何たる屈辱でしょうか。そうしてそれにより生き長らえるなぞと」
「ですが生きていなければ復讐も果たせません」
「それもわかっています」
口髭の男はそれもわかっていた。屈辱に耐えているというわけである。
「生きていなければ復讐は果たせない」
「その通りです。ここは耐えて」
連合の諺では臥薪嘗胆という。もっともエウロパ貴族達にとってはこうした諺もまた不快極まるものである。銀河語も必要だから学ぶのが常であり連合の文明も文化も彼等にとっては吐き気を催す不愉快なものであるのだ。そういうものでしかないのである。
「復讐の時を待ちますか」
「それしかありませんな」
老貴族も言うのだった。
「今は」
「しかしです」
ここで客の一人が言うのだった。
「復讐をするのならば」
「するのならば？」
「それは地獄のようにです」
モーツァルトのオペラ魔笛第二幕の有名なアリアの題名である。超人的な技量を要求されるアリアでありこれを歌うことはコロトゥーラ＝ソプラノにとって非常な名誉でもある。
「地獄のようにですか」

「はい」
他の者達にも応えてみせる。
「我々の恐ろしさを教えてやりましょうぞ」
「確かに」
老貴族もその言葉に頷くのだった。
「我々としてもこのまま負けているわけにはいきませんからな」
「その通りです。だからこそ」
「復讐の時を待ちますか」
「その通りですな」
彼等はそれぞれ言う。
「そうでなければ貴族の誇りの意味がありません」
「そう、誇りです」
また誰かがそれを言ってきた。
「貴族は誇りによって生きるもの。それが傷つけられたならば」
「晴らすのが道理」
「しかしですな」
中の一人が冷静に述べる。
「しかし？」
「戦力に差があるのもまた事実」
彼は言う。
「それをどうにかしなければなりませんな」
「腹立たしいことに」
口髭の男がまた言った。

## 第二十六部第四章　権威の失墜その三

「それに関しては我々が大きく劣るのは事実ですからな」
「そうです。こればかりは」
「蛮人共も不相応な力を手に入れたものですな」
　実際のところは連合の方が進んでいる部分もかなり多い。科学技術は総合的に見て連合は他の勢力を圧倒している。これは国力がそのまま科学技術を支えているからだ。文化や芸術においても連合はかなりのものを誇っている。そうした意味で彼等は連合に対して偏見を持っているのは否めない。もっとも連合は連合でエウロパの貴族文化というものを唾棄すべき階級社会の象徴として徹底的に嫌悪しているのであるが。どちらもどちらと言おうか。
「全く以って」
「我々が手に入れておくべきものが彼等の手にある」
「何時か取り上げなければ」
　そうは言っても力の差は歴然としている。それを考えれば遠吠えにしかならない。
「その為にですな」
　老貴族が言う。
「今は力を回復させなければなりませんな」
「全くです」
「あの戦争は。実に痛かった」
　エウロパ軍は掻き集めた五百個艦隊のうち三割に匹敵する約百五十個艦隊を失っている。その損失は二度と回復できない。また戦禍による損害もかなりのものだったのだ。
「しかしこの痛みから立ち直り」
「何時かは」
「その為にはです」
　老貴族は目を光らせてきた。これが本題であった。

「どうやらここは優れた指導者が必要ですな」
「というとあれですな」
貴族達は彼の言葉に目を光らせてきた。宴の場であるがそこにはかなり不釣合いな鋭い目の光が場を支配したのであった。既に別の意味での宴の場になっていた。
「今度の総統選挙は」
「誰を支持するべきか」
「ラフネール卿は次の選挙には出られないそうです」
「ほう」
「やはりあの敗戦により」
貴族達はその言葉に目を向けてきた。
「既に改革派はあらゆる選挙で敗戦が続いていますし。それの責任もあるのでしょう」
「まあ当然ですな」
「これであの方が出馬されるとなるとある意味で尊敬できます」
言葉がシニカルなものになっていた。エウロパ改革派の一連の選挙敗北は敗戦とそれによるエウロパの国力衰退が理由であるのは言うまでもない。
「それでは改革派は次の総統立候補者は誰か」
「今はそれを選んでいるようですな」
「ふむ。では暫く改革派も様子見ですな」
ここで改革派『も』という言葉が出た。ここに言葉が持つ複雑な意味が出ていた。これにおいては銀河語も新ラテン語も同じことであった。言葉には必ず意味があるのだ。
「保守派と同じく」
「何か暫くは双方の総統立候補者が誰なのか見定めることになりそうですな」
「いや」
ところがだ。ここでその口髭の男が言うのだった。
「そうではないかも知れませんぞ」

「といいますと」
「一体誰が」
「話は聞いております」
老貴族がその口髭の貴族に対して言葉をかけてきた。
「あの方ですな」
「そう、ギルフォード侯爵です」
ここでも彼の名前が出て来た。最近つとに名前が知られている人物である。エウロパでは今や著名人の一人とまでなっている程だ。

## 第二十六部第四章　権威の失墜その四

「彼もまた動くかも知れません」
「ギルフォード侯爵ですか」
貴族達はここで彼の名を口にするのであった。当然彼等もギルフォードのことはよく知っている。それも彼の巧みな宣伝の結果である。
「どうなのでしょうか」
「あの戦争では活躍したそうですが」
「少なくともイギリスにおいては切れ者として知っている者は知っていました」
何とも微妙な返答が返された。
「少なくともですか」
「はい。何分まだ若いのでそう表に出ることはありませんでしたが」
「しかし切れ者なのですね」
「左様です」
口髭の男は述べる。
「それは間違いありません」
「成程」
「左様ですか」
「議会でも優れた政策立案と事務処理を行っていましたし」
政治家にとって最も求められる能力のうちの二つである。
「学生時代は神童と謡われていましたし」
「神童ですか」
「確か侯爵のご出身は」
「オックスフォードです」
口髭の男は答える。言うまでもなくイギリスの名門校である。この時代においてもエウロパ屈指の大学であり連合軍もイギリスに入った時にはこの大学には一切手をつけなかった。市民の日常生活に

は当然ながら学園生活も入っており八条がそれには介入を許さなかったからだ。その中でもオックスフォードに関しては八条は特別に留意するように指示を出していた。これには八条の祖国である日本の歴史的な事情があったと噂されている。

実はオックスフォードはかつて日本の皇室の方々が留学される場所だったのである。連合とエウロパが決定的な対立に陥ってからは自然とそうしたことがなくなりむしろ日本の学習院が連合各国の帝室や王室の子弟の留学先になってしまいオックスフォードへの留学は過去のものとなっているが八条がそれを知っていたのだ。だからこそ彼はオックスフォードニは細心の注意を払ったのである。ちなみに連合各国の王族関係者達は学習院と日本宮内省の恐ろしいまでの厳格さに誰もが驚く。ケベックのアレクサンドラ王妃に至っては日本宮内省を鬼か何かとまで言っている程である。

「ほう、オックスフォードですか」

「そこではじまって以来の天才だと言われていました」

「学部はどちらで」

「法学部です」

また面白い学部が出て来た。特にイギリスに関してはだ。

「法学部だったのですか」

「そこで英国法をマスターしたそうです」

「何と」

何故面白いかの理由は簡単である。この時代に至るまでイギリスには成文法は存在していないのだ。ユナイテッド＝キングダムとしての法は当然ながらエウロパ中央政府の法の下にあるがイギリスの法としては成文法がないのである。

全ては慣習法なのだ。従って学ぶべきものは膨大なものになる。英国最初の女性首相であるマーガレット＝サッチャーはオックスフォードで法律を学んで弁護士になったがこれについては避けたのだ。その為『ズル』をしたと今だに言われているがそもそもこんなものを学ぶとなれば尋常ではない。サッチャーは冷徹さと強固な意志、

鋭い頭脳の持ち主だったが学者になるつもりはなかったのでそれは避けたのである。
「それはまた凄いですな」
「ですから神童と呼ばれたのです」
彼はそう述べる。
「おわかりでしょうか」
「ええ、よく」
「成程、それは凄い」
彼等もそれを聞いて納得する。彼等も英国の法については知っている。
「そうして戦場でもですか」
「ニョルズの戦いについてはよく言われていますな」
「英雄ですかな」
老貴族が述べてきた。
「ひょっとすると」
「さて」
しかし口髭のイギリス貴族はそれに対してはまだ懐疑的であるようであった。

## 第二十六部第四章　権威の失墜その五

「それはすぐにはわからないものでしょう」
「というと」
「彼もまたこれからでしょうか」
「今後の動き次第ですな」
　また言うのだった。
「それに関しても」
「ふむ」
「では彼に関しても様子見ですかな、まだ」
　貴族達はそう判断した。そうしてまた言うのだった。
「しかし。今は英雄が必要な時ですな」
「それは間違いありませんな」
　彼等はまた口々に言うのだった、
「今のこの状況から脱するには」
「英雄が」
「それこそあれですな」
　老貴族は満を持したかのような言葉を述べてきた。まるでその言葉を客人達全てに行き渡らせようとするかのように慎重に言葉を進めていた。
「かつてのアレクサンドロスやユリウス＝カエサルのような英雄が」
「カエサルですか」
　言うまでもなくエウロパにとっては絶対的な英雄である。エウロパの母体はＥＵであるがこれの源流はローマ帝国だ。そのローマ帝国を築いたのがカエサルなのだから。
「若しくはブラウベルグ」
　国父だ。エウロパにとってはカエサル以上かも知れない英雄である。その生い立ちは伝説、いや神話にまでなっており彼を知らぬエウロパの者達もまたいない。

「彼等が復活したような存在こそが必要なのでしょう」
「侯爵はそうなれますかな」
またギルフォードの名が出た。
「果たして」
「それはこれからわかること」
また言われた。
「もっともそれには資質が必要ですがね」
「そういえばですな」
貴族の一人がまた言う。
「英雄というものは不思議なものです」
「といいますと」
他の貴族達もその言葉に顔を向けてきた。言葉に何か誘われるものがあったからだ。
「エピソードを自分から作り出していくような」
「アレクサンドロス然りカエサル然りですな」
「そうです、もっとも創作であったり自分自身で喧伝していたりもありますが」
ナポレオンにしろそうである。英雄は神格化される為にそうしたエピソードが作られたりするものなのである。こうしたことは革命的な宗教家にも見られる。あるいは開祖か。釈迦にしろキリストにしろそうである。これは確かに宣伝を本人か周りの者、心酔する者達が行うということでもあるのだが英雄自身について来るものでもあるのだ。
「侯爵もそうなるでしょうかな」
「英雄になれれば」
この言葉が付け加えられた。
「おそらくは」
「結局はそうですか」
「英雄はある程度作られるものでもあります」
「自分自身がそうであると共に」

英雄とは確かに超人的な能力が必要条件となる。しかしその必要条件は一つではないのである。周りがそれを備えさせるものでもあるのだ。
「それが誰が作りますかな」
「我々ということになるでしょうな」
口髭の貴族が答える。
「やはり」
「ふむ、そうですか」
彼等はその言葉に応える。だが嫌がるわけでもない達観した顔になっていた。
「それではその英雄を待つとしましょう」
「我々が作り上げるものでもある英雄を」
「そうですな」
そう口々に述べる。述べながら同時にあることを考えていた。
「ただしですな」
老貴族が言うのだった。
「我々がそれを進んで行うようになるかも知れませんな」
「といいますと」
「カリスマによってです」
こう述べてきたのだった。

## 第二十六部第四章　権威の失墜その六

「その英雄が持っているカリスマにより」
「カリスマによりですか」
「その通りです。英雄が必ず備えているもの」
それこそがカリスマなのである。皆何故英雄に心酔するか、それはカリスマ故にである。英雄はカリスマを備えているからこそ英雄なのである。そういうことである。
「それが我々を捉えれば」
「我々は進んで英雄を飾り立てると」
「自然とそうなるものなのでしょう」
老貴族はそう述べて次にその際たる例を出してきた。
「あのヒトラーがそうであったように」
「ヒトラーがですか」
「はい」
頷くその顔が少し複雑なものになっていたのにも理由がある。ヒトラーが為したことはあまりにも大きい。ユダヤ人への迫害やドイツの敗戦もそうである。だが一度はドイツを蘇らせ第一次世界大戦の敗戦と恐慌により沈んでいたドイツを蘇らせたのも彼なのだ。それは紛れもない事実なのだ。ドイツを救ったという意味でヒトラーは英雄でありドイツ国民は熱狂的に彼を支持した。そうして彼等は進んでヒトラーという英雄を飾り立てたのだ。宣伝相であるゲッベルスの宣伝も確かに大きかった。だがそれと共にドイツ国民がヒトラーを飾り立てたのも大きかったのだ。ヒトラーユーゲント然りだ。ヒトラーは一人で英雄になったのでもなく彼だけが飾り立てたのでもないのである。彼を作った者達の中に紛れもなくドイツ国民もいたのだ。
ここで微妙な問題が起こる。日本とドイツの差だ。二十世紀後半にはこれで日本を責める『日本人』達が少なからず存在した。日本

とドイツの戦争責任は同じであると。それでドイツの責任の取り方を褒め日本を貶める。卑しいことこの上ない行動であるが古来より見られる方法でもある。

だがこれは誤りである。日本は単なる戦争犯罪を犯しただけなのだ。日本はナチスの如き人種政策をしたわけでも組織的な、軍の一部の者の『軍律に違反した』悪事ではなく『国家による組織的、計画的な』犯罪行為を働いたわけではないのだ。極東軍事裁判の異常性は通常の戦争犯罪、即ちどの国もしてしまうような過失犯を軍ではなく国家が確信犯で行ったナチスの悪事を裁いたニュルンベルグ裁判に基いて裁いたことである。ニュルンベルグ裁判自体が事後立法であり全く別の案件を裁いたことであるのだ。事後立法であるのでそもそもが問題外であるのだが適用されるべきはソ連なのである。なお非常に面白い話だがドイツと日本を比較して日本を責めていた者達の多くはソ連崇拝者であった。あろうことかこの犯罪国家であり戦争犯罪はまさに強盗の如きだった彼等を『平和勢力』と呼んでいた。平和への冒涜以外の何物でもない。これ程滑稽なブラックジョークもそうはない。

「そうなる可能性もありますな」

「確かに」

「それは」

彼等もやはりそれに納得して頷いた。

「有り得ないことではないです」

「むしろそうなった方がよいのではとすら思えますな」

また中の一人が言うのだった。

「何故でしょうか、それは」

「今のエウロパはそうでもしないと立ち直れないのではないかと思うからです」

この言葉もまた危惧から来るものであった。エウロパに対する。

「我々は今追い詰められていますので」

「確かに」

「それはそうですな」
彼等もそれを認めるしかなかった。不本意であっても。
「それだけの英雄がいなければ」
「我々は挽回できはしない」
「思えば無念なことです」
また言葉が苦くなってきた。それを語る口の中も。
「そうした絶対的な存在あってとは」
「仕方ありませんな」
そしてそれを認めるしかないというのも。今のエウロパはそうした状況なのである。
「まずは今を乗り切ることです」
「今をですか」
「しかしですな」
今からその先へ。言葉は自然に動いていた。
「それから先はどうなるでしょうか」
「未来ですか」
「そうです」
言葉を発した者が一同に答える。
「今のままではどのみち袋小路なのではないかと。最早総督府もないのですし」
「確かに」
「これは統計上ですが」
口髭の貴族がここで一同に言うのだった。

## 第二十六部第四章　権威の失墜その七

「何でしょうか」
「若し我々が連合の今の惑星開発技術を手にしたとします」
「ええ」
「その場合今のエウロパで養える人口は」
「どれだけでしょうか」
「精々三千億だそうです」
「三千億」
その数字が彼に刻み込まれた。
「それだけですか」
「そう、それだけです」
口髭の貴族は刀傷のように深い声で一同に答えるのだった。
「連合は今の十倍は養えるようになるでしょうが」
これは所有している星系、惑星の数の差である。連合の勢力圏はそれこそ銀河全土だ。北、南、東に無限の開拓地もある。それを省いても四〇兆は養えるというのだ。これはやはり恐ろしい数字であった。
「我々はそれが限度のようです」
「さらに技術が進歩すれば」
中の一人が言ってきた。
「どうでしょうか」
「そうなればわかりませんが一つ言えるのは」
またしてもエウロパにとっては厳然たる現実が突き付けられる。
「そうなれば連合もその時には」
「さらにですか」
「そうです。それに」
また一つ事実が突き付けられる。
「連合には無限の開拓地がありますので」

「我々にはないものが」
「あるのです」
「このままでは連合に圧倒されたままですか」
連合にとっては非常に喜ばしい現実だ。エウロパにとっては全然逆だが。
「どうすればいいのか」
「そういうことを解決してくれるのが英雄ですな」
結局はそうなのだ。英雄とは救世主であるのだ。
「今こそ」
「それが出ないと今の我々は」
「このまま窮していくのみ」
「それだけは我慢がなりませんな」
「確かに」
またしても口々に言い合う。これこそが本音であった。
「何としても連合に復讐を」
「そうして再び我々の時代を」
「では今は探すとしましょう」
口髭の貴族がまとめるようにして述べてきた。
「英雄を」
「はい」
こうして話は終わった。彼等は宴に戻る。しかしこのことは心に留まるのであった。やがてそれが大きなうねりの中に入っていくことになるのであった。
エウロパの貴族達がそれぞれエウロパの行く末について憂えているその頃バチカンでは移転の準備が進められていた。言うまでもなく講和で定められた移転である。
「バチカン全てをですか」
「そうだ」
枢機卿の一人が若い神父に答えていた。
「当然我々もな。全員だ」

「全員が連合にですか」
「そういうことになった。それは知っていると思うが」
「はい」
若い神父は枢機卿の言葉に頷いた。二人は今バチカンの庭にいた。
「既に持って行くものは全て決まっている」
「バチカンの所蔵するものは全てですね」
「そうだ、何もかも」
「誇りもまた」
「誇りか」
枢機卿は神父の言葉に顔を暗くさせる。白い太陽の光が差し込んでいるというのにその表情は暗く沈んだものであった。明るい日の中で暗い顔になっていた。
「そのようなもの。今の我等には」
「ないのですか」
「持つことも許されぬ」
こう言うのだった。
「囚人となる我等にとってはな」
「そうですか」
「三度目のバビロン捕囚か」
枢機卿は言う。

## 第二十六部第四章　権威の失墜その八

「一度はバビロニアにより、二度目はフランスにより」
「そして三度目は」
「連合により、だ。これも神が我々に与え給もうた天罰なのだろう」
「エウロパ情報部に加担していたという」
「そうなる」
神父に答える言葉は実に苦いものであった。彼等はこれまでエウロパ情報部がバチカンを隠れ蓑にして連合に対する工作を行っていたことを内心では知っていたのだ。だがあえてそれを止めはしなかった。その結果として連合とエウロパの戦争が起こり今に至る。それを天罰だと言っているのである。
「我々はやはり俗世から離れるべきだったか」
「全ては自らが撒いた種であると」
「神がそれを許されなかった」
嘆いても仕方のないことを嘆くしかなかった。
「その結果だ」
「無念です」
「しかしだ。連合では」
「何かあるのですか？」
神父は枢機卿に問うた。
「政治からはこれまで以上に切り離されるだろう」
「やはり」
「それが為だったのだから」
彼は言う。
「それも至極当然か」
「やはり我々は神に仕えているだけでよいのですね」
「そうだな」
この返答は虚しかった。後悔がこもっていた。

「そうあるべきだった。古来よりな」
「かつて政治と宗教は同じものでした」
「うむ」
　これは近代まで程度の差こそあれどの国も同じであった。キリスト教にしろイスラム教にしろそうである。そもそも国家が成立し政治ができたがこれは『まつりごと』であった。そのまま祭事に言い換えることができる。表裏一体どころか同じものであったのだ。
「それを考えれば当然だった」
「我々も政治家でもありましたし」
「そうだったな、かつては」
「はい」
　神父は枢機卿に対して頷いた。
「神に仕える者としれ」
「そしてそれが恐るべき腐敗をもたらした」
　ローマ教皇は政治家であった。長い間そうであった。世俗に密接に関わり欲望と野心を露わにした者達ばかりであった。陰謀や奸智なぞは当然の世界であった。彼等は権謀術数の世界に生き、その中で勝ち抜いた者達なのであった。まるで呪術の世界であった。
「思えばバチカンは罪深い存在なのだ」
「その罪がまた一つ」
「裁かれたのだな」
「連合ではやはり針のむしろでしょうか」
「いや」
　だが神父のその言葉には異議が出された。
「ところがどうもそうではないらしい」
「といいますと」
「我々はこれでも篤い振興を受けている」
「有り難いことに」
「非常にな」
　枢機卿はまた頷いた。

「我々のような者達にも」
「連合では我々を迎え入れると考えている信者が多いそうですが」
「彼等にしてみればそうなのだろう」
神父の言葉に応える。
「バチカンをエウロパから連合に迎え入れる。ここにも連合の者達も多い」
「確かに」
これはバチカンだけである。宗教だけは別ということである。バチカンはそうした意味で治外法権、例外でありその為にエウロパ情報部もそれを利用したのだ。
「だから。そうした見方もあるだろう」
「では今後は」
神父は枢機卿のその言葉を聞いて言った。
「連合出身の教皇も」
「今後はそうなるだろうな」
枢機卿はその言葉に応えた。これに関しては達観も見られた。

## 第二十六部第四章　権威の失墜その九

「連合に移るのだから」
「左様ですか」
「連合に行くのは嫌か」
枢機卿はここで神父に尋ねた。
「貴方は嫌なのか」
「はい」
神父はその問いに静かに頷いた。こくり、と首が動いた。
「私は。エウロパの生まれですので」
「国はイタリアだったな」
「そうです」
その問いにも答える。
「イタリアにはもう滅多に戻ることはできないのですね」
「そうだな。立場が逆になるうえに往来に関してはこれまでとは比較にならない程厳しいものになるだろう。工作のもとになったのだから」
「やはりそうなりますか」
「そうなる。全ては連合の中でだ」
「そういえば枢機卿」
神父はそこまで聞いて今度は彼が問うた。
「どうした？」
「連合ではバチカンの移転先を決めるのに随分議論があったとか」
「そうらしいな」
枢機卿もその言葉に頷いた。
「彼等の中でな。各国の駆け引きがあったらしい」
「やはり利権ですか」
神父はそれを聞いてすぐにわかった。
「おそらくはバチカンに巡業する信者達の利権を考えて観光産業の

者達が主に。そういったところではないでしょうか」
「そのまさかだ」
枢機卿はその言葉に頷いた。俗世に関わりがないとされる彼等もこうしたことがわかるまでに政治への知識はあった。やはり俗世とは完全に分かれてはいないのだ。
「それを狙って様々な駆け引きがあったそうだ」
「そうですか。そうして今の場所になったのですね」
「信者の数では」
枢機卿は信者の数についても述べる。
「連合の方が多い」
「圧倒的なまでに。それは人口によって」
「全ては人口だ。連合の者達はそれで移転をよしとするが」
「我々にとっては」
結局は彼等がエウロパ出身であるということが大きな理由になる話であった。彼等はエウロパから離れたくはなく、こうなってしまったことに悲しみを感じているのだ。主な理由はそうした個人的な感傷であったがそれと同じ位今のバチカンの惨状を恥と考え天罰と捉えていたのである。そういうことであった。
「悲しむべきことです」
「おそらく今度は帰ることはできぬ」
「連合に永遠にですか」
「そうだ。ローマからエウロパの心であったわれわれがエウロパから去る」
一言であるがそれは実に衝撃的なことである。だからこそエウロパ全土でも深い悲しみとなったのである。
「エウロパの心は。どうなるものか」
「アノミーになるでしょうか」
神父はふとこの言葉を出した。
「このままですと」
「そうだな」

そして枢機卿は彼の言葉に賛同する顔で応えた。
「そうなるだろうな。キリスト教は今でもエウロパの心だ」
「はい」
例えギリシア、北欧の神々が復活したとしてもだ。キリスト教がエウロパの心の支えというのは変わりがないのだ。それがなくなってはアノミーになるのも道理であった。
「連合はそれも狙っているのか」
「だとすれば連合というのは実に容易ならざる相手でした」
「数が多いだけではなくな」
忌々しいがそれを認めるしかなかった。
「そちらの方もな」
「ええ」
神父はまた応えた。
「そういうことなのでしょう」
「しかもだ」
枢機卿はここで辺りを見回した。
「ここにも連合の者達がいるな」
「そうですね」
これもまたわかっていることであった。しかしそれを実感するとどうにも話しにくくなる。壁に耳あり障子に目ありということである。
「それも計算のうちか」
「何もかもがですか」
「我々はこれから連合の虜囚になる」
またバビロン捕囚に言葉がかかった。
「しかも永遠にな」
「エウロパの心が」
あくまでローマ＝カトリックが、であるがそもそもカトリックはキリスト教の中で多数派なのだ。プロテスタントはどちらかと言えば少数派になる。

## 第二十六部第四章　権威の失墜その十

「教皇様は受け入れておられるが」
「そうですね」
それもまた彼等は知っていた。知っているからこそ辛い。
「しかし。ここに帰ることは二度とあるまい」
「我々は連合の人間になる」
「果たしてどうなるか」
悲観的な言葉は続く。
「このまま我々は」
「ですか枢機卿」
神父は苦い声をまた出した。
「そうだとしても信仰だけは」
「それはわかっている」
彼も枢機卿だ。信仰はわかっていた。
「それは。一時たりとも忘れはしない」
「そうです。それだけは」
神父もそれに応えて述べる。
「忘れていいものではありません」
「思えばそれを忘れていた時も長かった」
それが中世である。バチカンには信仰がなかった。あったのは欲望と野心だけであった。その為に多くの血が流されてきた。あまつさえ異端審問まで行われていた。これによって欧州は血生臭い地獄にもなったのである。これもまた歴史だったのだ。
「それはもまた忘れてはいない」
「忘れていたことへの天罰でもあるのでしょうか、今は」
「そうかも知れない」
その言葉に頷く。
「だからこそ」

「そして連合に入ったならば」
神父は枢機卿に顔を向けて声をかけてきた。
「うむ」
「我々はそこではせめて今までのようにはなってはいけないでしょう」
「そうだな。本当の意味で俗世と離れて」
「神の望まれるままに進むべきかと思います」
「私はそれでも不安だ」
枢機卿は神父の言葉を聞きながら不安を告白したのだった。
「今までに申し上げて下さった理由以外にですか」
「いや、その中の一つだ」
そう返したうえで言うのだ。
「我々は白人だ」
「はい」
エウロパは白人しかいないと言っていい。長い間彼等だけで生きていてモンゴロイドやニグロイドが入って来なかったからだ。連合が混血の結果その三つの血が混ざり合っているのとは全然違う。そうした意味で人血の白人種であるのだ。枢機卿はそれを言う。
「だが連合は」
「純潔な白人なぞいないでしょうね」
「人口比率でも皆無に近いらしい」
これは黄色人や黒人に関しても言えることであった。
「今ではな」
「ではつまりは」
「そうだ」
また神父に述べる。
「これからは肌の色が違う教皇になっていく」
「それもまら連合の考えなのでしょうね」
「我々とは違う教皇」
「そして我々もまた」

「周りは全て連合の者達だ」
そうして徐々にバチカンを連合の中に組み入れていく。それこそが連合の考えなのであった。彼等がエウロパの心を自らの中に組み込むことも考えていたのだ。
「我々は徐々に消えていく」
「後には連合だけが残る」
「そう、それだけだ」
声が呻いていた。
「そうして我々は」
「連合になっていく」
「だがバチカンは残る」
そのうえでこうも述べるのだった。
「バチカンはな」
「残りますか」
「連合の中であっても。その心だけは残る」
「では心を伝えていきましょう」
それしかなかった。そうして彼等はそれを選んだ。
「ここは」
「そうだ。では」
「はい」
また神父は言う。
「ここは胸を張って連合に入り」
「我々の心を残そう」
「本当の信仰を」
毅然とした決意であった。それと同時に圧倒的な敵に向かう決意でもあった。

## 第二十六部第四章　権威の失墜その十一

「連合には確かにあらゆることで敗れたが」
その現実にもまた立ち向かおうとしていた。
「それでも心は忘れたくはないな」
「その通りです」
「ではそうするとしよう。例え絶望的であっても」
「それを絶望と思わなければ」
「きっと神が御覧になって下さる」
俯いてはいたがしっかりとした言葉であった。その言葉で述べた。
「だからだな」
「ええ。それだからこそ」
「喜んで連合に向かおう」
「ええ」
エウロパの者達はこうして悲痛な顔をしていた。しかし連合の者達はそうではなかった。かなり上機嫌で楽しい日々を過ごしていたのであった。このバチカンにおいても。
「いや、これからは楽になりますな」
「全くですな」
連合の神父達は集まるとそんな話をするのであった。
「連合に入れば移動も楽ですし」
「今までみたいに肩身の狭い思いをしなくて済む」
そう言い合う。
「おまけにこれからは教皇様も」
「我々の中で選べる」
今まではエウロパ出身者が独占していた。しかしこれからは違う。それもまた噛み締めて喜びに浸っているのである。彼等の喜びは実に多い。
「よいことばかりです」

「いや、全く」
ワインもパンも美味い。これまでになく。
「そういえばですな」
神父の一人が今口にしているパンについて言った。
「これからは聖水も聖餅もまた」
「そう、連合のものになりますな」
「喜ばしいことです」
彼等にとってはそうに他ならない。
「エウロパの麦はどうも」
「そう、今一つ味が」
ここで連合とエウロパの差と違いがまた出てきた。連合では稲と同じように水を使って栽培する水麦がある。これは麦でありながら米に匹敵する収穫量を誇る驚異的な麦である。味もまたかなりよくなっている。それに対してエウロパの麦は二十一世紀のままの麦だ。
「よくないですな」
「いや、全く」
「そもそもエウロパの食事はどうも合いませんな」
「そうですな」
彼等は心から悲しそうな顔になっていた。彼等にしろ味覚というものから完全に決別することはできないのだ。それをできるのはかなり特殊な人物だけであろうか。
「料理にしろ素材にしろ」
「何かが違うのです」
顔を顰めさせて言い合う。
「エウロパのワインについてどう思われますか？」
「いや、上品ぶっていませんか？」
彼等の主観ではそう感じられるのだ。
「どうにも」
「そうですな。やはり連合のあの個性を前面に出した味覚のワインこそが」

「我々にとってはいいですな」
「まあ日本のワインは少し小さくまとまっているような」
日本でもワインはよく製造されている。しかし連合ではあまり好まない者もいる。見ればここには日本人はいない。そのせいもあろうか。
「何かエウロパのそれに似ているような」
「彼等にしてみればワイン本来の味を活かしているそうです」
神父の一人が言う。
「素材を」
「葡萄をですな」
「ええ」
同僚の神父の言葉に応える。見れば彼等は二人共黒人である。

## 第二十六部第四章　権威の失墜その十二

「彼等はそう言っています」
「やれやれ、日本人らしい」
言葉がいささかシニカルになっていた。
「彼等はどうしてそう素材がどうとか本来の味とかこだわるのか」
「美味しさに上品を求めるのが彼等の癖ですな」
「より美味しいものへと改良するものではないのですかな」
連合ではこうした考え方も多い。
「ワインならばより強烈な個性を前面に出して」
「左様、そうすればいいのに」
神父としてはいささか俗物的な話題を言い合う。
「どうしてそう本来の味にこだわるところがあるのか」
「そこもまた日本ですな」
彼等は苦笑いを浮かべて言うのだった。
「様々なアレンジを得意としながらも」
「何処かでその伝統を守ろうとする。わからない国です」
「そういえば」
ここで話が教会に移った。
「バチカンが連合に移るとなるとあれですな」
神父の一人が楽しそうに述べてきた。それはエウロパの神父達が危惧していたことであった。ところがその危惧は彼等にとっては無上の喜びなのである。
「我々の祖国の中から教皇様が出られるし」
「日本人の教皇も」
「ただ。あれですな」
エウロパにとっては忌々しいことこのうえなく、連合にとっては何とも痛快で考えるだけで楽しくて仕方がない話になっていく。そう、彼等は楽しんでいた。

「大国に教皇が移るとなると」
「どうなるやら」
「何か大国というとまた彼等ですな」
「いやあ、何かにつけて出て来ますな」
見れば彼等の中には大国出身者はいないようである。連合になるとどうしても大国と小国の問題が出て来る。小国出身者達にとってはまた大国が出て来るのは避けたいのである。
「といいましてもですな」
神父の一人が述べる。
「大国でカトリックといえばケベックとブラジルだけではないですか」
「あとはフィリピンですか」
ＡＳＥＡＮ各国は日米中露やブラジル、ケベック程国力は高くはない。しかしその団結と交渉能力で小国にとっては厄介な相手になっているのだ。
「それ位では」
「いやいや」
しかしここで言われる。
「あの四国というか」
「米中露は」
結局この三国が出て来る。この三国が出ない話は連合においてはまずない。日本もそうであるがこの三国とはかなりスタンスが違っているのだ。
「常に出て来ますからな」
「どうしたものか」
彼等にとってはあらゆることが影響力行使の対象なのだ。バチカンでさえも。
「バチカンも小国優先といって欲しいものですな」
「いや、それも難しいかと」
これには異議が呈された。

「それはまた何故」
「宗教は一応は政治とは無縁ということになっています」
あくまで一応は、である。実際にはやはり違うのだ。バチカンは俗世とは関わりがない、建前はそうであるしそうでありたいとかなり思ってはいる。だがそれでも完全には離れられないのである。これはエウロパの聖職者達に言葉と矛盾するがそれと共に矛盾しない。政治と宗教を完全に切り離すことはこの時代でも中々上手くはいっていないのだ。なお連合の一国であるタイではこの時代でも国王は仏教徒でなければならないが全ての宗教を保護しなくてはならないとタイの国内法によって明確に定められている。
「ですからこれに関しては」
「大国も盾に取りますか」
「あの三国はそうしたことにはかなり頭が回りますからな」
千年前と全く変わってはいない。
「厄介なことに」
「何故ああしたことには目ざといのか」
神父の一人が皮肉めいた言葉を言う。

## 第二十六部第四章　権威の失墜その十三

「全く以って不思議です」
「だからこそああなったのでしょう」
別の神父が述べる。
「あそこまで大きく」
「まあ彼等の歴史を見ればそうですな」
何故そこまでになったのか、一日でなったのではない。地球にいた頃に長い時間をかけて彼等は大きくなった。宇宙の時代になると人口が多いというのと国際的地位を利用してかなり広範囲な勢力圏をもらったのだ。中央政府は中央政府で厄介な彼等を辺境にやって影響力を少しでも弱めようと思っていたのである。それで多少は影響力は減ったが完全ではなかったのだ。そんな『ヤワ』な国家では彼等はなかったのだ。
「何処までも面倒な」
「その彼等がですか」
言葉に溜息が混じる。
「またぞろ自国から教皇を出そうと策謀するやも」
「よく考えれば今までよくそうしたことになりませんでしたな」
「いや、それはエウロパにあったからでしょう」
神父達の間でそう話される。
「連合にあればやはり」
「いえいえ」
しかしそれについてもそうではないと返させる。
「そうではなくてですな」
「というと？」
「一体」
「エウロパ同士でです」
これについて言われるのであった。

「バチカンを利用せんと。国々の間で」
「少なくともかつてはありましたな」
また歴史が出された。
「メディチ家やボルジア家、フッガー家が教皇を狙って」
「おっと、それがありましたな」
それについて述べられた。
「ですがエウロパになってからは国家間では」
「それはやはり中央政府の権限が大きかったからでは？」
権力がそこに集中していれば。バチカンにまでいかないというわけだ。
「そのせいでは」
「しかし貴族達の間では」
今度はエウロパをエウロパたらしめている貴族達について言及された。
「そうしたことが表立ってはなかったようですが」
「紳士協定があったのでしょうな」
神父の一人が述べた。
「各家で醜い争いなぞできるだけしないようにと」
「あくまで教会の中だけでと」
「おそらくは」
そう話された。
「しかし。これが連合となると」
「そもそもあの三国は」
紳士協定、である。ここが肝心だ。
「紳士協定なぞいざとなれば平気で破りますからな」
「日本と違い」
日本はこれは守る方である。もっともそれを悪く利用するめざとい国だとも言われているが。何はともあれ『約束』は守る国であるのだ。
「そこも何とかしないといけませんな」

「それについてはバチカンの力を使いますか」
また神父の中の一人が述べた。
「厄介なことになる前に」
「バチカンのですか」
「そうです、我等の力は」
ここで出されるのは武力でも経済力でもない。バチカンにはそのようなものは不要であると言っていい。少なくともこの時代においては。
「こういう場合には使って宜しいかと」
「まあそうですが」
「しかし」
異論も出て来ていた。
「こうしたことになったのも政治に関わったからですし」
「あまり過激には」
「いや」
だがすぐに反論が為された。議論が速やかに行われていた。
「それはあくまで程度の問題です」
「程度ですか」
「そうではないでしょうか」
黒人の神父のうちの一人が言う。彼はそうした考えであったのだ。

## 第二十六部第四章　権威の失墜その十四

「度を過ぎたら何でも問題になります」
「まあ確かに」
「結局はそうですが。何事も」
「では我々もある程度はよいと」
「加減をすればいいのですよ」
黒人の神父はなおも笑って言うのだった。
「政治に関しても匙加減だけで」
「では今回もまた」
「はい、ある程度でいいのです。そうすればあの三国も大人しくなりましょう」
「少しでいいですか」
「そう、ほんの少しです」
そこをあえて強調して述べるのであった。彼の考えでは政治力の行使は少しでいいのだ。これはあくまでバチカンの力の一部でしかないが。
「それでいいかと」
「ではそうしますか」
「それにしても。待ち遠しいですな」
そうしたことも入れたうえでだ。彼等はそれがいいと言う。やはり連合の者達としての考えがここにははっきりと現われていたのだった。
「連合に行く日が」
「それは確かに」
「それは間も無くです」
彼等は笑顔で言い合う。
「さてさて、神も主にも去られたエウロパは何が残るのか」
「一応は何か残るでしょう」

少し意地悪い様子で話をしていた。連合の者としてだった。
「エウロパとて何もないわけではあるまいし」
「ところがですな」
神父の一人が仲間達に述べる。
「彼等はどうも今虚脱状態が続いているようでして」
「カトリック信者の間にですか」
「そうです。彼等は今非常に落ち込んでいます」
「バチカン移転がそれ程ショックだということですか」
「我々とは正反対に」
「ただしです」
ここでまた話が政治的なものになっていく。あｙはり政治と宗教は完全には離れることはない。彼等も自分達の話の中でそれを実感していた。
「連合としては今は移民の受け入れの予定はないということです」
「移住者をですか」
「そうです。そういうことになっています」
つまりエウロパ側からの人の流入を排除するということである。これは工作員の潜伏、侵入を防ぐのが目的であった。なおサハラに関しては難民という形で受け入れをしておりマウリアに関しては夕刻関係になるのでそうした往来も可能であった。あくまでエウロパに対するだけなのである。
「ですから幾ら熱心な信者であっても」
「連合には入られない」
「我々もそれを受けてはいけないことになっています」
「ふむ、中央政府も厳しいですな」
「いえ、それが当然かと」
そう話が交あわされる。どの神父も神父らしい思慮深い顔になっていた。
「またエウロパ政府が仕掛けてくるかも知れませんし」
「そうですな」

神父達はまた同僚の言葉に頷いた。
「彼等は実にそうしたことには造詣が深い」
「欧州外交もそうでしたしな」
「ええ。優雅に茶と菓子を楽しみながら謀略を考えていく」
そう評された。
「それが彼等ですな」
「何か嫌なものがありますな」
「そうですか？」
皆仲間の一人に顔を向けた。
「それはそれでよいのでは」
「気取っております。そういうのは私は好きではありません」
「ふむ、左様ですか」
「あくまで個人的には、ですが」
自分でもそう断りを入れる。
「どうにも。エウロパのそうしたところが」
「その気取りももうすぐ滅多に見れなくなりますぞ」
「そうですな」
またしても連合の人間として話をする。彼等もあまり人のことは言えない。
「ここに来ることもありませんし」
「そうですな。こことも お別れですな」
それを如何にも楽しそうに言うのだった。彼等は何処までもエウロパという場所についていい感情を持ってはいないようだった。言葉尻にもそれが出ている。
「やれやれといったところです」
「連合では歓待の準備が整っていますぞ」
「おお、そうなのですか」
それを聞くとまた喜ぶのだった。
「それでは今は」
「はい、それを楽しみにしながら」

その笑顔で話を続ける。そうして一斉に立ち上がった。
「祈りを捧げに行きましょう」
「我等が主に」
何だかんだで彼等も信仰は持っていた。それは確かに連合の者としての信仰であったが信仰には変わりがない。そういうものであった。
「おお、そういえば」
「今度は何ですかな」
歩きながらの話になった。だがそれでも続けられる。
「いえ、主の御顔です」
「主のですか」
「そうです、今主の御顔はあの髭のものですな」
「ええ」
「そうですが」
これはルネサンスの頃から変わってはいない。十字架にあるキリストも絵画等に出て来るキリストもその顔はラテン系のものである。実はこれは非常におかしなことなのだ。

## 第二十六部第四章　権威の失墜その十五

「あれは妙ですな」
「はい、それは確かに」
「有り得ることではありません」
　これは科学的にも二十世紀には検証されていることであった。イエスはラテン系ではなくユダヤ系である。それであの顔立ちは有り得ないのだ。しかもあの顔はルネサンス以降の羅テ系の顔である。これは余計に有り得ない。帝政ローマの頃のユダヤ人の顔では絶対にない。
「そこも変わるでしょうかな」
「そういえばですな」
　神父の一人がここで言うのだった。
「かつては主の御顔は今とは違うものでしたな」
「はい、確か」
　ここで記憶が手繰られる。
「髭のない美青年に描かれていました」
「それもまた違うでしょうが」
　髭は当時のローマでは剃られていたがユダヤ人の間では剃っている者とそうでない者がいた。ローマに倣うか倣わないかの差である。こういうことであった。
「ただ、あの顔はないですな」
「よく考えれば不思議ですな」
　こうも言われた。
「最も有名な方の御顔が今もはっきりしないとは」
「全くです。あの聖骸衣にしろ」
　かつてあまりにも有名になったキリストの遺体を包んだという布である。そこに映し出されているキリストの顔もまたラテン系である。だからこれがその聖骸衣として本物であるということはないの

だ。それはキリストの顔にはっきりと出てしまっているからだ。
「妙な話になっていますし」
「しかもあそこで亡くなられたのではないとも言われていますな」
「ええ、コーランではそうですな」
コーランではキリストの性格も聖書のそれとは異なっている。おおむねコーランの登場人物は異様に前向きでアッラーの裁きも受けず試練は果敢に立ち向かって乗り越えていくのであるがコーランのキリストもそうなのだ。ここが大きく違っている。これは聖書から見れば驚くべきことなのだ。
「そうしたことも今後議論になるでしょう」
「この十字架の主も」
神父の一人が自身の胸にかけてある銀のロザリオを手に取って見た。その顔はやはりと言うべきかラテン系の顔をしていた。なおこれこそがキリストの顔だと思っているのはエウロパの者達の間では聖職者の間でも主流となっている。当然であるともされている。
「御顔が変わりますか」
「そうなるやも」
「左様ですか。ただ」
ここで連合の複雑な人種的事情が出て来るのだった。
「変わったら変わったらでまずいのでは？」
「イメージですか？」
「いえ、そうではなく」
それは否定された。すぐにだ。
「あの主の御顔はラテン系のものですな」
「はい」
それが再確認される。そのラテン系というところに実は大きな問題があるのだ。
「そこです」
「ああ、成程」
「そういうことですか」

神父達はそこで気付いた。ラテン系はエウロパだけにいるわけではないのだ。むしろ連合の方が圧倒的に多い。かつての中南米諸国は人口的にも国数的にもかなりの規模になっているのだ。無論他のコーカロイドやモンゴロイド、ニグロイド達と混血はしているが。そもそも中南米諸国はスペインの征服から混血が進んでいる。インカ等のかつてのインディオの末裔だという国家もその人種自体は混血である。インディオの血は薄くなっているのだ。

しかしラテン系なのは事実だ。ここに問題があるのだ。

「彼等はよく思わないでしょうな」

「そもそもですな」

また言われる。

「主は黒人だという話もありましたな」

「ナチスはゲルマン民族だと言っていたような」

これは事実である。滑稽と言えば滑稽なことに。

「ユダヤ系の筈ですが」

「ではアジア系の御顔だったのですな」

イメージが二転三転する。神父達の頭の中のキリストの顔は完全に訳がわからなくなってきていた。三千年以上前の人物だから当然と言えば当然だが。

「どうなのでしょうか」

「あの頃のセム系民族の顔ですか」

「それにですな」

また言われる。

「かなり体格はよかったそうですな」

「ええ、そういえば」

「羊飼いでしたか、確か」

そういうことになっている。キリストは優男ではなかったのは間違いないとされている。そもそも優男があれだけの距離を歩けることもないのだ。少なくとも足腰はしっかりしていた。

## 第二十六部第四章　権威の失墜その十六

聖人が実際にどうだったかを調べると中々興味深いこともわかってくる。例えば孔子は元々武人の家に生まれており身長二メートルを越える筋骨隆々の大男であり武芸にも秀でていた。彼は学問だけの人間ではなかったのだ。

「御身体も変わるでしょうか」

「何かかなり変わってきますな」

それを認識しだしてまた違和感を感じる。

「どうにもこうにも」

「いや、それにも増して」

さらに言われる。

「主の御顔は今まで随分描かれてきていますが」

「ルネサンス以降はあの御顔ですからな」

「容易には頭の中から離れません」

「そういえば」

彼以外の人物についても言及されだした。

「何か？」

「あのじゅうに使徒もマリア様もラテン系の御顔ばかりですな」

「ああ、そういえばあの方々もですな」

「ですな。確かに」

それにも気付く。一つのことに気付くとそれがどんどん進んでいっていた。

「やはりバチカンがローマにあったせいですな」

「イタリアにあったからこそ」

イタリアはラテンの国だ。彼等も混血しているが。ラテン系は昔から積極的に他の民族や人種と混血を繰り返してきている。ここがノルマン等と違うのだ。イギリス貴族の構成員となっているノルマン人というのは他の民族と混血しないのだ。少なくともそういうこ

とになっている。アングロサクソンやケルトはアメリカではかなり混血しているが。なおエウロパでは貴族は貴族同士で結婚するのが常である。しかし身分違いの恋もあるにはある。
「ああなったのですな」
「それでは日本にあれば主は日本人の顔だったと」
「いた、それはまた」
　これは流石にイメージが沸かなかった。
「確かにアジア系はアジア系のようですが」
「黄色人ではないのでは？」
「それに当時のユダヤ人もある程度は混血していましたし」
　かなりそういうことに厳格なユダヤ人達だがそれでも混血はあったのだ。古来よりメソポタミアは民族の流入、移動が激しくヘブライの者達もその中で混血しているのである。そうした意味では古来からの純血のユダヤ人も存在していないのである。
「白人なのかも」
「ただしラテン系ではないと」
「どうも話が科学者のものになってきましたな」
　少なくとも最初から神学的な話ではない。人の顔についてなのだから。
「いや、案外わかっていないものですな」
「ええ。主のこととはいえ」
　だがそれは実感した。
「どういった御顔かさえも」
「これでは写真ができる以前の人の顔なぞ本当はどうかわかりませんな」
「ああ、そういえばですな」
　また別の人物の名前が出た。
「ナポレオンですが」
「ああ、フランスの」
「背が低いのは有名ですな」

ナポレオンは小柄で有名であった。身長は一六四程度であった。当時の欧州貴族達は人種的なものもあるがそれ以上に栄養から庶民達より頭一つ大きい位であった。彼等の間ではナポレオンは比較的小柄であったのだ。なお太陽王ルイ十四世も彼と同じ位の身長であった。途方もない大食漢であったが背はそんなものであった。そして彼がライプチヒで敗れたドイツにとっては記念すべき、フランスにとっては憎むべき年に生まれている音楽家ワーグナーは一六五で小柄とされている。ちなみにナポレオンは女性には案外奥手で皇后ジョゼフィーヌを第一に考えていたが太陽王もワーグナーも漁色家であった。小柄でも女性を魅了することは可能なのだ。無論権力が最も大きかったのだが。

「あの御仁もかなり美化しておるようですし」

「あの有名な絵ですな」

神父の一人が左手をテーブルに添えて、右手を腹の中に入れる動作をしてみせてきた。ナポレオンの絵の中で最も有名なものの一つである。

「これですな」

「そう、それです」

ナポレオンについて話す神父が述べる。

## 第二十六部第四章　権威の失墜その十七

「それなのです。あの絵はどうも等身を高くしているそうで」
「頭が大きかったと」
「はい」
それを言われる。
「あの皇帝陛下は随分頭が大きかったそうで」
「それがコンプレックスだったようですな」
「何か連合ではかなり小柄だったのですな」
この時代の連合ではである。男は一七五あっても小柄とされるのだ。何故か女は極端で一七〇を越える者もいれば一五〇ない者もいるが。混血の際の遺伝子の結果と言われている。
「確かに。まあエウロパ人はおおむね背が低いですがね」
連合の者達より頭一つ分小さいとされている。見ればこの神父達もかなりの大きさだ。少なくともエウロパでは大男と言われるような立場である。
「特に彼は」
「それを気にしていた」
「案外人の顔は後世ではわからなくなるものですな」
「それに美意識も変わりますし」
これもまた大きい。
「当時では美しくとも今見れば違う場合もありますし」
「その逆も」
「そういうことです」
それもあるのだ。十世紀の美人がこの時代でもそうだとは限らないのだ。
「現にエウロパの女性をどう思われますかな」
かなり神父らしくない言葉ではある。公式にはカトリックの聖職者は生涯独身なのだ。バチカンでは昔から『どういうわけか』子供

もいるのであるが。一応はそうなっている。
「エウロパの女性ですか」
「これはオフレコですが」
笑って言われる。やはり彼等も神父としてどうかという話をしているのは自覚していた。
「どうでしょうか」
「オフレコなら申し上げますが」
神父の一人が述べる。
「ええ」
「私の好みの女性は。今せんな」
「私も」
「私もですな」
彼等は口々に述べてきた。
「どうにもあの肌の色が」
「顔が」
また口々に言う。
「私の好みではありません」
「あくまで個人的にはですがね」
「やはりそうですな」
話を出してきた神父が仲間の言葉に頷く。
「好みではないと」
「そもそもですな」
また神父の一人が述べる。
「純粋な白人というものは連合には殆どいませんし」
「確かに」
「純粋な黄色人と黒人もですな」
それも全て混血の結果であるのは言うまでもない。民族は残っているがそれでも混血はかなり進み人種的な特徴はかなり混ざっているのである。
「残ってはいませんし」

「そうした我々から見れば。エウロパの美しさというのは」
「やはり何かが違いますな」
「ええ」
そんな話をする。彼等にしてみればそういうことであった。
「彼等は彼等で我等の肌や目の色を色々と言っていますしな」
「肌はわかりますが目もですか」
「髪の色もまた」
「はて」
黄色人の神父の一人がその言葉に首を傾げさせる。彼は確かに黄色人の顔をしているのだがその髪の色は金色である。そこが違っていた。
「髪の色は彼等も同じでは？」
「その顔に合わないとのことです」
「おやおや。それはまた」
神父達は同僚のその言葉に何ともはやという顔を浮かべて笑った。
「何とも珍妙な」
「それは大したことがないでしょうにな」
「やはり彼等の主観ではそうではないようで」
そう述べられる。

## 第二十六部第四章　権威の失墜その十八

「髪や目の色と肌の色が合っていないと」
「ふむ」
「有色人種に自分達の色はそぐわないとでもいうのですかな」
「まあそこまでは言わないでしょうが」
連合では所謂『カラード』と言われた有色人種の血が全て入っているといって過言ではない。そもそも白人の人口構成が比較的少なくそれで混血すれば白人の血がそれだけ薄くなるのも道理である。もっともそれでも遺伝子は強く残っていて髪や目の色、顔にそれが出ているのであるが。その為白人の顔の黒人やこの神父の一人のようにアジア系の顔で金髪であったりということがあったりするのだ。無論白人の肌でアジア系の顔ということもある。
「それでも美意識にはそぐわないようで」
「左様ですか」
「つくづく彼等と我々は違うのですな」
「そう、別物ですな」
彼等もそれをよく認識していた。
「そのエウロパ的なものの象徴であるバチカンが連合に入れば」
「どうなりますかな」
「パイプオルガンはなくならないでしょうが」
エウロパでは教会の音楽はパイプオルガンである。これはもう伝統だ。それに対して連合はパイプオルガンもあるが様々だ。中南米系ではギターもあるしその他の宗教と混ざって琴を弾いたり様々な楽器で演奏したりもするのである。これも連合の多様性の一つだ。
「それでもまあ」
「かなり変わりますな」
「連合の中のバチカン」
それがまた言われる。

「果たしてどうなるか」
「実に楽しみであります」
そんな話をしながら連合出身の神父達は楽しげに話をするのであった。今バチカンは完全に連合に飲み込まれその中に入ろうとしていたのだった。
そうしたことを敏感に捉えている男がいた。ラフネールであった。彼は官邸において沈んだ顔で書類にサインをしていた。その前にはカミュがいる。
「そうか。分かれているか」
「予想通りかと」
カミュはラフネールにそう告げてきた。
「こうした事態も」
「バチカンの惨状もか」
「連合にとっては喜ばしい事態です」
「彼等にとっては我々の不幸は全てそうだな」
「はい」
カミュはまた彼の言葉に頷く。
「まさにその通りです」
「忌々しいことだ。だがそれを言っても何にもならない」
それがわかっているからこそラフネールはここで言葉を一旦中断した。
「それでだ」
「ええ」
「今は少しでもエウロパを復興させることを考えなければならない。いいな」
「その通りです。それで」
「うむ」
カミュの言葉に頷く。そうしてまた述べてきた。
「次の総統選挙だな」
「そう、それです」

カミュはそれに応えてきた。
「おそらく今度の選挙はエウロパの命運を決するものになります。それだけ重要なものです」
「次の総統がエウロパの行方を決める」
ラフネールはカミュに応えて述べる。
「英雄になれるか亡国の指導者になれるか」
「その総統は重大ですね」
「それでだ」
ラフネールはここまで語ってまた言うのだった。
「我々としてはだ。次の総統は」
「総統は」
「まず私はもう選挙には出ない」
ラフネールはこう告げた。
「出られないのですか」
「そうだ。私によりエウロパは敗北した」
敗戦の指導者である。それがどういったものか彼もわかっているつもりであった。それで彼はその責任を取るつもりでもその選択を選んだのである。
「それにだ」
「それに？」
「もう私もかなり疲れてしまった」
今度はそう述べる。
「体力も残されてはいない。総統をやるだけのな」
「それでですか」
「我々としては。新たな立候補者を選びたい」
「それでは一人適任者がおります」
カミュは不敵に笑ってラフネールに述べてきた。
「素晴らしい逸材が」
「ほう」
ラフネールはカミュのその言葉を受けて彼に顔を向けてきた。興

味深い目を作っている。
「それは一体誰だ？」
「私自身です」
自信に満ちた声で言うのだった。

## 第二十六部第四章　権威の失墜その十九

「私こそがエウロパを救う英雄なのです」
「自信はあるのだな」
「私が自信をなくしたことはありません」
彼は傲然とまでした態度でそう返した。
「それは閣下も御存知の筈ですが」
「確かにな」
ラフネールもその言葉には頷く。
「しかしだ」
「しかし？」
「保守派が誰を立てるかがわからない」
それもまた問題であった。
「彼等は誰を選ぶだろうか。それに」
「彼ですか」
「そう、彼だ」
ラフネールはまた言う。
「ギルフォード侯爵だ。保守派が盛んにアプローチをかけているようだな」
「どうやらそのようで」
カミュもそれは知っていた。それでラフネールにも語る。
「彼等は今これといった指導者がいませんから」
「それが我々にとってもよかったのだがな」
「はい」
またラフネールの言葉に頷く。
「そうです。敵が弱いというのはそれだけで有り難いこと」
「うむ」
「だからこそ我々は今までこうしていられたという一面は確かにあります」

「そうだな。しかし」
敵が手強くなればどうなるか。それはどの世界でも自明の理なのである。政治の世界でもそれは顕著で相手が弱ければそれだけで政権維持にとって非常に有り難いのだ。
「あの侯爵が中に入れば。わからないな」
「ですが閣下」
「何だ？」
ここでまたカミュの言葉に顔を向ける。書類の裁決をしながらだが心は主にそちらに向いていた。
「その侯爵ですが」
「どうかしたのか？」
「どうも独自の動きを見せています」
「独自の動き！？」
「はい」
そうラフネールに述べる。
「どうやら」
「では保守派には加わらないというのか」
「そのつもりのようです」
「わからんな」
ラフネールはカミュの言葉に首を捻りながら述べた。
「政党に加わらないとは。無所属で行くつもりなのか」
「どうやら」１０
カミュもいぶかしむ顔で言う。彼としても信じられないといった様子であった。
「それだけの資金力があるのか？」
「侯爵家はイギリスでもかなり有名な資産家だそうですが」
「いや、それでも無理だろう」
ラフネールはそう返す。個人でやるのと政党とではその資金力に隔絶たる差がある。それは組織の力である。二十世紀にあらゆる国にあった共産党程ではないが政治において政党の力が強いのはこの

時代のエウロパでも同じなのだ。無論連合もそうであるが。
「個人で総統選挙を乗り越えていくのは」
「私もそう思いますが」
カミュもそう見ている。彼はそうした資金の読みも秀でているのである。
「ですが彼はまた違う考えのようです」
「スポンサーがいるのか？」
ラフネールは今度はそちらを問うた。
「有力者が幾人も」
「既に何人かの各国の有力貴族の支援を取り付けているそうです」
「ふむ」
「企業も」
カミュは企業も出した。言うまでもなく企業も有力な支持母体である。他には各種団体や職業、宗教団体もある。民主政治において政治家が頼みとする母体は実に多彩なのだ。エウロパでもそうであるし連合は尚更だ。連合になるとまさにカオスであると言ってもいい程だ。
「そうか。ではそちらを頼るということか」
「どうやら。彼と出会った者は必ず彼の支持に回るそうです」
「カリスマ性があるのか」
「どうやら」
また答える。
「それもかなりのもののようです」
「それで資金は調達しているというのだな」
「資金だけではありません」
カミュはさらに言う。
「スタッフも。次々と優秀な人材が彼のもとに集まっています」
「ほう」
それを聞いたラフネールの目が動いた。

## 第二十六部第四章　権威の失墜その二十

「それは聞き捨てならないことだな」
「多くの在野の人物が集ってきています」
「そうか。それもカリスマ故だな」
「その通りです」
またラフネールに答える。
「そのうえ」
「うむ、そこから先はわかる」
民主主義の政治家としてだ。後は言うまでもなかった。
「支持者もか」
「それも踏まえてかなりの支持者がいるそうです」
「そうか。瞬く間のようだな」
「はい。私もこの間気付きました」
カミュは表情を消して述べる。
「気付けばかなりのものを築き上げていました」
「何か彗星のようだな」
ラフネールは今度はこう述べた。
「気付けばそうなっていた。かなりのものだ」
「はい、まさにその通りです」
「話を聞くだけでは英雄だ」
こうもカミュに述べる。
「救世主のように。現われた」
「おそらくあちらもそれを宣伝として使うでしょう」
「エウロパを救うべき英雄としてか」
「はい。おそらくそれを狙ってどの政党にも属さないのでしょう」
「政党になぞ捉われない、か」
ここまで聞いてラフネールにもようやくわかった。そうした過去のしがらみや規定観念等を全て断ち切るのもまた英雄とされている

からである。英雄はさながら万能の天才だと考えられるものである。それは古来からあるイメージと言ってもいいものなのだ。
「そうしてエウロパを完全に新生させる」
「そうした救世主として」
「よくある話だが」
ラフネールはここでいささかシニカルな言葉を出してきた。しかし表情は変えない。
「装うことはできる」
「それは確かに」
カミュも彼のその言葉に頷く。
「唾棄すべき輩が善人の仮面をつけているのはよくあることです」
「そうした輩は最後はその仮面が剥がれるのがオチだ」
シニカルなだけでなく冷酷でもあった。
「何故か自分で剥がしてしまうことが多い」
「はい」
カミュもそれに頷く。
「そうして現われた素顔というものは実に醜悪です。しかも人にそれを見られるや否や下劣極まる本性を露わにしますな」
「そうだな。何故かそれは同じだ」
ラフネールはまた言う。
「余計に周囲の反感を買うだけなのにな。そうして破滅する」
「英雄もまた同じです」
カミュはそれを英雄にも例えてきた。
「英雄の仮面を被っているだけの輩も古来から無数にいました」
「そうだ。それを装ってな」
「しかし彼等は常にその仮面を剥がされてきた」
「むしろこう言うべきかな」
ラフネールはふと言葉を変えてきた。
「どういったようにでしょうか」
「本当の意味での善人が善人の仮面を被る必要がないように英雄も

また仮面を被る必要がない。それが素顔なのだからな」
こう言うのであった。確かにそれは真実であった。真の意味での素顔がそれならば仮面なぞ不要なのである。そういうことであった。
「それではあの侯爵はどうでしょうか」
「まだ仮面かどうかはわからない」
ラフネールは言う。
「しかし。かなりの力を持っているのは確かだな」
「はい、どうやら」
それはカミュも感じていた。彼は確かに傲岸不遜で人間的には様々な問題を持っている男である。だが人を見抜く目は持っているのである。
「しかし英雄になれる程かどうかは」
「まだわからないな」
「そうです。もっともそれは最後の最後までわからない一面もありますが」
「最後までか」
「はい」
またラフネールに答える。
「そういうものかと。最終的に英雄と定めるのは」
「歴史家だろうな」
ラフネールは言った。
「それも後世の」
「そうです、全ては彼等が」
カミュもラフネールもここで言葉が冷淡なものになる。

## 第二十六部第四章　権威の失墜その二十一

「決めることです。その絶対的な目で」
「それは我々に対してもだろうな」
ラフネールはそれを自分達にも述べた。
「我々も。彼等の絶対的な目で評価される」
「はい、間違いなく。彼等の目にかかれば」
「実にな。冷酷に評価される」
歴史家とはそういうものである。その頭で前に生きた者達がどういった人間なのか判断し、そうして歴史書に書き残していく。誰が英雄か愚物であるかはかなり広い範囲において彼等が決めるのだ。当時英雄であっても歴史的には愚者になることもあるのだ。
「その彼等が決めるのか」
「侯爵は今決められる場所にようやく立ったということでしょうか」
「いや、それはまだだな」
だがラフネールはそうではないと述べた。
「そこにはまだ至っていない。そうなるのは」
「総統になってからですか」
「そうだ、全てはそれからだ」
そうカミュに告げる。
「総統になってからだな。ヒトラーもそうだったな」
「はい、確かに」
ヒトラーという男の名前に対して頷いた。
「彼も総統にならなければ」
「単にこの時代にそうした男がいた、それだけだったな」
「泡沫政治家として」
「そうだ、所詮はそうなっていた」
ラフネールはさながら冷徹な歴史家のように語る。その目もまた声と同じく冷徹なものになっていた。その目と声でヒトラーを見て

いるのであった。
「ヒトラーの名は歴史書には残らなかった」
「ではドイツはどうなっていたでしょうか」
「それは卿もわかっていると思うが」
今度はカミュに対して問うた。まるで見越しているかのように。
「違うか？」
「いえ」
カミュはそれを否定しなかった。むしろ不敵に笑ってラフネールを見返すのだった。
「別の英雄が出ているだけです」
「そういうことだ」
ラフネールはカミュのその言葉に頷いた。ヒトラーは彼だけで現われたのではないのだ。時代が彼を呼んだという一面もあるのである。
「当時のドイツのことを考えるとな」
「英雄が必要だったのです」
カミュはその不敵で傲岸とさえ思える笑みを一旦消して述べた。整った貴公子然とした顔にいささか険しいものが漂ってさえいた。
「ドイツを救うべき英雄が」
「救世主がな」
「ヒトラーは救世主だったのですね」
カミュは異端とも取れる言葉を述べた。これはヒトラーが滅んでから長い間定説になっていることである。ヒトラーとナチスを賛美することも肯定することも絶対のタブーとなっていた。今でも連合においてはそうである。こうなっている理由はユダヤ系の存在が大きいのは言うまでもない。なおエウロパにはユダヤ系は存在しない。皆連合に移住したからである。
「ドイツを一旦は救った」
「はい、それは事実です」
カミュはまたそれに頷く。

「最後は敗れましたが」
「それでも救ったことは事実だ」
ラフネールはまたそれについて言及する。
「何もかもなくし絶望と破局の中にあったドイツをな」
「今のエウロパと同じく」
カミュはここで今の自分達を出してきた。当時のドイツも現在のエウロパも苦境にあるのは同じなのである。それは誰もがわかっていることである。
「今の我々もか」
ラフネールはカミュの今の言葉に乗ってきた。目を彼に微妙に向けてきた。
「今の我々も」
「違うでしょうか」
「いや」
そのこt場を否定しなかった。むしろ肯定さえしてきた。
「そうだな。敗戦し」
「はい」
ラフネールのその言葉に応えて頷く。

## 第二十六部第四章　権威の失墜その二十二

「総督府を失い領土も失った」
「賠償金さえも」
「額こそ違えど。同じだな」
　実は連合はここで実際にベルサイユ条約を参考にしたのである。あの時英仏はドイツに対してあまりにも過酷な条約を押し付けた。それがドイツ人の心に残り怨恨となった。それがヒトラーを生み出す原因の一つとなったのは歴史においてある通りである。連合中央政府の面々はそれを熟知していた。だからこそ過度に過酷なものとはしなかったのである。それでも充分過ぎる程の屈辱を彼等に与えることは忘れはしていないのであるが。ブラウベルグ回廊やニーベルング要塞の名を変えたのもそれによるものである。ただしあそこまでの過度な賠償金は要求せず名前も適度なものに考慮した。老獪と言えば老獪なのである。
「何処までも」
「全くです」
　カミュは忌々しげな声で返した。
「しかも我々の中に乗り込んでまで」
「あれもな」
　ラフネールはかつてキロモト達がオリンポスに入ってきて交渉にあたったことを思い出していた。あの時はペーチの命を賭けた交渉により救われた。今ではペーチは平凡な人物ではなく毅然とした救国の英雄としてエウロパでは語られている。
「してやられたな」
「特にあの国防長官に」
「そうだ、あの日本人にだ」
　今度はラフネールが顔を顰めさせてきた。彼も八条のことはよく覚えていた。忘れたくとも忘れられないものがそこに存在している

のである。
「八条義統にな」
「元は軍人であります」
「日本軍だったか」
日本軍という名前はエウロパにも伝わっている。十九世紀末から二十世紀中頃までの彼らの戦いぶりは最早人類史上においての伝説とさえなっているのだ。
「あの日本軍か」
「はい。ですが今の日本軍です」
カミュは嫌悪感を見せてラフネールに言葉を返した。
「あくまで今の」
「千年以上前の彼等とは違うのだな」
「流石に。ですから」
「しかしだ。宴の場では」
カミュにとってはこれもまた忌々しい記憶であった。エウロパの貴婦人達を敵でありながら魅了した八条の美貌と気品に対して露骨に憎しみを抱いているのである。その証拠に顔がまた歪んでいた。それが何よりの証拠であった。
「かつての日本軍の軍人達のようにな」
「あの当時の彼等は我々よりも遥かに小柄でみすぼらしかったそうですが」
「今の彼等はな。むしろ我々よりも」
背が高くなっていた。これは栄養の関係が大きかった。人間というものはその摂取する栄養で体格が大きく変わるものだ。これは人種は関係あることはあるがそれ以上に個体差も関係するし何といってもやはり摂取される栄養が大きく関係するのである。なお項羽や関羽はその背丈は二メートルを超える大男であった。当然アジア系であったがそれでもこれだけの大きさがあったのだ。儒学の祖である孔子は実は身長二メートルを超える筋骨隆々の大男であったのだ。これは史実にも残っており孔子はその体格を生かして武芸にも非常

に秀でていたのである。なお孔子の父はそもそも武人であり彼もまたかなりの大男であった。
「何もかもにも敗れたな」
「それは」
カミュはラフネールの言葉に反論しようとしてきた。
「全てにおいては」
「だが。あまりにも今の我々は」
ラフネールはそれでも言う。屈辱は消えていないのだ。
「護りも奪われ」
ニーベルング要塞をである。
「総督府を失い。そうして結果として」
「屈辱だけが残った」
「全く以ってあの時のドイツと同じだ。程度の差こそあれどな」
「否定できませんね」
カミュはまた忌々しげに述べた。それは残念ながら事実であった。

## 第二十六部第四章　権威の失墜その二十三

「ということはだ」
ラフネールはまた述べてきた。
「今の我々には」
「英雄が必要である。結局はそこですね」
「それは我々から出したいものだ」
ここで現実のいささか生臭い政治の話になった。エウロパもまた政党政治である。それならば英雄の出るべき場所も彼等にとっては一つしかないのである。
「そうだな」
「それでは閣下」
カミュは待っていたかのように名乗りをあげてきた。
「今回の選挙においては」
「出てくれるのか」
「はい」
不敵に笑って言葉を返してきた。
「今エウロパを救えるのはまさに英雄だけです」
「それが自分自身であると」
「違うでしょうか」
逆にラフネールに問い返す。これもまた自信の表れであった。しかも絶対的なまでの。
「私こそが」
「否定はしない」
ラフネールはその彼の質問にやんわりと返した。
「そして肯定もしない」
「肯定もされないとは」
「今我が政党から出せる人物は少ない」
そうした状況なのは最早言うまでもなかった。それが今のエウロ

パなのである。
「いや、卿しかいない」
「だからこそです。そしてエウロパを救えるのも」
「神々がそれを必要とするならば」
言葉が宗教的なものになっていた。神の存在がここでも出て来ていた。
「卿が選ばれるだろう」
「では私しかいません」
絶対の自信を隠そうともしなかった。それがカミュをカミュたらしめているものの一つでもあるのだから。彼は今それをラフネールに露わにしたのであった。
「御安心を」
「彼に勝てるのだな」
ラフネールはあの男を出してきた。
「卿は」
「私は生涯で敗北を経験するつもりはありませんでした」
言葉が過去形なのに苦いものがあった。これもまた当然顔に出ている。
「決して」
「あの連合の長官以外にか」
「そして連合にも」
こう返した。
「ありませんでした。そしてこれからは」
「これ以上の敗北をする気はないのだな」
「そうです」
カミュの声は普段の彼からは少し予想がつかないものであった。鋭く、強いものになっていた。いつもの傲慢なまでに自信に満ちたものではなくなっていた。
「決して」
「では。決まってしまったな」

ラフネールもそれを受けていた。そのうえで言ったのだった。
「我々からの立候補者は」
「お任せ下さい」
カミュはそれを受けて一礼して言葉を返した。やはり迷いはない。
「このエウロパを。何としても」
「頼むぞ。これは我々だけの問題ではない」
ラフネールはカミュを見据えていた。強い光がそこにはあった。
「そう。あえて言うならば」
「エウロパの問題であると」
「我々の政党だけの問題であったならば。何と気軽なことか」
ここでのラフネールの言葉には政党政治、言い換えるならば政党による民主政治の弊害が込められていた。政党政治は確かに民主政治としては纏まり易く政策も立案しやすい。だが時としてその政党のことしか考えられなくなってしまうことがあるのだ。これは政党政治が成立してから見られたものでありこの時代においても健在である。エウロパだけでなく連合やマウリアにおいても見られるのが実情だ。こうした意味においてエウロパも連合も結局は同じ人間だということなのであろう。
「今の時点で何人も我が我がと手を挙げていることだろう」
「それができないのが今ということです」
「千年前もそうだったらしいな」
ラフネールはふと千年前、エウロパにとっては英雄の時代について言及してきた。

## 第二十六部第四章　権威の失墜その二十四

「あの時も。誰もいなかった」
「そしてエウロパは絶望に打ちひしがれていた」
太平洋諸国に出し抜かれそれまでの世界での主導的地位から転げ落ちた当時の欧州。誇りもこれからの希望もなくしただ生きているだけであった。このまま消え去っていくのではないかとさえ思われていたのだった。
「ですがそれは」
「ブラウベルグにより救われた。劇的なまでにな」
「だからこそです。今もまた」
「その時なのだな」
「そうです、そしてその英雄こそが私です」
いつものカミュの声に戻っていた。不遜なまでに自信に満ちた声に。
「だからこそ」
「では。頼むぞ」
カミュの顔を見て声をかけた。
「この時を。これからのエウロパを」
「お任せ下さい。私はこの時の為に生まれたのですから」
運命論になっていた。いささかギリシア悲劇的なまでに。
「だからこそ」
「では改革派は卿を総統への立候補者として推し出す。それは決まりだ」
「はい」
「こちらはこれでいい。あとは」
「保守派ですね」
カミュはここで対立する立場にある相手を出してきた。エウロパはおおまかに言って二大政党制でありラフネール達が所属する改革

派と保守派の二つが存在している。改革派がどちらかと言えば知識人や人権活動家の支持が強いのに対して保守派は企業家や軍人の支持が多いとされている。しかしエウロパは基本的に貴族が多く彼等が政治の主流にいる為おおまかな差は連合のそれと比べると小さなものになっている。

「彼等が誰を出してくるかです」

「そうだ。おそらくはギルフォード侯爵ではない」

それはわかっていた。既に。

「だとすれば」

「今の保守派に出せる人間がいるでしょうか」

ここでのカミュの言葉は侮りのそれではない。冷静な分析に基くものだ。保守派は人材不足で悩んでいるのだ。だからこそこの時野党に甘んじていた。それまで長きに渡って指導者であった者が世を去り後継者すら選べずにいるのだ。だからこそ改革派にも遅れを取っていた。相手のそうした事情はカミュもよく認識していたのだ。

「果たして」

「意地でも出さなくてはなるまい」

ラフネールは本来の学者としての目で述べてきた。

「今はな」

「あちらも英雄を出しますか」

「そうだ。さて、誰が出るか」

「軍人でしょうか」

軍人出身者の多い保守派を知ったうえでの言葉であった。

「誰かを担ぎ出して」

「では彼かな」

軍人と聞いてラフネールには思い当たる人物が脳裏に浮かんできた。それは彼も非常によく知る人物の一人であった。

「シュバルツブルグエウロパ元帥」

「軍務卿ですか」

「そうだ。彼ならばどうだ」

シュバルツブルグの名を出したうえでカミュに問うてきた。
「先の戦いでは奮闘したが」
「名声は確かにあります」
カミュはそれは見極めていた。他のことも。
「そして能力も。あの方は立派な方です」
「では決まりか」
そこまで聞いたうえでカミュに問う、まるで自分の考えを確かめるかのように。
「軍務卿で」
「さて」
カミュはここで待っていたかのように異論を述べてきた。思案する目で。
「それはどうでしょうか」
「違うというのか」
「問題が二つあります」
またしても待っていたかのような言葉であった。カミュは言った。
「二つというと」
「まずは軍務卿御自身のお気持ちです」
まずはそれについて言及してきた。
「どうお考えなのか」
「本人が受けないと」
「あの方はあくまで武人です」
エウロパにおいても根強い考えであった。軍人は武人であり騎士である。そこには野心や欲望は否定するものがある。連合では軍人は仕事の一つに過ぎないがエウロパでは違うのだ。軍人を彼等自身も含めて特別視する考えがあるのだ。
「ですから」
「受けないか」
「声がかかってもです。あの方には野心はありません」
「確かにな」

カミュの言葉に頷く。それはラフネールもよくわかっていた。シュバルツブルグは古風な武人である。今政権にいるのも軍人としてである。政治家としてではないのだ。それは誰もが非常によくわかっていることであった。

## 第二十六部第四章　権威の失墜その二十五

「だからこそ」
「まずはそれだな」
「はい、そしてもう一つは」
言葉を続ける。それは鋭さを増しているように聞こえるものであった。
「年齢的なものもあるでしょう」
「年齢か」
ラフネールはそれを聞いてまた目を鋭くさせた。そこに何かを見るように。
「だがそれは」
「当てはまらないと仰るのですか」
「そうではないのか」
あらためてカミュに問うた。
「軍務卿は軍人としては壮齢であるし政治家としては」
まだ若い歳であると。そう言おうとした。政治家の年齢が普通の世界よりも上であるのはエウロパにおいても同じである。この時代でもそうである。
「それは確かにそうです」
カミュもそれは認めた。
「軍務卿はまだお若いです」
「では何故ここで言うのか」
カミュの言葉を聞いてあらためて問う。
「年齢のことを」
「相対的なものです」
「相対的というのか」
その言葉を聞いてカミュにまた問うた。
「はい、私が出ます」

「うむ」
それがまずはあった。
「私と軍務卿を比べると」
「やはり卿は若いな」
カミュは政治家としてはあまりにも若い。これは連合における八条や金についても言えることであった。若くして政治家になるというのはやはり稀有な礼なのである。
「はい、英雄に必要なものは時として若さです」
「若さか」
「若さはそれだけで多くの輝きがあります」
これは政治の世界にも言える。年齢の高い独特な世界であるからこそという意味もあり。
「オクタヴィアヌスも若かったではないですか」
初代ローマ皇帝である。彼は若くして輝きを手に入れた。カエサルが初老になるまで輝きを発揮しなかったのに対して。もっともオクタヴィアヌスはカエサルのように力強い存在ではなかったのだが。か細さの見える青年であった。もっともそれを利用した老獪さも既にあったのだが。
「ナポレオンもまた」
「ヒトラーもな」
実はヒトラーも政治家としては若かった。四十代で総統になっているのだ。これはエウロパの長い歴史でも数える程しかない。あまり語られないことであるが。
「英雄には力も必要だ。その力は」
「若さと共に」
カミュは述べた。
「そういうことですね」
「そうだ。今こそその若さが必要なのだ。いいな」
「ええ」
不敵な笑みはそのまま彼の笑みだった。傲慢なまでに自信に満ち、

同時に知性と狡猾さも併せ持つ。そうした笑みであった。それを今浮かべたのだ。
「では私がエウロパの総統に」
「頼むぞ。エウロパの為に」
「はい。しかし」
「しかし？」
カミュの今の言葉に目を向ける。笑ってはいない、真剣な目で。
「因果なものだな。線年前の栄華が消え去ったかのようだ」
「栄華ですか」
「そうだ、栄華がな」
栄華という言葉をあえて繰り返す。そこに何かを込めて。
「消え去ったな。もっともあの者達にしてみればこれこそが運命なのだろうがな」
「閣下」
カミュの声と目に怒りがこもる。それはラフネールに向けられたものではなかった。今ここにはいない遥か遠くで繁栄を謳歌する者達に対してであった。
「運命なぞは変えるものです。変える者こそが」
「英雄なのだな」
「それを私が果たしてみせます。英雄が」
今カミュは自身を絶対的な英雄だと確信した。そこにあるのは絶対の自信だった。しかし彼はこの時気付いてはいなかった。英雄は一人とは限らない。そして神々はどの英雄を選ぶのか。それを知ることもなかった。それが人であるカミュの限限界とも言えた。人としての。

# 第二十六部第五章　女王の決意その一

女王の決意

不退転であった。少なくとも今までは。
「何があっても」
アルコルジの口調は強いままであった。口調と同じく目までも。
「私は敗れません」
「何があろうともですな」
「はい」
そう周りの者達に告げる。そこにいるのはアヤグーズの者達だけではない。ハサンの者達もいる。だがそれでも彼女の口調は変わってはいなかったのだ。
「相手があのシャイターン主席であろうとも」
「陛下」
その言葉を聞いて声をあげる者達がいた。アヤグーズ軍の者達である。言うまでもなくアルコルジに長年仕えアヤグーズに生きる者達である。
「そう仰るならば我々もまた」
「勝利を」
「そなた達」
アルコルジは家臣達の顔を見る。見ればどの者達も忠誠心に満ちた力強い顔をしていた。その顔を見てアルコルジの心にさらに強いものが宿るのだった。
「アヤグーズの為に。戦ってくれるのですね」
「無論です」
王宮にある王の間。そこに集まるアヤグーズの者達にはこれまでにない強いものがあった。それで以って魔王シャイターンに挑もうとしていた。
しかし。そこにいるのはアヤグーズの者達だけではなかった。ハ

サンの者達もいれば多くのハサンの属国の者達もいるのだ。彼等はアヤグーズの者達とは別の考えであった。
「女王陛下」
そのハサンの者達のうちの一人がアヤコルジに声をかける。その階級は大将のものでありかなりの地位にあることがすぐにわかった。
「何でしょうか」
「謹んで申し上げます」
まずはアヤコルジの前に片膝をつく。アヤコルジはハサン軍元帥でもあるのだがこの場合はアヤグーズ女王としての彼女に一礼したのである。
「何でしょうか」
アヤコルジもまた彼に顔を向ける。そうして問うのであった。
「戦いの場はどうされるのですか」
「それはもう考えています」
アヤコルジの声には迷いはなかった。王の間の白い装飾の中でそのハサン軍大将に対して語るのであった。それは女王としての言葉であった。
「コムです」
「コム星系ですか」
大将はその言葉を聞いて声をあげた。
「そこで戦いを」
「いけませんか」
「いえ」
大将は片膝をついたままその言葉を否定した。この場合の否定は女王の意に対してあくまで忠実なものであった。だがそれは彼の本意であるかというとはなはだ微妙なものである。しかし彼はそれをあえて顔には出さない。それは軍人としての当然のことであった。
「それはいいのですが」
「いいのですが？」
その言葉に顔を向ける。整った眉が微かに歪んだ。

「コムで」
「他に何処があるでしょうか」
そう大将に問うた。
「戦力的に優先的なティムール軍の相手をするには」
「それは確かにその通りです」
大将はまたしても女王の言葉を肯定した。
「このアヤグーズにおいて戦うとするならばあの星系において他はないでしょう」
「はい。では異論はありませんね」
「いえ」
大将はここではじめてアヤコルジの言葉を否定した。むしろここからが本題であった。
「今戦うのは。どうでしょうか」
「戦うべきではないと」
「その通りです」
「では聞きます」
戦うべきではないと聞いた。だがそれで終わる筈がないのだ。戦いは最早避けられはしない。既にティムール軍はアヤグーズ領に入っているのだ。それで何もしないというのは国を捨てるということである。そんなことをする者があろう筈がないのだ。少なくともアヤグーズの者達ではだ。アヤコルジは今アヤグーズの者として語っていたのだ。
「何処で戦われるというのですか」
「一時退くべきかと」
彼はそう女王に言った。
「そうして我が軍と合流して戦力を充実させ」
「同時に伸びた敵軍の補給路を狙うと」
言葉を続けさせない。女王の方から言ってきた。
「そういうことですね」
「退くのもまた戦略です。ですから」

大将はまた上奏する。
「アヤグーズ領は放棄しましょう。そうして複雑な地形を利用して補給路を叩き戦力を消耗させて持久戦を挑むのです。さすればあのシャイターン主席といえど」
「その戦略は正論です」
一旦は彼の言葉を認めた。

## 第二十六部第五章　女王の決意その二

「そうすれば。如何にあのシャイターン主席といえ苦戦は免れないでしょう。そうしてそれにより勢いを消されやがては」
「我が軍の勝利となります」
大将は顔をあげた。見ればその顔が晴れ渡っていた。勝利を予感する顔であった。
「ハサン軍、そしてアヤグーズ軍の」
「アヤグーズ軍の、ですか」
ハサン軍はいい。しかしその後の言葉には甚だ疑問であるといった声であった。またその表情もそうであった。整った顔が暗く曇っていたのだった。
「そうです。そうして勝ちましょう」
「参謀」
大将の役職を口に出した。この場合はそれを口に出すべきであったし実際に彼女はそれを出した。そこにもまた深い意味があったのだ。
「アヤグーズ軍にとってはそれは勝利でしょうか」
「むっ！？」
アヤコルジの言葉に顔を向ける。
「それは。アヤグーズ領をティムールに引き渡せということですね」
「それは確かに」
それは認める。しかしそれだけではないというのだ。
「その通りです」
「参謀。貴方はアヤグーズの者達に対してそれをせよと言われるのですね。誇りを捨てよと」
「それは違いますが」
「アヤグーズの者達は皆誇りで生きているのです」
ここで女王はアヤグーズの名を出した。

「祖国を誰にも渡さなかった。その誇りで」
「では退かないと」
「そうです。これはアヤグーズを預かる者としての言葉です」
言葉が強くなった。完全なる強さがそこにあった。何者をも退ける強さがそこに。完全にあったのである。
「私は。退きはしません。彼等を迎え撃ちます」
「ですが閣下、それでは」
「アヤグーズはアヤグーズの者達のものです」
またしても言葉が発せられた。強い言葉が。
「そうですね。それでは」
「どうしても。退かれぬのですか」
大将は問う。その顔がはっきりと曇っていた。勝利ではなく敗戦を恐れる。その顔が今はっきりと顔に出ていた。それを隠すこともできない程に彼は不安を抱いてしまっていたのであった。
「それでは勝利は」
「貴方にもう一つ言うことがあります」
アヤコルジはまた語った。その強い言葉のままで。
「それは一体」
「アヤグーズの者達は。強いのです」
強さであった。戦場においての強さが重要なのは何時の時代でも同じである。それはこの銀河を巨大な船で駆ける時代であってもだ。それは同じなのだ。
「それはわかっております」
大将はまた答えた。アヤグーズは尚武の国として知られている。そのことは彼もよくわかっていた。実際にハサン軍もアヤグーズ軍にはかなり助けられている。だからこそ今のアヤコルジの言葉にも頷けることができたのだ。
「ですが」
「ですが？」
それでも言うのだった。彼もまた彼の考えが深くあるのだ。

「それでもです。やはり」
「ここは退くべきであると」
「左様です」
そうアルコルジに述べる。
「一時退きそうして持久戦に持ち込むべきです、やはり」
「それがハサンの考えですね」
「いえ」
その言葉は否定した。またしても首を横に振る。
「私個人の考えです」
「殿下は。どう御考えなのですか」
この場合の殿下とはハサン王太子であった。アルコルジにとっても上官にあたる。面識もある。信頼でき、尊敬できる人物であると思っている。しかし今はそれでも考えを変えるつもりはなかった。
「そこまではわかりませんが。ただ私は殿下の名代としてもここに参っています」
「名代ですか」
その言葉の意味は大きい。それもよくわかる。
「そうです。ですからやはりここは」
「参謀」
またしても彼を役職で呼んだ。
「この戦いにおける責任者は私ですね」
「はい」
これは事実だ。だからこそ頷くしかなかった。
「それは確かに」
「では決定権は私にあります」
そう名乗り上げるようにして述べた。

## 第二十六部第五章　女王の決意その三

「アヤグーズの主である私に対して」
「では。やはりコムで戦われるのですね」
「はい。あえてあそこで」
やはり考えは変わりはしない。それを彼にも言い伝えるのであった。
「殿下にお伝え下さい。必ずや勝利を収めハサンを救ってみせると」
「ハサンを」
ここではあえてハサンの名前を出してきた。これは理由がある。
「そうです。だからこそ」
「我が祖国を救って下さるのですね」
大将は問う。そうしてまたアルコルジに顔を向ける。
「その戦いで」
「ですから。御安心下さい」
ただ戦いに長けただけで女王とはなれない。女王に必要なものは政治もまた然りなのだ。今それをはっきりと口に出してみせたのだ。駆け引きの一つでもある。
「コムにおける戦いは。必ず」
「わかりました」
大将も頷いた。そこまで言われては彼としても納得する他なかった。
「我々もまた。共に戦いましょう」
「ハサン軍もまたですか」
「そうです」
その言葉と共に立ち上がった。毅然として堂々とした動作であった。
「ハサンを。アヤグーズを守る為に」
「戦って頂けるのですね」

「当然です」
そのあえて消していた表情が変わった。うっすらとであるが笑みを浮かべたのだ。それは落ち着いた、同時に昂然とした笑みであった。
「私もまた武人です」
彼は言う。
「戦場で戦うことは名誉なことであれど避けるものではありません」
「提督」
「そしてそれは私だけではありません」
彼は今度は後ろを向いた。その笑みのまま。
「そう。つまり」
「はっ」
彼の後ろにいるハサン軍の軍人達が彼に応える。彼等もまた上官と同じ顔であった。
「我々は今ここで陛下と共に」
「喜んで戦場に向かいましょう」
「よいのですね」
アルコルジはあらためて彼等に問うた。強い目の光が彼等に向けられている。
「かなり厳しい戦いになるでしょう。それでも」
「はて」
ハサンの者達は今のアルコルジの言葉に対して笑った。何を今更、といった笑みであった。その笑みは百の言葉よりも語るものであった。
「戦いの場とは厳しいもの」
「厳しくない戦いなぞあるでしょうか」
彼等は口々に言う。そこにあるのは武人としての心であった。
「それも今更です」
「ですから」
「では。ハサン軍は全軍ですか」

「そう、全軍です」
答えはもう決まっていた。これもまた当然の返答であった。
「全軍を挙げて」
「ティムールを倒しましょう」
「では。よいですね」
そこまで聞いては最早何も言うことはない。そうして言葉を続ける。
「今から。軍議を開きます」
「はい」
「それでは陛下」
アヤグーズ、ハサンの者達だけではない。他の属国の者達もまたアルコルジに従う。
「只今より」
「はじめましょう」
「会議の間へ」
アヤコルジは告げる。
「入りなさい」
「はっ」
皆返礼をした。その直後に動きをはじめた。
「では先に」
「参ります」
こうして戦いへの備えをはじめた。彼等の戦いの場は決まった。アヤグーズ軍は今やコムに向かう。それが彼等の決定であった。

## 第二十六部第五章　女王の決意その四

アヤグーズ軍、ハサン軍及び各国軍がコムに移動をはじめているのはすぐにティムール軍に伝わった。シャイターンはその報告をアヤグーズ領内で聞いていた。
彼は今アヤグーズの星系の一つに留まっていた。そこで軍の補給を行わせていたのだ。
「コムか」
「そうです」
報告をするのは若い将校達だった。彼等は王家の別邸において優雅にくつろぐシャイターンに対して詳細な報告を行っていた。
「そこに今全軍を挙げて」
「集結しています」
「ふむ。やはりな」
シャイターンはこの時軍服を着て別邸の中庭にいた。そこで整った緑の庭を見ながら漆黒のワインを楽しんでいたのだ。
「コムか」
「予想通りなのですか」
「そうだ」
そう将校達に対して語る。落ち着き払った声で。
「あの場所しかあるまい。彼等が戦うのはな」
「他にはないのですね」
将校の一人が彼に尋ねた。
「彼等にとっては」
「絶好の場所はそこしかないだろう」
こう答えを返した。
「彼等にとってはな。理由はわかるか」
「はい」
別の一人がシャイターンに答える。

「コムは堅固な宙形です。守るに易く攻めるに難い」
「それだけではありません」
また別の一人が口を開いた。
「あの星系には多くの軍事基地があります。それも利用できます」
「そうだ。彼等にとってはあまりにも戦うによい場所だ」
将校達に顔を向けての言葉だった。
「実にだ。そして我々にとっては」
「あまりにも戦い難い」
「厄介な場所です」
「普通に考えればな」
ふと不敵な笑みを浮かべてみせてきた。シャイターンのいつもの揺るぎない絶対の自信に満ちた笑みだった。この笑みこそが彼の最大の魅力なのだ。彼のカリスマはその自信によるところが最も大きい。彼自身もそれがわかっているから笑ってみせたのだ。
「普通の者ならばな。そう考えるだろうな」
「では閣下は」
「違うと仰るのですね」
「その通りだ」
答えは脚本通りであった。彼自身の書いた。
「敵が誰であれだ」
「誰であれ」
将校達の言葉の流れもわかっていた。全ては計算通りであった。
「私は常に勝利を収める。それはアッラーが定められたことなのだ」
「アッラーが」
イスラム社会であるサハラにおいては言うまでもなく絶対の存在であるアッラーの名を出してみせる。これもまた脚本通りなのだがそれ以上に彼は実際に自らをアッラーにより選ばれた存在だと確信していた。それもまた彼の自信の根拠の一つとなっているのだ。
「アッラーは私に勝利を下さる。そして」
言葉を続ける。

「栄光も」
「ではコムに向かわれるのですね」
「当然だ」
笑みを浮かべる。絶対の自信に満ちた笑みを今。
「勝利を収めるだけだ。後はな」
「わかりました。それでは」
「諸将をここに呼べ」
伝令役でもある彼等に告げた。
「軍議を開く。よいな」
「はっ、それでは」
「場所はこの宮殿の王の間において行われる」
あえて王の間とした。アヤグーズ王家から奪った宮殿の王の間において。
「よいな。今から私もそちらに向かう」
「王の間に」
「その主を倒す為にな」
今いる宮殿の本来の主を倒しそうして完全に自らのものとする。シャイターンはそのことを思い覇者としての誇りを胸に提督達を呼ぶのだった。
この宮殿の王の間は白く質素な造りである。別邸であるので当然と言えば当然であるがどちらかというと武骨な内装となっている。それは尚武の気風を有するアヤグーズのことを考えればこれは妥当なものであった。しかしシャイターンはそれを今一つ気に入ってはいないようであった。
「ふうむ」
少し気難しい顔で部屋の中を見回す。まだ一人であり部屋の中央において部屋を見回していたのだ。とりわけ上と壁を見ている。

## 第二十六部第五章　女王の決意その五

「どうもな。こういった装飾はな」
彼はどちらかというと華美を好む。豪奢な生活の中にいた彼にとってはこれは当然のことであるがだからこそこの武骨で装飾に欠ける趣きを楽しまなかったのだ。
「変えたいものだ」
「変えたいですか」
後ろから声がした。振り向けばフラームがいた。彼もまた軍議に呼ばれていたのである。
「この宮殿を」
「宮殿だけではない」
振り向いた姿勢のまま弟に対して応えた。
「全てをだ」
「ではこのアヤグーズ全てを」
「アヤグーズか」
弟が何を言いたいのかはわかっていた。彼もまたそれにあえて乗ってみせた。
「違いますか？だからこそ」
「アヤグーズだけではない」
これが彼の返答であった。
「サハラ全てをだ」
「兄上の下に」
また声がした。今度はアブーが来た。シャイターン家の兄弟達がまずは揃った。
「そうですね。サハラの全てが」
「覇者とは何か」
シャイターンは末弟に対して問うた。
「聞こう。覇者とは何だ」

「アッラーの剣で全てを手に入れる者です」
イスラム世界においては覇道もまたアッラーの導きに拠るものなのだ。全てのものはアッラーに司られている。シャイターンもまたその中にあるというのだ。
「そしてそれは」
「私だ」
先程の青年将校達に対するのとほぼ同じやり取りとなっていた。
「私こそが覇者だ。全てをアッラーからお受けした剣で手に入れる」
「そうして兄上の色に変える」
「私の色は覇権の色」
また告げる。
「赤こそがな。赤により全てを覆う」
「このサハラを」
フラームが応える。
「赤に染められるのですか」
「この宮殿は色は悪くはない」
赤を好むといえども他の色を拒むというわけではないのである。彼はそこまで器の小さな男ではない。白もまた受け入れていた。
「色はな。しかしだ」
「兄上の覇気を受けてはいない」
「私の気を受ければ全てが変わる」
悪魔的なものと英雄的なものが合わさった笑みであった。邪悪と覇気が同時にそこにはあった。それはまさに魔王の笑みであったのだ。
「この宮殿もまたな」
「それを確かにする為の一つの布石が次の戦いですな」
「布石のな」
アブーに対して答える。
「一つに過ぎないのだ。所詮はな」
「それでは次の戦いは」

「全ては既にアッラーが定められている」
玉座の向こうに目をやった。そこは王者より上の者の場所だ。彼は今そこを見ていたのだ。王の上に立つ、帝王の座をだ。
「私の勝利だ」
「最早全ては兄上の中にあるのですね」
フラームは兄のその言葉を聞いて楽しげな笑みを浮かべた。生まれてから兄と接してきた。だからこそあらゆることがわかっているのである。
「そうしてそれにより」
「勝利がもたらされる」
「では兄上」
アブーが兄にまた声をかける。
「皆の者に伝えるのは」
「一つだ」
また答えた。決まっている答えを。
「勝利をだ。ではそろそろだな」
「はい」
二人は同時に答えた。兄に対して恭しく一礼する。
「緒将が来ます」
「私も座すとしよう」
今度は玉座に目をやる。そのうえでの不敵な笑みであった。
「そこで話す。よいな」
「はっ」
弟達はまた一礼する。シャイターンはそのまま玉座にあがりそこに座した。そうして部屋にやって来る諸将を見やる。全員が揃ったところで言うのだった。

## 第二十六部第五章　女王の決意その六

「全軍コムに向かう」
一言だ。だがそれで充分だった。
「よいな」
「はっ」
全員一礼する。それを確認してからまた告げた。
「既に敵はコムに向かっている」
「もうですか」
「驚くことではあるまい」
声をあげた提督の一人に述べた。
「それはもうわかっていたことではないか」
「確かに」
その提督はシャイターンの言葉に頷いた。既にティムールではアヤグーズ軍がコムに入ると予想を立てていたのだ。これはアルコルジの性格を見抜いたシャイターンの深い洞察力によるものであった。彼は人の性格を見抜くことにも優れていたのだ。
「では今から我等も」
「出撃は二日後とする」
出撃の日時も今告げた。
「その時までに備えはしておくように。それだけだ」
「わかりました。それでは」
二人の弟達と提督達は一礼して応える。
「その時にいざ」
「勝利を我が手に」
「そう、勝利を我が手に」
シャイターンは彼等の言葉に応えて述べる。
「しかしだ」
「しかし？」

「まだ何か」
「諸君に一つ覚えておいてもらいたいことがある」
それを今彼等に対して言うのだった。覇者を目指す者として。
「覚えておくこと」
「閣下、それは一体」
「この戦いでの勝利は一つの勝利に過ぎない」
そう彼等に告げた。
「一つの、ですか」
「では聞こう」
提督達がいぶかしんだのを見て取ってまた言葉を出す。
「我が軍の目的は何か？」
「我が軍の」
「そうだ。何だ？」
また問うてきた。
「一つの勝利だけなのか。どうか」
「いえ」
提督の一人がそれに応えて述べた。
「我々の目的はサハラの統一です」
「そうだ」
その提督の言葉に頷く。
「私はサハラを一つにする。その前ではコムでの勝利なぞは」
「些細なものだと」
「そう仰るのですね」
「その通りだ」
また提督達に告げる。
「わかったな。コムでの戦いは一つの勝利に過ぎないのだ」
「では最高の勝利は」
「統一なのですな」
「それこそが我がティムールの目的なのだからな。だからこそ」
シャイターンは言葉を続ける。

「その勝利に驕ることもあってはならないのだ」
「はっ」
「では我々は」
彼等はシャイターンの言葉に頷いてから述べた。
「統一に向けて」
「閣下と共に」
「諸君等は運がいい」
シャイターンの顔が変わった。あの傲岸なまでに自信と余裕に満ちた笑みだった。その笑みで提督達を見下ろしていたのだ。
「いや、賢明というべきか」
「賢明ですか」
「我々は」
「そうだ」
シャイターンはまた告げる。

## 第二十六部第五章　女王の決意その七

「私に仕えることを選んだのだからな。それこそが」
「いえ、それはまた違います」
「そうです」
彼等はここでシャイターンに対して反論してきた。シャイターンは部下達に対して反論することも許している。己の意見を絶対的なものとして他人に強いるような男ではないのだ。もっとも己の考えに対して絶対的な自信は持ってはいるのだが。
「我々は閣下だからこそ」
「お仕えしているのです」
「私だからか」
「そうです」
またシャイターンに対して言うのだった。
「閣下でなければ誰が仕えましょう」
「我々が仕えるのに相応しい御方だからこそ」
「今我等はこうして」
「そうか」
シャイターンは彼等の言葉を受けて笑った。先程までの顔に穏やかさが宿っていた。彼はそうした笑みも浮かべることができるのだ。
「私は諸君等に感謝の言葉を述べたい」
「いえ、それは」
「そのような」
彼等はかえって恐縮した。シャイターンの今の言葉に。
「御気遣いは無用です」
「あくまで我々の意志なのですから」
「ではまた一つ言っておこう」
シャイターンはまた言葉を続けるのだった。
「一つ？」

「それは一体」
「私が仕えるに値しない男ならば」
彼は言う。顔が穏やかなものからそれまでの傲岸なものになっていた。あくまで全てを見下ろしその上に立つ男の笑みであった。
「何時でも寝首をかくがいい」
「まさか」
「そのような」
「そうでなければ去ってもよい」
こうまで言う。
「仕えるに値しない主は滅びるしかない」
「滅びるしか、ですか」
「そうだ。それが世の摂理だ」
シャイターンの哲学であった。イスラムの世界では人が仕える存在は本来は唯一にして絶対的な神であるアッラーだけであるのだ。それは誰もがわかっている。ムスリムならば。シャイターンもまたムスリムだ。そのうえでの言葉なのだ。
「この世のな」
「左様ですが」
「では閣下」
提督達はその言葉を受けたうえでまた言うのだった。シャイターンに対して。
「何だ？」
「閣下が閣下である限り」
「我等はここにいてよいということですな」
「それもまたアッラーの思し召しでもあるならば」
「アッラーのか」
アッラーを深く信仰するシャイターンにとっては。心地よい名であった。
「左様です。だからこそ」
「我々は閣下と共に」

「その決意は変わりはしないか」
「閣下が閣下であるならば」
「決して」
「そうか。最早問わぬ」
そこまで受けては最早言葉はなかった。シャイターンは彼等の心を全て受けた。そのうえでまた言葉を続けるのであった。
「決してな」
「それでは閣下」
「いざ戦場へ」
「出撃の時は先に伝えた通り」
また言い伝える。それと共にシャイターンは立ち上がった。玉座から立ったその姿は最早帝王のそれであった。彼は既に帝王となっていたのだった。
「よいな」
「はっ」
「では」
そこに控えている者達が全て敬礼する。こうしてシャイターンもまた己の軍を率いて戦場に向かうことになるのだった。最初の決戦の場へ。

## 第二十六部第五章　女王の決意その八

ティムール軍とアヤグーズ軍がコムに向けて動きはじめたという情報はすぐにオムダーマン軍や連合、マウリアにも伝わった。彼等はそれを聞きそれぞれの判断を下すのだった。同時に彼等それぞれの動きもまた。

「既に権益は確保していたな」

キロモトは両軍が動いたと聞いて最初にこの言葉をカバリエに対して発した。言葉が発された場所は大統領官邸の自身の執務室であった。

「あの方面に関するものは」

「無論です」

カバリエは彼の前に立っていた。そのうえですぐに言葉を返したのであった。

「それも全て」

「では安心して見ていていいな」

キロモトはその言葉を聞いてまずは微笑んだ。安堵した笑みであった。

「この戦いは」

「はい。我々は完全に傍観者に徹することができます」

「確かにな。だが」

キロモトはここでまた述べた。目の色が安堵から何かを狙うものに変わっていた。

「だが？」

「ハサンは思ったより劣勢なようだな」

ハサンについての言及だった。

「ティムールだけでなくオムダーマンにも押されているな」

「はい。友好関係にある我々としては」

「望ましくないと言える」

言葉は気遣うものである。しかしそれを出すキロモトの目は相変わらず何かを狙う鋭いものであった。異様なまでにアンバランスな対比がそこにあった。
「ハサンがこのまま負け続け消え去るというのはな」
「では何かしらの援助を」
カバリエはそれを言葉に出してきた。
「出されますか」
「そうだな」
相変わらず言葉では気遣っている。しかし目の光は鋭いままだ。
「見返りがあるならば」
「見返りですか」
「我々としては。わかってくれていると思うが」
「はい」
カバリエも笑みになった。何か得体の知れないものを含んだような笑みに。
「おおよそですが」
「ではそのおおよそのものに関して尋ねたい」
ブレーンの一人でもある彼女に対して問う。静かだが確かな声で。
「どういったものがよいか」
「援助するならばその方法は」
「そうだ。それによって今後が大きく違ってくる」
一口に援助と言っても色々ある。単に資金や兵器を送るものもあれば実際に軍を派遣する場合もある。二人は今何を出そうか話をしているのだった。
「それだが」
「私としては資金援助でよいかと思います」
「資金援助か」
「そうです。サハラの今後は予測がつけにくいかと」
それがカバリエの読みであった。彼女は外交官として戦局を慎重に見ていた。その為迂闊な行動は避けるべきであると考えているの

だ。
「オムダーマン、ティムールが勝利した場合も考えられるかと」
「確かにな」
キロモトはカバリエのその言葉にも頷いた。彼もそれは予測していた。あらゆるケースを考えるのが政治の基礎である。彼もそれを忠実を守っていたのだ。
「そうした場合下手に援助をすれば」
「サハラとの今後の関係においてよくはありません」
「それではだ」
キロモトは考える目をして述べた。
「ここは半ば傍観者に徹するか」
「それも手です」
カバリエも頷く。キロモトに対して。
「三国とこのまま交流を続けていき」
「どうなってもよいようにしておくか」
「我々はそれが可能です」
今後はこう述べてきた。

## 第二十六部第五章　女王の決意その九

「我々連合は」
「そうだな。我々と彼等の力の差は圧倒的なまでだ」
この言葉には傲慢はない。あくまで冷静に連合とサハラの力の差を述べたまでである。連合の人口は四兆、それに対してサハラは全土を合わせて二千億である。人口において二十倍の差があり経済規模も領土も資源も殆どが二十倍程度の差がある。これだけの差があれば最早多少のことは遠慮が無用と言えた。
「だが慎重に行くべきであるしな」
「はい。少なくとも軍の派遣は無理です」
カバリエは軍の派遣は困難との見解を示してきた。
「それに関しましては」
「それは私もわかっている」
これにはキロモトも完全に同意してきた。こくりと頷いて応える。
「エウロパとの戦いを終えたばかりだ。軍にも休息が必要だ」
「それだけではありません」
カバリエは言葉を付け加えてきた。
「それだけではないか」
「やはり実際に兵を派遣しますともうそれだけで」
戦争になってしまうと。そう言いたいのだ。連合は戦いを好むわけではない。むしろ刃を交えずして何かを得られるならばそれに越したことはないと考える勢力である。もっとも戦わなくてはならない場合は別であるが。
「オムダーマン、ティムールと」
「全面戦争だな」
「ですからある程度の資金援助に留めて後は傍観だけで宜しいかと」
「結論はそれだな」
カバリエに対して述べる。

「我々にとっては。ハサンの存続と勝利が望ましいが」
「それとても極端に願うものではありません」
そういうことであった。所詮今の連合にとってサハラとはそういう存在であった。あくまで外の世界であり関心の外なのだ。それはキロモトもカバリエも同じなのだ。
「権益も確保されていますし」
「わかった。外相の意見はそうだな」
「はい。消極的協力です」
一言で言えばそうなる。
「それで宜しいかと」
「実は首相も同じだ」
ここで彼はアッチャラーンの名を出してきた。
「蔵相もそうだ。やはりあの地域には深入りはしない」
「かなりの部分傍観者で過ごすと」
「そうだ。だが一人考えが気になるのだが」
「その一人とは」
「国防相だ」
八条の名が出て来た。言わずと知れた連合の軍事の要である。エウロパとの戦いを鮮やかな勝利に導いた彼は今では連合の若き英雄なのである。
「彼はどういった考えかな」
「おそらくは慎重派かと」
カバリエはそう予想を立ててきた。
「武を濫用する方ではありませんし」
「おそらくはそうだな」
キロモトもそれを読んでいた。カバリエの言葉に同意して応えた。
「だが実際に考えを聞いておきたいが」
「ではこちらに」
「既に来るように言ってある」
静かにそう述べた。

「そしてハサンに対する意見を聞きたい」
「今国防相はかなり忙しいそうですが」
カバリエは八条自身について言及してきた。
「対エウロパ戦戦勝式典の用意で」
「あれか」
エウロパとの戦争は連合にとって記念すべきことであった。連合が他国との戦いを行った最初のものであり同時に連合が戦争に勝利した最初のものでもある。これまで連合は戦争自体を経験して来なかった。その連合が勝利を収めたことは大きかった。それも全ての国が集う中央軍がである。これは連合中央政府への統合の格好の象徴となると共に連合軍という存在が連合各国の統合の証にもなるという実に多大な政治的貢献があった。
「あれの用意は順調か」
「記念日までには確実だとのことです」
「ふむ。ではこちらに来てもらっても問題はないな」
キロモトはそこまで聞いて改めて言った。
「長官に来てもらってもな」
「では長官の意見を聞いてからな」
「最終的な意見を決定されるのですね」
「そうしよう」
最後の決断までにそれを聞くことにした。

## 第二十六部第五章　女王の決意その十

「ここはな」
「わかりました。それでは」
「最後に聞きたい」
キロモトは一礼したカバリエに対して声をかけた。
「はい」
「あの戦争は。果たしてどうなるかな」
「私の見たところ残るのは二つかと」
カバリエはキロモトにそう答えた。
「一つはオムダーマン。そしてもう一つは」
「もう一つは」
「次の戦いで決まります」
それがカバリエの読みであった。
「おそらくは。あのコムの戦いで」
「あの戦いでか」
コムに二つの勢力の軍が集結しているのは彼等も知っている。その趨勢は彼等も注目しているのだ。サハラの流れを。
「そうです。果たしてどうなるか」
「それはこれからだな」
キロモトは呟いた。これでカバリエとの話は終わった。彼女が去った後で程なくして八条が官邸のキロモトの部屋に戻って来た。端整なスーツを着ていた。
「只今参りました」
「うむ」
キロモトは飾りのない態度で八条に返礼する。
「よく来てくれた。理由は他でもない」
「サハラに関してですか」
「そうだ。どうするべきだと思うか」

今度は八条に問い返した。
「援助をするか傍観するか」
「最低限で宜しいかと」
八条の言葉は予想通りであった。やはり彼も慎重派であった。
「下手に深入りしてはいらぬ火傷をしてしまいます」
「火傷か」
「はい。ですから」
八条は言う。
「ここは慎重に行うべきです。ですが」
「ですが？」
「ここで一つ問題があるように思えます」
八条の目に光が宿った。強い光であった。
「それは何かな」
「王家の存在です」
皇室を戴く日本人ならではの言葉であった。
「王家か」
「若しハサンが敗れるとします」
実直なまでにストレートな言葉であった。
「その場合ハサンの王家はどうなるか」
「それか」
「はい。あの王家は長い歴史を持ち連合においても交流のある皇室、王室が多いです」
「そういえばだ」
キロモトはそれを聞いてふとあることを思い出した。
「日本もそうだったな」
「そうです」
キロモトのその言葉に頷いた。
「我が国の皇室もまた交流が深く。ハサン王家に不幸があれば」
「惜しむというところではないか」
「それでです」

八条は言う。
「若しもの時は連合も動く必要があると思います」
「政治的にだな」
キロモトは政治的にという表現を使ってきた。八条が軍事的なことを言っているのではないというのは彼にもわかっているからである。
「はい、ハサンが崩壊し国家がサハラに存在できなくなれば」
「王家を保護しなければならないか」
「これまでもそうしたことがありましたが」
サハラは戦乱に覆われてきた場所である。これまで多くの王家が滅んできた。中には一族全員が戦乱の中に消えたケースもあるが多くは連合に亡命しているのだ。そうした亡命王家により形成されている連合王国もまた小国ながら連合には存在している。
「今回もそのケースが適用されるかと」
「では。また亡命王国に入るのだな」
「はい」
八条はそう述べた。

## 第二十六部第五章　女王の決意その十一

「いざという場合はそうするべきだと思います」
「いざという時か」
キロモトは八条の言葉に静かに応えた。
「そういった場合も考えておかなければならないしな」
「そういうことです。まだ戦局は読みにくいですが」
「その戦局だが」
キロモトは今度は戦局について言及してきた。深い知性を潜ませた目であった。
「長官はこの戦争の流れをどう見るか」
「この戦争のですか」
「そうだ。どう見ているか」
それについて尋ねてきた。カバリエの話を聞いた後に彼の読みも聞くつもりなのだ。
「この戦い。どうなると思うか」
「まだはっきりしたことは読めない状況です」
八条は慎重な読みを述べてきた。
「今のところは。序盤でしかありませんから」
「序盤か」
「戦いははじまったばかりです」
こうも述べた。八条は元々慎重な男でありそれは政治や戦略にもよく現われているがとりわけ戦局に関してはそうした読みをする男なのである。
「オムダーマンもティムールも今は進撃していますが」
「これからはわからないか」
「はい。ですが」
ここで彼は言った。
「次の戦いはかなり重要なものとなるでしょう」

「次というと」
「オムダーマンは北上しています」
まずはオムダーマンに言及した。
「オムダーマン軍は確かな足掛かりを得ています」
ジェルム星系での戦いである。この戦いでアッディーン率いるオムダーマン軍が鮮やかな勝利を収めたことは連合にも伝わっているのである。
「次の戦いで勝利を収められればかなり大きいです」
「そうか」
「そしてティムールですが」
今度はシャイターンのティムールについて言及した。
「今アヤグーズ領に侵攻していますがここはサハラ西方の要地です」
「うむ」
だからこそシャイターンも攻めているのである。ハサン軍が一旦そこを放棄してから持久戦を考えていたのもそうした要地であるという事情が背景にある。
「その地を得られれば」
「大きいというのか」
「はい。それは次の戦いにかかっています」
八条は言う。
「両軍は今コムを目指していますがティムール軍はその戦いに勝利を収めれば」
「戦局を決定付けかねないというのだな」
「はい。どちらも次の戦いにかかっているのは間違いありません」
「そうか。次か」
「戦いはまだ続くにしろ」
そのうえで戦いはまだ続くという予想も出す。
「次の戦いはかなり重要なのは間違いありません」
「そうか」
「オムダーマンもティムールも有利になるのは間違いありません」

「では。ハサンはまずいか」
キロモトは静かに述べた。
「彼等にとっては正念場か」
「そうです。ですが我々は彼等にはさして援助する必要はないでしょう」
「ふむ」
この言葉はキロモトが予想していた言葉であった。だから驚いてはいなかった。むしろカバリエと同じ意見であるので内心これからのハサンに対する政策を決められたことに気持ちをよくさせていたのである。迷うよりは決めた方がいいというわけである。
「援助するにしても」
「資金援助程度だな」
「それでいいかと思います。それも名目上は軍事関係ではなく」
そうしたカモフラージュは政治の常である。あからさまに軍事目的で援助を出すといったことは相手を挑発する以外では有り得ない。連合としては今後少なくともオムダーマンやティムールと揉めるつもりはない。従ってこれは当然の処置であった。

## 第二十六部第五章　女王の決意その十二

「経済援助としての借款でいいと思います」
「そうか。ではそれで行こう」
「はい」
八条はキロモトに対して頷く。
「それで行きましょう」
「わかった。それでだ」
さらに話を進める。
「連合軍の派遣はいらないな」
「それは止めるべきです」
八条はそれはすぐに否定した。
「何があっても。それだけは」
「ならないか」
「ここでサハラに兵を送ればオムダーマン、ティムールと全面戦争に至ります」
その危険性について言及した。
「そうなれば我が軍も不用意に損害を出し出費もかなりのものです」
「ましてや権益はもう確保されているしな」
「そうです。無益な出兵になるかと」
八条はそれを嫌ったのである。何も得られない戦争はしないということである。
「ですからそれは」
「そうだな。止めておこう」
キロモトもそれはすぐに決定しいた。
「賛成者もいないしな」
「軍も今はエウロパとの戦争が終わったばかりですし」
やはりそれも出された。
「動いても何にもなりません」

「ましてやサハラは火事場だ」
連合から見ればそう見えるのだ。
「火事場にわざわざ不用意に入っては」
「それが国家の危機になります。やはりサハラはサハラです」
ここでも連合のサハラに対する考えが出ていた。彼等にしてみればサハラというのは化外の地であるのだ。自分達の場所ではないという考えが殆どだ。
「彼等は彼等で」
「任せていればいいか」
「基本的にはそうであるべきです」
八条はあくまで今のサハラには関わるべきでないと言う。
「こちらに何か関わらない限りは。そのままです」
「わかった。では資金援助だけにしておこう」
「そしていざとなれば王家の引き受けで」
「些細だな。だがそれで」
「充分です」
こうして八条は今回のサハラの戦いにおける自身の考えを述べ終えた。そしてそれは連合中央政府のサハラに対する政策ともなったのであった。
「それでだ」
話は終わった。だがキロモトはまだ言う。
「話は変わるが」
「何でしょうか」
「長官もそろそろいい頃ではないのか」
「といいますと」
それまでの政治的な雰囲気が消えた。いささか家庭的なものさえ感じられるものになった。
「いや。相手はいるかな」
「相手！？」
キロモトの言葉に首を傾げさせる。

「相手といいますと」
「だから相手だ」
また彼に言う。
「相手はもういるのか。どうなのか」
「御言葉ですが閣下」
八条は真剣に戸惑う声で応えてきた。見れば本当にわかっていない顔である。
「一体何のことでしょうか。相手がどうとか」
「冗談か？」
次にキロモトはこう返した。
「それは。冗談ではないのか」
「いえ、私は本気ですが」
真顔で答えてきた。見れば本当にそうした顔になっている。
「何が何なのか。わからないのですが」
「わからないのか。相手とはな」
「はい」
固唾を飲む顔になる。この時八条は不必要なまでに真面目になってしまっていた。

## 第二十六部第五章　女王の決意その十三

「恋人だ。若しくは婚約者は」
「ええ、それでしたら」
「いるのか」
「いえ」
期待で顔を上げたキロモトを待っていたのは落胆であった。今の八条の言葉を聞いてまるでこの世の終わりのように落胆したのであった。
「そうした方は全く」
「そうか。いないのか」
「それがどうかしましたか？」
「どうかするのだ、これは」
キロモトはたまりかねた顔でそう返した。
「いいかね、長官」
「ええ」
「君もいい年頃ではないか。そろそろ」
「残念ですが私に声をかけてくれるような方はいませんので」
八条は表情を変えずにそう言うのだった。
「申し訳ありませんが」
「それは嘘ではないのか？」
キロモトはまたしても八条の言葉を否定した。彼は連合において最も端整な顔をしている政治家だと言われている。黒い髪と瞳に細面の白面を持つ高貴な美青年というのが彼の評価だ。スラリとした長身はどんな服も立派に着こなす。東洋風の美貌である。
「長官程になると」
「私は嘘を申しませんが」
実直な性格で知られている。これでも有名である。
「ましてやこうしたことでは」

「本当なのだな」
「ですから嘘ではありません」
もう一度答えた。
「それは信じて下さい」
「わかった。本当にいないのか」
「何度もお話させて頂きますが」
「うむ。そこまで言うのならいい」
これ以上聞こうとは思わなかった。それで止めた。
「しかしだ。そんなにいないのか」
「どういうわけか女性にもてたことはありません」
彼自身がそう思っているだけであるが。
「ですから今も」
「では見合いは」
この時代の連合では各国で見られる。結婚相手を手に入れるには有効な方法の一つでもある。こうしたことも多分に縁であるのだが。
「親からは話もありますが」
「だろうな」
これはわかった。八条は家の長男、即ち跡継ぎである。この時代はそういった考えは連合においてはかなり稀薄となっているが名門である八条家はまた別なのである。彼は嫡男でありどうしても家を継いで跡を残さなくてはならないのである。
「時間がなくて」
「今の間はか」
「そのうちだと思います」
彼はいささか他人事のような言葉を出した。
「少なくとも今は」
「国防長官としての責務が忙しいのだな」
「はい。こう申し上げては長官には失礼ですが」
「いや、それは構わない」
それは許した。

「こちらも無理を言って来てもらっているしな。それは」
「左様ですか」
「うむ。だが相手は自分で見つけるべきだ」
キロモトはここで持論を出した。そちらに八条を誘導することにしたのだ。
「自分でな。いいかな」
「それはどうにも」
しかし彼はそれに対しては首を横に振る。どうにも気が乗らないといった感じである。
「私は。苦手です」
「性分か」
「まあ。そういうところです」
「しかしだ。それにしても」
呟きながら八条の顔を見る。やはり端整な顔である。同性愛者からも人気があるので有名だがそうでないキロモトから見てもやはり端整であった。
（この顔でか）
心の中で呟く。
（相手がいないというのは。嘘のようだ）
「では閣下」
八条はふと声を出してきた。キロモトもそちらに顔を向ける。

## 第二十六部第五章　女王の決意その十四

「うむ。何だ」
「そろそろ時間ですので退散させて頂いて宜しいでしょうか」
「むっ、もうか」
その言葉を聞いて壁にかけてある時計を見る。見ればもう話し合いに予定された時間に達していた。時間の流れが実に早かった。
「わかった。それではな」
「はい。それではまた」
八条は一礼して挨拶をする。
「サハラに対する私の意見は述べさせて頂きました」
「有り難う。それではまたな」
「ええ。それでは」
八条は部屋を後にする。キロモトは一人になってまた呟くのだった。
「やれやれ。本当は本人が気付いていないだけかも知れないな」
八条がもてないという話についてであった。
「普通あれだけの美男子ならば誰でも」
彼の予想は当たっていた。ここで一人彼を誘い損ねて苦い顔をしている美女がいたからだ。
「そうですか。今日は無理ですか」
「はい。申し訳ありません」
金が八条に『個人的に』電話をかけていたのだ。あくまで『公の』ことに関しての打ち合わせの為に夕食を一緒にと話したのだがあえなく撃沈したのである。
「今日はどうしても離せない仕事がありまして」
「なら仕方ないですね」
金は残念さと無念さに満ちた声で応えた。それも八条には気付かれないが。

「それではまた」
「はい。またの機会に」
八条は何も気付いていない様子で電話を返す。そもそもどうして個人の電話にかけてきたのすらわかっていない。どうしても気付かないのだ。
「宜しく御願いします」
「はい」
こうして電話を切った。電話を切った後で金はどうにもやりきれない顔でそこにいた。
「また。駄目だったのね」
自分の気持ちは隠しているが。やりきれない。そうした苦しい気持ちを押し殺して彼女は一人で夕食に向かうのだった。多量の菓子を慰めに。
エウロパでも今後のサハラの趨勢は見守られていた。モンサルヴァートはシュバルツブルグ達他の軍高官達とそれについても話をしていた。
「今のところはアヤグーズ有利か」
「そうですね」
彼はシュバルツブルグのその問いに答えた。今彼等は軍務省の一室で茶を飲みながら話をしていた。取り立てて機密的な話ではないのでいささかくつろいでもいた。
「オムダーマンとの戦いにしろ」
「やはり数か」
シュバルツブルグはこう呟いた。
「ハサンが有利に立っている理由は。国力が違うな」
「敗れはしましたが国力はまだ彼等の方が優勢です」
モンサルヴァートは豪奢な白い陶器のカップを手に答えた。その中にあるのは紅の茶であった。そこからは湯気と共に甘い茶の香が漂っている。
「経済の中心地は何ら手をつけられてはいませんし」

「心臓部はしっかりしているのか」
「そういうことです」
シュバルツブルグにこうも答えた。
「あくまで今のところはですが」
「これからはわからないか」
そう述べるシュバルツブルグの目が光った。
「ハサンがしっかりしているとなればこちらとしては有り難い」
「確かに」
二人は頷き合う。それには理由があった。
「彼等が強ければそれだけ戦乱が長引きますから」
「その通りだ」
そういう理由であった。サハラの戦乱が長引けばそれだけサハラが衰える。そうすれば弱体化している今のエウロパにとっては脅威が弱まるということなのだ。
「今よりも揉めてもらわないとな」
「それに関しては大丈夫かと」
彼はまた答えた。
「戦乱はまだ終わりませんし」
「三つが二つになる」
シュバルツブルグはそれに応えて言った。
「そして二つが一つにだな」
「その通りです」
モンサルヴァートは彼のその言葉に頷いてみせた。サハラでの戦いは統一まで行われる。彼等もそれを見通していたのである。
「また下手をすれば」
「またしても分裂する」
それがサハラの歴史であった。彼等は今まで多くの国々に別れて争ってきた。その途中幾度か統一を果たせそうな勢力も現われた。だがその都度そうした国家は儚く潰え今に至る。彼等もそうしたサハラの歴史を熟知しているのである。

## 第二十六部第五章　女王の決意その十五

「そうなればまた戦乱です」
「つまり我々には目を向けられない」
「そういうことです。本来ならばここで謀略を仕掛けることもあったのですが」
モンサルヴァートは謀略は自分では使うことはない。だがエウロパ中央政府は今まで数多くの謀略をサハラ各国や連合に仕掛けている。もっとも先の連合との戦争はそうした謀略の失敗に起こるものであるが。謀略は労少なく功多いものであるが失敗した場合は容易に政治的に糾弾される材料となり信頼もなくす。諸刃の剣なのである。
「今の我々にはそうした余裕は」
「連合の情報収集だけで精一杯だな」
「残念ながら」
モンサルヴァートは自分の顔を苦いものに変えて答えた。
「情報本部も戦争でかなりの施設を破壊されましたし。とりわけ諜報活動の前線基地でもあったニーベルング要塞を失ったのは痛いです」
「ニーベルングか」
懐かしさと苦渋が心の中に満ちる。
「そうだな。あの要塞を」
「今ではアタチュルクというそうです」
「忌々しい名前だ」
シュバルツブルグはその名を聞いてすぐに吐き捨てた。
「トルコの建国の父だったそうだな」
「はい」
ケマル＝アタチュルクは衰え第一次世界大戦により遂に何の力もなくなったオスマン＝トルコを倒し共和制トルコを開いた男である。

人類史上最も偉大な強権政治家とも言われる彼はその絶大な指導力と政治力でトルコを導いた。今連合にいるトルコは彼を国父としている。その名がエウロパの者達にとって面白い筈がない。連合側もそれをわかって名付けたのであるから実に底意地が悪いと言えた。
「今あの要塞は連合軍により要塞群となっています」
「要塞群か」
「そうです。最早容易には陥落させられないかと」
「全く以って忌々しい話だ」
シュバルツブルグはまた言い捨てた。
「敗戦の結果とはいえ。あそこに陣取られるとはな」
「当然情報関係の施設も彼等の手に落ちました」
「では我々の情報収集に使っているな」
「間違いなく」
モンサルヴァートは答える。
「その証拠にサハラ経由で連合に送り込んでいた諜報員達が次々と行方をくらましていますし」
「むっ」
「我々が工作し煽動していた暴動や宇宙海賊、テロリスト達も殲滅されていっています。最早情報収集だけでも大変な有様です」
「全て知られてしまったようだな」
「どうやら」
モンサルヴァートはまた答える。
「ですから。諜報工作については根本から考え直すべきであると思います」
「わかった。では縮小だ」
シュバルツブルグはすぐにそれを決定した。
「そうして情報活動に専念する。連合及びサハラへのな」
「わかりました」
シュバルツブルグのその言葉に頷く。それからまた言うのだった。
「それでですね」

「何だ？」
「連合に関する僅かな情報の中で一つ興味深いものがありました」
「興味深いだと」
「はい」
シュバルツブルグに答える。
「どうやら連合軍は新たな巨大戦艦を開発するようです」
「巨大戦艦か」
巨大戦艦と聞いてシュバルツブルグの目の色が微妙に変わった。
「というとあのティアマト級の後継なのか」
「いえ、そうではないようです」
「そうだろうな」
自分で言って自分で納得した。
「まだ建造されたばかりの新型ばかりだ。もう替えるなぞというのは」
「有り得ないかと」
開発したばかりの兵器は欠陥でもない限り次世代兵器の出現まで一線を担う。これもまた二十世紀からのことである。
「では何の為の巨大戦艦か」
シュバルツブルグは問うた。
「既にあれだけの巨大戦艦を何千隻も持っているというのにだ」
「どうやらその上の指揮艦艇のようです」
「その上の！？」
「はい、ティアマト級より上の」
そう述べる。
「よくわかりませんが軍か軍集団を統率する為の巨大戦艦のようです」
「そういえば今はだ」
シュバルツブルグは言う。

## 第二十六部第五章　女王の決意その十六

「あのティアマト級巨大戦艦は艦隊の指揮艦艇だったな」
「はい、そうです」
またシュバルツブルグに答える。
「それだけではなくその上に立つ存在のようです」
「軍集団というと百個艦隊か」
連合軍の編成だとそうなる。恐ろしいまでの数である。
「それだけの艦隊を指揮する存在か」
「かなり巨大なものになるかと」
「考えられない話だ」
シュバルツブルグは話を聞き終えてそう述べた。困惑気味の顔になっていた。
「軍集団を指揮する艦艇なぞ。そもそも」
「連合軍は軍集団単位でも動くからでしょう」
モンサルヴァートはその困惑の顔を見せる彼に言うのだった。
「彼等は数が違いますから」
「確かにな」
それは嫌になる程知っていることである。先の戦いで。
「軍集団で四十か」
「はい」
「我が軍は今かろうじて四つ」
それもかなり無理をした結果である。国家形態の違いもあるが連合軍が四兆の人口で四千個艦隊、百三十億なのに対して今の連合軍は四百個弱の艦隊数に人員はかろうじて十億程度だ。相当な差がそこにはある。しかも歴然とまでしたものが。
「十倍か」
「人員にして十三倍」
モンサルヴァートは付け加える。

「やはり。圧倒的です」
「それだけの巨大な軍の運営にはそうした存在も必要ということか」
「おそらく。そしてタイプですが」
「どんなもののようなのだ？」
「下手な衛星程度の大きさがあるようです」
「衛星か」
それを聞いて今度は言葉を詰まらせた。
「信じられん話だ、またしても」
「まだ多分に未確認情報なのですが」
「それでもな。やはり」
「我々にとっては途方もない話なのは間違いありません」
「そうだ。そしてそうしたことを推し進めているのは」
今度は人に関する話になった。
「やはり彼か」
「はい。八条義統」
彼の名が出た。
「やはり彼が推し進めているようです」
「あの日本人には何度もしてやられた」
シュバルツブルグの顔がまた忌々しげなものになる。
「戦略においても宴においても」
「今のところ全て我々の無様な負けです」
モンサルヴァートもまたその整った顔と声を濁して言った。
「全く以って」
「シンガポール条約以来の屈辱だな」
シュバルツブルグの顔が苦渋に歪む。
「それだけのものをあの日本人には味あわされている」
「それ以上かも知れません」
それに対するモンサルヴァートの言葉はさらに苦いものであった。
彼等の感情がこれ以上はないという程露わになっていた。軍人としては珍しい程に。

「彼が及ぼしたものは」
「連合にとってのブラウベルグかな」
「それ以上でしょう」
モンサルヴァートはこうも言う。
「彼は。何せ寄せ集めの連合軍を僅かの間にあそこまで戦える軍にしましたし」
「寄せ集めのな」
「そうです。所詮は寄せ集めの軍でした」
実は連合軍と言ってもその内実はそんなものであるのだ。それまで各国の軍に分かれていたのを一つに纏めただけなのだ。軍服も兵制も既に各国共通のものが多かった為それに関しては楽であったがそれだけで軍として成り立つものではない。軍は一朝一夕でできるものではないのだ。しかし彼はそれを見事に成し遂げたのである。
「確かに精強さでは劣りますが」
「それはな」
連合軍は決して精強な軍ではないと言われている。個々の戦闘力も訓練度もあまり高くはない。将校の作戦指揮能力も平凡だと言われている。
「ですがそれに頼らないシステムを成立させています」
「補給に情報収集」
八条がまず重視したのはそこであった。

## 第二十六部第五章　女王の決意その十七

「そして通信と戦術のマニュアル化」
「極めて合理的だな」
「彼は将兵の個々の強さや訓練度に頼らない軍隊を作り上げました」
「二十世紀型か」
　二十世紀の軍は次第にシステムにより戦うようになっていた。これは長い間軍の主流であったがサハラではそれよりも名将や将兵の個々の訓練度に頼る戦争が発達した為システムに頼る戦争は忘れられたのだ。むしろそれは旧式とさえ思われてもいた。八条はそれを見直し復活させたのである。
「今更と思ったが」
「ですが連合軍には合っていました」
「確かにな」
　また忌々しげに答える。
「彼等のように訓練度に劣り尚且つ数が多く装備も優れているならば」
「それに頼ればまず問題はありません」
「それを思い知らされた」
　あらためて述べる。
「嫌な程にな。これもある意味ルネサンスか」
「ルネサンスですか」
「そうだ。軍事のな」
　実はルネサンスは単に文芸が復興されただけではないのである。戦争においてもルネサンスが為されていた。かつてのギリシアやローマの戦争が再研究されそれにより戦争のあり方が大きく変わってもいるのだ。その例の一つとしてテルシオがある。スペインで成立し三十年戦争前期までその威力を発揮したこの方陣はかつてのギリシアやローマの方陣をモデルとしたものであるのだ。

「彼はそれをしたのだ」
「そういうことですか」
「我々としても学ばなくてはならない」
シュバルツブルグはこうも述べる。
「彼等のそうしたところはな」
「それでは閣下」
モンサルヴァートはシュバルツブルグのその言葉を聞いて言う。
「我々もまた」
「軍制改革だな」
毅然として述べた。
「我々もまた」
「システム化ですか」
「そうだ。取り入れるべきだ」
シュバルツブルグはそう言葉を続ける。
「そうしなければ連合に対向し辛いだろう」
「先の戦争では個々の戦いでは奮戦しましたが」
これは事実である。エウロパ軍の将兵達は圧倒的な物量を誇る連合軍に対して毅然として立ち向かい奮闘した。その見事な戦いぶりは連合軍の将兵をして感嘆の言葉を漏らさせる程であった。それはさながら第二次世界大戦のドイツ軍や日本軍を思わせるものであったとまで言われている。当時の日本軍の壮絶なまでの戦い方は連合においては有り得ない伝説とまで言われている。
「結局は敗れました」
「数もあったがやはり」
「はい」
シュバルツブルグの言葉に頷く。
「我々の戦い方が旧式であったのも事実でしょう」
「旧式か。そうなるか」
「負ければそうなるものです」
モンサルヴァートの今の言葉は戦争というものを見事に表わして

いると言えた。軍事というものは極めて保守的な世界なのだ。決まったやり方があればそれを忠実に守る。そうしなければ敗れてしまうからだ。下手に新しい戦争の仕方をしてもそれで勝てるとは限らないのだ。だから革新者というものは普通の世界より異端視されたりする。八条がシステム化を取り入れた時も様々な論争が議会を中心として起こっている。しかし彼は実績を残した。エウロパとの戦争前に既に海賊やテロリスト討伐での実績がだ。それでもエウロパとのはじめての本格的な戦争に関しては圧倒的な物量で勝利は確実視されていたものの果たしてどうなるのかと思われたりもしているのである。

「それが戦争ですから」

「それでは我々も新しくなろう」

「はい」

またシュバルツブルグの言葉に頷く。

「ですが。ここで問題があります」

「我々自身にだな」

シュバルツブルグもよく自覚していることがここで脳裏に宿った。

「我々エウロパの騎士達の」

「我々が騎士であるからこそ」

モンサルヴァートもそれに関して言及する。

「果たして。それを受け入れられるかどうか」

「騎士は戦場で名乗りをあげ雄々しく立派に戦う」

この時代は流石に集団戦であるがそうした考えはまだ残っている。エウロパの軍人達は自分達を騎士と自認して戦っている。それをどうかと見ているのだ。

「それはいいことだが」

「それだけでは。勝てないものがあります」

またしても冷静に述べるモンサルヴァートであった。

## 第二十六部第五章　女王の決意その十八

「数を理由にしてはならないか」
「確かに第一の要因でしたが」
幾ら何でも何倍もの相手ではそれが理由になる。だがそれだけが敗因ではないということだ。敗因は一つである場合はまずないのだ。
「それだけではないのもまた事実です」
「同じ数ならば勝てていた場合もあったがな」
「それを完勝にするのです」
モンサルヴァートは強い言葉で言う。
「それこそが戦争なのですから」
「完全に勝ってこそ戦争か」
「勝たなくては意味がありません」
そういうことである。ここがスポーツとは違うのだ。
「そしてその為には」
「時として敵に学ぶことも大事だな」
「今それを学びましょう」
またしても言葉が鋭くなった。
「次の戦いの為に」
「わかった。ところでだ」
シュバルツブルグはここで話題を連合から離した。そのうえで言葉を続ける。
「そろそろサハラが重要になってくるな」
「サハラですか」
「そうだ。どうなるかな」
そちらに話を戻して述べる。
「彼等は」
「まずはゆっくり見ましょう」
今度は言葉が穏やかになった。だがそこには慎重さがあった。

「趨勢を」
「そうだな。我々は今彼等に介入できないしな」
「それが残念と言えば残念ですが。致し方ありません」
「うむ」
またモンサルヴァートの言葉に頷いた。
「モントローズも非武装化されましたし」
「あそこがティムールのものにならなかったのは不幸中の幸いだったな」
連合とのオリンポス条約において非武装化が決定しているのだ。この時シャイターンはこのモントローズの割譲を連合に言ってきているのだ。
「若しなっていれば」
「我々はサハラの脅威も受けるところでした」
「しかし。どうしてかな」
ここでシュバルツブルグは言う。
「連合が彼等にモントローズを渡さなかったのは」
「おそらく。ティムールが極端に力を持つことを好まなかったからでしょう」
モンサルヴァートはこう答えた。
「彼等も善意で友好関係をしているわけではありませんから」
「あくまで連合の都合によってか」
「はい」
ここでは話が政治的になる。軍事と政治は切り離せないものだからこそ。
「ティムールにもティムールの都合があるのと同じように」
「連合にもだな」
「そうです。連合は本来はサハラの現状維持を望んでいると思われますが」
モンサルヴァートも政治センスを持っている。そうでなくてはこの若さでエウロパ元帥にまでなれはしない。例えどれだけ武勲があ

り名門の出身であってもだ。
「三国による」
「だが彼等は今も何もしないな」
シュバルツブルグはその話を聞いてこう述べるのだった。
「サハラに関しては。伝統の不干渉政策か」
「関心があまりないのでしょう」
これもまた事実だった。
「結局サハラに関しては」
「化外の地だからか。やはり」
「そうなるでしょう」
シュバルツブルグのその言葉に応えた。
「我々とはまた違って意味で」
「やはり。連合とサハラは違う世界なのだな」
シュバルツブルグの今の言葉は真理であった。連合とサハラの関係を語るうえにおいて。このことを彼等も理解しているのである。
「我々と連合が違うように」
「はい。また違った意味で」
今度はこう答えた。
「ですから現状維持が本音でもあまり積極的には動かないのです」
「どうなってもいいということか」
エゴイズムと言えばエゴイズムな言葉だった。
「結局は」
「権益さえ得られればそれでいいのでしょう」
ここでも連合の都合が出て来た。連合にとってみればサハラとはそうした存在でしかないのだ。これは他ならぬ連合もまた自覚している。

## 第二十六部第五章　女王の決意その十九

「今のところは」
「今のところはか」
「彼等が現状維持を望んでいるのはこのままだとサハラが脅威にならないからです」
こうした事情もあるのだ。
「力が一つになっていないからこそ」
「では一つになれば」
問いが鋭くなる。
「どうなるかな」
「その時はおそらくは」
モンサルヴァートも言葉を鋭くさせた。その目も。
「お互い次第でしょう」
「融和と対立があるか」
まずはそのことが頭に浮かんだ。政治における基本となる二つの路線であった。これは外交でもそうであるが内政でもあるものだ。
「連合としては理想はそうなっても融和だな」
「そうですね。彼等にとってもサハラにとってもそれが最もいいでしょう」
モンサルヴァートはここでも政治的な視点から語った。
「連合は敵を持たずに済みサハラは」
「連合という巨大な獣を相手にしなくて済む」
そういうことであった。これはとりわけサハラにとって大きいと言えた。サハラにとっても連合の巨大さは深刻な脅威であるのだ。
「そういうことだな」
「おそらくは融和路線となるでしょう」
モンサルヴァートは鋭い目のまま語る。
「お互いそれがベストですから」

「しかしそれが成らなかったならば」
仮定が出された。
「どうなるかな」
「その時は連合は全力を以ってサハラと対峙するでしょう」
まるで決まりきったことのように述べられる。シュバルツブルグもまたその話を予定調和のように聞くのだった。冷徹なまでに落ち着いた顔で。
「あの有り余る力で」
「そうなるケースは何かな」
「そうですね」
シュバルツブルグの言葉にまた応える。
「連合は何もかも持っています。ですが」
「ですが？」
「例えばサハラにしかないものが出て来たならば」
目の光が微妙に色を変えた。それまで政治を語る青いものから戦いを語る紅いものに。微妙に変わったのだった。
「それをサハラが独占しようとしたならばわからないでしょう」
「そうなるか」
「はい、あくまで想定されるケースの一つです」
そう前置きをする。
「あくまでですが」
「今のところその可能性はないようだがな」
シュバルツブルグは全て聞いたうえでこう言葉を返した。
「そうしたものは見つかってはいないしな」
「サハラも一つにはなっていませんし」
「一つになったサハラか」
今度はそれについて注目する言葉を述べる。
「果たして出来上がるかな」
「さて」
それについてはモンサルヴァートも懐疑的な言葉を述べる。目の

色は青いものに戻っていた。完全に政治を語るものになっていた。
「それに関してはあまりにも不確定な要素が多く」
「わかりかねないな」
「読みきれません」
モンサルヴァートもこう言うしかなかった。
「ですが若し統一されるならばその主役はわかっています」
「三人いるな」
シュバルツブルグもその主役達が誰なのかわかっていた。それについても言及するのだった。
「ハサンの太子に」
「ティムールのシャイターン主席。そして」
最後の一人は。モンサルヴァートがその名を口にする。
「オムダーマンのアッディーン副大統領です」
「とりわけ後の二人の存在が大きいか」
「はい」
二人は頷き合う。その言葉が慎重な響きを含んできた。
「やはり今までのことを考えますと」
「英雄か」
今度は英雄という言葉が出た。
「サハラに現われた英雄達か」
「今まで多くの英雄が出て来ました」
英雄とは独特の時代に出るものだ。とりわけ世が乱れている時はだ。サハラは一千年の間乱れてきた。それならば多くの英雄達が出るのもまた道理であった。
しかしだ。それの多くが徒花であったのだった。だからこそサハラは今でも一つになっていないのだ。それが証拠と言えた。
「ですがそれでも」
「サハラは一つになってはいない」
「我々としては忌々しいことに干渉もできませんしここは傍観に務めましょう」

モンサルヴァートは忌々しげにそう言うのだった。
「そしてその間に」
「力を取り戻すとするか」
「はい。是非共」
そんな話をして時を過ごす。彼等もまた動いていた。しかし今人類の主な舞台はサハラ、とりわけコム星系に移ろうとしていた。戦いは熾烈なものになろうとしていたのだった。それは誰もが予感していることだったが行く末までは誰も知らなかった。だがその幕は確かに開こうとしていたのだった。

第二十六部　完

2007・9・6

# 第二十七部第一章　コムへその一

コムへ

戦いがはじまる前は常に何かある。それは嵐の前が静かなのに似ている。

コム星系もそうだった。今ティムール軍とアヤグーズ軍が向かっているこの星系は軍事施設がある以外は静かであった。将兵達も今はのどかなものだった。

「ここで戦争になるんですよね」

見回りをするパトロール艦の中で若い将校が言った。

「もうすぐ」

「そうだな」

艦長は彼のその言葉に応えた。艦橋から無限に続く銀河を見ていた。

「もうすぐだな」

「ここで決戦ですよね」

若い将校はまた言う。

「我が軍とティムール軍の」

「ティムール軍がここで倒れる」

艦長は強い声で彼にそう述べた。

「必ずな。だからこそ」

「だからこそ」

「我々も気を引き締めなければならないが。今はどうにも」

「のどかなものですね」

若い将校はまた述べた。

「敵はいませんし準備はできていますし。やることと言えば」

「今はパトロールだけだな」

艦長はまた答えた。

「戦争をしようにも相手はまだだ」

「もうすぐだそうですね」
「そうだな。彼等の足は速い」
シャイターンの用兵は迅速なことで知られている。鮮やかなまでの機動戦で勝利を収めてきたことが彼の名声を確立したのは人々の記憶に残っている。
「普通の軍よりも速いぞ」
「わかりました。それでは」
「気を引き締めることは欠かせない。今の様な場合でもな」
「今ここに来ることも考えられますね」
若い将校はここではあまり考えていない言葉を出した。
「若しかすると」
「流石にそれはないと思うがな。だが」
艦長も危惧は抱いていた。
「シャイターン主席だ。わからんな」
「そうです、それです」
若い将校はそのシャイターンという名に過剰な反応を示してきた。これはサハラの者達ではよくあることで彼の存在がどれだけ大きいかということの証でもある。
「一体何をして来るか。何処から来るか」
「わからないな」
「だからこそ我々もこうしてパトロールに当たっているわけですが」
若い将校は怪訝な顔で述べる。
「ですが敵が来たならば」
「我々はただのパトロール艦だ」
艦長は今度はそのことについて言及した。
「本格的な戦闘艦艇との戦闘は不可能だ」
「ええ」
パトロール艦はあくまでパトロール及び哨戒が主な任務である。従って戦艦や巡洋艦といった本格的な戦闘艦艇に比べて装備はかなり劣るのだ。それは駆逐艦や護衛艦よりも低い程である。連合軍の

パトロール艦はそれでもかなりの装備を持ち他の国家の駆逐艦程度の能力を持っているがそれは例外である。
「敵艦隊を発見したならば退く」
「やはり」
「というよりは退くしかない」
艦長は困ったような顔をして言った。
「我々はな」
「あくまで戦闘は主力ですか」
「そういうことだ。くれぐれも軽挙妄動は慎めということだ」
艦長はまた述べる。
「上層部もそう言ってきている」
「左様ですか。しかし」
「しかし。何だ？」
「今度の戦いはかなり大規模なものになりますね」
若い将校の目には今も無限の銀河が漂っている。様々な色の星達が瞬き濃紫の銀河を彩っている。その銀河においてまた戦火が起ころうとしているのだ。
「我々もまた参加ですか」
「我々パトロール艦隊は予備戦力扱いだ」
艦長は若い将校にそう返した。

## 第二十七部第一章　コムへその二

「予備戦力ですか」
「そうだ。戦闘力は大したことはないからな」
そういうことであった。やはりパトロール艦は戦力が低い。このことは誰もが熟知していることだった。だからこそ予備戦力なのである。
「だkらだ。わかったな」
「わかりました。いささか残念ですが」
「まあそう言うな」
血気を見せてきた若い将校を宥める。
「また出番があるだろうからな」
「そうですか。しかしパトロール艦は案外」
「退屈か？」
「いえ、そこまでは言いませんが」
彼もそこまでは言わない。だがそれでも本格的な戦闘に参加したいという彼の願いはなおざりにされる。それがどうにも気に入らないというのだ。
「どうにも」
「本来ならば我々も戦闘用の艦艇に乗り換えるところだが」
アヤグーズ軍のパトロール艦は元々駆逐艦と同じ運用形式になっている。その為乗員が駆逐艦にすぐに乗り換えることも可能なのだ。なおアヤグーズ軍は駆逐艦と護衛艦も同じ運用形式、操艦形式になっている。従って彼等は護衛艦に乗り換えることも可能だ。
「足りているかどうか、数が」
「艦艇の数ですか」
「とりあえずここにも旧式の駆逐艦や護衛艦は置いているがな」
それもかなりの数をだ。コム星系はアヤグーズ細大の軍事拠点であり艦艇もかなりの数を置いているのだ。その中にはかなりの数の

駆逐艦や護衛艦もある。
「今のうちに動かしておこう。間に合うかどうかわからないがな」
「そうですね。今のうちに」
若い将校は艦長のその言葉にも頷いた。
「しておきましょう」
「それに関する訓練もすぐにはじまるだろうが」
「時間がありませんね」
「敵は何時来るかわからない」
そのことが余計に彼等を不安にさせていた。
「のどかでいられるのはもうすぐだな」
「そうですね。今度の戦いは我々にとっては」
「正念場だ」
艦長の目が鋭くなる。
「だからこそ」
「敗れるわけにはいきません」
若い将校の目も鋭くなる。
「敗れればそれは即ち」
「アヤグーズの滅亡だ」
艦長の声が深刻なものになる。
「本当に正念場だな」
「はい」
彼等は銀河の中で戦いを待っていた。今両軍はこのコムに向かっていたのだった。
ティムール軍はコムに向けて進軍している。その速度は普段の彼等よりも幾分遅いものであった。これはシャイターンの考えによるものであった。
「今は急がなくともよい」
彼はそう言うのだった。
「今はな」
「それはまた何故でしょうか」

参謀達が彼に問うた。
「迅速に進めるのが閣下の常でありますのに」
「今回だけは。それは何故」
「これも考えあってのことだ」
悠然と笑ってそう彼等に返した。
「だからだ。気にすることはない」
「左様ですか」
「そうだ。わかったな」
あらためて彼等に言う。
「全軍このままの速度でコムに向かう」
また言い伝える。
「そのうえでだ。いいか」
「何か」
「面白い策を用意しておこう」
不敵に笑ってそう告げた。
「彼等に対してな」
「何をされるおつもりでしょうか」
参謀達はまたシャイターンに問うた。どうも彼の考えを読みきれないでいた。
「今回は」
「それも何処で」
「場所は一つしかない」
「一つしかですか」
「そうだ。その場所はわかるな」
不敵な顔で笑いながら参謀達に問うのであった。

## 第二十七部第一章　コムへその三

「その場所は」
「やはりコムですか」
「そうの通りだ。他にあるか？」
また参謀達に問うた。
「ないな。そこで面白い策を仕掛けよう」
「勝利の為に」
「勝利とは華々しく美しいものでなければならない」
これは彼の美学であった。その為には手段を選ばないというのもまた彼の美学である。彼の場合美学と哲学は同じものであると言ってもいい。
「ならば。美しき策を用意しておこう」
「それは一体」
「今は伏せておく」
それは隠しておくというのだ。つまり秘策である。
「今はな。わかったな」
「わかりました。それでは」
「閣下がその策を出されるのを心待ちにしております」
「うむ。そうしているがいい」
不敵な笑みをそのままに述べる。
「私によりまた華麗な勝利を得られるのをな。それでだ」
「はい」
話は変わる。
「そろそろ食事の時間か」
「既にシェフが用意しております」
側に控える小姓の一人が述べる。
「行かれますか？それとも」
「今は自室で食べる気にはなれない」

その時により食べる場所を変えるのは彼の癖の一つである。時として外で食べたりする。これは暗殺を防ぐのにも役立っているのだ。
「行こう」
「それでは」
「うむ。そういえばあの女王は生活は質素だったな」
アルコルジに話を移す。
「身の回りのものも簡素だというが」
「そのようですな」
「あの王家の特色のようです」
参謀達がそれに答える。彼女に対する情報収集も順調に進んでいる。だからこそこうした彼女の近辺や私生活のことも知っているのである。
「質素で尚武を重んじ」
「贅沢を嫌うそうです」
「味気ないものだ」
シャイターンにとってはそうとしか思えないことであった。それを実際に口にする。
「そんなことではな。そうは思わないか」
「質素な生活がですか」
「贅沢もまた文化だ」
これもまたシャイターンの美学であるが実際に贅沢もまた文化であるのだ。ローマ帝国がそれで有名であるが贅沢から生まれるものもあり一概には悪と決められないものがそこにある。ルネサンス期のメディチ家の贅沢からも芸術が生まれている。多くの哲学や宗教では贅沢を完全な悪と断定しているがやはりこれもそれぞれの倫理によるものだ。連合においても贅沢はかなり盛んである。少なくとも連合の一般市民の生活は戦乱に悩まされるサハラのそれよりもかなり贅沢であると言っていい。これには様々な文化や生活がある連合と質実剛健な趣きの強いサハラとの違いもあるが。もっとも他者を脅かす贅沢は連合においても嫌われる性質のものである。

「それを無闇に嫌うというのはな」
「左様ですか」
「何も日本の皇室みたいにするつもりはない」
日本の皇室の質素さはこの時代においても健在だ。その質素さは伝統であるので変えることはできないのだ。日本の皇室程の存在になると質素であるがこそよいものであるがシャイターンは日本の皇室の人間ではない。こうした違いもある。
「みらびやかでよいのだ」
「これからはサハラも」
「華やかであると共に強くだ」
またシャイターンの美学が表われた。

## 第二十七部第一章　コムへその四

「私はそうして生きる。戦いにおいても」
「アヤグーズに対しても華麗に勝つと」
「うむ。では行こう」
そこまで言ってすくっと立ち上がった。
「華やかな食事にな」
「わかりました。それでは」
「次にまた」
「その時までに集めていて欲しいものがある」
彼は歩きながら参謀達に言う。
「それは一体」
「アヤグーズ軍将兵の細かい配置だ」
「細かいですか」
「そうだ」
そう彼等に告げる。
「既に指揮官クラスまではわかっているな」
「はい」
参謀達は彼の言葉に答える。
「各国の艦隊司令までは」
「艦長クラスまで調べておいてくれ」
「艦長までですか」
「そうだ。そこまでな」
また彼等に言うのだった。
「可能か？」
「それでしたらすぐにでも」
情報参謀の一人が答えた。
「可能ですが」
「すぐにか」

「後はファイルにして提出するだけです」
彼はこうも述べる。
「宜しければすぐにでも」
「いや、そこまではいい」
すぐには出さなくていいと返した。
「次でな。よいな」
「はい。それでは」
「ですが閣下」
別の参謀が彼に問うた。
「何だ？」
「どうしてその様な細かいところまで」
「そうです。艦隊司令クラスならともかく」
「後の部下達を知っておきたいのだ」
彼は悠然として彼等に述べた。
「私の手足となる者達をな」
「後の部下達をですか」
「そうだ。今から知っておいても損はあるまい」
つまり次の戦いに勝利を収めることは既に彼の中では規定事項なのだ。だからこそこう言えるのである。
「わかったな」
「しかし閣下」
また別の参謀が彼に声をかけてきた。
「何だ？」
「御言葉ですが次の戦いで戦死する者も出て来ると思いますが」
「確かに」
他の参謀達もそれに頷く。戦闘をすれば戦死する者も出る。それは自明の理であった。
「それでも。宜しいのですか？」
「戦死した場合は」
「そうなればそれまでのことだ」

シャイターンは素っ気無くそう返した。
「アッラーに天国へ連れて行かれるのならばそれは運命」
「運命ですか」
「そうだ。私が言えるものではない」
ここではシャイターンの信仰が表われていた。彼はアッラーに対しては絶対的なまでの信仰を持っている。これはムスリムとしては平均的なものであったが。
「その場合はな」
「左様ですか」
「戦死した者はいい」
彼はこうも言う。
「彼等はな。戦いで死ぬ者は別だ」
「では生きている者こそが」
「必要だ。いいな」
「はい」
「それでは」
「それは私自身にも言えることだ」
言葉がふと虚無的なものになった。

## 第二十七部第一章　コムへその五

「閣下御自身にもですか」
「私もまたアッラーの僕」
それを実際に言葉に出す。
「それだけの存在に過ぎないのだ」
「アッラーの前に全ての者は些細な存在になる」
参謀の一人が言った。
「そういうことですな」
「その通りだ。英雄といえど一介の人間に過ぎない」
また冷徹な声で述べた。
「私とてな。だが」
「だが？」
「一介の人間としてはだ」
その範疇で不敵に笑うのだった。
「どうかな」
「それは閣下が最もよく御存知かと」
「言うまでもないのでは？」
「確かにな」
参謀達のその言葉に笑ってみせた。
「私はサハラを一つにする英雄となる」
「はい」
「そういうことです」
参謀達は笑顔で応える。
「では閣下」
「それを今から」
「見せるのだ。アヤグーズに対してだけではない」
シャイターンの戦争はただ単に軍事だけに留まらない。そこには政治も常に関わる。それを言いながらまたしても不敵に笑うのだっ

た。
「サハラ全土にだ。いや」
「いや？」
「全人類にだ」
不敵に笑ったままこう言うのだった。
「見せてやろう。私の鮮やかな勝利を。その理由は」
「何でしょうか」
「私の戦争は見せる為のものなのだ」
それを自分でも言う。
「あえてな。では諸君」
参謀達に顔を向けてきた。
「また後で作戦会議を開くが。わかるな」
「はい」
「無論です」
参謀達はまた答える。
「それでは後で」
「会議室で」
「ではそうだな。それまでは昼食か」
部屋の時計を見る。アラビア数字で時刻が書かれた銀とダイヤの時計である。それで時間を細かく見たうえでの言葉であった。
「ゆっくりと食べればいい」
そう参謀達に告げる。
「いいな。時間はまだある」
「有り難うございます」
「それでは」
「全ての将兵達に答えよ」
次いでこう述べてきた。
「今のうちに英気を養っておけとな」
「左様ですか」
「私もそうする」

まずは指揮官がそうしなければ駄目なのはこうした場合でも同じである。シャイターンも今それを部下の将兵達に見せるのであった。
「今からな。ではな」
「はい、それでは」
「ゆうるりと」
彼はそのまま食事に向かうことになった。すぐさま豪華な食事とワインが運ばれそこで六人の将校と従者達にかしづかれ食べはじめた。まずはワインを口にする。
「ところでだ」
「はい」
従者に声をかけたのだった。
「このワインはどの国のだったかな」
「アヤグーズ産です」
「そうか、ここのなのだな」
従者の言葉を聞いて眉を細めさせる。
「いいな。この味は」
「御気に召されましたか」
「うむ」
その質問にも答える。
「いいものだな。はじめて飲んだが」
「左様ですか」
「まだあるか？」
そのうえでまた問うた。

## 第二十七部第一章　コムへその六

「このワインは」
「あと何本かありますが」
「それだけか？」
「はい、それだけです」
従者はまた答える。
「あるだけで申し訳ありませんが」
「だが。また飲みたいものだな」
グラスを目線にさせての言葉だった。その紅に染まった世界には他ならぬ彼もいた。彼はその中であの不敵な笑みを浮かべていたのである。
「なくなってからも」
「はあ」
「その為にはだ」
また言う。
「アヤグーズをな」
「手に入れると」
「その通りだ。だからこそコムに向かっている」
不敵に笑ったまま言葉を続ける。
「コムにな。もっともワインだけではないが」
「ワインだけではないと」
「無論だ。それはもうわかっているのではないのか？」
従者達や将校達に問うのだった。
「私が欲しいのは全てだ」
「アヤグーズの全て」
「最後にはサハラの全てが」
まさにワインは野望の色であった。その野望の色で顔を染め上げながら悠然と言葉を続ける。笑みが悪魔めいてさえ見えてきた。

「私のものとなるのだ」
「そうでした」
従者の一人が彼に答えてきた。
「それこそが閣下の御希望でした」
「その通りだ。私の夢、いや野望は」
あえて野望とまで言う。
「サハラそのものを手に入れることだからな」
「では閣下」
「このワインはこれからも」
「アヤグーズのものは他にもあるか？」
また問うた。
「あるならばまた飲みたいものだ」
「無論です」
「このラベルはあと数本しかないですが」
そのことがまた述べられる。
「他のラベルも数本ずつ」
「ほう、用意がいいものだ」
他の種類も揃えてあると聞いて目を細めさせてきた。
「まだ飲めるのは有り難い」
「ええ。では他のもお持ちしましょうか」
「いや」
しかしここではそれは控えてきたのだった。あえて右手でそれを制する。
「今はいい。今はな」
「左様ですか」
「それでだ」
そのうえで話を変える。今度は食卓にあるチーズに目を向けた。オードブルの一つであり様々な種類のチーズが銀の皿の上に置かれていた。
「このチーズもまたアヤグーズ産か」

「その通りです」
従者の一人がそれに答える。
「これもまた」
「アヤグーズは何かと美味なものが多いような」
ここでは美食家の顔も見せてきた。
「気がするが。どうだ？」
「確かに」
「言われてみれば」
従者達はその言葉にも頷くのだった。
「アヤグーズは農業の発達した惑星が多いですし」
「そのせいかも」
「そうだな」
シャイターンはチーズを口の中に入れながら述べた。モツァレラチーズである。
「このチーズもまたいい」
「シェフが喜びます」
「こうしたチーズを嫌う者も多いがな」
シャイターンの今の言葉には根拠があった。何故ならこのチーズだけでなく今出されている他のチーズもまた欧風のチーズだからである。そこに理由があるのだ。
「エウロパのチーズだという理由で」
「そういえば閣下はそうしたものには平気ですね」
「当然だ」
何を言うのだと言わんばかりであった。

## 第二十七部第一章　コムへその七

「私は食べ物では別にいいのだ」
「左様ですか」
「美味であればどんなものでもいい」
そういう考えの男であった。彼は美食を愛するがそこには何ら偏狭なところはない。連合のものもマウリアのものも当然のように食べる。酒もである。
「そうした考えはかえって」
「かえって？」
「サハラの器を小さくする」
そう述べた。
「イスラムは寛容な教えだな」
「はい」
これはこの時代においても本質的に同じである。二十世紀末にイスラム原理主義というかなり偏狭な一派も現われたがこれはあくまで一部である。どの時代においてもイスラムというものは本質的に極めて寛容なのである。その最大の根拠の一つとして他の宗教の存在も認めているということである。これはユダヤ教にもキリスト教にもない考えである。同じ一神教であるというのにである。
「ならば食についても同じだ」
「そういうことですか」
「そうだ。美味であればそれでいい」
言いながらチーズを一口食べた。独特の弾力が歯に伝わる。
「どんな国のものでもな。そういえばだ」
「そういえば？」
「連合でも同じものを食べているのだな」
今度は連合に話を移してきた。
「彼等はその他にも多くのものを食べているというが」

「連合の中には多くの文化、文明が存在していますので」
側に控えていた若い執事が述べてきた。彼もまたシャイターンの家臣である。代々シャイターン家に仕えている家の者でもある。
「それもまた当然かと」
「ふむ」
シャイターンはそれを聞いて視線を微妙に動かしてみせてきた。
「複数の文明、文化が内包されている」
「そこが我々と違う点です」
「それはわかっているがどうにもな」
その微妙な視線をさらに微妙に動かすのであった。何かを見ようとしているかのように。
「一つであって一つでないようだな」
「それも当然かと」
「確かにな」
また若い執事に言われて頷く。
「かつての人類社会の大部分が彼等を築き上げた」
「はい」
「それならば。そうした存在になるのも道理か」
「ええ。そうしてですね」
また言葉が出される。
「それ等が融合した一面もありますので」
「そこにはイスラム文明もあったな」
「ええ。彼等の中にはイスラム国家も多いですし」
「そうだな」
実際には連合にいるムスリム達の方がサハラのそれよりも数が多い程である。それで連合からのメッカへの巡業もあるのである。これはイスラムの教えに定められたことでありこの時代においてもかなり守られている。
「それならばな」
「連合のイスラムは我々とはかなり離れていますが」

「我々にしろそれは同じか」
ここでシャイターンは自分達についても述べてきた。
「我々も同じとは？」
「かなり変わってもいる」
「左様でしょうか」
「今私は酒を楽しんでいるな」
そこで酒を出してきた。
「こうして」
「ええ。それがですか」
「酒を禁じていた時代も多かったではないか」
そう言うのだった。イスラムの教えでは禁酒となっているのだ。だがこれはその時代の解釈によってかなり変わっている。かつてのイスラム最大の英雄バイバルスは馬乳酒を愛していた。サラディンもかつては飲んでいた。何時の時代でも何だかんだで飲まれてきているのだ。それを詩に歌った男もいる。この時代は酒はかなり飲まれている。シャイターンが今飲んでいるようにである。
「だが今は違う」
「そういうことですか」
「そうだ。だからだ」
また言う。

## 第二十七部第一章　コムヘその八

「連合のイスラムが変わっても特に驚きはしない」
「わかりました」
「ただ」
そのうえであえて言う。
「どうなっているのかは興味があるな」
「興味がですか」
「他の文明や文化を知っておいて悪いことはない」
シャイターンはあくまでそういう考えの男であった。他の存在であってもそれがよいと思えば拒みはしない。そうした男なのである。
「だからだ。学んでおきたいな」
「この戦いが終わればですか」
「そうだな。若しくは統一が成った後で」
また統一が出された。
「学んでおきたい。いや」
ここで言葉を変えるのだった。
「既に学んでおきたいな」
「連合の中のイスラムをですか」
「今考えを変えた」
いきなり方向転換をしたがそこもまた彼の柔軟さであった。そうした思考ができるのもまた彼の強みであるとも言える。硬直していては中々容易に動けないからである。
「ここはだ」
「はい」
「連合全体について学んでおきたい」
そう言うのだった。
「全体をな。どうか」
「そうですね」

若い執事がまた答える。
「宜しいかと。統一されれば連合とも向かい合います」
「うむ」
「そこにあるのは決して友好的なものだけではないでしょうし」
こうした言葉が出されるがそれは決して対立ということではない。人と人の付き合いが常に晴れではないように国家同士の交流もまた友好的であり続けるということはないからだ。時には貿易や経済のことで対立することもある。こうしたことは連合においては日常茶飯事でもある。
「ですから」
「学んでおいて悪いことはないな」
「私はそう考えます」
執事は礼儀正しい様子で述べた。
「とりわけ連合に関しては」
「やはりあれだけの勢力であり続けるには理由がある」
シャイターンもそう述べる。
「そうだな」
「はい、やはりそれも理由あってのことです」
執事もその言葉に頷く。
「ですからそれを学ぶというのも」
「よし。ならばわかった」
そこまで聞いて彼も頷いた。
「一度連合についてじっくり学ぶとしよう」
「はい」
「そしてよきものは取り入れる」
またシャイターンの考えが出た。
「そういうことだ」
「わかりました。それでは」
執事がまた答えてきた。
「そちらについては手を回しておきます」

「まずは裏のデータはいい」
そこはよしとした。
「まずはな」
「そうですか」
「とりあえずは表だ」
そう言うのだった。
「表を学びそれから裏を学んで」
「取り入れていきますか」
「それでどうか」
「はい、よいと思います」
執事は彼の今の言葉に頷いた。これはへつらいではなく実際にそう心に思ったことである。彼は自分の主を本当に認めていたのである。

## 第二十七部第一章　コムへその九

「ですが。今は裏は学ばれないのですか」
「まずは表を知ってからにしたい」
シャイターンは冷静なままでそう返した。
「今はな」
「左様で」
「そのうえでだ」
また述べた。
「裏も学ぶ。表も裏も知らなければ」
「全てを知ったことにはならない。そういうことですね」
「うむ。このチーズも然りだ」
また今自分が食べているチーズを見た。そのモツァレラチーズは相も変わらず彼の口の中で見事な弾力を与えていたのであった。
「表も裏も知らなければな。わかりはしない」
「チーズにも裏があるのですか」
「味の裏だ」
こう表現した。
「味のな。わかるか？」
「いえ」
この言葉の意味は鋭い若い執事もわかりかねた。つい首を傾げさせてしまった。
「そこまでは。申し訳ありませんが」
「チーズはまろやかなものだな」
それをまずは述べてきた。
「その味は」
「はい、それはわかります」
そうした味位はわかる。だがそれだけではないというのだ。執事にとってはそれが実にわかりにくいのである。そういうことであっ

た。
「ですがそれだけではないとすると」
「味は一つの器官で味わうものか」
シャイターンは次にこう述べた。
「舌だけで。どうか」
「歯でもですか」
モツァレラチーズからこれはわかった。素晴らしく弾力のあるチーズだからだ。そうした意味で非常に独特なチーズなのである。
「そうだ。弾力もまた味だ」
「成程」
楽しげに笑い今はワインを口に含む彼に応えた。
「そういうことですか」
「また香りも楽しむもの」
またチーズに口を近付けて言う。
「チーズの香りもまたな。いいものだ」
「つまりあらゆる方面からそれを楽しむ。そういうことですね」
「政治にしろ軍事にしろ文化にしろそうだ。連合に関してもな」
「それでまずは表ですか」
「味わうにはもう一つのコツがある」
シャイターンはまた言った。モツァレラチーズはもう食べてしまっていて次のモツァレラチーズをもらっている。それも不敵な笑みと共に食べている。
「それは一体」
「一度に全てを味あわないことだ」
「一度に、ですか」
「一度でわかろうとしても限度がある」
今彼はそれを実践していた。小さなチーズを食べているがその味を一度に全て味わってはいなかった。少しずつ一つずつじっくりと味わっているのである。
「じっくりと時間をかけてゆっくりとな」

「全てを知られる。そういうことですか」
「無論そうはいかない場合もある」
あらゆるケースが考えられる。急かねばならない場合もまたふんだんにあるのだ。そうした場合は当然ながらそういうわけにはいかないのである。
「そうした場合は仕方がないが」
「できるだけ、ですか」
「戦場もまた然り」
ここで遠くを見た。今から向かう戦場を。
「一度では味わいきれない。一度見ただけではな」
「何度も見て」
「既に情報は全て集めた」
次にこう言った。いつもの不敵な笑みをその端整だが陰のある顔に浮かべて。それはさながら悪魔、それも人間の顔をすることを好み知を愛する悪魔、所謂メフィストフェレスのそれであった。彼はその顔に自分で気付いたうえでそれを楽しんでもいた。
「何度も見ているが。その度に面白い発見があるな」
「面白い」
「コムは面白い場所だ」
コム星系の名を実際に出した。
「まさに私が戦うに相応しい。あの女王もまた」
「閣下が勝利を収められるのに」
「英雄には相応しい舞台がある」
次にこう述べた。悪魔的な笑みのまま。
「だがその舞台は作るものなのだ」
「作るもの」
「そう、他ならぬ英雄自身がな」
「それは既に作られていますか？」
「全ては私の頭の中にある」
自信に満ちた言葉はさらに続く。魔王は己の言葉が実現すること

を知っているからこそあえてそれを口にすると言われている。今の彼もまさにそれであった。彼は今完全に魔王となってここに座し全てを語っていたのである。
「何もかもがな。従って後は」
「輝かしい勝利だけ」
「このままコムへ進めばいい」
その目が赤く光った。悪魔の様に。
「わかったな」
「はっ」
戦いは近付いていた。シャイターンはそこに輝かしい勝利を見出し美酒と自らを讃える歌に酔うのだった。英雄そのもののように。

## 第二十七部第一章　コムヘその十

ジェルムの戦いに見事な勝利を収めたオムダーマン軍はまずはここを前線基地としてさらなる侵攻を計画していた。しかし今は目立った軍事行動を行っていなかった。

アッディーンはこのジェルムに司令部を置きそこから戦局やこれからの戦略を見据えていた。戦争はないがそれでも彼は多忙を極めていたのである。

「今日の書類はこれだけか」

「はい」

秘書官のハルダルトが彼に答えた。アッディーンの机の前には書類が十センチ程積み上げられていたのである。彼はそれを見てハルダルトに問うたのであった。

「今日はこれだけです」

「そうか。少ないな」

アッディーンはその十センチの山を見て落ち着いた声で述べた。

「今日は。またどうしてだ」

「軍の整備補給再編成及び移動が一段落ついたからです」

「それは知っている」

「では。おわかりかと」

「そうだが。それにしても」

その書類の山を見ながらまた言うのだった。

「急に減ると妙な感じになってしまうな。いつもは優にこれの倍はあるからな」

「それは明日に」

「そうか」

その言葉を事務的な部屋の中で聞くと実に仕事をしている感じになる。だがそれはアッディーンにとってはあまり好ましくない仕事であるので楽しんではいなかった。

「明日か。明日はこれの倍か」
「三倍になるかと」
返答はアッディーンにとって実に冷酷な現実であった。もっとも好きでない仕事というものはどうしても山のように来てしまうのであるが。アッディーンにとってはそれはデスクワークである。事務処理能力もまた秀でている彼であるがだからといって好きなわけではないのだ。ここは八条とは違っていた。
「一口に言うと三倍だがそれが実際に出て来るとな」
「嫌になられるのですね」
「少なくとも私はそうだ」
苦笑いと共に答える。感情を見事に表に出していた。
「デスクワークは。しかしこの仕事は何時でも全く減らないな」
「オムダーマン軍がなくなれば減りますが」
「つまりそれまでは増える一方か」
「そういうことです。ですから」
「わかた。では処理をしていこう」
そう言葉を返してペンを手に取った。そして一枚ずつ書類に目を通しサインをしていく。その処理は八条程ではないが迅速かつ的確であった。事務処理能力もまたトップに求められる能力の一つだが彼はそれに関しても問題はなかった。そうした意味でも優秀な男である。
暫くすると書類は半分程になった。アッディーンはそれを確かめてからハルダルトに声をかけた。
「ところでだ」
「はい」
「ハサン軍は今積極的に動いてはいないな」
「そうです。今のところは」
「ジェルメの敗戦が響いているな。それに」
「アヤグーズが危機ですし」
それについては彼等も知っていた。西部での戦局はハサンにとっ

ては思わしくない。それは今現在オムダーマンに攻められている東部と同じである。
「そのせいで今は積極的には動けないようです」
「こちらとしてはいいことだな」
アッディーンは冷静な声でそう述べた。
「そのことは」
「はい。こちらもその間に戦力を充実させられます」
ハルダルトも言う。
「我々もかなりの戦いを経てきており戦力の再編成もまだ必要ですし」
「そうだ」
アッディーンは今のハルダルトの言葉に頷いた。
「それにはまだ時間がかかる。ジェルメを奪われたとはいえハサン軍はまだ戦力があるしな」
「確かに」
彼等はそれもわかっていた。ハサン軍は敗戦続きであるがそれでもかなりの戦力を有し続けているのだ。その戦力だけでもオムダーマン、ティムール両軍を凌駕しているのである。
「やはりハサンは大国です」
「そうだな」
アッディーンはハルダルトの言葉にまた頷いた。
「ジェルメを奪ったとはいえ戦いはまだ続く。だが」
「だが？」
「今度の戦いは一つのターニングポイントになる」
「ターニングポイントに」
「そうだ」
また告げる。
「コムでの戦い」
アッディーンもまたコム星系で起こるであろう戦いを見据えていた。彼が直接戦うわけではないがそれでも見据えていたのである。

## 第二十七部第一章　コムへその十一

「それがどうなるかでな」
「コム星系ですか」
「まだハサンは勢いもある」
勢いという言葉が出て来た。
「我々以上にな。ジェルメを奪われたとしても」
「その勢いで我々を凌駕する可能性もあると」
「勢いは戦争における最も重要なものの一つだ」
これはこの時代においても変わりはしない。人が戦争をする以上そうした流れというものが大きく関わるのは変わりはしない。アッディーンはそれを言っているのである。
「ハサンにはまだそれがある」
「それがコムで大きく変わる可能性があると」
「アヤグーズはハサンの属国の中でも最も強い」
これは彼等もよく知っていた。ハサンの数多い属国の中でもとりわけ信任が篤く国力、特に軍事力においても属国の中でトップだったのだ。女王であるブルコルジもまたハサン王太子から全幅の信頼を受けており能力も高く評価されているのだ。
「その国がなくなるとなると」
「勢いが大きく変わる」
「少なくとも西方ではティムールに大きく傾く」
アッディーンは述べる。
「シャイターン主席もそれをよくわかっているだろうな」
「逆に言えばアヤグーズ軍が勝てば」
「流れはアヤグーズ軍を掌握しているハサン軍のものとなる」
これもまた真実であった。西方における戦いの流れが大きく関わっている戦いであるのが明白であった。まさに運命の戦いの前であったのだ。

「それは我々にも大きく関係する」
「そうですね」
ハルダルトはその言葉に頷いた。
「西方の勢いがそのまま東方にも伝わりますから」
「そうだ」
これは合理的な理由ではなく感情的な理由からである。自国の軍の勝利は他の戦線にいる将兵の士気にもかなりの影響を与えるのである。これもまたどの時代においても同じことであるのだ。アッディーンはこのこともわかっていたのである。
「そうなれば今は穏やかにしているダビデブ元帥の軍も」
「攻勢に移る」
アッディーンは言う。
「まだ戦力の編成に時間がかかるな」
「それは間も無くですがただ」
「そうだな」
ハルダルトが何を言いたいのかはわかっていた。
「彼等に主導権を握られます。今はそれを奪い合っている状況なのに」
「彼等が握れば。辛いものになる」
勢いでそれを手に入れられるのを警戒しているのである。戦争とはデータだけではないからだ。やはり人の心の存在は大きいのだ。
「アヤグーズ軍は強い」
「はい」
今度はアヤグーズ軍について言及した。
「その強さは突出している。勝利を収める可能性は充分にある」
「むしろです」
ハルダルトはまた述べた。
「地の利があるだけにアヤグーズ軍の方が有利かと」
「数においてもな」
今度は数について言及された。

「彼等の方が有利だ。ましてやアヤグーズ軍は既にあの星系に多くの軍事施設を設けている」
「ええ」
「そうしたことも踏まえて。アヤグーズ軍が有利だ」
「それにです」
ハルダルトはそれだけを見てはいなかった。これはアッディーンもまた同じであった。
「将も」
「ブルコルジ女王は女傑」
これもまたアッディーンもよく知っていることだったのだ。
「容易に打ち破れる相手ではない」
「シャイターン主席はかなり不利な戦いを強いられますね」
「普通に考えれば負けるが」
アッディーンは言う。
「それでも」
「それでも？」
「一つ気になることがあった」
考える目で述べるのだった。
「気になることとは」
「そのアヤグーズ軍と協同で戦うハサン軍だが」
「彼等ですか」
言うまでもなくこの戦いにおける主役の一つである。コムでの戦いは別にしてオムダーマン、ティムールと同じく戦いの主役であるのだ。
「彼等がどうもコムでの戦いに消極的だったようだな」
「そのようです」
ハルダルトもまたそれについて言及した。情報は既に伝わっていたのだ。

## 第二十七部第一章　コムへその十二

「一旦アヤグーズを放棄して誘い込み」
「補給路を遮断して持久戦に持ち込むつもりだったようです」
「戦略としては妥当だ」
アッディーンはそう評した。戦争において相手の補給路を遮断して餓えさせたうえで持久戦を挑むのは多くの戦いにおいて行われてきたことである。サハラにおいてもそうした戦いが行われたことは多い。非常に効果的な作戦だからだ。アッディーンもそれを熟知しているからこそサラーフとの戦いでも今の戦いでの初期においても補給路の守りを徹底させてきたのである。それにはこうした事情があったのだ。
「だが。それはどうもな」
「消極的ですか」
「少なくとも今の時点ではそうだ」
アッディーンは言う。
「ハサン軍がな。それがどう影響するか」
「ですが閣下」
ハルダルトはここで彼に言うのだった。
「ハサン軍はブルコルジ女王の説得により共にコムに向かうことを決めたではないですか」
「それは聞いている」
アッディーンはそれもまた知っていた。彼もまたあらゆることを聞いて情報を細かく分析していたのである。名将とは戦場に強いだけでは成り立たないのだ。
「しかしだ。それが影を落とさないか」
「影を、ですか」
「シャイターン主席は謀略家でもある」
アッディーンはこのこともまたよく知っていた。ハサンで起こっ

た多くのテロ事件は彼の謀略だと知っているのである。なおこのことを把握している者はオムダーマンにおいては僅かである。アッディーンはその一人であるのだ。
「その謀略を出すかもな」
「ハサン軍に対して」
「ハサン軍だけとは限らない」
こうも言う。
「何故なら」
「何故なら？」
「役者は一人ではないからだ」
あえて役者は複数いると述べた。アッディーンにしては珍しく芝居がかった言葉になっていた。それがハルダルトの心にやけに残ることになった。
「例えばだ」
「はい」
またアッディーンの言葉に応える。
「二匹の狼を互いに争わせるにはどうすればいいか」
「狼をですか」
「そうか。貴官ならどうする」
「そうですね」
ハルダルトは暫く考えてからアッディーンに答えた。
「互いを敵視させるように仕向けます」
「そうだ。しかしだ」
「しかし？」
「一方が失敗したとしてももう一方が相手を敵だと思えば」
アッディーンは言う。
「その場合はどうなるか」
「そうですね、それでは結局同じことになります」
ハルダルトは少し考えてから述べた。
「一方が攻撃するでしょうから。それによりもう一方もまた」

「そういうことだ。二つの勢力を争わせるのに双方に仕掛ける必要もないのだ」
「どちらか一方だけで」
「確かに双方をそうさせるのが理想だ」
アッディーンは述べる。
「だが。極論すればそうなるのだ」
「それではシャイターン主席は」
「ブルコルジ女王は切れ者でもある」
まずは女王について言及する。彼女はそうした調略にも強い耐性を持っていることで知られている。一言で言えば見抜くのが上手い。自分からそれを仕掛けることはないのだが見抜いて対処するの上手いのだ。それにより多くの戦争で勝利を収めてきてもいる。戦術だけではやはりないということなのだ。

## 第二十七部第一章　コムヘその十三

「彼女はまずかからないが」
「ハサン軍は」
「今ハサンにはそれまでの優れた人材が減っている」
　またそれについて言及する。このことが非常に大きいのだ。これが連合軍のように確固たるシステムにより動いている軍隊ならばある程度以上に問題はないのであるが人的資源に頼る傾向の強いサハラではそうではないのである。
「彼等が引っ掛かる可能性は高い」
「双方争いますか」
「争わせる必要もまたない」
　アッディーンはまた述べた。
「それもな。ないのだ」
「では別の計略ですな」
　ハルダルトはすぐにそう見抜いてきた。
「例えば」
「同士討ちさせずともだ」
　アッディーンはここでまた言う。
「動けなくすればそれで済む」
「はい」
　ハルダルトもそれに気付いた。兵とは動いてこその兵なのだ。それが動かなければ何の意味もなくなる。戦場にいてこそわかることであった。遊兵は作るな、これは古来よりの戦術の絶対的な原則である。それを作らないのが優れた戦術家の条件でもある。
「動けなくすればな。だから」
「どうやらシャイターン主席には秘策があるようですね」
「あの御仁はただ戦って勝つだけではない」
　アッディーンは言う。鋭いが嫌悪感のない声で。

「策略で以っても勝つのだ」
「策ですか」
「そのうえで華麗にな。手段は選びはしないが」
「勝利は華麗にですか」
「謀略もまた覇道の花だ」
アッディーンはここで謀略を肯定するのだった。この場合は自身が使う使わないの問題ではなく、また好き嫌いの問題ではないのだ。リアリズムにおける問題である。政治の世界というものはあくまでリアリズムだ。その中において謀略は確かに花なのだ。異形の花であろうともだ。覇道は光の世界に咲く花だけを必要とはしていないのだから。
「だからこそだ」
「主席は異形の花も愛する」
「そうした覇業もあるということだな」
アッディーンはまたしても冷徹に述べた。
「全てを手に入れる為には」
「手段は選ばないと」
「こうした考えがある」
言葉を続ける。
「何事も結果が全てだと」
「よく言われる言葉ですね」
とりわけ政治においてはである。その中においても軍事はそうである。政治的解決を武力により執り行うものであるからだ。そうであれば必ず勝利しなければならないのだ。絶対に結果を出さなくてはならない、それが軍事であり戦争であるのだ。
「昔から」
「それでは手段を選んではいられないな」
「その通りです」
ハルダルトはアッディーンの言葉にまた頷いた。
「選んでいて敗れたならば全く以って本末転倒です」

「そういうことだ。だからこそ」
アッディーンはまた言う。
「主席はそうするのだ。手段を選ばずにな」
「華麗に振舞うには裏もある」
「いや、そうではない」
今のハルダルトの言葉はすぐに否定した。
「裏はないのだ」
「といいますと」
「その異形の花を愛でるのもまた華麗にだ」
「謀略もまた華麗に、ですか」
「エウロパを見ればいい」
ここでは微かに表情が歪んだ。サハラの者達のエウロパへの感情は彼等がいなくなろうとも根強く残っている。アッディーンは今はそれを無意識のうちに出してしまったのだ。これは何も先の北部での総督府だけではないのだ。古く十字軍まで遡るものであるのだ。まさに歴史的な因縁であると言っていいものであるのだ。
「彼等も謀略を愛するな」
「はい」
ハルダルトもそれは熟知している。彼もまた歴史的に。
「実に狡猾に」
「そして優雅に」
言葉が付け加えられた。
「連合でのそれは多分に直接的であり暴力的であるが」
つまり粗野であるというのだ。よく連合での謀略は派手に多量のものを貪りながら相手を前にやって罵りながらお互い謀略を仕掛け合うと言われている。それが最初で次に裏に回って行うのである。だがそこでも相手への罵倒は止まらないしそれは多くの場合相手にも聞こえることが前提である。連合の謀略はよく言えばあからさまで悪く言えば粗暴なのである。これは多くの強烈な個性が衝突し合う連合だからであろう。

「しかしエウロパは」
「間接的であり理知的でありますな」
「それが美しいかどうかは全くの別問題だがな」
連合が貪り食いながら正面きってなのに対してエウロパのそれは優雅に茶と菓子を楽しみながら言葉の端々に毒を含ませながら仕掛けると言われている。裏ではもっと陰険である。しかしそれは常に微笑みと華を以って行われるものであり連合のそれとは全く違う。そうした違いがはっきりとあるのだ。
「エウロパを出すとわかるか」
「確かに」
ハルダルトは納得した顔で頷いた。

## 第二十七部第一章　コムへその十四

「あの優雅さですか」
「彼は華麗だがな。そうしたものだな」
「優雅に謀略を行うですか」
「連合では完全否定されているそうだな」
「さもありなんです」
これはすぐに理解できた。
「何しろ彼等にとってエウロパは結局は全否定されるものですから」
「知識人達の間ではあのエウロパ的生活は肯定されてもいるのだったな」
これについてはアッディーンも知っていた。実際に連合ではエウロパ貴族達の余裕のある生活を肯定してそれで以って連合のけたたましい生活を批判する者もいるのである。ただしこれには常にオチがつく。ハルダルトもこれについてもよく知っていた。
「ですが」
それを今述べる。
「常に最後は連合の生活を褒めていますね」
「そうだな。常に」
そういうことである。結局は連合の人間であるから連合の生活こそが一番素晴らしいのだと言うのである。結局はエウロパをけなしたいのである。
「しかも彼等はあれだな」
「連合ですか」
「その彼等だ。エウロパが何かするとすぐに」
「凄まじい勢いでけなします」
これも連合の癖である。
「何か産業を発展させたり進出しようとすれば」
「あれこれと条件やデータを出して成功しないと主張するな」

「ええ」
こうしたことだけではない。
「成功したら成功したで後に失敗する筈だと絶対に書きますし」
「失敗したら大喜びで書くな」
「不幸があれば見事な笑顔を見せますし」
それ程エウロパが嫌いというわけである。
「あれは全く以ってストレートです」
「先の戦争の時は書き放題だったな」
連合はこれまでになくエウロパを嬉々として叩いていたのだ。これに関してはネットもマスコミも同じだった。貴族とは空虚なものでしかないとまで断言している者もいた。
「あれは昔からだな」
「千年前からですね」
実にこれも根が深い。
「アメリカの雑誌等は」
「他の国の雑誌も似たようなものだがな」
「はい。日本はそうでもないようですが」
「あの国はまた異色だ」
アッディーンはそう述べて首を少し捻った。
「あの国だけはな」
「特別ですか」
「悪口は言わない」
「確かに」
日本はそれで有名な国である。しかしだからと言って高潔な国なぞでは決してないのがやはり国際社会というものである。そもそも高潔であってもそれが国民を幸せにしないのでは何の意味もないのだ。国民を幸福にするのが国家であるからだ。
「悪口は言わないが」
「それだけではありませんか」
「あの国は強かだ」

アッディーンも日本に対してこう評価していた。それは同じなのだ。
「柔らかいがな」
「そういえば日本の文化もそうですね」
ハルダルトはそれについても言及する。
「柔らかいものです。硬い要素は殆どない」
「米中露とはそうした意味で逆だな」
「その通りです。だからこそ」
ハルダルトはまた言う。
「対象的で目につきます」
「日本人は自分達では外交や謀略が不得手だと思っているようだな」
「意外なことに」
これもまた事実である。日本はこの時代においても自分達では外交下手だと思っているのである。しかしそれは他国から見ればそうではないのだ。
「上手いだろう。少なくとも油断出来ない」
「連合内部ではそう思われていますね」
「特にあの三国はな」
その三国とは言うまでもなく米中露である。なおこの三国の外交は連合においてはとりわけ下手だと言われている。力技に頼り過ぎるからだと評価されている。三国は謀略も得意だがそれが得意だからといって外交上手には決してならないのである。そういうものである。
「日本外交に警戒している」
「ライバルとしてだけでなく」
「相性もあるな」
三国が国力に頼った外交をすれば日本はそれに頼らないのだ。あくまで柔らかく流すものは流す。そうしたたおやめと言うべき外交が油断ならないとされているのである。

## 第二十七部第一章　コムヘその十五

「あの三国と日本の相性は」
「いいとは言えないでしょうね」
「そうだな。日本の大人しめの個性と比較しても」
「はい」
相性もまた外交においては重要である。合う合わないにより色々と変わってくるものであるからだ。それは人付き合いにおいても同じであるが。
「だからか。あの三国が日本外交を警戒しているのは」
「私も日本は決して外交下手だと思いません」
「私もだ」
アッディーンも同じ見方をしていた。それを今はっきりと言葉に述べる。
「攻撃を受け流し何時の間にか自分達のペースに入れていく」
「まるで日本の武道のように」
「武道か」
アッディーンは今のシャイターンの言葉に注目した。
「武道になるのか、あれは」
「日本には古武術や柔道といったものがありますがそれに一脈通じるものが確かに」
「あるのだな」
「私はそう見ています」
ハルダルトはまた述べる。
「柔らかい強さがそこに確かに」
「ああした外交は学んでおいて損はないか」
「模倣できるかどうかは別にしまして」
ハルダルトの今の言葉はいささか弱気に聞こえるものであるがそれでも真実であった。外交もその国それぞれの特性があるのだ。そ

れを無視して完全に模倣することは不可能なのである。若しそれをしたならばあまりいい結果が出ない場合が多い。結局は自分で自分を作り出すしかないのが外交というものである。
「学んでおきましょう」
「そうだな。連合自体が何かと学ぶことが多い」
「あの三国にしろ」
「彼等も伊達にあそこまでの大国になったわけではありませんし」
「地球にあった頃からな」
米中露が大国になったのはただ運がよかっただけではないのだ。そこには相当な経緯があってのことである。超大国になったのはいいがそれを維持するのは困難なことでもある。創業と守成どちらが困難かというとどちらも同じ程である。これを言ったのは中国唐代の政治家魏徴であるが彼は非常に聡明であり剛直な政治家であった。彼が自身の主君太宗に語ったことである。これは事実であろう。一代で身を起こしながらも潰えたという話は実に多いからだ。
三国もまた衰退したことが幾度もあった。だがそれでも今も大国として連合に大きな影響力を行使できている。そうなっているのは彼等もまた大国としての己を維持する能力があるからに他ならないからである。これがわからなくしては歴史も政治も決して語れはしないであろう。
「それは連合の多くの国に言えるが」
「我がサハラは創業は容易であっても」
「守成は不得手だ」
それを自分達でも言う。
「だからこそ。今まで一つになれなかった」
「それが現実ですね」
そういうことであった。英雄は幾人もいたがそれでも国家を維持できる英雄はいなかったのだ。だからこそ多くの国家が興亡していったのである。それがサハラの現実であった。
「サハラが一つになろうともそれからだな」

「真の意味での苦難は」
また言葉が出される。現実は容易なものではないようだった。
「これからか」
「そうですね。それに」
「それに？」
「エウロパも外にありますしそれに」
「連合もな」
また彼等について言及する。
「何を仕掛けてくるかわからないな」
「欲を完全に肯定していますから」
資本主義であるからこれは当然と言えば当然である。しかし連合のそれはサハラ程強固な宗教的倫理にコントロールされていないとされている。だからこそ問題であるとされているのだ。少なくともサハラにおいてはそう考えられているのである。
「危ういですね。敵視されると」
「連合は巨大だ」
これもまた嫌でも認めざるを得ない現実だった。
「彼等を敵に回したならばそれで」
「終わりだ。我々の力では対抗できはしない」
「はい」
ハルダルトは頷く。冷厳極まる現実をそこに認めて。
「全てはこれからだ。また統一が成ろうとも」
「そこでハッピーエンドとはなりませんか」
「物語ならそうなるのだがな」
アッディーンは今回どうも普段の彼の口調とは違っていた。むしろシャイターンのそれに近い響きがあった。いささか影響が見られるようであった。

## 第二十七部第一章　コムへその十六

「現実は違う」
「強いて言うのならあれですね」
「あれとは」
「神話です」
ハルダルトは異教的な言葉を出してきた。
「神話はそのまま現実の世界になりますので」
「つまり終わりはしない物語か」
「そうです。人がいる限り」
「神がおられる限り」
アッディーンはムスリム的な言葉を口にした。アッディーンもまた強い信仰を持っている。それはサハラの者ならば当然持ち合わせているものである。
「そうだな」
「はい。だからこそ我々は維持にも務めなければなりません」
「難しいものだな」
アッディーンはここまで聞いてポツリと呟いた。
「為すことと同じくな」
「シャイターン主席もそれを考えておられるでしょうか」
「おそらく私以上にな」
「左様ですか」
「私も今以上に学ばなくてはな」
ここまで話したうえでの言葉であった。
「連合について。それをこれからに活かすのだ」
「具体的にはどのようにして学ばれますか？」
「そうだな」
顎に手を置いて考える顔になった。
「行くのも一つの手か」

「行かれるのですか」
「そうだ。無論様々な問題があるができるならば行きたい」
そう述べるのだった。
「できればだがな」
「やはり困難だと思われます」
ハルダルトはそう述べてきた。
「やはり閣下は」
「それはわかっている。だができれば」
それでも彼は言うのだった。
「行きたいものだな」
「少なくともそれは今ではありませんな」
「残念だが嫌になる程わかっている」
その顔が苦笑いになった。
「まずはこの戦いをどうにかしなければいけないのだからな」
「その通りです。また戦いが近付いています」
ハルダルトは言う。
「ハサン軍と」
「彼等もまだかなりの力があるな」
アッディーンはそれを認めていた。それも素直に。
「ジェルメでの敗戦でもまだ我々以上の力を持っている」
「その国力は見事です」
ハルダルトもそれを認める。彼等は軍人として冷静にそれを認めていたのだ。敵を見るにあたっても公平に見なければそれは恐ろしい破局へとつながる恐れがあるのだ。彼等もそれをよくわかっていたのだ。そうでなければここまで生きてはこられなかった。
「我等とティムールを合わせたのより上でしたから」
「彼等さえその気になればサハラを統一できていたな」
アッディーンはまた言う。
「だが彼等が望んだのはあくまで現状維持だった」
「今のサハラのままでよかったと」

「彼等にしてみればだ」
アッディーンは思慮深い目になっていた。敵軍に自ら先陣を切って進む勇敢な彼であるがこうした思慮深さも併せ持っているということなのだ。
「貿易で潤っていればな。それでよかった」
「それでですか」
「彼等にしてみれば少なくとも今は統一の時ではなかった」
次にこう言った。
「より力を蓄えてからな。そう考えていた」
「力をですか」
ハルダルトは述べる。
「我等を制圧した後でもそれを維持できる力をだ」
「創業の後の守成ですか」
またそれについて言及された。国を作るのは確かに馬上においてである。だがそれを維持するのは馬上においてではないのだ。そしてそこにもまた力が必要なのだ。
「難しい問題です」
「その困難なことをどうするかも問題になるが」
「少なくとも今は」
「我々は馬上にいる」
創業というわけだ。彼等はそれがよくわかっていた。

## 第二十七部第一章　コムヘその十七

「そういうことだ」
「では間も無くその馬を進めることになります」
ハルダルトはその馬についてこう述べた。
「また北に」
「北か。最終目標はやはり」
「ハサンの王都ブルジルト」
アッディーンの声が強く鋭いものになった。
「そこだ」
「そこに至るまでですが」
ハルダルトもまたその強く鋭い声で述べる。
「敵は既に多くの護りを用意しております」
「兵の数もかなりだな」
「その通りです」
鋭く答えた。
「彼等もまた総動員令を発しておりますし」
「ハサンの全ての力をだな」
アッディーンは言う。
「出してきているな」
「サハラ第一のその国力を」
「彼等も本気だ」
あくまで現実を直視したリアリズムに徹した声であった。リアリズムという無機質なものを何処までも理解してこその鋭い声になっていた。
「ジェルメを奪われアヤグーズで決戦を迎え」
「遂に本気に」
「そして同時に」
さらに言葉を続ける。

「あの太子はそれを使いこなすことができる」
「ええ」
力を集めただけでは何にもなりはしないのだ。それを使いこなさなくては意味がない。力を使わずして何にもなりはしない。力を使いこなせないのはそれと全く同じである。どれだけ力を持っていてもそれを持て余し敗北した例は枚挙に暇がない。
「あの太子はな」
「できますか」
「しかしだ」
そのうえで言葉を付け加えるのだった。
「他のハサンの者達はどうだ」
「他のですか」
「つまり太子の部下達だが」
「以前ならば可能だったでしょう」
ハルダルトの言葉は意味深いものだった。
「以前の彼の部下達ならばそれは」
「文武両方でな」
太子は優れた人物であるがその中でも人物を見抜くそれを上手く活用することが得意なのだ。しかし今はそれが困難な状況にあったのだ。
「だがそれが今は」
「その部下達が減っています」
「今いる者達は落ちる」
冷徹な現実がまだ言葉として出される。
「ハサンにとっては残念ながらな」
「そうです、それが今のハサンの最大の問題です」
ハルダルトもそれをよく見ていた。彼等は今のハサンの現状をむしろハサンの者達よりもよく見ていたのだ。味方から見るよりも敵から見る方がわかり易い場合もある。今もまたそうだった。
「それができる人材がいないことこそが」

「使いこなしているつもりなのだろうがな」
「ええ」
つもりである、これが最も危険なのだ。自分ではそう思っているからこそ気付きはしない。そこまでわかる人材こそが必要なのだがそこまで至る人材はそうはいない。またそうした人材が消えてしまっているのが今のハサンなのだ。シャイターンは何処まで狡猾にハサンを弱体化させていたのだ。
「彼等にしては」
「しかしそうではない」
「現場の指揮官も。同じだ」
「確かに」
ハルダルトは今感じたことを実際に口に出して述べた。
「ダビデブ元帥はともかくとして」
「彼の手足となる部下達がな。動きが今一つだった」
「それなりはそれなりですが」
「そのそれなりでは今は難しい」
そういうことだった。

## 第二十七部第一章　コムヘその十八

「ハサンにとってはな。またハサンでそれを理解しているのは」
「あの太子だけですね」
「またそれを決して口に出すことはできない」
彼はまた言う。
「出せばそれだけでハサンの結束が崩壊する」
「太子にとっては苦悩の連続です」
「そうだ。しかしだ」
アッディーンの目が鋭く光った。今の声と同じく。
「シャイターン主席の策略は何処までも巧妙だな」
「ただ見つからず目的を遂行するだけではありません」
「そうだ」
ハルダルトの今の言葉に頷く。
「どういった効果をもたらすかまで考えている。そこまでな」
「誠の謀略と言うべきでしょうか」
「そういうものが存在しているとすればそう言うべきだな」
謀略を好まないアッディーンにしてあまり気分のいいものではないのがこの言葉からわかる。そうしたことはやはり言葉にも出るのだった。今がそうだった。
「見事なのは見事だ」
「はい」
「それによりハサンは確実に弱体化した」
「そしてそれに付け込んで戦局を有利に進めていく」
「完全に計算してな。何処までも」
シャイターンは手段を選ばない男だがそれはあくまで目的があってのことだ。目的を確実にかつもっともリスクを少なく達成するにはどうすればいいのか。彼はそうしたことを全て踏まえて謀略を仕掛けているのである。そうした意味でも彼は完璧な謀略家であった。

「ハサンは辛いな」
「それも事実ですね」
「しかしだ」
ここでアッディーンはまた言うのだった。
「それは我々に向けられればどうなるか」
「我々にですか」
その言葉を聞いたハルダルトの目に剣呑なものを警戒する光が宿った。
「そうだ。そうなればどうなる？」
アッディーンはさらに問うた。
「その可能性は今後は」
「大いにありますね」
「諜報対策を進めて行くべきだな」
アッディーンの次の対策はそこであった。
「今後に備えて」
「そうですな。しかし」
「何だ？」
またハルダルトの言葉に目を向けた。
「いえ。今は手を結び合っていても後にはですか」
「それが戦いだ」
アッディーンはまたしてもあえて冷徹に言うのだった。今日手を握り合っていても明日にはその手で殴り合うのが戦争というものであり政治というものである。共に戦う相手がいれば手を結びそうでなければ自分達が争う。そういうことである。それだけとも言う。
「それがな」
「わかっているつもりですがやはり」
「複雑か」
「そうですね、それは否定しません」
ハルダルトも素直にそれを認める。
「同盟が消えすぐに」

「対立に変わる。めまぐるしくな」
「さて、私達はそう考えていますがハサンは」
「また違う考えだ。ハサンにしてみればそんな話は全く以って図々しいことになる」
「はい」
そういうことである。ハサンとて滅亡するつもりは毛頭ない。あくまでオムダーマンとティムールを倒しこの際サハラを統一しようとさえ考えているのである。
「だが生き残るのは一国だけだ」
「これは中国の言葉ですが」
「うむ」
そのハルダルトの言葉を聞く。

## 第二十七部第一章　コムヘその十九

「天に二日なしです」
「太陽ということは皇帝か」
アッディーンはすぐに察した。皇帝とは太陽である。この世の全てを照らし出す存在だ。多くの国でそう言われてきた。もっともイスラム世界では太陽は熱い日差しで世界を焼く忌まわしい存在であり夜に優しい光を与えてくれる月の方が有り難い存在なのであるが。ちなみに皇帝を月と言った人物もいる。教皇権絶頂期のローマ教皇インノケンティウス三世であり彼は教皇こそが太陽であり皇帝はその光で照らし出される月だと言ったのである。当時どれだけローマ教皇の力が強かったかだ。
「皇帝は一人」
「サハラを治めるのも本来は一人」
これはほぼ暗黙の了解であり預言にも基いているものだがサハラを統一した者はサハラの皇帝となり全てを統べる。そう定められているのだ。
「その一人こそが太陽となり」
「他の太陽は消え去る運命か」
「それは果たして誰なのでしょうか」
「さてな。そもそもだ」
アッディーンはここでまた言うのだった。
「ここからまた分裂する可能性もあるしな」
「ええ」
それについてはハルダルトも否定できなかった。
「そうですね。その可能性はあります」
「エウロパの介入こそないだろうが」
エウロパは連合との戦いで勢力を大幅に落としている。暫くは自分達の復興に取り掛からなければならない。それは彼等も見ていた。

「それでもだ」
「連合も動かないようですが」
「彼等は我々にあまり関心がない」
この読みも当たっていた。
「所詮は彼等から見れば化外の地なのだからな」
「どうなってもいいと」
「権益さえ確保できればそれでいいのだ。後はどうなろうとな」
「マウリアもそれは同じ」
「そうだ」
マウリアもそれは同じだった。結局彼等にとってサハラとはそうした存在でしかないのだ。少なくとも今のところはである。
「外からの介入の心配は今はない」
「問題は中ですか」
「それこそが最大の問題だ」
中という言葉にアッディーンの目が鋭くなる。
「果たして誰が出て来るかだが」
「野心家が他にも」
「サハラは野心を持つ者にとってこれ以上になく素晴らしい場所だ」
戦乱に明け暮れ力さえあれば国さえ持てる。そうした世界において野心がある者が羽ばたかない筈がない。実際にこの千年の間野心家が次々に出て来た。シャイターンもその野心家の一人である。彼もまた力により羽ばたいているのだから。
「若しかしたらな」
「それは何処に現われるかわかりませんね」
「ああ」
その言葉にも頷くしかなかった。
「オムダーマンに現われる可能性もある」
「閣下こそそうだという意見もありますし」
「それも聞いている」
アッディーンはあえて不敵に笑ってみせた。

「私が野心家か。面白い仮説だ」
「ですが実際に閣下により今のオムダーマンはあります」
これもまた事実だった。アッディーンの軍略によりオムダーマンは瞬く間に巨大な勢力となっているのだ。これは否定できない事実であった。
「ですからそうした話も」
「出るのだな」
「そういうことです。そして」
「そして？」
ハルダルトの言葉にまた目を向ける。
「実際に今閣下は副大統領となられていますし」
「つまり地位と実績か」
「はい。それを以ってです」
「そう取られても仕方はないか」
自分で自分を分析しての言葉になっていた。

## 第二十七部第一章　コムへその二十

「私は今まで勝ってきてここにいるのだからな」
「ええ。そういうことになります」
「つまりだ。野心家は本人の心次第ではないのだな」
そういう見方になった。
「周囲がどう思うか。結局はそうなのか」
「そうなるかと。突き詰めれば」
「野心があろうとも羽ばたけなければ野心家にはなれない」
「逆に言えば野心がなかろうと羽ばたければ」
「それで野心家になるか。いや」
ここでふと気付いたことがあった。
「野心家を英雄と言い換えてもいいな」
「英雄とですか」
「英雄だ」
アッディーンはまたその言葉を繰り返した。まるで心に刻み込むように。
「英雄は自分でなると言ってもそうはなれない」
「周囲が言ってはじめてですか」
「そうした側面があるのは事実だ。その人間が英雄だと書き残すのは誰だ？それは英雄自身ではないな」
「はい」
そうであった。英雄は歴史書を書いたりはしない。歴史書を書くのは歴史家である。つまり他の者がその英雄を英雄と書き残すのである。
「英雄も野心家も本人でどうにもならない部分がある」
「決めるのは周囲であると」
「そうだな。そして私は何か」
「私にはわかりません」

ハルダルトはこれまでの話を踏まえてこう言うのだった。
「私は歴史家ではないですし。ただ」
「ただ。何だ」
「閣下の今までとこれからで全てが決まります。英雄か野心家かは」
「面白い話だ」
アッディーンは今のハルダルトの言葉を聞いて楽しそうに笑った。
「そう考えると面白いな」
「確かに」
「私は別にどちらでも構わないのだがな」
「左様で」
これは多くの者にとっては意外な言葉であった。ハルダルトはそうではないがあえてこうした言葉を出したのである。アッディーンの反応を見る為だ。
「そうだ。英雄と言われようが野心家と言われようがな」
「では何をお望みで」
「私は軍人になった」
まずそれについて言った。
「軍人になりたくてだ。そしてそれでは成功した」
「政治家にもなられましたが」
「政治家としても務めを果たす。与えられた仕事はな」
それがアッディーンであった。軍事においても政治においても天才的なまでの力量を見せる彼であるがそこには野心も何もないのだ。ただ果たすだけという側面が強い。そこに私情はないというわけだ。彼はそうして今まで戦い抜いてきたのである。
「果たさせてもらう」
「ふむ」
「おかしいか？」
「いえ」
そのアッディーンの言葉には首を横に振った。
「それぞれですから」

「そうか」
「ただ。閣下は英雄と見られています」
「周りにだな」
そうした意味で彼は英雄なのだった。本人が言わない英雄だった。
「それは御存知だと思いますが」
「知ってはいるが意識はしていないな」
こういうことだった。それがアッディーンだった。
「変に意識をすればそれでおかしくなるしな」
「それはありますね。確かに」
「私は私でいきたい」
自然体でということだった。
「何時までもな」
「わかりました。それでは」
「別に宣伝するつもりもない」
ここでは冷徹に政治的な配慮としての言葉だった。
「英雄だどうとかいうのはな。だが」
「だが？」
「事実はそのまま伝えてくれ」
そうハルダルトに告げた。
「それは頼むな」
「わかりました。それでは」
「今度の戦いもだ」
彼は言う。
「そのまま宣伝するだけでいい」
「それでは」
「ではな。次の戦いにも備えよう」
「はい、それでは」
彼等は話を終えた。そうして次の戦いに向かうのだった。戦いは今は収まっていたがまた激しくなろうとしていた。それは必然であった。

## 第二十七部第二章　晴れ舞台の前その一

晴れ舞台の前

エウロパ軍との戦いに鮮やかな勝利を収めたことは連合軍にとって実に大きなことであるのは言うまでもない。当然ながらそれを祝福しようという動きが連合のあちこちで見られた。

各国でもそれは話の種になっていた。どうやってそれを祝うかだ。

「いや、我が国でもですな」

太平洋各国の外交官達が地球のある屋敷に集まって話をしていた。ここは彼等の為にある別邸でありそこで何かと意見交換を行っているのである。部屋は穏やかな気温であり木造を模したものであった。その中にかなりの数の人間達が集まり円卓を囲んでいた。最初に口を開いたのはメキシコの外交官であった。陽気な素振りで話の口火切ったのである。

「話題ですぞ。祝日にしようと」

「祝日ですか」

「そうです。貴族達に勝利を収めた記念すべき日として」

「それは我が国もです」

マレーシアの外交官が次に述べた。

「我が国でもエウロパとの戦いに勝利を収めた日を国民の祝日にするべきだとの意見が出ています。しかも反対する意見はほぼ皆無です」

「まあそうでしょうな」

他の国の外交官達もその言葉に頷く。宿敵エウロパとの戦いに勝利を収めたことは彼等にとって非常に大きな喜びであったのだ。千年どころの騒ぎではなかった。

「思えばですな」

今度口を開いたのはインドネシアの外交官だった。

「我々は長い間彼等に支配され」

「後塵をきしてきた」
他の者達もそれに言葉を続ける。
「逆転したのはシンガポール条約からでしたが」
「いや、そこから彼等はしぶとかった」
語るその顔は笑っていたが言葉は苦々しげであった。
「ブラウベルグが出なければそのまま永遠の屈辱の中に落としてやったというのに」
「その通りですな」
彼等にとってはブラウベルグは忌々しい余計な存在でしかないのだ。エウロパにとっては偉大な英雄であり国父であるが連合にとってはその当時はこの上なく目障りな男であり今は忌々しい対立の現況であったのだ。国や立場が変わればその対象の見方も変わるのだ。例えばネルソンがイギリスにとっては英雄であるがフランスにとっては忌まわしい敵であるのと同じようにだ。つまりはそういうことである。
「それを生き長らえて」
「今までのうのうとしていたのですからな」
彼等から見るとこうなるのだ。
「ですがそれも終わりましたな」
「ええ」
彼等の声に笑みが宿る。その顔にも。
「この勝利は大きいですな」
「エウロパは暫く立ち直れません」
「その記念すべき日を祝う」
声を笑わせたまま言葉を続ける。
「全く以って楽しいことであります」
「ただ問題はその日ですな」
核心はそこだった。これについての議論が行われていたのだ。
「どの日にするか」
「どうなっていますか、そちらは」

「こちらは停戦の日です」
ベトナムの外交官が答えた。
「その日こそが勝利の日ではないでしょうか」
「いや、それはどうでしょうか」
それにタイの外交官が反論する。
「やはり。講和締結の日ではないかと」
「オリンポス条約ですか」
「そうです、あの日に勝利が決定したのですから」
タイの外交官は静かにそう述べた。
「やはりあの日しかないかと」
「その日にしても問題がありますぞ」
アメリカの外交官が言葉を加えてきた。
「何せ連合とエウロパではかなり時間の違いがありますからな」
「おっと、そうでしたな」
「ではどういった日になるか」
「エウロパでの時間はこの際止めておいた方がよいでしょうな」
中国の外交官がここで言った。
「すなわち現地時間は」
「では条約が締結された瞬間のこちらでの時間になりますか」
「はい、そうなるかと」
こう述べられた。
「それでどうでしょうか」
「そうですな」
オーストラリアの外交官がその言葉に同意したように頷いた。
「それが一番妥当ですな」
「ですか。それでは我々としてはそれで」
「ただ。ここで問題があります」
今度はシンガポールの外交官の言葉であった。
「問題とは」
「統一することです」

シンガポールの外交官が言うのはそこであった。

## 第二十七部第二章　晴れ舞台の前その二

「その祝日を多く設けては混乱が生じますから」
「それですか」
「ですから。ここは一つにするべきでしょう」
日本の外交官がすかさずこう言うのだった。今まで黙っていた彼がすぐに話に入った。Ｓれは絶妙なまでのいいタイミングであった。まるで狙っていたかのように。
「一つの日に」
「ということはですな」
それを聞いてパプワニューギニアの外交官が口を開いた。
「これは中央政府の問題になりますな」
「彼等の」
この部屋にいる中の何人かの顔色が悪くなった。
「そうです、中央政府の」
日本の外交官はまた言った。
「議論になりますが」
「どうもいけ好かないですな」
そこまで聞いてロシアの外交官が述べた。
「中央政府に一方的に決められるのならば」
「いや、何もそうではないでしょう」
カナダの外交官が今のロシアの外交官の言葉を打ち消す。
「この場合は」
「そうでしょうか」
しかしそれに異議を呈する者達も多かった。太平洋諸国は伝統的に中央政府の過度な干渉を嫌う国が多い。そうでないのは日本等僅かである。
「私はそうは思いませんな」
「私もです」

とりわけ大国は。米中の二国の者達がまず反論した。ここでも。
「中央政府は最近権限を拡大していますしな」
「今回もそうとは」
「記念日を決めるだけですが」
日本の外交官は彼等に対して言った。
「それで権限拡大も何も」
「いや、わかりませんな」
フィリピンの外交官の言葉は実に鋭いものであった。
「何でも使えますから」
「確かに」
それにニュージーランドの外交官も頷く。
「とくに近頃の中央政府は」
「どうにも権限拡大に熱心ですから」
そういった意味でキロモト政権は旧太平洋諸国から好まれてはいない。中央政府の権限拡大は即ち連合内部での彼等の力が抑えられることだからだ。これを好ましいと思う筈もなかった。とりわけ連合でとりわけ強い力を持つ米中露はそうであった。
「それがどうも」
「我々としては」
「考え過ぎではないですか？」
中央政府に伝統的に忠実な日本はこう言うのだった。
「何もそこまでは」
「そう言えるのはここにいる面々の中では貴国だけですな」
「全くですな」
すぐいその米中の外交官達から突っ込まれた。
「今の中央政府はどうも」
「我々に対して冷淡ですから」
「その通りです」
ロシアの外交官も米中についた。
「我々は冷や飯食いですからな。いや」

ここで彼はユーモアを見せてきた。酒が入っていないと明るさはないと言われることの多いロシア人であるが彼はそうではないようである。顔が赤くないところを見ると酔ってはいないがそれでも普通に明るい顔を見せているのである。これはこれで凄いことであると言える。

「冷やピロシキ食いですかな」

「ではこちらはハンバーガーです」

「饅頭ですかな」

どれも冷えればまずくて食べられないものばかりだ。彼等はそれもわかってこう表現してきたのだ。実際に中央政府は彼等の専横を防ぐ意向なのだ。それを彼等は把握している。

「困ったことですな」

「我々に冷たいというのは」

「公平に接して頂きたいです」

これはかなり都合のいい言葉であった。だがそう言うのが彼等でもある。そうやって千年以上過ごしてきたのだから容易には変わりはしないものだ。

「公平にですか」

日本の外交官はその言葉に心の中で怪訝な顔を見せた。何を言っているのかと思ったのだ。なお日本は千年の間で柔らかさはそのままで強かさが増したと評されている。

## 第二十七部第二章　晴れ舞台の前その三

「そう、公平に」
「我々にも」
暗に日本を批判しているのは言うまでもない。
「今回に関してもそうですな」
「やはり我々も。考えを聞いてもらわなければ」
「それは議会の仕事では？」
日本の外交官は米中の同業者にそう返した。
「我々が言うと。それに」
「それに？」
「上下両院の上に各国の首脳議会がありますし」
この存在が大きいのだ。連合国家である連合においては各国の意向を反映させなければならず上下両院の上にこうした各国首脳の議会を設けているのだ。これは各国の意向を羽いさせるというその目的を果たすと共にそれぞれの立場や考えを連合中に知らしめている役割も果たしている。だがそれと共に各国のエゴを剥き出しにさせ中央議会の動きを鈍くさせているというデメリットもある。そのデメリットが問題視されて昔から廃止すべきという中央集権論者からの意見も根強い。
「そちらで話せばいいことでは」
「やれやれですな」
ロシアの外交官は今の日本の外交官の言葉に肩をすくめてみせた。
「これですから貴国は」
「そうですな」
ニュージーランドの外交官はロシアについた。よく見れば今回日本は孤立していた。中央政府支持派と不支持派に分かれているが支持派が日本だけだからだ。だからといっても困った顔をしてはいないのがこの時代の日本であった。誰に狐を宰相にしているわけでは

ないということか。
「何時までも中央政府の顔ばかり立てて」
「今回はそれはどうかと思うのですが」
「いや、別に」
韓国も当然ながら日本不支持に回ったがそれでも言うのだった。相変わらず平気な顔で。
「特に中央政府の顔を立てているわけではありません」
「立てているではありませんか」
「違うのですか？」
「違いますな」
平気な顔のまま答える。かなり詭弁であうがそれを何とも思わずに顔にも出さない。やはり彼もまた狐であると言えた。若しくは狸であろうか。
「我が国とて中央政府に忠実なわけではありません」
「どうだか」
「それはケースバイケースでは？」
「ははは、確かに」
タイとベトナムの外交官の言葉にまた笑って返す。だが今度の笑いは意味が違っていた。何と時と場合によるということを宣言したのだ。これはかなり大胆であった。
「認められましたか」
「これはまた」
「どなたも同じことですから」
図太いまでに平然と言ってのけた。
「それだけです」
「はっきりと言われるとは」
「流石にそれは」
これにはどの国の外交官達も言葉がなかった。そうした意味で彼は今の一言の発言で場を完全に支配したのであった。ペースを掴んだのだ。

「ですが真実だと思いますが」
「むっ」
「それは」
その証拠に今それに反論できる者はここにはいなかった。
「その通りですな。然るに今回も」
「我々の国益は関係ないと」
「いえ、あります」
またロシアの外交官に言葉を返した。
「配慮はしておりますぞ。ちゃんと」
「それではですな」
ロシアの代表はそれを受けて口を大きく開いた。
「またどうして今の御言葉を」
「聞きたいものです」
「要は日が我々の思い通りになれば宜しいのですな」
日本の外交官はその目をクールなものにさせて彼等に問うた。
「違いますかな？簡単に言えば」
「その通りですが」
「しかし」
「ですが真実の筈です」
流れを掴んでいるのを利用した。多少強引に話を押えた。
「それだけです。ですから」
「我々としては意向を伝え」
「その通りにしてもらう」
「はい。ではその日は」
日本の代表は音頭を取って来た、流れはさらに彼のものになってきていた。

## 第二十七部第二章　晴れ舞台の前その四

「何時にするかですな」
「停戦の日ですかな」
韓国の代表が言った。
「戦争が終わった。その日こそが」
「いや」
それにすぐカナダの代表が異議を呈してきた。
「その日ではなく」
「オリンポス条約の日ですか」
「それも連合での日です」
そこが細かく決められた。肝心の部分であるからだ。
「その日こそ我々の勝利が完全に決まった日なのですから」
「言われてみれば」
韓国の代表もその言葉に納得した。政治的に考えればそうだからだ。連合においては軍事の立場はかなり低い。だからこそここでも政治的な考えが優先されるのだった。
「その通りですな」
「そうですな」
「それで宜しいかと」
各国もまたカナダ代表の意見に賛成を示してきた。政治的な考えからすればそちらの方が妥当であるからだ。彼等も外交官であり政治に携わっているからこそ頷くのだった。
「後はそれを中央政府に伝えて」
「我々の意向を飲んでもらうと」
「それで宜しいですね」
日本の外交官はここでまたしても意見を纏めてきた。その様子に米中露の外交官達はいささか不快さを感じていたがそれは顔には出さなかった。

「そのようにして」
「ええ」
「我々としてはそれで」
「ただ」
ここで中国の外交官が口を開いた。
「どうにも。中央政府のやり方は今だもって好きになれませんな」
「その通りです」
アメリカの外交官もそれに続く。
「何かといえば権限を中央に集めるというのは」
「各国の自主性と独自性を損ないます」
一見良識ある言葉であるが彼等が言っているのであまり説得力のない言葉であった。言葉よりも日頃の行動が見られるものであるからだ。
「ですからここはですな」
「各国の意見を取り入れるべきです」
「確かにその通りです」
日本の外交官もそれには大いに頷く。元々日本は常にかなり融和的な対応を取ることで知られている。もっともそれだけではなくそこには日本なりの意志があるのであるが。
「各国の意見や考えも尊重されなければなりません」
「よくわかっておられるではないですか」
「全くです」
米中の外交官達はその通りだと言わんばかりの態度を見せてきた。
「ではおわかりですな」
「我々の言わんとしていることが」
「しかし」
ここで日本の代表は言うのだ。相手の行動を完全に読んだうえでの言葉だというのは周りにはすぐにわかった。米中の代表もそれを悟り内心舌打ちした。
「意見を述べるのとクレームをつけるのはまた違います」

「つまり我々はクレーマーだと」
「心外ですな」
「そうとも申し上げてはいません」
この言葉も読んでいた。読んだ上で受け流したのだ。
「意見を述べ議論には参加する」
「基本ですな」
米中についていたが途中から様子見に回っていたロシアの代表がそれを聞いて述べた。これは民主主義の基本である。言うまでもないことであるが。
「ですがその議論においては」
「おいては？」
「自分の意見を押し通そうとするものではないでしょう」
そう述べて中央政府を立ててきた。良識には良識で返したのだった。ここにも日本代表の強かな読みがあった。良識というものは良識によって相殺されることがままあるのである。
「ですから意見を述べた後決められてもあれこれ言わないことです」
「つまり最低限の参加でよいと」
「そう仰るのですか」
「ですから各国首脳の院があります」
その存在をまた米中の代表に示した。そこには当然ながら彼等もいる。無論その他の国々の首脳達もいる。それが重要なのであるが。
「そこで議論と議決に参加すればいいのです」
「まあそうですな」
「一応は」
納得していないのは言葉では出さなかった。あえて。

## 第二十七部第二章　晴れ舞台の前その五

「そうしましょう。ですが」
「ですが？」
「我々もまた意見は述べさせてもらいますので」
「それは御了承を」
彼等はそれぞれの口で述べた。今度は日本だけでなく他の国々に対しても。
「宜しいですな」
「それは通させてもらいます」
「ええ、それはどうぞ」
日本側は穏やかな口調で言葉を返した。
「それも守られるべきですから」
「意見を言うことは何があっても守られるべき」
「そういうことですか」
「左様です」
簡単に言うがそれは難しいことだ。民主主義であっても自分とは違う意見、自分にそぐわない意見を弾圧したり喋らせないようにする輩は存在している。そうした輩こそ民主主義を守れと言うブラックユーモアな状況もまた存在している。ブラックユーモアというものはこの世に存在しているものだ。傍目から見れば真に滑稽で醜悪なものであるがそれすらわからない愚劣な輩もいるということだ。世の中というのはそうした意味においても非常に面白いものである。
「誰であろうとも」
「まあ誰であろうとも」
「それは常識ですな」
これも米中が言うとあまり説得力がないものだったりする。彼等はよく小国を恫喝したりしているからだ。だから小国は連衡する。こうしたことは春秋時代から全く変わっていないと言っていい。そ

うそう変わるものでもない。大国の横暴も小国の合従連衡も。もっとも連合においてはそれは常に経済的なものであり武力は使われないのであるが。弾丸からは何も生み出されはしないが札束からは何かが生まれる。だからこうした衝突もかえって連合の経済活性化や見直しに貢献してもいるのだ。

「その通りです。ところで」

日本の外交官は話が一通り収まったところで言うのだった。

「お腹が空きませんか」

「おお、そういえば」

それを聞いてカナダの代表が部屋の壁にかけてある時計を見た。

「時間ですな」

「丁度いい頃です」

「既にお店は用意してあります」

日本の代表は一同に対して述べた。

「よい店を知っておりまして」

「流石ですな」

「全くです」

今度ばかりは米中の代表もまた笑顔になった。食べ物のこととなれば彼等も別なのだ。食事というものは連合においてはとりわけ重要なものなのだ。

「それでですね」

ベトナムの外交官が日本の外交官に問うた。

「どんなお店ですか？」

「所謂何でも屋です」

日本の代表はそう述べた。

「各国の料理がある。砕けたお店ですよ」

「砕けたですか」

「お昼にはいいですな」

彼等も別に飾るつもりはない。むしろそうした店の方がリラックスできるのはこの時代においても同じである。レストランもいいが

そうした店もいいものなのだ。
「それでは参りますか」
「ええ。それにしても」
「それにしても？」
日本の代表はタイの代表の言葉に顔を向けた。
「用意がいいですな。もう予約をしてあるとは」
「確かに」
他の国々の外交官達もそれに頷く。
「時間的にもそうですし」
「これも気配りですかな。日本流の」
「ははは、そう捉えてもらえると嬉しいものです」
笑ってその言葉に応える日本の外交官であった。
「是非共。それではですね」
「はい」
「参りましょう」
まずは自分が席を立ってみせた。
「いざ御馳走へ」
「御馳走ですか」
「確かにそうですな」
この言葉にはまたしても皆頷いた。
「美味しければそれで御馳走です」
「そういうことです」
これは確かに真実であった。料理というものはまず美味しくなければならないのだ。それが第一である。美味しくなければどんな素材でも味でも御馳走ではないのだ。

## 第二十七部第二章　晴れ舞台の前その六

「その店にはタコスはありますか？」
「勿論」
メキシコの代表に笑顔で答える。
「ラーメンやハンバーガーもありますよ」
「本当に何でものようですな」
インドネシアの外交官もそれを聞いて笑顔になる。何でも食べられる状況というのも非常に有り難いことだ。連合ではそうした各国の軽食を集めた店も多いのである。
「では楽しみに」
「我々も」
皆笑顔で食事に向かう。この時はそれまでの政治的ないがみ合いを忘れて楽しく食事の時間を過ごすのだった。そうしてそこで楽しい食事となったのである。
この食事の前の政治的な話はカバリエの耳にも入っていた。彼女はこのことをすぐに内相である金に話した。記念日の制定には内務省が強く関わることだからだ。
「また彼等ですか」
「ええ」
二人は夜にレストランで話をしていた。和風レストランであり所謂料亭と呼ばれるものである。そこのお座敷において話をしていたのである。無論二人でだ。
「米中露、特に米中ね」
「いつものことですね」
金はそれを聞いてまずはこう述べた。
「彼等に関しては」
「もう馴れているといった感じね」
「否定はしません」

金は刺身を食べながら答えた。平目の刺身である。淡白で品のある味が口の中で山葵醤油と合って絶妙なハーモニーを奏でている。
「予想もしていましたし」
「そう、やっぱりね」
カバリエも同じ刺身を食べている。彼女も同じ味を楽しんでいた。
「実は私もやっぱりねと思っているのよ」
「そうですか」
金もその言葉に応えた。箸は動き続けている。
「予想通りではなくて？」
「確かに」
金はカバリエのその言葉に頷く。今度は天婦羅を口にする。おろし大根を入れただしが絶妙なまでに海老や烏賊、キスといった素材を活かしている。カバリエはそれを見て目を細めさせてきた。
「天麩羅もよさそうね」
「はい」
金もその言葉に応える。舌は正直である。身体の中で最も正直な部分の一つが舌だ。美味いかまずいかはどうしても嘘はつけないものだ。
「これもまた」
「ここの天麩羅は絶品なのよ」
カバリエモまたその天麩羅を口にしていた。彼女は青シソから食べているが。
「揚げ具合といい味付けといいね」
「そうですね。それに素材も」
「彼等は天麩羅の具としては主役ね」
ここで米中露について言及したのだった。
「主役ですか」
「そう。例えるのならここに鯛の天麩羅を置いたようなものかしら」
この天麩羅は今ではポピュラーに食べられているが長い間忌避されてきた。何故そうなったかというと徳川幕府の創始者である徳川

家康がこれに当たって死んだからだ。もっとも鯛を三枚も一度に食べれば身体も悪くしようなものでもある。一説には癌だったとも言われているしもっと違う俗説では梅毒だったとも言われている。真相はわかりはしないがどちらにしろ彼がこの天麩羅で当たったのは事実なので長い間避けられているのだ。

「鯛のですか」

「確かに鯛の天麩羅は素晴らしいわ」

グルメのカバリエはそれも知っていた。

「けれど。それだけで大きな存在になってしまうわね」

「ええ」

金はその言葉に頷く。そのまま天麩羅を食べている。

「どうしても。そうなります」

「そういうことなのよ。存在が大き過ぎるのよ。その個性も」

「個性もですか」

「だから扱いが難しいのよ」

次にこう述べるのだった。

「何かとね。だから」

「だから？」

「あえて距離を置いたりすることも大事ね、彼等に関しては」

「では外相」

金はここまで聞いたうえでまたカバリエに問うた。

「何かしら」

「今回はどうするべきでしょうか」

「話は聞いておくべきね」

カバリエはまずはこう答えた。

「話はね」

「聞いておくのですか」

「聞かなかったらそれはそれで後が厄介よ」

金にそう告げる。彼女も海老や烏賊を食べはじめた。見事な歯触りと弾力が口の中で感じられる。その感触とそれぞれの持っている

味に心の中で賛辞を送るのだった。

## 第二十七部第二章　晴れ舞台の前その七

「だから。聞いておくの」
「それで私達と意見が同じならば」
「彼等の手柄にすればいいわ」
簡単に言ってのけたのだった。
「その時はね。エウロパとの戦勝の勝利記念日だったわね」
「はい」
またカバリエの言葉に頷いた。
「そうです。それです」
「そうね」
わかってはいたがあえて確かめたのだ。そうして頭の中で考えを纏める為である。カバリエはその外見からは思いも寄らぬ切れ者としても知られている。どちらかといえば熟考するタイプである。
「それなら合う可能性が高いわね」
「ですね」
金もそれはわかっていた。こくりと頷いて答える。
「こちらはオリンポス条約締結の日を考えていますが」
「あら、それはいいわね」
カバリエは今度は湯葉を食べていた。大豆を使った料理で言うならば豆腐と同じである。その薄く白いあっさりとした味もまた彼女の好みであった。
「それだと問題はないわ」
「ありませんか」
「確か彼等も同じ考えだった筈だから」
「それでは」
金はそこまで聞いて顔を明るくさせた。謹厳実直な性格の為積極的に顔を崩したりはしないがそれでも表情が明るくなったのは事実である。

「このまま」
「ただしよ」
湯葉はすぐに食べ終わった。既に酢の物は最初に食べており今度は吸い物に移っていた。鱧の吸い物である。その鱧の淡白なようでいて強い自己主張を楽しみながら言うのだった。
「すぐには彼等に手柄を譲らない」
「焦らして。ですか」
「その通りよ」
にこりと笑って述べる。その笑みはただ金の言葉に対してだけではない。今味わっている鱧の味に対してでもあるのだ。金もまたその鱧を味わっている。絶妙な味に彼女も頬を綻ばせてはいる。
「すぐにやれば彼等もそれを恩に着ないから」
「恩ですか」
金はその言葉を聞いて微妙な顔になった。この時は鱧の味を忘れていた。
「彼等は」
「必要とあらば恩を忘れる」
ある意味わかりやすい外交である。だが国際政治とはえてしてそういうものである。むしろ恩を絶対に忘れないという方が珍しい。そうした国は馬鹿正直と揶揄される世界でもあるのだ。
「そう言いたいのね」
「はい」
「それはそれよ」
だが金はそれをよしとした。
「その場合でも恩は残るから」
「残りますか」
「ええ。それでツケにしておけばいいのよ」
いささか世俗的な言葉がここで出た。
「ツケですか」
「そう。貸しておくの」

カバリエは今度はこう言い換えてきた。
「返してもらえる時にね。帳簿につけておいてね」
「わかりました。それでは」
「世の中と同じね。そうしたところは」
わかりやすくこう述べるのだった。
「貸し借りは残るものなのよ」
「はあ」
「踏み倒されるのを許さなかったらそれでいいのよ。彼等に対しても」
「そういうことになりますか」
「一つ言っておくわ」
柔として言うのであった。カバリエは柔らかい外交を得意とする人間である。それに対して金は剛一辺倒である。あまりにも生真面目で謹厳な人間として知られている。
「時には柔らかくね」
「柔らかく、ですか」
「貴女には一番難しいことかも知れないけれど」
くすりと笑ったのはカバリエもまた金の性格をよく知っているからである。その厳格な性格をである。伊達に女教皇と呼ばれているわけではないのだ。金にしろ。
「ここは柔らかくいきなさい」
「わかりました」
その言葉にこくりと頷く。彼女は素直でもある。
「それではそのように」
「押さば引き引かば押す」
どちらかと言うと武道的な言葉になっていた。それも柔道の。
「それでいいの。常に押しているだけでは潰れるわ」
「頭を打ってですか」
「そうよ。わかってるじゃない」
今の金の言葉にまた頬を綻ばす。おかずはあらかた食べてお茶漬

けを食べている。梅のあっさりとした茶漬けだ。今回のメニューは何処までもあっさりしたものであった。
「それを避ける為にもね。その方が楽よ」
「私は楽をするつもりは」
「あら、それじゃあ」
言葉を変えることにした。金の言葉を受けて。そこがカバリエの柔であった。

## 第二十七部第二章　晴れ舞台の前その八

「ことを為すに当たっては。これでいいかしら」
「それでしたら」
こう言われると彼女も納得する。言いようということである。
「わかりました。ではそのように」
「頼むわ。じゃあ」
「はい」
話が一旦終わり別のところに向かう。
「お茶漬けを食べたら次はあれね」
「デザートですか」
金の目が笑う。無類の甘党の彼女らしい動きであった。
「いよいよ」
「内相は和菓子も好きだったわね」
「あっ、はい」
その言葉にすぐに頷く金であった。やはり彼女も政治家としてはかなり素直な性格をしている。そもそも嘘なぞつかなくとも能力があればそれでいいと考えるタイプであるが。
「それもかなり」
「その通りです」
自分でもそれを認めるのだった。
「和菓子のあの上品な甘さが」
「いいのね」
「外相はどうでしょうか」
「私もよ」
くすりと笑って答える。そこから彼女もかなり和菓子が好きなのがわかる。
「抹茶と合うわね」
「あのお茶がまたいいですね」

金は金でお茶にかなり五月蝿い性格をしている。なお彼女のお茶の飲み方は普通の人間を引かせるのにかなり役立っている。
「日本の味そのものです」
「茶道ね」
「茶道も習いました」
金はお嬢様育ちである。だからそうしたことも学んできているのだ。
「正座が辛かったですが」
「けれど素直に学んだのね」
「そうでしょうか」
「ええ、それはわかるわ」
カバリエは笑いながら言う。先程と同じくすりとした笑いであった。
「貴女の様子を見ていたら」
「我が家は昔から日本と関わりの深い家でして」
「韓国にはそうした家が多いわね」
「はい」
その言葉にも素直に頷く。口では何と言っても韓国が日本と深い関係にあることは連合の誰もが知っている。単に韓国側が素直でないだけだと言われている。
「千年前から」
「そうですね、地球にあった頃から」
思えばかなり長い付き合いである。
「私としては日本は立派な国だと思います」
「本当にそう思っていて？」
何故か急に金をからかうような笑みを見せてきた。
「貴女最初は八条長官に」
「あれは彼の考えが最初理解できなかったからです」
カバリエのからかうような言葉にすぐに切り返してきた。すぐに普段の切れ者の顔になっていた。

「八条長官の」
「そうだったの」
「はい。何を考えているのかわかりませんでした」
そう述べるのだった。
「日本人には多分にそうしたところがありますが」
「そうね。日本人には」
カバリエもその言葉に頷く。日本人の腹の底は読みにくいというのは連合でよく言われていることである。それが彼等を狐だの狸だの呼ばれる原因の一つでもあるのだ。
「ましてや長官は無口な方ですし」
「特に女性の前ではね」
そのせいで同性愛者説まで出ているのである。
「無口ね」
「それで困りました」
金はその整った顔に少し皺を寄せて述べた。
「そのせいです」
「そうだったの。でも今は違うわね」
「はい」
カバリエの言葉にこくりと頷く。

## 第二十七部第二章　晴れ舞台の前その九

「よく話してみると政治手腕も知識も教養もあって」
「素敵な方だと」
「その通りです、長官は素敵な方です」
かなり危ない言葉を出したが本人は気付かない。
「真面目ですし気さくなところもありますし」
「彼もまた御曹司なのは知っているわね」
「日本の名家八条家」
八条家の名は連合においてはつとに知られている。代々有力な政治家を輩出し、そのうえ各種産業に大きな力を持っているからである。八条はその家の嫡男なのだ。
「我が国とも深い関わりがありますし」
「それは二十世紀からだったかしら」
「そうです」
金はそのことも知っていた。
「半島で多くの産業を興したと聞いています」
「あの時は韓国は日本だったわね」
日韓併合によりそうなった。これにより何も無かった朝鮮半島は大きく発展することになる。それが今の宇宙における韓国の地位につながっていると言っても過言ではない。この時代韓国人もそれはわかってはいるがそれでも何かと日本に対して対抗意識を燃やしているのである。これは最早消せはしない性分であった。
「そのせいで」
「ということはですね」
金は不意に言うのだった。
「私も日本人になっていたということですね」
「そうね。そうありたかったのかしら」
「いえ」

だが金はそれは否定する。
「私は韓国人ですので。そのことを誇りに思っています」
「誇りにね」
「そうです」
強い言葉で答えてみせた。
「恥じることはないと思いますが」
「実はね」
そこまで強く言う金に対して述べるのだった。
「日本をそこまで表立って肯定できる韓国人ははじめて見たのよ」
「そうなのですか」
「言うならばあれね」
カバリエは和菓子をちらりと見た。羊羹であった。
「この羊羹が韓国とするわね」
「はい」
「お抹茶は日本ね」
こう言うのだった。
「最後のトリの」
「お抹茶ですか」
「おら、さっきあの大国達を鯛の天麩羅って言ったわよね」
話をある程度戻してまた説明する。
「それは覚えているわよね」
「ええ、まあ」
金もまた頷く。
「それで日本はお抹茶」
「随分個性が弱いですね、鯛の天麩羅に比べると」
「そうね。しかもその天麩羅が三枚もあるし」
かなり強烈なのは言うまでもない。一枚でもかなりのものだというのに。だが連合という国家連合はまさにそうなのだ。中にそれだけ大きな存在の国々を抱えているのだ。
「ＡＳＥＡＮ諸国がお刺身で」

「個性がないようで強くしかも欠かせない」
「それぞれの天麩羅やお野菜が中南米諸国やアフリカ諸国、あとはオセアニアかしら」
「他のお料理が新興国家で」
「特に重要なお汁もあるし」
そう考えていくと連合というのは非常に個性の強い国家が集まっているのがわかる。そして和菓子が韓国で抹茶が日本だというのだ。
「お茶がないと落ち着かないわね」
「そうですね」
これについて異論がある者は少ない。何故ならお茶なくして料理はないからだ。
「それは」
「ただね」
ここでカバリエは言うのだった。
「このお茶が美味しいかそうでないかで全然違うわね」
「日本はそういう存在ですか」
「あの長官もね」
カバリエは楽しそうに語っている。

## 第二十七部第二章　晴れ舞台の前その十

「そうしたお茶の様な存在ね」
「そうですね。確かに」
和菓子を韓国、そして自分自身と見ればそれは容易にわかった。
「では私の個性は」
「長官の様な人がいてようやくより生きるようになるの」
「韓国もまた」
「では聞くわ」
金に対して問うてきた。
「韓国にとって日本はどういう存在かしら」
「一言で言うと頼りになります」
これこそ偽らざる真意であった。韓国にとって。
「日本なくしては後ろが心配です」
「そうね。そうした意味でもやっぱり」
「やはり日本はお茶ですか」
「和菓子でも食べた後はその味が残るわ」
甘いものはどうしてもそうなってしまう。だからそれを消す為にお茶やコーヒーというものがあるのだ。お茶の文化はお菓子と共にあるのはこのせいである。
「それを消す為にもね。けれど消すのは」
「和菓子の味だけではないと」
「わかるのね」
「はい。それも学びました」
生真面目にそう返答する。
「お茶に関しては。特に和食は」
「不思議なものね。本当に」
カバリエは不思議という言葉をあえて出してきた。
「和食におけるお茶の存在は」

「少なくとも他の国の料理のお茶やコーヒーの位置とは少し違いますね」
「そうなのよ。日本もそうね」
「全てを中和する」
「そういう存在ね」
カバリエはどちらかというと親日派である。日本についての悪口を言ったことはない。日本において不思議なのは国内にこそ日本を最も嫌う人間がいるということだ。しかもそうした人間は所謂インテリゲンチャに多い。二十世紀後半の日本は人類史上最もインテリゲンチャが腐敗し堕落した時代であると言っていいがこの時代の所謂『進歩的知識人』という人種は日本を蔑むことがその特徴の一つであった。そんな彼等の崇拝する国といえばソ連の如き全体主義国家であったり北朝鮮といった犯罪国家であった。お話にもならない三文喜劇である。
「それを考えると個性は強いわね」
「決して目立ちませんが」
「目立たないのも個性のうち」
一つの言葉が出た。
「そういうことね」
「そうなりますか。そういえばですね」
「八条長官ですか」
「御本人はこれと言って目立つようなことはされない方ですが」
「それでも存在感があるわね」
「ええ。あれが不思議と言えば不思議です」
金は言う。八条は華がある男であるとされている。その華は優雅であり貴族的であるとされている。つまり高貴な美男子というわけだ。
「そういたところも日本です」
「静かで目立たないけれどいるだけで華がある」
「目立たないようにしていても存在感を出せるですか」

「思えば凄いわ」
そんな人間も国家もそうはない。どの国家も必死に自己主張するのが常であるからだ。だが日本はそうしたことはしない。そうした意味でも実に不思議な国家なのだ。
「彼にしろね。何か見ているだけで」
「見ているだけで」
「うっとりするものがあるし」
お茶を一口飲みながら述べる。何処か女を感じさせる言葉になっていた。
「羨ましいと言えば羨ましいわね」
「はい」
金はその言葉にも頷いた。
「その通りです」
「それでその華のある人だけれど」
「何かありますか？」
「今回の件についてはどう言っているのかしら」
政治に話が戻った。先の戦争の最大の立役者として彼の存在は非常に大きい。当然ながらその発言も非常に大きいのである。
「長官ですか」
「聞いているかしら。何を言っているのか」
「さしあたっては何も」
金はこう答えた。

## 第二十七部第二章　晴れ舞台の前その十一

「聞いてはいません」
「そうなの」
カバリエはその言葉には少し残念な目を見せるのだった。
「彼の考えがかなり影響するのでしょうけれど」
「それだけのものがありますか」
「英雄になっているから」
戦争に勝利を収めるというのはそれだけ大きいのだ。今や八条は国防省と中央軍を作り上げた傑出した政治家というだけではなく千年に渡る因縁を持つエウロパを破った英雄でもあるのだ。その英雄の言葉は非常に大きいのだ。それは比類まきものがある。
「英雄の言葉は絶対よ」
「絶対、ですか」
「本人が意識するしないに関わらずね」
カバリエは笑って言うがこれもまた非常に重要なことであった。英雄となると本人が意識するしないに関わらず非常に大きな存在になるのである。
「重いものがあるわね」
「その重いものがあるのは御本人も存じておられるでしょうか」
「そうね」
カバリエは金の言葉に己の考えを巡らせた。お茶を飲む手が止まっている。そのうえで実に慎重に熟考しながら述べるのであった。
「それは本人もわかっていると思うわ」
「そうですか」
「彼は政治的な感覚は本当に鋭いから」
これに関しては殆どの者が認めるところである。八条は政治家としては非常に鋭い感覚を持っている。少なくとも世事における彼のそれよりは。

「わかっているわね。それに慎重だし」
「はい」
これも有名であった。その鋭さと慎重さ、博識が彼を一流の政治家たらしめているのだ。彼は天才タイプではないがそうしたバランス感覚のある政治家なのである。
「だから発言を控えられていると」
「私はそう見ているわ。ただ」
「ただ？」
今のカバリエの言葉に注目する。
「そろそろ機ね」
「時機ですか」
「そう、彼がそれについて発言する時機ね」
こう述べる。彼の発言が待たれている時機でもあるというのだ。言葉を発するにはそれなりのタイミングが必要である。早過ぎても遅過ぎても駄目なのである。
「どうやらね」
「では近々大きく動きますね」
「多分ね」
カバリエも慎重に言葉を進める。
「この件に関しては。さて」
またしても冷静な目になった。
「あの三国が何を言うかしらね」
「彼等は常に動きますから」
金もいささか辟易気味のようであった。
「中にも外にも。またどうして」
「それだけ活力があるということね」
カバリエはくすりと笑って言う。彼女はそんな三国をある程度受け入れているようだ。
「国としてね」
「そうなりますか」

「これは彼等にしてみれば非常に有り難い褒め言葉なのでしょうけれど」
こう前置きしてきた。
「だからこそ大国になれた」
「だからこそですか」
「そして今でも大国であり続けている」
少なくともこの三国の力はマウリアやサハラ全土のそれに匹敵するものがある。日本も優にエウロパを凌駕する力を持っている。だが日本はこの三国には国力では少し劣るのだ。
「それは力があるだけじゃなくて」
「活発さが必要だと」
「エウロパを御覧なさい」
宿敵を出してきた。
「二十世紀後半以降彼等は活発さをなくしていたわね」
「はい」
それまで帝国主義下で積極的に外に出ていたがそれが終焉すると徐々に内に篭るようになっているのだ。ＥＵもそうであると言えるしシンガポール条約締結直前もそうであった。彼等は今の繁栄に落ち着き外に出る活力を失っていたのである。シンガポール条約の時もエウロパはかなり無気力であった。それをもう一度奮い立たせ旅立たせたのがブラウベルグであったのだ。
「それを見ればやっぱり活力は重要なのよ」
「繁栄していく為には」
「そう。だから彼等は繁栄しし続けている」
また米中露の三国について言及する。
「今もね」
「その活力はあらゆる方面に向けられていると」
「中央政府の政治にもまた」
「それをどう使うかですね。問題は」
金が言いたいのはそこであった。

## 第二十七部第二章　晴れ舞台の前その十二

「彼等が」
「大抵は中央政府の為にはならないことね」
これは見事なまでに千年前から変わらない。中央政府にとって彼等の横暴は非常に厄介な問題であり続けているのである。悲しいことに。
「彼等の為であって」
「私も本当にそれがわかったのは中央政府に入ってからです」
金もそれについて言うのだった。
「まさかあそこまでとは」
「当事者にならないとわからないものよ」
カバリエのこの言葉は実に現実的なものであった。
「おおむねね」
「そうですね」
またしても金にとっては頷くしかない言葉であった。
「本当に。それを肌身で知りました」
「あの彼もそうなのでしょうけれどね」
また八条に話を移した。お茶を飲みながら。
「どうなのかしら。そこは」
「表情が読み取れない方ですし」
「そうね。そういえば」
「はい？」
カバリエの言葉の調子が変わったのに彼女もふと気付いた。
「何か？」
「貴女は彼より年上だったわよね」
「ええ、まあ」
その言葉に何気なく応える。何が言いたいのかはわからないが。
「それが何か」

「そう。やっぱりね」
「やっぱり？」
「いえ、彼の人気は知っているわよね」
これについて尋ねる。八条は確かに人気のある政治家だ。政治家は民主政治においては人気がないとやってはいけない。人気がなければ即落選である。幾ら地盤や資金があっても極論を言えば票が集まらないとそれで終わりなのだ。八条はその点でも恵まれた政治家であった。
「それも承知のつもりですが」
「男性にも女性にもね」
「女性にもかなりの人気なのも知っています」
その整った容姿がかなり大きい。それだけでなく気品に溢れ長身で頭も切れ名門の嫡男となればである。まるでドラマに出て来るような貴公子である。実は連合にはこうしたタイプが少ないのだ。連合はかなりワイルドな一面も強いからだ。開拓地の存在がそこにはある。
「おば様達にもね」
「まるでスターですね」
「スターでもあるわ」
英雄とはまた別の言葉であった。
「彼はね。だから」
「それが私とどう関係が」
「あら」
今の金の言葉と表情には面食らってしまった。
「そう。だったらいいわ」
「！？」
カバリエの今の言葉に眉を顰めさせる。
「仰る意味がわかりませんが」
「じゃあいいわ。とにかくね」
「はい」

「この件に関しては彼待ちよ」
話を打ち切ってこう伝えるのだった。
「わかったわね」
「わかりました。それでは」
「内務省でもできることはしておいてね」
「それは既に進めています」
仕事になると異常なまでに動きが速い。それが金であった。
「御安心下さい」
「流石ね。そうしたところは」
「話は常に進めていかないといけませんので」
生真面目な普段の金であった。この生真面目さが何だかんだと言っても彼女の優秀さの根底にあるものであった。同時に厳格さにもつながっているが。
「それは既に」
「いい感じね。それじゃあ」
「はい。何時でも動けますので」
料亭においてこうした話が行われていた。連合はまた様々なものを内包して動きだしていたのであった。

## 第二十七部第二章　晴れ舞台の前その十三

八条もそれは同じであった。記念日の制定について彼は色々と意見を求められるようになっていたのである。

この日もそうであった。国防省の執務室において背広組のスタッフと話をしていた。当然ながらその戦勝記念日についてである。

「その日ですか」

「そうです」

背広組のスタッフの一人が応える。何人かでソファーに並んで座っている。八条はその向かいのソファーに向かい合っている。彼は一人であった。

「その日が一番ではないかと私は思いますが」

「停戦の日ですか」

八条は彼の意見を一先は聞いていた。そのうえで声をあげたのであった。

「その日に」

「如何でしょうか」

スタッフはまた彼に問うてきた。

「やはり勝利が確定したその日ですし」

「確かに一理あります」

八条もそれは認めた。

「ですが」

「ですが？」

「その日はあまり肯定されていませんね」

こう言葉を返したのであった。そのスタッフに。

「違いますか？」

「それは承知のうえです」

スタッフもそれはわかっていた。澱みのない顔にそれがはっきりと表われていた。

「私も」
「それでもその日を主張されますか」
「過去の歴史にちなみまして」
これが彼の意見であった。
「第二次世界大戦ではそうでしたね」
「あの戦争ですか」
「そうです」
スタッフも八条も真顔であった。人類史上屈指の激戦のことが出て来たからであるがそれと共にそこにある政治的意義についても考えていたからだ。
「あの戦争での戦勝記念日はそれぞれ停戦の日でした」
「ソ連、そしてロシアの戦勝記念日ですか」
「ええ」
その日は五月七日になっている。ドイツが連合国に降伏した日である。ソ連、そしてその後を継いだロシアはこの日を戦勝の日としていたのだ。日本が降伏した日も同じである。
「それを踏まえますと」
「しかしですね」
別の女性スタッフがここで言うのだった。
「それはいささか違うのではないかと思います」
「違うといいますと」
八条が彼女に尋ねた。
「はい。その日は連合にとっては記念日に相応しくありません」
「といいますと」
「あの戦争は多分に政治的でありました」
「はい」
八条もその言葉に頷く。戦争とは政治の一手段である。とりわけ先のエウロパとの戦争は発端がエウロパのスパイ活動であった。そうしたことを踏まえて多分に政治的だというのだ。
「それを考えましても終結の日はやはり」

「オリンポス条約の日ですか」
「そうです」
女性スタッフははっきりと言い切った。
「その日以外はないのではないでしょうか」
「確かに」
八条もその言葉に頷く。
「あの日で完全に戦争の締結が決定しました」
「つまり我々の勝利が」
停戦だけでは勝利にならないのだ。降伏であっても。正式に条約が締結されてようやく戦争は終わるのだ。三十年戦争にしろウェストファリア条約で完全に講和となっている。それまでは三十年の間戦い続けていたのである。その結果ドイツの国土は完全に興廃し一六〇〇万いた人口は一〇〇〇万にまで減ったと言われている。なお人口の減少はさらに酷く四分の一の四〇〇万にまで減ったとも言われているが流石にこれは極論であると思われる。幾ら激しい戦争が長く続いたからといってそこまでは減らないのが普通だ。中国の王朝交代期の動乱でよく人口が半分以下になるがこれは単に戸籍が崩壊しただけである。その証拠に再び人口統計をやればすぐに元の人口に戻っているのだ。
「確定した日でありますから」
「そうですね」
実は八条もこうした考えであった。
「その日で戦いは終わっています」
「ではこの日で」
「しかし」
だがあえてここで言う八条であった。

## 第二十七部第二章　晴れ舞台の前その十四

「何か」
「停戦の日です。問題は」
それについても言及するのであった。細かい気配りを忘れない。
「その日はどうされますか？」
「そう言われますと」
女性スタッフは困った顔になった。実はそこまで考えてはいなかったのである。
「オリンポス条約締結の日を戦勝記念日としますね」
「はい」
その言葉にまずは頷き返す女性スタッフであった。
「それはいいです。ですが停戦の日は」
「どうするか」
「それですが長官」
もう一人のスタッフが言ってきた。黒人のスタッフである。
「別に深く考えられることもないでしょう」
「といいますと」
八条は彼にも問うた。
「どうすればいいと」
「別の記念日にすればいいのです」
黒人のスタッフはそう述べてきた。
「別の記念日にですか」
「そうです。名前はまあ」
考えながら述べてきた。
「そのままでも宜しいかと」
「停戦記念日ですか」
「別にこだわる名前でもないかと」
また述べてきた。

「違うでしょうか。停戦したのは事実ですしそれによい停戦ですし」
「そうですね」
八条はその言葉に頷いて応える。言われてみればその通りだ。
「勝利が確定した」
「そしてそれを定めたのがオリンポス条約締結の日です」
黒人のスタッフはオリンポス条約についても言及したのだった。
「そうなります」
「それでは。記念日を二つにしますか」
八条も考える顔で述べた。思案に耽る時の彼の顔は非常に魅力的だという評判がある。その整った美貌がさらに際立つというのだ。見れば女性スタッフも彼の顔を見ていた。
「停戦記念日と戦勝記念日に」
「ええ、それでは」
「私もそれで」
最初に言ったスタッフも女性スタッフもそれに賛成するのだった。
「いいかと」
「問題ないと思います」
「それでは。国防省の案はこれで決まりですね」
三人の言葉を全て聞き終えてこう纏めたのであった。
「もう少し投票形式で意見を募集しておきますが」
「国防省としてですか」
女性スタッフはそれを聞いて意外といった顔を見せてきた。
「そうですが」
「長官としての御考えではなく」
彼女はそこを言うのだった。
「国防省として」
「それが何か？」
「いえ、それですが」
女性スタッフは少し考える目で述べてきた。
「この件は軍事と密接な関係にある為長官の御言葉がかなり重要に

なります」
「はい」
これは八条も認識していた。しかしそれをあえて口に出さないのが彼であるのだ。人はそんな彼を慎重だとも賢明だとも謙虚だとも評する。
「長官の功績にもなりますが。それでもですか」
「功績ですが」
八条はその言葉を聞いたうえで述べてきた。
「それは私だけで独占していいものではありません」
「長官だけで」
「そうです。先の戦争の功績は連合全てにあると言えます」
これこそ謙虚な政治的判断であった。八条特有の。
「連合全ての」
「何も私一人で勝利を収めたわけではありません」
こうも言う。
「国防省の全てのスタッフも頑張りましたし」
「はい」
これは事実だ。戦争からオリンポス条約、そしてその処理までの長い間国防省は背広組、制服組共に不眠不休で働いていたのである。当然ながら今いるスタッフ達もだ。

## 第二十七部第二章　晴れ舞台の前その十五

「それを考えますと私だけの功績にしていいものではありません。そういうことです」
「左様ですか」
「そうです」
にこりと笑って述べてみせた。
「そう考えていますが如何でしょうか」
「私達には異存はありません」
女性スタッフはそう答えた。
「あくまでスタッフですから」
「そうですか」
官僚は基本的にスタッフであり実務を担当するのだ。確かに功績も認められる社会ではあるが基本的には黒子なのである。だからこうしてスタッフにもスポットを当てる八条のやり方が実に有り難いものに感じるのだ。
「問題がなければ何も」
「では。これでいいですね」
「はい。そう思います」
女性スタッフははっきりとした声で答えたのだった。
「私もです」
「私も」
残る二人も。これで決定であった。
「それではですね」
「ええ」
そのうえであらためて八条の言葉に応える。
「投票の後でこの案件を議会に提出します」
「わかりました」
「そのうえでです」

八条の顔が引き締まった。まるでこれからが本当の問題だというように。
「どちらにしろ。おおよそ日程は決まりました」
「ですね」
スタッフ達もそれに応える。
「これで」
「後はそれに合わせて」
彼等は口々に言う。
「戦勝イベントの準備を進めていきましょう」
「それで宜しいですね、長官」
「はい、御願いします」
あらためてスタッフ達に告げる。
「そのように」
「それでは」
「各地でイベントが開かれます」
黒人のスタッフが述べる。
「これからは毎年そうなります」
「そうですね。連合軍にとっては重要なイベントになります」
八条はその引き締めた顔で述べる。軍は戦うだけではない。そうしたイベントもまた重要なのだ。見せる軍でなければいけないのはどの国のどの軍でも同じだ。血生臭い殺伐さとそうした華やかさが共にあるのが軍と言える。連合軍はかなり後者を意識しているが。
「その記念すべき最初です」
「そうです、最初です」
また八条は引き締めた声で言う。
「最初が肝心と言いますし」
「ええ」
「だからこそですね」
スタッフ達もまた彼の言葉に頷く。
「とりわけ地球でのパレードは派手なものにしたいです」

「ええ。その通りです」
派手好みでない八条もこれには賛同を見せるのだった。
「是非共。連合軍の存在を全人類に知らしめる為にも」
「それにつきましてですが」
黒人のスタッフはまた八条を見てきた。
「長官の御意見をかなり参考にさせて頂きたいのですが」
「といいますと」
「長官は日本軍でしたね」
それについて言われるのだった。
「以前おられた軍は」
「そうですが」
迷いなくそれに答えたのだった。
「それです。是非日本軍のパレードの形式で」
「日本軍のですか」
八条はそう言われてその目を微妙に動かすのだった。
「いけませんか」
「日本軍ですか」
女性スタッフもそれを聞いて目を微妙に動かしてきた。どうやら彼女は日本軍が好きだったようである。それが態度でわかるのだった。

## 第二十七部第二章　晴れ舞台の前その十六

「確かにいいですね」
それを言葉にも出す。
「あの行進やパレードをやるとなると」
「よいのですか」
八条は自分はわかっていないといった面持ちでスタッフ達に問うた。
「あれで」
「ええ、是非」
「あれが一番格好がいいです」
こうも言われるのだった。
「ですから是非」
「行進はやはり日本軍ですか」
「違うでしょうか」
あまり自信なさげな八条の言葉に対して問い返す。
「私達はやはりあれこそが」
「今だに人気があるのですね」
八条は彼等の言葉につい昔を懐かしんで呟いた。
「やはり」
「はい、それは当然かと」
女性スタッフの語る声がやけに熱かった。まるでマニアの様に。
「やはり長官、行進やそういった催しは華です」
「日本軍にはその華がありました」
「華と仰いますが」
彼等に渋々のように応えて彼は言うのだった。
「我が軍は実戦経験も海賊やテロリストだけでしたしそれでさえ」
日本は基本的に治安がよかった。だからそうした実戦経験もかなり少なかったのだ。俗にお坊ちゃん軍隊とも言われていた。見栄え

だけだと。
「滅多には」
「その滅多に行わない戦争が華麗でしたし」
「そうです」
「はあ」
お坊ちゃん軍隊と呼ばれていたが戦闘力は確かだったのである。訓練がかなり厳しかったせいもあるが日本軍は少数精鋭で知られていた。この少数精鋭主義は日本の歴史的伝統と言えるものであり実は明治維新の軍の頃から自衛隊でもそうだったのだ。
「だからこそです」
「やはり日本軍を参考にしてですね」
「それもいいですが」
だが彼は一つに傾かなかった。あえて。
「日本軍だけでは」
「といいますと」
「他の国々のものも取り入れていきましょう」
政治的判断であった。国家連合である連合においては一国にのみ偏った判断はできはしない。それを行いと必ず齟齬が生じる。ここが連合における政治の難しいところであった。何しろ三百もの国が存在するのだ。そうしたことを踏まえて政治を行うことがまず肝心なのだ。
「如何でしょうか」
「日本軍をベースとして」
「はい」
八条は答える。
「曲等についても」
「そう、曲もですね」
もう一つ重要な部分が指摘された。
「曲もまた重要です」
「果たしてどうした曲にするか」

「思えば連合軍の曲は既にかなりのものです」
八条とてその全てを把握しているわけではない。何故ならあまりにもその数が多いからだ。それも異常なまでだ。これにも理由があるのであった。
「やはり。三百国全ての曲が集まると」
「壮観ですね」
「ＣＤで何枚だったでしょうか」
軍歌や行進曲のＣＤも出ている。かなり人気があったりする。
「全部の曲を合わせて」
「ええと、確か」
白人のスタッフがそれに答える。考えながらだ。なお白人の顔だが肌はかなり黄色い。見れば髪も目も黒だ。その為アジア系にも見える。連合特有の顔であった。
「五時間収録のＣＤで」
「二十枚セットだったかと」
黒人のスタッフも答える。

## 第二十七部第二章　晴れ舞台の前その十七

「それだけのものがありました」
「左様ですか」
八条もそれは今はじめて聞いた。驚くべき量であった。
「相当なものですね」
「行進曲だけです」
しかも限定まで指定された。
「軍歌を入れると」
「より多いですか」
「三百国ですからね」
またそれが指摘される。
「それだけのボリュームがあります」
「しかも新たに曲を作ってきていますしね」
八条はそこも言う。これも事実で連合軍になってから作詞作曲された曲もかなりのものにのぼるのだ。そのせいで作詞家も作曲家も結構喜んでいる。
「それも加えるとなると」
「これもまた三百国の集まりの証と言えるのではないでしょうか」
八条はそこをあらためて指摘する。
「私はそう思うのですが。如何でしょうか」
「それは確かに」
「その通りかと」
スタッフ達はその言葉に応えた。
「では音楽をそれぞれの国の存在を証明するものにして」
「はい」
八条は黒人のスタッフの言葉に頷いてみせた。
「行進は」
「おおよそは日本軍ですね」

これはもう決まっていた。八条もスタッフ達の言葉を受け入れたのである。これは連合の軍事マニア達にとっては非常によい判断であった。
「細部に様々な軍の要素を取り入れて」
「大国中心でいきますか」
不意に女性スタッフが述べてきた。
「大国中心に！？」
「そう、そして行進曲等の選曲は小国中心で」
それでバランスを取ろうというのである。
「それで如何でしょうか」
「成程」
八条は女性スタッフの今の言葉に賛同の声をあげた。
「それはいいですね」
「バランスの取り方は幾らでもあるものですね」
「ええ」
スタッフの言葉にまた頷くのだった。
「様々なものに分けて」
「はい。そうして後は訓練を進めていきましょう」
「祝典の訓練ですか」
八条はその言葉を呟いて一瞬微妙な顔になった。スタッフ達もそれを見逃さない。すぐに八条に対して問うのであった。
「長官」
「どうか為されましたか？」
「えっ、いや」
八条は何かを懐かしむ笑みで彼等に応える。その懐かしみには楽しさと苦労が同居していた。いささか複雑な邂逅であるのがそこからわかる。
「昔を思い出しまして」
「というと軍におられた頃ですか」
「むしろ日本で国防大臣を務めていた頃ですね」

その頃から経験があったのだ。つまり連合における軍事行政のエキスパートなのだ。だからこそキロモトに初代中央政府国防長官に抜擢されたのである。何も根拠なくしてここまで抜擢されはしない。そうした意味でやはり彼はずば抜けた逸材なのだ。
「そうです、その頃です」
八条もそれを認める。
「あの頃もこうして」
「仕事を進めておられましたか」
「ええ。何しろそうしたことにも凝る軍でしたから」
その懐かさを想う笑みで述べる。
「色々とありました」
「大変でしたか」
「一言で申し上げますと」
苦笑いになる。やはり嘘はつけない男であった。
「そうなりますね」
「ははは、やはり」
「日本軍はそうしたところは大変ですか」
「だからです」
そこまで話したうえで彼等に対するのだった。
「日本軍式は大変ですよ」
「いやいや」
「それは覚悟のうえです」
だが彼等も負けてはいなかった。笑顔で返す。

## 第二十七部第二章　晴れ舞台の前その十八

「やはり見栄えをよくしなければ」
「軍は」
「だからこそ日本軍を意識してですね」
「あの軍服ならばなおよかったです」
日本軍の軍服のことだ。あの詰襟の軍服は今でも人気が高いのだ。その名残は下士官候補生の七つボタンの詰襟に残っている。これは日本軍のものなのだ。かつて予科練が着ていた軍服であり自衛隊でも少年自衛官等が着ていた。それを今も使っていたのだ。
「ですが」
「それは仕方ないです」
八条は悔しがる彼等を宥めるのだった。
「軍服はやはり背広が多かったですから」
「それはわかっていますが」
「しかし」
「それにですね」
まだ悔しがる彼等に対してまた述べた。
「確か皆さんは」
「ああ、それは関係ありません」
「そうです」
先に八条に対して述べるのだった。
「祖国の軍服が背広であっても」
「そういうことです」
「左様ですか」
「はい」
また八条に答える。
「やはりこれは個人的な嗜好ですから」
「それを考えますと」

「そういえばですね」
八条は彼等の言葉を聞いてまた述べるのだった。
「エウロパ軍の軍服は人気があるそうですね」
「はい」
「確かに敵ですが」
それでも人気があるというのだ。第二次世界大戦におけるドイツ軍の軍服がかなりの人気を今でも誇っているようにだ。こうした嗜好は国を越えるのである。なおイタリア軍やソ連軍の軍服も人気がある。他にはイギリス軍もだ。日本軍は海軍のそれが好評だったりするが実はこの時代の日本軍の軍服はその帝国海軍のものをモデルにしていた。特に将校の軍服は。それで人気の的だったのである。
「それでもやはりあの格好よさは」
「特に将官のそれは」
「詰襟はそれだけいいのですか」
「それだけではありませんね」
「そうですね」
スタッフ達はまた述べる。
「マントもいいですし」
「腰の短剣もまた」
「短剣もですか」
「日本軍もそうでしたね」
黒人のスタッフがすかさずそこを指摘する。
「詰襟で短剣を下げて」
「あれは最高に格好よかったです」
「しかしですね」
八条はまた苦笑いになる。その軍服について知っているからだ。軍服は実際に着てみなければわからない。これは他の服と同じである。
「あの軍服は案外動きにくいのですよ」
「そうなのですか」

「ええ。アイロンもいつも当てさせられましたし」
これは身だしなみを重視する日本軍独特のものである。なおこれもまた連合軍において導入されている。流石に日本軍のそれ程厳しくはないが。
「大変なのですよ。何かと」
「そうですか」
「動きにくいのがありましたか」
「そこが重要ですね」
八条は言う。
「やはり軍服ですから」
「ううむ」
「確かに」
スタッフ達もその言葉に頷く。
「そういえばエウロパ軍の軍服も動きにくそうですな」
「それもかなり」
「あれは相当動きにくいと思います」
八条が言う。

## 第二十七部第二章　晴れ舞台の前その十九

「ですからあれを採用するとなると」
「駄目ですか」
「軍服ですからね」
八条はまたこう言うのだった。彼は軍服の機能性を重視していた。ちなみにこれは連合の特徴である。軍服にはまず機能性を求める。そもそも動きにくい軍服になぞ意味はない。どれだけ格好よく見栄えがよくてもだ。合理主義の連合らしい考えだ。
「やはりそこは」
「そうですか」
「他にはオムダーマン軍の軍服も人気がありますね」
白人のスタッフが言う。
「あの軍服も」
「あれも詰襟ですね」
八条はオムダーマン軍と聞いてそこを指摘した。
「それにマントです」
「ええ、そうです」
白人のスタッフは答える。
「あの青い軍服に白いマントがやはり人気です」
どうしても詰襟とマントの組み合わせに人気が集中している。なおエウロパ軍の軍服は赤と黒、銀でありそこに階級によって色の違うマントを羽織るのだ。連合軍にはそもそもマントがない。やはり機能面で何の意味もないからである。
「ですね。逆にマウリア軍は」
「見向きもされません。我が中央軍のそれも」
「所謂ださいですか」
「一言で言うならば」
白人のスタッフは八条に言いにくいことを堂々と告げる。八条も

これにはまたしても苦笑いを浮かべるしかなかった。最終的に背広の軍服の採用を決定した者として。
「夏服はいいですがね」
「ですか」
連合軍の軍服には夏用もある。こちらは二種類あり略装と礼装がある。略装は開襟半袖であり礼装は五つボタンの詰襟だ。礼装はかなり動きにくい。
「はい。あれはそのままで評判がいいです」
「ならいいですがあれもまた」
動きにくいのだ。だから礼装なのだ。
「洗濯をしきりにする必要がありますし」
「何かと難しいのですね」
「あれは万国共通ですしね」
その夏の礼装についての言葉であった。
「そのまま採用しましたが」
「左様で」
「デザイン的には人気がありますか」
「星によってはあれを着ることになりますね」
その夏の礼装をだ。連合は広大で惑星によって気候が変わるのだ。
「そうですね。そこは各自です」
「はい」
「宇宙では当然冬服ですが」
これも定められていた。その為連合軍はどちらかというと冬の軍服を着ることが多いのだ。これは一般兵士においても同じことである。
「そこも定めましょう」
「わかりました」
「しかしですね」
八条はそこまで話してあらためて思うのだった。
「詰襟の人気は根強いですね」

「はい」
スタッフ達はその言葉に頷くことでそれを認めた。
「格好よさが違ってきますから」
「その中でもやはり日本軍のは」
「人気が根強いのですね」
それを再認識するがそれでも。もう軍服は決まっているのだ。
「今でも」
「そうですね。そういえばですね」
「ええ」
女性スタッフの言葉に応える。
「その時の長官の写真が人気だそうですよ」
「日本軍にいた頃のですか」
その言葉に目を向ける。
「夏用でも冬用でも」
「はあ」
何か実感の湧かない言葉であった。そう言われても本人にはどうにもピンと来ないものである。そのせいでどうにも困惑した顔で首を捻るのだった。
「左様ですか」
「国防長官の時も」
「あの時も」
日本の国防長官は他の国と違い文民であっても儀礼の時には軍服を着るのである。陛下も時に応じては軍服を着られる。ただし首相や他の閣僚は別である。あくまで日本式の儀礼であった。

## 第二十七部第二章　晴れ舞台の前その二十

「人気がおありですよ」
「人気があるのはいいですが」
複雑な苦笑いで述べる。
「どうにも」
「嬉しくないですか」
「どうにもですが」
曖昧な言葉になっていた。
「喜んでいいのか困っていいのか」
この場合困っているようであった。
「どちらなのか」
「やはり人気があるのはいいことかと」
「私もそう思います」
スタッフ達はそんな曖昧な顔になっている八条にそれぞれ言うのだった。
「惜しまれて、というのも」
「それはそれでいいものでは」
「そうですか」
八条は彼等のその言葉に表情を元に戻したのであった。
「あの軍服姿も」
「今では有り得ないことですが」
「それでもです」
彼等はまた八条に述べる。
「無名は何よりも辛いことではないかと」
「特に」
ここから先の言葉はもう八条にはわかっていた。
「政治家にとっては」
「そうなのですよね」

当然ながらそれはよくわかっている。八条もまた選挙で選ばれている政治家だからだ。連合では閣僚になるのはトップの任命だが議員になるのは選挙なのだ。議員出身である八条がそれをわかっていない筈がないのだ。例え地盤を持っているにしろ。
「ですが軍服姿が人気があるとは」
「いえ、それは普通です」
「軍服はそれだけの魅力がありますから」
ここにはいささか軍服を着ることができない背広組の羨望もあった。軍服を着ることができるのは趣味やコスプレを除いては軍人だけだ。それに憧れる者も多いのだ。
「特に長官のそれは」
「日本軍の元帥の服でしたね」
「はい」
スタッフ達の言葉に応えて頷く。日本軍では国防大臣は文民だがその儀礼用軍服は元帥のものだったのだ。それも主席元帥扱いであった。なお大元帥は言うまでもなく国家元首であられ軍の形式的な最高司令官であられる天皇陛下である。これはいささか明治憲法にも倣っていると言えた。
「それで人気が出ない筈がありません」
「とりわけ長官ならば」
「私ならばですか」
「そうです」
またスタッフ達は述べる。
「若い軍人というものはいいものです」
「だからポスターでも」
それをまた言う。
「あえて若いモデルを採用しているではありませんか」
「そうではないですか？」
「確かに」
そうしたモデルを選ぶのも八条の最終的な判断によるものである。

その為美青年を選べば彼の同性愛の根拠にもされるから困りものでもあったが。
「若い人の軍服はやはり」
「見栄えがします」
「特に日本軍のものはですか」
「そういうことになります」
その言葉が八条にも届く。だがそれでも彼は慎重なままであった。
「ですが日本軍の軍服は復活しませんし」
「そうですか」
「やはり」
わかってはいてもそう言われると辛いものがあった。
「私もまた文民ですので」
軍人出身であっても軍から離れればそれで文民である。つまり世の中というものは軍人が圧倒的に少ないものである。これは連合においてはとりわけそうであった。
「軍服も着ませんし」
「ではスーツでですね」
「はい」
彼等の言葉にこくりと頷く。
「それで式典に参加させて頂きます」
「それはいささか寂しいですが」
「仕方ありませんね」
「ええ。ですが」
「ですが？」
ここで八条が言った言葉に注目するのだった。

## 第二十七部第二章　晴れ舞台の前その二十一

「それでもやはり見栄えには気をつけていきますので」
「はい、それは」
「宜しく御願いします」
「わかりました」
その言葉にまた頷く。
「そこで重要なのはあれですね」
そしてまた言う。
「軍服の見栄えと他のスーツの対比と」
「それもですね」
「どうやら軍人だけではないですか」
「そうです」
また八条の顔が真顔になる。そうして述べるのであった。
「兵器もありますし。それに」
「大統領も出席されますしね」
「総合的に見栄えをよくしていきたいものです」
いささか映画めいた言葉になっていた。だがそれは八条の広い視野によるものであった。それは軍服だけに捉われないことからもわかるものであった。
「ここは」
「そうですね。確かに」
「それではそちらも」
「はい。それでですね」
さらに話を続ける。
「兵器の手入れについても達を出しておきましょう」
「はい」
「ではそちらも」
兵器についても指示が出された。

「パレードの訓練も合わせて」
「あとは号砲も」
軍の式典には欠かせないものであった。軍楽隊と共に。また同時にその軍楽隊についても八条の口から細かく言われるのであった。
「軍楽隊もですね」
「今の時点から訓練をはじめてですね」
「はい、そちらも」
そこも言われた。
「御願いします」
「それでは」
「最初が肝心です」
八条はあらためて述べた。
「後はおおよそ形ができますので」
「はい、その通りです」
「まずは最初です」
皆それがよくわかっていた。まずは最初にどうするかなのだ。それを失敗すれば大変なことになってしまう。最初に決めるかどうかが式典においてはとりわけ重要なのだ。
「ではそのように」
「はい」
「それでは国防省の総力を挙げて」
「しかし。仕事は増える一方ですね」
八条は苦笑いを浮かべて述べた。
「どうにもこうにも」
「まあ仕方がありませんね」
「そういうものです」
誰もがそれはわかっていた。仕事とはそうしたものだ。とりわけ軍事関連の仕事はそうである。デスクワークにしろ次から次に湧いて出て来るものなのだ。
「まあそれに文句を言わず」

「やりますか」
「ええ」
何だかんだで頷く八条だった。彼とて仕事が多いと逃げ出すような男ではない。仕事があればそれだけのものを果たす男であるのだ。
「それでは」
「はじめましょう」
こうして式典の準備は整えられていた。数日後停戦記念日と勝利記念日を定める国防省の案が下院に出された。それは少し議論が為された後可決され上院でも同じ流れになった。そうして各国の首脳会議においても。
「それではですな」
この年の議長国であるフェニキアの大統領が他の首脳達に声をかけていた。
「この国防省より出された停戦記念日と戦勝記念日の案についての可決を行いたいと思います」
「はい」
「それでは」
そこには全ての国の首脳達が集まっていた。そのうえで議決を取ろうとしていた。
「まずは反対の方は」
要するに反対の国である。それをまず見られた。
「おられますか？おられましたら」
だが誰も反対のボタンを押そうとしない。沈黙が議場を支配していた。

## 第二十七部第二章　晴れ舞台の前その二十二

「では次に」
議長であるフェニキア大統領は反対票がないのについてあえて何も言わずそのまま話を進めさせた。これもまた儀礼的な流れであった。票決が終わってからその結果だけを言うのだ。
「賛成の方は」
満場一致であった。これではもう流石に何も言えないかと思われたがそれでも議長は言うのであった。やはりこれも多分に儀礼的な流れであった。
「賛成三百」
丁度今の連合の国数である。
「反対なし。よって可決とします」
これで決まりであった。後の拍手もやはり儀礼であった。政治には儀礼もまた必要なのだ。そうした意味では連合にも儀礼はあるということであった。
その儀礼的な投票を終えて各国の首脳達はそれぞれの場へ戻る。だが太平洋諸国の外交官達はまたあの場所に戻り話をするのであった。
「やってくれましたな」
シンガポールの代表がまず口を開いた。シニカルな笑みを日本の代表に向けていた。
「まさか二つ出すとは」
「意外でしたか」
「ええ、全くです」
シンガポールの代表はこう述べ返す。
「一つとばかり思っていましたからな」
「実は私もです」
日本の代表もこう述べた。

「てっきりオリンポス条約締結の日を戦勝記念日として終わるものだと思っていました」
「確かに」
「それは我々もです」
皆同じ考えだった。誰もがそう思っていたのだ。
「しかし」
「停戦記念日までもうけるとは」
「この日も祝日だとのことですね」
日本の代表は他の国々の代表にこう述べた。
「そうです」
「その日もです」
「つまりバランスを取ったと」
日本の代表はまた述べる。
「どうやらそういうことです」
「バランスですか」
「いや、むしろ」
ここでベトナムの代表がふと気付いたように声をあげるのだった。気付きながらも心の中では今更気付いたのかと舌打ちも感じていたがそれは口には出さない。
「我々のことを知っていたのかも」
「我々のことを!?」
「おそらくは」
そうタイの代表に言葉を返す。
「さもなければ両方の日を記念日にしますまい。少なくとも」
「少なくとも」
オーストラリアの代表が問うた。
「わかっていた。こうした議論があることを。それを踏まえて」
「記念日を二つ制定したと」
「そうではないかと考えられます」
また述べるのだった。

「記念日は制定しても休む休まないはそれぞれですし」
「確かに」
「基本は休日ですが」
祝日を定めるのには実は問題になることがある。その日が休日になるということである。基本的に土曜と日曜が休日の週休二日がこの時代の基本であるが当然ながらそれこはそれぞれである。あまりにも休日が多くては仕事に支障が出かねないのはこの時代でも同じである。しかしそれはやはりそれぞれなので休まない場合もある。そうした場合は特別な手当てが払われる決まりだが支払ってでも来てもらいたい場合もあるのが仕事だ。
「そこはあれですしな」
「何とでもなりますし」
こうした柔軟さが連合にはある。基本はあくまで基本なのだ。中には一月好きで自営業をやっている者もいる。この辺りは度が過ぎれば過労で倒れるが。
「そうしたことも踏まえて二日制定ですか」
「やはり。八条長官ですかな」
「いや、今回は違うようです」
だがここでメキシコの代表が言う。
「何っ」
「違うのですか」
「はい、どうやら」
そう一同に告げる。
「国防省のスタッフ達の意見を取り入れて」
「ふむ」
「投票までして決めたようなのです」
「そうだったのですか」
皆それを聞いて頷く。それはそれで深いものがあると見抜いていたからだ。
「そうして決めるとは」

「かなり。慎重ですな」
「慎重なだけではありませんな」
アメリカの代表が述べた。
「丁寧に意見を汲み取っています」
「全くです」
ロシアの代表がそれに頷く。
「憎々しいまでに」
「しかもそれを国防省の手柄にできる」
中国の代表はそこも指摘した。

## 第二十七部第二章　晴れ舞台の前その二十三

「自分だけではなく」
「国防省のですか」
「そうなりますか」
インドネシアの代表とマレーシアの代表はそこに注目した。
「あえて国防省の手柄にするとは」
「彼等に功績を重ねさせて」
「国防省の地位を確固たるものにしたいのでしょう」
ニュージーランドの代表はこう話を纏めた。
「今後の為に」
「だとすればですな」
カナダの代表は考える目になっていた。
「今後中央政府内で国防省の地位はかなりのものになるでしょう」
「国防省の地位だけではありませんな」
続いてブルネイの代表が口を開いた。
「軍事行政もまた。重要な位置を占めるようになります」
「軍事行政も」
「そうです」
一同に答える。
「それまであまり省みられなかったものが」
連合においては軍事の割合はかなり低いものであり続けた。外に攻め込む必要はなくただエウロパへの備えと海賊、テロリスト対策だけであり続けたからだ。八条と国防省設立によりそれがかなり改善されたといってもそれでもまだかなり低いものであった。実際に予算不足に悩まされ続けている。八条はそれの改善も考えているというのだ。
「変わると」
「ただしです」

ミャンマーの代表は言うのだった。
「それもまあ限度があるでしょうし」
「そうですな」
「やはり必要なだけあればいいものです」
各国の代表が口々に言う。
「軍事というものについては」
「支出だけですし」
収入はない。軍事予算を考えるうえで最も重要なのはここである。支出ばかりで収入のない部門に過度に投資するのは禁物である。これは経営の初歩の初歩だ。
「普通に運営できる程度の発言権を手に入れたいのでしょうな」
「国防省としては」
「そうですな」
彼等の分析は当たっていた。実際にそうしたことを見えない八条ではない。彼は財政や他の政治のこともよくわかっている男だ。だからこそ切れ者と言われているのだ。
「まあそこのところは適度で収まるでしょうし」
「あまり警戒すべきものではないですな」
「ええ」
そうしてこういう結論に至った。
「ですが。今回もまたしてやられましたな」
ペルーの代表は忌々しげに述べた。
「どうにもこうにも」
「確かに」
チリの代表が彼の言葉に賛同を示した。
「何だかんだで我々は彼にしてやられました」
「記念日の制定は完全に彼、そして中央政府のものに」
「全くです」
それがわかっているからこそ。彼等は腹立たしさを感じていたのだった。

「それも二日定められました」
「出し抜かれましたな」
「実に上手く」
話す度に皆憮然としていく。それは彼等もわかっていた。
「自分が思っていることを相手が先にやってしまう。しかもそれが見抜かれていたとなると」
「これは。完全な敗北です」
特に政治の世界においては。どうしようもなくなってしまう。
それが苦々しいまでにわかる。言葉にも出ているのだ。
「我々の」
「はい、確かに」
殆どの者がそれを認める。認めるしかなかった。
「まさか。先に全てを取られるとは」
「やはり。あの長官は」
そうして八条についても言及される。
「只者ではありませんな」
「全くです」
「八条義統」
またその名が口に出される。最早その名は連合の各国の独立を重視する派にとっては不倶戴天の存在になりつつあった。しかしだ。ここが連合の複雑なところだ。
「日本に戻ればどうなるか」
「それですな」
ここにその複雑さが出ていた。
「日本の為に動くでしょう。そうなれば」
「我等の利になるでしょうな」
「そうですな」
そうして全員で日本の代表を見るのであった。こうなっては引くのが普通であるがこの日本の代表はかなり強かであった。涼しい顔でそれを受け流すのであった。

「さて、それはどうでしょうか」
「さて、とは」
「また随分あれですな」
受け流した彼に対して言う。
「答えを避けられる」
「いつものように」
「いやいや、我が国には我が国の都合がありますし」
これが日本側の返事であった。
「あくまでどうなるかはわかりませんな」
「中央政府重視ですかな。いつもの如く」
「さすれば彼もまた」
「それもまたわかりませんな」
はぐらかしてはいるが言葉自体は真実であった。日本にも日本の都合がある。それに関してははっきりと告げているのである。今はそうすることがベストだとわかっているからこそ。
「ですから日本の都合がありますし」
「では日本の為に動いてもらいたいものですな」
「翻っては」
そうしてそう言われてはいそうですかと引き下がる彼等ではなかった。それで話が終われればそもそも外交なぞは不要である。終わらないからこそ彼等もいるのだ。
「我等の為にも」
「友好国として」
確かに友好国である。彼等は。もっとも国際社会において友好国とは口で言えばそうなるだけの関係であり実際には水面下では様々なことがあったりするものだ。
「太平洋時代からの同志として」
「無論それもわかっておりますぞ」
日本の代表はその空手形を切った。これは幾ら切っても痛くも痒くもない。それがわかっているからこそ彼は平気な顔で幾らでも切

るのであった。
「御安心下さい」
「ならいいですが」
「ではあの方が日本に戻られる時を待ちましょう」
この言葉で話を締めくくるのであった。
「その時には思う存分」
「我等の為に働いてもらいましょう」
「ええ。日本の為に」
日本の代表は軽く言葉を入れてきた。そうしてあえて八条の今後についても主導権を握って話を終わらせたのであった。どちらにしても話はまだ終わりはしなかった。

## 第二十七部第三章　もう一つの嵐その一

もう一つの嵐

全人類がコムでの戦いに注視している頃エウロパではもう一つの嵐が起ころうとしていた。その中心にいるのはギルフォードその人であった。

彼は連日連夜エウロパ各地で演説を行っていた。テレビに出ることも頻繁であった。

「諸君！」

まずはこう呼び掛けるのがいつもである。彼の演説は。

「我々は敗れた！連合に対して！」

歯に衣着せない。言いにくいことも言うのだった。

「だがそれは我等の能力で敗れたのではない！数によって敗れたのだ！」

そしてこう続ける。さりげなくだがはっきりとエウロパの者達の誇りに訴えかける。

「数だ！それをカバーするのは何か！」

何だという問いはもう受け取っている。それに答えるだけだ。

「それは指導者だ！優れた指導者だ！かつてのブラウベルグに匹敵する指導者こそが必要なのだ！彼ならば今の敗北はなかったであろう！」

大上段に言ってのける。身振りも派手なものになる。

「国父ブラウベルグ！彼ならば！我々を敗北に導かなかった！しかし！」

ここで言う。

「彼はもういない！望んでも帰っては来ない！ヴァルハラにいる者はラグナロクのその時まで帰っては来ない！オリンポスでもそれは同じだ！」

エウロパの宗教が出る。北欧にギリシア、そしてカトリック、プ

ロテスタント、ギリシア正教。おおまかに分けてこの五つが混在しているのがエウロパの宗教だ。
「ブラウベルグおらずして我等は勝てるのか。勝てる！」
そう宣言する。
「勝てるのだ！優れた指導者がいれば！それは！」
遂に。
「私がいる！私によりエウロパはまた立ち上がる！あの栄光のエウロパに！」
これが言いたいのであった。彼は今指導者となるべく演説を行っていた。だからこそ高らかにこう演説し宣言したのであった。彼のその声において。
「諸君！私はここに誓おう！エウロパの栄光を！そして！」
そして。ここからもまた重要であった。
「連合に勝利を収めることを！私は必ず勝つ！」
ギルフォードのこの演説はエウロパ中に響き渡っていた。敗北とその後の経済破綻に苦しむエウロパの者達にとってギルフォードの演説は深く心に響くものであった。それが激しく確実に一つの大きな時代のうねりとなろうとしていたのであった。
「救世主か」
それはモンサルヴァートも聞いていた。今の演説は自身の執務室において聞いていた。デスクワークを丁度終えて一息ついたところであった。
「まさにそんな感じだな」
「そうですね」
ベルガンサもそれに応える。彼は今部屋に入ってきたばかりだ。書類を受け取りに来たのである。
「軍にいた頃から自信に満ちた御仁でしたが。その時よりもさらに」
「軍人としては普通に優秀だったな」
モンサルヴァートはニョルズでの戦いを思い出して言う。あの時彼はギルフォードを部下に置いていた。その彼の活躍にかなり助け

られてもいた。
「それもかなり」
「はい、あの時の戦いぶりは見事でした」
「それが彼にとっては大きな実績になっているな」
そのうえでこう述べた。
「今の宣伝にな」
「宣伝ですか」
「そうだ、宣伝だ」
こう述べる。政治家になるにはただ能力があるだけではないのだ。それを広く知らしめる宣伝が必要なのだ。ナチスやソ連が自己宣伝に躍起になっていたのはそれがよくわかっていたからだ。見事なまでに狡猾に宣伝をしていたのが彼等であった。
「それこそ重要なのだ。政治では」
「軍においてもですな」
「うむ」
あらためてベルガンサの言葉に頷く。
「それでもやはり政治の世界は」
「特に、ですか」
「彼はそれがよくわかっているようだ」
まだテレビで演説を続けているギルフォードを見て言う。
「だからこそここまでな」
「それにです」
ベルガンサも言った。
「演説も見事ですな」
「ああ。こちらもな」
それは聞いていればわかる。人の心を掴んで離さないものであった。ロベスピエールにしろナポレオンにしろ演説は得意だった。ヒトラーやスターリン、とりわけヒトラーは言うに及ばない。その演説の才能により全てを掴んだ者達だからだ。
「見事なものだ」

「後は。実際の政治手腕ですが」
「そこまではわからないな」
これば かりはモンサルヴァートにもわからなかった。実際に何か実務がないとわからないものだ。単なるアジテーターでしかない存在も今まで多くいたのが歴史である。

## 第二十七部第三章　もう一つの嵐その二

「だが」
「だが？」
「祖国イギリスでは既に政治家だったな」
「ええ、確か」
これも資料として残っていた。彼は細かいところまで経歴がわかっている。そこもまた彼がどういった人間であるのかを見せていたのだ。
「議員も務めていますしそちらでは」
「どうだったか」
「三十以上もの法案を提出しています」
「あの若さでか」
「そうです、しかも」
ベルガンサはさらに言葉を続ける。
「その全てを成立させています」
「全てをだな」
「そうです」
モンサルヴァートの言葉に答えた。
「全てです。あの若さで」
「だとするとだ」
モンサルヴァートはそこから一つの結論を出した。出さざるを得なかった。
「政治家としてもかなりのものだな」
「政策立案能力もそれを実行させる工作も行動力も」
「全て持っているということか」
「間違いなく」
ベルガンサは答える。そう結論付けるしかなかった。
「政治家としても傑物です」

「では出るべくして出たのだな」
そこまで話を聞いて述べた。
「彼は」
「そうなります。既に祖国では圧倒的な支持を集めています」
「イングランドではか」
彼はイングランドの名門出身だ。この国は今でもエウロパの中においてかなり強い独自性を維持している。それがギルフォードを支えていると言えた。
「そうです。そこが最大の基盤になっています」
「しかも足元も持っている」
これもまた大きかった。政治家として。
「全てを持っていると言えるな」
「そのうえ」
それに留まらない。政治家は持っているだけでは意味がないのだ。
「それを活かす術も知っているようです」
「資金についてもだな」
「そうです」
またモンサルヴァートに答える。
「潤沢な資金を惜しみなく使っているようです」
「ふむ。ではこうした演説も」
「ええ」
彼は言う。
「その資金を活用したうえです。そうしてまた支持者を得て」
「さらに資金を得て力を蓄えていく、か。強いな」
「資金だけではありません」
その他にも力を蓄えているというのだ。ギルフォードという男は話せば話す程その凄さがわかってくる、そうした男のようであった。
「彼のところに集まっているのは」
「人材か」
「はい、その通りです」

厳粛な顔で述べた。
「エウロパ中から。キラ星の如き人材が集まろうとしています」
「英雄は一つの巨大な星だ」
モンサルヴァートはふとした感じでこう述べてみせた。
「巨大な星ですか」
「そうだ。恒星だな」
それは恒星のことだった。恒星ならばそれだけに留まりはしない。
「だからこそその周りには」
「衛星も集まる」
「恒星が大きければ大きい程な」
そういうことであった。恒星は衛星を作り出すものだ。ギルフォードが英雄ならば当然ながらそうなるものであった。モンサルヴァートはそれがわかっていたのだ。
「時には恒星さえ衛星にしてしまい」
「己のものとする」
「全てはその恒星次第だ」
英雄の器次第だと述べた。
「どうやら彼は恒星のようだが果たして」
「他の恒星をもその中に収めてみせるでしょうか」
「そうでなければ駄目だ」
一旦突き放した言葉になった。

## 第二十七部第三章　もう一つの嵐その三

「本当に英雄ならばな。それだけのものでなければならない」
「ですか」
「さて、彼がどうなるかだ」
テレビから顔を放した。ギルフォードはまだ演説を行っている。
「少なくとも。これからのエウロパの台風の目になるな」
「台風ですか」
ベルガンサはその台風という言葉に二つのものを感じた。そしてまずは最初に感じたものをモンサルヴァートに対して口に出してみたのであった。
「それは益ある台風でしょうか」
続いてもう一つを。
「それとも」
「そこまではわからない、今はな」
モンサルヴァートは冷徹にそう述べた。
「しかしだ」
「しかし」
「それを益あるものにするのはある程度以上は市民だ」
「市民ですか」
「歴史を見るのだ」
モンサルヴァートはここで歴史を出すのであった。
「ナポレオンを選んだのは誰だ」
「フランス市民です」
彼等の圧倒的な支持の下でナポレオンは執政になりそうして皇帝になった。死後も圧倒的な支持、いや崇拝が彼に向けられていた。彼がフランス人の大半を占める農民の保護を確約しそれを実行に移したせいだがそれでも彼等の崇拝があったのは事実だ。
当然ながらヒトラーもだ。ドイツ人は彼を英雄、救世主として選

んだのだ。実際にヒトラーはドイツとドイツ人を一度は救った。そうして意味で彼は間違いなく英雄であり救世主であったのだ。その時のドイツ人にとっては彼は偉大なる存在であったのだ・

「ではブラウベルグを選んだのは」

次に。彼の名が出された。

「誰だ」

「我々です」

その答えは決まっていた。

「正確に言うなら過去の我々です」

「そういうことだ。英雄はその衛星の光もまた必要なのだ」

「衛星の光も」

「その光を受けてさらに輝きを増す」

こう述べた。

「さもなければ限度があるのだ」

「そうですか。では彼もまた」

「エウロパ市民の光を浴びなければならない。そしてその色も」

「色により変わると」

「そうだ。益になるか害になるかは色だ」

そういうことであった。

「恒星は己から輝くがその色を決めるのはある程度は彼自身ではなく」

「衛星達ですか」

「我々だ」

つまりは。衛星というのはこの場合はエウロパ市民なのだ。英雄という恒星に導かれその周りを回る。それと共にその光で恒星を彩る。そういうことであった。

「それに彼だけが英雄とは限らないしな」

「改革派からはカミュ外相が出られるそうです」

ベルガンサはカミュの名を出してきた。

「あの御仁もまた自負心が高い方ですが」

「彼もまた己を英雄だと思っているのだな」
「はい」
はっきりとそう答えた。
「その通りです。だからこそ総統選にも」
「彼はフランスが基盤か」
フランス生まれであるから当然であった。なおこの時代においても英仏の地域的対立は残っていた。多分に感情的なものになっていたがそれでも残っているのは事実であった。ここまで見事なライバル関係はエウロパでも連合でもこの二国間だけである。
「そうです。フランスです」
「これでドイツも揃えば面白いな」
表情を変えずにの言葉であった。
「ここは」
「どういうことですか？」
「これは何でもない」
そしてその言葉はすぐに打ち消した。

## 第二十七部第三章　もう一つの嵐その四

「忘れてくれ。いいな」
「はい。それでは」
「それでだ」
ベルガンサが応えてくれたのを見てまた言うのだった。
「保守派からは誰も出ないのか」
「今一つ候補者を絞りかねているようです」
それが実情であった。保守派も苦しいのだ。
「どうにもこうにも」
「それでも誰かいるだろう」
モンサルヴァートはいささか他人事でそう述べた。
「一人位は」
「さて、どうでしょうか」
だがベルガンサの言葉は浮かないものであった。軍部はどちらかというと今の保守派に賛同する者が多いのである。彼等はあくまで軍人なので政治には介入しないが。ただ現役武官が軍務相になれるだけである。それでも連合とはかなり違うが。
「その辺りは」
「いないのか」
「少なくとも今は」
こう述べた。
「見当たらないようです」
「この侯爵に対抗できる人材がか」
「おそらく彼が出なければ誰かが出たでしょうが」
相手を見てしり込みするというのはよくあることである。その点において保守派はよくある行動をとっていると言えた。それがよいのか悪いのかは別問題としてだ。
「彼に対抗できるとなると」

「いないか」
「少なくとも手を挙げる人間はいません」
ベルガンサは言う。
「保守派の中には」
「しかしだ」
モンサルヴァートはここまで聞いたうえで静かに述べるのだった。
「誰か出さなくてはいけないだろう」
「そうです」
ベルガンサもわかっている。だから頷く。
「それで彼等も焦っているようです」
「そうだろうな」
これもまたわかっていることである。モンサルヴァートはまた頷いた。そうしえ頷き終えてからまた言うのであった。慎重に言葉を進めて。
「その焦りがどういう結果をもたらすかな」
「結果ですか」
「焦りは結果を求めているからこそだ」
これは人間心理であった。人は焦っていると他のことなぞ見もせずにただ結果を求める。焦っているのは結果を追い求めているからでありそれを考えると当然のことである。今の保守派がそうであるようにだ。モンサルヴァートはそれを認識したうえで話していた。
「その結果は。どうなるか」
「保守派で候補者がいないとどうするのでしょうか」
「いない場合か」
「そのまま諦めるでしょうか」
「いや、それはない」
モンサルヴァートはその可能性はないと見ていた。
「絶対にな」
「それでは何としても候補者を立てると」
「何もしないで負けるよりは何かをして敗れた方がいいな」

モンサルヴァートは言った。
「戦争とは違い」
「そうですね。政治の世界では」
ベルガンサもわかっていた。戦争においては戦力温存の為にあえて戦わないという例もある。だが政治の世界では別なのだ。政治において何もしないで敗北するというのはそれだけで白旗を挙げたと見なされる。政治の世界での白旗は完全敗北だ。そうなっては信頼も求心力も落ちる。だからこそあえて誰かを出さなくてはならないのだ。その政党の存在感を示す為にもだ。実際に敗北がわかっていてあえて名乗りを挙げてそれにより名を残す政治家もいる。いい自己アピールの場でもあるのだ。
「ですが今だ候補者がいないのは」
「だから焦っている。それをどうにかする為に」
「結局中で見つからないと外に向かいますか」
「それが自然の流れだな」
モンサルヴァートは言う。
「そうなる筈だ」
「それでは閣下」
ここでベルガンサはまた問うた。
「保守派は誰を選ぶでしょうか」
「そこまではわからない」
モンサルヴァートもそこまでは見てはいなかった。もっと言えば見るつもりもなかった。正直に言えば彼は政治には関心があるがそうした政党の駆け引き等には関心が薄かったのである。これは政略を好まない彼の嗜好によるものであった。

## 第二十七部第三章　もう一つの嵐その五

「そこまではな」
「左様ですか」
「しかし。誰かを選ぶとなると」
彼は言う。
「侯爵に対抗できる人物か」
「果たしているでしょうか」
「いるかも知れない」
また述べる。醒めた声で。
「いないかも知れない。この場合はいない方が可能性が高い」
テレビのギルフォードを見ながら述べる。やはりクールな声であった。
「それでも出さなければならないが」
「あえて若い政治家が出るかも知れませんね」
ベルガンサは政治的な視点から述べた。
「名を挙げる為に」
「あえてか」
「若しかしたらですが」
「だとしたらその政治家はかなり勇気がある」
モンサルヴァートは仮定に対して述べた。その仮定の対象が全く見えないものであるのであやふやな仮定であるがその結論は当たっていた。
「蛮勇と言ってもいい」
「蛮勇ですか」
「政治にも蛮勇は必要だ」
意外な言葉であった。
「それは勇気と紙一重だがな」
「では勇気とすると」

先程のモンサルヴァートの言葉を挙げた。
「その政治家はその勇気によりかなりの大物になれますね」
「そうだな。そこに能力が備わっていれば」
やはりまずは能力であった。しかし勇気というものはその能力を大きく引き出す。これもまた政治の世界においても言えることであった。
「なれるな」
「ですね。果たして出るでしょうか」
「さてな。むしろだ」
そうしてまた言うのだった。
「今の保守派は外から人材を求めるかも知れない」
「そうなりますか」
「確かな人材がいればな」
そう前置きした。
「彼をスカウトするだろう」
「そうしなければ勝てないと」
「うむ」
また頷く。ギルフォードを見ながら。
「まぐれもない」
「実に厳しいですね」
「それは改革派も同じだがな」
もう一方の勢力についても言及する。計算づくの演劇のような話の流れになっていた。
「だが彼等は」
「カミュ外相がいますか」
「本来の保守派と改革派の対決ならば彼だった」
モンサルヴァートはカミュは総統になれるとまで言う。それは彼の能力を正当に評価しているからこその言葉であった。人間的には様々な問題があるにしろ彼が政治家としては非常に傑出した能力の持ち主であることは確かだからだ。またカリスマ性があるのも認め

ていた。
「あの魅力もまたな」
今もそれについて言う。
「そうそう備わっているものではない」
「そういえば外相は敵も多いですが」
ベルガンサもモンサルヴァートの言葉を受けて気付く。
「支持者も慕う者も多いですね」
「そういうことだ。そうした魅力の持ち主なのだ」
味方と共に多くの敵を持つ者もいる。それもまた魅力のあり方の一つだ。万人に愛されるタイプの魅力もあるがそうしたタイプの魅力もあるのである。
「彼はそうだな」
「この侯爵はどうでしょうか」
「若しかしたらだ」
演説は終わり近くになっていた。テレビの中であるというのに周囲が興奮しているのがわかる。興奮しているのはどうやらテレビのスタッフらしい。
「最も恐ろしい魅力の持ち主かも知れないな」
「最も恐ろしい魅力ですか」
「そうだ」
こう表現するのであった。

## 第二十七部第三章　もう一つの嵐その六

「若しかしたらだが」
「その魅力とは一体」
「宗教家だ」
ここで一言深い言葉を出した。
「宗教家とは」
「それも偉大な宗教の創設者達だ」
次にこう述べた。
「キリストやムハンマドのようにな」
「圧倒的なカリスマですか」
「彼等はどうしてあそこまでの存在になれたか」
モンサルヴァートはそこを指摘する。
「何故か。わかるな」
「はい」
それがわからないベルガンサではない。それだけの聡明さが彼には備わっていた。だからこそその端整な顔を強張らせていた。
「カリスマ故です。その神懸かりなまでの」
「確かに彼等には能力もあった」
それは事実だ。キリストもムハンマドも偉大なる指導者であり素晴らしい賢者であった。だがそれだけではただそれだけなのである。
「しかしそれだけではなかったからな」
「それがカリスマだと」
「それは努力して得られるものではない」
モンサルヴァートはカリスマというものについてこう評した。
「自然とその人に備わっているものだ」
「自然とですか」
「では聞くが」
あらためてベルガンサに問う。

「キリストは努力してそうなったのか」
「キリストがですか」
「そうだ。どう思うか」
「努力ではないと思います」
それはベルガンサもわかる。だからこそ言えた言葉だ。
「既に生まれた頃から様々な逸話に飾られていましたし」
「それは何故か」
「カリスマ故ですね」
「そうなる。例えそれが創られた話であってもな」
聖人や賢者といった存在の逸話は後世に創られたものが多いのが現実なのだ。例えばそのキリストもそうであるし真言宗の空海もそうである。空海は日本仏教界、いや日本史上において特筆すべき天才であるがその彼の逸話もまたその多くが創られたものであるのだ。
「それを創らせるのがカリスマだ」
「それもですか」
「既に彼は伝説を創っている」
自分で創るものでもある。伝説や逸話は。
「戦場においても政治の場においても」
「実績であると共に」
「実績がそのまま伝説となる」
そう述べた。
「それが英雄だ」
「カリスマによりそうなると」
「カリスマがあれば何でもない話も英雄のエピソードになる」
そういうものだ。アレクサンダーにしろその失敗談までもが英雄の逸話になっているのはこうした理由からだ。ブラウベルグも何気ない話がエピソードになっている。
「彼もまた」
「その彼が今動いているが」
「どうなるでしょう、エウロパにとって」

「おそらく彼ならやる」
モンサルヴァートはそう見ていた。
「このエウロパをな。救える」
「エウロパが救われるのですか」
ベルガンサの目がその言葉により大きく見開かれた。
「今の惨状から」
「彼が英雄ならばな」
一応はそう前置きを置く。
「それが果たせる。英雄の出現というものは運命的なものでもあるのだから」
「運命ですか」
「ジークフリートもそうだ」
北欧神話における最大の英雄だ。モンサルヴァートはドイツ人であるのでジークフリートの話を子供の頃から聞いている。だから今その名を出したのである。

## 第二十七部第三章　もう一つの嵐その七

「彼も出るべき時に現われたな」
「物語にしろ」
「そしてキリストも」
　彼もまたそうであった。キリスト教の誕生と成立は多分に運命的な時機にあると言っていいものがある。それが歴史における必然だったのかも知れない。キリスト教が後世に与えた影響を考えれば。キリスト教なければ欧州は少なくとも大きく違ったものになっていた。
「あの時でなければ駄目だったのだ」
「史実の英雄達もですね」
「アレクサンダー然りナポレオン然り」
　エウロパにおいて今でも英雄とされている者達だ。ギリシア世界を統一しペルシアを征服したアレクサンダーもフランス革命から姿を現わし皇帝となったナポレオンもまたその時に出るべくして出たのであろう。そしてエウロパの国父もまたそうなのであろう。
「ブラウベルグ然り」
「我が国父もまた」
「彼があの時いなければどうなっていたか」
　モンサルヴァートはそこを指摘した。
「エウロパはあのまま惨めに生きているだけだったな」
「こうして銀河には出られなかったかも知れません」
　その可能性もあったのだ。当時のエウロパはシンガポール条約により完全に塞ぎ込んでしまっていた。連合には勝てはしない、このまま地球の端で朽ち果てていくだけではないかという考えまで漂っていた。丁度日露戦争までの有色人種が白人に対するような感情がエウロパに漂いだしてきていたのだ。それを変えたのがブラウベルグなのであった。

「彼があの時エウロパに出なければ」
「少なくとも我々は栄光を取り戻しておらず」
「下手をすればここにもいなかった」
「そうなりますか」
「彼が出たからだ」
そう結論付けた。
「出るべき時にな。彼が」
「彼がですか」
「英雄がだ。そして今は」
「英雄が望まれている時ですね」
「そうだ」
モンサルヴァートはベルガンサのその言葉を待っていた。そう言いたかったのだ。
「望むものは望まれるべき時に与えられる」
「それが救国の英雄ならば」
「現われるのは今だ」
そう言うのだった。
「彼がそうならばまさにそうだ」
「だからこそ世に現われた」
「エウロパが今の有様でなかったならば彼はイギリスの一政治家で終わっていたかも知れない」
そうなる可能性もあるのだ。平穏ならば。
「しかし。今はこうした時代だから」
「ああしてテレビに出ている」
「どうなるかな、これから」
あらためて彼を見た。
「彼は。そしてエウロパは」
「英雄は彼だけでしょうか」
「どういうことだ？」
「いえ、若しかしたらです」

ベルガンサはふと思い出した、いや気付いた感じで述べた。
「英雄は一人だけではないかも知れませんし」
「カミュ外相か？」
「あの御仁だけではなく」
何処となくモンサルヴァートを見ていた。
「若しかしたら」
「そこまではわからない。しかし」
「しかし？」
「英雄といってもそれぞれだ」
次に述べたのはこの言葉だった。
「プロイセンをドイツにしたのは二人の英雄だったのだしな」
「ビスマルクとモルトケですか」
「そうだ」
彼は言った。当時のプロイセンの首相と参謀総長だ。彼等がいなくてはドイツ帝国は成立しなかったと言っていい。二人の英雄がいなければ。英雄は一人とは限らないということの証でもある。
「若しかしたら。今のエウロパは」
「英雄が何人か必要だと」
「かも知れない」
こう考えだしてもいた。
「若しかしたならばな」
「確かに困難な時です」
それは言うまでもない。しかも建国以来の。
「一人では不足なのかも」
「そうした場合は英雄は複数現われる」
モンサルヴァートは言った。
「神々の手によりな」
「神々だけが知っている」
「そうなる。神々はどう見ているか」
この場合の神々は二つの系統だ。ギリシアと北欧。モンサルヴァ

ートは北欧の神々を見ていた。あの荒涼たる雪と氷の世界にいる神々をだ。

## 第二十七部第三章　もう一つの嵐その八

「それだな」
「少なくとも彼はその中心にいるようですね」
「英雄ならばな」
またしてもギルフォードを見た。
「間違いなく」
「エウロパは。必ず蘇ります」
ベルガンサはそれを信じていた。
「だからこそ。我々もまた」
「責務を果たすぞ」
彼は言った。
「いいな」
「はい。それでは」
「また午後だ」
彼はまた言う。
「会議だ。いいな」
「はっ」
ベルガンサは敬礼で応えた。同時にギルフォードの演説は終わっていた。彼は自信に満ちた笑みでその場を去り後には魅了された者達だけが残っていたのだった。
ギルフォードは演説の後で一人ホテルに戻った。そこでシャワーを浴びた後でスコッチを飲みながらくつろいでいた。そこに電話がかかってきた。
「私だ」
それに出る。すると彼にとって聴き慣れた声が届いて来た。
「私です」
「卿か」
それはギルフォードのよく知る声であった。

「どうした。何か報告か」
「いい報告と悪い報告が一つずつです」
「ほう」
ギルフォードはその報告を聞いて楽しげな笑みを浮かべた。それは声にも出ていたので電話の向こうの相手にもわかった。あえてわからせたのだが。
「どちらから聞かれますか」
「そうだな」
その楽しげな笑みのままのベル。
「まずは悪い報告から聞くか」
「悪い報告からですか」
「まずは悪いものを聞くのがいい」
ギルフォードは笑ったまま述べる。悪い報告も気にせず受けるといった顔であった。それは彼の余裕と度量がそうさせるのであった。
「後で気が楽になるからな」
「わかりました。それでは」
「うむ」
電話の向こうの相手は話をはじめた。それは政敵に関するものであった。
「改革派ですが」
「彼等か。何か動きがあったな」
「カミュ外相を総統選の公認にすることになりました」
「ほう、やはりな」
それを聞いても別に動じてはいない顔であった。
「予想通りだ」
「悪い報告でしたが」
「私はそうは思わない」
あっさりとそれを退けた。
「悪い報告というものは予想しない事態になった場合に言うものだ」
「左様ですか」

これは彼の考えであった。彼にしてはそうなのだ。
「予想出来る事態ならば対処できる」
「はい」
そして。
「私に対処できないものもないしな」
これは彼の自信であった。絶対的な自信がそこにはある。彼ならばこその自信である。かつてのナポレオンの様に自らの為すことに不可能はないと考えているのだ。それがギルフォードであった。
「だからだ。事前にわかっていれば問題はない」
「では悪い報告という言葉は取り消します」
「うむ。わかった」
その言葉を受ける。やはり余裕に満ちた顔であった。
「カミュ外相しかいないしな」
「あの御仁しかですか」
「では聞くが他に誰かいるか」
逆に聞き返した。
「今の改革派に。まさかラフネール総統が出るわけにもいくまい」
「確かに」
電話の向こうの者はギルフォードのその言葉に頷いた。
「敗戦の責任者でありますし。それに」
「最早今総統の座にあるのだけでやっとだな」
「はい」
それだけラフネールの消耗が激しいということであった。ギルフォードはそれを見抜いていたのだ。先の連合との戦いで劣勢の中何とか耐え切って戦い抜いた代償は彼自身にもかかっていたのだ。ペーチの命を奪っただけではなかったということだ。

## 第二十七部第三章　もう一つの嵐その九

「その彼が出られる筈もない」
「そういえばそれに関しての情報ですが」
電話の向こうの声はその言葉を聞いてまた述べるのだった。
「ラフネール総統は総統の職を離れたならば隠棲されるそうです」
「まだそんな歳でもないがな」
ラフネールはそこまで高齢ではない。ようやく六十に手が届こうかという年齢だ。それで隠棲というにはあまりにも早かった。この時代の平均寿命を考えればまだまだ時間があるからだ。
「それだけ疲弊されているのだな」
「そういうことかと」
「ふむ。ならばこそカミュ外相か」
「やはり。今の改革派はあの方しかいないのですね」
「他に候補者がいて欲しかったところだろうがな」
ギルフォードはその顔から笑みを消していた。声からもそれは消えていた。
「あの御仁は敵も多い」
「ええ。その性格故に」
高慢で自信に満ちシニカルな性格として知られている。また好色で賄賂も好めば策謀により相手を陥れることも辞さない。そうした人物だからである。
「それもかなりのようですね」
「より安定した人物を総統に推したかったのだろうがな」
「それが適わなかったと」
「そういうことだ。ペーチ首相が生きておられてもな」
彼は彼で問題があったのだ。
「華がない」
「華ですか」

「そうだ。国家元首だ」
それが最も問題になる。首相とは求められるものが全く異なるのである。
「それになるにはあの方も華がなかった」
「今も生きておられたら首相のままですか」
「首相でなければならない」
こう述べた。
「あの方はな。そうした方だった」
「左様ですか」
「カミュ外相はまた違うがな」
そのうえでカミュに話を戻した。
「問題はあれど。総統になれる器だ」
「はい」
それは電話の向こうの者もわかっているようであった。ギルフォードの言葉にこくりと頷くのが声の気配からわかった。
「やはりそうでありましょう」
「悪い報告はそれだけだな」
「はい。またおってお伝えします」
「わかった。それでだ」
悪い報告であった筈のものを終えて次の話に入るのであった。
「次は。いい報告か」
「そうです」
「お茶の時間はもう終わっているぞ」
ギルフォードはジョークを返した。お世辞にもあまりいいとは言えないジョークであった。ここでお茶の時間を出すのがイギリス人らしいと言えるものであったが。
「また明日にしてくれ」
「いえ、お茶ではありません」
向こうも笑いながら言葉を返す。
「別のいい報告です」

「何だ？美酒だったら今ここにはスコッチがある」
笑いを戻しての言葉だった。スコッチはイギリス人にとっては心の酒と言っていい。その心の酒を楽しみながら笑顔になっているのである。
「生憎だが」
「残念ですがそちらでもありません」
「ふむ。わからなくなってきたな」
あえてとぼけてみせる。
「それだと」
「ご冗談を。では報告致しましょうか」
相手も笑いながら言葉を出してみせた。
「そのいい報告を」
「それで。何だ？」
話を聞くことにした。じっと電話の向こうに耳を澄ます。
「資金についてです」
政治家にとっては欠かせないものだ。確かにギルフォードは資産家であるがそれだけでやていけるわけではない。資金は政治家にとっては命そのものなのだ。
「今回の遊説でかつてない程の資金を集めることに成功しました」
「ほう、そんなにか」
「これでギルフォード家の資産の三倍規模の資金が集まりました」
そうギルフォードに告げるのだった。
「これだけあれば」
「そうだな。遂に集まったな」
ギルフォードはそこまで聞いて満面に笑みを浮かべた。

## 第二十七部第三章　もう一つの嵐その十

「これで。結成出来るな」
「我々の政党を」
「いいか。今までの政党とは違う」
言葉が鋭くなる、まるで剣の様に。
「それはわかっているな」
「無論です」
彼もそれに頷く。
「だからこそ今」
「わかった。それではだ」
ギルフォードはそれを聞いてまた述べる。
「その資金を今は保管しておけ」
「はい」
「すぐに使う時が来るからな」
「そうですね。それは間も無くです」
電話の向こうの声もギルフォードのそれと同じく鋭いものになっていた。
「資金はそういうものですから」
「資金は命だ」
ギルフォードは鋭い言葉を出したのだった。
「命は多い方がいい」
「ええ。ではまだ集めますね」
「また多過ぎるに越したことはない」
こうも述べた。
「幾らあってもな」
「現状には満足しませんか」
「では今で足りると思うか？」
またしても問うのであった。

「どうか、その辺りは」
「その答えは言うまでもないと思いますが」
向こうから述べてきた。
「それは如何でしょうか」
「そうだな。わかっているな」
「無論です。それでは」
「うむ。そしてだ」
さらに言葉を続けるギルフォードであった。
「資金と共に」
「票ですか」
「個人個人の指示を集めるのも重要だが」
票集めについても述べるのであった。いささか以上に生臭い話であったがそれでも言うのであった。政治らしい話と言えばそれまでであるが。
「それよりもやはり」
「団体の支持ですか」
「労働組合はどうか」
まず彼が目をつけたのはそこであった。
「組合ですか」
「そうだ。ここにはかなり大きな団体があった筈だが」
「既にそこは抑えております」
電話の向こうの言葉はギルフォードにとって非常に喜ばしいことであった。彼はそれを聞いて顔を綻ばせた。そうしてまた述べるのであった。
「それはいい報告だな」
「おっと、そうでした」
電話の向こうで微笑むのがわかる。
「ではいい報告が二つでしたね」
「そうだな。悪い報告が消えていて」
軽いやり取りになっていた。イングリッシュジョークとはやや趣

きが異なっていたが。なおこの時代においてもイギリス人はユーモアを深い愛しているのだ。
「いい報告に変わった。悪い妖精が良い妖精になったようにな」
「そうなりました。失礼」
「そしてだ」
ギルフォードはさらに言う。
「他にもいい報告があると思うが」
「いい報告ですか」
「そこはどうだ」
また電話の向こうに対して問うのであった。
「他の労働組合も幾つか支持を取り付けました」
「よし」
これまた満足すべき報告であった。
「上出来だ。ではここに来た介はあった」
「ですが」
しかしここで。電話の向こうの声は曇るのであった。
「どうした？」
「保守派と改革派の支持団体を切り崩すのは今一つ成功しませんでした」
「あくまで無党派層だけか」
所謂特定の政党を支持しない勢力である。民主政治においてはつきものの存在だ。多分に流動的な存在であるがそれを取り込めると非常に大きい。

## 第二十七部第三章　もう一つの嵐その十一

「そうなります」
「近頃はその無党派層が増えているのも事実だが」
ギルフォードはクールな声で述べた。
「彼等の切り崩しもしておきたいものだな」
「全くです」
「よし」
彼はそこまで話したうえで述べるのであった。
「彼に行ってもらうか」
「あの方にですか」
「そうだ。ここはな」
まるで駒を動かすようであった。そのまま言葉を続ける。
「彼に出てもらうか」
「わかりました。それでは」
電話の向こうの声はそれを聞いて頷くのであった。
「私から電話しておきましょう」
「頼むぞ。本来なら私がかかるべきなのだが」
ギルフォードはその言葉を少し濁らせた。
「もうすぐここを発たねばならないからな」
「それは致し方ありません」
電話の向こうの声はそう言って彼を宥める。
「スケジュールは限界まで詰まっていますから」
「よくもまああれだけ詰まっているものだ」
ギルフォードは思わず苦笑いを浮かべた。
「何処かのタレントかと思った」
「タレントですか」
「政治家も多分にタレントだな」
今度はわりかしイングリッシュジョークめいていると言えた。あ

まり上手くはないにしろだ。
「ここまで忙しいとはな」
「それはイギリス議会で御存知だったのでは？」
「それはそうだが」
また述べるのだった。
「だが。忙しさの桁が違う」
「左様ですか」
「イギリス人の時間は穏やかなものだ」
ゆとりを愛する彼等だからだ。そもそもイギリス人というものはおっとりしたところがある。なお連合からすればそれは多くの征服した民族から搾り取った時間ということになる。彼等はその時間を無駄に浪費する不届きな者達だというのである。
「この時間にしろな」
「そうなりますか」
「そうなる。少なくとも今よりはずっと楽だった」
「そうですか」
「もっとも。馴れてしまったが」
ここで彼はまたジョークを言うことにした。
「このまま連合でもやっていけそうだな」
「連合でもですか」
「連合ではこんなものは忙しいうちに入らないそうだな」
ジョークが何時の間にか皮肉になってしまっていた。
「何でも彼等は私達を怠け者と考えているそうだしな」
「それは私も知っております」
電話の向こうの彼もそれを言う。
「実際のところ。主観によるものですが」
「そうだ。彼等の主観に過ぎない」
素っ気無く述べた。
「とどのつまりはな。しかしだ」
「しかし？」

「そもそも忙しいかどうかも主観で決められるものだな」
「そうなりますか」
「例えばだ」
ここでギルフォードは言う。
「私が忙しくないと思えば忙しくないな」
「ええ、まあ」
電話の向こうでその言葉に頷いてきた。
「そうなるかと」
「他人が忙しいと思っていてもそれは忙しいことにはならない」
「主観が全てですか」
「私もだな」
彼はまた言う。
「今が忙しくないと思えばそれまでだな」
「はあ」
「そうなるようになるかもな。今後は」
「総統になられて」
「総統に休みはない」
そうはっきりと言い切った。
「ならば。私は忙しいと思わないようにしよう」
「あえて無理することはないのでは？」
電話の向こうでまた言葉が述べられた。

## 第二十七部第三章　もう一つの嵐その十二

「無理をせずとも」
「それもそうか」
ギルフォードは彼の言葉を聞いて考えをあらためた。
「落ち着いてな」
「はい。それでですね」
電話の向こうの相手はさらに言う。
「御一人だけでもないということも。覚えておいて下さい」
「私は一人だけではないのだな」
「その通りです」
どうしても多くの人間が忘れていることだが。それが今告げられた。
「ですから。御安心を」
「有り難いことだな」
ギルフォードは微かに笑った。しかしそれは誰も見ることがない。
「私の周りに多くの者がいてくれるとはな」
「それは集まるものです」
こう表現するのだった。
「集まるのか」
「はい、閣下が恒星ならば」
奇しくもモンサルヴァートと同じ表現であった。当然ながら電話の向こうの者はそのことを知りはしない。だがこう表現したのは事実である。
「我々は衛星です」
「恒星の輝きはその恒星だけではない」
ギルフォードは言う。
「無数の衛星があらばこそだ」
「では閣下」

「わかっている」
ギルフォードは彼に言うのだった。
「エウロパを救うのは一人ではない」
「我々もまた」
「そうだ。いいな」
「わかりました。それでは」
「うむ。それではな」
そうして今また言うことがあった。
「頼むぞ、連絡の方は」
「わかっております。それでは」
「私は明日ここを発つがな」
「既に手配はしております」
用意がよかった。もっとも各地を転々として遊説をするならばこれもまた当然であった。一人でどうにかできるものではなく多くのメンバーがいればこそのことである。
「ですからそちらも」
「任せる。それではな」
「はい」
ここまで話をして電話を切った。一人になったギルフォードはまずはベッドの上に座った。そこでガウンを羽織ったままスコッチを飲みながら呟いた。
「いい同志達を持ったな」
こう呟くのであった。
「有り難いことだ」
その日はそのままスコッチを楽しんで終わった。次の日はすぐにホテルを発ち次の遊説場所に向かった。こうして彼は各地を飛び回り支持者を増やしていたのであった。
ギルフォードの動きはエウロパ各地で有名になっていた。それはネットにおいても議論の的になっていた。この掲示板でもそれは同じであった。

『今日は俺のところに来た』
『もう来たのかよ』
『ああ、随分早いな』
まずはギルフォードのその機動力について議論がはじまった。このことが最初にあがるのはやはり彼の動きが速かったからだ。
『こんな動きの早い政治家いたか？』
『エウロパにはいなかっただろうな』
エウロパはおっとりした社会だ。だから政治家の動きも決して早くはないのである。
『少なくともな』
『そうか、やっぱりな』
その言葉に納得する書き込みが入った。
『動きはかなり速いか』
『速いなんてものじゃないぜ』
すぐにこう書き込まれた。
『一日滞在してもう別の場所に移ってるだろ』
『ああ』
これもまた事実であった。ギルフォードは各地を巡り巡っているのだ。中には一日演説してそこからすぐに別の場所にということもあるのだ。
『俺のとこだったな』
『あんたのとこか』
突込みが書かれた。

## 第二十七部第三章　もう一つの嵐その十三

『そうさ。けれど演説は確かだったぜ』
『あの演説はな』
『確かにいいよな』
それはもう折り紙付きであった。ギルフォードは演説の天才とまで謳われている。それにより多くの者の心を掴み取っているのである。
『心動かされるっていうかな』
『演出もいいしな』
演出についてはスタッフの手腕が大きい。ただ演説だけでは完全な支持を集めにくい。演出もまた重要だ。フランス革命においては数々の絵画がその役割を果たした。テニスコートの誓いにしろそうだ。あそこで両手を胸にやるロベスピエールの姿が実に印象的だ。国王の処刑もまたそうである。首だけになり果てたその姿こそが革命の象徴なのだ。そこに何を見るかはそれぞれの者次第であろうが。
ヒトラーも然り。彼があそこまでなれたのはゲッペルスの演出によるところが大きかった。そうした意味でゲッペルスは実に偉大な男であった。
『そうだな』
『光の使い方とかな』
そこも言われる。
『七色の光に照らし出されてな』
『音楽に乗ってな』
その曲はワーグナーであったりエドガーであったりする。時にはカルメンの第一幕前奏曲が奏でられる。しかも常にオーケストラだ。カルメンのこの曲は最後の場面でも使われている。カルメンとドン＝ホセの最後の対面の直前に。極めて印象的であり観る者の心を離さずにはいられないビゼーの天才的なまでの場面作りが見られる。

『格好よく見えるんだよな』
『それも相当にな』
これもよく言われていることであった。
『何か英雄か救世主か』
『そんな感じにな』
彼らは完全に宣伝に乗っていた。これこそがギルフォードと彼の同志達の狙いであるが。そうさせるのは彼の才覚故である。
『見えるよな』
『全くだ』
誰もがその書き込みに納得する。
『正直あれだよ、改革派も保守派も頼りにならないんだよな』
『そうだよな』
『特に保守派な』
野党である保守派について批判めいたことが書かれた。
『あれだろ？まだ総統選の立候補者も決められてないんだろ』
『そうらしいな』
『何やってんだよ、保守派も』
次々と保守派への叩きめいた言葉が書かれていく。
『誰かいるだろ、一人位』
『どうかね』
それに懐疑めいたことが書かれること自体が。保守派の惨状を表わしていた。
『無理だろ、やっぱり』
『無理か？』
『ギルフォードの相手だぜ』
問題はやはりそこであった。その問題を解決するのはやはり難しかったのだ。それは言うまでもないことであったが書き込まずにはいられないことであった。
『それが務まるのは』
『政権取ってる改革派はあれだったな』

その中で改革派について書かれた。
『出て来るのはカミュか』
『ああ、あいつみたいだな』
既にそのことはネットに書き込まれだしていた。まだ公式に発表はされていないが既におおよそのことはわかっていたのだ。そこには予想と洞察もあった。
『というか改革派もあいつしかいないしな』
『そうだな』
『改革派も辛いんだな』
次々にそう書かれる。
『人材の事情がな』
『いないんだよ、あいつ以外』
まだいるだけましであるが。それでも酷評されていた。
『改革派もな』
『けれど保守派よりましか』
それでもやはり保守派と比べればこうであった。
『一人でもいるだけな』
『そうだな』
『一人でもいるといないじゃ大違いだ』
そういうことであった。零よりも一の方が遥かにいい。とりわけ人材というものに関してはそうである。誰もいなければそれで話が終わるからである。
『で、保守派は誰もなしか』
『外から探してるんじゃないのか？』
これについても洞察が届いた。

## 第二十七部第三章　もう一つの嵐その十四

『外からな。誰かいるだろ』
『いるか？』
お決まりの流れでこれにも懐疑的な言葉が書き込まれた。
『そうそう』
『いなければ不戦敗だぞ』
政治の世界においては最悪である。何にもなりはしない敗北だ。
『流石にそれはまずいだろ』
『やったら保守派は当分立ち上がれなくなるな』
こうまで言われだした。
『だから絶対に出さないといけないけれどな』
『人がいるかね』
またそれが突っ込まれる。
『あの侯爵に対抗できるのが』
『無理矢理担ぎ出すとかはどうだ？』
かなり無責任な書き込みも出て来た。こうした書き込みがあるのもインターネットならではであった。これに関しても昔から、またどの国でも変わりはしない。
『誰でもいいから』
『不戦敗よりはましだってか？』
『そういうことだよ。保守派にとってはその通りだろ？』
また突込みが為された。無責任だが鋭い言葉であった。
『だからだよ。ここは』
『それでもどうかねえ』
『いないのがやっぱり問題だろ』
『外部にもいないのか』
そこに話が戻った。
『誰か』

『誰かつってもなあ』
『保守派の支持母体といえばな』
今度はそこに検証が入った。インターネットの強みは多方面から検証が為されるところである。また工作があってもそれを見破ることも可能だ。確かに虚報も多い世界であるがそれでもかつてのマスコミに見られた悪質な印象操作が為されにくいのは強みである。
『軍か』
『軍に誰かいたか？』
『いるぞ』
誰かが書いた。
『とっておきの人間がな』
『誰だ、それ』
『シュバルツブルグ閣下か？』
彼の名が出た。彼は軍人としても政治家としても堅実な評価がある。敗れはしたが圧倒的な戦力を誇る連合軍と善戦し最後まで軍を維持したことは高い評価を得ていた。
『だけれど閣下は』
『歳がネックになるだろう』
年齢が指摘された。
『侯爵と比べたら』
『歳か。閣下も政治家としちゃそんなに歳じゃないんだがな』
これは事実であった。シュバルツブルグは政治家としても軍人としても壮年であるだけだ。とても老齢とは言えない。しかしギルフォードはその彼よりも遥かに若い。そこが問題であるのだ。年齢もまた多分に相対的なものであるからだ。
『相手が悪いか』
『だろ？だから閣下はないだろ』
なおシュバルツブルグはネットではよく閣下と仇名される。エウロパ元帥閣下だからこう呼ばれるのだ。エウロパは連合軍と比べて将官が多いのでその分閣下も多いが。

『じゃあ誰だよ』
『侯爵に対抗出来るって』
『だから一人いるだろ』
また書き込まれた。
『一人な』
『一人！？』
『それってあの人か』
それに気付いた者が書き込んだ。
『そう、あの人だよ』
また書かれる。
『わかったな』
『成程ねえ』
気付いた者は次々に書き込んでいく。わかれば実に頷けるものであった。
『あの人ならいけるな』
『ああ、充分な』
『あの人って誰だよ』
鈍い者が会話についていけずたまらずこう書き込んだ。
『わからねえか教えてくれよ』
『だからだ。軍にもう一人おられるだろ？』
『その人だよ』
かなりストレートなヒントが投げ与えられた。

## 第二十七部第三章　もう一つの嵐その十五

『これでわかるよな』
『ああ、やっとわかったよ』
その鈍い者もこれでようやくわかった。エウロパの事情を知っていてここまで教えてもらえれば誰にでもわかるというものであった。
『モンサルヴァート統帥本部長閣下か』
『そうだよ』
『あの人ならどうだ？』
『いけるな』
名前が出ると更に賛同者が増えた。中には顔文字で笑顔を出す者までいる。
『何だ。いるじゃないか』
『それも凄いのが』
『ただしだ』
しかしここで言葉が付け加えられる。
『あの人が選挙に出るかどうかはわからないぞ』
『出ないかな』
『可能性はある』
そう前置きが為された。
『あの人はあまり政治に興味がないみたいだしな』
『それに生粋の軍人だしな』
そこもまた問題であった。エウロパは政治家と軍人の違いが連合やマウリアに比べて曖昧なところがある。現役武官でも閣僚を務めることからそれがわかる。そうした意味では二十世紀に確立されたシビリアンコントロールとはいささか趣きを異にしているのである。
『そこのところはどうかな』
『頼まれたら出るんじゃないかな』
かなり楽観的な書き込みがここで出た。

『あの人も』
『どうかな』
『そうだとしてもかなり難航するだろ』
楽観に対して悲観が書かれた。どうしてもこうした流れになる。人というものは楽観と悲観でバランスを取りたがるものだからだ。どちらに偏り過ぎても精神的な均衡を崩してしまうものである。躁鬱というのもここにかなりの部分があると言える。
『何せ保守派にはいないんだからな』
『そうなるか』
『けれどやっぱりあの人しかいない』
結局はそうなるのだった。
『ギルフォード侯爵に対抗できるとなるとな』
『あの人しかか』
『保守派には選択肢がないんだ』
それが現実であった。惨いと言うべきかどうかはわからないが。
『他にな』
『じゃあ担ぎ出すしかないよな』
『そうだな』
誰もがそう見ていた。
『そうなると』
『それで担ぎ出せるのか？』
『だからそれがわからないんだよ』
少し怒ったような書き込みであった。それは今さっき為された会話だからである。
『どうなるかな』
『そうか、済まない』
『けれどあれだな』
ここで面白がるような書き込みが入った。
『若し担ぎ出せたら面白いな』
『そうだな』

『確かに』
これには皆が納得して頷く。その通りだからだ。
『凄いのが三人選挙に出る』
『見がいがあるぜ』
『それだけじゃないぜ。応援や投票のしがいもある』
選挙というものは厳かなものではない。かなりハレ、祭りの部分がある。だからこそ皆その精神を高揚させるのである。それはこういうことであるのだ。
『今回はな』
『楽しめるな』
『それに国的にも面白いぜ』
イデオロギーや軍人、政治家とはまた違った視点での見方が今出て来た。

# 第二十七部第三章　もう一つの嵐その十六

『国的にも？』
『見てみろよ』
そのうえでまた書き込まれる。
『侯爵と外相と伯爵だろ』
『ああ』
伯爵とはモンサルヴァートのことである。これは彼が伯爵家の嫡男であることから来ている。実際に既に伯爵でもあるのだが。
『それぞれの国は』
『イングランドとフランスとドイツか』
『どうだよ、そこ』
今度はそこが注目されるのだった。
『そこも面白いだろ』
『確かにな』
『フランス人の俺から見てもな』
当事者の一国の出身者もそこにいた。
『そう思えるな』
『そうだろう？やっぱりこの三国は重要だしな』
これは事実であった。連合においての日米中露と同じくエウロパにおける栄仏独というのは主軸となる国家なのだ。これも昔から変わらないことである。
『その三国の対決か』
『基盤はあるな』
『国としてはな』
その出身国が支持基盤となるのはこの時代においても同じである。どうしても自国の出身者を支持するのが人情だ。この時代においてもそれは変わらない。
『かなりしっかりしているな』

『人口ではドイツが一番だな』
ドイツはエウロパの中では最も人口が多い。それと同時に経済や科学、技術も発達している。名実共にエウロパ最強の国である。
『それを考えたらモンサルヴァート閣下か？』
『さてな』
しかしそうとも言い切れないのだ。
『ドイツだけじゃどうにもならないしな』
『それもそうか』
『イギリスもその点では負けていないしな』
『フランスもな。連中は数が多いからな』
どうやら三国以外の者達もいる。その忌々しげな文章からそれがわかった。
『数だけはな』
『数だけかね』
『まあそれはいいとしようぜ』
話がややこしくなると見た者が話を戻しにかかった。
『とにかくだ。三人共強力な地盤が期待できる』
『ああ』
『しかも能力も高い。本当に面白い選挙になるぜ』
『今までにない選挙だろうな』
『それもエウロパがはじまって以来な』
こうまで書かれた。
『凄いものになりそうだな』
『そこまでいくかね』
流石にこれには懐疑的な反論が書き込まれた。
『幾ら何でも』
『いや、いくな』
『そうだな』
その懐疑的な言葉に複数の反論が挙がった。
『今回はな』

『ブラウベルグが三人いるようなものだしな』
『今度はブラウベルグかよ』
驚く書き込みが来た。ブラウベルグと言えばエウロパにおいては絶対的な英雄である。国父であるがそれ以上の存在であると言ってもいい程だ。彼なくしてあの時のエウロパの復権も今もエウロパもない。それを考えれば当然のことである。
『そうさ。今はそれだけ苦しいしな』
『苦しいのは事実だな』
『全くだ』
これに関しては誰も反論しない。敗戦による経済的ダメージもさることながら精神的ダメージがあまりにも大きいのだ。誇り高き白い肌のエウロパが雑多な肌の連合の者達に敗れたのだと言い激しく落胆する者までいる程なのだ。
『俺もかなり疲れてるしな』
『身体的なものじゃないだろ』
『一日七時間労働だぜ』
エウロパではまだ多い位だ。エウロパは労働時間がかなり短い。連合のように働けばそれだけ利益に返って来るかというと連合程ではない。むしろ勤めているだけである程度の収入がある社会なのだ。勤めていなくても保健が充実している。そうなので最低限の労働しかしないのだ。なおかなり人気があるのは貴族のところへの奉公だ。給料も休みも奮発してくれるからである。貴族はそうしたことに絶対に出し惜しみしてはならないと考えられているからだ。貴族も貴族でそれはかなり辛いのだがそれでもそうしなければならないのである。流石に連合が言うような中世の様な無茶苦茶な搾取なぞはない。

# 第二十七部第三章　もう一つの嵐その十七

『働き過ぎだろ、それは』
『そうだよ』
こうした書き込みが為されるのが何よりの証拠であった。
『貴族並に働いてねえか？』
『あんたひょっとして』
『いや、平民だぞ』
すぐにその七時間労働者は答えてきた。
『れっきとした。イタリアのな』
『イタリアでそこまで働いているのかよ』
『あんた何やってんだ？』
『何って公務員だよ』
イタリア人は自分の職業を名乗った。
『ちょっとな。最近艦艇の修理が忙しくてな』
『それか』
『そういえばまだ修理しているんだったな』
『おかげで大変だぜ』
苦笑いの顔文字と一緒に書き込んだ。
『シェスタもできないしな』
『それはやばいな』
『昼のワインもセーブしているしな』
イタリアやスペインのシェスタはこの時代にも存在している。イタリア人はシェスタをしないと倒れるとまで言われている。なおイタリア人は他にも昼はフルコースでデザートにはジェラート、ワインは必須、そこに美女がいないと午後動かないと言われている。連合軍の者達もそれを信じていて実際にイタリア人の捕虜の為にジェラートやワインも用意していた。食べさせて収容所である程度働かせるつもりだったのだ。だがシェスタのせいでそれが全然出来なか

ったという話が残っている。
『おかげでクタクタだよ』
『けれどそれだけじゃないだろ』
『ああ』
無論それだけではない。
『やっぱり負けたっていうのがな』
『辛いよな』
結局話はそこに行き着く。
『そこは』
『何とかして欲しいよな』
こうも書かれる。
『そこんところは』
『だから今回の選挙はとりわけ真面目に選ばないとな』
結論はこうであった。
『誰にするべきか』
『はっきりしているのは二人』
その二人が誰であるかは言うまでもない。
『二人だけかも知れないな』
『どっちにしろ選ばないとな』
『ああ』
『誰にするか』
『今のところ支持はどうなってるんだ？』
そこに注目する案が出された。
『どっちの支持が上なんだ？』
『侯爵だ』
ギルフォードであった。
『マスコミの調査だとな』
『何処のマスコミだ？』
『イギリスじゃないよな』
マスコミの印象操作が警戒されていた。といってもエウロパのマ

スコミの印象操作はそれ程でもないのであるが。少なくとも二十世紀後半から二十一世紀前半の日本のマスコミの様な酷さはない。日本のマスコミは大嘘をつくのも平気だったし数の誤りが指摘されれば数の問題ではないと居直るような始末であった。なおこれは何処ぞの異常な宗教団体でも狂気の独裁国家でもない。民主主義国家のマスコミにおいてである。恐ろしいブラックジョークであるが現実の話であったのだ。その時の日本のマスコミの異常さは今でも歴史書に残っている程である。とりわけ様々な世界に介入してしたい放題をした愚劣な老人のことは有名である。この老人は千年経った今でも連合の歴史、とりわけ日本の歴史において悪名を残している。

『いや、ポーランドのマスコミだ』

全く関係のない国が出て来た。

『あそこのマスコミの調査さ』

『ポーランドか』

『じゃあ大丈夫みたいだな』

『そうだな』

皆ポーランドと聞いてとりあえずは安心した。それからまた述べた。

『やっぱり侯爵で決まりかね』

『その判断はまだ早いぜ』

『そうか』

『そうだよ』

こう言われる。

# 第二十七部第三章　もう一つの嵐その十八

『まだはじまってもいないんだしな』
『全部これからなんだよ』
『そうか。そうだよな』
それを聞いて納得したようであった。
『祭りはまだか』
『しかもだ』
不敵な笑みの顔文字がついていた。
『長い祭りになるぜ』
『しかも楽しいな』
『じゃあ俺達もそれに入るか』
『というか入らないといけないだろ』
選挙ならばこれは当然であった。
『やっぱり』
『まあそれはそうだけれどな』
それは彼等もわかっている。政治に興味がなければこうした掲示板でこうした話はそもそもしない。興味があるからこそ書き込んでいるのである。
『今回は特別だってことか』
『ああ、そういうことだな』
その書き込みに頷く書き込みが返る。
『誰を選ぶかで』
『エウロパが大きく変わる』
皆それを感じて。緊張を覚えていた。
『今のままじゃどっちにしろエウロパは駄目だぞ』
『袋小路か』
『じゃあ聞くけれどな』
話はエウロパの問題の核心に迫ってきていた。

『このままこの狭い場所でずっといるか？』
『ずっとか？』
『そうだ、ずっとだ』
そう問い詰められる。
『どうなんだ、そこは。ずっといていいのか？』
『ずっといたらどのみち終わりだろ』
認めるしかないような書き込みであった。
『このままだと』
『エウロパだけじゃ。ずっと俺達はこのままだな』
『そうだよ。ずっとこのままだ』
エウロパは人口が一千億になったところで止まっている。これは厳しい人口抑制政策の結果である。当然ながら中絶を認めているし避妊も大々的に行われている。これは全て狭いエウロパではこれ以上の人口を養えないからである。連合でも中絶を認めているがそれとは事情が全く異なるのである。連合は権利として認めているがエウロパは必然として認めざるを得ないのである。そこに両者の置かれた境遇の差があるのだ。もっとも中絶を認めないという者は連合にもエウロパにもいる。宗教的な理由からのことが多い。
『それで連合もこのままだ』
『連合がこのままっておい』
これはエウロパにとっては悪夢であった。
『あっという間に人口が三兆から四兆になってるんだぞ』
『その連合がこのままいくってことは』
『もう俺達には絶対に手に負えない相手になるぞ』
『そうしたら』
彼等にとって最悪の悪夢が脳裏に浮かんできた。
『連合に飲み込まれる』
『俺達は奴等の奴隷か』
『そうなりたいか？』
返答がわかっている質問であった。

『連合の軍門に下りたいか？』
『誰がそんなもの』
やはり返答はこうであった。
『連合にだけは絶対に嫌だ』
『俺もだ』
『そうだな。しかしだ』
忌まわしい過去のことがここで出される。
『総督府はもうないぞ』
『わかってるさ』
忌々しげな返事であった。言わずともわかっている。彼等にとってサハラ総督府は人口の流出先であり人口問題の解決先であったのだ。そうした意味で彼等にとっては生命線であったのだ。それを失ったこともエウロパにとっては大きな痛手だったのだ。

## 第二十七部第三章　もう一つの嵐その十九

『また攻め込めないか』
『無理だな』
それこそ果たせない夢であった。
『流石にもう』
『シャイターン主席がいる限りな』
『くっ、どうしようもないのか』
認めたくはない現実であった。
『もうサハラに行くことは無理か』
『サハラはそれだけは阻止するだろうな』
一度奪い返したものをもう一度奪われるという間抜けもそうはいない。それを考えればエウロパがまたサハラに進出することは絶望的であった。
『それに。今の俺達にはもうその力はないしな』
『そうだったな』
『連合に負けたせいで』
そういうことであった。敗戦のダメージはここでも彼等を責め苛んでいたのだ。
『サハラは諦めるしかない』
『わかった』
それが結論であった。忌々しい結論であった。
『しかしだ』
だがそれでも話は続く。
『それで諦めるのか？違うだろ？』
『まさか』
返答はすぐに返って来た。チャットのような速さであった。
『諦めたら終わりだろうが』
『じゃあ何処に行くんだ？まさかニーベルングとブラウベルグを突

っ切るのか？』
既に名前を変えられた二つの場所だがあえてこう呼んだのである。
多分に負け惜しみでしかないが彼等にも彼等の意地があるのだ。
『できたら苦労はしないさ』
本音ではそうしたいが誰が見ても不可能であった。
『別の場所があるだろ』
『ああ、北と西な』
そこしかなかった。
『何十万光年もあるよな』
『そこを突っ切ってか』
『正直辛いだろ』
まず思うのがこれであった。
『あそこを抜けるのは』
『けれど調査も中継基地も造っていってるんだろ？』
それは事実である。だが中々進んでいないのもまた事実である。
この時代においても距離の問題は如何ともし難いものがあるのだ。
ワープ技術はあるが流石に何十万光年もの距離を突破するというものは存在しないのである。ものには何事も限度があるということだ。
『だからそれに賭けるしかな』
『賭けか』
何か絶望を感じさせる言葉であった。
『それって何かな』
『俺達ってそんなにまずいのか』
あらためて自分達の今の立場を認識せざるを得なかった。
『正直そうだろうな』
そしてそれを認める書き込みも当然書かれた。
『そうでもしないとな。結局は』
『惑星開発はどうなんだ？』
別の意見が書かれた。
『連合並とはいかないがマウリア並になったら』

『二千億は生きていけるだろ』
『確かにな』
これは事実であった。連合の惑星開発の技術は素晴らしい。冥王星の様な星でもガス状の惑星でも居住可能にしてしまうのだ。その技術は見事なものである。

## 第二十七部第三章　もう一つの嵐その二十

『連合並だったら三千億以上だろうな』
『かなり大きいぞ、それは』
『しかしだ』
ここで大きな根本的な問題に当たる。
『何だ？』
『問題はあの連中が教えてくれるか？』
『ないな』
流石にそれは有り得なかった。
『マウリアにしろ』
マウリアは長年の連合の同盟国である。エウロパと交流があるにしろそれでもその位置は不動のものである。そのマウリアが技術を易々と渡す筈もないのだ。
『連合なんてそれどころかな』
『今の俺達の惨状を嘲笑っているだろうさ』
見事なまでにその通りであった。
『自分でやるしかないが』
『それもやるしかないさ』
そうであった。結局はそれもやるしかないのだ。
『それでもやっぱり大々的な解決はな』
『進出か』
『そうさ、暗黒宙域の果てにな』
結論はそれしかなかった。
『そこにあるものを掴み取るしかないか』
『けれどどうかね』
それに対して不安を感じる書き込みが為された。
『そこにあるのは希望かな』
『どういうことだ、それは』

『だからだよ』
その不安が今述べられる。
『そこに何か得体の知れない文明がいて俺達が入れなかったら』
そうしたケースも充分考えられた。とにかく先には何があるのか全くわかっていないのだ。
『洒落にならないだろ』
『洒落にならないどころじゃないぞ』
突っ込みもまた深刻なものであった。
『連合の、ほら』
『シャバキか？』
彼はエウロパにおいても有名人であった。言うまでもなく奇人変人としてだ。それでも有名になるのは彼にしてはそれだけ世の人々がこれからの恐るべき未来に対して危惧を抱いているからいいことなのだ。そう精神病院で心から喜んでいるのである。
『そう、そのシャバキが言っていたみたいにな』
『なるっていうのか』
『まさか』
普通に考えてシャバキの言うことは誰も真には受けない。
『そんなことがあるものかよ』
『幾ら何でもあいつの言うことはな』
『それもそうか』
言い出しっぺもそれで納得しだした。
『よく考えたら』
『そうだよ』
『それだけはないって』
『しかしだ』
そのうえで出された言葉であった。
『あそこまで極端ではなくともだ』
『可能性はあるってか？』
『自分達のことで考えてみればいいさ』

そう書かれた。
『実際にいきなり自分達の側に異質の存在が出て来たらどうだ？』
『怖いな』
答えは一言であった。またそれだけで充分であった。
『それもかなりな』
『怖いってものじゃないぞ』
こうも書かれる。既に人類が何度も経験してきたことである。特にエウロパはそうした経験が多かった。しかもそのいずれもが恨みを買う結果になっている。それは多分に彼等の自業自得であるがそれでもそうした経験があるのは紛れもない事実である。
『連合よりも下手をしたら』
『そちらの方が』
『そういうことだ。争いになる可能性は非常に高い』
嫌な予想が書かれた。
『そうなれば輝かしい未来どころか』
『暗澹たる未来だな』
『そのままＳＦ小説だな』
しかし大きな違いがあった。それは他ならぬ予想される現実かも知れないということなのだ。このことが今掲示板にいる彼等を暗澹とさせていた。

# 第二十七部第三章　もう一つの嵐その二十一

『何か新天地に出て戦いっていうのはな』
『勘弁願いたいな』
『あくまで仮定だがな』
それはそうである。確かに仮定だ。例えどれだけ嫌なものでも仮定なのだ。そう考えれば気が楽なものであるが暗澹なものは完全には消えない。
『しかしな』
『俺達の未来は明るくないのかね』
『それもわからない』
結局はそうなるのだった。
『どうなるのかもな』
『何だよ、それって』
『これだけ暗いものを感じさせらたってのにそれかよ』
『じゃあ聞くが』
一人の書き込みが参加者達に問う。
『わかるか？完全に』
『完全にか』
『そうか。わからないか』
人にはどうしても不可能なことが幾つかある。そのうちの一つが未来を完全に見ることである。如何なことをしてもそれは無理なのだ。タイムマシンはこの時代においても発明されていない。何度も何度も挑戦し何とか開発しようという者はそれこそ一千年前から存在して今もいるのであるがそれでも発明されないのだ。不可能ではないのかといった声もかなり強い。時間を飛び越えるということはそれこそ神の領域で侵すものではないという意見もある。
『どっちにしろ生きていくしかない』
こう書かれた。

『生きて未来を切り開くしかな。ないな』
『戦いの未来でも絶望の未来でもか』
『さもなければ連合に下るだけだ』
『くっ』
認めたくない現実だった。感情をそのまま書く者が今出た。
『それは嫌だろう？』
『それだけはな』
『誰があんな奴等に』
感情がストレートに吐き出される。これはそのままエウロパの感情であった。彼等のプライドがそれを許さないのだ。人には必ずプライドがある。それが許さないのだ。
『膝を屈するものかよ』
『だったらわかるな』
『ああ、よくな』
忌々しげだがそれだけにストレートな書き込みであった。
『わかったさ』
『それ位ならどんなエイリアンにも勝つさ』
エイリアンという言葉が出たがこの時代では異星人とは全く違った使われ方をしている。異星人は所謂知的生命体であるがエイリアンはクリーチャー的なものを意識しているのである。つまりエイリアンとは怪物と同義語になっているのである。エウロパではそうであるし連合においてもサハラにおいてもそれは同じである。
『何があってもな』
『じゃあ決まりだ』
やはり結論はこうであった。
『暗黒宙域を突破するしかないな』
『そうだな』
『それしかないな』
彼等はそれぞれ書き込んでいく。
『その第一歩か、今度の選挙は』

『そういう意味もあるな』
それがあらためて認識される。強い認識であった。
『確実にな』
『未来を決める選挙か』
急に意味が大きくなった。
『大袈裟かな』
『いや、そうでもないだろ』
これについてはすぐに否定された。
『実際どんな選挙でもそうだしな』
『そうか』
『そうだよ』
それが彼等の間で確認される。
『選挙はどれでもな。それを考えると』
『決して軽いものじゃない』
あまり意識されないが実際はそうなのだ。たかが選挙だがされど選挙なのである。その一票が国や自分の未来を大きく変える可能性があるのである。
『だからよく考えようぜ』
『わかった』
すぐに頷く書き込みが書かれた。
『そういうことならな』
『絶対にな』
『さて。じゃあ俺も考えるか』
意見がかなり出たところでこう書かれた。
『これからじっくりな』
『そうだな。選挙は長いし』
『その間考えようぜ』
彼等は口々に、いやそれぞれの手で書き合う。だがその早さも内容も会話めいていた。それだけ話の間が近いものになっているということであった。

『それから答えを出せばいいな』
『ああ、そうだな』
『じゃあ俺は』
一人抜けようとしてきた。
『これでな』
『何だ、飯か？』
『いや、酒だ』
同じようなものだがそれは違っていた。
『約束していたんだよ、仕事仲間とな』
『そうか。じゃあな』
『ああ。フランスワインは最高だぜ』
『勝手に言ってろ』
やっかみの言葉が書かれた。
『このエスカルゴ野郎が』
エウロパでもその国の食べ物から相手を罵倒することがある。連合でもそうであるがこれは多分に愛称めいている。フランスはエスカルゴでドイツはソーセージ、イギリスはローストビーフとなっている。連合の者達も唖然としたという伝説が残っているイギリス料理であるがそれでも罵倒に使われるような料理がちゃんと存在する。イギリス人は内心自分達にもそうした料理があるのだと自慢していたりもする。
『へへへ、悪いな』
顔文字つきでその罵倒に返事が返った。
『それじゃあな』
『俺はイタリアワインといくか』
イタリア人が書いたものであるのは言うまでもない。
『あんたがフランスならな』
『俺はドイツだ』
最後はそれぞれの国が出た。国ごとの意識はまだ残っていた。それが出た掲示板でのやり取りであった。エウロパもまた動こうとし

ている中での些細な話である。

# 第二十七部第四章　嵐が迫りその一

嵐が迫り

ティムール軍とアヤグーズ、ハサン両軍を中心とした共同軍はそれぞれコム星系に向かっていた。共同軍の先頭には女王ブルコルジのシャハラザードがあった。

優美なシルエットである。アラビアンナイトの語り部であるその名に相応しい姿であった。だがこのシャハラザードは爪も牙も持っていた。言うならば美しい獣であった。

ブルコルジはその艦橋において進撃する全軍の指揮を執っていた。その中で傍らに控える参謀達に問うのであった。

「コムまではあと幾日ですか」

「はっ」

早速参謀の一人がアヤグーズ式の敬礼の後で彼女の問いに答えてきた。

「あと三日です」

「三日ですか」

「そうです」

「二日にできませんか」

報告を聞いた後でそう注文をつけるのであった。

「二日にですか」

「戦場に到着するのなら早い方がいいです」

そう参謀に述べるのであった。

「だからこそ」

「だからこそ？」

「速度を進めておきたいのですが。どうですか」

「わかりました」

参謀達は彼女の言葉に応えた。

「それでは速度を」

「御願いします」
言葉遣いは丁寧だがその語気は鋭いものであった。
「相手が相手ですし」
「シャイターン主席」
シャイターンという言葉に反応しない者はいなかった。サハラにおいて魔王と恐れられている男である。しかも彼等は既にその恐ろしさを味わっている。これは当然であった。
「何を仕掛けて来るかわかりません。だからこそ」
「戦場への到着は早い方がいいと」
「先んずれば人を制す」
古くよりある言葉である。そもそもは項羽が言った言葉である。彼はその言葉通りに戦いそうして覇王になった。最後の最後では敗れてしまったにしろ。
「そういうことです」
「では必ず進まないといけないと」
参謀の一人が女王に問い返した。
「そういうことですか」
「そうです」
こくりと頷いて述べた。
「一日でもその差が」
「その差が」
「勝利の分かれ目となるのです」
峻厳な事実であった。実際に戦場というものは一瞬の時間の差で勝敗が決する。そうであるからこそブルコルジは軍を戦場に急がせているのである。
「三日でならどうなるでしょうか」
「少なくとも一日を浪費することになります」
答えるその声がさらに鋭くなった。
「一日でも」
「一日ですか」

「その一日で戦場の整備及び準備を整えておきましょう」
「勝利の為に」
参謀達もその言葉を鋭くさせる。女王の心が伝わったのだ。
「わかりました」
そこにはギーヴとバンダルもいた。彼等がまず女王の言葉に頷いたのである。彼等はハサン軍であっても彼女の心意気に魅せられていたのだ。
「それでは我々も」
「陛下と共に」
「申し訳ありません」
ブルコルジはそのハサンの軍人達に対して言うのだった。
「ハサン軍である貴方達にまで」
「陛下」
ギーヴがその言葉にすっと笑ってみせた。今更何を、という言葉であった。心が伝わっているからこその言葉であった。見れば顔もそうなっていた。
「ハサンはアヤグーズにとって兄の様な国です」
「妹を助けない兄なぞこの世に不要です」
「兄ですか」
「友人と言いましょうか」
既に属国だのそういった意識は消えていた。彼等は対等な相手としてアヤグーズを見ておりブルコルジも女王として見ていたのである。

## 第二十七部第四章　嵐が迫りその二

「友人を見捨てる友人なぞ」
「この世で最も下劣な存在です」
「かたじけないと申し上げておきます」
ブルコルジは彼等から顔を離して述べた。背中だけを見せている。
「ただ。それだけですが」
「それだけで充分です」
「ですから我等もまた」
彼等はまた言う。
「共に戦場に向かいたいのです」
「だからこそ」
さらに述べるのだった。
「勝利をこの手に」
「ティムール軍をアヤグーズから叩き出しましょう」
「わかりました」
背を向けたまま答える。
「それでは共に」
「はい、共に」
ハサン軍もまた心を同じにしていた。共同軍はそのまま一直線に戦場に向かうのであった。その速度はさらに速いものになっていた。
ブルコルジは艦橋から離れて自室にいても軍服を脱ぐことはなかった。その凛とした顔をそのままに質素な自室で写真を見ていた。そこには彼女の家族があった。
我が子達である。夫はもう亡くそこには子供達だけがいる。四人の子供達をその手に抱いて笑顔で微笑んでいる自分の姿がそこにあった。
その自分を見てついつい微笑む。彼等こそが自分の幸せであるから。

この子供達の為にも敗れるわけにはいかない。そう決意したところで扉をノックする音が聞こえた。
「入りなさい」
写真から目を放してそう告げる。すると部屋に二人の侍女が入って来た。
「時間ですね」
「はい」
「それでは陛下」
二人は部屋の掃除をはじめた。ブルコルジはそれを見て部屋の端に位置したのだった。侍女達はその彼女に対して静かに告げてきた。
「申し訳ありません」
「暫しお待ちを」
彼女達は告げる。
「掃除が終わるまでの間は」
「ご迷惑ですが」
「構いません」
だが彼女はそれをよしとした。そうして侍女達に穏やかな声をかけるのであった。
「いつも申し訳ありません」
「いえ、これが仕事ですから」
「私達の」
「貴女達のですか」
「左様です」
また女王に対して言うのであった。
「そうですね」
ブルコルジはそれを聞いて何かを悟ったようであった。
「確かに」
「ええ。ですが」
「それが何か？」
二人は今の女王の言葉が意外だったのだ。それで目を丸くさせた。

「それぞれの責務があるのです」
それが彼女が悟ったことであった。
「それを果たすことこそが大事で」
「そうですね」
「それだけです」
「問題は。それをどれだけ完全に果たすか」
問題はそこであった。そこを見て考えに入るのであった。
「それこそが問題なのですね」
「その通りです」
「だからこそ私達もまた陛下の身の回りを世話させて頂きます」
「有り難うございます。では私は」
「陛下は」
その黒い目が輝く。毅然とした光で。
「貴女達を守りましょう」
「戦いに勝たれてですね」
「その通りです」
それを新たに誓う。同時にさっきの写真を見ていた。

## 第二十七部第四章　嵐が迫りその三

「思えばです」
そうしてまた言う。
「守ることができるのも命があればこそですね」
「はい」
侍女の言葉に頷く。
「命をかけなければならないがその命があればこそ」
「そうです」
侍女の一人はブルコルジの言葉に応えた。
「何事も命があればこそです」
「そうですね」
ブルコルジも今それを心の中で確かめていた。
「命があればこそ戦場にも立てる。しかし」
「しかし？」
「それを捨てなれかばならない時もあります」
「命を」
その言葉は一際強く重いものであった。侍女達の心にもそれは響く。
「そうです、命をかけてでも果たさねばならないことがあります」
そうしてまた言った。
「それが今です」
「私達は戦いのことはわかりません」
「ですが」
侍女達はその言葉を聞いて言うのだった。主を見ながら。
「全てを賭けられておられるのですね」
「この戦いに」
「賭けなければならない戦いですから」
その言葉には最早何の迷いも未練もなかった。だからこそ言える

言葉であった。戦士として軍人として。彼女は生きて死ぬつもりだったのだ。
「何としても」
「では陛下」
「私達は」
侍女は強い声でまたブルコルジに言うのだった。
「その陛下を何があっても」
「御護り致します」
「有り難うございます」
その強い顔に微笑みが宿った。それが実に美しい絵の具となっていた。
「ではその心。有り難く受けましょう」
「御願いします」
侍女達は頭を垂れる。彼女達の心も今受けたのであった。
部屋の掃除が終わった。侍女達が去ると今度は給仕頭が部屋に入って来た。彼が来た理由はわかっている。ブルコルジはその彼に問うてはいるが。
「食事ですね」
「はい」
頭を下げて述べてきた。
「お持ちしましょうか」
「いえ、それには及びません」
そう彼に告げた。
「私が行けば済むことです」
「それでは陛下」
給仕頭はそう述べて彼女を食事の間へ案内した。廊下を通る間左右に兵士達が控えている。それはまるで王宮の中のようであったがそれでも実に質素であった。何処までも質実剛健を尊ぶアヤグーズ王家に相応しい様相であった。
食事の間もそうであった。そこは普通の部屋と何も変わりがない。

ただ黒い簡素だが大きなテーブルがあるだけである。しかしそこには白い木綿のテーブルかけがかけてあるだけだ。ただそれだけで他には何の装飾もない部屋であった。
そこのテーブルに着くとすぐに料理が運ばれてきた。その料理も普通の将兵が食べるものと全く同じであった。やはり女王が食べるものではなかった。
ブルコルジが簡素な食事を食べているその頃。シャイターンは豪奢そのものの様々な装飾で飾られた一室で絹のテーブルかけの上に紅い薔薇の花を飾りそのうえで様々な馳走を前にしていた。その中の一つを食べながら側に控える参謀達に声をかけるのであった。
「もうすぐだな」
「はい」
参謀の一人が彼に答えた。一礼して。見ればシャイターンの後ろには六人の武装した仮面の将校達が控えている。彼等もここにいたのだ。
「コムに到着します」
「あと何日だ」
シャイターンは今度はそれを問うた。
「あと何日でコムに到着するか」
「三日です」
「そうか」
シャイターンは三日と聞いて満足気に笑うのであった。
「丁度いいな」
「宜しいのですか、それで」
「充分だ」
そのうえでこう述べた。
「アヤグーズ軍とハサン軍はおそらく我々の到着よりも早い」
「早いと」
「一日前に到着しているな」
それはもう読んでいた。ブルコルジが兵を急がせるのを既に読ん

でいたのである。これは情報収集よりも彼の勘からであった。

## 第二十七部第四章　嵐が迫りその四

「そうして準備に取り掛かっている筈だ」
「そのままにして宜しいのですか？」
「いい」
しかもそれもいいと言う。
「好きにされてばいい」
「ですが閣下」
参謀の一人が焦りを抑えられずにシャイターンに問うた。
「質問をお許し下さい」
「言っている筈だ」
シャイターンは自信に満ちた声で彼に言葉を返した。
「私に言いたいことがあるならば何時でも誰でも言っていいとな」
「はっ、それでは」
シャイターンは他者の言葉を遮ったりはしない。よい意見ならば好んで採用する。そうした度量も併せ持っているからこその国家主席であるのだ、
「それでは相手に先を制されてしまいますが」
「そうだな」
シャイターンはそれも認めた。
「一日の差は実に大きな」
「それではだからこそ」
「だが」
しかしここで彼は言った。
「既に私が先を制していればどうか」
「既に先を！？」
「そうだ」
パンをその手で千切った。エウロパ風の白い柔らかいパンだ。彼はパンはそちらの方を好んでいた。敵のものをあえて征服している

のだと言わんばかりの態度で食べていた。
「そうならばどうか。それならば」
「既に敵を手の中に収めていると」
「私はそのつもりだ」
口元に悪魔的な笑みを浮かべて述べるのだった。
「だからだ。焦ることはない」
「左様ですか」
「そしてだ」
シャイターンはまた部下達に問うた。
「先に向かわせた別働隊はどうしているか」
「既にコムに接近しています」
グータルズが答えた。
「敵に発見されないように予定地点で潜伏しています」
「ならばいい」
彼の言葉を聞いて満足して笑うのだった。
「それで勝利は確約されたものだ」
「そうなのですか」
「それで」
参謀達はそれを聞いてそれぞれ言葉を出す。中にはまだ信じられないといった感じの声もあったがシャイターンにとってはそれもまた自身の勝利への輝かしい前奏曲であった。
「見ているのだ」
落ち着いた声でまた述べた。
「我が軍の勝利を。そして」
「そして？」
「華麗な滅亡をな」
右手で頬杖をついた。左手にグラスを持ち。ロゼのワインが妖しい光を放っていた。
「それはもうすぐだ」
「左様ですか」

「滅亡といっても様々なものがある」
シャイターンは笑みを浮かべて何かを見ていた。その何かが彼に言わせていたのだった。
「だが。それは華麗でなければならない」
「滅亡もですか」
「では聞く」
問うた参謀達に問い返した。
「ただ滅亡するだけでは。どうか」
「ただ滅亡するだけでは」
「味気ないな。華が散る時は美しく散るもの」
それは彼の美学だった。華を愛する彼の。
「国もまた華だ。それならば」
「美しく、ですか」
「私も然りだ」
急に自分についても述べた。
「そうでなければ意味がない」
「ティムールもですな」
「それは言うまでもないと思うが」
不敵な笑みを浮かべる。自信に満ちた笑みを。
「全ては華麗に勝つことにこそ意味がある。いいな」
「はっ」
「では今より」
「しかしだ」
焦りを見せていた部下達に対して告げた。
「焦ってはならない」
「むっ」
「見たところ貴官達は焦っているな」
彼は部下達もよく見ていた。既にそれを見抜いていたのである。

## 第二十七部第四章　嵐が迫りその五

「どうかな」
「それはまさか」
「そうです。我々は」
「それではだ」
ここでシャイターンは鈴を手に取って鳴らした。すぐに従者が一人やって来た。彼はその十社に対して一言こう告げたのであった。
「あれを」
「わかりました」
その従者は彼の言葉に頷くと一旦姿を消した。参謀達はそれを見て怪訝な顔を浮かべる。そうして彼等の主に対してその顔で問うのであった。
「あの」
「一体何を」
「すぐにわかる」
不敵な笑みのままそう返す。
「すぐにな。来たぞ」
「むっ」
その従者が帰って来た。見ればその手には幾つかの箱がある。数はそこにいる参謀達の数だけある。その数にも秘密があるようであった。
「私からの贈り物だ」
「閣下からのですか」
「また何故ここで」
「すぐにわかる」
彼は答えずにそう告げたのであった。
「まずは受け取るのだ。いいな」
「はあ」

「それでは」
参謀達はそれに頷き彼の横に並んだ。その従者は同僚達にそれぞれ箱を手渡し彼等は参謀達にそれを差し出して中を開けた。そこにあるのは。
「これは」
「一本だけだ」
シャイターンは今度はこう彼等に告げた。
「一本だけやろう。受け取るがいい」
「はあ」
「それでしたら」
参謀達はそこにあるものを受け取る。するとそれは忽ちのうちに崩れてしまった。それも全ての参謀達が持ったそれがである。これには彼等も驚きを隠せなかった。
「これは一体」
「どういうことですか！？」
「細工をしておいたのだ」
シャイターンは楽しげな笑みを共に彼等にそう述べるのであった。
「一本にな」
「葉巻にですか」
「そうだ」
箱には二本の葉巻があった。彼等のそのうちの一本を手にしてこうなったのである。
「一本は普通の葉巻だがもう一本は手に取ると壊れるようになっているだ」
「それはどうして」
「見ればわかると思うが」
シャイターンはそう彼等に言葉を返した。
「見れば？」
「そうだ。葉が離れていたな」
「あっ」

言われてはじめてそれに気付いた。見れば二本の葉巻のうち一本は奇麗だがもう一本は壊れた後を見てもやはりおかしかった。今ようやくそれに気付いたのであった。
「今気付いたな」
「は、はい」
「それでは」
「落ち着いて見ればわかったのだ」
シャイターンは言うのだった。
「葉巻の異変にな。しかし落ち着いていなければ」
「それもわからないと」
「どうだ。これでわかったな」
それを見せたうえでまた告げるのであった。
「貴官達は焦っていると」
「はい」
「確かに」
これを見せられては頷くしかなかった。シャイターンは葉巻を使ってそれをあえて見せたのであった。
「急ぐのはいい」
彼はまた言う。
「だが。焦ってはならない」
「焦っては、ですか」
「そうだ。それは破滅を招く」
こうも告げた。

## 第二十七部第四章　嵐が迫りその六

「特に戦争においてはだ。これで落ち着いたと思うが」
「確かに」
「申し訳ありません」
「わかればいい。そしてだ」
そのうえでまた述べてきた。
「コムに到着するのは三日後だ」
「三日後」
「あえて前に敵を見るぞ」
シャイターンは既にその目の前に敵を見ていた。女王と彼女が率いる敵軍を。それを見ても傲然とさえしていたのであった。
「いいな」
「はい」
「それではこのまま」
「速度、進路共にそのままだ」
あらためて指示を出した。
「わかったな」
「了解っ」
参謀達は一斉に敬礼する。そうして主に応えた。
「ではそのように。そして」
「そして？」
「その葉巻だが」
笑みを浮かべて参謀達にまた告げる。決して侮蔑したものではなく穏やかな笑みであった。彼は様々な笑みを浮かべることができる。そこにはこうした笑みもあるのだ。
「貴官等に渡そう。楽しく吸うがいい」
「有り難うございます」
「それでは」

「無論壊れていない葉巻をだ」
その笑みのままこうも告げた。
「それは安心してくれ」
「左様ですか」
「では喜んで」
見たところ彼等は皆喫煙派である。それも葉巻もいけるようであった。シャイターンのささやかな贈り物であった。
「兵達にも渡すものがある」
「それは一体」
「まずは戦場に行く前に」
「はい」
主の次の言葉を待つ。
「食事にワインをつけよう」
「ワインをですか」
「つまり酒だ。好きなだけ飲むようにと伝えよ」
「わかりました」
「それは今日だ」
さりげなく戦場には影響が出ないようにも配慮した。
「そして戦場で活躍した者には昇進とボーナスを約束しよう」
人参もぶら下げた。そうしたことも忘れない。
「わかったな」
「これで兵達も奮い立つことでしょう」
「人は大義だけでは動きはしない」
シャイターンは冷徹にそう述べた。
「見返りもまた必要だということだ」
「特に兵達は」
「兵だけではない」
兵士だから、将校だからといってここでは分けて考えてはいなかった。
「誰もがそうだ」

「誰もがですか」
「これは将校も同じだ」
それを今はっきりと言うのだった。
「見返りは弾むぞ」
「それでは我々もまた」
「無論だ」
またしてもあの自信に満ちた笑みを浮かべてみせた。
「遠慮なく敵を倒すがいい。いいな」
「はっ」
「それでは」
「別働隊にも同じだ」
こうも言葉を入れてみせた。
「彼等にも恩賞は弾むぞ」
「それはいいことです」
参謀の一人が笑顔でシャイターンの言葉に応える。
「彼等もまた喜びましょう」
「それでは閣下。戦場では」
「思う存分敵を屠れ」
あまりにも直接的な言葉であった。部下達の戦意をそのまま刺激する言葉であった。
「ただしだ」
「ただし？」
「全ては私の命じるままだ」
彼は冷徹でもある。その冷徹な目を見せる。そうしてその目で語るのであった。

## 第二十七部第四章　嵐が迫りその七

「それもわかっているな」
「はっ」
「それもまた」
参謀達は今度は条件反射的に応えるのであった。背筋が普段のそれよりも少し伸びているように見えるのは気のせいであろうか。
「無論承知です」
「だからこそ」
「ならばいい」
それこそが彼の望む返答であり様子であった。シャイターンはそれを見て内心ニヤリと笑っていた。だがあえてそれは顔には出しはしなかったのであった。
「では。行くぞ」
「コムまで」
「先にも伝えたが進路と速度はそのままだ」
そう告げる。
「いいな」
「了解」
「そのうえで全軍に告ぐ」
そしてまた言う。
「戦場に着いても全ては私の命じるままに動いてもらう。いいな」
「はい」
皆それに頷く。
「そういうことだ。それではそれまで各自休むがいい。いいな」
「わかりました」
将兵にも休息を取らせる。そうして彼等に英気を養わせた後で戦いに向かうのであった。実はここに大きな差が出ていたのであった。
「兄上」

フラームとアブーは兄の部屋にいた。そこで手にカードを弄びながらシャイターンに問うのであった。シャイターンは別の椅子のところでワインを楽しんでいた。
「何だ？」
「急がれない理由はやはりあれですか」
アブーが長兄に問うた。彼はフラームと共にポーカーに興じていた。
「あれとは？」
「将兵の英気を考えて」
「ふむ」
だが彼はその質問には答えなかった。ワインを飲み続けている。
「答えられないということは肯定でしょうか」
「そう考えるのだな」
「違うのですか？」
今度はフラームが兄に問うた。
「そう思えるのですが」
「別に隠してはいない」
彼の返事はこうであった。
「そのつもりだが」
「やはりそうですか」
二人の弟はその言葉を聞いて納得して頷く。カードはそのまま動いている。
「成程」
「今アヤグーズ軍とハサン軍は全速力でコムに向かっているだろう」
それはもう完璧に読みきっていたのだ。
「そうして到着したならばすぐに戦場の構築にかかる」
「休まずに」
「そうだ、休まずには」
彼はそこも読んでいた。
「これは非常に大きいな」

「ええ」
「それは確かに」
二人は長兄の言葉にまた頷くのであった。
「ここで将兵を休ませておくのとそうでないのとでは全く違う」
「ですが兄上」
ここでアブーが問うてきた。
「何だ？」
「それですと既に向こうが準備を終えています」
「アブーの言う通りです」
フラームはここではアブーに同意を示してみせたがこれには理由があった。自分があえてそうすることで兄の出方を見ようとしているのである。
「それでは先を制せられていて」
「遅れを取るかと」
「その心配もない」
しかしシャイターンな笑みも浮かべず極めて落ち着いた様子でそう二人に告げるのであった。彼もまたあえて笑みを浮かべないのであった。
「心配はないと」
「そうだ。先を制しているか」
「ええ」
アブーはまた言う。
「このままですとあちらが」
「その心配は無用だ」
しかし彼の考えは変わらなかった。
「無用ですか」
「そうだ。その理由はだ」
ワイングラスを掲げ。そうして述べてみせた。その動きは芝居がかっているものであったがそれでも演出としては見事な効果を弟達に対して見せてもいた。

## 第二十七部第四章　嵐が迫りその八

「既に私が先を制している」
「兄上がですか」
「情報収集は整っている」
まずはそれを出してみせた。
「敵の動きもこれからのことも全てわかっている」
「全てですか」
「そう。そして」
微かに口元が動いた。
「その疲れ具合もな。全てわかっているのだ」
「左様ですか。そのうえで」
「ふふふ。焦ることはない」
言葉を急がせた末弟を嗜める。次兄はそれを黙って見ている。やはりこういうふうに話が動いたのかと心の中で思いながら。
「そのうえで兵を動かしているのだ」
「ではあの先遣隊は」
「そうだ」
はっきりと答えてみせた。
「わかったうえでだ。いいな」
「では兄上」
フラームはここで自分の出番が来たと読んだ。そうして実際に発言をしてみせた。そうして兄に対して問うのであった。またシャイターンもそれを見て冷静な目をしていた。
「あの先遣隊は」
「既に指示は出している」
はっきりと述べてみせた。
「既にな。これでわかるな」
「はい」

わかった。もうこれで充分であった。兄の言うように。
「存分に。そういうことですか」
「そうだ。そうだからこそ」
シャイターンはまた言う。
「彼等を事前に動かしたのだ」
「疲れた敵を狙う伏兵ですか」
「そうした意味もある」
アブーのこの言葉を認めた。だがそれは完全にではない。
「だが。それだけではない」
「といいますと」
「彼等は予備兵力でもある」
「予備兵力でもありますか」
「その通りだ」
落ち着いた様子のまま言葉が続けられる。
「いいか」
そしてまた弟達に対して告げる。
「単に兵を分けたわけではないのだ。それは誰でもできる」
「誰でもですか」
「そうだ」
シャイターンははっきりと言っていた。自分は他の者とは違うのだと。
「疲れきった敵兵を倒し」
「そして我等の予備兵力でもあると」
「そういうことだ。わかったな」
「はい」
「そういうことでしたら」
二人もそれに頷いた。
「全ては兄上の手の中にあると」
「そうした意味で全ての先を制しているというのですね」
「単に兵を進めるだけならば」

シャイターンはグラスを置いた。もう酒はなくなっている。だがその香りと味を口と心の中で楽しみながら述べるのであった。酒の楽しみ方の一つだ。
「誰でもできるな」
「確かに」
「急げばいいのですから」
「そうだ。確かに兵を進めなければ話にならない」
これは言うまでもないことであった。戦争はまず兵を動かすことからだ。だがそれだけで満足するようではそれは二流なのだ。シャイターンはそう考えていた。
「しかしだ。真の用兵は」
「それより先にある」
「兵は神速を尊ぶ。だが兵は人だ」
そこが肝心なのであった。
「疲れもする。そこも考え」
「事前にも手を打っておくと」
「地の利を使うのもいい」
アブーに応えてから今度はこう述べてみせた。

## 第二十七部第四章　嵐が迫りその九

「しかし。その地の利を使うのもまた」
「人ですね」
「そういうことだ」
それをはっきりと告げてみせる。
「その人がどうあるかで地の利も変わってくる」
「ですが兄上」
アブーはここで別の点を述べてきた。
「何だ？」
「ブルコルジ女王もまた名将ですが」
今度は将について言うのであった。戦争というものは様々な要因が存在している。その中には将の器もまた存在しているのは古来より変わらない。
「それについては」
「それは否定しない」
シャイターンはそれを完全に認識していた。そう、完全にである。
「むしろ。戦場においては私にも引けを取らない」
「兄上よりも」
「いや、むしろ」
思案の目になった。酒がその思案をより鋭くさせていた。これはシャイターンだからこそであった。彼は飲めば飲む程冴える男なのだから。
「私よりも上かもな」
「それ程ですか」
「間違いなく戦場においては絶対の名将だ」
こうまで評する。
「だが。今は焦っている」
「焦っていますか」

「それが僅かだがミスを誘うのだ」
視点はそこにあった。彼はそこまでも見ていたのである。
「この場合は。彼女は兵の疲れを忘れている」
「それですが」
「こういう言葉があるな」
また述べた。
「狼に率いられた羊は羊に率いられた狼に勝ると」
「ええ。それは」
「昔から」
フラームもアブーもこれは知っていた。古来より言われていることである。名将に率いられた軍の方が強いのである。これは普遍である。
「狼に率いられた狼はどうだ」
「これ以上強い存在はないかと」
フラームが答えた。
「違いますか」
「その通りだ。狼と狼が戦えばそれは激しい戦いになる」
そのうえで自らをも狼と述べてみせた。シャイターン率いるティムール軍も精鋭であると言われている。千年も前より戦乱の耐えないサハラでは必然的に優れた者が軍に入りそうして強兵となっていったのだ。そうした歴史もあるがそれ以上にシャイターンが鍛えたことがティムール軍の強さになっていたのである。
「わかるな」
「兄上」
フラームは今の言葉に問うた。
「その狼と狼の差を分けるものこそがそれですか」
「そう、疲れだ」
シャイターンは一番上の弟のその言葉を認めた。
「疲れがあればそれだけ差が出るものだ」
「わかりました。だからこそここで英気を養い」

「決戦に向かうのだ」
「決戦に」
「アヤグーズの興廃はこの一戦にかかっている」
あえてアヤグーズの立場に立ってみせてきた。
「しかしそれは逆に言えば」
「我々にとってもそうであると」
「その通りだ」
フラームのその言葉に頷く。
「この戦いでおおよその優劣が決まる」
「ティムールかハサンか」
「いいな」
またしても言葉を鋭く、強くさせた。
「そこはわかるな」
「無論です」
アブーが答えた。

## 第二十七部第四章　嵐が迫りその十

「そういうことでしたら。やはりここで」
「それでも戦いは激しいものになるだろう」
シャイターンはそこも見ていた。彼は決してアヤグーズ軍もハサン軍も侮ってはいなかった。むしろ高く評価していると言えるものであった。
「間違いなくな」
「では一手も間違いはできませんか」
「相手も間違えることはないだろう」
そこでもブルコルジを高く評価していた。
「それも決してな」
「決してですか」
「彼女もまた名将だ。名将を知るのは」
そして言う。
「名将だ。だからこそわかる」
「ですか」
「彼女は強い。しかしだからこそ」
不敵な笑みになった。戦いを楽しむ目にもなる。
「戦いがいがある。それに」
「それに？」
「欲しくもなるな」
「兄上」
フラームが兄に問うた。
「ブルコルジ女王を欲しいと仰るのですか」
「私は優れた者が好きだ」
まずはそれであった。
「そして」
「そして？」

「美しい女も好きだ。彼女はまさにそれだ」
「では兄上。彼女をティムールに迎えられるのですか」
アブーはそれを問うた。兄の性格はよく知っているつもりである。彼は優れた者を愛する。彼等を次々に幕下に入れている現実から知っているのだ。
「そのつもりだ。妻としてではなくな」
「それはよいかと」
「そうです」
二人の弟は兄のそれに賛同するのであった。
「ブルコルジ女王は紛れもない名将。やはり」
「牝獅子を手に入れる。だが」
「だが？」
「獅子は誇り高い」
少し考える目になった。また別のものを見ているのがわかる。
「果たして。上手くいくかな」
「上手くいくのでは？」
「そうです」
ここで二人はいささか楽観的になっていた。
「倒して説き伏せれば」
「見返りもまた出して」
「そうかな」
しかし。それでも魔王の顔は懐疑的なままであった。
「そう上手くいけばいいがな」
「兄上」
フラームはまた兄に対して声をかけたのだった。
「あの女王は違うと仰りたいのですね」
「その通りだ。何度でも言おう」
シャイターンもまたこう言葉を返してみせる。
「あの女王は容易には私の下には来ないだろう。むしろその方が面白い」

「面白いと」
「そうだ」
その不敵な笑みのまま述べた。
「容易に誰もが入るというのは案外つまらないものだ」
それが彼の考えであった。そこにあるのは戦争も政治も何もかもを心から楽しんで動く者の目であった。今彼は全てを楽しんでいたのであった。
「だからこそだ」
「左様ですか」
「わかったな。だからこそ」
また言う。
「あえてそれでもいいのだ。手に入らないならば」
「それはどうなりますか」
「それはアッラーの御意志だ」
全てはアッラーの意志の下にある。シャイターン、いやムスリム達が持っているイスラム的運命論がここでも出るのであった。シャイターンもまたその中にあるのである。

## 第二十七部第四章　嵐が迫りその十一

「そうだな」
「確かに」
本質的に宗教家であるフラームは当然のようにその言葉に頷いた。シャイターン家は元々宗教家である。そうした意味では彼はシャイターン家の家督を相続しているのである。もっとも誰もがシャイターン家の主と言えばこのメフメット＝シャイターンを指差すのだが。
「それならばやはり」
「そうだ。わかったな」
「はい、ではその際は仕方ないとして」
「何もかもがそうだ」
やはりここでもイスラム的なものが出ていた。イスラム的達観である。これは日本やキリスト教の達観とはやや異なるものである。イスラム教は全てがアッラーの下にあるからこそそれから離れることはないのである。そういうことである。
「私が敗れるならばそれもアッラーの御意志だしな」
「ええ」
「そうですね」
フラームだけでなくアブーも長兄のその言葉に頷いた。結果としてそう結論付けられるのである。イスラムの考えを突き詰めていけば。だがそうだからといって何もしないというわけではないのである。それとはまた違うのがイスラムの思想なのである。
「まずは全てを果たす」
「はい」
二人は長兄の言葉に頷く。
「それからだ。アッラーが決められるのは」
「それに。気が楽ですしね」
フラームはふと笑みを浮かべて述べたのだった。

「戦いで死ぬというのは」
「そうだな」
これはシャイターンも同じ考えであった。これにも理由がある。
「ジハードで死ぬのだからな」
「そうすれば行く場所は一つです」
フラームはまた述べる。
「天国へ。それを考えると戦争というものもまたよしです」
「しかしだ」
だが彼はまた言うのだった。
「だからといって命を粗末にはしない」
「当然です」
確かに死は恐れない。しかしそうだからといって命を粗末にしないのがイスラムである。あくまで生き抜いて運命をアッラーに委ねるという考えなのだ。本人の意志と努力を肯定したうえで神に絶対に帰依しその意志に従う、そうした思想なのである。これが他の宗教にはかなり理解しにくいものであるのはこの時代においても変わりはしないのであるが。
「わかるな」
「では可能な限り戦われると」
「無論そのつもりだ」
アブーに答えてみせた。
「この身体がある限りな」
「左様ですか。それでは」
「一度や二度、いや」
シャイターンは言う。
「幾度敗れようとも私は諦めはしない」
「幾度もですか」
「この命駆る限り。何度でも戦うつもりだ」
「それでは若しこの戦いで敗れても」
「そのつもりだ」

返答はもう決まっていた。シャイターンはそれを言うだけだった。
「わかったな。私が死ぬのもまたアッラーの思し召しなのだ」
「では私もそうですね」
アブーは長兄の言葉を聞いて言うのだった。
「兄上がそうならば」
「その通りだ。全ての者がそうだ」
言い切った。イスラムの考えの下で。
「生と死はアッラーの御心の中だ」
「そういうことですね。それでは兄上」
「まずは全てを動き」
またフラームに告げる。
「そのうえでアッラーの御心に委ねる。いいな」
「はっ」
「それでは」
「さて。この時点で打てる手は全て打った」
シャイターンは戦場に話を戻す。それまでのことを思い出して言うのだった。
「何もかもな。後は戦場に到着してからだ」
「戦場ですか」
「少なくとも。楽には勝てはしない」
これは確信していた。
「あの女王もまた命を賭けているのだからな」
「左様ですか。ところで」
「どうした？」
話がまた動いた。今度は別の方面に関するものであった。
「南方の戦線ですが」
「オムダーマン軍か」
シャイターンはアブーの言葉にすぐに気付いた。南方といえば彼等である。
「そういえば彼等もまた勝利を収めているな」

「はい」
二人の弟が兄の言葉に頷いた。
「鮮やかなまでに」
「戦力的にも補給路もハサン軍の方が充実しているが」
「やはり初期の奇襲が効果的だったのでしょうか」
軍人のアブーがそこを指摘する。
「それは確かにな」
シャイターンもあの奇襲は効果があったとわかっている。しかしそれだけではとてもあそこまで進めはしないというのが彼の考えである。

## 第二十七部第四章　嵐が迫りその十二

「だがそれだけではない」
「それだけではありませんか」
「やはり戦略がしっかりしている」
それが彼の答えであった。
「奇襲からそれに繋げるのが上手い。それが今のオムダーマン軍を支えているのだ」
「左様ですか」
「無論アッディーン元帥の戦術指揮能力もある」
ダビデブ元帥率いるオムダーマン軍との戦いでの勇敢さと水際立った戦術指揮は既に人類全体に伝わっている。それの為にオムダーマン軍が勝利を収めているように言われているがシャイターンはそれだけではないと見ているのであった。
「だがそれを支えるのは」
「戦略ですね」
「その通りだ」
アブーにそれをはっきりと述べた。
「それに補給だ」
「補給ですか」
「我々と同じくな」
シャイターンもまた補給路を確保しながら慎重に兵を進めている。その為にかなりの兵を補給路への哨戒と防衛に回している程なのである。
「補給路には気を使っているな」
「そういえばですね」
フラームがここで口を開いた。
「オムダーマン軍は工兵も充実しています」
「そうだな」

それはシャイターンも気付いていた。工兵の存在は重要である。
「何でも南方統一以降工兵を充実させたそうで」
「理由はわかる」
南方は元々シャイターン家発祥の地である。だからこそ彼もそれがわかるのであった。
「南方の迷路の様な宙形に随分悩まされたそうだしな」
「やはりそれですか」
「南方は入らなければわかりはしない」
経験論である、だがこれが非常に強いのも事実である。
「そういうものだな」
「ええ、それは」
弟達もそれはわかっている。彼等も様々な経験により今長兄の右腕、左腕となっているからだ。才能だけで事を為すこともできる人物も確かにいるが普通はどれだけ才能があろうとも経験が必要なのだ。彼等にしてもそうでありシャイターンもまた同じというわけである。
「その通りです」
「アッディーン元帥は元々補給は重視していたがな」
それで既に過去の戦いで証明されていた。
「西方統一の折にな」
「確かサラーフの戦いの時でしたな」
フラームはそれを思い出した。
「あの戦いの前半は確かに」
「あの戦いは確かにサラーフ側の人材があまりにも劣悪だった」
サラーフの最大の敗因はよくそれだと言われている。マスコミの寵児だったナベツーラが政権に就きミツヤーンやホリーナム、キヨハームといったおよそ軍人とは考えられない者達を登用した為にサラーフの滅亡を招いたとされている。それは確かに真実だがそれだけではないのだ。
「しかし。オムダーマン側にも勝因があった」

「はい」
相手の敗因だけで勝てるものではない。こちらにも勝因が必要なのは当然である。言うならばサラーフは勝因を捨て、オムダーマンはそれを得ていたということだ。
「その一つが補給だ」
「オムダーマン軍は補給線の防衛をかなり重視していましたな」
フラームはそこを言う。
「それもかなり」
「そうだ。それが大きかった」
シャイターンはそこを指摘するのだった。
「それにあの時から工兵を上手く使っていた」
「補給基地、攻撃拠点の整備に」
「そうだ。アッディーン元帥は拠点主義だ」
そこもまた指摘された。
「敵を攻撃する際にまず攻撃拠点を置く。そうしてそこから攻める」
「そうですね」
アブーもそれに気付いた。
「これまでの戦いにおいては。そうして攻め入るにつれて拠点を深くしていき」
「最後は敵の本拠地を陥落させる。連合軍もそうだな」
「連合軍もですか」
「基本的に彼等はオーソドックスだ」
シャイターンは連合軍についての研究も行っていたのだ。彼はただ単にサハラだけを見ているのではない。人類全てを見ているのである。

## 第二十七部第四章　嵐が迫りその十三

「補給と情報の充実、優れた工作技術」
「それにより戦っていると」
「その通りだ。かつてのローマ帝国やオスマン＝トルコの様にな」
ローマもトルコも兵が強いだけ、その数だけで戦っていたのではないのだ。ローマ帝国はレギオンという方陣を組んだ縦走歩兵、オスマン＝トルコは大砲と銃で勝利を重ねていったがそこには大きな数がある。問題はその数と人員、装備を戦場まで容易に送られる整備状況が必要なのだ。彼等が長けていたのはそれである。道路を整備し補給体制を整えていた。だからこそ彼等は大帝国を築き上げ、維持していたのである。
「連合軍はそうした意味で素晴らしい軍隊だ。油断はできない」
「オムダーマン軍もまた」
「その通りだ」
アブーに答えた。
「連合軍は数が多い。だがオムダーマン軍は少ない」
「ええ」
「その違いはありますが」
「しかしだ。だからといって補給も工作も不要というわけではないのだ」
「同じ程重要なのですね」
「その通りだ」
また末弟に述べた。
「それで南方だが」
「はい」
話がそこに戻った。
「あそこで戦うには複雑な宙形を進むことがまずある」
「そうですね」

フラームはまた頷いてみせた。兄の言葉をそうして聞いていた。
「そこでの補給路の維持というのは」
「決して容易ではない。西方よりもさらに」
「それで工兵を充実させたのですね」
「そういうことだ。もっとも南方での戦いでは彼は慎重に兵を進めゲリラを少しずつ掃討していくことで補給路の維持を計っていたがな」
「それだけではないのですね」
ということである。それだけで補給路を維持できるかと言うと実に困難である。戦争は一つの対処だけでは完全に対処し得ない場合が実に多いものなのだから。
「それでも苦労があったのは事実だろう」
シャイターンはそこも読んでいた。
「何とか統一はできたがな、南方も」
「そういえば西方と南方の宙路もかなり整備されているようです」
「そうなのですか」
アブーはフラームの話を聞いてその次兄に問うた。
「それは初耳ですが」
「知らなかったのか」
フラームはそれを聞いていささか顔を顰めさせた。
「アブー、これは知っておかなければならないことだぞ」
「申し訳ありません」
次兄からの叱責に頭を垂れる。
「多分に政治的な話だが。だからこそ余計に」
「知っておかなければならないと」
「御前も私もただシャイターン家の書、剣だけではないのだ」
そもそもフラームは文官でありアブーは武官である。長兄であるシャイターンが彼等の上に立つという形になっている。しかしだからといってフラームもアブーもそれぞれの文と武にだけ携わっていればいいというわけではないのだ。高官になればなる程どちらの知

識も求められる。これはこの時代においても同じである。とりわけ戦乱の続くサハラや貴族主義であり政治家と軍人の区別がやや曖昧なエウロパは余計にそうである。
「どちらも知っておかなければならない」
「この場合は書であると」
「そうだ」
フラームははっきりと告げた。
「工兵を使っているが政治なのだ」
「政治ですか」
「より言えば軍事行政になる」
今の人類においては八条義統が最も得意とするものである。軍は強いだけではただの張子の虎だ。万全に動けるシステムと環境がないと何にもなりはしないのだ。
「オムダーマンは西方と南方を領有した」
「はい」
これはもう言うまでもないことである。
「そうなれば西方も南方も同じになるな」
「はい、それは」
これもアブーのわかることであった。アブーとてそもそもはかなり聡明な若者である。だがあまりにも若いのと軍人としての方面に関心が偏っているだけなのだ。フラームもまた同じようなものであるが彼は最近軍事も学んでいる。ここが違うということなのだ。
「だからだ。西方と南方を同じ程度に整備しているのだ」
「南方の物資を移動させやすくして」
「西方からも容易に入られるようにな。流通もよくなる」
「流通もまた軍事には大事だ」
それまで暫くは話を聞いているだけだった長兄がまた口を開いてみせた。

## 第二十七部第四章　嵐が迫りその十四

「流通もですか」
「連合では殆ど経済だけに使われる言葉だが」
少なくとも連合の殆どの者にとっては流通の整備は経済的な理由からである。サハラでもそのイメージは強いがシャイターンはここであえて経済以外の流通について言及してみせたのだ。
「軍事のものもあるのだ」
「軍事も」
「軍が動き易ければ動き易い程いい」
シャイターンは言う。
「だからだ。彼は南方の宙路も整備したのだ」
「そうだったのですか」
「オムダーマン軍の兵が容易に増えたのもそのせいだ」
フラームがまた末弟に述べる。
「徴兵した兵達がすぐに集まるのはな。そのせいなのだ」
「つまりは移動が容易だからですね」
「そうだ。わかってきたな」
末弟の言葉に表情をよくさせた。
「どうやら御前も政治がわかるようだな」
「いえ、それはまだ」
だが彼はまだそれは自覚してはいなかった。
「恥かしながら今の言葉ではまだ」
「それを自覚するのもいいことだ」
長兄はその彼に告げた。
「わかっていれば対処ができるからな」
「左様ですか」
「そうだ。とにかく今オムダーマンの工兵はいい」
そこをまた指摘する。

「それが今の彼等の進撃も支えている」
「では兄上」
アブーはそこまで聞いて言うのだった。
「我々もまた」
「そうだ。戦時中とはいえ指示を出しておく必要があるな」
シャイターンは冷静に述べた。
「そうではないか」
「はい」
「その通りです」
二人の弟達はむべもなく答えてきた。これまでの話では当然の流れであった。
「それではすぐに」
「かかりますか」
「軍には私から達を出しておこう」
シャイターンは即決した。そこまで何の迷いもなかった。
「それでいいな」
「異論はありません」
「私もです」
フラームとアブーはそれぞれの口でそう答えるのだった。
「それではいい。では」
「そうして兄上」
そのうえでフラームは兄に問うた。
「どうした？」
「工兵はそれでいいとして」
「まだ何かあるのか？」
「はい。それを使った今後ですが」
彼はそれについて言及するのであった。今彼は政治家の顔になりそれで長兄に対して述べていた。彼は宗教家であるがそれと共に、いや若しかしたらそれ以上に政治家であるかも知れなかった。ムスリムにおいては珍しいと言えるタイプであろう。本来イスラムでは

聖職者はおらずそうした意味で完全に世俗化しているからだ。元々シーア派の一派であるシャイターン家は宗教家も持っているのである。ここがスンニー派等多数派とは違っていた。なおサハラではシーア派も多い。そもそも二十世紀後半のイスラム原理主義の影響もあるがそこにはシーア派の過激な思想もあった。サハラのイスラムは連合やマウリアのそれに比べてかなり原理主義的なのだ。そこにシーア派のような厳格な宗教倫理も存在しているのである。なお連合のイスラムはスンニー派が圧倒的多数でありしかもその摂理はサハラのスンニー派よりもさらに穏やかなものになっている。連合とサハラの明らかな違いの一つであるとされている。

「工兵を使ってだな」

「そうです。道を作るべきではないかと考えます」

フラームは兄にそう述べるのであった。

「オムダーマンと同じく。如何でしょうか」

「そうだな」

彼は次弟の提案にその鋭い目を光らせてきた。

「悪くはないな」

「それでは兄上」

「そうだ。それもまた検討しておく、いや」

ここで急に言葉を変えた。

## 第二十七部第四章　嵐が迫りその十五

「是非共。実現しなければな」
「その通りです。そうすれば北方とこの東方が大きくつながります」
「ティムール領全体にルートを設ける」
シャイターンはこうも言った。
「そうして速やかに各地に兵を送られるようにするぞ」
「はい」
フラームはあらためて頭を垂れた。
「そうされるのが宜しいかと」
「つまり」
それを聞いていたアブーが声をあげてきた。
「オムダーマンと同じことをされるのですね」
「そうだ」
シャイターンは今度は末弟に答えた。
「その通りだ。これでわかったな」
「ええ」
アブーは敬礼で長兄に答えた。
「道の重要性が」
「そうした意味でローマは実に偉大だった」
またローマについて語られる。
「そうしたことをあの時代で完全にわかっていたのだからな」
「そもそもはアケメネス朝ペルシアからですね」
フラームは古の大帝国を例に出してきた。ペルシアはもうなくなった筈であるが連合にはペルシア王国という国が存在している。一応はペルシア人の末裔を自称しているがそもそもアケメネス朝もササン朝も歴史の遥か彼方の国家でありその民族も消え失せてしまっているのでこの主張は甚だ眉唾である。だが連合ではそれで通っている。アッシリアやフェニキアとそうした意味では同じ存在である。

「道を築いたのは」
「いいことだ。モルトケもそうだしな」
「鉄道も入りますか」
「結局は同じことだ」
シャイターンはこう評する。
「兵や物資を速やかに多量に移動させるのだからな。道も線路もそうした意味では全く同じものなのだ」
「そうですか。そう考えると」
「わかり易いか」
「はい」
アブーは明るい顔で長兄に述べた。
「私はティムールの鉄道の責任者ですから」
「あれはあえて御前にしたのだ」
シャイターンは今それを明かしたのだった。
「あえてですか」
「これをわかってもらう為にな」
「そうでしたか」
「そうだ。わかったのならばいい」
満足した笑みを末弟に見せて述べた。
「任じたかいがある」
「有り難うございます」
「道も線路も宙路も全て同じだ」
またそれを言う。
「そう考えれば容易い話だ」
「柔軟に応用して考えればいいと」
「それは重要なことだ」
シャイターンはアブーの心に刻み込むようにしてそれを言うのだった。
「わかったな、これで」
「はい。これで」

アブーもそれに頷く。
「わかりました」
「これは軍政の一歩になる」
シャイターンは次に軍政についても言ってみせる。これについてはアブーと同じ考えであるのがわかる。彼もまた一代の軍政家であるからだ。戦略戦術だけではないのだ。
「よく覚えておけ」
「はい」
「戦略と戦術はその次でいいのだ、本来な」
そのうえで戦略と戦術についても言及する。これを軍政よりも下に置くのは政治家の目であるがシャイターンはこの時完全に政治家になっていた。
「そうなのですか」
「連合軍を見ればわかる」
また連合軍について言及する。
「彼等は戦略はしっかりしている。それは軍政によって支えられているのだ」
「補給、情報等の各システムと法整備」
フラームはそれ等をすぐに出してきた。
「そういったものがあってこそ」
「そうだ。戦術なぞはこういったものがしかりしていればどうにでもなるものだ」
「そうだったのですか」
「では連合軍について聞くが」
シャイターンはアブーに対して連合軍について尋ねた。

## 第二十七部第四章　嵐が迫りその十六

「彼等の戦術はどう思うか」
「連合軍のですか」
「そうだ。正直に述べよ」
「あまりこれといって見るものはないかと」
これがアブーの連合軍の戦術に対する評価であった。
「ないか」
「はい。どれもオーソドックスであり戦術的に目立ったものはありません。ただ」
「ただ？」
「かなりマニュアル化していると見受けられます」
彼は連合軍の戦術をこうも見ていた。
「マニュアル化か」
「はい。そう見受けられますが」
見ればアブーは政治のことを語るのとはうって変わって鋭くそれでいて澄み切った目になっていた。それは彼が軍事に関しては極めて優れた資質と知識を持っているからである。
「臨機応変ですがその都度戦うやり方が決まっています」
「それがパターンだというのだな」
「違うでしょうか」
「その通りだ」
彼は末弟の言葉を認めるのだった。静かに頷く。
「よく気付いたな」
「有り難うございます」
「連合は処刑の仕方は様々なバリエーションがあるが戦術は決まっている」
シャイターンはまた述べた。
「誰かが言ったか」

「連合のあの処刑は特別です」
アブーもフラームも急に顔を顰めさせた。なお連合では少年法なぞという無意味なものはない。加害者の人権なぞというものも一切ない。この前強盗殺人した十五歳の少年達は生きながら手足を寸刻みにされ内蔵を引き摺り出されて処刑された。当然これも麻酔なしである。少年達は生きながら何日もかけてゆっくりと殺されてその罪を償ったのである。なおその屍は野生動物の餌にされそこまで放送された。連合は処刑を実況中継する習慣になっているのだ。実に素晴らしいことと言えよう。
「アッラーの教えではありませんな」
「ジャハンナムの処刑をそのまま再現したものありましたな」
焼けた鉄を飲ませる処刑方法もある。あえて地獄の処刑を再現することもある。
「連合の者達のあれが理解できません」
「向こうも同じことを言っている」
だがシャイターンは弟達の嫌悪に対して平然と言うのだった。
「彼等も我々が残忍だとな」
「まさか」
アブーはその言葉をすぐに否定した。まさかというのが顔にも出ていた。
「そんな筈が」
「戦場で人が多く死んでいるからだ」
シャイターンは冷徹なまでに落ち着いた声で述べた。
「サハラは戦乱が耐えない。好戦的で血を好むとな」
「それはサハラの事情です」
アブーは自分の声が憮然としたものになっているのを感じた。不愉快さを感じているのだからこれは当然のことであった。彼にとってはそうである。
「我々とて好んで戦争をしているわけではありません」
「それは彼等もだ」

シャイターンはそれをはっきりと述べたのだった。
「彼等とて無闇やたらとああした処刑をしているのではない」
「そうでしょうか」
今度は懐疑的な声になる。彼には信じられない話である。
「連合を見ていると。凶悪犯といえど嬲り殺しにするのを楽しんでいるとしか」
「確かにその一面はある」
これは否定できなかった。実際に連合では処刑はショーになっている。凶悪犯が惨たらしい処刑の中で絶叫し悶えながら無残に死んでいくのを喝采をあげて見るのが常である。そうしてその凶悪犯に罵声と浴びせるのも常だ。サハラから見ればそれは非常に惨い話なのだ。
「しかし。それはあくまで凶悪犯に対してだけだ」
「そうなのですか」
「そうだ。我々が必要に応じて戦争をしているのと同じだ」
シャイターンは末弟に述べる。
「好きで処刑をしているわけではないのだ」
「戦争と同じですか」
「彼等には彼等の事情がある」
シャイターンは言う。
「連合は雑多なモザイク国家群だ。それにモラルも雑多だ」
「あれだけ多くの宗教に民族があるからですか」
「民族も文化もな」
シャイターンはアブーの言葉に続ける。
「そうして文明も。我々のように一つではない」
「我々以上に様々な人間がいるのですね」
「そうだ。悪人もだ」
シャイターンは便宜上犯罪者を悪人と表現した。もっともシャイターンも自身を悪人であると思っているが。だがこの場合の悪人とシャイターンが自任している悪人とはまた違うものである。これを

わかったうえで話をしているのである。

## 第二十七部第四章　嵐が迫りその十七

「様々な悪人がいる。そうした中で治安を維持するには」
「そうした刑罰も重要なのですか」
「我々のようにコーランにのっとればいいというものではない」
イスラム以外ではコーランは絶対ではないのだ。コーランはあくまでイスラムの中で絶対のものであり無謬のものなのだ。宗教が違えば価値が変わるのはバイブルでも同じである。
「連合では絶対のものがないのだからな」
「絶対のものがないのですか」
「唯一の絶対のものはない」
シャイターンは連合をそう見ていた。
「だから。アノミーにも陥りやすいと言える。価値観が認められず」
「それでなのですね」
今度はフラームが兄に問うた。
「連合の中で凶悪犯が多く、彼等に対して酷刑が行われるのは」
「そうだ。そうした凶悪犯を罰し、悪をした場合にはどうなるかを自分達が自分達に見せているのだ」
「成程」
つまりは自己確認の為でもあるのだ。無論それだけの事情ではないが。そこには先に述べたショーという一面もあるし被害者側の意見もある。だがそれと共にこうしたアノミーに関する一面もあるのは事実である。連合の複雑な一面がここにもあるのだ。
「だからだ。彼等が格別残忍でもないのだ」
「そうなのですか」
「文化的な潜在意識もあるだろうがな」
シャイターンはフラームに言うと共にそこも言うのだった。
「文化的な」
「中国にアメリカにロシア。そしてラテン系、東南アジア」

ざっと主要国達を述べる。
「古の民族達もそうか。その歴史においては」
「残忍な処刑が多いですね」
フラームは自分の歴史の知識から答えた。
「考えれば。イスラムでは到底ないような」
「エウロパも同じだが。彼等はそれは今のところは忘れているな」
「ええ」
エウロパでは加害者への配慮も見られている。同じく人権を重視していてもそこが連合とは違う点であった。エウロパは二十世紀後半的人権思想が色濃いのだ。
「あくまで今のところは、ですが」
「素顔は。最も残虐かも知れないがな」
二人は無意識のうちにシニカルになっていた。
「だが。今は確かに違う」
「ええ」
「連合はそれも復活しているのだ」
「残忍な処刑もまた」
「それもある」
中国にしろアメリカにしろロシアにしろその処刑はかなり残忍なものがあった。これは各国の事情があってのことである。これもまた歴史なのだ。
「そうしたことも踏まえて考えなければならない」
「そうだったのですか」
「そしてだ」
シャイターンは話を戻しにかかった。
「戦術がパターン化しているのもまた連合独自の考えだ」
「そうなのですか」
「処刑が惨たらしく雑多なのと同じになるか。その根は」
シャイターンは言うのだった。
「連合は合理的な一面も強い」

「その合理的な一面によりそうしていると」
「そういうことだ」
そうアブーに述べる。
「どうした場合にどうした戦術を採用するべきか。それを研究したうえで完全にマニュアル化してそれを実行に移す」
「それが連合だと」
「私はそう見ている。彼等は違うと言うかも知れないがな」
「ですか」
「学んでみればいい」
アブーを見ての言葉だった。
「彼等の戦術も。かなりよくできていることがわかる」
「そうなのですか」
「彼等はあくまで合理的だ。それに基いて練られたものだ」
シャイターンはそこまで見ていた。ここまで見られるというところに戦術家としてのシャイターンの能力が現われていると言えた。
「見れば見る程面白い」
「そうなのですか」
「戦術は多くのパターンがあることに越したことはない」
一応はこう述べる。
「だがそれは必ず勝つことは前提だ」
「それは確かに」
アブーも軍人だ。それはわかる。

## 第二十七部第四章　嵐が迫りその十八

「それが果たせない戦術は何の意味もない。そういうことだ」
「そうですね」
これは誰もがわかることだった。戦術とは戦場で勝利を収める為のものだ。それを果たせない戦術というものはその時点で何の意味もないものなのである。
「だからだ。いいな」
そうしてまた彼は言う。
「勝利を収められる戦術があればそれだけでいいという考えもある。連合がそれだな」
「左様ですか」
「そして」
シャイターンはさらに言う。
「戦術は戦略の下にある」
「戦略の下に」
「戦略のミスは戦術の成功ではカバーし難い」
例外もあるが。おおむねはそうである。一つの戦場での勝利はその戦場での勝利でしかない。そういうことである。
「戦略での成功は戦術を覆い隠してしますのだ」
「では連合軍は戦術よりも戦略を遥かに重要視しているのですね」
フラームはそこを問うた。
「そう聞こえますが」
「それもかなりな」
シャイターンは次兄にそう述べた。
「あの長官はそう考えているのは間違いない」
「左様ですか」
「そして。戦略を支えるのは軍政だ」
戦略の上に軍政を置いた。

「彼はそういったものを全て理解して連合軍を作り上げているのだ。完全に政治家としてな」
「政治家ですか」
「わかったな」
アブーに顔を向けて言う。
「戦争は。政治家の仕事なのだ」
「政治家ですか」
「昔から言われている言葉だが」
アブーに対してだけではなかった。フラームに対してだけではない。これは自分自身に対しても述べられる言葉であった。それは。
「戦争は政治の一手段だ」
「それですか」
その言葉はフラームも知っていた。だから声をあげたのだった。
「そうだ。だからこそ」
「政治家でなければ出来はしないと」
「はじめるのも終えるのもな」
終わりまで指摘する。言葉もその流れも注意しながら進めているのがわかる。彼はここでは何時になく慎重になっていた。
「どちらも政治家の仕事なのだ」
「軍人がはじめるのでも終えるのでもないのですね」
「では聞くが」
問うたアブーに対して問い返した。
「はい」
「戦争をはじめるのはどうしてだ」
「宣戦布告からです」
アブーはその質問に答えた。シャイターンは末弟の言葉に笑みを以って応えるのであった。アブーはそれを見て合格だと思った。
「そうだ」
「左様ですか」
それを聞いてアブーも微笑む。やはり当たっていれば嬉しい。彼

はここではいささかその年齢に相応しい子供っぽさを見せていた。
「軍人は戦争がはじまってはじめて戦場に向かうな」
「駒として」
「それも合格だ」
シャイターンはアブーの今の駒という言葉にも合格を出したのであった。
「合格ですか、今も」
「軍人は戦争においては駒に過ぎないのだ」
「というと軍も」
「そうだ、全ては駒だ」
シャイターンは冷厳なまでに言い切った。
「駒だからこそ。勝手には動けないのだ」
「そうですね」
今度はフラームが応えて述べた。
「軍人はあくまで国防省、そして国家元首の命令によって動くものですから」
「それがわかっているのといないのとで全く異なるのだ」
シャイターンはそれがわかっていた。彼はそうした意味で軍服を着てはいても政治家であるのだ。それを自覚してもいるのである。
「軍人は命令があってはじめて動ける。これは元帥であっても」
「同じですね」
アブーもまた軍人である。そして元帥でもある。彼にしろ上官にあたる最高司令官の兄の命令によって動くものである。それは軍人として彼の骨の髄まで染み込んでいるものであった。しかし今は政治家としても求められているのであった。

## 第二十七部第四章　嵐が迫りその十九

「つまり。政治家が命令しない限り軍人は動かず」
「止まりもしないと」
「そうだ。軍人は戦争を行う」
こう述べる。
「しかし。あくまでそれは戦場に限ってだ。動くだけだからな」
「成程」
「そうした意味で彼等もまた官僚だ」
「官僚ですか」
「官僚もまた自分からは動きはしない」
これは民主政治が進むとさらに顕著になる。連合では特にそうである。官僚はそもそも実務を行うものであり自分達から動くものではないのだ。動いて指示を出すのは政治家である。言うならば官僚というものは駒でありコンピューターでしかないのだ。動かしデータを入力するのは政治家の仕事なのである。なおこれは政府に言えるものであり官僚は官僚で議会に自分達の意見を述べたりも出来る。議会はそれを聞いて政府をチェックする。そうした体制が連合やマウリアでも採られているしサハラでもかなり見られるものである。官僚は決して悪ではなく必要な存在なのだ。だからこうしたチェック体制が存在しているのである。
「それと同じことだ」
「軍人も官僚も同じですか」
「違うのはいざという時に持つものだけだ」
シャイターンは次弟に述べた。
「銃かペンか。それだけだ」
「それだけですか」
「その差しかない」
やはりその言葉は冷徹であった。

「深く考えることはない。それだけだ」
「わかりました」
フラームはここでまた一つ政治を知ることになったのであった。会心の笑みにそれが表われていた。彼もまだまだ学ぶべきものは多いと言えた。
「それでは私も今後それを」
「ただしだ」
シャイターンはここで次兄に釘を差した。
「はい」
「このティムールのことはわかっているな」
「勿論です」
フラームは余裕さえ感じられる笑みで長兄の言葉に応えた。
「兄上が全てです」
「そうだ。ティムールは私だ」
はっきりとそう言い切った。
「私があってこそなりたるものなのだ」
「そうですね」
フラームはその言葉にも頷く。
「だからこそ」
「それがわかっていればいい」
次弟を見て言う。
「わかっていればな」
「ええ」
つまりは独裁国家というわけである。議会も政府も政党も存在しているがシャイターンはその上にいるのである。従って彼は政府、官僚、議会の上に立ち何時でもそれ等に介入することが可能なのだ。簡単に言えばそれだけ強力な権限を持っているということである。これはティムールの憲法においても定められている。流石にシャイターン本人の名前は記されてはいないにしろ国家元首、即ち彼の権限は保障されている。そういうことなのだ。

「御前もだ」
「はい」
アブーに顔を向けると彼も頷いて応えるのであった。
「これでわかったな」
「少なくとも軍人というものについては」
彼はそう答える。
「そうですか。官僚ですか」
「官僚と政治家はまた違う」
かつては同じであったがこの時代ではそれがかなり分けられていた。やはりこれも政党政治と議員制度の故であった。そもそも昔は官僚だけでなく宗教家もまた政治家であった。政治家が官僚とも宗教とも分かれて独自に政治家になるというのも近代の特徴であるのだ。
「そこを理解するのだ」
「わかりました」
「だからだ。御前は政治家になるのだ」
あらためて弟に告げる。
「わかったな。いずれは御前に国防省を与える」
「私が国防省をですか」
「そうだ。そしてフラーム」
「はい」
今度はフラームに顔を向け次弟はそれに応える。
「御前は内務省だ」
「私は内務省ですか」
「御前達は私の両腕となりシャイターン家の両輪となるのだ」
そう二人に告げる。
「わかったな」
「わかりました」
「それでは兄上」
「まずは。この戦いを勝利で終わらせる」

シャイターンは言った。
「そしてハサンを併呑し」
「それからですか」
「それからのことはわかっているな」
その鋭い目で弟達を見据えてきた。
「わかっているならばだ」
「無論です」
「その先は」
弟達も同じ目になった。それが何よりの証拠であった。
「言うまでもありません」
「御安心下さい」
「流石はシャイターン家だ」
シャイターンはその答えに満足した。
「そうでなくてはな」
「それでは兄上」
アブーが言う。
「三日後に」
「勝利だ」
それだけであった。
「それだけだ。いいな」
「はっ」
「そこでは私は戦術家となる」
あえてこう言うシャイターンであった。
「わかったな」
「戦術家ですか」
「確かに戦術は戦略の下にある」
言葉を濁した感じになる弟達に対して述べる。
「しかしだ。決して戦術が劣っているというものではないのだ」
「左様ですか」
「それを間違えるのも愚なのだ」

彼は言う。
「むしろ戦術は芸術だ」
「芸術ですか」
「鮮やかに、見事に勝つのも戦術ならば苦難の末に勝利を収めるのも戦術だ」
一口に戦術と言っても様々である。そこには無数の戦い方があり無数の勝利と敗北が存在している。シャイターンはそれを見てこう述べているのである。
「だからこそ芸術なのだ」
「そうですか」
「今からそれを人類全体に見せよう」
そこまで言うと立ち上がった。
「よいな」
「わかりました」
「ではあ兄上」
「いざ。コムへ」
ティムール軍もコムへ向けて進撃する。そうして今両軍の決戦の幕が開こうとしていたのであった。後に言うコム星域会戦がはじまろうとしていた。

# 第二十七部第五章　コムの死闘その一

## コムの死闘

コム星系。今この星域にアヤグーズ軍とハサン軍が展開していた。彼等は必死に星系の戦場整備に追われていたのであった。

「どうですか？」

ブルコルジはその状況を提督達に問うのであった。

「今の状況は」

「はっ」

それに対して後ろに居並ぶ提督の一人が敬礼の後で答える。彼女は今乗艦の艦橋にいた。そこから全体の指揮にあたっているのである。モニターにはコム星系の宙図が映し出されている。

「今のところは順調です」

「順調ですか」

「はい。明日までには終わります」

彼はそう主に対して告げた。

「突貫工事でありますが」

「わかりました」

ブルコルジはその言葉を聞いて頷くのであった。特に困った顔は見せてはいない。

「ではこのまま急がせなさい。いいですね」

「わかりました。それでは」

「ティムール軍はまだここに来る気配はないのですね」

「それはまだです」

別の提督が彼女に答えた。

「明日かと」

「そうですか」

ブルコルジはそれを聞いて妙なものを感じた。それは顔にも出ていた。

「おかしいですね」
「確かに」
それにギーヴが答える。彼の他にもハサン軍の提督や参謀達もそこにいるのであった。
「あのシャイターン主席ならばすぐにでもこのコムへ来ると思ったのですが」
「そうですね」
ブルコルジもそう呼んでいた。それもあり戦場への到着を急がせたのである。ところがその読みは外れた。彼等の到着は明日だというのだ。
「どういうことでしょうか、これは」
「シャイターン主席です」
バンダルもそれを言う。
「何かあると思った方がいいですね」
「それはわかっています」
彼女もそう読んでいた。シャイターンの話は最早言うまでもない。優れた戦術家でもあり謀略家でもある。それがわかったうえでの話なのである。
「しかし。だとすれば」
「何を仕掛けて来るか、ですか」
「コムには何もないのですね」
それをまた提督達に問うた。自身の部下達にだ。
「彼等の伏兵等は」
「はい」
また提督の一人が彼女に答える。シャイターンが伏兵を好むことも彼等は知っていた。彼はその迅速な用兵と伏兵の使い方により今まで勝利を収めてきているのである。それを知っているからこそのアヤグーズ軍の動きであるがその両方がないとあってはどういうことか見当がつきかねていたのである。
「ありません。近辺も探しましたが」

「そうですか」
ブルコルジはそれを聞いて伏兵はないと思った。もっともこれは甘いのであるが。シャイターンは彼女達の裏をかいて思わぬ場所に兵を隠しているのである。だがこれを知っているのはシャイターンだけで彼女達は知らないのであった。
「それでは。そちらも問題ありませんね」
「そうなるかと」
「それでは。このコムに専念すればいい」
ブルコルジは話を聞いたうえでそう呟いた。
「そうなりますが」
「今のようにですな」
ギーヴがここで述べる。
「戦場を整備し防衛施設に配置して」
「そうです。今進めているように」
ブルコルジもそれに応えて述べた。その鋭いが美しい目が彼等とモニターに映る戦場となるべき場所を交互していた。彼女の関心は完全にこのコムという戦場にあった。
「していけばいいのですが」
「では陛下」
また提督の一人が言う。
「このまま。予定通り進めていきましょう」
「ええ、そうすれば」
別の提督も述べる。
「問題はないかと」
「わかりました」
ブルコルジは暫し考えたが頷いた。そうしてまた述べるのであった。

## 第二十七部第五章　コムの死闘その二

「それではそのように。そして貴方達も」
「はい」
提督達は主の言葉に一斉に敬礼して応えた。
「それぞれの艦隊に戻りなさい」
「わかりました。それでは」
提督達はそれぞれの艦隊に戻り指揮にあたることになった。そこにはハサン軍の者達もいるのは言うまでもない。その中でギーヴはバンダルに対して問うのであった。
「閣下。どうにもおかしいと思いませんか」
「おかしいと思うか」
「はい、あのシャイターン主席です」
彼等は既に自分達の乗艦にいた。そこの艦橋で話をしていた。
「既に仕掛けている状況ですが」
「彼ならばな」
バンダルもその言葉に頷いた。頷きながら銀河を見ていた。
「本来ならば仕掛けているな」
「そうです。それがないというのか」
「おかしいと思うのだな」
「ええ。何故でしょうか」
「勝てる自信がある」
バンダルは前を見据えながら述べた。
「だからこそ仕掛けないのか」
「あのブルコルジ女王にですか？」
ギーヴは今度はブルコルジの名を出した。彼女の戦術指揮能力はハサンの属国や正規軍はおろかサハラ全体においてもそうはいないレベルである。
「勝てる自信があると」

「シャイターン主席もまた優れた戦術家だ」
バンダルはそこも言う。これは事実である。
「それもあるが」
「しかしです」
ギーヴはそこに反論する。あえてだ。
「シャイターン主席は自分より上か互角と見るならばふどのような状況でも必ず策を用意してきました。今回だけそれがないというのは」
「有り得ないというのだな」
「私にはそうとしか考えられません」
ギーヴは怪訝な顔でそう述べた。
「それはどう思われるでしょうか」
「確かにな」
バンダルも怪訝な顔になっていた。彼もまた同じものを感じていたのである。
「彼ならばな。必ず策を仕掛けているな」
「それも既に」
「それがないか。それとも」
バンダルは警戒するような顔で述べる。
「既に仕掛けているか」
「そのどちらかですね」
「仕掛けているとすると」
彼はその仮定を採った。
「既に我々はその中にあるということになるな」
「そうです」
ギーヴの顔が暗くなる。
「そうなると」
「我々の運命は決まっているということになる」
バンダルの声も暗いものになっていた。
「そういうことだな」

「はい、今一度周辺を哨戒してみますか」
ギーヴはそれを申し出てきた。
「どうされますか」
「そうだな」
バンダルもそれに頷く。そうしてすぐに指示を出すのであった。
「我々だけだが。もう一度星系周辺を哨戒してみよう」
「はい」
ギーヴは彼のその言葉に頷いた。
「それではすぐにでも」
「うむ、偵察艇及び偵察機をすぐに出せ」
指示は現実のものとなった。
「それでいいな」
「はい。それで何か見つかればいいのですが」
「見つからないに越したことはない」
バンダルはこう述べた。

## 第二十七部第五章　コムの死闘その三

「本当に何もなければ、の話だがな」
「何もなければ、ですか」
「そう思いたいのが人の心だ」
意味深い言葉である。人は自分が願うことを無意識のうちに考えてしまう。それをあえて言ったのである。これはどの文明に属している人間であっても同じだ。人の本能として自分が願う方向についつい予想を立ててしまうものなのだ。そう、誰であってもだ。それが楽観的なものであっても悲観的なものであってもである。
「それならばな」
「若しいるとして今まで見つからなかったというのは」
「敵の隠密能力が優れているのか」
バンダルは今度はその予想を立てた。
「だとすれば。厄介だな」
「しかしそれだからこそここは」
「そうだ。慎重に探すぞ」
語るバンダルの顔が険しくなった。
「見つけられるのもこれが最後のチャンスだからな」
「そうですね。それが遅れれば」
「まずいことになる」
そういうことであった。彼はそれがよくわかっていた。だからこそ焦りも感じていたのだ。哨戒を急がせるのはその焦りもあったのである。
「わかったな」
「はい。では今よりすぐに」
「シャイターン主席の罠か」
バンダルはそれを呟いて不吉な顔になる。
「おそらくはある。だがそれは」

「それは」
「どういったものかはわからない。そして今やるのかどうかさえも」
「結局はわからないのです」
ギーヴは不安な顔で述べた。
「既に仕掛けているというのも予測でしかありませんし」
「我々にそれで心理的にプレッシャーを与えているのかな」
「それは間違いなくあります」
ギーヴはそう述べたうえで艦橋のモニターの左半分に映し出されているコム星系の宙図を見た。見ればそこには急激に整えられていく星系の防衛陣地もまた映し出されていたのであった。
「現にそれがあるからこそこうして今」
「守りを固めているか」
「そして一日早くここに来ました」
それについても述べる。
「女王陛下もシャイターン主席を警戒しておられます」
「そうだな」
警戒していると言えば問題があるが意識しているのは事実であった。シャイターンの軍略と謀略その両方をよく知ったうえでの今なのだ。敵を知り己を知らば百戦危うからずという。そうした意味でブルコルジはただの猛将ではなかった。だがこれを逆手に取ることが可能な者もいるのだ。人の心理を読んで戦術戦略を立てられるならばその者は間違いなく一級の人物と言える。そしてシャイターンの評価は一級の人物なのだ。
「それにより少なくとも今こうしていますし」
「それを考えると急いだのは失敗だったか？」
バンダルはそう考えだした。
「むしろそれよりも兵に休息を取らせて」
「そこまではわかりませんが」
ギーヴもそこまでははっきり言えなかった。顔が曇る。
「ですが。今こうして兵を休ませていないのは事実です」

「我々もまたな」
「それが悪い方に出なければいいですが」
ギーヴはまた述べる。
「それはどうなのでしょうか」
「だが今はその余裕がない」
それもいい話だがバンダルはこれもわかっていた。
「余裕がな。わかるな」
「はい。哨戒を急がさなければ」
ギーヴも述べる。
「そういうことですね」
「さらにわからなくなった」
バンダルの顔もまた曇った。
「本当に我々は罠にかかっているのか。それとも」
「こう焦らせること自体が彼の罠なのか」
「見えなくなってきてしまった」
彼等の周りを薄暗い霧が覆うとしていた。彼等はその中で一日を過ごした。結局哨戒を行っても怪しいものは見つからずハサン軍もアヤグーズ軍も殆どの将兵が碌に休息を取らないまま一日を過ごした。そうしてようやく全てを整えたところでティムール軍が戦場に到着したのであった。
「既に整えているか」
シャイターンは戦場に到着するとイズライールの艦橋からまず星系の状況をモニターで見た。見れば防衛陣地が見事に整備されアヤグーズ軍やハサン軍を護るようにして配備されていた。
「見事なものだ。彼等に都合よく整えられている」
「そしてです」
ここでハルシークが彼の後ろから述べてきた。
「我々に今にも攻撃せんばかりです」
「そうだな。少なくとも下手に進めば無駄な損害を受ける」
「はい」

二人は敵の陣地を見ながら述べた。見ればどの防衛陣地もティムール軍の進路に全て攻撃態勢を見せている。ただ一つ空いているルートの先にアヤグーズ軍達がいる。そしてその彼等も自軍の陣地に守られている。それは完璧なまでであった。シャイターンもそれを見ていたのである。

## 第二十七部第五章　コムの死闘その四

「そしてその先には、か」
「これは。必勝の陣です」
ハルシークは一言で敵の陣を見て述べた。
「ただ一つ空けているルートの先の敵を見ても」
「一気に決めるつもりだな」
見ればそのアヤグーズ軍もハサン軍も弓矢の形をしていた。突撃により一気にティムール軍を突き崩さんとしているのは明らかであった。
「そしてそれで我々が崩れれば」
「横にあるのは死」
言うまでもなくアヤグーズ軍の防衛陣地の攻撃を受ける。ビーム砲なりミサイルなりで蜂の巣にされるのは目に見えている。それだけでなく機雷も多く設置されている。しかも隠蔽なぞせず堂々と見せ付けて置かれているところに相手の考えがはっきりとあった。
「後ろに退けば」
「そのまま最後まで追い立てられて惨敗となるでしょう」
「天王山においてな」
シャイターンはこの戦いを分かれ目と言っていた。その分かれ目であることをまた強調したのであった。
「そうなれば我々は終わりだな」
「これまでの苦労が水の泡です」
「そこまでわかっていて向こうもここまでしてきた。立派なものだ」
「ですが閣下」
ハルシークは言う。
「我々もまた既に」
「そうだ。どうやら見つかってはいないようだな」
また敵の布陣を見て述べる。

「いいことだ。では問題ない」
「はい、それでは」
「敵の防衛陣地の射程や機雷源は避けよ」
シャイターンはそう指示を出した。
「わかったな」
「了解」
「わかりました」
ティムール軍はそれぞれ彼の指示に応えた。
「そしてそのまま敵軍に向かう。いいな」
「はい」
シャイターンの指揮の下ティムール軍は進撃を開始した。それを見てアヤグーズ、ハサン共同軍はまずは動かなかった。敵を見ているだけであった。
「そうですか。来ましたか」
ブルジルトはシャハラザードの艦橋にいた。軍服とマントといういつもの出で立ちでそこに立っていた。
「いよいよ、ですね」
「そうです」
後ろには参謀達が控えている。彼等が女王の言葉に応えた。
「我等が勝つか彼等が勝つか」
「それで全てが決まります」
「それでは陛下」
参謀達はブルコルジのその言葉を受けて声をあげた。
「このまま戦いですな」
「そうです。しかしまずは」
艦橋のモニターには今のコム星系の宙図が映し出されていた。そこにはティムール軍の姿もある。彼女はその姿を見ながら述べるのであった。
「彼等を待ちましょう」
「予定通りですか」

「はい、予定通りです」
そう参謀達に告げた。
「このまま。宜しいですね」
「わかりました。それでは」
参謀達はそれを受けてまずは控えた。モニターに映っているティムール軍はそのまま一つの宙路で彼等に向かって来ていた。それは事前の報告通り迅速なものであった。
「速いですね」
ブルコルジはその動きを見て述べた。
「話の通りですね」
「ええ」
「確かに」
参謀達もそれに応える。
「この機動力でも勝利を収めてきた彼等ですが」
「何か？」
「いえ、この速さでしたら」
その速さを見ての言葉であった。女王の鋭い頭脳はそこから一つの結論を出していたのであった。
「ここまで二日で来られると思うのですが」
「二日ですか」
「艦種を選べばより早く」
そうも述べる。
「ここまで辿り着くことが可能だと思うのですが。そこはどうでしょうか」
「さて。それは」
参謀の一人が女王の疑念に答えてきた。

## 第二十七部第五章　コムの死闘その五

「あくまで時と場合です」
「そうですな」
別の参謀の同僚のその言葉に頷くのであった。
「このアヤグーズは険阻な宙形ですし」
「それを考えれば速度は」
「しかしです」
ブルコルジは異議を次々に申し立てる参謀達に対して言った。彼等を見ずにモニターを見続けている。ティムール軍のその動きをである。
「このコムはその中でもとりわけ険阻ですが」
「それはそうですが」
「しかもです」
反論しようとする参謀達に対してさらに述べた。
「今彼等は我々の仕掛けた防衛施設や機雷源を避けながらです。それであの速度ですが」
「むっ」
「そういえば」
参謀達はその言葉を聞いて声を挙げた。そういえばそうなのである。女王の言葉を受けてあらためてそれに気付いた形となっていた。
「どう思われますか？」
あらためて彼等に問うた。
「それについては」
「確かに」
「今のコムよりは速度が出せる筈ですな」
参謀達もそう結論付けた。だがそれで話は終わりではなかった。
「そしてです」
「そして？」

「はい。彼等はあまりにも簡単に我等のところに来ています」
次に女王が指摘したのはそこであった。
「あまりにも簡単に。これは一体」
「動きが単調だと」
「そうです」
参謀の一人の問いにそう答えた。
「我々の意図を完全に把握しているか、若しくはその逆のように。これは」
「何か危険なものがあるでしょうか」
「あるとすれば、です」
女王の目が光った。
「それは一体」
「まさか」
「シャイターン主席はやはり」
ここで参謀達の頭の中にシャイターンが浮かび上がった。その稀代の策士が。彼は参謀達の頭の中で悪魔めいた邪悪な笑みを浮かび上がらせていた。
「我々に対して何かを仕掛けていた！？」
「だとすれば一体」
「動じてはなりません」
女王として、軍を率いる者として動揺を見せた彼等に対して鋭い声で告げた。
「指揮官や参謀が動じてどうなりますか」
「そうでした」
「申し訳ありません」
「わかれば宜しい」
まずはこれでよしとした。そうしてそれからまた述べる。
「しかしです」
「はい」
「その考えは間違ってはいないかも知れません」

先程のシャイターンについての考えについて述べるのであった。
「間違ってはいませんか」
「それは充分考えられることです」
そのうえで言う。
「あのシャイターン主席が私のこの布陣に何も感じていない筈はないでしょう」
「それは間違いないかと」
ブルコルジも当然ながらシャイターンという男を知っていた。そのうえで警戒していた。だからこそここまで準備を怠らなかったのである。だからこれは当然であった。
「それであの動きとは」
「あの御仁が何も感じないとは思えませんし」
「やはり」
「しかしそれでもです」
それでも彼女は言うのであった。
「このままの布陣でいきます」
「このままで、ですか」
「そうです」
また答えた。
「このまま。敵を待ちましょう」
「わかりました。それでは」
「このまま」
「敵が来たらすぐに仕掛けます」
ブルコルジの黒い目が光った。琥珀の光であった。

## 第二十七部第五章　コムの死闘その六

「宜しいですね」
「了解」
参謀達もそれに頷く。既にそれは決まっていた。そして今はそのままでいくことになったのであった。様々な疑念を抱きながらも。それで通すのであった。
シャイターンは迅速に兵を進める。そうして敵まであと少しの距離まで迫っていた。
「もうすぐだな」
シャイターンもまた艦橋のモニターを見ていた。そこに映し出されている両軍の距離はさらに狭まり接触まであと少しという距離にまでなっていた。
「間も無く戦闘だ」
「はい、間違いなく」
それにハルシークが答える。
「それではそろそろ」
「そうだな。彼等が動いてくれる」
口元だけに笑みを浮かべて述べた。
「そろそろな」
「そうですな。丁度その時間です」
「全ては予定通りだ」
シャイターンはその冷徹な、独特のその目でモニターを見ながらまた言った。
「このまま進め。いいな」
「はっ、それでは」
「敵が動いても構わん」
こうも言う。
「それも予定通りだ。ならばこそ」

「兵を前に」
「進め続ける」
彼は言い切った。
「このままな。わかったな」
「御意」
周りに控える者達が敬礼で応える。こうして両軍の衝突の時が狭まってきていた。
「間も無くだ」
シャイターンはその中でまた述べた。
「最初の段階だ」
「最初ですか」
「そうだ、まずはな」
そうハルシーク達に述べる。
「これが成功するかどうかで大きく変わる。しかし」
「しかし？」
「それは必ず成功するものだ」
笑う。その笑みはまさに魔王の笑みであった。勝利を確信する魔王の笑みであった。
「相手はそれに気付いていない。いや、気付いているかも知れないが」
「気付いていても？」
「それに対抗できなければ駄目なのだ」
そういうことであった。彼はだからこそ勝利を確信していたのであった。ブルコルジもまた勘付いてはいた。しかしそれが何かまではわからなかったのだ。それが勝敗を決するものであると。シャイターンはわかっていた。そうした意味で彼は勝利に向かっていた。
「さて。来るか」
また共同軍を見る。
「動けば。それがどうなのかがはっきりするがな」
「動くようです」

ハルシークがモニターを見ながら告げた。
「前に来ました」
「そうか。面白い」
シャイターンの笑みがさらに魔王めいたものになった。勝利への確信がさらに強いものになった証であった。それがはっきりとわかる。
「ならば。第二段階に入る」
「次にですか」
「左手だ」
シャイターンは自身の左手を高々と掲げた。すると。
「陛下！」
シャハラザードの艦橋において参謀の一人がモニターを見ながら叫ぶのであった。今彼等から見て右手に突如として一軍が姿を現わしたのであった。
「右手から敵が！」
「何っ！？」
ブルコルジはそれを受けてモニターを見た。見れば確かにそこに敵軍が姿を現わしていた。彼等は自分達の前にある共同軍の防御陣地を破壊しながら前に来る。前方にのみ防御態勢を敷いていたその陣地は為す術もなく破られ無残に突破された。そうしてティムールのあらたな軍はそのまま共同軍の側面に向かって来たのであった。
「いかん、このままでは！」
「陛下！」
参謀達はそれを見てまたブルコルジに対して叫ぶ。彼等が言うことは同じであった。
「横を衝かれます！」
「若しくは後ろを！」
「くっ！」
ブルコルジにも今の状況がわかった。そして今は決断しなければならない時であった。迅速な決断をである。それが迫られていた。

彼女とて愚かではない。その決断を下した。それは。
「下がります」
苦い顔だがそう告げた。

## 第二十七部第五章　コムの死闘その七

「全艦反転。宜しいですね」
「反転ですか」
「そうです」
危惧する顔になる参謀達に対してまた告げた。彼等は敵に背を向けることを恐れたのだがブルコルジはそれがわかったうえで判断していた。それには確かな根拠があった。
「まだ敵はこちらには届きません」
「それは安心していいと」
「そうです」
そういうことであった。彼女はティムール軍の速度を完全に認識した上でそう判断したのであった。優れた戦術的判断であると言えた。
「若しこのまま前向きに退けば」
「足が遅れますな」
「そうなれば側面どころか」
後ろから狙われかねないと。言外にそう述べていた。それは参謀達にも伝わった。参謀達もそれを聞けば判断するしかなかった。
「わかりました」
「それでは」
「そして全速力です」
こうの指示を出す。
「わかりましたね」
「はい」
「了解です」
「全艦反転！」
ブルコルジはあらためて指示を出した。
「このまま下がります。いいですね」

「はっ」
皆敬礼で応える。そうして素早く反転し後ろに下がるのであった。
それはティムール軍の追いつけない速さと距離であった。
「ふむ、退いたか」
「これも予想通りですか」
「そうだ」
シャイターンは戦局を見ていた。その間に彼等から見て左翼の援軍は周りの防衛陣地を次々と破壊していく。機雷源も砲撃で壊す。そうして彼等の動ける範囲を広くしていくのだった。シャイターンはそれを見てもほくそ笑むのであった。
「いい具合だ」
「戦場が広くなることがですか」
「そうだ。これでやり易くなる」
こうも言うのだった。
「動き易いに越したことはないな」
「確かに」
ハルシークは主の言葉に対して頷いた。
「その為の伏兵でしたか」
「伏兵は何も敵を狙うだけではない」
主にそうした用途で使われるのだが彼は今回はあえてその用兵を採らなかったのである。そうした意味で意外な用兵だったが決して奇手ではなかった。
「こうして。戦い易くするのもまた」
「そうでしたか」
「だが。早いな」
次に共同軍を見た。見れば彼等はもう安全な場所まで退きそこで布陣しようとしていた。シャイターンはその迅速な動きを見て言うのだった。
「この速さは予想していたとはいえ」
「現実に見ればですか」

「そうだ。やはり女ながらに猛将と言われるだけはある」
こうも評した。感嘆であった。
「見事だな」
「それで。次はどうされますか」
ハルシークはまた主に対して問うた。
「このままだと迎撃態勢を再び整えられてしまいます」
「そうです。しかも」
別の参謀が彼に言う。
「彼等は自分達の防衛陣地にその左右を守られています。我々は正面から攻めるしかありません。そうなれば」
「損害が大きくなるか」
「そうです」
その参謀は彼にはっきりと告げた。
「このままでは」
「どうされるのですか」
「ならば。方法は一つしかないな」
シャイターンは彼等の言葉を聞いてそう言うのだった。
「一つしかな」
「それは一体」
「別働隊と合流する」
まずはこう告げた。
「わかったな。まずは合流だ」
「合流ですか」
「そうだ」
参謀達に対してまた告げた。
「そして戦力を一つにさせる。わかったな」
「わかりました。ですが」
「ですが。何だ」
ここで言葉を濁した参謀の一人に問う。だが彼に視線は向けずモニターを見ていた。そこに映る自軍と敵軍から目を離さない。

「言ってみよ。何だ」
「それだけなのですか」
「そうだ、それだけだ」
やはり彼の方を見ずにこう告げるのであった。

## 第二十七部第五章　コムの死闘その八

「それがどうかしたか」
「だとすると」
彼はそれを聞いてわかった。シャイターンの考えが。それを自分で言うのであった。
「我々はこのまま敵と正面から」
「その通りだ」
シャイターンはやはりモニターを見たままだ。そのままで凄みのある笑みを浮かべた。その魔王の笑みを。
「このまま正面から攻撃する。いいな」
「それしかありませんか」
「相手は女王だ」
ブルコルジの名を出した。
「歴戦の勇将だ。それを破るとなれば」
「正面から堂々と戦ったうえだと」
「そうだ。他の方向も考えたのだがな」
しかし彼は今はそれを選んだのだ。これは戦術家、いや軍人としての本能からの選択であった。何故か、彼は軍人でもあるからだ。政治家だけではないのだ。
「不服か？」
「いえ」
「まさか」
彼等はシャイターンのその言葉に対して不敵な笑みで言葉を返す。彼等にしてもそれは望むところであった。それは何故か。彼等もまた軍人でありそして。
「我等はアラブの頃より」
「戦いを愛してきましたので」
それが理由であった。彼等は今その身体に流れるムスリムの、ア

ラブの血に従ったのである。だからこそ今正面からの戦いに挑むのであった。
「だからこそ」
「喜んで参りましょう」
「では。それでいいな」
「はい」
返事はもう決まっていた。
「いざ戦場へ」
「そして女王の首を」
「ふふふ、それは駄目だ」
シャイターンはその不敵な笑みで血気にはやる彼等に対して言うのだった。
「駄目だとは」
「いいか」
彼は自分が率いる軍全体に告げた。
「あの女王は虜とするのだ」
「虜にですか」
「そうだ。確かに最悪の場合倒しても構わない」
意固地にそれを求める男ではなかった。それについては柔軟に述べるのであった。
「しかしだ。できることならば」
「虜とせよと」
「その場合は三階級の特進だ」
格別の報酬であった。
「下士官兵士ならば将校にしてやろう」
「将校にですか」
「そうだ。しかもだ」
報酬はそれだけではない。シャイターンは決して吝嗇な男ではない。むしろ報酬を弾むのでそれについては評判のいい男であった。人間というものでは報酬によっても大きく動くものである。彼はそ

れを誰よりもよくわかっていたのであった。
「ボーナスも弾もう」
「どれだけですか？」
「その者の年収の二十年分だ」
「二十年ですか」
「不服か？それだけの価値はあるからな」
シャイターンはそう部下達に告げる。
「サハラきっての勇将を捕虜とするのだからな。それだけは出すぞ」
「何と」
「まさかそれだけのものを」
誰もがこの言葉に驚きを隠せない。しかしそれでもシャイターンは彼等に対して問うのであった。己の言葉に念を押すようにであった。
「どうだ。足らなければ」
「いえ、まさか」
「そのような」
彼等の言葉はそれを否定するのであった。血気をさらに高めさせて言うのだった。
「それならば是非」
「あの女王をこの手で」
「他の敵に対してもだ」
そのうえで他にも報酬を示す。これはコムに来る前に言ったことそのままであった。
「倒せばそれに見合う報酬と地位を約束しよう」
「有り難き御言葉」
「ではいざ今より」
「進め！」
シャイターンの声が大きくなった。その声で全軍に告げた。
「いいな。我等はこれより正面から敵軍と戦闘に入る」
「はっ！」

部下達もそれに勢いよく応える。まるで波濤の様に。

## 第二十七部第五章　コムの死闘その九

「そして倒す。それだけだ」
「では今より」
「そうだ。行くぞ」
イズライールを前に出させる。それに全軍が続く。
「そして勝利を。いいな」
「了解！」
ティムール軍は進撃に移った。それが戦いの本格的なはじまりであった。それを見て共同軍も戦闘態勢に入った。
「陛下」
シャハラザードのモニターにバンダルが姿を現わす。その後ろにはギーヴもいる。
「いよいよですな」
「はい」
ブルコルジは鋭い顔で彼に応える。だがその物腰も表情も普段と変わりはしない。
「そうですね。それでは」
「迎撃ですな」
「そのつもりです」
こうバンダルに言葉を返した。
「敵が来るのならば」
「それでは全軍を以ってこのまま布陣しておきましょう」
「左右は既に防いでいます」
ブルコルジはここで自軍の防衛陣地について言及してみせた。
「ですから敵が来るならば」
「正面しかありませんか」
「上下もまた」
そちらにも言及する。

「既に機雷を散布しています。ですから」
「しかしです」
ここでそれまでバンダルの後ろで沈黙を守っていたギーヴが口を開いた。そうして彼女に対して己の意見を具申するのであった。
「先程のようにそれ等を破壊しにかかりませんか」
「それならばそれで好都合です」
しかしブルコルジはその危惧を余裕の笑みで受け流すのであった。
「敵がそちらに行けば」
「どうされますか？」
「それだけこちらへの兵力が減っている証拠。そこを衝きます」
「そして一気に倒すと」
「そうです」
そのつもりであった。守りを固めはするが敵がそうした動きを見せれば一気に攻勢に転じて敵を粉砕するつもりだったのだ。勇将らしい考えであった。
「ですから。心配はありません」
「それではこのまま」
「そうです。まずは迎撃です」
そう彼に答える。だが彼女の言葉はそれで終わりではなかった。
「しかし」
「しかし？」
「決して守りに徹するつもりはありません」
これもまた彼女らしい言葉であった。
「攻めます。宜しいですね」
「はい」
それにはバンダルが応えた。彼の予想した言葉であった。
「それではそのように」
「守るだけでは。アッラーは勝利をもたらしてはくれません」
どちらかというとイスラム圏では攻撃が尊ばれる。これはそれこそイスラム教が成立してからの話であるがこれはこの時代について

も同じであった。やはり彼等はアラブなのだ。
「だからこそ」
「承知です。それでは前に」
「そうです。ですがそれは」
「それも承知です」
バンダルは笑みになっていた。その笑みでまた言うのだった。
「防御陣地を利用しながら」
「それで行きましょう。それでは」
「我が軍も陛下の御言葉のままに」
あらためて彼女の指揮下に入ることを宣言するのであった。
「いざ。御指示を」
「では。全軍に告げます」
ブルコルジは彼の言葉を受けてあらためて指示を出す。それは。
「敵が射程に入ったならば」
「はっ」
「まずは一斉射撃を加えます」
最初はそれであった。全てはそれからである。
「そのうえで全軍突撃です」
「突撃ですか」
「そうです。それを繰り返します」
過激な防御であった。攻撃と言っても差し支えない。
「それで。宜しいですね」
「はい」
「それではそのように」
「それでは」
彼等はその積極策を採ることにした。それで向かうことになった。
共同軍は果敢に正面のティムール軍に向かう。ティムール軍もそれを確認する。

## 第二十七部第五章　コムの死闘その十

「来ました」
「わかっている」
シャイターンはその報告を受ける。だが全く動じたところはない。
「女王らしいな」
そう言うだけであった。落ち着いて。
「らしいですか」
「そうだ、こうでなくては面白くない」
そのうえでまたあの楽しむ笑みを浮かべる。
「こうでなくてな。では我々も行くぞ」
「前へ」
「そうだ、前だ」
指示には何の迷いもない。
「予定通りだ。しかしだ」
「しかし？」
「ただ前に出るのではない」
こう全軍に告げた。
「それはよく覚えておけ。いいな」
「ただ、ですか」
「すぐにわかる」
前に突き進む自軍に対してまた告げる。
「すぐにな。それでは」
「はっ」
「前へ」
ティムール軍も突き進む。そうして両軍は遂に激突したのであった。
「撃て！」
「撃て！」

シャイターンとブルコルジの指示が下ったのはほぼ同時であった。両軍は一斉に炎を吹きそれで互いを貫かんとしだしたのだった。
無数の砲撃が光の帯となる。そうして敵を撃たんとする。
その光の帯が激突する。二つの光の帯はそれで相殺される。だがそこにもう一撃来た。
それは共同軍のものであった。ブルコルジの素早い指示と彼等の熟練の動きがこれだけ早期の攻撃を可能にさせたのであった。
「敵の次の射撃です！」
「もうか！」
ティムール軍の将兵はそれを見て驚きの声をあげた。彼等にとっては思いも寄らない速さでの攻撃であった。驚くのも無理はなかった。
「閣下！」
「全艦回避運動に入れ！」
シャイターンは回避を命じた。
「それと共に前方にバリアーを集中させよ！」
「わかりました！」
皆それに頷く。そうしてシャイターンの指示のまま回避運動に入りバリアーを集中させた。そうして共同軍の攻撃をかわそうとする。
だがそれでも限度があり忽ち何隻かが撃沈される。しかもそこに共同軍の攻撃がまた来るのだった。だがシャイターンはそれに対してはすぐに攻撃命令を出した。
「全艦一斉射撃！」
「一斉ですか！」
「そうだ！今度はバリアーを張るな！」
そう命じる。
「エネルギーを全て砲撃に集中させろ。いいな！」
「わかりました！」
「それでは！」
皆それを受けて攻撃を出す。今度はティムール軍の攻撃が間に合

った。やはり共同軍にとっても続けて三回も全力攻撃を繰り出すのは無理があるようであった。三回目のそれは一回目、二回目よりは動きも遅かったのがその表われであｔった。
ティムール軍と共同軍の攻撃が激突する。今度はティムール軍が勝った。それで共同軍の艦艇の幾つかが炎となる。炎にならないまでも損傷を受けている艦艇もそこにいた。彼等のダメージは明らかであった。
しかし見ればそれはティムール軍も同じであった。的の二回目の攻撃でダメージを受けている艦艇が多く見られる。参謀達はそれを見てシャイターンに問うのだった。
「閣下」
「どうされますか？」
「第一陣は下がれ」
シャイターンはそれを受けてこう指示を出した。
「それにかわり第二陣が前に」
「はっ」
「それでは」
「ダメージを受けている艦艇は速やかに後方の工作艦の修理を受けよ」
こうも指示を出す。
「無理をすることはない。いいな」
「無理をですか」
「報酬も何もかも命があればこそだ」
そのうえで報酬をちらつかせるのであった。
「それならば無理をするな。いいな」
「そうですな」
「確かに」
皆それに頷く。報酬も命あってのものというのは彼等もよくわかっていた。シャイターンは自らがそれを言うことによって彼等にそれを教えたのである。

## 第二十七部第五章　コムの死闘その十一

「わかったな。それでは」
「はっ、それでは」
「そのように」
「そうだ。では第二陣前に」
そのうえであらためて指示を出す。
「それでいいな」
「わかりました」
こうして敵がダメージを受けてそれの対応をしている間に第二陣を出した。そうして今度は彼等に攻撃を命じるのであった。
しかしその頃には共同軍も立ち直っていた。そうしてティムール軍へ反撃を浴びせようとしていた。
「ミサイル射撃用意」
射程が縮まったのを見て今度はミサイルによる攻撃を命じるのだった。
「全艦ミサイル発射用意」
「ミサイル発射用意」
攻撃が復唱される。それを受けてミサイルの発射用意が整えられる。
そうして照準が合わされ攻撃が浴びせられようとしている。それと同時に敵の攻撃に備えてアンチミサイルミサイルの準備も整えられていた。
「敵、第二陣が前に出ています」
「新手ですか」
ブルコルジは参謀の言葉を聞いて鋭い顔を見せた。
「それだけ数に余裕があるということですか、向こうに」
「はい。ですが」
それでも参謀達は臆してはいない。数のうえでの劣勢も怖れはし

なかった。
「退けられない数ではありません」
「ですから」
「はい。そのまま攻撃に移りなさい」
参謀達だけでなく全軍に告げる。
「わかりましたね」
「わかりました」
「それでは」
「ミサイル発射！」
右手を思いきり振り下ろした。
「撃て！」
「撃て！」
またしても攻撃が復唱される。そうして今度はミサイルが放たれた。
それはティムール軍も同じであった。共同軍とほぼ同じ要領でミサイルを放つ。そしてそれは互いに敵を撃ち合うのだった。
またしても互いに多くの損害が出る。ティムール軍も共同軍も多くの損害を出す。撃沈された艦艇もあるがそれ以上に損害を受けた艦艇が多い。シャイターンもブルコルジもそれぞれその破損した艦艇の修復を命じるのだった。
しかしシャイターンはそれだけではなかった。ここでもやはり陣の入れ替えを命じるのであった。
「次は第三陣ですか」
「第三陣だ」
「そうだ。第二陣を休ませる」
そう言い伝える。
「わかったな」
「それでは次は第四陣ですね」
「その通りだ」
参謀の一人の問いに答える。

「そうして次々に変えていく。いいな」
「わかりました」
「そうして順次休息を取らせて」
「数で勝っているならば」
シャイターンはあらためて参謀達に述べる。モニターに映る両軍の布陣を見据えながら。
「そうして攻めていく。いいな」
「そういうことでしたか」
「成程、そうした攻め方ならば」
「あの女王にも勝てる」
彼は断言する。
「正面からお互い全力でいきなり戦っても勝つのは難しい相手だ。だからこそ」
「車懸かりを取り」
「徐々に消耗させていく」
「それに対して敵は常に全軍だ」
その通りだった。共同軍は全軍を以って向かって来ている。それに対してティムール軍は陣を次々に入れ替えている。どちらの疲労が少ないかは明らかであった。
そのうえティムール軍の用意した補給艦と工作艦の数は共同軍のそれよりも遥かに多かった。その差もまたあった。シャイターンは常に補給を忘れない。それが今功を奏してきていたのである。
「この差は大きいぞ」
「やはりここでも数ですか」
「その通りだ」
シャイターンは冷徹な顔と声のまま述べてみせた。
「戦争は全て数だ。そして補給だ」
「戦術もそれに倣うと」
「無論少数ならば少数の戦い方がある」
かつてその少数の兵で鮮やかな勝利を収めてきた彼だからこそ言

える言葉であった。しかしそこはあくまで臨機応変なのだと。今は言うのだった。

## 第二十七部第五章　コムの死闘その十二

「だが多数ならばそれを使う」
「今のように」
「その通りだ。このまま次々に新手を繰り出す」
彼は今それを言い切った。
「いいか、またすぐに入れ替える」
「すぐにですね」
「そうだ、疲れたならばすぐに次の陣と交代しろ」
全軍に対して告げる。
「そうして敵を疲れさせていけ。わかったか」
「わかりました。そういえば」
「何だ？」
ここであることに気付いた参謀の一人に声をかけた。
「何かあるか」
「彼等は既に疲労が溜まっている筈です」
彼が指摘するのはそこであった。
「それは何故だ？」
「彼等はこのコムに我々より一日前に到着しています」
そこを今指摘するのだった。
「そして戦場整備に取り掛かっていました。それも不眠不休で」
「そうだ」
それはシャイターンも認識していた。今のコムの周到な防衛陣地も機雷源も彼等が一日かけて築いたものである。当然ながらそれはもう知っていたのだ。
「ですからその疲れもあり」
「間も無くその疲れが出て来ると言いたいのだな」
「多少休息を順番で取っていてもそれは完全ではありません」
彼はこうも述べる。

「それならばそろそろかと」
「ふむ。それで崩れるか」
シャイターンは正面に展開する共同軍を見ながら呟いた。今のとこと彼等は見fごとに戦っている。だがそれは全軍であり全く手を抜いてはいなかった。
「疲労により」
「それは閣下が予想されたことですね」
その参謀は彼にそう問うた。疲労について指摘したうえで。
「そうではないですか？」
「そうだ」
シャイターンはそれを隠しはしなかった。その通りだったからだ。
「隠しはしない。全ては私の作戦通りだ」
「そこまで考えて作戦を立てておられたとは」
「当然だ。この戦いは負けられない」
毅然とした声で参謀達に告げる。
「ならば。周到に勝利を収めるための舞台演出はしておくべきだ。違うか」
「左様ですか。しかし」
これは参謀達にとっては驚嘆すべきことだったのだ。普通に戦場を構築するのではなかったからだ。勝利を構築するのがシャイターンであると知ったのだから。その驚きは当然であると言えた。
「そこまで考えておられるとは」
「まさか」
「これもまた戦術だ」
シャイターンは平然と言ってのける。
「ただ相手の武力を攻めるだけではない」
「相手の他の部分もまた、ですか」
「その通りだ」
まだ共同軍を見ている。彼等はまだ崩れてはいない。だがシャイターンにとって彼等が崩れるのは予定事項であった。

「相手を敗北の状況に置くのもまた戦術なのだ」
「左様ですか」
「戦略でだけそうするのではない。それを今確かなものにする」
そう告げると。その右手を大きく掲げさせた。
「陣を入れ替えよ！」
高らかにそう指示を出す。
「そして新たな攻撃に入れ。先の陣は後方に回れ！」
「はっ！」
「そうして波状攻撃に専念せよ。いいな！」
「了解！」
全軍それに応える。そうして再び波状攻撃を仕掛けるのであった。
共同軍はティムール軍のその波状攻撃を受け続けていた。それに対してまだ五分に渡り合っていたがそれもそろそろ限界に近付いていた。それは最高司令官であるブルコルジが最も認識していることであった。
「将兵の疲労が溜まってきていますね」
軍の動きが鈍くなってきているのを見て呟いた。
「それも徐々に」
「徐々にですか」
「先よりそうでした」
目を暗くさせて述べる。

## 第二十七部第五章　コムの死闘その十三

「やはり戦場整備での疲労が出て来ていますね」
「しかしそれでも」
彼女の参謀達は言う。
「ここは耐え切るしか」
「我等は数で劣りますし」
「わかっています」
それはブルコルジもわかっていることであった。だからこそ頷くしかなかった。
「ですがこのままでは」
「危ういですか」
「それは否定できません」
こうも述べた。
「非常手段ですが」
「はい」
彼女は将兵の疲労を回復させる為に。一つの手段を採用することにしたのであった。それは。
「携帯食の特を出して下さい」
「特をですか」
「そうです」
決意した顔で全軍に告げる。
「宜しいですね。戦闘を続けながらそれを食べるように」
「わかりました。それでは」
「全軍にでる」
ブルコルジはそうも伝える。
「わかりましたね。今すぐに」
「了解しました」
こうしてその携帯食の特が出されるのであった。だがそれは食料

ではなく飲料であった。しかも濃い蜂蜜色のかなり変わった色のものであった。
それを速やかに全将兵に配布する。そうして飲ませる。。
実はそれはスタミナドリンクなのであった。それもかなり効果がある。連合においてかなりの人気があるそれをアヤグーズ軍は採用していたのである。しかも戦闘用にかなり即効で効果の出る特別なものを開発し実用化していた。それを今出してきたのである。
将兵達はそれを飲み疲れを吹き飛ばした。そうしてまた戦いに向かうのであった。
「やれる！」
「俺達はまだ！」
疲労を感じていたところで体力を取り戻し戦いに向かう。その勢いはティムール軍を圧倒せんばかりであった。ティムール軍もこれには驚きを隠せなかった。
「何っ、こいつ等急に」
「どういうことなんだ！？」
「そうか、成程な」
だがシャイターンはその勢いを見ても冷静なままであった。そうして言うのだった。
「彼等は携帯食を投入した」
「携帯食をですか」
「そうだ。それにより疲労を回復したのだ」
何でもないといった様子でそう述べる。
「今の彼等には疲労は存在しない」
「それでは閣下」
「我等の今までの苦労は」
参謀達はシャイターンのその言葉を聞いて浮き足立つ。勝因が一つ消えたからそれも当然であった。だがシャイターンは相変わらず落ち着いたままであった。
「焦ることはない」

そう彼等に告げる。
「特にどうということはない」
「ですがそれは」
「あまりにも楽観的なのでは？」
「残念だが楽観ではない」
こう彼等に言葉を返す。
「これもまた計算通りだ」
「これもまた」
「そう。そしてだ」
さらに言葉を続ける。
「彼等の疲労回復は一時的なものだ」
「一時的なものですか」
「人間の疲労は完全に休息を取らなければ容易には回復するものではない」
この時代においても人間の身体のそうした性質は変わってはいない。どの動物にも言えることであるが完全な休息を取らない限り疲労は消えたことにはならないのである。
「特殊な飲料では限度があるしそれに」
「それに？」
「それの効果が消えた時は余計に疲れるものだ」
「つまり麻薬と同じであると」
「そうだ」
参謀達にそう告げる。
「その時が最大の狙い目だ」
「最大の」
「一番怖いのはだ」
シャイターンはさらに言う。そこにある深い読みを参謀達にあえて見せながら。

## 第二十七部第五章　コムの死闘その十四

「疲れが急に出た時だな」
「あっ、それは確かに」
これは参謀達も実感でわかった。何かをしていて疲れが出たその瞬間が最も疲れるのだ。つまりシャイターンはその瞬間が来るのを待っているのである。
「その瞬間までこのまま行く」
「このままですか」
「その時に勝敗は決する」
こうまで断言してみせた。
「だからだ。わかったな」
「はい」
「それではその時こそ」
「決着をつける」
またしても断言する。あくまで強く。
「一瞬でな」
「一瞬、ですか」
「勝敗が決するのは常に一瞬だ」
戦争とは総じてそういうものである。どれだけ長い戦争も転機となるポイントは一つなのだ。それをつかめるかどうかというだけなのである。
「だからだ。逃すことのないようにな」
「わかりました」
「ではその一瞬を」
「掴む為に」
シャイターンは両手を挙げた。そうして全軍に指示を出す。
「陣を入れ替えよ。いいな」
「はっ！」

こうしてまた陣を入れ替えて新手を繰り出す。彼等は車懸かりの攻撃を続ける。だが疲れから回復した共同軍はそれを耐え抜く。戦いはそのまま膠着状態のままであった。

これは共同軍から見てまずいものがあった。やはり数では劣っている。それを自覚している彼等はまたしても焦りを感じだしていたのであった。

「このままでは」

「押し切られるか」

既に損傷率も無視できないものになっている。彼等はそれも考慮に入れていた。

「勝負に出るべきでは？」

「一気に」

艦長クラスでは周りの士官達にこう問う声もでだしていた。そしてそれはブルコルジの耳にも入っていたのであった。

彼女もまた焦りを感じていた。それは事実だった。そこに来て艦長達のこれである。彼女はこれで判断を強いられることになった。

「陛下」

参謀達もまたこのことについて問う。

「どうされますか？」

「進まれますか？それとも」

「このままでしょうか」

「このままならば」

ブルコルジはその美しい眉を顰めさせていた。その目でモニターと艦橋に見える敵軍を見据えている。

彼等は上から次々に新手を繰り出してきてこちらに当たっている。言うならば水車である。その水車の前に戦力を少しずつ削り取られている。彼女は今そう感じた。

「今の損傷率は」

彼女はまずはそれを尋ねた。

「損傷はどの程度でしょうか」

「一割です」
そう報告があがった。
「一割を失っています。今のところは」
「今のところは、ですか」
それはブルコルジの頭の中に入った。今のところは、という言葉までもは。
「そうです、あくまで今のところです」
「ですがこれが続けば」
「そうですね」
彼女は暗い顔で参謀達の言葉に応えるのであった。そのうえで自身の言葉を述べる。
「削り取られていきます」
「それではやはり」
「ここは」
「全軍突撃用意」
彼女は決段を下した。
「いいですね。そうして」
「一気に勝負を決すると」
「その時が来ました」
腕を組み述べた。元々積極的に攻撃を仕掛けて守るつもりであったし実際にそうしてきた。だがここまでするというのはそれこそ勝敗を決するその時までは控えていたのだ。
だが今がその時だと判断したのだ。今ここで仕掛けなければこのまま戦力を削られていっていずれは敗北する。この戦いでの敗北はそのままアヤグーズの滅亡に直結する。そのことを誰よりも知っている彼女はここで判断を強いられたのであった。
「だからこそ」
「はい。それでは」
「全軍に対して」
「突撃です」

それをまた告げる。
「私も行きます。ですから」
「はい」
参謀達はまた彼女に応えた。彼等の顔にも緊張が走る。
「勝ちましょう」
「そしてアヤグーズを」
「アヤグーズを守る為に」
ブルコルジは高らかに祖国の名を掲げた。

## 第二十七部第五章　コムの死闘その十五

「今全ての力で！」
「突撃！」
彼女の言葉が合図となった。共同軍は全軍を挙げて突撃に入った。ティムール軍はそれを見て一気に陣を整えるのであった。
「守りに徹せよ！」
シャイターンはそう指示を出した。各艦隊に方陣を組ませそれをそれぞれ連携させる形にさせた。そうして彼等の突撃を防ごうとするのであった。
だが共同軍の突撃は強烈であった。まさに津波そのものの攻撃でティムール軍を撃破しようとする。彼等の方陣はその激しい波の中に置かれ中には崩壊する陣もあった。ティムール軍は今この戦いにおいて最大の危機を迎えようとしていた。
「閣下」
「もうすぐだ」
青い顔をして自身に声をかけてくる参謀の一人に応えた。やはりその表情を変えずに。
「もうすぐ時が来る。それまでの我慢だ」
「我慢ですか」
「そうだ。津波はすぐに終わる」
共同軍の怒涛の攻撃を見据えながら述べる。
「すぐにな。今は確かに激しいが」
「ええ」
「それももうすぐだ。その時こそ」
彼は言う。
「仕掛ける。わかったな」
「はい。それでは」
「そのまま耐えろ」

彼はまた全軍に指示を出した。
「このままだ。わかったな」
「このままか」
それを聴いた艦隊司令達は思わず顔に苦渋の色を浮かべさせた。
「辛いな、それは」
「ですが司令」
その中の司令の一人に参謀の一人が言うのだった。
「主席は今まで敗れたことはありません」
「確かにな」
当然ながら彼等もそれは知っている。シャイターンの不敗神話は彼等にとっては何よりも心強い支えである。それが今生きようとしていた。
「ですから今も」
「主席を信じればいいか」
「はい、ですからここは耐えましょう」
その参謀は自分の直属の上司に対して告げた。
「主席の仰る通りに」
「わかった」
艦隊司令はその参謀の言葉に頷いた。
「ではこのまま辛抱するぞ。いいな」
「はい」
彼等は末端の兵士達に至るまでシャイターンの言葉を信じた。そうしてこの場を何とか耐え凌ぐのであった。
ティムール軍の粘りはかなりのものであった。共同軍の攻撃を彼等から見れば憎らしいまでに耐え切っていた。そうして次第に。共同軍に変化が見られてきた。
「うう・・・・・・」
「そろそろか」
彼等は遂に疲れを感じだしてきたのだ。それまでの気迫は少しずつ消えていきそうして倦怠感が覆いだしていた。これがはじまりで

あった。
それはすぐに彼等の動きにも現われた。一瞬だが動きが弱まった。シャイターンはそれを見逃さなかった。
「よし！」
シャイターンは叫んだ。そして指示を出す。
「今だ、全軍反撃に転じよ！」
「反撃ですか！」
「そうだ！」
またしても叫ぶ。
「今がその時だ。時が遂に来たのだ！」
「では閣下！」
「今より我等は！」
「勝利を掴む！」
こうも叫ぶのだった。
「わかったならば。全軍反撃に転じよ！」
「はっ！」
「そのまま突撃だ！一気に突き崩せ！」
勢いのある言葉であった。その言葉がそのまま全軍に伝わることがわかっているからこその言葉であった。これもまた計算していたのだ。
「そしてこのイズライールも前に！」
「しかしそれは」
「構わない！」
自らの突撃すらもその中に入れていたのだ。危険もまた。

## 第二十七部第五章　コムの死闘その十六

「私も諸君等と共に。勝利を掴む為に」
「だからこそ前に」
「いいか、攻撃を受けても怯むな」
敵を前にしてもそう述べるのだった。敵を見据えながら。
「わかったな」
「わかりました。それでは」
「わかったならば前へ！」
シャイターンはまたしても叫ぶ。
「全軍突撃だ！一気に突き崩せ！」
「了解！」
今ティムール軍は一つになった。そうしてそのまま正面の敵に突き進む。その勢いは今さっきまでの共同軍のそれに匹敵するものであった。それで一気に共同軍を突き崩そうとしていた。
疲れを感じだしていた共同軍にとってこのティムール軍の攻撃は耐えにくいものであった。だがブルコルジはそれでも彼等に指示を出すのであった。
「案ずることはありません！」
「左様ですか」
「この程度の攻撃！」
その正面から来るティムール軍を見せて言うのだった。
「臆していては何もなりません。だからこそ」
「ここは」
「再度全軍突撃です！」
それが彼女の出した決断であった。
「宜しいですね。ですから」
「それではすぐにでも」
「そうです。間隙を与えずに」

波濤そのものとなって攻撃を仕掛けだしてきたティムール軍を前にしても。まだ彼女は戦いを続けていた。少なくとも戦意は全く衰えてはいなかった。
「攻撃を仕掛けるのです。宜しいですね」
「わかりました。それでは」
「全軍態勢を立て直し」
まずはそう指示を出す。
「そしてその後に」
「全軍突撃だと」
「そうです。そしてそれは」
「今すぐにでも」
「時間を与えてはなりません」
ティムール軍を見据えて。そのうえでの言葉であった。
「わかりましたね。それでは」
「はい」
参謀達は彼女の言葉に頷く。そうして共同軍は態勢を整えなおし今攻撃態勢を取り戻したのであった。怒涛のティムール軍の攻撃を前にしてもまだ戦意をそのままにさせて。
「全軍突撃！我等に勝利を！」
「はっ！」
ブルコルジもまたシャハラザードを前に出した。そうして全軍一丸となりティムール軍に突き進む。ティムール軍もまたその動きを止めることはない。両者は互いに一本の弓矢となって敵に向かうのであった。
両軍は激突しそこで一旦動きが止まった。だがそれは力のせめぎ合いでありその衝突点では激しい攻防が行われていた。
「押し切れ！」
シャイターンはその衝突点に対して叫ぶ。
「一気にだ。全ての戦力をつぎ込んでもだ！」
「我々の全ての戦力を」

「このイズライールも前へ出すのだ！」
自身の最前線への参加も厭わないのだった。
「一隻でも戦力が必要だ。だからこそ」
「最前線にですか」
「敵を見るのだ」
止めようとする部下達に対して共同軍を見るように告げた。
「彼等の主は。どうしているか」
「なっ・・・・・・・」
「何と・・・・・・・」
彼等はシャイターンの言葉に従い敵軍を見て。思わず息を呑んだのであった。何とそこにはシャハラザードの姿があったからだ。
その美しいシルエットを前線に見せている。そうして自ら砲撃を放っていた。
「そのままです！」
ブルコルジは旗艦の砲撃の衝撃を感じながら艦橋に立ち指示を続けていた。
「そのまま前へ！退くことはなりません！」
「馬鹿な、敵の主自ら」
「槍を手に取っているとは」
「だからこそだ」
シャイターンはそのブルコルジの勇姿を見据えながら部下達に告げた。
「私も向かう。彼女の前に」
「では閣下恩自ら」
「あの女王を討ち取るおつもりですか」
「面白いではないか」
シャイターンは楽しんでいた。それが笑みとなって現われていた。その楽しむ笑みで女王が戦う姿を見ていたからだ。

## 第二十七部第五章　コムの死闘その十七

「それでは私も応えなければならない」
「あの女王に」
「それに。面白いではないか」
その喜びを自分の言葉にも出してみせた。
「軍を率いる将同士がこうして刃を交えるというのは。違うか？」
「物語めいていると」
「エウロパの者達が好みそうだな」
エウロパを出したのはあくまで彼等の騎士物語にそうした話が多いからである。シャイターンはそれも知っているのである。エウロパを憎んではいるがその見るべきものは見ているのである。
「こうした話は」
「そして我等も」
またそれはサハラの者達も同じなのだ。戦を嗜む者達は。
「向かうべきであると」
「だからこそだ。わかったな」
「わかりました」
「それではこのイズライールも」
「前に出せ」
あらためて艦全体に告げる。
「わかったな」
「はっ」
「それでは」
「イズライールを最前線に！」
それを実際に指示に出す。
「そして狙うは！」
「女王の首を！」
皆それに応える。シャイターンは自ら最前線に躍り出た。そうし

て主砲を放ち共同軍の艦艇を沈めにかかったのであった。
「敵の総旗艦か！」
「間違いない！」
共同軍の将兵達はそのイズライールの姿を見て叫ぶ。
「あの艦にこそ」
「シャイターン主席がいるぞ」
「陛下！」
そうしてブルコルジに対して告げる。水から槍を手に戦う女王に対して。
「敵の総司令官が来ました」
「どうされますか？」
「私と同じですね」
参謀達に対して言うのだった。
「彼もまた」
「はい。水から前線に向かい」
「剣を抜いております」
「流石は。この私と戦おうというだけのことはあります」
ブルコルジもまたシャイターンの乗るイズライールを見据えていた。その口元に不敵な笑みを浮かべているのもまた彼と同じであった。
「ならばそれに応えましょう」
「前に出ますか」
「はい」
参謀達の言葉に頷いてみせた。
「さらに前へ」
「わかりました」
「それでは」
「シャイターン主席とお見受けした！」
ブルコルジは通信を使って叫んだ。シャイターンのいるイズライールまで。

「いざ応えられよ！」
「私を呼んだか」
モニターのスイッチを入れて彼女に応える。こうして二人はモニター越しにはじめて対面するのであった。
「ほう、はじめてこうして見たが」
シャイターンはブルコルジの顔を見て面白そうに笑った。そのうえでまた述べた。
「映像等で見るよりも。素晴らしい美貌だ」
「褒めて頂けるのですか？」
「私は人のものになっている女性以外は褒める」
サハラでは人の妻となっている女は褒めないのである。それはその女性に気があると思われるからである。シャイターンもそうしたしきたりを守っているのだ。
「貴殿は。今は一人だったな」
「そうですが」
ブルコルジは彼の問いに正直に答えた。
「それが何か」
「ふむ。話に聞いた通りだ」
また楽しげな笑みをその顔に浮かべていた。
「どうやら。貴殿と私がここで会うのもアッラーのお導きだ」
「アッラーのですか」
「そうだ。だからこそ会えて言おう」
彼はブルコルジに対してまた告げてきたのだった。
「貴殿は。私の下に来るべきなのだ」
「貴方のですか」
「そうだ。悪い話ではあるまい」
そうブルコルジに対して声をかける。

## 第二十七部第五章　コムの死闘その十八

「私の部下となり共に覇道を歩む。どうだ？」
「何と大胆な男か」
それを聞いたバンダル達ハサンの将兵達は思わず顔を顰めさせた。彼等にとってこの時のシャイターンの言葉は聞き捨てならないものであった。
「この場で己の下に誘うというのか」
「しかも一国の女王を」
それだけでも恐るべき大胆さである。だが彼等が顔を顰めさせたのはもう一つ理由があった。それはハサンにとっての問題であったのだ。
「しかもここでアヤグーズがティムールにつけば」
「我等ハサンは」
「司令っ」
彼等はその動揺を抑えきれずにバンダルに対して声をかけた。戦闘中でありながら震える声で。問わずにはおられなかった。
「どうされますか！？」
「ここで若し女王が彼等についたならば」
「愚かな」
彼等の問いに対するバンダルの返答は最初の言葉をこれではじめた。
「えっ！？」
「今何と」
「愚かだと言ったのだ」
バンダルはまたその言葉を出したのであった。
「貴官等は今まで何を見てきたのか」
「今までといいますと」
「それは」

「あの女王陛下の何を見てきたのだ。言ってみろ」
あらためて彼等に問うのであった。
「私に対して。どうか」
「御言葉ですがあの女王陛下は」
それに応えて一人が述べてきた。
「決して裏切るような方ではありません」
「そうだ」
バンダルはあらためてそこを指摘したのだった。
「そうした方ではない。だからこそ」
「案ずることはないと」
「そうだ」
彼は断言したのであった。
「あの方は決して裏切ることはない。だからこそ」
「ここは動じることはないですか」
「動じてはならない」
こうまで告げた。
「我々が動ずればそれだけこちらに隙が出る」
「はっ、まさかそれが」
「あの主席の」
「それは違うだろうがな」
シャイターンの策謀であることは否定した。何故ならただの策謀ならばわざわざこうして前線まで出て女王を誘ったりはしないからである。
「しかし。流石はシャイターン主席だ」
バンダルはあらためてシャイターンを褒め称えるのであった。
「ここまで来てあえて誘うというのか」
「女王陛下を」
「人材を求めるにあたってどの様な危険も顧みない」
シャイターンに対する評価の一つだ。彼は広く人材を求めそれを上手く活用している。彼一人の力で今立っているわけではないので

ある。
「それを今見たな」
「それで司令」
「女王陛下はこれからは」
「案ずるな。これまで通りだ」
そう部下達に告げる。
「戦われる。だからこそ我等も」
「それでは」
「ここで」
「全軍アヤグーズ軍のフォローに回れ」
彼はアヤグーズを完全に信頼していた。そうして宗主国の軍でありながら彼女等のフォローに回ることにしたのであった。思い切った判断であった。
「いいな」
「はっ」
「了解です」
部下達もまた頷く。彼等がこうしてこれからの運命を決意したその時にもシャイターンはアヤグーズと対峙していた。彼等はまだ互いを見据えていたのだった。
「貴殿はただ散るには惜しい」
シャイターンは言う。

## 第二十七部第五章　コムの死闘その十九

「その才を私の下で生かせ。どうだ」
「魔王と言われた貴方の下で」
「相応しいと思わないか」
シャイターンはブルコルジの口から魔王と呼ばれたことに心の中で悦びを感じていた。彼にとって魔王という称号はこの上ない尊称であるのだ。
「その魔王の下に集う女将として歴史に残るのだ。悪い話ではない」
「確かに」
ブルコルジもまたそれに頷くのだった。
「貴女と共にこのサハラを一つにするのは。一つの道であります」
「そうだ」
シャイターンはその言葉にも満足した微笑みを浮かべた。
「それでは。答えは決まっているな」
「それが賢明な者ならばですね」
「その賢明な者が貴殿だ」
シャイターンはそう告げた。
「だからこそ。共に」
「主席、御言葉ですが」
ここで彼女は言うのだった。
「私は賢明な者ではありません。それは買い被りというものです」
「むっ！？」
「このブルコルジ家において最も尊ばれてきたものは賢明ではないのです」
それは事実であった。代々その勇敢さと精強さを称えられてきた彼等にとって賢明とは褒め言葉ではなかったのだ。その褒め言葉とは。
「それは勇猛です」

彼女は言うのだった。
「勇猛、そして誇りこそがこのブルコルジ家の誇り。だからこそ」
「私に従わないというのか」
「私は女王であります」
次にこう言うのだった。
「女王は女王として生き、そして死ぬもの。だからこそ」
「私の誘いを断るか」
「貴方の様な方と共に戦うのもまた武門としては悦びです」
それは本心であった。シャイターンにはそう思わせるだけの魅力があった。だが。ブルコルジはあえてそれに背を向けるのであった。
「しかし私は」
「ふむ。見事だ」
だがシャイターンは。その背を向けた女に笑みを返すのであった。
「そうでなくてはな。面白くはない」
「面白くないと」
「そうだ。私につかずに誇りにつく」
彼は言う。
「それだけの者であるからこそ私も愛するのだ。だからこそ」
「私を手に入れたいのですか」
「私は存外諦めの悪い男でな」
不敵な笑みをそのままに言葉を続ける。
「欲しいものは何としても手に入れる。いいな」
「ならば貴方は知ることになります」
ブルコルジもまたシャイターンに告げた。
「何もかもが手に入るわけではないと。それもまた」
「アッラーの思し召しなら今からそれがわかる」
そう述べると右手を高々と掲げた。命令を出す合図であった。
「今からな。では」
「ええ」
ブルコルジも応える。彼女の右手も高々と上がった。

「全軍総攻撃！」
「今こそ決着の時！」
二人はほぼ同時に指示を出した。そうしてそれと共に両軍はそれぞれ最後の全面攻撃に入ったのであった。
「攻めろ！」
「今だ！」
両軍の指揮官達がそれぞれ指示を出す。今彼等は再びぶつかり合った。
炎と炎の激突であった。コムに巨大な炎が次々と沸き起こった。
ティムール軍も共同軍もそれで損害を出していく。シャイターンもブルコルジもその中にいる。
両者はまずは互角だった。しかし。次第に戦力と疲労の差が現われてきたのだった。
「まずい」
アヤグーズ軍の艦長の一人が顔を顰めさせた。
「どうやら今の我が軍は」
「艦長、兵達の疲労が」
副長が彼に言うのだった。
「そろそろ限界に」
「わかっている。だが」
彼はそれを受けて顔を顰めさせたまま。また言うのだった。
「もうなのか」
「残念ですが」
副長はそう述べる。

## 第二十七部第五章　コムの死闘その二十

「やはり携帯食だけでは限界がありました」
「くっ」
その報告に歯噛みする。
「それにかえって疲労が増したようです」
「あの携帯食の影響だな」
「おそらくは。あれは効果が切れればそれだけ疲労を増加させますから」
「そのせいか」
それは彼等もわかっていた。わかっているからこその切り札だったのだがそれが裏目に出る形となってしまった。彼等もこれは危惧していたがそれでも使わざるを得なかったところに共同軍の苦しさがある。
「それでどうなのだ、我々は」
「あまりもたないかと」
副長はこうも報告した。
「このままでは」
「そうか。難しいか」
「どうされますか？」
「今は戦闘中だ」
この言葉は。絶望的な響きを含んでいた。
「ここで下手にまた携帯食を採っても」
「隙ができますか」
「今は少しでも手を離すことはできない」
そうした状況であった。ティムール軍の攻撃があまりにも激しく少しでも気を逸らせばそれがすぐに艦の撃沈につながりかねない状況だったのだ。それがわかっているからこそ艦長もその指示を出せなかったのだ。

「だからこそ今は」
「戦い続けるしかないと」
「兵士には我慢するように伝えてくれ」
こう言うしかなかった。
「わかったな」
「はい」
副長は頷いた。だがその時であった。
ティムール軍の攻撃が彼等を撃った。光の帯が艦を直撃したのだ。
「ぐわっ！」
「うっ！」
艦橋もその衝撃で揺れる。それにより艦長も副長も一旦宙に浮きそうして床に叩きつけられた。それだけでかなりのダメージだった。
だがそれでも彼等はまだ生きていた。全身を鈍く襲う衝撃に耐えながら周囲の者達に尋ねた。
「何処をやられた！」
「二番砲塔です！」
すぐに誰かから報告が返ってきた。しかしその報告も何か痛みに耐えている声であった。
「二番砲塔大破！使用不能です！」
「くっ、駄目か！」
「無理です！また一番砲塔も中破です！」
「一番もか」
これは最悪の報告だった。艦の攻撃力が激減したのがわかる。
「それではもう」
「艦長、どうされますか」
副長の声が聞こえてきた。見れば彼は何とか立ち上がり艦長を助け起こそうとしていた。その手の感触が伝わるところを見ると自分はまだ大丈夫なのだと感じた。
「このままではこの艦は」
「下がることはできるか」

艦長はまずはこう尋ねた。
「今この艦は。どうなのだ」
「エンジンに問題はありません」
喜ぶべき報告が聞こえてきた。
「ですが砲塔のダメージが艦全体に」
「そうか。では決まったな」
彼はそこまで聞いて決断を下した。それは。
「下がれ」
彼は言った。
「司令官には私から伝えておく。下がれ」
「下がられるのですか」
「最早戦えない。これでは意味がない」
忌々しげだが決断した顔であった。
「わかったな。全速で反転せよ」
「はっ、それでは」
こうしてこの艦は何とか戦場から離脱した。だが彼等はまだ幸運な方で次第に共同軍の方に損害が出はじめていた。中には撃沈される艦も多かった。
「第一艦隊の旗艦サダム撃沈！」
「第二艦隊の戦力七割を切りました！」
ブルコルジの下にも次々と報告が入る。それは彼女にとって悲痛なものであった。
「ティムール軍の攻撃がさらに強まりました！」
「前線から離脱及び行動不能の艦艇数が全体の二割に」
「二割ですか」
その割合がブルコルジの顔を曇らせる。そうしてティムール軍を見ると。
「思ったより。減っていませんね」
「実に手強いです」
参謀の一人が忌々しげに述べた。

「戦意は衰えず。疲労も感じられません」
「そのようですね」
彼等の果敢な攻撃はモニターからもわかる。それを見てまたしても顔を曇らせるのであった。

## 第二十七部第五章　コムの死闘その二十一

「どうやら」
「どうされますか？」
ここで参謀達は彼女に問うてきたのだった。
「このまま戦われますか？それとも」
「退けと」
「はい」
彼等の中で最も年配の者が応えてきた。見れば大将の階級を着けている。
「我等の疲労も限界です。これ以上の戦闘は」
「損害を増やすだけだと言いたいのですね」
「御言葉ですが」
そう前置きするが。考えは変わらないのであった。
「ここではもう限界です」
「しかしです」
ブルコルジはその大将に顔を向けた。そうして言うのであった。
「ここでの撤退は」
「それは承知です」
大将も言う。彼もまたこのコムでの戦いの意義がわかっていたのだ。だがそれでも。彼はこう主に申し出るしかなかったのだった。苦しいことに。
「しかし。それでも」
「仕方がないと」
「まだ。戦えます」
この言葉が決め手であった。
「戦力が残っている限り」
「ここで全滅しても何にもなりませんか」
「その通りです」

彼はまた言った。
「ですから陛下、ここは」
またしても上申する。
「お下がり下さい」
「ここでアヤグーズが潰えない為にも」
「そうです、まだ戦えるのですから」
「しかし。このコムでの敗戦は」
彼女にはわかっていた。他の者にも。ここで敗れるということはアヤグーズにとってもハサンにとっても許されないことだと。しかしそれでももうどうしようもないこともわかっていた。彼女にとってはこう判断できることもまた非常に辛いことであった。自身の聡明が憎くもさえあった。
「我々にとっては」
「ここで一兵残らず滅びるよりは遥かによいです」
大将の言葉が強くなった。
「陛下、御決断を」
「今ここで」
「そうです」
声が強いるようになった。もう時間がないのだ。
「如何為されますか」
「・・・・・・わかりました」
ブルコルジは遂に頷いた。唇を噛み締め、拳を握り締めながら。そうして腹の奥底から苦い言葉を吐き出したのであった。
「それではそのように」
「はっ」
それしかなかった。共同軍はそのまま撤退にかかる。しかしここで一つ問題があった。それは撤退の時には決して避けられない問題であった。
「後詰だ」
「後詰は誰が」

それであった。まずはそれが問題だったのだ。撤退の際敵を足止めする者達が必要だ。アヤグーズ軍の中の提督の一人が名乗り出ようとしたその時であった。
「それならば私が」
「貴方が」
名乗り出てきたのはバンダルであった。彼が自ら名乗り出たのである。
「はい。後ろはお任せ下さい」
彼は毅然としてモニターからブルコルジに述べるのだった。
「それで宜しいでしょうか」
「ですが司令」
ここでブルコルジは彼を司令と呼んだ。ハサン軍の司令官であるからこう呼んだのである。
「この後詰は」
「棄権だと仰るのですか」
「そうです」
彼女は言うのだった。
「私が後詰を」
「何を仰いますか」
今の言葉には笑みで返すのだった。
「陛下が後詰をされて何になりますか」
「ですが」
「貴女は全軍の将です」
そこを指摘する。彼等にとってブルコルジは全軍の将でありこれからも全軍を率いなければならない。彼が指摘するのはそこなのだった。

## 第二十七部第五章　コムの死闘その二十二

「貴女に若しものことがあれば話になりません」
「それでは」
「そうです。だからこそ私が」
そう言ってまた名乗るのであった。
「見事後詰を務めましょう」
「陛下」
参謀の一人がここでブルコルジに言うのだった。
「ここはバンダル司令の御言葉を受けましょう」
「そうです」
別の参謀も彼女に告げる。
「やはりここは」
「司令にお任せしましょう」
「そうですか」
ブルコルジはその言葉に頷いた。やはりこの時も頷くしかなかったのだ。
「それではここは」
「そうです。それでは」
「ここは」
こうしてバンダルが後詰を務めることになった。アヤグーズ軍や他の属国の軍はすばやく撤退をはじめハサン軍が後詰に入るのだった。それはシャイターンも見ていた。
「ほう」
シャイターンはハサン軍が前に出たのを見て呟いた。
「どうやらハサン軍が防ぐつもりのようだな」
「そのようですな」
それはハルシークも見ていた。彼等を見てその目に強い光を漂わせた。

「彼等にもまだ骨がある者がいるようですな」
「随分減らしたのだがな」
シャイターンは言う。テロや暗殺でハサンの人材を次々と消していったのが功を奏しハサンはその国力をかなり落としていたのである。
「それでも残っていたか」
「バンダル大将ですな」
ここにいるハサン軍についての情報は既に集まっていた。彼等のことについても全て調べていた。だが彼の細かい能力ついては調べきっていなかったのか。
「ですが。おかしいですな」
ここでハルシークは言う。
「何がだ？」
「彼は本来慎重な男で」
「そうだな」
シャイターンはハルシークに対して述べる。
「その彼が後詰になるとは」
「何かあったのでしょうか」
ハルシークはそこを不思議に思う。思えばきりがなかった。
「これは」
「さてな。そこまではわからないが」
唯一つ言えることがあった。シャイターンはそれについて言及する。
「だが彼等は今ここにいる」
「はい」
それは否定できなかった。彼等が後詰を務めていることを。
「それをどうするかだな」
「どうするかですか」
「そうだ。わかるな」
「無論です」

彼は主の言葉に頷くのだった。
「当然ここは攻めましょう」
「そうだ。我々の前に立ちはだかるのなら」
倒すだけであった。それが戦闘の常識であった。
「構うことはない。全軍攻撃だ」
「そうです。それでは」
「バンダル大将」
シャイターンは今後詰に来たその将の名を呟いた。
「本来の力、見せてもらうぞ」
「では参りましょう」
ハルシークはまた述べた。
「最後の勝利を掴みに」
「しかし。中々面白いものだ」
彼はバンダルを見据えて言う。今銀河に彼の乗艦は見えないがそれでも銀河に見ていた。彼が自分の前に立っているのを。

## 第二十七部第五章　コムの死闘その二十三

「思いも寄らぬ相手がいるというのもな。これもアッラーの思し召しか」
そう言って全軍を突撃させた。それに対してハサン軍は方陣を巧みに敷きティムール軍の攻撃を防ぐのだった。
「いいか、粘れ」
バンダルは自軍に方陣を敷かせたうえで彼等の指揮を採っていた。彼もまた方陣の一つの中に陣取りそこでティムール軍の相手をしていたのだった。
「友軍が逃げ切るまでな」
「わかりました」
ハサン軍の将兵達はそれに応える。彼等もまた戦場で果敢に戦い敵の攻撃を抑えていたのだった。その戦いぶりはサハラの戦士のものであった。
「ハサン軍も中々か」
シャイターンはその戦いを見て言うのだった。
「贅沢に慣れた軍だと思っていたが」
「そうですな」
参謀達もそれに頷く。
「我々が思っていたよりも」
「これもまた将の資質故か」
シャイターンはそう見ていた。
「バンダル大将。思ったよりもやる」
「彼は本来参謀タイプだったのですが」
ハルシークがまた述べる。彼等が見るバンダルとはそういう男だったのだ。ところが彼はそうではなかった。むしろかなりの勇将であった。
「決して臆病ではない」

目の前で決死の覚悟で戦うハサン軍を見てまた言う。
「ハサン軍もまた」
「彼等もやはりサハラの戦士ということですか」
「それもある。実に面白い」
そしてその健闘に笑う。戦いを楽しんでいるからこその笑みであった。
「それならばこそ。戦いがいがあるな」
「そうですな。弱兵を相手にするのは詰まらないものです」
ハルシークも言う。彼もまたサハラの者である。だからこその言葉であった。
「彼等がそうして戦うのならば」
「我々も。退くわけにはいかない」
「ええ。それでは」
「全軍攻撃の手を緩めるな！」
シャイターンはあらためて指示を出した。
「よいな。ここで後詰を倒し」
そしてさらに言う。
「敵に追いすがれ。よいな！」
「はっ！」
ティムール軍もそれに応える。そうして方陣に果敢に立ち向かうのだった。
しかしハサン軍の方陣はそれぞれが連携し合い敵を防ぐ。その守りの前にさしものティムール軍も攻めあぐねていた。
「まずいか」
「このままでは」
ティムール軍の中にも次第に焦りが見えだしていた。
「敵に退かれる」
「まずいぞ」
しかし彼等はそれでも軽挙には走らなかった。シャイターンがそれを止めていたのだ。

「いいか、攻めるのはいい」
彼は言う。
「その功績も認める。しかし」
「焦るのとは違いますか」
「そうだ。命を粗末にするな」
こうも言うのだった。
「アッラーの御呼びがあるまではな。いいな」
「はっ」
「それでは」
参謀達も頷く。こうして彼等の方針は決まった。
ティムール軍は攻めはしがらそれは無謀なものではなかった。果敢だが慎重に攻め、そうしてハサン軍を追い詰めていこうとしていた。だが対するハサン軍も存外しぶとくそれを防ぐ。そうしているうちに共同軍の殆どは無事に戦場を離脱してしまっていた。
「上手くいっているな」
「はい」
ギーヴがバンダルの言葉に頷いた。
「どうやら上手くいきそうです」
「最悪の事態は避けられたか」
全軍壊滅だけは。それだけはまぬがれそうであった。
「せめてそれだけでも」
「そうですね」
ギーヴはその言葉にも頷いた。
「どうやら。それでは我々も」
「うむ。少しずつ下がれ」
そう部下達に告げた。
「いいな。最前線から方陣を崩す」
「はっ」
「それを後方の方陣が援護する。そうして退いていけ」
「わかりました。ではそのように」

「ここが一番難しい」
バンダルの目が引き締まる。緊張により。

## 第二十七部第五章　コムの死闘その二十四

「後詰を務めるのも難しいが」
「最も難しいのはそこから下がる時」
「その通りだ」
またギーヴの言葉に頷くのだった。
「それを実感する、今はじめてな」
「そうですね」
ギーヴもまたそのはじめてという言葉に同意するのだった。実は彼等は撤退戦というものははじめての経験である。だが今それを行っている。思えばこれは冒険であった。
「そのわりには上手くいっていますが」
「今のところはな」
バンダルの返した笑みは苦笑いだったがそれには当然ながら理由がある。それは今は負け戦なのとまだ完全に撤退そのものが終わっていないからである。これでは苦笑いになるのも当然であった。ギーヴもそれは自覚していた。二人は同じだったのだ。
「これを完全にするには」
「最後の一兵まで下がり」
「話はそれからだ。だからこそ」
「下がりましょう」
ギーヴは改めて言った。
「ここで」
「そうだ。少しずつ下がれ」
バンダルはあらためて指示を出す。
「そして」
「そして？」
「退却する艦艇は搭載している全ての機雷を散布しろ」
こうも指示を出すのであった。

「そうして敵を足止めするのだ。いいな」
「了解」
「ではそれも」
「忘れるな、いいな」
指示を強調した。これもまた撤退戦での基本であった。機雷はただ敵の足止めや罠、進路の制限に使うだけではない。退路を確保するのにも使う。こうした意味でバンダルははじめてでありながら退却戦の基本をしっかりと守っていたのであった。
「第一陣撤退に入りました」
「うむ」
そのうえであがってきた報告に対して頷いた。
「わかった。では機雷を散布しているな」
「はい」
満足のいく返事であった。見ればモニターでもその報告通りの動きであった。バンダルはそれを見て再度今の状況に満足するのであった。
「ならばよい」
また頷いてみせた。
「続いて第二陣だ。そうして」
「徐々に退いていく」
「慎重にだが急げ」
一見相反するが同時に軍事行動においては両立させなければならない言葉であった。今それを全軍に告げるのもまた基本を守っていた。
「いいな」
「無論です」
「そして我々も」
「最後の最後まで残る」
これは司令官としてであった。そうして指揮を執るつもりだったのだ。

「それもいいな」
「何かアッラーの元へ一番近いと思えると」
部下の一人がその言葉に笑う。
「今ここにいるのもかえって」
「いいものですな」
「ふふふ、楽しいか」
バンダルはそう述べた彼等に対して問うた。
「こうした極限の状況が」
「攻めるのもいいですがこういうのも悪くはありません」
その中の一人の返答であった。
「思ったよりも」
「ただ。滅多にあるものではないでしょうが」
「それはこれからの戦局次第だ」
実にシビアな言葉だがその通りであった。バンダルはここで嘘を言うつもりはなかったし実際にこの言葉は嘘ではなかった。むしろ悲観に傾きやすい現実の言葉であった。
「これから次第だ」
「難しい話ですな」
部下の一人の言葉だがそこには苦笑いが含まれていた。微妙なスパイスであった。
「何か続きそうで」
「どうにも」
「少なくともこの戦いでティムール軍の有利が確立された」
それはこの戦いがはじまる前から言われていたことである。勢力比的にも今は互角の状況であったしコムの宙政学的位置からもそれは言われていたことなのだ。だからこそ彼等はここを決戦の場と心得ていたのであり実際に決戦となった。その結果が今なのだ。

## 第二十七部第五章　コムの死闘その二十五

「残念なことにな」
「挽回する必要がありますな」
「必ずな」
バンダルはまた答えた。
「しかも何があってもだ」
「ではその戦力を温存しておく為にも」
「今は」
「下がる」
そういうことであった。撤退の理由はそれ以外にはない。
「第二陣も撤退に入りました」
「わかった」
バンダルは今あがった報告に応えた。
「では続いて第三陣。そして」
「我々も」
「どうやら敵は慎重に攻めているようだな」
「そうですね」
またギーヴが答えてきた。
「我々の戦いを警戒してのことでしょうか」
「ならば有り難い」
バンダルは素直にそのことに感謝した。
「おかげで余計な損害を出さずに済む」
「そうですね。しかし」
だがここで。ギーヴは顔を顰めさせた。
「それでも今の我々の損害もまた」
「馬鹿になっていないな」
バンダルも忌々しげに顔を顰めさせた。今の状況でもハサン軍の損害はかなりのものだった。撤退戦の難しさもあるがそれ以上にテ

ィムール軍の攻勢が激しかったからだ。
「そうそう簡単には返してはくれないか」
「そこはやはりシャイターン主席ですね」
「うむ。しかしそれでもだ」
バンダルの目がまた光った。
「帰らせてもらおう。今後の為に」
「はい。戦いはまた続きますので」
ギーヴも言う。
「ここは何があろうとも」
「よし、いよいよ最後だ」
第三陣の撤退が済んだのを見て彼等も動いた。
「最後に総攻撃を浴びせ。そして」
「そして」
「反転した後機雷を後部発射管から全て放って撤退だ。いいな」
「わかりました」
「ここが最後の正念場だ」
そう語るバンダルの顔に緊張が走る。
「いよいよな」
「ここで失敗すれば終わりですか」
「少なくとも我々はそうだ」
身も蓋もない言葉だがその通りであった。
「もっともそちらの方が後世の歴史に残るがな」
「名誉ある戦死としてですか」
「英雄に祭り上げられるかも知れない」
バンダルは冗談めかしていたがそれはこうでも言わないとリラックスできないからであった。極度の緊張がどういった事態を引き起こすのか彼はよくわかっていたのである。だからこそあえてこうした冗談めかした言葉を言ったのである。
「それがいいのなら別に構わないが」
「家族がいなければ」

ここで誰かが家族を出してきた。
「それで構わないのですが」
「生憎我々は」
「生きなければならない」
「はい」
そういうことであった。今ここで別に死んでも困らないという者も少なかった。人間というものは進んで死ぬべきではない、これもまた教えである。イスラムにおいても命を粗末にせよとは言っていないのである、
「家族は別の者に養われるが」
「それとこれとは別なので」
「やはりここは」
誰もが生きるつもりであった。イスラムにおいては戦争で夫を亡くした場合はすぐに別の男に嫁ぐべきとしているがこれは戦災未亡人への救助策である。そもそもイスラムにおいて妻を四人までとしたのはこれが理由なのである。
「生き残らなければ」
「ですから司令」
「わかっている。それではだ」
「ええ」
「気を抜くことなく」
彼等は言う。

## 第二十七部第五章　コムの死闘その二十六

「最後まで戦います」
「ですから御命令を」
「よし、方陣を解け」
最後の撤退命令が下された。
「そして一斉射撃の後で」
「機雷散布ですね」
「そうだ、隙を作るな」
バンダルはこうも言う。
「作れば。相手はシャイターン主席だ」
彼に対する警戒も解いてはいない。相手が何者であるのか、それもまたよくわかっていたのだ。わかっているからこその言葉であった。
「隙を作ればそれが死に繋がる」
「そうです」
「だからこそ」
部下達も言う。
「やはりここは」
「気を抜いては」
「そういうことだ。合図を待て」
方陣が解かれていく。彼等はそれを見ながら次の指示を待っていた。
人が解かれた。その瞬間だった。
「撃て！」
バンダルはその一斉射撃を命じた。ハサン軍の全ての艦艇から射撃が繰り出される。
「一撃だけだ、いいな！」
「了解！」

彼等もそれはわかっていた。その一撃にこれまでにない力を込めている。そうしてティムール軍に対して幕を張り動きを止めたのであった。

それによりティムール軍の動きが一瞬止まった。いや、シャイターンが止めた。その幕を見て下手に動くことを制止したからであった。やはりここでも彼は果敢でありながら慎重であった。その慎重さで無駄な損害を避けた結果であったのだ。

ティムール軍の動きが止まるのを見ると。バンダルはすぐに次の動きに移った。すかさず命令を下すのだった。

「全艦反転！」

「全艦反転！」

また指示が下される。その指示が復唱され全艦反転する。そうして後部の射出管から機雷が発射される。これも予定通りであった。

「これでいい」

バンダルはティムール軍の動きが止まり機雷を放ち終えて呟くのだった。

「これで。逃げられる」

「司令、次は」

「決まっている」

そうギーヴに言葉を返す。ここまで来て次の行動は一つしかなかった。

「全速で撤退するぞ」

「わかりました」

ギーヴはすぐにその言葉に頷く。もうそれはわかっていることであった。だがそのうえで問うたのだ。全軍にそれを知らせる為にである。

「それではすぐに」

「うむ、それでは」

「全艦このまま全速力で戦場を離脱する」

ギーヴが全軍に述べた。

「いいな、振り返るな」
こうも言う。
「このまま前を向いてだ。わかったな」
「了解」
「それではすぐにでも」
こうしてハサン軍は戦場から離脱にかかった。その速度は動きを止め前に機雷を撒かれたティムール軍に追いつけるものではなく彼等は何とか戦場を離脱できたのであった。こうしてコムでの戦いは終わった。
コム星域会戦は共同軍のコム星系からの撤退で幕を降ろした。参加兵力はティムール軍三二〇万三〇個艦隊、共同軍は全軍を合わせて二一一万二十一個艦隊であった。兵力に勝るティムール軍が押し切った形となり損害は双方二割に達する激しいものであった。だが後方に多くの工作艦や救助艦を置いていたティムール軍の損害はすぐに回復できるものであり彼等の痛手は少なかった。何よりも彼等はハサンの勢力圏において西方の要衝であるコム星系を手に入れることができた。これは非常に大きなことであった。

## 第二十七部第五章　コムの死闘その二十七

「捕虜の収容は終わったか」
「はい」
勝利を収めたシャイターンは星系の首星であるコムに入ろうとしていた。その中で参謀達に問うていたのだ。
「無事に。後程後方に送ります」
「うむ。後は防衛施設をこちらのものにしておけ」
「わかりました」
「このコムを今後の拠点とする」
彼はこうも定めたのだった。
「それもいいな」
「このコムをですか」
「他に何処か候補地があるか？」
彼は逆に参謀達に問うたのだった。
「ここが最もいいと思うが」
「少し宙形が」
「そうです」
参謀達が彼に異議を呈したのはそれが理由であった。彼等はさらに言う。
「何処か別の場所にされた方が」
「ここは補給には不向きですので」
「補給拠点は別に置く」
彼の返答はこうであった。
「別にな。ここではない」
「それではここは一体何の為に」
「このコムは整備施設が整っている」
彼はそこを指摘したのだった。その目が鋭く光った。
「だからだ。ここは後方の整備及び修理基地とする」

「そうされるのですか」
「そしていざという時の防衛拠点にもする」
こうも述べるのだった。
「万が一に備えてな。ここならば大軍も相手にできる。あくまでやり方次第だが」
「だからですか」
「それで」
「そうだ。わかったか？」
あらためて参謀達に問うのであった。
「これで。わかったならば」
「はい」
「それではそのように」
参謀達も遂に彼の言葉に頷いた。これで話は決まった。
「艦隊の整備と補給が終わればこのままま進撃に入る」
シャイターンはコムを見ながら言うのだった。そこは赤と青の星だった。それを見てコムが砂漠の多い惑星であることがわかる。サハラの惑星であった。
「いいな」
「わかりました」
「ではこれからは」
「アヤグーズを倒す」
シャイターンは毅然として述べた。
「このままま」
「あの女王もまた」
「彼女は私の部下とする」
彼ははっきりと言った。これももう決めていたことだった。彼自身が。
「だからこそだ」
「それでは進路は」
「言うまでもないことだと思うが」

「確かに。それでは」
「いいか、ここでは息抜きをするだけだ」
シャイターンはそう全軍に告げた。
「進む先は」
「進み先は」
「勝利だ！」
それだけであった。
「最後の勝利を掴む為の息抜きでしかない、いいな」
「はっ！」
全軍彼の言葉に応えた。そうして彼等は今束の間の休息に入る。
しかしそれは本当に一瞬のことでしかなく。彼等はまた戦いに向かうのであった。

第二十七部　完

２００７・１１・５

# 第二十八部第一章　官僚と議会その一

## 官僚と議会

今連合中央議会ではしきりに官僚達が出入りしていた。これは議員達が招いているからであり彼等は主に委員会において話をしていた。

この日もそうであった。会議室に集まった議員達に対して数人の官僚がしきりに何かを説明していた。議員達は己の前にノートを置きペンを手にして話を聞いていた。

「それでですね」

赤金色の髪の初老の女の官僚がしきりに何かを話していた。

「予算の関係でそれに関しては」

「できませんか」

「はい」

政治家の一人の問いに対して答えた。

「どうしても」

「今どうしてもと仰いましたが」

その政治家はまた彼女に問うた。

「それは予算の関係だけですか？」

「といいますと」

「ええ。こう申し上げては何ですが」

見ればその政治家はかなり若い。まだ二十代であろうか。彼の名はオムダル＝アットール、ペルシア出身であり保守派最年少の議員である浅黒い端整な顔に黒い髪が印象的だ。

「それを理由にされているのではないかと思いまして」

「つまり予算は理由に過ぎないと」

「率直に申し上げればそうです」

言いにくいことをあえて率直に述べるのだった。肝が座っていると言える。

「私の気のせいであればいいのですが」
「予算の問題は確かです」
初老の官僚はそのアットールの嫌味とも捉えられる言葉に対しても答えた。官僚らしく事務的に。
「今年度は福祉に予算を充実させていますね」
「ええ」
「それは確かに」
アットールだけでなく他の議員達もそれに応える。今連合中央政府は福祉の再充実を掲げそれに予算をかなり回しているのである。それは彼等もよく知っていた。
「それと軍事費に予算が回り宇宙開発には余り回していないのです」
「それはもう私も知っています」
アットールもそれに言葉を返した。
「ある程度は、ですが」
「左様ですか」
「そのうえで申し上げます」
初老の官僚を見据えながらまた述べてきた。
「今新たな惑星を開発する計画が少ないのは予算の関係だけなのでしょうか」
「それですか」
「そうです。見たところ随分と少ないように思えます」
彼はここで手許にあるファイルを見た。そこには新規の惑星開拓及び開発に関する資料がある。彼はそれを見ながら官僚に対して問うているのである。
「例年に比べてもかなり。これでは」
「その同じファイルですが」
「はい」
ここでは官僚の言葉に応えた。
「後半を御覧になられていますね」
「無論です」

穏やかだがいささかシニカルな色を声に含ませてもいた。
「既存の惑星への開発計画ですか」
「それについてはかなり多いと思うのですが」
「確かにそうですね」
アットールもそれは認める。
「つまり再開発に重点を入れておられるのですか」
「そうです」
初老の官僚はそう答えた。
「これは開拓省からの意見ですが」
「開拓省の」
「そうです」
ここで白髪の若い官僚が出て来た。彼は今まで話していた初老の官僚の右隣にいた。眼鏡の似合ういささか無機質な感じのする若い男であった。
「これにつきましては私が説明させて頂いて宜しいでしょうか」
「ええ、どうぞ」
議員の一人がそれを許す。
「お話下さい」
「はい、それでは」
若い議員はそれを受けて話しはじめる。かなり穏やかな口調で。
「まずこれまでのことを振り返ります」
「はい」
議員達はそれに応える。

## 第二十八部第一章　官僚と議会その二

「これまでの数十年間は惑星開拓に力を入れてきました」
「そうですね」
「それは確かに」
　近年まで連合においては保守派も今政権を担当している改革派もそれぞれ惑星開拓に力を入れていた。それは膨張する人口や不況に対する対策でそれにより人口を移動させたり資金投資で金を動かして経済を活況化させたりしていたのである。そうした事情で開拓が行われてきたのだ。
「ですが今は違います」
「景気も好調だと」
「そうです。人口の増加は相変わらずですがこれは問題にならないと思います」
「いえ、それはどうでしょうか」
　アットールがそれに異議を唱えてきた。
「違うと仰るのですか」
「私はそう思います」
　謙虚だがはっきりとした言葉であった。
「何故なら人口が増えているからです。それを受ける為には」
「より一層の惑星開拓をですか」
「そう考えるのですが如何でしょうか」
「確かにそれは一理あります」
　若い官僚もそれは認めた。
「ですがここで大きな問題があります」
「大きな問題」
　アットールはその言葉に目を止めた。
「それは一体。財政的なものだけではなく」
「はい。もう一つありまして」

彼に応えて言う。
「私はそれは財政面よりも問題があると見ています」
「では是非御聞きしたいのですが」
アットールのその目が光った。
「その問題とは。何でしょうか」
「惑星自身の問題です」
若い官僚はこう述べてきた。
「惑星自身のですか」
「そうです。先にこの数十年惑星開拓を積極的に行ってきたと申し上げましたが」
「はい」
これはもう話されているし既にここにいる者ならば誰でも知っていることである。しかしそれでもまた話されるところに重要な問題があると言えた。
「それです」
「それといいますと」
「開拓こそ行ってきましたがインフラ等がまだ不充分なのです」
彼はそこを指摘するのだ。惑星開拓はただそこに移住して終わりではないのだ。インフラもまた重要な問題なのだ。それがなければまともな経済活動すらできないからだ。
「土地の開墾もまだ未発達の惑星も多いですし」
「そこを充実させていくべきだと仰るのですか」
「その通りです」
彼はそうアットールに述べた。
「開拓省はそう考えています」
「成程」
アットールはまずはその言葉を聞いて頷いた。そのうえで言うのであった。
「一理ありますな」
「有り難うございます」

「しかし」
だがそれで終わりではなかった。彼はここでまた言うのだった。彼にしても自分の意見をそう簡単に収めるつもりはなかったのである。
「今一つわからないものがあります」
「といいますと」
「それでも。数が少な過ぎます」
またしても開拓する星系、惑星の数について指摘するのだった。
「このままでは」
「それが問題だと仰るのですか」
「その通りです。これでは」
アットールはまた言う。
「人口増加に追いつけないのではないでしょうか」
「そうはなりません」
若い官僚は静かに言葉を返してきた。
「決して」
「断言されましたね」
「はい」
また断言する。口調は穏やかだがそれでも言葉そのものは険しい。どうやらそれが彼の性格であるらしい。意外と厳しい性格のようである。

## 第二十八部第一章　官僚と議会その三

「それは開拓省も既にチェックしています」
「だからこそこれでいけると言われますか」
「今連合の人口増加は四兆です」
連合の人口についても言及される。これがまず問題となるのは言うまでもない。なぜならそもそも移住というものは増え過ぎた人口を他の場所に移すことによって居住や環境、食料の問題を解決するのが目的だからだ。だからこそ人口が問題となるのである。
「それに合っていると思われます」
「将来の人口増加についてもですか」
「その通りです」
またアットールの言葉に答えた。
「数十年の新規惑星開拓によりその分は満たされています」
「具体的にはどれだけですか？」
アットールはそれも尋ねてきた。尋ねる部分が実に多岐に渡っている。実は彼はこれまで尋ねたことについてもこれから尋ねるつもりのことも全てわかっている。わかっていてあえて問うのもまた駆け引きであった。彼は今駆け引きをしているのだ。
「今の状況で養える人口は」
「六兆かと」
「六兆ですか」
「はい、今の技術では」
技術の問題も提示された。
「今の連合の状況ですと六兆までは充分に養えます」
「技術の進展についてはどうお考えですか」
「これについては残念ですがはっきりとしたことは申し上げられません」
こう答えるしかなかった。技術の発達や登場というものは多分に

イレギュラー的な要素を含んでいる。だから迂闊なことは言えないのであった。
「だからこそ六兆です」
「その六兆まで人口が達するのは」
アットールはここで己のデータを出した。これまで控えていたがあえてここで出したのも駆け引きであった。あえてそうしたのである。
「確か三十年後の予想ですか」
「はい」
向こうもそれは知っていた。冷静に答えてきたのがその証拠であった。
「中央政府総理府の統計予想ではそうなっております」
「より早くなる可能性も指摘されていましたな」
アットールはそこを言う。
「確か。二十年後になる可能性もあると」
「はい。それも存じております」
官僚もまたそれに答える。彼はそれもわかっていた。何処までも己の仕事の知識に詳しい男であった。アットールはそのことに内心感嘆していたが当然ここではそれを言葉に出すことはなかった、そのまま聞いていて反撃に転じるだけであった。
「それから先はまた開拓に重点を置くべきだと考えます」
「それは何時でしょうか」
「十五年後です」
長期的な展望が今出された。
「その頃にはシフトを変更するべきであるというのが我々の出した結論です」
「少なくとも今ではないと」
「そうです」
そこは強調してきた。まるでアットールに対抗するかのように。
「さもなければ今開発している惑星の発展に支障が出ます」

「成程。つまり今は我々にとっては伸びる時期ではないと」
アットールはそう結論付けてきた。しかしこれは自分の為に出した結論ではない。自分に議論を有利に進める為にあえて出した逆説的な結論なのである。
「そうお考えですか」
「何度も申し上げますがそれが開拓省の考えです」
そこをまた強調してきた。
「如何でしょうか」
「やはり賛成はできませんな」
アットールはそこまで聞いたうえで静かに答えてきた。
「それは」
「理由は」
「やはりそれでは人口増加に間に合わない可能性があるからです」
そしてまた言うのであった。
「二十年後です、早ければ」
「ええ」
官僚もアットールが強調してきたそこに応える。
「早ければですね」
「それで十五年後とは。問題が起きませんか」
「それについても既に検証済みです」
彼はそう言葉を返すのであった。
「十五年後から行う大規模な惑星開拓は」
「大規模な」
「大国のそれを中心として行われます」
そう言ってきた。

## 第二十八部第一章　官僚と議会その四

「大国のですか」
「今の統計によりますと大国での人口増加が顕著です」
「はい」
アットールはこれも知っていた。この場合の大国とは日米中露だけではない。旧東南アジア諸国やブラジル、トルコ、その他の新興国家の中での大国達に見られるものである。彼はそれもまた調べていた。これは己の政策の根拠となるものであるからだ。
「それに対して行うものです」
「具体的にはどれだけの規模でしょうか」
「二十年計画です」
「二十年」
アットールはそれを聞いてまずは眉を顰めさせた。
「またそれは随分長い年月ですね」
「そして人口にして五兆人相当」
「五兆人」
この人口数にもまた眉を顰めさせる。それはアットールだけでなく他の議員達もであった。
「大き過ぎないか？」
「確かに」
「開拓だけでなく開発も合わせて行います。既存の星系、惑星への開発もです」
「そうして五兆人規模に」
「そうです」
アットール達に答えた。
「それが次の開拓計画です」
「また随分大きなものですな」
アットールは眉を顰めさせながらも冷静さを保って述べた。

「それだけのものとは」
「百年後人口はさらに増大します」
官僚は言った。
「十兆になる計算だったかと」
「そう予想されていますね」
アットールもそれは認める。
「今までの人口増加率も考えまして」
「そうです。それを念頭に置きました」
「それでその規模ですか」
「驚かれるものでしょうか」
ここで意外な言葉が出た。官僚は別に驚くべきことではないと言ったのだ。これにはアットール達委員会に出席している議員達は色を失った。
「何と」
「今何と」
「何故ならこれだけの規模の開発はいつものことだったからです」
官僚は平然と述べた。
「違うでしょうか」
「それは人口の割合から見た御言葉でしょうか」
アットールが彼に問うた。
「今までとは」
「そうです」
官僚もまたそれを認める。
「以前には倍以上の移住計画も立てたことがありましたが」
「確かに」
「五百年前でしたな」
かつて彼等は途方もない開拓計画を立ててそれを実行に移したことがあるのだ。それを僅か百年で達成し途方もなく巨大な開拓地を開拓し終えて移住しているのだ。連合の歴史においては『大移住計画』と書かれているものである。彼等はそれを思ったのだった。

「それに考えればまだ小規模ですしそれに」
「それに」
「この程度の開拓計画は一宇宙世紀に一回はしていますが」
一宇宙世紀は百年である。こうしたところはおおよそ西暦に準じる。なお連合では今も西暦も使っている。併用という形になっているのだ。
「どうでしょうか」
「つまりこの場合は数はまやかしであると」
アットールは問うた。
「そう仰りたいのですね」
「少なくとも統計上の数はそうです」
微妙な言い方であったがその通りであった。官僚というものは数字を念頭に置いて何事も為すがこの場合はその時の状況も大きく関係するものである。だからここでこの若い官僚はあえて今出ている数字についてこうしたコメントを述べたのである。
「あくまで統計上ですので」
「実際の国力と照らし合わせて考えるとそうでもないと」
「そうです、充分為しえるものです1
彼はそう結論付けてみせた。
「ですので。今回もまた」
「実行に移していいというわけですか」
アットールはそこまで聞いてまた考える目になった。
「成程」
「おわかりでしょうか」
「それについてはわかりました」
そのうえで若い官僚に対してこう答えるのであった。

## 第二十八部第一章　官僚と議会その五

「そして今は新たな開拓を控えるということも」
「少なくとも開拓省はその方針です」
彼はまたこう述べた。
「それを御理解頂ければ幸いです」
「私はわかりました」
アットールはそれに応えてこう述べた。明らかに含みのある言葉であった。
「ですが」
「ですが」
「市民がそれを納得するかどうかは別問題であると申し上げておきましょう」
そうしてこう言うのであった。議員を動かすのは市民である。選挙で選ばれる立場であるからこれは当然である。例えば何処かの国と何らかのトラブルがありその際選挙があれば市民の中に強硬的な考えが強ければそうした議員が多く選ばれるしそうでなければ宥和派の議員が多く選ばれる。そういうわけである。
「市民ですか」
「そうです。一応は申し上げておきます」
また言うのだった。
「それをお忘れなきよう」
「わかりました。それでは今回の説明はこれで」
「宜しいでしょうか」
最初に説明を行っていた壮年の女性官僚も議員達に問うてきた。
「これで」
「いや」
だがここで別の議員が声をあげるのだった。
「申し訳ありませんが一つ流れている話があります」

「それは一体」
「予算です」
この説明会の最初の頃の話であった。
「予算ですか」
「まずは開拓の是非は置きましょう」
話が複雑化するのを恐れてそれはまずは置かれた。
「そのうえで、ですが」
「ええ」
「その惑星再開発にはどれだけの規模のものになるでしょうか」
「それですか」
「そうです」
そこをまた問うのだった。
「開拓が予算面でも問題があることもあり縮小しているのを考えるとそれよりも低い予算であると見受けられますが」
「それはその通りです」
女性官僚は静かに答えた。
「少なくとも例年の惑星開拓よりは小規模です」
「ほう」
「それでは」
またアットールが彼等に問うてきた。彼がこの委員会での質問役になっているのは彼の個性故である。そうして話を聞いているのである。
「一体どれだけの規模の予算でしょうか」
「中央政府国家予算の三パーセントです」
彼女はそう答えた。
「来年度の。その予定ですが」
「三パーセントですか」
「そうです」
またアットールに答える。
「それで問題はないと思いますが」

「確かにそうですね」
彼も一応はそれを認めるのであった。
「ですがその予算でいけますかな」
「計算上ではこれで充分です」
彼女はまたアットールに説明を返した。
「それは後日お配りするファイルにも明記しております」
「左様ですか。まあ若し予算が足らなければ」
ここで彼は微妙な顔を見せる。そのうえで何かを含んだ微笑みを浮かべながら言うのであった。そこにはある種の意地悪ささえかいま見えていた。
「軍事費から削ればいいでしょうか」
「おいおい、それはまた」
それを聞いた同僚の議員達が苦笑いを浮かべて彼に声をかける。
「暴論ではないかね」
「そうだ。幾ら何でも」
「ですが。減らすとなればまずそこでしょう」
しかし彼はなおも言う。

## 第二十八部第一章　官僚と議会その六

「まさか教育費や社会保障費を削減するわけにもいかないでしょう」
「それは確かに」
「その通りだが」
これは連合の実情が出ていた。彼等にとっては軍隊というものはあまり存在感のないものであり必要であるとの認識はあるが過度のものではないのである。そこがサハラや彼等の宿敵であるエウロパとは違うのだ。連合の巨大さと平和さがそれを許している。
「だからですよ。まあそうならないことを祈りますが」
「わかっています」
女性官僚も答える。
「それも認識していますので」
「今回も軍事費の予算はあれですか」
アットールは軍事費についても言及してきた。
「総生産の」
「一パーセントから二パーセントです」
彼女ははっきりと告げた。
「その間で今調整中です」
「そうですか、やはり」
アットールはそれを聞いて納得した顔になった。予想通りだと思ったのである。
「その枠内ですね」
「これ以上増やすことはありません」
「そうです。そうあるべきです」
彼はその言葉に応えて言う。
「我々は他のことにお金を色々と回さなければならないので。特に」
「惑星にだね」
「そうです。我々にとって一番重要なのはやはりそれです」

開拓と開発、それが第一なのである。軍もその発展を阻害するような海賊やテロリストを排除するのが第一の目的である。連合においては軍はそうした存在と考えられている。なお開拓と開発に続くのが経済発展であり貿易である。そこから文化だ。連合という勢力は他の勢力に比べて比較的戦乱や流血が少ないからこその考えである。

「ですから。軍事費は最低限で宜しいでしょうね」

「それは国防省にお話下さい」

若い官僚は表情を変えずにそう述べた。

「私達の専門外ですので」

「はい。それについては御聞きするつもりはありません」

アットールの方でもそれを言う。

「御安心下さい」

「はい」

「それではこれで宜しいでしょうか」

また女性官僚が言う。

「今回の説明会は」

「はい、これで終わりとしましょう」

委員長が述べた。

「今回も御苦労様でした」

「わかりました」

「それではこれで」

「次回ですが」

終わる時に委員長が述べる。

「三日後今回と同じ時間でこの場所で。宜しいでしょうか」

「わかりました」

アットールが答えた。

「それではそのように」

「御願いします」

こうして次の日まで伝えられて説明会は終わった。アットールは

この説明会が終わると同僚の議員達と共に食事に入った。入ったのはベイクドポテトにオニオンリングス、レリッシュキャベツ、バーベキューリブであった。何処か西部劇を思わせる店内に合った料理であった。そこにパンとビールも頼んでいた。

「何かこのメニューは」

同僚の議員の一人がテーブルの上の料理を見て言う。

「随分と野菜が多いね」

「そうですね」

アットールもそれに答える。

「アメリカの料理といえば肉のイメージが強いと」

「はい」

「そう思っていましたが」

彼等はそれを認める。実際にアメリカでは肉をよく食べる。しかも牛肉というイメージが強いのである。しかしここでアットールは言うのであった。

「ところが野菜もよく食べまして」

「そうなのですか」

「意外ですか」

「否定はしません」

彼等はそれを自分達でも言う。彼等の持っているイメージを。

## 第二十八部第一章　官僚と議会その七

「それについては」
「確かにそれはあります」
アットールもその噂を知っている。だがそれはあくまでイメージでしかないと言うのだ。
「しかしそれだけではなく」
「こうして野菜も多いと」
「特にこれですね」
ここで彼はベイクドポテトをフォークで切ってみせた。そのホクホクした感じが仲間達にも伝わる。
「如何ですか、このポテトは」
「言うまでもないかと」
「見ているだけで食欲をそそります」
彼等もまたジャガイモを愛している。それならば答えはもう決まっていた。こうして茹でたり焼いたりしたジャガイモというものは最高の味を持っているからだ。
「そしてこれも」
「玉葱ですな」
「どうですか、肉にはやはりこれです」
玉葱を指し示して述べる。もうジャガイモは一口だが口の中に入れている。そうしてその絶妙の味を楽しんでいるのであった。至福の時である。
「玉葱があってこそ」
「しかしそれは」
「やはり肉が」
「肉だけではないということです」
アットールはあえてこう言うのであった。楽しげな笑みと共に。
「肉を引き立て尚且つ自身でもその味を誇る」

「成程」
「それが玉葱だと」
「それはここにもありますし」
今度はレリッシュキャベツだが見ればそこにも玉葱が入っている。実に多い。
「多いですな、玉葱が」
「何かそれを見ていると」
「肉ですな、いよいよ」
「やはり肉ではないですか」
議員の一人がここで言った。言いながらバーベキューリブを見ている。言うまでもなくこの食事の主役であり今の話の主なテーマになっている存在である。
「アメリカといえば」
「それでどうして」
「御聞き下さい」
しかしアットールは同僚達に言うのであった。相変わらず落ち着いた口調で。
「肉だけでは食べられるでしょうか」
「いや、それは」
流石に彼等もそれは否定する。それぞれの首を横に振って。
「どうにもこうにも」
「味がくどくなります」
「では野菜だけでは」
そうしてまた同僚達に問うのであった。
「如何でしょうか」
「それも何だか」
「味気ないですな」
「やはり両方があってですね」
「はい」
「その通りです」

彼等はアットールの今の言葉に頷いた。確かに肉だけでも野菜だけでもどうにも上手くいかない。特に今テーブルの上にあるメニューは。片方だけだとそれぞれの個性があまりにも強くなるものであった。特にバーベキューリブと玉葱がそうであった。
「だからです。アメリカの料理もまた」
「両方を調和させていると」
「そうです。意外でしょうか」
「はい、意外です」
同僚の一人がはっきりと述べてみせた。
「アメリカ料理がそこまで考えているとは」
「意外と繊細と言うべきでしょうか」
「何か戸惑っておられますね」
「それも否定しません」
自分の言葉を聞いて楽しそうに笑うアットールにそのまま答えてみせた。
「アメリカですから」
「そういえばあのハンバーガーも」
アメリカ料理の代表と言われるハンバーガーが出た。やはりこれにつきた。アメリカらしいと言える食べ物でありこの国の象徴でさえあるものだ。
「肉と野菜が同時に入っていますな」
「そうですな」
「案外アメリカ人も考えているのです」
ここでまたアットールが言う。
「調和というものを。彼等なりに」
「彼等なりに、ですか」
「はい。そういうことになります」
そしてこう述べるアットールであった。

## 第二十八部第一章　官僚と議会その八

「決して肉だけ、ワイルドなだけではありません」
「彼等なりに繊細であるということですか」
「どうですか、実際の料理も」
そのうえで今並んでいる料理の味について問う。
「御感想は」
「悪くないですな」
「いや、むしろ」
ここでその味についても評価される。それについては。
「いや、中々」
「外見に比して何と言いますか」
「繊細と言うべきか」
そうなのであった。意外にも大味ではなく実に細かいところまで配慮が行き届いた味になっていた。少なくとも二十世紀のそれとは全く違うものになっていた。
「この肉にしても」
「焼き加減も」
満足のいくものであった。シェフの腕もあるが彼等にとって満足のいくものであった。
「素晴らしいです」
「ふむ、アメリカ人は二十一世紀から料理の腕を上げだしたと言われていますが」
「それを実感しました」
「あとこの肉ですが」
アットールもその肉を食べている。彼の口の中で様々な調味料で味付けされた肉の絶妙な味が広がる。その肉にも秘密があるのだった。
「おわかりでしょうか」

「何がでしょうか」
「この肉について」
「ただの豚肉では？」
同僚の一人が特に考えることなく述べた。確かにそれはごく有り触れた豚肉である。素材はいいであろうが確かに普通の豚肉だ。
「何か特別なのでは？」
「ペッカリーやバクのものではないようですが」
連合ではこうした動物も食べられているのだ。
「はい、豚肉です」
アットールもそれを述べた。
「ただの」
「そうですな」
「それが何か」
「ですから。豚肉です」
彼はそこを強調するのだ。同僚達もそこにこそ何かがあるのがわかった。それでまた彼に対して問うのであった。
「それでは」
「この豚肉に何が」
「豚肉であるということです」
彼が言うのはそこであった。
「アメリカの肉と言えば」
「牛ですな」
そうしたイメージがある。ステーキの影響のせいかアメリカといえば牛肉なのだ。少なくともそうしたイメージが非常に強いのである。
「しかし豚です、これは」
「これに何かがあると」
「実はアメリカでは豚肉を一番よく食べます」
アットールはここでそれを同僚達に述べるのであった。
「そうだったのですか」

「はい」
そして彼等の言葉に頷く。
「意外でしたか」
「いや、それは」
「思いも寄りませんでした」
本当に彼等の予想外の話であった。アメリカへのイメージが少しどころではなく崩れた。
「まさか豚肉だったとは」
「それを言うと中国のようですな」
「そうですね」
アットールも今そのことに気付いた。言われてみればその通りだと、実に思うのであった。これは彼にとっても意外なことであった。
「中国も豚肉がメインですし」
「その通り」
「それが少し、あれですが」
議員の一人が顔を暗くさせる。それには事情があった。
「困った話ではあります」
「それはわかります」
アットールは少し笑みになった。そうしてその同僚に述べるのであった。

## 第二十八部第一章　官僚と議会その九

「宗教上の関係で」
「その通りです。私はムスリムですので」
そうした事情からであった。といっても連合のイスラム社会においては食べる前にアッラーに謝罪すれば食べていいのである。それでも困ることは困るのだ。
「そこがどうにも」
「ではこの豚肉も」
「おっと、忘れていました」
その議員は言われてふと思い出した。それであった。
「アッラーよ」
彼は厳かな調子で言いはじめた。
「お許しを」
「これで宜しいですな」
「食べられますな」
「ええ」
彼はにこりと笑った。そうしてフォークとナイフでバーベキューリブを食べはじめるのであった。食べながら話を再開する。それは豚肉とアメリカのそれに戻っていた。
「アメリカは多民族国家でありましたので」
「それについてはもう」
「最初からですな」
議員達はアットールの言葉に応える。
「はい。ですから食べ方も食材も一つではありません」
「豚肉もまたですか」
「そうなります。彼等は豚肉を最初から食べていました」
彼は言う。
「それこそ建国の頃から」

「英国の影響ですかな」
英国、と言ったところで微かな侮蔑があった。それは英国がエウロパにあるからに他ならない。連合においてはエウロパの中でもとりわけ悪辣な国とされている。過去の植民地統治や異民族支配をかなり誇大化、歪曲して伝えて教えているのである。なおこれはフランスに関してもそうであるしスペインに対してもだ。しかもこの話にはオチがついて非常に面白いことになっていたりもする。
それはイタリアに関する話だ。何故か彼等は弱いが憎めない者達として言われるのだ。それがどういうわけか実に微笑ましいのである。
「イタリアの奴等は弱い」
これに言葉が尽きる。
「間違いなく勝てる相手には大苦戦して」
「互角の相手にはボロ負けする」
そういうことだった。十九世紀から二十世紀までの彼等の戦歴を見て言っているのだ。
「砂漠でパスタを茹でていたそうだな」
「戦場に行けばピクニックみたいにはしゃいで」
「女の子にうつつを抜かし」
伝説になっていた。
「脱走してはデートしているか喫茶店でコーヒー飲んでいて捕まったとかな」
「将校どころか一個部隊丸ごと脱走とかな」
何故かイタリア人に対してはこんな話ばかりで悪口は非常に少ない。流石の連合もイタリアに対してはどうにも甘いのであった。あとリトアニアがかつて連合王国を形成していたせいか今でもポーランドに対しては甘い。フィンランドもスウェーデンに対してはそうであった。
「そういうことばかりだな、イタリアは」
「情けない奴等だ」

そうは言っても顔は笑っているのだった。学校の授業でも教師が笑いながら生徒に伝える話である。英仏に対しては怒りを露わにするというのにだ。

そんな事情があり今ここにいる議員達もここで英国の名を不快気味に言うのだった。ここで彼等の中に不穏な空気が流れたがアットールはすぐに消した。

「まあ豚は何処でも食べていますね」

「確かに」

「それは」

これは彼等もわかる。豚肉というものは昔から食べられている。豚という文字に家の文字の一部が入っているのが何よりの証拠である。豚は家と関わりが深い生き物なのだ。

「英国もそのうちの一つであるというだけです」

「それだけですか」

「はい。それに牛は」

牛についても話される。

「農作業や乳業に使いますし」

「そうですな」

「それを食べるということは」

「かなりの無駄です」

それを今言う。

「ですから豚を」

「食べるのですな」

「今は豚も乳業に使っていますが」

これも品種改良の結果である。豚の乳もよく飲まれる。味もかなりいい。ここにいる彼等も豚の乳を飲んでいる。これも連合においてはよく知られている。

## 第二十八部第一章　官僚と議会その十

「かつては違いました」
「つまり豚は食べるだけですか」
「残飯処理やゴミの処理だけですな、他は」
豚の餌はそれであった。よくある話では糞尿を食べさせていた。
司馬遷の史記においてもそうした記述が存在する。合理的と言えば合理的な話である。
「そうだからこそ」
「豚は共にいた」
「確かに牛よりは食べる順位が優先されます」
「アメリカでもそれは同じだったと」
「そうなります」
アットールはそこにもう一つ付け加えてきた。
「そうして後一つは」
「ああ、それはわかります」
議員の一人が言ってきた。
「成長が早い、牛に比べて」
「そうです」
アットールは彼の言葉に微笑んで頷いた。
「そうだからこそ食べられます」
「成程」
「だからこそですな」
「やはりそれを考えれば」
彼等はその豚肉を食べながら話をする。ソースと肉汁が絡み合い実に美味い。その味を楽しみながら楽しく話を続けるのであった。
「豚肉はいいですな」
「牛よりも」
「味はそれぞれの好みがあり宗教的な問題も確かにありますが」

アットールもまた食べている。食べながら話を続ける。
「豚肉は優れた食べ物なのは間違いありません」
「はい」
「味だけではなく」
「そういえば栄養もですな」
そこも話される。
「内臓も美味いですし」
「そうですな」
内臓についても話される。豚は捨てるところがないとまで言われている。実際に連合各国では豚肉は全ての部分が食べられる。ここで面白いのは連合ではあらゆる動物がそれこそ骨の髄まで食べられるのに対してエウロパやサハラでは必ずしもそうではないというところだ。エウロパではこれを連合の者達の貪欲さ、残虐さの証とされる。だが実際のところは彼等も内臓や血を食べないわけではない。もっとも彼等も流石にアザラシやマナティー、恐竜等は食べないが。連合ではごく普通の食べ物であってもだ。
「まさに最高の肉です」
「いや、全く」
「中々どうして」
「有り難い存在です」
「アメリカ人もそれがわかっているのです」
またアットールが述べた。
「それもよく」
「だからこそ豚肉を最もよく食べるのですね」
「そういうことです」
そう同僚達に答える。
「彼等もまた」
「しかしそれはよく考えれば当然ですな」
不意に一人が言うのだった。
「当然とは？」

「アメリカ人だからです」
こう言うのだ。
「彼等の合理主義を考えれば。豚肉を選ぶのも」
「成程」
「そうなりますな」
アメリカ人の合理主義が出れば余計に頷くことができる。それならば。
「アメリカ人らしいですな」
「ふむ、話がわかれば」
彼等はあらためて頷くのだった。
「そういえばですね」
ここでアットールがまた言う。
「アラブで豚が食べられないのもその合理主義故でしたね」
「そうなのですか」
これには殆どの者が驚いた顔になるのだった。

## 第二十八部第一章　官僚と議会その十一

「宗教的な戒律ではなくですか」
「それが定められた理由です」
アットールの返答はこうであった。
「宗教的なものにしろ定められるには必ず根拠があります」
「ええ」
「確かに」
彼等にもそれはわかる。彼が言うのはそこであるのだ。
「それなのです」
「根拠があったと」
「そう、それは」
もう豚はなかった。アットールは今度はパンを食べながら語る。柔らかく白いパンであった。口の中でもその柔らかさがはっきりとわかる。彼はそれを食べながら同僚達に静かに述べるのであった。
「まずは衛生的な理由です」
「衛生的ですか」
「そういえばあれですな」
ここで同僚の一人がふと気付いた。
「豚肉というものは」
「はい、元々寄生虫が多いものです」
アットールはそれをよく知っていた。実は豚は雑食性なので寄生虫が多いのである。こうしたところが牛や羊とは違う点であるのだ。
「ですから生では」
「危険ですね」
「まあ日本人はそれでも食べていますが」
日本人の生物信仰がここでで出ていると言えた。彼等は何でも生で食べようとする。しかしその彼等にしても豚に関しては中々生では食べようとしなかった過去が存在している。そうした慎重も日本

人は持っていると言いたいがこれに関しては川魚を生で平気で食べていたのであながちは言えないものがあったりする。
「彼等は置いておいてですね」
「羊でも鶏でも刺身にしますし」
「あげくは蛙でも」
「とりあえずそれは例外です」
アットールはそれは外すのであった。
「それでですね」
「はい」
そうして話を元に戻す。
「当たる危険性が高い為食べなかったのです」
「成程、それならわかります」
「それもよく」
彼等もその言葉に頷いた。
「そういうことでしたら」
「衛生的な理由からですか」
「犬の唾と同じです」
アットールはふと一見全く関係のないものも出したのであった。
「それとも同じです」
「犬の唾!?ああ」
これは同僚達もわかった。それもすぐにだ。
「あれですな、狂犬病」
「それです。豚肉にあたるのも狂犬病もまた危険なこと」
狂犬病はこの時代にはワクチンが開発されなおる病気になっている。しかし当時は違っていて確実に死ぬ病気だったのだ。それは二十一世紀まで同じであり狂犬病を克服するのに人類は天然痘やペストに対するよりも苦労しているのである。
「そうした理由からです」
「ふむ」
「だからこそ不浄であると」

「そう、そして」
彼はさらに述べる。
「他にも理由があります」
「他にもですか」
「そう、それは」
そしてまた言う。
「合理的側面です。今まで申し上げてきた」
「合理的側面ですか」
「それはどういう」
「豚は清潔好きな生き物です」
まず指摘されたのはそこであった。
「飼育するには多くの水が必要です」
「そうですな」
「あれで。奇麗好きですから」
実は豚は繊細な生き物なのだ。そのが意見から不潔で鈍重に思われやすいが実は違うのだ。だからこそペットとしても飼われたりするのである。

## 第二十八部第一章　官僚と議会その十二

「だからです。アラブでは」
「水が少なかった」
「少なくとも他の地域より貴重であった」
「そうです。だからこそ豚は疎まれた」
こうした事情からだったのだ。砂漠の多いアラブでは豚を飼って食べるのはかなり非合理的であったのである。だからこそムハンマドは豚肉を食べることを禁じたのだ。
「そうしたことからです」
「全ては合理主義故に」
「アメリカもアラブも」
「そうです。思えば今回もですね」
ここまで語ったうえで自分達にそれを重ねてきた。
「私達もまた」
「合理的に考えるならば」
「どうするべきか」
「まずは彼等の主張をもう一度学びましょう」
アットールの提案はこうであった。
「結論はそれからです」
「それですと」
ここで議員の一人が言う。
「場合によっては我等の主張を引っ込めることになりますが」
「そうですな」
同僚達もそれに頷く。
「その可能性は否定できません」
「それは我々にとっては」
「まずは学んでからです」
彼は言うのだった。

「合理主義にのっとり」
「合理主義ですか」
「まあここで重要なのは」
アットールは言う。
「市民に納得できるように話を纏めることです」
「そうですな」
「それが第一です」
建前での話である。実際にはどうしても彼等の支持者に対してになってしまうのが民主主義の宿命であり持病である。これはかなりのところ致し方ないところがあった。
「さて、開発なら開発で」
「どうなりますかな」
彼等はその話をする。
「今のところはこれでは、ですが」
「はい、まだ全てを見ていませんが」
「こうまで開拓の数が少ないと」
彼等の言うのはそこであった。やはりそれを問題としていた。
「話になりません」
「我々としましては」
彼等は保守派である。彼等は大規模な開拓を主張しているのである。
「これより遥かに開拓の数を多くしていきたいのですが」
「向こうはそうでないと言う」
「どうやらですね」
アットールは考える目になっていた。ここではビールがそれを助長させていた。酒というものは不思議なもので時として考えを鋭くさせたりもするのだ。逆の場合もかなり多いが。
「今回政府と官僚の間に考えの齟齬は殆どありません」
「そうですな」
「それはわかります」

同僚達もそれを感じている。彼等にとってはあまり面白くない話だ。
「そして与党も」
「考えが纏まっていますか」
「かなり手強いですな」
彼等の中の一人がそれを認めて呻く。
「どうにもこうにも」
「どうしたものか」
「慎重に行きましょう」
そんな彼等にアットールが声をかける。穏やかな調子で。
「焦っても何にもなりません」
「ええ」
彼等もそれに頷く。
「ここはね」
「しかしどうにも」
彼等の声が微妙に響きが悪くなったのだった。

## 第二十八部第一章　官僚と議会その十三

「我々に劣勢なような」
「それを言うと」
どうしようもないのだった。彼等もそれがわかっていた。それでも言うしかなかったのだ。
「話になりません」
「左様です」
アットールもそこに突っ込みを入れるのであった。
「元々それはわかっているのですから」
「その通り」
他の議員がそれに頷いた。
「何しろ我々は野党ですから」
「それに関しては」
「数、ですか」
「そう、数です」
そこがあらためて指摘されるのであった。
「悲しいかな民主主義は」
「そうですな」
そうして彼等はシニカルな口調で述べ合うのであった。野党めいていると言うべきであろうか。少なくともそれは多数派のものではないのがはっきりとわかる。無論多数派が常に正しいとは限らない。しかし彼等はここでは少数派なのは紛れもない事実であった。
「数が大きな力です」
「それを持てる者こそが正義」
結局はこうなる。
「そういうことですな」
「全くです」
「まあそれは受け入れるしかありません」

アットールがまたシニカルな笑みで述べるのであった。
「選挙で負けたのは事実ですから」
「その通りです」
同僚の議員達は彼の今の言葉に憮然とした顔で答えるのであった。
「それはもう」
「今更言っても」
「覆水盆に返らず」
中国の古い言葉が出て来た。
「そういうことです。今ここで選挙での敗戦を嘆いても仕方ありません」
「ええ」
「問題はこれからです」
それがわかなぬ程彼等は愚かではない。それもはっきりしていた。
「どうするべきか」
「そこですな」
「何、やり方はあります」
アットールは落ち着いた声で同僚達に述べるのであった。
「それはそれでね」
「というと」
「何か御考えが」
「はい」
アットールはまた頷くのであった。今度はビールを飲みながら。
「まずは政策においては」
「ふむ」
「転換ですかな」
「そうです」
いささか柔軟な考えを提示するのであった。
「開拓にこだわるのが愚ならば」
「それを転換して」
「開発に重点を移しますか」

「まあこれはオフレコですが」
オフレコとは言ってもそこが本題なのは言うまでもない。そこが肝心なのである。
「利権はそれでも得られますし」
「そうですな」
「それは」
同僚達も納得した顔で頷く。この場合は彼等のそれもあるがそれよりも支持者や後援者の利益がそれにあたるのだ。ここもまた重要なのである。
「それに関しては問題ありませんな」
「それならば」
そう言い合って頷き合うのであった。
「何はともあれ利権ですから」
「仕方ないと言えば仕方ないですが」
これもまた民主主義である。それもまた真実である。

## 第二十八部第一章　官僚と議会その十四

「しかし」
「それを何とかしなければ我々は生きられませんから」
「その通りです」
アットールは今の言葉を待っていた。その冷徹な言葉がそれを如実に表わしていた。
「政治家はまず何の為にあるのか」
「市民の為」
これが重要なのだ。
「我々を支持してくれる」
「それですな」
そこなのだ。支持してくれる人の為に動く、それが政治家なのである。かなり極論であるが民主政治においてはそうなるのである。奇麗事ではなくだ。
「その為には」
「ここは彼等の利権を守らないと」
「我々は落選ですな」
それは死と同じだ。政治家にとっては。
「だからこそ何とかしなければ」
「そしてその為には」
「そうです」
またアットールは言う。
「今回もやるべきことをしなければなりません」
「そうです」
「それでは」
「そこについてのお話です」
そうして話を切り出すのであった。
「宜しいでしょうか」

「そこですか」
「まずはここを引き揚げましょう」
店を変えるように提案してきたのだった。
「そしてですね」
「他の場所で、ですか」
「そうです」
彼は答えた。
「さしあたっての場所は」
「ハンニバル議員の事務室ではどうでしょうか」
議員の一人がこう提案してきた。
「彼に連絡して」
「そうですね」
アットールもその言葉に考える目になったのであった。すぐに。
「それはいいですね」
「それでは」
「そのように」
話は決まった。だがここで一つ問題があったのだった。
「いや、ただ」
議員の一人が言う。
「御本人の問題が」
「おっと」
「そうでしたな」
他の者達もふと気付く。迂闊と言えば迂闊であった。
「それを忘れるとは」
「どうやら我々も」
「失礼しました」
それはアットールもであった。バツの悪い苦笑いを浮かべていた。
「私も。うっかりとしていました」
「ははは、まあそれはお互い様です」
「そうです」

同僚達が彼をそう慰める。
「ですからそれ程落ち込むこともないかと」
「それよりも」
そうしてまた言い合うのであった。
「これからですぞ」
「左様、ですから」
「ええ」
彼等の言葉に応えるのであった。もう普段の彼に戻っている。
「それではすぐに」
「はい」
「連絡しましょう」
言うまでもなくハンニバルにである。
「確か今は地球におられましたな」
「そうだったかと」
そう話をしながら席を立って店を出る。勘定も払うのを忘れない。
ハンニバルに連絡をした後で彼の事務所に集まった。そうして彼を囲んで話をするのであった。

## 第二十八部第一章　官僚と議会その十五

「まずはよく来てくれた」
ハンニバルは彼等を出迎えて述べる。既に彼等を出迎える準備はできていたのかすぐにコーヒーが出される。一同はそのコーヒーを応接用のソファーに座って飲むのだった。ハンニバル自身もそのソファーに座っている。
「丁度君達と話をしたいと思っていた」
「そうだったのですか」
それを聞いてアットールが彼に顔を向ける。既にその右手には黒いコーヒーを入れたカップがある。そこからはあの独特のかぐわしい香りがする。
「開発と開拓についてだな」
「そうです」
アットールはハンニバルのその言葉に応える。その通りであった。
「実は先程委員会において財務省と開拓省の説明を聞いたのですが」
「開拓は今回は殆ど行わないのだったな」
「そうです。それは御聞きでしたか」
「情報が流れてきていた」
ハンニバルは一言で述べたのであった。
「既に私のところにもな」
「ほう。それでは」
アットールはそれを聞いて言う。
「既に話は決まっていたのですか」
「おそらくはな」
ハンニバルもまたコーヒーを飲んでいる。それと共にチョコレートケーキも食べている。実はこの組み合わせはハンニバルの好物でよく知られている。
「だから私のところにもその話が流れてきた」

「情報元は」
「マスコミだ」
そうアットールに述べる。
「親しい記者から聞いた。ここでな」
「ふむ、そうだったのですか」
アットールはそれを聞いて考える顔になった。そうしてまた彼に問うのであった。
「それは何時頃のお話でしょうか」
「確か三日前だったか」
そう答える。
「そう記憶している」
「三日ですか」
「そうだ。確かその辺りだ」
それを今アットールに告げる。
「それがどうかしたか？」
「いえ、三日ですと」
アットールはその日を見て微妙な顔になる。そうしてまた言うのであった。
「既にそこの時には決まっていましたか」
「おそらくはそれより少し前にな」
「そうでしょうね」
彼はまた頷いた。
「それはわかります」
「これも政府の決定だろうな」
ハンニバルはこうも述べた。
「彼等は今は惑星開拓には消極的だ」
「全くです」
アットールはそれが不満であった。それを顔にもはっきりと出していた。コーヒーを飲みながらその不満に満ちた顔でまた言うのだった。

「それよりも福祉と軍事に重点を置いていますね」
「そうだな。惑星開発と」
「その三つを公約にしていますし」
与党の改革派はそれを看板にして選挙を戦いそうして勝った。これに対して野党は惑星開拓と軍備の縮小を訴えていた。それが支持されなかったのである。
「我々はそれで失敗したのでしょうか」
「結果としてはそうだな」
ハンニバルもそれは認めた。残念であるが。
「軍は特に必要ないと思うのだがな」
「いえ、それは」
だがアットールはそれには懐疑的であった。微妙な顔がそれを教えている。
「どうでしょうか」
「君は軍事には違う考えか」
「はい」
それをそのまま彼に告げた。
「私は軍備に関してはこのままでいいと思います」
「軍備拡張か」
「拡張と言ってもたかが知れています」
彼は穏やかな調子でこう述べた。
「連合の軍備は」
「確かにな」
それはハンニバルもわかる。わかっているがそれでもあまり乗り気ではないのがはっきりと顔に出ている。その顔を少し捻ってもみせてきた。
「だがそれでもだ」
「あまり賛成はされないのですね」
「連合軍は巨大だ」
そこを指摘する。

「あまりにも巨大だからこそ。周囲にいらぬ警戒をさせる」
「そこですか」
「そうだ。そうなればマウリアやサハラ諸国と不要な緊張を作りかねない」
彼はそれを気にしていたのだ。実は彼はマウリアとの関係を重視している。そのうえマウリアとは個人的に太いパイプを持っておりそれに影響が出ることも気にしていた。

## 第二十八部第一章　官僚と議会その十六

「それがな」
「マウリアはないのでは？」
アットールは少し考える顔をして彼に答えた。
「そう言える根拠は」
「あると言える」
彼は言う。
「ありますか？」
「友好国だからといって安心してはいないか」
ハンニバルはまた述べる。
「だからといって」
「そういうつもりはないですが」
「基本的にはだ」
ハンニバルはまた言う。
「同盟関係にあるとはいえだ」
「そういうことも考えておかなければなりませんか」
「ここだけの話私の事情もある」
そこも話す。仲間内であり彼等にもそのマウリアとのパイプで色々と便宜を計っているからである。何だかんだで持ちつ持たれつの関係である。
「それにも影響が出る恐れもある」
「それもありますか」
「複雑な関係にはしたくない」
彼は言う。
「それがな」
「微妙ですか、そこが」
「マウリアとの関係に問題が出ては本末転倒だ」
そこをまた指摘する。

「軍備もいいがな」
「何、それは問題ありません」
しかし彼はそこをまた言うのであった。
「我々の軍備は彼等には向けていませんし」
「それはそうだがな」
それはハンニバルも知っている。彼も軍事のことに関して無知ではないのだ。むしろ保守派の中でもかなり軍事通として知られている。
「それに」
「それに？」
「我等の軍事技術をマウリアにも譲渡しているではありませんか」
アットールはそこも言う。
「ですから特に彼等が警戒することはないと思います」
「それは彼等が、だな」
「そうです」
また言う。
「そういうことを考えれば彼等に関しては」
「楽観的に思えるが」
「そうでしょうか」
やはりアットールにはこれといって危険視するものがないように思えた。これはハンニバルとアットールの考えの相違であった。だからかなり致し方ないものがあった。それにここにはハンニバル個人の事情もある。どうしようもないものもそこにはあるのである。
「他の皆はどう思うか」
「我々ですか」
「そうだが」
それを彼等にも問う。
「どう思うかな」
「そうですね」
「私達も」

「アットール君と同じか」
「はい」
そのうちの一人が彼等を代表して答えてきた。
「私達はそう考えます」
「軍備自体に関してはそれぞれ考えが異なるでしょうが」
それでもマウリアとの関係はそれ程問題視する必要はないのではという考えは彼等と一致していたのである。それをまた言うのであった。
「そう思うのですが」
「どうでしょうか」
「ふうむ」
ハンニバルは彼等のその言葉を聞いて考えるかおになる。そうしてまた述べるのであった。
「そういう考えもありますか」
「ですが貴方は違うと」
「はい」
それを彼等に対しても述べるのであった。
「どうしても」
「やはりマウリアとの関係が気懸かりですか」
「我々のマウリアとのパイプにも支障が出るのでは？」
彼もまたそこを言う。
「連合の極端な軍備拡張は」
「極端でしょうか」
アットールはそもそもそこにも異議を呈する。
「一三〇億ですよ」
ハンニバルはそれに対して連合軍の数を提示する。一言で言うと圧倒的な数である。これだけの数を集められる勢力は言うまでもなく他には存在しない。
「これだけの数となると」
「そこですが」

アットールはそこも指摘する。

## 第二十八部第一章　官僚と議会その十七

「膨大な数と考えておられますね」
「はい」
ハンニバルもそれを認める。
「そうではないのですか？」
「確かによく言われています」
アットールはそれも認める。実際に連合軍の膨大な数は色々と言われている。エウロパにおいては直接的な脅威と言われている。
「特にエウロパでは」
「マウリアでもそうした話が出ています」
ハンニバルはそこをまた指摘する。
「一部においてですが」
「一部ですね」
アットールはそれもまた知っている。やはり慎重に言葉を述べるのであった。
「それも確か」
「彼等はあくまで連合との同盟に懐疑的な一派です」
流石にマウリアと個人的に太いパイプを持っているわけではない。そうした情報も持っているのだ。その中でそうした情報も持っている。マウリアにも様々な勢力が存在している。中には連合との同盟に対し懐疑的な勢力も存在しているのだ。
「ですがそれなりに影響力を持っていまして」
「彼等を警戒していると」
「その通りです」
そういうことなのであった。
「彼等の勢力が勢いづくことは避けたいのです」
「それは当然ですな」
「確かに」

他の面々もその言葉に頷く。
「我々だけの問題ではなく連合全体の問題になりますし」
「ひいてはマウリアとも」
「まず結論を申し上げますが」
ハンニバルはここで言うのであった。
「正直軍備拡張もマウリアとの関係が悪化しなければそれでよいのです」
「サハラに関しては」
アットールはサハラに関しても問うた。
「どうなのでしょうか」
「サハラは」
ハンニバルはどうにも首を傾げるのであった。
「申し訳ないですが私はあまり知りません」
「私もです」
アットールも言った。
「彼等はどうも彼等だけで纏まっていますので」
「そうですな」
「確かに」
同僚達も彼の言葉に頷いた。
「彼等はあまりにも独自な世界です」
「どうも。理解できないものがあります」
「彼等との関係に関してはまだ的確な判断がしにくいです」
ハンニバルは彼等の話を纏めて言った。
「ですから私も彼等に関してはあれこれ言えません」
「左様ですな」
「まあ中で纏まる方々ですし」
サハラは何処までも独自の世界である。だからこそ彼等も今まで隣にあってもこれといって影響を受けてこなかったのである。それは今でもである。
「我々としても」

「どうにもこうだと言えないですな」
「そういうことです」
ハンニバルは話を纏めにかかった。
「難しいことに」
「その難しい話はマウリアもですね」
アットールはサハラについてある程度話し終えてからまた述べた。
「彼等に関しても」
「そうです。先程も申し上げましたが我々との関係について懐疑的な一派が」
「彼等に対して工作は有効ですか？」
議員の一人が目を光らせてきた。
「買収は」
「どうでしょう」
ハンニバルはこれに関しても懐疑的な顔を見せるのであった。
「ああした考えの持ち主となると原理主義的な考えが多いのが常ですし」
「原理主義者ですか」
「はい」
そこが問題なのだ。原理主義者というものはあまりにも純粋であるが故に買収や懐柔が効果がないのである。そこが厄介な問題なのである。

## 第二十八部第一章　官僚と議会その十八

「ですから買収や懐柔は」
「効果が期待できない」
「困りましたな」
彼等はそれを聞いて腕を組む。それは彼等もわかっていることだ。
「そうした者達が多いとなると」
「マウリアにもいますか」
「連合にもいますしね」
アットールがここで言う。結局のところ同じ人間である限り原理主義者というものは何処にでも存在しているのである。連合はかなり合理的で実利的な社会であるがそれでも原理主義者は存在しているのだ。様々な価値観の持ち主がいるからこそだ。そこが問題なのだ。
「そうした考えの持ち主は」
「当然マウリアにもですか」
「何か。問題は厄介ですな」
「だからです」
またハンニバルは述べた。
「そこを何とかしたいのですが」
「技術供与や兵を向けないだけでは駄目ですか」
「そうなります。それに」
「それに？」
「最低限の備えはしていますし」
マウリアとの境にも何だかんだで最低限の兵は置かれているのである。これは当然の備えであるがそれすらも色々と言われるのが国際政治というものなのだ。
「そこも突かれて」
「つまり何でも問題になるのですな」

「そうです」
それが政治というものである。
「私はそれを危惧しています」
「何かそこまで聞きますと」
アットールは話をそこまで聞いてあらためて考えに入るのだった。
「あの長官の考えを聞きたくなりますね」
「あの長官！？ああ」
「彼ですか」
同僚達もそれが誰なのかすぐにわかった。連合の政治の世界においてはもう言うまでもないことであった。とりわけ軍事に関することならば、である。
「そう、八条長官です」
アットールはその名を述べた。
「彼の考えを聞きたいところです」
「しかしそれは」
「どうにも」
同僚達もハンニバルもここで首を傾げさせるのであった。
「仮にもあの御仁は改革派ですし」
「そうですな」
対立政党である。そう簡単に意見を聞くわけにはいかないのだ。
「ですが聞き出すように仕向けることはできます」
アットールはまた言った。
「それは可能ですが」
「まあ確かに」
「そうですな」
それに彼等も頷く。頷くがどうにもわからないものがあった。
「問題は聞き出し方ですな」
「そこです」
そこであった。
「どうするべきか」

「流石に彼でもはいそうですかと教えてはくれません」
八条は温厚な人柄で知られている。しかしそうおいそれと手の内を見せたりはしない。政治家がそれでは話にもならない。人が悪いとかそういう問題ではないのだ。
「どうすればですが」
「いや、ここは」
アットールはふと閃いた。
「方法がないわけではありません」
「方法が？」
「そうです」
彼は述べる。
「簡単なことですが。情報を流すのです」
「情報を？」
「そうです」
同僚達にも述べる。
「今こうして私達が懸念していると。それを流せば」
「彼も動きますか」
「自然とそうなるでしょう」
考えながらまた述べた。
「それでどうでしょうか」
「そうですな」
ハンニバルもそれを聞いて考える目になる。見ればまんざらでもないようであった。
「それをやってみますか」
「情報を流すのはただですし」
「はい」
ただ程使えるものはない。そういうことでもあった。
「ですからです。ここはそうして」
「わかりました。それではそれで行きましょう」
ハンニバルは述べた。

「それからの結果次第で私も考えます」
「それが宜しいかと。それでは」
アットールはそれでいくことにした。
「そういうことで」
「ええ、それでは」
同僚達も頷く。こうして彼等が連合の軍備拡張に対するマウリアの懸念を危惧しているという情報が流された。それと共に開拓についても色々と考えていることも情報として流された。それはすぐに連合の政界に流れた。それでまた舞台が動くのであった。

## 第二十八部第二章　情報が伝わりその一

情報が伝わり

アットール達の話についてはすぐに連合の政界全体に広まった。当然ながら八条のところにもそれはすぐに伝わった。だが彼はすぐには動かないのであった。

「やはりあれでしょうか」

由良が自身の事務室で色々と事務処理に当たっている八条に問うた。今彼は中央政府国防長官ではなくほかの様々な役職の仕事をしているのだ。八条家の嫡男として彼の仕事は色々ある。八条学園理事としての仕事もその一つである。

「これは」

「おそらくはそうだろうな」

すぐに由良に答える。あくまで機能性と合理性だけを考えた事務室にはこれといって装飾はない。彼はその中で黙々と事務処理を進めているのである。

「アットール議員がいたのだったな」

「情報ではそうです」

由良はそう八条に述べた。彼もまた事務処理を行っている。ソファーに座って書類を次々と処理している。彼もまた仕事をしているのであった。

「他にハンニバル議員も」

「何か保守派の領袖の一人と期待の若手の組み合わせというと」

「如何にもですね」

「そうだ。私にとっては惑星開拓は直接の関係はないが」

「はい」

直接関係はなくても関係はある。開拓した惑星には防衛衛星等を置かなければならないしその防衛は軍の仕事だからだ。しかしあくまで直接ではないのである。

「問題はやはり」
「マウリアへの懸念ですか」
「それだな」
また書類を一枚処理してから答えた。見ればそれは八条学園に関するものである。彼はこの学園の理事である。殆どすることがないがこうして仕事をしなければならない時もあるのだ。やはり色々と忙しい人物なのである。
「それが問題だが」
「マウリアにも原理主義者はいます」
「それは知っている」
次の書類を見ながら答える。見ればまた八条学園に関するものである。それも処理していく。見れば八条学園に関する書類がかなり多くなっている。
「それもかなりのな」
「何処にでもいるものですね」
由良も自分の書類を処理しながら言う。話の内容が自然とアットール達が行っていたものと重なっているのは偶然ではなかった。同じものを見ているからだ。
「そうした人物は」
「何処にでもいるものだな」
八条も特に表情を変えずに述べた。
「人が人である限りは」
「そうなりますか」
「強固な信念を持つのも人だからだ」
別にこれは悪くはないと言いたげであった。
「しかしだ。それでも」
「それでも？」
「それがあまりにも強いと。時として問題になる」
「それが原理主義者というわけですか」
「そうだ」

八条は一言で答えた。
「そういうことになる。彼等はあれだったな」
「ええ、あれです」
互いに知っているからこその言葉のやり取りになっていた。
「マウリアはマウリアで。連合との交流を拒む者達です」
「彼等も根強いな」
八条は書類を処理しながらであるが少し溜息をついた。彼等の存在に関してである。
「どうにもこうにも。一千年前からいたと思うが」
「そうですね。歴史書にはずっと名前が残っています」
そうした意味では生ける歴史でもある。悠久とさえ言われるマウリアの歴史の特徴の一つとさえ言われている存在なのだ。その存在の根強さは。
「度々出てはああだこうだと言っている感じです」
「その根拠といえば」
「マウリア独自の文化文明を守る」
つまりは文化的、文明的原理主義者というわけである。そうした意味ではかつてのイスラム原理主義者達と同じである。こうした文化的、文明的な原理主義者は結局のところ何時でも何処でもいるものである。自国の文化や文明を守ろうとする意志はどの国の市民にもあるものだからだ。
「それだな」
「そうです。ですが」
「それには異論があるのだな」
「その通りです」
由良もはっきりとそれを述べるのであった。
「彼等はあまりにも」
「個性が強過ぎるというのだな」
「そう思います。ですから」
「あまりその危険はないというのか」

「私個人の考えですが」

一応はそう断るがそれでも由良は自分の考えがそれ程間違っているとは思っていなかった。それは彼の中にあるマウリアへのイメージからである。

## 第二十八部第二章　情報が伝わりその二

「彼等程の個性の前では我々の影響なぞ」
「連合ではそう考えられているな」
八条も彼の言葉を受けるのであった。
「確かに」
「長官もそうなのでは？」
「否定はしない」
彼もまたそうした考えであった。
「あれだけ強烈な個性の国は連合にもない」
「そうです」
「文化においても文明においても。彼等の個性はあまりにも強烈だ」
強烈過ぎるが故に独自の勢力となっているのである。しかしそれでもマウリアではそうは考えてはいない勢力も存在しているのだ。人の考えは本当にそれぞれである。
「あまりにもな」
「だから私も大丈夫だと思うのですが」
「だが彼等は違うのだな」
「そうです。ある意味理解不能です」
「私もだ」
八条もまたそれを言う。
「どうして彼等の文化文明が壊れるのだ。我々ごときとの交流で」
「むしろ我々の方がですね」
「そう思うのだが。それでも」
しなければならないものがある。それはわかっていた。
「彼等は違う考えだからな」
「それが厄介です。そもそも」
「そもそも？」
さらに書類を処理しながら由良にまた問うた。

「彼等は自分達に自信がないのでしょうか」
「そうかもな」
八条は特に感情を込めることなくそれにこう述べた。
「結局のところはな。だからこそ排他的になる」
「自信があれば受け入れますか」
「そうなる」
そしてまた述べた。
「我々は彼等が自信を持てない根拠がわからないが」
「それも彼等それぞれの考えなのでしょうかね」
「そうだろうな。現実に彼等は存在している」
それは否定できない事実であった。
「原理主義者としてな」
「我々はどうするべきでしょうか」
ここで本題に入った。由良はそこを八条に問いたかったのだ。八条もそれをわかっていてあえて待っていた。これもまた話の駆け引きであった。
「その彼等に対して」
「彼等はあくまで少数派だ」
この前置きが八条によって述べられた。
「それはわかるな」
「はい」
それは言うまでもなかった。由良も素直に頷くことができた。
「議論においても」
「僅かな勢力でしかない」
実際のところはその程度なのである。キャスティングボードを持つまでにも到っていない、そうした僅かな勢力しか持っていないのが現実である。
「しかしだ」
「しかし？」
「それでも勢力を持っているのは事実だ」

そうなのであった。それもまた紛れもない事実だ。
「しかも基盤も持っている」
「そうですね」
由良はこの言葉にも頷いた。やはりそれもまた事実であったのだ。
「それではこのまま放置しておいては」
「厄介なことになりかねない」
八条はそこを指摘するのだった。
「マウリアにおいて我々との不協和音になる可能性がある」
「それを防ぐべきですが」
「もっとも保守派はそれと共に別の問題を抱えているようだがな」
「別の問題といいますと」
由良はそれを聞いて顔をあげた。やはりそれは気にことであった。彼等から見て保守派は対立政党であるがその相手の問題が気になるのは当然であった。
「ハンニバル議員のパイプだ」
「マウリアとのですね」
「そうだ。それへの影響も懸念しているのだ」
「それならばそれは問題視しなくていいのでは？」
やや利己的な言葉だったがそもそも政敵のことを気にかけるということ自体が有り得ない話だ。だからこの場合はそれでも構わないことであった。

## 第二十八部第二章　情報が伝わりその三

「彼等への不利益になるのでしたら。ましてやハンニバル議員は」
八条にとっては強敵の一人である。何かにつけて連合の軍備拡張に懸念を表明しているのである。それも財政面等様々な理由からだ。その中にはマウリアとの関係悪化を懸念する発言もあるがそれもこうした事情があるのであった。
「しかしだ。これはハンニバル議員だけには留まらない問題だ」
「連合全体にですか」
「隙間風はない方がいい」
八条はそう述べるのだった。
「出来る限りな」
「それではやはり」
「彼等の勢力を削いでおきたい」
八条は言った。
「ここでな。そうすれば軍備を拡張してもマウリアとの関係も悪化せず」
「全体的な関係もスムーズになりますな」
「しかしだ。どうにも」
ここで八条は難しい顔になるのであった。
「今の我々には」
「工作をする余裕がありませんか？」
「それはある」
それは肯定するのだった。
「だが。相手に問題がある」
「相手にですか」
「向こうの領袖だが」
「確かクサム＝ラコシ氏ですね」
「そうだ、彼だ」

八条はその名前を指摘するのだった。
「彼は。工作が通用するような相手ではないそうだ」
「そうなのですか」
「まず。清廉潔白だ」
そこがまた実に原理主義者らしかった。そもそも原理主義者というものは己の価値観を絶対視する。それも禁欲的であればある程である。このラコシという人物もそうなのであった。彼もまた極めて清廉潔白でストイックな倫理観の持ち主であったのである。
「買収や懐柔は一切通用しない」
「原理主義者らしくですか」
「そうだ。それに」
「それに？」
「暗殺や脅迫にも屈しない」
それだけの意志と能力があるということであった。
「数多くの暗殺を潜り抜けているそうだ。それこそな」
「マウリアで暗殺をですか」
「それだけ敵が多いということだ」
連合やマウリアでは政情が安定していることもあり暗殺といった極端な手段は少ない。しかしそれでもあるのはどの時代でも変わりはしないのである。
「彼はな」
「しかもそれで生き残っている」
「そうだ。それだけのものがあるということだ」
問題はそこにもあったのであった。
「わかるな。彼に工作は意味がない」
「説得もですか」
「原理主義者に説得が効果のあるものか？」
「いえ」
それは誰にでもわかることであった。心底腐り果てた外道と原理主義者には説得は無意味である。この両者を見極められるかられな

いかでその者が賢いか馬鹿かがわかる。最悪は心底腐り果てた外道をいい人達だのまともな人達だの言い出すことである。俗に無能な味方だの無能な働き者が有害と言われるが本当に有害なのはそうしたことを見極めることのできない愚か者である。そうした愚か者は大抵外道の言葉を真に受けて愚行を繰り返し破滅するのがオチであるがそれまでに多くの災厄を撒き散らすから厄介なのである。

「それはもう」

「言うまでもないな」

「残念ですが」

「だからだ。彼は我々の手に負える相手ではない」

八条はこう結論付けたのであった。彼にとって残念なことに。

「仕方のないことだ」

「では手を打たないと」

「そのつもりはない」

それはすぐに否定した。

「何か手を打つつもりだが」

「それをどうするかですか」

「それがわからないのだ」

八条は困り果てた顔で言うのだった。

「どうしてもな」

「そうですか。しかし何も出来ない筈もないので」

「そうだ。だが少なくとも彼には直接何も出来ない」

「はい」

これは由良にもわかる。嫌になる程。

## 第二十八部第二章　情報が伝わりその四

「彼を何とかしなければならないのに」
「どうすればいいか」
八条は書類を一通り処理し終えて腕を組んだ。そうして考えに入るのだった。
「このまま不協和音を放置するわけにもいかないからな」
「しかし手出しが出来ないとなると」
「我々ではな」
どう考えても結論が出ない。書類整理の後でもいい考えが浮かばない。そのままあれこれ考えているが夕方までいい案が浮かばなかった。だがその夜のことだった。
そのまま事務所にいた。だがそれもそろそろ引き上げようとしていた。その時だった。
「はい」
電話がかかってきたので出た。するとかけてきたのは意外な人物であった。
「貴方は」
「お久し振りです」
テノールの美声であった。それは八条が今まであまり聞いていない声であった。
「サッバティーニ首相ですか」
「そうです」
彼であった。イスラエル首相として辣腕を振るう彼が電話の向こうにいたのであった。その美声で八条に対して声をかけてきたのであった。
「これからお時間がおありでしょうか」
「ええ、まあ」
会いたいということだとわかり彼は応えた。

「夜でしたら」
「わかりました。それではですね」
サッバティーニはそれを聞いて声をさらに明るいものにさせてきた。
「今夜。場所は」
「場所ですか」
「夕食でも食べながら如何でしょうか」
サッバティーニはあえて明るい声でこう提案してきたのだった。
「気軽に。どうでしょう」
「気軽にですか」
「はい」
声は明るいが話自体は明るいものではないであろうことは八条も予想していた。しかしそれはあえて顔にも声にも出さずに言葉を返すのだった。
「どうでしょう、それで」
「そうですね」
八条はまんざらではないといった様子で声をまたかけた。
「それではそのように」
「宜しいですね、それで」
「私の方では何もありません」
またそう述べた。
「ただ。食べるものをどうするかですが」
「それならいい考えがあります」
「そうですか」
サッバティーニの言葉に少し考える顔になった。まさかイスラエル料理なのかと思った。実のところ彼はイスラエル料理といえばあの独特のパンしか知らないのだ。他に何があるかと問われれば答えられなかった。イスラエルという国については知っていてもだ。
「蕎麦なぞ如何でしょうか」
「蕎麦！？」

八条にとって今の提案は全くの予想外であった。まさかそこで蕎麦が出て来るとは予想もしなかった。声もうわずったものになっていた。

「蕎麦ですか」

「どうでしょうか、それで」

サッバティーニも八条の驚きはわかっていた。しかしそれはあえて声には出さずにまた問うのであった。ここまで来て八条はこれがサッバティーニの手の一つだと悟った内心舌打ちしたのだった。思わぬ奇襲にかかってしまったと言えた。

「蕎麦で」

「そうですね」

八条はその提案に冷静さを取り戻して言葉を返すのだった。

「私はそれで構いませんが」

「はい、ではそれで」

サッバティーニは声を明るく笑わせていた。それが単なる社交辞令のうえだけではないことは八条はわかっていた。それが内心でどうにも苦々しかったがやはりそれも言葉には浮かべないのであった。浮かべるわけにもいかなかったのであるが。

「お店はですね」

「何処でしょうか」

「蕎麦八でどうでしょうか」

シンガポールにある蕎麦屋である。

「そこで」

「蕎麦八ですか」

「はい」

そこは八条の馴染みの店だった。何故サッバティーニがその店を知っているのかはあえて聞かなかった。これも八条にとっては苦々しいが予想がつくことであったからだ。

## 第二十八部第二章　情報が伝わりその五

「そこで如何でしょうか」
「はい、それでは」
やはりここでも声には出さずに答えるのであった。
「そのように」
「では今から私も参りますので」
「はい、では私も今から」
「では蕎麦八で」
「ええ」
こうして八条は蕎麦八に行くことになった。蕎麦八の中は江戸時代風の純粋な和風の趣であった。店内もテーブルも何もかもが木造でありのれんもありお品書きも筆で書かれている。店に入るとすぐに蕎麦とつゆの味が鼻に入り食欲をそそるのであった。
八条はその食欲を自分でも感じながら店の者に奥に案内された。そこは個室でありもうサッバティーニが笑顔で席に座り待っていたのであった。
「こんばんは」
彼は八条に顔を向けて挨拶をしてきた。八条もそれに言葉を返す。
「はい、こんばんは」
「それでは食事にしますか」
サッバティーニが言ってきた。八条もそれに頷き彼の向かいの席に座る。そうしてまずは店の者に蕎麦を注文するのであった。
「何に為さいますか？」
「天ざるを」
これを注文したのは八条であった。
「せいろを」
これはサッバティーニである。二人はそれぞれ違うものを注文した。それが終わり店の者が去ってから二人きりになった。八条はこ

こでサッバティーニに対して言うのであった。
「ここは天ざるが絶品でして」
「そのようですね」
サッバティーニは彼の言葉に応えてその舞台俳優のような端整な顔を笑わせてきた。どうやらそれも知っているようである。しかし何故かあえてそれを頼まないのであった。
「ですが私は」
「何か？ああ」
ここで彼も気付いた。何故彼がそれを注文しなかったのかを。
「だからですか」
「はい、宗教上の戒律です」
サッバティーニ自身もそれを言ってきた。
「ユダヤ教においては鱗のない海のものは食べられませんので」
「そうでしたね、他には蟹もですか」
「その通りです。ですから我々は」
「蟹鍋等は」
「無論食べることすら想像できません」
こういうことであった。
「日本人から考えれば異様でしょうが」
「いえ、それは」
八条はサッバティーニのその言葉にはフォローを入れた。
「そうは思いませんが」
「お気遣いどうも有り難うございます」
「宗教上の戒律ならば致し方ありません」
彼はこうもサッバティーニに述べた。
「そういうことでしたら」
「そうですか」
「それでも蕎麦は食べられるのですね」
「はい」
この言葉には頷くのであった。

「それに関しては何の問題もありません」
「ならば問題はありません」
八条は笑顔で彼に述べてみせた。
「何しろここは蕎麦屋ですので」
「蕎麦を食べることこそが肝心だということですね」
「その通りです。ここではわんこ蕎麦もあります」
「わんこ蕎麦！？ああ」
少し考えたがすぐに思い出した。
「あれですね。お椀に食べればすぐに入れていく」
「それです。それも食べられます」
八条は笑顔で説明する。
「それも安く。また今度来られた時に召し上がられると宜しいかと」
「そうですね、その時にまた」
「今はせいろなのですね」
「はい。確か蕎麦はあれですね」
ここでサッバティーニは日本文化について語るのだった。
「噛んではいけないと」
「あっ、それは違います」
だが八条はそれは否定する。サッバティーニはそれを聞いて怪訝な顔になった。そうして八条に対して問うのであった。

## 第二十八部第二章　情報が伝わりその六

「違うのですか」
「それは江戸の蕎麦です」
八条はこう述べた。
「ここは上方の蕎麦ですので」
「上方というと確か」
「はい、昔の地球で言う大阪や京都です」
そう彼に説明した。
「ですから特に噛むなとは言わないのです」
「そうだったのですか」
サッバティーニはそれを聞いて目を少し丸くさせていた。
「それはまた」
「驚かれましたか？」
「驚いたわけではないですが」
それとは少し感情が異なっていた。また別の感情であった。
「それにしても」
「蕎麦自体は大体同じです」
「それは同じなのですね」
「ただ。つゆが違います」
今度はつゆを出してきた。
「つゆがですか」
「そうです、江戸では醤油に卸し大根です」
まずは江戸について説明される。
「しかし上方のそれは昆布や鰹等で様々なだしを取ります」
「そうなのですか」
「はい、ですから味が全然違っています」
八条は穏やかにサッバティーニに対して述べた。
「それも全く」

「ではあれですか」
サッバティーニはそこまで聞いて納得したような顔で八条に言葉を返した。
「噛んではいけないのは」
「そうです。江戸の蕎麦です」
八条もそれを認めて言うのだった。
「ですが上方では特にそうは言われません」
「成程、そうだからですか」
「そうです。江戸と上方では蕎麦までがこうも違うのです」
「同じ日本でもですか」
「意外でしたか？」
「いや、何と言いますか」
サッバティーニは感心しながら頷いていた。そうしてその感心した顔でまた言うのだった。
「勉強になります。同じ日本においても」
「中華料理と同じです」
八条はここで中華料理を出してきた。
「中華料理とですか」
「同じ中国でもおおまかに分けて四つの料理がありましたね」
「はい」
これはサッバティーニも知っていた。
「今はそれよりも多くの系統がありますが」
「ですが今でもその源流は四つです」
サッバティーニに対して述べる。
「四川、広東、上海、北京の四つです」
「そのそれぞれが全く違う味付けですね。残念ながらその四つの全ての料理を食べられるわけではないのですが。これだけはどうしても」
「仕方ありませんか」
「生憎ムスリムのように柔軟にはいきません」

答えるその顔は苦笑いである。苦笑いであるが非常に寂しいものがそこにはある。
「私達の神は決して許されることのない神ですので」
「そうですね」
ユダヤにおける神とは極端なまでに峻厳である。些細な場合や止むを得ない場合においても戒律を破るということを許しはしない。それは旧約聖書にある通りである。
「聖書を読むと」
「その通りです。ですからそれはなりません」
「では海老や烏賊も」
「絶対にご法度です」
はっきりとした声で答える。
「日本人が楽しく食べているものもまた」
「ではたこ焼きは」
「とても美味しいそうですね」
また顔が寂しげなものになる。

## 第二十八部第二章　情報が伝わりその七

「話には聞いております」
「駄目なのですか」
「鱗のないものは駄目なのです」
従って鰻も駄目だ。非常に戒律が五月蝿いのである。
「他にも様々な制約があります」
「かつてはそれが合理的だったそうですね」
「そのようです」
紀元前一千年頃の話である。その頃の戒律をまだ生かしているのがユダヤ教でありユダヤ人なのだ。考えれば実に凄いことである。
「あくまで当時ですが」
「では今は」
「それは言ってはならないことになっております」
またしても寂しげな顔になる。
「何があろうとも」
「左様ですか」
「まあ今は蕎麦だけです」
半ば以上仕方なくだがそう述べるのだった。
「おっと。ただ」
「ただ？」
「いや、やはり駄目ですね」
言おうとしたがここでも止めた。
「野菜の天麩羅ならいいかと思ったのですが」
「それも駄目なのですか」
「はい。これも実に厳しくて」
ここでその蕎麦と天麩羅が来た。八条のところには天ざるが、サッバティーニのところにはせいろが。それぞれ包まれただけで唾が出るような香りに支配される。

「海老をあげた後の油を使っては駄目なのです」
「また厳しいですね」
「ユダヤ教はそうなのです」
また言うのだった。
「日本人には考えられませんか」
「いや、そこまでは」
八条はここまで聞いて首を捻るばかりであった。
「ありません。幾ら何でも」
「精進料理でもですか」
「そこまではないですね」
八条はそう答えた。
「全くね」
「そうですか。やはり」
「それはユダヤ教だけですね。おそらくは」
また言う。
「しかし蕎麦はいいですよね」
「ええ、これに関しては」
箸を手に取りながら八条に答える。
「全く問題ありません」
「ならまずはいいですね」
ようやく微笑むことができた。本当にようやくであった。
「蕎麦を楽しみましょう」
「蕎麦は何度か食べたことがあります」
蕎麦をつゆの中に入れる。そうして口の中に入れる。
「ふむ」
「如何ですか？」
「いい味です」
顔を綻ばせて八条に答える。
「ここまで美味しい蕎麦はこれまでなかったですね」
「そこまでですか」

「はい」
八条に笑顔で答える。見れば彼は海老の天麩羅を食べている。それは天麩羅用のつゆにつけている。そうしてそれを口の中に入れた。
「これはせいろですね」
「そう、せいろです」
八条はまた答えた。
「蒸したものですが」
「蒸すとまた味が違うのですね」
「それがおわかりなのですね」
「はい、口ではどうも上手く表現できませんが」
それでも違いがわかる。それは見事だった。
「これは中々」
「蕎麦と言っても色々ありまして」
八条はまた言う。
「普通に茹でるのとせいろにするのとではまた味が変わります」
「蕎麦も奥が深いですね」
「そうですね、かなりかと」
八条もそれを認めてきた。
「一見そうではないように見えますが」
「それは和食らしいですね」
サッバティーニも和食については知っている。連合ではそれで有名でもある。

## 第二十八部第二章　情報が伝わりその八

「一見簡単に見えてそうでないのは」
「よく言われます」
八条はまた頷いてみせた。
「それでいて実はそうではないと」
「はい。この蕎麦もまた」
さらに蕎麦をすする。やはり美味い。
「そのようで」
「天麩羅もでして」
「天麩羅もですか」
「これがかなり難しいものです」
八条は蕎麦と天麩羅を交互に食べている。今食べているのは白身の魚であった。サッバティーニはその魚を見て彼に対して問うのであった。
「その魚は」
「キスです」
そうサッバティーニに答えてきた。
「キスというのですが」
「御存知でしょうか」
「いえ、それは」
残念そうに首を横に振る。
「知りませんでした。そんな魚もあるのですか」
「日本では昔からよく食べられます」
そう述べる。
「白身で癖がなくて食べ易いです」
「そうなのですか。それは美味しそうですね」
「はい、味も保証できます」
そのキスの天麩羅を実に美味そうに食べながら答えた。

「是非一度召し上がられては」
「はい、やはり今は無理ですが」
鱗のない海老や烏賊を揚げた油に入れているからである。これは先にサッバティーニ自身が言った通りである。そういうことには五月蝿い彼であった。
「いずれは」
「そうされるといいです。ところで」
ここで八条は話を変えてきた。
「どうして私をここに」
「お招きしたことですか」
「そうです。何の御用件でしょうか」
彼が今度聞いたのはそれであった。サッバティーニの表情を窺いながら問う。まだ蕎麦を食べているがその中に緊張が漂いだしていた。
「私を御呼びした理由は」
「いえ、マウリアのことですが」
「マウリアのことですか」
「そうです」
それをまた彼に告げる。
「お話は御聞きですね」
「ええ、まあ」
サッバティーニのその言葉に頷く。頷きながらまた話を聞くのであった。
「そうですが」
「それです。実はですね」
彼はまた八条に対して述べた。だがここでせいろがなくなった。すぐにそれを注文する。そうしてまた話に入る。
「連合軍の軍備拡張を懸念する声がマウリアにもありまして」
「国粋派ですね」
八条はここでは彼等をこう言い表した。

「マウリアの中における」
「国粋派ですか」
サッバティーニはその言葉に対して考えた。言い得て妙だがここではあえてそうした表現を使ってきたのだなと考えながらまた八条に対して言うのだった。
「確かにそうかも知れませんね」
「その中心にいるのはラコシ議員ですか」
「そう、彼です」
ラコシという名には何も飾らずに言葉を返してみせた。
「彼が連合軍の軍備拡張はマウリアにも向けられるものだと主張しているのです」
「ふむ、そうらしいですね」
その言葉に頷く。八条もそれは知っている。
「ですがそれは」
「連合軍にとってはそんなつもりはありませんね」
「毛頭ありません」
すぐにそう述べることができた。だがここには隠しているものがあった。

## 第二十八部第二章　情報が伝わりその九

実は連合軍の中では密かにマウリアと戦闘状態になった場合を想定して戦略構想等を想定しているのである。これはかつてアメリカが行っていたカラープランと同じ性質のものである。基本的に防衛的なものであるがそれでも想定していることは事実である。

「少なくとも彼等が何かをしない限りは」

「何かを、ですか」

「はい。マウリアは連合とは一千年に渡る同盟国です」

次にそこを強調してみせた。

「それでどうして。こちらから何かをするのでしょうか」

「あくまでこちらは何もなしですか」

「では御聞きしますが」

八条はサッバティーニに問うた。あえてといった感じであった。

「連合軍のマウリアとの国境への備えは最低限のものです」

「はい」

これは事実である。それだけしか必要ないという現実的な問題もあるがマウリアを刺激しないという政治的な問題もここにはある。

「それでどうして我々を警戒するのか。やはり数でしょうか」

「その通りかと」

サッバティーニもそこを指摘する。指摘しながら今来たせいろを食べる。八条のところにもおかわりのざるが来た。彼もそれを受け取って食べはじめた。そうして話を続ける。

「それしかありません」

「連合軍の数ですか」

「連合軍は一三〇億」

サッバティーニは今度は連合軍の数を述べる。やはり問題になるのはそこであった。

「それに対してマウリア軍は」

「三〇億でしたね、今は」
八条にとっては専門分野である。各国の戦力はもう頭の中におおよそであるがインプットされているのである。これもまた仕事の一つであるのだ。
「艦隊にして二百個艦隊です」
「こちらは四千個艦隊でしたな」
「そうです」
およそ二十倍である。一口で済むが実際には途方もない差である。
「これでは。脅威に感じない方が無理かと思いますが」
「私もそれは存じております」
八条はサッバティーニの今の問いにクールに言葉を返した。
「だからこそ」
「マウリア軍への技術供与をですね」
「そうです。あえて手の内を渡したのです」
これもまた戦略のうちである。そうして敵意のないことを見せるのである。
「それでどうでしょうか」
「後は確か」
「武官の留学も受けています」
これもまた戦略の一環であった。連合軍がどういった軍かを見せてマウリア軍の軍人達に理解してもらおうというのだ。相互交流が対立を緩和するのに有効なのはこの時代でも変わりはしない。
「他にも。そうですね」
「何かお考えが」
「宣伝も考えております」
八条はそこにも考えを及ばせていたのであった。
「マウリア向けの。そうして彼等に対してアピールします」
「それは非常によいことです」
サッバティーニはそれに関してはすぐに手放しで賛辞を示してきた。

「これでかなり違うかと」
「無意味な猜疑は相当減ると思いますが」
「その通りです。ですが」
しかしそれでも。ここでサッバティーニは言うのであった。
「それで理解しない人々もいます」
「はい」
八条の返事が鈍いものになった。それもまたわかっていることであった。そうしてその中心にいる人物もまた言うまでもなかった。
「それがラコシ議員ですね」
「彼は一筋縄ではいきません」
サッバティーニは己の声にいささか剣呑さを混ぜてきた。
「清廉潔白であり弱みはありません」
「そのようですね」
八条もそれはもうわかっている。そして他のことも。
「また頑迷な御方ですので」
「説得も期待出来ない」
「身辺に関してもです」
それについても言及されるのであった。
「非常にガードが固く」
「左様ですか」
「これについては多くは申し上げません」
あえてわかる。これは深く言わずともわかることであった。
「宜しいですね」
「はい。わかりました」
八条も政治家だからわかっている。わかっていてあえてやり取りをするのだった。
「それでは。何をしても無意味だというのですね」
「彼自身に関しては」
サッバティーニはここで不敵に笑った。

## 第二十八部第二章　情報が伝わりその十

「そうなります」
「そうですか」
八条は今の言葉を聞いていた。しっかりとだ。
「彼自身は、ですか」
「何も彼だけを狙う必要はないのです」
サッバティーニはこうも言う。
「何も。違いますか」
「それではですね」
八条はそれを聞いて述べるのだった。
「幹を除かずに枝を除くと」
「そういうことです」
サッバティーニは蕎麦をすすりながら述べる。話をしながらもせいろの味を楽しみ続けていた。
「これで如何でしょうか」
「それは貴方のお考えでしょうか」
八条はここで彼にそう問うた。
「それは」
「さて」
しかし彼はそれにはあえてとぼけるのであった。
「それはどうでしょうか」
「わからないと。そういうことですか」
「いえいえ、そうも言いませんが」
そこはかなり意図的にぼかすのだった。八条が何を知りたがっているのかをわかったうえで。
「ただ。申し上げることが、です」
「左様ですか」
「はい、お互いここは紳士協定としましょう」

この言葉に全てがはっきりと述べられていた。八条もこれ以上聞くつもりはなかった。それは最初からそのつもりであった。引き際を知っていたのだ。
「そういうことで。宜しいでしょうか」
「わかりました」
八条もわかっているからこそその言葉に応える。政治での話ではこうしたやり取りも多分に形式的なところがある。サッバティーニは言葉の外にあえてこの発言の主を教えていたし八条もそれを理解していた。それだけでもう充分であるということであった。
「それでですね」
「ええ」
また話が再開される。サッバティーニはまた八条に対して言ってきた。
「マウリアの強硬派ですが」
「どうされますか」
今度は強硬派であった。実に様々な呼び名がある。
「既に考えがあります」
「それは一体」
「ですから。枝です」
それをまた言ってみせてきた。
「枝を切れば。幹だけでは如何ともし難いでしょう」
「確かに」
これはわかる。木は幹だけでなるものではない。枝もあってはじめてなのだ。サッバティーニは今それを穏やかだが剣呑さを含めて言うのであった。
「それでです。今回は幹はそのままです」
「枝だけを」
「そうです。それを考えているのですが」
「わかりました。左様ですか」
「はい、そういうことです」

また八条に対して述べる。
「それでですね」
「ええ、次の段階ですね」
話の次の段階に入る。八条はそれを今ここの空気で読んでいた。
「実行者ですが」
「それは既に動いております」
サッバティーニはしれっとした感じでこう述べてきた。
「もうね」
「早いですね、それはまた」
「何、確実に仕事を果たせるならばです」
そう八条に言ってのける。あくまで平然とした顔で。
「それも当然かと」
「左様ですか」
「はい、後は結果を待つだけです」
やはりしれっとして言うのであった。
「それだけでもう。話は終わりです」
「ラコシ議員だけではたかが知れていますか」
「また述べさせて頂きますが幹だけでは大樹とはなりません」
そこをまた強調する。
「おわかりですね」
「ええ。それではですか」
「そうです。幹だけの大樹なぞ大樹ではありませんから。何とでもなります」
「それでは後は何の手も打たなくていいと」
「少なくとも次の枝が生えるまでには時間がかかります」
悠然として述べる。そこには絶対の自信があった。
「それだけ時間があれば。問題はありませんね」
「はい、充分過ぎる程です」
八条も穏やかだが確かな笑顔を浮かべて彼の言葉に頷いた。

## 第二十八部第二章　情報が伝わりその十一

「間違いなく」
「わかりました。そうして」
サッバティーニはまた言うのだった。
「次のお話ですが」
「ええ、何か」
今度は何についての話であるかはわかっていた。この場合はギブアンドテイクとなる。政治においてもこれは絶対的なものがある話であった。
「我がイスラエルはですね」
「何か問題でも？」
「実は。いい港を一つ持っております」
それを提示してきた。八条は彼が何を言いたいのかもうわかっていた。
「そこには整備施設も揃い」
「ふむ」
「守りにも行き来にも都合がいいです。そうした港が一つあるのですが」
「そんなものがあったのですか」
「はい」
そう八条に告げる。
「どう思われるでしょうか」
「そうですね」
サッバティーニの言いたいことはもう充分わかっている。そして八条にとっても国防省にとってもこれは悪い話ではない。だからこそサッバティーニもこれを材料に使ってきたのだ。彼も無理が通るとは思っていないし通ってもそれがしこりになるのはわかっていた。そうしたことまで読んで取引材料を提示してきたのである。

「検討させて頂きます」
「御願いします。それで宜しいですね」
「ええ」
サッバティーニの言葉に対して頷いた。
「それではそういうことで」
「いや、話は速やかに終わりました」
ここまで話が済んだところでにこやかに笑うのであった。彼の笑みは実に素晴らしいことで知られている。その切れ者さだけではなく容姿でも人気のある彼だがとりわけその笑顔には定評がある。その容姿までも使うというところにこのサッバティーニという政治家の凄みがあるとも言える。
「せいろも美味しいですし」
「おや、もうなくなったのですか」
見れば彼のせいろはもうなくなっていた。
「これはまた」
「味がいいと自然に箸も進みます」
わざと箸を言葉に出す。
「しかも蕎麦は」
「はい、カロリーは殆どありません」
八条はそれを彼に伝えた。
「ですから相当食べても」
「それはいい」
サッバティーニはそれを聞いてまた笑みを浮かべた。だが今度の笑みはそれまでの笑みとは少し違い心から嬉しそうな笑みであった。
「それではまだ食べても」
「はい、宜しいかと」
八条もそう述べる。
「蕎麦でしたら」
「では長官も如何でしょうか」
「無論そのつもりです」

八条の返事もまた決まっていた。予定通りである。
「もう一杯。ですが」
「ですが？」
「天麩羅はなしです」
「ああ、それはわかります」
サッバティーニは先程の笑顔のままで彼に応えた。
「あれですね。カロリーを考えて」
「それもありますがそれ以上に」
「それ以上に？」
八条の次の言葉を待つ。待ちながらも頭の中でそれが一体どういった理由なのかを考える。切れ者なのはここでも発揮されていた。
「蕎麦の味だけを楽しんでみたくなりました」
「蕎麦だけのですか」
「はい、その通りです」
またサッバティーニに述べる。
「これだけでも見事な味わいがありますから」
「確かに」
サッバティーニもそれがわかる。今食べているからだ。

## 第二十八部第二章　情報が伝わりその十二

「蕎麦とこのつゆの組み合わせは。最高なものがあります」
「幾らでも食べられますね」
「はい、その通りです」
こうも答えるのであった。実際に彼はこの蕎麦というものが好きになってきていた。そうさせるものが蕎麦というものに確かに存在していると言えた。
「これはまた。見事です」
「それでですね」
八条はまた蕎麦が来たところで述べる。やはりざるとせいろである。
「イスラエルには蕎麦はないのですか」
「蕎麦粉自体は料理に使います」
それは述べる。
「クレープに」
「ああ、そうでしたね」
本来クレープの生地は蕎麦粉から作られるものである。八条もこれを知っている。
「それではそれ以外は」
「やはりありません」
返事はそれしかなかった。
「蕎麦をこうして食べるというのは聞いていましたが」
「そうでしたか」
「しかし。実際に食べてみると」
それまで少し暗めになっていた顔がまた明るくなってきた。
「中々。いや」
「美味しいものですね」
「はい、その通りです」

そういうことであった。彼は蕎麦の美味しさを今知ったのであった。
「麺にして食べるというのがまた」
「流石にパスタにしようというのは。いや」
「日本人ならありそうですが」
サッバティーニは今の八条の言葉に思わず笑みを浮かべたのであった。
「実際にそうして様々な料理を作っておられますし」
「そうですね。私の知らないだけで」
「連合は実に広い」
サッバティーニは機嫌をよくさせた顔で述べた。
「その中にはそうした料理もあるかも知れませんね」
「日本でも蕎麦だけで食べるわけではありませんし」
「そうなのですか」
「団子にして食べたりもします」
蕎麦がき等である。こうした食べ方も日本においては広く知られている。八条もそうした食べ方を非常に好んでいる。彼は蕎麦なら何でもいける口なのである。
「団子にですか」
「それでお汁粉にしたものも」
「ああ、お汁粉ですね」
お汁粉という言葉にまたサッバティーニの顔が明るくなる。
「私はあれも好きです」
「イスラエルでもお汁粉は食べられますか」
「はい、善哉も」
「ほう、それはまた」
八条にとっては意外なことであった。イスラエルでも汁粉や善哉が食べられるとは思っていなかったのだ。何しろ蕎麦も食べられていないようなのだから。
「そちらはあるのですか」

「人間誰しも甘いものを愛します」
例外はいるがおおむねそうである。
「戒律がなければ」
「それに関する障壁はありませんか」
「そういうことです。だからこそイスラエルにおいても甘いものはどの国のものもすぐに伝わります」
「日本のものも」
「むしろ日本のものは少ないですね」
そう八条に述べた。これは昔から日本とイスラエルの交流が然程深くはないからである。様々な国にネットワークを築いてきている国であるが日本に対しては今一つなのである。
「ですから私もお汁粉を知ったのはつい最近です」
「そうでしたか」
「ここにはお汁粉はありますか？」
「はい」
八条は穏やかな笑顔で彼に答えた。
「ありますが」
「ではそれをデザートに頼みたいのですが宜しいでしょうか」
「ええ、どうぞ」
八条はそう彼に返事を返した。
「お好きなものを」
「善哉も好きなのですよ」
サッバティーニはテーブルの上にあるベルを鳴らして店の者を呼んでから八条にまた述べた。汁粉と善哉の違いは案外簡単である。汁粉が粒あんであり善哉がこしあんなのである。その違いで見た目も味も全く違ってきているというわけである。これもまた和食の深さである。

## 第二十八部第二章　情報が伝わりその十三

「あの小豆がね」
「小豆は美味しいものでしょう」
「はい、確かに」
サッバティーニは満面の笑顔で述べる。
「あの穏やかな甘さが堪えられません」
「連合はよく甘さが極端だと言われますが」
「確かそれをよく言っているのは」
サッバティーニは今の八条の言葉にふと思案を巡らせた。記憶を辿っているのだ。
「サハラの方からですね」
「はい、確か」
エウロパはあえて除外していた。実際にエウロパで連合のレシピを手に入れて連合の菓子を作ってみればその甘さに辟易したという話がある。
「そうだったかと」
「マウリアからはその話はないようですね」
「マウリアも菓子もまた」
八条はここでいささか引いてみせた。
「壮絶な甘さですが」
「そうですね」
サッバティーニもそれを知っているようであった。急に深刻な顔になって頷いてきた。
「あの甘さは。アメリカの菓子よりも」
「遥かに上です」
アメリカの菓子の甘さは連合においてはかなり有名である。なお韓国の菓子はその上をいっていると言われている。当然ながら金は韓国菓子もまた大好物としている。韓国料理は辛い為それに対抗す

るように菓子は甘いのであると言われている。なお酒のマッコリもかなり甘い。
「あの甘さは驚く他ありません」
「そこにもマウリアの個性が表われていますね」
「それもはっきりと」
サッバティーニも八条に合わせて言う。
「出ているというレベルではありません」
「その通りです。日本人から見てあれは」
「いやいや、我々から見ても」
二人の意見はここでは完全に一致していた。
「全く以って」
「その通りです」
「そういうことも考えればマウリアの個性はあまりに強烈です」
サッバティーニもこれはよく認識しているのであった。
「連合文化や文明に対しても」
「そうそう染まりはしないと思うのですが」
「全くです」
サッバティーニもまたこれについては考えることは同じなのであった。複雑な表情で首を傾げるのがそれの何よりの証拠であった。
「それでどうして」
「彼等は自分がわかっていないのでしょうか」
「一部はそうなのでしょうね」
そう八条に述べる。
「ですがそれはあくまで」
「ほんの一部でしょうが」
「しかしその一部の影響を看過できませんので」
今の話し合いになっているというわけである。そう簡単には話が解決しないのが政治というわけである。少数派だからといってもだ。
「やはりそれを考えまして」
「手を打たれたのですね」

「はい。あとですね」
サッバティーニは複雑な顔を元に戻してまた八条に言う。
「今回のもう一つのお話ですが」
「新規の惑星開拓ですね」
「これはそもそも大国は乗り気ではないようですね」
「そのようですね」
八条は彼の言葉に応えて頷いたのだった。
「確か日米中露は」
「いずれも今は開拓は消極的だったと記憶していますが」
「状況が変わりましたので」
八条はそう述べた。
「彼等はそれよりも惑星開発にシフトを移動させています」
「その通りです」
サッバティーニもその情報は掴んでいる。だからこそ八条にも話しこうして頷いてみせるのである。裏付けがあって故の言葉のやり取りであるのだ。
「だからこそ今回は」
「そもそも中央政府は開拓に積極的ではありません」
あくまで今の改革派政権は、である。そこが重要なのだ。

## 第二十八部第二章　情報が伝わりその十四

「開発で充分と判断しているからこそ」
「今現在の四兆の人口に対しても」
「そうしてこれから増えていく人口に対しても」
連合の人口は増え続けていっている。それへの対策は連合にとって最重要課題である。だがかつての地球のようにそれが解決し難い深刻な問題かというとそうではない。開拓と開発でその頃と比べればかなり安易に解決できる問題になっているのである。
「それで当分の間は解決できます」
「そして将来は」
「そうです」
ここでアットール達が受けた話がここでも出された。
「また大規模な開拓が行われます」
「そういうことですね」
サッバティーニはここでまた頷いてみせた。
「それはまたいずれということで」
「今はその時機ではありません」
八条もそうした考えであったのだ。だからこその言葉であった。
「ですから彼等はアットール議員達に話したのです」
「その方針で行かれますか」
「今現在はそうです」
それをまた告げる八条であった。
「そうして暫くはいくつもりです」
「わかりました。中央政府のそれに関する方針にイスラエルも反対しません」
「左様ですか」
「我々は今は人口問題には悩まされておりませんので」
そもそもイスラエルの人口はかなり少ない。それに増加率も普通

である。それも最近はイスラエル内部での開発が成功している。だからこそ今回の開発重視政策に賛成しているのである。ここでも各国それぞれの事情が大きく関係していたのだ。
「そういうことです」
「わかりました。それは中央政府にとっては有り難いことです」
「無論他の国々もそうです」
ここでは例の大国達のことである。
「中央政府にとっては有り難いことだと思いますが」
「そうですね」
八条は一呼吸置いてからそれに応えた。
「確かに。その分だけ配慮する先が減りますので」
「今回開拓を重視しているのは主に保守派です」
「国でしたら新興の小国ですね」
「はい、彼等は建国して間もないので焦っているのです」
そうした事情で開拓のタイミングも今一つわかっていないところがある。これもまた各国それぞれであるがそれが時としてこうした問題になるのだ。
「我々から見れば彼等もその時ではないのですが」
「あとはペルシアでしたね」
「彼等は最近人口増加が激しいですので」
ペルシアは言わずと知れたアットールの祖国である。アットールが惑星開拓を主張しているのは祖国のこうした事情が関係していたのである。
「これは止むを得ないかと」
「確かに」
「各国それぞれですので」
それをまた言うサッバティーニであった。
「そこの調整が中央政府の仕事ですね」
「そうです。では細かいことは開拓省に話しておきましょう」
「そうされると助かります」

サッバティーニもそれに頷く。
「我々はあくまで中央政府ではありませんので」
「そうですね。中央政府には中央政府の役割がありますので」
「そういうことです」
彼はあえてアドバイスというところに留めておいた。だが無論無償でのアドバイスではない。これは政治の世界ではまずないことである。
「それでは。そろそろですか」
「そうですね」
八条はサッバティーニの今の言葉に頷いた。
「来る頃です」
「お汁粉が」
サッバティーニはまた汁粉の名前を口にして微笑んでみせた。
「これを食べる時にいつも思い出すことがあります」
「それは何でしょうか」
八条はそれを聞いて政治的な話題かと思ったがそれは違っていた。サッバティーニはもうその関心を政治から食べ物にシフトさせていたのだ。
「善哉のことですが」
「善哉ですか。というと」
「二つ一緒に出す店もありますね」
「ええ、まあ」
八条は彼のその言葉に頷いてみせた。
「あれですね。夫婦善哉」
「あれはどうしてなのでしょうか」
「あれには様々な理由があります」
まずはこうサッバティーニに前置きしたのであった。
「様々なですか」
「はい、まずは二つ出しますね」
「ええ」

ここに理由があるのである。八条はそのうちの一つについてまず述べた。

## 第二十八部第二章　情報が伝わりその十五

「そうすれば一つより多く見えますね」
「あっ」
サッバティーニはこれを聞いてハッとした。言われてみればその通りなのだ。これには今まで気付かなかった。切れ者と言われる彼でも。
「そうですね、確かに」
「それにです」
そうしてまた言うのであった。
「二つで先程申し上げましたが」
「夫婦ですか」
「そうです。縁起がいいですね」
「はい、その通りです」
八条のその言葉に頷く。
「夫婦仲良くですか」
「夫婦善哉は縁起ものでもあるのです」
八条はまたそれを言うのであった。
「だからこそ店のメニューにもあるのです」
「そうだったのですが。それにしても」
「何かおありですか？」
「いえ、実に面白い話です」
感心しながらこう述べた。
「しかし。これの元は」
「元ですか」
「そうです、何処からはじまったのでしょう」
彼が次に興味を持ったのはそこであった。そんなことがはじまったのは一体日本の何処なのか非常に関心を持ったのだ。これは学問的と言えた。

「こんな面白いことが」
「大阪です」
「大阪ですか」
「はい」
八条は答えた。大阪とはかつて地球にあった頃の日本の大都市の一つである。今も日本には大阪星系という星系があるがこの都市から名前が取られているのである。
「大阪の法善寺横丁にあった店で」
「その場所にあった店ですか」
「はい、名前を夫婦善哉といいました」
こうサッバティーニに教える。
「今も確か大阪星系にありました」
「まだ店があるのですか」
「歴史は随分古い店です」
これは言うまでもなかった。二十世紀、いやそれよりもまだ昔からある店である。古いとしか言いようがない。連合にもこうした店は結構あるのである。
「味もそのままです」
「二十世紀のままですか」
「無論。完全にそうとはいきませんが」
「それはそうですね」
これはサッバティーニもわかる。千年以上経っているのである。調味料や素材が同じでもそこにあるものは地球のものではない。調理法が同じでも使っている料理器具が千年前とこの時代では全く違う。これでは味が完全に同じかというとそうはならないのである。
「しかしまだそうした夫婦善哉を出しています」
「その店からはじまったそれを」
「そうです。これが他に店にも広まったものなのです」
「だからですか」
サッバティーニはその話を聞いて大きく頷くのであった。

「だから二つに」
「そうです、これは大阪起源だったのです」
起源まではっきりと言う。
「意外でしたか」
「いや、決してそうは思いません」
しかしサッバティーニはこう言葉を返すのであった。
「私は」
「それはまたどうしてでしょうか」
「大阪ですよね」
彼が聞くのはそこであった。
「それが生まれたのは」
「そうです」
それをまたサッバティーニに言う。
「だからですよ。それで納得できます」
「そうなのですか」
「大阪は商人の街だったと聞いています」
これはサッバティーニも知っていた。
「それならば。こうしたことも」
「信じられるというのですね」
「そういうことです。何しろ私は」
「はい、それから先はわかります」
八条も穏やかな笑顔で応える。
「ユダヤだからですね」４
「そうです。商売ならばわかります」
そういうことであった。ユダヤ人というのは色々と言われているがそれでも商業を得意としているのは紛れもない事実である。だから大阪の話もわかるのであった。

## 第二十八部第二章　情報が伝わりその十六

「こうしたことでしたら」
「では大阪には興味がおありですね」
「ええ」
そして八条の言葉に応えて頷いてみせる。
「そういうことでしたら。ただ」
「ただ。何か」
ここでサッバティーニの言葉の色が変わったのを見逃さない八条であった。すかさず問うた。
「大阪は食道楽の街ですか」
「あっ、それは」
八条はその言葉に気付いてあっとした顔になった。
「その通りです。おわかりですか」
「はい、今までのお話でそれに気付きました。となると」
「何か」
「そこが我々と違いますな」
そう八条に述べるのであった。
「我々は食道楽はありませんので」
「そうですか」
「何しろ戒律が厳しいので」
理由はそこであった。イスラエルという国において美食は縁のないものであるというイメージが強いがそれはやはり宗教的戒律によるものである。それにより食材や料理法が制限されている為にどうしてもそれが制限されてしまうのである。これは致し方ないことであった。
「しかし大阪は」
「全くありませんでした。いえ」
八条はふと言葉を止めてからまた言った。

「江戸時代には肉食はなかったですね」
「そうでしたか」
「ただ。鶏肉はよかったです」
これは事実である。しかも。
「鳥ならば何でもよく」
「それではかなり種類が広いのでは？」
「はい、それはそうです」
これについても認めるところであった。
「しかも猪等も食べられて海の幸は何でもいいですし」
「鯨もですね」
「勿論です」
日本では昔から鯨は食べられていた。鯨一匹捕れればそれで漁村は一年遊んで暮らせるとまで言われていた。それだけの価値があったのである。
「鯨は肉だけではありませんでしたし」
「他にも色々とですね」
「今は流石に肉だけですが」
「ははは、あれも美味しいそうで」
サッバティーニはここで大きな笑顔を見せてきた。端整な顔を崩していたのだ。
「やはり食べられませんが」
「鯨もですか」
「エラがないので」
これも重要であった。ユダヤ教においては鱗だけでなくエラも見られるのだ。当然ながらこれがない海のものは食べられないのである。当然ながら鯨や海牛類も駄目である。
「食べられません」
「やはりそうですか」
「はい、まあ私共のことはよくて」
「大阪についてですね」

「そうです。しかし鳥はあり海はありでは」
「しかもです」
ここで八条はさらに言うのであった。
「それだけではありません」
「おや、他には何が」
サッバティーニは八条のここでの言葉にふと目を光らせた。
「はい、肉ですが」
「それは確か駄目だったのでは？」
「いえいえ、実はこれが抜け道がありまして」
八条は笑いながら彼にそう言うのであった。思わせぶりな程であった。
「猪ですが」
「あれは駄目なのでは？」
「それがそうではないのです」
こうサッバティーニに言うのである。
「実は」
「肉なのにですか」
「ものは言いようです」
「ほう、ものはですか」
サッバティーニは今の八条の言葉を聞いて含み笑いになる。そこに何かがあるのは明白であったからだ。そもそも日本人は言いようにより何かを問題をはぐらかしたり先送りしたり解決してきたりもしているからである。それを知っているからこその含み笑いであった。

## 第二十八部第二章　情報が伝わりその十七

「それはどういうことでしょうか」
「例えばその猪ですが」
「はい」
「鳥の仲間として食べたのです」
「鳥の！？」
流石のサッバティーニもこれには面喰らった。
「猪をですか！？」
「はい、そうです」
それをまた言う。
「猪をそう言って食べていたのです」
「それは流石に無理があるのでは」
サッバティーニは懸念に満ちた顔で八条に述べた。彼にはそうとしか考えられない話であった。流石に猪を鳥と呼ぶのは納得できなかったのだ。
「幾ら何でも」
「ももんがの仲間としたのですよ」
「ももんがのですか」
「そうです。当時日本ではももんがは鳥と考えられていましたので」
これは本当のことである。かつての日本では空を飛ぶものは全て鳥と見なされていたのである。それを利用したというわけなのである。
「そういうことにしまして」
「食べたと」
「これでおわかりでしょうか」
「ええ、まあ」
納得していないまでも頷いた。
「かなり強引ですが」

「他の動物の肉は薬として」
「食べていたのですか」
「そうです、そうして結構食べていました」
「それでは何もタブーはないのと同じですね」
サッバティーニはかなり率直な言葉を述べてみせてきた。
「お話を聞く限りは」
「やはりそう思われますか」
「はい」
彼は今回ははっきりと答えるのであった。
「それではもう殆ど」
「実際そうです」
しかも八条もそれを認めるのであった。
「制約はないに等しいです」
「やはりそうですか」
「何だかんだで牛や豚を食べているケースもありますし」
「牛や豚までですか」
「そうです。網焼きにしてです」
これも本当の話である。実際に徳川光圀はそうして牛を食べている。彼は他にもラーメン屋やチーズまで食べているから当時はかなりのデテモノ食いであった。
豚に関しては徳川慶喜が大奥において豚を食べるということで嫌われていたという話が残っている。確かにゲテモノであっただが食べられているのは事実である。例外的にではあるが。
「食べられていました」
「そうなのですか。ではやはり」
「食べ物の制約はないと仰るのですね」
「奇人変人と思われる程度でしょう」
サッバティーニもそれを指摘する。
「それでは何を食べても」
「そうですね。精々はそれ位です」

「では全く問題ありません」
彼ははっきりと述べた。
「我々と比べたならば」
「どうも日本人はそうした宗教的なタブーは少ないので」
これは実際にそうである。この時代では僧侶も普通に髪を伸ばしていたり肉食をする。これは二十世紀から見られていることであるが特に悪いことではないのだ。大切なのは信仰である。
「それはあまり」
「左様ですか」
「はい。ですから大阪では食の文化が発達しました」
それをまた言う。
「それに食材も豊富でしたし」
「そのようですね。それはわかります」
食文化が発達するにはまず食材がなくては話にならない。これは何時何処の時代にも言えることである。日本の大阪とても例外ではないのである。
「イスラエルはそれに関しても」
「ヘブライの頃ですね」
「はい、そうです」
また八条の言葉に応えて頷く。
「荒地ではそうそう食べるものがありませんので」
「そうですね。それではやはり」
「二十世紀でも同じでした」
彼は少し寂しい顔になった。

## 第二十八部第二章　情報が伝わりその十八

「シオンの地は我等の約束された地です。しかし」
「荒地でもあると」
「従ってこれといって贅沢な食事はありませんでした。宗教的な戒律もあって結局今まで美食やそうした文化を味わったことはありませんね」
「そうなりますか」
「しかしです」
ここでまた話を変えてきた。
「日本はそれに関しては何の問題もない。羨ましい限りです」
「はあ」
「しかし。蕎麦は問題ありませんね」
それについてはにこりと笑ってみせた。
「それは何よりです」
「ではまた蕎麦を召し上がられますね」
「はい、また次の機会に」
その笑みのままで八条に述べた。
「いただきます。戒律の範囲内で楽しみましょう」
「それが宜しいかと」
「少なくともカナダよりは食を楽しみたいです」
何故カナダの名前が出たかというとカナダは連合においては料理のまずい国で有名だからである。その有名さではフィンランドと双璧を為している。
「これからは」
「そうですか。ですが」
「何か？」
「カナダ固有の料理は食べたことはありません」
八条はまずはそれを前もって述べる。

「しかしフィンランドは案外そうではありませんでした」
「食べられたことがあるのですか」
「はい」
そうサッバティーニに答えた。
「魚主体でそれ程悪いとは思いませんでした」
「ああ、そうですね」
サッバティーニは魚という言葉で納得した。そこに秘密があるのはすぐに察することができた。それは八条との今までの会話かわであった。
「魚に鍵がありますね」
「日本人は魚が好きですので」
八条もその鍵を言葉に出した。
「それで何の問題も感じませんでした」
「そういえばですね」
ここでサッバティーニはまた言う。
「フィンランドでは鰻も食べるそうで」
「はい、その通りです」
これは本当のことである。連合において鰻とはかなり人気のある魚の一つである。フィンランドにおいてもそれは同じことであるのだ。
「にこごりにしたりして食べます」
「それが美味しかったのですね」
「おわかりでしたか」
今のサッバティーニの言葉にまた微笑む。
「そうです、堪能させて頂きました」
「やはりそうですか。それ程までにその鰻がよかったですか」
「満足させて頂きました。それに魚だけではありませんので」
「他にもありましたか？」
サッバティーニは八条の今の言葉には首を捻った。
「だとするとそれは何でしょうか」

「鹿です」
八条が言うのはそれであった。
「それもトナカイやムースを食べますので」
ムースとはヘラジカのことである。冷帯にいる大型の鹿である。北の国においてはこうした大型の鹿もまたよく食べられているのである。食用の他には愛玩用にも労働用にも飼われているしその乳も飲まれたりしている。鹿もまた家畜化されているのである。その為の牧場もある。
「これはこれで中々」
「いけるのですか」
「私としては何の不満もありませんでした」
彼にとってはフィンランド料理は合格であった。
「いいものです」
「そうですか」
「はい。何故そうした話になっているのか不思議ですらあります」
そうまで言って首を傾げる程であった。
「どうにもこうにも」
「噂とはそうしたものです」
サッバティーニはふと哲学的な顔でそう述べたのであった。
「あれにならないのにすぐに広まります」
「確かにそれは言えます」
八条もそれに同意する。

## 第二十八部第二章　情報が伝わりその十九

「それに関しては」
「長官もそれはよく御存知ですね」
「ええ、まあ」
彼とてその噂を立てられる立場だから当然である。
「何かと」
「それでですね」
彼はまた言う。
「苦労もしています」
「やはり。ただ」
「ただ？」
「確かエウロパに二度行かれていますが」
「ええ、それについて何か」
停戦の時と講和条約の時だ。それについてもまた応える。
「イギリスの料理についてですが」
サッバティーニは興味深そうに彼に対して問うてきた。
「イギリスにも行かれていますね」
「はい」
これも事実だ。だから頷いた。
「それで。あの国の料理はどうでしたか。噂通りでしたか」
「噂通りでした」
八条は真顔でこう答えた。
「いえ、噂以上だったかも」
「それ程までですか」
「はい、あの味はある意味忘れられません」
彼はこうまで言うのだった。
「一度食べれば舌に残り」
「我慢できないと」

「そうです。よく御存知ですね」
「噂話を覚えているだけです」
実はサッバティーニはイギリスには行ったことがない。そもそもそうした機会なぞある筈もない話だった。八条は幸か不幸かそうした機会があるのである。
「だからこそ」
「ふむ。それでですが」
「いや、何を食べてもあれは」
八条にしては珍しい酷評であった。
「記憶から離れることはありませんでした」
「成程、何かそこまで聞くと」
サッバティーニも言葉がない。
「噂以上のものがあるのですね」
「私も驚きました」
八条も応えて言う。
「これ程だったのかと」
「よくある話ですが」
サッバティーニはここで例えてきた。
「はい」
「愚か者に会った時にここまで馬鹿だとは思わなかったと考えます」
これはよくある話だ。愚か者は何処までも愚かであるが下には下がいる。中には実生活において深刻な支障をきたす域にまで達している愚か者すらいる。
「ですがそれは料理にも言えますか」
「まあそうかと」
八条も頷いて言う。
「美味しいものは何処までも美味しいですが」
「まずいものは何処までもまずいと」
「そうかと」
「ううむ」

サッバティーニは八条のその言葉を聞いてまた考える顔になった。
「料理も奥が深いものです。これはわかっているつもりでしたが」
「イスラエルでもそうした料理ができる筈ですが」
「そうでしょうか」
これには懐疑的にならざるを得なかった。
「我々はどうにも制約が多くて」
「それもまたいい素材になる可能性もあります」
いささかサッバティーニを励ますような言葉であった、
「ハンデをバネにするのもまた多いですが」
「それはそうですがどうにも」
だが彼の顔はそれでも晴れはしない。

## 第二十八部第二章　情報が伝わりその二十

「御言葉ですがそれは何の制約もなく素材も豊富だからこそ言える言葉に思います」
「確かにそうかも知れません」
八条自身もそれは認める。
「ですが。日本でも制約はありましたし」
「あったのですか」
「これは昔の話です」
まずこう前置きをしてから述べた。
「かつては冷凍技術なぞありませんでした」
「そうでしたね。あれが発達して確立されるのは確か」
サッバティーニ派頭の中で己の知識を辿った。そうして導き出した答えは。
「二十世紀の後半でしたね」
「そうです、それまではありませんでした」
八条もそう答える。
「ですからそれまでの間は寿司や刺身といったものも内陸ではありませんでした」
「ふむ。そうですな」
サッバティーニもその言葉に納得して頷く。
「どうしてもそうなってしまいますな。傷みますから」
「それでここで工夫があったのです」
「どういった工夫でしょうか」
「これは京都のお話です」
またしても上方の話であった。八条家がそのルーツを上方に持っているせいか彼の話はどうしても上方に関するものが多いようである。
「京都は三陸に囲まれている為に海の幸が届きません」

「そうですね。昔になると」
「従って多くは干物でした」
必然的にこうなってしまう。なお刺身であるがこれは元々は中国の料理である。水滸伝において河魚を刺身にして食べる場面がある。元々は唐代にそうして食べられはじめたのであるがこれが内陸に広まりその際腐敗した為にそこから疫病が流行った。ここから中華料理は必ず火を通すようになったと言われている。
「ですが何とかして例外を見つけようと」
「それで見つかりましたか？」
「はい、それは鱧です」
「鱧！？」
サッバティーニは鱧と聞いて目を丸くさせた。それは彼の全く知らない魚であったからだ。少なくとも聞いたことは今まで全くなかった。
「あの、それは」
「御存知なかったですか」
「はい、どんな魚でしょうか」
彼はその丸くなった目のまま彼に問う。
「全く想像がつきませんが」
「細長い鰻に似た魚です」
八条はまずこう説明した。
「鰻にですか」
「ですが外見は全く異なります」
次にこう述べる。
「顔は険しく歯が多く」
「ふむ。それで」
「小骨が非常に多いのです」
「それではかなり食べにくそうですね」
そこまで聞いて己の考えることを素直に述べるサッバティーニであった。別に隠す必要がない場面においては彼も素直になるのであ

る。
「随分と」
「そうですね。ある程度食べにくいのは事実です」
八条もそれは認める。
「ですが。味はかなりのものです」
「それ程までですか」
「京都では独特の言葉があります」
ここで京都の古い言葉を出してみせた。
「鱧祭りという言葉が」
「鱧を食べる祭りでしょうか」
「今も京都星系に祇園祭りというものがありまして」
この時代でも祇園祭りは残っているのである。なお大阪においても天神祭りが残っている。これは祇園と全く同じことである。
「それは夏行われましたが鱧は夏の魚でして」
「その時に鱧を食べるというわけですね」
「はい、だから鱧祭りなのです」
そういうことであった。
「京都では鱧は海から運ばれてもつ数少ない魚だったのです」
「ふむ、それで食べられたのですね」
「はい」
またサッバティーニに対して答えた。

## 第二十八部第二章　情報が伝わりその二十一

「そういうことです。お分かり頂けたでしょうか」
「その制約の中で鱧を見つけ食べたと」
「小骨が多いことに対しても工夫が為されました」
八条はそこにも言及する。
「細かく切り込みを入れて小骨を切ったのです」
「それでですか」
「鱧を食べるのは容易ではありませんでした。しかし」
「しかし」
今度は彼が八条に対して問うた。
「努力して食べるだけのものがありました。鱧はあっさりとした味で何にしても非常に美味しく」
「京都人の舌を喜ばせたのですな」
「その通りです。それも全て工夫の結果です」
「成程」
「簡単にそうなったわけではないのです」
「ではイスラエルもですな」
サッバティーニの言葉に希望が宿った。
「工夫をしていけば」
「必ずそうなると思います」
八条も言うのだった。
「ですから御安心を」
「わかりました。いや、今日のお話は」
サッバティーニの顔も声も晴れやかなものになっていた。
「非常に有意義でした。有り難うございます」
「ではデザートも食べ終わりましたし」
既にそれも食べ終えている。後には何もなかった。
「これでお開きに致しますか」

「いえ、あのですね」
しかしサッバティーニはここでまた言うのであった。
「何か？」
「酒はいいのですよ」
彼は含み笑いを浮かべて述べてきた。
「飲み過ぎなければ」
「飲み過ぎなければですか」
「しかもです」
サッバティーニの笑みがさらに深くなる。どうも酒に楽しみを見出しているようである。
「私はあまり酔わなくて」
「ふむ」
「日本酒にも興味があるのですよ」
「わかりました」
八条もそこまで聞いて顔を晴れやかなものにさせてきた。
「それでは次はお酒ですね」
「はい。日本酒はかなり美味しいそうで」
「そうですね。好き嫌いがありますが」
一応こう前提が置かれる。どの酒にも言えることであるが日本酒もかなり好みが別れる。それで飲めないという者も多いのである。この辺りは致し方がない。
「好きな人はかなりです」
「そうですか。まあそれは実際に飲んでみないとわかりませんね」
「そうですね」
酒とはそうしたものである。実際のところ飲んでみないと合う合わないはわかりはしないのだ。アルコール度が強い酒が駄目な者もいる。酒は非常にそれぞれである。
「その辺りは」
「では飲んでみましょう」
サッバティーニは話の本題に入った。

「それで肴は」
「何にされますか？」
「豆腐はあるでしょうか」
ここで和食の定番の一つを出してきた。
「豆腐は。どうでしょうか」
「ええ、それでしたら」
八条もそれに応えて述べる。
「この店のお豆腐はかなりの絶品です」
「豆腐もいいのですか」
「何分何でもできる店ですので」
だからこそ八条も気に入っているようである。
「お豆腐もあります」
「ふむ、それではそれで」
サッバティーニも決断を下した。豆腐にしたのである。
「それと日本酒で」
「今回は楽しみましょう」
「はい、こちらこそ」
こうして二人は政治から酒に移っていった。以後サッバティーニは日本酒愛好家としても連合に広く知られることとなったのであった。

# 第二十八部第三章　開拓と開発その一

## 開拓と開発

連合主要国の首脳達はこの時太陽系にいた。といっても主惑星である地球ではなく月であった。そこで今回の惑星開拓についての意見を出し合っていたのである。

その中でも大国達の首脳達は頻繁に顔を合わせていた。彼等にしてみれば今回もまた重要事項だからだ。今とある料理店においてその中でもとりわけ大きな国々が集まっていた。黒い壁に赤い灯りである。その中で中国清代をモチーフにした装飾が映える。

その店は中華料理店であった。それも広東料理だ。中華料理の中でもとりわけ使われる食材も調理法も豪勢だと言われているこの料理を楽しみながら話をしていた。

「然るにですな」

アメリカ大統領であるマックリーフは箸で海鮮麺を食べている。見れば誰の前にも麺が置かれている。そして円卓の中央部は回転式になっているがそこに蒸し餃子や小龍包、家鴨料理や前菜等が置かれている。他には各自の前に炒飯も置かれているがその多くは海の幸である。広東料理だけあり海の幸が非常に多かった。

「今回の場合は我が国としましては」

「開発に重点を置くべきだと仰りたいのですな」

「そうです」

炒飯を食べるロシア大統領グリーニスキーに対して述べた。

「我々としては今は開拓ではなく開発の時期であると考えるからです」

「確かにそうですな」

家鴨の卵であるピータンを食べている中国大統領の李がマックリーフの言葉に頷いてみせていた。

「それは私、いえ中国も同じ考えです」

「左様ですか」
「今開拓は充分です」
彼は悠然とピータンを食べながらそう語るのだった。
「それよりも一旦開拓した惑星や衛星を開発していく。その時期かと」
「その通りです」
マックリーフは少し微笑んで李の言葉に頷いてみせた。
「だからこそです。今回の中央政府の案には賛成です」
「そうですな」
見ればグリーニスキーもそれに賛成する顔であった。
「その通りです。しかし」
「どうも今回は小国でそれに反対する国が見受けられますな」
李が言う。
「どうにもこうにも」
「そう、それです」
マックリーフもそこを指摘する。彼が言いたいのはそこであるのだ。
「どうにもこうにも。彼等にしてみれば然るべき理由があるのでしょうが」
「それでもです」
グリーニスキーは少し微笑んで首を捻ってから述べてきた。
「我儘が過ぎると思うのですが」
「そうですな」
李も彼の言葉に応えて頷く。普段の自分達についてはこの際考慮しなかった。
「あまり我儘を言っては中央政府が困ります」
「それでは今回は」
マックリーフは悠然と言う。見れば箸の使い方がかなり上手い。連合では箸とスプーン、フォークとナイフは同時に使われるものであるからこれは当然であった。

「彼等には我慢してもらいますか」
「そうですな」
「ではその方針で」
「いえ」
しかしだ。ここで出席しているもう一人が声をあげた。見れば伊藤であった。彼女も大国の首脳として今回の会議に出席しているのである。彼女は気品のある知的な物腰で他の三人に話をはじめたのであった。
「それはどうでしょうか」
「異論がおありですか」
「そうです。あまり彼等を押さえつけるのもどうかと思います」
彼女はグリーニスキーに対して穏健な言葉を返してきた。
「それは彼等の主権を侵害し考えを封殺するものです。それは」
「いけないと言われるのですな」
「その通りです」
李に対しても答える。
「流石にそれは」
「それではですな」
それを受けてマックリーフが伊藤に問うてきた。
「ここはどういうお考えでしょうか」
「今回の開拓案ですが」
伊藤はマックリーフの言葉を受けて述べてきた。
「確かに僅かですが新規の惑星開拓もありますね」
「はい」
マックリーフは伊藤の言葉に頷いた。
「その通りですが」
「それを惑星開拓を主張する国々に重点的に回してはどうでしょうか」
「彼等にですか」
「そうです」

そうマックリーフに述べる。

## 第二十八部第三章　開拓と開発その二

「これで問題はないと思いますが」
彼女は海老のチリソースを食べている。海老とチリソースの二つの味がそれぞれ口の中で絶妙に絡み合い素晴らしい味になっている。それを楽しみながら話をしているのである。
「如何でしょうか」
「そうですな」
李が彼女のその言葉を聞きながら思案の声で述べてきた。
「確かにそうすれば問題はありません」
「そうです。だからこそです」
伊藤も言うのであった。
「ここはそうするべきかと」
「ふむ」
マックリーフもここまで聞いて考える目になった。褐色の引き締まった顔の中にあるその目が動くのであった。
「そうですな。そうすれば彼等も納得しますか」
「その通りです。だからこそです」
伊藤はまた述べる。
「それで如何でしょうか」
「基本的に異論はありません」
グリーニスキーも述べてきた。四国の首脳達の考えはここでは一致した。
「しかしですな」
「何か。不都合でも」
「まさか完全な善意からの御言葉ではありますまい」
彼は少し苦笑いを浮かべたような顔になって伊藤に問うてきた。
「一体どういったお考えで？」
「いえ、別に」

伊藤は彼の問いに対して穏やかに笑って返すだけであった。ここでは彼女はその通称である九尾の狐になりきるのであった。
「ありませんが」
「左様ですか」
「はい」
その狐のままで答える。
「私としましては彼等のことも踏まえまして」
「成程、それではそう捉えさせて頂きますぞ」
「是非共。それでは」
伊藤はここで海老を食べ終えた。そうして今度はフカヒレスープを飲むのであった。中国産の絶品である。他には豚料理まである。中国と言えばやはり豚であった。豚足を丸ごと煮たものである。
「それで宜しいでしょうか」
「ええ、それでは」
「そのように」
マックリーフも李も考える顔になったがそれで納得することにしたのであった。
「しましょう。こちらとしても彼等を押さえつけるつもりはありません」
「その通りです。それは道理に合いませんので」
「全く以って。そうしたことは実際に好ましくありませんな」
言葉がやけに白々しく聞こえるがそれが当然であった。米中露はこの時代においても他の国々に平気で恫喝を仕掛け強引に自分達の意見を押し込むからだ。武力はなくなっても経済力でそれをしようとするのだから千年前と全く同じであった。むしろ経済や貿易が主体である連合でそれをしてくるのであるから余計に悪質であると言えた。国の性格はそうそう容易に変わるものではないのであろう。
「それではそのように」
伊藤は穏やかに笑って言葉を述べた。
「しましょう」

「ええ、それでは」
「これで話を一旦終えて」
「後は」
マックリーフ、李、グリーニスキーはそれぞれの言葉で述べながら話を移してきた。
「料理に入りますか」
「そうですね。それにしても」
伊藤はグリーニスキーの言葉に応えて自分の麺を見た。彼女のそれは普通のチャーシュー麺であった。彼女の好物でもある。
「この麺はまた」
「絶品ですか」
「はい、コシがあるだけでなく」
伊藤は今度は麺を食べながら述べてみせてきた。
「味もまた」
「麺はコシだけでありません」
中国人ならではの言葉であった。李の今の言葉はかなりの説得力があった。
「味もまた大事ですからな」
「使っている麦がいいのですね」
「それは間違いありません」
李の返答はさらに自信を増していた。

## 第二十八部第三章　開拓と開発その三

「この店は特別なルートを使って麦を手に入れていますから」
「特別なですか」
「中国からです」
そうして李の祖国が出て来た。
「わざわざ麺類の為に栽培している麦を使っているのです」
「そうなのですか」
「そうなのです。そのうえで最高の技術で麺を作っている」
そこまでしたものである。だからこその味であった。
「それは他の素材も一緒でして」
「この海老もですね」
「その通りです。これもまた中国からです」
どうやらここの店の料理の素材は全て中国から入荷したものらしい。李の自慢げな言葉からもそれはわかる。やはり中華料理の素材は中国のものが一番ということか。
「この点心は如何でしょうか」
「水餃子ですね」
「それだけではなく」
今度はマックリーフに勧めていた。
「蒸しハンバーグもあります」
「ハンバーグですか」
マックリーフは李が勧めたそのハンバーグを見る。見ればそれはあんかけをして干し海老が入っている。ハンバーグはハンバーグでも中華風のハンバーグであった。
「これもまた絶品でして」
「これはシーフードのハンバーグですね」
「そうです」
マックリーフにまた答える。

「広東料理では割かしよく食べます」
「そうなのですか。ハンバーグといえば」
ここでマックリーフは如何にもアメリカ人といった言葉を述べるのだった。
「ハンバーガーをイメージしますが」
「あれに関しても面白いことがありますぞ」
李は目を細めさせてマックリーフに述べてきた。
「中華風のハンバーガーがあります」
「中華風の？」
「はい、まずハンバーグをここにあるような味付けにして」
まずはハンバーグについて言及する。言うまでもなくハンバーグはハンバーガーにとってなくてはならないものである。そうしてもう一つの必須のものがある。
「パンは饅頭の包です」
「あれですか」
「そうです、そうして作られるのが中華風ハンバーガー」
話す口調が誇らしげだ。
「絶品ですぞ」
「一度食べてみたいものですな、それは」
マックリーフはそれを聞いて楽しそうに目を輝かせていた。その目で今は豚の角煮を食べる。これもまた中華料理の定番である。宋代のある詩人が作った料理である。
「是非共」
「私はこれが一番いいですな」
グリーニスキーはグリーニスキーで楽しんでいる。彼は今酒を飲んでいた。
「この老酒が」
「その酒が御気に召されたのですな」
「ええ、中々」
老酒を飲みながら答える。

「中華料理によく合います」
「これは本来北の方の酒でして」
李はグリーニスキーに対しても説明をはじめた。
「コーリャンから作るのです」
「コーリャンですか」
グリーニスキーは聞き慣れない言葉を聞いたような顔になった。
「何か珍しい穀物で？」
「所謂雑穀です」
李はコーリャンについてまずはこう説明した。
「昔は中国は米だけを食べていたのではないので」
「それも食べていたのですか」
「その通りです」
今中国の主食は米である。といっても麦もかなり食べる。これは中国だけでなく連合の全ての国々でそうである。彼等は米をメインとして様々な主食を採っているのである。その中には麦や他の五穀だけでなくイモやそのコーリャンもあるのである。

## 第二十八部第三章　開拓と開発その四

「それから造った酒なのです」
「そうだったのですか」
「それで如何でしょうか」
李は今度はグリーニスキーに酒の味を問うた。
「御気に召されているようですが」
「気に入っているだけでもお分かりだと思いますが」
彼は笑いながら言葉を返した。その右手にあるグラスにはもうその老酒がある。
「確かに。では美味いのですな」
「絶品ですな」
グリーニスキーは満面の笑顔で答える。
「いや、中華料理にはこれですか。以後覚えておきましょう」
「他にも酒は色々あります」
李はここで言う。
「紹興酒や桂花陳酒もありますし」
「私は紹興酒ですね」
「私もですな」
伊藤とマックリーフはそちらを指示した。
「どちらかと言えばあれですが」
「あれとは？」
李はまた伊藤に問うた。
「ワインがいいです。中国のワインが」
「流石はお目が高い」
李は伊藤の今の言葉にまた目を細めさせた。彼にとっては喜ばしい言葉だったからだ。
「中国ではワインもよく飲まれていまして」
「そのようですね」

「はい、それも古くから」
これは本当のことである。唐代の有名な詩である涼州詩にも詠われている。中国人はかなり古くからワインを飲んできているのである。意外かも知れないが。
「その中国のワインを出されるとは」
「ワインはチリが有名ですが」
連合ではそうである。他にも多くの国がワインを売っている。日本もアメリカもそれは同じだ。なおロシアもワインを輸出しているしかなり飲んでもいる。
「中国のワインもいいものです」
「特に赤がですな」
「はい」
伊藤は笑顔で李の言葉に頷いた。
「その通りです」
「中国では赤ワインが愛されていまして」
李は上機嫌で説明をはじめた。
「それでよく飲まれるのです」
「そうだったのですか」
「無論白もよく飲まれます」
李は続いてこう注釈を入れた。
「ですが肉料理や海鮮ものにしろ広東や上海のような味付けが多いせいか」
「赤が好まれると」
「そういうことです。和食ではあれですね」
「ええ、白ですね」
伊藤はにこりと笑って答えた。
「日本酒か。それです」
「酒は料理に合わせるもの。いや」
ここでふと言葉を変えた。
「料理が酒に合わせるのかも知れませんがそれでも」

「それぞれの調和が大切であると」
「やはり中華料理に合うワインは赤です」
李はそうしたことを踏まえてこう結論付けた。
「白は駄目とは言いませんが合わない場合が多いのです」
「左様ですね」
「ええ。だからこそ」
ここで店の者を呼ぶ。そうしてワインを頼んだのであった。
すぐにボトルが四本持って来られた。それがそれぞれの前にグラスと共に置かれる。
「今のお話で機嫌がよくなりましたので」
李はそのグラスに注がれるワインを見ながら他の三人に述べた。
「このワインは私の奢りです」
「ほう、それは素晴らしい」
マックリーフはその言葉を聞いて頬を緩ませた。
「では有り難く頂きます」
「いえいえ、今度はアメリカのワインを飲みたいものです」
「では今度は私が」
この場合はいい感じの売り言葉に買い言葉であった。マックリーフもそれに上機嫌で乗るのであった。

## 第二十八部第三章　開拓と開発その五

「奢らせて頂きましょう、アメリカのワインを」
「おっと、それを言われると」
「そうですね」
それを受けてグリーニスキーと伊藤も言うのだった。
「私もそうしなければいけませんな」
「私も」
「それでいいのですよ」
李は明るい声で二人にも告げた。
「お互いそうして親睦を深める」
「思えばそれはいいことですな」
他の三人もそれに納得する。
「確かに」
「やはり親善を深めるにこしたことはありません」
表向きには確かにそうだ。彼等はここでは表向きの話をするのであった。いささか茶番めいているがそれには構うところがなかった。
「ではそういうことで」
「はい」
こうしてまずは話は終わった。続いてデザートであった。酒はまだ残っているがそれを丁度飲み終えたところでデザートがやって来たのであった。
デザートも色々あった。杏仁豆腐もあれば饅頭もある。他には果物もある。中華料理では菓子はもっと先に出るのが普通だが今回は違っていた。また中央の一段上になっている回転する部分に置かれていく。そうしてまた話に入るのであった。
「やはり杏仁豆腐ですね」
伊藤が言った。
「これがなくては中華料理を食べた気にはなりません」

「左様ですか」
「はい、私はこれが好きでして」
にこりと笑って李に答える。
「最後は必ずこれです」
「それだけの料理ではあります」
李もにこりと笑ってそれに応える。
「杏仁豆腐は中華料理のデザートの中でも最高傑作の一つです」
「そうですな」
それにマックリーフも頷く。
「私もこれは好きでした」
「貴方もですか」
「アメリカにも中華料理店は数多いです」
実際のところ中華料理は連合のどこにでもある。
「それで結構食べるのですが」
「その中でもこの杏仁豆腐は、ですか」
「はい、中華料理のデザートの中では一番のお気に入りです」
それを自分でも言う。
「これがなくては。食べ終えたとは思えません」
「伊藤首相と同じですな」
「どうやらそのようで」
別にそれがどうしたとは思ってはいない。彼が杏仁豆腐を好きだということは変わりはしないからだ。肯定しても否定してもそれは変わりはしないことなのである。
「それは貴方も同じでしょうか」
「否定はしません」
グリーニスキーもそれは同じであった。彼も認めてきた。
「あの甘さがたまりません。それに」
「それに？」
「杏仁豆腐自体の舌触りも」
彼はそれもよいと言うのだった。

「一度食べたらそれで忘れられません」
「左様ですか」
「はい」
グルーニスキーも頷いてみせてきた。
「ここで出て来たのはある程度予想していましたが」
「嬉しい的中ですか」
「その通りです。では喜んで食べさせて頂きます」
彼は笑顔で述べる。伊藤やマックリーフと同じ笑顔であった。
「是非共」
「そうですな。ところで」
ここで李はふとした感じでまた言ってきた。
「何でしょうか」
「この杏仁豆腐に限らず連合ではあらゆる場所で中華料理が食べられます」
「ええ、それは」
「確かに」
他の三人もそれに頷く。これは言うまでもないことに思えた。中華料理といえば連合ではかなりポピュラーな料理のジャンルである。今更といった感じの話ではあった。

## 第二十八部第三章　開拓と開発その六

「しかし。マウリアではそうではありません」
「まあそうですね」
「それは」
三人はまた彼の言葉に頷いた。だが今度の頷きはこれまでのものとは違っていた。皇帝ではあるがそこにはいぶかしむものもあるのだ。
「それは何故かといいますと」
「あそこはまた特別です」
マックリーフがその顔を少し曇らせて述べてきた。
「あの国はあまりにも特殊です」
「その通りですな」
グリーニスキーはいぶかしむ顔になっていた。
「あの国だけは。どうにも」
「まさに別世界であります」
李もそこを指摘する。
「料理にもそれは言えまして」
「我々がカレーと呼んでいる料理ですが」
伊藤が言ってきた。
「実のところあれはカレーではありません」
「そうらしいですな」
李がそれに応える。
「これはよく言われていることですが」
「それを言えばインド料理は全てカレーであるとのことです。それに」
伊藤はさらに言う。
「連合のどの料理も彼等の舌には合わないそうですし」
「ボルシチがありますが」

グリーニスキーは自国の代表的な料理を出してきた。酸味の強いシチューである。ピロシキと並ぶロシア料理の代名詞でもある。連合ではかなり有名な料理だ。
「これをカレー味にしました」
「はい」
「それでどうなりました？」
「変わったロシア料理ですね、でした」
首を捻って述べてみせてきた。
「どうにもこうにも。これは」
「変わったロシア料理ですか」
マックリーフはそれを聞いて少し目を閉じてそれからまた述べた。
「それで我々がマウリア料理を食べると」
「舌に合いませんな」
「その通りです」
そう李に答える。
「彼等も同じなようで」
「結果として連合の料理はマウリアでは流行りません」
これが結論であった。料理までもマウリアは独自性があまりにも強烈なのであった。連合三百国の中でもマウリアより個性的な国はない程であった。
「逆でも同じですが」
「料理でもそうです」
伊藤がここで言う。
「他のあらゆることが」
「そうです。マウリアは決して混ざり合いません」
李の結論はこれであった。
「さながらカレーがそうであるように」
「そうですな。しかしあれで」
マックリーフはいぶかしむ顔で話を政治に戻してきた。
「ラコシ議員のような人物がいるのは」

「自覚がないのですかな」
グリーニスキーにはそうとしか思えなかった。
「自分達の個性の強さに対して」
「おそらくはそうなのでしょう」
李はそれに応えて言う。
「だからああして過敏になるのです」
「過敏になることはないと思うのですが」
伊藤もマウリアに関しては理解できない部分が非常に多い。だから今回はどうにも歯切れの悪い言葉を続ける。どうにもこうにもわかりかねてである。
「あそこまで同時性が強ければ何があっても飲み込まれることがないので」
「自分達ではわからないのでしょう」
マックーリーフは言う。
「鏡に映っても自分自身はそうはわからないものですから」
「左様ですか」
「ええ。それは彼等も同じということで」
「マウリアは永遠にマウリアです」
李はここで哲学的な言葉を出した。
「それ以外の何者でもありません。決して我々には混ざらずに」
「マウリアであり続けると」
「正直理解できない国であります」
伊藤だけでなく他の二人にも述べる。

## 第二十八部第三章　開拓と開発その七

「あの国だけは。どうしても」
「その国と今揉めていますが」
グリーニスキーもまた政治に話をやってきた。
「果たしてどうなるでしょうか。何分ラコシ議員は清廉潔白でやましいことなぞ何一つない御仁ですが」
最もやりにくい相手だ。ましてそうした人物が自分が絶対に正しいと信じて疑わないものである。交渉を行うにもそれが厄介なのである。真っ白というものは案外使いにくいものなのである。
「それをどうこうするとなると」
「暗殺、ですかな」
マックリーフはさりげなく恐ろしいことを口にしてきた。
「だとすると」
「それをやらせる御仁でもないようで」
李は止めるのではなくその可能性の是非について述べるのであった。ここでは彼等はあくまで政治的な実効性と可能性のみを考えていた。
「残念なことに」
「身辺のガードは固いと」
「それもかなり」
彼はあらためてそれを述べる。
「その為手が出せないのですよ、マウリアの彼と敵対する勢力も」
「危険を察知する能力も優れていますか」
「それにです」
李はさらに言葉を付け加えてきた。
「彼はわかっています。自分が死ねば」
「殉教者になると」
「そうなれば彼の願いはさらに果たせます。暗殺は上策ではないか

と」
何かしらの志を持つ人間を殺したとする。彼は殉教者になる。そうなれば残された者達にとっては偉大な崇拝の対象となりその思想や信念はさらに強くなり広まる。キリスト教が何故あそこまでの宗教になったかというとキリスト自身や他の信者達の殉教があったからだ。彼等はそれを認識したのだった。
「ではどうすべきでしょうな」
グリーニスキーはそれでもどうするべきかを話すのだった。
「まあ我々が行うのではなく」
「あくまで中央政府の仕事ですが」
「その通りです。ですが気になります」
マックリーフの言葉に応えて述べる。
「彼等はラコシ議員に対してどうするのかが」
「将を射るにはまず馬を射よ」
ここで伊藤が言った。
「我が国の諺です」
「ほう、つまりは」
李がその言葉に反応してみせてきた。
「あれですか。ラコシ議員を狙うだけが策ではないと」
「確かに彼は強力な存在です」
それは認める。認めるしかなかった。
「ですが彼だけで成り立っているわけではありません」
「その通りですな」
伊藤の言葉にグリーニスキーが頷いてきた。
「彼の周りには多くのスタッフがいます。参謀もいれば実行部隊もいます」
「はい」
この場合の実行部隊とはナチスの突撃隊のような存在ではない。彼と志を同じくする議員達という意味である。少なくともラコシは暴力的な人物ではない。対話を重視するタイプだ。もっともその対

話とは相手を論破して自らの正当性と正義を世間に知らしめるものであるが。
「彼等はどうでしょうか」
「彼等ですか」
「ラコシ議員の様な方は稀です」
伊藤の目が笑っていた。目が笑っているのではなく目の奥が笑っていた。その笑みにこそ彼女の真意が現われていた。
「清潔な人物ばかりとは限りません」
「そういうことですか」
「そうです。中央政府がそれに気付いているかどうかですが」
彼女もまたマックリーフに応える。
「ラコシ議員の周りを動けなくすれば同じことです。彼一人では限界があります」
「そうですな」
李は今の伊藤の話に目を光らせてきた。そのうえで彼も言う。

## 第二十八部第三章　開拓と開発その八

「確かにそうです。独裁者とて一人で動くわけではありません」
「そうです」
「英雄もまたあのキリストでさえも」
殉教者という言葉が出たせいかここでキリストの名前が出て来た。彼の様な絶対的な存在でさえも一人ではあそこまで為し得なかった。彼は確かに偉大な存在でありカリスマ性があった。しかし彼に従う使徒達がいてこそなのでもあった。その使徒達を引き寄せたのは彼の力であるが彼だけでなくその使徒達の力もあっての故である。それは誰にでも言えることである。どんな英雄や聖人であってもだ。一人では限度があるのだ。
「一人では限りがありますな」
「そうです。あのラコシ議員も一人では動ききれません」
伊藤はまたそこを言う。
「だからこそ」
「ふむ、では中央政府の動きはわかりました」
李はここまで聞いたうえで頷いた。
「そういうことですか」
「はい、おそらくはそう動くでしょう」
伊藤もまた彼の言葉に頷く。
「私の読みが当たれば」
「そうなりますか」
「だとするとこれから面白い話になりますな」
マックリーフはここで自分が持っている情報を出してきた。
「既にイスラエルも動いているようですし」
「ほう、イスラエルがですか」
グリーニスキーはイスラエルと聞いて楽しげな笑みを浮かべた。
「影のバランサーがもう動いていますか」

「既に中央政府の高官と接触し」
伊藤はその中央政府高官という言葉に目の奥だけで反応を見せた。見ればマックリーフはその高官が誰かまではわかっていないようだ。しかし彼女はその彼の今の言葉だけでそれが誰なのか察しをつけた。しかしそれはあえて言わないのであった。
「工作員達もマウリアに入り込んでいるようです」
「相変わらず早いですな」
李の言葉は素直な感嘆であった。
「味方に回せばあれ程心強い存在もない」
「ですが」
グリーニスキーはわざとシニカルめいた顔になる。豪快な気質の多い彼にはいささか似合わない顔であったがそれでもその顔を作ってみせたのだ。
「敵に回せばあれだけ厄介な存在もありませんな」
「そうですね」
彼の言葉に伊藤が応えた。
「私もそう思います」
「もっとも」
グリーニスキーはここでまた言う。
「私はそうした方をもう一人知っておりますが」
「左様ですか」
あえて今の彼の言葉はスルーする。
「その方は光栄なのでしょうか」
「そうですな。先程の話の前者だけを受け取って下さい」
グリーニスキーもさるものだ。あえてこう言うのであった。
「その方にはそうお伝え下さい」
「わかりました。それでは」
その言葉に対して口の両端だけで笑って応える。
「ではお伝えしておきます」
「是非共。さて」

話が段落づいたところで彼は声をあげた。
「話は終わりましたしこれで」
「ええ」
「それでは」
マックリーフと李も頷く。皿の上にはもう一片しかない。これは中華料理の礼儀であり堪能したという証なのだ。ここで残らず食べるというのはまだ足りない、満足していないという意味になるのだ。彼等はそれを承知しているからこそここでそれぞれ一片残したのである。
「これで終わりにしましょうか」
「それではまた」
「はい」
伊藤以外の三人が続いて応える。そうして伊藤もまた。
「次の機会に」
こうして話し合いは終わった。四人はそれぞれの宿舎に引き揚げる。伊藤もまたそれは同じだった。彼は今泊まっている月のホテルに戻った。そこでシャワーを浴びた後で携帯に電話を入れたのであった。
「私だけれど」
「これは首相」
すぐに返事が返ってきた。それは八条の声であった。

## 第二十八部第三章　開拓と開発その九

「何の御用でしょうか」
「噂を聞いたのだけれど」
まずはこう前置きする。
「イスラエルの誰かと会っていたそうね」
「何処からそれを御聞きになられました？」
肯定の返事であった。伊藤は今の言葉を聞いてやはりと心の中で思った。
「少しね。君が会ったことまでははっきりしないわ」
「左様ですか。ならいいのですが」
「とりあえず中央政府の高官とイスラエルの誰かが接触したというのは流れているわ」
その情報を彼に教える。
「気をつけなさいね。何処に目や耳があるのかわからないから」
「はい、それは」
八条もその言葉に応えて頷く。
「存じているつもりです」
「それだったらいいけれど。ただ」
ここで伊藤は話を本題に進めてきた。
「マウリアへの対策はもう考えてあるのね」
「はい、そちらは」
八条の返答は実に明瞭なものであった。
「既に手は打ってあります」
「そう、もうなのね」
伊藤は八条のその返答にまずは微笑んだ。
「ならいいわ」
「はい、実はですね」
「ええ」

ここで八条はことの次第を話す。
「イスラエル政府から申し出がありまして」
「成程ね」
これで話が繋がった。伊藤は八条の言葉を聞きながら心の中で思った。
「それで上手くいくのね」
「間違いありません」
八条はここでも明瞭に答えてきた。彼らしいはっきりとした言葉で。
「こちらも工作員を送り込んでいますので」
「それで何をするのかしら」
伊藤が次に問うたのはここであった。
「よかったら教えてくれるかしら」
「ワコシ議員は直接は狙いません」
まずはこう述べてきた。
「彼は狙うにはあまりにも堅固であり清廉潔白です」
「それはもうわかっているのね」
「はい、調べた結果」
駄目だというのだ。まず念入りに情報収集を行うことが絶対条件であるのは何も戦争だけではない。こうした政治の世界でもまた経済の世界でも同じことである。それを完全に踏襲しているという点で八条はよくわかっている人物であると言えた。もっと言えば伊藤の弟子であると言えた。
「彼に関しては無理ですので」
「それで狙うのは」
「彼の側近達です」
伊藤はそれを聞いて心の中で会心の笑みを浮かべた。自分と同じ答えだったからだ。彼女にとってはまだ彼は生徒であった。そうした意識があるのは間違いない。
「彼等を狙います」

「暗殺で？」
「それはどうも」
八条はそうしたことは好まない。もっと言えばスキャンダルを狙うのも本質的に好まない。そうした裏の世界に関する政治は彼の得意とするものではないのだ。
「それには及ばないかと」
「ではスキャンダルね」
「はい、その方針です」
八条は答える。
「我々がそれを見つけ出し」
「それからはイスラエルの仕事になるのね」
「そうなります。既に見返りの話もついています」
「高くついたでしょうね」
「いえ、思ったよりは安かったです」
本音を述べるのであった。
「実際のところは」
「それでどれ位したのかしら」
「港を一つです」
そう伊藤に答えた。

## 第二十八部第三章　開拓と開発その十

「イスラエルの港を一つ。軍港として欲しいと」
「安いかしら、それは」
　吝嗇な傾向がありそうしたことに関する交渉では連合でも一、二を争う程手強いとされる伊藤から見ればそうなる。だが八条にとってみればそうではないらしい。
「協力一つで港一個というのは」
「そうでしょうか」
「それを安いかそうでないかの判断は基準の分かれるところね」
　伊藤はあえてそこで話を止めた。
「難しいところだけれど」
「はい、私としてはこれで済んでよかったと思いますが」
「君は昔から気前がよ過ぎるのよ」
　しかしここでまた話を再開させる。八条を嗜めてきたのだ。
「駄目よ、あまり気前がいいのよ」
「左様ですか」
「最初から出すつもりでもあえて出し惜しみをするのよ」
　それが伊藤のやり方であった。基本的に気前がいいとされる日本であるがこの伊藤との交渉はかなり厄介であるというのが連合内部での評価である。こうした手強さもまた彼女を九尾の狐と呼ばしめるものになっているのである。
「それは言った筈だけれど」
「申し訳ありません」
「謝る必要はないわ」
　それはいいとした。
「けれど。いいわね」
「ええ」
　また伊藤の言葉に頷く。

「実際のところあまり気前がいいのも駄目なのよ」
「それはわかっているつもりですが」
「やっぱり育ちが出るのかしら」
ここで伊藤は八条の育ちのよさを指摘した。決して嫌味ではない。だが実際のところ彼が育ちのよさ故に気前がいいこともわかっていた。これは仕方ないとも言えた。
「こうしたところは」
「そうなのですか」
「どうしてもね。それは出るわ」
やはりまた言う。
「ほら、エウロパの貴族達だけれど」
「はい」
「彼等も平民に対しては随分と気前がいいそうね」
「そう聞いています」
無論例外もいるがおおむねにおいてそうであると言えるものがあった。実際のところエウロパ貴族達は平民達には給料にしろチップにしろ気前よく払うのが当然だと考えられているのである。これもまたノブレス＝オブリージュであるがそれと共に育ちの出ることであった。
「それと同じね。君も」
「そうなりますか」
「なるわ。自覚がないのがその証拠よ」
「はあ」
「まあそれがいい面でもあるけれど」
決して否定はしない。むしろ肯定させする。
「けれどね。時と場合はそれを抑えることも大事よ」
「わかりました。努力します」
八条は一応は頷く。だが本人にもあまり自信がなく伊藤もそれはわかった。こうした生まれついてのものはそうそう容易にはなおりはしないからである。

「わかればいいわ。ただね」
「はい」
また伊藤の言葉に頷く。
「イスラエル相手だともっと粘ってもよかったわね」
「そうなりますか」
「多分彼等にしてみれば港一個は思いも寄らなかった貰い物よ」
それを八条に告げる。
「もっと安くなると思っていたでしょうから」
「そうなのですか」
「こうした時は出来るだけ値切るものなのよ」
伊藤は自分の交渉術をここで述べた。
「出来るだけね。まあこれは得手不得手があって」
「得手不得手が」
「君はかなり不得手ね、正直」
それはどうしようもないのかと思った。しかしそれでも言うのだった。

## 第二十八部第三章　開拓と開発その十一

「それでもね。いいかしら」
「ええ」
「努力をするのは大事よ。いつも気前よくだと足元を読まれますし」
「それはあってはなりませんね」
「そう、それは問題なのよ」
足元を読まれるということがである。そうなればそこを掬われる。伊藤はそこを指摘して八条もそれを警戒するのであった。なお彼は決して交渉下手ではない。むしろ日本の議員であった頃から中々交渉が上手いことで知られている。機転が利くからである。
「そうなったら。連合は手強い相手が多いからね」
「ええ。それはわかっているつもりです」
八条もそれは認識していた。三百もの国々が互いに結びつき反目しそうして生きていっているのである。その中にいる八条もまたそれはわかっていたのだ。
「けれど。もう一段階上をね。目指してね」
「上をですか」
「そういうこと、そうした値切りもまた覚えるといいわ」
「出来る限りやってみます」
「意識するとしないでまた全く違うから」
例えできなくともそれを知っているかいないかで全く違ってくる。伊藤はそれもわかっていた。
「いいわね」
「そこもまた勉強ですね」
「そう言うとわかりやすいかしら」
教授の時の顔になった。それが実にいい顔であった。
「そういうことよ。いいわね」
「はい、それでは」

「それでだけれど」
ここまで話して話題を変えてきた。
「何でしょうか」
「会ったのは誰かしら」
「誰と申しますと」
「男性かしら。それとも」
「男の方です」
八条はそう答えた。ただし名前はあえて出しはしない。
「それが何か」
「いえ、少し気になってね」
伊藤はその言葉を聞いて少し面白くないものを感じたがそれは言葉には出さずに言葉を返すだけであった。
「それだけなのよ」
「そうなのですか」
「女性の方とは最近会っていないのね」
「いえ、会っていますが」
しかしそれは否定する。
「会っているのね」
「はい」
八条のその言葉は伊藤を一瞬だが喜ばせるのに充分なものであった。しかしそれはほんの一瞬でしかなかったのが彼女にとっては至極残念なことであった。それは何故かというと。
「金内相ともカバリエ外相とも」
「仕事でなのね」
「それがどうかしたのでしょうか」
「いえ、いいわ」
声にほんの少しだけ憮然としたものを含ませて答えるのであった。
「わかったわ、そういうことならね」
「あの。それが何か」
「いいのよ、別に」

彼が相変わらずこうしたことに関しては何もわかっていないのを再確認してそのうえで心の中で溜息をつきながらもまた言うのであった。
「気にしなくていいわ」
「そうなのですか」
「それでね」
その話を終わらせてまた言うのだった。
「マウリアの方は大丈夫なのね」
「ええ、それに関しては」
話が元に戻り念を押すようなものになった。八条もそれに応えてきた。
「御安心下さい、必ず」
「外務省はどうなのかしら」
「カバリエ外相も乗り気です」
八条の顔が笑顔になっていた。
「あの方も常々マウリアにおいてそうした勢力があるのを快く思ってはおられませんでしたから」
「それはそうでしょうね」
伊藤はカバリエがマウリアの原理主義者達を嫌っているということに納得した。そうした勢力があれば円滑な外交を考え実行するにあたって非常に厄介だからだ。これはすぐにわかった。
「はい、だからです」
「今回は外務省がメインになると思うのだけれど」
「それの話の調整も進めています」
八条はそれにも答えてきた。
「既に」
「そう。じゃあ安心していいわね」
「是非共」
また伊藤に答えてきた。
「既に中央政府が動いていますので」

「それが表に出れば厄介だけれどね」
政治の仕事は表と裏が顕著である。この場合は言うまでもなく裏である。それが公になってはならないものであるのもまた言うまでもないことであった。

## 第二十八部第三章　開拓と開発その十二

「そこは気をつけてね」
「わかりました」
「それと。改革派だけれど」
「はい」
また話が変わった。
「選挙の方はかなり有利なようね」
「追い風がありますので」
八条の声が明るいものになった。さっきよりもである。
「それにかなり助けられています」
「エウロパとの戦争の勝利ね」
「それがかなり大きいです」
戦争に勝つことが政治家の選挙にとって大きな追い風になるのは民主政治の特徴の一つである。それがとりわけ顕著であったのは二十一世紀までのアメリカであったがこの時代の連合も同じであった。千年の間戦争をしたことのない彼等もこれは同じであったのだ。
「そのせいで大統領閣下の人気も高く」
「再選は確実ね」
「はい、そう言われています」
「今のところはそうね」
伊藤はここで少し醒めた物言いをあえてしてきた。
「今のところはね。わかるわね」
「はい、ここで間違えれば」
「ええ、終わりよ」
彼女は言いたいのはそれであった。今それを述べる。
「特に裏の仕事が公になれば」
「ダーティーなイメージがついて」
「終わりよ。それは気をつけてね」

「そうした世界があるのがわかっていてもですね」
「ないことになっているからよ」
また意味深い発言であった。
「そうした世界は。表ではね」
「表では、ですか」
「選挙で見られるのは表よ」
裏は見られない。見られてもそれは決して公には語られない。それが政治というものの在り方なのである。とりわけ選挙というものではそうである。人々も政治家達もみらびやかな外見をあえて見てその裏は評価してもそれを口に出すことはないのである。
「いいわね」
「ですね。だからこそ」
八条も応えて頷く。
「今回の仕事は慎重に」
「成功すればこう書かれるわよ」
声に笑みを含ませて八条に述べてきた。
「幸運なことにマウリアの強硬派議員達が次々に失脚して」
「それが外交の成功に結び付いたと」
「こういった話は多いのよ」
笑みを含ませたままの声で述べる。
「実際にはね。急死というケースは時として」
「暗殺もあるのですか」
「そうよ。歴史には都合よく急死した人が多いわね」
伊藤の声が剣呑なものになってきていた。
「それのうちの何割かは」
「暗殺ですか」
「例えばよ」
また言うのだった。
「激しい運動の後で生水かワインを飲んでそれで急死というのは」
「見るからに怪しいですね」

「そうした話が多いわね。実際のところは急死でも
「実際のところは藪の中と」
「一応は色々と言われると思うわ」
連合にもマウリアにもマスコミがありインターネットがある。彼等はこうした話には非常に敏感に反応するのは千年前から変わりはしない。それも連合でもマウリアでもこれは同じなのである。
「それでもね」
「それで済むのですか」
「歴史に書かれるのは主に表だから」
行間に何かを隠す場合もあるが。結局はそうなのだ。裏の話が表に出れば書かれるが。言い換えれば表に出なければ書かれはしないのである。
「そういうことよ」
「わかりました。それならば今回は」
「運がいいわね」
伊藤は笑ってこうあらためて述べた。

## 第二十八部第三章　開拓と開発その十三

「今の改革派は」
「そうですね。私もそうですね」
「八条君はまた違うわ」
だが伊藤は彼に関しては特別だとここで言うのだった。
「また違うとは」
「だって。そもそも運がいいのだから」
そしてこう言う。
「そうですか」
「そうよ。まず他の人が欲しいと思うようなものは何でも持っているし」
資産に家族に美貌に頭脳に健康。彼は実に恵まれている男であった。
「持っていないのは一つだけね」
「といいますと」
「早く奥さんをもらいなさい」
伊藤は優しい声で彼に言ってきた。
「前から言っているでしょ。政治家は独身では勝手が悪いわ」
「残念ですが相手がいません」
八条は申し訳なさそうにこう言葉を返すのだった。
「今のところは」
「お見合いはしないの？」
「お見合いですか」
その言葉に何か不穏な空気を見せる八条であった。
「それもちょっと」
「お見合いは嫌なのかしら」
「あまり好きではありません」
嫌いということであった。伊藤はその理由がどうしても聞きたく

なった。それで実際に彼本人に対してそれを聞くのであった。聞かずにはいられなかった。
「それはどうしてなの？」
「一度御会いしてその人がわかるとは思えません」
それが八条の理由であった。
「何度御会いしてようやく」
「普通一度会って結婚はしないけれど」
連合ではそうである。サハラでは違うが。サハラでは家と家との婚姻であるという考えが強いのである。連合の個人主義とはまた違う考えなのである。
「それでもです。お互いをよく知らないと不幸なことになります」
「それが君がかしら」
「いえ、お互いがです」
この返答自体は伊藤にとってみれば合格であった。ここではいそうですとでも言おうものなら八条を叱るところであった。しかし彼はそうした浅い考えの男ではなかったのだ。
「だからこそ。お互いをよく知った関係でないと」
「そう。だからお見合いはしないのね」
「そういうことです。別にいいですよね」
「別にそこまでは言わないわ」
伊藤もそれに反対はしない。人それぞれの考えであるからだ。
「じゃあ許婚とかは」
「そうした方も」
「いないの」
「私の代ではないです」
ここで自分の代ではと言うのが名家の証であった。八条家は日本はおろか連合でもその名を知られた名門であり許婚という存在も長い間続いていた。だが彼の代ではそうではないというのだ。
「ないのね」
「はい、父の考えでして」

「御父上の？」
「結婚相手は自分で見つけろと」
父の考えをここで伊藤に対して述べる。
「それを子供の頃から教えられてきました」
「御兄弟もなのね」
「弟や妹達も皆そうです」
どうやら本当らしい。そこまで聞いて伊藤はわかった。
「ですからそうした方も」
「いないのね」
「そういうことです。弟達も妹達も皆結婚していますが」
「じゃあ次は君の番じゃない」
「ですが」
ここで話が戻る。何か堂々巡りめいてきていた。
「相手がいませんので」
「気付いていないだけじゃないかしら」
「気付いていない？」
「ええ、そうよ」
八条に対して言うのであった。

# 第二十八部第三章　開拓と開発その十四

「君だけがね。そうは思わないのかしら」
「いえ、それはないでしょう」
八条はそれを完全に否定した。頭からその可能性を全否定している感じであった。彼は何故かこうしたことについてはいつもこうなるのである。
「何せ昔からですし」
「昔から？」
「中学生の時からです」
また随分と遡るものだ、伊藤は彼の話を聞いて心の中で思った。だがやはりこれもあえて言葉には出さないのであった。黙って聞いて心の中で思うだけであった。
「私はそうした話には縁はないのです」
「そうなの」
「バレンタインでも」
今では連合全体の行事となっている。女の子が男の子にチョコレートをプレゼントする日だ。かなり儀礼的にもなっているがやはり本命の男の子にここぞとばかりにチョコレートを渡すのはこの時代においても健在である。こればかりはそうは消えはしないもののようである。
「貰うのは義理チョコばかりですし」
「義理、ねえ」
当然伊藤は今の彼の言葉を全く信じてはいない。
「本当かしら」
「疑われているのですか？」
「いえ、それは違うわ」
これもまた否定する。
「違うけれど」

「それではどうして」
電話の向こうで伊藤の言葉に何か探りを入れてきているのがわかる。伊藤はそれもそのままにした。
「それでどんなチョコレートを貰ってきたのかしら」
「形は様々ですね」
わかる人間にとってはこれで充分であった。形が様々ということはだ。
「量だけは多いのです、いつも」
「形もなのね」
「そうですね。ブラックチョコの上にホワイトチョコで文字が書いてあったりとか」
「ホワイトでねえ」
伊藤はわかり過ぎる程わかった。今ので。
「ハート型のものや。チョコレートの色も様々ですね」
「どんな色があったのかしら」
「ピンク色のが多かったです」
ピンクはこの時代では女性からの男性の愛情を表わす色であるとされている。チョコレートの色はこの時代では様々である。あのチョコレート色だけではなく他にホワイトチョコもあればそのピンクもある。中には赤もあるし青や黄色、緑もある。味もまたそれぞれ少しずつ異なっている。チョコレートといっても一口には言えない時代であるのだ。従ってチョコレート菓子も様々な色があるのである。
「ですがやはり義理ですのね」
「そう、全部義理だったのね」
「そうです。ですから私はもてないのです」
自分では気付いていないのだった。
「おわかりですね」
「他に聞きたいことがあるのだけれど」
「はい、何でしょうか」

八条はまだ伊藤に応える。伊藤はそれをよしとしてまた八条に対して言うのであった。内心ではその鈍感さにかなり呆れてしまってはいたが。
「映画のチケットとかは貰ったことはあるわね」
「いつも友達が行けなくなったからと言われていました」
つまりここでも女の子の真意に気付いていなかったのだ。
「それで一緒に行ったことはありますが」
「何度位そうした誘いがあったのかしら」
「さて」
電話の向こうで首を捻っているのがわかる。
「小学校から今までですと。わかりません」
「そんなに多かったのかしら」
「数え切れないのです」
困った声になっていることからこちらでも相当な数があったことがわかる。
「申し訳ありません」
「それで乗るのね、誘いには」
「特に用事のある時以外には」
気付いていないことが何よりもわかる返事であった。
「御一緒させて頂いていました」
「その時にまた誘われたわよね」
「そういえばそうですね」
ふとそれに気付いたような言葉であった。
「今日家には誰もいないとか喫茶店に行かないかとか。あと、ええと」
「ええと?」
「何か繁華街の裏に行こうって言う娘も結構いました」
「そう、繁華街の裏にね」
伊藤はそれを聞いてこれまでで最も呆れた。繁華街の裏にホテル街があるのがこの時代なのだ。それがどういう意味なのかは大抵の

人間ならば簡単にわかる話である。ところが八条はそれにすら全く気付いていないのである。伊藤の呆れ様は凄まじいものであったが電話の向こうの八条は気付いてはいない。

## 第二十八部第三章　開拓と開発その十五

「こちらも忙しいのでいつもお断りさせて頂いていましたが」
「どういった理由で忙しかったのかしら」
「色々です」
八条は答える。
「学業であったり習い事であったり用事があったりペットの世話をしたり」
「そう、それでなのね」
それで断るのは失格である。伊藤は今度もそう思ったがやはり言わなかった。
「はい、そうなのです」
「それもわかったわ。それで結論として君は」
「もてないのです。どうにもこうにも」
電話の向こうで首を傾げているのがはっきりとわかった。
「どうすればいいでしょうか」
「そうね。少し考えるといいわ」
伊藤の言葉はこうであった。
「少しですか」
「そうよ、少し」
声にわざと険を入れるのを忘れない。
「わかったわね」
「わかりました。少しですか」
「少しでいいのよ、君の場合は」
八条の頭の回転の早さを知ってのことである。だがそれと共にそれでも彼は気付きはしないだろうとも思っていた。その辺りが伊藤の鋭さであった。
「そうすればわかると思うから」
「わかりました。それでは」

八条もそれに応えて述べる。
「考えさせて頂きます」
「少しだけれどじっくり考えるのよ」
伊藤はこうも付け加えるのだった。それは念を押していた。
「そこのところをしっかりね」
「じっくりとですか」
「人間時間をかけて考えるといい場合が多いわね」
「はい」
これは確かにそうである。もっともそれとは逆にじっくり時間をかけてかえって悪くなる場合もあるが。これは時と場合による。もっと言えばケースバイケースである。
「今のはそれだから」
「女性に関してはですね」
「マウリアに関してはもう答えが出ているわよね」
「ええ、それは」
もうそれについては言うまでもなかった。確かに答えが出ている。それならばいいことであった。少なくともこれ以上動かすような話ではなかった。
「だったらそれはいいわ。後は」
「もう一つですか」
「本当にね。年齢的にもあれだし」
「年齢もですか」
八条もいい歳なのだ。少なくとも結婚してもいいような。政治家という世界はとりわけ独身であるとよくないとされる世界である。パートナーがいないと駄目だとされるのは体面だけではなく実際に支えてくれる人間が必要となる仕事だからである。伊藤もこれは夫がいることで実感していることであった。
「そう、そろそろでしょ」
「確かに」
八条もそれは自覚はしていた。しているだけであったが。

「わかったのなら早くいい人を見つけるのよ」
「わかりました」
「どうしてもというのなら」
伊藤はここで助け舟を出した。これは計算のうちである。
「私が紹介してあげるから」
「首相がですか」
「私だっていい女の子の何人かは知っているわ」
その程度の人脈は持っている。そうでなければ政治家としてやってはいけない。政治家にとっては人脈を築くのも重要な仕事であるのだ。
「だからね。いざという時は頼るのよ」
「ではその時には」
「さもないとね」
脅すことにした。やんわりとであるが。
「息子達にその娘さん達を紹介するから」
「それはいいことです」
だが八条に今の脅しは効果がなかった。効果がないというよりは何の話か全くわかってはいなかった。やはり八条はここでも八条であった。

# 第二十八部第三章　開拓と開発その十六

「御子息達も喜ばれることでしょう」
「え、ええ」
八条の鈍感さに呆れて同時に愕然としながらも応える。
「そうね。じゃあ」
「是非勧められるといいです」
やはり八条はここでも気付いていないのであった。
「そうした娘さんを知っておられるのなら是非」
「君にもね」
愕然とはしたがそれでも立ち直って言うのだった。
「わかってると思うけれど」
「はい、その時は是非」
「とにかくね」
まだ愕然としたものが残っていた。それを自覚して何とか抑えながら伊藤は言うのであった。それにはかなりの努力を必要とした。
「早いうちに結婚するのよ。いいわね」
「ええ、それに関しては」
頷くのはしっかりしていた。彼はわかっているつもりである。だがわかっていないのだ。もっとはっきりと言ってしまえば気付いていないのだ。伊藤だけが気付いていた。
「こちらでも相手を探しますので」
「まあ頑張ってね」
期待しない声であった。絶対に無理だと確信していた。
「そこもね」
「はい、それでは首相」
「ええ」
話が終わりに近付いていた。伊藤もそれがわかった。
「また。お電話御願いします」

「またね。時間があれば」
「日本はどうですか？」
話は最後に日本についての話題になる。八条にとっては有り難い祖国であるのは言うまでもない。
「今の我が国は」
「平和よ」
まずは一言で述べるのであった。
「治安もいいしね。経済も順調だし」
「では何の問題もない・・・・・・というわけにはいかないですね」
「問題の起こっていない政治はないわ」
そういうことであった。政治というものは常に何かしらの問題と向かい合っているものである。それはこの時代においても同じであるし過去においても未来においてもそうである。大なり小なり問題が常に起こりそれへの対処に追われるのが政治というものなのである。
「福祉でね。問題になっているわ」
「福祉ですか」
「身体障害者への保障費をどうするかでね」
議論中だというのだ。言うまでもなく福祉はこの時代においても重要な議題であり問題である。かなり産業化もしており複雑化もしている問題である。
「議論中なのよ。野党とね」
「そうだったのですか。最近日本についてはあまり見ていませんでしたが」
「そっちもそっちでかなり忙しいみたいね」
「ですがそれは理由にはなりませんね」
八条はここで自省の言葉を述べるのであった。
「それでも見なければ。時間を作って」
「その通りよ、政治家はね」
伊藤はまた教育者の顔になった。

「それは君が日本にいた時に随分言っていたけれど」
「はい」
そして八条もそれをよく覚えていた。そうして伊藤の言葉に応えるのであった。
「確かに。その通りです」
「けれど自分で気付いたのならいいわ」
だからそれで許すというのだ。
「自分でならね。それで」
「ええ」
「野党は障害者への保障費の現状維持を提案しているのよ」
「現状維持ですか」
「そう、そしてこちらは増額をね」
こうした話も常に起こる。選挙の争点になることも多い問題である。
「提案していてそれで議論中なのよ」
「どちらが通りそうですか」
八条が次に問うたのはそこであった。
「そして市民の支持は」
「両方共こちらよ」
まずは八条にとっては望ましい返答であった。

## 第二十八部第三章　開拓と開発その十七

「今のところはね」
「そうですか」
「ただね」
だがここで伊藤の言葉が曇った。八条もそれに気付いた。
「ただ？」
「現状維持については市民の支持も根強いのよ」
「そうなのですか」
「それよりも重点的に予算を振り向けるべき分野があるということでね」
「重点的にといいますと」
八条は今度はそこを問うた。問いながら自分でもそれが何なのかと考える。少しの時間考えてから伊藤に対して答えるのであった。
「教育費でしょうか」
「ええ、そうよ」
正解であった。伊藤もそれに頷く。
「人口増加に伴いね。学校を増やす必要があるから」
「ですね」
日本も人口が増え続けている。だからこれは容易に想像がつく話であったのだ。
「そちらにより予算を振り向けるべきだという意見も多いのよ」
「一理ありますね」
「そうね」
八条も伊藤もそれはわかるのだ。それだけの政治センスが二人にはあるのだ。
「一応こちらの考えとしてはね」
「野党と議論をしてですね」
「ええ、折衷案を出してみるわ」

それが今の伊藤の考えであった。妥協しないのも政治であるが折衷もまた政治である。その匙加減がどうにも難しいのであるが。
「それでどうかしら」
「悪くないかと」
八条も少し考えてからそれに答えた。
「まあ議論の内容次第ですが下手に衝突するよりいいものが出来ると思いますし」
「そうね。この案件は柔軟にいってもいいわね」
伊藤もそれは認識していた。だからこそ言うのであった。
「わかったわ。じゃあこちらは野党と協議に入ることにするわ」
「そうですね。ところで」
八条はここでもう一方にも気をやるのであった。
「野党の方はどういった様子でしょうか」
「少なくとも対決姿勢ではないわ」
「そうですか」
「ええ。一層こちらにとって都合がいいわね」
「そうですね。それですと」
八条もそれに応えて述べる。
「話し合いまでもスムーズにいくと思います」
「元々こちらとしても対決するつもりはないのよ」
伊藤は自分の考えをまた述べてきた。
「無闇に戦っても何も得られないし」
「確かに」
それは八条もよくわかっていた。国防長官がそんなことを言うのかと驚く者もいるだろうが実際のところ国防長官だから戦いを好まないという一面もあるのだ。戦争をよく知ることになるからだ。八条としてもそれは同じで彼としても無闇な戦いは避ける考えの持ち主であるのだ。
「だからここは議論で終わらせることにするわ」
「議論の場においても野党は融和的でしょうか」

「そうね」
八条の言葉に少し考える時間を置いてから答える。
「そうみたいね。あちらとしても特には」
「さらにいですね。お互いにとって」
「ええ、今はお互いにとって本当にいい流れよ」
伊藤はそれもまた認めるのであった。彼等にしてみても話し合いで解決できるにこしたことはない。しかし政党政治の問題点がここで言われるのであった。
「野党勢力は時として反対するだけになりますが」
「ええ、それはね」
八条の今の言葉に伊藤も顔と声を曇らせるのであった。
「往々にしてあるわね」
「それがないというだけでも大きいです」
「マスコミも静かだしね」
伊藤はそこも言う。

# 第二十八部第三章　開拓と開発その十八

「それも非常に有り難いわ」
「マスコミも大人しいのですか」
「これは知っていると思うけれど」
ここで伊藤は八条に対して話す。
「ある新聞社の社長が収賄で逮捕されたのよ」
「ええ、そのようですね」
こうした事件はこの時代でも頻繁にある。腐敗と言うものもまた人の世にあってはついて回るものだ。とりわけ情報が集まり易く容易に権力者となるマスメディアは腐敗し易いと言える。インターネットができて久しいこの時代においても彼等の腐敗し易さは教育界と共に双璧を為す程である。教育界と同じく閉鎖的でもあるからだ。どうしても知識人というものは相手をチェックするのは得意でも自分自身をチェックするのは不得意なものなのである。
「それでネットで叩かれていて今は大人しいのよ」
「マスコミは何処でも同じですね」
「こういう言葉があるじゃない」
伊藤は八条に対して言う。
「ジャーナリストは最も堕落した人間がなるものだって」
「何処の学者の言葉だったでしょうか、それは」
「確かリトアニアの政治学者ね」
伊藤は述べる。
「元ジャーナリストの。だからこそ説得力がある言葉だと思うわ」
「確かに」
八条もその言葉に頷くのであった。
「マスコミのそうした事件はいつものことですから」
「まあどうしようもない一面があるけれどね」
ここでは日本人の言葉になっていた。何しろ日本という国は二十

世紀後半から二十一世紀前半にかけて人類史上最低最悪のマスメディアを持ち彼等が絶対権力者として君臨し腐敗を極めていた国だからだ。マスメディアの腐敗について研究される時は必ずその素材に使われる程である。そうした面でも日本という国は有名になってしまっている。そしてこの時代においても日本のマスコミといえば腐敗していると認識されているのである。

「特に我が国のそれは」

「そうですね。ですが彼等が静かとなれば」

「正直こちらもやり易いのよ。偏向した報道をしないから」

「はい」

これもまたマスコミの常である。自分達の思うままに情報を流すことが多いのである。

「野党のはねっかえりもそれに寄りかかれないしね」

「ですね。その何でも反対するという勢力も」

「ああした連中こそ問題なのよ」

伊藤の言葉が不機嫌なものになっていた。

「今は僅かな勢力だけれどね」

「そうなのですか。私がいた頃は結構目につきましたが」

「そのマスコミの社長と癒着していたのが露見したのよ」

事情はこうであったのだ。

「それでなのよ。彼等が消えたのはね」

「いい話ですね」

世の中にとっても政界にとってもそうであった。そうした政治家と彼等をバックアップするマスコミがいなくなればかなり変わる。何でも反対は何も生み出しはしないからだ。また何の知能も思考も必要ない。政党政治において一方がそうなればそれは忽ち衆愚政治に陥る。これが政党政治の問題点の一つでありこの時代においても往々にして存在しているものなのである。嘆かわしいと言えば嘆かわしい。

「そういうことよ。中央政府はかなり激しい激論が行われたそうだ

けれど」
「今もです」
八条はこう言い加えてきた。
「しかもまだ続きそうです」
「大変ね、それはまた」
「何、こちらはこちらでいい流れになっていますし」
八条も言う。
「激論の中で妥協点が出来ています」
「それならいいわ」
伊藤はそれを聞いて満足するのだった。
「案外ね。妥協したり折衷したものがいい場合が多いから」
「そうですね」
その言葉に八条も同意する。
「政治というものは」
「人の世界がそうだからよ」
ここで人の世界を出すのだった。

# 第二十八部第三章　開拓と開発その十九

「完全に一方によっていたら偏ってしまうわ」
「はい」
伊藤のその言葉に頷く。
「その通りです」
「だからよ。もう一方と話し合って」
「そうして中央に寄っていくのですか」
「やじろべえと同じよ」
伊藤はこうも言うのだった。
「バランスが一方に偏ると」
「倒れますね」
「そういうことよ。だからこそ」
「真ん中を目指すと」
「ええ。完全というものはないのだし」
こうも述べるのだった。
「だからあえて話し合えるならば話し合って」
「そうして話を進めていく」
「あくまで理想だけれどね」
ここまで言ったところで声に苦笑いが含まれた。
「実際のところは必ずしもそうはいかないけれど」
「特に相手に問題があれば」
「何でも反対だとね。全く話にならないのよ」
そういうことであった。それは最早政治ですらない。単なるパフォーマンス、いやそれ以下である。
「時として謀略も必要だけれど」
「あくまで重要なのはそれね」
「ええ。自分の要求だけをゴリ押しするようなのもいるけれど」
「それは論外でしょう」

八条はそうした輩はすぐに気って捨てた。
「謀略も必要なのは事実ですが」
「ええ」
これは前提である。政治においては謀略もまた避けられない。昔からそうである。
「己の私利私欲のみにそれを使うのならば」
「政治家でも何でもないわね」
伊藤もはっきりと言い捨てる。
「ただのゴロツキね」
「はい」
そして八条は彼女のその言葉に頷いた。
「ですがそういった輩もいますので」
「残念ながらね」
伊藤はこう応える。
「民主政治には付き物ね。そうした政治家と言っていいのかわからない存在も」
「全くです。議論も何もしてきませんし」
「そう。相手は議論を仕掛けては来ないのよ」
そういった輩も残念ながらいる。民主政治であろうがどんな政治システムであろうが己の私利私欲の為に手段を選ばない輩はいるものなのだ。
「それが嫌なのよね」
「どんな人物でも議論をするならばそれで話すに足る相手ですか」
「私はそう考えるわ」
こうした意味において伊藤は実に率直であった。少なくとも堂々としている相手ならばいい。それが伊藤の考えであり何処か武士道的でもあると言える。
「八条君はどうかしら」
「私もですね」
八条もそれに応えて頷くのであった。電話の向こうで。

「それに関しては」
「そうね。それでいいわ」
伊藤は八条の返答ににこりと微笑む。
「君らしいし」
「有り難うございます」
伊藤のその言葉に礼を述べてきた。
「それならばこのまま」
「そう、そのままでいいわ」
伊藤もまた言う。
「君らしくあるのも大事なのだからね」
「私らしくですか」
八条はこう言われると少し微妙な顔になるのであった。顔だけでなく声にもそれが現われる。伊藤はそれもまたすぐに察したのであった。
「ただしね」
「ただし？」
「伸ばすべきところは伸ばすのよ」
こう付け加えてきた。
「そこはいいわね」
「伸ばすべきところは」
「ええ、そうよ」
そこを強調する。しかもかなり強くであった。

## 第二十八部第三章　開拓と開発その二十

「言いたいことはわかるかしら」
「どういうことでしょうか」
だがそれはわかっていなかった。もっとも伊藤もそれはわかっていた。しかしそれでも呆れずにはいられないのであった。今日だけもうかなり呆れてしまっているが。
「それは自分で見つけるのね」
「そうですか」
「それも勉強のうちだから」
「勉強の」
「そうよ」
やはり彼が全く気付いていないのがわかる。しかしそれでもあえて言うのは彼が気になるからに他ならない。八条は伊藤のそうした気持ちはわかるがそれ以上のものはわかりはしない。彼女が自分で気付くように促しているそこだけはわからないのであった。
「それがわかれば君の人生も大きく変わるわ」
「そんなにですか。その様なものがあるのですか」
八条にとっては衝撃的な言葉でさえある。しかしそれが何かはやはりわからない。
「凄いものなのですね」
「確かに凄いわ」
それは伊藤も認める。
「一生が本当に変わるから」
「わかりました。ではよく考えてみます」
「まあ気付かないかも知れないけれど」
「！？」
今の伊藤の言葉には八条は首を傾げさせた。
「気付かないのですか」

「そう、特に君みたいな人はね」
声に少し不満げなものが混じる。
「気をつけるのよ、そこも」
「何が何なのかわかりませんが」
八条は電話の向こうで首を傾げさせるのであった。やはり彼にはわからないのであった。このある方面においての鈍感さだけはどうしようもないのが彼である。
「とりあえずやってみます」
「手始めにね」
「はい」
また伊藤の言葉に応える。
「プレゼントに目を配ってみて」
「プレゼントにですか」
「君へのプレゼントは多いそうね」
「ええ、まあ」
これは本当である。八条のところにはプレゼントがひっきりなしに届けられる。政治上の付き合いのうえでのものが多いがそれと同じ位女性からのプレゼントも多い。なおこうしたプレゼントの類はこの時代では特に問題視はされていない。なお八条はそうしたプレゼントはおおむね寄付している。特に使おうという意志がないものはそうしているのだ。これもまた連合においてはごく普通に行われていることである。
「まずはそれからよ」
「プレゼントからですか」
「よく見ればわかるわ」
電話の向こうでそう告げて笑ってみせた。
「少しだけよく見ればね」
「ではまずは」
「今何処にいるのかしら」
今度は彼に対して今何処にいるのか尋ねてきた。

「よかったら教えてくれるかしら」
「自宅です」
伊藤に対してこう答えた。
「今から少しお酒を飲もうと思っていますが」
「そうなの。明日事務所に行くわよね」
「はい、その予定です」
これはもう決まっていることであった。彼は次の日はまる自分の事務所に向かう予定だったのだ。そこでまずは事務所の仕事を軽く済ませてから予定時間までに国防省に行く予定である。国防長官としても多忙でありそれからも離れることができないのである。
「それでプレゼントはそこね」
「はい」
また伊藤に答える。
「あくまで公人ですので。届け先はそうしています」
「わかったわ。なら明日まず見るのね」
「プレゼントをですね」
「そこでかなりわかるから」
あえてまた言う。
「見ていけばね」
「見るとわかりますか」
「一度見てわからないのなら」
伊藤は八条がどうしても気になる。そうしてまた言葉をかける。
「何度でも見るのよ」
「何度でもですか」
「一度見てわからなくても百回見ればわかるわ」
言葉が諺めいてきていた。

# 第二十八部第三章　開拓と開発その二十一

「いいわね。そうすればわかるから」
「左様ですか」
「機会を見て少しずつでいいわ」
八条の多忙さはわかっている。それを踏まえて機会を見てと言ったのだ。
「そうしていけばわかるから」
「わかれば人生が大きく変わるのですか」
「それは間違いないわね」
「そこまでとは」
八条は言葉を飲む。しかしそれでも伊藤は安心してはいなかった。
「わかったわね、何度でも」
「プレゼントを見ると」
「一番いいのはやっぱりあれかしら」
ふとここでさっきの八条との話を思い出す。そうしてまた彼に話してみせた。
「バレンタインね」
「チョコレートをですか」
「そう、それが一番わかり易いわね」
そうは言いながらもここで心に不安が宿る。
「けれどね」
「けれど？」
「少しだけれどよく見るのよ」
念を押してきた。
「そこはいいわね」
「少しだけどよくですか」
「そう。さもないとわからないから」
これは八条限定であった。実は。

「いいわね。それも何度も」
「何度もですね」
「ええ、そして時々本も読むことね」
「本もですか」
「一番いいのは漫画かしら」
少し考えてから漫画を出した。
「学園ものね。あれが一番いいわね」
「話がわからないのですが」
八条は伊藤の言葉にここでも首を傾げさせた。
「どういうことでしょうか、それは」
「わからなくても読むことね」
しかしここでも答えない。伊藤はあえて突き放しているのだ。
「いいわね」
「とにかく読むのですか」
「漫画がわかりやすいけれどね」
また漫画を出すのであった。
「やっぱりね」
「学園ものですね」
「しかもよ」
同じ学園ものであっても注文をつける。伊藤は突き放しているが実に念入りにも言うのだった。彼女にしろさ突き放すのは最低限に留めている。
「かなりベタベタのをね」
「ベタベタですか」
「言い替えるとこってりね」
こうも言う。
「そうした作品を選びなさい。古典的なまでの学園ものをね」
「何かそうした漫画といえば」
八条とて漫画はよく読む。そのうえで述べるのであった。
「少女漫画にあるような感じですか」

「そうね、ああした感じ」
伊藤もそれに応えて頷く。
「わかってるのなら早いわ。じゃあ少女雑誌やその系統のネットで読むのね」
「わかりました。それではそういうことで」
「ええ、よく勉強するのよ」
「はい、では今度ですね」
「今度？何かしら」
「日本に帰った時です」
その時のことについて言及してきた。言葉が心なしか楽しげなものに戻っている。
「その時にですね」
「漫画かしら。それならそっちでも簡単に手に入ると思うけれど」
「はい、漫画に関しては」
彼も問題ないという問題はそこではないようであった。

## 第二十八部第三章　開拓と開発その二十二

「問題ありません」
「じゃあ何かしら」
「河豚を食べたいのです」
「河豚を」
「日本の河豚を」
　この時代においても河豚は食べられる。しかも遺伝子操作と養殖により毒のない河豚もあるのだ。元々河豚の毒であるテトロドキシンは自然連鎖により蓄積されていったもので自然種には強いが養殖のものには強くない。これは二十世紀末に段々わかってきていたことである。この時代ではそれにより河豚の肝も普通に食べられるようになっているのである。言うならばあんこうの肝であるあん肝と同じ扱いである。
「食べたいのです」
「そちらでは食べていないの？」
「残念ですが日本の河豚は」
　寂しそうに述べてきた。
「食べておりません。こちらの河豚は少し味が違いまして」
「そうね。それは確かにね」
　日本の周防星系での河豚が有名である。ここは漁業が有名であり様々な美味な魚が川や海から採れるのである。他には宇宙港がいいので有名である。
「やっぱり河豚は日本よね」
「料理方法も洗練されていますし」
　八条はこうも言う。
「やはり河豚となると違います」
「太陽系にも河豚を食べさせてくれる店はあるのじゃなくて？」
「それでもです」

八条はここではやけにこだわりを見せるのであった。
「味が全く違いますので。それで」
「そう。それじゃあわかったわ」
「ええ、日本に帰った時は」
彼はそれをまた言う。
「御一緒に御願いします」
「そういえば私も河豚は最近食べていないわね」
伊藤は八条と話していてそれを思い出すのであった。
「今思い出したわ」
「首相もですか」
「ええ。好きなのだけれどね」
とにかく河豚は美味い。この時代においても日本人はこの魚の味をこよなく愛している。鍋にするもよし刺身にするもよし唐揚げにしてもよし。とりわけ鍋にした後は雑炊もいい。とにかくどうやって食べても最高に美味い魚の一つなのである。
「最近食べる機会がなくて」
「ですね。どういうわけか」
「何かを食べるにはきっかけが必要なのよ」
伊藤は言うのだった。
「河豚にしろね」
「そうですね。ではこれからは」
「機会を見つけてね」
「なければ仕方ないですが」
「なければ作るのよ」
くすりと笑ってまた八条に告げた。
「何でもね。それでいいわね」
「はい、それでは今度日本に戻った折に」
「河豚を食べましょう。いいわね」
「わかりました」
そうした話をしていた。話を終えると伊藤は電話を切ってすぐに

休息に入るのだった。まずは寝る前に寝酒としてブランデーを口に含むのであった。ストレートである。
「さて、あちらの方は」
八条の鈍感さについて考える。
「どうしようもないでしょうけれど様子を見るしかないわね」
政治とは別の問題で苦笑いを浮かべていた。その苦笑いはそのまま教師のそれであった。彼女は教師の顔で八条を気遣っていたのである。
そして少し飲んでから寝る。そうして明日に備えるのであった。

## 第二十八部第四章　原理主義者その一

原理主義者

俗に原理主義者と呼ばれている。はっきりと言ってしまえばいい言葉ではない。批判で使われるものだ。だが彼はそれを誇りとさえしていた。

「結構なことだ」

そう言うのはマウリア中央議会議員であるクサム＝ラコシである。少数野党であるマウリア党を率いる人物でその年齢は五十代半ば、長身で痩せた身体に鋭い目を持つ人物である。マウリアきっての国粋派としてあまりにも有名な人物である。

バラモンの名家の出であり極端なマウリア至上主義者として有名である。大学で歴史学を学んでそれに拍車がかけられたというのがもっぱらの噂であるがそもそも少年時代から生真面目で妥協を知らない人物でありその思想も極端に愛国的なものであったと言われている。高校の時にはもう愛国主義者達を集めてサークルを開いていた。大学では民族主義団体のリーダーとなりもう連合との交流について反対の意見を述べていた。

「マウリアはマウリアである」

これが彼の第一の主張である。

「マウリアだけでやっていける。連合との交流なぞ不要」

つまりは鎖国である。連合やサハラ諸国との交流を絶ちマウリアだけで生きていきその文化や伝統を固辞していくべきだと説いているのである。その為に徹底した議論を重ねることでも知られている。

「あんな頑固者は知らない」

「しかも頭も切れる」

それが彼と論戦を演じた者達の感想であった。彼等にしてみればラコシの意見は暴論である。しかしその暴論を押し通す強さと知識、

カリスマ性を持っているのだ。だからこそ誰もが彼を止められる中には従う者、賛同する者すらいるのである。
マウリアでは往々にして極右としてあまり人気がない。だが支持者達からは絶大な人気を得ている。彼等にしてみればラコシの言う言葉は正論でありマウリアはそうしなければならないいというのだ。そう思わせて信じさせるのがラコシの言葉であった。
「私は強制はしない」
彼はあえてこうも言ってみせる。
「しかし。私の主張は曲げはしない。何があっても」
つまりは己の正しい道を突き進むというのだ。実際に彼は突き進みそこには一切の妥協はない。そうした人物であるからこそ人格においては全く批判を受けない。また彼は公正な人物としても知られている。こうした逸話まである程だ。
盗難事件が起こった。マウリア人達は最近ビジネスでそこにやって来た連合のポーランド人を疑った。彼が盗んだのではないかというのだ。
それは疑惑から確信に変わった。何故かというとそのポーランド人がマウリア語が不得手だったからだ。また外国人という偏見もあり彼はそのまま犯人に仕立て上げられそうになった。だがそれに対してラコシは完全として言ったのであった。
「何の取り調べもなしに人を捕まえてはならない」
こう言ったのだ。それを聞いた人々は目を丸くしてラコシに対して問うた。
「外国人であってもか」
「それがどうしたというのだ」
ラコシはその問いに平然として言葉を返した。
「外国人だと何かあるのか。取り調べにおいて」
「貴方はマウリア至上主義者ではないのか」
「その通りだ」
その問いに平然として言葉を返す。何もやましいことはない顔で。

「ではどうして外国人を庇うのか」
「貴方のこれまでの発言や行動と矛盾するのではないか」
「矛盾することは一切ない」
彼はそうした問いに対してきっぱりと言い返すのであった。
「確かに私は排外主義者だ」
「そうだ」
「その貴方がどうして」
「しかし。彼等の人権を侵害することには反対である」
人権を出して言うのであった。
「例えどの国の者であっても偏見によって罪に問われるようなことはあってはならない。それはそのままマウリアの恥となってしまう」
これは彼の主張であった。
「マウリアは偉大な国だ。そうした恥を被ってはならない」
「ではどうせよというのだ」
「そうだ、それが問題だ」
彼等は続いてそれを問うた。どうするべきかと。
「法律にのっとって取調べを行うべきだ」
それに対する彼の反論はこうであった。
「それと良識に基いてだ」
「良識か」
「そうだ。言い換えるのならばマウリアの良心に」
彼はそれを強調する。それに従わなければ何の意味もないと言わんばかりであった。実際に彼はそう信じていたのである。強固なまでに。
「逆らうことなく取調べを行うべきだ」
「よし、わかった」
「それならばだ」
彼等もハサンのその言葉を受けることにした。彼の強固な意志を受けたのである。そこまで言われては彼等も反論のしようがなかった。

こうしてそのポーランド人への公正な取調べが行われた。結果はシロであった。彼に対する完璧なアリバイが見つかったのである。

これに対してそのポーランド人とポーランド政府から感謝の言葉があった。だがラコシはそれに対してこう言うだけであった。

「人として、マウリア人として当然のことをしただけだ」

それだけであった。謝礼も受け取ろうとはしなかったのである。彼は確かに原理主義者であるが高潔な人物であった。それは誰もが認めるところであった。

## 第二十八部第四章　原理主義者その二

その為彼の思想や信条には批判する者はいてもその人格や行動を批判する者はいない。批判と中傷は別であるから批判する者は実際としていないのであった。その人格に関してはである。これだけは誰もが素直に認めるところであった。

その彼に対して今日も議論を仕掛ける男がいた。場所はレストランである。彼等はそこでカレーを食べながら議論をするのであった。

題目は政治ではなかった。文学である。マウリアの古典文学の代表作であるマハーバーラタだ。それに関してラコシと議論するのは若い学者であった。

「マハーバーラタは駄作だというのか」

「私にとってみればです」

その学者はカレーを食べながらラコシに応える。

「話があまりにも壮大過ぎて掴み所がありません。チグハグです」

「チグハグか」

ラコシはチキンカレーを食べている。チキンカレーといっても連合、とりわけ日本にあるようなそれではない。マウリア独特の汁気の多いカリーを白い米とよく焼いて油を落とした鶏肉の上に置いたものである。それがマウリア風のカレーなのである。

「そうではありませんか？」

「私はそうは思わない」

鶏肉を食べながら応える。皮が固く薄く焼けておりそこに肉に付けられたスパイスとルーの味が混ざり合う。それ等が一層肉の旨味を引き立てていた。

「決してな」

「決してですか」

「整合が取れているとは思わないのか」

「全体としてはそうでしょう」

学者はまた彼に対して言う。
「しかしそれがあまりにも大きく」
「細部は妙なことになっている。そう言いたいのだな」
「その通りです。それは認められますね」
学者はそこを強調してきた。彼が食べているのはシーフードカレーだがこれは元々マウリアには存在しないものである。マウリアではあまり魚を食べる習慣がないのである。インドと呼ばれた時代から有りそれが今でも生きている傾向があるのだ。少なくともラコシはあまり魚を食べない。彼は主として鶏や豚、羊を食べる。間違っても牛は食べない。なお今必死に彼に挑戦している若い学者にしろ牛は食べない。つまり同じヒンズー教徒であるのだ。
「細部はな」
ラコシも頷いてみせた。
「確かにその通りだ」
「そういうことです。ですからマハーバーラタは駄目なのです」
彼は言う。
「そうした細部にこだわってこそ名作であるというのにです」
「それはどうかな」
ラコシはそこまで聞いたうえで学者に言葉を返してきた。
「果たしてその通りかどうか」
「違うと仰るのですか」
「如何にも」
ラコシらしく正面から述べてきた。一切逃げはしない。
「君は今マハーバーラタが壮大だと言ったな」
「はい」
彼もその言葉に対して頷く。彼もまた若くして議論において無敗を誇るラコシに対して挑戦するのだ。それなりの度胸はもう持っていた。
「それは確かです。あそこまでの壮大なストーリーはありません」
「それがマウリアなのだ」

ラコシはそこまで聞いたうえでこう返してきた。
「マウリアだと」
「君は近年のマウリア文学を高く評価しているな」
「マウリア文学は近代においてようやく開花しました」
彼はラコシの言葉を受けて述べる。
「それまではただの古典主義です。何も見るところはありません」
「何もか」
「違うでしょうか」
少し感情を見せてラコシに問う。
「実際のところマウリア文学は古典にばかり夢中になりこれからがありませんでした」
「これからか」
「そうです、それを打破するには一つ大きな方法があったにも関わらず」
主張は力説になったいた。その力説をラコシに対してぶつける。
「悪戯に古典主義に陥り。時間を浪費していました」
「時間をか」
「そうではありませんか？」
強く鋭い眼差しをラコシに向けたうえでの言葉であった。
「今までのマウリアは。一千年の間」
「僅かな時間でしかないな」
ラコシは一千年という時間をそう言い捨てた。何でもないといったふうに。

## 第二十八部第四章　原理主義者その三

「その程度ならば」
「一千年がほんの僅かな時間だというのですか」
「そうではないのか」
ラコシはまた言う。それを一切否定しないのだった。
「一千年。十回かその程度の転生の間だ」
「それはそうですが」
「わかっているのなら話が早い」
マウリアにおいては輪廻転生は常識である。人は何度も生まれ変わり悠久の時を生きる。彼が今言っているのはまさにそれであった。
「ならば一千年もほんの少しの間だ」
「そう主張されるのですか」
「そうだ。そしてだ」
今度はラコシが問う番であった。実際に問うてきた。
「その近代のマウリア文学はどうして動き出したのだ」
「他のものを取り入れたからです」
彼はこれが言いたかったのだ。当然ながらラコシのことをわかってのうえである。全てはそこに終着するのであった。
「他のものか」
「そうです、連合の考えを」
学者クの顔が晴れやかなものになった。マウリア人特有の白人の顔に黒い肌。その独特の顔が晴れやかなものになったのである。
「取り入れて大きく進歩しました。そうして開花したではないですか」
「そうして出来上がったのが」
「現在です」
答える声が一層晴れやかなものになる。
「現在の晴れやかなマウリア文学になったのではありませんか」

「そういえば最近は」
ラコシはここでスプーンで白米を食べながら述べる。その白米にもルーがかかっている。その辛さが舌から身体全体に伝わる。ルーに入れられているあらゆるスパイスが充分に生きている何よりの証拠であった。ラコシは今その辛さを楽しんでいたのだ。
「テレビでもそうした文学作品を原作にしたものが多いな」
「よいことです」
学者の笑みがさらに明るいものになった。
「ドラマにしろそうです」
彼は今度はそのドラマにも言及してきた。
「あの何でも入ったミュージカルドラマですが」
「マウリアのドラマだな」
「あれがよくないのです」
彼はそれも否定するのであった。
「リアリズムがありません」
「リアリズムがか」
「しかも終わりは大抵同じです」
結末についても言及してきた。
「ハッピーエンドしかないではありませんか」
「いいことだと思うがな」
ラコシはドラマや映画に関してはハッピーエンド派であるのだ。マウリア映画やドラマといえばその結末は大抵がそうなっている。その為連合からはそれを揶揄されたりもしている。
「それが駄目なのです。終わりは一つではありません」
「複数だというのだな」
「そうです」
彼はまた断言してきた。
「悲しい結末もあって然るべきです。長い間マウリアにはそれがありませんでｈしたが」
「今はある。ということだな」

「そういうことです。それが近代以降のマウリア文学です」
誇らしげな言葉であった。
「ようやく我々も真の文学を生み出せるようになったのです」
「真の文学か」
「如何にも」
またしても誇らしげに言ってみせる。
「その通りです。何か違いがありますか？」
「若いな」
ラコシの返答は最初は一言であった。
「そして青いな」
「私が青いと」
「それは書生の言葉にしか過ぎない」
学者を見据えての言葉は続く。
「もっとも君はまだ若い。それは当然だと思う。それを考慮すれば妥当というべきか」
「私が若いですと。いいことです」
彼はあえてそれを受けてみせる。挑発なのはわかっていてだ。

## 第二十八部第四章　原理主義者その四

「その若さこそが原動力となるのですから。全てに対する」
「若さがか」
「そう、若さです」
胸さえ張ってみせてきて。
「それこそが今のマウリア文学を作り上げていっているのではありませんか」
「それだけだと言うからこそ若いのだ」
だがそれでも彼はこう言って学者の言葉を否定する。それはまるで受け止めてから反撃で切り捨てるようなものであった。
「確かに連合の考えを入れたものは事実だ」
「それは認められるのですね」
「私にとってはそれは好ましいものではない」
ここで彼の原理主義者としての顔が出て来た。
「それは。しかしだ」
「しかし？」
「それだけで近代のマウリア文学があるわけではないのだ」
「他にも要因があると仰るのですね」
「如何にも。例えば」
彼は言う。カレーのルーをスプーンですくって口に含む。様々な香辛料の味がルーに満ちている。それを味わってからまた言葉を出す。
「そのストーリーの一つとして悲劇性だが」
「私が述べさせて頂いたそれですね」
「そう。それについてマウリアにはなかったと言ったな」
「違うのですか？」
「インド神話を見るがいい」
ラコシが出してきたものはインド神話であった。なおインド神話

の特徴はこの時代においても生き続けていることである。マウリアの神々はヒンズーの神々であるがこの神々は連合で復活した多くの神話系統の神々とは違い一度忘れられたり死んだ神々とはまた違う。永遠に生きてそうして今も呼吸をしている神々なのである。ここが連合やエウロパの一度は無意識下の虜囚となった神々とは違うのである。

「彼等の中にも悲劇がある」

「ありますか？それは」

「ブリトラは死んだ者に裏切られている」

彼はインド神話における悪竜を出してきた。この竜は雷神インドラと争い講和する。しかし彼はその時義兄弟になった彼に欺かれ与えられた恋人に騙されて殺されている。憎しみしか知らなかった彼がはじめて信じ、愛した存在に裏切られたのである。これを悲劇と言わずして何と言おうか。ブリトラは悪しき存在であるがそれでも見方を変えればこの話はブリトラの悲劇となるのである。インドラの英雄譚だけではないのである。

「これは悲劇ではないのか」

「それですか」

「そうだ」

ラコシは言う。

「そうは思わないのか、君は」

「言われてみれば確かに」

彼とて卑怯者ではない。だから言われたことは認める。そうして彼の言葉を受け入れたうえでまた頷いてみせるのであった。この学者もまたそれなりの度量があった。

「その通りです」

「見方は一つではない」

ラコシにしてはいささか合わない言葉であると言えた。少なくとも原理主義者にとっては。だがこれもまた彼の一面であるのだ。

「決してな」

「ではマウリア古来のものも」
「今の近代マウリア文学に影響しているのではないのか」
そこをまた言う。
「そうは思わないか」
「まさかそれは」
「ましてだ」
否定しようとする学者にまた言ってきた。
「一つだけの要素で全てを語るのは危険ではないのか」
「むっ」
「マウリアは広大だ」
怯んだ学者に対して今度はマウリアの広大さについて言及してみせた。
「その広大さは文学にも及ぶ」
「それでは連合の影響は一つだけではないのですか」
「一部ではある」
一部だと言う。
「しかしその主流は」
「何だと仰るのですか」
「その文学は何で書かれているか」
ラコシが次に指摘したのはそこであった。

## 第二十八部第四章　原理主義者その五

「何語で書かれているのか」
「それは言うまでもないと思いますが」
「それでも聞いておきたい」
わかっているがあえて問う。そこにはラコシの深謀があるのがわかる。しかし学者はそれに乗ることにした。議論としては負けても彼にとってはそれがプラスになると判断したからだ。彼はここでは論戦よりも学者としての知識への欲求を選んだのであった。
「何語か」
「マウリア語です」
彼は答えた。
「それによって書かれています」
「そうだな。ムスリム達は言うが」
ラコシはここではムスリムを出す。話が飛んでいるように見えるが実は違う。
「コーランはアラビア語で書かれてこそコーランだ」
「はい、それは知っています」
マウリアにも多くのムスリムがいる。連合にもである。だからこの言葉は知っている。といっても連合やマウリアでは普通に銀河語やマウリア語に翻訳されたコーランがコーランとして扱われているのであるが。サハラでは当然ながらアラビア語のものしかない。
「かなり独特の考えだとは思いますが」
「その独特さのうえだ」
ラコシはそれを肯定するのだった。
「コーランがあるのは」
「彼等にとってはそうですね」
「うむ。マウリア文学も同じなのだ」
ここまで話したうえでマウリア文学に話をやる。

「マウリア文学もまたマウリア語で書かれているからこそマウリア文学なのだ」
「そうなりますか」
「翻訳は確かにあるが」
一応はこれは前置きされる。マウリアにおいても銀河語をマウリア語に翻訳することは多い。翻訳機もあるがこれを使った場合どうしても面白みのない事務的な言葉になってしまうので本にする場合は専門の翻訳家が行うのはこの時代でも同じである。なおマウリアにおいても連合においても確かに公用語がありこれは義務教育で徹底されているがそれとは別にそれぞれの国や地域の言葉も話され学ばれている。言語学はこの時代においても健在なのである。
「それでもマウリア語が前提となっている」
「そのマウリア語ですか」
「一朝一夕でできた言葉か」
「いえ」
これは即座に否定する。そんな言葉ではない。
「それこそ何千年もかけてできた言葉です」
「そうだ」
これこそがラコシが言いたいことであった。

「つまり。連合のものを取り入れても」
「それが書かれる文字がマウリア語であるならば」
「そこにマウリアが大きく入る。連合のそれはメインではなくなるのだ」
「そうなりますか」
「如何にも」
ここまで話して紅茶を飲む。マウリアの紅茶を。
「これでわかってくれたか」
「ううむ」

学者はここまで聞いて唸った。もうあの鼻っ柱の強さは何処にもなかった。
「そうなりましたか」
「文学は一目からでは語ることはできないものだ」
「それはわかっているつもりでしたが」
「完璧ではなかったのだな」
「今ようやくわかりました」
頭を垂れるようにして彼に答えた。
「全く以って」
「わかってくれればいい。連合のものが入るのは確かに私は好きではない」
これは引き払わない。どうしてもだ。
「しかし。近代マウリア文学に関してそれは主な要因ではないのだ、発展のな」
「そのようですね」
「やはりその根幹はマウリアだ」
それをまた言う。
「それはわかってもらえたかな」
「いや、全く」
彼は既に敗北していた。しかしその敗北を心地よく受け入れていたのであった。それは彼自身にとっても思いも寄らぬ心境の変化であった。
「よいことを知りました」
「そう言ってもらえると有り難い」
ラコシは笑ってこそいなかったが満足しているようであった。それは言葉の色にもはっきりと現われているのであった。あえて見せているのだ。

## 第二十八部第四章　原理主義者その六

「それでだ」
「はい」
話はここで変わる。
「このカレーだが」
「美味しいですな」
「スパイスがいい」
ラコシはルーの香辛料について言及するのであった。
「様々な種類のものを全て生かしている」
「そうですね。だからこそこの味が出せるのでしょう」
「そしてそれだけではない」
「それだけではないと」
「そうだ」
彼はそこにもプラスアルファして述べるのであった。
「その一つ一つが見事なハーモニーを展開している」
「つまりはあれですか」
学者が食べていたのはシーフードカレーであるがそのシーフードカレーを食べながら述べる言葉であった。なおチキンカレーとシーフードカレーではルーが違う。これは鶏肉とシーフードでは調理の仕方が全く異なってくるからである。そうした事情があるのだ。
「お互いを生かし合っていると」
「そうさせるのは何故か」
ラコシはそこを言う。
「何故かわかるか」
「それは調理の方法ですね」
これについてはこの若い学者もわかることであった。彼とてカレーを食べてきているのだ。だからこそこれについても言及できるのであった。

「一つのスパイスだけを使ってそれを活かす方法もあれば」
「そうしてそれぞれのスパイスを生かす方法もある」
「ですね」
学者はラコシの言葉に頷く。
「しかし。口では容易に言えますが実際には」
「それを実行するのは難しい」
これがラコシの結論であった。
「言うのは容易く行うのは難しいのだ、何事も」
「はい」
ラコシのその言葉に頷く。
「その通りです。とりわけこうした一見簡単な料理こそが」
「カレーは連合でもサハラでも食べられる」
そもそもロイヤル＝ネービーにおいて広まりそこから日本に伝わり世界的に人気となった食べ物であるがマウリアのそれはまたかなり独特なものを守っているのである。
「それにおいてだが」
「マウリアのカレーはスパイスのそれぞれを生かしていると」
「味でそれを感じているのだな」
「そうです。私は文学以上に料理には五月蝿い方なので」
彼は実際のところ学者であるがそれと共に美食家としても知られているのである。人類にとって美味い食べ物というのは切り離せるものではないのだ。
「それで」
「このカレーについてもそうなのだな」
「はい、よくわかるつもりです」
彼はこう答える。
「この味については」
「これがマウリアの料理の粋なのだ」
ラコシはここで遂にそれをマウリアのものだと断言してみせた。
「これこそがな」

「そうなりますか」
「うん。全てのスパイスを生かし」
「それを絶妙なハーモニーの中に置く」
「それこそがマウリア料理の一つだ。一つの完成形なのだ」
絶賛であった。単に料理を褒めているのではなくマウリアそのものも褒めているのであった。それこそがラコシの真意であるのであった。
「マウリアは実に奥が深い」
「そのハーモニーを生み出すだけの深みがあると」
「そうだ。私はそれを守っていきたいのだ」
紅茶をまた口に含んで語る。その言葉にもまた深みが見られた。
「わかってくれるか」
「はい、この素晴らしいマウリア文化を」
「断固として守っていく」
言葉は先程と同じだがより強くなっていた。

## 第二十八部第四章　原理主義者その七

「何があろうともな」
「私もそれに賛同させて頂きます」
何時しか先程までかなり連合文化にかぶれていると言えたこの若い学者もラコシの思想に共鳴するようになっていた。まるで全てを悟ったかのように。
「それで宜しいでしょうか」
「同志は拒まない」
それに対するラコシの言葉は寛容なものであった。
「誰であろうがな。では共に歩もう」
「はい」
学者はまたラコシの言葉に頷いた。
「それでは。御願いします」
「マウリアはマウリアで悠久の時を歩むべきだ」
ラコシはまた言う。
「このままな。永遠に」
そう話しながら紅茶を飲むのであった。これがラコシという男であった。原理主義者であるが単に過激な原理主義者ではない。深い知識と洞察、思慮を持っていた。そうした人物であったのだ。
だからこそ連合は彼の排除を諦めた。能力があるだけでなく潔癖でもあったから。それで彼等が狙うのはラコシ以外の者達だったというわけである。
「それでだ」
マウリアのホテルの一室。あえて灯りを消して暗くさせた部屋の中に影の世界の者達が集まっていた。彼等はそこでソファーやベッドに座ってあれこれと話をするのであった。
「情報は集まったな」
「ああ、これで充分だろう」

ソファーにいる男が答えてきた。
「これだけの情報があればな。完璧だ」
「狙い目もわかってきたな」
「そうだな」
彼等は口々に言い合う。
「こいつだな、まずは」
「そいつは女性問題だな」
「ああ。しかしこれは」
ここで彼等のうちの一人が言葉を濁す。
「女性問題と言っていいのかどうか」
「何かおかしいか？」
「ニューハーフ専門だぞ」
所謂女装した男性である。マウリアにもそうした存在がいるのだ。彼等はここではこれを女性問題と定義しているのである。これに首を捻る者がいるのだ。
「これで女性問題なのかどうか」
「だが妻子がいる立場でこれはまずいだろう」
「まずいか」
「普通に考えてまずいだろう」
そう言うのであった。
「一応自分を女性だと言って性転換までしている相手なのだからな」
「そうなるのか、やはり」
彼はどうにも理解できないようであった。しきりに首を捻るのがその証拠であった。そうしてその中でまた言うのであった。いぶかしみながら。
「しかしな」
「まあスキャンダルにはなる」
これは保障された。
「マウリア原理主義では同性愛はあまり歓迎されないという一面もあるしな」

「やはり同性愛になるのか？」
「そうとも考えられる」
話がさらにややこしくなる。完全にこんがらがっていると言えるようになっていた。互いの顔は暗闇の中なのでよくはわかｒないが声の色はわかる中であった。
「だからそちらにも訴えられる」
「不倫と共にか」
「そうだ。少なくともこれで彼は動けなくなる」
目的はそれである。それならばよいのだと言いたげな言葉であった。
「だからこれでいい」
「わかった。それじゃあそれでな」
「うむ。それでだ」
話は次のターゲットに移った。
「彼女については金銭スキャンダルだ」
「所謂汚職だな。これはどの国にもあるな」
これがない国はない。付き物と言える。
「マウリアにも」
「これが一番だしな」
中の一人がその汚職について言及する。
「工作にはな」
「その通りだ」
他の者達もその言葉に頷くのであった。汚職がスキャンダルになるのは何時でもで何処でも同じである。連合でもマウリアでもだ。どちらも汚職にはエウロパと比べるとかなりその目は穏健なものであるがそれでも問題視されないわけではないのである。
「これが一番だな」
「原理主義者も汚職はするんだな」
また誰かが言った。

## 第二十八部第四章　原理主義者その八

「潔癖だと思ったんだがな」
「そこは人それぞれだな」
またメンバーの一人が言う。
「原理主義者だからといって汚職をしないとは限らない」
「そういうものか」
「そういうものだ」
素っ気無い調子の返答であった。
「主義主張に関係なく汚職する奴はする」
「それが世の中か」
「そういうことだ。だから特に驚くに値しない」
「そこを突くだけか」
「俺達の仕事はそれだけだ」
何人か冷徹に仕事を進めるメンバーがいるらしい。彼等はその冷徹な雰囲気の中で話を進めるのであった。工作員らしいと言えばらしい流れであった。
「問題はこれを成功させるかどうかだけだ」
「それだけか」
「そういうことだ。一応情報は集まった」
それには満足していた。しかしそれは第一段階に過ぎないのである。
「次だな」
「次か」
「どうするかだ。これから」
今度は工作について話し合うのだった。
「どうやって仕掛けるかだ」
「マスコミに流すか」
「そうだな」

それについて話し合う。工作の基本の一つだ。政治家や官僚を攻めるにはマスコミを使うのが最も効果的な方法の一つなのはこの時代でも同じである。
「他にもリークの方法はある」
「後は何処だ」
「敵対政党だな」
今度はそちらであった。
「そうだ、彼等は敵が多い」
「敵が多い。そうだな」
これには誰もが頷く。ラコシはその思想故にマウリア内部においても多くの敵が存在している。政治家の間でもそうである。マスコミからもかなり敵対されているのであった。マスコミにおいても彼を嫌っている者も多い。これは彼等もよくわかっている。そのうえでの工作なのだ。また政治家に対しても同じである。だからこそこの工作を採るのである。
「そこが狙い目か」
「敵が多いのはそれだけで損か」
「その通りだ」
敵が多いというのはそれだけで問題なのだ。何をしてくるかわからない相手がそれだけ多いっていうことだからだ。言い換えるとそれだけ工作の仕掛け所があるのである。
「我々にとっては都合のいいことだからな」
「敵が多いと誇る奴もいるがな」
「それも時と場合によるな」
また言われた。
「それに関してもな」
「職業や立場の関係だな」
「政治家が敵が多いのは当然だ」
政敵にしろ対立政党にしろ思想が違うマスコミもである。中には何を仕掛けて来るのかわからない場合がある。そうした相手が厄介

なのは言うまでもない。
「だがそれでもな」
「敵はできるだけ少ない方がいい」
これは常識である。
「政治家でもな」
「ラコシ議員の欠点はそれか」
またメンバーの一人が言う。
「敵が多いということが」
「敵が多いのもまた欠点になるのだな」
「嫌われるよりも好かれる方がいい」
何においてもそうである。
「彼はそれがわかっていないのだろうな」
「嫌われても構わないと考えているのだろう」
ラコシに対する的確な分析であった。
「彼は。そうした人間だ」
「嫌われようが構わないと考えるタイプか」
「それよりも己の信念を大切にするタイプか」
「そうだな」
これははっきりわかる。ラコシは己の信念を常に大事にする。そうして彼は今まで突き進んでいる。彼の生き方は常にそうなのである。
「それはいいことだろうがな」
「しかし。それが時として問題になるか」
「我々の付け入り所となった」
「災難と言えば災難かな」
そう言い合うのだった。

## 第二十八部第四章　原理主義者その九

「彼がそれをどう考えるかわからないけれどな」
「まあそれは大した話じゃない」
彼等にとってはそうである。彼等は工作員だからだ。むしろその方がいいとさえ思えるものであった。工作の付け入り所である。
「だが。流石にラコシ議員はないか」
「ないな」
一人が手に資料を見て首を振るのだった。
「予想していたがここまでないとはな」
「完全な清廉潔白か」
「見事なものだ」
感嘆の言葉さえ出ていた。
「彼は流石に付け入ることができないか」
「やはり幹には何もできはしないな」
「枝だけか」
「何、それも想定したことだ」
だからそれもいいというのであった。工作に関してはそうした割り切りも必要だということである。彼等は妥協も必要だということがわかっているのである。
「だからいい」
「そもそも力を削ぐのが目的だからな」
「そうだな」
これは納得した。彼等の仕事はそれ以上を求められるものではないからだ。
「まあこれで削げる」
「原理主義者はな」
「しかし毎度思うが」
彼等の中でふと達観したような言葉が出た。

「こうしたこともしないといけないのが政治だな」
「光ばかりじゃないか」
「影もあるか」
彼等はそう言い合う。
「その影をやるのが我々か」
「仕事はこれだけじゃないがな」
「それでもな。行っていることには変わりない」
「因果な話だ」
自嘲も出て来た。
「全く以って」
「金はいいのだがな」
こうした仕事には報酬はかなり弾まれるのが常識である。頼む方も後ろめたいからであろう。それで彼等もその収入はかなりいいのである。
「それでも時としてこう言いたくもなるな」
「ああ。しかし暗殺よりはましか」
こうした言葉も出た。
「誰かを殺すよりはな」
「それの専門家も知ってるぞ」
また言葉が出て来た。
「知り合いにな」
「殺し屋ってわけか」
「そうだ。誰とは言わないがな」
こう仲間に答える。
「もっともよかったら紹介するがどうだ？」
「紹介するのはカタギの可愛い女の子だけにしてくれ」
ジョークが入って来た。
「悪いがそれ以外はノーサンキューだ」
「何だ、勿体ない」
「生憎人を殺すつもりはないんでね」

またジョークで返すのであった。
「そうした仕事は専門外だ」
「そうだったのか」
「裏の仕事といっても色々ある」
これは事実だ。何も暗殺だけが仕事ではないのだ。
「俺はそっちはしないさ」
「じゃああれか。紹介するのは」
「カタギの女の子だけにしてくれ」
それを実際に述べる。
「それでいいな」
「ニューハーフは駄目か？」
「遠慮する」
いささか悪質なジョークであったがそれも断る。
「生憎俺にはそうした趣味はないんだ」
「そうなのか。じゃあいいな」
「それで可愛い娘は？」
「まずは俺が見つけて一人彼女にしてからだ」
随分と気前のいい話からはじまった。
「それからもう一人でいいな」
「まずは御前さんが一番いい娘をってわけかい？」
すぐにそこ言葉に嫌味で返すのが慣れたやり取りならではあった。彼等は既に何回か一緒に仕事をしている。だからこうしたやり取りになっているのである。
「それはちょっと違うな」
「どう違うんだ、それで」
「まずは俺がタイプの女の子を手に入れる」
どちらにしろ自分を最優先させているのは変わらない。話す方もこれに関しては最早完全に居直っていると言えた。ある意味において素晴らしい。
「それから御前さんのタイプを見つけてやるさ」

「御前さんの彼女が俺のタイプだったらどうするんだ？」
「その時はクローンでも探してやるさ」
この時代はクローン技術が一般的になっている。しかしそれが使われるのは医療等極めて限られている。さもないと倫理上極めて深刻な問題が生じるからである。

## 第二十八部第四章　原理主義者その十

「それでいいか？」
「せめて姉か妹にしてくれ」
クローンと聞いてこう言葉を返すのだった。
「それならいいんだがな」
「わかった、じゃあそうするさ」
「それに関しては俺も贅沢は言わないしな」
またかなり大きく出るのであった。頼む側のものではない。
「従姉妹でもいいさ」
「男以外ならか」
「顔が似ていればいい」
こうも言う。
「だが性格はいいに越したことはない」
「何だ、贅沢だな」
相手の言葉に思わず闇の中で苦笑いになるのだった。
「性格まで言うのか」
「女は性格なんだよ」
それがわかっているとはまた随分と見る目があると言えた。不思議なもので性格が悪ければその顔もいずれ歪んでくるものなのである。その逆もある。
「それがわかる男は男として一流なんだよ」
「そんなもんかね」
「そうなんだよ」
そう今頼んでいる相手に言葉を返すのであった。
「要は性格なんだよ」
「それについてだけれどな」
「何だ？」
相手からここで言葉が返って来た。

「蟹は己の甲羅に似せて穴を掘るってな」
「古い諺だな」
この諺はそれこそ何千年も前から使われている。人間という生き物は己の器に合った行動をしたり発言をしたりするものであるということだ。それ以上のことはできないということでもある。
「それだ。類は友を呼ぶとも言うな」
「何が言いたいんだ？」
「つまりだ。彼女は自分に相応しい女の子しか手に入らないんだよ」
そう今頼んでいる相手に告げるのであった。
「それはわかれよ」
「さてな」
しかし彼はその言葉に対しては平気な顔でとぼけるのであった。
「何のことやら」
「諺を信じないのかい？」
「少なくともその諺に関してはそうだな」
彼はしれっとした調子で言うのだった。
「下らない諺さ、どちらもな」
「じゃあどんな諺が好きなんだ？」
「瓢箪から駒だね」
思わぬ授かりものが手に入るという意味である。この諺も実に古くこれまた何千年も前から使われている言葉である。
「だから。俺にも思わぬ美女が」
「自分の器量は認めるんだな」
「もう三十が近いからな。贅沢は言っていられないさ」
言葉に自嘲が入る。
「人間三十になるとあれこれと考えるんだよ」
「まだ人生七十年もあるのにか」
「まあな」
この時代の連合の平均寿命は百歳である。かなり高いと言える。なおこの時代は七十でも子供を作る夫婦もいる。それだけ健康が長

く保っていられるようにもなっているのである。
「後の七十年を楽しく生きる為にもな」
「いい彼女をか」
「彼女から嫁さんにだな」
話が飛躍してきた。
「そうなって欲しいものさ」
「見合いしたらどうだ？」
他から話が入って来た。
「それだったら」
「ああ、それもあるな」
そしてその言葉にも頷くのであった。
「よく考えたらな。それも手だよな」
「見合いといっても悪くないぞ」
今話に入って来た男はこう言うのだった。
「当たりが大きい」
「そんなものか」
「そんなに極端な外れはない」
彼は言う。

## 第二十八部第四章　原理主義者その十一

「人間というものはな。性格が極端に悪い人間はあまりいない」
「まあそれはな」
ただしその性格が極端に悪い人間に会う確率の高い人間はいる。これは言うならば運命的なものであり彼自身ではどうしようもない問題である。もっともそうした人間はそれと比例して素晴らしい人間に出会える可能性も高いのであるが。禍福というものは案外釣り合いが取れているものである。
「あるな」
「だからだ。一回やってみたらいい」
「見合いか」
「焦っているのだろう？」
そこを彼女を探している男に対して問う。
「相手がいなくて」
「そうなんだ。だから」
「だったら絶対にそれをするべきだ」
そう言ってまたお見合いを勧めるのだった。
「表の仕事でな」
「わかった。じゃあ一回業者に頼んでみる」
そういったことを請け負っている業者もいるのである。結婚もまた重要な産業なのである。冠婚葬祭は宗教的な意味でも人生においても重要な舞台である。だから産業にもなるのだ。
「それでいいよな」
「それを決めるのは自分だがな」
一応こう前置きはする。
「それでもな。するにこしたことはない」
「ユダヤ教だがいいかな」
「だったらイスラエルの会社に行けばいい」

すぐにこう言い返された。
「そういう企業もある筈だぞ、イスラエルにも」
「そんなのはあったかな」
それを言われるとどうにも首を捻るしかなかった。イスラエルはそうした宗教が絡むとかなり厳格になるからである。それがユダヤ人をユダヤ人にしているからだ。混血が進んでいる彼等がどうしてユダヤ人であると言えるかというとユダヤ教を信仰しているからに他ならないのだ。
「記憶にないな」
「だったら探せばいい」
そういうことであった。
「それでなければ親か上司に頼むんだな」
「わかったさ。じゃあそうするわ」
ここまで話してやっと頷くのであった。
「じゃあ国に帰ったらすぐにそうするか」
「そうしろ。悪くはならないからな」
「わかった。それじゃあその前に」
話が仕事に戻った。
「一仕事だな」
「そういうことだ。それでだ」
話がそちらに戻るとまた別の意味で盛り上がってきた。
「これを流して一応は終わりだが」
「簡単だな」
「ただし。足は消す必要がある」
そこが強調されるのであった。
「わかっていると思うがな」
「それは承知のうえだ」
「その通りだ」
部屋にいる者全員が答える。これに関しては誰もが納得する。まさか連合の人間だと名乗って情報をリークするわけにはいかないか

らである。
「だからだ。一般市民のふりをして」
「マウリア語の文章を的確に書くのは基本だな」
「そうだ。そして」
話を続ける。
「各国の大使館にも一応注意しておくか」
「大使館にもか？」
「ここにも大使館の関係者はいると思うが」
「私だが」
こうした話で外務省が関わらない筈がない。やはりここでも外交官はいた。もっともあえて暗闇の中に身を沈めて顔は出さないが。彼も顔が出ることを警戒しているのであった。
「そうか。では注意を頼むぞ」
「情報が大使館に出ないようにか」
「あくまで中央政府の仕事だ」
また前置きが述べられる。
「それとイスラエルのな。あくまでイスラエルは協力者だが」
「そうだな」
「それはな」
そういう前置きになっている。だからこれについては決まっていると言えた。

## 第二十八部第四章　原理主義者その十二

「中央政府の仕事でしかない。察知されていても知らないということにしておかなければな」
「そういうことだな」
「あえて何もないということになる」
所謂公然の秘密だ。既に大国の首脳達は知っているが彼等もあえて知らないふりをしている。中央政府も中央政府でそうすることにしているのである。
「何もないということになる。表でな」
「では何もないのだな」
政治であるとされるのは表でのことだけである。世の中は全てそうであるが。つまり裏で行われていることは公にならなければ噂のレベルでしかないのである。
「我々の仕事は」
「ビジネスマンということになっている」
一応はそうなっている。彼等の多くは。
「マウリアとの商談でここに入っているのだ」
「仕事でな」
「そうだ。仕事でな」
言葉が思わせぶりなものになった。
「仕事で来ているのは紛れもない事実だしな」
「そうだな」
「それは事実だ」
その通りだった。事実は事実である。言葉は使いようであった。
「そういうことにしておこう。さて」
「さて？」
「受け持ちを決めて今日は別れるか」
「もうそんな時間か？早いな」

「時間は待ってはくれないものだ」
ここで不意にといった感じで哲学的な言葉が出た。
「追っても追わなくても動くものだ。何時でもな」
「そういうものか」
「だからだ。過ぎるのは当然だ」
何か達観したような言葉であった。空虚な達観であったが何故か今の彼等にはその空虚な達観がやけに似合うのであった。それは裏の仕事のせいであろうか。
「だからだ。その時間になった」
「前の打ち合わせ通りでいいだろう」
誰かがこう提案してきた。
「割り当ては」
「そうだな」
別の男がその言葉に頷く。
「受け持ちもな。それで問題ないだろう」
「ふむ。ではそれでいいな」
「ああ」
「それでいい」
皆それに頷いてきた。これで話はおおよそ決まりであった。
「そういうことでな。では解散だな」
「さて。この後で何処に行くかだな」
「飲むのなら部屋にした方がいい」
リーダー格と思われる男がメンバー達に忠告するのであった。
「盗聴に気をつけてからな」
「マウリア側が俺達に勘付いているのか？」
「その可能性は皆無ではない」
用心に用心を重ねるということであった。これは工作を行うにあたって常識であった。情報が漏れてしまっては工作の意味がなくなってしまうからである。
「若し漏れたらそれで終わりだ」

「そうだな。仕事も」
「俺達も」
そういうことであった。工作員は仕事を完全にやり遂げてこそ工作員なのである。それがわかっているからこそ彼等の間に緊張が走るのであった。
「首を飛ばしたくなかったら用心してくれ」
「ああ、わかったぜ」
「しかも一蓮托生だしな」
「そういうことだ。この部屋にしろ事前に盗聴は厳しくチェックした」
そこも抜かりはなかった。そこまでする必要があるということであった。
「どの部屋も頼むぞ」
「そうだな。帰ったらな」
「念入りにしておく」
「女にも注意してくれ」
注文はまだ続いた。
「そちらもよくある話だからな」
「そうだな」
所謂ハニートラップであるがこれは弱みを握る為だけに行われるのではない。情報収集においても行われるのだ。これは日本の戦国時代のくノ一も同じである。女という文字を崩してこう呼ばれる彼女達の主な任務は潜伏し情報収集を行うことであったがその際男の寝床で聞くことが常だったのだ。これは何時でも同じである。
「マウリアもマウリアで侮れないしな」
「とりわけラコシ議員は」
「勘の鋭い彼のことだ」
また誰かが言う。
「既に我々のことは気付いている可能性もある」
「既にか」

「少なくともそう考えておいた方がいい」
その方が用心できるというわけである。
「それも本気でな」
「本気でか」
「実際にその可能性もあるからだ」
皆無ではない。ここが重要なのだ。

## 第二十八部第四章　原理主義者その十三

「そこはわかっていてくれ」
「その言葉、心に留めておくぜ」
「じゃあそれから部屋で楽しむか」
「部屋の酒は高いのだがな。我慢するか」
ホテルの酒が高くなるのは何処でも同じであった。これは二十世紀から変わりはしない。マウリアでも同じでありだからこそ彼等の中には外で飲もうと考えるメンバーもいたのである。
「それじゃあそういうことでな」
「ああ。また集まろう。その時は」
「成功していればいいな」
彼等は口々にこう言い合って別れた。それから二週間後急にラコシとその近辺が慌しくなったのであった。彼の率いるマウリア党が首脳部のスキャンダルにみまわれたからだ。
「彼もか」
ラコシは朝自宅で新聞を見て呻いた。そこには一面に彼の腹心の部下のスキャンダルが報道されていたのであった。
「それも今度は汚職か」
「旦那様」
呻くすぐ側から召使いが声をかけてきた。
「どうした？」
「お電話です」
「こんな朝早くからか」
「はい」
召使いは彼のその問いに答えた。
「それで誰からだ」
「マスコミの方からです」
「マスコミだと」

「どうされますか」
落ち着いた調子で彼に尋ねてきた。
「出られますか。それとも」
「出よう」
迷いはなかった。
「私が出ないと話になるまい」
「ですが旦那様」
召使いは彼を心配する目で見て言うのだった。
「相手は」
「マスコミなぞ怖くはない」
しかし彼の返事は物怖じしないものであった。実際に彼はマスコミなぞ全く恐れてはいなかったのである。
「だから安心するように。いいな」
「わかりました。それでは」
「うむ。そして電話は」
「こちらです」
もう手に持っていた。それをラコシに差し出す。
「ぞうぞ」
「わかった。それでは」
「はい」
こうして彼は電話に出た。そうしてマスコミとの応対をはじめたのであった。
「朝早くに申し訳ありません」
「うん、おはよう」
まずは礼儀正しい挨拶からだった。その応対から彼は今の自分の相手がとりあえずは礼儀作法を守る男だとわかった。マスコミの中には礼儀作法なぞ知ったことかという無頼漢も多いのである。それも彼等の持つ特権故である。この時代でもそれが続いているのだ。
「今回は議員に御聞きしたいことがあって電話させて頂きました」
「私にか」

「そうです、最近マウリアを騒がせています」
「言いたいことはわかっている」
言葉が少し長くなりそうだったので自分で進めることにした。彼とて忙しい身である。この日も予定がある。だからこそ急がせたのである。
「汚職の件だな」
「とういよりはスキャンダルですね」
電話の向こうのジャーナリストはこう述べてきた。
「既に御存知だとは思っていますが」
「政党マウリアの一連のスキャンダルか」
「そうです、最近そちらでのスキャンダルが続いていますが」
「遺憾だ」
まずは一言返した。
「党首として今回の事態は遺憾の意を禁じ得ない」
「左様ですか」
「これも私の不徳の致すところだ」
そしてあえてこう述べてみせた。

## 第二十八部第四章　原理主義者その十四

「この事態は」
「議員に関する報道はないのですが」
向こうも彼が何かをする人物とは思っていない。実際にマウリアでは誰もが彼はこのスキャンダルには一切関わっていないと見ている。それだけ彼の清廉さが知られているということであった。
「それでもですか」
「党首であるならば責任は避けられまい」
彼は強い声で答えた。
「この責任は取らせてもらう」
「責任といいますと」
電話の向こうのジャーナリストの声が険しくなった。
「議員、まさかそれは」
「近いうちに会見を開く」
彼はこう答えた。
「近いうちにな。それでいいな」
「それは本当のことですね」
「私は嘘は言わない」
大見得を切った。しかしそれは本気の大見得であった。そうした意味でこれは見得であった見栄ではない。ラコシもそれがわかって言っていた。
「必ずな」
「左様ですか。それではその日は」
「翌日公表する」
ラコシはまた言い切った。
「正午に。その時に伝えよう」
「わかりました。それでは」
「うむ。話はこれで終わりかな」

「ここから先はオフレコで宜しいでしょうか」
ジャーナリストの声が小さくなってきた。
「オフレコか」
「それで宜しいでしょうか」
「何か気付いたところがあるようだな」
「ですからオフレコです」
ジャーナリストはそこを強調する。即ちここから先の話は外には出ないということであった。ジャーナリズムにおいてはこれもまたルールである。もっとも二十世紀後半の日本のマスコミはそうしたことすら平気で破っていたが。これもまたどれだけ当時の日本のマスコミが腐敗し堕落していたかの証明でもある。マスコミの腐敗のケースとして日本のそれはまことにいいサンプルとなっているのである。
「それをお忘れなきよう」
「わかった。それでは」
ラコシはそれを受けて話をはじめた。
「何だ、それで」
「今回の一連のスキャンダルは確かに貴方には関係がありません」
「それはわかっていてくれて何よりだ」
「それにです」
ジャーナリストの声が小さいながらも鋭くなった。
「今回は少し妙な感じがします」
「妙だというのか」
「そうです。こうしたスキャンダルは普通複数の政党にまたがるものですが」
政党が違えど多少の関係があるということである。
「それに一つの企業や異性、同性から話は広がりますが」
「今回はまちまちだな」
「はい、汚職にしろそうです」
ジャーナリストは言う。

「汚職もある議員はあの企業、この議員はこの企業と。全く関係がありません」
「それは私も感じていた」
ラコシも答える。あくまでここでは自分がそれを知っていたかどうかはあえて言わないのだった。清廉潔白な彼であるが人材登用については能力主義である。従って有能で自身の思想に共感している同志ならば多少の汚職や遊びは黙認していたのである。これはマウリアでもそうであるし連合でもその傾向がある。政治家は能力に重点を置いて見られる社会なのだ。だがそれでも汚職が公になった場合はそれなりのことが待っているが。
「不思議なことにな」
「スキャンダルも同性であったり異性であったりまちまちです」
「これまた関連性がない」
「そうです。それに」
ジャーナリストはさらに言う。
「そちらの議員だけというのが最も引っ掛かります。これは一体どういうことでしょうか」
「言いたいことはわかった」
ラコシはここまで聞いて述べた。
「つまりだ。我々が狙い撃ちにされているというのだな」
「これもまたオフレコですので」
またそれを強調する。ジャーナリストもかなり慎重になっているのがわかる。
「ですから申し上げますが」
「我々を邪魔だと思っている勢力からの工作か」
「誰だと思われますか」
ジャーナリストは問うてきた。
「そしてどの勢力か。お気付きでしょうか」
「それはわからない」
ラコシは電話の向こうの相手に対して首を横に振った。今彼等が

使っている電話はテレビ電話ではないので表情や様子はわからないのだ。それがラコシにとってはいいことでもあった。

## 第二十八部第四章　原理主義者その十五

「私にもな」
「左様ですか」
「そうだ。ただ」
「ただ？」
今の言葉にジャーナリストの声が上ずった。
「お心当たりでも」
「それが実に多いことに気付いた」
ラコシの返事はこうであった。
「あまりにもな。だがこれが工作ならば仕掛けた者、若しくはその中にいる」
「その多くの中にですか」
「知っていると思うが私の敵は多い」
「はい」
ジャーナリストもその言葉に頷く。これは否定しようのない事実であった。
「だから容易に特定はできないが」
「間違いなくその中にいると」
「そう見ているのだがな」
「左様ですか。それで議員」
「うむ」
オフレコは続いているが話は戻った。
「これからどうされるおつもりですか」
「それは今は言わない」
オフレコでもそれは隠した。
「それでいいか」
「後のお楽しみというわけですか」
「そう考えてもらってもいい。しかし私は逃げない」

言葉を強くさせてきた。
「それはよく踏まえていてくれ。それでいいな」
「わかりました」
ジャーナリストも強い声で答えてきた。
「それでは明日の発表をお待ちします」
「話はそこからはじめる」
ラコシはこうも述べた。
「それで宜しくな」
「わかりました。それでは」
「うむ、それではな」
こうして電話での話は終わった。それと共にオフレコも終わった。オフレコの方が重要な話であった。電話を終えたラコシは鋭い顔で呟くのであった。
それから電話を召使いに渡す。それからその召使いに対して告げた。
「プラーナ君を呼んでくれ」
「こちらにですか」
「そうだ。彼の車で向かいたい」
そう召使いに告げるのだった。
「頼むぞ」
「わかりました、それでは」
「うむ」
こうしてプラーナが車でラコシの屋敷までやって来た。彼はラコシの秘書である。彼が政治家になる前からの付き合いでありラコシにとってはブレーンであり第一の腹心でもある存在である。その彼を呼んだのである。
「今日は私の車でですか」
「それでいいな」
「はい」
ラコシはその中性的な顔を見せて彼に答えた。

「それではそのように」
「運転手にはもう伝えてあるな」
彼は運転手も雇っている。裕福な家でありカーストも高位にあるので何人でも雇うことが可能なのだ。なお彼はカーストでいうとバラモンになる。
「はい、それはもう」
プラーナはラコシの言葉にすぐに応えてきた。
「いつものように」
「有給休暇だな」
「それも特別ボーナスとして」
かなり待遇がいいのがここでもわかる。
「伝えておきました」
「それはいい。彼には家族と楽しい時間を過ごすように伝えてくれ」
「それでは先生の御言葉として」
「頼む。では行くか」
「それでは」
こうして彼はプラーナの運転する車に乗り込んだ。そうして運転する彼の後ろから声をかけるのであった。これが本来の目的であった。

## 第二十八部第四章　原理主義者その十六

「それでだ」
「何でしょうか」
「今少し厄介なことになっているが」
「確かに」
プラーナは運転しながら彼の言葉に応えた。周りの車窓が次から次に移り変わるのを見ながら話をする。
「おかしいと思うか」
「今のこの状況をですか」
「そうだ。我々に対してだけだ」
ラコシは先程ジャーナリストと話したことをここでも話すのだった。
「集中的に。様々なスキャンダルでだ」
「先生はどう思われますか」
「おそらく君と同じだな」
ラコシはあえてこうプラーナに告げた。まるで彼の様子を探るかのように。
「おそらくはだが」
「そうですか」
プラーナはその言葉を受けた。そのうえで彼は自分の考えを述べるのであった。
「私もそうですね。今回は」
「やはり。そう思うのだな」
「ええ。ただ」
「ただ。何だ」
話が本題に入った。これまでは結局のところは序章に過ぎなかったのだ。
「この騒ぎを仕掛けたのが何者かということです」

「何者かか」
「最近先生は連合の脅威を述べておられますね」
「対外的にはな」
その通りである。ラコシはそれを認めた。実際に連合の巨大さは常に指摘されている。マウリアにおいて彼と同じように連合を危険視する者も実際にいるのだ。
「そうしているが。そのうえで」
「国交断絶と軍備拡張を主張されていますね」
「そうだ。それにあるのか」
「私はそう見ています」
プラーナが言うのはそこであった。
「連合にとっては望ましくないことに」
「連合がどう思おうが構うことはない」
これがラコシの本音だった。連合の考えはわかっているし調べてもいるがだからといってそれを意に介するというわけではないのである。
「彼等のことは知らない。彼等が何をするかは興味があるがな」
「何をするかはですか」
「そうだ・・・・・・むっ」
ここで気付いた。彼の勘が動いたのだ。
「彼等がか」
「そうです」
プラーナは後ろを振り向かない。冷静に丁寧に運転をしながら言葉だけで彼に応えるだけであった。
「つまり今回のこれは」
「連合というわけか」
「おそらくは中央政府です」
プラーナはこう予測を述べてきた。
「中央政府か」
「先生は最近各国政府については何も言っておられません」

「最近はマウリアでは大人しいからな」
ラコシはそれも認める。実際に今連合各国はマウリアにおいてはビジネスにおいてもそれ程活発ではない。むしろ中において活性化しているのである。
「だからあえて何も言わないのだが」
「しかし中央政府はどうでしょうか」
プラーナはまた中央政府に言葉を戻した。
「彼等、とりわけ軍はマウリアとの国境にも兵を置こうとしていますが」
「彼等の主張では必要最低限の戦力だな」
「はい」
これは連合軍が主張していることである。だがそれは一方の主張でありもう一方がそれに頷くとは限らない。ましてやそのもう一方が大勢いるとなると。全く信用しない者がいるのも当然の話であるのだ。
「冗談にしか聞こえないがな」
「連合軍は巨大です」
そもそも連合が警戒されるのはその巨大さ故である。従ってその軍もまた巨大であるのは道理である。しだから連合軍も警戒されているのである。
「その巨大な彼等が力を振り向けるとなると」
「一部でもそれは脅威となる。それはわかっている」
ラコシもその辺りは冷静に分析しているのであった。
「しかしだ」
「はい、そして」
「その脅威を取り除く必要があるのだ、我々としては」
「その通りです」
プラーナはラコシのその言葉に頷いてみせた。やはり運転しながら前を見てのことであるので表情は見えない。ラコシからはその首が動くのが見えるだけであった。

## 第二十八部第四章　原理主義者その十七

「しかしそれは連合軍、それを動かす中央政府にとっては邪魔なのです」
「私は彼等との軍事交流も反対しているしな」
「そうですね」
　これについてもラコシなりの主張があった。国粋主義的な理由からだけでなくマウリアはマウリア独自で兵器を開発し軍事思想を確立させるべきであるというのである。連合のそれがマウリアには合わないものであると彼は考えているのだ。これもまた一理あると言えるものであった。
「それが気に入らないのか」
「少なくとも気持ちのいいものではないですしマウリアとの交流に関しても障害です」
「私は障害か」
「彼等にとってみれば。それが大きくならないうちにというのもあるでしょう」
「実に慎重なのだな」
　ラコシは皮肉を言うタイプではないがここでは少しだけそれが入っているように見えた。
「そうして芽を摘み取るとは」
「そうかも知れません」
　プラーナもそう思うところはあった。
「我々はマウリアでも少数派ですから」
「それも圧倒的にな」
　実際のところ政党マウリアは少数野党でしかない。原理主義者というものは元々その過激さから支持を得られにくいところがあるが元々寛容な空気のあるマウリアではとりわけそうである。そうした意味においてラコシ達は鬼っ子なのである。その鬼っ子に対して連

合中央政府は仕掛けたというわけだ。
「用心深いと言うべきか」
「予防にしても」
「そのせいで我々はかなりの打撃を受けてしまったな」
声はそのままだったがその内容は現実をはっきりと実感しているものであった。
「彼等によってな」
「そうですね。ですがそれならばこれで終わりでしょう」
「終わりか」
「我々の膿は出きりました。それに」
「それに？」
プラーナに対して問う。
「工作ならばここで終わりでしょう、今回は」
「終わりか」
「こうした工作は一撃離脱です」
そうして相手が気付かないうちに安全圏に逃げる。工作は気付かれたり見つかってしまったならば元も子もないものだからである。
「ですから」
「もうないというのだな」
「おそらくは。我々はもう気付いていますし」
「気付いてからそうだったのかと気付くというものだな」
「そうです」
またラコシに対して答えた。
「気付くことに気付くのです」
「思えば面白い話だ」
あまり上手いとは言えない言葉遊びだったがラコシはそれに乗った。
「しかし。気付いたことは大きいな」
「そうですね。こちらが気付いたということは向こうも見ているでしょうし」

「それを考えても相手の動きは止まるか」
「おそらくは」
プラーナは述べてきた。
「こちらが気付いた時にはもう逃げている。工作の基本です」
「私も同じことをする」
ラコシは自分に当てはめて考えてみた。
「工作をするのならばな。これは気付かれれば終わりなのだからな」
「そうですね。我々の受けたダメージは小さくはないですが」
「暫くは派手に動けまい」
連合の読み通りだ。ラコシもそれはわかっていた。そうした意味で彼の政治的な読みは正確であった。正確であったからこそ苦々しい思いも抱いているが。
「当分の間は力を蓄えよう」
「失った人材を育てることも必要ですね」
「それが最優先課題だな」
政党マウリアにとってはである。
「それを進めていこう、暫くは」
「わかりました」
「そのうえでだ」
ここで彼は別のことを思いついたのであった。
「人材の中にとりわけ育てたい者がいる」
「それは何でしょうか」
「後継者だ」
ラコシは言った。
「後継者を育てたいのだ」
「先生のですか」
「そうだ。政党マウリアを引き継ぐ存在だ」
語るラコシの目が光った。

## 第二十八部第四章　原理主義者その十八

「そうした存在が欲しいのだ、そろそろな」
「それには少し早いのでは？」
「いや」
ここではプラーナの言葉は否定した。
「決して早くはない。まずは見つけなければならないからな」
「まずは見つけるのですか」
「普通の樹の種は探せば見つかる」
まずはこう前置きする。
「しかし大樹のそれはそうとは限らない」
「見つけるだけでも手間と暇がかかると」
「そうだ。中心にあるべき存在はな」
語るラコシの目が光る。
「そうそう容易には見つかりはしないものだ。だからこそだ」
「今からはじめるのですね。まずは探すことから」
「その通りだ。それでいいな」
「わかりました」
プラーナも彼の言葉に頷いた。やはり運転したままであるので前を見ているのだがそれでも頷いていることはラコシにもはっきりとわかった。
「それではそちらも手配しておきましょう」
「これは私も行う」
ラコシは言った。
「まずは同志でなければならないがな」
「真の意味でマウリアを愛する者ですね」
「それがまず少ないのだからな」
ラコシにとっての最大の憂いであった。彼はマウリアを愛していた。その愛情は最早家族に対するものより深い。その深い愛情故に

今原理主義者とも呼ばれているのである。
「困ったことにな」
「かえって人材を探し易いという一面もありますが」
「そうした考えも可能か」
これはラコシにとっては発想の外であった。そうした考え方もあることに気付いた程である。
「そういえばそうだな」
「そうです。これを幸いとする考えもできます」
「そうだな」
あらためてプラーナの言葉に頷く。
「では絞っていくとしよう」
「それが宜しいかと」
「まず言っておくがカーストは選ばない」
今だに残っているヒンズーのカーストはここでは否定した。ラコシはバラモンの中でもかなり高位の出であるがそれでも能力を優先させて考える主義である。彼にとってはまず重要なのはマウリアを愛しているかどうかでありカーストは関係ないのである。
「それはいいな」
「わかりました」
プラーナはその言葉にまた頷いてみせた。
「それではそれは」
「うむ。学生をあたるか」
「学生をですか」
「そこからまず探していきたい」
ここではラコシの視野は広かった。
「若い人材からな」
「卵から探していくのですね」
「真の人材は卵の時点から違う」
ラコシは言う。
「既に輝きがある。連合の言葉では金の卵か」

「特別な卵だと」
「それを見つけていく。そしてそれを温めていき」
「雛にする」
「そう、それがはじまりだ」
卵を雛にする。それからようやくはじまるのである。見つけるだけでも苦労するものだがそれだけではないということなのである。
「それからな。一から育てていくぞ」
「雛を見事な鳥にしていくと」
「それを考えれば今からでもいい」
ここまで話したうえで先の己の言葉をよしとするのであった。
「そうすれば必ず政党マウリアをしょって立つ人材になる」
「他の人材もですね」
「そうだな。一緒に探しておこう」
それならばであった。話が動いていた。
「若い人材でも優れた者は優れている」
「連合のあの国防長官のようにですね」
「八条義統といったな」
当然ながらラコシも彼のことは知っていた。僅かの間に国防省と連合軍を作り上げエウロパとの戦争にも圧勝し今の連合軍を支えている人物だ。連合においては絶大な人気を持つ彼のことはラコシも聞いているのである。

## 第二十八部第四章　原理主義者その十九

「立場的にはあまり好かない男だがな」
「人としては」
「悪い話は聞かないな」
その言葉の響きはどちらかといえば好意的なものであった。
「今回は彼が仕掛けた可能性もあるがな」
「立場的にはそうですね」
プラーナはラコシとは違った意味で八条の立場について述べた。
「連合軍に関することですし」
「そうだな。しかしそれにしても」
ラコシはまた八条について言及する。
「あれだけの人材がいるというのはやはり凄いことだな」
「連合とはいえ。あれだけの人材は」
「そうは出ないだろう。彼を選んだ者の目には素直に驚嘆する」
彼はここまで絶賛した。
「日本の伊藤首相だったな。あの切れ者と評判の」
「そもそも政治家の家の出ですけれどね」
「その中から選んだのか。つまりは」
「そのようです。そして手塩にかけて育てたそうです」
プラーナはそれも聞いていた。彼も連合に関する情報収集を行っているのである。
「そうして今に至ったと」
「逸材をさらに育てる」
これはラコシの考えでもある。
「いいことだ。そうして彼を育てたか」
「そうかと」
「その彼により我々は痛い目に遭わせられたようだがな。それは学んでおこう」

「では我々も伊藤首相になるのですね」
「そうだ」
ラコシはプラーナの問いに対して頷いて答えてみせた。
「そうして手に入れるものはこれからの大樹と」
「我々のさらなる発展ですか」
「今は小さくともだ」
彼は自分の政党の勢力をはっきりと認識していた。認識したうえで話を進めるのであった。
「必ずやマウリアを正しい方向に導く。その為にだ」
「ここは耐えてそうして」
「人を見つけるぞ。いいな」
「はい」
車の中でも今後の話をする。彼は決して敗れてはいない。しかしその動きが弱まったのは事実であった。これが連合とマウリアの関係に影響していくのであった。
「上手くいきましたか」
「思った以上の成果です」
ディカプリオが国防省の長官室で八条に対して話していた。
「これで彼は当分の間動くことができません」
「それは何よりです」
八条はその話を窓辺で聞いていた。外の青い空を眺めながら話を聞いていた。
「これで我々にとっての障害が消えました」
「政治的な」
「そうです。あくまで軍もまた政治の中にあるのですから」
これは極めて連合的な考えであった。八条は今それを述べたのであった。
「だからこそ彼は問題だったのです」
「既に政治問題になりかけていましたし」
ディカプリオも八条と同じ言葉を述べる。その目の青と緑の光が

増していた。
「ここで彼を弱めておくのは正解だったでしょう」
「その通りです。これで」
八条はまた言う。
「マウリア内部において連合軍について何かを言う大きな勢力はなくなりました」
「それでは長官」
ディカプリオはそこまで聞いてまた言ってきた。
「これからマウリア軍との関係は」
「友好関係をさらに深めていきます」
それが八条の考えであった。
「あくまで平和的に。宜しいですね」
「わかりました。ですが」
「はい、わかっています」
ディカプリオが何を言いたいのかもわかっていた。それに対しても応える。
「マウリアと戦闘になった場合の想定シュミレーションは行って下さい」
「そのプランも作成ですね」
「それは忘れないように御願いします」
窓の向こうを見たままの言葉であった。
「さもなければ火急の際に痛い目を見ますからね」
「そうですね。それは避けなければ」
これは軍事において常識であった。彼等もマウリアとはこのまま何もないでいられる可能性が確実だとは思ってはいない。僅かでも可能性があればそれに対して対処を考え用意しておく。それが軍人である。八条もディカプリオもそれを行っているに過ぎないのだ。
「その為にもそれは御願いします」
「わかりました」
ディカプリオはあらためて八条の言葉に頷いた。

## 第二十八部第四章　原理主義者その二十

「そちらも情報部として協力させて頂きます」
「御願いします。それで」
「はい」
八条はここで話を戻すのであった。
「マウリアとの国境に置く戦力ですが」
「どの程度にされますか」
「最低限でいいのですが」
これはまずの前提であった。友好関係にあるがそれでも兵を置かないわけにはいかない。それを考えると政治的判断において国境に置く戦力は最低限となるのである。
「五十個艦隊程度でしょうか」
「五十個ですか」
「マウリアは二百個艦隊でしたね」
それが確認される。
「確か」
「はい、今また人口増加に伴い艦隊の数を拡大していますが」
これは連合と同じ事情からである。人口が多くなればそれに比例して兵士数や艦隊数も多くなる。それだけ多くのものを守らなくてはならないということである。
「それに伴いです」
「わかりました。それでは」
「はい、五十個艦隊のままですね」
「二百個艦隊を全てこちらに向けることは不可能ですから」
八条のこの読みは正確であった。マウリアは東に連合を、西にサハラ諸国を置いている。伝統的に戦乱の続くサハラに対して警戒している。戦火の影響を被りたくないのだ。従ってサハラとの境にその主力を置き警戒及び亡命者への対処にあたっているのである。こ

こに割かれる戦力もかなりのものになっているのだ。
「元々連合との境には余り戦力を置いていませんし」
「こちらもその程度ですね」
「はい。後は防衛施設の充実だけでいいと思います」
それも忘れてはいなかった。
「それだけでマウリアとの有事は何があってもまず大丈夫です」
「五十個艦隊で足止めしている間に準備を整えられますし」
そうした読みもあった。これもまたマウリア側もよく認識していることである。お互いがよく認識していれば下手な有事は起きない。彼等はそれもわかっているのだ。
「それではそのように」
「しておきましょう。マウリアはこれで大丈夫ですね」
「そうですね。彼等は」
ディカプリオも八条の言葉に応えた。八条の机の前に立って。
「それでですね」
「何か情報がありますか？」
「はい」
ディカプリオは真剣な顔で述べてきた。
「サハラに関してです」
「何か動きがありましたか」
「ティムールですが」
情報はティムールに関するものであった。
「どうやらまた動くようです」
「コムでの勝利の後でですか」
「暫くはそのコムを拠点にして雌伏していましたが」
コム星系での決定的な勝利の後で彼等は暫くそこを拠点に戦力の再編成及び破損した艦艇の修復及び補充にあたっていたのである。
これは次の戦いに備えてのものである。
「それを終えていよいよのようです」
「アヤグーズを倒すのですね」

「おそらくは」
彼は八条にこう述べた。
「我が情報部の分析ではそれが最も可能性が高いと出ています」
「そうですか。いよいよですね」
「それに対するアヤグーズですが」
今度はその相手に対して言及されるのだった。
「既にそのティムールを止めるだけの戦力はありません」
「コムの敗戦でですね」
「それが決定的でした」
ディカプリオも言う。
「あの戦いにより戦力を大きく消耗しましたので。今彼等はかろうじてティムール軍に対抗するだけの戦力しかありません」
「かろうじてですね」
「はい、かろうじてです」
ディカプリオはそこを強調するかのように述べた。

## 第二十八部第四章　原理主義者その二十一

「ハサン軍の後詰によりかろうじて体裁が整うだけの戦力は残りましたが」
「それもギリギリですか」
「そうです。精々正面から戦える体裁があるだけです」
それだけのダメージを受けてしまったのである。コムの戦いはアヤグーズ軍にとってはその存亡をかけた戦いであった。それに敗れたのであるから当然と言えば当然である。戦略的な要地を失っただけでなくその戦力も大きく消耗した戦いであったのだ。
「ゲリラ戦ですが」
「あの女王陛下はそれは採らないでしょう」
ディカプリオはこうも分析していた。
「彼女は。それよりも」
「正面から戦いますか」
「私はそう見ています」
また八条に対して告げる。
「そうして華々しく散るかと」
「アッラーの戦士としてですか」
「祖国に殉じて」
そこには確かに美学があった。しかし八条はそこに見ているものをここではあえて言いはしなかった。相変わらず窓の向こうの空を眺めてそうしながら言葉を発するだけであった。
「わかりました」
「左様ですか」
「では今度の戦いはティムールの勝利ですね」
「それはまず確実かと」
これは言うまでもないことであった。
「ティムールはこれによりハサン西方での優位性を確かなものにし

ます」
「アヤグーズを足掛かりとして」
「そうです。ハサンにとってこれはあまりにも大きなダメージになります」
こうも言う。
「南方でもオムダーマン軍がまた動くようですし」
「南からもですね」
「そうです、二正面作戦です」
これが非常に大きな意味を持っていた。
「どちらも相手にしなければなりません」
「元々ハサンはそれが可能だったのですが」
八条はそこを指摘する。
「国力的にオムダーマンもティムールも遥かに凌駕していましたし」
「確かにそうでした」
これは連合軍もよくわかっていた。だからこそ連合軍ではこの戦いはハサンが両国を退けると見ていたのだ。ここまでの彼等の苦戦は想像している者は少なかったのだ。
「オムダーマンもティムールも予想以上に強かったです」
「そういうことになります」
ディカプリオも言う。
「そしてその強さの要因ですが」
「人ですね」
「はい」
また八条の言葉に頷くのであった。
「さらに突き止めれば指揮官です」
「その通りです。将の質です」
八条はここでアッディーンとシャイターンについて言及する。それこそがオムダーマン、ティムールが勝利を収めてきた最大の要因なのだ。
「これがかなり大きいです」

「二人共名将と言えますね」
「それぞれタイプは違いますが」
彼等のタイプについても既に検証が連合軍の中でも為されている。その結果はアッディーンはどちらかというと正統派の将でありそれに対してシャイターンは謀略をも好む将であるとされている。おおむねにおいて当たっているといえる検証の結果であった。
「そうなります」
「二人の名将ですか」
「それに対してハサンの将の質ですが」
「決して悪いものではないと思いますが」
八条はやはり窓の向こうの空を見たまま述べる。
「かなり減ってしまったとはいえ」
「アッディーン副大統領に敗れているダビデブ元帥ですが」
今のハサンの有力な将帥の一人である。長い間ハサン軍で戦ってきておりハサンにとっては宿将と言ってもいい存在である。
「彼にしろ名将と言っても過言ではないでしょう」
「その堅実な用兵と見事な統率で知られていますね」
「その通りです。ですから」
ディカプリオは述べる。
「普通ならばこの戦いはハサンの勝利になるのです」
「南でも西でも」
八条はまた言う。

## 第二十八部第四章　原理主義者その二十二

「西にはそのアヤグーズのブルコルジ女王がいますし」
「連合軍にもあそこまでの勇将はいません」
女でありながらブルコルジは勇将として高い評価を得ている。彼女は軍人として連合軍や市民達の間でも広く知られている存在なのである。
「それだけの人物ですが」
「敗れましたね」
「そうした相手を破るということ自体が」
ディカプリオはさらに言葉を続ける。
「今のオムダーマン、ティムールの強さになっています」
「全ては軍を率いる将の強さであります」
八条はまたそれを言う。
「それだけの人物がいるからこそオムダーマンもティムールも今の地位にいるのですし」
「全ては剣でですか」
「それがサハラです」
戦争によって何かを掴む、それがサハラであると。八条は今それをはっきりと言った。これはサハラに対する偏見ではなく紛れもない事実であった。戦いによって解決し、手に入れるのがサハラなのである。
「戦いの中にあるのです。全てが」
「全てがですか」
「戦争とは確かに政治の手段の一つですが」
クラウセヴィッツの時代から言われ既に金科玉条になっている言葉である。連合においてはとりわけそうなっている。それだけ連合が政治化しているということでもある。
「サハラではそれが極めて採りやすいのです」

「その政治的手段としての戦争を」
「またそれが許されていますし」
「サハラ統一ですか」
「はい。今まで誰もが果たそうとして」
空の向こうに見るものは何であるか。八条は何処までも青い地球の空を見ながら述べる。そこに見ているものがただの青い空ではないことだけはわかる目であった。
「為しえませんでしたが」
「地球にあった頃からですね」
「そうですね」
ディカプリオの言葉に頷く。
「かつてのウマイア朝以降ですか。分裂は」
「他のイスラム諸国は置いておきまして」
ここではアラブ世界にだけ限定した。今のサハラの母体である。そのサハラという名前もアラビア人達にとって馴染みのあるサハラ砂漠からきているのである。北アフリカ北部に広がる砂漠でありアラビア人達にとってはナイルやチグリス＝ユーフラテスの水と共に記憶の原風景となっているものである。
「アラブはずっとそうでした」
「アッバース朝にファーティマ朝」
八条はここで力のあったイスラム王朝の名を挙げた。
「セルジュク朝にアイユーブ朝」
あのサラディンの王朝がアイユーブ朝である。十字軍と長い戦いを繰り広げたイスラムの雄である。その彼の王朝はエジプトにあったのだ。
「そしてオスマン＝トルコですか」
「いずれも強大な国家でした」
「特にアッバース朝とオスマン＝トルコは」
オスマン＝トルコは長きに渡ってイスラム圏の最大国家であった。非常に優れた文化や圧倒的な国力を誇り欧州を圧倒し続けた。しか

しその彼等ですらもアラブを統一できなかったのだ。これはそもそもこの王朝が侵略の主な相手を欧州に求めていたせいでもあったが。
「強大でしたが統一は為りませんでした」
「はい、残念ながら」
ディカプリオは連合の者の客観的な目であったがそこには強大な国家が果たせなかったことへの若干の残念さが見られた。
「そして今もなおですか」
「何度か統一できるチャンスはあったのですがね」
「英雄が暗殺され、急死し」
「その都度分裂の繰り返しでした」
それがサハラの歴史であった。そうしていつもすんでのところで統一を逃し戦乱を続けてきたのである。
「そしてその結果」
「今です」
八条はここで完全に感情を己の言葉から消してしまっていた。
「今のような流れもサハラでは何度かありましたが」
「今度はどうでしょうか」
「こればかりは人の資質では限りがあります」
「人ではですか」
「はい」
今度は八条が答えた。

## 第二十八部第四章　原理主義者その二十三

「人の力だけでは統一はなりませんね」
「では他に何が必要なのでしょうか」
「時ですね」
「時、ですか」
八条のその言葉に顔を向けた。そうして窓の向こうの空を見据えたままの八条の背中を見るのであった。そうしてそこから彼の言葉を読み取るのであった。
「統一できる時でないと駄目なのでしょう」
「今まではその時ではなかったと」
「その時であれば統一できました」
運命論的な言葉であったが確かにそう思わせるものが今までのサハラの歴史にはあった。サハラ風に言うとこれもまったアッラーの思し召しになるのだ。
「それだけの資質の英雄達でしたし」
「今までサハラに現われた英雄達は」
「しかしそれが果たせなかった」
八条はそこに時を見ていたのだ。
「それを考えるとサハラに最も必要なのは時です」
「統一の時だと」
「今がそうであるならば統一は果たされるでしょう」
そのうえで八条は言う。
「そして統一したならば」
「その時は」
「連合にとって大きな脅威になる可能性があります」
その言葉と共に遂に振り向いた。そうしてディカプリオの顔を見て述べる。
「情報部長」

「はい」
ディカプリオは彼の言葉に応えた。
「アッディーン副大統領とシャイターン主席ですが」
「二人ですね」
「そうです、二人です」
真剣な顔であった。その顔でディカプリオに対して言うのである。
「二人について更なる調査を」
「細部までですね」
「今よりさらにです」
そう言葉を付け加えさせる。
「調査を御願いします。宜しいですね」
「わかりました」
そしてディカプリオもそれに頷いた。情報部長として。
「そのうえで彼の幕下の人物達も」
「彼等もですか」
「英雄の手足のことも知っておく必要があります」
八条はこう考えていた。この際徹底的に彼等を調べ尽くすつもりであったのだ。
「それで宜しいですね」
「はい、わかりました」
ディカプリオとしてもそれで異論はなかった。彼もまた二人に興味があったのだ。仕事以外にもそうした感情が混ざっていた。
「それではすぐに」
「御願いします。しかし」
「何でしょうか」
「二人共若いながらもかなりの傑物ですね」
「それは確かに」
これもやはり言うまでもなかった。既に実績があるからだ。
「僅かの時であれだけのことを果たすとは」
「オムダーマンはサハラ西方の一国家でしたね」

「そうでした」
これはよく知られている。オムダーマンはサハラ西方において第三勢力でしかなかったのだ。それが瞬く間に西方を統一し南方も手中に収めたのである。それは全てアッディーンの力によるものだ。彼の軍略があればこその西方と南方統一なのである。
「それが今やあれだけの勢力にですか」
「彼がいてこそですね」
「そうです。また彼に関して情報が入っているのですが？」
「情報ですか」
「はい」
そう八条に答える。
「今彼は副大統領ですね」
「ええ」
軍事担当の副大統領である。あえて彼の為に新設されたような役職だ。オムダーマンは共和制であり軍の最高司令官は大統領である。だが今は実質的にアッディーンが最高司令官になっている。しかも軍の階級はそのままである。かなり異例の出来事ではある。少なくとも連合においては全く考えられない話である。

## 第二十八部第四章　原理主義者その二十四

「それが大統領になるそうです」
「国家元首にですか」
「ただこれは未確認情報です」
ディカプリオはそう前置きを置いてきた。
「未確認ですか」
「ネットで情報部のスタッフが拾った情報です」
「ネットですか」
八条はネットと聞いてその首を少し傾げさせた。
「では伝聞の可能性も極めて高いですね」
「私もそう思います」
ディカプリオもそれは認める。
「確かな情報元もはっきりしていませんし」
「伝聞の可能性も高いのですね」
「若しくは誰かの悪戯か」
彼等はネットには風聞の類も多いことはわかっていた。これはネット初期からそうであり今でもそれは同じなのだ。そこからどのようにして本当の情報を手に入れるかが問題なのである。情報部ではそうした仕事も常に行われてはいる。それだけが仕事ではないが。
「匿名の書き込みではわかりにくいですね」
「そうです。今それを検証中です」
ディカプリオはまた言う。
「果たしてそれがどうなるか」
「そうですね」
八条はここでもディカプリオの言葉に頷いた。
「その情報が確かであればかなり興味深いですが」
「今それをチェックしているところです」
「これからなのですね」

「そうです、まだ見つけたばかりの情報です」
またそう言われる。
「どう転ぶかはまだわかりません」
「オムダーマンでは軍人がそのまま国家元首になることは珍しくありませんね」
「それは」
これもサハラ特有である。サハラでは戦乱に明け暮れている為に軍人に人材が集まり易い。またその発言権もかなりのものになっている。それが為にクーデターも日常茶飯事なのである。また禅譲も多い。八条はここではそのことについても考えを巡らせるのであった。これもまた重要な問題であった。
「それでですね」
「クーデターは考えられませんね」
ディカプリオはそれは否定した。
「オムダーマンの政情は安定していますし」
「ですね」
八条もそれはわかっている。オムダーマンはサハラの中ではとりわけ政情が安定していることで昔から知られている。そのうえシビリアンコントロールも連合レベルで安定しており軍部のクーデターの可能性もないのだ。そこに加えてアッディーンの性格も大きく影響していたのである。
「それにアッディーン副大統領は」
「少なくとも権力志向の人物ではありません」
「そうですね」
八条はまたディカプリオの言葉に頷いたのだった。
「彼は野心家ではありません」
「今の座はあくまで実績の結果です」
「それが普通の軍人政治家とは違う点ですね」
「そうなのです。ですから」
クーデターの可能性はないというのだ。

「オムダーマン政府もその可能性は全く考えていません」
「でしょうね。だとすると」
答えは一つであった。
「禅譲ですか」
「おそらくは」
ディカプリオはまた答えた。
「そうではないかと」
「理想的な形ではありますね」
八条は禅譲という言葉にこう述べた。
「権力の移譲としては」
「そうです。誰もが傷つきません」
「それに血も流れない」
古来ではそれが最も理想の権力委譲の形式であるとされていた。とりわけ中国ではそうでありあえてそれにこだわる政権も多かった。古代の堯と瞬の関係がその典型とされているがこれは伝説の話である。実際は舞台裏で様々な謀略もあるのだがそれについては歴史書にある通りである。

## 第二十八部第四章　原理主義者その二十五

「最高の形式ではあります」
「そうです。しかしです」
ディカプリオはここでまた言うのだった。
「これが本当かどうかは」
「全くわからないのですね」
「ですが彼が今ではオムダーマン細大の英雄なのは確かです」
これは誰もがわかっていた。
「彼にとっては望めば誰もがその座を譲られるものです」
「大統領であっても」
「そして統一すれば」
言葉が強くなる。答えがそうさせていた。
「皇帝に」
「あちらの言葉ではスルタン＝カリフですね」
「はい」
これはオスマン＝トルコによる。スルタンとは君主のことでありカリフとはイスラム教の指導者のことである。初代カリフは言うまでもなくムハンマドである。四代のカリフは選挙によって選ばれたものであり正統カリフ時代と呼ばれている。それ以降は血統で選ばれている。ウマイア朝であるがこれもムハンマドの一族である。基本的にムハンマドの一族は実に多くカリフの後継者には困らなかったのだ。二十世紀でもムハンマドの子孫が一国の王であった。
「制度的にはそうです」
「そうでしたね」
カリフの権威が弱まりスルタンの地位が高くなる。暫くそれで宗教的なものと政治的なものが対立したがオスマン＝トルコは皇帝がスルタンとカリフを兼任することにより双方の権威に立ちこれを収めた。皇帝とは宗教的にも政治的にもあらゆる権威の上に立つもの

だ。これによりオスマン＝トルコは皇帝を戴く帝国となったのである。
「サハラの皇帝ですか」
「人類社会で三人目の皇帝です」
ディカプリオはこう述べた。
「今のところは」
「ですね」
八条には非常によくわかる話であった。
「我が国と」
「エチオピア」
どちらも連合にある。古い皇室である。
「それに続く第三の皇帝です」
「サハラを統一した者がサハラの皇帝になる」
「預言者の言葉でしたね」
「はい、あの頃はアラブでしたが」
それが今に続いているのである。サハラはそのままアラブである。
だからこれはサハラの者達にとっては当然の話なのである。
「それを果たせるかどうかですが」
「どうなのでしょうか」
ディカプリオもそれを言う。
「若し皇帝になるのならば」
「ええ」
「どちらが相応しいでしょうか」
彼はそれを今八条に対して問うた。
「アッディーン副大統領かシャイターン主席か」
「それはわかりませんね」
八条もこれに答えることはできなかった。
「どちらかは。ただ」
「ただ？」
「アッラーの言葉通りならば」

あえてサハラで信仰されているそのアッラーを出した。
「それも全てアッラーが既に決めていることです」
「既にですか」
「そうなるかと」
そう答えてみせた。
「違うでしょうか」
「確かに」
そしてそれにディカプリオも頷いた。
「イスラムの教えではそうなります」
「そうです。ただ」
ここで八条はまた考えるのであった。
「シャイターン主席は例え玉座に就かなくてもそれで終わるとは思えません」
「といいますと」
「彼には特別なものを感じます」
「特別なものですか」
「そうです。言うならば」
考えているのが見えるのは顔だけではなかった。目もそうであった。

## 第二十八部第四章　原理主義者その二十六

「魔王と申しましょうか」
「魔王ですか」
「アッディーン副大統領には感じないのです」
アッディーンも出す。
「しかし彼に関しては」
「特別なものを感じると」
「そうなのです。おかしいでしょうか」
「いえ」
しかしディカプリオはそれを否定しない。むしろ今の言葉にはそれを肯定する趣きがあった。それは彼も八条と同じものを感じているからに他ならなかった。
「確かに彼は普通でありませんな」
「普通ではないですか」
「はい、普通ではないものがあります」
こうも言う。
「やはり魔王です」
「魔王ですね、やはり」
ディカプリオの目が光る。その目は二つの光を放っていたがそれが見せている色は同じであった。二色の光であってもだ。同じなのであった。
「強いて言うのならアッディーン副大統領は覇王です」
「覇王ですか」
今度は八条がディカプリオの言葉に頷く番であった。
「そうです。野心はないですが」
「そうですね。彼は」
これは先にも出た話だった。それを繰り返していた。
「それはないです、ただ」

「導かれているものがあるでしょうか」
「それがアッラーのものなのかどうかはわかりません」
ディカプリオは今八条を見ていたのではなかった。アッディーンを見ていたのだ。この部屋にはおろか連合にさえいない一人の男を見ていたのだ。
「ですが運命的なものに導かれているかと」
「それが彼を今までやったと」
「そうですね、彼は自然と今に至ります」
これまでのアッディーンの生い立ちがそうなのだ。ただ戦い勝利を収める。そこには野心はなくその勝利によって地位を築いてきた。それがアッディーンだ。だがシャイターンは。
「シャイターン主席ですが」
「彼は違いますね」
「そうなのです。野心家です」
それを言うのだった。
「彼はその野心に従い動いています。全てが」
「思えば南方にいたのですが」
シャイターン家はそのはじまりは南方のシーア派の宗派の宗主ではないのだ。一介の僧侶に過ぎなかった。ムスリムでは本来聖職者はいないのだがシーア派ではそうではない宗派もあるのだ。シャイターン家がそうなのである。彼等はそこから陰謀を駆使して今に至るのである。
「それが北方に移り」
「エウロパ軍を破ったのがはじまりでしたね」
「その通りです」
八条の言葉に応える。
「あれから鮮やかな勝利を収めてカリスマ性を発揮して北方を統合し」
「英雄になりました」
「サハラでは英雄です」

あえてサハラでは、と言う。
「しかしサハラ以外では」
「ここで私は考えるのです」
八条のその整った目に不穏な色が宿った。彼にとっては数少ない表情であり見せることのない色であった。それを今見せたのである。
「彼がサハラを統一します」
「はい」
「そして皇帝になるならば。その後どうなるか」
「野心家のシャイターン主席がですね」
「どうなると思われますか？」
それをディカプリオに対して問う。
「彼がサハラの皇帝になったならば」
「彼は確かに野心家です」
最早これは大前提になっていた。彼が野心家であるのがまず述べられた。
「しかし愚かではありません」
「そうです」
それを今言うのだった。

## 第二十八部第四章　原理主義者その二十七

「むしろその頭脳は恐ろしいまでに鋭いものがあります」
「そうした意味でも魔王なのです」
八条はそこを見ていた。
「魔王はただ野心だけで魔王になるのではなく」
「その軍略と知略によっても」
「だからこそ彼は今に至ります」
八条もまた今ここにいない男を見ていた。サハラにおいてその野心を胸に戦場を駆ける魔王を見ていたのである。
「北方をその手に収めただけではなく」
「後の政治も見事なものがあります」
「そう、それです」
八条が言いたいのはそこであった。シャイターンはただ北方をまとめただけではないのだ。その後もまた注目すべきことであったのだ。八条はそこも見ていたのだ。
「政治なのです」
「サハラ北方は戦乱により荒れ果てていました」
エウロパの侵攻もありそれはサハラの中でもとりわけ酷い有様であったのだ。それにより北方は難民の出る場所になり何もかもがなかった。だがそれは昔のことになっていたのだ。
「それが今では」
「不足なぞない世界になっています」
「そうです。瞬く間に」
八条はそれを高く評価していたのだ。
「今では北方はその力も見事なものになっております」
「それだけの短い期間によってです」
「政治力も卓越したものがあります」
「頭脳もあります」

「政治家としても卓越し」
「力関係を見るのも敏です」
話がさらに核心に入った。
「それにより」
「ハサンのあれですか」
「その通りです、やはりあれは」
「ティムールの謀略と確実に言えるでしょう」
戦いの前にハサンの要人達が次々に謎の死を遂げた事件である。これは謎の死であるとされているが八条はもうその真相を確信していたのだ。
「証拠こそありませんが」
「全ては勝利の為にです」
「そうです。彼はこのままでは勝利を手に入れるのは難しいと考え策を弄しました」
ディカプリオはこう述べた。
「勝てないと考えたせいです」
「だからこそ謀略を使ったのですね。それならば」
「統一してさらなる野心を持てば」
八条に対して述べる。その目が光る。再び光ったのであった。
「それでどう動くかですか」
「連合に向くと思われますか」
ディカプリオに問うてきた。
「その野心に燃えた目は何処に」
「それが連合に向くと思われるのですね」
「可能性は皆無ではありません」
八条はそう述べるのであった。
「違いますか」
「確かにそうです」
それはディカプリオも認めた。
「サハラの人口は二千億です」

「はい」
今度は国力が述べられた。
「連合でここまでの人口の国はありません」
「それに国力もですね」
「はい」
それについても検証が為される。
「連合のどの国よりも高いものがあります」
「あくまで統一されれば、ですが」
その前提があるにしろだ。それでもそうした力が潜在的に備わっているのは非常に大きいのである。二人はそうしたことも踏まえて話をしているのだ。
「連合にとってはエウロパ以上の脅威になるかも知れません」
「シャイターン主席が今以上の野心があるならば」
「その可能性は否定できません。ですが」
「ですが？」
ここでディカプリオの言葉に顔を向けた。
「それはおそらくはないでしょう」
「ないですか」
「彼が見ているのはあくまでサハラだけです」
まずはこれについて述べられる。
「サハラだけを見ています」
「そういえばそうですね」
そして八条もそれはある程度見ていた。
「彼が考えているのはあくまでサハラの統一であり」
「人類の統一までは考えていません。その証拠に」
「証拠に」
「彼の発言では連合は全くと言っていい程出てきません。マウリアもです」
「ですね」
ここに大きなものがあるのであった。話に出ていないのだ。それ

はこの場合は彼が連合やマウリアに対して興味がないことの証左になるのである。
「エウロパは違いますが」
「エウロパの話が出るのはまた違う理由からですね」
「そうですね」
これはもうわかっていることであった。

## 第二十八部第四章　原理主義者その二十八

「エウロパは彼等にとっては外敵です」
「そういうことです」
総督府のこともありサハラの者達はエウロパを激しく憎んでいるのである。何十億を遥かに越える難民達の存在がその一旦である。彼等にとってはエウロパ軍はまさに十字軍であったのだ。流石に今のエウロパ軍は虐殺や食人は行っていないにしろである。
「だからこそ話に出ているだけです」
「つまり敵でなかったならば興味がない存在ですね」
「そうなるかと」
ディカプリオはそう述べる。
「それを考えますとやはり彼の野望はまずはサハラだけでしょう」
「サハラだけですか」
「それに彼はわかっています」
そうして次の言葉を出してきた。
「サハラでは連合全体の相手にはならないということを」
「二千億の人口でもですか」
「確かに二千億です」
また人口についての話になった。
「しかしそれは連合全体と比べると」
「二十分の一ですね」
「それです」
連合の人口は四兆である。サハラ二千億に対して圧倒的なものがある。人口は何時の時代でもそれが多いだけで国力となるものである。程度の差こそはあれどだ。
「国力もまたそれ程離れています」
「連合は確かにまとまりに欠けますが」
それは八条もわかっている。各国の発言力や権限がエウロパのそ

れよりも遥かに大きいのである。これは非常によく知られていることでもあるのだ。
「しかしです」
「それが一つになれば違いますね」
「我々はそれを見せました、彼等に」
そしてこう言った。
「エウロパとの戦争を」
「ですね。あれは連合の力が一つになったものでした」
一つにしたのがこの八条であった。彼はただ連合軍を戦場に向かわせただけではないのだ。そこには連合軍の持てる力を全て注ぎ込んでみせたのである。しかもそれを一つにしてだ。
「中央軍はその力を一つにしたものです」
「はい」
ディカプリオは今の言葉には大きく応えてみせた。
「その通りです。今までは中央軍さえなかったのですが」
「それがある。これは大きいですね」
「少なくとも今までより遥かに外敵を寄せ付けないものであります」
「外敵ですか」
「そう、外敵です」
ディカプリオは言う。
「彼が連合に牙を向けるのならばすぐに外敵になります」
「ですね。しかし外敵にしない為にも」
「連合軍は必要な存在なのです。それが彼に妙な気を起こさせないものでもあります」
「抑止力ですか」
「簡単に言えば」
こうも述べる。
「そうなります」
「その抑止力と彼の野心の限界によりサハラとの戦いはまずありませんか」

「そう思います。ですが」
しかしそうであっても言葉を出すのであった。ディカプリオは軍人として細部まで考えていた。少しの漏れもあってはならないと言外で述べているのだ。
「用心の為にも」
「サハラにも備えておきますか」
「あくまで建前はこれまで通り」
「はい、難民対策です」
これについては八条が最もよくわかっていることであった。多分に政治的な話であるからだ。国防長官としての仕事であるものであるからだ。
「それで宜しいかと」
「サハラとの境に防衛艦隊を多数置き」
「防衛施設も整える。これですね」
「参考にしたいものがあります」
ここで八条は言うのだった。
「参考にしたいものとは」
「万里の長城です」
そうしてかつて中国にあったものを出してきた。これは歴代中国王朝が北方の遊牧民族の侵攻を食い止める為に築いていったものである。中国人はこれを以って国境ともしていた。なおこれを見てもわかるように歴代の中国王朝にとって最大の脅威は北方の異民族であったのだ。これはどうした政権であっても中国にいる以上変わることはなかった。制服王朝というその北方の異民族達の王朝でもこれは同じで満州民族の清王朝でもロシアという敵がいた。例外はモンゴル民族の元王朝であるが彼等はその北も勢力圏にしていたからだ。他ならぬその北のモンゴル高原こそが彼等の故郷であったからこれは当然であった。

## 第二十八部第四章　原理主義者その二十九

なお面白いことに漢民族と同化している征服王朝はどれも北の異民族と対立している。自分達は漢民族と主張しているがそもそものはじまりは鮮卑である隋や唐にしろそうである。これは共和制になってからも同じで中華人民共和国は同じイデオロギーである筈のソ連を宿敵としてきたしその後継国家であるロシアとも犬猿の仲であった。これは結局のところイデオロギーよりも地政学的要因が大きな意味を持つということである。八条はその万里の長城を参考にしたいと今言っているのである。

「長城ですか」

「はい」

ディカプリオに対して答える。

「それでどうでしょうか」

「つまりそこから先はサハラの領土であるということですか」

「そしてこちら側は連合領です」

八条はまた言う。

「そうして分けておきたいのですが」

「防衛と共にですね」

「無論防衛が主眼です」

これは言うまでもない。

「しかしそれと共にです」

「双方の境であるとはっきりさせるのですか」

「それでどうでしょうか」

ここまで話してまたディカプリオに対して問うた。

「サハラとの国境への備えは」

「少し即答しかねます」

ディカプリオはここではあえて慎重になるのであった。

「申し訳ありませんが」

「個人では言いかねますね」
「そうです」
そしてそれをはっきりと述べた。
「情報部長であり元帥でもありますがそれだからこそ」
「迂闊には言えませんか」
「また元帥会議があります」
連合の最高幹部会議である。それが俗にこう呼ばれているのだ。参加者がいずれも元帥ばかりであるからこの通称になっているのである。
「その場においてならば」
「言えますね」
「今はあえて申し上げません」
慎重に慎重を期してきた。
「そこでまた御願いします」
「わかりました」
そして八条もその言葉を受けた。
「それではそのように」
「はい。それにして」
ディカプリオはその二色の目にまた考える色を帯びさせた。
「何か？」
「サハラの動向も気になりますね」
「はい、それは確かに」
八条だけでなく連合全体がそれに注意を払っていた。
「どうなるかが多少なりとも連合にも影響しますから」
「くれぐれも敵対関係にならないことを願います」
決して好戦的ではないディカプリオだからの言葉ではない。これは連合全体の考えと言ってもよかった。彼等にとっては戦わずして利益を得られればいいのだ。それができるのならば何も不満はないのだ。
「ですね。ただ」

「ただ？」
「向こうに何かあればやはり別になります」
「何かあればですか」
「政治的なものだけではなく」
そうして彼は言う。
「経済的に何かあれば。わかりません」
「火種は何処にでも転がっていますしね」
「それを一つずつ消していくのが政治というものですが」
そうは言いながらもあえて逆についても言及してみせた。
「しかしそれとは逆に」
「火種をさらに大きくさせる場合もありますか」
「連合ではそうしたことはないのですがね」
少なくとも武力を伴った騒動にはならない。それが連合である。しかしだ。
「ですがサハラとの間では」
「それが否定できませんね」
「例えばです」
今度は例え話を出してきた。
「はい」
「彼等の勢力圏であらたな資源が見つかったならば」
「資源ですか」
「それもかつての石油やウランのような」
人類の歴史を変えたエネルギー資源である。今の人類社会の繁栄は十九世紀の末期にその基礎があると言われているがそれは石炭から石油に変わることにより成し遂げられたのである。そうして原子力資源の活用を知るに至りそこから今のエネルギーに至る。その基礎はまず石油であったのだ。
「そうした資源がサハラで発見されたならば」
「わかりませんか」
「それを我々が交易で手に入れられればいいです」

それに越したことはない。まずはこれが理想であった。
「ですがそうでなければ」
「戦いも有り得ますか」
「その場合は彼等次第ですが」
「かつての石油の争奪のようになるのですね」
「そうなれば戦いの可能性もあります」
八条はそれを否定しなかった。
「できればそうしたことにならないことを願いますが」
「それもサハラ次第でしょうか」
「そうですね」
八条はそれはまずは半分だけ頷いた。
「しかしそれだけではなく」
「連合もまたサハラへの対応に注意を払わないといけませんね」
「戦争は片方だけの問題で起こる場合もありますが」
一方的な侵略である。そうしたものも確かにある。
「しかし多くは」
「それが政治的な問題であるならば」
「双方に問題があるのが常です」
八条は政治的に戦争について述べた。戦争というものが政治の解決の手段の一つであるならばそうなる。それを踏まえて話を進めているのであった。
「話し合いを進めていくことも必要かと思います」
「国防や国益の為にも」
「その通りです。しかし今は」
ここでまたサハラの問題が浮上する。
「それがしにくい状況ですね」
「趨勢がはっきりしないことにはですか」
「そうです。さて、一つになるか」
八条の目が光った。
「それともまたあと一歩のところでそれを逃すか」

「これから次第ですね」
「そうです。我々はそれを見守りましょう」
八条は静かな声で述べた。
「これからのサハラを」
「我々の為に」
今はそれしかなかった。だが彼等はもうサハラへの対応を進めていた。政治は常に動く。軍もまた。連合もまた同じであり動くのはサハラだけではなかったのだった。だがそれはお互い知ることの少ないものであったのだった。

# 第二十八部第五章　優位性その一

優位性

ハサン内部では次第に焦りの度が深まってきていた。その理由は言わずもがなのことでありティムールがアヤグーズ軍とのコム星系の戦いで決定的な勝利を収めたからだ。皆このことで焦燥を感じずにはいられなかったのだ。

「アヤグーズに援軍を送るべきだ」

「いや、彼等に一旦国を放棄してもらおう」

重臣達の中でも意見が乱れていた。

「とにかくティムール軍は強い」

「これをどうするかだ」

その中でそのアヤグーズ軍を破ったティムール軍についても言及された。

「このままではアヤグーズ全土を占領されてしまう」

「そうなれば我々は西方において決定的に劣勢になる」

有能な者が減ってしまっているとはいえまだこの程度の戦略はわかる者ばかりであった。少なくとも彼等は極端に無能ではなかった。しかし、ではあったが。

「では援軍だ」

「それしかないであろう」

重臣の一派はこう主張する。

「するティムール軍を破れ。数だ」

「数で押し切ればどうにかなる」

こう考えるのがやはり二流であった。

「国力でも数でも我等の方が優勢なのだ。それを使えば如何にシャイターン主席とはいえ」

「押し戻せるぞ。そうして」

次に妄想に近い話になってしまうのだった。

「逆にティムール本土を占領できる」
「そうなれば話は終わりではないか」
「馬鹿な」
当然の流れであったがこれはすぐにもう一方に否定された。これが否定されるはっきりとした根拠も存在していた。
「ではオムダーマンはどうなるのだ？」
「オムダーマンか」
「そうだ、我々が対しているのはティムールだけではない」
彼等の言う根拠はこれに他ならなかった。
「彼等もいるのだ。彼等はどうするべきなのだ」
「彼等の方が数が多いのだ」
やはりもう一方も残念ながら二流でしかないのがここでもはっきりとした。彼等もまたやはり数しか見ていないからである。ここが問題なのにすら気付いていないのだから。
「彼等への備えにも兵を向けなくてはならない」
「ただでさえそちらも劣勢なのだぞ」
「しかしだ」
ティムールに兵を向けるべきであるという重臣達は反論する。
「ティムールを何とかしなければならないのは事実だ」
「それはわかっている」
もう一方も反論する。彼等もティムールが脅威であると認識はしているのである。問題はそれへの効果的な対策が見つけられないことである。
「しかしだ」
「兵がないというのか」
「そちらに向けるだけの兵がな」
彼等はそれを主張する。
「オムダーマンに向けなければならない」
「オムダーマンは今どうしているか」
ここでそれが問題になる。

「動いているのか？」
「また北上を開始した」
そしてこう言われた。
「ゆっくりとだが。その速度は次第に速くなってきている」
「北上してきているのか」
「彼等の目指す場所は一つしかない」
そしてこう言われる。
「我等のいるこの王都だ。王都を狙っているのだぞ」
「それはティムールも同じだ」
話が半ば水かけになってきていた。
「ティムールもまたこの王都を狙ってきているのだぞ」
「それもわかっている」
わかってはいるのだ。そこまで愚かではないのだ、双方共。
「それもな。しかしだ」
「しかし。オムダーマンが気になるか」
「どちらを先に倒すかだ」
「どちらもというわけにはいかないぞ」
「優先順位を決めなければな」
それが今話される。
「優先順位か」
「それをどするかだ」
「ではまずはティムールだ」
また同じ反ティムール派から言葉が出た。
「それしかないな」
「その根拠は何だ？」
「国力だ」
彼等の言う根拠はそれであった。ティムールの国力であった。

## 第二十八部第五章　優位性その二

「国力か」
「そうだ。ティムールの方が弱い」
彼等は言う。
「弱い方を叩く。それでだ」
「ティムールを先に倒すというのか」
「その通りだ。弱い方を先に倒す」
言うならばこれは戦略において常套手段である。彼等も今はそれに倣っているのだ。一応は戦略がわかっているということであった。
「それが普通だと思うのだがな」
「違うな」
それにすぐに反論が返る。それは反オムダーマン派からである。彼等の反論もかなり形式的なありきたりのものになっている。ただし彼等にその自覚はない。
「違うだと？どういうことだ」
「国力だと言ったな」
問題はそこであった。彼等も国力について話すのであった。
「国力ならオムダーマンを先に倒すべきだ」
「何故そうなる？」
「彼等の国力故だ」
彼等もまたオムダーマンを見る理由は国力であった。そうした意味においては反ティムール派と考えることは同じなのであった。
「どういうことだ？」
「オムダーマンの国力の方が上ではないか」
反ティムール派はそこを指摘する。
「それでどうして彼等なのだ」
「解せんぞ、全く」
「強敵を先に倒す」

彼等はそう答えた。
「手強い相手をまずは全力で倒し」
「そうして憂いを消すか」
「困難は先に消すに限る」
彼等は言う。
「そうすればいいではないか。脅威は先に取り除く」
「違うか？」
これもまた戦略であった。彼等もまた戦略によりオムダーマンを先に倒すことを主張していたのだ。やはり彼等も戦略がわかっているのだ。一応はであるが。
「いや、その通りだ」
「一理あるな」
反ティムール派もそれは認めるところであった。
「一応はな」
「一応はか」
「そうだ。だが賛成はできない」
反ティムール派は言う。
「決してな」
「それは何故だ？」
「決まっている。それでは勝てないからだ」
彼等はこう言って反オムダーマン派の主張を否定してきた。
「勝てないだと」
「そうだ。オムダーマンを相手にするにはそれだけ力が必要だ」
これわかっていることであった。
「彼等を相手にして勝ったとしよう」
「うむ」
仮定であるがその前提が置かれた。
「しかしその後余力は残っているか」
「余力だと？」
「そうだ。その後でティムールの相手をしなければならない」

これはどちらにしろ決まっていることであった。ハサンはオムダーマンもティムールも相手にしなくてはならない。彼等がそれぞれハサンに侵攻してきているのだからこれは当然であった。ハサンは双方を倒さなければ生き残ることができないのである。それも絶対にだ。これはハサンの者達には脳裏に刻み込まれていた。

「その余力でティムールの相手をできるのか」

「可能だ」

反オムダーマン派はそれは可能だとする。

「可能だというのか」

「そうだ、我等の全力でオムダーマンを倒せばだ」

「全力でか」

「ティムールには最低限の戦力を置き抑えにする」

彼等の戦略ではこうである。

「そうしてその間にオムダーマンをだ」

「できるのか？」

反ティムール派はそれを主張する。

## 第二十八部第五章　優位性その三

「それでオムダーマンを倒せるのか」
「国力を見ろ」
また国力が出るが今度はその国力を見る対象が違っていた。
「ハサンとオムダーマンでは国力は違う」
「だから大丈夫だというのだな」
「そうだ」
反オムダーマン派は頷いてみせる。
「だからだ。安心していい」
「ならばティムールを先に倒すべきだ」
「その通り」
ここで反ティムール派は主張する。
「ティムールの方が国力が低いではないか」
「まずは彼等を先に倒すべきだ」
「ティムールを全力でか」
「そうだ」
彼等もここで言うことは同じであった。双方共言っていることは同じである。ただ彼等自身がそれに自分達でもお互いでも気付いてはいないだけなのである。
「そしてそれからオムダーマンだ」
「それでよいではないか」
「ではその間のオムダーマンへの備えはどうするのだ」
話がそのままティムールからオムダーマンに替わっただけである。しかし彼等はそれに気付くことなく話をしているだけなのである。
「最低限でいいではないか」
「足止めでな」
やはり言うことは同じであった。
「その間にティムールを倒し」

「返す刀でオムダーマンをだ」
「ふん」
反オムダーマン派はすぐにそれを否定した。一笑に伏してみせたのだ。
「愚かな話だ」
「何っ！？」
「我々が愚かだというのか」
「そうとしか言い様があるまい」
反オムダーマン派は自分達のことには気付くことなく反ティムール派に冷たい声で言い返すのであった。
「オムダーマンがそれで止められるものか」
彼等はこう言って否定するのであった。
「彼等の力はティムールの比ではない」
「最低限の力ではオムダーマンを止めることは不可能だ」
「ではティムールにはそれができるというのか」
「そうだ」
彼等は毅然として反論する。胸を張ってさえいる者までいる。
「確実にな」
「国力を見ろ」
「それで止めれたらいいがな」
「何っ！？」
「何が言いたい」
反オムダーマン派に有利になったと思われたところで振り子がまた戻った。実によく揺れる振り子であることだけはわかるものであった。
「止められるものか。その程度でな」
「だからこそティムールを先に倒すというのか」
「そうだ、まずはティムールだ」
彼等も引かない。
「彼等をまず倒すべきだ」

「いや、オムダーマンを先にだ」
そして反オムダーマン派もこれは同じであった。
「先には倒すべきである」
「それこそ何もわかっていない証拠だな」
「それはこちらの言葉だ」
彼等の話は何時まで経っても平行線であった。そうして時間だけが過ぎようとしていた。このことはハサンを指導する王室の耳にも届いているのであった。王は謁見の間で太子しかいないのを見計らってそっと彼に問うのであった。
「近頃重臣達が騒いでおるな」
「はい」
太子もそれを否定しない。こくりと頷くだけであった。
「オムダーマンを倒すべきかティムールを倒すべきか」
「どちらを優先させるかで騒いでおるのだな」
「その通りです」
そう父王に対して述べた。
「陛下の御心を騒がせてしまっていますが」
「それはよい」
王はそれには構うところがなかった。穏やかな声で息子である太子に対して告げた。
「今はこのような時だ」
そうしてまた告げる。
「重臣達が騒ぐのも無理はない。それだけ国を案じているということでもある」
「このハサンを」
「考えてもみよ」
王は穏やかな声のままでまた語る。
「本当に憂いているからこそ言い合うのではないか」
「確かに」
太子もそれはわかる。はっきりと。

「少なくとも国を売るよりはましであろう」
「そうした輩は決して表には出ぬものですし」
これは何時の時代でも同じである。所謂売国行為というものが破廉恥なものであるのは言を持たないからである。もっとも中には堂々と敵国が攻めて来たならば頭を下げればいいと主張する輩もいたのだが。これは少なくとも例外中の例外である。そうはいないものだ。

## 第二十八部第五章　優位性その四

「裏側も調べていますが」
「内通者はいるか」
「今のところ見当たりません」
太子はこう父王に対して述べた。
「幸いにして」
「ハサンは中は纏まっているのだな」
「今においても」
それは彼等にとって幸いであった。確かに敗北が続いているがそれでもハサンの中は纏まっていたのである。そして戦意も高いものであった。まずはそれは彼等にとってはよいことであった。
「それは御安心下さい」
「わかった。ではそれは満足しておこう」
父王もこれには安心するのであった。そうしてまた述べる。
「そしてだ」
「はい。次は」
「戦局だが」
話は自然にそちらに移るのであった。
「今どうなっているか」
「芳しくはありませぬ」
こう答えるしかなかった。だからこそ今も重臣達が二つに分かれて話をしているのである。上手くいっていればこんな話をする筈もないのだ。
「残念ながら」
「そうであろうな。アヤグーズも敗れたそうだな」
「はい」
太子は隠しはしなかった。それも素直に述べる。
「コム星系において」

「ブルコルジ女王は無事か」
王は次にそれを問うた。それもまた気掛かりのことであったのだ。
「それはどうなのじゃ？」
「女王には何の問題もありません」
太子はこれについてもそのまま述べた。
「健在です」
「左様か」
「軍も。アヤグーズ軍も救援の我が軍も損害はありましたが」
「まだ戦えるか」
「戦うにはいささか厳しいかと」
彼はこう読んでいた。この読みに関しては重臣達と同じであった。コムでの戦いは言うならば決戦であった。それに敗れたということはやはり決定的なものがあるのである。
「このままではアヤグーズは」
「滅亡の危険があるな」
「その通りです。これにどするべきかですが」
「わしとしてはだ」
王はここで己の考えを述べるのであった。
「アヤグーズを失いたくはない」
「アヤグーズを」
「あの国とは長い付き合いだ」
ハサンにとってアヤグーズとはただの属国ではないのだ。パートナーに近い存在なのだ。アヤグーズの武勇に昔からかなり助けられている。ハサンの属国の中でもこの国は別格と言える存在であるのだ。だからこそ王はここでは己の考えを述べたのである。
「それを考えるとな。見捨ててはおけぬ」
「陛下の御考えはそうですか」
「そうだ。それにだ」
王はさらに太子に対して述べる。
「戦略的にもそうであろう」

「アヤグーズを失うべきではないと」
「そう思わないか」
それを太子に問うのであった。
「アヤグーズは要地だ」
「はい」
これもまたよく知られていた。アヤグーズが尚武の国になったのはその場所によるところが大きいのだ。ハサン西方の重要な守りであり続けているのである。これはエウロパのサハラ侵攻の時でもそうであり北方から東方へ雪崩れ込むのを防いだこともあるのだ。
「だからだ。それを失えばティムールを利することになる」
「では陛下は」
父王に対して問うた。
「まずはティムールに対するべきだと仰るのですね」
「オムダーマンはまだそこまで迫ってはおらぬのだろう？」
また太子に問う。

## 第二十八部第五章　優位性その五

「ジェルムを占領してからは」
「次第に北上をはじめておりますが」
一応はそれを報告する。
「ですがこの王都との距離は」
「かなりのものであろう」
「その通りです」
距離的には西方から攻めるより北方から攻めた方がこの王都ブルジルトに近いのだ。しかもその差は結構なものである。戦略においては距離もまた非常に重要なものなのだ。
「ではまずはティムールだ」
「ティムールですか」
「オムダーマンに対してはまだ備えが多くある筈だ」
「それは確かに」
その通りである。ジェルメからブルジルトまでにもかなりの軍事施設がある。それを一つずつ破っていくのは容易ではない。だが西方に関しては違うのである。
「だが西方はな」
「アヤグーズの他には拠点はこれといってありません」
それがハサンの防衛上の弱点であるのだ。ハサン西方はあまりにもアヤグーズに頼り切っていたのが今までだったのだ。太子はそれをかなり改善していたとはいえ限度があった。
「では決まりだ」
王は告げた。
「まずはティムールだ」
「ティムールですか」
「そうだ。オムダーマン方面だが」
「そちらはどうされますか？」

太子は己の考えを述べることなく父王に対して問うた。
「それは今のままの戦力でいいだろう」
「今のところはですか」
「そうだ、今のところだ」
彼の判断はこうであった。
「戦力的にも西方に向けている戦力よりは遥かに多いな」
「はい」
その言葉に頷いて肯定した。
「その通りです」
「では今の戦力のままで専守に徹するように告げよ」
「ダビデブ提督に」
「そうだ。元帥にもな」
ダビデブの名は王も知っていた。ハサン軍の柱石の一人でもあるからだ。それだけにその信任はかなりのものでもある。昔から知った顔でもある。
「守りに徹するようにとな」
「わかりました」
それは太子も受けた。
「ではそのように元帥には伝えておきます」
「うむ、頼むぞ」
「それで陛下」
太子は話が一段落ついたところでまた父王に声をかけてきた。
「今度は何用じゃ」
「この度のアヤグーズの損害ですが」
「敗戦じゃ。かなりのものであろう」
「ええ。ですがそれは最低限に抑えてあります」
それは断っておくのであった。
「何とか。撤退戦も上手くいきましたし」
「我が軍の将兵も頑張っておるな」
「彼等の力の限りは」

「よいことじゃ」
王はここでは太子の言葉の最後の意味まではわからなかった。ただ表面だけを受けて喜びの声を述べるだけであった。
「その力があるうちはまだ安心じゃ」
「安心ですか」
「人がある限り国はある」
これはこの王の持論である。それを今太子に対して述べたのだ。
「その人の心がまだあるうちはな」
「それはその通りです」
太子は一旦はその言葉に頷いてみせる。
「ですが」
「人材が物足りぬか」
「御言葉ですが」
彼が言いたいのはそこであった。それを今言うのであった。
「何分減り過ぎました故に」
「今更言っても詮無いことじゃが」
王はその言葉を受けて顔を曇らせる。その顔で太子にまた述べた。

## 第二十八部第五章　優位性その六

「あれはやはり間違いないか」
「そうとしか考えられません」
太子もまたそれに応えて述べる。
「ティムールの仕業としか」
「狡猾よのう」
王はそれを聞いてまずはティムールをこう評するのであった。その曇らせた顔で。
「シャイターン主席は」
「しかもただ狡猾なだけではありません」
太子はさらに言う。
「その軍略も政治能力もまた」
「傑出したものがあるな」
「まさに英傑と呼ぶに相応しい人物です」
敵とはいえそれは正当に評価していた。敵とはいえその能力や素養を素直に評価できるだけの分別も力量も彼には備わっていた。
「まさしく」
「そうじゃな。しかしあの者はあまりにも」
王の顔の曇りにさらに暗さが加わった。その声にも。
「陰が強過ぎる」
「従って英雄ではありません」
太子は言う。
「強いて言うならば」
「梟雄か」
王も言った。
「あの者は梟雄じゃな」
「まさしくそうであると」
太子もまたそれに応えて述べた。

「危険な男です。敵にするにはあまりにも」
「そうじゃな。今我等はその危険な男を相手にしておる」
王がティムールを優先的に相手にするべきだと考える理由にはこれもあるのだ。シャイターンという男をそれだけ危険視しているということなのだ。
「じゃから。先に倒しておきたいのじゃ」
「だからこそですか」
「わしの考えは間違っておるじゃろうか」
王はそれも太子に対して問うた。彼とて己の考えが常に正しいとは思ってはいない。こうして時としてそれを振り返ることも必要なのだとわかっている。ただしそれはあくまで己の気付く範囲内であるのもまた彼の限界であろうか。それは中々気付かないものであるのだが。
「どうじゃろうか、そこは」
「そうですね」
太子は父王の問いに対して考える顔になった。そうしてまた述べてきた。
「間違ってはいません」
「正しいか」
「そうとも言えません」
その応えは曖昧なものであった。太子の表情はしっかりしているというのにだ。
「これは重臣達についても言えますが」
「正しいということはないのか」
「というよりはです」
そうしてここで述べてきた。
「正しいかどうかは後で決まることです」
「後でと申すか」
「そうです。強いて言うならば」
彼はまた言う。

「それが正しいかどうかわかるのは後になってからです」
「ふむ」
王はそれを聞いて太子が何を言いたいのかわかった。そうして曇った顔から納得した顔になって頷いてみせたのであった。
「それではそれがわかるのは我等が生き残った時じゃな」
「生き残ることができれば正しいのです」
彼が言いたいのはそれであった。シビアな現実であるのだ。
「しかし滅んだその時は」
「間違っておるのじゃな」
「そう評価されます」
評価されると。あえて他者にそれを委ねてみせた。
「全ては生き残るかどうかです」
「結局はそうなるのじゃな」
「それを書くのも我々ではありませんし」
「歴史家達か」
結論はそうであった。どの選択が正しくて間違っているかを判断するのは今そこにいる者達ではないのだ。後世の歴史家達なのだ。彼等が資料を調べ総合的に研究してそこから己の主観も交えて判断を下すのである。主観が入るのは人として当然のことであり多少は止むを得ない。しかしそれはあくまで程度の問題でありそれが過ぎると問題になる。これもまた匙加減が大事なのである。

## 第二十八部第五章　優位性その七

「そうです。判断を下すのは彼等です」
「難儀な話じゃな」
王はそれを聞いて困った顔になるのを自分でも感じた。
「我々ではないのも。また」
「また？」
「アッラーではないのじゃな」
「はい」
アッラーについては彼も言った。
「アッラーはアッラーで既にそれはお決めになられています」
「既にか」
「御存知なのはアッラーだけ」
彼もまたムスリムである。だからこそここではムスリム独特のイスラム的運命論にのっとって言葉を出すのであった。ムスリムとして。
「既に何が起こっているのは」
「本当の評価もアッラーだけが御存知なのじゃな」
「そうなります」
そっれもまた頷いてみせた。
「歴史家達の評価はそうした意味では真のものではありません」
「人の評価はそうなるな」
王はアッラーを基に考えてそう言うのであった。人ではなく神をその基軸としたならばそういう見方になるのであった。何を基軸とするかでそれは変わるのだ。
「では気にすることはないか」
「気にしても仕方ありません」
結局はそうなるのであった。
「どうせ今の我々があれこれできるものではないのですから」

「そうじゃな。その頃には我々は生きてはおらん」
「生きていても何かをできるものではありませんし」
太子はこうも言うのだった。
「連合やマウリアの者達が何を言っても我々には」
「あの者達が何かを言ってもな」
それについては王もあれこれ言うつもりはなかった。そのせいかその言葉も実に醒めたものであった。その醒めた声で言うのであった。
「気にすることもない」
「左様ですか」
「別の世界の話じゃ」
その理由はこれであった。
「サハラではない。サハラであっても言うつもりはないが」
「他者の口には鍵はかけない」
太子は言った。
「それが侮辱や罵倒ではない限りは。それはハサンの法にありますし」
「我等はナベツーラの如き下賤とは違う」
ナベツーラについては彼等も知っていたのだ。
「マスコミを使ってその様な真似はせぬ」
「それでいいのです」
これについては太子も同じ考えであった。
「正しきことも悪しきことも言わせておけばよいのです」
「むしろ大事なのは」
「その多くの言葉から正しきことを見つけることです」
それこそが太子の考えであった。
「今もまたそれは同じです」
「そうじゃな。何が正しきかを見つけることじゃ」
こうした意味で話は元に戻っていた。
「それでじゃ」

「はい」
太子もまた父王のその言葉を受けて応える。
「ティムールじゃ。よいな」
「わかりました」
「わしはそれが正しいと思う」
だからこそそれを今言うのである。
「シャイターン主席を放っておくことはできぬからな」
「それではそのように」
太子はその言葉に頷く。それで表面は納得した。表情には出していないがそれでも実の父である王に対して見抜かれてしまったのであった。
「不満か」
「いえ」
その問いには一旦は否定した。
「それはないです」
「しかし違う考えだな」
「それは否定しません」
これはあえて述べてみせた。

## 第二十八部第五章　優位性その八

「私としてはオムダーマンを先に倒すべきだと考えるのですが」
「オムダーマンか」
「そうです。先にオムダーマンを倒すべきです」
彼は言うのであった。
「まずはオムダーマンです」
「彼等の方が脅威か」
「そう思います」
彼は言う。
「ティムールにはシャイターン主席がいますが」
「オムダーマンにはアッディーン副大統領がいるか」
「そうです。彼の軍略はかなりのものです」
太子はそれを見抜いていた。というよりは熟知していた。彼の戦略戦術をこれまでの彼自身の戦いを見てきて知っているのである。
「我々との戦いでもそうです」
「アステロイド帯を突破したそれか」
「そうです」
それもまた言うのであった。
「そしてジェルメの戦いにおいても」
「あれもまた見事だったな」
王も当然ながらそれは知っている。ジェルメで負けたのは己の国の軍であるからだ。負けた方がそれを知っているのもまた真理であるのだ。
「まさか勝てるとは思わなかった」
「オムダーマンが」
「わしは確かに軍の最高司令官だ」
国家元首が軍の最高司令官であるならばハサン軍の最高司令官はハサン王国国家元首である国王の彼がそうである。これはまず大前

提としてあることだ。
「しかしだ。残念だが軍のことは昔からな」
「それは」
「いや、これは事実だ」
自分で己の欠点を知ってはいた。
「それは認める。そのわしの言葉だが」
「あの戦いは私もまず大丈夫だと思っていました」
王に代わって太子が答えた。
「あのままで勝利は確実でした」
「太子はそう思うか」
「私だけではないかと」
そしてこうも述べた。
「ダビデブ元帥の布陣は完璧でした。先の国境の時よりも」
「あの時よりもか」
「流石と言うべきものでした」
こうまで評してみせる。実際にジェルメの戦いは連合でもマウリアでもハサン軍が勝利しオムダーマン軍は苦境に陥るとの見方が強かったのだ。それからハサンはオムダーマン軍を少なくとも自国領から排除しその軍をティムールに向けそれで彼等は国難を乗り切ると見ていたのである。しかしそれは裏切られた予想であった。今となってはそうなってしまっていた。
「あれで勝てない筈はなかったのです」
「見事な護りだったな」
「ええ」
王の言葉に頷く。
「しかしそれはならず」
「ジェルメは奪われ多くの兵が失われた」
「ジェルメはよいのです」
太子はそれはまだよしとした。
「確かに戦略的要地でありそこを失うことは我々にとっては深刻で

すが」
「しかしそれ以上に」
「多くの兵を失いました。ジェルメは取り返すことができます、しかし」
「兵はそうではないな」
「そうです。今予備役に大規模な召集をかけていますが」
「アヤグーズ以西、ジェルメ以南はもう無理だな」
「それもあります」
既に敵に占領されている星系から兵を集めることは不可能である。これは言うまでもない。それができれば何の苦労もいらない話である。
「熟練兵も失っていますし」
「それもまた今後に大きく影響してくるな」
「残念なことに。兵は戻りません」
あまりにも痛い現実であった。ハサンにとっては。
「将と同じく」
「それの穴埋めも容易ではないか」
「ジェルメでの損害は大きいです」
それをまた言う。
「暫くそれを回復させることも必要でした」
「それは上手くいっているか」
「何とか」
王に対して答えた。

## 第二十八部第五章　優位性その九

「数のうえではですが」
「数では、か」
「数だけです」
こうも言ってみせる。
「戦いは確かに数が重要なのですが」
「それだけではないな」
「質もまた重要です。ただでさえ我々の兵がオムダーマン、ティムールに比べて質では劣ります。これは紛れもない事実です」
「左様か」
「はい」
答えるその言葉が苦々しいものになっていた。
「残念なことに」
「それはやはりあれか」
王はその原因が何であるか察した。
「戦争が少なかったせいだな」
「その通りです」
そう王に答えたのであった。
「やはり戦争は兵を強くします」
「そうだな」
王もまたそれを認めて頷く。
「やはり戦争が兵を強くする」
「そうです」
「訓練よりも実戦か」
「勝利すればの話ですが。それが兵を強くさせます」
「そうだな。だからこそオムダーマンもティムールも強力だ」
そういうことであった。特にオムダーマンは西方、南方を統一してきた。その中での多くの戦いが彼等を鍛え上げているのである。

それが彼等の精強の最大の理由であった。
「その彼等を前に多くの熟練兵を失ったのは」
「堪えることです」
「それに対してはどうするか」
「やはり数です」
まずはそれであった。
「先程数を否定はしましたが」
「それでもか」
「はい。何と言ってもそれがなければどうしようもありません」
こうも言ってみせた。
「戦争は多くの兵でするもの。寡兵はそれだけで敗北に近いのです」
「では動員は最大限だな」
「そうです」
太子のここでの考えは間違っていなかった。むしろ戦略においては正道であった。
「動員は一回で済ませます」
「一回でか」
「その通りです。一度で集め」
これは孫子にもあることであった。
「それで全てを終わらせます」
「召集に関してはか」
「既にそうはなっていないのが無念ですが」
既に開戦前に兵を集めてある。それで今また集めるということに彼は自分自身に対して不満を抱いているのであった。そういうことである。
「そうします」
「わかった。ではそのようにな」
「はい。そしてです」
言葉をさらに続けた。
「それを訓練の後で戦場に向けます」

「そうだな」
まずは太子のその言葉に頷いた。
「それにはどれだけかかるか」
「予備役を招集しますので訓練の時間は短いです」
予備役は普段からある程度の軍事訓練を受けている。それが救いであった。
「ですから最悪で三ヶ月かと」
「三ヶ月か」
「はい、それだけの期間は最悪で見積もっています」
「あくまで最悪か」
王は最悪でそれだけと聞いてまずは安心したようであった。
「ならばよい」
「それで宜しいのですね」
「それだけの時間があれば間に合うな」
「三ヶ月ならばギリギリといったところです」
そう答える太子であった。
「時間的には」
「ならばよい。わしはそう思うぞ」
「目標としましては一月です」
次に目標とする時間を述べた。

## 第二十八部第五章　優位性その十

「それだけあれば戦場に送ることが可能です」
「召集をかけるのは兵や下士官だけか」
「将校もです」
それも既に決めていることであった。
「予備役の将校も総動員します」
「うむ。持てる戦力を全て使うのか」
「この戦争は余力を残せるものではありません」
彼の言葉は真剣そのものであった。
「どちらも油断のできない相手なのは間違いないのですから」
「その通りだ。だからこそ」
「ハサンの持てる力を使うのです。予備役の提督も全員出てもらいます」
「将も少ないのだな」
「残念なことに」
ハサンに今足りているものはなかった。とりわけ軍人は。だからこそ動員できるものならば何でも動員しているのであった。そうした状況だったのだ。
「艦艇はかろうじて間に合っていますが」
「そちらも増産させているのだな」
「勿論です。損害は予想以上です」
「そちらもか」
「将兵も艦艇も」
太子の言葉は苦渋に満ちていた。
「全てが足りなくなりつつあります」
「艦艇も旧式のものを動員しろ」
「はい」
太子は王のその命令に頷いた。

「使えるものならば使う。それに従えば」
「旧式といえど使わなければなりません」
「そういうことだ。ならばいいな」
「はい、それでは」
「第一線でなくとも」
王の言葉には止むを得ないという意識も見られた。
「戦力となるのならばな」
「何でも使うしかありません。今でこの有様です」
「これがさらに劣勢になれば」
ハサンにとっては今最も考えたくはないことである。しかしそれでも考えずにはいられなかったのだ。それだけ追い詰められようとしているからだ。精神的に。
「より酷いことになるな」
「民間船を改造してでも」
「そこまでか」
「あくまで最悪のケースです」
サハラでは滅亡寸前の国家が民間の船舶を徴集して簡易な改造を施してそれで戦うということがままある。もっともそこまでしても滅亡する時はするのであるが。実際にそこまで追い詰められた国家は大抵そこで滅亡してしまっている。軍艦がなくなればもうそれで終わりなのだ。
「しかしそれもまた」
「考えねばならんな」
「今のところそこまでは至っていませんが」
「ならばよいが。しかし」
「しかし？」
「戦局よりも戦っている者の心の方が問題だな」
王は少し間を置いて溜息と共に言うのであった。
「どうにもこうにも」
「戦っている者の方がですか」

「そうだ。劣勢ならばだ」
彼は言う。
「それだけ追い詰められていく。しかもじわりじわりと」
「堪えますか」
「太子はそうではないのか？」
太子の目を見て問う。彼の本心を問うていた。
「そうした状況は。辛くはないのか」
「私よりも前線の将兵達の方が遥かに辛いでしょう」
ここで彼は国政を預かる者としていささか優等生的な言葉を出してきた。
「何しろ彼等がその劣勢を最も感じているのですから」
「そうか」
「それで陛下」
そのうえで彼は言ってきた。
「今後のことですが」
「何か考えがあるのか」
「私も前線に向かって宜しいでしょうか」
鋭い声と言葉になった。それで以って王に対して問うのであった。

## 第二十八部第五章　優位性その十一

「そして直接敵を破りたいのですが」
「敵をか」
「はい」
彼は毅然として答える。
「それをどうか。お許し下さい」
「ならぬ」
だがそれは許されなかった。その申し出に対する王の返答は厳しいものであった。
「それはならぬぞ」
「左様ですか」
「そなたはハサンの柱石」
それが理由であった。彼は実質的にハサンの摂政であり内政、外交、軍事の指導者であるのだ。つまりハサンは彼により動かされてきているのだ。その彼を前線に行かせることは王として到底認められないことであった。だから許さないのであった。
「そのそなたが王都を離れてどうするか」
「左様ですか」
「そして万一があれば」
そうした心配もあった。
「ハサンはどうなる。それだけはならぬ」
「わかりました」
ここまで言われては彼も動けなかった。大人しく従う他ない。ここが彼の弱いところでもあった。流石に父王の言葉を退けることは容易ではないのだ。
「それではこのまま都に留まり」
「全体の指揮にあたるのだ。よいな」
「はっ」

王の言葉を受けて頷いた。
「それではそのように」
「してだ」
太子が納得したのを見てからまた問うてきた。
「そなたはどちらに向かうつもりだったのだ」
「どちらといいますと」
「オムダーマンかティムールか」
ここでどちらかといえばその二つであった。それ以外にはなかった。
「どちらに対して向かうつもりだったのだ」
「オムダーマンです」
その問いに対しての彼の答えはこれであった。
「オムダーマンに対するつもりでした」
「ティムールではないのか」
「ティムールも確かに危険です」
コムのことでもそれはよくわかっていた。王もそれを強く認識しているからこそティムールに戦力を向けるよう指示を決定したのである。
「しかし私は」
「オムダーマンを警戒するか」
「アッディーン副大統領は稀代の名将」
彼は言う。
「彼を止めなければなりませぬ故」
「そこまで言うのじゃな」
「はい。何としても」
毅然とした顔でまた述べてみせてきた。
「退けなければなりません、絶対に」
「その通りじゃ。しかしオムダーマンか」
「何か」
「思えば強くなったものだ」

王は己の言葉に感慨を込めて述べた。
「以前は我等と戦うことなぞ考えられもしなかったというのにな」
「今ではサハラ西方と南方を完全に手中に収めています」
「それじゃ。変わったわ」
それをまた言うのだった。
「我等を脅かすまでとはな」
「それは確かに」
太子もまた父王の言葉に同意であった。
「しかも僅かの間に」
「やはりあの男の力か」
「それしかありません」
ここでもアッディーンの名前が出た。
「彼の軍略により今に至るのです」
「それを考えればオムダーマンも危険なのだがな」
「それでもティムールをですか」
「どうしてもじゃ」
王は言う。
「捨てはおけぬ。それでよいな」
「どちらにしろ敵は倒さなければなりません」
これは放置してはおけない話である。戦略において優先順位を設けないというのはそれだけで失格である。王も太子もそれはわかっているのだ。

## 第二十八部第五章　優位性その十二

「それに順番をつけなければ」
「陛下はそれにティムールを。ですね」
「果たしてそれが正しいかどうかだが」
王の顔に迷いが現われた。
「どうかな。そこは」
「やはりそれは今答えは出ませんので」
「そうだったな。誰にもわからぬか」
「ですから陛下」
太子は王を宥めるようにして言う。
「ここはまず決断されるべきだったのです」
「そうして決断をしたか」
「そうです。それでよいのです」
「では今より命じる」
王は太子の言葉に励まされた。そのうえで告げた。
「ティムールを先に攻めよ。よいな」
「わかりました」
こうしてハサンの方針は決定された。まずはティムールであった。速やかに予備戦力が召集された。そうしてティムールに兵を向けていくのであった。
王都を出るハサン軍。太子はそれを己の宮殿の窓から見ていた。その壮麗な窓の向こうで彼はどうするべきなのか複雑な顔をしていた。
「決断は下した」
「はい」
太子の秘書がそれに応えた。
「それで迷ってはならないな」
「迷えばそれだけ傷が増えます」

彼は言う。
「ですからこれでよいのです」
「オムダーマンも気懸かりだが」
太子は王に対して言った同じ悩みを抱いていた。それを今己の宮殿の中で腹心である秘書に対してだけ述べていたのだ。
「どちらを先に倒すべきかだが」
「殿下はオムダーマンなのですね」
「私はそう考えている」
今それを秘書に対して告げた。
「アッディーン副大統領は。おそらくは」
「おそらくは」
「生きていればハサンを統一する人材だ」
「そこまでですか」
秘書はそれに問うた。
「それは殿下ではなく」
「ハサンにも私にもそうした野心はない」
太子の言葉は事実であった。実際のところハサンは今のままで満足していたのだ。サハラで最も豊かな東方を統一しているだけで。それでよかったのだ。
「だからだ。それは」
「興味はないのですか」
「今もだ」
彼は答える。
「敵を退けられればそれでいいのだ」
「ハサンを統一しなくとも」
「考えてもみよ」
太子はまた言った。
「アッバース朝の時代よりサハラは一つになったことがない」
「はい」
太子の言葉に頷く秘書であった。

「確かに。我等は常に争ってきました」
「それを考えると。このままでいいと思うのは」
「分かれたままでですか」
「これは北方の者に言わせれば全くの愚論であろうがな」
それは太子もわかっていた。統一された力がないばかりにエウロパの蹂躙を受け母なる星を追い出された彼等にしてみれば。しかし太子の立場ならそうなのであった。ハサン王国の太子である彼ならば。
「しかし私はこう思うのだ」
「サハラはこのままでよいと」
「統一もよし」
まずはそれを認める。肯定の言葉であった。
「しかし統一すればそれで終わりなのか」
「終わりですか」
「それで我々は幸せになれるのか」
太子は考える目と顔になっていた。それで己の秘書に対して問うのであった。
「どうなのか」
「そうではないでしょうか」
秘書は暫し考えていた。それからまた少し時間を置いた。それから一応はサハラの殆どの者が考えていることを述べたのであった。

## 第二十八部第五章　優位性その十三

「統一されて強大な力になれば。エウロパに攻められることもなくなります」
「エウロパはか」
「違いますか」
己の主に対して問う。
「エウロパに対して倍の力です。そうなれば」
「それでも争いは続く」
しかし太子は醒めた声でこう言うのだった。
「それでもな」
「それはどうしてでしょうか」
「確かに力は手に入る」
太子はそれはわかっていた。しかしその力が決していいものとは考えていなかったのだ。それもまたわかる言葉であった。
「しかしその力をエウロパはより警戒するだろう」
「警戒しますか」
「そのうえで謀略を仕掛けてくる」
彼は言った。
「我々に対してな。それと共に緊張が起こる」
「緊張が」
「常に緊張をはらんだ平和だ。しかも」
太子はさらに言葉を続けた。それはサハラの者達にとっては受け入れたくはない未来図であった。それを今太子は言うのであった。
「敵は彼等だけではなくなる可能性もある」
「彼等だけではない」
「連合だ」
太子は一言で述べた。
「連合まで敵に回すことも考えられるのだ」

「彼等を相手にするというのは」
「我々では不可能だな」
太子はこう考えていた。これは連合とサハラの国力の差をはっきりと認識しているからの言葉であった。あまりにも強大な連合の力を。
「彼等と対するのは」
「しかし連合とは今までは」
「確かにな」
実はハサンと連合中央政府及び各国との関係は良好である。友好関係にあると言ってもいい。しかし彼はそれに安心していなかったのだ。
「しかしそれはこれからも続くか」
「これからも」
「基本的に連合は敵対関係を望んではいない」
これもまたわかっていた。連合はあくまで実益を考えているだけだ。そのうえで武力を用いることはあまりにもリスクが大きい時代だ。それよりも経済制裁や関税を高くすることの方が連合らしい。実際に連合とハサンには過去そうした話が多く起こっている。
「だが。必要とあらば」
「武力での衝突も有り得ますか」
「そうだ。だからだ」
太子はまた言う。
「連合が我々を警戒する可能性もあるしな」
「今のままではそれはないですか」
「我々が中で争わざるを得ない限りは」
これが前提であった。
「しかしそれが一つになれば力は中には向かわない」
「外に向かう」
自然の理であった。その力の使い方もまた問題であるのだが。
「それを連合は警戒しているのだ」

「そういえば最近中央政府国防省がしきりに我が国との国境に備えを置こうとしているようですね」
秘書は太子の言葉を聞いているうちにそのことを思い出した。
「守りを固める為に」
「それも統一を睨んでのことだろう」
太子は秘書の言葉に応えた。
「だからだ」
「やはり。それでは」
「連合も警戒している。我々はこれまで異常に敵に囲まれる恐れがあるのだ」
「では統一すればすれば」
「問題は続く。それがゴールではないのだからな」
ゴールではない、その言葉は今までよりも重いものであった。
「ゴールではありませんか」
「英雄譚ならばな」
英雄の話を出すのだった。
「統一し。それで終わりなのだが」
「そうはなりませんか」
「歴史は永遠に続く」
それが太子の考えであった。

## 第二十八部第五章　優位性その十四

「統一されればそれはそれでだ」
「続きますか」
「そうだ。だからこそだ」
彼は言うのだった。
「エウロパにも連合にも警戒しなければならないのだ」
「それを考えればこのままの方がかえっていい可能性もあるのですね」
「私はそう考える」
実際に秘書にまた言う。
「わかったな」
「はい、確かにそうした考えも可能です」
秘書も主君の言葉に頷いてみせた。
「しかし。それでもです」
「やはり統一はされるべきか」
「私はこう考えます」
はっきりと太子に対して言ってみせた。
「サハラにとっては」
「難しい話だな。確かにそれはサハラの者達にとっては夢は」
「ついこの前はでは見果てぬ夢でした」
そうであったのだ。サハラはこれまで多くの戦いを経てその中で統一による平和が叫ばれた。イスラムでは戦争を肯定しているがそれでも無闇な戦は好むところではないのだ。
「しかし今は」
「だがそれはな」
「はい、我等による統一が望ましいのです」
「どうかな」
しかしそれにはやはり消極的な太子であった。彼はあくまで現状

維持を望んでいるのだ。
「私はそうは考えない。先に述べた理由でな」
「左様ですか」
「連合との戦いは確実な滅亡をもたらす」
彼はそう確信していた。
「彼等はバハムートだ」
「バハムートですか」
「そうだ。まさに宇宙を支える巨大な魚だ」
なお面白いことに連合ではどういうわけかバハムートは偉大な龍と考えられる場合が多い。しかしサハラではあくまでコーランにある通り巨大な魚なのである。
「人類社会においては圧倒的な存在であり続けている」
「その連合とは対峙できませんか」
「ただ対峙するだけで膨大な力を消費してしまう」
彼はそう考えていた。
「エウロパを見よ」
「エウロパをですか
「対峙するだけでそれだけ国力を消耗してきたか」
「ニーベルング要塞だけではなかった」
彼は言う。
「大艦隊を擁し。人材を育ててきた」
「一千年の間」
「それを見ていて私は思うのだ」
ふと太子の目が遠くなる。そうしてその目で語る。
「若しエウロパが連合と対立していなかったならば彼等は他のところに力を注げたな」
「はい」
これは容易に察しがつくことであった。対峙しているのは連合もまた同じであったが連合とエウロパではそもそもの力があまりにも違うのだ。

「間違いなく」
「開発なり技術革新にな。その力を注ぐことができた」
「しかしそれができなかった」
「軍備にかなりの力を注いできた」
それがエウロパの動きを制限させてきたと。こう言うのであった。
「それが為に。ああなってしまった」
「サハラ侵攻もそうですか」
「若しエウロパの開発が上手くいっていたらどうか」
太子はその可能性について言及する。
「どうなっていたと思うか」
「やはりサハラに侵攻することはなかったでしょう」
秘書にもそれがわかった。だとすれば人類の歴史も少なからず変わるのだ。
「そうなると」
「そういうことだ。これはサハラにも言える」
「我々にもですか」
「軍備に力を注げばそれだけ他の方面への力がそがれる」
力はそれぞれ限られている。だからそれを軍備にだけまわすことはできないのだ。しかし戦乱の場合。強大な敵を相手にしている場合は違う。それにかなりの戦力を向けざるを得ないのであった。それが問題なのである。
「今でもそうだがな」
「今もですか」
「しかしその割合が統一されて減るかというかとだ」
そこが問題なのだ。
「かえって増える可能性もあるのだ」
「周囲の全てを敵にすることにして」
「そうだ。流石に今まではそうではなかったな」
「はい、それに」
秘書は太子のその言葉にも応えた。

## 第二十八部第五章　優位性その十五

「今は交易もしておりますし」
「その交易もなくなる可能性があるのだ」
それもまた問題となった。今ハサンは連合、マウリアとエウロパの中継貿易も行っている。対立はあってもそれで完全に通商が切れるというわけではないのだ。これは大航海時代前のオスマン＝トルコと欧州諸国の関係と同じである。彼等は対立しながらも交易も続けていたのだ。もっともそれがオスマン＝トルコにとって一方的な暴利であったのだが。
「そうなれば余計に財政は苦しくなる」
「そうなりますか、やはり」
「そうだ。そのうえでこれまで以上の軍事費だ」
「考えたくないことですな」
思えばそれは暗い未来だ。太子は今それを見て語っているのであった。
「それは」
「無論そうなるとは限らない」
こうは断る。
「しかし。可能性はあるということだ」
「そうですか」
「皆無ではないのだ」
「戦いはまだ続く場合も有り得るとなると」
「それを考えるとどうか」
彼は秘書に対して問うた。
「統一は魅力的か」
「やはりそうなのでしょう」
しかし秘書はこう彼に答えた。
「一千年、いえアラブ時代からの悲願です。だからこそ」

「誰もが統一を望むか」
「そうです。その先に何があろうとも」
彼は言う。
「殆どの者がそれを目指すかと」
「難しいことだ」
太子はそこまで聞いて考える顔になった。
「思えばだ」
「ええ」
「統一を誰もが考えないとしよう」
「考えぬのですか」
「そうだ、各国のままで留まる」
これはかなり変わった考えであると言えた。少なくともサハラにおいては。
「それならば戦乱も今より遥かに減っていたとは思わないか」
「完全にはなくならずとも」
「サハラにおいてそれは不可能だ」
それは否定する。
「連合のように何かが得られなければ他の惑星を手に入れるということは出来ないからな。まだ我々の住む世界は限られている」
「そうですね」
その言葉に秘書も頷く。
「ですから完全には」
「しかし。統一を目指さなければここまで戦乱は激しくならなかったのだ」
逆説的な考えである。しかしそれだけに確かな考えでもあった。
「おそらくはな」
「その分だけサハラは豊かになっていたでしょうか」
「軍備への負担が減れば」
これがかなり大きいのだ。
「それだけな。かなりよくなっていた」

「そうですか。やはり」
「それにだ」
太子はまた言葉を続ける。
「他の方面に力を注げば」
「それだけ発展の可能性が高まりますね」
「軍備にだけ金を次ぎ込むのは愚だ」
彼はそうした考えの持ち主なのだ。
「軍備は出るだけだ」
「ええ」
出費しかないのだ。これはこの時代でも変わりはしない。それを考えれば連合が軍備に最低限しか使っていないのは当然であった。
「そこに過剰に注ぎ込んでいれば」
「何の意味もありませんね、財政的には」
「ひいては国家予算を不当に圧迫する」
そうしたことも懸念する太子であった。実際にそうしたことはサハラはおろか過去の歴史において非常によく見られてきたからである。
「だからだ。本当は最低限に抑えたいのだが」
「サハラではそれは」
「不可能に近い」
現実ではこうであった。

## 第二十八部第五章　優位性その十六

「おそらくこれからもな」
「そうですか」
「我々からは戦乱は離れられないものかも知れない」
その顔がまた曇る。
「このまま永遠にな」
「それがアッラーの思し召しでしょうか」
「それが思し召しと言えばそうなる」
太子はそれを否定しなかった。出来なかったとも言える。それは何故かというとやはり彼もムスリムだからだ。絶対的に帰依しているからこそだ。
「とどのつまりはな」
「そうなりますね」
「しかし。その先に何があるか」
「何でしょうか」
「誰にもわからない。しかし」
そうしてまた言うのだった。
「サハラもまた一つのうねりの中にある」
「宇宙のですね」
「その通り。そのうねりの結果として」
彼はまた述べる。
「統一ならばそれもアッラーの思し召し」
「戦乱が続くのもまた」
「然りだ。偉大なるアッラーのな」
「そうですか。ところで」
「何だ」
秘書の言葉の感じが変わったのに気付いた。それであらためて顔を彼に向けた。

「軍備も宜しいですが」
「他の問題か」
「はい、貿易についてですが」
話がそれに移っていた。戦いの最中においても貿易は行われる。当然ながら戦乱の起こっていない場所に限られるがそれでも行われているのは事実である。
「マウリアとの貿易は今途絶しています」
「うむ」
まず秘書のその報告に頷いた。
「致し方あるまい」
「戦乱の影響で。マウリアはそれで我々との貿易にあるルートを希望しています」
「あるルートというと」
「オムダーマンの占領宙域を通りたいとのことですが」
秘書はこう太子に述べてきたのであった。太子はそれを聞いてすぐに問うてきた。
「オムダーマンのか」
「そうです」
秘書も彼にまた答えてみせた。
「そうしてこちらと貿易したいと。その際の航行の邪魔はしないで欲しいとのことです」
「そうなのか」
「どうされますか？」
ここまで話したうえであらためて太子に問うのであった。
「この件に関しては」
「まだ貿易を行いたいとはな」
太子にとってはまずそれが頭の中を支配する要因となった。
「戦乱だというのに」
「戦乱でも利益を欲しいということなのでしょう」
秘書の言葉は冷徹なまでに実利的であった。

「彼等にしても」
「しかし安全は欲しいか」
「そこは天秤です」
天秤が話に出て来た。
「安全と利益を測りにかけて。重い方を選ぶのです」
「では今度は利益が重かったのだな」
「そうなるのはこれからです」
しかしここでは即答しなかった。
「これからの殿下の御言葉により」
「私の判断でか」
「その通りです。如何為されますか？」
じっと太子を見据えてまた問うてきた。
「航行の安全を保障されますか？それとも」
「我々の敵はあくまでオムダーマン軍及びティムール軍だ」
その問いに対する太子の最初の返答であった。
「あくまで彼等でしかない」
「ということは」
「そうだ。マウリアの、しかも商船には何の興味もない」
それをはっきりと告げたのであった。
「ムスリムの戦士が相手にするのは同じ戦士だけだ」
「では宜しいのですね」
「断る方がおかしい」
そうまで告げた。

## 第二十八部第五章　優位性その十七

「折角利益を求めてきているというのにな。そしてそれは」
「我々の利益にもなる」
「それを逃す道理はあるか？」
「いえ」
秘書は今の太子の言葉はすぐに否定した。
「ありません」
「そうだな。そういうことだ」
これで話は終わりであった。
「マウリアから話が出てくれて何よりだ」
「そうですね。そういえば」
「何だ？」
「彼等はオムダーマンにも話をしているのでしょうか」
秘書はここでふと思うのであった。オムダーマンの占領注意奇をつうかするからには当然彼等との話にもなる。彼が言うのはそこであったのだ。
「その辺りはどうなのでしょうか」
「当然話はしているだろう」
太子は当然であると言うようにそう述べた。
「そうでなければまずこちらにも話が来ない」
「それもそうですか」
「それにこれはオムダーマンにも利益になる」
そうしてこうも言う。
「宙域を通るのはそれだけではないからな」
「金もかかりますか」
「通行税もな」
これもあった。
「もっともマウリア人達の怒りを買わないようにそれは最低限であ

るだろうが」
「それでもあるとないのとでは大違いですね」
「零と一の差はただの一ではない」
こう述べた。
「そこには無限のものがあるのだ」
「無限ですか」
「そうだ。皆無と数だ」
確かにそこには絶大な違いがあった。何もないのと僅かに何かがあるのとではそもそも大きな違いなのだ。太子は今それを言っているのである。
「全く違う。彼等がどちらを取るかというと」
「やはり一ですね」
「アッディーン副大統領も伊達に副大統領になっているわけではない。当然だな」
「ええ」
「それはいい」
オムダーマンが利益をあげるのを構わないと述べてみせた。
「それはな」
「宜しいですか」
「それに我々が言ったところで何にもならない」
諦めるしかないといった感じの現実的な言葉であった。
「実際のところはな」
「そうですね。オムダーマンのことですから」
「精々抗議をするだけだ」
「では抗議は」
「それもしない」
素っ気無く述べた。
「わざわざマウリアの気分を害するつもりもない」
「左様ですか」
「我々の利益には確かになっているしな」

「やはりそれが大きいですか」
「一番だな」
こうまで言ってみせる。
「それがやはりな」
「利益になる、ならないですか」
「国と国の付き合いは結局はそうだ」
それはサハラにとっても同じことなのだ。
「利益にならずに対立が深くなれば」
「それが戦争になると」
「簡単に言えばそうなる。さて」
話が一旦止まりそこから変わった。
「その対立の頂点であるその戦争だが」
「はい」
秘書もそれに応える。

## 第二十八部第五章　優位性その十八

「どうなるかな」
「それはこれから次第ですね」
秘書の言葉は決して楽観してはいなかった。むしろ冷たい響きを持っていた。
「どうなるかは」
「そうだな。それにしても」
「何でしょうか」
「我々は。少し平和に浸り過ぎたか」
太子の目は過去を悔やむ色があった。
「それが今こうして出ているのかもな」
「平和ですか」
「平和になるのはいい」
それにいいに越したことはない。しかしそれには時と場合が大きく関係する。太子はそれもまたわかっていた。そのうえでの言葉なのだ。
「だが。周りが剣を研いでいるならば」
「それは死に直結しますか」
「そうなる可能性は高い」
そういうことであった。
「これが連合ならばいいのだ」
「連合ならば」
「そしてマウリアも」
話はマウリアにも及ぶ。
「力があり周りに敵がいない。いても」
「充分に防げる相手ならば」
「平和に浸っていてもいい。それでやっていけるのだからな」
「しかしそうでない場合は」

この場合はハサンに他ならない。それはこれまでの言葉のやり取りからわかることであった。
「言うまでもない。今の我々だ」
「今の、ですか」
「平和ボケだったか」
当然ながらいい意味の言葉ではない。
「この言葉は好きではなかった」
「そうなのですか」
「平和は尊い」
誰であってもこれは同じだ。これを否定できるとすればそれこそ何かおかしな考えや利権の持ち主であるがそうした人物は滅多にいない。平和であった方が産業等が栄え利益を生じ易いからだ。連合において軍需産業が振るわないのもこkに大きな理由があるのである。
「しかし。それに慣れあまりにも浸かっていると」
「溺れてしまいますか」
「そうなる。剣を持つことすら忘れてしまってな」
「剣さえも」
「そんなつもりはなくともだ」
それを自覚できればいい。しかしそれが出来ないならば敵を前にした時にただ切りつけられるだけである。それが戦乱に覆われた場所ならば尚更のことである。
「そうなってしまうのだ」
「今の我々もですか」
「ハサンの兵だが」
自分達の兵である。他ならない。
「彼等についてどう思うか」
「やはりオムダーマン、ティムールに比べて弱いものがあります」
「そうだな」
これもまた大きかった。何時の時代にも兵の強さは大きなものを

持っているのである。例えばプロイセン軍が恐れられたのは総司令官であるフリードリヒ大王の軍略によるものであるがそれと共にプロイセン兵の強さもあったのだ。その軍律と訓練が支えていた強さである。そこに後に実戦経験と勝利による自信も加わってそれはさらに強いものになるのだ。

「やはり長い間戦争をしていなかったせいですか」

「それに浸っていてな」

太子は言う。

「やはりそれもまたあるな」

「はい。弱兵ですか」

「その弱兵で果たして凌げるかどうか」

彼のその整った顔が曇る。

「それが問題だ」

「凌ぐしかありません」

それに対する秘書の言葉はここでも現実的であったが冷たいものであった。

「そうでなければ我々は」

「そうだな。ここは」

そうして言うのだった。

「彼等に期待しよう。それでもな」

「はい、他ならぬ我々の同志達なのですから」

この場合の同志とは同じ国の人間という意味である。間違ってもかつての共産主義国家内で使われていた意味ではない。

「我々が信じなければ」

「彼等の力もわかっている」

これが大きかった。

「それならばだ」

「信じますか」

「その全てをな。それでは」

太子はここでようやく顔をあげるのであった。

「ここで指揮にあたる。いいな」
「はい、それでは」
秘書はようやく言葉をそのまま感情のない事務的なものにすることができた。その言葉でまた述べるのであった。
「これからまた」
「何かあればすぐに知らせてくれ」
太子も言う。
「対処にあたる。いいな」
「はい、ハサンの為に」
「そう、ハサンの為に」
太子も応える。
「存分にやる。それでいいな」
「それでは」
こうして彼等も首都に留まりながら戦いにあたるのであった。戦いは激しさを増していく。それに生き残るのはどの国か。それを知るのはアッラーのみであった。

第二十八部　完

２００７・１２・３１

# 第二十九部第一章　オムダーマンの沈黙その一

オムダーマンの沈黙

ティムール軍がコム星系での戦いに鮮やかな勝利を収めるまでオムダーマン軍は沈黙を保っていた。その沈黙には理由があった。

「ようやく整ったのだな」

「はい」

司令室にいるアッディーンに対して参謀のラシークが応えてきた。彼はアッディーンの前に立ってそこから報告を述べていたのだ。

「整備も補給も終わりました」

「そうか」

「そして補給路の整備も」

そちらの整備も重要なのだ。路がなければ到底補給は成り立たないのだ。

「整いました」

「このジェルメからオムダーマン本土まで」

そこまでの道である。

「全て整ったか」

「これで無事北に向かうことができるかと」

「そうだな。しかし」

アッディーンはここで考える顔になった。その目に見ているものは今彼がいる部屋ではなかった。悠久の銀河であるのだ。

「これからもまだ戦いは続くな」

「このジェルメを奪って終わりではありませんね」

「そうだ。それだけは確かだ」

そうラシークにも答えた。

「まだハサンには多くの防衛基地がある」

「はい、そうです」

これはオムダーマン軍は既に侵攻前の計画の時点でわかっていた。

それに基いて作戦計画を練っていたのである。それ等を潰していく為にである。
「しかもです」
「それ等を一つ一つ攻略していかなければならないな」
そういうことなのであった。全ての軍事基地が要所要所に置かれている。だからそれ等を避けて通ることもできないでいるのだ。
「どれも通過することは不可能だ」
「通過すればそこから攻めてきます」
これは火を見るより明らかなことであった。
「そうすればそこから我が軍は崩れ」
「敗北してしまう」
「だからです」
ラシークは言う。
「一つずつ攻略していくしかありません」
「当初の計画通りか」
「そうです」
こうもアッディーンに答えるのであった。
「致し方ないと言うべきでしょうか」
「いや」
しかしシャイターンはそれは否定しなかった。その意味での否定の言葉であった。
「決してそうではない」
「左様で」
「うむ。それはわかっていたことだ」
彼は言う。
「それならばな。今更何を言っても仕方ない」
「そうですか」
「一つずつ攻略していく」
それをあらためて言ってみせる。
「ここからな」

「やはりジェルメですか」
「ここが最もいい」
今彼等が拠点としているジェルメ星系についても言及が為された。
「ここから徐々に北上していく。若し敗北すれば」
「その時は」
「ここに戻り勢力を取り戻す」
それもまた当初からの予定であった。アッディーンもそう考えているのだ。
「それでいいな」
「計画通りですね」
「そうだ、何もかもな」
ラシークの言葉にまた応える。
「だから。多少の敗戦はジェルメがある今臆することはないが」
「しかし予定では」
作戦計画には必ず予定がある。これは軍事行動においては常に厳格に定められている。今回のオムダーマン軍のハサンとの戦いにおいてもこれは同じなのだ。
「かなり迅速な行動が要求されていますが」
「それは私が立てたものだな」
「はい」
それはアッディーンが入れたものだ。彼の迅速な用兵は計画にもはっきりと現われているのである。それもかなりの精密さで。

## 第二十九部第一章　オムダーマンの沈黙その二

「そうですがあれについては」
「疑問の声もかなりあがっているな」
「御存知でしたか、それも」
「予想していた」
アッディーンはむべもなく述べるのであった。
「それはな。立てる前から」
「左様ですか」
「そうだ。もうわかっていたことだ」
「実現は不可能ではないかと言われてもいますが」
ラシークはあえて表情を消してみせた。その顔と声でアッディーンに問うのであった。
「あの計画に関しては」
「そう思われているな」
「味方からも」
ここでラシークは味方からも、と言った。これがかなり重要であった。
「そして」
「敵からもだな」
「それも御存知でしたか」
「どんな計画もある程度は漏れる」
そういうものなのだ。どれだけ厳密に情報を保持していても。そうした計画については様々なところから情報が漏れる。今回も同じであった。
「それも承知していた」
「では今回は」
「敵に疑問を抱かせる」
アッディーンの言葉が強くなった。

「そこなのだ」
「疑問を抱かせるのですか」
「まさかここまで早く来れるとは思わないな」
「はい」
問題はそこなのであった。
「流石にここまでは」
「そこだ」
アッディーンの言葉が強くなる。
「私はそれを考えているのだ」
「といいますと」
「今の時点で。実現可能かどうか疑問が出ている」
また言う。
「しかし。それ以上の速度で動いたならば」
「それは可能でしょうか」
ラシークもこれには顔を顰めさせる。彼の考えでは今の時点で最早その実現はやれるかどうかギリギリのところなのだ。それでこれ以上とは。
「果たして」
「見ているのだ」
しかしアッディーンの言葉の調子は変わらない。強さも。
「それをどうするかをな」
「では閣下は自信がおありなのですね」
「敵の虚を衝く」
古来より戦争において常に言われていることである。そうして勝利を収めることが重要なのは何時の時代でも、この時代でも変わらない。しかしそれをどうするかが問題なのだ。
「これもまた然りだ」
「これもまた、ですか」
「そうだ。まさかと思う速度で攻めてみせる」
言葉も目の光も強く鋭いものになった。

「それを今考えているのだ」
「だからこそ今は動いていないのですか」
暫くオムダーマン軍はジェルメから動いていない。これは勢力回復の為だと言われていたがアッディーンは他にも全軍にあることをさせていたのだ。
「全艦艇の整備を重点的にさせていたのは」
「強行軍になるのは間違いない」
これはもう覚悟のうえであった。
「しかしだ」
「しかし」
「リスクだけの効果は期待できる」
だからこそアッディーンはやるのだ。
「この作戦はな」
「そうなのですか。だからこそ計画より速く動いてみせると」
「そうして敵の基地を次々に攻略していくぞ」
「敵はもう備えを万全にしていると思われますが」
ラシークは言う。オムダーマン軍がジェルメで戦力を整えている時間はかなりのものがあった。その間にそれを行っていることはもうすぐにわかることであった。
「それでも、ですか」
「予定だ」
アッディーンはまた予定という言葉を出してみせた。

## 第二十九部第一章　オムダーマンの沈黙その三

「ええ」
「予定は向こうの頭の中にも入っている」
「我々の予定がですね」
「何時来るか。だ、ここでは」
それを指摘する。
「それより後に来るのは構わない」
「待ち構えているからこそ」
「しかし。先に出てくればどうか」
そこを問う。
「正面からでも。驚きは隠せないな」
「ですね。敵の心理を考えれば」
ラシークは姿勢こそは変えなかったがその表情は大きく変えていた。深く思案する、しかも敵の心理について考える顔で言葉を慎重に出すのであった。
「やはりそうなります」
「そこなのだ」
アッディーンはそこを指摘してみせた。
「そこを衝くのだ」
「あえて相手の心理を揺さぶるのですね」
「そう、そして」
彼はさらに言う。
「そこを衝いて攻撃を仕掛ける」
「はい」
当然の流れであった。
「そうして敵の基地を攻略し」
「それからは」
「ここで相手の防衛計画だが」

話がまずはそこに移った。
「敗れた場合はどうなっているか。わかっているな」
「はい、それについてももう」
ラシークはすぐに答えてきた。
「わかっています。それは」
「敗れた場合は速やかにその基地を放棄し」
アッディーンは言う。
「後方の基地に撤退しそこでまた戦う、そうだったな」
「そうです」
ラシークはアッディーンの言葉に応える。
「そうしてそこの守備隊と合流し」
「つまりだ」
ここであることがはっきりとわかるのだった。
「我々が先に進めば進む程」
「敵は強くなっていく」
「そうだ。必然的に我々の戦力は消耗していくというのにな」
それが問題なのであった。
「戦略的には非常に正しい」
「少なくとも我々にとっては嫌な戦略です」
ラシークはハサンのこの戦略を主観的に評した。
「それもかなり」
「敵にとって嫌がられる戦略こそが正しい戦略だ」
その通りであった。あえて敵の望ましい戦略を取るというのも考えてみれば愚かな話である。そんなことはまず有り得ない話である。
「それを考えればな。ハサンのその暫減戦略は正しいのだ」
「彼等にとってみればそうですね」
「それにより我々は次第に劣勢に追い込まれていくぞ」
「そうですね。ではそれを防ぐ為にも」
「そうだ」
アッディーンはラシークの言葉に頷くのだった。

「素早く敵を倒しそれを許さない。いいな」
「まずは最初が肝心ですか」
「最初だ、何もかも」
アッディーンはまた言う。
「そのまま勢いに乗り敵の守りを崩していく。それでいいな」
「はい、それで」
ラシークもそれに頷いて同意するのだった。
「全ては司令にお任せします」
「わかった。それでは先に進むぞ」
「それも迅速に、ですか」
「これまでの常識を覆すことになる」
アッディーンの考えにはこうしたものも入っていた。
「速度においてな」
「速度ですか」
「我等は昔から速度がかなりのものとされているが」
元々オムダーマン軍は速度においてはかなりのものと言われている。サハラの軍勢はその速度においては他の勢力よりも速いがその中でもオムダーマン軍はかなりのものである。その中でもアッディーンはその統率と優れた用兵によりさらに速度を速めさせているのである。これもまた彼の秀でた軍事能力の一つであるのだ。

## 第二十九部第一章　オムダーマンの沈黙その四

「それをも越える」
「それをもですか」
「そうだ。そうして先に進み敵の基地を攻略していく」
兵は神速を尊ぶ、であった。
「勢いが全てだからな」
「そうですね。確かに」
これはまたアッディーンらしい戦い方であると言えた。その機動力を使って彼は多くの戦いにおいて勝利を収めてきているのである。これはラシークもわかっていた。
「二つ基地を陥とす。あくまで緒戦だが」
「緒戦ですか」
「だがそれに勝てればさらに勢いがつく」
彼もそれを狙っているのだ。
「そしてそのままだ。いいな」
「つまり何重もの防衛ラインを二重破るのですね」
「それだけでかなり違うな」
「少なくともその二重のラインに配置されている兵はさらに後ろに行かないようにすれば」
「後の戦局にもかなり影響していくな」
「そうなるかと。それに」
ここでラシークはあることについて言及した。
「ハサンが予備戦力を動員してきています」
「しかも最大限の数だったな」
「はい、その通りです」
ハサンの予備役への総動員令は既にオムダーマン軍にも伝わっていた。ハサン軍はそれを大々的に宣伝したからだ。この宣伝の理由は内部にだけ向けたものではなく外部、つまりオムダーマンとティ

ムールにも向けたものであるからだ。だからこそ宣伝をしているのだ。
「それをまずはティムールに向けるようですが」
「若しもだ」
ここでアッディーンは一つの仮定を述べてきた。
「あくまで仮定だが」
「はい」
言葉が慎重なものになっていた。
「ティムールが敗れた場合は」
「速やかにその戦力をこちらに向けてくるでしょう」
これもまた言うまでもないことであった。戦力とは敵を破る為にある。敵が二つありそのうちの一つを破ったならば残ったその一つに全ての戦力を向けて倒すのは当然の流れである。アッディーンは今そのオーソドックスな流れを述べてみせただけであったがそれでも同盟関係にある相手だったので慎重な言葉になっているのである。
「そうだな。つまりはだ」
「時間は彼等の味方ですか」
「こちらの援軍の到着も確かにある」
それは常に要求してある。だがそれがすぐに届くかというとそうではない。距離という問題がありそれは容易なことではないのだ。
「しかしだ。それは」
「まだ先ですね」
「だからだ。今は限られた時間と戦力の中で戦うしかない。ならば」
「速く攻める。そうなのですね」
そうアッディーンに問う。
「戦力はそれでかなり違ってくる」
「かなりですか」
「そうだ。それは用兵一つで大きく変わる」
彼は言うのだった。
「戦力にはそれもあるのだからな」

「速度もですか」
「何を戦力とするかだ」
彼はまた言う。
「我々は今それを戦力としなければならないのだ」
「ですが司令」
ラシークはここまではおおむねアッディーンの言葉に頷いていた。
しかしここでは否定的な言葉を見せるのであった。
「どうした？」
「その二重の防衛ラインですが」
「最初のか」
「はい、まずはそこですが」
アッディーンに対して言う。
「かなり強固ですが。一気に攻めても攻略できるかどうか。特に」
「最初か」
「そうです、ヘルマンド要塞です」
最初はまずそこであった。
「かなり強固ですが。正面から正攻法で、しかも迅速に攻略が可能でしょうか」
「しかもその防衛戦力を後方に逃さずにか」
「それが可能だとは。ここまで御聞きしましたが」
「難しいというのだな」
「残念ですがそう考えるしかありません」
彼はここで自分の考えを述べた。

## 第二十九部第一章　オムダーマンの沈黙その五

「何かお考えでもあるのでしたら別ですが」
「ないと思うのか」
アッディーンはここまで聞いたうえでこう言葉を返してきたのだった。
「なくてここまで言うと思うか」
「では何かお考えが」
「まずは進む」
今は答えずにこう言うだけであった。
「その時に伝えよう。それでいいな」
「左様ですか」
「今はあえて言わない。それでいいな」
「はい」
ここまで聞いて納得するのであった。実はここであえてアッディーンに対して異議を述べたのはこれが理由であった。それを聞きたかったのだ。
「そういうことでしたら」
「難攻不落と呼ばれている要塞は実に多い」
アッディーンは言う。
「しかしだ」
「ええ」
「陥落した要塞もまた多い。完全に難攻不落という要塞は有り得ないのだ」
「確かにそれを造り得るのは」
「アッラーだけだ」
ここでもアッラーが出た。やはりムスリム達にとって完璧な存在というのはアッラーだけであるのだ。所詮人は完璧ではないのだ。
「そうだな」

「その通りです」
ムスリムならば。これに関しては同じ考えになるのは当然であった。
「では人が人の造りしものを攻略するのは」
「常に可能なのだ」
彼はそう考えていた。
「無敵の軍隊もなければ陥落しない要塞もないのだ」
「人が為すものである限りは」
「人ならば」
そしてまた言う。
「必ず欠点がある。人であるからこそ」
「陥落させることはできるのですか」
「私はそう考えている。それを忘れた相手ならば」
「かえって抜け目がありますか」
「そうだ。完全というものは人である限りないのだからな」
言葉を続ける。
「完全と思えばその時で終わりだ。ハサン軍はどう思っているかだが」
「完全だと思っていれば」
ラシークも言った。
「それで彼等は終わりですね。確かに」
「ハサン軍も今はかなり苦しいだろうな」
アッディーンは今度はハサン軍に対して考えてみせた。
「今の劣勢の状況は」
「それは間違いないかと」
これはラシークもわかっていた。ハサンは今オムダーマンに対してもティムールに対しても敗北が続いている。これが苦しくない筈がないのだ。
「やはり」
「そこで何かにすがろうとする」

アッディーンはそこを読んでみせた。
「さて、それでどうなるかだな」
「軽挙にもつながるでしょうか」
ラシークはこうも考えた。
「やはりそれが」
「その可能性もあるが。それよりは」
「それよりは？」
「何かにすがる方が可能性は高いか」
「何かですか」
「私はそう読む」
将であるならば敵の心理を読むことも重要である。アッディーンはどちらかというと正攻法を好むタイプであり心理を読むことはあまりない。しかし今回は別であった。
「その何かだが」
「まずはアッラーですな」
最初はまずこれであった。

## 第二十九部第一章　オムダーマンの沈黙その六

「アッラーにすがるのはまずは我々と同じですね」
「そうだな。彼等もそうした意味では我々と同じだ」
なおオムダーマンもハサンも宗教的にはスンニー派である。この時代においてもイスラムの主流派である。といってもやはりサハラのイスラムと連合やマウリアのイスラムは全く違うものになっているのだ。それはサハラの者達も実感している。その為連合やマウリアのイスラムには色々と思うところもあるのだ。
「しかしそれだけにはすがらないだろうな」
「守りにすがるか」
「そうですね」
次に考えるのはそこであった。
「あの何重もの防衛ラインに。すがるでしょう」
「それを打ち砕くのだ」
それがアッディーンの考えであったのだ。
「二重だが。それが心理的に与える影響は大きい」
「彼等だけでなく我が軍に対しても」
「それもある」
その言葉に対しても頷いてみせた。
「勢いが大事だからな」
「勢いに乗ってそのまま進む」
それもまた用兵の一つだ。勢いを作りそれに軍を乗せるのもまた用兵なのだ。ただ兵を巧みに動かし陣を迅速に組むだけではないのである。
「それこそが」
「用兵であると」
「だからだ」
彼は言う。

「ここは勢いをまず作る。ジェルメでの勝利での勢いだけでなく」
「このジェルメを奪取したことも実に大きいですが」
そもそもジェルメの戦いの勝利も殆どの者の予想を覆すものであったのだ。オムダーマン軍は今度こそ敗北するのではと思われていたのだがそうはならなかったのである。この勝利がオムダーマン軍の士気に大きく影響しているのも事実であったのだ。それもかなり大きな。
「それだけではなく、ですね」
「そうだ。だからだ」
アッディーンはラシークの言葉に応える。
「これは第一段階に過ぎない」
「その第一段階の終わりだと」
「第二段階のはじまりでもあるが」
ジェルメの勝利はそうしたものであったのだ。確かに大きいものであったがそれはあくまで一つの節目なのだ。それ以上に大きなものがこれからのことなのだ。
「それだけなのだ」
「それだけですか」
「それに時間も経っている」
これもあった。
「士気は確かにあがったがな」
「むしろですね」
ラシークは言葉にあるものを加えてきた。
「それ以上にやはり」
「このジェルメを手に入れたことが大きい」
彼はジェルメの戦略的価値について言及するのだった。
「補給基地、前線基地としてな」
「はい」
アッディーンの言葉に対して頷く。
「ここを手に入れたことが非常に大きいな」

「そうです。これからの二重の防衛ラインを壊すこともまずはジェルメを陥落させなければ何もはじまりはしないことなのですから」
「そうだ。そうした意味でかなり大きい」
それをまた言う。
「ここは士気よりも戦略だな」
「そうですね。ジェルメを手に入れたのはそこですか」
ラシークの目が考えるものになった。
「戦略であると」
「ここを手に入れなければ我々は国境を拠点にしたままだった」
その通りだった。これがオムダーマン軍にとってはかなり辛いことであるのは言うまでもない。補給線が長ければ長い程苦しいのだ。間に中継地点や他にも本格的な補給基地があるとそれが全く違う。彼等にとってもそれは言えることなのだ。補給なくして軍は戦うことはできはしないのだから。
「やはり。大きい」
「彼等にしてみればここを失ったことは大きいでしょうね」
「それでも奪還には来ないのは時間的な余裕故だな」
「そうでしょうね」
それに応えて頷いてみせてきた。
「彼等は時間を味方にしていますので」
「万が一ということもある」
アッディーンの目が光った。

## 第二十九部第一章　オムダーマンの沈黙その七

「ティムールが破れた時の為にな」
「果たしてティムールはどうなるでしょうか」
ラシークは今度はティムールについて問うのであった。
「彼等は」
「貴官はどう考えるか」
アッディーンはその問いにまずは彼の考えを聞くのであった。
「ティムールに対しては」
「おそらくですが」
ここでラシークはそれに応えて言う。
「勝利は有り得るかと」
「勝てるというのか」
「これも大方の者は敗北を予想しているようですが」
「連合等ではそのようだな」
「はい」
連合やマウリアにおいてこの戦いがどう見られているのか彼等は知っていた。これはリアルタイムでネットを通してわかっているのだ。
「やはり兵力や地の利の不利を根拠として言われています」
「やはりそれが大きいか」
アッディーンはそのことも知っていた。そのうえでの言葉であった。
「彼等の中では」
「しかしです」
だがここでラシークは言うのだった。
「シャイターン主席もそれを既に御存知でしょう。ですから」
「それを逆に使えば勝利が可能だというのだな」
「私はそう考えます」

彼はまた言う。
「今回もまた。ただです」
「彼もこれからが正念場だな」
これはアッディーンもわかっていた。
「アヤグーズに勝てるかどうかが」
「北方での天王山です」
「そういうことだ。だがどちらにしろ」
「そうですね」
ここからの言葉は言うまでもなかった。
「我々も勝利を手にしなければなりません」
「勝利は向こうから歩いてくるものではない」
それは厳然たる真実であった。
「こちらから掴み取るものだ」
「その通りです。では」
「積極的に攻める」
あらためて述べてみせるアッディーンであった。
「それも思いも寄らない方法でな」
「それがこれからですか」
「その通りだ。ハサン軍も粘る。だが」
しかしそれでもであった。
「それをさせないのもまた戦略だ」
「この戦いはおそらくサハラの今後を決めるでしょうね」
「それは間違いない」
わかっていることであった。しかも完全にだ。
「我々かそれとも」
「ハサンかティムールか」
生き残った勢力がそのままhサラを治めることになる。そういうことであった。それだけ重要な戦争であるというのはもうわかっているのだった。
「三国のうちで生き残るのは」

「何処かですか」
「若しハサンが倒れれば」
それについて考えられる。
「残るのは我々とティムールだが」
「そうなれば次に起こるのは」
言うまでもなかった。一つしかないのだ。
「我々とティムールの間で」
「そうなるかもな」
あえて仮定にしておくのだった。今それを断定するのは戦略的に許される状況ではなかったしそれと共に政治的にもまずいものがあるとわかっているのだ。

## 第二十九部第一章　オムダーマンの沈黙その八

「あえて言わないでおきたい。今はな」
「シャイターン主席は傑物です」
それはサハラでは確固たる評価であった。絶対的なカリスマとして絶対的な存在としてサハラ全土に知られるようになっているのである。
「その彼と戦うということは。それに」
「私のことか」
「御言葉ですが」
ここで話はアッディーン自身に関するものに移った。
「その際周囲が騒がしくなるかと思われますが」
「それはいい」
だがアッディーンはそれに構わないと断言してみせたのであった。
「私のことはな」
「宜しいのですか」
「そうだ」
そしてまた言ってみせる。
「私と妻のことは気にすることはない」
「はあ」
彼の妻であるマルヤムはシャイターンの妹である。絶世の美女であるがそれよりも彼の妹であるということでサハラ、とりわけオムダーマンで知られている存在なのだ。それは軍の中においても同じでありそれが舞台裏において色々と言われている話題の一つにもなっているのだ。
「それはいいな」
「ですか」
「それにだ」
そしてまた言うのだった。

「こうしたことは歴史上多い」
「政略結婚、そして」
「後は言わなくともわかるな。だからいいのだ」
「左様ですか」
それは割り切っていたのであった。彼とて陰謀渦巻くサハラに生まれ育ち数多くの戦いを経ている。だからこその言葉であった。サハラは戦乱の地であるのだから。
「それに今は」
「まずはハサンを」
「間も無く全軍を動かす」
それを告げてみせる。
「予定通り北にな」
「そうですね。第二段階に進める為に」
ラシークもまた言う。
「軍を動かしましょう」
「当然ながら私も出撃する」
アッディーン自ら前線で指揮を執る。これが彼のやり方である。これは連合においては全く見られないことである。何故なら連合軍においては大統領にしろ国防長官にしろ完全に文官である。文官は軍の最高司令官たりえても前線指揮官にはなり得ないのだ。八条もそれがわかっているからこそ前線に出ることはない。彼が前線に出て指揮を執るのは連合軍においては有り得ないのだ。若しそれをすれば連合軍は完全に崩れてしまう。現場の指揮は武官の仕事であるからだ。
「いつも通りな」
「はい、わかりました」
ラシークもそれに当然の様に頷くのだった。
「それではそちらも。いつものように」
「うむ。頼むぞ」
「向こうは太子の出陣はありませんか」

敵であるハサンのことをまた考える。
「何か彼も出陣を望んでいるようですが」
「彼の考えとしてはそうだろう」
アッディーンの読みは見事なまでに当たっていた。その通りであったのだ。
「しかし。それは出来ない」
「二つの敵を同時に抱えているからですか」
「まずはそれだ」
オムダーマンとティムール、この二つの敵を相手にするにあたって一つの敵に対して出陣するわけにはいかないのだ。それこそ彼が二人にならない限りはだ。
「我々とティムールを相手にするには王都ブルジルトに留まるしかない」
「そこで指揮にあたるしかですね」
「そうでなければ。対処は不可能だ」
そういうことであった。
「我々にとっては都合のいいことにな」
「そうですね。それは確かに」
その通りであった。そしてそれだけではなかった。
「それにだ」
「次は」
「ハサンの現状だ。政治的なな」
「政治的と言いますと」
「太子はハサンの柱だ」
それが大きかった。

## 第二十九部第一章　オムダーマンの沈黙その九

「出陣すれば万が一ということもある」
「はい」
それが大きかった。ハサン王国は王制であり国王が絶大な権限を持っている。そして今の王は健康的な面もあり摂政でもある太子が実質的に全てを取り仕切っているのだ。その彼がいなければ全く動かなくなってしまうのだ。ここが大きな問題になっているのであった。
「それだけでハサンは終わる」
「だからこそ動けないのですか」
「太子は指揮官としても評価があったな」
「はい、確か」
戦乱から逃れていたハサンであっても。やはり宇宙海賊等そうした脅威は存在しているのだ。太子はそれに対して果敢な指揮を行うことでも知られているのだ。
「その彼が前線に出れば」
「やはり手強いですか」
「しかも士気もあがる」
この場合は敵の士気である。それはかなり大きい。
「彼が前線で出るだけでな」
「それは非常に大きいですね。しかしそれが果たせないのは」
「ハサンにとっては痛い。様々な要因で彼が前線に出られないのはな」
「確かに。それに今のハサンは」
今度はハサン自体の問題に話が移る。
「人材が少なくなっていますし」
「色々と苦しい状況だな。だがそれでも手強いことには変わりないのだ」

「まだまだ力はありますか」
「まだまだな。手強い相手であることには変わりはないのだ」
それを己自身に対しても言い聞かせる。アッディーンの思考の特徴の一つとして相手を決して侮らないというものがあるがそれはこうして己自身に言い聞かせるということが大きいのである。言うならば簡単な自己暗示なのだ。小さいようで大きなことなのである。
「いいな」
「はい。それをよく認識して」
「戦いを進めていく。それ行く」
「やはり長期戦になりますか」
ラシークはそれを思うのだった。
「今後は」
「それも覚悟のうえだ。相手が強ければそれは避けられない」
「ですね」
「それでは出撃は予定通り行う」
これをまた言う。
「それで今日は終わりだ。いいな」
「はい。それでは」
「今は兵を休めておく」
これからに備えてのことである。
「弓も何もかもな」
そこまで言ってラシークを去らせ己も部屋を後にする。そうしてジェルメのホテルに置かれている己の宿舎に入り夕食とシャワーを終えるとそこで携帯に電話が入るのだった。見ればそれはプライベートのものであった。
電話をかけてきたのは妻であった。そのマルヤムである。
「どうした？」
「元気でいてくれているみたいね」
どうやら安否を確かめる電話であるようであった。その証拠に声がほっとしたものになっているのがアッディーンの方でもわかった。

「何よりだわ」
「その為の電話だったのか」
「ええ。駄目だったかしら」
「いや」
しかしそれはよしとするアッディーンであった。声が心なしか笑っていた。
「別に構わないが」
「そう、よかったわ」
「それよりもだ」
ここで彼は妻に対して問う。
「そちらは何もないか」
「アスランは？」
「いや、御前自身がだ」
他ならぬ妻に対しての言葉であった。
「何も困ったことはないか」
「ええ、何もないわ」
穏やかな声で微笑んでいるのがわかる言葉であった。
「こちらもね」
「そうか。それならいい」
「側には侍女達がいてくれているし」
皆オムダーマンで雇い入れた侍女達である。副大統領ともなるとそうした侍女達を何人か雇わなくてはならないのだ。サハラではそうしたものなのである。

## 第二十九部第一章　オムダーマンの沈黙その十

「特に困ったことは何も。それに」
「それに？」
「退屈もしていないわ」
まま微笑んでいるのがわかる言葉であった。
「彼女達がいてくれているから」
「遊んでもいるのか」
「ええ」
夫の言葉に対して電話の向こうで頷いてみせる。
「彼女達とね」
「そうか。ならいい」
それを聞いて彼も安心した顔になるのだった。
「困っていないのだったらな」
「いえ、困っているわ」
しかしここでこう言ってみせてきたのであった。
「何故ならね」
「何かあるのか」
「貴方がいないことよ。これは仕方ないけれど」
「そうか」
「もっともこれはわかっていたわ」
マルヤムは落ち着いた様子でこう述べてもきた。
「そうしたものだから。軍人の家というものは」
「わかっているのだな」
「わからない筈がないわ」
こうも夫に対して述べる。
「私の家もそうなのだから」
「シャイターン家か」
言うまでもなくメフメット＝シャイターンの家だ。本来は宗教家

の家であるのだがそれでも軍人であることには変わりがない。とりわけ長男である彼はそうである。
「そうよ。だからわかってはいるのよ」
「家族や夫がいない間はか」
「ええ」
そういうことであった。やはり事前に知っていることは大きかった、
「だから慣れてはいるわ」
「そうか。しかしだ」
ここで彼はさらに言う。
「不安はないのだな」
「不安？」
「そうだ。戦争に行っている」
彼はそれを言うのだった。やはり戦争に行っているからには万が一ということもある。彼が今言っているのはそのことに他ならなかった。
「若しものことがあれば」
「それは覚悟のうえよ」
それに対しては言葉が少し険しいものになっていた。
「そうしたことはね」
「そうか」
「それもまた軍人の家だから」
彼女は言うのだった。
「わかっていることよ。いざという時は」
「既に覚悟しているのか」
「そうよ。それに貴方は」
「私は？」
「決して死ぬことはないと信じているから」
これはいささかどころかかなり矛盾している言葉であった。だが彼女はそれをあえて夫に対して言ってみせたのである。それには理

由もあった。
「何故なら」
「何故なら？」
「貴方はまだ掴むものがあるからよ」
「まだか」
「ええ、そうよ」
そう夫に対して告げる。
「今よりもまだ大きなものをね」
「それは何か」
「これからわかるわ」
だがそれからはあえて言わないのであった。
「これからね。戦っていればね」
「戦っていればか」
「そういうことよ」
そう夫に対して告げた。
「だから死ぬことはないわ。安心していて」
「戦いを続け果てには何があるか」
アッディーンは半ば呟くように言う。

## 第二十九部第一章　オムダーマンの沈黙その十一

「わからないが」
「それはアッラーだけが御存知のこと」
彼女もまたアッラーの名を出すのであった。イスラムにおいては神の名を常に出してもよい。むしろ常に出されることが望まれる。それがイスラムなのだ。ユダヤ教とはここが違う。
「けれど私にもある程度わかるわ」
「そのある程度わかることを聞きたいが」
アッディーンはここで部屋の中のソファーに座った。大きく柔らかい白いソファーである。あまりにも豪奢な感じで彼の好むところではないがそれでも座るのであった。腰がその中に深々と沈んでそのまま落ちるような感じであった。
「いいか」
「ええ、いいわ」
マルヤムもそれに応えてきた。そうして言うのだった。
「それはね」
「ああ」
「栄光よ」
一言であった。
「それは栄光なのよ」
「栄光か」
「そう、栄光が手に入るわ」
夫に対して告げるのであった。
「だから安心していいわ」
「ふむ。そうか」
彼はそれを聞いてまたしても電話の向こうで考える顔になった。そのうえで妻に対して応える。その顔は真剣なものになっていた。
「栄光が手に入るのか」

「満足できるかしら、それで」
「栄光と言われてもな」
ここでアッディーンは無欲なその性格を見せた。実際のところ彼にはこれといった野心は希薄である。権力にしろ富にしろ栄誉にしてもだ。そうしたものには然程というよりは全くと言っていい程興味のない男なのだ。それがアッディーンらしいと言えばらしいと言えるものであった。
「私は別にな」
「だからこそよ」
しかしここでマルヤムは言うのであった。
「だからこそそうしたものが手に入るのよ」
「望まないからか」
「アッラーは必要な者にそれを与えて下さる」
イスラム的運命論であった。キリスト教プロテスタントの中でも厳格なカルヴァン派は予定説を唱えているがイスラムもまた予定説がある。しかもそれはキリスト教のそれに比べてもかなり厳しいものである。それがイスラムの特徴の一つでもあるのだ。
「欲がなければ余計に」
「では聞きたいのだが」
アッディーンはここまで妻の話を聞いてふと思うのであった。
「何かしら」
「野心があればどうなのだ」
彼が今度聞くのはそこであった。
「若しそれがあれば」
「あった場合でも」
妻はそれにも応えて夫に語る。
「アッラーはその目的が正しい者に与えて下さるものでしょう」
「目的か」
「そうです」
そうしてまたイスラム的な観念に基いた言葉が述べられるのであ

った。
「目的こそが大事なのです」
「手段はどうなるのだろうな」
アッディーンはそれについて述べてみせるのだった。
「手段ですか」
「そうだ。手段はどうなるか」
「それは時と場合によります」
マルヤムはまずはこう答えてきた。
「ですがおおむねにおいて」
「まずは目的なのだな」
「そうです。目的が正しければ手段はある程度以上は容認されるものです」
イスラムにおいては人間というものは実に小さな存在でしかない。一人の人間の悪事なぞというものはアッラーの前ではさしたる悪でもない。ましてやそれが手段でしかないとすればやはりそれはさしたるものではないということになってしまうのである。無論イスラムにおいても悪は許されないがそれでもその目的を見ておりそのうえで人間を小さなものとしている。ただしここで見ているのはそれがどういった悪かもなのだ。
「ですが」
「邪悪は滅ぼすべきものだな」
「そうです」
悪は悪でも邪悪は忌み嫌われる。不幸にしてどの世界にも邪悪というものは存在するが。その邪悪を持っている者以外が邪悪を憎むのもまた人として当然のことである。

## 第二十九部第一章　オムダーマンの沈黙その十二

「手段は邪悪でさえなければ」
「それでいいのか」
「目的が正しければ」
それもまた言われる。
「よいのではないでしょうか」
「わかった。それではな」
アッディーンはここまで聞いてそれについて納得するのであった。
「それを受けるとしよう」
「ですが貴方は」
それと共に彼女にわかっていることが一つあった。
「決してそうした悪は採られませんね」
「どうも好きにはなれない」
これはアッディーンの個人的な嗜好が関係していた。
「やはり正面から挑みたいな」
「何事もですか」
「そうだ。これはおそらく」
話したうえで自己分析もしてみせる。
「私が。軍人であるということかな」
「それが大きいでしょう」
そしてマルヤムもその根拠を認めるのであった。
「軍人という方々はどうしても正面から物事を挑むものです」
「そうだな」
アッディーンも彼女の言葉を受けて頷いた。
「無論例外もいるが基本的には」
「そうだ。それが軍人なのだから」
とりわけこのサハラ、そうしてエウロパにおいてはそうである。
これはサハラにおいてはアッラーの戦士であるという意識がありエ

ウロパには騎士道精神があるからだ。だからそうした意識を持つのである。これは昔から剣を持つ者には備わっているものである。
「どうしてもそうなってしまう」
「では政治家は」
マルヤムはアッディーンの軍人という言葉に退避させる形で政治家を出してきた。
「どうなのでしょうか」
「そうだな」
アッディーンはそれに応えて考える顔になった。言うまでもなく彼は軍人であるが政治家でもある。オムダーマン共和国副大統領なのであるから。
「政治家ならばまずは目的だ」
「そうです」
また目的について述べられる。しかも軍人に対してよりもより大きな話になっている。これが政治家という仕事の責務が関係していた。
「ですからより手段は」
「選んではいられないか」
「政治に求められるのは全て結果です」
マルヤムの言葉は少なくともただの女のものではなかった。政治を知っている女の言葉であった。これも彼女がシャイターン家にいるからこそだと言えるものであった。
「それ以外にはありません」
「まずは結果か」
「どれだけ志が高くともです」
政治家にも志が必要なのは言うまでもないことであるが。しかしそれでもあえて言うというところに政治の難しいものがあると言えた。
「結果を出せなければどうしようもありません」
「それが政治なのだな」

「そうです」
そういうことであった。厳然な事実であった。
「ですから手段も邪悪でなければいいのです」
「最悪でも邪悪であっても」
アッディーンはマルヤムの言葉の裏を読んだ。それを言ってみせる。
「目的が正義であればいいのか」
「正義もまた純粋なものではありません」
それを行うのがアッラーではない人間である限りは。そうなるのであった。それは何故かというとやはり人間が完全な存在ではないからだ。
「ですからその程度はあっていいのです」
「それよりも正しい結果を出すことか」
「立派な志を持った人物も敗れ去ってしまえば」
またしても厳然な話であった。政治は宗教ではないのだ。宗教というものが大きく関わるものではあってもだ。昔は政治と宗教は同じものであったが。これは日本語での『まつりごと』という言葉にも現われている。政事と祭事という両方にこの言葉があてはめられるのがそれの証拠である。近代国家の政治はこの二つを切り離したことにはじまると言ってもいい。祭事の方は皇室や王室に渡したのだ。共和制の国家ではより完全に分けられ政治の監督下に宗教が置かれている場合もある。
「それで救われるものは何もありません」
「だが悪の手段であっても結果が出てそれで目的が果たされれば」
「それで救われる者が現われます」
そういうことであった。
「こう考えれば宜しいかと」
「わかった。それでは」
「はい。政治については可能な限り正道を歩まれてもいいですが」
「いざという場合には」

「その手段もお考え下さい」
そうアッディーンに述べる。

## 第二十九部第一章　オムダーマンの沈黙その十三

「宜しいでしょうか」
「そうさせてもらう。しかしだ」
「それは可能な限り止められるのですね」
「出来るだけそうしたい」
それでもやはりアッディーンの性格はそのまま残っていた。やはり彼はシャイターンとは違う。出来るだけ正面から攻めたいと考えるタイプの人間なのだ。
「それでは駄目か」
「いえ」
しかしマルヤムは。そんな彼もまた肯定してみせるのであった。
「それが貴方の貴方たる由縁ですので」
「私たる由縁か」
「そうです。兄上が兄上であるように」
同時に彼女の長兄も出す。梟雄だとされている彼女の兄をだ。
「貴方もまた貴方なのですから」
「では私らしく行かせてもらう」
「はい」
アッディーンの言葉が毅然となる。マルヤムにもそれがわかった。
「それではそのように」
「そしてだ」
ここでアッディーンはまた言ってきた。
「何でしょうか」
「私は必ず戻って来る」
はっきりとした声であった。
「必ずな。それは安心してくれ」
「勿論です」
マルヤムもその声を微笑まさせて応えた。

「お待ちしておりますので。その凱旋の時を」
「凱旋か」
しかしアッディーンはそれを聞いても特に表情を変えないのであった。
「そうなるのか」
「勝利の凱旋です」
それをはっきりと述べてみせてきた。
「貴方の」
「それによりオムダーマンはさらに大きくなるのだな」
「そうなります」
またアッディーンに対して答える。
「サハラもまた」
「統一されるのだな」
アッディーンも今まで考えなかった統一というものを視野に入れだしていた。それまでサハラが望んでも得られなかったものをだ。
「このサハラが」
「貴方もそれを望んでおられますのね」
「これはサハラにいるならば殆どの者がそうだと思うが」
こうした点において彼もまた殆どのサハラの者達と同じであった。やはりサハラを統一して一つの国家にしたいと考えているのである。
「どうか」
「そうです。それは私も同じです」
そしてマルヤムもそれは同じであった。
「私も。サハラは統一されるべきだと考えています」
「やはりそうか」
「しかしです」
だがここで彼女は言うのだった。
「何かあるのか」
「まだ余談はできません」
それを言う。

「今までサハラはここまで至ったことが何度かありました」
「そうだったな」
過去の歴史においてはそうである。サハラも以前何度か統一される寸前まで至っているのだがその度に何かしら反乱や暗殺、他の勢力の侵略がありそれは成らなかったのだ。結局そうしてサハラは一つにならずに今に至っているのである。千年もの間そうなのである。
「ではやはり」
「そうです。気を抜いてはいけません」
強い言葉になっていた。
「今でも」
「それはわかっている。しかしだ」
だが彼はここで言う。
「サハラは統一に向かってかなり進んでいるのは事実だ」
「それはそうです」
これにはマルヤムも頷くことができた。

## 第二十九部第一章　オムダーマンの沈黙その十四

「それを為し得る方が今は二人もおられますし」
「二人もか」
「そうです。まずは」
アッディーンに応えて言う。
「貴方と」
「私か」
「そして兄上」
その二人であった。それを彼に対して言うのであった。
「その御二人です」
「二人もいるとはな」
アッディーンはそれを聞いて少し微妙な顔になるのであった。
「可能性がそれだけ高まるか」
「そうかと。そして統一されれば」
「サハラがようやくはじまるのだな」
「はい」
アッディーンのその言葉に頷いてみせてきた。
「長い戦乱が終わり」
「平和になるか」
「いえ、それはわかりません」
ここでは彼女はハサンの太子と同じことを言うのだった。
「それに関しては何とも」
「そうだな。エウロパもいる」
まずは彼等だった。確かに今は連合との戦いによりその力を大きく弱めているがそれでも一つの勢力であることには変わりがないのだ。そういうことであるのだ。
「しかもだ」
「はい。彼等だけでなく」

勢力は他にもある。アッディーンはそれもわかっているのだ。
「連合もいます」
「彼等と戦う可能性は殆どないが」
それはわかっている。しかし皆無ではないこともわかっているのだ。
「それでも向かい合うことになるな」
「連合はあまりにも強大です」
彼等にとってみればあまりにも強大な勢力なのだ。二十倍もの差はやはりどうしようもないものがある。それを理解できないアッディーンではないのである。
「彼等と対峙するだけでもかなりの力を使います」
「そうだな」
アッディーンは自分の言葉を代弁するようなマルヤムの言葉に応えた。
「それをどうするかだが」
「統一されればそれが大きな課題になります」
マルヤムは既に統一された後について考えていた。
「連合とどう向かい合うかが」
「対立はできない」
これはサハラから見れば絶対である。
「何があってもな」
「その通りです。対立すればそれで滅亡になります」
その滅亡する勢力とは。
「サハラが」
「そうだな。連合との対立はそのままサハラを滅ぼす」
圧倒的な勢力を向こうに回すのはそれだけで国を滅ぼす。そうして実際に滅んだ国の存在も歴史において枚挙に暇がないのである。
「統一されれば融和策を中心にすることになるか」
「それが基本です」
生きるにはそれしかないのであった。

「幸い連合もまたそれ程好戦的な存在ではありませんし」
「そうだな。彼等は実利的だが好戦的ではない」
両者は同じではないのだ。そういうことであった。
「それが大きいか」
「そうかと。好戦的という点ならやはり」
マルヤムはまた言う。
「エウロパの方が上です」
「環境がそうさせているな」
エウロパの置かれた環境がということである。エウロパは常に人口問題で悩みその解決策としてのサハラ侵攻だったのだ。ただ単に侵略しているのではないのだ。
「彼等に関しては」
「それは連合も同じことです」
同時にこれもわかっていることであった。

## 第二十九部第一章　オムダーマンの沈黙その十五

「彼等が好戦的でないのもやはり環境によります」
「そうだ。持っているからな」
「はい」
アッディーンの言葉に頷くのだった。
「彼等は開拓地も資源も食料もエネルギーも何もかもな」
「そうした意味で連合は非常に恵まれています」
簡単に言えば餓えてはいないのだ。そういうことであるのだ。
「ですから実利的ではあっても好戦的ではないのです」
「しかし。実利的か」
そのうえでこれもまた問題になるのであった。
「それは注意しておかないとな」
「利益があれば動く」
連合の問題はそこである。
「我々との対立に利益があれば」
「動く勢力です」
そういうことであった。
「ですから我々の中に彼等の利となるものがあれば」
「来るかも知れないな」
「そうです」
話がサハラにとって剣呑なものになってきていた。
「彼等もその場合は」
「エウロパと違った理由にしろだ」
それでもであった。
「来ることは考えられるな」
「その通りです。そして来れば」
話がさらに進む。
「我々にとっては存亡の危機になります」

「その時にも備えておかなければならないか」
アッディーンもまた統一された後について考えだしていた。
「統一されたならば」
「統一された後についても何かとお考え下さい」
またしてもマルヤムのアドバイスは実に政治的なものであった。
「事前に何かと考えておけばその時に」
「すぐに動けるな」
「そういうことです」
彼女が言いたいのはそれであった。
「それを覚えておいて下さい」
「わかった」
マルヤムの念押しの言葉に頷くのであった。
「今からな」
「はい。それでは」
「話はこれで終わりだな」
「ええ」
言葉にまた微笑みが戻ってきていた。
「長い時間をかけて申し訳ありませんでした」
「いや、それはいい」
それはいいとしたのであった。
「それよりも。そちらは寒くはないか」
「いえ」
言葉のやり取りが夫婦のそれになる。それを受けてマルヤムの言葉も微笑むのであった。ここでようやく妻としての顔も見せるのであった。
「今は特に」
「そうか。それならばいいがな」
夫はその言葉を受けてまずは安心したようであった。
「寒いとやはりな」
「風邪ですか」

「あれだけはどうしようもない」
結局のところ体調を崩して風邪をひいてhしまうことは人類は克服できてはいないのだ。エボラにしろエイズにしろ狂犬病にしろ克服し今では癌や白血病まで解決しているというのにだ。風邪だけは人類としてもどうにも手の打ちようがないのであった。この時代においてもだ。
「だからだ。問題はないんだな」
「あなたはどうでしょうか」
妻として逆に夫に尋ねてきた。
「大丈夫でしょうか」
「私の方は問題ない」
妻を安心させる言葉を今妻に対して述べるのであった。
「到って健康だ。私が風邪をひいては話にならないからな」
「それは確かに」
今オムダーマン軍は全将兵に体調管理を厳命している。言うまでもなく次の戦いに備えてだ。体調を崩しては戦えるものも戦えないのだ。
「では大丈夫なのですね」
「安心してくれ。睡眠もな」
「万全ですね」
「身体はいつもじっくりと休めている」
そう妻に述べた。

## 第二十九部第一章　オムダーマンの沈黙その十六

「それに食事にも気を配っている」
「それならばよいですが」
「あれだったな」
ここで彼はまた言った。
「生姜か」
「はい」
連合でとりわけ食べられている。古来より滋養にいいとして広く食べられているものだ。アッディーンもこれを最近よく食べているのである。
「あれも食べている」
「それに大蒜もですね」
「そうだ」
また妻に対して答えた。
「御前の言う通りな。食べていると」
「体調が違いますね」
「まさかここまで違うとはな」
アッディーンの言葉が笑っていた。
「思わなかったが」
「生姜に大蒜は古来より中国等で食べられていまして」
「そうだったな」
漢方薬にもよく使われている。その頃からよく使われて食べられていたのである。昔からその滋養は知られているということなのだ。
「それを我々も食べるといいのだな」
「何も拒むことはありません」
そう夫に対して言う。
「身体によく味がいいのなら」
「そうだな。それで充分だ」

「無論あれです」
しかしここで一つ問題になることがある。マルヤムがここで言うのはそれであった。
「コーランにおいて禁じられているものは」
「食べてはならない」
「そうです。しかし逆に言えば」
「そうでなければ。食べてもいいな」
「はい。そうなのです」
「わかりやすい話だ」
アッディーンはまた自分の言葉を微笑ませるのであった。普段の生真面目な彼の顔がここでは少し砕けていた。武人から家庭人のそれになっていた。
「今将兵にもだ」
「はい」
「生姜や大蒜を勧めている」
「それはいいことです」
それを聞いてマルヤムも微笑むのだった。
「我々の食事ですが」
「うむ」
「戒律による制約が多いです」
イスラムにおいて問題となるのはこれなのだ。連合の場合はかなり緩やかであり豚肉にしろ動物の血や内臓にしろ食べる前、最悪でも食べた後にアッラーに許しを請えばそれでいいのだが原理主義の影響が残っており厳格に考えるサハラではそうはいかないのである。それはアッディーンもマルヤムもよくわかっていた。彼等にしてみても連合のそれはあまりにも自由というよりは放埒なものとして見えているのである。
「それを考えなければ」
「駄目だな」
「そうです。その中で考えて」

マルヤムはさらに言葉を続ける。
「食べ物も作っていくべきです」
「肉はあれか」
「はい、羊です」
サハラではもっともポピュラーな料理である。
「あれが一番だと思われます」
「羊が最も身体にいいか」
「それとですね」
マルヤムはもう一つ付け加えてきた。
「鶏肉ですね」
「鶏か」
「あくまでコーランにあるものだけですが」
ここでもそれが出る。なお連合ではそれこそ空を飛ぶものならば飛行機以外は食べると言っていい。空を飛ばない鳥も美味ければ食べている。
「あれもいいのです」
「あれは何にでも使えるしな」
「はい、それもあります」
やはり鶏の肉は利用できる範囲がかなり広いのであった。例え内臓や骨を使わなくともだ。肉や皮だけでかなりのものがあるのである。

## 第二十九部第一章　オムダーマンの沈黙その十七

「それにカロリーも少なく」
「蛋白質も多いからか」
「ですから食事もお考え下さい」
「それはわかっている」
　これまでの話からそれは言うまでもないことであったが彼女は妻としてそこを念押しするのであった。アッディーンも夫としてそれに応えていた。
「できれば自炊をすべきか」
「ですがそれは無理ですね」
「残念なことにな」
　それは認めるしかなかった。仮にもオムダーマン副大統領であり軍の実質的な最高司令官である彼が自炊をしては国家としての対面にも関わるのだ。だからそれはどうしてもできないのであった。そこがこの場合の最大の問題点なのであった。彼にとっての。
「しかしです」
「うん」
「頼むことはできますので」
　つまりはそこであった。
「メニューはよくお考え下さい」
「まずは健康か」
「いえ、違います」
　健康第一というのは否定するのであった。
「それは違うか」
「健康と味覚は両立されなければなりません」
　それがマルヤムの考えであった。理想論だがむしろ料理においてはその理想論こそがいいのだ。さもなければいい料理は出て来ないからだ。

「ですからまずは、ではないのです」
「そうだな。確かに」
そして言った本人もそれに頷くのであった。
「そうでなければ食べても楽しいものではない」
「このサハラでは」
サハラ自体が言及された。
「まだ料理というものが文化として花開いていません」
「連合のようにか」
「思えば仕方のないことですが」
これも戦乱のせいである。戦乱はまずは娯楽や文化を消していく。料理もまた文化である以上戦乱の下ではそうは簡単に発展しないのである。もっとも平和であっても料理が発展するとは限らないものであるが。イギリスは長い間繁栄し平和でもあったのだが食生活はかなり貧しいものであり続けた。貧しいというよりは悲しいものであったというのが連合の者達の評価である。この時代でもイギリスのレストランに入って泣きながら出て行ったという連合の兵士達の話まである程だ。
「それに関しても」
「しかし出来るだけはだな」
「そうです。少なくともサハラでも餓えてはいないのですから」
最低限食べるものはあり続けているのだ。それが救いであった。人類は少なくとも宇宙に出てから誰もが餓えるということからは解放されているのである。
「それだけでもかなり違います」
「統一してからは様々なやるべきことがあるが」
アッディーンはまた統一後について考えはじめた。
「料理もまた然りか」
「はい。ですがそれは」
「わかっている」
ここから先は言うまでもなかった。

「まずは何事も果たしてからだ」
「はい。それではまた」
「うん」
ここまで話して電話を切った。アッディーンはあらためてこれから為すべきことが多きことがわかった。だがそれは今は置いておいて休むのだった。そのこれから為すべきことを果たす為に。今は休むのであった。

# 第二十九部第二章　屈辱の記憶その一

屈辱の記憶

連合軍はエウロパにおいては実に規律正しく軍規を守ったことで知られている。これは八条が軍規を徹底させた為であり実際に連合軍の風紀はかなりよいものであった。しかしそれでも問題がないわけではなかった。

当然略奪や暴行もありそれが問題になることはあった。だがどの組織においても不心得者はいるものでありそれも僅かであった。それもまた事実である。

しかしその軍規に関わること意外で連合軍は様々な問題を起こしているのであった。ただしこれは連合にとっては快挙であったのだが。

その話は幾つか残っている。例えばイタリアの首都星系であるローマに連合軍が入城した時だ。不意にカルタゴ出身の兵士が騒ぎ出したのだ。

「やったぞ！」

「俺達は屈辱を果たしたんだ！」

彼等はこう騒いで勝利を宣言しだした。これにはあまりにも有名な歴史的な経緯があった。

カルタゴ人達は一応はあの古代のカルタゴの子孫である。実際のところはかなり自称なのであるがそれでもそういうことになっている。その彼等がかつてのカルタゴの宿敵であるローマに入城したということはそれだけで輝かしい勝利なのであった。だからこそ騒いだのである。

「今ローマを踏みつけにした！」

「そうだ！最早ローマは敵じゃないんだ！」

そう口々に叫ぶ。彼等は喜びに包まれローマの中で記念写真を取り凱歌をあげる。それが連合軍全体に伝わりローマにおいて大々的

な戦勝パレードまで行われたのだ。無論これは彼等自身の喜びを見せるだけではなくローマ、そしてエウロパの者達に見せつける意味もあった。

それを見てローマの市民達、イタリア人達は歯噛みするしかなかった。何しろ既に彼等は入城しているのだ。どうすることもできなかったのだ。

「勝利をこの手に掴んだぞ！」

「スキピオが何だ！」

ここで彼等は悪乗りをした。スキピオ、しかも大スキピオも小スキピオも、ついでにといった感じでカルタゴを滅ぼすように執拗に叫んだ大カトーの像を作ってそれを連合の兵士達が踏みつけにしてポーズを取っている写真まで写したのだ。それだけでは飽き足らずその像を最後にはハンマーで叩き潰した。そうして勝利を祝っていたのであった。

「くそっ、三千年も前の話をか」

「そもそもカルタゴ人かどうかすらわからないだろうが」

そもそもカルタゴ人というのはポエニ戦争で生き残った者達が奴隷に売られて離散しその末路はわからなくなっているのだ。それでどうして自分達がカルタゴ人と呼べるのか根拠がわからないのはエウロパの者達もわかっている。あくまで自称であることもわかっているのだ。

だがそれでも敗北は事実であり彼等に対してどうこうすることも出来なかったのだ。遂に穿けるとの血を引くという者達がカエサルの像を持ってきて挙句にこう言い出したのだ。

「カエサルも倒したぞ！」

「ハゲの女ったらしをな！」

御丁寧なことにわざとカエサルの額を広くしてそこに銀河語で『ハゲ』と書いてあった。最初エウロパの者達は何と書いてあるかわからなかったがその意味を知って激怒した。変え札は彼等にとっては絶対的な英雄である。その英雄を穢されて怒らない筈がなかった。

だがここでも彼等はどうこうすることもできなかったのだ。連合軍はその破壊したカトーやカエサル、スキピオの首を持って街を凱旋する。エウロパの者達にとっては屈辱の、連合の者達にとっては心から楽しい場面であった。

そんな彼等の馬鹿騒ぎはパレードの後も続きローマのあちこちでパーティーを開いた。それもまたローマの市民達にとっては屈辱的なものであった。

古代ローマの宴会は寝そべって吐いては食べ吐いては食べをするものであった。彼等はそうして飽食の宴を繰り広げていたのである。

連合の者達はそれをあえて歪めて演劇にして楽しんでいたのだ。そうして口々に言うのである。

「こうして彼等は贅沢を欲しいままにして」

「多くの奴隷を搾取していたのだ！」

「ふざけるなローマ！許すなローマ！」

「だが我々が成敗した！」

ここでその腐敗したローマの貴族達をいきなり出て来た連合の兵士達が蹴散らす。そうすると何故かローマの貴族達は第二次世界大戦のイタリアの兵士達になり泣き叫びながら逃げ出していく。この時のイタリア軍のことは連合でも有名であるからそれを揶揄したのだ。

「誇り高いローマ貴族の正体は何だ！」

「弱くて涙が出るイタリア軍だ！」

そう言って馬鹿にするのだ。その連合の兵士達にあのローマのレギオン達が向かうが。忽ちのうちに象に乗る彼等に蹴散らされてやはり泣き叫んで逃げ惑う。

「ハンニバルは果たせなかったが俺達が彼の心を継いだ！」

「ローマは破った！そして！」

最後はカトーやスキピオに扮した役者達が連合の兵士達に土下座をしている。連合の兵士達はその前で高らかに勝利の勝ち鬨をあげる。そうした演劇がわざとローマの市民達に見えるように上演され

たのだ。当然ながら連合の兵士達の連合式のバイキングの宴もだ。
「俺達は彼等をこうして叩き潰した！」
「三千年の怨みを晴らしたのだ！」
そうして歓声をあげる。その中で酒や食べ物を消費していく。彼等にとっては輝かしい勝利である。だがそれは同時にエウロパの者達にとっては屈辱な敗北だ。それを刻み付けられていたのである。
これはローマだけではなかった。イギリスにおいてもだ。イギリスが誇る大英博物館に連合軍の将兵達が入って来てまずはこう言ったのだ。

## 第二十九部第二章　屈辱の記憶その二

「何だ。骨董品屋か」
「な・・・・・・！」
博物館の館長はいきなり骨董品屋と言われて言葉を失った。何しろイギリスの栄光の展示館とも言うべき場所だ。そこを骨董品屋と言われては言葉を失うのも道理だった。しかしここで連合の将官がこう言ったのだった。
「そのようなことを言うな」
まずは骨董品屋と言った部下を嗜めた。だがその顔は何故か楽しげに笑っている。
「骨董品屋さんに失礼ではないか」
「そうですね」
その部下も笑いながらそれに応えた。そうしてまた言う。
「骨董品屋というよりは物置ですな」
「そうだ」
将官はそれが言いたかったのだ。それに応えて笑ってみせる。
「ここは物置でしかない」
「お言葉ですが」
あまりもの言葉に館長が抗議してきた。
「この大英博物館を物置とは。聞き捨てなりませんな」
「おや、そうではなかったのか」
だがその将官は平然として言うのだった。
「ここは物置だとばかり思っていたがな」
「残念ですが違います」
館長は何とか平静を保って応えた。
「ここは博物館です。人類の中でも最高の」
「最高の物置なのだな」
「そうですね」

「そうとしか思えませんね」
彼の部下達もそう言うのだった。
「ガラクタばかり置かれていますし」
「一体何を大事にしているのやら」
「よく見ればだ」
将官はさらに言う。
「連合各国のものもあるな」
「確かに」
「というよりはですね」
部下達も意地の悪い笑みを浮かべて言う。
「我々のものしかないではないですか」
「何だ、盗品ばかりではないですか」
「そうだな。物置ですらない」
侮辱はさらに続く。
「盗品見せ場だ。犯罪の展示室だ」
「はい」
「その誇らしき大英帝国とやらの」
「その大英帝国のだ」
将官の意地の悪い言葉はさらに続く。
「誇りは泥棒行為だったのだな」
「いえ、それだけではありませんぞ」
部下の一人もまた意地悪い顔を浮かべて言ってきた。
「謀略に嘘に」
「そうだったそうだった」
将官はあえて芝居がかった様子でまた応える。
「何だ、悪事しか働いておらんな」
「所詮はエウロパですな」
「博物館とは己の国のものを見せるものですがしかし」
彼等の嫌味は続く。
「イギリスではそれは犯罪であるようで」

「流石は海賊の国ですな」
「いや、全くだ」
「我々には理解できない神経であります」
口々にそう言い合って大英博物館どころかイギリスもその栄光もエウロパでさえも馬鹿にする。そうして将官の言葉はさらに続くのであった。
「連合の法は知っているな」
「はい」
「無論です」
部下達もそれに合わせて応えた。
「盗品は速やかに元の持ち主に返却する」
「それをせぬ場合は罪に問われます」
「その通りだ。それでは」
彼等から見て『盗品』に目をやりながらの言葉であった。
「返してもらおうか」
「なっ、返せですとっ」
館長はその言葉にまた抗議をする顔になるのであった。

## 第二十九部第二章　屈辱の記憶その三

「この大英博物館のものを返せですとっ」
「その通りだ」
憤る館長に侮蔑と冷酷を以って返すのだった。
「我々が本来の持ち主なのだからな」
「ふざけるのも大概にして頂きたい。散々罵倒を繰り返した後でそれとは」
「では。話を聞くか」
ここで軍人達の後ろから背広の男達が出て来るのであった。その中には当然ながら女もいるが男達の方がやけに目立つ感じがしていた。
「弁護士としてはどうでしょうか」
「お話になりませんな」
将官に弁護士と言われた男は眼鏡に手をやりながら冷たく答えてみせた。
「盗品であるのは明らかです。それはこちらの資料にもあります」
「そうですな」
出してきたのは歴史書であった。イギリスの歴史についてのものだ。
「何時何処で何を盗み」
「それを大英博物館に保管したと。書いてありますな」
「まごうかたなき証拠です」
弁護士はまた述べる。
「言い逃れのしようがないまでに」
「では法律的には問題ないと」
「はい、全く問題ありません」
「馬鹿なっ」
「そうだ、そんなことが許されるものかっ！」

博物館員達はそれでも抗議するのだった。
「ここはイギリスだ。ならばイギリスの法律が適用されるのだ」
「そんな屁理屈は通用しないぞ！」
「また戯言を」
弁護士の機械的な声がまた彼等を撃った。
「戯言だと！？」
「どちらが！」
「今ここは連合軍の占領下にあります」
これは今更言うまでもない事実であったが彼はそれをあえて言うのであった。
「それならば」
「それならば！？」
「連合の法律が適用されます。それも中央政府の法がです」
「では今は」
「そうです。連合中央政府の法によりこの博物館にある連合各国のものを撤収する権利があります」
またしても冷徹な声であった。
「よって法律的な問題は何もないのです」
「わかりました。それでは」
将官はそれに応えた。これで勝負は決まりであった。
「後は貴方達の出番ですな」
「はい」
「お任せ下さい」
今度出て来たのは如何にも学者然とした者達であった。博物館員達は彼等の姿を見てその素性が一体どういった者達であるのか即座に悟った。
「まさか貴方達は」
「はい、そうです」
「貴方達と同じです」
「学芸員か」

館長は忌々しげに述べるのだった。
「まさか彼等まで連れて来るとは」
「我々は貴方達とは違いましてな」
将官のゆがめた口の端が嫌になる程目に映る。
「略奪は決してせぬのです」
「略奪をしないと。詭弁を」
「詭弁と捉えられるならばそれで結構」
平然と館長の呪詛の言葉を受け流してみせた。
「ですがそうではないのは事実です。それでは」
「わかりました」
「すぐに取り掛かります」
学芸員達はすぐに自分達の仕事に取り掛かった。展示物一つ一つをチェックしだしたのである。兵士達がその警護にあたっている。
「さて、これで本物かどうかチェックして」
「連合に送るというわけですか」
「御安心を。エウロパのものには一切手はつけません」
それは保障してみせるのであった。
「それも何があっても」
「信じよとでも仰るのですかな」
「何度も申し上げますが我々は略奪をするのではないのです」
あえて言い聞かせるように念を押す。それは善意からではなく悪意によるものである。簡単に言うならば『嫌味』としてやっているのである。

## 第二十九部第二章　屈辱の記憶その四

「それはお忘れなきよう」
「エウロパのものにこそ本当の価値があるのですがね」
イギリス人にしてはあまりにも余裕がなく苦しいユーモアであったがそうなってしまうのも無理はない状況なのが今であった。
「それを残して頂けるとは光栄ですな」
「閣下」
ここで佐官の一人が将官に問うてきた。
「どうした？」
「エウロパのものには兵士が触れたがりません」
「それはまたどうしてだ？」
「ガラクタにしか見えないからであります」
狙っているとしか思えない嫌味がまた出て来た。
「そのガラクタはどうしましょうか」
「必要とあらばどかしておけ」
本当にガラクタを扱うように指示を出してみせるのであった。
「ただしだ」
「はい」
「ガラクタはガラクタでもエウロパから見れば宝であるらしい。丁重に扱うようにな」
「わかりました。それでは」
佐官もそれに返礼する。しかし言葉はまだ続くのだった。
「ですが」
「何だ？」
「ゴミ箱が欲しいところであります」
「ゴミ箱・・・・・・！」
「何と・・・・・・！」
またしても館長も館員達も絶句することになった。

「我がエウロパのものをガラクタだと！」
「言うにこと欠き！」
「それでですね」
だが佐官はそんな彼等をあえて無視して言うのであった。
「軍事博物館からも連絡がありました」
「イギリスのだな」
「そうです。そこにあったネルソンの肖像画と軍服ですが」
この時代においてもイギリスの英雄であり続けている男である。彼のネルソン＝タッチはとラファルガーでの鮮やかな勝利と共に今も連合でもマウリアでも士官学校の教科書にある程である。だがその彼でさえ連合においては侮蔑の対象なのである。結局のところ連合はエウロパを否定して存在しているのである。その全てを。
「何でも廃棄物にしか見えなくて困っているそうです」
「そちらにはゴミ箱はないのか」
「博物館自体がゴミ箱にしか見えないそうです」
「何という連中だ・・・・・・」
「ネルソン提督でさえも」
「所詮は過去の栄光ですな」
将官は呆然とする館員達に対してまた冷たく言うのであった。
「エウロパの全てが。しかしそれにしても」
「今度は何でしょうか」
「ここから連合のものがなくなれば」
彼はこの時は博物館の中を見回していた。周りでは将兵達や学芸員達は忙しく動き回っている。見れば本当にエウロパのものは必要な場合にどけるだけで一切手をつけてはいない。少なくとも彼等はエウロパのものには一切興味がないのは事実であった。
「こちらにあるのは僅かになりますな。まさに英国の影響です」
「いずれ目にもの見せてやる」
その中で若い館員が忌々しげに呻いた。
「この野蛮人共め」

「では覚えておいてもらいましょう」
将官は野蛮人と言われても平気な顔のままだった。そうして述べる言葉は。
「我々は略奪品を誇らしげに展示したちはしません、それに」
「それに」
「その野蛮人に敗れたことを。是非共」
「閣下」
ここでまた部下から彼に声がかかる。
「うむ。どうした？」
「そろそろ食事の時間ですが」
「おお、そうか」
闊達な調子でその部下に言葉を返してきた。
「それは何よりだ。しかしだ」
「しかし？」
ここ部下に対して言うと部下もそれに顔を向けてきたのだった。
「何かありますか？」
「いや、どうにもな」
また微妙な顔で笑ってみせてきた。

## 第二十九部第二章　屈辱の記憶その五

「最近美味いものを食っていなくてな」
「そうですね」
部下も言いたいことがわかっていたので頷くことができた。
「イギリスの料理は。私にはどうにも」
「わしもだ」
将官はあえて『大英』博物館の館員達に聞こえるようにまた言ってみせた。これもまた嫌味の一つでありかなり意地が悪いと言えた。
「あんなまずい料理はないな」
「はい、おそらくは」
部下も笑いながらあえてイギリス人達に応えるのであった。彼もまたかなり性格が悪いと言えるがあえてそれをしているのはエウロパへの悪感情から来るものであるのは言うまでもない。
「カナダやフィンランドよりも上かと」
「上どころではないな」
将官の嫌味はさらに続く。
「比較にならない。あの昨日の。あれは何だったかな」
「ローストビーフとプティングでしょうか」
「そうだ、それだ」
なおどちらも連合においてもかなり食べられているものである。元々はイギリスの料理であるのだが連合では殆どの人間がアメリカのものだと考えている。
「あれは酷かったな」
「はい、全くです」
部下もそれに頷いてみせる。
「焼き過ぎのうえに生焼けで」
「あれを連合で出したらどうなるでしょうか」
「その店は客に喧嘩を売っていると思われるな」

これは本気で言っていた。実際に連合では味と量が重視される。ましてやそんなものを出したとなると客が怒り狂うのは道理である。そういうことであった。
「確実にな」
「その通りです。しかしそんなものを平気で出すとは」
「イギリス人の度胸は大したものだ」
これは悪意であった。しかし半分本気であった。
「パンも酷かったな」
「スイスのパンもあんまりなものでしたが」
これは昔から理由があった。スイスでは国防上の理由で小麦を保存していた。有事の際の食料を確保しているのである。その為古い小麦を使ってパンを焼いている為にパンがまずいのである。これは何故か戦後の日本ではあまり知られていない話であったのだ。スイスは決して平和を愛する国家ではなく完全な武装と防衛体制により国を守っていたのだ。その強さはかなりのものであのフランスやドイツですら手出しができなかったのだ。当然イタリアも。
「イギリスのパンも」
「あれはパンだったのか」
将官の嫌味はさらに続いていた。
「豚の餌かと思ったぞ」
「肥料ではないのですか、あれは」
部下の嫌味はさらに酷いものであった。
「スイスのパンですら裸足で逃げ出す程で」
「ははは、まあ本当のことを言うな」
またイギリス人達を前にして言うのであった。
「その肥料を食べている連中もいるのだからな」
「植物にでもなるつもりでしょうか」
「若しかしたらそうかもな。光合成をして」
「若しそれができたら面白いな」
イギリス人達は彼等のその話を聞いて顔を赤くさせたり青くさせ

たりしている。当然ながら怒りによるものである。その怒りはかなりのものであり皆怒りで身体を震わせている。しかしそれでも連合軍の兵士達の嫌味は続く。それもさらに人数を増やして。
「閣下、面白いものを見つけました」
「何だ？」
「これを見て下さい」
兵士の一人が持って来たのはビスケットであった。言うまでもなくイギリス人の紅茶の友である。イギリス人はお茶菓子には愛情を込めると言われている。
「ビスケットか」
「ただのビスケットではありません」
「何とこれは」
「何と？」
将官は彼等に対して問い返した。
「凄いビスケットなのか」
「はい、こんなまずいビスケットははじめてです」
「見て下さい」
何故かここで軍用犬を連れて来ていた。シェパードである。
「犬ですら食べません！」
「こんなビスケットがあったとは！」
「おおっ、これは凄い」
実際に犬が顔を顰めて引いている。それを見て将官はさらに笑った。

## 第二十九部第二章　屈辱の記憶その六

「こんなビスケットを人が食べているのか」
「私もこんなものははじめて見ました」
「私もです」
彼等もまた嫌味を言う。芝居がかったところではないのはその態度からわかる。
「犬も食わないなんて」
「こんなことが」
「いや、やはりイギリス人だからな」
将官はまたしてもそこに嫌味の根拠を述べるのであった。
「犬よけではないのか、このビスケットは」
「犬よけですと」
「ビスケットが」
「そうだ。イギリス人は無類の犬好きだったな」
これは連合でも知られた話である。イギリス人は昔から犬を愛し様々な犬を作って育ててきている。イギリス原産の犬が多いのはその為である。イギリス人はペットに対して並々ならぬ情熱を注いできていたがそれが最も出ていたのが犬なのである。
「そうですね。植民地の人間は消耗品扱いしても」
「犬は愛していました」
「その彼等の中には派閥があるという」
「派閥が？」
「そうだ。犬だけか」
ここで将官は犬と対比する形で何かを出してきた。
「ペットは」
「いえ、それは違います」
「やはり犬といえば」
彼等の答えは決まっていた。それは。

「猫もいます」
「そうだ、猫だ」
将官は猫を部下達から聞き出して笑ってみせた。
「おそらくこれは猫の餌だ。犬が食べないようにしているのだ」
「成程、そうだったのですか」
「それで犬が顔を背けるのですか」
「おそらくそうだ。しかし」
彼の嫌味はこれで終わりではなかった。さらに続けるのであった。
「こんなもの猫でも食べるかどうか」
「いや、食べないでしょう」
部下の一人が彼の嫌味に応えた。
「少なくとも連合の猫は一匹も食べないでしょう」
「そうですね。猫星の猫でも」
連合では捨て犬や捨て猫等のペットを捨てると罪になる。だが何かしらの事情でペットを育てられなくなる場合があるのでそうしたペットやペットショップでの売れ残りは各国にそれぞれ一箇所か若しくは複数置かれているそうした動物を育てる星に送るのである。言うならば大きな動物ランドである。彼等はそこのことを言っているのである。
「食べないでしょうね」
「いやはや、そんなものを食べるイギリス人達は全く」
「見上げたものだな」
「そうですね、本当に」
「凄いことです。尊敬はできませんが」
こうした嫌味や意地の悪い催しがエウロパのあちこちで行われていた。これもまたエウロパの者達にとっては屈辱であった。その屈辱は彼等の心に染み付いていた。当然ながら敗れた軍人達の間でもだ。
「長官」
プロコフィエフがモンサルヴァートの元帥府で彼に話していた。

そこには彼の下にいる主だった提督や参謀達が勢揃いしていた。
「将兵への教育ですが」
「どうなっているか」
モンサルヴァートはそれを彼女に対して問うた。
「どういう方針になっているか」
「屈辱を晴らせと」
彼女はこうモンサルヴァートに対して告げてきた。
「そうしたふうにするべきだとの意見が出ています」
「連合軍に対してか」
「そうです」
プロコフィエフは冷徹な声でまた彼に告げた。
「教育部では。そうして連合軍への敵愾心を植え付けそれを闘志に変えようと考えている者がいます」
「教育部か」
モンサルヴァートは教育部と聞いて少し考える顔を見せてきた。

## 第二十九部第二章　屈辱の記憶その七

「彼等もな」
「何か？」
「いや、それはどうかと思うのだ」
彼はその教育部の一部の考えに今一つ賛同しきれないようであった。
「そうして連合軍への敵愾心を植えつける」
「はい」
それが目的である。プロフィエフはそれに応えた。
「その通りですが」
「私はあまり賛成はできない」
それを今はっきりと言うのであった。
「その理由は」
「連合軍に目を向けるのは確かにいい」
それはいいとした。
「しかしだ。連合軍にばかり目を向けると」
「サハラがおろそかになりますか」
「今サハラの流れは統一に向かっている」
モンサルヴァートもそう読んでいた。そうした意味では八条と同じ読みである。しかしある意味において彼の読みは八条とは違っていた。
「そうなればだ」
「我々にとってまた一つ敵が現われますね」
「その通りだ。人口にして二倍だ」
つまりは強大な敵というわけなのである。ここが問題なのだ。連合にとってはサハラは脅威にはなっても国力差は連合の方が圧倒的に上なのだ。それに対してエウロパはサハラと比して半分の人口しかないのだ。これが非常に大きな意味を持っているのである。

「連合ばかりにだけ目を向けていけば」
「彼等がおろそかになると」
「連合軍を見ること自体はいいのだ」
それはあくまでいいとする。
「しかしだ。それだけではないのだ」
「サハラもいるからこそ」
「そうだ。連合軍のみに敵愾心を煽るのはあまりよくはない。これからは連合もサハラも見ていかなければならない。私はそう考えるのだが」
「そうですな」
それを聞いてベルガンサが応えてきた。
「確かに。今流れは変わろうとしています」
「エウロパの周りの流れがな」
「連合は中央政府の力が強まり」
その分だけ連合軍の力が強まるということである。伝統的に連合の中で中央政府の権限が強まればエウロパとの敵対関係が激化する。各国の権限が強まれば敵対関係は弱まる。もっともこれは程度の差でしかないが。そうした関係にあるのは中央政府が伝統的にエウロパへの敵対心を重視するからである。
「サハラが統一されようとしています」
「周囲が動けば我々もそれに備えなければならない」
「そういうことです。ですから連合だけを見るのは」
「下策だ。中策は」
ここでモンサルヴァートは言うのだった。
「連合とサハラを半々で見ていく」
「それは中策ですか」
「そうだ」
マトクにそう述べる。
「中策でしかない」
「では上策は」

マトクはまた問うてきた。
「何でしょうか」
「サハラを重視するべきだな」
モンサルヴァートの目の色が変わった。鋭くなったのだ。
「サハラをですか」
「そうだ」
彼は言うのだった。
「サハラだ。我々が第一に相手にすべきなのはな」
「連合ではないと」
アローニカはモンサルヴァートの言葉に懐疑的な顔を見せるのであった。どうやら彼は連合との戦いを見ている立場であるらしい。
「そうだ。連合は余程のことがない限り動きはしない」
彼はそう見ていた。そしてその根拠もあった。
「何故なら」
「何故なら？」
「彼等は満ち足りている」
それが重要なポイントであった。

## 第二十九部第二章　屈辱の記憶その八

「その復讐心までもな」
「復讐心もですか」
「あの戦争での彼等の多くの侮辱は確かに腹にすえかねる」
彼もこれにははっきりと不快感を抱いていた。別に陵辱されたというわけではない。しかし汚れた雑巾で顔を拭かれたような。そうした不快感を抱いていたのである。
「それは私も同じだ。だがあれにより」
「彼等はかなり満足したと」
「それも当然だ。何しろ我々の国の首都をほぼ全て占領し」
「そのうえで」
「ああした行動を採ったのだからな。それは当然だ」
「ふむ、そうなりますか」
ターフェルはそこまで聞いて頷くのであった。
「彼等の敵対心も今は満ち足りて満腹の状態であると」
「そうだ。だから動かない」
モンサルヴァートはそう見ていた。
「彼等はな」
「しかしサハラは違うと」
ここが重要なのであった。
「彼等は来るのですな」
「彼等との因縁は連合とのよりもさらに根が深い」
まずはそれがあった。
「連合とは千数百年、だが」
「サハラとは二千年ですな」
「そうだ」
つまり十字軍の頃からだ。やはりそこからはじまるのである。
「それにこれまでの総督府のことがある。彼等も我々に対して激し

い敵対心を持っている」
「それを我々に向けて来るというのですね」
「尚且つ」
問題はさらにあった。
「彼等への備えもない」
「そうです」
今度はジャースクが応えた。提督達の顔はそれぞれを見合いその考えを巡らせ合っていた。
「モントローズ要塞が武装解除されましたので」
「今後あの要塞は使えない」
それまでサハラへの備えであり対サハラの拠点であった要塞であった。だが先の戦争により非武装化させられているのだ。これも連合の策略であった。
「それをサハラが付け込むことは実に容易だ」
「実際にです」
プロコフィエフがここで報告する。
「ティムールは北方のモントローズ近辺に軍事基地の建設を計画しているようです」
「防御用ではありませんな」
ゴドゥノフはそう読んできた。
「間違いなく」
「シャイターン主席の性格ならば」
モンサルヴァートはここでシャイターンの性格から分析してきた。
「これは今後の攻撃に備えてのものだろうな」
「モントローズの非武装化を受けてですな」
「何かあれば間違いなくモントローズは占領される」
エウロパにとっては忌まわしいことだがこれはもう予想されることであった。
「そこからエウロパ本土に攻め込まれるぞ」
「はい、そうです」

ゴドゥノフはその言葉に頷いた。
「そうなればエウロパはまた」
「しかも先の連合との戦争の比ではない」
モンサルヴァートはまた言う。
「恐ろしい戦乱になるぞ」
「長官はそれを恐れておられるのですね」
「その通りだ」
モンサルヴァートはそうステーファノに述べるのであった。
「今我々が連合のみに目を向ければそれに付け込まれるのは確実だ」
「そうですか」
「我々は最早連合だけを見ていればいいのではないのだ」
それが現実であった。
「だからだ。教育部のこれには賛同できない」
「では長官」
クライストが彼に問うのであった。寡黙な傾向のある彼にしては珍しいことであった。
「我々はどうすればいいのでしょうか」
「事実をそのまま教育していればいい」
モンサルヴァートの考えはこうであった。

## 第二十九部第二章　屈辱の記憶その九

「ありのままな」
「ありのままですか」
「過激に教える必要はない」
こうも言う。
「かえって連合だけを見ることがあってはな。後々禍根になる」
「確かにそうですね。しかし」
「連合への敵対心を忘れることがあってはならない」
ジャースクの言葉に応えた。
「そう言いたいのだな」
「そうです。それもかえって愚だと思うのですが」
「その通りだ」
モンサルヴァートはそれも見ていた。完全に否定するというわけではないのである。８
「要はバランスなのだからな」
「そうです」
ここで参謀としてプロコフィエフが口を開いた。
「やはりここは。バランスを考えましょう」
「まずはサハラだな」
モンサルヴァートはそちらに重点を置いているのは変えないのであった。これが彼の戦略であった。サハラ重視というわけである。
「そこにニとすれば」
「連合は一ですね」
「そうだ。大体その程度でいい。しかしこれからは」
モンサルヴァートは今後のエウロパについて考える。それについてはどうにも明るい答えが出ないのもまた事実であった。
「しかしな」
「しかし？」

「何でしょうか」
「エウロパ軍は今再建を進めている」
連合との戦いにおいてエウロパ軍は全軍の約三割を失った。これは軍の損害においては全滅と表現されるものでありかなり深刻だ。それを再建させるだけでもまず大変なのである。しかもエウロパの抱えている悩みはそれだけではないのだ。まだあるのだ。
「再建が成ったとしてだ」
「数にして五億です」
ベルガンサが答えてきた。
「再建したならば」
「五億だ」
モンサルヴァートもまたその数を言ってみせた。
「これに対して連合軍は百三十億だ」
「はい」
軍の規模に比して約二十六倍である。人口差が四十倍であるが国力差がそのまま出たのではないのだ。連合軍は軍備にはエウロパ程力を割いてはいないのである。これは連合とエウロパの置かれたそれぞれの境遇が関係していた。エウロパはこれで精一杯なのだがそれでもまだ足りないのが現状であるのだ。
「サハラは統一されなければどんな規模かわからないが」
「彼等は軍の勢力だ」
モンサルヴァートはそれがよくわかっていた。
「兵は強くしかも人口にしては」
「二倍」
これも大きく関係していた。
「純粋に考えれば二倍の強兵を相手にすることになります」
「そうだ。連合とは違うのだ」
モンサルヴァートはまたプロコフィエフの言葉に応えた。
「連合の兵は強いか」
ここで自分の下に今集まっている参謀や提督達に対して問うた。

「それはどうだ」
「強いのは義勇軍です」
アローニカがその問いに答えた。
「連合の兵は確かに多くその規律は完璧です。しかし」
「そうだ。兵としては強くないのだ」
それが現実なのだった。連合軍は兵は決して強くはないのである。これは彼等が戦争を知らないのと訓練時間が短いせいだ。それにやはり連合軍はまだ寄り合い所帯と言ってよいしできて間もない。新造の軍には問題も多いのである。だから連合軍は義勇軍を前面に出して彼等を剣とし盾としてきたのである。
「数だけだ。極論すればな」
「しかも好戦的ではありませんし」
プロコフィエフがまた言ってきた。
「そうですね」
「その通りだ。連合軍はたかが知れている」
こうもはっきりと言ってみせるのであった。
「数は確かに凄いがな」
「将の質もそうですね」
ニルソンが指摘するのは将であった。エウロパ軍の。
「正直それ程だったとは」
「無能な提督もいなかった」
連合軍には実際に無能な提督は皆無であった。誰もが一応は平均水準にあったのだ。だがあくまで平均水準であるのだ。
「しかしだ」
「ええ。ただそれだけです」
そういうことなのだ。

## 第二十九部第二章　屈辱の記憶その十

「百点満点では六十点程度の提督が殆どで」
「マニュアル通り動いているだけだったな」
「臨機応変ではありました」
ベルガンサがまた言ってみせた。
「それは事実です。ですがそれもまた」
「マニュアル通りだったな」
二人が言うのはそこであった。
「あくまで何処までもな」
「やはり彼等はまず数です」
ベルガンサはまた言う。
「それをマニュアルとシステムによって戦う。個々の将兵の質はあまり求めてはいないのでしょうね。それはある程度わかるような気がします」
「マニュアルとシステムによって戦う、か」
ゴドゥノフはそれを聞いてその豪胆さがはっきりと出ている顔を動かすのであった。濃い髭がピクリ、と動いたのが見えた。
「そうした戦い方を進めていた時代があったな」
「はい」
彼にはプロコフィエフが答えた。
「二十世紀後半です」
「個々の将兵の強さではなく」
今度はマトクが言った。
「武装とシステム、マニュアルで戦うか」
「合理的ではある」
モンサルヴァートはそれをこう評した。まずは肯定的なものであった。
「連合軍のこともよくわかっているしな」

「そうです」
またプロコフィエフが答えたのであった。
「実戦経験のない連合軍だからこそそうしたふうにしたのでしょう」
「それをしたのはやはり」
モンサルヴァートはそれが誰かわかっていた。
「八条義統か」
「間違いありませんな」
「あの御仁しかいません」
今や彼はエウロパ軍にとって不倶戴天の敵となっていた。彼を倒すことを永遠の誓いとしているエウロパ軍人さえいる程だ。そこまでの存在になっていたのだ。
「どう考えても」
「文民統制の連合軍において」
そうなったのはここにも理由があった。連合軍はエウロパ軍のように現役武官が閣僚となり指揮を執る場合があったりはしないのだ。完全に文民統制下にあり政治家が軍を統率している。だからこそこうしたふうにもなるのだ。これは二十世紀後半とそのまま同じであった。
「それを踏まえてあそこまでしてみせたのは事実だ」
「まずは見事です」
プロコフィエフもそれは認める。
「しかしそれはやはり連合軍の強さもわかってのことですので」
「その政治体系もな」
これもまた関わっていた。しかも深く。
「連合は動きが読める。彼等は民主政治だ」
「はい」
「だから。市民が戦争を望まなければ戦争にはなりにくい。前の戦争では彼等は戦争を望んだ。あのステッラの事件によってな」
あの事件がエウロパの今を導いたと言ってもいいのであった。
「しかし今は違う」

「我々には敵対心はありませんか」
「それをいたずらに刺激するのはやはり愚だ」
ベルガンサに応えながら話をまた戻したのであった。
「我々が生き残る為にはな」
「生き残る、ですか」
「その通りだ」
モンサルヴァートの言葉が鋭いものになっていた。
「今エウロパは苦境にある」
「はい、それは確かに」
「否定できません」
建国以来の苦境にあると言っていい。それが現実であった。エウロパの者達にとってはあまりにも受け入れるのが辛い現実ではあるが。

## 第二十九部第二章　屈辱の記憶その十一

「今は確かに」
「生き残ることさえも」
「だからだ。今は生き残る為にやるべきことをやる」
モンサルヴァートはこう表現してみせた。
「やらないものはやらない。そういうことだ」
「そうですか」
「そういうことだ。それにしても」
モンサルヴァートはここでまた言うのだった。
「サハラに今介入できないのは痛いな」
「そうです」
プロコフィエフがまた言ってきた。
「今ここで介入できれば彼等の統一を防げるのですが」
「我々にとってみればサハラの統一は望ましいことではない」
エウロパの戦略ではそうなのだ。これはこれまでのモンサルヴァートの話にはっきりと出ていることであった。彼等の偽わらざる本音なのだ。
「それを防ぎたいのだがな」
「ですが今我々には介入することどころか」
「生き残ることすら危うい」
それが現実なのであった。
「この苦境をまずは乗り越えないとな」
「はい。さもなければ対抗どころではありません」
「卿等に言っておきたい」
モンサルヴァートはあらためて自分の下に集まる将帥達に言うのであった。
「ここでは。軽はずみな動きは慎むようにな」
「エウロパの為にですか」

「そうだ。今は力を取り戻す時」
こう告げる。
「それを忘れないでくれ。いいな」
「わかっております」
「今は」
「連合との戦いで受けた傷を癒す」
まずはそれなのであった。やはりそれであった。
「それでいいな」
「はい、確かに」
「今は」
彼等はまた言い合う。そうして今はエウロパ軍の受けた傷を回復させるのであった。だがそれはえ彼等だけが考えているのではなかった。あのギルフォードも同じことを考えていたのだ。彼はこの日もまた市民達の前で高らかに演説を行っていたのであった。
「諸君！」
また彼は市民達に対して言う。
「エウロパは今屈辱に身悶えしている！」
こう言ってみせた。
「連合に受けた屈辱に！我が祖国であるイギリスもまたそれを受けた！」
言うまでもなく大英博物館のことである。
「その悔しさを忘れてはならない。しかしだ！」
ここで言うのが彼であった。
「それは決して軽挙妄動になってはいけない！それこそが彼等の思う壺である！」
「思う壺！？」
「どういうことなんだ、それは」
「彼等は待っているのだ。我々が怒り狂う時を」
彼は言う。支持者達の声を聞いているかのように。
「その時にまた付け込むだろう。それでも我々は戦える」

まずはそれを保障してみせる。
「しかしだ。彼等の挑発に乗れば勝利を収めてもそれは賢者の勝利ではないのだ」
「賢者の勝利！？」
「それは一体何だ？」
支持者達だけでなく他の演説を聞く者達もこれには首を傾げた。何のことかわからなかったのだ。賢者も勝利もわかるがそれが何なのかはわからない。
「我々は何か！」
彼はここで市民達にまた問うた。
「誇り高きエウロパだ！世界を正しく導いてきたのは我々である！」
大航海時代から二十世紀までの時代は彼等にとってはそうなのだ。『多少の』過ちはあってもそういうことになっているのだ。当然ながら連合ではそれは悪の所業であるが。
「その我々が！愚者であろうか！」
「違う！」
誰かがそれに応えて叫んだ。
「我々は愚者ではない！」
彼はまた叫んだ。
「それは歴史にある！我々は優秀だ！」
「違う！我々こそが最も偉大なのだ！」
ギルフォードもまたその考えは変わってはいないのだった。
「その優秀な我々が！愚かなる彼等の挑発に乗ってはならないのだ！」
彼はそれを強調してまた言う。

## 第二十九部第二章　屈辱の記憶その十二

「何があろうとも！彼等の挑発に乗ってはならない！」
「そうだよな」
「それはな」
市民達はギルフォードのその言葉に同意して頷く。彼等としても自分達が決して愚かだとは思っていない。取り立てて賢者とも思ってはいないが。
「愚かなる彼等の挑発に乗らず。今は落ち着くのだ！」
「それはそうだな」
「挑発に乗るのも馬鹿な話だよな」
「それよりも今は！」
彼はここで本題を主張してみせた。
「力を取り戻すのだ！」
彼が言うのはそこであった。
「連合との戦いで失った力を！ここで取り戻すのだ！」
「そうだな」
「今はそうだな」
「軍の復活を！」
まずはそれを叫ぶ。
「あの輝かしいエウロパ軍を復活させるのだ！誇らしい騎士達の姿を！」
「ふむ」
軍人達はその言葉を受けて微笑んだ。
「その通りだ。彼はいいことを言う」
「わかっているではないか」
彼等にしては実に望ましい言葉であったのだ。
「その通りだ」
「今は軍備を整えてな」

それを実際に言ってくれるならばそれに越したことはない。現に今でギルフォード支持に回った軍人達も結構な数になっていた。
「輝かしいエウロパの栄光は汚されてはも汚れるものではない！力を取り戻すだけでいいのだ！」
彼は高らかに叫んでいた。身振り手振りを交えて語る。
「そして今言おう！賢者とは何か！」
今それを話しはじめた。
「それは我々のことである！世界を正しく導いてきた我々が！」
最初にこう宣言した。
「真の誇りを知る我々が！誇りあるならば軽挙を慎みあえて挑発には乗らずにいるものだ！」
話は元に戻っていたが一理あるものであった。その通りなのだ。
「そのうえで多々しい戦いを行い勝利を収める。それこそが賢者の勝利である！」
「それがか」
「つまり挑発には乗らずにか」
「我々は戦いを怖れない！だが賢者なのだ！」
刷り込むようにして言葉を続ける。
「それを忘れてはならない！私が言うのはそれなのだ！賢者は誇りを忘れずに戦おうではないか！」
彼もまた連合に対しての過剰な怨念を封じていた。だがそれと共に彼は考えてもいた。しかしそれは演説では言わずそれが終わってからスタッフ達に対して言うのであった。
「連合だけは許せないのはわかる」
ホテルで語っていた。それを今スタッフ達に告げている。
「あれだけのことがあったからな」
「はい、確かに」
「それは我々も同じです」
スタッフ達もそれに頷くのであった。彼等もまた連合を憎んでいたのであった。

「連合に受けた屈辱を忘れることはやはり」
「できはしません」
「それはわかっている」
ギルフォードは冷徹な言葉でそれに応えた。そのうえでまた言う。
「私もそれは同じだしな。あの汚らわしい連中にはな」
「ではどうして」
「あえてそれを抑えるようなことを」
「今のままで充分だからだ」
先程よりもさらに冷徹な響きの言葉であった。
「充分ですか」
「そうだ」
それをまた言う。
「エウロパの者達の連合への憎悪はな。今のままで充分だ」
「そうなのですか」
「そうだ。だからこれ以上煽ることはない」
こうした理由であった。
「怒りはそれが過剰になればその者を滅ぼす」
哲学めいた言葉も口にしてみせる。

## 第二十九部第二章　屈辱の記憶その十三

「だからだ。それよりもだ」
「それよりも。それでは」
「まずは力と誇りを取り戻すのだ」
彼が言うのはそこであった。
「まずはそれが肝心だ。いいな」
「その二つを」
「そうだ。怨念は過剰にはいらない」
そこをまた言って強調する。
「必要なのは何か」
「何かと言われますと」
「何でしょうか」
「力だ」
彼が欲しいのはそれであった。
「連合にもサハラにも対抗できる力が。我々には必要なのだ」
「それですか」
「そうだ。しかしだ」
だがここで彼はまた言うのであった。
「その力は我々には乏しい」
「残念ですが」
「それは確かに」
これに関してはギルフォードやスタッフ達だけではなくエウロパの者達全てがわかっていることであった。どうして一千億で四兆に勝てるというのか。
「しかし急にその力を身に着けることはできなくとも」
「徐々に、ですか」
「そうだ。何年かかろうともな」
ギルフォードが言うのはそこであった。

「いや、何世代何百年かかろうともだ」
「何百年ですか」
「そう簡単には力の差は埋まりはしない」
それがはっきりとわかっている言葉であった。
「だが。それの下地を作るのが私だ」
「閣下ですか」
「そうだ。エウロパは蘇る」
蘇るとまで言い切る。彼自身の手でだ。
「だからだ。いいな」
「はい、それでは」
「その為にも」
「怨みは確かに必要だ」
一応はその怨みも肯定する。しかしこれもまた彼の計算であるのだ。そうした意味で彼はあくまで政治家であると言える人物であった。
「それは何故かというと」
「力の糧になるからですか」
「人とは不思議なものだ」
あえて人間をこう定義付けてきた。
「プラスの力だけでなくマイナスの力も使って強くなるのだからな」
「怨みもまた、ですか」
「そうだ。それは事実だ」
臥薪嘗胆という言葉がある。古代中国の言葉であり言うならば連合の言葉であるのだがこの場合は彼等にも当てはまっていると言えた。
「過剰でなければそれもまたよし」
「しかし閣下はそれよりも」
「そうだ。誇りを使う」
彼の考えはやはりそこがメインであった。
「我がエウロパの誇りをな」

「そうですね。確かに」
これはスタッフ達もわかっていた。しかしここでその中の一人が言うのであった。
「しかしですね」
「言いたいことはわかっている」
鋭いギルフォードである。彼が問いたいことはわかっていた。
「誇りが打ち砕かれていると。そう言いたいのだな」
「はい、そうです」
そのスタッフも答えてみせた。その通りであるのだ。
「先の戦いの敗戦で失ったのは力だけではありません」
「誇りもまた」
他の者も言うのであった。
「失われました」
「散々に敗れた今」
「一度の敗北でか」
ここでギルフォードはいささかシニカルな言葉を述べるのであった。
「実に呆気ないな」
「そこまで破れましたから」
「やはり」
「確かに誇りというものは脆い」
ギルフォードはそれもまた肯定してみせる。まずは。

## 第二十九部第二章　屈辱の記憶その十四

「しかしだ。築きなおすこともできる」
「そうでしょうか」
「一度壊れたものはそう簡単には」
「病だ」
ふとした感じで病気を出してきたのであった。
「どんな病でも名医ならば治すことができるな」
「それはそうですが」
「優れた薬や機材があれば尚更だ」
この時代医学はさらに進歩しており人類の平均寿命は百歳を超えしかも二十一世紀には難病であったものが全て克服されている。人類にとって病とは二十一世紀までとは全く違う存在になっていた。怖れるものでは殆どなくなっていたのである。そこまで変わっているのだ。
「そしてそれを行うのは私だ」
「侯爵ですか」
「そうだ、私だ」
また言ってみせるのであった。
「エウロパの誇りを取り戻させる。必ずな」
「そうですね」
「誇りも必ず」
「戻る。それでだ」
彼はあらためて述べてきた。
「誇りを取り戻せばエウロパはまた蘇る」
「エウロパが」
「考えてもみよ」
ギルフォードはまた語る。
「これまでエウロパは多くの危機があった」

「危機がですか」
「そうだ。それこそ古代から」
つまりそこからエウロパの歴史がはじまるとしているのである。これはエウロパの起源が古のローマよりはじまるという彼等の考えから来るものである。
「ケルト人の侵略がありカルタゴとの戦いがあった」
「はい」
スタッフ達はギルフォードのその話を聞いていた。じっとだ。
「ペルシアとも戦ってきた。その間幾多の敗北があった」
これは歴史にある通りだ。とりわけカルタゴとの戦いは激しいものでありカンネーの戦いでは名将ハンニバルによって未曾有の危機に追い込まれたこともあった。ササン朝ペルシアとの戦いでも皇帝が捕虜になったりもしている。ローマとて栄光の中にあるだけではないのだ。
「しかしだ。その度に我々は立ち上がり」
「そして？」
「誇りを取り戻してきた。何度もな」
「何度もですか」
「オスマン＝トルコとの戦いを思い出すのだ」
かつてイスラム世界の覇者となり長きに渡って欧州を脅かしてきた大帝国である。今連合にあるトルコはこのオスマン＝トルコの後継国家を自任しておりその繁栄はかなりのものである。
「我々は長い間圧倒されてきた」
「はい」
「それは確かに」
ハプスブルク家の本拠地であるウィーンは二度も包囲され彼等の海だと考えていた地中海はその制海権を握られていた。そうして東欧のかなりの部分が占領されていたのだ。
「しかしだ。やがて彼等を圧倒したな」
「ええ、それは」

「ギリシアを独立させてからは」
「そういうことだ。長きに渡って力を蓄えればそれは可能なのだ」
彼が言うのはそこであったのだ。ここでも。
「わかったな。それでは」
「誇りを取り戻し力を蓄えるのですか」
「一度の敗北で。全てが終わったわけではないのだ」
こうも言ってみせてきた。
「むしろこれからだ。連合を破るのはな」
「連合をですか」
「その為の政策も既にある」
彼は今度は政治家として語ってきた。
「私のこの中にな」
「わかりました。それでは」
「うむ」
スタッフ達の言葉にまた応える。
「我々はこのまま侯爵と」
「エウロパの栄光の為にこれからも」
「むしろ。面白い程だ」
ギルフォードは不敵な笑みになっていた。
「面白いですか」
「そうだ。立ち直れないと思われた我々が蘇る」
その不敵な笑みで述べる。
「そうして栄光を取り戻しサハラも連合も倒す。面白いではないか」
「そうですね。それは確かに」
「そう考えれば。楽しいものがあります」
スタッフ達も満足した顔になる。ギルフォードの言葉に賛成している証であった。しかしそれでもまだ聞きたいことはあったのであった。

## 第二十九部第二章　屈辱の記憶その十五

「ですが侯爵」
「何だ？」
「何世代もかかるのですね」
「そうだが」
ここでギルフォードとスタッフ達の違いが出ていた。しかしスタッフ達はそれには気付かずただギルフォードだけが気付いていたがそれをあえて表情には出していないのであった。
「何か問題があるのか？」
「それだけかかる話となると」
「どうにも我々には」
それぞれ首を傾げて述べる。そこであった。
「実感が湧きません」
「どうにも」
「そうなのか」
ギルフォードは気付いていたがあえてそれを言わずに言葉を返すのであった。
「私達の生きている間だけですが」
「それだけでも大変だというのに」
「読むのがか」
「はい、そうなのです」
彼等はまたギルフォードに応えるのであった。
「何百年ともなると余計に」
「どうなるのか」
「だが。それを読まなくてはならない」
ここでギルフォードの言葉が鋭いものになった。
「それが本当の戦略なのだ」
「本当のですか」

「そうだ。遥かな先まで読む」
それをまた言ってみせる。
「それこそが戦略なのだ。いいな」
「それは聞いていますが」
「それでもやはり」
「理解はできないか」
「というよりは実感ができないのです」
彼等の言うのはそこであった。どうしても遥かな先まで考えることができないのだ。だがこれは結局のところ人ではない彼等にとってみれば仕方のないことであると言えた。
「どうにも」
「そうなのか。だが連合は」
「連合は？」
「少なくともあの長官は読んでいるな」
八条のことである。言うまでもなくギルフォードも彼のことは知っているのだ。
「八条義統ですか」
「そうだ。彼は間違いなく遥かな先まで読んでいる」
ギルフォードは言う。その目が遥かな地球にいる八条を見据えたものになっていた。
「何百年も先までな」
「そうして連合軍を築き上げていたのですか」
「それだけではない」
彼はさらに言う、
「そのシステムまでも。遥かな先まで見据えたものだ」
「あの徹底的なシステム化ですね」
「その通りだ。あれはかなりしっかりしたものだが」
それだけではないのだ。連合軍のシステムは。
「それと共に変更し易いようにできている」
「システムがですか」

「戦術ではなく」
「戦術はどうにでもなる」
ギルフォードのそちらへの見方は実に素っ気無いものであった。その言い方から彼は戦術に関しては重要視してはいないのかとさえ思える程のものであった。
「問題はシステムと」
「まだありますか」
「教育だ」
そこも指摘してきた。これは明らかに軍人ではなく政治家の目であった。その政治家の目で語ることこそがギルフォードであると言えた。
「それが問題なのだ」
「教育までもですか」
「連合軍の教育システムやカリキュラム等だが」
「はい」
「情報は入っている。私のところにも」
「何と」
これはスタッフ達も驚いた。何故なら彼等もそこまでは見てはいなかったのだ。あくまで政治的なスタッフである彼等は軍事のことに関しては専門外でありとてもそこまで関心も注意もいってはいなかったのである。これは仕方のないことであるとも言えることであったが。

## 第二十九部第二章　屈辱の記憶その十六

「それを見る限りでは。やはりな」
「しっかりしていると共に変更し易いものですか」
「鞭のようなものだ」
ギルフォードはこう評したのであった。連合のそのシステムを。
「強いが柔らかい」
「強いが柔らかい」
「それはまさに」
彼等はそれを聞いてふとあることを脳裏に浮かべるのであった。
「日本ですか」
「そうだ、日本だ」
ギルフォードも言うのであった。日本を。
「あの強かなな。日本だ」
「そういえば日本といえば」
「あの江戸幕府がありましたな」
「軍事政権でしたか」
この時代の視点から言えば幕府はそうなるのである。何故なら武士は騎士と同じく軍人だからだ。必然的にそうした見方になるのである。
「かなり強固な統治システムかと思えば」
「その実は」
「そうだ。かなり緩やかなものだった」
ギルフォードは言う。
「堅固ではない。磐石だった」
「磐石ですか」
「そう、あの政権は磐石だった」
また言うのであった。
「そうした意味で非常にしっかりしていた」

「そういえば」
「連合もまたそうですな」
「確かに」
スタッフ達はこれにも気付いたのであった。連合は言うまでもなく国家連合であり三百の国々から成る。それを取り纏めるものが中央政府なのである。
「中央政府が幕府とすれば」
「あの騎士領、いえ」
ここで言葉を変える。彼等の観点では騎士領であるのだが日本ではそれが違うことに気付いたのだ。この場合の呼び方といえば。
「諸藩ですか」
「そうなるな。そう考えるとわかり易いか」
「連合は幕藩体制ですか」
「そう考えると。どうして千年ももっているのか」
「わかりますな」
そういうことであった。江戸幕府は人類史上でも極めて非常に磐石な統治体制でありそれの崩壊は黒船の襲来までなかった。それがなければどれだけ続いていたかわからないという程のシステムであった。尚且つ平和であった。これは非常に素晴らしいことである。
「それが連合軍にも言える」
「そうなりますか」
「やはり」
「そういうことだ。わかったな」
「はい」
スタッフ達はあらためてギルフォードの言葉に頷いた。
「それを軍にも応用したのですか」
「だとすればあの日本人は」
「かなりのものだ。連合もこれから伸び続ける」
「あれ以上ですか」
これには流石に驚かざるを得なかった。

「あれ以上大きくなれば」
「対抗できないというのだな」
「今で四十倍です」
それは圧倒的というものではない。かろうじて対抗できているというのが今までであった。しかもそれも今回の敗戦でかなり危ういものになっていた。
「これ以上開けば最早」
「我々でだ」
「だからだ」
しかしギルフォードは臆することなく述べるのであった。
「何百年も先を見据えなければならないのだ」
「そうなのですか」
「しかし」
それはいいが。だがそれでもここで大きな問題があった。
「だからといって我々には」
「人口はこれ以上は」
「それもわかっている」
わかっていなければ話にもならないことであった。

## 第二十九部第二章　屈辱の記憶その十七

「今一千億」
「はい」
エウロパの人口である。人口が国力を考えるに当たって重要な要素の一つであることはこの時代でも全く変わらないのである。
「これ以上増やせるかというと」
「無理です」
スタッフの一人の言葉が答えであった。
「それはもう」
「やはり」
「そうだな。まずは国土だ」
最初にこの問題があった。
「我々の保有している星系はだ」
「はい、一千億が限度です」
「全ての星系を合わせても」
つまり飽和寸前にあるということなのだ。だからエウロパは長い間その人口を増やすことができなかったのだ。人が住むにはやはり場所が必要なのだ。
「せめてです」
「せめて？」
「はい。連合の技術があれば」
ここで連合の技術が話に出た。
「一千億どころか三千億の人口を持つことが可能でしょう」
「よくそう言われているな」
連合の惑星開拓及び開発技術はかなりのものでありエウロパのそれとは比較にならない程なのだ。それさえあればエウロパは三千億の人口を養えるようになる、と言われてきているのである。
「しかし我々にはそれがなく」

「今もこうやって」
「技術は手に入れるもの」
ギルフォードは素っ気無く述べた。
「そもそもだ」
「そもそも？」
「連合だけか」
ここで連合のほかにも言葉がいくのであった。
「連合だけといいますと」
「つまりは」
「そうだ。他にもある」
彼は言うのであった。
「マウリアがな」
「マウリアですか」
「そうだ。彼等と我々は幸いにして関係はそれ程悪くはない」
だからこそ先の戦争においても講和の仲介になったのである。マウリアは彼らにとってはいざという時になくてはならない仲裁者なのである。
「彼等から技術を学ぶ」
「果たして上手くいくでしょうか」
「それは。確かにいいのですが」
スタッフ達は懐疑的になる。確かにマウリアの惑星開発技術もエウロパより遥かに上なのだがそれでもそれを手に入れるとなれば話は別なのである。マウリアも強かでありはいそうですかと教えてくれるとは誰も思ってはいなかったのである。これは普通に考えてそうなのである。
「ですがそれは」
「そう易々とは」
「表から行けばな」
「表！？」
「そうだ」

ここでギルフォードは表と言ったのであった。
「表からはだ。そう易々とは手に入りはしない」
「あの侯爵」
スタッフ達はそれを聞いて彼に問うてきた。
「御聞きしたいことがあるのですが」
「何だ？」
「表とは。何でしょうか」
「そうです。それです」
他のスタッフ達もそれに問う。表というのが何なのかわかりかねていたのだ。
「わからないか」
「申し訳ありませんが」
「どうにも」
「何事にもだ。表と裏があるな」
こう言って懐から何かを出してきた。それは一枚のカードであった。
「カードですか」
「表はこうなっている」
「ええ」
見ればみらびやかに飾られている。看板のようにだ。そのカードは彼だけが持っている特別のものだろうか。彼の名前まで特別に書かれてさえいた。

## 第二十九部第二章　屈辱の記憶その十八

「しかしだ。裏は」
「裏は？」
「こうなっている」
見れば裏もまた飾られている。それは表と対になるものであったが色彩がかなり違っていた。それはそれで全く別のものになっていた。
「裏はだ」
「ええ。何かあるのですね」
「表とは全く違うがつながっている」
「つながっている！？」
「といいますと」
「そうだ。方法は一つではない」
ようやくといった感じで言ってみせてきた。
「技術でも何でも。何かを手に入れる方法はな」
「ふむ、成程」
スタッフの一人がそれを聞いて納得した顔で頷いてきた。
「そういうことですか」
「わかったな」
「はい」
少なくとも彼はわかった。それで納得した顔でいるのであった。
「ようやくですが」
「？私にはまだ」
「私もだ」
だが他のスタッフ達はそうではなかった。いぶかしむ顔でその同僚に対して問う。どうしてもわからないからこそ問うているのである。
「つまりだ。表は正攻法だ」

「ああ、そうか」
「そういうことか」
彼等も政治に携わっている。だからこれでやっとわかったのだ。
「それだったらな」
「そういうやり方も確かにあるな」
「買収が一番いいのだが」
ギルフォードは静かに語る。
「何かしらの手段で手に入れておく。マウリアの技術でもだ」
「ええ」
「かなりの開発ができる。またそれをテコにする」
「テコ、ですか」
「技術をコピーするだけでは所詮は二流」
今度はに龍という言葉が出た。
「そこから発展させていく」
「発展ですか」
「そうだ。我々の手でな。そして」
「そして？」
「フロンティアを見つける」
ギルフォードの言葉がさらに強くなる。まるでそれこそが目的であるようにだ。
「フロンティアといいますと」
「やはりそれは」
「そうだ。一つしかないな」
スタッフ達に言う言葉もはっきりとしたものになっていた。彼の決意であった。
「あの遥か何十万光年もの暗黒宙域を抜けてだ」
「その先にある無限の世界をですか」
「その通りだ。何としても見つけ出す」
言葉に込められた決意がさらに大きいものとなっていた。
「必ずな」

「それもまた困難ですな」
「確かに」
スタッフ達はこれにも難色を示すのであった。既にその暗黒宙域には何度どころか何百回と探索隊を送り中継基地も何個も設けているがそれでも遥かな星雲や星団には巡り合っていないのである。その何十万光年という遥かな空間の中において星系一つとしてだ。
「それでもだ」
「それでもですか」
「そうだ」
それでもギルフォードの言葉は変わらないのであった。
「無論だ」
「はい」
「サハラに再び侵攻できるのならそれでいい」
「また総督府をですか」
「そうだ。しかしそれができないならばだ」
ここで答えが出るのであった。
「その場合はだ」
「そうですか」
「確かに。我々とて生きなければなりません」
これは絶対のことであった。何故ならどんな生物であろうとも生きなければならないのは宿命である。本能の第一がそれであると言っていい。

## 第二十九部第二章　屈辱の記憶その十九

「だからですね」
「そうだ。連合もサハラも生きなければならないように我々もまただ」
　モンサルヴァートの言葉は連合やサハラの者達から聞けば虫のいい言葉だがそれでも彼等にとってみれば切実でかつ現実の話なのだ。それを諦めれば死ぬしかない。生きる為には何をしても生きなければならない、他の生物がそうであるように彼等もまたそうなのだ。それだけのことだ。
「だからだ」
「その通りです」
「しかしそれは連合の者達にとっては」
「わかろうともしない」
　はっきりと言ってみせた。
「何故なら。彼等にとってみれば」
「我々がどうなろうと知ったことではありませんか」
「それどころか苦しむのを見て喜ぶ程だ」
　連合にとってエウロパの不幸とはこの上なく喜ばしいものである。それを見て美酒を飲むことこそが彼等にとって最高の喜びの一つなのだ。
「それが彼等の偽らざる考えだ」
「偽るどころか」
「それがひしひしと伝わります」
　ネットや雑誌ではもう実際に言葉になっている。テレビにおいても大々的に言われている。エウロパなぞどうなっても構わない、そのまま苦しんでいればいいと。彼等の本音そのままだ。
「全く以って」
「何もかもが」

「その通りだ。我々にとってもだ」
向こうがそう思っているならばこちらも同じ考えになる。それがマイナスの感情であれば尚更だ。連合とエウロパの関係はまさにそのマイナスの積み重ねなのである。
「彼等の不幸が楽しいな」
「そうですね」
「忌まわしい奴等が不幸を味わうと思うと」
自分達に置き換えて考えればそうなる。それが現実であった。
「実に楽しいものです」
「成程。そうですね」
ここで彼等はわかった。
「では彼等にとってみれば我々がこのまま苦しみ続けることは」
「実に楽しい見世物であると。そうなのですか」
「おそらくはだ」
ギルフォードは例えを出してきた。
「ネットやゲームよりもまだ楽しいだろうな」
「ネットやゲームよりも」
「そこまでの楽しみだと」
「憎い相手や嫌いな相手の苦しみはそれだけの価値がある」
ギルフォードは実に人間のマイナス部分の考えがわかっていた。それに基づいて考えれば答えは実に簡単に出るものであった。
「千年もの間いがみ合っていればな。それだけのものがあるだろうな」
「左様ですか」
「そういえば連中は」
忌々しげな言葉になっていた。
「植民地時代のことをあれこれと言ってくれていますな」
「恩恵を与えてやったというのに」
「全く」
彼等にしてみればそういう考えなのだ。エウロパでは大航海時代

や帝国主義時代、その後の欧州が主導権を握っていた時代は彼等が今の連合やサハラの者達を正しく導いていた時代なのだ。連合の者達にとっては全否定すべき、いや最初から全否定している考えである。

「恩知らずな野蛮人共が」

「何を言っているのか」

「しかしその野蛮人に敗れたのだ」

ギルフォードはここで彼等に告げた。

「だから今こうして苦しんでいる」

「それはそうですが」

「ですが」

「卿等の言葉はわかる」

彼もそれは認めるのであった。

「しかし」

「しかし？」

「敗北は事実だ。それは変えられない」

「はい」

「そうです」

彼等も落ち着きを取り戻しそれに頷くのであった。いや、頷くしかなかった。彼等とて現実から逃れることはできはしないからだ。残酷な現実であればある程。

## 第二十九部第二章　屈辱の記憶その二十

「無念です」
「誇り高き我々が奴等の嘲笑を浴びるなぞ」
「気にすることはない」
しかしギルフォードの言葉は落ち着いていた。
「連合のことは。気にすることはない」
「そうなのですか」
「生きていればだ」
ギルフォードは言う。
「必ず嘲笑を受ける。しかし」
「しかし？」
「それは生きていれば必ず起こることだ」
受け止める言葉であった。
「必ずな。だから」
「だから？」
「受け止めるのだ」
「受け止めるのですか」
「この屈辱を」
スタッフ達にはこの言葉は到底受けられないものであった。エウロパ貴族としての誇りが。それを受けさせなかったのである。
「それはあまりにも」
「惨いのですが」
「誇りがあるならば受けるものだ」
しかしギルフォードの言葉はあまりにも冷徹なものであった。
「何があろうともな」
「何があろうとも」
「そうだ。それが真の誇りだ」
彼はそう己のスタッフ達に告げた。

「例えどのような屈辱もな。だからこそだ」
「屈辱をすぐに晴らすのではなく、ですか」
「それもよし」
まずはそれも認める。
「しかしだ。それが果たせない場合にはだ」
「受けるしかないと」
「そうだ。いいな」
「それを成した者達は」
「いた」
ここでギルフォードはまた言ってみせてきた。
「かつて。そう」
「その者達は」
「何処に」
「あの。連合にだ」
言葉が強張ったように聞こえた。それは緊張故であろうか。
「連合に！？」
「まさか。いや」
だがここで。一人がふと気付いた。
「そういえば日本では」
「日本か」
「ああ。二十世紀の話だったか」
「正確に言うならば十九世紀の終わりから二十世紀のはじまりにかけてだ」
ギルフォードは年代まで知っていた。完璧だというわけだ。
「その頃に起こったことだが」
「はい」
「それは一体」
「まずはだ」
話は幾つかの段階を経ているようである。周りの者達はギルフォードの言葉からそれを察した。そのうえで黙って話を聞くのであっ

た。
「中国と戦争があった」
「中国とですか」
「そうだ。その時は最後の帝政だった」
所謂清王朝である。満州民族の国だがこの王朝は非常に優れた政治能力を以って中国を治めていた。言うならば中華王朝の優れた入り婿といったところであろうか。
「その国に勝ったのはいいが」
「ええ」
「今度はロシアが来た」
「ロシアですか」
「あの」
今でも連合において強い力を持っている国である。連合においては日米中露で四大国、ここにブラジルとトルコを入れて六大国ともなるがいずれにしろ入っている国である。

## 第二十九部第二章　屈辱の記憶その二十一

「それでだ」
「ロシアに脅迫されたのでしょうか」
「そうだ。しかし」
「しかし？」
「ただの脅迫ではない」
どうやら彼は連合各国の歴史にも詳しいらしい。敵を知り己を知ればと言うがそれを考えれば彼は戦略もわかっているとも見える言葉であった。
「といいますと」
「武力を使ってでしょうか」
「以前のロシアはそれが普通だったそうですが」
今の連合とは違うのだ。もっとも今は武力のかわりに経済力を使うのであるから違いはないとも言える。結局のところ力を使うからである。
「そうなのでしょうか」
「それはいつものことだ」
ギルフォードは素っ気無く答えた。
「ロシアはな」
「まあそうですが」
「それだけではないと見受けますので」
「ロシア一国で干渉したのではない」
ここが重要なのだ。
「フランスとドイツを誘った」
「ほう」
「あの二国を」
所謂三国干渉である。日本の歴史においては実に名高い三国による恫喝である。これにより日本は日清戦争後の下関条約で得た遼東

半島を清に戻さざるを得なかったのだ。
「そうして日本を退けたのだ」
「善意ではないでしょうか」
「何しろあのロシアです」
ロシアという国は実に不思議な国であり昔から国民は素朴で親切で無欲な人々だと言われている。ところが国としては残忍で信用できず暴力的だと言われる。もっともこれはロシアと利害関係が生じている国々からの言葉である。これまた不思議なのであるがロシアは利害関係のある国に対しては何処までも敵対的でその牙も爪も隠そうともしないのである。だが利害関係のない国に対してはかなり寛容で親切なのである。
アメリカや中国は違う。利害関係が生じれば表面上は友好関係を保っているが裏では様々な謀略を駆使してどんな手段を使ってでも徹底的に潰そうとし、そのうえで相手を貶め何処までも蔑み断罪しようとすると言われている。日本は最後まで耐えていきなり切りつけてきて後は名誉ある敗者として扱うと言われている。四国でそれぞれ差があるのだ。どれがいいか悪いかはこの場合はまた別の問題である。
そのロシアと日本に利害関係が生じた。三国干渉はそれの直接的なはじまりであったのだ。元より日本はロシアを心底怖れていたのであるが。
「どうせ領土でも得ようとしていたのでしょうな」
「その通りだ」
ギルフォードの返事は一言であった。
「ロシアはそのまま万里の長城以北に居座り」
「やはり」
「それが狙いですか」
「しかもそこから日本が日清戦争で独立させた朝鮮半島に本格的に進出してきたのだ」
これが当時の日本を刺激したのだ。

当時の李氏朝鮮、独立後は大韓帝国は衰亡の極みにありしかも世界情勢を読む力もなかった。国王、後の皇帝である高宗は無能な人物と言われ皇后の一族の専横や李氏朝鮮の腐敗を象徴している両班という貴族達の横暴を止めることもできず国力は衰微しまともな軍事力さえなかった。その結果として独立運動が起こっても清王朝の介入を許し日清戦争まで真っ当な舵取りすらできてはいなかった。しかも独立させて一安心と思っていた日本の予想を悪い意味で裏切ったのである。

何とその皇帝高宗がロシア大使館に逃げ込みそこで政務を取るという異常事態が発生したのだ。これには日本の首脳達も唖然とした。唖然としただけでなく蒼白になってしまった。それが何故かというとロシアに半島の権益を次々に売り渡しはじめたからだ。このままではロシアは本当に朝鮮半島を己の勢力圏にしてしまう、日本がそう危惧したのも当然である。実際にロシアは半島を己の勢力圏に収めてしまうつもりであった。そこにロシアが常に喉から手が出る程欲しくて仕方がなかった不凍港を手に入れまた日本を攻める足掛かりにもなる。軍艦の一隻に韓国の名前さえ既につけていた。ましてロシアは超大国だ。半島なぞ簡単に己の勢力圏に収めることができる。とある詐欺師と呼んでも構わない歴史学者がロシアには半島を勢力圏に収める力なぞなかったと言っているがこれは虚言に他ならない。

ロシアは次第に半島に進出し清で義和団事件が起こる。これで日本とロシアが主力なって出兵するがロシアはここで満州に兵を置き続け旅順には要塞と軍港を築いた。明らかにそこから半島、そして日本を攻める気であった。日本にとって運命の時が迫っていたのだ。

「その間だ」

「はい」

ギルフォードはここまでスタッフ達に話していた。スタッフ達は彼の話をじっと聞いていたのである。

「日本も何もしていなかったというわけではない」

「といいますと」
「やはり力を」
「そうだ」
そこに答えがあった。

## 第二十九部第二章　屈辱の記憶その二十二

「彼等とて眠っているわけではなかった。むしろだ」
「力を蓄えていた」
「それも必死に、ですね」
「そうだ。それこそが臥薪嘗胆だ」
ギルフォードはここでようやくといった感じでこの言葉をまた出してみせたのであった。
「エウロパもまた今は」
「臥薪嘗胆の時ですか」
「これでわかったな」
「ええ」
「ようやく」
スタッフ達も頷く。しかしここでまた聞きたいことがあった。
「ですが侯爵」
「何だ？」
「それで日本はどうなったのですか」
「そうですな」
問題はここであった。例えどれだけ耐えて力を蓄えたからといっても負ければ何の意味もないのだ。それが政治の世界というものである。
「敗れたのですか。それとも」
「結論から言おう」
ギルフォードは簡潔にそこからはじめた。
「ええ」
「それで彼等は」
「勝利を収めた」
結果はそうであった。誰もがその全力を出し尽くしそうして勝ったのだ。日本はその成立以来の未曾有の危機に対して何とか勝利を

収めたのである。奇跡的なまでに見事に。
「そうして彼等は生き残ったのだ」
「つまりはハッピーエンドだったのですな」
スタッフの一人がそこまで聞いて言った。
「だからこそ参考になると」
「そうだ。日本はやった」
彼は言う。
「十倍の勢力を誇るロシアにな」
「十倍ですか」
「確かに勢力差はかなりのものですな」
十倍と一口に言ってもだ。当時の日本にとってはそのロシアの相手はまさに悪夢であった。誰もが勝てるとは思えず強硬派であるとされている山縣有朋でさえ最後の最後まで決断を迷っていた程だ。伊藤博文もロシアとの講和を模索していた程なのだ。
「そしてだ」
「そして？」
「彼等は外交も使った」
「外交もですか」
「つまり頭脳もだ」
こうも言い換えてみせた。
「頭脳を使って勝利を収めたのだ。諜報戦然り」
ペテルブルグに明石元澄大佐を送りレーニンに資金を送ったり情報収集に努めた。そして他の方面にも頭脳を使ったのである。
「外交もだ」
「外交もですか」
「我が祖国と手を結んだ」
「つまりはイギリスですか」
「そうだ」
これもまた大きかったのだ。日露戦争の勝利はただ戦場での勝利だけではないのだ。

「日英同盟だ」
「日英同盟」
「それがですか」
「これは我が国の自慢になるが」
ギルフォードはこう前置きして言ってきた。
「我が英国はかつては世界に覇を唱えた」
「そうですな」
「それも長きに渡って」
日の沈まぬ帝国として二世紀の間だ。ブルボン王朝との百年に渡る戦いを勝ち抜きその後のナポレオンとの戦いを制してだ。その間危機も幾度かあったがそれでも勝利を収めたのである。最後に勝っている者こそが勝利者であるとするならばだ。
「その間我々は同盟を結ばなかった」
名誉ある孤立というわけだ。
「それにより欧州のバランサーとなっていた。しかし時代は変わりだ」
「そうして」
「各国も力をつけそれもままならなくなってきた」
「そうだったのですか」
「特にだ」
ここでまたあの国が出る。

## 第二十九部第二章　屈辱の記憶その二十三

「ロシアがな」
「あの国がですか」
「そうだ。ロシアと我が国の関係は実に険悪になっていた」
簡単に言えばロシアの勢力圏とイギリスの勢力圏が各地で隣接していたのだ。それがそのまま各地での対立につながっていたのである。イギリスにとってロシアをどうにかすることが重要な外交課題になっていたのである。そこで日本が目に入ったというわけである。
「日本と同じくな」
「それが世界規模になったもので」
「それを考えるとイギリスも切実だったのですね」
「そうだ。だからこそ日本との同盟を選んだのだ」
そういうことなのであった。
「日本にとっては想像もできないことだったがな」
「！？それは何故」
「あの日本が」
「今の日本とは違う」
一国でエウロパに匹敵する力を持っている日本ではないのだ。当時の日本は。
「当時の日本は小国だった」
「おっと、そうですな」
「そういえば」
スタッフ達もここで気付いた。
「ロシアの十分の一でしたな」
「それを考えれば」
「そうだ。その日本が世界の覇権を握るイギリスと同盟を組む」
当時としては考えられない話だったのだ。
「誰もが驚いた。日本でさえも」

「日本でもですか」
「彼等は考えたのだ」
ここでギルフォードは言うのだった。
「自分達のような小国がイギリスと同盟を結べる筈がないとな」
「それは謙遜ではなく」
「己の力を見たうえでだ」
そういうことであった。当時の日本は何も己を卑下していたのではない。己とイギリスを正確に見極めたうえでこう考えていたのである。
「しかもだ。彼等はアジア系だな」
「そうですね」
「今でこそかなり混血していますが」
今連合ではかなり混血が進んでいる。純粋なアジア系も白人も黒人も殆どなくなってしまっているのだ。だから肌が黒いアジア系や白人の顔の者もいれば金髪の黒人もいたりするのだ。実はこの混血もまた連合の者達がエウロパの者達を馬鹿にすることの一つになっているのである。混血を全くしない差別主義者だというのである。混血したくともできない彼等の事情はここでも全く無視して馬鹿にしているのである。
「当時は純粋なアジア系でしたな」
「そういえば当時アジア系は」
「そうだ」
ここでもう一つの問題が出た。
「アジア系はヨーロッパ系に比べて差別されていた」
「所謂白人至上主義ですな」
「その通りだとも思いますが」
ここでは本音が出た。実際のところ彼等は自分達が最も優れていると信じているし己の白い肌はその証だと思っている。これはエウロパだからこそ思えることであるのだが。
「当時はそれが確固たるものだった。いや」

「いや！？」
「絶対のものだったのだ」
そうした時代だったのだ。白人こそが世界を正しく導く存在だと言われていたのだ。なお非常に面白い話であるが知能指数の検査をしても進化を調べてもアジア系の方が上にあるとされてきた。しかも今連合においては人種や混血による知能指数の差は全くない。結局のところ同じ人間なのでその能力にも然程大きな差がないというわけだ。とどのつまりは人種論というものは何の根拠もないものでしかないのだ。
「そのアジア人国家の日本が白人国家の頂点にあるイギリスと手を結ぶ。それはやはり」
「夢の様な話ですか」
「イギリスにはイギリスの都合があった」
これは大前提である。やはりロシアを見据えてのことだ。
「アジアでの権益を守ってくれる存在も必要だったしな」
「それが日本だったと」
「日本にしてみても悪い話ではなかった」
むしろ渡りに舟である。強国ロシアと対峙するにあたりまたとない友邦が出て来たのであるからだ。しかもそれが世界に覇権を唱える国家である。
「しかし。信じられるかどうかというとそれは」
「別問題というわけですね」
「だから同盟締結までにも色々あった。それでも結ばれたがな」
「そうなりましたか」
「それは日本にとって非常に有益な外交であった」
何しろロシアの力を各地で抑えていてくれているのだ。有り難くない筈がなかった。日本にとってはロシアの力を少しでも削いでおかなければならなかったからだ。

## 第二十九部第二章　屈辱の記憶その二十四

「その外交によっても日本は勝利を収めることができたのだ」
「それではですね」
ここで彼等は言うのであった。ここまでギルフォードの話を聞いたうえでだ。
「彼等は戦闘だけで勝ったのではなく」
「文字通り全ての力を使って勝ったのですか」
「臥薪嘗胆、それによりな」
「それを我々もですか」
「彼等に対して」
『彼等』という言葉の対象が変わった。それまでは日本であったのが連合に変わっていた。そこにはサハラも入っているのも言うまでもない。
「その通りだ。誇りを以って耐え」
彼はあえてまた言ってみせた。
「そうして力を蓄え何時の日か、だ」
「長い道のりですな」
「それは実に」
「何、それはいつものことだ」
あっさりといつものことだと言い切ってしまった。
「政治においてはな」
「いつものことですか」
「さしあたっては国力を開戦前にまで戻す」
そこまで考えているのであった。ギルフォードの目はあらゆるところに及んでいた。
「それからだな」
「ですがそれも」
「何か方法がおありで」

「なければ言うことはない」
こう言うのであった。
「わかったな」
「はい、それでは」
「侯爵の御言葉のままに」
「経済は生き物だ」
彼は言う。
「生き物は動くからこそ生き物だ。そういうことだ」
「確かに」
「それはその通りです」
これは言うまでもないことである。機械も動きはするがここでは完全にあらゆる部分が動いているという意味である。生物は心まで動いているが機械には心というものがない。その違いがあまりにも大きいのである。だから機械は生物にはなり得ないのである。
「動かす。さて」
「さて？」
「もう話はここまでだ」
きりのいいところで終わらせてきたのであった。
「休むとするか」
「そうですな」
「もうかなりいい時間です」
真夜中になっていた。誰もが休む時間になっていた。
「それでは明日の為にも休息を取りますか」
「そうですな」
「その日の休息は翌日への糧となる」
ギルフォードは静かに述べた。
「それでは。休むとしよう」
「ええ。では侯爵」
「これで」
「うむ。ところでだ」

最後に彼はスタッフ達に言ってきた。
「彼との面会については進んでいるか」
「御安心下さい」
スタッフの一人が確かな声で答えてみせてきた。
「それは既に」
「向こうには気付かれてはいないな」
「おそらくは」
「おそらくは、か」
「これは言い訳になりますが」
「よい」
それをよしと言ってみせた。
「言ってみてくれ」
「はい。あの閣下も鋭い方ですので」
その言葉と口調から相手がかなりの人物であるとわかる。
「既に気付かれている可能性もあります。今気付かれておられなくとも」
「これからはわからないか」
「はい。まだ少し時間がありますので」
こう答えるのであった。
「ですがお待ち頂ければ」
「期待していいということだな」
「是非。それでは」
「うむ。それではな」
「はい」
こうして話は終わった。彼等はこれで話を終えた。エウロパでもまた何かが大きく動こうとしていた。しかしそれはまだ出てはいないだけであるのだ。

# 第二十九部第三章　教会の葛藤その一

教会の葛藤

近頃ブラジルが何かと騒がしい。それには理由があった。

「では旅行業界は既に準備を整えているのだな」

「ああ」

高官達が密室で色々と話をしていた。

「既にな。彼等は何時でもいいそうだ」

「そうか、何時でもか」

彼等はそれを聞いて頷き合う。

「それはいいことだ。では後は当事者達が来るだけだな」

「そうだ、それだけだ」

話はバチカンに関してだ。前の会議でブラジルはその側にバチカンを置くことに失敗している。しかしそれでもこの国の旅行業界はバチカンへのツアーを計画して既にそれはかなりの応募者さえいる程の大きな話になっているのである。

高官達はそれについて話をしていた。ブラジルに直接関係のある話である。

「では。我々としては」

「バチカンとも話をしておくか」

「そうだな。あちらにとっても悪い話ではあるまい」

その通りであった。旅行客が落としていく金というものはかなりのものだ。それだけで生きている都市や星は昔からかなりの数があるのだ。

「それは当然だな。彼等とて霞を食べているわけではあるまい」

「そうだな」

バチカンは聖なる場所とされているが歴史を知っていればその言葉に素直に頷ける者はいない。先の戦争も枢機卿が関係している程だ。世俗的と言えばこれ程世俗的な場所もそうはない。しかもかな

り陰惨なものがその裏にはあり続けた場所でもあるのだ。
だからこそ今彼等もこうして話をしている。全てわかったうえでだ。
「聖書や賛美歌の売り上げだけでなく」
「大勢の信者達の寄進もあるがな」
それだけで既にかなりのものがある。
「だが。それだけでは足りないだろう」
「金は特別なものだ」
ここでこの言葉が出た。
「足りるということはない」
「そうだな」
高官の一人がこの言葉を聞いて笑みになった。
「確かにその通りだ」
「そういうことだ。バチカンもまたそうだ」
金というものの特殊性をよく踏まえた話でもあった。
「幾らあっても困るということはない」
「では。話は上手くいくな」
「そうだ。しかし」
ここで問題が一つあった。
「旅行客のマナーだな」
「それだな」
そこにいる者達は皆マナーについては目を光らせるのであった。
「それが問題になる」
「普段のマナーでは。困ったことになる」
旅行客のトラブルというものは何時の時代のどの国にも存在している。残念ながらそれは消えるということはない。この時代もブラジルだけでなくどの国でも旅行客達が旅行先の国でトラブルを起こして問題になるという話がしょっちゅう起こっているのである。
「それはどうするか」
「場所が場所だしな」

「そうだ」
確かに歴史を見れば聖なる場所だと言われてもにわかに信じることはできない。しかしそれでもバチカンだ。下手なマナーではお話にならないのだ。
「バチカンだからな」
「普通の観光旅行ではない」
そういうことである。ムスリムのメッカ巡礼と同じなのだ。彼等にしても旅行ではあるのだが表向きは巡礼なのだ。ここは重要なのである。
「巡礼だ」
「そこを徹底して注意してもらうか」
「さもないと大変だ」
彼等はそれもわかっていた。
「若しだ」
「うむ」
そのうえでまた話になる。
「我が国の観光客達がバチカンで無作法なことをすれば」
「それだけで国際問題だぞ」
「その通りだ」
彼等の声が真剣なものになる。バチカンは権威である。権威に泥を塗るということは彼等にとっても非常に危険なことであるのだ。
「だからこそそれだけは」
「そうだな。避けなければ」
「そうだ。だからこそ」
彼等は言い合う。

## 第二十九部第三章　教会の葛藤その二

「マナーについては普段の旅行よりもな」
「遥かにエチケットを徹底してもらわなければ」
「しかしだ」
ここでもまた問題があった。問題というものは尽きることがない。さながら一つの首を切ればまたそこから首が出るヒュドラーのようなものだ。しかもヒュドラーの中央の首が不死身であるのと同じで問題は決して消えることがない。そうした意味で問題と言う存在は不死身の化け物に等しいのである。
「それを我々が言うことは」
「難しい」
そうなのであった。ブラジル政府はおおらかなことで知られている。所謂ラテン気質である。とりわけ旅行に関しては最低限のマナーさえ守ってくれればいいと言うだけである。それなのに今回だけやたら五月蝿く言うことはできないのであった。そこが難しいことであった。
「ではどうする？」
「我々が言えないとなると」
「向こうに言ってもらうか」
ここでこうした意見が出た。
「バチカンでか」
「そうだ、彼等にだ」
バチカンへ言葉が向けられた。
「何しろ彼等は注意することの専門家だ」
「そうだな」
「確かにな」
これは彼等が聖職者だからだ。聖職者というものは道徳を語るものだ。確かに歴史上バチカンは不道徳という言葉では到底済まない

ようなことを数多くしてきているがそれでも彼等の仕事はそれなのだ。だから注意するのも慣れているだろうというのが彼等の考えであった。
「それでどうか」
「うむ、確かに」
他の者達もその言葉に納得して頷く。
「他ならぬ彼等が言えば」
「それでいいな」
「何しろだ」
宗教そのものへの話となる。
「巡礼に行くのだしな」
「巡礼にいく者達が神父の言葉に従わないわけにもいくまい」
そういうことであった。聖地への巡礼でそこにいる聖職者達の言葉を聞かないなどというのは有り得ない話である。彼等はそこに期待したのだ。
「それではだ」
「この件はこれで決まりだな」
「そうだな」
そう話し合う。
「既にあちらにはエウロパから先行して来ている神父達がいたな」
「ああ、既にな」
それはもう調べてあった。
「万単位でな」
「また随分と多いな」
高官の一人がその数を聞いて呟いた。
「万単位とはな」
「いや、それが普通だろう」
しかしそれはすぐに否定された。
「バチカンだぞ」
「うむ」

バチカンという場所の特殊性がまた話に出る。
「それならば神父や司教が何万人もいて不思議ではあるまい」
「そうなるか」
「あとスイス人達も来ている」
「スイス人！？ああ」
ここで話がわかった。少し考えたうえであ。
「彼等だな」
「そうだ。傭兵達だ」
所謂槍を持った護衛兵達だ。バチカンは中世よりスイス人の傭兵達をバチカンの護衛として置いているのである。それがこの時代も続いているのだ。
「彼等も既にかなりの数が来ている」
「来なくてもいいのだがな」
中の一人が忌まわしげに呟いた。
「エウロパの者達なぞ」
「まあそう言うな」
だがそれは仲間達によって窘められた。
「落ち着けというのか」
「そうだ。元々エウロパのものだしな」
「むう」
それを言われると弱い。彼も大人しくなってしまった。

## 第二十九部第三章　教会の葛藤その三

「確かにそうだな」
「だからだ。その程度は許してやればいい」
「あくまでその程度ではないか」
「それもそうか」
言葉には幾分以上に嫌味が加わっている。その感情は誰もが同じであった。
「では。納得しておくか」
「そういうことだ」
「しかもだ」
ここでそのスイス人達に関しての話になる。
「今時パイクだのハルバートなぞを持っていても」
「何程のことがあろうか」
「それもそうだな」
それも理由であった。つまりは儀礼的な存在に過ぎないというわけである。今は宇宙の時代だ。そこで槍を持っていてもどうにかできることではないのだ。最早バチカンがそれ自体が封建君主として君臨し独自の軍隊を持っていた時代ではないのである。そうした時代は終わっているのだ。
「では無視していいか」
「最もスパイが紛れ込んでいる可能性もあるがな」
「それだな」
注意すべきはそこであった。何しろそれで戦争になっているからだ。
「それについては気をつけなければな」
「一応入国までに三重のチェックがあるがな」
アタチュルク要塞群にマラッカ回廊、最後にガンタース要塞群である。先の戦争により確立した三重の防衛体制がここでも生きてい

るのである。
「それと連合各国でもチェックだな」
「チェックする担当者が全て買収されるとは考えられないしな」
「そうだ」
そうした者がいるにしろそれが全てなどということは有り得ないのだ。買収に応じない者もいるのである。無論脅迫に屈しない者もだ。
「また全員が全員無能だということは」
「有り得ない」
これもまた有り得ないことであった。
「コンピューターの計算ではだ」
「うむ」
ここで話の根拠としてコンピューターが出された。
「スパイが無事に連合に入られる可能性は四兆分の一だ」
「ふむ。連合の人口と同じだな」
「そういうことだ」
つまりまず有り得ないということであった。
「では安心していいか」
「バチカン自体でもチェックがあるしな。それを入れれば」
「まずスパイは入り込むことができないか」
「むしろマウリア経由で来るだろう」
まだそちらの方が可能性があった。エウロパとマウリアは離れていても交流があるからだ。サハラ各国も互いの交流は妨害しない。これはマウリアに配慮してのことである。
「そちらの方が可能性があるな」
「そうか。最早バチカン経由での工作員はないか」
「そうだ。それにだ」
ここでまた話される。
「それを抑える為にバチカンを移転させるのだからな。それでまた工作に使われたとしたらそれこそ話にならないではないか」

「それもそうだな」
「わかったな。だからこれについては安心していい」
「わかった。そのエウロパだが」
「うむ」
話がエウロパについてのものに移っていった。
「バチカンの残留運動はまだ続いているのか」
「相変わらずだ」
つまり続いているということである。彼等も必死なのだ。
「連日連夜バチカンの前で座り込みだ」
「そうか。存外粘り強いな」
「エウロパ人は粘り強い」
連合におけるおおむねの評価でもある。連合の者達に対して何事も根気があるとされているのである。根拠は様々な説があるが。
「今回も同じだ」
「そうか今回もか」
「執念深いか」
「まあそうも言うな」
「確かに」
執念深いという言葉には皆笑って頷く。彼等にしてみればこちらの評価の方がしっくりとくるものであった。エウロパに対する評価ならば。

## 第二十九部第三章　教会の葛藤その四

「その執念深さを発揮している」
「成程」
「そういうことだ。無駄な努力だがな」
「無駄な努力に力を費やしてくれればいい」
他ならぬ彼等の本音である。
「このままずっとな」
「その通りだな。彼等が無駄なことに力を費やしている間に我々は」
「さらに力を蓄えさせてもらう」
そういう考えであった。
「さて、それではエウロパの嘆き血の涙を流して悔しがる様を眺めながら」
「優雅にバチカン巡礼を楽しませてもらおう」
「そうするとしよう」
そんな話をしていた。この頃そのバチカンでは移転する準備で大混乱に陥っていた。その混乱はあまりと言えばあまりであった。
「教皇様行かないで下さい！」
「どうかここに！」
バチカンでは今日も信者達がそう訴えている。その中では司祭や神父達が荷物を持って右に左に動き回っている。当然ながらシスターや枢機卿もいる。
皆その手に荷物を持っている。そうしてそれぞれ言い合っていた。
「それはこっちで」
「これはあっちで」
「それはこっちだな」
「はい、そうです」
最早誰が誰なのかわからない。何しろ普段は動くに及ばない枢機卿達ですらあくせくと動いているのである。もっともこれはエウロ

パ系の者達だけであり連合系の者達は皆平気な顔をしてくつろいでいる。間違っても彼等の手伝いや助けなぞしようとはしない。笑顔で彼等の動く様を見守っているだけである。
「いやいや、随分と」
「動いておられますな」
二人の司祭がベンチに座って笑いながらその喧騒を見守っていた。
「普段運動をされていない方が多いようですな」
「そうですな」
息を切らす彼等を見てさらに笑う。
「何でもあれですな」
「何でしょうか」
ここで彼等はわざとその動き回る者達に聞こえるようにして話し合うのだ。
「エウロパでは聖職者はスポーツをしないとか」
「ほう、そうなのですか」
「ええ、何でも」
そして言うのだ。
「身体を動かすことは卑しいそうで」
「初耳ですな、それは」
「いや、これが本当なのです」
実は嘘である。これは連合の一国である韓国に昔存在した両班という貴族階級だ。彼等は汗をかくことを極端に蔑視し動かなかったのである。それをわざと彼らに当てはめて馬鹿にしているのである。悪質極まりない嫌味であると言えた。
「下の者が動くそうで」
「自分では動かないのですか」
「それこそが貴族ではないのですかな？」
連合のいつもの貴族への嫌味であった。
「自分は動かず搾取だけする」
「おお、それは酷い」

また聞こえるようにして言う。
「人間としてそれはどうかと思いますが」
「いやいや、これがですな」
さらに話を続けてみせる。
「一向に気にならないようです」
「またそれはどうして」
「青い血という言葉がありますな」
「はい」
昔から貴族をさす言葉である。青を高貴な色としてのことであろうか。
「それはつまり彼等は」
「人間ではないというわけですか」
「いや、特別だと思っているのです」
「特権階級ですな」
「その通りです」
連合では最も忌み嫌われているものである。階級社会を否定したのがアメリカからはじまる近代民主主義のはじまりである。連合は王制の国家も多くあれどそうした階級社会は否定しているのである。彼等の価値観で話しているのである。

## 第二十九部第三章　教会の葛藤その五

「だから平気なのです」
「腐敗ですな」
これもわざと聞こえるように出した言葉だ。
「まさしく」
「いや、これがですな」
もう一人の神父も楽しげに言うのだった。
「中に入れば気付かないようでして」
「腐敗にですか」
「はい、全く」
そう言うのであった。
「気付かないそうで」
「エウロパの人達は随分と鈍感なようで」
「いえ、鈍感ではなくてですな」
ここでフォローするかといえばそうではない。そもそもフォローするのならば最初からこんな話をするわけがない。常に悪意で語っているのである。
「それが自然なのですよ」
「腐敗が自然だと」
「左様で」
あえて言うことばである。狙っていた。
「エウロパでは腐敗が自然なのです」
「何と恐ろしい」
この言葉も芝居だ。
「そんなことが許されているとは。エウロパはとんでもないところですな」
「ですから。御覧下さい」
エウロパを見るようにとの言葉であった。

「彼等の今を。如何にも動き慣れていませんな」
「そうですな」
あたふたと動き回り右往左往するエウロパ出身の聖職者達を見ながらの言葉である。もとより手伝おうとは全く思っていないのである。
「働いていないからです」
「怠惰に慣れているからこそ」
「そういうことです。さて」
ここでまた言葉が発せられる。
「もう身支度はできておられるでしょうか」
「無論です」
その神父は穏やかに答えてみせた。
「もう何時でも連合に帰ることができます」
「そう、連合にですな」
「そうですな。帰ることができるのですな」
彼等にとってみれば帰るということに他ならない。連合は彼等にとっては故国でありこのバチカンのあるエウロパは故国ではないのだ。それは決して動くところがない。
「いや、これでエウロパも見納めですか」
「腐敗し怠惰な貴族と」
これは決して動くことのない彼等の貴族への評価であった。例え偏見と承知していても変えるつもりはない。確信犯であるのだ。
「そして無気力で従うだけの者達」
「永遠に去るかと思うと」
「名残惜しくはありますな」
心にもないことを言うのであった。笑いながらするこの話はエウロパの者達にとっては実に忌々しいことであった。連合とエウロパの対立はバチカンでも行われていた。連合の侮蔑とエウロパの憤怒がこの聖なる場所においても満ち満ちていたのである。かなり強烈に。

とにかく連合の者達はエウロパの者達に何もしない。完全にサポタージュであった。エウロパの者達は右往左往して引越しの準備をするばかりだ。何もしてはいなかった。
「何という奴等だ」
「全くだ」
彼等は言う。連合の者達を見て。
「全く手助けしないどころか」
「せせら笑ってくるとは。どういうつもりだ」
「結局のところ我々を蔑み貶めたいのだ」
これははっきりわかっていた。わからない筈がない。
「どうしてもな」
「どうしてもか」
「そうだ。それが彼等にとっての無常の楽しみなのだからな」
それもまたはっきりとわかるのだった。
「我々の不幸は何があろうとも」
「人を呪わば呪われる」
それを聞いたエウロパの神父の一人が言い捨てた。
「それが神の御教えではないのか」
「無論彼等もそれはわかっている」
わかっていない、知っていない筈もないことであった。

## 第二十九部第三章　教会の葛藤その六

「当然のようにな。しかしだ」
「感情は抑えられないか」
「抑えるつもりもないだろうしな。それに」
「それに？」
言葉が続く。
「彼等にとっては我々は人ではないのかもな」
「人ではない！？馬鹿な」
それは流石に否定しようとする。この神父はかなり真面目な性格なのかそうした偏見を見過ごせないようである。顔だけでなく言葉にもそれが出ていた。
「我々とて」
「少なくとも神の御教えを知るに値しない者達だとは思っているだろうな」
「我々がか」
「そうだ。階級社会に身を置き」
とにかく連合においてはそれが忌み嫌われるのである。連合はアメリカからはじまる革命型民主主義をはじまりとしている。ここで革命と言われるのはアメリカ独立戦争だけでなくフランス革命での成果も頭に入っているからである。もっとも連合においてはフランス革命は忌むべき流血の革命でありジャコバン派はナチスやソ連のルーツと考えられているのであるが。それでも階級を否定したことは受け入れられているのである。
「そしてサハラに攻め入ったからな」
「それか」
「そうだ。好戦的な野蛮人らしい」
「野蛮人というか、我々が」
流石にそれは聞き捨てならないようであった。聖職者でありなが

らその声が上ずっている。感情として受け入れられなかったのだ。
「人は皆同じだというではないか」
「その通り」
キリスト教の最も重要な教えの一つである。もっともそう言いながら欧州では長い間貴族主義が残り今も根強くあるのであるが。これは矛盾であるが。
「しかも連合ではそれが特に」
「そうだ。連合では職業や生まれ、国籍、人種や肌、髪、目の色による差別はない」
「そうではないか」
これは実際にそうである。人類はそうした差別は殆ど克服していたのである。もっとも他の差別があるのだが。連合では連合内部ではそうした差別は殆ど消えていたがサハラの難民達への差別が問題になっているのである。だがそれは今の話とは直接関係はない。
「しかしそれで我等は」
「我等は連合の者達ではない」
これに尽きた。
「だからだ。神の御教えもわかろう筈がないというのだ」
「また随分と極端な偏見だな」
そう思わずにはいられなかった。
「我々とてそこまでは思っていないと考えるが」
「彼等にしてみれば我々こそが偏見の塊だ」
本当にこう考えられている。
「階級社会にいて差別をシステムとして認めているのだからな」
「そういうことになるのか」
「これで連合に行く」
「うむ」
ここからの未来は安易に想像できる未来であった。彼等にとっては忌々しく腹立たしい未来に他ならないものであるが。
「どうなると思うか」

「我等は彼等の侮蔑の中に置かれるな」
それははっきりとわかった。
「偏見と差別。後は」
「愚弄だ。そうした海の中だ」
「これも試練なのかな」
彼はここまで聞いてあらためて思うのであった。
「神の与え給うた」
「そうかもな」
相手の神父もそれを否定しようとはしなかった。
「元はといえば我々のことであったからな」
「因果だな」
それを聞いて今度はこれを思うのだった。
「我等の犯した罪により報いを受けるのだからな」
「しかもエウロパ全てがな」
連合との戦争である。それによりエウロパは荒廃した。それを今言うのである。
「荒廃しこうして我等も」
「報いを受ける」
「それを考えれば当然か」
出て来る答えは彼等にとっては受け入れるしかない、同時に苦いものである。
「それもな」
「そうだな。だが」
それでも言葉を発せずにはいられなかった。

## 第二十九部第三章　教会の葛藤その七

「これによりバチカンはこれからどうなるのか」
「バチカンか」
今度はバチカンについて思うのであった。
「連合に移り。どうなるのか」
「少なくとも我々の力は削がれる」
これは間違いなかった。
「それも大きくな」
「大きくか」
「そうだ。例えば」
ここからは彼等にとって耐えられない話であった。しかしそれでも語られるのであった。
「教皇だが」
「うむ」
「連合の人間から出ることになっていくだろう」
「馬鹿な」
「そんなことが」
それは彼等にとっては想像できないことであった。何故なら彼等にとっては教皇とはエウロパ人の中から選ばれるものであったからだ。それが何千年も続いたことであったからだ。
「有り得る筈がない」
「そんなことが」
「それは我々がエウロパにいるからだ」
それは冷然たる現実であった。
「エウロパにな。しかしそれが連合に移れば」
「連合から選ばれることになるのか」
「考えてみるのだ」
また言われる。

「エウロパにいる我々が。連合の者達から教皇を選ぶか」
「教皇をか」
「そうだ。我々の象徴である教皇をだ」
ローマにあった頃からバチカンの教皇というものはカトリックの象徴であった。教皇なくしてバチカンは有り得ないのだ。生ける権威なのである。
「連合の者達の中から選ぶか。どうだ」
「それは」
「やはり」
誰もが口ごもる。答えは一つしかなかったのだ。
「そんなことができるわけがない」
「どうして。あの様な者達から」
「そういうことだ」
答えは出た。
「選ぶことなぞできはしないな」
「やはり。教皇ともなれば」
「枢機卿にしても」
「そうだ。枢機卿の割合を見ただけでわかる」
結論がまた語られる。
「枢機卿もエウロパ出身者の割合が大きいな」
「うむ」
「そうだな」
「七割といったところか」
言うまでもなくカトリックの信者の数では連合はエウロパを圧倒している。それもかなりのものだ。何倍もの数の連合の信者達がいるのだ。
「信者の数では何倍だったかな」
「十倍はいるのではないのか？」
ふと中の一人が述べた。
「いや、もっと多いかな」

「二十倍はいるだろう」
「二十倍か。その程度か」
彼等は語り合う。とりわけフィリピン、そして中南米諸国に信者が多いのだ。これは地球にあった頃から変わらない。かつて中南米諸国においてはバチカンの発言は絶対的なものであった。バチカンは決して過ちを犯さない、それはこの時代でも多くの信者達に信じられていることであるのだ。
「しかも聖職者の数も」
「連合の方が多い」
「かなりな」
聖職者の数もまた連合の方がかなり多い。少なくとも司教までは圧倒的な差がある。
「連合に行こうなぞとは」
「誰も思いはしないからな」
「いや、しなかったと言うべきか」
言葉が少し訂正された。

## 第二十九部第三章　教会の葛藤その八

「忌々しいが行かなければならなくなったからな」
「そういうことか」
「そうだ。行かなければならない」
それがまた言われる。
「連合にな。その連合にだ」
「彼等にしてみればバチカンの改革の好機なのかもな」
「実際にそれを言っている」
あくまで連合の目から見ればだ。実際にエウロパにとって圧倒的に有利な人事や行動が多くそれが連合から見れば不満の種であったのだ。何故なら数でいけば彼等の方が圧倒的に多いからだ。数が大きな力を持っているのは教会においても変わりはしないのである。
「エウロパの独占していたものを公平に分けるとな」
「公平にか」
「そう、公平にだ」
シニカルな響きを持つ言葉になっていた。それは何故かというと。
「連合から見てだ」
「連合からか」
「我々にとっては今までは公平だったつもりだが」
公平というのも時として主観に基くものなのだ。一方から見て公平であり平等であってももう一方から見れば差別的で不平等である。そうなるのだ。
「彼等にとっては違う」
「そうなるのか」
「では彼等は」
「その不公平を正そうと今から燃えている。宗教的情熱にな」
「嘘だな」
神父の一人がそれを否定する。

「それは連合にとって都合のいい行いがはじまるだけだ。言うならば」
「言うならば？」
「何だ？」
「連合によるバチカンの独占だ」
忌々しげに言い捨てる。
「バチカンを連合で独占したいのだ。彼等はな」
「だからだ。それは今までだったのだ」
「彼等から見て我々がな。行ってきたことだ」
「馬鹿なことだ」
またそれに反論する。
「そもそもバチカンとは何だ」
「バチカンか」
「そうだ。バチカンは連合のものではない」
そう言うのだった。
「バチカンはエウロパのものだ。エウロパで生まれ育ったものだ」
「その通りだ」
「キリスト教は。そうだった」
だがこれは多分に彼等の一方的な主観である。実際はキリスト教はエウロパ、かつての欧州で生まれたものではない。ユダヤの地で生まれたものである。キリストがユダヤ人であることがそれの何よりの証である。しかし欧州で育ったのは事実であり彼等の主観もここに根拠があるのである。
「それをどうして彼等が自分のものにするのだ。キリストは我等の心だ」
少なくともキリスト教なくして西暦の欧州はなかった。
「その心まで奪うつもりか」
「それも考えているのだろう」
連合とて愚かではない。それも考慮のうちだ。しかもそこには悪意もある。連合がエウロパに好意を向けるというのも有り得ない話

であった。
「我々の誇りも。何もかも」
「奪い去るというのか」
「そして屈辱にまみれた姿を見て楽しむ」
「今回の移転にしろ」
「あれか」
ここで歴史的な事象が出た。
「教皇のバビロン捕囚か」
「そうだな。かつてフランス王が行った」
「それを彼等がするのだ」
「しかも」
だが連合はフランス王ではない。フランス王も曲りなりにもカトリックであった。しかし連合は。
「似非のカトリックと」
「その他の多くの連合の神々の中だ」
「連合のか」
「そう、連合のだ」
それが心の中にも繰り返される。
「あの忌まわしい神々の中に」
「我々も入る」
「ギリシアや北欧ならばまだいい」
彼等の中にいる神々である。長い間精神の檻の中に閉じ込められていたがそれが解放された神々である。エウロパで信じられている神々なのだ。
「しかし。あの神々は」
「我々の中にはいない」
「完全な余所者達だ。彼等から見れば我々がそうなのだがな」
「くっ・・・・・・」
ここまで話して歯噛みが出た。

## 第二十九部第三章　教会の葛藤その九

「呪わしい。何もかもが」
「その神々の中に放り込まれ」
「しかもバチカンそのものが連合に飲み込まれる」
「忌まわしい未来だ。しかし」
言葉が変わってきた。
「思えばそれも」
「報いなのか」
「そう、報いだ」
彼等の中の一人の言葉であった。
「元はといえば我々の撒いた種なのだしな」
「その通りだ」
「それでは」
「そうだ。致し方ない」
それは認めるしかなかった。彼等も。
「罪は償わなければならない」
「特に我々は」
「神に仕えていながら」
今度は悔恨が彼等を襲った。それから逃げることはできない。
「罪を犯した。そのことは」
「逃れられはしないのだ」
「だからこそ。連合に行くのだな」
「そうなる」
答えはもう出ていた。既に。
「忌まわしくともそれが償いなのだから」
「思えば。主を裏切った我々は」
ここでの主とは言うまでもなくキリストのことだ。彼以外の主はキリスト教にはいない。

「償うしかない」
「悔い改めて」
「十字架を背負う資格もないしな」
これも自覚していた。
「主のように」
「しかもその十字架も」
また話が変わった。
「我等にとっての主観でしかない」
「連合の者達にとっては違うか」
「しかも全くな」
そういうことであった。連合のカトリックの信者達の間には彼等の信仰があり十字架がある。それはもう既にこのバチカンにも見えているものであった。
「彼等の今のはしゃぎようはな」
「何処までも。嬉しいか」
「バチカンは今までエウロパのものだったからな」
それは逆立ちしても変わらないものであった。少なくとも今まではだ。
「それが彼等のものになる」
「神を奪う」
信仰のうえではそうになる。
「かつてのローマ帝国のようにか」
「ローマを乗っ取ったのはキリスト教だったが」
ローマでは征服した国家の神を入れるのは当然であった。そうして多くの神々をその信仰の中に持っていたのである。それがローマであったのだ。
またローマはキリスト教の飲み込まれた。そうした意味であのビザンツ帝国も神聖ローマ帝国もローマ帝国ではないのだ。何故なら多神教こそがローマだったからだ。
「今度は我々がか」

「連合に」
「しかし」
ここでまた一人が言うのだった。
「どうした？」
「我々は諦めることはない」
「諦めないのか」
「そうだ」
言いながら顔もあげてみせる。
「いいか」
「うむ」
「どうした？」
「待っていれば。また時が来るのだ」
「時がか」
「そうだ。きっと来る」
遠くを見ていた。今のバチカンを見てはいなかった。

## 第二十九部第三章　教会の葛藤その十

「我等の手にな」
「来るのか」
「きっと来る」
言葉は毅然とさえしていた。
「その時に。動けばいい」
「それは。何時か」
「少なくとも我々が生きている時間ではない」
つまりそれだけ先であるということだ。
「だが。待っていれば」
「必ず来るか」
「そうだ。だから待つのだ」
言葉には強ささえ宿ってきていた。
「わかったな。待つしかないのだ」
「そうか」
「それしかないか」
「そう。それしかない」
こうも言う。
「結局のところはな」
「待つのは。信仰か」
「それもまた信仰だ」
同時に政治でもあることが複雑でもある。
「耐え忍ぶのもまた。しかしそれが」
「我等の犯した罪ならばか」
「そういうことだ。当然の話になる」
話が元に戻ってきていた。それでも話は続く。
「仕方のないことだ」
「そうだな」

「やはり」
「しかし。そうなると」
ここで異論が出た。
「どうした？」
「何かあるのか？」
「うむ、それでだ」
話が動いた。
「今はまさに教皇のバビロン捕囚だな」
「そうだな」
「その通りだ」
これは実感していることである。他ならぬ彼等が。
「その後に何が起こったか」
「？それは」
「言うまでもない」
教会の歴史ではもう言うまでもないことであった。
「分裂だ」
「ローマ＝カトリックのな」
そもそも東西教会に分裂していた。だが教皇のバビロン捕囚に反対する神聖ローマ帝国とイングランドが別に教皇を立てたこともあったのだ。バチカンの歴史も複雑なのである。
「そうか。それか」
「それがまた起こるというのは」
「バチカンが動くのだ」
まずはその前提が話される。
「ならば。分かれることも有り得る」
「そうなるか」
「それもまた」
「ないとは言えない」
そう言葉が出される。
「そう思うのだがな」

「そんなことになれば」
一人が首を横に振る。
「バチカンは終わりだ」
「そうだ。そんなことになってしまえば」
「終わりというのなら」
しかしまた言われるのであった。
「既に終わっていると思うがな」
「終わっているか」
「そうだ。バチカンだ」
バチカンの歴史はおぞましいものでもあるのだ。腐敗と堕落を極めてきてもいるからだ。さながら人間の醜さに挑戦するかのように。

## 第二十九部第三章　教会の葛藤その十一

「我々は。常に過ちを犯してきてきた」
「逆説的に言えばな」
「そうなる」
無謬を謳うが。だがそれだからこそなのである。
「だから。それで終わるのならばな」
「そういうことか」
「皮肉だな」
「皮肉だが事実だ」
それが現実だというのだ。
「紛れもなくな」
「しかし。こうは言っていても時間は動く」
「ああ。それもまた変えようがない」
忌まわしい事実は時間についてもそうであった。
「何もかもが。我々にとっては悪夢だ」
「その悪夢の中で生きていくことになるのか」
「連合で」
次々に出る言葉はどうしても暗澹たるものであった。それを噛み締めながら話を続ける。だがそれも一時中断しなければならない時が来たのであった。
「そこにいたのか」
「むっ？」
そこに一人の神父がやって来たのである。言うまでもなく彼等の同僚の一人である。
「食事の時間だぞ」
「もうか」
「もうといってもいい時間じゃないか」
彼等を呼びに来た神父はこう彼等に告げた。

「日を見ろ。いい時間だ」
「そうだな」
「もう高いか」
彼等もその言葉を受けて日を見ればその通りであった。既に日は高く昼食には丁度いい時間であった。この時代でも星系や惑星によってそれぞれの違いがあるがそれでも太陽の高さによっておおよその時間を計ることはできるのである。日時計は健在というわけだ。
「では。いいか」
「今日の食事は何かな」
「パンと簡単な燻製らしいな」
聖職者らしい質素なものであった。
「それとザワークラフトだ。赤キャベツのな」
「何だ、いい内容じゃないか」
彼等の中の一人は燻製とザワークラフトまで聞いてこう述べた。
「燻製にザワークラフトまであるとは。ワインもあるな」
「当然だ」
キリスト教ではこれは外せない。キリスト教においてワインはキリストの血に他ならないからだ。パンはキリストの身体である。これは古代のカニバリズムが隠されているという指摘もある。カニバリズムはかつては様々な形で存在していたのである。歴史書にもそれは隠されて出ていることが多い。
「それは常にあるじゃないか」
「そうだな。ならいい」
「ワインがあればいいのか」
「ワインがなければ困る」
言葉は逆説的なものになっていた。
「あれは百薬の長だ」
「それで何が言いたいのかわかったよ」
予備に来た神父はその言葉でおおよそのことを察したのであった。
「やはり。それか」

「それ以外に何がある」
彼はそう同僚に言い返した。
「今の私達にとっては。憂いを消すものは」
「主の血以外にはなし、か」
「せめて。それで癒されたい」
聖職者にはそぐわない逃げの言葉であったが今はそれも仕方のないものであった。少なくともバチカンの中においてはそうであった。
「それでいいか」
「私にそれを止めることはできない」
彼もそう言うだけであった。大なり小なり同じだったのだ。その気持ちは。
「何はともあれ。行こう」
「ああ。せめて食べるものと飲むものがるというのは」
「それだけで神の御加護だ」
言葉にはどうしても自嘲が込められている。それを隠せないまま先に進む。そうして先み食堂に入った。重厚かつ壮麗な宗教画が壁にかかげられ建築様式はルネサンス期のものをそのまま再現したものであった。その中で多くの聖職者やその関係者達が簡素な食事を採っていた。そこには連合の者もいればエウロパの者もいる。主が弟子達を前に何かを語るその絵画を前にして彼等はまずは静かに食事を採っていた。しかしそこに一人のスーツの男が来たのであった。

## 第二十九部第三章　教会の葛藤その十二

見ればアジア系の顔に蜂蜜色の髪と灰色の目をしている。それを見ると彼が連合の者であることがわかる。彼は黒い肌の神父達のところに来ていた。

「おお、ここでしたか」

「はい、こちらです」

黒い肌の神父達が彼を手招きする。そうして空いている席を薦めるのであった。

スーツの男はそこに座る。そこに座るとすぐに壁の宗教画を見るのであった。

「ふうむ」

「どうされたのですか？」

隣にいた神父の一人が彼に問うた。

「いえ、この絵ですが」

「ああ、あの絵ですか」

その壁の絵を指差しての話であった。彼はその宗教画をじっと見ている。

「おかしいですな」

「おかしいというと」

「何が」

「いえ、主の顔です」

キリストを主と呼ぶところを見ると彼もまたカトリックであることがわかる。バチカンはカトリックでなければ入ることができないのである。

「主の顔ですか」

「何故。ラテン系の顔なのでしょう」

彼はそこを指摘する。連合で常に言われていることである。

「おかしいことです。何時になっても」

「まあそれは確かに」
「その通りです」
連合系の神父達もその言葉に頷くのであった。
「連合での主の顔は髭のないアジア系のそれに近い顔であることが多いというのに」
「何故エウロパの主の顔はこうなのか、ですな」
「やはり。エウロパだからなのでしょう」
スーツの男は言う。
「エウロパにいれば他のものが見えなくなる」
「その通りです」
「所詮このエウロパは狭い一地域にしか過ぎません」
あえてその場にいるエウロパの者達に聞こえるようにして出されている言葉である。
「ですからこうした科学的見解に欠ける絵画になるのでしょうな」
「見れば使徒達も」
言うまでもなくヨハネやペテロといった使徒達である。その使徒達の顔にも注目していた。顔だけでなくその髪や目、肌の色までもである。
「おかしなことですな」
「誰もがラテンの顔です」
これはルネサンス期に確立された描き方である。宗教画における主や聖人達はラテンの顔になっているのである。中にはボルジア家の面々をそのままモデルにした宗教画も存在する。当時絶世の美女と謳われたルクレイツィア＝ボルジアの顔もそこにある。なおボルジア家はスペインにそのルーツがある。つまり彼等もラテン系の血というわけなのだ。
「おかしいことです」
「連合では決して有り得ない絵ですな」
「実はそれは以前から思っていたのです」
ここぞとばかりの言葉であった。

「しかしそれを信じない方々が大勢おられまして」
「おや、それはまた」
スーツの男はその言葉を聞いてシニカルに笑うのであった。
「非科学的な。まるで中世の様ですな」
「そう思われますか」
「はい」
スーツの男は満面に笑みさえ浮かべて答えてみせた。
「かつては世界をリードしたと自称するエウロパは中世だったのですか」
「ははは、そうですな」
「これで魔女狩りでもすれば完璧ですな」
「あいや、魔女狩りにしても」
またシニカルな言葉が出た。
「最近でもそうした騒ぎがあったのです」
「ほう」
「今だにですか」
「そうです。実はですな」
周りのエウロパの者達が不機嫌な顔でワインやパンを口にしているのを楽しみながらの言葉である。げんに顔が笑っている。それが何よりの証拠であった。
「この前魔女に間違われた老婆がリンチに遭いかけたのです」
「それはどの国の話ですかな」
「イギリスです」
「おやおや、イギリスで」
「しかもイングランドです」
「ほう、それはまた」
イギリスとイングランドは同義語なのだが彼等はあえて嫌味を強調する為に言葉を二重にしてみせたのである。これもまた嫌味である。

## 第二十九部第三章　教会の葛藤その十三

「大英帝国は実は非科学の国でしたか」
「いや、紳士の国だったのでは？」
「そういえばそうでしたか」
当然ながらここにもイングランドの者達はいる。それもわかっているのだ。
「海賊ではなく」
「海賊というよりはあれですな」
なお連合では魔女狩りというものはない。そもそもそれとはほぼ関係のない国ばかりだからこれもまた当然の話なのだ。
「無知蒙昧な邪教徒」
「おお、それです」
最早嫌味を越えていた。
「異端と呼んでもいいですな」
「ええ。そうですか、カトリックにもまだ異端が」
「思えば滑稽な話です」
周りの幾らかはさらに不機嫌になるが彼等はあえてそれを楽しみながら話を続ける。結局のところ確信犯だから当然のことなのだ。
「主の顔すらわからないというのも」
「気付かないのでしょうな」
こうも言い換えるのだった。
「見えているものが見えずに」
「現実も信仰も見えずですか」
「そうです。まことに滑稽です」
言葉はさらに続く。
「その滑稽もそろそろ終わりですがね」
「そうですな」
彼等にしてみればそうである。それはエウロパの者達にとっては

全くの正反対であるが。
「さて、連合でカトリックは本当の意味でのカトリックになりますな」
「はい」
あえて自分達こそ正統と言ってみせる。
「その正統により導かれて」
「主も喜ばれましょう」
「では今からそれを祝い」
「はい」
ワインを掲げる。掲げる必要は本来ないのであるがあえて掲げるのはこれもまたパフォーマンスだからだ。エウロパの者達に見せ付けているのである。
「飲むとしましょう」
「主の下されたこの美酒を」
「これからの喜びの為に」
そう言い合って飲むのだった。彼等にとってみればこれからのことは楽しい夢である。その夢を楽しむ彼等を見て歯噛みする者達もいる。そういうことであった。
こうしたことは今はバチカンでは多く起こっていた。当然ながら教皇の耳にも入っており彼の憂いの一つとなっていたのである。
「そうですか。また」
「最早。我慢できないという言葉もあります」
「当然でしょう」
教皇は自室で話を聞いていた。報告するのはエウロパ出身の枢機卿の一人である。言うまでもなくエウロパ派の人物である。
「そこまで侮辱されては」
「ではここは」
「動いてはなりません」
しかし教皇ははやるその気持ちを抑えさせるのであった。
「それは何故」

「動いて。どうにかなるものではないからです」
静かな声でそう言うのであった。
「どうにかなるものでは」
「それは確かに」
枢機卿もそれはわかっていた。痛いまでに。
「おわかりでしたら。もうこれ以上この件に関しては」
「言うことはないというのですね」
「そうです」
彼は言う。
「宜しいですね。ここでは」
「わかりました。無念ですが」
「無念を晴らすのは騎士」
エウロパの考えではそうだ。軍人としてよりも騎士としての考えが強いのもまたエウロパの風潮である。騎士道が生きているのだ。
「しかし神に仕える者は」
「その無念を飲むのですか」
「それが神に仕えるということです」
そう言うのであった。
「耐え忍びその中で人の心を救う」
「それをわかっているつもりでしたが」
「頭ではわかっていても心でわかるのは難しいものなのです」
教皇の言葉は続く。

## 第二十九部第三章　教会の葛藤その十四

「どうしても。そうなります」
「はい。人であるならば」
「我々が人であるからこそこの度の過ちは起きました」
そもそもの発端であるステッラの事件だ。ステッラの工作に枢機卿の一人が手を貸したことにより戦争になり今に至る。教皇はこのことに心を痛めていたのである。
「そもそも」
「そもそも？」
「我々のせいで。この度は数億もの命が失われたではありませんか」
「はい・・・・・・」
沈痛な声で頷く枢機卿であった。
「それを考えれば連合に行くことは。試練でも報いでも何でもありません」
「当然の結果ですか」
「その通りです」
はっきりとした言葉になっていた。
「ですから。何もしてはなりません」
「わかりました」
無念は続くがもうそれはどうしようもなかった。
「それではそのように」
「はい。それでですね」
「はい」
話は変わる。枢機卿もそれを受けて自分の顔をあげるのであった。
「移転の準備は進んでいますか」
「何とか」
それは進んでいた。不本意ではあっても進めないわけにはいかなかったからだ。そして実際にその話は進んでいるのであった。

「進んでいます」
「そうですか。それならば宜しいです」
「そしてそのことに関係しますが」
「何か」
話はいささか政治的なものに移った。そもそもバチカンは極めて政治的な場所であり続けてきた。だからここで政治的な話になるのも当然であった。
「枢機卿の人員が大幅に増えるという話ですが」
「それですか」
「御存知だったのですか」
「ええ」
こう枢機卿に対して答えた。
「既に。連合各国からの要望ですね」
「とりわけ大国とカトリックの多い国家から」
そうした話が出ているというのである。
「これからは連合に合ったバチカンになるようにとのことで」
「表向きは組織の巨大化ですね」
「はい」
しかし裏の理由は違う。むしろ今回はその裏の理由が正体である。こうしたこともまた政治だからこそあることであった。政治だからこそ。
「しかし実際は」
「彼等の影響力をバチカンにも伸ばしたい」
枢機卿は語る。
「そうでありましょう」
「間違いなく。しかしそれは」
「そうです」
拒むわけにはいかないことであった。
「これから連合においてバチカンを運営していくには仕方のないことです」

「今まで連合には枢機卿も主立った組織も置いていませんでした」
あくまでエウロパ中心の存在だったのだ。これは地球にあった頃から変わらない。ローマ＝カトリック教会は欧州のローマ＝カトリック教会であり続けていたのである。
「しかしこれからは」
「連合に拠点を置くことにより」
「それが大きく変わります」
それはバチカンはじまって以来のものになるとさえ予想される。そこまでのものであった。
「その一つになりますね」
「そうなります」
教皇の言葉に頷く枢機卿であった。
「枢機卿の大幅な増員は」
「その全てがおそらくは」
「連合の者達になります」
当然の話の流れであった。
「そしてやがては」
「いえ、すぐにでもですね」
枢機卿が何を言いたいのかわかっていたので先に言うのであった。

## 第二十九部第三章　教会の葛藤その十五

「おそらくは」
「そうですか。遂に」
「はい。エウロパ以外からの教皇です」
それまで考えもしなかったことである。エウロパ以外からの教皇なぞといったものは。しかしそれも当然出るべきことであるのだ。連合にあるのなら。
「そしてそれからは」
「永遠にそれが続きますね」
教皇は己の言葉にあえて感情を消して答えてみせてきた。
「バチカンが続く限りは」
「白人ではなくですか」
「連合では最早白人の定義もないですし」
それはエウロパの者達にはわからない世界なのだ。何故かというと彼等はその白人の中でだけ生きているからだ。それでわかる筈もないのだ。
「ですから」
「黄色い肌や黒い肌の教皇ですか」
「実感できませんか？」
「はい」
枢機卿の返事は人種的偏見から来るものではない。純粋な違和感だ。エウロパの者達の立場で考えるとどうしても実感するのが困難なことなのだ。
「今までバチカンにも連合出身者はいたのですが」
「それでも」
枢機卿は答える。
「教皇となると。わかりません」
「左様ですか」

「申し訳ありませんが。どうしても」
また答える枢機卿であった。
「それだけは」
「実感できなくとも現実のものになります」
それは逃れられないことなのだ。何しろ連合の中に入ればそうなってしまう。そういうことであった。
「それは御承知下さい」
「わかってはいるのですが」
「そして枢機卿」
教皇はまた枢機卿に言ってきた。あえて名前を呼ばずその役職で言うのであった。
「近頃夜が長いようですが」
「それは」
「どうなのですか、そこは」
「申し訳ありません」
また頭を垂れる。そうして項垂れての言葉であった。
「眠れないのです」
「貴方もですか」
「では教皇もまた」
「はい」
枢機卿のその言葉に静かに頷くのだった。
「やはり。私もまた」
「そうですか。やはり」
「そして飲むものといえば」
「ワインを」
「本来は。よくないことなのですが」
それは彼等もわかっていることだ。酒に溺れてはならない。だが溺れかねない状況になっているのだ。それだけ憂いに支配されているということなのだ。
「どうしても」

「私もです。主の血に」
「主の血は確かに人の心を癒す為にあります」
酒は様々な用途がある。心を癒すのもまたその中の一つなのだ。しかしそれが過ぎると身体を滅ぼしてしまう。酒に溺れる者は何時の時代のどの時代にも存在しているのもまた現実なのだ。
その酒に溺れる聖職者達が最近エウロパ内部で問題になっている。なお連合では浮かれ酒ばかりだ。見事なまでの対象の違いになっていた。
「しかし。度が過ぎれば」
「わかっていない方はおられないでしょう」
枢機卿もそれはわかっているのだ。誰もが。
「ですが。それでも」
「本当にそうです。せめて朝には残らないようにしていますが」
それでも飲まずにはいられないのだ。まだワインで済んでいる彼等はいい。中には連合にあるウォッカの様な強い酒に逃げている者もいる。どうしようもないのだ。
「主の血がなくては」
「しかもそれにより」
ここでもまた政治の話が出るのだった。
「連合側からまた工作を仕掛けて来かねない状況です」
「またしてもですか」
「そうです。酒に浸っている聖職者達を取り上げて」
言うならばエウロパ側の失態なのだが相手の失態に付け込むのは政治の基本である。連合はそれを忠実に守っているだけなのだ。

## 第二十九部第三章　教会の葛藤その十六

「彼等のかわりにまた」
「連合出身の聖職者達を推しているのですね」
「そうです。今から彼等を要職に就けようとしています」
バチカン乗っ取りの一環であるのは言うまでもない。
「ありとあらゆる方面からそうして攻めてきているのです」
「そうですか。それならば」
教皇はその話を聞いて静かに頷く。それからまた言うのだった。
「対策を講じておきましょう」
「どうされるのですか？」
枢機卿は彼に問うた。
「何かお考えが」
「あります。それは」
「はい、それは」
「そうした酒に過度に浸っている聖職者達を一旦入院させましょう」
「入院ですか」
「それによりアルコール中毒を治療させます」
アルコール中毒に対する効果的な治療方法の一つである。この時代においてもアルコール依存症や中毒は存在しており彼はそれを使ったのである。
「表向きはそれぞれの理由ですが」
「あくまでカモフラージュですか」
「そうです。そうして個々に治していきます」
確かに時間はかかる。しかし的確な対策である。彼はここでは堅実な方法を選択したのである。聖職者らしい選択であると言えるものであった。
「それでどうでしょうか」
「宜しいかと」

枢機卿もおおむねにおいて賛成を見せた。しかし。
「ですが」
「何か問題点が」
「彼等の移転の準備は」
問題はそこであった。
「そこはどうされますか」
「人を雇いましょう」
それへの対策ももう考えていた。入院する者達の移転準備に関してはそれぞれ人を雇って対処するというのである。
「それでどうでしょうか」
「カトリックの信者をですか」
「そうです。カトリックに好意的な企業も多いですし」
エウロパにおいてバチカンの存在は絶対的なものだ。それこそ黙っていても他の宗教では考えられない程の額の寄付金が集まってくる。バチカンが金に困ることはない。そうした噂が流れるだけで金が集まって来る。人もまた然りだ。それがバチカンの強みの一つでもあるのだ。
「彼等が助けてくれるでしょう」
「わかりました。それでは情報を少し流しておきます」
「御願いします」
「表向きはあくまで移転の手伝いということだけで」
「それだけで御願いします」
真相はあえて言わないというのである。これもまた配慮のうちなのだ。
「これで。この件は終わりますね」
「そうかと。しかし今後は」
「わかっています。それはどうしてもですね」
「ええ」
未来に関する話であった。
「やはり。連合により」

「キリストの御教えはバチカンだけではないですが」
そのことはバチカンも認めるしかない時代になっていた。かつて血を血で洗った宗教対立も今は昔の話に完全になっているのである。エウロパにおいても。
「しかし。それでもやはり」
「連合の手に主が奪われたようなものです」
「悲しんではなりません。ですが」
「どうしても。その心は」
「この世で最もわからないものは人の心です」
教皇はまたあえて言う。
「これだけは。どうしても」
「どうにもなりません」
「ですが。それを表には出せないのですよ」
教皇の声が穏やかなものに戻った。その声で枢機卿に述べるのであった。
「私達だけは。宜しいですね」
「承知です。では」
「人々を救いその心を安んじ続けましょう」
彼は言った。
「それは宜しいですね」
「無論です。それでは」
「はい、これで」
話を終えるのであった。
「お疲れ様でした。それでは」
「教皇、それではまた」
枢機卿は最後に頭を垂れた。そうして別れを告げる。
「明日にでも」
「明日ですか」
「いけませんか？」
「いえ」

枢機卿のその言葉にも静かに返す。
「ただ。その明日がどうなるかと思いまして」
「それですか」
「考えても仕方ないのことだとはわかっていますが」
「さもありなん、ですか」
「信仰もバチカンも」
信仰が最初に来たのだった。
「明日にはどうなるかわからないようになってきています」
「それまでは明日は必ずあるものでしたが」
「全ては神の思われるまま」
今になってそれを実感するのだった。今この状況になってだ。人は危機にならなければ感じはしない。彼等もまた然りであったのだ。
「しかしそれに従うしかなく」
「我々は神の思し召しに従い」
「ただ。信じるだけです」
「その通りです。全てを捧げ」
「では。これ以上言うのは止めましょう」
教皇の言葉は厳かなものになった。
「そして自分達の場所に戻り」
「そうしてその中で務めましょう」
「それぞれのなすべきことを」
そう言い合って別れる。彼等にとっては未来は閉じられようとしているものにも見えていた。どうなるかはわからない。漠然とし暗澹ある不安の中にその身を置いていたのであった。

## 第二十九部第四章　南部戦線の動きその一

南部戦線の動き

シャバキは相変わらず隔離病棟にいる。だが本人には自覚はない。

「見える、見えるぞ！」

鉄格子の中で叫んでいる。普通の人間には見えないものを見ているのだ。

「バチカンが連合に来る。教皇は死ぬ！」

「おい」

そんな彼に鉄格子の向こうで彼を監視している看守が問う。あまりにも危険な為病院であっても看守がつく。それがこのシャバキという男なのであった。連合一の奇人変人という仇名は伊達ではない。

「それ何回言ったよ」

「馬鹿な、俺は正気だ！」

話が見事なまでに噛み合っていない。しかもシャバキに自覚はない。

「だから見えるんだ！ノストラダムスも言っている！」

「ノストラダムス！？」

看守はその聞いたこともない人物名に首を傾げる。

「そりゃ誰なんだ？」

「ユダヤ人でフランスの預言者だ」

「エウロパの奴か」

看守はフランスと聞いてそう判断した。

「何でエウロパの人間が連合に関わるんだ」

「ノストラダムスは預言していたんだ？」

「この場合は予言じゃないのか？」

「違う、預言だ！」

段々と言葉の内容も滅茶苦茶になってきている。しかしこれもシャバキには自覚のないことであった。要するに自覚症状のない患者

なのだ。
「ノストラダムスは預言していた。六が四つ重なる時に！」
「今宇宙暦何年だったかな」
看守はそれを聞いて首を捻る。
「六が四つも重なっていたか？」
「古代ウクライナの暦ではそうだ」
「古代ウクライナ、ねえ」
看守はその全く聞いたことのない単語にまた首を捻る。そんな言葉は今はじめて聞いた。そもそも古代ウクライナなぞというのはＳＦでもない設定である。
「それが今年だ。その時に大いなる神父が西から東に移ると言っていた」
「何でだ？」
「光の創世記でだ」
連合ではそんな本も出ている。一応ノストラダムスが書いたとされているが実際は何処ぞの予言作家が適当に面白おかしく書いたものだ。よってノストラダムスはそんな本は書いてはいない。そもそもノストラダムスの本職は医者で美容コンサルタントであり予言者ではない。だが予言作家やシャバキの様な人物には予言者に見えるのだ。シャバキは預言者だと主張するが彼の脳内以外では間違っている話だ。
「彼は言っているんだ。そしてその大いなる神父は」
「どうなるんだよ」
「殺される」
彼は断言する。
「邪悪な存在でだ。そして次の教皇はその邪悪な存在の黒幕なのだ」
「成程な」
看守はシャバキの説明に納得して頷く。
「それでその邪悪な人間は誰なのだ？」
「アトムだ」

「漫画の主人公か？」
「違う！」
それはすぐにシャバキ自身によって否定される。
「その教皇の本当の名前だ。主そっくりの姿をしていて」
「また随分と目立つ顔だな」
連合でのキリストはアジア系の髭のない美男子の顔なのが普通だ。誰もが知っている顔なので目立つというわけなのだ。
「とてつもなく鋭利な頭脳と素晴らしいカリスマ、そして邪悪な心を持っている」
「ヒトラーかスターリンみたいなものか」
「いや、それ以上だ」
二十世紀を席巻した二人の独裁者以上だという。なお予言の本ではこの時代においてもヒトラーとスターリンは人気者である。とりわけヒトラーは。
「その頭脳で教会を復興させ」
「教会は破綻していたのか」
看守にとっては初耳である。
「また凄いことを知ったな」
「そのうえで強大な軍隊を持つ」
「バチカンがか！？」
また壮大な時代錯誤のストーリーであった。これには看守はまたしても首を捻った。いい加減首が疲れて仕方なくなってきたのを感じる。
「そうだ。そして電波を操り」
「携帯とかテレビとかパソコンだな」
「それにより世界を征服するのだ」
「どうやってだよ」
「それだ！」
また不意に絶叫しだした。

## 第二十九部第四章　南部戦線の動きその二

「電波に洗脳する遺伝子を送り込みそこから人々の脳を操るんだ！」
「電波に遺伝子か」
「そうだ！」
言葉が滅茶苦茶になっていることにここでも気付かないシャバキであった。自分が何を言っているのかわかっていないのだ。
「そして全人類洗脳計画を発動させるんだ！あげくは宇宙人に連合を売り！」
「今度は宇宙人か」
破綻しているなりにストーリーが壮大になってきている。実にダイナミックだ。
「サタンの僕となり幻魔が降臨する！第六の魔王が連合を支配するんだ！」
「成程な、実に大変だ」
「だからだ！」
シャバキはまたしても絶叫する。
「俺達はそれを止めなくてはならない！今こそ教皇を止めるんだ！」
「何時の教皇をだい？」
「今のだ！」
「話が見えないというか矛盾してきていないか？」
看守はまたしても突っ込みを入れる。
「何で今の教皇を止めるんだ？連合に来るなってことかい？」
「いや、連合には来てもらう」
また話が矛盾してきた。
「そのうえで連合に来てもらうのを止めるんだ」
「どうしろっていうんだ」
あまりにも話が矛盾しているのでまた突っ込みを入れた。
「来てもらうのに来るなって。どういうことなんだ」

「心だけは来てもらう」
それがシャバキの主張である。
「そして精神世界でアトムに勝ってもらうんだ」
「精神世界にか」
「そうだ。阿弥陀如来の力を借りて」
遂には全く違う宗教まで出て来た。完全に破綻したＳＦである。
「戦ってもらい勝ってもらう。そうしてもらうんだ」
「そうなのか。アトムって凄いんだな」
「モナ＝リザと同じ顔を持つ大淫婦から生まれた男だ」
また予言の定番が出て来た。これはバビロンの大淫婦と呼ばれる存在で予言の本にはしょっちゅう出て来る。予言ではなく当時のローマやそうした存在を書いていると言われている。実はヨハネの黙示録もそうで過去の迫害者や国家、当時キリスト教を迫害していたローマ帝国を書いているというのが真相なのだ。何分表現が見事なので予言に見えてしまっているのだが。なおローマからしてみれば皇帝を認めないカルト教団を罰しているだけである。カリギュラからあったことだ。実際のところネロがはじめてでもない。
「類稀なる邪悪な男だ」
「ラフネールよりもかい」
「比べ物にならない」
連合で第一の悪人は殆どいつもエウロパの総統なり政治家だ。ラフネールも然りである。
「ほう、そんなに邪悪なのかい」
「黒髭を従えている」
また予言によく出て来る話だ。二十世紀にも出て来ているこの黒髭だが実際のところは一体何者で何をするのかは本によってまちまちで理解不能である。
「そしてこの世を混沌の渦に落とすのだ」
「何の為にだい？」
論理が既に破綻というレベルではないのは放置してシャバキの話

を聞くのだった。
「わからない」
「そうかい」
思わず何でじゃ！と突っ込みたくなったがそれは心の中で抑えるのだった。それだけのものがなければ予言は聞けはしないのだ。
「だが一つだけわかっている」
「一つだけ？」
「そうだ。それは三つある」
なおシャバキは時として真っ当な算数すらできなくなる。数字なぞ大した問題ではないと彼の脳内で見事に解決するのである。
「その三つは？」
「まずアトムは世界征服を目論んでいる」
わかっていた。目的は。
「そして人類を全員彼の奴隷として」
「また壮大だね」
今時奴隷制というのも素晴らしい発想であった。そんなものは既に採算が採れなくなっていて消えてしまっている。ただしシャバキの脳内では違うだけだ。それこそ共産主義者が何が何でも階級や格差を見て革命を目論むのと全く同じ話なのだ。今更騙される者もいない話だがやはり彼は違う。

## 第二十九部第四章　南部戦線の動きその三

「その人類を獣の餌とするつもりなのだ」
「今度は獣なのか」
「そう、獣だ」
　またしても予言の定番である。なおシャバキの言う獣とはそれこそ数え切れない程存在している。黒髭と同じで何匹いるかわからない。同じ本でも無数に出たりしている。
「獣の餌となるのは」
「どれだけいるんだい？」
「穢れを知らない男女以外は全員だ」
「じゃあ連合の殆ど全員だな」
　人間なぞというものは皆大なり小なり穢れているものだ。完全に穢れていないとすればそれこそ赤ん坊位である。
「いないんじゃないか、それだと」
「いや、いる」
　しかしシャバキの主張は続く。
「助かるのは六六六六人だ」
「連合全体でそれだけかい」
　しかも何故か六がここでも四つ続いている。シャバキは六という数字が余程好きらしい。他に好きな数字は十三である。不吉だと本人は恐れているにしろだ。
「そう、それだけだ」
「また随分大変だね」
「しかし最後にアトムは滅ぶ」
　これは確実なのだという。
「一人の救世主によって。黒髭も獣も」
「救世主か。誰だい？」
「それは西だ！」

また叫ぶ。
「西から出るのだ。その救世主は！」
「西っていうと」
看守が考えたのは連合の西部である。ところが相手はシャバキだ。話が奇想天外なとてつもない方向に向かうのもまた当然のことであった。
「マウリアにいる皇帝」
「皇帝！？」
救世主からまた随分と世俗的な話になったと思った。
「皇帝が何かするのかい？」
「獅子が見える」
彼には見えるらしい。なお他人には絶対に見えない。ひょっとしたら何か悪質な薬なり悪い酒を飲めば見えるのかも知れない。そうした類だ。
「その獅子がアトムも獣も倒し」
「それで世界が救われるのかい」
「いや、駄目だ」
結局駄目らしい。
「俺には見える。そ・・・・・・そうか！」
「話が凄い破天荒になってるな」
最初からそうであるがグレードアップしてきているのを感じた。
「どうなるやら」
「わかったぞ！その皇帝こそが獣なんだ！」
奇想天外では済まない話の流れだった。脈絡も何も最早あったものではない。
「危険だ！サハラだ！」
「マウリアじゃなかったのか？」
そんな些細な設定なぞシャバキにはどうでもいいのだ。彼の脳内ではそんなことは考慮するに値しないことでしかない。
なおシャバキは過去を決して振り返らない男である。一月前に巨

大ブラックホールで人類は滅亡すると言ったかと思うとその月には他の知的生命体のロボットにされると主張する。彼にとって過去とは最早あってないが如きものだ。過去は何でもない存在なのだ。
「サハラに出て来るその男を止めろ！」
「誰をだよ」
「七つ頭の竜だ」
また予言に定番のキャラクターが出た。所謂サタンである。
「あの赤い竜が迫り来る。連合を飲み込むつもりだ」
「連合をねえ」
冷静に考えなくても有り得ない話だった。
「二千億の人口で」
「ああ」
統一してもサハラはそれだけだ。
「四兆の連合をかい。深海魚みたいな胃袋なんだな」
「そう、深い海の底から来る」
今度はラグクラフトまで入って来た。無意味な方向には極めて博識で余計な教養だけ多いシャバキであった。
「あの男を何とかして抹殺しなければ連合は」
「終わるのかい」
「見える、ハーケンクロイツが」
またまた予言の定番が出て来た。
「ヴォストークもか。そうか、サハラの正体はナチスやソ連だったんだ」
「何でそうなるんだろうな」
言うまでもなくサハラはイスラムだ。間違っても宗教に対して否定的な全体主義の流れを受けてはいない。サハラにおいてはイスラムを否定しては何も存在できないのだが。
「危険だ。サハラを倒さなくては」
教皇のことは完全に忘れている。とりあえずは。
「さもなければ連合の人口は千一まで減ってしまう」

「六六六六じゃなくてか」
「六六六六！？何だその数字は」
ついさっき自分で言ったことなぞ最早遠い彼方であった。

## 第二十九部第四章　南部戦線の動きその四

「ピラミッドは教えているんだ、これからの惨劇を。その赤い狐により」
「今度は狐か」
勝手に動物を出しているようにしか聞こえない。しかも何故かピラミッドまで出て来ていた。ノストラダムスからとんでもない方向に話がいっていた。
「人類は一人残らず死に絶える！人類滅亡への序曲だ！」
「序曲ばっかりで何時まで続くんだか」
思わずまた突っ込みを入れる看守であった。
「世界を救え！連合の辺境に生まれ出ようとしている頭文字がＡの男を！」
「そんなの幾らでもいないか？」
連合は四兆人だ。辺境といっても様々だ。それこそ開拓中の星にそんな人間は山といる。
「世界を救わなければ！俺が！」
「ああ、わかったわかった」
きりのいいところでシャバキを宥める。
「わかったらパスタ食え、パスタをな」
「あ、ああ」
看守は鉄格子の窓を少し開けてパスタを差し入れる。シャバキの好物なのだ。
「ワインもあるからな。おかわりは自由だ」
「済まないな、いつも」
とりあえず犯罪者ではないので待遇はいい。実は部屋の中もかなり快適で彼が望めば運動も風呂も利用できるようにはなっている。治療の一環でもあるのだが彼を治療することはそれこそ荒れ狂うバンダースナッチの首に縄をかけるのと同じ位難しいことである。

「おかげで。快適に暮らせる」
「まあ執筆も頑張ってくれ」
一応彼の本はベストセラーだ。ただし評価にいつも今回も腸がよじれる程笑わせてもらったと書かれるような本であるのだが。
「たっぷり食べてな」
「ああ、俺は負けない」
勝手に熱血する。パスタとワインを楽しみながら。
「何があってもな」
「ああ、頑張れ」
いつもそんなことを言っている。実は彼のそんな姿はテレビで実況中継もされていたりする。ドキュメントギャグとして素晴らしい視聴率を誇ってもいる。何だかんだで彼は連合にその名を広く知られているのだ。
そんな彼の姿は八条も見ていた。この日は内務省に招かれておりそこの一室で金と一緒に彼の勇姿を観察していたのである。
観察を終えて。八条は言うのだった。
「またいつもながら凄いですね」
「はい」
内相の執務室である。そこのテレビを利用しているのだ。八条はソファーに、金は自身の執務室に座ってそれぞれシャバキを見ていたのであった。
「相変わらずですね」
「そうですね」
金が八条の言葉に頷くのだった。
「パワーアップしているようにも」
「どうにも。何処まで凄くなっていくのか」
「この人は特別ですね」
金は皮肉もなにもなしで素でここまで言ってしまった。
「こうまで派手に凄くなっていくとは」
「これもまた才能でしょうか」

「確かにこれもまた才能なのでしょう」
金もそう感じていた。才能といっても様々な形のものがあるということである。それを考えればシャバキもまた才能に満ち溢れた人物になる。もっともそれが世の中の役に立つ才能かどうかは全くの別問題だ。笑わせる才能というのならシャバキは連合一であるだろうが。
「その才能の持ち主ですが」
「暴走が止まりませんね」
「影響力もかなりです」
ただしこれはシャバキが望んでいるような影響力ではない。
「何しろあやゆるメディアで」
「彼の真似が流行っているのですね」
「そうです」
そういう意味での影響力なのである。
「あの奇天烈なキャラクターはそれだけで恐ろしいものです」
「そうですね。ただ」
「ただ？」
八条の言葉に顔を向ける。そのうえで彼のその端整な顔をも見やる。
「それを完全に真似できた方はおられないようですが」
「ええ、確かに」
これに関しては金も同意であった。同意しながら机の上に置いていた飲むチョコレートを口に含む。これもまた頭が割れるような甘さになっている。彼女以外にとっては。
「完全には無理でしょう」
「そうですね。それは不可能です」
八条は不可能とまで言ってのけた。彼にとっては珍しく。

## 第二十九部第四章　南部戦線の動きその五

「あそこまでのハイテンションを維持して支離滅裂な発言を続けるというのは」
「人間のエネルギーには限りがあります」
それを見極めるのもまた政治家の仕事の一つである。それにより今何をするべきかを考えるのである。何かを為すにとって重要なことでもある。
「しかしそれはあくまで常人の話であり」
「超人にとってはまた別問題ですね」
「そういうことです」
確かにシャバキは超人でもある。だがこれに関してもまたそれがいいことかというと完全に別問題になってしまうのであった。つくづく厄介な話である。
「あくまで。別問題でしかないのです」
「結局のところ彼は彼でしかないですか」
「そうです」
二人の言葉には達観さえ見られた。
「あのテンションは誰も維持し続けられませんので」
「薬をやっているという噂もありましたね」
残念なことに麻薬の類はこの時代にも存在している。裏社会があり、また人の弱さというものがある限りこうした類の存在もまた消えることがない。その中毒患者が深刻な社会問題になっているのもまた同じだ。これは連合だけでなくエウロパやサハラ、マウリアでも同じだ。麻薬といったものが問題にならない時代も国もないのだ。ないとすればそれこそそれは完全な統制国家か飢餓状態に置かれている国家しかない。
シャバキにそうした噂が流れるのも道理だった。彼を見ていれば。だがそれは違っていた。

「しかしそうではありませんでしたね」
「脳内で自然に麻薬を分泌できるのでしょう」
シャバキとはそういう男なのだ。
「ですから麻薬に頼る必要はないのです」
「そうなりますね」
「はい。それも踏まえてやはりこの人は天才なのです」
相変わらずテレビで叫び続けている彼を見ての金の言葉だ。
「類稀なる」
「その類稀な人物の言葉のうちの一つですが」
「何か？」
「サハラの獅子です」
シャバキが思いつきで叫んだ言葉の一旦だ。マウリアになったりするし獅子も虎になったり豹になったりする。だが八条はあえてその獅子に注目したのである。
「サハラの獅子と言えば」
「青き獅子ですか」
「はい、その彼です」
アッディーンのことである。なおシャイターンはサハラの魔王と呼ばれている。連合やサハラの者達が適当につけた仇名である。
「実は今回はそのアッディーン副大統領についてお話に窺ったのです」
「そうだったのですか」
「はい」
また金に答えてみせる。
「申し遅れましたが」
「仕方ありませんね」
八条の謝罪を笑顔で許す金であった。
「目の前にこんな御仁が展開していれば自然と注意がそいらに向かいます」
「そう言って頂けますか」

「ええ。それでですね」
そのうえでまた八条に尋ねるのであった。
「何故彼のお話を内務省に」
「最近内務省にオムダーマンのスタッフを受け入れているそうで」
八条が尋ねたのはそこであった。それは事実であり最近連合中央政府内務省ではオムダーマン共和国の官僚を留学、研修という形で受け入れているのである。八条はそのことについて金と話をしたいというのである。
「それはどういった御了見なのでしょうか」
「深い意味はありません」
金の答えはこうであった。
「向こうから申し出がありまして」
「それでですか」
「はい。中央政府の政治システムを勉強したいそうで」
「？しかし」
八条はそこまで聞いて目をしばたかせるのであった。
「中央政府の、ですか」
「我々だけではありません」
金はこうも言い加えてきたのだった。
「各国政府にもです」
「各国政府にでもですか。そういえば」
「日本にも来ておられますね」
「ええ、その通りです」
金のその言葉に答える。実はそうなのだ。
「この前日本政府からその話を聞きました」
「そうですか」
ここで八条は深く言わず金もわかっていたが実はその話は伊東から聞いたものである。言わずともわかっているという類の話になっている。

## 第二十九部第四章　南部戦線の動きその六

「そうですか。日本だけではありませんでしたか」
「韓国にも来ています」
当然の様に金の国にもだった。
「各国政府の内政の研究をしているようです」
「内政のですか」
「おそらくは統一後を見越してのことかと」
そう予測を立ててきた。既に話は統一を見据える段階に来ているということであった。しかもそれはオムダーマンだけではなかった。
「またそれは」
「ティムールもですか」
「はい、そうです」
そう答える金であった。
「結構な数のスタッフ派遣の申し入れが内務省に届いています」
「オムダーマンとティムールが」
「ハサンはありません」
これはそのままハサンの今の考えを現わしていた。彼等にとってみれば統一といったものはあまり考えていないことであるのだ。
「あくまでこの二国だけです」
「彼等は統一した後の内政形式を考えている、そうですね」
「そうかと。ただ、どういった統治システムになるかは未定です」
それはまだ決まってはいなかった。しかし予測を立てることはできるのだった。
「ですが」
「おそらくそれは連合中央政府の様な形式ではないでしょうね」
「そうでしょうね」
これはすぐにわかった。何故ならサハラの状況が念頭にあるからだ。

「連合は分権形式ですがそれは」
「まずサハラには合いません」
そうなのだ。戦乱が続いていたサハラには合わないのだ。
「それは彼等が最もわかっていることでしょう」
「しかしどうして」
ここまで聞いて八条は思うのだった。
「それでどうして連合に来ているのでしょう、彼等は」
「おそらく連合の高度な統治システムを学ぶ為でしょう」
「システムの進歩状況をですか」
「はい」
連合とサハラではその官僚システムにしろ統治システムにしろ格段の差が出ていた。ここでも戦乱の影響があったのだ。戦乱に明け暮れたサハラではそうした内政のシステムを整えることは困難であったのだ。結果としてそれが統一後の課題の一つにもなっているのだ。
「それを学びに来たようです」
「二千億の人口に相応しい政治システムですか」
ここで八条は微妙に言い換えた。統治ではなく政治としたのだ。
「それを」
「今オムダーマンもティムールも政治面で問題を抱えています」
金はそこも指摘したのだった。
「それは今もこれからも。双方に深く関係のあることです」
「今の政治システムでは治めきれなくなっているのですね」
「はい、そうです」
要はそれであった。
「全ては。両国の勢力が急激に巨大化したことにより」
「ハードウェア、ソフトウェア双方の面で処理しきれなくなっていますか」
「そしてそれはこれからのことに関しても同じなのです」
問題は今だけではないのであった。

「これで統一したとなると」
「とてもサハラを治めきれないと」
「そうです。二千億の人口を纏められるシステムです」
それを学び取る為にオムダーマンもサハラもスタッフを連合に送って来ているのであった。戦争による統一だけでは国は一つにならないのだ。政治もまた肝心なのは言うまでもないことである。それは政治の世界にいるならば常識と言えるものであった。
「彼等はそれを欲しているのです」
「ふむ。では彼等はサハラの統一後も視野にはっきりと入れたということですね」
「はい」
それは簡単に導き出される答えであった。彼等の行動から。
「そこがハサンとは違います」
「そうですね。しかし彼等は中央集権的になるでしょうが」
ここで連合との相違が出ていた。
「我々は各国もまた多分に分権的ですがそこで相違が出るでしょう」
「そこはアレンジするかと」
つまり彼等に会うように変えるということであった。
「彼等にしろ我々の政治がそのまま彼等に合うとは考えていないでしょうし」
「それはそうでしょうね」
これもまた当然のことであった。その国にはその国に合った政治があるからだ。
「彼等にとってはこれからも政治でも忙しい日々が続きますか」
「そうかと。それに」
「それに？」
ここでまた話が動いたのであった。

## 第二十九部第四章　南部戦線の動きその七

「最近オムダーマンは何かと我々やマウリアに接近してきていますね」
「ええ、それは」
その官僚の派遣もその一つである。だがそれは他にもあるのであった。
「ティムールもまた」
「双方共盛んに交流を呼び掛け」
「しかも占領地での連合各国の権益には一切手をつけていません」
「ええ、それに」
まだあった。
「我々の企業が進出している先に攻撃を仕掛けることもありませんね」
「ハサンもそれは同じですね」
彼等はあえて連合の企業が進出している先には手を出さないようにしているのだ。これもまた多分に政治的な判断によるものであった。
「我々との関係悪化を恐れていますか」
「間違いなく」
金は答えた。
「それは我々にとっても好都合ですし」
「そうですね。何もサハラと揉める必要はありません」
備えはまた別の話である。彼等にしても無闇に戦争を欲しているというわけではないのだ。そうした当たり前のことをわからない者もいるのだが。
「彼等もそれをわかっているのなら」
「いいことです」
「はい。そういえばですね」

「何か？」
「そのオムダーマン軍のことです」
今度は彼等についての話になった。
「彼等が何か」
「また動き出すようです」
八条は静かに紅茶を飲みながら述べた。紅茶は見事なスカーレッドでそのいいろを楽しみながら飲む。普通の紅茶よりもずっと茶の旨味が強くなっている。日本の駿河星系の産である。この星系は日本においては茶の産出地としてあまりにも有名で様々な茶が栽培されてきているのである。
その紅茶を飲みながら語るのだった。濃厚な味と香りに口を預けながら。
「オムダーマン軍の北上ですか」
「そうです。暫く動きを静めていましたが」
「でしたね。それもかなり」
「軍事的にはかなりの時間になっていました」
八条は金もそれを踏まえていることを彼女の言葉から悟ってまた述べた。
「かなりの時間沈黙していました」
「あれはやはり今後の為だったのでしょうか」
「はい、そうです」
金のその疑問の言葉に答えてみせてきた。
「その通りです。彼等は南方侵攻後の緒戦で勝利を収め」
「ええ」
まずはそこからはじまった。全てはアッディーンの鮮やかな奇襲から。このアッディーンという人物はここぞという時に鮮やかな奇襲を以って勝利を収めるというのが連合での評価であった。その為に青い獅子とまで仇名されたのだ。なおこの仇名は彼の所属するオムダーマン軍の軍服が青であることに由来する。この青い軍服の上に白いマントを羽織るのがオムダーマン軍元帥である彼の姿なのだ。

若き獅子なのだ。
「そしてマスカートでの勝利以降進撃を停止していました。それは」
「これからの為だったのですね」
「軍事基地を整備して補給体制を整え」
まずはそこからなのであった。
「これからのことに備えたのです」
「そうだったのですか。やはり」
「彼は。補給を重視する人です」
八条はアッディーンをそう評していた。
「補給をですか」
「意外ですか？」
「ええ、それは」
金もまたアッディーンに対してはそうしたイメージを持っていなかった。彼女にとって軍事は専門外でありどうしてもそうした認識になってしまう。彼女の見ているアッディーンとは補給すら無視して戦う勇敢な若い提督である。これは八条が見ている彼とは全く異なるものだ。
「思いも寄りませんでした」
「確かに。彼のイメージは強烈なものがありますから」
「奇襲のイメージがですね」
「そうです。ですがそれはかえって」
アッディーンが補給をわかっているからであった。彼の奇襲は相手が補給の常識を踏まえているのを察知してのことなのだ。そこを見抜いて一気に攻めて持久戦を許さない、彼の奇襲の真髄はそこなのだ。
「彼に対しての誤認になります」
「誤認ですか」
「あのサラーフでの戦いでも南方での戦いでも」
連合の軍事識者達の間ではこの二つでの一連の戦いもかなり注目されている。アッディーンはこの二つの戦いでは慎重に進撃を進め

ていたのである。

## 第二十九部第四章　南部戦線の動きその八

「彼は慎重に進撃を進め」
「そして」
「丁寧に勝利を収めています。とりわけサラーフとの戦いではそうでした」
「あの戦いはかなり」
サラーフについては金も知っていたのだ。
「サラーフ側の指揮官にかなりの問題があったと思いますが」
「はい、それはまずあります」
連合でもミツヤーンやホリーナム、キヨハームといったような人材はまずいない。極めて愚劣な人材として連合の各士官学校でも教えられている程なのだ。
「ですがそれにも増してアッディーン提督の戦略は」
「補給を重視した慎重なものだったというのですね」
「まず補給路を艦隊で守り」
これを徹底させたことがまず大きかったのだ。
「補給基地と前線基地を整備していました。そうして戦っていましたので」
「そうだったのですか。アッディーン副大統領は慎重派だったのですか」
「実はそうなのです」
これは言われてみればわかることであった。金にとっても。
「今回もまた同じです」
「今回もまた、ですか」
「はい。そろそろ補給体制が整ったと思います」
八条はそれも読んでいた。時間的なものを見ていたのだ。
「それは即ち」
「オムダーマン軍の再度の進撃がはじまる頃だというのですね」

「そういうことです。オムダーマン軍はこのまま北に進撃を再開し。そして」
「そして？」
「それからは確かなことはわかりません」
八条はあえて断言を避けたのであった。
「そこからは」
「オムダーマンが勝つかはハサンが勝つかはわかりませんか」
「ですがそこで」
八条はまた言う。
「またアッディーン副大統領がどうなるかがはっきりとわかります」
「どうなるかは、ですか」
「今までの彼の評価はまずは」
これについては連合の中でのことである。無論八条もサハラでの彼の評価は承知しているがあえて連合での評価を述べたのである。
「英雄であります」
「しかも若きですね」
「はい、そうです」
英雄であるというだけでかなりの評価だ。しかし人はそこに若さを付け加えるとより一層高い評価を下す。アッディーンに関してもそれは同じだったのだ。
「その若き英雄という評価がさらに高まるか」
「若しくはそれが終わるか、ですか」
「それがまた問われようとしているのです」
そう述べたのであった。
「さて、その試練に彼は打ち勝つことができるでしょうか」
「その答えは簡単ではないかと思います」
金はまたここでチョコレートを飲みながら述べるのだった。
「簡単ですか」
「はい」
そして言う。チョコレートを入れてあるカップを置いてから。

「英雄ならば。どんな難問でも」
「解決できると」
「そうです。英雄ならば何の問題もありません」
そうしてこう言うのだった。
「彼が。本当の英雄ならばハサン軍を破るでしょう」
「ですね」
実は八条もこの答えを待っていたのである。金のその答えを聞いたうえで満足気な顔で笑うのであった。それこそが正解だと顔に出したうえで。
「ハサン軍もまた必死ですが」
「はい」
これもまた当然であった。彼等もまた国がかかっているのだ。滅亡するわけにはいかないのだ。そうした意味ではお互い同じ条件なのだ。オムダーマンもハサンも。
「果たして。アッディーン副大統領に勝てるでしょうか」
「それを見せてもらうことになります」
金は言う。
「ただ」
「ただ。何か」
「今こちらに派遣されているオムダーマン政府のスタッフですが」
彼等に関して言及するのであった。
「何があっても彼等への待遇は変えませんので」
「そうですか」
「はい、例え」
ここから話すのはあくまで考えられる限りの最悪のケースである。しかしその最悪のケースをあえて話すことにより内務省としての方針を述べたのである。

## 第二十九部第四章　南部戦線の動きその九

「彼等の祖国が滅んだとしても」
「滅亡したとしてもですか」
「彼等への待遇は変えません。あくまで留学生、研修生として待遇します」
「それが宜しいかと」
また八条もそれに同意して頷くのであった。
「さもなければ。やはり人道的な見地から批判が出るでしょうし」
「はい」
金が意識しているのはそこであった。民主主義である連合においては人道的見地がつとに重要なのだ。それを無視することは不可能なのだ。
「そうあるべきです」
「若しそれを無視して彼等に対して下手な対処を採ったならば」
「それですぐに批判が来ます」
火を見るより明らかな話であった。
「野党から。そしてマスコミから」
「ネットでも」
「そうです。あらゆる場所から批判が出ます」
もうわかることであった。連合では様々な口が存在している。その口が何を言うかわからないということなのだ。これも民主主義だからだ。
「それにより政府への批判が噴出しますので」
「やはり厚遇したままでいることが正解ですね」
「はい。それしかありません」
八条はそれを断定さえしてみせた。
「彼等に関しては」
「小さなことでしょうが」

結局のところはそうだ。オムダーマンから連合に研修としてスタッフを派遣されているということは歴史的にも小さな話であるし現在の政治的にも新聞においてもネットにおいてもテレビにおいても小さく取り上げられるだけの話だ。しかしそれでも注意を払わなくてはならない話なのである。
「それでも。忘れてはならない話ですので」
「慎重にですね」
「はい。そうなるべきだと私も考えます」
もうチョコレートはない。金はそのことに残念なものを感じながら話す。だがすぐに我慢できなかったのか机の上にあった菓子を食べだしたのであった。チョコレートクッキーである。
「さもないと批判もありますし」
「後で禍根にもなりかねませんし」
サハラとのトラブル、火種という意味であった。
「大事にしておきましょう」
「はい」
「それでですね」
ここで話は移った。
「サハラの情勢は予断を許さないものになっていますが」
「ええ」
「内相は。どの勢力が残ると考えていますか」
「どの勢力が、ですか」
「そうです」
金に顔を向けたうえで問うた言葉であった。
「それに関してはどう思われますか」
「私は軍事に関しては専門外ですが」
まずはこう前置きする。それから慎重に言葉を進めるのであった。
「今の流れだとまずハサンは危ないでしょう」
「ハサンですか」
「はい。オムダーマン、ティムールに攻められています」

まずは二国を一度に相手にしている、そのことが大きかった。
「そして」
「そして？」
「その結果として二正面作戦を行っていて国力がその分消耗を強いられています」
「ですね。確かに」
ただ二国を相手にするのは実は二正面作戦に比べたら大きな問題ではないのだ。二国を相手にしていてもそれが同じ方向ならば特に問題はない。両方を同時に相手にすればいいだけだからだ。しかしそれがそれぞれ違う方向だったならば。労力はそれだけ多くに振り向けられる。これが問題なのだ。
「それによる軍事的、政治的負担がかなりなものですので」
「それがハサンにとって大きな負担になっていると」
「そうです。そして」
金はここまで述べたうえで新たなポイントを指摘した。
「人材もまた」
「人材ですか」
「ハサンはこれまで多くの人材を持っていました」
太子が選び、抜擢した人材達である。彼等がハサンを人材面から支えていたのは事実だ。しかしその人材達がどうなっているかが大きな問題となっていたのだ。
「ですがその人材達が」
「かなり減りましたね」
「そうです」
それがハサンにとっての大きな問題となっていたのだ。軍人もそうであるし政治家も官僚も。その数を大きく減らしていたのだ。

## 第二十九部第四章　南部戦線の動きその十

「これはおそらく」
「ティムールのテロの結果でしょうか」
「今はまだ証拠はありません」
連合ではそれはわからない。だからこう言うのであった。
「ですがまず間違いはないでしょう」
「状況証拠というものですか」
「はい、それです」
そこからでも判断は可能だ。ここで何を言われても反論しないのがシャイターンであった。ここであえて反論したり居直ったりするならば誰もが黒だと断定する。最悪なのは証拠を出せとかえって主張することだ。シャイターンはそういうことをするような愚か者ではないのだ。
「それを考えるならば」
「間違いなくティムールの仕掛けたものですか」
「オムダーマンであるとはあまり考えられないのです」
金はこうも述べるのだった。
「それはまた何故」
「アッディーン副大統領の性格からです」
オムダーマン軍を取り仕切るアッディーンその人についての言及がまた為されたのであった。
「彼は。謀略を使うタイプには思えません」
「そうですね」
八条もそう見ていた。だから金の今の言葉にすぐに頷くことができたのだ。
「謀略を使われそれを未然に防ぐことはできるでしょうが」
「自分で使うことはしないでしょう」
「謀略というものは特別な適性が必要です」

八条はここでこう述べた。
「能力がある、なしでの問題ではなく」
「あくまで適性ですか」
「そうです、適性なのです」
また言うのであった。
「それこそが必要なのです。まず第一には」
「その次に能力ですか」
「はい。勿論能力も必須です」
こえはまずどんなことでも言うまでもないことであった。しかし謀略というものが特殊なものである以上特殊な適性が必要になるのもまた言うまでもなかった。
「しかしまずは適性です」
「左様ですか。しかし」
「しかし？」
ここで金の言葉に問う。
「シャイターン主席はその適性があるのでしょうか」
「かなりのものかと」
八条はシャイターンをただの英雄とは見てはいなかった。そうした意味ではサハラの多くの者とは彼への評価は違ったものになっていた。
「かなり凄いものがあります」
「油断のできない方というわけですね」
「はい。今後の彼の動向には国防省としても注目しています」
「国防省がですか」
「能力があるだけに危険なのです」
こうも言う。
「何かした場合に」
「その為に今サハラへの備えも進めているのですね」
「基本的にはどの国が統一した場合に対しても考えています」
これは普遍的な対処なのだ。だからこそ進めているのである。

「ですが。その中でもシャイターン主席はかなり危険です」
「かなりですか」
「私はそう見ています。また国防省のスタッフも」
「そうなのですか」
「少なくともアッディーン副大統領より遥かに油断のできない人物です」
こうまで言う。彼等はそこまでシャイターンを警戒しているのだ。それは八条も同じで彼もまたシャイターンという男を見ていたのである。
「連合と対した場合も謀略を仕掛ける可能性はなきにしもです」
「対した場合ですか」
「私としてはサハラと衝突する気はありません」
これは八条だけでなく連合全体がそう考えていた。彼等にとってみればサハラは全く異なる世界であり興味の外なのだ。そこと何かことを構えるという気持ちにはなれないのが当然だ。連合での考えではサハラという場所は完全に化外の地でしかないのである。
「彼に対しても。これといってする気はないのですが」
「それが宜しいかと。シャイターン主席も聡明な方」
これは間違いがなかった。そうでなければあの若さで一国の国家元首になり領土を拡大できる筈もない。自明の理であると言えた。
「こちらから何もしなければあちらからも何もないでしょう」
「そう思います。差しあたって今は」
八条はまた述べてきた。
「こちらの備えを進めながらサハラの情勢を見守りましょう」
「まずはオムダーマンとハサンの戦いですね」
「はい」
話はそこであった。

## 第二十九部第四章　南部戦線の動きその十一

「彼等のうちどちらが勝つかですね」
「はい。動きがあれば伝わります」
八条は言う。
「国防省としてもサハラの動向に関する情報収集を進めています」
「かなり情報を集めておられるようですが」
「別に隠しているつもりはありませんが」
八条はあえてにこやかに笑うのであった。
「情報収集に務めているのは事実です」
「戦略戦術への研究ですか」
「ジャーナリストや観戦武官もいます」
ジャーナリストはこうしたケースでは非常に役立つ。彼等の集めた情報を利用するのだ。これも二十世紀から確立された情報収集の方法である。
「彼等だけでなく」
「他にもですか」
「当地の方々も協力して下さっています」
ここでは先程とは笑みを変えてにこやかに笑ってみせてきた。
「有り難いことに」
「まさかとは思いますが」
「国防省は何もしておりません」
それは証言する。
「私としても。謀略というものは」
「左様ですか」
八条もまた謀略の適性を持ってはいないのだ。彼はあくまで正攻法の政治家であり政治力はプラスの方向にのみ活用するタイプである。これは彼の生まれ育ちのせいもある。良家の御曹司であり資金にも地位にも困ることはなかったからだ。よい意味での純粋な力の

使い方ができてきたからなのだ。
「ですがジャーナリストの中には」
「彼等は違いますか」
「彼等としては情報が命です」
それを集めるのがジャーナリストだ。だからそれを手に入れる為に手段を選んではいられないと考える者もいるということだ。もっとも買収といったものは謀略でも何でもない軽いものだが。少なくとも情報収集にそれを使うというのは有り触れたことであり驚くにも値しない。だが八条はそうした軽い謀略も使わない男だったのだ。情報収集にしてもあくまで正攻法でしか集めない男だったのだ。もっともそれでもかなりの情報を集めるのであるが。
「だからです」
「彼等もまた必死なのですね」
「今あの場所では誰もが必死です」
こうも言う。８６
「だからこそ。そうなります」
「彼等には彼等のやり方がありますか」
「それを否定するつもりはありません」
それについてまでとやかく言う八条ではなかった。
「こちらの役にも立っていますし」
「それ程役に立っていますか」
「はい、おかげで助かります」
顔が綻んだ。
「今ではここにいてもあの場所での動向が何もかもが手に取るようにわかるようです」
「それはよいことですね」
「それで分析をしてみたのですが」
情報はただ集めるだけでは何にもならない。そこから分析をし結果を想定するのが戦略なのだ。八条は今その戦略を行っていたのだ。
「その結果ですが」

「何かわかりましたか」
「ハサン軍は現状戦力のみでオムダーマン軍と対峙します」
「現状戦力だけでですか」
「はい、そうです」
ハサン政府での決定は発表されていなかった。しかしは地上は手に入れた情報を分析しただけでそう想定したのであった。
「それにより防御を固めるつもりなのです」
「防御をですか」
「何重にも防御を固めているのはそれからの判断なのです」
そこもまた読んでいたのであった。
「現状戦力でオムダーマン軍の進撃を止める為」
「何重にも。ということは」
ここで金は気付いた。かなり鋭かった。
「敗北する度に退き、そうして少しずつ戦力を削っていくのですね」
「それはハサン軍の戦略だと思われます。防衛ラインが危うくなればすぐに撤退し」
「後ろの防衛ラインに入りそこでの戦力と合流し」
「次第に戦力を増加させてオムダーマン軍の進撃を防ぐ。ロシア軍が地球で多用した戦法です」
ロシア軍の防御戦術はこうした多重の防衛ラインを敷き撤退しながら戦い相手の消耗を強いるというものがある。それともう一つ知られた戦術がある。それこそが焦土戦術である。この多重防御戦術と焦土戦術は併用されることも多かった。むしろ併用するのがロシア軍の常であるがハサン軍は焦土戦術を採らずにただ多重防御戦術を採っているのだ。これは国民への犠牲を好まない太子やハサン政府の考えもあった。
「彼等はそれを使っているのです」
「そうしてオムダーマン軍を追い詰めていこうというのですか」
「時間もロスさせるつもりです」
八条は今度は時間についても言及した。

## 第二十九部第四章　南部戦線の動きその十二

「時間もですか」
「御承知のようにハサンはティムールとも戦っています」
これもあった。
「そして新たに動員した戦力をティムールに主に向けています」
「ということは」
「はい、そうです」
ここまで話したうえで金の言葉に頷いてみせた。
「まずはティムールを倒しそのうえで」
「オムダーマンをですか」
「ハサンは優先順位を決定したようです」
戦略として常識であった。敵が複数存在した場合どちらを先に倒し優先させるかは戦略の基本の一つである。彼等もそれを忠実に守ったのである。
「それにより時間を稼ぐつもりのようです」
「そうなのですか」
「彼等はこれで上手くいくと考えています」
そうだからこそ決定したのである。
「だからこそまずはティムールだと」
「戦力がティムールの方が少ないからでしょうか」
「おそらくは」
金と八条の予想はこの時一致していた。また同時に正解であった。彼等もハサン政府も同じことを考えていたのである。違うのはハサン側が決める側であり八条達は見ているだけだ。そうした差がはっきりと存在していた。
「しかし。それはいささか早急な決定なのでは」
「早急とは」
「そうです。より状況を見極めてからの決定は・・・・・・いや」

しかし金は今の言葉をすぐに引っ込めたのであった。
「それが許される状況ではありませんか」
「そう、ハサンにとっては」
そういうことであった。ハサンは当事者でありしかもそれは戦争を行っているのだ。戦争を行っていて悠長に判断を下せるというのは非常に困難なことである。とりわけそれが劣勢に置かれているのならば余計にだ。どうしても心理的に余裕がなくなってしまうのだ。
「それはできません」
「そのうえでの判断でしたか」
「しかもです」
八条はまた言う。
「それが正しいかも間違っているかもわからないのです」
「それもですか」
「結果は最後になってわかります」
こうも言うのだった。
「言い換えれば勝つか敗れるかしない限り」
「わかりはしないと」
「はい、そういうことです」
八条は述べた。
「彼等もまたわかってはいません。私達もですが」
「私達もですか」
「確かにティムールを先に倒すのは戦略の常道」
また述べてみせる。
「戦力的には考えて。ですがそれが正しいかどうかですね」
「ええ」
「結果としてティムールを倒せればそれは正解になりますね」
「そうなります。結果を主に見て考えるならば」
政治の世界というものはまず結果があるのだ。何をしても結果がよければそれでいいのである。言い換えれば結果が悪ければどんないいことをしても駄目なのである。

「最後までわかりませんか」
「ハサンにとってはティムールを倒せれば正解です」
「正解ですね。確かに」
だが金はここまた一つのことに気付いた。
「ですがそれは答えは半分でしかありませんね」
「その通りです」
八条はこれもわかっていた。だがここでもあえて言わないだけであったのだ。これには八条なりの計算があってのことなのだ。
「ハサンにとっての完全な答えは両方を倒してこそです」
「ではどうやっても両方を倒せばそれで終わりと」
金はまた言った。
「ティムールとの戦いは。最後の最後までわからないのですね」
「ティムールを倒して終わりではないので」
八条は今ここにいながら銀河を見ていた。サハラの銀河を。
「ハサンにとっては迷いもあったでしょう」
「ですが迷っている時間もなかった」
「そうです」
迷っていては手遅れになってしまう。そのことへの危惧もまた常にハサンにあったのだ。それに押されるようにして決断を下したという一面もあったのだ。

## 第二十九部第四章　南部戦線の動きその十三

「それに加えて」
「それに加えて？」
「ティムールに対しての備えが乏しいのです」
八条が次に指摘したのはサハラの戦略構想におけるポイントであった。
「ティムールへの備えはアヤグーズ王国がありますが」
「アヤグーズ？ああ」
最初そう言われてもピンとこなかったがすぐに気付いたのであった。
「あの女王の治めている国ですね」
「アヤグーズのブルコルジ女王は一代の猛将。ですが彼女が敗れれば」
「守りはそれでなくなるのですか」
「少なくともかなり乏しくなります」
銀河を見ながらの八条の言葉であった。彼はその銀河にサハラでの三つの勢力の動きを見ていた。そうしてそれを金に対して語っているのだった。
「そのうえアヤグーズを陥落させられればそのアヤグーズを拠点にして攻めて来るでしょう」
「アヤグーズからですか」
「そうです。しかもティムール軍の動きは迅速です」
防衛拠点に乏しくしかもその拠点を奪われその敵の動きが迅速ならば。話はハサン側にとって実に厄介なものになるということであった。
「そうした諸事情を防ぐ為にも」
「彼等を先に倒すのですね」
「ハサンはそう決定したのです」

「成程」
ここまで聞いて遂に全てを理解したのであった。専門外のことを聞いていたがそれでも全てを理解したというのは金の頭脳の冴えの証明でもあったが。
「そういうことなのですか」
「はい。だからこそ彼等はまずはティムールを先に倒すことに決定したのです」
「わかりました。ハサンも彼等なりに考えていますね。見事です」
見事とまで評する。ここでは素直にハサンを褒めていた。
「さて。どうなるかを見せてもらいますか」
「ええ」
二人は言葉を交えさせた。
「それにより我々も動き方を変えますので」
「その間に長官は」
金はここでちらりと八条を見やった。
「備えを整えられて」
「万全にしておきます。予定通り」
「御願いします。そちらは」
「はい。それでは」
ここまで話すとすっと席を立つのであった。
「私はこれで」
「帰られるのですか」
「用件はもう終わりましたので」
「そうですか」
金はその言葉を聞いて少し曇った顔になるのですか。
「それではまた」
「はい。それでは」
「ただ。長官」
ここで金は思い切った感じで八条に顔を向けるのであった。
「何か？」

「あのですね」
その眼鏡をかけた整った知的な美貌に珍しく躊躇いを見せながらも声をかける。
「もう少し時間はおありでしょうか」
「時間ですか」
「そうです」
おずおずとした様子でまた声をかけた、
「宜しければですが。もう少し」
「もう少し？」
「仕事の打ち合わせを」
「！？」
八条はそれを聞いて顔を顰めさせる。そのうえでまた金に対して述べるのだった。
「仕事のですか」
「そうです」
その目を泳がせながらの言葉であった。
「まだ。忘れている部分があるかどうか」
「ああ、そうですね」
八条は立ち上がったままで納得した顔で頷くのであった。
「忘れていては二度手間になります。そうなれば厄介になりますね」
「はい、ですから」
また必死な声になっていた。
「御願いできるでしょうか」
「わかりました」
金の真意には何一つ気付くことなく頷くのであった。
「それでは御願いします」
「有り難うございます。それではですね」
嬉しさを必死に隠す様子が見えているがやはり八条はそれには気付かない。いそいそと立ち上がって部屋の棚からお菓子を出す金を見てもおかしいとも思わないのだ。

## 第二十九部第四章　南部戦線の動きその十四

「お菓子でも。どうぞ」
「どういったお菓子でしょうか」
「パイです」
金はそのパイを出しながら答えた。
「アップルパイです。我が国の陸山星系の産でして」
「韓国のですか」
「はい、韓国の林檎の産地として有名な星系でして」
やはりいそいそとした動作でまた答える。エメラルドグリーンのパイが出されていた。
「りんごの色も素晴らしいですよね」
「奇麗な色ですね」
「は、はい」
赤くなった手で八条にパイを差し出す。八条もそのパイを受け取った。
「これがですか」
「そうです。味はですね」
「どうなのでしょうか」
「はい。それでは」
一切れ取って口の中に入れる。それを食べると八条の口の中が強烈な林檎の甘みに支配されるのであった。
その甘みを感じながら咀嚼し喉に入れておく。その八条に金が尋ねた。
「如何でしょうか」
「一言で宜しいでしょうか」
「はい」
金はこくりと頷いてみせてきた。
「御願いします。どうでしょうか」

「美味しいです」
にこりと笑っての言葉であった。
「上品な味ですね」
「上品ですか！？」
「ええ。確かに甘さはかなり強烈ですが」
普通のアップルパイよりもかなりだ。八条もそれには気付いていた。
「だがそれがすぐに消えて」
「その後は」
「非常に心地よい感じになります」
こう答えるのであった。
「こんなアップルパイもはじめてです」
「御気に召されたようですね」
「ええ、とても」
にこりと笑った言葉も出してみせた。
「これに合うのは」
「紅茶かコーヒーですね」
「そうです。どちらがありますか？」
「両方用意してあります」
知的な顔をにこやかにさせての金の言葉だった。
「それでは長官はどちらを」
「そうですね。ここは紅茶を」
八条が選んだのは紅茶であった。彼は紅茶もコーヒーもどちらもいける。今はアップルパイに合わせて紅茶を選んだのである。
「御願いできますか」
「喜んで。それでは」
「はい、それでは」
程なくして紅茶が煎れられる。金の紅茶の入れ方は手馴れたものであった。二つのティーカップに濃い紅の茶が入れられる。その茶が強い茶の香りを発していた。

「これも韓国産です」
「韓国のですか」
「はい、槿花星系の産でして」
金は産地を述べた。
「韓国のお茶の産地です」
「そうなのですか」
「韓国はお茶も有名なのですよ」
「お茶もですか」
「あまり知られてはいないのでしょうか」
「申し訳ありませんが」
金のその言葉に少し目を伏せつつ言葉を返した。
「韓国でもお茶はよく産出されているとは」
「韓国人がお茶をよく飲むようになったのは新しいですしね」
金はその紅茶に砂糖を次々に入れながら応える。既に白い角砂糖が七個程度入れられまだ入れ続けているのであった。
「比較的」
「地球にあった頃に既に飲まれていたのでは？」
「ええ。二十世紀後半です」
そう八条に答えた。
「李氏朝鮮の間はお茶を飲む風習は断絶していました」
「お茶を飲む風習が？」
八条はそれを聞いて目を止めた。ティーカップを持つ手の動きも止まってしまっていた。
「それは止まるものなのですか」
「御存知ありませんか」
「といいますと」
「これは宗教的な関係でして」
金は遂に砂糖を十個入れた。それから金色のスプーンでかき混ぜる。今にもカップの底からジャリジャリという音が聞こえてきそうである。

## 第二十九部第四章　南部戦線の動きその十五

「宗教的なですか」
「そうです。韓国、その時は李氏朝鮮でした」
「大体十四世紀から二十世紀の辺りですね」
李氏朝鮮がどの時代に存在したのかは八条もおおよそのことを知っていた。しかしその歴史の詳しい部分はあまり知らなかったのだ。おおよそは知っていたが。
「そうです。李氏朝鮮の国教は」
「ええ、朱子学ですね」
儒教の一派であり宋学とも言われる。中国の南宋で朱熹により完成されたもので非常に厳格で身分制度を重視している。中国では君臣間の関係を重視しているということになる。当時北方の異民族に悩まされていた南宋が彼等の誇りを保つ為に生み出された部分が大きい。
「それを国教にしたのは知っています」
「その時高麗で国教であった仏教を否定したのです」
「仏教！？ああ」
八条はここまで聞いてわかった。
「仏教はお茶を飲みますからね」
「そうです、禅宗でも茶道でも」
禅宗において茶を飲むのは禅を組んでいる時に寝てしまわないようにである。所謂コーヒーと同じ興奮剤というわけである。また僧侶は建前ではあるが酒を飲むものではないのでそのかわりに甘いものや茶を楽しむのである。だから仏教には茶が欠かせないのだ。
「お茶があるものです。しかしその仏教を否定したならば」
「お茶を飲まなくなりますね」
「その結果李氏朝鮮ではお茶を飲まなくなったのです」
「そうだったのですか」

「今飲んでいるのは再開されたものになります」
ここで自分のその砂糖をふんだんに入れた茶を飲むのであった。
「再開といっても千年以上の歴史がありますが」
「ふむ。韓国でもそうした歴史があったのですか」
「そうなります。おわかりですね」
「はい、わかりました」
八条はここまで聞いて金の言葉に頷くのであった。
「韓国にそうした歴史があるとは知りませんでした」
「歴史のことはいいのですが」
金はそれはいいとした。
「ですが
「ですが？」
「韓国のお茶のことは御存知なかったのですか」
「すいません」
「結構宣伝もしていて売れ行きもいいのですが」
笑みが少し寂しげなものになった。
「それでも知られていないのは寂しいですね」
「日本でも韓国のことは結構紹介されているのですが」
「そうなのですか」
「それでも知りませんでした」
声に申し訳なさが宿っていた。
「申し訳ありません」
「謝れることはありません。以後御存知頂いていればいいのですから」
金は述べる。
「それで宜しいでしょうか」
「はい。それでは今後は」
「御存知を。韓国のお茶も美味しいのですし」
「確かに」
これには納得できた。飲んでみたがこれまた絶品であった。

「お茶そのものに濃厚な味がありますね」
「そうですよね。だから私はこのお茶が好きなんです」
金は今度は純粋に微笑んだ。
「甘さは足りないですが」
「そうですか？」
八条はこれには疑問符でもって返した。
「私にはこれはかなり甘いですが」
「皆さんそう仰いますが」
しかし金にとってはそうでないようであった。首を捻ってさえいる。
「私にはとてもそうは思えないのです」
「これでですか」
「甘さが。これでは」
「これでは」
「心もとありません。ですから砂糖を入れているのです」
そういうことであった。だがこれはあくまで金の主観によるものである。
「十個程度」
「あの、内相」
八条が困惑したものをその整った顔に浮かべて金に声をかけてきた。
「御言葉ですがあまり甘いものを過剰に採られると」
「御安心下さい」
金はその言葉にはすぐに返事をしてきた。
「私は太らない体質ですし」
「そうですか」
「それに糖尿病にならないようにしていますので」
そちらにも考えを及ばせているのであった。流石は連合中央政府きっての才媛であると言えた。なお彼女の人気は男性よりも女性によるものが大きい。

## 第二十九部第四章　南部戦線の動きその十六

「そちらもですか」
「そうした健康的な砂糖にしています」
そうした砂糖もあるのだ。この時代は糖尿病も克服されているのだ。簡単に言うとカロリーゼロのコーラのようなものだ。この時代でもコーラはあるが。
「ですから御安心を」
「だったらよいのですが」
「甘いものは人類の友ですよ、長官」
その砂糖をふんだんに入れた紅茶を手ににこりと笑うのだった。
「昔から甘いものは御馳走であったではありませんか」
「それはそうですが」
「誰もが甘いものが好きなだけ食べられる」
金はまた言ってきた。
「それは非常に幸福なこと。言い換えれば」
「言い換えれば？」
「それを果たすことこそが政府の第一の務めです」
「誰もが甘いものをふんだんにですか」
なお連合ではそれはもう確立されていることである。
「そうです。まずは食べること」
「はい」
金のその言葉に合わせて頷く。
「それが大切ですね」
「これは何時でも何処でも変わりませんか」
「人は食べないと生きていけませんので」
現実を踏まえた言葉であった。生きているならば絶対に何かを食べなければ駄目だ。したがって政府の第一の仕事は国民を食べさせることなのだ。

「衣食住は必須ですね」
「そうです。それを確保できなければ政府ではありません」
八条もこれに同意する。
「しかしそれは最早連合では」
「はい、そうです」
既にそれは銀河進出時代に達成されている。かつては何億人も餓えに苦しんでいたがこの時代ではそれはない連合においては餓えはない。誰もが好きなだけ食べられる時代になっているのだ。それだけ人類社会が豊かになってきているのである。
それは既に千年前からで本来は言う必要がない。しかしここで話が出るのはそこに理由があるからであった。話す金にとって。
「そして甘いものは」
「人類の舌の友と仰るのですね」
「その通りです」
また笑みがにこりとしたものになる。
「食べることからさらに一段階上にあがり」
「甘いものをですか」
「誰もが食べられるのならばさらに上にあがるべきです」
また言った。
「甘いものをふんだんに食べられる。そうした社会であるべきです」
「そういえばですね」
八条は金の話を聞いているうちにあることを思い出した。
「かつては甘いものといえば」
「はい、食べられるのは限られた層だけでした」
金は言った。
「それこそ富豪か貴族か」
「そうした存在だけでしたね」
「教科書においてはここでエウロパ批判につながっていますね」
とにかく何でも貴族主義批判にもっていくのが連合の教科書なのだ。彼等はとかくエウロパの階級社会や貴族制度を否定する。それ

が彼等の大衆民衆主義との対立概念だからである。
「貴族だけが贅沢をしていたと」
「そして平民から搾取し」
共産主義めいた言葉だが彼等はこうした言語もエウロパ批判においては使う場合もあるのだ。とにかく何でも使うのである。
「好きなだけ食べていたと」
「かなり誇張もあるでしょうがね」
エウロパ側からすればとんでもない捏造になる話だ。
「まあそうは言われていますね」
「しかし今は」
ここで話がこの時代のことになる。
「誰もが好きなだけ食べられるようになりました」
「しかも自分の力で」
「そうです、それが大切なのです」
金はまた紅茶を飲んだ。
「このお茶にしろ。色々とありましたし」
「アヘン戦争ですね」
「全く。エウロパ貴族というものは悪辣なものです」
なお彼女もエウロパは嫌いである。好きな筈もない。連合にいるのならば。

## 第二十九部第四章　南部戦線の動きその十七

「まあ彼等の奪ったものは全て取り返しましたが」
「大英博物館ですね」
「はい。その結果あの博物館には碌なものが残っていないそうで」
「その時彼等は怒りに身体を震わせていたそうですが」
「滑稽ですね」
金はそんな彼等の怒りを一言でばっさりと切り捨てた。
「盗品を飾るだけでも信じられないというのにそれがなくなって怒るとは」
「そうなりますか」
「それに我々は代金は払いました」
一応は、である。この際盗品を取り返すのだから金なぞ払う必要はないと連合内部でも議論があったが結局は払ったのである。これは八条や金の意見を通ったのだ。
「それでとやかく言われることはありません」
「それはそうです。ところが彼等はあそこにあったものは自分のものだと思っていたそうで」
「千年前から手許にあったからですね」
「はい。千年ぶりに我々は取り戻したのです」
「その結果ですか」
大英博物館等にめぼしいものがなくなったのは。
「悔しかったら自分で作ればいいのですけれどね」
「少なくとも今は無理でしょう」
八条も一言で切り捨てた。
「あれだけのダメージを被っては」
「暫くエウロパはお菓子も食べられませんか」
「食べるものは何とかあるようですが」
話がそこに戻った。

「それもかなり苦しいようで」
「人は何かを食べているうちは幸せです」
紅茶をもう一杯入れる。そこにも砂糖をふんだんに入れるのであった。やはりここでも十個入れた。相当な甘さであることがすぐにわかる。
「特に甘いものは」
「その甘いものが苦しくなればまずなくなりますね」
「だからです」
金はまたその紅茶を飲みながら話す。
「政府は誰もが甘いものをふんだんに食べられるようにしなければならないのです」
「いや、ただ」
「ただ？」
「そこには問題があるかと」
八条はこう言葉を付け加えてきたのであった。
「問題ですか」
「そうです。政府は市民の健康も維持する義務があります」
中央政府は小さな政府が基本である。連合は小さな政府であるべしという考えが強い。これは連合各国の存在や様々な勢力の存在があり言われていることだがその結果として彼等は大きな政府というものを好まないのである。しかし最低限のことはしなければならず市民の健康に関してもそれに入るのである。
「ですからあまり過度には」
「甘いものは駄目だと」
「幾分かは自己責任ですが」
こうも言い加える。
「しかしそれでも健康を維持するべきですので」
「あまり甘いものはですか」
「そうです。糖尿病になります」
克服されたとはいえやはり糖尿病は存在している。完治するもの

になってはいてもやはり糖尿病になる者はこの時代でも多いのだ。
「ですから。あまりそうは」
「そうした甘いものを食べなければいいのでは？」
これは金個人の意見だ。
「果物なりを」
「いえ、果物も」
八条はここであらためて金の無類の甘党について考えねばならなかった。
「食べ過ぎればやはり」
「私は糖尿病にかかったことはないですが」
平気な顔でその砂糖をふんだんに入れた紅茶を口に入れながらの言葉だ。
「おかしいですね。そうしたものを食べなければいいだけでは」
「内相は食べておられませんか？」
「セーブしています」
あくまで彼女なりに、だ。
「そうした甘いものはそれ程食べないようにしています」
「そうなのですか」
「はい。例えばですね」
そうして言うのだ。
「マンゴーにしろパパイヤにしろ」
「熱帯系のフルーツですね」
「それだけで食べるのではなく他のものと一緒に食べてお茶等と一緒に食べれば」
「違うのですか」
「偏食もいけませんし」
その言葉には一応の理はあった。
「そうしたことに気をつけていればいいのですが」
「そうなのですか」
「どちらにしろですね」

ここからは彼女が絶対に譲れないことであった。

## 第二十九部第四章　南部戦線の動きその十八

「誰もが甘いものを食べられる」
「はい」
彼女はこれだけは引かない。
「それを果たしていなければなりませんね」
「政府ならば、ですか」
「そうです。果たしてサハラは」
そのうえでサハラにもまた言及する。
「今後それを為し得るかどうかですね」
「それはこれからにかかっています」
八条はまた言葉を冷静なものにさせた。そうして言うのだった。
「連合の様になれるでしょうか」
「この様に甘いものをふんだんに食べられるかどうかですね」
「はい。それはまだわかりませんが」
八条も金と同じ茶だが彼のそれは砂糖を入れてはいない。ストレートでそのままのお茶の甘さと香り、味を楽しんでいるのである。
「見せてもらうことにしましょう」
「わかりました。それではそのように」
またおかわりをする。また砂糖を入れる。
「そういえばサハラといえば」
「何か」
「かつては世界でもっとも豊かな料理を楽しんでいたそうですね」
「ええ、それは」
これについては八条も知っていた。
「かつてのアラビア帝国やオスマン＝トルコの時代ですね」
「そうです。その時代です」
金もそれは知っている。かつてサハラはアラブと呼ばれていた時代に繁栄を極めていた。その結果として豊かな料理を楽しめたのだ。

バグダットでの豊かな食生活はアラビアン＝ナイトにも書かれている。またオスマン＝トルコでは宮廷料理が花開いたのである。
「その時代の様になれるかも知れませんね」
「それも見せてもらいましょう。それでは」
「帰られるのですか」
「はい、有り難うございました」
この期に及んでも気付いてはいない。
「国防省に帰らせて頂きます」
「またいらして下さい」
控えめにこう声をかけるだけだった。
「お待ちしていますので。是非」
「わかりました」
わかりましたと答えるがやはり何もわかってはいない。
「それではまた」
「はい。それでは」
金は残念そうに言葉を返す。しかしそれ以上は言えずただ見送るだけであった。どうしてもそれ以上は言えない金であった。
国防省に帰ると早速仕事が待っていた。八条の机の上に書類が山となって積まれていた。すぐにそれの処理に取り掛かると暫くして部屋の扉をノックする音がしてきた。
「どうぞ」
「はい」
入って来たのはディカプリオだった。彼は敬礼するとすぐに八条の前に来たのであった。
「申し上げたいことがあって参りました」
「何かありましたか？」
「はい、オムダーマン軍が遂に動きました」
ディカプリオはこう八条に報告するのであった。
「北上を再開しました」
「そうですか。遂に」

八条はそれを聞いて静かに頷いた。
「動きだしましたか」
「はい。攻撃目標は言うまでもなくハサン軍の防衛陣地です」
これはもう言うまでもなかった。
「ただ。ハサン軍もかなり堅固な防衛陣地を何重にも築いていますので」
「その突破は楽ではないのですね」
「普通に見て非常に困難です」
ディカプリオはこう報告した。
「集まってきた情報を見る限りそう判断できます」
「参謀本部の分析はどうでしょうか」
「それも同じです」
彼はまた述べた。
「やはり非常に困難だとのことです」
「そうですか。やはり」
八条はそれを聞いてもまずは驚きはしなかった。冷静に話を聞いて受け止めるだけであった。

## 第二十九部第四章　南部戦線の動きその十九

「では突破を果たせてもオムダーマン軍の損害はかなりのものになりますね」
「情報部と参謀本部の予想では最初の防衛ラインを突破するだけで一割近い損害を出すとのことです」
「一割ですか」
八条はそれを聞いて考える目になった。一割と簡単に言うが戦いにおいてそれだけの損害を出すということはかなりのダメージである。しかもそれは最初の戦いに過ぎずまだ何度も戦いがあるということがオムダーマン軍にとって話を困難なものにさせていた。
「最初のそれで」
「しかもそれが何重にもありますので」
「オムダーマン軍の損害は途方もないものになりますね」
「最後には消滅の可能性も指摘されています」
「消滅ですか」
「そうです」
ディカプリオの言葉は厳しい。消滅とは九割以上の損害である。そこまで損害を出すという戦いも非常に少ない。五割以上の損害どころか三割を越えても全滅とされるのである。それを考えればとてもやれる戦いではない。オムダーマン軍にとってはそうであった。
「ですからオムダーマン軍の今回の攻撃は無謀だという指摘もあります」
「そうですか」
「我々の出した分析では彼等の勝利の可能性は殆どありません」
こうまで言う。
「ほぼ不可能です」
「それでは彼等はわざわざ負けに行くようなものですね」
「はい」

八条のその問いにはっきりと頷いた。
「戦力的に見た場合そうなります」
「わかりました。しかし」
だが八条はここでまた言った。
「問題は果たして分析通りになるかどうかですね」
「オムダーマン軍にとって解決方法は一つだけあります」
「それは一体」
「本来こうした防衛ラインは総攻撃を仕掛けるものですが」
「ええ」
「そこを一点集中攻撃に専念して突破すれば」
アッディーンの得意攻撃でもある。今までこうして多くの防衛ラインを突破してきている。連合軍の情報部も参謀本部もこれは知っている。
「その場合は損害はかなり軽微なものになります」
「では彼等はそれをしてきますね」
「おそらくは。ですが」
「ですが？」
「その場合ハサン軍も対策を講じてくるでしょう」
「防衛ラインを突破されたならば」
「その防衛ラインにある兵を次の防衛ラインまで後退させます」
そうして少しずつ下がりつつ戦っていくのだ。これは八条が金に語ったものだ。
「そのうえでやはりオムダーマン軍に消耗を強います」
「そうですね。やはりそれですか」
「はい。ですからオムダーマン軍にとって厄介なのは変わりないです」
彼はこう言う。
「それに一点突破にしろ」
「一点突破にしろ？」
話はそこにも向かう。

「まずハサン軍の防衛ラインはかなり堅固です」
「はい」
これも八条の知っていることであった。だからすぐに頷くことができた。
「それを一点集中攻撃とはいえ破れるオムダーマン軍の兵器はありません」
「そうなのですか」
「我々ならば別です」
連合軍に関しても言及される。
「我々は砲艦やミサイル艦もあります」
「ええ、それによる陣地攻撃も可能ですね」
「そうです。ところが」
ここでオムダーマン軍にとっての問題があった。
「彼等は元々艦隊戦用の兵器が主流でして」
「サハラ全体がそうですね」
「そうです。彼等の艦艇は機動力中心です」
これはエウロパ軍も同じだ。これに対して連合軍のそれは攻撃力と防御力、そして情報収集能力に重点を置いている。その結果速力や小回りはかなり劣っているが。
「火力はそれ程ではありませんので」
「ハサン軍の防衛陣地を突破するのに苦労しますか」
「そう思います。果たしてそれをどう解決するかですが」
「難しいですか」
「そう判断せざるを得ません。ですから損害は一割になります」
「だからこその一割」
ここでまたそれについて考える。
「彼等にとっては辛いですね」
「それが続きますので。どうするか」
「それも見せてもらいますか」
八条はそこまで聞いて静かに述べた。

「あのアッディーン提督がそれをどう解決するか」
「長官」
ディカプリオはそんな八条の声と顔を見てあることに気付いた。

## 第二十九部第四章　南部戦線の動きその二十

「まさかとは思いますが」
「何でしょうか」
「期待されていますか？」
そう彼に問うたのであった。
「オムダーマン軍の勝利を」
「むっ」
八条はディカプリオからこう言われると何ともいえない顔になった。核心を突かれてどうにもそれに対して言い返せない、そうした顔であった。
「まあそれは」
「ここからは少し職務を離れましょう」
ディカプリオは不意にこう言ってきた。
「それで宜しいでしょうか」
「職務をですか」
「はい。そのうえでお話しませんか」
彼の提案であった。
「それで如何でしょうか」
「国防長官としてではなく、ですか」
「私も情報部長としてではなく」
互いにこう言い合う。
「そうして話したいのですが」
「わかりました」
そして八条も彼のその申し出を受けるのであった。
「それでは。国防長官としての発言から離れますと」
「はい」
実際にその立場から話しはじめた。
「アッディーン副大統領の勝利を期待します」

「やはりそうですか」
「あの方の勝利はいつも鮮やかです」
「そうですね」
これはディカプリオも同意見であった。著しく劣勢であっても鮮やかに勝利を収めてみせる彼を賞賛する声は連合にも多い。八条もその一人なのだ。
「それを見たいものです」
「今回もですね」
「はい、そうなのです」
それが八条の希望であった。
「果たしてどういった勝利を収めるのか」
「それに期待されているのですね」
「部長はどうですか」
呼び方は普段と変わらない。慣れた呼び方なのでこうなっている。
「私ですか」
「はい。アッディーン副大統領についてはどう考えておられますか」
「私も今回期待しています」
それに関してはディカプリオも同じであった。やはり彼もアッディーンの勝利を期待しているのである。あくまで個人的な希望であるが。
「副大統領の勝利を」
「さて。どうなるでしょうか」
彼も言った。
「今回の戦いは」
「見物ですね」
まだ国防長官としての発言ではなかった。
「果たしてどうなるか」
「今までの様な鮮やかな勝利を見たいですね」
「その通りです。彼の戦いでとりわけ見事だったのは」
「どの戦いだったと思われますか？」

「最初ではないでしょうか」
八条はディカプリオのその言葉に答えた。
「最初といいますと」
「はい。彼が中佐であった頃です」
遠い昔の様に思われるが実際は違う。瞬く間に鮮やかな勝利を収め続けてきている彼はそれだけ昇進も早かったのだ。中佐であったのはこの前なのだ。
「あの巡洋艦の艦長であった頃ですが」
「あの頃ですか」
「はい。敗北寸前の軍にあってただ一隻で敵の正面に立ち」
それは連合軍の戦いではまず有り得ない。もっともこの様な戦いはサハラにおいても例がなくアッディーンがはじめて行ったことなのだ。
「そして勝利に導いたあの戦いです」
「あのですか」
「はい。そうです」
彼は答えた。
「あの戦い方は最初に聞いて驚きました」
「確かに。有り得ませんね」
ディカプリオも連合軍の軍人である。彼の常識では一隻で進撃する敵軍の正面に立つということは全くの想定の範囲外なのだ。考えもつかないことであるのだ。

## 第二十九部第四章　南部戦線の動きその二十一

「あの戦い方は」
「そうです。しかもそれでいて」
ここからは専門的な話になった。
「あれは常道でした」
「あの時敵軍は攻撃態勢に入っていませんでした」
「はい」
ただ進むことだけを考えていたのだ。攻撃態勢には入っていなかった。アッディーンもそれがわかっているからこそ彼等の前に立ったのだ。そうしてその彼等に攻撃を浴びせたのである。
「わかっているからこその行動ですね」
「ですがわかっていても」
ディカプリオはここでまた言う。
「そうそうできはしないことです」
「はい。僅か一隻で敵軍の前に立つことなぞ」
「相当な度胸が座っていなければできるものではありません」
「連合軍でそれをできる者はいません」
これは確信であった。連合軍においては元々そうした戦術はマニュアルの中にはない。まだまだ各国の軍の寄り合い所帯が実質でありまた訓練よりも規律への教育に重点を置く傾向にある為訓練度もそれ程ではない。だからマニュアル以外の行動は考えられないのだ。そもそも連合軍は集団戦術の軍隊であり尚且つ命を粗末にするなというのが教えだ。それで僅か一隻で敵軍の前に立つことなぞ想定の範囲ではないのだ。
「これは断言できますね」
「そうですね。絶対にないです」
八条だからこそそれに頷くことができた。その連合軍を作った彼だからこそ。

「何がどうあっても。若しその様な状況になれば」
「撤退ですね」
「はい。実際にオムダーマン軍はあの時撤退しようとしていましたし」
これが現実なのだ。
「それが普通でした」
「彼は普通ではありませんか」
「間違いなく」
そう言えた。連合軍の常識から見て。
「しかし普通でないからこそ」
「見てみたいですね」
「その通りです。今回はどうなるか」
それをまた言う。
「見ておきましょう」
「はい。さて、それに関する情報ですが」
「何か」
自然と国防長官と情報部長に戻っていた。そのうえで話を続ける。
「どうやらオムダーマン軍は何かを動かしているようです」
「何かをですか」
「はい。何だと思われますか」
「さて」
急に言われてもわかるものではない。この質問には八条も首を傾げる。
「申し訳ありませんがいきなり仰られても何のことか見当が」
「つきませんか。実はそれが何かはまだこちらにも情報が入っておりません」
「ですが何かが動いたのは事実ですね」
「そうです」
それだけはわかっていたのだ。
「それを引っ張って行っているようです」

「彼等の戦場に」
「やはりこれは防衛ラインへの対策かと思われます」
これは至極当然の分析結果であった。
「ハサン軍のその防衛ラインを突破する為の」
「ふむ。何なのでしょうか」
「わかりません。ただ」
ここまで話したうえでまた言う。
「これの成功如何でまたアッディーン副大統領は英雄となるでしょう」
「勝利と共に」
「はい、オムダーマンの勝利と栄光がまた彼の手に入ります」
あえてオムダーマンと言ってみせるディカプリオであった。
「それが何か。そしてそれを上手く使うことによって」
「防衛ラインを突破できる兵器となると」
「何だと思われますか」
「砲撃ですね」
まずは己の軍の得意攻撃を出してみせた。
「砲艦や戦艦による集中攻撃ですが」
「しかしそれはオムダーマン軍では力不足」
「そうです」
これは先程話した通りだ。オムダーマン軍の艦艇の火力は連合軍と比べると弱い。少なくともハサン軍の防衛ラインを突き崩すには射程も火力も足りないのである。

## 第二十九部第四章　南部戦線の動きその二十二

「それでは何か」
「要塞を持って来る？」
今度はクロノスの戦いにおいてエウロパ軍が使った戦術を話に出した。
「それならば」
「いえ、それはないでしょう」
しかし八条はそれはすぐに否定した。
「有効ですが不可能です」
「不可能ですか」
「はい。まず時間がありません」
最初に指摘したのはそこであった。
「オムダーマン軍は今から敵の防衛ラインに攻勢を仕掛けますね」
「はい」
八条のその言葉を肯定する。
「それならば余計にです。あの時エウロパ軍は守る側でした」
「しかも時間があった」
「そうです。クロノスまであのテューポーンを持って来る時間がありました」
その点も指摘する。
「ですがオムダーマン軍は今攻撃を仕掛ける側です」
「そうです。それで時間は」
「もうありません。ですからまずは時間的な理由が最初に来ます」
「最初に、ですか」
「次に」
八条の指摘はこれに終わらない。さらに続けるのであった。
「オムダーマン軍に要塞はあるでしょうか」
「要塞ですか」

「そう。防衛ラインを破壊できるような強大な要塞が。あるでしょうか」
「オムダーマン軍についても調べてみましたが」
これは情報部が行ったものである。連合軍は第一の敵である連合軍だけではなくサハラ各国の軍隊に関しても情報収集を怠ってはいない。オムダーマン軍だけではなくハサン軍やティムール軍に関してもだ。しかもそれは政府に至るまで及んでいる。軍を動かすのは政府であるという政治的認識に立って情報収集を行っているのである。これが連合軍の情報収集の特筆である。彼等は政治を見て動いているのである。
「オムダーマン軍自体にそうした要塞はありません」
「そうですね。むしろそういった要塞を攻略する側です」
「強いて言うならばそうですね」
「ええ」
オムダーマン軍とて守りがないわけではない。しかし急激に勢力圏を拡大した彼等はまだ充分な防衛施設を建設するには至っていないのだ。だからそれ程堅固な要塞はないのだ。これは連合軍も知っているのである。
「それもあります」
「そういうことを考えれば有り得ないです」
「オムダーマン軍があそこへ要塞を持って行くことは」
「はい。しかし」
ここで八条はまた言った。
「他のものならどうでしょうか」
「他のものですか」
「そう。それが何かが問題ですが」
八条はそのことを考えていた。しかしそれが何かまではわからないのだった。
「どちらにしろ今の戦力では防衛ラインの突破は困難です」
「そうです。だからこそプラスアルファが必要なのですが」

「それはアッディーン副大統領はわかっているでしょうか」
「おそらく」
八条もディカプリオもそれはわかっていた。
「ですが。彼の頭の中まではわかりませんので」
「はい。それが問題なのです」
幾ら彼等でもアッディーン本人ではない。だからその頭の中まではわからないのだ。何しろ本人ですらわからないことがあるのが思考というものだ。彼等がアッディーンの考えを全てはっきりとわかる筈がないのだ。そういうことであった。彼等もそれはわかっている。
「まあじっくり見ていけばわかりますね」
「ええ。それでは」
「今落ち着いて見ていることにしましょう」
そう言いながら八条はテレビをつける。リモコンのスイッチを入れるとテレビが着いた。立体テレビから出て来たのはあの男であった。
「俺は戦う！」
シャバキはテレビから飛び出て叫んでいた。人食い鮫が立体で飛び出てくるよりさらに心臓に悪い。少なくともいきなり見てあまり気分のいいものではない。
「何があろうとも？」
「今度は何があったんでしょうか」
「さて」
ディカプリオもそこまではわからない。連合軍は彼に対しては完全なノーマークなのである。彼をマークしているのは精神科医である。

## 第二十九部第四章　南部戦線の動きその二十三

「全く何が何だか」
「その訳がわからないのが彼ですが」
「今度は何に騒いでいるのでしょうかね」
二人は頭の中に疑問符を幾つも付けながらテレビを見ている。暫く見るとお決まりの発言を繰り返していることがおぼろげながらわかった。
「地獄がこの世に舞い降りる！」
「地獄がですか」
「見えないのか、御前は！」
「私の声が聞こえるでしょうか」
自分の言葉に応える形になったので八条は少し驚いた。
「まさかとは思いますが」
「違う！」
「違うのですね」
今度はわかって突っ込みを入れた。
「それで何を騒いでおられるのやら」
「炎が降り注ぐ」
シャバキは深刻な顔で叫んでいる。
「そ、そうだ」
「いきなりいつもの断言ですね」
「早いですね」
二人はそれを聞いて呟く。途中から彼を観たのでそう思えるのである。もっとも最初から観ても話がわからないのがシャバキという男であるが。
「わかったぞ！世界は破滅するんだ！」
「そうですよね」
「今度は何で破滅するんでしょうか」

「アンゴルモアから大王がやって来る！！」
「アンゴルモア！？」
「今度はお決まりの単語ですね」
シャバキの大好きな単語の一つだ。万能の言語でありこれを出せば大抵は話に辻褄が合う。彼の中だけのことであるが辻褄が合うのだ。
「今度のアンゴルモアは何でしょうか」
「確か以前は」
八条はシャバキの絶叫を聞きながら記憶を辿る。
「何とかいう宇宙人でしたね」
「リトルグレイでしょうか」
千年以上前からバラエティ番組に出ている宇宙人である。この宇宙人も実在するかどうかは一切不明の謎の存在ということになっている。
「リトルグレイを中央政府が匿っているんだ！」
「私達がですか」
「その中心は国防省だ！」
無茶苦茶な断言は続く。
「彼等が連合を！人類を売り飛ばそうとしているんだ！」
「そうでしたっけ」
少なくともその国防省のトップである八条にその記憶はない。そう考えたことは全くない。しかしシャバキの考えは全く違うのだった。
「記憶にないんですが」
「彼の頭の中の長官は違うようですね」
そういうことであった。
「見える！見えるぞ！」
今度は何かが取り憑いた。
「俺、参上！」
「何が参上だったんでしょうか」

「さて」
アンゴルモアの話は何処かに消えようとしている。シャバキは過去を振り返ることは決してないので話の辻褄はどうでもいいことなのだ。
「見えているんだ！八条長官は銀河の覇王になるつもりなんだ！」
「さっきリトルグレイと密約していたのでは？」
その覇王がテレビを観ながら呟く。
「何故その私が覇王になろうというのでしょうか」
「彼は一万人委員会を操り」
「一万人委員会をですか」
「彼等に命じている！人類総洗脳計画を！」
「成程」
本人はそれを聞いて納得することしきりであった。
「私はそこまで悪人だったのですか」
「今おわかりになられたのですね」
「はい」
そうディカプリオに答えた。
「恐ろしい悪人だったのですね」
「しかし。何故テレビで告発されているのに私は無事なのでしょう」
「さて」
すぐに答えがシャバキの言葉となって出て来た。

## 第二十九部第四章　南部戦線の動きその二十四

「彼は既に人類を洗脳しているんだ！悪魔の所業だ！」
「なっ、今度は悪魔ですか」
「長官もお忙しいことで」
「悪魔を許すな！粛清しろ！」
「物騒ですね」
悪魔も驚く発言だった。
「さもないと人類は破滅する！リトルグレイによって！」
「おや」
またあることに気付いた八条であった。
「リトルグレイ復活ですか」
「話が元に戻ったのでしょうか」
「魔王となった八条長官はリトルグレイと融合している！」
完全に話が架空小説になっている。
「最早彼は人であって人ではない！」
「ほう」
これまた八条本人にとっては今わかる衝撃の事実であった。
「魚屋に操られている！彼は傀儡だ！」
「いえ、貴方今さっき」
魚屋という訳のわからない単語も気になるがとりあえず彼は傀儡という言葉に注目するのだった。魔王だの融合だのと明らかに矛盾しているからだ。
「私が魔王だと」
「ノストラダムスの傀儡なんだ！一万人委員会に頭脳を洗脳されている！」
「私が彼等を操っているのではないのですか？」
「冥皇ハーデスが降臨し」
「今度はエウロパですか」

ハーデスはエウロパにおいては重要な神の一人である。エウロパのギリシア系の神々の世界は天界と海界、冥界の三つでありそれぞれゼウス、ポセイドン、ハーデスが治めている。ハーデスは冥界の王にして三大神の一人であるということなのだ。陰気な老人であったり黒い髪の美男子であったりする。その姿はまちまちだがどちらにしろ冥府の王であるということには変わりはない。一つの世界の主神なのである。
「八条長官は彼の庇護を受けこの連合を征服しようとしているんだ！」
「成程」
本人はそれを聞いて感心する。
「恐ろしい話ですね」
「全くです。僅かの間の話なのに矛盾が凄いことを除けば」
「それを何としても阻止しなければならない！」
シャバキはまた絶叫する。
「そうしてサハラから出る第七の獣を倒す！いいな！」
「サハラから、ですか」
またしても話が飛んでいた。
「次から次に話が動くのですね」
「はい。それでどうされますか？」
ディカプリオはまた問うてきた。
「どうされるかとは」
「まだこの番組を見続けますか。どうされますか」
「そうですね」
少し首を捻ってから答える。
「それもいいでしょうか。とりあえず今は観るものもありませんし」
「そうですか。それではこのままで」
「はい。このままで」
「世界は大きく破滅に向かおうとしている！」
シャバキの絶叫は続いていた。

「混沌の神々によって！」
「混沌の！？」
また話が変な方向いっていた。
「あのまつろわぬ。狂える神々だ！」
「今度は何でしょうか」
「狂ったアラビア人が書き残した！」
『只今放送中に見苦しい発言があったことをお詫びします』
ここで画面が一時中断された。今の狂ったアラビア人という発言がそれであった。言うまでもなく完全な問題発言である。シャバキの番組ではこれはしょっちゅうのことだ。
「言おう！俺は知ってしまった！」
「一万人委員会に宇宙人に人類滅亡の序曲にまだあるのですか」
知ってしまったことの多いシャバキであった。放送禁止用語を炸裂させてもまだ平気なのだった。なお今は完全に精神病院からの実況生中継なのだ。何を放送するか困ったテレビ局がとりあえず暇潰しに彼を実況生中継することにしたのだ。その結果が今なのだ。
「あの暗黒の破壊神が宇宙を破壊するのだ！」
「宇宙を」
また話のスケールが大きくなる。
「混沌と破壊！それが彼等の本質だ！」
「ひょっとして」
八条はそれを聞いてあることに気付いた。
「それは若しかするとあの小説でしょうか」
「アラビア人というから間違いないでしょう」
ディカプリオもそれはわかった。
「何か小説と現実の区別がつかないのですね」
「だろうと思っていましたが」
「それを食い止めるのだ！一人になっても俺は戦う！」
シャバキは一人で勝手に誓っていた。何はともあれ彼の絶叫は続くのであった。精神病院の隔離病棟の中で。孤独な戦いが続いてい

た。彼だけの。

# 第二十九部第五章　北上開始その一

北上開始

全人類が見守る中遂にアッディーン率いるオムダーマン軍の北上がはじまった。アッディーンの用兵らしくその動きは実に迅速なものであった。

「まずはだ」

シャイターンもそれは見ている。彼は今コムでの戦いを終えそこの拠点化と自分達の次の戦いへの準備を進めていたのであった。その中での言葉であった。

「その動きは我々の予想を越えるものになる」

「予想以上にですか」

「そうだ。彼の用兵は迅速だ」

アッディーンの戦術の特徴の一つとしてこれがある。彼の用兵は迅速であり常に周囲の予想を越える速さで進む。シャイターンはそこを指摘するのであった。

「だからだ。今回も」

「速いというのですね」

「その通りだ」

そう腹心であるハルシークに述べていた。今彼はコムにあった王家の宮殿に入りそこを己の仮住まいとしていた。今は屋外の庭で食事を採っているのだ。大きなテーブルをわざわざ持って来させてその上に白い絹のテーブルかけをかけさせている。後ろには護衛の六人の士官をいつもの様に控えさせそのうえで食事を採っている。三十品はあろうかという料理の中から選りすぐって食べている。ワインもある。シャイターンのいつもの豪勢な食事であった。彼は食べながらハルシークに話をしていたのである。

「もっともそれはハサン軍も読んでいるだろうがな」

「その読みよりも上だと」

「そう。そして」
彼はまた言う。銀のフォークとナイフを操りながら。七面鳥の丸煮であった。胡椒を中心とした様々なスパイスで味付けをしている。
「まずはそれでハサン軍の意表を衝くだろう」
「まずは、ですか」
ハルシークはここから主がさらに言うことに気付いた。
「それからは」
「それからは攻撃だ。そこでも面白いことをするだろう」
「面白いことといいますと」
「一つ聞く」
シャイターンはここでハルシークに問うた。フォークに突き刺した七面鳥の肉を口の中に入れて噛む。鶏に似ているがより濃厚な味を楽しみながら彼に言葉をかけていた。
「オムダーマン軍の艦艇の火力はどうだ」
「オムダーマン軍のですか」
「そうだ。その火力はハサン軍の防衛ラインを突き崩せるものかどうかだ」
「結論から述べて宜しいでしょうか」
ハルシークは答える前にこう前置きしてきた。
「うむ」
「それでは」
シャイターンがそれを認めるとハルシークはそれを受けて話をはじめた。それは大方の予想通りのオーソドックスな返事であった。
「無理です」
「無理か」
「はい。これが連合軍のものならばわかりません」
ハルシークは言う。
「連合軍の艦艇の火力は相当なものです。しかも射程はかなりのものです」
「そうだな」

連合軍の戦いを研究してのことである。だからこそシャイターンも今のハルシークの言葉に頷くことができたのだ。そういうことなのだ。
「しかも攻撃力も備えており」
「その火力ならばハサン軍の防衛ラインも突破できるな」
「そうだ。連合軍ならば」
シャイターンはまた言った。
「それが可能だ。エウロパ軍の陣地もこれにより突破され続けた」
「あの巨大戦艦と砲艦がとりわけ大きな存在です」
「それにミサイル艦とな」
「はい」
連合軍の攻撃においてこの三種類の艦艇はただ敵艦隊を攻撃するだけではないのである。敵の要塞や陣地を攻撃することも考えられているのだ。その証拠にテューポーンはティアマト級巨大戦艦の攻撃により陥落している。それも考えての攻撃を設計したのだ。
「連合軍はそうです」
「しかしオムダーマン軍は」
「それだけの火力はない」
そういうことであった。彼等の見方は八条達と同じであった。
「それが大きな問題だな」
「そうです。彼等の主体は艦艇への攻撃です」
「我々もな」
「その通りです」
サハラでの戦術は艦隊同士の戦いが多い。だから必然的に機動力を中心に考えられその火力も敵艦に向けたものになる。砲艦やミサイル艦もあるが数も火力も連合軍のそれ程多くも強くもないのだ。連合軍の戦術が斬新と言えば斬新になる。これも八条の考えことであるが。

## 第二十九部第五章　北上開始その二

「ですから彼等はハサン軍の防衛ラインを突破することは困難です」
「突破はできるだろうがな」
「少なくとも最初のそれはですね」
「そうだ。だが」
シャイターンはまた言う。
「それは大きな損害を出してのことになるだろうな」
「おそらく戦力の一割はなくすでしょう」
ハルシークの分析は奇しくも八条やディカプリオと同じ分析結果であった。緻密に分析していけば結論は必然的に同じものになるということだろうか。
「その一割の損害が突破の度に続きます」
「戦力が減れば犠牲はその分増える」
「ええ」
多くの兵で攻めればそれだけ軍全体への負担が減る。それは結果として軍全体の損害を減らすということになる。そういうことなのだ。
「ですから」
「オムダーマン軍にとっては損害を出すわけにもいかないのだ」
「その通りです」
ワインを飲むシャイターンに対して答えた。その赤い味が口の中を支配している。
「その為の切り札が必要だと思われます」
「それだ」
シャイターンもそこを指摘する。
「その為にも彼等には切り札が必要なのだ」
「それがあるかどうかですね」
「なければ作るしかない」

シャイターンのここでの言葉には冷徹な響きがあった。また彼もその冷徹さを隠そうともしない。あえて見せている感じであった。
「彼等自身でな」
「なければ、ですか」
「だがそれはあるのだ」
シャイターンは今度はこう述べた。
「あるのですか」
「そうだ。問題は彼等がそれに気付くかどうかなのだが」
「あるということすらわかりませんが」
それはハルシークにすらわからないことだった。ティムール軍においてシャイターンの腹心の一人であり軍きっての切れ者である彼にすらわからないことであった。
「しかしあるのならば」
「そうだ。必ずそれを切る」
シャイターンは言う。
「彼はそれにより勝利を掴むだろう」
パンを食べた。彼が好むエウロパ風の柔らかいパンだ。それをワインで流し込みながら話をする。ワインとパンの味もまた口の中で混ざり合っている。
「必ずな」
「それはハサン軍の気付いていることでしょうか」
「気付いてはいないな」
シャイターンはハサン軍に対しては冷たい目で見ていた。
「間違いなくな。何故なら」
「何故なら？」
「彼等はあくまで正攻法にこだわる」
彼はそこを指摘するのであった。
「これは軍の実質的な最高司令官である太子がそうだからな」
「あの太子がですか」
彼等もハサン軍の実質的な司令官が太子であることを知っている。

ハサン軍は王制であり最高司令官は国王なのだが実質的な司令官は彼になっているのである。その太子のタイプもまた把握しているのであった。その傾向を把握して読むこともしているのだ。
「そうだ。あの太子は正攻法しかない」
シャイターンは言った。
「優秀だがな。奇策やそういったものを知らないな」
「だからこそオムダーマン軍のそれには気付かないのですね」
「そうだ。もっともアッディーン副大統領が何をするか」
彼はまた言った。
「わかるのは私だけだ」
「閣下だけですか」
「そうだ。獅子を知ることができるのは獅子だけだ」
獅子を話に出した。獅子はサハラでは最も尊ばれている獣である。他には狼もそうである。なおこれは連合においては様々な獣になるのだ。
「その獅子が見るのだ。彼はわかっている」
「わかっていて。そして」
「動いている」
こうも言ってみせた。

## 第二十九部第五章　北上開始その三

「既にな」
「その何かをもう持って来ているのですか」
「オムダーマン軍についての細かい情報はあるか」
シャイターンはまたハルシークに対して問うた。
「今の彼等の内情だ」
「彼等のですか」
「そうだ。それはわかるか」
今聞きたいのはそれなのであった。だがシャイターンは知りたいという顔ではなかった。己のわかっていることを確かめたい、そんな顔であった。
その顔で問うていた。ハルシークに対して。
「かなり困難だと思われますか」
「やはりそうか」
「残念ながら」
まずはこう答えるのだった。
「ハサンにはそれこそ宮廷内にまで密偵を送り込んでいます」
「そうだな」
情報収集にかけてはシャイターンは卓越したものを持っている。手段を選ばないきらいもあるがそれは見事なもので工作員を送り込むなり買収してこちら側に抱き込むなりして情報を収集しているのである。他にはハッキングも駆使している。それが彼の情報収集の方法なのだ。一見卑劣に見えるが情報収集はそうしたものだ。だから至極当然のことを彼もしているだけなのである。だが彼はそこに他者よりも謀略を入れているだけである。
「しかしオムダーマンに対しては」
「そこまでは達していないのだな」
「まだそちらに力を入れていないこともありますが」

まずティムールはハサンに対する工作を集中させたのだ。当面の相手に対して。しかしそれとは別にオムダーマンに工作を仕掛ける必要もあった。だがそちらにはまだ神経を集中させていないのだ。しきれいないのだった。力は分散させてはならないのだから。
「ですから今は」
「そうか。これからか」
「またこれからも工作員を送り込むことは容易ではありません」
ハルシークの言葉はシャイターンに対しては思わしくないものであった。しかしそれでもあえて表情を変えたりはしない。感情を出さずに話を聞いていた。
「決して」
「そこまで難しいのか」
「はい。まず工作員を送り込むことですが」
まずはそこであった。
「身元調査もそれからのチェックもオムダーマンは厳しく」
「政府自体がか」
「はい。西方と南方の出身者であっても厳しくチェックされます」
これは実はオムダーマンの伝統である。政治家や官僚の身元に関しては厳重にチェックして検証するのだ。それがかなり厳しいのだ。
「ですから北方や東方出身者は」
「身分を偽ってもか」
「そこもまたかなり厳しく調べられます」
あくまで厳重なのであった。
「とりわけ軍は」
「そうか。では買収は」
「それもかなり困難です」
そちらも否定されたのであった。
「オムダーマンの官僚も政治家もかなり清潔でして」
「そこまでか」
「はい、他の国に比してもかなりのものです」

こうまで言うのであった。実際にオムダーマンの政治家や官僚、軍人はかなり清潔である。これはマスコミの目がかなり厳しいからである。
「ですからそちらも期待できません」
「政府関係は駄目か」
「全くです。若し買収できたとしても僅かな人間でしかもその情報が入るのは一時的でしょう」
これはハルシークの分析であった。
「ですからそちらは」
「それではだ」
シャイターンは考える目になった。そのうえで今度はこう言ってきた。
「政府関係は諦める」
「政府を」
「そうだ。困難ならば矛先を変える」
冷静な調子で述べてきた。
「政府でなくともよい。今度工作を仕掛けるのは」
「何処にされますか？」
「マスコミだ」
彼は言った。
「第四の権力を狙うぞ」
「彼等をですか」
「三つの権力に入り込むことが無理ならば他の権力に入るだけだ」
それが彼の考えであった。シャイターンもマスコミの重要性はわかっている。インターネットによりその力がかなり弱められたといってもその力はまだあるのだ。彼はそこを狙うというのである。

## 第二十九部第五章　北上開始その四

「そうだ。マスコミはどうだ」
「オムダーマンのですね」
「何かと今なら交流という名目で入られる筈だ」
彼はさらに言葉を続ける。
「だからだ。買収も容易ではないのか？」
「そうですね」
ハルシークはシャイターンのその言葉をまずは否定しなかった。そのかわりに考える顔になる。探る類の考える顔になっていた。
「マスコミは腐敗し易い組織です」
「そうだ」
これは何時の時代もどの世界でも変わりはしない。社会の木鐸と自称するがその実は情報を集めそれを独占し好きなように流せる。そのうえで他者を監視できる。自分達へのチャックはしなくてもよい。これで腐敗しない筈がないのだ。インターネットがあってもそれでもマスコミの腐敗は健在であったのだ。もっとも二十世紀後半から二十一世紀前半の日本の様な腐敗はそうそうはないことであったが。サラーフは置いておいて。
「それでは彼等を狙いますか」
「金も女も使ってな」
つまりあらゆる手段を使うということであった。
「仕掛ける。わかったな」
「マスコミにですか」
「その国家においてだ」
ここからはシャイターン独自の哲学であった。その哲学はかなり独特なものでありそれと共に悪魔的でさえあるものであった。それもまたシャイターンらしいものであった。
「腐敗していない場所なぞない」

「ないと」
「そうだ。しかもだ」
「しかも」
「閉鎖的ならば尚更な」
「マスコミが閉鎖的だと」
「あの世界を閉鎖的と言わずして何と言うのか」
こうも言う。どうも彼はマスコミがあまり好きではないようだ。そのこともよくわかる言葉であった。少なくとも冷淡であることは窺い知ることができる。
「違うか」
「確かに人数自体はあまり多くはありません」
これもまたマスコミの特色である。マスコミはその強大な力に比してその構成員は少ないのだ。大新聞社が実際は千人に満たない社員しかいないということもざらだ。
「そこも狙い目なのだ」
「人が少ないこともですか」
「それだけ買収に都合がいい」
また買収について言う。
「人が少なければそれだけ買収に使う額が減る」
「はい」
これは事実だった。買収するにしろその額が多いとそのコストが高くなってしまう。そういうことであった。買収もまた的確に、コストに見合うだけのものがなければ駄目なのだ。
「かえって都合がいい」
「都合がですか」
「そうだ。だからマスコミへの買収はかえって上手くいき易いのだ」
「しかも」
「腐敗し易いと」
「その通り。さて、オムダーマンのマスコミは」
彼は今度はオムダーマンのマスコミについてまた言及した。

「誰が最も腐敗しているのかだな」
「それを調べることも容易なようですね」
「少なくとも難しくはない」
彼はこう答えた。
「人が少ないだけにな。それに」
「それに？」
「弱みに付け込むのだな」
ワインを一口また飲んだ。それから述べたが口元が赤く濡れている。その口での言葉だが何故かこれまでより邪悪な響きが感じられた。
「弱みにですか」
「そうだ。誰かが困っていればそこに付け入る」
笑みも浮かべたがそれもやはり悪魔的なものであった。
「金に困っている。家庭に悩みを抱えている」
「そういった相手を探して」
「抱き込む。抱き込めなければ」
「どうされますか」
「巻き込むのだ」
こうまで言う。
「巻き込んでそうして我々の手の者にするのだ。いいな」
「はい。それではすぐに」
「あの男を送り込むのだな」
ここで彼はカードを切ってきた。一枚のキングのカードを。
「まずはな」
「わかりました。それではあの男を」
「そうだ。わかったな」
「はい」
その言葉に頷く。

## 第二十九部第五章　北上開始その五

「すぐに彼を送り込みましょう」
「そうだ。ハサンの方はもう充分だな」
「そうですね」
ハルシークは考える顔になっていた。それは作戦参謀としての彼の顔ではなくまた別の一面の顔、強いて言うならば謀略を使う男の者の顔となっていた。
「既に工作は完全に成功したと言っていいです」
「ではだ。引き揚げさせるのだ」
「わかりました。それでは」
「オムダーマンが生き残れば」
シャイターンはまた言う。
「やがてな。私と」
「閣下、そこから先は」
「うむ」
不敵に笑って言葉を止めるのだった。
「言う必要はなかったな。では止めておこう」
「うむ、それではな。止めるとしよう」
「はい。それで閣下」
シャイターンに対してさらに述べる。
「今後の我が軍のことですが」
「コムの基地化はもう終わっているな」
「はい、今日終わりました」
こうシャイターンに対して報告する。
「それを報告に来たのですが」
「そうだったのか」
「申し遅れてすいません」
「謝る必要はない」

それはよしとした。
「そうか。遂に終わったか」
「ではすぐにでも」
「アヤグーズ軍はどうしているか」
次に彼はアヤグーズ軍について尋ねた。
「彼等は今どうしているか」
「首都防衛の準備に取り掛かっています」
ハルシークはそれについても言及したのだった。
「かなりの数のアヤグーズ軍及びハサン軍を中心とした連合軍が集結しております。コムでの敗戦を思わせないだけの数の軍が」
「数はか」
「あの撤退戦を見事に終えられたのが彼等の損害を抑えています」
こうもシャイターンに対して述べた。
「やはりそれだけのものがあります」
「あの撤退戦は見事だったな」
「確かに」
あの時のバンダル、ギーヴ等が指揮した撤退戦は確かにシャイターンの目から見ても見事なものであった。それによりティムール軍は最後の詰めを打つことができなかった。またそれは言い換えるならばアヤグーズ軍にとっては何とか敗戦のダメージを最低限に抑えられたということである。
「あれにより彼等は首都での最終決戦を我々に挑むことができるのですから」
「王都アッサルーム」
シャイターンはアヤグーズの首都の正式名称を口にした。
「そこでの最後の戦いか」
「少なくともその近辺での戦いです」
「そうだな。実によきこと」
不敵な笑みをまた浮かべての言葉であった。
「一つの国が滅ぶ場所は」

「そこは」
「その首都であることが最も相応しいのだ」
笑みが変わった。冷徹なものに。
「華々しく、そして華麗に滅ぶ」
「華麗に」
「軍人として最も美しい仕事がある」
シャイターンは軍人として語る。ワインをたたえたグラスを右手に持ちそれに目を向けている。赤い軍服の上に羽織った白いマントが見映えている。
「それは何でしょうか」
「演出だ」
彼はそれを演出であるとまず述べてみせた。
「演出！？」
「そうだ。相手の滅びの時を演出するのだ」
彼が言う演出とはそれであった。それを今ハルシークに述べるのであった。
「華麗な滅びをな。その強さと栄華に相応しい最期の時をだ」
「ではアヤグーズもまた」
「アヤグーズだけではない」
その冷徹な笑みがワインにも映っていた。白い顔が赤く見えている。まるでそれはシャイターンであるがシャイターンではない。もう一人の彼であるかのように。

## 第二十九部第五章　北上開始その六

「これから私と戦う全ての相手がそうなのだ」
「全てがですか」
「私がその手の中に収めるのはサハラだけではない」
彼もまたサハラ統一という野心をその心に抱いている。
「それまでの相手の最期もまたその手の中に収める」
「その滅びの時もまた」
「そうだ。全ては私の手の中にある」
その目は今の彼の手にあるグラスに注がれ続けている。
「全てがな」
「それではオムダーマンもまた」
「そうだ。サハラにあるものは全て」
それをまた言ってみせた。
「私の中にあるべきなのだ」
「畏まりました。それでは」
ハルシークは恭しく一礼してまた述べた。
「我々はそのように」
「それでだ」
ここでシャイターンは笑みに戻った。しかしその笑みはそれまでのものとは違い落ち着きと余裕を漂わせた、そうした笑みになっていたのだった。
「この宮殿だが」
「はい」
話がそこに移った。
「といっても貴官ではこれはわかりにくいな」
「申し訳ありません」
シャイターンのその言葉に頷く。彼は軍人であり政治家ではない。官僚と言えば軍人もまた官僚であるが今シャイターンが求めている

ことに答えられる官僚ではなかった。
「では場所を変えるとしよう」
ここでシャイターンは食事を終えることにしたのであった。
「さて。残ったものだが」
「どうされますか」
「いつものようにしておくのだ」
「わかりました」
シャイターンはいつも豪奢な数十品のうち数品しか食べはしない。残ったものは全て使用人達が食べるのである。サハラにおいてはこうした行動が普通なのだ。
「それではそのように」
「では彼等を呼んでくれ。私は」
「何処に行かれますか？」
彼が問うたのはそこであった。
「部屋は。そうだな」
彼としてはそれ程重要な話ではない。だが個人的な話である。それを考えれば場所を考える必要があった。そうして選んだその部屋は。
「よし。王の間に向かう」
「王の間ですか」
「そうだ。そこで言葉を伝える」
王の間にすることにした。やはりその顔には余裕が見える。
「それでいいな」
「わかりました。それではそちらに」
話が決まった。ハルシークはその言葉を受けてまた恭しく一礼するのであった。シャイターンはそれを見届けてから悠然と立ち上がるのだった。
「さて、それでは」
「はい。どうぞごゆるりと」
「そうさせてもらう。ではな」

「はい」
シャイターンは部屋を後にした。王の間に入ると暫くして数人のスーツの官僚達が入って来た。彼等は頭を垂れて文民としての礼をしてから彼に応えるのであった。
「主席、御呼びでしょうか」
「うむ」
官僚の中でも主席と思われる最も年輩の男の言葉に応えた。
「呼んだ理由は他でもない。この宮殿のことだが」
「如何為されますか」
「私の好みに合わせてくれ」
そう言い伝えるのであった。
「わかったな」
「はい、それでは」
官僚達は彼の言葉に頷くのであった。
「その様に致します」
「すぐに」
「またここに立ち寄ることになる」
シャイターンはこうも彼等に告げた。
「それではな。その時までに」
「畏まりました」
「それでは」
「頼むぞ。それにしてもだ」
シャイターンは玉座に座っていた。その玉座も部屋自体も見ながらつまらなさそうに話すのだった。その目も実に冷めたものになっている。

## 第二十九部第五章　北上開始その七

「面白みがない部屋だな」
「そうでしょうか」
その年輩の官僚は彼の言葉に異議を申し立ててきた。
「確かに主席の趣味ではありません」
「そうだ」
シャイターンもそれは認める。
「ですが。この宮殿には見るべきものも多いと思われますが」
「そうか」
「はい。ですから」
彼は言うのだった。
「この宮殿はそのままにしておいてもよいかと」
「つまり無下に壊したり作り変えたりすることは止めておくべきだというのだな」
「率直に申し上げるとそうです」
素直に言ってきた。
「ですからここは取り壊さずに新しい離宮を造るべきだと思いますが」
「それではだ」
それを聞いてからまた述べる。
「この離宮はどうするのだ？」
「国民達に開放すればどうでしょうか」
彼の提案はこうであった。
「取り壊す必要もありませんしそれならば」
「ふむ。国民達にか」
「この離宮は王家のものでした」
そこを強調してきた。それにこそ問題があると言っているのだ。
「ですからそれを国民に対して開放するということは」

「私の度量を見せることにもなるな」
「そうです。ですから」
話はそこまで踏み込んだものであったのだ。ただこの離宮を守るというだけではなかったのだ。彼もまた官僚でありそこまで読んでいての上申であったのだ。
「それで如何でしょうか」
「新たな離宮を造る費用はあるのだな」
「既に」
静かに答えてきた。
「それは用意してあります」
「そうか。ならばよい」
シャイターンは建築を好む傾向にある。しかしこの時代においてはどれだけ建築に熱を入れてもたかが知れているレベルになっている。かつては権力者の病として恐れられ国庫を空にし国を滅亡に追い込むものとして忌み嫌われていた建築病だがこの時代はそうではなくなっていた。とはいってもこれはサハラにだけ見られるもので民主主義国家である連合やエウロパ、マウリアには見られないものではある。
「では。そうするようにな」
「わかりました。それでは」
「どちらにしろまたここに来るだろう」
シャイターンはそれをまた告げてきた。
「それは憶えておくようにな」
「はい、それでは」
「あと数日すればここを経つ」
これも伝えた。
「それではな」
ここまで言うと彼は官僚達を下がらせた。その顔は満足したものであった。
「さて」

後ろには相変わらず六人の将校達が控えている。彼等に対しても静かに声をかけた。
「休むぞ」
彼等は言葉を発することなく同時にシャイターンの言葉に頷いた。まるで彼の影であるかの様に。影が六つに見えるかのようであった。
数日後彼は出撃した。そのままアヤグーズとの戦いに向かう。彼もまた戦い続けていたのだ。己の野望の為に。その黒い目を赤く輝かせていたのであった。
その頃ハサン軍南方方面軍は護りを固めていた。彼等には絶対の自信があった。
「さて、オムダーマンの奴等は来るかな」
「逃げてもおかしくはないよな」
パトロールをするパトロール艦の中で兵士達がＣＩＣの中で話をしていた。
「この護りを見ればな」
「ああ。俺達だって馬鹿じゃない」
彼等は自信に満ちた顔で言う。
「そうそういつも負けていられるか」
「ああ。だからな」
彼等の乗り込んでいるパトロール艦の周りの惑星もアステロイドも衛星も全てが堅固な護りに覆われていた。機雷源も施設されている。彼等はそれを知っているからこそ話をするのであった。
「これだけのことをやったんだ」
「例えここを破られても」
彼等はさらに話をする。

## 第二十九部第五章　北上開始その八

「俺達には次がある」
「その次もな」
多重に敷かれた防衛ラインのことは彼等も知っているのだ。だからこそ満足していたのだ。
「何度でも護れるからな」
「オムダーマン軍だってそうそうは敗れないぜ」
「一度や二度じゃないしな」
「それが大きいよな」
やはり多重の護りであるというのが彼等にとって精神的に大きかったのだ。
「やっぱりな」
「ああ。さて、オムダーマンの奴等はどう出るかな」
「飛んで火に入る夏の虫さ」
昔からよく使われる諺が出て来た。連合においてだけでなくマウリアでもこのサハラでも非常によく使われてきている諺の一つなのだ。
「さあ来いよ」
「是非共な」
彼等が来ることを期待して待ってさえいた。
「今度こそ打ち負かしてやるからな」
「これまでの鬱憤も晴らさせてもらうぜ」
彼等はそう話をしていた。兵士達は勝利を確信していた。そしてそれは指揮官達も同じだった。彼等は防衛ラインに置かれた司令部において話をしていた。
「それでオムダーマン軍はどうだ」
「あと四日程度で来るかと」
第一次防衛ラインの防衛司令官であるハッサーム大将が司令室に

己の幕僚達を集めて話をしていた。席に座る彼達の前に数人の幕僚達が立っている。
「四日か」
「はい」
幕僚の一人であるアルコルド少将が彼に答えた。彼等は今の防衛態勢に安心しきっていた。
「そうか。四日の間にさらに護りを固めることができるな」
「さあに機雷を撒きましょう」
こう提案するのだった。
「そうすればより堅固になります」
「コロニーレーザーはどうか」
「それも既に」
アルコルドはそれにも答えた。
「可能な限りの数を配備しております」
「そうか。可能な限りだな」
「そうです。どれだけ来ても」
アルコルドの自信に満ちた言葉は続く。
「出血を強いることができます」
「わかっていると思うが」
ハッサームはここでまた言うのだった。
「何もここで防ぎ止める必要はないのだからな」
「そうです」
アルコルドはハッサームのその言葉に頷いた。それは他の幕僚達も同じであった。
「要は敵の戦力を減らしていけばいいのです」
「その通りだ。減らしていくのだ」
ハッサームはまたそれを言う。
「少しずつな。我々には機雷やコロニーレーザーの他にも守りがある」
「ミサイル砲座も防衛惑星も」

「ふんだんにある。それで敵の数を減らす」
彼等もハサン軍のその戦略がわかっていた。それを確かめ合う意味でも今はこうして話しているのだ。その話をさらに続けるのであった。
「危なくなったら下がる」
「後方のカラクーム要塞に」
第二次防衛ラインである。その後ろにも幾重もの防衛ラインを置いているのである。
「そうしてオムダーマン軍を減らしていきましょう」
「そうだ。だからこそな」
ハッサームはまた言う。
「ここでそれを少しでも果たす為に」
「守りをさらに固めていきましょう」
「そうだ。四日あればさらにもう一段階その守りを強くすることができる」
それが彼等の計算であった。
「護りの充実を進めろ。いいな」
「わかりました。それでは」
彼等はそう話していた。しかし彼等は緊張してはいなかった。むしろ余裕ですらある。その余裕で以って戦局を見ていた。具体的には四日あると思っていたのであった。しかしそれは大きな間違いであった。
二日後。彼等は目の前に信じられないものを見たのであった。
「馬鹿な、もうか」
「は、はい」
アルコルドが二日前と同じく司令室でハッサームと話をしていた。しかし今度は部屋の中にいるのは二人だけでありしかもそこにいる彼等の顔は強張ったものであった。
「オムダーマン軍が来ています」
「信じられん」

ハッサームはその強張った顔で呟いた。
「これだけの速さで進撃してくるとは」
「司令」
アルコルドはあらためてハッサームに対して言う。

## 第二十九部第五章　北上開始その九

「防衛施設の強化は間に合いません」
「致し方ない」
彼もそれは諦めた。そう判断を下すしかなかった。
「それは中止せよ。直ちに総員戦闘配置につけ」
「わかりました」
ハッサームのその決定に従って頷くのだった。
「それではそのように」
「それでオムダーマン軍はどう展開しているか」
「まだ我が軍の前に姿を現わしただけです」
アルコルドの報告はハッサームにとってはまずは安心すべきものであった。
「そうか。まずはそれは助かったな」
「そうかと。ですが」
「今言った通りだ。総員戦闘配置につけ」
「はっ」
これは変えようがない。目の前に敵がいてこの指示を出さない愚か者もいない。
「わかったな」
「はい、それではすぐに」
「目標は一割だ」
ハッサームはここで数値としての目標を提示してみせた。
「敵の数を一割減らせればそれでよしだ」
「そうですね。そしてどちらにしろ」
ここからの方針も既に軍の上層部で決められていることであった。それをあえて言う。
「この要塞が危うくなれば下がりましょう」
「そうだ。後ろにな」

「思えば楽な話です」
彼等の話は奇しくも自軍の兵士達のそれと同じものになっていた。
「敵を止めるのでなく減らしていけばいいのですから」
「そうだ。とにかく減らすことを考えるのだ」
こう考えれば実に楽であった。敵を完全に止めるのならば絶対にそうしなければならないとの強迫観念が生じるが減らせばいいだけではそうはならない。心理的にかなり楽になる。そういうことであった。こうした心理的に負担をかけさせないのもハサン軍上層部のこの戦線での戦略であった。
「それで行く。いいな」
「はい。それでは」
こうして彼等は配置についた。彼等は勝利を確信していた。だがそれはオムダーマン軍も同じだった。敵の予想よりも早く前線に姿を現わしてみせたアッディーンはその前においてこれからの攻撃について居並ぶ提督達を集めて話をするのであった。
「さて」
彼等はアリーの会議室に集まっていた。円卓に座りそこでアッディーンの話を聞くのであった。
「まずは迅速に敵の前まで来ることができた」
「はい」
「しかしそれははじまりに過ぎない」
こう前置きしてきた。
「問題はこれからなのだ」
「それでは司令」
カーシャーンがアッディーンに対して言ってきた。最初に口を開いたのは彼であった。
「このまま攻めますか」
「そうだ。あれを使う」
アッディーンはここで『あれ』と言うのだった。
「あれをな。それでいいな」

「はい、それでは」
「ここまで持って来ただけではないのだからな」
こうも言う。
「使わなければ意味がない」
「そして同時に」
次に口を開いたのはアルマザールであった。
「使わなければ勝利はおぼつきませんな」
「そういうことだ。勝利を手に入れる為に持って来たものだ」
アッディーンは今度はアルマザールに応えて言うのであった。
「だからこそ使わせてもらう。いいな」
「はい、それでは」
アルマザールもそれに頷くのだった。
「そのように」
「持って来るのはいささか骨が折れましたが」
カトラナの顔が苦笑いになっていた。
「まさかあれを艦隊と一緒に動かすとは思いませんでした」
「確かにな」
アッディーンもそれは否定しなかった。さもあらん、といった肯定の顔をそこに見せている。
「普通は誰も考え付かない。しかし」
「しかし？」
「時としてな。思いつくこともあろう」
「それが今回だったというのですね」
「私もどうしたものかと考えていた」
ハサンの防衛ラインをどのようにして突破するかということをだ。彼もまた悩んでいたのだ。しかしそれを見つけることができるかどうかで大きく変わるのだ。

## 第二十九部第五章　北上開始その十

「しかしそれにより」
マトラが言った。
「曳く艦艇の苦労は並々ならぬものがありました」
「そうだな」
ここで曳くという言葉が出た。少なくともそれは進撃時には見られない言葉だ。だがアッディーンはここでそれをあえて聞くのであった。
「しかもこの速度でな」
「それを為しえただけでも奇跡です」
「ですがその分」
今度口を開いたのはムーアであった。
「補給艦や工作艦は後ろに置いてきたままです」
「そうです」
この点をニアメも指摘する。
「今我々は補給において重大な欠点を持っています」
「それもわかっている」
それを承知の上での進撃であったのだから当然だった。アッディーンの表情は変わらずそれを言う。だがそこで彼はまた言うのであった。
「しかしだ」
「しかし？」
「補給はまずは当初の目的を達する分はある」
「確かに」
それだけの計算は既にしている。そういうことであった。
「だからだ。それは安心していい」
「それでは閣下」
作戦参謀であるシンダントが問う。

「今回は予定通り防衛ラインの突破後は」
「そうだ。撤退する敵を捉える」
これも既に決定済みであった。少なくとも彼はそうして今回の作戦を成功させるつもりであったのだ。その計算もしていたのである。
「それは既に述べてあるな」
「はい」
「それもまた」
シンダントだけでなく後方参謀であるバヤズィトも彼に応えた。
「それでは補給を受けるのは敵を捕捉し捕虜とするか若しくは殲滅した後ですね」
「まずは第一の防衛ラインを無傷で突破しそのうえでそこにいる兵を逃がさない」
口で言うのは一言である。しかしそれを実現するとなると非常に困難である。今回もまたそうした話なのであった。戦争にはつきものの話である。
「わかったな。それではな」
「わかりました。それでは」
「ですが閣下」
それでも彼等はアッディーンに対して言うのであった。
「これから来る補給艦や工作艦はどうしましょうか」
「我々はこのまま兵を進める」
まずは今の戦力について述べる。これは不変である。
「しかしだ。彼等はまずは突破した敵要塞に入るように言え」
「敵の要塞にですか」
「まずは第一次を突破しそこにいる敵を処理したのならばだ」
「はい。その場合は」
「そこで補給及び整備を受ける」
戦争をしていれば当然ながら激しい消耗と損傷がある。その問題を解決しない限り戦うことはできない。これはこの時代においても変わりはしないことだ。

「そこから第二次防衛ラインに進撃する。だが」
「だが。何か」
「それは迅速に行う」
こう参謀達に告げるのであった。
「迅速にですか」
「そうだ。間違いなく第二次防衛ラインの護りも堅固だ」
「その通りです」
情報参謀であるシャルジャーが述べてきた。
「第二次防衛ラインであるカラクーム要塞ですが」
「うむ」
「その護りは今目の前にあるヘルマンド要塞とほぼ同じです」
「つまり普通に攻めれば我が軍の一割を失うということだな」
「その通りです。ですから」
「わかった。それでは作戦を変更しよう」
アッディーンはここで作戦を変更することを決定したのだった。
「後方のその補助艦艇だが」
「はい」
「どう為されますか？」
「要塞に入らずそのまま進むように伝えよ」
「そのままですか」
「そう。そして」
ここからが重要であった。オムダーマン軍にとって。

## 第二十九部第五章　北上開始その十一

「そのカラクーム要塞前で合流する」
「カラクームの前でですか」
「そうだ。合流し攻撃を仕掛ける前に補給及び整備を受ける」
合理的な判断であった。彼はいまそれを言うのだった。
「それでどうか」
「はい」
答えるシンダントとバヤズィトの言葉が明るいものになっていた。
「それで宜しいかと。むしろ」
「戻るよりも時間のロスが少なくそちらで行くべきです」
「うむ。それならばな」
アッディーンは作戦と整備及び補給を担当する二人の参謀からその言葉を聞いて決定した。参謀達が言うのならば間違いはないということである。
「では。その方針で行くぞ」
「はい」
「それでは」
参謀達だけではなく現場を担当する提督達からも異論はなかった。これでそれは決まりであった。
「敵艦隊との戦闘で間違いなく時間のロスが生じますので」
そう分析するのは迅速な用兵で知られるコリームアであった。
「それで宜しいかと」
「要塞を放棄して後方に下がる敵を捕捉することだな」
「その通りです。それを考えればおそらく我々と彼等の合流ポイントはカラクーム要塞前になります。しかも攻撃をはじめる前の時間で」
「よし」
それを聞いてまた頷くアッディーンであった。

「それではこれ行くぞ」
「了解です」
「ではすぐに」
「行動に移る」
彼は指示を出した。
「攻撃目標はヘルマンド要塞」
これもまた予定通りである。
「速やかに攻撃に移るぞ」
「わかりました。では」
「各員それぞれの担当部署につけ」
これは提督達だけではなく今軍にいる全ての者に伝えられた。末端の兵士に至るまでそれを伝えたのであった。それこそが軍であった。
「わかったな」
「では我々も」
「そうだ。すぐにそれぞれの指揮する数個艦隊に戻ってくれ」
「わかりました」
今ここにいる提督達は一個艦隊を指揮してはいない。それぞれ数個艦隊を統括して指揮しているのである。そしてその上にいて総司令官となっているのがアッディーンなのだ。
「それではな。各員が配置に着いたならばすぐに総攻撃にかかる」
こうも指示を出す。
「すぐにだ。急ぐようにな」
「はっ」
こうしてオムダーマン軍は戦闘配置についた。いよいよ彼等の秘策が出される。しかしそれが何かを知るのはまだ彼等だけであった。
そのオムダーマン軍の接近をヘルマルド要塞の将兵達は見ていた。だが彼等からそれに対して仕掛けるということはなかった。
「精々攻めさせておけ」
「進んでくればいいんだ」

自分達の護りに絶対の自信があるからこその言葉であった。
「機雷もあればコロニーレーザーもあるんだ」
「飛んで火に入る何とやらだ」
またこの諺が出る。これこそが今の彼等の偽らざる心境であった。
「さあ来い、来るんだ」
「機雷にミサイルが御前等を待ってるぜ」
迎撃態勢を整える。しかし。オムダーマン軍はある距離でその動きを止めたのであった。
「!?どういうことだ」
「あの距離でか」
その距離は少なくともオムダーマン軍の艦艇の攻撃射程ではなかった。サハラのどの艦艇の攻撃射程でもない。ハサン側のコロニーレーザーの射程にもギリギリで入ってはいなかった。
「奴等一体」
「何を考えているんだ!?」
「司令」
司令室においてアルコルドがハッサームに声をかけた。彼は司令室から要塞全体の指揮にあたっているのだ。
「奴等は一体何を」
「わからん」
それはハッサームにもわからないことであった。顔を顰めさせていた。

## 第二十九部第五章　北上開始その十二

「だが。何かをしてくるのは間違いない」
「そうですな」
それはアルコルドにもわかる。彼等とて愚かではない。オムダーマン軍が何かをしてこない、何かを考えていないとは考えてはいない。
「しかしその何かがわかりません」
「警戒態勢を続けろ」
彼は一先警戒を続けることにした。
「何をしてきてもいいようにな」
「わかりました。それでは」
「前面に防衛施設を集中させよ」
具体的な指示としてこう告げるのだった。
「仕掛けるとすれば前面しか有り得ない」
「はい」
これは要塞の位置からしてすぐに出せる結論であった。オムダーマン軍はヘルマンド要塞には正面から攻めるしかなかった。位置的にそうするしかない。ハッサーム達もそれがわかっているからこそ正面に戦力を集中させることができたのであった。
「ではすぐにそのように」
「アッディーン元帥が何をしようとも」
ハッサームの目の光が強くなった。黒い目の光がまるで闇の中の光のようであった。
「それで防げる。損害を強いることができる」
「ええ。ですから」
アルコルドも言う。
「ここはそれでいきましょう」
「うむ」

彼等は備えた。そうして敵の動きを待つ。それに対してオムダーマン軍の動きは正面からはあまり見えなかった。少なくともハサン軍からはそうであった。
「よし」
しかしアリーの艦橋にはアッディーンの姿がある。彼はそこから自軍に指示を出し続けていた。
「予想通りだな。敵は正面に戦力を集中させてきている」
「はい、確かに」
彼の言葉にガルシャースプが頷く。参謀達も艦橋に集まっている。
「全てはこちらの予想通りです」
「そうするしかないのだ」
ここでアッディーンはまた言った。
「我々に犠牲を強いるのにはな」
「では閣下」
ここでガルシャースプはアッディーンに声をかけた。
「あれを前面に出しますか」
「攻撃ポイントはだ」
アッディーンはガルシャースプのその言葉を受けてまた指示を出す。
「あそこにする。いいな」
「あの突出部分ですね」
そこが何処かはガルシャースプにもわかった。要塞の防衛ラインにおいて突出している部分があった。アッディーンはそこを攻撃ポイントを指し示したのだ。
「あそこを」
「そうだ。あれをあのポイントに集中させろ」
また言う。
「あそこから突破するぞ」
「わかりました。それでは」
アッディーンの言葉に頷く。そうしてオムダーマン軍はその突出

部に戦力を集中させる。それを見たハサン軍は特に驚くこともなく冷静なままであった。
「ほう、あそこを攻撃するつもりか」
「ならばそうすればいい」
オムダーマン軍のその動きを見てもまだ余裕の笑みを見せていた。
「あそこにはとりわけ兵器が揃っているしな」
「そうそう簡単には突破されないぞ」
「司令」
アルコルドは前線に出ていた。そのかわりに他の参謀達がハッサームに声をかけてきた。
「ではあのポイントに防御を集中させましょう」
「それで足りるかと」
「そうだな。だが」
しかしここで彼はあることに気付いたのだった。
「どうされましたか？」
「やはり射程には入っていないか」
「そういえば」
「我が軍の射程距離には」
ヘルマルド要塞には長距離の射程を持つ兵器も多数配備されている。しかしオムダーマン軍はその射程をはっきりと見切ってその範囲内には入らないのであった。彼はそれに気付きその顔を顰めさせるのであった。

## 第二十九部第五章　北上開始その十三

オムダーマン軍は入らない。ハッサームはそこに不吉なものを感じていた。
「やはりおかしいな」
「おかしい。それでは」
「前線に伝えよ。いや」
すぐに言葉を言い換えた。
「私も前線に向かおう」
「司令もですか」
「そうだ。間違いなく彼等は何かをしてくる」
それは前から読んでいた。問題はそれが何かがわからないということだった。彼はその何をしてくるのかがわからないということに不安を感じていたのだ。
「それに備えてだ。行くぞ」
「どうしてもですか」
「行かなければ危うくなる」
その顔が曇っていた。後方で指示をにあたるよりも今は前に出るべきだと考えていたからだ。
「だからだ。いいな」
「わかりました。それでは」
「我々もまた」
彼等もそれに従う。こうしてハッサームはアルコルドを追う形で前線に出た。前線に出てみてもやはり目の前にいるオムダーマン軍は前には積極的に出ようとはしないのだった。
「オムダーマン軍には長距離の艦艇兵器はなかったな」
「はい、その通りです」
「少なくともあの距離から届くものはありません」
参謀達もそれはわかっていた。お互いのことはそこまでわかって

いたのだ。
「しかし何か攻撃しようとしています」
「しかも」
オムダーマン軍の布陣を見て彼等もわかっていた。
「彼等は突撃用意に入っています」
「間違いなく攻めてくるつもりです」
「しかし。このまま突撃してくれれば」
どうなるか。言うまでもなかった。
「我等の思う壺です」
「それでもなのでしょうか」
「わからない。だが」
ハッサームは言う。そのオムダーマン軍を見据えながら。
「何かをしてくる。突出部に可能な限りの備えを置け」
「わかりました」
彼等はさらに突出部に兵器を集中させるのであった。そうして守りを固める。アッディーンはそれを見てもまだ動かない。少なくとも突撃はさせようとはしないのだった。
「もうすぐだな」
「はい」
参謀達がアッディーンの言葉に応える。
「いよいよです」
「突出部に集中させております」
「他のポイントにはどうか」
そこも問うのであった。
「間も無く配備が完了します」
「突出部と同じで」
「わかった」
そこまで聞いて頷く。
「では攻撃を仕掛けてからだ。いいな」
「了解」

「あれを前面に出せ」
ここで遂にそれを告げるのであった。
「集中攻撃だ。いいな」
「はっ」
「それでは」
皆それに頷く。そうしてそれが前線に出て来たのであった。
それはハサン軍の者達も見た。その目を一斉に顰めさせる。
「何だあれは！？」
「あんなものを持って来たのか」
「そうか、あれか」
ハッサームもそれを見ていた。そのうえでの言葉であった。
「あれを持って来たのか」
「しかしあれでは」
「やはり」
しかし彼等はそれを見てもまだ冷静さも余裕も崩してはいなかった。全く。

## 第二十九部第五章　北上開始その十四

「こちらには届かないでしょう」
「そうだ。全く無意味だ」
少なくとも彼等の頭の中にあるデータにおいてはそうであった。
「届かない無用の長物を持って来るとは」
「何を考えているのか」
しかしオムダーマン軍から見れば違う。とりわけアッディーンはそうであった。
「さて、射撃準備はいいな」
「はい」
幕僚達が彼の言葉に答える。
「何時でもいけます」
「後は閣下の御命令を待つばかりです」
「よし。それではな」
アッディーンもそれに頷く。そうして遂にその右腕を掲げだした。
「では射撃用意」
「射撃用意」
命令が復唱される。それと共にそれにエネルギーが充填されていたものが放たれようとしていた。
「撃て！」
「撃て！」
右腕が振り下ろされる。それと共に今無数の光が突出部に向かって放たれたのだった。
その無数の光は一直線にハサン軍の防衛ラインに向けられる。だがそれを見ても彼等は全く動じない。やはり落ち着いたままであった。
「何を放ったかと思えば」
「オーソドックスと言うべきか」

この場合でのオーソドックスは侮蔑の言葉であった。
「さて、ではこのまま守るか」
「そうですね」
それは司令部も同じであった。ハッサームもアルコルドも。
「無駄な努力だったな」
「努力することはいいことですが」
アルコルドの言葉はシニカルなものであった。彼等はハッサームの乗艦であるザラーヴァントの艦橋において戦局を見ていたのだ。
「戦場においては成功しなければ意味がありません」
「その通りだ。よくもあんなものを多量に持って来てあの速度だったがな」
「おそらく補給艦や工作艦を後方に置いてきたのでしょう」
アルコルドのこの予測は当たっていた。その通りであった。
「つまり彼等は継戦能力に欠けます」
「ではその分消耗が増えるかもな」
「はい、ひょっとすれば」
こうハッサームに答えた。
「それだけ負担が大きくなるのですから」
「そうだな。無駄な努力のツケは大きいのですから」
「よし。さらにいことだ」
ハッサームはまた言った。
「ここでより彼等を消耗させることができるのだからな」
「はい、そうです」
彼等はオムダーマン軍の攻撃を侮っていた。だがそれは一瞬のことであった。何とオムダーマン軍のその攻撃は。
「!?何だと」
「射程を越えた!?」
そうなのだった。光はそのままハサン軍の防衛ラインに突き進む。それはハサン軍の将兵が知っている射程をさらに越えてさらに進む。
「まずいぞ、このままでは」

「この陣地にも突き刺さるぞ」
「まさか」
彼等は不意に慌て出した。このまま攻撃が突き刺さればどうなるか。彼等にしろわかっていた。戦場にいるのならばわからない筈がなかった。
「いかん！」
それをハッサームも察知した。急いで指示を出す。
「バリアーを張れ！」
まず命じたのはそれであった。
「最大出力でだ。守りを徹底させよ！」
「は、はい！」
「そして衝撃に備えよ！」
続いてこの指示も出した。
「来る。負傷兵が出たらすぐに救助に当たれ」
「わかりました」
「まさかとは思うが」
迫るその光を見て呟く。光は迫る時間は一瞬である筈だがそれは永遠の時のように思われた。その中で必死に指示を出し続けていた。
アッディーンは冷静にその一瞬である筈だが永遠の時を見据えていた。今まさにその無数の光がハサン軍の陣地を突き破ろうとしていたのだった。
「まさかと思っていたようだな」
「はい」
アッディーンの言葉にシンダントが答える。
「まさかとは思っていたようで」
「だろうな。だが敵の裏をかく」
アッディーンは腕を組み立っている。そうして戦局を見据えながらの言葉であった。
「それが戦いなのだからな」
「そうです。我々とてただ敵に向かうだけではありません」

シンダントは述べた。

## 第二十九部第五章　北上開始その十五

「この程度は常識の範囲内でしょう」
「そういうことだ。さて」
アッディーンは腕を組むのを止めた。そこからまた言うのだった。
「もう一撃だ」
「もう一撃ですか」
「そうだ。それからだ」
彼は言う。
「全鑑突撃にかかるぞ」
「わかりました」
その光が今ハサン軍の陣地に迫る。そして。
「来たぞ！」
「バリアーだ！」
その光が迫るのを見て皆その顔を蒼白にさせる。何とか助かろうともがく。
「いや、後方に退避しろ！」
「間に合わせろ！」
誰もが生きる為に叫ぶ。しかし。
中には助かった者もいる。しかしそうはいかなかった者もいた。彼等はオムダーマン軍の放ったその長い光に貫かれて消え去った。無数の命がその光の中に消え去りそうして二度と蘇ることはなかった。
その光が消えた後でようやくハッサームは呟いた。その呆然とした声で。
「まさかとは思ったが」
「はい」
アルコルドもそれに応える。見れば二人の顔は同じ顔になっていた。強張り蒼白になっている。これもまた戦場でよく見る顔であっ

た。
「届くとはな」
「どういうことでしょうか」
それまでの冷静な顔がアルコルドにはなかった。声もそうであった。
「距離は。わかっていた筈なのに」
「そうだ」
ハッサームも言う。
「コロニーレーザー。しかも我々のものならば」
「射程は同じ筈です」
ハッサームのその言葉に応えた。
「ですがあの射程というのは」
「まさか。いや」
ハッサームはここで気付いた。
「そうか。改造してあるのだ」
「改造ですか」
「そうだ」
それしかなかった。それ以外に考えられなかった。
「彼等はコロニーレーザーの射程を改造し伸ばしたのだ」
「今回の為にですか」
「暫く彼等の進撃は止まっていたな」
「はい」
今回の進撃までその動きは止めていた。言い換えるならばそれだけの時間があるということなのだ。時間があれば何かができる。これもまた言うまでもない。
「その間に仕込んでいたのだ」
「そうですか。それで」
「そうだ。やられた」
声にもそれを出す口許にも苦悶の色が浮かんでいた。
「完全にな。してやられた」

「この要塞を陥落させる為に用意していたということですか」
「そうだな。一手も二手も先を呼んでいた」
またしても声に苦悶が混じっていた。
「アッディーン元帥。やはりやる」
「司令、また来ます！」
ここで彼にとっては出来る限りならば聞きたくない報告をまた聞くことになった。
「二撃目です！」
「そうか。やはり来たか」
攻撃は一撃とは限らない。これはもう常識である。
「バリアーを張れ。退くことができる者は退け」
それが今の彼の指示であった。
「できる限り後ろにな」
「はい。ではその様に」
「それにしても。考えたものだ」
ハッサームはまた呟くのだった。
「距離を伸ばしてきて持って来るとはな」
「最初はまさかと思いました」
「それが第一の狙いだったか」
それを認識して歯噛みもする。

## 第二十九部第五章　北上開始その十六

「これを続けられれば。オムダーマン軍はほぼ無傷でこの要塞を手に入れることができる」
「無傷で、ですか」
「そう、無傷でだ」
それをまた言う。
「このままではな。しかも我々にそれを止めることはできない」
「くっ、それではこのままでは」
「敵の消耗を強いることなぞ夢の話だ」
またしても歯噛みする。
「どうやら。これが彼等の答えだったか」
「またしても。出し抜かれましたか」
それを再認識することになった。呻いた言葉がまた出される。
「どうされますか、司令」
「どうされるかか」
「はい。問題はこれからです」
アルコルドはもう衝撃からある程度ではあるが立ち直っていた。それでこう司令官に対して問うのであった。彼にしろこのまま損害を出すわけにはいかなかったのだ。
「戦われますか？それとも」
「撤退か」
「言いにくいことですが」
「一つしかない」
ハッサームはまずはこう答えた。
「それはな。今は」
「どうされますか、それで」
「止むを得ん」
次に出した言葉はこれであった。

「止むを得ないといいますと」
「撤退だ」
彼が選んだ選択はこれであった。苦渋に満ちた顔での言葉だった。
「これ以上の戦闘は無意味だ。損害を増やすだけだ」
「その通りです」
それはアルコルドも同じ考えであった。そう言ったその瞬間に今二撃目が炸裂する。そうして陣地がまた破壊され多くの将兵が死傷したのであった。
「Aポイント左翼損害率三割を超えました！」
「Dポイント通信が遅れています！」
「損害の出ている場所にはすぐに救援を送れ！」
ハッサームは撤退を決意してからもさらに指示を出すのだった。
「そのまま後ろに下がらせろ。よいな」
「後ろにですか」
「そう、後ろにだ」
それをまた言う。
「このまま要塞を放棄するぞ」
「それでは司令」
「このまま」
「そうだ、第二次防衛ラインまで撤退する」
正式にそのことを言うのであった。
「撤退してそこで戦う。よいな」
「わかりました。それでは」
「消耗を強くことはできなかったが」
それが無念ではあった。彼等の当初の計画では一割の損害を出させることだったのだ。しかしそれは果たせない。そのことを思っていたのだ。
「それ以上に。これ以上戦闘を続けても」
「我が軍が無駄に消耗するだけというのですね」
「遺憾だがな」

参謀達の問いに遺憾という言葉を使った。言葉を発するその口の形からも苦渋が見える。
「だが生きていればまた機会がある」
「今回の借りを返すことを」
「そうだ。だからこそ今は退く」
それが軍人としての考えであった。ただ撤退するのではなくそれは次の戦いに向けての撤退なのである。それが撤退なのだ。逃亡では決してない。
「それでいいな」
「無念です」
「わかったな。では」
「はい。それでは」
この指示はすぐにこの要塞のハサン軍全体に伝えられるのであった。
「全軍撤退！」
「第二次防衛ラインまで下がれ！」
「えっ、もうなのか！？」
「随分早いな」
現場の将兵達はその指示を聞いて驚きの声をあげた。彼等は損害を被ったとはいえまだ戦うつもりだったのだ。しかしそうはならなかった。それに驚いていたのだ。

## 第二十九部第五章　北上開始その十七

しかし命令は事実だった。それも確認された。
「間違いないか」
「はい」
その中の一隻の戦艦の中で艦長と副長がそう話をしていた。
「ハッサーム閣下からの直接のです。暗号番号はそうなっています」
「そうか。では間違いはないな」
「はい。ですから」
副長は艦長に対して答える。
「ここは我々も」
「撤退しましょう」
「わかった」
艦長は副長の今の言葉に頷いた。
「では下がるか」
「損傷を受けている艦艇から下がっています」
「むっ」
見ればそうであった。損傷を受けている艦がまず戦線を離脱している。彼等の戦艦はまだ損傷を受けていない。彼はそれを見て判断を下すのであった。
「我々はまだ残るとするか」
「残りますか」
「まずは彼等を援護する」
撤退戦術における常道であった。軍人としてそれを身に着けていたのである。
「それからだ。わかったな」
「ですね。それが今の時点でのベストです」
副長もそれに頷く。彼もまた軍人だ。だからこそ艦長のその判断に賛同するのであった。

「ハサン軍の戦いを見せてやりましょう」
「うむ。撤退のハサン軍だったか」
艦長は不意にこう言ってきた。
「撤退のですか」
「そうだ。どうも最近こう言われているらしい」
こう述べて苦笑いを浮かべる。
「あまりにも敗北することが多くそれで撤退することが多いからな」
「不名誉な話です」
「そうだ。しかしだ」
だがここで彼は別のことを言うのだった。
「その撤退戦にこそよさがあるとも言われている」
「撤退戦にですか」
「嫌味ではなくな」
こう前置きする。
「実際にそう言われているのだ」
「撤退戦によさがですか」
副長にはわからない言葉であった。撤退は軍人にとっては苦いものだからだ。そして同時に常に考えておかなければならないことでもあるのだ。
「そうだ。上手く戦っているとな」
それがハサン軍の最近での評価であったのだ。撤退が多いがその中で善戦して損害を最低限に抑え上手く退いているというのである。言葉にすれば簡単であるがそれを実行に移すのは非常に難しいことでもある。それが撤退戦なのだ。何しろ敵に後ろを見せて下がるのだから。
「評価されている」
「それは何処での評価でしょうか」
「我が国以外だ」
艦長の今度の言葉はこうであった。
「そこではこう言われているのだ」

「では連合等ですね」
「主に連合でだ。今回もそう言われるかもな」
「やれやれといったところですね」
副長はそれを聞いて溜息をつく。苦い顔と共にであった。
「そんな評価をもらうとは」
「嫌か」
「正直に申し上げまして」
それを隠すこともしない。
「愉快なことではないのは事実です」
「そうだろうな。何しろ敗戦が続いていることの何よりの証拠だ」
「ええ」
「しかしこれもまた事実だ」
それも認めるしかないということであった。

## 第二十九部第五章　北上開始その十八

「わかったな」
「わかりました。それでは」
「そもそも撤退は予定に入っていたしな」
当初の計画通りだ。撤退しながら戦うことはもう決まっている。
それは全将兵がわかっていることであった。
「では撤退を開始する」
「はい、それでは」
アルコルドはあらためて彼のその言葉に頷くのであった。
「速やかに第二次防衛ラインであるカラクーム要塞まで」
「下がるとしよう」
こうしてハサン軍は撤退を開始した。まずは損傷の大きい艦艇から下がり続いて無傷の艦艇が。将兵の収容も迅速でありそれは確かに見事な撤退であった。
それはオムダーマン軍からも確認されていた。アッディーンはそれを見て言う。
「相変わらずと言うべきか」
「はい、見事な撤退です」
ガルシャースプがそれに答える。この言葉は決して皮肉ではない。賞賛の言葉である。
「あそこまでの撤退はそうそうはできません」
「撤退こそが最も難しい」
アッディーンはこの言葉を呟いた。
「それを考えればハサン軍の人材もまだかなりいるのだな」
「既に急死や事故死でかなり減ってはいてもですね」
「そうだ。優れた人材がいる」
そこを見てアッディーンの目が光った。
「憶えておくことにしよう」

「確かに。それでは閣下」
ガルシャースプはそこまで聞いたうえでまた彼に声をかけてきた。
「次の御命令は」
「コロニーレーザーの斉射は続ける」
これは止めないのであった。
「それと共に艦艇を突撃させる」
「敵陣の中に」
「そうだ。そして」
ここからが彼の作戦の真髄であった。
「敵を追撃する」
当初の予定通りであった。
「よいな、それで」
「わかりました。それでは予定通り」
「要塞の占領は陸上部隊に主に任せる」
こうも告げる。本来ならば全軍でかかるものだが彼は今回はそうはしないのであった。
「それでいいな」
「はい。それもまた計画通りに」
「相手もまさかと思うことだ」
アッディーンは戦場を見据えて呟いた。
「要塞を占拠せずに軍を追うというのだからな」
「確かに。戦いの常道ではありません」
「しかし常道でもある」
常道であって常道ではない。また微妙な言葉のやり取りであった。少なくともそれは少し聞いただけでは軍人のやり取りする言葉の類ではなかった。
「戦いに対する最終的な勝利を追い求めるのが軍人なのだからな」
「その為の手段を採るのもまた常道ということですね」
「そうだ。今はその常道を取る」
言葉のやり取りは続く。

「勝利の為にだ」
「では閣下」
「全艦突撃せよ！」
あらためて指示を下した。
「まずはこのまま要塞の防衛ラインを突破する。そして」
「さらに先に」
「そうだ。引き続いて追撃にかかる」
この指示も出すのであった。
「いいな」
「ではそのように」
「うむ。しかしだ」
彼はここでふとした感じで言うのだった。既にアリーは突撃に入っている。彼の常として己の旗艦もまた攻撃や突撃に参加させる。これはかつて中佐だった時のカッサラでの戦いでもそうであったり先のジェルムでのハサン軍との大規模な会戦においてもそうであった。これがアッディーンなのだ。
「まだ敵の防衛ラインは続く」
「はい」
今のヘルマルド要塞、カラクーム要塞だけではない。ハサン軍の防衛ラインはさらに続く。そうした多重の防衛ラインでアッディーン率いるオムダーマン軍を防ぐ戦略なのだ。
「それを一枚ずつ突破していく」
「このようにして」
「既にそれを突破する武器はある」
それがコロニーレーザーである。今使ったそれだ。

## 第二十九部第五章　北上開始その十九

「これを使ってな」
「しかし。よく考えたものです」
ガルシャースプは既に後方に位置するようになっているそのコロニーレーザーについて述べた。これはジェルメ攻略後そこを拠点としながら基地の整備や補給を行いながらアッディーンの指示によりオムダーマン軍が用意してきた。要塞攻略の為の兵器なのである。
「こうしたものを。よく」
「要塞攻略に必要なものは何か」
アッディーンは言う。
「攻略できるだけの多大な兵力と」
「そして火力ですか」
この場合は攻撃力、衝撃力のことである。これは兵力もまた同じであるが。
「そうだ。その火力を用意したのだ」
「それこそがこのコロニーレーザー」
「オムダーマン軍、いやサハラの艦艇は艦隊戦を極めて重視している」
それが伝統である。
「とりわけ我が軍はな」
「それが我が軍の強さでもありました」
多くの艦隊戦での勝利により今を築き上げてきた。何を隠そうその代表こそがアッディーンである。彼の勝利の殆どが艦隊戦によるものであるのは言うまでもない。
「そうですね」
「そうだ。しかしだ」
それが長所であり短所でもあるのだ。諺のままであった。
「その分要塞戦には弱いな」

「そうですね。それは確かに」
「ブラーク攻略は言うならば奇襲だったしな」
サラーフの首都攻略戦の時の話である。この戦いも遥かな過去になってしまった気がする。しかし時間的にはほんの昔のことでしかないのだ。
「あの時もし艦隊による攻撃を仕掛けていれば」
「どうなったでしょうか。やはり」
「そうだ。多くの損害を出していた」
これはもう目に見えている未来であったのだ。
「確実にな」
「ですね。そうとしか考えられません」
「それを防ぐ意味もあった。そしてそれは上手くいったが」
「はい」
その時はだ。しかしそれでオムダーマン軍の弱点が解決されたわけではなかったのだ。無論これはサハラの軍事形態全体に言える話であるが。
「今回はそうはいかない。だからだ」
「射程を教化したコロニーレーザーを用意したと」
「ヒントはあったのだ」
「ヒントですか」
「そう、ヒントはあったのだ」
ここでヒントがあったと言ってみせるのだった。
「連合軍の巨大戦艦があるな」
「ええ、あれですね」
その存在は連合軍の象徴ともなっている。巨大な規模を誇る連合軍に相応しい巨大戦艦としてだ。そうした意味で八条の政治的意図は成功を収めていた。ただ単に巨大な艦艇を建造させただけではないのだ。内外にそれを見せることによって連合軍の存在を示したいのである。外には防衛、内には結束の象徴としてである。こうした存在を象徴とすることは政治ではよくあることである。

「あの巨大戦艦の巨大砲を聞いて思いついたのだ」
「確かにあれはかなりの威力ですね」
その威力がどれだけのものかはガルシャースプも知っている。オムダーマン軍においてもその攻撃により数多くの勝利を収めたことを知っているのである。
「連合軍はまずあの巨大砲での攻撃からはじまる」
「確かに」
そこから砲艦やミサイル艦での攻撃だ。連合軍の攻撃はかなりマニュアル化しているのだ。
「その一撃でまずかなりのダメージを敵に与えているからだ」
「要塞も攻略していましたね」
「そう。テューポーンもまた」
今や連合軍に押収され連合本土に持ち去られているあの要塞もまたティアマト急巨大戦艦の巨大砲の一斉射撃により陥落したのである。あのクロノスでの戦いでの一場面だ。
「それを見て思ったのだ。要塞を攻略するにはこれが一番だとな」
「ですが我が軍には」
ここが最大の問題であった。ガルシャースプが今言うところがだ。
「巨大戦艦はおろかあそこまでの砲艦ミサイル艦も」
「ないな」
「そうです」
これもまた言うまでもない事実であった。
「ないからこそですね」
「そうだ。しかしないでは済まされない時もある」
それが今なのである。そういうことだった。
「その時にはな。こうした工夫が必要なのだ」
「ですね」
あらためてアッディーンの言葉に頷いた。
「だからこそ今こうして」
「なければ見つけ出すか作り出す」

それこそが工夫であった。
「そういうことだ。今回は上手くいった」
「はい。それで閣下」
ここまで聞いたうえでアッディーンに問うてきた。
「何だ」
「これは予定通りに使いますね」
「そうだ、第二次防衛ライン攻略でも使う」
それも今はっきりと言った。彼は最初からそのつもりでこのコロニーレーザー達を用意させたのである。そういうことであった。
「予定通りな」
「わかりました。それでは」
「さて、このまま突撃を続ける」
またしても指示を出した。
「要塞を突き抜けそして」
「撤退する敵部隊を捕捉し捉える」
「まずは気付かれるな」
隠密裏に動けということであった。
「通信を途絶し一気に敵の後ろに迫るぞ」
「はっ」
「それからだ」
ここまで述べてまた言うのだった。
「次の段階はな」
その次の段階に向けて兵を進める。アッディーンはさらに戦いを続けていく。オムダーマンの為に。そしてそれは己の運命を切り開く戦いでもあったのだった。だが彼は己の運命がどう切り開かれているかまではわかってはいなかった。それを知るのは神だけであった。

第二十九部　　完

2008・3・1

# 第三十部第一章　戦利品その一

戦利品

連合の首都星系である太陽系。今そこに一つの巨大な要塞が移動されてきていた。

それはあのテューポーンであった。かつてクロノスの戦いでクロノスまでエウロパ軍が持って来たあの無数のビーム砲台を持つ惑星要塞である。それが今太陽系にまで来ていたのだ。

何故エウロパのものがこの連合にあるのか。それは簡単であった。戦利品として手に入れたのである。

このテューポーンの他にも連合軍が手に入れた戦利品は数多い。それ等は全て連合軍が己のものとして使用している。このテューポーンもまた同じである。

「やっとここまで来たのだな」

「はい」

統合作戦本部長の執務室でバールはスタッフの一人であるスーツの男から報告を受けていた。スーツからわかるように彼は軍人ではなく官僚である。

「やっとといった感じです」

「エウロパは遠かったな」

バールは少し感慨を込めてこう述べた。そこまで聞いてから。

「わかってはいたが」

「艦隊を動かすのよりも苦労しました」

官僚はこうも言う。バールの席の前に立ち述べていた。

「まだあの方が」

「そうか。そんなにかかったのか」

「はい」

官僚はまた答えた。

「費用の面での苦労はかなりのものでした」

「そうか。そんなにかかったのか」
バールはそこまで聞いてその顔を顰めさせた。軍隊では何かを一つ動かすのにも書類と金が必要になる。軍もまたお役所であるからこれは当然であった。
それは統合作戦本部長であれば当然のこととして頭に入れていることであった。だが金の話になるとやはり顔を顰めさせてしまう。金が出るのを好み人間なぞいないからだ。
その彼が言うのだった。費用がかかったことに。その額もまた問うてきた。
「それで幾らかかったのだ？」
「百個艦隊規模です」
彼はここで艦隊に例えて話をしてきた。
「百個艦隊をエウロパのクロノスからこの地球に持って来ただけのコストがかかりました」
「そうか。百個艦隊か」
彼はそれを聞いて今度は顔を曇らせた。百個艦隊といえば一個軍だ。連合軍の軍の単位としてはかなり大きいのは言うまでもないことだ。サハラで一度にそれだけの艦隊を動員できる国はない。エウロパでも無理をして五個集めたのが限界であった。連合軍は今は四十個軍持っているがそれでも巨大な規模であるのには変わりがない。この軍が今は四個集まって軍集団になる。連合軍で最も大きな軍の編成単位である。
「はい。つまり百個艦隊分余計にコストがかかったのです」
「そうか」
「はい。百個です」
それをまたバールに告げる。
「最初はここまでかかるとは思いませんでした」
「そうだな。他の戦利品の移動もそれでは」
「想定以上になっています」
またバールに告げたのだった。

「その分の費用の調達をどうするかという問題ですが」
「どうすればいいか」
バールはそこを問うた。費用がかかるのは仕方がなかった。しかし問題はそれで終わりではない。その埋め合わせをしなくてはならないのだ。
「そうだな。何か案はあるか」
「既にエウロパからの所謂賠償金はもうなくなりました」
「使ったな」
「はい、想定の範囲内でのことに関して」
使ったというのである。しかしこれは言い換えれば想定の範囲外のことに関しては使っていないということである。結果としてそうなるのだ。
「もう残ってはいません」
「わかった。しかし」
彼はまた答えた。そしてまた問うた。
「他に何か埋め合わせをできる場所はないか」
「丁度サハラとの境への防衛ラインの施設も計画します」
「そうだな」
そちらにも金がかかる。軍というのはとにかく金がかかるものだ。しかも入ることはない。ただ消費していくだけでしかないのだ。それが軍の金なのだ。
「では何処から埋め合わせをするか」
「百個艦隊です」
ここでまたこの言葉が出た。
「その分の移動費分です」
「そうだ。百個艦隊だ」
「はい。ですから」
ここで官僚が提案したことはいささか吝嗇な話であった。

## 第三十部第一章　戦利品その二

「訓練計画がありましたね」
「うむ」
その計画は軍では大小の問題を抜くと常に存在している。訓練をしない軍ではそれこそ話にならない。もっとも連合軍は軍規の教育にまず極めて熱心であり訓練は然程行っていないという指摘もある。少なくとも募集人員の減少を懸念して厳格な訓練は殆どない。千年の平和の弊害だとも言われているが志願制の軍隊では志願者の確保の為にこうなってしまうケースもあるのだった。元々連合では軍の人気が低いことも一因になっていた。
「それを幾つか減らしましょう」
「そちらで埋め合わせるか」
「はい。差し当たっては」
あらためて提案してきた。
「次の艦隊総演習の規模を縮小しましょう」
「どれだけ縮小する？」
「半分程度に」
まずはそれであった。
「そして観艦式の規模も縮小しましょう」
「それで埋め合わせるか」
「流石に戦勝パレードを縮小するわけにはいきませんが」
エウロパとの戦いの勝利を記念して設けられたパレードである。連合軍最大のイベントの一つともなっている。流石にこれを縮小するわけには行かなかった。
「その程度ならよいのでは」
「その程度か」
「止むを得ません」
顔を顰めさせるバールに述べたのだった。

「軍事費は限られているのですから」
「そうだな。それも低く」
中央政府の予算の比率では決して大きくはない。少なくとも他の勢力と比べればそれは実に微々たるものになっているのである。
「それも仕方ない。連合では軍の地位は高くない」
「はい」
これは彼等もよく認識していた。他ならぬ彼等が。
「大体軍にしろ仕事がないにこしたことはない」
「確かに」
身も蓋もないがその通りだ。軍が暇だというのはそれだけ問題がなく平和だということの証である。なお連合軍は他の勢力の軍隊に比べればかなり暇ではある。エウロパとの戦争の後では特にだ。宇宙海賊やテロリストといった懸念材料が彼等自身の登場により大きく減ったからである。つまりは抑止力にもなっているのだ。
「しかしそれだとその分予算がな」
「減らされます」
そうなるのだった。必要がないと見なされてのことだ。
「困ったことに」
「そこが難しいのだ」
言葉に実感が篭っていた。
「そこがな。必要のない場所に金を回したりはしないからな」
「その通りです。ましてやそれが」
ここからもまた重要であった。
「出費ばかりで歳入がないのならば」
「財務省としては金を回す理由がない」
「その通りですね。やはり」
「予算は有効に使う」
絶対の鉄則である。これはどの時代のどの世界であっても変わりはしないことだ。それこそ絶対に不変のものである。無謬でさえあると言ってもいい。

「だからだ。財務省もそれは正しい」
「そうです。ですが」
だが彼はここでまた言うのであった。
「我々としてはそうはいきません」
「そうだ。それに」
バールもまた言う。
「軍事は不可欠なものだからな」
「守りを怠って滅ぼしたこともまた数多いです」
これは歴史にある通りだ。軍備を怠ったらどうなるかは最早言うまでもない。もっともそれが的確なものであるという前提も必要なのであるが。
「ですから我等は」
「予算が必要なのだが。しかし」
バールの言葉が濁った。
「ないのならば仕方がないか」
「そうです。予算がないのならば」
「長官にも頑張って頂いているがな」
予算を確保するのもまた長官の仕事である。八条もこれに関してもかなり健闘し予算を確保してはいる。しかしであった。問題もあったのだ。

## 第三十部第一章　戦利品その三

「長官は。正攻法は得意であられるが」
「裏になると」
「そちらには通じておられませんね」
「そうだ。それが問題なのだ」
あくまで政治の表の世界とやり方しか知らないのである。名門に生まれ育ち政治家として花形を歩んできているからこれは仕方がないとも言えるがである。
「それは仕方がないがな」
「はい」
二人もそれはわかっている。
「相手に対して裏から攻めるといった搦め手は」
「御存知ないですね」
「正攻法で見事な手腕を発揮されているがな」
少なくともその政治力は確かなのは事実だ。力があれば裏の手を使わなくとも平気だということでもある。そういうことであった。
「それはそれで非常に助かってはいるが」
「裏も知られるとまた違いますか」
「そうだ。といっても」
ここで一旦己のことに考えをやった。
「それは私もないな」
「ないですか」
「軍人の世界ではな」
自分のいる世界についても言う。この世界は政治家や官僚の世界とはまた違うのだ。官僚と言えば官僚であってもである。ここが微妙なのだ。
「品行方正で仕事が的確であれば」
「いいのですか」

「そうだ。コンピューターに徹することも大事だ」
命令に従うということを言い換えればこうなりもする。
「そういうことだ。特に連合においてはそうだ」
「そうですね。それは確かに」
「官僚でもそうではないのか？」
「まあそれは」
言われてみればそうであった。連合の官僚は。
「我々はあくまで実務担当であり仕事をするだけですから」
「そうだな」
「意見を具申はできますがそれだけです」
「うむ」
連合での考えでは官僚も軍人も行政府の指示に従うものとされている。それと共に立法府である議会に実際の政治の実務や見積もりを述べることもする。こうして立法府に行政府のチェックを促させたりもする。実務担当であるが何を言っても駄目というわけではない。だがこれといって利権は生じないようになっている。それが生じるとすれば政治家になる。それに官僚の世界は連合においてはスポイルズ＝システムもあり上からの政治家の締め付けもきついのだ。二十世紀までのように政治家とある程度混同され実際の行政指導に携わることはなくなっているのだ。彼等にしろあくまでユニットになってしまっているのだ。こうした意味では軍人と同じだがやはり違う部分もあるのだ。それはどこかというと。
「ですが意見はよりし易いですね」
「そうか」
「議会も専門知識を持っておられる方が多いですし」
「それが有り難いのだ」
バールはそこを本当に指摘する。目の光が強くなっている。
「軍事知識になると」
「そうはおられませんか」
「軍事分野はまた特別だ」

ここにも理由があった。
「かなり特殊な知識だ。そしてそれを備えている政治家は」
「僅かですか」
「では官僚ではいるか？」
あえて彼等の世界について問うた。
「君は確か」
「文部省からの出向です」
実はそうなのであった。文部省の官僚にしろ軍事知識を持っている人材が必要だという見解があってのことだ。そうした意向もあってのことだ。
「そうだな。では文部省に軍事知識のあるスタッフはいるか」
「いえ」
首を横に振って答えた。
「私のいる限りは。いません」
「そうだな。モンゴルでもそうだった」
彼の祖国でもそうであったのだ。あの古のモンゴル帝国の姿はもうない。今あるのは平和で落ち着いたモンゴルなのだ。少なくとも連合ではそうである。
「それで苦労してきた」
「軍事知識のある政治家や官僚がいなくてですか」
「説明に困るのだ」
深刻な問題であったのだ。
「何がどう必要でどうするべきかわかっている人間が少なくてな」
「そういえば長官も」
ここでまた八条の話が出る。
「それで苦労しておられるとか」
「そのようだな。財務省でそれを話してもわからないそうだ」
「そうなのです」
わからなければどうしようもない。そういうことだ。

## 第三十部第一章　戦利品その四

「何が大事で何が不要なのか知らなければ」
「どうしようもないと」
「政治家で軍事知識を備えている方がおられないというのは」
「深刻な問題ですね。それはここに入るまで私もわかりませんでしたが」
「文部省関係はどうだ？」
「教育は不可欠な問題です」
それが何よりの答えであった。
「これをどうするかは政治の根幹の一つでもありますので」
「勉強しない政治家はいないか」
「そうです。それにあとは」
さらに言葉を続けてみせる。
「福祉にインフラに農業、開発、開拓。あとは財政と経済ですね」
「そういうところだな。そこには軍事はないな」
「残念ながら」
それが連合の実情なのであった。軍事を重要視している政治家が少ないのである。ここにも千年の平和の影響が出ていたのである。
「私も重要だとは長い間認識していませんでしたので」
「文部省でも知識を備えている政治家がいないのでは仕方ないか」
「それが結局のところ予算の獲得にも影響しますね」
「その通りだ。確かに仕事がないのにこしたことはないが」
そこをまた言う。
「だが。それでもな」
「最低限さえあればいいというのとはまた違いますね」
「最低限は最低限だ」
こうも述べた。
「それでいいというものではない」

「むしろ軍備というものは」
「最低限のそれでは侮られる」
それが現実だ。そして侮られるとどうなるのかもまた現実である。
「そこをわかっている人材が非常に少ない」
「流石に最近は変わってきているようですが」
「連合軍の設立とエウロパとの戦争をターニングポイントにしてな」
「はい」
これもまた事実である。
「ですがそれでも」
「そうだな。まだ理解している人間が少ないな」
「そうですね。一割程度でしょうか」
「深刻な数字だと思わないか」
「確かに」
軍事を理解している人間がそれだけいないのだ。連合ではどれだけ軍事に関する知識が乏しいかということだ。彼等はそのことをよく認識しているだけに憂いているのである。
「あれだけの戦争をしたというのにな」
「ですが本部長」
しかしそれでも彼は言った。
「一割です」
「僅か一割だ」
「一割にも達しました」
言葉を言い換えてきたのである。だがこれは詭弁ではなかった。
「それまでは一パーセントいるかどうかでした」
「十倍に増えたということだな」
「そうです。大きな進歩だとは思うのですが」
「そうしたふうに考えることもできるか」
彼の言葉を聞いて考える。確かにそうした考えに至ることも可能だとも思う。かなり引っ掛かるものがあるのは事実だがそれでもであった。

「ではその一割を増やしていくか」
「そうあるべきです」
彼は述べた。
「その一割を足掛かりにして」
「これからか」
「そうです。それで如何でしょうか」
「そうだな」
バールはそれを聞いて腕を組む。それは考えている証拠であった。表情もまた真剣さを増していた。
そのうえで。また言うのだった。
「ではそう考えるとするか」
「そうです。まだ連合軍が設立されて間もないですし」
「しかもだ」
さらに言葉を付け加えてきた。
「軍事の専門知識を備えている政治家及び官僚が一割だ」
「大体ですが」
「それは多いと捉えてもいいか」
こう考えるようになってきていた。
「それぞれの専門分野をそれだけ知っている人間は多くはないしな」
「その通りです。それで一割と考えるならば」
「もっとも専門的とは言えないレベルの者も多いだろうが」
一応はこうも考えていた。

## 第三十部第一章　戦利品その五

「しかしそれでもだな」
「ええ。それ程悲観するものでもないでしょう」
「わかった。ではそう考えるとしよう」
腕を解いた。それからまた述べた。
「これからはな」
「ある程度は楽観的に考えることも必要かと」
今度の言葉はこれであった。あえて楽観的だという言葉を出してみせたのであった。彼はここでは計算をして言葉を出しているのである。
「だからこそです」
「よし、それではだ」
バールも頷いた。それからまた言う。
「彼等を頼りにして話を進めていこう。そうだな」
「そうであるべきです。理解者は一人でもいてくれればそれだけ有り難いです」
「うむ」
これは事実であった。理解者が一人でもいるのといないのとでは全く違う。一人でもいればそれが大きな力になるのである。そういうことであった。
「ではそうしよう。予算に関してもな」
「はい」
話が予算のそれに戻った。
「今年度はとりあえずはそうしてやっていくか」
「特別予算の編成は」
「やはりもう無理だろう」
統合作戦本部長としてこう結論を述べた。
「既に二回それを組んでもらっている」

「技術に基地整備に」
「そうだ。それだけでかなりのものになっている」
また言う。
「これ以上は無理だ。だから」
「我慢するしかありませんか」
「演習が縮小されるのは無念だがな」
軍隊だから訓練をしなければならない。さもなければ真っ当な軍隊なぞ望むべくもない。しかしである。予算がその訓練も許すのだからそれがなければできないのも道理であった。軍にとっては癪な話だが結局のところ金がなければどうしようもないのである。他の世界と同じで。
「それも仕方ない」
「では本部長、今回は」
「そうだ、それで行く」
決断を述べた。
「制服組の意見はな」
「制服組としてはですか」
「そうだ。後で他の者の意見も聞くがとりあえずはだ」
本部長としての意見はこれで決まった。だからといってそれが通るとは限らないし決定するわけでもないが彼は己の意見をこう決めたのであった。しかし。
「それでだ」
「ええ」
バールは今度は官僚に問うた。
「君達はどうするのだ？」
「君達といいますと」
「だからだ。背広組だ」
つまりは文官というわけだ。彼等もまた重要な存在なのだ。軍は軍人だけの組織ではないのだ。シビリアン＝コントロールだからでもあるが多くの文官もまた存在しているのである。そのトップが八

条なのである。
「君達はどうなのだ」
「まず長官のお考えはわかりませんが」
「まず長官は置いておこう」
国防省のトップは、であった。それはまた別格なのだからだった。
「事務次官辺りまでの君達の考えはどうなのか」
「数日中にわかると思います」
彼はまずはこう答えてきた。
「数日中か」
「はい、今は意見の調整中の段階です」
そして今度の言葉であった。
「ですから今は」
「まだはっきりしたことは言えないか」
「そうです。ですが」
しかしまた言うのであった。
「どうした？」
「我々としましてはそもそもあの要塞は必要なのかどうかといった声もあります」
「要塞がか」
「そうです」
彼はそう述べる。
「あれはむしろ外に置き」
「アタチュルク要塞辺りにか」
「そうです。そうすれば防衛によりいいのではないかと。そうした意見も多いです」
「しかも移動の費用もかからないか」
「正直なところそれが最も大きな理由ですが」
偽らざる本音であった。

## 第三十部第一章　戦利品その六

「やはりそれも考えまして」
「我々としてはだ」
これは制服組のことである。
「太陽系の防衛が頼りないのだ」
「確か百個艦隊を置いていますが」
所謂首都防衛軍である。地球を中心に首都軍管区がありそこにも四百個の艦隊がある。つまり一個軍集団を太陽系周辺に配置しているのである。言うまでもなく四百個もの艦隊を持っている勢力は連合以外には存在しない。それだけでかなりの守りではある。
「そうだ。それでもだ」
「念には念を入れて」
「それが軍人だ」
軍人は常に最悪のケースを想定する。だからこれもまた当然のことであるのだ。
「太陽系には防衛施設が乏しい。だからこそあの惑星要塞が欲しいのだ」
「テューポーンが」
「あれを太陽系の外に配する」
それが軍人達の計画である。
「そして百個艦隊と共に守らせる。これで首都の守りは万全だ」
「他の押収したエウロパの防衛施設と共にですね」
「エウロパの防衛施設はいい」
今度はこう言った。
「少し改良するだけで充分に我々のものとして使える程にな」
「だからこそ押収されたのですね」
「彼等の力を弱めると共にな」
理由は複数あったのだ。

「その為だ。まさかそのまま使わせるわけにもいくまい」
「確かに」
それは当然であった。連合軍としてもエウロパ軍の弱体化は願ってもないことだ。だからそれを実行できる機会があれば即座にそうする。それだけのことなのだ。
「その一環なのだが」
「それに対してのコストがですね」
「私もここまでとはな」
ここでは本音をつい漏らすことになった。
「かなり高くなった」
「やはり距離がネックです」
それこそが最大の問題であった。そうなのだ。
「クロノスからここまでというとやはり」
「距離がか。それは仕方がないな」
「そうです。距離の問題は」
何時でもある問題だ。それによってコストが大きく変わるのもどの時代でも変わりはしないのだ。近ければ安くなるし遠くなれば高くなる。そういうことだ。
それが今彼等を悩ませている。それで。どうするべきか考えているのであった。
「アタチュルクに置くとする」
「はい」
「だとすればコストは全く気にしなくて済むな」
「その通りです」
彼は言った。
「ですがアタチュルクの守りはもう充分ですね」
「少なくともそう簡単に陥落したりはしない」
バールもそれに応えて述べる。
「エウロパ時代のそれは一個の惑星に十二の防衛衛星だった」
「そうです」

それで以って難攻不落としていたのだ。確かに連合軍もその攻略には奇襲を仕掛けて損害をなくしている。まともに攻めれば相当な損害を出したことは言うまでもなかった。
「ですが今は」
「全ての惑星を要塞化しそのうえで十二の衛星を置いている」
「そうです。ですからこれ以上の守りは必要ないかと」
「念には念を押せだが」
この言葉もまた出た。
「しかしそれもまた限度があります」
「そうだ。流石にテューポーンまで置くことはあるまい」
「だからこそこの太陽系にまでですか」
「そう考えているのだがな」
彼だけではなく軍の高官のかなりの数がそう考えているのである。統合作戦本部長の権限は確かに大きいがそれでも彼の一存でどうこうなるわけでもないのだ。
「だが。それにより演習が縮小されるか」
「それを止めるには移動を諦めるかですが」
「どうしたものか」
腕を組むだけでなく首も捻った。
「首都の守りもあるしな」
「一から築き上げますか？」
ここでふとこう提案してきた。

## 第三十部第一章　戦利品その七

「一からか」
「そうです。そうした場合の費用は」
「どうなるか」
「それも考えておきますか。ですがそれでも」
「かなりの費用になるな。いや、それこそ」
バールはまた首を捻った。そうして言うのは。
「そちらの方が高くなるな」
「そうです。だからこそそれもまた」
「コストは百個艦隊程度では済まないでしょう」
「持って来るのはテューポーンだけではない」
そうなのだった。実は太陽系に移動させるのはテューポーンだけではないのだ。他の様々なものも太陽系に移動させそれを守りに使うつもりなのだ。
「それで太陽系は難攻不落となるが同じ規模のものを一から築き上げるとなると」
「費用はさらに」
「そうなれば、だ」
また言った。
「演習どころではない。膨大な費用がかかる」
「しかも時間が」
「そうだ。それもある」
バールは時間についても指摘した。
「持って来て改良するだけならそこまではかからないな」
「そうですね。どんなに長く見積もっても一年です」
それが精々であった。とてもそれ以上はかからない。これは確信さえしていた。
「ですが最初から築き上げれば」

「何年もかかる。途方もない話だ」
「やはり移動させた方がいいのですね」
「我々はそう見ている。しかし移動するだけのコストが今は」
「長官にお話してみますか」
「それは当然だ」
彼もそれは当然としたのだった。トップである八条に話を通さなくてははじまらない。これはもう言うまでもなかった。そしてそれについて述べたところでまた言うのだった。
「私から話をしておく」
「左様ですか」
「そうさせてもらう。どのみち今日は行かないとならない」
「長官のところにですね」
「教育総監と一緒だ」
「総監もですか」
「士官学校のことでな。話すことがあるのだ」
また首を捻りながら述べた。しかしその顔はさっきよりは明るいものであった。どうやらテューポーンの移動よりは彼にとっては軽い問題のようだ。
「それでだ」
「士官学校といえば連合軍のそれは」
「今何校あるかわかっているか」
「七千でしたよね、確か」
「そうだ。それをな」
「増やすおつもりで」
さらに増やすというのだ。七千ある士官学校を。
「連合軍は九十億から百三十億になる」
「はい」
まずは軍全体の数が出た。
「それに見合う士官を必要とするならば一万は必要なのだ」
「そうなのですか。つまり」

「三千校を新設する」
彼は述べた。
「それだけのものが必要だ。それをお話しに行くのだ」
「待って下さい」
しかし彼は話を聞いて顔を顰めさせずにはいられなかった。
「三千校ですよね」
「そうだ」
バールは彼の問いに答えた。
「三千校だが」
「それだけの士官学校を新設するとなると」
また随分とかなりのコストがかかる。ここでもコストの問題が出るのであった。こればかりはどうやっても離れられない話であった。金の話だけは。
「また随分と」
「しかしこれはもう既に計画が出されたものだ」
こう述べるバールであった。

## 第三十部第一章　戦利品その八

「しかも軍としてはこれを通してもらわなくてはならない」
「ですがそれもお話するとなると」
「長官としても難しい顔になられるだろうな」
「長官だけではないでしょう」
彼はここでこれまでになく顔を曇らせた。言葉もそれに続く。
「おそらく。中央政府も」
「特に財務省がだな」
「間違いなく難色を示すと思われます」
そしてこう述べた。
「話がさらに難しくなるかと」
「しかしだ」
バールの言葉が強くなった。
「軍において教育は不可欠だ」
「はい」
将兵を育成しなくては何にもならない。ただ武器を与えてそれで軍人というわけにはいかないのだ。高等教育なくして軍隊はないのだ。
「だからだ。それに」
「それに？」
「実は士官学校だけではないのだ」
話はそこに収まらなかった。
「他の各種学校や教育課程もな」
「充実させるのですか」
「そうせざるを得ない。九十億が百三十億になる」
四十億も増えるのだ。相当な数と規模だ。
「それに合わせて軍備増強もしているしな」
「そうですね。費用がさらに」

「だが全てお話する」
バールは決意していた。
「こういうことはまず全てお話しておかないと」
「後でかえって問題になりますね」
「そうだ。隠蔽はかえってよくない」
これが彼の持論であった。
「包み隠さず言うことがな」
「確かに。軍事機密はあるにしろ」
「それとこれとは別だ」
流石にこれはわきまえていた。そうでなければ話にならない。
「まさかマスコミの前で機密を話すわけにもいくまい」
「それは問題外です」
言うまでもないことだがそれが通用しない相手もいる。軍事機密とは何たるかを意図的に理解しないで報道する者達もいるのだ。人は悪意で動く場合もいるしそうした輩もいる。とりわけ何らかのよからぬ目的がある者の場合はそうである。悪意の前には善意なぞ何の問題にもならないのだ。
「ですからそれは」
「そうだ。まずは置いておく」
「はい」
バールのその言葉に頷く。
「それでだ。話は」
「全てお話され」
「長官のお考えも知りたい」
これが重要な目的であった。実はそれが主な目的であると言っても過言ではない。
「是非共な」
「長官のお考えもですか」
「実際のところ長官のお考えでかなり運営は上手くいっているな」
「そうですね」

これは制服組だけでなく背広組も感じていた。これもまた八条の才能の一つだ。少なくとも彼等はこう見ていたし考えてもいた。
「少ない運営費でも上手くやられる」
「そうです。幾ら何でも無理だと思われるような状況でも」
彼等はそのことを話しはじめるのであった。
「無事に済ませてしまわれます」
「だからだ。今回もひょっとすれば」
「演習を縮小せずにテューポーンを太陽系にまで持って来ることができますか」
「まだその辺りも全くわからないがな」
それは断ってみせた。実際のところまだ話してもいないのだからこう答えるしかない。
「だがお話は御聞きしたい」
「わかりました。それでは」
「そういうことだ。さて」
ここでバールは話を変えてきた。
「もうそろそろいい時間だな」
「といいますと」
「だからだ。もうお昼だ」
これを彼に教えるのだった。
「お昼となれば。わかるな」
「ああ、そういうことですか」
官僚も昼と聞いて察した。というよりはわかったのだった。

## 第三十部第一章　戦利品その九

「昼食ですね」
「何を食べるか決めているか？」
「いえ、まだです」
彼はこうバールに答えた。
「実は何を食べるかも考えていませんでした」
「そうだったのか」
「食堂でも行きますか」
彼は考える顔をしながらバールに述べた。
「ここは」
「そうだな。ではそうするか」
「長官は何を食べられるのか決めていますか？」
「そう言われると」
バールは首を捻った。表情は変わらないがそれでもそれで彼の感情がわかるのだった。それで充分であった。
考えながら彼に述べてきた。
「どうしたものかな」
「それでも行ってみますか」
「行かないとどうにもはじまらない」
その通りであった。何かを食べるにはその何かがある場所に行かないとどうにもならない。そういうことである。それで今回バールは彼の言葉に頷くことにしたのだ。
「では行くとするか」
「はい。では御一緒させて頂きます」
「うん」
こうして二人は国防省の食堂に向かった。白い中に観賞用の木々や草花が見られる。その草花の間を通ってテーブルに座りそこからメニューを見るのだった。

「さて」
バールは彼と向かい合ってメニューを見ていた。彼もまた同じようにして見ている。
「何を頼むかな」
「私はもう決めました」
彼は言ってきた。
「何を食べるのか」
「何にしたのだ？」
「オムライスとミンチカツです」
こう答えてみせてきた。
「その二つを」
「オムライスとミンチカツか」
「如何でしょうか」
「中々いいな。いや」
言葉を言い換えることにした。自分の感情の動きと共に。
「いいな。では私もそれにするか」
「オムライスとミンチカツにですか」
「そうだ。だがオムライスは少し変えよう」
ここで彼の好みによるアレンジが入った。
「このハヤシソースかけオムライスにしたい」
「それですか」
「これもよさそうだと思わないか」
選んでから相手に問うた。
「ハヤシライスとオムライスの組み合わせだ。カレーをかけたオムライスと一緒だと思うが」
「まあ近いでしょうね」
彼もそれは察した。話を聞いて。
「私は食べたことはないですが」
「そうか。実は私もだ」
バールはハヤシライスは好きだ。あの牛肉と玉葱、それにソース

の組み合わせが気に入っているのだ。しかしそれとオムライスの組み合わせというと今まで食べたことはなかったのだ。だから今回は中々興味深さも感じていた。
「しかし。面白いな」
「オムライスとハヤシの組み合わせがですか」
「カツカレーもイメージするな」
こうも言う。実際にカツも頼むことにしている。
「何かな」
「それを考えれば贅沢ではありますね」
「うむ。ではその贅沢を楽しむ為にも」
「それですね」
こうして注文するものは決まった。暫くして二つのミンチカツとそれぞれのオムライスがやって来た。どれもかなり巨大なものであった。
「いつも思うのですが」
官僚は目の前に置かれたそのオムライスとミンチカツを見て言う。
「どうした？」
「ここの食堂のメニューのボリュームは凄いですね」
「そうだな」
連合の基準から見てもそうなのである。この場合は。
「これだけ食べれば満腹する程にな」
「しかも安いですし」
「官庁の食堂だしな」
理由はそれであった。会社や庁舎の中の食堂は安いのが普通である。学生食堂もそれを言ってしまえば同じ理由で安いのである。

## 第三十部第一章　戦利品その十

「うどんの丼なんかも凄いですね」
「サラダもかなりだな」
「そうです。フルコースを頼めばそれでもう夜までもちます」
「有り難いことだ。しかも味もいい」
少なくともバールの好みではあるようだ。
「だからだ。ここは有り難いのだ」
「メニューも多いですしね」
「とりあえず一式あるな」
連合の主要な国の有名なメニューは一通り置かれている。連合軍の本拠地と言ってもいい場所であるからこれも当然のことであるが。
「文部省の食堂もいいですけれどね」
「あそこのもか」
「あそこのはまた違ったよさがあります」
そう自分の本来の居場所のことを述べる。
「時々給食みたいなのもありますし」
「給食か」
「ええ。学校の」
連合では給食もある。給食か弁当どちから選べるようになっているのである。この給食を取り仕切っているのも文部省なのである。
「それの実験用でよく出るのです」
「そうなのか」
「これがまたいい感じなのです」
楽しげに笑って述べる。話しながらフォークとナイフを手に取ってその人の頭がすっぽりと入ってしまうような巨大なミンチカツを切っていくのだった。
「子供の頃に戻ったようで」
「あれはいいものだな」

バールも給食と聞いて頬を緩ますのだった。彼もまたミンチカツを切っている。
「食べ易いしそのうえ」
「栄養も考慮されています」
「しかもだ」
それだけではないのが学校の給食のいいところなのだ。
「味もいいな」
「まとめて作りますからそれだけ」
「そういうことだ。実はだ」
ここでバールはカツを口に入れながら言う。ミンチカツのそのハンバーグの味と衣の二つが絶妙な調和を口の中で伝えている。それを楽しみながら話すのだった。
「軍の食事の参考にもしているのだ」
「そうだったのですか」
「実際に参考になるな」
あらためてこう述べる。今度はソースにカツをつけている。ソースの味もまた楽しみたくなったのだ。ソースの他には付け合せのマッシュポテトやレタスも見忘れてはいない。
「あの組み合わせはな」
「ですね。確かに」
彼もそれに応えて頷く。
「それを考えれば給食というものは」
「決して馬鹿にはできないものだ。充分にな」
「充分にですか」
「そうだ。子供だけのものにしておくのも勿体ない」
今度はこう述べた。
「大人も食べなくてはな。それを大人用にしたのが」
「軍の食事、というわけですか」
「かなりの要素は入れた。しかしな」
「しかし？」

「まだ研究の余地はある」
こうも述べた。
「給食の研究ですか」
「そうだ。そうすればよりよい食生活になるだろう」
「将兵がですね」
「それもまた強くする方法の一つだからな」
話しながらまた一口口の中に入れる。今度はソースをつけたものである。ハンバーグの肉と玉葱、人参の他に衣もあるがそれにソースの濃厚な味もプラスされた。それを食べてみるとさらに味わいがある。食べていて心が楽しくなっていくような感覚であった。
「是非共な」
「そういえばですね」
彼はオムライスを食べている。赤いケチャップがかけられた黄色い薄いオムレツの下にオレンジのチキンライスがある。それをスプーンで取っている。
「このライスですが」
「ライスか」
「長官の祖国である日本ではとにかく白米が好まれていますね」
「とりわけ粘り気の強い米がな」
「ええ」
連合では米は普通は細長くそれ程粘らない米が食べられている。だが日本では粘り気のある米が食べられているのだ。これが大きな違いであった。

## 第三十部第一章　戦利品その十一

「とにかく日本ではライスですね」
「そうだな。連合全体でも主流だが」
「はい」
連合での主食は米に麦、大豆、とうもろこし、それにジャガイモだ。特徴としては水田の様に水で栽培する麦やとうもろこしがあるということだ。
「そのライスでの話ですが」
「何かあったのか？」
「昔の白米です」
連合では普通に精白して食べている。玄米もあることにはある。
「昔の白米は精白すれば栄養がなくなりましたね」
「そうだったな。確か」
バールは己の知識の中からそう答えた。
「胚芽がなくなるからな。後はデンプンだけだ」
「つまり完全な炭水化物になりますね」
「そういうことだ。だから栄養が偏る」
「そうです」
彼が言いたいのはそこであるようだ。
「そのかわりに副食が発達したそうですね」
「しかもだ」
それだけではない。白米がもたらしたものは。
「私は玄米は食べたことがないが」
「ないのですか」
「そうだ。よくわからないが玄米は腹持ちがいいそうだな」
「そうなのですか」
実は彼もそれは知らなかった。玄米を食べたことがないのだ。連合においては玄米は珍しい食べ方となっているがこれには理由があ

る。
「白米だとすぐに消化される。だから」
「どうなったのですか？」
「三食食べるようになったらしい」
こう述べたのだった。
「それまでは朝夕の二食だった」
「ところが白米が主流になってから」
「昼も食べるようになった。それで三食だ」
「そうなりますか」
「そう。そして」
バールはさらに言う。
「副食で白米では採れない栄養を取る」
「当時の米ではそうなりますね」
「そうなる。当時の米はな」
「また随分と不便な米だったのですね」
「全くだ」
この時代の米は胚芽以外の部分にもまんべんなく栄養があるように品種改良されている。それで精白しても玄米と同程度の栄養があるのだ。だからこそ玄米が非常に珍しい食べ方になっている。だからこれからの話はこの時代では理解されにくいものになっている。
「その殆ど栄養がない白米を主食にしていましたね」
「日本は長い間な」
「それで江戸時代ですが」
彼は日本のある時代を話に出した。日本人の性格の形成にかなり影響した時代であると言われている。二百年以上の平和を誇り連合の千年の平和に告ぐ安定した繁栄を見せたことで歴史に名高い時代でもある。連合においてはかなり有名な時代なのだ。
「とりわけ都市部で白米を食べていまして」
「ああ、それは身体によくないな」
バールはすぐにわかった。

「デンプンだけではな」
「とりわけビタミンBが不足します」
「そうだ」
これが最も問題になるのである。当時の白米は。
「それにより脚気になった者が多かったのだろうな」
「その通りです。脚気といえば今は」
「もうなくなった病気だ」
連合の中で脚気になった者は宇宙に何百年もいない。資料にあるだけの病気だ。
「ですが当時の日本では深刻な国民病でして」
「それで大勢死んだのか」
「そういうことです。とりわけ」
そしてここで語った。
「江戸時代の後の軍においては」
「軍でか」
「当時の日本軍のキャッチフレーズは二つありました」
この二つにより日本軍は人材を集めていたと言っても過言ではない。それが何かというと当時の日本では極めて魅力的なものである。

## 第三十部第一章　戦利品その十二

「一つは誰もが武士になれる」
「軍に入ってだな」
「そうです。武士の誉れを身に着けることができる」
　それまでは武士出身者だけしか武士になれなかった。身分制度があるのだから当然である。もっとも実情は養子縁組や功績があった場合には名字帯刀を許される。やはり同一民族内であったのでその辺りは欧州辺りと比べるとかなり緩やかではあったのだ。
「それがまず魅力的でした。それに」
「それに？」
「好きなだけ白米が食べられる。これです」
「それなのか」
　今の連合軍では魅力的でも何でもないことではある。それどころか何処でも好きなだけ他のものまで食べられるのがこの時代の連合だ。
「はい。確かに都市部や豊かな農村では白米はよく食べられていました」
「そうなのか」
　あまりモンゴル人には実感できない話ではある。この時代でも彼等は遊牧生活を愛しているしバールもその中で育ってきているからだ。
「ですが軍に入るような貧しい農村では」
「白米なぞ食べられなかったか」
「そういうことです。簡単に言えば」
「今とは違い貧しい出身の人間が入ることが多かったのか」
「一応は徴兵制でしたが」
　だがこの徴兵の基準がかなり厳しかったのが当時の日本軍だったのだ。甲乙丙丁の四段階で身体検査の基準が定められ甲種合格者か

らさらに選抜していたのだ。こうして精鋭を選んでいた。だから軍に入れる人間はそれこそ学校のクラスだと一人か二人であった。作家の志賀直哉は軍に入った時の写真の中で誇らしげな顔をしていた。それだけ軍に入られるということは誉れであったのだ。

「ただ、入られること自体が凄い話でした」

「実質的には選抜徴兵制か」

「サハラによくあるあれですね」

「そうだな」

サハラ各国では実質的にそれを施行しているのだ。この時代徴兵をしても実は意味がない。軍事関連がかなり専門的な知識を要するものになっているからである。

それで選抜徴兵制に実質的になっているのだ。精鋭を選りすぐってそれを兵士にするというわけである。そうした意味では当時の日本のそれに近い。

「あれをしていたのか」

「そしてです。待遇も当時としては破格でして」

「その二つのキャッチフレーズでわかるようにか」

「白米もそうだったのです」

また彼は答えた。

「白米が即ち御馳走の象徴であった時代だったのです」

「時代が変われば御馳走も変わる」

バールは呟いた。

「そういうことだな」

「そうです。それでその結果」

「白米だな」

そこをあらためて問う。

「ということはだ。脚気になりそうだな」

「その通りです。それで当時の日本軍は深刻な状況に置かれていました」

その通りであった。日清戦争も日露戦争も日本軍はそれで多くの

死者を出してしまっているのである。脚気は死ぬ病気であるのだ。
「戦死者よりも脚気で死ぬ者が多く」
「よくそれで戦争ができたな」
これにはバールも驚きを隠せなかった。そのハヤシソースをかけたオムライスも食べだしていた。その味を楽しみながら話をしている。
「しかも勝ったのだったな」
「両方共まさかの大勝利でした」
「そうだったな。特に日露は」
十倍の国力差のある相手に勝利を収めた。劇的かつ歴史的な勝利であった。なお連合の中ではロシアだけがそれを話に出すと苦い顔になる。
「奇跡的な勝利でした」
「その裏にそんなものがあったのか」
バールはそれを聞いて呻く様に呟いた。
「脚気による犠牲者が」
「そこまでは御存知なかったですか」
「実はな」
それに応えて言う。

## 第三十部第一章　戦利品その十三

「餓死は聞いたことがあるが脚気で死ぬのは」
「それで麦飯を導入したようです」
「麦か」
「はい、麦です」
ここでもう一つ重要な穀物が出た。
「それを白米に入れて食べて脚気から逃れたのです」
「そうだな。麦にはビタミンＢ１があるからな」
「そういうことです。それで脚気を防いだのです」
「つまりそこまでは脚気でバタバタ倒れていたのか」
「その通りです。特に陸軍は」
大日本帝国陸軍だ。連合においてはその強さは伝説にまでなっている。今の連合では絶対に実現できない強さとまで言われている程だ。
「それで多く死にました」
「陸軍の方が食事が質素だったのだな」
「はい、そうです」
海軍は狭い船の中にいるので必然的に数少ない楽しみの食事の技術があがる。しかし陸軍はそうはならないのである。しかも軍によっては素人の兵士が持ち回りで作る。これで美味いものがあるかというとそうなる筈がない。だから陸軍は食事が質素でまずいのである。
「その結果なのです」
「それでも当時は御馳走を食べていた」
「白米ですから」
そうなるのだ。貧しい農村から出て来た兵士達にとってはまさに夢の話だったのだ。その夢を思う存分与えてくれるのが軍というわけだったのだ。

「しかしそれが」
「脚気になったのか。皮肉な話だな」
「当時の軍医達もその原因を必死に探したそうです」
「当然だな」
それは軍医として当然の話だ。さもなければ戦力が持たない。そういうことだ。
「そうでなければ戦えない」
「はい」
彼もバールのその言葉に頷く。
「その通りです」
「しかし。陸軍の方が脚気で死んだ者が多かったようだな」
さっきの話からそれを察したのだった。
「どうやらな」
「その通りです。海軍では麦飯を早いうちに導入してそれを止めました」
これは事実だ。実はこれにはヒントがあった。
海軍では兵士だけが脚気になった。将校はならなかったのだ。
これは何故かと考えた。艦内は狭い。そこにいれば伝染病ならば自然と広まる。階級も関係なくだ。そうした事例は船の中では枚挙に暇がない。
それを見て次に見たのは食事であった。兵士は白米で将校は洋食だった。当時海軍では兵士と将校で食べるものが違っていたのである。洋食はパンだ。それを見てパンを作る麦を白米に混ぜたのだ。それを食べさせてみると本当に脚気がなくなったのだ。そういうことだったのだ。
海軍ではこれで脚気はなくなった。しかし陸軍ではそうはいかなかった。
当時陸軍の軍医局をリードしていたのは森林太郎という男であった。作家としても有名でありこの時のペンネームを森鴎外という。東大医学部を卒業しドイツでコッホに学んだエリート中のエリート

である。とりわけ細菌学においては優秀な人材だとされていた。その彼が脚気菌があると主張したのだ。
　これで陸軍での麦飯の導入が遅れに遅れ必然的に脚気患者は増えていった。それを見た現場指揮官はおろか陸軍の総帥であった山縣有朋や寺内正毅までもが森の言うことを突っぱねて麦飯を導入させたといった話もある。食事の問題はこれ程までに切実な話なのだ。
「それを考えると食事はおろそかにはできないな」
「全くです。そういえば」
　ここで彼はまたあることに気付いた。
「どうした？」
「当時、といいますか二十世紀の日本軍は食事でのトラブルが多いようです」
「そうなのか」
「はい、第二次世界大戦においても」
　その戦争についても話される。
「補給の問題で餓死者を出した作戦もありましたがそれ以上に」
「それ以上に？」
「米を炊くと煙が出ますね」
「うむ」
　これはこの時代の品種改良した米でも変わらない。
「そうだな」
「それを見つけられて攻められたり」
　これも当然あることだった。食事の間には絶対の隙が生じる。実際にこの時を攻められて敗れた話も多い。そのうえ米というものは案外かさばるしそのうえ炊くのに手間隙がかかりその時に大きな隙や煙で位置を知らせてしまうこともある。そうしたリスクが多いものなのである。

## 第三十部第一章　戦利品その十四

「他にはですね」
「他には？」
「肺魚を食べて当たって死んだりとか」
「肺魚を！？」
これまでで最も驚いた幹事のバールの顔であった。
「あんなものを食べたのか、日本軍は」
「そうです。今も食べていますが」
「わからん」
流石に首を捻った。
「美味いとは到底思えないが」
「味だけではありません」
彼はさらに言う。
「中には悪質な寄生虫がかなりいます」
「そうだな。河魚だしな」
しかも養殖ではない。連合では生ものをよく食べるがそれは殆どが養殖ものだ。寄生虫のことは非常によく知られているのである。嫌になる程までに。
「よく食べる気になったものだ」
「しかも刺身で、です」
「そうか」
真顔で表情を消してその言葉に頷いた。
「問題外だな」
「その結果多量の食中毒による死者が出ました」
「当然だ。現地の市民も呆れただろう」
今の言葉がここで出ていた。
「普通は食べないな」
「それにかなり懲りまして」

さらに話は続くのだった。
「二十世紀終わり頃から行った海外派遣では」
「どうなったのだ？」
「レトルト食品主体で行ったのです。補給もかなりの技術を上げていました」
「しかしレトルトか」
そこに突っ込みを入れる。
「それが主体だと」
「やはりそれはそれで問題でして。ただ現地の食べ物や水にはもう懲りていたようで」
「また問題があったのだな」
「そういうことです。食事は難しいものですね」
「全くだ。今でこそそうしたことは考慮しなくて済むがな」
「それはいいことかと」
オムライスはもう半分以上食べていた。バールもそれは同じである。
「少なくとも脚気は」
「それだけでも大きな違いか。他の栄養もな」
「二十世紀と比べれば格段の差があるのは事実ですね」
「量もな。時代が変われればそれだけということか」
「その通りです。しかし」
だが言葉はまだ続くのであった。同時に問題もまた。
「だからといっても問題はまだあるわけで」
「そうだな。見ていかないとわかりはしないものだ」
「その通りです。例えば」
ここで事例が一つ出た。
「衛生面ですね」
「生ものも食べるしな」
「そうですね。特に」
「やはりここでも日本人が出るな」

そうなのだった。生ものを食べるといえば彼等なのだ。連合で生ものを食べることを広めたのもまた他ならぬ彼等なのだ。和食もかなりポピュラーなのだ。
「そうです。長官もそうですし」
「そういえば長官もまた」
話は八条にも及んだ。
「生ものがお好きだったな」
「そうですね。それもかなり」
「そもそも海の幸がお好きだが」
これもまた日本人の特徴だ。この時代においても彼等は刺身等の生ものをこよなく愛しているのである。これを食べられることが幸せの一歩だともされているかどうかまではわからないが。
「最初は驚いた」
「驚かれたのですか」
「実はだ」
バールはオムライスにハヤシソースをつけそこに入っている肉や玉葱も一緒に食べるのであった。オムライスとハヤシライスの二つを食べているようなものだ。
「モンゴルでも生ものは食べる」
「そうですね」
それは彼も知っていることであった。

# 第三十部第一章　戦利品その十五

「確か羊の肉を」
「生でな。食べる」
こう答えた。
「時としては、だ。そうそう食べるものではない」
「左様ですか」
「生肉を細かく刻んでそれを香辛料や刻んだ玉葱で味付けして食べる」
そうその料理について説明する。
「それがモンゴルの生肉の食べ方だ」
「ハンバーグの元になっていますね」
「その通り。ハンバーグはそこからはじまった」
ハンバーグではなくミンチカツを見る。既にもう殆どなくなっている。見れば官僚の皿も同じであった。精々一切れ程度でありもう一口で終わるという段階だ。
「このミンチカツもな」
「そうです。それがドイツに伝わって」
「それからアメリカへの移民から入り込んだものだったな」
「ですね。しかし生ですか」
「そう、生だ」
またそれを言う。
「美味いぞ、中々」
「そうですか」
「和食でもあるな」
ここでまたしても和食が出る。
「馬肉を細かく刻んで玉葱や卵で味付けしてな」
「桜肉ですか」
「それだ。こう言えばわかるな」

「はい」
バールの言葉に頷いてみせた。
「実際に食べたことはありませんがそれなら」
「モンゴルでは馬肉は食べないがな」
顔が少し曇った。モンゴルにおいては馬は家畜ではなく家族に等しい存在なのだ。だから食べるということはないのだ。だがそれを他の者にどうこう言うバールでもモンゴル人でもない。
「あくまで羊だが」
「やはりそれですか」
「そう。そして話が戻るか」
ここまで話したうえで話を戻すのだった。
「日本人は魚を切ってそれをそのまま醤油に漬けて食べる」
「そうです」
それが刺身だ。和食で最も有名なものの一つでもある。
「海老にしろ何にしろな。時には牛やその馬までな」
「ですね。刺身にして食べます」
「そうだ。あれに驚いたのだ」
「日本人はそんなに食べますか」
「魚料理なら何でも食べるが」
またこう前置きされた。
「特にこれや天麩羅が好きなのかもな」
「そうですか」
「少なくとも長官はそうだな」
八条の大好物がそれだ。他にも好きな食べ物は多いが刺身もその中の一つというわけなのだ。そして天麩羅もそうなのである。
「身体にいいそうだが」
「新鮮であればですね」
これは絶対必要条件だ。生ものならば特に。
「ですから冷凍技術も最新式のものを取り入れて」
「そうしているな。おかげで食材の管理技術もかなり上がった」

「いいことです」
「長官の御嗜好もかなり影響していると思うがな。それでもだ」
「ええ。それでですね」
「うん」
話がまた動いた。
「デザートはどうされますか？」
「デザートか」
「はい、それです」
見れば彼はオムライスも食べ終えていた。バールもミンチカツは食べ終えてあとはオムライスを一口であった。二人共かなりの健啖家である。
「それはどうされますか」
「そうだな。和食の話が出たしな」
「では何を」
「白玉あんみつをもらうか」
和風にするのであった。

# 第三十部第一章　戦利品その十六

「それで行こうと思うが」
「では私は」
彼はそれを聞いて別のものを考えたようであった。バールの意見に賛同する言葉ではなかったのがその証拠だ。
「ここは洋風にいきます」
「洋風か」
「ミンチカツとオムライスでしたので」
彼の理由はそれであった。
「ですからここはそうします」
「そうか。では何にするのだ？」
「プリンにしようかと」
こうバールに答えた。
「それで如何でしょうか」
「いいと思う」
バールもそれに頷くのだった。反対する様子は全くない。
「ではそれでな。お互い注文するか」
「はい、それでは」
こうしてベルが鳴らされデザートが頼まれた。バールはそれを食べ終えると八条のいる長官室に向かった。するとそこにはもう八条がいた。
「お邪魔します」
「はい」
まずは普通の挨拶のやり取りからはじまった。
「まだお昼休みが終わって間も無くで申し訳ありませんが」
「いえ、それは構いません」
バールの謝罪の言葉にいつもの穏やかな笑みで返すのであった。
それからまた述べてきた。

「それでですね」
「ええ」
「お話があるのですね」
「そうです」
八条のその問いに頷いて答えた。
「実は二つあります」
「二つですか」
「まずは士官学校の増設です」
それを述べる。
「それは宜しいでしょうか」
「確かその件につきましては」
八条もその話は知っていた。それでその話を聞くとすぐに彼も切り返してきたのであった。
「教育総監のフランキ＝マトリョーフ元帥とのお話でしたね」
「はい、総監も間も無く来ます」
「そうですか」
今の連合軍教育総監はフランキ＝マトリョーフという。古風で謹厳実直な軍人として知られポーランド軍の宿将であった。連合軍での階級は元帥である。
「それではお話はそれからですね」
「そうなります。では」
「はい」
一旦バールの言葉に頷いてみせた。
「それから本格的にお話を」
「そういうことで。おや」
丁度いいタイミングで部屋の扉をノックする音が聞こえてきた。
二人はそれを受けて扉に顔を向ける。そこにいるのが誰かはもうわかっている顔であった。
「お話した側からですね」
「ですね。それでは」

「入ります」
すぐに厳かで生真面目な調子のバスの声が扉の向こうからしてきた。
「どうぞ」
「はい、それでは」
すぐに顔の下半分を白い髭で覆った厳しい顔の男が入って来た。連合軍元帥の服を着ていてその中背の身体は実によく引き締まっている。まさに武人の顔であった。
彼がそのマトリョーフである。連合軍の教育総監として辣腕を振るっている人物である。前線での指揮経験はないが長い間教育畑を歩んできた。それを見て八条は彼を教育総監にしたのである。
その彼が部屋に入って来た。八条のところに来るとまずは一礼したのである。キビキビとした動作での見事な敬礼であった。その敬礼から話を進めることになった。
「よく来られました」
「有り難うございます」
マトリョーフは八条に言葉を返した。
「お話ですが」
「はい、それですが」
八条が応えた。
「士官学校の件ですね」
「はい、その増設についてのお話です」
マトリョーフの謹厳な言葉がまた出された。その声だけで部屋の場を作ってしまっている。八条もバールもそれに引き込まれている感じであった。

## 第三十部第一章　戦利品その十七

「その件ですが」
「はい、それですね」
八条もその話に顔を向ける。
「長官はどうお考えでしょうか」
「私としてはそれでいいと思います」
まずは結論から述べた。
「ですが」
「予算ですか」
「そうです。その問題です」
ここで八条の目が光った。それはマトリョーフだけでなくバールからも見ることができた。鋭く、それでいて知的な。そうした深い目の光であった。
「それはどうされますか」
「それが問題です」
マトリョーフも伊達に元帥までやっているわけではない。だからこれはわかる。
「それですが」
「何かお考えが」
「各種の教育関係の予算を」
まずはこう言ってきた。
「削減してそれに当てようと考えているのですが」
「そしてそれを増設の予算にですか」
「回せるでしょうか」
「難しいですね」
八条はすぐにそれを否定した。
「残念ですが」
「やはりそうですか」

「その方法ですと」
「ではどうすれば」
今度はバールも言ってきた。彼にしろ予算の話でここに来ているだけあって他人事ではなかった。だからこそ八条に対して今のタイミングで言うのである。
「宜しいでしょうか」
「本部長はあの件ですね」
八条はバールも声を発したのを見てすぐに彼に顔を向けて述べてみせてきた。
「エウロパより獲得したテューポーンをはじめとする各種の要塞等を」
「はい、それです」
バールは八条の今のその言葉を指摘した。
「それの移動の費用がかなりのものになっていまして」
「オリンポスからこの地球まで」
八条は言った。
「百個艦隊、つまり一個軍団を移動させるだけの費用がかかるというのですね」
「その通りです」
バールは今の八条の言葉に頷いてみせた。
「それはどうされますか」
「同じです」
次の八条の言葉はこうであった。
「士官学校の増設の件と」
「同じなのですか」
「予算の件ですね」
話がいささか単純化してきた。八条があえてそうさせてきたのだ。
「とどのつまりは」
「その通りですが」
「では同じです。つまり」

八条はまた言う。
「予算を合理化すれば言いだけの話です」
「予算の合理化ですか」
「そうです」
穏やかな言葉になっていた。八条独特の。
「そうではないですか？今回も」
「確かにそうですが」
「ですが長官」
マトリョーフも言ってきた。しかし彼は表情を変えない。その謹厳な顔のままである。
「それは可能なのですか？」
「結論から申し上げましょうか」
「はい」
話はここでかなり単刀直入なものになった。どうも八条は今回は己の中にあるその考えを早く言いたくて仕方がないようであった。それが垣間見える態度ではある。
「可能です」
「可能なのですか」
「そうです。今の予算ですが」
ここで話が予算全体に及んだ。八条の目がさらに輝きを増した。

## 第三十部第一章　戦利品その十八

「全体的に見まして無駄が多いです」
「無駄がですか」
「そうです。従ってそれをカットしていき」
話はそこに至る。
「その余剰の分を回せばいいと思います」
「それでいけるのですか」
「無理だと思われますか？」
「それは」
バールは難しい顔を見せた。普段はそんな顔を見せない彼にしては珍しいものであった。
「経理関係者からの話では」
「今でギリギリですか」
「はい」
八条の問いに頷いてみせてきた。
「その通りです。今のままでもです」
「財政状況は確かに厳しいですね」
当然ながら八条もそれは把握している。国防長官としてだ。
「ですが今で充分過ぎると思います」
「充分ですか！？」
「そうです。まだまだやっていけます」
平然とした顔で言ってのけてみせた。そうした感じであった。
「増設と移動を合わせてもです」
「果たしてそういくでしょうか」
「ええ」
にこりとした顔になる。穏やかな顔であった。
「既に案もありますし」
「えっ！？」

「もうですか」
今の八条の言葉には二人も驚きを隠せなかった。まさかと思ったからだ。二人にとっては今の予算状況でどう考えても極限であったからだ。
「はい、既に案を考えてあります」
「何処をどうやって削減したのでしょうか」
「ですから全体的にです」
また述べてみせてきた。
「余剰を削っていけばそれだけでかなりのものに」
「そうですか。しかし長官」
バールはここでふと思うのだった。
「はい」
「今の状況でもさらに削れるのですか」
「私はそう思います」
この件に関しての八条の考えは一定していた。変わらない。
「ではお見せしましょうか」
「データをですね」
「はい、これです」
机の引き出しから出してきたのは分厚いファイルであった。それを二人の前に出してみせたのである。
「このファイルに予算の削減案をまとめておきました」
「そのファイルにですか」
「そうです。それを御覧になって下さい」
またファイルを見せて述べる。
「これでいいと思いますが」
「わかりました。それでは」
「拝見させて頂きます」
バールもマトリョーフもそれぞれの言葉で述べた。
「じっくりと御覧になって下さい」
「じっくりとですね」

「何しろ厚いファイルですので」
こう前置きするのであった。
「宜しく御願いします」
「では後程」
「そういうことで」
「御願いします。さて」
八条はここまで話したところで二人にあらためて言葉をかけてきた。
「予算の話はこれで終わりですね」
「とりあえずはですね」
「まずはファイルを拝見させてからですが」
「はい。それでお話は」
八条はまた机から何かを出してきた。それもまたファイルであった。
「今度のファイルは」
「新型戦艦についてです」
彼はこう述べてみせてきた。
「教育総監には直接関係のないお話でしょうが」
「確かに直接的ではありません」
彼も一応はこう答える。

## 第三十部第一章　戦利品その十九

「ですが技術にあてる教育の関係がありますので」
「御聞きになられるのですね」
「それを希望します。それで宜しいでしょうか」
「はい。それでは」
八条もそれに頷くのだった。こうしてマトリョーフも話を聞くことになったのだった。
三人で話をはじめる。八条が二人に対して述べる形で。二人は立ったまま話を聞くのだった。
「今我が軍は艦隊の旗艦にティアマト級巨大戦艦を使っていますね」
「はい」
八条のその言葉にバールが頷く。
「あの巨大戦艦はそれも目的で開発しましたし」
「指揮系統の為に」
「その通りです」
だからこそ巨大でもあるのだ。一万隻もの大艦隊を指揮するのにはそれだけ電子や通信の設備が必要ということなのだ。だからこその巨大戦艦なのだ。
そして。それだけではなかった。
「ですが艦隊を指揮するだけでは限界がありますね」
「その通りです」
今度答えたのはマトリョーフであった。静かに述べる。
「だからこそ今回の新型戦艦が必要なのです」
「はい。その巨大戦艦こそは」
八条はまた言う。
「百個艦隊、即ち一個軍を統率できる巨大戦艦」
「即ち超巨大戦艦です」
バールが述べた。

「それを開発する必要があります」
「そうです。その超巨大戦艦の開発ですが」
話は完全にそこに移っていた。三人で話を進めていく。
「詳しいことはまだ企画書の段階です」
「まだそうなのですか」
「はい、そうなのです」
八条は答える。
「技術部も専用のチームをようやく組んだ段階ですし」
「ではまだ開発ははじまったばかりなのですね」
「そういうことです」
また二人に対して答えた。
「何もかもが」
「左様ですか。詳しいことは技術部に聞いてみないと、ということですか」
「その通りです。ですがこの超巨大戦艦はかなり凄いものになるようです」
「むっ」
バールはそれを聞いて半ば無意識のうちに声をあげた。制服組のトップである彼にも当然のように情報が入っている。彼はそれを頭の中で反芻しながら話を聞いていたのだ。
「それですが」
「どうされました？」
「はい。私が技術部から聞いた話ですが」
「どうしたお話ですか？」
「ティアマト級巨大戦艦を大型化させたものという話ですが」
彼が聞いた話ではこうなのだ。
「それもかなりとのことで」
「その案もあります」
八条の返答はこうであった。
「案の一つですか」

「そうです。あくまで今のところは、ですが」
「そうなのですか」
「技術部の制服組の案です、それは」
こう述べるのだった。
「外部の技術者達の案は他のものでして」
「他のものですか」
「申し訳ありませんがまだ制服組にはそちらの案は届いていなかったようですね」
「企業でまだ出ている案だからですね」
「そうなのですね」
バールはそれを聞いて納得した。制服組は企業とはそれ程つながりがない。だから得られるその情報も実に限られたものになるのだ。バールはこのことを今心の中で思い制服組、即ち軍人の限界についても考えた。連合は文民統制により軍を統括している為に軍人が全てを知っているというわけではないのだ。民間関係にはどうしても弱くなるのである。こちらは所謂背広組の仕事というわけなのだ。
「それもどういった案なのか気になりますが」
「それもこのファイルにあります」
「左様ですか」
「はい。宜しければ御覧になられますか？」
また彼等に対してそれを問うた。

## 第三十部第一章　戦利品その二十

「コピーもありますし」
「そうですね。それでは」
「そちらも頂きたいです」
「わかりました。ただ」
ここで八条は少し念を押してきた。
「これはまだトップシークレットです」
「トップシークレットですか」
「そうです」
言葉も表情も鋭いものになり部屋の雰囲気もそうしたものになった。このことからトップシークレットという言葉の重みが実によくわかる。文書の管理で言うと最重要機密扱いにあたるからだ。彼等は制服組のトップである元帥だからこそ見られるのである。それだけの地位にあるということなのだ。
「ですから読み終われば」
「わかっております」
「すぐにシュレッダーにかけそれから」
「はい。即座に再利用行きです」
ここまで徹底されるのだ。情報管理において八条はかなり徹底させている。それでも幾らかの情報がマウリア軍に漏れ伝わったりしているという指摘があり彼も神経を尖らせているのである。情報管理というものはかなり徹底してもそれでも完璧はまず有り得ない難しいものなのだ。
「無論そちらの予算案もです」
「わかっております。これに関しても」
「承知しました」
「御願いします。さて」
話が一段落したところでまた彼等に声をかけた。

「お話はこれで終わりです。お疲れ様でした」
「はい、それでは我々もこれで」
「退室させて頂きます」
「予算に関してはこれでいけると思います」
最後にこう述べてきた。
「駄目ならまた案を練り直しますので」
「左様ですか」
「そう考えています。ところで御二人は食事は召し上がられましたね」
「それに関しましては」
「私も」
二人の言葉はここでも一致した。話の内容は先程とは全く違っているが。
「そうですか。とはいっても」
「何か？」
「ティータイムです」
にこりと笑って二人に言ってきた。二人はそれを聞いてすぐに己の手にある腕時計を見た。見れば確かにもうかなりいい時間であった。
「確かに」
「時間的には」
「では宜しいですね」
二人の言葉を聞いてにこりと笑ってみせてきた。
「お付き合い願えますか」
「総監」
バールがマトリョーフに顔を向けて問うてきた。
「はい」
「どうされますか？」
「私の方は時間はあります」
マトリョーフはまずはこう述べた。

「ですが本部長はどうなのでしょうか」
「私もそれだけの時間は」
あるということだった。答えとしては八条にとって満足のいくものであった。顔には出さなかったが心で穏やかに笑うのであった。
「そうですか。それでは」
「長官」
ここまで話したうえで再び八条に顔を向けた。二人して。
「そういうことで」
「宜しく御願いします」
「誘いに応じて頂き有り難うございます。実はですね」
八条はにこやかに笑って二人に述べた。
「抹茶でいいものが届きまして」
「抹茶ですか」
「そうです。コロンビア産で」
この時代はコロンビアはコーヒーだけではなくお茶の栽培でも有名になっているのである。その栽培で連合ではかなり有名な国になっている。
「黄色いものですが」
「黄色い抹茶ですか」
「如何ですか」
あらためて二人に対して問うのだった。
「黄色い抹茶は」
「面白そうですね」
「それでは」
二人もそれに乗った。実際のところ軍人といえど人としての好奇心は存在する。機械でないのならばこれは当然と言えることである。だからこそ頷いて応えるのである。
こうして三人で抹茶のティータイムとなった。黄色い抹茶はバールにとってもマトリョーフにとっても実に飲みやすく楽しい時間を提供するものであった。

## 第三十部第二章　茶は一つではないその一

茶は一つではない

マウリアの辺境にあるガンダルフ星系。サハラ南方との境にあるこの星系は昔からサハラとの貿易の中心地の一つであると共にマウリアの軍事拠点でもあった。言うまでもなくサハラで有事があった際の前線基地である。

今ここで宇宙港に入港する商人達の間で。しきりにとあることが噂にあがっていた。

「それは本当か？」

「ああ、どうやらな」

今南方はオムダーマン領となっている。従って手に入る情報もオムダーマンのものが圧倒的に多い。これは宙理的な状況から当然のことであった。

そのオムダーマンに関する情報の中で手に入るものは。ここでは軍事的なものではなかった。

「そんなに変わったのか」

「ああ、一度行ってみればいい」

彼等の中でこんな話がやり取りされる。港のラッタルの近くでもそこの酒場でも話されることは同じだった。やはりそのことなのだ。

問題はそれが何かということだ。それは。

「南方も豊かになっているのか」

「見違える程にな」

今までサハラ南方といえば比較的貧しい場所であった。複雑な宙形の星系がひしめき合い流通も交通も悪くしかも小国に分かれ戦乱が続いていた為経済発展が遅れていたのだ。だがオムダーマンによって統一されると。それが一変したのである。彼等が話すのはそれについてだ。

「農業も工業もな」

「発展しているのか」
「今までみたいに軍需産業ばかりじゃない」
こうも話されるのだった。
「勿論まだあるがかなり減った」
「統一されたからか」
「多分な」
こう話されるのだった。オムダーマンの影響に関しても話される。
「今までは色々な国に分かれていたからな」
「ああ」
それが対立するものならばそれだけ軍にかかる負担が大きくなる。そういうことであった。分裂というものは軍備の拡充とそれに伴う戦乱を引き起こす要因となるケースもあるのだ。それが今までのサハラ南方というわけである。簡単に言えばそういうことになる。
「オムダーマンに統一され効果的かつ合理的な軍事政策が採られることになった」
「内政に関してもだな」
「そういうことだ。その結果として」
答えはここにあった。
「かなりの経済発展を遂げている。何でも成長率は一年あたり十五パーセントを優に越えるらしい」
「十五パーセントをか」
「信じられないな」
にわかには信じられない数字ではある。戦乱を知らず人口増加と発展の続く連合においてもその成長率は全体平均としては六パーセント程度である。マウリアは五パーセントになっている。十五パーセントを優に越えるというのは途方もない割合である。商売をしているだけにそれが容易にわかるのだった。
そのうえで。彼等はさらに話をする。
「それは南方だけか？」
「オムダーマン全体でも十パーセントを越えるらしい」

こう話される。
「南方だけでなく西方も経済発展はかなりのものだそうだ」
「統一されたからか」
「いや、それだけじゃないだろ」
すぐにそれは否定された。確かに統一は大きいがそれだけでそうおいそれとそこまでの経済発展が果たせる筈がない。優秀な人材と政策、それに技術と資金がない限りはだ。
「軍需を民需に転換して」
「そして技術と資金か」
「それがないと何にもならないだろう」
経済の初歩に戻っての話になっていた。
「やっぱりな」
「それもそうか」
「そうだ。それでだ」
話はここでいつも動くのだった。これはこの話では決まった流れであった。
「それが実に上手いのだ」
「そうか」
「ああ、どうやらな」
こうした話になる。
「オムダーマンのスタッフはかなり優秀らしい」
「そんなにか」
「ああ、そうじゃなければとても無理だ」
「無理か」
「当然だな」
こう述べられるのだ。
「あそこまでの発展はな」
「オムダーマンといえばだ」
誰もが思い浮かべるのは一人の英雄であった。それが誰かはもう言うまでもない。あまりにもよく知られた名前になってもいたから

だ。

## 第三十部第二章　茶は一つではないその二

「アッディーン副大統領だな」
「彼か」
「そう、彼だ」
それをまた言う。
「しかし人材は彼だけではないみたいだな」
「あの御仁よりもか」
「そう、それも」
ここで居酒屋ならばいつも一杯グビリとやるタイミングだ。実際に居酒屋ならばそうされているのが現実だ。これは場所にもよるが、だ。
「かなり優秀なのが幾人もいる」
「幾人もか」
「上にも下にもな」
上といえばそれこそ閣僚クラス、下になれば普通の地方の役所の事務員まで。こうした実に広い範囲になる。かなり大雑把な言葉ではあるがわかりやすいのは事実だ。
「多く揃っているみたいだな」
「ううむ」
「そんなにか」
「オムダーマンの人材登用は最近かなり上手くいっている」
こうした分析結果が出るのだった。
「やはりこれもかなりのレベルでな」
「何もかもが上手くいっているのか」
「何もかもがというわけではないがかなりのレベルなのは間違いない」
「だからか。それだけの成長率を維持できるのは」
「全ては」

また言われる。
「人材もいてそれが他の様々な要素をコントロールしているからだろうな」
「その結果がその成長率か」
「ああ。そうだろうな。そしてそれは」
「まだあるのか？」
話はオムダーマンだけには留まらないのであった。これが商売の話の複雑かつ面白いところだ。話の場の雰囲気も非常に独特のものになるのだ。
「ある。ティムールだ」
「ティムール！？」
「あそこか」
「そうだ、ティムールだ」
今度はティムールの名が出て来た。シャイターンが治めるサハラ北方の国家が。
「あの国の発展もかなりらしい」
「そんなに凄いのか？」
「北方のエウロパの植民地があっただろ」
「ああ」
連合やマウリアでは総督府はよくこう呼ばれていた。彼等にとってみればエウロパ総督府とは二十世紀まで存在していた植民地と同じものだったのだ。十字軍が築き上げたキリスト教国家とみなす者も多かった。植民地にされた経験のある国家や先祖が多い彼等にとってみればまさに忌むべきものでありそのインパクトは強烈なものでもある。
「あそこを解放して」
「それで？」
「難民達が凄まじい勢いで戻ってきている。しかもだ」
人だけではなかったのだ。こうした意味ではオムダーマンと同じだがその要素と割合がオムダーマンとティムールではかなり違って

いるのだった。
「エウロパは人だけ連れて逃げた」
「そうだったな」
「危急のことだったしな」
エウロパ本土での戦局がかなり悪化してそれにより総督府を放棄したのだ。本来ならば駐留軍だけ撤収させればよかったのだが既に総督府には百億、エウロパの全人口の約一割がいた。その彼等を見捨てることをラフネールはよしとしなかった。その為モントローズでのモンサルヴァートと八条の会談となったのでありモントローズ要塞の放棄、非武装化も決定されたのだ。この話の裏には実は連合とティムールの密約もあったのだがこれはまた別の話である。
「他の全てのものは置いていった」
「家も何もかもか」
「工場も港もな」
これが非常に大きかったのだ。
「それに農園もプラントも科学研究所も。殆ど破壊することなくだ」
「破壊しなかったのか」
「何故また」
撤収の際にはそこにあるものを敵に利用されないように徹底的に破壊してから去る。所謂焦土戦術であるがこれはこの時代でも見られることである。かつてサラーフがオムダーマンに対して行った戦略でもある。
「その時間もなかったのだ」
「そうだったのか」
「それでか」
「しかもだ」
話はそれだけではなかった。これに関しても。

## 第三十部第二章　茶は一つではないその三

「その設備とかが全部ティムールに没収された」
「没収か？」
「ティムール側の発言だとそうなる」
そういうことであった。こうした政治的なことに関しては一方ともう一方、そして第三者でそれぞれ同じものを差していても言葉が違ってくるのである。これは言語的な問題ではない。政治的な理由としての問題である。だから問題もかなり複雑なものとなるのである。そういうことなのだ。
「あちら側だとな」
「あくまで没収か」
「当然だ」
しかもその呼び方が変わるのには理由があった。
「彼等は北方を解放したのだからな」
「解放か」
「そう、解放だ」
またこう言われた。
「解放したんだ。総督府をな」
「サハラのエウロパ植民地をな」
「エウロパのか」
話が傍目から見れば混乱したものになる。しかし実はそうではない。あくまで同じものを差して話をしている。わかりやすく言うならばサハラ北方にあるエウロパが進出した場所のことだ。宙理的にはそうなるのである。
「そう、彼等から奪取したのだ」
「彼等が去ったその場所を。軍で獲得した」
「そういうことか」
「そういうことだ。それでだ」

そのことが確認されたうえで話が変わった。ティムール自体に関する話にだ。これは戻ったと言うべきであろうか。それとも変わったと言うべきか。それは漠然としたものだ。
「そのティムールだが」
「どうなっているんだ？」
「かなり発展しているのか？」
「あそこも見違える程らしいな」
こう話されるのだった。これもまたマウリアから見れば驚くべきことであった。
「それまでエウロパが進出し難民が湧き出るだけだったがな」
「それが変わったのか」
「ああ。ティムールに統一された」
ここでも統一という言葉が出た。北方もまた統一されてからかなり変わったのである。そうした意味ではオムダーマンにより統一された西方及び南方と同じであると言えた。
「そのせいでな。軍備が合理的になって」
「人が戻ってか」
「そうか」
「そうなのか」
人がいなければどうにもならない。ティムールもまた同じであった。こうした意味ではやはりオムダーマンと同じなのだ。中身はかなり異なってはいてもだ。
「そのせいでオムダーマンもティムールもかなり発展しているのか」
「その通りだ。若しこれが」
話が動いた。さらにであった。
「サハラ全体に広まったならば」
「サハラ統一か」
「そうだ」
そのことについて話された。彼等が長い間夢だと思っていたサハラ統一である。少なくともマウリアにおいてはそれは完全に夢話と

されていた。そういうことであった。
「それが現実のものとなれば」
「サハラは。大きな力となるか」
「二千億だ」
サハラの総人口だ。それだけいるのだ。
「しかもそれがさらに発展していく。何しろサハラはイスラムだ」
「イスラムか」
「そう、イスラムだ」
今度は宗教が出た。サハラがイスラム世界であるのはマウリア側もよく承知している。彼等の中では完全にイスラム化した世界だと認識しているのである。
「イスラムでは避妊はない」
「そうだったな。子供は多ければ多い程いいという考えだ」
避妊に関しては表向きは、といったことが多いのはどの世界でも同じだ。江戸時代の日本においてもカトリック世界においても避妊は公では禁止されていたがそれでも実際は行われていた。最悪の場合貧しい農村においては間引きさえ行われていた。人口調整や他の止むに止まれない理由からそうせざるを得ないのだ。だからこそ陰で避妊や中絶、また間引きが行われてきたのである。なお江戸時代の日本では便所にその中絶を取り扱う医者の広告が貼られたりしていたし吉原では花魁は妊娠した場合中絶するのが普通であった。
「だからだ。その人口増加も」
「我々よりも上か」
「連合よりもな」
「あの連合よりもか」
「そうだ」
なお連合の人口増加が大きな割合なのには理由がある。中央政府が主導し各国政府もそれに同調し子供の多い家庭に様々な特典を用意し与えたからだ。それが千年もの間続き連合の人口増加は続いているのである。これは中央政府にとっても各国政府にとっても結構

な負担であったが人口増加が国力増加につながるのでそれでも行われた。軍事費がかからないだけにその分も予算に回せたことも大きかったが。

## 第三十部第二章　茶は一つではないその四

「かなりのものになるぞ。そしてすぐにでも」
「どうなるのかといえば」
「わかるな」
「ああ」
そしてまた話されるのだった。
「かなりの国家になるぞ」
「マウリアよりもだな」
「おそらくはな」
実際のところマウリアの人口は二千億ではない。統計に出ていない人口が三百億存在しているとされている。実情は一切不明であるがだ。
「すぐにな」
「では連合は」
ここで人類最大の勢力の名が出た。連合がだ。
「越えられるか」
「流石にそれは無理だな」
「そうか」
「四兆だ」
連合の人口だ。最近まで三兆だったがそれが増えたのである。連合の人口は増え続けている。
「その四兆には流石に届かない。容易にはな」
「そうだろうな。二十倍だ」
「途方もない差だ」
言うまでもないことであった。連合はそうしたところが桁外れなのである。
「その差は縮まることがない」
「すぐにはか」

「それにだ」
連合についても話される。
「連合の人口増加も止まらない」
「それだな」
「そう、それだ」
これが大きな問題だったのだ。連合については。
「連合もまた人口は増え続ける。しかも元が違う」
「四兆だな」
「そう、四兆だ」
その連合の総人口である。一口で済む言葉だがそれが途方もない規模であることは言うまでもない。何しろ全人類の人口の八割以上なのだから。
「その四兆の人口がな。凄いんだ」
「それはわかってるさ」
言うまでもないことだ。だがあらためて語られる。
「四兆がさらに増える」
「五十年で二倍になるとすると」
この時代の人口増加はおおむねそんな感じだ。将来は三倍になるのではとまで言われている。これは連合だけでなくマウリアも同じである。
「そうだ。八兆だ」
「八兆・・・・・・」
「それはまた」
その数字を聞いてまた絶句する。とんでもない数字である。
「サハラだと四千億か」
「精々六千億だな。だが連合は八兆で」
「しかもさらに五十年後は」
もう一歩も未来が語られる。つまり百年後というわけだ。
「連合は十六兆だ。いや」
ここで考えが少し訂正された。冷静に。

「サハラが六千億なら連合は十二兆になるな」
「まあそうなるか」
「実際にそれをやるかどうかはわからないがな」
　これはあくまで仮定だ。しかし仮定を話すことも決して無駄なことではない。だからこそ彼等はここでこの話をよくするのだ。この流れにおいて。
「だとするとサハラが一兆八千億になるのに対して連合は」
「三十六兆か。何だかな」
「夢みたいな数字だな」
「百年前もそう言われていたようだがな」
　連合の人口四兆という数字だ。この予想はもうされていたのだがそれでも夢のような数字と考えられていたのだ。だが現実になったのだ。百年前は一兆だったのだ。その時ですら遂に大台に乗ったと騒がれていた。しかし連合はその数字も軽々と超えてしまったのである。
「しかしそれを考えると」
「やはり有り得るか」
「そうだ、有り得る」
　それがまた話される。

## 第三十部第二章　茶は一つではないその五

「現実にな」
「だが。二十倍の差は容易には縮まらないのだな」
「それはな」
これが再認識させられた。無慈悲なまでに。
「ではサハラが連合を超えることは容易ではないか」
「容易とかそういう問題ではないな」
こう表現された。
「ほぼ。不可能だ」
「不可能か」
「まずな」
結論としてはこうであった。やはり差があり過ぎるのだった。
「今の成長を以ってしてもな。無理だ」
「そうなるか」
「ただしだ」
だがここで。いつも述べられていることがある。それは。
「思わぬ出来事が起こったならば」
「どうなる？」
「連合を超えるかも知れない。いや」
言葉が訂正される。しかしこれもまた今を考えればかなりの話である。
「その差をかなり縮めることも可能だ」
「かなりか」
「そう、かなりだ」
ここが問題でありポイントなのだった。しかもかなりの。
「かなり近付くことはできるかもな」
「それだとだ」
それを聞いてまた言葉が出るのだった。至るところで。

「連合はサハラを意識するだろうな」
「ああ、それはあるな」
これはすぐに察しがついた。商人である彼等の本能でだ。
「誰もが隣が豊かになれば意識する」
「国家でも近所でもな」
「そういうことだな」
人間心理としての話であった。隣が豊かになれば意識せざるを得ない。これは国家においても同じでありこの場合はサハラが豊かになった場合の連合に関してである。連合が発展するサハラを見てどう意識するかなのだ。
「嫉妬するか」
「そこまではいかなくとも強く意識するようになる」
それは間違いがない。本能的に確信するのだった。
「それがどう動くかだな」
「敵意を抱けばどうなるかな」
次にこれが述べられるのだった。連合とサハラとの関係がだ。
「対立するかな」
「さて、それはどうかな」
これについてはいつも疑問符が投げ掛けられる。現実的な見方のうえで。
「連合は好戦的じゃないからな」
「そうだな。あくまでビジネスを優先させる」
連合の経済主義は彼等もよく知っている。伊達に長い間連合、しかも中央政府及び各国と付き合ってきたわけではない。サハラ寄りのこの辺境の星系にいる彼等もそれは知っていたのだ。
「だから武力は伴わないだろう」
「まあおおよそはそうだな。しかしだ」
ここで連合の性格について述べられる。
「連合はあくまで利益を優先させる」
「それはな」

「よく知っているさ」
誰もが知っていることであった。ここでいつも雰囲気がやや連合に対して否定的なものとなる。これは異文明への否定的な感情なのだ。
「だとすればどうなる？」
「若し何かがあれば。それに武力が必要ならば」
「連合は合理的だ」
この場合の合理的も決して好意的な見方でないことが重要だ。合理的という言葉は決して好意的に使われる場合だけではないのだ。これは他の言葉についても言えるが。
「必要とあればそうするだろうな」
「必要とあればか」
「そう、必要とあればだ」
「使うか」
酒場ではここでまた酒が、喫茶店ではお茶が飲まれる。マウリアの茶が。港での立ち話だともうその手に空き缶がある。完全に空になるが話は続くのである。
「おそらくはな。もっともそれは今まで例がないが」
「連合という国家ではな」
「そうだな。それはなかったな」
満ち足りておりそこまでする必要がなかったからだ。無限の宇宙は彼等に争う必然性を消し去ったのである。その点においてエウロパやサハラ各国よりも遥かに幸せであった。

## 第三十部第二章　茶は一つではないその六

「だから予測がつけにくいがな」
「前例がないとな」
「そう、前例がない」
連合としてはだ。しかしこのことで読みをかなり難しくさせていたのである。
「だから的確には言えない。どうなるかな」
「そうだな。どうなるか」
「そこがわからない」
「だが。しかしだ」
またしても話が動く。変わったのだ。
「これから連合とサハラはかなり大きな軸になるかもな」
「サハラが統一されたのならな」
「そう。統一されたのならな」
それがまた言われる。統一は前提だったのだ。
「サハラが大きな力になるのは間違いないからな」
「連合とエウロパよりもか」
「あれの比ではないだろう」
連合とエウロパの対立は一千年に渡って人類社会の大きな軸の一つであった。しかしそれをも越えるというのである。もう一つのその軸は。
「軸がもう一つできてそれは」
「大きいか」
「これまでになくな」
またそれが話される。
「さて、それができるか。そして」
「なっていくか」
仮定の段階だからそれはわからない。しかし話されているのだっ

た。
「見せてもらうか。ただ」
「そう、ただ」
ここでは話が自分達の話になる。話をする彼等のだ。
「俺達にとって平和であることを祈るな」
「しかも有益にな」
「それは絶対にな」
商人である。しかも貿易商だ。平和でなければ務められない職業だ。だから彼等にとっては平和であって欲しい、そうでなければならないのである。
「連合とのビジネスはその点楽だけれどな」
「連合ならな」
「ああ、連合ならだ」
暗にサハラのことを話すのだった。今までの戦乱に覆われたサハラのことをだ。
「だがこれが統一されるとなると」
「どうなるかだな」
やはり話の関心はそこにあった。彼等は彼等の事情でサハラの平和を望んでいたのである。もっと簡単に言うとサハラが平和であればそれでいいのだ。彼等にとっては。
「この戦い、続くか」
「ハサンとの戦いか」
「ああ、それが長引けば」
話がまたしても動いた。今度は今行われているオムダーマンとハサンの戦いについてだ。同時にティムールとハサンの戦いも行われているがそれは話には出ていない。
「こっちにも影響が考えられるぞ」
「国力が疲弊してか」
「そういうことだ。サハラのある程度の発展は」
今度も話が動きそれは打算的と言えば打算的なものになった。

「我々にとって利益になるからな」
「金持ちと付き合いたいからな」
「全くだ」
そういうことだった。相手が金持ちならば商売をした時により多くのものを買ってもらう。そういう理由なのだ。金があれば誰もが買う。この世の摂理であった。
「連合と比べたらな。今までは」
「旨味が少なかった」
連合とサハラでは豊かさが全く違う。一千年の間戦乱がなく海賊やテロリストの存在があったとはいえただ経済発展に開拓だけを考えて行っていればよかった連合と戦乱に覆われていたサハラとでは何もかもが違う。豊かさも全く違ったものになってしまっていたのだ。
「しかしサハラが豊かになれば」
「旨味も増すな」
「そういうことさ。銃を売るよりテレビを売るんだ」
二十一世紀に出来た言葉と言われている。銃を売ればそれだけで終わりだしかもそれが経済の破壊に使われる恐れもある。しかしテレビはその前に電波や電気が必要であるしそれへの投資で金が動く。金が動けば経済が活性化する。テレビだけでは済まない。だからテレビをキャッチフレーズにして言葉ができたのである。

## 第三十部第二章　茶は一つではないその七

「テレビをな」
「マウリアのテレビをだな」
「サハラのテレビはな」
ここでサハラのテレビ、ひいては製品全体について話された。
「品質が落ちるからな」
「そうだな」
「それはな」
これも彼等は知っていた。商売をしていれば自然とサハラの製品も見る。サハラも行き来しているからだ。それを見て彼等は冷静に分析していたのだ。
「連合のものと比べるとな。かなり」
「落ちる」
「俺達のものと比較してもだな」
「その通りだ」
様々な製品は連合のものが一番いいとされる。もっとも三百国ありその国それぞれで製造して販売しておりその差はある。だが全体として連合の製品は人類社会の中で一番いいとされる。これは電化製品だけではなく車や食料にも及ぶ。競争が激しい結果でもある。
それに続くのがマウリアのものだ。マウリアの製品はどこか大雑把というかおおまかだとされる。マウリア気質が出ているとも評価されている。
それと同じ程度とされているのがエウロパの製品だ。連合の者達は先の戦争においてエウロパの製品を散々にこきおろして馬鹿にした。しかしその品質自体は決して悪くはないのだ。
だがサハラはどうかというと。戦乱の為民生が後回しになる傾向が強くそれが製品にも表われていたのだ。ここにも豊かさの違いが出る形となっていた。

「それも統一すれば変わるかな」
「少なくとも変わりだしているようだぞ」
「そうなのか」
「この前アスランに行った時だ」
オムダーマンの首都だ。今やサハラで最も重要な星系の一つとなっている。そうさせたのもアッディーンである。彼がオムダーマンを大きくしたことによりそうなったのだ。
「製品を見たがかなりよくなっていた」
「かなりか」
「ああ。少なくとも故障は少なくなった」
故障の多い少ないはこの時代でも製品の品質のランク付けで最も重要なものの一つである。
「デザインもよくなったしな」
「そうなのか」
「これも平和になったからだな」
またそれが述べられる。
「西方と南方はな。さて、それで」
話がここでまた動く。いや、戻ったと言うべきか。
「これが一つになれば」
「どんなに凄いか、だな」
「そして連合がどう動くのか」
「楽しみではあるな」
「平和ならな」
そんな話が行われ続けていた。マウリアにおいても銀河が動いていることは感じ取られていた。そしてその中で。首都ブラフマーにおいても国家主席であるクリシュナータが情報収集の結果を聞いていた。
「動きはこれだけか」
「はい、今のところは」
浅黒い肌にスーツの男が彼の前に立ち報告していた。クリシュナ

ータは今は執務室にはおらずホテルの中の一室にいた。そこで彼の報告を受けていたのだった。
「サハラではこれだけです」
「思ったより静かだな」
報告が書かれたファイルに一通り目を通したところでまた述べた。
「あれだけ激しい戦闘が行われているというのにな」
「確かに前線での動きは激しいです」
スーツの男はこう述べる。
「ですがそれ以外は」
「予定通り進んでいるせいか」
クリシュナータはこう述べた。
「そのせいで。静かに見えるのかな」
「その通りです」
彼もその言葉を認めて頷いてみせてきた。
「行動が予定通りならば。その動きも静かに見えます」
「そういうことか。それではだ」
クリシュナータはまた述べてきた。
「今のサハラの情勢は」
「はい」
彼はクリシュナータのその言葉に応えた。

## 第三十部第二章　茶は一つではないその八

「オムダーマン及びティムールにとっては予定通りということだな」
「そうなります」
クリシュナータのその言葉に頷いてみせてきた。
「この場合は」
「そうだな。ハサンにとっては苦しいがな」
「ですがこれは今のところです」
ここで言葉を言い加えてきた。
「今のところか」
「ハサンには力があります」
サハラ随一の国力がだ。その国力は連合の中にあっても上から数えた方が早い程だ。少なくとも人口のうえではそうなのだ。
「その力がまだありますので」
「巻き返すことも可能か」
「それにハサンは守る側です」
今度はこれについて話された。
「地の利を心得ていますから」
「守るには有利というわけだな」
「そういうことです。実際にオムダーマンとの戦いではそれを使っています」
あの多重防衛ラインである。国境から築いておりそれで守ってきている。これはハサンの地の利も生かしたかなりのものなのだ。もっとも序盤はアッディーンに虚を衝かれてしまったが。
「これをより有効に使えれば充分に」
「いけるのだな」
「まず彼等はティムールを叩くつもりのようです」
「そのようだな」
クリシュナータはここでまたファイルを手に取った。そうしてこ

こでティムールとハサンの戦いに関するデータをもう一度見るのであった。
「兵の動きを見ればな」
「これは戦略においては妥当でありましょう」
彼はここでは己の考えを告げた。その顔が鋭いものになっていた。元々痩せ型で鋭利な印象を与えるがそれがさらに強いものになっていた。
「戦力の少ない方を先に叩きその間多い方は足止めしておく」
「二正面作戦の常だな」
「そうです」
答えはそれであった。二正面作戦なのだ。ハサンの今回の戦いの問題はそこだったのだ。
「この二正面作戦での戦略は。正しいものです」
「正しいことは事実だな。それに従いティムールを叩く」
「そうです」
それがまた指摘される。
「ですがティムールもまたそれを読んでいます」
「読んでいるか」
「それも間違いなく」
言葉が強調された。クリシュナータもそれを聞いて目の前のスーツの男がこの分析に対して絶対の自信を持っていることを悟った。
「彼等のその動きを」
「それではだ」
クリシュナータはそれを聞いて述べた。彼もまた洞察力を働かせたような声になっていた。
「ハサンの思い通りにはならない可能性が高いな」
「ハサン軍次第でありますが」
一応はこう述べる。
「しかし」
「しかし？」

「ハサン軍はティムールとの戦いにおいて守勢に立とうとしています」
「コムの敗戦の結果だな」
これに関してはすぐに察しがついた。頼みの綱のアヤグーズがこの戦いで敗北したことにより窮地に追い込まれている。それではハサンが守勢に立つのも道理であった。アヤグーズはハサンにとってもっとも頼りになる属国というだけではないからである。
「あの敗戦がやはり大きいか」
「そうです。今その穴埋めをしようと必死のようですが」
「間に合うか、だな」
「動員はかけました」
そのことも既に知っていた。
「しかしです」
「動員しただけで勝てるものではないだろう」
クリシュナータの言葉は冷徹なものだった。
「ましてや相手はシャイターン主席だ」
「はい」
彼の軍事的才能に関しては彼等もよく聞いていた。その能力が天才と言ってもいい段階にあることも知っていた。それもまった。

## 第三十部第二章　茶は一つではないその九

「そうおいそれとはいかないだろう」
「ですが戦力だけを計算した場合には」
「いけるのだな」
「そうなります。今の状況でも」
「だからこそか」
そこまで聞いたうえでまた述べた。
「ティムールを先に叩くのは」
「そうなります。しかしこれは」
「判断ミスだというのか？」
「いえ、そうではありません」
それは否定する。彼はここで自分の考えを述べるのだった。
「私ならばです」
「どうするか」
「やはり先にティムールを叩きます」
こう述べるのであった。
「君でもそうするか」
「はい。まずティムールの方が戦力は少なく」
「やはりそれか」
「それに彼等の首都アレクサンドリアは近いです」
続いてティムールの首都アレクサンドリアの名前が出た。シャイターンはこのアレクサンドリア星系を拠点として動いている。つまりティムールにとってもシャイターンにとっても心臓なのだ。
「そこを陥落すればティムールはその力をほぼ失いますので」
「それもありティムールなのだな」
「そうです。翻ってです」
ティムールについて話したうえでまた話を動かした。
「オムダーマンに関しては」

「国力はティムールより高い」
「まずはそれです」
どうしてこ国力、戦力が大きな問題になっていた。ここでは一緒のものとして語られているがそれは戦力は国力を基盤としているからである。だから同一視されて語られているのだ。
「それにです」
「首都だな」
彼等の首都についても話される。
「オムダーマンの首都アスランは遠いな」
「アレクサンドリアと比べてもかなり」
つまりそれだけ心臓が離れているということだ。これはかなり大きい。
「ですから」
「そこに辿り着くまでに多大な距離がかかる」
「距離がかかるということはそれだけ戦いを経なければなりません」
「国力もそれだけ消耗してしまう」
シャイターンは話を聞いたうえで呟いた。
「そういうことだな」
「その通りです。やはり距離が大きな問題になります」
「そうだ」
距離、彼等はこのことを強く意識するのだった。
「距離はそれだけで大きな意味を持つな」
「オムダーマンもそれにより補給ラインが伸びることを予想したのですが」
「彼等はそれを上手くクリアーしたな」
クリシュナータはまたファイルを見ながら述べた。
「アスランから遠く離れていても」
「新たに獲得した領土の軍事基地を上手く使っています」
分析の結果を報告した。
「その為です」

「それでだな」
「そうです」
そして答えるのだった。
「ここまで見事に使いこなせるとは思っていませんでしたが」
「アスランからはじまり国境にまで至る補給ネットワーク」
「はい」
そのことが述べられる。
「それはこれまでの戦いにおいても有効に使ってきているが」
「今回の戦いでもそうでした」
何故オムダーマン軍がここまで勝つことができたのか。その答えがここにあった。ただ戦場において勝つだけでは戦争は最後まで勝ち抜けないのである。戦術と戦略の関係であった。
「ハサン領内でもそれを築きながら進んでいます」
「迅速だが確実にだな」
「オムダーマン軍の戦いは奇襲が多いです」
それも分析していた。アッディーンは敵が守りを固めていると見れば必ずその虚を衝いてそこから攻める。この戦い方は彼を名将であるとしているのだった。
「しかしそれは一面でしかありません」
「その本質はオーソドックスか」
「戦略から考えれば常軌を逸したものではありません」
「常軌を逸したものは」
クリシュナータはここでもクールな言葉を出した。

## 第三十部第二章　茶は一つではないその十

「その時は華々しくとも最後には無残な結果になるものだ」
「その通りです」
そして彼も主席である彼の言葉に頷いてみせた。
「常道になければそれは生きられるものではありません」
「それは生物の進化と同じか」
「進化とですか」
「辿る道は全く違うがな」
まずそれは前置きするのだった。
「しかしだ。それでもだ」
「常軌を逸した生物は長くは生きられない」
「奇抜なのもいい」
まずはそれは肯定する。
「しかしそれが極端になってしまえば」
「それによって滅びるというわけですね」
「戦争もまた然りだ」
戦争に話が戻った。
「常軌を逸した戦い方は何時か必ず敗北する」
「それも悲惨な形で、ですね」
「補給を忘れればどうなるか」
オムダーマン軍がとりわけ重要視していると思われるその補給に関して語られた。
「弾薬も食料も燃料もなくては」
「そして整備を受けなくては」
「戦える筈がない」
答えはすぐに出た。
「そういうことだな」
「その通りです。オムダーマン軍、いえ」

ここで彼は言葉を言い換えた。より実直にわかり易く述べたのだった。
「アッディーン副大統領はそれがよくわかっていますね」
「サラーフとの戦いでそれが非常によくわかったな」
西方を統一した時の戦いであった。アッディーンにとっては英雄物語のページの中にある話だ。彼の輝かしい勝利の歴史の中にあるものだ。
「彼はあの時補給路を守り整備を整え」
「それからサラーフと戦いました」
「焦土戦術を執られたがそれを無力化させてみせた」
補給を整えてである。焦土戦術は確かに有効なものだが所詮は人が行うものである。やはり解決し対抗する方法が存在しているのである。
「それを見ても補給を重視しているのがわかる」
「そうです」
クリシュナータのその言葉にはっきりと頷いてみせてきた。
「そうしたものも見ていきますと」
「天才だ」
またこの言葉が出た。
「アッディーン副大統領は。戦術戦略の天才だな」
「少なくとも名将ではあるでしょう」
今度は名将という言葉が出た。歴史において数多く出て来たこの言葉が。この言葉は戦乱の中においてこそ出て来る言葉である。
「それもかなりの」
「名将か」
クリシュナータは名将という言葉を聞いて考える顔になった。それからまた口を開くのだった。その考える顔で、である。深い思考の顔であった。
「思えば今までのサハラの歴史でその言葉はよく出て来たな」
「はい」

それだけ戦乱が激しかったということだ。千年の間戦乱が絶えた年はない。それがサハラであるのだ。常に何処かで戦いが行われていたのだ。
「中には天才もいた」
「天才と呼ばれる者もまた」
「そうだ。多くいた」
これは非常に大きな意味を持っていた。
「多くな。しかしだ」
「その誰もが統一を果たせませんでした」
「ある者は志半ばにおいて倒れ」
戦死である。この場合は。
「ある者は病に倒れた。そしてそれでいつも元の木阿弥になった」
「英雄の死の度に話は元に戻りました」
「そうだ」
今の彼の言葉に対して頷いてみせた。
「その通りだ。サハラはそれの繰り返しだ」
「今までも三国状態になったことはありました」
「何回かな」
それだけ統一に近付いたということだ。サハラの歴史においてはこれで遂に統一されると判断していいケースが幾らかあった。しかしそれが適うことはなかったのだ。

## 第三十部第二章　茶は一つではないその十一

「だがその時にまたいつも」
「それが果たされませんでした」
「そうだった」
それがまた語られる。
「英雄が死に」
「暗殺もありました」
そうした最後もあったのだ。様々な勢力があるのは人の世の常だがサハラもそれは同じだったのだ。その中には英雄というものを好ましく思わない勢力も存在する。敵のない者なぞいない。従ってその敵に対して命を狙われる。それが結果として暗殺に至るのである。
「若しくは事故死」
「不慮のな」
これもまたあることだったのだ。人の世にはアクシデントがつきものだ。そしてそれが時として歴史を動かしてしまうのである。
「色々あったが共通していることは」
「それがサハラの歴史を変えてしまったということですね」
「そう、それだ」
クリシュナータはそのことを指摘した。鋭く。
「それによりサハラは常にまた分裂した。英雄を失い」
「その度にでしたね」
「英雄が腐敗した場合もあったな」
今度はそれであった。
「英雄が栄耀栄華に溺れ」
「戦いも政治も忘れてしまい」
「その結果としてまた分裂したな。彼に反対する勢力が反乱を起こし」
「実に様々なケースがありました」

何しろ一千年の間の戦乱だ。だからその中で破滅のケースも様々にあったのだ。その様々な破滅の中で。サハラは常に絶望に陥ったのである。
「それが今回も起こるでしょうか」
「わからないな。これは」
ここで目を少し右に動かした。異質のものについて考える目であった。
「彼等の神アッラーだが」
「アッラーがどうかしましたか？」
「イスラムにおいてはアッラーは絶対の存在だ」
それがまず語られる。
「そのアッラーが全てを決めるのだったな」
「はい、そうです」
イスラムの話になる。マウリアにおいてもイスラム教徒は多数存在しておりムスリムの閣僚もいたりする。だがクリシュナータはヒンズー教徒であるので目が横に動いたのである。
その横に動いた目を元に戻しても。言葉は続いていた。
「そのアッラーだが」
「どうしましたか」
「その都度のサハラの分裂と戦乱」
それがまた語られる。
「これはアッラーの意思なのだろうな」
「彼等の考えならばそうなります」
イスラム教においてアッラーの力は絶対のものだ。そのアッラーに絶対的に帰依するというのがイスラムの意味だ。つまりアッラーは世界そのものなのだ。
「アッラーによって全てが決められます」
「ではこれまでの破滅と再度の分裂もそれだな」
結論はこうなった。
「アッラーの意思だ」

「そうなりますね」
クリシュナータのその言葉に頷いた。
「彼等の教えをそのまま受けるとすると」
「思えばウマイア朝が崩壊し」
話はそこにまで遡る。イスラムの歴史の初期にまで。
「それからイスラム世界が統一されることはなかった」
「アラビアというあの世界においては」
「そうだ。圧倒的な存在はあった」
世界帝国としてそれはあった。アッバース朝しかりオスマン＝トルコしかり。今は連合において大国の一つとなっているトルコはかつては大帝国だったのだ。
「だが統一には至らなかった」
「銀河に出ても」
それも話された。

## 第三十部第二章　茶は一つではないその十二

「それは変わりませんでした」
「むしろ戦乱はより激しくなったな」
「そうですね。圧倒的な存在が現われることはなく」
「うむ」
　これはそのアッバース朝やオスマン＝トルコの様な存在という意味だ。ハサン王国は確かに強い力で東方を治め続けているがそれは東方だけのことでしかない。アッバース朝やオスマン＝トルコの様にイスラム世界の殆どを掌握したことはないしその意思も持ったことはないのだ。
「それはそうだったな」
「そうです。ですから」
「戦乱はより激しくなった」
　それが答えだった。
「これまでもそうだったしな」
「これからはどうでしょうか」
「英雄が失わなければ」
　これまで話したあらゆる意味においてであった。
「出るかも知れない」
「知れないですか」
「さて、問題はまだある」
　それで終わりではなかった。まだあった。
「それは一体」
「ファイルには書いていないが」
　ここで彼が提出したファイルについて話をするのだった。
「ファイルには書いていないことですか」
「そうだ。あくまでサハラのことだけを書いているな」
「はい」

それは否定しなかった。視点をサハラ各地に向けて書いたものである。だからこれは当然のことであった。
「その通りです」
「外の勢力については書いていないな」
「外の勢力といいますとそれは」
「そうだ」
彼がわかったのを察してさらに突っ込んでみせた。この辺りは見事なやり取りになっていた。
「我々もそうだし連合もな」
「連合もですか」
「最近彼等は我々との境に備えをしだしている」
これまでは各国で行っていた。しかし今は連合軍で行っている。これが大きな違いであった。
「サハラに対してもな。とりわけサハラには」
「それは私も聞いております」
この件については彼もよく知っているのだった。すぐに答えてみせてきたのがその証拠である。
「万里の長城の如き防衛ラインを計画しているとか」
「そうだ。かなりのものを築こうとしているな」
「サハラに備えてですか」
「戦乱が続いている間にだ」
こうも述べた。
「彼等もせわしないものだ」
「せわしないですか」
「そうは思わないか？」
いささかマウリア的な時間の概念においての言葉であった。
「折角エウロパとの戦いが終わったというのにな」
「彼等にしてみれば今こそ、というようです」
「今こそ、か」
「はい」

ここまで話してまた頷いてみせるのだった。
「勢いのあるうちにということなのでしょう」
「そうか。勢いか」
クリシュナータは勢いと聞いて目を動かした。ただしそれは今この場にあるものを見る笑みではなかった。ここにはないものを見ている顔であった。
「勢いに乗り今のうちにか」
「彼等も軍事に関しては基本的に我々と変わりませんし」
「あまり重要視されてはいない」
「極めてです」
「国民総生産の中でのどの程度の割合だったかな」
今度話されるのはそれであった。国民総生産はこの時代にも存在している。連合においては連合全てと各国のものがある。この場合は全てのものだ。
「我々は一パーセント程度だが」
「連合でも同じです」
「そうなのか」
「はい。あちらの国防省はそれを増やしたいようですが」
予算がより多く欲しいのはどの場所でも同じである。予算は血液と同じだ。それがなくては動くものも動かないのである。だからこそ少しでも多く欲しいのだ。
「上手くはいかないようです」
「その理由も我々と同じだな」
「その通りです」
こうした意味において連合とマウリアは似ていると言えた。少なくともエウロパやサハラとは事情が全く異なっているのは確かだ。
「軍事にはそれ程予算を割く必要性が見出されていません」
「最低限であればいいか」
「はい。特に連合は」
また連合の内部事情について話される。

## 第三十部第二章　茶は一つではないその十三

「そうなります」
「百三十億だったな」
連合軍の総数が出された。
「四兆の中で」
「人口的な割合では微々たるものです」
「三百人に一人程度だな」
実際にその程度の割合だ。決して多いとは言えない。
「装備も。かなりのものだが」
「連合の技術は我々のそれとは比較になりませんので」
「それもある」
技術が高ければそれだけ兵器にかかる予算が低く済む。そういうことだった。
「それを考えると一パーセントでいけるか」
「はい。ですが」
ここでまた数字が語られる。
「百三十億です」
「エウロパは五億」
例として出されたのはエウロパ軍であった。彼等ではなかった。
「彼等は一千億の中の五億だったな」
「はい」
「二百人の中での一人だ」
割合としては連合より高い。
「そしてその編成も」
「予備戦力も含めれば」
「軍事にかけている負担はかなり大きい。今は敗戦でのダメージからの復興にもかなり費用を割いているそうだな」
「その通りです」

それが語られる。今度は。
「それにより予算が危機的な状況になっているそうです」
「軍事だけではないからな」
そうなのだった。連合との戦いでエウロパ全体が深刻なダメージを受けているのだ。八条が一般市民や経済施設への攻撃を禁止した為その損害は最低限のものであったがそれでも全体としてのダメージはエウロパにとっては深刻極まるものだったのだ。それへの復興もあるのだ。
「それだけに深刻だな」
「そういうことです」
クリシュナータの言葉を肯定して頷くのだった。
「我々にしろ数は同じだが」
「はい、五億です」
今のマウリア軍の総数だ。
「この数は我々にとっては最低限です」
「そうだ。しかし」
ここでクリシュナータはふと言うのだった。
「どうもな。思ったより」
「どうされましたか？」
「クシャトリア階級の出身者がその大勢を占めているがな」
「ええ」
これはマウリアの伝統である。カースト制度は法律のうえではなくなって久しいがそれでも微妙に残っているのだ。一千年経っても残っているのだ。
「しかし。それでも」
「何でしょうか」
「クシャトリア階級全てが軍人になるわけではないな。カーストの関係で」
「カーストは実に複雑ですので」
細かく分けると三千にもなる。尚且つここにシーク教やゾロアス

ター教、イスラム教やキリスト教まで入る。マウリアではヒンズー教の一派と考えられているが仏教もある。マウリアは宗教の坩堝でもあるのだ。もっともそれが宗教だけに留まらないのがマウリアなのであるが。

「軍人とならないかーストもありますから」

「それはわかっているが」

「ですから。それに関しては」

「深く考えることはないか」

「そういうことです」

こうクリシュナータに対して述べた。

「数は足りていますので宜しいかと」

「軍人になれない軍人になるべきカーストはいるか」

「それはありません」

クリシュナータにとっては安心すべきことであった。

「むしろ数が足りないのを他の宗教の出身者で補っている程です」

「それならばいいがな」

「連合ではこういうことはないのですが」

ここでも連合軍が話に出た。

「しかし。それでも」

「彼等には彼等の問題があるか」

「募集しても人が来ないそうです」

これが連合軍の問題であるのだ。

「何しろ連合は豊かです」

「うむ」

まずはこれがあった。

## 第三十部第二章　茶は一つではないその十四

「それに我々やエウロパの様な階級意識はなく」
「それで義務として軍人になる者もいない」
「そこです」
　それもまた連合軍の特色なのだ。階級社会ではない彼等はその出身に関わらず好きな職業を選ぶことができる。従って軍人になるのも自由なのだ。
「志願制でもありますので」
「中々人が集まらないのか」
「かろうじて定員に間に合っている状況のようです」
「我々よりも深刻なのがわかるな」
「そうです。それであの長官も困っているようです」
「あの長官というと」
　長官と聞いてクリシュナータの目が光った。その人物のことをよく知っているからだ。
「八条長官か」
「そうです、あの日本人の長官です」
　彼もそれに答えた。
「宣伝にも力を入れ待遇も必死によくしているとのことです」
「涙ぐましいようだな」
「そうでもしないと本当に集まらないようで」
　これが豊かな国の志願制の軍隊の難しいところであった。国が豊かになればそれだけ軍に入る人間が少なくなるのはどの社会でも同じなのだ。階級的な義務がない限りは。
「それこそ軍律を守らせるのと同じ程度の労力を費やしているとか」
「あの軍律をか」
　連合軍の軍律の厳しさと軍規の厳正さはクリシュナータもよく知っていた。連合軍はまず軍律を徹底させることを念頭に置いて教育

しているのである。
「はい、それと同じだけのものを」
「かなり努力しているのだな」
話を聞いて呟いた。
「そこまでだったか」
「しかしです」
それでも、といった流れで話がまた動いた。
「人員は中々集まらないようです」
「そうか」
「といっても百三十億ですが」
「我がマウリアでもそこまでの人口を持っている星系はない」
「そうです」
これはあくまで統計上のことであるがそうなのだ。百億が精々である。
「それだけの人員がいるというのは脅威なのだがな」
「向こうとこちらでは受ける印象が違います」
まずはこう前提された。
「向こうが人員不足で困っていてもこちらにとってはそれだけの数が脅威であることがあります。それが他ならぬ連合軍のことです」
「我々は同盟を結んでいるからまだいいがな」
「はい」
彼等に関してはだ。しかしだ。
「宿敵であり今も敵対関係にあるエウロパはどうか」
「ニーベルング要塞もブラウベルグ回廊も失い効果的な守りの要がない状況です」
「だからといって何もしないわけにはいかない」
「そうです」
守りを怠ること程愚かなことはない。目の前に明確な敵がいる場合は特にだ。そうした状況で守りをする必要がないと主張するのはおおむねその明確な敵とつながっていると考えていい。その格好の

例となるのがやはり二十世紀後半の日本であった。ソ連や北朝鮮といった勢力を前にして非武装中立や刺激するなと主張していた勢力がその実は彼等と結託していたというのは歴史にある。さらに呆れた話だがその彼等が『良識』とされていたのだから恐ろしい。
その恐ろしい話はエウロパにはない。これは彼等にとって幸いであった。
「エウロパは今それで」
「予算が苦しい中で防衛に取り掛かっているのだな」
「その通りです」
そういうことなのだった。
「そのせいで予算はさらに苦しいことになっていますが」
「それでもしなければならない」
「そうです」
だからこそエウロパは苦しいのだった。その苦しさは最早建国以来の困難と言われた連合との戦いを超えるとさえ言われている。ローマ建国以来とまで言われているのだ。
「それで今度の総統選挙はこれまでにない盛り上がりも見せています」
「ギルフォードだったか」
不意にこの名前が出た。
「イギリスの侯爵の。そうだったな」
「そう、その侯爵です」
彼もまたギルフォードという名前に対して頷くのだった。

## 第三十部第二章　茶は一つではないその十五

「彼が出てそのカリスマ性を発揮しています」
「そうだ、今のところエウロパの人気を一身に集めているがな」
「最初に名を挙げたのは連合との戦争でした」
「ニョルズでの戦いだったな」
「はい。オリンポスの前での」
　エウロパにとってクロノスと並ぶ最後の防衛線での戦いであった。ここで負ければ本当に後がなかった。彼等はここで必死の戦いを繰り広げた。彼等はここで踏ん張り何とか生き残ったのである。危ないところでマウリアの仲裁が入ったのであるがそれでも生き残ったのは事実だ。
「そこで勇敢に戦い名をあげました」
「そうだったな。その時はただの志願者だったが」
「エウロパ軍大将でした」
　それがあの時の彼の官職だった。エウロパでは貴族こそが危急の際には自ら志願して危機に立ち向かうものだとされている。とりわけ戦争においてはそうなのだ。
「サハラ義勇軍に対してタンホイザー元帥と共に前線に向かい」
「それで知られるようになったな」
「その彼が今選挙に出ています」
「既に実績はある」
「その実績が人気に大きく影響しています」
　選挙の常だった。事前に何をしたかで人気が大いにあがるのである。とりわけ知名度が。政治家はまず名前を知られることが重要なのだ。
「彼もまた然り、です」
「その彼の人気は比類なきものになろうとしているが」
「実績だけではないでしょう」

次にこう言われた。
「やはりそこにあるのはカリスマ性です」
「それか」
「そう、それです」
カリスマ性についての話がはじまった。これもまた政治家、とりわけ民主主義の中では欠かせないものである。もっともカリスマ性を持っている人物というのは滅多にいはしないのだが。
「そのカリスマ性により絶大な人気を集めています」
「そうだ。彼にはカリスマ性がある」
クリシュナータもそれは認めていた。それだけ彼を認めているということだ。
「今選挙になっても総統になるのは間違いないとまで言われているのだったな」
「はい。こちらでも分析してみましたが」
その分析を既に行っているというのだ。仕事が早い。
「当選の確率は九割五分を超えます」
「つまりほぼ確実なのだな」
「はい」
あらためてクリシュナータに答えてみせた。
「その通りです」
「そうか。確実か」
「しかも彼は名門の出身です」
「侯爵という程だからな」
一口に侯爵というがその地位はかなりのものだ。公爵が王家に近いか祖先がそれこそ国を救うような功績をあげてなっているものだ。若しくは欧州で屈指の名門であるかだ。侯爵はそれに次ぐ。つまり侯爵家というのもエウロパにおいてはかなりの名門にあたるのである。
「イギリスでは有力な家の一つか」
「かつてはですが」

話がマウリア以外では大昔に関するものになった。
「このマウリアがインドの時にも来ていたそうです」
「マウリアの」
「そうです。あのインド統治です」
彼の顔が歪んだ。イギリスのインド統治の時代は彼等にとっては暗黒時代なのだ。歴史の教科書ではそうなっている。これは連合と同じである。
「あの時に関わっていたそうです」
「するとあれだな」
クリシュナータもそれを聞いて顔を曇らせるのであった。
「あの時に我々の祖先を徹底的に搾取した者の子孫か」
「彼等はそう考えてはいませんが」
「ではあれか」
エウロパ側の言いたいことはわかっている。これは連合に対しても言っているのでよく知っているのだ。だが知っているからといっていい感情を抱いているわけではない。
「教化したというのだな」
「そういうことです」
エウロパに言わせれば植民地は現地民に文明を与え教化したということなのだ。これを連合で言えば即座に袋叩きにされかねない。当然マウリアでも嫌な顔をされる考えだ。

## 第三十部第二章　茶は一つではないその十六

「ですから。ギルフォード侯爵は」
「インド人を強化した偉大な祖先なのだな」
「そうなります。偉大な祖先なのです」
「見方が変われば」ということか。今回も」
「そうかと。今回もまた」
「忌々しいことだ」
　ここまでその話を聞いて冷静かつ知的なクリシュナータにしては珍しく顰めさせた顔になっている。その顔での言葉であった。
「何が教化なのか」
「それで連合に対しても彼は言っています」
「野蛮人だとでも言っているのか？」
「流石にそこまでは言っていませんが」
　だがエウロパにとって連合の者達がそうであると認識されているのは事実だ。彼等にとってはエウロパ、即ち欧州の文明こそが絶対の存在なのだ。それ以外は野蛮な文明もどきでしかないのだ。とりわけ連合のそれはそうなのだ。連合の者達もまたエウロパのそれはかぶれている学者達ですらサブカルチャー扱いであり心の中では連合のものこそ最高であると考えている。こう書いてしまえばどちらもどちらということなのだ。
「ですがかなり言っています」
「否定的にだな」
「まずは数だけだと」
　これはある意味においては事実である。連合の強さの源の一つはその数だ。
「言っています」
「やはりそれか」
「そしてです」

さらに言葉を続ける。
「連合は決して優れてはいないのだと」
「敗れたというのにまた随分と強気だな」
「三十倍の、いえ四十倍の差です」
これは単純に人口だけの差ではない。総合的な国力差もそこまで開いているのだ。連合とエウロパの差はかなりのものであり続けているのだ。
「それでも。戦い抜けたのは我々が優秀なのだと言っています」
「詭弁ではないのか」
クリシュナータはこう考えた。
「結局敗れているではないか」
「それはそうですが」
これは事実だ。ただし連合やマウリアにとっての事実だ。
「しかし彼等は滅びませんでした」
「あのままいけば確実に滅んでいた」
マウリアの仲裁がなければだ。少なくともオリンポスを占領されていたのは間違いないとさえ言われている。そこまで敗れていたのだ。
「それで言えるとはな」
「まああの時もエウロパは完全に滅んではいないでしょう」
「滅んでいなかったか。しかしだ」
ここから先もまたわかっていた。
「受けている傷は今の比ではなかっただろう」
「やはり首都が敵の手に陥ちるのは大きいですね」
「首都とは何か」
クリシュナータは真剣な顔で述べた。
「さっきも言ったが国家の心臓だからな」
「その心臓を奪われるということは大きいですね」
「その通りだ。心臓が複数あるのならともかく」
話が普通の生物から妖怪めいたものになった。妖怪の中には心臓

が幾つもあるとされているものもいるのである。有名なのはこの時代の日本が時々例えられる猫又という妖怪だ。長く生きた猫がなるこの妖怪は尻尾が二つあるのが特徴だが何とその心臓は九つあるのだ。

「エウロパは一つしかないからな」

「そこが中央集権的なあの国家の辛いところですね」

「中央集権国家は確かに便利だ」

今度の話は政治システムについてであった。

「政治をする上でまとめ易く監督し易いからな」

「ええ」

だからこそ古代中国で中央集権国家が誕生したのだ。あの秦の始皇帝の作り上げた秦王朝がそれだ。これは他の文明圏の諸国家にも普及しこの時代においても政治システム、統治形態の一つとして存在しているのである。要するに中央に権限を集中させそこから全体の政治を執るのだ。とりわけ独裁主義国家ではこの傾向が強い。

「エウロパの様な国家では確かに便利だな」

「その通りです」

「しかしだ。長所が短所だ」

古くからある諺が出た。

「政治をするうえではまとめ易くまた防衛においても考え易いが」

「一旦それを奪われるとなると」

「それだけで終わりだ」

そういうことであった。

## 第三十部第二章　茶は一つではないその十七

「少なくともそのダメージは途方もないな」
「そうそうは立ち直れない程のダメージになりますね」
「若し連合軍がオリンポスを占領していたらどうなったか」
現実的なシュミレーションの話であった。
「それは出ているか」
「まずエウロパ政府の威信が極めて落ちます」
最初にそれだった。
「そして」
「そして？」
「あらゆる産業が全面的に麻痺するでしょう」
「それによる経済的損失は膨大なものだな」
「飢え死にはいません」
それは保障することはできた。この時代は基本的にどの惑星、星系でも自給自足がある程度は可能な状況だったからだ。特に星系単位ではだ。
「ですがそれだけです」
「そうだな。それだけだな」
そうなのだった。飢え死にがないだけなのだ。しかしそれだけで生きられるかというとそうではない。ただ飢えていないだけなのだ。それだけなのだ。
「他の経済活動は精々星系単位になり」
「エウロパ全体としてはまさに心臓が止まった状態です。いえ、この場合は」
彼はまた言葉を言い換えた。
「脳が麻痺若しくは脳死の状態でしょうか」
「どちらにしろ意識はなくなる」
「その通りです」

クリシュナータの言葉に頷いた。
「国家を人と見るならば。その麻痺が続けば、です」
「一時であっても悪影響が残る」
「それを考えればやはりオリンポスを守り抜いてよかったです」
「そうだな。エウロパにとってな」
あくまでエウロパに限定するのだった。他の勢力にとってはそうではないのだ。
「その結果として今の復興も苦労しながらも何とかやっていけているな」
「占領されていたら破滅が確実でした」
確実とまで言われた。
「数年は碌に動けなかったでしょう」
「連合軍はそれを狙っていたふしがあるな」
「それは当然です」
話がまた軍事的なものになった。言うならば政治の中の軍事である。
「軍人としましては最終目標を決めるのは必然のことですから」
「その必然を果たした」
こう結論付けるクリシュナータだった。
「彼等の計画においてな」
「それがオリンポス占領だったのです。もっともそれを許可したのは政府ですが」
文民統制として当然のことだった。軍人は計画を出しそれを上申するがそれを許可するのは彼等を統括する文民なのだ。これは文民もまた軍事をある程度知らないと中々上手く機能しないものだ。これが文民統制、シビリアンコントロールの難しい点なのだ。軍事を知ってこそなのだ。
「中央政府です」
「連合のな。その決定者こそ」
「八条義統」

またこの名前が出た。
「彼が決めたのです」
「果たせなかったとはいえオリンポス占領を決定したのは何故か」
「勝利を果たす為だけではないでしょう」
彼はクリシュナータのここでのいささかとぼけた問いに対してまずはこう答えるのだった。
「それだけでは」
「ないというのだな」
「はい。まず首都を占領したならばエウロパの受ける傷はかなりのものです」
またこれが話される。
「致命的なまでに」
「その為に受ける傷を癒すのにかなりの年月がかかるな」
「その年月です」
彼が指摘するのはそこだった。
「年月か」
「そう、年月を必要としたのでしょう」
彼はそれをこれまでよりも主張するのだった。
「彼等の為に」
「彼等の為というと」
「連合軍、ひいては連合全ての為です」
こう述べられた。

## 第三十部第二章　茶は一つではないその十九

「エウロパとの戦いの後で。暫く宿敵であるエウロパが動けないようにする為なのかと」
「その為にそれを計画したのだな」
「ただ。エウロパとの戦いへの勝利を見ていたのだけではないのです」
　八条はエウロパとの戦いでの勝利を至上としていた。これは当然だ。しかしそれだけで終わらなかったのだ。それから先のことも見据えていたというわけだ。
「それからのこともまた」
「しやすいようにエウロパを動けなくすることを考えていた」
「そうです」
　答えはそれであった。
「その間に彼等の計画を果たすつもりだったのでしょう」
「それはおそらく彼等が今行っていることだな」
　今連合軍、言い換えれば国防省が行っている計画は様々なものがある。そのいずれもがかなり大規模なものだ。費用だけでなく時間もかなりかかるような。八条はそれを行うにあたり宿敵であるエウロパを当分の間動けなくさせることを計画したというわけなのだ。
「そこまで考えていたのか」
「あの長官、顔は整っていますが」
「うむ」
　マウリアにおいても八条は美男子として通り異性からも同性からも人気がある。マウリアから見れば異国情緒、日本のそれを具現化したような美男子なのである。
「その頭脳は。時としてかなり鋭利なものがあります」
「犠牲は最低限に収めようとするがな」
「その傾向は確かにありますね」

これは八条の考えの特徴の一つであった。
「一般市民への攻撃はしませんし」
「うむ」
「その生活を脅かすようなことはありません」
「実際に首都が占領されて経済活動が危機に瀕していても最低限の食料とエネルギーは維持できる」
「星系、惑星単位の活動はできますから」
「そうだ」
あくまで最低限であるがそれでも死なないのは事実だ。なおエウロパは各星系及び惑星の食料及びエネルギーの自給自足率がかなり高い。どの星系も充分やっていける程にある。これもまた連合中央政府国防省には事前に届いていたのだ。そこまで調べていたのである。
「敵対勢力とはいえ一般市民を極力害さずに戦いを進めていく」
「口では簡単に言えるが現実には難しい」
「その通りです」
なお必要かつそれが最も合理的ならば一般市民でも攻撃対象にしてきたのがかつてのアメリカ軍や中国軍である。ロシア軍もそれに同じだ。流石にこの時代では違うが。
「ですからそれを果たせる彼もまた」
「天才的ではないかも知れないが非常に優れた人物だ」
「戦略家であります」
八条はこう評価された。
「それもかなりの」
「オリンポス占領は適わなかったが」
「それで別の手を打っています」
「賠償金か」
「言葉は違いますが」
それであった。
「確か義援金だとか」

「だが実際は変わりはしない」
クリシュナータは実を言っていた。
「賠償金だな。敗れた者が支払う」
「はい」
「その額も実に巧妙だ」
「これは財務省の考えだそうです」
彼はこう付け加えてきた。
「財務省。連合中央政府のだな」
「その通りです。そこからこれだけの額ならばいいだろうと」
「そうだな。エウロパが支払える額だ」
それがまず重要なのだ。あまりにも高過ぎては支払うことができない。第一次大戦後のドイツへのそれはあまりにも高いものであり
これが第二次世界大戦の原因の一つにもなったのだ。
「しかも連合があの戦争でかけた費用を帳消しにし」
「尚且つエウロパの重荷にもなる」
「実にいい額だったな」
「その結果エウロパは財政面で苦労することにもなっています」
「それも目的だったからな」
だから当然のことなのだ。それを果たしたということなのだ。
「彼等にとってみればいいことだった」
「その通りです」
「連合軍は上手く動いているな」
結論としてはこうなった。ここまでの話で。
「やはりトップがしっかりしていると違うか」
「そういうことです。八条長官なくしてあそこまで動けはしないでしょう」
「そうだな。そして」
クリシュナータはまた言う。

## 第三十部第二章　茶は一つではないその二十

「今後それがまた大きく動く」
「どうなるかですね」
「情報収集は行っていく」
それは既に決定されていることだがあらためて言うのだった。
「そしてだ。交流も深めていくぞ」
「連合軍とですね」
「我々は彼等と戦うつもりはない」
それはなかった。全くと言っていい。
「絶対にな。戦わない」
「戦って勝てる相手ではありません」
「それ以上に戦ってもメリットがない」
「はい」
これが最も大きな理由だった。確かに連合の中にはマウリアと衝突している国もある。しかしそれはいずれも貿易や通商のことであり協議で解決できるものだ。だから武力を使うような問題ではないのだ。そういうことである。彼等もそれをよく踏まえているということなのだ。
「では。今後も」
「戦うことはなく」
「そして過剰に敵視されないようにしよう」
「敵視もですか」
「確かに友好関係にある」
これをまた大前提として話すのだった。
「しかしだ。相手の感情を見ていなければならない」
「政治の世界であってもですね」
「政治は誰が行うか」
次に話されるのはそこだった。政治とは誰によって行われるかと

いうことだった。
「それが問題だ」
「では」
「誰が行うか」
彼に対して問うた。
「言えるな」
「人です」
答えはこれだった。政治は人によって行われるものだ。コンピューターによっても機械によっても行われるものではない。そういうことだった。
「人が行うものです」
「だからだ。人は感情を持っているもの」
また言う。
「その感情を意識しなければならない」
「今回は利害とは別ですね」
「人は感情の生き物だ」
次の言葉はこうであった。
「時としてそれは利害を無視する」
「利害を」
「連合でも過去そういうことがあったな」
過去の事象について言及された。
「過度に対立しそれが互いの経済制裁につながったことが何度かあったな」
「はい」
そうしたことも連合の長い歴史の中では何度か起こっているのだ。事前に周辺各国や大国から止められたこともあれば起こってから仲裁を受けたこともある。武力衝突は流石になかったがそれ以外の衝突が起こり続けてきているのである。衝突は何も武力だけではないのだ。
「だからだ。我々もだ」

「それを踏まえて」
「連合は敵に回さないようにする」
こう告げた。
「その中のどの国もな」
「わかりました」
クリシュナータのその言葉に対して頷くのだった。
「それではそちらも今後重要になってきますね」
「連合はこれでいい」
連合については結論が出た。
「しかしだ」
「しかし？」
「まだ問題がある」
「サハラですか」
「お茶があるが」
不意にお茶のことを言うのだった。
「お茶ですか」
「飲むか？」
彼に顔を向けて問う。
「どうだ。一杯でも」
「宜しいでしょうか」
あらためてクリシュナータに対して問うてきた。
「お茶を」
「だから誘っているのだが」
また彼に対して声をかけた。

## 第三十部第二章　茶は一つではないその二十一

「そうですね。それでは」
「わかった。それではだ」
立ち上がった。それからマウリア風の棚からティーカップを二つ出した。陶器のものだ。
「マウリアの陶器ですか？」
「いや、違う」
それは否定した。彼に顔を向けて。
「連合のものだ」
「連合ですか」
「エストニアのものだ」
そしてこう答えた。
「向こうから贈られてきた」
「エストニアからですか」
「意外なようだな」
「否定はしません」
そのことに静かに答えた。実はエストニアは陶器で有名な国ではないのだ。どちらかといえば最先端の電子技術で有名な国だ。小国ながらそれで有名なのだ。
「陶器というイメージは」
「あの国も最近色々とやっているのだ」
話しながらそのエストニアの陶器を二つ棚から出した。
「電子だけでは駄目だと考えてな」
「そうなのですか」
「どうだ？」
その陶器を彼に見せた。
「このカップと皿は」
「いいものですね」

見たところ白と青の色使いがかなりいい。彼の気に入るものではあった。
「特に青が」
「この青を出すのに苦労したとのことだ」
「青をですか」
「向こうの人間から聞いた」
述べながら机の上にその二つのカップを置く。
「ただ青を出すだけでは駄目なのだとな」
「連合ではそうなのですか」
「青は青でも少し違う」
青について話す。
「コバルトブルーだが。そこに僅かに群青を入れたそうだ」
「群青色を」
「それで。この独特の青にしたらしい」
「細かいことを考えているのですね」
「かなりな。売る為にはそこまでしなくてはならないらしい」
こう話す。その青の上に今度は紅い茶を入れた。するとその青が変色し黒になるのだった。
「色が」
「工夫はこれもだ」
また彼に対して言う。
「色が変わるようにもしているのだ」
「考えたものですね」
そうクリシュナータに答えた。
「これはまた」
「連合はやはり凄いものがある」
クリシュナータもまた言う。
「こんなことを考え付くのだからな」
「エストニアですね」
また国名が出る。

「確かかつてバルト三国で」
「小さい国だがな。それでもだ」
「こうして工夫をしていると」
「言い替えればこうした工夫を常に考えていかないと生きていけない社会でもある」
「連合を見ていて思うのですが」
連合についての話になった。全体に関するものだ。
「彼等はどうもせわしないですね」
「そうだな。それはな」
彼のその言葉に頷く。
「常に何かにあくせくしている。いや」
「いや！？」
「何にでもか」
言葉を言い換えた。『何か』を『何にでも』に。
「何でもそうだな」
「彼等は時間の使い方があまりにもせわしないように思えます」
「彼等にしてみればだ」
まだ茶に手をつけてはいない。見れば彼もまた。
「我々の方が時間の使い方に問題があるそうだ」
「それもよく聞きます」
マウリアの者達もよく聞いていることであった。
「時間の概念があまりにも長いと」
「そうでしょうか」
その彼等にしては全く実感のないことなのだ。彼等にしてみれば時間とは悠久のものであるからだ。しかもここには大きな宗教的思想もあった。

## 第三十部第二章　茶は一つではないその二十二

「あくまで今の人生だけでは」
「そうだな。今の人生だけでは」
こう語られる。
「そうかも知れないが」
「何度も生まれ変わるのです」
彼等の考えではこうなのだ。時間の概念は今の人生だけではないのだ。次の人生でも時間が続いているのである。記憶もごく稀にだ。
「何度でも。しかし彼等はそれを理解していません」
「仏教があったな」
「はい」
連合では仏教徒も多い。しかしだ。
「しかしそれでも理解していないようなのです」
「おかしいな」
マウリアの考えに基いて首を傾げる。
「それはまた。仏教は」
「そうです。ヒンズー教の一派です」
彼等の考えではこうなのだ。連合でこれを言えば唖然とされる。連合においては仏教はあくまで仏教なのだ。古代のマウリア、即ちインドにおいてそれが生まれたことは知っていてもだ。
「しかしそれでも」
「理解していないとはおかしいな」
「どうしてでしょうか」
彼等にはどうしてもわからないのだ。
「それがわからないのは」
「人生は一度ではない」
輪廻転生である。マウリア独特の。この思想が日本においては特に非常に強く影響している。これは仏教においてそうなったのであ

る。
「何度でもあるのだ。だから焦る必要はないのだ」
「この宇宙にしろ」
さらに話が途方もないものになる。
「創造神ブラフマーの一日でしかないというのに」
「永遠の神々の一日だ」
「そうです」
そう考えるのだ。だがこの時代のマウリアの悠久はただ時間という縦の概念に対してだけではない。横の世界に対してもなのだ。
「無限の宇宙の中での」
「それでどうして焦る必要があるのか」
彼等はこう考えるのである。
「それがわからないな」
「そうです。不明です」
不明とまで言うのだった。
「極端な例では一分の遅れで批判をする場合があります」
「一分だ」
クリシュナータもまた話す。
「確か電車が遅れた場合だな」
「そうです。それで連合ではよく問題になります」
こう話される。
「電車が遅れたということで」
「マウリアでは一分なぞな」
「そうです」
ここからがマウリアであるのだ。
「半日遅れもな」
「ごく普通のことです」
そうなのだった。マウリアにおいては。
「それでどうして一分で騒ぐのでしょうか」
「わからない」

こう話す。クリシュナータも彼も。
「ほんの些細な時間で騒ぐその理由がな」
「半日遅れてもその日です」
マウリアの時間だ。連合の者達がどうしても理解できない。
「一向に問題はないというのに」
「だが彼等にとっては大きな問題だ」
「はい」
お互いに全く理解していない、できないのだ。一千年もの間同盟関係にありその交流も深いものがあるというのにだ。どうしてもであった。
「半日となれば」
「それで宇宙港で騒ぐ面々がいます」
「彼等は何日で騒ぐのだ？」
「二日です」
「たった二日でか」
「カルシウムが足りないのでしょうか」
どうしても理解できないのでこう述べた。

## 第三十部第二章　茶は一つではないその二十三

「港で二日遅れといえば」
「至って普通だ」
そうなのだった。マウリアにおいては。
「大体だ。半日遅れともなれば」
「既に別の便が来ています」
「大体一時間に一本だったな」
「そうです。過疎地においては三時間程度でしょうが」
「三時間に一本か。僅かな時間だ」
「その僅か三時間でも待てないのです、彼等は」
首を傾げながらの言葉が続く。話をしていてもやはりまだ茶には手をつけてはいない。食べることに関してもマウリアはかなり遅いと連合では言われている。
「それどころか怒ってしまって」
「本当に短気だな」
「短気過ぎます」
なお待つその間マウリア人達は寝たり本を読んだりする。そうして時間を過ごすのだ。
「どうにもこうにも」
「あの短気さが連合をあそこまで発展させたといえばさせたのだがな」
「僅か千年で」
「そうだな。僅かの間に」
彼等にしてみれば千年の時間も僅かなのだった。それ程まで時間の概念が連合とはかけ離れていたのである。そういうことであるのだ。
「そこにまで至ったのです」
「それを考えると短気もいいものか」

「到底賛同はできませんが」
「確かにな。だがその彼等との付き合いはこれからも続く」
「はい」
クリシュナータのその言葉に頷く。
「サハラに関しても」
「サハラに関しては様子を見ましょう」
「じっくりとな。今のところはオムダーマンの調子がいいが」
「まだそれは確固たるものではありません」
「もう二つ程度勝利が必要か」
クリシュナータはここで左手を口に当てて述べるのだった。考える顔をしている。
「そうなれば違うな」
「違いますか」
「ティムールもだ。最低限アヤグーズを倒さなくてはな」
「今のところはコムでの戦いに勝利しただけです」
「それだけでもかなりのものだが」
それは認める。
「もう一つだな」
「ではアヤグーズを」
「そうなれば優位が確定する」
クリシュナータはアヤグーズを滅亡させることがティムールの戦略的優位性を確立させると示唆した。それを冷静に見ていたのであった。
「彼等の戦場ではな」
「確立されますか」
「そうだ」
彼が言うのはそれだった。ティムール軍の戦略的優位性の確立についてだ。
「それが果たせるかどうかはそれにかかっている」
「アヤグーズ軍は今首都に戦力を集結させています」

「首都にだな」
「はい」
こうクリシュナータに述べた。
「残っている星系にある戦力を全て」
「全てか」
「それだけでなく」
言葉をさらに続ける。
「ハサン軍も動員した兵力を援軍に」
「決戦は近いか」
クリシュナータはこう見た。
「ハサンの西においては」
「南でもまた」
オムダーマンにも話が向かう。
「オムダーマン軍が北上しています」
「第一防衛ラインを突破してだな」
「そうです。あれもまた思わぬ行動で」
彼等にしてみれば思わぬ行動であったのだ。アッディーンのあのコロニーレーザーを使った派手な防衛ライン突破は。少なくとも予想したものではなかった。

## 第三十部第二章　茶は一つではないその二十四

「コロニーレーザーを持って来てその攻撃で防衛ラインを崩すとは」
「そうだな。ただ艦隊だけで突破するだけではなかった」
ただ突破することも可能であった。しかしアッディーンはそれを避けたのだ。
「損害を恐れてな」
「そのうえで第一次防衛ラインを突破し」
話は続く。
「今は第二次防衛ラインに向かっていますが」
「どうなるかな」
クリシュナータは今後のオムダーマン軍の動きに注目するのだった。
「普通に考えればかなり無謀な動きだが」
「しかしそれも一見です」
一見だと述べた。
「やはり彼の軍事行動は」
「そうだ。理に適っている」
よく見ればそうなのだ。一見して奇襲の連続であるがその奇襲さえも理に適っているのがアッディーンなのだ。全てが適っているのである。
「それは今回もな」
「コロニーレーザーに関しましては」
話はコロニーレーザーに戻る。
「あれは確かに防衛ライン突破に役立ちます」
「そうだ。普通の認識では防衛用の兵器だがな」
「ええ」
コロニーレーザーは防衛ラインに置かれているのが普通である。しかしそれだけに使えるかというとそうではないのだ。誰もそれに

気付いていないだけなのだ。
「それを発想を変えてか」
「見事と言うべきです」
クリシュナータの言葉に頷く。
「しかし」
「しかし。何だ？」
「より凄いのはコロニーを持ってあれだけの速度で突破したことです」
「それか」
「そう、それです」
彼が指摘するのはそれであった。
「コロニーは何しろ固定されているのが普通です」
「うむ」
そうなのだ。ある程度惑星を軸として円運動を行っているがそれでも固定されているのと同じである。少なくとも艦隊の様に動くものではないのだ。
「それを持って来てあれは」
「見事な艦隊運営と統率力だな」
「それにも優れているということですね」
「統率力についてはもうわかっていた」
それに関しては既に、であった。
「だが。艦隊運営もか」
「幕僚に優れた者がいるようです」
こうクリシュナータに述べた。
「後方参謀達にも優れた人材がいますが」
「あの副司令官か」
ここである者の名が出た。
「ガルシャースプ上級大将か」
「ガルシャースプ上級大将」
彼もその名前を聞いてその目をいぶかしげなものにさせた。

「確か」
「名前は知っているな」
「はい、一応は」
こう答えることはできた。
「しかし」
「それ以上はわからないか」
「申し訳ありません」
「謝る必要はない」
それはよしとした。それには至っていないということだった。
「それはな」
「左様ですか」
「しかしだ」
だが言葉は続けるのだった。
「彼のことは知らないのか」
「アッディーン副大統領が巡洋艦の艦長をしていた頃からの部下だとは聞いています」
「うむ」
そのことで名前は知られている人物なのだ。
「ですがそれ以上は」
「知らないか」
「何をしているのかもあまり」
「確かに艦隊を率いたことはない」
ガルシャースプはそうした存在ではないのだ。艦隊司令になったことはないのだ。

## 第三十部第二章　茶は一つではないその二十五

「作戦を指揮したこともな」
「ありません。確かに」
「そう。そして」
言葉は続く。
「目立つ人間でもないしな」
「目立つということは確かにありませんね」
そのこともまたガルシャースプをして目立たないようにさせているのだった。ただアッディーンの側にいる人間としか見なされていなかった。今も殆どの者にとってはそうだ。
「中には影だのいるだけだのいった悪口も」
「それは完全な的外れのようだな」
「といいますと」
「だからだ。運営だ」
クリシュナータが指摘するのはそこだった。
「確かにアッディーン副大統領は軍政も優れている」
「はい」
「そのことでオムダーマン軍はかなり合理的にもなっている。しかしだ」
「彼だけでは、ですか」
「予算や艦隊を動かすのはかなり難しい」
こうも述べる。
「普通の政治と同じだ」
「同じということは」
「官僚だ」
次に出た言葉は官僚という単語だった。
「官僚。それでは」
「そう。軍官僚だ」

あらためてこう述べた。軍官僚であると。
「八条長官は政治家だな」
「ええ」
これは否定できない。彼こそまさに政治家だ。しかも超一級の。
「そしてアッディーン副大統領は軍人だ」
「その通りです」
生粋の軍人である。戦争というものに関して天才的な才能を見せる軍人なのだ。
「しかしだ。彼は」
「官僚であるというのですね」
「制服を着ている者の中にも官僚は必要だ」
これもまた事実である。官僚はただ文官の中に入ればいいというものではないのだ。軍においては制服組の中にも必要なのである。
「それが彼なのだ」
「だからアッディーン副大統領の側にいるのですね」
「ただの副司令官だけではない」
それをあえて言ってみせる。
「彼は。そうした存在なのだ」
「ずっと前から不思議には思っていました」
彼は真剣な顔で述べた。６
「だから側にいたのですか」
「オムダーマンは文官もしっかりしているしな」
「ええ」
話が戻った。
「そしてそれは文官だけではなかったのですね」
「そういうことだ。官僚か」
官僚について考えるのだった。
「連合や我がマウリアでは政治家と官僚は全く別の存在だな」
「はい」
「特に政治家と軍人は」

「コントロールする者とされる者という関係だけではなく」
そうした関係にあるのは事実である。政治家は官僚や軍人をコントロールして政治を行うのだ。官僚は実際にそれを行う。そうした関係なのだ。
「政治を決めて指示を出す立場とそれを実際に行う立場」
「そうですね」
そうなるのだった。
「それが連合やマウリアだが」
「我々にはそうしたカーストもありますが」
「それはな」
連合ではこれはそれぞれの職業選択によりかなり決まるのだがマウリアではここにカーストが入るのだ。これが連合とマウリアの大きな違いだ。政治家であるカーストと官僚であるカーストがあるのだ。ただしこれは法律のうえではそれは否定されている。そこがまた複雑なのだ。
「確かにあるな」
「カーストがない連合はあくまで個人の選択ですか」
「それで優秀な人材が我々より容易に手に入るのか」
「少なくとも彼等はそう思っているようです」
階級社会を全否定する連合らしい考えであった。彼等は階級社会はあらゆる可能性を潰す諸悪の根源だと考えているのだ。確かにそういう見方も可能だ。

## 第三十部第二章　茶は一つではないその二十六

「ですが。少し短絡に思います」
「あらかじめある程度の将来が決まっていればそれに適応させていくことができる」
「そうです」
「それにだ」
ここからが特にマウリア的思想であった。
「運命でそうなることを決められているのだしな」
「その通りです。その人生においては」
「それがどうしても理解できないのだな、彼等は」
「残念と言うべきか仕方がないと言うべきか」
「やはり文明が違う」
クリシュナータが選んだ言葉は彼が提示したどちらでもなかった。文明の違いに言及するという第三の言葉を選んだのである。そういうことだった。
「結局のところはそうだ」
「そうなりますか」
「そうだ。それでだ」
連合のことをまた止めて話を戻した。
「サハラ各国だが」
「まだ政治家と軍人、官僚の違いが曖昧ですね」
「儀礼的に軍服を着るのとは違う」
これもまた日本に関してだ。日本では連合軍設立まで国防相は文民であるが儀礼の場においては日本軍元帥としての軍服を着ることがあったのだ。しかもそれは主席元帥としての待遇であり文民でありながらこう定められていたのだ。なお軍の最高司令官は言うまでもなく国家元首である天皇である。陛下もまた儀礼の場において軍服を着られることがあったし今も時折ある。この軍服は日本軍最高

司令官である大元帥としての軍服であった。詰襟で黒と金色の軍服をである。ただし軍の最高司令官であるが実質的な権限は首相にある。ここが立憲君主制の軍の指揮の特徴である。
「実際に軍服を着た国家元首もいた」
「はい」
所謂軍事政権というものだ。
「将軍が蔵相や文相を務めることも多いな」
「官僚がそのまま閣僚になることもまた」
「そこが大きく違うのだ」
議会制民主主義とはまた違う世界なのだった。なお連合中央政府や各国、マウリアにおいてもおおむね閣僚や高級官僚はトップが直々に任命する。即ちスポイルズ＝システムが主流である。これに対してエウロパでは貴族主義のうえに官僚がそのまま高級官僚になるメリット＝システムの傾向が強い。
「我々とサハラはな」
「だからアッディーン副大統領もあれでいいのですね」
「軍服を着た副大統領」
「左様です」
少なくとも連合やマウリアでは有り得ない話だ。
「マウリアではいいのですか」
「それどころか国家元首でもいいからな」
「ええ。クーデターで政権を握った将軍もいましたから」
軍がクーデターを起こして政権に就くというのももう連合やマウリアでは夢物語だ。彼等は地球にあった頃にそんな話をなくしているのだ。
「それもまたよしですか」
「皇帝もだろうな」
最後に出たのは皇帝であった。
「皇帝ですか」
「知ってはいるな。当然」

言葉が念押しになる。
「サハラを統一した者はサハラの皇帝になる」
「預言によりですか」
「ムハンマド以前の預言者だがな」
イスラムにおいては預言者はムハンマドで最後なのだ。彼こそが最後の預言者でありイスラムが最後の教えだというのはイスラムなのだからだ。
「だからだ。先の預言者のだ」
「その預言により、ですか」
「サハラを統一したならば皇帝になる」
「人類の中で三人目の皇帝ですか」
「日本、そしてエチオピア」
連合にいる二人の皇帝である。
「そしてサハラになるな」
「皇帝になればその権威はかなりのものとなります」
「そうだ。何しろ皇帝だ」
皇帝という言葉がことさら強調される。
「王の上に立つ、な」
「ただ。こうも言われていますね」
「むっ！？」
ここで彼の言葉に注目する。
「何とだ」
「皇帝は誰であろうとなれるが王はそうではないと」
「欧州でのことだな」
「そうです」
本来王は族長のようなものである。皇帝はローマ皇帝なのだ。エウロパでは皇帝といえばローマ帝国皇帝を指す。三千年前から変わらないことだ。

## 第三十部第二章　茶は一つではないその二十七

「ですから。皇帝は然程尊くないといった意見もあります」
「エウロパ的発想で言えばそうだな」
しかしクリシュナータはそれはあくまでエウロパ的なものに過ぎないと一蹴した。
「だがサハラでは違う」
「違いますか」
「スルタンであり」
まずはイスラムの王の称号が出た。今もサハラでは王はこう呼ばれる。古来は貴族を広くこう呼んでいたのだがこの時代ではそうなっているのだ。
「カリフである」
「カリフですか」
「そうだ、カリフだ」
イスラム教の最高指導者である。かつてはイスラム世界では最も権威ある存在であった。アッバース朝があった頃はそうであり王はカリフを称することもあった。
「つまりスルタン＝カリフだ」
「トルコ皇帝と同じですね」
「あのオスマン＝トルコとか」
「はい、彼等はスルタン＝カリフ制を採っていましたから」
それでキリスト教的視点から言えば世俗的、宗教的統合を果たしていたのである。だがイスラムは元々市井の宗教なのでこの視点は決して正解ではない。
「そうなりますね」
「そうだな。そうした意味での皇帝だ」
「ですか」
「イスラムではだ」

ここが重要であった。
「民族は関係ない、あまりな」
「文化も」
「全てがイスラムの下にある」
それだけ絶対的な宗教なのだ。
「他の文明や宗教も認められる存在だが」
「あくまでイスラムの下ですか」
「認められるのだからな」
だから下になるのだ。イスラムはこの際に様々な特典を見せて改宗をさせることも忘れない。これがイスラム教が瞬く間に広まった理由でもある。
「この場合はイスラムの下にあるとされる」
「やはりイスラムが絶対であると」
「その絶対のイスラム世界を統括する存在だ」
それがサハラの世界での皇帝なのだ。
「イスラム教の最高指導者にしてな」
「国家元首であると」
「その皇帝になるのだ」
あらためて語られる。
「統一を果たした者はな」
「そして若しかするとこれから統一が果たされる」
「見せてもらおう」
クリシュナータのその端整な顔が微かに笑った。
「それをな」
「わかりました」
「ところでだ」
あらためて彼の顔を見上げてみせてきた。
「君の名前は何といったかな」
「クマラージュです」
彼はクリシュナータの言葉に応えて己の名を名乗るのだった。

「ムワタ＝クラマージュ」
「それが君の名だな」
「そうです。防衛省に在籍しております」
「わかった。ではその名前覚えておこう」
クリシュナータは静かにこう応えた。
「今後もな」
「是非共」
「では今日は御苦労だった」
これで話を終わらせるのだった。かなり長くなった話であったが。
「お茶を飲んでから終わりにしよう」
「このお茶をですね」
「そうだ。美味いか？」
「はい」
今の問いにはにこりと笑って答えてみせてきた。
「まだ一口飲んだだけですが」
「ならもっと飲むといい」
クリシュナータもにこりと笑って言葉を返す。
「この茶は飲めば飲む程味が深くなっていくからな」
「わかりました。それでは」
クマラージュもそれに応える。それから二人でその茶を楽しむのであった。その茶は確かに飲めば飲む程味が深くなり楽しませるものであった。

# 第三十部第三章　疾風の追撃その一

疾風の追撃

第一次防衛ラインであるヘルマンド要塞を陥落させたアッディーン率いるオムダーマン軍。彼等はヘルマンドに留まることはなかった。

「このまま進め」

アッディーンは既に指示を出していた。

「カラクームに向けてな」

「カラクームを攻略されるのですか？」

「確かにそうだ」

何故かここでは一言でそうだとは答えなかった。旗艦であるアリーの艦橋に青い軍服と白いマントで立ちその姿で遥かな銀河を見据えながらの言葉であった。

「だが。それより先にだ」

「先に」

「追いつくぞ」

こう述べるのであった。

「彼等に」

「彼等にといいますと」

「ヘルマンドを脱出した敵軍だ」

その敵軍のことであった。

「まずは彼等を捉える」

「捉えますか」

「このままカラクームに逃げ込ませるわけにはいかないからな」

遥かな銀河を見据えながらの言葉だった。モニターに映し出されているその銀河は遥かな悠久の世界でありそこに映るのは星達と宇宙だけである。

「その前にだ」

「捉えるというのですか」
「その通りだ」
後ろに控える参謀達に対して述べる言葉だった。
「速度はこのままでいい」
「このままですか」
「既に彼等の予定速度よりも先に進んでいる」
アッディーンは冷静にこう述べるのだった。
「そうだったな」
「はい」
参謀の一人が彼の言葉に答える。航宙参謀である。
「彼等は彼等の最大速度で進撃しています」
「うむ」
アッディーンは相変わらず前を見据えたままその言葉に応えている。
「ですが我々は」
「それ以上に、だな」
「とりわけこの高速艦隊はです」
冷静な言葉が続く。
「彼等の予想すら超えて先に進んでいます」
「彼等はまだ知らないのだ」
アッディーンは言う。
「我々の高速艦隊の速度にな」
「既に我々の機動力は知っている筈だがな」
「ええ」
既にオムダーマン軍の、とりわけアッディーン率いる軍の機動力はサハラだけではなく人類社会全体にも伝わっている。幾多の戦闘を見てだ。
「それは間違いありません」
「しかしだ。それでもか」
「はっ」

ここでモニターが切り替えられた。参謀のうちの一人の手によって銀河の映像からオムダーマン軍とハサン軍のものになる。それを見たうえで話が行われるのだった。
そこには北に向かうハサン軍の赤とそれを追うオムダーマン軍の青があった。オムダーマン軍の青は今まさに二つに分かれようとしていた。それを見ながら話をするのだった。
「ここにもありますが」
「うむ」
「ハサン軍は彼等の最大限の速度で進んでいます」
「その通りだ」
その報告を聞いたうえで頷くアッディーンだった。
「確かにその速度はかなりのものです」
「ワープも多用しているな」
「そうです」
アッディーンの問いに答える。
「かなりの無理をしている程です」
「無理を承知でというわけか」
「そして」
さらに言葉が続く。
「全艦艇を何とか維持しています」
「一隻も脱落者を出さずにか」
「今ハサン軍も兵を失うわけにはいきませんから」
これは戦略的な理由からであった。

## 第三十部第三章　疾風の追撃その二

「彼等は。数だけしかありませんので」
「その数のうえでの優位を少しでも損なわずにだったな」
「ええ」
「だからか。あの速度は」
見れば確かにハサン軍は急いでいる。しかしそれでもその速度は思ったよりも速くはない。そこに問題があった。
速度が出ないのには理由があった。それはハサン軍の艦艇であった。
「ハサン軍は我々とは編成が違います」
「彼等は戦艦だけではないな」
「はい」
アッディーンのその言葉に頷くのだった。
「足の遅い補給艦や工作艦も多々あります」
「そしてその中には」
さらに言葉を続ける。
「負傷兵も多いです。艦艇もまた」
「損害を受けているものが多いな」
「負傷兵を満載しそのうえダメージを受けている艦艇が多ければ」
「足が遅くなるのは当然だな」
「その通りです」
またアッディーンの言葉に頷くのだった。
「そこが我々とは大きく違います」
「コロニーレーザーはあのままでいいのですね」
「今は持って来ているだけでいい」
これがアッディーンの返答だった。やはり前を見たままであり冷静な言葉を続けていた。その黒い目をモニターに向けさせ戦場を見据えてだ。

「今はな」
「それではそのように」
「予定通りここで高速艦隊を分ける」
アッディーンは言った。
「わかったな。ここで分ける」
「そして彼等の先回りをして」
「挟み撃ちにする」
アッディーンが得意とする機動戦術だった。それをまた使おうというのだ。
「しかしだ」
「しかし？」
「ただ普通に挟み撃ちにするのではない」
こう述べてみせてきた。
「高速艦隊を二つに分ける」
「二つにですか」
「そうだ。そうする」
彼は言った。
「まずは高速機動部隊の一方は私が率いる」
「わかりました」
皆アッディーンの言葉に頷く。
「そしてもう一方は」
「誰が」
「マトラ大将だ」
彼が出した名前はマトラであった。
「彼をだ。それでいいな」
「マトラ大将ですか」
それを聞いたハルシークがその鋭利な顔の表情をその顔と同じものにさせた。そのうえで述べるのだった。
「何かあるか」
「攻撃で一気に決められるのですね」

彼が問うたのはそこであった。
「今回の作戦は」
「そうだ」
ハルシークの言葉に答えた。
「今回の攻撃は何としても敵を逃がすわけにはいかない」
「左様ですか」
「そうだ。何としてもな」
また告げる。
「彼等に合流されるわけにはいかないのだ」
「後方の防衛ラインにですね」
「そうなれば厄介なことになる」
「厄介なことに」
彼は言う。
「敵の戦術はわかっているな」
「ええ、確かに」
「防衛ラインを突破される度に残った兵力を後方に退けそれを続けて戦力を増大させつつ戦う。それを続けていけばどうなるか。わかるな」
「はい」
ハルシークはアッディーンの言葉に頷いた。

## 第三十部第三章　疾風の追撃その三

「我が軍は消耗戦を強いられます。そしてそれこそが彼等の狙いです」
「わざわざ彼等の狙いに乗ることはない」
アッディーンはまた言った。
「だからだ。敵を捕捉して殲滅若しくは降伏させる。いいな」
「降伏させますか」
「できることならな」
彼とても敵を無意味に殺戮するつもりはなかった。だがそれでも戦闘を避けるつもりはなかった。ただ無意味な殺戮を好まないだけだ。相手が降伏するのならそれならそれでいいというのが彼の考えである。今回もそれで済むのならそれでいいと考えていたのである。
「それならそれでいい」
「降伏させられるならそれに越したことはないです」
これは殆どの者が思うことだった。
「しかし。それも捕捉したうえですね」
「その通りだ」
またハルシークの言葉に頷く。
「敵が抵抗しなければいいのだがな」
「そうですね。相手が賢明なことを祈ります」
「そうだ。そうなるならな」
アッディーンはあくまで無駄な戦闘を避けるつもりだった。戦いが避けられればそれでいいと思っていたのだ。それならば無駄な損害も避けられるからだった。
「敵将は誰だったか」
「確かラフジャサーン上級大将です」
「ラフジャサーン上級大将か」
「そうです。彼です」

その彼だと言うのだった。
「調査によると慎重な人物です」
「慎重か」
「はい」
またアッディーンに答える。
「あくまで我々の調査に基きますが」
「そうか。それなら無駄な血を流さなくて済むな」
「ですが」
しかしここでラシークはまた言うのだった。
「それも彼等を捕捉することができればのことです」
「その通りだ。捕捉しなければ何にもならない」
その通りだった。アッディーンはそのことを考えて行動を取っているのだ。だからこそ兵も進ませるのである。
「わかったな」
「はい、それでは」
「兵を三つに分ける」
こうも言う。
「三つに分け二つは高速機動部隊であり」
「後の一つは」
「それが最も兵が多いということになるが」
言葉は続く。
「そこにはコロニーレーザーもある。今度の戦いには左程役には立たないかも知れないが要塞攻略においては存分に役に立ってもらう」
「その指揮は」
「ラーグワート大将だ」
オムダーマン軍の長老格の一人でありそれと共にアッディーン指揮下の提督の中ではとりわけ老練な用兵を見せることで評判となっている人物である。その彼を指名したのであった。
「彼に頼もう」
「わかりました。それでは」

「これで指揮官は揃った」
アッディーンは言う。
「次の戦いのな」
「それでは今から」
「軍を三つに分ける」
あらためて指示を出す。
「わかったな」
「はっ」
こうしてアッディーンは兵を三つに分けて追撃にかかった。その頃ヘルマンド要塞から撤退するハサン軍はラフジャサーン大将の指揮の下必死に軍を北に逃がしていたのだった。
彼等は全軍で撤退していた。彼等はその中で何とか落伍者を出すまいと必死だった。
「いいか」
彼は己の乗艦において部下達に告げていた。
「何としても全員カラクームにまで入れる。いいか」
「はい」
部下達もそれに応える。
「ここで一兵も失うわけにはいかんのだ」
「その通りです、閣下」
「そうだ。ところでだ」
ここで彼は部下達に対して問う。

## 第三十部第三章　疾風の追撃その四

「何でしょうか」
「オムダーマン軍の動きはどうか」
それを問うのだった。彼等もオムダーマン軍の動きは警戒しているのである。
「来ているか」
「迫って来ているのは間違いありません」
部下の一人が答えた。
「我々を」
「そうだな。だからこそ急がなければ」
「カラクーム要塞側は何時でも迎え入れる準備ができているとのことです」
また部下の一人が答える。
「すぐにでも」
「そうか。それならばいい」
「そういうことです」
「そういえばだ」
ここでラクジャサーンはまた部下達に問うてきた。
「何でしょうか」
「ハッサームはどうした」
ハッサームの名を出してきた。
「彼は大丈夫か」
「はい、ハッサーム閣下でしたら」
部下の一人が答える。
「今のところ安静にしておられます」
「そうか。ならいいがな」
彼はそれを聞いてまずは安心したように頷くのだった。
「あの時の戦いでの傷がかなり重かったからな」

「確かに」
部下達はラクジャサーンのその言葉に応えた。
「あの戦いでは多くの戦死者及び戦傷者を出しました」
「その損害は思ったより甚大でした」
それは彼等の予想を大きく越えたものであった。とりわけ戦傷者が多くその移送もまた彼等にとっては頭の痛い問題となっていたのだ。
「人員だけでなく艦艇もまた」
「それだ」
ラクジャサーンもそれを言う。
「工作艦は動かしているな」
「動かしていますが何分移動中でして」
「しかも損傷を受けている艦艇が多く」
追いつかないというのだ。それが問題だった。
「速度は思ったよりも」
「困ったな」
その報告を聞いてあらためて暗い顔になるラクジャサーンであった。
「もっとも普通に考えてオムダーマン軍の追撃を受ける可能性はないがな」
「はい」
これは計算に基いての結論だった。
「幾ら彼等でも要塞を掌握してからでは」
「間に合いません」
こう考えていたのだ。彼等の戦略にも沿っていた。
「ですからこのままでも間に合います」
「安心はしていいかと」
「そうか。不安にかられるのもな」
ここでラクジャサーンは指揮官の考えになるのだった。
「かえってよくない。ここは落ち着きも必要だ」

「はい、その通りです」
「ですから」
「わかった」
あらためて部下達の言葉に頷くラクジャサーンであった。
「それではな。このまま友軍の場所にまで向かうと」
「それが宜しいかと」
「それで司令」
話が変わった。部下の一人が時計を見て彼に報告するのだった。
「何だ」
「時間です」
「時間！？」
「そうです。昼食の時間です」
それを彼に告げるのだった。見れば確かにその時間であった。この場合の時間は艦内時間である。大抵は地球の時間に合わせている。ラマダンも同じだ。
「ですから」
「うむ。それでは」
ラクジャサーンはそれを聞いてまずは言うのだった。

## 第三十部第三章　疾風の追撃その五

「最初にラマダンをだな」
「その通りです。まずはそれです」
「うむ」
　これはムスリムとして欠かせなかった。彼等はその余裕があれば無理をしない体勢でラマダンをすることになっている。この教えはこの時代でも健在だ。
「では」
「食事の前にな」
　それぞれ懐から大きくなる敷物を出してそこに座る。それからラマダンをはじめる。その独特の誓いを述べながら礼拝をする。そのうえで食事とするのだった。
　今回の食事は戦場食だった。これは移動中なので当然だった。
　メニューは缶詰のクスクスと羊の缶詰だった。飲み物は粉末式のオレンジジュースだ。ラクジャサーンはそれを艦内の士官室に置いて部下達と共に食べるのであった。
　缶詰はあらかじめ湯で温められている。その温かい戦場食を食べながらふと部下の一人に対して問うのであった。
「ところで」
「何でしょうか」
　その部下が羊の肉を食べながら彼に応えた。
「この戦場食のことだが」
「はい、これが何か」
「今我々が食べているのはクスクスだな」
　話はそれに関するものだった。クスクスは連合だけでなくサハラでもよく食べられている。麦であり主食の一つと言っても過言ではない存在だ。
「はい、クスクスですが」

「これはオムダーマン軍でもあったな」
「確か」
その部下は答えた。
「彼等も同じサハラですししかもクスクスは保存にもいいですから」
「そうだな」
クスクスが保存にいいというのは確かだった。
「小麦にルーをかける」
「はい」
要するにそれだけだ。実に簡単な料理である。しかしそれだからこそ美味いのだ。なお日本人の間でもこの時代は好まれている料理の一つだ。カレーに似ていると言われている。
「それだけだがな」
「それだけなのがかえっていいのでは」
逆説的な言葉であった。
「シンプルなのがかえって」
「確かにな。これは戦争でもそうか」
「戦争でもですか」
「そうかと」
ラクジャサーンの言葉に応える。
「かえって簡単に考える方がいい時もあります」
「今回はどうか」
「今回もそうかと思います」
こう述べた。
「ただ撤退するだけですから」
「そうだな。撤退するだけだ」
要するにそうだ。一言で言えば。
「ただしだ」
「はい、ただしです」
ここで話が動くのだった。
「ただし。何だ」

「敵に追いつかれたら何もかもが終わりです」
こう述べるのだった。
「今後の軍全体の戦略にも関わります」
「そうだ。だから何としても逃げなければいけない」
彼等の立場からはこうなのだ。何があろうとも第二次防衛ラインに入らなければならないのだ。だからこそ彼等も必死なのだ。
ラクジャサーンはさらにクスクスを食べる。ただその顔はあまり晴れてはいない。部下達はそんな彼の顔を見て本人に声をかけるのだった。
「閣下」
「何かありますか」
「うむ。味だが」
「味ですか」
「そうだ。クスクスのだ」
話がクスクスに移るのだった。見ればまだクスクスを食べている。
「味についてどう思うか」
「いいのでは？」
「そうですね」
彼等もまた同じクスクスを食べている。だからそれに応えることができた。
「美味しいかと」
「そうは思われないのですか？」
「いや、思う」
正直にこう答える。

## 第三十部第三章　疾風の追撃その六

「味はいい」
「そうですね。味覚にも考慮されていますし」
「やはり。まずい食事というものは」
彼等は食事についての話もするのだった。これについては当然と言えた。やはり食事の良し悪しというものは確実に将兵の士気に影響するのだ。
「そういえばですな」
「連合軍は」
「彼等か」
ラクジャサーンは連合軍と聞いて顔を微妙なものにさせた。
「連合軍はかなり特別らしいな」
「そうです」
あくまで彼等の基準から言えば特別なのだ。
「何しろ食事の良し悪しも宣伝材料になりますから」
「宣伝材料か」
この言葉が出た。
「そうです。宣伝材料です」
「それです」
部下達も言う。
「美味い料理が好きなだけ無料で食べられる」
「それもまた宣伝材料に」
「連合ではそれは宣伝材料になるのか」
だがラクジャサーンはその言葉にはいささか以上に懐疑的であった。
「連合軍は我々よりも遥かに豊かだな」
「はい」
その通りであった。平和に経済的発展を続けておりその文化や文

明を発展させてきた。文化の中には料理も含まれているのである。
「だから。味もまたかなりのものだと思うが」
「連合の人間が言うにはです」
連合全体についての話にもなる。
「我々の食事はお世辞にも美味しいものとは言えないとか」
「このクスクスもか」
「そうです」
それもまた話される。
「そしてそれは連合軍についても言えます」
「そうだな」
ラクジャサーンもそれに頷いた。
「舌が肥えている。だが無料で好きなだけ食べられるというのは」
「確かに魅力です。しかし」
「やはりそれでも人気がないのが現状です」
結局はこうなるのだった。
「そうだな。それで」
「はい」
話が移った。
「連合軍もそれで苦労しているようです」
「我々にはわからない苦労だな」
兵を集めようと思えば召集をかければそれだけでいいサハラでは完全に別世界の話だった。彼等にとってみればそうなのだ。
「それでも百三十億です」
「かつてサハラでもそこまで人口を持っている国は少なかった」
「上から数えた方が早かったです」
サハラは総人口で二千億だが多くの国に分裂していた。だからそこまで人口を持っている国も少なかったのだ。最近では三国に大きくまとまってきているが。
「国が大きいというのはそれだけで力です」
「連合と融和路線を続けていて幸いだったか」

ラクジャサーンは考えてから述べた。
「彼等を相手にすれば我々も」
「はい、おそらくは」
これはここにいる全ての者がわかっていた。軍人として。
「一触鎧袖だったかと」
「そうだな。億単位の戦力を集めるだけでも必死だというのに」
「そうです」
数があまりにも違っていたのだった。
「ですから。我々の連合への外交は正しかったのです」
「そうだ。外には融和的に接し」
この場合の外とは連合のことである。やはり彼等にとって連合とは外の世界なのだ。
「内には硬軟両方だ」
「それが我がハサンの外交でした」
「そうだった。ところがだ」
ハサンは基本的に外交の方針として敵を一つに絞っていたのだ。それはその一つの敵を集中的に攻撃する為だ。だから今は彼等にとってはかなり特殊なケースなのだ。
「今はオムダーマンとティムール両方を相手にしている」
「その通りです。それがまた」
戦略上大きな問題になっていたのだ。二正面作戦が戦略上極めて苦しいものであるのはハサンに関しても同じなのだ。とりわけ国力の問題において。
「どちらを相手にすべきだったか」
「どちらかをですか」
「そうだ。オムダーマンかティムール」
言うまでもなく今交戦中の二国の名前だ。
「その彼等のうちのいずれを相手にすべきだったか」
「難しい質問です」
部下の一人が答えてきた。

## 第三十部第三章　疾風の追撃その七

「国力的にはティムールを相手にすべきですが」
「その後でオムダーマンだな」
「オムダーマンは広い」
「はい」
西方と南方を完全に掌握している。その勢力圏だけを見ればハサンよりも上だ。しかしハサンはサハラにおける最大の人口密集地帯を掌握しており産業も発達している。それだけに国力が高かったのだ。オムダーマンと比べてもかなりの差があったのだ。
「その距離を考えればな」
「攻めにくいものがあります」
「そうだ」
そこを言うのだった。
「首都アスランまではかなりのものがある。それを考えれば」
「オムダーマンとの戦いはかなりの難しいものがあります」
「そうだな。それだ」
そうなのだった。オムダーマンとの戦いはハサンにとっては距離の問題で非常に問題のある戦いであり続けていたのだ。しかしそれでも今戦われているのも事実だった。
「補給路もかなり伸びるな」
「それはオムダーマンも同じの筈ですが」
「そうだ。しかし」
ラクジャサーンはここでまた言った。
「彼等はそれを解決しているな」
「まずはアスランから」
「うむ」
軍事作戦は宙理的には全てその国の首都からはじまる。そうした意味で軍といった組織は極めて中央集権的な組織なのである。これ

はどの時代でも変わらない。
「カッサラに補給ラインを設け」
「あのカッサラ星系だな」
「そのアッディーン副大統領が中佐の時に活躍しその勢力圏とした場所です」
「そうだったな」
その時のアッディーンの活躍が彼をしてその名を知らしめることになった。それをも考えるとこの戦いは非常に歴史的に意義のある戦いであった。
その戦いのことを今艦内で思う。敵将のことを。
「それを考えればカッサラの存在はあらゆる意味において非常に大きいな」
「その通りです。カッサラの存在は今やオムダーマン軍にとってはかけがえのないものです」
「西方の戦いでも南方の戦いでも重要な存在だったな」
「補給基地として」
「それは今もです」
彼等の国との戦いにおいてもそうなのだった。カッサラ星系は重要な補給基地としてオムダーマン軍にとって恩恵となっているのだ。
「そしてそこからまた」
「我々との国境に続いているのだな」
「幾つかの中継地を置いての補給となっています」
そういうことだったのだ。補給ラインを整備したうえせ戦争に挑んでいるのがオムダーマンなのだ。そしてそれはアッディーンのことでもあった。
「しかもです」
「その速度も速い」
「はい」
今度は機動力についても語られる。
「我が軍の艦艇よりも」

「しかし。今は大丈夫だな」
「間違いなく」
部下の一人が確信をその顔に見せて答える。
「ですからこのまま撤退を続ければ問題ありません」
「そうだな。だが最大限急がせるぞ」
「その通りです」
これについては誰も異論がなかった。
「それでだ」
「はい。今度は」
「最初にふと思ったことだが」
話題が変わるのだった。
「オムダーマン軍もまた同じクスクスを食べているのだな」
「クスクスですか」
「そうだ。このクスクスだ」
既に食べ終えたクスクスの缶詰を見下ろしながら話をする。
「戦場食に入っているのだったな」
「はい、それは間違いなく」
「だが。同じクスクスだろうか」
「向こうではトマトのソースが多いそうです」
「トマトか」
「ええ。エウロパで言うとイタリア風の」
イタリアの名前が出た。この時代においてはイタリア料理はエウロパだけでなく連合でも非常によく食べられている。またこのサハラにおいてもかなり取り入れられているのである。
「トマト味のソースをかけて食べることが多いとか」
「トマトか」
ラクジャサーンはトマトと聞いて少し怪訝な顔になるのだった。

## 第三十部第三章　疾風の追撃その八

「それは美味いのか」
「オムダーマンでは人気だそうです」
「人気があるか」
そう言われてもピンと来ない顔をしていた。
「わからないな」
「トマトはお嫌いで？」
「いや」
部下のその問いは否定した。
「そうではないが。ただ」
「ただ？」
「クスクスに合うのかと思ってな」
彼が言うのはそこであった。
「それはどうなのか」
「そうですね」
それに応えて部下の一人が述べてきた。
「クスクスは小麦から作ります」
「ああ」
これはもう言うまでもないことだった。小麦から作らなければそれはクスクスではないと言っていい。米で作ればカレーになってしまう恐れがある。
「ですから。小麦もまた」
「合うか」
「パスタと同じです」
次に話に出したのはパスタだった。
「パスタか」
「そうです。そのパスタです」
またパスタを言う。

「パスタにはトマトを使ったソースが多いです」
「それはな」
これについてはもう言うまでもなかった。あまりにも有名であった。かなりサハラ風にアレンジはされているがサハラ各国でもパスタは食べないわけではない。この辺りは原理主義的考えの者達にしてみれば受け入れられるものではなく反発もあるがそれでも食べられてはいるのだ。
「ですから合うようです」
「そうか。機会があれば食べてみたいな」
ラクジャサーンはここまで聞いてこう述べたのだった。
「一度な」
「そうですね。ところで閣下」
ここで話が変わった。
「食事も終わりましたし」
「そうだな」
見ればもう皆食べ終わっていた。食後のインスタントコーヒーも飲んでしまっていた。だがのんびりというわけにもいかないのが現状だった。
「では。艦橋に戻るか」
「はい」
「それでは」
こうして彼等は艦橋に戻った。彼等が艦橋に戻ったその頃。アッディーンはアリーの司令室において戦場食を食べていた。やはりそれはクスクスの缶詰だった。
その缶詰は暖かいものだった。それとソーセージを食べている。見ればクスクスのソースはトマトとガーリックをメインにして茄子を入れたものだ。イタリア風であった。それとソーセージにやはり粉末の、彼はグレープジュースを飲んでいた。それとザワークラフトとピクルスであった。
そういったものを食べていた。食べるのは早く僅かの間に半分程

度を食べていた。その彼に側に控えていた将校の一人が述べてきた。
「司令」
「どうした」
「只今偵察に出していた無人偵察艇が敵を発見しました」
「敵をか」
「はい」
敬礼して彼に答える。
「こちらの予想通りの進路を進んでいます」
「そうか。予想通りか」
アッディーンはそれを聞いてまずは表情をそのままにさせていた。だが食事をする手は止めていた。そのままで彼の話を聞いていたのである。
「ではこちらも予定通りでいいな」
「予定通りですか」
「そうだ。遭遇まで六時間だったな」
「そうです、六時間です」
将校はすぐに答えてきた。
「それだけの時間があります」
「わかった。ではまずは各員をに交代で休息させよ」
アッディーンの最初の指示はこれであった。
「二時間交代でな。そして動いている者で交代で準備をさせる」
「わかりました」
「最後の二時間は総員で戦闘準備に入る」
「総員で」
「いいか」
アッディーンはあらためて彼に言う。

## 第三十部第三章　疾風の追撃その九

「ここで彼等を逃がせば後の戦いにも大きな支障が出る」
「支障が」
「それはわかっているな」
今度は問うのだった。
「はい、無論です」
「わかっていればいい。だからだ」
また言うのだった。
「最後の二時間は総員だ。では」
「すぐにでも」
「そうだ。休ませる者は休ませ」
戦争では休息も必要だということだった。
「働く者は働かせる。まずはそれでいい」
「了解しました」
「今のうちにだ」
今度は今のうちに、という言葉が出た。
「英気を養っておかなければならない」
「では司令」
ここでその将校はまた言ってきた。
「食事に関しては」
「五時間後だ」
こう告げるのだった。
「五時間後にやはり戦場食だ。いいな」
「わかりました」
「ただ。連続して戦場食というのはな」
アッディーンはそのことを少し思うのだった。
「将兵の士気に関わるだろうか」
「別にそれは意識しなくともよいと思います」

バヤズィトが述べてきた。彼もこの場に控えていたのだ。
「いいのか」
「はい。エネルギーには充分に考慮したものでありますし」
まずはカロリーについて言及した。カロリーをエネルギーと呼ぶのはオムダーマン軍では時々あり特に気にするものではなかった。
「また栄養も味覚も」
「味覚もか」
「不充分ではない筈です」
その言葉には自信さえあった。
「我が軍の食事は」
「そうだな」
これについてはアッディーンも異論はない。今食べているからわかることだった。そういう意味ではラクジャサーンと同じなのだが彼がそれを知る由はない。
「最近味があがっていると思うのだが」
「あえてそうしたのです」
バヤズィトの弁であった。
「後方支持部があえてです」
「将兵の士気の為だな」
アッディーンはそれを聞いてこう述べた。
「やはり味か」
「それとです」
彼はさらに言ってきた。
「種類も量も増やしました」
「そちらもか」
「司令のお食事もです」
今彼が食べているそれのことであった。
「これは普通の将兵と同じものの筈だな」
「はい」
オムダーマン軍においては階級に関係なく同じ場所で食べる。た

だし将校は士官室でだ。ここが誰もが同じ食堂で食べる連合軍と違うところだ。
「それは誰もが同じです」
「これで格別美味いわけではないのか」
「どうでしょうか」
あらためてアッディーンに問うてきた。
「この味は」
「さっきも言ったが」
こう前置きして言ってきた。
「美味い。少なくとも私が幼年学校にいた頃とは全くの別物だ」
「幼年学校のですか」
「あの時は酷いものだった」
その言葉は実に正直なものだった。確かに粗食で贅沢な食事に馴れておらず味について文句は言わないアッディーンであるがそれでも味覚は鋭いのだ。だがそれを普段は言わないだけだった。それを考えれば今の言葉はかなり異例のことである。だが紛れもない事実であった。

## 第三十部第三章　疾風の追撃その十

「あの時はそうも感じなかったが」
「そうだったのですか」
「やはり。あれか」
ここでその時の状況が述べられる。
「幼年学校の訓練は厳しい」
「はい」
まずはこれがあった。
「そして育ち盛りだからな。それを考えれば」
「まずは味より量ですか」
「必然としてそうなるな」
軍ではよくあることだった。まず栄養と量なのだ。その二つがクリアーされてようやく味なのだ。保存も重要であるがそれはまた別である。
「だから詰め込むのに必死でそこまでは味わっていなかった」
「味わっていませんでしたか」
「全くな。今思えばだが」
振り返ってようやくわかることであったのだ。
「酷いものだった。味が濃いだけで」
「濃いだけで」
「今食べているのは確かに戦場食だが」
まずはこの前提があった。しかしその前提を置いてもであった。
「いい味をしているな。香辛料の使い方も見事だ」
「それを研究したのだとか」
サハラでは香辛料の使い方が極めて重要だ。地球にあった頃から豊富な香辛料に囲まれておりそれがこの時代にも至っているのである。
「そうか。それでか」

「幼年学校の香辛料の使い方は」
「胡椒は胡椒だけ、唐辛子は唐辛子だけだ」
「またそれは随分と」
「酷いものだと思うな」
「はい」
そう答える他なかった。
「それと比べるとやはり今のこのクスクスは」
「いいものだ。これなら士気も保てる」
「そう思います。そういえばですね」
「何だ？」
「糧食の担当官が言っていました」
この場合は文官になる。オムダーマンの国防省にも背広組が多くいるのである。その中の一人の言葉であるとバヤズィトは言うのである。
「以前の戦場食は酷いものしか作れなかったと」
「作れなかったのか」
「はい、理由は簡単なことで」
ここで理由について言及された。今まで食事がよくなかった理由が。
「予算がなかったからです」
「予算がか」
「はい。そのかなりの部分が兵器の開発及び製造に向かい」
サハラの軍ではよくある話だ。その結果として軍人の生活が連合やマウリアに比べてかなり質素なのだ。これはオムダーマンでもティムールでも同じだ。
「そこにまで予算が回らなかったのだそうです」
「食材にか」
「調理器具にも」
そこにまで話がいく。
「予算が回らなかったそうです」

「そうか。それでか」
アッディーンもそれを聞いてまた何かを察したのだった。
「焼き加減もかなりいい加減だったのは」
「そういえば最近の艦艇のキッチンはかなり充実しています」
「そこにも予算が回されたか」
「国が大きくなったせいです」
まずはそれだった。
「予算もかつて西方にいた時とは比べ物にならない程ですし」
「予算の額か」
「そうです」
やはりそれも大きいというのだ。
「その運用もまた」
「調べてみたのだ」
アッディーンは言う。
「軍事費のうちのかなりの部分を占めていた兵器の開発及び製造だが」
「はい」
話が少し戻っていた。
「それに無駄が多かったのだ」
「無駄ですか」
「主計部と技術部に調べさせなおさせた」
これも軍政のうちである。軍政と一言に言っても多岐に渡るのだ。
「その結果かなりの無駄があったからな。その分を他の場所に回し」
「そして」
「同時に予算の他の部門に関するものもチェックさせた」
彼は徹底的にやったのだ。予算を決めるのも軍の最高指揮官である彼の仕事なのだ。軍のトップというものはその仕事も実に多いのだ。

## 第三十部第三章　疾風の追撃その十一

「その結果予算をかなり見直したからな」
「それでですか」
食事の味が上がった理由は。
「味がよくなったのは」
「そういうことだな。あとだ」
「はい」
「軍の数や編成も合理化したしな」
それも理由の一つであった。
「確かに軍の数は増やしたがそのまま各国の軍を集めたわけではない」
「はい」
数は思ったより少ないのだ。オムダーマン軍はその将兵を厳密な選抜徴兵制にしている。表向きは徴兵制だがその実際はそうなのだ。これは他の多くの国でも同じだ。サハラにおいては。
「それもよかったのだな」
「一つになればそれだけ軍にかける費用が少なくなります」
「そういうことだ」
オムダーマンでもティムールでもこれは同じだった。
「その結果だな。そしてだ」
「そして」
「それが結果として軍の士気や動きをさらによくさせたな」
「はい。その通りです」
バヤズィトはアッディーンの言葉に頷いてみせた。
「今回の作戦においてもそれが影響しています」
「では六時間後だ」
予定の時間が告げられた。
「双方から攻撃を仕掛ける。いいな」

「はっ」
「向こう側の動きはどうか」
高速機動部隊を二つに分けている。そのも一方について問うたのだ。
「あちらの動きは」
「連絡が取れない為よくはわかりません」
あえて連絡を取っていないのだ。敵に通信を傍受される危険を考慮してのことである。彼等はあくまで隠密裏に行動しているのだ。今のところは。
「ですが」
「信頼していいな」
「間違いなく」
自信に満ちた返答であった。ハルシークからの言葉だった。
「彼等もまた。我々と同じ動きを執ってくれているものと確信しております」
「横からだ」
また作戦が述べられた。
「アタチュルク大将に期待しよう」
「その通りです」
「それではだ」
ここで彼は食事を終えた。すぐに従兵達が缶詰やコップを片付ける。彼はその間に席を立って扉に向かうのだった。
「艦橋に向かうぞ」
「わかりました」
周りにいる将兵達がそれに応える。
「では今から」
「四時間はゆっくりできる」
彼はまた言った。
「その間に英気を養っておくようにな」
「わかりました。それでは」

「それでだ」
アッディーンもまた再び言葉を発する。既に扉に近付いている。
「ハサン軍を倒した後は」
「どうされますか」
「捕虜となれば武装を完全に解除し最低限の監視をつけ後方に送る」
まずは捕虜の処遇について述べる。
「無闇な流血はアッラーの望まれるところではない」
「はい」
サハラで無闇な虐殺が少ないのはこの考えがあるからだ。イスラムは戦いを否定してはいない。ジハード、即ち聖戦という思想がそれだ。しかし無闇な流血は好むところではないのだ。また残忍な拷問や処刑も嫌われる。全てはコーランにのっとり行われるのだ。それがサハラなのだ。
「それは肝に銘じておいてくれ」
「わかっております」
「それだけだ」
「戦うならば」
「こちらも戦う」
ラシークに一言で答えた。
「それだけだ」
「そうですか。それだけですか」
「おそらく大した戦いにはならない」
彼はそれと共にこうも読んでいた。

## 第三十部第三章　疾風の追撃その十二

「一戦で終わる」
「そうですね」
それにラシークも同意して頷くのだった。
「まず彼等は敗残兵ですし」
「そうだ」
まずはそれであった。
「そしてその中には負傷者やダメージを受けている艦艇も多々あります」
「戦力的には大したことがない」
彼の読みは当たっていた。
「だからだ。戦うとしても一戦だ」
「ではやはり捕虜に」
「敵の指揮官が余程無能でなければな」
こう表現した。
「そうなるな」
「わかりました。それではそのように」
「捕虜の護送の用意はもうできているな」
「無論です」
ラシークは自信に満ちた笑みで今度の彼の言葉に答えた。
「それは既に」
「よし、ならば何の問題もない」
今のラシークの言葉を聞いて満足気な声で応えたのだった。
「では。私は艦橋にいる。何かあればすぐに報告するようにな」
「はっ」
「それでは」
参謀達はＣＩＣに向かう。そこで様々な情報収集にあたるのだった。彼等も今から様々に動いていた。それが身を結ぶのは六時間後

だった。
　その六時間後。オムダーマン軍は姿を消していた。通信を遮断し隠密裏に行動していたのだ。その上の方にハサン軍の艦隊があった。
「ハサン軍の動きはどうだ」
「予想通りです」
　艦橋に戻っていたラシークが彼に述べる。
「我等に気付いた様子はありません」
「レーダーは効かしていないのか」
「いえ」
　それは否定した。
「かなり効かしています。電波の反応はかなりのものです」
「そうか。思えば当然だな」
「はい。ですが」
「ですが」
「我々の通信妨害と電波の遮断には対応できていません」
　こう報告するのだった。
「とりわけこの件に関しましては」
「塗料か」
　アッディーンは言った。
「艦艇に塗っている塗料だな」
「その通りです」
　またアッディーンに応えるのだった。
「塗料が電波を吸収しその反応を上手く消しています」
「いいことだ」
「技術部の優れた開発です」
　素直に技術部に感謝するのだった。こうした塗料による電波吸収は二十世紀末からある。その当時画期的な兵器だと言われたステルス戦闘機にもそれが使われているのだ。
「それと電子戦機です」
「それもだな」

「連合軍の戦術を応用しましたが」
この電子戦機の使用も二十世紀後半からありこの時代でも存在し続けているが大規模に使ったのは連合軍がはじめてだ。オムダーマン軍はそれを採用したのである。
「これがかなり効いています」
「そうか。それもか」
「そうした複数の事情から敵には発見されていません」
結論としてはこういうことだった。
「では今から」
「攻めるぞ」
一言であった。
「一気にな。いいな」
「はい、それでは」
ラシークはそれを効いてまた述べた。
「電子戦機は」
「収容しろ」
もう出す必要はないということだった。
「姿を隠す必要はなくなった」
「はっ、それでは」
「全軍に告ぐ」
同時に通信の遮断も止めた。最早それも必要ないということだった。アッディーンの行動はあえて大胆なものにしていた。その大胆さを今敵にも見せていると自覚しながらだった。

## 第三十部第三章　疾風の追撃その十三

「攻撃目標は右斜め上だ」
「右斜め上」
「そうだ」
モニターが三次元立体映像になる。そこに自軍と敵軍が映し出されている。オムダーマン軍は青で、ハサン軍は赤で。それぞれ表されていた。
「右斜め上だ。一気に攻めるぞ」
「はっ、それでは」
「進路はそちらに変える」
これも伝えた。
「既に友軍は向かい側にいる。挟み撃ちとする」
「下からのですね」
「その通りだ。一気に決める」
こうも告げるのだった。告げるアッディーンの顔に緊張が走っていた。それは今まさに敵に切り込む戦士の顔だった。彼もまた戦士なのだ。
「わかれば。続け」
最初にアリーを動かした。軍の先頭に立つ。
「勝利にな」
「よし、行くぞ！」
「全軍突撃だ！」
それに彼の指揮下にある全艦艇が応えて動きだした。皆上に向かって急行する。
「我等に勝利を！」
「アッラーよ御照覧あれ！」
口々にこう叫んで敵に突撃する。ハサン軍はそれをモニターに見て驚愕で支配された。

「右斜め上及び左斜め上から敵です！」
「何だと！」
ラクジャサーンはモニターを見てもまだシンジら得なかった。
「まさか。ここで出て来るとは」
「ですが司令」
参謀の一人がそれでも彼に言う。
「実際に今」
「それだけではない」
彼はさらに言うのだった。顔は狼狽で引き攣っている。
「今まで。発見できなかったのか」
「はい」
「残念ですが」
幕僚達からの言葉が届く。
「どの艦艇からもそれは」
「ありませんでした」
「広く円形にレーダーを出していた筈だ」
これへのぬかりはなかった。彼とても無能ではない。伊達に将官を務めているわけではないのだ。ハサン軍では将官は国王自ら任命する形になっている。それだけに無能では務まらないのである。少なくとも極端に無能ならば大佐で終わる。そういう組織なのだ。しかも中将だ。そうはなれないのだ。
しかしその彼が狼狽する。それだけのことであるということだった。彼のその狼狽と驚愕は続く。その間にも敵軍が迫っていることを虚ろに見ながら。
「それが。どうしてだ」
「司令」
その彼に幕僚達が声をかける。
「どうされますか」
「どうするかだと」
「そうです」

あらためて彼に問うのだった。
「このままでは敵にむざむざやられてしまいます」
「それは即ち」
「わかっている」
顔中に汗を流していた。脂汗だ。その中の一雫が口の中に入り彼に塩の味を与えた。見れば幕僚達もその全員が脂汗を流していた。
「ここは」
「迎撃ですか」
「いや」
その問いには首を横に振った。
「それは無理だ」
「左様ですか」
「あまりにも負傷者及び破損した艦艇が多い」
理由はそれであった。第一の。
「そのうえエネルギーもミサイル等の弾薬も残り僅かだ。真っ当な戦闘は期待できない」
「それは確かに」
「否定できません」
幕僚達も彼のその言葉に頷く。その通りだった。彼等が戦力になるのはあくまで次の要塞に入りそこで補給なりを受けてからの話なのだ。それがないなら戦力にはならないのだった。
「ではここは」
「そうだ」
また答えた。
「それしかない」
「では司令」
「敵艦隊に通信を入れよ」
ここからの動きは迅速であった。焦ることも止まることも許されなかった。

## 第三十部第三章　疾風の追撃その十四

「我が軍は降伏するとな」
「わかりました」
「仕方がありませんね」
「悔やむしかないがな」
ラクジャサーンの言葉は実に苦いものだった。その苦さを噛み締めながらの言葉だった。
「だが。このまま無駄死にするよりはましだ」
「その通りです」
サハラでは降伏は恥ではない。生きていれば何時かは、という考えなのだ。だから彼等はここであえて降伏を選んだのである。そういうことであった。
「では。今から」
「うむ」
部下達の言葉に頷く。
「降伏すると通信を出せ。よいな」
「はっ」
敬礼で返す。こうしてこのハサン軍の方針は決まった。
ハサン軍からの降伏申し入れをアッディーンは突撃する中で聞いた。シンダントがその中で彼に対して問うてきた。
「閣下」
「降伏のことか」
「そうです。どうされますか」
「決まっている」
前を見据えたまま彼に答えた。
「受諾する」
「受諾ですか」
「先にも言った筈だ。戦いがないことに越したことはない」

それをあえてまた言うのであった。
「だからだ。喜んで受諾しよう」
「はい。それでは攻撃は」
「中止する」
既に攻撃態勢にも入っていたのだ。そこまで準備はできていたのだ。攻撃はただ命じるだけではできはしないのだ。とりわけ宇宙での戦いにおいてはそうである。
「敵艦隊の直前で止まれるな」
「今ならば」
シンダントはまた答えた。
「ここで指示を出せば間に合います」
「わかった。では全軍停止だ」
まずはこう指示を出した。
「それから攻撃中止だ。よいな」
「はっ」
アッディーンの指示に対して幕僚達の敬礼が帰った。
「後は彼等を武装解除しそれから後方に遅らせる」
「そして我々は」
「先に向かう」
これもまた予定通りだった。だからその言葉は簡潔で強いものだった。迷いもなかった。
「本隊と合流した後にな」
「わかりました。それでは」
「いい具合に終わった」
アッディーンはここで満足気に述べた。
「損害を出さずにな。さて」
「さて」
「これでハサン軍はどうなるかな」
敵軍について考えるのだった。
「第一陣の軍の合流はこれで果たせなくなったが」

「再び戦略の破綻ですか」
「第一の破綻はヘルマルド要塞の容易な陥落だった」
陥落させた本人の言葉である。だからこそ説得力のあるものであった。彼は簡潔であるが自信に満ちた声でそれを述べたのである。
「そして第二が」
「今だと」
「本来は戦力の一割程度を消耗させ撤退し」
「第二防衛ラインに入りさらに戦いを挑む」
「増大した戦力でな。こちらの戦力を少しずつ削り取っていくつもりだった」
「そのうえで」
シンダントはまた言う。
「最後には勝利を」
「そうだ。これは我々の戦力が消耗しなければ成り立たない話だ」
「はい」
その通りだった。戦力を消耗させるのが目的であるのにそれができなかったとなれば。もうそれで戦略の意味がなくなってしまう。そういうことであるのだ。
「これで第一次防衛ラインの件は終わった」
「では第二次は」
「第一次と同じだ」
言葉はここでも簡潔なものであった。

## 第三十部第三章　疾風の追撃その十五

「一気に攻め落とす」
「コロニーレーザーで以って」
「あれの移動は順調だな」
「無論です」
幕僚の中の一人が彼に答える。
「今本隊から連絡がありましたが順調に移動させているとのことです」
「よし、ならばいい」
アッディーンはそれを聞いて満足した顔で頷いた。
「それではだ。進むまでだ」
「カラクーム要塞まで」
「そのカラクームだが」
今度はそのカラクーム要塞について話が為された。
「どうだ。その護りは」
「おおむねヘルマンドと同じものです」
ラシークが述べてきた。
「ヘルマンド要塞と同じか」
「確かに宙形も違いその配備されている兵器の数も違いますが」
「その傾向は同じだな」
「その通りです。ですから」
「コロニーレーザーの攻撃が有効か」
「ただ。おそらくは」
ここでラシークは言葉の色を少し変えてきた。
「その攻撃はもう知られています」
「そうだな」
これについてはアッディーンももうわかっていた。
「彼等とて愚かではない」

「はい」
まずはこの前提が述べられた。オムダーマン軍にしろハサン軍を決して侮ってはいない。確かに人材は減ったがそれでも極端に無能な人間がいるとは思ってはいなかった。それを見るだけの冷静かつ的確な目を持っていたのだ。とりわけアッディーンとその幕僚達はそうだった。
「既に通信なりで情報は伝えているな」
「間違いなく。ですから」
「そうだ。しかしだ」
「しかし」
「情報はもう届いている」
まずこれは確実だと断定した。
「しかしだ。対策はまだできてはいない筈だ」
「対策は、ですか」
「我々には巨大なレーザー兵器は艦隊にはなかった」
ハサン軍もわかっていることだ。
「それに対する対策は進めていない」
「ではカラクームでもまた」
「一斉射撃だ」
またしても簡潔に述べてみせるのだった。
「コロニーレーザーのな。いいな」
「はっ、では攻め方はヘルマンドの時と同じで」
「その通りだ」
ここでも答えは決まっていた。
「コロニーレーザーの射撃で攻略するぞ。いいな」
「了解しました」
「では予定通り」
「さて。これでカラクームはいい」
アッディーンは考える顔で述べた。
「これで第二次防衛ラインまでは陥落させることができる。楽にな」

「楽にですか」
「問題はこれからだ」
「第二次の後ですか」
「まだ多重に防衛ラインが敷かれているな」
「はい」
ラシークがアッディーンの言葉に答える。
「それこそ彼等の王都まで」
「長いものだ。おそらく何時かは対策を出してくるだろう」
「我等のコロニーレーザーに対して」
「そうだ」
彼の言葉に頷いてみせた。
「問題はそれが何かということだが」
「何をしてくるでしょうか」
「それもまだわからない」
その問いに対しても首を傾げるだけだった。だがその動作にしろ優柔不断なものは見えない。毅然としたものに見えるのはやはり彼がアッディーンだからであろう。彼以外ではとてもそうは見えない筈だ。

## 第三十部第三章　疾風の追撃その十六

「まだな」
「左様ですか」
「その時はこちらが対策を出す番だ」
「対策には対策で」
「目には目をだ」
　諺で例える。
「それで行く。その場合はな」
「わかりました。それではそのように」
「さて。それではだ」
　ここまで話し終えたうえで話を変えた。
「軍を集結させた後で北に向かう」
「北にですね」
「そうだ。第二次防衛ラインを突破する」
　あらためてそれを述べた。
「わかったな」
「はっ」
「それでは」
　参謀達もそれに応えた。
「そのように」
「ではまず集結を」
「そうだ。それではな」
　早速軍の集結がはじまっていた。まずはそれまで左右に分かれていた高速機動艦隊がであった。今一つになろうとしていた。
　彼等は集結しさらに本隊とも合流する。そのうえで進撃を開始するのだった。
　オムダーマン軍のことについては連合でも話題になっていた。この勝利もネットで話になっていた。そのことについて掲示板群の中

でも書き込みが相次いでいた。
『オムダーマン軍がまた勝ったな』
『またか』
『ああ、一兵も失わずに敵を全部捕虜にしたらしい』
このことが書かれる。
『おいおい、ハサン軍もだらしないな』
『最近へたってないか？』
部外者特有の無責任な書き込みも見られる。これはネットでは付き物だった。
『ハサン軍。どうしたんだよ』
『兵隊が弱いのかね』
こうした意見も出た。彼等から見ればハサン軍はそう見えるのだ。しかし話はそれだけでは終わらなかった。分析はそれだけではなかったのだ。
『いや、ハサン軍は強いぞ』
『強いか？あれだけ連敗しているのにか』
『オムダーマンだけでなくティムールにも負けているだろ』
このことについても書かれた。
『連戦連敗の軍が強いのか？』
『だよな』
率直な疑問だった。またこれもネット特有の本音の書き込みだった。
『普通は弱いだろ』
『二十世紀のイタリア軍よりはましか』
『同じじゃないのか？』
当時のイタリア軍は連合においては笑いものの代表になっている。あまりにも弱いどころではない見事なやられっぷりが伝説になっているのだ。ところが連合との戦いにおいてはイタリア人も果敢に戦っておりその強さも見せていたので誰もが今のイタリア人は弱いとは思ってはいなかった。むしろ強いとさえ思っていた。とりわけ貴

族はであった。イタリア貴族もまた勇敢に戦い圧倒的な物量と装備を誇る連合軍に立ちはだかり向かってきたのである。
『あそこまで笑える話はないけれどな』
『まああれはな』
イタリア軍についてはここに書き込む皆が知っていた。
『戦死者一万で捕虜が三十万か』
『脱走が二十九万だ』
『他にもあったな』
『ああ』
それだけではないのだ。イタリア軍は他にも色々な話が残っている。第一次世界大戦の時も弱かったが第二次世界大戦においても同じだったのだ。
『三分の一の相手に負けていたな』
『しかも惨敗だ』
『ムッソリーニは何を考えていたんだ？』
当時のイタリアの指導者についても言及される。
『政治家としては優秀だったのにな』
『ああ、政治家としてはな』
『人間としても結構いいおっさんだったみたいだな』
連合においてはそれ程イタリアの評判は悪くはない。エチオピアのように過去侵略を受けた国もあるが見事に撃退したり苦戦させたりしているので悪感情はないのだ。勝った相手には悪い感情なぞ持たないのが人間というものである。従ってイギリスやフランスにはかなり悪い。
『それがどうしてな。自分の軍隊はわからなかったんだか』
『謎だよな』
ムッソリーニの評判も実は悪くはない。

## 第三十部第三章　疾風の追撃その十七

『ドゥーチェもなあ』
『何やってんだか』
『格好だけじゃ駄目なんだよ』
『そうそう』
また笑いながら書き込まれる。
『ローマ帝国のあれだよな』
『あの行進な』
ムッソリーニはイタリア軍の行進をローマ帝国式にさせたのである。駆け足で右手を掲げているものだ。だが強さはローマ帝国軍にはならなかったのだ。
『制服もいいんだけれどな』
『ファッションセンスは昔からだな』
『そうだよな。連合軍よりいいんじゃないのか？』
こっそりと連合軍の軍服への不満が書き込まれた。
『あのスーツはないだろ』
『あんた、エチオピア人か日本人だろ』
すぐに突込みが入った。
『それかどっかの王国の人間だな』
『違うか？』
『何でわかったんだよ』
相手もそれを否定しない。
『そうだよ、ケベック人だよ』
『やっぱりな』
『そうか』
皆それを聞いて納得するのだった。予想通りだったのだ。
『ケベックの軍服も詰襟だったからな』
『廃止されたけれどな。っていうか採用されなかったな』

連合軍設立の時の話になる。あの時に軍服が定められたが君主制のほぼ全てで採用されていた詰襟は採用されず共和制の全部と言っていい割合で採用されていたスーツタイプが採用されたのである。最終的な決定者は八条だったが彼は多数決で決めたのである。噂によれば日本人である彼は本音では詰襟にしたかったのだと言われている。真相はわからないが結局スーツタイプに決定されたのである。

『それまだ言うのか』

『ケベック国軍は詰襟だろ』

『まあな』

一応詰襟の軍服は各国の国軍に残ってはいる。

『じゃあいいじゃないか』

『残ったんだからな』

『やっぱり軍服は詰襟の方がいいだろ』

それでも彼は書くのだった。

『それでどうして』

『おい、話がずれてるぞ』

ここで注意が入った。

『元に戻せ』

『そうだな』

多くの人間がその書き込みに賛同する書き込みを入れた。

『まあその話は軍服関連のスレでな』

『そういうことでな』

『ああ、わかったよ』

そのケベック人も彼等の言葉に従う。それでこの掲示板からは姿を消したのだった。そのうえで話は元に戻り色々と続けられるのだった。

『で、ハサン軍だよな』

『ああ。連中ってそんなに弱いか？イタリア軍よりはましだろ』

『大体弱いのか？』

そこに疑問符が打たれる。

『実際のところは。どうなんだよ』
『負けてはいるよな』
これはどうしようもない事実だった。動かすことができない。
『しかもかなり』
『まあそれはな』
『北と南で連戦連敗だ』
『結構やばいレベルにまではいってるな』
こうしたことはもう彼等の耳に届いている。そこも話される。
『やっぱり弱いだろ』
『あのハイド教授も強いって言っていたしな』
冗談めかしてハイドの名が出て来た。
『あの予想が絶対に外れるあの人がな』
『ああ、ハイド元帥か』
あえてこう呼ばれているのである。普通は予想が常に逆になるということは相当なことがない限りはない。このハイドの予想は常に外れているので元帥と呼ばれているのだ。彼は連合軍設立は失敗だと言い八条は無能だと言い治安はよくならないと言いエウロパが勝つと言っていた。それで今回はハサン軍は精強でありオムダーマン、ティムール両国を破ると言っていたのである。

## 第三十部第三章　疾風の追撃その十八

『あの人が言うんだから弱いだろ』
『いや、強さは相対的だろ』
理性的な言葉が書き込まれた。
『結局のところ』
『まあそうだが』
それは誰もがわかるのだった。そうした書き込みが実際に出て来た。
『それじゃああれか』
『あれ？』
『ああ。ハサン軍が弱いんじゃない』
まずはハサン軍について述べられた。
『オムダーマンにティムールが強いんだ』
『ここの兵はそんなに変わらないんじゃないのか？』
すぐにこう突込みが入った。
『実際のところは。ハサン軍もそんなに弱兵じゃないだろ』
『海賊退治とかを見ていたらな』
『海賊退治か』
『ああ、これ見ろ』
掲示板にデータが出て来た。これまでのハサン軍の海賊等との戦いでのデータだ。見ればそれは損害が極めて少なく戦果が大きいものであった。
『かなりいいだろ』
『確かにな』
『連合軍並だな』
実際のところ連合軍も海賊相手には無敵に近いのだ。しかしであった。
『いや、連合軍は数があるから』

『それはな』
『それと装備もな。しかも連合の宇宙海賊はサハラのそれと違うだろ』
　両者の違いが話に出た。
『そうじゃないか？連合の海賊なんて所詮は』
『辺境のならず者だな』
『いい場所に出たらすぐにやられる』
『その程度だな』
『ああ、そういうことだよ』
　連合での宇宙海賊はその多くは辺境のまだ治安の行き届いていない場所やそのさらに外にまで不法に出て生活を営んでいる所謂ドロップアウトした存在を狙っていたりする者達だ。所詮その程度なのだ。幾ら深刻な問題であっても。だがサハラのそれはかなり違うのだ。
『サハラのそれはかなりの規模だろ』
『一個艦隊規模もいたか』
『そんなのザラだ』
　まず規模がそれだけあった。
『しかも質もな』
『かなりのものなんだな』
『尋常じゃない』
　こうも述べられる。
『正規軍に勝つような連中だぞ』
『ああ、オムダーマン軍もまだ西方でチマチマしていた頃はてこずっていたな、海賊に』
『そうだったな』
　まだついこの前の話である。
『アッディーン副大統領は確かそっちでも功績をあげて』
『それで提督になった』
『そうそう、そうだった』

『あの人も海賊退治からだった』
『向こうの海賊はえぐいぞ』
えぐいとまで言われる。かなりの表現である。
『傭兵がそのままなったり脱落した軍が急にそうなったり。だから』
『装備もいいんだな』
『しかも戦い慣れている』
これも大きかった。連合の海賊は所詮ならず者達だ。たかが知れているしそのうえ数も大したことがない。あの解放軍の様なものもいることにはいるが。
『そんなのを相手にしてこれだけ勝っているんだ。それを考えれば』
『強いか』
『俺はそう思うな』
こう書かれた。
『少なくとも弱くはないだろう』
『そうなるか』
『兵は少なくとも両軍に対抗できる』
個々の兵士の強さへの結論が出された。
『見劣りするものじゃない』
『わかった。それじゃああれか』
その結論が出されたうえでまた話が続いた。
『他のところだな。ハサンがやばいのは』
『数は外すな』
兵指数は完全にハサンが上だ。オムダーマン、ティムールを合わせたよりも多い。数においてもそれを支える国力においてもハサンは両者より完全に上なのだ。
『どう見てもこれはハサンが上だからな』
『そうだな。数はな』
『外すか』
『それでだ』
そのうえでまた話が続いた。

『装備はどうだ？』
『それも変わらないな』
サハラでは兵器の質はそんなに変わらないのだ。どの国も。

## 第三十部第三章　疾風の追撃その十九

『強いて言うとオムダーマンのそれはかなりの機動力だけれどな』
『それだけだよな』
『少なくともそれだけであそこまで勝てないな』
『そうだな』
『それはその通りだな』
それへの反論はなかった。明確な資料を読んでいる者達ばかりだからであった。ここで下手なことを言えば無知と断定され相手にされなくなる。それがネットでの議論だ。
『だとすると』
『この場合の問題点は』
『将か』
一言で誰かが書いた。
『やっぱりそれだよな』
『将軍か』
『そうだよ、オムダーマンだとアッディーン副大統領』
まずは彼の名前が出た。
『それでティムールは』
『シャイターン主席だな。その二人か』
『それだろ、やっぱり』
名前が出るとすぐにこう書き込みが入った。
『あの二人は名将だろ、やっぱり』
『いや、名将どころじゃない』
それはすぐに訂正されることになった。
『英雄だ』
『英雄か』
『ああ、名将よりも上だ』
こう述べられた。いや、書き込まれた。

『英雄だ。しかも二人もいる』
『その英雄二人が相手か。しかも前線にいる』
『それを考えたらハサン軍はやばいな』
あらためてハサン軍の現状が分析されだした。
『そういえばハサン軍で名将、いや英雄はいるか？』
『英雄か？』
『ああ、英雄だ』
探される書き方であった。
『誰かいたか。あの太子は前線に出ないから却下な』
『そうだな』
『出たくても出られないしな』
連合でもこう読まれていた。既に。
『両方相手にしないといけないからな』
『そうだな』
『どっちか片方ならともかくな』
片方だけなら彼も前線に出られたというのだ。
『両方だからその両方を見る為に首都に残って』
『その両方に対する指揮にあたる。大変だよな』
『しかしそれをできるのはハサンであの太子だけだしな』
『それはな』
王室の力が強いハサンで実質的な指導者であるからだ。彼の存在はまさにハサンの柱であるのだ。一本の大きな柱である。
『その太子がいなくなれば』
『ハサンは終わる』
峻厳な響きを含んだ書き込みだった。
『それもあるから動けないし前線にも出られないんだろうな』
『あの二人は出てるがな』
言うまでもなくアッディーンとシャイターンのことであった。
『それも平気でな。どちらも自分から突っ込むしな』
『あれは正直引く』

これは紛れもなく連合の考えだった。
『指揮官が自分から突撃するなんてな。しかも軍の先頭で』
『それがサハラなんだろ』
サハラを理解するような書き込みだった。
『指揮官自ら突撃するってのは。今までも多かったしな』
『しかも国家元首がな』
『連合でそれはないな』
『ないない』
何を言っているんだといった書き方だった。
『そんなの有り得るか』
『そうだ』
それをまた言うのだった。

## 第三十部第三章　疾風の追撃その二十

『文民だぞ。文民が戦場に出るか！？』
『いや、出るわけがない』
『そういうことだよ。連合じゃ国家元首は全員文民だろ』
『ああ』
　これはシビリアン＝コントロールの見地からそうなっているのだ。連合においては中央政府も各国もその最高司令官は国家元首だが彼等は全て文民だ。君主にしろ軍の階級は大元帥とされていたがそれは名目上のものでしかなく実質的な最高司令官は文民である首相なのだ。
『だから有り得ないんだよ』
『しかしサハラは違うな』
『軍人がそのまま国家元首の場合もあるな』
『シャイターン主席がそうだろ』
　それが言われる。
「アッディーン副大統領も軍人だしな』
『軍人だけが戦場に出る』
『だからか』
『そうだよ。これでわかるな』
『軍人だけが戦場に出られるか』
　これはこの時代では当然のことだった。戦場に出られるのは正式な軍人だけだ。彼等以外が戦場に出た場合捕虜になる資格もない。何をされても文句は言えないのだ。
『軍人が正規の軍服以外に出られることもないだろ』
『それはゲリラだな』
　ゲリラは戦場に出た場合やはり普通に殺されるのだ。それは国際法にも定められている。この時代のそれは二十世紀から変わらない。
『ゲリラはつまり』

『殺されても文句は言えない』
そういうことだった。
『そもそも国家元首が戦場で死んだらまずいだろ』
『まあな』
その場合のダメージはその国家に対して計り知れないものだ。
『戦場で他の仕事もできないしな』
『確かに』
その問題もあった。国家元首は本来は戦争以外での仕事も多く持っている。そちらの仕事もしなければならず戦場に出るわけにはいかないのだ。
『だから連合だとまず出ないんだよ』
『それに戦争もなかったしな』
これもまた理由の一つだ。連合にとっては。
『戦争がなければ戦場に出ることもない』
『そうだな』
これまた簡単な答えであった。
『それを考えるとサハラは戦争だらけだな』
『だから軍人の国家元首が戦場に出ると』
『そうなるな』
『まあどっちにしろ連合じゃ考えられない話だ』
結論としては結果としてそうなるのだった。
『国家元首が最前線なんてな』
『アッディーン副大統領はナンバーツーだぞ』
彼は国家元首ではない。しかしここでは国家元首と同じ扱いを受けていた。ナンバーツーとしてもであった。ここでの話ではそう扱われているのだ。
『一応はな』
『そういえばあの人近いうちにナンバーワンになるんじゃないのか？』
『オムダーマンのか？』

『ああ、何でもそうなってるらしいじゃないか』
こう話される。
『近いうちに譲られてな』
『禅譲か』
『正直その功績は半端じゃないだろ』
今のオムダーマンはアッディーンが作り上げたと言っても過言ではない。彼が戦争に勝ち続け軍を整えたのが今に至るのだ。西方と南方を統一したのは彼だからだ。
『それを考えたら当然だろ』
『そうなるか』
『ああ、そうなる』
また話が交えられる。
『まあ噂の段階だがな』
『一介の軍人から大統領か』
『普通だろ？』
これについてはこう結論が出た。
『サハラじゃな。一介の大尉が瞬く間に独裁者になったこともあるだろ』
『そういえばそうか。それに』
また書き込みが為される。

# 第三十部第三章　疾風の追撃その二十一

『誰でも最初は一介か』
『そうだよ。そこからはじまるんだよ、何でもな』
『アッディーン副大統領もな』
またアッディーンの話になる。
『名前が売れたのはカッサラでの戦いからか」
『あの時は中佐か』
『何でもオムダーマンではその時からある程度有名な軍人だったらしいぜ』
既にその頃のアッディーンに関しても知られていたのだ。それもかなり。
『幼年学校を卒業して瞬く間に中佐だ』
『よく考えたら凄いか』
『凄いなんてものじゃないだろ』
こう告げられる。
『あの若さで中佐になっていたんだからな』
『そうか』
『そうだよ。それまでにもかなりの武勲を挙げていたらしいな』
『中佐になるまでに既にか』
『けれどこっちには情報は入ってなかったな』
『サハラの端の方だったからな』
それだけオムダーマンと連合は離れていたということだ。元々連合においてはサハラでの戦争は今の様にただ掲示板やチャットで話されたり本で書かれる位だ。さして現実的な話とも思われていないのが実情だ。そしてその考えで今もここで話されているのである。
『あまり知られていないのも当然か』
『オムダーマン軍に関する過去スレあったよな』
別のスレの話が出て来た。

『そっちでは何て言われていたんだ？』
『ああ、俺そこの住人だぜ』
一人名乗り出て来た。
『実はな。まああそこはカッサラでの戦いの前から見ていたけれどな』
『古株なんだな、あんた』
『あの頃アッディーン副大統領は注目もされていなかったな』
『そうか、やっぱりな』
これは今ここに書き込んでいる面々がある程度予想していたことだった。だからそれを聞いてもそれ程驚くことはなかったのだった。
『一介の中佐だぜ』
また一介の言葉が出た。
『ただの巡洋艦の艦長だ。全部で一万隻はいたよな』
『あの戦いは確かそんな規模だな』
『規模としちゃかなり少ないイメージがあるな』
これは連合での認識に基く。
『それでも一万の中の一人だ。目立つか？』
『いや、全然』
『そんな中じゃな。とてもな』
『そういうことだよ。アジュラーン提督は知られていたがな』
『あの爺さんだけか』
『そうさ、あの爺さんだけだ』
連合ではアジュラーンはよく老人呼ばわりされる。これはアッディーンに比べてかなり歳を経ているからこう呼ばれているのである。
『精々な』
『そんな感じだったか』
『シャイターン主席は南方じゃどうだったんだ？』
不意にシャイターンへの話に移った。
『あの御仁はどうなんだ？』
『あの御仁はそこそこ南方じゃ有名だったぜ』

こう書き込まれた。
『傭兵隊長としてな』
『そういえば実家は結構勢力のある教団だしな』
『シーア派のな』
シーア派も様々な分派があるのだ。そういうことであった。
『だからそれなりに知られていてちょこちょこ掲示板でも名前は出ていたぜ』
『そんなに有名だったのか』
『いや、名前が出るだけだ』
その程度だったのだ。最初は彼も。
『それ位だった』
『じゃあ野球での二軍選手みたいな扱いか？』
『それ以下だったな』
こうまで言われる。
『正直ノーマークだった』
『そうだったのか』
『北方に出た時は正直誰だと思った』
『誰かか』
『そこまで無名だったんだよ。全然な』
『そこまで知られていなかったのか』
ある意味衝撃だった。今の彼を知っているならば余計にだった。
これを知って彼等はあらためて驚いているのである。その驚いた書き込みが続く。

## 第三十部第三章　疾風の追撃その二十二

『それが今ではな』
『英雄か』
『俺達の中でも知らない奴はいないだろ』
実際に連合においてもシャイターンを知らない者はいない。アッディーンもまた同じだ。彼等の名はそれこそかなり有名な女優よりも知られるようになっている。
『まあ知らないのは世捨て人位だろ』
『それって結構多いぞ』
突込みが入る。
『世捨て人もな』
『多いか、世捨て人って』
『多いぞ』
今度は世捨て人の話になる。
『それこそ今の境から先に行けばな。どれだけいるか』
『どれだけか』
『まあ連合の人口には入っていないがな』
連合は時代に応じて境を拡げてきている。一応境までを国境としている。そこにいる人間までを人口と考えている。だからそれより先については人口に入れていないのだ。つまりそこから先にいると連合の中央政府のものもどの国のものも法律は適用されないし人口統計にも入ってはいない。つまり完全な世捨て人だ。
『そうした存在が確か』
『どれだけいるんだよ』
『どれだけだろうな』
これに関しては誰も正確な数字はわからないのだ。
『だが。十億かそれ位はいるかもな』
『十億か』

『実際連合の中でもかなり好き勝手できるからな』
連合では言論も表現も集会結社も許されている。民主主義だからだ。それこそ己の好きな国家に移住することもできる。だから連合の中で満足できるのだ。大抵は。
『無政府主義者とか無国家主義者とかが逃げるからな』
『それが十億か』
『いや、あとカルト教団だな』
連合でも認められずに、というわけだ。
『それ考えたら十億越すか？』
『まあいつもすぐに国境が拡がって飲み込まれてるんだがな』
それもまた事実だった。そうした者達も結局連合に入ることになるのが常だ。そうして人口統計に入れられるのである。これの繰り返しだ。
『しかし。どれだけいるのかわからないのはな』
『まあそれは気にしないでおくか』
『それでだ』
話がまた戻った。
『シャイターン主席にしろアッディーン副大統領にしろな』
『彼等か』
『ああ、このスレの主役な』
何時の間にか主役になっているのだった。
『今度どう動くのかわからんところがあるな』
『何かアッディーン副大統領っていつも今度こそ負けるって言われてるしな』
『ああ、元帥閣下も言ってるしな』
先程のその予想が必ず外れるということが神話になっている軍事評論家である。こうした意味で有名になれるというのもかなり凄いことではある。
『必ず負けるってな』
『それで勝ってるのかもな』

『そうかもな』
こうも言われる。
『まあ元帥は置いておいてだ。正直なところ』
『勝てる戦いはしていないからな』
『そうだな。相手は常に優勢』
これが最も大きかった。
『それで勝っていくんだからな』
『あの時ばかりは俺な』
『何だ？』
『元帥の予想が当たると思うんだよ』
その彼を肯定する書き込みが入った。
『幾ら何でもって思うからさ』
『まあそれはな。俺もだ』
『御前もか』
『それでも勝つんだからな。凄いっていうかな』
素直な賞賛の言葉だった。これは彼等が遠くからアッディーンを見ているからだった。だからこそ公平な目で見られるのである。しかも客観的に。
『シャイターン主席もな』
『そうそう』
賛同の書き込みが書かれる。
『それでだ。話は』
『ああ』
『主席はあれだろ。いよいよアヤグーズと最後の戦いか』
『ああ、そうだったな』
『そういえばな』
書き込みが続けられる。複数の手により。これこそ掲示板の醍醐味だった。これは二十一世紀初頭に確立され進化しながら今に至っているのである。

# 第三十部第三章　疾風の追撃その二十三

『ブルコルジ女王を正面から破るなんてな』
『しかもあの数でな』
『連合軍だとやっぱりあれだろうな』
自分達の軍のことが話に出る。なお言うまでもなく彼等の中では連合軍はあくまで強い存在ではない。装備と数だけで戦っているとみなされているのだ。
『それこそいつもよりも数でな』
『やっぱり数か』
『それ以外にあるか？連合軍に』
またつっけんどんな書き込みだった。
『ないだろ、正直』
『規律はいいぞ』
『それにかけてはほぼ完璧だろ』
ただ。連合軍の軍規が正しいことはよく知られている。八条がそれを第一に考えているからだ。連合軍は紳士の軍隊として有名になっている。
『それだけは、だけれどな』
『軍律が正しいのはいいことだがな』
それがわからない彼等ではない。
『略奪も暴行も行わない』
『一般市民も狙わない』
当たり前のように見えて実はかなり難しい。軍の規律を維持するには徹底的な教育とチェックが必要だからだ。そしてそれに向かわせない配慮もであった。八条はそのいずれにも細かく配慮しているのだ。その結果がエウロパとの戦争での品行方正さであった。もっとも後の戦勝パーティーでは蛮行はなかったが散々にエウロパを貶めた催しをエウロパの者達、とりわけ貴族達の前で行ったが。これ

はまた別の話であった。
『いい軍隊だな』
『頼りないけれどな』
軍事マニアの間ではいつもこう言われる。
『数がなければどうなのか』
『腑抜けの集まりだからな』
こうまで言われる。
『所詮はな』
『所詮はか』
『だってよ。俺達だぜ』
自分達の話になる。
『千年も戦争せずにぬくぬくと生きてきて』
『美味いもの食って漫画とかゲームで遊んで金儲けしてってか？』
『それだよ』
つまり平和なのであった。それなりに様々な問題が起こってきてはいたが連合は平和だった。これは否定できない事実である。
『それに対してサハラは千年の間』
『常にどっかでドンパチだったな』
『だから義勇軍も強いんだな』
サハラ義勇軍だ。今では連合軍最強の軍とまで言われている。何かあればまず彼等が火事場に飛び込む。それから正規軍が向かうのがセオリーである。
『あの強さは凄いよな』
『鬼だ』
こうまで言われる。
『鬼神だよ、あれは』
『本当だな。サハラの人間が連合の兵器で武装すればああなるか』
『最強の兵士だな』
これが義勇軍の評価だ。尊敬さえされている。
『それにだ』

『それに？』
『結局あれだろ。連合にとっちゃ余所者だ』
『余所者か』
『難民だからな』
現実が書き込まれた。
『楯にも使えるしな』
『義勇軍は楯か』
『実際にそういう使われ方してるだろ』
またしても現実が書かれる。義勇軍と書けば聞こえはいいがその実態はまさにそれだったのだ。連合軍正規軍の正面に立ちそこでまず突撃する。また退却の際には後詰をすることも暗黙のうちに決まっている。そうした存在なのだ。
『エウロパとの戦いでもな』
『犠牲か』
『正規軍の損害の九倍だぞ』
エウロパとの戦い、所謂連合＝エウロパ戦争においての戦いで連合軍は十個艦隊に相当する約一千万の人的損害を出している。そのうち正規軍のそれは一個艦隊程度の百万だ。それに対して義勇軍は九個艦隊に相当する九百万、それだけの差がある。義勇軍は百個艦隊、一億の基幹戦力であるがそのうちの九パーセントを失ったのだ。なおエウロパ軍のそれは全軍の三割に相当する百五十個艦隊分の一億五千万の損害だ。
『それだけの差があって何かないと思えるか？』
『いや、確実にあったな』
『それはな』
彼等もそれはよくわかっていた。直感でわかったのだ。
『あの用兵を見ればな』
『確実にな』
『確実にか』
またそれが言われる。

## 第三十部第三章　疾風の追撃その二十四

『結局あれだろ。正規軍を失うわけにはいかない』
『ああ』
民主政治においてはとりわけそうだが軍の損害が多ければそれはそのまま為政者への批判に直結する。しかし戦争を行うならば必ず損害が出る。そこが難しいのだ。それへの解決をするにはどうすればいいか。若し損害を気にしなくていい軍があればどうなるか。容赦なく前線に出すのが普通の流れだった。
『しかしあの長官そんな人間か？』
『八条長官か？』
『そうだよ。あの長官そういうのは好きじゃないだろ』
八条の性格はよく知られていた。そうした他者を楯にするような人間ではないことも。
『そういうのを決定するか？』
『あの長官の好みはこの場合関係ないさ』
『関係ないか』
『現場はな』
この場合の現場とは戦場のことだ。その戦場だ。
『全然関係ない世界だろ』
『関係ないか？』
『軍律とかは当然守られるさ』
それは徹底されているのが連合軍だ。それだけは何時でも何処でも厳正に守らなければならないというのが連合軍、それを統括する八条の考えなのだ。それは実に徹底されていた。しかしであった。現場、つまり戦場は軍律以外にも問題があるのだ。実際の戦闘のことだ。
『けれどな。損害を出さないようにするのは』
『この場合は前線指揮官の考えか』

『そうだ、前線指揮官の考えだ』
これが即ち現場の考えだ。
『御前が艦隊とか、いやこの場合は軍とか率いていたらどうする？』
『そりゃやっぱり』
『そうだろ？それだ』
結論は一つしかなかった。
『犠牲を出すわけにはいかないからな』
『それでか。そうなるのは』
『それにだ』
『それに？』
『連中にもそうしないといけない事情があるからな』
『事情？』
また話が動く。戦場における複雑な事情だ。
『正直連合軍は数が多いだろ』
『その話はもう出ただろ。ループさせるなよ』
『違う。連合軍はその数でジリジリと進むだけでいいところがあるだろ』
『まあな』
エウロパ軍をそれで押すこともできる。そういうことだった。
『バリアー張りまくれば損害で出ないさ。速度に向けるエネルギーをバリアーに向けてな』
『そのかわり進撃はかなり遅くなるぞ』
『それでもだよ。連合軍にとっちゃ損害が出ないことが大事だからな』
そういうことだった。
『それでもやっていけるんだよ、極論すれば』
『まあ次善の策だよな、それって』
やはり順調な速度で進むのが常道なのだ。しかしそれもまた手なのだ。連合軍にとっては特にそうだ。確かに前線に楯となる部隊を置くことが最も犠牲を出さず順調に進む方法であるが。

『じゃあそうしないのか』
『だからだよ。連中がいるだろ』
『連中？』
『その義勇軍の奴等だ』
彼等だった。
『奴等が自分から言って来たとしたら？』
『自分から望んで火事場に飛び込むのか』
『それだよ』
話は妙な方向に向かっていた。
『その場合はどうなんだ？』
『どうなんだって言われると』
『断れないよな』
『だよな』
これもまた答えが一つしかない質問だった。前線指揮官でそこにいたならば。
『しかし向こうから火事場行きを志願するかね』
『だからだ。向こうの事情だよ』
そこをまた言われる。
『何度も言うが連中は難民だな』
『ああ』
それは絶対の前提条件だ。この場合は。
『その連中が連合に留まるには何が必要だ？』
『功績だ』
一言だった。
『その功績を立てるにはどうすればいいか。若し戦場にいるなら』
『まあそこで武勲を挙げるのが一番だな』
『そういうことだ』
答えはこれであった。
『だから前線で戦うんだよ。わかるか』
『自分から志願してか』

『元々それを意図して設立されたものでもあるしな』
『おい、待て』
ふとここで誰かが書き込んだ。
『何だ？』
『そういうことまで考えて義勇軍は設立されたってことか』
『そうなるだろうな』
『それを考えたのは誰だ？』
あらたな疑問であった。
『八条長官じゃないんだよな』
『あの長官はそもそも作ったとしても正規軍に入れるだろ』
『まあな』
実際に八条はそう考えて設立させた。これはネットでも知られていないことだが。
『しかしそうじゃないな』
『じゃあ誰が一体』
『さてな』
これについては誰も答えられなかった。知らなかったからだ。
『そこまではわからないさ。ただ』
『ただ？』
『あの長官の考えを変えることができるとしたら』
答えは次第に導かれていっていた。話をしていて見えてきたのだ。
『誰か、だな』
『だとすると誰だ？』
『国防長官の上だ』
こう書かれた。
『それは誰か』
『ああ、成程な』
『そういうことか』
これでこのスレに書き込んでいる皆はわかった。それで納得した書き込みが続く。

『二人のうちのどっちかか』
『しかもあの爺さんだな』
『あの爺さんだけで考えたのではないだろうがな』
思わせぶりな何かを含んだ、それと共にそうしたことを楽しむような書き込みになってきていた。
『その筋だな』
『まあそういうことだな』
『それでだ』
さらに書き込みが続く。
『見返りは何だろうな』
『色々あるだろ』
今度はこう書かれた。
『それこそ何でもな』
『何か俺これからが凄い楽しみになってきたぜ』
『これからがか』
『ああ、それもかなりな』
『義勇軍がどうなるかな』
『見せてもらうか』
実際にその楽しみを感じる言葉が書かれている。
『これから義勇軍がどうなるかな』
『難民もな』
『そうだな』
そう書かれている。そのうえで。彼等は一人また一人とネットから一時去る。今はその議論がお開きとなりまたの時になった。ネットの議論はまた行われる時になればすぐに開かれるのだから。その時までの休止であったのだ。

# 第三十部第四章　難民の行く先その一

難民の行く先

連合には十億のサハラからの難民達がいる。その多くは戦乱、とりわけサハラ北方へのエウロパ侵略とそれに伴う住人追放からだった。彼等の多くはサハラ北方の残された場所か若しくは西方や東方に逃れたが中には連合にまで逃れた者達もいるのだ。その中の十億が連合にいるのだ。

今その彼等により編成されている義勇軍の中で。ある動きがあった。それは。

「これで俺も閣下になったんだよ」

「あら、随分早いわね」

実家に帰って来て誇らしげに語るグータルズに対して姉のロスタムが笑顔で応えていた。実家のリビングのテーブルに向かい合って話をしている。彼は連合軍の軍服を着ている。

「もう閣下なんて」

「准将な」

彼は姉に今の自分の階級を告げた。

「この前の戦争での武勲のおかげさ」

「そんなに頑張ったの」

「頑張ったってものじゃない」

誇らしげに姉にまた語る。

「何度も死線を潜り抜けてな。戦ったんだよ」

「そうだったの」

「そうさ。そのおかげだよ」

自分の軍服の左腕の袖をぽんぽんと叩く。見ればそれは明らかに准将のものだった。

「これはな」

「大変だったのね、ロスタムも」

「姉さんの方はどうたたんだい？」
「私は別に」
姉は弟の言葉に首を横に振るだけだった。
「特にこれといって何もなかったわ」
「そうなんだ」
「貴方に比べればね」
ここで何故か自分と弟を比べるのだった。グータルズはそれを不自然に思った。それで怪訝な顔になって姉に対して問うのだった。
「姉さんも何かあったの？」
「何かって？」
「だから。日常生活で何かあったとか」
「仕事はしているわよ」
グータルズもかつて従事していた農場での勤務だ。ハラドゥーンの農場である。
「ハラドゥーンさんのところで」
「親父さんも元気なんだな」
「ちょっとお酒を飲み過ぎだけれどね」
「それはよくないな」
酒を飲み過ぎていると聞いて少し苦笑いを浮かべた。
「どれだけ飲んでいるかわからないけれど」
「悪いことがあったわけじゃないし」
「いいことがあったの？」
「息子さんが結婚されるのよ」
そういうことだった。だから機嫌よく飲んでいるということだったのだ。グータルズはそれを聞いてまずは安心した。そのうえで問いを変えるのだった。
「結婚か」
「ええ」
「それで相手は？」
問いはそれだった。

「誰なんだい、一体」
「向こうの人よ」
ビルギースはまずこう述べた。
「向こうの人と結婚するのよ」
「連合のかい」
「ええ。インドネシアの人と」
そう答えるのだった。
「結婚されるのよ」
「同じムスリムなんだよね」
「それはね」
その通りだというのだ。しかしグータルズはそれを聞いてあまりいい顔をしなかった。それどころか難しい顔をしてまた言うのだった。
「じゃあ。もうサハラには戻らないんだ」
「そのつもりらしいわ」
そのことを弟にも教える。
「もうここに馴染んでるらしくて」
「そうなんだ」
姉のその話を聞いてさらに難しい顔になる。雰囲気も今一つはっきりしない感じになっている。
その雰囲気を醸し出したまま。言うのだった。
「帰らないなんて」
「嫌なの、やっぱり」
「サハラは俺達の故郷じゃないか」
彼等にとっては忘れられない故郷なのだ。何年経っても。それを聞いて面白くない顔になるのも当然だった。彼にしてみれば。
「そこに戻らないのか」
「そんなに嫌なの」
「人それぞれだけれどね」
それは一応は認める。

## 第三十部第四章　難民の行く先その二

「けれど。それでも」
「そうなの」
ビルギースは弟のそんな言葉と感情を見て顔を暗くさせた。弟は姉のその顔にも気付いた。
「ひょっとしたらさ」
「ええ」
「姉さんもかい？」
単刀直入に問うた。
「まさかサハラに戻らないのかい？」
「私も。誘われているのよ」
「誰に」
「チリの人だけれど」
チリといえばムスリムではない。それは彼も知っている。
「チリってまさか」
「安心して。連合ではムスリムでもムスリム以外と結婚してもいいのよ」
「そういう問題じゃないよ」
声が少し怒ったものになっていた。感情が出ていた。
「姉さんも戻らないなんて」
「貴方は戻るの？」
「当たり前じゃないか」
当然とさえ言う。彼にとってはそうだったのだ。故郷を絶対のものだと思っているからだ。そこが彼とビルギースに違いになっていた。
「何時か絶対に戻ろうって決めていたじゃないか」
「それはそうだけれど」
「あの時に」

あの時と言った。
「エウロパのやつらに祖国を追われて逃げる時に。忘れたのかい？」
「いいえ」
俯いて姉の言葉に首を横に振る。
「忘れる筈がないわ」
「じゃあどうして」
「仕方ないじゃない。私もあの人が」
「好きだっていうのかい？」
「そうよ」
俯いたままだがはっきりと答える姉だった。
「好きよ。そして一緒に暮らしたいわ」
「そんな。姉さん・・・・・・」
「戻るのは貴方だけになるかもね」
「冗談じゃない。やっと北方がサハラの手に戻ったのに」
そのことを言う。そのエウロパとの戦争によってだ。そのことをあえて言ったのだ。どうしても言わずにはいられなかったのだ。彼にとっては。
「それでどうして」
「あの戦争でエウロパはいなくなったわ」
「うん」
「それで私達は故郷に戻れるようになった。けれど」
「けれど。何なんだよ」
また少し感情的になって姉に問う。
「それでどうして戻らないんだよ」
「だから。その人を好きになったから」
彼女の言葉はここでも変わらない。
「それに」
「それに！？」
「連合に愛着ができたのよ」
それも理由だったのだ。彼女にとっては。だが彼にはわからない

ことだった。
「わからないよ」
首を横に振って俯いて姉の言葉を否定する。
「そんなこと。どうして」
「だから。変わったのよ」
「変わった！？」
「そうよ」
悲しげな顔で俯いて弟に告げる。
「私達も何もかも」
「何もかもってそんな」
「じゃあ聞くわ」
グータルズに顔を向けてきた。目の光は強い。
「貴方の周りはどうなの」
「俺の周りか」
「ええ。残ろうっていう人はいないかしら」
聞くのはそのことだった。
「それはどうなの？」
「うっ、それは」
答えることができなかった。すぐには。それにははっきりとした理由があるからだ。

## 第三十部第四章　難民の行く先その三

「それは。その」
「そうよね。いるわよね」
「・・・・・・ああ」
俯いて姉の言葉に答えた。
「その通りだよ。いるよ」
「そうよね。やっぱり」
「しかも結構な数だ」
聞かれていないことだが自然に口に出て来た。
「何で残るんだ」
「それはそれぞれよ」
こう弟に述べた。
「私みたいな事情もあれば」
「他には？」
「ここが好きになったのよ」
「故郷があるのにか」
グータルズは姉の今の言葉にまた首を横に振った。彼にとっては考えられない、理解できない話だった。だから首を横に振ったのだ。
「どうしてだ。それでどうして」
「連合に残るのが嫌なの？」
「俺は嫌だ」
また首を横に振って言う。
「こんな場所。こんな場所よりもサハラの方がずっといいに決まってる」
「それは貴方の主観よ」
しかしビルギースはこうも弟に告げた。
「それもね」
「主観。何でそう言えるんだ」

また姉に反論する。顔を上げて。
「俺達はサハラに生まれたんだ」
「ええ」
弟のその言葉には頷くことができた。
「そしてサハラで生きてきて。追い出されはしたけれど」
「だから。サハラに戻るのね」
「俺はあそこがいいんだ」
断言さえする。
「サハラのあの。砂と岩の星達が」
「あの砂と岩が」
「そこに水があって。夜には優しい月が出て」
サハラの惑星は連合やエウロパのそれに比べてあまりにも過酷な環境の惑星が多い。緑に包まれた星は少なく青に恵まれた星も少ない。戦乱の為にそうした惑星開発もできないでいるのだ。だがグータルズにとってはその過酷な環境こそがサハラであり懐かしいものなのだ。
「それがいいんじゃないか」
「誰もがそうは思わないわ」
静かに弟のその言葉を否定したのだった。
「それはね」
「じゃあ。やっぱり」
「そうよ。連合には何でもあるわ」
連合のことが話に出た。
「緑も青も」
「くっ」
連合では恵まれた星ばかりだ。惑星どころか衛星すらそうして開発し生物豊かな星にしてしまう。技術と資金、それに平和があってこそのことだ。
「そして楽しいことも何もかもが」
「娯楽か」

「人は。楽しくないと生きていけないわ」
その通りだった。
「サハラにはない様々な娯楽があるわ。だから」
「ここを離れたくないのか」
「考えてみて」
弟の目を見て問う。
「ここは。娯楽も美味しいものもあるわね」
「ああ」
それは否定できない。連合とサハラでは豊かさが全く違う。食べ物、そう今二人が飲んでいるコーヒー一つ取ってもその味が全く異なる。それだけの違いがあるのだ。
「何もかもが」
「サハラには確かにないさ」
渋々ながらそれを認める。
「それでも故郷じゃないか。サハラで生まれたんじゃないか」
「貴方と同じ考えの人も多いわ」
これもまた事実だった。
「どうしても故郷に帰りたいって人が」
「どうして皆じゃないんだよ。難民皆が」
「だから。それは有り得ないの」
教え諭す言葉になっていた。

## 第三十部第四章　難民の行く先その四

「人を好きになることも。国を好きになることも止められないものよ」
「誰にもかい」
「人にはね」
こう答えた。
「アッラー以外には止められないわ」
「じゃあアッラーが許さない」
彼は断言さえした。
「そんなことは。皆サハラに戻らないと」
「じゃあ。サハラにしかムスリムはいないの？」
逆に弟にこう問い返す。
「それは違うさ」
「そうよね。サハラだけじゃなくて連合にもマウリアにもいるわね」
「ああ」
むしろ連合のムスリムの数はサハラのそれよりも多い位だ。サハラはそれこそ二千億全員がムスリムであるが連合はそもそも人口が違う。だからである。
「アッラーは連合も見ておられるのよ」
「連合も」
「ええ。だから」
ここまで話してまた話す。
「連合に残ってもいいのよ」
「わからないよ、俺には」
たまりかねたような言葉だった。
「どうして連合に残りたいなんて。サハラに戻るんじゃなくて」
「貴方はやっぱりサハラに戻りたいのね」
「どうしてもね」

断言であった。
「戻りたいさ。故郷に」
「わかったわ。じゃあ離れ離れになるかもね」
「姉さんはどうしてもこの連合に残るのかい」
「そのつもりよ」
やや俯いた顔になっていたがそれでも話すのだった。
「それはもう。心では決めたから」
「そうか。ならもう」
「それで貴方は」
あらためて弟に尋ねる。
「何時サハラに戻るのかしら」
「それはわからないよ」
首を横に振ってしまった。まだはっきりとは言えなかったのだ。
「今は少なくともそのつもりはないさ」
「そうなの」
「本音を言うとすぐに戻りたいけれど」
これが偽らざる彼の本音であった。
「今は無理だから」
「ハサンとティムールの戦争ね」
「多分それで終わりじゃない」
その目が光った。軍人の目になっていた。
「多分ね」
「まだ戦争が続くのね」
「ああ。サハラが統一するまでは」
「そんなこと言ったら戻ることはできないわよ」
「確かに難民に意図的に攻撃しようとはしないだろうね」
サハラにおける暗黙のルールである。難民に対しては攻撃を加えない、むしろ保護しなければならない。無法のまま戦争を行っているわけではないのだ。
「それでも。巻き込まれることは考えられるから」

「そうね」
「だからだよ」
それを理由とするのだった。
「今は行かないさ」
「戦争に巻き込まれたくはないのに」
「戦うのはいいんだ」
軍人として、サハラの者としての言葉だった。
「けれど。武器を持たないで巻き込まれるのは嫌だからね」
「わかったわ。じゃあ暫くは連合に留まるのね」
「うん。それでさ」
そのことに関してだが話が変わった。
「何かしら」
「その難民の国ができるんだって？」
このことを姉に対して問うのだった。

## 第三十部第四章　難民の行く先その五

「何か軍で話を聞いたのだけれどさ」
「そんな話あるの」
「姉さんは聞いていないの？」
「いいえ」
弟の言葉に首を横に振るのだった。
「そんなの。初耳よ」
「そうなんだ」
「そんなことが言われているなんて」
「俺も耳に挟んだだけさ」
こう前置きする。
「何か中央政府の中でそんな話になってるって」
「中央政府でなのね」
「ああ。まだそっちには話がいっていないんだな」
「そうね。まだ民間には」
「軍でも知っている人間は少ないか」
ここでグータルズは一つサハラと連合の違いを意識した。サハラでは軍人、しかも佐官となると地位は高くかなりの情報を入手することも可能なのだが連合では違うのだ。連合では軍人の地位は高くないし政治に関わることもない。だから情報も手に入る量は少ないのだ。
「まあそれもそうか」
「貴方はどうしてそれを聞いたの？」
「将官に上がった時にね」
ただし将官ともなればやはり手に入る情報が違ってくる。連合軍では准将以上は国防長官が直接任命する形式になっている。実質的には大将からなのだがそれでも将官はそういうことになっているのだ。だから准将ともなるとそれなりの情報が手に入るようになるの

だ。
「聞いたんだ。大将閣下同士の話を聞いてね」
「そうだったの。それで」
「何かそういう話が出ているってね」
「大将が。じゃあかなり確実な話かしら」
ビルギースはそれを聞いて呟いた。
「ひょっとして」
「そうじゃないかな。まだはっきりとしたことはわからないけれど」
「国家ができるの。私達の」
あらためてそのことを考える。
「難民の」
「それを考えたらやっぱり連合に残るんだね」
「私は。もう連合の方が愛情があるのよ」
それをまた言う。
「もう。どうしてもね」
「どうしてもなんだ」
「駄目かしら」
「それはさっき姉さんが言ったじゃないか」
こう姉に言葉を返した。
「感情は別だって」
「それじゃあ」
「結局。俺は俺なんだ」
まずはこう述べた。
「そして。姉さんは姉さんなんだよ」
「私は私なの」
「これで別れ別れになっても」
言葉が繰り返されていた。
「それもアッラーの思し召しと考えるしかないのかもな」
「それで納得できるの？」
「いや」

しかしその問いには首を横に振る。そうはいかないことは他ならぬ彼自身が最もよくわかっていることだったのだ。だから首を横に振ったのだ。
「それは無理だね」
「納得はしないのね」
「口で自分で言っているだけさ」
言葉が少しシニカルなものになっていた。
「格好つけてね」
「別にそうは思わないけれど」
「格好つけているのは事実だよ」
少し自嘲めかした感じになっていた。
「そうでもしないと。自分が格好よくならないと」
「納得できないって言いたいのね」
「そうさ。どっちにしろ俺は残るつもりはないから」
そのことは変わらなかった。
「絶対にね」
「でも私は」
「サハラには帰らないんだね」
「ええ。どうしても」
今度は彼女が首を横に振るのだった。

## 第三十部第四章　難民の行く先その六

「そのつもりはないわ。あの人と一緒になりたいから」
「それにしても。姉さんが結婚か」
次に思ったことはそれだった。
「不思議だな。ずっと姉一人弟一人だったから」
「そうね」
連合に逃れて来た時からだった。彼等はずっと二人で生きてきた。姉と弟の二人で。小さい頃は学校に通いながら働いてきていた。そして今は軍人になり離れ離れになっていた。しかし何時かは家に戻るつもりだった。それが変わったのだ。その姉の結婚で。
「貴方はまだなのね」
「俺はそんなこと考えてもいないさ」
今度は左手を横に振るのだった。
「全くね」
「そうなの」
「今のところは。相手もいないしね」
姉への言葉は続く。
「全く」
「連合軍では将校はすぐに結婚するように言われているそうね」
「義勇軍は別さ」
こう答えた。
「まあ一応そんな話はあるけれどね」
「やっぱりあるじゃない。じゃあ」
「だから。それはいいよ」
少しうんざりとした顔になっている。その顔での言葉になっていた。
「今は結婚なんて」
「そうやってずっと独身でいるつもり？」

「連合に入るうちはそれでもいいさ」
「またそんなこと言って」
話が完全に家庭のものになっていた。
「若いうちに身を固めていないと」
「後で苦労するって？」
「そうよ。私だって二十代で決めたし」
「それは女の人の話じゃないか」
こう言い返す。
「男はまた別だよ」
「男でもよ。サハラなんか」
グータルズが恋焦がれてやまないそのサハラの話をわざと出した。
「それこそ十代で結婚することだってざらじゃない」
「それは」
「違うっていうのかしら」
グータルズが言葉に詰まったところですぐに攻撃を強くさせた。
こうなっては彼女のものだった。完全に姉の顔になって彼を攻めるのだった。
「そうじゃないでしょ」
「それはまあ」
「見なさい。だから」
腕を組んで強い声になっていた。
「早く結婚しなさい。いいわね」
「相手がいればね」
せめてもの反撃だった。
「そうさせてもらうさ」
「相手が」
「そう、相手」
彼もまたわざと言っていた。そこを強調するのだ。
「相手がいればね」
「それは自分で見つけるものよ」

しかし姉は強かった。今度はこう言ってきたのだった。
「そういう努力しないで何が見つけるのよ」
「そのうち見つかるさ」
今度の返事はいい加減なものだった。
「そんなのはさ」
「それで見つかれば苦労しないわよ」
「全てはアッラーの思し召しじゃないか」
「アッラーは自らを助けるものを導かれるのよ」
サハラ世界ではよく使われる言葉である。要するに自ら努力する者を助けるということである。これはどの宗教でも言葉を変えて使われるものである。
「だから」
「自分で探せって言いたいのか」
「そうよ。わかったわね」
「今はそんな気分じゃないよ」
それでもまだわからないグータルズであった。まだ言うのがその証拠だ。
「忙しいし」
「忙しいのは理由にならないわよ」
「そうかな」
「そうよ。忙しくても時間はあるわ」
こうも弟に告げる。

## 第三十部第四章　難民の行く先その七

「どれだけ忙しくてもね」
「朝から晩まで仕事だよ」
今度は仕事のせいにするのだった。往生際が悪い。
「それでどうやって」
「毎日朝から晩までなの？」
姉も弟が仕事のせいにしているとわかっているのでさらに言う。
「そんなわけないわよね」
「サハラとは違うんだよ」
「どう違うの？」
「仕事が幾らでもあるんだ」
これは実際のことだ。連合ではそれこそ仕事がなければ辺境の開拓地に向かえばいい。流石に端の辺りは治安が悪いがやはりそうではない場所も幾らでもある。治安の悪い場所の方が収入は遥かにいいが安全に稼ぐことができる場所もある。だから連合では失業率が高まったり何か不況の兆しがあれば新たに惑星や衛星を再開発したり開拓したりする。それで雇用を確保したり経済を動かしたりしてそれを防ぐのだ。当然それを見誤って失敗しインフレやデフレになったりするがそれでも失業率はそれでかなり抑えているのだ。それと閉塞感も。
「軍もね」
「サハラよりも多いの？」
「断然多いだろうね」
こうも述べる。
「正直のところ」
「多いのかしら。そんなに」
「戦争がない時のサハラの軍なんて暇なものじゃないか」
これは実際にそうである。彼等はあくまで戦争がその仕事であり

それがないならば仕事は比較的暇なのだ。これがサハラの軍なのだ。
「けれど連合軍は違ってね」
「どうなの？」
「将校はデスクワークが多いんだ」
「デスクワークっていうと」
「つまり事務の仕事だよ」
言うのはそれだった。
「そちらの仕事が多くてね」
「そんなに多いの？」
「だから朝から晩まで」
またそのことを言う。
「時間があればそれの処理さ。その間に訓練や教育、トレーニングもあるから」
「だから時間がないって言いたいの？」
「そういうことさ。だから仕方ないんだ」
「それでも時間はあるわね」
まだ弟の言葉を信じようとしない。
「実際のところは。そうでしょ？」
「まだそんなこと言うんだ」
「幾らでも言うわ」
彼女も負けてはいない。姉の意地があった。
「あんたは。それを理由にしているだけよ」
「本当に忙しいのだけれど」
「それでも時間があるわよね」
まだ言う。
「少なくとも紹介してもらえる時間は」
「それは」
「あるのね」
ここでまた突っ込んでいく。隙を見逃さなかった。
「やっぱり」

「どうしても俺が逃げていると思いたいんだね」
「少なくとも結婚しようとは考えていないわね」
完全に見抜いた言葉だった。
「そうよね」
「だから。忙しいんだよ」
言い逃れがさらに苦しいものになっていた。しかしそれでも言うのだった。
「本当にさ」
「そう言って逃げて」
「逃げていないよ」
次第に追い詰められているのが自分でもわかる。わかっていてもそれでも反撃するのだった。そうしなければならない時でありそうしていた。
「本当にね」
「じゃあ。早く相手を見つけることね」
「お見合いでもしろっていうのかい？」
「そうよ」
言いたいことはそれだったのだ。結論としては。
「わかっているじゃない。それじゃあ」
「ひょっとしてその相手は姉さんの知り合いか何かなのかな」
「どう思うかしら」
ここでふと思わせぶりな笑みを浮かべてきた。

## 第三十部第四章　難民の行く先その八

「それは」
「そうとしか思えないね」
正直に姉に述べた。
「俺にお見合いさせてそれで身を固めさせて」
「それの何処が悪いのよ」
遂にビルギースも居直ってきたのだった。こうなると姉の方が断然強いのが姉弟である。彼女もそれをあえて使うことにしたのだ。いささか子供じみていた。
「だから。早く結婚しないと」
「結婚してもすぐ死ぬかも知れないじゃないか」
「軍人でいる限りはね」
「軍を辞めろっていうのかい？それは」
「そのつもりはないのはわかっているわ」
だからそれについては言わないのだった。
「あんたが軍人でも構わないし」
「構わないんだね、それは」
「義勇軍はかなり危ないらしいわね」
「まあね」
このことであまりにも有名であった。何かあればすぐに火事場に飛び込んで戦うのが義勇軍だ。だからその損害も正規軍と比べてかなりのものなのは紛れもない事実なのだ。それについては連合内部でも有名でありネットでも議論の対象になっている。ビルギースも知っているのだ。
「それでも収入はいい」
「そうなの」
「それに誇りもある」
軍人にとってはこれが一番大きかった。

「戦場で戦えるから」
「それでいいのね」
「ああ。俺はエウロパの奴等を倒した」
まずはこのことに満足していた。
「これからも。何かあれば戦う」
「だから軍に残るのね」
「そのつもりだよ。俺は軍人でいたいんだ」
「そうなのね」
「姉さんもそれでいいだろう？」
そこをビルギースに問う。
「俺が軍人でも」
「ええ。ところで」
「何かな」
「連合軍でもやっぱり結婚している人が多いわよね」
「勿論」
これはもう当然のことだった。全員が独身である軍なぞ有り得ない。やはり結婚して家庭を持つものなのだ。どの職業の多くの者が。対象が同性である場合もあるが。
「じゃあ独身なのは理由にはならないわよ」
「やっぱりそれなんだ」
「戦死は恐れているの？」
「まさか」
それははっきりと否定する。
「俺が死ぬわけないじゃないか」
「じゃあ余計によ」
「結婚しろってことだね」
「ええ。いい娘よ」
それを言ってきた。
「だから一度」
「嫌なんだけれど」

また随分とはっきりした言葉だった。
「俺はまだ」
「何度も言うけれど結婚は早い方がいいのよ」
まだ弟を急かし続ける。
「身を固めないと」
「だからいいって」
こんなやり取りを続けていた。この時難民達の間では残ろうとする者と戻ろうとする者が分かれていた。彼等の中には葛藤も見られていた。この姉弟の様に。
このことは連合全体の議論となっていた。あちこちでそれについて議論になっていた。
テレビでも。あるコメンテーターが神妙な顔で語っている。
「つまりですね」
「はい」
若い女のキャスターがそれを聞いている。白いセットの場には他のコメンテーター達もいて今のこのコメンテーターの話を聞いていた。
「これは彼等の問題ですので」
「彼等に任せるということですか」
「その通りです」
こう答えるのだった。

## 第三十部第四章　難民の行く先その九

「やはり全てを彼等に任せて。帰りたい方は任せて」
「ちょっと待ってよ」
それを聞いた醜い顔の女コメンテーターが声をあげた。目は鋭くベッコウの眼鏡をかけていて歯は出ているし唇の形も悪い。おかっぱ頭がその醜さをさらに際立たせている。彼女の名をヨウコ＝ガラショーフという。グルジア人の女学者である。
「そんなの無責任じゃない」
「無責任ですか、ガラショーフさん」
「そうよ。だって連合に来ているお客さんじゃない」
それを言う。
「だったら皆戻してあげないと」
「あの、ガラショーフさん」
それを聞いたスキンヘッドのコメンテーターが呆れたように彼女に言った。
「何よ」
「残りたいっていう人もいるじゃないか」
「そんなの知ってるわよ」
とても知っているとは思えないが言うのだった。
「だから。帰りたいって人はいますぐ」
「そんなのできるわけないじゃないか」
「そうだそうだ」
忽ちガラショーフは他のコメンテーター達の集中砲火を受けた。
「だって今サハラ戦争してるんだよ」
「それでどうして」
「そんな時こそ軍隊じゃない」
その言葉を聞いてその場にいる一同はおろか視聴者達も呆れてしまった。ネットの実況においてはもう呆れ果てたという書き込みが

続いた。
『軍隊っておい』
『御前が言うな』
すぐにこう書き込まれた。コメンテーター達も同じだ。
「軍隊ってあんた確か」
「連合軍には反対しているんじゃないのか？」
「そうよ」
他の面々の突込みにも平然として言葉を返す。
「けれどあれじゃない。難民の人達を返してあげる為には」
「あのですね」
最初のコメンテーターがここでガラショーフに言う。
「連合軍は連合領内から外には出られないんですよ」
「エウロパと戦争したじゃない」
なお彼女はエウロパとの戦争にも反対していた。要するに連合軍が嫌いなのだ。こうした宗教的な連合軍嫌いの人間もやはりいるのだ。
「それで何で今更」
「だからあれ宣戦布告していたでしょ」
「特別なケースなんだよ」
「じゃあハサンにも宣戦布告すればいいじゃない」
『ポカーーーーーーーン』
その発言を聞いた視聴者でのネットの書き込みだ。
『こいつやっぱり馬鹿だ』
『有り得んだろ。ハサンに宣戦布告って』
『こいつエウロパとの戦争でも全然わかっていなかったよな』
『本当に政治学者かよ、こいつ』
次々にこう書かれていく。完全に馬鹿扱いされている。
「それですぐに返してあげないと」
「あのね」
金髪のコメンテーターが彼女に言ってきた。

「ハサンとは友好関係にあるんですよ」
「そんなの知ってるわよ」
何故か傲然としての言葉だった。
「けれど難民の人達を送り返してあげるには軍で保護するのが一番じゃない」
「大体すぐに送ってあげる必要ないじゃない」
「そうだそうだ」
それが言われる。
「タイミングを見てだよ」
「そもそもだよ」
また言葉が続けられる。
「エウロパとの戦争はあのステッラのスパイ行為が明るみになったからで」
「ハサンとは何もないじゃないか」
「だから何なのよ」
しかしガラショーフは相変わらずだった。
「人の為に動かないので何で連合軍なのよ。設立した意味ないじゃない」
「だからそれとこれとは話が別なんだよ」
またスキンヘッドのコメンテーターがクレームをつける。
「連合軍は国民の安全と生活を守るんだよ」
「中央政府の権限強化の為じゃないの？」
「違うよ」
全否定された。しかもすぐに。

## 第三十部第四章　難民の行く先その十

「中央警察と同じなんだよ。あと連合の治安を守って」
「各国の軍で充分じゃない」
『こいつ本当に学習能力ないな』
『というか何を見てきてるんだよ』
　またネットで実況で書き込まれる。
『連合軍ができて宇宙海賊やテロリストが瞬く間に減っただろ』
『辺境にいる俺なんかそれで随分治安がよくなったんだが』
「いい、マウリアじゃね」
　ここでマウリアを出す。
『ほい、またマウリア』
『やっぱり外国出してきたな』
　ガラショーフの話の特徴なのだ。必ず外国を引き合いに出す。しかも高確率でマウリアを。これがこのガラショーフの特徴の一つでもある。
「軍は普通にやってるじゃない」
「普通にってマウリアも国軍じゃないか」
「中央軍と同じだよ」
「違うのよ」
　その事実を認めようとしない。
「マウリアは普通に辺境でも平和じゃない。過去も」
「だから。国軍が宇宙海賊やテロリストをやっつけてるからなんだよ」
「連合と同じなんだよ」
　こういわれるがそれでも聞き入れない。耳がないかの様に。
「違うっていうのがわからないの？」
「同じっていうしかわからないよ」
「全くだ」

誰も彼女に賛成しないのが見事なコントラストだった。完全な喜劇でありガラショーフはその主役になっている。彼女に自覚はないが。
「とにかく。難民はね、すぐに皆返してあげて」
「だから残りたいって人もいるじゃないか」
「その人はどうするんだよ」
「連合が受け入れればいいじゃない」
一見してまともな言葉だった。
「連合各国でね」
「それはやっぱり無理じゃないか」
「やっぱりな」
「連合ってそんなに器の小さい国家群だったの？他の人を受け入れられないなんて」
『そんな問題じゃない』
『いい加減相手のこと考えろ、この馬鹿女』
また実況で書き込まれる。
『最低一つはわかれ』
『御前一回でも正論言ったことあるか？』
こうまで書かれるのがこのガラショーフであった。しかし彼女はまだ言う。
「受け入れてあげないと。度量は」
「難民の人達が自分達の国が欲しいって言ったら？」
「じゃあどっかの国が星系分けてあげればいいじゃない。アメリカでも中国でもロシアでも」
『ふざけるな！』
速攻でその三国のいずれかの国の者のものと思われる書き込みが来た。
『そんなことできるか！』
『いや、あんた何怒ってるのよ』
『つうかどの国の人？』

『ロシアだ』
ロシア人だった。
『ふざけるな。開拓地が一杯あるだろうが』
『ロシアあんなに星系あるじゃないか』
『いいじゃないか、一個位』
『なあ』
からかいの書き込みが次々に入るのだった。実に厳しいが。その間にもガラショーフの言葉は続いている。やはり相変わらずの有様だ。
「だから。どっかの国が分けてあげれば」
「いや、それ無理だから」
また他のコメンテーターから突っ込みが入った。うんざりとした顔だ。人を相手にするものではなく凶暴な動物を相手にしているような顔になっている。
「何処の国もそんなことしませんよ」
「何よ、皆器が小さいわね」
またしても見当違いな言葉が出て来た。
「星系一個位で」
「一個位って言うけれど」
スキンヘッドのコメンテーターの突っ込みだった。
「あんた、星系一個って相当なものだよ」
「連合全部で何千万ってあるじゃない。三千万？」
『四千万だったか？』
『今その位じゃないのか？』
ネットの書き込みがまた続く。
『もっと多かったっけ』
『どうかな』
「そのうちの一個よ。全然平気よ」
「だから。その国の事情があるんだよ」
スキンヘッドのコメンテーターのうんざりとした感じの顔が目立

。

## 第三十部第四章　難民の行く先その十一

「一個でも無理なんだって」
「無理じゃないわよ」
「それよりも新国家築いたらいいんじゃないのか？」
『正論キターーーーーーーーッ！』
『ガラショーフ涙目だな』
ここでまた実況が盛んになる。
「そうじゃないの？開拓地入れてさ」
「ああ、そうだよな」
「そういえばそれでいいですよね」
ガラショーフ以外のコメンテーターはその言葉に賛同する。確かにその通りだ。今までガラショーフの言葉に議論が滅茶苦茶になっていてそこまで行かなかったのだ。
「何処がいいかな」
「それはあの人達に選んでもらったらいいんですよ」
連合では新国家建設は何処かのまだどの国も領有を宣言していない開拓中の星系を選んでそこにすることになっている。事前にどの様な星系かチェックもした上で決めるのだ。
「違いますか？」
「それは中央政府が選んであげるべきよ」
『また言ってるよこの婆』
『本当に政治知らないんだな』
『これで政治学者か？』
今のガラショーフの言葉にまたネットで突込みが入る。またしても呆れたものだった。
『政治を知らない政治学者か』
『どんな馬鹿なんだよ』
「難民の人達に提供してあげないと」

「いや、それ今までないじゃない」
「前例がないのは理由にはならないわよ」
金髪のコメンテーターに反論する。その言葉だけは正論だった。だが今彼女を見ている者は誰もそれを正論とは思っていないのだった。
『この場合は違うだろ』
『それ連合じゃないから』
『そもそも自分で選ぶ方がいいじゃないか。それが自由ってやつだろ』
こう書かれる。視聴者の方がわかっているのだ。
『歯を剥き出しにして馬鹿言うブスは見苦しいな』
『全くだ』
その『歯を剥き出しにして馬鹿言うブス』はさらにいうのだった。
「難民の方々に善意でね」
「差別じゃないか」
「差別じゃないわよ」
また他のコメンテーターに噛み付く。
「だから。最高の惑星を提供してあげてね」
「その最高の星系の基準って何？」
さりげなく間違いまで訂正されている。
「一口にこう言っても色々あると思うんですけれど」
「だから。資源が一杯あって」
確かに豊かさの基準の一つだ。星系の。
「それで土地が肥えていて緑も水も豊かでそうした星が一杯ある場所よ」
「そんなの幾らでもありますよ」
別の女性コメンテーターが無邪気に言う。彼女はタレントだ。一見するとただのタレントであるが『学者』のガラショーフよりも頭がいいと定評がある。
「それの何処を選んであげるんですか？」

「その中で一番いいのよ」
「だから。何処なんですか？」
「そこまでは私にはわからないわよ」
こう言って顔を背ける。ここでまたネットに書き込みが入る。
『負けたな』
『汚い顔を見なくて済むな』
「じゃあやっぱり選んでもらった方がいいじゃない」
「そうですよね」
金髪のコメンテーターがスキンヘッドの言葉に頷く。
「やっぱりそれですと」
「そっちの方がずっと楽だしあの人達の為にもなるよ」
「確かに」
「そもそもガラショーフさん」
またコメンテーターの一人がガラショーフに問う。
「何よ」
「貴女はそもそもあの人達をどうしたいんですか？」
かなりダイレクトな質問であった。
「皆返してあげればいいって言ったすぐ後にいい星系を提供してあげようとかどっかの国が分けてあげるべきだとか。矛盾しているんですけれど」
「してないわよ」
彼女の中だけそうであった。

## 第三十部第四章　難民の行く先その十二

「私はケースバイケースで言ってるだけよ」
『全然そうは見えないよ』
『馬鹿言ってるっていうのと言葉を間違えてるんだろ』
今の彼女の言葉へのネットの突っ込みも厳しい。
『というかこいつっていつも言ってること破綻しまくってるよな』
『矛盾してるしな、互いにな』
「だから。いいのよ」
「よくないですよ」
「だから。何が何だかわからないから」
「放っておいてよ」
こう言ってまた顔を背ける。
「それならそれでもういいじゃない」
『よかねえよ』
『今の言葉学者失格だろ』
ネットでの書き込みによる突込みが続く中彼女の醜態は続く。彼女だけでなく今連合ではその難民達の話が結構あちこちで話題になっていた。議論もまたかなり盛んであった。
カバリエもまた。これについて考えていた。彼女は今飛行機から降りたところだった。場所はニュージーランドのベルファスト星系、ニュージーランドの首都星系であり保守派の領袖であるマウイの地元である。彼女に会う為にここに立ち寄ったのである。財務相であるトラブゾンも一緒だ。
まずは車に乗る。ここでトラブゾンは横にいるカバリエに声をかけてきた。
「さて」
「狭くて御免なさい」
カバリエはまず笑って彼にこう言ってきた。

「私があまりに大きくて」
「いや、それは」
彼はそれに関しては笑って何でもないと述べた。
「御気になさらずに」
「いいの」
「ええ。むしろ外相と一緒にいられて幸せです」
「またお世辞を」
「いえいえ、お世辞ではありませんぞ」
笑ってそれは否定するのだった。
「これはまことの言葉です」
「どうかしら」
「信じて頂けなく残念至極です」
「では信じればどうなるのかしら」
笑って彼に問うカバリエであった。
「何かあるのかしら」
「あります」
彼も臆することなく言葉を返す。
「あるの」
「はい。今回のお話で」
言うのはそれであった。
「財務省としても用意があります」
「それはもう用意しているものではなくて？」
「いや、これは手厳しい」
こう指摘されて思わず苦笑いになる。
「そう言われると」
「公と私は別」
よく使われる言葉が出た。実際にそうだがここでは冗談めかして使われていた。
「いつもそう言っている貴方がそんなことを言うこと自体がおかしいと思うわ。普通は」

「それでもうおわかりでしたか」
「そういうことよ。それで」
話がここで変わる。
「財務省としてはどれだけ出せるかしら」
「遣り繰りが必要なのが現状です」
つまりあまりよくはないというのだ。
「開拓省への予算の配分は終わっていまして」
「ええ」
「今回はかなりの額に上っていますがそれは全て計画している開拓及び再開発にかかるものでして」
「つまりそちらの予算は回せないのね」
「そういうことです」
静かにカバリエに答えてみせた。
「本来は開拓省から出すべきものですが」
「いつもの新国家用の惑星開発と同じようにね」
「その通りです」
連合では新国家が入る星系の開発は開拓省が行っている。これは普通の星系の開拓及び再開発と同じだ。違うのは普通の国家はそこにその国の予算や計画も入り共同という形になるが新国家に関しては中央政府開拓省が全面的に受け持つということだ。
「ですからそちらは」
「特別予算はどうなの？」
「そちらもかなり限られています」
こちらでも話は暗いものだった。

## 第三十部第四章　難民の行く先その十三

「老人年金と教育特別費で」
「そう。福祉と教育でね」
「その二つを減らすわけにはいかないので」
民生を考えるうえではそうであった。小さい政府であってもこれを考慮しないわけにはいかない。これが民主国家の政府の難しいところだ。
「やはりこちらも」
「他からは回せないかしら」
「外務省にしろそれは同じですね」
「こちらもギリギリなのよ」
さりげなく自身の統括する省庁を守るカバリエだった。
「予算の遣り繰りがね。今回は少なかったから」
「申し訳ありません」
「謝る必要はないわ。私も少なく見積もったし」
こうした事情もあった。
「サハラ各国にあった領事館や大使館を完全に撤収したから」
「オムダーマンとティムールによりですね」
「特に西方と南方ね」
やはりオムダーマンに関することであった。
「そちらの大使館や領事館はもう完全に撤収したから」
「オムダーマンのそれ以外は」
「ええ。だから予算を減らしたのだけれど」
「それでもギリギリですか」
「残念だけれどね。こちらはそうした事情よ」
「内務省は言うまでもないですし」
トラブゾンはここで腕を組んで思索に入った。
「金内相の節約は有名ですし」

「防衛省もね」
「あそこに至っては」
八条の管轄下である。
「あの予算でよくあれだけできるものだと感心すらしています」
「では八条長官を参考にしてはどうかしら」
「長官をですか」
「ええ。それなら何とかできるかも知れないわよ」
「そうですね」
トラブゾンは今のカバリエの話に乗った。
「それでしたら」
「それでいいのね」
「はい、予算は何とかこちらで工面します」
固い決意の見られる言葉だった。
「少ないとはいえまだ使えそうな予算があちこちにありますので」
「それを掻き集めて」
「そうなります」
いささかお寒い話だがそうも言ってはいられなかった。そうした状況だったのだ。
「それではその様に」
「御願いね。さて」
「はい。何でしょうか」
「向こうは何を要求してくるかしら」
カバリエが言うのはそこであった。
「開拓相ではなくて外相の私を呼ぶというのはまずは」
「彼等に異邦人という意識があるということですね」
「そうね」
だからなのだった。普通は新国家建設等の時は開拓省が窓口になる。しかし彼等はサハラからの難民であるので外相である彼女が出向くことになったのだ。あくまで会談なのだ。
「その彼等がサハラに戻るかそれとも」

「連合に入るか」
トラブゾンも言う。
「問題はそこですね」
「かなり分かれると思うわ」
「分かれますか」
「ええ」
またトラブゾンに対して答える。
「かなりね」
「残る者と帰る者に」
「難民の歴史はいつもこうなのよ」
カバリエの今の言葉には達観が含まれていた。
「いつもですか」
「そう。最初は誰でも望郷の念があるわ」
自らの意志に反して故郷を去るしかなかった。これで望郷の念を抱いていない方がおかしい。そういうことだった。
「けれど。そこにいるうちに」
「その地に愛着ができる」
「既に保護されている国の市民権を手に入れている人もいるそうね」
「はい、難民ではなく市民になった方も多いです」
トラブゾンはあえて丁寧に述べた。こうした時に下手な表現を使うことは政治家としての品性及び資質を疑われることだからだ。だからあえて慎重に述べたのだ。

## 第三十部第四章　難民の行く先その十四

「ですから」
「既に分かれているのね」
「新国家に入れば難民ではなくなります」
「ええ」
次にはこう述べられカバリエもそれに頷いて答える。
「その通りね」
「難民という不安定な地位から市民になれば」
「安心することができるわね。これが大きいわよね」
「その通りです。ですから」
トラブゾンは言う。
「既に連合に入っている方もおられるのです」
「それは知っていたわ。けれどそれでも」
「まだ十億以上の難民の方々がおられます」
そういうことであった。
「この連合全体で」
「国家になるには充分な数ね」
「はい」
次にカバリエが指摘したのはそこでトラブゾンもそれに頷いてみせた。
「そうです、充分です」
「充分な数があればやっぱり」
「国家を建設しようという話は当然です」
「そうね。けれど」
だがここでカバリエは言うのだった。
「それは冒険でもあるわね」
「冒険ですか」
「今まで難民が連合に来たことはあったわ」

「それこそサハラから常に」
これもまた歴史だった。連合は常にサハラの難民達を受け入れてきている。だが今はこれまでとは大きく違う事情があったのだ。それは。
「それでも新国家を築くことはなかったわね」
「全くです」
「連合の何処かの国に市民権を貰ってそこに入るか平和が戻って帰るか。どちらかだったわね」
「ええ、これまでは」
「それが新国家建設ね。何だか」
今までは話にもあがることはなかった。だからそれに関して戸惑いも見せているのだ。そういうことだった。
「戸惑いを感じるわ」
「確かに」
それにトラブゾンも同意して頷く。
「前例がないとやはり」
「前例がないでは政治家は話が済まないけれどね」
「ええ、それは」
政治家の世界での話になった。
「その通りです。政治家でそれを言えば」
「落選よ」
カバリエの言葉は一言であったがその一言が実に重いものだった。
「即刻ね」
「そうですね。官僚ならいざ知らず」
「官僚に対してはその場合責任はこちら持ちだと言えばいいのよ」
これはカバリエの官僚へのコントロール方法だった。
「こう言うだけで彼等は怯まなくなるから」
「責任は自分持ちですか」
「大臣の仕事は責任を受け持つことよ」
こうも言ってみせる。

「そうしてスタッフを動かすのよ。つまり責任を果たせなければ」
「大臣にはなれないと」
「それが地位と言うものだと思うけれど」
今度の言葉はこうであった。
「違うかしら」
「それがわかっていない人間も多いようですが」
「確かにね」
ただ地位だけを求める者は何時でも何処にでもいる。当然ながら連合にもいる。そうした者達が問題を引き起こすのもある。これは何処でも同じである。
「この前の不祥事もね」
「ええ」
製品の偽装問題が話題になったのだ。
「トップの責任逃れがね」
「モラルの低下でしょうか」
「違うわ。昔からあるじゃない」
カバリエはモラルの低下で話を終わらせはしなかった。それとは別のものを見ている。そしてそれを言葉にもはっきりと出してみせるのであった。

## 第三十部第四章　難民の行く先その十五

「それに関してはね」
「不心得者は何処にでもいますか」
「何時でもね。あれはそれだけの話よ」
「左様ですか」
「こうした時テレビの新聞論説委員が盛んに言うけれど」
　この時代でもこうした論説委員の演説らしきものは存在している。テレビと新聞がある限り結局これがなくなることもないのだ。それがいいか悪いかは別にして。
「そんなにご大層な話ではないわ」
「新聞は違う論調ですが」
「新聞は物事を何でも大袈裟に書くものよ」
　これが新聞の習性なのも変わってはいなかった。
「些細なことでもね。しかもそれぞれを強引に結び付けるし」
「それは確かに」
「ただ。責任感をはっきりさせるのは難しいところがあるわね」
「地位だけでは駄目ですか」
「それだけでは。少し苦しいのでしょうね」
　カバリエは少し考える顔になっていた。
「それを考えたら階級だけで責任を取ることが決められている社会はその点は楽ね」
「エウロパですか」
「気に入らない制度だけれど。そうなるわね」
　彼女もまたエウロパもその貴族主義も好きではなかった。連合の教育では『彼等式の』植民地統治や覇権主義、侵略、抗争、人種主義、とりわけ貴族主義はとりわけ唾棄されるものとして教育されてきているからだ。これは様々な価値観を持つ彼等の中で共通する数少ないものだ。

「貴族は責任を取るべき階級なのだから」
「苑貴族達にここに追いやられた方々との会談ですね」
「今からのはね」
話がここでまた変わったのだった。
「さて、どうなるかしら」
「サハラ人は頑健だと聞いていますが」
「戦いで鍛えられてね」
「それとその過酷な環境で」
サハラの惑星の殆どは砂と岩の惑星だ。連合の様に緑のそれに変える術もない。そうした環境に入れば確かに頑健となってしまうのだ。
「鍛え抜かれているからと」
「その彼等がどんな星系を選ぶかね」
「緑の星系を選ぶというのが大方の見方ですが」
「豊かさを求めるのね」
「そうです」
これはガラショーフと同じ見方だった。彼女の論調は確かに独善的であり主観しかないがそれでもそこに真実もあるのは確かだった。連合から見た真実が。
「違うでしょうか」
「さて、どうなるかしらね」
ここでカバリエはあえて明確な返答を避けた。
「それに関しては」
「わかりませんか」
「こちらとしても開拓省が提示している星系が幾つかあるわね」
「はい」
「どれも私達の基準ではいい星系だけれど」
連合の基準、と言ったところが要点であった。
「彼等にとってはどうかしら」
「我々とは価値観が違うと」

「連合とサハラは別世界よ」
次に述べた言葉はこれであった。
「それを考えれば私達とは違う判断を下すことも考えられるわ」
「緑を求めずにですか」
「私もそれはまさかとは思うけれど」
こう考えるのはカバリエもまた連合の者であるからだ。連合では緑と青、つまり木と水が愛される。それこそが惑星の豊かさの象徴なのだ。
「どうなるかしらね」
「全ては会談してからですね」
「ええ。それにしても」
ここでカバリエは窓の外を見るのだった。
「何か」
「豊かね」
窓の外の風景を眺めながら言ったのだった。
「ここも緑と青が」
「確かに」
右手には森があり左手には大河がある。緑と青の対比だった。
「このようにするのにかなりの手間隙をかけたそうです」
「開拓だったわね」
開拓により岩の惑星をこうした。それがこのキャンベラなのだ。
「ここもそうし作り上げたのだったわね」
「その通りです。ニュージーランド人の努力の結晶です」
「ええ。見事な努力の結果よ」
カバリエもそれを認める。

## 第三十部第四章　難民の行く先その十六

「こうして緑と青の世界を築いていく。さて、彼等はどうするのかしら」
「全てはこれからわかることです」
トラブゾンの言葉だった。
「これから。何もかも」
「結局のところはじまってもいないのね」
「会談もまだですし」
「全てはテーブルに着いてからはじまる」
カバリエは言った。
「そういうことね」
「まだテーブルにも着いていません」
「それでも話すことはできるのね」
「プレリュードです」
オペラに例えるトラブゾンだった。
「幕が開く前の」
「はじまるのは幕が開いてから。けれどあれよ」
「あれといいますと」
「オペラは幕が開いてはじまりではないのよ」
「といいますと」
「既に。幕が開く前にはじまっているのよ」
これがカバリエの考えだった。舞台がはじまるより遥か前に劇ははじまっているというのだ。だがこれはトラブゾンにはピンと来ないことだった。
「といいますと」
「事前の準備よ」
オペラについてそこまでは詳しくないと見受けられる彼に告げた。
「こう言えばわかるかしら」

「ええ、そう仰って頂ければ」
財務相として理解したのだった。
「予算の編成前の事前の整理や人員の確保等ですね」
「そういうことよ」
予算一つ編成するにも人員を集め編成出来るように資料等を集めなくてはならない。そういうことであった。仕事ならばどれでも重要なことである。
「これでわかってくれたわね」
「はい、よく」
笑顔でカバリエの言葉に頷いてみせた。
「そういう感じでしたら」
「それでその舞台の前だけれど」
「はい」
またカバリエの言葉を聞く。
「今のところは順調に進んでいる感じね」
「順調ですか」
「ただ。はじめての作品の舞台に取り掛かる時は」
「その時は」
「より慎重に、かつ念入りに」
こう述べてみせた。
「話を進めていかないと駄目なのだけれどね」
「外務省の方ではどうだったのでしょうか」
「まずはあちらの要望を細かく聞かせてもらったわ」
「もうですか」
「おおよそのレベルだけれどね」
一応は、ということだった。だが聞いているのといないのとではかなり違っている。これは何事においても言えるものであり今回もそれは同じだった。
「聞かせてもらったわ。その結果」
「おわかりになられたことは」

「まず。星系はまだ決めていないそうよ」
「それはまだですか」
「向こうでの話もまとまっていないそうだから」
「左様ですか」
最も重要な話はまずは据え置きとなるのだった。
「だから。何処に入るのか、どの国に近いのかも全然わからないわ」
「それが最大の問題なのですが」
「ただ。ある程度は予測がついたわ」
しかしここでカバリエはこうも言うのだった。
「ある程度といいますと」
「米中露の近くは避けたいそうね」
「ああ、彼等は」
トラブゾンはこう言われて何となくだがわかった。三国とは宗教が全く異なるからだ。アメリカにしろ中国にしろロシアにしろこの時代ではムスリムも結構多く存在しているがその宗派が違うのだ。同じスンニー派であってもサハラのそれはかなりイスラム原初のそれに近いのだ。だからであった。

## 第三十部第四章　難民の行く先その十七

「それはわかります」
「それと貴方達の場所にも」
「旧ＡＳＥＡＮ諸国の近辺にも」
「米中露と同じ理由で」
「同じムスリムだと余計に、なのですね」
「残念かどうかはわからないけれどね」
カバリエはムスリムではないのでこう述べるだけだった。その為か今の彼女の言葉にしても随分と他人事の様にも聞こえる響きだった。客観的だとも言えるが。
「そうした感情的な理由が強いわね」
「感情はどうにもできません」
トラブゾンはそれには立ち入らないことにした。
「ましてやそこに宗教が関わると」
「宗教が一番複雑になるわね」
「その通りです」
またカバリエの言葉に頷く。
「こればかりはどうにも」
「確か十九世紀にはこの問題は解決された筈だけれど」
前を見て少しシニカルに述べるのだった。
「フランス革命や共産主義によりね」
「どちらも同じですな」
「ええ、同じよ」
カバリエにしては珍しいシニカルな言葉になっていた。
「両方共ね。それにナチズムも」
「結局は全体主義ですから」
「彼等は宗教を否定したわね」
「はい」

それはフランス革命にはじまる。宗教を否定しそのかわりに理性を出したのだ。所謂理性崇拝でありこれはそもそもが啓蒙思想にはじまる。もっともかなり歪に進化してしまった啓蒙思想であったが。
「それにかわるものが理性であり」
「イデオロギーであり」
「独裁者だったわ」
最後に行き着いた答えは独裁者だった。
「その独裁者を生きた神にしてしまったのよ」
「ロベスピエールでありヒトラーでありスターリンである」
「ムッソリーニは違うけれどね」
「彼は独裁者ではありませんか」
「かなり近いものではあったけれど」
「成程」
この時代はムッソリーニは連合においてもヒトラーやスターリン程評判は悪くはない。むしろずっといい位だ。マフィアを根絶しイタリアを立ち直らせた功績とその人間味ある性格が評価されているのだ。かつては完全悪の如く言われていた彼もその評判はかなりましになっているのだ。
「また違ったから」
「ヒトラーもスターリンも神であったと」
「ムッソリーニは神ではなかったわ。その証拠に」
「その証拠に」
「神と和解をしているわ」
面白い言葉が出て来た、トラブゾンはカバリエの話を聞いていてこう思った。
「神と和解をですか」
「ナポレオンもだったけれどね。つまり」
カバリエはさらに言う。
「バチカンと和解したのよ」
「それですか」

「ヒトラーは教会をないがしろにし」
なおヒトラーはカトリックであった。オーストリア生まれでありその信仰は先祖代々のものだったのである。なお彼がユダヤ人の血を引いていないのも確かなものとされている。この時代でもまだ諸説ありはっきりしないところはあるが定説ではそう決まってはいる。
「スターリンはバチカンの存在を無視していたわね」
「そしてロベスピエールは」
「彼は徹底的に教会を嫌ったわね」
ジャコバン派の特徴だった。
「聖職者を次々と粛清したわね」
「理性の名の下に」
「自由の名の下に多くの血を流させた革命は」
またシニカルな言葉になっていた。
「さらに今度は理性により」
「多くの血を飲み込んだ」
「理性という存在を崇め奉る宗教だったのよ」
こうした点がやはり全体主義のルーツと言えるのだった。二十世紀世界を覆ったナチズムもコミュニズムもそのルーツは銃八世紀末、十九世紀初頭にあったのだ。
「ほら、トスカってオペラがあるわね」
「ええ、それは知っています」
トスカについてはトラブゾンも知っていた。プッチーニの名作だ。連合では日本を舞台とした蝶々夫人、アメリカを舞台とした西部の娘、中国を舞台としたトゥーランドットが人気である。

## 第三十部第四章　難民の行く先その十八

「カヴァラドゥッシだけれど」
「彼が一体？ただの画家では」
「それが違うのよ。ほら」
ここでカバリエは言う。
「演出によってはね」
「演出ですか」
「彼は髭を生やしていたりするわよね」
「そういえば」
言われてそれに気付くトラブゾンだった。
「そういう時もあったような」
「どうしてだか知っているかしら」
「その歌手がたまたま髭を生やしているというわけではないですね」
「勿論よ。それに」
「それに」
カバリエの話は続くのだった。
「彼は時々ブーツだったり赤と青と白の服を着ていたりするわね」
「そういえば」
トラブゾンは今のカバリエの言葉でまたあることに気付いた。
「時折青い上着に白いシャツに赤いタイの彼がいますね」
「これが何かは」
「トリコロールですか」
トラブゾンの顔が一気に曇った。トリコロールだからだ。
「あの胸の悪くなる国家の」
「そう、フランスの国旗ね」
青が自由、白が平等、赤が博愛を示している。その行いや歴史がそれとは全く逆であろうとも一応はそれがこの時代でもフランスの象徴となっているのである。

「あれを表しているのよ」
「では髭は」
「あれは顎鬚ね」
「はい」
演出ではそうなるのだ。
「あれが象徴になるのよ」
「顎鬚がですか」
「髪型もだけれどね」
「髪も」
それを聞いて思わず首を捻る。彼にはどうしてもわからないことだった。
「そういったものがどうかしたのですか？」
「どちらも革命家だっている証拠になるのよ」
「革命家の、ですか」
「ええ。当時の欧州の貴族だけれどね」
話は当時の貴族達に関するものにも及んだ。
「鬘を被っていたわね」
「はい」
これはトラブゾンも知っていた。当時の貴族の風俗だ。その時は貴族達は身だしなみとしてそうしていた。なおそれと共に鬘の虱にも悩まされてもいた。
「けれど彼はそれを被らないで髪を短くしていたから」
「まずそれで貴族とは違うと」
「そう、それで」
さらに言う。
「顎鬚はね」
「当時の貴族はそういえば」
トラブゾンは話が進むにつれて思い出していった。学んだことや本で読んだことを。
「髭を生やしてはいませんでしたね」

「髭は剃り化粧をしていたのよ」
バロックやロココの時代はそうであった。これもまた身だしなみだったのだ。
「けれど顎鬚を生やしていたから」
「革命家であるということの証になるのですね」
「それに無神論者ね」
「ああ、そうですね」
これはトラブゾンもすぐにわかった。
「貴族制度に反対しそれと共に革命は信仰も否定していますから」
「結果としてそうなるのよ」
「だからカヴァラドゥッシはそういう格好になるのですね」
「そういうことよ。わかってくれたわね」
「はい」
ようやく納得して頷くことができたのだった。
「そういうことでしたら」
「そういう複雑な理由があったのよ」
「舞台一つ取ってもそうした複雑な事情がありましたか」
「ええ。わかってくれたわね」
「わかりました」
笑顔でカバリエの言葉に頷く。

## 第三十部第四章　難民の行く先その十九

「ようやくですが」
「現実もそれは同じよ」
「今回においても」
「それでだけれど」
また言う。
「今度の会談でもね」
「それですね」
実務のことになると顔が変わる。能吏の顔になっていた。
「細かいところへの配慮は必要ね」
「その通りです。それで場所ですが」
話がそこにも戻った。
「彼等は何処を望んでいるのでしょうか」
「それが。後はトルコの近くだけれど」
「同じムスリムですがそれでも、ですね」
「しかも同じスンニー派だけれどね」
トルコは元々スンニー派イスラム教徒が多い。これはオスマン＝トルコからであり数多くの異教徒や異民族をその中に擁しているがその主流はあくまでそれであったのだ。スルタンがカリフも兼ねていたのがその証である。
「それでもなのよ」
「やはリ違ってきていますね」
「連合のスンニー派とサハラのスンニー派」
この表現が使われた。
「違うものになっているから」
「摩擦が生じる恐れがありますね」
「ええ。問題はそれね」
そこをまた指摘する。

「これまでも実際に難民が連合に入って」
「摩擦がありました」
これは本当のことだ。やはりそれはあったのだ。
「ですがあくまで個人のことで」
「国家ではなかったわね」
「はい。その分だけ問題が小規模でした」
こうも言う。
「ですが今回は」
「一歩間違えれば惨事よ」
カバリエの顔が曇る。
「あちらがどう動くかだけれど」
「さて、何処を選ぶでしょうか」
「それが問題ね」
あらためてそれを言う。
「場合によっては。こちらも骨が折れることになるわね」
「その通りです。その場合は」
「説得が必要ね」
「そうですね。その時は」
そんな話をしつつ車を進ませて会談に赴く。彼等には彼等の戦場があるのだった。

# 第三十部第五章　突撃戦再びその一

突破戦再び

第一次防衛ラインから撤退する敵を捕捉して捕虜としたオムダーマン軍。アッディーンはその兵達をさらに北に進め次の防衛ラインに向かっていた。

アリーの艦橋において。アッディーンはまた幕僚の一人に問うのだった。

「あと何日で到着か」

「二日です」

幕僚の一人が彼の言葉に答える。

「あと二日で敵の次の防衛ラインに到着です」

「そうか、二日か」

アッディーンはそれを聞いてまずは頷いた。

「予定通りだな」

「本来は三日だったのでは？」

「この速度だと二日だ」

あらためてこう述べるのだった。

「だからだ。それでいい」

「左様でしたか」

「うむ。それでだ」

彼はさらに言う。

「敵軍はおそらく知っているだろうな」

「友軍が残らず捕虜になってしまったことにですか」

「知らないと思うか？」

それを幕僚達に対して問う。

「誰も連絡を行かしていないと。それは考えていないな」

「確かに」

「それは」

「そうだ、彼等は間違いなく知っている」
アッディーンは言った。前を見ながら。
「友軍が捕虜になったことをな。それを受けてどう動くかだが」
「徹底抗戦でしょうか」
幕僚の一人がこう言ってきた。
「数が少ないと感じ余計に」
「いや、早期撤退ではないのか？」
別の幕僚はこう述べた。
「数が少ないのなら余計に」
「いや、カラクームはヘルマンドより堅固だ」
また別の幕僚が異論を出してきた。
「それならば。立て篭もり戦術の変換を考えるのではないのか」
「戦術の変換か」
「そうだ」
彼は言う。
「例えば。後方から兵を集めるなりしてな」
「暫減戦略を放棄してか。まさか」
「だが考えられる」
しかし彼はあくまでこう主張する。
「それもな。逆もまた真なりだぞ」
「それは確かにそうだが」
同僚達は彼のその言葉を否定できなかった。誰もが難しい顔になっていく。
「だが一気にここで兵を集めて来られるのは」
「困ったことになるぞ」
「別に困るに値しない」
ここで口を開いたのはアッディーンだった。幕僚達に顔を向けての言葉だった。
「それはな。別にな」
「司令」

「それはまたどうしてでしょうか」
「ならばその時にまとめて倒すだけだ」
簡潔に述べるだけだった。
「一斉攻撃でな。こちらも手間が省ける」
「それだけですか」
「そうだ、それだけだ」
言い切ってもみせる。
「敵が集まればな。それだけ後で戦闘を続ける手間も省ける」
「そこまで仰るとは」
「案ずるな、自信はある」
やはり言葉は揺らがない。
「コロニーレーザーを前にして密集すればそれだけで自殺行為なのだからな」
「今回も持って来たのはそれも考慮してのことでしょうか」
「いや、そうではない」
しかしそれは違うと言うのだった。

## 第三十部第五章　突撃戦再びその二

「ですが今の御言葉は」
「あくまでその場合はそうなるということだった」
こう幕僚達にあらためて説明するのだった。
「一度に集まった場合はな。だがそれはない」
「これまで通りの暫減戦略を続けていくと、ハサン軍は」
「ダビデブ元帥はこうと決めたら容易には考えを変えないところがある」
つまり頑固ということだった。これがよい方向に出る場合もあれば悪い方向に出る場合もある。今回はあながちどちらかとは言えないものがあるがそれでも彼はそれを利用することにしたのだ。
「だからだ。それを考えれば」
「やはり集まりませんか」
「おそらく第三次を突破するまではこのままだ」
「次の次を、ですか」
「第三次までこのままいければまずは御の字だ」
彼の考えではこうであった。
「それだけ敵の戦力を減らせられる。しかし」
「しかし？」
「前回の様にただ追撃して捕捉するだけでは駄目だ」
前回の機動力を活かした追尾及び捕捉して逃れようとするハサン軍を一平残らず捕虜としたあの戦術のことだ。彼は今回はそれをしないというのだ。
「今回はな。それは警戒されている」
「ですが彼等は危機になれば間違いなく要塞を放棄して撤退します」
「その通りです」
幕僚達にとってもうこれは既定の話であった。
「それをどうするかを考えれば」

「やはり今回も」
「捕捉はする」
その彼等を安心させるようにして告げるのだった。
「それは安心してくれ」
「左様ですか、それは」
「その様になのですね」
「そうだ。捕捉するといっても方法は一つではない」
前に顔を向けて。そのうえで己の幕僚達に語るのだった。
「幾らでも方法がある。楽なものだ」
「では今回はどうされるのですか？」
「コリームア大将だ」
「コリームア大将ですか」
「彼とその下にある艦隊に伝えよ。あらかじめ先に行けと」
「先に」
「そうだ。そして」
続けて指示を出す。
「全速力でカラクームの左翼にある要塞地帯に攻撃をかけよとな」
「カラクーム左翼にですか」
「砲撃を中心に叩き込め」
こうも言う。
「敵の射程内に入らないように注意してな。わかったな」
「わかりました」
「ではすぐにコリームア提督にその様に」
「同時に右にも攻撃を仕掛ける」
アッディーンは右にもと言った。
「左翼と比べてやや遅れてな。そこの指揮官は」
「どなたでしょうか」
「ムーア提督だ」
彼に決めるのだった。
「彼とその下にある艦隊は右だ。いいな」

「ムーア大将の艦隊を右に」
「これで敵の左右に攻撃を仕掛けることになるますな」
「ですが」
「ですが。何だ」
幕僚達のうちの一人の言葉に問う。
「その部隊は急がせる為にコロニーレーザーを持って行くことが困難であると思われます」
「確かに」
「その通りです」
それを聞いて他の幕僚達も彼の言葉に頷くのだった。
「そうなれば要塞攻撃は」
「効果がなくこちらの損害も甚大なものとなりますが」
「あくまで敵の射程に入らない限りでやるのだ」
先程の指示において述べたことをまた言ってみせてきた。
「それだけでいい」
「それだけでいいと」
「では積極的な攻勢は」
「二人に伝えよ」
ここでまた言ってきた。

## 第三十部第五章　突撃戦再びその三

「あくまで派手に動けと」
「派手に」
「そうだ。それだけでいい」
こうも言ってみせる。
「派手に動いて。それで敵を引き付ければな」
「敵を引き付ける」
「ではそれが」
「そうだ。左右に目を奪われている間に主力は正面を急襲する」
アッディーンは言った。
「そして集中砲撃で一気に突破しそのうえで」
「そのうえで」
「すぐに高速機動部隊を雪崩れ込ませる。指揮は私が執る」
「閣下が」
「またしても」
「これで勝敗が完全に決する」
ここまで話したうえでの言葉だった。
「雪崩れ込ませた軍をさらに敵の後ろに回り込ませてな。そうして包囲して完全に陥落させるのだ」
「その様に進められるのですか」
「これならば敵も逃げられぬ」
それを狙っての戦術の採用であった。
「これでな。だが」
「だが？」
「何か問題が」
「迅速に動く」
彼の考えはこれだった。
「迅速にだ。さもなければこの作戦は失敗する」

「まずは左右の部隊が敵を上手く引き付け」
「そうだ」
第一段階はそれであった。まずはこれが成功しなければならない。これはもう言葉の外にはっきりと言っていた。皆わかっていることだった。
「そのうえで中央に主力が殺到する。薄くなった守りにな」
「つまり敵を分散させ」
「一点突破の後包囲するのですな」
「戦術としてオーソドックスだな」
「確かに」
「戦術としましては」
彼等もそれははっきりとわかった。難しいものだが戦術としては極めてオーソドックスなものだった。過去に幾らでも先例があるものである。
「だがオーソドックスであるだけに難しいぞ」
「オーソドックスだけに」
「そうだ、難しい」
それをまた言う。
「完全に行うのはさらにな」
「しかしそれをあえてやられるのですね」
「では自信は」
「私は自信のない作戦は採らない」
それがアッディーンだった。確実にできると判断しなければそれを採用したりはしない。それが彼、アッディーンなのだ。そうした意味で慎重なのだ。
「今回もまた同じだ」
「ですね。それでは」
「それで行きましょう」
「それだけに二日なのは大きいのだ」
二日という時間が。重みを帯びてきていた。

「実にな。三日よりもだ」
「三日よりも」
「一日をどう活かすかだ。これはハサン軍にとっても言えるが」
「敵にとっても」
「三日と判断してそのうえで準備して心構えをしている」
彼が言うのはそこだった。
「それだけに二日となると」
「一日が大きいですか」
「そうだ。そこを衝く」
アッディーンの顔に今不敵な笑みが宿った。
「それでな。一気に攻めて勢いを決める」
「わかりました。それでは」
「そのように」
「すぐに左右に兵を向かわせよ」
あらためてこの指示を出す。
「よいな」
「はっ、それは」
「確かに」
それもすぐに指示が出され皆それに応えるのだった。

## 第三十部第五章　突撃戦再びその四

「まずはそれだ。そのうえで」
「中央に兵を進め一気に」
「勝負を決める。コロニーレーザーは到着したらすぐに放てるようにしておけ」
「そのコロニーレーザーですが」
「どうした？」
「破損したものはどうしましょうか」
「破損したものか」
アッディーンはそれを聞いて僅かだがその顔に考えるものを漂わせた。
「そうです。それはどの様に」
「既に先の戦闘でダメージを受けているものもあります」
「それは」
「考えがある」
「どの様な」
「まずはエネルギーを充満させる」
最初はそれだった。
「コロニーレーザーの中にな。そして」
「そして」
「それを敵陣に向けて放つ」
「敵陣に対してコロニーレーザーを」
「そしてそれで敵陣を攻撃するのだ」
アッディーンの策はこれであった。
「言うならば爆弾として使う」
「爆弾ですか」
「途中で破壊される可能性もある」
アッディーンはこれについても考慮をしていた。そこまで考えて

こその戦術というわけだった。やはり彼は一代の戦術家でもあるということの証だった。
「それはそれでいい」
「宜しいのですね」
「目晦ましになる」
これも狙っているのだった。彼の狙いは一つではなかったのだ。
「レーダーもエネルギーで異常が出る。それも狙うぞ」
「ですがそれは」
「我等もだと言いたいのだな」
「はい、それだけのエネルギーが生じれば」
「我々の攻撃もまた」
他の幕僚達もそれを危惧していた。だからこそ口々に述べる。
「それへの影響も充分に考えられますが」
「それはどの様に」
「構わぬ」
しかし何とここで。アッディーンはそれをよしとしたのだった。
「宜しいのですか」
「そうだ」
また幕僚達に対して言ってみせる。
「我々はそれを考慮する必要はない」
「といいますと」
「無差別の波状攻撃を続ける」
それが彼の戦術だった。
「射程を定めずにな。今まで通りな」
「そういうことでしたか」
「これならば問題はあるまい」
「確かに」
「それならば」
幕僚達も今のアッディーンの言葉を聞いて納得するのだった。不安げだった表情が変わっていく。

「ではその様に」
「到着したならば即座に全面攻撃を」
「その通りだ」
これはただコロニーレーザーに対して述べたことではなかった。
「いいか」
「はい」
「全艦同じだ」
艦艇についても同じだと言ったのだった。
「わかったな」
「全艦同じですか」
「無論先発させる左右の艦隊もだ」
コリームア達に対してもだった。彼の戦術は有り得ない程迅速なものだった。彼はそれをあえて行おうという。幕僚達はまた驚くしかなかった。
「到着したならば即座に」
「総攻撃を開始する」
「これが重要なのだ」
こうも言ってみせてきた。
「本来は到着してから攻撃態勢に入るが」
「そうではなく事前にそれを行う」
「兵を進めながらな」
つまり間合いを詰めながら剣を抜き弓矢を取り出すというのだ。古来でもまずなかったがこれはこの時代においてもだ。艦隊はまずそのポイントに移動してそれから態勢を整えてかｒ攻撃態勢に入る。彼はそれをしないというのだ。

## 第三十部第五章　突撃戦再びその五

「だが突撃ではない」
「突撃ではなく」
「そこから波状に一斉攻撃を仕掛ける」
こうも述べるのだった。
「一気にな。突撃するのはそれからだ」
「わかりました。それでは」
「その様に」
幕僚達はここでまたアッディーンの言葉に頷くのだった。
「これまでこうした戦術はなかったな」
「一気に突撃するというものは多々ありますが」
「これは流石に」
突撃の場合は攻撃しながら突入する。しかしそれでさえもまずは狙いを定めてからだ。彼は今それすらもしないというのだ。到着と同時に総攻撃である。やはりこれは今までなかったことだったのだ。
「それをあえてやられますか」
「兵は神速を尊ぶ」
またしても古来より言われている言葉がアッディーンの口より出された。
「それは移動だけではないのだ」
「攻撃もそうであるのはわかっていましたが」
「まさかこうした方法が」
「兵は相手の虚を衝く」
これもまた古来より言われていることだった。
「それにはこうしたやり方もある」
「ふむ。確かに」
「言葉では簡単ですが思いつくのは」
「卵だ」

アッディーンは不意に卵を言葉に出してきた。
「卵！？」
「卵が一体」
「卵を立たせるにはどうすればいいか」
「それは鳥の卵ですね」
「そうだ」
サハラでは食べる卵は鳥類の卵だ。連合では恐竜や両生類、魚類の卵も食べる。だがサハラではコーランにある以外のものはあまり食べないのでこうなるのだ。
「それを立たせるにはどうすればいいか」
「それでしたら」
幕僚の一人がすぐにアッディーンに答えてきた。
「まず卵の殻の底を割り」
「うむ」
「それから中を取り出し」
まずはそれだった。流石に中身を粗末にはしないのだった。
「そのうえで立たせます。底が割れて安定していますから」
「その通りだ」
「コロンブスの逸話ですな、確か」
「そうですな」
流石にこれは誰もが知っていた。エウロパではコロンブスは偉大な探検者であり英雄の一人にもなっている。連合ではここに侵略の尖兵という考えも加わり複雑なものになっている。
「だからわかるな」
「はい、つまり簡単なことでも気付くのは容易ではない。そういうことですね」
「戦いにおいてはとりわけそうだ」
アッディーンが言いたいのはそこであった。
「簡単なこと程気付かないのだ」
「成程、そういうことですか」

「それでしたら」
「わかるな。コロンブスの卵だ」
「何事もそうなのですな」
「戦争にしろ」
「そうだ。だがこれは」
しかしここでアッディーンはまた言うのだった。問題点を指摘するかのように。
「一つ問題点がある」
「問題点といいますと」
「言うのは容易だ」
まずこう述べる。
「しかし実行するのは」
「難しいというのですね」
「到着と同時に総攻撃を浴びせる」
一言で言うとこれだけに過ぎない。たったそれだけのことだ。しかし今までどの軍も宇宙戦においてできなかったのはそれなりの理由があるのだ。発想として思いつかないだけではなく、だ。
「しかしこれにはかなりの訓練度を要する」
「訓練度を」
「しかも軍全体のな」
こう述べたのだった。

## 第三十部第五章　突撃戦再びその六

「訓練が必要なのだ」
「確かにそうですな」
「到着と同時に総攻撃を浴びせるとなると」
幕僚達にもこれがわかる。わからないでいるのはそれこそ軍人として失格だ。戦術一つへの理解度だがこれだけで軍人としての資質が容易にわかるものだ。
「やはり統率が取れ」
「それと共に万全の動きが取れなければ到底は」
「そういうことだ。然るに我が軍は」
「我がオムダーマン軍は」
「それが可能だ」
断言だった。
「だからこそ指示を出すのだ。わかるか」
「その攻撃を実行にですか」
「必ずやれる」
またしても断言してみせる。
「それにより我々は」
「勝利を手に入れるというわけですか」
「その通りだ。ではこのまま進むぞ」
「はっ」
「それでは」
幕僚達はアッディーンの言葉に応える。これで決まりであった。
オムダーマン軍は恐るべき速度で敵要塞に向かう。だがハサン軍はまだそれを知らない。彼等は完全にあと三日と考えてそれに基いて備えをしていたのだ。
前線の艦隊も同じだった。配置に着いている艦隊は多々あるがそれでも彼等は穏やかに前線を眺めていた。そこにはまだ緊張感はな

い。
「あと三日だったな」
「はい」
その艦隊の司令の問いに副官が答えた。
「どれだけ急いでもそれだけはかかります」
「うむ。それならよい」
司令は副官の言葉を聞いてまずは頷いた。
「それならばな。何の問題もない」
「幾ら何でも二日では来られません」
副官はこうも言うのだった。
「如何にオムダーマン軍といえど」
「そうだ、彼等といえどな」
司令はまたしてもその言葉に頷いた。
「辿り着ける筈がない。残念なのはヘルマンドの兵達がここまで辿り着けなかったことだが」
「全くです」
副官も司令のその言葉に歯を噛み合わせる。それで自然と苦い顔になっていた。
「折角その為の物資も用意していたというのに」
「彼等の為のな」
ただ兵達を収容してそれで兵力を増やしていくつもりではなかったのだ。それだけで戦えるかというとそうでもない。やはりその為の備蓄や補給も必要なのだ。その備えは事前に整えていたのだ。だがそれが。オムダーマン軍が彼等を捕らえたことにより不意になってしまった。このことを悔やんでいるのだ。
「残った物資は使えばいいですが」
「経補担当者達にとっては今のところは無駄な努力だな」
「そうです。それを思うと」
「だが仕方がない」
しかし司令はこう述べてその嘆きは終わらせた。

「仕方ありませんか」
「備蓄はないよりある方がずっといいに決まっている」
これがこの司令の考えだった。
「ある方がな」
「それは確かに」
「特にエネルギー、弾薬、それに」
「食料ですね」
「この三つがないと話にもならない」
特に食料だった。どの様な精強な兵士達も何かを食べなければ生きてはいけないからだ。だからまずはこれだった。食料なのだ。
「とりわけ食料が豊富にある」
「それだけ時間をかけて戦えますね」
「その通りだ。後は」
司令は前線をモニターから見ながらまた言う。
「あれへの備えだ」
「コロニーレーザーへの」
「そうだ。バリアーをこれまで以上に強くしておけ」
「はっ」
まずはこれであった。彼等はバリアーを強化することによってコロニーレーザーの高出力のビームを防ごうと考えているのだ。だがそれだけではなかった。

## 第三十部第五章　突撃戦再びその七

「そしてだ」
「機雷を」
「撒いておくぞ」
続いてはそれだった。
「とにかくあと三日だ」
「はい、三日です」
またそれが語られる。
「奴等が来るその直前にな。撒いておくぞ」
「今は宜しいのですね」
「構わん。早いうちにバリアーは張っても無駄なエネルギーの消費だ」
「確かに」
司令の言葉に頷いた。今度の機雷はバリアーとしての機雷なのだ。一口に機雷といっても様々な種類があり中にはこうした主にバリアーとして使えるものもあるのだ。彼等が使おうとしているのはそれだった。
「だからだ。いいな」
「わかりました。では三日目に」
「撒けばいい。今下手に撒けばこちらの軍を混乱させてしまいかねないしな」
「わざわざ機雷源に入り込む輩も、ですね」
「そうなっては元も子もない」
司令も言う。
「だからだ。三日目に撒くぞ」
「はっ、それでは」
「それでだ」
彼はさらに言葉を続けてきた。

「我が艦隊はここから動くことはない」
「ここが受け持ちですか」
「そうだ。そのつもりで守り抜くぞ」
こう告げるのだった。これは副官だけでなく己が指揮する全将兵に対して向けた言葉だった。
「いいな」
「それもまた」
わかったと言うのだった。
「承知致しました」
「では今日はこれまでだな」
ここで話を終えた。
「後は各員交代で休息に入れ」
「わかりました」
「三日後に備えて休養だ」
やはりここでも三日という言葉が出た。
「私もな。少し休もう」
「では司令室にですね」
「いや、別のところだ」
しかし彼はこう言葉を返した。
「今はな。休息もいいが」
「何か他のことをですか」
「まずは食事にしたい」
「食事を」
「戦闘に入ればあとはまともな食事はない」
こう副官に述べた。
「それならばな。今のうちに食べておきたいのだ」
「わかりました。それでは何を」
「魚がいい」
次の言葉は素材についてであった。
「魚がな。今日のメニューにはあったか」

「ええ、それはもう」
副官はこの問いにも素直に答えた。
「魚のフライです」
「フライか」
「ええ。お嫌いですか？」
「いや、好きだ」
顔を綻ばせての返事であった。
「それがあるならいい」
「後は駱駝の丸焼きも」
「駱駝の？あれか」
「ええ、あれです」
サハラでは結婚式やその他の時の祝いの場で食べられる。駱駝の中に鶏を数羽、その鶏の中に魚を数匹、そして魚の中にも卵を入れる。かなり豪快な御馳走である。
「あれが出る予定です」
「祝いごとがあったか」
「今日は陛下御生誕の日ですが」
「陛下か」
「そうです」
また司令に対して答えた。

## 第三十部第五章　突撃戦再びその八

「その祝いです」
「だがその様な日に駱駝の丸焼きなぞが出たことは」
なかったのだ。確かに美酒や馳走は出されるがそれでもであった。
司令は怪訝な顔になっていた。その顔で副官に対して問うのである。
「なかったが」
「これは殿下の御命令でして」
「殿下のか」
ハサンを実質的に仕切るその太子のことだ。
「最前線で戦う将兵達には特別に振舞えとのことで」
「それでか」
「はい、そうです」
また司令に対して答える。
「それでこの様に」
「わかった」
そこまで聞いてまずは頷く。
「それは殿下のお気遣いだったか」
「その通りです。戦いにおいて生死をかける我等に対して」
「有り難いことだ」
太子の心を受けてあらためて言うのだった。
「我等のことをそこまで気遣って下さるのだな」
「司令、だからこそ」
「わかっている」
副官が何を思い何を言いたいのか、それはもう完全にわかっているのだった。
「では。三日後に備え」
「はい、三日後の為に」
「英気を養い備えを万全にしておくぞ。いいな」

「はっ」
敬礼で応える。こうして彼等もまた戦いに備えるのだった。だが彼等はあくまで三日後と考えそれに基いて動いていたのだった。
その指示を出した太子は。今己の宮殿の中の会議の間に側近達を集めていた。皆彼が心から信頼する者達だ。その彼等を卓に集め上座から告げていた。
「オムダーマンは積極的に動いてきている」
「はい」
まずはオムダーマン軍についての話だった。側近達もその言葉に頷く。
「そしてティムール軍も動き出した」
「アヤグーズ軍は彼等の首都に集結しております」
「コム奪還は考えていないのだな」
「残念ですが」
報告したその側近が彼に答える。
「その力はないとのことです」
「仕方ないか」
太子はその報告を聞いて残念そうに呟いた。
「あの敗北はかなりのものだったからな」
「残念ですが。しかし」
「まだティムール軍に対抗できる戦力は残っているな」
「それは何とか」
これは太子にとってもハサン軍にとっても喜ばしい報告であった。
「あります。少なくとも援軍の到着までは充分に持ち堪えることができます」
「ならいい。だが」
「だが？何か」
「アルコルジ女王は確かに猛将だ」
それは太子が最もよく知っていることだ。だからこそ彼女を信頼しハサン軍の高官の地位も与えているのだ。だが知っているからこ

その不安もあるのだった。
「しかし守るのはどうか」
「守りですか」
「攻めるのは確かに見事だ」
これもまた充分に認める。
「しかし。守りは」
「コムでは如何だったでしょうか」
「あれは」
「あれは攻めている」
こう読んでいる。
「正面からぶつかってな。あれはシャイターン主席があまりにも見事だった」
「左様ですか」
「それに首都アッサルームはコムよりも遥かに堅固だ」
「守るのに向いていますな」
「実にな。しかしだからこそだ」
「だからこそですか」
「そうだ。彼女に向いているか」
彼の危惧する言葉は続く。
「そこでの守りが」
「果たしてどうなのでしょうか」
これについては側近達の誰も答えられなかった。どうしてもであった。

## 第三十部第五章　突撃戦再びその九

「それに関しては」
「あの女王陛下ならやって頂けると思いますが」
「だが。しかしだ」
彼は言う。危惧をそのまま。
「油断はできない。やはり」
「どうされますか」
「援軍の足を急がせよ」
こう指示を出す。
「数を多くしてそれで守りたい。いいな」
「援軍をより迅速に向かわせますか」
側近の一人がそれを聞いて視線を少し鋭くさせる。考える目であった。
「それで対処しますか」
「指揮権は彼女にある」
任せているのだ。派遣しているハサン軍や他の属国の軍も合わせてだ。それを確実に認識したうえでの指示であるのがわかる。
「しかし。今は」
「今は」
「数も必要だ。数で押す」
「左様ですか」
「その為の援軍だ。やはり戦いは数だ」
この考えは連合軍においてとりわけ顕著だがサハラにも強い考えだ。そもそも数が多い方が有利なのが戦争だ。太子もその考えの持ち主なのだ。
「だからだ。数を少しでも増やし」
「それと共に不安要素も消すと」
「その通りだ。いいな」

「はっ、わかりました」
「ではすぐにアヤグーズに向かっている援軍に対して指示を出します」
「頼むぞ。それでだ」
太子の話は続く。
「前線の兵士への士気の鼓舞だが」
「それですが殿下」
また別の側近が彼に問うてきた。
「何だ？」
「あれはかなりやり過ぎではないでしょうか」
「駱駝の丸焼きか」
「ええ。他にも色々出しましたし」
彼が言うのはそれであった。
「食料に金はかかりませんがそれでもあそこまで出すのは」
「構わない」
しかし太子の返答はこうであった。
「それはな」
「構いませんか」
「確かに軍にとって贅沢は忌むべきものだ」
ここが連合軍との違いだ。連合軍では将兵の待遇はかなりいい。これは贅沢ということでもある。少なくともサハラから見ればそうなる。連合軍は彼等から見れば贅沢に溺れている軍なのだ。
「しかしだ」
「しかし」
「士気の鼓舞はそれよりも重要だ」
これが今の太子の考えであった。
「だからだ。あえてな」
「あえてですか」
「今我が軍は苦しい」
こうした場だからこそ言える言葉だった。公の場では絶対に言え

はしない。
「だからだ。あえて」
「士気を鼓舞すると」
「そういうことだ。その為だと思えばどうということはない」
「わかりました。それでは」
「それはそのように」
「うむ。そしてだ」
太子はさらに話を進める。
「臣民の生活はどうか」
「臣民達ですか」
「そうだ、彼等だ」
ハサンは王制であり国民は王の臣下となっている。だからこう呼ばれるのだ。サハラではおおむね王制の国家では臣民と呼ばれ共和制だと市民と呼ばれる。一まとめにして市民と表現される連合とはここが違うのだ。
「その生活はどうか」
「規制はありますが生活は送れています」
「そうか」
「ただ。必需品の多くが配給制で」
「うむ」
太子はそれを聞いて顔を曇らせる。

## 第三十部第五章　突撃戦再びその十

「やはり闇のマーケットが出て来ています」
「どうしてもそうなるか」
彼はそれを聞いてまた難しい顔になるのだった。
「こうした時は」
「必需品もできるだけ配布していますが」
「それでもだな」
「残念ですが」
「その通りです」
彼等はこう太子に答える。太子もまた彼等の報告を静かに聞いていた。
「それが解決できる目処はあるか」
「やはり戦争が終わってからです」
「そうか、やはりな」
それを聞いて納得する。納得するしかなかった。
「そうなるか」
「それでです」
側近の一人がまた言う。
「裏の世界の者達が利権を伸長させています」
「やはりな」
こうした話になると当然のように彼等が利権を手に入れる。これもまたわかっていることだった。顔は曇ってはいるが驚いたものではない。
「そうなるな」
「殿下、それでです」
「何だ」
側近の一人の言葉に顔を向けた。
「私に一つ考えがあるのですが」

「臣民の生活についてだな」
「そうです。宜しいでしょうか」
「うむ、言ってみてくれ」
彼に発言を許した。
「それは何か」
「連合です」
彼が出したのは連合だった。
「連合！？」
「はい、彼等から買いましょう」
彼の提案はこうであった。
「彼等から買ってそれでやっていきましょう」
「連合から買うのか」
「それでどうでしょうか」
「価格はどうか」
彼が最初に聞いたのはそれであった。
「連合の価格は。我々にとっては」
「それはある程度交渉次第かと」
まずはこう前置きする。
「ですが」
「ですが？」
「連合の物資は豊富です。それこそ我々よりも遥かに」
「うむ」
これは確かだった。出回っている品物の数も種類もハサンと連合では比較にならない。ハサンを一とすれば連合は十、それだけの差があった。
「ですから」
「連合と話をするべきだというのだな」
「その通りです。如何でしょうか」
「数は賄えるか」
「間違いなく」

念押しまでされた。
「連合にとっては我々への援助なぞさしたるものではありませんから」
「四兆の人口だからな」
「はい」
これがそのまま力になっているのだ。
「対する我々は属国を全て合わせても八百億」
「しかも援助だけですので」
「さしたるものではないか」
「そうです。ですが」
別の側近が言ってきた。
「問題は彼等がその微力を使うかどうかです」
「我々を援助するかどうかか」
「はい、それはまた別問題です」
そういうことだった。
「援助するのは何かしらの利益があってのことですので」
「そうだな」
「連合中央政府及び各国としてそれをするかどうかはわかりません」
「あくまで実益としてか」
「そうです」
政治は利益を求めるものだ。利益があってはじめて援助をする。
若しそれがなければ。最早言うまでもない、当たり前の話であった。

## 第三十部第五章　突撃戦再びその十一

「ですからそれに関しては」
「期待できない可能性もあるか」
「ただ。一つ確実な方法があります」
先程援助を出したその側近がまた言ってきた。
「確実な方法？」
「はい。何気なく臣民達の窮状を知らせ」
「うむ」
話はそこにも至る。
「市民達に訴えるのです」
「連合のか」
「そうです」
彼が次に述べたのはそれであった。
「それは如何でしょうか」
「つまりは彼等のボランティアというわけだな」
これは太子もわかっていた。連合ではボランティアが盛んだということも知っているのだ。
「市民団体や宗教団体等が期待出来ます」
「連合にはそうした団体が多いな」
「ええ」
これが連合の特徴の一つだった。彼等は様々な勢力をその中に持っている。市民団体や宗教団体もその中の一つなのだ。ここに連合の勢力の多重さと複雑さもある。
「政府が期待できなくとも彼等は」
「何かあまりいい方法には思えませんが」
老人の側近が暗い顔をして述べた。
「それは」
「よくはないと」

「異教徒からの施しなぞ」
彼が言うのはそれであった。ムスリムとしての誇りだ。
「受けるのは如何なものか」
「いや、その考えは違うだろう」
太子の側に座す側近が老人の言葉に異議を述べる。
「違うのか」
「そうだ。施しを受けるのは恥ではない」
彼はこう主張する。
「富める者が貧しい物に行う施しは」
「ムスリムの務めだ」
老人もそれはわかっていた。これはムスリムの基本の一つだ。
「それはわかっている」
「ならいいではないか」
「いや、だからこそよくない」
少し聞いただけでは言い掛かりにも聞こえる言葉だった。
「それだからこそだ」
「どういう意味か、それは」
「異教徒だ」
またこの言葉を出す。
「異教徒から施しを受けるというのは。どうなのだ」
「そんなことはどうでもいいのではないのですか？」
「確かに」
しかし多くの者はそれを気にしてはいないようだった。案外醒めていた。
「貰ったものは素直に受け取る」
「それでいいのでは」
「そう考えるのか」
「ええ」
「そうですが」
多くの者はまた老人に答えてみせた。

「それがいけませんか」
「それでいいではないですか」
「そうなのか」
「それよりもです」
その大勢の中の一人が述べてきた。
「善意を受け取らないというのはやはり」
「確かにそうですな」
これは多分に理由付けだった。しかしこの場合は精神的に非常に楽になる理由付けだった。人というものは複雑なもので理由を見つけてそれで救われたりもするのだ。
「ですからここは」
「それで」
「いいというのか」
老人は彼等の言葉を聞いてあらためて考える顔になるのだった。
「そういう考えもあるか」
「ですから深く考えることはありません」
「くれるというのなら受け取っておきましょう」
「わかった」
「それよりも問題はです」
だがここでそれと関連するがあらたな問題が出された。
「何か？」
「その受け取ったものが有効に使われるかどうかです」
側近の一人がその問題について語った。

## 第三十部第五章　突撃戦再びその十二

「それこそが問題なのです」
「つまり横流しですかな」
「それもあります」
まずはそれを認めた。だがそれだけではなかった。
「さらに」
「さらに？」
「その横流ししたものを転売する等して私腹を肥やす輩も考えられます」
「ルートをはっきりさせることか」
太子それを聞いて一言述べた。
「そういうことだな」
「その通りです。それにより配分の不公平がないようにしましょう」
「わかった」
太子はその側近の言葉に対して頷いた。
「ではその際のルートのチェック機構の確立だ」
「はい」
「それは私の直属とする」
そこまで決定したのだった。
「それでいいな」
「わかりました、それでは」
「後は交渉か」
「少なくとも市民団体や宗教団体のかなりの数が動きます」
側近の一人が述べる。
「それは充分期待できますので」
「確実ではないか」
「今のところは」
こう訂正するがそれでもであった。

「こうした状況になると必ず支援を訴える勢力が連合には多くありますので」
「そうだったな」
これは有名だった。これは良心によるものだ。
「だからこその市民団体であり宗教団体だな」
「それに助けられるのもまた事実です」
そうしてもらわなければならない、事情もそうしたものだった。
「ですから是非」
「だが何時か返さなくてはな」
太子はここで謝礼を話に出した。
「お返しですか」
「そうだ。借りたものは返す」
彼はそれをまた言う。
「それはムスリムとしての誇りに基いて行わなければならない」
「そうですね。それは」
「もっともそれについてですが」
ここで言葉が少しシニカルなものになる。
「どうした？」
「全ては生き残ったうえです」
あまりにも現実的な言葉だった。それである。
「生き残らなければそれも返せません」
「そうですな、確かに」
「援助の要請も全ては生き残る為のもの」
全てはそれだった。何もかもがそうだ。
「ですから我々は何としても生き残らなければなりません」
「その為にもです」
「まだ余裕はあるがな」
太子は言った。
「だが今のうちにだな」
「早いうちに手を打っておかないと手遅れになります」

「その通りです」
また側近達が彼に言及する。流石に太子の側近として選ばれているだけあって先見の明も備えていた。それがあるのとないのとでは大きな違いだった。
「ですから今のうちにですね」
「だからこそ」
「そうだな。確かにな」
「では殿下、援助の要請及びチェックルートの確立は」
「それでよしとする」
正式に決定とした。
「よいな、それで」
「はい」
「ではそれで」
「後はこれを議会に提出するが」
ハサンは立憲君主制だ。王権が強くとも議会は確固たる力があるのだ。

## 第三十部第五章　突撃戦再びその十三

「議会の方は問題ないな」
「万全です」
「殿下が出された法案なら間違いないです」
王権が強いので王室が法案を出せばかなり無茶なものでない限り通るのだ。ハサンは王が立法、行政、司法三権の上に立っているのである。
「ですから」
「それで」
「よし。それではな」
「これで問題は無い筈です」
「臣民の生活に関しては」
「もう少しの我慢か」
太子は考える目で述べた。
「彼等にとって」
「もう少し耐えてもらいましょう」
「今は」
側近達の顔もまた苦いものになっていた。それでも言うのだった。
「仕方がありません」
「今は」
「そうだな。今は」
太子の顔もまた苦いものになった。端整な顔がその分だけ歪む。
「辛いだろうがな」
「その時に軍への横流しが一番危ういです」
「そう、それは」
「そうだな。それが起きて公になれば」
ハサンの国としての信頼は地に落ちる。このことも懸念された。
「だからこそルートのチェックは厳しくしよう」

「その通りです」
「軍には万全の補給を行ってはいるがな」
「少なくとも食料及び生活必需品の補給は」
「むしろ燃料弾薬よりも優先的に行っています」
「それでいい。それでな」
太子はそれでいいと認めた。
「それではだ。まだ話すことはあるか」
「いえ、今は」
「もうこれで」
側近達がまた答える。
「ありません」
「そうか。ではこれで会議を終わる」
太子は彼等の言葉を聞いて会議の終わりを正式に決めた。
「今日は御苦労だった。それでは」
「はい、それでは」
「これで」
一同はこれで別れた。会議は終わった。太子も自分の部屋に戻る。しかし彼は浮かない顔をしているのだった。
「暗いな」
一言こう呟くだけだった。暗い部屋の中で一人呟くのだった。
オムダーマン軍の進撃は順調だった。アッディーンは今の状況を幕僚達に問うていた。今彼はアリーの会議室にその幕僚達と艦隊司令達を集めていた。そのうえで話をしていたのだ。
「それでだ」
「はい」
「明日だな」
「はい、明日です」
幕僚の一人が答える。
「明日敵の本陣前に到着です」
「そして数時間後です」

別の幕僚も言う。
「先に出した左右の軍が敵の防衛ライン前に到着するのは」
「そうか。数時間だな」
「その計算でな」
「彼等からの報告は」
それについても問うのだった。
「あるか」
「あります。やはり数時間後とのことです」
また別の幕僚が答える。
「予定の場所に到着するとのことです」
「万全だな」
アッディーンはここまで聞いて頷いた。笑ってはいないが満足している顔だった。

## 第三十部第五章　突撃戦再びその十四

「これまでのところは」
「これまではですか」
「そうだ、これまでだ」
幕僚達にもこう答える。
「まずは手が順調に進んでいるだけだ」
「ではこれからはどうなのでしょうか」
彼に問うたのはアルマザールであった。
「これからか」
「はい、これからは。順調には」
「いく」
一言、断言だった。
「安心しろ。敵はまだ私の考えには気付いてはいない」
「左様ですか」
「その証拠に防衛ラインはまだ手薄だな」
「その通りです」
ラシークが答えた。彼もこの会議に参加しているのだ。
「やはり三日だと思っています」
「そうか。やはりな」
アッディーンはそれを聞いてまた満足した顔で頷いた。
「ならばよしだ」
「左右の軍にも気付いていません」
そのことも言う。
「完全に」
「迂闊と言えば迂闊だな」
アッディーンは敵軍を評してこう言った。
「事前に何も見ていないというのは」
「気付いていないのでしょう」

しかしラシークは述べるのだった。
「普通では三日での到着でも余程のことですから」
「余程か」
「ですから偵察部隊も出していません」
「そろそろ出してくる頃だが」
「今出しても準備には間に合いません」
既にそれも計算しているのだった。軍事行動というものは全て計算である。それによって動くものなのだ。そうした意味でオムダーマン軍は優れた軍だった。
「ですから」
「勢いに乗れるな」
「はい、後は」
「攻撃だけだ」
アッディーンはここでも言い切ってみせた。
「あの攻撃を成功させるぞ。いいな」
「はっ」
「わかりました」
艦隊司令達がそれに応えて頷く。
「それではそのように」
「何としても」
「その攻撃で一気に勢いに乗る」
彼の今回の戦術の重点はそこだった。
「そうして後は」
「予定通りに」
「敵の守りを突き破って後ろに回り込む」
予定している戦術通りだった。
「今度は一兵も逃さない。いいな」
「一兵もですか」
「そうなれば敵軍に与える衝撃が違う」
こうも述べる。

「第一次防衛ラインも第二次防衛ラインも全て突破されたうえ一兵も逃げられなかったならば」
「戦力だけではなく精神的にもですね」
「ただ兵力が減るだけではないのだ」
全ての兵を捕虜とすることの重要性をさらに述べる。
「それだけの損害を出した。どれだけ守りを固めても」
「そうなれば敵の士気はかなり落ちますな」
「どれだけしても無駄ならば」
「その通りだ。だからこそ」
やると言うのだ。
「わかるな」
「はい」
「それでは後は」
「総員配置につけ」
これは今ここにいる者達だけに伝えたものではなかった。

## 第三十部第五章　突撃戦再びその十五

「明日の総攻撃に備えてな」
「わかりました、それでは」
「今より」
「まだ防衛ラインが多々あるがそれでもだ」
アッディーンの言葉は続く。
「二つをそうして破られたとならば」
「敵の動揺はかなりのものですね」
「その通りだ。それでは」
「そのように」
こうして総攻撃前の最後の会議は終わった。オムダーマン軍は総員配置に着く。その間に先に出した二つの軍が敵の防衛ラインに到着した。ハサン軍はこれに大いに驚いた。
「何だと、まさか！」
「もう来たのか！」
まずは前線に衝撃が起こった。続いて司令部に。
「そんな筈がない！」
「間違いに決まっている！」
要塞の防衛司令官であるマグパ大将も艦隊司令であるラフコルーサ大将も最初はこの報告を信用していなかった。二人は会議室で打ち合わせ中だった。
「これ程速く到着するなぞ」
「有り得ないことだ」
「いえ、ですが」
しかし報告する若い将校は言うのだった。
「事実です」
「それは前線からの報告か？」
「いえ」

彼がマグパの問いに対して答えた。
「私がこの目で見た報告です」
「馬鹿な」
マグパはそれを聞いても信じなかった。
「見間違いだ。間違いなく」
「そうだ、そうに決まっている」
ラフコルーサも言う。
「今来るなぞ」
「もう一度よく見て来るのだ」
マグパはまた彼に言った。
「よいな、もう一度だ」
「はあ」
「では行け」
こう伝えたその時だった。また別の若い将校が部屋に飛び込んで来た。
「司令官、大変です！」
「どちらの司令官だ」
「申し訳ありませんが両方です」
彼は敬礼をしつつこう答える。
「御二人への報告です」
「我々にか」
「何だ？」
「我が軍は攻撃を受けています」
報告とはそれであった。
「攻撃！？馬鹿な」
「貴官もそう言うのか」
二人は彼の言葉もすぐに信じようとしなかった。その理由も述べる。
「いいか、オムダーマン軍が幾ら速いとはいえ」
「二日もかからないうちに来られるものか」

それぞれ将校に対して言ってみせた。
「二日でも有り得ないのだ」
「三日が限界の筈だ」
「しかしです」
それでも彼は言う。あえて。
「来ているのです」
「馬鹿な、有り得ん」
「では証拠があるのか」
ラフコルーサがそれを問う。
「あれば信じるが」
「なければその時は貴官を」
軍人というものは何よりも証拠を重要視する職業だ。確かなものに基いて判断し行動する。これは彼等が常に勝利を追い求める存在だからである。職業から来る考えなのだ。
「それで。あるのか？」
「あります。モニターを御覧下さい」
「ふむ」
「わかった」
彼の言葉に二人して鷹揚に頷く。そのうえで部屋のモニターのスイッチを入れた。するとすぐに画面が浮かび上がりそこにある光景が映し出された。その光景は。
「ば、馬鹿な」
「有り得ん」
今の今まで彼等が頭から否定していたその光景があったのだ。

## 第三十部第五章　突撃戦再びその十六

「もう来ているなどと」
「しかも。攻撃まで」
「これで信じて頂けるでしょうか」
「私の言葉も」
最初に部屋に入って来た将校もここで言う。彼はまだ部屋に残っていたのだ。
「これで」
「おわかりになられた筈です」
「有り得ん」
「全くだ」
またこの言葉が出た。有り得ないという言葉が。
「幾ら速いといっても」
「これ程の速度で来るとは。一体どういうことなのだ」
「それで司令」
「どうされますか」
彼等が問うのはそれであった。これからのことだ。
「今実際にオムダーマン軍が来ております」
「それに対しては如何様に」
「う、うむ」
「そうだな。それだ」
まずは二人は一呼吸置いた。そのうえで述べるのだった。
「敵はどちらを攻めているか」
「防衛ラインの左右です」
二番目に入って来た将校が即答する。
「間合いを取りつつ攻撃を仕掛けています」
「では今のモニターの光景は」
「左翼です」

ハサン軍から見て左翼ということだ。オムダーマン軍から見れば右翼になる。そこに攻撃を仕掛け、受けているというわけである。
「左翼を攻められています」
「これが左翼か」
「そして右翼は」
ラフコルーサが二人に問うた。
「同じです」
「同じか」
「はい、確認できる敵艦隊の規模は大体同じです」
「そうか。同じか」
「そしてその規模は」
二人も伊達に大将の階級にいるわけではない。すぐに冷静さを取り戻し落ち着いた様子で二人に問い続ける。この辺りの切り替えが見事であった。
「どういったものか」
「何個艦隊程度か」
「それぞれ四個艦隊程度です」
「何だ、大したことはないな」
マグパはそれを聞いてすぐに述べた。表情も僅かに綻ぶ。
「どれだけのものが来たかと思えば」
「陽動だな」
ラフコルーサはこう考えた。そしてそれは真実だった。
「本格的な攻撃の前のな」
「そうだな。そしてその時が」
「明日だ」
マガパもラフコルーサのその考えに頷いた。しかしここで二人はあるミスを犯した。やはり彼等の中での軍事的常識に従い本軍の到着時間をこう考えたのだ。
「明日に来るだろうな」
「そうだな。それではだ」

「今のうちだ」
ラフコルーサの言葉だ。
「今のうちにその左右の軍を叩くぞ」
「一気にだ」
「それで何の問題もない」
二人はそれぞれ言う。
「そしてその分だけ後の戦いが楽になるな」
「その通りだ。敵はこれで無駄に戦力を消耗することになる」
こうも考えたのだった。彼等はその左右を攻めるオムダーマン軍を一気に殲滅しその後で迫り来るオムダーマン軍の主力を迎え撃つつもりだったのだ。万全の備えで軍を分けたことにより力を落としている彼等を。
「ではそのようにな」
「進めるか」
「よし」
ラフコルーサはマグパの言葉に頷いた。これで決まった。
「作戦は決まった」
「攻める」
「攻めますか」
「そうだ」
ラフコルーサは二人の問いに答えた。
「まず艦隊は中央に配してあるものをそれぞれ左右に向けろ。すぐにだ」
「わかりました」
「防衛施設もだ」
今度はマグパが言った。

## 第三十部第五章　突撃戦再びその十七

「動かせるものは左右に回せ。いいな」
「ではそれにより左右の攻撃力を増大させ」
「そうだ、殲滅する」
「陣を出てもだ」
　それだけ積極的に攻めるということだった。これはオムダーマン軍の戦力が少ないことを見ての判断だった。てきがすくなければこれを一気に殲滅すべし、戦争の基本中の基本だ。
「よいな、追うことは危険だが」
「それでもだ」
「わかりました、それでは」
「すぐにそれを」
「伝えよ」
　マグパは二人に対して告げた。
「全軍にな」
「はっ」
「わしも出よう」
　ラフコルーサはここで立ち上がった。
「出るのか」
「そうだ。前線で見なければわかるものもわからん」
　彼は前線で戦うタイプの指揮官だ。だからこう判断を下したのだ。
「だからだ。左に行く」
「わかった。ではわしは」
「ここに残るか？」
「いや、右に行く」
　彼は右に向かうことにした。
「そこで敵の迎撃及び攻撃の指揮を執りたい」
「ふむ。それではだ」

ここでラフコルーサの脳裏にあることが閃いた。それを実際に述べる。
「ここは鉄槌と床でいこう」
「鉄槌と床か」
「そうだ、それだ」
不敵に笑ってそれをマガパに話すのだった。
「どうだ、それは」
「そうだな」
そしてマガパもそれにまんざらではない顔だった。
「それはいいな」
「ではそれで行こう。左翼に艦隊を重点に回す」
「それでは右翼には平気を主に回すぞ」
「そうしてくれ。それでは」
「まずはその敵を倒すとしよう」
「その通りだ」
こうしてハサン軍の戦術は決定した。左翼と右翼にそれぞれ動く。そうして攻撃を仕掛けようとする。しかしここで左翼を指揮するコリームアは攻撃とは思えない行動に出たのだった。
「司令」
「どうした？」
「オムダーマン軍ですが」
ラフコルーサの幕僚達のうちの一人が彼に言うのだった。
「前方に機雷を撒いています」
「何、機雷をか」
「そうです」
その幕僚は答えた。
「こちらへの攻撃を中止して」
「我々の動きに気付いたか」
ラフコルーサはまずこう思った。
「攻撃に」

「ですが普通攻撃の時に前方に機雷は撒きません」
「その通りだ」
機雷は防御に使うものだ。相手の進路に撒布して進撃を妨害したりその進路を限定させたりする。またトラップとして使う。本来はそうしたふうに使うのだ。
「ですが彼等は今前方に」
「攻撃を中止してだな」
「そうです。一気には攻めないのでしょうか」
「まずは我々の足止めか」
ラフコルーサは次にこう考えた。
「それでその場を凌ぐつもりか」
「どうされますか？」
幕僚はあらためて彼に問うた。
「このまま進撃を仕掛けても機雷により不要に損害を出すだけだと思われますが」
「その通りだ。少なくともこのまま前には進めない」
「はい、それは間違いなく」
その幕僚も答える。

## 第三十部第五章　突撃戦再びその十八

「それではここは」
「まずは一斉射撃だ」
彼が下した決断はそれだった。
「いいな」
「機雷に対してですね」
「その通りだ。まずはそれだ」
これもまた戦術の常道だった。機雷に対しては掃海艇を向けるかそれが危険ならば砲撃によりそれを破壊する。彼が今回採った戦術は後者だった。
「それでいいな」
「はい、それでは」
「少なくともこれで敵に時間を与えたか」
ラスコルーサはそのことに心の中で舌打ちした。
「まさかこうしてくるとはな」
「ですが。無駄なことです」
幕僚は楽観的に述べた。見れば顔が笑っている。
「所詮数が違います。このまま一斉射撃で機雷を消してそれから突っ込めば」
「それで勝てるか」
「はい」
ラフコルーサの言葉に頷く。
「いけます。所詮は時間稼ぎです」
「そうだ。一気に左翼から右翼に押し切る」
床と鉄鎚の戦術を。ここでも述べた。
「そのうえで元の陣に戻り敵の本陣を迎える。それでいいな」
「はっ」
まずは機雷源に対して一斉射撃を加えた。それで前方の憂いを消

す。だがそれを見てもコリームアとその下にある艦隊は一向に動揺した様子はなかった。
「上手い具合に時間を稼いでいるな」
「はい」
彼の主席参謀であるアルカサが応えた。
「敵は上手い具合に機雷に攻撃を仕掛けています」
「しかもだ」
「ええ」
次に彼等は敵の陣を見る。見れば彼等の前に多くの艦隊が展開している。コリームアはそれを見て満足している顔で笑っていた。
「部隊もいい具合にこちらに持って来ているな」
「完全に我々を先に倒すつもりですね」
「それだけではなく」
コリームアはさらに言い加えた。
「まだ本軍の到着には時間がかかると思っているな」
「確かに。だからこそ我々を一気に倒そうとしている」
「そこが狙い目だというのにな」
「その通りです。ですが司令」
ここでアルカサはさらに言う。
「何だ？」
「我等が倒されては元も子もありません」
彼が言うのはそれだった。
「ですから。まだ彼等の攻撃を受けるわけには」
「わかっている。機雷はもう使った」
「はい」
全て撒布したのだ。だから使えないのだ。
「次は何を使うかだ」
「司令、ここはですね」
アルカナが提案する。
「どうするのだ？」

「我等の得意とする方法で行きましょう」
「そうか、あれか」
「はい、あれです」
二人は笑みを浮かべて言葉を交える。二人で言いたいことはわかっていた。
「あれで行きましょう」
「そうだな。ではそれでな」
「守るのは何も楯を構えるだけではありません」
アルカナの言葉だ。
「他の方法もあります。そういうことです」
「その通りだ。よし」
コリームアはアルカナの言葉を聞いたうえであらためて指示を出した。
「全軍散開せよ」
「はっ」
彼の言葉に配下の全将兵が応える。
「それで機動戦に入る。いいな」
「わかりました」
皆その言葉に頷きまずは散開する。ハサン軍はそれを見てまた困惑するのだった。
「今度は散開した！？」
「攻めるつもりなのか！？」
そう思ったのだ。少なくともただ守っているのではないとは思った。
「我々の攻撃を予定して散ったか」
「だがそれにしては」
散開戦術を採る動きではなかった。むしろ積極的に動きハサン軍にも向かおうとしていた。簡単に言えば機動戦を仕掛けていたのである。

## 第三十部第五章　突撃戦再びその十九

「この積極的な動きは」
「やはり攻めるのか？」
「数ではこちらの方が上なのだが」
当然ラスコルーサもそれを見ている。敵の動きを見て顔を困惑させていた。
「だがこうして機動戦術を取るとは」
「司令、敵のポイントを絞りましょう」
先程とは別の幕僚が彼に提案してきた。
「ポイントをか」
「はい、あれはただの陽動です」
彼はそう見ていたしそれは当たっていた。しかしそれがどういった陽動かまでは見抜いていなかった。それがこの幕僚の限界なのだろうか。
「ですからそれには乗らずに重点的に一点一点攻め」
「それで戦力を削っていくか」
「二回か三回の攻撃でいいかと」
彼はこうも言った。
「それで動きを止め然る後に」
「一気に全軍突撃だな」
「その二回か三回の攻撃で敵の戦力はかなり落ちている筈です」
それが彼の読みだった。
「ですからここは是非」
「わかった。それではな」
その幕僚の言葉を入れた。そのうえで全軍に指示を出す。
「最も突出しているポイントを叩け！」
今アメーバの様に出て来たその触手を指摘した。
「あそこだ。撃てーーーーーーっ！」

「はっ！」
ラスコルーサの指示に従い一斉射撃が加えられる。しかしそれよりも前にコリームアの軍はその突出部を引っ込めてしまった。まるで予測していたかのように。
「何っ！？」
「偶然か！？」
ハサン軍の将兵はそのあまりもの迅速な動きにまずはこう思った。それ程あまりにも迅速で不規則な動きを見せていたからである。
しかしこれは違っていた。コリームアの戦術だったのだ。
「上手くいったな」
「はい」
コリームアの言葉にアルカサが頷く。二人は会心の笑みをそれぞれ浮かべている。
「まさかこちらが予測しているとは思うまい」
「どうやら予測していなかったようです」
アルカサは言った。
「それは間違いありません」
「そうか」
「ええ。その証拠に」
その不規則な動きはさらに続いている。コリームアはあえてそうした艦隊運動をしてみせているのだ。これには確固たる戦術があった。
「彼等の動きが止まっています」
「呆然としているな」
「はい、予測していたら別の行動に出ています」
「私ならここですぐに突撃し総攻撃を仕掛ける」
「突撃をですか」
「そうだ」
彼ははっきりと言い切ってみせた。
「ここでな。一気にだ」

「一気に。そうですね」
それにアルカサも頷く。
「こうした陽動に対しては数が有利ならば押し切るのが一番です」
「それで勝てる」
コリームアは言う。
「ましてや我々は打たれ弱い機動力重視の艦隊。尚更な」
「そうです。彼等はそれも見落としているようですね」
「好都合だな」
こう述べてニヤリと笑ってみせるコリームアだった。
「それはさらに」
「はい。さて、敵が我に返りました」
「うん」
見れば敵艦隊がまた動いてきた。攻撃ポイントを定めたらしくそこに艦首を集中させる。今突出させているポイントに向けていた。先程と同じだ。
「さて、それでは」
「また退きましょう」
「そうだ。退け」
一言だった。
「第五艦隊は後方に。そして今度は第四艦隊が前だ」
「はっ」
「わかりました」
モニターにそれぞれ第五、第四各艦隊の司令官達が出る。そうしてコリームアに対して答えるのだった。コリームアは己の旗艦から率いている艦隊に指示を出しているのだ。

## 第三十部第五章　突撃戦再びその二十

「ま、また来たのか！？」
「本当にアメーバそのままの動きだ」
「司令」
幕僚の一人がラフコルーサにやや狼狽した声をかける。
「また攻撃がかわされました」
「またか。
「どうしますか？」
「攻撃方法を変える」
彼はそう判断を下した。
「攻撃方法を変えるのですか」
「そうだ」
また答えた。
「そう動くのなら我々は」
「どうされますか？」
「突撃だ」
彼は言った。
「数では勝る。ならば」
「突撃されてそれで一気に蹴散らされますか」
「そうだ。数にしても何倍も離れている」
見たところオムダーマン軍は三個艦隊程度だ。しかしハサン軍は十五個艦隊、このカラクームには二十個艦隊を配置していたがそのうちの四分の三を集めたのである。五倍に達するその物量で戦いを一気に決めることにしたのだ。これはコリームアが言った案でもある。
「だからだ。いいな」
「はっ、それでは」
「全軍突撃用意だ」

ラフコルーサは言う。
「最早相手に機雷はない。ならば」
「了解！」
「それでは今より」
速やかに全軍集まりそこから前面にエネルギーを集中させる。まさに今突撃せんとしている。
「全軍突撃！」
「はっ！」
ラフコルーサの指示の下ハサン軍は突撃を開始する。陣地を出てそのまま突き進む。だがそれを見てコリームアはまたしても会心の笑みを浮かべたのだった。
「そのタイミングだ。読み通りだ」
「司令、それでは」
「全艦艇散開せよ！」
彼は叫んだ。
「そして敵艦隊の周囲に展開しろ。いいな！」
「了解！」
コリームアの指示に従い全艦艇が散開する。散兵戦術だ。それでまずはハサン軍の鋭鋒をかわす。だが目的はそれだけではなかった。
「馬鹿な、かわした！？」
「かわしても何にもならぬというのに」
ならばこのままその散開した敵艦隊を各個に叩き潰すつもりだった。数を利用して。最早今彼等にとって右翼を攻めているオムダーマン軍の後方は取った。それでもう充分だったのだ。
「司令、ここは」
「散開している敵軍をまず討て」
「わかりました」
まずはこう指示を出す。幕僚達もそれに応えて頷く。
「それではすぐに」
「それは戦力の半分だ」

彼は回す戦力にまで言及した。
「そして残りの半分で」
「我が軍の右翼を攻めている敵の後方を衝く」
「その通りだ」
それこそが彼の考えている戦術だった。
「それで勝てる。いいな」
「はっ、それでは」
その言葉のまま動こうとする。しかしだった。
何とその彼等の前に新たな敵軍がいたのだ。彼等は。
「馬鹿な、どうしてここに」
「新手か！？いや、違う」
彼等はその軍が何者なのかすぐに察した。それは。
「右翼を攻めていた兵だ！こっちに来たのか！」
「くっ！何という素早さだ！」
先程までカラクームを攻めていた兵が反転し彼等の前に来ていたのだ。今動こうとしていた彼等に対して即座に攻撃を浴びせる。まずはそれで機先を制した。
「敵艦隊の動きが止まりました」
「最高のタイミングだったか」
ムーアがいた。彼は己の旗艦の艦橋において表情を変えずにこう呟いた。その目の前では攻撃を受け無数の火球を生み出しているハサン軍の姿があった。

## 第三十部第五章　突撃戦再びその二十一

「動きだした時は軍にとって最も脆い時だ」
「その通りです」
彼の副司令官であるマグルーパが答える。見れば彼の階級章はオムダーマン軍中将のそれである。
「その時を狙ってのことでしたが」
「実に上手くいったな」
「はい、これで敵の動きは完全に止まりました」
マグルーパはムーアに対して答える。
「彼等の狙いは適わないものとなりました」
「その通りだ。それでは」
ムーアの目が光る。
「このまま次の攻撃に移る」
「次の」
「再び一斉射撃だ」
彼の指示はこれだった。
「コリームア殿の艦隊が態勢を立て直すまでの時間をそれで稼ぐぞ」
「わかりました」
既にコリームアの艦隊はハサン軍の左翼に集結しだしていた。この動きもまたアメーバめいていた。離散しそれからまた集まる。まさにそれだった。
ハサン軍に対してまた攻撃が仕掛けられる。その間にコリームアの艦隊は左翼に集結している。ハサン軍にとっては思いも寄らぬ展開だった。
「な、こんなことになるとは」
「何を考えている、奴等は」
「うろたえるな！」
だがここでラフコルーサが全軍を叱咤した。

「動揺すればそれで敗北だ。落ち着け！」
「は、はい！」
「申し訳ありません」
彼の叱咤により全軍我に返った。見事な叱咤だった。
それにより将兵だけでなく幕僚達も我に返った。そのうえでまた彼に問う。
「司令、それで」
「どうされますか？」
「案ずることはない」
彼は言うのだった。
「数はまだ優勢、存分に戦える」
「それではここは」
「そうだ。左翼に敵艦隊が集結しているな」
「もう既に集結し終えようとしています」
「そうか、速いな」
それを聞いて冷静に述べる。
「集結前に向かうつもりだったが」
「残念ですが」
「それでどうされますか？」
「まずは左翼のその敵艦隊を足止めする」
彼が出した最初の指示はそれだった。
「まずはな。そして」
「そして！？」
「次だ」
さらに言う。
「正面のあの敵艦隊を潰す。つまり兵を二手に分ける」
「二手にですか」
「では先程と同じですな」
「分けるのは同じだが戦術を変える」
しかし彼は完全には答えなかった。こう答えたのである。

「変えるといいますと」
「三個艦隊を左翼の艦隊の足止めにする」
ほぼ同数で止めるというのだ。
「そして残る艦隊で」
「正面のあの敵艦隊を叩く」
「そうだ」
はっきりと言い切った。
「そして返す刀で左翼の艦隊も殲滅する。機動戦力でな」
「一気にですね」
「最早床と鉄鎚は無理だ」
それはもう諦めていた。今の攻撃を受けて。だからこその戦術の転換だったのだ。
「ならば。それはそれでやる方法がある」
「左様ですか。だからこそ」
「そうだ。それでいいな」
「はっ」
「了解しました」
幕僚達は皆司令の言葉に応えて敬礼で返した。
「それではそのように」
「致しましょう」
「第一から第三の各艦隊は左翼に回れ！」
ラフコルーサはすぐに指示を出す。

## 第三十部第五章　突撃戦再びその二十二

「そして残る艦隊で正面に再度再度突撃を仕掛ける。いいな！」
「了解！」
「では・・・・・・行けっ！」
こう指示を出す。だがその時だった。
またしてもだった。あれが出て来たのだ。彼等は自分達の前方にあるものを見たのだ。それは。
「くっ、ここでまたか！」
「姑息なオムダーマン軍」
それを見て歯噛みせずにはいられなかった。そこにあったのは。
「また機雷か」
「またしてもか」
幕僚達も忌々しげに呻く。オムダーマン軍はここでまた機雷を撒布してきたのだ。それでハサン軍の足止めをしてきたのだ。ここでまた。
「どうしますか司令」
「このまま突撃を仕掛けてても」
「わかっている」
ラフコルーサは己の幕僚達に対して苦い顔で応える。
「足止めか。小癪な」
「しかもまたです」
「彼等も持っているとは」
「だがこれは当然か」
だがここでラフコルーサはこう言うのだった。
「当然ですか」
「そうだ。戦力は彼等の方が少ない」
まずはこの前提があった。
「ならばあがく。何としても勝つ為、生きる為にな」

「それがこのあがきだと」
「だが。オムダーマン軍らしくないと言えばらしくないな」
「はい、それは確かに」
幕僚達も今の司令の言葉に頷くのだった。
「本来オムダーマン軍といえば」
「電撃戦と一点集中攻撃を得手としています」
オムダーマン軍というよりはアッディーンが得意としている。他には敵の防御ポイントの弱い部分を突破する戦略戦術を得意としている。これはもう広く知られていることだった。
「ですが今回は」
「おそらく彼はいないにしろ」
「何かあるのか」
ラフコルーサの脳裏に疑念が浮かんだ。
「これは」
「若しそうだとすると一体何が」
「！？」
ここで。レーダー員の顔が強張った。この旗艦だけでなく彼が率いる全艦艇のレーダー員の顔が一斉に。強張ったのであった。
「まさかこんなことが」
「有り得ないぞ、まさか」
「！？どうしたのだ」
「何があった！？」
まずおかしいと思ったのは各艦の艦長と艦隊司令達だった。彼等はすぐにいぶかしんでそのレーダー員達に対して尋ねたのだった。怪訝な顔をして。
「宇宙潮流によりレーダーの異常か？」
「ここにはそんなものはない筈だが」
「いえ」
だがレーダー員達はその問いにはまず首を横に振るのだった。その強張った顔で。

「違います、これは」
「違う！？」
「では一体何だ」
「これは・・・・・・敵です」
次第にその強張った顔が青くなる。それから白に。まさに血の気が引く感じだった。
「敵！？敵ならば」
「正面と左翼にもう」
「いえ、違います」
だが彼等は艦長達にも司令達にも答えるのだった。その蒼白の顔で。
「新手です」
「新手！？まさか」
「そんな筈が」
「いえ、間違いありません」
答えは続く。
「しかもこの数は」
「敵の・・・・・・」
「レーダーに反応です！」
マガパのところにも蒼ざめた報告が入る。

## 第三十部第五章　突撃戦再びその二十三

「要塞正面に向けて進撃、いえ殺到してくる敵軍です！」
「何だと！」
右翼で自軍と敵軍の戦いを見守っていたマガパはその報告を聞いて思わず声をあげた。
「もうだと！？」
「はい、かなりの速さです！」
報告がまた来た。
「その数六十個艦隊以上」
「オムダーマン軍がここに向けてきている艦隊の殆どか」
「はい」
既に今来ている六個艦隊と合わせて。それで全てだった。
「要塞の正面に来ています」
「このままでは」
「くっ、正面に向かわせろ！」
彼はすぐに指示を下した。焦ってはいても指示自体は冷静だった。
「防衛兵器をだ！早く！」
「駄目です！」
しかし彼の幕僚達からすぐに絶望的な返答が返ってきた。
「今向かわせても。もう」
「間に合わぬか」
「敵の動き、あまりにも迅速です」
見ればその通りだった。オムダーマン軍は全速力でそのまま突き進んできている。
「このままでは正面が総攻撃を受けます」
「では。このまま突破されるか」
「いえ、そう易々とはいきません」
少なくともそれだけの守りがある、その幕僚もこう思っていたの

だ。
「それに」
「それに？」
「攻撃に移るまでにはまだ時間があります。その間に艦隊だけでも向かわせましょう」
「そうか、艦隊をだな」
「はい」
艦隊と聞いてマガパの顔が明るくなる。それを出した幕僚達の顔もまた。
「彼等で足止めをしその間に」
「防衛兵器を戻す。それでいいな」
「それで大丈夫です。後は予定通りです」
この場合の予定とはハサン軍全体の戦略に関しての予定である。まずは敵に消耗を強い然る後で撤退して後方の要塞に逃げ込みそこでまた消耗を強いる。暫減戦略をここでも採るつもりなのだ。今回はそれで成功すると見ていた。少なくとも彼等はそうであった。
「ですから」
「そうだな。それではまずは右翼の艦隊を」
「向かわせましょう」
その言葉に従いまずは右翼の艦隊に指示が出される。
「既にラフコルーサ司令も動かれていますし」
「これで間に合うか」
「はい」
彼等はかなり落ち着きを取り戻した。これで防げると思っていた。ところがだった。急進するオムダーマン軍の勢いは止まらない。彼等はそれを見て不思議に思った。
「！？全速力で突っ込むぞ」
「突撃！？いや、違うな」
どうやら違うことに気付いた。
「攻撃態勢はそのままだ。しかも照準を合わせている」

「移動したままで総攻撃か！？まさか」
彼等の常識の中で考え顔をいぶかしめさせる。
「そんなことをしても当たる筈がない」
「何を考えているのだ」
何と戦闘速度ではなく移動速度でそのまま突き進むのだ。それは止まらない。そしてその中でアッディーンはアリーの艦橋においてただ正面を見据えていた。
「全軍攻撃用意」
「全軍攻撃用意」
その中で指示を下す。いつも通りそれが復唱される。
実際にミサイルや砲が構えられる。通常の攻撃と変わらない。砲艦もまたそのなかで砲撃準備に入っている。ミサイル艦もだ。
「敵は戸惑っているようです」
「そうだろうな」
彼はラシークの言葉に応えて頷く。
「何しろ通常の移動速度のままで敵の防衛ラインに突っ込んでいるのだからな」
「はい、そのうえ」
「その中で攻撃を出す」
彼は言った。
「それは思いも寄らぬだろうな」
「実は私も不安です」
「不安か」
「はい、成功するでしょうか」
前を見据えながらアッディーンに問うた。
「果たして」
「安心するのだ、必ず成功する」
しかしアッディーンは前を見据えたまま答える。その返答には何の淀みもない。

## 第三十部第五章　突撃戦再びその二十四

「必ずな」
「成功しますか」
「そうだ」
「司令！」
ここで報告が入った。
「砲艦の射程に入りました！」
「よし」
それを聞いてまずは頷いた。
「ではまずは砲撃だ。撃て！」
「撃て！」
攻撃命令が復唱され砲撃が放たれた。それは的確に敵陣を狙い撃ったのだった。無数の爆発が敵陣の中で起こり炎となる。
「馬鹿な、あの状態で」
「砲撃を仕掛けただと！」
ハサン軍はその攻撃を受けて思わず叫んだ。
「移動したままの攻撃だと」
「しかも照準を合わせて」
突撃の場合は戦闘速度で突き進み正面に照準を定めずに集中攻撃を浴びせる。そうして敵陣を突破するのだ。だがこの時オムダーマン軍は通常の移動速度で進撃しその中で照準を合わせてそれで攻撃を仕掛けてきたのである。似ているようだが全く異なるものだった。
「ミサイルも来たぞ！」
「ミサイルもか！」
ミサイルもまた同じだった。照準を合わせられピンポイントで攻撃を受ける。損害はさらに増えるばかりだった。
そして戦艦や巡洋艦が攻撃を浴びせそれぞれのポイントの防衛ラインを完全に破壊する。そこにオムダーマン軍の駆逐艦が入りさら

にその防衛ラインを破壊していく。そして完全に前線に食い込まれたのだった。
「馬鹿な、こんなことができるとは」
ラフコルーサは兵を進めながら呆然としていた。間に合う筈だった。だが間に合わなかったのだ。
「戦闘速度では来なかったのか」
「間違いなく移動速度でした」
彼に幕僚の一人が答える。彼もまた呆然としている。
「そして砲撃を仕掛け防衛ラインを一気に」
「オムダーマン軍は化け物か？」
彼は思わず言った。
「こんなことができるとは」
「これは夢でしょうか」
「いや、現実だ」
だが彼は言った。
「紛れもない。現実だ」
「そうですね、確かに」
「防衛ラインが突破されようとしている」
「このままでは我々は」
「まずい・・・・・・」
絶望が多分に含まれた言葉だった。
「後方に回られたら終わりだぞ」
「はい、そうなれば我々は」
「ここで一兵残らず戦死するまで戦うか」
ラフコルーサは言う。
「若しくは降伏だ」
「降伏ですか」
「その二つしかない」
彼は言う。
「間に合わせる。いいな」

「今防衛ラインを食い破ろうとする敵のその側面を衝くのですね」
「そうだ」
幕僚のその問いに答えた。彼の考えはそれしかなかった。
「それでいいな」
「わかりました、それでは」
その幕僚もまた彼の言葉に頷いた。
「このまま全速力で進みましょう」
「移動速度だ」
ラフコルーサは言った。
「それでいいな」
「はい、そして最後に」
「戦闘速度に切り替える」
これが普通の戦闘での行動なのだ。だが今のオムダーマン軍はそうではなかったのだ。
「それでなければ攻撃が」
「当たりはしません」
本来はそうなのだ。彼等はここでは彼等の常識により戦術を選んだ。それで急ぐ。しかしオムダーマン軍の速度は防衛ラインでも変わらずそのまま突き進んでいた。

## 第三十部第五章　突撃戦再びその二十五

「まだです！」
「そのままの速度か！」
「はい！」
マガパの幕僚達もラフコルーサの幕僚達もそれぞれの司令達に答える。
「このままでは」
「本当に」
「間に合わないのか」
二人の問いは最早絶望に陥ろうとしているものだった。
「このままでは」
「何ということだ」
既にオムダーマン軍の何割かが突破していた。そして彼等は。
「よし、このまま後方に回れ！」
「了解！」
アッディーンの言葉に応える。実際に要塞の後方を抑えるのだった。
要塞は敵の方に守りを集中させるものだ。とりわけそれが防衛ラインとなっているならば。今回もまさにそれだった。後ろを取られたハサン軍の運命はもうこれで決まっていたのだった。
運命を握られたハサン軍は。遂に進退極まった。その士気が急激に落ちていった。
「司令」
「何だ」
ラフコルーサは幕僚の一人の言葉に応えていた。
「将兵の士気が落ちています」
「動かない者が出ているのだな」
「その通りです」

そのまま彼に答えてきた。
「このままでは」
「投降する者も出るか」
「残念ですがそれは」
別の幕僚が出て来た。
「既に前線では。一隻単位ですが」
「それでも出ていることは出ているのだな」
「その通りです」
沈痛な顔でラフコルーサに答える。
「艦艇だけでなく防衛部隊の間でも」
「そしてそれは次第に大きくなっています」
「わかった」
ラフコルーサもまた沈痛な顔になっていた。その沈痛な顔で彼等に対して答えたのだった。
「それではだ」
「どうされますか？」
「降伏だ」
最早選択肢はこれしかなかった。
「このまま攻撃を仕掛けても殆ども者は従うまい」
「確かに」
「今こうして投降する者が出ている状況では」
「そういうことだ」
彼は言うのだった。
「戦うことができぬならば下るしかない」
「それでは」
「マガパ大将はどうしているか」
「わかりません」
こう返事が来た。
「ですがマガパ大将の指揮下においてもやはり」
「ならば。同じか」

「そうかと」
「わかった。ではオムダーマン軍に伝えよ」
「はっ」
まずはオムダーマン軍と連絡を取るのだった。降伏するにしろ正規の手続きというものがある。彼はそれを行う為に今指示を出したのだった。
「降伏したいとな。いいな」
「わかりました。それでは」
こうしてラフコルーサは艦隊と共に降伏した。一方のマガパの下には。
「オムダーマン軍から通信が来ています」
「彼等からか」
「はい、どうされますか」
右翼に置いていた臨時の司令部で報告を聞いていた。
「出られますか？」
「出よう」
臨時司令部のその椅子に座りながら報告する部下に答えた。
「おおよそのことはわかっているがな」
「・・・・・・はい」
その部下もまた沈痛な顔で頷く。既に防衛部隊の中でも自ら投降する者達が出て来ている。そうした状況の中で敵軍が持って来る話といえば一つしかなかった。わかっていることだったのだ。
その通信に出る。出て来たのは。
「はじめまして、マガパ大将」
「はじめまして」
まずはお互いに敬礼し合う。モニターには青い軍服と白いマントの黒髪の青年がいた。

## 第三十部第五章　突撃戦再びその二十六

「オムダーマン軍の司令官であるアッディーンです」
「そうか、貴方がか」
報道でその顔はよく知っていた。しかし実際に話をするのははじめてだ。マガパは自分の息子の様な年齢の敵将とこうして話をはじめることに運命めいたものを感じながら話に入った。
「お話は聞いております」
「左様ですか」
「ここに来られていることはわかっていました」
まずは社交的な話から入る。いささか儀礼めいてはいるが。
「ですがこうして御会いするとは思いませんでした」
「それは私もです」
アッディーンも答えてきた。
「そしてこのことをお勧めすることも」
「何を勧められるのでしょうか」
「降伏です」
マガパの予想通りだった。やはりそれだった
「閣下」
「はい」
そのうえでまた話に入る。
「貴方とその指揮下にある軍はよく戦われました」
「左様ですか」
「その健闘に敬意を払い申し上げたいのです」
「降伏をですな」
「その通りです」
アッディーンはまた答えた。
「宜しいでしょうか。貴方とその指揮下にある将兵の命と安全は保障致します」

「安全をですな」
「私は言った言葉は必ず守ります」
アッディーンはこう告げてきた。
「必ず。戦場を離れれば武器を持つ理由はありません」
「そうですか」
「そうです。ですから」
また言ってきた。
「降伏を。如何でしょうか」
「既に勝敗は決していますな」
「そうです」
マガパのこの言葉にも答えてきた。
「だからこそ。これ以上の無駄な血は」
「・・・・・・わかりました」
もう暫く時間を置こうと思ったがそれは止めた。丁度その時にまた若い伝令将校が部屋に飛び込んできたからだ。血相を変えているその顔から何を報告するのかわかっていた。
「それでは。その様に」
「受けて下さるのですね」
「はい。ただくれぐれも」
「わかっています」
アッディーンは彼が何を言うのかわかっていた。だからすぐに言葉を返してきた。
「オムダーマン軍が戦うのは武器を持つ相手だけです」
「そうですね」
「これが破られたことはありません」
サハラではおおむね戦争とは軍人同士が行うものだ。かつて、二十世紀にあったような一般市民を攻撃することはあまりない。とりわけオムダーマン軍、特にアッディーンの指揮下ではそれが徹底されていた。
「だからこそ、閣下」

「わかっています。では降伏します」
「有り難うございます」
「これで」
こうしてマガパとその指揮下の軍勢も降伏した。これで話は終わりかというとそうではなかった。先程部屋に飛び込んできたその若い将校がマガパの前でオロオロしていたのである。
「どうした？」
「は、はい」
そのマガパに声をかけられ姿勢を正した。そのうえで敬礼してから述べてきた。
「報告したいことがあります」
「何か」
「申し上げて宜しいでしょうか」
「うむ」
鷹揚に彼に応える。彼がまだ焦燥を見せていたからあえてそうしたのだ。
「言ってみてくれ。何があったのだ」
「第十三防衛師団が投降しました」
「一個師団単位でか」
「左様です」
そう報告してきたのだった。
「そしてそれに続いて旅団単位で投降する部隊が続々と」
「そうだったのか」
マガパはそれを聞いて納得した顔になった。そのうえでまた述べてきた。
「成程な」
「ですが今は」
「そうだ、我々全てが降伏した」
こう彼に告げるのだった。

## 第三十部第五章　突撃戦再びその二十七

「今それをきいてもな」
「左様でしたか」
「そうだ。我が軍は降伏した」
また言う。力のない言葉であった。
「今しがたな」
「わかりました。では今後は」
「オムダーマン軍の指示に従う。いいな」
「はい、それでは」
彼は敬礼した。しかしそれ以上何もできなかった。戦いは終わった。これだけは確かなことであり誰もどうすることもできなかったのだった。
カラクーム要塞はオムダーマン軍の手に陥ちた。言うまでもなくそこにはアッディーンもいた。彼は勝利の歓声を静かに聞いていた。
「これで第二陣も陥落させたな」
「はい」
彼に対してシンダントが答える。
「あと三つです」
「五重の防衛ラインのうち二つを突破したに過ぎないか」
「いえ、二つもです」
しかしシンダントはこうアッディーンに述べてきた。
「二つもか」
「そうです、二つもです」
またこう述べてみせた。
「二つも陥落させたのです」
「見事なものと言うべきか」
「それは周囲が言うことです」
今度はあえてこう言ってみせた。

「閣下の周囲が」
「周囲がか」
「はい、御覧下さい」
ここでその周囲を見回すようにアッディーンに対して述べた。見るとオムダーマン軍の将兵達は喜びに沸き返っていた。その見事な勝利に対して。
「これが周囲です」
「我が軍の士気はあがっているか」
「それが何よりの証拠です。それに」
「それに？」
「敵軍の士気はこれにより間違いなく落ちています」
「間違いなくか」
「六十個艦隊分の戦力が失われました」
これはあくまで基幹戦力である艦隊がだ。それだけではなく他にも多くの戦力が失われている。その損失は永遠に取戻しが利かないものだ。ハサン軍にとってはオムダーマン軍に対して完全な勝利を収めない限りは。
「これは応えない筈がないです」
「しかしだ」
だが彼は言うのだった。
「彼等はまだ後ろがある」
「はい、それはあります」
シンダントはまた頷いてみせた。
「この方面にいるのは八十個艦隊です」
「まだ我々よりも多い」
「しかも三重の防衛ラインがあります」
まだそれだけのものがあるのだった。ハサン軍はオムダーマン軍に対して五重の防衛ラインを敷きそこに百五十個の艦隊を置いているのだ。これだけでもオムダーマン軍を圧倒していた。
「まだ道は険しいです。しかし」

「二度の鮮やかな勝利を収めてみせた。これは」
「今後にも大きく影響しない筈がありません」
「そうだな。彼等は暫減戦略を採るつもりだったが」
「それの根幹を為す六十個艦隊が喪失しました」
百五十個艦隊のうち六十個艦隊だ。やはり大きい。
「これが彼等をしてどう動かしてくるか」
「それも見ものか」
「そうです。それも今後踏まえ考えていきましょう」
こう述べた。
「今後は」
「それも考えるとこの二度の勝利は大きいか」
「そう言わざるを得ません」
「わかった」
アッディーンはシンダントの言葉をここまで聞いたうえで頷いた。頷くとその言葉がはっきりとしたものになるのだった。より一層。
「では我が軍の次の行動を伝える」
「はっ」
シンダントだけでなくそこにいる全ての者がそれに応える。
「まずはこのカラクームも補給基地とする」
「カラクームもですか」
「そうだ、一時進撃を停止する」
ここでまた進撃を停止させた。丁度ダビデブ元帥との死闘に勝利を収めた時と同じだった。
「そのうえで補給を受け捕虜達を後方へ送る」
「わかりました」
約束を守った。やはり彼は捕虜を害するつもりはなかった。この毅然とした正直さがアッディーンをアッディーンたらしめていると言っていいものである。それが今出たのだ。

## 第三十部第五章　突撃戦再びその二十八

「それから進撃する」
「それからですね」
「そうだ。それまでに整備補給を整えておけ」
こうも指示を出す。これまでの戦いのダメージをなくそうというのだ。
「わかったな」
「わかりました。それでは」
「進撃はそれからだ」
進撃のことも話された。
「万端整ってからだ。いいな」
「了解です」
皆この言葉にも頷く。
「それもまた」
「では司令」
指示が終わったところで今度はガルシャースプがアッディーンに声をかけてきた。
「どうした？」
「戦勝報告を送りましょう」
「アスランにだな」
「はい、この勝利は素晴らしい宣伝になります」
彼は言う。
「我々にとっても。そして」
「サハラ全体にもだな」
「その通りです。勝利は全てをもたらすもの」
ガルシャースプは笑みさえ浮かべて述べた。自信を窺わせる笑みだった。勝利という自信を。
「だからこそすぐにでも」

「そうだな。そのうえで今は」
「はい、今は」
「勝利の中に兵を休める」
こう告げるのだった。
「よいな。この勝利の中に」
「わかりました。勝利の中に」
「そしてこの休息はただの休息ではない」
今度の言葉はこれだった。
「次の勝利に向けての休息だ」
「次の勝利に向けての」
「だからこそ休む」
彼はまた言った。
「静かにな。では全軍に告ぐ」
指示を己が率いる全ての軍に行き渡らせた。
「今は休息だ。そして次の目標に向かう英気を養うぞ」
「はっ！」
皆敬礼でアッディーンのその言葉に応える。これでカラクーム攻略戦は終わった。参加兵力はオムダーマン軍七十個艦隊、兵力七千二百万に対してハサン軍は三十個艦隊、兵力は四千万だった。結果としてハサン軍はその四千万の将兵がその殆どを投降させることになった。オムダーマン軍の完全勝利だった。その勝利に沸き立つオムダーマン軍は。今は次の進撃に備え英気を養うのだった。

第三十部　　完

２００８・５・１０

# 第三十一部第一章　勝利の影響その一

## 勝利の影響

オムダーマン軍の鮮やかな勝利はすぐに人類社会全体に伝わった。連合においてもエウロパにおいてもマウリアにおいてもその話題でもちきりとなった。

連合ではネットでも新聞でもテレビでもこのことで議論が行われるようになった。その時ハサン軍の勝利を言っていた識者達は皆責められていた。

「貴方はあの時オムダーマン軍が負けると仰っていましたが」

「いや、それでもですね」

ある識者が討論番組で論戦相手に責められていた。目を丸くさせてドギマギとした顔になっている。

「あんなことは有り得ないですよ」

「あんなことですか」

「そうです」

彼は必死になって言い返す。半分議論ではなくなっていた。

「あんな勝利は常識を超えています」

「常識をですか」

「まず動きが速過ぎます」

彼はそこを指摘した。オムダーマン軍の進撃速度をだ。

「あれだけの動きをするなぞ。考えられません」

「考えられませんか」

「その通りです」

また言うのだった。

「二日ですよ」

「はい、二日です」

このことは連合でも語られるのであった。やはり常識外のこととして。

「二日であれだけの距離を進軍するなぞ」
「考えられませんか」
「まず連合軍に例えます」
ここで彼は例えとして連合軍を出した。
「連合軍ですとあれは四日は優にかかります」
「四日ですか」
「はい、四日です」
また答える。
「それだけはかかります。どれだけ急いでも」
「確かにそうですね」
彼のその説明は他の識者達も頷く。実は彼等にしろハサン軍の勝利、オムダーマン軍の敗北を予想してそれが外れ批判されている者達であるが。
「連合軍の艦艇はサハラ各国の軍のそれと比べて速度が遅いです」
「そうです」
今攻められている学者もそれを言うのだった。
「その通りです。確かにそれがあります」
「ええ」
とりあえず前提としてそれがあった。
「普通に進んで五日というところでしょう」
「連合軍で五日ですか」
「オムダーマン軍で普通ならば四日です」
一日とはいえかなりの開きだ。その一日の差が戦争においては勝敗を分ける決定的な要素となるのであるから当然のことであった。
「急いで三日です」
「ところが彼等は二日で到着しましたね」
「そう、それです」
彼はそこをまた言う。
「それが有り得ないのですよ」
「有り得ないですか」

「一体どうして二日で到着することができたのか」
言いながら腕を組んで考えさえする。彼にとってはどうしてもわからないことであるのだ。
「理解できません」
「オムダーマン軍の機動力がそれだけあったということでしょうか」
同じくハサンの勝利を予想し今責められている学者が述べてきた。
「私達の予想を越える」
「兵器にですか？」
「はい、兵器にです」
学者は女性ニュースキャスターの言葉に応えて頷いてみせた。
「艦艇に。それだけの潜在能力があったのでは」
「いえ、それは違うようです」
だがそれは先程の識者が否定した。声が少しムキになっている。
「違うのですか」
「はい、既にオムダーマン軍の艦艇には詳しいデータが揃っています」
「データがですか」
「そうです、これです」
彼は早速そのデータを出してきたのだった。すぐにテレビ側のスタッフがそれを受け取って説明に協力するのだった。実によくできた番組である。

## 第三十一部第一章　勝利の影響その二

「いいですか、まずは」
「ええ」
「これです」
その女性ニュースキャスターに示されたのは連合軍とオムダーマン軍それぞれの艦艇のデータであった。武装だけでなくその速度や防御、レーダーまで公になっているところは全て書き込まれていた。
「まずは双方の主力艦艇である戦艦ですが」
「速度が速いですね」
学者はすぐにこう言った。データを一目見て。
「戦艦の速度が我々の高速戦艦並ですね」
「そうです」
識者もそれを認める。
「そして高速戦艦は」
「比べものになりませんね」
男のニュースキャスターはデータを見て目を丸くさせていた。
「速いんですね。オムダーマン軍の艦艇は」
「そうです。それでも三日です」
識者はそこを力説する。
「何処をどう頑張っても。ですが」
「彼等は二日でした」
やはり問題はそこなのだった。
「二日で踏破です。有り得ません」
「しかもです」
今度は学者が話す。
「移動速度のまま総攻撃をし立ち止まらないというのは」
「それはないのですね」
「そうです」

学者はある新聞の論説委員の言葉に対して答えて頷いてみせる。
「ありません、あれもまた」
「そうですか。私はそれを聞いて時こういう方法があったの後思ったのですが」
「当たりはしません、普通は」
こう述べるのであった。
「あれではとても」
「しかしそれを見事に成功させましたね」
「ええ」
論説委員の言葉に対して頷く。やはり真剣な顔だ。
「想像できないことに」
「そうですか」
「しかしです」
だが学者はここで言ってきた。
「何か」
「これは実現可能です」
学者はここでは顔を明るくさせて述べたのだった。
「可能ですか」
「はい、ただし」
彼の顔が真剣なものになる。明るいながらも。
「これを行うには相当な訓練が必要です」
「相当なですか」
「連合軍ではまず無理です」
自分達の軍隊に関してはあっさりと一蹴してしまった。
「とてもとても。彼等では」
「できませんか」
「連合軍の訓練度はそこまで達していません」
また随分と手厳しい評価が次々と下される。
「ですからとても」
「連合軍の訓練度は低いですか」

「連合軍は他のことに重点を置いていますから」
軍人上がりの政治家も言ってきた。彼もまた糾弾される側にいる。それだけ多くの人間がハサンの勝利を常識として考えているということである。
「他のこととは」
「教育です」
それであった。
「軍規軍律の徹底。まずはこれです」
「それですか」
「はい」
強い返答が実に軍人らしいものであった。
「その通りです。まずはそれです」
「ああ、そういえば確かにですね」
今の彼の言葉には論説委員も頷くところがあったのか言葉を入れる。
「連合軍の軍律はしっかりしていますね」
「まずはそれを徹底的に叩き込まれます」
「徹底的にですか」
「そうです、徹底的に」
言葉が繰り返される。
「何においてもまずはそれです。連合軍は軍規軍律です」
「そこまで徹底されているのですか」
「では御聞きしますが」
ここで政治家は周りに対して言う。何故か彼は糾弾される側にいるというのに堂々としている。その堂々とした様子のまま話を続けるのだった。

## 第三十一部第一章　勝利の影響その三

「連合軍軍人の犯した犯罪は多いでしょうか少ないでしょうか」
「少ないでしょう」
論説委員は述べた。
「とりわけエウロパとの戦争においては」
「ああ、そういえばそうですね」
「確かに」
識者と学者もそれに頷く。
「連合軍は略奪暴行の類が非常に少ないですね」
「一般社会よりも遥かに少ない位です」
「これは軍規軍律を徹底させているからです」
政治家は胸を張ってさえいた。
「だからこそ彼等は犯罪を犯すことが少ないのです」
「それでそればっかりやっているから訓練度が落ちているっていうことでしょうか」
論説委員の突っ込みは彼が軍事に疎いからであるのだが実のところ容赦のないものであった。その通りであるのは最早連合では常識でもあるのだが。
「それはそれで問題が」
「だって当たり前でしょ」
ある女性タレントが軽い調子で言ってきた。タレントも呼ばれているのだ。
「訓練厳しくしたら人来ないじゃないですか」
「あの、それを言ったら」
「物凄くやばいんですけれど」
学者と識者の顔が引き攣っている。あまりにも真実であり過ぎる言葉だったからだ。
「連合軍は将兵の待遇にはかなり配慮していますけれど」

「だからといってですね」
「けれどあれですよ」
タレントは軽く一見して何も考えていないようだがその中に恐ろしい真実を含ませた言葉を続ける。天然なのか計算なのかわからない曖昧さの中で。
「連合軍ってあまり訓練していませんよね」
「何処の軍隊と比べてですか？」
「日本軍です」
かつての連合各国の中ではとりわけ訓練の厳しい軍隊として有名であった。なお彼等の軍律の厳しさも相当なものとして有名だった。
「日本軍と比べたら全然ですよな」
「あそこと比べたら駄目ですよ」
「そうそう」
学者と識者はこうタレントに言い続ける。
「あの軍隊は特別でしたよ」
「それにそのせいで人が集まらなかったじゃないですか」
識者もさりげなくとんでもないことを言う。
「あんなの繰り返したら駄目ですよ」
「人が来ないと話にならないじゃないですか」
「やっぱり連合軍って中々人が来ないのですね」
ニュースキャスターは何気なくそれを尋ねてきた。
「前々から言われていますけれど」
「当たり前ですよ」
あの軍人出身の政治家の隣にいる若い政治家が話に加わってきた。なお彼等はどちらも中央政府の議員だ。今話している彼は別に軍とは関わりがない。しかも保守派だ。だから随分と気楽な様子で話す。軍人出身の政治家はその横で強張った顔になっているのと対象的だ。
「他に幾らでも仕事があるのに」
「仕事がですか」
「軍は仕事ですよ」

実に連合らしい考えであった。
「辛い仕事には誰も行きませんよ」
「そうですね。それはね」
「じゃあやっぱり」
「そういうことです」
彼はにこやかに笑って述べる。聊かわざとらしくもある笑みだった。
「訓練厳しくしたらそれだけ入ろうっていう人がいなくなります。給料もあげて福祉も充実させてとにかく待遇をよくしないとね。駄目なんですよ」
「そうなんですか」
「そうです。だから訓練を厳しくできないんです」
「ですか」
「規律が厳しい分だけ。そういうふうになっています」
「あの、ちょっと待って下さい」
ここで学者がその政治家に突っ込みを入れる。
「何ですか？」
「それですと規律を緩やかにすべきだって意見になりますよ」
「その通りです」
今まで静かにしていた軍人出身の政治家もそれに加わる。
「それはまずいですよ」
「規律のない軍隊なぞ」
「いや、それでいいんですよ」
その政治家はまた微妙な発言をしてきた。
「それでいい！？」
「はい。まずは規律です」
そのうえでこう言うのだった。

## 第三十一部第一章　勝利の影響その四

「規律を最もしっかりさせておかないと。話にもなりません」
「では訓練は左程でなくていいと？」
「はい」
また随分と正直と言い切るのだった。その言葉には何の迷いもない。
「その通りです。訓練度は確かに重要ですが」
「ええ」
「そうです」
まずこれは絶対のことである。訓練なくして軍ではないし精強な軍というものは訓練を経ていなければ成り立つものではないのだ。
しかしこの政治家は言うのだった。
「連合軍は規律さえしっかりしていればいいです。そうした質はあまり」
「いらないのですか」
「だって装備凄いじゃないですか」
これはもう折り紙付きだった。連合軍の装備は他の勢力の軍と比べて隔絶たるものがある。確かに速度では大きく劣っていても、である。
「それに数だって」
「数は確かに」
「それを言うと」
「ある程度でいいんですよ、個々の質は」
そのうえでまた発言してみせた。
「それよりも大事なのは」
「やっぱり規律なんですね」
「悪いことする軍隊程迷惑な存在はありません」
ここでこの政治家は顔を少し曇らせて真剣なものにさせた。

「それは歴史にありますよね」
「ええ、まあ」
「そうですね」
ここにいる面々の返答がぼやけているのは実感がないからだ。連合では戦禍はなかったし連合軍設立前の各国軍もこれといって動くことはなかった。当然ながら基地外への武器持ち出しはであるし憲兵もいる。戦場でもなければ軍人の行動も一般市民と変わりがない。
「だからです。軍に規律を求めなければなりません」
「訓練度を殺してまで」
「数で押し切れますし」
その政治家はまた言う。
「それでいいんですよ」
「そうですか」
「数と装備で押し切ると」
学者と識者もそれで納得した。言われてみればそうなのだ。
「そういえばですね」
「はい」
キャスターがタレントの言葉に応える。
「何でしょうか」
「エウロパとの戦争で連合軍の損害って少なかったですよね」
「だからですよ」
その政治家がまた言ってきた。タレントの言葉に応えて。
「それでいけるんですよ」
「そうなんですか」
ここでは義勇軍については忘れられていた。ネットでの実況でも何故か義勇軍の損害に対する突っ込みは微々たるものであった。不思議なことに。
「けれどまああれですね」
「あれといいますと」
「いや、オムダーマン軍ですよ」

話がそこに戻った。
「あの速さは本当にわからないです」
「そうですよ、あれは」
「普通じゃないです」
識者も学者もそれに頷く。
「二日というのは」
「一体どうすれば」
「全速力でいったんでしょうか」
タレントがまた何気なく言ってきた。
「そうすれば行けるんじゃないですか？」
「それだとあれなんですよ」
軍人出身の政治家が述べる。どうにもこうにもといった感じで首を横に振りながら。
「確かに全速力で進撃しますよ」
「はい」
「それをやったら艦隊でいられません」
「艦隊ではですか」
「艦隊の運用ってのは難しいんですよ」
軍人出身らしい言葉になっていた。

## 第三十一部第一章　勝利の影響その五

「それでそんなことしたらそれこそ」
「軍隊が滅茶苦茶になっちゃうんですね」
「そうです」
彼が言うのはそれだった。
「かなり無理をして全速力だとそれこそ二日で行けるでしょう」
「二日でですか」
「ええ」
軍人出身の政治家はオムダーマン軍の艦艇の機動力と距離を見つつ話をする。
「ですがそれをやればもう艦隊としての行動を維持するのが困難なので」
「それでなんですね」
「そういうことです」
彼は述べる。
「だから有り得ないのですよ。とても」
「ですがオムダーマン軍はそれをあえてしたのですね」
「そう、それで」
キャスターに答えつつ話を進める。
「成功させました」
「やはり有り得ませんか」
「はい、とてもです」
それをまた答える。
「何故こんなことができたのか」
「そんなにですか」
「ただ。一つ考えられることがあります」
しかし彼はここでふとした感じで言ってきた。
「一つ？」

「いえ、二つでしょうか」
すぐにこう言い直してきた。
「ひょっとすると」
「といいますと」
「はい、まずは将兵の訓練度です」
「まずはそれですか」
「先にお話に出ましたが」
「ええ」
「それですか」
他のコメンテーター達もそれに応えて話を聞く。テレビの前にいた者も糾弾する、されるを忘れて彼の話を聞く。どれだけ重要なのかということだ。
「確かにオムダーマン軍の訓練度はかなりのものです」
「そうですね」
「それは否定できません」
先の話にもあった通りだ。やはりこれは大きな前提であった。
「それがかなり高ければそうした動きも可能です」
「可能ですか」
「はい、ただしです」
そのうえで言葉を付け加えてきた。
「それをするには相当な訓練度が必要です」
「相当なですか」
「まず連合軍のそれが比較にならないレベルにまで達していなければ」
「連合軍よりも！？」
「いえ」
だが彼はここでふと言葉を変えてきた。
「言い替えましょう。先程日本軍のお話が出て来ましたが」
「あっ、はい」
その話を出した当の本人であるタレントが応えてきた。

「何ですか？」
「確かに日本軍はかつての連合各国の軍の中で最も訓練が行き届いた軍でした」
　これもまた前提だった。日本軍以上に訓練の行き届いた軍はない、連合軍では長きに渡ってそう言われてきた。少数精鋭で通っていたのである。
「ですが」
「その日本軍よりも上ですか」
「日本軍でもあの動きはできません」
　こうはっきりと言ってみせたのだ。
「とても。あそこまでは」
「とてもですか」
「その日本軍以上の訓練があり」
「ええ」
「まずこれが一つです」
　ここで一旦話を切ってきた。
「将兵の訓練度」
「それが第一ですか」
「そうです。それでは」
「第二ですね」
「その通りです」
　またキャスターに応えてみせた。顔は真剣そのものだ。テレビの前でも視聴者の視線は彼に釘付けでそのまま彼により話は進められていた。
「第二に統率です」
「統率ですか」
「この場合はオムダーマン軍の提督ですが特に」
　一呼吸置いた。それからまた述べる。
「アッディーン副大統領です」
「アッディーン副大統領が」

「そうです、彼の統率です」
それを指摘する。

## 第三十一部第一章　勝利の影響その六

「彼の統率があまりにも凄いのです。それによって」
「脱落者を出すことなくその速度で進撃して」
「あの攻撃を行うことができたのです」
ここまで述べた。
「だからこそなのです」
「そうなのですか。そこまであって」
「そうです、そこまであってです」
彼はまた言う。
「可能だったのです」
「そのうちのどちらが欠けていてもできませんね」
「その通りです」
識者の質問に対して答える。
「ですから今回はハサン軍が弱かったわけではないのです」
「むしろ強いですね」
学者がその言葉に対して答えた。
「ハサン軍は。少なくともあそこまで一方的にやられるような戦力ではありません」
「そうです。それは最初の戦いからそうです」
軍人出身の政治家はまた随分と大胆に話を遡及させてきた。
「国境を破られたその時ですらです」
「あの時でもですか」
「普通に戦えばオムダーマン軍は敗北していました」
はっきりと言ってみせた。
「間違いなく」
「間違いなくですね」
「正面からあの防衛ラインを突破しようとすれば」
「はい」

実はこの場には男のキャスターもいる。場の仕切り役だ。今回はあえて静かにして話を聞いていたのだ。その彼が今はじめて声をあげてきた。
「相当な損害が出ていたのですね」
「間違いなく」
軍人出身の政治家は彼に対してもはっきりと答えた。
「仮に突破したとしてもそれこそそれ以上の戦闘が無理な程のダメージを受けていました」
「しかしそれがなかった」
「そうです」
それがどうしてだったのかは既に言う必要もなかった。
「あの時もアッディーン副大統領の見事な奇襲がありました」
「奇襲で勝ったと」
「そして素早く敵の後方に回り込み」
戦略、戦術双方においてアッディーンが得意とする作戦だ。彼は常にこれで勝っていると考える者すらいる。彼に対する認識不足であるがそう認識させるものがあるのも確かだ。そこまでアディーンの用兵が巧みで思いも寄らぬ勝利を挙げているということでもある。
「そのうえで同時攻撃を仕掛ける。見事です」
「今回はあれですね」
「はい」
男のキャスターが何を言いたいのか、彼はもうわかっていた。それをあえて聞くのだった。
「急襲攻撃です。口で言うのは容易いですが」
「行うのは困難だと」
「それを見事に成功させました」
彼はアッディーンを褒め称えさえしていた。少なくとも認めている。
「実に鮮やかなまでに」
「それではです」

今度口を開いたのは女のキャスターであった。
「ええ、それでは？」
「今回は予想が外れたのはあまりにもオムダーマン軍が優れていたというわけですね」
「そう考えます」
彼は今回もまたはっきりと答えてみせた。
「それだけオムダーマン軍が優れているというわけです」
「それではですね」
普通の政治家が難しい顔をしながら述べてきた。
「若しですよ、若し」
「はい、若し」
「何が」
「彼等が私達と戦うことになれば」
半分仮定であるが後の半分は危惧がある、そうした顔での問いであった。この問いはその軍人出身の政治家だけでなくほかのコメンテーター達にも向けられていた。
「どうなるでしょうか」
「負けはしませんよ」
「やっぱり」
学者と識者が同時に彼の質問に答えてきた。
「まず、というかほぼ」
「やはり国力差が凄いですから」
「安心ですか」
「二十倍ですよ」
「これはやっぱり大きいですよ」
「国力ですか」
「はい」
二人は同時に男性キャスターの言葉に対して答えてみせた。
「その通りです」
「軍事力はないのですね」

男性キャスターはそこを念押しする。それこそが重要なのだと言わんばかりである。少なくとも彼はこの場合はそう考えているのは事実である。
「この場合は」
「兵士数はどうとでもなりますので」
「それでもそもそも普通に彼等の何倍もありますよ」
「サハラ全部を合わせたのよりもね」
「サハラ全土のですか」
「その通りです」
元の大きさがまるで違う。だからこれも道理なのだった。やはり最初からの数の違いというものは国力を考えるに当たって非常に重要である。

## 第三十一部第一章　勝利の影響その七

「ですから我々にとってはサハラ、いえオムダーマン軍と億が一何かありましても」
「兆か京かも知れませんね」
「ははは、確かに」
学者と識者はこう言い合ってそのうえで笑い合う。彼等だけでなく連合にとってもオムダーマンと対立し衝突するということはまず考えられないことだった。これに関しては連合のどの架空戦記作家も書いてはいない。精々ハサンが統一して連合に攻めて来るというストーリーだ。多いのはやはりエウロパとの戦いを扱ったものである。
「そんな可能性ですが若し何かあっても」
「オムダーマン軍といえど敵ではありませんよ」
「そうですか」
「はい、そうです」
「力の差が歴然としていますので」
「そうですか。それでですね」
「はい」
ここで話が変わる。サハラから連合に関するものになった。
「一つ気になることがあるのですが」
「気になること？」
「そうです。その連合軍ですが」
「ええ」
「彼等が何か」
これは二人だけでなく他のコメンテーターや女性キャスターも聞き入る。連合軍といえば他ならぬ彼等の軍だ。気にならない筈がなかった。
「どうやらサハラとの境に防衛ラインを敷くとの計画を立てている

ようです」
「ああ、そうですよ」
軍人出身の政治家がそれに頷いてきた。彼は所属政党が八条と同じ改革派であり軍事通なのでこの話に関しても知っているのだった。
「今その計画を考案して検証しているところです」
「そうなのですか」
「はい、あくまで難民対策です」
「難民対策ですか」
「その通りです」
彼はこう周りに対して答えてみせた。
「それ以外の何者でもありません」
「難民でしたか」
「ええ、間違いありません」
彼はまた答える。
「ですから。何の心配も入りません」
「そうでしたか。難民でしたか」
「何しろ戦乱が続いていますから」
その理由をここぞとばかり強調してみせてきた。
「そうした対策も必要ですから」
「そうですね、それは確かに」
男性キャスターは彼の話を聞いて神妙な顔で頷く。完全に信じている顔であった。
「今でも十億人もの難民達がいますから」
「彼等が全てそうではないですが」
次にこう前置きしてからまた述べてきた。
「難民の中には怪しい存在もいますし」
「過去ではエウロパの工作員が紛れ込んでいたこともありますね」
「はい、それですね」
彼は女性キャスターの言葉に対して答えた。
「過去にはそうした事件もありましたね、そういえば」

「そうなのです。ですから」
これは数百年前に実際にあった事件だ。難民を装ってエウロパの工作員が紛れ込み彼等の手で情報がエウロパに伝わると共に様々な破壊工作も行われていた。その為連合では難民に対する警戒心も潜在的に存在しているのも紛れもない事実なのだ。
「そうしたことも必要なのです」
「成程」
「それでなのです」
彼はあらためて言う。
「連合とサハラとの境に防衛ラインを設けるというのは」
「凄いですよね、それって」
またタレントが話す。
「そうしてチェックしていけばエウロパはもっと困りますよね」
「そうですよ、おわかりですね」
「随分長い距離になりますよね」
彼女はこうも言った。やはりあまり考えていないようには見える言葉である。
「連合とサハラの境になると」
「そうですね、確かに」
彼女の言葉に頷いたのは保守派の政治家だった。軍人出身の改革派の政治家の隣にいるその彼のことだ。彼はしたり顔でタレントの今の言葉に頷くのだった。
「かなり長いものが予想され予算が心配されます」
「いやいや、それがですな」
しかし軍人出身の政治家は彼の言葉に対してすぐに反論してきた。

## 第三十一部第一章　勝利の影響その八

「決してそうではないのです」
「そうではないと」
「そうです。既に予算は組まれていまして」
「ふむ」
「というか計画されそれが今議会にかけられるところですが」
「つまりは全てこれからということですか」
言葉に少し嘲りが入れられているようにも聞こえる言葉遣いになっていた。
「だとすると」
「与党の国防委員会では既に審議されています」
彼は答える。実は彼はその中央議会国防委員会にも所属しているのだ。これは政治家同士のそれぞれの政策に対する検証や審議、立案を担当するものだ。ここから法案が出されることも多い。
「その結果間違いなしでした」
「ですがあれですよね」
この政治家はそれでも反論してきた。
「最近どうにも国防予算が」
「微々たるものですよ」
また答える。
「国防予算の割合なんて」
「それは確かにそうですが」
「割合はあれ以上増えませんですし」
連合全体の国民総生産の一パーセントである。やはり相当少ない。連合は伝統的に軍事には左程金をかけないのである。理由は簡単で比較的平和で金をかけなくて済んでいたからだ。
「何か問題でも？」
「それならいいのですがね」

少し無念な顔で話を引っ込めるのだった。その顔がネットで話題になったがこれはまた別の話である。
「それでは」
「ではそういうことでそれは」
「ただ。境全体にですね」
「そうです」
また話をしてきたのでそれに応えるのだった。
「その予定です」
「何か万里の長城みたいですね」
学者はかつて地球にあった建造物を話に出してきた。中国が北方の遊牧民族に対して築いたものだ。これで境としていたのである。
「それですと」
「まあ近いかと」
軍人出身の政治家もそれを認めて頷く。
「言われてみれば」
「長城ですか」
「はい、そうです」
また答える。
「そう考えて頂ければ」
「じゃあサハラが遊牧民ですね」
タレントはここでも何気なく言ってきた。
「そうなりますよね、それだと」
「といっても当然戦争をするつもりはありませんよ」
軍人出身の政治家はそこは念押ししてきた。少し困惑した顔で。
「それはよく覚えておいて下さい」
「はい」
「だといいのですが。まあ備えです」
そしてまた言うのだった。
「いざという時のね」
「いざという時ですか」

「何があるかわかりませんから」
彼は笑って言葉を続ける。
「軍隊自体がそんな組織ですしね」
「その通りね」
彼の言葉を聞いてテレビの向こうで頷く声があった。それは伊東の声だった。彼女は己の執務室において今の番組を見ていたのだ。そのうえでの言葉だったのだ。
「軍はいざという時の切り札なのよ」
「有事の際にですね」
丁度そこにいた小柳がそれに問う。その小柄な身体を彼女の前に立たせている。そのうえで彼女と共に今テレビを見ていたのである。
「そうよ。有事のね」
「それこそが戦争だと」
「そればかりじゃないわ」
伊東は今の小柳の言葉に対して言い加えてきた。
「戦争ばかりじゃね。災害でもそうよね」
「あれもそれに入りますか」
「入るわよ。それを考えたら有事というのは多いわよ」
「そうですね。それは確かに」
「今さっきの話だけれど」
テレビを指差す。話はまだ続いていた。
「連合軍は訓練度は低いって言われていたわね」
「はい」
小柳は伊東のその言葉に対して頷いた。

## 第三十一部第一章　勝利の影響その九

「今確かに」
「その通りよ」
まずはそれを認めるのだった。
「連合軍の訓練度は低いわ」
「やはりそうですか」
「ただし」
だがここでまた。言葉を付け加えるのだった。
「それは戦闘に関するものに関してよ」
「戦闘ですか」
「あくまでそれ限定でね。災害救助に関してはね」
「違うのですね」
「そちらの訓練はちゃんと行っているわね」
それを見ていたのであった。その知性をたたえた目で。
「これはあまり知られていないけれどね。やっているわ」
「そうですか」
「むしろこちらにより重点を置いていないかしら」
伊東はこうも述べる。
「連合軍という軍隊はね」
「八条君、いえ」
小柳は慌てて言葉を引っ込めた。そのうえで言い換える。
「八条長官の方針ですね」
「そうよ。その証拠に」
「ええ」
伊東はさらに話す。
「宙路はかなり整備していっているわね」
「はい、連合軍として」
連合軍の宙路は独自のものだ。民間のものと沿ったラインに置か

れている。なお平時にはここも民間が使用している。有事には別、というわけだ。
「それは災害があった場合にすぐにそちらに向かえるようにしているのよ」
「星系単位の場合もですね」
「そうよ。その為だったのよ」
「そうだったのですか。辺境にまで及ぼしているのはそれだったのですね」
「ええ。同時に宇宙海賊やテロリストへの対応にもなっているけれどね」
「そうですね。それも」
小柳はそれにも頷くのだった。
「どちらかといえばそれに目が向けられていますが」
「実はそうじゃなかったのよ」
伊東はこう言う。
「むしろメインは」
「災害対策ですか」
「軍は戦うだけが仕事じゃないのよ」
二十世紀末から次第に認識されてきたことである。
「むしろね」
「そちらの方がですね」
「そういうことなのよ。連合軍はそうした軍隊よ」
「サハラの軍とはそこが違うのですね」
「彼等はあくまで戦争第一の軍」
言葉が真面目なものになる。
「あとは治安の為のね」
「治安は連合軍もそうですね」
「ええ。けれどサハラの軍はとにかく戦闘が第一よ」
「災害よりもですか」
「ほら、だから」

伊東はまた言う。
「サハラで災害があると犠牲者が多いじゃない」
「そうですね」
これは小柳も知っていた。よくニュースで出るからだ。
「連合に比べるとかなり」
「それが災害対策をしていないせいもあるけれど」
「その際に軍が的確に動いていないせいですね」
「向かわせることも遅いしね」
対応も遅いというのだった。この点に関する伊東のサハラ各国の軍に対する評価は実に厳しいものがあった。しかもそれをさらに続ける。
「彼等にとってはそうしたことは二の次なのでしょうね」
「二の次ですか」
「それも当然だけれどね」
しかしここで矛を少し緩めた。
「当然ですか」
「戦争に勝利しないと国がなくなるから」
「サハラでは」
「連合では支持されないと終わりよ」
あくまで政権としてである。だがサハラは国家なのだった。

## 第三十一部第一章　勝利の影響その十

「災害対策がまずければ」
「すぐに支持率を失います」
これは道理だった。民主政治では当然のことだ。
「そうね。それに的確じゃなければ人的、経済的損失もかなりのものになるわ」
「だからこそ災害対策に重点を、ですか」
「八条君だけではないしね」
ここで八条の名前が出たが今はとりあえず出しただけだった。
「昔から。連合各国ではそうだったから」
「軍は災害の為ですか」
「そうした意味での有事よ。だから災害も」
「そういうことでしたか」
「今までは災害は何だと思っていたのかしら」
「有事とは考えていませんでした」
小柳はこう伊東に対して答えた。
「そこまでは」
「有事なのよ。緊張が伴うものなのよ」
「緊張は感じていました」
それも素直に答える。
「ですが。有事でしたか」
「こう考えるとわかり易いわね」
「はい、確かに」
伊東の言葉に対して頷いた。
「余計に緊張します」
「軍は人を殺す組織だけれど人を救う組織でもあるのよ」
相反するものが同時に存在している。そういうことだった。
「実際のところね」

「かつての、二十世紀初頭までの軍とは違うのですね」
「まだそのイメージが残っているのはあるわね」
「はい」
小柳はまた答えた。
「私にもあります」
「けれど違うのよ。今はどちらかというと」
「人を救うのですね」
「そうよ。市民を護る為の組織よね」
「ええ」
これもまた軍の変質であった。所謂皇帝、王者が持っている軍から国家が所有し、しかも国家の主権者が市民になったから。だから市民を護る軍になったのである。
「だったら災害救助も当然ね」
「そうなりますか」
「だからよ。それに重点が置かれるのは」
そういうことであった。
「連合軍にしろね」
「成程。市民の軍だからですか」
「そうよ。ただエウロパは」
「少し違いますね。貴族の軍です」
「貴族がエウロパそのものと平民を護る軍」
エウロパ軍は実際にそう規定されている。こう軍規に書かれているのだ。
「そうでしたね」
「考え方が私達と全く違うのよ」
「義務ですか」
「そう、義務なのよ」
これを小柳にも言った。
「彼等のね」
「高貴なる者の義務ですね」

「私にはわからない倫理観だけれどね」
「私にもです」
小柳もそれに答えるのだった。
「高貴なる物なぞ。そうした考えは」
「陛下や皇室の方々のお考えとはまた違うからね」
「はい。それとは全く違うのはわかります」
これは言葉としてわかっているのではなく感覚としてわかっているのだ。皇室の高貴とエウロパ貴族の高貴は違う、これは民族的な問題もあるのだ。
「そもそもです」
「ええ」
伊東はここでは小柳の言葉を聞くのだった。
「高貴なる者と言いましても元々エウロパ貴族といえば」
「そうよ。征服民族よ」
「そうです。高貴なる者ではなく征服民族です」
あらためてこう述べる小柳だった。
「ですから元々高貴ではなくその義務感もまた」
「多分に自己満足」
伊東の言葉だ。

# 第三十一部第一章　勝利の影響その十一

「そう言いたいのね」
「少なくとも私にはそう思えるものです」
伊東に対する答えはこうだった。普段は童顔ながらポーカーフェイスで知られている無表情な顔が少し嫌悪感を漂わせるものになっていた。
「所詮は征服者の自己満足ではないかと」
「それでもあれなのよ」
「歳月が進むうちにですか」
「それに今のエウロパ貴族達は」
「はい」
今の時点のエウロパ貴族達の話にもなる。
「少し違うわ」
「違うといいますと」
「民族的にはよ。同じじゃない」
「あっ、そういえば確かに」
伊東に言われて気付いたのだった。
「彼等はエウロパが出来てから選ばれたのでしたね」
「確かに元々貴族の家だった家系も多いわ」
とりわけイギリスがそうだ。イギリスはエウロパ建国の折にそのまま自国の貴族達をエウロパ貴族にしているのである。そうした事例もエウロパでは多い。
「だから被征服者だった民族の貴族達もいるわよ」
「そうだったのですか」
「これは気付いていなかったかしら」
「申し訳ありません」
まずはそのことを謝罪する。
「知りませんでした」

「謝る必要はないわ。ただね」
「はい」
伊東はまた話に入り小柳がそれを聞くのだった。本来の形に戻ったとも言える。
「民族的には今のエウロパ貴族達は混血も進んでいるわ」
「彼等の貴族社会への参入によってですか」
「ええ。確かに平民階級との婚姻はないけれどね」
「貴族社会の間でもそれは細かい階級があるようですね」
「騎士やジェントリから」
「彼等も貴族でしたね」
これはイギリスの制度に基いている。『サー』や『ディム』という称号がそれを表わしている。なおオーストラリアやニュージーランド、カナダが大英帝国から出て正式に独立した時に言うまでもなくこうした称号は全廃されている。貴族制度の否定は連合共通の価値観の一つだからだ。
「そう。彼等は彼等だけの社会があるし」
「ええ。そして爵位の間でも」
「男爵は侯爵につくものとされ」
一応はそうなっている。
「子爵は公爵にね」
「確かそうでしたね」
「かなり複雑な縦構造の社会なのよ」
それが貴族社会というものである。ピラミッドそのままの構造になっているのだ。そしてその頂点にいるのが皇帝ならぬエウロパ総統というわけだがこれは選挙によって選ばれる。
「あそこはね」
「その中でも幾つにも分かれていっているのですね」
「そういうことよ。それで彼等は」
「そういった倫理観を育んでいったのですか」
「そういうことになるわ。歪に感じるかしら」

「否定はしません」
また実にはっきりと述べてみせた。
「私にはどうにも」
「そう。やっぱりね」
「ですがそれがエウロパ軍の市民を守る理由になっているのですね」
「あくまで平民だけれどね」
連合の市民とは違う。これは絶対のものであった。
「そうなっているわ」
「成程」
「けれど。彼等も守る対象はやっぱりあれなのよ」
「敵対勢力の武力というわけですね」
「具体的に言えば私達よ」
苦笑いになったうえでの言葉だった。
「その敵対勢力というのは」
「ですか」
「これはわかるわね」
「千年の間の対立関係ですから」
これはわかるのだった。否定できないものがそこにはあった。しかもはっきりと。
「それは」
「私達からどうやって平民と国土を守るか」
やはり自分達なのだった。

## 第三十一部第一章　勝利の影響その十二

「それが問題だったのよ」
「では災害は」
「エウロパは恵まれていてね」
これは皮肉ではなかった。
「災害はあまり起きないのよ。どの星系も」
「それは羨ましいですね」
「連合で怖いものといえばね」
「はい。幾つかあります」
小柳が述べた。
「地震、雷、火事、台風」
「ブラックホールに過度の磁気嵐に超惑星」
「今ではある程度コントロールできるものばかりですが」
「あくまである程度だからね」
流石に完全にコントロールしきれないことがあるのだ。そのケースが問題なのだった。
「だからやっぱり災害は怖いわ」
「そうです。やはりエウロパが羨ましくなります」
「狭いけれどね」
しかし伊東はここで待っていたかのように言ってきた。
「それはまあ」
「あんな狭さでは苦しいわよ、連合ではね」
「大体アメリカ、いえ中国程度の勢力圏でしょうか」
「もっと小さいでしょうね」
伊東は答えた。
「総督府もなくなったから」
「では我が国程度、いえやはり」
「そうね。その程度ね」

「そこに一千億ですか」
「そう、開拓できる場所を全て開拓してね」
「我が国は一兆はいけそうですが」
小柳は言った。
「彼等は星系の数自体が少ないのですね」
「それもあるわ」
「やはり」
しかもかなりなのだった。
「勢力圏はやはり問題ではないですか」
「大切なのは星系の数だからね」
「そうですか。そこに一千億」
「我が国と同じ勢力圏で我が国よりも遥かに星系は少ない」
話せば話す程エウロパの追い詰められた状況がわかるのだった。
「しかも向こうには私達がいる」
「これで災害が多ければ泣くしかありませんでしたね」
「神様もそこまで意地悪じゃなかったってことね」
笑って述べた言葉だった。
「どの神様かはわからないけれど」
「エウロパの神様では？」
小柳はこう考えて言うのだった。
「やはり。そうなると」
「キリストの神は連合にもいるわけ」
「ええ。ですからあの神ではないでしょう」
それは否定されるのだった。やはりと言うべきか。
「だとすれば矛盾が生じますので」
「不思議だけれどね。同じ神を信仰していて同じ神に対して勝利を祈りつつ戦うのですから」
「そう言ってしまえば歴史ではそうした事例が多いですので」
「特に欧州ではそうですね」
そうなのだ。同じ神を信仰していようが争う時は争うのだ。それ

が人類社会の歴史なのだ。
「同じ神を信仰していつつ」
「矛盾は人の世界の常でしょうけれど宗教は時にそうね」
「はい。ですからそれを言うと問題がかなり複雑になります」
「というかはわからなくなるわ」
「ですから。この場合はキリストは」
「とりあえずないことにしましょう」
考慮から外すのだった。考えれば考える程矛盾が生じてどうしようもなくなるからだ。それも人類社会だがあえて考慮しないのも政治なのだ。宗教に関しては。
「ですからこの場合は」
「ギリしか北欧の神々ね」
「はい、そうです」
やはりそちらの神々であった。
「となると祈る対象は」
「アテナかヴォータンか」
そういった神々であった。ギリシア神話での戦いの女神、北欧神話での戦いの神だ。どちらもその性質はかなり違うがそれでも戦いを司っているのである。
「どちらかですね」
「そうです」
小柳は言う。
「その神々に対して祈ったのでしょう」
「勝利をね」
「そしてそれが聞き届けられた」
そういうことだった。

## 第三十一部第一章　勝利の影響その十三

「戦場での勝利を。そして」
「そして？」
話はさらに続くのだった。
「災害に関してはそれぞれの神々を」
「多いわね、それも」
「はい、かなり」
ギリシアも北欧もまた多くの神々を擁している。その数はそれぞれかなりのものだ。少なくとも連合のそれぞれの神話の神々にひけは取らない。流石に日本のそれには劣るであろうが。日本の神々はまた特別に数が多いからだ。多いだけでなくそれぞれの名前も複雑なのだ。
「その願いが聞き届けられたということでしょうか」
「けれど。その人口過密と狭さはどうにもならなかったのね」
「連合は広く戦乱はなかったですが」
それはなかった。確かに。
「ですがその分災害は多かったです」
「そうね。災害の割合で言えば」
「はい」
「エウロパは連合の十分の一程度かしら」
そこまで違っていたのだ。連合にあるどの星系も惑星も災害はかなり多いのだ。噴火にしろコントロールできるとはいえ完全ではないのでやはり起きるのだ。
「羨ましいことではあるね」
「我々にはその加護はなかったのですね」
「けれど個々の惑星は豊かだった」
「ええ。それに」
「その数も多い。禍福というものはわからないものね」

「ある程度拮抗しているものでしょうか」
話は政治から哲学にも及んでいた。
「やはり。一つが満たされれば一つが災いを招く。そういったふうに」
「それはあるわね。連合もエウロパも幸福があれば」
「不幸もある」
そうも言うのだった。
「やっぱり。そうね」
「そうなりますか」
「けれど。あれね」
「あれといいますと」
「いえ、これは私が思っただけよ」
こう前置きしてまた述べる伊東だった。
「けれどね」
「ええ。けれど」
また言う。
「連合で信仰されている神々は多いわね」
「ええ、それは」
その通りだった。やはりその数はかなり多いのである。それだけ連合が多様な文明、文化を包容しているということでもあるが。
「ではその分だけ」
「加護もあるのでしょうね」
「そうなりますか」
「それで思うのよ」
そのうえでまた述べる。
「若し彼等の神々を取り込んだら」
「ギリシアや北欧の神々をですね」
「そうよ。その場合はさらに加護が得られるわ」
こうした考えは古代からある。他の神々を取り入れて自分達の力にするという考えは多神教では実に多い。ローマ帝国や中南米がそ

の例である。
「どうかしら」
「神々だけはいりますが」
小柳の返事はいささか冷徹なものであった。
「エウロパの者達はいりません」
「一千億の不穏分子はいらないのね」
「一千億もいれば大きな頭痛の種になります」
こうも述べてみせた。
「何をするかわかりませんしそのうえ」
「一千億もの不穏分子への処刑はね」
「できるものではありません」
顔を暗くさせての言葉だった。
「その様なことは」
「そもそも連合は不穏分子なぞいない社会よ」
「はい」
これは建前であるが現実でもある。連合は多様な社会であり自由と平等の社会なのだ。確かに君主も存在しているがそれはあくまで象徴としてだ。大衆民主主義社会というわけだ。二十世紀価値観を付け加えるならばここに資本主義や高度大衆社会といった言葉もプラスされる。そうした社会なので異分子、不穏分子というものは有り得ないのだ。ただしこれは平等を否定するならば別なものとなるのだ。
「それで平等を否定する不穏分子は」
「いていいものではありません」
「そういうことね。だから」
「エウロパ人は連合にはいてはなりません」
「そうね。しかも」
「我々は粛清といったことは。どうにも」
「変わったって言えば変わったわね」
伊東の次の言葉はこうであった。

## 第三十一部第一章　勝利の影響その十四

「人類も」
「少なくとも連合は」
「ええ。連合は最初からそうだったけれど」
これには大きな秘密がある。連合で粛清が不可能な理由が。
「やっぱり。多様性を認めるとね」
「はい。粛清にはなりません」
こういうことなのだ。
「何故なら粛清というのは一元化を目指す社会において行われるものです」
「ええ、その通りよ」
全体主義がまさにそれである。人類社会で近代的な価値観においては最初の全体主義国家はジャコバン派によるフランスであるが彼等はまず粛清を行った。王党派やジロンド派だけではなく自分達の身内もまた多く粛清の対象としている。際立った例としてはその街の市民を粛清として一割抹殺することを目標とする。その中にジャコバン派から見て罪のある者がいなくてもいい。目標としてそれだけ粛清するのである。そしてそれを果たす。これはナチスにおいてもソ連においても踏襲される。これが粛清というものだ。
「だからそれは」
「連合ではできません」
「精々爪弾きにされるだけね」
「しかしその爪弾きにされた一千億がまた集めれば」
「答えは決まっているわ。またエウロパができる」
「はい」
やはりそれであった。
「お話にならない。喜劇ね」
「ブラックユーモアです」

小柳はこう表現した。
「ですからエウロパの併合はとてもできません」
「少なくともするべきではないわね」
「私はそう考えます」
結論はこうであった。
「だから先の戦争でも領土の併合でさえ殆どしなかったのよ」
「あくまで回廊と要塞だけに留め」
「防衛としてはそれで充分だしね」
あくまで防衛の観点からだと述べた。
「だからあれだけだったのよ」
「はい、確かに」
「あとは周辺を非武装地帯にしてね」
「若しもの場合は踏み込まれるものですが」
非武装地帯と決めてもこれは条約のうえでのことなのだ。必要とあらば破られるということは歴史において多々ある。例えばドイツのラインライト進駐だ。ヒトラーの大きな賭けであり彼はそれを内心緊張しつつ実行し英仏が動いたならば兵を引かせるつもりだったが成功したのだ。
「それでもですね」
「踏み込むからには動きがあるわ」
伊東は言った。
「事前にね。それも政治的にも軍事的にも大きく」
「それでわかると」
「そういうことよ。非武装地帯はただ兵を置かないで安全を保つだけじゃ目的じゃないのよ」
言うまでもなくそれが最大の目的である。しかしそこに達するまでに動きが必ずある。それを見て対応する為の時間稼ぎという意味もあるのだ。
「だからあれでいいのよ」
「左様ですね」

「エウロパはそれでいいのよ」
「わかりました。それでは」
「そういうことよ。それで」
「それで？」
「最近の各国の動向はどうかしら」
話題を急に変えて小柳に対して問うのであった。
「サハラに対する動向は。どうなっているの？」
「ほぼ全ての国が中央政府に倣っています」
小柳はまずこう答えた。
「中央政府にね。つまり」
「はい、ハサン寄りです」
そういうことであった。連合は伝統的にハサンと友好関係にあり今もそれを守っているのである。それがいささか苦しいのが現状であるが。
「我が国も然りです」
「そうね。ただハサンは」
「どうなると思われますか？」
「危ないかもしれないわ」
彼女は言うのだった。
「若しかしたら」
「まさか」
「まだ力はあるって言いたいのね」
「はい、そうです」
小柳の返事はこうだった。
「今のままでも充分」
「オムダーマンとティムールを退けられる力があると」
「確かに二正面作戦です」
それは事実だった。

## 第三十一部第一章　勝利の影響その十五

「紛れもなく。しかし」
「国力は双方をプラスしたよりも大きいわね」
「今だに。ですからそうそう敗れるとは」
「そうね。国力のうえではね」
「アッディーン副大統領もシャイターン主席も水際立った指揮を見せていますがやはり人的資源に頼る戦争というものは限りがありま す」
「何時か尽きると」
「全ては国力です」
小柳の考えはあくまで連合のそれだった。連合では戦争というものは人ですることのものではない。システムと装備、そして補給ですることのなのだ。
「ですから」
「そうね。普通に考えればね」
「普通は、ですか」
「ハサンはあまりにも負けが込んできているわ」
語る伊東の顔に憂いが見られる。
「だから。これ以上の敗戦は」
「彼等にとって危険ですか」
「ええ。特に」
「特に？」
「次のハサンとティムールの戦いだけれど」
「それですか」
「そう。オムダーマンだけではなくティムールの存在があるわね」
これはおさらいになっていた。ハサンが戦っているのはオムダーマンだけではないのだ。どうしてもティムールとの戦いも強く意識せざるを得ないのだ。

「彼等との戦いはコム以降これといった進展はないけれど」
「今のところは双方共次の準備にかかっています」
小柳が述べる。
「そろそろそれも終わりでしょうが」
「アヤグーズにとっては首都攻防ね」
「そうなります」
それであった。
「ここで敗れることがあれば」
「そうよ。かなりまずいわ」
答えはそれであった。
「アヤグーズは滅亡しその領土が完全にティムールのものになる」
「そうですね。そうなれば」
「まず西部戦線はティムールに勢いが完全にいくわ」
連合ではオムダーマンとハサンの戦いを南部戦線、ティムールとハサンの戦いを西部戦線と呼んでいる。全ては二正面作戦からきている名称である。
「完全にね」
「戦力もティムール有利になるでしょうか」
「戦力はまだまだハサン優勢よ」
それは否定する。
「けれど。勢いがね」
「勢いがですか」
「そのうえティムールは重要な戦略拠点を手に入れるわ」
これも大きいのだった。
「アヤグーズというね。宙理的にも西部戦線では要地だし」
まずはこれがあった。
「そのうえ補給基地としてもね。使えるわ」
「では次の戦いは天王山の一つですか」
「西部戦線のね」
こう小柳に語る。

「南部戦線でもおそらく次が天王山になるわ」
「まさにハサンにとっては正念場ですか」
「そうよ。連敗が続いているだけに余計にな」
「私はこうなるとは思いませんでした」
小柳はここでまた言う。
「ハサンがここまで破れ続けるとは」
「予想外だったのね」
「そうした意味では他の方々と同じでしょうか」
自己分析であった、
「ハサンの勝利を疑っていませんでした」
「私もまさかと思ったわ」
「そうですか」
「冷静に考えてね。勝てるものではないわ」
伊東もまた小柳と同じなのだった。この戦いに対する分析は。
「それがどうして」
「勝利を予想したのは誰かいたでしょうか」
「いるわ」
伊東は答えた。

# 第三十一部第一章　勝利の影響その十六

「一人だけね」
「一人ですか」
「ええ。誰だと思うかしら」
「そうですね。それは」
考える顔になる。そのうえで答えた。
「八条君でしょうか」
「わかるのね」
「それを予想できるといえば」
小柳は言う。
「あの子しかいません」
「あの子なのね」
「あっ」
ふと出てしまった失言に気付く。そのうえで顔を少し赤くさせて左手で口を閉じるのだった。彼女にしては珍しく少女めいた仕草であった。
「すいません、つい」
「いいのよ。そういえば」
「はい」
「貴女は八条君より年上だったわね」
「はい、そうです」
伊東のこの質問に答えた。
「一つですが」
「どうも彼は年上に人気があるのよね」
「何処か母性本能を刺激されます」
女同士だからこその言葉だった。それにしても随分と正直な言葉ではあるが。
「あれだけの美男子で何処か頼りなくて」

「しっかりしているのだけれどね」
「はい、それなのに何故か」
そうだと言うのだった。
「頼りないのです」
「思えば不思議な子よ」
伊東もこう呼んだ。
「全然そんな雰囲気でもないのにね」
「はい、頼りない感じがします」
「天然って言うのかしら」
今度はこう表現する。
「あれはね」
「天然ですか」
「こう表現すべきだと思うけれど。どうかしら」
あらためて小柳に対して問う。
「彼の場合は」
「そうですね。強いて言えばそうかと」
そして小柳もそれに頷くのだった。
「彼の場合は」
「本人は意外なことにね」
「はい」
「女性に人気がないって思っているのよ」
「まさか」
小柳はそれを聞いてすぐに眉を顰めさせた。
「あれで女性に人気がないとは」
「常に女性雑誌でも騒がれているわよね」
「はい、その通りです」
すぐに伊東に対して答える。
「ファッションセンスがいい政治家では常にトップですし」
「そうね。ルックスについてもね」
「それでどうしてその様なことを」

「どうやらね」
「どうやら！？」
伊東の言葉に対して眉を少し動かして問う。
「そういった雑誌は読まないらしいのよ」
「そうなのですか」
そもそも男が読むことの少ない雑誌だ。この時代においてもどちらかといえば主婦やＯＬが読む雑誌というものは存在している。日本においても然りだ。
「読むのは総合雑誌と」
「あとは漫画でしょうか」
「それだけだったわね」
政治家が読む雑誌としては妥当だった。どちらも何かと役に立つ。
「あとはネットね」
「ネットでも女性人気は高いのですが」
「ネットは興味があるものしか見られないじゃない」
それがネットの特徴である。興味がないものは目に入ることがない。それは他の世界でも同じだがネットの世界ではさらに顕著なのだ。

## 第三十一部第一章　勝利の影響その十七

「だからそれも」
「気付かないのですか」
「同性愛者に好かれているというのは自覚しているわ」
「それはですか！？」
それを聞いてさらに首を傾げる小柳だった。眉も顰めさせている。
「それに気付いてどうして女性には」
「気付かないのかね」
「はい、例えば」
「陛下ね」
他ならぬ彼女達の国家元首だ。日本とエチオピアだけが戴いている皇帝。そのうちの一人である。なおこの時エチオピア皇帝が男性であり陛下が女性であらせられるのでこれをタロットカードの大アルカナの皇帝と女帝に例えるジョークもある。なお女教皇は中央政府の内相である金とされる。
「陛下が直々にチョコレートを下さるということは」
「普通はわかるわね」
「わからない筈がありません」
小柳の言葉は力説になっていた。
「どうしても」
「そうね。普通は絶対にわかるわね」
「そういえばです」
小柳はまた言う。
「彼の学生時代ですが」
「かなりチョコレートを貰っていたそうね」
「ええ、その通りです」
美男子で成績優秀、かつ性格がよく育ちも立派ならばもてない筈がない。この時代においてもであるがそうした男は女性から寄って

来るものである。
「ですが」
「一向に気付かなかったと」
「バレンタインのチョコは全て義理だと思っています」
「呆れたわね。チョコレートの形だけでわかるでしょうに」
「普通はそうです」
義理チョコなら買って済ます、しかも安いものを。ところが本命ならばどうなるか。かなり高価なものになるか手作りだ。それで女の子の気持ちがわかるのだ。
「普通の板チョコじゃなかったんでしょう？」
「どれも立派なものだったそうで」
「わからなかったのかしら」
伊東はいぶかしむ顔になった。そのうえで腕さえ組んで思索に入る。
「本当に」
「若しかすると育ちのせいでそれがわからなかったのかも知れません」
「育ちで？」
「そうです」
こう答える。
「そのせいで。何しろチョコレートにしろ立派なものばかりでしょうから」
「じゃああれなのね」
ここで伊東はふと思った。それを実際に口に出す。
「彼は板チョコは知らないのね」
「おそらくは」
その伊東に対して答える。
「知らなかったと思います」
「でしょうね。育ちがいいとチョコレートも変わるわ」
「あれはあれで美味しいものですが」

「美味しいものなんてものじゃないわ」
伊東は小柳のその言葉を訂正して自分の言葉で述べた。
「あれは最高のお菓子の一つよ」
「最高のですか」
「ええ。あれこそがね」
にこりと笑っていた。どうやら彼女は板チョコが好きらしい。
「特にミルクチョコがいいわね」
「ミルクがですか」
「貴女もチョコレートが好きだったと思うけれど」
ここで悪戯っぽく笑って小柳に問う。
「どうかしら、それは」
「私はブラックです」
素直にそれを認めて好みを伝える。
「それが一番いいです」
「そう、貴女はブラックね」
「それとコーヒーです」
非常によくある組み合わせだ。コーヒーはこの時代でも非常によく飲まれている嗜好品である。なおチョコレートは飲むものもこの時代においても存在している。
「その組み合わせが好きです」
「いい趣味ね。それで彼だけれど」
「はい」
八条に話が戻る。
「本当にね。どうなのかしらね」
「天然ですか」
「女性関係にね」
八条に関する話での核心であった。
「全く気付かないのだから」
「私が彼と話をします」
「ええ」

「会談でも閣議でも打ち合わせでもです」
つまり仕事の場でのことだ。かつては同僚でありそうしたことも多かったのだ。今はないが。
「その時主人が後で五月蝿かったのです」
「御主人が？」
「多分に冗談ですが」
こう前置きはする。

## 第三十一部第一章　勝利の影響その十八

「ですが」
「それでも言うのね」
「はい、美男子と一緒に仕事ができてよかったな、と」
にこりともせず伊東に語る。
「こう言うのが常でした。他ではそんなことはないのに」
「嫉妬ね」
伊東にはすぐにわかった。どうしてそうなるのか。
「それは」
「はい。どうやら同性から見てもそういう存在であることは間違いないので」
また述べた。
「ですから主人も嫉妬してなのでしょう」
「あの御主人がね」
「はい、意外でしょうか」
「意外なんてものじゃないわ」
小柳の夫については伊東も知っている。だからこその言葉であった。
「温厚で嫉妬とは無縁なのに」
「同性から見ても嫉妬を感じるようです」
こうも述べる。
「そのせいで余計に」
「そうなの。実はね」
「実は？」
「私もあの子に嫉妬を感じたことがあるわ」
にこりと笑っての言葉であった。
「本当のことを言うとね」
「嫉妬ですか。総理が」

「あれだけの美男子よ」
まず言うのはそこであった。
「それに」
「それに」
「背も高いし」
彼女はそれについても述べる。
「だからね。そのせいで」
「嫉妬を感じられたのですか」
「そういうこと。こう言えばわかるわね」
「はい」
これは小柳にもわかった。それには彼女も伊東と同じ理由があった。それは。
「それでしたら私もですし」
「背だけはね。どうしても」
「全くです」
表情も声も変わらないが憮然としているのはわかるものであった。
「伸びません」
「確かあれだったわね」
伊東はここでまた言う。
「連合では女性の平均身長は」
「確か一七〇程度です」
伊東に対して述べる。
「日本においてもです」
「そうよね。つまり私達は」
「平均より二十以上低いです」
そうなのだった。二人は小柄なのだ。このことについても有名なのがこの二人なのだ。
「残念なことに」
「男性は一八〇を優に超えていて」
「そうです」

「彼は一九〇を超えているからね」
「正直なところ羨ましいことです」
それが嫉妬の理由だった。背の高さなのだ。なお連合は人類社会の中ではとりわけ背が高い。エウロパよりも平均身長が高いのである。
「おかげで並んで歩くとね」
「大変ですか」
「余計に小さく見えるのよ」
苦笑いであった。
「おかげでね」
「ハイヒールを履いても焼け石に水ですね」
「まさにそれね」
そういうことだった。
「どうしようもない差があるわ」
「そうですか。やはり」
「それでね」
伊東はさらに言う。
「彼はそういうことには気付いて気遣いしてくれるのがまた」
「そうですね。どうにもこうにも」
「困るのよ。そういえば」
「はい」
ここで話が変わった。

## 第三十一部第一章　勝利の影響その十九

「それで連合軍はエウロパでは色々騒ぎを起こしたそうね」
「僅か数人の兵士がレストランを閉店に追い込んだという話が多く残っています」
　つまり文字通り食い潰したのだ。店にある食べ物を全て食べてしまったのである。これにエウロパの市民達は大いに驚いたのである。
「そういった騒動が多々」
「殆どバイキングね」
　バイキングを話に出した。
「そこまで行くと」
「実際に大柄ですし」
「ええ」
　それもあった。バイキングといえばやはり大柄なのだ。
「大きさだけはどうしようもないものがあります」
「それと食べる量はね」
「そうです。彼等が来てエウロパは食糧問題が懸念されたそうです」
「嘘でしょ」
　伊東はそれを聞いて目をしばたたかせた。流石にそれは信じなかった。
「六十億が来ただけで」
「元々ギリギリでしたし」
　エウロパの食料状況はそうだったのだ。人口問題と直結している。人口が飽和寸前の状態ならば食料もそうなる。そういうことであった。
「ですからそれで」
「そうだったの」
「はい、しかも彼等が百億人分は食べるとのことで」
「彼等にとってはね」

「そのせいで」
そう答えるのだった。
「食糧問題が懸念されたそうです」
「連合本土から食料も輸送していた筈だったけれど」
これはエネルギーや弾薬と共に優先的に回されていた。何時の時代でもそうであるが軍隊も人間の組織だ。だから何かを食べなくては動かないし生きてはいけないのだ。そういうことなのだ。
「それでもなの」
「はい、それでもです」
小柳はこう答えた。
「連合軍の将兵が外出時に食べるだけで」
「そこまでエウロパに損害を与えていたの」
「実はエウロパは少食でして」
「そうらしいわね」
これは伊東も聞いていて知っていることであった。
「何でも私達の半分程度しか食べないらしいわね」
「そうです。そのせいで」
「彼等がちょっと食べるだけで損害が出るのね」
「そのせいで連合軍の将兵はバイキングになぞらえられていたそうです」
「失礼ね」
それを聞いて少し不服そうだった。
「バイキングだなんて。それじゃあ私達がまるで野蛮人じゃない」
「全くです」
小柳も同じ感じに不服そうな顔になる。連合ではバイキングはエウロパの野蛮な海賊だと言われているのだ。その荒っぽさのみが強調され宣伝され教育されているのだ。なおこれはイギリスやオランダ、フランス、スペインといった国々の海外進出も同じことである。それを強く意識してか連合軍はエウロパにおいては彼等の港を占領しそこで勝ち誇った記念写真を撮ることが多かった。その不埒な海

賊行為の拠点を制圧したということなのだ。
「背が高くて食べるだけでね」
「そうです。ただ」
「ただ？略奪や暴行はないに等しかったと聞くけれど」
「補給の話です」
小柳はこう断ってきた。
「我が国の国防省のスタッフから聞いたのですが」
「ええ」
「連合軍のエネルギー及び弾薬の消費は桁外れだったそうです」
「六十億という数だけじゃないのね」
「はい、それを考慮してもかなりだそうです」
「そんなに凄かったの」
伊東は鋭い目になって小柳に問う。女狐だの九尾の狐だの言われ日本国首相として辣腕を振るうその目であった。その目で小柳に対して問うてきていたのだ。
「当初の予想の三倍近くを消費したそうです」
「三倍なのね」
「はい、少なくとも日本軍では考えられない規模だったそうです」
「まあ日本軍はね」
自分達の国の軍だからこそ言えることであった。
「元々予算が全くないから」
「確かに」
日本軍は精鋭であった。しかしそれ以上に慢性的な予算不足に悩まされてきていた。理由は簡単でそもそも予算の割り当てが極端に少なかったからだ。

## 第三十一部第一章　勝利の影響その二十

「比べる方が間違いね」
「何と連合軍は連合全体の総生産の一パーセントもあるそうです」
これだけでこうまで言われるのであった。
「また随分と多いわね」
「ですがそれと比して連合軍の数も多いので予算編成には苦労しているそうです」
「そうなの」
「はい。出費がとかく多いそうで」
「軍というのは厄介な組織ね」
出費と聞いて苦笑いになる伊東だった。そのうえでまた述べる。
「出費ばかりで歳入はない」
「はい」
その通りだった。そうした意味で非常に財政的には厄介な存在なのだ。
「そのうえやたらとお金がかかる組織だしね」
「これはどの時代でも変わりませんね」
「どこの国でもね。まさか軍人に農作業をさせるわけにもいかないし」
「開拓や惑星開発での作業はよく行っていますが」
工兵を主に使ってである。連合軍は災害救助とこれが主な仕事になりつつある。これも連合独特の特徴である。
「それでも」
「そう。歳入がないのは変わらないわね」
「そうした意味では教育と福祉も同じですね」
「あれは投資とケアよ」
伊東はその二つはこう評してみせた。
「人材育成と人材保護のね」

「そういうことになりますか」
「だからいいのよ。けれどそれを考えると軍は」
「さしづめセキュリティといったところでしょうね」
「そうね。やっぱり不可欠な存在ね」
「それを考えれば予算を回すのは当然ですね」
こうなるのだった。
「ですがそれにしても」
「教育費が大体五パーセントを超えるわね」
「その通りです」
この場合も国民総生産における割合だ。
「福祉はもっとかかるし」
「それを考えれば軍事費は微々たるものです」
「当然ね。やはり百三十億しかいないから」
「しかですか」
「人口の割合で言えば微々たるものでしかないわ」
この場合は連合全体の人口を考慮している。その四兆の巨大な人口をである。
「所詮ね」
「確かに。三百人に一人も達していません」
「エウロパは七億だったかしら」
エウロパを出してみせた。
「十億では？今は」
「連合との戦争前ね。随分いたわね」
「数のうえでは」
いたのである。志願兵が非常に多く彼等の熟練度は未熟であったにしろだ。
「百人に一人ね」
「それでエウロパの国力の限界でした」
「マウリアが二千億の人口で」
公表されている人口だ。あくまで。

「今は四百個艦隊で八億だったわね」
「割合は我々よりまだ少ないですね」
「前は二百億だったじゃない」
「はい」
それだけ軍備に力を回していないということだった。言い換えればそれが可能な状況だったのである。これまでのマウリアは。少なくとも中央ではそうであった。
「クシャトリア階級の為のね」
「今もクシャトリア階級が主のようですね」
「ええ、これは変わらないわ」
マウリア独特のカーストである。従って軍もその範疇に入るのである。
「それが増えてね」
「四百個艦隊ですか」
「どうもあれなのよ」
ここで伊東は言った。
「あれといいますと？」
「ほら、マハラジャがいるわね」
「彼等ですか」
所謂藩王である。マウリア独特の存在であり大統領の下でその地域の君主として治めている存在だ。立憲君主でありその地域の象徴となっているのだ。
「彼等やそれぞれの州の知事の下にあった州軍の中央軍への統合を進めているらしいのよ」
「らしい、ですか」
「その方法がよくわからなくて」
ここで首を捻る伊東であった。

## 第三十一部第一章　勝利の影響その二十一

「どうにもね」
「わからないといいますと」
小柳は彼女にしては珍しくその顔にクエスチョンマークを浮かび上がらせた。
「それは一体」
「だから。おかしなことにね」
「はい」
「一旦解散したうえでそれで組み込んでいるのよ」
「そのまま統合するのではなくですか」
「ええ、そうなのよ」
こう小柳に語る。
「解散させてマハラジャや知事に別の権限を渡してね」
「別の権限！？」
小柳の頭にもクエスチョンマークが浮かんだ。
「何が何なのか」
「マハラジャの拒否権よ」
「拒否権！？」
「ほら、議決を拒否できる権限」
国家元首にある権限である。連合ではそれが最初からある。
「それを譲渡して彼等の不満を宥めたりもしているらしいのよ」
「それは最初からあるのでは？」
「あるわよ」
民主国家では当然のことだ。
「あるけれどなのよ」
「何が何なのかわからないのですが」
表情は変わらないがそれでもクエスチョンマークが浮かんでいるのであった。

「そもそも州軍を統合せずに一旦解散するというのも」
「生まれ変わるらしいのよ」
「またそれですか」
マウリア特有のこの生まれ変わりの思想。それが政治の世界でもあるというのだ。
「それで州軍は一旦死んでね」
「はあ」
クエスチョンマークをそのままに話を聞いている。
「マハラジャや知事も腕の一つを失ったから」
「腕の一つを与えると」
「そうらしいのよ。どういう発想なのかよくわからないけれど」
「マウリア人にしかわからないのでは？」
当然小柳にもわかっていなかった。
「その考えは」
「そもそもマウリアでは神様は腕や目、顔が幾つもあったりするわね」
「ええ、それは」
これはあまりにも有名であった。それだけ力があるということを表しているのだ。仏教で菩薩や明王、天といった存在で腕や目、顔、足が複数ある場合が多いのは言うまでもなくこれの影響である。仏教は他ならぬインド発祥だからだ。なおマウリアでは仏教ではヒンズー教の一派とみなされている。
「だから。生えるものらしいから」
「それでですか」
「わからないわよね」
「残念ですが」
こうも答えた。
「わかりません」
「そうね。とにかく」
「はい」

「マウリアはそれで州軍等を中央軍に編成してそれで五百個艦隊、十億の編成でいくそうよ」
「数的にはエウロパと同じですね」
「けれど人口が違うからね」
「一応は二百人に一人ですか」
「ええ、そうなるわ」
割合としては普通である。
「サハラは様々だけれどその負担の大きさは言うまでもないし」
「やはり我々はあまりそうしたことには」
「お金はかけてはいないわね」
結論が出た。
「それも全然ね」
「ですがそれが軍の運営の苦しさにもなっていますか」
「普通の官僚や軍人は常に顔が青いそうよ」
ここで普通という言葉が出た。
「これでやっていけるのかってことでね」
「ですがやっていけていますね」
小柳の言葉はクールだった。
「実際には」
「八条君がいるからね」
ここでまた彼の名が出た。

# 第三十一部第一章　勝利の影響その二十二

「彼が遣り繰りしているから」
「遣り繰りですか」
「ある意味ね。家庭の主婦と同じよ」
苦いものと楽しげなものをミックスさせた笑みでの言葉であった。
「あちらの事情はね」
「そんなに苦しいのですか」
「全てを穴埋めするのはね」
こう表現してみせる。
「難しいわよ」
「そうですか」
「それでよ」
伊東はさらに言う。
「その少ない予算も何かあれば減らされようとするし」
「野党や財務省にですね」
「野党はその分を開拓に向けたいのよ」
保守派の主張はそうなのだった。今中央政界では内部の充実を主張する与党の改革派と積極的な開拓を主張する保守派が対立しているのである。言うまでもなく八条は与党の改革派にいる。
「それで軍事費をね。出来るだけそちらに向けて」
「と考えているのですか」
「財務省は他に予算を向けたいのよ」
次に述べるのは財務省だった。
「歳入が見込めない場所にはってことでね」
「成程」
さっきと話は同じだった。
「かつての日本並とまではいかないけれどもっと減らしたいのが本音ね」

「軍にとっては辛いですね」
「八条君にとってもね」
「それで今はどういった状況でしょうか」
「それに関しても頑張っているわ」
八条が、という意味である。
「彼はね」
「そうですか。それは何よりです」
「ええ。けれどただ」
伊東はここでまた言う。ただし話題は変わる。
「それで彼が多忙になって」
「それで。どうなると」
「相手が見つからないのがね。困ったものね」
「相手がですか」
「だって。もういい歳じゃない」
政治家としてはかなり若い。しかし普通の世界での年齢で言うと。八条もかなりいい年齢なのだ。少なくとも大学を卒業したならばそうした年齢である。
「だからいい加減にって考えているのだけれど」
「そちらの相手がいませんか」
「気付かないしね」
やはりこの問題もあった。
「彼自身も」
「聞いた話では彼に想いを寄せる異性は中央政府にも多いそうですが」
「私が名前を知っている限りでは二ダースよ」
「二ダース」
「もててるわね」
しかもかなりであると言っていい。そこまで行けば。
「中央政府でそれだけだしそれこそ日本だと」
「実は私のスタッフの中にもあの子に夢中の者がいます」

「そうなの」
「彼女を紹介してみましょうか」
「絶対に気付かないわよ」
伊東ははっきりと述べた。
「女の子を紹介しても友人を紹介してもらったとしか思わないから」
「有り得ませんね」
小柳の声が普段よりトーンが落ちた。憮然としているのだ。
「それはかなり」
「そのかなりだからなのよ。彼が問題なのは」
伊東もかなり困った顔になっていた。
「鉄壁の鈍感さだからね」
「鉄壁ではなく最近ではアタチュルク要塞群とまで言われているようです」
「アタチュルク要塞群」
「はい、あれです」
連合がエウロパから割譲させたニーベルング要塞を改造させて建設しているあれである。今では連合最大の軍事拠点の一つともなっている。
「あれにまで至っていると」
「単身で要塞を一つ陥落させるのね」
「難しいでしょうか」
「不可能ね」
断言さえするのだった。

# 第三十一部第一章　勝利の影響その二十三

「そんなことは。到底ね」
「ではどうすればいいでしょうか」
「一番簡単なのはあれよ」
それでも策はあった。それについて述べるのだった。
「お見合いよ」
「お見合いですか」
「これならどうかしら」
その是非を小柳に対して問う。
「これなら問題はないと思うけれど」
「そうですね。ただ」
「ただ？」
「やはり時間が」
「ないというのね」
「残念ですが」
少し目を伏せての言葉であった。
「ないかと。少なくとも今は」
「そうね。なかったわね」
今さっき自分が言った言葉を思い出す破目になって後悔する伊東であった。
「彼はあまりにも多忙だから」
「せめて中央政府国防長官を辞任してからでしょうか」
「今はまず無理なのね」
「何でも毎日真夜中まで国防省にいて朝早くにらしいですから」
「何処の諸葛亮孔明なのかしら」
言わずと知れた中国三国時代の蜀の宰相であり軍師である。非常に生真面目かつ勤勉な人物でありその日常は仕事に明け暮れていたのである。伊東はその彼の名前をあえて出して呆れてみせたのであ

る。
「全く。昔から生真面目な子だったけれど」
「国防省設立当初はほぼ不眠不休だったそうです」
「タフね、本当に」
「流石元軍人と言うべきでしょうか」
小柳はこう述べた。
「やはり」
「それどころじゃないわね。そうね、とにかく時間がないのね」
「はい」
「全く。休める時でも休めないんだから」
八条のその性格を知っているだけに溜息をつくのだった。
「困った子だこと」
「最近ではサハラ各国に対する情報収集も盛んに行っているそうです」
「サハラのなのね」
「はい。何か考えているようです」
「防衛ね」
伊東はすぐにそう察しをつけた。
「サハラとの境に強固な防衛ラインを築くって話があったわよね」
「ええ、それは」
小柳はこの話も聞いていた。
「私も聞いています」
「それね。多分」
「そうなのですか。それでですか」
「第一目的はね」
「第一目的」
「多分それだけではないわ」
伊東のその目にさらに知的な光が宿る。こうした時に彼女は普段以上の冴えを見せるのである。つまり狐そのものになるのである。
「サハラ内部のことも詳しく調べているでしょうし」

「内部もですか」
「宙理にそれぞれの星系の状況」
そこまで話を及ばせる。
「当然戦略や戦術のパターンもね。調べていると思うわ」
「では当然文明や文化、政治等も」
「勿論そうでしょうね」
小柳の問いにも答えてみせた。
「ありとあらゆることに関してね」
「それではまるで攻める時のようです」
小柳はそこまで話を聞いてこう述べた。
「少なくとも防衛の為だけでないように思えますが」
「何事も徹底的によ」
しかし伊東はここで言った。
「調べるのならそれこそね」
「ですね。それは」
「何事もね。スポーツだってそうじゃない」
「ええ、それは確かに」
言うまでもなくその通りの話であった。小柳は伊東の今の言葉に対しても頷く。

# 第三十一部第一章　勝利の影響その二十四

「野球でもサッカーでも」
「スコアラーが的確に仕事をすれば」
また随分と具体的な話であった。
「それで随分と違うわ」
「スコアラーが情報収集をしますからね」
「それを的確に整理して作戦に活かす」
伊東はこうも言う。
「それもまた戦争よ。引いては防衛になるわ」
「そういえばですね」
「ええ」
「八条長官はエウロパとの戦争において反省をしておられましたね」
「情報収集についてかしら」
「はい、エウロパについてです」
そのことだった。話は情報収集に関するものに移っていた。
「宙理や基地、他のありとあらゆることに関して情報収集が不足していたと」
「仕方ない一面があると言えばなるわね」
「ありますか」
「ええ。ほら、連合からエウロパには入られないじゃない」
まずはこれがあった。
「マウリアやサハラ各国を仲介するにしろね」
「そのルートはかなり複雑です」
連合にはまずこういうネックがあった。エウロパから連合にはカトリック教会のルートに潜んで入ることが可能だった。ステッラのそれである。このルートの遮断がバチカンの連合への移転の最大の理由になっている。無論表向きではそうではないが実際にはそれが理由になっているのだ。

「そのうえに」
「肌や目の色がね」
「変えることはできますが」
「それでもね。限度があるから」
「彼等はほぼ純粋なコーカロイドです」
連合では長年に渡る混血の結果殆どいなくなった存在である。連合はモンゴロイド、コーカロイド、ニグロイド、アボリジニーの混血なのだ。これは連合の歴史の中で作り出されてきたものである。
「それだけで限られます」
「骨格の細部に至るまでね」
「はい。ですからこちらから送り込むことはまず不可能でした」
「ところが彼等にしてみればね」
「連合にはそうした存在もいるからね」
「割合としまして」
エウロパでの割合と連合での割合が違う。連合の者がエウロパに入ればその肌や髪の色、それに質で随分と目立つ。だがエウロパの者が連合に入っても一見ではどうも見られない。これもまた人種的な問題の一つである。工作においても影響があるのが事実なのだ。
「それは確かに」
「そうなのよね。こちらから情報収集は困難です」
「マウリアかサハラ各国から買った情報が多かったわね」
「そうです」
その為に多くの人材を各国に派遣したりもしていた。だがそれでも限度があったというわけである。やはり自分達で調べるのが一番なのだ。
「ですから」
「難しい話だったわね。けれど今のサハラ各国に関しては違うというつもりなのよね」
「今回はですか」
「そういうことよ。さて、どうなるかしら」

「彼も頑張ってくれていますね」
「ええ。じゃあ私達もね」
「はい」
伊東の言葉に対して頷いた。そのうえでまた述べた。
「では今から」
「行きましょう。仕事は待ってはくれないわ」
「わかりました」
伊東が立ち上がると小柳はその後ろについた。さながら秘書のようである。
「国防省についてはどうかわからないけれどサハラについては次の仕事でも話が出るわ」
「出ますか」
「少しだけでもね。間違いなく出るわ」
こう述べた。
「それはね」
「左様ですか。やはり」
「あの動きは劇的だったから」
オムダーマンの話だった。
「それと共にサハラが大きく動いているから」
「我々もそれに影響を受けますし」
「そういうこと。じゃあいいわね」
「ええ」
小柳は頷き伊東に従い部屋を出た。それと共に話が終わった。だが話が終わったのはこの場での話でありすぐに別の話がはじまるのであった。まさにエンドレスワルツであった。

## 第三十一部第二章　外から見えるものその一

外から見えるもの

その頃日本の政治の中心である八幡星系には旧太平洋諸国の要人達が集まっていた。集まっている理由は他でもなく連合経済の今後に関する定例会議である。だからこそここに集まっているのだ。

星系全体を日本国軍が護り連合軍もそれに協力している。それは星系周辺だけでなく惑星内部、ひいては建物一つ一つにまで及んでいた。首相官邸や要人達が宿泊するホテルはとりわけガードが固くまるで要塞の様であった。それを見たオーストラリアのジャーナリストがふと呟いた言葉だ。

「まるで軍事基地の中にいるみたいだな」

「全くだ」

彼の隣にいたオーストラリア人のカメラマンがその言葉に頷く。

「相変わらずあの首相の仕事は抜かりがないな」

「流石は女狐といったところかな」

ジャーナリストは少しシニカルな笑みを浮かべてこう述べた。二人が今いる首相官邸の門のところにも衛兵達がいる。言うまでもなく銃を手にして厳格な顔で立っている。連合軍の兵士達だ。見れば一個小隊程度はいる。

「徹底させる時は本当に徹底させるな」

「全くだな。見ろよ」

カメラマンはここでジャーナリストに声をかけてきた。

「どうした？」

「官邸そのものも」

普段はどうということのない質素な官邸だ。一軒屋の少し大きいものと言っても何の遜色もない程度の大きさであるし外観もそんなものだ。皇居が余り大した派手さではないので必然的に首相官邸もそうなるのだ。こうしたところは質素にするのが日本の伝統である。

「まるで軍事基地だな」
「あちこちに兵士が見えるな」
「普段より十倍はいるな」
「十倍か」
「ああ、十倍だ」
カメラマンは官邸の中を覗き込みつつジャーナリストに述べる。その横では兵士達があまりいい顔をしていない。しかしそれはわざと無視をしていた。
「それ位はいるな」
「そんなに増やしているのか」
「テロリストを警戒しているな」
「それをか」
「ああ、この前も出ただろう」
彼は言う。
「あの古代生活への復古主義者がな」
「そういえばあったな。犯行声明つきでな」
「最近あの連中があちこちで動いているからな」
「それでか」
古代生活への復古主義とは人類は石器時代の自然の生活に戻るべきだと主張する者達のことである。中にはそれを主張する者達もいるのだ。多くはそれを実践して彼等だけで石器時代の生活を自然の中で送る。戸籍上では死亡したり行方不明になる。だが問題なのはこれを人類全体に強要しようと考えている者達がいることだ。何時の時代でも他人が自分と違う考えナのを認められない者はいる。
「この厳戒態勢は」
「だろうな。それでだ」
「全く。迷惑な話だ」
ジャーナリストはその大きな口を顰めさせて忌々しげに呟いた。その唇は黒人のものだが肌の色はアジア系であった。彼も混血していた。

「こっちは気分よく取材がしたいんだがな」
「仕方がないさ。相手は話がわかる連中じゃないからな」
「テロリストだからか」
「話がわかる奴はテロリストにはならないさ」
自明の理だ。民主主義社会であり言論の自由が認められているのなら自分の主張をすればいいのだ。だがそれをせずに暴力に走る。筋が通らない証拠だ。
「だろう？」
「まあな。ついでに他人の迷惑も考えないか」
「テロリストは他人の迷惑も考えないさ」
こえもまた自明の理であった。
「自分だけの存在なんだ」
「エゴイストもそこまでいけば害悪だな」
ジャーナリストはわざと立派とは言わない。テロリズムの害悪というものをわかっているからだ。それは義憤やそういったものとは全く無縁の存在なのだ。
「全く」
「連中にとっては聖戦なんだよ」
「じゃあ他人はどうなってもいいのかよ」
「自分達以外は敵なんだよ」
簡単に言えば異常な世界に住んでいるのだ。カルトの世界そのものだ。
「あいつ等にとってはな」
「頭がいかれてやがるな」
ジャーナリストはカメラマンの言葉を聞いたうえで述べる。

## 第三十一部第二章　外から見えるものその二

「何時の時代でも。テロリストっていうのは」
「だからテロリストなんだよ」
カメラマンの言葉も実に醒めたものであった。
「頭がおかしい奴がテロリストになるのさ」
「じゃあまともな奴はどうなるんだ？」
シニカルな笑みと共にカメラマンに対して問う。
「そういう奴は」
「決まってるだろ。まともな奴はな」
「ああ、まともな奴は」
「周りにいるさ」
一言だった。
「俺達と俺達の周りにな」
「俺達はまともなのかね」
「少なくとも他人に危害を加えるつもりはないだろう？」
「まさか」
その言葉に両肩をすくめてみせる。
「自分の主張を押し通したい為にそんなことまではしないさ」
「そういうことさ、常識ってやつはな」
カメラマンはそれは常識とさえ言い切ったのだった。
「誰だってそうなんだよ、普通は」
「それが普通か」
「ああ、普通だ」
また言ってみせる。
「それができない奴がテロリストなんだよ」
「そう言ってしまえば格好悪いものだね、本当に」
「テロが格好いいってのも幻想だぜ」
今度はカメラマンがシニカルな言葉を出すのだった。彼も実に容

赦がない。
「そんなのは馬鹿な作家や市民団体の作り出した幻想さ」
「幻想か」
「ファンタジーだ」
今度の皮肉はこれであった。
「格好のいいテロなんて有り得ないんだよ」
「そんなものか」
「むしろ格好いいのはだ」
「俺達かい？」
「そうさ」
白い歯を輝かせての言葉だった。実にそれが似合っているがそれと共に随分わざとらしくもある。演出がかかってしまっているのは事実である。
「俺達こそが格好いいんだよ」
「あんまりマスコミの自画自賛はよくないと思うがな」
「誰がマスコミが格好いいって言ったよ」
今度の返し言葉はこうであった。
「流石に俺でもそうは言わないぜ」
「今言ったじゃないか」
ジャーナリストも言い返す。
「今さっき。違うか？」
「だから。俺達ってのはな」
「ああ」
「市井の人間ってことだよ」
カメラマンが言うのはそれであった。何もマスコミという特定の存在を指し示すものではないのだ。言葉のトリックと言えばトリックになるものだった。
「市井のな。人間なんだよ」
「何だ、それか」
「マスコミと思ったかい？」

「随分意地が悪いな」
少し口を尖らせて抗議する。
「相変わらずな」
「人間少しは意地が悪い方がいいって言うだろ」
「聞いたことがないな。心が奇麗に越したことはないっていうのは聞いているが」
「それは俺の知ってる言葉じゃない」
カメラマンも実にシニカルであった。
「意地の悪さと親切を適度にミックスさせて見事な人間ができるものなんだぜ」
「それでできるのは何か知ってるか？」
「さあ」
「ブラウン神父だよ」
有名な推理小説の主人公である。おんぼろの傘を着た風采のあがらない神父だ。イギリス人であり実に神父らしからぬシニカルな言葉も言ってのける。中々食えない男であり連合においては彼もまた意地の悪いイギリス人のサンプルとされているのである。
「あの意地悪爺か」
「それでしかないと思うんだがな」
「それは嫌だな。せめてイスラエル人にしてくれ」
連合の影のフィクサーと言われている存在だ。ここでは冗談めかして話に出た。
「イギリス人に例えられたら死んでも死にきれん」
「随分イギリス人が嫌いなんだな」
「エウロパは大体嫌いさ」
カメラマンはこう答えてみせた。

## 第三十一部第二章　外から見えるものその三

「あんな似非紳士な」
「似非紳士ねえ」
ジャーナリストはその言葉を聞いてまた己の中のシニカルな血が沸き立つのを感じた、こうなってしまうともう歯止めが利かないのである。
「それ言えば俺達はな」
「何だ？」
「罪人の末裔になるぜ」
シニカルというよりは自嘲になっていた。
「連中から見ればな」
「知らないな。誇り高き開拓者の子孫だろう？」
今ではオーストラリアとニュージーランドはこうなっている。
「俺達は」
「奴等から見れば違うらしい」
「それは奴等の目がおかしいんだ」
強引にそういうことにしてしまうのだった。
「性格はもっとおかしいがな」
「そう来るか」
「おかしいから今まで好き勝手テロリストを煽ってくれたんだ」
ここでカメラマンの顔が曇る。
「全く。工作の手段を選ばん奴等だ」
「そうだな。それはな」
ジャーナリストの顔もまた同じように曇るのだった。
「否定できないな」
「今度の連中は只の狂人集団だが」
「ああ」
「今までそれでどれだけの人間が死んだか」

「千年の間だったからな」
それだけの期間連合はエウロパの工作を受けてきたのだ。そのせいで恨みが骨髄にまで至っているという一面も確かに存在するのである。
「随分死んだな」
「少なくともあれだな」
「あれって何だ？」
「この前の戦争だよ」
カメラマンはこう答えた。
「この前の戦争で死んだエウロパの人間は」
「確か一般市民入れて二億程度だったかな」
軍人も入れてだ。これが多いか少ないかは別だ。一般市民の犠牲者は戦いに巻き込まれた結果だ。連合軍は一般市民を対象とした攻撃作戦は一切発動、計画しなかった為損害は軽微だったのである。これはやはり八条の指示によるところが非常に大きかったのだ。
「そんなものだったかな」
「それよりは死んでるな」
「エウロパの工作で死んだ人間はか」
「どうせ奴等だ」
ここでは偏見が出た。当のカメラマンも自覚しているが隠そうとはしない。
「もっと死ねばよかったんだよ」
「もっとか」
「俺の本音だ」
やはり隠そうとはしない。
「全く。忌々しい話だ。あの長官はクリーン過ぎるんだ」
「戦いとかは確かにそうだな」
「向こうも戦場ではやたら正々堂々としてるがな」
これもまたエウロパなのである。
「それでもだよ」

「それでもか」
「エウロパの奴等なんかいらないんだ」
遂には過激な論理まで出て来た。
「一人残らず死んでもいい」
「特に貴族はか？」
「その通り」
彼等への嫌悪はひとしおであった。やはりと言うべきか。
「あいつ等は特に嫌いだな」
「まあ俺もそうだがな」
ジャーナリストもそれは同じであった。
「あの連中だけはな」
「全く日本人ってのはな」
八条が日本人であることが今度の話題の中心だった。
「甘いんだよ」
「甘いか」
「戦う相手は軍人だけだって考えてるよな」
「それはあるな」
そのことは否定しなかった。これは日本人の伝統である。

## 第三十一部第二章　外から見えるものその四

「それこそ昔の戦争なんてな。一般市民だろうが容赦しないだろ？」
「アメリカ軍とか中国軍とかだな」
ジャーナリストが言うのは彼等だった。かつてのアメリカ軍や中国軍は一般市民であろうとも容赦なく攻撃対象としてきた。そのことを言っているのだ。
「連中にはそこまでしてもいいだろうに」
「武士はそんなことはしないんだとさ」
カメラマンの言葉はここでも皮肉めいていた。
「ほら、ここにいる連中だってな」
「日本国軍か」
今彼等の目の前で首相官邸を守っている彼等である。観れば軍服は連合軍のものと同じだ。各国の軍も軍服は統一されたのである。
「一般市民を狙う真似はしないな」
「そうなんですか？」
「はい」
ジャーナリストの問いに真面目にも一人の軍人が出て来た。階級を見れば中尉であった。まだ若い将校である。青年将校と言ってもいい。
「その通りです」
「やはり」
ジャーナリストは青年将校の毅然とした言葉を聞いて納得したか鬼なった。
「そうですよね。戦闘において一般市民を狙うことは」
「あってはならないことです」
これまたはっきりと答えてきた。
「それだけは決して」
「ほら、やっぱりそうだったぞ」

ジャーナリストはカメラマンに顔を向けて言うのだった。
「一般市民は狙わないそうだ」
「そういえば連合の軍隊は昔からそうだったかな」
カメラマンもふとした感じで述べる。
「一般市民は狙わないな」
「そもそも作戦指導にありません」
また将校が答えてきた。
「その様なものは」
「作戦にはない」
「そうです。暴徒の鎮圧にしろ」
これもまた軍の重要な仕事の一つである。警察で手に負えない場合はやはり軍なのだ。しかしここでこの将校はまた言うのだった。
「それだけはあってはなりません」
「あってはならないというと」
「ですから一般市民の犠牲です」
そこを強調してきた。
「何があろうとも。ですから」
「ですから？」
「暴徒の鎮圧には催眠ガスを使用します」
それであった。この時代の催眠ガスや催涙ガスは後遺症もなく実に使い易いのだ。実際に連合軍はこうしたガスを非常によく使用している。
「若しくは水を上からかけます」
「水をですか」
「文字通り頭を冷やすということです」
冗談みたいな話であるが話す方は真剣そのものであった。
「これでも随分違います」
「そうなのですか」
「まず狂騒状態になっているならば頭上から大規模に水を降らし」
「航空機等でですね」

「その通りです」
やはりそうであった。航空機やヘリを使うのも戦術の基本中の基本である。
「それでかなり違います」
「そうなのですか」
「銃や戦艦を使うだけが軍隊の仕事ではありません」
やはり生真面目な言葉だった。
「それは御了承下さい」
「まあそれはわかっていますが」
「仮にもジャーナリストですし」
この時代は軍隊を取材するジャーナリストも多い。かつての日本のジャーナリスト達の様に全く勉強もせず捏造記事を書くような者は流石に少ない。
「ですが今回はそれでも」
「堅固ですね」
カメラマンも先程連中とまで言った言葉を今では穏やかなものにさせていた。
「テロリスト対策ですよね」
「はい、そうです」
将校もそれを認めて答える。
「それでこの様にしております」
「徹底していますね」
「徹底させるのが我々の仕事です」
軍の仕事というのだ。

## 第三十一部第二章　外から見えるものその五

「ですから」
「左様ですか」
「確かにそうですね」
二人もそれを聞いて納得するのだった。将校の言っている言葉はまさに正論だった。実に正しい。ただあまりにも模範的で面白みもないが。
「さて、それでですね」
「取材ですか？」
「ここから先は入られません」
このことを彼等に告げるのだった。
「それは御了承下さい」
「中には入られませんか」
「残念ですがここがぎりぎりです」
また告げてきた。
「申し訳ありませんが」
「全ては安全の為ですね」
「その通りです。ですから」
「強行突破したらどうなります？」
カメラマンはここでかなり過激なことを笑いながら言ってきた。
「その場合は」
「現行犯逮捕です」
表情を変えずに出す言葉が怖い。
「あしからず」
「そうですか」
「そのうえで本国に強制送還です」
やはり表情を変えずに言葉を述べてくる。
「御覚悟下さい」

「最悪発砲ですか？」
「兵士達の銃には既に即効性の睡眠薬を入れた銃弾を装填させています」
言うまでもなく本気の言葉である。
「これは報道して下さい」
「・・・・・・わかりました」
ジャーナリストは表情を変えないままのその将校の言葉に頷いた。
「ではそういうことで」
「本国に強制送還も是非お書き下さい」
「書くまでもないですけれどね」
ジャーナリストは苦笑いを浮かべてこう言葉を返してみせた。
「誰でもわかっていることですし」
「ではくれぐれも御自重願います」
「わかっていますよ。じゃあ相棒」
「ああ」
何時の間にか相棒になっているカメラマンが応えた。
「それでいいな」
「いいさ。今回はそこまでするような話じゃないしな」
「待っていれば向こうから話を出してくれるな」
「女狐はそこまで読んでいるのかね」
「そうだろ？」
伊東のことだ。日本といえば彼女といったような感じになっている。首相というものはやはりその国の顔になるのだ。大統領もそれは同じである。ただし国王は少し違う。天皇もまた。
「あの陛下は涼しげなのにな」
「美少女だよな」
今度は何か違う話になってしまっていた。
「それであの首相はどうしてな」
「顔はいいぞ」
「まあな」

それはジャーナリストも認めた。
「顔はいいな。背は低いがな」
「背のことは禁句だからな」
「わかってるさ、それはな」
伊東の小柄なのはあまりにも有名だ。だからこう言われたのだ。
「それ言ったら次取材させてもらえなくなるぞ」
「まさか」
流石に今のカメラマンの言葉は笑って否定した。
「そこまでは行かないだろう」
「少なくともそんなことする人じゃないだろ」
カメラマンはこう言ってきた。
「そんな小さいことはな」
「まあそうだな」
彼もそれに応えて言う。
「そういうことはないな」
「ただ。何されるかわからないがな」
しかしこうも言われるのだった。
「あの首相はあれで腹黒いからな」
「確かにな。にこにこと笑って裏で手を回してってタイプだからな」
「前から不思議なんだよ。何で日本と揉めた政治家は必ず何か起こるんだ？」
それであった。日本に対して何かを仕掛けようとした政治家はその近辺で騒動が起こるか思いも寄らぬスキャンダルが起こってそれで失脚するか動けなくなる。そうしたことが常に起こるのでジャーナリスト達も奇妙に思っているのだ。中には明らかに謀略だと断定する者もいる。

## 第三十一部第二章　外から見えるものその六

「流石に『急死』した政治家はいないがな」
「それだけは救いなんだろうがな」
「ああ。しかしだ」
ここでまた話が出る。
「今回はその腹黒い人物がホストだぜ」
「そうだな」
日本で開催される。それならば当然のことだった。
「日本で行われると色々と手の込んだ催しが行われるんだがな」
「どうなんだろうな。その中でも何かありそうだな」
「何かか」
「そう、何かだよ」
そのことがくどいまでに話される。
「絶対に何か仕込んでいるのがあの首相のパターンだからな」
「具体的に言えばあれだな」
「あれ？」
ジャーナリストはここでカメラマンの言葉を聞く。
「饅頭があるだろ」
「ああ」
まずはそれを話に出す。饅頭は和食のお菓子の一つとしてかなり人気のあるものである。ポピュラーな菓子であると言っても過言ではない。
「一見美味いがそこに毒を入れているな」
「何か日本らしいな」
「しかもその毒は猛毒でだ」
これは外せなかった。
「おまえに遅効性だからだ。味もなければ痛みもないような毒だ」
「悪質だな、随分」

「日本ってそういうところあるだろ」
その日本の将兵達の前で言うのだからいい度胸だ。見れば彼等は明らかに何か言いたそうな顔でそこに立っている。流石に言葉は出しはしないが。
「笑いつつ背中をってな」
「何かそれを言うと凄い嫌な国だな」
「その癖律儀だしな」
今度は褒めてきた。
「意外なところでな」
「意外とだな」
「まあそうだ。それでだ」
カメラマンはまた言う。
「今回の会議もすぐには確かなことがわからないかもな」
「遅効性ってわけか？」
「日本だからな」
こう言葉を述べるのであった。
「何をしてくるかわからないぞ。いいな」
「それはあるな。ゆっくりと見るか」
「今回だけでわからないとはまた難儀な話だな」
「それが日本だろ？」
また言われる。
「あえてわかりにくくさせるのが日本の流儀じゃないか」
「何か日本が嫌いみたいに聞こえるぞ」
「いや、認めてるんだが」
しかしカメラマンはこう言うのだ。
「日本って国はな」
「いい意味でか？悪い意味でか？」
「いい意味だぜ」
笑ってこう述べる。
「わかりにくいか？」

「わかりにくいっていうか皮肉にしか聞こえないぞ」
「いや、それでも本気だ」
しかし彼はそれでもこう言うのだった。
「それでもな」
「そうなのか」
「ああ。この国は確かに凄い」
今カメラマンの視線は首相官邸に向けられていた。そのうえでの言葉だった。
「そうした外交能力があるのは確かだ」
「力はプラスのものばかりじゃないがな」
「そうさ。マイナスもある」
電流に合わせての言葉だった。
「だからそれもいいんだよ」
「そのマイナスをどうプラスに変えるか」
「それも政治ってやつさ」
「じゃあ今回はそれを見せてもらうか」
ジャーナリストはそれを結論とした。
「よくな」
「そっちの政治家や官僚はどうだ？」
「ニュージーランドのか？」
「ああ、兄弟国家としては知っておきたいな」
この時代でもオーストラリアとニュージーランドは兄弟国家であるとされている。元々イギリスの植民地でありそこからはじまっている歴史がある。それに基いているのだ。
「言っておくが我が国はな」
カメラマンは笑って述べてきた。
「相変わらずだ」
「相変わらずか」
「ああ、変わらない」
ここでは持ち前のシニカルさを出していた。

## 第三十一部第二章　外から見えるものその七

「正直なところな」
「何かオーストラリアっていえばあれだな」
「鈍感でお山の大将さ」
そのシニカルな笑みでの言葉だった。
「何も変わらないさ。それでやっていけてるから不思議だ」
「連合だからやっけいけるのかな」
「そうだろうな。サハラにあったらとっくの昔に滅亡だ」
またシニカルな笑みが出た。
「あんな馬鹿なことをしていればな」
「祖国愛が感じられないんだが」
「それはあるぜ」
また笑って言ってみせた。変わらない笑みだ。
「俺なりにな」
「随分とひねくれた愛情みたいだな」
「否定派はしないさ。ああした国だからな」
「ああした国ねえ」
「そのああした国から見れば兄弟国家は羨ましいんだよ」
今度は少し嫉妬が入っているように聞こえた。
「立派な政治家が多くてな」
「どうだかな、それは」
「違うのか」
「こういう言葉知ってるか？」
ここでこう彼に尋ねてきた。
「どんな言葉だ？」
「隣の芝生は青く見える」
まずは一言であった。
「そういう言葉だよ。聞いたことはあるだろ」

「一応はな。オーストラリアじゃこう言うぜ」
「何てだい？」
「隣の庭にいるカンガルーは大きく見えるってな」
「オーストラリアじゃカンガルーは人気があるんだな」
「最高のマスコットさ」
つまりは国の象徴というわけだ。これは間違いではない。オーストラリアといえばやはりこの時代においても有袋類なのである。
「よく食うしな」
「カンガルーを食うのか」
「案外美味いぜ」
笑ってこうその兄弟国家の国民に述べる。
「キーウィと違ってな」
「美味いのは果物のキーウィだ。鳥は止めておけよ」
笑ってこう言葉を返してきた。
「まずいからな」
「まずいのかよ」
「外見見ればわかるだろ？」
「いや、わからないな」
ジャーナリストに対して笑って返す。そのうえでまた言ってみせる。
「食ってみないとわからないからな」
「生憎だが本当にまずいんだよ」
しかしそれでも返事はこうなのだった。カメラマンにとって残念なことに。
「あの鳥はな」
「何だ、面白くないな」
「始祖鳥でも食ってろ」
最初の鳥である。古代の生態系が残っている星にはかなり生息している。まだ爬虫類の名残が強く歯があり顔も蜥蜴めいている。そうした鳥だ。

「あれは美味いぞ」
「そうだな。じゃあそれにしておくか」
「その始祖鳥ですけれど」
ジャーナリストはここでまた日本軍に対して尋ねてきた。どうも彼等に対して目の前でかなりなことを言ったり丁寧に尋ねたりもころころと態度を変えている。
「日本じゃどうやって食べますか？」
「そういえば興味があるな」
カメラマンもジャーナリストの言葉に興味を向けさせた。
「日本じゃ本当にどうやって食べるんでしょうか」
「始祖鳥を」
「普通にです」
またその若い将校が答えてきた。やはり実直な態度で。
「普通にですか」
「ええ。焼き鳥にしたりオープンで焼いたり」
普通の鶏を食べるのと変わらない。
「痩せていますけれど毛をむしって丸焼きにしたり」
「成程」
「普通ですよね」
「ええ、確かに」
「他の鳥と変わらないんですね」
彼等はそれを聞いて納得した。しかしここから先は今一つそうはいかない部分もあった。ここが実に日本らしいといえばらしい。

## 第三十一部第二章　外から見えるものその八

「あとは唐揚げにしたり鍋にしたり刺身にしたり」
「刺身！？」
「鳥をですか」
「ええ、そうです」
　将校は自然に彼等に答えた。
「そうして食べていますがそれが何か」
「始祖鳥を刺身に」
「いや、鳥を」
「我が国では鳥も刺身にしますが」
　将校はまた答えるのだった。やはり冷静な顔で。
「それが何か」
「日本では何でも生で召し上がられるのですね」
「はい、その通りです」
　これは変わらないのだった。日本人はとかく生ものが大好きなのだ。これはこの将校にとってはごく普通の自然なことなのである。
「無論虫のチェックは厳しいですが」
「それは当然ですね」
「しっかりするのは」
「確か今回の各国首脳を招いての晩餐会では」
　こうした会議ではつきものである。食事会というものも政治のうちだ。イベントでもあるがそれ以上に料理という自国の文化を見せまた交流を推進するものなのだ。
「恐竜の刺身でした」
「恐竜！？」
「はい、イクチオザウルスです」
　海にいる恐竜でその外観はイルカそっくりである。その為イルカと見間違える話も多い。

「あとプレシオサウルスの唐揚げに」
「むむっ」
「何と」
「アーケロンの卵のスープです」
「シーフードなのですね」
「はい、そうです」
恐竜とはいえ海にいるからそうなる。海にいれば鯨でも恐竜でも何でもシーフードなのだ。
「海老や貝も当然出ますが」
「どう思う？」
カメラマンはここまで話を聞いて真剣な顔で相棒に尋ねた。
「恐竜の刺身だが」
「何て言えばいいかわからないな」
その相棒も返答に窮していた。
「そんなものを出されればな」
「刺身は俺も嫌いじゃないが」
「だったらいいんじゃないのか？」
「それはあくまで魚だけだ」
カメラマンは真剣そのものの顔で答えた。
「魚だけだぞ。羊肉でも抵抗があるのに恐竜はな」
「ないか」
「ああ、ない」
それをまた言う。
「果たして今日の晩餐会はどうなるか」
「見ものではあるな」
彼等は官邸を見つつこう話していた。その夜の晩餐会。各国の首脳達はそれぞれの席の前に置かれている料理を見て彼等の危惧通りに面食らった顔を見せていた。
皆それは同じである。そして一様に。ホストである伊東に顔を向けていた。まずはマクレーンが彼女に対して声をかけてきた。

「伊東総理」
「はい」
伊東は穏やかそのものの声で彼に応えてきた。
「何でしょうか」
「今宵の晩餐会ですが」
「はい、何か」
「恐竜ですか」
「そうですが」
返答は慇懃なものである。しかし何か含まれているようなものを感じさせないわけでもない。
「それがどうかしたでしょうか」
「アーケロンの卵のスープやオムレツはわかります」
「そしてプレシオサウルスの唐揚げも」
李も加わってきた。
「ですがイクチオサウルスの刺身というのは」
「これは一体」
「恐竜をお刺身にしていけないのでしょうか」
だが伊東の返答はやはりこうしたものであった。
「そういった戒律は」
「はい、ないです」
「それは」
二人もそれは否定する。そもそもアメリカでも中国でも恐竜はかなりポピュラーな食べ物だ。とりわけ中国では恐竜は竜を食べるとして人気がある。それでもであった。

## 第三十一部第二章　外から見えるものその九

「ですが刺身というのはやはり」
「これは」
「日本では至って普通の食事です」
しかしそれでも伊東の余裕は変わらない。
「味もよいですよ」
「美味しいのですか？」
「はい、それもかなり」
にこやかにかつ慇懃に笑っての言葉であった。
「ですから是非。召し上がられて下さい」
「むむむ。それでは」
「しかし」
「ふむ。それでは」
だがここでグリーニスキーが出て来たのであった。
「一つ頂いてみますか」
「閣下がですか」
「はい」
その大柄で武骨な顔を綻ばせて伊東に答えるのだった。
「我がロシアでも恐竜はよく食べられます」
「そうでしたね」
「ええ。ですが生でたべることはないのでこれは実に興味深い」
こう伊東に述べる。
「ですからここは是非。食べてみたいですな」
「ではどうぞ」
「はい、では」
箸で取って山葵醤油につけてから口の中に入れる、あずは山葵のあの独特の刺激と醤油の濃厚な味が口の中を支配する。そしてその恐竜の味もまた。

「むっ、これは」
「如何ですか？」
「成程」
まずは頷いてみせてきた。
「これは中々」
「美味しいのですか」
「生の恐竜は」
「はい、それもかなり」
こうマックリーフと李に対して答える。
「美味しいものです」
「ううむ、そうなのですか」
「まさかとは思いますが」
「いえ、それですが」
しかしグリーニスキーはその二人に述べるのだった。
「アメリカでも中国でも恐竜はよく食べられていますよね」
「ええ、まあ」
「それはそうですが」
「それに生肉も」
それについても問う。
「食べられますね」
「はい、結構食べます」
「否定はしません」
アメリカでは生肉を食べることもある。無論そのままではなく細かく刻んで大蒜や玉葱で味付けをして食べるのだ。所謂タルタルステーキというものだ。
そして中国でも。中国は刺身の発祥の国なのだ。
「ですが流石に恐竜は」
「ないかと」
「日本では豚肉も食べますよ」
「えっ！？」

それを聞いたインドネシア大統領であるハラト＝モハステが豚肉を食べると聞いて思わず声をあげた。しかもかなり驚いた顔であった。
「若しかして生で豚肉をですか！？」
「はい、そうです」
伊東がモハステの言葉に答えた。
「あくまで新鮮なものに限りますが」
「いや、それでもです」
モハステは驚きを隠せない顔でまだ言ってきた。
「有り得ないというか」
「有り得ませんか」
「豚肉はいいとします」
インドネシアはムスリムの国だ。言うまでもなく豚肉は敬遠される。しかし連合のイスラムはサハラのイスラムとはかなり違う。豚肉を食べることに関してもアッラーに謝罪してから食べればよいとされている。だからインドネシアにおいても豚肉を食べてもいいのである。しかしそれでも流石に生でというのは引くものがあるのだ。
「ですがそれを生でというのは」
「有り得ませんか」
「はい、想像もできません」
顔が少し青くなっていた。

## 第三十一部第二章　外から見えるものその十

「とても」
「とてもですか」
「恐竜の刺身にしろ」
今回出ている恐竜の刺身についても言及する。
「こんなものがあるとは」
「インドネシアでも恐竜はかなり食べられていると聞いていますが」
「それはその通りです」
モハステもそれは否定しない。
「ですがそれでも」
「生はありませんか」
「全くです」
「これはないでしょう」
ここでマックリーフと李がまた言ってきた。モハステに同調するようにして。
「魚ならともかく」
「恐竜は」
「しかし。それはそうとしまして」
ベトナム大統領であるグエン＝グアン＝リーがここで言う。
「恐竜のお刺身というのは面白いですな」
「まあ確かに」
「それは」
マックリーフも李もそれは認める。
「ですが食べるというのは」
「如何なものかと」
「衛生上の心配がないならそれでいいのでは？」
グエンはかなり柔軟な考えを述べた。
「それだけで。宗教的には何もないのですよね」

「ええ、それは」
「何もありません」
これについては参加国全てがそうだった。伊東は事前にそういうことも調べてある。連合において食事に関する戒律が五月蝿いのはやはりユダヤ系であるがその彼等がいないので問題はかなりスムーズに進んでいた。それが伊東にとって助けになっているのは事実だった。
「ではそれでよいのでは？」
「むむっ」
「そうなりますか」
「衛生上で何かがあれば」
ホストである伊東がここで言う。
「私が全責任を取りますので」
「そうですか」
「それだけではありません」
そしてさらに言い加えてきた。
「美味しくなければそれに関しても」
「責任を取られると」
「はい、そうです」
今度は言い切ってみせた。
「ですから御安心下さい」
「そこまで言われるのなら」
「我々も」
マックリーフも李もそこまで言われて食べないわけにはいかなかった。実際に箸に手を取って刺身を取る。そのうえで食べるのであった。
口に入れて噛み味わう。その味は。
「むっ、これはかなり」
「美味いものが」
彼等も納得する味だった。歯触りもかなりよかった。

「意外とあっさりしていて」
「鶏と魚を合わせたような」
「如何でしょうか」
伊東はここであえてにこやかに笑ってその二人に対して問うのだった。
「このお刺身は」
「いいものです」
「まさか。こうした味だったとは」
「恐竜は元々鳥に近い味です」
これは恐竜だけではない。爬虫類全体がそうである。蛙の様な両生類もそうだが意外と味はあっさりしていて食べ易いのだ。だからこそよく食べられるのだ。種類によっては養殖もされている。巨大でかなりの量を食べるが草食恐竜は大人しく案外育て易いのである。
だからこそ今こうして食べられているのだが。それでもであった。抵抗があるのだ。
「恐竜の刺身とは思いませんでした」
こう言ったのはグエンであった。
「いや、それでも食べてみるとこれが」
「実はこれにはヒントがありまして」
「ヒントといいますと」
「同じお刺身でです」
伊東はまずはこう答えた。
「お刺身からヒントを得ました」
「日本の料理人がですか」
「そうです。日本では鶏を生で食べることもあります」
「むむっ」
「鶏までも」
それを聞いた各国の首脳の中にはそれだけで引く者がいた。

## 第三十一部第二章　外から見えるものその十一

「生で食べるというのか」
「流石というか何というか」
「ですから。同じ様な味の恐竜ならどうかと考えたのです」
「それでイクチオザウルスの刺身を」
「確かに言われてみればその通りですが」
「しかしです」
今度言ってきたのはグリーニスキーだった。
「何でしょうか」
「イクチオザウルスですね」
「はい」
彼が言うのは恐竜そのものに関してであった。
「イクチオザウルスならば恐竜は恐竜ですが」
「イメージとしては海豚ですか」
「はい、海豚です」
グリーニスキーも伊東に対して述べた。
「私はそういうイメージがあるのですが。イクチオザウルスは海豚です」
「ではこれは海豚のお刺身だと」
「そういう感じです。日本では確か鯨もまた」
「お刺身にします」
「そうですね。海豚は鯨の仲間ですので」
これは生態的にはっきりしている。だから二十世紀に海豚を食べることも鯨を食べることと同列視され日本が批判されていたのである。
「考えてみれば当然ですか」
「当然でしょうか」
「さて」

マックリーフと李は今のグリーニスキーの言葉に顔を見合わせて言い合う。
「私はそうは思いませんが」
「私もです」
「そういえばですな」
二人をよそにグエンが口を開いた。
「このイクチオザウルスですが」
「ええ」
伊東がグエンのその言葉に応える。
「よくもあそこまで独特の進化をしたものだと思います」
「確かに」
彼の今の言葉に伊東も頷く。
「恐竜といえばです」
グエンはさらに言う。
「ティラノザウルスやブラキオザウルスを思い浮かべますが」
「陸上のものですね」
「ところがイクチオザウルスは違います」
こうも述べる。
「まるで魚です。いえ、魚そのものです」
「魚ですか」
「はい、やはり魚というよりは海豚で」
あえて言い替えた。先程から話に出ている海豚に。
「味もそれを微かに思わせますな」
「実はそれを考えてこのメニューにしてみました」
「イクチオザウルスの刺身を」
「種類は違いますが役割は同じです」
そしてこう言うのだった。
「哺乳類と爬虫類の違いはあれども」
「ほう」
「それは」

今の言葉を聞いてマックリーフと李の顔色が一変した。それまでの困惑し戸惑ったものから普段の冷静で抜け目のないものになったのであった。
「それは同じです」
「成程」
「それは確かに」
二人は今度は納得する顔で伊東の言葉に頷くのであった。
「海豚にしろこのイクチオザウルスにしろ」
「海では同じ様な役割ですな」
「そういうことです。ですから選びました」
そのことをまた言う。言葉をあえて選んでいるかのように。
「この度は」
「ふむ。そういうことでしたか」
「それではですね」
二人はここで今度はアーケロンの卵のスープを飲みながら伊東に問うてきた。

## 第三十一部第二章　外から見えるものその十二

「このアーケロンの卵にしろ同じですね」
「やはり海亀の」
「大きさは違いますが海亀は海亀です」
今度はこう答えてみせた。
「ですから。選びました」
「そうでしたか」
「確かに。言われてみれば」
今回はイクチオザウルスよりも安易に納得できた。
「アーケロンは海亀です」
「恐竜ですが」
「恐竜という名前にこだわるのもどうかと思いまして」
伊東はさらに言葉を続ける。
「それもあって今回はあえて恐竜をメインにしました」
「しかも海のものをですな」
「はい、そうです」
モハステに対しても答えてみせた。
「御気に召されていれば何よりです」
「いや、食べてみればこれは中々」
「プレシオサウルスの唐揚げにしろ」
彼等はこれまで然程目立っていなかった唐揚げにも箸を向けた。
それもやはり美味かった。鶏と同じような味だ。しかも肉は意外と柔らかい。
「生姜を効かしてありますな」
「あと醤油と」
「和風です」
伊東は一言各国の首脳達に述べた。
「どうぞお召し上がり下さい」

「ええ、それでは」
「シーフードサラダもまた」
彼等は次々に食べはじめる。最初こそ戸惑いで迎えられたがその後は。和気藹々とした食事になった。その後でそれぞれの首脳達と共に食事にあたった各国の高官達はある部屋に集まった。ただしそこには日本の高官達だけはいない。あくまで彼等だけでの集まりであった。
「またしてやられたようだな」
「確かに」
暗い密室の中で。彼等は顔を見合わせてひそひそと話し合っている。誰も聞いてはいないがそれでも小声になって話すのであった。
「まさか恐竜を出すとはな」
「しかも海のだ」
これは誰も予想していないことだった。
「最初の情報では羊料理だったな」
「うむ」
晩餐会の食事も事前に情報が出回るのだ。しかし今回はそれが裏切られたのである。
「羊を好まない日本人が羊を出す」
「我々に合わせてくれたと思ったのだがな」
「日本らしくな」
他国への気配りを欠かさない、よく言えばそうなる。そうした体質はこの時代の日本も強く持っているのである。しかし別の体質も併せ持ってはいる。
「しかし意表を衝いたな」
「これもまた日本らしい」
「全くだ」
こういう体質も持っているのであった。
「ダミーの情報だったか」
「羊はな。そうだったようだな」

「相変わらず手の込んだことをしてくれる」
「実にな」
これは日本への評価であるが別のフィクサーへの評価でもある。
「流石は女狐か」
「つくづく手玉に取ってくれるな」
「しかもだ」
彼等はここであることを感じ取ってもいた。それは。
「勢いは向こうに取られた」
「日本にな」
今回の会議での流れをだ。会議においても流れというものは重要だ。それを掴めるかどうかで大きく違う。そうした意味ではスポーツの試合とも似ていると言える。
「それを狙ってのことだな」
「食事で仕掛けてくるとはな」
「いや、これに関しては別に」
「珍しいことではないか」
「タレイランだ」
ここで一人の名前が出て来た。

## 第三十一部第二章　外から見えるものその十三

「タレイランからだ。珍しいことではない」
「そうか、あの男か」
「そうだ、あいつだ」
皆タレイランという名前に嫌悪感を見せていた。理由は簡単であり彼がフランスの外交官だったからだ。あのナポレオンをして絹の靴下に入れられた汚物と言われている。そのいわくつきの男の名前が今出て来たのである。
「タレイランが上等のヒラメを二つ手に入れた」
「うむ」
彼等の中の一人が話し皆がそれを聞く。
「そしてそのうちの最初の一尾を先に出してわざと落とす」
「気落ちしたところにもう一尾出すのだったな」
「その通りだ」
あまりにも有名なタレイランのヒラメの話である。これにより参加者を落胆させたうえでさらに喜ばせヒラメを楽しませた。タレイラン一流のもてなしである。
「それをやってきたのだ」
「フェイントをかけてきたか」
「しかも何段階もな。タレイランは一段だった」
「ふん、全くやってくれる」
「相変わらず食えない女だ」
彼等は話を聞いて口々にこう言うのだった。実に忌々しげな声であった。
「まずは恐竜で」
「うむ」
「しかも刺身だ。シーフードでな」
「和食にしてそのうえ海の幸だ」

「これでまずは三段だ」
タレイランのそれよりも遥かに手が込んでいるのがわかる。
「そしてそのうえであの言葉だ。爬虫類も哺乳類も種類は違うが役割は同じか」
「手の込んだ隠語だな」
伊東が何を言いたいのか。彼等はもうわかっていた。
「サハラにおいて。ハサンかオムダーマンか」
「はたまたティムールか」
言葉を続ける。
「乗り換えるのには何の支障もないか。言ってくれる」
「穏やかに笑っていて内面は」
「相変わらず強かなものだな」
伊東に関する話であった。
「つまりハサンから乗り換えることも必要だということだな」
「それが日本からのメッセージか」
「料理に隠された」
そういうことだったのだ。伊東はこれからの会議の前に事前にこうメッセージを送ったのである。それもオブラートに包んで。見事に隠していたのである。
「ハサンから乗り換える」
「それですな」
話がそこに移った。
「これについてはどう思われますかな」
「そうですな」
ハサンについてだった。彼等がどうなるかも念頭に置かれて話される。
「ハサンについてはです」
「ええ」
一人が話し周りの者達がそれを聞く。
「まさかの敗北が続いていますな」

「確かに」
「普通で考えればハサンはオムダーマンもティムールも倒しています」
そのことも述べられる。実際のところハサンの国力を以ってすればオムダーマンもティムールも倒せるのだ。彼等にしろハサン有利と見ていたのだ。
「ですがそうならず」
「オムダーマンもティムールも勝利を収めている」
「しかも鮮やかなまでに」
そこまで言われるのだった。
「あれは意外と言うべきか」
「予想すらしていませんでした」
連合においてもハサンの勝利は疑いようのないものだったのだ。彼等はそのことを念頭に置いてハサンとの交流を進めていた。しかしその予想は大きく外れているのが現状であった。
「国境を突破された時も」
「はい」
「あれは普通に対処して終わると思っていました」
「ですがアッディーン副大統領の動きは予想を超えていた」
「まさにです」
そこがまた言われる。

## 第三十一部第二章　外から見えるものその十四

「ハサン軍はあえなく国境を占領されました」
「その通りです」
「それから勢いに乗ったオムダーマン軍は進撃を続けています」
「今や第二次防衛ラインまで突破しました」
「しかも損害はほぼありません」
　このことも指摘される。
「オムダーマン軍にとっては快挙ですがハサンにとっては窮地です」
「そして」
　自分達についても述べる。
「ハサンと交流の深い我々にとっては」
「これは面白いことではありませんな」
「確かにオムダーマン、ティムールとも交流はあります」
　彼等はサハラに対して特に思い入れがあるわけではない。彼等にとってみればサハラはあくまで化外の地だ。深い関心はなく権益さえ確保できればいいのだ。だがその権益が問題なのである。それについて話されているのだった。ここでは。
「しかしハサンが滅亡するとなると」
「我々の権益がどうなるかですね」
「それについてのことですか」
　そういうことであった。
「ティムールとオムダーマンですか」
「どうですかな、彼等は」
　あらためて彼等について話される。
「信頼できる相手かどうか」
「我々の権益を保障してくれるか」
「正直なところです」
　こう前置きしてから連合としての本音が述べられる。

「我々にとってはサハラがどうなろうが構わないのですが」
「全くです」
「連合ではありませんし」
「難民の受け入れ先も確保していますしな」
懸念となるべき事情が解決しているのでどうでもいいというのだった。
「彼等がどれだけ戦乱を経ようが」
「どうということはありませんな」
「ですが」
ここで言葉が変えてみせる者がいた。
「我々の権益に関することなら別です」
「その通りです」
話の先はやはりこれであった。極論すれば彼等にとってみればサハラは権益さえ確保していればどうなってもいいのである。その程度だが権益が重要なのだ。
「権益が確保されれば」
「ハサンは権益を間違いなく保障してくれました」
「だからこそよかった」
「その通りです」
だからこそ交流を深めていたのである。あくまでビジネスとしてだ。
「しかもハサンは平穏でしたからな」
「サハラ東方は」
サハラといえど全ての場所が戦乱に覆われていたわけではない。東方では長い間ハサンの安定した統治の下で繁栄し太平を謳歌していた。だから連合も進出していたのだ。
「それを考えればオムダーマンとティムールは迷惑なことです」
「全くですな」
あくまで彼等の事情というか勝手のみで話す。
「サハラなぞ統一してもらわなくてもいいのですが」

「我々の権益さえ保障されていれば」
そういうことなのだった。結局のところは。
「東方の戦乱、そろそろ我々の権益に影響してきますな」
「ではどうするか」
彼等は話していく。
「それについての話し合いでしたが」
「ここで日本側からのメッセージが出ましたか」
それこそが今宵の晩餐会のメニューなのだった。伊東はそれをあえて言葉には出さずに料理にそれを出して皆に伝えたのである。
「それは乗り換えですか」
「冷淡ではありますな」
「まあそれはいいでしょう」
やはりここでも彼等はサハラそのものに対して冷淡であった。やはり他所の場所であり他人の集まりであるとしか見ておらず考えていないのだった。
「サハラはサハラですから」
「ハサンも結局のところどうなっても」
いいとさえ言う。やはり思い入れはない。
「しかし。乗り換えですか」
「果たしてどうするべきか」
彼等はそこを話していく。

## 第三十一部第二章　外から見えるものその十五

「それですな」
「別に乗り換えてもいいのですが」
「ええ、実際のところ」
「我等の権益さえ確保されていれば」
権益の話が続く。
「いいのですからな」
「所詮連合ではありません」
こうも言う者もいた。
「どれだけクールに徹しても構いません」
「そういうことです。ましてやハサンが滅びるとなれば」
「そうなれば我等の権益は誰が保障してくれるのか」
「保障する者がいるかどうか」
その話も為される。
「それがオムダーマン、ティムールでしょうか」
「ですが我々は」
ここで重大な問題があった。それは。
「彼等についてはよく知りません」
「オムダーマンといえば」
オムダーマンについてまず話される。
「西方の一国でありましたが」
「そう、最初はそうでしたな」
「それが急に」
拡大して今に至るのである。全てはアッディーンの功績である。
彼の勝利がオムダーマンをそこまで大きくさせたのである。これは紛れもない事実だ。
「一応事情は知っていますが」
「ええ」

当然彼等もその事情は知っていた。
「ですがそれ以上は」
「ティムールに関しても」
彼等が知らないのはオムダーマンだけではなかったのだった。もう一方の雄ティムールに関してもなのだった。やはり彼等のサハラに関する知識は偏りがあった。
「よく知りませんな」
「信頼できるかどうか」
「少なくともですな」
高官の一人がここで顔を顰めさせる。
「シャイターン主席に関しましては」
「信頼できないと」
「その通りです」
そう答えるのであった。
「あの御仁は謀略家です」
「確かに」
ティムールのことはまだよく知られていない。しかしそのティムールの主であるシャイターンのことはかなり知られている。謀略を好む男としてだ。
「それは事実ですな」
「北方に入り」
話はそこにまで遡る。
「そしてティムールを建国する際にも」
「名家の未亡人に取り入り」
これがシャイターンが北方で権力を握るきっかけの一つになったのは確かである。
「そして彼女を妻とし」
「既に妻がいたのでしたな」
「おや、そうでしたか」
この話が出て各国の高官達の顔色が変わった。

「それは実にまた」
「不道徳といいますか」
「いやいや、サハラですぞ」
しかしこれは高官の一人に笑って否定された。
「サハラですから」
「宜しいというのですか」
「ですから。イスラムです」
このことがまた強調される。やはりサハラとイスラムは切り離せないのであった。何故かというとサハラがサハラになっているのはイスラムがあるからなのだから。
「イスラムでは妻は四人まで持っていればいいではありませんか」
「おっと、そうですな」
そこにいた者達がそのことを思い出す。
「言われてみればそうですな」
「確かに」
そのうえで次々に頷く。
「連合ではもう一夫一妻になっていますが」
「ええ」
これはイスラムといえどである。それだけ連合ではサハラに比べて宗教的戒律が法律より下位にあるということだ。だがサハラではイスラム法はそのまま法律なのだ。
「ですから忘れていました」
「私もです」
マレーシアの高官もついつい苦笑いを浮かべて述べた。

## 第三十一部第二章　外から見えるものその十六

「何しろ誰もが一夫一妻ですし」
「そうですな。それは」
「妻は一人いればそれで充分ですしな」
中の一人が不意にこう述べてきた。
「実際のところは」
「イスラムでは妻は四人まで持ってもいいのですが」
この戒律はサハラでは今も生きているのだ。
「公平に愛さなくてはなりませんから」
「妻を四人も公平にとなるとどうにも」
「苦しいですな」
そういうことであった。
「妻を四人も公平に愛せますか？」
「まさか」
そこにいる男達は皆苦笑いを浮かべてその言葉に答える。
「それは難しいですな」
「ええ、確かに」
そういうことであった。
「かなり骨が折れます」
「しかしそれでもあえて妻をあらたに持つとは」
話がそこに戻る。
「策謀あってのことでしょうな」
「そういえばシャイターン家というのは」
今度はシャイターンの家について言及された。
「代々策謀で大きくなっていった家です」
「よくあるのは婚姻政策でしたな」
「はい」
それが大きかったのだ。それにより大きくなってきているのがシ

ャイターン家だ。そしてそれは今でも行われているのである。
「長兄であるあの主席殿だけではなく次男も三男も」
「そして妹もですか」
美貌のマルヤムのことだった。
「あの妹君はアッディーン副大統領の奥方でしたな」
「ええ、確か」
この辺りの情報もいささかあやふやなのであった。
「そうだった筈です」
「オムダーマンとは当面ことを構えないということですかな」
「まあそういうことでしょう」
これも謀略だと思っていたのである。
「それもまた」
「あくまで当面でしょうかな」
「どうですかな。今はまだはっきりとはわからないでしょう」
かなり疑わしく見ているがそれでも今はあえてはっきりとさせないでいた。
「あくまで今のところはですが」
「ええ、あくまで」
「そしてその北方にしろ」
今度の話は北方においての話である。
「どうにもこうにもあの主席の政敵が急死していきますな」
「そうですな」
この情報は一応はその度ごとに入っているのであった。
「しかもかなりの数です」
「急死でなければ失脚です」
政治の世界ではつきものだ。何らかの不手際やスキャンダルにより失脚していく。これはこの時代の連合でも同じだしサハラでも同じなのである。
「そういえば戦場で戦死も多かったですな」
「ああ、それもおかしなことに司令室が突然爆破されたりとか」

「戦闘中に」
そういうこともあったのだ。
「他にも祝杯をあげていると倒れたりとか」
「ありましたな、それも」
これもまた急死に入るのであった。
「汚職事件や女性問題も多かったですな」
「女性であっても女性問題があったり」
「ええ、それも」
サハラでは同性愛は連合のように寛容ではない。エウロパの総統補佐官の様に堂々と自分が同性愛者だと名乗れる社会ではないのである。
「とにかく何でもありましたな」
「そう、何でもですな」
それを述べ合う。
「奇怪なことです」
「普通に表だけを見れば」
あくまで表だけを見ればである。しかし裏を見ればどうなるか。何事も表だけではないのだ。やはり裏も存在しているのである。

## 第三十一部第二章　外から見えるものその十七

「そうなりますが」
「実際は」
「証拠はありませんがな」
あくまで証拠はない。彼等もシャイターンが証拠を残すような者ではないと思っている。
「しかし」
「状況が教えてくれますな」
「ましてやハサンに関しても」
ハサンの話であった。
「高官達が次々と倒れていましたな」
「奇怪なことですな、これも」
「全くです」
このこともまたよく知られていた。
「次々と急死や謎のテロで命を落としていましたな」
「戦いの前に。しかも」
「あれでハサンは相当な人材難に陥っていたそうで」
「あの太子の腹心が多く倒れていますから」
それがハサンにとって実に大きな打撃なのは言うまでもない。
「ソフトウェアの消耗が問題視されていましたな」
「その通りです。これもやはり」
「間違いないでしょう」
やはりこれも状況から見られていた。
「シャイターン主席の仕業でしょうな」
「ですな。そうしたことを見ていくと」
出て来る結論は一つであった。
「やはりあの御仁は信用できませんな」
「ではオムダーマンでしょうか」

「いや」
だがここでそれも否定された。
「オムダーマンもわかりません。それに」
「それに？」
「ティムールにしろ確かにシャイターン主席は謀略家です」
「はい、それはまず規定事項ですな」
「それは」
これについてはもう誰も異論がなかった。誰もが言うのだった。
「しかしです。それはあくまで敵に対してのこと」
「敵にですか」
「そうです、利害関係が生じた相手には確かに手段を選ばないようですが」
これは政治の世界ではよくあることだ。連合においても普通に存在している話だ。ティムールの場合はそれが極端なのだ。そういう考え方もできた。
「しかしそうれではない相手には」
「どうでしょうか」
「その場合は大丈夫でしょうか」
それについてはこう言われるのだった。一人の口から。
「実際のところ」
「大丈夫ですか」
「まあおそらくは」
そしてこう結論めいたものが出た。
「我々が彼等と深刻な利害関係に陥らない限りは」
「深刻な、ですか」
言葉としては微妙なものであった。実際の関係としても。
「何かよくわからない言葉ですが」
「あれですな」
ここで一人が言う。
「つまりは敵にならないといいのです」

「そうですか」
「はい、利害関係とはそういうものです」
それが言われた。
「敵にならなければいいのです」
「ではティムールとはこちらからは仕掛けることもありませんか」
「そうだと思います」
「といってもこちらには仕掛ける理由もありませんが」
結局のところ連合にとってはサハラとはそうした場所だ。だから執着もなかった。だからそれでよかったのだ。彼等も考えが実にドライになっていた。
「向こうはどう考えますかな」
「シャイターン主席は謀略家ですが力関係には敏感でしょうか」
「普通に考えればわかるでしょう」
常識が出た。
「それに関しては」
「普通に考えればですか」
「そうです」
それが話される。

## 第三十一部第二章　外から見えるものその十八

「常識で考えれば我々はサハラには何の野心もありません」
「とうよりは半分以上はどうなってもいいですな」
「そういうことです」
結論としてはそうなのだ。連合にとってはサハラとはそういう場所でしかない。隣接しているとはいえサハラは別世界であったのだ。
「それはティムールも同じでしょう」
「ティムールもですか」
「サハラがこちらに何かを向けてきたことがありますか」
高官の一人が周りの者達に問う。
「この一千年の間」
「ありませんな」
「それは」
「そういうことです。彼等にとっても我々はそういう場所です」
別世界なのだ。サハラはサハラで完全に一つの世界になっているのだ。そうした意味では連合と同じだ。つまり彼等の中で完結しているのだ。
「ですから」
「我々は何をしなくてもいい」
「何かをしてはいけないとも言います」
そういうことにもなるのだった。
「サハラに対しては」
「そうなりますか」
「はい、それで」
話が続けられていく。
「シャイターン主席に関する情報が欲しいですな」
「ええ、確かに」
「今のままではっきりとした判断ができません」

そういうことだった。
「ですから今は何とも言えませんな、ティムールに関しては」
「ですがオムダーマンはどうでしょうか」
「オムダーマンも情報が少ないです」
オムダーマンに関しても同じだった。やはり彼等はサハラについてあまり知ることがないのだ。その知識のなさがどうしても影響していた。
「ですから」
「今ははっきりとした判断ができませんか」
「そうなります。ですが」
そしてここで。伊東のあの料理が話に出るのだった。
「あの首相はオムダーマン、ティムールに乗り換えるべきと言っています」
「ということは」
ここで一つの前提があるのだった。
「あの方は御存知なのですな」
「そうなりますな」
結論としてはそうであった。
「知っていますな、サハラのことも」
「そのうえでのあれですか。手が込んでいますな」
「全く」
結論が出て来た。
「ではここはあの方の話をじっくりと聞きますか」
「そうですな」
そして彼等もそれに傾くのだった。議論の帰結として。
「何を考えているのか」
「聞かせてもらいましょう」
「まず間違いないのは」
ここでまた話されていく。
「ハサンは見切りをつけるということですか」

「そう言われてもあれですな」
ここでまた話が詰められていく。少しずつであるが。
「あまりこれという実感が湧きませんな」
「ハサンとは付き合いも深かったですが」
「ええ」
交流が長きに渡っているのは事実である。それは否定できなかった。
「それで愛着に似たものもありますが」
「それでもですな」
どうも何処か空虚な言葉になってきていた。
「あまりこれといって感想が湧かないというか」
「かなりどうでもいいようなものがありますな」
「全くです」
そういうことだった。やはり彼等にとってサハラは化外の地だ。そうした意識がどうしても根強く存在しているのだ。それにより話されているのである。
「乗り換えるならドライにですな」
「しかしそれでいて」
感傷も入るのだった。
「ハサン王家には残って欲しいものがあります」
「では亡命でしょうか」
この話も出た。
「それならば」
「亡命ですか」
「はい、連合に」
それも話されていく。
「彼等の受け入れに関しては何の問題もないでしょう」
「過去難民や亡命は多くありましたしな」
連合はサハラにとっては外の世界でしかない。だから連合に行ってしまった者には何の関心も持たないのが普通である。連合もまた

亡命を受け入れるだけで彼等には何もしないのがわかっているからだ。そうした意味でも完全に化外の地でしかないのである。

## 第三十一部第二章　外から見えるものその十九

「それに関しては何の議論の必要もありませんな」
「若しその際」
あるケースが言及された。
「オムダーマンかティムールが何か言ってきたならば」
「その際は無視すればいいのです」
それだけであった。
「何の問題もなく」
「ですな。彼等に言われる義理はありません」
「言う方がおかしいですな」
「はい、その通りです」
結論としてはこうであった。
「連合は連合、サハラはサハラ」
またこの言葉が出た。
「それで行きましょう」
「ケースバイケースですね」
「そういうことです」
実に便利な言葉だった。こうした場合には。政治ではこうした便利な言葉が色々とある。彼等もそれを承知のうえで使っているのである。
「ですからこれに関してはそういうことで」
「ですな。それでは」
「はい」
ここで話が纏まった。
「また明日御会いしましょう」
「明日もハードな一日になりそうですしな」
「そうですね。いやいや、それでも」
彼等の言葉に少し剣呑な嫌味が混ざった。

「流石は日本と言うべきでしょうかな、これは」
「全くです。まさに狐」
伊東のことも言われる。ここでも彼女は狐であった。
「手の込んだことをしてくれるものです」
含み笑いを浮かべつつ彼等は別れた。これでこの日の晩餐会は終わった。しかし会議はこれで終わりではなかった。むしろ幕を開けたといってもよかった。
その時伊東は。官邸の己の部屋にいた。そしてそこで一人デスクワークにあたっていた。だがサインを続けているうちに扉をノックする音が聞こえてきた。
「どうぞ」
入るように言う。すると外相である東が入って来たのだった。
「少し宜しいでしょうか」
「ええ、いいわよ」
にこりと笑って東に応える。
「今日はオールナイトのつもりだし」
「徹夜ですか」
「必要とあらばよ」
そのにこりとした笑みで彼に答えるのだった。
「首相はそういう仕事だから」
「少しでも寝なければもちませんが」
「それはもう見つけてあるから」
「左様ですか」
「寝られる時間を見つけるのも仕事のうちよ」
彼女は言う。
「首相になった時には覚えておいてね」
「またそんな御冗談を」
今の首相になった時には、という言葉には苦笑いを浮かべるのだった。こうした表情からこの東も政治家としては実直な人物であるのがわかる。

「私は首相には」
「首相というか地位はね」
「ええ」
「向こうからやって来る場合もあるわよ」
「そうですか」
「なろうと思ってなれない場合もあれば自然になれる場合もある」
そしてこう述べるのだった。
「そういうものなのよ」
「何か運命論みたいですね」
「半分位はそうね」
そして彼女もその言葉を認める。
「必然としてそうなる場合もあるわ」
「そうですか」
「これは地位だけじゃないけれどね」
そしてここでこうも述べたのだった。
「実際のところね」
「といいますと」
「政治の世界は全てそうよ。自然になるものもあれば」
「そうはならない場合もある」
伊東の言葉に合わせて述べた。

## 第三十一部第二章　外から見えるものその二十

「そういうことですか」
「わかってるじゃない。それでそうならない場合だけれど」
話を核心に誘導させる。これは伊東独特の話術であった。それに東を引き込んだうえで話を進めるかのようだった。ここが実に巧みであった。
「今は。どっちだと思うかしら」
「今ですか」
「そう、今よ」
にこやかに笑いながら東の顔を見上げる。小さく整った顔が彼を見上げていた。
「それを聞きに来たのじゃないの？君は」
「はい、その通りです」
そして東もそれに頷くのだった。
「今宵の晩餐ですが」
「あれね」
「あれがそうなのですね」
その晩餐について問うのだった。
「なるようにする為の」
「そうよ。あれはジャブよ」
「ジャブですか」
「メッセージね」
こうも言ってみせる。
「簡単なね」
「メッセージに過ぎませんか」
「あれなのよ。サハラの状況だけれど」
「はい」
今回の会議の主要なテーマだ。これを話す為に彼も今伊東の前に

来たのだから話がここに向かうのは至極当然の流れであった。
「私としてはオムダーマンやティムールにも顔を向けるべきだと思うのよ」
「両国にですか」
「それを言えば君はこう言うのかしら」
こう彼に問うてみせた。
「まだハサンは優勢にあると」
「はい。ハサンは今のところ確かに敗北が続いていますが」
彼はそれに応えて述べる。
「ですがやはり地力があります。いずれは」
「そうね。巻き返せる力はあるわね」
「はい」
それをあえて伊東に述べる。
「そう思うのですが」
「国力ではね」
しかし伊東はここで意味深な言葉を出してみせた。
「確かにそうね」
「国力で上回っているのならばやはり」
「私も普通ならそう判断するわ」
伊東もそれは同じなのだった。しかし彼女はここにプラスアルファがあるのだった。
「けれどね」
「けれど」
「あの彼等はその国力を覆すものがあるわ」
「アッディーン副大統領とシャイターン主席ですか」
「今までオムダーマン、ティムールがどうして勝ってきたか」
彼女は言葉を続ける。
「何故かはわかるわね」
「その彼等の力です」
これは東とてすぐに答えることができた。それ以外に答えはなか

った。
「彼等なくしてはそもそも今もありません」
「オムダーマンもティムールもね」
「ではやはり彼等が」
「そうよ。だからメッセージを送ったのよ」
そういうことであった。彼女の口からもこのことを言ってみせたのだった。
「各国の首脳達にね」
「そうでしたか。ですが」
「それには根拠も必要だというのね」
「はい。そうです」
東はそこも言うのだった。
「それもはっきり見せなければ彼等は乗らないと思いますが」
「その通りよ。わかっているのね」
「はい。それで」
伊東に対してさらに問う。
「その根拠とは」
「それはもう纏めてあるわ」
「もうですか」
「何かを仕掛けるに当たっては既に何もかもを整えておく」
こう述べてまた笑ってみせた。

## 第三十一部第二章　外から見えるものその二十一

「だからよ」
「そうですか。だからですか」
「既にね」
「はい」
「送れる態勢にはしているわ」
そしてこのことを東にも告げるのだった。
「もうね」
「では後は送るだけですか」
「そうよ。ただ」
「ただ？」
「大切なのはタイミングよ」
それを言うのだった。
「タイミングよ。いいわね」
「それですか」
「何事もね。それが一番大事なのよ」
「それはわかっているつもりですが」
「わかっていてもできるようになるのには難しいわよ」
また笑って述べてきた。
「何でもね。これに関してもね」
「はい」
「そうなのよ。データ一つ送るのにもね」
「そういうことが必要ですか」
「ええ。だから」
伊東は言葉を続ける。
「これを送るのは今ではないわ」
「今ではない」
「ええ、だから今はまだ小細工をするだけよ」

小細工とまで言った。だがこれは冗談であった。
「それで行くわ」
「わかりました。それではそれは」
「いいわね。それにしても小細工もね」
伊東の顔が少し苦笑いになった。
「これはこれで大変なのよね」
「はい、それは確かに」
これについては東もよくわかることだった。外相をしているからだ。
「何かと難しいものがあります。相手にも気付かれないようにしないといけないですし」
「相手に気付かれる小細工は小細工じゃないのよ」
これが伊東の言葉だった。伊東は微笑みながら言葉を続けていく。
「見つからずにそれをしていくのよ。いいわね」
「しかし。相手も今回のことでどう思うのでしょうね」
「どうって？彼等が？」
「はい。あの晩餐でこちらの意図はわかりましたね」
「わかったっていうか教えてあげたのだけれどね」
「まあそれはそうですが」
彼もまた少し苦笑いになった。
「それによりどう動くでしょうか」
「それも読んでいるわ」
伊東は言う。
「完全にね。わかっているわ」
「読んでいますか」
「ええ。今彼等は悩んでいるわ」
「悩んでいますか」
「具体的に言うとハサンからオムダーマン、ティムールに乗り換える」
話はそれであった。敗戦が続いているハサンに見切りをつけてオ

ムダーマン及びティムールとの関係を深めていく。伊東が言っているのはそれだった。
「それだけれどね」
「ハサンが若し勝った場合は」
「その場合は何もなかったことになるわね」
「何もなかったことですか」
「そうよ、何もね」
また答える。
「なかったことになるわ」
「そうですか。何もですか」
「ええ。表には出ないわ」
冷徹なまでに言葉を出していく。
「オムダーマン、ティムールと水面下で話し合いをしていたことはね」
「水面下ですか」
「あくまで水面下でしかないじゃない」
微笑んでいた。ここでもまた。

## 三十一部第二章　外から見えるものその二十二

「それはなかったことになるのよ」
「ですか」
「というよりはなかったことにするわ」
結論としてはそれであった。何事もなかったことになるのだ。言い換えればそういうことにしてしまう、そうなのだった。
「それについても考えているから」
「全てにおいて考えているというわけですか」
「そういうこと。あと負けた方だけれど」
「最悪二国になりますね」
オムダーマンとティムールだ。この二国もまた重要なフィクサーである。戦争の当事者であるからこれは当然のことである。
「亡命者がそれだけ増えますか」
「ハサンだけだったら一国だけれどね」
「ハサンの場合は王家ですね」
「王家の亡命も最近減っているでしょうか」
「国数が減れば必然的にそうなるわ」
簡単な話だった。サハラの国数は今三つにまで減っている。そうしたのはオムダーマンとティムールである。オムダーマンの場合は武力によってだがティムールに関してはシャイターンの主導により政治的統一なので事情がかなり違っている。それも関係していた。
「今までは一年に一国の割合でありました」
「一年に一国」
伊東はそのことについて考える。
「つまり千年もの間千の国が潰れたということね」
「凄まじい戦乱ですね」
東もまたそのことを思う。確かに壮絶なものだった。連合ではその千年の間滅亡した国家はない。政権交代があるだけだがこれは何

でもない。新国家ができていっただけだ。
「それがサハラの歴史なんですね」
「場所が違えば歴史も違うわ」
伊東の言葉はかなりクールになっていた。
「連合は繁栄を謳歌してきたけれどサハラはね。かわりに戦乱があったわ」
「それが亡命者や難民を生んできたと」
「こっちはそれだけよ。ただサハラは」
「違いますね。本当に」
「正直ね、サハラにある連合の権益についてはね」
「どうなのでしょうか」
「必要なのは必要だけれどあまりいらないと思うのよ」
少し醒めた目と言葉であった。
「戦乱があまりにも大きいから」
「戦乱ですか」
「何かあればすぐに巻き込まれる」
このことを言うのだった。
「そしてその度にね。こういった話になっているわね」
「確かに。南方でも僅かな権益でカルタゴがオムダーマンと交渉していたそうですね」
「その話、あまり知られていないけれどね」
「はい」
こうしたこともあったのだ。カルタゴはサハラ南方に少し権益を持っていた。オムダーマンの南方進出においてカルタゴは権益がある国とオムダーマンに対して相互に交渉を行い戦火が及ばないように手回しをしていたのだ。こうした裏事情もあったのだ。
「あったのよね」
「はい。そして今度は我々ですか」
「正直私もこうなるとは思わなかったわ」
「思わなかった」

「ええ。ハサンはかなり安定していたじゃない」
ハサンはサハラ東方における安定政権であり続けた。その為連合各国もハサンと盛んに交流を深めていたのである。しかしそれが変わったのだ。
「数年前まではね。夢にも思わなかったわ」
「そうですね。それは私もです」
東も同じだった。やはり彼等にしろ想像だにしていなかったのだ。
「まさか。オムダーマンがあそこまで急に大きくなるとは」
「ティムールができるのもね」
「全く予想外でした。瞬く間でした」
「サハラの情勢は流動的だってわかっていたけれどね」
何しろ戦乱に覆われた地域だ。何が起こってもおかしくはない。国ができて潰れることもだ。それがサハラの普通であったのだ。
「それでもここ暫くはね」
「オムダーマンは西方の一国に過ぎませんでした」
「国力としてはナンバースリー」
「はい」
それが最近までの連合でのオムダーマンの評価だって。それに過ぎなかったのだ。
「それが今ではね」
「サハラを統一する可能性まである国家になりました」
「そうなったのはどうしてかというと」
アッディーンだった。アッディーンがいなくては今のオムダーマンはない、この評価は連合でもそのままだ。当然サハラにおいてもそれは同じだ。
「ティムールでもそうね。一人の英傑によってね」
「英傑が国を作りますか」
「御伽噺みたいだけれどね」
「はい、私にもそう思えます」
連合では国は英雄が作るものではないのだ。あくまで人の集まり

が作るものなのだ。

## 三十一部第二章　外から見えるものその二十三

「ですがそれがサハラでは違いますか」
「英雄・・・・・・ね」
伊東もまた英雄という言葉を出した。
「まさかとは思うけれど」
「まさか！？」
「いえ、何でもないわ」
ここから先はあえて言わないのだった。
「忘れて。いいわね」
「はい、それでは」
「それで。時間はまだあるけれど」
伊東はくすりと笑いながら述べてきた。
「どうするの？夜食の時間はあるけれど」
「夜食ですか」
「何か食べる？といってもインスタントラーメン位しかないけれど」
「インスタントラーメンですか」
東はそれを聞いて意外といった顔を見せた。
「またそれはどうも」
「意外よね。一国の首相がインスタントラーメンなんて」
「そういうものでは？」
しかし東は意外といった顔で応えるのだった。
「実際のところ」
「実際のところ？」
「私もよく食べます」
少し苦笑いになっての言葉だった。
「時間がないので」
「政治家はよく贅沢なものを食べていると言われるけれどね」
「残念ですが違いますからね」

「時間がないからね」
政治家は忙しい。これに尽きた。
「どうしても食べ物は簡単なものになってしまいがちね」
「はい。おかげで栄養のバランスがいつも気になります」
そういうことだった。時間がなくてどうしてもインスタント食品に限られる。だから必然的に栄養が偏ってしまうのだ。この時代のインスタント食品は二十世紀のそれよりもかなりましではあってもだ。
「それがわかっていないマスコミも多くて」
「ネットじゃ逆になるしね」
伊東は今度はマスコミの話になった。
「粗末なもの食べるなって。これは激励かしら」
「激励でしょうか」
「そう考えればいいのよ。そういうのが面白いんだから」
「面白いですか！？」
東はこの言葉には首を捻る。
「それですと贅沢なものばかり食べているという噂も面白いということになりますけれど」
「そうなるわね」
今度ははっきりと言ってみせた。
「裏返しでしかないしね」
「そういうことですか」
「そういうこと。ただ」
「ただ？」
「面白いって言えるってことは楽しんでるってことよ」
顔が笑っていた。
「楽しまないとね。何か一つを食べるだけで色々と言われることもね」
「タフですね」
「タフであることは政治家の大前提よ」

また笑ってみせての言葉だった。
「いいわね、それはね」
「それはわかりますがそういうのが面白いんですか」
「ある作家の言葉よ」
「作家といいますと」
「脚本家でもあるわね。凄い人がいるのよ」
「それは連合の人間ですか？」
「そうよ」
東の怪訝な言葉にすぐに答えてみせた。
「日本のね。作家よ」
「日本人は昔から個性がないと言われますが」
これに関しては千年以上前から言われていることだ。
「そんな人もいるんですね」
「意外と個性的よ、日本人」
しかし伊東の返答はこうであった。
「実際のところはね」
「そうですか？私はあまり」
「国家としてもかなり個性的だけれどね」
「それは確かに」
日本という国が個性的でないとは流石に言えなかった。日本の持つ強烈な個性に関しては連合でも非常によく知られていることだからだ。
「人も個性派揃いよ」
「そうですか」
「そうよ。それがわかるとわからないで全然違うわよ」
「日本人が個性的」
「私だってそうじゃない」
自分を例に出してきた。

## 三十一部第二章　外から見えるものその二十四

「まず一国の首相が個性的よね」
「まあそれは」
伊東のその個性に関してはかなり知られている。雌狐という名前は伊達ではない。
「八条君だってそうだし」
「長官は個性的ですか？」
「あら、個性はないと言いたいのかしら」
「個性的というよりはですね」
東は少し首を捻ってから述べた。
「美男子で優れた人物ですが」
「何でもソツなくこなすね」
「そうした印象はありますが」
「それ以上ではないのね」
「人物観が甘いでしょうか」
「そうね、甘いわ」
東のその言葉に対して頷く。
「八条君も八条君でかなり個性的よ」
「そうですか」
「それこそそのアッディーン副大統領やシャイターン主席に負けない位にね」
「それ程ですか？」
「女性には全然鈍感だしね」
「鈍感ですか」
「ちょっと待って」
それに気付いた様子もない東に伊東はかなり呆れていた。
「それ、わからなかったの？」
「そうなんですか」

「どうやら気付かなかったのね」
「女性にはもてるようですが」
「もてることはもてるわ」
伊東はそれは保障する。
「けれど。本人はそれ一向に気付かないのよ」
「！？まさか」
「まさかじゃないわよ。それ、本当に気付かなかったの！？」
思わず身を乗り出して東に問うた。
「このことに」
「はあ。そうですが」
「同性にはわからないのかしら」
「女性から見たら違うのですか？」
「そう思うけれど。何か話がわからなくなってきたわ」
今度は伊東が首を傾げるのだった。
「何かね。どうも」
「あれだけ各国にファンがいる人間はいないですが」
東はまたそのことを言うのだった。
「タレントも女子校生もＯＬも主婦もそれこそ映画スター並に応援しているじゃないですか」
「それでもてると思っているのね」
「まあそれで女性問題の噂一つないところがまたいいのですがね」
東はくすりと笑ってみせた。
「生真面目で好感が持てます。同性にも人気が高いですし」
「あっちの世界の人にもね」
「同性愛者からですか」
「それは本人も困惑しているそうね」
「そうらしいですね。それは」
明るい顔であった。結構表情が変わる人物のようだ。
「そうよ。ただ」
「ただ？」

「君は本当に気付かなかったの」
「ですからそれは」
「わかったわ。じゃあいいわ」
ここまで聞いてこの話も止めた。
「それはね。それで夜食だけれど」
「インスタントラーメンですね」
「そういうのが面白いんだって言えるかしら」
東に目を向けて問うてみせた。
「君も。そこのところはどう？」
「言えるようになりたいです」
返事はこれを選んだ。
「その方が楽しいでしょうし」
「日本人はこれに関しては様々な返事を出すわね」
「まあそれは」
これには心当たりがあった。
「その通りですね」
「それが個性というものなのよ」
「そういうことですか」
「個性は別に特別なものじゃないのよ」6
伊東はあえてこういうふうに述べる。
「自然なものなのよ」
「自然なのものですか」
「そんなに肩肘張って考える必要もないしね」
「自然ですか」
「自然に考えていけばいいのよ。個性についてもね」
伊東の言葉は続く。
「日本人もこう考えると個性があるわよね」
「そうですね。特別視して考えなければ」
東もそういう考えに至ってきた。言われてみればそうなるのだった。

## 三十一部第二章　外から見えるものその二十五

「日本人も個性的ですね」
「その個性で言うけれど」
伊東はさらに言ってきた。
「今回の会議は個性の見せ所よ」
「日本風の個性ですか」
「そういうのが面白いのよ」
またくすりと笑ってみせてきた。
「この言葉も忘れないでね」
「はい、それでは」
「で、夜食は」
「それは少し考えが変わりました」
東はインスタントラーメンには乗らなかった。どうも最初からあまり乗り気ではなかったらしい。
「節制します」
「ダイエット！？」
「牛乳にすることにします」
穏やかに笑って伊東にこう述べた。
「今夜は」
「牛乳ね」
「若しくは豆乳を」
連合ではどちらも非常によく飲まれている。連合においては大豆で作った食品は非常によく食べられている。豆乳もまたその一つなのだ。
「頂くことにします」
「豆乳ね。考えてみればそっちの方がいいかしら」
「豆乳は身体に非常にいいですし」
このことは変わりはしない。だから人気もあるのだ。

「それにすることにします」
「私もそれにしようかしら」
「インスタントラーメンではなく」
「考えてみればそこまでお腹は空いていないわ」
ふと自分の腹加減を見ての言葉だった。
「だからそれにしようかしら」
「それもいいかも知れませんね」
「さて、それでね」
伊東はまた言う。
「次もまた面白い仕掛けを考えているから」
「メッセージに関してですね」
「そういうこと。じゃあ夜食は」
「一旦家に帰ります」
東はこう述べた。
「今は」
「あら、つれないわね」
「それによく考えれば」
「よく考えれば？」
「首相と深夜に二人で密談というのはスキャンダルの種ですね」
「醜聞ね」
今度の笑みは結構楽しむようなものだった。ただしそれがいいんだからといった類のものではなかった。その笑みで以っての言葉だった。
「それは避けないとね」
「その通りです。ですから」
「帰るのね」
「はい」
伊東に対して答えた。
「明日また御願いします」
「しかし。最近はあれね」

「あれといいますと」
「こうして男女二人きりだけじゃなくて同性同士でも」
「噂になりますね」
「私なんてあれよ。小柳君を子猫ちゃんにしているって変な話があったわ」
子猫ちゃんとは所謂女同士の同性愛において年上の女が年下の女を愛人として囲うということだ。伊東は小柳をそうしていると噂があったのだ。
「確かに彼女は可愛いけれどね」
「そういう言葉が噂の元になるのでは？」
「まあそうだけれどね」
少し苦笑いになった。
「それはね」
「言葉も自重しないと駄目ですね」
「自重しているわよ」
「計算していても駄目ではないですか？」
東の今度の顔は真顔であった。
「かえって騒動が」
「だって。今回は完全に事実無根だしましてや騒いでいる先は」
「誰なんですか？」
「巨大掲示板の百合板よ」
そういうことだった。何とでも言える場所だ。
「かなり好き放題書かれているわ」
「またそれは」
「それならいいけれど男女はね」
「それは確実に致命傷になりますね」
「そういうこと。だからね」
伊東は言う。
「確かにすぐに帰った方がいいわよね」
「はい。ではこれで」

「わかったわ。明日ね」
「明日また」
「忙しいわよ。それじゃあね」
こうして別れることになった。それで話は終わりだった。一人になった伊東はデスクワークを進めていく。その中でふと呟くのだった。
「けれど。八条君は同性からはわかりにくいのね」
そのことを呟くのだった。だがすぐに沈黙し仕事を進めていく。
夜食は豆乳で済ませたのだった。

# 第三十一部第三章　メッセージその一

メッセージ

日本における旧太平洋諸国での会議は進んでいた。だがそれは日本のリードによるものだった。そのことを各国の面々は大なり小なり面白くなく思っていた。

「何というか」

「全くですな」

マックリーフは憮然とした顔で一人呟いていた。その周りに彼のスタッフ達がいた。彼等はホテルの一室に集まり彼等だけで話をしているのだった。

「ある程度はこうなることをシュミレーションしていましたが」

「あれは以外だった」

マックリーフはそのスタッフ達に対して述べる。

「夕食に言葉を入れておくとはな」

「ですが思えば」

スタッフの一人がここで言う。皆でソファーを囲んで話をしている。

「あれはタレーランです。充分に考えられました」

「もっともそれができるのは」

スタッフ達は口々に言いだした。

「タレーランに匹敵するだけの人間しかありませんが」

「タレーランか」

「そうです」

マックリーフに対しても答える。

「つまりあの首相殿はタレーランに匹敵する厄介な存在だということです」

「褒め言葉には聞こえないな」

マックリーフはにこりともせずこう述べた。

「あの男と同じとなると」
「政治家としては傑物ですがね」
「政治家に人間性は不要とはいってもな。あれは」
タレーランといえば連合では大悪人である。上司にも部下にも友人にも持ちたくない男として知られている。もっともエウロパの人間は連合では大抵そうなるのだが。
「酷過ぎるな」
「絹の靴下の中の汚物です」
この言葉がここでも出た。
「まさに」
「あの伊東首相はそうではないと思うが」
「ですから狐です」
伊東は何処までも狐になるのだった。
「あの首相は」
「揚げに薬を入れてきたな」
マックリーフはこう表現した。
「今回はな」
「薬ですか」
「そうだ」
「そしてその薬とは」
「イクチオザウルスですか」
「あれは誰か予想できたか」
マックリーフはあらためて彼らに対して問う。
「聞くが。どうだ」
「正直それは予想できませんでした」
スタッフの一人があらためて述べたのだった。
「それは」
「ですね。それは流石に」
「予想できなかったか。私もだ」
「閣下もですか」

「あらゆるパターンを想定したがしかしあれはなかった」
マックリーフは苦い言葉で述べた。
「あれはな」
「タレーランをまたやって来るとは」
「食えませんね」
「食えない相手なのはわかっていたがな」
マックリーフはこれははっきり認識していた。しかしそれでも彼は言う。これは己の不明に対する反省でもあった。それをあえて言っているのだ。
「今回はしてやられたか」
「全くです。今回の会議はそうおいそれと劣勢を挽回できません」
「どうするべきか」
「いや、待て」
しかしここでマックリーフは口元に手を当ててふとした感じで言ってきた。
「思うのだが」
「何でしょうか」
「ハサンからオムダーマン、ティムールに乗り換えるか」
「それですね」
「向こうのメッセージは」
そのことについてもはっきりわかっていた。しかし今はそれから話が外れていたのである。マックリーフはそれを話として出したのだ。
「どう思うか」
「乗り換えのことですか」
「そうだ。それ自体はどう思うか」
「オムダーマンとティムール」
「その二国ですね」
「情報がない」
マックリーフは言う。

## 第三十一部第三章　メッセージその二

「そのオムダーマンとティムールに関してはな。そもそも我々はどうもハサン以外のサハラについてはあまり知っていることはない」
「はい、そうです」
スタッフの一人がマックリーフのその言葉に頷いた。
「ハサンとは長い間交流がありかなり知っていますが」
「それ以外については」
「そもそもです」
別のスタッフが述べた。
「我々の進出はあくまで東方だけです。平和な東方だけです」
「カルタゴが南方に進出していましたが」
「うむ」
このことは少しだが知っていた。マックリーフも。
「我々は南方にも西方にも」
「戦乱が激しかったですから」
やはり理由はそれだったのだ。戦乱のある場所に進出する企業なぞない。戦乱が起こってしまえば破壊が支配する為経済的な活動が極めて困難だからだ。
「特に北方は」
「エウロパなぞがいる場所は」
進出なぞは全く考えられないのだった。彼等はエウロパがそのまま東方に進出してくる可能性も考えていたがその際はハサンに援助する程度しか考えていなかったのだ。
「進出なぞ考えられません」
「ですから結果として」
「そうだな。ただ」
ここでマックリーフは権益について話す。
「オムダーマン及びティムールにあらかじめ権益の保障を約束して

おいたのはよかったな」
「はい、それは確かに」
「その通りです」
スタッフ達はマックリーフのその言葉に同意して頷いたのだった。
「今戦いは我々の権益がある場所は避けられています」
「通商が妨害されていますので万全とは言えませんがそれでも」
彼等は言葉を続けていく。
「権益は無事です」
「彼等は約束を守っています」
「そうだ、守っている」
マックリーフは今度はそこを指摘したのだった。
「彼等は我々との約束を守っているな」
「はい、それは間違いありません」
「オムダーマンもティムールも」
「そう、オムダーマンもティムールもな」
マックリーフは二国の名前を言葉で繰り返してみせた。
「我々の権益は守っていてくれているな」
「そうです。それが何か」
「それだ」
あらためてそこを指摘する。
「そこなのだ。彼等は我々との約束を守っている」
「それですか」
「そうだ。例えて聞く」
スタッフ達に対して問う。
「約束を破った前科のある人間との約束を守るか」
「いえ、それは」
「全く」
スタッフ達もこれについてはすぐに答えを返した。それは明白な返答だった。
「そんな連中とは契約なぞできません」

「信頼が第一です」
「平気で嘘をつき約束を守らない人間なぞどの世界でも誰からも信用されはしない」
マックリーフは弁護士出身としてではなくあくまで人間の世界の言葉を述べたのだった。これは何時でも何処でも絶対の摂理であった。
「つまりだ。彼等にしろ」
「信頼を重視していますか」
「オムダーマンは少なくともな」
まず話に出たのはオムダーマンに関してだった。
「信頼できるようだな」
「信頼できますか」
「オムダーマンは」
「私はそう思う」
マックリーフは鋭い目でスタッフ達に対して述べた。
「彼等の今までの行動を見ていればな」
「そういえばオムダーマンというのは」
「ええ」
話が進む。
「条約等を破ったことはありませんな」
「あのサハラにおいても」
サハラでは条約を破ることが頻繁にある。相手国を騙すのも日常的だ。それが戦乱の歴史だからだ。サハラにおいては戦争に勝利し生き残る為にはそれも必要なのだ。それが連合等から見てどう思われるかということはまた別の問題だ。やはりサハラはサハラだけの世界なのだ。

## 第三十一部第三章　メッセージその三

「それを考えれば信頼できますか」
「オムダーマンは」
「ただ」
しかし話はここで移るのだった。
「ティムールはどうでしょうか」
「あの国ですか」
「そう、あの国です」
スタッフ達は今度はティムールについての話に入るのだった。マックリーフもその話を聞いている。彼からはあえて言葉を出しはしないが。
「あの国はどうでしょうか」
「間違いなく謀略が多いですが」
「謀略」
ここでそこにいた者達の表情が変わるのだった。
「謀略ですか」
「確かに」
彼等もティムールに関するこの話は知っていた。あまりよくは知らないサハラの世界といえどもだ。
「北方統一に関しても今の戦争前のハサンの要人達の相次ぐ怪死にしろ」
「それはやはり」
「シャイターン家ですが」
ティムール主席は言うまでもなくシャイターンだ。その彼の家について述べられるのもまた当然の話の流れであるとも言えた。
「以前より謀略や陰謀を得意としてきたようで」
「シャイターン家の出身は」
「はい、南方です」

元々はサハラ南方のあるシーア派の宗派の宗主だったのだ。
「南方において隠然たる力を持っていたとか」
「傭兵もやっていましたな」
「そうでしたな」
次に述べられたのはこのことだった。
「宗教と軍事ですか」
「その二つで生きていた」
「戦乱故ですな、まさに」
「ええ。極彩色であります」
サハラではこうした勢力が少なからず存在してきた。独自の力を持つ宗教団体も傭兵もだ。とりわけ傭兵の存在はかなり大きなものとなってきている。
「そのサハラの中だからこそ生まれたのがシャイターン家」
「陰謀と謀略で彩られた家」
あまりいい言葉ではなかったがそうした言葉が次々と出て来るのだった。
「確かシャイターン主席の父は」
「あの教団の前の教皇で」
彼等はまた言葉を出していく。
「右手に奸智左手に謀略とまで言われたような人物でしたな」
「やはり信頼できませんか」
「ということは」
スタッフ達だけでの言葉が続く。やはりマックリーフは黙って聞いているだけである。ただその目は知的な光を保ち続けている。
「ティムールは信頼できませんか」
「手を結ぶとすればオムダーマンだと」
「いや、待って欲しい」
ここでマックリーフは遂に口を開いてきたのだった。
「！？閣下」
「それでは」

「確かにティムールは危険だ」
これはマックリーフもよく認識していることだった。前提として述べるのだった。
「はい、それは確かに」
「我々もよく認識しているつもりです」
「だが。それでも」
しかしそれでもマックリーフは言う。
「それでも？」
「閣下、何か」
「その何かだ。確かに危険な存在だが」
「それでも何かありますか」
「そうだ。それはあくまで利害関係が生じた場合だ」
「利害関係ですか」
スタッフ達は今のマックリーフの言葉に眉を動かすのだった。そのうえで彼の言葉を聞き続ける。今は彼の話を聞くターンであるということだった。
「そうだ、確かに利害関係が生じた相手には牙を剥く」
「はい」
このことは否定しようがない事実だった。スタッフ達も今それについて話しているところだったからだ。だからこそ頷くことができた。
「しかしだ。それがない相手に対してはどうか」
「それがない相手ですか」
「そうだ。利害関係が生じていない」
これをまた指摘してみせる。
「そうした相手にはどうなのか」
「といいますと」
「では我々に対しては」
「正直なところ我々にとってみればサハラなぞどうでもいい存在だ」

本音だった。どうしようもないまでの。
「少なくとも殺し合ったり軍隊を送るような存在ではない」
「それはその通りです」
「サハラになぞ。兵を進める理由がありません」
これは中央政府にいない彼等でも断言するものだった。連合にとってみればサハラにあって連合にないものはない。逆にサハラになくて連合にあるものはふんだんにある。そんな間柄だ。連合があえて武力行使をしてまでサハラを攻める理由なぞ全くないのである。

## 第三十一部第三章　メッセージその四

「そんな必然性は」
「我々の中でさえ武力なぞ使う必要はないのに」
この場合は連合内部でのことだ。
「それでどうしてサハラになぞ」
「シャイターン主席の命でさえ」
興味のないことである。本当にどうでもいいのだ。
「どうこうする必要はありません」
「利害関係はあくまで互いを殺し合う性質のものではありません」
「それだ」
これを指摘したのは劉だった。奇しくも彼もまた自分のいるホテルの一室で自身のスタッフ達を集めて話をしていたのである。そこで彼は言うのだった。
「我々の関係は生きるか死ぬかの関係ではないな」
「はい、確かに」
「交流か若しくは無関心か」
中国のスタッフ達が主に対して答えていた。奇しくもマックリーフに対するアメリカのスタッフ達と同じだった。何もかもが同じであった。
「そういった関係です」
「ですから結果として」
「我々にはその牙は剥かない」
劉は断言してみせた。その小さな目に強い光をたたえて。
「決してな」
「決してですか」
「そうだ。だから彼の謀略は我々には向けられない」
彼は言う。
「それは安心していい」

「では。話し合いをしていいと」
「そうだ。利害関係の生じない相手だからな」
それは他ならぬ自分達のことである。
「手を結べる。もっともそれも深い関係ではないがな」
「深い関係ではないですか」
「サハラはサハラ、連合は連合だ」
またこの言葉が出る。
「連合にとってはサハラがどうなってもいい。権益さえ保障されれば」
「ではとどのつまりは」
「ある程度の交流でいい。その中で権益を確保できればそれでいい」
「極論すれば相手は誰でもいいと」
「その観点から見ればティムールでもいい」
話は確信の色を帯びてきていた。
「約束を破らないことがわかっている相手ならな」
「では。ティムールに関しても」
「そうだ。私はこう考える」
彼は結論を述べた。
「考えとしてオムダーマン、ティムール双方と交流だな」
「双方とですか。それは」
「不都合か？」
平然とした顔でスタッフ達に問うてみせた。
「それは」
「流石にそれは」
「いささか」
スタッフ達は今の劉の言葉には顔を曇らせるのだった。彼等はこれに関しては賛成できないものを感じていた。それで今の顔になっているのだ。
「勇気があるというものではなく」
「どうなのでしょうか」

「不都合があるのか」
劉はここで彼等に問うた。すると返答はこうであった。
「交流するのならどちらかとでは？」
「やはりここは」
「それかサハラに絞るか」
「三つのうち一つです」
「そう選ぶのが妥当だと」
「違うな」
しかし劉は彼等のその言葉を否定するのだった。
「違うというのですか」
「それはまた何故」
「では聞くが我々は彼等を裏切っているか」
そうスタッフ達に対して問い返してきた。
「裏切っているかというと」
「それは」
「三国のどれも裏切ってはいない」
彼は言い切ってみせた。
「そうだな。裏切ってはいない」
「それはそうですが」
「裏切っていなければ何の問題もないのだ」
こう結論付けてもみせたのであった。
「裏切らなければな。それが怨まれない条件だ」
「怨まれない為の」
「若し三国のうち一国について」
「はい」
「その国が滅亡する」
これは仮定だが現実を見ている仮定だった。

## 第三十一部第三章　メッセージその五

「そうすれば我等は損をすることになる」
「損を。では」
「だからそれは愚なのだ」
「愚ですか」
「政治の基本は何だ」
それをスタッフ達に対して問う。
「それは。何だ？」
「損をしないことです」
答えは今さっき出たばかりの話であった。
「要は。そう考えますが」
「その通りだ」
劉もまたそれに頷いてみせる。正解ということだった。
「損をしないことだ。そうだな」
「はい、ではこの件に関してもまた」
「損をしないようにですか」
「ならば答えはそれだ」
今度の言葉はこうであった。
「どう転んでも損はしない。ならば」
「三国と話をしておくことですか」
「そうして権益の保障をしておくと」
「その通りだ。権益さえ守られればいいのだな」
「簡単に言ってしまえば」
「その通りです」
スタッフ達もその通りだと言ってみせる。答えとしてはこれしかなかった。
「ではやはりここは」
「三国とそれぞれ話をしておくのですか」

「そういうことだ。わかったな」
スタッフ達を見つつ声をかける。
「今回はな。それでいい」
「保険という意味もあるのですね」
「保険は必ずかけておくもの」
慎重で知られる李に相応しい言葉だった。
「わかったな。それではだ」
「はい、それではやはり」
「そうしますか」
「向こうも権益の保障位は軽くする」
李はこうも読んでいたのだった。
「彼等にとってみても些細なことだしな」
「些細ですか」
「収奪しているのではない。交易で手に入れているもの」
ここもまた重要であった。交易で手に入れているのならばお互いにとってメリットがある。ここがエウロパが北方で行ってきた収奪とまた違うのだ。
「彼等にとってもメリットがあるからな」
「ですね。それは」
「安心していいですか」
「そしてだ」
李はまた言ってきた。
「オムダーマン、ティムールとも話をしていく。しかし」
「しかし？」
「油断は禁物だ」
李の声に剣が宿った。
「いいな。油断も信頼もできない」
「油断も信頼も」
「特にティムールはだ」
「やはりティムールはそういう意味では信頼できませんか」

「おそらく利に鋭い」
李はティムールをこう見ていた。
「だからだ。油断すればそこから付け込まれるぞ」
「向こうに甘い汁を座れますか」
「向こうに怨まれない程度に甘い汁を吸う」
この言葉が出た。
「それが外交ではないのか」
「そうです。それは」
「相手によっては怨まれようが何をしようが甘い汁を吸う」
こうした言葉まで出た。
「それが外交ですが。しかし」
「今回は怨みを買わない程度にしたいからな。こちらとしては」
「はい、それは」
「完全に敵対関係になることはありませんから」
完全に敵対関係になればその場合は徹底的に甘い汁を吸う。極論で言えば戦争がそうである。ハサンとオムダーマン、ティムールもまたそうした意味では同じなのだ。
「ではこちらも節度を保ち」
「敵度に甘い汁を吸わせてもらいますか」
「こちらは油断せずに向こうにいいものを余分に持って行かれないようにな」
「わかりました。それでは」
話はこれで纏まったのだった。

## 第三十一部第三章　メッセージその六

「そのようにしましょう」
「ここはそういうことで」
「そうだな。それにしても」
話が纏まったところで李は大きく息を吐き出すのだった。
「随分と意地の悪いメッセージを送る人物だ」
「伊東首相ですか」
「そうだ。流石は日本の首相だ。食えないものだ」
「煮ても焼いても食えないというのはこのことですな」
「全く。そういえば」
スタッフの一人はふとあることを口にした。
「狐は食べても美味しくありませんな」
「そうだな。美味しいのはあれだ」
李もそれに応えて話に付き合ってみせてきた。
「狐が好物とするな。揚げだ」
「揚げですが」
「あれはいい。和食の中では特に好きだ」
「ええ。あれは確かに絶品です」
「豆腐料理の中の傑作の一つです」
「その傑作の料理だが」
話は揚げにも及んでいく。
「日本にしかなかったのだったな」
「はい、ですから狐が揚げを食べるというのは日本だけです」
これは日本人の多くが知らないことだ。実は彼等はどこの国の狐も揚げを好きだと思っているところがあるのだ。これは意外なことであるが。
「中国では狐といえば」
「鳥だろうかな」

李は少し考えてから述べた。
「狐といえばな」
「アメリカでもそのようで」
「アメリカの狐も鳥が好きか」
「童話でそのようなことが書いてありました」
スタッフのうちの広地が述べてきた。
「幼い頃の記憶ですが」
「やはりそうか」
「ロシアの狐は油肉やトナカイまで食べるとか」
「それは最早狐ではないな」
李はそれを聞いて率直に述べた。
「トナカイまで食べるのか、あの国の狐は」
「ロシアですから」
自分と偏見を疑われる物言いだがそれでも通じるところがある。実際のところロシアと中国の関係はこの時代においてもよくはない。ロシアとアメリカもだ。彼等とロシアの関係だけは地球にあった頃から変わらないのであった。日本とロシアもあまり変わってはいない。
「狐も大きいそうで」
「あそこは何でも大きいな」
李の今の言葉は褒め言葉ではない。
「大きければいいというのか。しかし狐がトナカイを食べるとはな」
「まるで狼ですな」
「それで日本の狐は揚げか」
「はい」
また日本の狐の話になった。
「ヘルシー嗜好なことだ」
「それと鼠の天麩羅が好きだとか」
「どちらにしろ揚げものなのだな」
「そうなります。そういえば」

「そういえば。何だ？」
「地球にあった頃の話ですが日本の狐は小型でした」
「小型か」
これは今ここにいる殆どの者が知らないことだった。これは李も同じであった。彼もまた地球にあった頃の日本の狐のことは知らなかったのだ。
「はい、山岳地帯の狐でしたし」
「山にいる狐か」
「ですから」
言葉を続けるのだった。
「小さかったのです。熊や狼も」
「あの首相も小さいがな」
「小さいからでしょう。嗜好もまた」
「菜食嗜好になるか」
「そう思います。今回は菜食ではありませんでしたが最高の揚げを出されました」
揚げがさらに話に出される。

## 第三十一部第三章　メッセージその七

「我々としては。あれはありませんでした」
「最初は驚いたというものではなかった」
李の言葉が次第に学問的な色彩を帯びたものになってきていた。
「しかしだ。今は」
「違いますか」
「怒りもしたがそれでもな」
彼は言う。
「違うな。成程と思うな」
「成程ですか」
「そうだ」
そのうえでまた言う。言葉がさらに続く。
「我々としても。悪い話ではありません」
「不意打ちでいい話を持って来たと」
「あまり趣味がいいとは言えませんな」
「あの首相らしいな」
これは賞賛と皮肉が両方混ざった言葉だった。
「だが。真剣に検討してみるか」
「そうですね。我々としても悪い話ではありません。むしろ」
さらに言葉が出される。これはスタッフ達からのものだ。
「いい話です。ただ、決断にはまだ早いと思います」
「そう思える根拠は何だ」
「情報がありません」
スタッフのうちの一人の言葉だった。
「情報か」
「具体的に言えばオムダーマン及びティムールに関する情報です」
それであった。まだ彼等はそれは持っていないのだった。判断材料としてはそれが希薄というわけだった。情報がなければどうこう

もできないのだ。
「それがありませんので」
「まだ動くべきではないか」
「そう思います。今は」
「その通りだな。では今は」
「はい、今は何もしないでおきましょう」
結論が出された。
「様子見です。ですが真剣に検討をしましょう」
「検討しつつ様子見か」
「そうすべきかと」
「よし、わかった」
李もここで決断を下したのだった。
「今は様子見だ。いいな」
「はい、わかりました」
「それでは」
これで中国の方針は決まったのだった。今はまだ様子見だ。しかしここで彼はまた言うのだった。言葉に含まれている学問的なものがさらに深いものになっていた。
「もっともすぐに話が来るかもな」
「情報のですか」
「そうだ」
彼が言うのはそこであった。
「日本が出した話だ。日本が出すのが自然だな」
「そうですな。それに関しては」
「あの首相です。こうした場合になると親切になります」
「親切ですか」
今の言葉には笑みが含まれる。今度はジョークであった。
「小さな親切ではなく大きな親切を」
「まあもっともその大きな親切にはヒモが付いてありますが」
これが政治の親切であり善意というものだがそれでもだった。そ

こには何かの見返りの要求がある。それを完全に承知しての言葉であった。
「そのヒモが何かですが」
「ヒモか。果たして今回は何かな」
「どうでしょうか」
「またぞろ縁起でもないか碌でもないというかそういうものであるのは必定ですが」
「日本ですからな」
日本に対して、特に伊東には中国もそれなりに苦しい目に遭っているのだ。彼等にとって苦しいことは日本にとってはいいことなのであるが。
「何をしてくるか」
「剣呑なことです」
「口に蜜、腹に剣」
李はこの言葉を出した。
「それだな、まさに」
「しかもその剣には毒が塗られている」
「遅効性の猛毒が」
こうまで言われる。

## 第三十一部第三章　メッセージその八

「ヒモが何か。それも考えておきますか」
「おそらく我々に対してだけ付けているものではありませんな」
「中国には中国のヒモだろうな」
李は鋭い目で予想を立ててきた。
「アメリカにはアメリカの、ロシアにはロシアの」
「そこまで見ていると」
「どうにもこうにも食えない話ですな」
「流石と言うべきか憎むべきというべきか」
「日本にとっては流石で我々にとっては憎むべきだ」
二つの主観を把握した言葉だった。李の言葉はここでも学問的なものになっていた。学問的でありかつ非常に鋭い分析のある言葉であった。
「タフ＝ネゴシエイターだな」
「そういえば強いですね」
伊東はこうも評された。
「強かです」
「一見柔らかですが」
だが強いというのだ。柔らかに見えて。
「ですが強いのがあの首相です」
「柳の様に」
今度は柳だった。とかく色々と言われる伊東だった。だがそれは彼等にしてみれば至極正当な評価なのだ。相手から見ればということだが。
「その柳ですが」
「さて。今度は何を仕掛けて来るか」
「見せてもらおう」
最後の李の言葉であった。

「全てにおいてな」
「はい。そういうことです」
「これからじっくりと」
これで彼等の話は終わった。しかしこれで完全に終わりというわけではなかった。彼等は日本の動きを見続けていた。これはどの国も同じだった。
「次は何だ」
「何を仕掛けて来るか」
彼等はそれを考え密かに身構えていたのだった。
「それ次第でどうするかだな」
「決断を下すのは」
こう考えていた。そして伊東はこのことをよく把握していた。把握しつつ次の行動を考えていた。考えつつ自分のスタッフ達に対して言った。
「そろそろね」
「そろそろですか」
「ええ。彼等の今の考えはわかるわよね」
こうスタッフ達に対して問う。
「何を考えているか」
「おそらくオムダーマン、ティムールとの交渉を真剣に検討しているでしょう」
「これは間違いないかと」
彼等もこう分析していた。この分析は正解だった。
「ですが。判断は保留しているでしょう」
「それはまだ」
「まだね。それは何故かわかるわよね」
「はい、それは」
「判断材料がないからです」
彼等はそれもわかっているのだった。
「判断材料があれば決断を下すでしょう」

「ここで間違いなく」
「そう、判断材料ね」
伊東はそれが出たところで笑ってみせた。
「それが出れば違うところね」
「ではその判断材料を」
「そろそろですか」
「そうよ、ここでまた一枚カードを出す時が来たわ」
伊東は言った。
「ここでね。いいわね」
「それではあの資料を各国に出しますか」
「メールで」
「そう、メールでね」
伊東は彼等の言葉に頷く。彼女は今首相官邸にある己の執務室にスタッフを集めていた。そこの自身の椅子に座って話をしているのだった。

## 第三十一部第三章　メッセージその九

「メールが一番いいわね。予定通り」
「無論匿名でですね」
「あえてね」
また笑って言ってみせていた。
「それだからこそ効果があるのよ」
「リークという形ですか」
「そう、リーク」
スタッフの一人の言葉に頷いてみせる。
「それで行くわよ。いいわね」
「わかりました。それでは」
「そのように」
スタッフ達も伊東のその言葉に応えて頷くのだった。彼等も伊東の考えがはっきりとわかっていた。だからこそ頷くことができたのである。
「ただ。相手も情報元が何処かはわかっているでしょう」
「そうですね」
スタッフ達が今度話すのはそこであった。相手も馬鹿ではない。だからこれもまた充分に予想できるものであるのだ。そういうことだった。
「それについては間違いなく」
「しかしあえてリークですね」
「わかっていても名前は出さない」
伊東はくすりと笑って言ってみせる。
「それが政治でしょ？」
「わかっていてもわからないことになっているのが政治ですか」
「そうよ」
そこでまた頷いてみせる伊東であった。

「誰も言わなくてもね。そういうことよ」
「ですか。だからこそですか」
「ええ。だからリークなのよ」
そこをまた言ってみせるのだった。
「それでいいわね」
「わかりました。それではやはりそれで」
「リークということで」
「あとは」
伊東はここで言葉を付け加えてきた。
「ただリークするだけでは芸がないわね」
「芸がない！？」
「ええ、芸がないわ」
スタッフの一人のふとしたような高い声に応える形で言ってみせる。
「何もね。全く面白くないわ」
「ではどうされるのですか？」
「リークだけではないというと」
「政治の世界で最も重要なものよ」
またしてもくすりと笑ってみせる。知的であるがそこには深慮がある、そうした顔であった。伊東がよく見せる笑顔でもある。俗に狐の笑顔とも言われている笑顔である。
「まずは情報」
「それはリークですね」
「そう。そして次は」
「次は」
「ここで質問よ」
その狐の笑みのまま居並ぶスタッフ達に対して問うのであった。
「政治の世界で最も大切なものが二つあるわ」
「はい」
まずはこの言葉をまた言ってみせてきた。実に思わせぶりに。

「一つはその情報ね」
「ええ」
これはまず確定していた。政治において情報はそのまま命となっていく。情報収集能力の優劣がそのまま政治力になるのは何時の時代でも同じだ。言うまでもなく民主政治においてもそうだ。むしろ民主政治においては情報を集められない政治家はそれだけでかなり落ちる。
「そしてもう一つは」
「政治においてもう一つ重要なもの」
「といいますと」
スタッフ達はあらためてそれについて銘々考えだした。皆考える顔になっている。
「だとするとやはりそれは」
「そうですな」
彼等はここで一つの答えを出してきたのだった。それは。
「お金ですか」
「資金でしょうか」
「やはりそれです」
スタッフ達が出した答えはどれも同じだった。それであった。

## 第三十一部第三章　メッセージその十

「結局のところ政治というものは」
「お金がなければ駄目ですね」
これもまた何時の時代でも変わらない。集金能力もまた政治家にとって重要な能力の一つなのだ。汚職と見る向きもあるが結局のところ選挙をするのにもスタッフ達へ給与を払うにも必要とあらば情報を買うのにも資金は必要だ。政治は奇麗事だけでは済まない。
それだからこそ彼等はこの答えを出したのである。金である。これは時として水面下での取引、即ち賄賂となる場合もある。今回はそれを強く匂わせる話であった。
「ではここはやはり」
「彼等にも」
「個人には渡さないわよ」
くすりと笑ってスタッフ達に述べる。
「ただ、ね」
「条約に入れますか」
「そういうことよ」
彼女が言うのはそれであった。
「個人に渡しても喜ぶのはその個人だけ」
「はい」
「それはそれで時としていいのだけれど」
こうした裏金を掴ませるのもまた伊東の得意とするところである。買収、篭絡といった裏工作は政治においては普通にあることだからだ。
「今回はね。政治家や官僚だけでなくその後ろにいるそれぞれの国の市民もいるから」
「だからですか」
「何の見返りもなしにこちらの意見を押し通すことはできないわ」

こうも言ってみせるのだった。
「必ず見返りが必要なのよ」
「だからですか」
「そういうこと。これでわかったわね」
「ええ、そういうことでしたら」
「それでですか」
「狐は騙すだけではないのよ」
自分が狐と呼ばれていると認識したうえでの言葉であった。
「ちゃんと。渡すものは渡すのよ」
「それが狐ですか」
「狸もね」
狐といえば狸だった。日本の外交はよく狐だの狸だの囁かれている。
「化かしてそれと共に」
「相手の懐に少し何かを入れておくのですか」
「それが政治よ」
またその狐の笑顔を見せてきた。
「化かしてそのうえで相手の懐にそっと入れておく」
「そうして恨みを買わないように」
「化かすのはあくまで必要だからよ」
マキャベリ的論理であった。マキャベリは普通に政治のことを言っているだけである。もっともそれを肯定的に見ない者が多いのはこの時代でも同じであるが。
「そしてその分の見返りを渡すのもまた」
「政治ですか」
「そういうことよ。わかったわね」
「はい、それでは」
「そのように」
「各国ごとに纏めておいて」
このことをスタッフ達に早速言い伝えてみせた。

「いいわね。すぐにね」
「今回の分の見返りを条約に含ませる」
「そうよ」
伊東の顔から笑みが消えて真面目なものになっていた。
「そういうことで。すぐにかかってね」
「はい、それでは」
「すぐに」
スタッフ達もそれに頷くのだった。
「纏めておきます」
「やはり米中露の分は」
「ああ、あの三国ね」
伊東は三国の名前が出たところでそれに応えてきた。
「あの三国に関してはやっぱりね」
「かなりの見返りが必要ですね」
「全く。あれだけのものを持っていてそれでも」
スタッフの一人が首を捻りながらぼやいてみせてきた。
「より欲しがるとは」
「満腹になってもまだ食べようとする」
別のスタッフはこう評する。
「相変わらずですが」
「それがまたどうにも」
「彼等にとっては満腹ではないのよ」
しかし伊東はここで彼等にこう言うのだった。

## 第三十一部第三章　メッセージその十一

「あまりにも胃袋が大きいから」
「胃袋がですか」
「私達の胃袋とはまた違うのよ」
こう表現された。
「彼等の胃袋はね」
「そうなのですか」
「日本は無欲だと言われているわね」
「ええ、まあ」
「それは」
これに関しては連合でも定評となっている。日本という国も日本人にしろ非常に無欲であるとされている。これは昔からである。
「しかし彼等はというと」
「まずロシアだけれど」
最初に言及されたのはロシアについてであった。
「市民は無欲なのよね」
「はい」
「それについては」
ロシア人といえば無欲であり素朴かつ親切な市民であるということで有名だ。ウォッカを愛しておりそれとささやかな生活さえあれば満足である、ロシア気質はこの時代でも健在であった。
「ところが国となると」
「全く違いますね」
「そう、百八十度ね」
伊東はこう表現してみせた。
「違うわ。ロシアという国は欲張りよ」
「どうして市民は無欲なのに」
「国家としてはどうして」

このことがまた語られる。
「あそこまで強欲なのでしょう。言葉は悪いですが」
「しかしロシアを強欲と言わずして何を強欲というのか」
ロシアといえば強欲である。これははっきりと言われていた。
「確かに。それは」
「まさに強欲です」
それがまた言われる。
「欲しいものは力づくで手に入れようとし」
「しかも思い切りふんだくる」
こうまで言われる。なお連合においての力づくとは経済制裁等である。流石に武力行使を使うことはない。だが経済的には別なのだった。
「あくまで強欲です」
「あの強欲な国がまずありますか」
「そうなのよ。あの強欲なロシアが」
それをまた言う伊東であった。
「まずあるのよ。その彼等に対しては」
「少し大目にですか」
「そう。ただし」
ここで言葉を加えてきた。
「あまり多くするとかえって厄介よ」
「厄介ですか」
「これはアメリカと中国にも言えることだけれど」
この二国のことも話に出してきたのだった。
「少なくしても問題だし多過ぎても問題なのよ」
「多くするにしてもですか」
「そう、多くするにしてもよ」
話が幾分細かいところにまで及んできていた。
「多過ぎたら。足元を見られるから」
「足元をですか」

「そう、三国共、特にアメリカと中国は」
伊東の警戒心は強かった。とりわけアメリカと中国に対しては。
「よく見ているわよ、相手の足元はね」
「そうですね、それはね」
「かなり」
これについてはスタッフ達もよくわかっていた。わかり過ぎる程にまで。
「ではここはやはり」
「多過ぎると」
「そう、問題ですな」
「確かに」
話が警戒するものになっていく。しかも自然にだった。
「では多過ぎずですか」
「そこもまた本当に肝心だからね。気をつけてね」
「はい」
スタッフ達は伊東のその言葉に頷いたのだった。
「特にアメリカと中国は」
「その二国ですか」
「そう、その二国よ」
特に警戒されるのはこの二国だった。
「ロシアはまず国家としてだけ欲張りだけれど」
「ええ、それは」
「その通りです」
またこのことが言われ再確認される。

## 第三十一部第三章　メッセージその十二

「けれどアメリカと中国は市民も違うわよ」
「ええ、それはかなり」
「確かに悪い言葉ですが強欲です」
　アメリカと中国については市民達までこう言われるのだった。しかもそこには強い警戒の念まではっきりと見られていた。そうした言葉になっていた。
「アメリカン＝ドリームでしたか」
「ええ、まずはそれね」
「そしてチャイニーズ＝ドリーム」
　この言葉もまた連合において定着していた。アメリカン＝ドリームにしろチャイニーズ＝ドリームにしろ簡単に言うと社会的な成功である。この場合は経済的な成功を指し示している。そどちらもほったて小屋から国家元首や大企業のオーナー、チャンプになる。そうしたことを指し示しているのだ。
「どちらもね。まずあるのは」
「欲ですか」
「そう、欲よ」
　これがまた言われる。
「欲はね。宗教的な思想は除くと」
「はい」
　まずはそれは取り除かれるのだった。
「経済的な思考ではいいのよ。それどころか」
「それが経済発展の原動力になると」
「その通り。だからいいのよ」
　伊東は経済的なビジョンから欲というものを肯定していた。これは資本主義を考えるうえでかなり真っ当なものであった。まず欲を肯定するのが資本主義の一歩である。

「それはね」
「ですか。ただ」
「ただ？言ってみて」
「はい、過剰であればです」
そのスタッフは伊東に応えて述べる。
「それはかえって災いになるかと」
「主に相手にね。最悪自分自身にだけれど」
「そうです。彼等のこの場合は相手になりますが」
「だからよ。この場合は考えてね」
言葉が慎重なものになっていく。
「こちらがどれだけ出すのか。それが大事なのよ」
「大事ですか」
「欲っていうのはね。刺激されもするから」
そこもまた読んでいる伊東だった。伊東の考えは実に細かいところにまで及んでいた。そこにまで考えを巡らせることができるのは流石に学者出身だけはあった。
「それを刺激しない為にも」
「あえて適量に多くですか」
「そう、適量に多く」
そこをまた言う。
「いいわね、それは」
「わかりました。その加減が大事ですね」
「そういうこと。それでね」
「はい」
話がさらに続けられていく。
「交渉相手にもよるけれどいざという時はその欲を抑えさせる為に」
「相手を満足させることも用意しておきますか」
「その通りよ。そちらもいいわね」
「はい、わかりました」
このことも考慮に入れられるのだった。やはり実に細かいところ

にまで話が及んでいく。
「ではそれもまた」
「欲は刺激されて増幅するけれど満たされもするもの」
伊東は言う。
「満腹している相手と食べ物の話をしても相手はそれ程刺激されないわね」
「ええ、確かに」
食べ物の話に例えるとわかり易いものがあった。
「だからね。ここはそれも用意しておくことも大事になるわね」
「最初はそれは避けたかったのですが」
「ケースバイケース」
伊東の今度の言葉はこれであった。
「そこはわかっていてね」
「それですか」
「必要とあらば手段は選ばない」
えげつないといえばえげつない言葉である。
「結果さえよければいい。それこそが」
「政治なのですね」
「そういうことよ。だからこその政治よ」
また言ってみせてきた。
「結果が全てなのよ」
「結果ですか」
「だから賄賂でも何でもね」
続いて彼女は賄賂を認める言葉を出した。

## 第三十一部第三章　メッセージその十三

「使える手段は何でも使う。いいわね」
「わかりました。それでは」
「その場合は」
「ただし」
言い加えるのも忘れない。考慮を深いところにまで及ばせていた。
「ただし？」
「あくまでそれは見えないところよ」
また狐の笑みになっていた。その笑みで語る。
「見えないところで。いいわね」
「見えないところですか」
「白鳥は水の中では必死に足を動かしているなんて奇麗なことは言わないわ」
ここでも狐の笑みだった。
「ただ。政治は見えないところで仕掛けるのよ」
「仕掛けるのですか」
「そう、あくまで見えないところでよ」
そこはかなり強調するのだった。
「マスコミに気付かれないようにね。ネットにも」
「ネットにもですか」
「ある意味マスコミよりも厄介ね」
伊東は今回ネットをかなり警戒していた。それをスタッフ達にも述べるのだった。
「マスコミの目は限られているけれど」
「ネットは違いますか」
「幾つ目があるかわからないわ」
それがネットの恐ろしさの一つだった。
「しかも何処にあるかわからないわよ」

「何時何処にですか」
「そう、何時何処にあるか」
それをまた言う。
「まさにあれね。壁に耳あり障子に目あり」
「しかも日本のネットユーザーだけではありませんね」
「言うまでもなく他の国のネットユーザーもいるわ」
「太平洋の国々だけではありませんか」
「ええ、だから厄介なのよ」
話をさらに進めていく。
「ネットはね。だからこそ慎重に御願いね」
「わかりました」
「ではより慎重に」
「日本をよく思っていない人間もこれまたあちこちにいるし」
「あちこちにですか」
「三百国の国々全てにいると言ってもいいわ」
伊東の言葉は一聴するとかなり極端な言葉であった。しかしそうではないのが現実だった。何しろ四兆の人間それぞれに独自の嗜好があるからだ。
「だから」
「だからこそですか」
「見つかったら何を書かれるかわからない、そしてそれが瞬く間に広まることを覚えておいてね」
「はい」
スタッフ達はまた伊東の言葉に頷くのだった。
「何事も用心に用心ですか」
「狐よりも慎重に」
また狐を言葉に出す。言うまでもなく自分のことを出してのジョークである。
「いいわね」
「はい、それでは慎重に」

「かからせて頂きます」
「これで話は終わりね」
ここまで話を終えて伊東はふと言葉を変えてきた。
「それでね」
「あっ、はい」
「何か」
「お腹が空いたわね」
今度は狐の笑みではなかった。食べ物を前にしたにこやかな笑みであった。
「丁度今作ってもらっているものがあるけれどどうかしら」
「何でしょうか」
「巾着よ」
その食べ物を前にした笑みで述べた。
「餅入り巾着。どうかしら」
「揚げですか」
「そう、揚げ」
また答えてみせる。
「私は揚げが大好きなのよ。お餅もね」
「何か揚げといいますと」
「私にとって相応しいでしょ」
今度は他人の反応を楽しむ笑みだった。その笑みで言葉を続ける。
「揚げはね」
「まあ確かに」
「総理に揚げは」
スタッフ達も笑顔で応える。やはり狐といえば揚げであった。少なくとも日本人の中ではそうだ。狐の好物といえばやはりそれが第一なのだ。
「実はきつねうどんも好きよ」
「それもですか」
「うどんに揚げが入っていないと寂しくなるわ」

口を少し尖らせる。本音なのがわかる言葉だ。

## 第三十一部第三章　メッセージその十四

「天麩羅もいいけれどね」
「天麩羅もですか」
「両方入っていたら最高ね」
こうも述べる。
「おうどんだけでなくおそばもね」
「おそばもですか」
「おうどんもおそばも」
伊東はさらに言葉を続けていく。
「油ものが合うじゃない。だから揚げはいいのよ」
「確かにその通りですね」
「うどんやそばにはそれです」
これはうどんにもそばにも言えることだった。どちらもあっさりとしたものであるだけに油ものが合うのだ。そうめんもまた然りである。
そしてスタッフの一人が。ここでそのそうめんも話に出した。
「では総理」
「ええ。何かしら」
「そうめんにも揚げか天麩羅が」
「おそうめんの場合は厚あげね」
限定しているがやはりであった。
「天麩羅も最高ね」
「ですね。そうめんもまた」
「あっさりしたものと油っこいものの対比こそが最高なのよ」
にこやかに笑いながら話を続けていく。そうして話を自然に巾着に戻していく。
「巾着もそうね」
「巾着もですか」

「揚げの油っこさと餅のあっさりさが絶妙に組み合わさるわね」
「そういえば」
スタッフ達もそれに気付く。巾着もまた同じということだった。
「そうなりますね。しかも」
「お餅を隠しているわね」
「はい」
何気に隠しているという話になった。
「お餅をね。隠しているのが大事なのよ」
「政治と同じですね」
「そう、その通り」
スタッフの一人の今の言葉に会心の笑みを浮かべる。その通りであったのだ。
「重要なものは時として覆って隠すのよ」
「そういうことですか」
「そういうことよ。それじゃあ巾着は」
「ええ、是非共」
「頂きたいものです」
ここまで話を聞いて受けないわけにはいかなかった。話は完全に伊東のペースになっていた。彼女はその流れで話を進めていく。
「そう言って貰えると嬉しいわ。さて」
「ええ」
皆伊東の言葉に応える。
「巾着が来たわ。丁度人数分ね」
「人数分というとまさか」
スタッフの誰もがここで伊東の考えがわかった。
「最初から読んでおられたのですか」
「常に相手の数手先を読む」
狐の笑みだった。今は。
「それが一国の首相の仕事の一つよ」
「首相のですか」

「貴方達も学んでおいて欲しいわね、これは」
また学者の顔になっていた。むしろ教師と言うべき顔であろうか。
「相手の数手先を読むのは」
「おいそれとできるものではありませんが」
「だからこそよ」
こうも述べてみせる伊東だった。
「余計に学ぶべきものなのよ」
「そうなりますか」
「誰でも身に着けている能力だけでは駄目なのよ」
「首相はですか」
「そうよ。だからこそ」
伊東は言う。
「学ばないといけないのよ。こんな能力は生まれた時から備わるものではないし」
「後天的にですか」
「相手を見ることも大事よ」
相手という言葉も出してみせた。

## 第三十一部第三章　メッセージその十五

「それから読んで手を打っていくのよ」
「チェスと同じですか」
「そうよ、チェスや将棋がそうじゃない」
スタッフの一人の言葉にくすりと笑ってみせる。そこで巾着がそれぞれの前に出される。皿にはちゃんと箸まで添えられている。黒い箸だ。
「相手の先を読んでやっていくのが達人ね」
「ええ、まあそれは」
「その通りです」
この時代にもチェスや将棋は健在なのである。他には囲碁や五目並べもある。
「はじめての相手でも瞬時にどういった相手か見抜いてね」
「将棋の世界は常人にはわからない世界だと」
スタッフの一人が伊東のここまでの言葉を聞いたうえで述べた。
「俗に言われていますがそれが出来る者同士の世界だからですか」
「そうなるわね」
伊東もそれを否定しない。
「話の流れとしてはね」
「そういうことですか。では」
「将棋に例えなくても」
「はい？」
皆が皿を手に取ったところだった。伊東はまた話を変えてきたのだ。
「付き合いでもそうよ。例えばね」
「例えば」
「この黒い箸」
伊東もまたその手に皿を持っている。また箸は右手にある。

「これを出さない場合も読みになるわね」
「黒い箸を出さないこともですか」
「豊臣秀吉だけれど」
「太閤様ですか」
この時代でもよく知られた歴史上の人物だ。一介の農民から天下人になった英傑として。連合では一介の人物が国家元首になるのは多々あるようになったがそれでも秀吉が英傑であるということには変わりがない。伊東は不意に彼の名前を話に出してきたのである。
「彼は黒い箸が嫌いだったのよ」
「また何故」
「理由はわからないわ。それでも黒い箸が嫌いで」
嫌いなのは変わらないようである。
「これが出されたら食べようとしなかった程なのよ」
「そうだったのですか」
「他に黒い茶器も好まなかったわね」
どうやら黒という色を好まなかったようである。どういうわけかわからないが黒い茶器を好まなかったということで石田三成と千利休の軋轢の話が一つあったりする。
「だからここに豊臣秀吉がいれば私は黒い箸は選ばなかったわ」
「そうなりますか」
「お酒が嫌いな相手にはお酒は出さない」
これもまた一つの読みである。
「厳格なユダヤ教徒には海老や烏賊は出さない」
「日本人には出す」
「そういうことも読みよ」
くすりと笑ったままの言葉であった。
「簡単な場合もあるわ。これをかなりのレベルにまで上げることが大事なのよ」
「そういうものですか」
「難しく考える必要はないの」

言いながらその黒い箸で巾着をつまむ。すると揚げから茶色のつゆが出る。昆布つゆである。そのほのかな香りが部屋の中にも漂う。
「決してね」
「成程、そうですか」
「色々とあるけれどね、本当に」
「全くです」
「今回の仕事も」
スタッフ達もまた巾着を箸でつまみながら述べる。
「色々とやることがあります」
「仕事は何でもそうですが」
「そうね。さあ」
伊東はここで話を終わらせてきた。
「話はここまでよ。それじゃあ」
「後は食べるだけですね」
「この巾着を」
「最も大事な言葉よ」
揚げを前にして目を細めさせていた。これまでで最も嬉しそうな言葉である。やはり彼女も好物を目の前にしては弱いようだ。
「何かをするにはまず」
「まず？」
「食べること」
こう言うのであった。
「ダイエットするのにもまず食べないといけないし」
「ダイエットにもですか」
「こういう言葉があるわ。痩せたければ食べなさい」
千年以上前の言葉である。食べれば新陳代謝能力があがるからだ。食べ過ぎるのは当然よくないが実に合理的な言葉である。

## 第三十一部第三章　メッセージその十六

「だから。何かをするには必ず食べないといけないのよ」
「今はこの巾着をですか」
「お餅は体力がつくから」
この時代でも人気のある食べ物である。
「それも考えてこれにしたのよ」
「これもまた先読みですか」
「ふふふ、そうなるわね」
だが今回はそれよりも伊東自身の嗜好が大きく出ているようであった。どうやら彼女は揚げだけでなく餅も好きなようである。狐的ではないが日本的ではある。
「これもね。じゃあ」
「はい」
言葉と心が重なり合った。
「食べましょう、いいわね」
「わかりました。それでは」
皆で揚げを食べはじめた。そのうえでそれぞれの仕事に取り掛かる。今回の会議は終始日本のリードで進みサハラ情勢への今後の対処が決定された。それはオムダーマン、ティムールとの交流も深く進めていくものとする、そういうものとなったのであった。
このことはすぐに各国に伝わった。当然エウロパにもだ。
ボーデンはこのことを首相官邸で聞いていた。丁度その時カミュもまた官邸に来ており彼と共にこの話を聞くことになったのであった。
話を聞くとすぐに。ボーデンはカミュに対して問うてきた。
「この場合は外相と御呼びするべきですな」
「はい、そうですね」
カミュはにこやかに笑ってボーデンのその問いに答えてみせた。

彼は今エウロパ中央政府の外相兼内相となっている。簡単に言えばエウロパのかなりの部分を統括している。ペーチの死去で内相であるボーデンが首相代行となった為に臨時に内相も務めているのである。
「そうなるかと」
「では外相」
ボーデンはあらためてカミュに問うてきた。
「はい、何でしょうか」
「この件についてはどう思われるでしょうか」
「連合内の太平洋各国の思惑ですか」
「そうです」
その通りであった。ボーデンも頷いてみせてきた。
「これは。ハサンの命運を見切って見捨てたということでしょうか」
「いえ、そこまでは行かないでしょう」
カミュはボーデンのその言葉には首を横に振ってみせた。
「別に見捨てるというところまではいかないかと。ハサンも今はそこまでは追い詰められていませんし」
「追い詰められていませんか。確かに」
ボーデンもこれは読んでいた。
「まだそこまでは至っていませんな。力はまだあります」
「その力を有効に使えばまだまだ大丈夫です」
カミュもまたハサンはまだこんなものではないと見ていた。これはハサンの国力を冷静に分析したうえでの言葉であるからかなりの説得力を持っている。
「だから彼等はまだハサンを見捨ててはいません」
「そうなりますか」
「ただし」
だがここでカミュは言うのだった。
「ただし!?」
「あらゆるケースを考えているのは間違いないですね」

「あらゆるケースとか」
「あえて申し上げます」
カミュの言葉が強いものになる。それと共にその目も。強いものになっていた。
「彼等はハサンの滅亡も考えています」
「やはりそれをか」
「決して言葉には出しませんが」
カミュはこのことを読んでいた。エウロパにいながら連合のことを的確に読んでみせている。やはり一流の政治家であり情報通であることがわかる。
「読んでの行動です」
「ハサンの滅亡か」
「今は可能性は少ないです」
カミュは言った。
「敗北が込んでいるのは確かですが」
「敗北が続けばやはりまずいな、ハサンにとって」
「我々にとっても」
「我々にとっても？」
「ハサンの滅亡は望ましくないことです」
カミュはエウロパの立場から語っていた。完全にエウロパの目になっている。

## 第三十一部第三章　メッセージその十七

「今は」
「そうだな。今はな」
そしてボーデンもその言葉に頷くのだった。納得している顔で。
「正直なところハサンは我々にとって必要だな」
「サハラは争っていることが望ましいのです」
カミュの目がさらに鋭くなった。言葉もまた。その気品があり優雅ですらある顔に鋭さが宿る。鋭さだけでなく邪なものも漂わせていた。
「争っていればな。我々に向かうことはない」
「そうです。そうすれば我々もまた介入できます」
「いづれはな」
カミュの言葉に頷く。
「今は無理だが」
「はい、まだ傷は癒えてはいません」
今度のカミュの言葉は苦々しげなものになっていた。それまで自信に満ちたものだったが今はその自信に替わって忌々しさが入っていた。
「連合との戦いの傷が」
「連合も随分とやってくれた」
ボーデンは言う。
「民間の生活に関するものには手はつけなかったが」
「軍需関係は。徹底的です」
「ピンポイントで狙ってくれたな。憎らしいまでに」
「エウロパ軍の復旧のメドはまだ経っていません」
「そうだ。戦乱の傷は深い」
連合軍はあの戦争で民間生活に手はつけられなかった。しかし戦争そのものがそれを傷つける。その傷が深くまだ回復できないでい

るのであった。
「何をしてもな。思ったような復興にはなっていないな」
「目標は十年です」
カミュは今度は時間を言葉に出した。
「十年で戦争前の経済状態に戻すことですが」
「難しいな」
ボーデンは言う。彼もまた苦い顔になっている。
「十年どころか。どれだけかかるかわからない」
「その間にサハラが固まってしまえばどうなるか」
カミュはエウロパにとって望ましくない未来を提示した。これは仮定であるがそれでも心地よいものではない。だがあえて提示してみせたのだ。
「我々が介入することが困難になります」
「我々にはもう開拓地はない」
これがエウロパ最大の問題なのである。最早彼等には新天地はない。今ある一千億の人口を養うことでさえ困難なのが実情なのだ。
「だから。これ以上の生活を手に入れる為には」
「サハラから奪うしかありません」
「そうだ、彼等からな」
ボーデンの言葉が強いものになる。強い決意の言葉だ。
「奪うしかないのだ。何があろうとも」
「現状維持ではどうにもなりません」
カミュの言葉は発展を肯定する言葉だった。政治家とは国家を発展させるのが義務である。彼はその義務を前提とした言葉を述べたまでである。
「若し今のままでいるならば我々は」
「このままこの狭い場所で朽ち果てていくだけだ」
ボーデンは俯いて呟くのだった。
「連合の勝ち誇った笑いを見ながらな」
「既に彼等には数多くの侮辱を受けています」

カミュの言葉にある憎しみと侮蔑がさらに強いものになる。そこにあるのはあの戦いの記憶だけではなかった。その他のものもまた入っていた。
「ブラウベルグが出るまでもまた」
「それからもだったな。数多くのものを受けた」
「その通りです。我々は彼等のあの勝ち誇った笑みを千年以上見てきました」
「千年。長いな」
「全くです」
ボーデンの今の言葉を肯定する。
「長いというものではありません、全く」
「我々は慎重な成長、発展を余儀なくされた」
エウロパは今いる世界に限りがあることにすぐに気付いた。そしてどれだけの人口を養えるのかも。その為一千億で止まったのだ。止めるしかなかったのだ。
「人口だけでなく技術もな」
「文明も何もかも」
「そしてその間に連合は」
ボーデンはまた連合の名前を出す。声に込められた忌々しいものをさらに強くさせて。彼自身の感情に他ならないものであった。
「四兆の人口にあれだけの国力を手に入れ技術も文明も」
「何もかもを手に入れました」
「肌も目も髪も様々な色の者達がだ」
言うまでもなくエウロパにはコーカロイドしかいない。彼等から見れば連合こそが異様なのだ。黄色い肌も黒い肌もだ。エウロパにはないからだ。

## 第三十一部第三章　メッセージその十八

「かつては我々の奴隷であったというのにな」
「野蛮人が不相応なものを持っています」
カミュの言葉はとりわけ忌々しげなものであった。
「我等が正しく導き使う筈のものを」
「彼等は言っているそうだな」
ボーデンはさらに忌々しげに語る。
「我々こそが野蛮人だと」
「戯言です」
カミュはその言葉を完全に頭から否定した。彼にとってはそれはまさに戯言だった。妄言と言ってもいい。少なくとも認められる言葉ではない。
「我々により導かれ生かされていた者達だというのに」
「十字軍に大航海時代に」
「あとは帝国主義の時代ですね」
「そうだ、その全てが野蛮だったという」
「彼等に相応しい対応をしたまでです」
この考えは何もカミュだけにあるものではない。エウロパそのものにあるものだ。これは教育の結果だ。エウロパでは彼等の祖先は誇らしく生き人類を導いてきたということになっているのだ。だが連合ではそう教えてはいないのである。全く逆のことを教えているのだ。
「ですが彼等は」
「我々が全てを破壊し奪ったと教えている」
「そうです。そして」
カミュはさらに述べる。
「彼等は我々の圧制から脱し悪の束縛を脱したのです」
「とんでもない歴史観だ」

「そして今ではあの有様です」
「我々を倒したと勝ち誇っている」
「そう。ニーベルングをも奪いそしてバチカンを手に入れ」
あの戦争の結果だ。全ては。
「何もかもを罵ってくれました。敗者であると」
「今はそれに耐えるしかない」
「はい」
「しかし。復興しいづれは」
「思い知らせてやるべきです」
「野蛮人には野蛮人に相応しい劫罰を与える」
ボーデンの言葉は普段の温厚なものとは全く違っていた。激しい憎しみがそこにある。それは連合に対する彼の素のままの感情である。
「その為にやはり」
「サハラですが」
「そしてだ」
ボーデンはまた言う。
「まだ星の向こうの果ては見えないか」
「残念ですが」
ボーデンの言葉に対して首を横に振る。
「まだ見えません。何も」
「そうか。では続行だな」
「はい。このままです」
「そうか。神々はまだ我々に試練を与え続けられるか」
「これもまた残念なことですが」
カミュはまた述べる。
「何かを見つけるのはまだまだ先かと」
「焦っても仕方ないしな」
「焦って問題が解決するのなら」
カミュはあらためて述べてきた。ただし今回はその言葉にシニカ

ルなものを含ませていた。これはカミュ独特の高貴な皮肉というものであった。
「この世に問題はありません」
「そうだな。焦ってもな」
「はい、それどころか焦りは破滅を呼びます」
「そうだ。ではここは慎重に話を進めていこう」
「はい」
今度はシニカルをなしにしてボーデンに対して頷くカミュだった。
「この件もまたですね」
「そうだ。しかしだ」
「しかし？」
「あのサハラ侵攻を十字軍に例える者がいたな」
「主に連合の者達が」
やはり言うのは彼等であった。彼等から見ればエウロパはかつての貧しく野蛮な僻地なのだ。これは大航海時代の欧州が周辺地域から持たれていたイメージである。欧州の発展はローマ時代を除外するとかなり新しいのだ。むしろ停滞と破壊に覆われていた時代が長い。

## 第三十一部第三章　メッセージその十九

「またしてもです」
「流石に人肉を食べているとかは言っていないだけか」
「その分言いたい放題ですが」
「全く。口の減らない奴等だ」
「言わないではいられないのでしょう」
またカミュの言葉にシニカルが宿った。
「我々に対しては」
「そうか。せめてその口を黙らせておきたいがな」
「全くです」
だがそれができる筈もない。連合とエウロパは全く違う世界となっている。異世界に介入できる程エウロパは強くはないのである。
「忌々しい」
「そして今度はあれだと言うのか」
「あれといいますとやはり」
話を聞いてすぐに察するカミュであった。
「大航海時代ですか」
「ならば新たに進出して豊かになれる」
「はい」
大航海時代で欧州が得たものは実に大きい。それがそれから数百年の欧州の繁栄をもたらせたのである。これは紛れもない歴史的事実である。
「あの連中に威張らせることもなくなるか」
「そうありたいものです」
カミュもまたこれは心から願っていることだった。とにかく新天地の発見は彼等にとって死活問題となっているのである。発展する為に。
「それが適わなければ」

「やはり。サハラ進出だな」
「その通りです。その為には」
カミュがまた言う。
「やはり。サハラが混乱してもらわなければ」
「せめて隣接している勢力が弱体化していなくては」
「その通りだ。だが今は」
「むしろ我々の方が」
「下手に動けばどうなると思う？」
ボーデンはカミュに対して問う。
「我々は」
「まずサハラの勢力、具体的に言えばティムールですが」
「うむ」
カミュの言葉に対して頷く。
「仮想敵国としては一番考えられるな、サハラにおける」
「その通りです。彼等が強い場合攻めても返り討ちに遭います」
「そうなれば何にもならないな」
「それどころかです」
カミュは言葉を続けていく。
「我々の方が攻め込まれていくでしょう、敗北の状況如何によって」
「お話にもならん。絶対に避けなければならない最悪の事態だ」
「その通りです。ですから」
カミュは言葉を続けていく。
「何があっても避けなければなりません、それは」
「そして隙を見せれば奴等もいるな」
「そう、連合です」
彼等にとって心の奥底から憎んでいる相手だ。またしても彼等の名前が出るのは今回は感情からではなかった。戦略的な視点からの言葉だ。
「奴等が動くことも考えられます」
「何だかんだと理由をつけてか」

「既にニーベルング要塞は奴等のものになりました」
今ではアタチュルク要塞群となっている。エウロパ領だった頃に比べて比較にならない程その規模が大きくなっている。そしてそれだけではなかった。
「周辺は非武装化していますし」
「奴等が動けば即応はできないな」
「その通りです。そのままエウロパの滅亡に直結します」
「今の我々では。そうなるな」
「間違いなく。ですから」
カミュはまた言葉を続ける。
「この事態もまた何があっても避けなければなりません」
「わかっている。ではやはり」
「サハラが弱い時を狙いましょう」
カミュは言うのだった。
「そして弱くなければ」
「弱くさせる。そうだな」
「その通りです。強大な相手ならば理屈は簡単です」
この場合は政治的、戦略的な理屈である。その理屈から話せばこの場合打つべき手段は一つであった。政治では非常にオーソドックスな手段ではある。
「謀略を仕掛けましょう」
「謀略か」
「そうです。謀略こそが最大の芸術」
不敵に邪な笑みを浮かべてのカミュの言葉であった。

## 第三十一部第三章　メッセージその二十

「だからこそ」
「その場合は使うのだな」
「その通りです。ただし」
「ただし？」
「相手を見ましょう」
カミュの目が鋭いものになった。その声もまた。
「相手だけは。じっくりと」
「見てから仕掛けるのだな」
「あのシャイターン主席ですが」
ここでもティムールを見続けていた。そのうえでの言葉である。
「ただ軍略や政治に優れているだけではありません。稀代の謀略家です」
「そうだな。あの男はな」
「表向きは颯爽とした英雄ですが」
サハラでの評価はそうだ。カリスマ的な英雄とされているのだ。
「しかしその素顔は」
「違うな。まさに稀代の謀略家だ」
ボーデンもまたそう見ていたのだった。シャイターンに対しては。
「油断ならないな」
「仕掛けるのが困難なだけではありません」
「向こうが仕掛けて来る可能性もある」
「その通りです」
カミュが今度言うのはそのことだった。
「彼は連合にはこれといって仕掛けるつもりはないようですが」
「連合にはか」
「完全に別世界だと思っているようです」
連合がサハラに対して抱いている感情はそのままサハラも持って

いるのであった。シャイターンもまた例外ではないというわけである。
「ですから向こうが何かをして来ない限り」
「仕掛けないか」
「そう見ていいかと」
「それではだ」
ここでボーデンはふと言ってきた。
「双方をそうさせればいいな」
「連合とティムールの仲違いですか」
「そうした場合にはな。どうだ」
「そうですね。可能であればですね」
カミュもまたそれに乗るような感じになっていた。
「考えてみるのもいいでしょう」
「そうだな。あくまでそうした場合だが」
「はい、あくまで」
言葉が繰り返される。
「ケースバイケースといきましょう」
「連合とサハラの対立だが」
ボーデンはあらためてこのケースについて言及した。ただし今度はティムールと呼ばずサハラと呼んでいる。サハラ全土を見ての言葉なのだった。
「なれば。どうか」
「我々にとっては非常に有り難いことです」
カミュの顔に今度は悪魔めいた笑みが宿った。
「奴等が互いに争ってくれるとなると」
「少なくとも我々に目が行くことは少なくなる」
「はい」
これについても述べられる。
「それもまたよいことです」
「下手に見られても困るものだからな」

ボーデンはここではこう述べた。
「だからな。やはり」
「はい。我々の行動を見られればそれだけ見透かされますから」
「政治では見透かされたならば」
「全ては終わりです」
そういうことだった。だから彼等は警戒しているのである。双方の目を。
「ですから私は思います」
「賛成してくれるのだな」
「はい、連合とサハラを争わせましょう」
「それがベストだな」
「サハラを弱めさせ、混乱させるという意味でも」
その点からも見た言葉だった。カミュは複数の視点から見てボーデンの考えに賛同したのである。そしてこれはボーデンもまた同じものを見ていた。
「よいかと」
「そうだな。今までは連合の中に仕掛けていたのだがな」
「はい」
テロリストや海賊を煽りかつ工作員に活動させていた。しかし連合軍の設立によりそのテロリストや海賊が激減し工作員の潜入もその主なルートにしていたバチカンを失い有効な手立てが失われていた。だから彼等としても今は連合自体に仕掛けられなくなっているのだ。

## 第三十一部第三章　メッセージその二十一

「それができなくなりましたので」
「だからといって何もしないわけにはいかないしな」
「その通りです」
何もできないからといって何かをしないわけにはいかない。これもまた政治である。無策は最早失政より悪質だともさえ言われる場合もある世界なのだ。
「ですからできそうならば仕掛けてみましょう」
「そうだな。それでは」
「おそらく全面衝突にはならないでしょう」
カミュはこうも分析していたのだった。
「連合とサハラでは国力が違いすぎますので」
「それか」
「はい、それです」
カミュはまたそこを指摘する。
「ですから全面的な対立にはならないでしょう。サハラが引きます」
「サハラがか」
「いざとなれば引きます」
彼は言うのだった。
「ですから全面的なものにはなりません」
「我々とは違うか」
「若しです」
今度は仮定の話を出してみせた。
「彼等が我々を相手にするならば」
「その場合はどうなるか」
「サハラは全力で我々に力を向けてくるでしょう」
「やはりそうか」
「はい、そうなります」

彼はそうボーデンに述べるのだった。
「今の状態でも可能な限りの力を我々に向けて来るでしょう。若し連合と衝突していても可能な限りあちらに譲歩して彼等を納得させたうえで」
「そこには怨みもあるか」
「間違いなく」
彼は断言した。
「政治には感情も加わります」
「そうだな」
彼等もまたそうであるからよくわかるのだった。実際に連合に対しては剥き出しの憎悪と偏見を向けて対している。カミュは特にそうである。
「ですから彼等もまた」
「そうしてくるか」
「そして我々を徹底的に攻撃して来るでしょう」
「ならば余計に我々にそこまで目を向けられないようにしなくてはな」
「連合と対立させましょう」
「若しくはマウリアですか」
「マウリアですか。そういえば」
「そうだ。彼等もいる」
ボーデンの言葉の響きは連合やサハラに対するよりもソフトになっていた。それだけマウリアに向けている感情は悪意のあるものではないということだった。それにマウリアとエウロパはそれ程深刻な利害関係はないのである。このことも非常に大きいものであった。
「とにかくサハラはな」
「今の流れでは統一されてしまいかねません」
「そうなれば安定する」
統一即ち安定である。これはこれまでの人類の歴史にある自明の理の一つである。どの国でも勢力でも同じだ。エウロパも欧州の時

代はそうであった。
「安定させてはならんな」
「そうです。最悪統一されたとしても」
「安定だけはな。ならんな」
「これまでどうしてエウロパが生きてこられたか」
話はそこにも至った。エウロパが存続してきた理由にまで。
「やはり連合が安定していなかったからです」
「奴等は中での対立が激しい」
「はい」
連合は纏まりに欠ける。穏やかな国家連合であるから自然とそうなるのだ。エウロパはそこにも付け込んできたのである。過去幾度も。
「安定とはやや程遠かったです」
「それもかなり長い間な」
「戦争がないだけでした」
こういう見方もできたのが連合の歴史である。とかくあれこれと対立が頻発してきたのが連合の歴史だ。その中で必ず何処かの国同士が経済や貿易、通商といった問題で摩擦を起こし対立を生じさせてきたのである。それがなかった時はない程であったのだ。

## 第三十一部第三章　メッセージその二十二

「いがみ合いの歴史でもあります、奴等の歴史は」
「その通りだ。昔は中央政府の力も弱かったしな」
「まさに神聖ローマ帝国でした」
こう評されていたのが連合なのだ。中央の力が弱く砂上の楼閣とまで言われてきたのが神聖ローマ帝国だ。彼等はそれに例えられてきたのである。
「彼等は」
「それぞれの国に軍もあったがな」
「互いの国同士での交戦権がなかっただけです」
「そうだ」
実はそうなのだった。連合において各国の軍はそれぞれの領域の治安維持と災害救助が主な任務なのであった。交戦権は完全に否定されていたから戦争は起こらなかったのだ。
「だが対立はあった」
「連合的対立です」
「そうだな」
そういうことであった。
「経済的なことでな」
「連合ではまず経済です」
カミュはそれがはっきりとわかっていたのだった。エウロパにいながら連合のことをよく把握していた。それだけの頭脳があるのである。
「銃ではなくコインです」
「ミサイルより札束だな」
「そうです。彼等にとっては金が全てです」
「思えば下卑た世界だな」
ボーデンはまたしても連合に対する蔑視を見せた。

「金こそ全てとは」
「奴等に貴族の誇りというものはありませんから」
「そうだったな」
「はい、ノブレス＝オビリージュなぞ最初から知らないのです」
彼等はこのことからも連合を馬鹿にするがむしろこれは連合にとっては誇りである。何故なら彼等にとっては階級というものがないことが誇りなのだからだ。
「ですから誇りも知りません」
「そういえば軍人もまた職業の一つでしかないな」
「その通りです」
これは連合とエウロパの最大の違いの一つだ。エウロパでは軍人もまた高貴なる者の義務の一つなのだ。軍人は職業ではないとも考えられているのだ。
「金を稼ぐ手段でしかありません」
「品がないものだ」
ボーデンはこう言い切ったのだった。
「実にな」
「はい。ですから」
「中で金を巡った争いばかりが起こるか」
「そういうことになります」
確かに一面に置いてはその通りであった。連合という社会はかなり高度な大衆型資本主義社会であるからだ。だから必然的に金銭的な話も多いのである。
「国家間においても」
「そういえば戦争をするより経済制裁の方が効果的な社会だったな」
「はい、そうです」
これが連合の実情である。
「銃ではなく札束です」
「即物的な社会だ」
「軍を動かすよりも外交や通商の場で相手に制裁や交流の破棄を述

べる方が遥かに効果的なのが連合の最大の特徴であります」
「そうだな。我々とは違うな」
「エウロパではそんなことはまずありません」
カミュはここでエウロパの優位性を述べてみせた。ここにも自分達に対する絶対の自信がある。もっともその自信は無意識下にある劣等感と表裏一体であるが。
「奴等はそもそも団結が苦手です」
「そうだ。しかしこの前の戦争ではな」
「あれは数に押し切られました」
これが大きかったのは事実である。連合が人類社会で圧倒的な存在感と力を誇示しているのはやはりその数が大きいのである。否定できない事実だ。
「技術もまた」
「千年も戦争をしていないというのにな」
「それだけ元々ある技術力が高いということなのでしょう」
「野蛮人が技術を持っても宝の持ち腐れだというのにな」
「全くです」
またしても連合への偏見が出る。彼等は技術、とりわけ惑星開発や農業、科学、化学といった実用的な分野において連合に大きく引き離されているのである。エウロパが発達させた技術や文化は文学や哲学といったものである。現実的な連合文明とは別のものではある。
「我々こそが持つべきものですが」
「しかしそれが連合のものになっていて」
「連合軍に使われました」
「それは否定できない事実だ」
「そうです。数と技術により敗れました」
「誇りでは敗れなかったというのにな」
このことには絶対の自信があった。しかも無意識下の劣等感なぞなく。エウロパ軍、とりわけ貴族達は圧倒的な連合軍に対して果敢

に立ち向かい戦場以外でも恥ずべき行いを見せることはなかった。騎士道のまま毅然として戦ったのである。これは間違いなかった。

## 第三十一部第三章　メッセージその二十三

「奴等にはそうした誇りはないのだからな」
「確か日本にはありましたが」
「日本！？ああ」
ボーデンは日本と聞いて一旦不思議なものを見る顔を見せた。
「あの不思議な国だな。連合の中でもかなり異質の」
「そうです、その日本です」
不思議な顔になったボーデンに対してカミュは嫌悪感を見せていた。その裏にはかつての腹立たしい経験があったのである。
「あの八条長官の」
「彼か。エウロパ軍の最大の敵のだな」
「そうです。連合中央政府国防長官」
それが八条である。彼は連合軍のトップである。言うまでもなく連合軍の最高司令官は国家元首である中央政府大統領だが実質的に統括しているのは国防長官である彼なのだ。
「彼には何度もしてやられました」
「聞いているし見ている」
ボーデンは言った。彼の中でも記憶が蘇る。
「講和会議では随分と目立っていたからな」
「東洋の貴公子でしたか」
八条は今ではかなり珍しくなっている純粋なアジア系なのだ。しかも名門の嫡男であり容姿端麗でもある。彼は講和会議の場においてもとりわけ目立つ存在だったのだ。
「貴婦人達の間では人気でした」
「美男子としてだな」
「あれが美ですか」
カミュはそれを認めたくないようだった。
「美というのはやはり」

「エウロパの、我々のものだな」
「そうです。あの様な混血の美なぞ」
　エウロパの誇りとしてその白い肌がある。人種主義と言えば人種主義になるだろう。しかし連合では混血が進み純粋な人種は殆どいない。民族的な見方では最早どの民族も混血が進み過ぎ名前だけになっているとさえ言われているのだ。例えばカルタゴ人だがそもそもカルタゴは三千年以上前に滅亡しカルタゴ人達はローマに奴隷として売られその存在は歴史の中に消えている。それでカルタゴ人が今出て来たというのはやはり民族的にはすこぶる怪しい話なのだ。もっとも連合には他にフェニキアやアッシリア、バビロニア、シュメール、ペルシア、インカ、アステカといった過去の民族の末裔国家も多い。だが彼等もまたそのルーツは自称であり実際は黒人の血が濃かったり白人の容姿が入っていたりする。つまりすこぶる怪しいことは同じということである。
「認められません」
「純粋なアジア系であってもな」
「あのアジア系は東アジア系の顔立ちですね」
「そうらしいな」
　ボーデンはカミュの言葉に頷いた。
「切れ長の目に低めの鼻に黒い髪と目か」
「連合では絶世の美男子の顔の一つとされています」
「連合では幾つでも顔があるがな」
「はい、それは確かに」
　無数の人種が存在している証拠でもある。ラテン系もいればインド系も入ってはいる。だからそれだけの顔、美貌が存在しているのだ。
「その中の一つです」
「どうもそれが貴婦人達に受けたのか」
「ただ。向こうは至って朴念仁で」
「朴念仁か」

「はい。幾ら声をかけられても応じることはなかったそうです」
「一人でも相手にしていればそれだけで暗殺の理由になっていたな」
ボーデンの言葉が剣呑なものになる。
「エウロパの貴婦人と寝ればそれだけでな」
「私もまた同じ意見です」
多くの女性と浮名を流しそれを楽しんでいるカミュらしい言葉だった。彼はその美貌を利用して女性と枕を並べるタイプの男なのだ。ここが八条と違う。
「若しそうしていれば刺客を送っていました」
「刺客か」
「はい。例え成功しなくとも見つからないようにして」
この見つからないようにするというのが重要なのだ。歴史において『急死』というのはままある。その中の幾割かは裏に何かあるのかも知れない。
「仕掛けていまして」
「できればあそこで急死してもらいたかったな」
「確かに」
ここでは本音で話していく。
「軍務省が消極的だったので実行しませんでしたが」
「軍務省か」
ボーデンは軍務省と聞いてまずは。その責任者であるシュバルツブルグの顔を思い浮かべた。そうしてそのうえで話すのだった。

## 第三十一部第三章　メッセージその二十四

「今の軍務省は少し騎士道が過ぎるな」
「軍人として非常によいことですが」
「だが政治はできないところがあるか」
「少なくとも裏の政治は」
　ということだった。今ではボーデンが首相に専念しその後任的な存在として内務省も取り仕切っているだけにカミュの言葉には説得力があった。
「無理です。騎士には」
「紳士にはできるがな」
「スパイは紳士の仕事」
　カミュはふとこの言葉を出してみせた。
「ジョンブル達の言葉です」
「イギリス人か」
「はい、彼等です」
　この時代にも生きているイギリス人への蔑称である。フランス人とイギリス人はこの時代においてもまだ仲が悪いのである。これはもうどうしようもないものだ。
「彼等の言葉ですが忌々しいことに事実です」
「そして貴族にもできるな」
「騎士にはできないだけです。そして」
　カミュは言葉を続けていく。
「見送りとなりましたが。あの長官はあの地位にいればいるだけエウロパにとって脅威となります」
「確か軍人出身だったな」
「はい」
　八条の経歴はもうエウロパでも知られている。
「数年ですが日本軍にいました」

「そうだったな。経補将校だったか」
「そうです。それから政治家に転身しました」
「連合では少ない軍人出身の政治家か」
「その通りです」
キロモトもそうであるが実際連合では軍人出身の政治家は非常に少ない。キロモトの経歴もまたそれを考えれば連合ではかなり異質なものであるのだ。
「だが文民だったな」
「現役の武官ではないので」
そうなるのだった。武官でなければ文民となる。例え軍人出身であっても。連合でもエウロパでもこの考えは同じである。
「そうなります」
「文民であそこまでの軍政ができるというのか」
「例え過去に軍にいたとしても」
「傑出しているな」
ここでは素直に八条を褒めるボーデンだった。
「憎らしいまでにな」
「ですが今暗殺はできません」
「それは無理か」
「バチカン以外の潜入ルートを確かなものにしない限り」
カミュは言うのだった。
「不可能です」
「忌々しいことだな。あの男はエウロパにとっては一刻も早く取り除いておきたいのだが」
「その通りです。スキャンダルを暴くにも」
「無理か」
「我等と結託している市民団体は根こそぎ潰されてしまいました」
実はエウロパはそうした市民団体も連合内部に設けていたのである。しかし彼等は連合軍秘密部隊や中央警察によりあらかた潰されてしまったのだ。市民団体の傘を被って怪しげな行動を行うのはこ

の時代でもままあることである。無論全ての市民団体がそうではない。
「残念なことに」
「今の中央警察はかなり優秀らしいな」
「はい、それもかなり」
カミュは言う。
「おかげでこれといった行動を取れなくなっています」
「参ったな。では今の我々は」
「忌々しいですが内政に専念しましょう」
これがカミュの考えだった。
「今は。それにエウロパの現状を考えると」
「それか」
「そうです。国力の回復に務めるべきです」
「やはりそれだな」
「ただ国力の回復に務めるべきではありません」
彼はこうも言い加える。
「軍の回復もまた」
「回復させるべきだな」
「今基幹戦力は三五〇個艦隊」
おおよその数字である。

## 第三十一部第三章　メッセージその二十五

「これをもとに回復させていきましょう」
「基幹戦力以外にもだ」
「以外にも？」
「そうだ。軍事基地及び防衛システムも再整備したいのだがな」
「それは難しいでしょう」
しかしカミュはそれには懐疑的な顔であった。
「財政的に。困難です」
「財政的にか。それはな」
財政の話を出されるとボーデンもまた弱ったようであった。首相が自国の財政状況を把握していないのでは話にもならない。当然彼は把握していた。
「やはりそこまでは辛いか」
「残念ですが。正直なところ軍の維持が精一杯かと」
「軍務省もそう言っているのか？」
「はい」
ボーデンの問いに対して答える。
「その通りです。彼等もまた」
「そうか」
苦渋に満ちた顔でカミュの言葉に頷くのだった。
「では今はまずは国力の回復に専念するか」
「軍政は二番目です」
それは二番目としたのだった。何事にも優先順位がある、カミュはそれに基き軍事についてはまず二番目とした。そして一番目は何かというと。
「まずは経済です」
「それだな、やはり」
「はい。幸い損害は軽微ですので」

「このことで連合に感謝するとは思わなかった」
「全くです。八条長官は一般市民を手にかける男ではなかったです」
「好きになれない男だが人の道はわきまえているか」
「そうかと」
ここでは八条を認めた。好感は持っていないがそれは認めるのだった。カミュもボーデンも敵の長所を認める度量もあるということであった。
「それに助けられました。ですから」
「内政に専念させてもらうか」
「是非」
話はこれで結論となった。
「さて、それでですね」
「今度は何だ？」
「選挙のことですが」
「選挙か」
「改革派からは私が出ることでほぼ決定していますね」
「頼むぞ」
ボーデンは選挙の話になると先程とはまた違う顔になってカミュに述べてきた。それまでは理知的な面持ちであったが今は勝負をする顔であった。
「保守派はまだ誰が出るかわからないが」
「あちらはまだ選挙に出る人間も決まっていませんか」
「人材に困っているといよりはだ」
ここでボーデンは言う。
「誰を出すべきかわかりかねているようだな」
「誰を出すべきか」
「まず卿に対することができ」
まずはカミュだった。
「そしてあのイギリスの侯爵に勝てる人物だ。それがいるかどうかとなると」

「いないですか」
「そうおいそれとはな」
こう言うのだった。
「見当たらないらしいな」
「左様ですか」
「それだけあの侯爵は手強いようだ」
「ギルフォード侯爵」
「聞いているな」
「はい」
カミュもまたボーデンのその言葉に頷くのだった。
「圧倒的なカリスマ性を発揮し恐ろしい勢いで支持者を増やしているとか」
「その支持者の内容も問題だ」
ボーデンはそこも指摘する。
「エウロパ内のあらゆる層だ」
「あらゆる。そうですね」
カミュはまた頷いた。それもまた知っているということだった。
「貴族や平民といったくくりだけではなく」
「他にもだ」
ボーデンはまた言う。
「あらゆる職種、そして」
「老若男女構わず」
「それにより選挙資金も膨大なものになっているそうだ」
「企業までも味方につけているからですね」
「その通りだ。何者も味方につけている」
「しかもその支持は熱狂的だとか」
「その通りだ。今あの男はエウロパの救世主とまで謳われようとしている」
「救世主」
「そうだ。救世主だ」

そのことを言う。あえて強調して。

## 第三十一部第三章　メッセージその二十六

「それになろうとしているのだ」
「何でもブラウベルグ以来の英雄になろうとしているそうですね」
「自分もそう思っているようだな」
ボーデンはギルフォード自身の考えについてもある程度以上聞いていた。そしてこのことをカミュに対して語るのだった。総統選挙に出る彼に対して。
「それもかなりな」
「英雄ですか。確かに今は」
「英雄が必要な時代だな」
「はい、ですがその英雄とは」
カミュは強い言葉で言う。
「私です」
「卿か」
「そう、私です」
カミュはその強い言葉で続ける。
「エウロパを救う英雄は私なのです」
「自信があるのだな」
「自信のない英雄なぞいません」
言葉も笑みも不敵なものになっていた。
「違いますか」
「いやその通りだ」
それを認めるボーデンだった。
「それはな。確かに」
「そういうことです。ですから」
カミュもまたそれに応える。
「私は総統になりましょう」
「今のところギルフォードの情報を集めていく」

「御願いします」
「今わかっている限りだが」
「どの様な人物ですか」
「卿が知っている通りだ」
実に簡単な一言であった。
「あの通りの。人間としては多分に自信家だな」
「私よりもでしょうか」
わざと自嘲めかして言ってみせてきた。
「それは」
「そうだな。己に対して絶対の自信があるようだ」
「それは面白いことです」
そう言われてかえって彼の中で何かの火が点いたようであった。
「そうでなくてはなりません。総統になるというのなら」
「自信か」
「はい、自信です」
またそれを言ってみせる。今度はその自信に満ちた笑みで。
「己に自信がある者でなければとても」
「しかしそこにはだ」
「はい、言うまでもないことです」
真顔に戻ってまたボーデンの言葉に答える。
「実力がなければなりません」
「私は卿には充分な実力があると思っている」
「有り難き御言葉」
「カリスマもな。両方備わっている」
「だからこそ私がエウロパを救うのです」
そういうことだった。実力がありそれを完全に認識しているからこそ自信がある、彼の場合だそうだった。実力に基く自信であるのだ。
「私でなくてはなりません」
「無論改革派としても卿を全面的に支援する」

「支援なぞなくとも私は己の力で」
「卿はそのつもりか」
「はい、全て実力で通ることができます」
やはりここでも絶対の自信を見せる。倣岸不遜なまでの自信であるがこれがまたカミュという男のカリスマの源の一つにもなっているのだ。
「ですからそれは」
「卿はそう言うがやはりな」
「そうはいきませんか」
「そうだ。やはりあれだ」
ここでまた話が出る。
「ギルフォード侯爵の人気はな。今やエウロパ全土に拡がっている」
「そうですか。だからですか」
「選挙もまた遊びではない」
「はい、確かに」
エウロパもまた民主主義国家である。連合のような大衆型民主主義ではない。階級民主主義であり貴族の力が強い。しかし民主主義なのは紛れもない事実だ。
「だからこそ勝たなければならない」
「エウロパの為に」
「意地悪く言えばあれだ」
ボーデンの笑みがシニカルなものになる。この笑みもまた温厚な人柄で知られる彼にとっては珍しいものだった。その笑みを見せてきたのである。

## 第三十一部第三章　メッセージその二十七

「我々の為だ」
「改革派の為ですか」
「選挙は意地悪い見方をすれば。いや」
言葉をまた言い換える。
「政党や個人の為になるものだな」
「私利私欲に走りやすいですか」
「そういうものだ。そもそも人間は利や欲を求める存在だしな」
「それから離れたならば」
「人ではないという見方もできるな」
仏教ではそうした利や欲から解き放たれることを求める。それができたならば解脱したとなり仏になる。つまり人から離れるという見方もできるようになるのだ。
「そうなればな」
「はい、やはりそれは民主主義では離れられません」
「民主主義もそれを考えれば因果なものだ」
言葉はさらにシニカルな響きを含んでいく。
「人間の欲を肯定していくのだからな」
「欲をですね」
カミュもまたそれに反応を示してきた。
「人間というものは欲で動くものですが」
「それは肯定できるものか」
「私はそう考えます。誰もがそう」
ここで彼はまたシニカルな言葉を出してみせた。やはりシニカルとなるとボーデンよりカミュの方が似合っている。それは個性がそうさせるものだった。
「連合の。仏教徒ですか」
「それか」

「彼等の様にはなれません。もっとも連合でもそうした仏教徒は非常に少ない、いえ絶滅危惧種の動物よりも稀少なようですが」
「絶滅危惧種か」
「あの連中こそ欲の塊です」
　これは確かにその通りだ。連合は大衆民主主義であり階級がない。また多くの開拓地を持っておりその開拓には欲もまた必要なのが事実なのだ。
「それでどうして欲を否定できましょうか。僧侶も妻帯しているとか」
「公にだな」
「そうです。公です」
　なおカトリックでが一応聖職者は妻帯してはならないとされている。もっとも歴代法皇の中には実際に子供がいた者もいるので一応は、である。連合ではこの時代は宗派によるが僧侶もまた妻帯が許されるようになっている。そうなったのは日本の浄土真宗がはじまりだともされている。
「公に認められています」
「破廉恥な話だな」
「だから。そうした連中が欲を抑えられるかというと」
「不可能だな」
「そう、不可能です」
　とりあえず自分達のことは棚にあげた言葉だった。
「そしてそれは我々もまた」
「奴等程ではないにしろな」
「その通りです。ですから多少は欲が入るのは仕方ありません」
「あくまで程度か」
「そうです。そしてこの場合は」
　言葉を続けていく。
「我々は勝たなければなりません」
「幸い政党の力がある」

政党政治もまた民主主義の基本の一つだ。十八世紀にイギリスでおおよそ確立されたこのシステムはこの時代に至っても民主正義の基幹となっているのである。
「だから組織力では彼に勝る」
「勝りますね」
「これは大きい。個人で出るのと組織がバックにあるのとでは力が全く違うからな」
「確かに」
カミュもまた政党にいる者だ。だからこそ政党の力はよくわかっているのだった。
「それではここは」
「そうだ。我々が全力で卿をバックアップする」
強い意志を込めた言葉であった。
「そして必ず総統にしよう。いいな」
「わかりました。そしてエウロパを」
「頼む」
今度は一言だった。
「是非共な」
「はい。そういえばですね」
「今度は何か」
「いえ、我がエウロパの国父ブラウベルグのことです」
彼のことだった。欧州以外の殆どの国々と人間を向こうに回し多くの暗殺や工作を退け欧州の誇りを取り戻しその地位を回復させた偉大な英雄だ。彼がいたからこそ今のエウロパがある。そうした意味でエウロパの者達にとってはまさに国父なのである。
「ブラウベルグか」
「彼は確か所属している政党はありませんでしたね」
「最初はな」
当初は無所属だったのである。全く無名の若者だったのだ。
「だがな。あそこまでなった」

「その徒手空拳から。そういえば」
「また彼は」
「そう、ギルフォード侯爵です」
またしても彼の話になるのだった。

## 第三十一部第三章　メッセージその二十八

「まさかと思いますが彼は」
「どうやら彼だけで政党を作るようだな」
「そうですか。自分が作りますか」
「そうだ。それを果たすとなるとやはり彼は」
「英雄だと」
「そうなる。総統になると共に新たな政党を立ち上げたとなるとな」
こう述べるボーデンだった。これは今までのエウロパの歴史ではなかったことである。連合やマウリアにおいても。誰も考えないことであったのだ。
「恐ろしい話になるな」
「一から政党を作り上げそのうえで国家元首になる」
「普通ではできない」
「しかし英雄ならば」
「不可能を可能にする。それが英雄だ」
俗に言われる言葉だ。
「何時の時代においてもな」
「私がそうなるのですね」
カミュの笑みがこれまで以上に自信に満ちた傲岸なものになっていた。
「その不可能を可能にする英雄に」
「なれるな」
「実はですね」
またしても自信に満ちた笑みを見せての言葉であった。
「私の辞書にはある言葉がないのです」
「！？何の言葉がないのだ」
「不可能という言葉です」
その自信に満ちた笑みでの言葉であった。

「その様な言葉は完全に消しておりますので」
「ナポレオンだな」
カミュの祖国であるフランスの歴史上最高の英雄とされている男だ。ただ常勝の天才であっただけではなく戦いのあり方を変えさえした。軍人としてだけではなく政治家としても傑出した男であり抜群の知性まで備えていた。まさに英雄と呼ぶに相応しい男である。
「それは」
「ナポレオン＝ボナパルト」
不敵な笑みの為に目までが曲がっていた。不敵に。
「確かに見事な人物でしたが今見れば欠陥も多いかと」
「所詮軍人でしかなかったと言いたいのだな」
「軍人は必要です」
軍人が不要な世界というものはこの時代においても実現した国家はない。軍人の仕事が戦争だけではないのだからこれは当然だった。軍人は戦争だけしていればいいというものではない。これを理解していない人間は政治を理解していないと言っても過言ではない。
「ですが軍人には限界があります」
「限界があるか」
「ナポレオンは確かに軍人でした」
またこのことについて言及してみせるカミュだった。
「政治家としても秀でていましたがやはり軍人でありました」
「政治については限界があったか」
「だからこそあの二人を使いこなせなかったのです」
ふと二人という言葉を出してみせたカミュだった。
「彼等を」
「タレーランとフーシェだな」
「彼等を使いこなせていればナポレオンの失脚はありませんでした」
これはよく言われることである。ナポレオンの政権、即ち第一帝政を支えていたのは外相であるタレーランと警察相であるフーシェだった。だが有能であるが忠誠心とは全く無縁であり手段を選ぶこ

とのないこの二人を使いこなすことはナポレオンには無理であった。もっとも彼等を使いこなせるような人物はこの時代においては誰もいなかったのであるが。英雄をもってしても二人の怪物を使いこなすことはできなかったのだ。
「政治家であればどうだったかわかりませんが」
「政治家であればか」
「ヒトラーであればどうだったでしょう」
ナチス＝ドイツを作り上げた男だ。なおエウロパではヒトラーは英雄であるが連合では稀代の悪人となっている。これはスターリンもまた同じだ。これについてはイスラエルの存在が大きいと言われている。ユダヤ人を虐殺したのはヒトラーだけではないのである。スターリンもまた同じだったのだ。こうした意味においてもナチスとソ連、ヒトラーとスターリンは全く同じ存在であったのだ。全体主義国家であり独裁者であったのだ。虐殺を躊躇しない。
「あの二人を使いこなせたかも知れません」
「怪物が三人か」
ボーデンはそのことにかなりいぶかしむものを感じている。
「ぞっとしない話だな」
「軍人が政治をするにあたってはやはり限界があります」
「限界があるか」
「はい」
相変わらずの傲然とまでしている自信での言葉だった。
「何故なら軍人はその職務があまりにも専門的であるが為に」
「それはその通りだ。それではだ」
「私は政治家として英雄になります」
これこそがカミュの考えであった。彼はそれを念頭に置いて英雄というものを語っているのである。ここに実に大きなものが存在していた。
「そしてエウロパを救ってみせましょう」
「政治家として英雄になるか」

今のカミュの言葉を聞いてボーデンの目が微妙に動いた。
「そうなのか」
「それが何か」
「いや」
自分でも気付かない。しかしボーデンは何かを感じていた。しかしそれを表に出すことはなかった。自分が気付いていないから当然であった。
「何でもない。それならな」
「そうですか」
「とにかく頼む」
この言葉はすぐに出たのだった。
「エウロパの為にな」
「わかりました」
こうして二人の話は終わった。しかし話が終わってもそれはあくまで言葉のうえでの話が終わっただけだった。まだ話は続いていた。言葉の続きが。

## 第三十一部第四章　あぶれ者その一

あぶれ者

連合内部は比較的平穏であった。エウロパとの戦いも一方的な勝利に終わりそのうえでバチカンの移転も後は指を折っているだけでありまた各国の関係もそれぞれ良好だった。しかしだからといって問題が全くないというわけではなかった。問題のない世界というものもないのだ。

「義勇軍だぜ」

「あれがかよ」

「ああ、あいつ等がそれさ」

連合軍のある基地内において若いセーラー服の兵士達が遠くを歩いている浅黒い肌の軍服の男達を指差してひそひそと話をしていたのである。

「義勇軍のな」

「何か思ったよりも小さいんだな」

「そういえばそうだな」

その義勇軍の男達を見つつこうも言うのだった。

「あれだけ強いんだからな。どれだけ大きいかと思えば」

「慎重にしてどれ位だ？一七〇はあるよな」

「幾ら何でもそれ位はあるだろ」

「どれだけ小さいんだ、それだと」

連合においては平均は男が普通に一九〇程度はある。栄養の関係でそうなっているのだが当然女もまた他の勢力圏よりも背が高くなっているのである。

「一八〇はないな」

「ああ、それはない」

見ていてそう判断されたのだった。

「一七五程度か。やっぱり小さいな」

「あんなに小さくてあそこまで強かったのか」
「不思議だよな」
「全くだ」
彼等を見つつ話は続く。
「まあ武装は俺達とは少し違うしな」
「特別な武装か」
「艦艇はエンジンが凄いらしいな」
義勇軍の艦艇に関しては連合軍の普通の艦艇とは多少変えられている。常にまず敵軍に突っ込む彼等の艦艇はバリアーも堅固であるし速度も通常の連合軍の艦艇よりも速くなっているのである。
「火事場に突っ込むからな」
「しかも訓練もあれなんだろ」
今度は訓練について言及された。
「かなり厳しいらしいな」
「俺達の比じゃないらしいな」
一人がこう述べたのだった。
「もう想像を絶するものらしい」
「厳しいって聞いていたけれどそんなに厳しいのかよ」
「だからよ。火事場に突っ込むんだぜ」
これがまた強調されるのであった。
「それこそあれだよ。月月火水木金金」
「休みなしじゃねえか」
かつての日本海軍がそうであった。訓練に制限をかけることなぞ誰も考えはしない。だからこそ帝国海軍は休みなぞなく訓練を続けたと言われているのだ。実際は平時はそれなりに休暇があったにしろだ。これは帝国海軍の厳格さを表わす伝説となっているのだ。
「無茶苦茶だな」
「俺達なんか週に二日も休みあるのにな」
これが連合軍である。
「将校だって休みがたっぷりあるのにな」

「ああ」
これについては元々日本軍が異常なだけであったのだ。この時代の日本軍が。
「連中は休みなしか」
「しかもだぜ」
「まだあるのかよ」
「ああ、まだあるんだよ、これが」
話がさらに続けられる。
「軍律だってな。俺達以上だぜ」
「俺達以上・・・・・」
連合軍の兵士達にとっては想像を絶する言葉であった。
「想像がつかないな」
「ああ」
連合軍は軍律だけは徹底している軍である。訓練は厳しくはなく福利が行き届いているが軍律だけはとかく厳格である。これは八条がそうさせているのだ。
「俺達も軍律はかなり厳しいけれどな」
「そのチェックもな」
「けれどそれよりもかよ」
彼等にとっては最早想像できない域の言葉だった。
「しかも訓練は厳しいのかよ」
「まさに地獄だな」
「地獄を経るにはそれなりの理由が必要だからな」
ここで兵士の一人が同僚に対して言った。

## 第三十一部第四章　あぶれ者その二

「理由！？」
「ああ、それだよ」
彼は仲間達に対してまた言う。
「義勇軍は真っ先に前線で突っ込むよな」
「ああ」
まさに火事場に最初に飛び込むのが義勇軍の仕事なのだ。それこそが彼等の存在意義なのである。言うならば正規軍の剣であり盾なのである。
「それだけ危険が多いからな。だから」
「死なない為にか」
「ああ、そういうことだ」
これは現実を見据えた言葉であった。
「真っ先に火事場に飛び込んで俺達の先鋒となる。だから」
「鬼の如き訓練と規律が必要だってことか」
「そういうことだ」
「けれどあれだよな」
ここで話が微妙に変わった。
「あれって何だ？」
「あいつ等のことだ」
一人がその義勇軍の者達を見つつ言葉を述べていく。
「損害は俺達よりずっと多いな」
「ああ、それはな」
これはもう連合軍にいれば誰もが知っていることであった。彼等にとっては今更な言葉だがそれでも話を続けるのであった。この場においては。
「多いなんてものじゃないな」
「あの戦争にしろ」

言わずと知れたエウロパとの戦争である。一千年の平和から連合軍中央軍設立を経て連合としては事実上はじめての戦争である。それまでは精々宇宙海賊征伐程度だったのが本格的な戦争になった。連合にとっては実に大きな出来事であったのは最早言うまでもない。
「俺達の損害は一個艦隊程度だったな」
「そうだったな。百万か」
連合軍の参加兵力は二千個艦隊だった。その中の一個艦隊、人員にして百万程度の損害だ。六十億の参加兵力を考えれば実に微々たるものであった。
「それに対して義勇軍は九個艦隊」
「全体の一割近くか」
軍での損害では最早かなり深刻な域である。三割で最早軍の上層部の責任問題にまで発展する。三割で全滅と認識されるのが損害の考え方だ。
「単純に数だけでも俺達の十倍近くだ」
「九倍だしな」
これだけでもその損害が普通でないことがわかる。
「それだけの損害を出していたんだな、義勇軍は」
「まああんな戦争ばかりだったからな」
義勇軍の戦争についても回想される。
「同じ戦力でも敵に突っ込んだりしていたよな」
「そうだよな、あいつ等はな」
「俺達だったら考えられないな」
連合軍は常に敵より多い数で戦うのが常である。さもなければ守って動かないのが常だ。もっともエウロパとの戦争においては正規軍は常にエウロパ軍より圧倒的に大勢の戦力で戦っているのであるが。
「あんな戦いはな」
「それでも奴等は違ったな」
「それどころかな」

話がさらに進む。
「敵より数が少なくても戦っていたな」
「そういえばそうだったか」
「一回あっただろ。ええと」
ここで記憶が手繰られる。
「確かフレイ星系の戦いな」
「フレイ！？」
一人が何処だそこはと言わんばかりの声をあげた。彼にとっては聞き慣れない言葉であったのがこのことからでもわかるものであった。
「それは何処だった？」
「エウロパ南方の星系だよ」
一人が彼に説明する。
「確かな。あまり知らないみたいだな」
「俺北方にいたからな」
その彼はこう言い訳をしたのであった。
「南のことは知らないんだよ」
「そうだったのか」
「ああ。それでそのフレイでの戦闘はどうだったんだ？」
「敵は四個艦隊」
エウロパ軍では結構な規模の軍勢だ。連合軍にとってみればどうということのない規模ではあるが。数の違いがここでも出ているのである。
「対する義勇軍は一個艦隊だ」
「四倍か」
なお連合軍は三倍で相手に対するのでも少ない程である。

## 第三十一部第四章　あぶれ者その三

「その四倍の戦力の相手に向かったんだよ」
「それでどうなった？」
「勝った」
ガリア戦記の様に簡潔な返答であった。なおカエサルはこの名文が後にギリシア文化の影響を受けて文章に装飾を施すことをこのんだ後世のローマ人達に馬鹿にされることになったのである。これも実に滑稽と言えば滑稽な話ではある。
「軍の三割を失いつつもな」
「激しい戦いだったんだな」
「あの戦争で連合軍が出した最も大きな損害だ」
三割という数字はそれだけ大きいのだ。
「その結果エウロパ軍は二個艦隊規模を失いフレイから撤退したがな」
「成程」
「しかしまたどうしてそんな戦争をしたんだ？」
別の人間がこう言って首を捻ってきた。
「無謀だろう。四倍の相手になんて」
「そういえばそうだな」
それに同意する者が出るのもまた当然の流れであった。
「無茶苦茶だろう？正規軍の援軍は呼ばなかったのか」
「呼べるに呼べない事情だったらしい」
事態には全て前提が必須だ。今度はそれについて話された。
「そこではな」
「呼ぶに呼べない事情？」
「まず正規軍はその時他の星系で戦っていた」
「そうだったのか」
「それでまずフレイまでには行けなかった」

「ああ、そういえば」
ここで一人があることを思い出したのだった。
「フレイの近くにはアテナ星系があったな」
「アテナ星系っていえばだ」
名前からすぐにわかるエウロパの星系である。だがここでは名前だけが重要なのではない。むしろ名前の後ろにあるものこそが重要なのである。
「確か南方の交通の要地だったな」
「そう、そこでエウロパ軍と対峙していた」
そういう事情だったのだ。これが前提であった。
「フレイにあったのはそれの予備戦力だったんだよ」
「じゃあフレイでの戦闘はその予備戦力を叩く為か」
「そういうことだ」
これで全ての事情が伝わったのであった。
「それで一個艦隊でフレイに向かった。ところが」
「敵は予想より多かったと」
事情がさらにわかってくるのだった。
「それでも敵に果敢に向かいか」
「無謀と言えば無謀だがな」
「それでも凄いことだな」
純粋に四倍の相手に勝ったことは正当に評価するのだった。
「勝ったんだからな」
「全くだ」
「しかも話はそれだけじゃない」
話がさらに進められるのだった。
「フレイ星系を奪取して」
「ふん」
「それで？」
仲間の兵士達も話をさらに聞く。
「そこからアテナを急襲した。つまり敵の側面からも攻撃を仕掛け

たというわけだ」
「じゃあそれでアテナでは勝ったんだな」
「そういうことだ」
一つの戦術的勝利はさらなる戦術的勝利をもたらすことがある。
今回がまさにそれであった。
「それでアテナは勝った。彼等のおかげでな」
「凄いことだな、本当に」
「何か義勇軍様様だな」
またしても純粋な賞賛が述べられた。
「それを考えるとな」
「しかしよ」
だがここで異論が入った。懐疑的な言葉が。
「あの連中は連合の人間じゃないぜ」
「連合の人間じゃない」
「だってそうだろ？」
そして言葉が続けられていく。
「あの連中はサハラから来た」
「ああ」
「生まれは連合じゃないだろ」
「少なくともルーツはそうだな」
一人がそれを認めた。これは紛れもない事実であった。

## 第三十一部第四章　あぶれ者その四

「サハラからだからな」
「つまり難民だ」
言葉に嫌悪感というスパイスが加わった。それは決していい意味のスパイスではなく味を悪くさせるものでもあるかも知れないが加えられたのは事実だった。
「奴等はな。俺達と同じじゃない」
「同じじゃないか」
「だってそうだろ？」
このことはかなり強調されるのだった。念入りなまでに。
「俺達は連合生まれだが奴等は違う」
「それか」
「そうだ、それだよ。俺達とは違うんだ」
「サハラの人間か」
「連合の人間じゃない」
このことが重要なのだった。連合生まれではない。今ここにいる彼等は連合の者達だ。連合とサハラの違いがかなり強調されていく。
「戦争の世界に生きてきたから違うのも当然さ」
「サハラはな」
これについては今話している彼らの全てがわかっていることだった。サハラは一千年の間戦乱に覆われてきた。それに対して連合は千年の平安だ。テロリストや宇宙海賊は確かに存在したがそれによって連合中央政府や各国政府の基盤が崩されたことは一度もないのだ。
「戦場だ。だからな」
「強いのも当然か」
「そうだ、当然だよ」
ここでもまた自分達とは違うのだと断言された。

「強いのもな。当たり前なんだよ」
「まあ俺達はな」
自分達についても述べられるのだった。
「戦争弱いからな。前線に立つこともあまりないしな」
「っていうか俺達はいつも二番目だろ」
軍では誰もが知っている連合軍正規軍の使われ方である。
「まずは義勇軍が突っ込んで俺達がその次だ」
「火事場には奴等か」
「それでいいんだろ。お偉いさんは」
誰もが公には言わないがその通りの事実だった。
「正規軍が減ればそれだけ自分達の首が危なくなるからな」
「俺達は死んだら駄目なのか」
「兵隊が死んで困るのは死んだ兵隊ばかりじゃないからな」
いささか以上に政治的な言葉になっていた。しかしこれに関しては民主主義国家ということを考えれば当然だった。連合は紛れもない民主主義国家だ。
「親も悲しむ。家族も」
「家族も」
「家族は何を持ってる？」
それが一番重要なのだった。民主主義国家というシステムを考えるとその家族もまた重要なフィクサーなのだ。問題はその軍人だけではないのだ。
「投票権と口だよな」
「口だよ、それだよ」
そこが指摘される。
「口と手があればそれだけで問題なんだよ」
「口は食うばかりじゃない」
それだけだったならばおそらく人という存在は社会を築けはしなかったであろう。口とは食べる為だけに使われるものではないのである。

「話すな」
「ああ」
「家族を失った悲しみを話すとすれば？」
「テレビの前やブログでだな」
「ああ、それだ」
ここが問題なのだった。
「それで政権批判をすれば困るよな」
「尊い犠牲は犠牲だけれどな」
その犠牲こそが問題なのである。ただそれだけで済む話ではないのだ。
「それでもな。自分の子供や家族が英雄になったと決め付けられる人間ばかりじゃない
「っていうかいないだろ」
そもそも連合では戦争というものに対する関心が他の勢力と比して希薄である。だから戦場での英雄という発想も実に少ないのである。
「そんなふうに考える人間は連合にはな」
「まあそうだな」
それに関しては彼等もよくわかるのだった。連合の者達だからだ。
「それで戦死者が多かったらそれだけ怒る家族も多いよな」
「政府への批判者が多くなる」
「そうなれば票も減る」
民主主義国家では当然の流れであった。

## 第三十一部第四章　あぶれ者その五

「だから俺達には死んでもらったら困るんだよ」
「それ考えたら俺達って変な立場にいるよな」
「今気付いたぞ、これ」
それだけ軍という存在に関する考え方がドライであるという証でもあるのだ。これもまた連合らしい考えであると言えるものである。
「俺達はただ単に軍隊で働いてるわけじゃなかったんだな」
「給料と待遇がいいから入ったんだけれどな」
「俺もだよ、それ」
非常に現金な考えである。連合らしい考えだ。
「死んだら困るのかよ、俺達」
「それでそのかわりに義勇軍がか」
「けれどよ、それってよ」
義勇軍に対する複雑な感情が話に混ざったのだった。
「かなりあれじゃないのか？酷い話だろ」
「まあそれは確かだな」
「そうだな」
これについては誰も否定できなかった。彼等が決して人格障害者ではなくそこに後ろめたさを感じられるだけの良心があるからだった。
「あの連中は俺達の盾だ」
「っていうか身代わりか」
「死んでもらったら困る俺達にかわってだからな」
「そのためのの義勇軍ってわけだな」
「強い義勇軍を全面に出して戦わせる」
連合軍のオーソドックスな戦術である。これはエウロパとの戦いにおいて一貫して行われてきたことでもある。全ては犠牲を出さない為にである。

「確かに勝ちやすいし合理的だよな」
「戦争でも政治でもな」
やはりここでも政治の話が出る。
「そうなるよな」
「じゃああいつ等はあれか」
ここでまたその義勇軍の将兵に顔が向けられる。
「その為に死ぬのか」
「選挙権もないしな」
民主主義国家ではかなり重要な要素であった。
「連合市民でもない」
「だから死んでもいいのか」
「そうなる。奴等は消耗品だ」
かなり冷酷な言葉だが事実でもあった。
「俺達の前に立つな」
「何でそんなのに志願するんだ？」
連合の若者にとっては率直な感情だった。
「消耗品扱いされる職場なんて誰も行かないだろ」
「そんなのすぐに問題にならないか？」
またしても連合の社会の中での話になっていく。彼等が連合にいる限り最早そうならざるを得ないものであった。やはり所属している社会からは離れられない。
「どれだけ金が出てもな」
「だから。あいつ等は連合の人間じゃないだろ」
このこともまた言われた。
「しかも全然な」
「全然か」
「そうだ、全然だ」
サハラ出身者、その異邦人であるということもまた変えられないことであるのだ。連合という社会から見てはわからないことではあるのだが。

「だから奴等に対してはそんな配慮はいらないんだよ」
「サハラ出身者にはか」
「じゃあ御前だったらどうする？」
「俺！？」
「そう、御前だよ」
兵士の一人が話が振られた。
「御前だったらどうするんだ？」
「どうするって何がだよ」
いきなり話を振られて戸惑っているようだった。
「何を一体」
「だからだよ。連合の人間じゃない奴がいる」
相手は話をわかりやすくする為にこう表現してみせてきた。
「どう扱うんだよ、御前なら」
「まあそうだな」
話を振られて少し考え込みながら彼は述べてきた。

## 第三十一部第四章　あぶれ者その六

「公に差別したらまずいよな」
「ああ、それはな」
「幾ら何でもな」
流石にこれはまずいというのは誰でもわかることだった。連合は平等主義と人権を掲げている。凶悪犯に対する酸鼻を極める死刑もその人権を侵した者に対する処罰であるのだ。もっともここには明らかにそうした残虐さを楽しむ感情も存在しているのであるが。
「やばいしな」
「それはないか」
「大体だ」
話がさらに突っ込まれる。
「異邦人だからって差別したらそれだけで批判されるぞ」
「そうだよ、その通りだ」
「酷いぞ、それは」
良心の問題もあるのだった。ごく稀に良心を持っていない人間、所謂サイコパスという人格障害者も存在しているが大抵の人間には良心がある。その良心が許さないのだ。
「差別はよくないぞ」
「その通りだ」
「だからだよ」
ここで話が元に戻ったのだった。
「露骨なことはできないんだ。絶対にな」
「絶対にか」
「しかもこっちが受け入れた」
もう一つ問題が述べられた。
「難民としてな。来る者は拒まずでな」
「ああ、そうだったな」

「エウロパに追い出された難民達を救えってことだったな」
それを大儀名分として難民を受け入れたのである。ここでもエウロパに対する激しい敵愾心が存在していたのだ。しかもそれだけではなかったのだ。
「だからだよ。無碍には扱えないんだよ」
「そういうことか」
「それにだ」
今度は連合の法律に根拠がある話になった。
「帰化すれば連合市民だな」
「ああ」
実際にマウリア、サハラ各国から連合市民になる者も存在している。とりわけサハラからは戦乱から家や国家を失った難民達が連合に帰化するケースが存在しているのだ。
「だからだ。本当に粗末には扱えないんだよ」
「じゃあ義勇軍は何なんだ？」
あらためて義勇軍について語られる。
「やっぱりあれは俺達の盾なんだろ？」
「それは事実だ」
これについては否定されないのだった。
「戦慣れした彼等を前線に立たせて戦わせているのは事実だからな」
「それは否定できないか」
「ああ、それにだ」
話がさらに続けられる。
「これで戦勲を挙げるな」
「ああ」
話がさらに動く。
「そうなれば難民達の評価もあがるな」
「確かにな」
この流れは必然だった。新入りが何かしらの功績を挙げなければならないのはどの社会でも同じである。とりわけそれが異邦人であ

るならば余計にだ。
「じゃあ向こうも向こうで義勇軍に入る必要があるのか」
「そういうことになるな」
話がここで繋がった。
「難民全体の為にな」
「命をかけて戦ってか」
「歴史上よくある話じゃないのか？」
冷徹とも取れる意見まで出された。
「こういう話は」
「あるのか」
「ほら、フランスだ」
エウロパの一国であるのは言うまでもない。また今ここで話をしている連合の兵士達がこの国を嫌っていることもまた言うまでもないことだ。
「あの国には昔外人部隊があってな」
「その外人部隊を酷使していたんだな」
「そうさ。義勇軍以上にな」
さりげなくフランスに対する悪口が入っていた。
「連中はそういうのは全然平気だしな」
「エスカルゴ野郎共は相変わらずなんだな」
「昔から性格の悪い連中だぜ」
フランス人に対する蔑称である。他には蛙とも言う。何故蛙と言うかというとフランス人達が蛙を食べるのとその軍服の色が青だったからだ。なお連合ではその蔑称の名付け親のイギリス人達をローストビーフ野郎だの味音痴の貧乏貴族だの言う。こちらもかなり口が悪い。

## 第三十一部第四章　あぶれ者その七

「そのエスカルゴ共がやっていたのか」
「そうさ。外人部隊に入り戦う」
まずはこれが前提だった。
「それで功績をあげたらフランス市民になりやすかったりしたんだよ」
「成程、そうか」
「そういえばこれってアメリカにもなかったか？」
今度はアメリカについて話される。
「アメリカ軍に入って戦えば市民権を得られるってな」
「あったな、そういえば」
「何か近代国家の軍隊とは少し違うがな」
「まあそれはそれだな」
さりげなく連合の中にある国家には甘いのだった。もっともアメリカは連合の中ではお世辞にも好かれている国家とは言えないが。何しろ国家としての性格が二十世紀から殆ど変わっていないのであるからだ。これは中国やロシアに関しても同じでやはり彼等も好まれていない。
「とにかく義勇軍で活躍すればそれだけ彼等にとってプラスになる」
「それか」
「連合市民にもなりやすくなれるし彼等の地位も向上する」
「そこまであるのか」
「だから戦うんだよ、前線で」
話が纏まった。
「命を賭けてな」
「しかし何かあれだな」
ここで一人が寂しげな声を出した。
「あれ？何だ？」

「だからといって命懸けで戦うのは辛いよな」
「そうだよな。誰だって死にたくないよな」
「全くだ」
彼等の偽らざる本音だった。
「死にたくない。本当にな」
「戦争でもな。生きていて勝つのが一番だ」
「その通りだよな」
「それはあくまで連合の考えだな」
だがここでまた一人が言ったのだった。
「連合の考え！？」
「サハラでもやっぱり死ぬのは怖い」
これは否定できなかった。
「しかしだ」
「ああ、しかし？」
「サハラはイスラムだ」
「連合にだってイスラムはあるぜ」
「なあ」
「俺だってそうだぜ」
ここにもそのイスラム教徒が存在していた。
「もっとも酒と豚カツが大好きだがな」
「別にいいだろ、それ位」
「そう言ってくれて有り難いぜ」
笑いながら言う。連合ではイスラムもかなり他の宗教と折り合いをつけまた酒も豚肉もかなりポピュラーになっているのである。もっとも奥さんは大抵一人であるが。
「で、イスラムがどうしたんだ？」
「それだよな」
話がまた戻った。
「そこに何かあるのかよ」
「ジハードだよ」

「ジハード！？ああ、あれか」
「聖戦だな」
流石にこれは彼等も知っていた。イスラム独特の考えの一つである。
「連中にとって義勇軍で戦うことはジハードなんだよ」
「そうなるのか」
「そうさ。それにだ」
さらに話が突っ込まれる。
「死んでも家族の心配はないからな」
「遺族への年金か？」
「それもある」
これは連合の現実での言葉だった。
「義勇軍にもそれは完全に保障されているからな」
「それか？」
「それだけじゃない」
だがそれだけではないというのだ。なお連合中央政府国防省は義勇軍に対しても福祉厚生を完全に保障している。そうした待遇面での差別は一切ないのだ。
「それだけじゃないのか」
「イスラムだが」
話はイスラムのことに移った。
「妻は四人まで持てるとあるな」
「ああ」
「それか」
「そう、それだ」
話はそこに移るのだった。やはりサハラ出身者はサハラから逃れることはできないのだった。これは最早必然と言えるものだった。

## 第三十一部第四章　あぶれ者その八

「何故そうなったかというとだ」
「理由があったのか」
「あるからそう決められたんだろ」
何を言っているんだと言わんばかりの突っ込みだった。
「だからだ。それはな」
「どんな理由なんだ？」
「戦災未亡人の救済だ」
それが理由だったのだ。
「あと孤児のな」
「それか」
「そう、それだ」
彼は言うのだった。
「戦争をすれば人が死ぬのは当然だよな」
「今更何言ってるんだよ、おい」
「当たり前だろ」
連合軍はそれを最小限に抑えることを念頭に置いている。だからこそ義勇軍ができたという一面もあるのだ。戦争をするからには戦死者が出るのはどうしても避けられない。
「だからだよ。軍人が死ぬのはいいさ」
「ああ」
「けれど。残された家族がどうなるかというと」
「それか」
「そう、その通りだ」
話が核心に移っていた。
「未亡人や孤児を救う為にな。だからそうなったんだよ」
「妻は四人まで持ってよし、か」
「あれの理由はそこだったか」

「自分が死んでも家族は助けられる」
これだった。
「コーランでそれが保障されているのならば」
「戦えるというわけだな」
「これでわかったな。だから義勇軍は戦うことができる」
そういうことだったのだ。このことが細かいまでに伝えられたのだ。
「あそこまで勇敢にな」
「確かに勇敢だな」
「義勇軍はな」
「その損害もかなりだがな」
損害の多さを忘れることはどうしてもできなかった。義勇軍は常に前線で戦う為にその損害はどうしてもかなりのものになっているからだ。
「全軍の九パーセントか」
「それだけの血が流れた」
これが現実だった。
「俺達が生きて連合が勝つ為にそれだけの血が流れたんだな」
「異邦人の血がな」
「それを考えると罪深いものだな」
「俺達がだな」
「ああ」
暗い顔をして俯いて頷いたのだった。
「申し訳なく思うがな」
「しかしだ」
だがここでまた言われるのだった。
「俺達だって命をかけて戦ってきたんだぜ」
「俺達もか」
「違うか？」
一人がそこにいる全ての者に対して尋ねる形になっていた。

「俺達だって戦場に出ていたよな」
「それはな」
その通りだった。実際に彼等は戦場に果敢に立ち戦ってきた。やはり彼等も少なくない犠牲を払っているのである。なお連合軍正規軍の損害は全体の僅か三千分の一に過ぎない。それでも百万単位の犠牲ではあるのだが。
「だからだ。胸を張ってもいいんだよ」
「それでいいのか」
「卑屈になる必要はないさ」
こうも言うのだった。
「別にな」
「そうか。別にか」
「戦場で戦ったんだ」
このことがあらためて強調される。
「連中と同じくな」
「そうか。俺達もか」
「だからいいんだよ」
そう言って仲間達を宥めているようだった。
「義勇軍に負い目を感じる理由は俺達にはない」
「俺達にはか」
「少なくとも軍人にはだ」
彼等は戦った。これは間違いない。しかも正々堂々と正面からだ。これで軍人としての対面が保たれたというわけである。感情的な問題だ。

## 第三十一部第四章　あぶれ者その九

「だからいいんだよ、俺達はな」
「あくまで俺達はか」
「政治家は別だがな」
連合という国の特色がここでも話に出た。
「政治家はとにかく俺達に犠牲が出なければいい」
「そして勝てればか」
「そういうことだ。けれどな」
「けれど！？」
「だからといって後ろめたさを感じていないわけじゃないだろうな」
良心というものに注目した言葉であった。
「それでもまずは目的は果たしているな」
「目的か」
「政治は目的だ」
これもまた真理だった。政治という世界では目的を果たすことが何よりも重要なのだ。言い換えれば結果が全てというわけである。
「それを果たすかどうかだが」
「義勇軍はそれを果たすことができる存在ということか」
「言い換えれば駒だ」
かなり意地の悪い言葉になっていた。
「連合軍の損害を減らし勝利をもたらす駒だ」
「駒か」
「そう、強力極まりない駒だ」
こうも言われる。
「それが連中ってわけだな」
「何度も話すことになるがそうなるな」
「政治的には有り難い存在なんだな」
「そう、政治的にはな」

連合では軍事は他の勢力に比べてとりわけ軍事が政治的なものになっている。これもまた高度に発展した民主主義社会の特徴であると言える。
「それでいいんだ」
「彼等には様々な特典を用意しておいてか」
「それ位安いんだろうな」
突き放した言葉になっていた。
「勝利と犠牲を抑える為にはな」
「あまりいい話じゃないな」
ここまで聞いて一人が述べた。
「どうにもこうにもな」
「けれどそれが事実だ」
これは否定できなかった。
「そのおかげでエウロパとの戦争には勝てたし」
「俺達は生きて帰れたか」
「異邦人の助けでな」
最後にこの言葉が出て終わりとなった。彼等についてはこれで終わりだった。しかし同じ頃義勇軍上層部の間では。今後について深刻な話になっていたのだった。
あるホテルの一室に彼等は集まっていた。そしてそこで密談を行っていた。部屋の中に席を並べ円座になって向かい合って座っている。
「それでだ」
「うむ」
話は既に進められていた。
「この件についてだが」
「思ったようには進んでいないか」
「残念なことにな」
話にいる中の一人が答えたのだった。
「八条長官は理解を示されているが」

「あの長官はか」
「話のわかる御仁である」
八条は連合中央政府の閣僚達の中ではかなり良識派であり話のわかる人物であると言われている。そしてそれは間違いではないのもまた事実だ。
「しかしだ。どうにもな」
「連合全体ではか」
「特に背広組だ」
所謂官僚達である。
「彼等はどうも難色を示しているな」
「彼等はか」
「そうだ。背広組と言っても様々な派閥があるが」
「複雑な話だな」
「連合だからな」
自分達とは違うというのだ。この言葉から彼等が本来は連合にいる者ではないことがわかる。つまり彼等は連合から見れば異邦人というわけだ。
「おのずと話は複雑になる」
「我々の話でもだな」
「そうだ」
断言により返事が返ってきた。

## 第三十一部第四章　あぶれ者その十

「その背広組のうちで元々我々の存在をよく思っていない派閥があった」
「所謂国粋派か？」
「国粋派でもない」
それについては否定された。そもそも連合は国家連合である。それで国粋派と言うと各国にあくまで忠誠を尽くす者達ということになる。そうではないのだ。
「言うならば中央政府原理主義か」
「中央政府のか」
「そうだ。まあ原理主義というところまではいかないが」
流石にそこまで純粋培養な考えはないということであった。
「それでもな。我々の存在を快く思っていない者達もいる」
「おかしな話だ」
一人がここまで聞いて闇の中で顔を顰めさせた。
「我が義勇軍を作ったのは誰だ？」
「彼等だ」
答えはこうであった。
「彼等以外の何者でもない」
「そうだ。何故その彼等がよく思わないのだ？」
それがわからないというのだ。これは確かに一面ではそう言えるものであった。
「我々の力が必要だから作ったというのに」
「だからだ。彼等の中にも色々な考えの持ち主がいる」
このことがまた話された。
「その中には」
「我々の存在を快く思わない者達がいると」
「それはわからないか」

「残念だがな」
その彼は同志の言葉に漆黒の闇の中で首を横に振ってみせた。
「わしがいたのはブリーグ王国だからな」
「ふむ、ブリーグ出身だったか」
「ここの連中が言うには専制国家だった」
サハラではそうした国家も存在してきたのである。全ての国が議会を持ち共和制若しくは立憲制にある連合やエウロパとはここが違うのである。
「だからだ。様々な考えがるというのはな」
「わかりにくいか」
「議論することがなかった」
専制国家ではこうなることが多い。
「全て陛下が決められた」
「そうだったか」
「派閥もなくな。しかし」
「ここでは違う」
話は何時の間にかそのブリーグの話も混ざってきていた。
「様々な議論があるのだな」
「そういうことになる」
「それが民主主義というものだ」
「わかっているつもりだったが」
これは一応は、というニュアンスであった。
「それでもな。どうにも」
「慣れていないか」
「慣れない」
こう答えた。
「そういうことになるか。しかしだ」
「しかし？」
「少なくともその連中は我々の存在は不要だと思っているのだな」
「その通りだ」

これについても答えが出た。
「連合軍は正規軍だけでいいと考えているのだ」
「ふむ。ならばそれでいいのではないのか？」
「全くだ」
突き放したシニカルな言葉が出された。
「そもそも我々は助っ人という扱いなのだしな」
「その割りにいつも死地に送られる」
「それもまたよし、だがな」
アラブの戦士としての誇りによる言葉だった。これと同じ様な考えはエウロパにもある。所謂騎士道だ。しかし連合にはない考えであるのだ。
「しかし。それでそう言われるのは」
「やはりいい思いはしない」
「全くだ」
戦ってその存在を否定されるのならば当然だった。これは当然の感情であると言えた。
「それならば我等も軍を辞めるか」
「そうだな。義勇軍を辞めて元のなただの難民に戻る」
「それもまたよしか」
「だが」
しかしここでまた異論が出た。

## 第三十一部第四章　あぶれ者その十一

「だが？」
「我々に感謝している派閥もある」
「それもあるのか」
「当然我々を利用すべしという派閥もある」
そうした派閥も当然あるのだった。つまり連合軍の絶てにし剣にしようという派閥である。これは政治的な打算による判断なのは言うまでもない。
「彼等が最も多いか」
「最大派閥か」
「嫌か？」
「いい思いはしない」
これまた素直な感情であった。
「利用されるというのはな。やはりな」
「だが彼等は特典についても保障してくれている」
「あれか」
「そう、あれだ」
多くの給与と名誉、それに帰化への簡易な手続きだ。他にも様々な特典を用意しているのが彼等なのである。背広組の最大派閥なのだ。
「あれを保障してくれているのも彼等だ」
「利用するだけの見返りは用意しているということだ」
「聞いていていい気持ちはしない」
これは感情に基く言葉である。
「しかしだ。冷静に考えれば我々にとって悪い話ではないな」
「その通りだ」
これは事実であった。
「結果があるのならな。だが」

「だが？」
「いや、これは言っても無駄か」
彼はこれ以上は言おうとはしなかった。
「政治は結局のところ互いを利用し合いそこから利を得るものだからな」
「それが我々にとってプラスならばそれでいいであろう？」
「その通りだ」
冷静な結論だった。
「ではいいか」
「納得したな」
「感情では納得しないが理性では納得した」
やはり政治的な言葉であった。
「だからこれはいいとしよう」
「そうか。それでは話を移すぞ」
「うむ」
こうしてまた話が進められた。
「もう一つ派閥がある」
「今度はどんな派閥だ？」
「我々に対して同情的だ」
「同情的か」
「そうだ。差別して扱うのはどうかというのだ」
こうした考えも連合内部、国防省にはあるのだった。
「我々をな」
「それが同情か」
「良心とも言う」
こうも言い換えられる。ここでも良心というものの存在が出たのだった。
「その良心が彼等をこう言わせているのだ」
「我々に対する良心か」
「そういうことになる。義勇軍への差別的な待遇を止めさせようと

いうのだ」
「しかしだ」
この意見に対してもまたすぐに異論が出された。
「我々は法律的には差別を受けてはいない」
「うむ」
「むしろ待遇は正規軍よりいいのではないのか？」
「確かにな」
「それはその通りだな」
これについても話される。実際に待遇という面では義勇軍は正規軍よりはかなりいいのもまた現実だった。そうした面での保障は国防省もまた怠っていないということだ。
「しかし常に矢面に立たされるというのは事実」
「うむ」
これもまた紛れもない現実であった。
「そうしたことをなくそうというのだな」
「その通りだ。しかしだ」
「そのしかしだな」
彼等の話は続く。
「良心という問題が出たな」
「良心か」
「我々に同情的な派閥は良心により主張していると言ったな」
「如何にも」
このことははっきりと再確認された。彼等の中で。

## 第三十一部第四章　あぶれ者その十二

「では我々、義勇軍自体を快く思っていない一派だが」
「彼等か」
「彼等には良心がないのか？」
次に話されたのはこの問題であった。
「我等をよく思っていない一派は。良心がないのか」
「いや、決してそうではない」
それもまた否定されるのであった。しかもすぐに。
「彼等にも良心はある」
「あるのか」
「良心のない人間なぞ滅多にはいない」
ごくごく稀にいるとしてもだ。そもそも良心がない人間というのは所謂人格障害者の類である。この時代においては即座に治療される種類の障害であるとされ最も危険な類の障害者であるとされている。何故なら人格障害者は容易に他者に実害を与える存在であるからだ。
「殆どの人間には良心が存在している」
「彼等にもか」
「当然だ。彼等はこう考えている」
そして今話されるのであった。彼等の考えが。
「我々を祖国に帰そうというのだ」
「祖国にか」
「つまりサハラだ」
かなり広範囲な意味での祖国であった。文明であると言っていい。
「サハラに帰そうというのだ。我々を」
「義勇軍を解散してか」
「それどころか難民全員をだ」
「難民全員を！？」

「うむ」
その質問にすぐに返答が述べられた。
「そうだ。難民全員をな」
「十億の難民をか」
「また大きな話だな」
「連合は四兆だ」
またしてもこの連合の人口が話に出る。とどのつまり人口というものがその国の国力を考慮するうえで非常に大きな要素の一つである以上これが話に出ない筈がなかった。
「四兆から見て十億だ」
「微々たるものだというのだな」
「その通りだ。つまり」
前置きから本題に入る。
「その十億を然るべき時にサハラに帰す」
「つまり我等の故郷に」
「そういうことだ。帰そうと考えているのだ」
「それが良心か」
「我々は故郷を恋しがっている」
誰もが故郷を愛している。こう考えるのは自然であると言えた。
「ならばそこに何もなく帰す。それは悪か」
「いや、善だ」
すぐに結論の一つが出た。
「善以外の何者でもない。それはな」
「そういうことだ。彼等もまた己の良心に従っているのだ」
「良心が複数あるのか」
「百人いれば百人の良心がある」
古来より言われてきた言葉である。
「そういうものだ」
「今は良心が三つか」
「我等を利用しようという側の良心は？」

これについても話された。
「それは一体どういったものか」
「これは我等に功績を与えようというものだ」
「功績か」
「その通り。連合に入るには功績があった方が入り易いな」
「うむ」
これもまた事実であった。異邦人が新しい社会に入るには何が必要か。そこにいる彼等に受け入れられる何かがあればいいのだ。その何かが功績というわけである。つまり功績とは時として貴重なパスポートともなるのである。無論それだけには留まらないのだが。
「そういうことだ。それをくれる為にだ」
「戦場でか」
「我々は千年の間戦ってきた」
言うまでもなくそれがサハラの歴史である。
「ならば戦いが得意だな」
「少なくとも連合の者達よりはな」
「自信がある」
自然と答えが彼等の口から出された。

## 第三十一部第四章　あぶれ者その十三

「それについてはな」
「そういうことだ。得意分野でこそ功績を挙げる」
最も簡単な方法である。何時の時代においても。
「彼等は我々にそれを期待していてのことだ」
「そういうことか」
「無論さっきにも言った理由がある」
正規軍の損害を減らしたいという理由だ。人は良心によってのみ動くわけではない。そうした辺りは複雑に絡み合うものなのである。
「彼等は自分達のことも考えている」
「では良心は関係ないのではないのか？」
「しかしそれはあるのだ」
これもまた否定されたのであった。
「良心もまた重要な要素となっている」
「利己心と共にか」
「それを言えばだ」
話がさらに複雑なものにさせられた。だがそれは政治がわかっていれば容易に理解できる話であった。少なくとも連合ではそうであった。
「我等に対して同情的な一派もだ」
「彼等もまた利己心があるか」
「彼等のバックには様々な人権派団体がいる」
「人権派！？何だそれは」
これはサハラの者達には聞き慣れない言葉であった。戦乱に覆われた社会においてはそもそも人権について語る余裕も乏しいから当然であった。
「人権はわかるな」
「それはな」

流石にこれはサハラでもよく知られた言葉である。
「言うまでもない」
「サハラにもあるからな」
連合から見れば最低限だが確かにあるのだった。
「それを守り拡大しようという考えの者達だ」
「そういうものが連合にあるのか」
「本当に色々なものがあるな、連合には」
「その彼等が言うのだ」
少し長い前置きの後でまた話になった。
「我々の人権を守れとな。それと共にその一派に様々な働きかけをしている」
「働きかけか」
「金銭や接待もある」
これは一歩間違えば癒着や汚職とみなされる話であった。だが連合ではこうした話が他の勢力の社会より多い傾向にもあるのだ。それがいいか悪いかは別としてだ。
「その中にはな」
「そういうことか」
「そうだ。そうした事情もあるのだ」
「そうした事情もか」
「人は善意のみでは動かない」
良心を善意と言い替えてきていた。
「決してな。そこには個人的な事情もある」
「私利私欲でもか？」
「そう。私利私欲でもだ」
今はそれがはっきりと肯定されたのであった。
「それはしっかりとした理由になるのだ」
「汚い話だな」
「汚い話でも理由にはなる」
随分と醒めた言葉であった。だが次に出された言葉はさらに醒め

た言葉であった。
「その人間の中ではな」
「そうか。そうなるか」
「それに確かに大儀としては立派だ」
これがまた話を複雑にされるのだった。
「難民は弱者だ」
「ああ、それはな」
「どうしてもそうなるな」
難民が弱者であるという認識は何時の時代でも、当然ながらこの時代でも不変のものであった。身を置くべき祖国をなくし流浪の民となっている。当然確かに身を置く場所はない。これを弱者と言わずして誰を、何を弱者と言うのかといった話になるのも道理である。
「この場合は我々か」
「面白くない話だが」
中には不快感を露わにする者達もいた。
「我々が弱者とはな。歴戦の戦士である我々が」
「だが難民なのは事実だ」
これに対しては現実で反論が為された。
「それはな。どうあがいても今のところはな」
「変わらないか」
「それこそ帰化するか帰る他ない」
連合側が提示している事柄であった。どの派閥も必ずどちらかに寄っている。これは先程よりこの場において話されていることである。

## 第三十一部第四章　あぶれ者その十四

「難民でなくなる為にはな」
「帰化か」
「既に多くの同胞が帰化しているな」
「ああ」
その帰化についての話がはじまった。
「サハラの動乱は長い」
「千年だ」
千年の動乱と千年の繁栄。サハラの歴史と連合の歴史。見事なまでのこの好対象にあるものもまた現実だった。そして彼等こそこの二つの現実の狭間にいる存在なのであった。
「千年の間に難民は多く生まれた」
「確かにな」
「東方は長い間平穏だったとはいえ」
これはハサン王国の力によるところが大きかった。今でこそオムダーマン、ティムールとの戦いでその地位が揺らごうとしているが数百年の間東方を支配してきたのは事実である。
「それでも。とりわけ北方では」
「戦乱が続いた」
エウロパの侵略もこの中に入れられている。
「多くはサハラに流れたがな」
「こうして連合にいる者達もいる」
他ならぬ彼等だ。
「そして連合に帰化した者達も多いというわけだ」
「連合に入るのか」
「彼等の中に」
「嫌か？」
「正直に言わせてもらおう」

彼等の中の一人の率直な言葉だった。
「連合は異郷だ」
「そうだ、ここはサハラじゃない」
「連合だ」
他の者達のうちの数人もそれに続いた。連合という社会は彼等のいたサハラとは違う。難民としての立場はこのことを何よりも実感する立場でもあるのだ。
「連合は。好きにはなれない」
「そうだ。サハラではない」
個人的な嗜好だった。
「ここはサハラではない。連合だ」
「あの砂と岩の星はないのだ」
サハラの多くがそうした惑星なのだ。連合から見ればそうした惑星はすぐに開発の必要がある惑星だ。しかしサハラから見ればそうではないのだ。これもまた文明の見解の相違というものだった。何につけてもこの相違というものが出て来るのが文明というものである。
「何処にもな」
「緑もいい」
緑がなくては人は生きてはいけない。水もだ。
「しかし。作られた緑はいらない」
「水もだな」
「その通りだ」
これがサハラの考えというわけだ。連合のそれを作られたものだと断定し否定してしまう。それが正しいか間違っているかはまた別の問題だ。
「やはり。我々がいるのはサハラだ」
「出来れば。サハラに戻りたいが」
「しかしな」
「ああ」

ここで彼等は顔を見合わせるのだった。
「今は帰られないな」
「無理だ」
今のサハラの状況が大きく関係していた。
「ハサンとオムダーマン、ティムールか」
「戦争は激しさを増しているな」
「今のところハサン優勢か？」
「いや、情勢が変わった」
軍人である彼等はそれを的確に見抜いていた。見抜くだけの目がなくてが軍人、しかも指揮官になることはできない。少なくとも極端に無能ではなれはしないのだ。
「アヤグーズが敗れたな」
「ブルコルジ女王がか」
「そしてオムダーマンも勝利を収めた」
ハサン側の敗北が続いているというわけだ。
「こうまで敗戦が続いてはな。如何にハサンといえどもだ」
「だがハサンにはまだ余力がある」
これもまた現実である。

## 第三十一部第四章　あぶれ者その十五

「まだな。しかしだ」
言葉がさらに続けられる。同時に分析も。
「アヤグーズの敗北は大きいだろうな」
「だがアヤグーズはまだ生きている」
国としてはまだ存続しているということだった。これは確かに大きい。しかし既にそれは大きな要素ではなくなっているということであるのだ。
「首都アッサルームはまだあるぞ」
「アッサルームはまだあるがな」
「おそらくはそこに戦力を集結させている筈だ」
首都こそはその国の心臓である。心臓を失えば生物はそれで終わりだ。国家の中には複数その心臓を持っている国家があるにはあるが。なお連合にしろそうした心臓を幾つも持っている国家であると言える。太陽系の他にもそうした機能を持っている星系が各国に存在しているのだ。このことは防衛上極めて大きいと言える。
「まだ。終わらないだろう」
「しかしコムでは敗れた」
シャイターンが収めたあまりにも鮮やかな勝利のことだ。
「正直。あそこまで鮮やかに勝つとは思わなかったがな」
「それは私も思う」
「私もな」
誰もがシャイターンのあの勝利は予想していなかったのだ。シャイターンは簡単に言えば天才だ。幸か不幸か彼等は天才ではないのだ。軍事的才能や知識は確かに備わっているがそれは決して天才の域には達していないのだ。天才とはある意味神に近いものがあるのだ。
「流石に敗れるか苦戦はすると思っていた」

「しかし彼は勝った」
「鮮やかなまでに」
これが語られる。
「それによりアヤグーズは窮地に陥っている」
「それだけではない」
今度は戦局全体を見て語られる。
「西方の戦局自体が」
「これまでは少なくともハサン優勢だった」
少なくとも、ではある。グラフで示せばハサンのそれが上にあったのだ。例えそれが下がりティムールのそれが上がってきてはいてもだ。
「それがあの戦いでな」
「変わった」
「少なくとも互角になった」
これだけでも非常に大きいのだ。
「西方での双方の力関係はな」
「そして南方も」
ここではハサンとオムダーマンの戦いが行われている。この南方においてもシャイターンと同じく戦争の天才がいるとされている。
「アッディーン副大統領はハサンの防衛ラインを次々と突破している」
「五重の防衛ラインだったな」
「そうだ、五重だ」
サハラ南方の戦局に関する情報も入っていたのだ。既に。
「五重の防衛ラインのうちの二つが破られた」
「二つか」
「あと三つだ」
そしてこう言われた。
「あと三つ防衛ラインがあるがな」
「だが。危ないな」

一人が剣呑な声をここで出した。
「危ないか」
「そうだ。確かにまだ防衛ラインは三つある」
「そうだ。三つだ」
彼等はここではハサン側に立った話をしていた。
「三つあるがな。先の二つの防衛ラインの突破のされ方を見ているとだ」
「あれはな。私も驚いた」
「私もだ」
また口々に言葉が出されていく。
「コロニーレーザーを持って来てそれで攻撃を仕掛けるとはな」
「しかも艦隊行動に合わせてだ」
「確かにコロニーレーザーは威力がある」
これはもう言うまでもないことであった。
「あれで攻撃すればかなりの防衛ラインでもたまったものではない」
「その通りだ。しかしだ」
威力が話されたうえで他のことも話されるのだった。
「コロニーを持って来ることはまず無理だった」
「少なくとも我々はそう考えていた」
彼等は話す。
「防衛ライン突破、要塞攻略といえばだ」
「まず砲艦やミサイル艦で攻撃を浴びせる」
これは連合軍の攻撃方法であるがサハラにおいてもおおむね変わらないことである。砲艦及びミサイル艦の役割は敵艦隊への攻撃の他にこうしたものもあるのだ。
「それから戦艦や重巡の攻撃も加えて」
「その後に揚陸艦を降下させる」
地上部隊で制圧するというわけである。ただし連合軍ではまず最初にティアマト級巨大戦艦での巨砲での砲撃が浴びせられる。これはコロニーレーザーよりも強い威力を持っている。

「そうした流れだが」
「だが彼等はコロニーレーザーを持って来た」
「それで防衛ラインも崩した」
あらためてこのことが話される。

## 第三十一部第四章　あぶれ者その十六

「凄まじい攻撃だがな」
「だがそれ以上にだ」
話がさらに進められていく。
「その発想がわからないな」
「わからないどころではない」
これは驚愕の言葉であった。
「本当に。コロニーレーザーを前線に持って来る」
「労力だけでも想像を絶する」
本来コロニーは惑星や衛星の周りを回っているものだ。それを艦隊と共に運用するとなるとそれだけでかなりの労力を要するのだ。コロニーは艦艇と違うのだから。
「それを為しえたアッディーン副大統領」
「やはり只者ではない」
このことが認識されていく。
「それによりハサン軍の防衛ラインを突破するとは」
「ハサン軍も予想だにしなかったに違いない」
「それではだ」
ここまで話されたうえでそれまでの話が一旦整理された。
「ハサン軍は劣勢に傾こうとしているな」
「うむ、そうなるな」
「このままでは危険だ」
やはりハサンに立って話が為されている。これもまたある意味では重要なことであった。
「安定政権であるハサンが倒れれば」
「我等の帰還どころではないぞ」
「帰るとすればだがな」
無事に祖国に帰るには安全が保障されていなければならない。今

までは少なくとも東方はハサンがそれを保障していた。しかしそれが大きく揺らいでいる。だから彼等は今このことを問題視して話をしているのである。
「ハサン似は安定して欲しい。いや」
「そうだ」
話がさらに踏み込んだものになった。
「出来ればサハラを統一して欲しいものだが」
「オムダーマンもティムールもわからないところがある」
「とりわけティムールはな」
彼等の中にはティムールに対して疑念を抱いている者もいた。そしてそれが何故なのかも彼等は自分達でよくわかっていたのであった。
「シャイターン主席。どう思うか」
「英雄だそうだな」
「そう、英雄なのは間違いない」
彗星の様に姿を現わしエウロパ軍の侵攻を防ぎ一国の主となり北方を統一した。瞬く間にそれだけのことを成し遂げた彼は今やサハラの英雄となっているのだ。このことは遠く連合にも伝わり当然難民である彼等の耳にも入っているのである。しかしであった。
「だがな。危険だな」
「英雄なのは間違いない」
話がさらに進められる。
「しかし策略を好む」
「目的の為には手段を一切選ばない」
シャイターンが連合でよく言われていることである。サハラではそれはあまり考慮されていないが離れておりしかも部外者である連合ではこのことはよく認識されていたのだ。
「しかも野心家だな」
「サハラを統一したならばさらに何かをするのではないのか？」
彼等はこのことを危惧していたのである。

「連合との戦争を開始しはしないか」
「若しくはマウリアと」
「そういえばだ」
ここでも一つの現実が語られる。
「連合は今サハラとの境に防衛ラインを敷こうとしているな」
「うむ」
「密かにだがな」
これは今は連合では殆ど注目されてはいないが生粋の軍人である彼等は気付いていたのだ。軍人だからこそ気付くことであるのだ。
「備えは進めているな」
「サハラに対してな」
「万が一ということか」
「やはりシャイターン主席を警戒してのことか」
「ティムールだけではないだろうがな」
なおこの防衛ライン施設は名目上は難民の保護となっている。だがこれに気付いている者達はそれが方便だということも見抜いているのである。
「オムダーマンもな」
「とりわけティムールだな」
「やはりティムールか」
「ハサンが滅びる」
この仮定が今話された。

## 第三十一部第四章　あぶれ者その十七

「そうなればティムールかオムダーマンが東方に出て来るな」
「東方が統一されるとは限らない」
「分割されるか」
「その場合はより複雑になる」
彼等はこれからのサハラを見て話をしていた。
「オムダーマンにしろティムールにしろ安定政権になるのかどうか」
「ハサンの様にか」
「どう思うか」
彼等は今度は軍事からさらに発展した政治的な話を進めていた。軍事とは政治の一手段である。だから政治にも話が及ぶのであった。
「両国共急激に発展した」
「拡大は驚くべきものだ。しかしだ」
「維持は拡大よりも困難だったな」
「とりわけ軍事で拡大したものはそうだな」
「うむ」
連合の様に開拓で拡大した場合はその維持はそれ程労力を要しない。何故ならそこには人はいないからだ。しかし元から人がいた場所ならどうなるか。そしてそれがかつての敵対勢力に属していたならば。それを考えると侵略し占領した地域の維持は容易ではないのだ。
「彼等は軍事により拡大した」
「そして今は内政よりも拡大を意識している」
「果たして。それがどうなるかだが」
「占領地の反乱」
一つ仮説が出された。
「考えられると思うが」
「旧ハサン領のだな」

「しかもだ。それが複数広範囲に渡る」
「尚且つオムダーマン、ティムール双方にだ」
「そうなれば混乱は尋常なものではなくなる」
「では。尚更帰還は無理になるな」
さらに気分が暗澹たるものになる現実であった。
「ではやはり」
「帰化か」
何人かの顔が歪んだ。
「嫌な話だがな」
「我々にとってはな」
「しかしだ」
だが。問題は彼等の間だけではないことがさらに問題であった。
「子供達は。連合になついている」
「こちらもだ」
「私のところもだ」
人は子供を産むものだ。だからこそその子供達が問題になるのも当然だった。彼等の考えだけで収まらなくなってしまっているのだ。
「連合のテレビ番組を見て」
「連合の本を読んでいる」
ここにはそれだけに留まらない重要なポイントがあった。
「銀河語を話してな」
「家でも銀河語を使っているぞ」
そういうことだった。サハラはアラビア語を地球にいた頃から使っている。コーランもアラビア語でなければならないとされているのだ。連合ではコーランは銀河語だけでなくそれぞれの国の言語でも訳され学ばれているがそれとは全く違っているのである。これが連合だ。
「銀河語の方がアラビア語よりも多いな」
「困ったことだな」
「しかもだ」

ここで問題は彼等の根幹にも関わるものになった。
「コーランの言葉を銀河語で話していた」
「何っ！？」
「それはまことか」
誰もが今の言葉には驚きを隠せなかった。ムスリム、サハラのムスリムにとってこれは由々しき事態なのだ。しかも極めて深刻な憂慮すべきことなのだ。
「それではムスリムではないぞ」
「アラビア語でコーランの言葉を話さないなどとは」
「当然怒った」
このことを最初に話した彼は深刻な面持ちを崩してはいなかった。
「殴った。だが妻に止められた」
「何とだ？」
「連合ではこれが普通なのだとな」
「馬鹿な」
「連合とは違う筈だ」
こう言うことそのことこそが彼等が連合にいているという意識がない何よりの証拠だった。連合とは違うと認識している言葉に他ならないからだ。
「それでどうして連合など」
「貴官の妻は何を考えているのだ」
「妻は連合への帰化を望んでいる」
歯噛みしつつこのことを語るのだった。

## 第三十一部第四章　あぶれ者その十八

「それでだ。銀河語で話して何が悪いということなのだ」
「そうか。軍の高官の妻までもがか」
「では。我々の近辺にも」
「サハラか連合か」
二つの国はあらためて認識される。
「我々はどちらかを選ばなければならないのだな」
「そうだな。そういえばだ」
「そういえば？」
「我々の国を作ろうという動きがあったな」
その話が出て来た。これについては彼等も聞いてはいた。
「我等サハラからの難民が連合に築く国のことだが」
「それか」
「知っているな」
「話は聞いている」
中にいる一人が答えはした。
「一応はな。実現するかどうかはわからないが」
「その国ならどうか」
あらためてそのことについて話されるのだった。
「確かに連合にいる」
「うむ」
このことはどうしても否定できない。
「しかしだ。我等の国だ」
「我等の国か」
「そうだ。我々の国だ」
自分達の国であるというこのことがしつこいまでに繰り返される。
そしてそれは彼等の心に深く刻み込まれていくのであった。
「我々の国を築くのだ。これはどうか」

「悪い話ではないな」
「そうだな」
これには多くの者が乗ったのだった。
「サハラの伝統を守ることができる」
「サハラに戻らなくともサハラでの暮らしを再現できる」
「今の様に。隠れてするのではなくてな」
こう話されていくのであった。
「堂々とそれを行うことができるようになる。難民ではなくその国の者としてな」
「そうなればいいのだがな」
「しかし。果たして」
「それに賭けるか」
一人が呟く様にして言葉を出した。
「賭けるのか？」
「そうだ。若し国を持てれば我々は難民ではなくなる」
「難民でなくなる」
このことだけでも心理的に非常に大きいのだった。
「その国に生きることができる。胸を張って」
「そうなればいいが」
「だが。まだ話が出ている段階だ。バチカンとはそこが違う」
「バチカンとは違うか」
「そうだ」
既にバチカンはその星系まで決定され移転の準備が進められていた。移転は最早時間の問題でありそれに基いて話が進んでいたのだ。
「しかも彼等は完全に宗教だ」
「うむ」
バチカンこそは人類社会で最も宗教的な存在である。それと共にかなり政治的な存在でもあるのはこの時代でも同じではあるが。
「我々は違うな」
「戦うことによってしか己の居場所を築けない」

「哀れな異邦人だな」
自嘲の言葉まで出された。
「しかし国が出来れば。まだ戦わなければならないにしろ」
「胸を張れる」
「難民ではなくなるからな」
「是非共その国が生まれて欲しい」
彼等の切実なる願いだった。
「実現出来るのならな」
「そうだな。そうあってくれればな」
「それでだ」
彼等はさらに話を進めていった。

## 第三十一部第四章　あぶれ者その十九

「我々軍人として出来ることがあればそれに協力していくか」
「軍人としてだな」
「そう、軍人としてだ」
本来は政治家の仕事であるが軍人として何が出来るか。彼等は今度はこのことを考えだしていたのである。話はさらに動いていた。
「あればやって行こう」
「そうだな。それはやはり」
「武勲か」
行き着くことはそれだった。
「武勲を挙げていくしかないか、我等は」
「それではだ」
意を決した顔になって話していく。
「エウロパとの戦争は終わったが今度は」
「連合内のテロリストや海賊」
「特に海賊か」
仕事は探せば幾らでもある。どの世界でも言えることであるがこれはここでも同じであった。幸か不幸かそういうことであった。
「奴等の掃討も志願していくか」
「では国防省に進言していこう」
「うむ」
話はそこにも至った。
「ではそういうことでいいな」
「宇宙海賊及びテロリストへの掃討任務」
正確に言えばこうなるのだった。
「それへの参加を国防省に提案しよう」
「そうだな。それではそれが決定したところで」
「話を終えようぞ」

「終わるか」
「不服か？」
「いや」
それは否定されたのであった。
「もういい頃合いだしな。終わろうぞ」
「わかっているではないか。それではだ」
「しかしだ」
だが言葉は言い加えられた。
「これで解散というのも面白くはないな」
「面白くはないか」
「そうだ。だからだ」
一人の言葉が他の者達をリードしている状況であった。その状況のまま話が続けられていく。それは彼等も何かを期待しているからであろうか。
「食べないか、何か」
「食べるのか」
「そうだ。折角サハラの者達が集まっているのだ」
これが一つの条件であった。
「だからだ。ここはサハラのものを食べようぞ」
「ふむ。悪くはないな」
「確かに」
食事と聞いて気分を悪くしない者はいない。それは彼等も同じである。なお連合は食材も料理もサハラと比べてかなり豊富なものとなっている。
「では食べるか」
「問題はそれが何かだ」
「まずは羊を焼いたものだ」
やはりサハラといえば羊であった。
「サハラ風に香辛料を効かしたものをな」
「ふむ。いいな」

「だがそれだけではあるまい」
「後はクスクスだ」
連合でもよく食べられるがやはりサハラが本場だ。麦を粉状、ライスに近いようにして皿に盛りそこにカレールーに似たソースをかけたものである。
「野菜もある。こちらは炒めたものだ」
「悪くないな。夕食になるか」
「全員の分はあるな」
「無論。デザートは三角のドーナツだ」
それもあるのだった。
「サハラ風のな。蜜をたっぷりとかけただ」
「アラビアンナイトに出たあれだな」
「そう、あれだ」
既にその時からサハラの料理は形ができていたのだ。なおアラビアンナイトの時代アラブは世界の最先進地域でありその料理も非常に豪勢なものであった。
「あのドーナツだ。どうだ」
「酒もあるな」
「ワインがある」
ワインであった。
「赤だ。どうだ」
「さらにいいな」
「では。是非」
「全員か？」
「無論」
返答は自然に返って来た。
「では頼む。人数分な」
「楽しくやろうぞ」
「わかった。それではだ」
早速ホテルの電話が取られた。そこで注文というわけだ。

「ルームサービスでいいな」
「ここで食べるのか」
「嫌か？」
「いや、致し方ないな」
「それはな」
彼等はすぐに納得したのだった。というよりは今の彼等の立場を考えれば納得するしかなかった。そういった状況であるのだ。

## 第三十一部第四章　あぶれ者その二十

「何しろ我々はここにいることにはなってはいない」
「表向きはな」
つまりは密談というわけである。
「それではな。ここで食べるのも」
「致し方ないということになる」
「そういうことだ。それでだ」
一人がさらに話を続ける。
「頼むぞ。いいな」
「うむ」
「そしてだ。ワインだが」
何故かワインについてはここでまた話された。
「一つ考えがあるのだが」
「考え！？何だ」
「いいワインだ」
彼は楽しげに笑いながらこのことをそこにいる面々に話した。
「我々の分もあるがここで一本置いておきたい」
「一本か」
「そうだ、一本な」
この一本というのを強調してきていた。
「置きたいのだがどうだ」
「それはいいがまたどうしてだ？」
中にいる一人がそれについて尋ねた。
「またどうしてキープするのだ」
「そうだな。それが気になるな」
「どういうことだ？」
他の者達もそれについて問うてきた。
「我々の飲む分は既にあるというのに」

「どうしてだ」
「決まっている。あの方の為だ」
語る声が笑っていた。
「あの方に送りたいのだ」
「あの方？ああそうか」
「あの方だな」
ここで彼等はそれが誰かわかったのだった。察したので頷いていた。
「それなら問題はないな」
「確かにな」
「何度も言うがいいワインだ」
このことがまた強調される。
「我々だけで飲むのは勿体ないからな」
「そうだな。それは確かにな」
「いいものは皆で味あうものだからな」
楽しげに笑っての話になっていた。先程までとは違いかなりリラックスしたものになっている。やはり食べ物になると明るくなるのはサハラも同じようだ。
「では一本余計に頼むか」
「そうしよう。流石に料理までは無理だが」
「まあそれは仕方ないな」
「それは我等だけで味あうとしよう」
笑いながらの言葉であった。
「羊に野菜にクスクスか」
「それにドーナツだ」
デザートまで話される。
「いい組み合わせだな」
「そうだな。羊はやはりいい」
一人の言葉が目を細めさせるものだった。
「連合でもよく食べられているがそれでもな」

「料理が違うからな」
「そうだ。それが大きい」
これがまた話される。とかくサハラと連合では料理までが全く違うのだ。これは文明の違いの一つでもある。料理もまた文明なのである。
「特に羊の刺身はだ」
「ああ、日本のか」
一人が露骨に嫌そうな声をあげる。なお既に電話で料理の注文はしている。後はそれが来るだけだ。この待つ時間も話をしているのだ。
「日本人のあれはわからないな」
「魚を生で食べるのは聞いていたがな」
「うむ」
「恐竜や肉まで生とはな」
「羊だけではないしな」
日本では羊の刺身もあるのだ。これは山葵ではなく大蒜や生姜を醤油に入れてそれで食べる。馬刺しや牛刺しと大体同じ食べ方である。

## 第三十一部第四章　あぶれ者その二十一

「不気味な食べ方だ」
「豚もそうして食べるしな」
「豚を食べるのはまだ許せるが」
なおサハラでは豚は食べられない。連合のムスリムが彼等の神であるアッラーに一言謝罪してから食べているのとは全く違っている。
「それを生となるとな」
「しかもどうも連合全体でこの食べ方はあるようだしな」
「生か」
「そう、生だ」
「豚だけではない」
こう話が進められていく。
「他のものもだからな。これが」
「連合の食事には驚かされることが多いが」
「全くだ」
異文化の巡り合いだからこれは当然であった。
「しかし。本当に生で羊を食べるとはな」
「驚く他ない」
「しかもだ」
彼はまた言った。
「食あたりを恐れていないな」
「豚にしろそうだな」
「我々が何故豚を食べないのか知らないわけではあるまい」
ムスリムが豚を食べないのにははっきりとした理由があるのだ。それは豚肉が傷みやすく寄生虫が多いからである。砂漠で生まれたイスラムでは肉はかなり傷みやすいのだ。また豚が当時は肉だけにしか役に立たず放牧にも農作業にも酪農にも向かなかったことも大きい。この時代の連合ではそれが品種改良されて豚の乳のミルクや

チーズがあるが当時はそんなものはなかった。だから彼等は豚肉を避けたのである。
「それでどうして」
「河魚まで食べる連中にしろな」
「まあとりあえずはだ」
ここで話が打ち切られた。
「これ以上話をしても堂々巡りだ。終わるか」
「そうだな。正直日本人の好みはどうでもいい」
「うむ、確かにな」
これはもういいとしたのだった。日本はこの時代でもムスリムが非常に少ないのだ。日本にはそもそも一神教の信者は伝統的にかなり少ないのであるが。
「そろそろ料理も来るしな」
「早いな」
「味はどうか」
「味は期待していていい」
それを知っている者の言葉だった。その証拠に声が楽しげに笑っているものだった。
「それもかなりな」
「美味というのだな」
「まずいものを他人に勧める趣味はない」
いい趣味であると言えた。
「当然ワインもな」
「そうか。ではそのワインも」
「一本はあの方に」
これは忘れてはいなかった。
「贈るとしようか」
「いや、待て」
しかしここで一人が新たな提案をしてきた。
「三本頼めるか」

「三本！？」
「そうだ、三本だ」
本数をまた告げたのだった。同志達に。
「いいか。もう二本追加したいのだが」
「それは構わない」
追加注文自体はいいとされた。これに関しては。
「しかしだ。何故また追加なのだ？」
「そうだ、何故だ」
「一本はわかる」
既についていた話であった。
「それはな。しかしだ」
「あとの二本は何だ？」
「何故二本だ？」
同志達は彼に対してさらに問うのだった。問い詰めるという感じではなかったが怪訝なものを感じていることがはっきりとわかる言葉であった。
「それが知りたいのだが」
「何故だ？」
「また戦争になる」
彼が次に語った言葉はこうだった。

## 第三十一部第四章　あぶれ者その二十二

「だからだ。二本頼みたいのだ」
「戦争が？」
「正確に言うと決戦か」
決戦という言葉が出された。
「最後のな」
「最後の！？ああ」
一人は今の言葉でわかった。
「そうか、あそこか」
「あそこだな、そうか」
「あの二国だな」
そしてそこにいる全ての者が理解したのだった。その二本のワインの使い道が。そのことは歴戦の軍人である彼等にはすぐにわかったのだった。
「あの二国にか」
「どちらが勝つのかどちらが負けるのかはまずはどうでもいいとしよう」
それにはあまり構わないといった感じであった。
「それはな。いい」
「いいのだな」
「勝者にも敗者にもまずは祝福だ」
語るその声が笑っていた。まるでそこに恋愛相手がいてロマンを語る様にだ。実に楽しげに語っているのだった。
「我々からな」
「そうだな。趣としては面白いな」
「いささかサハラの流儀ではないがな」
これは認識された。サハラではあまり酒を贈るという慣わしはない。時代によって飲酒が厳しく禁止されてきた歴史があるからだ。

この時代では違うが。
「面白いな」
「少なくともあの御仁は喜んで受けるだろう」
他の者も楽しそうに声をあげる。だが彼等はまだ恋愛を語るようなロマンチズムはそこにはなかった。あくまで今の者一人だけである。
「ワインに目のない御仁らしいからな」
「これがワインだけではないらしい」
「ああ、その様だな」
このことも連合においてすらよく知られていることであった。
「日々これ以上はない贅沢を楽しんでいるそうだな」
「戦場においても何十品も美食を楽しみ」
「そして豪奢な服を着ていると聞く」
「しかもだ」
人物によっては贅沢はさらに高まるものだ。贅沢とは際限がないものだからだ。だがこれも文化の一つであるから話は複雑だ。完全には否定できないものでもあるのだ。
「身の回りの品も部屋も全て豪奢に装飾されているそうだ」
「戦場においてもか」
「もっと細かく言えば己の乗艦の自室だ」
そこであった。
「これ以上はない程に豪奢だそうだ。宮殿の様にな」
「宮殿か」
「あの御仁の宮殿の豪奢さもかなりと聞くか」
「ああ、その様だな」
このこともまた連合においてもよく知られているのであった。連合はかなり巨大な勢力であり様々な技術、情報伝達技術まで発展しているだけあって情報がよく伝わって来るのだ。このことに関してはサハラとは比較にならないものがある。これも豊かさの証拠の一つだ。

「エウロパのどの貴族よりも豪奢だそうだな」
「当然ハサン王国の宮殿よりもだ」
サハラで最も豊かで強いとされてきた国だ。今は劣勢でもだ。
「凄いものらしいな」
「そんなにか」
「その宮殿で普段暮らしている。四人の妻達と共にな」
「ではワインの一本なぞさしたるものではないか」
「ワインもだ」
ワインもまた。ここで語られるべきことであった。
「やはり贅沢なものを選んでいるそうだ」
「では余計に我々が贈るものでは満足しなさそうだな」
「あれでも彼が飲むワインには遠く及ばないだろう」
「及ばないのは事実だ」
このこともまたよく認識されていた。
「彼が飲んでいるものはあまりにも違うからな」
「やはりそうか」
「だが」
それでも語られる。
「こうしたことが好きな御仁だ。受け取ってくれるだろう」
「受け取ってくれるか」
「我等の名前を出しても出さなくてもいい」
それはいいとしたのだった。
「別にな。これはどうでもいいな」
「そうか。別にいいのか」
「大した問題ではない」
こうまで言われる。
「出してもいいし出さなくてもいい」
「この場合はその程度か」
「私は出さなくてもいいと思う」
そしてこの意見が出たのだった。

「別にな。どうでもいいことだ」
「どうでもいいか」
「あの御仁はその様なことは気にしないだろう。だからだ」
「まあそうだな」
「贈ることに意義があるしな」
「そういうことだ。では」
これで話が完全に終わった。ここでタイミングよく部屋のチャイムが鳴った。
「食事にするか」
「そうだな。食べて飲み」
「せめて今だけでも現実を忘れよう」
語る声が楽しげなものになっていた。
「この悩み多い現実をな」
「美酒と美食によって」
こうして彼等は悩み多きこの世から酒の世界へと移ったのだった。それはイスラムでは厳しく戒められる時もあることだが。今は忘れるのだった。悩み多き世界のことを。

# 第三十一部第五章　三本のワインその一

三本のワイン

コムでの戦いの後。アヤグーズ軍を中心とした連合軍はアヤグーズの首都アッサルームに軍を集結させていた。この集結には意味があった。

「ここでだな」

「そうだ、ここでだ」

ハサン軍の将官達がアッサルーム星系の衛星の一つに設けられた司令部からモニターで集結する艦隊を見つつ話していた。彼等の顔は険しい。

「ここで決戦となる」

「アヤグーズにとってはか」

「いや」

将官の一人であるバンダルが今の言葉を否定した。

「アヤグーズにとってだけではないぞ」

「バンダル提督、それは一体」

「どういう意味ですか」

ハサン軍の将官達は今のバンダルの言葉に対して一斉に問うた。彼はアヤグーズに派遣されているハサン軍の首席指揮官なのだ。階級も上級大将であり最も上となっている。

「我々にとってもそうだということだ」

「我々にとってもですか」

「では言おう」

ここで彼はさらに言うのだった。

「コムで我々は敗れたな」

「はい」

苦い顔で今のバンダルの言葉に頷く。

「忌々しいですがその通りです」

「残念なことに」
彼等はその苦い顔で言葉を次々に出した。
「シャイターン主席にしてやられました」
「あの敗戦は痛かったです」
「そうだ。かなりの痛手だった」
バンダルもそれについて言う。コムで彼等は持てる力を全て注ぎ込んだ。それだけに勝利を確信していた。しかしそれでも敗れたことは彼等にとっては戦力及び戦略上の拠点を失っただけでなく精神的にも大きなダメージだった。このことも考慮に入れての言葉だった。
「あまりにも大きい。そしてだ」
「そして？」
「このアッサルームでの決戦だな」
「ええ」
「このアッサルームで」
「ここで敗れれば当然アヤグーズは滅亡だ」
首都を失うことはそのままその国の滅亡になる。これは戦争においては半ば常識となっている。首都はそれだけ重要な場所であるのだ。だからこそ国の心臓とまで呼ばれるのだ。
「言うまでもなくな」
「しかしそれがハサンにとっても命運を決するものになりますか」
「少なくともだ」
ここでまたバンダルは言う。
「西方での劣勢は容易には覆せないものになる」
「容易に、ですか」
「今この西方に我々の戦力が集中的に向けられようとしているな」
「はい」
「その通りです」
その通りだった。ハサンはまずはオムダーマンをその重厚長大な防衛ラインで防ぎ戦力的に少ないティムール軍を先に倒すことを決

定したのだ。だからその動員した戦力を全て西方に向けたのである。
戦力の集中は戦略の初歩だがそれを忠実に守っているのである。
「ですからそうおいそれと劣勢には」
「例えここで敗れたとしても」
「ではまた言おう」
しかしまだバンダルは言うのだった。
「アヤグーズを失う」
「それですか」
「そうなったらどうか」
今度部下達に対して問うのはこのことだった。
「ただ西方における最も貴重な属国と戦略上の要地を失うだけか」
「それだけでもかなりの痛手ですが」
「それだけではないと」
「アヤグーズ軍は精強だ」
それで以って知られているのがアヤグーズ軍だ。個々の兵も強く訓練が行き届き将校は勇敢で指揮官は戦争を熟知している。尚且つ総司令官であるブルコルジはハサンの下にいる将達の中では最強の猛将であるとされている。ハサン軍最強の軍であると言ってもいい。
「その彼等が破られたとなると」
「破られたとなるとですか」
「果たしてどうなる？」
部下達に対してまた問うのだった。
「その精強なる彼等ですら破られたとなると。勝てると思えるか」
「それは」
「我等だけではない」
指揮官達だけではないとした。

## 第三十一部第五章　三本のワインその二

「下級将校や下士官、兵達はどうか」
「彼等ですか」
「特に兵達だ」
軍は指揮官だけで戦うのではないのだ。兵士達で戦うのだ。それを今あえて言うのだった。
「彼等はどうか」
「それは」
「やはり。その様な事態になれば」
「そうだな。士気に大きく関わる」
こういうことだった。兵達の士気が落ちればそれだけ軍は弱くなる。士気がその軍の強さに大きく影響することはこの時代でも変わらないのだ。
「だからこそだ」
「この戦いは大きな意味を持っていますか」
「ただでさえコムでの敗戦は我々に大きな衝撃とダメージを与えた」
このことも事実だった。
「これ以上のダメージを受けるわけにはいかない」
「そういうことですか。それでは」
「そうだ。勝たなければならない」
集まっている自軍をなおも見ていた。
「今回ばかりはな。若し敗れればどれだけの戦力があろうとも」
「敗れますか」
「勝つのは困難になる」
勝てないと思ってしまうからだ。こうなってしまえばもう士気を回復させることは困難だ。
「それもかなりな」
「それだけ重要な戦いになりますか」

「確かに敗れるつもりはありませんが」
「こちらに向けられている予備戦力だが」
バンダルは今度は自軍の予備戦力について言及した。
「まだ集められている段階か」
「はい。まだです」
参謀の一人が今の問いに答えた。
「まだ。それは」
「集められているところか」
「急いでいるのですが」
「どれだけ集まっているか」
今度は具体的な割合を問うた。
「今。どれだけだ」
「首都に八割程度です」
「八割か」
「はい、まだ」
「間に合わないか」
その報告を聞き顔を顰めさせるのだった。
「ここには。やはり」
「残念ですが」
「やはり兵は多い方がいい」
これは戦争の鉄則だった。絶対のものとも言っていい。連合軍はそれを忠実に守って戦争を行っている。だからこそ彼等はエウロパに圧勝できたのである。
「しかもまだ士気があるうちにな」
「その通りです。確かに」
「それが果たせぬのなら仕方がない」
そしてこう言ってそれを諦めるバンダルだった。
「今集められる戦力だけで戦うしかないな」
「ですが司令」
別の参謀が彼に言ってきた。

「何だ？」
「戦力としてはまず我が軍があり」
「うむ」
「そしてアヤグーズ軍、その他の属国の軍です」
「それがどうかしたか」
「総数においてはティムール軍を凌駕しています」
この参謀が言うのは数であった。先程からバンダルが言っていることの一つだ。
「それもコムの時よりも遥かに。地の利もありますし」
「これだけの数なら大丈夫だというのだな」
「違うでしょうか」
あらためてバンダルに問う。
「これだけの数ならば。問題はないかと思いますが」
「普通に考えればな」
バンダルは普通という言葉を反対的に使って述べてきた。
「そうなるな」
「普通では、ですか」
「コムでもだ」
話が出たのでさらにコムでのことに深く入る。

## 第三十一部第五章　三本のワインその三

「我々は勝利を確信していたな」
「確かに」
誰もが勝利を疑っていなかったのだ。コムでの戦いは。ティムール軍を圧倒的な兵力と防衛施設、それに陣地で迎え撃ったのだ。誰もが勝利を確信していた。しかしそれはシャイターンの武略によって破られ今こうしてアッサルームにいる羽目になっているのである。
「だが。今は」
「こうしてここにいます」
「答えはそれだ」
これで充分であった。
「この程度の数では安心できない」
「できませんか」
「五倍は必要か」
ハサン軍にとっても今の状況では途方もない数である。それだけ国力差が開いていればそもそもその圧倒的な戦力を万全に配しここまで攻められてはいないのだ。
「今の彼等を前に安心できるのは」
「五倍ですか」
「そうだ、五倍だ」
また倍数を告げる。
「それだけは欲しいな。シャイターン主席相手には」
「連合軍位の戦力と国力が必要ですか」
「装備もな」
装備についても言及する。
「あれだけのものがあれば。苦労はしないのだがな」
「ですが今ある戦力だけで戦うのもまた戦争です」
これは正論であった。

「あまり贅沢を言っても何にもならないかと」
「それもわかっている」
わからないバンダルではなかった。逆説的に言えば。
「しかし。せめて戦闘の時間がもう少し遅ければな」
「予備軍が来ればですか」
「それだけは欲しかった」
心から搾り出すような言葉だった。これは本音の言葉だ。
「数はな。無理だとしてもだ」
「どうしてもですか」
「しかし。やはりな」
諦めの感情がここでバンダルの口から出た。
「言っても仕方ないな。艦艇も人員も少ないならば」
「やはり守りですか」
「そうだ。それしかない」
兵が少ない部分は何で補うべきか。もうこれは戦術のレベルにおいてはすぐに答えが出るものであった。代わりのもので埋めるのだ。そしてその代わりは。
「まずは機雷を撒こう」
「はい」
やはり最初はこれだった。機雷は守りにおいて最も効果的な兵器の一つであるのはこの時代においても同じなのである。だから連合軍は掃海艇にも力を入れているのだ。
「そして次はだ」
「ミサイル砲座及びビーム砲座ですね」
「それもだ」
備えはさらに進められていく。
「当然増やしていく。ティムール軍が来るまでに最低今の二倍にしておきたい」
「二倍ですか」
「できるなら三倍だ」

かなりの数を注文してきた。
「三倍は欲しい。可能ならばだ」
「またそれはかなり」
「多いと思うか？」
「少なくとも少数とは思えません」
直接的な表現は避けたがそれでも言葉には伝わるものがあった。
「それだけの規模ともなると」
「コムでのことを思い出すのだ」
またコムのことが出される。
「あの時は少なくとも今のアッサルーム以上の守りだった」
「それはそうですが」
「だが。破られた」
何度でも言う。敗戦を言うのは生粋の軍人であるバンダルにとっては決して快いものではない。しかしあえて何度も言うのであった。
「見事なまでにな。してやられたな」
「その通りです。では」
「そうだ。だからこそ三倍は欲しいのだ」
冷静に戦力を見極めての言葉だったのだ。

## 第三十一部第五章　三本のワインその四

「三倍はな。それだけ置いておけば」
「勝てますか」
「少しでも勝利の可能性を高くしていく」
バンダルは言う。
「出来る限りだ。だから」
「より以上の守りをですか」
「コムでの守りを越える」
はっきりと言い切った。
「そして今度こそティムールを破るぞ。いいな」
「はっ、それでは」
「このことをブルコルジ陛下にも」
「すぐにお伝えする」
バンダルの目の光が強くなった。決意の目であった。
「すぐにな。それではだ」
「行かれるのですね」
「暫くこの場を頼む」
ここまで言うと踵を返した。それと共に背中のマントがたなびく。ハサン軍もまた将官はケープ若しくはマントを羽織っているのだ。これに関してはオムダーマン及びティムールと同じであった。マントはエウロパ軍が有名だがサハラ各国においても採用されている。採用されていないのは連合軍及びマウリア軍である。彼等はスーツ型の軍服の為にマントを採用しにくいのだ。またエウロパ風なのを嫌っていると理由、それに機能性を鑑みてのことでもある。
「それではな」
「はっ、それでは」
「どうぞお任せを」
「ギーヴ中将」

しかし彼はここで参謀の一人としてここにいたギーヴに対して声をかけたのであった。先のコムでの戦いにおいても共に戦った二人だ。
「共に来てくれるか」
「はっ、それでは」
ギーヴ自身もそれに応えてきた。
「御一緒させて頂きます」
「頼む。陛下に進言したいことがあるからな」
「だからですか」
「そうだ。だからこそだ」
また言うのであった。
「共に来て欲しい。いいな」
「わかりました。それでは」
「この戦いだ」
またこのアッサルームでの来たるべき戦いについて述べた。
「この戦いに全てがかかっている」
「今後の西部戦線がですね」
「下手をすれば西部戦線だけではない」
今ハサン軍ではティムールとの戦いを西部戦線と呼んでいる。それに対してオムダーマンとの戦いは南部戦線と呼んでいる。戦略的に分けて考える必要がある為にあえてこう分けて呼んでいるのである。
「ハサン全体にとってもな」
「危機になると」
「時として一つの敗戦が連鎖的に続く」
今の彼等がまさにそれだった。
「それは何処かで止めなければならない」
「止められなければ」
「破滅だ」
今度は一言であった。

「それでな。全てが終わる」
「だからこそこのアッサルームでなのですね」
「首都の攻防はできるなら避けるべきだ」
誰も心臓の側で争おうとはしない。その中ならば尚更だ。首都の荒廃はそのまま経済や流通だけでなく政治、行政に悪影響を与えるからだ。
「しかし。最早な」
「そうも言ってはいられませんね」
「残念なことにな。こうなってはだ」
「しかしなってしまったからには仕方がありません」
「その通りだ。そしてその為に勝利を手に入れる為に」
「今は陛下の下に」
ブルコルジのことである。
「参りましょう。それでは」
「参ろうぞ」
「はい」
こうして二人はブルコルジのところに向かった。ブルコルジはこの時己の宮殿にいた。宮殿とはいっても質素かつ武骨でありただ広いだけでそこには何の装飾も贅沢もなかった。クリスタルの窓もシャンデリアもなくただのガラスのそれしかない。絵画も飾られてはおらずカーテンは木綿だ。そんな質素極まりない宮殿のトレーニングルームで。女王は若い将校達を相手に今はフェシングに励んでいたのだった。
「遅いっ！」
「くっ！」
すばやい一突きが一方の膝に入った。これで一本だった。
「これで五本ですね」
「その通りです」
突きを入れた方は女の声でもう一方は男の声であった。しかも若い男の声である。周りにはフェシングの白い服を着た若い青年達が

いる。彼等こそ女王の相手を務めているアヤグーズ軍の若手将校達なのだ。皆若く精悍であり非常に整った顔をしている。
「御見事です」
「貴方は脚に隙があります」
女は言いながらここでまずは剣を収めた。そのうえでマスクを脱ぐ。そこから顔を露わにさせたのはブルコルジその人であった。白いフェシングの服が実によく似合っている。似合っているだけではなくその見事なスタイルをも現わしそこには艶さえあった。

## 第三十一部第五章　三本のワインその五

「それを衝かれると弱いようですね」
「脚ですか」
「そう、脚です」
相手のその将校もまた仮面を脱いでいた。その顔はやはり精悍で整ったものであった。青年将校に相応しい顔立ちであると言える。
「上半身に注意を払い過ぎ脚の守りがおろそかです」
「脚の守りが」
「攻撃は上半身にだけ向けられるのではありません」
ブルコルジはこうも言う。
「脚もまた狙われるものなのです」
「それはわかっていますが」
「わかっていれば後はそれを常に忘れないこと」
女王の言葉が鋭いものになる。
「宜しいですね。常に忘れていなければ対処ができる」
「はい」
「覚えておくのです。この敗北を」
「わかりました。それでは」
「さて」
彼に指摘を終えるとそのうえで周囲を見回した。
「次の相手は誰ですか」
「もう一通り終わりました」
将校の一人がこう彼に述べる。
「ですからもう」
「休憩ですか」
「その時間です。どうされますか」
「休みましょう」
鋭い目であったがそれを急激に穏やかなものにさせつつ述べたの

だった。
「休息も必要です。休める時に休まなければ」
「左様ですか」
「そうです。今はただの余興」
余興であるとも言うのだった。
「あまり疲れさせては来るべき時に遅れを取ります。ですから」
「休息ですね」
「飲み物はありますか」
続いて飲み物を尋ねたのであった。
「何か。ありますか」
「コーヒーがあります」
今度述べたのは将校ではなくメイド達であった。彼女の近辺に仕える者達だ。ブルコルジの信頼するメイド達でもあり常に彼女の側にいる。
「アイスコーヒーが」
「アイスコーヒーですか」
「日本風です」
こうまで言ってきた。
「日本風に冷やしたうえで氷を入れたグラスに注いたものです」
「勿論砂糖は白砂糖です」
アイスコーヒーはサハラでは日本風が有名である。あらかじめ白砂糖でかなり甘くさせた濃いめのコーヒーを氷を入れたグラスに注ぎそのうえでストローで飲む。これが日本風なのだ。
「それでどうでしょうか」
「ホットもできますが」
「汗もかきましたし」
ブルコルジは実際にメイドの一人より受け取った柔らかい木綿の白いタオルで顔を拭いている。その汗は爽やかな汗であった。
「身体を冷やしておく為にも。そうですね」
「アイスコーヒーですか」

「今日は思ったより暑いです」
これも考慮しての言葉であった。
「ですから。身体が熱くなり過ぎないように」
「冷たいものをですね」
「そうしましょう」
熱中症を避けてのことである。確かに身体を冷やし過ぎるのはよくないが熱いままでも危険だ。それで彼女は今は愛すコーヒーにしたのであった。
「アイスコーヒーを」
「はい、それでは」
「どうぞ」
すぐにその日本風アイスコーヒーが運ばれて来た。無論ストローも一緒である。そのストローを口に含んでそのうえで冷たいコーヒーを飲む。コーヒー独特のほろ苦さと白砂糖の甘さ、それに冷たさが口の中、それから喉及び内臓から身体を冷やしていく。一杯飲み終えるともう身体は結構冷えていたのであった。
飲み終えた彼女にすぐにメイド達が尋ねてきた。見ればその服はコーヒーと同じ黒を基調としている。黒と白の対象的な色彩を使った服である。
「もう一杯如何ですか」
「そうですね。それでは」
ここではその申し出を受けることにした。

## 第三十一部第五章　三本のワインその六

「ではもう一杯御願いします」
「はい、それでは」
「すぐに」
　こうしてまたコーヒーが運ばれようとする。しかしここで彼女達は自分達の主によって今の動きを止められることになってしまったのだった。
「少し待ちなさい」
「！？何か」
「何かありましたか」
「時と場合によってはもう少し必要です」
　こう言って彼女達を止めたのであった。
「まだ確定ではないですが」
「そうなのですか」
「さて」
　ここまで言ったうえであらためて新たに来た二人に顔を向けるブルコルジであった。機能的な爽やかな汗の匂いのする白い部屋の中にかなり場違いな軍服の男が二人いたのだった。見ればその軍服はアヤグーズのものではなくハサンのものであった。
「まずは何を飲まれますか」
「飲み物ですか」
　二人のうち前に立つバンダルが応えてきた。
「宜しいのですか、頂いて」
「遠慮することはありません」
　猛将と謳われているとは思えない程の静かで穏やかな笑みを浮かべて今のバンダルの問いに対して応えるブルコルジであった。
「私に対して遠慮とはそれだけで不敬罪なるのですから」
「それは聞いたことがありませんが」

「我が家は寛容を以って棟とします」
次にはこう言ってみせたのであった。
「同時に寛大も。ですから」
「だからこそですか」
「そうです。それに私自身遠慮を好みません」
次の言葉はこれであった。
「ですから。どうぞ」
「それではですね」
「ええ」
それを受けてバンダルも言うのであった。
「私はコーヒーを」
「アイスですか」
「そうですね、アイスを」
少し考える目をしてからブルコルジに答えた。
「それを頂きたく存じます」
「わかりました、アイスコーヒーをですね」
「はい」
あらためて頷いてみせる。
「それを是非」
「貴方もそれは同じですか」
ブルコルジはバンダルに同行していたギーヴに対しても問うた。
「やはりアイスコーヒーですか」
「はい、そうです」
ギーヴはすぐに言葉を返してきた。静かに述べて。
「それを御願いします」
「わかりました。それでは」
こうして飲み物は決まった。すぐに氷を多量に入れたアイスコーヒーが運ばれて来る。二人はそれを受け取り飲みはじめた。飲みながらブルコルジに対して述べるのであった。
「実はここに参上した理由ですが」

「戦争のことですね」
彼女もまたコーヒーを飲んでいた。それを飲みながらバンダルに対して応えていた。
「そうですね」
「おわかりですか」
「その服で」
ブルコルジはここで二人の服を指し示した。
「おのずとわかるというものです」
「ふむ、そうですか」
「はい」
またバンダルの言葉に答えてみせる。
「軍服で来られたということはやはり次の戦いのことでしょう」
「その通りです」
ダンバルは静かに答えたのだった。
「今度のアッサルームの戦いのことですが」
「ハサン軍の援軍は間に合わないそうですね」
「御存知でしたか」
「話は聞いています」
語るブルコルジの目が光った。
「残念なことですが」
「こちらとしても申し訳ありません」
バンダルはここではブルコルジに対して謝罪の言葉を述べた。

## 第三十一部第五章　三本のワインその七

「間に合えば。それだけ戦局が有利になるのは間違いないというのに」
「構いません」
しかしブルコルジはそれにはこだわらないのであった。何でもないといった様子で言葉を返しそれで終わらせてしまったのである。
「それについては」
「構わないのですか？本当に」
「戦争とはその場で与えられた最高の条件でするもの」
つまりケースバイケースというわけである。
「ですから。それに関しては」
「構わないのですか」
「そうです。ならばその来られない戦力を補うだけ」
ブルコルジの言葉は冷静なものであった。
「それだけです」
「ではそれを補う方法は」
「今進めている通りです」
今度はギーヴに対して答えた。
「機雷及びミサイル砲座、ビーム砲座を増やし」
「それ等で対処すると」
「その通りです。先のコムでの戦いと同じですが」
「同じとなると」
「それは」
「不安なのですね」
また二人に対して問うた。
「それでは。またコムの様になると」
「コムとは状況が違います」
バンダルはまずはコムとアッサルームの違いについて言及した。

コムはかなり複雑怪奇な宙形であり迷路の如きものであった。このアッサルームもまた険阻な宙形であり守るに易く攻めるに難い。だがその形がコムとは全く異なるものであるのだ。ここが重要であった。
「コムはまさに迷路ですが」
「はい」
これについてはブルコルジもよくわかっていた。他ならぬ彼女の国だからだ。国家元首として、そして軍の最高司令官としてそれぞれの宙形は把握しているのだ。
「このアッサルームはそれに対して」
「宇宙潮流です」
アッサルームの特徴はその宇宙潮流なのであった。
「この複雑に幾つも流れる潮流。これですが」
「どう使うかです」
またブルコルジは述べた。
「この潮を」
「ではこの場合はやはり」
「機雷です」
まずはこれであった。
「機雷をどう使うかですが」
「どうされますか？」
「このアッサルームは我がアヤグーズの首都」
このことが何よりも重要であった。アヤグーズの心臓である。そしてそれは別の意味においても非常に重要なのであった。ブルコルジはそれも言う。
「誰よりもこの星系のことは知っています」
「では潮流もまた」
「そうです」
そういうことだった。彼等は潮流のことをよく知っていたのだ。
「どの潮流が何時どういったふうに流れるのか。よく把握していま

す」
「だからこその機雷なのですね」
「潮流に機雷を流します」
これは非常によく使われる戦術である。潮流に機雷を流して敵艦隊に攻撃を仕掛けたり足止めにしたりするのは戦術の基本の一つなのだ。
「それにより来るティムール軍を責めます」
「まずは機雷ですか」
「そしてまた」
ブルコルジはさらに言う。
「その潮流の動きに合わせて」
「今度はビーム砲座及びミサイル砲座ですね」
「そうです。全ては潮流に沿ってです」
配置するというのだ。全ては潮流であった。
「配します。そして艦隊もまた」
「潮流に乗ってですか」
「ティムール軍はこのアッサルームの潮流は知っているでしょう」
「知っていては効果がないと思われますが」
今のギーヴの言葉は実はわかっていての言葉である。つまりは確信犯であるから意地が悪いと言える。だがブルコルジもそれを受けるのであった。

## 第三十一部第五章　三本のワインその八

「完全には知らないのです」
「完全にですか」
「そう、完全にです」
ブルコルジはここをくどいまでに指摘してみせた。
「彼等は完全には知りません。しかし我々は」
「知っている。そういうことですか」
「その通りです。私達は完全にこの星系の宇宙潮流を知っています」
これはあくまでアヤグーズ軍は、ということである。彼等だけが熟知している星系の潮流なのだ。他の者達は知らないことなのであった。
「ティムール軍は知りません」
「生半可な知識というわけですね」
「その通りです。生半可な知識です」
このことが問題なのであった。
「それは無知よりまだ恐ろしいものです」
「そう、それです」
これこそがブルコルジの言いたいことであったのだった。
「彼等はアッサルームの複雑な潮流を知らないのですから。だからこそ」
「そこを衝くというのですね」
「これで勝てます」
確信の言葉だった。
「今度こそ。このアッサルームで」
「ティムール軍は今コムに集結しています」
「はい」
この情報も既に入っているのだった。
「そろそろ出撃でしょうか」

「既にその準備は完全に整っているようです」
アヤグーズ軍もハサン軍も無能ではなかった。敵の動きもまた把握していたのである。そうでなくては戦争なぞできはしないのであるから。
「そしていよいよ」
「出撃ですね」
「戦いは間近です」
語るギーヴの目が光る。
「彼等との決戦は」
「ここで勝てば我等は生き残ります」
「そうですね。ですが」
ブルコルジはまたそのギーヴに対して問うた。
「負ければ」
「まずアヤグーズは滅亡です」
これは避けられなかった。首都の陥落は即ちその国家の滅亡であるからだ。
「申し上げにくいことですが」
「言わなければならない現実もあります」
しかしそれを聞くブルコルジは落ち着いたものであった。もう額の汗はひきそこにはいつもの精悍で美しい顔があった。獅子の美貌とも言うべきか、猛女の美しさであった。
「それが今であるだけです」１０
「そう受け取って頂けますね」
「口により剣を振るうことはありません」
ブルコルジはこうも答えた。
「このアヤグーズでは言葉は保障されています。それについてはお気遣いなきよう」
「有り難き御言葉」
言論の自由は保障されているということであった。連合やマウリアではこれは常識であるがサハラではそうではない場合も多々ある

のだ。独裁者が出ることも多いせいである。サハラにおいては民主主義も人権も決して絶対のものではないのである。
「それではその御言葉に甘えさせて頂きます」
「はい」
「それでです」
ギーヴはさらに述べる。
「我がハサンにとっても深刻な事態となります」
「貴国にとってもですね」
「戦略上の要地を失います」
まずはこれであった。アヤグーズ王国はハサン西方の要地なのだ。交通の中心地でありここを制圧すれば少なくとも西方は四方八方に兵を送ることができる。それを考えればティムールとしては何としても手に入れておきたくハサンにとっては守らなくてはならない場所なのだ。
「そして多くの貴重な戦力も」
「我々もですね」
「その通りです。貴国は我々にとって頼りになる存在です」
ハサンにとってアヤグーズの精鋭達は常に頼りになる助っ人であり続けてきた。その彼等なくしての国防、とりわけ西方のそれは考えられないことなのである。

## 第三十一部第五章　三本のワインその九

「その貴国を失いたくはありません」
「有り難き御言葉です」
ブルコルジはその言葉を笑わず真剣な顔で聞くのだった。
「その様に言って頂けるとは」
「またアヤグーズは豊かな国でありますので」
ハサンの属国の中では随一である。
「そこをティムールの手に入れられると」
「それだけでティムールの国力が上がりますね」
「これは政治的な理由です」
これまでの話も政治が入っていたが今度のこれはとりわけであるのだ。
「我等が失い彼等が手に入れるというのは」
「二重の傷になりますね」
「はい。それもまた避けなければなりません」
自身の豊かな勢力圏を敵に奪われること程痛いものではない。オーストリア継承戦争、その後の七年戦争におけるオーストリアとプロイセンの衝突、普仏戦争から第二次世界大戦までのドイツとフランスにより行われたアルザス、ロレーヌ両地方、ドイツ語で言うアルサス、ロートリンゲン両地方を巡る戦いを見るまでもなくこれがその国それぞれにとって大きな意味を持つことはこの時代でも同じなのである。
「それもまたです」
「確かに。我々としてもティムールの軍門に下るつもりはありません」
「頼もしき御言葉。そういうことです」
「それだけではありませんね」
ブルコルジはまた彼に尋ねてきた。

「そうですね。まだありますね」
「はい、後は人です」
人と述べたのであった。
「人ですね」
「そう、人です」
言葉が繰り返される。これはその人という単語がどういった意味を持つものなのか、話を聞いているブルコルジもよくわかっているからである。
「人の問題もあります」
「我々が敗れたとなると」
「既にコムでの敗戦にその兆候が見られます」
先の戦いについても言及される。
「士気はかなり落ちます」
「コムの敗戦は我が軍の士気にも大きく影響しました」
ブルコルジは自軍のことを今出してみせた。
「それを回復させるのにかなり苦労もしました」
「ですがこのアッサルームで敗れれば」
ギーヴはまた最悪の事態について言及してみせた。
「その場合は最早」
「ハサン及びその属国軍の士気は重大極まる影響を受けますね」
「そうです。ですから避けなければなりません」
先にバンダルが言ったことそのままであった。
「このアッサルームを奪われることは。アヤグーズの滅亡は」
「だからこそです」
ブルコルジの言葉がさらに引き締まったものになった。
「私も。今ここで」
「決戦の用意をされているのですね」
「アヤグーズの獅子の女王」
彼女の通り名である。この勇ましくかつ誇りさえ内包している通り名はサハラだけでなく遠くマウリアやエウロパ、果てには連合に

まで届いている。
「その名にかけて彼等を倒しましょう」
「勝ったその後は」
「すぐに追撃にかかります」
猛将と呼ばれるに相応しい果断な言葉であった。
「すぐに。このアヤグーズから彼等を追います」
「すぐにですね」
「二言はありません」
やはり果断な言葉であった。
「そうして御覧に入れましょう」
「有り難き御言葉。それでは」
今応えたのはバンダルであった。やはり彼もいるのだ。
「すぐに手筈にまた入りましょう」
「問題は機雷ですが」
今回の作戦の最重要部分であった。
「流れに上手く乗せることです」
「潮流ですね」
「はい、そうです」
やはり話はそれであった。

## 第三十一部第五章　三本のワインその十

「これについては我が軍が第一に撒きますが」
「当然我が軍もですね」
バンダルは名乗り出た。
「我々もまた機雷を撒布して」
「お任せできますか」
「御心配なく」
にこりと微笑んでブルコルジに答えるのであった。
「我が軍とて機雷はよく使います」
「はい」
これについては既に定評がある。ハサン軍は機雷を好むのだ。アッディーン率いるオムダーマン軍との戦いにおいても防衛に機雷を大量に撒布していることからもそれは窺える。
「ですから。潮流に流すのもまた」
「できるのですね」
「いつものことです」
これは事実であった。機雷撒布の基本であり彼等もそれはよくわきまえているのだ。ただしそれはこのアッサルーム星系以外のことではある。
「ですから。是非共」
「わかりました。それでは」
「お受け致します」
自信に満ちた笑みであった。これで機雷に関する話は終わった。だが話はこれで終わる程単純ではなかったのである。なおも続くのであった。ただしそれは軍事に関するものではなかった。
「陛下」
「何用ですか」
傍に来た従者に応える。

「陛下にお届け物です」
「私にですか」
「はい、ワインです」
従者はこうブルコルジに告げた。
「ワインです。連合産の赤が一本」
「連合産の」
ブルコルジは連合からのものと聞きまずは眉を動かした。
「さて。連合からですか」
「差出人は不明です」
こうも告げられる。
「ですが。間違いなく連合からのものです」
「そうですか。連合からですか」
「どうされますか」
従者は今度はこう尋ねてきた。
「受けられますか？それとも」
「受けるわ」
すぐに答えたブルコルジであった。
「そのワインをね」
「受けられるのですか」
「一応聞いておくけれど」
その前にチェックはしておくのであった。
「毒は確かめているわね」
「はい、既に」
それは万全だというのだった。この時代においても暗殺、とりわけこの場合は毒殺は多々ある。とりわけサハラではそうだ。戦乱渦巻くこの地においては暗殺もまた日常茶飯事でありその中でも毒殺は非常によくあることだからだ。それのチェックも当然なのである。
「しておりますので御安心を」
「それでは遠慮なく」
「わかりました。では」

そのワインがすぐに出されてきた。ボトルに入れられたそれは確かに赤であった。
「これを」
「連合のワインだそうだけれど」
「はい」
話は今度はワイン自体の話に移る。
「実は飲むのはこれがはじめてなのよ」
「はじめてだったのですか」
「ワインは常にサハラのものだったわ」
サハラでもワインはある。酒が飲まれているからそれが生産されるのも当然である。その中には赤や白、ロゼだけでなく実に様々な色のものがある。
「サハラのもので白が好きなのだけれどね」
「陛下は白でしたか」
「はい、そうです」
バンダルの問いに答える。
「白は。飲み易いので」
「確かにそうですな」
白ワインが飲み易いというブルコルジの言葉に納得した顔で頷くバンダルであった。
「白はそのままでも飲めますし」
「一緒に食べるものは大抵チーズです」
これについても話すブルコルジであった。

## 第三十一部第五章　三本のワインその十一

「それとクラッカー、ソーセージといったところですが」
「それですと白でなく赤でもいけますな」
バンダルはこの組み合わせを最後まで聞いて答えた。
「如何でしょう、それでは」
「この組み合わせで飲んでもいいということなのですね」
「その通りです。さあどうぞ」
バンダルの言葉は今度は勧めるものであった。
「その赤ワインを。是非」
「そうですね。それでは」
ここまで話を聞いたうえで頷くブルコルジであった。
「そうさせて頂きましょう。それでは」
「はい、どうぞ」
「こちらに」
ワインのコルクはもう抜かれている。そして普通のガラスのグラスとチーズとクラッカー、それにソーセージが用意されていた。実に準備がよかった。
「陛下、どうぞ」
「お召し上がり下さい」
「それでは」
その赤ワインが注がれたグラスを左手に取りまずは一口含んだ。それを飲むと忽ちワインの濃厚かつ芳醇な香りと味が口の中を支配していく。その味は中々辛いものであった。だがそれがかえって彼女を刺激しクラッカーやチーズに目を向けさせるのであった。
「如何ですか」
「そのワインは」
「はい、これは」
バンダルとギーヴに対して答える。その返答は。

「美味いな」
シャイターンはコムにあったアヤグーズ王家の別荘にいた。そこの王の間において昼食を摂っていた。そこで一杯のワインを手にして口に含んでいたのだ。テーブルの上には何十品もの豪勢な料理が並んでいる。その食材はどれも山海の珍味ばかりであった。
「このワインは。連合のものだったな」
「はい、そうです」
従者の一人が彼の問いに答えた。彼のテーブルの前には従者達が並び後ろには六人の仮面を被った大佐達が並んで立っている。あの警護の者達だ。
「送り主は不明ですが」
「それはどうでもいいことだ」
今はそれを無視するシャイターンであった。左手に持つそのワインの味を純粋に楽しんでいるようであった。グラスはクリスタルのものである。
「今はな」
「どうでもいいですか」
「既に毒は確かめているな」
「はい」
従者の一人が答える。これへのチェックに関してはアヤグーズもティムールも同じなのであった。なおシャイターンは毒殺も得意としている。
「それは既に」
「ならば。さらにどうでもいい」
「左様ですか」
「それに誰が送ってきたのかもおおよそ見当はついている」
「それは一体」
「義勇軍だ」
不敵な、それでいて何かを楽しむ笑みと共に述べた言葉であった。
「彼等だ」

「連合のあの義勇軍ですか」
「そうだ」
従者の問いに答える。従者達は絹の豪奢な制服を着ている。シャイターンはデザインし服の素材まで決めた軍服にも似た華麗なものである。
「あの義勇軍からの贈り物だ。贈り主は彼等の将官達だな」
「またどうして」
「余興だな」
素っ気無くこう述べるシャイターンであった。
「これはな。所詮は」
「余興でこの様なことをですか」
「サハラの者達が」
「おかしいか」
今度はシャイターンから問うてきた。
「我々の同胞がこうした余興を行うとは」
「正直彼等とは思いませんでした」
「私もです」
従者達は口々にそれに続くのであった。彼等にしろこうした行動はサハラの者達のものではなかった。連合の者達が行うものだという意識があるのだ。
「それがまたどうして」
「この様なことを」
「だからだ。余興だ」
シャイターンはまた余興だと述べてみせた。楽しげな笑みを浮かべつつここでまた一口含む。口の中に入れられたそれは辛いものであった。辛口のワインなのだ。

## 第三十一部第五章　三本のワインその十二

「彼等のな」
「またどうして連合のようなことを」
「どうして彼等は」
「彼等は気付いてはいないが変わってきているのだ」
シャイターンは言う。
「彼等はな」
「どういうふうに変わっているのですか？」
「彼等は」
また話すシャイターンであった。
「難民だな」
「ええ」
「それは」
サハラ義勇軍はサハラから連合に逃れてきた者達からの志願を受けて軍を編成している。そこに様々な政治的思惑があるとしても志願制なのは事実だ。
「あくまでサハラの者達だ」
「つまり我々の同胞です」
「彼等は」
「しかし連合にいる」
シャイターンが今度言うのはこのことだった。
「連合にいる。彼等はな」
「それが大きいのですか」
「そうだ。かなり大きい」
シャイターンが指摘するのはここであった。
「連合にいるのだ。それならば」
「連合の者達のようなことをするのも道理ですか」
「彼等はあくまでサハラの者だと自分達では思っているだろう」

そこまで見ているのだった。いや、読んでいるのだ。シャイターンはその鋭い頭脳で。
「だが。それでも少しずつ」
「連合の考えが入ってきていますか」
「気付かないうちにだがな」
「ですがその気付かないものが大きいと思いますが」
「その通りだ」
これこそがシャイターンの言いたいことであるのだった。目の動きがここで止まったことがその証拠であった。しかしそれはほんの一瞬のことだった。彼はさらに言ってきた。
「心はサハラにあり続けている。しかしその身は連合にある」
「連合にあるとなると」
「そうだ、それで連合に染まってもいるのだ」
「成程」
「そうなのですか」
従者達は今のシャイターンの言葉に頷いた。これで話がおわったからだ。
「しかしです」
「しかし。何だ」
「彼等はサハラに帰りたがっているそうですね」
「そのことは度々聞いていますが」
「それは事実だ」
これについてはシャイターンもよく聞いているのであった。だから今話を聞いても特に驚いた様子もない。むしろ話を楽しんでいる感じだ。
「彼等の故郷はこのサハラだ」
「ええ」
「特にです」
ここで彼等独自の条件も加わった。
「彼等の多くはこの北方出身」

「西方や南方出身者もいますが」
「エウロパとの戦争だったな」
やはりそれであった。エウロパはサハラにおいては自国領に組み入れたならばそこにいるサハラの者達を追放していた。それが多くの難民達を生み出していった原因なのだ。
「あれが大きかったな」
「サハラにいた難民達の多くは帰ってきましたが」
「うむ」
難民の多くはサハラに逃れていたのである。連合はやはり遠いのだ。だから連合に流れた者達は難民の間ではかなり少数派なのである。
「おかげで我がティムールの国力はかなり増大もした」
「ですが連合の者達はなのですね」
「その通りだ。サハラにはいなかった」
これが大きいというのである。
「連合にいた。だからだ」
「連合に染まっていますか」
「では」
「しかし心はサハラを向いている」
それぞれ矛盾する考えが出されたのだった。

## 第三十一部第五章　三本のワインその十三

「連合にありながらな」
「また実に複雑ですね」
「連合にありながら心はサハラですか」
「果たしてそれでサハラに戻れるのでしょうか」
「難しいだろうな」
シャイターンははっきりと言い切った。
「最早純粋なサハラの者達ではなくなっているからな」
「そうなりますか」
「しかしそれはまた」
「それはまた。何だ？」
「哀しいことですね」
従者の一人が述べたのだった。
「サハラの者だというのに気付かないうちに連合の中に入っていっているとは」
「サハラに戻っても連合を忘れられそうにはないですね」
「連合については私もよく知らない」
シャイターンはサハラから出たことはない。だから知らないのだ。
「どういった場所なのかはな。しかし豊からしいな」
「そうですね。かなり」
「豊かなのは間違いないです」
「このワインにしろだ」
シャイターンは今飲んでいるワインを口に含んだのだった。赤ワインを。
「サハラのものよりも美味いかも知れない」
「そんなにですか」
「そのワインはそこまで」
「美味いのは確かだ」

それは太鼓判さえ押した。なおシャイターンはサハラきっての美食家でありワインにかけても尋常ではない程通じているとされているのだ。
「ただ辛いだけではない。豊穣な味わいがある」
「豊穣なですか」
「そうだ、サハラのワインでここまで出しているワインはない」
絶賛であった。
「しかも幾らでも飲めそうだ。高級なワインなのか」
「確かに高級であります」
「調べましたが」
従者達はまた答えてきた。ワインについては彼等が調べたのである。
「その結果連合においてはかなり高級です」
「味についても定評があるそうです」
「そうだろうな。将官が飲むのだ」
軍の最高幹部達であるのはこの時代においても同じだ。連合軍は多くの将官がいて義勇軍もそれは同じだがそれでも地位が高いのは変わりないのだ。
「安物の筈がない」
「やはり」
「そして私に贈ってきた」
次に述べたのはこの点だった。
「この私にな。サハラで最もワインを知る私にな」
「閣下にですか」
「その通りだ。私を試す意味もあったのかも知れない」
「閣下を」
「だが。私にはわかった」
またしても一口飲んでから述べたのだった。
「このワインのこともな。他のこともだ」
「左様ですか」

「面白い贈り物だ」
最終的な評価はこうであった。その口元は余裕に満ちた笑みが浮かんでいる。
「連合らしいな」
「連合ですか」
「そうだ、連合だ」
最早完全に連合と割り切っていたのであった。
「彼等はな。連合なのだ」
「連合の者達が連合のワインを贈ってきたというわけですね」
「戦いの前のささやかな贈り物だがな」
「しかし含んでいるものは実に大きいと」
「ワインはただワインであるわけではない」
この言葉もまた実に意味深いものであった。
「そこには多くのものが内包されているのだからな」
「だからこそ味わいがあるのですね」
「その通り」
また答えるシャイターンだった。
「面白い味だ。連合のワインもだ」
「では閣下、これからは」
「ワインは」
「いや、サハラだ」
これは変えないというのだ。ワインについては。
「ワインはサハラのものがやはり一番だな」
「連合のものが美味いとはいってもですか」
「好みというものだ」
シャイターンは好みという言葉を出したのであった。

## 第三十一部第五章　三本のワインその十四

「これに関してはな。確かに連合のワインは美味い」
「はい」
「しかし。慣れているのはやはり」
「サハラのものだと」
「ワインの色は血の色だ」
俗にこう言われることもある。かつてワインというものを知らない日本人は来日してきた静養人達が赤いワインを楽しんでいるのを見て血を飲んでいると思ったりもした。なおこれが鬼が人の血を飲むという話になったのだという説もある。鬼は平安時代に日本に流れ着いた白人だというのだ。
「血なのだ。だから」
「サハラのものがいいと」
「私はそうだ」
やはり彼の嗜好であった。
「サハラのものが一番合うのだ」
「サハラのものですね」
「これからもそれで頼む」
見れば連合のワインは遂に一本空けてしまっていた。シャイターンは酒がかなり強く一回の食事でワインを何本も空けたりする。
「そうだな。さし当たっては」
「はい、さし当たっては」
「コムのワインを頼む」
今彼等がいるこの星系だ。
「ここのワインも有名だったな」
「生産量こそ少ないですが」
これはコムの葡萄農園の面積と関係がある。コムはアヤグーズの重要な戦略拠点であり軍事拠点でもあった。だから農地Ｚ全体の面

積が小さいのである。
「味はよく言われております」
「ではそれをもらおう」
これで話は決まりであった。
「そのコムのものをな」
「畏まりました、それでは」
「だが。美味いことは美味い」
ここで彼は話を連合のワインに戻してきた。
「それもかなりな」
「左様ですか」
「そうだ。連合か」
次に彼は連合に対して考えを向けさせた。
「統一した暁には彼等と向かい合うことになるが」
「向かい合いますか」
「好むと好まざるにも関わらざるにな」
こうも言うのであった。
「どちらにしろ。境を接するからにはだ」
「向かい合うことになりますか」
「その通りだ。だからだ」
また言うシャイターンであった。
「連合のことは今以上に知らなければならないな」
「連合のことを」
「それでは閣下」
従者達は今のシャイターンの言葉に対して問う。実は彼等はただの従者ではないのだ。簡単に言うならば小姓である。シャイターンは将来の幹部候補生を従者として側に置きそのうえで彼等に対して様々な教育を施しているのである。だから彼等も今問うのであった。
「連合とは融和でしょうか」
「それとも」
「それは彼等次第になるな」

シャイターンは届けられた新しいワインを飲みつつ語るのだった。
「あくまでな。彼等次第だ」
「連合次第ですか」
「私は連合に関心はある」
まずはこれを言う。
「しかし。興味はないのだ」
「関心はあるが興味はない」
「それは一体」
「連合については知りたい」
これは紛れもない事実であった。
「しかしだ。連合にある文化や資源、富、領土、人材といったものには」
「興味はないのですね」
「そうだ、全くな」
連合のそうしたことには一切興味がないと断言するのであった。
「ないな。どうでもいい」
「左様ですか」
「サハラが統一されればそれでいいのだ」
シャイターンの野心、言い換えれば目的はあくまでサハラ統一までだ。それから先には一切ないというのだ。つまり彼の野心には限度があるのだ。
「それだけでな」
「サハラまでですか」
「では聞こう」
従者達に対して問う。

## 第三十一部第五章　三本のワインその十五

「連合の領土に興味はあるか」
「連合のですか」
「そして資源には」
続いて資源についても言及する。
「人材と富、文化には。どうだ」
「言われてみれば」
「あまりというか全く」
「豊かなのはわかっていますが」
従者達は考えながら口々に述べるのであった。その思案はおおよそといったようなはっきりしていない部分もあるが実感としては確かなものがあった。
「それでも。欲しいかといいますと」
「全くです」
「それは何故だ」
もう一度従者達に対して問うてきた。
「何故だ、それは」
「サハラはサハラですし」
「連合はあまりにも」
「そうだな。それだ」
彼が言いたいのはそれであった。そのことを従者達にあえて告げたのである。
「連合は連合だな」
「はい」
「別世界です」
この言葉も出て来た。
「完全に。ですから」
「関心はありますが興味は」

「マウリアも同じだ」
このことも語るシャイターンであった。
「マウリアも。別世界だな」
「ええ、確かに」
「ですから。やはり」
「サハラだけでいいのだ」
シャイターンはまた言った。
「私はな。サハラの統一帝国を築く」
「はい」
これはシャイターンの究極の野心だ。何故サハラの者達が長い戦いを続けてきたのか。それはサハラ、即ちアラブの統一を目指してのことなのだ。
「必ずな。だが連合やマウリアはサハラではない」
「それでは」
「そうだ。攻めるつもりはない」
それは皆無なのであった。
「全くな。向き合うがそれはだ」
「融和ですか」
「ましてや連合は四兆だ」
当然ながら国力の差も意識されるのであった。
「我々は二千億だ。併呑できるものではない」
「そうですね。むしろ争えば」
「飲み込まれるのは我等です」
「統一だけではないのだ」
統一から先もまた語られる。
「その国家を築き上げようともすぐに滅んだ例も多い」
「歴史においては確かに」
「建国されてすぐに滅亡してしまった国家もまた」
「多いものだ。統一は創業だ」
これはよく言われることであった。確かに創業はかなり大変なこ

とである。しかし創業が成ってそれでハッピーエンドというのはあくまで演劇の世界だけのことである、現実の世界ではそれからも続くのである。それから先もまた非常に重要かつ困難であるのだ。
「それからは」
「持続させることですか」
「守成だ」
シャイターンは言った。
「守成もまただ。これもまた困難なことだ」
「創業と守成ですか」
「どちらがより困難だと思うが」
コムのワインを飲みつつ従者達に問う。目の前の馳走も多くの中から選んで食べていっている。なおこの馳走のうち残ったものは下の者達に下げ渡される。これはかつての中国やローマ、欧州の皇族や貴族達のそれと同じである。彼等の馳走の食べ方を真似ているとも言える、
「それについてはだ」
「創業ではないでしょうか」
従者の一人がおずおずと述べた。

## 第三十一部第五章　三本のワインその十六

「やはり」
「何故そう思うか」
「何かをはじめるにはまず起き上がらなければなりません」
「うむ」
シャイターンは表情を消して彼の言葉に頷く。
「それはその通りだ」
「その瞬間が最も力を使います。ですから」
「創業こそが最も困難であるというのだな」
「違いますか」
「それは確かにある」
その彼の言葉をまずは認めた。
「だが。間違っているな」
「では守成の方が困難なのですか？」
別の従者が問うてきた。
「それならば」
「それもまた違う」
これもまた正解ではないというのだ。
「どちらもな。正解ではない」
「では一体」
「どちらが」
「双方共なのだ」
これがシャイターンの答えであった。
「双方共ですか」
「そうだ」
また言うのであった。
「創業したものを維持していく」
「はい」

双方を絡めてきたのであった。
「双方は同じだ。だからこそだ」
「共に同じだけ困難であるというのですね」
「その通りだ。何故かわかるか」
「何故かといいますと」
「それは」
答えられない従者達であった。それでシャイターンに対して問うのであった。
「何故でしょうか」
「その理由は」
「それはだ」
ここで彼は答えてみせるのだった。
「まずことを為す」
「それを維持するのですね」
「例えばだ。一旦ものに力を加える」
物理学に例えて話をするのであった。シャイターンはそちらの知識も豊富なようだ。
「それをさらに続けて行くには同じだけの力が必要だな」
「始終続けていくには」
「確かに」
「そういうことだ」
彼が言いたいのはそういうことであった。
「同じだけの力が必要なのだ。わかったな」
「そういうことでしたか」
「だからこそ」
「そうだ。創業と守成は同じだけ困難なのだ」
あらためてこのことを告げる。
「国家を考えるにおいてな」
「だからこそ統一だけでは終わらないのですね」
「統一されても戦争が終わるとも限らない」

こうも言ってみせたのだった。
「それもな」
「千年の戦乱が終わってもですか」
「先に挙げた連合にしろだ」
「連合もですか」
「連合次第といったが」
「はい」
話が元に戻っていた。連合もまた統一後のサハラに大きく関わるということがここでも語られるのであった。シャイターンの目は何処までも広いものを見ていた。しかも先を。
「連合が若し我々に対して敵対的になったならばだ」
「まさかそれは」
「連合は」
従者達はそれについては一斉に否定的な意見を述べたのだった。
「今まで我々に対して武力行使を仕掛けたことはありません」
「武力行使どころか」
さらに言葉が述べられる。

## 第三十一部第五章　三本のワインその十七

「経済制裁等さえも」
「皆無でしたが」
「連合にとっても我々はあくまで外地なのだ」
「外地ですか」
「だから興味がなかったのだ」
こう従者達に述べるのであった。
「連合は連合だけで完結している世界だからな」
「そういう意味では我々と同じですね」
「彼等もまた」
「こう言えばわかり易いな」
「はい」
またシャイターンの言葉に対して答えた。
「それは確かにある。連合は我々への関心は実に希薄だ」
「ではやはり」
「しかしだ」
だがシャイターンはまた言うのであった。
「それは不変ではない」
「不変ではありませんか」
「そうだ」
また言うのだった。従者達に。
「我々に興味を持ったとする」
「興味を」
「ならばその場合はだ。しかも連合は欲というものを大いに肯定している社会だ」
「大衆消費型資本主義社会ですね」
「うむ」
連合が誇らしげに主張している社会である。全ての思想や宗教、

文化及び文明を内包できるこの上なく寛容な社会だというのだ。確かに寛容であるがそれだけではないのだ。
「その社会では欲をエネルギーとして動くのだ」
「それにより経済活動を発展させると」
「主に金銭及び資源だ」
「資源ですか」
「そう。資源だ」
シャイターンの目が光った。資源というところで。
「資源なのだ。彼等は常にそれも求めている」
「ですが連合の資源は」
「それは」
「豊富だというのだな」
「そうです」
従者達は口々にシャイターンに述べた。連合は資源に関してもサハラとは比較にならない程豊かなのだ。資源によっては科学技術で生み出すこともできそれが彼等の豊かさをさらに確固たるものにさせているのである。資源もまた豊かさの重要なパラメーターなのだ。
「それこそ無尽蔵に」
「その彼等がどうして我々に対して」
「石油の話はわかっているな」
「石油ですか」
「歴史にあったな」
かつて国の命運を決めると言っても過言ではなかった資源である。実際に石油を巡って多くの戦争が起こってきたのもまた歴史にある。
「我等の領土にあった石油を狙って多くの者達が来た」
「迷惑なことに」
「とりわけアメリカだの中国だの欧州だのが」
従者達は実に忌々しげに語っていく。
「来てくれましたな」
「呼んでもいないのに武装までして」

「それが再びとも限らないのだ」
「資源があるのにですか」
「またどうして」
「連合は既に中で満ち足りていてその為に動かないと思いますが」
連合は決して好戦的な勢力ではない。欲望を肯定しているがそれは連合の中で全て満たされるからだ。領土争いが連合内部で起こっても新しい別の星系に進出すればそれでよく中央政府もその方針でトラブルを収めてきた。だからこそ連合は内戦もなく外にも進出しなかったのである。
「ですがそれでもですか」
「どうしてまた」
「資源は今あるものが全てとは限らない」
「といいますと」
「新しい資源が発見されたとする」
語るシャイターンの目がまた光った。
「このサハラでな。そして」
「そして？」
「それは連合にはないものだ」
この仮定もまた語られる。

## 第三十一部第五章　三本のワインその十八

「しかもそれがあれば社会すら変えられるならば。どうなるか」
「欲望を肯定する連合がですか」
「彼等がそれを見れば」
「危険だと思うな」
シャイターンの目がさらに光る。
「下手をすればそれこそだ」
「そうですね、その場合は」
「連合が武力行使を仕掛けてくる可能性が」
「そういうことだ。可能性は皆無ではない」
最悪のケースを語り終えてから一息ついてワインを飲むのであった。
「そうなればこのワインもまた」
「連合のものになりますか」
「下手をすればな。そうなる」
また言うのであった。
「さしあたって統一後我々の敵となるのが間違いないのは」
「エウロパですね」
「彼等だけは間違いありません」
これについては最早彼等だけでなくサハラの多くの者が確信していたのであった。
「まず統一してからも何かしてくるでしょう」
「今でこそ敗戦の為大人しいですが」
「そうだ。いずれはまた衝突する」
当然ながらシャイターンもそう呼んでいたのであった。
「彼等とはな」
「彼等との戦いは避けられませんか」
「どうしても」

「彼等にはないのだ」
シャイターンはエウロパに対して辛らつにこう述べてみせた。
「連合が持っているものも我々が持っているものもな」
「住む場所ですね」
「エウロパは狭い」
「確かに」
「連合、いや我々と比較しましても」
「そうだ、狭いのだ」
この事実が確認されるのであった。
「その狭さが戦乱を呼んできたな」
「ええ、それは」
狭さというのもまた戦乱を呼ぶ一因となり得るのだ。それには根拠もあった。
「それだけ住居、耕作地」
「そして工場に漁場。様々なものが足りなくなります」
「現にエウロパではコロニーが多いな」
「はい」
このこともよく知られていた。エウロパは他の地域に比べてコロニーが多いことで知られている。これは軍事用ではない。居住用や農耕用、工業用のコロニーなのである。
「それは住む場所等が少ないからだ」
「そうですね。だからこそ彼等は」
「コロニーにいます」
「しかしコロニーは何かと問題がある」
シャイターンはそこもまた指摘した。
「まず一個一個が高価だ」
「ええ」
その高価さは尋常なものではない。それこそ数個作るだけで一個艦隊に匹敵する資源や建設費、維持費がかかる場合もある。これは尋常ではない。

「それに収容できる人員等も限られているしな」
「少なくとも惑星とは比較になりません」
「衛星とも」
「そうだ。それもある」
シャイターンより先に従者達が次の問題点について言及した。コロニーは惑星や衛星に比べるとその収容可能人数が極めて少ないのである。これは致し方のないことであるが。
「少ないのだ」
「つまりコストパフォーマンスがかなり悪いということになります」
「だからこそ連合ではあまり作られていない」
少なくとも連合ではコロニーを建造するよりも惑星や衛星を開発してそこに移住する方が常である。その方が遥かに効率的だからだ。しかしエウロパは技術的な問題からこれができないのである。エウロパの惑星開発技術は連合と比べるとかなり劣っているのである。
「技術的な問題もあるがな」
「だからですか」
「そしてだ。もう一つ問題があるな」
「はい」
従者達はまたシャイターンの言葉に頷いた。
「防衛上のネックになり易いです」
「コロニーというものは」
「コロニーは宙に漂っている」
所謂スペースコロニーである。この時代のコロニーは。

## 第三十一部第五章　三本のワインその十九

「宇宙での戦闘に実に巻き込まれ易い」
「それだけではないかと」
「話がわかったようだな」
「はい、宜しいでしょうか」
「よい、話してみよ」
「はっ、それでは」
声をあげた従者はシャイターンの許しを得てさらに言葉を続けたのだった。その言葉は。
「宙に浮かんでいる為敵の攻撃目標、とりわけ恫喝の狙いとされ易いです」
「そうだ、恫喝だ」
シャイターンもまた同じことを言いたかったのだ。それをこの従者はわかったのだ。
「一般市民を狙う攻撃を立てる、若しくは公表したとする」
「ええ」
「過去にそうした軍隊もあった」
「アメリカ軍や中国軍、ロシア軍ですね」
「つまり覇権主義国家の軍隊ということになる」
こうした性質の軍隊は一般市民であろうとも攻撃対象にすることがある。これは敵国の市民もまた敵であると認識するからだ。従って攻撃目標とするのである。
「若し彼等が一般市民のいるコロニーを攻撃したとする」
「コロニーの守りは実に薄いものです。そうなれば」
「駆逐艦の砲撃一つで終わりだ」
それがコロニーの現実であった。宙に浮かぶ棺桶とも成り得るものなのだ。
「それだけでな」

「そこを戦場に選ぶだけでも違いますね」
「特に悪質なのはテロリストだが」
「連中もですか」
「惑星や衛星でテロ行為を行うよりも容易だ」
何しろ外部から少し攻撃を加えるだけでいいのだから。しかもその効果は惑星や衛星に対するよりも遥かに確実であるのだ。何しろコロニーの中に多くの人間がいるのだから。
「実にな」
「その通りです。テロにも弱い」
「そこが戦場になるならば防御側はかなりの負担になります」
「一般市民を見捨てたならばだ」
その際どうなるかについても話される。
「それでその国、その軍の信望はほぼ皆無に帰す」
「その通りです」
国家、軍隊が何の為にあるかだ。確かに侵略の為という面はある。しかし市民を守るというのもまた重要な責務なのだ。だからこそ災害救助にも派遣されるのである。
「ですからそれはできません」
「市民を守らない軍なぞ軍ではありません」
「そうだ。それはただの武力組織になってしまうのだ」
ティムール国家主席としてこのことはよく認識しているシャイターンであった。この程度のことがわかっていないのならば国家主席は務まらない。
「だからだ。コロニーはやはり」
「持たない方がいいですか」
「私はそう考える」
少なくともシャイターンはこう考えているのだった。
「おそらくサハラ全体でもそうであるだろうし」
「はい」
サハラではコロニーは非常に少ない。そうした防衛上の理由から

である。誰もわざわざ狙われるようなものを建造したりはしないものなのだ。
「連合でもそうだな」
「連合ではあくまで惑星開発や資源収集の為のようです」
「実に連合らしい」
これがシャイターンの連合のそれに対する感想だった。
「それについてはな」
「しかしです」
ここで従者の一人が気付いた。
「連合とエウロパの戦争ですが」
「あの戦争か」
「はい。あの戦争では連合軍はそうしたコロニーには一切攻撃を加えませんでした。それどころか」
話をさらに続けていく。
「コロニー近辺での戦闘すら避けていました。やはりこれは」
「連合軍、いや八条長官だったか」
「あの長官ですか」
「そうだ。あの長官は一般市民を狙うことは好まない」
この点において八条は非常に強い意志を持っているのだ。
「それは厳しく戒めていたな」
「そうですね。その結果連合とエウロパの戦争は」
「非常に奇麗な戦争でした」
「それは政治的にかなり成功していた」
政治的にという言葉を出してみせたのであった。

## 第三十一部第五章　三本のワインその二十

「実にな」
「政治的ですか」
「そうだ。連合軍は一般市民を狙わない」
厳然たる事実となったことであった。
「これを内外に大きく宣伝することになった」
「しかも規律厳正であると」
「それもある」
少なくともこうしたことにかけては連合軍はかなり厳しい軍隊であった。訓練は緩くともその軍規軍律は厳正であり続けているのである。
「つまりだ。それは」
「正義の軍隊ということになるのですね」
「悪事をせず一般市民を狙うことはしない」
シャイターンはこのことをまた強調してみせた。
「それを正義の軍隊と言わずして何と言うか」
「確かに」
「一般市民にとって受けは非常にいいです」
「あの長官の意志もあるにしろ」
「それがあの戦争においては非常にいい結果となった」
シャイターンは今度は結果を述べた。
「そのおかげで一般市民に犠牲は殆どなかったのだからな」
「エウロパ軍もそれを受けてコロニー近辺にはあえて布陣しませんでした」
「布陣することも可能だったというのに」
「貴族だ」
またしても一言で述べてみせるシャイターンであった。
「貴族だからだ」

「誇りですか」
「そうだ。貴族を貴族にしているものは何か」
従者に対しての問いは続く。いささか教師めいている一面が確かにあった。
「それが何かというと」
「やはり誇りです」
「それ以外にはありません」
従者達もすぐに答えることができた。既に答えが出ているとはいえだ。
「とりわけ彼等に関しては」
「ブルー＝ブレッドでしたね」
昔から使われている言葉だ。高貴なる者という意味である。庶民とは流れている血がそもそも違うのだと言ってみせてこれを現わしているのである。
「好きな言葉ではありませんが」
「どうにもあれは」
「不遜な言葉ではある」
シャイターンもこのブルー＝ブレッドという言葉に不快感を見せたのであった。
「何が青い血か」
「はい」
「アッラーは人を同じに作られた」
イスラムの教えである。アッラーの前に人は皆同じであるというのがイスラムの教えだ。確かに地位はあるが王侯も乞食も同じムスリムであるという意識が彼等には強いのだ。曲がりなりにも強い信仰心を持っていると言えるシャイターンが不快に思うのも道理であった。
「何故それで血が青いのか。少なくともそう自称するとは」
「確か彼等もまた」
「キリストだった筈」

「今では混ざっているがな」
彼等の信仰についても話される。
「かつてのギリシアや北欧の神々が復活しているからな」
「それでもキリストはありますね」
「うむ」
これについては確かなものだと言われるのであった。キリストは欧州の心であるとされてきた。それは今も容易には消えていないのである。だからこそバチカンがあるのだ。
「そのキリストの教えですが」
「神の前に全ての者は平等だとしているな」
「はい、それです」
従者達が言うのはこのことであった。
「ですがその様な言葉があり」
「しかもです」
彼等の言葉はさらに続けられていく。
「彼等はかつて奴隷を持っていました」
「しかも十九世紀までです」
奴隷についても話がされるのであった。だがこれはかなり複雑な問題であった。
「奴隷は彼等だけではなかったですし」
「我々も持っていましたが」
イスラム世界にも奴隷が存在したのは事実である。これはイスラム世界が形成されてからあった制度であるしオスマン＝トルコでもあった。

## 第三十一部第五章　三本のワインその二十一

「ですが我々はムスリムになれば解放されましたし」
「そうです」
イスラム世界の奴隷は非常に寛容でありそのうえムスリムになれば解放されていた。つまりここでもムスリムは平等とされていたのである。
「しかし彼等はそうではなかった筈です」
「キリスト教徒になっても。そのうえその様な言葉までありますし」
「欺瞞に過ぎないのだ」
シャイターンはここで出したカードは断言であった。
「所詮はな」
「欺瞞ですか」
「そうだ。確かフランスの国旗だったか」
「トリコロールですか」
これはこの時代でも使われている。フランス人にとっては永遠の誇りである。
「あの青、白、赤の意味は知っているな」
「はい」
「それは知っております」
彼等もトリコロールの色のそれぞれの意味はよく知っていた。あまりにも有名であるからだ。
「まず青が自由で」
「そうだ」
「白が平等、そして」
言葉がさらに続けられていく。
「赤が博愛ですな」
「題目としてはいいと思います」
言葉にいきなり皮肉が入っていた。この時代のアラビア語はかな

り率直で皮肉を言う前にずけずけと言う傾向があるが今回は珍しかった。
「あくまで題目として、ですが」
「題目は題目だ」
シャイターンはばっさりと切り捨ててみせた。この言葉の使い方の方がサハラである。
「しかしだ。面白いのはだ」
「その現実ですね」
「自由、平等、博愛」
この言葉がまた出される。
「しかしその実態というとだ」
「全く逆どころではないですね」
「少なくともフランスの行いといえば」
「何処が平等なのか」
シャイターンが言うのはまずここであった。
「他国民に対しては容赦なく侵略を行い」
「そのうえ奴隷の如き扱いでした」
「あのイギリスとどちらがより悪辣だったか」
ここまで言われる。イギリスの植民地統治もかなり悪辣なものとしてサハラでも連合でもよく言われているがフランスはそれに匹敵するものであったのだ。
「不平等の間違いではないでしょうか」
「自由にしろ博愛にしろです」
残る二つについても言われるのであった。
「確かに自分達の自由については敏感ですが」
「その反面。他者に対しては全くです」
「無神経ではないところがさらに悪質です」
つまりは確信犯というわけだ。この認識はサハラにおいては一千年前から変わってはいない。むしろ先のエウロパのサハラ侵略によってそれはさらに強いものになっているのだ。

「博愛もまた」
「あれは偏愛でしょう」
「そういうことだ。彼等の掲げる看板は偽りが常であるのだ」
「常ですか」
「そう、常だ」
シャイターンもまたエウロパに対しては強い嫌悪感を抱いている。それを隠そうともせず政治に利用さえするのが彼の手法であるが。
「常にそうだ。だからこそ」
「若し彼等が平和を掲げてもですか」
「信用できるとは全く思わないことだ」
「では我々の第一の敵はエウロパになりますね」
「それは間違いない」
連合も確かに脅威であるがやはり第一は彼等なのであった。サハラとエウロパの関係はそれ程険悪なものが存在しているのである。
「連合が最も大きいがな」
「意識がはっきりしているだけにですね」
「エウロパは連合及び我々と境を接している」
エウロパの事情についても話される。エウロパは連合及びサハラと国境を接している。それに対して連合及びサハラはそのエウロパとお互いだけでなくマウリアとも境を接しておりマウリアは連合及びサハラと境を接している。こうした宙理上での関係もあった。

## 第三十一部第五章　三本のワインその二十二

「それだけにだ」
「連合に向かうことはできませんね」
「それは不可能だ」
エウロパもまた連合という厚い壁に阻まれているのである。
「今までもガンタース要塞群があったな」
「はい」
言わずと知れた連合がかつてブラウベルグ回廊、今の呼び名をマラッカ回廊というその回廊の出口に築いたエウロパ用の要塞群である。ここを抜けるには最低で百個艦隊が必要であるとされてきた。つまりエウロパ軍の優に半数が必要とされていたのだ。
「それを突破することすら不可能であったのだ」
「だからこそ彼等は先にも我々を選んだ」
「今なら余計にだ。今のエウロパでは連合に勝てるどころかだ」
それはもう最初から完全に不可能だったのだ。
「彼等がまた攻めてきたならばそれで終わりだ」
「そうですね。最早ニーベルング要塞もありません」
彼等の重要な護りであったその要塞もないのであった。既に。それどころかだ。
「ましてやニーベルングは最早」
「アタチュルク要塞だ」
連合のものになりこう改称されていたのである。そして改称されただけではなかったのだ。
「アタチュルク要塞はこれまで以上に強化されこれまた要塞群になっている」
「はい」
つまりは連合風に完全に護りを固められているというわけなのだ。
「周辺も非武装地帯になっています」

「つまり連合軍が動けばそれだけで」
「エウロパは滅ぶ。我々より遥かに連合の危機を感じているのだ」
「ではやはり攻めるとなれば」
「我々ですね」
「そういうことになる」
力関係を見ての結論であった。
「どうしてもな。それは避けられないであろう」
「避けられませんか」
「ですが閣下」
従者の一人はここで政治的な見解から述べるのであった。
「エウロパは確かに八方塞りと言っていい状況ですが」
「うむ」
「それだけでしょうか」
彼は言うのであった。
「それだけとは」
「彼等は今彼等の北方と西方のあの何処までも続くという無限の暗黒宙域」
サハラではこう認識されている。何十万光年もの距離に星系一つ見当たらないからこう呼ばれているのだ。星系、即ち恒星と惑星、衛星があってこそ人はそこに移住することができるからである。
「そこを越えようとしていますが」
「そういえばです」
別の従者もここで口を開いた。
「彼等はその終わりを見つけようとしているとか」
「終わりを見つけることができれば」
「その先に進出することができるのだな」
「はい、そうです」
「そうなればです」
口々にシャイターンに対して述べてきた。
「我々とことを構えずに移住先を見つけることができ」

「戦争にはならないでしょう」
「その可能性もある」
シャイターンもまたその可能性は否定しないのであった。
「彼等が無事進出できればな」
「それではその場合は」
「我々とエウロパの戦争は」
「回避できるに越したことはない」
シャイターンもまたここでは政治家としての判断を下した。
「戦争になったならばだ」
「はい」
「ただ人命が消耗されるだけではない」
「資源も消耗し」
従者達も戦争で何が起こるかはよくわかっていた。軍人はあくまで戦争のことだけを考えていればよいとされる。少なくとも下級将校までは。だが政治家は戦争が何をもたらすのかも考えなければならないのである。シャイターンも彼等も今は政治家となっていた。
「産業も破壊される」
「できれば避けたいものです」
「今は仕方ありませんが」
サハラ内部ではそれは今はどうしようもないということだ。何しろ互いに統一の為に戦っているからだ。その結果千年の間に多くの人命が銀河に消え資源を磨耗し産業が衰退していったのだが。戦乱はただそれだけで終わりはしないのである。様々な弊害があるのも事実なのだ。
「ですがエウロパとはやはり」
「連合に対しても」
「戦争は避けたいものだ」
やはりシャイターンはここでも政治家として語るのであった。

## 第三十一部第五章　三本のワインその二十三

「何としてもだ」
「ですからこの場合は」
「避けられるのではないでしょうか」
「エウロパにしろです」
　彼等はエウロパの立場になってみても考えるのであった。相手の立場を想定してものを考え見ることも政治にとっては必要なのだ。例えば地球にあった頃の中国が何故万里の長城を築き伝統的に何処に備えていたか。アメリカのアラスカは何の為にあそこまで軍事的に重要視されていたか。彼等はどちらもロシアという国を見ていたのである。地球にあった頃彼等はロシアを常に第一の敵として想定し戦略を立ててきた。これもまた相手の立場になってみなければどうしてもわからないことであるのだ。
「戦争はしたくないでしょうし」
「特に今はです」
　そのうえで現在のエウロパについても目をやるのであった。
「あそこまでダメージを受けていれば」
「これ以上の疲弊は最早エウロパにとっては」
「流石に今はない」
　シャイターンもそれは否定する。
「しかもだ。エウロパもまた戦争は出来る限りは避ける」
「やはりそうですか」
「ですね」
　従者達はシャイターンのその言葉に頷く。その間にシャイターンはまたワインを一本空けていた。すぐさままた一本運ばれクリスタルのグラスに注がれるのであった。
「ではやはりそうなれば」
「彼等との戦争は」

「だが。失敗すればだ」
ここでシャイターンの目が光る。
「どうなるか」
「失敗すればですか」
「そうだ。わかるな」
「はい、その場合は」
「やはり」
これから先は言わなくても誰もがわかることであった。
「我々との戦争です」
「彼等にとって不本意であっても」
「その場合にも彼等自身備えている筈だ」
シャイターンはこのことも読んでいるのであった。
「備えなくては何も出来はしないのだからな」
「ではやはり」
「エウロパとの戦争の可能性は」
「完全には消えない」
今度ははっきりと言ってみせたシャイターンであった。
「決してな」
「そうですか。やはり」
「そうなりますか」
「下手をすれば発見しても我々と戦争になるかも知れない」
「新天地を発見してもですか」
「まさか」
「エウロパは非常に切迫した状況にある」
シャイターンもまたエウロパの立場を想定してそこから考えたのである。そのビジョンはやはりと言うべきか彼の従者達よりも上であった。
「一千億の民があの中にいる」
「はい」
「サハラにいた者達もな。既に飽和寸前だ」

「今でそうですか」
「疲弊から立ち直ったならば」
従者達にさらに言葉を続けるのであった。
「すぐにでも余剰人口の移住先を見つけなければならない」
「その為の新天地ですが」
「無論そこへの移住は最優先だろう」
かつての大航海時代とこの点では同じであると言えた。進出先を見つけそこに向かうということは。
「だが何十万光年だ」
「距離ですか」
「一口に何十万光年だがそこの距離は途方もない」
「確かに」
「それだけの距離となると」
彼等にも今一つ想像できないものがあるのであった。どうにも首を傾げるその姿がそのことを何よりも如実に現わしていると言えた。
「しかし我々は近いな」
「はい、それは」
「言うまでもなく」
「若し我々が統一していないかさもなければ統一していても弱ければ」
「来ますか」
「可能性は皆無ではない」
やはり可能性を零であるとは言わないのであった。これもまた政治家のビジョンであった。

## 第三十一部第五章　三本のワインその二十四

「だからだ。やはりエウロパとは」
「常に衝突する可能性があるのですね」
「今にしろ備えは置いてある」
ティムールはエウロパと国境を接している。だから今ハサンと戦争中である今もエウロパとの境には兵を置いているのである。置かずにはいられないのだ。
「何があってもいいようにな」
「そうですね。あれは」
「確かに」
「連合と戦う可能性は皆無ではないが極めて少ない」
「しかしエウロパとは」
「それよりずっと可能性は高い。それを覚えておくようにな」
「はっ」
従者達は一斉に一礼する。ここでシャイターンはさらに言うのであった。
「ワインだが」
「ワインですか」
「連合のものは輸入していきたいな」
こう述べるのであった。
「美味いことは美味かった」
「左様ですか」
「しかしだ」
そしてまた言うのである。
「エウロパのワインは不要だ」
「不要ですか」
「そうだ、不要だ」
言い切りであった。

「現在も未来もな。過去もそうだったが」
「不要ですか」
「そうだ。エウロパのワインは全く必要ない」
「エウロパはですね」
「連合のそれとは違う」
連合も出してみせる。あくまでこう言うのだった。
「それはいいな」
「はっ、それでは」
「エウロパに関しては」
「それではだ」
このことを伝えると同時に今のワインの最後の一杯を飲んだ。丁度食事も終わっていた。幾つか置かれているデザートのうちから一つを選んで食べたのである。それはケーキだった。見ればサハラのすぐりを使った生クリームのケーキである。それ自体はエウロパ風であった。
「午後は作戦会議だったな」
「はい」
従者の一人が答えた。
「その通りです」
「そうか、わかった」
その言葉を聞いてまずは納得した顔で頷くシャイターンであった。
「では部屋の準備をしておいてくれ」
「わかりました。それでは」
「そしてだ」
シャイターンはここでまた言うのだった。
「何か」
「先程のワインだが」
「連合からのワインですね」
「そう、それだ」
話はワインに戻っていた。シャイターンはあえて戻してきたので

ある。ここに何かしらの意図があることは誰の目にも明らかであった。
「これは私だけに贈られたものではない」
「閣下だけではないですか」
「余興ならばだ」
また余興という言葉を出してもみせる。
「おそらくこれはだ」
「他の誰かにもですか」
「それが誰かというとだ」
彼はそこを言うのだった。この目がまた実に鋭いものだった。
「おそらくは二人だ」
「二人ですか」
「一人はまずアヤグーズのブルコルジ女王」
「彼女が！？」
ブルコルジと聞いて従者達の目が動いた。シャイターンの後ろにいる六人の仮面の将校達だけは表情を伺い知ることができなかった。

## 第三十一部第五章　三本のワインその二十五

「あの女王がですか」
「そうだ。彼女に贈られている」
彼は述べた。
「面白い趣向ではある」
「面白いだと」
「そうだ」
不敵に笑って述べる。しかしその顔は酒には酔ってはいなかった。赤くもない。
「これから戦う我々双方に贈るとはな」
「この意味は一体」
「何なのでしょうか」
従者達はそれについて考えた。しかし彼等はここでもサハラとして考え連合としては考えなかった。その為どうしてもわからないのだった。
「健闘を祈るということだ」
「健闘をですか」
「そうだ」
こう従者達に述べるシャイターンであった。
「それでだ。彼等はな」
「成程、そういうことですか」
「戦いへ向かう我等へのほんの祝福と餞別だ」
「またそれは随分気障なことです」
「全くです」
どうも気取ったものに思えるのだった。彼等にとっては。
「それはどうにも」
「やはり我々の流儀では」
「やはり連合だな」

「はい」
どうしてもそう思えるのであった。
「こうした贈り物自体が」
「やはりどうにも」
「だが受け取った」
その笑みのまま答えるのだった。
「だからこそだ。我々は」
「我々は？」
「彼等に対して我々の戦いを見せるとしよう」
実に楽しげな笑みであった。これからのことを思い浮かべそれを楽しんでいる。
「思う存分な」
「それでは」
「午後の会議もまた」
「会議に参加する提督や参謀達にはワインを贈ろう」
「ワインをですか」
「私も少し連合の真似をしてみたくなった」
笑みが少し変わった。シャイターンにしては珍しい子供っぽさも混ざった笑みであった。
「少しな」
「そうですか」
「そうだ。それも手配しておいてくれ」
「はっ」
またシャイターンの言葉に応える従者達であった。
「それではそれも」
「お任せ下さい」
「では頼むぞ」
ここまで言うと立ち上がる。そのうえでまた言うのだった。
「食事はいつもの様にな」
「わかりました」

シャイターンの食事は常に残ったものは下の者達に下げ渡される。これを楽しみにしている者達もいる。国家元首、しかも贅沢を好み美食家でもあるシャイターンの食事であるから尚更である。彼の舌はサハラだけでなく人類全体でも至高のものの一つと謳われているのだ。

「それではそちらもお任せ下さい」

「頼んだぞ」

この指示を伝え終えてからシャイターンは食事の場を後にする。そうして作戦会議に向かうのだった。この時彼はふと一人呟いた。

「さて、最後の一人は」

義勇軍の将官達がワインを贈った最後の一人について思いを及ばせるのだった。

「今飲んでいるのだろうな」

そのことも思い楽しそうに笑うのだった。彼の楽しみは中々趣きがあるものだった。

マシュハドは八条と会っていた。地球の国防省のビルの一室で彼と二人で話をしていたのである。話は義勇軍に関するものであった。

「はい、その件につきましてはわかりました」

「それで宜しいのですね」

「はい」

八条はマシュハドの言葉に頷く。今二人は機能性だけを重視した簡素な会議室で二人で話をしていた。部屋には二人の他には誰もいない。

## 第三十一部第五章　三本のワインその二十六

「今申し上げたようにしますので」
「有り難いことです」
マシュハドは八条の今の言葉を聞いて満足した顔で頷くのだった。
「そう言って頂き何よりです」
「そしてです」
八条はまたマシュハドに言った。
「戦没者の葬儀はムスリムで統一するとして」
「ええ」
話は戦没者の葬儀に関することだったのだ。連合では戦没者の葬儀はあらゆる宗教の者達が一同に会して行われる。しかし義勇軍は全員がムスリムである為にこれは出来ない。だからその件に関して彼等の間で細かい打ち合わせを行っているのであった。
「宗派は」
「それにつきましてはこちらにお任せ下さい」
「義勇軍だけでですか」
「ええ。スンニー派とシーア派ですね」
この時代でもイスラムは大きく分けてこの二つに分けられるのである。
「長官が気にかけておられるのは」
「その通りです。シーア派にしろ」
八条はさらに述べる。
「各派ありますし。その派によって葬儀の方法が変わりますね」
「その通りです。それは宗派の数だけあります」
そういうことであった。
「ですからそれも」
「連合にはない宗派もありましたね」
「はい、それもです」

マシュハドは答える。
「それこそ様々なものが」
「サハラだけにあるイスラムの宗派」
八条もそれに対して考えを巡らせだした。
「確かティムールのシャイターン主席にしろ」
「そうです、シャイターン家もまた同じです」
こう八条にも答えたのだった。
「シーア派で」
「そうですね、シーア派です」
八条はここも言うのであった。
「シーア派はどうも多くに分かれていますね。とりわけサハラは」
「連合ではスンニー派が多いようですね」
「ええ、それは」
その通りだった。連合でのイスラムはスンニー派が主流なのである。おおらかな雰囲気のある連合ではスンニー派が合っているとも言えるのだ。
「確かに。その通りです」
「やはりそうですか」
「国によって多少の違いはあることにはあるのですが」
「そういえば日本では」
「ええ」
マシュハドに対して述べる。
「ムスリムは少ないです」
「確か人口の一パーセントでしたか」
マシュハドは頭の中のデータを辿って述べた。
「その割合は」
「その程度だったでしょうか」
八条もまた己の頭の中にあるデータを辿るのだった。
「確か」
「ムスリムは少ないのですね」

「ええ、サハラの方々が残念がられているのは知っています」
これは昔からである。日本においてはムスリムは宗教面においてはとりわけ少数派であるのだ。これには日本が元々多神教であるということも大きく関係していた。
「ですがそれでも」
「それだけですか」
「キリスト教徒も少数派です」
このことも述べるのだった。
「ユダヤ教徒に至っては」
「あれはイスラエルだけですね」
笑って述べるマシュハドであった。
「あの国にのみあるものと言っても過言ではないでしょう」
「その通りです。ユダヤ教はユダヤ人の宗教です」
八条もまた述べる。

## 第三十一部第五章　三本のワインその二十七

「ですからユダヤ人以外には」
「やはりそうなりますね」
「そういえばです」
八条はここでマシュハドに問うのであった。
「サハラでは元々ユダヤ教徒は」
「弾圧はしていません」
きっぱりと述べたのであった。
「多少はあったことは事実ですが」
「しかし欧州の様に惨たらしいものではなかった」
「経典の民です」
この言葉が出された。
「彼等も我々もまた」
「そうでしたね。元は同じ宗教でしたね」
「神が同じなのです」
そういうことなのだ。アッラーはヤハウェと同じ存在なのである。
これはコーランにおいてもはっきりと書かれていることであるのだ。
「我々は」
「そうでしたね。だからなのですね」
「二十世紀にしろです」
話が古い時代のことに移った。
「あの時我々と彼等は激しく争いましたが」
「ええ、確かに」
中東戦争である。自立と生存を目指すイスラエルと聖地エルサレム及びシオンの地の奪回を目指すアラブ諸国との戦いである。結果としてイスラエルは生き残りパレスチナという国家も生まれるには生まれた。一応は双方の望みが果たされた形にはなったのだ。
「ムスリムにしてはユダヤ人が国家を作っても構わなかったのです

ね」
「それは全くです」
これまたはっきりと答えるマシュハドであった。
「彼等が何処に国を作ろうが一向に構いません」
「そうしたね、それは」
「そこで何をしようが構いません」
こうも言うのだった。
「むしろ祝福したい位です」
「ですが・・・・・・ですね」
「はい、そうです」
ここでマシュハドは残念そうな顔で首を捻るのだった。髭だらけの厳しい顔だがそれが妙に愛嬌のある感じに見えてもいた。
「ですがあの場所だけはだったのです」
「聖地だけは駄目だったのですね」
「あそこでさえなかったらよかったのです」
こうも言うのだった。
「我々としましては」
「謀略がありましたしね」
八条は謀略という言葉を出してみせた。
「イギリスの謀略が」
「今も尚忌々しい連中です」
この時代にもエウロパの中でイギリスと言う国家は存在している。連合においてもサハラにおいてもエウロパ構成国の中でオランダ、スペイン、フランスと並びとりわけ評判の悪い国家である。中にはエウロパの悪の象徴とまで考えている者もいる。もっとも連合やサハラにとってはエウロパは悪そのものであるのだが。連合では各国の教科書にはっきり書かれておりサハラは北方侵略で実経験がそれを言わせていたのだ。
「そのせいで無駄な血が流れました」
「全くです」

「しかし。今はイスラエルもあります」
連合の中の一国として確固たる地位を築いているに至っているのだ。
「我々も彼等と交流がありましたし」
「イスラエルはお嫌いですか」
「いえ」
実に素っ気無く八条の問いに答えたのだった。
「全くです。好きでも嫌いでもありません」
「左様ですか」
「ただ。経営者達はあまり好きではなかったようですが」
「ビジネスにおいてですね」
「イスラエルの経営者は手強い」
マシュハドは苦笑いになっていた。
「よくそう言われていました」
「そうですか、やはり」
「連合でもそう言われていますね」
「イスラエルの経営者も商人も手強い」
八条は言う。
「連合では誰もが知っていることです」
「そうですか、やはり」
「私の実家ですが」
八条が今度出したのは彼の実家であった。連合屈指の企業グループである。八条はこの家の嫡男であるのだ。つまり御曹司でもあるのだ。

## 第三十一部第五章　三本のワインその二十八

「イスラエルでもビジネスをやっていまして」
「手強いですか」
「現地のスタッフがいつも泣いております」
彼もまた苦笑いになっていた。
「そのあまりの手強さの前に」
「やはりそうですか」
「彼等はとかく商業に長けています」
それで有名なのがユダヤ人なのである。
「ですから。中々」
「やはりそうですね」
「その彼等がいるといないのとで大きな違いがあるのもまた事実ですが」
「商業の活性ですか」
「連合になくてはならない存在の一つです」
こうまで言う八条であった。
「それもいい意味で」
「宗教とは別にしてですね」
「彼等は押し付けることがありません」
ユダヤ教の特徴の一つである。ユダヤ教はあくまでユダヤ人だけの宗教であるからだ。過去はこれがもとでの弾圧や迫害も多かった。
「それも決して」
「それは我々も同じでして」
マシュハドはまた笑ってみせたうえで述べてきた。
「信仰の強制は一切しません」
「そうですね。イスラムは」
「ただ。それでもです」
そのうえでまた言うのであった。

「葬儀に関しましては」
「葬儀はかなり重要なものです」
それがわからぬ八条ではない。
「ですからやはり」
「我等のことは我等に任せていただき有り難うございます」
「実は。私も考えたのです」
八条は実直な様子で彼に述べてきた。
「正規軍と合同で行うべきかと」
「合同ですか」
「はい、連合軍の葬儀の仕方は先程お話した通りです」
「全ての宗教が一度に介してですね」
「サハラから見れば非常に変わっていると思いますが」
「確かに」
それはマシュハドにとっては否定できないことであった。確かに全ての宗教が一度に介しての葬儀はイスラムがほぼ全てを占めるサハラから見ればそうであった。
「あまり想像できない光景です」
「やはりそうですか」
「ですが」
マシュハドはまた言う。
「興味深くもあります」
「否定はされないのですね」
「イスラムは他の宗教を否定はしません」
これは事実である。イスラムはこの点においてキリスト教等とは大きく違うのである。他の宗教への寛容性も備えているのがイスラムなのだ。
「それは絶対にです」
「絶対ですか」
「ジズヤさえ納めれば」
異教徒はこれを納めれば信仰を許すのがイスラムの決まりだ。

「それで構いません」
「コーランですね」
「その通りです。ですからそれを否定することは絶対にありませんので」
「わかりました。そうですね」
「何か」
「今考えついたのですが」
まずはこう前置きしたうえで述べた。
「若しそちらが宜しければですが」
「はい」
「葬儀を行う場所及び時間は同じということにしませんか」
「同じですか」
「そうです。つまり同じ場所で二つの葬儀を共に行うのです」
こう述べる八条であった。
「それで行きませんか」
「同じ場所にですか」
「連合軍は連合軍、義勇軍は義勇軍」
また彼は述べた。

## 第三十一部第五章　三本のワインその二十九

「そういうことです」
「ふむ」
マシュハドはそれを聞いて考える目になるのだった。厳しい顔だが知的なものも備えていた。それは歳がそうさせているという一面も見られた。
「そうですな。それは」
「悪くないと思うのですが」
「つまりあれですな」
マシュハドはその考える顔でまた言う。
「連合軍と義勇軍は確かに分かれている」
「はい」
それは認めるのだった。やはりそれぞれ別の軍なのである。
「ですが同じなのです」
「同じ連合の軍隊なのですね」
「はい、そうです」
八条はまた答えた。
「ですからこの形式を提案したいのですが」
「実はです」
ここでマシュハドの顔が少し深刻な色を帯びた。
「御存知かも知れませんが最近我等義勇軍は」
「正規軍から特異な目で見られているのですね」
「そうです、その通りです」
また頷いてみせるマシュハドであった。
「御聞きになられていたでしょうか」
「はい」
静かにその彼の言葉に頷くのであった。
「耳に入っていました」

「そうですか、やはり」
「偏見は確かにあります」
八条の目には達観の色が混ざってきていた。
「人間というものは因果なものでして」
「ええ。だからこそ」
「偏見による差別がどうしても生じてしまいます」
「これはどの国でもどの時代でも同じですね」
「否定できません」
また答える八条であった。
「このことは。どうしても」
「はい。それでです」
マシュハドもまた言葉を続けるのであった。
「長官の今回の御提案はそれを考慮してのことですね」
「別々にやれば溝がさらに深まります」
今度は懸念する顔と声になっていた。
「そうなれば。連合軍全体にとっては」
「宜しからざるものですね」
「だからです。あえて同じ場所で行いたいのです」
「同じ場所でかつ同じ時間で」
「如何でしょうか」
ここまで話したうえで彼に問うのであった。
「この提案は」
「そうですな」
マシュハドはここまで聞いてまた考える顔になるのであった。
「こちらとしても正規軍と溝が深まるのは避けたいです」
「やはり」
「既に末端では言い争いも起こっているそうです」
「何件かですがね」
「ですが起こっているのは事実です」
これが懸念されているのであった。悪い芽は早いうちに摘み取っ

ておくに限るのはこういった事態においては常の話であった。
「ですから」
「早いうちに手を打っておくべきですね」
「そう考えます」
マシュハドから八条への提案という形にもなるのだった。
「私としましては是非と考えます」
「わかりました。それでは義勇軍の方がそうなのですね」
「はい。ですが」
ここで八条は複雑な顔になるのであった。
「連合軍はですね」
「やはり心理的な抵抗がありますか」
「それを感じている者もあります」
否定できない事実はこれもであったのだ。

## 第三十一部第五章　三本のワインその三十

「それは紛れもない事実です」
「やはり」
「サハラ義勇軍は難民から構成されています」
この事実もまた不変のものである。
「ですから」
「我々は異邦人であると」
「そう思われているのです」
このことが今はっきりと語られたのであった。
「我々の一部からは」
「異邦人ですか」
「連合の人口は四兆人です」
言うまでもなく今の人類の勢力の中で最も大きな勢力だ。割合にして八割を優に超える圧倒的なものである。サハラの二十倍の数である。そのサハラとエウロパ、そしてマウリアの公式発表の人口数を足してもその八分の一程度にしかならない程なのである。
「その中で十億ですが」
「十億の異邦人ですか」
マシュハドは四兆と十億を比較して。また述べたのであった。
「まさに大海に浮かぶ小舟ですな」
「そうしたものですね」
この表現は八条も納得するものであった。
「確かに。それだけの割合が」
「ええ」
「その小舟に乗る異邦人です」
「実に心許ないものです」
マシュハドの言葉がまた曇る。
「全く以って」

「しかもです」
八条の言葉はさらに続く。
「連合には異邦人は」
「いませんね」
「確かに連合には多様性があります」
それを誇りともしているのが連合であるのだ。
「ですが異邦人となると」
「いませんか」
「先程イスラエルの話が出ましたが」
「はい」
連合の主要構成国の一つである。
「イスラエルはかつては異邦人でありました」
「欧州においてはですね」
「そうです、ユダヤ人と言われていた頃」
かつては確かにそう呼ばれていた。しかしこの時代においてはイスラエル人と呼ばれることが圧倒的に多い。ユダヤ教とは別に国名でだ。
「彼等はそうでした」
「ロマニもそうでしたな」
「その彼等にしろ連合では」
「れっきと国を持っていますね」
「はい、その通りです」
そうだったのだ。連合においてはロマニ人、かつてジプシーと呼ばれていた彼等の国家も存在するのである。ロマニ連合というのである。
「国土もありますし」
「そうらしいですな」
「国土自体は星系一つです」
これには理由がある。連合中央政府の法においては国家は星系一つ最低限領土として持っていなければならないのだ。しかも規定の

連合領土内でである。これにより国家が無闇に増加する事態を避けているのである。各国の法もこれに準じて定められている。
「ですがロマニ全体は」
「連合全体に広がっているのですね」
「はい、そうです」
こうマシュハドに答えた。
「ですが彼等もまた連合においては異邦人でありません」
「はい」
「ですが」
八条の顔が曇った。
「貴方達となるとです」
「異邦人になりますか」
「連合にいる者ではありませんでした」
極めて重要なポイントとなっている。
「サハラにおられました。ですから」
「連合では異邦人になると」
「逆に言えば我々もこうなります」
八条の言葉は逆説的にさえなった。
「我々もサハラに行けば」
「異邦人になると」
「そうなります。確かに今まで多くの難民がサハラに来ました」
「ええ、確かに」
「そしてそれにより多くの帰化人が出ました」
「帰化ですか」
その言葉を聞いたマシュハドの顔もまた曇った。二人の顔が両方共曇った形になった。

## 第三十一部第五章　三本のワインその三十一

「我々が」
「それによりです。連合の者になった貴方達もおられます」
「連合にですか」
「我が連合は来る者は拒まずです」
これもまた真実であった。やはり連合は寛容なことは確かである。しかしそれでも異邦人というものは事実であるのだ。否定できない事実であった。
「断じて」
「では帰化すれば我々も」
「それを支持する勢力も連合には多いです」
「国防省にもですね」
「御存知でしたか」
今の言葉で表情を固まらせた八条であった。八条にとってはこのことはマシュハドに対してはできるだけ隠しておきたいことであったのだ。
「このことは」
「はい、聞いています」
マシュハドはあえて表情を消して答えた。
「他にも様々な勢力が入り乱れていることも」
「正直義勇軍についてはですね」
「はい」
「我々の中でも意見が錯綜しています」
「それも聞いていますが」
「今回の葬儀にしても」
話が葬儀に関することに戻った。
「色々と意見がありました」
「合同についても同じですね」

「おそらくはこれについては異論が出ます」
これも読んでいる八条であった。
「ある程度以上のことは予想しています」
「左様ですか」
「しかもこれは決して悪意や偏見等からのみ語られるものではありません」
語る八条の顔はこれまで以上に曇っていた。
「善意からもです」
「善意からもですか」
「人とは複雑なものです」
八条の顔がさらに曇る。
「悪意が善を生み出すこともあれば」
「善意が悪を生み出すこともある」
「しかもです」
八条の言葉が続く。
「その善も悪も一方にとって善であれば」
「他方にとっては悪であるというのですね」
「連合には様々な考えがあります」
多様性を誇りとしているならば当然これも認められていることであった。様々な考えを認めることこそ多様性の証の一つであるからだ。
「そしてそれが」
「善悪もまた複雑なものにさせるのですね」
「そういうことです。貴方達のことを考えて合同に反対するであろう勢力もあるのです」
「我々のことを考えて」
マシュハドはその言葉の意味がわからなかった。
「それはどうしてまた」
「サハラですね」
「ええ」

何度も語られた前提である。
「義勇軍はサハラです」
「その通りです」
「ですから。サハラ出身の貴方達のことを考慮して」
「合同には反対するのですね」
「これがです」
また語る八条だった。
「ただの偏見ならば根拠の適当な理屈をこねて言っているだけですから何も問題はないのです」
「そうです、確かにそれは」
これはマシュハドにもよくわかった。
「所詮付け焼刃にもなっていません。軽いものです」
「悪意は見抜かれればそれで終わりです」
八条は悪意を実に下らないものだとこの場では言い捨てるのだった。
「後はそれを指摘していけばそれで終わりです」
「相手の自滅を引き起こしますね」
「はい。ですが善意ですと」
「そうはならないと」
「こちらとしても言いにくくなります」
その曇った顔はまだ続いていた。

## 第三十一部第五章　三本のワインその三十二

「何しろ正しいと思っているのですから。余計に」
「その善意とサハラはどういう関係にあるのでしょうか」
「つまりです。貴方達が連合軍と共にいて彼等を意識しないようにする為です」
「だからだと」
「他にも理由はあります」
さらに述べる八条であった。
「連合軍との無用なトラブルを事前に防ぐ、サハラの方々だけでサハラのことはやるべきではないのかと。本当に様々な意見が理由が考えられます」
「複雑さが増していますな」
「ええ。それもありますが」
今はその複雑さは少し置くのであった。
「まことに。貴方達のことを考えたうえで」
「合同に反対されると」
「葬儀の形式も同じでした」
話はさらに戻った。
「同じ連合軍だからと」
「連合軍の葬儀に参加という形にでよというのですね」
「はい、そういう意見もあったのは事実です」
「ふむ」
「本当に意見は様々です」
八条はそこをまた強調して述べるのであった。
「善意のものであってもです」
「四兆いれば四兆の善意がありますか」
「とどのつまりはです」
彼の言葉は続く。

「それだけ貴方達も選ばされる選択肢があるということです」
「これからもですね」
「まずはこれでこの件は一つの結論が出ました」
「葬儀の場所と時間は同じ」
「はい」
「そして行うものは別だと」
「同じであれど分けられている」
これが極めて重要なのであった。
「そういうことです。玉虫色と言われましても」
「政治的な判断とも思われるものですね」
「その御指摘を否定するつもりはありません」
その通りだったからだ。それを否定する程八条は政治家として意地の悪い男でも腹黒い男でもなかった。彼の政治的な思想はかなり良心的で誠実な部類のものだからだ。
「事実軍事に関するものもまた政治であるからです」
「政治ですか」
「ですから私が判断したのです」
国防長官である彼がである。
「この件に関しましても。そして今こうしてお話させて頂いているのです」
「全ては政治ですか」
「そう、政治なのです」
今度ははっきりと肯定してみせた。
「このことは。連合は寛容ではあるがサハラではない」
「サハラではない」
「つまり貴方達はあくまで義勇軍であり」
「難民であると」
「表立って言う場合は偏見になる言葉であります」
そうした言葉を表立って言えば周囲からどういった評価を受けるか、それがわからなくして政治家として、いや公人としてやってはは

いけないのだ。連合でもそうした分別は存在している。
「ですからそれは」
「ふむう」
「今後も様々な善意が貴方達の前に現われます」
「そして悪意もですね」
「悪意は対処が容易です」
この考えはここでも変わりはしない。むしろそれ以上に善意というものの厄介さを述べる八条であった。善人の部類の彼が言うことであるからこそ余計に複雑なことになっていた。
「ですが善意というものは。どうしても」
「言っている本人がそれが正しいと思っているからこそですか」
「貴方達はやはり大海の中の小船なのです」
「どうなるかわからない」
「ですからつねづね御注意を」
言葉は忠告にもなっていた。
「どうなるかわからないところがあまりにも多いので」
「実は我々にもです」
マシュハドもここで素直に己の言葉を、いや難民達の考えを述べたのであった。

## 第三十一部第五章　三本のワインその三十三

「様々な意見があります」
「そのようですね」
八条はその彼に対して冷静に言葉を返したのだった。
「どうやら」
「御存知でしたか」
「はい。先程も申し上げた通り」
その冷静な調子のまま言葉を続ける八条であった。
「人にはそれぞれの考えがあります。ですから」
「それもまた当然であると」
「そう考えます。従って」
「従って」
「貴方達のうちで帰還派と残留派があるのもまた当然です」
「わかって頂けていましたか」
「それぞれの心境も察しているつもりです」
八条は今の中央政府の閣僚達の中でもとりわけ心配り、気配りができる人物として知られている。それがここでも発揮されているのだった。
「帰還を望まれる方についても残留を望まれる方についても」
「帰りたい者はやはり祖国が恋しいのです」
「サハラがですね」
「ええ。祖国は祖国です」
例えその祖国がなくなってもだ。この場合の祖国とは滅亡してしまったその祖国ではなくサハラ全体を指し示しているのである。かなり広義の意味である。
「ですからそれは」
「忘れられませんか」
「連合ではかつてはイスラエル人がそうだったと思いますが」

「そうですね。そう言われると」
またイスラエル人の話が出ると納得できる八条だった。
「その通りです。幾ら彷徨えどやはり」
「祖国は忘れられるものではありません」
シオンの民は二千年の間放浪を続けようやく祖国を掴み取った。そしてその存続の為ならばあらゆることをしてきた。今のイスラエルはそうではないとしてもだ。
「ですから。彼等もまた」
「帰還を望んでいると」
「流石に今は不可能ですが」
サハラの現状を指し示しての言葉である。
「肝心の東方が戦乱に覆われてしまっているこの状況では」
「やはり無理ですね、それは」
「おそらくハサンもティムールも我々の交通自体は認めるでしょう」
どちらも分別のない国家ではない。だとすれば難民達の移動を許さない程政治的センスがないということである。特にシャイターンはそうであると言えた。
「ですが。それでも」
「用心を重ねるのですね」
「祖国に辿り着く前にその旅の中で死ぬこと程苦々しいことはありません」
こうも言うマシュハドであった。
「ですから。それは何としても」
「左様ですか。では今は」
「はい。帰還はありません」
断言であった。
「既に我々の間でもそう決められています」
「それはいい判断だと思います」
「有り難うございます」
「それでです」

マシュハドの言葉はさらに続けられる。
「我々はまずはサハラでの戦局を見定めます」
「戦争が終わるのをですか」
「予断を許さない状況です」
それだけ読めない状況であるというのだ。三国共まだ力がありしかもそれが確実な決定力を持つものではない。だからこそ即断が危険だというのである。
「ですから今は」
「避けるというのですね」
「戦争が終わってからです」
このことを強調する。
「帰還に移るならば」
「ではもう一つ御聞きします」
「はい」
八条の問いが出て来た。
「残留派ですが」
「彼等ですか」
「彼等はどういう考えなのでしょうか」
そのことを直接マシュハドに対して問うのであった。
「残るにしろ。どうされるのですか」
「それがつまり」
「はい、それぞれの国に帰化されるか」
今いるそれぞれの国の市民となるということである。
「それとも。もう一つの」
「新国家ですか」
「その道もあります」
実際に言ってみせた八条である。
「どうされますか、それは」
「そう言われますと」
返答に窮するマシュハドであった。

## 第三十一部第五章　三本のワインその三十四

「それもまたそれぞれです。おそらくそれも分かれます」
「帰化と新国家に」
「どちらがいいとは決して言えないものです」
マシュハドの言葉はさらにはっきりとしないものになっていた。顔にもそれが出ている。
「選択肢としましても」
「連合としてはです」
「ええ」
「どちらの用意もできます」
かなり寛容な言葉であると言えた。
「そのどちらも。つまり」
「我々次第というわけですね」
「そうなります。やはり最終判断は貴方達に委ねられます」
「我々にですか」
「とりわけです」
ここで八条はマシュハドの顔を見るのだった。目が真剣なものになっている。
「上層部、つまり軍では」
「我々ですか」
「それで宜しいですね」
その真剣な顔で彼に問う。
「場所は同じで。葬儀はその形で」
「はい、私としましては」
彼は珍しく一人称を私とした。普段はわしなのであるが目の前にいるのは国防長官である八条であることからこうしたのである。彼を上司だと認めているのだ。
「それで宜しいかと」

「わかりました。ではそれで」
「はい、それで御願いします」
これでこのことに関する話は終わった。しかし話はこれで終わりではなかった。
次に八条は。少し時間を置いてからマシュハドに対して言うのであった。それは」
「それでですね」
「はい、今度は一体」
「元帥宛に届き物があります」
「わし・・・・・・いえ私にですか」
「その通りです」
また述べるのであった。
「お渡しして宜しいでしょうか」
「届き物とは」
そう言われても今一つわからない様子のマシュハドであった。今まで真剣そのものであったその顔が怪訝なものになっているのがその証拠である。
「何でしょうか」
「既にチェックはしてあります」
こうマシュハドに述べるのだった。
「まずは安全なものです」
「それで何でしょうか」
「ワインです」
マシュハドへの返答はこうであった。
「ワインですが。連合産の」
「ふむ。連合のものですか」
「受け取られますか」
マシュハドの顔を見つつ問う。
「そのワインを」
「一つ御聞きしたいことがあります」

マシュハドはここで冷静な顔で八条に尋ねた。
「宜しいでしょうか」
「ええ。何でしょうか」
「そのワインの贈り主は」
彼が問うのはそこであった。贈り主のことを問うたのである。
「どなたですか、一体」
「それがですね」
しかしここで。八条は首を横に振るのだった。
「わからないのです」
「わからないのですか」
「はい」
この問いには首を縦に振るのだった。
「全く。誰が誰なのやら」
「差出人不明とは」
それを聞いて目を顰めさせるマシュハドであった。
「また随分と怪しいですな」
「しかし毒物は混入されていません」
これに関するチェックのことがまた話される。

## 第三十一部第五章　三本のワインその三十五

「ですから飲まれる分には」
「大丈夫というのですね」
「連合ではよくあることです」
八条はふとこう述べてきた。
「こうした差出人不明の贈り物は」
「テロや悪意ある行為だけではなく」
「無論そうした場合もあるます」
これは否定できないのであった。
「それがあるからこそ検査も慎重なのであって」
「成程」
「ですが。その殆どは遊びでして」
「遊び！？」
「はい、多くは知人が送るものです」
「知人がですか」
マシュハドにとっては聞き慣れない、あまりにも変わった遊びであった。少なくともサハラには全くない遊びなのは間違いなかった。
「そうです。あえて誰であるのかを隠して贈り」
「それで何を以って遊ぶのでしょうか」
「相手が喜ぶのを見るか。若しくは」
「若しくは」
「贈り主が誰なのかを当てるというものです」
語る八条の顔は少し笑ったものになっていた。
「そういうものです」
「珍しい遊びですな」
マシュハドはかなり率直に己の考えを述べたのであった。
「それはまたかなり」
「サハラにはなかった遊びですね」

「ええ、正直初耳です」
また率直に述べるのだった。
「この様な遊びがあるとは」
「私もこうして贈られることがあります」
「閣下もですか」
「しかもそれが結構多いのです」
八条の笑みに僅かだが苦笑いも入った。
「これが。中々」
「多いのですか」
「はい。贈り主で一番多いのが」
「どなたですか？」
「首相です」
微笑んでマシュハドに述べる。
「首相が最も多いですね、やはり」
「首相といいますとあの方ですか」
「あっ、失礼」
突如としてマシュハドに謝る八条であった。
「アッチャラーン首相ではありません」
「そちらの首相ではないですか」
「申し訳ありません、これも連合独特ですが」
また前置きをすることになったのだった。この辺りのやり取りが連合を知らない者にとっては実に不可解でわかりにくいものであった。
「我が国の首相です」
「そちらでしたか」
「はい、そうなのです」
苦笑いと共にマシュハドに答える。
「つまり日本の」
「伊東首相ですな」
「そうです、そちらの首相です」

そういうことであった。八条が首相という場合は多くの人物がこれに当てはまるのである。連合が三百の国から構成されるからこその話であった。

「伊東首相からよく受けます」

「成程、そうなのですか」

「贈り物は実に様々です」

こうも彼に言う。

「ワインである場合もありますしケーキである場合も」

「食べ物を贈るのでしょうか」

「食べ物が多いですがそうとも限りません」

それだけではないというのであった。

「他のものもあります。例えば」

「例えば」

「時計やバッグもあります」

贈り物としては実にオーソドックスなものである。

## 第三十一部第五章　三本のワインその三十六

「他にも色々と」
「そうなのですか」
「ワインが多いのは事実です」
しかしワインについては特別にこう注釈を付け加えるのであった。
「やはり。贈り物としていいものですから」
「だからですか」
「それでです」
ここで彼はさらに言う。
「どちらを選ばれますか」
「どちらとは」
「先程申し上げましたがこの遊びの楽しみ方は二つあります」
それに話を戻すのであった。
「そのまま贈り物を喜ばれるか。それとも」
「贈り主を当てるか」
「そのどちらかです。さて」
あらたまってマシュハドに対して問うてきた。
「どうされますか」
「そうですな」
首を横に振りつつ考えた。だがやがて答えを述べるのであった。
「素直に喜ぶことにします」
「そちらですか」
「はい、どうもこれは」
戸惑ったような口調であった。
「こうした遊びははじめてですので」
「だからこそ今は」
「素直に喜ばせて頂きます」
こう八条に述べたのであった。

「今は」
「わかりました。それでは」
「しかし連合ではこうした遊びがあるのですか」
「まあ元々はですね」
八条の顔が少し微妙なものになった。
「あれなのです。エウロパ辺りからはじまったようですが」
「エウロパで、ですか」
「一説によると貴族の遊びだったそうです」
その顔がさらに曇る。
「どうやら」
「貴族の遊びだったのですか」
「それを否定する説もあります」
一応はこうも述べる。
「アメリカで流行ったのだと」
「アメリカですか」
「昔中国にあったのだと」
「今度は中国ですか」
「とにかく色々な説があるのです、起源についてきましては」
「そこまで古い遊びなのですか？」
「まあそうです」
八条もいぶかしむ顔で首を捻ったが一応はという形で答えたのであった。
「どうやら。我が国が起源だという説もありますし」
「日本もですか」
「我が国には和歌がありまして」
所謂詩である。連合においても詩歌は文学として存在している。詩人のいない国や文化というのもまずないものであると言っていい。
「それが起源だとも」
「和歌が起源ですか？」
「あえて誰か読んだかわからないようにして贈ることがあったので

す」
八条の話はかなり古いものになっていた。
「恋人に対して」
「そうして密かな気持ちを伝えるか」
「若しくは自分が誰か当ててもらう。そうした贈り物もあったのです」
「ふむ、確かに似ていますな」
マシュハドはこの話を聞いて納得した顔で頷くのだった。
「この遊びと。似ています」
「実は今も和歌でこうしたりしています」
「ほう」
この話もまたマシュハドにとっては実に興味深いものであった。
思わす声をあげる程であった。

## 第三十一部第五章　三本のワインその三十七

「和歌は今でも読まれますか」
「はい。といいましても」
また語る八条であった。
「これも復活したものでして」
「復活ですか」
「日本では長い間廃れていました」
そもそも和歌をすらすらと出せるような人間自体が非常に減っていたのである。二十世紀や二十一世紀にはかなり減ってしまっていた。なお漢詩においてもそれは同じであった。驚くべきことに伊東博文や山縣有朋は政治家としてだけでなくこうした詩においても秀でた才能を見せていた。
「ですが銀河の時代になると」
「それが復活したのですか」
「日本文化が学ばれまして」
静かにマシュハドに語る。
「その結果です。他の国で和歌を詠むようになり
「それが日本に戻ってきたのですね」
「そういうことです。それで復活したのです」
「では連合ではやはり」
「そうした告白の方法が実際にあります」
今度は楽しげな笑みになって述べた言葉であった。
「男であっても女であっても」
「実に優雅ですな」
「学生の遊びでもありますが」
「いや、それでもです」
話を聞くマシュハドもその目を少年の様に輝かせている。
「それはいい。かなりです」

「左様ですか」
「それがこうした贈り物遊びに変わっていったのですか」
「あくまで一説の一つですが」
「面白いですな」
笑顔で語るマシュハドであった。
「そうした遊びがあるとは」
「サハラにはないのですか」
「残念ですが」
寂しい顔になって彼に述べる。
「そうした遊びはありません。サハラには」
「詩は」
「あります」
それは流石にあるという。
「ですがそれでも連合のように流行ってはいません。少なくとも学生達までそうして遊ぶようなことはないです」
「そうですか」
「何しろです」
顔が急に曇っていっていた。そのうえでの言葉だ。
「我々は。戦乱に覆われていまして」
「詩どころではないですか」
「戦争はまず文化を変えます」
これはどの時代でも同じである。
「娯楽が消えますし」
「まずはそれからですね」
「娯楽もまた文化を生み出します」
そこに人の心があるからだ。それを考えれば娯楽もまた人の生活に欠かせないものでありまたこれもまた文化の一つであるとも言えるのだ。
「それがなくなり人の心に余裕がなくなり」
「その結果文化が変質しますか」

「サハラの文化は連合のそれと比べると殺風景です」
語る言葉がさらに寂しげなものになる。
「実に。ですから」
「魅力がないとでも？」
「そうは言えません」
このことは否定した。
「ですが。どうしても」
「連合とは違いますか」
「華やかさや優雅さはありません」
こういうことであった。
「大衆文化ですか」
「はい」
連合の文化といえばやはり大衆文化である。大量に消費され生産される。派手でそれでいて様々なものがある。そうした文化なのである。
「サハラはそうした文化ではないのです」
「貴族は存在していない筈ですが」
「ですが大衆も弱いのです」
これもまた戦争の影響である。

## 第三十一部第五章　三本のワインその三十八

「大衆もまた。強いのは」
「軍人ですか」
「より強いて言うのならば」
マシュハドはさらに述べる。
「戦争です」
「戦争文化ですか」
「ありとあらゆる事柄が戦争につながっています」
千年の間戦っていればそうなる。やはり戦乱が今のサハラを形作っているのである。これは最早誰にも否定できないことであった。
「ですから文化もまた」
「戦争によるものですか」
「詩にしろです」
また詩の話になった。
「アッラーと戦場のことがほぼ確実に出ます」
「恋愛は」
「あることにはあります」
流石に詩歌からそれは離せない。詩歌によりその恋心を謡うものだからだ。
「ですが割合としては僅かです」
「やはりそうなりますか」
「普通の歌謡曲等もです」
ここには様々なジャンルが入る。この場合ではロックもクラシックもパンクも同じだ。こうした音楽のジャンルにおいてもやはり連合の方が多彩で歌の数も多い。
「戦争の影響があります」
「そうなりますか」
「戦争からは逃れられません」

マシュハドの言葉は続く。
「こればかりは。どうしても」
「文化がかなり違っているのは間違いないですね」
「全くの別物です」
これは他ならぬ彼が最も実感していることであった。
「連合とサハラでは」
「戦争というスパイスにより」
「連合ではこのスパイスはどう思われるでしょうか」
戦争をスパイスに例えての話になっていた。
「そちらでは」
「連合にはそのスパイスは長い間ありませんでした」
八条もこの表現に乗ってみせる。
「平和というスパイスだけで」
「サハラにも平和はありました」
ここでマシュハドは意外な言葉を口にした。サハラにもスパイスはあると。
「ですがそれは恒久的なものではなく」
「サハラ全土にあったものではないですね」
「そういうことです」
これが答えであった。
「常に何処かで戦争があったのが我がサハラですから」
「そうですね。では平和というスパイスは」
「貴重なものになります」
戦争と平和は対象的なものとされる場合も実に多い。実際は秩序と混乱がそうなるのだが平和という言葉にはそうさせるものがあるのだ。
「戦争が多ければ多い程。激しければ激しい程」
「戦争はサハラにおいても完全に否定されているのですね」
「ですがそうでもありません」
これもまた否定される。

「サハラはイスラムです」
「ええ」
これは戦争以上にサハラにとっては切り離すことのできないパートであった。サハラの文化、いや全てはイスラムからはじまるからだ。かつての欧州世界がキリスト教によりその全てがはじまっていたのと同じように。サハラもまたその全てがイスラムからはじまっているのだ。
「イスラムにはジハードがあります」
「聖戦ですか」
「戦争もまた肯定されています」
この事実もはっきりと述べるマシュハドであった。
「ですから詩にも他の文学にもそれは出ています」
「戦争を肯定ですか」
「その通りです。戦いもまた文化になっているのです」
こうした意味では話が矛盾していると言えた。何しろ文化が戦争に覆われているとされながらそれと共に戦争もまた文化であるというのだからだ。奇怪な言葉でもあった。
「文化に入っています」
「入っているのですか」
「そうです」
こう八条に述べるのだった。
「戦争もまた」
「ふむ」
「我々は戦争を嫌ってはいません」
マシュハドは言った。

## 第三十一部第五章　三本のワインその三十九

「決して。受け入れています」
「そうですか」
「それと共に平和も求めています」
「平和もまたですね」
「戦争と平和」
　またこの二つが話に出される。
「この二つは決して矛盾してはいません」
「相反するものであっても」
「それも反しません」
　話がさらに深いものになった。
「それぞれ共に内包されています。サハラの文化の中に」
「強い文化ですね」
　そこにサハラの強さも見た八条であった。
「それもまた」
「そうです。それでですね」
「ええ」
　話は完全にマシュハドのペースになっていた。八条は彼の話を聞いているだけだった。その聞く中で学んでもいるのである。聞くのもまた学ぶことなのだ。
「サハラの文化はその中で形作られていきました」
「その中でですね」
「はい。連合の文化が繁栄と開拓と発展の中で作り出されたように」
「サハラの文化は戦争と平和の中でですね」
「そしてイスラムです」
　これは欠かせなかった。
「イスラムもまた欠かせません」
「むっ、そうでした」

「しかし。それも踏まえて」
マシュハドの目がまた変わった。
「贈り物はまた面白いものですね」
「では後でお渡しします」
「はい、御願いします」
笑顔で八条の言葉を受けるのだった。
「是非。楽しませて頂きます」
「一つ申し上げておきます」
今度は八条が話のペースを握っていた。話のペースは何かあるとすぐに変わるものであるが今回もそれが当てはまるものであった。
「楽しまれると」
「はい」
「わかることもあります」
「楽しめばわかると」
「ええ、そうです」
今度はにこやかに笑っての言葉であった。
「その通りです。楽しめばわかります」
「左様ですか」
「ええ。ですからどうか」
「ワインを楽しまれよというのですね」
「その通りです。まずは」
彼がまず言うのはこのことであった。
「楽しまれて下さい。宜しいですね」
「わかりました」
内心首を傾げつつ彼の言葉に頷くのだった。

## 第三十一部第五章　三本のワインその四十

「それではそのように」
「是非。それではこれでお話は終わりですね」
「そうですね」
マシュハドは八条の言葉にあらためて頷いた。
「今は」
「では私はこれで」
八条の方から話を切ってきた。
「次の仕事の時間ですので」
「次のですか」
「今日も仕事が足で追いかけてきています」
涼しい笑みであったがこのことこそが八条の多忙さを言い表すものであった。
「ですから。これで」
「はい。それではこれで」
これで話を終える。部屋を出たマシュハドに早速そのワインが渡されたのだった。
「このワインなのか」
「はい」
彼にワインを渡した若い女性兵士が答える。
「これです」
「ふむ」
「何かありますか」
「いや」
そのボトルを見つつ彼女に言葉を返す。
「別に何も」
「左様ですか」
「ところでだ」

ここでマシュハドは女性兵士に対して声をかけた。
「貴官だが」
「はい、私ですね」
「そうだ。階級は」
「三等軍曹です」
経歴と共に答えてきた。
「この四月に昇進しました」
「そうか、三等軍曹か」
「それが何か」
「いや、下士官の階級が多いと思ってな」
連合軍の階級の特色である。連合軍は下士官の階級が実に細かく多くなっているのだ。こkがエウロパ軍やサハラ各国軍と大きく違っている。
「それでな」
「左様ですか」
「それで上級大将はないな」
「はい」
このことも問うたがすぐに返答が返ってきた。
「連合軍にはありません」
「そうだな。やはりサハラとは違うな」
聞き終えてから述べた言葉であった。
「ここもな」
「！？といいますと」
「いや」
三等軍曹の怪訝な言葉には答えないのであった。
「何でもない。忘れてくれ」
「左様ですか」
「それでだ」
そのうえでまた彼女に言うのであった。
「そのワインだが」

「ええ」
「私が直接持って行ってもいいな」
「はい、勿論です」
今度は軍人らしくきびきびとした様子で答える三等軍曹であった。
「包装しますので。お待ち下さい」
「包装！？」
「ワインのボトルですので」
だからだと彼女は言うのである。
「だからですが」
「・・・・・・ふむ」
ここでマシュハドは暫し考えた後で気付いた顔になって述べた。
「そうだったな。ボトルだからな」
「ガラスです」
これが大きかった。ガラスは脆く何かあれば割れてしまうのはこの時代でも変わりはしない。確かに二十世紀のそれと比べると硬度は高くなり割れても粒になり危険さもかなり弱いものになっているのしろだ。それでもガラスは割れるものであるということはこの時代でも変わらないのだ。
「ですから。それで宜しいでしょうか」
「そうだな。では頼めるか」
「わかりました。それでは」
こうしてワインは包装されることになった。何重にも紙やスチロールで覆われそのうえで箱に入れられる。詰め物までされて。そのうえで彼の手に戻されたのである。
「どうぞ」
「厳重だな、また」
「ワインですので」
三等軍曹の言葉は当然といったものであった。
「やはり。用心するべきかと」
「そうだな。これもやはり連合か」

マシュハドはここにも連合を見るのであった。
「こうしたところも」
「！？連合といいますと」
「いや、こうした包装はだ」
彼は今度は三等軍曹の言葉に応えた。
「普通に行われているものだな」
「はい、国防省だけではありません」
官公庁だけではないというのであった。
「普通の商店やデパートにおいても」
「同じだな」
「無論スーパーでもです」
つまり何処の店でも同じというわけである。
「品を守る為に」
「そうするのだな」
「壊れたり割れたりしては元も子もありません」
こうもマシュハドに述べるのであった。
「ですから、ここは」
「そうだな。いいことだ」
ここまで聞いたうえで彼女の言葉に頷くマシュハドであった。
「これはな」
「はあ」
「細かいものだ」
そのことに関心する言葉であった。
「実にな。サハラにはない」
「サハラといいますと」
「いや、これもな」
今度は話さなかった。先程と同じ展開になった。
「何でもない。気にすることはない」
「左様ですか」
「では。有り難く受け取っておこう」

「はい」
「それではな」
ここまで話をしてワインを受け取りそのうえで今の己の宿舎に戻った。地球に来るということで用意された宿舎があるのである。
そこに入りワインを開けて飲む。濃厚な赤の旨味がそこにはあった。
「ふむ」
チーズでシンプルに楽しむ。簡素な宿舎のソファーに座り一人飲んでいる。音楽もかけずテレビも点けない。静寂の中で一人飲んでいた。
ワインの味は確かに連合のものであった。最初はそれを純粋に楽しんでいるだけであった。しかし飲んでいるうちに彼もわかってきたのである。八条の言葉の意味が。
「そういうことだな」
誰が贈ってきたのかが今わかった。わかるとこれもまた楽しく一人ほくそ笑む。だがそれはあくまで己の心の中にしまい込み。今は一人このワインを、遊びを楽しむマシュハドであった。

第三十一部　完

２００８・９・４

# 第三十二部第一章　エウロパの実情その一

## エウロパの実情

エウロパの勢力が衰退していることは誰の目にも明らかであった。それは他ならぬエウロパ市民達が最もよくわかっていた。何故なら彼等はこのことを肌で感じる立場にあったからだ。

「食べられるだけだな」

「ああ、今日もな」

スーパーで買い物をしている学生達が暗鬱な顔になって話をしていた。丁度お菓子売り場のところにいてチョコレートやガムといったものを見ている。一人が飴を手に取って言うのだった。袋自体はカラフルで実に食欲をそそるものではある。他にも様々な種類の菓子が店に溢れてはいる。

「どう見たってこれってな」

「期日が古いだろ」

見ればその通りだった。賞味期限ギリギリであった。他のお菓子もそうである。

「最近こんなのばかりだな」

「品薄の店だったあるしな」

「ああ、あるだけまして」

「どう見ても質は碌なものじゃないな」

「見てみろよ」

ここで一人が生菓子のコーナーを指差す。そこにはケーキやタルトといった如何にも彼等が好みそうな様々な種類の生菓子が置かれていた。やはり種類も数も多い。

「どれもよ。クリームが」

「質落ちてるか」

「果物だってそうだよ」

彼はここで苺ケーキの苺を指差したのであった。見ればその苺は。

「小さいよな」
「ああ、小さくなった」
そうだったのだ。苺は以前と比べると明らかに小さかったのだ。このスーパーのケーキは果物も大きいことで有名であったからこのことが余計に目につくのである。
「しかもな。数だってな」
「前は三個だったのに二個だよな」
「ケーキ自体の大きさだってな」
このことにも目がいくのであった。彼等の目は鋭い。
「小さくなってるよな」
「大体この飴だってな」
飴の話もまた入って来た。
「量減ってるしな。軽いぜ」
「どれもこれもかよ」
「菓子だけじゃねえしな」
「果物だってな」
語るその顔がさらに不機嫌なものになっていく。どうも彼等は年頃に相応しく甘いものにはかなり夢中になっているようである。だからこそ細かいことまでわかるのであろう。
「最近新鮮じゃないしな」
「ああ、古いのが多いな」
「あるのは種類と数だけだ」
菓子と同じなのであった。
「かろうじて食べられるってのか小さいのばっかりだ」
「前はそんなのじゃなかったのにな」
「負けたからかよ」
一人が忌々しげに述べた。
「連合に負けたからだな」
「他に何があるっていうんだよ」
別の一人がその彼に告げる。

「負けたから。こうなってるんだろ」
「食い物が酷くなったのか」
「食い物だけじゃないしな」
「靴だってな」
「ああ、質が落ちてるな」
今度は靴にまで目をやるのであった。見ればお世辞にもあまり質のいい靴ではなかった。紐もゴムも何処となく弱々しくみすぼらしいのである。
「戦争前に比べたらな」
「何でもかんでもかよ」
「最近な、俺の親父」
「ああ。どうした？」
「休みなく働いても給料が減ったってさ」
「俺のところもだよ」
「俺もだ」
これに関しても誰もが同じなのであった。苦しさは仕事にまで及んでいたのである。
「俺の家は工場やってるけれどな」
「調子悪いか」
「青息吐息ってやつさ」
うんざりとした顔で述べた言葉であった。
「どうにもな」
「何処も同じってわけか」
「スーパーも会社も工場も」
「負けたせいだな」
「全くだ」
結論は自然とここに帰結するのであった。
「連合との戦争に負けたからな」
「何か負けてから暮らしがずっと悪くなってないか？」
こうも言うのであった。

## 第三十二部第一章　エウロパの実情その二

「何かよ。気のせいか？」
「いや、それ気のせいじゃないぜ」
「そうだな」
皆仲間の言葉に頷く。頷きながら今度はその生菓子を見るのだった。一人はチョコレートケーキを手に取って暗い顔で物証していた。
「ケーキだってよ。戦争の頃はまだ」
「チョコレートまだ多かったよな」
「そうだよ。それがだ」
今ではチョコレートはまばらだ。見てわかる程にまで。
「この有様だよ。負けたら急にな」
「何で戦争中の方がよかったんだ？」
「さてな」
それは曲りなりにも経済が動いていたからであるがそれはまだ学生、しかも制服を着ているような歳の彼等ではわからないことであった。
「とにかくだ。今碌なものじゃないな」
「飯はまずくなったし」
「小遣いも減った」
「バイトしてもバイト料も減ったしな」
「悪いことだらけだよ」
うんざりとした調子で言葉を続けるのであった。
「何もかもな」
「俺達平民は耐えるだけか？」
実は彼等は平民なのだ。エウロパにおいては貴族と平民の間には厳然たる隔壁がある。この二つの階級の違いは血の色にまで例えられている。
「青い血の方々は違うのかね」

「似たようなものらしいぞ」
「似たようなものかよ」
「それどころかな」
貴族についても話されるのであった。
「俺達より苦しい生活になってるそうだな」
「そうなのか」
「賠償金あっただろ」
本来は違う名前だが俗にこう呼ばれている。実質的にはそれに他ならない為エウロパでは公の場以外ではこう呼ばれるのだ。的確と言えば的確だ。
「あれ俺達への増税はなかったな」
「そういやそうか」
「確かああした場合は」
「増税で支払われるんだったな」
そういうことであった。サハラにおいても賠償金を支払う場合はその殆どは増税で支払われる。臨時の支出への財源としてはオーソドックスである。
「確かな」
「しかし今回はそれはなかっただろ」
「増税はなかったな」
このことはまた確認される。
「もっともこれで増税なんかなった日にはな」
「俺達終わりだよ」
「ああ、全くだ」
その通りであった。今彼等は苦しい状況に置かれている。何とか生きているといった具合である。これで増税ともなれば止めになりかねなかった。
「そうならなくてよかったよ」
「それだよ」
この増税が指摘されるのだった。

「俺達への増税がなくてそのうえで賠償金を調達した。それは何故か」
「あれか？貴族から出させたのか」
「それしかないだろ」
必然的にそうなるのだった。
「何しろ金がないんだからな、今のエウロパは」
「ある所から出させるのか」
「それが貴族の場所か」
そういうことであった。エウロパにおいては貴族は背負うべき義務は平民のそれに比べて多いものとされている。これは爵位が上になればなる程である。
「じゃあお貴族様達は今は」
「色々苦労しているらしいな」
「具体的にはどんな感じだ？」
「家の宝を売ったりな」
まずはこれであった。
「金を直接出したり会社やらを売ったりして」
「それで金を作って出したのか」
「そういうことらしいな。それで一気に貧乏になった貴族も多いらしいぜ」
「またそれは災難だな」
「それであれらしい」
また語られる。
「今貴族はパーティーまで小さくなっているそうだ」
「パーティーまでか」
「そう、それまでな」
貴族達は宴をするものだ。ここから情報収集を行ったりする。ただ単に宴を開きそれを楽しむだけではないのである。これは何処でも同じであるが。

## 第三十二部第一章　エウロパの実情その三

「小さくなっているらしい」
「そこまでか」
「しかもだ。バチカンもなくなるしな」
「まだこっちにあったのか？」
一人がバチカンの話を聞いて目を丸くさせた。
「まだ連合に行っていなかったのか」
「って御前何言ってるんだよ」
その彼に早速突っ込みが入った。
「今も残留のデモがバチカンの前でやってるだろうが」
「いつもテレビに出てるぜ」
「いや、俺プロテスタントだからな」
首を傾げてこう述べるのであった。
「別にそれは」
「知らないっていうのか」
「というか興味なかった」
そしてこう言うのであった。
「それはな」
「そうか。ってそれでもな」
「何で知らないんだよ」
「教会も大変なんだよ」
憮然として語るのだった。
「こっちの教会もな」
「プロテスタントもか」
「そうだよ。俺のいる教会もな」
また実に景気の悪い話になるのだった。教会もまた苦しいのが今のエウロパなのだった。あらゆる場所が困窮していると言えた。
「お布施が足りなくてな」

「教会もか」
「本当に何処もかしこもだな」
「負けたからだよ」
また敗戦のことが言われる。
「負けたからな。やっぱり」
「負け負けって辛気臭くばるばかりだな」
「けれど負けたのは事実だな」
これだけはどうしても否定できないのだった。事実だけは。
「今度は勝ちたいな」
「勝ったら暮らしがよくなるんだな」
「少なくともこんな気分は味あうことはないぜ」
「今みたいな気分をか」
「ああ、そうだ」
そしてまた言い合うのであった。
「こんなな。何もかもがジリ貧になっていく気分はな。味あわないさ」
「どうなるんだよ。俺達」
また一人が忌々しげに言う。
「このまま。終わりか？」
「エウロパがかよ」
「そうさ、俺達だよ」
自分達とエウロパを重ね合わせた言葉であった。
「このままよ。少しずつ弱っていって」
「何もかもがパーか」
「衰退って言うのかね」
「そうだよ、衰退だよ」
一人が苦々しげに語った。
「で、後で色々歴史に書かれるのさ」
「敗戦から立ち直れなかったってか」
「そうだよ。そう書かれるんだよ」

そのことが実に腹立たしいのがわかる。誰もそのまま衰退を受け入れたりはしない。だから彼等の今の怒りも至極当然のものではあった。
「それも連合の奴等にな」
「最悪なんてものじゃないな」
「全くだ」
彼等の最も嫌いな相手についても最早言うまでもないことであった。一方が嫌えばもう一方もまた嫌う。嫌わば嫌われるというわけである。
「あの連中にだけは書かれたくねえな」
「それなら何があっても生き残ってやる」
「そうだよな、全くだ」
「エウロパ舐めるなってんだ」
若いナショナリズムを見せている。少年のナショナリズムだ。

## 第三十二部第一章　エウロパの実情その四

「大体あいつ等何だ？」
また一人が述べた。
「所詮あれだろ。野蛮人だろ」
「土人だよな」
「結局はそんな連中だな」
「俺達が文明を授けてやらなかったら」
彼等は大航海時代にしろその後の帝国主事時代にしろこう考えているのだ。未開の者達に文明の光を与えてやったと思っているのである。
「今でも地球で」
「無様にはいくつばっていた」
「それがだ」
変わったというのである。
「俺達を蔑んでな」
「好き放題書くわ言うわ」
「何様だと思っていやがるのか」
「しかもだ」
彼等の怒りというか愚痴というかは続く。
「この前の戦争だってな」
「ああ、嫌味なものだよ」
「あの長官だよな、連中の軍務大臣か？」
「アジア人のあいつだよな」
「そうだよ、あいつだ」
八条のことだ。中央政府国防長官はエウロパでは軍務大臣と考えられているのだ。確かに軍務のトップなのは事実だが国防長官が文民でなければならないという連合式のシビリアンコントロールの中にあることまではよく理解されていないのである。

「あいつ随分嫌味だよな」
「略奪暴行は厳禁ってしたあれかよ」
「そうだよ、それだよ」
連合軍が軍律を徹底させたこともまた彼等にとっては怒りの種の一つになっているのだ。要するに何もかもであるのだが。彼等に自覚はない。
「わざわざあんな達出してな。嫌味か？」
「俺達のか」
「何か兵隊の奴等が言ったそうだぜ」
連合の兵士達の話にもなる。
「俺達は御前達と違って文明人だから略奪とかはしないんだってな」
「あっ！？何だそれ」
最初誰もが今の言葉の意味がわからなかった。
「俺達とは違うってか」
「そうだよ。違うってな」
「ええと、そうだよな」
「だとすると」
今一つ言葉の意味がわからないまま話をするのだった。今連合の兵士達が自分達に対して何と言ったのかどうしても理解できなかったのである。
「つまりだ。俺達がだ」
「略奪とかするっていうのか」
「馬鹿言えよ、おいおい」
早速一人が笑いだした。
「俺達が略奪とかするってか？」
「そんな訳ねえだろ」
「なあ」
他の面々も言いだした。彼等にとっては全く理解できない話だというのだ。
「エウロパ軍がそんなことするかよ」

「俺達だって誇りはあるんだ」
当然彼等にも誇りはある。エウロパ軍もまた軍規軍律が厳格なことで知られている。ただし彼等の誇りは職業の軍人としてではなく貴族という階級から来るものであるのだ。
「何で略奪なんてな」
「そんなことをするんだ」
「色々言ってたらしいぜ」
連合軍の兵士達のことを話したその兵士がまた言う。
「俺達エウロパ軍がサハラで悪の限りを尽くしたとかな」
「生きる為の戦争をしただけだろうが」
「大体一般市民には指一本触れちゃいねえぜ」
これはかなりのレベルにおいて真実の話であった。エウロパ軍はサハラ侵攻はしたが一般市民を攻撃対象としたりしたことはないのだ。貴族として醜い行為であると認識していたからだ。ここでも自分達は貴族だという認識がはっきりと存在していたのである。
「それで何で言うんだ？」
「あいつ等嘘ついてるんだろ」
「いや、どうもそれが違うらしい」
「違うってか」
「ああ。十字軍とかな」
また随分と古い話だ。

## 第三十二部第一章　エウロパの実情その五

「大航海時代にしろ帝国主義時代にしろ。俺達が略奪暴行の限りを尽くしたってな」
「それかよ」
「そう、それだよ」
仲間達に対して忌々しげに語る。
「それとは違うっていうんだよ」
「何千年も前の話か？」
「よくそんなこと言うな」
「そういえばあいつ等」
またあることを思い出すのであった。これもまた忌々しい記憶である。彼等にとって。
「あちこちの博物館から取って行ったよな」
「ああ、連合のものだって言ってな」
「中国とかメソポタミアのやつをな。ごっそりと」
買い取ったのであるが彼等にとっては取られたに等しいのだ。
「持って行ってな」
「気付いたら何もなしだ」
「ああ、大英博物館なんか凄いらしいぜ」
この博物館こそ連合から最も多く奪い返された博物館であったのだ。
「ありとあらゆる国のコーナーがその国語と消えてな」
「で、残っているのは僅からしいな」
「これも奪い返しただけだって言ってな」
「勝手なことだ」
「何様なんだよ」
「で、俺達とは違うってか」
話がここに戻った。

「どんだけ自分勝手なんだよ」
「自分勝手っていうか御前等が言うなっていうんだ」
「全くだ」
彼等から見ればそうなのだ。ここでも連合への反感が如実に出ている。
「俺達に手を出さなかったのは俺達とは違うって言っておいてな」
「自分達はごっそりと持って行きやがった」
「食いまくってくれたしな」
「ああ、あれも酷かったよな」
ふとここで牛肉コーナーに目をやるのであった。隣にはソーセージやハムが置かれている。こうした燻製ですら質が落ちているように見えるのが現状であった。
「そういえば肉とかの喰い方な」
「牛か馬かって思ったぜ」
「連中に言わせればマンモスかオオナマケモノか」
「ふざけたことをしてくれたぜ」
「で、それだけ食って」
さらに語る。
「俺達とは違うか」
「俺達そんなに食わねえよ」
「御前等とは違うんだよ」
連合とエウロパでは個人差もあるが一人一人が食べる量がかなり違っている。連合の兵士達は平気でエウロパの店を無数に食い潰してきているのである。
「あんなに食ってよ」
「それで略奪はしていないか」
「おかげで俺達は今の有様だ」
今エウロパの食糧事情がいささか悪くなっている理由の一端として連合軍の者達が食べまくったということがあるのだ。何しろ六十億で一千億が許容範囲の場所に入り彼等が一日に食べる量を三日で

食べていたのだ。これでは食糧事情に影響するのも当然であった。
「ふざけるのもいい加減にしやがれってんだ」
「確かに金は払ってたさ」
「それでもな。限度ってやつがあるよな」
「そういうことだよ」
結局彼等にとってみれば略奪されたのと同じであるのだ。根こそぎ食べられてしまったからだ。食べられる方はたまったものではないのだ。
「あいつ等。好き勝手言いやがって」
「野蛮人がな」
「それでだよ」
また一人が言ってきた。
「俺達が若しな」
「ああ」
「滅亡したらどうなるんだ？エウロパが滅亡したら」
「それはその時はやっぱり」
この話が出てふと考えるのだ。そうした場合自分達はどうなるのか。それについて考えると暗鬱な答えしか出て来ないのだった。どうしても。
「サハラに併合されるのか？」
「冗談じゃねえぞ」
まずこの未来に真っ青になる。
「あの連中とはあれだけ派手にやり合ったんだ。若し併合されれば」
「何されるかわからないな」
「奴隷か？」
とうの昔に消え去ってしまった制度が言葉に出された。この時代ではどの世界にも奴隷というものは存在しない。確かに扱いや待遇が問題にはなるが少なくとも奴隷といった存在はもう歴史の彼方に過ぎ去り架空の存在として物語に出て来るだけとなってしまっている。

## 第三十二部第一章　エウロパの実情その六

「奴隷にされるのか奴等に」
「少なくともいい待遇じゃないだろうな」
「だろうな」
「ムスリムになれば別だろうがな」
「それは絶対に願い下げだ」
しかしこの改宗はすぐに拒まれた。
「何で俺達がムスリムにならないといけないんだ」
「全くだ。俺達はエウロパにいるんだぜ。それでどうして」
「ムスリムにならないといけないんだよ」
「全くだ」
口々に忌々しげに言い捨てる。彼等にとってはキリスト、そしてギリシアや北欧の神々に対する信仰もまた心の拠り所であり誇りなのだ。その彼等がムスリムになるということはそれだけで屈辱に他ならないことだったのだ。つまり到底受け入れられないことなのだ。
「それだけは願い下げだ」
「サハラに入るのはな」
「じゃあ連合か」
もう一つ仮定が出された。
「俺達は連合に飲み込まれることになるぞ」
「それはもっと嫌だぜ」
すぐに全員顔を顰めさせた。
「サハラに入るよりな」
「考えたくもないな」
「余計にな」
こういうことだった。彼等にとっては連合という存在は名前を聞くだけで身の毛がよだつものだった。その存在を聞いて余計に嫌悪感を見せるのだった。

「連合に入る位ならな」
「死んでやるよな」
「当たり前だ」
まだ学生の彼等も連合に対する敵愾心はただならぬものがあった。それはこれまでの愚痴めいたものからはっきりと攻撃性があるものになっていた。
「誰があんな連中のところに入るものか」
「連合に入る位なら死ぬまで戦ってやる」
「その通りだ」
サハラに入るのよりもさらに険しい嫌悪感であった。
「あの連中が俺達に入るのなら別だがな」
「それでどうしてだ」
「じゃあどちらも嫌だな」
そしてこの結論が出された。
「サハラに入るのも連合に入るのも」
「当たり前だ」
はっきりと断言された。
「どちらも願い下げだ」
「エウロパのものしか食わないぞ」
ここで一人がまたケーキを手に取った。果物のケーキだ。
「絶対にな。このケーキは何処のケーキだ？」
「エウロパのケーキだよ」
「他のケーキは食いたくないよな」
彼は仲間達にそのケーキを見せる。両手で丁寧に持って彼等に見せる。小さく果物もしなびようとしているがそれでも紛れもなくそれはエウロパのケーキであった。
「そうだろ？」
「ああ、ずっとな」
「俺達はエウロパのケーキを食いたい」
「他のはいらない」

誰もがはっきりと言い切っていた。
「連合のケーキなんぞ頼まれても食うか」
「どんなものでもエウロパのケーキしか食わないぞ」
「お茶もな」
それもであった。
「コーヒーもだ。そこにある砂糖もな」
「連合の奴等は向こうのケーキやお茶の方が美味いって言っていたな」
「ああ」
この話も聞いてはいた。しかしであった。彼等は何があろうともエウロパのものにこだわるのであった。そこにこそ心があると言わんばかりに。
「それでも食いたくはないわ」
「幾ら美味くても食えるものか」
「そうだ。俺達が食うのは」
「エウロパのケーキだけだ」
「飲むのもだ」
飲み物についても語られる。

## 第三十二部第一章　エウロパの実情その七

「エウロパのお茶やコーヒーだけだな」
「そうだよ。じゃあ何買う？」
「俺はこれだ」
果物のケーキを持っている少年はそのケーキを選んだ。
「このケーキを買う」
「それか」
「御前等はどうするんだ？」
「そうだな。俺はこれにするか」
一人はチョコレートケーキを手に取った。
「俺はこれだ」
「俺はそうだな」
一人はチーズケーキを、最後の一人は苺ケーキをであった。それぞれ手に取っていくのであった。
「これにするか」
「エウロパのケーキをな」
「これからもな」
皆同じことを言った。
「エウロパのケーキを食べていこうな」
「それか」
「そうだ。食うぞ」
こう言い合うのである。
「エウロパのケーキをな」
「食べるぞ」
「ずっとな」
言い合いながらカウンターに向かう。辛くともエウロパで生き続けたかった。多くの者がこう願い今の辛い状況を耐えて生きていたのであった。

貴族達もそれは同じであった。質素になってしまった宴の場で。カミュは静かに酒を楽しんでいた。馳走も酒も今までからは想像もできない程質素なものになっている。部屋の装飾も僅かでありみらびやかさにも欠ける。その中でカミュは静かに飲んでいるのである。
「閣下」
「はい」
その中で一人の貴婦人が彼に声をかけてきた。見れば彼が知っている貴婦人であった。コルテーゼ侯爵夫人という。フランスのある大貴族の出身であり今は夫であるコルテーゼ侯爵の妻である。黒い髪に青い目を持つうるわしい美女である。その彼女がカミュに声をかけてきたのだ。
「今宵は静かですね」
「少し物思いに耽っていまして」
こう夫人に述べるカミュであった。
「哲学的思考に」
「あら、珍しいですわね」
夫人は今のカミュの言葉を聞いて楽しそうな笑みを見せてきた。
「閣下が哲学的思考とは」
「そうでしょうか」
「美女を見てはおられないのですね」
その笑みでカミュに対して問う。
「今宵は。音楽や文学のことも考えられず」
「恋愛やそういったものが頭から離れる時がありまして」
カミュもまた悪戯っぽく笑って夫人に言葉を返すのであった。
「今がたまたまそうなのです」
「左様ですか」
「はい。今はただその思考に耽り」
そうして言う。
「美酒を楽しむだけです。このワインを」
「このワインですが」

夫人もまたグラスを手に取りそのワインを口に含む。そのうえでまた述べてきた。
「フランスのワインではありませんね」
「スペインのものですね」
こう夫人に答える。
「どうやら」
「おわかりですか」
「しかも星系は」
話が星系にまで至る。
「バンブローナ星系ですね」
「はい、その通りです」
にこやかな笑みで夫人の声に頷くカミュであった。
「バンブローナ産の赤です」
「いつものフランスのものではないのですね」
夫人はここでこう言うのであった。
「ロマネコンティの最上級では」
「残念なことに」
今度の笑みは残念そうな笑みであった。それをシニカルなものに隠してはいるが残念そうであるということはそこに微かに浮き出ていた。
「それはありません」
「そうですか」
「今はそれは出せないのです」
そして今度はいささか申し訳なさそうに述べるのであった。傲岸不遜と言っていいまでに自信に満ちかつ慇懃なことで知られる彼であるが今は慇懃さだけであった。

## 第三十二部第一章　エウロパの実情その八

「そこまでは」
「今はそうですか」
「誰もが同じだと思いますが」
「ええ。それは確かに」
夫人もその問いには納得した顔で頷くのだった。
「私もまた同じですし」
「奥様もですか」
「このドレスですが」
自身が今着ている紅い絹のドレスをここでカミュに見せる。それはロココ時代のそれをそのまま蘇らせたものでまるでベルサイユがここにあるかのようである。
「いつものものとは違うのです」
「そうですね。見てみれば」
ここで夫人のドレスを見てカミュも言った。
「絹は絹ですが」
「まず絹の質が普段のものとは違います」
こう述べるのであった。
「人工肥料の桑を食べた蚕ですので」
「そうですね。光沢がそれです」
「やはり絹は天然の肥料での桑を食べた蚕が一番です」
「はい、その通りです」
カミュもまた絹には詳しかった。絹はこの時代でもかなり広範囲に着られている。エウロパではとりわけ貴族達のドレスに最高の素材とされているのだ。
「ですが。そういったドレスは今は」
「手放されたのですね」
「皆様と同じ理由です」

寂しい笑みを浮かべてカミュに述べた。
「私もまた」
「この宴もまたそうです」
「閣下もですか」
「無念ですが。エウロパの為です」
唇の端だけで苦々しいものを見せていた。
「今は。そういう時ですから」
「これもまた貴族の務めですね」
夫人はこの言葉はカミュにだけ向けたのではなかった。自分自身にも向けていたのだ。自分で自分に言い聞かせるという意味が多分にあるのだ。
「自らを犠牲とするのも」
「その通りです。貴族には青い血が流れています」
カミュは言う。
「苑義務を果たさずして何が貴族なのでしょうか」
「はい。ですからこれは」
「義務です」
カミュはまた言った。今度は断言だった。
「我々貴族の」
「それでもまた市井に比べれば」
「豪奢であると言っていいでしょう」
少なくとも今の彼等は食べられぬだけの馳走と美酒に囲まれてはいる。いささか以上に質は落ちていても。平民達はそれ以上に質が落ちておりそれが深刻なものだったのだ。
「まだ」
「市井では欠乏こそしていないといった状況のようですね」
「その通りです」
これは内相でもある彼が最もよくわかっていることだった。今彼はそれまで内相であったボーデンが首相代行となったのに伴いこれまでの職務である外相をそのままに内相にも就任したのだ。外相兼

内相である。国のかなりの部分を取り仕切っている立場になっているのだ。
「何とか食料は満ちていますが」
「満ちてはいますか」
「それも綱渡りです」
普段のエウロパは食事に全く困ることはない。連合もまた同じであるがエウロパもまた餓えから完全に解放されているのだ。それも久しい間。
「今は」
「綱渡りですか」
カミュの今の言葉を聞いた夫人は暗い顔になった。
「食料は」
「他の物資もです」
こうも夫人に告げた。
「電化製品にしろ工業製品にしろ」
「質は落ちていますか」
「落とさざるを得ません」
暗い言葉であった。現実と同じく。
「数を保とうとするのならば」
「まずは数ですか」
「そうです。数です」
カミュもまた数の論理の信奉者であった。やはり何事も数がなくては何にもならない、彼は常にこの考えを固く信じているのである。

## 第三十二部第一章　エウロパの実情その九

「一千億の市民の為の数。それが必要なのですから」
「質は犠牲にしてですね」
「そうせざるを得ません」
厳然たる現実であった。
「今は。それしか」
「ワインやドレスもまた」
「食べられ着られること」
人が生きていくうえで決して欠かせないもののうちの二つだ。後の人はやはり住む場所である。これに関しては今は話すものではなかった。
「それが果たせるだけでも」
「そうですね。それは」
「保障されているだけでも有り難いことです」
「では私達はまだ幸せなのですね」
窺う顔でカミュに問うた。
「食べ物に服がある。それだけで」
「そうです。今はそれを維持するだけでも大変なのですから」
「わかりました」
ここまでカミュの言葉を聞きそのうえで頷くのであった。
「今は。本当に耐える時ですね」
「耐えればまた時が来ます」
「時がですか」
「そうです」
カミュの顔は真剣であり声もまたそれと同じであった。
「今は。時が来るのを待つべきです」
「どれだけ待てばいいでしょうか」
「長くはありません」

しかし彼はここでこう断言した。
「決して。長くはありません」
「それはまたどうしてでしょうか」
「救世主が現われるからです」
彼が言う根拠はこれであった。
「救世主ですか」
「そうです。エウロパを救う英雄」
言葉が真剣なものから強いものになっていた。その声で夫人に語り続ける。
「それが間も無く現われます」
「それは一体」
誰なのかと夫人はカミュに問うた。すると彼はすぐにこう答えを返してきたのであった。そのあくまで強い声で。だが強くはあったがそこには優雅さもあった。
「私です」
「閣下が」
「そう、私なのです」
こう断言するのであった。
「私こそエウロパの救世主なのです」
「では今度の総統選は」
夫人もまた表情を変えていた。これまでの優雅で気品に満ちたものに政治の機知を含ませたのだ。彼女もまた政治を知っていたのだ。
「出られるのですね」
「はい、その通りです」
また断言で答えるカミュであった。
「私が総統となります」
「左様ですか」
「既に色々あちこちの方々にお話をさせて頂いております」
「そして今私にですね」
「そうです。つきましては」

話はさらに政治的なものになっていく。こうしたことを話すのもまたパーティーの役割なのだ。ただ美酒や美食を堪能したり顔を合わせるだけではないのだ。
「御主人にも御話して頂けますか」
「主人にもですね」
「今日は来ておられませんね」
このことを確認する。
「確か」
「今はドイツに行っています」
夫人はそれに答えてこう述べた。
「ですからここには」
「左様ですか。では戻られたらですね」
「はい」
「私が話をしたいと言っていたと。申し上げて下さい」
「わかりました。それでは」
「御願いします。それで」
彼はさらに夫人に言うのだった。

## 第三十二部第一章　エウロパの実情その十

「既にチケットを二枚用意してあります」
「二枚ですか」
「いえ、失礼」
ここで言葉を変える。一瞬だが微かに笑ってみせる。
「二組です。失礼しました」
「二組ですね」
「今度のカサンドラ歌劇場での上演ですが」
「今度のカサンドラといえば」
それを聞いた夫人の目が興味深そうに光る。既にその顔には笑みが消えていて政治的なものを見る真剣だがそこには計算と読みがある顔になっていた。
「確か上演されるのは」
「そう、魔笛です」
モーツァルトの代表作の一つである。ドイツ語で上演されるジングシュピール形式の作品であり様々な解釈が為されることでも有名な不思議な作品である。
「それのチケットですが。ロイヤルボックスの」
「それを主人にですね」
「奥様と御二人で。どうでしょうか」
「それが一組と」
「そうです」
静かに夫人に答える。
「そしてもう一組は」
「閣下がですね」
「如何でしょうか。今度の魔笛もまた随分前評判がいいですが」
「前評判ではありませんね」
今の夫人は目元を微かに笑わせていた。そこには政治はなく期待

を感じさせているような笑みがあった。そこにだけ政治がなくなっていた。
「夜の女王ですが」
「彼女です」
カミュは口元と目元だけを笑わせて夫人に述べた。
「彼女が出ます」
「そうですね。では成功は約束されたものです」
「如何でしょうか」
「私も主人も彼女のことはよく知っております」
夫人は目元だけでなく口元も笑わせてきた。微かであるが確かに笑っている。見ればその笑みはカミュのそれと同じものになっていた。
「その技も声もまた」
「それでは」
「主人にはお話しておきます」
その微笑みのままカミュに言葉を返す。
「それも前向きに」
「有り難い。それではですね」
「ええ」
「このスペインのワインですが」
先程から飲んでいるそのグラスの中の赤ワインを夫人に見せつつ話を変えてきた。
「一本ずつ皆様にお渡ししようと思っているのですが」
「贈り物にですね」
「そうです。あまりにも美味なので」
そのグラスの中のワインを見つつ微笑んでいる。
「贈らせて頂こうと思うのですが如何でしょうか」
「宜しいと思いますが」
夫人もまたグラスの中のワインを見つつ答える。
「このワインは。絶品ですので」

「普段のロマネコンティでなくて申し訳ないですが」
「大切なのは御心では？」
ここでは話がいささか空虚さを帯びていた。貴族社会に付き物の虚飾と言うべきか。そういったものが微かに感じられるのだった。
「こういったものは」
「それは心得ているつもりですが」
「それに関しましては私が口出しするものではありません」
一旦こう言って退いてもみせる。
「ですが。それでも」
「ふむ。御心ですな」
「その通りです」
言葉の裏にあるものを確かめ合っていた。
「ここは。常にそうですが」
「わかりました。それでは」
カミュもまた夫人の言葉の裏にあるものに頷き決断したのであった。この辺りは流石に若いながらも外相と内相を務めているだけはあった。

## 第三十二部第一章　エウロパの実情その十一

「その様に。それでですが」
「はい」
「話は変わります」
今度は彼がリードして話を進めてきた。
「この前の件ですが」
「あれですか」
「無事済みましたので」
微笑んで夫人に述べたのだった。
「無事。話は済みました」
「そうですか。それは何よりです」
「そのことをここで述べさせて頂きます」
「わかりました。それではですね」
今度は夫人からカミュに言ってきた。
「今度閣下の御自宅にケーキを遅らせて頂きます」
「ケーキをですか」
「苺をこれでもかという程乗せたケーキを」
こう彼に告げるのだった。
「生クリームも大量に使い」
「それはいい」
「我が家のシェフが腕を振るうことでしょう。執事もまた」
「わかりました。では届くのを楽しみにしています」
「是非。それではカサンドラの件ですが」
「ええ」
これについてもまた話されるのであった。
「お考えになって頂けるのですね」
「主人には彼女が出ることをお話しておきます」
「是非共。やはりモーツァルトの作品は素晴らしい」

「そうですわ。やはり天才です」
この時代においてもモーツァルトは天才と讃えられ続けている。やはり彼を超える天才というものは少なくともクラシックの世界には出ていないのである。少なくともエウロパにおいてはそういうことになっている。この場合連合のクラシックは完全に無視してしまっている。
「彼は」
「全ての世界に天才はいるものです」
カミュはここで天才について語る。
「モーツァルトもゴッホも」
「ゴッホもですか」
「そうです。彼もまた天才です」
こう言ってゴッホを認める。どうやらカミュはゴッホを好んでいるようである。
「マグリットも天才ですが」
「成程」
「そしてボードレールもまた」
十九世紀フランスの耽美派作家である。
「天才というものは全ての世界に存在しそれぞれ永遠の輝きを放ち続けるのです」
「では閣下」
夫人は今は楽しげな顔になってカミュに尋ねる。
「政治の世界においても天才は存在しているのですね」
「先程申し上げたまでです」
これがカミュの答えであった。
「先程。それだけです」
「そうですか。よくわかりました」
「それでは奥様」
あらためて夫人に告げる。
「御主人にはくれぐれも」

「魔笛の件ですね」
「はい、そうです」
表向きはそう話すのであった。
「宜しく御願いします」
「わかりました。それでは」６
「やはり彼女もまた天才なのですから」
どうやら話題は今度は純粋にオペラに関するものらしい。それは話からもわかる。
「天才の歌は是非聴かなければなりません」
「その通りですわ、閣下」
「この世を創り出し変えるのは何か」
「神でしょうか」
「神だけではありません」
こう言うのである。カミュは。
「神々だけではなく人もまた創り出し帰ることができます」
「ですがそれは」
「無論それは限られています」
こう前置きもする。

## 第三十二部第一章　エウロパの実情その十二

「それだけの力を持っている者は」
「そうですわ。そうおいそれとは」
「ですが存在しているのです、確かに」
声にまた自信が戻っていた。
「そう、そしてそれは」
「それは」
「天才です」
自信に満ちた笑みでまたこの言葉を出すのであった。
「天才こそがそうした存在なのです」
「彼女だけではなくですね」
「御期待下さい」
こうも夫人に告げる。
「その時。エウロパがどうなるか」
「わかりました。それでは」
「はい」
こうしてここでの話は終わった。その後でそのカサンドラ歌劇場において。カミュは自身の夫人そしてコルテーゼ侯爵夫人と共にいた。ゴシックを思わせる内装の観客席において彼等は同じボックスに座りそこで並んでにこやかに話をしていたのであった。
「いや、有り難うございます」
茶色い髪に緑の目の気品のある貴公子がカミュに対して笑顔で声をかけていた。見れば彼もカミュも黒いタキシードで正装しており夫人達はドレスで着飾っている。
「こうしてこの度お招き頂き」
「いえ、この舞台は特別なものですから」
カミュはにこやかにその貴公子に顔を向けて述べるのだった。今は優雅な笑みである。

「是非にと思いまして」
「今宵の魔笛がですか」
「歌手はどれも御存知ですね」
「ええ」
カミュの問いにこくりと頷く。その左側にコルテーゼ侯爵夫人がいる。カミュの右手にカミュの妻がいた。四人並んで座っている。
「どれも若手の素晴らしい歌手達ですね」
「そうです。とりわけ」
「夜の女王ですね」
「それです」
彼の夜の女王という言葉に言葉を止めるカミュであった。
「魔笛といえばやはり夜の女王ですね」
「はい、その通りです」
貴公子はカミュの言葉に納得した顔で頷く。
「まずは夜の女王です。彼女がいない魔笛は音楽的にはかなり落ちると思います」
「他の曲も素晴らしいのですがね」
モーツァルトの音楽の特徴である。何処を取ってもそれは絶品なのだ。これが彼を天才たらしめている根拠の一つともなっている。
「ですがやはり」
「そうです。あの時がまずあります」
貴公子の口振りが熱いものになっている。
「夜の女王が。やはり第一です」
「よくあれだけの音楽を作れたものです」
カミュはモーツァルトを素直に絶賛した。
「あの歌は。あまりにも超絶的で」
こうまで言う。
「しかしそれでも歌える歌手が常にいるというのもまた不思議なことです」
「それがモーツァルトではないでしょうか」

貴公子は考えつつカミュに述べるのだった。
「それこそが」
「といいますと」
「確かに歌うには困難な曲もあります」
当時の時代は曲はまずそれを歌う歌手に合わせていた。これは後のベルリーニにしろそうだ。モーツァルトもそれにより多くの超絶的な技量が要求される歌を作曲している。この魔笛の夜の女王の歌もまた同じなのだ。やはり超絶的な技量を要求されるのである。
「ですがそれを歌える歌手がいる。歌える様にしてあるのでは？」
「それも考慮していたのでしょうか」
「そうではないかとも思います」
貴公子は述べる。
「彼はまた」
「それもモーツァルトの才能でしょうか」
「天才なのでしょう」
また言う貴公子であった。
「そういうことにまで及んだ曲を作曲した彼は」
「そうですね。天才はあらゆるものを包み込む」
「誰もが為しえるものではありません」
「その通りです。そこまでの音楽を作り出せたのは彼だけです」
モーツァルトだけだと断言するカミュであった。

## 第三十二部第一章　エウロパの実情その十三

「あの彼だけが」
「それで閣下」
「はい」
「まずは魔笛を観ましょう」
「ええ」
　これは既に決まっていた。しかし貴公子の言葉はそれで終わりではなかった。
「同時に食事も頼んでいますが」
「食事もですか」
「侯爵」
　ここで貴公子の爵位を口にした。
「ワインはどれが宜しいでしょうか」
「スペイン産を」
「わかりました」
　静かに侯爵の言葉に頷くのであった。
「それではそれを」
「実はですね」
　この貴公子コルテーゼ侯爵は楽しそうにカミュに対してまた述べた。
「今までワインはフランスのものばかりでした」
「そうでしたか」
「スペインのものは飲んだことがありません」
　こうも彼に言う。
「ですが飲んでみると」
「如何ですか？」
「いいものですね。スペインのワインもまた」
「ルイ十五世でしたか」

カミュはふとブルボン朝の王の名を出してみせた。フランス一の美男と言われそれと共に凡愚の王としても知られている。あまり評判がいいとは言えない王だ。
「こう言っていました」
「何と」
「我々は赤ワインも白ワインも同時に愛せるではないかと」
「赤ワインも白ワインもですか」
「侯爵もそれは同じですね」
「はい、それに関しましては」
侯爵もこれに関しては同じだった。
「赤も白も好きですが」
「それと同じです。つまりフランスのものもスペインのものも」
「同時に愛せるというのですね」
「その通りです。侯爵がそれを知って頂き何よりです」
ここまで言ってまた優雅な笑みを見せるのであった。
「それでですね」
「はい」
「ワインはそれでして」
「料理は」
「スペイン料理は如何でしょうか」
「スペインですか」
「とはいっても宮廷料理です」
その優雅な笑みのまま述べる。
「スペインの宮廷料理です。これは召し上がられたことはおありですか」
「いえ」
残念そうにカミュの言葉に首を横に振ったのは返答であった。
「それはないです。残念ながら」
「では是非御賞味下さい」
にこりと笑っての言葉であるのは変わりがなかった。

「その宮廷料理を」
「はい。ではまずはそれを楽しんでから」
「ええ」
話はまだ続いていた。
「それから魔笛をですね」
「それこそが歌劇の楽しみ方です」
「美酒と美食の後でですか」
「できる限りで、ですが」
さしものカミュも言葉が少し曇っていた。
「その通りです」
「今は少し難しいところがあるのは確かですね」
「否定できません」
やはりこう述べるのであった。
「暫くは残念なことに」
「そうですね。今はどうも」
「ですがエウロパは必ず復興します」
すぐに断言になっていた。

## 第三十二部第一章　エウロパの実情その十四

「それは御期待下さい」
「必ずですか」
「そうです。連合になぞ敗れたままではいられません」
「連合ですか」
侯爵も連合という名前を聞いて顔を顰めさせる。連合が相手となっては流石に彼も不快感を露わにせざるを得なかったのだった。
「私も彼等と戦いました」
「そうだったのですか」
「武器を手に取り。私もまた」
「誰もが果敢に戦った戦争でした」
これはエウロパ人、とりわけ貴族達の誇りになっていることだった。彼等は強大な相手であっても卑怯未練を卑しみ勇敢に戦うことを誇りとしている。カミュは文官でありまた外相でもあったのでそれでも戦っていたのだ。戦場以外でも戦う場所は存在しているのだ。
「あの戦争は」
「そうです。その誇りがあれば」
「そうです」
侯爵に応えて述べる。
「我々は必ず復活します。そうして」
「再び繁栄の時を迎えるのですね」
「ですがそれには一つ条件があります」
彼は言う。
「それが重要なのです。今も」
「条件ですか」
「おわかりだと思います」
ここでまずはメインディッシュがテーブルの上に運ばれるのだった。それはまずはサラダであった。レタスをメインにしてトマトと

オニオンをメインとしていた。
「それに関しましても」
「ええ、それはお任せ下さい」
侯爵もまたわかったうえで述べるのだった。今グラスには白ワインが注がれている。歌劇場のボーイがそれぞれのグラスに注いでいるのだ。
「それに関しましては」
「どうも有り難うございます」
「友人達にも話しておきましょう」
コルテーゼ家はフランスの中ではかなりの有力貴族の一つである。その為各界、とりわけ貴族の社交界においては顔が広く影響力も高い。だからこそカミュは今彼等と話をしているのだ。
「それで宜しいですね」
「御願いできますか」
「何、お安い御用です」
ただの貴公子とは思えない深い笑みを見せての言葉であった。
「この程度のことは」
「有り難うございます」
「ましてや今回はあれでしたな」
話は総統選にまで及んでいた。ごく自然に。
「イギリス貴族も出るのでしたな」
「はい、例の侯爵殿がです」
「ギルフォード侯爵」
侯爵は忌々しげに述べた。
「連合も不愉快極まる存在ですがジョンブル達もまた」
「イギリス貴族です」
カミュもまたそこを強調する。
「私は相手が誰であろうと勝利を収めるつもりですが」
「はい」
「個人的な感情としてイギリス人が一番好ましくない相手です」

フランス人特有の感情であった。
「彼等が最もです」
「その通りです。彼等にいい目だけは見せたくはありません」
侯爵もまたそれは同じだった。イギリスとフランスの仲の悪さはこの時代でも健在であった。連合で言うとアメリカとロシア、中国とロシア、日本とロシア、トルコとロシアの様なものである。なおフランスは他にもオーストリアやドイツ、スペイン、オランダといった国々とも国民感情としてはあまり仲がよくはない。どう贔屓目に見てもあまり好かれているとは言えないがそれでもそんなことを気にするフランス人でないのは昔からだ。
「決して」
「食べ物といえばです」
カミュの笑みがシニカルなものになっていた。
「何かあったでしょうかね。彼等には」
「さて」
侯爵もまたシニカルに応えるのだった。
「ローストビーフだったでしょうか」
「あれは不思議な食べ物だと私は思います」
既にサラダを食べ終え今度は鰻のオードブルを食べている。
「イギリス人が作ればこの上なくまずいものになるというのに他の国の人間が作れば実に美味なものになります」
「確かに」
「プティングもです」
イギリス人の料理の腕前も次々にけなしていく。

## 第三十二部第一章　エウロパの実情その十五

「よくもあれだけまずくできますな」
「何でも連合の者達がです」
侯爵はここであえて連合の名前を出してみせた。やはり白ワインでオードブルを食べていく。
「イギリスの食べ物を食べて感動したそうです」
「それはまたどうして」
「噂通りのまずさだったからとか。感動のあまりむせび泣きしたそうですよ」
「連合の者達もまたどうして」
カミュはその話を聞いて実に楽しそうな顔を見せた。
「わかっていますな。味が」
「ええ。少なくともイギリス人よりはましです」
これまでの温厚さが侯爵から見事に消えていた。あるのはただイギリスへの嫌味だけである。これもまたフランス人らしい行動であった。
「あの彼等にしろ」
「動物と変わらない連中ですが」
カミュは連合への偏見も見せていた。
「食べ方にしろ」
「優雅さはやはり彼等には無縁ですね」
「はい。所詮は」
エウロパ貴族に特に強い連合への偏見であった。
「このスペインの宮廷料理にしろです」
「何かあったのですか？」
「わざわざ将校達がこのオペラハウスに来て頼みました」
「それで」
「彼等は食べた途端に言ったそうです。味が薄いと」

「何と」
侯爵は今までで最も馬鹿にしたような笑みを浮かべた。
「味が薄いですか」
「そう言って次の瞬間には胡椒やソース、醤油といったものをこれでもかという位大量にかけ。そうそう、唐辛子もあったそうですな」
「素材の味が台無しになるでしょうに」
「そうしたことがわかる連中ではないでしょう」
「確かに」
侯爵もその目で見ているが偏見というサングラスをかけての見聞である。だからここではカミュと同じ位連合に対する侮蔑を見せていた。
「わかる筈もありません。味が濃くて量が多ければそれだけで満足ですから」
「しかも酒も馬の如くです」
「その通りです」
「そうして量が少ないと不平を言い三人分は食べ」
「無作法にも程がありますな」
「この歌劇場のレストランも食べ潰したそうです。あの戦いにおいて何処でも見られたように」
「将校がですか」
侯爵はここではエウロパの常識で語っていた。
「それはまた」
「彼等の将校は誰でもなれますので」
「誰でもですか」
「高貴なる者の義務なぞ理解出来る筈もないのです」
これは連合とエウロパでは最もそれへの理解が分かれる事柄の一つになっている。連合ではこれはエウロパ貴族の傲慢であると考えているがエウロパではそのままに考えているのである。それだけの違いがあるのである。
「所詮は」

「そうですな。全くです」
鰻は食べ終えた。そしてスープの後はいよいよメインディッシュであった。羊のスペイン風ステーキである。鶏の肉まで共にある。
「しかし。これで量が少ないとなると」
「蛮人はよく食べるものです」
「その通りです」
「かつてのモンゴル人もまた」
まず話に出したのはモンゴル人であった。当然ながら連合である。
「馬や牛の如くでしたな」
「しかも何でも食べます」
これはモンゴル人とは違うが意図的に同じにしてしまっている。モンゴル人は羊か乳製品だけを食べ食事は質素だったがそれは今はどうでもよかったのだ。
「それこそ恐竜でも何でも」
「しかも生で」
「日本のあれですな」
「日本はあの中では比較的ましですが」
それも偏見を露骨にさせていた。
「それでも。やはり連合です」
「その通りです。連合です」
「連合の中では最もジョンブルに似ていましたな」
「あら、そういえば」
ここでコルテーゼ夫人が話に加わってきた。

## 第三十二部第一章　エウロパの実情その十六

「日本人といえば」
「何でしょうか」
その夫人に応えたのはカミュであった。
「あの八条義統長官ですね」
「ああ、彼ですか」
カミュは彼の名前を聞いてより不機嫌になるのだった。
「彼はとりわけ不愉快ですな」
「そうだったのですか。彼といえば」
夫人はここでかつてのことを思い出すのだった。
「あの講和会議の時にエウロパに来ていましたね」
「ええ、そうです」
不機嫌さを隠しもせずに彼女に言葉を返してきた。
「その通りですが何か」
「私は御会いしたことはありませんが」
こう前置きしてまた話すのであった。
「何でも評判の貴公子だったとか」
「はい、そうです」
その不機嫌さのまま夫人に述べるのだった。
「全く。不愉快なことに」
「何でも相当優雅な方だったとか」
「確かにそうです」
不本意ながら認めるといった顔であった。
「あれだけ優雅で気品のある御仁はそうはいないでしょう」
「エウロパにおいてもですか」
「そうです。エウロパにも」
これをまた話すのであった。
「いないでしょう。あそこまでの御仁は」

「そうですか」
「しかもです」
彼はまた言う。
「教養もまた相当なものです」
「教養もですか」
「はい。あそこまで立派な人間はいません」
こうまで言う。
「完璧なまでです」
「そうでしたか」
「私も正直彼には好感を持っていました」
これは本当のことである。策謀も使い何かと信用できないとも言われている彼であるがここでは正直に述べていたのである。確かな言葉で。
「これは認めます」
「左様ですか」
「しかし。非常に残念なことがあります」
そしてこうも言うのであった。
「非常に。これは否定できません」
「残念とは？」
「彼が連合の人間だということです」
やはり言うのはこのことであった。
「そして日本人であることもです」
「日本人だからですか」
「野蛮人であります」
これをまた言う。
「野蛮人がどうして。我々より優雅で気品もあり教養も兼ね備えているのか」
「はあ」
「不愉快ではありませんか」
「確かに」

夫人もエウロパ貴族である。ならばこれを不愉快に思わない筈がなかった。互いに嫌い合う関係なので連合に対しては誰もが同じ感情を抱いているのがエウロパ、とりわけ貴族達だ。連合でもまた同じなのだからまことにお互い様ではある。また双方それを肯定さえしている。

「彼等の中にある人間がどうして」

「全く以ってその通りです」７６

侯爵もまた再び口を開いてきた。

「彼がエウロパ貴族ならどれだけよかったか」

「ええ。おそらく今頃は」

カミュはさらに言う。

「平民であっても今のエウロパ政府を背負っていたでしょう。私と共に」

「エウロパ人ならばですか」

「まことに残念ですがそうです」

夫人に対してまた述べる。

「彼に関してはです」

「それではギルフォード侯爵もそうですね」

「そうなります」

カミュはギルフォードについても述べた。

## 第三十二部第一章　エウロパの実情その十七

「彼もまた。フランス人であれば」
「イギリスは不思議な国ですね」
侯爵は認めるような、それでいて忌々しげに述べるのだった。
「何故かいざという時には英雄が必ずいる」
「はい、確かに」
カミュはまた忌々しげに語る。
「ネルソンもそうでしたしウェリントンもまた」
「マールボロもでしたな」
侯爵が話に出したのはスペイン継承戦争で活躍したイギリスの名将だ。フランスはこの時スペイン王の座を狙ってイギリスだけでなくオランダ、そして宿敵オーストリアも敵に回して戦った。当時の王ルイ十四世はムラのある王でありこうした外交的、戦略的ミスを犯すことも多かったのだ。
「いつも出て来ました」
「はい、そうです」
また忌々しげに頷くカミュだった。
「ドイツ相手にも」
「ロイド＝ジョージにチャーチル」
それぞれ第一次、第二次の時のイギリスの首相だ。なおロイド＝ジョージはドイツに過度の賠償を負わせ第二次世界大戦の要因を一つ作ってもいる。
「あとモントゴメリですか」
「我が国のシャルル＝ド＝ゴールに匹敵する英雄ではあります」
彼等についてはフランスの敵ではなかったので忌々しさはなかった。
「いざという時には必ず誰かが出ますな」
「はい、そういえばです」

「あの戦いにおいても」
カミュは連合との戦いについても語る。
「彼がそうなりますな」
「ギルフォード大将」
あえて当時の軍人としての名で彼を呼ぶ侯爵であった。
「ニョルズ星系会戦での英雄です」
「あの戦いはサハラ義勇軍百個艦隊を相手にしました」
「はい」
連合軍最強の軍と言われる彼等をである。それがどれだけ覚悟が必要な戦いかはこの戦争を見てきた者なら誰でもわかっていることだ。何しろエウロパ軍を最も苦しめた者こそ他ならぬ彼等だからだ。
「その彼等に果敢に立ち向かい」
「そしてその進撃を止めた」
「クロノスで我々は敗北の一歩手前でした」
もう一方の戦いにおいてエウロパ軍は総崩れ寸前で何とか持ち堪えていたのである。三重の防衛ラインを全て破られ最終防衛ラインも崩されようとしていた。そのクロノスとは違いニョルズでは何とか戦線を保ち互角に戦っていた。それを支えたのはモンサルヴァート、タンホイザーだけでなく彼もまたその一人だったのだ。
「ですがニョルズでそれを食い止めていた名将として」
「彼は英雄になりました」
「そう、そして今も」
侯爵はさらに言う。
「エウロパを救わんと立ち上がったのです」
「と、イギリス人は言っていますな」
「イギリス人の間での支持は既に固まっているようです」
「ええ、そのようですね」
カミュは冷ややかな目で侯爵の言葉に答えていた。これは侯爵に向けたものではない。
「まずはそれが基盤ですか」

「次にポルトガルです」
この国の名前も出て来た。
「イギリスの忠実な友人です」
「物好きな連中です」
カミュはポルトガルをこう評して述べた。
「全く以って」
「国としてはやはり今回もイギリスにつくものと思われます」
「まずはその二国ですか」
「他の国々は多分に流動的でしょうね」
侯爵は述べながら脳内でさらに分析をしていく。こうした分析が必要とされるのもやはり政治の世界ならではである。彼もまた政治の世界にいるのだ。
「ですがアイルランドは間違いなくイギリスにはつきません」
「当然ですね」
カミュの今度の言葉は冷静かつ客観的なものであった。
「彼等だけはイギリスにつくことはありません」
「そういえば確か」
侯爵はここで頭の中での思考を切り替えた。それは分析から思い出すことであった。
「また話に出させて頂きますが」
「ええ」
カミュはここで肉を口に入れた。羊独特の匂いが口の中を支配する。その味と匂いを楽しみつつ彼の話を聞いて対応していた。

## 第三十二部第一章　エウロパの実情その十八

「連合の中にアイルランド系は多いですね」
「アメリカにですね」
「おかげでケルトの神々は彼等の所にありますが」
「そうです」
侯爵はここでまた不機嫌な顔になったがそれはそのケルトの神々が連合にあるということについてだ。神々の分布も連合とエウロパでは完全に分かれてしまっているのだ。
「その彼等がとりわけイギリスを馬鹿にしていたそうです」
「積年の恨みを晴らしてですね」
「そうです。彼等の中ではイギリスはとりわけ憎むべき存在ですから」
「あれだけのことをすれば当然でしょう」
「ええ、確かに」
カミュも侯爵もここでもまた自国のことは棚に上げてしまっている。こうしたご都合主義とも言える考えもまた政治には必要であるのだ。厚顔とも言ってもよいかも知れないが。
「それでです」
「はい」
カミュが侯爵の言葉に頷く。ここでワインを飲む。
「アイルランドは間違いなくイギリスには寄らないということですね」
「その通りです。彼等の票はこちらに流れる可能性が高いです」
「高いですか」
カミュはここで怪訝な顔になった。そして言う。
「確実ではないのですか」
「実はですね」
ここで侯爵は言うのだった。

「もう一人立候補者が出るかも知れないのです」
「もう一人」
侯爵もカミュもここで急に怪訝な顔になった。カミュはその怪訝な顔で侯爵に尋ねるのであった。
「そのもう一人とは一体」
「ドイツです」
侯爵はまずは国の名を出した。
「ドイツにいます」
「ドイツ。それでは」
「おわかりになられますか」
「もう一人の若き英雄ですね」
そしてこういった表現を使ってみせたのだった。
「彼ですね」
「そうです。ウォルフガング＝フォン＝モンサルヴァートエウロパ元帥」
この名前が出された。
「エウロパ軍宇宙艦隊司令長官です」
「あの戦争での彼の活躍は見事でした」
カミュはまずは彼を認めて褒め称えた。
「実に。素晴らしいものでした」
「はい、それは確かに」
「これまでも多くの武勲を挙げてきています」
エウロパ総督府においての戦いぶりは有名であった。その戦い方は華麗とも言ってよく勇敢であり敗北を知らなかった。押されていたエウロパ軍の中でも彼は一筋の光明であり続け連合軍の前に立ちはだかり続けた。今軍人の中で最も人気のある男だ。
「その彼です」
「彼を擁立するとすれば」
ここでカミュは考えた。そのうえで述べた。
「保守派ですか」

「どうやら。接近を考えているようです」
「ではまだ要請もしていない」
「そうです。そして長官御自身もまた」
「動いても話してもおられないのですね」
「全てはまだの段階です」
そしてこう述べた侯爵であった。
「今はまだ」
「そうですか。まだですか」
「ですが」
しかし侯爵はここでまた言うのであった。
「水面下でそうした話が出て来ているのは事実です」
「ふむ。水面下で」
「そしてです」
侯爵はここであらためてカミュに顔を向けてきた。食事からは一旦顔を離している。そしてそのうえで彼に対して尋ねるのであった。
「これについてはどう思われますか」
「どうといいますと」
「擁立されるでしょうか」
真顔でカミュに問うてきたのだった。
「長官は。如何でしょうか」
「まだ何とも言えませんが」
カミュはまずはこう前置きした。
「ですが」
「ですが」
「おそらくは擁立されるでしょう」
鋭利な、思慮のある目での言葉だった。

# 第三十二部第一章　エウロパの実情その十九

「これにつきましては」
「擁立されますか」
「はい、間違いありません」
こうも述べるカミュであった。
「今回は。間違いなく」
「そうですか。やはり」
「確かに不確定な要素が多いです」
彼はそれは認める。
「声もかけていない状況では。ですがそれでも」
「今回は擁立されると」
「私はそう見ています」
また言うカミュであった。
「今御聞きしただけですが」
「どうしてそう思われるのですか」
「勘です」
答えはこれであった。
「勘がこう教えています」
「勘ですか」
「はい、勘に過ぎませんが」
「されど勘ですね」
「そういうことです」
また侯爵に答えた。政治の世界では勘もまた重要になってくる。
極端に言えばナポレオンも勘の鋭い男であった。才能や野心だけでなく勘もなくてはあそこまでは登り詰められないということである。
政治の世界はただ知識や能力だけの世界ではないのだ。
「ですからこそ」
「なりますか」

「必然性でもあります」
カミュはこうも言った。
「これに関しては」
「必然性ですが」
「そうです。保守派は今これといった候補者がいませんね」
「はい」
侯爵はカミュの今の言葉に頷く。
「その通りです」
「だから余計にです」
保守派の立場になっての言葉であった。
「何としても長官を擁立しようとするでしょう」
「ですが長官は」
侯爵はモンサルヴァートの立場に立って言う。
「それを受けられるでしょうか」
「長官がですか」
「確かモンサルヴァート長官は」
さらにモンサルヴァートの立場に立って述べていく。
「政治の世界からは距離を置いておられましたね」
「はい、確かに」
これはカミュもわかっていた。
「それはその通りです」
「それにです」
侯爵はさらに言う。
「彼は政治家としては」
「未知数だというのですね」
「はい、そうです」
彼が指摘するのはこのことだった。
「政治家としてあまりに未知数です。それでは今の状況では」
「侯爵」
しかしカミュはモンサルヴァートの政治力が未知数であると指摘

する侯爵に対して言葉を返すのであった。至って冷静な様子である。
「総統には確かに政治力が必要です」
「はい」
これは言うまでもない。エウロパのトップだからだ。
「そうであるからこそ」
「しかしです」
だがここでカミュの言葉がまた出される。反論的に。
「それは最低限でいい場合もあるのです」
「それだけでいいと」
「そうです。確かに政治家としての力量は必要です」
カミュもそれは認める。
「ですがそれが最低限であるならば」
「その場合はどうなるのですか」
「統率力とカリスマ性が必要となります」
彼が言うのはこの二つであった。
「この場合ですが」
「モンサルヴァート長官に関しては」
カミュからこの二つを聞いた侯爵はあらためて考える顔になって述べた。
「統率力はかなりのものですね」
「ただ将兵を統率しているだけではありません」
普通統率力はそれを言うのだが統率力はそれだけではない、彼が言うのはそういうことだった。

## 第三十二部第一章　エウロパの実情その二十

「もう一つあります」
「直属の部下の統率ですか」
「その通りです。兵の統率が上手くとも直属の部下の統率が不得手な者もいます」
「確かに」
　侯爵もこれはわかった。例としてはエウロパの人物ではないが中国三国時代の袁紹本初である。彼は兵士の統率は見事なものであったがどういうわけか直属の家臣達をまとめるのは不得手だった。その為彼等の派閥争いや讒言のし合いを防ぐことができなかった。特異なケースであろうが袁紹がそうした弱点を持っていたことは確かである。それが為に彼は官渡の戦い等において曹操に敗れる一因を作ってしまったのだ。
「長官は将兵の統率は見事ですな」
「はい、それにつきましては言うまでもありません」
「ですが部下の統率は」
「それも見事なものです」
　カミュは冷静な声でこう述べた。
「それもまた」
「そういえば」
　ここで侯爵は気付いた。
「彼の部下はよくまとまっていますな」
「その通りです。だからこそ」
「はい」
　侯爵もここで答えたのだった。
「それもまた」
「そういうことです。そして」
「カリスマですか」

「次はそれです」
侯爵にまた述べた。
「彼のカリスマ性は」
「それもまた立派なものですね」
「実績が作り出したカリスマです」
これがカミュのモンサルヴァートの持っているカリスマ性への分析であった。
「彼のそれは」
「軍人としての今までの戦いにおいてですね」
「その通りです。数多くの戦いでエウロパに勝利をもたらしてきました」
「敗北はありません」
「常勝かつ不敗です」
この二つの言葉にモンサルヴァートが持っているカリスマ性の根拠が語られていた。カリスマは時として信仰に近くなるがそれを招きよせることがその勝利なのだった。
「だからこそですか」
「そういうことです。つまり彼のカリスマも私やギルフォード侯爵とは性質が違いますが」
「強さは同じ程度ですか」
「はい。ですからこれも備わっています」
「成程」
「だからこそ彼もまた総統になり得ます」
最後に結論を述べたカミュであった。
「統率とカリスマにより」
「そういえば」
話が進むにつれて侯爵は気付いたことがあった。
「モンサルヴァート長官の政治力ですが」
「それですか」
「はい、連合との戦争について軍は補給や防衛、通信といった各種

分野に様々な整備を行いましたが」
「あれですか」
この話が出たところでカミュの目が光った。
「あれは当時の統帥本部長である」
「モンサルヴァート長官でしたな」
「はい、彼です」
侯爵の言葉に対して頷いたのだった。
「彼が整備したものです」
「その通りです。それでは」
「政治力もかなりのものですか」
「少なくともそういった後方及び防衛設備の充実がなければエウロパ軍は敗れていました」
カミュは軍人ではないがこのことを把握していた。それだけの軍事知識も備えているのだ。やはり彼は一級の政治家であると言えた。
「確実に」
「エウロパを救えるだけの政治力も備えていましたか」
「そうなります」
またカミュは言う。
「宇宙艦隊司令長官としても」
「はい」
今モンサルヴァートとローズはそれぞれの官職を交代した形になっている。今の宇宙艦隊司令長官はモンサルヴァートで統帥本部長がローズになっているのだ。
「艦隊の再編成を見事にしていますね」
「ええ。普通あそこまで的確には」
「それを見る限り政治家としても秀でていますか」
「では余計に」
「総統選挙に出れば強敵になります」
侯爵は断言した。
「間違いなく」

「下手をすれば三つ巴ですか」
「侯爵」
デザートが来た。フルーツの盛り合わせだ。カミュはそれを横目で見つつまた侯爵に声をかけたのだった。

# 第三十二部第一章　エウロパの実情その二十一

「フランス国内の改革派ですが」
「はい」
「一枚岩にしておいて頂きたいのです」
「まずはフランスですか」
「一つずつ行っていきましょう」
実に慎重な言葉であった。
「全てはそれからです」
「一つずつですか」
「ええ。例えば」
ここでカミュはそのデザートの中のマスコットを手に取った。そうして一粒摘み取ってからまた侯爵に対して語ってみせたのである。
「このマスカットと同じです」
「マスカットをですか」
「ええ、そうなのです」
その黄緑の独特の色の粒を見せて語る。
「これとまた。葡萄は一粒ずつ取って食べますね」
「その通りです」
「政治もまた同じです」
葡萄を政治に例えてきた。
「これを食べるのと」
「政治も同じ？ああ、成程」
侯爵は考える目になったがすぐに全てを解した顔になった。
「そういうことですね。確かに」
「おわかりになられましたね」
「一度に全て食べることはできませんね」
「はい」
侯爵の返答に頷くのだった。

「そういうことです」
「だからこそまずはフランス内部の改革派ですか」
「最初は足元です」
こうも言う。
「足元を固めなければ」
「土台をですか」
「何事もそうですね」
マスカットの粒を口に含みつつ述べる。その丸い感触をまず楽しむ。皮ごと口の中に入れてそれから皮を歯で破るのがカミュの葡萄の食べ方であった。
「全ては土台からです」
「成程」
「それでです」
カミュはさらに言う。
「土台を完全かつ磐石なものにさせてから」
「次の評伝に移るのですね」
「イギリスとドイツはまず難しそうですね」
その二国についてはもう諦めている感じであった。
「やはり。ドイツも」
「モンサルヴァート長官が出られたならば」
カミュはまたこの仮定を述べたのだった。
「ドイツもやはり」
「総統選挙の特徴ですが」
カミュが次に見たのはこのことだった。
「その国から総統立候補者が出れば」
「はい」
「そうした場合その国は超党派でその立候補者に票を入れます」
「それは確かに」
侯爵もこのことはよく知っていた。総統といえばエウロパの国家元首である。連合に比べるとかなり中央政府の権限が強くそれが為

に総統を出すということは大きいのだ。
「ではフランスもまた」
「そうですね。足場を固めるのは容易ですね」
カミュもこれについては楽観していた。
「保守派に関しても」
「ですが一応話はしておくべきですね」
「それもお任せ下さい」
侯爵は今度は自分から名乗り出てみせた。
「私が根回しさせて頂きます」
「御願いします」
「何、こうしたことはお互い様です」
微笑んで答える侯爵であった。
「常にね」
「ええ、確かに」
静かに応えてみせるカミュだった。

## 第三十二部第一章　エウロパの実情その二十二

「こちらとしても何かあればやらせて頂きますので」
「そうですか」
「この前のように」
にこやかに笑って侯爵に述べた。
「違いますか」
「ははは、あの時は助かりました」
侯爵はその話が出たところで笑顔になった。
「おかげで我が国はイタリアに遅れを取りませんでした」
「中央政府としてもイタリアの突出は好みませんでした」
カミュもまた微笑んで侯爵に答えた。
「あの時は。そこでフランスから話が出て渡りに舟でした」
「そうでしたか」
「農産物の生産は近年停滞しています」
カミュの顔が少し暗いものになった。エウロパの食糧事情は連合と比べるとお世辞にもいいものではないのだ。餓えてもいないし食糧不足が危惧されることもないがそれでも明るい話にはなれないのが現実なのだ。カミュにとっても面白くない現実ではある。
「イタリアの大規模な開拓の成功は願ってもないことです」
「はい」
「農水省としてもそれは有り難いことでした」
「しかし、ですね」
「はい、しかしです」
ここからが重要なのだった。極めて政治的な事情によるものだ。
「イタリアだけがそれを行うと」
「不利益なのですね」
「そうです」
カミュははっきりと答えた。

「一国だけ突出してはその国の発言力が歪になります」
「連合のようにですね」
「あれは最悪でしょう」
またしても連合を批判する。今度は反面教師としてである。
「大国があまりにも突出しています」
「日米中露がですね」
「まだ日本はましなようですが」
かなり穏やかでソフト路線を愛する国だということはよく知られているのだ。その為連合の他の国にも日本はかなり安心されているのは確かだ。
「しかしあの三国は」
「千年前から変わらないようですね」
「野蛮人に進歩を求めるのは愚です」
カミュの連合に対する感情がここでも出ていた。
「そんなものは最初から」
「あの三国の横暴は極めて問題があるようですな」
「連合の騒動はかなりの割合で彼等が一方にいます」
「やれやれですな」
「中央政府も常に頭を抱えているようで」
「いい気味ではあります」
侯爵もまた自身の連合への感情をここでも隠そうとはしない。
「ですがそれでも」
「ええ。我々がそれを踏襲することはありません」
「野蛮人とは違いますからな」
「そうです。だからこそです」
カミュははっきりと言い切った。
「イタリアの突出を防ぐ為にも」
「そうした事情があったのですか」
「こちらから要請したい程でした」
こうも言うカミュだった。

「何処も名乗り出ないのならば。フランスにでも、と」
「本当に渡りの舟だったのですね」
「そういうことです」
マスカットを食べ終えてまたワインを口に含む。甘いフルーツ系のワインになっている。
「おかげで助かりました」
「そうでしたか」
「それでです」
カミュはまた言った。フルーツワインのほのかな香りを楽しみながら。

## 第三十二部第一章　エウロパの実情その二十三

「おかげでイタリアとフランス、双方でバランスを取ることができました」
「成程」
「まことに困った時はお互い様ですね」
「それをフォローし合うこともまたお互いの利益になるのですね」
「そういうことですね」
「ええ。ではフランス国内のことは」
侯爵はこのことに話を戻してきた。
「お任せ下さい」
「はい、それでは」
彼の言葉に頷くカミュだった。
「御願いします、それに関しては」
「まずはこれでエウロパ第二の人口を持つ国が味方になります」
「そうですね。第二の」
エウロパの人口はまずはドイツが最も多い。その次はフランスでイギリス、イタリア、スペインと続く。この五国がそのままエウロパの五大国となっている。なおこのうちで連合で最も嫌われているのはイギリスである。どの国もこれでもかという程批判的に書かれているのが連合におけるエウロパなのであるが。
「大きいと思いますが」
「ええ、確かに」
微笑んでまた侯爵に答える。
「それもかなり」
「ですが勝負はこれからです」
総統選挙のことを勝負と言うのだった。
「まだはじまってもいません」
「その通りです」

「それで思うのですが」
侯爵はまた言ってきた。
「閣下」
「はい」
「この選挙は三国の勝負になります」
「英仏独の」
「感情に訴えるのも必要になりますね」
「イギリスとドイツに対する感情ですか」
当然ながらフランスはイギリスは言うまでもなくドイツとも仲が悪い。地球にあった頃からその仲は全く進歩していない。彼等は気付いていないがそうした意味では連合と大差はない。
「それですね」
「そう、それも御考え下さい」
「わかっています」
涼しげな笑みで侯爵の言葉に頷いた。
「それにつきましてはもう既に」
「考慮されていますか」
「無意識の時点でありますから」
悠然と笑みを浮かべて述べたのであった。
「もう既に」
「無意識にですか」
「彼等については言うまでもありません」
これもまたフランス人のイギリスやドイツに対する感情の表れであった。同じエウロパだからといってもその感情は複雑なものがあるのだった。
「ですから」
「それではお任せしますね、そちらは」
「はい、是非」
「エウロパが大きく動きますか」
侯爵はフルーツの最後であるオレンジを食べつつ述べた。

「今度の選挙で」
「復活になります」
「復活ですか」
「そうで。冬は一瞬で」
今のこの状況を冬だと言うのである。侯爵もこれには同意だった。
今はエウロパにとってはあまりにも苦難の状況であるからだ。
「それからは春です」
「そしてその春は」
「永遠となるでしょう」
「永遠ですか」
「その通りです」
悠然とした微笑みが続いている。
「我がエウロパにとっての」
「あの忌まわしき連合の者達を屈服させたいものです」
「それへのはじまりとなります」
「それはいい」
侯爵だけではなくエウロパの者達ならば誰もが望んでいることである。彼等は再び人類の指導的地位に戻りたいのだ。二十世紀までのそれに。
「ではそれは」
「私によって為されます」
ここでもその自信を見せるカミュであった。
「そういうことで。それでは」
「はい、それでは」
丁度ここで幕が開いた。デザートを食べ終わったその瞬間だった。序曲の後でタミーノ王子が大蛇に襲われつつ舞台に姿を現わす。魔笛の舞台がはじまり彼等は今はそちらに目をやるのだった。政治と美酒、美食から離れて。

# 第三十二部第二章　誘いその一

誘い

モンサルヴァートは多忙を極めていた。宇宙艦隊司令長官になってからも統帥本部長であった時と同じだけの仕事を抱え卿もまた書類の山を前にしていたのである。

「では閣下」

彼の前に立つ士官が声をかけてきていた。

「この書類はこれで」

「全て決裁した」

その士官に対して述べる。見ればその士官の階級は少佐である。まだ若いところを見ると貴族階級出身であることを伺わせる。

「だから。持って行ってくれ」

「はっ、わかりました」

少佐は敬礼をした後でその書類の山を受け取りそのうえで部屋から消えた。それからも彼の激務は続き書類を次々と処理していっていた。部屋に詰めている他のスタッフ達も同じである。

「閣下」

その中でスタッフの一人が彼に声をかけてきた。

「一つ御聞きしたいのですが」

「どうした？」

「現在の艦隊数ですが」

彼が言うのはこのことだった。

「現状で宜しいのですか」

「現状か」

「はい」

もう一度彼に対して言ってきた。

「数字のうえでの現状で。宜しいのでしょうか」

「総統はそう仰っている」

「総統がですか」
「既に議会でも承認された。数字においての数で行く」
「左様ですか。数字のうえでですか」
今エウロパ軍は五百個艦隊を保有している。これは連合との戦争前に増員して編成したものである。だがその連合との戦争により数を大きく減らし実質には三百五十個艦隊程度の数しかないのが実情だ。それだけ連合との闘いで消耗してしまったのだ。
「それでは五百で」
「随時実数もそこに戻していければいいがな」
「そうですね。それは」
「しかし。今はな」
また一枚書類を決裁し終えてからぼやくモンサルヴァートであった。
「無理な話なのはわかっている」
「確かに」
「あまりにも戦死者が多い」
エウロパ軍はこの戦争で全軍の三割を失った。しかもただの三割ではない。予備兵力まで組み込んでの三割である。つまり今確かに戦える戦力は開戦前の三割しかいないのだ。
「だからな」
「今は補充は無理ですか」
「今のところはだ」
あらためて述べるモンサルヴァートだった。
「残念なことだが」
「人員はそうなりますか」
「何処かで補充できればいいが」
こう思わずにいられないのは彼が宇宙艦隊司令長官だからだ。艦隊を統率する者として当然の考えであった。
「今はな。それよりもやることが多過ぎる」
「エウロパ全体として」

「そうだ。軍はそこまでは触れてはいないが」
「はい」
あくまで軍務だけである。軍人の発言権が比較的強く現役武官であっても閣僚となることのできるエウロパであっても軍人が行える仕事の範囲は軍のことについてだけである。他の民生やそういった部分はそれぞれの官僚が受け持つのはエウロパもまた同じである。
「それでもだ。あまりにも多いな」
「全くです」
「艦隊にしろだ」
ここで話を艦隊に関することに戻すモンサルヴァートだった。
「人員の他には」
「まず艦艇ですか」
「四割近くが撃沈若しくは破損しているな」
「その通りです」
別のスタッフから報告があがった。
「そのうち完全に破壊されているものは二割です」
「二割か。思ったより少ないか」
「少ないでしょうか」
「ああ、少ないな」
あらためて言うモンサルヴァートであった。

## 第三十二部第二章　誘いその二

「思ったよりはな。三割は達していると思っていた」
「流石にそこまでは」
「あそこまでやられたのだ」
実際に戦場で立ち指揮を執っていたからこれは実感としての言葉であった。
「それで二割とはな。思ったよりは少ない」
「左様ですか」
「そしてだ」
彼はさらに言うのだった。
「残る二割は修復可能なのだな」
「はい、そうです」
このことに関しては明るい返事が返って来た。
「それはもう」
「そうか。ならいい」
「ですが修復の時間は遅れます」
今度は明るくはないニュースだった。
「残念なことですが」
「修理基地の回復が遅れているか」
「それです」
基地についても話されるのだった。
「統帥本部も今必死に手配していますが」
「間に合わないか」
「連合軍の破壊が徹底していましたので」
連合軍は攻め込むとその基地を利用できるものは全て利用しそうでないものは破壊し尽した。しかも退く際にも基地を破壊して連合に戻っている。国際法にないならばそれは徹底的に執り行うのが連合軍であった。

「それが為に」
「修理基地の回復状況は」
「ようやく五割にまで戻りました」
「五割か」
「はい、ですから艦艇の修復はまだ」
「わかった。ではそれは待とう」
「はい」
これについてはこう答えを出すしかなかった。今のエウロパ軍の状況はまさに廃墟からの復活と言っていい。そこから蘇るのはやはり容易ではないのだ。
「基地の回復もな」
「やはりそれしかありませんか」
「これは統帥本部の仕事になる」
「そうです」
職務の担当も確認される。
「だからこれについては話をするしかないが」
「今統帥本部も多忙を極めています」
またスタッフの一人が言った。赤い髪に青い目の女だ。
「彼等も必死ですが」
「我々と同じようにか」
「はい、同じです」
彼女ははっきりとモンサルヴァートに対して述べた。
「我々も。そして軍務省も」
「わかっていることだが。あらためて聞くとな」
「何か」
「いや、それも当然だ」
こう述べるモンサルヴァートだった。
「今の状況はな。復興は最も困難な仕事だ」
「俗にそう言われていますね、歴史では」
「かつて欧州は幾多の戦乱に覆われてきた」

それがエウロパの歴史である。二十世紀の二度の世界大戦の後はエウロパ本土は傷つくことはなかった。エウロパとして銀河に出てからは連合との戦争まで本土での戦争は経験していない。今がはじめてでありその受けた傷は確かに深いものであったのだ。
「その都度立ち上がってきたが」
「その通りです」
「それは確かに」
三十年戦争もそうであった。この時ドイツは想像を絶する傷を受けた。しかしそれでも復興してきた。これもまた欧州の歴史なのだ。
「今回はまだましだがな」
「ましですか」
「確かに連合軍は忌まわしい敵だった」
モンサルヴァートはカミュ達程連合への反感はなかった。敵意もそれ程強くはない。ただ武人として敵を見据えているだけなのだ。

## 第三十二部第二章　誘いその三

「しかしだ」
「しかし？」
「民需には手をつけなかった」
「ええ、確かにそれは」
「一切ありませんでした」
「彼等が狙ったのはあくまで我々だけだ」
軍だけだというのだった。
「軍とその施設だけだったな」
「はい、確かに」
「だからだ。これで一般市民や民需までもが攻撃対象とされていたならば」
「復興はさらに困難なものになっていたのは間違いありません」
「それはわかっております」
「その通りだ。だからだ」
モンサルヴァートは言う。
「我々の復興はまだ楽なものだ」
「楽ですか」
「そうだ、まだな」
あくまで程度の問題だがこう言うのだった。
「その点では連合軍には感謝するべきだろうな」
「敵に感謝するというのもおかしな話ですが」
「それでもです」
銀色の髪の若い男の士官が口を開いてきた。
「彼等の為に今の我々の惨状があります」
「そうですな。それを考えれば」
「そうだ。だが私は思う」
「思う？何をでしょうか」

「連合の者達は騎士であった」
「騎士ですか」
この言葉は彼等にとっては特別な意味を持つ言葉だ。何故なら彼等は常に騎士道を胸に置いて戦っているからだ。軍人というよりは騎士だと認識しているのだ。
「そうだ、騎士だった」
「御言葉ですが」
「私もです」
ここで士官達はモンサルヴァートに対して怪訝な顔で言うのだった。
「彼等は所詮は有色の者達です」
「かつては我等の恩恵にすがるだけの者達だったではないですか」
「過去は過去だ」
しかしモンサルヴァートは言うのだった。
「過去はな。現在とは違う」
「現在とは」
「現在はヴェルザンティ」
時を司る女神のうちの一人だ。北欧の神々の一柱である。
「未来はスクルズ、そして過去がウルズだったな」
「それはそうですが」
「現在は現在、過去は過去でしかない。神までもが違う」
「しかし彼等は今でも」
「粗野でしたが」
「果たしてそうか」
モンサルヴァートはこれについても懐疑的な言葉を述べてみせた。
「連合の者達のマナーは確かによくはない」
「そうではありませんか」
「あの暴食に」
彼等は忌々しげに言葉を続ける。
「演劇までして我等の英雄を貶めたではありませんか」

「ド＝ゴールはおろかナポレオンも」
「ネルソンや獅子心王までも」
「確かに彼等は銅像を倒したり略奪や暴行はほぼありませんでした」
これは事実だった。連合軍はそういった行動は勝利よりも優先させていたふしがある。
「しかしそれでもあの粗野で猥雑なものは」
「騎士のそれではありません」
「騎士は確かにエチケットを重視する」
モンサルヴァートもそれは肯定する。
「しかしだ」
「しかし？」
「それだけではないのだ」
こう士官達に言ったのだった。
「騎士とはな」
「マナーだけではないと」
「そう」
そしてさらに言葉を続けるモンサルヴァートであった。
「そして彼等は一般市民にも民需にも攻撃を加えなかった」
「それが大きいと思われているのですね」
「騎士が戦う相手は何だ」
これはエウロパ軍にとっては絶対の返答だった。
「何だ、それは」
「決まっています」
最初にモンサルヴァートと話していた黒い髪の士官が応える。

## 第三十二部第二章　誘いその四

「敵です」
「そう、敵だな」
「その通りです、我等の敵はあくまで敵軍です」
「そうだ、敵軍だ」
モンサルヴァートもその言葉に頷いてみせる。
「敵軍だな」
「その通りです。では彼等は」
「そうだ、騎士なのだ」
今ここで断言した。しかしすぐに言葉を変えた。
「いや、少し違うか」
「違いますか」
「考えてみれば彼等に騎士はいない」
「ええ、まあ」
誰もが今のモンサルヴァートの言葉には少し拍子抜けを感じた。
「それはその通りですが」
「確かに」
「武士だな」
そして騎士のかわりにこの言葉を出すのだった。
「彼等はな」
「武士道ですか」
「そうだ」
これを他の者達に告げた。
「彼等はな。武士道を守っていた」
「では長官」
女士官が彼に問うてきた。
「ではこの場合はあの長官の存在が大きいのですね」
「そうだ、必然的にそうなる」

モンサルヴァートはもう彼女が何を言いたいのかわかっていた。
「連合中央政府国防長官」
「八条義統ですか」
「彼に敗れたのだ」
そしてこう言ったのであった。
「あの日本人にな」
「そういえば」
日本人と聞いて一人が気付いた。
「武士道は日本が発祥でしたな」
「そういえば確かに」
「ではあの日本人の長官殿は」
「武士道を守っていたということでしょうか」
彼等はこう口々に己の考えを述べるのだった。
「この場合は」
「しかし。連合といえば」
しかしここで彼等は日本以外の国も見るのだった。
「あまりそういうものを守りそうにない国ばかりですが」
「一般市民を狙う戦略戦術を考える国ばかりですな」
「確かに」
これは彼等の偏見もあるがあながちそれだけとも言えない歴史的事実があった。
「アメリカや中国、ロシアといえば」
「騎士道はおろか」
そんなものは全く守らないと考えていたのだ。
「一般市民を狙うことすら平気です」
「しかも自国民までです」
アメリカは南北戦争では内戦であっても平然と戦略として略奪と行い市街地に砲撃を仕掛けて一般市民を殺していった。中国も同じで内戦の度に多くの同民族を殺している。ロシアに至ってはさらに極端だ。ロシアの歴史は地球にあった頃はかなり血生臭かったのだ。

「そうした連中がいるというのに」
「よくもまあ抑えられたものです」
「彼等なら一般市民を攻撃対象にすることなぞ躊躇しないでしょうね」
「それは強権を使ったのだろうな」
モンサルヴァートはこう予想を立ててきた。
「おそらくはな」
「強権をですか」
「連合軍で軍の最高司令官は大統領だ」
「はい」
これはエウロパも同じでエウロパ軍の最高司令官は国家元首である大統領だ。国家元首が軍の最高司令官であるというのはどの国でも同じである。
「しかし実質はだ」
「国防長官が取り仕切っているというのですね」
「軍務相と同じだな」
モンサルヴァートはこうも言う。
「ただし、文民でなければならない」
「文民でなければならないのは知っています」
「それは知っているか」
「はい。それでも」
「強権を使えるのですか」
このことが彼等にとってはいささか理解しにくいものであった。

## 第三十二部第二章　誘いその五

「文民であっても」
「いざという時に」
「連合は軍人はあくまで軍人だ」
「あくまでですか」
「そうだ、あくまで軍人だ」
そしてまた言った。
「政治家ではない。言うならば官僚と同じだ」
「また随分とドライというか」
「素っ気無い考えですね」
「だが連合ではそうだ」
やはりこう述べるモンサルヴァートだった。
「政治家にアドバイスすることはできるがな」
「後は実務だけですか」
「そこが我々と違う。あくまで官僚に過ぎない」
「だからですか」
「長官が強健を使うこともできるのですか」
「しかしだ」
モンサルヴァートはここでまた言った。
「しかし？」
「まだ何かあるのですか」
「連合は複数の国家がある」
「ええ、我々より遥かにそれぞれの国家の権限が強かったですね」
「纏まりに欠ける連中です」
「所詮はその程度とも言えますが」
彼等もやはり連合の者、それに貴族なので連合に対する感情はいいものではなかった。いいというよりはかなり悪いのが実情である。
「それが影響するとなると」

「余計に強権が必要ですか」
「むしろ軍人より各国だな」
モンサルヴァートはこう見ていた。
「むしろな」
「そこに強権を使いましたか」
「連合軍の軍律は日本軍のそれを参考にしている」
「日本軍のを」
「そうだ。日本軍のだ」
そこをあえて強調していた。
「軍規もまたな」
「日本軍といえばあの」
「軍規軍律の厳しさでは連合随一と言われた」
これは地球にあった頃からの伝統であった。日本軍の軍規軍律の厳正さは十九世紀からのものであった。一時期の自衛隊時代はいささか優しいと言われていたがそれはあくまでかつての日本軍と比較してであり世界的にはやはり厳正であった。やがて正式に日本軍となって復活するとまたあの軍規軍律が元に戻ったのである。その軍規軍律の厳しさは各国から見れば想像を絶するものであり連合軍が設立された時はその軍規軍律が入ると聞いて各国は多いに驚いたのである。
「あの日本軍のそれをですか」
「ではやはり」
「そうだ、相当に厳しい」
「だからあそこまで略奪や暴行もなかったのですか」
「一般市民への攻撃も」
「彼等の作戦にはそもそも一般市民を攻撃対象としたものはない」
モンサルヴァートは言った。
「日本軍にはな」
「そういえばこれについては」
青い目の士官がここであることに気付いた。

「連合各国の軍にもありませんでしたな」
「一般市民を攻撃対象とする思想は」
「戦争自体がなかったからだ」
こう分析するモンサルヴァートだった。
「それはな」
「つまりそういう事態がなかったと」
「精々海賊が相手でしたな」
「それとテロリスト」
どちらも悪質な相手でありかなり慎重な対策が必要だがそれでも内戦や対外戦争ではない。このことがかなり重要なのである。
「そのどちらかですな」
「ではやはり彼等は」
「そうだ。元々なかったのだろう」
結論が少し変わっていた。
「それも大きかった。マニュアルがなかったのもな」
「そして今もないと」
「連合軍の戦略戦術については今研究が為されている」
ただ敗北したわけではないのだ。相手のことを学び取るのもまた軍の務めである。敗北から何を学ぶか、それこそが最も重要なのだ。
「その結果そもそもそういう戦略戦術がなかったようだ」
「米中露もですか」
「あの連中までもが」
「テロで自国民を巻き込むという作戦はなかった」
極端な考えではあるが軍ではないのだった。

## 第三十二部第二章　誘いその六

「しかもそのうえであの軍規軍律だ」
「だからなかったのですか」
「そうだ。おそらく彼等もわかっていた筈だ」
モンサルヴァートの声に深く鋭い洞察が宿った。
「民需や一般市民への攻撃が我々に対してどういった影響を及ぼすのかはな」
「わかっていましたか」
「それも。やはり」
「だが彼等はそれでも行うことがなかった」
このこともまた強調されていた。
「決してな」
「その結果復興はまだましですか」
「しかし。それでも」
彼等の口には苦いものが漂っていた。
「敗北感はより深まりました」
「どうにも」
「我々もまた略奪暴行、一般市民への攻撃はありません」
「そう、それは恥です」
ここでも貴族としての誇りが出て来た。彼等にとっては特権は誇りと矜持、そして義務感と常に一体なのだ。それが彼等を貴族たらしめているのだ。
「しかし野蛮人である筈も彼等もまた」
「それを守るとは」
「野蛮人か」
モンサルヴァートはその言葉に少し考える顔を見せた。
「その言葉もな」
「何か」

「いや、主観だな」
そして主観という言葉を出した。
「所詮はな」
「主観ですか」
「そうだ、主観に過ぎない」
そしてこうも述べる。
「我々のな。つまり我々は文明人だな」
「はい」
「その通りです」
それはその通りだった。相手を野蛮人と否定するからには自分達こと文明人であるという認識が前提になる。文明と野蛮はこの時代においても対比されるものであるからだ。
「しかし彼等もまた言う」
「彼等がですか」
「そうだ。我々は文明の皮を被った野蛮人だとな」
こうした批判が連合からあるのは事実である。
「そう言ってきているのだ」
「彼等がですか」
「そうだ。我々はサハラを攻めた」
俗に言うサハラ侵攻である。
「そして彼等から星系を奪い追い出したな」
「それは我々が生きる為です」
「エウロパは最早手狭ですから」
「連合はそれを批判してきた」
これはその通りだ。ことあるごとにエウロパを批判するのが連合の一千年来の伝統であるがこの時はとりわけ強く批判していた。蛮行であるとさえ言っていたのだ。だが彼等はそれに対しては何らこれといった行動は起こしていない。エウロパ戦役にしろこれとは目的が違う。
「野蛮だとな」

「我等の事情を知らないからです」
「知らないのでないのならば意図的に無視しているか」
「そのどちらかでしょう」
事情を意図的に無視するのは政治の常識である。かつてアメリカはそれにより日本にハルノートを突きつけたことがある。あえて日本を挑発し戦争を起こさせる為だと言われている。このハルノートを見たインドのハルという判事はこんなものを突きつけられたならばどの様な小国であろうともアメリカと戦っていたであろうと言っている。意図的な無視はこの時代においても健在である。
「彼等は我等のことを何一つ知らないのです」
「所詮は」
「果たしてそうか」
だがモンサルヴァートはこれについても懐疑の目を向けていた。
「果たして。そうなのか」
「といいますと」
「彼等はわかっていたのですか」
「当然わかっていない者もいた」
これは何時の時代でもいる。物事の道理や事情がわからない人間は何時でも何処でもいるものである。意図的にわかろうとしない者も含めて。
「しかしだ。わかっている者もいたのだ」
「我等の行動がですか」
「果たして我等は究極の意味で文明か」
モンサルヴァートの言葉は哲学的色彩を強くさせていた。

## 第三十二部第二章　誘いその七

「サハラ侵攻は。文明か」
「野蛮だと仰るのですか、あれが」
「侵攻し元いた者達を追い出し自分達が居座るのが野蛮と言うのならな」
「ですが長官」
茶色の髪の士官が反論する。
「彼等は確かにそうしたことをする必要がありません」
「そうだ」
彼はモンサルヴァートが次に何を言うのか読んでこう言ったのである。そしてそれは当たっていてモンサルヴァートもそれに頷いてみせる。
「彼等には無限の開拓地があります。攻めずとも資源も土地も何もかもが手に入ります」
「それにひきかえ我々は」
連合とエウロパの違いがあまりにも極端に出る部分だった。
「この狭いエウロパがあるだけです」
「確かに豊かです。しかし」
「限られています」
無限と有限、この違いだった。
「我等は精々一千億しか暮らせません」
「これ以上の人口増加は」
「しかしだ」
またモンサルヴァートは言うのだった。
「侵攻は侵攻だな」
「確かに」
「それは」
「それを野蛮と言うのならば我等は野蛮になるのだ」

「左様ですか」
「所詮野蛮という言葉は主観でしかないのかも知れない」
また哲学的な言葉になっていた。
「この場合は我々のな」
「主観でしかないと」
「結局は」
「そうだ。そして」
モンサルヴァートはさらに言葉を続ける。
「それによりだ」
「それにより」
「連合を見誤ってはならない」
「連合を」
「彼等は強い」
今度の評価は一言だった。
「確かに強い」
「勢力としてですか」
「我等の四十倍だ」
単純に人口だけを見てもこれだけの差があるのだ。
「国力も資源も経済力も」
「確かに途方もない違いです」
「それはその通りです」
彼等とて軍人、しかも士官だ。この程度のことは把握しておかなければどうしようもない。把握し認識するだけでもその精神的負担はかなりのものだがそれでもそれを行うだけの資質がなければならない。士官というものはそれだけのことが要求されるのだ。
「彼等は。あまりにも強大です」
「その差は歴然としています」
「そこで見誤るなら」
モンサルヴァートはまた言った。
「すぐに我等の次の苦難に結び付くことになる」

「次の苦難の」
「我がエウロパの最大の敵は連合だ」
戦争の後でもこれは不変だ。
「何があろうともそれは変わらない」
「ええ、それは」
「サハラよりもやはりまずは」
「敵の分析は冷静にだ」
戦略の基礎の一つだ。
「それを考えればな」
「偏見は危険ですか」
「そうだ。ましてや」
言葉を付け加える。
「我々は敗れている」
「むっ」
皆その言葉に反応した。
「敗れている。それは確かだ」
「確かにそれは」
「否定しません」
誰もが俯いてしまった。しかしだからといって事実は変わらない。
「敗れた相手を侮るとだ」
モンサルヴァートはその彼等に対して言葉を続けた。

## 第三十二部第二章　誘いその八

「次の苦難に陥るのは道理だ。だからこそ」
「ここは冷静に見ることですか」
「彼等を」
「そうだ。特に」
「特に」
「彼だ」
話が人に関するものにまたなった。
「彼だ。八条義統だ」
「あの国防長官ですか」
「私はかつて彼と会った」
モントローズ要塞譲渡の時である。
「その時に感じたことだが」
「ええ」
「悪い人物ではない」
「悪人ではないですか」
「そして」
さらに述べていく。
「敵としてはかなりの強敵だ」
「つまり有能ということですね」
「そう、その通りだ」
頬髯のある少し年輩の士官の言葉に頷いたのだった。
「有能だ、それもかなりな」
「こういう言葉がありますね」
赤髪の士官がここで言った。
「有能な敵は無能な味方よりも厄介な存在だと」
「その通りだ」
モンサルヴァートもそれと同じ考えであった。

「もっとも我がエウロパ軍に無能な者なぞいはしないがな」
「無論です」
「エウロパの者にはそうした輩なぞ」
これは教育の結果であると言えた。エウロパ軍の指揮官達の大半が貴族出身者であるが彼等は常に厳格な教育を受けている。その教育により彼等は有能な指揮官となっているのだ。伊達に貴族という特権階級にあるわけではない、少なくともエウロパではそうだ。
「一人たりともいはしません」
「決して」
「無能な味方はいなくすることができる」
これは教育によってだ。
「しかし有能な敵はそれこそ」
「暗殺でもしなければ意味がありませんか」
「そうだ、そしてそれは」
モンサルヴァートは暗殺というものに対して好意的ではない。それは今の彼の表情からも窺い知ることができた。その如何にも不機嫌そうな顔からだ。
「軍の正規の仕事ではない」
「そう、その通りです」
「あれは諜報部の仕事です」
これが彼等の意見だった。軍の所謂正統派のだ。
「諜報部でも元々暗殺は好まれていませんし」
「それをするのは」
ここで軍部では好まれていない者の名前が出て来た。
「カミュ外相位でしょう、今は」
「あの御仁は目的の為には手段を選びませんからな」
「そうだな。外相はよくこう言っておられる」
モンサルヴァートはここでは感情を顔から消している。
「尊敬する人物はタレーラン及びフーシェだとな」
「実にあの御仁に相応しいですな」

「全くです」
士官達はそれを聞いてそれぞれの口で述べた。
「あのある意味非常にフランス人らしい」
「あの二人とは」
フランス革命は多くの革命家と一人の独裁者、一人の英雄、そして二人の怪物を生み出したと言われている。独裁者とはロベスピエールのことだ。彼からナチスやソ連が生まれたと言ってもいい。ジャコバン派はまさにフランス革命の鬼子であり全体主義といってもいい存在だった。以後多くの独裁者達が生まれ出るがそのはじまりこそがロベスピエールだったのだ。そうした意味でロベスピエールは恐ろしい存在であった。
英雄はナポレオンだ。ナポレオンはこの時代においてもフランス最大の英雄である。コルシカ生まれの小柄な男は確かに英雄であった。
そして二人の怪物だ。彼等こそが問題なのだ。タレーランとフーシェ、ロベスピエールの粛清からも逃れナポレオンすらも手玉に取った二人だ。カミュが尊敬しているのは彼等というのだ。
「あの御仁は確かに二人に似ています」
「強いて言うならばあれですな」
またそれぞれ話すのだった。
「二人を足して二で割ったようなものです」
「二をかけたものでは？あの性格は」
「しかも野心家です」
カミュは野心家としても知られている男なのだ。

## 第三十二部第二章　誘いその九

「あの二人も極めて危険でしたが」
「それ以上に」
「外相は実際に多くの政敵を葬ってきているな」
「はい」
確証はないがよく知られている話である。
「何人いるかわかりませんが」
「確かに」
「暗殺はしてはいないようだが必要ならばな」
「するでしょうな」
「間違いなく」
「そうだ。だからこそだ」
モンサルヴァートはまた言う。
「暗殺をしてもおかしくはない」
「ですが諜報部は連合の要人暗殺は計画しませんでしたね」
「そういえばそうでしたな」
「千年の間そうした工作は少なかったです」
これについても言われた。実際にエウロパはテロの煽動等の工作を好み連合を混乱させてきたがそれでも暗殺といったものは少なかったのだ。
「諜報部としても好きではなかったのですか」
「どうやら」
「失脚を工作したことはあったがな」
それはよくあることだった。
「しかし暗殺自体はなかった」
「ええ、そうです」
「それは」
「あの長官を失脚させることはできなかったか」

「はい、どうやら」
「スキャンダルの類は見当たらなかったようです」
「そうだろうな」
モンサルヴァートはこのことも納得した顔で聞いていた。
「清潔でもあることが感じられたからな」
「エウロパと比べて連合の政治家は汚職にはルーズと聞いていますが」
「それもかなり」
これは事実だ。大衆民主主義の問題点として資金を多量に集めなければならない。それを選挙等の政治活動に多くの資金が必要だからだ。またスタッフや支援者への報酬も必要になる。だからこそかなりの金が必要なのだ。階級社会ではそれ程にはなりはしない。
「しかしあの御仁は違いますか」
「八条長官は」
「厄介なことではあるがな」
モンサルヴァートは少し政治的な話になっていた。
「あれだけ有能で隙のない人物が相手となるとな」
「味方であればどれだけよかったことか」
「この言葉を言うことになるとは思いませんでした」
「全くです」
「あれだけの人物はおそらくエウロパにも」
「そうはいない」
モンサルヴァートはまた表情を消していた。今度は言葉にもだった。
「いや、いるか」
「不安ですな」
「そう言われると」
他の士官達もこう言わざるを得なかった。
「彼はそれだけの人間だ」
「そうです。確かに」

「だからこそ我等は完敗したのですね」
「彼に勝たなければならない」
モンサルヴァートの目が鋭くなっていた。
「そしてその為にはまず」
「軍備ですか」
「そう、その通りだ」
モンサルヴァートの言葉は現実を選んだものだった。
「今はな。それからだ」
「そうですね。それでは」
「ここにある仕事もまた」
「しかし」
青い目の士官がぼやいた。
「書類が一向に減りません」
「そしてまた」
ファックスが鳴りそこからまた出て来た。
「来ましたよ、またしても」
「書類が」
「今度はどの艦隊からだ？」
「第百三十二艦隊です」
女の士官がモンサルヴァートの問いに答えた。

## 第三十二部第二章　誘いその十

「そこからです」
「第百三十二艦隊か」
モンサルヴァートは艦隊名を聞いて考える顔になった。
「あの艦隊はクロノスの戦いでかなり消耗していたな」
「はい、その五割を失いました」
軍としては想像を絶する損害である。
「そして今はアルテミスに駐留していますが」
「そうだったな」
そのことも言うモンサルヴァートだった。
「今はな」
「今艦隊の多くはオリンポスとアルテミスにいます」
「その二つの星系しかないからな」
モンサルヴァートの言葉はここでまた苦いものになった。
「残念なことだが」
「はい。修理基地がありません」
これが事情であった。
「この二つの星系以外はどうも」
「ですから」
「本当に他の星系のものも迅速に修復して欲しいものだな」
「全くです」
艦隊としては切実な願いであった。
「無理を承知だが」
「他にもやらなければいけないことが多過ぎますので」
「統帥本部も必死のようですが」
「それもわかっているしな」
それがわからないモンサルヴァートではない。
「だが。それでもな」

「はい、今のままではどうにも」
「苦しい状況です」
「ニーベルングもない」
これがエウロパを戦略的にかなり苦しいものにさせていた。
「あの要塞の基地の充実は傑出していた」
「全くです」
「あそこは確かに」
「今それを言っても仕方ないがな」
それはよくわかっていることだった。エウロパにいれば誰もが。
「あの要塞は今は連合のものだ」
「アタチュルク要塞群でした、確か」
「忌まわしい名です」
黒髪の士官の顔がこれまで以上に忌々しげなものになった。
「全く以って」
「そうだったな、卿はギリシア人だったな」
「ギリシア人から見れば」
「その通りだ」
その忌々しげな顔で同僚達にも述べるのだった。
「ケマル＝アタチュルク。トルコの国父だった」
「トルコから我等の先祖を追い出したな」
「忌まわしい男だ」
第一世界大戦後枢軸側だったトルコに欧州各国が乗り込んだのである。オスマン＝トルコはその命脈を完全に絶たれ瀕死の病人だったトルコは遂にその遺産を分割されようとしていた。しかしここでこのケマル＝アタチュルクが登場し彼等をトルコから追い出したのだ。その中でトルコをとりわけ蝕んでいたのがトルコの宿敵であるギリシアなのだ。ギリシアは十九世紀ニナ独立してから常にトルコと対立してきていたのだ。
「あの名前をつけてくれてしかも」
「ニーベルング要塞どころではなくなったな」

「そうだ、要塞群になった」
複数の惑星規模の要塞を置いたのだ。それは最早エウロパ軍全軍を以ってしても攻略できるかどうかわからないといった程になっていたのだ。
「最早我々のものではないのだ、完全にな」
「我々の最大の盾は今や我々に突き付けられた槍だ」
「そうだな。槍だ」
「連合の言葉では矛か」
矛盾という言葉が彼等の脳裏に浮かんでいた。
「我等の喉元に突き付けられた最悪の矛だ」
「その通りだな」
「その矛は今は動いていない」
モンサルヴァートがここでまた言った。
「基本的に連合という国家は好戦的ではない」
「それが救いです」
「彼等はそれよりも金を好みますからな」
商業主義というわけだ。連合では軍人の地位は決して高いものではなくまた軍事行動を起こすこともまずない。エウロパとの戦争はあくまで例外なのだ。

## 第三十二部第二章　誘いその十一

「こちらから下手なことをしない限りは」
「まずないでしょう」
「元々他の勢力には無関心ですしな」
これは連合の特色でもある。彼等はエウロパに対して激しい敵対心を持ちマウリアとは友好関係にあるが基本的に彼等だけで留まっているのだ。体外的には内向的傾向があるのだ。
「しかしそれでも」
「彼等があそこにいるというだけで」
「不安になるな」
「その通りです」
士官達は一斉にモンサルヴァートの言葉に頷くのだった。
「今はですから」
「艦隊を復旧しておきたいのですが」
「それすらも困難なのが現状です」
「そうだ。今は全てにおいて困難だ」
モンサルヴァートはまた言った。
「確かな軍事力がなければそれで国民は不安になる」
「はい」
敵を前にして剣も鎧もなければどうなるか。それを考えれば当然である。
「だからこそここはな」
「そうです。一刻も早く軍備を」
「それもまた難しいでしょうが」
「万難を排す」
この言葉が出て来た。
「今はそういった状況ですな」
「軍のあらゆる面において」

「しかしです」
士官達の言葉が続けられる。
「口で言うのは容易いですが実際に動くとなると」
「難しいのも事実」
「そうだな。やはり」
「やはり？」
「軍務省及び統帥本部と一度詳しく話し合いたい」
彼が言うのはこのことだった。
「すぐにな」
「すぐにですか」
「今夜だが」
話は実に早かった。
「夕食は軍務相及び統帥本部長と会いたいな」
「御二人とですか」
「そうだ。その調整をしておこう」
ここで壁にかけてある時計を見た。見ればまだ午前である。十時になったばかりだ。オリンポスの時間は地球と同じ二十四時間なのだ。
「今日はな」
「わかりました。それでは」
「それもまた」
これに応えたのは秘書官達だった。彼等も部屋にいてモンサルヴァートの仕事を手伝っていたのである。彼等も仕事に終われているのである。
「ですが長官」
「何だ」
秘書の一人の言葉に応える。
「最近御身体が」
「殆ど寝ておられないのでは？」
「寝ていることは寝ている」

これについてははっきりと述べるモンサルヴァートだった。
「毎日な。時間を見てな」
「そうなのですか」
「一日四時間は寝ている」
そしてこう告げた。
「最低限な」
「四時間ですか」
「それでも寝ないよりはずっといい筈だが」
「確かにそうですが」
「それでも」
「言いたいことはわかっている」
秘書官達に述べ返す。
「それはな」
「その通りです。やはりより多くの睡眠時間が必要です」
「こうした生活を続ければ」
「過労か」
この言葉を出した。
「それだな」
「はい、もうかなりの時間を勤務しておられますし」
「何処かでじっくり休まれないと」
「それもわかっているが」
なおエウロパではこうした勤務時間については連合よりも五月蠅い傾向にある。とりわけ労働者達はそうである。一日八時間で多いとされるのだ。

## 第三十二部第二章　誘いその十二

「それでもな」
「やはり今は無理ですか」
「卿達も同じの筈だ」
モンサルヴァートは彼等に問い返した。
「それはな」
「確かにそれはそうですが」
「嘘をつかないとすれば」
「やはり。眠っていないか」
これは誰もが同じだった。やはり誰もが寝ていないのだ。今のエウロパ軍は。
「将兵達にも休息が必要だがな」
「はい、それは確かですが」
「それでも今は」
「人も足りない」
溜息だった。
「どうにもな」
「その通りです、人も足りません」
「人材もまた減りました」
「これでも予想よりは少なかったのだ」
モンサルヴァートは沈痛な顔で述べた。
「人的な損害がな」
「これで予想通りですか」
「二割に達したかどうかといった程度だ」
こう秘書官と他の士官達に告げた。
「あれだけの損害を被ってな。人的損害は」
「それもまた不幸中の幸いですか」
「これでもまだ」

「そうだ。それでもだ」
彼は言うのだった。
「この有様だ。これでな」
「参ったことですな」
「それは確かに」
「負傷者ですが」
話が負傷者に関することにも及んだ。
「これについてですが」
「そろそろ負傷者は全て復帰できるな」
「はい、間も無くです」
これは断言できた。怪我は治るものだ。完治できない者もいるのは確かだがそれでも回復できる者もいるがそれでもだった。
「これで全員復帰することになります」
「軍務登録者は」
「義手や義眼等も配り終えているな」
「ええ、それもまた」
「そちらにも予算をかなり割きましたので」
「やはり人だ」
彼は言った。
「人が大事だからな。何よりも」
「人ですか」
「戦争は人間が行うものだ」
彼の持論である。
「兵器はどうとでもなる」
「兵器はですか」
「費用さえあればな」
この前提が出される。
「それが可能だ」
「それもまたないのが現実ですが」
「全くです」

黒い目の士官が苦笑いを浮かべて述べた。
「今の我々にはないものばかりですな」
「お金も人材も」
「挙句には時間さえも」
「あるのは仕事だけです」
シニカルな言葉だった。
「仕事だけは幾らでもありますな」
「全くです」
「そうだな。確かに」
彼等は自嘲めかしていたがそれでもだった。モンサルヴァートはその気を紛らわせることができた。心をリラックスさせるのもまた重要なのだ。
「ないものばかりではないか」
「そうですね。あるものはあります」
「何かがあるうちは希望を捨ててはいけないですね」
また明るい話になった。
「では今は頑張って」
「働きましょう」
「その通りだ。それではな」
「はい」
皆モンサルヴァートの言葉に頷く。

## 第三十二部第二章　誘いその十三

「これからも頑張って」
「働きましょう」
「よし、そうだな」
　こうしてモンサルヴァートはこの日もデスクワークに励むのだった。そして夕食はブラウベルグ、ローズマンとの会食になった。宮殿を思わせる壮麗なレストランにおいて三人で食事を採っていた。三人は個室におりそこのテーブルに座して食事を採っているのだった。
「長官」
「何でしょうか」
　ブラウベルグがモンサルヴァートに声をかける。彼もそれに応える。
「ここに我々を呼んだ理由だが」
「任務のことです」
　彼はこう答えた。
「それで僭越ながらここに御呼びしました」
「私もですか」
「その通りです」
　ローズマンに対しても答える。
「本部長もまた」
「そうでしたか。やはり」
「今統帥本部は多忙のようですね」
「ええ、確かに」
　それを隠すことは彼にもできなかった。何故ならそれは軍どころかエウロパ全体がそうだからだ。彼等全員がそうなのだから嘘はつけなかったのだ。
「否定はしません」

「そうですか、やはり」
「ええ。予算もありません」
苦い顔になっていた。
「何もかもがありません」
「ええ。ですが」
しかしここでモンサルヴァートは言うのだった。
「そのうえで御願いしたいことがあるのでしょうか」
「何でしょうか」
「修理基地のことですが」
彼が言うのはそのことだった。ここでもそのことを話すのだった。これは彼が考えた通りの話の展開だった。これを言わずにはいられなかったのだ。
「できればより迅速に修復を御願いできるでしょうか」
「修理基地をですか」
「そうです」
それをまた言う。
「艦艇の修復を早く済ませたいので。宜しいでしょうか」
「それはわかります」
ローズマンはまずはそれに頷いた。
「その通りです。艦艇がなくてはやはり」
「では」
「しかしです」
だがここで彼は言うのだった。
「他の基地の修理も進んでいないのです」
「他の基地もですか」
「軍需関係は徹底的に破壊されています」
ローズマンは今度はこのことを述べるのであった。
「ですから」
「修理基地にまで予算が回らないのですか」
「回してはいます」

言い訳だった。
「ですが。それでも」
「順調ではないですか」
「予算がとにかくありません」
エウロパ軍全体が抱えている問題がここでも出るのだった。
「修理基地の修復にしろ」
「やはりそうですか」
「そしてだ」
ブラウベルグが二人の話に入って来た。三人はここでは食事を食べていない。まだ一品も届いてはいない。それを置いて今は軍務の話に専念しているのだ。
「予算の獲得も満足にはいっていない」
「それもですか」
「そうだ、それもだ」
二人に対して告げる。
「それが好転する見込みもない」
「それもですか」
「民需優先だ」
この現実が述べられるのだった。

## 第三十二部第二章　誘いその十四

「今はな」
「まずはそちらですか」
「そうだ。これは中央政府の方針だ」
シュバルツブルグは言うのだった。
「総統閣下の御決断だ。それに」
「それに？」
「議会もそれを承認した」
「そうですか」
「改革派としてはそういう方針なのだ」
またこのことを告げるシュバルツブルグだった。
「私としては。少しな」
「少し？」
「軍を預かる者としてはやはり軍事に政治を任せておきたい」
彼はここでは軍人として、しかもそのトップとしての考えを述べた。
「しかしだ。これを言えば卿等は気を悪くするだろうが」
「いえ、構いません」
「私もです」
ローズマンとモンサルヴァートはここで言うのだった。
「是非お話下さい」
「御願いします」
「そうか。それではだ」
二人の言葉を受けて彼は口を開く。今度は彼自身の言葉だった。
「私としてはだ。民需が大事だと思う」
「確かに」
「我々軍人の役目は」
これについては二人も言う。

「市民を守る為にあります」
「ですから民需もまた」
「その通りだ。それがわからないならば軍人である資格がない」
ブラウベルグもこうまで言うのだった。
「複雑だ。どちらかといえばやはり民需だからな」
「そうですね。それは」
「市民が餓えては何にもなりませんし」
「ただでさえ今民生はかなり落ち込んでいる」
彼は言った。
「ここでこれ以上民生を落とせば本当に食料さえ欠乏するようになる」
「食料の欠乏」
「それだけはなりませんね」
二人も伊達にエウロパ元帥であるだけではない。政治も知らなくてはいけない。政治家としてこのことをはっきりわかって話を聞いて加わっているのだ。
「そうだ。日用品もだ」
「それもですか」
「話は聞いているな」
「はい」
二人は同時にシュバルツブルグの今の言葉に頷いた。
「何とか数だけはありますが」
「それでもですね」
「そうだ。数だけはな」」
シュバルツブルグの言葉は苦い。
「何とかあるといった状況だ」
「そうですね。本当に」
「古い質の悪いものばかりになっています」
「だからだ。これ以上はな」
シュバルツブルグはまた言う。

「民需を落とすわけにはいかない。だから」
「我々としては現状で何とかするしかないですか」
「そうだ。済まないが財政ではな」
「わかりました。それでは」
「従います」
二人は己の気持ちは押し殺さざるを得なかった。
「工夫をするしかないですね、今は」
「残念ですが」
「卿等だけではなくだ」
彼等はまた言う。
「軍全体がな」
「激務が続いています」
モンサルヴァートはこう述べた。
「軍務省にしろ統帥本部にしろそれは同じですね」
「その通りです」
ローズマンがモンサルヴァートのその言葉に頷いた。
「今は。皆倒れる寸前です」
「こちらもだ」
シュバルツブルグも言う。やはり軍全体がそうであった。
「せめて人が欲しいのですが」
「誰かいるか」
「人ですね」
人という言葉を聞いてモンサルヴァートは少し考え込んだ。そのうえでまた述べた。

## 第三十二部第二章　誘いその十五

「まずは負傷者が復帰しますので彼等に早速軍務に戻って頂き」
「それか」
「傷が癒えてすぐで申し訳ないですが」
「だが。そうも言ってはいられない状況だな」
シュバルツブルグは難しい顔で述べた。
「今はな」
「はい、その通りです」
「後はだ」
シュバルツブルグはさらに言う。
「デスクワーク限定だが復員してもらうか」
「復員！？」
「そうだ。定年で退役している軍人達だが」
「彼等ですか」
「彼等にも軍役に戻ってもらいたい」
こう言うのであった。
「それで数は調達できるか」
「ですが閣下」
ローズマンはシュバルツブルグの今の言葉には難しい顔を見せた。
「御高齢の方々にはそう負担は」
「わかっている」
それは彼も当然ながら承知していた。
「勤務時間は限られる」
「では勤務時間を区切ってですか」
「そうだ。そうしよう」
「わかりました。それではそのように」
「貴族階級ならばだ」
ここで貴族という階級についても言及される。

「生活に困っている者は少ないな」
「といいますと」
「給与も削減するべきか」
このことも考えるシュバルツブルグであった。
「それで予算を調達できるか」
「予算をですか」
「そしてそれをだ」
さらに言うのだった。
「予備役として召集する将兵達の給与に当てたい」
「では予備役もまた」
「そうだ、召集する」
二人に対して告げた。
「ここはな。どう思うか」
「戦争は終わりました」
彼の提案に最初に応えたのはモンサルヴァートであった。
「本来召集は戦時若しくは戦争の危機がある時だけですが」
「しかしだ。今はエウロパ軍の危機だ」
シュバルツブルグはこのことをよく認識していた。
「だからこそ。今は」
「召集すべきであると」
「整備及びデスクワークに主に回ってもらう」
回されるのはそちらというのだ。
「ここはな。それでどうか」
「そうですね」
「それは」
二人はそれを聞いて暫し考えたがすぐに答えたのだった。
「数の調達のうえではいいかと」
「少なくとも今軍務に就いている将兵の負担はかなり減ります」
「そうだ。ではいいな」
「はい、私としましては」

「私もです」
二人はそれぞれ賛成票を投じた。
「それで御願いします」
「是非」
「わかった。それではだ」
シュバルツブルグも二人の言葉を聞いたうえで納得した顔になるのだった。
「このことを閣議で出してみる」
「はい、御願いします」
「是非共」
このことが決定された。しかし話はこれで終わりではなかった。

## 第三十二部第二章　誘いその十六

「そしてだ」
「ええ」
二人はまたシュバルツブルグの言葉に応えた。やはり食事はまだ運ばれてはいない。あえてそれを待たせて本格的に話をしているのだ。
「非武装地帯のことだが」
「あの一帯ですか」
「どうやら連合軍はあの地帯に工作を仕掛けているらしい」
「工作を！？」
「まだ未確認の情報だが」
シュバルツブルグはこう前置きしたうえで二人に対して話す。
「極めて小型の探査衛星を送り込んでいるらしい」
「小型のですか」
「そうだ、軍事用もな」
こうも話すのだった。
「軍事用の極めて小型のな。衛星を送り込んでいるのだ」
「衛星をですか」
「どうやら有事に備えているらしい」
「有事に」
「確かに非武装地帯はある」
このことが話される。
「しかしだ。いざとなればその辺りに兵を送り込むことができるな」
「はい、その通りです」
基幹戦力である宇宙艦隊の司令官であるモンサルヴァートが彼に答えた。
「条約は条約ですが」
「破ろうと思えば破れる」

「その通りです」
「我々にそんなつもりはないがな」
このことは断言するシュバルツブルグだった。これをしないのもまたエウロパ貴族の誇りだった。彼等はその誇りがあるからこそ貴族だと自負しているのだ。
「条約を破るなどとはな」
「それをする位なら潔く自決します」
今度はローズマンが言った。今度は断言だった。
「貴族として」
「その通りだ。我々は彼等とは違う」
シュバルツブルグは断言した。モンサルヴァートもローズマンも当然同じ意見だった。そしてこれはエウロパ貴族全体に言えることであった。
「何があろうともな」
「その通りです。何があろうとも」
また言うモンサルヴァートであった。
「それはありません」
「その通りだ。それ位ならだ」
ここでシュバルツブルグの目が光った。そのうえでまた話すのだった。
「相手にその条約を破らせる」
「はい、その通りです」
「そうします」
やはり答える二人だった。エウロパは確かに条約を破ることは決してない。しかしそれは自分達がということであり相手が破る分には何の問題も無い。強いて言うのなら相手に破らせることはできる、こういうことだった。これは政治として普通にあることであり何の問題もない。
「ですから決して動かすことはないのですが」
「それでもそうした工作を行っていますか」

「ニーベルングを奪い非武装地帯まで設けさせておきながら」
「またですか」
口々に言う二人だった。そこには不快なものが確かにあった。
「連合もまた臆病な」
「慎重と言えばそうなるでしょうが」
ローズマンとモンサルヴァートはまたそれぞれ言った。
「しかし。工作は放置できません」
「それへの対策も行うべきですね」
「その通りだ」
シュバルツブルグが彼等に告げた。
「しかし。あの地帯に軍を送ることはできない」
「はい、そうです」
モンサルヴァートの答えはこれだった。
「ですから。対策といっても」
「うむ」
「軍を使うことはできません。決して」
「その通りだ。だから今回はだ」
「はい」
「総統にお伝えすることになる」
彼等にとっては忌々しいことだった。
「対策をな。宇宙開拓省の管轄になるだろう」
「衛星としてですね」
「その通りだ」
こう述べるシュバルツブルグだった。

## 第三十二部第二章　誘いその十七

「今はな。条約がある限りな」
「条約を破ればという仮定ですが」
今度話したのはローズマンだった。
「若し非武装地帯に軍を送り込みます」
「そうすればどうなるかか」
「はい。その場合ですが」
ローズマンの言葉は続く。
「不利になるのは我々です」
「残念なことにな」
これはシュバルツブルグにもわかっていることだった。この場合条約を破ればエウロパはどうなるのか、それは火を見るよりも明らかだった。
「連合は一気に軍をニーベルングからエウロパ全土に向けてきます」
「その通りだ」
これは既に様々なシュミレーションの結果わかっていることだった。だからこそ非武装地帯への軍の侵入は彼等としてもできないことなのだ。
「何があってもな」
「それは彼等もわかっている筈ですがね」
「それでもですか」
「それだけ慎重なのだ」
シュバルツブルグは彼等を慎重と評した。
「彼等はな」
「そうなりますか」
「そうだ。だからこそ手強い」
彼は連合軍に対してさらに言う。
「中央軍を設立したのは彼等にとって大きなことだった」

「それまでは確かに軍事力も大きかったです」
ローズマンが述べた。
「ですがそれは統一された戦力ではありませんでした」
「その通りだ。だから怖くはなかった」
シュバルツブルグもこのことを言う。
「全くな。しかし今は」
「はい」
「その戦力が統一された。各国の軍から中央政府の軍にな」
「おそらく個々の将兵の質は我々には及びません」
モンサルヴァートは連合軍をこう分析していた。そしてそれはその通りだった。連合軍の練度は他の勢力と比べると大したものではない。決して。
「ですがあれだけの戦力が統一されていて」
「はい、それです」
「そしてあの装備です」
連合軍といえばやはりこれであった。
「武装だけでなく電子や通信も我が軍を遥かに凌駕しています」
「あれが大きかったですな」
ローズマンも連合軍とは何度も戦っている。だから彼等のことはよくわかっていたのだ。
「補給もまた見事なものです」
「システムも拡充したものでした」
モンサルヴァートはこのことも認識していた。連合軍は装備と補給、そしてシステムで戦う軍なのだ。二十世紀後半に確立された近代化軍を極限まで突き詰めた軍なのだ。
「これは我々も見習うべきだと考えます」
「システムの拡充か」
「武装は適性があります」
モンサルヴァートはこれについては及び腰であった。
「我が軍の戦略思想にああした重装備なものはどうかと思います」

「そうですね。それより機動力です」
ローズマンも言う。
「我が軍が重視すべきは」
「そうだ。しかし身に着けるべき部分は身に着けねばな」
「そう考えます」
ローズマンはシュバルツブルグに対して述べた。
「私も」
「装備はあくまで機動力重視だ」
シュバルツブルグは断言した。連合軍のそれが重装歩兵ならばエウロパ軍は軽装騎兵である。これは戦略及び戦術思想の根本的な違いが影響している。
「それを踏まえてだな」
「通信等は技術的な限界がありますが」
「それでもだな」
「少しでも充実させていきましょう」
三人で言い合う。
「是非共」
「よし、ではそうしよう」
「わかりました」
「それではそのように」
「まずはシステムのさらなる拡充だ」
結論が出された。
「これについては委員会を作り長期的に考える必要があるな」
「そうですね」
まずモンサルヴァートがその結論に頷いた。

## 第三十二部第二章　誘いその十八

「これは短期でやれば失敗するものです」
「システムは一朝一夕ではなりません」
そしてローズも言う。
「だからこそですね」
「そうだ、だからこそな」
「そのうえでですね」
ローズはさらに言ってきた。
「それと並行して今の復興を」
「その通りだ。人がいないのが難点だな」
「それを考えたならばです」
モンサルヴァートはここでまた己の考えを述べた。
「システムについてはまずは最低限のチームを編成し」
「委員会だけは作っておくのだな」
「とりあえずは、です」
また言うのだった。
「それからです。やはり復興を優先させましょう」
「そうあるべきか」
「時間はありますがそれでも順位を考えればそうかと」
これがモンサルヴァートの考えだった。
「今は。やはり」
「ふむ。そうだな」
シュバルツブルグはモンサルヴァートに言われ己の中の優先順位を変えたのだった。
「ここはな。やはり」
「はい、そうあるべきです」
「わかった」
あらためてモンサルヴァートの言葉に頷いた。

「ではそうしよう。しかしシステムはだ」
「とりあえずははじめるだけでいいかと」
こう言うのだった。
「まずは。それこそが」
「大事なのだな」
「何事もはじまりこそが最も困難です」
モンサルヴァートの目の光が強いものになった。その青い瞳から炎が発せられているかのようであった。それはまさに青い炎であった。
「だからこそ。まずははじまりで」
「わかった。それではな」
「次に少しずつでも続けていきましょう」
こうも言った。
「一歩ずつでも。如何でしょうか」
「中断はせずにか」
「その通りです。僅かでも続けていくこと」
このことをまた言うモンサルヴァートであった。
「それこそが肝心であると愚考します」
「いや、愚考ではない」
シュバルツブルグは今のモンサルヴァートの言葉を彼の謙遜通りには受け取らなかった。はっきりと肯定さえしているものであった。
「これは。賢明だ」
「有り難き御言葉」
「しかし。問題は人ですね」
ローズは現実を見て語っていた。
「人はどうするか。軍部はもう人を回せませんし」
「そうだな。それだな」
シュバルツブルグもこれには頭を悩ませるところだった。
「何分今は。その人材がな」
「その通りです。どうすべきでしょうか」

ローズはまた言う。しかしここで。モンサルヴァートがまた言うのだった。
「それでしたらですね」
「長官、次は一体」
「どういった御考えでしょうか」
二人のエウロパ元帥の言葉が重なった。そしてそのうえでもう一人のエウロパ元帥であるモンサルヴァートに問うのであった。三人のエウロパ軍最高幹部達がであった。
「人材はこの場合はですね」
「この場合は」
「軍事学者も入れましょう」
「学者もですか」
「はい、そうです」
ローズの言葉に頷くのだった。
「ここは。それで如何でしょうか」
「ふむ、軍事学者をですか」
「彼等の意見もまた非常に優れたものがあります」
この辺りは人によるのもまた事実だった。学者といえど多くの者がいる。中には人柄も能力も疑わしい者がいる。そしてその逆もまたいるのである。
「ですから」
「ふむ。そうだな」
シュバルツブルグは彼の言葉を聞いてまた思索に入った。

## 第三十二部第二章　誘いその十九

「それもいいな。検討しておくか」
「この場合は軍務省の直接の管轄になりますね」
「その通りだ」
軍全体に関することだからだ。だからこれは当然だった。
「では。こちらで考えさせてもらおう」
「はい、御願いします」
「これで話は終わりか」
全て整ったと見てシュバルツブルグは他の二人に対して問うた。
「今日は。それではだ」
「はい、それでは」
「遅れましたが」
「夕食にするとしよう」
既に時間はかなり遅れていた。しかしそれでも摂るものは摂るのだった。
「それではな。早速」
「ええ、それでは」
「ここのメニューは確か」
「オマール海老だったな」
シュバルツブルグは言った。
「ここのシェフの得意料理はな」
「オマール海老ですか。それはまた」
「キャビアやフォアグラも絶品だ」
この時代においても上流階級のものとされている。ただし連合では得意の大量消費社会における需要に応じた大規模な養殖によりあまり高級とは言えないものならばそのキャビアやフォアグラにしろ普通に売られている。当然もう一つの珍味トリュフもだ。しかしエウロパ人達は軍の缶詰に普通にあったそれ等を到底認められるもの

ではないと言い捨てた。この辺りもまた文化の相違が出ていると言える。
「それがメインだが」
「ではここはですね」
モンサルヴァートが提案した。
「シェフに任せるとしますか」
「シェフにか」
「ワインはソムリエにです」
これについても任せるというのだ。
「任せましょう。必ずやいいものを選んでくれるでしょう」
「彼等を信じるのですね」
「そうです」
ローズに対して答える。
「ここは。是非共」
「そうだな」
それにシュバルツブルグも賛成してきた。
「ここはその方がいいか」
「有り難うございます。それでは」
「とにかくだ」
シュバルツブルグは笑みを浮かべていた。
「ここの海老はいい」
「それは実に楽しみです」
「フォアグラも絶品だ」
エウロパ貴族ならではの会話であった。なおこうした会話こそが連合の者達にとってはエウロパ貴族の腐敗に他ならないのである。
「素材もよければそれを扱うシェフの腕もまた」
「いいものなのですね」
「味はイタリア風だな」
「それは楽しみです」
今の言葉はモンサルヴァートのものであった。

「イタリアの味は。私の好みです」
「そうか。それは私もだ」
シュバルツブルグもであった。モンサルヴァートに応えて笑っている。
「イタリアの味はな。親しみ易い」
「はい。全くです」
「おやおや、これはこれは」
そんな二人を見てローズがシニカルを装って笑いを浮かべてみせてきた。
「ドイツ人の御二人が手を組まれるとは」
「本部長、何か」
モンサルヴァートもあえて笑みを浮かべて彼に対してみせてきた。
「いえ。ドイツでは今でもイタリアが人気なのだと思いましてね」
「イタリアを好きなのは否定しません」
それは否定しないモンサルヴァートだった。
「それについては」
「そうなのですか」
「それでも。イタリアの味がいいのは事実だと思いますが」
「確かに」
これについてはローズも同じだった。
「それはその通りですね」
「では本部長もまた」
「いえ、私は」
しかし彼はここではそれを断るのだった。

## 第三十二部第二章　誘いその二十

「今はいいです」
「宜しいのですか」
「どうも故郷の味が恋しくなりまして」
「イギリスのですか」
「そうです。イギリスの味です」
これをそのまま言うローズだった。
「今はどうにも」
「左様ですか」
「はい、そしてです」
さらに言うローズだった。
「ワインもまた」
「イギリスのワインですか」
「はい」
この時代は多くの星系がある為イギリスもワインを産出する。だがおおむねそのワインはあまり有名ではない。エウロパにおいてもだ。
「バーミンガムのものを」
「バーミンガムのものをですか」
「有名ではないかも知れませんがそれでも味はかなりのものです」
こう弁明めいたことを口にしてきた。
「ロマネ＝コンティにもひけは取りません」
「ロマネ＝コンティにも。それはまた」
「ですが真実です」
あくまでこう言うローズだった。
「味は。かなりのものです」
「そうなのですか」
「一度召し上がられてみますか」

「そうですね」
モンサルヴァートは少し考えてから彼に答えた。
「ではワインはそれで」
「有り難うございます。では折衷ではないですが」
「料理はイタリア風ですね」
「それで行きましょう。それでは」
「はい」
「閣下もそれで宜しいですか」
二人で話を決めたうえで最後の一人シュバルツブルグに顔を向けて問うた。
「如何でしょうか」
「そうだな」
シュバルツブルグは少し考えたうえで述べてきた。
「私もそれでいい」
「そうですか。それでは」
「その様に」
こうして話すのだった。三人はこうしてワインはイギリス、料理はイタリアで調整した。こうして話と食事を終えた。これで話を終えたモンサルヴァートはまた仕事に戻った。それから数日間仕事をして一段落つくと珍しく家に帰ることができた。すると妻が彼を迎えた。あのヴァンフリート家の娘であるエルザだ。
「おかえりなさいませ」
「うむ」
「お客様が来ていますが」
「お客様だと」
「はい」
二人は広い宮殿を思わせる屋敷の中を歩きながら話をしている。周囲には多くの執事や使用人達が控えている。彼等の多くはモンサルヴァート家に代々仕えている者達である。中にはアンフリート家から来ている者達もいる。彼等はエルザの従者達である。

「来られていますが」
「お客様か」
「如何為されますか」
二人は白亜の屋敷の中を進んでいる。屋敷の中は質素だが壮麗でもある。十九世紀のドイツ貴族のそれを思わせる内装だ。やはり質素だがそこには確かな贅沢というものがある、それを感じさせる微かな香りを漂わせた、そうした造りの屋敷の中であった。
「会われますか？」
「そうだな」
彼はここで少し考える顔になった。まだ軍服のままである。
「何処のどなたなのだ」
「保守派の方です」
「保守派！？」
ここで彼は目を動かした。妻のエルザは彼のすぐ後ろに控えるようにして続いている。その仕草がやはり貴族的な儀礼に満ちたものであった。
「保守派か」
「そうです、保守派です」
こうモンサルヴァートに答える。

## 第三十二部第二章　誘いその二十一

「保守派の方ですが」
「中央政府のだな」
「はい、議会のです」
また答えるエルザだった。
「議会の方ですが」
「そうか、やはりな」
「あなたに御会いになりたいそうですが」
「私にか」
それを聞いて再び考える顔になるモンサルヴァートだった。
「私に。そうか」
「そうか？」
「いや、いい」
しかしここではこれ以上は話さなかった。
「とにかくだ。来られているのだな」
「御会いになられますか？」
「お客人に失礼があってはならない」
こう答えるモンサルヴァートだった。
「だからだ。会おう」
「御会いになられるのですね」
「ただ。少し時間が欲しい」
「左様ですか」
「お客人は今どうしておられるか」
「待合の間で静かに待っておられます」
このこともモンサルヴァートに教える。
「夕食も済ませられくつろいでおられます」
「そうか。どちらにしろ待ってもらうわけにはいかない」
これもまた失礼があってはならないということだった。こうした

気配りは貴族の社会においては至極当然のことである。モンサルヴァートはそれ以前に気配りを忘れない男であるが。
「ただ、着替えるまではな」
「わかりました。それでは」
「うん」
まずは自室に入った。そしてすぐに私服に着替えた。絹の服である。だがそのデザインは決して華美なものではなくドイツ人らしい落ち着いたものであった。
その服で待合の間に入る。そして客人の前に姿を現わしたのだった。
「お待たせしました」
「これは伯爵」
モンサルヴァートをその爵位で呼んだ。
「いえ、もう侯爵だったでしょうか」
「まだ正式には授位されてはいません」
立って言ってきた客人にこう返す。見ればその客人も絹であるが質素なデザインの貴族の服を着ている。その服と金髪碧眼から見てドイツ人であることがわかる。その顔立ちも見ればドイツ人のもので彫が深く鼻が高い。そして哲学者を思わせる思慮深い印象も与えている。
「ですからまだ」
「伯爵で宜しいのですね」
「はい、それで御願いします」
こう答えるモンサルヴァートであった。
「それでですね」
「ええ」
「確か貴方は」
「はい、エルラッハです」
己の名を名乗ってきた。
「オットー＝フォン＝エルラッハです」

「エルラッハさんですか。確か」
ここでモンサルヴァートは己の記憶の中からその名を探すのだった。すぐに答えが出た。
「中央議会下院院内総務ですね」
「はい、その通りです」
にこりと笑ってモンサルヴァートに答えてみせた。
「御存知頂き何よりです」
「お久し振りです」
次にこう返したモンサルヴァートであった。
「何時ぞやの宴の場以来ですね」
「そうでしたね。あの時はお互い楽しませて頂きましたね」
「そうでしたね。あれからもう」
「三年です」
こうモンサルヴァートに答えてきた。実は前に会ったことのある二人であった。
「長いものですね」
「そうですか。それだけ経っていますか」
「はい」
静かに微笑んで答えるエルラッハであった。
「もうそれだけです」
「そうでしたか。三年ですか」
「長いものです。それでですね」
「ええ」
「今回はお話があって参りました」
こう話すエルラッハであった。
「お時間はおありですね」
「ええ、それは」
あると答えるモンサルヴァートであった。

## 第三十二部第二章　誘いその二十二

「お気遣いなく」
「それは有り難い。それではですね」
「はい、何でしょうか」
「座りましょう」
まずはこのことを言うエルラッハであった。
「落ち着いて。宜しいでしょうか」
「そうですね」
気付けば二人は立ったままだ。モンサルヴァートの妻であるエルザもまた立ったままである。モンサルヴァートはあらためてこのことに気付いた。
「それでは」
「はい。座ってじっくりと」
「ああ、エルザ」
モンサルヴァートはここでエルザに顔を向けるのだった。
「御前はもう。下がって」
「わかりました」
「いえ」
しかしここでエルラッハはエルザを呼び止めたのであった。
「宜しければ奥様もこちらに残って頂きたいのですが」
「宜しいのですか」
「はい、今度の話は御二人にとってかなり縁のあるお話ですので」
「私にもですか」
「そうです」
エルザに顔を向けて頷くエルラッハであった。
「是非共。それで宜しいですね」
「わかりました。それでは私は」
「伯爵」

エルザに話したうえでモンサルヴァートに顔を戻してきた。
「それで宜しいでしょうか」
「はい、それでは二人でお話をお聞かせ下さい」
「わかりました。それではですね」
「御願いします、お話下さい」
「ええ」
こうして三人は席に着いて話し合った。モンサルヴァートとエルザは並んで座りその向かい側にエルラッハがいる。三人でコーヒーを飲みながら話をはじめるのだった。コーヒーはモンサルヴァート家のメイドが運んできたものである。見ればウィンナーコーヒーであった。
「やはりコーヒーはこれに限りますな」
「ええ、私はいつもこれを飲んでいます」
モンサルヴァートは笑顔でエルラッハに答えた。エルラッハはまずはクリームを少し銀のスプーンに取って口の中に入れた。クリームも質のいいものである。
「家でも他の場所でも」
「コーヒー派というわけですね」
「そうなります」
そのことを認めるモンサルヴァートであった。
「紅茶も嫌いではありませんがやはりこれです」
「ドイツ人らしくですね」
「そうなりますね。コーヒーはやはりウィンナーです」
「そうです、ドイツです」
ここでエルラッハは自分達の祖国の名を出した。
「我々はドイツ人です。そうですね」
「はい、それはその通りですが」
しかしモンサルヴァートはその祖国の名を聞いて目の奥に警戒するものを宿らせた。そこにこそ彼の今回の来訪の意味があると呼んでいたからだ。

「しかし」
「しかし？」
「何故ここで我が国の名を出されたのでしょうか」
「祖国を愛するが故に」
「ドイツをですか」
「その通りです」
思わせ振りな笑みをここで見せてきたエルラッハであった。
「実はですね。この度の選挙ですが」
「総統選挙ですか」
「まずはイギリスのギルフォード侯爵です」
「彼ですか」
「そうです。まず彼です」
最初に名前が出たのはギルフォードであった。既に彼のことはヨーロッパにおいて広く知られるようになっていた。それだけ選挙活動を盛んにしているということだ。
「イギリスからは彼が出ています」
「そうですか。イギリスからは」
「そしてです」
また語るエルラッハだった。
「それだけではありません」
「といいますと」
「次にフランスですが」
「フランス」
フランスと聞いてモンサルヴァートの目が微かに歪んだ。それは彼が今回の選挙においては今まで聞いたことのない国であったからだ。

## 第三十二部第二章　誘いその二十三

「フランスからも出ます」
「一体誰が」
「伯爵もよく御存知の方です」
「私も。というと」
　ここでモンサルヴァートはすぐに察した。彼もそれだけの直感はあるのだ。勘がよくなければこれまで戦場において不敗でいられはしない。そういうことだ。
「まさか。あの御仁ですか」
「そうです、カミュ卿です」
　やはりこの名前が出て来た。
「彼です。彼が出ます」
「そうでしたか。彼がでしたか」
「新しく手に入れた情報です」
　このこともモンサルヴァートに話すのだった。
「彼は決意したそうです。そしてフランスの貴族社会がまず全面的に支援するそうです」
「フランスの」
「やはり改革派が主立った支持者になっています」
「それは当然ですね」
　エルラッハの話を聞いて納得した顔で頷くモンサルヴァートだった。
「彼は改革派です。それならば」
「そういうことです。改革派としても彼を全面的に支援するとのことです」
「ラフネール総統の次に総統にですか」
「はい」
　また答えるエルラッハであった。

「そうなります。ですが我々は」
「我々は」
この場合の我々とは二つの意味があった。そしてそのそれぞれの意味はモンサルヴァートもエルラッハもよくわかって話をしていた。
「まだおりません。候補者が」
「左様ですか」
モンサルヴァートはここではあえて他人事として返した。
「まだなのですね」
「それでです」
あらためて顔を上げるエルラッハであった。
「私は考えたのですが」
「ええ」
「候補者を探し出し。そして御願いしようと思っているのです」
「そうでしたか」
「そしてです」
あらためてモンサルヴァートとエルザを見てきた。
「その候補者こそは」
「どなたですか？それは」
「今私の前におられます」
静かに微笑んで答えエルラッハであった。
「そう、それは卿なのです」
「私だと仰いますか」
「なりませんか」
またモンサルヴァートを見て問うてきた。
「エウロパの総統に。なられますか」
「今は何とも言えません」
まずはこう返すモンサルヴァートであった。
「今は」
「左様ですか」
「宇宙艦隊司令長官としての職務があります」

このことを彼に言うモンサルヴァートであった。
「ですから。今は」
「お答えできませんか」
「はい、そうです」
また答えるモンサルヴァートであった。
「残念ですが」
「左様ですか」
「暫くお待ち下さい」
今度はこう言うモンサルヴァートだった。
「その答えは」
「わかりました。それではですね」
「はい」
エルラッハに対して応える。
「暫く待たせて頂きます。それで宜しいですね」
「御願いします、それで」
「はい、それでは」
「こちらとしましてはですね」
エルラッハはモンサルヴァートを見つつまた述べる。
「卿のことは正当に評価しているつもりです」
「正当にですか」
「そうです。卿はエウロパを救える英傑です」
「英傑、私が」
「それは誰もが認めることです」
誰もが、と言った。これは多分に言葉のレトリックである。自分の意見を周りも同じだといい相手をそれに引き込むのは話術の基礎である。そしてそれがわからぬモンサルヴァートではなかった。しかしここでは彼はエルラッハの話を黙って聞くことにしたのであった。

## 第三十二部第二章　誘いその二十四

「それでです」
「それで」
「是非総統にと考えています」
また言うエルラッハであった。
「エウロパを救うべき総統に」
「総統にですか」
「そうです、それではですね」
エルラッハの言葉は続く。
「御返答はいづれにということで」
「それで御願いします」
「ですが」
ここで言葉を付け加えることを忘れない。
「御返答は早いうちに御願いします」
「早いうちにですか」
「はい、こちらとしては英傑の早い到着を待っています」
あえてにこりと笑う。しかしこれも話術のうちである。
「是非共。それはお忘れなきよう」
「承知しました」
「それではです」
エルラッハはここまで話をすると立ち上がったのだった。
「私はこれで」
「お帰りですか」
「はい。ではまた機会がおありでしたら」
「宜しく御願いします」
ここではこれで終わった。しかしこれで終わりではないうことは見送ったモンサルヴァート夫妻が最もよくわかっていた。エルラッハを見送った後彼はすぐにエルザと二人で先程エルラッハと話をし

た部屋に入った。そしてそこで妻と向かい合い話になるのだった。
「話は聞いていたな」
「はい」
妻はあえて表情を消して夫の言葉に頷く。
「その通りです」
「私を総統にか」
モンサルヴァートはこのことを口にする。
「今までこんな話が来ることは考えもしなかった」
「そうだったのですか」
「そうだったかとは」
彼はここで妻の言葉からあることを感じた。
「御前は違うのか？前から感じていたのか？」
「はい、それについては」
静かだが確かに夫の言葉に応えるのだった。
「薄々感じていました」
「そうだったのか」
「貴方は今まで多くの武勲を挙げてこられました」
このことはエウロパに広く知られている。
「海賊との戦いにおいても」
「それもか」
彼が少尉に任官してすぐだ。まずはエウロパ内での宇宙海賊の退治で活躍しtけいたのだ。彼はここでまず武勲を挙げ昇進していったのである。
「そしてサハラでの多くの戦い」
「次はそれか」
「そうです。あの御活躍はエウロパに広く伝わっていました」
「自覚はしないようにしていた」
これは慢心しない為である。彼は増長を嫌う。それは自分自身に対しても同じでありだからこそそうした武勲は意識しないように自分から務めていたのである。

「それについてはな」
「御自身が意識されずとも周囲は違うのです」
彼女が言うのはこのことだった。
「それについては」
「そうなのか」
「はい、そうです」
またはっきりと答えるエルザだった。
「そしてそれにより貴方は既に英傑でした」
「エウロパのか」
「エウロパの若き元帥」
元帥がどうした階級にあるのかは軍を少しでも知っているのなら誰にでもわかるものだった。彼は若くしてその栄誉を受けたのである。その武勲によって。
「そして連合との戦いでは不敗であられました」
「不敗か」
「あれだけの敗北を続けたエウロパ軍の中でです」
これもまた事実であった。彼は圧倒的な戦力を誇る連合軍に対しても敗れることはなかった。それはニョルズの戦いまで変わることがなかった。
「それはエウロパにとって数少ない誇りなのです」
「今となってはだな」
「そうなります。ですから」
また言うエルザだった。
「あの方は貴方のところに来たのです。その武勲を見てです」
「私の能力はどうなのだ」
彼が言ったのはこのことだった。

## 第三十二部第二章　誘いその二十五

「私にその能力があるとは見ているのだろうか」
「見ておられるでしょう」
このことにもはっきりと答えるエルザであった。
「それもしっかりと」
「しっかりとか」
「はい、その武勲の中にです」
また武勲について言う。
「貴方の能力も見ておられます」
「功績の中には」
「武勲はただ武勲であるだけではありません」
エルザの言葉はここではより深いものになっていた。
「そこには多くのものも含まれています」
「それはわかっているつもりだが」
「貴方の指揮官として、指導者としての力」
まずはこのことについて述べる。
「そして勇気と不屈の心」
「次はそれなのだな」
「最後にカリスマ性です」
「カリスマ性か」
モンサルヴァート自身では自覚しようもないものだった。これは自分ではどうしてもわからないものだ。ヒトラーですら最初はこれに気付かなかった。
「それが私にあるのか」
「出来上がったというべきでしょうか」
「出来上がったのか」
「そうです。やはりこれもまた武勲によってです」
また武勲という言葉が出された。

「貴方の。これまでの勝利と不敗によって」
「保守派としてはそれで選挙を戦いたいのか」
「政治として見ればその通りです」
「政治か」
だがモンサルヴァートは政治という言葉を耳にして浮かない顔になった。
「それはな。どうにもな」
「お嫌ですか？」
「私は今まで軍人であり続けてきたつもりだ」
まずこのことを妻に対して述べた。
「これまでな」
「では今は」
「今もだ」
それは変わらないというのだった。
「今もな。私は軍人だ」
「左様ですか」
「だからだ」
そしてまた言うのであった。
「政治に関してはだ」
「距離を置きたいのですか？」
「軍人はあくまで軍人だ」
妻への返答はこうであった。
「軍人は政治家とは違う」
「それはその通りです」
エルザもこのことははっきりと認めた。
「軍人は武官です」
「そうだ」
「そして騎士でもあります」
ここではエウロパ軍人の考えが明確に出ていた。エウロパにおいて軍人とはやはり騎士なのだ。この考えはエウロパが欧州だった頃

の騎士道に由来するのは言うまでもない。
「騎士は政治には介入しないものです」
「問われれば別だがな」
「そうです。あくまで主君、あるいは国家に忠誠を尽くすものです」
「それ以外に行うことは誇りを持って戦い、そして勝利を収めることだ」
モンサルヴァートは己の考えを言い切った。
「それだけだ」
「その通りです。それでは」
「そうだ。少なくとも軍人としては発言をしたくない」
これもまた彼の考えであった。
「決してな」
「ではどうされるのですか」
あらためて夫に対して問うた。
「この申し出は。どうされますか」
「正直なところ迷っている」
「そうですか」
「ただし。一つ言っておく」
ここでタイミングを開けてきた。

## 第三十二部第二章　誘いその二十六

「今のエウロパの状況は私もわかっている」
「今のエウロパもですか」
「そうだ。今のエウロパは建国以来の危機にある」
「はい」
存亡の危機と言ってもいい。多くのものを失いそれによる痛手もかなりのものだ。このことを誰よりもわかっている者達の一つが軍人でありモンサルヴァートもその一人だった。
「確かな指導者がいなければだ」
「崩壊ですか」
「その危険性は充分にある」
語るモンサルヴァートの顔が暗くなった。
「充分にな」
「そうですね。確かに」
「だからこそ確かな指導者が必要だが」
「ではあなたは」
「しかしだ」
彼はまた言う。
「私にその資質はあると思うか」
「正直に申し上げて宜しいでしょうか」
エルザの顔も声もこれまでより真剣なものになる。
「私の考えを」
「頼む」
彼もまたこれまでよりも真剣な顔と声で返した。
「是非な。それでどう思うのだ」
「あなたならできます」
こう返すエルザであった。
「あなたならば。このエウロパを」

「救えるというのだな」
「そうです。だからこそエルラッハ卿もここに来られたのです」
「だからこそか」
「今エウロパを救える人間は。そうは容易には見つかりません」
「容易にはか」
「救世主とはそういうものです」
救世主という言葉も出て来た。
「救世主は。ですが見つけた時には」
「その国を救うというのだな」
「そうです。そして今それは」
エルザは己の言葉を続ける。
「私が知る限りあなただけです」
「では。私はやはり」
「出られるべきです」
ここまで話して遂に最終的な答えを述べたエルザであった。
「是非。エウロパの為に」
「エウロパの為にか」
「そうです」
またしても告げるエルザだった。
「是非。御願いします」
「しかしだ。既に二人の候補者がいる」
モンサルヴァートは逃げたわけではないがここで二人のこともエルザに話した。
「イギリスのギルフォード侯爵」
「はい」
「そしてフランスのカミュ外相だ」
「外相は今内相も兼任されていますね」
「そうだ」
このこともエルザはよく知っていた。
「その政治的手腕は既に知られている」

「ギルフォード侯爵は瞬く間に多くの人材を集めているそうですね」
「人材だけではない」
モンサルヴァートはその他のことも妻に話した。
「資金もだ」
「ということは多くの支援者も」
「政治にはまず資金が必要だ」
とりわけ民主政治においてはだ。連合の大衆型民主主義とは違いエウロパは貴族制による階級型民主主義だ。従って政治にかかる資金は連合の程多くはかからずまた貴族達の資産も活用できる。だがそれでも多くの資金が必要なのは事実だった。特に国家元首である総統ともなればそれは相当なものになる。
「彼はそれも多く集めている」
「左様ですか。もう」
「既に多くの人材と資金が集まっている」
このことをまたエルザに告げる。
「彼は政党には所属していないがそれをも超越しようとしている」
「政党政治すらもですか」
「そのカリスマは圧倒的だ」
このことも話した。
「イギリスの政界では元々辣腕家で有名だったらしい」
「イギリスの政治ではですか」
「地方政治だがな」
一応はこう前置きする。
「それでもだ。破産寸前のイギリス財政を救い失業率を劇的に減少させた」
「そういえば」
エルザは今の夫の話であることに気付いた。

## 第三十二部第二章　誘いその二十七

「戦争までのイギリスはかなり豊かになっていました」
「全て彼の力だったのだ」
「そうだったのですか」
「そうだ。そしてだ」
モンサルヴァートの話はさらに続く。
「それだけではない。あの戦争においても」
「それは御聞きしています」
今度はエルザもよく知っていることだった。
「自ら前線に立ち多くの連合軍と果敢に戦われたそうで」
「見事な指揮だった」
ニョルズの戦いにおいて共に戦ったからこそよく知っているのだった。
「実にな。タンホイザー元帥と彼がいたからこそ敗れはしなかった」
「それでは政治家としても軍人としても」
「確かなものを持っているのは間違いない」
「左様ですか」
「だからだ」
彼は言った。
「その能力はかなりのものだ」
「そうですか。やはり」
「彼も英傑である可能性は高い」
「そうなのですか」
「そしてだ」
彼はさらに言葉を続けた。
「カミュ外相についてはもう知っているな」
「はい」
このことも知っているエルザであった。

「政治家としては若いながらも」
「そしてカリスマ性もだ」
「ええ。指導力も併せ持っておられますね」
「改革派では彼だろう」
無論次の総統選挙の立候補者のことである。
「間違いなくな」
「やはりそうですか」
「そうだ」
またエルザに対して告げる。
「まず二人が揃っている」
「本来ならばそれで終わりの筈なのですが」
エルザはこれまでの総統選挙を考えつつ述べた。
「保守派と改革派で」
「しかし今回は事情が異なる」
いつもそうとは限らないのが世の中というものである。それは政治の世界にとってはとりわけそうであり今回のエウロパもまたそうなのだった。
「保守派に人材がいないのだ」
「誰かおられなかったのでしょうか」
「少なくともあのギルフォード侯爵に対抗できる人材はいない」
モンサルヴァートはこう看破した。
「一人たりともな」
「そうなのですか」
「そして改革派においても」
「出られるのはカミュ内相だけですか」
「一人しかいなかった」
そしてまた言うのだった。
「彼しかな」
「辛いところですね」
エルザはここまで聞いて息を出した。

「保守派にとっては」
「だからエルラッハ卿がここまで来られたのだ」
彼は言う。
「ここまでな」
「あなた意外に声をかけられている方はおられるでしょうか」
「おそらくいない」
それも察しているモンサルヴァートであった。
「一人もな」
「それもまたですか」
「既に事前にかなり調べている筈だ」
彼は読んでいた。
「だからだ。もう」
「いないのですか」
「そうだ。若しもだ」
「若しも？」
「私が断れば彼等にはこれといって候補者がなくなる」
言葉はまたしても断言になっていた。

## 第三十二部第二章　誘いその二十八

「全くな。だからこそ彼等も必死なのだ」
「左様ですか」
「彼等もまた窮地に立っているのだ」
「政治的にですね」
「ここで政権を獲得できなければ暫くの間彼等が政権を手に入れることはできなくなる」
「それは受け入れられないことですね」
「彼等にとってはな」
ここでは言葉が客観的なものになっていた。
「その通りだ」
「そうなりますか」
「私の行動如何だが」
「それでどうされますか？」
「即断はできない」
彼は強いが静かな声で述べた。
「今はな。とても」
「では御考えになられるのですね」
「時間を与えてくれ」
また言う彼なのだった。
「暫く。時間をな」
「わかりました。ただ」
「ただ？」
「ヴァンフリート家はあなたの力になります」
「ヴァンフリート家がか」
「そうです」
確かに答えるエルザだった。エルザの言葉もまた確かなものを含んでいた。

「それはお約束致します。何があろうとも」
「いいのか。我がモンサルヴァート家はこれといって資産がない」
この場合は総統選挙を戦えるだけの資産がという意味である。総統選挙は下手をすれば名家ですら傾けさせないまでの資金が必要になる。モンサルヴァート家にはそこまで資産はないのだ。彼の家は貴族としては然程裕福な家なのではないのだ。そこがネックなのだ。
「出馬したならばヴァンフリート家にはかなりの負担になるぞ」
「いえ、それでもです」
また言うエルザだった。
「夫の家を助けるのは妻の家の務めです」
「そうか」
「それは貴族の家のしきたりの筈ですが」
妻としての言葉だった。
「違いますか」
「それはそうだが」
貴族の家では結婚はそれぞれの家の結びつきを強めるものでもあるのだ。政略結婚であるがこれは貴族社会の常である。古来よりのだ。
「しかし。それでも」
「お構いなく」
また言うのだった。
「どうか。ここは」
「わかった。ではその時はな」
「是非共。御願いします」
「わかった。それではな」
「それにです」
ここでエルザは言葉を付け加えてきた。
「もう一つ頼りにすべき方々がおられます」
「それは一体」
「ドイツの方々です」

「ドイツか」
言うまでもなく彼等の祖国である。エウロパでは最も強い勢力を持っている国であるというのはこの時代でも同じである。そのドイツに対抗できる立場にあるのがフランスであり離れた場所で状況を見ているのがイギリス。この三国の関係はこの時代においても変わりない。
「その国がだな」
「その通りです。まずはドイツです」
「ドイツ国民の支持か」
「これは確実に期待できます」
エルザの声が強いものになっていた。
「ドイツ人は同じドイツ人を支持するものですから」
「そうだな。それはな」
所謂地盤であるがこれの存在は政治においては非常に大きい。
「しかしそれでも」
「それでも？」
「支持を完全に得られるかどうかだ」
「それですか」
「それが問題だが」
「まずはです」
ここでエルザの目が光った。今までになく鋭い目になっていた。
「ドイツの保守派の支持を完全なものにしましょう」
「ドイツのか」
「それから改革派ですが」
彼等は今は完全に政治の話になっていた。しかしモンサルヴァートはそれには気付いていなかった。無意識のうちに政治に入っていた。貴族というものはその立場そのものが政治的になってしまう。爵位が高ければ高い程だ。それは彼もまた同じであるのだった。
「次第に支持を広げていきましょう」
「保守派と改革派両方にか」

「信条の違いも大事ですが血のつながりも大事です」
「血もだな」
「そうです。ですから」
また答えるエルザだった。
「ここは我がヴァンフリート家もまたお力に」
「その際は、だな」
「そうです」
一応はこう前置きされる。
「その際は、ですが」
「わかった」
妻の言葉に対して頷いた。
「ではその時は頼むぞ」
「かしこまりました」
「我がモンサルヴァート家は代々軍人の家」
彼の父も祖父も曽祖父もその前からなのだった。代々軍人を輩出している名門の家なのだ。その人脈がここでは問題になる。
「軍人の家とのつながりしかなかった」
「確かお母上は」
「スウェーデンの出身だ」
「そうでしたね。それではそちらにも」
「ただ。軍人の家との関係しかない」
これがモンサルヴァート家のネックであった。
「人脈は狭いのだ」
「そうでしたか」
「軍人だけだからな」
「それでもかなりのものでは？」
「限度がある」
モンサルヴァートの言葉は現実を見据えたものであった。
「だからだ。それは」
「それについてもお任せ下さい」

エルザはまた夫に対して進み出て来た。
「我がヴァンフリート家には人脈もあります」
「そうか」
「音楽は全ての方々を結びつけるもの」
ヴァンフリート家は代々音楽家でありしかもそれに関する企業も運営している。欧州の音楽界において強い力を持っているのだ。
「それにより人脈を築いてきましたので」
「その時はそれも頼りにしていいというのだな」
「如何にも」
静かに申し出た言葉であった。
「どうぞその時は」
「わかった。それではな」
夫は妻の言葉を受けた。こうして今の話は終わった。だがこれは次の話への前の舞台に過ぎなかった。新たな舞台が幕を開けようとしていた。

# 第三十二部第三章　伝わる動きその一

## 伝わる動き

各国首脳達、若しくはその代行者達は今日本の首都である京に集まっていた。そこで定例の各国首脳会議に参加しそれぞれの議論を行う為だ。

京は言わずと知れた日本の天皇のおられる場所である。まず彼等は陛下の挨拶を受けることになっていた。これもまた定例の行事である。

「日本で行われるとなるとこれがまた」

「ええ。何かと堅苦しくていけませんな」

首脳達がそれぞれの席で話し合っていた。今彼等は京の議会の席にそれぞれ座っている。彼等の為にあえて空けられた席なのである。

「儀式ばかり多く」

「しかもそれがやけに細かい」

「全くです」

それが彼等の気に入らない部分であるのだった。

「伝統か歴史かわかりませんがな」

「それでもああも細かいとなると」

「困ったものです」

苦い顔で話をしている。見れば彼等のいる議会も半円状で中央を取り囲むようになっている。そして席は黒檀の木で造られこれまた古風なものだった。

「何だかんだで古臭いといいますか」

「儀式がある国ですな」

「まあそれも当然でしょう」

首脳の一人が諦めたように言ってきた。

「三千六百年の伝統です」

「確か実際は三千年程度では？」

「そう。最初の十代程度の皇帝は実在しない筈です」
これは連合中で知られていることだった。連合で二番目に長い歴史を持つ国家元首の家の国であるがその実際の歴史は三千年程なのだ。
「神武帝は確か」
「あの皇帝は実在では？」
「さて」
実在という説もあるのだ。ただし在位の年数は信じられていない。不自然に長いからだ。
「そこはどうやら」
「しかし。三千年ですか」
「長いですな」
一言で言えるがその歳月は途方もなく長い。
「歴史がそれだけ長いとなると」
「それでも三千年なのですね」
「それだけ長ければ伝統ができますな」
「苔のむすまでというわけですね」
ここでは日本の国歌が出た。
「いや、本当に歴史も伝統も長い」
「エチオピア皇帝もそうですが」
「連合三百国の中で二つしかない皇室ですな」
連合でも皇室は二つしかなく皇帝と呼ばれる存在は二人しかいない。その二人のうちの一人がこの日本の天皇陛下というわけなのだ。そして。
「尚且つ女帝は一人ですな」
「この日本の皇帝陛下」
「いえ、皇帝ではないのです」
皇帝という言葉はここでは否定された。
「皇帝ではなく天皇になります」
「どちらでも同じなのでは？」

「それが違うそうです」
「はて」
首脳の一人が首を傾げさせた。
「何処がどう違うのか」
「複数の民族、複数の宗教の上に君臨していますな」
「はい」
もっともこれは連合においては常識になっている。国家間での市民の移動が盛んでありその為あらゆる国に様々な民族や宗教が混在しているのが連合なのだ。
「では皇帝なのでは？」
「そもそも天皇という言葉の意味が」
「皇帝は誰でもなれますな」
この話が出された。
「王はそうではありませんが」
「ええ、まあそれは」
「欧州の伝統に従えば」
「その通りです」
王とは簡単に言えば氏族の長である。一つの民族の元首である。実際にその下に複数の民族を抱えていても王とはその根本はそう見なされていた。だから特定の血筋でなければなれないとされてきたのだ。これが王という存在なのだ。だが皇帝は王ではないのだ。

## 第三十二部第三章　伝わる動きその二

「しかし皇帝は誰でもなれます」
「ナポレオン然り」
ナポレオンは王の血を引いてはいない。しかし皇帝になれた。かつてのローマ皇帝もそうであるし神聖ローマ皇帝も原則としては選帝侯達が選ぶことになっていた。
「ですが日本の皇室はそうではありません」
「ふむ。そうなのですか」
「そしてです。日本の皇室は天津神の血をひいているとされるのです」
「それで天皇だというのですか」
「一説には、です」
とにかく複数の説が入り混じっているので確固たることは言いにくいのだった。
「だから天皇なのです」
「もっともこの皇室はエウロパ風に言えば王でもありますが」
「これはエチオピア皇室も同じですな」
「確かに」
エチオピア皇室は一度二十世紀に悪名高きメンギスツ政権により断絶させられている。しかし傍流の血筋が発見されその血筋の者が復活させている。それが今のエチオピア皇室であるのだ。
「特定の血筋ですか」
「中国の皇帝ともまた違いますな」
「ええ、それも」
中国の皇帝は易姓革命によってなる。ある姓の者が天命を受けて治める。しかしそれを失えば皇帝でなくなり別の姓の者が治める。これが中国の皇帝の考えなのだ。
「また違います」

「日本の、そしてエチオピアの皇帝というわけですか」
「成程」
「まあそれにしてもですな」
ここで一人がふと言った。
「思えば勿体ことをしました」
「といいますと」
「いえ、中国についてです」
中国の皇帝の話が出たところで話されるのだった。
「皇帝がいれば。今頃は」
「おっとそれについては」
「言わない約束ですぞ」
各国の元首達がここで少し意地悪い顔になる。
「彼等は誇りを以ってそれを行ったのですから」
「今更それを変えることはできません」
「最初から王を否定した国もですな」
「倒した国もです」
ある国々についても嫌味めいて語られる。
「彼等は二度と皇帝を抱けません」
「これがどうも強い劣等感になっているようですな」
「ははは、確かに」
ここで彼等はちらりとその三国を見る。
「過去は変えられませんからな」
「誇りとなっているのなら余計に」
「いや、これはもっとも」
意地の悪い話が続く。
「痩せ我慢かも知れませんがな」
「ふむ、痩せ我慢ですか」
「誇りは時としてそうなります」
やはり意地の悪い意見であった。
「特に国家にまでなると」

「まあ後悔先に立たずですな」
「その通りです。まあ世の中ではよくあることですが」
「それにしても」
また三国の方を見る。
「実に不機嫌そうで何よりです」
「ははは、確かに」
彼等は旧太平洋各国の首脳達が集まっている場所を意地悪い目で見ていた。そこにはアメリカ大統領のマックリーフ、中国大統領の李、それにロシア大統領のグリーニスキーの三人が集まっていた。そして言葉通り不機嫌そものの顔でそこに座っていた。
「私は思うのですが」
「何でしょうか」
不機嫌な顔のマックリーフが同じく不機嫌な顔のグリーニスキーの言葉に応えていた。
「伝統とは何なのでしょうか」１２
「わかりませんな」
マックリーフは声まで不機嫌なものにさせていた。その声を返すのである。
「私の知らない単語です」
「三千年の伝統でしたな」
李もまた二人と同じく不機嫌な顔と声であった。

## 第三十二部第三章　伝わる動きその三

「我が国の歴史は五千年ですがな」
「それもあまり見られていないようですな」
「ええ、その通りです」
マックリーフの言葉に応える。
「全く以って。三千年の皇室ですか」
「皇帝、いや天皇でしたな」
マックリーフはあえて天皇と呼びなおした。
「この連合でたった二人だけの帝です」
「帝ですか」
グリーニスキーはその存在そもそもが好きではないようである。
「かつては我がロシアにも皇帝が存在していましたが」
「我が国にもです」
「全く。レーニンも余計なことをしました」
忌々しげに言うグリーニスキーだった。
「いや、あれはケレンスキーだったでしょうか。どちらにしろ帝政だったならば」
「日本と同格でしたな」
「その通りです」
「我が国はこのことに誇りを持っていますぞ」
李は誇りと言うが顔は不機嫌そのものにさせたままだ。
「古代からの忌まわしい因習から我々を解放してくれた偉大なる国父孫文の行動を」
「辛亥革命ですか」
「そうです」
この革命で清王朝は倒れている。この時に中国は皇帝という存在を否定したのだ。この時の中国はあらゆることは行き詰まり西洋諸国の侵略を受けそれを打破しようとしていた。その一貫として皇帝

という存在を否定したのだ。この時以降中国に皇帝は存在していない。
「素晴らしいではありませんか。世襲の権力委譲を終わらせたのです」
「確かに」
「我が国もです」
今度言ったのはマックリーフであった。
「ジョージ＝ワシントンはそれを否定しました。それにより」
「大統領制となったのでしたな」
「ミスター＝プレジデント」
大統領の英語、この時代のアメリカ語での大統領の呼び名だ。連合では銀河語が公用語であり第二言語として各国の言語が使われているのだ。アメリカ語もそれだ。
「私もまたその一人ですが」
「大統領としてですか」
「はい、ですから我が国では王は存在しないのです」
「皇帝はそれ以上にですな」
「その通りです」
アメリカもこれは同じなのであった。
「我が国には君主は存在しません。存在しているのは国父と歴代の大統領です」
「同じですな、全く」
「我々は」
「誇りです」
彼等の言葉は強がりめいた言葉になっていた。
「世襲の権力を否定して」
「それこそが誇りです」
「しかし。天皇ですか」
「連合で二人だけの皇帝」
どうしてもこのことが引っ掛かるのだった。皇帝という存在が。

「席次では第一ですな」
「ですな。王の上です」
「我々よりも」
皇帝は各国の国家元首の席次や儀礼においては常に第一とされている。日本の天皇とエチオピア皇帝ではその順番は即位順になりこれはそれぞれの国家元首間でも同じだ。就任している歳月がその順位になる。だからアメリカ大統領も就任してすぐならば席次は一番下になるのだ。席次や儀礼はこうした時に実にシビアだ。
皇帝の次が王となりそして大統領や主席、次いで首相、それから各国の閣僚になる。儀礼の待遇は各国でこう分けられている。ここでも皇帝が一番上になるのであった。
「こればかりはどう逆立ちしても勝てませんな」
「王には」
大統領は王には勝てない、連合での諺ににもなっている。
「日本人は新しいものが何よりも好きですが」
「こうした古い存在も同時にあるので」
「全く。おかしな話ですな」
三人は不機嫌な顔でそれぞれの席に座っている。その彼等は各国のジャーナリスト達からも見られている。ジャーナリスト達もまたおかしそうに笑っている。
「あの三国はいつもだな」
「ああ、全くだ」
「皇帝や王という存在を前にしたらな」
「いつもだよな」
「そうだよな」
そうなのだった。大統領である彼等はどうしても王や皇帝にはなれない。連合では階級は否定していてもこうした儀礼においては五月蝿い部分もあるのだ。

## 第三十二部第三章　伝わる動きその四

「言っても仕方ないのに」
「そんなに皇帝が羨ましいのなら皇帝作ったらどうだ？」
「それができたら苦労しないさ」
「ははは、それもそうか」
「わかってて言ってるだろ」
「いやいや」
　こんなやり取りをふざけつつ続けている。彼等も中々意地が悪い。そしてその意地の悪さは他の国の目にも向けられているのであった。
「あの国は特に凄いな」
「というか歯軋りさえしているな」
「あれもいつものことだけれどな」
「確かにな」
　彼等が今度見ているのは韓国大統領であり李修男だった。小柄な彼が歯軋りしているのがジャーナリスト達からもはっきりと確認されている。
「全く。韓国人ときたら」
「日本が絡むといつもそうだな」
「あれも千年位続いているか？」
「ああ。あれだろ？日本じゃなくなった時からだ」
「おい、韓国は日本じゃなかったんだぞ」
　ジャーナリストの一人が笑いつつ同業者達に対して話す。
「ちゃんと亡命政府があっただろ」
「サンフランシスコ講和条約に入れてもらえなかったあの政府か」
「ああ、あれだ」
　所謂上海臨時政府である。韓国ではこの時代においてもこの自称亡命政府を以って独立は維持されていたとする。あまり誰も信じてはいない話だ。というよりは連合でも信じているのは韓国人だけと

いう非常に奇妙な政府である。
「あの政権だ」
「あれは一体何だったんだ？」
「だから正統政権なんだろ？」
一応はこう主張はされているのだ。
「あれで」
「何度も内輪揉めばかりしていて碌に動いていなかったのにか？」
「上海にいる中国人も外国人も全く相手にしていなかったのにか」
「それでもあれらしい」
「訳がわからないな」
皆首を捻るばかりだった。
「そもそも韓国は日本になったのじゃないのか？」
「ところがなっていないらしい」
またこうなっているのだった。
「彼等の話ではな」
「条約でなったのじゃないのか？」
「当時の皇帝のサインがなかったそうだ」
「皇帝！？」
話がさらにややこしくなる。皇帝という言葉で。
「天皇のサインがなかったのか！？」
「いや、当時の韓国の皇帝だ」
こう言われるのだった。
「そのサインがないからあの条約は無効だというのだ」
「韓国に皇帝がいたのか」
「初耳だぞ」
「大韓帝国」
この国の名が告げられた。
「そこの皇帝のな」
「大韓帝国！？そんな国があったのか」
「聞いたことがないが」

「二十世紀にあったのですか？」
「そういえば」
彼等はここで自身の歴史への知識を辿った。
「中央アフリカにそんな国がありましたな」
「ああ、そういえばそうでしたな」
「中央アフリカに」
話がアフリカにまで飛ぶのだった。
「ボサカ一世でしたかな、そういえば」
「ええ、それですかな」
かなりマイナーと言えばマイナーな存在であった。激動の時代であった二十世紀の中では。
「独裁者となりそれから皇帝を自称した」
「所謂僭主ですな」
「それでしょうか」
「いえ、時代はそれより前です」
「前といいますと」
「確かボサカ一世の時代は」
何故かここにいる者達はボサカについてはよく知っていた。
「第二次世界大戦後でしたな」
「ええ、そうです」
これについてはよく知られている理由があった。

## 第三十二部第三章　伝わる動きその五

「第二次世界大戦後でアフリカ各国が独立してからでしたので」
「彼は西暦にして一九六〇年代だったでしょうか」
「違うのですか？」
「ですからアフリカですよね」
ジャーナリストの一人が指摘するのはここだった。
「その話は」
「ええ、そうです」
「違うのですか？」
「日本はアジアですが」
これは揺るがしようのない、そして否定のしようがない事実だった。この時代においても日本はアジアだと意識されている。人種という意味からこう判断されているのだ。
「ですから」
「ああ、アフリカとは違いますな」
「それだけは」
「はい、違います」
こうしてこのことは否定されれるのだった。
「当時アジアとアフリカは遠く離れていたので」
「ではその大韓帝国というのはアジアの国ですか」
「それでも東アジアです」
「東アジアというと」
「確か当時日本も」
この歴史への知識は完全にインプットされていた。
「では同じ東アジア同士ですか」
「どの国ですか？」
「ですから韓国です」
「韓国！？」

「韓国が帝国だったのですか」
「はい」
信じられないといった声で問う同僚達に対して答えるのだった。
「その通りです。彼等は帝国だった時期があったのです」
「複数の宗教があったのですか？」
「いえ」
このことは否定された。
「李氏朝鮮の時と同じです。国教は朱子学です」
「朱子学が国教とは」
「これはまた」
彼等は朱子学が国教と聞いて首を捻った。朱子学は儒学であり宗教とはまた違うのだ。儒教という言葉もあるが中国では確かに漢代に国教と位置付けられたりもしたが彼等の信仰はそもそも五胡十六国時代や南北朝時代に確立されていった道教やその根本にある様々な神々を信仰してきた。もう一つ仏教もある。中国人の宗教はこの二つの宗教により信仰が確立されているのだ。だから儒学を政治哲学として使っているだけだったのだ。
しかし李氏朝鮮は違っていたのだ。彼等は何と朱子学を国教としそれまでの仏教を弾圧した。複数の宗教も認めてはいなかったのだ。
「では帝国ではないですね」
「複数の宗教を認めていなかったのですよね」
「はい、その通りです」
答えははっきりと出ていた。既にわかっていることだった。
「宗教は朱子学だけでした。仏教もキリスト教も弾圧されていました」
「ではその面では帝国ではありませんな」
「帝国はまず複数の宗教があること。そして」
さらに指摘されるポイントがあった。
「複数の民族ですが」
「確か韓国といえば長い間」

そしてこのこともよく知られていることだった。
「単一民族でしたな」
「日本は少なくとも複数民族であり続けましたが」
日本の民族構成もまた有名であった。
日本人は縄文系と弥生系の混血である山と民族を主流とし沖縄系の琉球民族や北海道のアイヌ民族が存在してきた。この時代ではそれぞれ琉球王国、アイヌ連邦として存在しているが当時は同じ国家の下にあった。もっともこの時代でも日本には琉球民族とアイヌ民族が存在しているのだが。
「しかし韓国といえば」
「単一民族だった筈です」
「違うでしょうか」
「いえ、その通りです」
このことも答えは出ていた。
「本当に長い間純潔を尊んでいましたが」
「それでもなのですね」
「はい、そうです」
韓国は長い間連合でも単一民族国家として知られてきていたのだ。
「当然二十世紀もです」
「ではこれも違いますな」
「民族的には帝国ではないですな」
「何処が帝国なのですか？」
「日本が強引にそういうことにしたのです」
答えはこれであった。

## 第三十二部第三章　伝わる動きその六

「日清戦争がありましたね」
「ああ、あの戦争ですか」
「日本が当時の中国に勝った」
「はい、それです」
この戦争についても話される。
「その時に完全に独立した存在であるとして帝国とされたのです」
「ああ、長い間中国の属国でしたな、そういえば」
「その通りです」
韓国の歴史でのこうした話は知っているのだった。
「ですがそれを脱却させて他国の介入を防ぐ為に完全に独立させたのです」
「成程、それで大韓帝国だったのですか」
「そういうわけでしたか」
話はこれで収まった。
「しかしそれでも併合されたのですよね」
「ああ、そうですね」
このことも知られていた。何故か多くの者が大韓帝国だけを知らなかったのだった。
「結局のところ」
「日清戦争で独立したのに」
「その後でロシアにつきましたから」
また答えが出た。言葉が少し呆れたものになっている。
「それで日露戦争に勝った日本が怒って」
「併合ですか」
「遂に」
「いえ、まだです」
ここではまだ併合されなかったのだ。

「まだ併合されませんでした。保護国にはなりましたが」
「日本もまた慎重な」
「当時でしたらそれで終わりだったでしょうに」
「その後にですね」
「はい」
「国際会議の場で密使を送り」
所謂ハーグ密使事件である。
「日本側を怒らせて」
「また怒らせたのですか」
「懲りないことで」
「そこで外交権を剥奪されて密使を送った皇帝は退位させられました」
李氏朝鮮として最後の王であり大韓帝国初代皇帝である高宗だ。歴史的にはお世辞にも評判も評価もいい人物ではない。とかく時代が読めず判断が偏っていて正妻の暴挙を止められなかったと言われている。この時も誤った行動をして遂に退位させられたのである。
「それでその後」
「また何かあったのですか」
「朝鮮半島の総督として政治を統括していた伊藤博文を暗殺しまして」
「あれですか。よりによってというタイミングでやって」
「遂に国を滅ぼしたあの暗殺事件ですね」
「その通りです。これで完全に終わりました」
以上が日韓併合までのプロセスである。歴史的にここまで非常識な出来事が続いて併合にまで至ったケースは稀である。ないかも知れない。
「併合に至ったのです」
「これで大韓帝国は滅びたと」
「短い歴史でしたな」
その言葉は実に醒めたものであった。

「しかしですね」
「はい、何でしょうか」
「話を少し聞いて思ったのですが」
ジャーナリストの一人がまた述べる。
「上手くやれば併合に至らなかったのでは？」
「そういえば確かに」
「上手くどころか」
他のジャーナリスト達もここで続く。
「普通にやっていれば保護国止まりで」
「韓国は帝国のままだったような」
「それが歴史の不可思議さです」
これまで大韓帝国について説明していたジャーナリストはここでこう述べた。
「このことこそが」
「といいますと」
「事実は小説より奇なり」
今度はこう言った。
「ですから」
「こうしたこともあるというのですか」
「そうです。まさにそれです」
これが彼の意見であった。

## 第三十二部第三章　伝わる動きその七

「ですからこういった事態も全く不思議ではありません」
「成程」
「そうなりますか」
「その通りです。それに併合されて特に血が流れてはいませんでしたし」
「ははは、確かに」
「あまりにも平和理に行われた併合でした」
　これは連合の誰もが知っていることだった。日韓併合は各国の何処も反対せずしかも韓国側からもこれといって反対の意見はなかった。むしろ一水会という政治結社が積極的にそれを推進した程だ。当時の首都ソウルでは日韓併合を祝う看板すらあった。日本側に併合した際日本が受け持つ費用の膨大さを懸念して併合に対して慎重な意見があった。それ程まで併合に反対する勢力は韓国側にはなかったのだ。
「伊藤博文を暗殺しテロリストが死刑になっただけでしたね」
「ええ、そうです」
　このテロリストの名を安重根という。韓国では誰もが知っている。
「裁判を受けて取り調べも行われ」
「そのうえで絞首刑ですな」
「名誉ある死刑ですな」
　この場合はそうなるのだった。死刑と一口に言っても様々だ。しかしこの場合は安重根の名誉を守っている毅然とした処刑であったのだ。
「そのうえで併合をして」
「その後は人口が二倍になった」
　歴史的事実である。
「日本人は朝鮮人を法的には完全に同じに扱い」

「半島出身者の将校も大勢いたそうで」
「しかもあれでしたな」
こうしたことはかなり詳しい彼等であった。大韓帝国は知らなくとも。
「陸軍中将まで昇進した人物もいましたし」
「ええ」
「国立大学にも入ることができました」
この時代の日本では帝国大学と呼ばれていた。
「確かそのうちの一つソウル帝国大学では三分の一が半島出身者だったとか」
「ほう、三分の一ですか」
「そうです」
白人のジャーナリストが黒人のジャーナリストに対して答える。
「三分の一です」
「三分の一もいたのですか」
黒人のジャーナリストはこのことにかなり驚いているのだった。
「そんなに。またそれはえらく」
「植民地ではないような」
「ですから日本だったので」
説明していた彼がここでまた言う。
「それだけいたのです。学校の校長もいましたぞ」
「将校だけでなくですか」
「神父や警官も」
「むう、凄いですな」
「そこまで見事に同化しているとは」
「それで何故今だにそれを不快に思っているのでしょう、彼等は」
ここまで話してあらためて韓国大統領を見るのだった。
「厚遇されていたではありませんか」
「少なくとも欧州各国のそれとは比較になりません」
「ロシアなぞ」

ここで皆小声になる。当のロシアもここにいるからだ。
「その統治たるや鬼です」
「そうですな、あれは」
「この時代でよかったですな」
「全くです」
地球にあった頃のロシアの異民族統治の苛烈さはあまりにも有名であった。優しいヨシフおじさんだの寛容なるソ連だのロマノフの慈悲だの雷帝の涙だのプーチンの微笑みだのといった言葉はそのまま死を意味していた。これがロシアの統治だったのである。
「バルト三国やポーランドにしてみれば」
「旧コーカサスの国々にしろ」
彼等はこのことを今でもはっきりと覚えている。
「日本の統治を聞けば」
「天国でしょうな」
「それで何故なのでしょうか」
話が戻った。
「彼等はまだ日本にあれこれ言うのか」
「わからないのですが」
「結局あれなのでしょうな」
説明をしているジャーナリストがまた述べる。
「コンプレックスです」
「それですか」
「元々日本を自分達より下だと思っていましたから」
甚だ主観的な見方ではある。

## 第三十二部第三章　伝わる動きその八

「ですから。彼等に併合されたのが忌まわしくて仕方ないのでしょう」
「そうなのですか」
「当時は日本についていたにしろです」
感情的にかなり複雑と言えば複雑である。
「そうなります。しかもです」
「しかも？」
「日本と韓国を比較すると」
次に述べられるのはこのことだった。
「どちらが国力がありますか」
「日本です」
答えは即答であった。
「どう見ましても」
「こればかりは」
「そうですな」
彼が言いたいのもここであった。
「日本は韓国を国力において圧倒しています」
「はい」
「伊達に連合で六大国になっているわけではありません」
日米中露にトルコ、ブラジルを入れてだ。この六国、とりわけ日米中露の存在が連合設立からかなり大きいのである。政治や経済の場においても。
「韓国もそれなり以上に国力がありますがやはり」
「日本と比べましても」
「そういうことです」
やはり答えはこうであった。
「どう見ても日本に劣っていますので」

「劣等感を抱いていると」
「それはまた複雑な」
「そのうえです」
話はさらに続く。
「彼等は皇帝ではありませんので」
「権威まで日本の方が上だと」
「王ですらありません」
そもそも李氏朝鮮までは王であったのだが。
「それもまた彼等にとっては忌まわしいことなのです」
「国家元首の制度はそう簡単には変えられませんからな」
「しかもそれを一旦否定した国家は」
「そうです」
連合の暗黙のルールと言ってもいい。かつて王を否定した国家は王制にはなれないのだ。無論これは大統領制にも言える。だから連合では王制と共和制の国家がそれぞれ存在しているのである。
「韓国も然りですな」
「二十世紀後半に」
「ですからとりわけ日本の皇室に対して劣等感を抱いているのです」
「ふむ、わかりました」
「それでいつも日本の国家元首が出る席ではああして不機嫌な顔なのですね」
「そういうことです」
ここで謎が全てわかったのだった。
「だからこそああして」
「左様ですか」
「それで」
「しかしですね」
ここでジャーナリストの一人がまた言った。
「コンプレックスが実に強いですな」
「いや全く」

「その通りですね」
「日本は日本、韓国は韓国」
この世での定理の一つである。
「それでいいではありませんか。日本は韓国ではないのですから」
「ですがそうもいかないのでありまして」
事情は実に複雑なのだった。韓国にとってだけ。
「日本をあらゆる分野で超えたいといつも思っていますから」
「いつもですか」
「そうです」
これこそが韓国と韓国人のアイデンティティなのだった。
「何があっても何が起こっても日本を超えたいと」
「そう思って千年ですか」
「長いことです」
「しかしです」
ここで一つあることに気付く面々であった。
「確かに日本はかなりの力を持っていますが」
「はい」
「それはもう」
「しかし。それでも不得意の分野もあります」
得意不得意は人だけでなく国家にも存在する。得意なものばかりの完璧な万能選手なぞこの世には存在しないのだ。神ですらそれぞれを司るものがあるというのに。

## 第三十二部第三章　伝わる動きその九

「日本にもそれはあります」
「そうですな。それは確かに」
「スポーツで言うと円盤投げやバスケですな」
「しかし韓国といえば」
韓国の不思議な習性がまた語られる。
「日本の得意分野にばかり進出して」
「何でも日本と張り合おうとしますな」
「不得意分野に進出した方がいいのでは？」
合理的な意見も述べられる。普通はこう考えるものだ。
「産業にしろそうした方が」
「合理的な戦略だと思いますが」
「日本を打ち負かさないと意味がないと考えていますので」
これが韓国なのだった。
「ですから日本が弱かったり進出していない分野や場所には興味がないのです」
「不可思議ですな」
「全くです」
彼等はこう言うしかなかった。
「コンプレックスがそこまで高いというのは」
「かえって自分達を苦しめているだけのような気が」
「韓国は日本がないと生きていられません」
また一つ真理が語られる。
「日本に興味がなくなるということはないのです」
「まあそこまで日本に執着しているのならどうしようもありませんが」
「我々の口出しすることではありません」
ここで彼等は都合よく不介入の方針を採用するのだった。なお連

合においては内政干渉や不介入という原則は必要に応じて大国が忘れる場合もある。
「ですから我々は見ているだけです」
「あの大統領閣下も」
「そういうことですね。さて」
ここでタキシードを端整に着た初老の男が元首達の前に姿を現わした。
「いよいよですな」
「あれは日本の侍従長ですね」
「はい」
こうした存在も皇室及び王室ならではのことである。共和制の国家ではこうした侍従という役職は存在しない。宮廷というものがないからだ。
「それでは遂に」
「陛下が来られますな」
「連合でたった二人だけの皇帝」
また皇帝だと述べられる。
「そして一人だけの女帝ですな」
「女帝といえば」
またジャーナリストの一人が述べた。
「日本は過去何人も女帝がいますな」
「ええ、確かに」
「それこそ二十代は」
二度即位しておられる帝も過去におられたからである。こうした皇位の複雑さもまた日本の皇室の歴史の長さを物語るものであるのだ。
「おられますな」
「男系であっても」
「さて。その女帝陛下ですぞ」
「はい」

質素な色彩だが日本の礼服を丁寧に着こなした天皇陛下が部屋に来られた。そうして各国の元首達に対して会議の開催を告げる。これを苦々しい顔で聞いている元首達の何人かには気付いているのかいないのか表情には全く出すことはなかった。こうして会議が開催された。

会議は各国と中央政府の対話という形だった。中央政府側から出席しているのは首相であるアッチャラーンと何人かの閣僚達だけだった。その中には金や八条もいる。

「それではですね」

「ええ」

金が各国首脳達の言葉に応えている。

「この件は国防省と共同なのですね」

「少なくとも内政と連動しています」

金は質疑応答においてはっきりと述べる。首脳達と対する形だ。その後ろには中央政府の閣僚や要人達が並んで座っている。双方が対話しているのだ。

「それは国防省とも調整しています」

「左様ですか」

「それではですね」

「何でしょうか」

また首脳達に対して応える。

「サハラ国境への防衛ラインは内務省のお考えでもあるのですね」

「その通りです」

このこともまた認める金だった。

## 第三十二部第三章　伝わる動きその十

「そのつもりで行っています」
「ふむ、成程」
「それでは内相」
首脳達の何人かがまた金に対して問う。
「もう一つ御聞きしますが」
「ええ」
「内務省としてもあれだけの防衛ラインが必要だと認識されているのですね」
「はい、そうです」
疑いようのない言葉で返事をした。
「やはりこれだけの規模が必要です」
「果たしてそうでしょうか」
「これだけのものが。果たして」
彼等は首を傾げつつ述べる。
「難民対策ですね」
「そうですが」
「難民を保護しチェックする為にしろ」
「あまりにも堅固ではないですか？」
こう指摘するのだった。見れば彼等はその手にそれぞれ同じファイルを持っている。
「これでは完全に軍事用の防衛ラインです」
「しかもです」
彼等の指摘は続く。
「強大な軍を迎撃するような」
「そんなラインですが」
「やはり万が一の為です」
「万が一といいますと」

「あらゆるケースが想定されます」
金は落ち着いた声で述べていく。
「難民と称したテロリストの存在も」
「テロリスト」
テロリストと聞いて首脳達だけでなくジャーナリスト達も反応した。他にはネットで観ているネットユーザー達も思わず動きを止めてしまった。
「テロリストですか」
「そうです」
金は答える。
「そして他には海賊等も」
「そういえばサハラの海賊は」
ここでサハラに関する知識が出て来た。彼等も伊達に各国の代表ではない。サハラに関する知識もある程度以上備わっているのだ。
「かなり重武装でしたな」
「しかもです」
その知識が今述べられていく。
「戦い慣れしていますな」
「ええ、それもかなり」
「何しろサハラです」
こう口々に言う。
「戦闘に長けた海賊が多いでしょうな」
「連合のそれよりもか」
「比較にならないとのことです」
金は絶好のタイミングで答えた。
「その戦闘力は」
「それ程までですか」
「はい、我が連合の海賊ですが」
「彼等は何か」
「元軍人の海賊はごく少数です」

このことを述べた。
「そもそも我が連合は昔から軍人は少なかったのですかな」
「確かにそれはそうですな」
「ええ」
首脳達は金のその言葉にそれぞれの顔を見合わせて頷く。
「戦争がなかったですし」
「軍も志願制でしたし」
連合では一千年の間戦乱がなかった。だから軍人の地位も低かったのだ。数も必要とはされずその募集に際しては徴兵は一切なかったのである。これは今もであるが。
「海賊の出身といえば」
「まあ色々ですな」
「はい」
また顔を見合わせつつ言い合う。
「その辺りは」
「大体碌でもない連中ですが」
食べるものは満ちていて仕事はいざとなれば開拓地に行けば幾らでもあるのが連合だ。そうした社会で海賊をやるというのはそれだけで質のいい者達でないことがわかるというものだ。何しろ確信犯で犯罪行為を働くのである。これで質がいい筈がないのである。
「そうした連中に関して言えば」
「戦いは素人ですな」
「はい、その通りです」
金が言うのもここであった。

## 第三十二部第三章　伝わる動きその十一

「戦いに関しては素人に過ぎません」
「正規軍が来ればそれで大体退けていますな」
「装備も劣悪ですし」
「それもあります」
金の指摘は最早ただの内相の域を越えていた。この視野の広さもまた政治家としての金の持ち味の一つなのだ。だからこそ若くして中央政府の閣僚ともなっているのだ。
「彼等は旧式装備が限度です」
「その通りです」
「あとは商船を改造したものですな」
「それも大抵は質の悪い」
「それに対してサハラの海賊は」
ここまで話されたうえでサハラの海賊について言及される。
「我々の比ではありません」
「そうなのですか」
「まず彼等の多くは軍人出身です」
「そうですな」
「サハラならば」
首脳達はこのことをよく把握していた。サハラは戦乱に支配されてきた地域である。元軍人が多いのも至極当然のことであるのだ。
「戦いに敗れ行き場をなくした傭兵や」
「祖国を失った軍人が多いですな」
「そもそも徴兵制が殆どですな」
連合では考えられないことが次々と指摘される。
「元軍人なぞ徴兵制で幾らでもいます」
「彼等が難民になり生きるのに困れば」
「至極当然の流れというわけですな」

「確かに」
答えはここにあった。
「そうした海賊達の流入も防ぐ目的ですか」
「それだけではありません」
金はさらに言葉を続ける。
「かつてマウリアとの境にいたあの解放軍ですが」
「彼等ですか」
「彼等の如き存在を連合とサハラの境に置けば大きな災厄となります」
こう首脳達に述べるのだった。
「だからこそです。境にそうした防衛ラインを設けることにより」
「ああした存在を排除するのですか」
「その通りです」
軍が途方もない治安維持組織であるのはこの時代でも同じである。
「だからこそです。如何でしょうか」
「そうですな。確かに」
「それでいいかと」
「しかしです」
だがここでさらに突っ込みを入れる首脳もいた。
「内相」
「はい」
「費用についてですが」
次に話されるのはこのことに関してだった。政治においてもコストが重視される。費用は人体で言うならば血液である。血液なくしては生きることができない。
「あまりにもかかり過ぎでは？」
「確かに」
「これは」
「連合軍はです」
連合軍全体に関しても話される。

「確かに巨大な軍ですがそれでも」
「これだけの費用が存在するのですか？」
「しかもです」
彼等は口々に金に対して問う。
「連合軍はただでさえ人口増加に伴う戦力の増強を計っています」
「それもあるというのにこれは」
「大丈夫なのですか？」
「それに関しましては」
ここで中央政府側から手を挙げる男がいた。
「私がお話して宜しいでしょうか」
「貴方がですか」
「そうです」
手を挙げたのは八条だった。彼は静かにそこに座っていた。
「国防に関することですね」
「はい、確かに」
「その通りです。しかも」
首脳達も自分達が何を聞いているのかよくわかっていた。
「これは専門的な話です」
「子ストの問題なのですか」
「それでは私になります」
静かな口調でこう話す八条だった。

## 第三十二部第三章　伝わる動きその十二

「だからこそです。私がお話して宜しいでしょうか」
「ええ、是非」
「御願いします」
首脳達もそれに応える。
「それでは」
「はい、どうぞ」
「御願いします」
こうして彼等は八条の話を聞くことになった。八条はそれを受けて金と代わって質疑応答の場に立った。そうしてそこで話をはじめるのであった。
「まずはですね」
「ええ」
「何よりもコストです」
やはりこのことを問う首脳達であった。
「果たしてこれだけかかるのか」
「そして費用は何処から調達されるのですか？」
「まずはよく御覧下さい」
八条はまずはこう首脳達に対して述べた。
「この防衛ラインを」
「これをですか」
「手持ちのパンフレットがありますね」
「はい」
そのことに頷く首脳達だった。
「ここに確かに」
「これですか」
「そう、それです」
ここで言う八条だった。

「これだけのものを築くとなればですね」
「これだけのコストがかかるというのですか」
「これでも七割程度に抑えました」
「コストをですか」
「その通りです」
はっきりとした声で返す八条だった。
「これだけのものを築くとなれば相当のものがかかるのは確かです」
「ええ」
「本来ならばです」
彼はさらに言う。
「より多くのコストがかかりました」
「三割増しですか」
「三割ですか」
首脳達の考えはここに注目した。
「それだけのものがかかるとなると」
「どうも」
「ですがそれを抑えたのです」
このことをはっきりと話す八条だった。
「それはデータを参照されればわかりますが」
「データとは」
「はい、これです」
言って後ろにあるモニターのスイッチを入れる。するとそこに立体映像で様々な資料が映し出された。少し前のナンバーの雑誌でのデータまで含まれている。
「例えばこのビーム砲座ですが」
「はい」
「これは防衛ラインに多く設けています」
「ああ、これは見たことがあります」
「私もです」
軍事知識のある首脳達がこのデータを見て述べる。

「この砲座は各国にありますな」
「対空砲座ですな」
「はい、その通りです」
彼等の言葉に答える。
「これは敵の艦載機を対象として各惑星及び衛星に設けている砲座です」
「ふむ、それをサハラとの境にですか」
「しかしこれがどうかしたのですか？」
「この砲座を大量に製造しました」
彼はこのことを首脳達に語った。
「これまでよりも」
「集中製造ですか」
「そうです。それでコストを軽減しました」
「成程、それですか」
「それによって」
「少しずつ造るのよりも大量製造の方がコストは安くつきます」
これは製造においての常識である。彼は兵器の製造においてもこれを活用したのである。なお彼がこれを使ったのは今回がはじめてではない。
「だからこそです」
「だからこそですか」
「はい。三割減らすことができました」
彼はまた言った。

## 第三十二部第三章　伝わる動きその十三

「他にも色々と工夫をしまして」
「全体のコストを減らしたと」
「いつも通りですな」
首脳の一人がここで楽しそうに語った。
「コストを減らして的確にですか」
「そうです」
八条はその首脳の問いに対して答えた。
「それを念頭に置きです」
「しかしです」
別の首脳がここまで話を聞いて質問してきた。
「果たしてそれは成功していますか」
「といいますと」
「コスト削減自体はいいことです」
政治家としてこのことを認識しているのは当然だった。費用がかかってはそれだけ国庫を圧迫する。ましてや出費だけで収入のない軍事費はそれが特に問題になる。
「ですがだからといって質が落ちればお話になりません」
「そうですな。それは」
「まさにその通りです」
彼の言葉に幾つかの首脳達も応えて頷く。
「安くついても有事で役に立たなければ」
「何の意味もありません」
「長官」
彼等はあらためて八条に対して問う。
「その辺りはどうなのでしょうか」
「質も保障できますか？」
「無論です」

ここで八条はあらたなデータを出してきた。
「この配置を御覧下さい」
「むっ、これは」
「それは」
またモニターに出て来た。それは防衛ラインの地域そのものの配置宙図だった。首脳達は今度はそれを見たのであった。
「如何でしょうか」
「むう」
「これはまた」
見れば実に重厚長大な防衛ラインである。互いに護り合うよう、連携し合うように造られており艦隊配備も補給ラインも確かだ。幾重にも複雑に重ねられ尚且つ柔軟である。一見しただけで尋常なものではないことがわかる。それだけの密度を持つものであった。
「これならばまず」
「大丈夫でしょうか」
「例え二千個の艦隊が来てもです」
なおサハラ全土合わせても二千個も艦隊はない。
「この防衛ラインは破ることはできません」
「左様ですか」
「それにしても」
首脳達はそれを見てさらに言う。
「万全に万全を期していますな」
「整備工廠や艦隊の港だけでなく」
「補給基地までありますか」
「ここまであらゆる分野に充実しているとは」
「これはまた」
あらためて感服する首脳達だった。
「あのアタチュルク要塞群にも対抗できますな」
「全くです」
「護りは万全であるべきです」

八条ははっきりと前にいる彼等に対して述べた。
「だからこそ。これだけのものを」
「わかりました」
「そういうことですな」
遂に首脳達の多くが彼の言葉に頷いた。
「では長官」
「はい」
「まずは期待しております」
「こん防衛ラインに施設に関しましては」
「有り難うございます」
謙虚な態度で彼等の言葉を受ける八条だった。
「では。砕骨粉身して向かいます」
「そうですな。それでは」
「予算はこれでいいとしまして」
「計画もまた」
双方について語られる。
「まずはよしとしましょう」
「皆さん、では採決を」
採決に入る。その結果は八条にとって満足のいくものであった。
連合はこれでまた護りを固めることが可能になったのだった。彼等にとっては実に大きなことであった。

## 第三十二部第三章　伝わる動きその十四

会議を終えた八条はホテルの一室で国防省のスタッフ達と会議後の打ち合わせに入っていた。話すのは先の会議についての反省点もあった。

「まずは満足すべきでしょうか」

「そうですね」

スタッフ達はまずはこう話していた。

「我々のプランはほぼ完全に認められましたし」

「これで無事防衛ラインを築くことができますね」

「エウロパは既に備えがあります」

八条は彼等の話を聞きながら述べた。

「そして今度はサハラです」

「エウロパは長い間我等と対立関係にありました」

このことは連合においては常に念頭にあることだった。

「ですからそれだけのものを築いたのですが」

「サハラは。難民対策ですね」

「そうです。ですが」

「ですが？」

「これは後に備えてのことでもあります」

こうスタッフ達に話す八条であった。ホテルの部屋は明るく彼等はその光の中で話をしている。内部の話であっても決して密談という雰囲気ではなかった。

「後のといいますと」

「やはり」

「そうです。このままいけばサハラは」

語るその声が鋭く真剣なものになる。

「早いうちに統一されるでしょう」

「サハラ統一ですか」

スタッフ達はこのことを脳裏で思った。彼の言葉で。
「しかしそれを聞いても」
「やはりどうも」
「ピンときません」
「サハラの統一とは」
「それも無理はありません」
八条もそれは肯定した。
「一つになったことがないのですから」
「ええ、そのせいでどうも」
「サハラの統一と言われましても」
「私達には」
八条に応えて次々と述べていく。
「実感がわきません、どうしても」
「申し訳ありませんが」
「むしろです」
そしてさらに言うのであった。
「戦乱が続き海賊が出る方が可能性があるように思えます」
「私もです」
「また私も」
彼等はまたしても口々に言う。
「サハラの海賊は確かに危険ですし」
「それを考慮すればあれだけの防衛ラインも意味があります」
「過剰とは思いますが」
「しかしです」
彼等が一通り述べたところで八条は再び口を開いた。まずは彼等のそれぞれの意見を述べてもらいそれを聞いたうえで話すのである。
「統一の気運があるのは確実です」
「確実ですか」
「今三国になっています」
「はい」

この情勢は当然ここにいる全ての者が把握していた。
「ハサン、そして」
「オムダーマンとティムールですね」
「思えば急なことでした」
彼等にとって見ても予想し得ないスピードでの進展だったのだ。
連合はこの間に連合軍設立、解放軍殲滅、ステラ事件、エウロパ戦争、そして講和という千年の歴史の中でもかってないダイナニズムを経験したがサハラのそれは連合をも凌駕するものであったのだ。
「西方の一国であったオムダーマンが瞬く間に西方と南方を統一し」
「北方はあらたに生まれたティムールにより一つになりました」
「本当に驚くべき速さでした」
舌を巻かんばかりの調子である。
「気付けば三国です」
「特にオムダーマンとティムールですな」
「そう、その二国です」
八条もこの二国を指摘する。
「彼等はそれぞれ英雄を得て雄飛しました」
「アッディーン副大統領とシャイターン主席」
「彼等ですね」
「そうです。彼等がいなければ」
八条は言う。

## 第三十二部第三章　伝わる動きその十五

「サハラの歴史はここまで動かなかったでしょう」
「確かに」
「人が動かした歴史ですね」
「昔の中国の言葉です」
ふとした感じで言葉を出してきた八条である。
「天の時」
まずはこれであった。
「地の利」
続いてこれであった。
「人の和。この三つは」
「その三つは」
「歴史を動かす要因なのです」
こう周りのスタッフ達に告げた。
「この三つこそが」
「それはよく言われていますね」
「この場合は天の時でしょうか」
「はい、そうです」
スタッフの一人の言葉に答える八条だった。
「その通りです。彼等はまさにそれによりあそこにまで至ったのです」
「そうですか。それで」
「あそこにまで至ったと」
「これまでにも何度か統一目前に至ったことがあります」
サハラの長い戦乱の歴史ではそれだけ軍事的天才や英雄を数多く生み出してきている。その都度統一が叫ばれサハラは盛り上がってきたのである。
「ですが」

「そうはなりませんでした」
「常に」
スタッフ達は述べる。
「サハラは一つになれず」
「こういう言葉もありましたな」
「その通りです」
この言葉もまた認める八条だった。
「暗殺、内紛、そしてエウロパの侵攻」
「はい」
「そうしたものによりサハラは常に」
「統一の夢を絶たれてきました」
これもまたサハラの歴史であったのだ。
「結果としてそれにより今に至ります」
「分裂と混乱」
「戦乱と破壊」
サハラの歴史を彩る四色の絵の具である。ここに略奪と殺戮が加わることも珍しくはなかった。憎悪もまたサハラを支配してきたのである。
「それが絶えたことはありません」
「常に何処かで戦乱がありました」
それだけ血が流れたということでもある。
「百年前もそうでしたな」
「あの時ですね」
「そうです」
スタッフの一人が八条の問いに応えた。
「あと一歩のところでエウロパ軍が侵攻し全ては水泡に帰しました」
「惜しいことでした」
八条はここで少し無念を言葉に含ませた。
「あれは。サハラにとっては」
「確かに」

「本当にあと一歩でしたからな」
「あれはエウロパにとっても必然でした」
八条はここでエウロパも肯定した。
「彼等も新たな場所を手に入れなければ生きられなかったのですから」
「別にどうなっても構いませんが、エウロパなぞ」
「全くです」
スタッフのうち数人が連合の者として率直な言葉を述べた。これは主観そのものであったが連合の者の言葉としては至極当然なものであった。
「そのまま困窮しようが餓えようが」
「我々にとってはどうでもいいことですから」
「むしろです」
さらに意地悪い言葉が出される。
「その方が好都合です」
「エウロパの苦難は我等にとって幸福です」
他国の不幸は自国にとっては幸福である、この現実もまたこの時代においても健在である。サハラではそれが侵攻に直結するし連合では外交や通称の交渉において付け込まれる隙となる。武力を受けないまでもやはり攻撃を受ける事態に直結し易いものなのである。
「敵が弱ればそれだけ楽になります」
「それを。よくもまあ」
彼等はその目に嫌悪感を露わにさせていた。

## 第三十二部第三章　伝わる動きその十六

「生き残るとは」
「あのままサハラを統一させてくれればよかったものを」
「しかしあのまま統一すればしたで」
八条は洞察する目でここでまた述べた。
「どうなっていたかわかりません」
「といいますと」
「一体？」
「サハラもまた敵になる可能性があるということです」
「サハラもまたですか」
「そうです」
冷静に述べる八条であった。
「それは今後についても言えます」
「今後もですか」
「そうです。今我々は互いに無関心ですね」
「はい」
スタッフ達は八条の言葉に頷く。
「おおむねそうです」
「正直なところ権益さえ守られれば」
また連合の者としての言葉が出て来た。
「それで構いません」
「その通りですね」
八条もまた彼等の言葉を認めて頷いてみせた。
「我々にとってサハラはそれ程興味のある場所ではありません」
「はい、そうです」
「資源があることにはあるのですが」
これは事実だった。サハラの星系の多く、とりわけ南方には様々な資源が膨大な量で眠っているとされている。それは総数でマウリ

アとエウロパのそれを合わせたよりも遥かに多いとさえ噂されている。戦乱の影響でそれが完全に発掘されていないだけである。
「しかしそれはどれも連合にあるものですし」
「しかもです」１０
彼等の言葉は続く。
「サハラの惑星は居住可能な惑星はどれもよいものではありません」
「砂の惑星ばかりです」
残念そうに語る。
「農地の開墾及び惑星の開発、開拓も平和になれば大いにできるでしょうが」
「それでも今は」
「不可能な話です」
「例え開拓したとしてもです」
言葉がさらに続けられる。
「やはり我々の水準には及びません」
「貧しい地域です」
「随分と厳しい御言葉ですね」
八条はスタッフ達の言葉をここまで聞いて述べた。
「貧しいですか」
「これは差別に聞こえるかも知れませんが」
今貧しいと言ったスタッフが咳払いをしてからまた述べた。
「しかしそれは事実だと思います」
「事実ですか」
「あくまで我が連合と比べた場合です」
誤解を解くようにして述べた言葉だった。
「やはりサハラは貧しいです」
「例え統一したとしてもです」
彼とはまた別のスタッフが述べた。
「やはりその水準は我等に及ぶものにはならないでしょう」
「ですから権益さえ交渉で手に入れられれば」

「サハラには関心はありません」
国防省でもこの見解は同じであった。
「守りさえしっかりとしていれば」
「それで宜しいですね」
「私もです」
また八条が口を開いた。
「サハラはサハラです」
「やはりそうですね」
「そう、そして連合は連合です」
表裏一体の返答であった。
「こちらから特に何かする必要もなく」
「彼等が軽挙妄動に走らないようにするだけですか」
「あくまで我々と彼等は別世界です」
そしてこうも言った。

## 第三十二部第三章　伝わる動きその十七

「ただ。壁さえ置いておけばいいと考えます」
「それであの防衛ラインですか」
「以前にも延べさせて頂きましたがあれは万里の長城です」
「長城ですか」
「はい、そうです」
はっきりとした声で答える。中国が地球にあった頃に二〇〇〇年近くに渡って築いてきた何千キロにも連なる長大な壁である。彼等はこれで北方の異民族を防ぎそれと共に境としてきたのである。万里の長城から北は中国ではない、中国人の国の意識ともなっていたのだ。
「あれは長城です。つまり」
「連合とサハラを避ける境」
「そうですね」
「その通りです。だからこそ」
八条は言う。
「あれを築くのです」
「つまりですね」
スタッフの一人がそれを聞いて述べた。
「我々は中国、そして彼等は」
「騎馬民族ですか」
「例えて言えばそうなります」
八条はまた彼等の言葉を肯定してみせた。
「我々は開拓と発展にのみ専念してきました」
「はい」
「その通りです」
スタッフ達も彼の言葉に頷く。
「そもそもこの国防省ができたのも近年ですし」

「千年の間そうでした」
「千年は長い歳月です」
連合の時間の概念ではそうだ。
「その間そうでしたから。ですが」
「ですが？」
「この千年はサハラについても言えます」
「サハラについてもですか」
「そうです」
またスタッフ達に述べた。
「彼等は千年の間戦乱の中に包まれてきました」
「千年の戦乱ですか」
「その中で彼等は鍛え上げられてきました」
八条は言う。
「千年の間ですか」
「我々は経済活動や文化、芸術、科学、技術。そういったものを大いに発展させてきましたが」
平和の中で、である。
「しかし彼等は戦争技術を発展させてきました」
「戦争技術をですか」
「そうです。戦争文化と言うべきでしょうか」
「戦争文化ですか」
「変わった言葉ですね」
スタッフ達はこの言葉に目で首を傾げさせた。実際に首は動かしてはいない。
「その中には様々なものがあります」
「兵器の技術だけではありませんか」
「戦略及び戦術もその中に入ります」
「それ等も」
「そして補給も整備もです。我々は整備補給にかなりの注意を払っていますが」

八条は軍を動かす際にまず補給を重視している。その為後方支援に相当な力を割いている。それが連合軍の強さにもなっている。
「オムダーマン軍もティムール軍もそれはかなりのものです」
「かなりのですか」
「我々に匹敵するものがあるでしょう」
八条のこれは決して過大評価ではなかった。
「間違いなく」
「だからこそ注意を払うべきですか」
「そう考えます」
またスタッフ達に述べた。
「彼等が万が一牙を剥いてきた場合に対して」
「備えておくと」
「何が起こってもいいように」
「わかりました」
ここでスタッフ達は頷いた。
「何があるかわかりませんからね」
「政治の世界というものは」
「政治の解決の一手段として戦争があります」
八条は言った。

## 第三十二部第三章　伝わる動きその十八

「だからこそです」
「用心してですね」
「こちらからは何もしない場合でも相手に何らかの不都合があれば」
「攻めて来ますか」
「備えがなければ余計にです」
「備えがなければですか」
「目の前に壁があればそれで人は動きを止めます」
逆に言えば壁がなければそのまま突き進む。そういうことである。
人間というものは前に何があるかによってその行動を大きく変える生き物なのだ。
「だからこそ。エウロパに対するのと同じです」
「エウロパとですか」
「今なら充分に間に合います」
八条は時間についても述べた。
「おそらくサハラの戦争はまだ続くでしょうから」
「統一に向かっていてもですか」
「そうです」
また答える八条だった。
「統一までにまだかなりのエネルギーが必要ですから」
「それが戦争を起こしていくというのですね」
「統一に向けて」
「その間にということです」
「まだ戦争がありますか」
「間違いなく」
これも八条の想定の中にあった。
「エウロパ統一まで。数多くの戦いがあるでしょう」
「それでは長官」

またスタッフの一人が彼に問うてきた。
「また御聞きしたいのですが」
「何についてでしょうか」
「その勝者です」
最終的な答えを問うてきたのである。
「その最後の勝者は。誰でしょうか」
「最後のですか」
「そうです。誰が統一するか」
まさに核心であった。
「それは誰だと思いますか」
「どの国で」
「そして誰がサハラの皇帝となるのか」
他のスタッフ達も彼に尋ねてきた。
「それが究極の問題ですが」
「どう思われますか」
「今は余談を許しません」
八条の最初の返答は実に慎重なものであった。
「今三国の力は拮抗しています」
「拮抗ですか」
「まずハサンは連敗により衰えたりとはいえまだかなりの力があります」
最初に述べたのはハサンについてであった。
「底力はまだあります」
「まだですか」
「それを発揮しここで粘ることができればハサンが最後の勝利者になるでしょう」
「ではハサンが統一するのですか」
「あのサハラを」
ここでスタッフの多くは少し違和感を感じたのであった。
「ですがそれならば」

「既に行われていたかと」
「ハサンといえばです」
ハサンのこれまでの国家戦略について述べられていく。ハサンもまた古い国であり連合とは中央政府とも各国とも縁の深い国である。だからこそよく知ってはいるのだ。
「東方を統一していればそれでよく」
「動くイメージはありませんが」
「それでも統一ですか」
「おそらくハサンはあまりそこまでは考えていない筈です」
八条本人もこう読んでいるのだった。
「間違いなく。統一する気はかなり希薄です」
「やはりそうですか」
「それではハサンが勝ち残る。いや、この場合は」
言葉が訂正される。
「オムダーマン及びティムールを退けた場合は」
「彼等に圧倒するものを手に入れたうえでの三国体制ですか」
「敗れた両国がどうなるかはわかりませんが」
ここで両国について見ることも忘れてはいなかった。
「彼等とりわけオムダーマンは急激に伸張しましたので」
「まだ各地で反発があるかも知れませんね」
「特に南方ですか」
サハラ南方、かつては小国が乱立しオムダーマンにより統一された地域である。やはりこれもまたアッディーンの功績となっている。

# 第三十二部第三章　伝わる動きその十九

「あの地域は元々宙形が複雑で小国も乱立していましたし」
「それぞれの地域感情が強いです」
「反乱や暴動が起こる可能性は高いかと」
「そしてティムールもまた」
次に彼等はティムールについて言及した。
「急激に北方を統一しましたので」
「やはり急つなぎの印象は拭えません」
「ですからやはり敗れれば」
この予想が述べられていく。
「瓦解する可能性はあります」
「地域的には」
「その可能性はどちらも否定できません」
八条はここでもまた認めた。認めたものの対象こそ異なるが。
「オムダーマンもティムールも。やはり急激に勢力を伸張させましたので」
「そう、それです」
「ではやはり敗北は彼等にとってはあってはならないことですね」
「その通りです」
はっきりと言う八条であった。
「勝ち続けなければなりません。少なくともこの戦争の間は」
「そういうことですね」
「ではハサンが生き残ればまた小国乱立の可能性もありますか」
「全ては元の木阿弥と」
儚い言葉が出て来た。
「そうなるわけですか」
「最悪の場合は」
「あくまで最悪の場合です」

これは断るのだった。
「可能性はあまりありません」
「ありませんか」
「今オムダーマンもティムールも各地域をその統治形式に組み入れています」
これは当然の行政処置であった。占領したその地域や国家を自国のそれに組み入れていくことは統一を目指すサハラ各国にとっては至極当たり前のことなのだ。
「それが進んでいますのでやはり」
「可能性は少ないと」
「かなり少ないと思います」
断定に近い言葉であった。
「このケースに関しましては」
「わかりました。それでは」
「やはりこの場合は」
スタッフ達の分析が続けられていく。
「ではハサンが生き残り最も可能性があるのは」
「三国鼎立ですか」
「ハサンが圧倒的に強い形での」
「そのまま当分動くことはないでしょう」
八条は己の頭の中でそうなった場合のシュミレーションを行いつつスタッフ達に述べた。
「少なくとも何十年かは」
「そうですか」
「では当分大きな動きはサハラではありませんね」
スタッフ達は彼のその言葉に頷くのだった。
「その場合は我々も何かと権益を増やすことができそうですが」
「それはあくまでそうなった場合ですね」
「それではです」
話がさらに続けられる。

「ティムールが生き残った場合は」
「危険ですね」
八条はすぐにこう述べた。
「その場合は危険です」
「連合にとってという意味ですね」
「はい。とりわけエウロパにとっては危険になるでしょう」
「エウロパにとって。ですか」
「シャイターン主席は謀略家です」
このことは連合においても常識の話であった。
「そしてかなりの野心家でもあります」
「しかも非常に優れた人物ですね」
「英傑と言ってもいいかと」
一見相反するような言葉が三つ続けて出された。
「野心家で謀略家でもあり稀代の英傑でもある」
「確かに危険です」
「統一して野心が留まればいいですが」
「彼は非常に聡明でもあります」
やはり八条は相手を冷静にかつ的確に見抜いていた。そもそも聡明でなければ独裁者にはなれない。ヒトラー然りスターリン然りだ。独裁者には英雄の風格があるのだから。
「ですから戦力を見誤ることは決してありません」
「連合はサハラに比して圧倒していますね」
「はい」
厳然たる、覆せない現実であった。

## 第三十二部第三章　伝わる動きその二十

「ですから戦力を見誤ることは決してありません」
「連合はサハラに比して圧倒していますね」
「はい」
厳然たる、覆せない現実であった。
「では我々に目を向けるよりも」
「やはりエウロパにですか」
「攻める必要もないのです」
八条はまた言った。
「敵を見つけることができれば」
「できれば」
「国民の目を彼等に向けることができます」
かなり古典的な政治的手法がここで述べられた。
「そしてそれを国家統合の方法とするのです」
「我々もそうですね」
「エウロパに対して」
そしてそれは容易に国家単位、市民一人一人の呪縛ともなる。今の連合もまた同じである。
「やはり彼等は敵です」
「おそらくこれは変わることがないでしょう」
「そう」
結論は何時でも同じであった。
「彼等が消えるか我等が消えるか」
「その時まで」
「彼等に関してはです」
八条の言葉もいつもより冷徹なものであった。冷徹な言葉を口にすることは非常に少ないことでも有名な彼にしては珍しいことにだ。
「既に備えは幾重にもしていますが」

「そうですね。まあそれに関しましては」
「誰も反対しませんでした」
「それも当然ですが」
何故それが当然なのかは言うまでもなかった。彼等、つまりエウロパが敵だからだ。完全に敵だと認識して戦略を立てているのである。
「どんな手段を講じても」
「防ぐ必要がありますので」
「国力差がどれだけ開いていてもです」
八条の言葉はここで冷徹なものであった。
「油断はなりません」
「明確な敵意を持っているからですね」
「その通りです」
答えはここにあった。
「しかもお互いに」
「こちらは攻め込みはしませんが」
彼等にとっては実際のところエウロパの領土はさしてどころか全く興味のないものなのだ。しかも一千億も不穏分子を抱え込むつもりもないのである。
「それでもいるだけで」
「警戒すべき相手であります」
「そういうことです。サハラは」
「いざという時の為」
「それですね」
「そうです」
つまりは基本的にはお互い不干渉であり中立であり続けているのである。八条にしろ彼が統括する国防省にしろあくまで有事に備えての政策なのだ。
「備えあればというものです」
「しかしサハラに関してましては」

「全く違いますね」
「何かあることが最初から充分に考えられます」
つまり火種ということである。
「ですから既にあそこまでの備えをしているのです」
「まず賠償金を請求しておき」
これもその一環なのだ。それにより相手の経済力及び財政に対して負担をかける。そのうえでこちらの国庫も潤うのだから一石二鳥である。
「そのうえで非武装地帯を置く」
「これで二重ですね」
「ですがそれは外殻に過ぎません」
まだあるのが連合、そして八条の考え出した備えであるのだ。幾重にも護りを築いておく、彼は実に慎重な男でありそれが見事に反映されていた。
「三段階目もですね」
「ここからが肝心ですが」
「アタチュルク要塞群です」
八条自身が告げた。
「これを破ることは容易ではないでしょう」
「おそらくエウロパ全軍を以ってしても」
「相当の犠牲を払うでしょう」
「それを考慮してのことです」
軍事的というよりは多分に政治的な判断と言えた。何故ならこれは国家戦略の一環であるからだ。つまり彼は政治家として考えて計画しているのだ。

## 第三十二部第三章　伝わる動きその二十一

「要塞群を陥落させたとしても」
「その軍が壊滅しては何の意味もありませんからな」
「そうです。しかも」
彼の徹底さは続く。
「マラッカ回廊もありますし」
「あそこに中継基地を置いたのも正解ですね」
「おかげで本土と要塞群のつながりがより深まりました」
「それも考えてのことです」
やはりここでも政治的に深い考慮が見られた。
「そして最後は」
「ガンタース要塞群」
「これが最後にあるのがやはり心強いです」
「連合最強最大の要塞」
胸を張って自負して言える言葉であった。
「果たしてここまで辿り着けるか」
「しかも破ることができるか」
「そう彼等に思わせる為です」
結論としては心理的な圧迫も狙っているということである。政治においては相手、それが国家であっても組織であっても個人であってもそれを与えるということは非常に大きい。例を挙げれば戦争において相手国の国民がその主権者であればその国民に何らかの形で心理的圧迫を加える。そうすれば彼等は戦意を失い白旗を掲げることも考慮する。そうさせることを狙うのも可能なのだ。
「だからこそです」
「そういうことですね」
「この場合もまた」
「エウロパ軍は我々が憎くとも迂闊には動けません」

動かせない、八条の狙いはここにもあった。
「そういうことです」
「左様ですね。そういえばです」
「そういえば？」
「エウロパの総統選挙ですが」
話が変わってきた。
「動きがあったようです」
「動きといえば」
八条は既に彼の耳に入っていることを口にしてきた。
「確か中央政府の外相が総統選挙に立候補するそうですね」
「はい、カミュ外相ですね」
「はい。外相兼内相ですね」
「その通りです」
つまり役職を兼任しているのだ。このこともまた連合内部において広く知られるようになっていたのだ。情報が流れるのは光よりも早い。一旦それが知れ渡ったのならば。
「改革派として立候補するそうです」
「それではないのですか？」
「もう一つ動きがありました」
述べるそのスタッフの目が光る。
「ここで」
「それは一体」
「はい。保守派ですが」
「彼等ですか」
今まで半ば忘れられていた存在である。
「むっ、そういえば彼等は」
「今までは」
ここで他のスタッフ達も言ってきた。
「これといった動きを見せていませんでしたね」
「少なくともこの総統選挙には」

「しかしですな」
一旦誰かが口を開くと後は一気であった。彼等は口々に言ってきた。
「保守派が総統候補を出さないというのも」
「思えば奇妙なことです」
「二つの勢力があれば」
実に政治的な話になっていた。流石は政治家及び官僚である。こうした世界のことは熟知していた。そうでなければどちらの世界でも生きられない。政治家は言うまでもなく彼等と関わる官僚もまたである。この時代の連合では両者はかなり区別化されているにしろだ。
「それぞれの勢力から立候補者を出す」
「それが常道ですからな」
「しかし保守派には今までその動きがなかった」
「はい」
あらためてこのことが述べられる。
「思えばおかしなことでした」
「しかしここに来てですか」
「そうです」
最初に語ったスタッフがまた言葉を出してきた。
「動きがありました」
「それではです」
「誰なのですか？」
次の話は人に関するものであった。

## 第三十二部第三章　伝わる動きその二十二

「誰が立候補者として立てられるのか」
「それが問題です」
「ですが」
ここで連合の者達もよく知る今のエウロパ保守派のネックが指摘された。
「今の彼等はこれといってリーダーがいません」
「その通りです」
改革派と比べてそうなのである。
「少なくとも今のエウロパにとっての国難に対するには」
「どうなのかといいますと」
「人材不足です」
八条はエウロパ保守派をこう看破した。
「今のエウロパにとっての国難に対しては」
「そういうことですね、やはり」
「どの人材も帯に短し襷に長しです」
日本の古い諺であった。
「どうしてもそうなります」
「その通りです。しかしです」
「しかし？」
「それでも候補者を出すことはできます」
「人材がいなくともですか」
「そうです」
八条は深い思索と共に言葉を述べていく。
「人材はいなければ」
「いなければ？」
「見つければいいのです」
これが彼の結論であった。

「スカウトすればいいのです」
「スカウトですか」
「そうです。よくある話です」
冷静に例え話をしてみせてきた。
「例えばです」
「例えば？」
「スラッガーがいないならばどうされますか」
「育てます」
スタッフの一人がまず答えた。これは野球においての例えであった。連合は野球が盛んなのでこう例えると確かにわかりやすいものがあった。
「ドラフトで発掘した人材を育てます」
「育てますか。そうですね」
「成功するかどうかわかりませんが」
それで上手くいくかどうかわからないのが育成の難しさである。野球においてもこれは同じでだからこそ理想のチーム造りは難しいのだ。
「そうします」
「それがオーソドックスですね」
「はい」
「しかしです」
だが八条はここでまた言うのであった。
「それが間に合わない場合は」
「危急を要する場合ですか」
「状況はゆっくりと待てる場合ばかりとは限りません」
八条は野球の監督、いやフロントの立場になって考えていた。これは選手も監督も言うならば軍隊の制服組に似た立場であるからである。フロントが背広組なのだ。
「すぐに結果を出さなければならない場合は」
「その場合はより簡単です」

「私もそう思います」
複数のスタッフがここで述べてきた。
「助っ人を呼ぶことです」
「しかも実績のある助っ人をです」
「それです」
それだと言ってみせた八条であった。
「それが一番ですね」
「よくあるのは引き抜きですが」
「フリーエージェントにしろ」
「はい」
もっともフリーエージェントは代わりに代償戦力を求められるから交渉の巧さが要求される。これで有望な若手を取られて後で困るという話は実に多い。
「ですが他のプロ組織から助っ人を呼ぶことは」
「迅速かつ的確で」
「よく見られることだと思いますが」
「それです」
八条が今言っていることがまさにこれであった。
「助っ人を呼ぶことです。やはり」
「それですか」
「確かにこれは野球におけるお話ですが」
この前置きも確かに語る。

## 第三十二部第三章　伝わる動きその二十三

「ですが」
「ですが」
「政治にもある程度以上応用できるものであります」
「ああ、成程」
ここでスタッフの一人が納得した顔で頷いた。
「そういうことですね」
「はい、そうです」
八条は頷いたその部下に対して言葉を返した。
「そういうことになります」
「そうですか。やはり」
「！？それは一体」
「何なのですかな」
まだ話がよくわかっていない他のスタッフ達はここでその理解していると思われるスタッフに対して問うのであった。理解しているであろう人間に問うのは当然のことだ。
「助っ人とは」
「この場合は」
「ですから。保守派以外から人材をスカウトしてくるのです」
彼が言うのはこうであった。
「そして保守派に入れて総統候補とするのです」
「ああ、それなら話がわかります」
「そういうことですか」
元々政治について理解しなければならない官僚である彼等ならばすぐにわかることだった。
「普通の選挙と同じですね」
「人気、実力がある人物に所属政党の人物として選挙に出てもらう」
「連合でもまたよくあることです」

「その通りです。今回もです」
このスタッフがまた述べた。
「彼等も同じことです」
「そういうことですか」
「自分達のリーダーを呼びますか」
「では」
わかったところで話がさらに動いた。
「その人材は誰でしょうか」
「そう、問題はそれです」
「保守派からの総統候補は」
「誰なのでしょうか」
「おそらくは」
八条は答えが出る前に予測を立ててきた。
「彼ですね」
「彼！？」
「彼と言いますと」
「エウロパの英雄の一人です」
語るその目が全てを見透かしたような深い知性に輝いていた。深い青の知性である。
「その人物は」
「エウロパの英雄」
「それは一体」
「ウォルフガング＝フォン＝モンサルヴァート」
ここでこの名前を出した。
「彼ですね」
「どうやらそのようです」
途中沈黙を守り周りのスタッフの話を聞くだけだったそのスタッフが述べてきた。
「あのエウロパ元帥が出るようにです」
「そういえば彼は確か」

他のスタッフ達がここで言った。
「今はエウロパ宇宙艦隊司令長官でしたな」
「ローズ司令と交代で」
「統帥本部長から職務替えとなった筈です」
「その彼がですか」
「まだはっきりとわかりませんがそうした情報が出ています」
そのスタッフはまた言ってきた。
「しかしこれは」
「おそらく事実でしょう」
八条はまた深い青の目になっていた。
「というよりかは彼氏かいません」
「彼しか」
「そうです」
こうスタッフ達に告げるのだった。
「今エウロパで。保守派の代表となれるのは」
「若くしかも実力とカリスマ性を併せ持った」
「そうした人材はですか」
「今エウロパに必要なのは英雄です」
困難を前にすれば誰もがそれを望む。

## 第三十二部第三章　伝わる動きその二十四

「そして残された英雄は」
「彼しかいないと」
「それが答えですか」
「答えは出ましたか」
「おそらくは」
スタッフ達は口々に言い合う。
「保守派が彼を擁立する」
「改革派はカミュ外相でまとめる」
「そして政党を無視したギルフォード侯爵ですか」
「三人が揃いましたな、これで」
「はい」
またスタッフ達の言葉に対して頷く。
「これで」
「面白いですね」
スタッフの一人がまた言ってきた。
「この組み合わせは」
「というと」
「英仏独です」
三人のそれぞれの出身国が述べられた。
「この三国の対決ですね」
「面白いですな」
「確かに」
他のスタッフ達もそれに頷くのだった。
「言われてみればそうです」
「地球にあった頃から対立していた三国」
これもまた欧州の歴史だった。欧州は長い間互いに手を組み争ってきた。そうして歴史を育んできたのである。抗争と融和を繰り返

しつつだ。
「その三国が対決ですか」
「今までなかったことです」
何故三国が総統選挙で対決しなかったのかには理由があった。それは政党制度というものが持っている一つの特質によるものである。
「二大政党制でしたから」
「もっともこれは連合も同じですがね」
「確かに」
そうだったのだ。二大政党制ならば互いがそれぞれの候補者を出して一騎打ちとなる。したがって三つ巴とはなり得ないのである。普通は。
「しかし今回は違います」
「そうです。三人です」
こう言い合うのだった。
「政党が三つになりました」
「ギルフォード侯爵が立ち上げたあれですね」
「そう、それです」
「名前はもう正式に決まったでしょうか」
「いえ、まだです」
話はそこにも及ぶ。
「それはまだ決まっていないようです」
「そうですか」
「ですがこう呼ばれています」
ここである仮名が述べられた。
「ギルフォード派と」
「ギルフォード派ですか」
「はい。ギルフォード侯爵の支持者ですので」
だからだというのだった。根拠としてははっきりしている。
「だからそう呼ばれているのです」
「ふむ。そうなのですか」

「それでもう充分だとも言われています」
「確かに」
八条はスタッフ達の言葉に応えた。
「それはその通りですね」
「名前は後からついてくるものでもあります」
これはケースバイケースということであった。名が体を表す場合もあればその逆もある。今回のケースは明らかに後者であると言えた。
「特にこの場合は」
「そうなりますか」
「はい。どちらにしろです」
「ええ」
それが肯定されたうえでまた話が続けられる。
「英仏独の対決ですか」
「選挙での対決ですので」
この選挙での対決は一つの特徴があった。
「一人がもう一人と手を組むことはありません」
「互いに潰し合うだけです」
これだけであった。勝ち残るのは一人だ。一つの席を巡って争う。だからこそこの場合は三者はそれぞれ互いに争うしか選択肢はないのである。
「さて、その結果」
「誰が勝ち残るかですね」
「果たして誰になるでしょうか」
その予測も立てられた。
「それによりエウロパの情勢は大きく変わりますが」
「エウロパはどうなるかです」
彼等は言い合う。
「誰がなっても一緒というわけではありませんから」
「それは有り得ません」

八条もこのことははっきりとわかっていた。

## 第三十二部第三章　伝わる動きその二十五

「これはどの選挙についても同じですが」
「そうですね。人はそれぞれ違いますから」
「四兆いれば四兆の個性があります」
「この場合は三者三様ですね」
「そうですね」
　つまり誰がなるかによってエウロパの動きにそれぞれ特徴があるということだった。誰がなっても同じというのは政治を知らない愚か者の戯言だ。
「カミュ外相は文官です」
「はい」
　戦場に立ったことはおろか軍服を着たこともない人間だ。フェシングの剣さえ持ったこともない。戦争は肌では全く知らないのである。
「ですから平和的になるかというと」
「そうとばかりも限りませんね」
「その通りです」
　そういうことであった。
「戦争を知らないならば余計に強硬的になる場合もある」
「そういえばあの外相は」
　カミュ自身についても語られる。
「エウロパ貴族の中でもとりわけ偏見が強いです」
「そうですね」
　カミュの連合への偏見の強さはエウロパ貴族の中でもとりわけ強いものがある。八条はこのことをオリンポスで直接彼と会って知っている。
「その分連合に対して好戦的になる場合もありますが」
「問題はその中身です」

「そうです」
八条とスタッフ達のやり取りが続く。
「果たしてどういう動きを見せるかですが」
「彼が総統となった場合は」
「他の二人についてもですね」
「ドイツの」
モンサルヴァートのことである。
「あのエウロパ元帥殿は軍の中では実戦派ですが」
「それだけではありません」
モンサルヴァート個人についても細かく分析が行われている。ただ相手国の国力や兵器、軍の規模を調査するだけではないのだ。
「政治もまた知っています」
「統帥本部長の時の基地整備及び防衛計画は見事なものでしたね」
「確かに」
語る彼等の中に賞賛と苦さが共に見られた。
「おかげで我が軍は思ったよりも苦戦しました」
「犠牲こそ少ないものでしたがそれでも」
「色々と悩まされたものです」
それだけモンサルヴァートの防衛計画が優れていたということである。だから彼等も当初の予想よりも苦戦したのである。そういうことであった。
「その彼ですか」
「穏健派ということですがそれでも」
「予断は許しませんね」
「外務省に頼んで情報収集をより強くしてもらいましょう」
八条がここでまた述べた。
「そちらからの情報収集もまた」
「マウリアを通じてですね」
「そうです。エウロパへの直接のルートはありませんので」
国交がないから当然である。

「そうしましょう」
「それは承知しました」
「すぐに」
このことはすぐに決定された。
「そして最後の御仁ですが」
「ギルフォード侯爵ですか」
「彼に関してはまだよくわからないところがありますね」
「確かに」
そうなのだった。連合ではギルフォードはカミュやモンサルヴァートと比べて知られていることが少ないのである。これは仕方がなかった。
「エウロパ中央政府にいたことはありませんし」
「軍に入ったのもあの戦争の時です」
「長い間イギリス政界にいたのでしたね」
「はい」
スタッフの一人が八条の言葉に答える。
「その通りです」
「イギリス政界ではどのような」
「貴族院にいまして」
「はい」
イギリス独特の議会である。連合では上院も下院も身分制度とは無縁だがエウロパは違う。それが如実に現われている議会の形式である。

## 第三十二部第三章　伝わる動きその二十六

「そこで様々な法案に関わり」
「法案の制定にですか」
「その全てを通過させています」
「辣腕家というわけですね」
「それだけではありません」
それに留まらないというのである。
「閣僚の経験もありまして」
「ああ、そういえばそうでしたな」
「イギリスは」
ここでスタッフ達はあることを思い出した。イギリス政治の大きな特徴の一つだ。これはかなり古く今も維持されているものの一つなのだ。
「議院内閣制でしたな」
「あの国は」
「そうです。閣僚の半数以上は現職の議員でなければならない」
このこともよく知られている。
「それに乗っ取り閣僚にもなっています」
「そのポストは」
「内務相です」
そのスタッフは答えた。
「それに就任しました」
「そしてそこで実務能力も見せたのですね」
「その通りです」
「政策立案能力に企画力もあり」
八条はここまで話を聞いたうえでギルフォードについて分析した。
「そしてそれを通過させるだけの政治力もあり実務能力もある」
「政治家としては優秀でしょうか」

「そう言って構わないでしょう」
こう結論付けるのであった。
「やはり」
「では彼が総統になったとすると」
「まだよくはわかりませんが」
一応はこう前置きはする。
「軍事的才能もありますし」
「はい」
「しかもカリスマ性はおそらく」
カリスマについては決して忘れない八条だった。
「三人の中でも随一でしょう」
「随一ですか」
「彼が総統になれば一番手強いかも知れません」
語るその目が強い光を放っていた。
「警戒しておきますか」
「工作はできないでしょうか」
ふとスタッフの一人が述べてきた。
「彼を失脚させられるような」
「スキャンダルですか」
「そうです」
少し後ろめたそうに八条に告げる。
「奇麗な方法とは言えませんが」
「暗殺という手段もありますな」
「これもクリーンとは到底言えませんが」
むしろダーティーの極みである。政治の世界は確かに基本的に手段を選ばないものであるがそれでも好かれる手段と好かれない手段、そしてクリーンとダーティーが確かに存在するのだ。言うまでもなく謀略、とりわけ暗殺はダーティーの極みにある手段である。
「それも考慮してみますか」
「私はそういうことは好きではありません」

そして八条はそれを好まない政治家であった。
「しかし。必要とあらば」
「使われますか？」
「それが確実ならばです」
こう前置きする。
「ですが。今回はやはり」
「成功しませんか」
「そう思います」
落ち着いた声で述べた言葉であった。
「ギルフォード侯爵はおそらく勘も相当鋭い人物です」
「勘もですか」
「そしてかなり身辺には気を使っているでしょう」
このことも見抜いていた八条であった。
「ですから。下手な工作は」
「通用するものではないですか」
「そう思います。ですからここは」
「何もしないに限りますか」
「少なくとも様子見です」
こうも言うのであった。
「ここは。それで行きましょう」
「では情報収集に専念ですね」
国防省としての答えが出た。
「ここは。そうすべきですか」
「はい。それで御願いします」
八条もそれで行くとの方針を出した。
「くれぐれも軽挙な行動は慎んで」
「わかりました。それでは」
「その様に」
「それではです」
話が終わったところでまた口を開く八条であった。

「お話はこれで終わりにしましょう」
「わかりました」
「それでは」
「解散です。本日も御苦労様でした」
この言葉で全ての話を終えるのだった。国防省、そして八条も今後のことについて何かと考え実行するものがあった。外に出ないものも含めて。そして彼等の目は連合の外にも静かに向けられているのであった。

## 第三十二部第四章　北へ行く中でその一

北へ行く中で

アッディーンは五重のハサンの防衛ラインのうち既に三つまでを突破していた。しかしまだその前には二つの障壁を持っていたのである。

「あと二つになった」

「はい」

今彼は旗艦アリーの会議室に主立った司令官及び参謀達を集めていた。そのうえで今後のことについて作戦会議を行っていたのである。

「しかしだ。その二つがまた曲者らしい」

「曲者ですか」

「どういったものでしょうか」

「それについては」

司令官の一人であるムーアがここで出て来た。

「私からお話させて頂いて宜しいでしょうか」

「ムーア司令」

「旗艦がか」

「ムーア大将指揮下の軍に調査をしてもらった」

アッディーンがここで述べた。

「だからだ」

「左様ですか」

「ムーア司令が」

「既に一個艦隊を送っていたな」

「その通りです」

ムーアは静かにアッディーンに対して答えた。

「諜報活動を専門に命じた艦隊を」

「御苦労だった。そしてその結果わかったのだな」

「その通りです。次の二つの防衛ラインですが」
「うむ」
「まず一つは要塞群を築いています」
「要塞群だと」
「連合が築いているような」
連合の防衛の特徴としてただ要塞を配備するだけではないのだ。複数の要塞を配備してそれで以って護りとする。アタチュルクやガンタースがその代表である。
「ああしたものを築いているのか」
「何ということだ」
「無論あそこまでではありません」
このことも告げるムーアであった。
「あそこまで要塞を十以上も置くようなことはありません」
「それは何よりだが」
まずはそのことに安堵する一同だった。今の彼等の戦力では連合程の規模の要塞群では到底突破することはできないからだ。
「しかしです」
「しかし！？」
「というと」
「それはかなり堅固なものです」
このことは言うムーアであった。
「その場所は」
「どちらでしょうか」
「最後です」
つまり第五の防衛ラインというわけだった。
「最後の最後に。それを用意してきているのです」
「そうなのですか」
「はい。ですから」
ムーアは一同に告げる。
「このガワールのようにはいきません」

「ここは案外楽でしたね」
「確かに」
司令達はここで顔を見合わせて話をした。
「コロニーレーザーの一斉射撃で無事」
「突破できました」
「しかし最後はこうはいかないと」
「いえ、どうやらこのガワールは罠だったようです」
今度口を開いたのはシンダントだった。
「どうやら」
「というと！？」
「どういうことだ」
「ここは既に空城だった」
アッディーンが言った。
「我々が攻略したとの時にはな」
「兵員もいませんでした」
シンダントがアッディーンに続けるようにしてまた口を開いた。
「つまり自動操縦にして」
「既に撤退していたということは」
「！？では」
ここで司令達は気付いた。あることに。
「焦土戦術ですか」
「この要塞は」
「そうだ。先に二つの要塞を陥落させた」
「はい」
この事実がある。オムダーマン軍を暫減させる為のものだったがそれは結論から言って失敗してしまっている。オムダーマン軍はその戦力を殆ど減らすことなく快進撃を続けている。これは言うまでもなくハサン軍にとっては望ましいことではない。忌まわしいものに入る部類のものだ。

## 第三十二部第四章　北へ行く中でその二

「それを見て作戦を変更させてきたらしい」
「作戦変更ですか」
「具体的にはこの要塞を空にした」
彼等は今丁度ガワール要塞を占領したところだ。そのうえで速度を緩めることなくさらに進むつもりだったのだ。しかしそれが困難な状況になっているのだ。
「それにより時間を稼ぐつもりなのだ」
「あれですか」
マトクが言った。
「我等はここで多くのエネルギー及び弾薬を消耗しました」
「つまり補給が必要です」
「そうだ」
「そして整備も」
兵器を動かせばその分だけ整備が必要になる。整備を忘れては軍は動かない。近代戦での厳然たる事実の一つである。
「しかし整備基地も全て破壊され」
「補給設備も同じです」
「つまり」
結論が出ていた。今の彼等にとって思わしくない結論が。
「今のところこれ以上の進撃は無理ですね」
「そうだな」
司令達が苦い顔をして言う。
「まずはこの基地を整備して」
「そのうえでですな」
「思えばこれまで無理をして進撃してきています」
アガヌが述べた。
「整備も補給もそろそろ全面的に受けるべき状況でした」

「だからこそここの施設の利用を考えていたのですが」
「しかし」
だがそうはならなかった。予想は外されたのだ。ハサン軍によって。
「敵も我等の攻撃の勢いからそれを読んできましたか」
「あながち無能ではありませんな」
「いや、全く」
そのうえでハサン軍に対する認識もあらためるのだった。
「ではここでどうするべきか」
「やはり補給を受けなくては」
そうしなくてはどうしようもない。今のオムダーマン軍はまさにそうした状況だった。
「ではここは施設の修復を急ぎますか」
「仕方ありませんな」
「そのつもりだ」
またアッディーンが言った。
「そうでなければこれ以上動くことができない」
「そうですね。ここは」
「致し方ありません」
「敵の思う壺ですが」
「そうせざるを得ないとは」
苦々しい言葉が次々に出される。
「いや、全く」
「忌まわしい話です」
「しかし起こってしまったことは仕方がない」
アッディーンはそんな司令達に対して述べた。
「それはな。だから今は」
「やはり施設の復旧ですか」
「まずはそれだ」
総司令であるアッディーン自身も言った。

「整備及び補給の施設を整え」
「はい」
「進撃に備える」
「やはりそれからですか」
「時間のロスが」
「これが今後の戦局にどう影響するかですが」
参謀達の暗い顔で顔を見合わせ合い話をしだした。
「どうなっていくかですが」
「それも計画を練り直していきますか」
「時間もだな。今までは予定よりも早かったが」
「はい。それは」
「予想以上でした」
アッディーンの方を見ての言葉であった。会議に参加している者達は皆アッディーンに顔を向けている。そのうえで話をしていた。
「このままいけば予定よりも遥かに防衛ラインを全て突破できましたが」
「これで予想されるロスは」
「ロスは仕方がない」
しかしアッディーンはこのこともそのまま受け入れていた。

## 第三十二部第四章　北へ行く中でその三

「やはり問題はこれからどうするかだが」
「司令」
後方参謀長であるバヤズィトが言ってきた。
「まずは施設を万全の状況に復旧させ」
「それからか」
「そうです。同時に補給物資を後方からここに運び込みます」
「ここをさらなる進撃の足掛かりにするのか」
「そうです」
バヤズィトの考えはこうであった。
「本来はその予定はなかったですがこうなっては方針を変えましょう」
「わかった。それではな」
アッディーンも彼の考えを受け入れた。
「ここはそうしよう」
「有り難うございます」
「ハサン軍の動きは」
彼が次に問うたのはこのことだった。
「今はどうなっているか」
「今のところアンダハル要塞に向かっているだけです」
シャルジャーが答えた。彼は情報参謀長を務めている。
「我々の方には進む気配はありません」
「そうか」
「どうやら彼等はあくまで守りに徹するようです」
コリームアが述べた。やはり今回情報収集を担当しただけはありその見方は細部にまで至った見事なものであった。
「攻めることはないかと」
「攻めないか」

アッディーンはそれを聞いて考える顔を見せた。
「そうか。それは有り難い」
「有り難いですか」
「これで勝利を収めることができる」
こうも言うアッディーンだった。
「この戦い全てに及んでな」
「というと一体」
「何かありますか？」
「今我等はエネルギーも弾薬も使い果たしている」
この事実を一同に述べるアッディーンだった。
「そうだな」
「はい、そうです」
これはここにいる誰もがわかっていることであった。
「今攻撃を受ければ確かに」
「我等は最早」
「ここを退くので精一杯です」
そういった状況なのだ。武器がなくては戦うことができない。これはどの時代であっても変わらない絶対普遍の戦場での定義である。
「ですから今は」
「我等はまさに丸裸です」８
これが現実であった。
「攻撃を受ければそれで終わりです」
「ここでですか」
「そうだ。ここでだ」
アッディーンは言うのであった。
「攻撃を受ければ。それで終わりだった」
「それだけでですか」
「例えばだ」
彼は言葉を続ける。
「今の我々に高機動力の艦隊で攻撃を仕掛ければどうなるか」

「高機動力のですか」
「そうだ。それだけで我が軍は大混乱に陥る」
無論それだけではないのはこれまでの会議の流れで明らかである。
「下手をすればそれで終わりだ」
「終わりですか」
「とにかく今の我が軍にはエネルギーも弾薬もない」
「そして食料もですね」
「見事なものですな」
ニアメが苦々しげに言った。
「食料まで持って行っていますから。従って我々は」
「今持っているものを食べればそれで終わりです」
「まあこちらはすぐに届きますが」
流石に補給を忘れるアッディーンではないということである。

## 第三十二部第四章　北へ行く中でその四

「実際問題としてエネルギーや弾薬もです」
「これで一応は戦えますが」
「今襲われたらですか」
「そうだ。今だ」
アッディーンが言うのはまさにその今であった。
「襲われればそれで終わりだな」
「はい、確かに」
「今が最も危ないです」
「しかしだ。ハサン軍はだ」
そのうえでハサン軍の動きについて再び言及するのだった。
「動かない。静かなものだ」
「全軍第四の防衛ラインに集結しています」
「これは確かです」
情報収集にあたっていたそのムーアとバヤズィトが述べた。二人の言葉には絶対の自信さえあった。
「ですから間違いなくハサン軍は」
「今は攻撃を仕掛けてはきません」
「彼等の戦略を忠実に守っている」
アッディーンの今の言葉はただそれだけを聞けばハサン軍を賞賛しているように聞こえるものであった。しかしこれは少し事情が違っていた。
「しかしだ」
「しかし？」
「それが為に我々は生き残ることになる」
「それが為にですか」
「今我等に攻撃を仕掛けるべきだった」
こう言うのである。

「そうすれば彼等は我等を自国から追い出すこともできただろう」
「それだけの勝機だったと」
「ダビデブ元帥は確かに百戦錬磨の将」
このこともまた言うまでもないことであった。
「しかしだ。彼は攻撃は得意ではない」
「はい」
同時にこのことも有名であった。
「防衛タイプの指揮官だ」
「確かにその通りです」
「彼の経歴を見てみると」
ダビデブの経歴や戦歴もまた既に彼等の調べるところであった。
オムダーマンの情報網はかなりのものであることがここでも見られた。
「防衛任務ばかりです」
「攻めた事例は殆どありません」
「だからですか」
「そうだ。攻める男ではない」
このことも既に見抜いているアッディーンであった。
「決してな」
「だからこそここで攻めては来ないと」
「彼に進言する幕僚もいないですか」
「おそらくはな」
考える目で一同に告げた。
「いないだろうな。いたとしてもそうおいそれとは進言できまい」
「ダビデブ元帥だからですか」
「そうだ」
ダビデブはハサン軍の長老である。そして幾多の戦いで功績を挙げている能力も確かな人物だ。王室からの信頼も篤くハサン軍の宝とも言っていい存在なのだ。
「彼に進言できる者も確かにハサン軍全体ではいないわけでもない

が」
「できる者は中央にいるか」
「東方にいっていますか」
「そういうことだ」
今のハサンは人材をオムダーマンにだけ向けるわけにはいかないのだ。戦力と共に人材もそれぞれに割かなくてはならない状況なのである。
「だからだ。それもまた不可能なのだ」
「人材はかつてはよりいましたが」
「やはり減りましたな」
「司令、あれはやはり」
ベニサフが言ってきた。
「ティムールの」
「迂闊な言葉は危険だ」
だがアッディーンはこう言ってベニサフを嗜めた。
「黒にしか見えなくとも黒であるとはっきりしない限りはその色は黒にはならない」
「だからですか」
「そうだ。だからだ」
こう言うのである。
「迂闊なことは言うべきでない」
「わかりました」
「ましてやティムールは同盟国だ」
こうした政治的状況も関係していた。

## 第三十二部第四章　北へ行く中でその五

「そうしたことは言うべきではない」
「はい」
「どちらにしろダビデブ元帥の周りにはそれだけの人材がいない」
このことだけは否定できなかった。
「それが大きく関係しているのだ」
「そうなりますか」
「その指示を理解できる人材はいる」
それはいるというのである。
「そしてそれを実行に移せる人材もな。しかし」
「進言できるだけの人材はいませんか」
「そのうえ彼の欠点に気付いている人材もいない」
つまりそこまでの人材はいないというのだ。それが今のハサン軍にとって不幸なことでもあると。アッディーンは見抜いているのである。
「そこがハサン軍にとっての急所になったな」
「では司令」
今度はラーグワートが言ってきた。
「我等はまずは補給を受け」
「うむ」
「それと並行して整備を行いこの基地の機能も回復させましょう」
「まずはこの基地の機能を完全に回復させる」
アッディーンはこのことを断言した。
「そしてそれから再び進撃に移る。いいな」
「はっ、それでは」
「そのように」
司令や参謀達もそれに頷いて応えた。
「時間がかかるのは仕方がない」

「それはですか」
「当然早いにこしたことはない」
このこともまた言うまでもなかった。
「だが拙速より的確だ」
「そちらですか」
「そちらを優先させる」
これもまた指示である。
「そちらをな。わかったな」
「わかりました。そちらも」
「それでは」
「ではこれで会議を終わる」
アッディーンはここで話を終わらせた。
「では各員それぞれの持ち場に戻れ。いいな」
「了解」
こうして会議は終わり皆それぞれの持ち場に戻った。オムダーマン軍は早速要塞の基地機能の回復に取り掛かった。それと共に艦隊自体の整備及び補給も今できる段階で最大限のものを行った。アッディーンはそれを自ら指揮しあたっていたのである。
ここでまた。彼の下に情報が入った。
「閣下」
「どうした？」
彼の側に来た若い参謀に顔を向けた。
「何かあったか」
「はい、ティムール軍の動きですが」
「それか」
「どうやら遂に進軍を再開したようです」
こう彼に告げるのだった。
「アヤグーズの首都に対して」
「そうか。遂にか」
まずはそれを聞いて静かに頷いた。

「遂に動くのか」
「はい」
参謀は報告したうえで静かに頷いてみせた。
「その通りです」
「ここで西部の戦局が大きく変わるな」
アッディーンは前を見据えて述べた。
「その結果次第でな」
「結果次第でですか」
「そうだ。勝利を収めた方が圧倒的に有利に立つ」
彼は言う。
「今後の戦局の主導権を握ることができるだろう」
「既にティムール軍はコムでの戦いに勝利しています」
まずこの前提があった。報告した参謀がこのことを彼に話すのだった。
「これによりティムール軍は足掛かりを得ています」
「足掛かりは第一段階に過ぎない」
アッディーンはその勝利をそれで済ませた。
「所詮はな」
「第一段階ですか」
「まだ先があるのだ」
そしてこうも言った。
「それこそが今度の戦いの結果だ」
「では敗れればその足掛かりを築いた意味もなくなるのですね」
「その可能性もまたある」
そのことも否定しなかった。

## 第三十二部第四章　北へ行く中でその六

「敗北次第ではな。少なくとも」
「少なくとも？」
「ティムール軍はその勢いを大きく削がれる」
それだけでも戦局に対して非常に大きいものであるのは事実だった。戦争には勢いというものが持つ要素も非常に大きく絡むからだ。
「間違いなくな」
「ではティムールは次の戦いに勝つことができれば西部で有利になることができ」
「言い換えればそうなる」
敗北の逆は勝利だ。ならばそうなるのは必然だった。
「そして敗れれば今の侵攻作戦が頓挫しますか」
「その通りだ。そして」
ここまで話してさらに言うのだった。
「その戦局は我等にも大きく影響する」
「それは確かに」
言うまでもないことであった。戦局は一つに留まらないからだ。
「ティムールが敗れればハサンは戦力を我々に向けてくる」
「はい」
「そしてそれにより我々は苦境に立たされる」
「ハサンは既に予備戦力を総動員しています」
これもまた重要な要素の一つだった。ハサンがその持っている予備戦力を総動員していることも彼等は承知しているのだった。
「これの殆どはティムールに向けています」
「まずは戦力の少ない方をだ」
アッディーンはまた言った。
「叩くのが今のハサンの戦略だ」
「まずは戦力の少ない方をですか」

「西部には南部の様な防衛ラインはない」
ハサンから見て西部戦線はティムール、南部戦線はオムダーマンに対するものになっている。これがそのままハサン内外での戦線の呼び名になっているのだ。
「それもありティムールに兵力の殆どを向けたのだ」
「一気に倒すつもりですか」
「そうだ。まずは一気にティムールを倒す」
ハサンの側に立った言葉であった。
「そしてそれから我々だ」
「ゆっくりとですか」
「兵力と地の利を利用して押し潰すつもりだ」
それも見抜いているアッディーンだった。
「我々はな」
「彼等なりに戦略があるのですね」
参謀はそれを聞いて述べた。今アッディーンはアリーの艦橋にいる。モニターには無限の銀河が拡がりそこに目指すべき世界があった。
「ハサンにも」
「ない筈がない」
ここでも相手の側に立った言葉だった。
「彼等とて生きなければならないのだからな」
「確かに」
「ハサンは国力に勝る」
一つの揺るがすことのできない現実だった。
「それは我々とティムールを合わせたよりも高い」
「だからこそ二正面作戦も可能なのですね」
「いや、それは難しい」
困難だというのだ。
「それでもな」
「困難ですか」

「二正面作戦はそれだけで戦略にも混乱をきたす」
力の分散である。力が分散させられればそこに意識も散ることになる。人間という生物は一度に二つのものを見たり二つのことを考えたりするのは不得意なのだ。
「それだけな」
「ではハサンもまた」
「我々に対して三倍の国力があれば流石に話は別だ」
次にこう前提を出した。
「それだけあれば凌ぐのは容易だ」
「しかし、ですか」
「流石にそこまではない」
これが現実だった。
「ハサンといえどもな」
「それが大きなハンデなのですね」
参謀にもこの現実が把握できてきた。
「ハサンにとっては」
「若しもだ」
アッディーンは今度は自分自身に対しての仮定を述べた。

## 第三十二部第四章　北へ行く中でその七

「オムダーマンのみだったとする」
「はい」
「そうなればどうなるか」
「ハサンはその国力を全て我々に向けてきたでしょう」
これはすぐにわかる現実だった。
「間違いなく」
「そうだ。確実にそうしてきた」
敵が一つならば向ける力も一つになる。力学においても容易に言うことができる定理であった。戦争における絶対の定理である。
「そしてティムールにもだ」
「ティムールにもですか」
「同じだ。敵が一つならばな」
「そうですね。一つだったならば」
「しかしだ」
話が現実に引き戻される。
「彼等にとって残念だが敵は二つだ」
「我々とティムール」
「その方向も二つだ」
方位の問題もあった。
「どちらにも向けなければならない」
「だからこそ厄介なのですね」
「しかもハサンは人材が減っている」
ソフトウェアについても述べられる。
「それに適応できる人材も限られたものだ」
「だからこそ余計に混乱すると」
「前線はいい」
個々の前線についてはそれでよしとされた。

「しかしだ。首脳部はどうかというと」
「そういえばそのハサン首脳部ですが」
彼等に対する情報も出された。
「太子に権限を集中させています」
「これまで以上にか」
「はい、これまで以上にです」
元々ハサンの実権は太子が多くのものを持っていた。だがそれはこれまで以上のものになっているというのだ。非常時故だからであろう。
「まさに独裁者という域にまで」
「独裁者か」
「実際に非常大権まで与えられています」
これもまた実に大きなことであった。
「ですから。あの国は」
「頭に全てがかっているな」6
アッディーンも言った。
「やはり」
「では頭を潰せばそれで終わりですね」
「！？それでは」
アッディーンの後ろに控えていた別の参謀がここで気付いた。
「閣下、いい考えがあります」
「暗殺か」
「はい」
彼が言うのはそれだった。
「確かに常道ではありませんが。如何でしょうか」
「できるのならな」
こう返すアッディーンだった。彼の方に顔を向けることすらしない。
「するべきだがな」
「不可能だと仰いますか」

「私もそれは考えた」
アッディーンも考えたことを今告白した。
「しかしだ」
「それは無理でしたか」
「到底な。敵もさるものだ」
彼はまた言った。
「周りの警護は厳重だ。首都自体が警護に当たっていると言っても過言ではない」
「そういうことですか」
「諜報部員を潜入させるだけで手が一杯だった」
「そういえばあそこにはハルヴィシー少将が直率の部下達と共に潜入していました」
「その彼等でもだ」
アッディーンの言葉はオムダーマン最高の諜報員の名前が出ても変わらなかった。
「やはり。無理だ」
「そうですか。やはり」
「だからだ。このことは却下だ」
「わかりました」
「そういうことだ」
これでこの話を終わらせた。

## 第三十二部第四章　北へ行く中でその八

「残念だがな」
「はい。それでは」
「そのうえで話を聞きたいが」
「はい」
話が戻った。
「ハサンは上層部に負担がかなりかかっているな」
「それはその通りです」
「そこが彼等にとってネックになっている」
「そこにですか」
「人材の不足は必ず何処かに負担や齟齬が生じる」
彼はあくまでそこを指摘する。そこにこそハサンの問題点があるというのだ。
「必ずな。我々にとってこれはプラスになる」
「では」
「作戦はこのまま進める」
彼は言った。
「このままな。わかったな」
「わかりました」
「それでは」
参謀達もアッディーンの言葉に応えた。
「まずはこの基地の機能の回復ですか」
「そうだ。急ぐ必要はない」
「急ぐ必要はないと」
「このことはくれぐれも言っておく」
何度も慎重に告げるのだった。
「それはいいな」
「では確実に、ですね」

「そして慎重にだ」
言い加えすらする。
「まずはそれだ」
「基地の回復ですか」
「さもなければ我が軍は今後戦闘を行うことすら不可能だ」
こうまで言うのである。
「ここを足掛かりとする」
「さらなる侵略のですか」
「既にジェルム星系があるが」
オムダーマン軍が激戦の末に手に入れた星系だ。今彼等はここを戦略の拠点となっているのだ。彼等はそこを今最大の補給基地、整備基地にしているのだ。
「そこも遠くなった」
「はい」
距離の問題もあった。今彼等はジェルメから距離を空けてしまっているのだ。
「だからだ。ここで」
「中継地点ですか」
「足掛かりと言っていい」
また言う。
「このガワールをそれとする。いいな」
「ですが閣下」
参謀の一人が戦略を次々と述べるアッディーンに対して問うてきた。
「一つ御聞きしたいことがありますが」
「何だ？」
「その中継基地についてです」
彼が言うのはこのことだった。
「当初はジェルメだけを使う予定でした」
「うむ」

これは事実だった。アッディーンはガワールを占領するまでジェルメを拠点として五つの防衛ラインを突破するつもりだったのだ。
「ですが今は」
「ガワールも基地にされるというのですか」
「気付いたのだ」
彼は参謀達に応えて言う。
「五重の防衛ラインの護りは堅い」
「はい」
「特に残る二つはな。だからだ」
「ここで中継基地を設けるのですか」
「堅固な基地を破るにはどうすればいいか」
ここで一つの問題が出された。
「圧倒的な戦力で突破するのが一つの手だな」
「ええ」
「確かに」
どちらかといえば連合軍が得意とする方法である。エウロパとの戦いにおいて彼等はこの戦術でエウロパ軍の基地を次々と突破してきたのだ。
「ですが今ここでこのガワールを足掛かりにされるという」
「時間のロスを許してまで」
「確かに時間は重要だ」
速攻を得意とするアッディーンにわからない筈もないことだった。

## 第三十二部第四章　北へ行く中でその九

「しかしだ。時間を犠牲にしても」
「整備と補給は重要ですか」
「その通りだ。まずはその二つだ」
また言うのだった。
「それがあってこその速攻ですか」
「その二つが万全なら幾らでも進むことができる」
「幾らでもですか」
「その為にだ。やはりガワールを」
「わかりました」
「それで」
参謀達がアッディーンの言葉に頷いた。
「ではまずはこのガワールを」
「整備しましょう」
「そういうことだ。幸いハサン軍は攻める動きはない」
「はい」
この現実も彼等にとっては有り難いことだった。
「これを好機としよう」
「ハサン軍がここで攻めなかったことは彼等にとって大きな失点になりましたか」
「少なくともこのガワールから撤退するしかなかった」
今のオムダーマン軍の状況ではそうであるのだ。
「それはより大きな戦略の齟齬を生じる事態となった」
「はい。確かに」
「それだけは我々にとっては」
「それがなかったことがまず大きい」
また言った。
「我々にとってはな」

「それでは今はこの好機を利用して」
「整備を進め」
「そのうえで進撃を再開する」
またこのことが言われた。
「時間はその時に幾らでも取り戻せる」
「幾らでもですか」
「時間は確かに貴重なものだ」
これは否定できない。
「しかしだ。取り戻すこともできる」
「取り戻すことも」
「少なくともロスは埋められる」
この場合の取り戻すとはこういう意味であった。
「しかし人員や物資はそうはいかない」
「そして戦略もですね」
「今は時間を消費してもいい」
アッディーンの読みだった。
「だからだ。今は基地機能の充実に専念する。いいな」
「はっ」
「わかりました」
参謀達もそれに頷く。これで話は終わった。
こうしてオムダーマン軍は基地機能の回復に務めそこからさらなる進撃準備に取り掛かった。このことはハサンにも見えていた。
「そうか。オムダーマン軍は動かないか」
「はい」
太子に報告する若い将校が述べた。今彼は東宮にいる。そこでハサン全体の指揮にあたっていた。ここが実質的な総司令部となっていた。
「今のところは」
「ガワールで何をしている？」
「基地機能の回復に務めています」

こう太子に述べた。
「今のところは」
「そうか」
「進撃は見られません」
こうも述べるのだった。
「どういうわけか」
「そしてガワールはどうなっている？」
太子は今度はこのことを士官に問うた。
「その彼等がいる要塞は」
「完全に破壊していたものが急激に回復しています」
「そうか」
「参謀本部はジェルメに続くさらなる侵略の足掛かりにするのではと見ています」
「そうだろうな」
太子もそれを聞いて頷く。
「少なくとも今は時間があるのだな」
「ダビデブ元帥はその間に残る二つの防衛ラインの充実を計っておられます」
このことも述べるのだった。
「とりわけ最後を」
「決戦を挑むつもりだな」
太子はここまで聞いて静かに述べた。
「ダビデブ元帥も」
「どうやら」
士官もまた答える。

## 第三十二部第四章　北へ行く中でその十

「そのおつもりのようです」
「そうか。やはりな」
「参謀本部もそれを受けて物資の補給を進めています」
「守るだけだな」
「ええ」
今の太子の言葉にも動じるところはなかった。
「そうですが」
「それだけか」
「！？」
今の彼の言葉は士官にはわからなかった。
「それが何か」
「わからないか」
太子は士官がその目にいぶかしむものを見て問うた。
「そこは」
「何のことでしょうか」
「いや、いい」
彼がわかっていないと見抜いてこれ以上は言わないことにした太子だった。
「それはな」
「左様ですか」
「報告はまだあるか」
「西部戦線です」
「そちらか」
西部の話を聞いて顔を顰めさせる太子だった。
「そちらはどうなっている？」
「ティムール軍は遂にアヤグーズの首都への進撃を開始し」
「そして？」

「首都にまであと僅かの距離にまで迫っています」
「防ぐことはできるか？」
「いえ」
その問いには首を横に振る士官だった。
「それよりも首都で迎え撃つおつもりのようです」
「ブルコルジ女王はか」
「そうです。当初のお考え通り」
「そうか。女王も本気か」
「本気ですか」
「それは間違いない」
彼ははっきりと言った。
「勝利を収める気なのはな」
「はい。それは」
「首都での戦いは激しいものになるだろう」
太子は西部での戦いをこう呼んでいた。
「果たしてどちらが勝利を収めるかだが」
「どちらだと思われますか？」
「そこまではわからない」
即答は避けた太子だった。
「しかしだ」
「しかし？」
「女王は間違いなく本気だ」
「はい、それは」
士官もこれはわかることだった。ブルコルジが今度こそ勝利を収めるつもりなのは誰の目にも明らかだった。西部では南部よりも早く決戦の時が迫っていたのだ。
「間違いありません」
「だがそれは敵も同じだ」
「ティムール軍もですか」
「今度の戦いは双方共決して負けられないものだ」

「勝利を収めた方が今後の戦線の主導権を握る」
士官はアッディーンが西部戦線について言ったことをそのまま口にした。しかしこれはアッディーンだけでも士官だけでの言葉ではなかった。
「だからだ」
「まさか西部戦線がここまで押されるとは思いませんでした」
「それは君の予測か？」
「いえ」
士官は太子の問いには首を横に振った。
「参謀本部の予測です」
「そうか」
太子はそれを聞いてもまずは頷いた。
「参謀本部のか」
「それが何か」
「いや」
士官の今度の問いには首を横に振る。

## 第三十二部第四章　北へ行く中でその十一

「聞いただけだ。それはわかっているか」
「はあ」
「わかっていればいいのだ」
これは殆ど独り言だった。
「それでな」
「そして動員した戦力ですが」
それについても話される。
「戦略方針に従い西方に集中的に送りました」
「そうか」
「参謀本部の予測ではこれで間違いないとのことです」
「間違いないか」
「そのうちの多くが戦場に向かいました」
「アヤグーズの首都にだな」
「はい」
また太子の言葉に頷く士官だった。
「アッサルームに」
「女王はこのことに何と言っているか」
「あまり喜んではおられないとの情報が入っています」
「喜んでいないか」
「ですがアヤグーズ軍全体としては喜んでいるとのことです」
ブルコルジのことを打ち消すような報告がすぐに出された。
「援軍が来たことにより」
「そうだろうな」
太子はそれを聞いてまずは納得した顔で頷いた。
「戦争は数だ」
「はい」
「だからこれは当然のことだ」

「参謀本部も同じ意見です」
「参謀本部もか」
「そうです」
また参謀本部の名前を出してきたのだった。
「参謀本部もまた」
「わかった」
まずは士官の言葉に頷いた。
「それはな」
「有り難うございます」
「参謀本部の言うことは正しい」
太子はそれは認めた。
「確かに戦争は数だ」
「僭越ですが私もそう考えています」
「そうだ。そして」
「そして？」
「参謀本部は今どうしているか」
今度問うたのはこのことだった。
「今は。何をしているか」
「主だった方々は常に参謀本部に詰めておられます」
「常にか」
「ほぼ不眠不休で有事に当たっておられます」
こうも述べた。
「それがどうされましたか」
「そうか。それならわかった」
答えずに頷く太子だった。
「これから参謀本部に向かう」
「これからですか」
「そうだ。駄目か」
「いえ」
太子の問いには首を横に振って答えた。

「私に言う権利はありませんので」
「それではだ」
それを聞いてまた言う太子だった。
「私から問おう」
「殿下からですか」
「そうだ、君にだ」
士官に対して問うたのである。
「君にな。私は今参謀本部に行くべきか」
「行くべきだと思いますが」
「何故そう思うか」
「作戦のことをお知りになりたいのですね」
問いに返すようにして述べる士官だった。
「今後の作戦のことをより」
「私が知りたいというのか」
「そうではないのですか？」
表情を変えずに彼に問い返してきた。
「ですから参謀本部に向かわれるのでは」
「それはな」
ここで太子は己の考えを半分だけ隠して話した。
「その通りだ」
「では是非共」
参謀本部に行くように彼も勧めた。

## 第三十二部第四章　北へ行く中でその十二

「私が御供致します」
「頼めるか」
「是非共」
軍人らしい毅然とした、だが見方によっては感情の見られない機械的な声で返してきた。見れば表情にも人間味があまりなかった。
「それで宜しいでしょうか」
「うむ、是非な」
そして彼もそれを受けるのだった。
「頼む」
「わかりました。それでは」
こうして彼等は参謀本部に向かった。参謀本部に入るとすぐに主だった参謀達が集められた。太子は会議室で彼等を集めそこで彼等の話を聞くのだった。
「まずはだ」
「はい」
「戦局全体について聞きたい」
最初にこう集まった参謀達に対して述べた。
「今はどうなっているのか」
「南部でしょうかそれとも西部でしょうか」
「全体だ」
参謀の一人に対して答えた。見れば集まっている参謀達は全て将官だった。その腕に表わされている階級章がそれを見せていた。
「どちらもだ」
「どちらもですか」
「そうだ」
また語るのだった。
「どちらも。どうなっているか」

「まず南部戦線ですが」
それに応えて中将の参謀が答えた。
「オムダーマン軍は五重の防衛ラインのうち三つを突破しました」
「それは聞いている」
太子は既にそれは承知していた。
「そして三つ目のガワールに今留まっているそうだな」
「このままガワールに留まらず」
ここで居並ぶ参謀達は言った。
「先に進むと思っていたのですが」
「そうはなりませんでした」
「予想が外れたというのだな」
「はい」
このことを認めて太子に対して頷くのだった。
「これは意外でした」
「焦土戦術の意味もあったのですが」
「しかしオムダーマンは」
彼等は口々に言う。
「ガワールに留まりそこを基地化しています」
「戦力を集めて」
「戦力をですか」
「はい」
彼等は口々に言う。太子に応え。
「基地の整備及び補給を進めています」
「基地はそれによりかなり回復しているようです」
「この回復も私達の予想を超えていました」
「予想をか」
「ええ」
参謀達は太子の今の言葉に何でもないといった調子で返した。
「そうですが」
「それがどうしたのでしょうか」

「いや」
言おうと思ったがそれは止めたのだった。また。
「何でもない」
「左様ですか」
「オムダーマン軍、いやアッディーン元帥だが」
「彼がどうかしましたか」
「かつてサラーフとの戦いの時だが」
サラーフとの戦いはオムダーマン、そしてアッディーンにとって西方を統一した大きな戦いである。そしてこれはサラーフだけに留まらない話でもあった。西方の統一はそれだけ大きなことなのだ。
「サラーフは当初焦土戦術を採ったな」
「はい」
「それは承知しています」
「承知しているのだな」
「無論です」
「その通りです」
参謀達は皆太子の言葉に対して頷いた。

## 第三十二部第四章　北へ行く中でその十三

「あれは敵ながら見事でした」
「焦土戦術に対して足掛かりを置いて対処する」
「それは見事でした」
「オムダーマン軍は今それを行っているのだ」
「サラーフのあれをですか」
「ここで」
「既にジェルメに足掛かりを置いていてもですか」
「距離だ」
彼が今度言ったのはこれだった。
「距離が開いてきていた。だからこそ」
「ガワールを今整備していると」
「そういうことなのですか」
「そうだ。一つ貴官達に聞きたい」
太子の目の光が強いものになった。
「今オムダーマン軍はガワールで基地の整備にあたっている」
「はい」
「そこに攻める考えはなかったのか？」
問うのはこのことだった。
「それは。どうなのだ」
「どうと言われますと」
「それは最初から」
「なかったのだな」
「はい。そうです」
「ですが司令」
ここで彼等は話すのだった。
「その通りです」
「今攻めても何もなりませんから」

「何もならないか」
「今は戦力を集結させることが重要です」
「その通りです」
参謀達は口々に話す。
「そうした意味でダビデブ元帥は至極当然だの決断をされていると思いますが」
「違うのですか？」
「いや」
ここでもあえて己の意見は言わないのだった。
「それも手だ」
「ではいいのですね」
「悪くはない」
それでも己の考えは含ませる。ただはっきりと出さないだけだ。
「それでな」
「ではそのように」
「進めていきます」
「少なくとも今はな」
（手遅れだ）
同時に心の中でも呟いた。
（今動いたところで。既にオムダーマン軍は固まっているからな）
「では殿下」
「うむ」
「そして西部戦線ですが」
「そちらか」
「はい」
また話がそこに戻った。参謀本部としては西部戦線がメインの戦場であるのだった。優先順位からそれを決めているのである。
「今ティムール軍はアッサルームに入ろうとしています」
「それか」
「はい、それです」

「それを受けて我が軍も」
「アッサルームに軍を入れるか」
「その通りです」
静かに太子に告げる参謀達だった。
「ここでティムール軍を完全に叩く為に多くの兵力を動員して」
「一気に攻めるつもりです」
「アッサラームが決戦の地になるでしょう」
参謀達は口々に述べてきた。
「だからこそです」
「最高の戦力で彼等を討ちます」
「以後は一気にティムール軍をこのハサンより駆逐します」
「当然コムも奪回します」
「その為にも」
「それはいい」
やはりそれも認める太子だった。
「それはな。だが」
「だが？」
「何でしょうか」
「アッサルーム星系だが」
太子が言うのはアッサルーム星系についてであった。言うまでもなくアヤグーズ王国の首都でありこれからの決戦の地である。

## 第三十二部第四章　北へ行く中でその十四

「そこについては知っているだろうな」
「無論です」
「あそこは我々の勢力圏です」
参謀達は太子のこの問いにも自信に満ちた声で答えるのだった。
「既に地の利は心得ています」
「何もかも」
「何もかもか」
太子は参謀達の言葉をまずは己の口で反芻した。
「わかっているのだな」
「確かに複雑な星系です」
「ですが我々の勢力圏です」
またこのことを言う参謀達だった。
「知らない筈がないではありませんか」
「ですから」
「大丈夫なのだな」
太子の言葉が念押し気味になっていた。
「それで」
「宇宙潮流についても無論」
「承知していますが」
「ならばいい」
（確かに知っているだろう）
太子はまた内心で呟いた。
（あの星系の潮流のこともな）
「あの複雑な流れについても」
「我等はあそこで何度も訓練もしていますので」
「承知しています」
「そうか

（だがそれは完璧か）
太子が思うのはこのことだった。彼は参謀達が果たしてアッサルームのことを完璧に知っているのかどうかを懸念しているのである。しかし参謀達はこのことに気付いていないのだ。
（ある程度では。危険だが）
「それは前線指揮官達も同じです」
「何度もアヤグーズ軍と共同訓練を行っています」
「ですから」
「そうか」
それを聞いてもやはり己の感情は消したままであった。
「ではここは貴官等に任せよう」
「有り難き御言葉」
「それではそのように」
「まずは西部で勝利を収め」
太子は戦略について今度はかなり広い範囲で言及した。
「そのうえで返す刀で南部だな」
「まず西部を一気に進めます」
「だからこそアッサルームに戦力を向けます」
「一気に、だな」
「そうです」
また参謀の一人が答えた。
「ですから是非」
「それで進めます」
「そして南方だが」
「はい」
「こちらは予定通り持久戦だな」
「はい。そのつもりです」
この方針も変わることはなかった。当初の戦略方針を踏襲している。そしてそれは特に変えるところさえない位しっかりしたものであるのも事実であった。

「確かにヘルマンド、カラクームは瞬く間に破られましたが」
「それでもアンダハル及びファラーは」
「破れないというのだな」
「先の二つとは比較になりません」
それだけの防御効果があると自負している言葉だった。
「あのコロニーレーザーでの攻撃も」
「あれは流石に思いも寄りませんでしたが」
アッディーンの奇略であったのだ。艦隊でコロニーレーザーを運搬しその射撃で敵の防衛ラインを破る戦術はかってないものだった。
ハサン軍もそれにはかなり驚いた。しかし既にそのショックから立ち直り対策を講じたのである。彼等もそれだけの能力を持っているのだ。
「ですがそれに対しても」
「最早動じることはありません」
「そうか。それではな」
「はい、御安心下さい」
「そしてその間にティムール軍を倒し」
戦線をリンクさせての言葉だった。

## 第三十二部第四章　北へ行く中でその十五

「そうして足止めしているオムダーマン軍も駆逐します」
「それで戦いは我々の勝利に終ります」
「でじゃそれからは私の最大の仕事か」
シャイターンは彼等の話が勝利を予想するもので終ってから静かにこう述べた。
「それからがな」
「といいますと？」
「何が？」
「政治だ」
彼が言うのは今度はこれだった。
「政治だ」
「政治といいますと？」
「戦争を行うのは軍人だな」
「はい」
これも今更の言葉だった。
「では戦争を終らせるのは誰の仕事か」
「政治家になりますが」
「そういうことですか」
「そうだ。話はそれで終らせるべきか」
強い光を己の目に宿らせつつ居並ぶ参謀達に対して問うた。
「どう思うか」
「はい、このハサンより敵を駆逐すれば」
「それでいいと思いますが」
「そうか。それでいいか」
「いいのではないでしょうか」
参謀の一人が述べてきた。
「それで。我等の目的は防衛ですから」

「はい。私もそう思います」
「私もです」
彼に続いて他の参謀達も述べてきた。６
「別にオムダーマンやティムールには攻め込む必要はありません」
「それに彼等を退けた時は」
「退けた時は」
「その国力は衰えているでしょう」
「そして衰えたならば」
ここで政治的な予測も入った。だが太子が見ているような広範囲かつ現実的なものではいささかなかった。それが問題であったが彼等は気付いていない。
「必ず分裂が起こるでしょう」
「オムダーマンもティムールも急ごしらえの国家です」
これは一面としては事実だった。
「急激に勢力圏を築き上げました」
「オムダーマンは戦いで他の国を併合し」
「ティムールは北方の国家が寄り集まって」
「できているな」
「はい。ですから」
「まだつなぎ目があちこちに見えます」
これは彼等だけでなく多くの者が指摘していることだ。彼等の弱点であるとされてきていることだ。つまり急激な発展が裏目に出ているというのだ。
「ですから敗れれば」
「それで分裂に向かうでしょう」
「分裂したならばだ」
太子はさらに問うてきた。
「それでよしとするのか」
「ええ。そうですが」
「それが何か」

「攻め込まないのか」
太子が問うのはここだった。
「彼等に対して。攻め込まないのか」
「攻め込むですか！？」
「オムダーマンやティムールに」
「そうだ」
少し驚いた顔になる彼等に対して問うていた。
「退けた後さらにだ。それはどうなのだ」
「それは必要ないかと」
「私もそう思います」
だが参謀達は誰もその意志は見せなかった。
「別に攻め込んでも何にもならないでしょう」
「我等は既に東方を完全に掌握しています」
「サハラで最も豊かな東方を」
だからこそ彼等は豊かであるのだ。長い間サハラで最も豊かな東方を掌握し安定した状況にあったから。だからこそ安定しているのである。参謀達はそれでよしとしているのだ。
「ですからこれでよいかと」
「現状維持で」
「ではさらに攻め込む必要はないというのだな」
「はい」
「そう思います」
返答は変わらなかった。

## 第三十二部第四章　北へ行く中でその十六

「こちらとしては」
「放置してよいかと」
「どこも東方に比べれば比較にならない程貧しいものです」
サハラ東方は連合に匹敵する程豊かである。しかし他の地域は戦乱に覆われていた。その為に豊かさではかなり劣ってしまっているのだ。
「ですから別に」
「攻め込み領土に加えずともよいかと」
「そうか」
「はい、そうです」
「そうではありませんか？」
逆に太子に対して問い返しさえしてきた。
「我々には東方さえあれば」
「それでいいかと」
「ふむ」
答えずに腕を組む太子だった。
「わかった」
「おわかりになられましたか」
「貴官等の考えはな。これはだ」
「これは？」
「実は閣僚や議員、そして官僚達の多くの考えでもある」
政治の世界のこともここで明かしてみせた。
「それは聞いているか」
「ええ、まあそれは」
「ある程度は」
答える参謀達だった。
「政治の世界はよく知りませんが」

「話には聞いています」
「聞いてはいたか」
「ですがそれでいいのではないでしょうか」
「むしろ殿下」
また太子に対して問うてきた。
「下手に勢力圏を広げても無駄なだけです」
「無駄だというのか」
「ええ。あくまで我々は今のままでいいではないですか」
「この豊かな東方を掌握しているだけで」
皆現状維持で満足していた。そこから踏み出すつもりは誰も見せない。
「別に宜しいかと」
「東方は東方です」
こんな言葉も出て来た。
「そして西方も北方もそれぞれで」
「構わないかと思います」
「むしろです」
また考えが述べられた。
「西方や東方が乱れている方が有り難いのではないでしょうか」
「有り難いか」
「違いますか？彼等が一つになったこそ今の事態です」
受身どころか何処か他人任せなところのある意見も出て来た。
「統一されたからこそこちらに向かって来ました」
「我等は何もするつもりがないのに対して」
「無益な戦争です」
今度は主観に満ちた言葉だった。
「そのまでいればいいというのに」
「サハラ統一なぞという夢想を」
「夢想か」
この言葉に一瞬だが顔を曇らせる太子だった。

「それは」
「ええ、そうです」
「サハラの統一なぞ」
彼等はサハラ統一については全く考えたことがなかったのだ。サハラで戦乱が続いていたのはサハラ統一を目指してのことだがハサンは違っていたのだ。彼等はあくまで東方で自国の勢力圏が維持できればそれでいいと考えているのだ。そこから進むことはないのだ。
「何の意味があるのか」
「それを夢想と言わずして何と言いましょうか」
「だからか」
「はい、そうです」
「我々はやはり」
また太子に対して言う。
「東方だけで宜しいかと」
「それから先は別に」
「思えばだ」
太子はその彼等に対してまた話した。

## 第三十二部第四章　北へ行く中でその十七

「今我々はだ」
「はい」
「サハラ東方を掌握してからかなり経ったな」
「はい、既に」
「七百年でしょうか」
こう彼等に話すのだった。
「思えば長い歴史です」
「この東方を掌握してから」
「それからは大きな戦いはあまりありませんでした」
「そうだ」
戦乱の続くサハラにおいて唯一平穏だったのが東方なのだ。全ての地域が戦乱に覆われていたわけではないのだ。それでもハサンも断続的に戦争を行ってきているが。
「ですから今も彼等を退ければいいでしょう」
「後はどうでもいいかと」
「統一意見としては現状維持になるな」
「はい」
「それです」
参謀本部の結論はこれであった。
「それでいいかと」
「別に動く必要はありません」
「我等はこのままで」
またこのことを話していく。
「見ていればいいのです」
「彼等を退けたならば」
「オムダーマンとティムール」
太子はこの今争っている二つの国の名前をまた出す。

「そして我々だが」
「そういえば連合では」
「連合では？」
「今三国のうちの何処が統一するか話題になっているようです」
「このサハラをだな」
「どうやら我々のことを知らないようです」
こう言って一笑に伏す参謀達だった。
「我々はその様なことを望んでいないというのに」
「全くです」
「少なくとも我々は、ですが」
ハサンは、というのだった。
「統一しても何になるのか」
「我等にとってもメリットはないというのに」
「メリットか」
太子は今度は誰にも聞こえないように呟いた。
「メリットはあるがな。しかしそれは現状維持ではない」
「では殿下」
「そういうことで」
やはり太子の言葉は聞こえてはいなかった。彼等は穏やかな笑みを浮かべて彼に対して言うのだった。やはりその声は何もわかっていない声であった。
「宜しく御願いします」
「御決断を」
「うむ」
太子はあらためて彼等の言葉に頷いた。
「ではオムダーマン及びティムールを退けたならば」
「はい」
「そのままとする」
参謀本部だけでなく内閣や議会の決定でもあった。だから反対できなかったのだ。

「それでいいな」
「はい。それでは」
「宜しく御願いします」
「わかった。それではな」
「はい」
こうしてオムダーマンの先の先の方針も決定された。これはオムダーマン、ティムールにとっては鬼が笑う話だった。しかし太子はそこに違うものを見ていた。
「これが限界か」
こう言うのだった。一人になってから。
「ハサンの。人材の」
彼は統一の意見が出るのを待っていた。しかしそれがなかった。そのことに内心かなり失望しつつ今東宮に戻っていた。
「これでは。やはり私が」
呟き続ける。
「これまで以上に権限を強化し主導していくしかないのか」
「？殿下」
だがそれを隣に座す侍従の一人が聞いていた。
「何か仰いましたか」
「むっ！？いや」
だがあまりよくは聞こえなかったようだ。要領を得ないその返事に彼は己の言葉を誤魔化すことにしたのだった。己の考えを隠す為に。

## 第三十二部第四章　北へ行く中でその十八

「何でもない」
「左様ですか」
「それよりだ」
そして次は話を逸らしてきた。
「明日の予定だが」
「明日ですか」
「そうだ。どうなっているか」
このことを侍従に対して問うのだった。
「明日は確か閣僚達との会議と」
「式典が二つです」
「そうだったな。歌劇場と」
「臣民達との食事会です」
「その二つか」
彼は式典も確認してまた言った。
「どちらも豪奢なものになっていると聞いたが」
「はい、その通りです」
侍従は何でもないといった様子で彼に返した。
「いつも通り」
「そうか。いつも通りか」
「そうですが何か」
太子に対して問うてきた。
「それに何かありますか」
「今財政はどうなっているか」
今度はこのことを侍従に対して尋ねる。
「宮廷の財政は。どうなっているか」
「今も困っているわけではありませんが」
こう答える侍従だった。

「潤沢なものです」
「そうか」
「確かに我が軍は敗北が込んでいます」
このことは誰もが知っていることだ。隠せるものではない、太子はそう判断して情報をあえて公開しているのだ。隠蔽はしていないのだ。
「ですがそれでも」
「力はあると言いたいのだな」
「その通りです。少なくとも」
侍従はさらに言う。
「式典位なら何の問題もありません」
「財政的には」
「はい、そうです」
はっきりと答えさえする。
「ですから御心配なく」
「わかった」
あらためて彼の言葉に頷く。
「それではな」
「それよりも殿下」
「何だ？」
「最近お疲れではないですか？」
心配する顔で彼を見ての言葉だった。
「あまりお休みになられていないようですが」
「いや、別に」
この問いにはバツの悪い顔になる太子だった。
「それはないが」
「本当ですか？」
「毎日休むことは休んでいる」
「だといいのですが」
「少なくとも徹夜はしていない」

これははっきりと言う。
「徹夜だけはな」
「それだけはなりません」
侍従もそれは言うのだった。
「徹夜は。身体にとって最も毒です」
「よく言われることだな」
「はい。身体は時として休めなければなりません」
医者のような言葉だった。
「だからこそ少しだけでも」
「時間があれば休むべきだというのだな」
「その通りです」
やはり医者のような言葉であった。
「ですから。これから少し時間がありますので」
「休むべきか」
「ミルクを用意しておきますが」
そっと気遣った言葉であった。

## 第三十二部第四章　北へ行く中でその十九

「それを飲まれてから」
「休む方がいいか」
「そうです。それで宜しいですね」
「わかった」
侍従の言葉に対して静かに頷いてみせた。
「それではな。暫く休ませてもらおう」
「それで御願いします。それでは帰りましたら」
「うむ」
「お休みの用意をしましょう。連絡しますので」
「いや、それはいい」
侍従が携帯を出したところでそれは制止した。
「それには及ばない」
「宜しいのですか？」
「休む場所はもう決めてある」
微笑んでこう述べるのだった。
「だからだ。それはいい」
「宜しいですか」
「私の部屋で休む」
こう侍従に告げた。
「だからいい」
「左様ですか」
「少し休むだけだ」
そしてこうも言うのだった。
「だからな」
「少しで宜しいのですか？」
「少しでも数回に分けている」
「だからですか」

「少しずつでもな。だからこそ」
「わかりました。それでは」
侍従もこれ以上太子に言わなかった。
「そのように致します」
「うむ。それでだ」
「はい」
ここで話が少し変わった。
「飲み物を頼む」
「何をでしょうか」
「ジュースがいいな」
ジュースをということだった。
「グレープフルーツのな。それが欲しい」
「それはいいことです」
侍従は彼がグレープフルーツジュースを頼んだのを受けて笑顔になった。
「グレープフルーツジュースを頼まれるとは」
「そんなにいいのか」
「疲れた時には柑橘類ですから」
また明るい顔で彼に述べる。
「だからこそです」
「そうか。そういえばそうだったな」
「はい。マーグワート産ですね」
「そこは任せる」
そこまではこだわっていなかった。実際のところただグレープフルーツジュースが飲みたかっただけなのだ。他に他意はなかったのである。
「そこはな」
「マーグワートのものは格別です」
侍従はその彼をよそに彼に語る。
「栄養も違うのです」

「そんなに違うのか」
「グレープフルーツだけでなく」
彼はさらに太子に言ってきた。
「ジュースにレモンも入れておきましょうか」
「ああ、それもな」
やはりここまで考えていなかった。
「できれば頼む」
「わかりました。ではそれも」
「うむ」
「そしてですね」
「まだあるのか」
侍従のさらなる言葉に今度は少し驚いた顔になってしまった。
「まだ何か入れるのか」
「いえ、そろそろいい時間ですし」
「いい時間とは？」
「ですから。三時ですね」
「もうそんな時間か」
「はい。ですから」
ここから彼が何を言うのかは太子はすぐに察することができた。
他には考えられなかった。
「おやつですが」
「何か。今日は」
「同じくマーグワート産のものですが」
「ふむ」
「キーウィとオレンジではどうでしょうか」
出して来たのはその二つであった。
「やはりどちらも健康にかなりいいですので」
「キーウィとオレンジか」
「赤いキーウィと青いオレンジです」
また独特なものであった。

# 第三十二部第四章　北へ行く中でその二十

「それで如何でしょうか」
「ではそれを頼む」
やはりこれについてもあまり深く考えることなく答えた。
「そんなにいいのならな」
「味だけではないのですよ」
侍従の言葉は何故か誇らしげなものであった。明るさだけでなくそうしたものまで表情に入ってきていたのである。太子にとっては違和感のあるものだった。
「マーグワート産のものは」
「栄養が豊富なのか」
「はい。連合でもそれで人気です」
ハサンは連合との交流が盛んである。貿易もかなりの規模のものを行ってきているのである。
「味でも栄養でも」
「確かそれはラトゥーナ星系のものではなかったのか？」
「最近ではラトゥーナと同じだけの人気があるのです」
胸を張ってまた言ってきた。
「このマーグワートのものは」
「そうだったのか」
「言うならば双璧です」
こうまで言った。
「ですから。是非」
「わかった。それではな」
「有り難き御言葉」
「しかしだ」
だがここで彼は胸に引っ掛かるものがあった。それでこの侍従に対して問うのであった。

「一つ聞きたいのだが」
「何でしょうか」
「何故貴官はマーグワートにそれだけこだわる」
こう彼に問うた。
「貴官はマーグワート出身か？」
「いえ」
だがこの問いには首を横に振ってきた。
「それは違います」
「では何故だ。縁者でもいるのか？」
「そうでもありません」
これも違うというのだった。
「そういった縁戚はありませんので」
「では何故だ」
「簡単に申し上げるとファンだからです」
「ファン！？」
「はい」
にこやかに笑って戸惑った顔になっている太子に言ってきた。
「実はそうなのです」
「そうだったのか」
「何故また」
「きっかけは偶然でした」
こう太子に語ってきた。
「マーグワートの味を知ったのは」
「偶然か」
「ある日ネットを検索していまして」
「うむ」
「そこで見たのです」
よくあるパターンであった。人がインターネットというものを知ってからこうした偶然見たものから新しい世界を知るということが実に多くなったのである。

「マーグワートの評判を」
「それでか」
「実際にその果物を取り寄せてみまして」
「美味かったのだな」
「既に宮中でも人気です」
その発信源が彼なのはもう明らかだった。
「ですから殿下にもと思いまして」
「そうだったのか」
「ではそれで宜しいですね」
「構わない」
彼も今更断るつもりはなかった。
「私も何か食べてみたくなった」
「有り難き御言葉。それでは」
「そしてだ」
彼はここでその侍従に対して問うてきた。
「マーグワートだったな」
「はい」
「確か我が国の南方にあったな」
「その通りです」
太子のその問いに対して率直に答えてきた。
「どちらかといえば南方です」
「そうだったな」
その返答を聞いて頷く太子だった。

## 第三十二部第四章　北へ行く中でその二十一

「そして」
「そして？」
「近かったな」
今度はこう呟いた。
「ガワール星系にな」
「その通りです」
ハサンを実質的に統治する者としてそれはよく把握していた。
「近いです」
「願わくばそこまでオムダーマン軍が迫らないことを祈る」
そしてこう言ったのだった。
「決してな」
「是非そうあって欲しいものです。ですが」
「ですが？」
「それは杞憂でしょう」
こう言って微笑む侍従であった。
「それは。心配無用です」
「安心していいというのか」
「ガワール要塞は難攻不落です」
だからだというのだ。
「あの要塞は。決して」
「陥落しないというのか」
「まずアンダルを抜かなければなりません」
また言った。
「あのアンダルを」
「アンダルもな。確かに」
その要塞のことはよくわかっている太子だった。
「容易に陥落できるものではない」

「私は軍事のことはわかりません」
彼の専門外であるというのだった。
「宮内省の者ですので」
「国防省に出向したことは」
「残念ですが」
これが返答だった。
「それもまた」
「そうだったな。宮内省と国防省はな」
侍従のその言葉を聞いて遠くを見る目になった太子だった。
「険悪ではないが疎遠だ」
「その通りです。どうにも関係が希薄です」
侍従も首を傾げさせてそのことを認める。
「宮内省は財務省及び内務省とは関係が深いですが」
「うむ」
「国防省とは希薄です」
「そうだったな。国防省はあくまで軍事に専念している」
「はい」
「しかし宮内省はだ」
「そういうわけでもありません」
ここに一つの問題があるのだった。
「我々は宮廷のことを司っていますが」
「それだけに留まらないな」
「宮廷は実に多くのものに縁があります」
かつては軍ともそうであったが近代化が進むにつれそうではなくなっているのだ。連合では国王が軍服を着ることも稀になっている。日本では国防大臣が文官でありながら儀礼として日本国元帥、しかも首席として軍服を着ることはあっても国家元首であり軍の名目上の最高司令官である天皇陛下は軍服を着られない。儀礼においては礼服で登場されるのが常となっている。これは他の君主制の国でも同じである。

サハラでは宮廷に軍が入っている国も多かった。しかし多分に平和に馴れまた連合との交流が深いハサンでは分化がかなり進んでいるのだ。
「ですから財務省や内務省、とりわけ内務省とは」
「縁が深いな」
「宮中警察の件もありますし」
ハサンでは王室は彼等が警護しているのだ。
「ですから」
「軍の護りもあるがな」
「それでもです。完全に別物です」
「そうだな。だからだ」
「はい」
太子の言葉に頷いた。
「ですから。それは」
「そうだな。それはない」
また言う太子だった。
「だから宮内省の者は国防のことは知らないのだな」
「その通りです。国防省にも知り合いはいますが」
「それでも疎遠か」
「否定はできません」
紛れもない、しかも周知の事実だからだ。

# 第三十二部第四章　北へ行く中でその二十二

「このことは」
「そういうことだ。それではだ」
「アンダルのことですか」
「それは宮内省全体が考えていることだな」
「少なくとも私の周りではそうです」
彼はこう太子に答えた。
「皆。オムダーマンのこれ以上の進撃は不可能だと思っています」
「不可能か」
「はい、間違いなく」
断言にさえなっていた。
「それは無理かと」
「そうか。宮内省ではそう考えているか」
あらためてこのことを知る太子だった。
「ではさらに聞こう」
「何でしょうか」
「陛下はどう考えておられるか」
「国王陛下ですね」
「その通りだ。どうなのか」
父でもある国王がこのことについてどう考えているのか、侍従に対して問うのであった。これまでよりさらに真剣な目になっている。
「このことについては」
「陛下も同じです」
こう答える侍従であった。
「やはり。アンダル以降は」
「オムダーマンは進めないと考えておられるのだな」
「その通りです」
これが答えだった。

「それだけはないと考えておられます」
「そうか」
「陛下はオムダーマンよりもティムールだとお考えです」
「ティムールの方をか」
この言葉を聞いて太子の目が微妙に動いた。
「それはな」
「その通りだと思いませんか」
太子に対して問うてきた。
「これについてはやはり私はよく知りませんが」
「どうなのだ」
「参謀本部も同じ見解だと聞いております」
このことも宮内省に届いているのだった。
「ティムールの方が脅威と」
「ティムールか」
「はい。ですから」
侍従の言葉は続く。
「陛下もオムダーマンについては安心しおられると」
「そうであろうな」
このことについては本意不本意は別にして頷く太子だった。
「私もな」
「殿下も？」
「いや」
また言葉を途中で止めてしまった。
「何でもない」
「左様ですか」
「そうか。わかった」
ここで話を止めて頷いてみせた。
「それではな。話を戻そう」
「お話をですか」
「そのジュースのことだ」

話を戻してきたのはそのことだった。
「そんなにいいのだな」
「まさに黄金です」
こうまで言い切ってきた。顔が完全に笑顔になっていた。
「あれだけのものはそうはないでしょう」
「それ程までか」
「あの独特の甘酸っぱさがです」
グレープフルーツのその甘酸っぱさを言うだけで口元が綻んでいた。どうやら彼はその甘酸っぱさを堪能してきているようだ。
「さらに濃縮されていて」
「ふむ」
「実にいい感じなのです」
こう言うのであった。
「あれは一度飲んだら忘れられません」
「そんなになのか」
「だからなのです」
また笑顔での言葉であった。
「私もお勧めするのは」
「そういうことだな」
「評判になるのにはそれだけの根拠がありますね」
「その通りだ」
まさに自明の理というものだった。

## 第三十二部第四章　北へ行く中でその二十三

「それではだ」
「はい、是非」
「栄養の為にもな」
「連合の話ですが」
侍従の話は連合に関するものにもなった。
「彼等はあれで食には気を使っています」
「そうだな」
太子もそれは知っているようである。
「量だけでなくな」
「ええ」
まず彼等の大食ぶりはあまりにも有名になっている。エウロパ戦役で連合軍将兵のバイキングを彷彿とさせる食いっぷりが話になっているがこれはサハラでも有名なことなのだ。
「味にもな」
「その通りです。味にも五月蝿く」
「うむ」
「そして栄養にも」
太子は侍従に話を合わせてきた。
「そういうことだな」
「はい、その通りです」
侍従の言いたいことはまさにそれであった。
「あれで栄養にもかなり気を使っています」
「あとは衛生にも気を使っていたな」
「それもでしたね」
これについてもであった。意外と細かいのである。
「もっとも。衛生に関しては」
「連合の者達のあの頑丈さを考えれば」

「そうおいそれは当たらないと思うのですがね」
「確かにな。それでもか」
「彼等はとかく短気な国が多いですが」
国民性で言えばである。連合は三百国あるがハサンから見れば短気な国が多いのである。その中にいる市民達も含めてである。
「食べ物のことになるとな。余計にな」
「短気になっていますね」
「それだけ気を使っているということだな」
「その通りです。ですから栄養もまた」
「そうだな。だからか」
ここで太子は一つのことがわかった。
「あれだけ大きいのはな」
「彼等の体格ですか」
「そうだ。摂取している栄養はかなりのものなのだろう？」
侍従に対して問う。
「我々と比べて」
「彼等から見ればです」
侍従もそれを受けて彼に対して話す。
「我々の栄養事情ですが」
「どうなのだ？」
「欠食扱いになる程だといいます」
「！？そんなになのか」
太子もここまでは予想していなかった。だからこそ思わず声をあげてしまったのだ。
「そんなに違うのか」
「はい、どうやらそのようです」
侍従はまた述べた。
「あくまで彼等から見てですが」
「そうなのか。それ程か」
「まず連合は食べ物に困ったことはありません」

一つの前提であった。
「この一千年の間。飢えとは全く無縁でした」
「そうだったな。食べ過ぎで死んだ者はいてもな」
「はい」
「飢えで死んだ者はいなかったな」
「まさに飽食です」
今の言葉には批判と皮肉もまた含まれていた。
「ですが我々は」
「戦乱は何もかもを破壊する」
これは何時の時代でも変わらぬ現実である。
「居住している惑星や衛星を脅かされ」
「ええ」
「そして逃げる間に」
「若しくは逃げることもできず」
侍従の言葉に苦いものが含まれた。今度はそれであった。

# 第三十二部第四章　北へ行く中でその二十四

「その中であえなくですね」
「流石に我がハサンではなかったことだがな」
「ですがサハラ全体としては違いました」
そうなのであった。
「サハラ全体では。戦乱が止むことはなく」
「民衆への害も大きかったな」
「中には非道な者もいました」
戦争は聖人君子だけが行うものではない。八条のようにあくまで毅然として軍律を徹底させる者だけではない。そうではない者もまたいるのである。これはどの世界でも同じことだが。
「それにより」
「そうだ。飢え死にする者達もいた」
「そしてです」
侍従の言葉は続く。
「我等は平時であってもです」
「摂取している栄養が連合とはまるで違うのか」
「当然エウロパやマウリアとも」
この二つの勢力も話に出される。
「かなり違ってきているようです」
「我がハサンでもか」
「やはり劣っているとのことです」
実に正直に述べられた。
「実際のところ」
「そうなのか。それは気付かなかったな」
「体格にも出ています」
侍従は体格についても言及した。
「連合では平均身長は二メートル近いです」

「確か一メートル九十だったか」
「そうです」
少なくとも二十世紀と比べるとかなりの違いである。
「それが成人男子で」
「成人女子なら一メートル七十程度か」
「無論個人差はありますがそれ位だったかと」
「サハラでは成人男子が一メートル七十四程度だがな」
「ようやくあちらの成人女子と同じ位ですね。少し高い程度です」
「少しな」
こう返す太子だった。
「だが成人男子のそれはな」
「確かに連合の者達は大柄です」
会ってみたからこその言葉であった。
「そして食べる量もまた」
「かなりだな」
「はい。やはりそれも豊かさなのでしょう」
「ふんだんに食べられるからこそその大きさになる」
「どうやらこれは人種は関係ないようです」
連合は言わずと知れた多人種により構成された国家連合である。アジア系もいれば白人もいるし黒人やアボリジニーもいる。そして彼等が複雑に混血し合っているのだ。つまり連合においては人種というものは一概にこうだとは言えないものがあるのである。
「アジア系でも大きいですし」
「昔は小柄だったそうだな」
「はい」
二十世紀までの話だ。
「日本人の平均身長は十九世紀で一メートル五十四だとか」
「また随分と低いな」
「そしてかつてのエウロパも」
「欧州と言われた時代だな」

「そうです。その頃の彼等も」
「小柄だったのか」
「あのバイキングですが」
大柄と言えば彼等である。巨人とまで言われていたのである。
「実際は一メートル七十程度だったそうです」
「それだけしかなかったのか」
「意外でしたか」
「意外も何もだ」
流石に今回はいぶかしむ顔になっていた。
「低かったのだな」
「これでは我々よりも小柄です」
「そうだ」
それに彼は頷く。
「バイキングでそれだったか」
「ですから当時の欧州といえば」
「さらに小さかったのだな」
「古代ローマにおいてもそうだったようです」
ローマもそうだというのだ。

## 第三十二部第四章　北へ行く中でその二十五

「やはり我々と比べればかなり」
「小柄だったか」
「全ては栄養のせいです」
結局はこれに尽きるのだった。摂取している栄養が多ければそれだけ体格が大きなものとなる。だから昔の人間は小柄だったのである。
「連合の日本にしろです」
「先程話に出たな」
「はい、百五十四センチといえば」
「一応確かめるがそれは成人男子の身長だな」
「その通りです」
侍従はそれを否定しなかった。
「それだけしかなかったのです」
「伊東首相と同じ位か。いや」
「あの方はさらに小柄です」
「そうだったな。あの首相はな」
日本国首相である伊東の小柄さはサハラにおいても有名なものとなっている。連合では女性の身長はわりかし極端なものになっているのだ。
「一五〇程度だったか」
「ですからあの八条長官と一緒にいるとです」
「頭一個分どころではないか」
「その通りです。完全に」
「そうだな。身長が違い過ぎる」
小柄なことがさらに強調される。伊東は連合においてもサハラにおいても才媛、若しくは女狐として知られている。ところがその背もまた実によく知られているのだ。

「あの長靴を履いた猫」
「ナポレオンですか」
「あの男で一メートル六十二だったな」
「ええ、そうでした」
太子はナポレオンの背も知っていた。
「当時のフランス貴族の間では小柄でした」
「太陽王もだったな」
ルイ十四世のことである。異常なまでに長い在位を過ごしたこの王はかなりの健啖家で知られたが実は思ったより小柄だったのだ。このことはあまり知られてはいなかったりする。
「あの王は確か」
「百六十五でした」
歴史上の人物の身長についてよく知っている侍従である。
「貴族達の中ではやはり」
「小柄だったか」
「貴族は平民より頭一つ大きかったですから」
「それも栄養だったな」
「そうです」
ここでも話に栄養が出て来た。
「貴族達は食べることには困りませんでしたので」
「それのせいだな」
「そうです。全てはそれです」
結局話は栄養に至った。
「食べ物が大事なのです」
「連合の者達はその栄養に満ちたものを」
「牛馬の如く臓腑に入れていきます」
こう言ってしまうと連合の者達が暴飲暴食しているように見えるがサハラの者達から見ればその通りなのだ。それだけの量を食べているのだ。
「エウロパ戦役においてはです」

「連合軍の兵士十人でレストランを閉店に追い込んだのだったな」
「はい、そうです」
こんな伝説も出てしまっていた。
「あっという間にです」
「十人で店を一つか」
「その時彼等は何と言ったか御存知でしょうか」
「ああ、それは聞いている」
これも知っている太子だった。
「確かエウロパではこれだけしか食べていないのかだったな」
「その通りです。彼等は店を食い潰すつもりはなかったのです」
悪意はなかったのである。エウロパの者達を最初から馬鹿にはしていてもだ。
「ですから本気で驚いたとか」
「牛や馬が十頭来る」
本当に牛馬に例える太子だった。
「そうすればどうなるか」
「店は閉店です」
サハラでもこれは同じであった。
「そういえば連合の人間が来ればそれだけで食料が売れますので」
「エウロパではその時期食糧危機が起こりかけたのだったな」
「その通りです。何しろ六十億の大軍です」
「六十億か」
「しかもそれが彼等の三倍は食べます」
条件はさらにハードなものが追加された。

## 第三十二部第四章　北へ行く中でその二十六

「いえ、四倍かも知れません」
「つまり二百億の人口が飛び込んで来たのと同じだ」
「はい」
こう考えればわかりやすかった。
「エウロパの許容人口は一千億だと言われているが」
「その二百億が好き放題食い散らかすとあらば」
どうなるかは言うまでもなかった。エウロパも食料に困ったことはないがそれは人口抑制政策故のことである。連合とは条件が違うのだ。
「食糧危機になるのも当然だ」
「そうです。もっとも連合側にその意図はなかったようですが」
「エウロパを併合するつもりはなかったからな」
まずはこれだった。
「それに彼等を滅ぼすつもりもなかった」
「その通りです。ですから」
侍従も言う。
「エウロパの食糧危機は去りました」
「牛馬がいなくなってな」
「そうです」
やはりここでも連合の者達は牛馬に例えられた。
「恐竜と言ってもいいですが」
「恐竜か」
「ですが恐竜は爬虫類です」
侍従は何故かここで爬虫類というカテゴリーを出してきた。
「ですから彼等はそれ程食べません」
「そうだったな。爬虫類はな」
「はい」

これには確かな理由がある。爬虫類は哺乳類とは違い体温をコントロールすることができない。だからその体温のコントロールの分のエネルギーを必要としないのだ。だから哺乳類程の割合で食べたりはしないのだ。身体は大きくともその割合自体は少ないのである。
「あまり食べなかったな」
「その通りです」
「だからこそ牛馬か」
答えはそこにあった。
「連合の者達はな」
「我々も牛馬になりますか」
「それを目指したいものだ」
太子もそれを否定しない。
「是非な」
「まずは豊かさですか」
「そうだ」
まさにそのものであった。
「食べるものに服がある」
「そして家と」
「仕事だ。まずこの四つがなければならない」
「その通りです」
「本音を言うとだ」
ここからは政治を動かす者としての本音だった。
「戦争なぞはな」
「したくはありませんか」
「そうだ。戦争は何も生み出さない」
政治家、特に文官としての太子の言葉であった。
「だからしないにこしたことはない」
「左様ですか」
「しかしだ」
だがここでまた言うのだった。

「するからには勝たなければならない」
「勝たねばですか」
「そうだ。勝たなければな」
今度は武官としての言葉であった。
「何の意味もない」
「確かに」
「行わないに越したことはないが行うには勝たなければならない」
今度は双方の言葉だった。
「それが戦争だ」
「その通りです」
「思えば因果なものだ」
太子はすっと笑ってみせた。
「サハラにいればそれだけな」
「サハラでは戦いは悪ではありません」
「それは私も同じだ」
今度はムスリムの顔になっている。様々な顔を僅かの間に見せているがそれでも彼は自分自身に対して矛盾したものは感じてはいなかった。

## 第三十二部第四章　北へ行く中でその二十七

「私もな」
「戦争は恐れてはおられませんね」
「戦争は避けたいが起こるものでもある」
言葉には達観もあった。
「そしてそれは悪ではない」
「そうです。だからこそ今は」
「自重か」
「休まれ、そして栄養を充分に採られ」
「わかっている。それではな」
「はい。もうすぐです」
話が一段落したところでまた言ってきた侍従だった。
「東宮に戻られるのも」
「東宮か。どうも最近は」
「どうされましたか」
「毎日東宮と他の場所を行き来しているな」
「はい、確かに」
「忙しいのは確かだ」
「やはりそれは仕方ないかと」
侍従はそれは仕方ないと言う。
「やはり今は」
「戦争中だからな」
「その通りです。では」
「うむ」
また侍従の言葉に頷いた。
「ではまず休み栄養を採り」
「はい」
「また政務に当たろう。ホットラインだが」

「どちらまでのですか？」
「アヤグーズまでだ」
そちらへのホットラインであった。
「二つ用意しておいてくれ」
「二つですか」
「一つはバンダル将軍へだ」
アヤグーズに派遣されているハサン軍の最高責任者である。太子にとっては頼りになる軍人の一人でもある。それは能力と人格によるものだ。
「まずは彼と話をしたい」
「わかりました。ではそちらの用意をしておきます」
「頼むぞ。そしてもう一つは」
「どなたにですか？」
「女王にだ」
一言であった。
「ブルコルジ女王とだ。話をしたい」
「女王陛下とですか」
「是非だ」
言葉が強くなる。
「是非共話をしたい。ここでな」
「わかりました。ではそちらも」
「女王は今元気だったな」
「はい」
侍従はしっかりとした声で太子に応えたのだった。
「コムでの敗戦に対しても気落ちされていません」
「そうか。ならいい」
「あれは我々、そしてアヤグーズにとっては思わぬ敗戦でした」
「それは私にとってもだ」
太子も言った。
「あの戦いはな。勝利を確信していた」

「ええ」
これについては彼等だけではなかった。ハサンの者達だけでなく連合やマウリア、そしてエウロパの者達もアヤグーズ、ハサン連合軍の勝利を確信していた。しかし残念ながらそうはならず連合軍は敗れたのである。そして今に至っているのだ。アッサルームの決戦に。

## 第三十二部第四章　北へ行く中でその二十八

「ですが。まさか」
「恐るべきはシャイターン主席か」
シャイターンを褒め称える言葉になっていた。
「あの若き名将のな」
「名将なのは間違いないでしょう」
この評価はどの者達も本意、不本意に関わらず認めていた。それはこれまでの幾多の戦いにおける鮮やかな勝利の故である。
「我々にとっては残念ながら」
「そうだな。しかし戦争は将だけで行うものではない」
「その通りです。戦争はまずは」
「数だ」
はっきりと言った。
「幾ら優れた将が相手にいたとしても数はそれを覆ってしまう」
「連合軍がそうですね」
「そうだ」
連合軍が話に出た。
「彼等は将兵の練度は左程ではない」
「はい」
「そして将個々の質もだ」
「あまり大したことはありませんか」
「見たところ無能な将はいない」
エウロパ戦役から言っているのである。
「そして有能な将もまた」
「あまりいませんか」
「はっきり言ってしまえば凡将ばかりだ」
これが太子の連合軍の将達に対する評価だった。
「全体的な質では我が軍の方が上だ」

「上ですか」
「軍規を守り命令に忠実でマニュアルに沿った動きをするだけだ」
「それだけですか」
「そうだ。言うならばユニットに徹しているだけだ」
言葉を続けている。
「戦いの為にな」
「それだけなのですね」
「この程度は軍人ならば誰でもできるな」
「はい」
これもその通りだった。
「その程度のことでしたら」
「できないというのはかなりの無能だ」
「そうですね。元々軍人ですらありません」
「少なくとも軍人としての教育を受けていれば誰でもそう行うものだ」
「それを行っているだけであれだけの大勝利を収められたのは」
「やはり数なのだ」
ここまで話して出た結論はやはりこれであった。
「数だ。何もかもな」
「そして国力ですね」
「そういうことだ。国力といえばだ」
話はさらに続く。
「連合はその国力を数にだけ注いではいない」
「兵器にもですね」
「その兵器の質もかなりだった」
「それも国力ですか」
「そして数にも入る」
また数が話しに出た。
「砲撃できる数もな。かなりだからこそ」
「それも入りますか」

「しかしだ」
ここで太子の言葉が微妙に変わってきた。
「数はただ使えばいいというものではない」
「といいますと」
「使える場合と使えない場合がある」
こう言うのだった。
「二つのケースがな」
「ありますか」
「そうだ。それを考えればだ」
「今回はどうでしょうか」
侍従はそれも問うてきた。
「今回はどうなのでしょうか」
「まずアッサルームはだ」
「はい」
「複雑な宙形だ」
このことが述べられる。
「それもかなりな」
「はい。だからこそです」
深刻な顔の太子に対して侍従のそれは実に楽観的なものであった。
太子はその顔に言いたいものを感じていたがそれは顔にも出さなかった。
「これで勝てます」
「それもあってか」
「ここに膨大な戦力を注ぎ込み」
こう言うのだ。
「踏み潰せばいいのですから」
「そう思うか」
「何か？」
「いや、いい」
しかし彼は言わないのだった。途中で止めた形になったが。

「気にするな。いいな」
「わかりました。それでは」
「そしてだ。行くぞ」
ここで車が止まった。
「話通り一休みしてだ」
「そのジュースとフルーツの後で」
「そうだ。そうさせてもらう」
こう言って開かれた扉から出て仕事に向かう。彼もまた戦っていた。しかしその戦いは多分に孤独だった。少なくとも彼の本心を理解している者は周りにはいないのだった。

# 第三十二部第五章　決戦を前にしてその一

決戦を前にして

ティムール本国では今。国家主席の不在の中で慌しい動きが続いていた。
「そうだ、それはそっちだ」
「そのコンテナはすぐに出せ」
「いいか、すぐにだ」
こう言い合いつつ倉庫で作業服の将兵達が慌しく動き回っていた。
「それはそこでだ」
「おい、それはまだだ！」
「まだですか？これは」
「そうだ！」
先任下士官の怒鳴り声が響く。
「まだ出すな。それはな！」
「は、はい！」
「わかりました！」
「いいか、今は大変な時だ」
先任下士官はまた若い兵士達に怒鳴る。
「だからだ。余計に間違えるな」
「わかりました」
「そして急げ」
一聞すると矛盾する言葉だった。
「急げ。送る物資はまだあるんだぞ」
「減らないんですね」
「減る筈がない」
見ればこの先任下士官は曹長だ。曹長はまた兵士達に対して述べる。
「今俺達は何をやっている！？」

「戦争です」
「そうだ、戦争だ」
このことをあらためて言うのだった。
「戦争はとにかくものを消費する」
「はい」
「だからだ。この忙しさも当然のことだ」
「当然ですか」
「しかもだ。今は」
「今は？」
「決戦前だ」
このことを言うのだった。
「決戦前だぞ。アヤグーズ軍とな」
「決戦なんですか」
「何だ？わからないのか」
曹長は若い兵士がぼんやりとした返事をしてきたのを聞いて困ったような顔を見せてきた。
「そんなことも。わからないのか？」
「はあ、すいません」
「まだ。何が何なのか」
「そうだろうな。考えてみればそれも仕方ないことだ」
「仕方ないですか」
「御前等戦場に出たことはないな」
まずはこのことを彼等に対して問うのだった。
「戦場にな。ないだろう」
「ええ、まあそれは」
「最初に配属されたのがこの基地ですし」
この補給基地である。この基地はティムール本国にある。ここから膨大な物資を戦場にまで送っている。シャイターンが設けた数多くの補給基地のうちの一つなのだ。
「まだ戦場には」

「ひょっとしたら兵役が終わるまでここかも」
「それなら余計に仕方がない」
曹長は彼等の話を聞いて腕を組んでまた述べた。
「それもな」
「はあ。そうですか」
「それも」
「戦場にいればわかる」
曹長は言う。
「どれだけのものを消費するのかな」
「そんなに消費するんですか」
「凄いものだ」
言葉が強いものになっていた。
「夥しい量を消耗する。それを考えればこれだけの物資もな」
「すぐなんですか」
「そういうことだ。少ないものだ」
曹長は基地を見回してみせた。何もないと殺風景であろうこの基地の中は実に多くの物資で満たされている。その物資を見回しながらの言葉である。

## 第三十二部第五章　決戦を前にしてその二

「これでもな。まだな」
「まだですか」
「もうすぐもっと入る」
そしてこう述べるのだった。
「もっとな」
「えっ、今よりもですか」
「これよりもなんて」
「倍はいく」
こうまで言った。
「倍はな。いくな」
「そんなにですか」
「今でもコムの時に匹敵するのに」
先のティムールが戦った大きな戦いである。この戦いでもティムール軍は多くの物資を消耗している。しかしそれよりもだというのである。
「これよりもですか」
「艦艇の数が前よりも増えているしな」
「まずそれですか」
「そしてだ」
曹長はさらに言う。
「コムに物資を運び入れるのも本格的になるしな」
「それもですか？」
「勝っても負けてもだ」
曹長の階級にあるからこそ言える微妙な言葉だった。将校が言えば問題になるし下の階級の人間が言えば何を言っているとなる。そうした言葉であった。
「コムは今後重要になるしな」

「だからですか」
「そうだ。もうすぐ忙しさもピークになるぞ」
「うわっ・・・・・・」
「今よりもって」
「戦場にいないだけましと思え」
唖然とする若い兵士達に対して告げた。
「命を賭けてるわけじゃないんだからな」
「ですがジハードが」
「そうだよな」
兵士達は小声で言いだした。
「それに加われないっていうのが」
「あれですし」
「これもジハードだ」
「これもですか」
「立派な戦争だぞ」
こう言うのである。
「こうした物資を戦場に送るのもな」
「そういうものですかね」
「当然命を賭ける方がアッラーの思し召しだ」
「ええ、それは」
「そうですけれど」
「何ならだ」
少し意地の悪い顔になる曹長だった。
「命賭けでやってみるか？」
「といいますと」
「一体」
「過労死するか？」
彼が言いたいことは何とこれであった。
「それともな」
「あの、過労死って」

「幾ら何でもそれは」
「嫌か？」
戸惑いを見せた兵士達に対して問い返した。
「それで死ぬのは」
「ええ、それ位ならやっぱり」
「そうだよな」
顔を見合わせて口々に言うのだった。暗い顔をして真剣になっていた。
「船に乗って撃沈されるか基地を攻撃されて」
「死ぬ方がいいですよ」
「まあそうだな」
曹長もそれがわかっているようだった。話を聞いても特に咎める様子はない。
「普通はそうだ」
「そうだってそれじゃあ」
「何で聞くんですか？そんなこと」
「誰だってそうだからだ」
これが彼の言いたいことであるようであった。
「これはな」
「といいますと」
「一体」
また兵士達が曹長に対して問うた。その間にも彼等は次々と仕事をこなしていく。その手に持っているカードに文字を次々と入力している。

## 第三十二部第五章　決戦を前にしてその三

「間違えるなよ」
「わかってますよ」
「それは」
「それでだ」
こう断ってからまた話をはじめる曹長だった。
「御前等も過労死は嫌か」
「はいそうですかってそれで死ねる話じゃないですよ」
「戦死とは違うじゃないですか」
「いや、これも戦死だ」
しかしここでこう言うのである。
「これもな。立派な戦死だぞ」
「そうなんですか？」
「過労死も」
「今俺達はこうして軍務に当たっているな」
「はい、そうです」
「それは」
これは紛れもない事実だ。どうしようもないまでの。実際に彼等の周りは軍需物資で満ちている。これでそうでないと言うにはあまりにも詭弁であった。
「ですがそれで」
「そうなるのですか？」
「戦場は前線だけじゃないんだ」
こうした基地では常に言われる言葉ではある。
「俺達が遅れるとだ」
「それだけ前線の友軍が死ぬ」
「そうですね」
これが現実である。

「それはわかっているつもりです」
「前線も後方も関係ない」
曹長はこうも言った。
「後方もだ。つまりだ」
「ここで過労死してもそれは戦死になるんですか」
「そういうことですね」
「話がわかったな。それではだ」
「わかりました。それでですか」
「ここで死んでもそうなるんですね」
これでわかるのだった。ここで死んでもだ。
しかしだからといってだった。それで納得できる彼等ではなかった。
「ですが曹長」
「それでもですね」
「嫌か」
「そこまで働くとなると」
「正直引きます」
「安心しろ。俺もそこまでは言わない」
笑ってこう二人の兵士達に告げた。
「ただしだ。必死で働けよ」
「必死にですか」
「働けというんですか」
「そういうことだ。とにかく必死に働けよ」
このことを念押ししてきた。
「仕事はこれからもどんどん来るからな」
「わかりました。そういうことなら」
「もう休日返上でやりますよ」
「休暇は当分先になる」
同時に将兵にとっては聞きたくない言葉が出された。
「少なくともこの戦争が終わるまではな」

「そうですね。まあ仕方ないです」
「じゃあ。やりますか」
彼等もこれまでの話を受けて愚痴を止めて素直に仕事に向かうことにした。仕事は終わることがないようだった。しかしそれでも真剣にやっているのだった。
そしてこれは軍人達だけでなかった。文官達もまた。ほぼ不眠不休でそれぞれの責務に当たっているのだった。
「よし、ここはだ」
「そうするぞ」
彼等は口々に言い合い話をする。
「まずはだ。そこに送り」
「ああ」
「そしてそこに移す。そうするか」
「そうだな。そしてだ」
「後は書類にするだけだな」
「そうだな」
官僚社会というものは独特な社会である。書類が何にかけても重要なのだ。そこにサインされ採決されるかどうかで全てが決まる。これは何時の時代でもどの国でも同じである。
「ではすぐにこちらで書類を作っておこう」
「頼めるか」
「何、今こちらはまだ手が空いている」
こう同僚に返していた。

## 第三十二部第五章　決戦を前にしてその四

「ではすぐにこちらで書類を作っておこう」
「頼めるか」
「何、今こちらはまだ手が空いている」
こう同僚に返していた。
「まだな」
「空いているのか」
「やっと仕事が終わったところだ」
こう言うのである。
「やっとな」
「それでも暇ではないだろう？」
「暇？」
この言葉には苦笑いが返って来た。
「今ティムールで暇な人間がいるか？」
「いや」
彼もその問いには首を横に振って返す。
「まさか」
「わかってるじゃないか。いないさ」
「そうだな。国防省だけじゃないからな」
「この内務省もな」
苦い顔をして述べるのだった。
「忙しくない者はいない」
「連合の諺だったか」
また一つ面白い言葉が出された。
「猫の手も借りたいだったか」
「ああ、その諺か」
これは相手もよく知っている言葉であった。
「確か日本の諺だったか」

「日本だったか。ロシアだと思ったのだがな」
この辺りの記憶はわりかし以上に曖昧なものがあった。連合にいるわけではない彼等がそこまで詳しく知っているかというとやはり無理があるのだった。
「日本だったか」
「そうだ、日本だったと思うぞ」
「日本か。まあそれでだ」
「うむ」
「まさにそんな状況だな」
結論としてはそうであった。
「今はな。何処もかしこもな」
「忙しくない人間なぞいない」
結局はそういうことだった。
「誰も彼もがな」
「やれやれといったところだな」
「全くだ」
こうお互いに言い合うのだった。
「まあとにかくこれはだ」
「こちらで任せてもらおう」
「わかった。それではな」
「うむ」
こうしたやり取りが相次いでいた。そして首相であるウーアンザの下にも書類が山積みとなっていた。彼はそれ等の書類を一枚ずつ処理しながら総理府のスタッフ達に問うていた。
「まだあるな」
「はい、あります」
「今日の午前の分はこれまでですが」
「これで午前か」
ウーアンザはまた一枚サインしてから述べた。
「まだ午前だというのにな」

「普段の三日分はありますね」
「これだけでも」
「三日で済むかどうか」
苦い顔をしてスタッフ達に述べた。
「さらに多いのではないのか？」
「確かに。言われてみれば」
「これは普段より」
「占領地の行政まで加わったからな」
彼の激務の根拠はこれにあった。
「その分もあるか」
「こうした時に主席がおられれば」
「その分もありますし」
「仕方ないと言えば仕方がないがな」
シャイターンのことが話に出るとこう述べるウーアンザであった。
「主席御自ら出陣されているからな」
「はい、確かに」
「それは仕方のないことです」
「このティムールで最高の指揮官というとだ」
ウーアンザはスタッフ達に対して述べた。

## 第三十二部第五章　決戦を前にしてその五

「あの方だからな」
「戦略戦術の天才であられますから」
「やはり主席が出られないと」
「我が国の勝利はない」
　これがティムールの現実であるのだ。シャイターンが第一の名将であり彼がいるからこそ勝てるのだ。そうした意味でナポレオンを思わせるものがある。
「だからだ。その留守の間は」
「我々が守ると」
「そういうことですね」
「その通りだ。それが我等の義務だ」
　こうまで言う。
「だからだ。この書類の山もだ」
「こなしていくしかないのですね」
「それに主席の下にも届けられているのだろう？」
　今度はこうスタッフ達に対して問うた。
「書類は」
「はい、そうです」
「主席がどうしても決裁されなくてはならないものは」
　スタッフ達もそれに応えて述べる。
「送らせて頂いています」
「ファックス等で」
「そうか。やはりな」
　彼もそれを聞いてまずは頷く。
「そうでなくてはな。どうしようもないか」
「その通りです」
「ですがそれ以外は」

「こちらに集められている。そうだな」
「ですからこれだけあるのです」
「戦場では。やはり」
少なくとも出撃していては書類の決裁に裂ける時間も限られてしまう。なおシャイターンは事務処理能力についてもかなりのものがある。
「ですからどうしてもですね」
「kろえだけのものを」
「わかった。しかしそれにしても」
また彼は言う。
「実に多いものだな」
「国防省も内務省も今多忙を極めています」
「どちらもパンク寸前です」
「そうか。ならばだ」
ここで彼はふと思うことがあった。
「そろそろ時期か」
「時期といいますと」
「一体何の」
「それぞれの官公庁の拡大及び充実の時だ」
こう言うのである。
「そろそろな。どう思うか」
「ふむ。確かにそうですね」
「この総理府にしろスタッフが足りなくなっています」
彼等もまたこれについては思うところがあるのだった。
「ですからここはやはり」
「スタッフの増員ですね」
「ソフトウェアをまず優先させるか」
ここで彼は一つの決断を下した。
「よし。まずはコンピューターを増やし」
「ハードウェアもですね」

「そうだ。そしてかつて官公庁にいた人員を呼び戻せ」
実はティムールは建国の際に各国政府を統合し余剰な人員を整理したりしている。彼等は職を失うことなく他の職を斡旋されていた。その彼等を呼び戻すというのだ。
「これから我が国はさらに大きくなる」
「はい、それは確かに」
「戦争に勝つことにより」
「そうだ。だからこそだ」
彼は言うのである。
「出来る限り迅速にな」
「これからの為にですね」
「今はまだ仕方がない」
これはもう諦めていた。流石に今目の前にある仕事の処理に関わらせることは無理な話である。問題はこれからであるというのだ。
「だが。これからはな」
「わかりました」
「しかしだ。それにしても」
また一枚書類を終わらせた。

## 第三十二部第五章　決戦を前にしてその六

「本当に多いな」
「まあそこは仕方がありません」
「何しろ今は」
「そうだな」
スタッフ達の言葉に頷く。
「決戦前だからな」
「そうです、いよいよです」
「アヤグーズとの」
「まずコムだが」
コムの名を出すところに彼がただの文官ではないことを知らしめさせていた。
「あの星系に物資を集結させている」
「その通りです」
「そして行政機能も充実させていますね」
「アヤグーズのものをそのまま使ってはいるがな」
ここは合理的にいっていた。
「しかし最低限のことはしておかなくてはな」
「そういうことですね」
「ですがその最低限のことでも」
スタッフ達も溜息を出した。
「これだけあるのですか」
「厄介なことです」
その最低限の手続きが今ウーアンザの目の前にある書類なのだった。最低限であってもやはり多くなるのが行政上の書類というものだ。
「連合だとより少ないそうですが」
「あそこは当然だ」

ウーアンザは連合に対してはこれで済ませた。
「あそこはな」
「何故でしょうか」
「連合は中央政府だけではない」
連合最大の特色である。
「各国政府もあるな」
「はい」
「それは」
「そして各国政府の下の様々な行政機関もある。つまりだ」
「そちらに仕事が分担されるのですね」
「だが我がティムールは中央集権国家だ」
ここに彼等の仕事が多い理由があった。
「つまりだ。中央政府である我々に」
「権限が集中し」
「そして仕事も集中する」
そういうことであった。
「だから仕方がないのだ」
「そうですね。結果として」
「では総理」
「うむ」
スタッフの一人の言葉を聞く。
「仕事を減らそうと思えばやはり」
「地方分権ですか」
「それが一番なのは確かだ」
ウーアンザも彼の言葉に対して頷いてみせた。
「我々の仕事を減らそうと思えばな」
「やはりそうなりますか」
「ただしだ」
「ただし？」
だがここでこうも言うのを忘れない。

「それだけ権限も減るがな」
「権限もですか」
「中央集権体制は全ての権限を中央に集める」
だから中央集権なのだ。これを本格的にはじめて確立させたのは秦である。中国最初の皇帝を頂点とする統一王朝となったこの国はそれまで各国に分かれていた中国という国のあらゆるものを中央に集めそこから国家を統率していた。これが長い間中国という国の統治システムの基本となりまた実に多くの国にこのシステムが踏襲された。そうした意味で絶大な影響を持っていたのである。
「だからだ」
「従って我々の権限もまた」
「我がティムールは実質的にはだ」
「はい」
「主席の独裁体制にあるな」
「その通りです」
これは最早周知のことであり誰も否定しないものであった。ティムールは国家主席であるシャイターンに権限が集中する独裁国家なのだ。
「それではだ。権限が中央に集中するのもだ」
「当然ですか」
「独裁国家は全て中央集権体制にある」
独裁者が全ての権限を掌握するからこれは当然である。
「だからだ。我々もまた」
「その分だけ仕事があると」
「当面はそうだ」
何故かここで当面と言うウーアンザであった。

## 第三十二部第五章　決戦を前にしてその七

「統一したとしても暫くはな」
「暫くは、ですか」
「そしておそらくそれからもだ」
すぐにこうも言った。
「統一されてからもだ」
「それからもですか」
「またどうして」
「我がサハラを統一し治めるのは何か」
ここで一つの言葉が出された。
「それは何か」
「はい、それはやはり」
「皇帝です」
今は連合において二人しかいない至高の存在のことが話に出された。
「サハラを統一した者がなるといえば」
「やはり皇帝です」
「そうだ、皇帝だ」
ウーアンザはこの時シャイターンがそれになることを想定していた。この考えは彼がティムールの宰相ならば当然のことであった。彼は若き日よりシャイターン家に仕えてもいる。
「皇帝が全てを治める体制になる」
「サハラの全てをですね」
「その通りだ。全てをな」
「ではやはり」
「中央集権ですか」
「結果としてそうなる」
答えはこれであった。

「このサハラを治めるにはやはり中央集権体制が最も合っている」
「それがですか」
「我々には」
「長い間各国に分かれ争ってきた」
それがサハラの歴史である。
「ならばだ。それを終わらせ平和を持続させるにはだ」
「中央に権限を集めそこから全てを統括する」
「これですね」
「そういうことだ」
やはり答えはこれであった。
「連合やマウリアの様に地方分権はな」
「少なくとも無理でしょうね」
「あそこまでは」
「そうすれば統一に従わない者達が動き出す」
ウーアンザはこう読んでいるのである。
「そして彼等が活発になれば」
「折角統一されたサハラがまた乱れることになりますね」
「統一もまたうたかたの夢です」
「そうして滅んだ国も歴史には多い」
人類の歴史ではままにしてあることだ。三国時代の中国を統一した晋は皇族にかなりの権限を持たせて各地に配したがやがて彼等が互いに争い国を衰退させた。所謂八王の乱である。これが中国を再び戦乱に追いやる要因となったのだ。衰えた晋に北方の異民族達が大挙して雪崩れ込み都洛陽が陥落したのである。これにより中国北部は戦乱に覆われ漢民族の国家は南に移ったのだ。以後長く続く五胡十六国時代及び南北朝時代のはじまりである。この戦乱は隋による統一まで続くこととなった。
「だからだ。それはできない」
「我々ではですね」
「そうだ。従って仕事が増えようとも」

「維持していくしかありませんね」
「難儀な話ですね」
「難儀と言うか」
ウーアンザはここに今目の前にいるこのスタッフ達にあるものを見た。
「こうしたことを」
「はい、何か」
「それがどうかしましたか？」
「それはそれでいいことだな」
そしてこう彼等を評するのだった。
「それでな」
「といいますと」
「何故ですか？」
「権限が集まれば仕事がそれだけ増えると考えているな」
「はい」
「その通りです」
彼等もそれを否定しない。
「まあ覚悟はしていますが」
「それが何か」
「権限が集まるということはそれだけ権力を持つということだ」
これもまた常にセットになっていることだ。

## 第三十二部第五章　決戦を前にしてその八

「権力は意識していないな」
「それは別にないです」
「私もです」
彼等の言葉はそれは否定するものだった。
「仕事をする為にいるのですから」
「権力というのは」
「官僚には不要か」
「官僚はただのコンピューターです」
「そうではないのですか？」
そしてウーアンザに対してもこう述べるのである。
「所詮は」
「コンピューターには権力はありません」
「その通りだ」
ウーアンザも同じ考えであった。
「我が国で権力があるのは」
「あくまで主席閣下です」
「あの方だけです」
やはりここでも独裁者であるシャイターンであった。
「我々は主席にお仕えしているだけです」
「そうです。それだけです」
「そういうことだ。そしてだ」
「はい」
話はさらに続く。
「国民に対してもだ」
「我々もまた国民ですが」
「そうではないのですか？」
「いい返答だ」

ウーアンザは彼等の返答を聞いて笑みになった。この返答こそ合格であるのだった。
「その通りだ」
「では今後のサハラは」
「皇帝を頂点として」
「その下に全ての国民がいる」
つまり唯一の国家元首であり権限を持つ者であるというのだ。
「そういう体制になるだろう」
「専制主義ですか？」
「いや」
これは否定された。専制主義はサハラにおいてもかなり少ない体制の政治システムになっている。完全な独裁体制もだ。議会も普通選挙もない国家システムは流石にこの時代では主流とはなってはいないのである。これは時代の流れもありそうなっているのである。
「それはない」
「では立憲君主制ですか」
「それになるのですね」
「そうだ。おそらくはそうなるだろう」
ウーアンザは冷静な目でまた述べた。
「まずな」
「左様ですか」
「やはりそれですか」
「ただし皇帝の権限が名実的ではあっても大きなものになる」
しかしこうも言い加えるのだった。
「それはな」
「名実的にはあっても」
「憲法に明記されるだろう」
また言う。
「皇帝が全権を掌握し統治するとな」
「つまりあれですね」

それを聞いたスタッフの一人があることを思い出した。
「十九世紀のドイツ帝国や日本」
「ああ、それか」
別のスタッフが彼の言葉に頷く。
「それなのか」
「そう。皇帝の権限を強くさせた立憲君主制」
中央集権型立憲君主制と言うべきものである。これはそれまで多くの領邦国家や藩に分かれていた国家をまとめるには非常に都合のいい国家システムなのだ。国家元首に権限を集中させるとしそのうえで全国をまとめるからだ。日本はプロイセンのそれを踏襲したのである。
「それになるだろう」
「やはりそれですね」
「ですが首相」
「何だ」
ここでまたスタッフ達はウーアンザに対して問うのであった。ウーアンザもまたそれに応える。話はここでこのシステムの国家において起こった問題についての話になった。

## 第三十二部第五章　決戦を前にしてその九

「問題なのは軍ですが」
「軍か」
「はい。今軍の最高司令官は主席閣下です」
「その通りだ」
　このこと自体は常識である。国家元首がその国の軍の最高司令官であるのは全ての国家システムにおいて言えることだ。中国の歴代王朝でもそうであったしローマ帝国でもそうであった。オクタヴィアヌスが共和制を守るというポーズを取りながら帝政になることができたのは軍の最高司令官であるインペリアールであることを維持できたことが大きいのだ。子のインペリアールという言葉が皇帝、即ち英語でのエンペラーの語源になっている。
「それは当然だと思うが」
「ですがです」
「国家が統一された場合。いえ、今でも」
　話は今にも及ぶ。彼等の今である。
「若し軍が政府や議会の命令に従わなくなれば」
「そう、あの時の日本のように」
　ここで遂にその時の問題が話に出るのであった。
「憲法の不備を指摘し軍が政府や議会のコントロールを拒んだ場合は」
「どうなるのでしょうか」
「今はいいのですが」
　まず今はいいというのだった。
「主席が完全に指揮権を掌握しておられるので」
「あくまで現時点では、ですが」
　限定された。先程の今でも、という言葉が意識されているのは明白だ。

「今後を考えますと」
「軍が政府や議会のコントロールを受けないならば」
「それは案ずることはない」
だがここで出されたウーアンザの返答は実に冷静なものであった。
「それはな」
「といいますと？」
「一体どのような」
「あれは軍を直接皇帝の指揮下に置いていた」
「はい」
明治憲法ではそうであったのだ。なおこの欠点は憲法が制定された当時は誰も気付かなかった。これには明治政府の大きな特徴に起因していた。
「だがそれでも機能したのだ」
「機能していたのですか」
「そしてコントロールもされていた」
こうも述べた。
「完璧にな。当初はな」
「当初は、ですか」
「そうだ」
また彼等に述べる。
「その時はな。何故かわかるか」
「いえ」
「それは」
だがこう問われると彼等も首を横に振るだけであった。
「最初から暴走すると思いますが」
「ですがしなかった。その理由は」
「人がいたからだ」
ウーアンザの述べた答えはこれであった。
「だからなのだ」
「人がいたというと？」

「この場合は」
彼等はここではまず自分達で考えることにした。幾ら官僚はコンピューターに過ぎないとはいっても人間なのだ。人間として考えなくてはならない部分は考えるというわけである。
「コントロールできる人材というわけですね」
「そういった存在がいたのですか」
「それを元老と呼ぶ」
この言葉が出た。
「元老がな」
「元老！？」
「つまり重臣ですか」
「日本の」
彼等は元老という単語からこうした存在を読み取った。
「重臣達がいたのですね」
「軍をコントロールできるだけの」
「当時はまだ文官と武官の区別はまだ曖昧だった」
この区別が明確になるのは第一次世界大戦の頃からである。それまでは現役の武官が軍事関係の閣僚ハおろかその他の閣僚になることもままにしてあったのである。時には首相になる者すらいた。なおサハラでもこうした事態は往々にして見られるものではある。

## 第三十二部第五章　決戦を前にしてその十

「まだな」
「ではそうした重臣達がいたからこそ」
「コントロールできたのですね」
「そういうことだ」
「しかしそうした重臣達がいなくなれば」
このことこそが明治憲法の欠点だったのである。
「軍はコントロールを受けなくなりますね」
「だから当時の日本はああなったのですか」
「クーデターが起こった時の話だ」
所謂二・二六事件のことである。
「先に死んだ重臣がいればそうはならなかったとな。言ったのだ」
「そういうことですか」
「明治憲法は人に頼っている憲法だったのですか」
「多分にな。元老という人材の存在が大きかった」
「そうでしたか」
明治憲法というのは多分に急ごしらえの憲法であった。その為元老達の存在がその不備を補ってきたのである。これに気付く者は非常に少なかった。それどころかこの憲法を不磨の大典として神聖かつ完璧なものとしていたのだ。ここにも大きな問題があったのである。
「それでそういったふうに」
「なったのですか」
「人に頼っていた。だからこそ失敗した」
「ではシステムを整備すればいいですね」
「そういうことですね」
「その通りだ」
答えが導き出された。

「シビリアン＝コントロールだ」
「ではあれですね」
「確かに最高司令官は国家元首、つまり皇帝ですが」
これはまず定められていなければならないことであるので変えなかった。
「これは置いておきまして」
「そしてです」
「首相及び国防相に軍事の指揮権を持たせる」
これであった。
「首相は軍の最高司令官代理とし国防相の指示なくては軍は動かせないとする」
「シビリアンコントロールですね」
「そうだ、まさにそれだ」
結局のところ話はそこに収まるのだった。
「こうした意味では連合のそれに近いか」
「連合では中央政府も各国も国防大臣は文官でしたね」
「少なくとも現役武官はなれない」
これは法律で確かに定められているのだ。ただし他の閣僚も現役の官僚ならばなれない。つまり官僚と政治家をはっきり分けているのである。
「連合ではな」
「そうですね、確かに」
「では連合のやり方を踏襲して」
「その通りだ」
彼の考えはこうであった。
「戦時中はいい」
「はい」
「しかしだ。平時になればそれは変える必要がある」
「平時になればですか」
「平時になれば軍はだ」

軍という組織の動きもまた分析されるのだった。
「平時になればクーデター等の恐れが考えられる」
「戦時中よりもですね」
「基本的に常に動いている組織だ」
そうした意味で軍というものは生き物なのだ。しかも常に大洋を泳ぎ回っていなくては死んでしまう鮫なのだ。これが軍の特徴の一つだ。
「だからだ。その動きが権力に向かわないようにしなければならない」
「そういうことですね」
「そしてだ」
彼はさらに話を続ける。
「彼等が政治に携わろうと考えるならば」
「その場合は？」
「弾圧ではないですね」
「それは下の下だ」
弾圧についてはこう述べて一言で切り捨てたウーアンザだった。
「そんなことをしても何にもならない」
「確かに」
「その通りです」
スタッフ達にもこれは容易にわかることであった。ウーアンザに対して述べる。
「かえって軍の反発を深めますし」
「あたら有能な人材を失ってしまいます」
「そういうことだ。だからだ」
「どうされるのですか？」
「政治家になる道を置いておく」
「つまり議員ですね」
連合では官僚や軍人が政治に本格的に携わりたいと思うならば必然的に議員として立候補することになる。八条がそうであるように

だ。もっとも彼は元々政治家も多く輩出している日本の名家の嫡子であるのでそれを継いだとも言えるのであるが。それでも選挙を経てはいる。

## 第三十二部第五章　決戦を前にしてその十一

「それか若しくは」
「まあこれは我々ではあまり馴染みがないですが」
「スポイルズシステムだ」
この言葉が出された。
「内閣を組閣する首相がその人材を閣僚に抜擢する」
「それですね」
「それもまた連合的ですね」
「そうだな」
これもまた連合においては多々見られる人材登用形式である。連合においては政府高官はこうした内閣を組閣する首相や政権の座に就いた大統領が人材を任命する方式になっているのだ。連合においては議員内閣制はどの国においてもあまり主流ではないのだ。
「連合的だな」
「ですがこうした形式では」
「スポイルズシステムは採りにくいかと」
「そうですな」
スタッフ達はこう指摘した。
「皇帝に名目上とはいえ権限が集中するのですから」
「やはり。首相が任命するとなると」
「そうだ。おそらく議院内閣制になる」
「ですね」
やはりこれであった。
「皇帝が閣僚を直々に任命するという形式ですね」
「あくまで儀礼としては」
「儀礼だがな」
しかしこう定められていること自体が大きいのだ。それだけで首相の権限はある程度以上に束縛されたものになってしまうのだ。

「そうなるな」
「ではそうした意味でのコントロールは弱いですね」
「スポイルズシステムでは」
「君達には耳の痛い話になる」
ウーアンザは言葉を少し強くさせてきた。
「チェックの対象になるのは軍人だけではない」
「我々もですか」
「官僚も」
「そうだ。軍人もまた官僚だな」
「はい」
「それはその通りです」
文官と武官という決定的な違いがあるとしてもだ。やはり軍人もまた官僚なのだ。官僚というものへのコントロールは政治において極めて重要なのだ。
「では我々もですか」
「チェック対象となり」
「その通りだ。君達もチェックし」
ウーアンザは言葉を続ける。
「コントロールできるようにしなければならない」
「わかりました」
「ではこれに関しても」
「またしても連合方式になる」
どうしてもこうしたコントロールにおいては連合がモデルになってしまう。これは連合がこうしたことにおいて何歩先も進んでいるからであった。平時における政治ということにおいては連合程発達している勢力はないのだ。戦時においてはサハラなのであるがだ。
「あの政府が官僚を使い」
「はい」
「まずはそれですね」
「そして官僚は議会の話を聞き」

意見を聞くということである。そしてさらにだ。
「議会は政府をチェックする。三すくみだな」
「やはりそれですね」
「そうした形式ですね」
「その通りだ。わかったな」
「はい、それですね」
「やはり三すくみですね」
「こうなる。平時はな」
「はい。では」
「そういうことで」
スタッフ達はウーアンザの言葉に頷いて答えた。
「平時の国家体制も考えていきますか」
「統一後に向けて」
「恐らくこれを考えているのは我々だけではない」
ウーアンザはまた言った。
「おそらくオムダーマンもだ」
「彼等もですか」
「統一を考えているのは我々と彼等だ」
「そうですね」
「ハサンはそれは考えていないと思われます」
スタッフ達もウーアンザと同じことを読んでいた。

## 第三十二部第五章　決戦を前にしてその十二

「彼等は我々を自分達の勢力圏から排除したいだけで」
「そういうことはまず」
「考えてはいない。少なくとも主流ではない」
「だからこそですか」
「オムダーマンだけが」
「その場合国家元首、いや皇帝になるのは」
ウーアンザの目が光った。
「彼だ」
「彼・・・・・・あの御仁ですね」
「青き獅子」
「そう。アッディーン副大統領だ」
オムダーマンの青き獅子、アッディーンの通り名となっている。この名前で知られるようになったのはやはり彼の武勲故である。
「その彼だ」
「あの御仁もまた英傑ですね」
「我等が主席と共に」
「若しもだ」
ウーアンザはここで一つの仮定を出してきた。まずは前置きからだった。
「我々が勝つ」
「はい」
「そしてオムダーマンも勝つ」
この前提がまず話された。
「その場合はだ」
「戦いですね」
「我々とオムダーマンの間で」
「そうだ。そしてそれで話は終わらないのだ」

「そこが違うということですね」
スタッフの一人の言葉はおどけたようなものになっていた。
「英雄物語とは」
「戦いの後も話が続くというわけですね」
「それが政治だ」
ウーアンザの言葉は冷静だった。
「そして劇とも違う」
「何時までも続くものですね」
「戦争は勝てば終わりですが」
少なくとも戦争というものは勝敗こそが重要である。その結果が全てであり勝っても負けても講和と条約でまずはその戦争の全ては終わる。しかし政治はそうではないのだ。
「政治はそうではないと」
「むしろあれですね」
彼等の言葉は続く。
「戦争が終わってからこそが」
「はじまりですね」
「その通りだ。戦争は政治の一手段だ」
「それも連合でよく言われることですね」
「彼等は何でも政治ですからね」
これをサハラの者達は連合の者達が即物的だと言う理由の一つにもしていた。サハラの者達から見て連合の者達は極端に政治的なのである。
「まあそれは」
「そうなりますか」
「しかしだ」
だがここでウーアンザはまたスタッフ達に言ってきた。
「それが正しいのだ」
「正しいのですか」
「それが」

「政治という意味ではな」
これがウーアンザの見解であった。
「それでいいのだ」
「戦争は政治の下にあるのですね」
「政治と同等ではなく」
「サハラではあまりにも戦乱が激しかった」
エウロパの者達はその戦乱を三十年戦争の様だと評することもあった。三十年戦争により戦場となったドイツの国土は崩壊しその人口は一説には三分の一、極端な話では四分の一にまで減ったと言われている。多分に戸籍の類の崩壊のせいで人口の把握ができなくなったせいだがそれでも多くの人命が失われたのは紛れもない事実でありサハラの戦乱はそれに匹敵する激しいものであるというのである。
「だからだ」
「政治と同等に考えられていたということですね」
「そういうことだ。だが本質的には戦争は」
「政治の一手段というわけですか」
「そういうことだ。それではだ」
「はい」
「今後はサハラもそう考える時代になっていく」
未来を見ての言葉であった。

## 第三十二部第五章　決戦を前にしてその十三

「これからはな」
「これからはですか」
「統一の後はな。我々が望んでやまなかった平和が手に入り」
「平和が」
「千年の戦乱が終わり」
連合の千年の平和と対比されている言葉である。
「そして平和になるがただ平和になるだけではないのだ」
「あらゆることが変わるのですね」
「その通りだ。それは嫌か」
「いえ、それは」
「戦争が終わるというのなら」
彼等は戦争が終わるということをまずは受け入れたかった。それこそが彼等が望んでやまないことだったからだ。彼等も戦争をしたいわけではないのだ。
「それで構いません」
「このサハラの戦乱が終わるのなら」
「戦争を終わらせ平和になる」
「はい」
話はさらに続く。
「だがそれだけではないのだ」
「といいますと」
「一体」
「平和を維持しなければならない」
「平和をですか」
「手に入れた平和を」
「そうだ。創業と維持だが」
この二つについての話にもなった。

「どちらがより困難だと思うか」
「それは創業では？」
「やはり」
彼等はこう考えていた。少なくとも彼等はまず平和を手に入れることを考えていた。まずはそれでありそこからはあまり考えてはいないのであった。
「まず何かをしなければはじまりませんから」
「やはり」
「だがそれは違うのだ」
ウーアンザは彼等の言葉を否定した。この話の流れは彼にとっては想定の範囲内であり内心驚くこともなく冷静なまま述べるのであった。
「それはな」
「違うのですか」
「それは」
「何かをしてそれを続けることは難しいことだ」
「維持もですか」
「創業したものを続けて行く」
彼はまた言った。
「それは創業と同じ程度の難しさがある」
「そうなのですか」
「考えてもみるのだ」
ウーアンザは今度は冷静に歴史を出して話した。
「このサハラにおいては今まで多くの国家が起こった」
「はい」
「起こった事情は様々ですが」
分裂や合併、独立、反乱、様々なことが起こっての建国であった。中には血生臭い戦いを経てのものもあった。その辺りの事情はそれぞれ複雑だがそれでも起こっていたのは事実である。しかし国の勃興と同じだけの滅亡もあったのもこれまたサハラの歴史にある通り

でである。
「しかし多くは起こってすぐに滅んでいるな」
「ええ、それは」
「確かに」
それはその通りであった。
「五十年もつどころか」
「十年存続しなかった国家もざらです」
これもまたサハラの歴史なのである。
「百年存続した国家は稀です」
「多くは戦乱の中に滅んでいきました」
「そういうことだ。創業したものは維持さいなければならない」
「ええ」
「それはわかっていますが」
「創業には確かに膨大なエネルギーが必要だ」
力学においてもそうである。まず何かをするにあっては力を使いはじめなければならない。これは力学において常識である。
「創業にはな」
「そして維持にもですか」
「例えばだ」
ここでウーアンザは己の机の空いている部分に万年筆のキャップを置いた。白銀の光を放つ丸く細長いキャップだ。置いて動かせばどうなるのかは言うまでもない。

## 第三十二部第五章　決戦を前にしてその十四

「こうする」
こう言ってそのキャップを実際に動かせてみせた。ころころと転がっているのがスタッフ達にも見える。
「まずは動くな」
「ええ、そうですね」
「それが創業ですね」
「だが」
ここでまた言うウーアンザであった。
「やがて力が衰えばだ」
「むっ！？」
「止まるな」
「え、ええ」
「今確かに」
止まってしまった。力の作用が終わったからである。
「止まりました」
「力が終わったからですね」
「その通りだ。このまま動かそうと思えばだ」
「同じだけの力が必要だということですか」
「そういうことですね」
「私の言いたいことがわかったな」
「はい」
スタッフ達はようやくここで納得した顔でウーアンザの言葉に頷くことができた。
「そういうことですね」
「よくわかりました」
「何事もだ。国家についても同じだ」
「成程」

「そういうことでしたか」
「だからだ。維持もまた困難なのだ」
「わかりました」
「そういうことでしたか」
スタッフ達もまた頷く。だがウーアンザの言葉はさらに続く。
「そう。そしてだ」
「そして？」
「今度は一体」
「創業と維持ではその方法が違う」
「違うのですか」
「必要な力は同じだけだがな」
しかしその方法が違うというのである。これもまた政治の言葉であった。
「それは違うのだ」
「つまり今とこれからは全く違ったものになる」
「そうですね」
「簡単に言えばそうだ。具体的にはな」
「左様ですか。やはり」
「そういうことになりますか」
スタッフ達は彼の今の言葉を聞いてまた頷いた。
「ではサハラはこれから」
「大きく変わりますね」
「統一すればさらにな」
ウーアンザはまた統一後の話をした。
「そうなる」
「わかりました。それでは」
「その際の予測やプランも検証しておきます」
「それでは」
「今のところはそれはゆっくりとしたものでいい」
焦る必要はないと彼等に告げるのだった。

「今はな」
「今はですか」
「それは間違いなくまだ先のことだ」
だからだというのである。
「だからだ。穏やかでいい」
「左様ですか」
「それではそちらは」
「そういうことだ。そして今は」
「机の前の仕事ですね」
「とりあえずは」
これまで緊張が続く話ばかりだったので冗談が入った。この辺りのユーモアは彼等もわかっていた。人というものは緊張だけでは疲れてしまうものだからだ。
「午前の仕事はこれだけですので」
「頑張って下さい」
「わかった。ではもう少しだな」
「もう少しとは」
「もうそこまで終わられたのですか」
「おかげで事務処理能力が高くなった」
ウーアンザの顔がうっすらとした苦笑いになっていた。彼もまた緊張ばかりで生きているというわけではないということだった。やはり笑みも必要なのだ。

## 第三十二部第五章　決戦を前にしてその十五

「この歳になってな」
「それはいいことですね」
「いいことか」
「何でも早いということはいいことですよ」
スタッフの一人の言葉である。
「特に仕事は」
「それはその通りだな」
ウーアンザも完全に同意することだった。
「その分こちらも休める時間が増える」
「その通りですね」
「今は」
「さて、この仕事が終わればだ」
「どうされますか？」
「少し休むとしよう」
こう言うのだった。
「今はな」
「そうですね。昼食にして」
「そうしましょう」
「今日の昼食はだ」
今度は食事の話になる。彼等とて人間であるので食事は必要なのだ。食べずに生きていられる人間なぞ一人も存在してはいない。
「何にするべきか」
「羊にされてはどうでしょう」
「オーソドックスですけれどね」
「羊か」
羊料理の提案を受けたウーアンザの目が少し動いた。
「悪くないな」

「ええ。丁度いい具合に連合のビジネスマン達がここにも来ていますし」
「どうされますか？」
「スーツの下にマントは羽織っていないか」
こうスタッフ達に問うてきた。これはつまりビジネスマンに化けた軍人かどうか聞いているのである。連合軍もそうしたスパイを潜り込ませることは普通にしている。といってもサハラ各国に対してはあくまで情報収集であり工作が目的ではない。だからサハラ各国も彼等には特に支障がない限りは放置している。自分達に対して危害を加えたりしないことはわかっているからである。その辺りは両方共よくわかっていた。
「その辺りはどうか」
「はい、問題ありません」
「そうか」
まずはそれを聞いて頷くのだった。
「もっともそうであっても別に気になることではないがな」
「そうですね。連合軍に対しては」
「その情報をハサンやオムダーマンに売らない限りは」
「どうでもいいことです」
「そもそも売られるような情報を漏らしたりはしない」
ウーアンザは見極めたようにして述べた。
「その程度のことはな」
「そうですね。それは」
「向こうもわかっているでしょうが」
「それでだ」
ここまで話したうえでまた話を戻してきた。
「そのビジネスマン達だが」
「ええ」
「彼等が何か」
「何が好みだろうな」

彼等の舌についての話であった。
「その辺りは。何がだ」
「さて、それは」
「そこまでは」
彼等もよくは知らないのだった。
「連合の人間は何でも食べますが」
「言い換えれば好みが激しい可能性もあるということで」
そうもなるのだった。何でも食べる文化ではそこにいる人間はそれだけの種類のものを嫌っている可能性もあるのだ。最初から食べないことはタブーに当たるのでまた別なのである。
「そうなりますね」
「日本人でも生ものが嫌いな場合もありますし」
「その通りです」
「それは」
「そういうことだ」
スタッフ達もまた言う。ウーアンザもそれに応える。
「だからだ。ここは」
「見極めますか」
「ではまずは」
「招待してくれ」
食事を共にすることはもう決めていた。

## 第三十二部第五章　決戦を前にしてその十六

「こちらにな。いいな」
「はい、それではそちらは」
「すぐに」
「頼むぞ。それでだ」
「問題はメニューですね」
「何にするべきか」
「羊か」
話はここでまた羊に関するものになった。ムスリム圏であるサハラ各国においては最もよく食べられ人気の高い肉である。サハラでは肉と言えば羊なのだ。
「羊は連合でもよく食べられているな」
「はい」
「それは」
やはりこれはその通りだった。羊は連合全土だけでなくエウロパやマウリアについてもよく食べられる。それだけポピュラーな肉なのである。
「ですがやはり個人的な好き嫌いが」
「それがありますので」
「やはりメニューを聞いておいてくれ」
彼はこう決断を下した。
「それでな。頼むぞ」
「わかりました。それでは」
「そういうことで」
「うむ。ではこの話は終わりだな」
ウーアンザは話がまとまったことを確認した。
「これでな。それではだ」
「まずは仕事を終わらせましょう」

「早速」
「言っている間にあと少しですね」
やはりウーアンザの事務処理能力はあがっていた。話をしている間にも書類を次々と決裁しサインし終えている。その速さはかなりのものだった。
「もう少しで」
「午後は午後で仕事があったな」
「ええ、その通りです」
それはもう決まっていることだった。首相ともなるとやはり多忙を極める。
「それにつきましても」
「そうか。わかった」
「ではそれまでの間に」
「そういうことになるな。では聞いておいてくれ」
「わかりました」
この話はこれで終わりだった。ウーアンザは後方を万全に守っていた。その時前線にいるシャイターンは今まさにアッサルームに入ろうとしていた。
「兄上」
「間も無くなのだな」
「はい」
アブーがシャイターンに対して報告していた。今彼は旗艦の艦橋に立っていた。そこで末弟の話を聞いているのである。
「間も無くです」
「そうか。いよいよだな」
「はい。アヤグーズ軍及びハサン軍が」
「我々を手薬煉ひいて待っているというわけだな」
「この戦い。勝たなければなりませんね」
「戦争をするからには勝たなくてはならない」
シャイターンは腕を組み正面を見据えて述べた。

「何をしてでもな」
「何をしてでもですか」
「そうだ」
末弟に対して答える。目は正面のモニターを見据えたままだ。モニターに映るのは無限の銀河だった。そこを見ての言葉だった。
「何があろうともな。勝たなければならない」
「やるからにはですか」
「そしてそれは向こうも同じだ」
「アヤグーズもまた」
「そしてハサンもだ」
彼は言った。
「ハサンにもだ。それは言える」
「そういえば彼等は動員した戦力の殆どをこちらに向けているようですね」
「その通りだ」
それは既に投入しているのだった。ハサン軍は動員した戦力の殆どをオムダーマンにではなくティムールに向けてきたのだ。彼等もまた戦いに勝つ為にだ。
「それはな」
「あのアッサルームにですか」
「その通りだ」
ここでシャイターンの顔が微妙に笑った。
「アッサルームにな」
「アッサルームですが」
アブーは今度はアッサルームについて言及してきた。

## 第三十二部第五章　決戦を前にしてその十七

「連合軍が集結し」
「それだけではないな」
「はい。どうやら機雷源も多量に撒布しています」
「機雷もだな」
「その通りです。御存知の通り」
話が続く。
「あの星系は非常に複雑な潮流が複数流れています」
「それが守りにもなっている」
「そうです」
ティムール軍は既にこのことを把握しているのだった。
「それを利用した機雷撒布ですね」
「面白いことをする」
シャイターンはそれを聞いてもまだ笑っていた。
「我々は大軍だけでなく機雷、そして潮流も相手にするということだ」
「臆されてはいませんね」
「私は相手が誰であろうと臆することはない」
シャイターンが恐れる存在はない。ただ己が覇道を歩むだけなのだ。他には何もないのだ。
「例えそれがジンであろうとも」
「ジンであろうともですか」
「天使であろうともだ」
イスラムの天使はキリスト教のそれに比べても戦闘的である。ただしユダヤ教のそれとはまた違っている。何処か鋭利なのである。
「恐れはしない」
「それではこのまま」
「予定通り進む」

彼は言うのだった。
「予定通りな」
「そうですね。そのまま」
「参謀達の中にはここで一旦退くという意見もあったな」
「はい」
これはアブーも知っていた。ティムールの将官としてこれは聞いていたのだ。彼は将官として一軍を率いる身分でもあるのだ。
「だがそれは退けた」
「あくまでアッサルームでの決戦ですか」
「正論としてはだ」
ここでシャイターンは言うのだった。やはり無限の銀河を見ている。その白や赤、青のそれぞれの光を放つ星達を。それ等を見て言うのだった。
「参謀達の言葉だな」
「そちらですか」
「アッサルーム寸前で反転し」
「そのうえで」
「然るべき場所に誘い込む」
これがシャイターンの周りの参謀達の提案だったのだ。
「それを行えば勝利の可能性は高い」
「確かに」
その通りだった。その戦術を採用すれば勝利の可能性はかなり高い。誰もがそう予想していた。何故なら敵は多くこちらは少ないからだ。そこでこの誘い込みは妥当でもあった。
「それはな。そうすれば」
「まず勝てるでしょう」
「既にその場所も見極めていた」
彼の戦術眼はそれも見抜いていたのだった。
「既にな」
「では何故」

「決まっている。確実に勝てるからだ」
「アッサルームにおいて」
「その通りだ」
やはりこう言うのだった。
「間違いなくな」
「間違いなくですか」
「既に戦術は私の中にある」
彼はまた言う。
「そして勝利も」
「勝利もですか」
「そう。その通りだ」
彼はまた言った。
「既にな」
「では兄上」
「私を疑うのならばだ」
シャイターンはアブーに顔を向けない。あくまで。
「御前には銃を渡していたな」
「はい」
「撃て」
背を向けたままでの言葉だった。

# 第三十二部第五章　決戦を前にしてその十八

「撃てばいい。容赦なくな」
「それは」
「撃たないのか？」
末弟に対して問う。やはり背を向けたままだ。
「私が正しいと考えるのか」
「その通りです」
アブーは最初から銃に手をやってはいなかった。腰にあるホルスターのそれすら見てはいない。考慮するまでもないといった態度であった。
「私の銃はです」
「何だ」
「兄上を御護りする為のものです」
こう言うのだった。
「何故それで兄上を撃たれるのでしょうか」
「そう思うか」
「はい」
また答えるアブーだった。
「他には何もありません」
「わかった。それではだ」
シャイターンはやはり弟に背を向けつつまた言った。
「美酒を用意しておくことだ」
「勝利の美酒ですね」
「その通りだ。全軍な」
「全軍への美酒を」
「コムにはもう届いているか」
「確か」
この返答は曖昧なものだった。

「そうだったと思いますが」
「何だったら企業にも発注しておくことだ」
酒のメーカーのことだ。サハラにもそれは存在しているのだ。
「それをな」
「シャンパンをですか」
「そうだな、シャンパンにしておこう」
シャイターンは言った。この時代発泡性の白ワインのことを広義にシャンパンと呼んでいるのである。サハラにおいてもそれは同じなのだ。
「オーソドックスにな」
「わかりました。ではシャンパンを」
「頼む。数はだ」
「そちらは補給部隊に任せておいてよいかと」
「そこまで口を挟むつもりもない」
流石にそこまで細かい話になると突っ込まないシャイターンだった。国家主席には国家主席の仕事があるがここまでいくと流石にそれを逸脱するからである。
「それはな」
「ではそういうことで」
「そうしよう。さて」
ここまで話したうえで話を戻してきた。
「酒の話はそれまでだ」
「はい」
「アッサルームまであとどの位だ」
「あと三時間程度かと」
「三時間か」
シャイターンは時間を聞いて考える顔になった。そのうえでアブーに対して告げてきた。
「将兵に休養を取らせるように」
「休養をですか」

「そうだ。今当直に当たっている者の他は休ませよ」
こう指示を出した。
「アッサルームに入ればすぐに戦闘に入るかというとそうではない」
「そうではないと」
「敵の位置はもう完全に把握しているな」
「はい、それはもう」
既にそういったことまで把握しているティムール軍であった。彼等の偵察は実に徹底しており伏兵まで見抜いているのである。シャイターンの名将たる由縁はここにもあるのだった。即ち生半可な伏兵では効果がないのである。
「既に」
「ではよい。このままだ」
「進みそのうえで戦闘に当たられるのですね」
「その通りだ。敵の主力はアッサルームの主惑星であるアッサルームに集結している」
この惑星がアヤグーズの首都というわけである。
「ここは」
「その通りだ。それではな」
「はい。それでは」
「将兵に交代で休養を取らせそのうえで決戦に挑む」
シャイターンの今回の考えであった。

## 第三十二部第五章　決戦を前にしてその十九

「万全の調子でな」
「それだけ激しい戦いになると」
「それは間違いない」
アヤグーズにとってはその存亡をかけた戦いでありハサンにとってもまさに正念場である。これはシャイターンでなくとも容易に想像できることであった。
「だからだ」
「ではそのように」
「御前も休むのだ」
末弟に直接顔を向けて声をかけた。
「御前もな。よいな」
「私もですか」
「将兵もだと言った筈だ」
また末弟に対して声をかけた。
「これは命令だ」
「命令ですか」
「そうだ。そして私もだ」
シャイターン自分自身についてもそうだと言うのだった。
「私も休息を取ろう」
「兄上もまた」
「私とて人間だ」
こう言って微笑んでみせる。
「ならば。休まなくては身体も精神も参ってしまうだろう」
「確かに」
シャイターンは己の能力や素質に絶対の自信を持っている男だ。だが決して過信はしていないしましてや己を神だとも言ったりはしない。むしろムスリムとしての考えから己をアッラーの前にいる人

間だと考えているのだ。アッラーのみが神であるのがイスラムであり他は全て同じ人間なのだからだ。
「それはその通りです。それでは」
「休息の後ですぐに艦橋に戻る」
これは艦橋にいる全ての者達に対する言葉でもあった。
「ただしだ」
「ただし？」
「閣下、何か」
「何かあればすぐに起こすように」
こう言うのは忘れなかった。
「それはくれぐれもな」
「はっ、それはもう」
「承知しております」
旗艦イズライールの士官達がそれに応える。ティムール全軍の旗艦にいる士官達らしくその返答は実に立派なものであった。
「ですから閣下、ここは」
「安心してお休み下さい」
「ではそうさせてもらおう」
シャイターンも彼等の言葉を受けて安心した面持ちで頷いた。見れば前にいるイズライールの士官達はその動きも表情もいい。信頼に足るものであった。
「安心してな。だが貴官達もだ」
「はい」
「当直以外は休むようにな」
このことを伝えることを忘れなかった。
「くれぐれもな。無理はするな」
「わかりました」
「すぐに嫌でも無理をする時が来る」
その時こそが決戦の時である。これはもう言うまでもなかった。あくまで決戦の前の英気を養う休息なのだ。言うならば弓の弦を緩

めているのだ。
「だからこそだ」
「それでは」
「我々も」
「そういうことだ。休むのだ」
言いつつ自らも踵を返してみせる。するとそのマントが大きく動いた。赤いティムール軍の軍服に漆黒のマントが映える。赤と黒、それは青と白のオムダーマンのそれとは実に対称的であった。それぞれデザインは違うがやはり対比されるものがそこにはあった。
「今はな」
「はっ」
「それでは」
「では行くぞ、アブーよ」
「わかりました。兄上」
末弟は長兄の言葉に従い彼もまた艦橋を後にした。二人は艦橋のスタッフ達の敬礼を受けてその艦橋を出た。そのうえでそれぞれの部屋に戻るのだった。
その中で彼はまた。アブーに対して声をかける。彼はずっと長兄のすぐ後ろにいた。
「それでだ、アブーよ」
「はい」
「ブルコルジ女王だが」
「あの女王ですか」
「どう思うか」
こう彼に対して問うてきた。

## 第三十二部第五章　決戦を前にしてその二十

「彼女は。どう思うか」
「まさに猛女です」
これは彼だけでなくサハラの多くの者が抱いている彼女に対するイメージである。そしてこのイメージは誤りではないことも誰もが知っていることである。
「彼女は。まさに」
「そうだな。猛女だ」
「それ以外の何者でもないかと」
「そして美しい」
シャイターンは彼女をこうも評した。確かにその美貌でも知られている。
「何処までもな」
「その美女をどうされるおつもりですか？」
「私は気の強い女は好きだ」
返答はまずこうであった。
「そしてだ」
「そして？」
「有能な人材も好きだ」
言葉に笑みが入って来ていた。
「女よりもな。好きだ」
「お好きですか」
「私は欲しいものは手に入れる主義だ」
こうも言ってみせる。
「何があろうとな。だからこそ」
「では兄上」
アブーはここで彼の考えがわかった。
「女王もまた」

「そうだ。優れた人材は私の下へ来るべきだ」
今それをはっきりと言ってみせた。
「全てな」
「全てですか」
「そうだ。私はこのサハラを統一する者」
今の言葉には絶対の自負があった。
「だからこそだ。全てな」
「それではあの女王も」
「そういうことだ」
これが彼の理屈であった。
「是非共な。我が下に迎え入れる」
「ですが兄上」
しかしアブーはここであえて言うのであった。
「御言葉ですが」
「コムでのことか」
「はい」
彼が言うのはあの戦いでのことであった。既にシャイターンとブルコルジはあいまみえているのだ。その時に彼は一度彼女を己の下に誘っているのだ。
「あの時女王は」
「一度で手に入らないものもある」
だがシャイターンは平然とこう返すのだった。
「一度ではな」
「といいますと」
「三顧の礼だったか」
「中国のあの故事ですね」
「そう、あれだ」
あまりにも有名な中国三国時代、まだ王朝は後漢だったその時代に劉備が孔明を迎え入れたあの故事である。劉備はあえて三度も足を運び孔明を己の軍師としたのである。このことは中国、そして連

合だけでなくサハラにまで聞き及んで話として伝わっているのである。
「あの故事のことがあるな」
「それではここは」
「そうだ。何度でもだ」
断言であった。
「会おう。何度もな」
「そこまでしてなのですね」
「逸材はそうそう容易に手に入るものでもない」
シャイターンはこうも言った。
「そうはな」
「だからですね」
「その通りだ。それではだ」
「はい」
「その女王を手に入れる為に」
言葉が強くなった。
「今は休もう。いいな」
「はっ、わかりました」
「この戦いでおおよそのことが決まる」
シャイターンの話は戦局に対しても及んだ。
「我々にとっても彼等にとってもまさに正念場だ」
「はい、まさに」
「勝つ」
今度は一言だった。
「何があろうともな」
「はい。それでは」
ここで話を終えそれぞれの部屋に別れ休息に入った。ティムール軍はいよいよ戦場に入ろうとしていた。そしてそれを迎え撃つのは。

## 第三十二部第五章　決戦を前にしてその二十一

ブルコルジは既に首都惑星であるアッサルームを発っていた。港に入りそこで最後の調整にあたっていた。その周りには多くの司令官や参謀達が集まっていた。彼女は港に彼等を周りにして立っているのである。

「では間も無く出港ですね」

「はい、そうです」

「我が軍の艦艇は全て」

「動けるものは全て動員しましたね」

強い目で周りの将官達に対して問う。既に彼女も軍服にその身を包んでいる。剛健な軍服とマントが彼女を見事に飾っていた。

「動ける艦は」

「それはもう全てです」

「一隻たりとも漏らしはしていません」

「まずはそれでよしですね」

「そして陛下」

ティムール軍中将の階級を着けた参謀の一人が敬礼の後で女王に対して述べてきた。

「ハサン軍ですが」

「間も無くですね」

「はい、全軍アッサルームに到着します」

こう彼女に報告するのだった。

「全軍。このアッサルームに」

「わかりました」

その報告を受け静かに頷くブルコルジだった。

「そして数ですが」

「五十個艦隊です」

参謀はこう述べた。

「五十個艦隊が到着します」
「今ここにいるハサン軍は三十個艦隊」
「はい」
「これで五十個艦隊ですか」
「太子から御言葉です」
この場合太子とはハサン王太子をさる。アヤグーズはハサンの属国であるからこの場合は宗主国の揺るぎない言葉となるのである。
「派遣したハサン軍は全て陛下の指揮下に置くとのことです」
「左様ですか」
「既に正式に文章にもなっております」
これが一番重要なのだった。軍人の世界もまた官僚の世界でありその指示等は全て文書、文章で決められることとなっている。だからここではそれが決まったということになるのである。
「これは」
「では陛下」
司令官の一人がそれを聞いてブルコルジに述べてきた。
「我が軍は今三十個艦隊」
「そこに八十個艦隊です」
「百十個艦隊ですね」
「そうです」
ここまでは簡単な算数であった。
「対するティムール軍は確か今」
「四十個艦隊です」
参謀の一人が述べてきた。
「つまり三倍近くの戦力です」
「これならば」
「少なくとも数があるのはいいことです」
ブルコルジは数の優勢を確かめて表情を明るくさせる周りの者達にまずはこう述べた。だがその顔は決して明るいものではなかった。引き締めさせたものであった。

「数は」
「そのうえ機雷をこれでもかと撒布しています」
「しかも地の利も」
「勝利の要因は揃っているというのですね」
「はい」
「その通りです」
彼等は口々に己の女王に対して言うのだった。
「このままいけばまず」
「勝利は」
「確かに我が軍にとって有利な要因は多いです」
ブルコルジもそれは把握していた。
「ですが勝利の要因というものはです」
「何か」
「相手に一つでもそれがあれば」
やはりその声も厳しいものだった。楽観は何一つとしてない。
「そこから敗れもするのです」
「そこからもですか」
「そうです。だからこそ」
女王はまた言った。
「楽観はできません」
「確かにそれは」
「その通りです」
司令官達も参謀達も顔を一気に引き締めさせて主の言葉に頷いた。彼等とて伊達に将官にまで至っているのではない。それだけの能力を持っているのだ。だからこそ女王の今の言葉に真剣な顔になりそのうえで頷くことができたのである。そういうことであった。

## 第三十二部第五章　決戦を前にしてその二十二

「ではやはり」
「ティムール軍は」
「侮ってはなりません」
強い声での言葉であった。
「決して。いいですか」
「わかりました」
「それでは」
「乗艦です」
女王自らの指示であった。
「よいですね。これから」
「はい、それでは」
「今より」
「全軍出港！」
港全体に指示が下る。
「敵の迎撃に向かう！」
「行くぞ！」
こうして誰もがそれぞれの艦に乗り込む。戦いが今はじまろうとしていた。
ブルコルジもまた旗艦に乗り込む。艦橋には既にスタッフ達が集まり参謀達を後ろに従えた彼女を最敬礼で迎えるのだった。
「では陛下」
厳しい顔の艦長が言う。その階級は大佐だった。
「今より出港致します」
「はい」
「攻撃目標は敵軍」
このことも今告げた。
「ティムール軍です」

「畏まりました」
「では我等一丸となり」
「あのシャイターン主席の首を」
「少なくともティムールの弱点は」
伊達に軍を率いてここまで生きていたわけでもなく、また数多くの戦いにおいて勝利を収めてきたわけではない。彼女もティムールの弱点は読んでいたのだ。
「その国家システムにあります」
「国家システムにですか」
「その通りです」
答えるその声が毅然として強いものになっていた。
「即ち」
「即ち？」
「それは」
「ティムールは独裁体制にあります」
ブルコルジもまたティムールの国家体制をこう見ているのであった。
「立法、行政、司法だけではなく」
「三権だけではなく」
「軍の指揮権も名実ではなく実際に握り」
「そうですね」
「シャイターン主席は」
だからこそ前線にも出ているのである。そういう意味で彼は十九世紀までの武勲によりその座に就いている国家元首の後継者であると言えた。なおその代表者としてあのアレクサンドロスやナポレオンがいる。少なくともこの時代においては連合やエウロパでは存在し得ない国家元首である。
「国の全てを統括しています。法の上に位置している存在です」
「憲法ではそう規定されていなくとも」
「実質においてそうなのです」

こうしたことはままある。国家が不安定であればだ。サハラにおいてこうした体制の国家がまま見られたことが事実だがそれだけサハラの状況が不安定であるということなのだ。
「ティムールは」
「では陛下」
「そのシャイターン主席を倒せばティムールは」
「そうです。瓦解します」
答えはもう出ていた。
「それだけで」
「そうですね。それでは」
「ここは」
「いえ」
周りの者達の言いたいことはもうわかっていた。だがそれは否定するのだった。
「それは考えていません」
「シャイターン主席を討つことはですか」
「おのずとそうなればよしです」
女王は静かに言う。
「あくまでおのずとです」
「狙わずになのですね」
「狙えばそれだけで目がそちらに集中します」
これは当然のことであった。狙えば周りのものが見えなくなってしまうのは人間の特徴の一つでもある。そしてそれは戦場においては極めて危険なことでもある。

# 第三十二部第五章　決戦を前にしてその二十三

ブルコルジはこのことも把握していた。
「だからこそ」
「それは避けるというのですね」
「その通りです。宜しいですね」
「はっ」
「了解しました」
皆女王の言葉に答える。彼女の指示を承知したということであった。
「それではその様に」
「行いましょう」
「戦術はあくまでオーソドックスに行います」
これが彼女の考えであった。
「この戦いにおいては」
「左様ですか」
「それでは」
「攻撃対象はティムール軍」
シャイターンではなくティムール軍であると断言した。
「彼等を殲滅することを目標とします」
「わかりました。それでは」
「あくまで敵軍を」
「間も無くこのアッサルームに来ます」
このことを彼女自身も告げた。
「そう、このアッサルームに」
「では我々も」
「出港し」
「迎撃の用意です。集結場所は」
今度は軍の集結場所について言及するのだった。

「このアッサルームとします」
「ハサン軍もなのですね」
「その通りです」
友軍もということだった。
「このアッサルームに今我々が所有している戦力を一旦集結させます」
「そしてそのうえで」
「ティムール軍を」
「その通りです。ティムール軍は間違いなくこのアッサルームに来ます」
それ以外に道はなかった。決戦ならば互いに相手の戦力を殲滅するしかない。だからこそ彼等は互いに対して向かうしかないのである。
「それを」
「撃つと」
「勝利は我等にあり」
ブルコルジはここで高らかに宣言するように述べた。
「今その勝利を掴む為にいざ」
「はっ！」
「出港用意！」
艦長が出港命令を出した。
「いいな！」
「了解！」
ラッパが高らかになる。それが勝利へのホルンとなるかどうかはまだ誰にもわからない。確信はしていてもそれが現実になるかどうかはそれこそアッラーのみぞ知るということであった。
出港しアッサルーム近辺に集結するアヤグーズ、ハサン連合軍。その数はまさに威容と言うに相応しいものだった。そこにいた者達は皆自信に満ちた声で言うのだった。
「勝てるな」

「ああ」
こう言い合うのだった。
「この数なら」
「星を埋め尽くさんばかりではないか」
少なくともサハラにおいてここまでの戦力が一度に集結したことはない。連合のそれは彼等にとっては夢のような数字であったのだ。
「我等は百十個艦隊」
「それに対してティムール軍は四十個艦隊」
双方の戦力もまた確認される。
「これに負ける筈がない」
「三倍近くの差だ」
「そう、戦争は数だ」
真理である。連合軍もこれを忠実に守りエウロパ軍に対して完璧と言っていい勝利を収めている。戦争は何といってもやはり数が第一なのである。
「この数さえあれば」
「ティムール軍、恐れるに足らずだ」
「シャイターン主席もな」
「そうだ、勝てる」
「今度こそ勝てるぞ」
ハサン軍もアヤグーズ軍も戦力に抜かりはなかった。少なくともその数と装備については。彼等の士気は勝利を確信している為に極めて高いものであった。

## 第三十二部第五章　決戦を前にしてその二十四

「では陛下」
「いよいよですね」
「布陣は進んでいますか」
「はっ、全軍進めています」
「既に我が軍は布陣を終えました」
「ハサン軍は」
彼女はここでハサン軍について参謀達に尋ねた。艦橋に立ったままである。
「どうなっていますか」
「それは半分以上がまだです」
「もう暫く時間が必要かと」
言葉がごもっていた。やはりこういうことは言いにくいものであった。
「暫くお待ち下さい」
「今のところは」
「わかりました。そういうことなら」
何か言いたそうだったがそれはあえて言わずに止めた女王であった。
「待ちましょう」
「ハサン軍も真面目に進めていますので」
「どうか」
「今回の主力はハサン軍です」
数の関係でどうしてもそうなるのだった。
「彼等に勝利がかかっています」
「その通りです」
「彼等の数が戦力としては」
「そういうことです。だからこそ」

女王は言葉を続ける。
「彼等に期待しましょう」
「はっ、それではそのように」
「あちらの方にも」
「お伝え下さい」
ここには多分に外交的な儀礼も入っていた。こうした場合に礼を述べたり賛辞の言葉を送るのは外交においてはごく当たり前のことである。ブルコルジも女王としてそれをわきまえていたのだ。
だがそれでも。彼女の顔は何故か暗いものもあった。微かにそれを見せていた。
しかしそれは結局言わなかった。最後にこう侍従の一人に告げたのだった。
「それではです」
「はい」
「どう為されますか」
「出港が済み次第暫く自室に戻ります」
こう言うのであった。
「それで宜しいですね」
「御休息ですね」
「そうです」
侍従達にはっきりと答えた。侍従は皆若き乙女達であり軍服とは違い独特のメイドのそれに似た制服を着ている。それは艦橋においてはいささか不似合いだったがそれでも女王に仕える為にいるのだった。
「それで宜しいですか」
「はい、それではすぐに」
「用意しておきます」
侍従達はすぐに己の主に対してこう述べた。
「暫しお待ちを」
「それでは」

「御願いします。では」
「出港しました」
今丁度艦が出港したのだった。艦全体を、当然艦橋にもその衝撃が伝わる。出港で船が動く。その時の起動の衝撃であった。
それが終わるとブルコルジは己の言葉通り自室に入った。武骨なまでに何の装飾もない質素な自室に入り彼女が見たものは。机に立てられている己の子供達の写真だった。そこでは子供達は笑顔であり共に映る彼女もそれは同じだった。立体映像として映し出されていた。
「この子達の為にも」
その写真を見て呟く。彼女もまた決意を定めていたのであった。

第三十二部　　完

２００８・１１・１２

# 第三十三部第一章　戦いの観客達その一

戦いの観客達

ティムールとアヤグーズの最後の決戦が近いことは銀河全体で知られていた。やはりここでも連合においてはどちらが勝つかどうかで議論になっていた。

まず多かったのは。やはり数の優位と地の利を挙げるアヤグーズ派であった。彼等は口々に言う。

「今度ばかりはシャイターン主席でも無理だ」

「そうだ、勝つのはアヤグーズだ」

「今度は間違いない」

こう主張するのである。

「数は三倍近いぞ」

「これはどうしようもないだろ」

やはり第一に挙げられるのは数であった。

「この数はな。もう」

「覆せない」

「結局地力なんだよ」

国力が述べられるのは当然の流れであった。

「ハサンなんかサハラで一番国力があるじゃないか」

「それに対してティムールはどうだよ」

そのままティムールの国力について言及されるのもまた当然の流れであった。

「三国の中で一番弱いじゃないか」

「しかもシャイターン主席で持っている国家だ」

独裁制であることは連合でもよく知られていることであったのだ。

「人材だけでやってる戦争なんてな」

「何時かは負けるんだよ」

「結局は国力なんだよ」

「それしかないんだよ」
断言さえ出て来るのだった。
「国力がなければな。戦争なんてな」
「最後は負けるんだよ」
「しかもだ」
国力にプラスアルファまで為される。この辺りが今回の戦いにおけるアヤグーズ派の強みでありティムール派の弱みであった。アヤグーズ派は嵩にかかったようにして自分達の主張を続ける。
「今回戦うのはアッサルームだぜ」
「そう、アヤグーズの首都」
「裏庭なんてものじゃない」
こうまで言う。
「自分達のリビングだ」
「もう細かいところまで知ってるぜ」
そういうことだった。確かにその通りだった。家のリビング程家の人間に知られている場所はない。これは国家についても言えることであった。
「地の利も完璧だ」
「それもこれ以上ない程にな」
「尚且つ」
プラスアルファは続く。
「アヤグーズには後がない」
「ハサンにとってもここが正念場だ」
ここから導き出されることが一つあったのである。
「だからな。一致団結しているぜ」
「あの女王陛下の前にな」
「地の利と人の和もある」
これはいささか中華的な表現であったがその通りであった。
「これでアヤグーズが負けるなんてな」
「まずないぜ」

「いや、有り得ない」
これが彼等の主張であった。彼等はその主張に絶対の自信があるのだった。それに対するティムール派の主張は。アヤグーズ派に比べるとやはり弱いものがあった。
「しかしだ」
「そうだ、しかしだ」
彼等はまずアヤグーズ派の主張に対する反発からはじめるのだった。このこと自体が今の彼等の主張の苦しさの証明でもあった。
「あのシャイターン主席だ」
「そう、あの彼だ」
まずシャイターンの名前を出すのが彼等の常であったのだ。
「今まで幾度も劣勢を覆し」
「勝ってきたじゃないか」
「コムでもだ」
先のコムでの鮮やかな勝利についても言及するのだ。
「勝ったよな」
「あの時だって必ず負けると言われていたのに」
「それがどうだ」
虚勢を多分に混ぜて主張する。
「勝ったじゃないか」
「そして今がある」
「だから今回もきっと」
「彼は勝つ」
こう言うのである。
「必ず勝つ」
「あの赤き魔王は」
これがシャイターンの通称となっている。アッディーンは青き獅子と呼ばれているのと対比してこう呼ばれているのである。名付けたのはサハラの者達らしい。

## 第三十三部第一章　戦いの観客達その二

「だからだ。アヤグーズは今度の戦いで」
「滅びる」
苦しい断言であった。
「今度も勝つのはシャイターン主席だ」
「彼が勝つ」
「絶対にな」
「だからな。言ってるだろ」
ティムール派が言い終わったところで必ずアヤグーズ派から反論が返って来る。この話における議論の特徴であった。やはりそうなってしまうのだ。
「人材だけで勝てるものじゃない」
「確かに人材は重要だよ」
流石に人材までは否定できなかった。
「けれどな。それでもだ」
「人材だけじゃないんだよ」
「人材は勝利の為の要因の一つだ」
「そう、一つに過ぎない」
実に割り切ったものでありかつ合理的な言葉であった。
「その一つだけを根拠にしてもな」
「全部は言えないだろ？」
「他の要素を見てみろよ」
そしてまた数や地の利、団結が述べられるのであった。
「アヤグーズ有利だ」
「ウッズで言うと百対一か」
実際にウッズまでかけられていた。
「確かそれ位だったよな」
「ああ、そうだ」

「正確に言うと百十二対一だ」
最早圧倒的である。
「アヤグーズ有利だってな」
「ティムールは負ける」
また主張するアヤグーズ派だった。
「どう見てもな」
「そんなことはやってみないとわからないだろ」
「そうだ、その通りだ」
またティムール派が反論する。しかしだった。
アヤグーズ派は。戦争における一つの言葉を出してまた反論するのが常だった。その言葉は。
「戦争はただ戦場でするわけではないだろ」
「その通りだな」
そしていつも相槌が来るのであった。
「戦争は後方でも国力でも行われる」
「確かにティムールも後方はしっかりしているさ」
「この辺りは流石だよ」
ただ戦術で優れているわけではないのがシャイターンである。その補給体制を整える手腕も確かなものなのだ。これは多分に政治的なことだが優れた政治家でもある彼はこの辺りにもすぐに配慮が行き届くのである。だからこそのことであるのだった。
「だがな。それでもな」
「国力はな。どうしようもないさ」
「しかも地の利もないぞ」
またこのことが話に出された。
「それも全然な」
「相手のリビングで喧嘩だぞ」
こう例えられた。
「そうそうまともな喧嘩ができるものか」
「まあせめてだ」

一つ仮定が出される。出したのはアヤグーズ派だった。
「勝ちたければな」
「どうしろっていうんだ？」
「あれだよ。アッサルーム以外で戦うんだな」
「アッサルーム以外でか」
「そういうことだ。どうにかして引き摺り出してな」
「引き摺り出すっていうのか」
「この場合はアヤグーズ軍とハサン軍になるな」
攻め込むのはティムール軍、迎え撃つのはそのアヤグーズ、ハサン連合軍だ。従ってそういう形になってしまうのだ。アッサルーム以外での戦闘となれば。
「他にもハサンの属国の軍隊がいるけれどな」
「まあこの連中はあまり数に入っていないな」
「そういうことだな」
彼等は動員戦力の中にしか入れられていない。そこまで数として考慮されていないのだ。ハサンの属国は軍事的にはやはりアヤグーズが突出しているのだ。

## 第三十三部第一章　戦いの観客達その三

「結局のところな」
「だからだよ」
そしてこう言われるのだった。
「ティムールが勝ちたければアヤグーズ軍を引き摺り出すしかないだろ」
「それでも危ういがな」
そうした状況になってもティムールの勝利の可能性は低いというのである。
「数がやっぱりな」
「ティムールは一度負けたら終わりだ」
この言葉の根拠はティムールとハサンの国力差にある。ハサンはこれまでにもオムダーマンとの戦争も含めて負け続けているがそれでも余力がまだまだあるのが証拠だ。だがそれに対してティムールは国力では大きく劣る。それこそ一度敗れればそこで押し切られるまでに差があるのである。
「一度でな」
「だからこそ」
「くそっ、どいつもこいつも」
「ティムールが負けるっていうのかよ」
「けれどそれでも別に死ぬわけじゃないだろ」
「そうだろう？俺達はサハラの人間じゃない」
「確かにな」
今の言葉には頷くしかなかった。ネットの場においてもそこいらの喫茶店や居酒屋でも。結局のところ彼等はサハラにはいないのだ。連合にいる。あくまで観客でしかないのだ。
「それを考えたらムキになる必要もないだろ」
「確かにな」

「それはな」
これには誰もが頷いた。
「まあ強いて言うなら商売相手が変わるだけか」
「どちらがやり易いかだな」
話はそこに行き着くのだ。サハラにおいても連合の者達が進出してビジネスを行っている。この戦争がはじまる前にも真っ先にその権益を各国に保証させた彼等は。とどのつまりはそれを念頭に考えていた。
「そういうことだな」
「だからリラックスして考えようぜ」
「俺達の問題じゃないんだからな」
「じゃあそうするか」
「ああ、そうしようぜ」
「お茶でも飲みながらな」
こんな感じでやり取りを続けるのだった。彼等はあくまで観客としてこの戦いを見守っていた。それは中央政府国防省も同じで彼等はそれよりも自分達の仕事を優先させていたのである。
「特にこの戦いは何も得られるところはなさそうだな」
「そうだな。ティムールは敗れる」
そう客観的に見るだけだった。これは背広組も制服組も同じだった。
「戦術的にもアヤグーズが勝ち」
「特に学べきもない」
「そんなものだな」
「ああ、そうだ。それではだ」
「この戦いの観戦武官には安全な場所で見るように伝えてあるし」
連合とマウリアは観戦武官を派遣している。しかしエウロパはできない。何故なら彼等とサハラ各国はエウロパのサハラ侵攻以来国交断絶状態にあるからだ。従って彼等はいないのである。
「安心して見ていていいな」

「そういうことだな」
こう確認して動かないのだった。彼等もまたあくまで観客でしかなかった。しかしここで一人だけこの戦いの行方を注視している者がいた。それは。
「ティムールの勝利なのね」
「はい」
八条義統であった。彼は地球に来ていた日本国首相である伊東に対してこう語っていたのである。伊東の周りには日本の主立った閣僚達がいる。小柳や東といった面々である。
話している場はとあるレストランであった。扱っている料理はメキシコ料理だ。そこでテーブルを挟んで話をしているのである。
「この戦いはティムールが勝ちます」
「断言なのね」
「その通りです」
伊東に対して答える。その言葉もまた断言であった。
そうしてサボテンのステーキを食べながら。彼はまた言うのだった。
「戦いとは確実なものはありません」
「俗にそう言われるわね」
「そして勝因が一つでもあれば」
「そこに付け込めるというのね」
「そういうことです。この場合は」
話はティムール軍のその勝因についてのことに移った。

## 第三十三部第一章　戦いの観客達その四

「まずアヤグーズ、ハサン共同軍は数は圧倒的です」
「三倍近いからね」
これは誰もが協同軍の勝因として挙げていることである。
「それを覆すのは」
「ですが」
「ですが？何かしら」
「その質が問題です」
八条はまた伊東に対して述べた。
「その質こそが」
「質がなのね」
「ハサン軍が数的には主力ですが」
八条はまずそこを指摘する。
「ですがその多くの質は」
「芳しくないというのね」
「動員された予備兵力です」
八条はこのことを既に知っているのだった。
「問題はその予備兵力ですが」
「どうなっているというの？」
「訓練が満足ではありませんでした」
彼は言う。
「その訓練は。碌に行われずにいました」
「そういえばハサンは」
小柳がここで言った。
「長い間大きな戦争もなく」
「はい」
八条は小柳のその言葉に応えて頷いてみせる。
「平和でありましたね」

「通常の戦力で充分にやっていけたのです」
「つまりそれだけ予備兵力は」
「そうです」
答えが出た。
「殆ど注目されず訓練も碌にされてきていませんでした」
「戦うよりまず儲けろ」
伊東の言葉である。
「ハサンではよく言われていたね」
「はい、そうです」
「私達と同じね」
今の伊東の言葉には少し自嘲も混じっていた。
「連合とね」
「そうですね。確かにそうなります」
これは八条も頷くところだった。
「それは間違ってはいません」
「正しいと言えるわね」
「その通りです」
八条もまた連合の者である。だからこうした戦争よりもビジネスを先に考える考え方は持っていた。しかしだからといってここで戦争を忘れたわけではないのだった。
だからこそさらに。彼は言うのであった。
「ですが」
「そこでプラスアルファなのね」
「そうです。それはあくまでケースバイケースです」
こう主張するのだった。
「特にサハラの今においては」
「戦争こそが必要なのね」
「私はそう考えます。長い間ハサンはそれを忘れていたように見受けられます」
「その通りね。これは私達と同じね」

「流石に私達程ではありませんが」
「ええ。それは確かにね」
ハサンが大きな戦乱を経験していないのは先のエウロパ侵攻前以来である。長い間これといった戦乱を被らずに生きてきたのだ。生きてこれたのだ。
「それはね」
「一千年の平和です」
これこそが連合が享受してきた最大の恩恵である。
「我々はこの中で発展だけを考えてこれました」
「それと繁栄と」
「その中でどうしても戦いを忘れていましたが」
「別に悪いことではないわね」
「はい、それは」
また伊東の言葉に対して頷くのだった。

## 第三十三部第一章　戦いの観客達その五

「平和は悪いことではありません」
「そしてひるがえっては」
「所謂平和ボケという言葉ですね」
「あまりいい言葉ではないわね」
話す伊東の顔も曇ったものになっていた。
「お世辞にもね」
「確かに」
これは八条も同じ考えだった。サボテンを切るその手の動きもここでは鈍っていた。どうも彼はこうした言葉が好きではないようである。
だがそれでも。話は続けるのだった。彼は言うのである。
「それは平和の有難みを否定する節がある言葉ですから」
「連合の平和はあるべきものがあったからだから」
「そうです。食料と資源と土地」
東が伊東の横からこの三つを挙げた。
「この三つがあったからこそです」
「その通りよ。東君」
伊東は彼に顔を向けてその言葉に頷くのだった。
「それがなく、また何か一つしか得られないものがあったならば」
「我々もサハラになっていたのですね」
「それかエウロパね」
エウロパのサハラ侵攻のことを言っているのである。言いながらグラスを手に取る。そこにあるのは透明な、やや白がかったシャンパンである。それを一口飲むのだった。
「そうなっていたわ」
「我々もですか」
「確かにこれまで様々な問題があったけれど」

伊東もこれは否定しない。千年の平和といっても国家間の経済や通商においての衝突は頻繁であるしまた宇宙海賊やテロリストの存在もあった。連合としての境界の外には不法に移住している人口統計外の者達が百億単位でいるとさえ言われている。そうした問題も抱えているのである。
「けれど戦争はなかったわ」
「はい、それは」
これはその通りであった。
「それはなかったです」
「連合としてずっと一緒にやってこれたわね」
「確かに。それでは」
「これこそが平和なのよ」
伊東は確かな声で述べたのだった。
「繁栄と発展は常に求められ得られてきたわね」
「我が国もまた」
無論日本もその中に入っているのである。
「そういうことですね」
「そうよ。けれどサハラでは」
「それを求められたのはハサンだけでしたね」
小柳が言った。
「満足にできたのは」
「そう。オムダーマンの本来の本拠地である西方にしろ」
「確かその後ろにかなりの開発可能な星系があると聞いていますが」
「それに手をつけられなかったのよ」
伊東はこのことも知っていた。彼女もサハラのことはかなり詳しかった。これは彼女が政治家だけではなく政治学者としの顔もあるからであろうか。
見れば今彼女はその政治学者の顔になっていた。そしてその顔でさらに語るのだった。その目は何かを分析している目になっていた。
「どうしてもね」

「戦乱の為に」
「そういうことよ。戦乱は発展と繁栄の最大の敵」
こうまで言うのだった。
「その中でも発展するケースもあるけれど」
「中国の東周時代や日本の戦国時代ですか」
八条が伊東に対して述べた。
「そうした時代のことですね」
「そうよ。流石ね」
八条に顔を向け微笑んで彼を褒め称えたのだった。
「そこまでわかっているわね」
「恐縮です。ですが戦乱がなければ」
「それだけ流れる血とかかるコストが減るわ」
冷徹かつ合理的な、まさに学者としての言葉だった。
「だからこそ。その発展も繁栄もさらにスムーズになるものなのよ」
「連合のようにですね」
「連合では銃やミサイルでの戦いはないわ」
これは確かにない。
「そうした破壊の戦争はね」
「コインや札束ですね」
小柳はそれに応える形でこう述べてきた。

## 第三十三部第一章　戦いの観客達その六

「それよりも」
「そういうことよ。銃やミサイルは破壊するだけだけれど」
「はい」
本当にそれしかない。そもそも軍隊という組織がただ出費だけで歳入がない組織なのだ。戦争もまた同じだ。還元するものがない投資先としては最も割に合わないものなのである。
「コインや札束は」
「跳ね返ってきます」
「お金は動くだけでそれで充分効果があるのよ」
伊東はこう述べて微笑むのだった。
「それだけでね」
「そういうことですね。だからこそ連合は」
「発展できたのよ」
そうした戦争を行ってきたからでもあるというのだった。
「破壊の戦争をせずにね」
「そういうことです。しかしです」
また八条が述べてきた。
「これをサハラにそのまま当てはめるとしますと」
「無理ができるわね」
「そうです。少なくとも戦争を忘れてしまう危険があります」
「連合では戦争を忘れてもね。まだどうにかなるわ」
「いいか悪いかは別にしましてその通りです」
八条はまた述べた。サハラと比べると連合の所謂平和ボケはかなりのものだ。ガンタース要塞群とハサンの安定を絶対と思いそこにだけ目を向けていれば戦争は起こらないと考えている者がかなりの数に及んでいたのがつい最近までの連合であったのだ。それ程までだったのだ。

「ですがサハラでは」
「餓えた狼に太った羊の群れを見せるようなものね」
「そういうことです」
まさにそれだというのである。
「ですから。ハサンのそうした経済至上主義は」
「結果としてその弱兵化を招いてしまったわね」
「その通りです。特に予備兵力に」
「その予備兵力を動員しての今回の戦いだけれど」
話はそこに戻った。
「八条君はその弱兵故に彼等は敗れると見ているのね」
「その通りです」
今度ははっきりと述べたのだった。
「シャイターン主席は天才と言ってもいい戦略家及び戦術家です」
「それは私も聞いているわ」
これはもう連合でも有名なことであり言うまでもないことではあった。
「それもかなりのね」
「はい。その彼が何の考えもなくアッサルームに、敵の首都に乗り込むか」
話はそこにも及んでいた。
「まずそこから考えますと」
「勝算があってのことと」
「私はそう見ています」
「ですが長官」
東であった。立場が今ではそれぞれ中央政府と日本国、互いの国防の責任者となっているのでこの呼び方となっていた。政治の世界はその役職によって権限も変われば呼び名も変わるものだからだ。東もこの時ごく自然にこの呼び方で彼を呼んだのであった。
「勝算ですが」
「ないと仰るのですか」

「ティムールにとっては残念なことに」
彼はティムールの側に立った分析を述べるのだった。
「そう思います」
「確かにそうです」
そして八条もそれを否定しないのだった。
「戦力差だけではなく」
「はい」
「地の利も協同軍にあります」
動かしようのない事実である。
「この二つは」
「アッラーであってもですね」
「そうなります」
サハラでの信仰もまた話に出るのだった。
「必然的に」
「そうですね。それではです」
「ティムールは敗れると」
「そう考えざるを得ません」
また言う東であった。
「オッズでは優に百対一を超えていますし」
「協同軍有利ですね」
「その通りです」
これもまた聞いている八条であった。彼の特徴として互いの情報や分析を冷静に聞きそこから判断を下すのである。そこに主観はほぼ入らない。自分達の軍がその一方にいたとしてもである。だからこそエウロパとの戦争も鮮やかな勝利を収めることができたのだ。

## 第三十三部第一章　戦いの観客達その七

「この場合はどうしても」
「そう。確かに協同軍有利です」
彼はそれは静かに認めた。感情を見せるところはなかった。
「どうしてもそれは」
「ではやはり」
「しかしです」
だがこれまでは前振りだった。少なくとも彼の態度はそれを指し示すかのようなものだった。素振りではなく話の展開がそうなっていたのだ。
「先程も申しましたが」
「勝算が一つでもあればですか」
「確かに戦争というものは数字です」
連合軍の戦い自体がそうである。彼が作り上げている連合軍は数字と確率を常に計算し確実な勝利を目指して勝っていく。個人の武勇やそういったものは一切考慮せず全てをユニットとして考え作戦を立てているのである。それが連合軍、ひいてはその背広組のトップである八条の考えなのだ。
「我々としてはです」
「数字を相手よりできるだけ大きくし」
「そう、まずはそれです」
八条と東は今は連合軍の話になっていた。
「そして勝利を得られる確率を」
「しかも損害を最低限に抑えた勝利です」
この条件もプラスアルファされる。戦争での勝利というものは本質的にそれを本能として目指すものであるがこれは民主政治においてはとりわけ顕著なものとなっている。戦死者が出ればそこに遺族への補償が生じそのうえ志願者減少の要因ともなる。尚且つ戦争を

指導する政治家の責任問題になるからだ。敗北と同じだけ犠牲が許されない。それが民主国家の戦争なのだ。
「あくまで」
「つまり百パーセント確実な勝利を目指すのですね」
「その通りです」
結論に対して答えた八条であった。
「それを目指しています、常に」
「そしてそれは当然ながら」
「彼等も同じです」
サハラに話が戻った。
「サハラにおいても」
「では今回協同軍は確実な勝利を目指されていますね」
「それは間違いありません」
戦争をしているのならこれは当然のことであるのだ。
「そしてそれは可能な限り百に近付いています」
「可能な限りですか」
「そう、彼等は彼等の最大限の努力を払っています」
協同軍としては、である。彼等はこの戦いにおいて万全の備えをしている。これは何があろうとも否定できない事実であるのだ。
「そしてそれは果たしていますが」
「しかし勝利の確率を百にはできなかった」
「そうです」
またこのことに答える八条であった。
「ですからその僅かな可能性に付け込めば」
「ティムールも勝てるとと」
「いえ、勝てるのではありません」
東の今の言葉は否定した八条だった。
「それは違います」
「といいますとやはり」
「そうです。勝つのです」

ここでも断言してみせたのだった。
「彼等は。ティムールは」
「そのハサン軍の質を衝いてですか」
「そうです。まず彼等は数が多いです」
「はい」
だからこそ主力となっていることが確実なのだ。全ては彼等の数あってということが前提となっているのが今回の協同軍の作戦の要点なのだ。
「その数が長所であり」
「長所であり」
「盲点です」
八条は盲点であると看破した。
「無論ブルコルジ女王は一代の名将」
「猛将ではなくですか」
「名将と言って差し支えありません」
八条にしてはブルコルジを正当に評価している言葉である。よく猛将と呼ばれている彼女であるがそれ以上の存在だというのである。アヤグーズの女虎を。
「まさに」
「ではその名将はその盲点については」
「間違いなく知っています」
八条はこのことも看破した。
「それもまた」
「知っていますか。それでは」
「ですが」
八条の言葉はここで変わった。

## 第三十三部第一章　戦いの観客達その八

「だからといって対処できるものではありません」
「数故にですか」
「外交上の問題もありまして」
「ああ、それはわかるわ」
今の八条の言葉に頷いたのは伊東だった。これまで暫く聞いていたのがまた話に入る形になっていた。一旦赤い発泡性のワインを口に含んだ後で述べるのだった。
「それはね。ハサンとアヤグーズの関係ね」
「戦争もまた政治の一手段でありますのでやはり」
「自分の指揮下にあってもハサン軍のことは配慮しなければならない」
「その通りです」
これが答えであった。
「やはり。協同軍だからこそ」
「そこがネックになっていくのね」
「はい。そして数もあり彼等に頼るしかなく」
「質というネックには目をつぶるのね」
「そうせざるを得ません」
協同軍の内情を見事に見抜いた言葉であった。
「女王は」
「質に問題があり、それをティムールに衝かれる恐れがあっても」
「彼等を主力にせざるを得ません」
「アヤグーズ軍は使えないのね」
「無論彼等も先頭に立つでしょう」
これもまた読んでいる八条だった。アヤグーズ軍の勇猛さと精強さはサハラではよく知られたことである。指揮官であるブルコルジの軍略もありハサンでは最強の軍であるとされているのだ。

「ですがそれでも」
「ハサン軍との混成にならざるを得ず」
「そうなれば今度は」
「指揮系統ね」
この問題も出て来るのだった。
「今度はね」
「確かに指揮権は女王にあります」
「ハサン軍元帥でもある彼女の」
ブルコルジはアヤグーズ王国の国家元首であり必然的に王国軍の最高司令官でもある。だがそれと共にハサン軍の元帥でもあるのだ。この複雑さがあるのもハサンの特徴なのだ。
「けれどそれでも」
「そうです。アヤグーズ軍が本来の居場所ですので」
「従わない者も出て来るかしら」
「流石にそれはないでしょう」
この可能性は否定する八条だった。
「命令違反は。幾ら何でも」
「ないわね」
「私はそう見ています」
あくまで八条個人の主観という前置きを置いての言葉であった。
「これに関しては」6
「そう。ないのね」
「はい」
今度もまた答える。
「そう思います」
「命令に従うのはそれだけで軍としては大きいことだけれど」
「それでもね」
また言う伊東だった。
「質が一定しない軍というのは。厄介なものね」
「どうしても部隊によって差が出るものではあります」

八条は軍の司令官として述べるのだった。
「それは」
「それでも限度の問題だと思うわ」
「限度ですか」
「そうよ、限度よ」
今度は伊東が八条に対して述べるようになっていた。質という問題では彼女も大いに思うところがあるようだ。言葉にもそれが絵の具となって出て来ていた。
「限度の問題ね。どうやらアヤグーズ軍とハサン軍の主力では」
「かなりの差があります」
「そこよ」
伊東が指摘するのはそこなのだった。言葉に弾みがかかってさえいた。
「そこなのよ」
「ティムール軍が付け込むことができるとすると」
「そこを見ていてティムール軍の勝利を言っているのよね」
「その通りです」
そして答える八条だった。
「これは如何にブルコルジ女王といえど」
「そうね。コントロールすることはできないわ」
「ここで勝利を収めたシャイターン主席は」
八条は話をシャイターンに関するものに移した。彼がシャイターンを語るその目はさらに強いものになっている。それまでは客観的なものに徹していたが感情が入るようになっていた。
「まずハサンとの戦いに優勢に立ちます」
「ハサン軍の中で最精鋭のアヤグーズ軍を倒しただけではなく」
「はい」
「そしてです」
「アヤグーズ領も全て手に入れる」
アヤグーズ軍と倒しその領土を全て手に入れる。この二つがティ

ムール、そしてシャイターンにとって実に大きなことなのだ。ここでは政治家、かつ戦略家となっての言葉だった。

## 第三十三部第一章　戦いの観客達その九

「この二つが大きいのね」
「そしてハサン軍の主力も倒す」
「これによりハサンはその劣勢が決定的になるわね」
「アヤグーズはハサンにおいて宙理的に極めて重要な位置にあります」
　八条はこのことも把握していた。連合にいながらサハラのことを熟知に近いまでに知っていた。既にハサンのこともよく調べているのだった。
「そこをティムールが手に入れれば」
「戦略的に地の利も手に入れたことになるのね」
「それも大きいのです。ティムールにとって」
「ハサンはオムダーマンとも交戦中ね」
「そうです」
　これもあった。
「オムダーマンは第三の防衛ラインを掌握しています」
「もうですか」
　小柳はその話を聞いて驚きの声と顔になった。
「早いですね」
「あれ、長官」
　東が今の小柳の言葉を聞いて彼女に声をかけた。顔も彼女の方を向いている。
「このことは御存知なかったのですか」
「申し訳ありません。それは」
「このことは連合でも関心のない人間も多いのよね」
　伊東は小柳を弁護するようにして言ってきた。
「実際のところね」
「そうなんですか？」

「そうよ。結局連合の話ではないわね」
「はい」
東は伊東の言葉に頷くのだった。
「この戦争は」
「確かにその通りです」
東も頷く。これはどうしても否定できないことだった。連合にいればどうしても連合だけの世界で終わってしまう。四兆の人口とその果てしない広さの中に埋もれてしまうのだ。とりわけ小柳はその役職故に連合のことだけを考えてしまう。その為にサハラの戦局にもあまり関心がないのだ。
だからこそ今この話を聞いて。驚きの顔を見せたのである。そういうことなのだ。
「これは」
「だからよ。それに連合に直接的な影響は」
「難民だけですね」
また答える東だった。
「その程度です」
「正直対処は充分に可能ね」
「可能といいますか。難民でしたら」
首を傾げる東だった。
「やはりサハラ内部でかなり吸収されて一部になりますし」
「どうということはないのね」
「そう思います」
よく見れば東の表情も多分に他人事を語るものであった。客観性というものを通り越してそういったものになっているのだった。
「私は」
「東君はあくまでこの戦争は連合にとっては他人事だというのね」
「言い方はきついですがどうにも」
「わかったわ。それは小柳君も同じで」
「はい」

小柳もまたそれを認めて頷いた。
「やはり。それは」
「では八条君は」
二人の話を聞いたうえでまた八条に顔を向けてきて問うた。
「どうかしら」
「はい。それに関しましては」
八条はそれを受けてまた口を開くのだった。伊東だけでなく他の二人もまた彼を注視していた。三人の六つの視線が彼を見ていた。その中での発言だった。
「私も現時点では」
「連合への影響はないのね」
「そう考えます。ですが」
「ですが？」
「参考になる部分は多いかと存じます」
こう言うのである。
「それはかなり」
「戦略戦術においてね」
「これにつきましては当大臣も同じだと思いますが」
「ふむ」
話を振られた東は考える顔になった。だがそれは肯定ではなく否定の言葉となって出るのだった。

## 第三十三部第一章　戦いの観客達その十

「それですが」
「そうではないと」
「我が国軍の責務は治安維持です」
「あくまでそれだと仰るのですね」
「その通りです。ですから当面としましては」
「然程参考にはならないと」
「資料として保存することはします」
それは言うのだった。やはりこの程度がなくては軍として、ひいては国防大臣として存在している意味はなかった。だが然程積極的とは言えないのは間違いなかった。
「ですがそれよりも」
「国軍としての責務を考えたいというのですね」
「その通りです。具体的に申し上げるなら」
さらに言葉を続けてきた。
「宇宙海賊やテロリストへの対策ですが」
「それですか」
「それにつきましては確かにサハラにも参考になるものはあります」
今オムダーマン軍を率いているアッディーンも海賊退治でも名を挙げてきている。連合では中央軍設立まで宇宙海賊にもかなり悩まされてきていたし今も辺境では宇宙海賊が存在している。日本ではそうした存在はかなり少ないがそれでも参考にする部分はあるのであった。
「ですが本格的な戦闘は」
「それ程ではないと」
「その通りです。ですからこの戦争には」
「あまり見るものはありませんか」
「強いて言うなら補給等ですね」

そちらだと言うのである。
「見たいのは」
「それぞれの軍のですか」
「それは見ておきたいです。特にオムダーマン軍とティムール軍に関しては」
「彼等について」
「これは海賊に対しても効果がありますので」
補給はどの作戦においても影響する。補給なくして軍は動かないからだ。そうした意味で東もまた軍というものがわかっていた。だが戦術については、というわけだった。
「ですがそれ以外は。一応制服組に研究チームを作らせてはいます」
「それで充分かと」
八条は今の東の言葉には静かに頷いてみせた。
「研究チームで」
「左様ですか」
「はい、それだけでも大きなことです」
東を評価する言葉であった。
「研究するとしないではそれだけで差が出ますので」
「だからですか」
「各国の国防省について言うことはできません」
連合ではやはり各国の権限が大きい。比例するとかつてのアメリカ合衆国の各州よりも大きい。だから中央政府国防長官も平時において彼等の指示を出すことはできないのだ。無論有事には各国軍は中央政府軍の指揮下に入ることにはなっているのだが。
「ですからこれはあくまで話しているだけということで」
「そのうえでですね」
「はい、それでいいと思います」
回りくどい言い方だがあえてこう言うのだった。
「それで」
「わかりました。それでは」

「はい。それでです」
八条はここでまた話を続けるのだった。
「今回の戦争はあくまで正規戦です」
「そうね。まさにね」
東と入れ替わる形で伊東が応えてきた。
「国と国とね」
「我々としては大いに参考になる戦いです」
これは中央政府国防省を預かる者としての言葉であった。
「実に」
「実になのね」
「その通りです。そしてその先にある」
「間違いなく三国のうち消える国が出るわね」
「そうです」
これはもう確定していた。その消える国はまだ確定してはいないがそれでも行き着く先は国家同士の戦争でありそれが無制限戦争、今回の様な場合には辿り着くのはやはりそれしかなかった。勝った方が生き残り負けた方が滅亡する。戦争において誰もがすぐに考えるケースであり今回がまさにそれであるのだ。
「つまり統一か。若しくは」
「二つになります」
八条はまた伊東に対して述べたのだった。

# 第三十三部第一章　戦いの観客達その十一

「そのうちのどちらかです」
「そうね。そのうちのどちらかよ」
「その通りです」
ここでもまた答えた。
「生き残るのがハサンであった場合は」
「オムダーマンとティムールのいずれかが消えるか」
伊東は八条に合わせて述べていく。
「若しくは」
「両方が消えるか。もっともハサンは二国の滅亡を望んではいないようです」
「私から見ればそれで済まないのだけれど？」
あえて悪戯っぽく笑って八条に言ってみせるのだった。こうした問い掛けもまた伊東の得意とするところでここから相手の答えを引き出すのである。
「もう。ここまで来たら」
「王太子はそう考えているようです」
「あの太子が」
「はい」
伊東の次の動きを見ながら答える。
「そのようです」
「あの太子はあくまで現状維持派だったわね」
伊東はハサン王国太子のことを思い出しながら述べるのだった。彼女もハサンのことは学んで知っているが国の実権は王室、とりわけ摂政でもある太子に権限が集中していることを知っている。内閣や議会もあるが太子が一人で切り盛りしているところがあるのだ。
したがって太子はハサンの独裁者だと言われることもある。そしてその太子の動きがまた。ハサン、ひいてはサハラ全体に大きな影

響を持つことも把握しているのだ。
「けれど。無理だと思うけれど」
「この戦いの流れではですか」
「仮にオムダーマンもティムールも国境まで押しやるとするわね」
「ええ」
「それで両国は諦めるかしら」
また八条に対して問うてきた。
「それで。どうかしら」
「諦めないと思います」
八条は速やかに彼女の問いに答えた。
「まず。それで諦めずに」
「すぐにまたハサンに攻め込むわね」
「ましてや両国はおそらく密約を交わしています」
「オムダーマンとティムールがね」
「そうです」
また伊東に対して答えた。
「開戦前に。既に」
「そういえば」
それを聞いた小柳の目が動いた。
「日本でも不穏な動きがありました」
「不穏な動きとは」
「それぞれの大使館ですが」
「オムダーマン、ティムールそれぞれの」
「外務省からの情報です」
日本の外務省である。
「両国の外交官達が頻繁に接触していたとのことです」
「日本でですか」
「各国においても」
こう述べるのであった。
「接触し合っていたとのことです」

「そうだったのですか」
「しかもハサン側に気付かれないように」
このプラスアルファまであるのだった。
「慎重に身を隠して」
「やはりそうですか」
それを聞いてまた頷く八条だった。そのうえでまた述べる。
「そうして密約を進めていますね」
「ええ。私も最初は何かと思いました」
小柳はそれを聞いて述べた。
「何故オムダーマンとティムールがと。どうしても軍事のことには暗くて」
「外交としては何と思われましたか」
八条もまた彼女が軍事には弱いことを知っていた。それは彼女が政治家になってからずっと外交や内政、通商等そうした世界を歩いてきたから仕方のないことであった。だからこそここで外交に話を変えたのである。小柳は外務次官を務めていたこともあるのだ。
「その観点からは」
「情報交換にしては妙だと思いました」
「情報交換においてはですか」
「そうです」
そしてまた答えるのであった。

## 第三十三部第一章　戦いの観客達その十二

「それならば各国で頻繁に会うことでもありません」
「しかも密会という形で隠れてですね」
「そうです。ですから何かあるとは思いました」
このことをまた言うのである。
「何かが。ですが」
「ですが？」
「やはり軍事的な密約とは思いませんでした」
語りながらその顔を曇らせるのであった。
「どうにも。そういったふうには」
「では何と思われましたか」
また同じ問いになっていたがそれでも問う八条であった。
「この場合は」
「交易のことかとも考えました」
「交易ですか」
「はい。ですが」
ここで小柳はオムダーマンとティムールの宙理を頭の中で描いた。描きながらそのうえでまた言うのである。その頭の動きはやはり彼女もまた一国の閣僚であり伊東からは後継者の一人と目されているだけはあった。それだけのものは備えているのである。
「オムダーマンとティムールの間には複雑なアステロイド帯や宇宙サルガッソー、ブラックホール等が密集し」
「とても艦艇が行き来できる場所ではありませんね」
「はい。ですからサハラ北方と東方の交流はほどありませんでした」
また言うのであった。
「それに間にはハサンがあるというのに」
「やはり妙だと」
「次に考えたのは相互の親善でした」

「親善ですか」
「思えばそれにしては剣呑でした」
顔を鋭くさせて述べる小柳であった。
「密会する必要もありませんし」
「その通りです。確かにオムダーマンとティムールには一つのつながりがあります」
「婚姻ですね」
「そうです」
一つの絆が話に出て来た。
「それです」
「それだと思われたのですね」
「アッディーン副大統領の奥方はシャイターン家の出身です」
「確か名前は」
「マルヤム＝シャイターンといいました」
小柳は彼女の名はよく知っていた。
「サハラにおいても随一と呼ばれる美女です」
「そうですね。あの方は」
八条はここで何気なくだがお世辞にもデリカシーがあるとは言えない言葉を出してしまった。
「非常にお美しい」
「はい」
小柳は頷きはするがその表情を暗くさせていた。
「その通りです」
「あの方を妻に持てる方は幸福です」
こうまで述べる。
「ご気質もかなりいいとか」
「私もそう聞いています」
顔の暗さをさらに増していっている小柳であった。
「それに関しては」
「そうですね。ところで」

「何でしょうか」
「どうも顔色が優れないようですが」
何も気付かないうちに小柳に対して問う八条だった。
「どうされましたか？」
「何もありませんが」
その暗くさせたままの顔で言葉を返す小柳だった。
「それが何か」
「何かではなく御身体の何処かが」
「何もありません」
ここでもその暗い顔である。
「ですから。御気になさらずに」
「そうですか」
「とにかくです。その予想も外れました」
暗くなっていた顔を元の悔しがる顔に戻していた。どちらにしろ童顔ながら知的でしっかりとした印象を与える彼女の顔は曇ってしまっている。
「親善にしろ絆にしろ」
「軍事的密約だったということなのでしょう」
「小柳君は今度軍事を勉強するといいわ」
伊東はこう小柳に話した。

## 第三十三部第一章　戦いの観客達その十三

「そのうえで今度は」
「今度は」
「国防大臣ね」
目を少し上にやっての言葉である。
「それに推薦するわ」
「国防大臣ですか」
「そうよ」
小柳に対して頷いてみせての言葉である。
「それもやってみるといいわ」
「ですが私は」
それを言われてまた顔を暗くさせる小柳だった。だが今度の暗さは先程のそれとはまた違う色の暗さだった。暗さといっても様々であった。
「軍事に関しては」
「だから。勉強しなさい」
優しいがしっかりとした、例えて言うならば綿の縄の様な声であった。それはまさに教育者、教師といった感じの声であった。
「勉強してからね。推薦するわ」
「そうなのですか」
「安心しなさい。貴女ならできるわ」
穏やかで包容力のある笑みを小柳に向けていた。
「貴女ならね」
「わかりました。それでは」
小柳も伊東に言われては答えるしかなかった。八条の師と言われている彼女は小柳や東にとっても師なのである。とりわけ小柳は今日本にいる政治家で伊東に最も可愛がられ将来の日本国首相候補とまで呼ばれているのである。そこまで実力を買われているというこ

となのだ。
「その際は謹んで」
「そうするといいわ。東君は」
「はい」
今度は東に顔を向ける。彼にも声をかける配慮は忘れないのだった。
「今度は財務相かしらね」
「財務相ですか」
「それもまたいい経験になるわ」
こう言うのである。財務省はどの国においても、中央政府においてもかなり重要な官庁である。そこを取り仕切るのは常にその国の閣僚の中でも随一の人物がなるものだ。東は今そのことを伊東から聞いたのだ、今現在日本を取り仕切る伊東自身からである。
「とてもね」
「では私も」
「ええ。御願いするわ」
「畏まりました」
「ここでね」
東にも告げてから伊東は八条に顔を戻した。そうしてそのうえで彼に対して言うのである。
「君が日本にいてくれたら」
「私ですか」
「そうよ。首相だったわ」
苦さと寂しさが混ざった笑みで八条を見ての言葉であった。
「間違いなくね。私の後継者はね」
「はあ」
「私としては残念な引き抜きだったわ」
その二つのものが混ざり合った笑みでまた述べる伊東だった。
「実は君はずっと日本に置いておきたかったのよ」
「そうだったのですか」

「それが出来なくてね。ただ」
「ただ？」
「立派にやっているのを見てまずは嬉しいわ」
こう述べるのだった。
「それはね」
「有り難うございます」
「けれど」
だがここで言葉を強くさせた。八条を見るその目も同じだ。
「一つ言っておくことがあるわ」
「一つ！？」
「勉強することね」
こう八条に告げるのだった。
「勉強をね。しなさい」
「勉強といいますと」
そう言われても何かわからないといった様子の八条だった。
「政治のことでしょうか」
「違うわ」
ちらりと小柳を横目で見てからの八条への返答だった。
「勉強は一つじゃないわよね」
「ええ、まあ」
この言葉はわかる八条だった。

## 第三十三部第一章　戦いの観客達その十四

「それは。よく」
「そういうことよ。まず何を勉強するべきかを」
「はい」
「見つけなさい」
言葉がさらに厳しくなる。
「君の場合は。わかったわね」
「わかりました」
こうは答えてもどうにも要領の得ない返事であった。顔は相変わらず端整で気品があるが表情がどうにもいぶかしむものになってしまっているのだ。
「それでは」
「そういうことよ。それじゃあ」
「ええ」
「お話はこれで終わりね」
丁度八条の今度の戦いへの予想や他の様々な話も終わったところだった。
「それじゃあ。後はデザートを食べて」
「そうですね。最後は」
「メキシコのデザートよね」
伊東は言った。
「果たして何が出て来るかしら」
「ここのデザートはチョコレートが有名です」
「チョコレートね」
「そうです。カバリエ外相が発案されたメニューで」
今ではメキシコ大統領と並ぶメキシコの顔になっている中央政府外相である。その巨大な容姿が有名になっている最大の理由ではあるが。

「チョコレートムースの一つで」
「チョコレートムースなのね」
「お嫌いですか？」
メニューを述べたところで三人に問うた。
「チョコレートムースは」
「いいえ」
その問いに伊東が答えた。
「むしろ。かなり好きよ」
「私もです」
「それは私も」
そしてこれは東も小柳も同じであった。面白いことに三人共チョコレートムースは好物であるらしい。八条も入れれば四人共である。
それをあらためて知った八条は表情を綻ばせた。そうしてそのうえで言うのだった。
「それは有り難いことですね」
「君にとって？」
「半分は」
まずはこう答える八条だった。
「半分は私にとって有り難いことです」
「そう。それではあと半分は？」
「外相にとってです」
「カバリエ外相にとってね」
「そういうことです」
楽しげに笑って伊東に答えるのだった。
「あの方は御自身の考えられた料理を他人が食べることをこの上ない喜びとされています」
「流石というところかしら」
その話を聞いてこう言う伊東だった。
「連合きっての美食家としては」
「美食家ですか」

「少なくとも私のイメージはそうね」
八条への返答はこうであった。
「私の中でのカバリエ外相は美食家よ」
「料理の本を幾つも出しているせいですか」
「あれはゴーストライターが書いた本ではないわね」
このことも容易に見抜けるのが伊東の眼力である。彼女も伊達に政治学者であり一国の首相ではない。やはり備えている目は確かなものである。
「間違いなく本人の筆よ」
「そう見抜かれていますか」
「すぐにわかることよ」
そしてこのことを実際にも語るのだった。
「それはね」
「癖やそういったもので」
「それもあるけれど本人しかわからないことがあるから」
こう言うのであった。
「だから。それを見てね」
「成程。そういうことですか」
「ゴーストライターは所詮ゴーストライターに過ぎないわ」
今の伊東の言葉には侮蔑はなかった。だがそのかわりに何かしら達観したものがあった。その達観による言葉であるのだった。
「結局のところはね」
「では本人ならば」
「そこでわかるのよ。イミテーションかオリジナルかが」
「オリジナルかが」
「そういうことよ。だからその本を読んだからこそ」
話がここで核心に入り込む。

## 第三十三部第一章　戦いの観客達その十五

「彼女には美食家としてのイメージが強いのよ」
「そういうことですか」
「ロッシーニかしら」
十九世紀イタリアの作曲家である。オペラで非常に有名でありその作品はこの時代の連合においても広く上演されている。連合ではオペラは完全に自分達に吸収されてしまったものとして考えている傾向が非常に強いのである。なおこのロッシーニもまた美食家として非常に有名であった。
「例えるなら」
「あのイタリアの作曲家ですね」
「そういえば彼もね」
伊東はロッシーニにも話を及ばせてきた。
「目があったわ」
「目がですか」
「より確かに言えば舌ね」
こう言い直しもするがロッシーニの力量を認めているのは確かだ。
「彼のね。舌は」
「どういったものだったのですか？」
「見事なものだったそうね。スパゲティがあるわね」
「ええ」
これを知らない者は連合にもエウロパにもいない。言うまでもなくパスタの代表格である。これを知らずしてパスタもイタリア料理も語れない。
「十九世紀のスパゲティの食べ方は」
「ナポリ式ですね」
ここで八条は言った。
「それは」

「やっぱり知っていたわね」
今度は八条の学識を褒めた。八条は連合の政治家の中でもとりわけ学識や教養の豊かな人物として有名である。まだ政治家として若いがそれでも学者に負けない程の学識と教養を備えていると評判なのだ。大学では軍に進まずに院に残ることを強く勧められたこともあった。
「このことは」
「チーズをまぶして手で食べていたのですね」
「そうよ」
そして伊東もまたこのことを知っているのだった。
「その通りよ。スパゲティを上に高々と上げてからね」
「そうでしたね」
「何か随分と食べにくそうですね」
小柳は二人の話を聞いて言うのだった。怪訝な顔をしている。
「その食べ方は」
「そう思うかしら。やっぱり」
「はい」
そして伊東の言葉に頷く。
「私から見れば」
「そうよ。確かに今から考えればかなり食べにくいわ」
伊東もそれは認める。
「それにソースも乏しいわよね」
「ナポリタンやミートソースでもないのですね」
「そうよ」
「それはまたかなり」
そのことを確かめて余計に怪訝な顔になる小柳だった。
「味気ないというか。ペペロンチーノでもないですし」
「それでも当時はこの食べ方だったのよ」
伊東は言うのだった。
「当時はね」

「そうですか」
「そうよ。そして」
伊東はさらに言う。
「そのロッシーニだけれど」
「ええ」
「その彼は」
「彼は音楽家として成功した後パリに移り住んだわね」
「はい」
八条が伊東のその話に頷く。所謂花の都パリだ。そこで楽しむものはもう決まっていた。
「そこで美食を心から楽しむ生活を送っていたのだけれど」
「スパゲティをパリでも食べたのでしょうか」
東は何気なくこう問うた。
「そして何かあったのですか?」
「近いわね」
そのことを近いと答えた。
「そうよ。パリでスパゲティを扱っている店に入ったのよ」
「そうでしたか。それで」
「それでナポリ産と言われているまだ茹でてもいないパスタを食べて」
それだけであったのだ。だが。

## 第三十三部第一章　戦いの観客達その十六

「それだけでこれはナポリのものではないとわかったのよ。はっきりとね」
「見事なものですね」
八条がそれを聞いて述べた。
「それは」
「そういうことよ。彼も何かを見極める確かなものを持っていたのよ」
「この場合は料理を」
「そう。そしてそれは」
「カバリエ外相もまた」
「彼女はまず美食家よ」
またカバリエをこう評するのだった。
「美食家でありそこから政治家になったと言うべきかしら」
「そうなりますか」
「そして真の美食家は」
語る伊東の目の光が強いものになっていく。
「それを他の方面にも活かせるのよ」
「だからこそ外交官、いえ政治家として」
あくまでカバリエは本職は政治家であると言われている。実際のところ美食家と断定しているのは伊東だけであると言ってもいい。彼女独特の言い回しではある。
「それを活かしていると」
「その通りよ。彼女は美食家よ」
またこのことを言う。
「そしてその美食家のチョコレートムースだけれど」
「はい」
話は原点に戻った。

「果たしてどんなものかしら。楽しみね」
「それですが」
八条もそれに応えて述べる。
「ただのチョコレートムースではありません」
「というと」
伊東は彼の言葉を聞いてさらに笑みを深いものにさせた。
「一体。どういったものかしら」
「今来ました」
ここでウェイターが来た。服装はメキシコの民族衣装である。店に流れる陽気なメキシコの曲が実によく合う衣装である。その衣装と共に彼が持って来たものは。
金はこの時カバリエと話をしていた。その席には多くのデザートや果物がある。それを食べつつ外相であるカバリエと話をしている。今彼女が食べているのは。
「これですか」
「そう、これなのよ」
カバリエは微笑を浮かべて金に対して答えてみせた。
「これがね。私の考えた」
「チョコレートムースですか」
「そうよ。どうかしら」
「そうですね」
それはただのチョコレートムースではなかった。チョコレートケーキやチョコアイスまで入れてそれでベッドを作りそのうえナッツやアーモンドで飾りそれを鳩に見せている。そのうえチョコレートも配し非常に優雅なものを見せている。金はそのチョコレートムースを見て言うのであった。
「これはあれですね」
「あれというと？」
「ピーチメルバですね」
その菓子を話に出すのであった。

「あの。オーストリアリアのオペラ歌手からヒントを得た」
「ローエングリンの新婚の場をイメージしたあれね」
「はい、あれです」
菓子でベッドと白鳥を作っている優雅な菓子である。この時代でも食べられているものであり金も好物の一つとしているのである。
「あれをそのまま黒にしたような」
「ヒントを得たのは確かよ」
カバリエもそれは否定しない。
「それをチョコレートでもと思ってね」
「それで作ったのですか」
「あれは第三幕の婚礼の場面よね」
「はい」
ローエングリン第三幕のことである。この時の婚礼の合唱や結婚行進曲はあまりにも有名だがこの婚礼は一晩した続かない儚きものでもある。
「それに対してこれは」
「これが鳩ですから」
金はチョコレートムースのベッドの上の鳩を見て気付いた。
「あの時ですね。最後の」
「そうよ。つまりこのムースは実は」
「小舟ですか」
ローエングリンは小舟に乗って現われ小舟に乗って立ち去る。それがこの楽劇でのこの不思議な騎士の立場をも表しているのである。異界から来たこの世にない存在としての彼を。
「これは」
「そう。これは小舟よ」
やはりカバリエはそれも認めて頷いてみせた。
「これはね」
「成程、やはりそうですか」
金もそれを聞いて納得した顔で頷くのだった。

## 第三十三部第一章　戦いの観客達その十七

「確かにその通りですね。この黒は」
「白があれば黒がある」
カバリエは言う。
「相反するようでいてそれは」
「同じものだと仰るのですね」
「政治もそうね」
また微笑んでの言葉であった。
「特にこの世界は」
「確かに。政治もまた」
「長所が短所になり」
「短所が長所になる」
二人の言葉はここで重なった。そのうえでさらに続けられる。
「そういうことですね」
「その通りよ。例えば」
カバリエは思わせぶりな言葉を続けていく。目の光は穏やかだがそこにはあるものを見続けていた。
「今のサハラだけれど」
「はい」
金はそのカバリエのあえて黒の中にホワイトチョコで白くされた鳩の部分を黄金色のスプーンで取りながら話を聞いていた。話はサハラのものになっていた。
「どう思うかしら」
「今まさにアヤグーズ、ハサン協同軍とティムール軍の戦いがはじまろうとしていますね」
「そうね。しかもアヤグーズの首都アッサルームで」
「その通りです」
スプーンに取ったその鳩を口の中に入れる。するとホワイトチョ

コのミルクも混ざった白い甘さとその台になっていたチョコレートムースの黒い甘さが口の中で混ざり合う。それがまた絶妙の甘さになるのだった。
「もう間も無くはじまります」
「貴女はどちらが勝つと思っているのかしら」
「協同軍です」
金はカバリエの今の質問にはっきりと答えた。
「間違いなく彼等が勝ちます」
「それはどうしてかしら」
「まず数です」
彼女もまた数をあげて協同軍の有利を説くのであった。これに関しては彼女も他の者達も見ている部分は正しくまさにその通りであった。
「数において協同軍はティムール軍の三倍近いです」
「そうね。それは確かにね」
カバリエも彼女の今の言葉にはそのまま頷く。
「それは大きいわね」
「その次に地の利があります」
今度言うのはそれであった。
「正確には宙の理ですが」
「それは戦場がアヤグーズの首都だからね」
「はい、そうです」
やはり言うのはそこであった。
「首都はまさに彼等にとっては家の中そのものですので」
「勝手は何でもわかっていると」
「まさしく夜の暗がりの中でコップを出してやかんから水を飲むようなものでしょう」
今の金の言葉はいささか古いものも入っていたがその通りだった。この時代やかんとはあまり言わずポットと呼ぶからである。
「ですがティムール軍にとっては」

「あの星系はね」
カバリエはそのアッサルーム星系について語るのだった。
「あまりにも宇宙潮流が独特よね」
「私はアヤグーズに行ったことはありませんので」
それは断る金だった。
「ですが」
「それは聞いているわね」
「はい。かなり凄いとか」
「凄いなんてものじゃないわ」
こうまで言うカバリエであった。その言葉は真剣そのものである。
「もうね。上下左右に」
「はい」
「複数の潮流がそれぞれ吹き荒れていて」
「そこまでですか」
「さながら複数の海蛇が海中で荒れ狂っているかのようね」
こう表現するのであった。
「それもどれも巨大な海蛇達が」
「巨大なですか」
「軍の艦隊の動きも妨げる程の」
それ程までだというのである。
「そこを知るにはそうそう容易なことではないわ」
「ではやはり宙理は」
「協同軍に味方するわ」
はっきりと言い切るカバリエであった。

## 第三十三部第一章　戦いの観客達その十八

「完全にね」
「そうですね。そして」
「そして？」
カバリエはすぐに今の金の言葉に目を向けた。
「まだ何かあるのかしら」
「次に士気です」
彼女が次に言ったのはここだった。
「士気ですが」
「彼等の士気は高いというのね」
「後がありません」
彼女も連合にいながらアヤグーズの危機をよくわかっていた。
「ここで敗れればアヤグーズは滅亡し」
「ハサンはその劣勢が確実なものになるわね」
「そうです」
だからこそ危機なのである。しかもアヤグーズにとってはその存亡がかかっている。彼等としては何としても負けられないものがそこにはあった。
「だからこそ彼等も」
「必死ね」
「ティムールもまた同じのようですね」
ここが金の着眼点が並の政治家とは違うところであった。生粋の文官である彼女は祖国韓国にあった頃から軍事畑に入ったことはない。しかしそれでもそれなり以上の見識を備えているのだ。
「それについては」
「ティムールもまた後がないというのね」
「その通りです」
こう言うのである。

「彼等もまた一度敗れればそれでもう」
「滅亡に直結するというのね」
「今ティムールはその総力を挙げて戦っています」
ここに理由があるというのだ。
「ですから一度の敗戦がそのまま」
「ティムールの滅亡につながるということね」
「若しもです」
ここで話をさかのぼらせるのだった。
「あのコムでの戦いで敗れていればティムールは」
「滅亡していたというのね」
「あの戦いにも彼等は総力を注ぎ込みました」
「それははっきりしているのね」
「しています」
そうでなければ決して言うことはない。金はそういう人物だ。だからこそ連合中央政府内相としてその辣腕を存分に振るっているのである。中央政府にとってはカバリエと並ぶ内外を取り仕切る有能な女傑であった。伊達に女教皇とまで呼ばれてはいないのである。
「それに関しましても。既にデータが」
「データにまで出ているのね」
「内務省が統計として出しました」
「内務省が？」
「はい、サンプルとしまして」
至極落ち着いた声でカバリエの疑問符に答える金だった。眼鏡の奥の黒い瞳はいつもと変わらぬ知的な光を放ち続けている。
「大規模な事業に国力を投入し」
「そして成功した場合及び破綻した場合のサンプルとして考えてみました」
「大規模な事業？ああ」
カバリエもここでわかった。あまりにも事務的な言葉なのでこの場合それが何をさすものなのかわからなかったのだ。しかしわから

なかったのは一瞬であった。
「そういうことね。成程ね」
「その通りです。即ち戦争です」
「戦争はね。確かにね」
カバリエはあらためて金の今の話に納得した顔で頷くのだった。
わかってしまえばどうということはないがそれでも驚くべきことがあった。それは。
「けれど」
「何か？」
「随分と割り切った言葉ね」
こう金に述べるのだった。
「戦争を大規模な事業なんて」
「出資としてはそうです」
いささか以上に財務的な言葉であったが説得力はあった。
「政治的には」
「資金、資源、そして人材のね」
「尚且つ歳入の見込みはありません」
このことも言い加えるのだった。
「しかも全く」
「その通りなのよね。軍事というものはね」
カバリエはここで苦い顔になった。この苦さは決してチョコレートの苦味によるものではない。カバリエは今はチョコアイスを口にしている。黒いそのチョコが口の中で冷たさと甘さを与えながら少しずつ溶けていくのはこの上ない至福の時である。しかし彼女の今の顔は苦いものだった。

## 第三十三部第一章　戦いの観客達その十九

「出費しかないのよね」
「しかも今ティムールはそれにＧＮＰの一割以上を注ぎ込んでいます」
「一割以上」
「二割近いです」
金はこう言い直してきた。
「最早」
「そう。二割近くね」
そこまで聞いて今度は考える顔になるカバリエであった。
「それはまた相当なものね」
「それで失敗したならば。それに」
「それに？」
また金の言葉に対して問う。
「まだ何かあるのかしら」
「ハサンとティムールの国力差です」
金の冷静、いや冷徹の域に達している分析はまだ続いていた。彼女が今度言うのはそれぞれの勢力の国力だったのだ。そこまで見て分析しているのだった。
「これに関してはやはり」
「ハサンの方が上ね。どう見ても」
「圧倒的と言っていいものがあります」
「サハラで最も豊かな東方を何百年にも渡って統治し」
「はい」
それがハサンの歴史であり功績でもある。
「そして産業や貿易、商業を発展させてきたから」
「農業もまたサハラ随一です」
これもであったのだ。平和はそれだけで多くの恩恵をもたらすも

のだ。産業も技術もまず平和でそれに安心して力を注げなければ正常な発展はない。だからである。
「そのハサンに対してティムールは」
「長い間戦乱に支配されていたわね」
「とりわけエウロパ侵攻があり」
「ええ」
やはり最大のものはこれであった。エウロパに攻め込まれてしまったことが今ティムールがある場所の荒廃を招いた最大の要因だったのである。
「彼等の侵略と策謀に基くサハラ国家同士の争いによりあの地域は相当に荒廃しました」
「今でもそれは続いているわね」
「その通りです」
これはもう言うまでもない、いや聞くまでもないことだった。誰がどう見てもサハラ北方の荒廃はあまりにも酷いものであり続けているのであった。
「ようやくエウロパが去り難民達が戻り経済が復興しようとしているところで」
「エウロパはあらかた持ち去ってしまったようね」
「技術も何もかも」
また答える金だった。
「ですから。今のあの地域はようやく復興をはじめたというところです」
「ようやくなのね」
「はい、ようやくです。ですから」
「必然的にハサンとの国力の違いになっているわね」
「残念ですが」
そういうことであった。
「言い換えれば敗れた場合ハサンは劣勢になるだけですが」
「ティムールは国力の投資に失敗して後は滅亡ね」

「その通りです」
やはりこうなるのである。
「ですからティムールにとってもこれは」
「わかったわ。どうしても彼等がこの戦いに勝たなければならない理由が」
「この戦いにティムールが勝てれば少しは変わるでしょう」
ただしこう言い加えることは忘れない。
「今のコム、そしてアッサルームという二つの要衝とアヤグーズの国力を手に入れられるのですから」
「その通りね。さて」
カバリエは一旦コーヒーを飲み口直しをしたうえでまた金に問うてきた。
「話をさらに戻すわね。いいかしら」
「はい、それでは」
「それで貴女のこの戦いへの予想だけれど」
「それですか」
「ティムールの勝利と言ったわね」
「はい」
毅然として答えた言葉だった。
「あくまで。それは何故かしら」
「何故か、ですか」
「まず言うわ」
金の目を見ながら語ってみせる。
「国力において大きく開いているわね」
「そうです」
既に完全にわかっていることだったからこそここでは繰り返さないのだった。
「それなのにどうして勝てるのかしら」
「その注ぎ込み方です」
「注ぎ込み方！？」

「そうです。ハサンが揃えたのは数です」
「数なのね」
「まず数を揃えることを考えました」
このことを指摘するのである。

## 第三十三部第一章　戦いの観客達その二十

「数を。ですがそれに対してティムールは」
「どうだというのかしら」
「質に注ぎ込みました」
こう言うのであった。
「そこにティムールの勝因があります」
「数より質ね」
カバリエはこれまでの金の話を一言でまとめてこう言った。
「つまり。貴女の言いたいことは」
「そう受け止って頂いて宜しいです」
「そう。けれどこれは」
カバリエは考える目で静かに述べるのであった。
「連合の考えではないわね」
「それも否定しません」
こうも言うのであった。
「私としても」
「そうなの。否定しないのね」
「あくまでケースバイケースで」
次の金の言葉はこうであった。
「ですからこの場合は」
「質になるというわけね」
「私も最初は協同軍優勢と見ました」
金は己の最初の見識を述べた。
「やはり三倍近い戦力ともなると」
「そうおいそれとは覆せないわね」
「少なくとも我々はエウロパとの戦争は数により勝利したところが大きかったです」
このことは金もわかっていた。八条は将兵個々の質は訓練度と国

防の危機感による士気、特にサハラでの戦闘を通じて実戦経験を積んでいるエウロパ軍が圧倒していると看破していた。だからこそ彼はその圧倒的な数と武装、それに補給により彼等をローラーの如く踏み潰す戦術に出たのである。そしてそれは見事に成功し連合は勝利を収めることができた。もっとも前面には義勇軍も置いていたが。
「それは」
「質に勝るエウロパ軍に対してね」
「あの場合は質を圧倒しました」
「協同軍もそれを考えているのは明白です」
これも認識している金だった。
「だからこそあの数ですが」
「我々みたいにはいかないのね」
「私はそう思います」
はっきりと述べた。
「まず彼等の主力はハサン軍の予備兵力を動員したものです」
「彼等ね」
「彼等は左程質のいい軍ではありません」
「予備戦力だからかしら」
「簡単に言えばそうです」
静かに答えた。
「その訓練はなおざりでしたし」
「それね」
「しかも彼等はアッサルームの宙理に暗いです」
金はこのことも指摘した。
「練度の低さもありそれは大きく影響するでしょう」
「つまり。そこをティムール軍に突かれるのね」
「シャイターン主席は常に戦場になる場所の研究を怠りません」
金はこのことも知っていた。
「ですが彼等は」
「アヤグーズ軍は知っているわ」

カバリエは言う。このことは自明の理だ。
「間違いなくね」
「だからこそ実際の指揮はブルコルジ女王が執るのですが」
「果たしてそれに協同軍全軍が動けるかというと」
「動けません」
はっきりと看破した声であった。
「だからこそ彼等は敗れます」
「練度が低く宙理に暗くしかも命令通りに動けず」
「主力がこれでは」
駄目だというのである。
「彼等は敗れます。そしてそれは戦局を決定するでしょう」
「決定ね」
「今度の戦いがハサン西部戦線の優劣を決定します」
こうも言う。
「確実に」
「つまりティムールが有利になるのね」
「このことは戦局全体に影響を及ぼします」
「そうね。ハサンが戦っているのは西方だけではないわ」
二正面作戦を行っている。このことがあまりにも大きいのだ。ハサンにとっては当初はそれでも充分やっていけるものであった。しかし今は。それからは。それもまた問題になろうとしているのだ。

## 第三十三部第一章　戦いの観客達その二十一

「どうなるかしらね」
「ハサン南部もこのままいけば危ないと思います」
金の冷徹なまでに冷静な分析はそこにも及んでいた。
「五重の防衛ラインのうち既に三つをオムダーマン軍に奪取されていますので」
「第三はあえて彼等が手放したものだったわね」
「これは国防省の高官の意見とのことですが」
話に国防省が出て来たのは当然のことだった。戦争に関するもので彼等の名が今まで話に出て来ないというのもやはり不自然なものである。
「八条長官はあそこであえて攻撃に出なかったのは間違いだと言っておられたそうです」
「無血で引き渡したあの時ね」
「あれはあえて空城にしましたね」
「ええ」
既に連合中央政府もその情報は手に入れていた。
「彼等の補給戦を長くさせさらに進ませ」
「そこで叩く為に」
「けれど待っているだったわね」
結局そうだったのである。ハサン軍はオムダーマン軍を積極的に撃とうとはしなかった。第四、そして第五の防衛ラインに篭るだけで動くことはないのだった。
「今もね」
「あそこで少しでもよいから兵を出して叩くべきだったとのことです」
「そういえばオムダーマン軍はあのジェルムに補給基地を置いているけれど」

「それが長くなっています」
ハサン軍もそれはわかっていた。
「ですが今は第三の基地であるガワールを急速に基地化しているそうです」
「さらなる進撃の為にね」
「彼等の読みの失敗だと」
金は言う。
「長官は述べられているとのことです」
「この失敗、彼等にとって大きいわね」
カバリエもここまで聞いて静かに呟いた。
「それを考えると」
「それでも士気が充分で動揺がなければ防げるでしょう」
金は冷徹な分析のできる人物だがそれと共に人の心を察することのできる人物であった。そうしたこともわかっているからこそこの若さで高官にもなっているのである。ただ能力が優秀なコンピューターではないのだ。その頭脳はあくまで人のものであるのだ。
「ですが西方での敗戦が彼等の動揺を呼べば」
「危ういわね」
「私はそう見ています」
「さて、ハサンはかなり劣勢に立てば」
「はい」
再びムースを食べながらの話に戻る。
「我々はどうするべきかしら」
「まず権益は確保しています」
彼等にとって最大の関心事である。
「ですからそれは」
「気にする必要はないのね」
「我々としては何処でもいいのです」
金はこうも言うのだった。
「どの勢力が東方にいても」

「ただしなのね」
「はい。その勢力が連合に対して好意的であれば」
これが大前提なのである。ハサンは連合に対しては非常に好意的でありその関係は常に円満なものであった。それが彼等ハサン王国の繁栄にもつながっていたからだ。
「それでいいというのね」
「そうです。ですがさしあたっては」
「ハサンね」
「既にどういった考えかわかっていますから」
だからなのだった。
「一番安心できます」
「そういうことね。外相の私から見てもね」
「私としてはです」
金の目が少し不穏なものを感じさせるものになった。
「どうも。ティムールが統一すると」
「危ないのかしら」
「あのシャイターン主席という人物」
彼について考えながら述べる。
「非常に危険です」
「ハサンで起こった開戦前の連続テロだけれど」
「はい」
「あれは何だったかはある程度はわかったわ」
「ティムールの工作ですね」
金はそう言われてすぐにこう答えた。
「そうですね」
「流石ね」
今の金の言葉に微笑むカバリエだった。
「わかっていたのね」
「確かな証拠はありますか？」
「それを掴ませないところが見事なのよ」

カバリエの今度の言葉は苦笑と賞賛が共にあった。シャイターンに対する二つの感情がそのまま言葉になって出ているのであった。

## 第三十三部第一章　戦いの観客達その二十二

「そこがね。非常にね」
「そこがですか」
「そうなのよ。けれど状況証拠としてはね」
「彼等しかありません」
断言する金だった。
「確かに断定は危険ですが」
「ハサンの有能な人材がいなくなって得をするのは誰か」
カバリエは不意にという感じで言葉を述べた。
「そしてその次に何が起こったか」
「それを考えますとやはり」
「答えは一つしかないわね」
「一応二つあることにはあります」
金はとりあえずはこうも述べることは述べた。
「ですが」
「オムダーマンはどうもね」
そしてカバリエがその言葉に続く形で言うのだった。
「謀略を使うタイプではないし」
「少なくとも今のオムダーマンはです」
限定であるがそれでもはっきりとオムダーマンについては否定する金だった。
「軍事を取り仕切るアッディーン副大統領がまず謀略を使うタイプではありません」
「彼はあくまで正攻法ね」
「私はそう見ています」
金の目の光は鋭く、かつ真面目なものであった。
「謀略よりも正面から戦い」
「そうして勝つ」

カバリエはまた金の言葉に続く形で述べた。
「そういうことね」
「その通りだと思います。やはりそれを考えますと」
「ティムールね」
事前の消去法によりそうなってしまうのである。どうしても。
「やはり。彼等ね」
「シャイターン主席です」
それを指示するであろう人物もはっきりしていた。これには根拠もあった。
「独裁制のあの国家システムを考えれば」
「独裁者に全ての権限が集まる」
カバリエはまた言う。
「その通りね」
「しかも彼は南方にいた頃にも北方を統一する頃にも謀略を駆使しています」
「それにより今を築いた」
「ただ戦場において華麗に勝利を収め鮮やかな政治手腕を見せるだけではありません」
サハラにおいてはその二つでもって彼は英雄と称されている。しかしそれだけで彼は彼になっているのではないのだ。むしろそこにある裏のものでなっているのである。
「その謀略により」
「そしてその謀略を」
「はい」
「私達に対して向けたならば」
「由々しき事態です」
金の顔がこの話の場においても最も曇った。まるで白銀のスプーンが毒気を感じてそれで曇ってしまったように。急激な曇りであった。
「そうなってしまえば」

「彼がサハラで満足してくれればいいのだけれどね」
「果たしてそうなるでしょうか」
「断言はできないわ」
カバリエはまずはこう断ってきた。
「けれどね」
「けれど？」
「彼が見ているのはあくまでサハラね」
「サハラですか」
「ええ。連合にしろマウリアにしろ見ていることは見ているけれど」
見ているのは間違いない。しかし見るにしろ様々な見方がある。
カバリエの言いたいことはそれであり今もそれを語っているのである。
そうして。カバリエは言うのだった。
「私達はあくまで外国として見ているわね」
「外国ですか」
「オムダーマンにしろハサンにしろそうだけれど」
今度は彼等も一まとめにして語る。
「サハラはあくまでサハラで完結した世界なのよ」
「サハラでですか」
「私達とはそういった意味では同じで」
「我々と」
「連合もそうよね」
実際に自分達についても語る。
「連合は連合だけで一つの世界ね」
「はい」
またカバリエの言葉に対して頷く。

## 第三十三部第一章　戦いの観客達その二十三

「それと同じなのよ」
「つまり我々連合は彼にとっては外国でしかないのですか」
「あくまでね」
こう述べる。
「必要でない限りは特にどうこうするような相手ではないわね」
「こちらから何もしない限りはですか」
「何かしたらわからないわよ」
但し書きは付けるのだった。
「下手なことをこちらがすればね」
「その場合は牙を剥きますか」
「しかも猛毒のある牙をね」
どちらにしろ尋常なものではないのは確かだった。この場合は。
「密かに剥いて忍び寄るわね」
「そうですか。ではティムールが統一した場合のシャイターンは」
「害意を見せないことね」
これが肝心であるというのだった。
「若しそれをすればね。彼等は影から仕掛けてくるわ」
「それは注意しても」
「まず害のある存在ではないわ」
何もしない場合は、ということであるがこれは確かにそうであった。
「我々にとってはね」
「あくまで注意が必要なだけですか」
「そういうことよ」
「わかりました。それでは過剰に危険視しないことにします」
こう結論付ける金であった。
「彼等に関しましては」

「そうするべきね。それにしても」
今度はカバリエが思索に入りそのうえで述べるのであった。
「果たして。サハラはどうなるかしらね」
「まだ当分は戦乱が続きますが」
「それでも少しずつ見えてくるわね」
「はい。まずはアッサルームではティムールが勝ち」１１０
彼女の中では完全に規定事項になっていた。
「続いてオムダーマンが進み」
「オムダーマンとティムール」
カバリエは不意にこの二国の名を述べた。
「青い獅子と赤い豹ね」
「豹ですか」
「最近シャイターン主席はこうも仇名されているわ」
魔王とも呼ばれたりこう言われたりもしているのだ。この辺りは人によって好き勝手名付けるのが仇名というものであり彼についても同じであった。
「アッディーン副大統領が剣王と呼ばれているのと同じで」
「剣王ですか」
「オムダーマン軍元帥はマントを羽織るわね」
「はい」
エウロパ軍でも大将以上はそうであるがサハラの多くの国でもこれは同じなのだ。これは多分に装飾と権威付けの為なのである。
「そして副大統領はその腰に剣を帯びるのよ」
「だから剣王なのですか」
「儀礼的だけれどね」
この時代は流石に白兵戦での近代武器として作られた剣ならともかく普通に剣で戦ったりはしない。アッディーンもまた儀礼として、権威として剣を帯びているのである。
「そこから来ているのよ」
「そうでしたか」

「そして赤い豹」
またシャイターンに関する言葉だった。
「これはね。やっぱりイメージなのよ」
「赤はティムール軍の軍服の色ですね」
「ええ」
これに対してアッディーンの青はオムダーマン軍の軍服だ。ナポレオンの時代より軍服の色はそのままその国家や主要人物のイメージになるのである。
「それよ」
「イメージですか」
「シャイターン主席の持っている狡猾さは豹のものね」
「その通りです」
それこそまさに金の言いたいことであったのだ。
「彼は。油断なりません」
「それを頭に入れておくことは重要ね。さて」
「はい」
ちょうど二人共ムースを食べ終わった。いいタイミングだった。
「食べ終わったわね」
「はい。それでは」
「もう話はないわね」
「私は何も」
こう述べる金であった。
「ありません」
「そう。それだったらもう」
「帰りますか」
「ええ。それで貴女はここを出たらどうするのかしら」
「また仕事です」
答えは決まっていた。
「また内務省に戻りまして」
「内務省も何かと忙しいのね」

「外務省もそうだと思いますが」
「こちらは今は通常ね」
こう金に返すカバリエだった。
「あくまで今は、だけれどね」
「そうなのですか」
「それにしても今内務省はそれ程忙しいのかしら」
「はい、今は」
またカバリエの言葉に答える金だった。
「仕事が立て込んでいまして」
「そうなの。何もなくても仕事が来る時はあるわね」
「恐らくそれも今日で終わりです」
だが既に峠は去ったといった声であった。
「ですから。今日これで終わりましたら」
「明日からは穏やかになるのね」
「その通りです。それでは」
「ええ。さて、サハラは」
「これからどうなるか」
「まずはアッサルームね」
最後にこう述べ合って席を立つ二人だった。金もまたティムールの勝利を予見していた。そして今運命の戦いがはじまろうとしていた。遂にティムール軍はアッサルームに侵入したのである。来たるべき戦いの幕が開き多くの者が武器を手に戦場に向かうのであった。

# 第三十三部第二章　優勢な中でその一

優勢な中で

「来ました！」
報告はすぐにブルコルジの下に届いた。
「来ましたか」
「はい。ティムール軍です」
伝令の将校がブルコルジに対して報告する。
「遂に。このアッサルームにまで」
「わかりました」
それを聞いても動じるところのないブルコルジだった。傲然とさえして艦橋に立っている。その周りには彼女の参謀達が控えている。
「それではです」
「どうされますか？」
「全軍まずは機雷を撒布していますね」
「はい」
参謀の一人が彼女の問いに答える。
「それはもう既に」
「宇宙潮流に合わせて」
別の参謀が彼に述べた。
「流しています」
「それはもう既に」
「わかりました」
まずはその言葉を聞いて静かに頷くブルコルジだった。だがそれだけで終わらないのが彼女だった。またすぐに口を開くのだった。
「それではです」
「それでは？」
「機雷の第二次撒布の用意を」
「再びですか」

「その通りです。再度撒布します」
あらためてこう命じるのだった。
「まずはそれからです」
「機雷により戦力の削減ですか」
「ですが陛下」
ここで参謀達は怪訝な顔で彼女に対して言うのであった。艦橋の天井になっている三次元モニターには多くの艦艇の位置が映し出されている。その数は圧倒的なものがあった。
「我等は既に数において有利です」
「三倍近いです」
彼等は口々に言う。
「ですからそこまで機雷を撒布せずとも」
「暫減戦術を執らずともよいのでは？」
「いえ」
だが女王は彼女のその言葉を退ける。己の考えに絶対の自信を含ませるその声で毅然として彼等に対して述べるのであった。
「油断はなりません」
「油断はですか」
「まずは機雷です」
あくまで機雷にこわだっているかのようにも見えた。しかしそれでもだった。
「機雷により敵の戦力を少しでも減らしていきます」
「少しでも」
「まずはそれからです」
微動だにしない絶対の意志で述べる言葉であった。
「それから。軍を動かします」
「それからですか」
「では今は」
「ハサン軍にもです」
指示を出したのは己が直接指揮する立場であるアヤグーズ軍だけ

ではなかった。今彼女が指揮下に置いている全軍に対してであった。
「伝えるのです。今は動きません」
「今は」
「若し動けば後に軍法会議にかけます」
こうまで言うのであった。これが場合によっては死刑も有り得る厳しいものであることはよく知られていた。アヤグーズ軍の軍律は厳格なことで有名だったからだ。
「宜しいですね」
「軍法会議・・・・・・」
「それでは」
「わかりましたね。動いてはなりません」
軍法会議を出したうえでまた述べるのだった。
「今は。何があろうとも」
「わかりました」
彼等もここで頷くしかなかった。自分達の女王の言葉はやはり絶対であった。意見はできるがその意志まで左右できないのが臣下であるからだ。

## 第三十三部第二章　優勢な中でその二

「それではそのように」
「ハサン軍に対しても」
「機雷を潮流に乗せるのです」
ブルコルジはまた言った。
「今はそれに専念します。宜しいですね」
「はっ、それでは」
「そのように」
これで今の行動が決定した。アヤグーズ、ハサン協同軍は今は首都惑星アッサルームで動かず宇宙潮流に乗せて機雷を撒布することにした。まずはそれは順調に進みアッサルームの剥く雑な潮流に乗り機雷達は流れる。それは当然ティムール軍からも確認された。
「主席、機雷が」
「来たのだな」
「はい」
旗艦イズライールの艦橋において報告を聞くシャイターン。彼は今三十個艦隊を率いてアッサルームの入り口にいた。そこで今まさに進撃を開始しようとしていたのだ。
「宇宙潮流に乗せてきています」
「そうか」
それを聞いても動じるところはなかった。かえってこう報告する参謀に対して問うのであった。
「それは複数の潮流に乗せているな」
「はい。今回流したのは第二潮流及び第四、第五、第六各潮流です」
「ふむ」
それを聞いても表情を変えない。ただ聞いているだけだ。今回の作戦においてティムール軍はアッサルームの潮流を番号で数えてわかりやすいようにしているのである。

「その四つか」
「こうなっております」
艦橋の中央にある三次元地図に潮流が映し出される。それぞれのカラーで描かれわかりやすいようになっている。そこで四つの潮流が点滅するのだった。
「この四つが」
「そして今最初の機雷はどうなっているか」
「最初の機雷はこうなっております」
今度はそれぞれの潮流のある部分に黒い斑点のようなものが浮き上がった。
「丁度こうで」
「全ての潮流に流れているのだな」
「その通りです」
こうシャイターンに述べる参謀であった。
「そして中には間も無く我が軍に」
「来るというのか」
「どうされますか？」
怪訝な顔でシャイターンに問うてきた。
「すぐに対処せねば危ういですが」
「今来ているのは第一潮流のものか」
「はい」
その三次元モニターを見ながらのやり取りだった。シャイターンも参謀達もそのモニターから目を離しはしない。だがそれを見る顔はそれぞれ違っていた。
シャイターンは冷静沈着そのものの顔であり参謀達は個人差こそあれどそれぞれ危機を感じている顔であった。シャイターンはその彼等に対して告げるのだった。
「捨て置け」
「なっ！？」
「何もされないのですか」

「そうだ。その潮流の機雷は今は何もしなくてよい」
大胆を通り越して無謀そのものとしか思えない言葉であった。その言葉に顎が外れんばかりに驚く参謀達だったがシャイターンの表情は変わらない。
「何もな。それよりもだ」
「ですが」
「それよりもだ」
反論を言わせない口調であった。
「進軍だ」
「進軍ですか！？」
「ですが主席、それは」
「進軍だ」
ここでも有無を言わせない口調で言うのであった。
「よいな」
「進軍ですか」
「機雷のことを言っているな」
それは既に察しているシャイターンであった。確かに参謀達もそのことを言っている。だからこそ制止しているのだがシャイターンの言葉は変わらない。
「それは案ずることはない」
「案ずることはない、ですか」
「まず今来ている第一潮流のものだが」
「はい」
やはりまずはこれであった。

## 第三十三部第二章　優勢な中でその三

「それはただの目くらましだ」
「目くらましですか」
「そうだ。今この場にいても進軍しても我々に衝突することはない」
モニターに映し出されているその潮流を見ての言葉だった。見れば
その流れは今彼等にいる場所を避けているのである。確かに。
「だからだ。惑わされるな」
「ですがそれでも」
「潮流はまだ」
「完全に辿り着けないというものでもない」
また参謀達に対して告げる。彼等の方を見ずにモニターを見続け
ている。そこに現われているアッサルーム星系を見ているのである。
「それはな」
「では主席」
「既に道は」
「ある」
断言であった。その複雑な潮流の流れの中で彼は既に道を見極め
ているようであった。これこそまさに戦術家としての直感であろう
か。
「まずはこのまま正面に進む」
「正面ですか」
「そしてそれから右斜め下だ」
「右斜め下！？」
「しかしそこには」
「第八潮流があるな」
「そうです」
「当然第八潮流にも」
「無論それも承知だ」

シャイターンは今はその第八潮流を見ていた。その潮流は赤紫に映し出されている。やはり他の潮流とも蛇の巣の中の蛇の如く複雑に絡み合ってはいる。
「それもな」
「では余計に」
「この潮流があればやはり」
「言った筈だ。進む」
ここでも有無を言わせない口調を響かせた。
「このままな。案ずることはない」
「案ずることはないのですか」
「潮流も」
「諸君等はこの星系の潮流を敵と考えているな」
シャイターンは戸惑うばかりの声を出すしかない彼等に対して問うてきた。
「敵だと。そうだな」
「はい。それは」
「やはり」
彼等もそのことを否定しない。宙の理はやはりアヤグーズにある。それで敵でないと考える方が不思議なことであった。少なくとも軍事的常識においては。
「ですがそれが違うと」
「そう仰るのですか」
「自然はアッラーの恵みだ」
イスラムの考えだ。全てはアッラーの手の中にあるのだから自然もまたそうなのだ。そうして考えていけばアッサルームのこの複雑な宙理もまたアッラーの思し召しなのだ。
「だからだ。それを敵にするのも味方にするのも」
「我々次第だと」
「そう仰るのですか」
「その通りだ。それでは進軍を開始する」

もう誰もシャイターンに対して問わなかったし言いもしなかった。今までその天才的な直感と戦術センスによって鮮やかな勝利を収めてきている。それこそが彼のカリスマの源にもなっている。それならば。今も彼を信じるしかなかった。これまでも今もこれからもそれがティムール軍の最大の武器だからだ。

「よいな」

「はっ」

「わかりました」

彼等も覚悟を決めて応えた。ティムールの敬礼によって。こうしてティムール軍は正面に向かって進軍を開始した。それを見た協同軍は怪訝な顔をするのだった。

「ティムール軍が動いただと？」

「馬鹿な」

アヤグーズ軍もハサン軍も各艦隊司令達は一斉に顔を曇らせた。艦隊を預かる彼等をしてそうさせるだけの奇妙な行動だと思われたからだ。

「ここで動くなぞ有り得ん」

「第一潮流の機雷はもうすぐそこだったというのに」

「それを無視しての進軍だというのか」

「はい、そうです」

報告する将校は誰もがそれぞれの艦隊司令達と同じく怪訝な顔をしていたがそれでも自分達の責務に忠実に生真面目に報告するのだった。

「そのまま正面に」

「正面！？正面か」

「はい、正面です」

問うた者の殆どはアヤグーズ軍の艦隊司令達であった。

## 第三十三部第二章　優勢な中でその四

「その正面ですが」
「むう」
「どういうことだ」
だが問うてもそれがわかるというわけではなかった。怪訝な顔でさらに考えるだけであった。
「正面に行けばそのまま他の潮流に当たる」
「そしてそこで機雷に襲われ」
「後は終わりだ」
機雷により敵の戦力を徐々に減らしていく。ハサン軍のこの決戦での、いやオムダーマン及びティムールの侵攻がはじまった頃からのハサン軍の基本戦略である。
「しかしそれがわかっていないようだが」
「何故だ？」
彼等にはどうしてもわからないのだった。誰もがそうしたやり取りの後で首を捻ってしまった。
「今この場で」
「シャイターン主席は何を考えているのだ」
彼等の中で疑心暗鬼が拡がっていく。とりわけハサン軍の中で。その空気はハサン軍をまとめるバンダルのところにも及んでいた。
「司令、我が軍の将兵がざわついています」
「わかっている」
ギーヴの報告に対して述べる。
「今のティムール軍の動きに対してだな」
「そうです。まずは見破ったようです」
こう述べるギーヴであった。彼等も乗艦であるダマスカスの艦橋にいた。サハラの中では比較的武骨なデザインで知られているハサン軍の艦艇である。

「どうやら」
「まずはそうだな」
バンダルは己の信頼する参謀の言葉にまずは冷静に返した。
「第一潮流が目くらましだということをな」
「今はあの潮流の機雷は彼等に対して襲いません」
「その通りだ」
それはもうわかっていることだったのだ。だから驚きはしなかったのである。バンダルはブルコルジの考えをよく理解しているのだ。
「まずはそれは見抜かれました」
「うむ」
「だからこそ正面への進軍です」
そういうことだったのだ。襲い掛かって来ない敵なぞ恐れるに足らずというわけだった。
「機雷から身を守る為に」
「潮流を読みきったうえでか」
「潮流の流れはそうおいそれと変わるものではありません」
少なくとも人間の力では容易なものではない。確かに変えることもできることはできるがそれは国家規模での力を要する。今軍を展開している状況ではとても無理な話なのだ。
「ですがそれに捉われずに」
「あえてそれを選んで進むか」
「まずは見事と言うべきでしょう」
落ち着いた声でシャイターンを賞賛するギーヴだった。
「そこを見抜く慧眼は」
「それは認めるべきか」
「はい。やはり」
しかしだった。彼はここでさらに言葉を続けるのである。
「ですが」
「ですが？」
「このアッサルーム星系の潮流はあまりにも複雑です」

このことを言うのであった。
「シャイターン主席はここにはじめて入りますね」
「それは間違いないな」
「はい」
彼にとってだけでなく彼が率いるティムール軍の殆どがそうであった。彼等にとってはこのアッサルーム星系はまさに未踏の地なのだ。何も知らない場所なのである。
その何も知らない場所において何ができるのか。その問題だった。
「全て読み切れればまさに天才と言うべきです」
「幾ら知識があったとしてもか」
「そこまでの天才であるでしょうか」
ギーヴの冷静な言葉は続く。
「シャイターン主席といえど」
「一つでもミスを犯せばそれで終わりだな」
「この星系はとかく複雑です」
その複雑さこそが彼等をして護りとしているのだ。その護りに対しては彼等ハサン軍も絶対の自信を持って対しているのである。
「一度のミスがそのまま彼等の破滅につながります」
「そうだ。その途端に機雷を集中的に浴びる」
これはブルコルジの計算によるものである。彼女は機雷の撒布に対してそれぞれの潮流の速さも計算に入れて行ったのだ。その為潮流の機雷を受けて一度足止めを受けるとその途端に他の機雷も受けるようになる。それを計算しての機雷の撒布というわけなのだ。

## 第三十三部第二章　優勢な中でその五

シャイターンはまずはそれを避けた。しかしそれは最初でしかない。まだ潮流は続き彼等を妨げ続けているのである。何重にも。
「我等はまずはここで待とう」
「はい」
バンダルの言葉に頷いた。
「彼等のミスをな」
「そしてそのうえで動くと」
「その通りだ。ブルコルジ陛下の御命令の下でな」
彼等も今は動かなかった。ただティムール軍の動きを見ているだけだった。百十個艦隊は今も動きはしない。ただティムール軍の動きを見ていた。
そのティムール軍はまずは正面に進み機雷をかわした。動きは慎重だったがそれだけではなく思いの他速いものであった。
「いいか」
シャイターンはイズライールの艦橋から全軍に指示を出していた。
「今はこのままで進む」
「このままですか」
「そうだ。今はな」
モニターを見ながら冷静に参謀達に答えている。
「そのまま進む。ただしだ」
「ただし？」
「それからはどうされますか？」
「まずは右斜め下だ」
右斜め下と言った。
「そちらに進む。いいな」
「全軍ですね」
「無論だ」

迷いも躊躇もない言葉だった。だがその途中でふとした感じで言うのだった。
「第七艦隊右翼」
「第七艦隊ですか」
「そうだ。右により過ぎている」
艦橋の天井のモニターを見上げていた。そこにコンピューターによる三次元グラフィックでそれぞれの艦隊が映し出されていた。それを見ての言葉なのだ。
「左に寄るのだ。いいな」
「はっ」
それを聞いたティムール軍の軍服の男がすぐにモニターに出て来た。
「わかりました。それでは」
「すぐにな。わかったな」
「わかりました」
その軍服の男はシャイターンに対して答えた。
「潮流に巻き込まれることのないようにな」
そのことを厳しく言うアッディーンの言葉だった。
「くれぐれもだ。いいな」
「わかっております」
モニターの男はまたシャイターンの言葉に答えた。
「一隻もですね」
「その通りだ。そのうえで進む」
シャイターンの言葉は堅固だった。
「このままアッサルームまでな」
「了解です」
男はモニターから消えた。そうして彼等はそのまま慎重でありながらも迅速な速度で正面に進む。そうして第四潮流を前にして右斜め下に進路を変えたのであった。
「進路を変えた!?」

「今度は右斜め下か」
協同軍の者達は今度のティムール軍の動きを見てまた言った。
「またそうして機雷を避けるか」
「道を通り」
「まさか」
ブルコルジは今のティムール軍の動きを見て眉を顰めさせた。
「彼等は知っている！？」
「知っている！？」
「まさか道を」
「有り得ないとは思います」
言いながらもその目を細く鋭いものにさせていた。
「それは。ですが」
「シャイターン主席はそれを熟知していると」
「アッサルームの道を」
「ただ知っているだけで通れるものではありません」
それは誰よりもよく知っているブルコルジだった。この星系に住んでいるからだ。それで知らない筈がないことであった。
「到底。ですが」
「それでも今のところは通っています」
「間違えることなく」
「どうされますか？」
参謀の一人がここでブルコルジに問うた。

## 第三十三部第二章　優勢な中でその六

「ここは。どうされますか」
「動きません」
強い声で答えたブルコルジだった。
「今は動きません。いいですね」
「動かないのですか」
「そうです」
こう答えるのである。
「今は」
「左様ですか。今は」
「ではこのアッサルームで待っているだけですね」
「機雷に触れたこの時です」
その鋭くさせた目でモニターを見据えつつの言葉だった。モニターに映っているのはティムール軍においてシャイターンが見ているアッサルーム星系のものと全く同じものであった。違うのはそれぞれの潮流や惑星、そして艦隊を塗っているカラーだけであった。
「その時にこそ動きます」
「連鎖的に彼等が機雷を受け戦力を減らしたその時にですね」
「我が軍が一斉に動き」
「それまでは動きません」
こう言い続ける。
「決して。宜しいですね」
「はい、それでは」
「そのように」
参謀達も彼女のその強い言葉に頷いた。
「待ちましょう、今は」
「彼等を」
「何時でも動けるようにはしておくのです」

こう言うのは忘れなかった。
「決して。宜しいですね」
「はい、それは」
「そのように」
また彼女の言葉に頷く参謀達であった。協同軍は女王の言葉に従いそのままアッサルーム近辺において動かない。動かないが何時でも動けるようにはしていた。しかしその中で少しずつだが動揺と苛立ちも感じていたのだった。とりわけ実戦経験がほぼないハサン軍の多くは。
そしてその間にも。ティムール軍は進む。潮流と潮流の間を通り道を通っていくのだった。
彼等の周りを機雷が時折通り過ぎる。しかし彼等に当たることなくそのまま通り過ぎていったりその後ろに潮流から離れて置かれたりする。それで事実上退路も断たれた。
「もう退けませんね」
「承知のうえだ」
シャイターンの言葉は実に平然としたものであった。
「これもな」
「背水の陣というわけですね」
「どちらにしろ勝利以外にはない」
言葉の間後ろを振り返ろうともしない。あくまで前を見据えたままであった。
「それ以外にはな」
「だからですか」
「そうだ。退いた時には」
腕を組み艦橋に傲然と立ち続けている。そのうえでまた言葉を出してみせる。
「それが我がティムールの敗北の時だ。違うか」
「確かに」
参謀達もそれは否定できなかった。一度の敗北がそのまま国家の

滅亡に直結する、ティムールの置かれているその危うい状況は彼等も熟知しているのだ。
「それに関してはその通りです」
「我々に敗北は許されません」
「だからだ。勝つ」
やはり前を見続けている。
「何があろうともな」
「だからこそ後ろは構わないのです」
「退かないからこそ」
「そうだ。そして」
「そして？」
「何かありますか」
「こちらも撒布しろ」
こう言うのであった。
「機雷をだ。いいな」
「えっ、機雷をですか！？」
「我々もまた」
「そうだ。用意しておくのだ」
また彼等に対して告げた。
「わかったな」
「ここでですか？」
「今すぐに」
「今ではない」
それは否定した。

## 第三十三部第二章　優勢な中でその七

「今ではな。時が来ればだ」
「時が来ればですか」
「ですが」
「わかったな」
ここでも異論は話させないシャイターンだった。
「それはな。いいな」
「はい、それでは」
「わかりました」
それで納得する参謀達だった。彼等はここでもシャイターンを信じることにした。言い換えれば信じるしかなかったのだ。独裁者である彼を。
「それではそのように」
「備えておきます」
「このまま進むぞ」
彼は進路について述べた。
「道をな。いいな」
「わかりました。それでは」
「予定通りこの道を」
「道は一つだ」
アッサルームまでの道はモニターに黄金色の光で映し出されていた。今ティムール軍はコンピューターによるコントロールとシャイターンの全軍への指揮を以って進んでいた。その中でもシャイターン自身の指揮が占める割合がかなり大きなものになっているのは否定できなかった。これが連合軍ならばほぼ全てコンピューターによるコントロールになるがまだサハラではそこまで至っていないのである。これも技術の差であった。
「その道を沿い進んで」

「アッサルームに至ると」
「速度はこのままだ」
速度についても指示を出す。
「私の指示通りに行けば損害を出すことはない。私の指示通りならばな」
「はっ、わかりました」
「それでは」
参謀達は彼の後ろで一斉に敬礼をし答えた。彼等はそのまま進みその都度進路と速度を変え機雷をやり過ごしていく。そうしてアッサルームに次第に近付いてきたのであった。
「今のところ損害は皆無です」
「彼等にとっては順調に進んでいます」
「はい」
ダマスカスの艦橋においてブルコルジは報告する幕僚達の言葉に頷いていた。
「そうですね」
「まさかとは思いますがこのまま」
「ここに至るのでしょうか」
「機雷の潮流を全て抜けて」
参謀達の顔が曇っていく。彼等にしてみれば予想もしていないことであった。
「有り得ません。それは」
「それができるとなるとシャイターン主席は」
「どうやら。予想以上かも知れませんね」
ブルコルジはモニターを見ながら呟いた。
「彼は」
「彼といいますと」
「やはり」
「そうです。シャイターン主席です」
彼以外にはいなかった。話に出してみるとだ。

「その軍事的才能はやはり」
「我等の予想以上だと」
「ではやはり」
「天才です」
女王は言った。
「彼は。だとすると」
「この機雷潮流も効果がないと」
「そういうことなのですか」
「このまま無傷でここに至ったならば」
ブルコルジは遂にそのケースを口に出したのだった。これまで協同軍側が考えもせず、何があろうとも有り得ないと考えていたケースがだ。口に出されるのだった。
「その場合はです」
「その場合は！？」
「一体」
「決戦です」
前を見据えたままの言葉だった。その姿勢はシャイターンが今イズライールの艦橋において取っているものと同じだった。見ている場所も同じだったがそれだけではなかった。
「ティムール軍と」
「一兵も失っていない相手にですね」
「そうです」
「ですが陛下」
しかしここで若い参謀がかなり明るい顔で女王に言うのだった。その前を見据えて戦局を考えている彼女に対して言うのである。

## 第三十三部第二章　優勢な中でその八

「我が軍の優勢は変わりはしません」
「優勢はですか」
「やはり数が違いますか」
「そうです」
楽観的な言葉をまだ言う参謀だった。
「例え彼等が無傷でここに達したとしても」
「そうですか」
「その通りですな」
「それは」
その若い参謀の言葉に年輩の参謀達も納得した顔で頷いてきた。彼の言葉には彼等としても見るべきものがあるからに他ならなかった。
「我が軍は百十個艦隊です」
「彼等の三倍近くです」
その数の強みを言うのであった。
「その戦力で正面からの戦いになります」
「そうすれば如何にシャイターン主席といえど」
「勝てるものではありません」
「それはこのアッサルームにおいての戦闘でですね」
ブルコルジは彼等の話を聞いたうえで述べた。だがその間にも顔は前を見据え仁王立ちしたままで動かない。そのうえでの言葉であった。
「その正面からの戦闘は」
「違うのですか？」
「やはり戦うのならばここでしょう」
「若しもです」
だがここでブルコルジは言うのだった。モニターのアッサルーム

星系を見ているのはそのままだがその言葉の調子が変わってきていた。
「彼等がこのまま一兵も失わずに来るならば」
「はい」
「その場合は軍を動かします」
それが彼女の決断だった。
「軍全体を。宜しいですね」
「この軍をですか！？」
「何処に」
「少なくともここではありません」
やはりモニターを見据えたままでの言葉であった。
「ここはあまりにも危険です」
「危険ですか」
「はい。確かにアッサルーム星系は幾つもの宇宙潮流に護られています」
だからこその決戦の地なのである。首都ということもあるが彼女がこの星系を決戦の地に選んだのはやはりその護りのし易さからであるのだ。しかしなのであった。
「ですがこのアッサルーム近辺だけは」
「そうですね。それは」
「確かに」
そして参謀達も彼女の言いたいことがわかったのだった。何故ならこのアッサルームに長い間生きているのが他ならぬ彼等であるからだ。それも当然のことであった。
「何の護りもありません。当然潮流も」
「はい、それは」
「それでは。陛下」
「アステロイド帯に進出します」
こう言うのであった。
「あそこに立て篭もるようにして」

「戦うのですね」
「そうです。ここです」
彼女がモニターを指し示した場所は。丁度アッサルームから少し離れたアステロイド帯であった。見ればそのアステロイド帯は横にも縦にも長くまだ厚みも深かった。守るにあたってはこれ以上はないという程の絶好の場所であると言えた。そこを指し示したのである。
「ここに入りましょう」
「そこにですか」
「まずここは道の出口にあります」
「はい」
見ればその通りであった。道を出て暫く経ったそこにあるのだった。言うならば道の門、そうした守る側にとっては絶好の場所なのであった。
「ですからここに移動し」
「それで彼等を迎え撃つのですね」
「本来はそのつもりはありませんでした」
ここでふと本音を漏らすブルコルジであった。
「それは」
「ありませんでしたか」
「敵の戦力を暫減させていくつもりでした」
これが彼女のこの戦いでの戦略プランだったのだ。だがプランはあくまでプランなので修正され得るものでもあるのだ。何事も予定通りに行くとは限らないのだ。
「ですがそれが適わないとなれば」
「守るのですね」
「しかしです」
彼女はまだ言った。
「それに止まりません。ただ守るだけではありません」
「といいますと」

「今度は一体」
「ただ守るだけではあの主席は止められません」
シャイターンという男の能力を見抜いていた。だからこそ今の言葉にはかなりの重みがあった。その重みで以って語るのであった。

## 第三十三部第二章　優勢な中でその九

「ですから。その時にまた」
「その時にですか」
「はい。仕掛けます」
強い目での言葉であった。
「その時にこそ」
「わかりました。それでは」
「そのように」
「はい。このブルコルジの名にかけて」
アヤグーズ女王にして女ながら稀代の猛将と言われるその名にかけて。そこには彼女の女王として、軍人としてのプライドが存在していた。
「何としても彼を打ち破ってみせましょう」
「はっ、それでは」
「そのように」
「全軍進撃用意」
思い立ったら動きは速かった。早速全軍に指示を出すのであった。
「アステロイド帯にまで移動します」
「了解です」
「それでは」
皆それに従い移動をはじめる。すぐに協同軍全軍がアッサルーム近辺からアステロイド帯に向けて進む。その動きは道を進むティムール軍も確認していた。
「動きましたな」
「そうだな」
シャイターンはモニターからその彼等の動きを見つつ参謀の一人の言葉に頷いた。その間もティムール軍は大方の予想よりも遥かに速い動きで道を進んでいた。

「やはり動いたか」
「やはりですか」
「予想していた」
こうその参謀に告げるのであった。
「我等がこうして無傷で道を通っていればな。自然と来ると思っていた」
「左様ですか」
「流石だ」
シャイターンはここで賞賛の言葉を出してみせた。
「ブルコルジ女王。伊達に幾多の戦いで勝利を収めていたわけではないな」
「確かに。ですが」
「どうした？」
また別の参謀がここで言葉に懐疑的なものを帯びさせてきたのを耳にしてその彼に対して問い返した。この辺りのやり取りの動きもやはり速い。
「何かあるようだが」
「はい。アステロイド帯で守るのですね」
「それは間違いない」
アステロイド帯はどういったものなのか。それを考えれば出て来る答えは一つしかなかった。そういうことであった。
「まずな。そうしてくる」
「ですがそれでもですね」
彼は言葉に含ませている懐疑的なものをさらに大きくさせてシャイターンに対して述べるのであった。シャイターンはその間もじっと前を見てモニターに映し出される潮流や敵軍の動きを見ているのだった。
「あの女王が防御戦とは」
「それが腑に落ちないか」
「ハサン随一の猛将です」

この評価が一人歩きしている向きもあるが確かにそうだった。彼女は積極果敢な戦術により数多くの勝利を収めまたそれが彼女の名声の元となっているからだ。そうだというのに今それを見せようとしないのは確かに奇妙なことに見えるのである。そういうことなのだ。

「ですが今は守りに徹するとは」

「果たして守るだけかどうか」

「といいますと」

「その時になればわかる」

シャイターンはその言葉を鋭いものにさせた。

「その時になればな」

「その時にですか」

「そうだ。どちらにしろ今はだ」

「はい」

「このまま進む」

こう言うのである。

「このままな。いいな」

「道を進むのですね」

「そうだ。そうすればやがて戦う時になる」

「決戦の時が」

「まずは道を踏破することを考えよ。話はそれからだ」

「わかりました」

参謀達はシャイターンの言葉に頷いた。もうこれまでのような疑うものはなかった。やはり彼等はシャイターンという絶対のカリスマに対して深い信頼を置いているのであった。

## 第三十三部第二章　優勢な中でその十

そして話し終えたシャイターンは。ここでその参謀達に対して言うのであった。
「そしてだ」
「何か」
「まだ戦場までには時間があるな」
「はい、それは」
「まだ道の踏破は続きます」
「ならばだ。今のうちに将兵を休ませておけ」
こう指示を出すのであった。
「暫くはこのまま進めばいい。最も困難な場所は通り過ぎたしな」
「では暫くは将兵を交代で休憩させ」
「戦いに備えさせるのですね」
「そうだ。そして料理も奮発させるのだ」
この指示も出した。古代の戦争においても将兵に大飯を食わせるというのは明日は戦闘という意味であった。彼はそれと同じ意味で今の指示を出したのである。
「わかったな。それも」
「はっ、それでは」
「とびきりの馳走を出しましょう」
「そうしてくれ。それではだ」
シャイターンもここで踵を返した。そうして彼等にようやく向かい合う形になったがそれは一瞬のことでありすぐに彼等の横を通り抜けるのだった。そうして背中合わせになった時点で彼等の中の一人に声をかけた。
「フラームよ」
「はい」
この戦争に従軍している自身の弟であった。彼は本質的に文官で

あり教団の教皇でもあるがこうして軍服を着ることもあるのである。
これもまたサハラ独特のことである。
「私のいない間は頼むぞ」
「わかりました」
兄のその言葉に頷く弟であった。
「それでは」
「アブーも置いておく」
今度は末弟であった。見れば彼もその参謀達の中にいる。
「それでいいな」
「はい、では」
「私も少し休もう」
そしてこう一同に告げるのだった。
「自室にいる。何かあればすぐに呼ぶように」
「わかりました。それでは」
「ゆうるりと」
彼等の言葉を受け艦橋を後にする。マントが揺らぎそれを背負いつつ場を後にした。そうして自室に戻るとすぐに従者達が彼の傍に来て問うのであった。
「それでは閣下」
「お食事ですね」
「そうだな」
その彼等の言葉に応えて述べた言葉であった。既にテーブルに着き優雅にそこにいた。そのうえでの言葉だった。もう戦場にいるとは思えない優雅さの中にその身を置いていた。
「そうさせてもらおう。それではだ」
「はい。それでは」
「すぐに料理を」
「頼む。ただしだ」
ここで彼は注文を出してきた。
「酒はいい」

「酒はですか」
「そうだ。今はいい」
こう言うのである。
「今はな。それは後に取っておこう」
「祝勝にですか」
「そうだ。今はな」
従者達に答えながら目を戦場にいる時のそれにも戻してみせる。
優雅さの中にもそういった鋭さも持ち続けているのであった。
「その為に置いておこう」
「わかりました。それでは」
「そのように」
「頼む。その代わり今はだ」
そしてまた言うのであった。
「ジュースでいい」
「ジュースですか」
「そうだ。何かいいのがあるか」
「ワインが駄目でしたら葡萄ジュースは如何でしょうか」
従者の一人が彼にそれを勧めてきた。
「それでは。如何でしょうか」
「葡萄か」
「はい。赤と白があります」
何処かワインめいていた。だがそれもそもそも材料が同じ葡萄だから当然である。実際にワインを飲めない者が葡萄ジュースをその代用品とすることもあるのだ。

## 第三十三部第二章　優勢な中でその十一

「如何でしょうか」
「悪くないな」
シャイターンもそれに顔を向けて述べた。
「ではそうしようか」
「わかりました。ではどちらですか」
葡萄ジュースに決まったところでまた問う従者達であった。
「赤でしょうか。白でしょうか」
「今のメニューは何だ」
すぐには答えずに次にはそれを問うのであった。
「それも聞いておきたいが」
「鶏です」
「鳥か」
「はい。メインディッシュはそれです」
こう返事が返るのであった。
「それですが」
「では赤にしよう」
それを聞いたうえでこう答えたシャイターンであった。
「肉ならば赤だ。それでな」
「畏まりました。それでは」
「すぐに」
「それでだ」
彼は了承し頭を下げた従者達にまた問うのであった。
「デザートは何だ」
「チョコレートです」
すぐに返答が来た。
「チョコレートケーキですが」
「チョコレートケーキか」

それを聞いて少し考えそのうえでまた言うシャイターンであった。
「それではだ。最後の飲み物だが」
「何にされますか？」
「コーヒーでしょうか。それとも紅茶でしょうか」
「チョコレートがいい」
こう述べるシャイターンであった。
「それがいい。ホットチョコレートをな」
「それでございますか」
「そうだ。できるか」
従者達を見て問うのであった。
「チョコレートを飲みたいのだが」
「はい、できます」
「それもまた」
従者達の返答は幸いにして彼の期待したものであった。できるというのだ。
「ではそれで宜しいですね」
「最後の飲み物は」
「それで頼む」
実際に頷いてみせるシャイターンであった。
「それでな」
「わかりました。それでは」
「そちらもまた」
「頼む。久し振りにそれを飲みたくなった」
チョコレートを頼み終えて述べた言葉であった。
「ホットチョコレートをな」
「サハラ風で宜しいでしょうか」
「サハラ風か」
「何でしたら連合風にもできますが」
「連合！？どの国になる？」
連合のその三百もの国々のことを言っているのだ。サハラは同じ

文明圏なのでその作り方はおおよそ似ているが連合となるとそうではないのだ。連合では複数の文明が複雑に絡み合っており同じチョコレートでもその作り方がまるで違ってきているのである。
「今できるのは。どの国だ」
「ブラジル風ですが」
「ブラジル風になるとコーヒーも入るな」
「はい」
従者の一人が答える。ブラジルはこの時代においてもコーヒーを特産品の一つにしておりその消費量もかなりのものだ。チョコレートを飲む場合にもそれは欠かせないものになっているのだ。
「そうですが」
「チョコレートを純粋に楽しみたいな、今は」
「ではサハラ風でしょうか」
「そうだな」
従者のその言葉に頷くのだった。

## 第三十三部第二章　優勢な中でその十二

「そうなるな。ではそれにしよう」
「わかりました。それでは」
「サハラ風で」
「頼む。それでな」
「わかりました」
　こうしてメニューは決まった。まずは豪奢な鶏をメインとしたメニューを食べ終えそのうえでデザートとなった。見事なチョコレートケーキを同じくチョコレートで頂く。白い陶器のカップの中にあるチョコレートはその独特の黒を見せてそこにたたえられてあった。シャイターンはそれを見つつまた言った。
「このチョコレートだが」
「どうかされましたか？」
「ヒトラーがこよなく愛していたな」
「ヒトラーといいますと」
　従者達はその名を聞いて述べた。
「あのエウロパの」
「ドイツでしたな。確か二十世紀の」
「そうだ。独裁者だ」
　サハラにおいても知らぬ者はない。人類史上においてヨシフ＝スターリンと肩を並べる独裁者としてその名を残している人物である。
「彼はチョコレートを愛していたのだ」
「ほう。それはまた」
「意外です」
「意外か」
　従者の言葉を聞いて目を向けるシャイターンだった。
「それは意外か」
「ヒトラーといえばその行動や思想からあまりそうしたものを好む

とは思えませんので」
「酒を愛していそうなのですが」
「だが彼は酒は飲まなかった」
「そうなのですか」
「酒だけではない」
シャイターンはさらに言葉を続ける。
「煙草も吸わなかったし完全に菜食主義だった」
「ふむ。それは」
「禁欲的と言いましょうか」
「そう。ヒトラーは禁欲主義者だった」
そのことをはっきりと言ったシャイターンであった。
「身の回りには財産はなかった」
「財産もですか」
「そもそも蓄財には興味がなかった」
スターリンもそうであったがヒトラーもそうだったのだ。そういったものには一切興味がなかったのが彼等の人間的な特徴の一つなのだ。
「女性に対しても清潔だった」
「それは聞いております」
従者の一人がここでまた述べた。
「確か。最期の時まで妻帯しなかったとは」
「ゲリ＝ラバウルと結婚するまでな」
シャイターンはこの女性の名前を出した。実は彼女のことはヒトラーの側にいた者ですら知らなかったのだ。ドイツ軍の将軍の一人であったグーデリアンはヒトラーの私生活について書く機会があったがヒトラーの側にいた時間の多かったその彼にしろこの女性の存在は知らなかったと書いているのだ。
「それまでは妻を持っていなかった」
「それでも女性からの人気は高かったそうで」
「そちらでもカリスマ的な人気があった」

ドイツ人は熱狂的にヒトラーを支持した。それは崇拝に近いものだった。当然そこには女性の人気もあった。ヒトラーの下には常に彼を支持する女性達からのプレゼントが山のように積まれていたという。
「だが彼は生涯最期の時まで結婚はしなかった」
「そもそも女性にまつわる話も少ないですな」
「そういえば」
従者達は言い合う。ヒトラーという人間について調べているとあまり女性については出ないのだ。彼はそういったことにはさして興味がなかったのだ。
「彼は母なるドイツと結婚した男だと言っていた」
「母なる国とですか」
「だから最期まで結婚せず清潔だったのだ」
「そうだったのですか」
「それで」
「その服装も常に制服だった」
「それもまた質素ですな」
服装もそれだけだったのだ。ナチスのあの制服を着ているだけでやはり服も質素なものであった。贅沢とは無縁の男であり続けていた。
「では結局ヒトラーの私生活というのは」
「至って真面目なものだった」
結論はそれであった。
「酒も煙草もしない菜食主義者で尚且つ女性にも贅沢にも一切興味がなかったのだからな」
「そうです、確かに」
「そうなります」
「しかしだ」
だがここでシャイターンは言うのであった。

## 第三十三部第二章　優勢な中でその十三

「その様な彼でも嗜んでいるものがあった」
「ワーグナーでしょうか」
従者達の間からこの名前が出て来た。
「それは」
「それもあった」
言わずと知れたドイツの音楽家だ。その楽劇はこの時代でもエウロパでも連合でも人気があり上演され続けている。ヒトラーは十一歳で彼の作品の一つであるローエングリンを聴き終生その熱狂的な崇拝者、俗に言うワグネリアンであったのだ。彼は音楽の趣味があったのだ。
「そして読書だ」
「かなりの読書家だったそうで」
「どんな難しい本も読破した」
ヒトラーの知力の証明の一つでもある。独裁者はただ運だけでれるものではない。カリスマ性や統率力も必要であるしそこに政治力や知力も必要になってくるのだ。何故ヒトラーが人類の歴史に永遠に語り継がれているかといえばそのどれにおいても常人離れしたものを持っていたからである。彼はその知力もまた尋常なものではなかったのだ。記憶力も異常なまでによく知能指数も天才の域に達していた。
「そして覚えていた」
「そうした人物でもあったのですね」
「その彼が愛好したものがこれだ」
「これですか」
「そうだ。これだ」
そのチョコレートが注がれたグラスを掲げてみせての言葉だった。白銀の光を放つクリスタルのグラスの中にその黒いチョコレートが

姿を見せていた。
「これを愛していたのだ」
「チョコレートをですか」
「彼はチョコレートを嗜んでいた」
また言うシャイターンであった。
「酒や煙草はやらなくともな」
「それをですか」
「それはまた」
「妙に感じるか」
「はい、どうしても」
従者の中で最も年長の者が彼に対して答えた。見れば彼にしろ他の者達にしろそれについてはどうにも釈然としないようでそれを顔に出していた。
「あそこまでの独裁者が」
「チョコレートをですか」
「人の好みはそれぞれだ」
だがシャイターンはその顔を特に驚かせることもなく言うのだった。
「チョコレートもな。好きであっておかしくはない」
「左様ですか」
「私も同じだ」
楽しげな笑みを浮かべつつそのチョコレートを一口飲んでからの言葉であった。
「チョコレートは好きだ」
「それは承知していますが」
「ならば。わかるな」
あらためて従者達に対して問うた。
「このことが。私の言っていることが」
「はい、それならば」
「そういうことですか」

「そうだ。彼は最後は敗れた」
それが人類の歴史にいいことなのか悪いことなのかはこの時代様々に言われている。だが彼やスターリンが多くの者を殺してきたことも事実なのだ。彼が死んだことによって多くの者の命が助かったとも言われている。不思議なことに連合ではこの時代になってもヒトラーはかなり批判されている。しかしエウロパでは評価されている面もある。サハラでは比較的客観的に受け止められていると言えるだろうか。
「しかし私は」
「主席は」
「最後まで勝つ」
またチョコレートを飲んでの言葉である。
「必ずな。勝つ」
「それではこの戦いも」
「やはり」
「だからだ」
今度は不敵な笑みになっていた。
「今は酒は置いておくのだ」
「だからこそですか」
「そうだ。そして」
またチョコレートを飲む。
「祝勝は完全な勝利を収めてからだ」
「アッサルームを陥落させ」
「そしてあの女王を虜とされるのですね」
「そういうことだ。その時まで酒は置いておく」
さらに言葉を続ける。

## 第三十三部第二章　優勢な中でその十四

「そういうことだ」
「はっ、それでは」
「ワインの用意も」
「シャンパンだ」
彼は言った。
「あるだけ用意しておくようにな。わかったな」
「了解しました」
「それでは今は」
「あえてだ。飲まないでおこう」
チョコレートのグラスを右手に掲げて持ちつつ不敵な言葉を続ける。
「あえてな」
「畏まりました」
「それで主席」
「うむ」
「音楽ですが」
今度の話はそれであった。
「どれに致しましょうか」
「言うまでもないと思うが」
悠然と笑い従者達に述べた。
「それはもうな」
「ではワーグナーですね」
「そうだ」
やはりそれであった。それしかなかった。
「それを頼む。いいな」
「ワルキューレの騎行でしょうか」
「いや」

だがその曲には首を縦には振らなかった。
「今はそれはいい」
「では何の曲を」
「そうだな」
問われてほんの少しばかり考え込んだ。そのうえで彼が望んだ曲はこれであった。
「ローエングリンだ」
「ローエングリンですか」
「それの第一幕の前奏曲だ」
これであった。ローエングリンは名乗りの歌をはじめ様々な名曲があるがこの第一幕前奏曲もまた有名な名曲なのだ。この楽劇は最初から名曲ではじめられるというわけだ。
「それを頼む」
「はい、それでは」
従者の一人がその言葉に頷いた。
「それを」
「指揮者やオーケストラは何があるか」
「二十世紀のもので宜しいでしょうか」
その従者はこう問い返してきた。
「それでしたらフルトヴェングラー指揮のベルリンフィルがありますが」
「ほう、フルトヴェングラーか」
その名を聞いたシャイターンの声が僅かばかり上ずる。銀河に進出して千年経とうともこの音楽家の名は不滅なのだった。ワーグナーの他にもベートーベンやモーツァルトにおいても様々な名演奏を残しているロマン派を集大成した人物である。ドイツ出身だが連合においてもこのサハラにおいても今だに伝説的指揮者とされている。彼とそのライバルであったアルトゥーロ＝トスカニーニの影響はそれぞれの死後も百年に渡って影響を及ぼした。それだけのものがあったということだ。シャイターンが声を上ずらせたのも無理はなか

った。
そしてその名を聞いた彼の結論は。一つしかなかった。
「それではそれで頼む」
「フルトヴェングラーですか」
「そうだ。他には何があるか」
一応はそれもチェックすることも忘れない。
「二十世紀から二十一世紀のものは」
「他にもカラヤンやアバドがありますが」
「両者もまたいい」
彼はカラヤンもアバドも認めはした。しかしであった。
「だがフルトヴェングラーの方が上だな」
「左様ですか」
「あの指揮のワーグナーこそが至高だ」
こうまで言うのだった。
「だからだ。ここはそれで行こう」
「わかりました。それではそのように」
「まずはそれを聴く」
フルトヴェングラーで決定だった。
「そのうえでだ。暫くここにいる」
「はい」
「その間フルトヴェングラーのワーグナーをあるだけ聴きたいものだ」
「ではそのように致します」
「それでな。ただ」
「ただ？」
「ハンス＝ホッターのものがあればそれもだ」
同じく二十世紀の音楽家だ。バス＝バリトンの歌手でありニーベルングの指輪の隻眼の主神ヴォータンの役で有名だった。彼の存在なくして二十世紀後半のワーグナー作品黄金時代はなかったと言っていい。そこまで巨大な存在であったのだ。彼はまさに神だった。

## 第三十三部第二章　優勢な中でその十五

「それもな。あればだ」
「ヴォータンでありますが」
「曲は」
「ヴォータンの告別です」
ワルキューレ第三幕最後の場面だ。ヴォータンが娘であるブリュンヒルテに別れを告げ彼女を炎の神ローゲの炎に周りを覆わせ英雄の到来までそこで眠らせる場面だ。この場面の歌と音楽もまたワーグナーの中では名曲として知られている。ワーグナーに名曲は数多い。
「それがあります」
「ではそれも頼む」
「はい。そしてです」
「まだホッターがあるのか」
「トリスタンとイゾルデですが」
「ヴィントガッセンとニルソンか」
「そうです」
前者は二十世紀後半のワーグナーテノール、所謂ヘルデンテノールであり後者はワーグナーソプラノだ。やはり両者も伝説的名歌手としてこの時代にも知られている。人の声の力というものを知らしめる壮絶な名唱もまたこの時代に残されているのである。
「それもありますが」
「トリスタンとイゾルデではなく他のものではないか」
「それでしたらニーベルングの指輪から」
「ではそれだ」
従者のその言葉に頷いてみせた。
「それで頼む。それでだ」
「では」

「後は。もういい」
いいというのであった。
「聴き終えたその頃にはもういい時間になっている」
「左様ですか」
「そうだ。それではワーグナーを頼む」
「わかりました」
こうしてワーグナーの曲がかけられる。シャイターンは食事を摂った椅子に座したまま静かにワーグナーを楽しむ。その頃ブルコルジは険しい顔で全軍の指揮にあたっていた。艦橋のモニターを通じて全軍の動きを見ておりそのうえで指示を出すのであった。
「ハサン軍左翼です」
「今度はそこですか」
「はい。遅れています」
こう自軍の参謀に対して告げる。三次元モニターにはハサン軍全体が映し出されていた。映像はアッサルーム近辺が拡大されて映し出されておりそこに彼女が率いる艦隊も映し出されているのだ。
「ですからより速く」
「わかりました。要請しておきます」
「そうです。御願いします」
要請という言葉に頷くブルコルジであった。
「それで」
「命令とはいかないのがどうも」
ここでその参謀が苦い調子で述べた。
「厄介なことです」
「仕方がありません」
だがブルコルジはこう述べてそれを受け入れているのであった。
「それは。ハサン軍は同盟国なのですから」
「そうですね。指揮下にあっても」
「あまり強くは言えません」
ここに協同軍の難しさがあった。確かに彼女の指揮下にあるのだ

がそれでもそうおいそれと頭越しに指示を出すことはできないのである。ましてやハサン王国は立場としてアヤグーズの宗主国である。その関係が今の指揮をさらに厄介な状況にしていた。
「ですから。どうしても」
「わかっています。ですから」
「はい」
「要請としましょう」
結局こうするしかないのであった。
「今は。それで」
「はい、それではそのように」
「これまでと同じですね」
そしてこうも言うブルコルジであった。
「そしてこの戦いが終わるまで」
「そうですね。それにしても」
「これは」
参謀達はハサン軍の動きを見て述べた。どうしてもアヤグーズ軍と比べてその動きが鈍重なのだ。しかもそれはかなり目につく程であった。
「あまりにも遅いです」
「大丈夫でしょうか」
「数です」
ブルコルジは参謀達の危惧にこれで打ち消そうとした。
「数がありますから」
「だから大丈夫ですか」
「それがあるからこそ」
「やはり数は力です」
この戦争における絶対の定理は彼女もよくわかっていた。もっとも彼女の今までの戦いはそれを確信する相手を打ち破ってきたことにあるのだが今はそれは誰もが忘れてしまっていた。

## 第三十三部第二章　優勢な中でその十六

「ですから。それを使います」
「ではハサン軍は」
「そうです。アステロイド帯です」
やはりそこであった。
「そこに配して鉄の床とします」
「では鉄槌は」
「我々です」
こう己の参謀達に告げるのだった。
「我々が鉄槌になり彼等が床になり」
「そうしてティムール軍を叩きますか」
「これならば問題はありません」
そう判断しての作戦である。
「幾ら彼等の動きが鈍かろうとも」
「確かに。鉄の床にするならば」
「彼等はそこにいてくれるだけでいいですな」
「そして我々が叩く」
「そうです」
ブルコルジはまた述べた。
「そうして敵を叩きます。宜しいですね」
「はっ、それでは」
「そのように」
これで彼等の戦術は決まった。マケドニア軍が使用した伝統的な主力と高速部隊双方を機能的に使った戦術である。彼等は今それをしようというのだ。
「ではこの場合数は非常に大きいですな」
「ただでさえ三倍近くです」
彼等は自分達の数の優勢に励まされてこのように述べた。

「これは。間違いなく」
「勝てます」
「必勝の戦術です」
ブルコルジもこう断言してみせた。
「戦力差も合わせて。これならば」
「その通りですね。これならば」
「今度こそシャイターン主席を」
「彼は私を誘いました」
先のコムでの闘いのことである。このことは彼女も今でもよく覚えているのだ。このことに関しては彼女もシャイターンも同じであったのだ。
「私をです」
「陛下を！？」
「それは女性としてでしょうか」
「無論それもあるでしょう」
今彼女は夫はいない。形としては女手一つで子供達を育てているのである。なお彼女には愛人というような存在もいない。そうしたことには興味がないのだ。
「ですがそれ以上に」
「それ以上に！？」
「一体何を陛下に」
「私の才を求めているようです」
「陛下のですか」
「それでは」
「その通りです」
ここでも参謀達に対して答えるのであった。
「私を配下としたいようです。一軍の将として」
「何と不遜な」
「思い上がりも甚だしい」
「全くです」

これは彼等の率直な考えであった。彼等にとってみればブルコルジこそ主でありその主を配下に迎えるということは自分達を侮辱されたよりも屈辱的に感じることだったのである。
「そのようなことを考えているとは」
「ですがこの戦いで」
「そうです、陛下」
彼等は口々に自分達の考えをブルコルジに対して述べる。その言葉はそのままブルコルジの耳にも入る。だが彼女は感情は見せなかった。
「むしろ今度の勝利でそのシャイターン主席に対して」
「城下の盟を誓わせましょう」
「そう、そうあるべきです」
「何としても」
「そもそもです」
年輩の参謀が述べた。見れば彼の階級は大将である。アヤグーズ軍の最高階級は上級大将であり元帥は国家元首でありハサン軍元帥でもあるブルコルジだけとなっている。これはハサンの属国であるアヤグーズの立場を考慮しての階級付けなのである。
「我がアヤグーズは数百年に渡り王位にあります」
「ですな。それに対して彼はといえば」
その大将の言葉に中将の階級の参謀が述べた。
「確かにシャイターン家といえば南方では名門でしょう」
「ですが国家を預かるようになったのは今はじめてです」
「それまではシーアの一派の宗家であり傭兵の家でありましたな」
「ええ、そうです」
シャイターン家についても語られる。

## 第三十三部第二章　優勢な中でその十七

「その通りです。お世辞にも我々とは全く違います」
「我がアヤグーズ王家とは」
「まず家門はいいとしましょう」
ブルコルジはそれは捨て置くのだった。能力主義者でもある彼女にとってはそれは全くどうでもいいことだったのだ。だからシャイターンのことも素直に認めてはいた。
「ですが」
「ですが」
「それでは」
「私は。誰の首輪にもつながれません」
こう言うのであった。
「ハサン王家にお仕えしてはいれど」
「誰にもですか」
「それでは」
「虎をつなげることはできません」
己の通り名である女虎を意識しての言葉である。
「誰であろうとも。そう」
そしてさらに言う。
「アッラー以外には」
やはりムスリムとしての言葉はこうなった。アッラーに絶対に帰依するのがイスラムであり彼女もその中にあった。イスラム世界ではまずアッラーがあるのだ。
「だからこそ。あの主席にもつながれません」
「ふん、ではあの男をつなげてやりましょう」
「虎は豹よりも強いものです」
サハラではまず獅子が最上位にあるとされる。それと虎はほぼ同列でありその次に豹が来る。獅子や虎と比べて豹は狡猾な一面があ

るとして好まれていない一面もある。
「それを見せてやりましょう」
「豹は虎には勝てない」
こうも言う参謀もいた。
「今こそそれを」
「あの赤い豹に対して」
シャイターンの通り名も述べられた。彼等はそのまま敵を迎え撃つべきそのアステロイド帯に向かう。そしてそれはシャイターンもまた同じであった。その彼もまた。
ティムール軍は何と一隻の落伍者も出すことなくそのまま道を通ってしまった。機雷にかかることなく見事に通り終えてしまったのだった。
「落伍した艦艇はないな」
「はい」
右に控えるフラームが問いに応えた。左にはアブーがおり兄弟で彼を支える位置になっていた。まさに三位一体であるがシャイターンはそれを意識しているのかいないのかすぐに述べるのだった。
「ならばいい」
「万全ですか」
「まずはこれで第一段階は終わった」
前を見たままの言葉だった。腕を組み仁王立ちしそのうえで三次元モニターに映るアッサルーム近辺の宙図を見ているのであった。
「次だ」
「第二段階ですか」
「そうだ。勝つ」
カエサルの如く一言で済ませてしまった。
「私がだ。わかったな」
「はっ、それではすぐに」
「そしてだ」
宣言するように述べたうえで今度はフラーム達の他に控える参謀

達に対して問うた。言うまでもなく彼を崇拝するその参謀達である。
「機雷はどうなったか」
「協同軍の機雷ですか」
「そうだ。来ているか」
「はい、それは」
「こちらに」
「ふむ。やはり効くな」
参謀達の報告を聞いて静かに頷くシャイターンだった。だがその表情は変わらず冷徹な仮面を被っているように見えるものであった。
「あれはな。やはり」
「機雷を集めるのはいいですが」
「しかし一体」
「機雷を使う目的は一つだ」
シャイターンは相変わらずモニターを見ている。見ればそこに映るティムール軍の後ろにはその機雷達がついて来ている。それを見て声だけが満足気になっていた。
「敵を当て倒すものだ」
「確かにその通りですが」
「ですが。これは」
今回もまたシャイターンの考えがどうしても読めない彼等であった。感情を押し殺すのが軍人の務めでありそうするように努力しているがどうしてもそれが言葉に出てしまっていた。

## 第三十三部第二章　優勢な中でその十八

「一体何を」
「為さるのですか？」
「言った筈だ」
しかしシャイターンはまだこう言うだけだった。
「勝つ為だ」
「その為ですか」
「ではその為にこれ等の機雷を？」
「見ておくといい」
シャイターンの声に自信が含まれた。それまでは見せていなかったがここであえて見せるのであった。その動作には計算があった。
「私が。敵の罠をどう使うのかな」
「罠をですか」
「彼等の誤りはまず機雷を間違えたことだ」
「機雷をですか」
「そうだ。ただ止まっているだけの機雷ならばよかったのだ」
機雷にも幾つかの種類があり撒かれそこに置かれるだけのものとある程度自分で動くものがあるのだ。協同軍が今回使用したのは潮流でより速く動けるようにと後者を使ったのである。だがシャイターンはそれを誤りだと断言したのである。確かな声で。
「だが。そうではなかった」
「だからこそここに誘導されるのですか」
「それだけではない」
彼はさらに言った。
「我が軍もまた機雷を使う」
「それもですか」
「機雷を使う者は機雷によって滅ぶ」
シャイターンは言った。

「だからこそだ」
「しかし兄上」
今のシャイターンの言葉に対して末弟のアブーが言葉を加えてきて。
「宜しいでしょうか」
「うむ」
シャイターンも彼の言葉を受けて頷いてみせる。しかしそれでもその顔は正面を向いたままでありモニターのアッサルーム近辺を見続けているのだった。
「その言葉を使うならば」
「我々もまた、と言いたいのだな」
「そうです」
彼が言うのはそれだった。参謀達は彼のその言葉に内心ひやりとしたものを感じた。反論を許さないとはいえどもその言葉によって罰するシャイターンではない。ティムールにおいても反対意見は言わせたいだけ言わせているのが彼の施策である。しかしそれでもだった。今のアブーの言葉はあまりにも危険なものがあった。言動によって罰することはないといってもシャイターンはやはり独裁者であるからだ。
「そうなりますが」
「それは承知のうえだ」
シャイターンはまずはアブーのその言葉を受けてみせた。
「それもな」
「左様ですか」
「しかしだ」
だがここで彼は言った。
「それは精々一国の君主までのことだ」
「一国のですか」
「私は違う」
傲然とさえした言葉だった。

「私はこのサハラを一つにする男だ」
「それだからこそですか」
「そうだ。機雷を使うのではない」
機雷についてもこうであった。
「駒の一つとして操るだけだ」
「操るのですか」
「その通りだ。私にとって機雷もまたそうだ」
機雷もだというのだった。
「使える時に使える状況にあるから使う」
「それだけですね」
「たったそれだけだ。他には何もない」
「そうなのですね」
「それだけだ。実に簡単なことだ」
やはりアブーに顔を向けずに述べた言葉であった。
「駒の一つだからだ」
「では協同軍の機雷もまた」
「それだけだ」
敵である協同軍の機雷についてもそれだけで終わらせてしまった。

## 第三十三部第二章　優勢な中でその十九

「駒に過ぎない」
「敵のものもですか！？」
「それは」
「将棋というものがある」
シャイターンは今の彼の言葉にいぶかしんだ参謀達に対して述べた。
「将棋は。とはいっても」
「確か連合にあるものですね」
「とはいっても様々なものがありますが」
将棋と一口に言っても連合ではこの時代は様々な将棋が存在する。サハラにおいてはチェスが主流であり三次元による立体ボードでのチェスもある。また連合程盛んではないが娯楽としてテレビゲームやコンピューターゲームも存在している。ここではシュミレーションゲームについて考えられている。
「この場合の将棋とは」
「日本の将棋だ」
「日本のですか」
「そうだ。あの木の盤で同じく不思議な五角形の駒で行うものだ」
「ああ、あれですな」
参謀の一人がシャイターンの説明を聞いて納得した顔で頷いた。
「あの将棋ですか」
「そうだ。あれは相手の駒を倒す」
「はい」
「それをこちらでも使うことができるのだ」
「はい、確かに」
「それは」
これは参謀達も知っていた。このタイプの将棋はサハラでも知ら

れている。当然彼等もおおよそのルールは知っているのである。
「それと同じだ」
「といいますとこの場合は」
「彼等の機雷をそのようにして使うのですか」
「その通りだ」
やはりそういうことであった。それがシャイターンの考えであったのだ。
「どうだ。これは」
「ふむ。そういうことですか」
「今回は奪うのではなく利用するという形ですが確かに」
彼等もシャイターンの今の言葉を聞いてようやくこれまでの彼の采配を理解したのであった。つまりその為に今まであえて進むだけだったのである。
「そうなります」
「相手の駒を利用するのですから」
「敵の駒はただ倒したりしのぐだけではない」
シャイターンはまた述べた。
「こうして。利用することもできるのだ」
「それは考えませんでした」
「私もです」
彼等はここではサハラの軍人として考えていた。流石に相手を利用することまでは考えてはいなかったのである。そうした意味でシャイターンは見事であった。
「ですがこれは」
「面白いですな」
「面白い戦い方もまたある」
シャイターンもそれは否定しなかった。
「それで勝利を収めてこそ真の英雄だ」
「では兄上は」
「私こそが英雄だ」

今度はフラームの言葉に応えたのであった。
「後の世にも永遠に伝えられるようなな」
「サハラを統一した英雄としてですね」
「この戦いはその中の一篇に過ぎない」
絶対の自信による言葉は続く。
「だが。それでもだ」
「鮮やかに勝たれると」
「その通りだ。では進むぞ」
あらためて指示を出したのであった。
「アッサルームへな」
「はっ」
参謀達が応える。こうして遂にシャイターン率いるティムール軍とブルコルジ率いる協同軍は合間見えるのであった。この戦役における天王山の一つがはじまろうとしていた。

# 第三十三部第三章　機雷戦その一

機雷戦

遂にティムール軍と協同軍は互いの姿を確認し合った。まずはお互いの姿をそれぞれの無人偵察艇から受け取ったのであった。

「来ました」

まずは協同軍であった。司令官であるブルコルジのところに伝令将校が報告にあがった。彼は敬礼をして己の女王に対して報告するのであった。

「ティムール軍、こちらに来ております」

「数は？」

「三十個艦隊です」

「全戦力ですか」

ブルコルジはその数を聞いてまず呟いた。

「彼等もまた」

「その通りかと」

「わかりました。それでは」

ブルコルジはまず数は確認した。しかし彼女の問いはそれに終わらなかったのだった。さらに問いを続けるところが流石であると言えた。

「方角は」

「正面です」

方角も確認することも忘れなかった。とはいってもこの場合は何処から来るかは既にわかっていることであり確認でしかなかった。だがあえてそれを聞き自分に対してではなく周りの者達にそれを知らしめその考えを落ち着かせたのである。これは彼女の指揮への心配りであった。

「正面から来ます」

「わかりました」

それも確認したブルコルジであった。
「そこからですね」
「その通りです」
述べる伝令将校であった。
「そして編成ですが」
「それはどうなのですか」
「ティムール軍のオーソドックスです」
こうであった。
「やはり。巡洋艦や高速戦艦が多いです」
「機動力がありますか」
「そしてそれは全てティムール製です」
つまりティムールで建造された艦艇ということである。
「ですから機動力はかなりのものです」
「同時に火力もですね」
「おそらくは」
火力についても言及された。
「ティムール軍の特徴でありますので」
「そうです。ティムール軍は機動力と火力です」
「はい」
これはシャイターンの用兵に適った艦艇の構造となっているからだ。彼は戦闘に置いてはあくまでその二つを追及しそれを活かして戦う。これによりこれまでの戦いを勝ってきた。それをここでも見せるというわけだ。それがその艦艇からもわかるということなのである。
「それはもう把握しております」
「はい。それではです」
「問題はそれにどう対するかですが」
「だからこその鉄と床です」
今回ブルコルジが使うその戦術というわけなのであった。彼女は静かな声で述べた。

「ここでの」
「では陛下」
「そうです。まずはここに来てもらいます」
表情を変えずに述べた。
「ここに。そして」
「そして」
「勝利を収めます」
やはりここでも勝利を確信している言葉であった。彼女にしろ負けるつもりは毛頭ない・敗北を考えて戦場に向かう軍人なぞいないのである。
「だからこそ。今は仕掛けません」
「では今は」
「全軍停止です」
こう指示を出すのであった。
「今は。宜しいですね」
「はい。それでは」
「そのように」
「ハサン軍にもです」
同盟軍に対しても指示を伝えるように告げた。
「この指示を伝えて下さい」
「バンダル提督にで宜しいでしょうか」
「そうです。提督です」
ブルコルジもこう述べた。彼女は彼を提督と呼ぶことが多い。多くの場合彼女が提督と呼ぶ場合は彼を指し示しているのである。

## 第三十三部第三章　機雷戦その二

「提督に御願いします」
「はっ」
「今は。停止です」
もう一度年を押すようにして告げた。程なくしてこの指示はバンダルのところにも届いた。バンダルはこの時アステロイド帯にハサン軍を止まらせていた。その間に布陣しているのだ。
彼はその指示を聞いてすぐに。静かに頷いたのであった。
「了承しました」
こう答えるのであった。
「それではそのように。陛下に宜しくお伝え下さい」
「わかりました」
伝令はモニターによって行われていた。それを行ったアヤグーズ軍の若い参謀が応える。彼は敬礼と共に了承の言葉も述べるのであった。
「それではすぐに陛下に」
「御願いします。ところで」
ここでバンダルはその参謀に対して問うのであった。
「我等は今ここにいます」
「はい」
「そして折を見て前に出て敵に攻撃を浴びせる」
これもまた彼に伝えられた話である。
「それで宜しいのですね」
「その通りです」
こう答えるその若い参謀であった。
「ハサン軍は床であるとのことですので」
「我が軍が床で」
当然ながらどういうことかは既にバンダルも聞いているのだった。

パートナーの司令官としてこのことを伝えることは当然であった。
「アヤグーズ軍が鉄槌ですね」
「はい、そうです」
これは確認であり参謀は頷くだけであった。
「そうして。ティムール軍を」
「わかりました。ではその床に徹しましょう」
答えるバンダルであった。
「そのように」
「御願いします。それでは」
「勝利を我等の手に」
「勝利を我等の手に」
それぞれハサン式の敬礼で挨拶をする。こうして若い参謀はモニターから姿を消した。彼が姿を消すとバンダルは傍らにいるギーヴに対して声をかけたのだった。だが目は今は画面の消えたモニターにそのまま向けられている。そのうえでの言葉であった。
「まずは大丈夫か」
「そうですね」
バンダルの言葉に頷くギーヴであった。彼は頷いたうえでさらに上官に対して述べるのであった。その丁寧な言葉により。
「これは必勝の戦術です」
「機動力と火力、衝撃力全て使ったな」
「かつてマケドニア軍が使ってきたそれです」
このこともまた彼等の知ることであったのである。
「この戦術は破られたことはありません」
「アレクサンドロス大王は不敗だった」
「はい」
華麗な勝利を収め続けたこの覇者のことはあまりにも有名である。そして今ハサンきっての猛将と言われるブルコルジがそれを使う。それで敗れるとはほぼ誰も思わないものがあった。
「それを今ティムールに使う」

「これでシャイターン主席は終わりです」
「その通りだ。彼等は一度敗れればそれで全て終わりだ」
「如何にも」
その国力の弱さは彼等も認識していた。ティムール軍が極限の状態で戦っていることは彼らもわかっているのである。だからこそここで破るつもりなのだ。
「そしてこれで敵が一つ減る」
「続いては」
「オムダーマンだ」
南方を脅かしているそのもう一方の敵である。
「彼等を倒す。次はな」
「まさに返す刀ですね」
「どちらか一方ならばな」
不意に一呼吸置いてそのうえで溜息をつくバンダルだった。

## 第三十三部第三章　機雷戦その三

「ここまで苦労もしないのだがな」
「確かにですがそれは」
「言っても何もはじまるものでもない」
「残念ですが」
バンダルのその言葉に頷くのであった。
「その通りです」
「何かはじまるわけではなく何かをできるわけでもない」
「そのことを申し上げましても」
「ならば何かをはじめ何かをする為には」
「そうです。動くことです」
やはりこれであった。ギーヴの言葉は見事に現実を捉えたものなのであった。
「今。動くということは」
「勝つことだ」
バンダルは一言で全てを述べてしまった。
「ただ。それだけだ」
「はい。それでは」
「今は。待つ」
ブルコルジの指令をあらためてハサン軍全軍に告げた。
「よいな。軽挙妄動はくれぐれも慎むように」
「はっ、それでは」
「暫く。ここに留まる」
バンダルはブルコルジの指示を彼自身の口からもハサン軍に対して告げた。
「それでいいな」
「はっ」
ギーヴが代表してそれに応える。こうしてブルコルジの指示は一

応はハサン軍全体に及んだのであった。だが。それはあくまで一応であったのだった。
ハサン軍の将兵の中にはそれぞれの艦艇でこの指示に不満を抱く者達もいた。彼等は今現在の停止命令を聞いて眉を顰めさせて言うのであった。
「折角こちらの方が数が上だというのにな」
「全くだ」
彼等の数を妄信してもの言葉であった。
「それで攻めないなぞ愚の骨頂だ」
「その通りだ。やはりここは」
「攻めるべきだ」
見れば予備兵あがりの者達ばかりだ。彼等は将校に至るまで今攻めないことに不平を漏らすのだった。中にはそれは艦長クラスにまで及んでいた。
「愚かな話だな」
「全くです」
ある戦艦において副長が艦長に対して答えていた。
「今ここで攻めずして何とするか」
「ですがアヤグーズのあの女王様ときたら」
「全くだ」
不満をありありと述べ続ける二人であった。
「何が猛虎なのだ。攻め方もわかっていないとはな」
「数は我等が優勢です」
やはり彼等もこのことを念頭に考えているのであった。しかしそこにはその数以外に考慮に入れている部分はなかったりする。そしてそれに気付いてもいない。
「それを何故生かさないのか」
「駄目だな」
忌々しげに言い捨てた艦長だった。なお彼は長い間どころか兵役を務めてすぐに予備役になりそのまま二十年を過ごしている。その

間碌に教練を受けたこともない。ある企業の部長でそれを考慮して今艦長をしているのである。
「これはな」
「そうですな」
この副長も大体同じである。今の本来の仕事は役場の課長である。たまたま予備役将校となっていたのでこの艦長共々今この艦の副長をしているのだ。
「まあいい。いざとなったらだ」
「攻めますか」
「独断専行も時にはよしだ」
艦長は言った。
「これは普段わしの会社でな」
「はい、会社において」
「いつも言っていることだ」
しかも企業と軍を混同していた。やはり何もわかってはいないのだった。
「そうした時の責任は常に上司持ちだとな」
「それはいいことで」
確かにそれはいいがそもそも軍がわかっていない言葉である。
「だからだ。いざとなればな」
「出ますか」
「何が紅い豹だ」
シャイターンのことである。

## 第三十三部第三章　機雷戦その四

「その様な名前ははったりだ」
「そんな仇名があるというのもおかしなことです」
「その通りだ。何だというのだ」
どうしても自分達の本来の仕事から頭を離さない彼等であった。
「その通り名がな。だが今はいいな」
「時が来ればですか」
「その時にやってやる」
最早命令を守るつもりはない二人であった。
「ここで功績をあげれば会社に戻ればそれが評価されて」
「どうなりますか？」
「重役になれる」
満面の笑みを浮かべて言った言葉だ。
「そうなれば定年しても役員でな。給料を貰い続けられる」
「私は部長ですな」
副長もまた役場でのことを考えていた。
「部長になって。デスクも替わって」
「いいこと尽くめだな」
「全くです。さあ、今はその時を待って」
「勝利を祈るとしよう」
「アッラーに」
この様な呆れた有様だったが予備役から召集したハサン軍はおおむねこんな有様だった。それは末端の兵士に至るまで同じで彼等は彼等で菓子やジュースを飲みながら適当に持ち場にいるのであった。そうしてそこで雑談やゲームに興じていたのである。
「このステージが終わったら正念場だぞ」
「ここが終わったらか」
「ああ。敵の数が半端じゃない」

ある空母では兵士達がテレビゲームをしながら話をしていた。その周りにはゲームの攻略本やネットの書き込みをコピーした紙、それに菓子といったものが散乱していた。とても戦闘を間近に控えた状況には見えなかった。そんな中で戦闘配置に着いているのである。
「凄いぞ」
「攻略本でもそう書いてあったけれどな」
「その本じゃないぜ」
説明する兵士はだらしない戦闘服の着方でチョコレートクッキーをつまんでいる。あちこちにその汚い欠片が散らばってしまっている。
「他の本でも書いてあっただろ」
「ああ、確かにな」
「だからだよ」
彼はまた言った。
「注意しておけよ。いいな」
「いきなりあれか。一面の中ボスが出て来るのか」
「雑魚も大勢連れてな」
「ったくよお、何考えてるんだ？」
ゲームをする兵士はそれを聞いて思いきり声を顰めさせた。
「いきなりそれかよ」
「そっからまだあるからよ」
説明をする兵士は半分他人事で語る。
「覚悟しておけよ」
「わかったぜ。ところでな」
「ああ」
「改造コードで無敵のコードあったか？」
「ああ、それならもう見つけたぜ」
説明をする兵士はここで一枚の紙を取り出してきた。
「これだな。他にフル装備もあるからな」
「おっ、そっちも出たのかよ」

「これで一回最終面まで言ってみるか？」
「ああ、そうさせてもらうわ」
今の面のボスと戦いながら話をする。しきりに左右の手の指を動かし激しい誘導弾の攻撃をかわしつつレーザーを連射させている。
「一回最後までいったら大体わかるからな」
「っていうか慣れるだろ」
「確かにな」
そのボスに攻撃を当てつつ答える。
「最後までいったら。大体わかるんだよな」
「格闘ゲームでも同じだろ？」
説明をする兵士はここで煙草もやりだした。傍の灰皿にライターを置く。

## 第三十三部第三章　機雷戦その五

「そこんところはよ。一旦最後までいけばな」
「何か慣れるな」
「それだよ。何度撃墜されても最後までいきゃいいんだよ」
「そういうことか」
「だから無敵でもやってみればいいんだよ」
彼はこう同僚に説明するのだった。
「最後までいったらわかるからよ」
「そういうことだな」
「そうさ。ところでな」
「何だ？今度は」
「御前この前また新しいゲーム買ったよな」
「ああ」
ゲームをする兵士はここでまたボスに攻撃を当てた。するとその色が変わってきた。今まで白かったのが赤くなってきていた。まるで危険信号のように。
「あのサッカーのゲームか」
「あれ面白いか？」
「まあまあだな」
やはり指を動かしながら答える。
「その辺りはな」
「そうか。ならいいや」
そこまで聞いて呆気ないまでに話をあっさり終えてしまった。
「それならな」
「貸そうか？」
「いや、いい」
実際にその申し出も断るのだった。
「いいや。やっぱりな」

「そうか」
「それより。この戦い終わったらどうする？」
「どうするって？」
「ボーナス入るぜ」
今からはじまるであろう戦闘のことなぞ全く考えていない調子であった。
「それもたっぷりとな。どうするよ」
「俺それでバイク買う」
「バイクか」
「御前はどうするんだ？」
「俺？俺は旅行行くさ」
攻略本を煙草をふかしつつ見ながら答えた。
「どっかにな」
「旅行？連合にでも行くか？」
「そうだな。タイでも行くか」
何気なくの言葉である。
「あそこいいっていうしな」
「チェンマイ星系だよな」
「ああ、あそこな。すっげえ景色いいらしいしな」
「旅行か。悪くないな」
ゲームをする兵士も旅行と聞いてまんざらではない様子であった。
「それもな」
「じゃあそっちにするか？」
「いや、やっぱり俺はバイクだ」
またボスにレーザーを当てた。
「それにするよ」
「何だ、バイクかよ」
「いいだろ？好きなんだからよ」
むっとした顔で同僚に言い返した。
「あれで風切って走るのがいいんだよ」

「ゲームよりもかよ」
「まあこっちもいいけれどな。よしっ」
ここでそのボスを見事倒した。画面から浮き出た三次元モニターにおいて派手な爆発が起こる。二十一世紀のそれとは比較にならない程の迫力である。
「やったぜっ」
「おお、見事見事」
「それで次の面が正念場なんだな」
「そうさ。覚悟できてるよな」
「できてるぜ。その為に今までフル装備維持してきたからな」
誇らしげにその同僚に述べる。
「これをな」
「まあバリアあっても一瞬だけれどな」
「一瞬かよ」
「下手したら最初でまず消えるぜ。気をつけろよ」
「マジかよ」
「その前でちゃんとボーナスでサポート出て来るからな」
「ああ」
このゲームに対するかなり具体的な話になる。ゲームをするその兵士も同僚も顔を近付け合ってかなり密接に話をするのであった。

## 第三十三部第三章　機雷戦その六

「それで貼り替えとけ」
「バリアをか」
「さっきのボスも手強かっただろ」
「ミサイルの数が半端じゃなかったぜ」
うんざりとした口調で述べるのだった。
「連合軍の艦艇レベルでな」
「まあタイガーキャット十機分だな」
「そんなところだな」
タイガーキャットのミサイル攻撃はサハラにおいてもかなり有名になっている。その圧倒的なミサイル攻撃、一機辺り十発も放つそれで敵機をまとめて叩くのだ。連合軍特有のタイガーキャット自体の数も多さもあってこの攻撃は相手に相当なダメージを与えるのである。
「やばかったぜ」
「だからだよ。貼り替えとけよ」
「さもないとやばいか」
「それでもやばい」
シビアな言葉だった。
「正直なところな」
「マジか」
「一応本でそれチェックしたんだろ？」
「まあな」
あくまで一応は、である。だからその返事は今一つ弱い感じであった。
「それはな」
「じゃあわかってるんだろ？」
彼はそうゲームコントローラーを握ったままの彼に対して問うた。

「そこんところはな」
「それでも。マジなのかよ」
「嘘を言っても仕方ないだろ」
彼は本とクッキーを楽しみながらまた彼に告げた。今は煙草は吸っていない。
「こんなことよ」
「それはそうだけれどよ」
「だから。気をつけろよ」
「ああ、わかった」
ここで遂に頷く彼だった。
「それならそうするさ」
「そうしな。それにしてもな」
相手に話し終えてから大きく背伸びをするのだった。それからまた言った。
「この戦争、早く終わらねえかな」
「コムで本当は終わる予定だったんだろ？」
「というかあれだよ」
また言うのであった。
「オムダーマンの連中もいるしな。何でもティムール潰したら次はそっちだろうだ」
「おい、南部戦線の奴等何やってるんだよ」
「連戦連敗だよ」
これが返答だった。
「見事にな」
「見事にかよ」
「最初から今まで連敗続きだろ？」
「ああ、それは聞いてるさ」
次のステージに入るのを見ながらうんざりとした顔になる彼であった。その顔で同僚に対しても答えるのであった。その顔を見れば一応兵士であることはわかる。

「とりあえずはな」
「何であんなに負けるだって俺も思うけれどな」
「俺もだよ。このまま王都までってことはないよな」
「それはないだろ」
今の時点では確かに敗北が続いていても誰も祖国の敗戦を予想してはいなかった。誰が最終的な勝利を確信していたのである。
「流石にな」
「シュミレーションだったら絶対に勝てるしな」
「ああ」
今度はシュミレーションゲームの話になる。
「っていうかどれもハサンが圧倒的だろ？国力がな」
「だよなあ」
自分達の国のゲームだからだという考えはここではかなり希薄になっている。そういった主観も意識しないまでに強いものになってしまっているのだ。漠然とした平和の中で。
「それで何でここまで押されるんだか」
「まあそれも終わりさ」
ここれクッキーを食べ終えてまた煙草を吸ってきた。
「これでな」
「そうだな。よしっ」
「おっ、いよいよだな」
「ああ。いきなりこれだけ来たか」
中々大きな敵が数機出て来て主人公機の前に展開していた。しかも敵の小型機まで出て来ている。早速決戦といった状況であった。

## 第三十三部第三章　機雷戦その八

「マジだったな」
「とにかく敵の攻撃避けながら乱射しろよ」
煙草を吸いつつアドバイスをする。
「攻撃はオプションに任せてな」
「オプション四つ持って来て正解だったな」
「それとそのレーザーとハイパーミサイルな」
武装についても言及された。
「それで凌ぐんだぜ」
「よし、それじゃあな」
「とにかくよけろ」
敵の攻撃を避けろというのだった。
「よけながらオプションに攻撃を任せてな」
「あとこれか」
コントローラーの左上のボタンを四回押した。すると機体から急に何か浮遊する小型ユニットが出て来た。それは自然に敵に攻撃を加えるのだった。
「ファンネルだよな」
「それも使えばいいさ」
それもいいとするのだった。
「とにかく。最初からいきなり正念場だからな」
「ああ」
「生き残れ」
真剣そのものの言葉であった。
「わかったな」
「最終面までいってやるぜ、ここを凌いでな」
彼等はコントローラーを前にしてそうした話に興じるのだった。
だがそこには今彼等がいる戦場への意識はない。そしてそんな彼等

とは逆に。ティムール軍は全軍全神経を張り詰めさせて戦場に入った。周囲への警戒も怠らず殺伐としたものさえそこにはあった。
「敵艦隊、確認しました」
「まずは右翼だな」
「はい。高度は我々と同じです」
参謀の一人がシャイターンに対して述べる。シャイターンは相変わらず正面のモニターを見据えている。そのうえで彼に対して告げるのだった。
「そこに位置しています」
「次に正面の敵は」
「アステロイド帯です」
また報告が入る。
「そこで布陣しています」
「その守りを利用してか」
「その通りです」
これもまた予想通りであった。モニターにはそのアステロイド帯とそこに隠れて布陣しティムール軍を待つハサン軍の姿がコンピューターグラフィックで表されていた。
「今のところ出ようとはしていません」
「そうだろうな」
それと聞いて当然といった口調のシャイターンであった。
「それはな」
「では閣下」
「よし。まずは左に動く」
最初の指示を下した。
「左だ。いいな」
「高度は」
「そのままだ」
高度についても述べた。
「このままで進む」

「わかりました」
「そのうえで機雷撒布の用意だ」
「機雷を！？」
「アヤグーズ軍に向けて放て」
こう命じた。
「いいな」
「ここで機雷をですか！？」
「ここに来るまでも仰っていましたが」
「それもわかる」
今はこう述べるだけのシャイターンであった。
「それもすぐにな」
「すぐにですか」
「そうだ。だからだ」
彼はまた述べた。
「機雷撒布の用意だ」
あらためて言うのであった。
「わかったな」
「はっ、それでは」
「そのように」
何はともあれシャイターンの指示に頷くしかなかった。そのうえで彼等は正面に進みそのうえで左に迂回した。その動きはブルコルジからも確認された。

## 第三十三部第三章　機雷戦その九

「左にですか」
「どうやら気付いたでしょうか」
参謀の一人が今のティムール軍の動きを見てブルコルジに問うてきた。
「この鉄槌と床に」
「そうかも知れませんね」
ブルコルジも流石だった。すぐにその可能性を想定して述べた。
「だとすると」
「どうされますか？それでは」
「それでもこのまま進みます」
しかし彼女はこう判断を下したのであった。ここでは。
「このままです」
「左様ですか」
「はい。ハサン軍の陣は横にも広いものになっています」
数を利用してである。やはり数は武器であった。そしてブルコルジはその数を上手く活用する術を心得ていた。だからこそ横に長くも布陣しておいたのである。
彼女は今はそれを使うことにした。このままアヤグーズ軍に自身の右翼を見せるかと思われたティムール軍は急遽左に旋回した。その時だった。
「よし、今だ」
「今ですか」
「そうだ」
シャイターンは参謀達に言葉を返していた。
「今だ。機雷撒布だ」
「了解です」
方向を変えながら機雷を撒布したのだった。それはそのままアヤ

グーズ軍の側面に来た。ブルコルジもアヤグーズ軍の将兵達もそれを見て顔を顰めずにはいられなかった。
「！？機雷を」
「この様な時に」
その機雷を見てそれぞれ顔を顰めさせているのだった。
「何を考えているのだ、彼等は」
「機雷をここで使うとは」
「陛下、これは」
参謀達もまた自らの女王に対して問うのであった。その顔は怪訝なものである。
「一体何の魂胆があってのことでしょうか」
「足止めでしょうか、いえ」
ブルコルジもいぶかしがりながら述べるのだった。
「それにしては妙ですね」
「全くです」
「意味がありません」
参謀達の誰もが彼女と同じくいぶかしんでいた。そのうえで口々に述べる。何故ここでシャイターンが機雷を使ったのかわかりかねていた。
「機雷なぞ使っても何にも」
「意味がないではありませんか」
「そうです」
彼等は口々に言っていく。
「しかもです。そのまま左翼に位置しています」
「これはまた妙なことを」
「戦いを避けているのでは？」
参謀のうちの誰かが述べた。確かに今のティムール軍の動きはそう思われても仕方のないものであった。何しろそのまま左に向かい攻撃に移ろうとはしないからだ。
その真意は誰もがわかりかねていた。あまりにもわからずさんぼ

うのうちで中将の階級を持つ者がふとこう述べたのであった。
「もしやこれは」
「これは？何か」
「あるのですか？」
「機動戦術では？」
怪しむ目で述べた言葉であった。
「まさかとは思いますが」
「機動戦術といいますと」
「はい。我々は今このままオムダーマン軍を追っています」
「はい」
ブルコルジが彼の言葉に頷いてみせた。
「その通りです」
「それで我々を引き寄せ」
参謀は言う。
「まず我々を倒し」
「その次にハサン軍を引き出し各個撃破ですか」
「違うでしょうか」
怪しむ目のままでの言葉であった。

## 第三十三部第三章　機雷戦その十

「これは」
「言われてみれば確かに」
「怪しいですな」
「全くです」
その中将の言葉に他の参謀達も頷きだした。確かに言われてみればであった。シャイターンはその驚異的な機動戦による各個撃破を得意としてきた。そのことを思い出した彼等はすぐに。彼等の指揮官に対して声をかけるのだった。声にもそれを出す表情にもこれまで以上の真剣さがある。
「陛下、だとするとここは」
「危険です」
「このまま進めば」
述べた言葉であった。述べる口はそれぞれであり言葉もまたそうであったがその示す意味は同じであった。誰もが同じことを考えているのであった。
「危険かと」
「ですから、ここは」
「停止ですか」
「少なくともです」
大将の参謀のうちの一人が彼女に述べてきた。
「我等だけで進むのは危険かと」
「火力ではティムール軍の方が上ですし」
「機動力も」
「確かに」
ブルコルジもそのことを計算に再び入れた。そのうえで再度考えてみるとであった。やはりここは自身の軍だけで進むのは危険であった。

「正面から打ち合ってはティムール軍は手強いものがあります」
「コムの時の様に」
「消耗戦になればそれだけ」
「我が軍が。同じ数ならば」
「それにです」
参謀の一人はこの戦いにおける彼等の置かれた特殊な状況についても言及したのだった。
「陛下が倒れれば我が軍はそれで終わりです」
「その通りです」
こうしたことであった。国家元首である彼女が戦場で倒れればそれで終わりなのだ。捕虜になってもである。そうなればハサン軍があとどれだけいようとも同じだ。アヤグーズの滅亡ということになってしまう。だからこそ今彼等だけでティムール軍と正面から殴り合うことだけはできないのであった。
「ですからここは」
「彼等もまた」
「それしかありませんか」
ブルコルジは難しい顔で彼等の言葉に対して頷いたのであった。
「ここは。やはり」
「はい、そうかと」
「ですから」
「わかりました」
ブルコルジもここで頷くのだった。それは決断の頷きであった。
「それではです」
「はい」
「どうされますか？」
「ハサン軍に要請を」
やはりハサン軍に対するものであった。
「合流するようにと。そのままアステロイドから出て欲しいと」
「アステロイドからですか」

「そうです」
それが彼女のハサン軍への指示であった。
「それで御願いします。ただ」
「ただ？」
「これは指示ではありません」
またしてもそうしたことに対する複雑な事情が出て来ていた。
「要請です」６
「要請ですか」
「あくまでそうです」
建前でしかなくともここは厳しく決められていた。どうしてもハサンとアヤグーズの宗主国、属国としての関係が出て来てしまうのであった。
「ですから。宜しいですね」
「わかりました。それでは」
「要請を御願いします」
あらためて言うアヤグーズであった。
「ハサン軍に対して。アステロイド帯から出て合流してくれるようにと」
「はっ」
こうしてブルコルジからハサン軍への『要請』が伝えられた。程なくしてそれは伝わりバンダルもまたそれを聞いたのであった。
その『要請』を受けたバンダルだが。彼の考えは最初から決まっていた。それは。
「わかった」
これしかなかった。少なくとも彼は最初からブルコルジの命令に従うつもりであったしその考えはここでも変わることがなかったのである。
「それでは陛下にお伝えしてくれ」
「合流して頂けるのですね」
「無論だ」

何を言わんやとでもいうような言葉であった。

## 第三十三部第三章　機雷戦その十一

「我等は既に陛下の指揮下にあることが決められている」
「ハサン軍の階級においても」
ここでギーヴも述べてきた。
「そうですね」
「そうだ。陛下は元帥であられる」
バンダルもまたこのことを言う。ブルコルジがハサン軍元帥の階級も持っているのはこうした際への配慮でありそれは成功していると言えた。
「だからこそだ。何故異論なぞあろう」
「有り難き御言葉です」
要請に出たアヤグーズ軍の若い参謀は二人の言葉を聞き満面の笑顔になった。彼にしても果たしてハサン軍が要請を聞いてくれるかどうか不安だったのである。
「それでは。宜しく御願いします」
「わかっておる」
また言葉を返したバンダルであった。
「ではすぐに陛下にお伝えしてくれ」
「はい」
「合流させて頂くとな」
「わかりました」
返礼する参謀の動作も声も明るいものになっていた。無論その表情もである。
「それでは陛下にはそのように」
「頼むぞ」
こうしてハサン軍の合流が伝わりそれはすぐに実行ともなった。ハサン軍はアステロイド帯から出て来た。しかしその動きはやはり重いものであった。

「ハサン軍が出て来ました」
シャイターンに報告があがった。モニターにその動きだしたハサン軍が映っている。
「アヤグーズ軍と合流します」
「機雷は」
シャイターンはその報告を聞いているのかいないのか機雷について尋ねるのだった。
「どうなっているか」
「機雷！？」
「そう、機雷だ」
彼はまた言った。
「その機雷だ。どうなっているか」
「はい、それでしたら」
すぐにアブーが彼のその問いに答えてきた。
「協同軍の機雷ですね」
「そう、それだ」
彼が言う機雷は今回はこの機雷であった。先程彼等自身が撒布したものではなかった。あくまでその機雷であったのである。
「それはどうなっているか」
「間も無くこちらに来ます」
アブーはすぐにまた答えてきた。
「この戦線に」
「そうか」
シャイターンは末弟の言葉をまずは冷静に聞いて頷くのだった。
「わかった」
「では兄上」
報告を終えたアブーはさらに長兄に対して問うた。
「どうされますか？」
「前だ」
まずは一言であった。

「全軍このまま正面から攻撃をかけよ」
「突撃ですか」
「いや、違う」
そうではないというのだった。これまた突撃により一気に勝敗を決することの多いシャイターンを考えれば意外なことであった。だが他ならぬ彼だけはここでも至って冷静なままであるのだった。
「それはな」
「では一体」
「どうされるおつもりですか？」
「間合いを見計らったうえでの攻撃だ」
「間合いをですか」
「そうだ」
また答えたシャイターンであった。
「正面から。間合いを見つつ攻撃を仕掛けるぞ」
「御言葉ですが閣下」
「この場合は」
話を聞き終えた参謀達がすぐにいぶかしむ顔で彼に問うたのであった、
「やはり。突撃では」
「それをどうして」
「すぐにわかる」
こう答えるシャイターンであった。

## 第三十三部第三章　機雷戦その十二

「すぐにな」
「すぐですか」
「そうだ」
毅然とした言葉は変わらない。
「だからだ。前に進め」
「わかりました」
「それでは」
皆シャイターンの言葉に頷きそれに従う。ティムール軍はそのまま方向を変え協同軍に対して向かいはじめた。それを見た協同軍の中で異変が起こったのだった。
「いよいよだな」
「はい」
あの戦艦においてであった。副長が艦長の言葉に対して頷いていた。
「それではすぐに」
「そうだ。出るぞ」
「前に」
「突貫だ」
こう指示を出すのであった。
「艦を前に出せ。いいな」
「はっ」
敬礼をして艦長の言葉に応えた。
「それでは」
「敵が来たので前に出た」
艦長は不敵に笑って述べた。その笑みは恐れてはいない笑みであった。しかしそれは蛮勇に基く笑みである。彼等自身はわかっていなかったが。

「それだけだ」
「それで充分ですね」
「そうだ」
答える艦長だった。
「それでな」
「ではそういうことで」
「前に出よ」
見れば他の艦艇にもそうした動きを見せる艦艇が多くあった。どれもハサン軍のものからだった。バンダルはそれを見て眉を顰めさせた。
「愚かな。命令違反か」
「血気にはやってだけではありませんね」
「命令には従えないというのか」
忌々しげにギーヴの言葉を聞いて述べた。
「他国の国家元首の命には」
「ハサン軍元帥でもあるのですが」
「そうは思っていないのだな」
実際そう思っている者は希薄なのであった。残念なことにだ。
「愚かな」
「全くです。ですが」
「わかっている」
またしても忌々しげに述べた。その間にもハサン軍の艦艇の多くが勝手に前に出ようとしていた。それにより陣形が崩れようとしているのだ。
「指示を出せ」
「どうされますか？」
「制止だ」
強い言葉であった。
「これに従わない艦艇は撃て」
「こちらでですか？」

「そうだ」
有無を言わさぬ口調になっていた。
「そうしてもだ。止めるのだ」
「ですが閣下」
「それは」
周りの者達は今のバンダルの言葉に対して顔を顰めさせざるを得なかった。普段は冷静である彼がそこまで極端な対策を言うとは思わなかったからだ。
「やはり。そこまでは」
「どうかと思われますが」
「いや、それで行く」
彼は引かなかった。
「何があってもだ。いいな」
「そうまでしてですか」
「今の動きを止められると」
「さもなければ敗れるのは我等だ」
その言葉にははっきりとした危惧があった。危惧に満ちた言葉で前を見据え続けているのだった。そこには両軍の動きがモニターで描かれていた。
「だからだ。わかったな」
「わかりました」
すぐにギーヴが彼に答えたのだった。
「それではそのように」
「すぐに全軍に伝えよ」
また言うバンダルであった。ギーヴのその言葉に応える形で。

## 第三十三部第三章　機雷戦その十三

「いいな」
「はっ」
またギーヴが第一に応えるのだった。まるでタイミングを合わせているかのようにだった。バンダルも彼の言葉に冷静に返していた。
「わかりました」
「頼むぞ」
また言うバンダルだった。
「それで止まらなければ本当に撃て」
「畏まりました」
「今は。迂闊な動きはできない」
バンダルの言葉にまた危惧が宿った。
「それを見せればティムール軍に付け込まれるぞ」
「シャイターン主席にですか」
ティムールといえば彼だった。その彼のことをイメージして誰もがその心に緊張めいたものを帯びさせたのである。瞬時にして。
「確かに」
「それでは」
「よし、そういうことだ」
彼等の言葉を聞きつつ頷くバンダルだった。
「それではな。いいな」
「はい」
ハサン軍も彼等で動くのだった。そうして彼等も戦いに目を向ける。毅然としてその流れを見つつ。今軍の引き締めにかかったのだった。
「何っ、撃つだって！？」
「おい、尋常じゃないぞ」
すぐにバンダルからハサン軍全軍への話が及ぶ。それを聞いたハ

サン軍の将兵達の中から一斉に声があがった。それは全て驚きの声であった。
「味方を撃つって」
「まじかよ」
「それだけ閣下も本気だということだな」
だが仲には冷静な者もいた。ある空母の艦長は冷静に述べるのだった。
「この戦いにな」
「そういうことですか」
「そうだ。だからだ」
その艦長は艦橋にいる士官達に対して告げた。見れば彼は己の艦を前に進ませようとはしていなかった。彼の艦艇は、である。
「それだけの指示を出されるのですか」
「そういうことですか」
「他の艦艇はどうなった？」
あらためて他の艦について尋ねるのだった。
「それで。今は」
「流石に今の言葉は聞いたようです」
航海長が彼に答えた。
「軍の動きが止まりました」
「そうか」
見ればその空母のモニターの動きはそうだった。それまで前に出ようとしていたハサン軍の多くの艦艇が動きを止めてしまっていたのだった。
「それは何よりだ」
「そしてティムール軍ですが」
「どうなっている？」
「前に出ようとしています」
船務長がこう答えるのだった。
「今は」

「そうか。前にか」
「かなりのスピードです」
「むっ！？」
船務長の言葉を聞いて艦長自身もモニターを見る。そこに映るティムール軍の動きは確かにかなり速いものだった。その速さは相当なものである。
「間に合うか」
「間に合うかとは？」
「今我が軍は動きを止めた」
「はい」
まずはこのことだった。
「ですが。まだ」
「動きにはなっていないな」
「このまま艦列を整えるべきなのですが」
それは戦術の基礎の基礎であった。艦隊として体を為していなければ話にもならない。それは既に彼等も士官学校の時点でわかっていたのであった。
だが今はそれをまだできていなかった。艦の動きはまだ止まったままだ。それを見て彼等は底に確かな危惧を感じたのであった。
「まずいな」
「はい」
「このままでは」
「間に合うと思うがだ」
まだ艦の動きは止まったままだ。しかしその中でもティムール軍は前に突き進んでくる。その両者の動きを見ているうちに危惧を感じているのだった。

## 第三十三部第三章　機雷戦その十四

「だが。速いに越したことはない」
「そうです」
「だからこそ」
「やっとか」
ここでだった。ハサン軍の艦艇がようやく動きだしたのだった。少しずつその艦隊を整えてきたのであった。確かに少しずつであったが。
その動きは当然ながらシャイターンにも見えていた。参謀達はそれを彼に対して告げた。
「艦隊を元に戻してきましたな」
「うむ」
シャイターンは参謀の一人の言葉に頷いた。
「ようやくだな」
「どうされますか、主席」
ここでその参謀は彼に問うのであった。
「このままでの速度では我等が射程に入るまでに艦隊を整えられてしまいますが」
「そうなってしまえば」
「速度をあげよというのだな」
参謀達がここで何を言いたいのか。それは既にわかっているシャイターンだった。
「そういうことだな」
「御言葉ながら」
「ですから。ここは」
「よい」
しかしシャイターンはここでは。動こうとはしなかったのであった。そしてこう言うのであった。

「速度はこのままだ」
「このままですか！？」
「ですがそれによって敵は」
「わかっている」
こう答えるだけであった。話を聞いても。
「既にその動きもな。想定していた」
「ではどうして」
「ここで」
「来るな」
彼等の言葉には応えずに呟いた。
「遂にか」
「遂に！？」
「一体。何が」
「見よ」
いぶかしむ彼等に対して告げた、腕を前に出しその指で差し示したそこにあったものは。
「来たぞ、彼等がな」
「彼等・・・・・・・なっ！？」
「これは・・・・・・・まさか」
「いいタイミングだ」
不敵に笑うシャイターンであった。
「丁度今ここで来てくれて。最高の状況になった」
「そうですか。彼等でしたか」
「その彼等を待たれていたのですか」
「最高の援軍だ」
シャイターンの今の言葉は勝ち誇ってさえいた。
「彼等こそがな」
「では主席」
「ここは」
「そうだ。あえて速度はこのままだ」

この指示は変えないのであった。何故ならば。
「機雷の動きに合わせよ」
「はっ」
「わかりました」８
皆彼の言葉に頷く。今ティムール軍は勝利を確信して前に突き進む。しかしそれに対して協同軍は。思わぬ敵に足並みを乱していた。
「機雷だと！？」
「何故だ！？」
それはアヤグーズ軍においても同じであった。各艦隊の司令達もまた突如として左手に現われたその機雷達を見て狼狽しだしていた。
「ここで出て来るとは」
「どういうわけだ」
「まさかとは思うが」
ここでその艦隊司令の一人が言った。

## 第三十三部第三章　機雷戦その十五

「我々が今まで撒布していた機雷なのか」
「あの機雷が！？」
「まさか」
「モニターを見てみよ」
彼は自分の言葉にさらなる狼狽を見せる幕僚達に対してまた述べた。
「モニターをな。アッサルーム星系全体のだ」
「アッサルームの！？」
「それでは」
幕僚達は彼の言葉に従いすぐにモニターのスイッチをアッサルーム近辺から星系全体にやった。するとそこではっきりわかったのだった。
「くっ、馬鹿な」
「どうやって」
「機雷をこちらに寄せたのだ」
「というと」
「あえて電子で誘導して」
「おそらくはな」
彼は幕僚達の言葉に対して頷いたのであった。
「そうやってな。こちらまで持って来たのだ」
「我が軍は宇宙潮流に乗せ動いてもらう為にあえて自らも移動する機雷にしましたが」
「それもまた」
「仇になったな」
そこも読んでの言葉であった。
「それがな」
「くっ、それでは」

「我々はどうすれば」
「今しがたティムール軍が撒布した機雷はどうなっているか」
「後方に移動しております」
「後方か」
「はい」
幕僚の一人が彼に報告してきた。
「我々の後ろに」
「左手と後方に機雷」
司令はそれも聞いて述べる。
「そして右手にはアステロイド帯だ」
それが今の彼等の置かれた状況であった。彼は今それを静かに述べていた。
「そして正面はティムール軍だ」
「塞がれましたか」
「これは」
「上か下か」
しかし彼はここで上下についても述べた。宇宙空間での戦いであるから当然それも考慮に入れて戦術を考えているのである。
「それとも」
「それとも？」
「正面か」
強い言葉で述べたのであった。
「正面に向かうか」
「ですが司令」
「それは」
幕僚達は彼のその言葉に顔を曇らせざるを得なかった。
「その正面からティムール軍が来ています」
「ですからそれは」
「何も正面からだけではない」
彼は言葉を少し変えてきた。

「上下から正面を攻めればいい」
「上下からですか」
「そうだ。陛下にお伝えする」
顔を上げて毅然として述べた言葉であった。
「ここでな。いいな」
「はっ、それではすぐに」
「そうしましょう」
「頼むぞ。モニターをすぐに開いてくれ」
「はい」
また彼の言葉に頷く幕僚達であった。それに従いすぐにモニターが開かれそこからブルコルジに対して通信が入れられるのであった。
「ことは一刻を争う」
彼はその電源が入れられていく通信用のモニターを見て呟く。
「早くお伝えせねばな」
こうしてこのことがブルコルジに対して直接述べられる。当然ながらブルコルジもまたこのことは察知していることであった。
「わかりました」
その意見の上奏を受けて彼女もすぐに決断したのであった。

## 第三十三部第三章　機雷戦その十六

「軍を二つに分けます」
「二つですか」
「そうです」
こう彼女の参謀達にも述べる。
「上下二つに分けまずは機雷を避けます」
「そうですか」
「そして」
「そのうえで正面から来るティムール軍を討ちます」
そこまで考慮に入れているのであった。今彼女の頭の中でこれからの戦場の推移が描かれていた。それが彼女の主観によるものであってもだ。
「だからこそ」
「わかりました。それでは」
「そのように」
「ハサン軍に要請です」
このことも忘れなかった。
「ハサン軍が下に」
「彼等が下ですか」
「そして我々が上にです」
「我々が上ですか」
「彼等は数が少ない」
この場合はティムール軍のことである。
「おそらく一方にのみ兵を向けてくるでしょう」
「そうですね。それは確かに」
「彼等ならば」
「だからこそです」
毅然として言うのであった。

「あえて二つに分け一方に攻撃を向けている間に」
「もう一方の軍が来て挟み撃ちを仕掛ける」
「そうなのですね」
「その通りです」
それこそまさに彼女の戦術であった。これまた必勝の戦術であった。
「今こそそれを」
「はっ、それでは」
「すぐにそのように」
「ハサン軍に伝えて下さい」
また言うブルコルジであった。
「このことを。いいですね」
「はっ、わかりました」
「それではすぐに」
こうしてハサン軍にも指示が伝えられた。バンダルはすぐにその要請に頷くのであった。
「では陛下にお伝え下さい」
「これで宜しいのですね」
「その通りです」
モニターで述べるアヤグーズ軍の参謀達に対してまた述べる。
「ですから。今は」
「はい、それでは」
「我が軍が下に向かいます」
このことを今言うバンダルであった。
「そのように」
「御願いします」
こうして協同軍は上下に分かれていく。それを見たシャイターンはイズライールの艦橋から言うのであった。
「挟み撃ちに仕掛けるつもりだな」
「我が軍をですか」

「そうだ。一方を撃てばだ」
彼は言う。
「もう一方が我々に来る」
「間違いなく、ですね」
「そうだ」
既にそのことを読んでいるシャイターンであった。そして彼の参謀達もまた。
「それがあの女王の考えだ」
「では。どうされますか？」
参謀の一人が彼に問うた。
「今は。一体」
「攻められますか？一方を」
別の参謀も彼に問うてきた。
「だとすればどちらを」
「それとも。別のやり方で攻めますか？」
「いや、一方を攻める」
これがシャイターンの返答であった。
「上をだ」
「上といいますか」
「これは」
「そうだ。彼等だ」
上に上がったのはアヤグーズ軍であった。その動きが速い。そしてブルコルジの旗艦であるシャハラザードもいる。それ等を見れば彼等がどの軍なのかは明らかというわけだ。

## 第三十三部第三章　機雷戦その十七

「彼等に向かう」
「あくまで戦うのですか」
「そうだ。退却はない」
傲然とまでした言葉であった。
「ここで退くことはできない」
「それはそうですね」
「ここで退くことは」
既に退路は機雷によって阻まれている。機雷はただ協同軍の障害になっているだけではなかったのだ。今もなお彼等の後ろを塞ぐ形になっているのだ。
「できない」
「戦うしかないということなのですね」
「そうだ。言うならば背水の陣だ」
状況こそ違えど、であった。
「だからだ。生きたければ戦うしかない」
「生きたければですか」
「そうだ。そして勝たなければならない」
また述べたのだった。
「彼等にな」
「わかりました。それでは」
「アヤグーズ軍に対して」
「全軍上に向かう」
またシャイターンの指示が出された。
「よいな」
「了解です」
ティムール軍はそれに従い全軍上に向かった。アヤグーズ軍もそれを迎え撃たんと向かう。ここでブルコルジは下に向かったハサン

軍に対して要請を出すのであった。
「今です」
「わかりました」
すぐ後ろにいた少将の参謀が応えた。
「それでは。すぐに」
「今我が軍に勝利が手に入りました」
「ここで彼等を挟み撃ちにしてですね」
「そうです。今こそ」
また言うのだった。
「攻めます。上下から」
「それでは。今我等に勝利を」
こうしてすぐに指示が出された。アヤグーズ軍はティムール軍に向かうと共に下にいるハサン軍に要請を出した。バンダルはそれを受けてすぐに彼が率いる軍に指示を出した。
「挟み撃ちだ」
「はい」
彼の言葉にギーヴが頷いた。
「それでは。今より」
「全軍に告ぐ」
さらに言うバンダルであった。
「今こそ全軍を挙げてアヤグーズ軍と共に勝利を掴むぞ」
「これで。我々の勝利で終わるのですね」
ギーヴはこう述べつつモニターに映る両軍を見ていた。ティムール軍と協同軍を。
「この戦いの勝利で」
「そうだな。遂にだ」
バンダルは彼の言葉に対して頷いた。
「ここでな」
「この戦いに勝ち返す刀でオムダーマンにですね」
「敵を一つに絞られる」

このことについても言うバンダルであった。
「それだけで大きなことだしな」
「その通りです。ティムール軍さえ倒せれば」
「オムダーマン軍が強いといってもオムダーマン軍だけだ」
そのことに大きなものを見ているのだった。今彼等の苦境は二つの敵を同時に相手にしているからだということを把握しているのだ。
「だからだ。まずここでティムールを倒し」
「そのうえでオムダーマンを退け」
「我等は救われるのだ」
そういうことであった。
「この国難も」
「この勝利で」
彼等は勝利を確信し進まんとする。ところがだった。その動きは彼等が予測したよりも遥かに遅くなってしまったのだった。
それには当然ながら理由があった。それは機雷であった。彼等は左側面と後方から来た機雷達に囲まれてしまったのだった。
「くっ、機雷か！」
「ここに来て！」
まとわりついて来る機雷を防がんと回避運動及び砲撃に移る。しかしその多くは訓練が足らず回避しきれず機雷に接触し破損する艦艇も出ていた。

## 第三十三部第三章　機雷戦その十八

「第十五艦隊第七分艦隊が機雷に囲まれました！」
「すぐに周りの機雷を退けよ！」
「やってはいます。ですが」
「砲撃だ！」
こうした司令も飛ぶ。
「砲撃で機雷を吹き飛ばせ！それで一気にやれ！」
「ですが」
「ですが。何だ！？」
それぞれの艦隊司令部において怒号が飛び交う。
「それでは分艦隊の艦艇にもダメージが」
「くっ！」
「第二十七艦隊もまた機雷に囲まれました！既に回避できず破損し動きを止めている艦艇も多数出ております！」
「今度は艦隊単位でか」
「どうしましょうか」
「我が艦隊もまた機雷に」
「うう・・・・・・」
それを聞いて歯噛みする歓待司令達も出て来ていた。とにかくその圧倒的な数の機雷達に阻まれ今は碌に動くことができなくなっていた。
その間にティムール軍はアヤグーズ軍に対して突き進む。そして今まさに。
「全艦に告ぐ」
シャイターンはイズライールの艦橋において仁王立ちした姿勢で指示を出していた。
「砲門開け」
「全艦砲門開け」

指示が復唱された。
「総攻撃の用意だ」
「了解です」
「敵軍もその砲門を全て開きました」
アヤグーズ軍の状況も述べられる。
「方向は我が軍の正面です」
「正面からの衝突です」
「まずは押し切る」
シャイターンは言った。
「まずはな」
「はい、それでは」
「そのように」
シャイターンの指示が伝わりその全艦艇の砲門が開かれる。それはアヤグーズ軍も同じであった。そうして遂に両軍のそれぞれの旗艦の艦橋においてこの指示が出された。
「撃て！」
「撃て！」
シャイターンもブルコルジもそれぞれの両手を振り下ろした。そのうえで両軍から無数の光の束が放たれる。それはまず忽ちのうちに双方の艦艇の何百かを貫き光に変えたのであった。
「第七艦隊の左翼損害が一割です！」
「第十三艦隊上部もです！」
「構わん」
シャイターンはその報告を受けても動じるところはなかった。そしてこう言うだけであった。
「このまま進め」
「このままですか」
「そうだ。それと共に再度一斉砲撃だ」
彼が下す指示はこれであった。
「このままな」

「下部に関しては」
「気にしなくていい」
そちらのハサン軍には今は目もくれないといった態度であった。
「今はアヤグーズ軍に集中しろ」
「あくまでそちらなのですね」
「そうだ。まずはアヤグーズ軍だ」
また言うのであった。
「彼等を全力で叩く。全てはそれからだ」
「はっ」
「わかりました」
シャイターンの今の言葉で彼等が完全に一つになった。つまり彼の下に完全に固まったのである。後は最早彼の思い通りであった。
「そしてだ」
「そして？」
ここでさらに指示を出すシャイターンであった。

## 第三十三部第三章　機雷戦その十九

「イズライールを前に」
こう言うのであった。
「前に出せ。いいな」
「それでは閣下」
「このまま再度の一斉射撃の後で突っ込む」
これが彼の考えであった。
「敵軍に向けてな」
「宜しいのですね？」
参謀の一人がそれを確認する。
「それで」
「構わん。今はその時だ」
その突撃もそうであるというのであった。彼の考えはここでは何処までも勇猛であった。少なくとも死を恐れてはいないのがわかる。
「私が自ら斬り入るその時だ」
「わかりました」
その参謀はシャイターンのここまでの言葉を聞いて納得した顔になり頷いた。
「それではそのように」
「おそらくは向こうも同じだ」
「ブルコルジ女王も」
「一騎打ちになるかも知れん」
急にかなり時代錯誤な言葉が出て来た。集団の艦隊戦であるこの時代において一騎打ちなぞというものはまずない。しかし彼はふとした感じでこの名前を出したのである。
「若しやな」
「ですが主席」
「それでもなのですね」

「それならそれでいい」
表情はそのままで前を見据えての言葉である。
「それでな。それではだ」
「了解です」
イズライールの艦長であるハヒードが答えた。階級は大佐である。
「それでは。全速前進！」
「全速前進！」
彼の命令が復唱され艦が先に進む。戦速だがそれでも最大限であった。
旗艦が進むのを見てティムール軍も突き進む。それと同時にその再度の一斉射撃に入るのであった。
「撃て！」
「撃て！」
その再度の攻撃でアヤグーズ軍を撃ちそのうえで一直線に進む。そうして進みそのまま斬り込もうとするのであった。その姿はアヤグーズ軍からも確認されていた。
「ティムール軍、来ます！」
「距離を置いての波状攻撃ではなくですか」
「どうやら戦術を変えたようです」
参謀達がブルコルジに対して述べる。
「どうやら。ハサン軍が機雷により動けなくなっているのを見て」
「そのハサン軍はどうなっていますか？」
「絶望的です」
こう言うしかなかった。
「機雷を逃れようとするだけで。それだけで」
「必死なのですね」
「とても動けません」
返答はこれしかなかった。
「ですから。彼等は」
「わかりました」

ブルコルジはここまで話を聞き苦い顔で述べるのだった。
「では。やはり我々だけで相手をするしかありませんか」
「ここは」
「それでは。我が軍も突撃です」
「突撃ですか」
「今守りを固めても防げるものではありません」
それが今回の突撃の理由であった。
「ですから。ここは」
「突撃だと」
「突撃には時として同じ突撃こそが効果的なのです」
次にこう述べた。
「だからこそです」
「それでは」
「全軍突撃です」
ブルコルジはまたこのことを告げた。
「シャハラザードを前に」
「旗艦を！？」
「そうです。見るのです」
ブルコルジは今度はモニターを見るように告げた。するとそこに映っていたのは。

## 第三十三部第三章　機雷戦その二十

「シャイターン主席もまた同じですね」
「むう。まさか先頭に立って突き進んで来るとは」
「正気とは思えない」
「豹は豹でもいざという時は正面から来る豹のようですね」
シャイターンの通り名を出しつつ述べるのであった。
「どうやら」
「だからこそ我等もあえて応えてですか」
「それもあります」
このことは否定しない。
「ですがそれと共に」
「それと共に？」
「陛下、何が」
「私もまた。虎です」
ここで自分の通り名を出すのであった。
「この名の誇りにかけて今私も先頭に立ちましょう」
「虎としてですか」
「虎は誇り高き存在」
この考えは元々中国よりはじまる。虎のその強さと美しさからこう考えられるようになったのである。サハラでもやはり獅子が第一に来るのだが虎もそれと同格の存在として認識されているのだ。これが中国をはじめとした連合全体の考えの影響であるのは言うまでもない。
「ならば。豹が来たならば」
「受けるのですか」
「その通りです。では宜しいですね」
「はっ、それでしたら」
「我等も御供させて頂きます」

彼等もその言葉を受けて意を決した。ブルコルジに続く決意をしたのである。
「それでは今より」
「このまま正面から」
「そうです。全軍突撃です」
こうしてアヤグーズ軍もまた突撃に入ることになったのであった。
「そして先頭にはシャハラザードが」
「畏まりました」
「それでは」
「全軍突撃！」
あらためて指示が高らかに告げられる。こうしてアヤグーズ軍もまた突撃に入った。双方共剣を抜き敵に向かって突き進む。互いにビームとミサイルを放ち激突する。その先頭には双方の旗艦があった。
「あれは・・・・・・」
「あれこそが・・・・・・」
そしてお互いに擦れ違った。戦速で擦れ違い一瞬だったが今確かに擦れ違ったのであった。
「あれがシャハラザードだな」
「あれこそがイズライール」
互いに擦れ違った艦を見て言い合う。
「まさかここで見るとはな」
「思いも寄りませんでした」
そしてまたそれぞれ言うのであった。だが今はそれで感傷に浸っている時間はなかった。
「よし、ならばだ」
「ここは」
ここでも同時に声をあげる二人であった。それぞれの艦橋において。
「アズライール発進」

「シームルグを出しなさい」
艦載機を出せというのであった。アズライールはティムール軍の艦載機でありシームルグはアヤグーズ軍だけでなくハサン軍全体の艦載機でもある。
「それで接近戦に入る」
「艦艇と共に攻撃に入りなさい」
またそれぞれ言ったのだった。
こうしてそれぞれアズライールとシームルグが放たれる。そこで激しい格闘戦に入る。
この間両軍は乱戦に入った。しかしシャイターンはここで出撃させたアズライールをすぐに収容させる。それは一機も落とすなという厳しいものであった。
「ここで格闘戦に入られないのですか」
「それは無駄な損害を出すだけだ」
これが彼の考えであった。
「だからだ。これでいい」
「そうなのですか」8
「そうだ。収容は順調だな」
「はい、それは」
「撃墜されたもの以外は」
「ならばいい」
その報告を聞いて満足した様子で頷く。
「やはり出したのが早いのならばそれだけだな」
「そうです、それにつきましては」
「その通りです」
「それではだ。収めよ」
あらためて収容を指示した。

## 第三十三部第三章　機雷戦その二十一

「そしてだ。突き抜ける」
「突き抜けますか」
「そのうえですぐに迂回して再度攻撃に入る」
「迂回！？」
迂回と聞いて参謀達は声をあげたのであった。
「迂回なのですか」
「そうだが」
「反転ではなくですか」
「それでは少し」
「いや、迂回だ」
あくまでこう言うシャイターンであった。これまでのある時になるとあくまで断固たる意志を見せる、それをここでも出してきたのである。
「ここは迂回だ」
「何故でしょうか」
「反転すればそこで艦隊の動きが止まる」
彼が警戒するのはそこであった。
「狙い撃ちされればそれで終わりだ。だからだ」
「だからなのですか」
「そうだ。これでわかったな」
「確かに。ブルコルジ女王が相手ならば隙を見せればそれで」
「終わりですね」
「その通りだ」
彼が言うのはそういうことだった。彼はその反転により動きに隙ができてそこを狙われるのを警戒しているのである。咄嗟だが的確な指示であった。
「わかったな。それではだ」

「わかりました。それでは」
「今は」
「迂回だ」
あらためて指示を出す。
「いいな」
「はっ、それでは」
「すぐに」
「まずは突き抜ける」
また指示を述べた。
「アヤグーズ軍からな」
「わかりました」
こうして彼等はまずはアヤグーズ軍との乱戦を抜けた。そうして反転せずにそのまま下から上に迂回するのであった。それを見たアヤグーズ軍の者達はまずは我が目を疑ったのであった。
「すぐに乱戦を抜けただけでなく」
「反転もしないというのか」
「どういうことだ！？これは」
「陛下、これは一体」
「彼等は何を考えているのでしょう」
「艦載機の収容を」
ブルコルジは参謀達の言葉を聞きつつモニターを見ていた。そのうえで顔を顰めさせていた。まずはシームルグの収容を命じたのである。
「急いで下さい」
「はい、それはすぐに」
「それでは」
「接近戦でなくては意味がないものです」
艦載機の使い方はおおむね何処でも同じであった。やはり艦隊同士が近付いてこその艦載機なのだ。だから今出撃させても何の意味もないものであった。

「ですから」
「そうですね。それでは」
「しかし。ここで彼等は迂回するとは」
「またどうして」
「機会を作らない為ですね」
「機会を！？」
「そうです。機会です」
彼女が今回述べたのはこのことだった。
「我々が攻撃する機会を作らない為です」
「そういえばそうですね」
「反転すればそこで隙ができます」
「そこを狙えば」
そういうことであった。そこに集中攻撃を浴びせればそれで勝敗は決していた。ハサン軍にその隙を見せなかったのである。シャイターンの見事な戦術センスであった。
「そうはさせずにここで迂回したのですか」
「何と」
「そして我々もです」
ブルコルジはまた言った。

## 第三十三部第三章　機雷戦その二十二

「今迂闊な動きをすればそれで終わりです」
「では陛下ここは」
「どうされるのですか？」
「彼等の方にすぐに艦首を向けます」
これが彼女の決断であった。
「すぐに。宜しいですね」
「すぐにですか」
「そうです。艦載機の収容を急ぎつつ」
こう指示を出すのであった。
「そのうえでです。宜しいですね」
「わかりました。そうして再び正面から激突するのですね」
「彼等と」
「そうです。今は再び」
意を決した顔で述べるブルコルジだった。
「ぶつかり合います。宜しいですね」
「わかりました。ですが陛下」
「どうしました！？」
「やはり。火力においては」
「彼等の方が」
ここで双方の火力の問題が出ていた。ティムール軍は速度と攻撃力に集中させている。バリアーや装甲も正面に集中させているのだ。従って正面からの撃ち合いならば同じ数同士であった場合どうしてもティムール軍が有利なものとなってしまうのである。それが今出ているのであった。
「また撃ち合えばそれだけ」
「我等が」
「仕方ありません」

しかしブルコルジはこう言うのであった。
「今はそうするしか」
「くっ、正面からの殴り合いに持って来たのか」
「それに」
「この戦い。あまりにも戦局が変遷していっています」
「はい、それは確かに」
「その通りです」
これもまたその通りであった。協同軍は最初は防御的な陣形を組みそこで床と鉄槌の戦術でティムール軍を倒すだけであった。しかしそれが今こうしてティムール軍とアヤグーズ軍の正面からの撃ち合いになっている。それは彼女の思わぬ展開であった。
「これは。我々にとっては」
「しかもハサン軍は今も動けません」
「このままでは」
「何とか戦い抜くしかありません」
その声が苦しいものになっていた。
「今は。ですから」
「わかりました」
「それしかありませんね」
参謀達もこう自らの主に対して答えるのであった。
「やはり。こうなっては今は」
「それしか」
「耐えるのです」
ブルコルジはまた言った。
「耐えられなくなればその時が」
「ええ。その時こそ」
「我々が」
敗北であった。それだけは避けなければならなかった。だからこそ今。彼女は正面からの撃ち合いに応じることを選択したのである。
「ですが陛下」

「それでも」
「わかっています」
自軍の不利は承知しているということである。
「ですが。今は」
「くっ・・・・・・」
「仕方ありませんか」
「最低限ハサン軍が来るまでは」
彼女はまた言った。
「耐えましょう。いいですね」
「わかりました。それでは」
「見事耐えましょう」
「我等の勝利の為に」
「耐えればそれで勝てます」
言い換えればそうなるのであった。耐えられなければ敗北だが耐えられれば勝利になる。実に簡単かつ単純明快な話ではあった。

## 第三十三部第三章　機雷戦その二十三

「この戦いは」
「座って戦うのではないのですね」
「それではあの主席に破られてしまいます」
それもそうなのだった。シャイターンの戦上手を考えればそうなることは充分に予想できた。彼の戦術指揮能力はアレクサンドロスやナポレオンをも凌駕するとまで言われだしているのだ。
「だからこそ」
「前にですか」
「私もまたそうですから」
「陛下も。確かに」
「それは」
参謀達は今のブルコルジの言葉にすぐに頷くことができた。
「猛将としてですね」
「虎として」
「先に言った通りです」
話が繰り返された。
「私は虎として豹に牙と爪を向けましょう」
こうしてアヤグーズ軍もまた正面からティムール軍に向かった。両軍は再び正面から激しく撃ち合うのであった。二つの光の壁がまず激突した。
「アヤグーズ軍の光がこちらを押しています！」
「これは！」
「構わん！」
シャイターンはその報告を聞いても強気なのを崩さない。
「このまま押せ！」
「押すのですね！？」
「一気に」

「そう、一気にだ」
アヤグーズ軍の光の壁がじわじわとこちら側に迫っているのを見ながらもそれでも言うのであった。軍の先頭にその旗艦を置きながら。
「火力を上げよ」
「ですが閣下、それは」
「これ以上は」
「バリアーか」
シャイターンは何故こちら側の火力が上がらないのかすぐに察した。エネルギーをバリアーの方にも振り分けているからである。
エネルギーはただビームにだけ振り分けるものではない。防御用のバリアーにも振り分ける。ティムール軍にしてもそれは同じなのだ。だからこそであった。
「それだな」
「はい、その通りです」
「ですから。これ以上は」
「ならば話は簡単だ」
シャイターンはその報告を聞いて簡潔に述べてきた。
「バリアーの分をすぐにビームに回せ」
「ビームにですか」
「そうだ」
こう言うのである。
「すぐにだ。いいな」
「ですが主席」
「それは」
防御を無視するという大胆を通り越して無謀と言ってもいい今のシャイターンの言葉に参謀達は一斉に顔を蒼ざめさせて反論するのであった。
「いざという時に」
「我々が」

「今あの光の壁を受ければだ」
「はい」
「そうなればバリアーなぞ意味はない」
こう言うシャイターンであった。
「だからだ。今は回せ」
「バリアーの分をも」
「その通りだ。いいな」
あらためて彼等に告げるのであった。
「そういうことだ」
「あえてなのですね」
「攻撃は時として最大の防御になる」
よく戦術において言われることであるが流石にここまで大胆にかつ即座にそれを実行に移した例はそうはない。戦乱に覆われているサハラでもだ。
「だからだ。いいな」
「わかりました」
「では」
「無論このイズライールのものもだ」
「なっ！？」
「イズライールもですか」
「そうだ」
驚く艦橋の者達に対して平然と告げたのであった。

## 第三十三部第三章　機雷戦その二十四

「当然だ。言ったな」
その平然とした口調でまた言ってみせた。
「あの光の壁を受けてはバリアーなぞ何の意味もないと」
「ええ。それは」
「確かに」
「だからだ。このイズライールもそれは同じだ」
その言葉の強さは変わらないのであった。
「私とて艦が撃沈されれば死ぬ」
「それは」
「死なない者なぞいない」
周りの者達が取り繕うとするがそれは自分から遮るのだった。
「誰もなアッラー以外の存在は必ず死ぬ」
イスラムの定理の一つである。
「そういうことだ。だからだ」
「バリアーを外されるのですね」
「その通りだ。このイズライールのものもな」
前を見据えた言葉であった。
「そしてビームにエネルギーを集中させよ」
「はっ」
ここで敬礼で返すハヒードであった。
「それではそのように」
「全艦で押し切る」
シャイターンの指示は続く。
「いいな」
「そして押し切った後は」
「ミサイルだ」
今度はそれであった。

「続けて放つぞ」
「わかりました。それではそちらの用意もですね」
「頼むぞ」
また告げたのだった。
「それの用意もな」
「今回は艦載機は」
続けてこれについても問われた。
「出されますか？」
「いや、突撃はしない」
それについては否定するシャイターンであった。
「ミサイルを放ったならばだ」
「はい」
「その次は」
「再びビームでの攻撃に移る」
こう言うのである。
「隙を見せずに三連射だ」
「三連射ですか」
「それで勝敗を決する」
これまでで最も強い言葉になっていた。
「それでな」
「ではやはり今の競り合いに勝つことこそ」
「勝敗の分かれ目なのですね」
「そういうことだ」
そうなのだった。まさに今この瞬間こそがティムール軍にとってもティムールという国家にとっても運命の分かれ目なのであった。
そういうことであった。
「いいな」
「それでは御言葉通り」
「ここは」
「そうだ。まずは全てのエネルギーを攻撃に向けよ」

またしても指示が出された。
「そしてだ。敵の光の壁を押し返し」
「そして続いてミサイルを」
「最後は三連射だ」
ここまで話したのであった。
「それでいいな」
「畏まりました。それでは」
「息もつかせずに」
「息をつかせてはならない」
この場合は敵に対して、である。一気呵成ことが彼の今の考えなのだ。
「いいな」
「ではすぐに」
「エネルギーを回せ」
こうしてエネルギーがバリアーの分までビームに回された。するとそれまで押されていた光の壁のせめぎ合いに次第にティムール軍が勝ってきたのであった。

## 第三十三部第三章　機雷戦その二十五

「ティムール軍の力が上がった！？」
「まさか」
アヤグーズ軍の将兵達はその光の壁のせめぎ合いを見つつ述べた。
「ここにきて。どういうことだ」
「何故力をあげた？」
「そうですか。そう来ましたか」
それがどうしてなのか。最初にわかったのはやはりブルコルジであった。
「ここで。そう」
「そうとは？」
「陛下、これは一体」
「バリアーの分のエネルギーも回してきたのです」
こう周りの者達に述べた。
「それだけエネルギーを得ましたので」
「ここで我等の攻撃を押してきたと」
「そういうことなのですか」
「そうです。だからこそです」
このことをブルコルジもすぐに見抜いたのであった。この辺りの戦術眼はやはり見事という他ないものであった。伊達に猛将と言われていないということだった。
「ここで。我々の攻撃を」
「陛下、それでは」
「どうされますか？」
「無論我々も同じです」
ブルコルジもすぐに決断を下したのであった。
「バリアーの分だけエネルギーを回すのです」
「そしてそれだけビームを強くさせるのですね」

「そうです。それでいいですね」
「覚悟が必要ですね」
参謀達は彼女の指示を聞いてもその表情が強張ったものであった。
「その様なことをするのは」
「守りを捨てるというのは」
「それでもです」
だがブルコルジはあくまで主張するのだった。
「さもなければ我々は敗れます」
「確かに」
「ここで押されれば我々はそれで」
「敗北です」
これはアヤグーズ軍もまた同じなのであった。ここで押し切られればそのまま彼等の敗北、滅亡になってしまう。まさに運命の分れ目であったのだ。
「ではやはり」
「ここは」
「そうです。何としても勝たなければなりません」
強い声で述べるブルコルジであった。
「ですから。宜しいですね」
「はっ、それではその様に」
「ここは」
「バリアーの分のエネルギーをビームに」
こうしてアヤグーズ軍もまた自軍のエネルギーをビーム、即ち攻撃に向けるのであった。こうしてアヤグーズ軍の光の壁はまた力を得たのであった。
再びティムール軍のビームを押す。やげて両者の中間点付近で拮抗しだした。そのままで激しくせめぎ合いに入ってしまったのだった。
それを見てシャイターンは。表情を変えずにこう述べたのであった。

「敵も同じことをしてきたな」
「アヤグーズ軍も我等と同じく」
「バリアーの分のエネルギーを回してきた」
シャイターンは言った。
「ここでな」
「どうされますか？」
「それでは」
「最早回すエネルギーはない」
だがシャイターンはこう彼等に返すのであった。
「移動の為のエネルギーの他はな」
「移動の他！？」
「では閣下」
「ビームの力を各艦最大限にしろ」
またシャイターンは指示を出したのであった。
「いいな」
「最大限ですか」
「そうだ。最大火力ならば我々が勝っている」
それは既にデータではっきりとしていることであった。

## 第三十三部第三章　機雷戦その二十六

「だからだ。それを発揮させるぞ」
「了解です」
「それではすぐにそのように」
「我々がこうすればアヤグーズ軍もまた同じ様にしてくるだろう」
既に敵の行動も読んでいるのであった。敵の立場に感情移入してみて考えてみる、口で言うのは容易いが実際にするのには困難な、その行動を今取ったのであった。
「だが。それこそが狙い目なのだ」
「それこそは、ですか」
「そういうことだ。アヤグーズ軍の火力は予想以上だった」
「はい」
実はこれに関してはシャイターンの予想以上なのだった。アヤグーズ軍は戦力を正面に極端に集中させて一点突破を思わせる陣形でティムール軍に対しているのである。それはそのせいなのだった。
「それじゃ我々もです」１００
「ですが主席、火力ならば」
「そもそも我々の方が」
「そういうことだ」
これが答えであった。
「最大限に発揮すればやはり相手ではない」
「ええ。だからこそ」
「ここは。最大限でなのですね」
「アヤグーズ軍の戦いを見せる」
こうまで言うシャイターンであった。
「ここでな」
「畏まりました」
こうしてティムール軍はその火力を最大限にさせた。それは最早

アヤグーズ軍の相手になるものではなくなってしまっていた。そして遂に。
「駄目です、防ぎきれません！」
「押し切られます！」
報告は最早悲鳴になってしまっていた。
「敵のビームが・・・・・・・来ます！」
「よけきれません！」
「何っ、まさか」
「この様な。押し切られるというのか」
「アヤグーズは・・・・・・」
これが多くの者達の最後の言葉になった。忽ちのうちにその光の帯の中に数千の艦艇が飲み込まれてしまった。ブルコルジの乗艦シャハラザードを含めた運のいい幾割かの艦艇だけが生き残っただけであった。
「最前列壊滅です！」
「戦力五十パーセントにダウンです！」
「半数が今の攻撃でやられたのですか」
「はい、最前列が」
「今ので」
生き残ったブルコルジに対してすぐに報告があがったのであった。
「五割です」
「完全に破壊された艦艇もかなりのものになります」
「くっ、我々は」
「陛下、また来ました！」
しかしここでまたすぐに悲鳴そのものになてしまっている報告があがったのであった。
「今度はミサイルです！」
「夥しい数です！」
「バリアーは！？」
ブルコルジは咄嗟にバリアーについて問うた。

「今は」
「おそらくは。無理かと」
「回すことは回せますがその前にミサイルが」
「来るのですね」
「はい」
返答は明瞭なものであった。
「既に。放たれようとしています」
「・・・・・・わかりました」
ブルコルジはその返答に対してこれまで見せたことのないような苦々しい顔で答えた。その顔は今この場にいる誰もが見たことのない程の苦々しいものであった。
「それではです」
「どうされますか？」
「回避運動を」
こう命じるしかなかった。
「全艦回避運動に入りなさい」
「わかりました」
「おそらくそれで終わりではないでしょう」
既にそれも読んでいるのだった。
「ですから。これは」
「わかりました。回避運動ですね」
「そうです」
それしかないのであった。

## 第三十三部第三章　機雷戦その二十七

「だからこそ」
「はっ、それではすぐに」
「全艦回避運動に移れ！」
命令が復唱され伝えられた。
「ミサイルが来るぞ！」
「チャフの撒布も急げ！」
こうしてミサイルへの備えが迅速に取られる。だがそれが間に合うか間に合わないかのうちにもうミサイル達が雪崩の勢いで迫るのであった。
「ミサイル来ました！」
「まずは弾幕を張りなさい」
ブルコルジは回避運動を命じつつこの指示を出すことを忘れなかった。
「それでまずはミサイルを減らし」
「はい」
「既にチャフは撒布していますね」
「まだ途中ですが」
「それでも」
「左様ですか」
まずはそれだけを聞いて納得するしかなかったのだった。
「わかりました。それにつきましても」
「はい。そういうことで」
「御了承を」
「ではまずは弾幕を」
あらためてこの指示を出すのであった。
「それでできるだけ数を減らしましょう」
「わかりました」

こうして実際に弾幕が張られ幾分かのミサイルが減らされはした。だがそれでも全てというわけにはいかずましてやティムール軍が放ったミサイルの数は相当なものであった。その為チャフの妨害も効かなかったものも多くそのうえ回避しきれなかった艦艇が次々と被弾したのであった。
「敵の損害、甚大です」
「そうだな」
その有様を見てシャイターンは参謀の言葉に頷いていた。
「それもかなりな」
「まずは二撃目は終わりですね」
「だが話はまだあるぞ」
「ではやはり」
「三連射だ」
それであった。
「その用意はいいか」
「すぐにでも」
力強い返答であった。
「放てます」
「よし、ならば三連射用意」
遂にこの指示も出すのであった。見ればアヤグーズ軍の陣のあちこちでまだ爆発が起こっている。そしてその爆発はそのままアヤグーズ軍の陣の乱れにもなっていた。今攻撃を仕掛ければどうなるか。それは最早軍人にとっては言うまでもないことであった。
「全軍攻撃態勢に入れ」
「了解です」
「全軍攻撃態勢！」
指示が復唱される。
「三連射用意だ」
「三連射用意！」
「急げ！」

この指示も復唱されたのであった。ティムール軍の全艦の砲門が再び開かれたのだった。
「第七艦隊射撃用意完了！」
「第十九艦隊射撃用意完了！」
「第二十六艦隊射撃用意完了！」
次々とイズライールの艦橋に報告があがる。それはそのままシャイターンの耳にも届いていたのであった。
「では主席」
「いよいよ」
「そうだ。これで決まる」
シャイターンは意を決した顔で周りにいる参謀達に対して応えた。
「これでな」
「それではいよいよ」
「遂に」
「そうだ。いいか」
その右手を高々と掲げた。
「全軍」
「全軍」
「三連射はじめ！」
「三連射はじめ！」
遂にこの指示が出された。それを受けてティムール軍の全艦艇の砲門から殺戮の光が放たれる。それは宇宙の闇を切り裂きそのままアヤグーズ軍を撃った。

## 第三十三部第三章　機雷戦その二十八

まずは一撃目であった。それを受けて多くの艦艇がまた沈んだ。
「ティムール軍の攻撃です！」
「ビームです！」
「くっ、回避！」
ブルコルジはすぐに指示を出した。だがそれは殆どの艦艇に間に合わなかった。
指示が届くより先にアヤグーズ軍の艦艇は次々に光になって消えていく。撃沈されないまでも大破されたり傷を受けた艦艇が続出しそれ等の艦艇は忽ち呻き声をあげつつ戦場を彷徨いだす。そこに再び攻撃が加えられたのであった。
「また来ました！」
「損害は！？」
「全軍の二割を超えました！」
この報告があがった。
「まだ詳しいことはわかりません」
「ですがコンピューターの統計では」
「そうですか。二割ですか」
「はい、少なくとも」
「それを超えました」
この報告は間違いのないものであるのがわかるのもブルコルジの直感故であった。
「撃沈された艦艇もかなりのものです」
「生存者の収容も今は」
「それよりもです」
ここでブルコルジは言うのだった。
「まずは再度回避運動に入りなさい」
「回避ですか」

「そうです」
それをまた言うのである。
「ここは。それです」
「それは」
「来ました！」
参謀の一人が女王に問おうとしたところでまた悲鳴にも似た報告があがるのだった。
「またティムール軍の攻撃です！」
「ビームです！」
「くっ、回避！」
「全軍回避！」
指示もまた悲鳴そのものになっていた。だがそれも適わず再びアヤグーズ軍は切り裂かれることになってしまった。そしてティムール軍の三連射が終わったその時には。アヤグーズ軍は最早壊滅状態に陥ってしまっていたのだった。
「陛下、最早我が軍は」
「このままでは」
「戦闘不能に陥るのですね」
「残念ですが」
無念の言葉による報告であった。
「このままでは」
「これ以上の戦闘は」
「わかりました」
ブルコルジもまた苦々しい顔でその報告を受けるのであった。
「それでは撤退です」
「はっ」
「わかりました」
この指示が出された。最後の指示であった。
「アッサルームに対して」
「了解です」

「しかし」
だがここで女王は言うのだった。
「ハサン軍と共にです」
「ハサン軍とですか！？」
「ですが彼等は」
「例え壊滅していようとも友軍を見捨てはしない」
女王の声はまさに鞭の強さがあった。
「それがアヤグーズ軍の誇りの筈です」
「では陛下」
「彼等を。やはり」
「そうです。護りつつ撤退します」
「ですがそれは」
「いささか困難であるかと」
ここでの彼等の言葉はこれでもかなり抑えたものであった。
「今ハサン軍は機雷に取り囲まれております」
「そして我々もまた」
「それでもです」
だがブルコルジは彼等の言葉を退けるのだった。
「これは誇りにかけてです」
「誇りですか」
「そう。アヤグーズの誇り」
毅然とした言葉であった。

## 第三十三部第三章　機雷戦その二十九

「それにかけて。ここは」
「では陛下」
「何としてもですね」
「そうです。万難を排して」
また言うのであった。その毅然とした言葉で。
「ハサン軍を戦場から離脱させそのうえで我々も撤退します。いいですね」
「わかりました。それでは」
「そのように」
彼等もまた意を決したのであった。そのうえで今迫り来るティムール軍を迎え撃つのだった。ここで彼等は思いも寄らぬ攻撃に出るのであった。
「全軍前へ！」
「前へですか」
「そうです。前です」
艦橋で腕を組みつつ前を見据えて指示を出したブルコルジであった。
「前へ。敵軍に向かいます」
「ですがそれでは」
「むざむざ敵の剣の前に己を晒すことになりますが」
「そうはなりません」
ブルコルジはそれは否定した。
「何故なら」
「何故なら？」
「ただ敵を突破するだけではないのですから」
こう言うのである。
「他にも方法があります」

「他に！？」
「それは」
「すぐにわかります」
ここでは答えないのだった。
「すぐに。ですから」
「・・・・・・わかりました」
「では。陛下」
「そうです。前です」
あらためて指示が出されたのだった。
「前に。宜しいですね」
「了解です」
こうしてアヤグーズ軍は正面から勝負を完全に己のものにせんと迫るティムール軍に対して突き進むのだった。それを見てティムール軍の提督達も言葉を失った。
「何っ！？まさかここで」
「前に！？」
「正気なのか！？」
皆アヤグーズ軍のその動きに唖然としていた。
「突撃してくるとは」
「まさか我々と勝敗を決しようというのか？」
「今になって」
「そうか」
それを見て冷静だったのはシャイターンであった。
「そう来るか。見事だと言っておこう」
「そう来るかとは？」
「主席、彼等の動きは一体」
「これが彼等の誇りであり最善の判断だ」
「誇り！？」
「判断！？」
「そうだ」

強い声で頷くシャイターンだった。
「ブルコルジ女王のな」
「といいますと」
「誇りとは」
「まず彼等は自分達だけで撤退する気はない」
「自分達だけで。それでは」
「そうだ。ハサン軍も救うつもりだ」
こう参謀達や周りの者達に述べるのだった。
「彼等はな」
「まさか。そんなことは」
「できません」
その可能性は誰もがすぐに否定するのだった。
「今この状況では」
「幾ら何でも」
「世の中には不可能と思えてその実可能だということは多々ある」
シャイターンはここでこう言ってみせた。

## 第三十三部第三章　機雷戦その三十

「かつてオーストリアの宰相だったカウニッツの言葉だったか」
「カウニッツですか」
「確かな。彼の言葉だ」
マリア＝テレジアの懐刀として辣腕を振るった人物だ。フランス及びロシアとの同盟を締結し宿敵プロイセンに挑みポーランド分割にも加わった稀代の外交官である。オーストリアの外交は伝統的に欧州の中でもかなりのものだがその中においても特筆すべき人物であった。
「それはここでも言える」
「彼等に対してですか」
「そうだ。まずハサン軍は救える」
彼は言った。
「これはな。可能だ」
「可能だと言われましても」
「それは」
「だができるのだ」
周りが何と言おうともシャイターンは言うのだった。
「彼等はな」
「では一体どうやって」
「それをされると」
「すぐにわかる」
奇しくもアヤグーズと同じ言葉になっていた。
「すぐにな」
「と言われましても」
「一体彼等はどうやって」
「ハサン軍を救われるのですか？」
やはり誰もがそれについては大いにいぶかしむばかりであった。

「我等は間も無く戦闘に入ります」
「このまま一気に」
「私はここで分けることもできた」
「分ける！？」
「どういうことですか！？」
「だが。分けても同じだとわかった」
周りの声に答えずにまた述べるのだった。
「だからだ。今はこれで行くことにした」
「今といいますと？」
「それは」
「陣形だ」
彼はそのそれは陣形であると言うのだった。
「我が軍のな」
「我が軍の！？」
「陣形というと」
彼等はあらためて自軍の陣形を見た。魚、それも回遊魚の如き形でそのままアヤグーズ軍に突き進む。そのうえで攻撃に入ろうとしていた。
「どういうことでしょうか」
「ここで二つとは」
「見るのだ」
また答えずにこう告げるのだった。
「アヤグーズ軍の動きをな」
「アヤグーズ軍！？」
「むうっ！？」
何とアヤグーズ軍はここで左右に別れた。それと共に正面から来たティムール軍の攻撃をかわしたのであった。そして全速力でティムール軍の左右を駆け抜けたのであった。
「なっ、早い！？」
「この速さが」

「やられたな」
シャイターンは敵軍がジ自軍の左右を通り抜けるのを見つつ述べた。
「こういうことだ」
「というとこれが」
「彼等の」
「そうだ。最善の考えだ」
このことをここでまた言うのだった。
「彼等のな」
「まさかここでこの様にして抜けるとは」
「彼等の機略でしょうか」
「あの女王陛下の」
「これが」
「そういうことだ」
シャイターンだからこそわかることであった。
「これがな」
「また大胆な」
「そのうえ今のハサン軍を助けようとは」
「ただ戦に強いだけではない」
彼はまた言った。
「仁の心もあるからこそ。猛将であり女王であるのだ」
「仁の心ですか」
「簡単に言うと人を慈しむ心だ」
シャイターンはその仁について述べた。

## 第三十三部第三章　機雷戦その三十一

「連合の言葉だ」
「連合のですか」
「そう、中国のだ」
彼は中国の古典にも通じているのだった。やはりその教養はかなりのものでありそれはサハラ以外の文明にも及んでいるのだった。
「中国古代の思想家が定めた言葉だ」
「中国の思想家がですか」
「孔子だ」
連合では聖人の一人とまで考えられている。その神格化は母国の中国では昔からだがこの時代ではそれは連合全体にまで及んでいるのである。
「彼が定めた言葉だ。人を愛し慈しむ心だ」
「それがですか」
「それを忘れていないということだ」
「あの女王だ」
「だからだ」
仁と孔子について述べたうえでまた言うのであった。
「ブルコルジ女王は必ずハサン軍を救出に向かうだろう」
「そういうことですか。ですが」
ここでフラームが言ってきた。
「それは果たして可能でしょうか」
「可能かどうかか」
「はい。おそらくアヤグーズ軍は我等の後方で一つに戻りそのままハサン軍に向かいますね」
「うむ」
その動きはもう読んでいるのだった。上から攻めるティムール軍をやり過ごしそのうえで合流しそれから下でもがき苦しんでいるハ

サン軍の救出に向かう。それまでの航路を既に予測しているのだった。
「そうだろうな。おそらくな」
「ではその場合は」
フラームはさらに言った。
「どうするかですが」
「おそらく我々は中々追いつけないだろう」
「彼等が全速力で向かうからですね」
「そうだ。それよりもだ」
ここでシャイターンは今度の戦略を頭の中で考えそれを実際に述べたのだった。
「このまま下に向かう」
「下にですか」
「そうだ」
それを言うのだった。
「そしてそのうえで二つのコースがある」
「二つの」
「まずは航路を変えアヤグーズ軍に向かう」
まずはそのコースだった。
「彼等を途中でな」
「ですが兄上、それは」
今度はアブーが長兄に述べてきた。
「やり過ごされる可能性もあります」
「そうだ。彼等の動きは相当な速さだからな」
「では一体」
「どうされるのですか？」
「もう一つのコースだが」
ここでまた言うのであった。
「これがベストになる」
「それが！？」

「ではそのコースは一体」
「どういったものでしょうか」
「うむ」
既にアヤグーズ軍はティムール軍の矛をかわしている。そのうえで二つに別れ全速力で駆け抜けているのである。戦場は常に動いていた。
「まずはハサン軍に向かう」
「ハサン軍にですか」
「そして彼等に攻撃を仕掛ける」
これがその二番目のコースであった。
「彼等をな」
「そうですか。アヤグーズ軍が目指す彼等を」
「先に攻撃を浴びせるのですか」
「そういうことだ」
彼が考えているのはそれだったのだ。

## 第三十三部第三章　機雷戦その三十二

「アヤグーズ軍を撃つより彼等だ」
「彼等をですか」
「その通りだ。それではな」
「はい」
「それでは」
「このままハサン軍に向かう」
こう指示を出すのであった。
「このままな。いいな」
「了解です」
こうして擦れ違った両軍はそのままそれぞれのコースに向かう。動きは攻撃を仕掛けた分だけティムール軍の方が遅れていた。しかしそれは一瞬だった。
「すぐにハサン軍の方に」
「了解です」
ブルコルジは指示を出す。それに参謀達が頷く。
「それではすぐにでも」
「向かいましょう」
「ただしです」
ここでブルコルジの顔が険しいものになるのだった。
「全速力で向かうのです」
「そうですね」
「さもなければ」
「そうです。どうやら彼等も」
ブルコルジはモニターに映るティムール軍の動きを見て述べるのだった。見れば彼等もかなりの速さで下に向かっていた。
「同じのようです」
「そうですね。おそらくは」

「彼等もまた」
「ハサン軍は何としても救います」
強い決意に満ちた言葉であった。
「ですから。何としても」
「はい、何としても」
「彼等より先に」
「ハサン軍に」
彼等は必死に友軍に向かっていた。その頃ハサン軍もハサン軍で必死にもがいているのであった。
「くっ、まだか」
「はい、残念ですが」
バンダルに対してギーヴが苦い顔で述べるのだった。
「ようやく包囲されている艦隊等はなくなりましたが」
「そうか」
「ですが。それでも」
彼は言うのであった。
「機雷だけで損害はかなりのものになっています」
「そうか」
「そしてです」
彼はまた言った。
「機雷は執拗に我等にまとわりつき」
「逃れられないか」
「そのうえです」
バンダルの言葉が深刻極まりないものになった。
「ティムール軍がこちらに来ています」
「彼等がか」
「はい」
見ればモニターにもそのティムール軍が映っていた。そのまま彼等に向かって来ていた。
「我々に対して」

「そうか」
「どうされますか？」
「機雷も気になるがだ」
バンダルがギーヴの言葉を聞いて述べた。
「彼等に攻められてはどうにもならない」
「その通りです」
「しかしまだ時間があるな」
ティムール軍との距離を見ての言葉である。
「まだな」
「ではどうされますか？」
「一斉射撃だ」
まず出した指示はそれであった。
「まずはな」
「一斉射撃ですか」
「そうだ。将兵の練度が不安で命じられなかったが」
機雷は一斉射撃でまとめて排除することが多い。しかし今のハサン軍はその質の低さにより味方を撃つ可能性も考えだからこそバンダルはそれを命じなかったのである。

## 第三十三部第三章　機雷戦その三十三

「今はな」
「そうも言ってはいられませんか」
「そうだ。ことは急を要する」
苦い顔での言葉であった。
「これまで以上にな」
「それでは」
「全艦一斉射撃！」
その指示を彼自身も下した。
「今すぐだ」
「了解です。全艦一斉射撃！」
「全艦一斉射撃！」
命令が復唱された。それはすぐに全軍に伝わった。
「何っ、一斉射撃！？」
「まさかここで」
「いえ、間違いありません」
司令達がその命令を疑うがすぐにこう返答が返って来たのだった。
「全艦です」
「一斉射撃か」
「そうです」
やはり指示は間違いないのであった。
「間違いありません」
「本気か」
彼等はバンダルの指示に困惑せざるを得なかった。
「今のこの軍で一斉射撃なぞ」
「しかもこの様な状況で」
「無事では済まんぞ」
また言うのだった。

「例え撃ったにしろ」
「味方にも犠牲が出るぞ」
「そうなれば」
「ですがそれでもです」
しかし命令は確認されるのだった。
「間違いありません」
「やはり」
「そうか。一斉射撃だな」
司令達はその命令が間違いないことを確信せざるを得なかった。だがそれでもその困惑した表情はそれぞれに張り付いたままであった。
「わかった」
「はい」
「すぐに司令に返信せよ」
「わかりました。それでは」
こうしてそれぞれ命令の了承が返信されるのであった。
「止むを得ない」
「全くだ」
だがそれでも司令達は言い合うのだった。
「命令は命令だ」
「それならばだ」
「従うしかない」
命令は絶対だった。軍人にとって命令とは絶対のものである。仮にも一個艦隊を率いる彼等にとってはそれはどうしても従わなくてはならないものだったのだ。
だからこそ彼等は。今こうして指示に従う。そうせざるを得なかった。
「覚悟を決めてくれたか」
「そのようです」
バンダルに対してギーヴが言葉を返していた。

「全ての艦隊から返信がありました」
「そうか。これでいいな」
「ですが」
「わかっている。彼等も抵抗があるようだな」
「それはよくわかります」
それを察知しない彼等ではなかった。司令達の逡巡は僅かだったがそれでもそれがあったと察するには充分過ぎる時間であったのだ。
「無理もありません」
「そうだな。危険なのは間違いない」
「それでもなのですね」
「今はな。多少の犠牲は出てもだ」
「一斉射撃を」
「うむ」
攻撃が確認されてそのうえで頷き合うのだった。
「ここでな。それで機雷を取り除く」
「そうしてアヤグーズ軍と合流ですね」
「今陛下は何処におられるか」
「そのままこちらに向かっておられます」
モニターがハサン軍からアヤグーズ軍に移る。見れば彼等は確かにハサン軍の方に向かって来ていた。速度もかなりのものだ。

## 第三十三部第三章　機雷戦その三十四

「数は。少ないな」
「ティムール軍との戦闘でかなりの損害を出してしまっています」
「そうだな。やはりな」
「全軍の二割強は減らされています」
「対するティムール軍は」
「然程」
これが勝敗の何よりの証であった。
「減ってはおりません」
「そうか。やはりな」
「そしてハサン軍もまた」
「どちらが先に来る？」
「アヤグーズ軍も速いのですが」
ここに答えが半分出ていた。
「それ以上に」
「ならば余計にだ。撃つぞ」
「了解です」
「一斉射撃だ」
またこの指示が出された。
「いいな」
「了解です」
こうして遂に一斉射撃が放たれた。彼等は機雷を潰していく。しかしそこでやはりハサン軍の艦艇の幾らかは友軍の砲撃を浴びる羽目になった。
「くっ、損害は！」
「中破です！」
あの先に突撃を独断で進めようとしていた艦長に副長が答えた。
「何とか撃沈されずに済みましたが」

「それでもか」
「はい、被弾は免れませんでした」
「くっ・・・・・・・」
「航行はできます」
それは確認された。
「ですがビーム砲に損害を受け」
「攻撃に支障があるのだな」
「残念ながら」
「・・・・・・航行できるだけでもよしとするか」
彼はそれを不幸中の幸いだと思わざるを得なかった。
「今はな」
「では艦長、すぐに」
「この場合はダメージコントロールだったな」
「そうです」
この指示の確認にこそ危うさがあった。損傷を受けた場合のダメージコントロールが必須なのは言うまでもない。それを確認するところにこの艦長の軍人としての資質が出てしまっていた。
「ここは」
「よし、ではすぐに応急班を向かわせろ」
「わかりました」
「そのうえでだ」
「そのうえで？」
「一刻も早く逃げ出す用意をするのだ」
もう彼はそのことを念頭に置いているのだった。
「今はな。いいな」
「わかりました」
「生きなければならない」
彼は言った。
「何としてもな」
「そうですね。とにかく生きないと」

「わしには家族がいる」
「私もです」
彼等は生きることだけを考えていた。
「ですから。何があっても」
「助かりましょう」
これは今ここにいるハサン軍の将兵の多くが抱いている共通の感情だった。それはすぐにバンダル達にも伝わったのであった。
「またしても将兵の足並みが乱れております」
「機雷への一斉射撃でか」
「その通りです」
「覚悟はしていた」
それを聞いてもバンダルは今は表情を崩さなかった。
「それはな」
「左様ですか」
「機雷は我等の間にも入っていた」
「はい」
そこに訓練がおぼつかない軍で一斉射撃を加えれば味方にも攻撃の向こう側にいる攻撃が及び損害が出るのは言うまでもないことであった。そういうことだったのだ。
「覚悟のうえだ」
「そうですね。それは」
「それよりもだ」
その足並みの乱れを受けたうえでの言葉であった。
「行くぞ」
「撤退ですか」
「それと共に合流だ」
こうギーヴに告げたのだった。
「今はな。アヤグーズ軍と合流するぞ」
「アヤグーズ軍との合流ですか」
「こちらに来てくれている」

自分達を救う為にだ。その気概と侠気を彼等受けていたのである。
「それならばな」
「それでは」
「全軍に告ぐ」
またしてもここで指示を出した。
「全軍アヤグーズ軍と合流するぞ」
「はっ」
「そこで例えハサン軍との戦闘になろうともですか」
「それでもですか」
「そうだ。それもまた覚悟のうえで」
強い決意に満ちた言葉だった。
「行くぞ。いいな」
「了解です」
「我等だけ助けてもらうわけにもいかない」
バンダルは指示を出したうえでこう言うのだった。
「せめて。その心だけでも受けてだ」
こう言いながら今アヤグーズ軍との合流に向かうのだった。彼等もまたその意地を見せようとしていたのであった。

## 第三十三部第四章　犠牲を厭わずその一

犠牲を厭わず

撤退に入る為にハサン軍の救出に向かったアヤグーズ軍。しかし今この流れは彼等にとっては全く予想だにしなかったことであった。

「ハサン軍が機雷を払ったのですか」

「そうです」

ブルコルジにもその報告が届いていた。

「そして今こちらに」

「来ているのですね」

「この通りです」

モニターにそのハサン軍の動きが映し出された。見ればその話通りであった。

「彼等は今こうして」

「まさかですね」

ブルコルジはモニターを見たうえであらためて述べたのだった。

「彼等がそうして来るとは」

「犠牲を厭わず一斉射撃を加えて機雷を取り払いました」

「機雷をですね」

「そうです」

また報告があがった。

「そうして彼等は今」

「こちらに向かっていると」

「その通りです。どうされますか？」

「それはまずはいいことです」

このことは素直によしとするブルコルジだった。

「彼等が機雷から脱出できたことは」

「ですが損害は出しました」

このこともまた述べられるのだった。

「その一斉射撃の際に」
「確か機雷に複雑に囲まれたりしていましたね」
「そうです」
そのことも述べられたのだった。
「ですがそれを振り払う為にあえてです」
「また随分と思い切った決断を取りましたね、ハサン軍も」
「それだけ彼等も必死なのでしょう」
そのことはもう彼等もわかっていた。戦場においては必死でなければ生きてはいられない。今実際に戦場にいるからこそわかることであった。
「生きる為に」
「では我々もまた」
「はい。生きる為に」
「彼等と合流します」
変更された方針はこれであった。
「宜しいですね。それで」
「はっ、それでは」
「全軍ハサン軍と合流します」
あらためてこの指示が出された。
「すぐに」
「わかりました」
こうしてアヤグーズ軍もまたハサン軍に合流せんと向かうのだった。そしてそれはハサン軍もまた同じであった。彼等もアヤグーズ軍に向かうのだった。
「アヤグーズ軍の動きは速いな」
「そうですね」
ギーヴがバンダルの言葉に頷いていた。
「ですがそれと共に」
「ティムール軍の動きもな」
「そうです。彼等もまたその動きは」

「速い」
そうなのであった。
「かなりの速さだ。どうするかだが」
「一戦交えてもですね」
「まだ数は我が軍の方が上だ」
「確かに数では」
「最早。戦えるかどうかは疑問だがな」
とりわけアヤグーズ軍はそうであった。他ならぬティムール軍との戦闘によりそのダメージはかなりのものとなっている。これ以上の戦闘は無理なのは自明であった。
「今の我等は」
「ではやはり」
「撤退だ」
最早選択肢はこれしかなかった。
「撤退だ。そうするしかない」
「はい。それでは」
「全軍撤退だ」
彼もまたこの決断を下すのだった。
「我が軍も機雷と一斉射撃により犠牲を多々出しているしな」
「はい。その通りです」
「数だけというのがここで祟ったか」
バンダルは苦々しげに述べた。

## 第三十三部第四章　犠牲を厭わずその二

「練度が少ない軍というものはな。所詮は」
「何であると」
「デクの棒だ」
こうまで酷評するのだった。
「所詮な。数だけ集めても何の意味もない」
「ですが閣下」
「わかっている」
また言葉を返すバンダルだった。
「言っても仕方がない」
「そうです。最早」
「今は犠牲を出してもだ」
「撤退ですか」
「そうだ。遅れてしまった者は置いておく」
これもまた苦渋の決断であった。
「それよりもだ。今は」
「より多くの将兵を戦場から離脱させるのですね」
「それしかない」
前に映る両軍の動きをモニターから見据えつつの言葉だった。
「一兵でも多くな」
「では今は」
「そうだ。急がせるのだ」
「落伍する艦艇は置いて」
「彼等にはこう伝えるのだ」
バンダルはまた言葉を続ける。
「動けなくなったならば降伏せよとな」
「降伏ですか」
「シャイターン主席は冷徹だが捕虜を手にかける人物ではない」

確かに謀略を好み必要とあらば暗殺も辞さない。しかし彼は捕虜や動けない者を手にかけるような男でもないのだ。それには理由がある。
彼は常々こう言っている。
「敵兵を捕まえたならば捕虜にでよ」
そしてこうも言っている。
「捕虜は粗末にするな」
それは何故かというと捕虜はその闘いが終わった後で自軍の将兵に組み入れることができるからだ。政治的な判断からそうしているのである。連合軍が人道やそれ以上に評判を考慮して捕虜に対して紳士的であるのとは全く違った理由によってなのだ。
「だからだ。それでいいな」
「はっ、それでは」
「そのように」
ギーヴだけでなく他の参謀達も彼の言葉に頷いたのであった。
「そうさせて頂きます」
「だからだ。今は多少の落伍者が出てもだ」
「それよりも多くの将兵の撤退を優先させると」
「その通りだ」
また言うバンダルだった。
「それでいいな」
「苦い決断ですね」
ギーヴがまた言う。
「実に」
「仕方がない」
また言うバンダルだった。
「我々は敗れた」
「はい」
それもまた認識せざるを得ないことであった。
「敗れたのならばだ。今は」

「壊滅を避けるしかですね」
「そういうことだ」
また言うのだった。
「壊滅を避ける為にだ。多少の犠牲はだ」
「ですね。それでは」
「全速力で撤退する」
バンダルはさらに細かく述べた。
「いいな」
「はっ、それでは」
こうしてハサン軍はすぐに撤退に入った。その言葉通り彼等はすぐに全軍に指示を出した。そうしてすぐに全軍をアヤグーズ軍に対して向けるのだった。
それはアヤグーズ軍にも見えていた。彼等もそのハサン軍の動きを見て言った。
「彼等も動いてくれましたね」
「そうですね」
「どうやら」
参謀達は女王の言葉に頷いていた。

## 第三十三部第四章　犠牲を厭わずその三

「ではこのまま」
「そうです、合流です」
「そのうえで撤退しましょう」
「アッサルームに」
「その通りです」
「では」
「しかし」
だがここでブルコルジは顔を曇らせた。
「ティムール軍の動きも速いですね」
「むっ！？」
「そういえば」
見ればそうであった。その動きはかなり迅速だ。その速度を見て彼等アヤグーズ軍も警戒の念を強めているのだった。
「このままでは追いつかれるかも」
「追いつかれはしないまでも」
彼等は口々に言い合う。
「このままでは後方につかれ」
「そのまま攻撃を」
「そうです。そうなってしまえば危機です」
深刻な顔で述べるブルコルジであった。
「撤退の際にかなりのダメージを受けます」
「その通りです。ですが」
「彼等の動きも」
「やはり。ただ撤退できるわけではありませんか」
モニターを見て深刻な顔で述べるブルコルジだった。
「流石ですね。ティムール軍も」
「ええ。確かに」

「シャイターン主席。ここでも」
「速度はこれで精一杯ですね」
「はい」
また報告が述べられた。
「これ以上の速度は出せません」
「若しこれ以上の速度を出せば」
「どうなりますか？」
「艦隊の崩壊を招きます」
この報告が述べられたのだった。
「このままでは」
「そうですか」
「ですからこれ以上は」
「出せはしません」
「いえ」
しかしであった。ここでブルコルジは言うのであった。
「出しましょう」
「なっ、陛下」
「速度をですか」
「そうです」
はっきりと告げたブルコルジであった。
「そうです。速度をより多く出しましょう」
「ですが陛下、それをしたならば」
「艦隊としての陣形が」
崩れるというのであった。しかもそれだけではないのであった。
「落伍する者が出ます」
「そうなってしまえば」
「只でさえ我々は」
参謀達は危惧する顔で口々にブルコルジに対して述べるのであった。
「損傷を受けている艦艇が多いです」

「その彼等が落伍することも」
「止むを得ません」
これはバンダルと同じ言葉であった。そしてこの言葉を出す事情もまた同じであった。
「今は」
「止むを得ないというのですか」
「その通りです」
また述べるブルコルジだった。
「落伍者は置いていくしかありません」
「彼等はですか」
「こう伝えておくのです」
ブルコルジは素早く、そして険しい声で周りの参謀達に対して述べた。
「ティムール軍が来たならば降伏せよと」
「降伏ですか」
「そうです」
こう告げるのであった。

## 第三十三部第四章　犠牲を厭わずその四

「その場合は降伏せよと。伝えるのです」
「また思い切った御決断ですね」
「思い切ったですか」
「はい」
参謀の一人が深刻な顔で彼女に告げた。
「降伏せよとは。戦わずに」
「死ねとは言いません」
その指示は全く考えていないブルコルジだった。
「それは」
「左様ですか」
「そうです」
また言うのであった。
「何があろうともです」
「では陛下」
「落伍者が出ても」
「そうです。速度をあげるのです」
再度指示を出したのだった。
「そうして一刻も速くハサン軍と合流し」
「そのうえで撤退なのですね」
「その通りです」
またしても指示が確認されたのであった。
「わかりましたね」
「まずは何があっても合流と」
「そういうことですか」
「さもなければ全軍生き残ることはできません」
やはりここでもバンダルと同じことを言っていた。
「現に」

「現に？」
「ハサン軍を御覧なさい」
そのハサン軍を見るように周りの参謀達に対して告げた。
「彼等を」
「むっ！？そういえば」
「落伍者が出てもそのまま進んでいますな」
「彼等もまた」
「そうです。同じ決断を下したのです」
それを今参謀達に告げるブルコルジであった。
「全ては。全軍が生き残る為に」
「例え落伍者が出ようともですか」
「多くが生き残る為に僅かを切り捨てる」
戦場ではままあることだが今回がそうなのであった。そういうことであった。
「それです」
「ですね」
「では」
彼等も決断に従うしかなかった。そうでもしなければ軍として生き残れないのは明らかだったからだ。例えそれがどれだけ非常な決断としてもだ。
アヤグーズ軍は速度を速めた。それにより艦隊としての形を崩し落伍者も出してきた。それはティムール軍からも確認された。
「アヤグーズ軍もハサン軍も落伍者を出してきています」
「そうだな」
シャイターンは参謀達の報告に対して静かに頷いていた。その有様はイズライールのモニターからもはっきりと映し出されていたのである。
「そこまでしてもということだな」
「戦場からの脱出を焦っていますか」
「そうだ」

やはりシャイターンはそれをはっきりとわかっていた。
「ここで悠長にしていれば終わりだ」
「我々に捕捉されですね」
「そういうことだ。虎も危機に陥れば我が身を切り捨てもする」
こう述べるのだった。
「傷付いた部分をな」
「生き残る為にですね」
「その通りだ。しかしだ」
「はい、我等もですね」
「彼等を行かせるわけにはいきません」
そうなのだった。戦争とは相手をどれだけ倒すかということである。とりわけ撤退する敵軍を追う時にはそれがとりわけ重要になるのである。だからだった。
「何があっても」
「そうだ。だからだ」
「速度をあげますか？」
この提案が出て来た。
「我等も。そして彼等に追いつきますか？」
「どうされますか？」
「速度はこのままだ」
だがシャイターンはここでは速度をあげようとはしないのだった。

## 第三十三部第四章　犠牲を厭わずその五

「このままでいい。陣形を崩すな」
「左様ですか」
「例え彼等がどれだけ急ごうと追いつける」
こう計算しているのだった。
「だからだ。速度はあげずともよい」
「左様ですか」
「そうだ。その時に狙うのだ」
シャイターンはまた言った。
「いいな」
「その時にですか」
「彼等がどれだけ急ごうともそれには限度がある」
その通りだった。確かに今アヤグーズ軍もハサン軍もなりふり構わぬ速度で急いでいる。しかしそれでも限度があるのは道理だった。どの様な艦にも速度には限界があるのだからだ。
「だからだ。このままでいい」
「我々はですか」
「一撃でも加えられればそれでかなりのダメージを与えられる」
「撤退の際にですね」
「そういうことだ。その一撃だけでもいいのだ」
「わかりました」
「それに」
ここで彼はふと一言加えてきた。参謀達もそれを問う。
「それに？」
「何か」
「今多くの落伍者が出ているな」
シャイターンが今度言及したのは今アヤグーズ軍とハサン軍が出している落伍者達だった。見れば結構な数の艦艇が軍の速度につい

ていけず置いてけぼりんされている。
「そうだな」
「ええ。そうですが」
「それが一体」
「これもまた損害のうちだ」
こう言うのだった。
「彼等にとってはな」
「そうですね。軍全体としては」
「確かに」
その通りだった。損害は戦闘における犠牲者だけではないのだ。
今出てしまっているような落伍者もまたその損害のうちなのである。
戦力が減らされているということだからだ。
「その通りです」
「ではそれを出させることもまた」
「そうだ。損害を与えているということになる」
冷静に前を見据えての言葉であった。
「今もな」
「そういうことですか。それでは」
「今のまま彼等を急がせるのも」
「それもまたよしだ。そしてだ」
シャイターンはさらに言葉を続けさせた。
「その落伍者達だが」
「どうされますか？」
「彼等は」
「今は放っておくのだ」
無視しろというのであった。
「今はな。いいな」
「まずは敵軍ですか」
「そうだ。彼等をこのままアッサルームに追いやり」
「はい」

「それからは」
「そのうえで兵の一部を向け降伏を勧めろ」
「降伏をですか」
「そうだ」
ブルコルジとバンダルの読みは正しかった。やはりシャイターンはここで降伏を勧めることを選んだのであった。しかも迷うことなく。
「降伏を勧めるのだ。いいな」
「攻撃はされないのですか」
「動けぬ者を攻めることはない」
シャイターンは迷うことなく述べた。
「そんなことをしても何の誇りもない」
「誇りですか」
「アッラーが望まれるのはあくまで武器を手にした戦いだ」
アッラーの名前もまた出すのだった。

## 第三十三部第四章　犠牲を厭わずその六

「武器を持つ者、戦える者同士のな」
「では落伍者は」
「そうだ。武器を振るうべき相手ではない」
それは不変であると言わんばかりの口調だった。
「何があろうともな。それにだ」
「それに？」
「彼等はまた戦うことができる」
ここでもブルコルジやバンダルの予想通りのことになった。やはりシャイターンは政治的な決断をしたのであった。
「だからだ。彼等の命を奪うよりもだ」
「それよりも後にですね」
「そういうことだ。我が将兵として戦ってもらう」
つまり後に自軍に組み入れるということであった。
「軍人として役に立たぬのならそれはそれでいい」
「その場合はどうされるのですか？」
「他の仕事で国力増進に務めてもらう」
そういうことであった。彼が政治家である由縁がここで出ていた。政治家として国力の増進も見据えて捕虜として命は取らないのであった。
「どんな仕事でもな」
「そういうことですか」
「うむ。そうだ」
これがシャイターンの考えであった。
「わかったな。いいな」
「はっ、それでは」
「そのように」
彼等の言葉に頷きそのうえでまた指示を出した。

「では。全軍進路速度はそのまま」
「はっ」
「敵の追撃を続ける。いいな」
「わかりました」
「それではそのように」
こうして彼等は速度も陣形も保ったまま追撃を行っていた。アヤグーズ軍とハサン軍はその彼等の目の前で落伍者達を出しながらも何とか合流を果たしたのだった。
「まずは合流できましたな」
「はい」
バンダルとブルコルジはモニターを通して話をしていた。
「何とか」
「ただ。落伍者は思ったより多かったです」
「こちらもです」
ここでお互いに顔を曇らせるのだった。
「我が軍は二割の落伍者を出しました」
「二割ですか」
「申し訳ありません」
沈痛な顔でブルコルジに謝罪するバンダルだった。
「重ね重ね」
「何故それ程までに？」
謝罪するバンダルに対してモニターから怪訝な顔を見せるブルコルジだった。
「謝罪されるのですか？私は別に」
「今の事態は全て私が至らないからです」
「閣下が」
「はい」
また沈痛な顔で述べた。
「そうです。ハサン軍は陛下及びアヤグーズ軍の力となる筈だったのに足手まといになってしまい」

「それは違います」
だがブルコルジは彼のその言葉をすぐに否定した。
「閣下、それは」
「違うと言われるのですか」
「そうです。全ては私の判断ミスです」
彼女は彼女でこう言うのであった。
「機雷をどのようにして向こうに使われるのかを読めなかった私の」
「陛下のですか」
「そうです」
これが女王である彼女の主張であった。
「決して。閣下のせいでもハサン軍のせいでもありません」
「陛下・・・・・・」
「だからです」
女王はさらに言葉を続けてきた。
「今はそれよりも」
「撤退ですか」
「はい。確かに我等はここでの戦いに敗れました」
「はい・・・・・・」
敗北という言葉にバンダルの顔がさらに沈痛なものになった。それはこの戦いでの敗北がそのままアヤグーズの滅亡になることがよくわかっていたからだ。
「ですが戦いはまだ続きます」
「戦いは」
「そうです。そして」
ブルコルジはさらに言う。

## 第三十三部第四章　犠牲を厭わずその七

「まだハサンには挽回できる機会があります」
「我等にこの度の敗戦の機会を」
「ですから」
ブルコルジの言葉は続く。
「ここはすぐに撤退しましょう。宜しいですね」
「わかりました。それでは」
「はい。全軍撤退です」
遂に女王から指示が出された。
「宜しいですね」
「はっ、それでは」
こうしてアヤグーズ軍とハサン軍は合流してすぐに全軍撤退となった。だがそこにティムール軍がその牙を剥き出しにして襲い掛かって来た。
「攻撃射程範囲内に入りました！」
「敵の動きは」
「戦闘の意図は見られません」
報告が次々にシャイターンの下に送られる。
「速やかに撤退に移っています」
「そうか。やはりな」
シャイターンはその報告を聞いて静かに頷くだけだった。
「そう来たか」
「では主席」
「ここは」
「そうだ。攻撃を浴びせよ」
最早その指示は決まっているものであった。
「速やかにな」
「はっ」

「わかりました」
「全艦攻撃用意」
「全艦攻撃用意」
指示が復唱される。それと共にティムール軍の全艦が攻撃態勢に入った。
「ビーム砲及びミサイルの一斉発射だ」
「ミサイルもですか」
「あるだけのミサイルを放て」
シャイターンはここで思いきった指示を出してきた。
「いいな。全てだ」
「全てですか」
「ですが主席」
全てと聞いて危惧を覚える者もいた。
「ここでミサイルを全て放てば」
「後の戦闘に影響が出ると言いたいのだな」
「御言葉ですが」
やはり彼の言いたいことはそれであった。
「その通りです。ですから」
「案ずるな。ここでの艦隊戦はこれで終わりだ」
「これでですか」
「そうだ。これで終わりだ」
こう告げるシャイターンであった。
「これでな」
「それは何故ですか？」
「まず最早彼等に我等に艦隊戦を挑む力は残っていない」
まずはこれであった。
「これまでの消耗と戦力の低下でな」
「それでですか」
「そう。そして」
言葉をさらに続けてきた。

「彼等は最後の戦いは別の場所で挑むつもりだ」
「ということは」
「やはり」
「そうだ。アッサルームだ」
言わずと知れたアヤグーズの心臓のさらに中心である。そこにアヤグーズの王宮があり政府のあらゆる中心機関が存在している。まさに命の中心である。
「そこでの戦いとなる」
「降下による惑星戦ですか」
「だからだ。最早ミサイルは不要だ」
こういうことであった。
「それよりもだ。ここではできるだけ損害を与えよ。わかったな」
「はっ、了解です」
「それでは」
こうしてビーム及びミサイルでの一斉攻撃の用意が進められた。ティムール軍は協同軍との間合いを詰めようとしながらさらに攻撃に入るのだった。
「攻撃用意は整ったな」
「はい」
「今まさに」
「よし。それではだ」
報告を聞きここでシャイターンの右腕が高々と掲げられた。

## 第三十三部第四章　犠牲を厭わずその八

「全軍」
「全軍」
「撃て！」
右腕が振り下ろされた。そのうえで遂にティムール軍の全艦のビーム及びミサイルが放たれた。それは撤退しようとする協同軍の背に襲い掛かって来た。
「敵の攻撃が来ます！」
「ビーム及びミサイルです！」
「バリアーを！」
最後尾で撤退の指揮を執るブルコルジはすぐに叫んだ。
「そして弾幕も！至急です！」
「は、はい！」
「わかりました！」
最後尾に残る協同軍の多くはアヤグーズ軍の精鋭達であった。彼等は己の主の命令を受けてすぐに動く。即座に艦艇にバリアーがさらに張られビーム及びミサイルで弾幕が張られる。しかしそれで全ての攻撃が防げないということは最早自明の理であった。
「だ、駄目です！」
「弾幕をかいくぐってミサイルが！」
「ビームも！」
「衝撃に備えなさい！」
撃沈されればそれもどうしようもないが今はこう言うしかなかった。
「すぐに！」
「りょ、了解です！」
「それでは！」
すぐにその指示に従い全員それぞれでも防御に動く。しかしそれ

は間に合わず多くの艦がビーム及びミサイルを受け光に変わり中央からへし折れた。ブルコルジの旗艦シャハラザードは何とか無事だったがそれでも周りの艦艇の多くが沈められてしまったのだった。
「陛下、今のでさらに」
「多くの艦艇が」
「ですが。生き残る艦は生き残りましたね」
ブルコルジは眉を動かすことなくこう問うてきた。
「それでも」
「ですが」
「ならばそれで充分です」
毅然とした声で述べたのであった。
「それで」
「そうなのですか」
「後はです」
その毅然とした言葉を続けさせる。
「アッサルームまで」
「撤退ですね」
「そしてです」
言葉はさらに続けられた。
「家族のある者及び恋人のいる者」
「！？」
「陛下、何を」
「そしてハサン軍の将兵はそのままアッサルームを離脱するのです」
こう告げるのだった。
「このアッサルームから」
「陛下、何故」
「それは」
「そして最後まで戦わんとする者だけが」
参謀達の問いに答えずにさらに言うブルコルジだった。
「アッサルームに残るです」

「陛下・・・・・・・」
「やはり」
「そうです。最後の戦いです」
語るブルコルジにはもう迷いはなかった。
「これこそが」
「わかりました。それでは」
「我々もまた」
「しかしです。家族のいる者は帰るのです」
先に述べたことをここでまた告げるのだった。
「親、兄弟、妻子のいる者はです」
「!?それではもう」
「殆ど。誰も」
「ならばそれでいいではないですか」
言葉は前を見たまま語られる。後ろを見ることも横を見ることも決してなかった。
「最早アヤグーズは」
「くっ・・・・・・」
「それはそうですが」
「ですが」
「国が滅んだとしても国土は残ります」
ブルコルジはここでも正面を見据えていた。

## 第三十三部第四章　犠牲を厭わずその九

「そして民も」
「我等もですか」
「そうです。貴方達は生き残るのです」
その言葉は否定を許さない言葉であった。決して。
「必ず。何があろうとも」
「アヤグーズが滅んでもですか」
「アヤグーズの民は」
「滅ぶのは主だけでいいのです」
「主だけですか」
「そうです。私だけが」
彼女だけがと言葉を続ける。やはりそこには周りの者に対して拒むものを許さないものがあった。それは彼女の強い決意そのものであった。
「滅べばいいのですから」
「御言葉ですが陛下」
決意を見せる彼女に対して参謀の一人が述べてきた。
「あのシャイターン主席は陛下を欲しています」
「そうです」
他の参謀達も述べてきたのだった。
「ですから何も陛下が滅びられることはありません」
「シャイターン主席の誘いを受けられては」
「戯言ですね」
その言葉は一言で退けるブルコルジだった。
「それは。所詮は」
「戯言なのですか」
「そうです。私は女王です」
ブルコルジは言う。

「女王は誰にも膝を屈しません」
「うっ・・・・・・」
「確かに」
「そう。お仕えするハサン王国陛下に対してだけです」
彼女はあくまでハサン王国の属国であるアヤグーズ王国の女王である。ハサン王国軍元帥の称号もここから来ている。従って彼女が仕えているのはハサン国王だけんあおだ。
「それ以外の誰もです」
「そうですか。それではやはり」
「陛下は」
「最初からそのつもりはありませんでした」
こうまで言った。
「もとより」
「ではやはり」
「最後の戦いに」
「子供達を頼みます」
横も後ろも見ないのは変わらなかった。
「子供達だけは」
「・・・・・・わかりました」
「では。殿下はどの方も我等が責任を持って」
「御願いします。ハサン王国への亡命になりますね」
「はい、そうなります」
「既に有事の際のことは約束して頂いています」
「有り難き御言葉」
これはハサン王国に対する感謝の言葉であった。
「それでは陛下。後は我等にお任せして」
「心おきなく戦われて下さい」
「はい。それでは全軍」
「撤退ですね」
「アッサルームまで」

「その通りです」
やはりであった。まずは撤退してからであった。
「撤退です。宜しいですね」
「はい」
「それでは」
「艦艇の落伍は」
撤退を命じたうえでこのことも問うたのであった。
「今はどの程度ですか」
「今で全軍の二割になりました」
「撃沈及び破損と合わせると三割を超えています」
「そうですか。三割ですか」
ブルコルジはその損害の割合に表情を暗くさせた。何故ならそれは軍の損害としては大敗北と言うべきものであり全滅と呼称されるものだからである。表情が曇るのも道理であった。

## 第三十三部第四章　犠牲を厭わずその十

「派手に失いましたね」
「ですがこのまま戦えば」
「我等は。これ以上の損害を受けていたでしょうから」
「それは承知のうえではなかったのですか」
「それはその通りです」
他ならぬ彼女もまたその指示を出しているからこそ頷けるものであった。
「それは。やはり」
「ですね。それは」
「止むを得ないことですから」
「わかっています。では全軍全速力で戦場を離脱する」
感情を押し殺して指示を伝えた。
「落伍した艦艇には降伏するのように伝えなさい」
「はっ、了解です」
「では」
こうして協同軍はまず全力で戦場を離脱にかかった。やはり落伍者も多く出たがそれでもだった。今は全速力で脇目も振らず戦場を離脱した。
協同軍はティムール軍の第二の攻撃を受けることなく戦場を離脱した。それを見てシャイターンはまずは自軍に対してこれ以上の追撃を止めさせた。
「今はいい」
「よいと！？」
「ですが彼等は」
「アヤグーズ軍は撤退した」
シャイターンはこのことをあえて言った。
「アッサルームにな」

「ですからここでこそ」
「追撃を仕掛けないのです」
「よい。むしろ下手に追って反撃を受けては元も子もない」
それを危惧しての慎重な動きでもあった。
「だからだ」
「それでですか」
「そうだ。それにだ」
今度の言葉はブルコルジの考えを読んでのことである。
「彼女はもうアッサルームでは戦いを挑まない」
「！？アッサルームではですか」
「その宙域ではな」
こう述べるのだった。
「それはない」
「では惑星でですか」
「我等と」
「そう。惑星での戦いだ」
既にその戦いも見据えていたのである。
「最後はな」
「アッサルームのですか」
「遂に」
「最後の舞台に相応しい」
シャイターンの声は楽しむものであった。
「実にな」
「最後のですか」
「そうだ」
フラームの問いに対して答えた。
「豹と虎の戦いの最後の舞台にな」
「虎が最後の輝きを見せるのですね」
「その通りだ」
ブルコルジが倒れる、それは最早彼の中では定まっていることで

あった。
「そして膝を屈しだ」
「兄上に仕えると」
「何度も言うが私は才を愛する」
シャイターンの特徴として優れた人材を欲するというところである。才がある者ならばその出自や立場にこだわらずにすぐにそれに相応しい場所に就ける。そうした人材を見抜く目があることも彼をして今のティムールの独裁者にしているのである。独裁者はそうしたこともできなければ独裁者になれないものなのだ。
「そして彼女には」
「その才があるというのですね」
「その通りだ。だからこそだ」
「はい」
「あの女王を」
「元帥の地位を用意してある」
ここで彼はこうも言った。

## 第三十三部第四章　犠牲を厭わずその十一

「ティムール軍元帥の地位をな」
「元帥ですか」
「そうだ」
不敵に笑いつつ述べた言葉であった。
「元帥だ。彼女には相応しいだろう」
「確かに。ですが」
「ですが？」
ここで末弟であるアブーの言葉に応えた。
「何かあるのか」
「申し上げても宜しいでしょうか」
彼は今から言う己の言葉に長兄に対する不敬なものがあるのではないかと危惧して前以ってこう告げたのである。彼はここでは慎重になっていた。
「これから」
「構わない」
そしてシャイターンは彼にこう返した。
「何でもいい。言ってみよ」
「はっ、それでは」
許しを得てから再び口を開きだした。
「今ティムール軍には確かに元帥がおられます」
「うむ」
「ですがそれは」
「三人だけだな」
「その通りです。皆それなり以上に武勲を挙げている方々ばかりです」
「だからこそ元帥にした」
ここでアブーが敬語になっているのは彼はティムール軍において

の階級は大将だからである。その上に上級大将、そしてその元帥があるのである。
「その方々と同列ですか」
「それだけの才があるからだ」
「だからですか」
「そうだ。これは何度も言うが」
「はい」
「私は才を愛する」
またこのことを言うのであった。
「人の才をな。そして」
「そして」
「その才に相応しい地位と名誉を約束する」
こうも言うのであった。
「そして富もな」
「だからですか」
「彼女は元帥に値する」
ブルコルジの軍事的才能を見事なまでに見抜いていた。
「現に今も最後まで果敢に戦った」
「だからですか」
「そうだ。だからだ」
ここでもはっきりと言い切ったのであった。
「彼女は元帥だ。ティムール軍元帥だ」
「わかりました」
「役職は好きなものを与えよう」
そして次にはこう宣言した。
「彼女の望むだけのものをな」
「その才を手に入れる為に」
「そうだ」
今度は参謀達の言葉に対して答えたのであった。
「アッサルームに向かう」

「そして惑星戦を」
「くれぐれも言う」
シャイターンの言葉の調子が変わった。まるで鞭をその手に持っているかのように。
「一般市民には手を出すな」
「はっ、それは」
「肝に命じております」
「狙うのは軍事施設だけだ」
このことも告げた。
「他には手を出すな」
「あくまで狙うのは軍事施設だけですね」
「そうだ。一般市民に危害を加えてもならない」
また指示を付け加えてきた。
「ただし。彼等が武器を持って抵抗する場合は」
「その場合は」
「如何されますか？」
「決まっている。容赦することはない」
ここではかなり果断な調子になっていた。
「射殺しろ。いいな」
「了解です」
「それではそのように」
これは当然のことであった。一般市民が武器を持って襲い掛かって来るならばそれはゲリラに当たりその際は捕虜にせずにその場で殺してもいいことになっている。これは国際法の初歩の初歩でありシャイターンもそれに基いて指示を出しているだけである。

## 第三十三部第四章　犠牲を厭わずその十二

「それ以外で市民に危害を加えてはならない」
「わかりました」
「気害を加えた者はその場で射殺してもいい」
これまた実に厳しい指示であった。ティムール軍もその軍律の厳しさで有名である。このことに関しては連合軍やエウロパ軍、オムダーマン軍と同じである。
「このことに際しても容赦はするな」
「畏まりました」
「以上だ。それでは一部の兵を捕虜の投降や誘導に置き」
「はい」
このことも忘れてはいなかった。
「我等はこのままアッサルームに向かうとする」
「はっ、それではこれから」
「そのように」
「これでよしだ」
話を終えたシャイターンは満足したように言葉を出した。
「これでな」
「では主席、後は」
「降下戦及び惑星戦の用意ですね」
「そうだ。それまでは暫く交代で休息を取るように」
将兵を気遣ってのことであった。
「よいな」
「ではそれもまた」
「伝えておいてくれ。私も暫し休もう」
「わかりました」
こうしてシャイターンは艦橋から去り一旦己の部屋に戻った。そこで静かに一人でワインを楽しんでいるとそこにフラームとアブー

が来たのであった。
「御前達か」
「はい、我々も休息の時でしたので」
「それで」
穏やかに笑ってそれぞれ長兄に対して言ってきたのだった。
「参りました」
「宜しいでしょうか」
「といってもこれから少し眠りに入るつもりなのだがな」
「ええ。それまでの間で宜しいので」
「ここにいて宜しいでしょうか」
「そうだな」
弟達の言葉を聞き静かに応えてきた。
「それまでの間ならばな」
「はい。それでは」
「御一緒させて下さい」
「うむ」
弟達に対して頷いてみせた。
「それではな」
ここでシャイターンは右手を少しあげ指を鳴らした。するとすぐに傍に控えていた従者達がそれぞれワインと杯を持って来た。そしてフラーム達に対してそのワインを差し出すのであった。
「御前達も飲むといい」
「有り難き幸せ」
「このワインも杯も特別だ」
「銀の杯ですか」
まずはそれであった。この時代においても銀の杯といえば富や高貴の証である。銀が高価なものであることは変わりはしないのだ。
「そうだ。そしてワインは」
「これは何処のワインでしょうか」
「飲めばわかる」

こう弟達に言うのであった。
「飲めばな」
「わかりました。それでは」
「謹んで」
弟達は長兄の言葉を受けてその杯に口をつけた。するとそのワインは。
「ふむ。これは」
「ハサンのものですか」
「そうだ。ハサンの中でもかなり富のある者達が飲むものだ」
弟達にこう告げたのであった。
「トルグだ」
「それですね」
「トルグです」
ハサン王国トルグ星系で採れるワインである。農業が盛んな星系として知られその名産の中にはワインも存在しているのである。
「そのトルグのワインだ」
「よくこのようなものがありましたね」
「何故ここに」
「コムにあったものだ」
弟達に静かに話してきた。
「おそらくはハサン王家の者達が来た時の為に用意しておいたものだ」
「それですか」
「そうだ。どうだ、味は」
今度は味について問うのだった。
「このトルグの味は」
「見事です」
まずはフラームが答えた。

## 第三十三部第四章　犠牲を厭わずその十三

「噂に違わぬものです」
「かなり甘いですがそれでいて後味がよく」
「かつてエウロパの貴族達はこのワインをこう呼んだ」
北方侵攻まではエウロパもハサンの国と交流がなかったわけではない。もっともハサンはエウロパとの交流が途絶えてからも密かに付き合いを続けてはいたが。第三国であるマウリア等を通じて。
「サハラのトカイとな」
「トカイというと」
「そうだ、あのトカイだ」
また言うのだった。
「エウロパにおいて最高級のワインと言われるな」
地球にあった頃からそう呼ばれこの時代においても限られた星系、かつてのトカイの産地と同じ様な土壌と同じ種類の葡萄でした作られないワインなのである。だからこそ貴重であるとされているワインなのだ。
「それだと言ったのだ」
「ふ、う。それはまた」
「見事な評価ですね」
「確かに味も似ている」
シャイターンはこうも言った。
「あのトカイにな」
「ええ。確かに」
「その味ですね」
交流が途絶えているとはいえサハラではまだエウロパの品は手に入らないわけでもない。なお彼等は北方のエウロパの施設を撤収した際に手に入れている。エウロパは北方において総督府を持っていた頃ここでサハラの一部の親エウロパ派の国やマウリアと交流も行

っていたのだ。それでエウロパのワインもそれなりにサハラの者達の間で知られてはきていたのである。
「このトルグは」
「まさにそのトカイです」
「このトルグをさらに飲みたいか」
彼はトルグを手に弟達に尋ねてきた。
「どうだ。より」
「ええ、それは」
「確かに」
そして弟達は楽しげに笑ってそれに答えるのだった。
「トルグは一度飲めば他のワインは飲めなくなると聞いていましたが」
「まさにこれは」
「では。今後の方針は固まった」
弟達の言葉を受けての発言であった。
「トルグを手に入れるぞ」
「はっ」
「完全に」
「そしてトルグだけではない」
ただワインを手に入れるだけで戦争を行う程シャイターンは愚かではない。ワイン以外の全てを手に入れるつもりであるのだ。
「ハサンの全てをだ」
「ではこの戦いの後は予定通りですね」
「そう。予定通りだ」
冷静にフラームに対して述べたのだった。
「進むぞ」
「はい」
「ハサン本土にさらに」
「前に手に入れたコムとアッサルームを足掛かりとする」
即ちアヤグーズ王国全体をハサン攻略の拠点とするというのであ

る。
「そのうえでさらにハサン全土をだ」
「そうですね」
アブーは長兄の今の言葉に特に思うところもなく頷いた。だがフラームはここで考える顔になってその長兄に対して尋ねるのだった。
「ですが兄上」
「何だ？」
「ここで一つ問題になるのですが」
「オムダーマンのことだな」
「そうです」
ハサンと戦うもう一つの国の存在がここで話に出るのであった。
「彼等のことですが」
「彼等についてはだ」
「はい」
「既に考えは決まっている」
まずはこう述べたシャイターンだった。
「今においてはな」
「今は、ですか」
「そうだ。我々が進む」
まずは他ならぬ彼等自身を中心において話した。
「そうしてそこでオムダーマン軍と会う。そこを境とする」
「つまり先に手に入れた方が先だというのですね」
「そうだ」
彼が言うのはそういうことだった。
「まずはな。先に手に入れた方がその星系を領有する」
「わかりました」
「従ってハサン領の取り合いでもある」
例え共闘している相手であってもということだった。この辺りは実にシビアであると言えた。

## 第三十三部第四章　犠牲を厭わずその十四

「それは忘れるな」
「わかりました」
「それでだ」
シャイターンはさらに言うのだった。
「その際間違ってもオムダーマン軍と衝突はするな」
「それはわかっています」
「無論」
今度はフラームだけでなくアブーも答えた。これは政治に疎い傾向のある生粋の軍人である彼でも容易にわかる話であったのだ。
「そうなればオムダーマン軍も敵に回してしまいますから」
「今は彼等とは争わない」
シャイターンはまた言った。
「決してな」
「わかりました」
「今は、だ」
ここで言葉が微妙に変わった。
「わかったな」
「はい、今はですね」
「争わないと」
「今はハサンに専念する」
すぐにこうも言うのだった。
「今はな」
「わかりました」
「それではそのように」
「そこから先はまた別の話だ」
シャイターンの言葉の調子がまた変わった。
「先はな」

「といいますと」
「それでは」
「成り行き次第だがな」
口元もまた思わせぶりに笑っていた。
「オムダーマンともな」
「そうなる可能性もありますか」
「皆無ではない」
ないわけではないとも言うのであった。
「決してな。向こうの出方次第だがな」
「向こうといいますとオムダーマン政府ですか」
「彼等ですか」
「彼等ではない」
彼等、即ちオムダーマン政府ではないというのであった。
「彼だ」
「彼！？」
「といいますと」
「獅子だ」
言葉が鋭く、剣を思わせるものになった。
「オムダーマンの青き獅子だ」
「というとアッディーン副大統領ですか」
「姉上の婿でもある」
「マルヤムに嫁がせたのはあくまでオムダーマンとの絆を築く為だ」
「そうでしたね」
「それは」
こうした婚姻政策はこの時代においてもサハラではよくあることであった。元々砂漠の部族社会からはじまったイスラムにおいてはこうした家同士の婚姻は非常によくある話だ。だがここでは事情が少しばかり違ってもいた。
「ですがアッディーン主席の家は権門ではありません」
「あの婚礼に疑問を持っている者も多いようですが」

「バルマク家だ」
シャイターンは不意にこの家の名前を出してきた。
「全てはバルマク家だ」
「バルマク家！？確かそれは」
「アッバース朝のですか」
「そうだ。そのバルマク家だ」
弟達にそのバルマク家だと告げもした。
「そのな」
「バルマク家といえば確か」
「滅んでいます」
これは歴史にある通りだ。アッバース朝において最も有名なスルタンであるハルーン＝アル＝ラシードの宰相として辣腕を振るったジャアファルを擁していたこのバルマク家はそのジャアファルが突如スルタンによって処刑された時に連座し同時に処罰されその富は全て奪われたのである。こうしてそれまで栄華を誇っていたバルマク家は砂漠の蜃気楼の如き消え去ってしまったのである。
なおこのジャアファルもスルタンであるハルーン＝アル＝ラシードもアラビアンナイトにも登場している。この二人と処刑人である黒人の宦官マスルールはアラビアン＝ナイトではセットになっている。なおジャアファルは一代の美男子として有名でもあった。
「またその家がどうして」
「何かあるのですか？」
「滅びもすいれば栄えもする」
シャイターンはまた弟達に告げてきた。

## 第三十三部第四章　犠牲を厭わずその十五

「昨日までの寒門が突如として権門になる場合もある」
「というとそれでは」
「アッディーン家は」
「瞬く間にオムダーマンの副大統領になったな」
「はい」
「それはその通りです」
事実のままである。二人としても頷く他なかった。
「そういうことですか」
「だからこそ」
「今は栄えていても後に没落する」
シャイターンの言葉は続く。
「そうした家と縁組をしても何の意味もないな」
「その通りです」
「それはまさに」
「そうだ。だから私はマルヤムを彼の嫁にしたのだ」
そういうことであった。英雄は英雄を知るということだろうか。彼はそれを見抜いていたからこそ妹をアッディーンの妻としたのである。
「アッディーン家にな」
「左様でしたか」
「彼は副大統領では終わらん」
こうも言った。
「さらに上に登り詰めるだろう」
「では大統領にですね」
「副大統領の上となると」
「いや、より上かも知れない」
シャイターンのアッディーンへの評価はさらに続いた。

「よりな」
「大統領よりもといいますと」
「オムダーマンは共和制ですので」
オムダーマンの政体の最大の特徴である。大統領が選挙で選ばれる。これはオムダーマン建国より変わっていないことである。
「ですからそれはまた」
「それ以上は」
「政体は変えることができる」
だがシャイターンはまた言った。
「国民によってな」
「国民によって」
「フランス革命でフランスは共和制になった」
今度はフランスの話になった。
「しかしナポレオンは皇帝になった」
「はい」
「第一帝政ですね」
「そうだ。そしてサハラでは」
ここもまたかなり重要であった。
「サハラを統一した者は」
「皇帝になる」
「預言に従って」
「ムハンマドの預言ではない」
ムハンマドの預言はコーランにある通りだ。サハラのムスリムの間ではコーランこそが無謬のものである。ジンにしろペリにしろその実在が疑われることがあったのだがその際も実在するとされた。何故なら彼等の名前がコーランに乗っているからである。だからだというのだ。
「しかしだ」
「それ以前の預言にありますから」
「ムハンマドの預言でなくともだ」

預言は預言というわけなのだ。イスラム教においてはムハンマドこそが最高にして最後の預言者であり彼以上の、彼以降の預言者は存在しない。従って彼以前の預言者は幾分落ちるということになる。しかしそれでも預言であることには変わりはないのである。
「だからだ」
「それではアッディーン副大統領もいずれは」
「そう考えるようになると」
「その可能性は皆無ではない」
こう述べるシャイターンだった。
「決してな」
「彼に野心がなくともですね」
「英雄はその然るべき地位に就く」
「然るべき地位に」
「私か彼か」
今度は己も話に出した。
「どちらがそうなるのかまではわからないがな」
「左様ですか」
「そうだ。どちらかがだ」
また言うのであった。
「なるだろうな」
「若しも彼が皇帝になろうとすれば」
「若しくは」
二人は長兄の言葉を受けて述べてきた。

## 第三十三部第四章　犠牲を厭わずその十六

「彼の周りがそれに推すとすればですね」
「それで私の前に立ちはだかることになる」
ワインを右手に持ちつつ語った。
「それでな」
「その時は。それでは」
「オムダーマンと」
「その可能性も考えておくのだ」
ここに至って二人の弟達に告げたのだった。
「その場合にはだ」
「ええ。その場合は」
「オムダーマンとですね」
「その通りだ」
先を見据えた目になっていた。
「サハラを統一する為にな」
「はい」
「それこそが我等シャイターン家の悲願です」
無論彼等もこのことはわかっていた。彼等はその為に今も戦場にいるのだから。それでわかっていない筈がなかった。そこまで愚かではないのだから。
「ではその為にやはり」
「オムダーマンともですね」
「可能性は否定できない」
また言うシャイターンだった。
「サハラ統一の前にはな」
「サハラを統一するならばですか」
「彼等とも」
「そして獅子とも」

アッディーンのことも名前に出すのであった。
「戦わなければならないな」
「ですが兄上」
「それは」
「何かあるのか？」
声に感情を及ばせてきた二人の弟達に対してもシャイターンの言葉の調子は変わってはいなかった。それはまるで氷のようだった。
「それが」
「それがといいますが」
「アッディーン副大統領は」
「マルヤムの婿だな」
これは事実である。誰も否定できない。
「そうだな」
「そうです。ですから」
「それを考えますと」
「不都合があるのか？」
二人が声に感情を込めれば込める程シャイターンの言葉は落ち着いたものどころか冷徹なものになっていく。氷の温度はさらに下がっていた。
「それで」
「それでといいますが」
「それは。どうも」
「兄弟が互いに殺し合うこともよくあった」
その冷徹さのまま述べるシャイターンだった。
「歴史においてはな」
「それは」
「確かにそうですが」
「では言うまでもないな」
こう述べるシャイターンであった。
「必要ならばアッディーン副大統領ともだ」

「戦うと仰るのですね」
「言っておくがその命を奪うつもりはない」
「そうなのですか」
「命は」
それを聞いてまずは内心ほっとする二人であった。しかしシャイターンはその冷徹な声を温めることはなかったしそれは顔にも出ているのだった。
「私は人材を愛する」
「人材をですか」
「そうだ」
これはブルコルジに対しても述べたことであった。今それをアッディーンに対しても言うのだ。
「人材をな。アッディーン副大統領の才は英傑のものだ」
「英傑のですか」
「その通りだ。英傑を操る者は英傑なのだ」
これがシャイターンの考えであった。
「同じな。英傑なのだ」
「では兄上は」
「アッディーン副大統領を」
「彼だけではないがな」
冷徹な笑みが不敵なものになってきていた。

## 第三十三部第四章　犠牲を厭わずその十七

「あの女王もまた」
「全ての優れた人材は、ですか」
「兄上の下に」
「そういうことだ。だからこそだ」
「命は奪わないのですね」
「命を奪ってはそれで終わりだ」
終わらせるつもりはないということだった。
「それよりもだ」
「その才を生かされるのですね」
「アッディーン副大統領もまた」
「若し彼が私と戦えば必ず私の前に膝を屈する」
絶対の自信においての言葉だった。
「その時にこそ彼が真にサハラの為に動く時だ」
「兄上の側近としてですね」
「そのうえでサハラの為に」
「そういうことだ。彼もまた元帥に任じる」
このことまで既に考えているのだった。彼の中では全てが予定事項であった。その予定事項において話を進めていくのである。彼の中にサハラがあった。
「役職はこれも彼の思いのままだ」
「それもですね」
「私は誰の前にも膝を屈しない」
シャイターンは豪語した。
「そして」
「そして？」
「全ての英傑は私の下に集うのだ」
また言ったのだった。

「サハラのな」
「サハラのですか」
「サハラ以外には興味はない」
まるで次元の違う世界について述べるようであった。
「そこにはな」
「興味はありませんか」
「そちらには」
「全くだ」
やはりここでも素っ気ない言葉であった。
「そちらにはな」
「連合にもマウリアにもですか」
「ではエウロパにも」
「火の粉は払う」
外から攻めてくればということだった。
「だが。それでもだ」
「外の世界には興味がおありではないと」
「そう仰るのですね」
「エウロパには備えていればいい」
因縁あるエウロパに対してはそうであった。やはり彼等は敵として認識していた。
「連合やマウリアとは交流を深めていく」
「そうして貿易や通商で国力を栄えさせていくのですね」
「こちらから攻める必要はない。むしろ攻めてはならない」
語るその目が鋭いものとなった。
「決してな」
「決してですか」
「そうだ。決してだ」
また言うのであった。
「いいな。それは」
「統一がなれば戦わないのですか」

「基本としてはそうだ」
フラームに対して述べた。
「統一されたならば戦う必要はない」
「矛を収めると」
「そうなることを目指す」
今度はアブーに対しての言葉だった。
「戦いはな」
「戦いはあくまで統一の為ですか」
「不要な戦いなぞする意味もない」
シャイターンは全てを見ているような言葉になっていた。
「ただ人も金も資源も消耗するだけだ」
「ええ、確かに」
「まさにその通りです」
これは二人もわかっていた。戦争はあくまで政治の一手段ということが。それを考慮せずに行う戦争なぞ有害以外の何者でもないのである。

## 第三十三部第四章　犠牲を厭わずその十八

「ではやはりここは」
「そういうことで」
「そうだ。幸い連合もマウリアも好戦的な勢力ではないな」
「連合は自分達が豊かであればそれでいいのでしょう」
フラームは連合についてこう分析していた。
「彼等が。ただ」
「そうだな。連合は富のことしか考えていない」
とはいってもそれを否定しているわけではないシャイターンの言葉の響きであった。
「彼等の中でな。開拓と発展のことしか考えていないのだ」
「はい、そうですね」
「彼等は」
アブーもその言葉に対して頷いた。
「彼等にとって平和は絶対のものだ」
「千年の平和でしたね」
俗によく言われている言葉だ。この銀河においては。
「この前エウロパとの戦いがありましたが」
「しかし連合領内での戦いはなかった」
「宇宙海賊やテロリストがありましたが」
「それ以外は」
「なかった」
千年の間戦乱があったサハラとはそこが全く違うのだ。彼等は千年の間何処かで戦争が起こらなかったことはない。連合とは全く正反対なのである。
「完全にな」
「そうですね。各国の対立が戦争の水準に達したことさえありません」

「これは中央政府の存在がありましたが」
「中央政府だが」
シャイターンは連合中央政府についても知っていた。当然ながら知らない筈がなかったのだ。その程度の国際情勢への知識がなくして国家主席など務まらないのだる。
「俗に神聖ローマ帝国と呼ばれているな」
「そうですね」
「どういう意味かは言うまでもありません」
神聖ローマ帝国は中央の権限が弱く領邦国家となっていた。長い間ドイツ本土はおろそかなままだった。それは歴代のローマ皇帝がイタリアに介入するあまりドイツ本土への政策がなおざりになってしまっていたのだ。それが神聖ローマ帝国を最後までまとまりを欠く国家にしてしまっていたのである。
「それにつきましては」
「連合は長い間中央政府と各国政府の間で綱引きをしてきた」
「それぞれの権限の強化ですね」
「そうだ。今は中央政府が強くなっている」
「はい」
時代によっては各国政府の権限が強くなったりしている。そうした互いの綱引きが連合の自浄にもなっていて連合は確かな国家として続いているのである。
「そうですね。確かに」
「今は中央政府が強いですね」
「その通りです」
こう答える弟達だった。
「それが連合ですね」
「中央政府と各国政府という二つの軸があってです」
「彼等はその中で生きてきた」
また言うシャイターンだった。
「そうして平和と国家としての機能を保ってきた」

「そのうえで発展と開拓ですね」
「その通りだ」
そういうことであった。
「連合はな。しかしそれによって文明も文化も発展してきた」
「そして技術もですね」
「発展と開拓した頭になくともだ」
シャイターンの言葉は続く。
「それでも他のものはついてくるものだ」
「そうした文明や文化もまた」
「技術も」
「彼等にとって最も大事なのはそれだ」
「そうした平和によってもたらされたものですね」
「様々なものが」
「彼等がそれを守りたいのならそれを守ってくれればいい」
落ち着いた声で述べるシャイターンだった。
「それでな」
「むしろそうしてくれた方が有り難いのですね」
「そうだ」
これもまたそうであった。
「連合は四兆の人口を持っている」
「四兆のですね」
「対して我等は二千億」
「二十倍だ」
このことは何度も話されている。その度に連合という勢力の巨大さを認識するばかりだった。

## 第三十三部第四章　犠牲を厭わずその十九

「二十倍もの差があれば如何に我々とても」
「対することはできません」
「連合の目をこちらに向けるな」
シャイターンの考えは一つにそれがあった。
「必ずな」
「必ずですか」
「連合の目がそうした平和やエウロパに向いていればそれでいい」
シャイターンはあくまで連合との戦いを避けようと考えていた。これは絶対の考えであり何としても変えるつもりはないものであった。
「我々に対して向けられては終わりだ」
「その巨大な力を向けられるならば」
「ましてや統一がなったとしてもそれでだけで」
「敗れる。力で押されてしまう」
「敵を知り己を知ればだ」
シャイターンはこの言葉を非常によくわきまえていた。双方の力のことも把握していなくては政治はやってはいけない。そして戦争もだ。
「だから連合とは戦うことは避ける」
「それはいいのですが」
「具体的にはどうすれば」
「また言うが連合は発展と開拓しか頭にない」
「はい」
「それですか」
いささか侮蔑的な言葉であるがそれでもまた言うのだった。
「そうだ。我々のことは基本的には無関心だ」
「無関心」

「それならば」
「そのまま無関心でいてもらう」
今度の言葉は素っ気無いものであった。
「ずっとな」
「ではこちらからは何もしなければ」
「双方にとって何も問題がありませんね」
「アブー」
シャイターンは今の末弟の言葉に目を向けてきた。
「今の言葉はだ」
「失言だったでしょうか」
こう言って顔を曇らせるアブーだった。
「そうでしたら。申し訳ありません」
「違うな。政治がわかってきたな」
シャイターンは不敵な笑みを浮かべてこう述べたのだった。
「そこまでわかるとはな」
「これでよいのですね？」
「その通りだ」
これがシャイターンのアブーへの答えだった。
「政治はそういうものだ。時としては対立を避ける為のものなのだ」
「時としてですか」
「無闇に対立を続ければそれだけで国力を消耗する」
シャイターンはまた言う。
「力をそこに向けるからな」
「ではこちらは連合を敵視する政策を採らない」
「そういえば連合はサハラとの境に防衛ラインを建設するそうですね」
今度はフラームの言葉である。
「確か」
「知っていたのか」
「既に聞いています」

彼は長兄に対して述べた。
「それは」
「御前も軍事がわかってきたな」
「そうでしょうか」
「ではそれについてどう思うか」
「連合中央政府国防省はこのことに理由をつけてはいます」
彼は連合の政府から話をはじめた。
「難民対策だと」
「そうだな」
「しかし実情は違いまして」
その言葉を鋭いものにさせてきた。
「やはりそれは我々に対する備えであります」
「そうだ。我々へのな」
「統一がなったサハラへの。つまり」
「つまり？」
「明らかに我々を警戒しています」
導き出されたのは当然の答えであった。

## 第三十三部第四章　犠牲を厭わずその二十

「その為今の時点から備えを用意しているのです」
「連合中央政府国防長官は八条義統という」
「その名は私も知っています」
フラームの冷静な言葉が続けられる。
「日本、いえ連合でも有名な企業グループの長子ですね」
「そして政界の俊英でもある」
これが八条のサハラでの評価である。彼等だけの評価ではない。
「若き英雄とも言われている」
「英雄ですか」
「英雄は軍服を着ている者だけではない」
シャイターンはあえて軍服のことを述べた。
「背広を着ていてもだ。英雄は英雄だ」
「そうなのですか」
「政治家であろうとも経営者であろうともだ」
どちらも完全に軍人ではない。しかし連合においては彼等はサハラにおける軍人よりも遥かにポピュラーな存在となっているのは事実だ。
「農夫であっても医者であっても銀行員であってもな」
「英雄になるのですか」
「優れた業績を残し大事を為したならばだ」
これはシャイターン独自の定義である。
「そしてそれにより偉大な存在となったならばだ」
「それで英雄なのですね」
「それで」
「そういうことだ。だからあの長官も英雄なのですか」
「あれだけの短期間であそこまでの軍を作り上げた」
連合軍をである。

「そしてそれを動かし勝利を収めたな」
「エウロパとの戦争にですね」
「あの戦争の勝利は見事でした」
「幾ら質量共に圧倒的な差があってもだ」
数では四倍以上、兵器の質ではさらに圧倒的なものがあった。そのうえ万全の補給を整えていたので勝利を収めない筈がない。しかしであった。
「それでも新造の軍隊だ」
「はい、確かに」
「新造の軍隊です」
このことが言われるのだった。フラームとアブーによって。
「各国の軍を寄せ集め同じ軍服を着せ」
「同じ装備を揃えただけの」
「それであそこまでの勝利を収められるか」
シャイターンはこのことにも言及する。
「連合軍の損害は十個艦隊程度、人員にして百万だ」
「はい」
「そのうちの九割が義勇軍でしたね」
「それに対してエウロパ軍は百五十個艦隊」
艦隊規模にして十五倍である。
「そして人員は。死傷者全てで五千万を優に超えているな」
「一億だったのでは？」
「そうとも聞いていますが」
この辺りは諸説入り乱れている。だが実際は五千万程度でありエウロパ側もこう主張しているし連合もその程度だと分析して戦果として報告している。
「五千万ですか」
「しかし。それでも圧倒的ですね」
「義勇軍の存在があったとはいえ新造の軍隊でそこまでの勝利を収められるか」

「戦果だけではありませんしね」
「彼等は戦略目標も達する寸前でした」
「その通りだ」
当然ながらシャイターンはそこも見ているのだった。
「それもな。オリンポスをあと一歩で占領するところだった：
「それができなかったのはすんでのところでマウリアが仲裁に入ったからで」
「それがなければ。やはり」
「オリンポスは陥落していた」
一言で述べたのだった。
「確実にな」
「そうですね。あのまま押し切られ」
「そのままオリンポスを陥落させられあのオリンポス条約はエウロパによってさらに厳しい内容になっていたでしょう」
それを救ったのはエウロパ軍ではなくマウリアであった。実に皮肉な現実である。
「そこまでの一方的ナ勝利を収められるだけの軍を短期間で作り上げたのは」
「確かに見事ですね」
「そして連合の治安も飛躍的に向上した」
シャイターンはここでも勝利以外のものを見ていた。
「宇宙海賊やテロリストを掃討してな」
「その通りですね」
「それもまた」
「戦いに勝利を収め国家の治安も安定させた」
彼は言う。
「やはり英雄なのだ、彼もな」
「そういうことですか」
「あの八条長官は」
「あの長官とは一度会ってみたいな」

シャイターンの目が興味深げなものになっていた。
「是非な」
「では連合まで行かれるのですか？」
「それともこちらまで及びするのでしょうか」
「どちらでもいいがな」
何処で会うのかにはこだわらない様子だった。
「しかしだ。それでもだ」
「一度御会いされたいのですね」
「この戦いが終わってから考えよう」
彼は言った。
「ゆっくりとな」
「それでは今は」
「まずは目の前の戦いを終わらせる為に」
「そうだ。アッサルームだ」
アッサルームへの侵攻をここでも命じた。
「いいな。今からな」
「はっ、それでは」
「また。あらためて」
こうして彼等はアッサルームに向かった。そこでアヤグーズと、そしてブルコルジと最後の戦いに入るのであった。

# 第三十三部第五章　地上での決戦その一

地上での決戦

「捕虜はすぐに武装解除させよ！」
「投降する者には攻撃を加えるな！」
ティムール軍はアッサルームを包囲に向かいながら指示を飛ばしていた。
「いいか、狙うのはあくまで歯向かう者達だけだ」
「その連中には容赦するな」
「おいおい、随分紳士的だな」
「全くだぜ」
捕虜になったハサン軍の艦艇で後方に護送されながら話を聞いている兵士達がこう皮肉るのだった。見ればあのゲームをしながらこれからのことを話していた兵士達である。
「まあ命が助かっただけでもいいな」
「それはな」
とりあえずそれはよしとしている彼等だった。
「けれど俺達どうなるんだ？」
あのゲームをしていた兵士が相棒に問うてきた。
「それで」
「だから捕虜なんだろ？」
攻略本を見ていたその相棒の兵士が答える。
「これから」
「そうか。俺達が捕虜か」
「ああ、そうさ」
また答えるのだった。
「このままな。ティムールに送られるんだよ」
「嫌な話だな」
ゲームをしていた兵士はティムールに送られると聞いてあからさ

まに嫌な顔をした。
「ティムールに送られたらゲームどころじゃないぞ」
「給料はどうなるんだろうな」
「それは貰えるんだろう？」
「いや、わからないぞ」
相棒の兵士はそれにも疑問符をつけてきた。
「下手をすればな」
「貰えないっていうのか」
「戦いに勝ったんじゃないんだぞ」
これが重要だった。
「それに戦死と変わらないだろ？」
「捕虜だからな」
一応死んではいないが軍としては死んだも同然の話である。戦力ではなくなっているのだから。
「やっぱりな。それだったら」
「おい、じゃあ何でこの戦争に参加したんだ？」
ゲームをしていた兵士は思いきり嫌な顔をして言い出した。
「給料が貰えないんだったらな」
「そうだよな。何の意味もないよな」
「御前はあれだったよな」
相棒に対して問うてきた。ここで。
「バイク買うんだったよな」
「ああ、それだよ」
その問いに答える相棒だった。
「そのボーナスで買おうって思っていたんだけれどな」
「それも消えそうか」
「これじゃあ何で戦争に参加したんだか」
「全くだ。まあ捕虜でもゲームはしていいよな」
「それ位していいだろ」
やはり緊張感には乏しいやり取りであった。

「幾ら何でもな」
「そうだよな。じゃあ向こうじゃ解放されるまでの間ゲームで時間を潰すか」
「ティムールは変な労働とかさせないみたいだしな」
「そうだな」
「じゃあ適当に監督をしてる奴等に怒られないようにしながら」
「ゲームでもするか」
「そういうところだな」
こうした調子だった。そしてこれは他のハサン軍の将兵もおおよそ同じだった。やはり戦場にいるとは思えないかなり緊張感のないものだった。
「まあゲームでもしてな」
「時間を潰すか」
こうした話はティムール軍の将兵も聞いていた。彼等はそうした会話を聞いて呆れる他なかった。
「そういえばある艦の艦長と副長もな」
「ああ、そうだったな」
「あんな感じだったな」
「お役所で部長になるとかだったな」
「確かな」
そんな話を思い出しつつ話すのだった。
「どうやらハサン軍の将兵というのは予想以上にな」
「そうだな。士気がかなり酷いな」
「戦争を何だと思っているんだ？」
とにかく戦争に対するまともな意識を感じ取れないのだった。
「あんなな。戦争を軍以外でのボーナスか出世の為に考えるのか」
「何を考えているのか。全く」
彼等は首を傾げるばかりだった。そしてこの話はアッサルームを包囲しようとしているシャイターンの耳にも自然に入って来たのであった。

## 第三十三部第五章　地上での決戦その二

「そうか」
「はい、そうした状況です」
「ハサン軍は」
話を述べた参謀達が言うのだった。
「どうやらその士気はまことに低いようです」
「そして穏やかに護送されていっているそうです」
「捕虜の護送が順調なことはいい」
それはいいとするシャイターンだった。
「それはな」
「それはいいのですか」
「そうだ。それはいい」
あらためてそれはいいというのだった。
「それはな」
「そうですか。それはですか」
「しかしだ」
だがここでシャイターンは顔を曇らせて言うのであった。
「ハサン軍は。そうした軍なのか」
「正規軍はともかく召集した将兵はそうです」
「全く以って」
「ハサン軍にとっては嘆かわしい話だな」
シャイターンは述べた。
「それはな」
「嘆かわしいですか」
「ハサン軍にとって」
「軍人はどの国であっても戦うべき者達だ」
彼は言う。
「それも命を賭けてな」

「命を賭けてですか」
「それは」
「違うか？」
シャイターンは参謀達に顔を向けて彼等に問うた。
「諸君等もそうだと思うが」
「それは確かに」
「その通りです」
参謀達も言うまでもなく軍人だ。その軍人として頷くのだった。
「戦場で命を賭けずして何というのでしょうか」
「軍人とは。そういうものでは」
「そうした意味で彼等は軍人ではない」
今度の言葉は素っ気無いものだった。
「軍人ではな」
「軍人ではありませんか」
「捕虜にすると言ったが」
「はい」
「その必要はない」
ここでも素っ気無い言葉であった。
「アヤグーズとの戦いが終われば解放してやれ」
「えっ！？」
「解放ですか！？」
「そうだ、解放だ」
こう参謀達に告げるのだった。
「解放だ。いいな」
「あの、無条件でですよね」
「それは」
「そうだ」
やはり今のシャイターンの言葉は素っ気無い。
「無条件での解放だ。いいな」
「ですがそれは」

「あまりにも」
「そうです、兄上」
参謀達に続いてフラームも言ってきた。
「捕虜に危害を加えないというのはいいですが」
「無論そのつもりは毛頭ない」
戦場においてはともかくそれ以外で武器を振るうことはシャイターンの行動倫理にはない。あくまで戦場において戦うだけだ。謀略を仕掛けるのはまた別だが。
「それはな」
「ですが。無条件ですか」
「あくまでな」
このことを強調さえするのだった。
「どうでもいい。ハサン軍にすぐに全員渡してもいい位だ」
「あえて言わせて頂きますが」
フラームの顔は政治家のそれになっていた。そのうえでの言葉だった。
「それではあまりにもハサンに有利では？」
「有利だというのか」
「そうです。こうした場合は」
ここでフラームはサハラでの捕虜の扱いについて言及した。

## 第三十三部第五章　地上での決戦その三

「解放の条件として何らかの見返りを要求するものです」
「その通りです」
「この場合は」
参謀達もフラームの意見に賛成してきた。サハラでは捕虜の虐待が極めて嫌われているがこれには複数の理由がある。まず軍人として醜い行為とみなされていること。またムスリムとして同じムスリムに虐待を加えるということは最悪の悪行であると考えられていること。またサハラでは捕虜を返す条件として身代金を要求したり領土や利権を要求することが常識であるからだ。だからサハラでは捕虜の扱いは丁重なのだ。
そしてここで主に言われていることは。その身返りの話であった。
「幾ら何でも何も要求しないのは」
「如何でしょうか」
「それが軍人ならばな」
その問いに対するシャイターンの返答だった。
「私も見返りを要求する」
「左様ですか」
「そうだ。彼等は軍人ではない」
また言うのであった。
「軍人でないのならばな。そんなものは不要だ」
「左様ですか」
「とりあえず彼等はそれでいい」
これ以上は言うつもりもないといった感じでの言葉だった。
「それでな」
「では主席、それでは」
「彼等は」
「そうだ。どうでもいい存在だ」

こうまで言った。
「それよりもだ」
「はい、アッサルームですね」
「アヤグーズの首都の」
「アッサルームを完全に包囲する」
シャイターンはあらためてこの指示を出した。
「そのうえで降下に移る」
「わかりました」
「当然その前に軍事施設への攻撃を仕掛ける」
この指示を出すのも忘れてはいなかったのだった。
「いいな」
「そうですね。それもまた」
「忘れてはなりませんね」
「その通りだ。それにより抵抗力を奪ったうえで降下に移るぞ」
「はっ」
こうした作戦での基本パターンである。これはまさに教科書にもある戦術でありサハラだけでなく連合もエウロパも踏襲しているものだ。
「そして主席」
「何だ？」
「降伏勧告ですが」
この話も出た。
「それはどうされますか？」
「まずは包囲してから一度出す」
シャイターンは降伏勧告についても述べた。
「そしてだ」
「攻撃を終えてからもですね」
「そこでもう一回だ」
こう言うのである。
「降伏勧告をだ」

「されるのですね」
「何度でもする」
これが彼の考えだった。
「そうしてだ。何としても虎を捕らえる」
「虎を」
「虎は豹に従うもの」
これはただ虎と豹をさして言っているのではない。言うまでもなく虎はブルコルジであり豹はシャイターンである。そういうことであった。
「だからこそだ」
「ではやはり」
「最後の最後まで」
シャイターンの言葉はさらに強いものになる。
「諦めはしない。いいな」
「わかりました。それでは」
「そのように」
「敵の艦隊はどうなったか」
このことを言い終えてから今度はこのことを問うたのだった。
「今は。何処にいる？」
「ハサン軍の残存戦力は既に戦場を離脱しました」
「そうか」
「はい。このアッサルーム星系から離れていっています」
「こちらの追撃を振り切ろうとしています」
「わかった」
シャイターンはそれを聞いて納得した顔で頷いたのだった。

## 第三十三部第五章　地上での決戦その四

「では適度なところで追撃を中止しろ」
「はっ」
「それではそのように」
「そしてアヤグーズ軍も残る戦力はアッサルームにか」
「そうです」
　このことも既に彼等はわかっていたのだった。
「ただ。その戦力はかなり減っています」
「かろうじてアッサルームを護れる程度にまで」
「逃げたわけではあるまい？」
　シャイターンはその可能性は真っ先に己の頭の中で消去した。
「彼等に限って」
「はい。どうやら」
「決死戦のようです」
「そうか。決死戦か」
　シャイターンはその決死戦という言葉で納得したのだった。
「それを挑んできているのか」
「そのようです」
　決死戦とはアヤグーズが指示を出した通りの戦争の仕方である。親や兄弟、家族のいる者は外しまた少しでも命を惜しむ者もまた除外する。そうして死を覚悟する者達だけで最後の戦いを挑むというわけなのだ。
「ですから。アッサルームにいる彼等は」
「かなりの士気の持ち主だな」
「その通りかと」
「彼等は」
「しかしだ」
　それでもシャイターンの決断は変わりはしなかった。

「このままずは基地に攻撃を仕掛ける」
「はい」
やはりまずはそれであった。
「そしてだ。そのうえで降下戦に移る」
「わかりました」
「私も行く」
シャイターンが次に述べた言葉はこれだった。
「私もな」
「首席もですか」
「地上戦に」
「そうだ。私も行く」
彼はまた言った。
「私が行かなくては。女王も私の下に来るまい」
あくまで彼女を手に入れるつもりだったのだ。女王を。
「そういうことだ」
「わかりました。それでは」
「どうぞ。御気をつけて」
「それでは攻撃にかかるのだ」
シャイターンはまた指示を出したのだった。
「いいな」
「了解です」
「それでは。今より」
こうしてティムール軍の攻撃がはじまった。それによりまずアッサルームにある軍事基地がビームやミサイルにより破壊されていく。その攻撃は実に徹底していた。
「陛下」
「基地が破壊されていっているのですね」
「はい、そうです」
こう答える参謀達であった。
「今で損害は五十パーセントを超えました」

「もうですか」
ブルコルジはそれを聞いてまずは頷いた。
「攻撃を開始して十五分でですね」
「はい。もうそこまで」
「将兵の犠牲は軽微ですが」
「やはりここに戦力を集めて正解でしたね」
「こう来るのはわかっていました」
落ち着いた声で答える女王だった。
「戦術の基本ですから」
「だからですか」
「今のティムール軍の攻撃は」
「ここまで来て勝てるとは思っていません」
ブルコルジはまた言った。
「ここまで囲まれていて。後は」
「最期の戦いだけ」
「そういうことですね」
「降伏は。辞書にはありません」
こうも言うブルコルジだった。
「アヤグーズ王家の家訓には」
「はい」
「我等は建国より常に」
「剣に生き剣に死ぬ」
こういうことだった。

## 第三十三部第五章　地上での決戦その五

「私もまた」
「ですが陛下」
「これはティムール軍からですが」
ここでまた報告があがるのだった。
「また来ていますが」
「降伏勧告ですか」
「それです」
これもまた予想通りだった。ブルコルジはこれもわかっていた。
「来ていますが」
「どうされますか？」
「放っておきなさい」
静かにこう告げただけであった。
「それは」
「黙殺、ということですね」
「その通りです」
これもまた今まで通りであった。
「放っておくのです。そのようなものは」
「はっ、わかりました」
「では。これもまた」
「シャイターン主席はあくまで私を欲していますか」
ここでシャイターンのその鋭利でかつ端整な美貌をたたえた顔を脳裏に思い浮かべるのだった。
「女冥利にはつきます。しかし」
「しかし？」
「私は女である前に王であり将です」
これこそがブルコルジであった。まさに彼女の言葉であった。
「ですから。その申し出は受け取るつもりはありません」

「それではやはり」
「このまま」
「はい、また告げます」
今度は自軍への言葉であった。
「少しでも命を惜しむのならば遠慮なく去るのです」
こう告げるのであった。
「ただ。最期まで戦うという者だけが残り」
「そして戦う」
「そういうことですね」
「その通りです。私と共に」
既に心に持っているその剣は抜き身になっていた。
「アッラーの御前に行く者だけが」
「無論、残ります」
「死しても。我等は地獄に落ちるということはないのですし」
ここでは聖戦、即ちジハードの思想が出ていた。
「後はただ」
「命の限り戦うだけです」
「租国の為に」
「そして陛下の為に」
「その言葉、確かに受け取りました」
ブルコルジはあえて彼等の言葉を背に受けながら答えたのだった。
「今ここで」
「はい、それでは」
「今ここで」
「まずは最後まで守り抜きます」
これが今の彼女の作戦であった。
「いえ、最後の最後まで守り抜きます」
「死に場所でですね」
「各自。命が惜しくないならば最後の最後まで戦うのです」
最早そこには戦略はなかった。ただ戦えというのだから。しかし

それをあえて命じ戦わせるところにブルコルジの将としての心があるのであった。
「その場所を枕にして」
「最後まで戦い」
「そして散華されよということですね」
「無論私もです」
これこそがまさにブルコルジであった。
「戦います。ここで最後まで」
「では陛下」
「これを」
ここで出されたのは銃だった。言うまでもなくこうした戦場でその手に持つべき銃であった。女王自ら武器を手に戦うということであった。
「そしてこれも」
「宜しいですね」
「はい」
強い決意に満ちた顔で頷きながら銃を受け取りもう一つ出されていた剣も受け取ったのだった。これは白兵戦に使うものではなくこのアヤグーズの主であるという何よりの証だった。

## 第三十三部第五章　地上での決戦その六

「それではこれを手に今」
「戦いましょう」
「最後まで」
「わかっています。それで」
「それで？」
「今度は」
「ティムール軍はもう来たのでしょうか」
ここでティムール軍のことを問うのであった。
「彼等は。どうなのですか」
「今このアッサルームの主要基地への攻撃がとりあえず終わったところです」
「そうですか」
「租して今度は」
「アズライールが来ています」
ティムール軍のその艦載機である。この機は大気圏内でも使用可能なのだ。
「そしてどうやら」
「揚陸艦も」
「遂に、ですね」
まさにいよいよであった。
「来るのですか。遂に」
「そうですね。遂に」
「このアッサルームに直接」
「先に告げた通りです」
作戦は、ということであった。
「後はただ」
「ええ。それでは」

「我々も」
参謀達まで銃を手にした。そうして今ここで。アッサルームにおいてティムール軍とアヤグーズ軍の最後の戦いがはじまるのであった。
ハサン軍は線上を離脱しようとしていた。彼等はその戦力のかなりを失ったがそれでも何とか戦場を離脱することはできていた。そこにはバンダルの姿もあった。
「何とか脱出できたのはこれだけか」
「はい」
ギーヴが彼の言葉に応える。
「これだけです」
「半数はいるがな」
「ですが。かなりの損害を出しました」
ギーヴはあえて己の感情は消して報告に徹したのであった。
「最早それは」
「四割を超えているか」
「はい。今ここにいる艦艇を見る限りでは」
「わかった。それはな」
バンダルもまた無言でその言葉に頷くのだった。
「しかし。それは」
「はい。決定的な敗北です」
顔は表情を消していたが声にはどうしても絶望的なものが漂っていたのだった。
「これは」
「そうだな。今後の戦いにも影響するな」
「それは。否定できません」
答えるギーヴの声が沈痛なものになっていた。
「この状況では。我がハサン軍は多くの戦力を失いました」
「しかもだ」
ここで彼は後ろを振り向いた。振り向かずにはいられなかった。

「アヤグーズは。これで」
「ブルコルジ陛下のことですが」
「うむ」
「何度も声をかけました」
ギーヴの声の沈痛さがさらに増していく。
「ですがそれでも」
「そうか。聞き入れて下さらなかったか」
「残念なことに」
こう答えたのだった。
「無理にでも。お連れするべきだったでしょうか」
「いや、それは無理だったな」
バンダルはその可能性は皆無だったと言うのだった。
「絶対にな」
「そうですか。やはり」
「あの方は。誇り高いお方だ」
こう言うのであった。
「だからこそ。それはな」
「なかったですか。最初から」
「そうだ。私もできるならそうするべきだと思うが」
しかしだというのだった。そのうえで言葉を続ける。

## 第三十三部第五章　地上での決戦その七

「そうしてもあの方は望まれぬ。振り切ってでも彼等に向かっただろう」
「ティムール軍にですか」
「国が滅んでも己が生きるよりもだ」
バンダルは言う。
「共に滅ばれることを選ばれるだろう」
「だからこそ今なのですね」
「そういうことだ」
「醜く生きるより誇り高く滅ぶと」
「その通りだ」
ここまで告げて前に顔を戻した。
「仕方ない。今はだ」
「我々も撤退するしかありませんか」
「今の戦力では戦うことはできない」
彼は言った。言うしかなかった。
「今はな」
「この戦力では戦うことはできない」
ただ戦力が減っただけではなかった。残っている艦艇もその殆どが激しいダメージを受けている。また将兵の士気も敗戦とそれに続く命からがらの戦場からの離脱によってどん底まで落ちてしまっていたのである。
「とてもな」
「そうですね。それでは」
「撤退するしかない」
バンダルの声が苦々しいものになっていた。
「また後で。挽回するか」
「後で。ですか」

「かなり辛いがな」
彼には先がわかっているのだった。もう。
「最早ティムール軍の劣勢は確実なものだ」
「はい」
ギーヴもその言葉に頷いた。
「召集までかけて集めた多くの戦力とアヤグーズを失った」
「そしてですね」
「そうだ。この損失はかなり大きい」
「ハサンにとって」
「しかもだ。南方もある」
戦線は一つではない。そういうことだった。
「南方でもオムダーマン軍が進撃を続けている」
「そうですね。ダビデブ元帥がおられますが」
「ダビデブ元帥も。お辛いだろう」
バンダルはここでその南方で戦っているダビデブのことを思うのだった。
「五重の防衛ラインのうち三つが既に破られた」
「残るは二つ」
「果たして。どうなるか」
バンダルは先を見据えて言った。
「これからな」
「ハサンは。負けるわけにはいきません」
「負ければ終わりだ」
そういうことだった。敗北はそのまま滅亡につながっていく。今は滅ぶか滅ぼされるかの無制限戦争だ。ならばそれひしかないのだった。
「滅亡だ」
「ですね。おそらくオムダーマンもティムールも引かないでしょう」
「外交の席にも出ない」
それもわかっていることであったのだ。

「若し出るとすればだ」
「我が国の主権が喪失するその時ですか」
「あれだ」
バンダルはまた言ってみせてきた。
「第二次世界大戦でヒトラーがやったことだが」
「ポーランドに対してのあれでしょうか」
「そうだ。オランダにもベルギーにもノルウェーに対しても行ったがな」
ナチスドイツが軍靴で踏み躙った国は多い。そうした国々を全て己の国に組み込みナチスドイツは曲がりなりにもドイツ史上最大の版図を持つ国家になったのだ。ただしこれにはローマ帝国やカール大帝のフランク王国は含まれてはいない。
「それと同じだ」
「今まで。サハラにおいて数多く繰り返されてきたことが我々に対してもということですか」
「国家が消える」
バンダルの言葉は沈痛なものになっていた。
「敗戦によってな」
「アヤグーズが今そうなろうとしているようにですね」
「そういうことだ。アヤグーズ・・・・・・」
また後ろを振り返っての言葉であった。

## 第三十三部第五章　地上での決戦その八

「そしてブルコルジ女王。消えるにはあまりにも惜しいが」
「しかし」
「最早あの方を止めることはできない」
その沈痛な声でまた語るのだった。
「天国に行かれるのをな」
「そうです。我々ではもう」
「ああ。今我々はできることはだ」
「撤退するだけです」
それしかないのだった。今の彼等は。
「それしかありません」
「そうだ。だからこそだ」
「ここは。撤退ですか」
「生きていればまた機会がある」
これは何事においても言えることである。それは戦争においても同じで当然ながら戦争においてもそうだ。死んではそれで終わりなのである。
「今はな」
「ハサン本土に。まずは脱出ですね」
「ティムール軍の追っ手はどうなったか」
このことも尋ねるバンダルだった。
「彼等は。まだ来ているか」
「はい、まだ来ています」
ギーヴは告げたのだった。
「まだ。我々を追撃してきています」
「そうか。やはりな」
それを聞いて静かに頷くバンダルだった。
「それではだ。ここはだ」

「速度をあげられますか」
「そうだ。陣形を崩さない程度にだ」
今度はそれであった。陣形を崩さないだけの速度を出すというのだった。
「その速度で撤退するぞ」
「はっ、わかりました」
「確かに数は大きく減った」
このことは否定できなかった。現実は否定できない。その現実に対して嘘をつくことはできるがそれはこの場合は何の解決にもならないものであるのだ。
「しかしだ。まだそれでもだ」
「戦力は。ありますね」
「そうだ。まだティムール軍よりも上だ」
彼は言った。
「数はな」
「数は力です」
ギーヴは今の言葉は励ましのものだった。その数で勝負を挑んで敗れたがそれでも今はこの数を力とするしかないのであった。
「ですから。その数で」
「倒すしかない」
また言うバンダルだった。
「ティムールをな」
「ティムール。噂以上ですね」
ギーヴは今度はティムールについて言及した。
「まさか。ここまで手強いとは」
「コムでもアッサルームでも」
アヤグーズ、そして彼等とのその戦いである。
「彼等は劣勢を言われていた」
「劣勢どころではありませんでしたね」
「そうだ。敗北は間違いないと言われていた」

これは殆どの者が予見していたことだった。宙理は敵にありそのうえ数も劣勢だった。尚且つ将がブルコルジだった。これでティムールの勝利を予見する方が無理だったのだ。
「だが。それでも」
「彼等は勝利を収めました」
「鮮やかにな」
しかも鮮やかに勝利を収めているのである。
「そして戦略目的も果たした」
「ティムール、恐るべしですね」
「そしてシャイターン主席もな」
やはり彼についても語られた。
「彼も。恐ろしい軍略家だ」
「その軍略の前に我々は敗れました」
「そうだ」
これもまた現実であった。
「二度も」
「その敗北で我々は決定的な劣勢に立つことになった」
「はい」
これもまた現実であった。

## 第三十三部第五章　地上での決戦その九

「二度も」
「その敗北で我々は決定的な劣勢に立つことになった」
「はい」
　これもまた現実であった。
「これを覆すのも確かに容易ではないでしょう」
「だが。覆さなければだ」
「我々は滅びる」
　またこのことが述べられた。
「ティムール、そしてシャイターン主席によってな」
「メフメット＝シャイターン」
　シャイターンの名が述べられた。
「一代の梟雄ですね」
「そして南からは英雄が来ている」
「アッディーン副大統領」
　彼についても語られた。
「彼もまた来ています」
「両者を何としても退ける」
　ハサンの戦略目標は最初から今に至るまでこれに尽きた。
「いいな」
「はい、何があろうとも」
「そしてその為にだ」
「今は。退きましょう」
「うむ」
　ハサン軍はアッサルームを離脱しそのままティムールの追っ手を振り切り撤退を終えた。だがこれは彼等にとって長く辛い戦いの一幕でしかなかったのだった。
　砲撃が一通り終わったアッサルームでは。今いよいよ次の攻撃が

行われようとしていたのだった。
「来ます」
「はい」
アッサルームの司令部において。ブルコルジが既に白兵戦の用意も整えている参謀達の言葉を受けていた。やはり彼女ももヘルメットこそ着けていないが銃を備えている。
「揚陸艦が前に出て来ました」
「そうですね。いよいよです」
「戦車及び装甲車も来るかと」
そうした陸上兵器が来ることも当然ながら予測されていたのだった。
「ではいよいよ」
「はい。こちらも戦車や装甲車の用意を」
このことを命じるのだった。
「そして他の兵器も全てです」
「対空砲座は」
「それもです」
これについても許可が出た。
「アズライールによる爆撃もかなりのものになるでしょう」
「そうですね。それもまた」
「少しでも長く、少しでも多く」
今度のブルコルジの言葉だった。
「戦い、そして敵を倒しましょう」
「了解しました」
「陛下」
話が終わったところで報告があがった。
「来ました。ティムール軍の揚陸艦です」
「来たのですね」
「次々に大気圏を突破してきます」
そしてなのであった。

「間も無くそれぞれ降下を終えます」
「ですか」
「それでは陛下」
「我々もまた」
「はい」
ここから先の言葉はもう決まっていた。その指示も。
「我々も徹底抗戦の用意は整っていますね」
「既に各地域に兵を配し終えました」
まずは兵であった。人なくして戦争ができないのは最早言うまでもないことであった。
「そして兵器もまた」
「戦闘車両は」
戦車及び装甲車のことである。
「そちらもですね」
「無論です」
「それ等もまた」
これは先程の話の通りであった。
「既に配しております」
「何時でも戦闘が可能です」
「はい。それではそれぞれの場所で迎撃です」
こうして彼等はその防衛体制を整え終わった。そして今ティムール軍の揚陸艦が大挙して降下した。そのうえで今大規模な地上部隊が姿を現わしたのであった。

## 第三十三部第五章　地上での決戦その十

「まずは基地を抑えよ！」
「いいな！」
まずはそれであった。そうしてまずは前以って宇宙から攻撃を浴びせていたその基地を次々と占領していくのだった。
その基地にはアヤグーズ軍の将兵は殆ど残ってはいなかった。だからこそ基地の制圧自体はそれぞれ何も問題なく進められた。
「基地の奪取ですが」
「順調だな」
「それ自体は順調です」
やはりアッサルームに降り立ったシャイターンに対して報告が述べられる。彼はその制圧した基地の中でもとりわけ大きなその基地に入ってそこを司令部としていた。
「それ自体は」
「基地は、か」
「そうです」
これは言葉のレトリックだった。
「基地自体は進んでいるのですが」
「アヤグーズ軍の将兵は」
「いません」
こう答えが返って来た。
「殆ど。残ってはいません」
「残っている将兵達は負傷して捕虜になるしかない者達で」
「彼等はどうした？」
シャイターンは彼等の処遇に対して問うた。
「彼等はどうしたのだ」
「既に捕虜にしました」
こう返答が返って来たのだった。

「宇宙へあげる用意を整えております」
「そうか。ならいい」
シャイターンはその報告に対して静かに頷いた。
「それはな」
「はい。そしてです」
「設備は。駄目か」
「既に破壊されております」
こうも報告が届いたのだった。
「我々が破壊した分もありますが」
「それ以上に。彼等が」
「アヤグーズ軍が破壊してきたというのだな」
「その通りです」
そういうことであった。アヤグーズ軍はただ基地を放棄したわけではない。こうして全てを破壊して撤退するのは基本的な戦術であった。
「物資もまた」
「全て持ち去られていたか」
「おそらく首都中枢に集めております」
「アヤグーズの中枢に」
そういうことであった。全ては最後の抗戦の為であった。
「全て集めております」
「何もかも」
「それでです」
彼等はさらに報告を続ける。
「今彼等はそこで護りを固めております」
「主席、そうなれば」
「わかっている。すぐに基地を制圧した将兵を集結させるぞ」
「はっ」
「それでは」
「そしてだ」

彼はここでも順調に作戦を進めていくのであった。この辺りの指揮は艦隊戦を行うにあたる時と全く同じで実に冷静沈着かつ的確なものだった。
「私もだ」
「主席も？」
「何かお考えが」
「ここでの惑星全体の指揮は適してはいない」
こう言うのである。
「この基地ではな」
「それではここを移られるのですか」
「では何処に」
「首都中枢の手前にあるＡ基地だ」
「その基地ですか」
「そうだ。そこに入る」
彼はそこから指揮にあたることを決断したのであった。

## 第三十三部第五章　地上での決戦その十一

「そしてそこから指揮にあたる」
「はっ、それではそのように」
「致しましょう」
「あとは。物資だが」
物がなくては戦えない。これもまた地上戦においても同じことであった。
「それも整えていくぞ」
「はっ、それでは」
「宇宙から適時送りましょう」
「物資の集積場所もA基地とする」
指揮所を置くそこだというのである。
「そこに集める。いいな」
「A基地にですか」
「そうだ。そこに集め私が全て統括する」
「主席が」
「ですか」
参謀達は誰もが納得した。何故納得したかというとこれはティムールが独裁国家だからだ。独裁国家において国家元首が軍においても全てを統括するのは当然のことであった。もっともこれにより弊害が生じる場合もある。第二次世界大戦のナチスやソ連はそれにより途方もない損害を生じさせたり国家を滅亡させている。こうしたケースもあるがそれでも今彼等はシャイターンの言葉に従うのであった。
「それでは。御願いします」
「そのように」
「物資は次々に送れ」
彼はこうも告げた。

「そして軍の集結場所もA基地だ」
「そこですか」
「そうだ。そこに置く」
これも決まっていることなのだった。
「そこに置いて物資と共に部隊も私が統括する」
「部隊もですね」
「全ては勝利の為だ」
強い言葉で述べたのだった。
「わかったな」
「はい、それでは」
「部隊もまた」
「決戦の地はこれで決まった」
基地も司令部も何もかも決めたうえでシャイターンはその言葉をさらに続けていく。
「A基地と首都中枢の中間点だ」
「その中間点ですか」
「そこになる」
今度は厳かな声になっていた。
「そこにな」
「そこは確か」
「ここですね」
参謀達はここでモニターを見た。その首都中枢とA基地の間にあるのは平原だった。このアッサルームで最も広い平原である。
「この平原で決戦ですか」
「この惑星において」
「そして我等とアヤグーズの最後の戦いでもある」
こうも言うシャイターンだった。
「最後のな」
「では主席。すぐに」
「A基地に向かいましょう」

「A基地は今どうなっているか」
彼は今度はA基地自体に尋ねてきた。
「あの基地も。手に入れているな」
「はい、既に」
「部隊が入っています」
「ならばいい」
その報告は彼にとっては満足すべきものであった。
「入っていればな」
「まだ一個師団程度ですが」
「それでもだ」
まずは部隊が入ったことを重要視しているのだった。
「入っていればな。それで違う」
「少しでもですか」
「そうだ。一個師団あればその一個師団で何かが出来るな」
「確かに」
それはその通りだった。人というものは一人いるのといないのとで全く違う。師団数は大抵一万程度であるがそれだけいればそれ相当の仕事ができるということであるのだ。

## 第三十三部第五章　地上での決戦その十二

「ではその一個師団で既成事実化して」
「そのうえで他の部隊もですね」
「そういうことだ。いいな」
「はい、それではすぐに」
「他の部隊もまた」
「そして私もだ」
シャイターン自身の移動も忘れてはいないのだった。
「向かうぞ。いいな」
「了解です」
「あとはだ」
指示をさらに続けるのだった。
「首都中枢は包囲しろ」
「包囲ですね」
「そうだ、A基地を軸としてな」
包囲するにしろ扇の要が必要ということだった。何事も軸になるもの、要になるものが必要なのだ。シャイターンはその軸にA基地を選んだのだ。
「包囲するぞ」
「そのうえで平野に兵を向けて」
「決戦ですね」
「そうだ。毛沢東だったか」
中華人民共和国の建国者である。彼についての評価はこの時代においても様々な意見で分かれている。ある人物は英雄といいある人物は暴君といい。そうしたかなり極端な評価に分かれている。それが毛沢東という男である。彼の名前が出て来たのだ。
「囲んで倒す」
「それですか」

「包囲してですね」
「出来る場合と出来ない場合があるがな」
それも言う。
「しかしだ。今回はできる」
「だからですか」
「それで今回は」
「そうだ。包囲する」
このことをまた言ったのだった。
「彼等をな。いいな」
「はっ、それでは」
「包囲します」
「既にアヤグーズ軍の最後の部隊も袋の鼠だ」
袋の鼠、この言葉を出したところでシャイターンは思いなおした。
「いや」
「いや？」
「何か」
「鼠ではないな」
こう言って己の言葉を訂正にかかったのだった。
「袋の虎か」
「虎ですか」
「そうだ、ブルコルジ女王だからな」
ここでもブルコルジを念頭において述べたのだった。
「女虎だからだ」
「だから虎ですか」
「成程」
誰もがこの言葉には納得した。そう、ブルコルジは虎である。鼠ではない。そして虎と鼠は全く違う生き物である。これもはっきりとしていた。
「虎を囲むとならば」
「我々は」

「油断はできない」
シャイターンがまず言ったのはこのことだった。
「下手をすれば命取りになるぞ」
「そうですね。それでは」
「我々は」
「ただ包囲するだけではない」
彼の決断は素早かった。
「何重にも囲め」
「そうですね」
「十重二十重にも」
「そのうえでだ」
シャイターンの言葉は続く。
「空からの攻撃も忘れるな」
「ですね。それも」
「当然平野での決戦の際も」
「無論だ。敵もそうして来る」
ただ陸からだけではなく空からも攻める。これは戦術の基本中の基本である。二十世紀、第二次世界大戦において確立されたこの戦術はこの時代においても地上戦では基本となっているのだ。ただ陸から攻めるという戦術は最早存在してはいないのである。

## 第三十三部第五章　地上での決戦その十三

「ならばだ」
「数は」
「動員できるだけだ」
この指示にも迷いはなかった。
「この戦域にな」
「了解です」
「空と陸からあるだけの攻撃を浴びせる」
シャイターンの言葉は続く。
「重砲及びロケットやミサイルも総動員しろ」
「はい」
「それもまた」
「そのうえで進むこととする」
ここまで話して今遂にA基地に向かった。A基地にはヘリで入った。基地はシャイターンが辿り着いたその時にはもう様々な物資が空港に到着し部隊も集結していた。そしてその基地の司令部に入ったシャイターンそこからあらためて戦局を見渡すのだった。
「敵が来るな」
「はい、やはり平野に」
「迫って来ています」
参謀達が彼に報告をする。A基地の司令部は地下にありコンピューターや機器に囲まれていた。シャイターンはその部屋に入りモニターに映し出される映像を見ていたのだった。
その映像は平野や首都中枢を映し出していた。アヤグーズ軍の最後の砦となっているその首都中枢から軍が出ているのがはっきりと見えた。
「来ているか」
「数は。二十万程度です」

「対するこちらは百万だ」
「はい」
「その百万をすぐに向ける」
彼は言った。
「すぐにな」
「わかりました。それでは」
「補給は忘れるな」
「わかっています」
「それは」
ここでも補給を忘れてはいなかった。やはり補給が第一であった。
「そしてだ。火力と数で押せ」
「了解です」
「それによってですね」
「そうだ。まずは兵を出す」
「百万をですね」
「まずは五倍」
百万と二十万の違いがどれだけのものかは隔絶たるものがあるとしか言い様がないものであった。五倍の差は戦争においては決定的と言ってもいい。
「さて、女王はどうするか」
「アヤグーズ軍にはあれ以上の兵はありませんが」
「あの平野に出せる戦力が二十万」
「うむ」
「そして予備兵力はありません」
「あれが最後です」
予備兵力もない、そこまで追い詰められているのだった。
「その最後の戦力を潰せば後は」
「首都中枢に」
「そういうことだな。だからこその決戦だ」
「ですね」

そういうことだった。アヤグーズ軍にとってはまさに最後の守りなのだった。そこを突破されては本当に後がないのである。そういう場所になっていた。
「私も出るぞ」
「主席も！？」
「平野に」
「私が行かないで誰が行くのだ」
シャイターンは驚く参謀達に対して述べた。
「私以外にな」
「ではやはり今回も」
「主席御自ら」
「そうだ。私が指揮を執る」
今ここでこのことをはっきりと宣言した。
「この私がな」
「では兄上」
左後ろに控えていたアブーがその長兄に声をかけてきた。
「この最後の決戦にも出て来るというのですね」
「間違いなく出て来る」
シャイターンの言葉は微動だにしないものであった。

## 第三十三部第五章　地上での決戦その十四

「それはな」
「そうですか。ここでもまた」
「女王はあくまで戦いの中で生きる」
ブルコルジのことであるのは明らかだった。
「だからだ。来る」
「だからですか。兄上もまた」
「行かれると」
右後ろにいたフラームも兄に声をかけた。
「そういうことですね」
「女王がいなくとも出ていた」
このこともはっきりと言うのだった。
「それはな」
「女王が出陣せずともですか」
「出られるのですか」
「私は戦いの中で生きる」
彼は言った。
「サハラでは力は何で取るものだ」
「剣です」
参謀の一人が答えた。
「それによって手に入れるものです」
「そうです」
他の参謀もその言葉に頷いた。
「力は剣で手に入れるものです」
「敵を断ち切り」
「そうだ。わかったな」
「だからですか」
「この戦いにおいても戦場に立たれますか」

「そういうことだ。私は私の剣で力を手に入れる」
シャイターンは前を見据えて言い切った。
「私自身の剣でな。全てをな」
「はい。それでは」
「そのように」
「進むぞ」
シャイターンはさらに言った。
「平野にな。百万の兵でな」
「わかりました」
こうしてティムール軍は平野への進撃に取り掛かった。百万の大軍は基地を発しそのまま平野に向かう。戦闘には装甲車があり空には艦載機が編隊を組んで飛んでいた。
シャイターンは戦車に乗っていた。ティムール軍のその戦車は回転式の砲塔を持つ二十世紀のタイプからの伝統的な姿の戦車であった。その戦車を指揮車にしたものに乗っているのだ。
その中にいながら彼は。報告を逐次受け取っていたのであった。
「そうか。前面にか」
「はい。来ました」
「二十万です」
「予想通りだな」
来た方角と数を聞いて納得した顔で頷く。今彼は普段の赤い軍服でなく戦闘服を着ていた。陸戦部隊が着るその陸戦服で戦車の中にいるのだった。
「それはな」
「はい、そうですね」
「やはり前面からですか」
「対する我々は百万だ」
「はい」
「数は五倍だ」
単純に数を述べた。

「この五倍の戦力で攻めるが」
「どうされますか？」
「兵を左右に広げる」
彼は戦陣も指示した。
「そして彼等を包み込むぞ」
「左右から包み込みますか」
「数を利用する」
これは当然であった。数があればそれを有効に利用する。そして戦争において最も効果のある戦い方は敵を取り囲むことだ。シャイターンはその基本を守っていたのだ。
「いいな」
「ではまずは軍を左右に広げ」
「うむ」
「敵を取り囲みます」
「砲撃もだ」
それについても指示を出す。

## 第三十三部第五章　地上での決戦その十五

「一点に集中させる」
「その二十万の兵に対してですね」
「取り囲んだその兵を」
「そうだ。集中砲火を浴びせる」
包囲したうえでそうするというのだった。
「わかったな」
「了解です」
「それでは」
「その前にだ」
指示はさらに続く。
「艦載機で攻撃を浴びせるぞ」
「空爆ですね」
「それですね」
「その通りだ。最初はそれだ」
これもまた戦術の基本であった。まずは空から攻める。これもまた第二次世界大戦の頃から基本戦術になっている戦術であった。
「その時にだ」
「敵の艦載機ですね」
「シームルグですか」
「できれば先に空港を叩いておきたがったが」
シャイターンはここで考える顔になって述べた。
「それは出来なかったからな」
「それは仕方ないかと」
参謀の一人がすぐに言う。彼等は今戦車の中の左右に機械があり狭い中で話をしていた。流石に指揮車だけあって攻撃できるようにはなっていない。しかしそれでも操縦はされ車長もいて動かされていた。

「何しろ首都中枢の空港は地下にありますので」
「宇宙からの攻撃にもダメージを受けませんでした」
「そうだな。敵も考えたものだ」
「はい」
この時代はこうした地下に基地を置くこともよくあった。中にはこうした地下に置く空港もあるのだ。アヤグーズ首都中枢の空港がそれだったのだ。
「多少以上の弁を度外視し安全を優先させたのだからな」
「はい。ですが今回はそれがアヤグーズ軍にとって助けになりました」
「シームルグが保全されたのですから」
「だが。数はそれでも我が軍の方が上だ」
「ですね。それは」
「その通りです」
「だからだ。空においても」
彼はここでまた言った。
「取り囲め。数を利用してな」
「わかりました」
「空の戦いでかなり決まる」
シャイターンの言葉は続く。
「この戦い。それは解しておけ」
「了解です」
参謀達は狭いその戦車の中でも敬礼した。そのうえで指示を空にあるアズライールの編隊に伝える。それを受けて編隊の指揮官が頷いた。
「了解しました」
「作戦は貴官に任せるとのことだ」
大将の階級を持つ参謀が彼に伝える。
「空での戦いはな」
「わかりました」

操縦しているので敬礼は出来なかったがそれでも言葉で応えた。
「それでは。お任せ下さい」
「健闘を祈るぞ」
参謀はここまで言うと通信を切った。こうしてこの空の指揮官は彼が率いる全編隊に指示を出すのであった。
「いいか」
「はい」
「これから我が隊は敵編隊への攻撃に移る」
「わかりました」
「それでは」
部下達が彼のその言葉に頷く。丁度ここでシームルグの編隊が前方に姿を現わしたのだった。数はやはり彼等より少なかった。
「やはり数は少ないですね」
「我々の五分の一もないですね」
アヤグーズ軍のパイロット達はそのシームルグの編隊を見てそれぞれ言った。
「六分の一程度ですか」
「数としては」
「確かに数は少ない」
指揮官もそれは認める。

## 第三十三部第五章　地上での決戦その十六

「しかしだ」
「しかし！？」
「士気は高いぞ」
　このことは前以って伝えるのであった。
「彼等にとってはこれが最後なのだからな」
「最後ですか」
「この状況で撤退しなかった」
　彼が言うのはそこだった。
「そして軍から退かなかった」
「それだけにですか」
「最初から命を捨てていると」
「そういうことだ」
　彼が言うのはそれだった。
「それにだ。アヤグーズ軍の強さは知っているな」
「ええ、それはよく」
「身に滲みて」
　答えるパイロット達の声は真剣なものであった。冷や汗すら感じられる。その冷や汗を感じさせる言葉こそが彼等が知っているアヤグーズ軍の強さを教えていた。
「だからだ。用心してことだ」
　指揮官はここでまた告げた。
「幾ら数で勝っていてもな」
「そういうことですね」
「アズライールとシームルグの性能はほぼ互角ですしね」
「それもある」
　両機の性能は総合的には互角であると言っていい。それだけにパイロットの技量や戦術が大きく左右する状況になっているのである。

「一瞬の油断が敗戦になることだけはわかっておけ」
「了解です」
「それでは」
「全軍五つに分かれろ」
指揮官は己の率いる編隊を五つに分けることにした。
「そして正面と」
「正面ですか」
「まずは正面だ」
その五つに分ける軍の一つは正面に置くことにしたのだった。
「それと共に前後と上下にも置く」
「前後と上下にもですね」
「そこからそれぞれ攻める」
つまり五方向から囲みそのうえで攻めるというのだった。これがこの航空戦でのティムール軍、即ちこの指揮官が考えた戦術であった。
「一気にだ。いいな」
「はっ、わかりました」
「それでは」
こうして戦術が決定されティムール軍航空隊はすぐに五つに別れそのうえで包囲し総攻撃にかかった。まずはミサイルであった。
「ミサイル発射用意！」
「了解！」
皆指揮官の指示に言葉を返す。
「ロックオンは忘れるな！」
「わかてtます！」
「それは！」
これについてはもう言うまでもなかった。皆すぐにそれはセットした。するとすぐにアズライール各機から電子音が聞こえてきたのであった。
「ロックオン完了」

「ロックオン完了」
ロックオンはこの時代では共通語になっていた。だがその言葉の響きはアラビア語のそれであった。そのアラビア語での電子音が今響いたのだった。
そしてこの電子音が聞こえてからだった。また指揮官が言った。
「よし、ならばだ」
「はい」
「では。いよいよ」
皆指揮官の次の言葉を待った。その次の言葉とは。
「撃て！」
「撃て！」
攻撃命令が各機ごとに復唱されそれと共にミサイルが放たれる。まずはアズライール各機が放った全てのミサイルがそれぞれ複雑な、空中を舞う蛇の如き動きを見せてシームルグの編隊に向かう。しかしシームルグ達もただそれを黙って見ているわけではなかった。
「やはり」
「動いたか」
そう、各機動いたのであった。それがどうしてかはもう言うまでもなかった。

## 第三十三部第五章　地上での決戦その十七

シームルグ達は散開しそれぞれ驚異的な動きを見せて回避に移った。中にはビームでミサイルを撃ち落とす者すらいた。
指揮官はそのミサイルとシームルグ達の攻防を見た。そしてこう言ったのだった。
「見事だな」
「見事ですか」
「やはりアヤグーズ軍は強い」
あらためてこのことを言った。
「あれだけのミサイルを的確にかわしている」
「確かに」
「我々もあるだけの対空ミサイルを放ったのですが」
ここで一気に勝負をつけるつもりだった。だからこそ彼等もあるだけのミサイルを放ったのだった。しかしそれでもであったのだ。
「ですが。それでも」
「彼等は」
「そうだ。やってくれる」
感嘆の言葉だった。
「思ったより数は減りそうにないな」
「そうですね」
「電子妨害もかけていますし」
当然ながらアヤグーズ軍もそれは使用する。もっとも連合軍のそれに比べるとその強さは比較にならない。これは彼等やティムール軍だけでなくサハラの軍全体に言えることだ。
「どうやら。ミサイルだけでは」
「決着はつきませんか」
「だからだ」
指揮官はここでまた言った。

「もう一度。攻める」
「もう一度ですか」
「今度は切り込むぞ」
指揮官の声が鋭いものになっていた。
「いいな、全機でな」
「了解です」
「それでは」
「互いに衝突だけはするな」
このことを念押しするのは忘れなかった。大気圏内での戦いは宇宙でのそれに比べて衝突することが多い。何故なら惑星の大気圏の中にあるだけにそのフィールドが狭くなるからである。
「それだけはな」
「わかってます」
「それは」
「それでは各機ドッグファイトに移る」
ミサイルで攻撃を浴びせた次はそれだった。最早定番だった。なおアヤグーズ軍からのミサイルは先程のこちらからのミサイル攻撃で全て潰していた。やはりここでも数がものを言った。
「いいな」
「はい」
「では。全機突撃だ」
今度は包囲したうえでそこからアヤグーズ軍に一斉に襲い掛かった。さながら狼が同じ狼達に襲い掛かるようにだ。その狼同士の本格的な戦いとなるのだった。
アズライールはその圧倒的な数を頼んで複数で一機のシームルグに襲い掛かる形を取った。ようやくミサイルの脅威からその身をかわした彼等に一斉に襲い掛かったのだった。
「よし！」
「これでだ！」
前と上、下から三機一斉に襲い掛かりそのシームルグを狙う。三

方から射抜かれたシームルグは忽ちのうちに火を噴き脱出ポッドを吐き出したところで爆発四散して果てた。
「脱出ポッドは狙うな！」
指揮官がまた指示を出してきた。
「ロックオンするだけで軍法会議だ。いいな！」
「ええ！」
「わかってます！」
当然ながら彼等もそれはわかっていた。若し撃てばどうなるかは自明の理であった。
「狙うのはあくまでシームルグだけだ」
「ですね」
「それは」
「それは次々に狙っていい」
彼自身も激しいドッグファイトに身を置きながら指示を続ける。
「飽きる程な」
「飽きる程ですか」
「そうだ」
また部下達に対して答えるのだった。

## 第三十三部第五章　地上での決戦その十八

「いいな。好きなだけやれ」
「了解です。それじゃあ」
「まずは鳥退治ですね」
シームルグを鳥と評しての言葉であった。
「そしてそれからゆっくりとですか」
「そういうことだ」
指揮官も答える。静かだが確実な響きを持つ言葉になっていた。
「そしてそれからだ。陸を狙うのはな」
「俺はそっちの方が好きですけれどね」
部下の一人が何気ない感じで述べてきた。
「どっちかって言えば」
「そうしたければ勝て」
指揮官の言葉はここでも確実な響きを持つものだった。
「空での戦いにな」
「了解です。それじゃあ」
その部下は軽い調子で返す。
「そういうことで」
「獲物を狙いたければ生き残れ」
この言葉は戦争における大前提だった。まず生きなければ話にならない。これが現実である。戦場ではまず生死をかけるものなのだ。
「いいな」
「はい。それじゃあ！」
「全機攻撃開始！」
遂にこの言葉が出された。
「一斉に襲い掛かれ！」
「はい！」
「了解です！」

こうしてミサイルの次に全機で雪崩れ込む。大体において三機で一機を狙うようにして襲い掛かるティムール軍だった。その激しい攻撃の前にアヤグーズ軍の機体はその数を大きく減らしていっていた。

そしてその状況はアヤグーズ軍側もよく認識していた。しかもむしろティムール軍以上にだ。

「まずいな」

「はい」

地上での言葉だった。将軍の一人が暗い顔で空を見上げ参謀がそれに応えていた。

「我が軍は次々と撃墜されている」

「そうですね。やはり数が」

参謀もまた言うのだった。

「違います」

「戦争は数か」

将軍の言葉は苦々しげなものになっていた。

「所詮は」

「我等がこう言うとはな」

これまでは数においても彼等の方が優勢だった。しかしそれはシャイターンによってことごとく覆された。だが今はその数において敗れようとしていたのだった。

「皮肉なものだ」

「数を覆され数において敗れる」

将軍はここでも数について述べた。やはり上を見つつ。その間にも上下と正面からそれぞれ攻撃を受け炎に包まれたアヤグーズ軍の戦闘機が撃墜される。そうしてコクピットから脱出ポッドが打ち出されそのまま安全な場所にまで誘導されていくのだった。そしてそれは一機だけではなかったのだった。

「せめてパイロットの戦死者が少ないのが救いだな」

「ですね。せめて」

参謀の声も苦々しいものになっていた。
「命あらばこそ、ですか」
「命さえあれば幾度でも戦うことができる」
将軍はこの言葉も口にした。
「それは事実だが」
「はい。その通りです」
参謀もその言葉に応える。せめてもと地上から援護として対空射撃をティムール軍に対して仕掛けているがその効果は薄かった。何故薄いのかは彼等もよくわかっていた。
「しかもジャミングもかなりのものだな」
「ここでも数です」
また数であった。
「電子妨害の数もまたかなりのものになっていますから」
「それにより命中精度を下げる」
二十世紀後半から定式化されている基本戦術だった。この時代においてもこれは基本中の基本になっていた。サハラにおいても同じである。
「その数が多ければ多い程だな」
「そういうことになります」
「忌々しいことだ」
将軍の声はさらに苦々しいものになっていた。

## 第三十三部第五章　地上での決戦その十九

「このまま。倒されるか」
「せめて。あがきたいものですが」
「そうだな。あがくか」
ここで一つの決意をする彼等だった。
「何処までもな」
「はい」
「閣下」
ここで将軍の指揮車に通信が入って来た。
「航空部隊からの報告です」
「何だ？」
「戦力が五割を割りました」
まずはこう告げられるのだった。
「そしてティムール軍の航空機が地上に向かって来るそうです」
「そうか」
将軍はそれを聞いても最早驚いてはいなかった。むしろ落ち着き払っていた。
「わかった。ではこちらもこちらでやらせてもらう」
「申し訳ありません」
「謝る必要はない」
将軍の言葉はここでも微動だにしないものであった。最早、という感じである。
「貴官等はよく戦った」
「ですが」
「いいのだ」
これ以上は言わせなかった。
「後は。根限り戦ってくれ」
「根限りですか」

「そこでな」
これは彼等の意を汲んでの言葉である。
「いいな。それでな」
「・・・・・・わかりました」
まずは一人が将軍に対して答えた。既に空とのやり取りになっていた。
「それでは。力の限り」
「我等も」
「頼むぞ。では我々もだ」
「はい」
今度答えたのは参謀であった。
「やりましょう。是非」
「うむ。戦うぞ」
「無論です」
「閣下」
ここでまた別の報告が将軍のところに入って来た。
「攻撃ヘリ部隊が来ました」
「そうか」
この時代においてもヘリは地上部隊にとっては通常の航空機以上に脅威であった。とりわけ攻撃ヘリがまさに天敵なのは変わらない。
「攻撃ヘリもか」
「そして地上部隊も動きました」
この報告も入ったのだった。
「我等に向かって」
「方角は？」
「まずは正面です」
ここで重要なのはまずは、という言葉であった。一つではないということが最初に述べられている。これこそが問題なのである。
「そして左右からも」
「三方向からだな」

「その通りです」
そういうことであった。ティムール軍はここでも数を活かして攻め立てているのであった。
「どうされますか？」
「方陣を組め」
彼がまず出した指示はこれであった。
「護りを固めよ。いいな」
「はっ」
「空に対してもだ」
当然ながらそちらへの備えも忘れはしなかった。攻撃ヘリが来ているというのは第一に頭に入れていたのである。それと共に航空機の存在もだ。

# 第三十三部第五章　地上での決戦その二十

「いいな」
「護りを固めますか」
「少しでも長く戦う」
これが彼の選択であった。
「アヤグーズ軍の誇りの為に」
「アヤグーズ軍のですか」
「ひいてはアヤグーズの誇りだ」
彼はこうも言った。
「その為にだ。その為に戦える者だけ残れ」
「アヤグーズの為に」
「そうだ。その者だけが戦うのだ」
言葉は強いものになっていた。
「アヤグーズの最後の心の為に戦える者だけが」
「では答えは決まっていますな」
「その通りです」
将軍の今の言葉に返してきたのは各部隊からだった。
「将軍、既にここにいるのはです」
「そうです」
彼等は口々に言う。
「既に覚悟を決めている者だけです」
「他の者は全て去ったではありませんか」
「むっ！？」
「違いますか？」
「それは」
言葉を詰まらせた将軍に対してさらに問うてきた。
「だからこそ今ここにいるのです」
「最後まで。戦える者達だけが」

「陛下の為に」
ブルコルジのことも話に出た。
「戦える者だけが残ったのではないのですか？」
「このアッサルームに」
「そうだったな」
将軍もまた彼等の言葉を聞いてそのことを思い出したのだった。
「我々はな。そうだったな」
「はい、だからです」
「最早それは」
「それではだ」
ここまで話しては最早答えは一つしかなかった。
「全軍方陣を組め」
「はっ」
この指示そのものは同じだった。
「いいな。それではな」
「わかりました。それではです」
「方陣を組み」
「最後まで戦う」
最初から勝利を考えた戦術ではなかった。
「それで。いいな」
「はい、我等の意地を見せる為に」
「アヤグーズの誇りを見せる為に」
その為の戦いであるというのを誰もが強く意識していたのだった。
「是非。方陣を組み」
「戦いましょう」
「方陣が崩れればすぐに退け」
将軍はこのことを伝えるのも忘れていなかった。
「そのうえですぐに後方の方陣と合流しろ」
「そのうえで再び戦うのですね」
「陣が崩れた程度で慌てることはない」

彼は言う。
「いいな。崩れようともまた組めばいいのだ」
「了解です」
「それでは」
通信からでも敬礼をして返すのだった。こうして彼等は方陣を組みティムール軍を迎え撃つ。ティムール軍はその彼等に対して空と陸から襲い掛かるのだった。
「いいか」
シャイターンが己の指揮車から命令を出す。

## 第三十三部第五章　地上での決戦その二十一

「敵は方陣を組んでいるな」
「はい」
「その通りです」
　このことは既に彼も把握していた。まず敵の陣形等を見てそのうえで戦術を考えるのはこの時代においても地上戦においても同じであった。
「そのうえで我等を迎え撃たんとしています」
「どうされますか？」
「各個撃破だ」
　言葉は簡潔だった。
「いいな。方陣を一つずつ潰していけ」
「一つずつですか」
「彼等の考えはわかっている」
　シャイターンは指揮車の中においてもシャイターンであった。そしてその冷静沈着な物腰のまま命令を出していくのであった。いつも通り。
「方陣を組み守りを固め」
「はい」
「そのうえで最後まで戦うつもりなのだ」
「最後までですか」
「最早勝敗は決している」
　やはりシャイターンの言葉は冷静なままであった。
「既にな。そうだな」
「その通りです」
　彼の側に控えている陸上部隊の参謀が彼の言葉に応えた。
「今や我等は制空権を掌握しました」
「うむ」

先のその航空戦の結果であるのは言うまでもない。
「まだ敵の航空機は残っていますが充分抑えられるようになっています」
「アヤグーズ軍の地上部隊に対しての攻撃は可能になっている。そうだな」
「そうです」
しかもそれだけではないのだった。
「攻撃ヘリも出しています。空からの攻撃に関しては圧倒的に有利になっています」
「そのうえでだな」
「地上部隊も数で優勢になっています」
陸においてもであった。
「ですから。こちらからも」
「攻めることができる」
シャイターンは指揮車から顔を出し戦局全体をその目で見ることにした。今まさにティムール軍は戦車を先頭に出しそのうえで正面と左右からアヤグーズ軍を半包囲状態にしてそのうえで攻撃にかかろうとしていた。戦場の砂埃が天高くにまで達していた。
「しかしだ」
「このまま攻めてはなりませんか」
「このままではな」
その砂埃を見つつ述べたのだった。
「だからこそだ。ここは」
「各個撃破ですか」
「数を頼りに攻めることはするな」
シャイターンはこのことを強調して伝えた。
「あくまで計画的に攻めるのだ」
「だからこそ方陣を一つずつですね」
「その通りだ」
その目で自軍の動きを見つつ述べる。見れば軍勢は彼の言葉通り

に動いている。命令そのものは見事なまでに末端にまで行き届いていた。
「まずは先頭の方陣を叩く」
「はい」
「航空機と攻撃ヘリのそれぞれの部隊に伝えよ」
「はっ」
まずは空からであった。
「地上部隊の攻撃の前に総攻撃を浴びせるのだ」
「わかりました」
「そのうえで地上部隊の攻撃にかかる」
戦術自体はオーソドックスなままである。
「地上部隊の攻撃は」
「どうされますか？」
「まずは重砲部隊の攻撃だ」
ここでも戦術自体はオーソドックスなものであった。シャイターンは戦術そのものは決して奇をてらわない。これが地上での戦いでもそのまま生きていた。
「そのうえで戦車及び装甲車を進ませるぞ」
「それではそのように」
「攻めていく」
彼はまた言った。
「それでな」
「はっ、それではそのように」
こうしてティムール軍はシャイターンの指示のまま攻撃に入った。攻撃はシャイターンの指示に忠実にまずは空からの攻撃ではじまった。

## 第三十三部第五章　地上での決戦その二十二

航空機が空からロックオンする。一機一機ごとにその攻撃高度から目標をミサイルやロケットで照準を合わせたのだった。
「よし！」
あの地上部隊への攻撃を心待ちにしていたパイロットが声をあげた。彼は空での戦いを無事潜り抜け楽しみの時間に残っていたのだった。
「俺の時間だ！」
「そのまま狙え」
指揮官がその彼に告げる。
「いいな。外すなよ」
「わかってますよ」
そのパイロットは楽しむ声で彼に返した。
「もうロックオンしていますから」
「そうか」
「はい。後は」
「いいか」
指揮官は彼の言葉を受けて全軍に指示を出した。
「全機これより敵地上部隊への攻撃に入る」
「はい」
「わかりました」
すぐに返答が返って来た。
「ミサイルを放った後はビームでの波状攻撃に移る」
「それですか」
「ただしだ」
ここで念押しをすることは忘れなかった。
「攻撃ヘリの攻撃は邪魔をするな」
「それはですか」

「味方の功は奪うな」
「味方のですか」
「俺達の仕事をやる」
仕事という言葉が出された。
「だがその範疇以外のことはな」
「するな、ですか」
「そういうことだ」
この辺りは実に微妙な話であった。味方であっても功績は譲れないし侵すことはできないのだ。指揮官は今そのことを考えて話をしているのだった。
「いいな」
「はい、それは」
「わかっています」
部下達もそれはよくわかっていた。伊達に軍人、しかも機体に乗るパイロットである将校ではなかった。
「では隊長」
「ここは」
「攻撃ヘリ部隊の邪魔はするな」
このことはまたしても言われる。
「いいな、そのうえでだ」
「はい、攻撃を続けます」
「それじゃあ」
こうして航空機部隊はビームでの波状攻撃に移った。それと並行して攻撃ヘリ部隊がその持てる力を最大限に出してアヤグーズ軍の地上部隊を攻撃する。その威力は二十世紀から何ら変わっていなかった。
ビームガトリングガンを連射しロケットを放つ。ホバリングしつつ敵の頭上に留まり飽くなき攻撃を続ける彼等はまさにアヤグーズ軍にとっては災厄そのものだった。
「くっ、撃て！」

あの将軍もたまりかねて攻撃命令を出していた。
「攻撃ヘリ部隊をまず叩け！このままでは無意味な損害を出すだけだ！」
「ですが司令！」
報告は悲鳴になっていた。
「今はとても」
「対空車両はある筈だ」
「数があまりにも減っています」
こう報告をあげるのだった。
「ですから。機能的な反撃は」
「不可能になっているのか」
「対空車両は敵の重砲部隊の砲撃で集中的に撃破されました」
「くっ・・・・・・」
「ですから」
そういう理由だった。対空車両はその性質上空への攻撃には強いが地上からの攻撃には弱い。それを見抜かれてまず重砲部隊の的になったのだった。
「今は。とても」
「攻撃ヘリを撃退できないのか」
「残念ですが」
「それではだ」
将軍の言葉は相変わらず苦渋に満ちている。しかしそれでも指示は出すのだった。それが将軍としての最低限の責務であるからだ。

## 第三十三部第五章　地上での決戦その二十三

「それぞれで攻撃を浴びせよ」
「各個でですか」
「それでもだ」
苦渋に満ちているがそれでも強い言葉ではあった。
「攻撃を仕掛けるのと仕掛けないのとでは全く違うな」
「それは確かに」
「ゼロはあくまでゼロだが」
これは数学的な言葉であり思考であった。
「しかし。一はゼロとは違う」
「少しでも、ですか」
「ゼロは何にもなりはしない」
こうも言うのだった。
「だが。一はそれだけでも生きる」
「だからこそですか」
「動いてこそだ」
はっきりと述べた。
「動いて少しでも撃ち落とせ。いいな」
「はっ、それでは」
「あがく」
またこの言葉を出した。その間にも攻撃ヘリのビームマシンガンで戦車や装甲車、それに砲を破壊されていってもだ。それでも彼は言うのだった。
「何があろうともな。いいな」
「そうですね。既に決めていますから」
「少しでも戦い抜いてみせる」
頭上で飽くなき攻撃を続けるその攻撃ヘリを見据えての言葉だった。

「何があろうとも」
「それでは」
「撃て！」
今攻撃命令が出された。
「そして一機でも撃ち落とせ。いいな！」
「はい！」
こうしてアヤグーズ軍は残り少なくなった対空車両からビームやミサイルを放ちそれで攻撃ヘリにあたった。最早組織的な攻撃は不可能にはなっていたがそれでもだった。彼等は攻撃を仕掛けたのである。
それによりティムール軍の攻撃ヘリは幾らかダメージを受けた機体が出た。しかしそれでも撃墜された機体は皆無で攻撃自体はそのまま続けられていた。
「何てしぶとさだ」
「我々の攻撃が効かない？」
対空車両のアヤグーズ軍の兵士達は墜ちることのないティムール軍の攻撃ヘリ達を見て忌々しげに声をあげた。あげざるを得なかった。
「これだけ攻撃を浴びせているというのに」
「やはり組織的な攻撃でないと無駄なのか？」
「いや、まだだ！」
だがここで古参下士官、曹長の階級を持つ男が叫んだ。
「まだだ、まだだぞ！」
「まだですか」
「元々攻撃ヘリは下からの攻撃に強い！」
これはどの国の攻撃ヘリでも同じである。装甲をそこに集中させているからだ。それこそ高射砲の直撃を受けてもそうおいそれとはやられない。
「この程度は想定の範囲内だ」
「そうですね。確かに」

「この位で」
「どんどん撃て！」
曹長は叫ぶのだった。
「幾らでもな！攻撃しろ！」
「はい、それでは！」
「このっ！」
皆この曹長の言葉に元気付けられまた攻撃を開始した。数は攻撃する側から重砲の射撃で減っていくがそれでも攻撃は続けるのだった。
その様子はシャイターンからも見えていた。彼はそうしたアヤグーズ軍の戦いぶりを見てまた感嘆の言葉を口にするのであった。
「やはりな」
「見事というのですね」
「そうだ。最期の戦いに残っただけはある」
彼は冷静な顔で述べるのだった。
「覚悟ができている」
「彼等は死を前にしています」
参謀は述べた。

## 第三十三部第五章　地上での決戦その二十四

「だからこそ」
「戦えるのだ」
シャイターンは言った。
「あそこまでな」
「ですが主席」
「わかっている」
だからといって攻撃の手を緩めるシャイターンではなかった。
「砲撃を強めよ」
「はい」
「そしてだ」
「攻撃ヘリによる攻撃も続けさせるのですね」
「その通りだ。いいか」
命令を続ける。
「間も無く戦車や装甲車も進ませる」
「彼等も」
「そうだ。いよいよだ」
命令を出す言葉は鋭かった。
「彼等も投入するぞ」
「何分後に」
「五分だ」
シャイターンは問いに答えた。
「五分後だ。いいな」
「五分ですか」
「何度も言う。五分だ」
時間は譲らなかった。
「わかったな。その準備をしておけ」
「はっ、それでは」

「この五分でおおよそのカタがつく」
シャイターンはこう読んでいたのだった。
「だからだ。それからだ」
「止めを刺すのは」
「地上部隊を送るのはな」
それが止めだというのだった。少なくとも地上戦における最後の段階なのは確かだ。
「いいな」
「はっ、それでは」
「焦ることはない」
時間を言ってもそれでもだった。
「五分後に動かすだけでいい」
「それでですか」
「そうだ。まずは一つ」
その方陣を見ての言葉だ。
「そして次だ」
「次に」
「エネルギー及び弾薬には注意しておくことだ」
これについて言うことも忘れてはいなかった。
「いいな」
「エネルギーにもですか」
「当然だ。弾薬もだが」
「ではまずは一つ崩した後で」
「交代で補給をしておけ」
こう指示を出すのであった。
「いいな。そのうえで押し切れ」
「了解です」
こうしてその五分の間にも攻撃の手順が進められた。そのうえで攻撃に取り掛かる。そして五分後。遂に戦車や装甲車が前に進んだのだった。

「よし、今だ！」
「全軍突撃だ！」
「はい！」
ティムール軍の戦車及び装甲車が一斉に前に出た。その後ろに歩兵達が続く。遂に地上部隊の突撃、地上戦の最大の見せ場であった。
戦車はその砲からビームを放つ。それにより戦場に残っていたアヤグーズ軍の戦車や装甲車を撃ち抜いていく。アヤグーズ軍の車両はその都度火を噴いていく。
戦車が一両側面からビームに貫かれる。動きを一瞬止めてからそのうえで火を噴き爆発する。そしてそれは一両だけではなかったのだった。
一両、そしてまた一両とやられていく。方陣は完全に崩された。
「攻撃の手を緩めるな」
シャイターンもまた突撃に参加しそのうえでまた命令を出していた。
「各個撃破にかかれ」
「各個撃破ですか」
「一両を数両でかかれ」
こう言うのである。
「いいな」
「数でですか」
「そうだ、敵を寸断しだ」
方陣を崩したのをここで活かすのであった。
「そのうえで一両ずつだ」
「わかりました。ではそのように」
「一両ずつ」
「数を少しでも減らせ」
これが彼の考えだった。
「次の方陣に逃げ込むまでにな」
「わかりました」

「それでは」
こうしてティムール軍の戦車は数両でアヤグーズ軍の車両を取り囲みそのうえで一斉に攻撃を仕掛け撃破していく。攻撃を止めた車両からアヤグーズ軍の将兵達が次々と逃げ出していく。攻撃手段をなくした彼等にできることは一つしかないのであった。

## 第三十三部第五章　地上での決戦その二十五

「ま、待て撃つな！」
「忌々しいがな！」
手をあげるのだった。
「降伏する。最早駄目だ！」
「くっ！」
「主席、敵の戦車兵達は」
「後方に送れ」
指示は一言だった。
「いいな」
「いつも通りですか」
「そうだ。いつも通りだ」
シャイターンは捕虜に対してはここでもいつも通りであった。
「捕虜にしてすぐに後方にだ」
「はい、それでは」
「そのように」
「無駄弾を撃つな」
投降した者を撃つなということだった。
「彼等はまず後方に送り」
「はい」
「後々役立ってもらう」
その投降し武装を完全に解除されたうえで次々に後ろにやられていくアヤグーズ軍の軍服の者達を見ながらの言葉であった。丁度シャイターンの前も通ってきていたのだ。
「後々な」
「といいますと彼等も」
「加える」
その彼等を見ての言葉だった。

「アヤグーズとの戦いが終わり次第な」
「我が軍にですか」
「勝利を収めれば収める程強くなるのだ」
シャイターンは言った。
「我がティムールはな」
「そうですね。戦いが終われば彼等も我が軍ですね」
「だからだ。粗末には扱うな」
「わかりました」
敵の捕虜を後々自軍に加えるのはサハラにおいては普通に行われている。何もシャイターンだけではない。これは西方と南方を掌握しティムールと同じくハサンに攻め込んでいるオムダーマンにしろ同じでありサハラでは昔からごく普通のことであるのだ。
「それだけだ。捕虜はな」
「それでは捕虜を送りつつ」
「攻撃を続けよ」
これは止めないのだった。
「いいな」
「はい、それで主席」
ここで話が変わった。
「方陣は完全に崩れました」
「うむ」
遂に、であった。
「そしてです」
「遂に撤退をはじめたか」
「はい」
その通りだった。今シャイターンの目の前でもアヤグーズ軍は撤退を開始していた。方陣が完全に崩れたのを見て決断を下したのであった。
「次の方陣に向かっています」
「追撃しろ」

まずはこの命令を下した。
「しかしだ」
「しかし？」
「深追いはするな」
この命令を出すことも忘れなかった。
「いいな。深追いはするな」
「深追いは、ですか」
「それは止めておくことだ」
戦局を見据えつつの言葉であった。
「いいな」
「それはまたどうしてですか？」
「次の方陣を見るのだ」
「むっ！？」
「次のですか」
「既に態勢を整えている」
その通りだった。次の方陣はもう完全に態勢を整えていた。そのうえで撤退して来る友軍の受け入れもまた整えているのであった。

## 第三十三部第五章　地上での決戦その二十六

「だからだ。迂闊に近寄るとだ」
「攻撃を受けますね」
「今は余計な損害は避ける」
シャイターンはその為に過度な追撃を命じないのだった。
「あくまで一つずつだ。いいな」
「そうですね。それでは」
「確実に一つずつ」
「何度も言うが焦ることはない」
確かにシャイターンの言葉は落ち着き払ったものであった。そして戦局を見据えるその目もまたそうであった。落ち着き払ったものであったのだ。
「いいな」
「では適度に追撃を仕掛け」
「一旦態勢を整える」
自軍のことであった。
「いいな。次の方陣への攻撃の為にだ」
「ですが主席」
ここで空から通信が入った。攻撃ヘリ部隊からだった。
「何だ？」
「既に空は抑えています」
「うむ」
「ですからそこからの攻撃も続けて」
「敵の航空機はどうなっているか」
彼はここでこのことも問うたのだった。
「彼等はどうなった？」
「全機いなくなりました」
これはシャイターンにとっては喜ぶべき報告であった。

「殆どの機体を撃墜し」
「残りは？」
「撤退しました」
遂に諦めたということであった。
「そして残るのは我々の機のみです」
「では全ての航空機を地上への攻撃に回せ」
「はい」
遂にこの命令が出されたのだった。
「そして攻撃ヘリ部隊と連動してだ」
「わかりました。それでは」
「先に重砲での攻撃を浴びせておく」
敵の対空車両への攻撃である。空からの攻撃に対して先にこれを封じておく。先の方陣を破った時と全く同じ展開であった。戦術はオーソドックスだった。ここでも。
「それから攻撃にかかれ。いいな」
「わかりました」
「ではまずは重砲部隊だ」
航空部隊に命じてから重砲部隊に話を移した。
「いいな」
「はい、それでは」
「すぐに」
「エネルギー及び弾薬はどうなっているか」
「あと一回総攻撃ができます」
「一度か」
「どうされますか？」
「では総攻撃を仕掛けろ」
彼は言った。
「それが終わればすぐに補給だ」
「それからですか」
「一度の総攻撃で敵の対空車両を叩く」

シャイターンの考えであった。
「そのうえで空から攻め」
「そして地上部隊を」
「いいな」
攻撃命令を終えてからそれを確認する。
「そのようにだ」
「はっ、それでは」
「そのように」
「重砲部隊に告ぐ」
シャイターンは再び命令を下した。

## 第三十三部第五章　地上での決戦その二十七

「敵の方陣に総攻撃を浴びせよ」
「了解です」
「それでは」
「今あるだけのエネルギー及び弾薬を放て」
こうも命じるのだった。
「そのうえでだ。補給に移れ」
「そのうえでですか」
「まだ方陣はある」
彼はこれで戦いが終わるとは全く思っていなかった。これはまさにその通りでまだ方陣は残っていた。その方陣達も見据えていたのだ。
「彼等にもな」
「攻撃を仕掛ける必要があるからですか」
「だからだ。まずは総攻撃だ」
今攻めるその方陣である。
「そしてだ」
「補給を受けて次の方陣に」
「そうですね」
「わかればすぐに攻撃に移れ」
今度の命令は簡潔だった。
「いいな」
「はい！」
こうして重砲部隊が攻撃にかかる。横に並んだその重砲達の砲身が一斉に上に向く。そのうえで今攻撃にかかろうとしていたのだった。
「撃て！」
「撃て！」

攻撃命令が出された。そして。
その上に向けられた砲が一斉に放たれる。火を噴き砲弾が唸り声をあげて放物線を描く。そうしてその下にあるアヤグーズ軍の車両を吹き飛ばしていく。
重砲の威力はかなりだった。周りにある車両まで吹き飛ばす。対空車両を主に狙っているがそれ以外の車両まで吹き飛ばしてしまっていた。
「うわっ！」
「来たか！」
「回避！」
アヤグーズ軍の中で回避命令が必死に出される。
「回避しろ！早く！」
「避けろ！」
命令は必死なものだった。
「さもなければ死ぬぞ！」
「回避だ！」
アヤグーズ軍の車両はどれも必死にティムール軍の重砲から避けようとする。しかし唸り声をあげて落下する重砲の攻撃はあまりにも威力が高く至近でも車両を次々と吹き飛ばす。それによりアヤグーズ軍の方陣はそのダメージをさらに深いものにさせていたのだった。
「迂闊だったな」
将軍はそのティムール軍の重砲部隊の砲撃を忌々しげに見つつ述べた。
「重砲は彼等の方が強力だった」
「そうですね。確かに」
「まず射程が違う」
「あの射程は連合軍のそれに匹敵するでしょうか」
エウロパとの戦いでは連合軍の重砲もまたその射程と威力で有名になっていたのだ。最も恐ろしいのはその照準の正確さだったが。

「あれは」
「そうだな」
将軍もその言葉を認めた。
「少なくとも射程はそうだな」
「威力は確かに凄いですが」
「それは我々も同じだな」
「はい」
威力そのものについては互角なのだった。
「だが射程は」
「あまりにも違います」
「射程を改良したか」
これがティムール軍の重砲の秘密だったのだ。
「それによりあの強さか」
「どうやらそのようですね」
「連合軍から学んだな」
将軍はそのことを察知した。
「どうやらな」
「そのようですね。まずは射程ですか」
「相手の射程外から攻撃を仕掛ける」
何時の時代も戦術において求められることの一つだ。

## 第三十三部第五章　地上での決戦その二十八

「見事にそれを果たしている」
「我が軍の重砲部隊も攻撃を仕掛けていますが」
それは彼等も同じだった。しかしだったのだ。
「ですが。射程が」
「違うか」
「残念ですが」
そういうことであった。
「敵軍は我が軍の重砲の射程外に逃れています」
「うむ」
見ればまさにその通りだった。ティムール軍はアヤグーズ軍の重砲の攻撃射程の外に布陣している。そうしてその攻撃を避けているのだった。
「そしてそのうえで」
「彼等の重砲での射撃を行っている」
「今弾薬での攻撃が終わりました」
それは終わったのだった。だが。
「次は」
「ビームか」
「はい」
次はそれであった。今度はビームカノン砲の番であった。
砲が正面に向けられる。ビームカノンの特徴は攻撃が一直線に向かうことだ。今彼等はその特性を活かして攻撃に移るのであった。
そして今ビームが空間を切り裂いて放たれる。それにより再びアヤグーズ軍の方陣が切り裂かれる。ダメージが増える一方であった。
「くっ、対空車両は」
「どれだけ残っている？」
方陣の中でそれが確かめられたのだった。

「半数程度です」
「五割か」
「はい」
「今回も随分とやられたな」
「またしても組織的な反撃は」
「不可能だな」
この結論を出さざるを得なかった。
「シャイターン主席はわかっているな」
「地上での戦いもですか」
「まず空だ」
しその指揮官は忌々しげに述べる。
「空を抑えその後で」
「対空車両を撃破する」
「そうなればかなりの戦力差が地上においてあろうとも勝てる」
「その通りです。地上での戦いは上からの攻撃には脆いものです」
これがわかったのは第二次世界大戦からだ。第一次世界大戦から航空機は存在していたがそれを対地戦に効果的に使用したのは第二次以降からなのだ。
「ですから」
「しかも地上においても数で圧倒している」
「それならば後は」
「的確に進めていくだけだ」
そういうことであった。
「方陣を一つずつ撃破していく」
「少しずつ的確に、ですね」
「そしてシャイターン主席はそれを守っている」
この間にもビームカノンによる攻撃が続けられている。その威力は絶大でありまさに雷が放たれそれが大地を切り裂くが如きであった。
「憎たらしいまでに的確に」

「では今度もまた」
「もう来たか」
攻撃ヘリ部隊がまた姿を現わしてきたのだった。
「速いな、もうか」
「どうされますか？」
「組織的な反撃ができなくともだ」
だからといって何もしないのでは何にもならない。このこともはっきりとわかっていた。戦争は反撃しなければどうにもならないものだからだ。
「やる」
「では反撃ですね」
「残った対空車両に伝えろ！」
その雷の如きビームカノンの砲撃が丁度終わっていた。
「それぞれで迎撃せよとな」
「了解です」
敬礼で応えるその部下だった。

## 第三十三部第五章　地上での決戦その二十九

「ではすぐにそのように」
「とにかくだ。粘れ」
彼もこう言うしかなかった。
「粘って粘って粘り抜いてだ」
「少しでも長く戦うと」
「そう決めた筈だ」
既に勝敗を考慮していないのは彼もまた同じであった。
「だからだ。それならばだ」
「わかりました。粘ります」
丁度彼等のすぐ側をその対空車両が走る。そうしてその対空ビーム砲を空に対して向ける。空への攻撃が今はじまろうとしていた。
「頼むぞ」
指揮官はその対空車両に声をかけた。
「辛いだろうがな」
対空車両の火が噴く。そうして今絶望的な反撃を試みる。この方陣もまた空しく破られ次も、また次もそうだった。アヤグーズ軍は早朝から夕刻まで戦い残したものは。夥しいまでの彼等自身の亡骸であった。
彼等の殆どは倒れるか降伏するかしていた。残った僅かな戦力だけが逃げ去っていた。夜に戦場に残っているのはティムール軍だけだった。
「勝ったな」
「はい」
その夜の戦場に立つシャイターンに対して参謀の一人が述べる。
「この戦いもまた」
「時間はかかった」
シャイターンはそれは認めた。

「しかしだ」
「勝利は勝利ですね」
「その通りだ。そしてこの勝利により」
彼はさらに言葉を続けるのだった。
「道が開けた」
「ではいよいよ」
「王宮に向かう」
ブルコルジがいるその王宮にであった。
「王宮の周りは完全に要塞化されているな」
「はい、その通りです」
彼の側に控えていた別の参謀が答える。夜闇の中の彼等の足元には無数の残骸が転がっている。アヤグーズ軍のものと思われるものが圧倒的に多かった。
「彼等の最後の城です」
「最後のか」
「では主席」
「いよいよその城に」
「わかっている。進撃だ」
命令はここでも一つしかなかった。
「女王の最後の城にな」
「了解です」
「それでは」
「まずは今日はこれで休息に入る」
戦いが完全に終わった戦場においての言葉であった。
「点呼を取り」
「はい」
これは忘れることがなかった。どれだけの激戦であってもその後の人員点呼やチェックは忘れない。こうしたきめ細かさも持っているシャイターンであった。
「そのうえでだ」

「休息にですね」
「双方の戦死者や兵器の収容も急げ」
これも忘れなかった。
「負傷者の救出もな」
「はっ、それでは」
「それも」
周りの者達が敬礼で応える。
「そのうえで翌朝進撃に移る」
「王宮にですね」
「これで最後だ」
シャイターンはまた言った。

## 第三十三部第五章　地上での決戦その三十

「アヤグーズとの戦いはな」
「あの女王も膝を屈するのですね」
「遂に」
「屈させてみせる」
シャイターンは遠く、その王宮の方を見つつ言うのだった。
「何があろうともな」
「要塞は堅固なようです」
「どうやら。それは」
「三日だ」
シャイターンが今度言ったのは期日だった。
「その要塞を三日で陥落させる」
「三日でですか」
「そうだ。そして」
その遠くを見据えたまま言葉を続ける。
「三日で私は虎を得る」
「虎を。つまり」
「それは」
「そうだ。彼女だ」
その彼女であった。彼が心から望んでいる彼女だった。
「虎を我が部下とするのだ。いよいよな」
「そういうことですね」
「要塞に立て篭もる虎を」
「虎は高貴な存在だ」
サハラにおいては獅子の方が上だとされるがそれでも虎が高貴な存在とされているのは同じである。その気高いまでの美しさからそうされているのだ。
「そうおいそれとは手に入るものではない。そもそもな」

「苦労が必要ということですね」
「まだ苦労が」
「しかもその虎がだ」
シャイターンはなおもブルコルジについて語る。
「虎の中の虎。虎王だとすればだ」
「その苦労も尋常なものではない」
「そういうことですね」
「その通りだ。それではだ」
「はい」
「翌朝だ」
また時間を述べた。
「翌朝進撃する。それまで休息だ」
「了解しました」
「戦場整理にあたっている部隊はそのまま続けるように」
夜でもであった。見ればシャイターン達の周りでは多くの光が見える。それに従って戦死者や破壊された兵器の収容に当たっているのは明らかであった。
「いいな」
「はい、それもまた」
「了解しました」
この命令も受けて敬礼が為された。シャイターンの言葉はさらに続く。
「そして食事だが」
「食事ですか」
「まだ皆採っていませんが」
「すぐに採るようにな」
あまり多くは言わなかった。
「すぐにだ。いいな」
「すぐにですか」
「もう遅い」

彼は辺りを見ていた。その真っ暗闇を。
「すぐに採らなくてはな。時間が時間だ」
「だからですか」
「そうだ。すぐに採るようにな」
「それでしたら野戦食になりますが」
「それで宜しいですね」
「私もそれを採ろう」
シャイターンはこうも言うのだった。
「私もな」
「主席もですか！？」
「まことですか！？」
「何かおかしなことはあるか？」
シャイターンはここで驚きを隠せない周りの者達に対して問い返した。
「それで。何かあるのか？」
「いえ、いつものようなメニューかと思いまして」
「違うのですか」
「あくまで時と場合が許せばだ」
シャイターンは落ち着き払った様子で彼等に言葉を返した。それはまるで今から最高級のレストランに向かうかのような、そうした物腰だった。
「だがそうでなければ」
「採られないのですか」
「そうだ。今は時間も余裕もない」
だからだというのだった。

## 第三十三部第五章　地上での決戦その三十一

「それにだ」
「それに？」
「今全ての将兵が野戦食を採る」
今から迅速に食事を採るとなればこれしかない。地上戦は宇宙戦以上にその食事を採ることが困難なのだ。時によっては野戦食どころではない。
「ならば私もだ」
「そうですか。では主席」
「主席の分も」
「メニューは何だ？」
シャイターンは野戦食について述べたところでさらに問うたのだった。
「その野戦食の」
「羊肉の燻製と」
「ふむ」
「パンです」
「それか」
「それにクスクスです」
クスクスは本来ナイジェリアの料理でありイスラム圏の食事だ。だから連合だけではなく彼等の中でも食べられるのである。だから野戦食にも出されるのだ。
「その三つです」
「そうか。ならばだ」
「それで宜しいですね？」
「うむ。採らせてもらう」
地上戦用の軍服の上には流石にマントを羽織ってはいない。だがその背にたなびかせるものを背負いつつこう答えたのだった。

「その三つをな」
「パンは乾パンになります」
「他にはビスケットもあります」
「ビスケットもか」
「はい」
これも野戦においては重要な食事となっている。プロイセンのフリードリヒ大王は行軍中や戦陣においてビスケットを好んだことで知られている。
「それもありますが」
「どちらにされますか？」
「乾パンにしよう」
シャイターンが選んだのはそちらだった。
「それにな」
「はい、それでは」
「そちらを用意します」
「将兵には満足に食べるように伝えよ」
今度は量について言及した。
「いいな。満足にだ」
「満足にですか」
「食べられるだけ食べろ」
さらに具体的に述べた。
「いいな。そうした意味で満足にだ」
「わかりました」
「ではそれにつきましても」
「翌朝また進撃する」
戦いが行われるということだった。
「だからだ。今はだ」
「食事を採るということですね」
「次の戦いの為に」
「兵器はエネルギーや弾薬がなければ何にもならない」

それ等がなければただのガラクタだ。エネルギーや弾薬があってこそようやく戦うことができる、それが兵器というものなのだ。
「そして人はだ」
「食べないと動くことはおろか生きてもいられない」
「だからですね」
「その通りだ。だからこそだ」
食べろというのだった。
「わかったな」
「それではそちらも」
「満足に」
「食べさせよ。アヤグーズでの最後の戦いの前にな」
「わかりました」
「今は野戦食でいい」
今はいいというのだった。
「だが」
「だが？」
「何かありますか、まだ」
「三日の間に一つ馳走を用意しておきたいものだな」
シャイターンは腕を組んで述べたのだった。

## 第三十三部第五章　地上での決戦その三十二

「やはりな」
「馳走をですか」
「そうだ。おそらく野戦食が続く」
戦闘が行われるならばこれは充分に予想された。戦闘中にそういそれと食事を採る時間はない。ならば野戦食がメインになるのは当然のことだった。
「だが。その間にだ」
「そうした食事もですね」
「用意しておきたいと」
「野戦食ばかりでは将兵の士気に関わる」
食事が将兵の士気に大きく関係するのは人が戦争を行う限り避けられない問題であった。満足で美味い食事があって動くのは人として当然のことである。
「だからだ。用意しておくのだ」
「はっ、それでは補給隊にそのように」
「伝えておきます」
「今すぐにな。そうすれば戦いに間に合う」
「わかりました。それでは」
「そちらもまた」
「これで食事はいい」
これについての話はこれで終わらせたのだった。
「それではだ」
「はい、主席」
「こちらへ」
周りの者達が彼を後方に案内する。
「すぐに食事の用意に取り掛かりますので」
「少しだけお待ちを」

「そのうえで休むとしよう」
「シャワーは？」
「どうされますか？」
「まだそれはできてはいないな？」
戦闘が続いていた。それでどうしてそうしたものが用意できるというのか。こうしたところも地上戦の不便なところであると言えるものである。
「まだな」
「急げばすぐにできますが」
「主席のものは」
「いい」
不要だと言い切った。
「それはな」
「宜しいのですか」
「シャワーは」
「やはり将兵達は浴びることができないな」
彼は食事とほぼ同じことを問うた。
「そうだな。違うか？」
「いえ、そうです」
「その通りです」
返答には嘘偽りはなかった。
「それはまだ」
「少なくとも今日は」
「ならばいい」
ここでも断るのだった。
「それならばな」
「左様ですか」
「食事を採ったうえで休む」
彼はあらためて言った。
「それでな。そうさせてもらう」

「左様ですか」
「そのようにされますか」
「今はな」
こう答えた。
「そうしよう。それではだ」
「はい、それでは」
「そのように」
「貴官等もすぐに食事を採ることだ」
彼は周りの者達にも告げた。
「人間は食べなければ何にもならない」
「はい、それはわかっています」
「我々も」
人間ならばわかっていない筈がなかった。実際に彼等は今現在それぞれ空腹感を感じていた。もうそんな時間でもあったのだ。

## 第三十三部第五章　地上での決戦その三十三

「ではこれが終わりましたら」
「我々も」
「食べることだ」
彼は言った。
「そしてだ」
「はい、何か」
「まだありますか？」
「野戦食のこのメニューだが」
彼はこれについてまた言うのだった。
「一つ付け加えさせておくか」
「といいますと？」
「何か」
「ジュースだ」
彼は言った。
「果物のジュースだ。それが欲しい」
「果物のですか」
「それにできれば果物そのものもだ」
さらに付け加えた。
「野戦食ではないがそれもな」
「付け加えるべきだと」
「そう仰るのですね」
「栄養のバランスの為だ」
彼はそこまで考慮していた。
「ビタミンもなければ駄目だ」
「むっ、そういえば」
「このメニューにはどうも」
「そうだな。今一つ欠けている」

シャイターンの指摘は正しかった。
「わかったな。だからだ」
「はい、ではすぐに」
「それも手配します」
「果物はあるな」
このことも確かめる。
「それも。どうだ？」
「はい、オレンジでしたら確か」
「ジュースも。オレンジです」
「オレンジか」
シャイターンはオレンジと聞いてここでも考える顔になった。
「そうか。オレンジか」
「問題がありますか？」
「オレンジで」
「いや、それでいい」
これでいいというのだった。
「オレンジでな。あれはいい」
「そうですか。それでは」
「オレンジをすぐに」
「柑橘類か林檎の類がいい」
彼はこう言った。
「栄養にはな。できればこれからの最後の戦いにもだ」
「果物があるべきだと」
「出来る限り手配することだ。それが駄目ならばだ」
「その場合はどうされますか？」
「サプリメントでもいい」
これはかなり非常的なものに周りの者には聞こえた。
「とにかく栄養のバランスを考える」
「そうですか」
「この点やはり連合軍は優れているようだな」

そして今度は連合軍について言及したのだった。
「どうやらな」
「はい、そのようです」
周りの者の一人が答えた。
「連合軍の野戦食ですが」
「どういったものだ？」
「一言で言えば豪勢です」
まずはこう述べたのだった。
「料理だけでなく素材も」
「見事なものか」
「量もかなりですし」
「栄養のバランスはどうか」
「普通に野菜や果物が豊富にあります」
「ほう」
シャイターンはその言葉に目を向けた。如何にも興味があるといった目であった。
「しかも塩漬けや酢漬けが多く」
「栄養を破壊しないようにしているな」
「連合の高度な技術で冷凍しても栄養が損なわれないようになっているものもあります」
「ではそれを解凍してか」
「そうです」
こういうことだった。

## 第三十三部第五章　地上での決戦その三十四

「新鮮な野菜料理や果物が何時でも食べられます」
「それは興味深いな」
「他の料理もです」
野菜や果物だけではないのだった。
「シチューもすぐに温かいものが食べられます」
「ふむ」
「当然ここにも野菜が入っています」
シチューにもだった。
「またシチューだけでなく様々な料理が」
「連合らしくか」
「はい。中華風のスープもあれば日本の味噌汁もあります」
この辺りはやはり連合であった。
「そういったものが様々に揃えられています」
「口飽きはしそうにないな」
「それも考慮に入れているようです」
それもであるのだった。
「そしてその量ですが」
「今多いと聞いたが」
「はい。一度の食事が我々の倍はあります」
こう語った。
「優にそれだけは」
「何と、それはまた」
「多いな」
シャイターン以外の者達もそれを聞いて驚きを隠せない。
「倍とはな」
「やはり。連合ではそれだけ食べるのか」
「道理で身体も大きい筈だ」

「そうだな」
連合の人間はサハラの人間と比べてもかなり大きい。こうした意味ではエウロパもサハラも変わりはしない。とかく連合の者達は体格に恵まれている者が多い。
「少なくとも我々より遥かに上です」
「そうか」
「デザートも必ずありますし」
それもであった。
「そのフルーツだけでなく」
「菓子もか」
「チョコレートにクッキー、他にはケーキです」
「ケーキもか」
「はい、あります」
そういったものまであるのであった。
「やはりかなり新しい状態で食べられます」
「デザートまであるか」
「何と贅沢な」
「最早野戦食ではないな」
周りの者達はまた言い合う。
「そこまでいくとな」
「全くだ」
「連合の豊かさ故だな」
シャイターンは冷静な調子で述べた。
「それもまた」
「やはりそうですか」
「我々にはないものだ」
また一つ真実が語られたのだった。
「だからだ。言っても仕方のないことではある」
「はい」
「それは」

「しかしだ」
だがそれでもシャイターンはまだ言うのであった。
「それは我等が戦乱に覆われ続けているからだ」
「では主席」
「この戦乱が終われば」
「すぐには達することはできない」
一がすぐに十になれるわけではない。こればかりはどうしようもないことである。現実は何事においても一つずつ進むものだからである。
「しかしだ」
「少しずつですか」
「そうだ。近付くことはできる」
彼は言うのであった。
「少しずつな。戦場での食事も然りだ」
「左様ですね」
「それは」
「今は致し方ない」
また前置きが為された。
「だが。近付いていくようにな」
「少しずつですね」
「連合の豊かさに」
「とりあえずは今も温かい食事を採れるようにだ」
これは命令であった。
「そう配慮はしてもらいたい」
「全ての将兵がですね」
「それは」
「一人が冷めた食事ならば同じことだ」
実はシャイターンは常に豪奢な食事を楽しんでいるわけではないのだ。彼がそうした食事を楽しむのはあくまで満ちている時だけである。そうでない場合は決してそうした豪奢な食事を楽しんだりは

しないのだ。この辺りもまた彼の人気の源になっているのである。
「そういうことだ」
「はっ、それでは」
「その配慮も」
無論彼等でもこれは可能である。そうした時の為の固形燃料といったものも所有しているからだ。彼等も物資が全くないというわけではないのだ。
「しておきます」
「そのように」
「では。休もう」
これで話が終わった。
「今日はな」
「わかりました。それでは」
「また明日に」
こうして彼等の今の話が終わったのだった。シャイターンはその場を後にしてこのアヤグーズでの決戦を終えた。だがまだ最後の戦いが彼を待っているのであった。女王との最後の戦いが。

第三十三部　完

２００９・２・１６

# 第三十四部第一章　他勢力の目その一

他勢力の目

アヤグーズ軍及びハサン軍がアヤグーズ星系においてのティムール軍との決戦に破れたという話はすぐに人類社会全体に伝わった。それはサハラにだけ伝わったのではなかった。

『おい、今度もか』

『ああ、今度もだ』

またしても連合の軍事関係のインターネットサイトにおいてサハラの軍事情勢についての話が為されていた。今の主題はそのアヤグーズの敗戦のことであった。

『まさかアヤグーズが敗れるなんてな』

『またこの言葉だけれどな』

書き込まれる言葉は醒めたものも入っていた。

『シャイターン主席は予想外ってことか？』

『何かまたとんでもない勝ち方してるけれどな』

当然ながら彼の戦いぶりについても検証されたのだった。

『ええと、いきなりこう来るか？』

『普通これはないよな』

『ないない』

皆が否定した。

『機雷を逆に使ったりこうしてすぐに派手に動いたりってな』

『並大抵の指揮じゃないな』

『アメーバの動きみたいだな』

こうまで言われるのだった。

『ここまで絶妙に動かせるなんてな』

『連合軍にこんな動きできんのかね』

自分達の軍についても言及される。

『ここまで見事な動きな』

『どうかね』
『馬鹿っ、無理に決まってるだろうが』
すぐにこれは否定された。
『連合軍がいいのは軍規軍律だけだぞ』
『個々の質なんてな』
装備や補給は高く評価されていてもこうした将兵の質になると評価が低いのが連合軍であった。これは他ならぬ連合の人間からの評価であった。
『大したことないんだからな』
『数で戦う軍隊だぞ』
これがおおよその評価であった。
『それでどうやってここまで動けるんだよ』
『エウロパとの戦争忘れたのかよ』
先のエウロパとの戦争はそれの証明の一つであった。
「何かっていうと方陣組んで守るだけじゃねえか』
『あと数にあかせて攻める』
確かに数で戦う軍であるのは事実であった。
『それだけだろ？うちの軍隊なんてよ』
『メインの仕事は災害救助と海賊やテロリストの討伐だぞ』
エウロパとの戦争が終わった今は完全にそうなってしまっていた。
『で、どうやってこんな動きができるんだよ』
『できるわけないだろ』
『それもそうか』
しかもこれで納得されるのだった。
『じゃあ無理だな』
『装備と数で戦うからな』
『あと補給でな』
この三つさえあれば負けることがない、これが連合軍の考えに他ならない。そしてそれを徹底させているのが他ならぬ八条義統であった。

『それだけだからな』
『まあそういうことだ』
諦めの言葉まで書き込まれた。
『しかしな』
『ああ、勝つなんてな』
話がここに戻った。
『本当にまさかだよ』
『ここで負けたらティムールは終わってたな』
この評価はここでも健在だった。連合においても。
『それが勝った』
『勝った方が生き残って負けた方が滅びる戦いだった』
そうした意味でもまさに決戦そのものの戦いだったのである。
『それで負けたアヤグーズは』
『アッサルームに逃げ込んだぜ』
惑星アッサルームという意味である。

## 第三十四部第一章　他勢力の目その二

『そしてそこで最後の戦いってわけだ』
『無理だろ』
すぐにこう書き込まれた。
『最後って。もうよ』
『負けはもう決まったよな』
『滅びるのもな』
他人事で書かれているのは当然であった。連合にいる彼等にとってはまさに他人事であり対岸の火事であるからだ。それ以外の何者でもなかった。
『それでまだ戦ってもな』
『死に花か？』
連合では物語の中だけでの言葉である。
『まさかって思うけれどな』
『だからそれだろ？』
またしても突き放した書き込みであった。
『アッラーの為にってな』
『またそれか』
『あっちのイスラムはわからねえな』
連合にも多くのムスリムがいるがその考えは全く異なってしまっている。だからこそこう書かれたのであった。ムスリムといってもそれぞれになってしまっていた。
『命あってのものだねだろうにな』
『戦争で死んで何になるんだよ』
まさに連合の考えであった。
『だよな。それでどうしてな』
『死ぬのは勝手だけれどな』
こうも書かれる。

『連中がどれだけ死んでもな』
『まあはっきり言えばそうだよな』
『サハラはサハラだからな』
『それで連合は連合だからな』
連合特有のサハラに対するある種の無関心が出ていた。やはり彼等にとってはサハラという存在はあくまで外国でしかない。自分達ではなかった。
『あそこで何があってもな』
『どうでもいいしな』
『それでも。凄いことになってるな』
そうした突き放した視点で話が続けられていく。
『これでティムールはアヤグーズを滅ぼして』
『ハサンに対して優位に立ったな』
『アヤグーズの滅亡は確実だな』
このこともまた語られる。
『けれどあの女王はどうなるんだ？』
『ブルコルジ女王か』
『亡命するのか？』
この考えが出て来た。
『やっぱり。いつもみたいにな』
『連合にか』
『それかマウリアにな』
これはサハラの一つのパターンである。その国家が滅亡すると国家元首や要人は連合及びサハラに亡命してそこで余生を過ごす。中には自害したり暴虐な政治家は敗戦で怒り狂った国民に虐殺されたりする例もある。しかしその殆どはこうして亡命するのである。
『で、どっちに来るんだ？』
『連合じゃないのか？』
まずは連合だと予想された。
『俺達のところにな』

『ああ、それあの長官が喜ぶな』
また一つ新たなフィクサーが話に出て来た。
『八条長官がな』
『そういえば義勇軍消耗したからな』
エウロパとの戦争において彼等の損害は九パーセントに達していた。軍の損害としてこれは結構なものである。そしてこの損害は連合軍全体としても九割に達していた。
『将官も減ったらしいな』
『常に矢面だからな』
連合軍の先陣に立ちその剣となり楯となる。これが義勇軍の役目だ。義勇軍と名前はいいがその実態は所謂懲罰大隊と変わらない。こうした極論も出ていることには出ていたりする。
『で、その将官の補充にあの女王陛下はいいだろ』
『いきなり大将になるか？』
『元帥じゃないのか？』
階級としてはトップである。義勇軍では一人しかいない。
『仮にも国家元首なんだしな』
『おいおい、またそりゃ凄い扱いだな』
『いきなり元帥か』
皆このことにあらためて驚く。
『まさかとは思うけれどな』
『亡命したらか』
『じゃあ連合からスカウトか』
『そうなるんじゃないのか？』
こうした予想も立てられてきた。

## 第三十四部第一章　他勢力の目その三

『前からそうやってサハラの技術者やらを国の滅亡の為に取り込んできたしな』
『今回もか』
『今度は軍人としてか』
　このケースは連合では今までにないものであった。軍事関係の技術者は常に民間に移す形で受け入れてきている。この辺りにも連合の軍事のポジションが出ている。
『珍しいな』
『難民達のリーダーとしてでなくか』
『けれど。そうなるか？』
　一つ懐疑的な意見も出された。
『そう簡単にな』
『？どういうことだよ』
『ブルコルジ女王だろ』
　彼女自身について話されるのだった。
『あの』
『あのって何だよ』
『随分な物言いになってるな』
『だからな。降伏するか？』
　まず降伏について語られた。
『他の人間にな。シャイターン主席でもな』
『そういえばあの人かなり誇り高かったな』
　このことは連合にも伝わっていた。勇敢で戦場において自ら敵陣に飛び込む美しくかつ誇り高い女王のことは彼等も知っているのである。
『その女王が降伏か』
『考えられるか？』

こう問われるのだった。
『それってな』
『いやあ、ちょっとそれはな』
『ないだろ』
その性格を考えればこう答えが出た。
『じゃあまさか』
『本当に死に花かよ』
話が戻った。
『アッサルームで』
『王都を枕にしてか』
『マジでかなり凄いことになってるな』
他人事でゲームや小説を楽しむようになっているがそれでも言うのであった。彼等は彼等なりに真剣にサハラでの戦いの行方を見守っていた。
『さて、それじゃあどうする？』
『あの女王、どうやって死ぬ気だ？』
『自害か？』
よくある話である。サハラにおいても。
『毒をあおるかそれとも刃を胸に刺すか』
『どっちかね』
『それとも別の方法か？』
『それとも』
話はさらに続く。
『戦って死ぬかな』
『戦死ってわけだな』
連合では殆どない死に方である。だがサハラではごく普通にある死に方だ。戦争があるのかないのかでこうしたことも変わっていくのであった。
『そういえば戦死したら天国に行けるんだったな』
『ああ、イスラムの教えじゃな』

所謂ジハードの考えである。
『で、最後まで戦って死ぬっていうのか』
『あの女王も』
『それって惜しいな』
惜しむ声が出て来た。
『あれだけの美人だしな』
『おい、そっちかよ』
今の言葉には突っ込みが入った。
『美人だからかよ』
『やっぱり美人って大きいぜ』
連合では戦争がない。これもまただからこその言葉であった。やはり戦争がないというのは非常に大きなことであり考えにもはっきりと出てしまっていた。
『モデルだってやれるしな』
『芸能界かよ』
『美貌の元女王だぜ』
今度は商業主義の言葉であった。

## 第三十四部第一章　他勢力の目その四

『やっぱり看板になるだろ。化粧品とかのな』
『それはそうだけれどな』
『けれどやっぱり軍人じゃないのか？』
ようやくブルコルジの本来の能力について述べられる。
『義勇軍に入ってな』
『で、司令官かよ』
『それが一番妥当だろ』
こう結論が出された。
『やっぱりな』
『そうか、人材か』
人材としてあらためて考えられた。
『それじゃあ連合としてはブルコルジに死んでもらったら困るんだな』
『まあそうなるな』
『軍人になるにしろモデルになるにしろな』
どちらもにしてもであった。
『生きていてこそだしな』
『死んでも何にもならないからな』
『全くだ』
死んだらそれで何もかも終わりである。やはり連合の考えはそのままだった。
『死んでもらったら困るな』
『じゃあ中央政府はどうするのかね』
話は今度は中央政府の動向についてになった。
『やっぱり仲介に入るのか？』
『で、女王は連合に亡命か』
『そこで手打ちってところか』

『それならいいけれどな』
こんな話になっていた。
『さて、どうかな』
『こっちとしてはかなりどうでもいいけれどな』
人材が入るにしろ他人事でしかなかった。
『タレントならいいんだけれどな』
『軍人はなあ』
『今一つな。いらないよな』
『俺もそう思うな』
彼等は軍人に関しては関心は希薄だった。軍事のことを殆ど考えることがなかった連合独特の考えである。彼等は優秀な軍人と言われても現実のものとは思えないところがあるのだ。
『今時優秀な軍人なんてな』
『いらねえいらねえ』
それを実際にここで書き込む。
『補給に数な』
『あと優れたマニュアルだよな』
こういったものにより戦争を戦い最低限の犠牲で収めていく。それが連合での戦争に対する考えである。そこには名将といった要素はないのだ。
『それで優秀な軍人なんてな』
『別にな』
名将をどうしても必要とは考えていない彼等だった。しかしそれは連合の主流であるが全てではない。少なくとも彼はそうではなかった。
「軍としては欲しいのね」
「はい」
八条はカバリエに答えた。今二人は外務省の一室で顔を向かい合わせて座っていた。そうしてその場において話をしているのだった。
「彼女は優れた軍人です」

「優れたね」
「軍もまた優れた人材を欲しています」
彼ははっきりと述べた。
「だからこそです」
「そういう意味ではこちらも同じよ」
カバリエは八条の言葉を聞いたうえで静かに述べた。彼女の前には紅茶が置かれている。その紅茶はロイヤルミルクティーであった。
「こちらもね」
「外務省もですか」
「人材は幾らいても充分ということはないわ」
カバリエは言った。
「それと同じね」
「確かに連合軍はシステムによって戦っています」
八条はここで巷で言われていることを述べた。
「補給に数、装備、情報収集そして臨機応変の万全のマニュアルによって」
「それでエウロパとの戦いに勝ったわね」
「ですがそれだけで勝てるものではありません」
八条は静かに述べた。述べつつ己の前にある茶を手に取った。彼のそれは抹茶だった。和風の砂糖も何も入れていない純粋な抹茶である。

## 第三十四部第一章　他勢力の目その五

「やはり優秀な人材は必要です」
「そうね。ただ」
「ただ？」
「連合軍は一人の名将により戦う軍隊には見えないわね」
カバリエはその目を頬笑まさせつつ述べた。その微笑みは楽しむようなものだった。
「一人の天才ではないわね」
「はい」
これは八条も認めた。
「一人の天才よりも」
「百人の優れた凡才です」
八条は自分から言ってみせた。
「天才はまずいません」
「だからこそ天才というわけね」
「モーツァルトやダ＝ビンチは以後そういった才の持ち主は出ませんでした」
どちらもエウロパの者だが彼はここではそれに構わなかった。
「そういった特殊な人材に頼っていてはなりません」
「育てる必要のない人材」
「そうとも言います」
天才はそのままで天才なのだ。モーツァルトは僅か六歳で作曲している。しかもその三十五年という短い生涯で残した作品はあまりにも膨大でしかも駄作はない。
「凡才は天才に勝てません」
「そうね」
「しかしです」
彼はそのうえでさらに言葉を続けた。

「優れた凡才は育てることができます」
「天才には及ばなくともね」
「その通りです。一人の天才を得ることは奇跡ですが百人の凡才は努力によって得られます」
「そして百人の凡才の方が力になるというのね」
「数は力です」
これはまさに正論であった。
「だからこそです」
「けれど天才が得られる場合は」
「無論狙います」
そういうことであった。
「奇跡があるならばそれを」
「そういうことね。だからなのね」
「はい。それでですね」
ここまで話したうえであらためてカバリエに対して述べるのだった。
「今アヤグーズはまた敗れました」
「それはこちらも聞いているわ」
当然ながらこのことを彼等が知らない筈もなかった。既にネットで議論になっているがそれよりも早く知っていた。この辺りは外務省、国防省の情報収集の結果だ。
「そしてそれによりアヤグーズは」
「滅亡が確実になりました」
「そういうことね」
答えはもう出ていた。一つの答えは。
「ブルコルジ女王は王都を枕に討ち死にするつもりのようだけれど」
「それでですね」
八条は右手に抹茶を取ったうえでまた述べてきた。
「我が国防省としてはブルコルジ女王の才を欲しいのです」
「サハラ義勇軍ね」

「その通りです」
彼は彼女をサハラ義勇軍に入れるつもりだったのだ。
「ですから。是非」
「亡命をというわけね」
「まだ時間はある筈ですし」
「ええ。ハサンとの連絡は何時でもつくわ」
カバリエは微笑んで彼に答えた。
「何時でもね。当然アヤグーズにもね」
「それでは」
「こちらとしてもアヤグーズ王家が滅びるのは好ましくないと考えているわ」
「アヤグーズ王家がですか」
「マレーシアのスルタンの一家だけれど」
今度は連合のうちの一国の話になった。マレーシアは連合が地球にあった頃から存在している国の一つで旧東南アジアの一国である。複数のスルタンが交代で国家元首を務めるシステムになっている。簡単に言うと連合王国ということになるであろうか。

## 第三十四部第一章　他勢力の目その六

「アヤグーズ王家と縁者でね」
「ではその家が」
「ええ。助命を嘆願しているわ」
そういうことであった。血縁はこの時代でも健在である。
「是非。連合に亡命させて欲しいと」
「それを主張しているのはマレーシアだけですか？」
「勿論マレーシアだけではないわ」
話はそれに留まらないのだった。
「マレーシアを中心としてイスラム系の王制国家は全てね」
「そうですか。そういった国々も」
「そしてマレーシアと縁の深い旧太平洋諸国もよ」
連合の中でも中心となっている国家である。
「彼等も是非にと言っているわ」
「では中央政府としては」
「彼等の声を受けてね」
「左様ですか」
「ええ。アヤグーズ王家に連合への亡命を提案するわ」
そういうことであった。
「すぐにでも」
「ではそのように御願いします」
「そしてブルコルジ女王は」
「はい、義勇軍に招きます」
また話が戻った。
「階級は元帥です」
「元帥ね」
「マシュハド元帥と話を調整したうえで軍を率いてもらいます」
このことまで決めているのであった。

「是非共」
「そう。義勇軍元帥ね」
「そうです。如何でしょうか」
「いいと思うわ」
カバリエも八条の今の言葉に賛成してみせた。
「それでね。軍事は私の専門じゃないけれど」
「そうですか」
「また言うけれど人材は幾らでも必要なのよ」
「その通りです」
「軍事もまたね」
このこともわかっているカバリエだった。
「そういうことね」
「はい。ですが」
八条はここまで話したうえで己の顔を曇らせるのだった。
「こちらはいいのですが」
「問題はあちらね」
「人材は一方が求めるだけでは上手くはいきません」
こう言うのだった。
「双方が納得しないとなりません」
「相思相愛ということね」
「相思相愛？」
こう言われても恋愛に疎い八条にはわかりにくいことであった。
彼はそうしたことに関しては極めて鈍感なのだ。それは気付いている者は気づいている。
「そうなのですか？」
「ああ、そうね」
カバリエモふとこのことを思い出した。
「言葉を変えるとね」
「はい」
「お互いが納得しないと駄目ってことね」

「その通りです」
これで話は通じた。とかく恋愛には弱い八条だった。
「それは」
「そうね。つまりこの場合はあの女王がどう考えているかだけれど」
「誇り高い方なのは知っています」
ブルコルジの気質は当然ながら彼等もよくわかっていた。知らない筈のないことであった。そしてこのことが極めて問題になるのだった。
「そして命を惜しむ方ではないということも」
「サハラでは元々命は大事にされないわね」
「戦場においてはそうですね」
「ジハードの概念によってね」
「それです」
それだけジハードの概念はサハラにとっては重要なのだ。聖戦で死ぬことができればそれにより天国に行くことができる。だから戦場での死を恐れないのだ。
「ですから。女王もまた」
「あの女王は戦場では常に前線に立っているわね」
「ですね」
このことからも猛将と呼ばれているのである。
「そのことからもやはり」
「命を惜しむような人物ではないわね」
「命よりも誇りですね」
「そうね。女王としての誇りを何よりも大事にするタイプの人間ね」
「かつての武士や騎士のように」
「武士ね」
武士という言葉を聞いてカバリエは微笑んだ。
「武士というならそちらの国になるわね」
「そうですね」
八条もカバリエのその言葉に頷いた。

「それは確かに」
「ではあの女王の今の心境もある程度はわかると思うけれど」
「そう言われますと」
八条の顔がまた動いた。

## 第三十四部第一章　他勢力の目その七

「我が国においても武士道はないようになっていますが」
「それは日本人がそう思っているだけよ」
カバリエはそれは否定した。
「それはね」
「そうでしょうか」
「日本人には今でも武士道が残っているわ」
あらためて八条に言うのだった。
「はっきりとね」
「そうでしょうか」
「武道があるじゃない」
所謂剣道や柔道、そして空手といったものである。日本独自のものでありまさに武士の嗜みとして連合に知られているものである。柔道は明治からであり空手は沖縄からであるがそれでもこの時代では柔道や空手も武士の嗜みとして考えられているのである。
「剣道は武士のものね」
「それはそうですが」
「では外相は」
「武士道は残っていると思うわ」
こう言うのだった。
「はっきりとね」
「そうでしょうか」
「そしてそれだけじゃなくて」
カバリエの言葉は続く。
「他のスポーツにも」
「スポーツにも？」
「日本人はスポーツにおいては正々堂々と闘うことを美徳としているわね」

「それが当然ではないのですか？」
八条はいぶかしむ顔になってカバリエに言葉を返した。
「スポーツでしたら」
「他の国はそう考えているように見えるかしら」
「そうは見えないわね」
ここでまた八条に対して微笑んでみせる。
「結構。審判を買収したり自分達に有利なルールにしたり場所を勝手に設定したりしているわね」
「はい」
こうしたこともまたこの時代においてもある話であった。当然ながら批判の対象になるがそれでも行われ続けているのである。
「勝つ為には手段を選ばない」
「スポーツでそれはどうかと思うのですが」
八条の顔はいぶかしむもののままだった。
「幾ら何でも」
「そう考えることがなのよ」
「武士道と仰るのですか？」
「そうよ。つまり正々堂々と闘うということは誇りを意識してのことよね」
「それがあるからですね」
誇りのない者はそうしたことはしない。プライドということだ。ただしこれは真の意味での誇りということだ。偽者のプライドではないのである。
「その行動は」
「それこそが武士道ね」
カバリエはまた言った。
「そうしてあるべき場所では正々堂々としていることがね」
「そうなるのですか」
「エウロパの騎士道もそうね」
ただしカバリエは今は複雑な顔になった。

「スポーツでは正々堂々としているそうね」
「そのようですね」
このことも連合においても伝わっているのである。
「出征した連合軍もそれは見ています」
「スポーツでは勝利至上主義にも極端な商業主義にも陥らず」
「政治利用もしない」
この三つは連合の殆どの国の方が遥かに強い。
「しかしそれは」
「当然と考えることが武士道だから。そしてね」
「はい」
「そこから考えてみればいいわ」
話を戻してきた。
「あの女王陛下が今どう考えているかをね」
「そうですね。それでは」
八条はカバリエの話をここまで受けたうえであらためて考えてみた。考えると自然にブルコルジがどう考えているか察しがついてきたのであった。
「おそらく女王は死ぬつもりでしょう」
「そう見るのね」
「行き永らえるよりは死を選ぶでしょう」
また述べた。

## 第三十四部第一章　他勢力の目その八

「誇り高い方ですから」
「そうなるのね」
「説得は困難でしょう」
彼はこうも見ていた。
「死を覚悟した人物に対しては」
「それでもなのね」
「はい、そうです」
それでもであった。
「時間もありませんが」
「それでも。可能な限りね」
「説得を御願いします」
八条はここでは目で頼み込んでいた。
「我々としては女王陛下の軍人としての才覚が欲しいですから」
「軍人としてなのね」
「何でもモデルや文化人として注目している方も多いようですが」
「それは私も知ってるわ」
カバリエはここでまた微笑んだ。
「その話はね」
「モデルや文化人もまた大切ですが」
「そちらの方がお金になるからよ」
「お金ですか」
「軍人はお金にならないわよね」
「はい」
そもそも軍自体が非生産的なものである。そこにいる軍人が何かを生み出す筈もない。軍人は何かを守ることはできても生み出すことはできないのである。
「だからよ」

「だからこそタレントや文化人にですか」
「タレントはお金になるわね」
「はい」
だからこそ芸能プロダクションがあるのだ。これも二十世紀から変わりはしない。
「そして文化人もね」
「そちらの才能の方を見るのですか」
「それが連合よ」
連合自体の名前も出た。
「それがね」
「相変わらず軍への関心は薄いようですね」
「少なくともサハラよりはね」
「それが残念であります」
八条は顔を渋いものにさせた。国防長官としてこれは当然の表情であった。
「軍もまた重要であるというのに」
「けれどこれはいいことでもあると思うわ」
しかしカバリエはこうしたことを言い出したのであった。
「これはね」
「確かに」
そして八条もまたそれがどうしてなのかわかっているのだった。それだけの鋭さは彼は持っていた。そうでなければこの若さで中央政府国防長官にはなれない。
「軍が重要視されるのは戦乱やテロに覆われている時ですから」
「サハラのようにね」
「その通りです」
そういうことであった。
「連合はエウロパとの戦争まで戦争というものを経験していませんでした」
「千年の平和ね」

「そうです」
人類史上これまで長い平和はなかった。江戸時代の日本は二百年に及び太平でありこのことはこの時代ではかなり高く評価されているがそれを遥かに超える平和だった。しかも平和だけでなく繁栄もしていた。連合は千年に渡ってその平和と繁栄を謳歌していたのだ。
「確かに宇宙海賊やテロリストは存在していましたが」
「そしてそれによる損害もあったけれど」
「サハラ程ではありませんでした」
少なくとも比較にならない程落ち着いたものであったのだ。
「ですから中央軍も最近まで設立されませんでしたし」
「それも受動的な設立だったわね」
「そうです」
テロリストや宇宙海賊の跳梁跋扈が目に余ってきたからである。
「テロリストや宇宙海賊により」
「その通りね。彼等が大人しかったら今も設立されなかったわ」
「国防省も設けられませんでした」
中央軍がなければそうなるのは必然である。軍を統括するのが国防省だからだ。
「今もなお」
「そしてエウロパとの戦争はどうなっていたかわからないわね」
カバリエはここでまた言った。
「果たしてどうなったかしら」
「少なくともあそこまで一方的に戦いを進めることは出来なかったでしょう」
八条は冷静にその場合の予測を述べた。
「軍は一つにならなければ力を発揮できないものですから」
「そうでなければ烏合の衆になるわね」
「その通りです」
力が分散されるからだ。数が多いに越したことがないのは事実だがその数の強さが発揮されるのはその数が一つに纏まっているから

である。力学的前提であった。
「ですからその場合は」
「勝てたかどうかもわからないわね」
「おそらくは」
八条はここまで分析していた。
「苦戦は免れませんでした」
「それを考えたら海賊やテロリストはエウロパとの戦争の功労者と言えるのかしら」
連合勝利の最大の根拠の連合軍を築いたという意味においてである。

## 第三十四部第一章　他勢力の目その九

「どうかしら」
「そうですね。ただ」
「ただ？」
「国防省がなければそもそもステッラを捕捉することはできませんでした」
戦争の発端についても言及した。
「国防省において設けられた情報網がなければ」
「そうね。それもならなかったわね」
「そして今もエウロパ工作員の跳梁を許していたわね」
彼等が宇宙海賊やテロリストを煽動し裏から操っていたのもはっきりしている。事実エウロパの工作がなくなってからそういった存在の活動はさらに弱まっている。
「今もね」
「そういったものもなくなりましたし」
「やはり軍は必要な存在ね」
「そうです」
答えはここまで話されたうえで出された。
「国を守る為にです」
「けれどあの女王陛下を軍人にと望まない声は多いわね」
「残念なことに」
八条はまたこのことを述べた。
「ですが我々としては」
「やはり軍人としてなのね」
「可能性は極めて低いでしょうが御願いします」
八条はここでまたカバリエに頼んだ。
「是非共」
「わかっているわ。アヤグーズの滅亡は決定的」

「はい」
最早それは覆せなかった。
「話は一刻を争うわね」
「その一刻の間に決まります」
八条の声は強くなった。
「女王の命運が」
「さて。説得できればいいけれど」
カバリエは少し醒めたような口調になっていた。
「上手くね」
「先程も申し上げましたが可能性は低いです」
やはりそう思わざるを得ないのだった。ブルコルジがわかるだけにだ。
「しkしそれでも」
「やらないよりやるということね」
「やらなければ何もなりません」
八条の声はさらに強いものになる。
「テストにしろ書かなければそれで落第です」
「テニスもラケットを振らなければボールに当たりはしない」
カバリエもそれに応えて言う。
「そうね」
「はい。動かなければどうにもなりません」
「ではやはり」
「こちらからも動きます」
八条はこうまで言った。
「ハサンに派遣している駐在武官を通して」
「国防省としてもなのね」
「我々に入る人材なら我々が動くのは当然です」
「己で動かなければどうにもならない」
「自らのものは自らで掴む」
八条もまた言葉を続ける。

「だからこそです」
「それでいいと思うわ」
カバリエはこのことにも賛同した。
「では外務省は国防省と協力してね」
「はい」
「ブルコルジ女王の亡命を働きかける」
「そういうことで」
話はまとまった。
「御願いします」
「さて。これで賽は握ったわね」
実際に今握ってはいない。心においては違うが。

## 第三十四部第一章　他勢力の目その十

「我々の方は」
「そうですね。しかしシャイターン主席」
八条はまだ話を終えなかった。また抹茶を飲みながら今度はシャイターンについて言及した。
「思ったよりもできますね」
「そうね。まさかあそこまで勝ち進むなんて」
「オムダーマンの勝利も予想外です」
それもまたなのであった。
「ですがそれ以上にティムールの勝利は」
「予想できなかったわね。シャイターン主席の才覚もまたかなりのものね」
「英雄と言われるだけはあります」
サハラにおいては、である。
「しかし私は」
「あの主席にはいいものを感じてはいないようね」
「あまりにも怪しいものがあります」
「怪しい、ね」
「まずハサンに関してです」
今実際に干戈を交えているその国とのことである。
「戦争に入る前にあれだけの要人の急死や事故がありましたが」
「それについてはわかっているわね」
「はい」
これはもう既にわかっていることだった。わかってはいるが。
「確かな証拠はありませんが」
「灰色なのよね」
「限りなく黒に近い灰色ではありますが」
「灰色は灰色ね」

「そうです」
この件に関してティムール及びその国家主席であるシャイターンは灰色でしかないのだ。例えどれだけ黒に近くとも灰色である。このポイントが重要なのだった。
「ですから断言はできませんが」
「やっていると思っていいわね」
カバリエは断言はしなかったがこうは言うのだった。
「あれはね」
「それもありますし」
「シャイターン主席は一介の傭兵隊長だった時代から。いえ」
カバリエは言葉を変えてきた。
「違うわね。シャイターン家自体が」
「そうです。調べてみれば昔から」
「権謀の中で生きてきた」
カバリエは言う。
「それも血生臭い世界の中で」
「乱世であるサハラの中において」
乱世ではこうした人物や家が出るものだ。例えばチェーザレ＝ボルジアがそうであるし三十年戦争でのワレンシュタインにしろそうである。彼等は権謀も得意にしていた。むしろその権謀の方が恐れられていた一面がある。とりわけチェーザレ＝ボルジアはそうである。
「ですから彼は」
「危険だというのね」
「野心家なのは間違いありませんし」
「天下を求めるには野心が不可欠だからね」
「それがなければ動けません」
目的を目指すには心が必要である。そういうことである。
「ですから」
「それもかなりの野心がね」

「少なくともシャイターン主席にはそれを強く感じます」
「サハラ南部の傭兵隊長から北部に入り」
シャイターンの雄飛のはじまりである。
「そしてエウロパとの戦いで武勲を挙げ権門の未亡人と婚姻を結んで」
「そして今です」
瞬く間であった。
「野心がないと到底できるものではありません」
「その通りね。そしてその野心の為には」
カバリエは紅茶を飲み干していた。しかしおかわりを頼むことなくそのまま話を続けるのだった。それだけに真剣なものがそこにはあった。
「手段を選ばない」
「だからこそ危険です」
八条は断言するのだった。

## 第三十四部第一章　他勢力の目その十一

「ですがどうやらそれはサハラだけに留まっているようです」
「連合には向けられていないということね」
「彼の関心はサハラにだけあるようです」
こう言う八条だった。
「サハラにおいてだけです」
「彼にとって天下はあくまでサハラということね」
「我々は外の世界ということなのでしょう」
この考えは連合に根強いがサハラにおいても強いのだ。彼等にとってお互いの世界は外の世界でしかない。言うならば化外の地ということだ。
「我々と同じく」
「そうね。あくまで外の世界」
「はい」
「関心を持ちようがないということね」
「それでも備えはしておきますが」
万全を期すということだ。政治の基本中の基本だ。
「サハラとの境に」
「今進めているあれね」
「その通りです」
冷静な調子でカバリエに答える。
「サハラに対しても備えをしておきます」
「それでいいと思うわ。議会では疑問視する声もあるようだけれど」
「ハサンならばそれ程警戒しなくてもいいのです」
何故ならハサンは連合にとって同盟国だからだ。同盟国であるならばそこに信頼関係、しかも破ってはそれで何もかもが終わるものができるからある程度は安心できるのだ。
「ですがオムダーマンやティムールですと」

「すぐにはそうはいかないわね」
「特にティムールは」
またティムールを警戒するのだった。
「例えこちらに牙を向けていなくともです」
「そのシャイターン主席の為にね」
「まだ一体どうなるかはわかりませんが」
サハラの情勢がということである。
「ですが備えはできるうちにです」
「その通りね。本当に今のうちにね」
「連合としてはハサンに勝利を収めてもらいたいですが」
同盟国だからという理由もあるがそこには権益の問題もあった。連合はハサンとの交流が深く彼等が統一した場合その権益の拡大をスムーズに拡大できるからである。
「ですが。それは」
「連合はサハラには不介入」
カバリエの言葉は強いものになっていた。
「これはね」
「連合とサハラが出来た時から決まっていました」
「ええ」
その通りだった。連合はサハラには積極的に関わらない、これは千年前から定まっている基本政策の一つだ。間違っても軍事介入はしないと。
「兵を送るのはね」
「あってはなりません」
また言う八条だった。
「長い間ハサンが境にあり介入する必要もありませんでしたが」
「それ以上に。軍を送れば戦乱に巻き込まれる」
「はい」
それを恐れてである。だからこそ連合は中央政府として介入しなかったのだ。なお各国は中央政府の法でそれぞれの軍はその領域か

ら外には兵を出してはいけないことになっている。だから当然ながらサハラに対して兵を出すことは各国の立場からも出来ないのだった。

「だからだったわね」

「そうでした。そしてこれは」

「これからもね」

「あってはなりません」

八条の言葉はまた強くなっていた。

「ハサンがどうなろうとも」

「下手をしなくても泥沼に巻き込まれるわね」

「サハラの戦乱に巻き込まれるのは愚です」

「そうなればどうなるかわかったものじゃないわ」

「迂闊に軍事介入しそれにより誤ったことは歴史において多々あります」

特に二十世紀においてはそうであった。ベトナム戦争もそうであるし中越戦争にしろそうだ。大国の驕りもあるが迂闊な介入はそれだけで国に危機を及ぼすのである。

## 第三十四部第一章　他勢力の目その十二

「ですから絶対に」
「行ってはならないわね」
「ですから今の戦いも見ているだけです」
八条の考えは変わらない。
「ハサンがどうなろうとも」
「向こうも介入は望まないでしょうしね」
「彼等は他の勢力の介入はエウロパのそれで苦渋を舐めてきましたから」
「とりわけ北部は」
エウロパのサハラ侵攻が彼等に及ぼした衝撃はあまりにも大きかった。中には十字軍の再来とまで言う者もいた。キリストとイスラムの対立を決定的なものにしたそれに。
「それが強いわね」
「だからこそ介入すべきではありません」
八条の考えはこれに尽きた。
「サハラはサハラ、連合は連合です」
「そうあるべきね。けれど人材はね」
「手に入れるべきです」
それはそれ、これはこれであった。
「機会があれば」
「そうね、さてアヤグーズは」
カバリエはここではブルコルジとアヤグーズを同一視していた。これは狙っておらず自然にである。国家元首とその国を同一視することはこの時代でもままある。
「死を選ぶでしょうけれど」
「それでもあえてです」
「声をかけても損はないわね」

「少なくとも王族や要人の何人かは連合に来るでしょう」
ブルコルジは駄目としてもであった。
「彼等の保護も」
「そうね。それもあるわね」
「象徴としての存在も必要です」
今度話に出たのは象徴であった。
「難民達の象徴としての」
「そうね。そういえば」
カバリエは難民と聞いてまたあることを思い出したのであった。
「その難民のことだけれど」
「はい」
「新国家を作る話があったわね」
彼女が今度言うのはそのことだった。
「適当な星系にまとめて移住して。そうだったわね」
「はい、その話ですね」
当然ながら八条もその話は知っていた。中央政府の閣僚として当然のことである。
「それについてはまだ色々と議論中ですが」
「バチカンは何とか決まったけれどね」
オリンポス条約において決められたエウロパから連合に移転するバチカンについてのことである。そちらは各国の喧々諤々の議論の末何とか決まったのである。
「そちらはね」
「正直どうするべきかといいますと」
「まず彼等の職業の編成があまりにも極端ね」
「一億が義勇軍にいます」
「それなのよ」
カバリエもこのことを知っていた。難民の数は今は十億を超えている。しかしその中で一億というのはかなりの割合だ。成年男子の半数以上が軍に入っているという異様な割合になっているのである。

「それだけの数が軍にいる国家はね」
「まずありません」
この時代においてはない。
「歴史から見てもこれだけの割合は」
「あの北朝鮮以上ね」
自称朝鮮民主主義人民共和国のことである。二十一世紀まで存在した究極の独裁国家である。宇宙時代前に崩壊し紆余曲折の末韓国に併合され半島は統一された。
「それだけになると」
「ですから産業となりましても」
「働き手がいなくて存在できる産業はないわ」
カバリエは一言で切り捨てた。
「そんなものはね」
「その通りです。ですが」
「義勇軍を減らすことはできないわね」
「連合軍の先陣として必要です」
これは譲れないのだった。軍としては。
「まず彼等は既に実戦経験がありました」
「ええ」
「それだけに強いです」
「戦争を知っているからね」
知っているのと知らないのとではそこに決定的な差が生じる。これは戦争についてもそうである。八条とカバリエは今そのことを話しているのである。

## 第三十四部第一章　他勢力の目その十三

「その強さは連合軍にとって貴重です」
「頼りになる助っ人ね」
「その通りです」
そして彼等が先頭で戦えばそれだけ連合軍正規軍の損害が減る。彼等は剣であり楯なのだ。意地悪い者はあえてこう言ったリするがここではそうした話にはならなかった。
「ですから。失うわけには」
「一億の成年男子を兵に出したうえで国家を運営する」
カバリエはまた言った。
「できるのかしら、果たして」
「若しくは新しい国家運営を考えるかですね」
「新しいというか古代的だけれど」
カバリエは八条の新しい国家運営という言葉に反応して述べてみせた。
「この場合はあれね」
「あれですか」
「そう。スパルタね」
あまりにも有名な古代ギリシアの都市国家である。強大な軍事国家としてこの時代にもその名前を知られている。支配民族の成年男子は皆軍人であったのである。
「あれも産業もあったけれどね」
「少なくとも北朝鮮は国家を破綻させました」
「軍事費は中央政府が負担しているけれど」
義勇軍は連合軍になっているからこれは当然である。
「それでもね。これはね」
「やはり尋常ではない国家運営になりますね、彼等の国家は」
八条としてはどうしても義勇軍の戦力は必要なのだった。このこ

とは退くつもりはなかった。
「今度は中世的ですが」
「傭兵国家かしら」
「厳密に言って傭兵ではないですが」
こう前置きはする。
「それでも。言ってしまえばそうなりますね」
「ええ。まさにね」
カバリエも八条の言葉に頷く。
「兵を出してそれへの報酬で国家を運営する」
「そうした国家になるかも知れません」
「お金を出すのは中央政府ね」
カバリエはまた言った。
「彼等が功績を挙げる度に」
「便宜も図っていき」
「軍と戦争で国家をやりくりしていく」
この時代にはサハラにおいてもない考えだ。傭兵という存在はあってもだ。
「そうした国家が連合にできるとは思えないけれど」
「ですが運営としてはそうなるでしょう」
八条は冷静に述べた。
「もっとも民兵であってもいいですが」
「民兵ね」
「屯田兵的なものとして」
平時においては農業に従事し有事には武器を手に取って戦う兵士のことだ。中国三国時代より生まれた。連合においても各国が辺境の開拓で海賊に備えてやってきたこともある。
「平時は通常の産業に従事して」
「有事には義勇軍となるね」
「こうしたことも可能でしょうが」
「いい考えだと思うわ」

カバリエはまずは八条のその案に賛成した。
「基本的にはね」
「基本的には、ですか」
「問題もあるわ」
すぐにその問題にも気付いたのである。
「その民兵にもね」
「そうですね」
八条は言っている側からその問題がわかっているようだった。それでもあえて言って議論にするということでありカバリエも乗っていた。
「まず正規の軍人ではないので」
「ええ」
「日常的に訓練は行えません」
「従ってどうしても練度は落ちるわね」
「その通りです」
この問題があった。
「そうなれば精鋭としての義勇軍は成り立ちません」
「そうね。だからこそ価値がある存在だというのに」
「ですからこれもまた」
「実際にやるとしたら問題はあるわね」
「ですが屯田兵的なものですが」
彼が次に言うのはこのポイントだった。

## 第三十四部第一章　他勢力の目その十四

「最前線に置くのが屯田兵ですが」
「それはね」
開発と戦闘、双方を考えての兵だからこれは当然だ。後方で開発ができるならば別にそこに兵を置く必要はない。兵を置くのはそこに敵がいるからである。
「この考えは入れてみるのもいいかと思っています」
「最前線というとアタチュルク要塞群かしら」
「あの場所もいいですし」
「他には辺境は」
「辺境は今は正規軍で十二分です」
辺境はどうしても秩序が及ばない部分が生じそこに宇宙海賊が出没する。その為正規軍が何かにつけ海賊を討伐しているのである。今ではかなりましにはなっているが。
「ですからそちらに置く必要はないと考えています」
「ではアタチュルクね」
「それか」
「それか？」
「サハラとの国境か」
そこに置くことも考えているのであった。
「そうした場所にでしょうか。強力な外敵を退けるべき場所に」
「配しておきたいのね」
「それを考えれば新国家の場所も限られてきますが」
八条はその新国家の場所についても考えていた。
「彼等も故郷の側で戦いたいでしょうし」
「アタチュルクに国家ね」
カバリエの表情が微妙なものになった。
「それは考えなかったわ」

「そうですか」
「あそこはあくまで要塞と考えていたから」
実際に軍事基地として考えられているのだった。
「ただ。領土としてはね」
「今はどの国の領土でもありません」
「そうだったわね」
そういうことだったのだ。連合の領土に加えられたがそれでもだった。今のところはどの国の領土になっているということもなく中央政府預かりという形になっているのだ。
「あの場所はね」８
「そういう意味でもあの星系を難民達の新国家にすることは容易ですが」
「そうね。ただ」
カバリエは首を少し捻った。
「あそこはね。ちょっとね」
「国家にするには問題があるというのですね」
「私はそう考えるわ」
実際にこう答えるのだった。
「ちょっとね」
「左様ですか」
「あそこが何処かの国の保有する星系の一つならね」
カバリエは言う。
「けれどね。一つの国家になると」
「問題がありますか」
「まずあの星系は完全に軍事基地になっているわ」
星系全体を軍事基地にしたのである。エウロパもそのようにしたが連合はそのエウロパよりも遥かに巨大な規模でこの星系を軍事基地化したのである。
「産業は何も起こせないし」
「それはそうです」

純粋に軍事だけを考慮して基地化したのである。
「まずはそれがあるわ」
「まずはですか」
「それに」
「それに？」
「アタチュルク要塞は連合の防衛にとって最大の軍事拠点よ」
これはその通りだ。少なくともエウロパへの備えとしては最大のものである。ガンタース要塞群、マラッカ要塞群と並ぶ三段階への軍事拠点の一つとしてである。
「そこを完全に一つの国家に預けるのよね」
「そうなります」
「それはどうかしら」
カバリエは腕を組んでからまた述べた。
「あまりにもリスクが大きいわ」
「だからこそ危険ですか」
「私はそう考えるわ。義勇軍のうちの幾割かを駐留させるわけではないわね」
「はい、軍全体です」
八条はかなり思い切った考えを持っていたのがわかる。

## 第三十四部第一章　他勢力の目その十五

「難民十億。それで考えていたのですが」
「大胆だけれど。それでも」
「危険なのですね」
「ええ。それでもこの考えにはこうした考えがあるわね」
カバリエは八条の考えに一旦難色を示しながらもこうも話した。
「難民達はどうして難民になったか」
「はい」
「それね」
カバリエはその点を指摘した。
「難民になったか。それは」
「エウロパによってです」
八条もその言葉に答える。今連合にいるサハラの難民達は全て北方からの難民である。つまりエウロパにより故郷を追われた者達である。
「そうね。そしてエウロパには並々ならぬ敵愾心を持っている」
「憎しみそのものです」
だからこそエウロパとの戦争においても絶大な力を発揮しそれにより多くの武勲を挙げたのだ。強さはただ身体によるものだけではないのである。
「しかもかなり強い」
「血は血で拭う」
カバリエは不意にいささか物騒な言葉を出した。
「それがイスラムね」
「サハラのイスラムは特にそうです」
「だからこそあの時彼等はあそこまで戦って」
それだけではない。
「そして志願もしたということだから」

「そうです。私はその敵愾心を以って彼等がエウロパにあたると見ています」
八条の分析はかなりクールなものだった。
「いささか宜しくないやり方でしょうが」
「そうかしら」
だがカバリエはこの見方には醒めて返すのだった。
「私はそうは思わないわ」
「思われないと」
「政治なのよ」
政治なのだと話す。
「政治が求められるのは結果」
「結果ですか」
「まずはそれよ」
カバリエは八条以上にクールであった。
「結果。それを考えれば」
「そうした感情もまたよしですか」
「何故連合では徹底した反エウロパ教育が行われているか」
歴史の教科書ではそれこそかなりの部分をエウロパ批判に割いている。帝国主義から二十世紀まではおろか連合とは直接関係のない十字軍のこともかなり批判的に書いている。挙句にはローマ帝国のことまでだ。連合にケルト人がいてイスラエルがあってカルタゴの末裔を自称する人々がいるにしてもだ。それでもその様な以前のことまで書いている。ここでアッシリアやバビロニアやそういった国々のことは書かない。彼等もまた歴史的に相当なことをしてきているのにだ。ただ連合にいるという理由で書くには書くがそれより遥かにその栄光を書いたりもしている。ローマの栄光にはあれこれ文句をつけてもだ。
「それはどうしてかというと」
「エウロパという敵を認識する為に」
「同時に共通の敵を持つ為にね」

共通の敵を見て団結を促進させるというのは人類社会によくあることだ。この時代でも。
「だからこそじゃない」
「それでは」
「ええ、いいと思うわ」
結論としてはこうであった。
「政治ではね」
「そうですか」
「君らしくはないと思うけれど」
「正規軍でも構わないのです」
八条はこうも話した。
「護りは。ただ」
「国家を置くこともできるからね」
「それでこうも考えたのです」
こういうことだった。

## 第三十四部第一章　他勢力の目その十六

「それでどうかと思ったのですが」
「敵愾心を利用するのはいいけれど」
「やはりそれでも問題がありますか」
「どうしてもね。それにしても」
カバリエはあらためて腕を組んだ。
「今度の新国家建設は難しいわね」
「確かに」
このことは二人共強く認識していた。
「果たして。何処に置くべきか」
「開拓省も悩んでいるわ」
「あちらもですか」
「普通に辺境の何処かの星系に設けてもいいのだけれど」
これは新国家建設の際によく行われる。その辺境の場所に移住者が入りそのうえで国家建設となるのだ。なお新国家建設には前以って中央政府から承認が必要だ。移住にしろそうでありそれにより無軌道な勢力圏拡大や新国家乱立を防止しているのである。
「それもね」
「事情が普段とは異なりますし」
「軍事で成り立つしかない国家」
あらためてその国家形式が述べられる。
「今そうした国家が成り立っていけるかどうかもあるし」
「かなり問題です」
「それでも国家は築かれるのね」
「そうですね」
これはもう決まっているのだった。
「閣議でも議会でも。まだ議決等は行われていませんが」
「それはまだね」

「はい。まだ決まってはいませんが」
「難民次第だけれど」
「彼等はそれを望んでいます」
八条はそこに一言付け加えた。
「ただ。望んでいる方もおられるということですが」
「中には故郷に帰りたいという人もいるでしょうね」
「おそらくは。既にサハラにいる難民達は続々と故郷に帰っていますし」
「平和になれば人が戻る」
戦争の後に必ず起こる事柄の一つである。
「それは当然の流れだけれどね」
「やはり連合の難民問題も無縁ではありませんし」
「さて、どうなるかしら」
カバリエは言った。
「そういった問題は」
「難民は今までは帰るか帰化でしたが」
「今まではね」
「はい、それで話は済んでいました」
それでも様々な議論があったがそれでもだったのだ。少なくとも新国家建設にまで話が至ることはこの千年の間なかったことである。
「ですが今回は、ということですね」
「ええ。さて、話はこれで一段落ついたけれど」
カバリエは状況を冷静に述べていた。
「これから。どうするの？」
「これからですか」
「国防省も暇ではないわよね」
「はい、それは」
既に一連の話は終わり日常業務に戻っていた。カバリエの方が先にそれを感じ取っており八条が続く。そうして話を別のものにしていたのだ。

「今も。何かとやるべきことが」
「軍は書類仕事こそ真の戦場というわね」
「戦争は戦場で行われるだけではありません」
八条は冷静に言葉を述べた。
「むしろ戦場の後ろでこそ」
「補給や整備も然り」
「そして書類もです」
やはりそれもであった。
「そちらもまた。かなりのもので」
「そうね。書類もよね」
「戦争が行われている時は壮絶なものでした」
語るその顔に苦笑いが浮かぶ。

## 第三十四部第一章　他勢力の目その十七

「もうそれこそ。常に書類が山積みで届けられ」
「常になのに」
「六十億の大軍が動いたのです」
一口に言うが相当な数である。今まで人類の歴史においてここまでの数を動員した戦争はない。それだけに書類も膨大なものになったのである。
「やはり。それだけの書類が」
「来たのね」
「処理に必死でした」
その時を思い出す言葉であった。
「それこそ起きてから寝るまで。休む間もない程で」
「国防省創設、そして中央軍設立の時と同じ位だったのかしら」
「そうですね。同じ位ですね」
過去のそうした仕事とも比較してさらに話す。
「書類の規模は」
「じゃあ連続徹夜だったのね」
「その通りです」
やはりそうなるのだった。
「体重もかなり減りました」
「あの時はそうは見えなかったけれど」
「それでも減ったことは事実です」
事実は変えられない。そうも述べていた。
「体重が。私だけではなく」
「制服組だけでなく背広組を命を賭ける」
「それが戦争です」
そういうことだった。やはり戦争はただ戦場だけで行われるものではない。後方でもそれは熾烈であり負けるわけにはいかないもの

であるのだ。
「とはいっても戦争は現場で起きています」
「そうね」
「現場のことも考えなくてはなりませんし」
「その辺りは警察や消防署と同じね」
その通りであった。警察も消防署もその仕事自体は現場で行われている。会議室や執務室でもやるべきことはあるがやはり事件は現場なのである。
「そこはね」
「中々わかりにくいことではありますが」
「それでもわかって仕事はしているように見えるけれど」
「いえ、それが」
首を横に振るしかないといった態度だった。
「万全とはいきません」
「そうなの」
「やはり。現場と国防省では違います」
このことも認める八条だった。
「実際にビームやミサイルが飛び交う場所ではありませんから」
「あくまでデスクワークだから」
「はい。書類だけではわからないこともまた多いです」
「軍はそういうところが本当に大変ね」
カバリエもこのことを強く認識した。
「それで今の仕事の状況は？」
「流石にあの時程ではないです」
八条はここでも正直に述べた。
「戦争も終わってかなり経ちましたし」
「そうね」
「流石に連日連夜徹夜ということはありません」
「それはいいことね」
「私もスタッフも今は時間がかなりあります」

そしてこうも話すのだった。
「ですが」
「仕事はある」
この話の展開は予定調和であった。
「そういうことね」
「そうです。ですから」
「ええ。御苦労様」
にこりとした笑みを八条にかけた。
「また。何かあったらね」
「はい、宜しく御願いします」
「サハラのことはまた機会を見て話しましょう」
このことを話すのは忘れなかった。
「もっとも。時間があればだけれど」
「彼等に」
「願わくば早まったことはしないで欲しいわ」
それまでにこりとしていたカバリエだが顔をすぐに引き締めさせた。
「是非ね。それはね」
「はい。そうなれば何もなりません」
そしてそれは八条も同じであった。

## 第三十四部第一章　他勢力の目その十八

「何があっても。それは」
「こちらもすぐに手を打つから」
このこともまた話した。
「焦らないでね」
「わかりました。それでは」
「また」
別れの言葉であった。
「打ち合わせをしましょう。それじゃあ」
「はい。それではこれで」
八条は最後に一礼した。こうして彼等の今の話は終わるのだった。
八条の退出を見送ったカバリエはそれで終わりというわけではなかった。己の執務室に戻るとすぐに人を呼んだ。暫くして何人か背広の男女がやって来た。
「外相」
「お呼びですか」
「話はわかってるわね」
カバリエは己の執務机に座っていた。そしてそこから己の前に立つその数人のスタッフの顔を見つつ静かに話をはじめるのだった。
「アヤグーズのことだけれど」
「あの国ですか」
「アヤグーズ大使館は大丈夫かしら」
「はい、彼等は無事です」
「今はアヤグーズから避難していますが」
「そう。とりあえずは無事なのね」
カバリエはまず彼等の無事を聞いて安心した顔を見せた。この時代も大使館は必ずしも安全な場所ではない。戦乱が近付けばすぐに退避しなくてはならない。そうしてその退避した場所でまた情報収

集を行う。大使館は危険の中でもやるべきことがあるのである。
「それじゃあ連絡は」
「ついています」
「それでですが」
スタッフの方から話をしてきた。
「アッサルームにおける陸上戦はかなり進展したようです」
「そうなの」
「はい。ティムール軍は既に王宮に迫り」
「ええ」
「そこを包囲しました」
もうそこまで進んでいるのだった。
「そのうえで降伏勧告をしていますが」
「アヤグーズ側はそれを受けないのね」
「そうです、最後の一戦をするつもりです」
「最早誰も降伏しません」
「その前の陸上戦ではまだ降伏する人間はいたのかしら」
カバリエはこのことも彼等に尋ねた。
「その時はどうだったのかしら」
「はい、その時はまだ」
「いました」
スタッフ達はすぐにこのことにも答えた。
「ですがそれからは」
「もう包囲されているというのに」
「覚悟を決めたということね」
カバリエは彼等の話を聞いてこう分析した。
「つまりは」
「そうですね。間違いありません」
スタッフの一人もこう述べる。
「最早残っている人間はです」
「そうなるでしょう」

そして他のスタッフも彼に続いた。
「つまりはです」
「最早彼等は」
「ええ。全員死兵ね」
連合では存在しない言葉だ。連合においては危機に陥れば降伏する。ましてや自身の待遇や身の安全が保証されていれば尚更である。
「そして彼女も同じかしら、それは」
「ブルコルジ女王ですね」
先程のスタッフとは別のスタッフがその声に応えた。
「それは」
「ええ、そうよ。彼女もなのね」
「残念ながら」
返答はカバリエの予想通りであった。カバリエは表情を変えることなくその報告を受けていた。

## 第三十四部第一章　他勢力の目その十九

「そうなの」
「国防省は是非彼女を亡命させたいとのことですが」
「その決意は。やはり」
「けれど。やってみる価値はあるわね」
悲観的な報告を受けても彼女の考えは変わらなかった。
「説得してみましょう」
「説得ですか」
「我々の仲介を受けて戦闘を中止し」
「そして連合に亡命ですね」
「そういうことよ。むざむざ死んでもらってはね」
困るというのである。
「少なくとも国防省は納得しないわ」
「とりわけ長官がですね」
「わかってるのね」
「あの方がそれだけ女性に御執心なのははじめて見ました」
これもまた彼等にとっては見るべきものであったのだ。同性愛者ではないのかと思われる程そういった話のない八条があくまでブルコルジを迎え入れようとしているからだ。それは外務省のスタッフ達から見てもかなり異様なものであるのだ。
「まさかとは思いますがね」
「有り得ませんか」
「ああ、それはないわ」
カバリエも笑ってそれは否定した。
「国防長官が女王をいとおしく思っているってことよね」
「はい、そうです」
「それは絶対にないわ」
断言さえする。

「今まで噂があってもそれはすぐに誤報だってわかってきたわよね」
「残念なことに」
「ああした人もいるのですね」
「しかも鈍感なのよね」
今度は困った顔になるカバリエだった。
「誰がアプローチしてもね」
「はい。気付きません」
「外務省の女性スタッフの間でも人気はありアタックする者もいますが」
「普通以上にやっても気付かないわよ」
それが八条義統という男であった。
「バレンタインにハート型でしかもホワイトチョコで愛しています って書いた娘は数多いわ」
「また随分とはっきりとしたアプローチですね」
「けれどそれを何と思っているかというとね」
「何とですか？」
「いいデコレーションだと思うのよ」
やはり彼は気付かないのだ。
「どうしてもね。そういった感情だけは」
「そうした人ですからね」
またスタッフ達は述べた。
「流石にそれはないと思いました」
「あくまで軍人として求めているのですね」
「その通りよ」
やはりそうなのだった。彼はあくまでブルコルジを軍人として求めているのだった。軍人としての能力以外は求めてはいないのである。
「軍事的才能を惜しんでね。それでね」
「そういうことですか」
「それにより」

「ええ。他にも人材を求めているわ」
八条は人材収集についてはかなり貪欲なのであった。
「正規軍もその募集や教育システムにはかなり気を使っているし」
「募集もですか」
「ええ」
連合軍の募集は幾つかに分けられる。連合は高校まで義務教育であるが高等科にあたる少年学校がまずある。この学校は夜間部と同じ四年制でありここを卒業すれば伍長に任命される。制服はなく軍服がそれに当たる。その軍服は詰襟の七つボタンである。
そして一般兵士だ。二年の任期制であり任期終了の都度契約更新するかどうかが確認されその都度退職金が手渡される。高校卒業者で最も多い入る先だ。軍服はセーラー服だ。
次に曹候補士がある。兵として入り三年から七年で伍長になる。将来がある程度約束されている為一般兵士より待遇はいいと言える。ここも軍服はセーラーである。
その上に曹候補学生がある。二年で下士官になる。下士官になってからも昇進は早く将校への道も開けている。そういう意味で彼等は本採用組とも言われる。その軍服は少年学校と同じ詰襟の七つボタンである。この軍服は航空学生も同じである。

## 第三十四部第一章　他勢力の目その二十

航空学生は伍長からはじまる。そこからパイロットになっていきパイロットになれば将校となる。なお他のそうした軍務の専門学校もあり彼等も待遇は航空学生と同じである。ただしその門は曹候補学生からはかなり狭くなっている。やはり一般が圧倒的に多い。ここまでが高卒者の道である。

高卒から軍の大学である士官学校に入ることもできる。士官学校はそれこそ連合内に数えきれない程ありそれぞれで軍人としての教育を行っている。四年制であり卒業すれば正式任官となり少尉になる。普通の大学と違うのは学生時代にも給料があることだ。

大学卒業者は幹部候補生からはじまる。待遇は士官候補生からでありこれは士官学校と同じだ。一年の教育の後で少尉になる。この士官学校と幹部候補生が軍の指揮官の中枢となるのだ。彼等の軍服は士官のものだが袖の金モールが細いものが一本となっている。これが士官候補生の階級の証なのだ。

連合軍は大きく分けてこう分けられている。こういたように合理的に分けられているのだ。

「教育も細かいしね」

「本当に気を使っているのですね」

「国防省も」

「そのうえで彼女も得たいのよ」

そういうことであった。

「人材としてね」

「そうですか。それでですか」

「国防省の意向はわかりました」

既にわかっていたが再確認したのである。

「しかしこれはですね」

「何かしら」

カバリエはまたスタッフ達の言葉に応えた。
「連合全体にとってもいい話です」
「その通りです」
「ええ。アヤグーズの国家元首が亡命してくる」
このこと自体にも大きな意義があるのだった。
「それがね」
「難民の統合の象徴になるので」
「我々としても彼女には是非」
彼等もそういう考えであった。
「連合に来て欲しいものです」
「むざむざその命を散らすこともありませんから」
「私もそう思うわ」
死ぬことについて、という意味である。
「死んでもね。それは何もなりはしないから」
「ではやはり」
「仲介を打診しますか」
「ええ。すぐにね」
決断は下った。
「してくれるよう伝えてね」
「はい、それでは」
「そのように」
スタッフ達も彼女の言葉に頷いた。
「大使館のスタッフに連絡します」
「迅速に」
「そしてね」
カバリエはここでさらに言った。
「アヤグーズの滅亡でアヤグーズ大使館はなくなるわね」
「はい」
「スタッフ達はいつも通りよ」
こう言うのだった。

「ハサン大使館に入りそこに編入される」
「そのようにですね」
「ええ。いつも通りね」
またいつも通りと述べるのだった。
「そうなるわ」
「わかりました。それでは」
「そちらの処理も」
「必要な書類は持って来て」
カバリエはこうも彼等に告げた。
「決裁させてもらうから」
「わかりました。それでは」
「そちらも」
スタッフ達も彼女のその言葉に頷くのだった。
「すぐに持って来ますので」
「その際は宜しく御願いします」
「今まではサハラでの仕事はどのようにして退避するかが大きかったわよね」
カバリエは書類の決裁の話から現場の話に戻してきた。

## 第三十四部第一章　他勢力の目その二十一

「戦争が起こって。そうして」
「はい。北方に人を置くことはできませんでしたし」
「色々と制限もありました」
北方にスタッフを回すことができなかったのはエウロパの存在のせいである。エウロパ軍に捕まってしまえばどうなるかわからずそのリスクを考えてスタッフを北方に送れなくなっていたのだ。従って北方の情報収集は東方のハサン大使館が中心になっていたのだ。
「ですが今ではティムールに置くことができています」
「戦乱の為の退避は近年かなり多いですが」
「それだけサハラの統一が進んでいるということかしら」
カバリエは今度はこのようなことを述べた。
「今のところはね」
「今のところはですか」
「千年の間にこういう状況は何度かあったわ」
サハラの歴史についても言及する。
「けれど。それでも」
「はい。統一にはなりませんでした」
「その都度。その夢は破られました」
統一と分裂、これもまたサハラの歴史であるのだ。そしてそれに伴う戦乱により多くの者が倒れてもきている。サハラでは希望は絶望に容易に変わるものだとも言われている。
「ですが今は大きく分けて三国です」
「それまでの大使館の退避や統合も進んでいますが」
「そうね。大使館の退避や統合の仕事がかなりだったわ」
カバリエも言う。
「それを見ているだけでもサハラの情勢がわかる程までにね」
「はい。そして今度はアヤグーズです」

「アヤグーズがなくなれば」
「これまではハサンが優勢だったわ」
ハサンとティムールの戦争においてという意味である。
「けれど。アヤグーズを失い戦力も消耗して」
「その優勢は覆されることになります」
「これは間違いありません」
「ティムールとの戦いでまず劣勢に立たされることになったわね」
カバリエの目がまた光った。
「そしてオムダーマンとの戦いも」
「オムダーマンもまた」
「彼等もまた」
オムダーマンとの戦いもあるのだ。今ハサンが戦っている相手は一つではないのだ。
「そちらの戦いも五重の防衛ラインのうち三つを抜かれています」
「これ以上敗れればこちらも」
「そうね。劣勢に立たされるわ」
対オムダーマンの戦線についてもであった。
「このままではね。そちらもね」
「双方の戦線で劣勢に立たされる」
「まずいですね、ハサンにとっては」
やはり彼等に直接関わる話ではないので何処か客観的である。より意地の悪い見方をすれば他人事である。実際にそうであるからそういう口調に成るのも当然だが。
「アヤグーズを失いさらにティムールに進まれ」
「そのうえ五重の防衛ラインを全て突破されれば」
その二つの戦線でのハサンにとってさらに悲観的な状況をあえて予測して話した。
「如何にハサンといえど」
「そうなってしまえば」
「最悪の事態になるわね」

カバリエは言いながらその目を曇らせた。
「ハサンにとってね」
「はい、そうなります」
「その場合は」
「まさかハサンにとってその行動を取るとは思わなかったけれど」」
カバリエは言いながら腕を組むのだった。
「最悪の場合にはね」
「はい、そうです」
「その場合は。やはり」
「ええ。考えておいてもいいわね」
カバリエはその顔をさらに真剣なものにさせていた。
「今のうちにね」
「今ならそれを考えても間に合いますし」
「様々な事態を想定して行動を取ることもできますし」
「シュミレーションするとしないとでは大きな違いがあります」
スタッフ達は口々に話す。

## 第三十四部第一章　他勢力の目その二十二

「ですから。今の時点で」
「考えておきましょう」
「それでまた国防省に頼むことになるわね」
カバリエは再度国防省の存在を話に出すのだった。
「戦局のシュミレーションをね」
「我々が行うのは外交においてのシュミレーションですね」
「それもですね」
「ええ。そちらのスタッフは私が選ぶわ」
それは自分で選ぶというのだった。
「その人選はね」
「左様ですか」
「それは」
「時間があるのはやはりいいことね」
言いながら微笑を顔に戻すカバリエだった。
「そうしたことまでじっくりとやれるから」
「流石にティムールもオムダーマンも今すぐにハサンの王都に迫ることは無理です」
「距離がまだあります」
距離は戦争においても極めて重要な意味を持つ。敵との距離が遠ければそれだけ補給やそういったものに支障を来たす。無理な遠征で敗れた国家は数多くある。
この戦争においても距離は大きな意味を持っていた。ティムールもオムダーマンもまだハサンの本拠地に入るには多くの距離を経なければならなかったのだ。
「ですから。まだ」
「それは有り得ません」
「その距離がそのまま時間になるからね」

カバリエの今言った通りだった。
「だから。今はね」
「まだかなり時間があります」
「その間に全てをやっておきましょう」
「そういうことね。それじゃあ」
「はい」
「まずは今回私が言ったことは全て実行して」
カバリエは話を一つにして彼等に告げた。
「それはいいわね」
「わかりました」
「それでは」
スタッフ達も彼女の言葉に応える。
「すぐにそのように」
「致します」
「御願いするわ。すぐにね」
迅速であることを何よりも言うのだった。
「かつ的確にね」
「承知しております」
スタッフ達もそれはわかっていた。迅速かつ的確にというのはどの仕事でも基本であるからだ。もっとも粗雑であってはどうにもならないのでここには慎重も必要なのであるが。
「では今からすぐに」
「取り掛かります」
「話はこれで終わりよ」
カバリエは話の終わりをスタッフ達に告げた。
「後は。頼んだわ」
「それで外相」
一人がふと言ってきた。
「一つ気になることがあるのですが」
「気になること？」

「はい、そのハサンのことです」
スタッフの一人がハサンについて言ってきた。
「妙な話を聞いたのですが」
「妙な？」
「王室に一人子が生まれました」
「王子かしら。それとも」
「王女のようです」
彼は言う。
「あくまで未確認情報ですが」
「王女ね」
「問題はその両親です」
「両親！？」
「はい、まず母親ですが」
そのスタッフはこれまた奇妙なことを言った。王室、それもサハラのものならば父系であるからこの場合は父親から語られるのが常識だからだ。カバリエはこの点にも疑念を抱いた。

## 第三十四部第一章　他勢力の目その二十三

「何故父親からではないのかしら」
「それについては後で」
スタッフは今はこう言うのみだった。
「お話しますので」
「そうなの」
カバリエはそのスタッフの思わせぶりな、明らかに何かを含んでいる言葉にとりあえず問うのを止めた。そしてそのうえで彼の話を聞くのだった。
「その母親ですが」
「誰なのかしら」
問いながら己の記憶を辿ることも忘れていない。彼女が知る限り今のハサン王家で懐妊している者はいない。王女、后含めてだ。それを確かめてから話がいよいよ妙だと内心思っていた。
「それは」
「ある女官です」
「女官！？」
「宮中に務めている女官でして」
このスタッフは語るのだった。
「年齢はまだ二十にも達していません」
「というと入って間もないのね」
「その通りです。母親はこの女性です」
彼はこう述べた。
「それがまずはっきりしています」
「一介の女官ね」
カバリエは彼の話を聞いたうえでこう述べた。
「つまりは」
「はい、そうです」

彼もそれを認める。
「一介の女官です。家はハサンの名門の一つですが」
「それは当然ね」
その女官の家がハサンの名門の家ということはカバリエもわかった。宮中に仕える女官といえばこの時代においても特別な立場にいる人間である。そうした人間の出自がはっきりしないようなことは有り得ない。これは連合においても同じでありとりわけ日本やエチオピアといった歴史の古い国は五月蝿い。
「けれど母親は女官なのね」
「はい」
またカバリエの言葉に答えた。
「そうです。女官です」
「つまり王家の誰かが彼女に子供を産ませたのね」
カバリエは話の流れから全てを察して述べた。
「そういうことね」
「御言葉ですが」
「よくある話ね」
カバリエはここまで話を聞いて一旦こう述べたのだった。
「そういったことはね」
「確かに」
語るスタッフもそれを認める。
「こうした話は何処にもあります」
「エウロパでもよく貴族と使用人の恋愛があるそうね」
これは連合でもよく言われている物語の一つだ。
「身分を越えるとか身分によってとか」
「連合では表向きはない話です」
「少なくともそうした壁はかなり薄くて低いわ」
カバリエは連合の身分についても述べた。身分というよりは人間社会においてどうしてもできてしまう階級というものだ。しかしそれは制度になっていないだけに壁もかなり薄く低いものなのだ。

「それはね」
「それはそうですね」
「サハラもそういうのは王家以外は五月蝿くはないけれど」
イスラムにおいては全ての人間はアッラーの前に等しく人間である。アラビアンナイトの頃より王侯も物乞いも同じイスラムとされているのだ。
「王家はね」
「別です、それだけは」
「連合でもそうであるし」
王家だけは特別なのは連合でも同じであった。
「そしてその身分違いの愛が起こったわけね」
「あくまで内密ですが」
「そうした話は滅多に公にはならないわ」
カバリエは今度はこういったふうに言ってみせた。
「そうして潰えた恋愛も幾つもあるわね」
「おそらくは」
「そしてその愛もまた」
カバリエの声はシビアなものになった。

## 第三十四部第一章　他勢力の目その二十四

「そうなるのかしら」
「その女官は姿を消しました」
スタッフは新しい情報を述べた。
「死んではいないようですが暇を貰い」
「何処か。そうね」
カバリエはまた考える顔になってそのうえで己の考えを話してみせた。
「何処かの離宮に一人いるのかしらね」
「そこまでは確かめていませんが」
「可能性としてはあるわね」
死んでいないのなら何処かそうした誰もいない場所に軟禁される。口封じの基本である。よく開かずの間や行ってはいけない場所が宮殿にはあるがそのうちの何割かはこうした事情が裏にあったりするという。
「それも」
「はあ」
「そしてよ」
カバリエはさらに話を進めてきた。
「父親は？」
話の確認だった。
「その王女の父親は。誰かしら」
「第一の方です」
「そう」
この言葉だけでわかったのだった。
「あの人なのね」
「奥方はもう四人おられますので」
スタッフはイスラムの教理において絶対のものを一つ出してきた。

「ですから。彼女はもう」
「結婚することはできなかった。そうね」
「その通りです」
答えは決まっていた。
「それで。このことは公にはされいません」
「そうだったの」
「王の子であることを知るのも母親のことも全て最重要機密事項となっている」
「そうよね」
カバリエは彼の報告に納得した顔に頷いた。
「それは流石にね」
「王は近年身体も崩していましたが」
「何とか子供を作れる位の力は残っていた」
カバリエはまた言う。
「そういうことね」
「そうなります。そしてその王女ですが」
「ええ」
「その存在を知る者は王家でも僅かのようです」
「！？」
カバリエはここまで聞いて話のさらなる矛盾を感じ取ったのであった。いや、その話自体が実に奇怪で筋の通らないものであるとわかったのだ。
「王女なのに王家でも存在を知られていない」
「そうです」
彼はカバリエに答えた。
「その通りです」
「聞けば聞く程訳がわからないわね」
顔を顰めさせての言葉である。
「それは」
「やはりそう思われますか」

「確かに公にはできない子よ」
カバリエもそれは認める。
「けれど。存在を殆ど知られていないとは」
「どうやら母親と一緒に暮らしているようです」
このスタッフはここでこうも述べた。
「生まれてから」
「そうなの。それでこのことを知っているのは」
「王と太子位のようです」
国家元首である王と実質的に国を動かしている太子の二人だけだという。
「知っているのは」
「そんな話がよく耳に入ったわね」
「多分に未確認の部分も多い話ですが」
こう前置きもした。
「それでも。噂はどの様な障壁も通り抜け秘密は必ず他の誰かが知るものなので」
「それでなのね」
「はい、それでです」
またカバリエに答えた。

## 第三十四部第一章　他勢力の目その二十五

「といっても大使館でも知っている者は僅かですが」
「何処までも知る者の少ない話ね」
「そうです。あくまでそうです」
彼は言う。
「この話。決して公にはなりません」
「そうね。けれど」
「けれど？」
「わからないことがあります」
彼はここで顔を曇らせたのだった。
「どうしても」
「それね」
それが何なのかはカバリエにもわかった。
「どうしてそこまで隠蔽する必要があるかということね」
「はい、それです」
彼はまたカバリエに話した。
「確かにそうしたことにより生まれる子供はいます」
「何時の時代でもね」
このことも再度話される。人間の世界というものは奇麗事だけでは終わらない。こうした話も当然ながらあるのだ。それは過去も現在もおそらく未来も同じだ。
「そして公にされることはないといっても」
「ここまで隠蔽する必要があるかというと」
「甚だ懐疑的ね」
また言うカバリエだった。
「そういうことね」
「はい、その通りです」
彼はカバリエの今の言葉に頷いた。

「果たしてそれは何故か」
「わからないわね」
カバリエも首を傾げるだけだった。
「王の末娘。果たして彼女に」
「何があるのでしょうか」
彼等は首を捻るばかりだった。ハサン王家に一つ大きな謎があることがわかった。しかしそれはまだ何故かということは明らかにならなかった。今はそうであった。

## 第三十四部第二章　風の変化その一

風の変化

アヤグーズがアッサルームでの宇宙戦に敗北しそのうえ首都惑星に入られたということは当然ながらサハラ全土にも伝わった。それは連合よりも早かった。

「そうか。敗れたか」

言うまでもなくアッディーンもその話を聞いたその場所はガワール星系であった。彼はそこでこれからの進撃用意及び要塞の補給基地化を進めていた。

彼は今要塞の司令室にいた。そこの木製の執務椅子に座りそこから報告を聞いていた。

彼は報告を聞いたうえで言う。それは。

「予想外だったな」

「はい、確かに」

報告したラシークも彼の言葉に頷く。

「まさか敗れるとは」

「アヤグーズの滅亡は決定した」

アッディーンは続いてこう述べた。

「これでな」

「はい。そしてハサンの西部戦線での劣勢も決定的になりました」

ラシークはこうも述べた。

「この度の敗戦により」

「これを覆すのは容易ではない」

アッディーンはこうも述べた。

「確かに兵力では今だに圧倒しているがな」

「アヤグーズはハサン西方における交通の要衝でもありました」

だからこそティムール軍はあえてアヤグーズに攻め込んだのだ。猛将である彼女の巣にあえてだ。それはこの交通の要衝を押さえる

為だったのだ。
「ですがそこも奪われました」
「そうです」
そこにはシャルジャーもいた。彼もまたアッディーンに対して述べる。
「おそらくティムール軍はここからハサンの勢力圏各地に兵を送るでしょう」
「攻撃側の利点は攻撃ポイントを選択できることですが」
作戦参謀であるシンダントもこの部屋にいた。
「ティムール軍はそれをかなり自由な域で手に入れました」
「これまでは限定されたものでしたが」
「さて、ハサン軍はどうするか」
アッディーンは考える目になりそのうえでまた述べた。
「攻撃ポイントは敵に自在に与えてしまった」
「はい」
「ティムールは守らなくてはならない」
彼はさらに言う。
「しかし兵力には限りがある。全てを守ることはできない」
「全てを守ろうとする者は何も守れず」
シンダントはこの言葉を出した。プロイセン王でありオーストリア継承戦争及び七年戦争において勝ち抜いたフリードリヒ大王の言葉である。
「ですから」
「太子がどう判断するかだ」
アッディーンの目はさらに考えるものになっていた。
「守るポイントは何処かだな」
「そこに兵力を集めて守るしかありませんね」
「ハサン側は」
「我々の戦線とは違う」
アッディーンは次は自分達について言及した。

「我々のように一つのポイントしか攻められないものではな」
「ありませんね」
「やはりそれは大きいです」
「とにかく。アヤグーズはティムールの手に落ちた」
このこともまた言う。
「完全にな。そして」
「そして？」
「あの女王だが」
彼もまたブルコルジを知っていた。アヤグーズ女王としてその武勇を知られた彼女のことはサハラ中に知られている。それは彼もまた同じであった。
「果たしてどうなるか」
「降伏するのでは？」
「それしかありません」
「そうだな」
アッディーンもとりあえずは彼等の言葉に頷いた。
「これ以上の戦闘は無意味だ」
「はい、そうです」
「ですから」
「しかしだ」
そのうえで真剣な顔で言葉を変えてきた。
「あの女王は誇り高い性格だ」
「はい、そうです」
「まさしく虎です」
彼女のこの気性も誰もが知っていた。誇り高き虎の女王として知られていた。だからこそ彼等もまた幸福という今自分達が述べた言葉にすぐにこうも言うのだった。

## 第三十四部第二章　風の変化その二

「ですからすぐに降伏するとなると」
「そうはいかないでしょう」
「それはないだろうな」
アッディーンの予測は奇しくも連合中央政府外務省と同じだった。
「まずな。それはな」
「そうですね。やはりそれはないでしょう」
「あの女王はこの戦いで」
「死ぬな」
アッディーンはあえてこの言葉を述べてみせた。
「まずな。このまま」
「そうですね。王都を枕にして死にます」
「この戦いで」
彼等もまたそれぞれ話していく。
「サハラにとっては惜しいな」
そしてアッディーンはこうも言った。
「あれだけの人物を失うとなっては」
「それでどうも連合でも」
「連合で！？」
「自分達に迎え入れようとしているようです」
「連合が！？」
アッディーンはその話を聞いて眉を顰めさせざるを得なかった。
「彼等が。何故だ」
「奇怪に思われますか」
「否定しない」
アッディーンにとっても連合といえば外国、もっと言えば異世界でしかない。連合はあくまで経済や通商、貿易のことだけを考え軍事にはおざなりであるとも思っていた。

「その連合が。あの女王を迎えるのか」
「アヤグーズとティムールの戦いを仲裁したうえで」
「既に外務省は動きだしているかも知れません」
「あれか」
アッディーンはここで連合でよくあると言われていることを予測した。
「文化人かタレントか」
こちらの方で期待していると思うのだった。
「そうなってもらうつもりか」
「いえ、そうではないようです」
「これが」
「違う！？」
アッディーンは参謀達の言葉を聞きまた顔を顰めさせた。
「違うというのか」
「そうです、どうやら女王を軍人として求めているようなのです」
「まさかとは思うが」
アッディーンはシンダントの言葉を聞いても顔を顰めさせたままだった。
「そんなことがあるのか」
「信じられませんか」
「連合は優秀な軍人を求めたことはない」
彼は言う。
「これまで。そうしたことはない」
「それは確かにその通りですね」
「しかもだ」
アッディーンはさらに言葉を続ける。
「連合は軍人は自分達で育てている」
「教育隊や士官学校ですね」
これは連合だけでなく各国、当然オムダーマンにおいてもある。
このことは常識である。

「それにより自分達で軍人を育てているからその必要はないというのですね」
「そして連合は天才型の軍人を求めてはいない」
アッディーンは連合のこうした考えもわかっていた。連合軍はシステムで戦う軍であり天才やそうした傑出したソフトウェアに頼らない軍である。
「それで何故女王を軍人として求めるのだ」
「それはないというのですね」
「連合軍としてはだ。やはりそれはないと思うが」
「違うのです」
しかし今度はシャルジャーが言った。
「サハラ義勇軍に入れるつもりのようです」
「義勇軍にか」
「そうです。あの軍にです」
「あの軍に入れるつもりのようです」
参謀達はこう彼に話していく。
「義勇軍の指揮官として」
「義勇軍か」
実はアッディーンは今は彼等の存在を忘れていた。連合軍は正規軍の他に彼等もいる。そしてそのシステムのことも忘れていたのだ。

## 第三十四部第二章　風の変化その三

「ですからすぐに降伏するとなると」
「そうはいかないでしょう」
「それはないだろうな」
アッディーンの予測は奇しくも連合中央政府外務省と同じだった。
「まずな。それはな」
「そうですね。やはりそれはないでしょう」
「あの女王はこの戦いで」
「死ぬな」
アッディーンはあえてこの言葉を述べてみせた。
「まずな。このまま」
「そうですね。王都を枕にして死にます」
「この戦いで」
彼等もまたそれぞれ話していく。
「サハラにとっては惜しいな」
そしてアッディーンはこうも言った。
「あれだけの人物を失うとなっては」
「それでどうも連合でも」
「連合で！？」
「自分達に迎え入れようとしているようです」
「連合が！？」
アッディーンはその話を聞いて眉を顰めさせざるを得なかった。
「彼等が。何故だ」
「奇怪に思われますか」
「否定しない」
アッディーンにとっても連合といえば外国、もっと言えば異世界でしかない。連合はあくまで経済や通商、貿易のことだけを考え軍事にはおざなりであるとも思っていた。

「その連合が。あの女王を迎えるのか」
「アヤグーズとティムールの戦いを仲裁したうえで」
「既に外務省は動きだしているかも知れません」
「あれか」
アッディーンはここで連合でよくあると言われていることを予測した。
「文化人かタレントか」
こちらの方で期待していると思うのだった。
「そうなってもらうつもりか」
「いえ、そうではないようです」
「これが」
「違う！？」
アッディーンは参謀達の言葉を聞きまた顔を顰めさせた。
「違うというのか」
「そうです、どうやら女王を軍人として求めているようなのです」
「まさかとは思うが」
アッディーンはシンダントの言葉を聞いても顔を顰めさせたままだった。
「そんなことがあるのか」
「信じられませんか」
「連合は優秀な軍人を求めたことはない」
彼は言う。
「これまで。そうしたことはない」
「それは確かにその通りですね」
「しかもだ」
アッディーンはさらに言葉を続ける。
「連合は軍人は自分達で育てている」
「教育隊や士官学校ですね」
これは連合だけでなく各国、当然オムダーマンにおいてもある。
このことは常識である。

「それにより自分達で軍人を育てているからその必要はないというのですね」
「そして連合は天才型の軍人を求めてはいない」
アッディーンは連合のこうした考えもわかっていた。連合軍はシステムで戦う軍であり天才やそうした傑出したソフトウェアに頼らない軍である。
「それで何故女王を軍人として求めるのだ」
「それはないというのですね」
「連合軍としてはだ。やはりそれはないと思うが」
「違うのです」
しかし今度はシャルジャーが言った。
「サハラ義勇軍に入れるつもりのようです」
「義勇軍にか」
「そうです。あの軍にです」
「あの軍に入れるつもりのようです」
参謀達はこう彼に話していく。
「義勇軍の指揮官として」
「義勇軍か」
実はアッディーンは今は彼等の存在を忘れていた。連合軍は正規軍の他に彼等もいる。そしてそのシステムのことも忘れていたのだ。

## 第三十四部第二章　風の変化その四

「彼等か」
「これならありますね」
「義勇軍の指揮官として迎えるのなら」
「そうだな」
義勇軍の名を聞いてアッディーンも納得したのだった。
「あの軍は連合軍であって連合軍ではない」
「はい。連合軍のシステムは導入されています」
それはその通りだった。軍服も連合軍のものであり兵器も全て連合製ではある。
「しかし。それでいて連合軍ではありません」
「彼等はソフトウェアでもかなり戦っていますので」
「だから女王を招き入れるか」
アッディーンは話を全て理解した。
「そういうことか」
「はい、そのようです」
「その為に今戦闘の仲裁に入ろうとしているようです」
「意外だな」
アッディーンは話を聞き終えて顎に手を当てたうえでこう述べた。
「理解してもな」
「はい、それは我々も同じです」
「連合が軍人を求めるとは」
「しかしだ」
だがアッディーンはここでこうも言うのだった。
「考えられることでもあった」
「考えられることでもですか」
「連合軍の今のトップは八条長官だ」
彼のこともよく知っているアッディーンだった。直接の面識はな

く話を聞くだけだがそこから八条という男を分析し理解しているのである。
「彼ならばな。それはあるな」
「あの長官ならですか」
「彼は連合軍と義勇軍のことを完全に理解し把握している」
そうである理由も根拠もわかっていた。
「何故なら連合軍も義勇軍も彼が作り上げた軍だからだ」
「そうですね。両軍とも確かにそうです」
「あの長官の作り上げた軍です」
「彼以上に両軍を理解して把握している人間はいない」
こうも言うのだった。
「連合軍は完全にシステムで戦い犠牲を出してはならない軍だ」
「市民の軍だからですね」
「連合のような国家では将兵に犠牲が出てはならない」
これは若し犠牲者が出ればそれだけ志願者が減りそのうえ政権への糾弾に直結するからだ。その為八条は常に万全の形で勝てるように連合軍を臨機応変に万全に対応できるように補給を徹底させ数を多くし兵器も強くしそのうえでシステムを徹底させているのだ。
「しかし戦争で犠牲は避けられない」
「その為の義勇軍ですか」
「彼等は連合の人間ではない」
事実である。しかし冷酷な事実である。
「その彼等に犠牲が出ようともそれは連合の若者達の犠牲ではない」
「だからこそ義勇軍は前に出て戦うのですね」
「犠牲を厭わず」
「そして彼等はサハラの者達だ」
このことも八条は認識しているのだと言外で述べていた。
「我々は人で戦う」
「その通りです」
確かにハードウェアも存在しているが比重としてソフトウェアに

重点を置いている。それがサハラである。連合とサハラの違いがここでも出ていた。
「その我々のことも理解して女王を招き入れるのですか」
「そういうことだな。やはり八条長官は傑物のようだな」
アッディーンはここまで話して八条も高く評価した。
「我々の敵ではないことが幸いだ」
「確かに。その仲裁が成功するとは思えませんが」
「その通りですね」
また参謀達は彼の言葉に頷いたのだった。
「そしてそのアヤグーズですが」
「うむ」
「今遂に宮殿が包囲されました」
「最後の時が近付いているな」
「そしてティムール軍は降伏勧告を行いだしていますが」
それもであった。話は次々に進んでいた。

## 第三十四部第二章　風の変化その五

「このことを言えばな」
「そうなりますか」
「別に悪いことではない」
彼はこのことを特に悪やそういったものとはみなしてはいなかった。
「こうしたことは政治の世界だけではない。人の世では常にあるものだ」
「常にですか」
「そうではないか？他人に恩を売る」
今度は日常によくあることへの話になった。
「それは己が意識しているしていないに関わらず結果として己の名をあげることになる。善行はそれで他人が助かるだけではないのだ」
「自分自身もですか」
「人を助ければ己も助かる」
イスラムの言葉ではないが言うのだった。
「世の中とはそういうものだ。助けようとして果たせなくとも善意は認めてもらえる」
「ではこの場合は連合の善意が見られると」
「戦いを止めさせ多くの将兵の命を救おうとしたとして」
「そうなる。とりわけ連合内部では政権の支持につながるし連合の市民自体にも自分達の正義感を示せて悪いことは何一つもない」
「正義感もなのですね」
「人は悪もあれば善も持っている」
アッディーンは今度はこう言った。人間は確かに善と悪を併せ持っている。だからこそ悩み不安定な存在となっているのだ。善だけであっても悪だけであってもそれはそれでバランスを欠く。最も中には善意しかないような者もいれば何処までも邪悪な者もいるにし

てもだ。
「彼等はそのうちの善を満たせる。やはり悪いことではない」
「確かに。ただ仲裁を提案すればいいだけですから」
「それだけでいいのならば」
空手形でもいい。商売として考えてもこれ程いい話はなかった。
何も失わずにどれだけ失敗しても何かは間違いなく得られるからだ。
「我々もそうします」
「そうならば」
「だからだ。連合は間違いなく仲裁する」
アッディーンはまた言った。
「我々はそれを見せてもらおう」
「それでは。そちらは傍観者として見せてもらいましょう」
「願わくばこの敗戦でハサンの戦力が少しでも多くあちらに向かってくれることを祈りますが」
「いや、それはないでしょう」
今のシャルジャーの言葉にはすぐにラシークが突っ込みを入れた。
「彼等の戦力がこれ以上あちらに行くことは」
「ないというのか」
「そしてこちらに今以上の兵が向けられることもありません」
西部戦線について述べたうえで彼等が戦う南部戦線について述べた。なおこの西部や南部という呼び方はハサン軍のものでありオムダーマン軍やティムールはそう呼んではいない。彼等は戦っている戦線はそれぞれ一つでありまたこの見方がハサンの見方であるからだ。
「それはありません」
「既にハサンは予備戦力を総動員している」
アッディーンは述べた。
「だからだな」
「はい、そうです」
ラシークは彼の言葉にすぐに頷いてみせた。

「ですから。それはありません」
「予備戦力にも限りがある」
アッディーンの言葉は静かなものになった。
「かつてのように成年男子を集めてそれに武器を持たせて終わりということはないからな」
「だからこそです。既にハサンは予備戦力を総動員させました」
二十世紀までは予備戦力といえば動員した国民に武器を持たせてそれで兵として終わりだった。だが二十世紀末期から二十一世紀にかけて軍隊が専門職化してそんなことをしても戦力にならなくなった。それよりも専門職であった退官した軍人を再び集めた方がずっといいようになったのである。それはこの時代でも同じで今のサハラにおいても徴兵制こそあれそうなっているのである。もっともその徴兵にしろ実質的にはどの国も厳密な選抜徴兵制となってしまっているのであるが。
「もうこれ以上は動員できません」
「彼等にとって辛いことにな」
「はい。そしてその予備戦力の殆どを既にティムールへの戦線に向けました」
まずティムールを叩くことにしたのである。
「ですから」
「我々に兵を送ることはできない」
「そしてティムールにも」
今が限界ということであった。

## 第三十四部第二章　風の変化その六

「それだけに兵力は膨大ですが」
「質はどうかわからないがな」
「おそらくそれはお世辞にもいいとは言えないでしょうが」
ラシークはそれはもう見抜いていた。実際にアッサルームの戦いでは動員されたその予備戦力は戦力としてあまり役には立たなかった。
「ですが数は手に入れました」
「そしてそれを振り分け終えた」
「その通りです」
ここまで話すのだった。
「ですから。戦力はもうこちらには来ないです」
「後は王都を護る戦力だけだな。彼等の予備戦力は」
「それが動くのはまだ先です」
ラシークは彼等の動きも読んでいた。
「ですから少なくとも今の五重の防衛ラインを突破するまでは敵の増援はありません」
「その分は安心して戦えるな」
「はい。それだけは」
ラシークはアッディーンの言葉に頷いた。
「安心できます」
「そのことはいい。そしてだ」
アッディーンはここまで話したうえでまた話を変えてきた。
「これからの我が軍のことだが」
「はい」
参謀達も彼の言葉を聞く。
「まず我が軍はこのガワール要塞の補給基地化を進めている」
ここをこれからの進撃の足掛かりにするつもりなのだ。ジェルム

星系に続いて第二のハサン領内における足掛かりにしようとしているのだ。
「まずはそれを進め」
「そのうえで進撃ですね」
「既にハサン軍はアンダハル及びファラーにかなりの戦力を置いている」
「その数及び規模ですが」
情報参謀長としてシャルジャーが述べてきた。
「これまでにない規模です」
「先に抜いた二つよりもか」
「はい。我々にこの要塞を与えそこに入った隙を狙うつもりであったその戦力をそのまま置いています」
さらに言葉を続けてきた。
「それに」
「防衛施設も増やしているのだな」
「そうです」
戦争をしているからには当然の流れであった。
「機雷や人工衛星も多数に及び」
「これまで以上にだな」
「遥かにです。ですから」
「それぞれ攻略するのは困難か」
「どちらも堅固です」
ラシークは言う。
「ですが攻略しなければなりません」
「そうだ」
この言葉ははっきりと言い切るアッディーンだった。
「その堅固なアンダハルとファラーを攻略しなければならない」
「我々の攻撃ポイントは自由に選べない」
シンダントは無念そうに述べた。
「今後のティムール軍と違って」

「そうだ。アンダハルとファラーを攻略するしかない」
アッディーンはこのことを強調して述べた。
「絶対にな」
「そうです。道はそれしかありません」
要衝にあえて要塞を置いて護りとする。戦略の常道だった。
「ですから」
「だからこそだ。まずはこのガワールの基地化を完全なものにする」
アッディーンの今の考えだった。
「そのうえで残り二つの要塞を抜く」
「そうですね。それしかありません」
「我々は」
「補給が万全で攻略に対して的確な装備があればそれで勝つことはできる」
アッディーンもまた戦略の常道を熟知していた。
「つまりだ。ここは」
「どうされるのですか？」
「アンダハルは機雷だな」
「そうです」
シンダントが彼に答えた。
「機雷原をこれ以上はないという程前面に置きそれを護りとしています」
「成程な」
それを聞いたアッディーンの目がさらに光る。

## 第三十四部第二章　風の変化その七

「それならばだ」
「では攻略する方法があるのですね」
「この世で絶対のものは一つしかない」
アッディーンは参謀達の言葉に応えてまた述べた。
「アッラーの御教え以外にな」
「その通りです」
アッディーンもムスリムでありまた今彼の言葉を聞く参謀達もムスリムである。ならばアッラーの言葉を絶対のものと考えるのは当然だった。
「では。二つの要塞もまた」
「攻略されるのですね」
「少なくとも退くつもりも止まるつもりもない」
アッディーンにその考えは全くなかった。
「前に進む。それだけだ」
「そうですね。勝利を収める為には」
「我等が今以上のものを手に入れる為には」
「先に進みそうして勝利を収める」
彼は言った。
「それしかない。敗れればそれ相応のものを失う」
「それが戦争ですね」
「戦争は勝利を収めればそれで多くのものを手に入れることができる」
政治的にである。だからこそ政治の一手段としてあるのだ。これがサハラにおいては極めて顕著である、単純に言えばこういうことなのだ。
「だが敗れればそれを失う」
「その通りですね」

「我々も今までは一度敗れれば少なくともジェルムまで下がらなければなりませんでしたが」
「しかし今はこのガワールがある」
今いるこの場所はあるのだった。
「ここを完全に足掛かりとしてさらに先に進むのだ」
「はい」
「その補給と今後の作戦だが」
また話が移った。
「そのことについての話は各司令達がここに来てからだ」
「それからですね」
「今彼等はこの要塞の中に来ているか」
「はい、どの方も来られました」
ラシークがアッディーンの今の問いに対して答える。
「間も無く会議室に」
「わかった。では私も向かおう」
ラシークのその言葉を聞いてよしとしたのだった。
「そのようにな」
「はい、それでは」
「そのように」
こうして彼は今目の前に集う参謀達を連れて会議室に入った。そこにはもうそれぞれの司令達が集まっていた。その中の最上級者であるガルシャースプの指示で全員席を立ちそのうえで部屋に入って来た彼に対して敬礼をしたのであった。
アッディーンはその敬礼に対して返礼した。そのうえで総司令官の座に座りそのうえで懐疑に入るのだった。まずはアッディーンが口を開いた。
「今後のことだが」
「はい、残る二つの要塞の攻略ですね」
マナーマが彼の言葉に応えてきた。
「その為に今ここに我々を」

「その通りだ。貴官等にはこれからその二つの要塞攻略の為各艦隊を率いてもらう」
彼等の多くは既に大将になっている。司令達の中で中将の者はいない。上級大将はガルシャースプと司令の中で最年長であり功績もあるアタチュルクがそうであった。
「いいな」
「わかりました」
そのアタチュルクが彼の言葉に重厚な声で頷いた。
「それでは。我々は」
「そうだ。私も向かう」
彼もまた出撃するのだった。
「その二つの要塞の攻略にな」
「左様ですか」
誰もそれを聞いて驚きもしなかった。彼が自ら出撃しそのうえで前線で指揮を執るのはいつも通りだったからだ。彼にしろシャイターンにしろそういうタイプの指揮官なのだ。
「そしてだ」
「そして？」
「まずはアンダハル要塞の攻略だが」
まずはそれであった。

## 第三十四部第二章　風の変化その八

「あの要塞は機雷原によって護られている」
「はい」
ムーアが彼の言葉に答えた。
「それは五十億を超えます」
「五十億を超えるか」
「ハサン軍もこの戦線での出せる限りの機雷を出してきました」
だからこそ十億を超えるのだった。
「これを破るのは容易ではありません」
「確かに」
ニアメもムーアの言葉に同意する。
「しかしそれを破る策がおありなのですね？」
「閣下には」
「それだ」
アッディーンは司令達の言葉を受けたうえでさらに述べてきた。
「当然ながら機雷に触れてはならない」
「！？」
司令達も参謀達も何故彼がここでこの様な当然のことを言うのかわからなかった。
「そして五十億もあれば最早砲撃で潰すにしても限度がある」
「その通りです」
「それにアンダハル要塞といえば」
この要塞にはもう一つ問題があった。
「潮流は要塞の前を螺旋状に絶え間なく流れています」
「従って砲撃で穴を開けてもすぐに防がれてしまいます」
ムーアとニアメはそれぞれ言葉を続ける。
「ですから砲撃はそれこそ我々の火力を総動員しなければなりません」

「そしてそこで火力を消耗しては」
「次の要塞攻略に支障が出る」
そのアッディーン自身の言葉だ。
「だからそれは下策だ」
「はい、そうです」
「御言葉ですが」
「それでだ」
アッディーンはここまでを前置きにしてそのうえでまた述べた。
「私はここで一つ考えた」
「考えとは！？」
「それは一体」
「言っておくが掃海艇も今回は使えない」
司令達のうち幾人かが言おうとしたことを先んじて言う形となった。
「それもまたな」
「我々も掃海艇は多数持っています」
アガヌが述べる。
「ですが五十億です」
「機雷の数が多過ぎる」
「その通りです」
彼はアッディーンに対しても述べた。
「ですから。容易に突破はできません」
「今我が軍が持っている掃海艇を総動員したとしても」
ハラスも言ってきた。
「五十億ともなれば。とても」
「できはしないかと」
これが各司令達の意見であった。
「ましてや掃海艇は掃海艇です」
「その通りです」
この問題もあった。

「戦闘用ではありませんので前線に出せば」
「おそらくハサン軍にそこを狙われます」
これもまた容易に考えられることであった。
「ですから掃海艇を出すのも危険です」
「これもまた」
「使えないことはわかっている」
既にそれは認識しているアッディーンであった。
「それもな」
「左様ですか。それも」
「わかっておられましたか」
「そうだ。五十億もあればとても無理だ」
彼自身も言うのだった。
「それだけの機雷は。だが」
「だが？」
「連合軍ならどうか」
ここで話を出したのは連合軍だった。

## 第三十四部第二章　風の変化その九

「連合軍ならどう突破するか」
「それは容易に想像ができます」
カーシャーンが言ってきた。
「連合軍はまず圧倒的な数があります」
「うむ」
アッディーンはカーシャーンのその言葉に頷いた。
「そして装備も豊富です」
「しかもそれだけではないな」
「その通りです。その装備の性能一つ一つが極めて優秀です」
全てはその国力故のものである。
「ですから。それだけの機雷を撒布されても」
「まず突破できるな」
「連合軍の規模は我々とは桁が違います」
一桁多くなっている。なお人口では連合とサハラ各国ではそれこそ数字の桁が二つは異なってくる。オムダーマンはそこまではいかないが。
「ですから。この場合は」
「その数と装備で押すな」
「我々にないものが彼等には山程あります」
カーシャーンはこうも述べた。
「おそらく機雷には総攻撃を浴びせるでしょう」
「あのニーベルング要塞攻略だな」
アッディーンはここで具体例を話に出して来た。
「あの時彼等はまず無人艦艇を出してきたな」
「そうでした。それでまずはエウロパ軍に攻撃を集中させました」
「それにより無駄な損害を出させ力を消耗させ」
そのうえでサハラ義勇軍が出て来たのだ。連合軍の奇策であり彼

等はそれにより緒戦の勢いを掴むことができたのだった。これは今どの国の軍でも研究されている。
「勝利を掴んだ」
「その話ですか」
カーシャーンの後はマトラが述べた。
「無人艦艇ですか」
「そうだ。それでだ」
アッディーンはここでバヤズィトに顔を向けた。後方参謀の彼にだ。
「マトク中将」
「はい」
後方参謀長である彼が応えた。
「今掃海艇の集まりはどうか」
「廃艦予定の掃海艇ですか」
「そして掃海母艦もだ」
それもであった。
「その集まりはどうか」
「今のところは」
バヤズィトの返答は今一つはっきりしたものではなかった。
「まだです」
「そうか。まだか」
「廃棄される予定のそうした艦艇は南方や西方のものもですね」
「かつて各国で使われないまま置かれていたものもだ」
「そういったものもですか」
「そうだ。全てのそうした艦艇を揃える」
彼は言うのだった。
「今オムダーマン及び占領地にあるもの全てをな」
「集めるのですか」
「話はそれからだ」
アッディーンはまた言った。

「掃海関係の艦艇をあるだけ集める」
「廃棄予定のものをですか」
「他の艦艇もだな」
アッディーンの話はさらに付け加えられた。
「全て揃える。それから進撃に移る」
「それからですか」
「備えなくして勝利はない」
アッディーンの語る目が光った。
「その備えをしてからだ」
「はい、それでは」
バヤズィトは彼の言葉に頷いた。
「揃えておきます」
「迅速にだ。いいな」
彼はまた注文をつけた。
「それと共にこの要塞の基地化も進めておく」
「了解です。なおそちらですが」
「進展状況はどうか」
「こちらは極めて順調です」
今度の彼の返答は実にはっきりとしたものだった。

## 第三十四部第二章　風の変化その十

「既にかなり基地化が進んでいます」
彼は言った。
「ですから。こちらの問題はありません」
「わかった」
アッディーンも彼の返答に納得した顔で頷いた。
「それは私も見ている。ではこのまま進めるのだ」
「はい、それでは」
「防衛ラインを全て越えてからも戦いはまだある」
それで終わりではないというのだった。
「そう。我々の最終攻撃目標は何だ」
アッディーンは司令及び参謀達に問うた。
「我々の最終攻撃目標は。何だ」
「ハサンの王都であります」
即座に答えたのはガルシャースプだった。
「そこであります」
「この要塞はそこに至るまでの基地の一つだ」
アッディーンはガルシャースプのその言葉を受けて述べた。
「ただ残り二つの要塞を攻略する為だけではないのだ」
「それだけではありませんか」
「できればジェルメとこの五つの要塞は全て補給基地としたい」
彼の理想であった。
「そしてハサンを攻略し」
「はい」
「今後の戦いにも使う」
ハサンとの戦いだけを見ているわけでもないのであった。
「今後のな」
「今後のですか」

「戦いは一つ終わればそれで全てが解決するわけではない」
政治の話であった。
「政治は一つが終わればそれがまた別の一つに続くものだ」
「そして戦いも」
「戦争は政治の中にある」
副大統領として政治も備えてきていての言葉であった。
「だからだ。今度も踏まえてだ」
「最終的にはこの五つの要塞を全て基地にしますか」
「それで北への備えとする」
こう言い切った。
「北から来る敵へのな」
「それはいいことであります」
最初に賛同の意を述べたのはバヤズィトであった。
「ジェルメだけでは遠く、しかも限度があります」
「その通りだ」
アッディーンも彼の言葉に頷く。
「だからこそこの五つの要塞を我等の基地とする」
「防衛及び補給のですね」
「とりわけ後方支持に力を置く」
今進めているそれでもある。
「今はな」
「わかりました」
バヤズィトがその言葉に頷く。
「ではそれをさらに進めていきます」
「この五重の要塞とジェルメの基地がさらに役立っていく」
アッディーンは言う。
「この戦いの後にもな」
「つまりあれですな」
ニアメがまた言ってきた。
「然るべき次の戦いへの備えでもあるのですね」

「それを考えている。通常の政治で解決できればいいのだがな」
「通常のですか」
「ですが」
今度はガルシャースプの言葉であった。
「サハラは常に剣で解決してきました」
「その通りだ」
アッディーンもその言葉に頷く。それがサハラの歴史である。
「だからだ。それを考えれば」
「はい」
またガルシャースプは頷いてみせた。
「今のうちに備えておくのだ」
「その次の為に」
「統一してからも役に立つ筈だ」
アッディーンはそれからのことも見ているのだった。

## 第三十四部第二章　風の変化その十一

「サハラが一つになったその時にもな」
「その時にもですか？」
「この五重の防衛ラインは南から北に向かう為の重要なルートにある」
　軍事的にかなり重要なルートである。オムダーマンからハサンに向かうにはこのルートを通るのが最も近い。そして交通も容易であるのだ。だからこそオムダーマン軍はこのルートを進んでいるのである。
「そこを固めれば例え東方のかなりの部分を抑えられても」
「ルートを押さえてさえいれば」
「そこからの南下は止められますか」
「少なくともかなり遅らせることはできる」
　これが彼の考えであった。
「間違いなくな」
「ではその為にもですね」
「この五重のラインを固めておく」
　アッディーンはまた言った。
「あらゆるケースを考えておきたい」
「はっ、それでは」
「そのように」
　ガルシャースプとバヤズィトが彼の言葉に頷いた。
「致しましょう」
「まずはこの要塞を」
「そうしてくれ。さて、まずは先程話した艦艇を集める」
　アッディーンはここで話を元に戻した。
「それからだな」
「暫く時間があります」

ラシークが述べてきた。
「その間は」
「基地化は何度も言った通りだ」
これはそのままとした。
「しかし進撃しないからといって何もしないというわけではない」
「それでは」
「今まで占領した宙域の軍政も進めていく」
それについても考えているのだった。
「今はかなり安定しているがな。それでもだ」
「これにつきましてはやはり軍規軍律を徹底し穏健なものにしたのがよあったようです」
ガルシャースプはこのことについても述べてきた。
「今我が軍は占領した宙域については市民の安全と経済活動をかなりの範囲で保障しています」
「その通りだ」
アッディーンが命じたことなのでよくわかっていた。
「やはりそれがよかったな」
「その通りです。これは連合軍のものに倣ったのでしょうか」
ラシークはまた彼に問うてきた。
「やはり。そうなのでしょうか」
「そういえば以前の我が軍の軍政は」
「ここまで緩やかではなかったような」
司令達もこのことに気付いた。オムダーマン軍の軍政はこれまでも軍規軍律は厳しかったがそれと共に占領した宙域も民政に移管するまでかなり厳格なのであった。経済活動も厳しく規制しそのうえでかなり締め付けてきていたのである。それがオムダーマン軍のやり方だった。
「しかし今回はかなり」
「何故ですか？」
「やはり連合軍のやり方を見た」

アッディーンもそれは認めた。
「それは事実だ」
「やはり」
「そうでしたか」
「エウロパで行っていたあのやり方だ」
見ていたのは当然ながらそれであった。
「あれを真似てみた」
「だからでしたか」
「厳しく締め付けるより緩やかに治めた方がいい」
アッディーンはこうも言った。
「その方がな。いいものだ」
「宜しいのですか」
「経済活動が活発ならばだ」
話は経済にも及んだ。
「その分流通がよくなる」
「はい」
これは完全に経済の話だった。軍人はどうしても軍事の専門家であるが故に経済には疎くなる。それは仕方のないことだがそれでもアッディーンは今その経済を見て話をするのだった。

## 第三十四部第二章　風の変化その十二

「そして物資が手に入りやすくなる」
「流通が動くからですね」
「流れのない川より流れのある川の方が魚は手に入りやすい」
アッディーンの次の言葉はこうであった。
「物資は留まらせているよりも流れさせるのだ。そしてそれを買い取る」
「買い取るのですね」
「徴収してもそれは愚だ」
これも連合軍のやり方であった。
「買うのだ。そうすれば占領地の国民の支持も得られる」
「そういえばです」
アガヌがここであることを思い出した。
「その連合軍ですが」
「うむ」
「徴収は一切行わなかったそうで」
「それもまた」
「そうだ。その通りだ」
サハラでも基本は買い取りでありいずれ自国の勢力圏になる宙域に悪辣な行動はしないのが普通だ。無論例外であった国家や軍人も過去多かったが。
「それに倣った。徴収は確かにそれ自体にはコストはかからない」
「はい」
「買い取ればその分だけ費用がかかる」
この場合は食料や生活必需品である。軍もまた人間の集まりであり多くの人間が生活している。ならばそこに生活必需品が必要になるのは当然の話である。
「しかしだ。金を払う」

「そこにあるのですね」
「そうだ。それによって彼等に利益が出る」
そこが重要だというのであった。
「そうすれば我々は彼等にとって利益をもたらしたことになるな」
「その通りです」
「人は利をもたらしてくれる相手を支持する」
あらゆる物事においての現実である。
「だからだ。我々を支持し」
「それだけ暴動や反乱の不安が減りますね」
「パルチザンの不安もだ」
軍は前線だけで戦うだけではない。こうした後方の安全も考えなくてはならないのだ。かつてドイツ軍がバルカン半島でチトー率いるパルチザンに散々悩まされた歴史もある。
「そうした存在もかなり減らすことができる」
「緩やかにすればですか」
「そうだ。経済活動を許せば彼等も困窮しない」
戦時下での困窮もまたサハラではままある話だ。
「少なくとも最低限はな」
「そういえばエウロパにおいても」
彼等はここでまたエウロパに目を向けた。
「経済活動がかなり許されていた分だけ生活は困窮していなかったそうで」
「確かに星系によっては困窮していましたがそれでも餓えてはいませんでした」
「連合は彼等を餓えさせようと思えば餓えさせることができた」
そうしてもよかったしそうするべきだという意見も連合のネットでは散見されていた。
「しかし彼等はそれをせずにだ」
「あえて経済活動を認めました」
「これは連合軍の度量を宣伝するものだったがな」

やはりこれも八条の考えであるのだった。
「実際それにより連合から見て内外のその評価はさらに高まった」
「確かに」
八条の狙い通りになったのである。
「そうなりました」
「少なくとも連合軍は野蛮な軍とは誰も思いません」
「確かに雑多な軍隊だ」
連合には多くの国家、民族、組織、宗教、文化、文明、そういったものが混雑している。それはしっかりと軍にも出てきているのである。
「それにより無作法な点も見られるが」
「何でも連合で普段いる時もエウロパ領内でもかなり騒がしかったそうですね」
「馬鹿騒ぎも多かったとか」
「それも聞いている」
当然ながらアッディーンはこのことも知っていた。
「猥雑な一面もある」
「やたらと暴飲暴食し」
「そしてエウロパでは店を幾つも食い潰し飲み潰したとか」
そうしたことまで有名になっていたのだった。
「ですが軍規軍律は決して侵さず」
このことは徹底しているのだった。
「そのうえ占領地でも寛容ですか」
「宿敵の領内であってもな」
一千年来の宿敵でもなのであった。

## 第三十四部第二章　風の変化その十三

「そうしてきた。連合は宣伝でもエウロパに勝った」
「エウロパ軍もまた軍規軍律は極めて厳格ですが」
「それでも。彼等はあの時自国領で戦っていました」
自国領と敵国領、このそれぞれの違いがあった。
「そこで軍規軍律が厳正なのは当然のことだ」
アッディーンはそれは常識だと言い捨てた。
「むしろだ」
「むしろ？」
「内戦において略奪暴行を行う軍の方かおかしい」
また言い捨てたのだった。
「そんな軍の方がな」
「かつてのアメリカ軍や中国軍ですか」
「そうだ。彼等だ」
南北戦争では勝利した北軍も南軍もお互いそうしてきた。とりわけ北軍は勝利の為にそれをしてきたし当時南軍の勢力圏にいたとはいえ自国民を巻き添えにした都市への砲撃も行っている。また中国では国家が乱れ群雄割拠になるとすぐに軍がそういった行動を取る。略奪暴行を行わない軍が賞賛され奇異の目で見られ支持を得て彼等を率いる群雄こそが天下を掌握するというパターンができているのもその為だ。
「彼等の方がおかしいのだ」
「かつての彼等の方がですね」
「流石に今はそれはないがな」
国民性は変わっていない彼等だがそれでも軍規軍律は流石に変わっていたのだった。
「それを考えればエウロパは常識であって連合は常識ではなかった」
「はい」

結論が出された。
「いい意味でな」
「その常識を外れた軍のやり方を踏襲されているのですね」
「結果として」
「そうだ。学ぶべきものが多いからだ」
だから躊躇しないというのであった。
「彼等にな。それでだ」
「だからですね」
「それで」
「実際に多くの利益がこちらに生じている」
またこのことを話した。
「補給もこれまでよりスムーズに物資が手に入り暴動もかなり減っているな」
「それはその通りです」
「おかげで補給もこれまで以上に順調で治安に割く戦力も僅かで済んでいます」
彼等にとっては実際によいことばかりであった。
「おかげで戦力をこうして集結させられていますので」
「進撃も容易です」
「厳しく縄でがんじがらめにするより綿でゆうるりと包む」
アッディーンの次の言葉はこれであった。
「そのうえで我々の中に組み入れていく。これからはそうしていくつもりだ」
「左様ですか」
「軍政には確かに緊張が必要だ」
戦争中であるからそれは当然だった。戦争はやはり特殊でありその中での対処も特別なものになる。だからこそ緊張が続いているのだ。
「しかしそれは厳格なものではなく」
「寛容ですか」

「今度からはそれだ。さて」
ここまで話したうえでまた述べるアッディーンだった。
「今そのようにして物資は豊富にある」
「はい」
このことが再確認される。
「これもまた大きな力になる」
「その通りです」
「実際に将兵は今それによりかなり高い士気を維持しています」
現場を預かる艦隊司令官としてのッ言葉だった。
「士気をこのまま維持し」
「機が来れば進撃ですね」
「その通りだ。では話はこれで終わる」
アッディーンは話が一段落ついたと見てここでこう述べたのだった。
「後はそれぞれの艦隊に戻るもよし。まだこの要塞に残るもよしだ」
「どちらでもですか」
「今は英気を養うべき時だ」
ここでもこうしたことを言うのだった。
「だからだ。いいな」
「はい、それでは」
「今はここで」
「うむ。しかしこのガワールは」
今いるガワールについて言及した。
「随分と設備がいいな」
「そうですね。全体的にハサン軍のものは」
「その設備がかなり充実しています」
「整備設備や補給設備だけでなく」
そうした軍事関係に留まらないのだった。

## 第三十四部第二章　風の変化その十四

「娯楽設備もかなりのものです」
「例えばレジャー施設や書籍も多くありますし」
そういうものもであった。
「風呂といったものも」
「さながら連合のようです」
「連合か」
奇しくもここでまた連合の名が出て来た。
「確かにな。見事なまでに充実している」
「風呂は複数ありしかもサウナまで相当なものがあります」
「それを考えればやはり」
「それだけハサンが豊かなのだろうな」
アッディーンはその充実の理由と根拠を的確に見抜いていた。
「だからそうしたところにまで金を回せるのだ」
「そうですね。余裕があるからこそです」
「そこまで充実させることができるのは」
「娯楽施設の充実も士気には重要だ」
アッディーンは何処までも考えていた。その慧眼はさすがであった。
「今後はそこも考えていくか」
「そうですね。それが宜しいかと」
ガルシャースプもそれに賛同して述べてきた。
「今すぐには無理ですが今後は」
「質実剛健は確かにいい」
それはよしとした。
「しかし。それでも将兵の士気の鼓舞と維持の為にはそうした英気を養うようなものも必要だ」
「では今後も」

「そのように」
「進めていく。ではそれもだ」
「はい」
「わかりました」
参謀達が彼の言葉に応えて頷く。
「ではこの戦いの途中ですがそれもまた」
「研究し実際に出しましょう」
「頼むぞ。計画案が決まったら提出を頼む」
「了解しました」
ここまで細かく考えるのだった。
「それではそちらも」
「進めていきます」
「やるべきことは多い」
アッディーンはここでまた述べた。
「軍はな。では諸君」
「はっ」
「会議はこれで終わる」
延びたがそれもここで終わったのだった。
「以上だ」
「はっ、それではこれで」
「失礼します」
司令達も参謀達もそれぞれ席を立った。これで会議は終わった。しかしアッディーンの仕事は終わったわけではなく今度は三次元テレビ電話でハルダルトを傍らに置いたうえで大統領であるブワイフ、首相のハラーイブ、そして国防相であるシカール等と話していた。アッディーンとハルダルト以外は本国の首都アスランにいる。超光速通信を通じての星系間通信によってである。
まずはだ。ブワイフが彼に対して言ってきた。
「ではそちらは順調なのだな」
「はい」

確かな声で彼の言葉に頷くアッディーンだった。
「こちらは後は全てが揃うだけです」
「そうか。ならばいい」
「はい。ところで」
今度はアッディーンが問うた。その確かな声で国家元首である彼に問うたのだ。
「そちらは今どうなっているでしょうか」
「表向きは報道やネットにある通りだ」
ブワイフはこう彼に答えた。
「そのままだ」
「平和ですか」
「今のところはな」
何故か表向きや今のところと二重にフィルターをかけてきていた。
「平和にやっていけている」
「それは何よりです」
アッディーンもまずは己の言葉を抑えて述べた。

## 第三十四部第二章　風の変化その十五

「やはり銃後が安定しているのは何よりです」
「少なくとも経済も安定しています」
今度はシカールが彼に述べてきた。
「そしてそちらに物資を豊富に送ることも可能です」
「確かに満足に届いています」
アッディーンもそれは実感していた。
「有り難いことです」
「ですが」
しかしここでハラーイブが言うのだった。
「近頃領内に不穏な空気もあります」
「オムダーマン領内に！？」
「そうです」
また答えるハラーイブだった。
「北方との国境において潜入の形跡が確認されました」
「潜入！？」
アッディーンは潜入というその言葉にすぐに反応を見せた。
「というとまさか」
「北方ですので」
ハラーイブもそこに警戒を示しつつ述べた。
「そう考えるのが妥当ではないかと」
「そうだな」
アッディーンはあらためて彼の言葉に応えた。彼は副大統領でありオムダーマンにおいて第二のポジションにいるので首相に対しても上の立場の口調となっている。
「それは。やはりな」
「それで今対策を講じているところだ」
ブライフは真剣な面持ちで述べてきた。

「今のうちにな」
「そうですね。そうあるべきです」
アッディーンも真剣な顔になりそれに返す。
「芽は早いうちに摘み取るべきです」
「その通りだ」
「しかもできれば姿を見せないうちに」
こうも言うのだった。
「手を打っておくべきです」
「ハサンのことを見ていると」
シカールはまた言う。
「一刻も早くですね」
「そうだ。私が戻るまでに対処を頼む」
「わかっております」
シカールの返答も強いものだった。
「それではすぐに」
「工作員の一斉摘発だ」
まずはそれであった。
「そしてそれと共に北方との境への警戒をさらに厳重にする」
「それもですね」
「そうだ。抜け穴をそのままにしておくと何にもならない」
アッディーンはこうも言った。
「だからこそそこも塞ぐ」
「それにより彼等の工作を防ぐのですね」
「もっともそれを表にはできないな」
アッディーンはここまで考えていた。何事もあくまで表と裏がある。
「表にはだ」
「ではどうしましょうか」
ハラーイブがここでアッディーンに問うてきた。
「北方との境への警戒は。どういったように」

「表向きはだ」
何事も表向きだった。完全に政治の世界の話になっている。
「伝染病が発見された」
「それですか」
「しかもかなり悪性のものが確認された」
アッディーンは言葉を続ける。
「理由はその辺りか。それでどうか」
「ふむ。伝染病か」
ブワイフはその言葉を聞いて考える顔になった。
「それなら問題はないか」
「少なくとも理由では反論を許すものではありません」
伝染病となればだ。少なくとも公においては反論を許さないものがそこに生じる類の理由であった。
「ですからそれで」
「ではその病気の種類は何になるでしょうか」
ハラーイブも話を彼に合わせてきた。する、ではなくなる、という言葉を使ったところにそれがはっきりと出ていた。当然わかって言っているのだ。

## 第三十四部第二章　風の変化その十六

「最近確認されたその伝染病は」
「エボラではどうでしょうか」
シカールは少し考えてからハラーイブに述べた。今アッディーンの向こうのモニターではブワイフが中央の椅子に座り彼から見てハラーイブが右手に、シカールが左手にいる。シカールはブワイフを挟んでハラーイブに言ってきていた。
「しかも空気感染までするエボラです」
「空気感染するエボラ」
「それが北方との国境で発見され既にかなりの範囲に広がっている」
彼はこうも言った。
「しかも時間が経ってから症状が出るものです」
「潜伏期間が長い種類のエボラね」
「突然変異で」
エボラの特徴は潜伏期間がかなり短いことである。そして発症すれば死ぬまでの時間がこれまた相当短い。その為に広まらないという一面もあるのだ。なおこの時代ではワクチンは存在している。ワクチンを開発できない病原菌なぞこの世に存在していないのだ。
「そういうものが確認されました」
「いい理由ね」
ハラーイブの今の言葉は皮肉ではなかった。
「疑われても押し切ることができるわ」
「死亡率がかなり高いですので」
理由はさらにプラスアルファされた。実際にエボラの死亡率の高さはこの時代でも依然として高いものがある。それもまた問題であるのだ。
「ですから。厳密にです」
「それではその様にするか」

「はい」
シカールは今度はブワイフの言葉に頷いた。
「それではそのように」
「わかった。それではだ」
ブワイフは彼の言葉を受けてからまたモニターの向こうのアッディーンに顔を向けた。そうして彼に対してこのことを問うのだった。
「では副大統領」
「はい」
アッディーンも彼に応える。
「それでいいか」
「理由としては問題ありません」
それでいいというのだった。
「それではそれで」
「わかった。それでは決まりだな」
あらためて彼の言葉に頷くブワイフだった。
「北方に新型のエボラウィルスが確認された」
「事態は極めて深刻です」
「迅速な対処が必要です」
アッディーンとハラーイブがそれに合わせる。
「その為オムダーマン政府としては軍を派遣し」
「直ちに混乱の回復にあたります」
アッディーンとシカールの言葉だった。今度言ったのはシカールだった。
「それではそのように」
「直ちに対処を」
「よし、わかった」
ここでブワイフが決断を下した。
「ではそれで行くことにしよう」
「わかりました」
「ではそれで」

国防の責任者であるアッディーンとシカールがその言葉に頷いた。
「御願いします」
「理由としましては」
「俳優も必要だがな」
ブワイフはそこまで考えているのだった。
「そうだな。俳優はだ」
「既にこちらで用意できるようになっています」
シカールがすかさず言ってきた。
「特殊部隊のメンバーを使いましょう」
「ふむ。彼等をか」
「患者として病床に寝かせていればそれで宜しいですね？」
こうブワイフに問うのだった。
「それで如何でしょうか」
「患者はそれでいいが医者はどうするか」
それの問題もあった。伝染病なら当然医者が出て来る。これは当然の流れだった。芝居をするにはとかく徹底したものが必要なのは舞台と同じであった。
「そちらの役者はどうする？」
「それも特殊部隊のメンバーにより行います」
シカールはそれについても答えた。
「彼等によりです」
「それも特殊部隊のか」
「顔は出す必要がありませんので」
「顔は？」
「伝染病です」
このことがまず大きかった。

## 第三十四部第二章　風の変化その十七

「当然ながら感染の可能性があります」
「それはな」
言うまでもないことだった。だからこそ警戒を厳重にする為の表立った理由になる。そういうことであった。そこまで使える理由であるのだった。
「ですから医者はそれを防ぐ為にも」
「マスクをしているというのだな」
「しかも顔全体にです」
こうも言い加えるシカールだった。
「顔は全く見えなくなります」
「そうだな。これで言葉が多少以上棒読みでも疑われることはない」
「その通りです」
表情が見えなければそれだけでかなりのことがわからなくなる。そこまで考えての配慮であった。やはりかなり徹底しているのだった。
「だからこそ。それでどうでしょうか」
「よし」
ブワイフはこのことにも決断を下した。
「ではそれもそれで行こう。頼んだぞ」
「わかりました」
シカールは彼の言葉にまたしても応えて頷くのだった。しかしこれで話は終わりではなかった。まだ話しのうえで決済を仰ぐべきことがあった。
次に口を開いたのはアッディーンだった。話はこれまでのことと完全につながるものであった。
「それでですが」
「既に中に入っている者か」

「そうです。彼等です」
やはりその彼等に関することであった。
「彼等のことですが」
「それだな」
ブワイフもそのことにも顔を向けた。
「彼等をこのまま放置しておくわけにはいかない」
「その通りです」
話は既に決まっていた。
「ですから。彼等をどうするかですが」
「それだな。何かいい案はあるか」
「あります」
アッディーンは即答だった。
「御安心下さい。あります」
「そうか。あるか」
「はい」
あらためてブワイフに対して答えたのだった。
「やはり伝染病です」
「うむ」
「そして潜伏期間が長い新型のエボラです」
このこともまた話すのだった。
「そう。ですから」
「彼等を探し出しそのうえで捕らえていけばいいな」
「感染者という疑いで」
これを理由にするというのだった。
「それで疑わしい者をまず全員拘束しましょう」
「また随分と荒っぽいな」
ブワイフはアッディーンの案をここまで聞いて述べたのだった。
「疑わしい者全員とは」
「いえ、彼等だけではありません」
しかしアッディーンはまだ言うのだった。

「彼等だけでは」
「というと他にもキャリアーとして隔離するのか」
「そうです。若し彼等だけを隔離すればあちらも気付きます」
アッディーンはあちらと言ったがこの場合の『あちら』とは何を指しているのかも最早言うまでもなかった。彼等は全てわかったうえで話をしているのだ。
「ですから。巻き添えになりますが」
「一般市民の多くもか」
「彼等には一時我慢してもらいます」
アッディーンはさらに言うのだった。

## 第三十四部第二章　風の変化その十八

「確かに迷惑をかけますが」
「そうだな。しかし」
ブワイフは話を聞きながら述べた。
「別に身体を傷付けたり命を失うことではないな」
「流石にそれは言語道断です」
アッディーンとしてもそれをするつもりはなかったしましてや許されることではないということも強く認識していた。この辺りはしっかりとしていた。
「ですが一時隔離程度なら」
「問題はないか」
「そう考えます。ですから彼等にも少し我慢してもらいましょう」
彼はあらためて言った。
「工作員摘発の為に」
「そうだな。ではそうしてもらうか」
「はい。これにより工作員を全員拘束します」
アッディーンはそこに話を戻した。
「これで入り口を塞いだうえで潜り込んだ鼠も捕らえることができます」
「そうですね。そしてこれは」
今口を開いたのはハラーイブだった。
「オムダーマン全域に広がる話ですね」
「その通りだ」
アッディーンはハラーイブに対しても述べた。
「工作員は一人でも逃してはならない」
「その通りです。だからこそですね」
「うむ。オムダーマン全域においてエボラの調査を行おう」
あくまでエボラということにしておくのだった。

「当然今の占領したエリア全域でもだ」
「そちらは御願いします」
ハラーイブは占領しているハサン領についてはアッディーンに任せることにした。
「民政に如何するまでは」
「わかった。ではこちらは暫くは軍でやらせてもらう」
「御願いします。では大統領」
アッディーンに応えたうえでブワイフに顔を戻したのだった。
「そのように」
「わかった。オムダーマン全域でだな」
「はい」
あらためて彼の言葉に頷いた。
「そうなります」
「エボラは危険な伝染病だ」
確かに理由としては最高だった。
「徹底的な対処が必要だ」
「その通りです」
ハラーイブも演技を合わせる。
「だからこそ」
「オムダーマン全域において徹底的な調査及び隔離を命じる」
彼はまたしても言い切った。
「そうして対処に当たる。いいな」
「わかりました」
こうして話は終わった。それと共にアッディーンはブワイフに対して言うのだった。
「では閣下」
「うむ」
「今日のところはこれで」
別れの言葉だった。
「また御会いしましょう」

「忙しいところを済まなかったな」
ブライフもまた彼に対して労いの言葉で返した。
「そちらも大変だろうが」
「いえ、それは構いません」
しかしアッディーンはこう答えた。
「それにつきましては」
「いいというのだな」
「多忙なのは当然のこと」
彼はこのことをあるがまま受け止めそれでよしとしていた。
「ですから」
「そうか。ならいいが」
「それは誰もが同じでしょう」
そして彼はこうも言うのだった。
「今は」
「今は誰も同じか」
「戦争中です」
その事情そのものについて話すのだった。
「ならば誰もが多忙なのは当然です。私だけでなく閣下や首相も」
「その通りですね」
ハラーイブがアッディーンのその言葉に対して述べた。

## 第三十四部第二章　風の変化その十九

「今は確かに。我々は皆そうです」
「そういうことだ。だから取り立てて言われるとかえって気恥ずかしい」
微かに苦笑いさえ浮かべる。しかしその苦笑いは決して嫌味なものではない。
「ですから閣下」
「それはいいのだな」
「その通りです」
あらためてこのことをブワイフに対して話した。
「誰もが同じですので。ですから」
「わかった。それではだ」
「はい」
「言葉を訂正しよう」
そしてこう言って来た。
「これからも頼むぞ」
「わかりました」
アッディーンはこの言葉にはそのまま確かに頷いた。これで話は終わりだった。モニターが切られるとブライフはその真っ暗闇になってモニターをまだ見ていた。そうしてそのモニターを見たままでハラーイブ達に対して話すのだった。彼等もまだ残っていたのだ。
「どう思うか」
「副大統領のことですね」
「そうだ」
まずはハラーイブの言葉に対して頷いてみせた。
「彼のことだが」
「どう思われるかですね」
「首相はどう思うか」

ここで彼に対して問うのであった。
「彼については」
「ただ優秀な軍人であるというだけではありません」
これがハラーイブの意見だった。
「優秀な軍人であるというだけでなく」
「政治家としてはどうだ？」
「水準以上です」
まずはこう述べるハラーイブだった。
「いえ。むしろ」
「むしろ？」
「その政治能力は軍事的才能に匹敵します」
「政治家としても優れているというのだな」
「私はそう思います」
謙虚だが確かな声でブワイフに述べた。
「政治家としても優秀です」
「連合では政治家は政治家、軍人は軍人ですが」
今度はシカールが述べたのだった。
「我がサハラでは違いますから」
「軍人は決して軍人では留まらない」
ブワイフもまた言うのだった。
「軍人が政治家になることもある」
「はい、そうです」
「その通りです」
二人も彼のその言葉に頷くのだった。
「クーデターで政権に就くことが多いですね」
「それがまず第一の就任の理由です」
これがサハラなのだった。戦乱の世であり必然的に実力のある者が権力の座に就くことになる。その際クーデターもまた日常茶飯事なのだった。
「ですから軍人が政治家であっても」

「それは何の問題もありません」
「そういうことだ」
二人の言葉はそのままブワイフが今言いたいことであった。
「彼は軍人として天才的な才能がある」
「はい」
このことは誰もが認めることだった。
「それにより今のオムダーマンを作り上げた」
「数多くの勝利を我等にもたらしてくれました」
ハラーイブはこのことを強く覚えていた。忘れる筈のないことだった。
「軍人として」
「そして元帥になった」
「その通りです」
言うまでもなく大統領であるブワイフが任命したのである。元帥が軍の最高の階級であるのはオムダーマンにおいても同じなのである。

## 第三十四部第二章　風の変化その二十

「そしてそれだけではなく」
「功績があまりにも巨大だったからな」
ブワイフはこう述べた。
「だからだ」
「副大統領にされたのも」
「最初はただの名誉的なものになるかと思っていた」
実はそうだったのだ。オムダーマンは文民優位の国であり国防相も文民がなるものである。しかしあくまでこれは基本としてでありやはり非常時にはそれが変えられるのはサハラの国家だけはあった。そう、オムダーマンもまたサハラの国家なのである。それが重要であるのだ。
「しかしだ」
「予想以上でしたか」
「軍政の手腕がまず目に入った」
まずはそれであった。
「このハサンとの戦いの前に様々な軍政を行っていたが」
「はい」
「そのどれもが見事なものだった」
このことを今ここで二人に対して話すのだった。
「そしてそれにより戦争を続けている」
「そうですね」
「その的確な軍政の結果です」
「国防相」
ブワイフは今度はシカールに顔を向けて声をかけた。
「この軍政は殆ど副大統領が取り仕切ったものだな」
「はい、そうです」
シカールは素直にそのことに答えた。

「その通りです。その殆どは副大統領のものです」
「そうだったな。殆ど彼が立案し計画した」
「私は殆ど何も動きませんでした」
彼はここでも正直に述べた。
「その殆ど全てが副大統領のお考えでした」
「それにより今我がオムダーマンはハサンを攻めている」
「ただ戦争は戦場で行うものではない」
ハラーイブもまた言う。
「あの方はそれがよくわかっています」
「それは何故かというとだ」
「政治がわかっておられるからです」
やはりそれに尽きるのだった。
「そして経済もまた」
「わかっているな。あれだけ経済活動を自由化させそれにより物資の調達を容易にしている」
「それまで考えられるとは」
「先天的な政治センスがなければとても」
「政治の世界にも努力は必要だ」
ブワイフは言う。これはどの世界でも同じである。
「しかし先天的なセンスがあればそれが余計に役立ってくれる」
「そして副大統領にはそれがあると」
「最初はあるとは思わなかったが」
このことはここでも同じだった。
「だが。あるのならば」
「どうされますか？」
「考えていることがある」
ブワイフの顔が考えるものになった。
「彼は副大統領だ」
「はい」
二人は彼の今の言葉に頷いた。

「それでだ。私の後のナンバーツーだからだ」
「というとまさか」
「閣下、それでは」
「そうだ。禅譲もいいだろう」
そのままこの言葉を出してみせたのだった。
「禅譲もな。どうだ」
「禅譲ですか」
「つまり大統領職を譲られると」
「その通りだ。副大統領に譲るのはごく普通のことだ」
同じようなことはサハラだけでなく連合でもエウロパでもマウリアでも行われる。平和的な後継者への世代交代ということもあり評判のいい権力移動ではある。
「だからだ。どうだ？」
「今すぐにというのは」
「どうかと思いますが」
そういう限定付ではあった。

## 第三十四部第二章　風の変化その二十一

「ですが後継者にはいいと思います」
「私もです」
「君達もそう思うのだな」
ブワイフは二人の賛成の言葉を聞いてその目で彼等を見ながら述べた。
「そうか。それではだ」
「次期大統領としては最適です」
「あの方以外にはありません」
二人はまたブワイフに述べた。
「オムダーマンの今後を担えるのは」
「まさにあの方だけです」
「その通りだな。しかし今はまだ時期尚早か」
「戦争中ですので」
ハラーイブはその理由を述べた。
「ですからそれは」
「それが終わってからか」
「そして勝利を収めたならば」
話はらに限定されはした。
「その後で宜しいでしょう」
「戦勝と新たな大統領の就任が二つになります」
シカールも述べた。
「当然その直後に信任を問う選挙が必要になりますが」
「しかしそれはもうただの通過儀礼だな」
ブワイフはそれについては何でもないと言うのだった。
「戦争に勝利した最大の功労者にとってはな」
「はい。そしてオムダーマン最大の英雄にとっては」
ハラーイブの今の言葉は決して誇張ではなかった。今やアッディ

ーンはオムダーマンにおいて絶大、いや圧倒的なまでの人気を持っているのだ。それは北方におけるシャイターンのそれにも匹敵する。まさに両者はサハラを二分する英雄になっていたのだ。
「選挙なぞその程度でしかありません」
「だからそれは意に介さなくていい」
ブワイフはまたこう言った。
「選挙はな」
「それでは戦争の後で」
「彼がアスランに戻りすぐに伝えよう」
ブワイフはその時のことを思いながら述べた。
「その時にな。それでいいな」
「はい、それでは」
「その様に」
二人はまた彼の言葉に応えて頷くのだった。
「話を進めていきましょう」
「その準備も」
「戦争は終わってからが本当の戦争のはじまりだ」
ブワイフは今度は腕を組んで述べた。
「それからがな。政治の戦争だな」
「はじめる前も大変ですが」
「終わってからもですから」
「全くだ。いつもながら苦労させられる」
今の言葉には苦笑いが入っていた。
「ただ戦争に勝てばいいのではないのだからな」
「政治の手段でしかありませんので」
ハラーイブのこの言葉は生粋の政治家ならではの言葉だった。
「どうしてもそうなります」
「そうだ。それではだ」
「はい」
「まだどうなるかわからないが」

少なくとも今は戦闘中だ。それから先は断言できない。どれだけ勝っていようとも最後の一戦で敗れてはどうにもならない。それもまた戦争なのだから。
「用意はしておくとしよう」
「このことは閣下には」
シカールはアッディーンのことも話に出してきた。
「どうされますか？お伝えしますか？」
「いや、それには及ばない」
だがブワイフはそれはいいとしたのだった。
「今は我等三人だけの話にしておこう」
「我等だけのですか」
「今は」
「他言は無用だ」
そしてこうも話すのだった。
「このことはな。いいな」
「はい、それでは」
「そのように」
二人はまたブワイフの言葉に頷くのだった。そのうえでまた話す。

## 第三十四部第二章　風の変化その二十二

「我等三人だけの話ということで」
「そういうことにしておきましょう」
「下手なことを言えばそれが政治問題になる」
この辺りが実に難しいのだった。政治の世界において後継者問題が複雑な問題であるのはこの時代のサハラでも同じだ。結局王制であろうとも共和制であろうともこのことはどうしても離れられない問題であり続けている。世襲かそうでないかの違いしかないのだ。
「だからだ。今は」
「そのように」
「しておく。彼はそうした話で動揺したりはしないがな」
「基本的に野心は希薄な方です」
シカールがここでまたアッディーンについて語った。
「中佐から大佐、そして瞬く間に元帥にまでなられましたが」
「それでも野心はないか」
「権力志向やそういったものとは無縁です」
アッディーンの性格の特徴でもあった。彼はただ己の責務を果たしているだけで結果が後についているのである。それだけなのだ。
「それで今に至っていますが」
「面白いことだな」
ブワイフはアッディーンのその性格とこれまでの立身を考えながら述べた。
「野心がなくとも英雄になれる」
「はい」
「そして野心があろうとも英雄になれる」
「シャイターン主席のことですね」
「その通りだ」
ハラーイブの問いに対して返した言葉だ。

「彼の野心はかなりのものだ」
「はい、それは間違いありません」
「その為に名家の未亡人と婚姻を結びましたし」
彼が北方で権勢を握るに至ったはじまりのことである。ハルシーク家の未亡人との婚姻については彼等もよく知っているのだった。
「そして多くの政敵を葬っています」
「公にはされていないがな」
「こうした話は決して表には出ません」
こうした話が表に出るのは二流ということである。そういうことだった。
「しかし彼がティムールの主席になるまでに多くの北方の有力者が倒れています」
「どれだけ倒れたのかわからないまでな」
これは各国の上層部はおおよそだが察知していたのだ。その真相を。
「証拠もないが」
「灰色ではあります」
確かに灰色ではあった。
「しかしそれは灰色ではありますが」
「かなり黒に近い灰色です」
「そういうことだな」
ブワイフは二人の言葉に頷くのだった。
「灰色は灰色でもな」
「黒にしか思えません。どう見ても」
「急死ということにはなっていますが」
理由としてはよくある話だ。
「事故もありましたし突然病で」
「ハサンでもそうだった」
つまりハサンでもティムールでもそれだけ多くの人間が死んでいるのだ。シャイターンにとって邪魔になりそうな人間は全てだ。

「やはりあの主席はその野心はかなり強く」
「そしてその実現には手段を選びません」
「英雄ではあってもな」
ブワイフも彼が英雄であることは認めていた。しかし、であるのだ。
「だが。普通の英雄ではない」
「梟雄ですね」
ハラーイブは彼をこう評した。
「彼は」
「そうだ。彼は梟雄だ」
ブワイフも彼女の今の言葉に頷いたのだった。
「どちらかと言えばな」
「野心があり手段を選ばない英雄ですか」
「それもまた英雄だ」
ブワイフは今度はシカールに言葉を返した。

## 第三十四部第二章　風の変化その二十三

「英雄は一つではない」
「だからですか」
「さて、我等の英雄はだ」
話はアッディーンに関するものに戻った。
「無事に勝利を収めてくれるか」
「今その為に動いていますが」
「あのガワールにおいて」
「ガワールだな」
ブワイフはその名前にも反応を見せた。
「あの要塞にだな」
「既に五重の要塞のうちの三つです」
今言ったのはシカールだった。
「既に三つ陥落させています」
「ガワールは無欠だったがな」
ブワイフもそれは知っていた。そしてそれをあえてここで言ってみせる。
「そうだったな」
「はい。それはその通りです」
シカールはまた彼の言葉に頷いた。
「その無欠占領も相手の策略でしたが」
「策略だったのか」
「焦土戦略でした」
こう言うのだった。
「あの星系全体を空にしておき」
「ふむ。そこに入ったところでさらに進めば」
「そうです」
シカールはブワイフの今の言葉にも頷いた。

「補給に支障をきたします」
「何もなければな。当然だな」
「その通りです。そしてそこで補給がなくなり弱った我が軍を」
「撃つ」
ブワイフの今度の言葉は一言であった。
「そういうことだな」
「その通りです。彼等はそれを狙っていました」
「しかし彼は動かなかった」
この場合の彼とは当然ながらアッディーンのことである。
「そしてそのガワールを基地にしてか」
「そうです。そうして基地を補給基地にしてです」
シカールはまたブワイフに述べた。
「そうして今から攻めようとしています」
「この辺りが見事と言えるな」
ブワイフはここまで話を聞いて言うのだった。
「この辺りがな」
「この辺りとは？」
「彼は攻める時は果敢に攻める」
「はい」
アッディーンの攻撃の迅速なことはよく知られている。それによりこれまで数多くの勝利を挙げてきているからだ。疾風とまで言われている。
「だが慎重な時は慎重だな」
「その通りです。閣下の攻めにはいつも条件があります」
「条件？」
「そうです。その条件がなければ動かれないのです」
こうブワイフに語るのだった。
「それがあるからこそです」
「ではその条件は何か」
「それが補給です」

また彼に述べた。
「それがあれば攻めますがそれがなければ」
「攻めないのか」
「そうです。決して攻めません」
言葉を続ける。
「それが今です」
「案外言われないことだな」
ブワイフは彼のここまでの話を聞いて言うのだった。
「彼に関しての事柄のうちで」
「どうしてもその素早い用兵に話がいきます」
シカールもその評判は熟知していた。
「そして奇襲にも」
「あれは補給を軽視しているのではないのか？」
ブワイフはアッディーンの奇襲についても問うた。

## 第三十四部第二章　風の変化その二十四

「今回のハサン侵攻の最初もそうだたな」
「あのアステロイド帯突破ですか」
「そう、それだ」
主力を国境に配しそれで敵の目をそちらに集中させ自身はアステロイド帯を突破しそのうえで後方から奇襲する。アッディーンはこれにより緒戦を制したのである。ブワイフが言っているのはこの緒戦のことである。
「あれは補給軽視ではないのか」
「それも違うのです」
シカールはすぐに彼に答えた。
「それもまた」
「違うのか」
「アステロイド帯突破の際その行く先に敵の後方基地がありました」
「基地？そこを攻めたのか」
「そのうえで補給を確かなものにしました」
つまり的の基地を奪いそれを己の基地としたのである。話だけを聞けば戦争においては常のことであり驚くに値しないものである。
「ですから」
「補給を軽視したわけではないか」
「アステロイド帯を突破できるのは確実と見抜いておられました」
そもそもこのこと自体が他の者には気付かなかったことであった。
「そしてその向こう側にある基地の護りが薄いことも」
「つまり確実に成功する奇襲だったか」
「彼の中ではそうでした」８４
こう言うのだった。
「だからこそ」
「補給を軽視していなかった」

「そういうことです」
頷きつつ述べた。
「ですから」
「まずは補給か」
ブワイフは腕を組んだうえで述べた。
「そして攻めるか」
「そうです。まずは補給です」
「それが彼の戦いか」
「その通りです。これは常にです」
「補給があること何でもできる」
ブワイフは呟くようにして述べた。
「そういうことか」
「おわかりになられましたか」
「私は軍については専門外だ」
ブワイフは己のことも言った。実は彼は徴兵の経験もない。軍に籍を置いたことは一度もなく従ってそれへの知識も乏しいものであるのだ。
「だから。よくは知らないが」
「はい」
「補給の重要性は知っているつもりだ」
それはわかっているというのである。
「それに鑑みてみればだ」
「如何でしょうか」
「常道か」
こう言うのだった。
「彼の戦いは常道か」
「はい、まさにそうです」
シカールも同じ意見であった。
「ですから。奇襲であってもそれは常道を逸したものではありません」

「常識を踏まえたものなのだな」
「その通りです。ですから」
「彼は軽率ではない」
アッディーンのことを見ての言葉だった。
「決してな」
「あくまで慎重です」
「だから今は進まないか」
「動かれるのは時が来てからです」
「では今回も彼に任せよう」
ブワイフは決断も下したのだった。
「今回もな」
「今回もですか」
「実はだ。最近国民がだ」
「はい、そうですね」
「それは」
シカールだけでなくハラーイブも話に加わってきた。どうやら彼女も知っている事情であるらしい。

## 第三十四部第二章　風の変化その二十五

「国民は閣下が進撃されないのを不満に思っています」
「何故今進撃を停止されているか」
「それを疑問に思われ」
「不満なのです」
「その通りだ。それがまた問題だ」
ブワイフはこのことを言うのだった。
「それをどうするかだが」
「はい」
「今決まった」
はっきりと述べたのだった。
「彼に任せる」
「それもですか」
「中国の古典だったか」
ブワイフはふとその古典の言葉を思い出したのだった。
「君命といえど従えずだったな」
「孫子ですね」
「そう、孫子だったな」
ハラーイブの言葉にも応えて頷く。
「確かな」
「それは戦争の指揮においての言葉でしたね」
「そうだ。それだけ戦争の指揮とは重要なものだ」
ブワイフは確かに軍の経験はないがそれでもこうしたことはわきまえているのだった。
「下手に介入してはならない」
「そしてこの場合の君とは」
「国民だ」
こうなるのだった。つまり君とか国家の主権者という意味である。

主権者が君主ならばその命令となるし国民ならその声となるのである。ここで重要なのは軍事だけでなくあらゆる場合にも主権者の意見が常に正しいとは限らないということである。この時代でもそれは同じだ。
「国民の声といえどだ」
「ここは副大統領にお任せするのですね」
「現場にな」
現場とも言うのだった。
「任せることにした」
「わかりました。それでは」
「今はそうするのが一番だ」
ブワイフの決断にはこうした考えも含まれていた。
「我々も国民も今は軍には介入しない」
「若し介入すれば」
「その時は敗れる」
一言であった。
「確実にな」
「確実にですか」
「あらゆる戦争がそうだった」
ブワイフは遥かな過去にも考えをやっていた。
「例えばその中国の話だが」
「はい」
「長平の戦いだ」
「ああ、あれですね」
シカールはその地名を聞いただけで全てがわかった。
「あの四十万の兵が生き埋めにされたという」
「それだ。あれも王が将を替えての失敗だった」
「確かに」
この戦いは秦と趙の決戦でありひいては戦国時代の趨勢を決した戦いでもあった。この戦いにおいて趙王は秦の謀略に乗りその時現

場で指揮を執っていた歴戦の名将を退けその代わりに弁舌や駒の動かしは得意だが実戦を知らない若い将を送った。すると趙軍は秦の策略に乗り迂闊に進撃しそのうえで補給路を絶たれ降伏することになった。その結果四十万の兵が生き埋めにされたのだ。実際は四万程度だと言われているが大損害なのは事実だ。

「それもあれば」

「他にもありました」

「ベトナムでもそうだったな」

ベトナム戦争ではアメリカ軍に対して文民である大統領や国防長官が前線の指揮や兵器の運用にまで口を出した。その結果アメリカの敗北につながったのだ。

「素人が介入すればよくない」

「その通りです」

「もっともコントロールしなくてもならないがな」

「その辺りの匙加減が重要ですね」

「それができなければ問題外だ」

ブワイフは言い切った。

## 第三十四部第二章　風の変化その二十六

「確かに困難ではあるがな」
「そういえば我々の間でもこうした問題は常に起こっています」
「主権者の無知に基く介入や指揮も然り」
ブワイフはまた言う。
「そして軍の暴走もな」
「どちらも同じだけ問題であります」
「指示されていない行動を行う軍も問題だが過剰な介入も問題だ」
そういうことであった。
「最悪なのはがんじがらめになって動かない軍だな」
「中央軍設立前の連合の各国の軍にはそういう傾向が見受けられました」
シカールが言った。
「あの当時の各国軍には」
「それぞれの国境を出てはならなかったな」
「はい」
まずこれが大きかった。これは各国間の紛争や衝突を避ける為だ。そして他国の軍への攻撃も禁じられそれが行われた場合はその所属の国家への厳罰まで定められていたのだ。
「そしてそれぞれの政府の統制があまりにも大きく」
「かえって宇宙海賊やテロリストへの対処も鈍いものになっていました」
「そういうこともあり中央軍が設立された」
「そういうことです」
こういう流れでもあったのだ。連合軍は宇宙海賊やテロリストへの迅速な対応を目的として各国の軍を統合し設立された軍なのである。
「そしてその連合軍ですが」

「中央の統制が強いようだな」
ブワイフは既に彼等のことも看破していた。
「どうやらな」
「ですが軍人の意見は議会が聞きそれにより政府をチェックしていますので」
「動きはかなりよくなっています」
「それにあの長官だ」
当然ながら八条のこともわかっているのだった。
「彼がいるからな」
「あの長官の存在はやはり大きいかと」
「間違いなく稀代の戦略家です」
ハラーイブもシカールもやはりそのことは認識していた。
「それに」
「美男子でもあるな」
「連合にあれだけの美男子がいるとは思いませんでした」
ハラーイブは珍しく女性らしい一面を述べるのだった。
「アジア系独特の美貌でしょうか」
「連合ではもうああした顔立ちは珍しいそうで」
シカールは彼のその整った顔を思い出しながら述べた。
「どうやら」
「そうらしいな。純粋なアジア系そのものが極めて少なくなっている」
「はい」
「混血の結果な」
やはりそれが理由だった。連合はアジア系だけでなくアフリカ系やヨーロッパ系、それにアボリジニー等様々な人種が存在している。彼等の混血がかなり進んでいるのだ。
「その中であれだけの純粋なアジア系の顔立ちは」
「まずいません」
「だからこそ際立ちます」

「オムダーマンの独身女性の間でも彼の顔立ちは評判だ」
それだけ八条の名前も有名でありその美貌も知られているということである。
「しかも若くしてあれだけの地位にあり能力もあり名門の家で資産もあるならば」
「人気がない筈がありません」
「しかも温厚で心優しく腹の中も奇麗であります」
こうしたことでも有名なのだ。八条は正統派の政治家であり策略の類を使わない。もっと言えばそうしたことを使わなくてもよい立場で生きているのだ。
「ですからそうしたこともあいまって」
「人気だな」
「その通りです」
そうしたあらゆる面で人気があるのが彼なのである。
「ですがだからこそ」
「独身なのが気になるか」
「はい。何故でしょうか」
実際に首を捻ってさえ見せるハラーイブだった。
「あれだけのものが備わっていて。女性に人気もあるというのに」
「今までそうした相手がいないと聞いております」
ここでシカールが述べた。
「そして」
「同性愛、ですか」
「その噂もあります」
ハラーイブの顔が同性愛というところで歪んだ。サハラにおいてはあまり同性愛は好まれていない傾向が存在している。連合のイスラエル程ではないにしろだ。
「連合、とりわけ彼の地元では普通ですので」
「それは知っています」
連合では同性愛がごく普通なのはここにいる三人もよく知ってい

た。
「ですがそれでも」
「あまりいい印象は抱けませんか」
「はい」
やはりこれは宗教的戒律もあり受け入れられないのだった。
「どうしても。しかし噂ですので」
「はっきりとはしません」
「それは今は考えないようにします」
「わかりました」
最後にはこうした話になっていた。何はともあれオムダーマン政府としてもこの戦争における行動を決定したのであった。戦いは彼等の中でも行われているのだった。

## 第三十四部第三章　仲介は聞かれずその一

仲介は聞かれず

ハサン政府にもアヤグーズの話は伝わっていた。その首都の戦いのこともだ。

当然ながらハサン政府としては看過できる事態ではなかった。国の実際の指導者である太子はすぐに主だった閣僚や将官達を集め会議を開いた。

会議は宮廷の大会議室であった。そこで会議を開きすぐに閣僚や将官達が入室した。しかしどの顔も極めて沈痛なものであった。

「大変なことになりましたな」

「全くです」6

まず最初の言葉がこれであった。

「まさかアヤグーズが敗れるとは」

「今度こそはと思いましたのに」

「滅亡は確実ですな」

言葉はさらに沈痛なものになっていく。

「せめてブルコルジ女王の助命だけでもできればですが」

「どうなるでしょうか」

「それですな」

まずは太子を前にしてそれぞれ話す形となっている。太子は主催の席でまだ沈黙を保っている。それはまるで己の出番を待っているかのようだった。

「まずはティムール軍ですが」

「降伏勧告を出していますな」

「はい」

当然ながらこの場合はアヤグーズ軍に対しての降伏勧告である。

「その通りです。ではやはりここは」

「それに乗りますか」

彼等とて敵のそうした勧告を受け入れることは耐え難いことである。しかし今はそうしたことを言える状況ですらなかったのである。
「ブルコルジ女王が例え敵の捕虜になろうとも」
「死なせるわけにはいきません」
「その通りです」
彼等はまた口々に言い合うのだった。
「ですからここはすぐにアヤグーズ軍に言いましょう」
「そうですな。降伏勧告を受け入れるよう」
「虎は失ってはなりません」
ここでも虎と言われるブルコルジであった。
「では。今すぐにでも」
「その様に言いましょう」
「それでは」
「無駄なことだ」
だがここで太子が口を開いたのだった。その時が来たということであろうか。
「それはな。無駄なことだ」
「無駄なことですか」
「それはもう言い伝えていた」
彼はこう閣僚や将官達に話す。
「だが。それでも彼女はだ」
「聞き入れられませんでしたか」
「それでは」
「そうだ。誇りのまま最後まで戦うとな」
こう彼等に話すのだった。
「言っている。だからだ」
「そうですか。それではやはり」
「女王はこのまま」
「しかしだ」
だがここで。太子はまた言って来たのであった。

「一つ思わぬ場所から話が来た」
「話！？」
彼の言葉に誰もが目を止めた。そうしてその目を太子に集中させそのうえで彼に対して問うのであった。一瞬であるがそこに含まれるものは多くのものがある動きであった。
「話とは一体」
「それは」
「連合からだが」
太子はまずは国名を出してきた。
「仲介の話を持って来た」
「連合が？というと」
「亡命ですか」
「そうだ。ブルウコルジ女王の亡命だ」
彼もまたそうだと言うのであった。
「あの女王をな。連合に亡命させてはどうかとな」
「ふむ。といいますと」
この話を聞いた閣僚達も将官達も考える顔になった。今度はそれぞれ前を向いてそのうえで考える顔になる。そのうえでのことであった。
「女王を連合に入れそのうえで」
「いつものようにですかな」
ここでいつものように、という言葉が出された。

## 第三十四部第三章　仲介は聞かれずその二

「難民達の指導的な象徴にするか若しくは」
「文化人かタレントにでもするかでしょうか」
「あながちそうしたところだろうな」
太子にしろここはこう考えているのだった。彼といえば八条が彼女を軍人として迎え入れようと考えているとは夢にも思わなかったのである。
「連合だからな」
「随分と気楽なことです」
「全くです」
それを聞いた会議の参加者達の言葉はまずは皮肉を込めたものであった。その皮肉はあくまでシニカルでありそのうえ連合への羨望も混ざっていた。
「何かあればそうして亡命を提案すればいいのですから」
「戦争が嫌いだと言いながら」
その皮肉はさらに言葉に込められていく。
「そうして人材を受け入れればそれでいいのですから」
「例え口だけであっても何もリスクはない」
部外者としての特権ではある。
「そうですからな」
「全くです」
「それはその通りだ」
太子のこのことは認める。
「しかしだ」
「しかし？」
「何かありますか？」
「女王は助かる」
彼はこのことは強調して言うのだった。

「間違いなくな。これで助かる」
「はい、それは確かに」
「その通りです」
これについて懐疑の参加者で異論がある者はいなかった。このことだけは事実であった。
「成功すればだがな」
「女王は失うにはあまりにも惜しい人材です」
「それが例え捕虜になろうとも」
「その通りだ。だからこそ受け入れて欲しいのだがな」
太子の言葉もまた沈痛なものを帯びてきていた。
「それを考えれば今回の連合の仲裁の提案はだ」
「有り難いことですか」
「私はそう思う」
彼もこのことを否定しなかったのだった。
「我々やティムールの提案を受け入れなくともだ」
「はい」
「だが。彼等ならばだ」
「若しかするとですね」
「受け入れるかもと」
「確かに実現の可能性は少ない」
太子にしろそれはわかっているのだった。
「だが。若しかするとだ」
「だからですね」
「ここは僅かな可能性にかけて」
「何もしなければその可能性は皆無なままだ」
「それは確かに」
「何事もですね」
「そうだ」
太子は閣僚や将官達の言葉に対してまた頷いた。
「しかしだ。何かをすればそれだけで可能性が生じる」

「その通りです」
「まずは何かをする」
結局のところこれは政治の世界にも言えることであった。とにかく何かをしてみないと何にもならないのだ。人は動いてこそなのである。
「それからだ」
「それでは殿下」
「ここは」
「連合の提案を受け入れる」
宗主国としての決定であった。
「それでいいな」
「はい、それではそのように」
「しましょう」
これでおおよその方針は決定したのであった。しかし話はそれで終わりではないのであった。
「ですが殿下。それはいいのですが」
「戦いの流れはこれで」
「わかっている」
太子は表情こそ変えてはいなかったがそれでも不機嫌な言葉を出すのであった。

## 第三十四部第三章　仲介は聞かれずその三

「アヤグーズの崩壊とその領域が奪われたことで西部戦線の主導権はティムールに傾く」
「はい、その通りです」
「それです」
ブルコルジの話の次にそのことであった。
「やはりこの敗北は大きいです」
「戦局が彼等に傾きます」
「これが一つの戦線であればな」
太子はここでこう言った。
「何とでもなるのだが」６
「相手は彼等だけではありません」
「オムダーマン軍もいます」
当然ながら彼等のことも考えに入れられて話されるのだった。
「彼等は今五重の防衛ラインを突破しようとしています」
「残るは二つです」
「南部戦線はダビデブ元帥に任せてある」
彼が出したのはダビデブのことだった。
「彼ならばそうは下手なことにはならないが」
「前線していると言えるのですか？」
閣僚の一人が怪訝な顔で今の太子の言葉に問うた。
「ダビデブ元帥は」
「そうは思えないのか」
「正直に申し上げて宜しいでしょうか」
この閣僚はまずはこう前置きしてきた。
「このことにつきまして」
「いい」
太子も彼の言葉を受けて応える。

「それなら話してみてくれ。率直にな」
「それではです」
太子から許しの言葉を受けたうえで彼はようやく己の自分自身の率直な意見を口にした。それはダビデブにとっては決していいものではなかった。
「南部戦線でも敗戦が続いています」
「その通りだな」
「それを見ますと」
閣僚の言葉はさらに曇る。
「善戦しているとは。とても」
「そういえば南部戦線も」
「確かに」
彼の言葉を受けて他の閣僚達も次々に言い出した。
「兵力では我々が勝っています」
「ところがそれは」
「それは事実だ」
太子は彼等の言葉を受けたうえでこう言うのだった。
「確かに我が軍は南部戦線でも敗北が続いている」
「はい」
「その通りです」
「兵力でも勝っている」
「しかも地の利もあります」
このことも言われるのだった。
「そうしたこともありながらあれだけ敗北が続いているとは」
「如何なものでしょうか」
「それは一つの戦線であればだが」
「一つの戦線であれば？」
「それは一体」
どういう意味なのかと太子に対して問うのだった。ただしここで彼に問うているのは閣僚達だけであり将官達はここでは沈黙を守っ

ていた。
「どういうことなのでしょうか」
「今我々は一つの戦線だけ持っているのではない」
この前提が話される。
「西部と南部がある」
「その南部ですか」
「全ての戦力を一つの戦線に投入することはできない」
今現在ハサンが置かれている泣き所である。
「そしてだ」
「そして！？」
「まだあるのですか」
「敵将だ」
太子が次に言及したのは敵のことについてだった。

## 第三十四部第三章　仲介は聞かれずその四

「南部戦線の相手はオムダーマン軍」
「はい、彼等です」
「その彼等の将といえば」
「アッディーン副大統領」
やはり彼の名が出されるのだった。最早彼はオムダーマン軍、ひいてはオムダーマン共和国そのものの象徴とも言っていい存在になっていた。
「彼だが」
「今まで敗北すらしたことのない常勝の若き名将」
「彼のことですか」
「そう、その彼だ」
太子もまた彼について言及するのだった。
「彼のことだ」
「あのアッディーン副大統領の軍略はまさに天才です」
「だからこそですか」
「そうだ。勝利を収めるどころか持ちこたえることすら容易な相手ではない」
太子はアッディーンを決して見くびっても甘く見てもいはしなかった。それどころか高い評価さえ与えていた。それだけ彼がわかっているということなのである。
「だからだ。彼に対してはだ」
「今の状況で上手く戦っているというのですね」
「私はそう見ている」
こう閣僚達に述べるのだった。
「ダビデブ元帥も南部戦線の我が軍もな」
「そうなりますか」
「健闘してくれている。少なくとも戦線はまだ崩壊してはいない」

そうならないように五重のラインを敷いているということにこそそれがあった。これこそがダビデブが考えたその防衛構想なのである。
「それが見事だ」
「そうなのですか」
「持ちこたえているからこそ」
「我が軍は勝利を収める必要はない」
太子はここでもうも言った。
「負けなければいいのだ」
「負けなければ、ですか」
「これは南部でもそうだし西部でもそうだ」
二つの戦線においてこれは同じなのだというのだ。
「勝利を収める必要はない。敗れなければそれでいい」
「では南部は」
「戦線が崩壊せずこのままですか」
「まず西部でティムール軍を退けそのうえでその戦力を南部に回す」
これはハサン軍が考えていたこの度の戦争での戦略である。
「だからだ。ここはだ」
「南部は今のままでいいのですね」
「とりあえずは」
「その通りだ。ダビデブ元帥はこのことがわかっている」
だからいいというのであった。ダビデブを信頼しているというのがわかる言葉でもあった。
「あのアッディーン副大統領を破ろうと思えば」
「何が必要なのですか？」
「下手な戦略、戦術で彼を破ることは無理だ」
太子はこう看破したのだった。
「そして下手な戦力でも無理だ」
「戦力でもですか」
「二倍や三倍程度では無理だ」

そこまで優れていると評価している言葉であった。
「そう。通常の兵器でもな」
「通常の兵器でもですか」
「彼の持つ戦力を圧倒する数と兵器が必要だ」
彼は言う。
「どちらか。若しくは両方がなければならない」
「ではやはり今の南部戦線の戦力では無理なのですね」
「少なくとも西部に向けている戦力も必要だ」
だからだというのであった。
「西部のな」
「では殿下、ここはやはり」
「ティムール軍を退けて」
「確かに劣勢に立たされることにはなった」
このことは認識せざるを得ない現実であった。
「我々はな」
「残念なことですがその通りです」
「我々は。今は」
「しかしだ」
だがここでまた言う太子だった。

## 第三十四部第三章　仲介は聞かれずその五

「だからといって戦いを放棄することは許されない」
「はい、そうです」
「それは」
将官達だけでなく閣僚達も述べる。このことについては誰も異論がなかった。
「戦うからには勝たなければならない」
「そう、その通りです」
「戦うからには」
彼等もそれぞれ言うのだった。
「勝たなければなりません」
「何としても」
こう太子に対して述べるのであった。
「ですが殿下。アヤグーズでの敗北の結果」
「今の我々は」
「劣勢になっているのはわかっている」
それはもう把握してのことであった。既にこの場でも何度も話されていることである。それでわからない筈がなかった。人並の知能さえ備わっていれば。
「既に動員もかけている」
「これ以上の予備役の動員はできません」
将官の一人がまた述べた。
「これ以上の動員は最早不可能です」
「人も兵器もありません」
「先の総動員で既に予備戦力は全て出している」
太子自身が命じたことであるからよくわかっていた。
「全てな。今ある戦力だけで戦うしかない」
「いえ、殿下」

「傭兵を使いましょう」
将官達はここで彼に言ってきた。
「彼等を雇いそのうえで戦場に送りましょう」
「これはどうでしょうか」
「傭兵か」
傭兵と聞いた太子の目がまず動いた。
「彼等を使えとうのか」
「はい、そうです」
「これならばかなりの戦力が集まります」
彼等は口々にこう主張するのだった。
「サハラにはまだ多くの傭兵がいますので」
「彼等を雇いそのうえで戦力としましょう」
「いや、それはどうか」
「傭兵を使うというのは」
将官達のこの主張に対して反対の言葉を述べたのは閣僚達であった。丁度武官と文官が対立する形となった。丁度左右に分かれていた為に対比する形になっていた。
「傭兵は信用できません」
「報酬次第でどうとでも動きます」
これは古来から変わらない。傭兵というものは金により動きそうして簡単に願えるものだ。このことはかつての欧州でも今のサハラでも同じだ。
「しかも報酬と称して略奪を行うことも多いですぞ」
「我々の領土であっても」
何故かというと彼等の国ではないからだ。傭兵と市民兵の違いはここにある。彼等は祖国への忠誠心といったものとは全く無縁の存在なのだ。
「そうした者達を使うとなると」
「我が国の損失も覚悟しなければなりませんぞ」
「いや、それでもです」

「今は戦力がありません」
将官達は政治的見地から傭兵の必要性を主張するのだった。
「ですからここは彼等を雇いましょう」
「何があっても」
「しかし。それでは我が国の安全が脅かされる」
「傭兵は侵略する敵国以上に厄介な存在だ」
閣僚達はとかく傭兵というものに反発を示す。
「それに我がハサンは今まで傭兵を使ったことがない」
「そう、一度も」
これがハサン王国の軍事の特徴であるのだ。彼等はあくまで自国出身者の将兵から軍を形成していたのである。近代国家の国民兵というわけである。こうした意味ではオムダーマン軍と同じである。サハラの軍の主流ではあり彼等もその中にいるのである。
「それをするというのはどうかと思いますが」
「我が国の伝統を崩すというのは」
「伝統にこだわっている場合ではありませんぞ」
「その通りです」
また将官達が閣僚達の意見に反対する。
「さもなければ敗れます」
「敗北は即ち滅亡です」
今ハサンはそうした状況なのであった。これはもう誰もがわかっていることだった。
「ですからここは」
「傭兵を是非」
「しかし傭兵を使えばそれは」
「略奪や破壊の元となる。それは駄目だ」
「だがそれでも今は」
「そんなことを言っている状況では」
双方の意見は完全に対立してしまい最早彼等の間だけでの調停は不可能であった。となれば残された話をまとめられる者は一人しか

いなかった。そう、彼であった。

## 第三十四部第三章　仲介は聞かれずその六

「傭兵か」
「はい、そうです」
「傭兵です」
彼等は今の太子の言葉に一斉に応えた。そのうえで彼に顔を向けるのだった。
「傭兵ですが」
「どうされますか？」
こう問うてからそのうえで口々にその考えを述べるのだった。
「今は戦力が少しでも必要です。ですから」
「傭兵はなりません」
「さもなければ敗北します」
「略奪や破壊を許しては何にもなりません」
まさに武官と文官の対立であった。それの修復は確かに彼でなくては不可能であった。そして彼は今そのことに対して動いたのであった。
「それではだ」
「はい」
「どうされるのですか？」
「まず。傭兵は雇おう」
「なっ！？」
「それは」
武官達は笑顔になり文官達は驚愕の顔になった。
「できるだけな。ただしだ」
「ただし？」
「何かあるのですか？」
「その傭兵達は全員ハサン軍に編入する」
「ハサン軍にですか」

「そう。我が軍にだ」
こう述べるのであった。
「編入し正規軍とする」
「それでは彼等の軍規軍律は」
「そうだ。我が軍のものとする」
まずはこう述べるのだった。
「我が軍のな。そうする」
「それではその規律により彼等の略奪や暴行を許すのですか」
「成程、そうなれば問題はありませんね」
文官達はこれでまずは納得した。傭兵の問題である蛮行を防ぐにはまずは規律であった。それをどうするかを太子は政治的な手段で結論を下したのである。
「それにより」
「はい、そうです」
「それは」
閣僚達はそれぞれ太子の言葉に頷いた。
「我々としましてはそれでもう」
「略奪や暴行さえなければ」
「そのうえでだ」
だが太子の言葉はまだ続く。彼はさらに考えを述べるのだった。
「彼等の報酬だが」
「報酬ですか」
「彼等の」
「傭兵は金で動くものだ」
言わずもがなのことであるがここでまたあえてこのことを言ってみせた太子であった。
「そしてその報酬だが弾むのだ」
「弾むのですか」
「金さえ与えておけば裏切ることはない」
彼はこうも言う。

「それも多額のな」
「それで彼等をつなぎ止めるのですね」
「その報酬により」
「その通りだ。それだけのものはある」
彼はハサンの財政を踏まえて述べた。
「資金はな。それを出す」
「我が国の財政からですね」
「傭兵を雇うことは敗戦に比べれば遥かに安い」
これはその通りだった。敗北で失うものは大きいが傭兵を雇うことにより失うものは報酬だけである。どちらが安いといえば一目瞭然だった。
「それでは。そのように」
「致しましょう」
「雇えるだけの傭兵を雇う」
太子の判断は徹底していた。
「雇えるだけな。いいな」
「はい。それでは」
「今すぐに」
将官達はすぐに太子の言葉に頷いた。

## 第三十四部第三章　仲介は聞かれずその七

「そうしましょう。戦いに勝つ為に」
「それにより戦力を」
「二十世紀と今は違う」
太子はその国民国家が形成された時を述べた。
「あの時は誰であろうが銃を持たせればそれで兵士になれた」
「それで実際に多くの兵を集めることができました」
「当時は」
「第一次世界大戦や第二次世界大戦の頃でしたな」
最早遥かな過去の話である。
「あの時はそれこそ銃を持たせればそれで終わりでした」
「中学生を戦場に送る国もありましたな」
「はい、そういえば」
ナチス＝ドイツやソ連のことである。彼等はそのようにして人材を戦場に送ったのだ。とにかく兵士の数だけを調達したのである。これはかなり極端な例ではある。
「しかし今はそれはとても」
「素人を艦艇に乗せても何の意味もありません」
「全くです」
そういうことであった。戦争が高度に技術化してしまっているのだ。それでただ銃を持たせて戦場に送っても何の意味もなくなってしまっているのだ。
「ですからそういう時代ではありませんので」
「徴兵といってもです」
ハサンも徴兵制を採用してはいるのだ。
「実際には厳密な選抜徴兵制ですし」
「軍はまず質です」
「そして数です」

そういう時代になっているのである。
「ですから。今はこれ以上の数を集めようと思えば」
「傭兵しかありません」
「その通りだ」
とにかくそうするしかないのだった。今は。
「連合軍の様な同盟勢力があれば違うでしょうが」
「確かに」
その強大な連合軍の存在も話に出された。少なくとも連合軍は数はあった。それこそオムダーマン軍もティムール軍も何も使わずとも押し潰せるだけの戦力が。
「もっともそうしたふうに援軍を頼めば後が高くつきますが」
「最悪我等が併合されるでしょう」
外交には見返りが基本である。その見返りの中には併合といったものもある。これはサハラにおいても数多く行われてきたことでありハサンにしろそれで勢力圏を拡大させたこともある。だからこそそうした場合の見返りもまた予測がついたことなのである。そういうことだった。
「ですから。そういったことは」
「例え連合が申し出てきてもです」
「連合はそもそもサハラには不干渉だがな」
太子はここでまた口を開いて述べたのだった。
「サハラで何が起ころうともな」
「はい、確かに」
「彼等にとってみればサハラは異世界です」
「彼等の世界ではありません」
このことはサハラ側も認識しているのだった。
「ですから。彼等からの援軍はないでしょう」
「我等がどうなろうとも」
「そうだ。それは絶対にない」
太子は断言させてみせたのだった。

「絶対にな。それは有り得ない」
「はい、私もそう思います」
「私もです」
閣僚達も将官達もそれぞれ言った。
「ですから。今我々の戦力だけで戦いましょう」
「それが一番ですしそれしかありません」
「その通りだ。それならばだ」
太子はここでまた言った。
「やはり傭兵を集める」
「わかりました」
「そして正規軍に編入しその規律は徹底させる」
このことも付け加えることを忘れなかった。
「報酬も弾む」
「それも忘れずに。ですね」
「傭兵に蛮行を起こさせない為にはまずこれだ」
傭兵は報酬で動く。だからである。
「そして寝返りを防ぐのもこれだ」
「それは何とかなります」
閣僚の一人が述べてきた。老人である。彼はハサン財務相であった。
「今我々の財政は苦しくなっていますが。それでもその程度は」
「やはり財政は苦しいか」
「はい」
財務相は苦い顔で太子の言葉に頷いた。
「それは否定できません。何故なら」
「戦争によってだな」
「その通りです。まず戦費の出費がありまして」
「うむ」
「産業も停滞しその形が歪なものになっています。ですから」
「財政が苦しくなっている」

こうなるのは当然のことであった。これは何時の時代もどの国でも同じことである。とりわけ自国が戦場になるならばであった。戦争で儲かるということなぞ有り得ないのだ。

## 第三十四部第三章　仲介は聞かれずその八

「そうだな」
「残念ながら」
実際に苦い声で彼の言葉に応えるのだった。
「今このままの状況が続きますと」
「わかっている」
ここから先は最早言うまでもなかった。
「財政は破綻するな」
「例え勝ったとしてもです」
その場合についても述べられるのだった。
「数年は逼迫した財政状況が続きます」
「そうだな」
ハサンを実際に動かしている者として痛いまでにわかることだった。
「どうしてもな。それはな」
「はい。ですがそれでもです」
「傭兵を雇う金は出せるか」
「今ならまだこのままで工面できます」
また言う財務相だった。
「何も特別に徴収しなくとも」
「特別徴収は止めておきたいものだ」
太子はそれについては否定的であった。
「できる限りな」
「それは好ましくありません」
「確かに」
他の閣僚達もこれについては同じ意見であった。将官達は黙っている。政治のことは彼等にとっては専門外だからだ。ハサンも文官と武官の区別がかなり徹底しているのだ。

「それは臣民の支持を下げます」
「ですから」
「今は国が一丸とならなければならない」
また言う太子であった。
「だからだ。そうした支持を下げるような行動は避けたいのだ」
「はい、その通りです」
「ですから」
閣僚達もその太子の言葉に応えて言う。
「ここはここで終わらせて」
「そのうえで戦いましょう」
「そうだ。ではハサンにいる限りの傭兵を集める」
やるからには徹底的ということであった。
「いいな。それでな」
「わかりました」
「それではそのように」
将官達は今度はすぐに応えたのだった。
「募集をかけます」
「そういうことで」
「これでまずはよし」
太子は話が終わったと見えて言った。
「これでな。では会議はこれで終わる」
「今回はこれでですか」
「そうだ。御苦労だった」
今度は参加者に労いの言葉をかけた。
「これでな。以上だ」
「はっ、それでは」
「有り難うございました」
武官は敬礼で、文官は頭を垂れてそれぞれ彼に挨拶をした。まずは太子が退席しそのうえで他の者達が退席する。こうして会議は終わり太子は今度はテレビ中継を受けることになった。臣民に向けて

の演説であった。
「今私は誓おう」
力強い声をあえて出して言うのだった。
「ハサンの勝利と栄光を。ここに誓う」
こうした演説であった。こうした演説も彼にとっては重要な仕事であった。それを終わらせてから己の執務室に戻る。そうして今度はデスクワークに入ろうとするがここで東宮府、即ち彼の直属の部署の若い官僚がすぐに部屋に入って来て彼に対して言うのであった。
「殿下、連合からです」
「何の用件でだ？」
「アヤグーズの件で」
「ほう」
これを聞いてまずは心の中で来たか、と思ったが口には出さなかった。あえて感情は出さずにこう言うだけであった。
「連合からか」
「はい。アヤグーズ女王の亡命を受け入れたいと言ってきております」
「亡命か」
「連合にです」
「連合の提案だからな」
それはわかるという口調だった。
「それも当然だな」
「はい、それは確かに」
これは報告するスタッフにもわかることであった。だが彼がわかるのはそれまでであった。それは太子に対して怪訝な顔を見せたことからもわかった。

## 第三十四部第三章　仲介は聞かれずその九

「それは」
「だが。まだよくはわかっていないな」
「はい」
いぶかしむ声にもそれは出ていた。
「何故ここで仲介を申し出てきたのでしょうか」
「連合の意図が読めないか」
「確かに連合と我々には長い友好関係があります」
これはもうわかっていることだった。これにより連合はサハラ方面での安全をかなり確保していたのだ。こちらに目を向けていなくとも隣が有効勢力ならばそれは最大の護りになるのだ。
「ですがそれでも」
「女王の助命嘆願の理由か」
「我々にはともかく連合には関係ないことです」
彼は言うのだった。
「連合では女王の才は活かせる場がないのではないでしょうか」
「いや、そういうわけでもない」
「？といいますと」
「連合は確かに軍事は重要ではない」
確かに存在はするが決して重要なものではないのは事実だった。連合ではそれよりも遥かに重要なものが多くある。経済にしろ開拓にしろ開発にしろ貿易にしろだ。はっきり言ってしまえばレジャーや文学、音楽、そういったものより遥かに優先順位が低い存在である。それを考えれば生粋の軍人である彼女は連合においては価値のないものに思えるのも当然であった。軍人は数があればいい、サハラでは連合はこう考えていると思われているからだ。
「ですから。どう考えても」
「確かにな」

太子も彼の言葉に一旦は頷く。
「それはその通りだ」
「はい、そうです」
応えるスタッフだった。
「ですから。女王は連合には」
「軍事だけに限ればな」
太子も連合の中の人間、もっと言えば八条が何を考えているのかはわかっていなかった。それがわかっていればまた違う答えになっていたことは間違いない。
「そうなる」
「軍事だけですか」
「連合には他のものもある」
彼はこう言うのだった。
「そう、女王はただ軍人としているのだけではないのだ」
「女王ですか」
「まずそれがある」
彼はそこを指摘した。
「女王というのはそれだけで価値があるものだ」
「政治的な意味においてですね」
「そうだ」
まずはそれであった。このスタッフが着ているものはスーツである。即ち文官である。武官は軍服を着ており文官はスーツである。これはサハラでも同じだ。文官が政治を行う存在であることもまた然りだ。武官と文官の区分はまず着ているものでわかるのだ。
「女王が亡命する」
「はい」
「そうなればまず象徴ができる」
「難民達の象徴ですね」
「連合にもサハラからの多くの難民がいる」
これはサハラの歴史以来のことである。その数は決して多くはな

く殆どはこのハサンとはじめとしたサハラ各国に流れていっているがそれでもだった。連合にも流れ込んできているのだ。これは連合とサハラの歴史がはじまって以来存在している問題であるのだ。
「今十億程度だったか」
「確かその程度だったかと」
「そのうちの一億が義勇軍だったな」
「ええ」
これはここでは余談だったがそれでも語られた。
「思えば。かなりの数の人員を提供しているな」
「全ては彼等がサハラで生き残る為でしょう」
スタッフの言葉は落ち着いたものであった。
「その為に今ああして」
「戦場に出ているというわけか」
「そういうことかと」
彼は語るのだった。

## 第三十四部第三章　仲介は聞かれずその十

「彼等に関しては我々の干渉できることではありません」
「しかも関心を持つことでもないな」
「そうです」
そういうことであった。サハラの者であってもハサンの者ではない。だから彼等にしても感心を持つ必要もなかった。そういうことであった。
「ですからそれは」
「彼等のことは置いておいていいな」
「はい。それでは」
「話を戻す」
太子から言ってきた。
「その女王のことだが」
「はい」
「まずはその難民達の象徴としての価値がある」
「それですね」
「どうやら難民達で新国家を作るようだが」
話が動いてきた。
「その象徴として彼女は必要なのだ」
「国家の統合としてですか」
「別に共和制でもいい」
太子はまた言った。
「共和制でもな。連合でも我々でも共和制の国家は多いな」
「そうですね。オムダーマンにしろティムールにしろそうです」
「その通りだ」
ティムールは実質的にはシャイターンの独裁国家であるがそれでもだった。世襲の国家元首でなければそれで共和制と言えるのだ。もっとも中には二十世紀から二十一世紀にかけて存在した北朝鮮の

如き世襲制の共和制国家もあったがこれはあくまで異常なケースだ。
「だからそれでもいいことにはいい」
「それでもですか」
「しかし。国家には象徴が必要だ」
彼はまた言った。
「カリスマ的な指導者がいなければな。象徴が必要だ」
「だからですか」
「そうだ。だからこそ女王を欲しているのだ」
太子はこう見ているのだった。
「それか若しくは」
「若しくは」
「タレントだな」
今度はこの見方を述べた。
「彼女をタレントか文化人として使いたいのだ」
「タレントや文化人としてですか」
太子の今の分析にはスタッフはその目を顰めさせた。
「それは」
「俗物的だというのか」
「連合にそうした一面があるのは承知しています」
これは彼も承知していた。
「連合はよく言われるように大衆民主主義です」
「そうだ」
このことで有名でもある。連合では主権者はあくまで大衆でありその大衆は雑多な市民達によって構成されている。だから彼等が求めることも様々なのだ。
「中にはそうしたものを求める者もいます」
「その彼等が女王をそのタレント及び文化人として求めるならばだ」
「そうなるのですか」
「女王の才能をそうしたことに使うのは。いえ」
スタッフは言葉を変えた。

「才能ではありませんね」
「では何だというのだ？」
「女王は美貌の持ち主です」
実際にそうしたことからも有名になっていた。何時の時代でも容姿が優れている方が話題になる。これは彼女についても同じであるのだ。
「だからこそタレントですか」
「国家元首だからそれなり以上の識見も備わっている」
「はい」
「教養もな」
国家元首、それも世襲のそれならばそうしたことが必然的に求められる。だからこその王なのである。
「文化人としては最適だ」
「だからですか」
「そうだ。連合では軍事的才能よりも美貌や学識が求められる」
「平和だからですね」
「まず平和がある」
連合ではそれは水や空気と同じ様なものになっている。
「連合ではな」
「戦乱ではなくですね」
「そうだ。だからそちらの方が求められるのだ」
こう連合を評するのだった。

## 第三十四部第三章　仲介は聞かれずその十一

「平和な世界に軍事的才能は不要だ」
「不要ですか」
「そうだ。軍事的才能は戦いの中によってこそ必要になるもの」
スタッフに応えての言葉だった。
「だからだ。平和の時には」
「いらなくなると」
「少なくとも多くはいらない」
限定はしたがそれでもいらないと言うのには変わりがなかった。
「それはな」
「ではあれですか」
スタッフはここでまた彼に言ってきた。
「政治家が戦略を考え」
「軍人はそれに従い実務をこなしていく。それでよくなる」
「それだけですか」
「そうだ。それだけだ」
太子は言い切ったのだった。
「それだけでいい。平和な場所ではそうしたものはいらない」
「わかりました。それでは連合では」
「完全に戦略は政治家が考えている」
八条のことであった。
「軍人はアドバイスはしているだろうがな」
「アドバイスですか」
「だがそれだけだ。連合では軍人は官僚でしかない」
「軍人が官僚！？」
今の彼の言葉にスタッフは目を顰めさせた。
「それは。かなり」
「違うというのか」

「軍人は軍人です」
彼は言う。
「官僚ではないのでは？戦うことが仕事なのですから」
「それはあくまでサハラでの話だ」
「サハラでのですか」
「そうだ。とはいってもこのハサンでもある程度はそうだが」
「ある程度はですか」
「そうだ。我が国ではまず文官と武官が区分されている」
まずはそうなっているのだった。これが連合式のシビリアンコントロールがモデルになっていることは言うまでもない。まずはこうした背景があった。
「そして国防相は文官だな」
「はい」
それが決められているのだった。これはハサン王国の憲法にもはっきりと書かれている。武官が閣僚になることはハサンにおいてはないのだ。この点では現役武官であっても普通に国防大臣になることができるエウロパとは違う。やはり連合のそれと同じ形式なのだ。
「これにあるのだ」
「閣僚が文官であることですか」
「閣僚はゼネラリストの頂点に立つ」
そしてその総指揮を執る。簡単に言えばそうだ。
「だからだ。これについてはだ」
「では戦略を立てるのは」
「政治家だ」
この答えが自然に出された。
「そういうことになる。これでわかったな」
「はい、よく」
スタッフは彼の言葉に頷いた。
「そういうことですか」
「戦略は政治家が立てるもの」

彼はまた言う。
「私もだ。それはな」
「そうですね。我が国では殿下が戦略を立ててておられますね」
「戦略は戦術ではない」
話はさらに区分されていく。
「また別のものだ。戦術は軍人にしかできない」
「軍人にしかですか」
「しかし戦略は違う。本来は政治家が考えるものだ」
「軍人ではなくですね」
「軍人が考えてそれを提案してもいい。だが近代国家においては」
政治家がそれを決定し断を下し採用する。そういうことだった。
彼は政治家としての立場から話していく。少なくとも軍人ではなかった。

## 第三十四部第三章　仲介は聞かれずその十二

「そして戦略はだ」
「戦略は」
「戦時と平時関係がない」
「関係ないとは」
「常に考えられ練られていくものだ」
こう言うのだった。
「常にな。戦争をしていなくともだ」
「はい、それはわかります」
「従って戦略家は平時でもその才が求められる」
「しかし戦術家はですか」
「平時には求められない。戦争をしていなければな」
「そうですね。戦場がない限りは」
こうなるのであった。
「必要ありません」
「あの女王は戦術家だ」
ここで女王の話に戻った。
「戦術家は連合では必要がない。彼等はもう戦いをすることがない」
「はい」
スタッフはまた彼の言葉に頷いた。
「それはありません。確かに」
「戦争は終わった」
彼はまた言う。
「エウロパとの戦争はな。後は彼等が戦う理由はない」
「では女王が連合で求められるとなると」
「軍事的才能ではなくその美貌や識見だ」
必然的にそうなるのだった。
「それしかない」

「では殿下。彼等は女王を客寄せとしか考えていないのですか」
「不快か？」
「正直に申し上げれば」
このことを隠さなかった。
「女王のことが何もわかっていません。愚かです」
「愚かではない」
「連合だからですか」
「連合は連合の中で彼女を活かすと行っているのだ」
「軍人として以外にですか」
「それもまた認めているということだ」
連合を肯定していた。実際彼は連合を否定するつもりは毛頭なかった。
「女王をな」
「それでは。ここは」
「そうだ。この仲裁。やってもらおう」
既に彼の中で答えは出ていたがスタッフに対して告げたのははじめてだった。
「彼等にな」
「そうですか。それでは」
「すぐに連合に告げてくれ」
話はすぐだった。
「すぐにな。この仲裁を頼むと」
「わかりました」
「さて。後はどうなるか」
彼はまた考える顔で述べた。
「最後は女王がその仲裁を受け入れるかだが」
「それについては」
「わかっている」
太子の今度の言葉は達観であった。
「女王は連合の仲裁も受けない」

「そうですね。それはもう」
「誇り高い人物だ」
女王であるから当然だがそれ以上のものがある。それがブルコルジという人間だった。太子もスタッフもこのことをよくわかっていた。
「自分の国が滅んでどうして生きていようか」
「そうとしか思えません」
「女王は死ぬ」
答えはこれしかなかった。
「確実にな」
「残念ですが」
「彼女にとっては残念なことではない」
スタッフの言葉を言い換える形になった。
「彼女にとってはな」
「自国が滅んでも生きるよりは。ですか」
「彼女の考えではそうだ」
「最後まで。女王としてですか」
「私も止めた」
当然彼も彼女に降伏するように言ったのだ。彼女のその才を惜しんでのことであるのは彼自身がこれまで言っていた通りのことである。
「しかし。それでも聞き入れないのならば」
「誇りを完結させるべきですか」
「誇りを汚すことは下劣な行いだ」
それがわからない太子ではなかった。

## 第三十四部第三章　仲介は聞かれずその十三

「しかも誇り高くその誇りがどういうものか真に知っている人物のそれを汚すことはな」
「その通りです」
「惜しいが」
ふと本音が出てしまった。
「それも仕方あるまい」
「わかりました。では」
「どうしようもないこともある」
太子の言葉は降伏そのものだった。
「それが今の場合だ」
「女王の心がそうであるからですね」
「その通りだ。宗主国である我等の言葉も聞き入れなかった」
宗主国の言葉は絶対である。これはサハラだけでなく古来からの話である。
「それでどうして。連合の言葉を聞くのか」
「まずありません」
「そうだ。如何に連合が色々と出そうともだ」
不可能だというのである。
「無理だな。残念だが女王は死ぬ」
「それでは我等にできることは」
「見届けることだ」
一言だった。
「それだけだ」
「それしかできませんか」
「そうだ。だが」
「だが？」
「見届けるのも責務だ」

言葉は今度は諦観でも達観でもなかった。その証拠に強いものだった。
「見届けるのもな」
「見届けるのが責務ですか」
「そうだ。責務だ」
彼は言うのだった。
「責務だ。我々のな」
「女王の最期を見届けることがですか」
「少なくとも私は見る」
不退転そのものの言葉だった。
「私はな」
「殿下はですか」
「属国の最期は最後まで見る」
ここでも強い言葉だった。
「最後までな」
「それが責務なのですね」
「宗主国を預かる者としてだ」
だからだというのだった。
「何としてもな。見届ける」
「わかりました。それでは」
「女王の生き様を見よう」
「死ではないのですか？」
スタッフは今の太子の言葉には怪訝な顔になった。
「今最期と仰いましたが」
「確かに言った」
彼もそれは認めた。
「最期だと。確かに言った」
「それでどうして」
「人間は必ず死ぬ」
彼はこの絶対の摂理も語った。この摂理を妨げることは何者にも

できはしない。生ある者は必ず死ぬ。このことは何があろうと変えられないものなのだ。
「必ずな」
「それはそうですが」
「この世のあらゆるものがそうだ。何時かはなくなる」
いささか東洋的な思想に聞こえる言葉でもあった。
「そう。全てのものがだ」
「国家もですか」
「名前はそのままでもその形態は変わる」
彼の言葉は歴史を見ての言葉である。
「そして戦いに敗れて滅ぶということもだ。あるのだ」
「では今こそ」
「そうだ。その絶対の摂理が今アヤグーズと女王にかかろうとしている」
「アッラー以外にかかるものが」
「この世で不滅なものはただ一つ」
彼はここでもまた言う。

## 第三十四部第三章　仲介は聞かれずその十四

「アッラーのみだ」
「人はそのアッラーの僕です」
「だからだ。我々は不滅ではない」
ここではイスラムの摂理に基く話に戻っていた。やはり太子もムスリムでありその中で生きているだけにこの中から離れることはできなかった。サハラにいる限りイスラムは絶対なのだ。
「だからだ。アヤグーズも女王もまた」
「滅びる」
「そうだ。今がそれだ」
こういうことだった。
「滅びる。今な」
「宗主国の責任ある立場としてそれを見届けられる」
「それだけだ。それではだ」
「はい。それでは」
「私は見る」
彼は言い切った。
「全てな。最後までな」
「わかりました。それでは」
「戦いはこれからより激しいものになる」
彼はこのこともわかっているのだった。
「いや、激しいのではなく」
「激しいのではなく？」
「辛いものになる」
こう言い換えたのだった。
「我々にとってな」
「劣勢に立たされるからですね」
「その通りだ。最早これは避けられない」

わかっているからこそ出した言葉だった。言葉が苦いものになっていた。
「しかし戦いを投げ出すわけにもいかない」
「それもその通りです」
「だからだ。傭兵を集め」
「そのうえで戦力を増強させ」
「まずはティムールだ」
戦略を頭の中で立てた。先に倒す相手もまた決めていたのだった。
「彼等をだ。倒すぞ」
「倒しますか」
「そうだ。数だ」
数という言葉が出された。何と言っても戦争は数である。連合軍がエウロパ軍を終始圧倒し首都オリンポスにまで追い詰めそのうえでマウリアの仲裁で講和となったのもその数故である。このことは少しでも戦争を知っていれば最早言うまでもないことになっていた。
「数があるかどうかだ」
「それ次第ですか」
「数が不充分だった」
これまでのことを悔やんでの言葉も出したのだった。
「彼等、いや彼に対しては」
「シャイターン主席ですか」
「名将だ」
彼が名将であることも認めていた。
「名将なのは事実だ」
「はい、それはもう」
このスタッフもまたこのことを認めていた。シャイターンが名将であり戦場においてはまさに英雄であることは誰もが認めることだった。
「確かに」
「例え政治においてどれだけ陰謀を巡らそうともだ」

語る太子の顔がここでは忌々しげなものになっていた。
「戦場において名将であるのは間違いない」
「だからこそ英雄なのですね」
「少なくとも戦場では英雄だった」
そういうことだった。
「その英雄を倒すにはだ。中途半端な数の優勢では駄目だ」
「確かな優勢ですか」
「二倍でも無理だった」
今は二倍以上の戦力だったのだ。しかしそれでも駄目だったのだ。
その証拠にアヤグーズも今失い劣勢になろうとしていた。
「ならば。それ以上だ」
「より多くの数で」
「二倍でも無理なら三倍だ」
太子の言葉は単純明快なものだったが真理であった。

## 第三十四部第三章　仲介は聞かれずその十五

「いいな。それだけ集める」
「はい、それでは」
「女王は。残念だが」
　このことはどうしても頭から離れなかった。諦めてはいてもだ。
「問題はこれからだ。すぐに大規模に傭兵を集める」
「はい」
「そのうえでまずはティムールを倒す。いいな」
「わかりました」
「それだけだ。それではな」
「はい。それでは書類は」
「こちらで処理しておく」
　スタッフが持って来ていた書類に関しても答えたのだった。
「こちらでな」
「はい。では」
「用件はこれで終わりだな」
　あらためてスタッフに問う。
「では。下がってくれ」
「わかりました」
　こうして彼とスタッフの話は終わった。一人になった彼は自室で深い溜息をつくことになった。
「仕方ないか」
　一言だったがそれが全てになった。溜息をついた後で仕事にかかる。それで己の感情を胸の中に押さえ込んだ。そのうえで元の自分に戻るのだった。
　その頃アヤグーズの首都アッサルームでは。連合からの通信が届いていた。それはアヤグーズ軍だけでなくティムール軍にも届いていた。

「停戦か」
「はい」
当然ながらこの通信のことはすぐにシャイターンにも伝えられた。シャイターンは前線で指揮を執りながらそれを聞いたのだった。
「その仲裁を申し出ていますが」
「連合がか」
シャイターンはそれが連合からのものであることをまず考えたのだった。
「何故でしょうか」
「連合がここで仲裁に動いたことか」
「はい」
彼に問うた参謀はその言葉に応えて頷いた。
「そうです。それは何故でしょうか」
「それはすぐにわかる」
シャイターンはそれを聞いても冷静だった。
「目的は一つしかない」
「目的ですか」
「そうだ。目的だ」
また言うシャイターンだった。
「その目的もまたわかっている」
「それは一体？」
「女王だ」
彼はすぐにそうだと見抜いていたのだった。この辺りの勘の鋭さは流石だった。
「彼等は女王が欲しいのだ」
「女王をですか」
「そうだ。何故欲しいかというと」
彼の言葉は続けられる。
「その軍事的才能を欲しいのだ」
「軍事的才能！？」

「まさか」
参謀達はそれを聞いて一斉にその眉を顰めさせた。
「連合に軍事的才能なぞ」
「まさか」
「だがそのまさかだ」
彼の返答は揺るがない。絶対のものがあった。
「彼等は。女王の軍事的才能を欲しているのだ」
「あの連合がですか」
「それはまた何故」
参謀達にとってはわからない話だった。実は彼等も彼等なりに何故連合が彼女の才能を欲しているのか見当をつけてはいた。この短い話の中でだ。
「その美貌ではないのですか？」
「若しくはその識見」
「難民達の象徴として」
彼等の見方はハサン太子と同じだった。彼等にはその自覚はないにしろだ。それでも彼と同じ見当になっているのだった。これにも理由があった。

## 第三十四部第三章　仲介は聞かれずその十六

「連合が軍事的才能なぞ」
「欲するとは」
「そうです」
参謀達は口々に言う。その間にも周りでは攻撃が続いている。最後の要塞になっている王宮を取り囲んでそのうで砲撃を行っていた。まさに最後の戦いであった。
「連合が彼女を欲するとすればまず難民達の象徴でしょう」
「その通りです」
まずは政治的見解であった。
「女王ともなれば象徴として最適です」
「それではないのですか？」
「確かにそれが最も可能性のあることだ」
シャイターンもそれは認めた。
「その通りだ」
「ではやはり」
「そうではないのですか？」
「普通に考えればだ」
彼は言った。
「そうなる」
「普通に？」
「といいますと」
やはり彼等はまだわからなかった。シャイターンの読みが。
「違うというのですか」
「象徴では」
「象徴が他に既にいれば」
彼は言った。
「象徴は多過ぎてもよくはない」

「それはその通りです」
「船頭が多くては船は動きません」
昔から言われている言葉である。
「船長は一人で充分です」
「アッラーは唯一にして絶対の神」
シャイターンはここでムスリムとしての言葉を出した。
「アッラー以外の神は必要か」
「いえ、不要です」
「そうした神はいりません」
当然ながら参謀達もムスリムである。ならば答えは一つしかなかった。ムスリムならばだ。
「それでは。既に象徴がいるのですね」
「難民達の新国家を築くという話も聞いていますが」
「新国家の話はおそらく真実だ」
ここでも鋭い勘を見せるシャイターンだった。
「それもな」
「ではそれにあたっては不要なのですか」
「それではです」
参謀達は次に考えられるケースを述べはじめた。
「タレントか文化人か」
「連合らしくはありますな」
「全くです」
彼等もまた連合に対する認識はこうしたものであった。そこには多少の蔑みもある。それもまたサハラらしいものであった。サハラはどうしても連合を信仰心が希薄との認識から蔑む傾向も見られるのだ。強いものではないにしろだ。
「その美貌と識見を見込んで」
「それでしょうか」
「それも充分考えられる」
シャイターンの言葉には伏線があった。

「それもな」
「！？といいますと」
「これも違いますか」
「違う」
シャイターンは今度ははっきりと言い切った。
「絶対に違うな。これもだ」
「話がわからなくなってきましたが」
「まず難民達の象徴ではない」
最初に最も考えられるケースが否定された。
「そしてタレントでも文化人でもない」
「だとすると」
「軍事的才能！？」
そのうえでシャイターンが先程出した言葉を思い出すのだった。
「そうは言われましても連合軍は」
「正規軍は連合の三百の国のいずれかの市民である必要があります」
「その通りです」
連合軍は市民軍である。これは連合が各国の軍隊に分かれていた頃からの伝統である。即ち他の国籍の者、マウリアやサハラ各国の者は連合軍に入ることはできはしない。市民軍のこの鉄則を彼等も忠実に守っているのだ。十九世紀に確立された思想である。
「ですからそれは」
「それに連合軍は」
次に連合軍の体質についても考えられる。

## 第三十四部第三章　仲介は聞かれずその十七

「軍事的才能よりもマニュアルやシステムを優先させそれで戦う軍隊です」
「それで軍事的才能ですか」
こう言って誰もが首を捻るのだった。
「それでどのようにして女王を」
「わかりかねますが」
「連合軍は正規軍だけか」
その彼等に対してまたカードを見せたシャイターンだった。
「それは。どうだ」
「正規軍だけ！？」
「というと」
「そうだ」
シャイターンは声だけで満足さを出してみせてきた。
「わかったな。サハラ義勇軍がある」
「彼等ですか」
「エウロパとの戦いにおいて活躍した」
彼等のことも広く知られるようになってきていた。連合軍にとっては正規軍の消耗を防ぐという意味で前線に立つ彼等はかけがえのない存在になっているのだ。
「彼等にだ」
「彼等に入れるというのですか」
「それだ」
シャイターンはそれだと言うのだった。
「彼等はそれを考えているのだ。いや」
「いや？」
言葉を少し変えてきたのだった。
「彼と言うべきか」

「彼、ですか」
「そうだ」
また参謀達に告げた。
「彼だな」
「彼、といいますと」
「一体」
参謀達は今のシャイターンの言葉でまた首を捻ることになった。8
「誰ですか？」
「キロモト大統領でしょうか」
「彼なら確か」
キロモトの経歴についても当然知っているのだった。
「軍人出身ですし」
「下士官候補生出身でしたね」
「確かに彼は軍人出身だ」
「はい」
「そうです」
まず名前が出たのは彼なのだった。
「あの御仁でしょうか」
「有り得ますが」
「確かに有り得る」
彼もそれは認める。
「それはな」
「有り得る！？」
「それでは彼ではないのですか」
「確かに優れた政治家だ」
シャイターンにしろ彼の政治家としての力量は正当に評価していた。相手の力量を見極められないで政治家、しかも独裁者には成り得ない。
「しかしだ」
「彼ではないのですか」

「そうした発想は持っていない」
キロモトへの言葉だ。
「女王を欲したとしてもだ」
「軍人としてではないのですね」
「そうだ。やはり象徴だろう」
こう断言したシャイターンだった。
「彼が女王を使うのならばな。そうでなければ」
「やはりタレントか文化人」
「それですね」
「それしかない」
「だとすればです」
参謀の一人がいぶかしながらまたシャイターンに問うてきた。
「一体誰が女王の軍事的才能を欲しているのですか？」
「アッチャラーン首相は完全な文官ですし」
少なくとも軍事的発想にはかなり縁のない人物ではある。

## 第三十四部第三章　仲介は聞かれずその十八

「それにカバリエ外相もです」
「あの外相はかなりの曲者ですが」
カバリエの曲者ぶりは彼等もよく把握していた。彼等が直接やり合ったわけではないがそれでも彼女のことは聞いていて知っているのだ。
「それでも軍人ではないですし」
「だとすれば一体」
「誰がですか？」
「一人いる筈だ」
彼はまた言った。
「一人だ。それが誰かというと」
「ああ、彼ですか」
「あの貴公子ですね」
「わかったようだな」
参謀の一人の貴公子という言葉にすぐ反応してみせたシャイターンだった。
「彼だ。八条義統だ」
「やはり彼ですか」
「残された選択肢は一つしかありませんでしたし」
「元々一つしかなかった」
彼はこう評するのだった。
「それはな」
「そうですね。確かに」
「考えてみれば」
参謀達もここでわかったのだった。シャイターンが提示していた答えの選択肢は一つしかなかった。そういうことであったのだ。
「あの御仁は確かに連合の人間です」

「今では文官です」
文官ではある。軍人も現役でなければ文官になるのだ。文官は文民がなるものだ。時代が経るにつれ文官の方が数が多くなってきているのである。
「ですが。相当な戦略家です」
「だからですか」
「彼は連合一の戦略家だ」
シャイターンは八条をかなり高く評価していた。
「間違いなくな」
「戦略家ですか」
「そしてだ」
彼はさらに言葉を続けてきた。
「戦場では私が勝つ」
「閣下が」
「しかし。政治の場においてはだ」
舞台が拡がった。戦場はあくまで一つの地域で為されるものだが政治は時として人類社会全体になる。戦争は政治の一手段である。ならば必然的にそうなるのだった。
「私が敗れるかも知れない」
「まさか」
「それは」
シャイターンが敗れる、このことは彼等は決して認めようとはしなかった。何故なら彼等にとってシャイターンはまさにカリスマであるからだ。
「閣下が敗れる筈がありません」
「そうです」
彼等は尚も言うのだった。
「政治の場においても」
「有り得ません」
「彼を侮ってはならない」

しかし彼は言うのだった。
「何度も言うが戦場で彼と見まえたならば私が必ず勝つ」
「はい」
「その通りです」
まずそれは絶対のことであった。
「ですからそれは政治の場でも」
「違うのですか？」
「彼の政治力は天才的だ」
だが彼はここでまた言った。
「そしてその天才に勝つにはだ」
「閣下の政治力では」
「五分と五分だ」
これが彼の見方であった。
「若しかしたら彼の方が僅かに勝っているのかも知れない」
「閣下よりも」
「幾ら何でも」
「彼を侮らないことだ」
彼はまた言った。

## 第三十四部第三章　仲介は聞かれずその十九

「決してな」
「決して、ですか」
「相手を侮るならば」
その声が強いものになった。
「それで終わりだ」
「終わりですか」
「そうだ。その相手に敗れることになる」
彼は言う。
「必ずな」
「では閣下は」
今の言葉を聞いた参謀の一人が彼に対して問うた。
「八条長官の力量を見極めておられるというのですね」
「その通りだ」
はっきりとした声で頷いたのだった。
「だからだ。彼とは政治の場で戦うことはしたくない」
「それ程までですか」
「連合にいてくれてよかった」
こうまで言う。
「おかげで。戦わなくて済む」
「それ程までですか」
「あの主席は」
「連合軍を僅かあれだけの期間であそこまで作り上げた」
彼が指摘するのはまずこの点であった。
「あれだけの短期間でな。寄せ集めだった連合軍をだ」
「はい。最初はただの各国軍を集めただけのものでした」
「装備はおろか軍服さえもまちまちでした」
それが初期の連合軍であったのだ。

「ですが今やあの軍は」
「そうだ。見事に生まれ変わった」
そのことを正確に見ていたシャイターンだったのだ。
「あれだけ雑多な軍をな。僅かな間に」
「戦闘まで行われる軍にした」
「確かに見事です」
「ただ政治力があるだけではない」
シャイターンはさらに彼について語る。
「ただ政治力があるだけではだ」
「はい」
「それだけでは？」
「あれだけのことを為し得ない。他にも様々なものが必要だ」
「といいますと」
「その必要はものは」
「まずはだ」
シャイターンはそれは複数だと言うのだ。実際に彼はそれについての話もはじめた。何処までも八条という男に対して冷静な分析を行っていた。
「事務処理能力だ」
「それですか」
「デスクワークも重要なことだ」
彼はまずそれを話に出したのだった。
「それはな」
「デスクワークですか」
「それもまた」
「これは官僚の能力だが」
少なくとも武人の仕事ではないという考え方は強い。官僚はそうした仕事を処理していくのが仕事である。言うならばコンピューターのようなものなのだ。
「それがなくては何もできはしない」

「閣僚であってもですか」
「閣僚でもなくてはならない」
こう言うのだった。
「必ずな」
「そういうことですか」
「だからこそ」
「そうだ。だからこそだ」
彼はこのことへの指摘を続ける。
「必要なのだ。そうした能力もな」
「あれだけのことをするにはですか」
「しかも彼はその能力はかなりのものだ」
「そうでなければですか」
「あれだけのことが」
「連合軍設立の際にはかなりの事務的な仕事ができていた」
これは当然だった。何かをすればそれだけでかなりの書類が生じる。それが官僚の世界であり行政機関の仕事なのだ。極論すれば実弾演習を兵士達が行えばそれだけで書類上の手続きが必要になる。銃の弾丸を一発撃つだけで書類が必要になるものなのだ。
「その際彼はほぼ毎日不眠不休で事務処理を行った」
「左様ですか」
「そしてエウロパとの戦争の後処理もな」
「それもですか」
「どちらもだ。完璧に処理を果たした」
彼は言った。
「短期間にな。不眠不休でだ」
「不眠不休ですか」
「ならば」
「そう。彼はそれに加えて体力も備わっている」
次にシャイターンが八条の能力について指摘したのはこの点だった。

## 第三十四部第三章　仲介は聞かれずその二十

「かなりのな」
「元軍人だからですか」
「そういえば学生時代あの長官はかなりの時間身体を動かしていたとか」
「人間体力がなくては何にもできはしない」
これはこの時代でも摂理だった。人間は何をするにあたっても体力が必要なのだ。それがなくては何かをすることなぞできはしないのだ。
「彼はこの点においてもだ」
「備わっているというのですね」
「体力もまた」
「それもあってだ」
そういうことだというのである。
「彼はことを為し得たのだ」
「事務処理能力と体力ですか」
「確かにどちらも」
彼等は軍人として考えていた。しかしそれでもそれは間違ってはいなかった。
「政治家にとって必要なものです」
「その二つを兼ね備えているのですか」
「それもかなりな」
こうまで言うシャイターンだった。
「見事なまでにな。持っているのだ」
「政治力、事務処理能力、体力」
「その三つによってですね」
「もう一つある」
しかしシャイターンの言葉は終わらない。参謀達の分析は的確だ

ったが彼はそこにさらに付け加えてきたのだった。やはり彼の方が鋭かった。
「もう一つな」
「もう一つ！？」
「それは一体」
「一人で何かをするには限界がある」
彼はここではこう告げた。
「一人ではな。つまりはだ」
「部下ですか」
「我々のような」
「そうだ。貴官達のようだだ」
彼は言った。
「部下達が必要なのだ」
「つまり連合の国防省には人材もいると」
「そうなのですね」
「武官より文官に人材が揃っているか」
シャイターンは連合中央政府国防省について考えながら述べたのだった。
「比較の問題だが」
「文官にですか」
「彼は今では完全に文官だ」
彼は言った。
「元軍人であってもだ。だからこそ文官に重点を置いて人材を考慮し選抜している」
「文官が軍を統括するのですか」
「そうだ」
シャイターンは参謀の一人の今の問いにも答えた。
「その通りだ。それが連合だ」
「何度聞いても今一つ実感がありません」
「軍人が軍を動かすのではないのですか」

「連合は連合だ」
シャイターンはこの言葉を答えとした。
「そして我々は我々だ。連合ではそれが常識なのだ」
「それによってですか」
「彼等はそうして軍を動かしている。それによって彼は人材を動かしたのだ」
「人材をですか」
「文官中心に」
「しかし武官も見事に選んでいる」
さらに言葉を続ける。
「それを見抜くだけの目を持っているのだ」
「人材を見抜く目ですか」
「最後は」
「そう、それだ」
シャイターンが最後に指摘したのはこの点だった。
「四つ目だ。これにより彼はあれだけのことを為したのだ」
「そしてその連合軍を築いた八条長官が」
「閣下と争えば」
「私とてわからない」
心の奥底からの言葉だった。

## 第三十四部第三章　仲介は聞かれずその二十一

「どうなるのかな」
「勝てない可能性もあると」
「そうなのですか」
「閣下が」
「その彼だからだ」
話が戻った。
「彼は。女王を軍人として欲しているのだ」
「だからですか」
「その目があるからこそ」
「人を見抜く目があるからこそ」
「その彼が今動いたが」
ここでブルコルジがまだいる王宮に顔を向けた。
「さて、どうなるかだが」
「受け入れるでしょうか」
参謀の一人も王宮を見つつ言ってきた。
「果たしてあの女王は」
「あの長官の申し出を」
「どうするでしょうか」
他の参謀達もそれに続く。今彼等の目は王宮に集まった。
「おそらくはだ」
「おそらくは？」
そしてまたシャイターンの言葉を聞くのだった。
「断る」
一言であった。
「まず間違いなくな」
「断りますか」
「女王は。彼等の申し出も」

「受け入れるのならば既に受け入れている」
シャイターンはまた言ってきた。
「既にな。我々の申し出の時点でだ」
「やはりそうですか」
「そうなりますか」
「そうだ。女王は死ぬ」
シャイターンはこうも言った。
「この戦いで。間違いなくな」
「では主席」
「連合の仲介が終われば」
「攻撃を再開する」
今は攻撃を止めようとしている。連合の仲介を伝え、それへの決断が行われるまでの間は攻撃をしない、そうした戦場でのルールを彼等も守っているのだ。
「それでいいな」
「はっ、それでは」
「そのように」
「それまで暫し休息とする」
攻撃を停止するその間に休ませるというのだ。軍人らしい合理的な判断であった。シャイターンは今は完全に軍人になっていた。
「それでは。戦闘停止に入れ」
「はっ」
「わかりました」
参謀達は敬礼で彼の言葉に応える。こうして彼等は今は攻撃を止めた。その間にブルコルジは連合からの降伏の仲裁の申し出と連合への亡命の申し出を受け取っていた。
場所は王宮のモニターの一つであった。その前に座る彼女はアヤグーズ軍最高司令官の軍服を着ている。その姿で今モニターの前に立っている。周囲をこれまで支配していた砲声は消えてしまっている。その中でモニターに姿を現わしている連合中央政府外務省の者

の言葉を聞いていた。
見れば彼は連合中央政府外務省アヤグーズ大使だった。当然ながらブルコルジの知っている顔だ。白い髪の初老の男だ。彼はまずは女王に対して恭しく一礼した。そのうえで彼女に対して言ってきたのだった。
「まずはお久し振りです」
「はい」
最初は挨拶からであった。
「お元気そうで何よりです」
「貴方も」
話は社交辞令から入る。これは外交の基本であった。
その外交の基本から話に入っていく。大使は次第に話の核心に入っていくのであった。
「陛下、まずは今首都を離れていることを御許し下さい」
「それは構いません」
落ち着いた声で大使に言葉を返すのだった。
「むしろ礼を述べたい程です」
「私にですか」
「そうです。子供達を連れて星を出て下さいましたね」
「はい、それは」
大使も女王の言葉に応える。

## 第三十四部第三章　仲介は聞かれずその二十二

「当然のことをしたまでです」
「当然と仰るのですね？」
「その通りです」
こう女王に対して述べたのだった。
「人として。当然のことをしたまでです」
「何故それが当然だと」
「戦争で戦い死ぬのは軍人だけで充分です」
大使は物静かだが確かな声で女王にまた述べた。
「ですから。陛下のお子様達は」
「それに対してです」
また述べるブルコルジだった。
「貴方は今それを当然のことと仰いましたね」
「はい」
「ですが。その当然のことをしない者が多いのもまた事実です」
女王はこう言うのだった。
「それをした貴方に対してやはり」
「左様ですか」
「そうです。そのことにより貴方に勲章を届けておきました」
女王は大使に告げた。
「アヤグーズ獅子勲章を」
「獅子勲章をですか」
「そうです」
日本で言えば勲二等に匹敵する。一等はアヤグーズにはなく宗主国のハサンにある。従ってアヤグーズが出せる最高の勲章であるのだ。
「それを届けさせて頂きました」
「有り難き幸せ」

「どうかお受け取り下さい」
こうも彼に話した。
「それで御願いします」
「わかりました。それでです」
大使は彼女の言葉を受けたうえで自分も言葉を返してきた。
「今度は私がです」
「貴方がですか」
「はい。お受けして頂きたいものがあります」
最初はこう切り出したのだった。
「お話させて宜しいでしょうか」
「はい」
ブルコルジは彼が何を言ってくるのかわかっていた。しかしそれでもあえて彼の言葉を受けるのだった。その表情を変えることなく。
「私が今陛下にこのような形でお目通りさせて頂いた理由ですが」
「それは何故ですか？」
「まずはこの戦いを止めて頂きたいのです」
率直に述べてきた。
「まずはです」
「降伏ですか」
「今ティムール軍から降伏勧告が出ています」
彼は言ってきた。
「それを受けて頂きたいのですが」
「私に降伏をせよと」
「そしてです」
女王に息をつかせる間もなくさらに言ってきた。
「この降伏勧告を受けられ連合に亡命されることをお勧めします」
「連合に」
「はい。ここで死なれることはありません」
ここでも率直に述べた大使だった。
「是非。連合に来られそこであらたな御活躍をされるよう」

「私に連合に来いと」
「その通りです」
こう女王に言葉を返したのだった。
「是非共。連合は陛下の才を惜しんでいます」
あえて連合と言ってみせたのだった。
「ですから。是非」
「子供達は連合に行くことになっていますね」
ブルコルジは彼の言葉に答えるより先にこの話を出してきた。
「そうでしたね」
「既にハサンから連合に移られようとしています」
大使は女王の子供達のことも正直に話した。

## 第三十四部第三章　仲介は聞かれずその二十三

「そのことも御安心下さい」
「そうですか」
「そしてです」
ここまで話してまた言うのだった。
「今度は陛下がです」
「私がですか」
「そうです。連合に」
真剣な声で告げた。
「是非来られて下さい」
「連合にですか」
「将兵もまた希望があれば」
彼女と共に今共に戦うアヤグーズ軍の最後の将兵達のことも話に出した。
「是非共連合に」
「彼等と共にですか」
「どうか。是非」
言葉はさらに強くなった。
「いらして下さい。お待ちしております」
「それはつまり」
大使の話をここまで聞いたうえでの言葉であった。
「私に敗れよというのですね」
まずはこう言ったのだった。
「私にティムール軍に敗れよというのですね」
「はい」
大使は女王の言葉に怯んだ。しかし答えたのだった。
「それはその通りです」
「やはり。そうなのですね」

「しかしです」
だが大使は気を元に戻しそのうえでまた彼女に言ってきた。
「勝敗は兵法の常です」
古来からよく言われている言葉であった。
「ですから」
「降伏を受け入れよと」
「そうです」
言葉を隠さなかった。
「ここは。そして連合で穏やかに今後を」
「それもまたいいでしょう」
ブルコルジは彼の言葉を受けてまずはこう言ったのだった。
「思う存分戦いそのうえで余生を過ごす」
「その通りです」
「それもまた武人の生涯の一つです」
あくまでその一つだというのだ。
「過去にそうして一生を終えた英傑もいます」
「女王もまた」
今の大使の言葉はあえて途中で切りその後に続くものを隠していた。そうした言葉であった。
「ここは。そのように」
「魅力的ではあります」
女王はまた言った。
「名誉は守られるのですから」
「既に陛下の御名誉は連合にまで届いています」
そこまでだというのである。
「ですから。ここは」
「しかしです」
ブルコルジの言葉が急に鋭いものになった。
「それでもです。私は引きません」
「引かないと」

「そして敵に膝を屈することはありません」
つまり降伏しないということだった。言葉はそうなる。
「決して。何があっても」
「それでは」
「はい。受けません」
はっきりと言い切ったのだった。
「何があろうとも。私はその仲裁をお受けしません。何があろうとも」
「ですがそれでは」
大使はわかってはいたがそれでも暗い顔にならざるを得なかった。そしてその暗くなってしまった顔でまたブルコルジに対して言うのだった。
「陛下、貴女は」
「死ぬと言われるのですね」
「そうです。このままでは」
「最初からそのつもりです」
言葉にも口の端にも笑みが宿った。

# 第三十四部第三章　仲介は聞かれずその二十四

「陛下、貴女は」
「死ぬと言われるのですね」
「そうです。このままでは」
「最初からそのつもりです」
言葉にも口の端にも笑みが宿った。
「最初から。そのつもりで今ここにいるのです」
「最初からですか」
「私が普通の軍人ならば貴方の申し出は受けていました」
モニターの向こうの大使の目を見ての言葉だった。
「その申し出を。必ず」
「そうだったのですか」
「ですが私は女王です」
己が何かを語った。
「このアヤグーズの主です」
「はい」
「祖国が滅び。どうして主だけが残れましょう」
こう言うのだった。
「ですから。私は最後まで戦います」
「最後までですか」
「この剣が折れても」
実際には持ってはいない。しかしそれでも持っていた。彼女の心にこそ他ならぬその剣が持たれ輝きを放っていたのである。
「最後の最後まで戦いましょう」
「それでは最早」
「これがお別れとなります」
個人としても面識のあるからこその言葉だった。
「子供達のこと。まことに有り難うございました」

「左様ですか」
「子供達に伝えておいて下さい」
母の顔になりその顔で告げたのだった。
「これから連合において」
「連合において」
「連合の者として生きよと」
「連合の者としてですか」
「そして誰も恨むなと」
次に述べた言葉はこうしたものだった。
「誰も。間違っても今母が戦っている相手を仇と思うなと」
「仇とですか」
「母は戦って死んだ」
戦死するのはもう決めているのだった。だからこその今の我が子達への言葉だった。話すその顔も声も実に澄み切ったものになっていた。
「ただそれだけなのだからと」
「それだけだからですか」
「そう。母は誇りと共に死んだ」
次にはこう言った。
「それでどうして恨む必要があるかと」
「わかりました。それではそのように」
「最後に」
我が子達に言い伝える言葉が最後に及んだ。
「誇りを忘れるなと」
「誇りをですか」
「連合の者になろうともアヤグーズ家の誇りを忘れず。武によって生きてきた者の誇りを忘れず」
彼女は何処までも武人だった。そしてアヤグーズ王家はそのはじまりから今この時に至るまで戦いの中で生きてきた。それを表している言葉だった。

「生きよと。誇りを決して忘れるなと。
「はい。それではこれも」
「ムスリムとして」
言葉が付け加えられたがこれはサハラの者ならば当然のことであった。やはりサハラではイスラムなくしては何も成り立ちはしないのだ。
「生きよと。お伝え下さい」
「わかりました。それでは」
「御会いしたいものでした」
王宮の周りでは既に火が起こり部屋の窓にもその輝きが入って来る。ブルコルジはその輝きに顔を朱に染めながらその中で言葉をまだ続けていた。
「そちらの長官に」
「長官ですか」
「八条義統長官でしたね」
その朱を受ける顔を微笑ませていた。
「私を連合に迎え入れようとしたのは」
「それは」
「わかります」
こう大使に対して言った。

## 第三十四部第三章　仲介は聞かれずその二十五

「私にはそれは」
「おわかりでしたか」
「私を軍人として迎えられるおつもりでしたね」
「！？」
大使は今のブルコルジの言葉に思わず眉を動かした。実はそうなのだがこれはトップシークレットだった。しかし彼女はそれをわかっていた。このことに驚きを隠せなかったのだ。
「何故それを」
「やはりそうでしたか」
大使は思わず真相を話してしまった。だがそれは今に至ってはどうでもいいことだった。何しろ事実なのだから。事実には何者をも勝てはしない。
「そのように」
「そうです」
大使は言ってしまったその苦い顔で述べた。
「国防長官が。降伏の仲裁を提案され」
「やはり」
「そして陛下を義勇軍の指揮官として。元帥として」
「有り難き御言葉です」
そのことを確かめて満足したような顔になった。
「私のことを認めておられたのですね」
「もう述べさせて頂きますが」
大使もここまで言っては覚悟を決めた。何もかも隠す必要はないことがわかり思い切って言ったのだった。これは決断であった。
「長官は陛下の才を御存知でした」
「私のですね」
「その軍事的才能を」

彼が見ているのはそれだった。他の連合の者達が気付かないこのことを見ておりそれを的確に動かそうとしていたのである。
「ですから。義勇軍に陛下を」
「そのお気持ちだけを受け取らせて頂きました」
ブルコルジは言った。
「それを今」
「左様ですか」
「人は認められることを喜ぶもの」
これこそが最上の喜びの一つだと古来から言われている。かつて唐代初期の功臣の一人である魏徴は己の詩に詠っていた。人生意気に感ず、と。これはその喜びを詠ったものである。
「ですから。一度御会いしたいものでした」
「ではこのことは長官に」
「宜しければお伝え下さい」
こう大使に告げた。
「このことを」
「はい、それでは」
これでモニターを通しての話し合いは終わった。結局連合にとっては不本意な結果に終わった。すぐに戦闘が再開されブルコルジも指揮所に戻った。王宮に降り注ぐ砲弾や炸裂するビームはさらに激しさを増していた。
アヤグーズが降伏勧告を拒絶したことはすぐに八条にも伝わった。彼はこの時首相であるアッチャラーンと話をしていたが話を聞いてまずは小さく息を吐き出した。
「そうですか」
「仲裁は失敗に終わったな」
「はい」
アッチャラーンの言葉に対して頷いた。
「その通りです」
「残念なことだな」

「はい、全くです」
また息を吐き出して述べた。
「私としましてはです」
「ブルコルジ女王を死なせたくなかったか」
「彼女は優れた軍人です」
彼は今度はブルコルジについて述べた。
「あの才があれば。義勇軍でも」
「義勇軍に欲しかったのか」
「今だから申し上げられますが」
彼はここで己の考えていたことを話に出したのだった。
「彼女を義勇軍の将に迎えるつもりでした」
「義勇軍のか」
「はい、艦隊の総司令官として」
考えてあった役職についても述べた。
「迎え入れるつもりでした」
「そうだったのか」
「階級は元帥でした」
階級についても言った。軍人ならば必ず階級というものがついて回る。だからこそ彼女に関しても階級を考える必要があったのである。
「そうするつもりでしたが」
「元帥で義勇軍艦隊総司令官か」
アッチャラーンは話を聞きそれをまとめたうえで言った。

## 第三十四部第三章　仲介は聞かれずその二十六

「かなりのものだな」
「それだけの価値がありますから」
だからだというのだった。
「ですから。是非にと思っていたのですが」
「しかしそうはならなかったな」
「はい」
また残念そうな声で頷いた。
「わかってはいましたが」
「わかっていたのか」
「彼女は誇り高い人物です」
当然ながら八条も彼女がどういった人間なのかわかっていたのである。そうしたことを調べずして動くような人間ではない。八条もまた見ているのである。
「ですから。降伏の仲裁は受けないと思っていました」
「実際に宗主国であるハサンの言葉も聞き入れなかったな」
「本来属国は宗主国の命を聞かなければなりません」
だからこその属国であり宗主国なのだ。この関係の摂理はこの時代においても健在でありサハラにおいては今でもそれが生きているのだ。三百国が全て対等だとされている連合とはここが違うのだ。この点でも連合とサハラは全く違う世界であるのだ。
「それを突っぱねた程ですから」
「無理だとわかっていてもか」
「そうです。それでもでした」
八条は素直に述べた。
「女王を我が軍に欲しかったのです」
「随分と高く評価していたのだな」
アッチャラーンはあらためてこのことがわかった。

「あの女王のことを」
「優れた軍人です」
彼はまた女王について言った。
「そして見事な武人です」
「武人か」
アッチャラーンはこの武人という言葉には違和感があるような表情を見せた。
「あまり聞かない言葉だな」
「私もです」
これについては自分もだと言う八条だった。
「連合にいるのは軍人です」
「武人ではないな」
「軍人は軍規軍律を守るものです」
だからこそ軍人なのである。軍規軍律を守らない軍人は軍人ではない。連合軍はとかくこうしたことには極めて厳格な軍であるのだ。
「しかし武人は」
「違うのか」
「信念を守るものです」
こう言うのであった。
「わかりやすく言えばです」
「うむ」
「あのエウロパ軍ですが」
例えに出してきたのは彼等であった。
「その指揮官達は皆貴族です」
「貴族は皆将校だったな」
「そうです」
ここにエウロパの階級主義がある。貴族は誰でも将校からはじまる。連合でも大学卒業者は本人が強く希望しなければ将校からはじまるがこれとは事情が全く違うのである。
「その将校達の間にあるものはです」

「ノーブレス＝オビリージュだったか」
アッチャラーンの言葉は少しシニカルなものになった。
「確か『高貴なる者の義務』だったな」
「はい」
アッチャラーンの今の言葉に頷く八条だった。
「それが彼等の信念になっています」
「我々から見れば戯言だな」
アッチャラーンも連合の人間でありエウロパのそうした考えには甚だ冷笑的であった。それは程度の差こそあれ八条も同じだが彼はここではそのことを顔にも言葉にも出さずに話すのだった。
「その戯言で立っているが」
「それとはまた別のものがあります」
「エウロパ軍の将校にはだな」
「はい、そしてそれは」
「騎士道だったか」
またしてもその言葉に冷笑的なものを隠さないアッチャラーンだった。
「それによるのだな」
「そうです。エウロパ貴族は軍ではその騎士道の下に戦います」
八条はこう述べるのだった。
「あくまでそれにより」
「軍人として以上にか」
「彼等は騎士でありそれと共に」
そして言った。

## 第三十四部第三章　仲介は聞かれずその二十七

「武人であると考えています」
「自分達自身をだな」
「そうです。彼等は武人だと考えているのです」
ここで武人という言葉が確かなものになった。
「自分達を」
「そしてそれはエウロパ貴族だけではなくか」
「サハラにもあります」
サハラに話が届いた。リンクする形で。
「その精神は」
「マムルークだったか」
アッチャラーンは今度は冷笑も侮蔑も入れずに述べた。
「確かそうだったな」
「その精神です」
八条はそうだと答えた。
「サハラの軍人の中にあるのは」
「君の国にもあったな」
アッチャラーンはふとこのことにも気付いた。
「日本にも」
「武士道のことでしょうか」
「武人の心か」
アッチャラーンはどうしても実感が掴めないといった声であった。
「それがあるのだな」
「はい、それは確かに」
強く答える八条だった。
「ありました。今はスポーツ等に残っているだけですが」
「日本軍にもあったというな」
言葉は過去形であった。

「連合軍には」
「残念ながらありません」
それがいささか残念だというような今の八条の言葉であった。
「ですが。彼女が加われば」
「それが連合軍にも伝わったというのだな」
「それを期待もしていました」
ここでも素直に述べた八条であった。
「ですが」
「それは適わなかったな」
「はい」
また残念な声を出した。
「可能性は極めて少ないとわかってはいましたが」
「それでもか」
「可能性が僅かでもあれば」
彼はまた言った。
「それをしてみるだけです」
「まずは動くということだな」
「その通りです」
こういうことだった。動かなければ何にもならない。彼はその考えにより動いたのだ。
「可能性は低くともです」
「それでもあえてか」
「結果は。やはりこうなりましたが」
やはり残念な声であった。
「それでも。欲しいものでした」
「彼女がか」
「義勇軍の為に」
「それは駒としてかね」
「いえ」
これは否定した。首を横に振って。

「駒としてではありません」
「人としてか」
「確かに連合軍はユニット化された軍です」
将兵も艦艇も全てユニットとしそのうえで合理的に戦う。連合軍の基本方針である。
「ですが。戦うのはあくまで人です」
「その人を欲してなのだな」
「機械の彼女はいりません」
八条はこうも述べた。
「必要なのはあくまで人です」
「人か」
「人がいなくして戦争はできません」
八条の考えであった。彼は極めて合理的に戦う連合軍を組織はしたがそれでも人の存在を忘れることはない。だからこそ彼等の犠牲も極限まで避けようとしているのだ。

## 第三十四部第三章　仲介は聞かれずその二十八

「その為に彼女を欲しかったのですが」
「人材としてだな」
「何度も述べますがそうです」
また答える。
「そうでしたが」
「向こうはな」
しかしここでアッチャラーンは言うのだった。
「それだけで終わるとは思えないがな」
「向こうとは？」
「彼女だ」
他ならぬブルコルジのことであった。
「彼女は。君のことをどう思っていたのかな」
「女王がですか」
「それは考えたことがあるかね」
静かに八条に対して述べてきた。
「彼女がな」
「といいますと」
今の彼の言葉には答えられない八条だった。
「私には。少し」
「わからないのか」
「会ったことも話したこともありませんし」
彼は言う。
「軍人としての能力もその人柄も知っていますが」
「それだけか？」
「！？」
こう言われてもまだ首を傾げるだけだった。
「私は特に」

「ふむ。相変わらずだな」
アッチャラーンはまだわからない彼を見て述べるだけに留めた。
「それならいい。話は終わりにしよう」
「左様ですか」
「しかし。それにしてもだ」
それでも言わずにはいられないといった顔で言葉は続けるのだった。
「君もな。少しな」
「私も？」
「もう少し女性を見た方がいいな」
「見ればセクハラに思われますが」
見事なまでにピントの外れた今の八条の言葉だった。
「ですからそれは」
「そうではない」
今の八条の言葉には呆れた声を出すアッチャラーンだった。
「そうではないのだ。具体的に言うとだ」
「はい」
「君ももう」
わざとゆっくりと話すのだった。
「そろそろ身を固めてもいい頃ではないのかね？」
「結婚ですか」
「そう、それだ」
あまりにも具体的な言葉であった。
「結婚だ。考えているのかね？」
「勿論です」
静かだがはっきりと答える八条だった。
「両親や兄弟からも言われております」
「八条家の嫡男でもあるしな」
八条家は日本、いや連合においてその名を広く知られた名門である。その名門の嫡男が長い間一人みであるのは流石に体裁のいいこ

とではなかった。
「だからこそ。そろそろ」
「私もそのつもりですが」
こうは言いはする。しかしであった。
「相手がいませんので」
「もう少し周りを見たらどうかね？」
アッチャラーンはここでさらに具体的に言ってきた。
「君もだ。周りをだ」
「周りを？」
「そうすればわかるのだが」
「見ています」
わかっていない者の言葉だった。
「それはもう。確かに」
「わかっているというのかね？」
「はい」
ここでもわかっていない者の言葉を述べる八条だった。

## 第三十四部第三章　仲介は聞かれずその二十九

「肝心の相手がいませんので」
「だから少し落ち着くことだ」
アッチャラーンは内心かなり呆れながらまた彼に言ってきた。
「少しな。落ち着いて周りを見るのだ」
「ですか」
まだわかっていない。わかる筈もなかった。
「周りを」
「そうすればわかる」
アッチャラーンは親切に述べる。
「それでな。わかる筈だ」
「周りをですね」
「そうだ。すぐにわかる」
彼は何度も語る。この言葉を八条の心に刻み込もうとする。しかしそれは無駄な努力でしかなく八条にはどうしてもわからないことだった。
「見てはいます」
「そうなのか？」
「しかしです」
ここでもわかっていない者の言葉を出すのだった。
「私は昔から女性に縁がありませんので」
「そうなのか」
「これも残念なことですが」
何度も何度もわかっていない者の言葉を口に出す。
「学生時代から。いえ物心ついた時から」
「女性には縁がないのか」
「はい、チョコレートもです」
バレンタインのチョコレートのことである。この時代では連合全

体に広まっている風習である。女の子が男の子にチョコレートを渡すことがである。
「義理のもの以外は貰ったことがありません」
「一つもか」
「そうです。一つも」
自分でこう思いこんでいるだけである。
「貰ったことがありません。誕生日のプレゼントも」
「ないのかね」
「私も義理と本気の違いはわかります」
八条の今の言葉は心の中で全力で否定するアッチャラーンだった。
「それはありません」
「ならわかった」
ここでこの場は諭すことを放棄してしまったのだった。アッチャラーンも遂に。
「それなら仕方がないな」
「はい」
「話はこれで終わりにしよう」
「わかりました。それでは」
「私も仕事に戻る」
まずは自分のことを述べた。
「君もな」
「これから内務省に行かせて頂きます」
「内務省にか」
「内相が是非来て欲しいと仰っていまして」
その金である。連合においても美女で知られる彼女がである。
「それでです」
「内相がか」
「そうです」
何も気付いていない顔で相変わらず言っていた。
「そうですが」

「いいことだがな」
「だがな？」
「いや、いい」
やはりここでもここから先は言おうとはしないアッチャラーンだった。
「しかしだ。内相も」
「内相も？」
「大変だな」
「はい、全くです」
今のアッチャラーンの言葉にも真意が読めていなかったのだった。
「あれだけの激務をこなされておられるのですから」
「激務なのは事実だ」
それはアッチャラーンもよくわかっていた。内務省とは国のかなりの部分を取り仕切る部署である。その長ともなれば当然激務となる。
「しかしそれは誰もが同じだ」
「それもその通りですが」
「むしろ君の方がだ」
そしてこう言ってきた。

## 第三十四部第三章　仲介は聞かれずその三十

「国防省設立の時やエウロパ戦役の時は」
「一過性のものでしたから」
謙遜しての言葉だった。
「それは別に」
「しかし内相が多忙なのは事実だ」
八条がどうしてもわからないのを見て言葉を変えてきた。
「しかし。その中でだ」
「その中でとは」
「あえて会談の場を設ける」
彼が次に言ったのはこのことだった。
「そのことについてはだ」
「それだけ重要な話なのですね」
何処までもわかっていない八条だった。
「それならば私も」
「何度も言うが鏡は見ているかね？」
「鏡を？」
「自分の顔をよく見てみることだ」
アッチャラーンは真面目に彼に話した。
「よくな。見てみるのだ」
「よくとは」
「孫子だったが」
何とか彼にわからせようと古代中国の古典まで出してきた。
「敵を知り己を知れば百戦危うからず」
「その通りです。双方を知らなければ戦争も何もできるものではありません」
それがわからない八条ではなかった。
「政治もまた」

「わかっているな、これは」
「そのつもりです」
謙遜だったがはっきりとわかっている言葉だった。今度は。
「これこそ政治においても軍事においても基礎となる認識です」
「それならばだ。鏡を見ることだ」
アッチャラーンは八条のその秀麗な顔立ちを見て言うのだった。
彼は連合の政治家で最も端麗な顔立ちをしていると評判になっているのだ。
「よくな」
「鏡は家にありますが」
またわかっていない言葉になった。
「それこそ数え切れない程に」
「それで自分の顔を見てみるといい。答えはそこに多少はある」
「内相のことでですか」
「そうだ。見てみることだ」
また話したのだった。
「よくな。それでだ」
「はい」
「内相が君を呼ぶ意味を考えてみることだ」
「そうなのですか」
「そういえばだ」
わざと目を横にやってすぐに戻してからまた言ってきた。
「彼女もまだ独身だったな」
「確かそうでした」
実は彼女もまだ未婚なのである。
「実生活でも極めて質素で貞節だとか」
「時計の様な生活だともな」
「乱れたところは何一つありません」
そこまで真面目一方と見られているのである。
「人間関係においても」

「交際している相手も聞きません」
それもなのだった。
「学生時代に異性と手紙を交えさせたことはあったそうですが」
「手紙をか」
「電子のものだそうですが」
所謂メールである。二十一世紀から人と人をつなぐものの中で重要なものとなっている。当然ながらこの時代においてもそうである。
「二度か三度程」
「そんなものはな」
何でもないといった調子のアッチャラーンの返答だった。
「誰でもだ」
「誰でもですか」
「そうだ。誰でもしていることだ」
こう言って何でもないと言い捨てたアッチャラーンだった。
「それはな。わしも妻や娘と孫娘達の他にも」
「他にも？」
「メール位はいいだろう」
今の失言に咄嗟に自己弁護でかわす。口の堅い八条相手でもだ。
「それはな」
「メールは誰でもしていることです」
やはり彼はわかってはいなかった。
「そうですね」
「そうだ。君もだな」
「メールはかなり来ています」
流石に国防長官であり八条家の嫡子となればだ。
「女性の方からも来てはいます」
「ならそれは」
「メールは何ということはありません」
やはりわかっていなかったのだった。
「それでです」

「ううむ」
また八条の鈍感さに呆れながらも話を聞いていく。
「それで内相だが」
「はい」
「彼女は独身だ」
またこのことを八条に告げた。
「独身だからだ」
「独身だと何かあるのですか」
「いや、独身だぞ」
今の八条の鈍感さには思わず声に出して呆れてしまった。
「独身の女性なのだ」
「それが何か」
「そして君も独身だ」
「その通りです」
「そのことをよく考えてみることだ。よくな」
「わかりました」
言葉ははっきりしていた。しかしどうしても要領を得たものではないこともわかるものだった。
「それでは今から」
「気付けば何事も早いのだ」
これで本当に最後にするつもりのアッチャラーンだった。
「全てがな」
「それはそうですね」
「わしの今の言葉。よく覚えていてくれ」
最後に言った。
「いいな」
「それでは」
こうして八条はアッチャラーンに別れの挨拶をしてそのうえで内務省に向かった。アッチャラーンは彼の姿が部屋から消えたうえで。一人呟いた。

「幾ら鋭く優れていてもどうしてもわからないものもあるのだな」
彼を見ての言葉だった。今本人には言わなかったが。それでも言わずにはいられなかったのだった。彼の感情としてどうしても。

## 第三十四部第四章　女虎の最期その一

女虎の最期

連合の仲裁も結局失敗に終わった。それを聞いたシャイターンはすぐに決断を下したのだった。
「最後の攻撃だ」
「最後のですか」
「そうだ、これで終わらせる」
こう周りの者に告げていた。
「王宮をさらに取り囲め」
「はっ」
「空からの攻撃もさらに激しいものにさせよ」
指示を次々に出す。
「王宮を完全に破壊するつもりでだ」
「王宮をですか」
「そうだ」
また言うのだった。
「そのつもりで攻めるのだ。いいな」
「それでは女王は」
「降伏を断ったのだ」
シャイターンはここでは言葉に己の感情を出すことはなかった。
「それならばだ」
「仕方ないのですね」
「連合の仲裁が最後だった」
やはりここでも己の感情を見せることはなかった。
「それならばだ」
「仕方ありませんか」
「死のうとしている者に対してそれ相応の死に場所を提供する」
彼はまた感情を見せずに言った。

「それもまた戦いだ」
「それもですか」
「虎には虎に相応しい死に場所がある」
こうも述べた。
「そしてだ。それに相応しい死に方もな」
「虎に相応しい死に方とは」
参謀の一人がその彼に問うた。
「それは一体何ですか？」
「虎は誇り高い生き物だ」
彼は言った。
「誇り高いな」
「それではその誇りに相応しいですか」
「見事な死を与える」
こうも言うのだった。
「今からな」
「だからこそですか。ここで」
「総攻撃をですね」
「その通りだ。総攻撃をだ」
この指示は変わらない。
「仕掛ける。いいな」
「わかりました。それではこのまま」
「総攻撃を」
参謀達が述べる。
「では私も行こう」
「主席もですか」
「そうだ。陣頭に立つ」
自ら最前線に向かうというのだった。実際に足を先に出す。そうしてそのまま王宮を包囲しているその最前線に向かうのだった。
参謀や直衛の兵士達も同行する。そうして彼は最前線に立ちそのうえで指揮にあたる。最前線では無数の砲撃や攻撃が行われていた。

「撃て、撃て！」
「まずはあの建物を破壊せよ！」
「重砲隊、前へ！」
前線にいる将校達の攻撃命令が聞こえてきていた。
「このまま敵を破壊しろ！」
「あの戦車にバズーカを！早くしろ！」
「状況はどうなっている？」
シャイターンは前線の指揮を執るシースターシ将軍に問うた。武骨な顔の男で陸戦服がよく似合う。ヘルメットもブーツも砂塵で汚れている。
「はっ、総攻撃に入り一時間です」
彼は敬礼のうえでシャイターンにまずはこう述べた。
「その結果王宮へ間も無く突入できそうです」
「王宮の中にか」
「はい、そうです」
またシャイターンに対して述べるのだった。
「間も無く。それが可能です」
「そうか」
シャイターンは彼の言葉を聞いてまずは頷いた。

## 第三十四部第四章　女虎の最期その二

「それではだ」
「どうされますか？」
「空爆をさらに行え」
まずはこう指示を出した。
「そしてそれにより敵の防衛力を極限にまで落とせ」
「空爆ですか」
「ミサイル及び重砲による攻撃もだ」
それもだと告げた。
「徹底的に行え。その前にな」
「では突入ですね」
「その通りだ。陸戦部隊の精鋭を突入させる」
彼は言った。
「そしてだ」
「そして？」
「私も行く」
こう言うのだった。
「私もだ。いいな」
「主席もですか？」
「主席も王宮へ」
シースターシをはじめとした将官達は彼の言葉を聞いて思わず声をあげた。誰もが今の彼の言葉に対しては驚きを隠せなかったのだ。
「それはやはり」
「危険なのでは？」
「危険は承知だ」
しかし彼はその将軍達の言葉に対して何でもないように言葉を返すのだった。
「それはな。承知のことだ」

「ではそれでどうして」
「恩自ら行かれるのですか？」
「戦場に安全な場所なぞない」
彼は言った。
「だからだ。私も行く」
「ですが主席、それは」
「御自身で行かれることは」
「私が行かずして誰が行く」
しかし彼はこう言って彼等の言葉を受けようとはしなかった。
「違うか？指揮官である私が」
「それは」
「あまりにも」
しかし彼等は彼の言葉を今回はどうしても受けようとはしない。
難しい顔をしてどうにか断りそのうえで諦めてもらおうとしていた。
それがわかる今の彼等だった。
「ここは我等にお任せを」
「そうです」
こう彼に告げるのだった。
「ですから主席はこちらで」
「我等の戦いを御覧になって下さい」
「本来ならそうしていた」
シャイターンは王宮を見ながら述べた。
「私もな」
「ではどうして」
「今は」
「女王が戦っている」
そのブルコルジのことだ。
「彼女がな。今まさに陥落せんとする王宮でだ」
「そうだ。だから私は行く」
今の言葉は決意そのものだった。

「彼女と戦いにな。英雄を倒す者は」
「それは？」
「英雄だ」
王宮を見据え続けながらの言葉だった。
「だからだ。私が行こう」
「そうですか。英雄を倒す為に」
「御自ら」
「英雄は英雄によってのみ倒される」
彼の今度の言葉はこれあった。
「彼女もまただ。だからだ」
「そうですか。それで」
「主席は今」
「そうだ。わかったな」
あらためて将官達に対して告げたのだった。

## 第三十四部第四章　女虎の最期その三

「行く、王宮に」
「はい、それでは」
「我等もまた」
将官達は晴れた顔になり彼に対して一斉に敬礼したうえで述べてきた。
「共に行かせて下さい」
「是非共」
「そして私の戦いを見るのだ」
シャイターンは不敵な笑みと共に彼の言葉を受け述べた。
「英雄を倒す戦いをな」
「はい、では」
「今よりその戦いを」
こうしてまずは徹底的な総攻撃が行われた。そのうえで今ティムール軍は守りが極限まで弱まった王宮に雪崩れ込んだ。その中にはシャイターンの姿もあった。
「ティムール軍が王宮に入りました！」
「門が次々と占領されていきます！」
総攻撃をかろうじて生き残ったアヤグーズ軍の将兵達が悲鳴に似た声をあげる。
「最早突入を防ぐことはできません！」
「もう。これでは」
「怯むことはありません」
総司令部もまたあちこちが破損し火が噴いていた。倒れている将兵すらいる。しかしブルコルジはその中で毅然と立ち生き残った将兵達に対して告げるのだった。
「我等は最後まで戦うのみです」
「それでは陛下」

「このまま」
「そうです。最後まで戦うのです」
今ブルコルジは彼等に言った。
「アヤグーズ軍の誇りを彼等に見せるのです」
「そうだ、誇りだ」
「我等の誇りだ」
女王の言葉を聞いた彼等は口々に立ち上がる声を出した。
「その誇りを見せる為にだ」
「戦うのだ、最後までな」
「皆銃を手に取れ！」
自然に指示が出された。
「いいな、一人でも多く倒せ！」
「敵に背を向けるな！」
口々に叫びながら前を見据える。彼等も最後の戦いに向かうのだった。
王宮の中は極めて簡素な装飾で華美を好むシャイターンから見れば装飾にもならないものだった。しかし彼はその装飾を見て言うのだった。
「いい趣味だな」
「宜しいのですか」
「らしい」
こう言うのだった。
「あの女王らしい」
「女王らしいというのですね」
「そしてアヤグーズ王家らしい」
こうも述べた。
「あの王家らしい。簡素でいい」
「それがいいと仰るのですか」
「そうだ。らしくある」
彼はまた述べた。

「アヤグーズは尚武の国だったな」
「はい」
これはもう言うまでもない。建国から今にいたるまでその精強さで知られていた国である。ハサンの属国の中はおろかサハラの国の中で最もだった。
「それはもう」
「やはりアヤグーズといえば」
「そうだ。それらしい」
また装飾を見ながらの言葉だった。
「アヤグーズらしくな」
「左様ですか。らしくていいのですか」
「確かに私は華美なものを好む」
今彼等は王宮の庭の一つにいた。そこは緑の草や木々と白い花があり噴水のところにアラブの武装をした像があるだけだ。極めて簡素であった。
「しかし。それでもアヤグーズにはこの簡素が似合う」
「あくまでアヤグーズはそれだと」
「そうだ。これこそがアヤグーズだ」
言いながら周りの者達に目配せをする。すると彼等はすぐにその庭に散りその全てを制圧したのだった。庭には敵兵はいなかった。
「簡素でそして武骨なのがな」
「そういえばこの宮殿にしろ」
「確かに」
彼等も庭から周りの王宮の建物を見た。どの建物も白く派手な色ではない。そしてその作りも極めて簡素で愛想がないとさえ思えるものであった。その建物を見るのだった。
「簡素なものです」
「離宮もまたそうですが」
「この簡素さ。気に入った」
満面に笑みをたたえて言うシャイターンであった。

「戦いによりかなり損傷を受けているがな」
「ではどうされるのですか？」
部下の一人が彼に問うてきた。

## 第三十四部第四章　女虎の最期その四

「この宮殿。一体」
「修復ですか」
「戦いで何かが破壊されるのは仕方がない」
彼はそれは仕方がないとしたのだった。この辺りは戦いの後で敵地であっても必ずその修復にあたる八条と同じであると言えた。
「しかしだ。それが終われば」
彼はまた言った。
「修復する。いいな」
「はい、それではそのように」
「修復ですね」
「そうだ。修復は忘れるな」
このことを強く言うのだった。言いながらも周りを見回す。庭に続く廊下はどれも白くしかも大理石すら使ってはいない。その石もまた白いだけのものだった。
「くれぐれもな」
「はい、それでは王宮も」
「そのように」
部下達は敬礼をして彼に応えた。そのうえでシャイターンはさらに指示を出した。
「それではだ。先に進むぞ」
「わかりました」
「アヤグーズ軍は強いな」
周囲では銃声ばかり聞こえる。それと共に断末魔の悲鳴もだ。そうした戦場にある音や声ばかりが聞こえる。そればかりがであった。
「中々前には進めないか」
「残念ですが」
部下の一人が苦い声で述べた。

「彼等は皆死を覚悟しております」
「命は天界でか」
シャイターンはそれを聞いてまた言ったのだった。
「そういうことだな」
「はい、おそらくは」
「それしかないかと」
「戦いで死ぬことこそムスリムの喜び」
イスラムのジハードから来る考えなのは誰もがわかっていることだった。ジハードは解釈がかなり多様にできるものであり異教徒との戦いでなくともその解釈が可能なのだ。だからサハラでは戦争がなくならないという一面にもなっている。大義名分として絶好のものだからだ。
「ムスリムのな」
「それですね。やはり」
「彼等はだからこそ」
「ならば天界に送ってやることだ」
シャイターンも最早降伏を呼び掛けることは考えなかった。
「いいな、向かって来る者はだ」
「土壇場で降伏する者は？」
部下の一人が今のシャイターンの言葉とは逆のことを問うてきた。
「そうした者はどうされるのですか？」
「そうした者は武装解除させよ」
まずはこう返すシャイターンだった。
「そしてだ」
「そして？」
「降伏を受け入れよ」
こう言うのだった。
「降伏をな。いいな」
「そうした者はいいのですか」
「戦意をなくした者には何の興味もない」

素っ気無くさえある簡潔な言葉だった。そこには確かに何の関心も寄せていない、どうしたことがわかる味気のない言葉であった。
「また武器を持たない者を相手にする気もない」
「そうした者もですか」
「私が興味があるのは武器のある者だ」
彼は言った。
「武器のある者のみだ」
「ムスリムとしてですね」
「ムスリムならば戦うのは武器のある者に対してだけだ」
これこそが彼の考えであった。実際にティムール軍は規律の厳しい軍であり捕虜や一般市民への攻撃は厳禁である。若しそれに反したならば死刑である。
「武器を持たない者はだ」
「放っておくと」
「そうだ。捕虜にして速やかに後方に送るか」
「若しくは」
「適当な場所に回しておけ」
それだけであった。

## 第三十四部第四章　女虎の最期その五

「いいな。あくまで武器を持つ者と戦え」
「はい、それではそのように」
「捕虜に対しても」
彼等は口々にシャイターンの言葉に頷く。こうしてアヤグーズ軍の将兵に対する処遇が確認されそのうえでさらに進撃するのだった。
ティムール軍はさらに王宮の中を進む。しかしアヤグーズ軍の反撃は粘り強く一室一室を占領するにあたってもティムール軍の将兵達は夥しい時間と犠牲を払っていた。
「くそっ、催涙弾を放て！」
「は、はい！」
部屋に入ろうとするとすぐに銃撃が来て先頭の兵士が胸を貫かれた。後続の兵士達がすぐに彼を安全な場所に運びそのうえで将校が指示を出した。
すぐに部屋の中に催涙弾が投げ込まれる。白い煙が部屋の中を満たす。その中をガスマスクを着けた兵士達が突入し咳き込む敵兵達を射殺していく。
胸に銃撃を受けた兵士は重傷であった。しかし何とか心臓は外れており生きていた。
「おい、しっかりしろ！」
「すぐに医療兵が来るからな！」
「は、はい」
その兵士は上官達の呼び掛けに何とか反応していた。とりあえず息はあった。
「すいません、こんな目に遭ってしまって」
「いや、いい」
下士官の一人が彼に告げた。
「名誉の負傷だからな」

「そうですか」
「それより生きろ」
彼は負傷した兵士に言った。
「生きろ。いいな」
「生きるんですか」
「帰ったら結婚するんだろう？」
そして兵士に問うのだった。
「帰ったらな。だから今はだ」
「生きるんですか」
「幸せになりたかったら生きろ」
彼はまた言った。
「いいな。絶対にだ」
「わかりました。何とか」
兵士は医療兵に運ばれ後方で治療を受けた。何とか一命は取りとめそのうえで戦場を離脱した。ティムール軍もかなりの戦死者や負傷者を出しながらも何とか王宮を進んでいた。しかし犠牲は増えるばかりであった。それを受けてシャイターンの指示は変わらなかった。
「そのまま進め」
「ですが主席」
「損害が二割を超えました」
周りの者達が言うのだった。シャイターン自身もその手に銃を持っている。それを放ったこともこの戦いにおいて二度や三度ではなくなっていた。
「このまま進むとさらに」
「それでもこのままですか」
「そうだ。元より毒ガスの類は持ってはいない」
「はい」
ティムール軍にはそうしたものはない。サハラにおいてＢＣ兵器は使用を厳しく禁じられており開発もとっての他になっているので

ある。
　これは連合でもエウロパでも同じでマウリアにおいてもそうしたものの開発はないのだ。だからこそここでシャイターンは言うのだった。
「何があろうともな」
「そうですか。このままですか」
「そうするしかない」
　こうも言った。
「攻めていくぞ」
「それではこのまま」
「援軍を入れるのだ」
　これが今の彼の指示だった。
「不足した戦力はな」
「そうして徐々にですね」
「そう。徐々に先に進む」
　彼はまた言った。
「当然私もだ」
「主席もですか！？」
「ですがそれは」
「何度も言うが危険は承知のことだ」
　それはもうわかっているというのだった。彼は実際に今も発砲した。それにより前にいたアヤグーズ軍の将兵を撃ったのだった。

## 第三十四部第四章　女虎の最期その六

「戦場にいる限りはな」
「あくまでそう進まれますか」
「女王の下へ進む」
彼の決意だった。
「いいな」
「それでは」
「我等も」
シャイターンだけを行かせるわけにはいかなかった。彼等にしても。
「御供させて頂きます」
「このまま先に」
「よし、そしてだ」
ここでまた彼は言った。
「女王のいる場所はわかったか」
「はっ」
将官の一人が敬礼と共に彼に応えた。
「無論です。女王は総司令部から移りました」
「総司令部から離れたのか」
「既にそこは我が軍が占拠しました」
総司令部も陥落したというのだ。戦いが進んでいるのは間違いない。総司令部を陥落させたということは敵の最後の防衛ラインを破ったということだからだ。
「ですが女王はそこから逃れ」
「何処に向かった？」
「王宮の塔です」
彼は述べた。
「そこに逃れました。残っている兵達と共に」

「そこに逃れたのか」
「そうです」
将官はまた彼に述べた。
「そこに逃れました。そしてそこで戦うつもりです」
「わかった」
シャイターンはその言葉を聞いて頷いたのだった。そのうえでまた言う。
「それではだ。王宮の塔に兵を進めるぞ」
「わかりました。塔にですね」
「そしてそこを陥落させる」
いよいよ最後の戦いであった。この王宮における。
「いいな。それでな」
「了解です」
皆彼の言葉に敬礼する。そうして今最後の戦いに向かうのだった。王宮の戦いはいよいよ最後の局面を迎えようとしていたのだった。
塔ではアヤグーズ軍の残った戦力が集まろうとしていた。しかしそれが適わない戦力もいて彼等はそれでもそれぞれで戦うのだった。
「いいか、最早撤退は適わない！」
「しかしだ！」
その彼等を率いる指揮官達が叫ぶのだった。
「それでも戦うことを諦めるな！」
「ここが死に場所だ！」
「わかっております！」
「無論です！」
兵士達も前方にいるティムール軍に対して攻撃を放ちながら応える。
銃撃は激しいものだった。しかし彼等は一歩も引くことなく戦いを続ける。
そこにティムール軍の銃撃が来た。それにより忽ち数人倒れる。しかしそれでも彼等はまだ退かずそのうえで反撃を仕掛ける。彼等

の戦意は衰えるところがない。
「怯むな！」
ティムール軍の将兵達の言葉だった。
「怯むな。いいな！」
「撃て！倒せ！」
ティムール軍の将官達が指示を出す。そうしてそのアヤグーズ軍の兵士達に対して攻撃を命じる。
「グレネードを使え！」
「あれをですか」
「そうだ、あれを使え」
こうした指示まで出されていた。
「あれで一気に吹き飛ばすぞ」
「ですが閣下」
佐官の一人がその指示に顔を曇らせる。
「あれを使えばそれこそ部屋の中の何もかもが吹き飛びますが」
「王宮への損害が」
別の佐官も彼にその曇った顔で言ってきた。
「尋常ではありませんが」
「それでもですか」
「そうだ、それでもだ」
彼は言い切った。
「今はそんなことを言っている場合ではない。撃つのだ」
「損害はいいのですね」
「そうだ、構わん」
徹底的にやれということだった。軍人らしい言葉であった。

## 第三十四部第四章　女虎の最期その七

「構うことはない。いいな」
「そうですか。それでは」
「グレネードで敵兵のいる部屋を」
「吹き飛ばす。責任は」
将官はさらに言った。
「私が受ける」
「閣下がですか」
「指示を出したのは私だ」
今この場にいる全ての者に聞こえるように言っていた。これこそが彼の決意であり覚悟であった。軍も官僚組織でありその責任の所在ことが問題であるからだ。
「いいな。だからだ」
「わかりました」
「主席にはお伝えしておけ」
「はっ」
すぐに軍用携帯電話でメールが出された。
「今それをしました」
「よし。それではグレネードランチャーを出せ」
こうしてそのグレネードが出されそのうえでそれが敵兵達のいる部屋に対して放たれた。それにより敵兵達は確かに吹き飛ばされた。しかし部屋の中の装飾品も共に跡形もなくなってしまいそのうえ部屋も無残なまでに傷を受けた。しかしそれでも敵兵はいなくなった。
シャイターンはそのことをすぐに聞いた。しかし彼はそれをよしとした。それどころかこうまで全軍に対して指示を出したのだった。
「部屋は全てそうしろ」
「敵兵のいる部屋はですか」

「そうだ。全てグレネードで吹き飛ばせ」
こう言うのだった。
「より早くすべきだったか」
「それで宜しいのですか？」
「思えば私も躊躇っていた」
右手を口元に当てて後悔する顔になっていた。
「戦争とは何事も徹底的に行うものだ」
「はい」
「ならば。こうするべきだった」
言葉を続ける。
「早くからな。そうすれば損害はより軽微なものになった」
「ですが王宮の損害は」
「わかっている」
すぐに将官の一人の言葉に応えた。
「それはな。もうわかっている」
「それならば」
「私も王宮の損傷は恐れていなかった」
それは先程彼自身が述べた通りであった。
「しかし」
「しかし？」
「まだ甘かったということだ」
また後悔する顔になって述べたのだった。
「私もな。躊躇していた」
「左様ですか」
「グレネード等を使うことは意識的に避けていた」
自分でも気付いてはいた。しかしそれでも避けていたのだ。何故なら王宮の損傷を恐れていたからだ。やはり彼もそれを考慮していたのだ。
「それを使えば損傷はかなりのものになるからだ」
「だからですか」

「そうだ。だからこそ許可する」
彼は言った。
「グレネード等の使用をな」
「ではこの件は」
「褒賞を約束せよ」
処罰どころかこれであった。
「いいな。彼には褒賞だ」
「はっ、わかりました」
「よく私に気付かせてくれた」
そしてまた言った。
「いや、決断させてくれた。礼を伝えておけ」
「畏まりました。それでは」
こうしてその将官にはシャイターン自身から褒賞を約束され礼が述べられた。そうしてそのグレネードによる攻撃がはじめられた。それはかなりの威力でありアヤグーズ軍は次々に部屋ごと吹き飛ばされティムール軍の進撃はかなり早まったのであった。
このことはアヤグーズ軍の最後の砦となった塔にも伝わった。ブルコルジはその最上階において報告を聞いて静かに述べたのだった。

## 第三十四部第四章　女虎の最期その八

「最早容赦はしないということですか」
「はい。おそらくは」
「そうかと」
周りの生き残り何とかここまで辿り着いた部下達もそれに応えて頷く。
「グレネードにより皆吹き飛ばされています」
「そして王宮もまた」
「王宮には然程意味はありません」
しかしブルコルジはそれはどうでもいいというのだった。
「幾ら焼き払われようとも」
「王宮が！？」
「ですが陛下、この王宮は」
「建物は修復すれば済みます」
やはりそれはどうでもいいというのだった。
「それだけで終わりです。しかし」
「しかし？」
「人はそうはいきません」
ここで苦々しい声になっていた。
「人は死ねば終わりです」
「人はですか」
「そうです。死ねばそれで終わりです」
また言うのだった。
「死ねばそれで終わりです。全てが」
「人は死ねば終わりということですか」
「そうです。死んだならば天界に行きます」
それで終わりだというのである。ここでもムスリムの言葉が出ていた。ブルコルジは彼等が天に召されると述べたうえでまた言うの

だった。
「その将兵達は二度と帰ってはきません」
「その通りです。では陛下は彼等のことが」
「私の為に」
声に悲痛な色が宿った。
「命を捨ててくれた兵士達。そのことは忘れません」
「彼等も陛下の為に戦ったのです」
「そうです」
女王の今の言葉を受けて周りの将兵達が言ってきた。彼等の誰もが銃を手にしており身体のところどころに傷を受けていた。それこそが死闘の傷跡であった。
しかし彼等はその傷跡を気にすることなく。女王に対して言うのだった。
「そして我々もまた」
「ここにいるかいないかだけの差です」
「貴方達は・・・・・・」
「我等はアヤグーズ軍の人間です」
屈託のない笑みでの言葉だった。
「それならば。アヤグーズの為に戦うのは当然です」
「そして陛下の為にも」
その笑みでの言葉であった。
「彼等も我等も先に天界に行くかどうかだけの差です」
「そして悲しまれることはありません」
「悲しむことはないと」
「その通りです」
今度はこう述べるのだった。
「我等は天界に行くのですから」
「地獄ではありません」
彼等はここでもそれぞれの口で女王に対して告げる。言葉には淀みがない。

「それでどうして命をおろそかにしましょう」
「戦い、それにより天界に行けるのなら本望ではありませんか」
「それは私も同じです」
ブルコルジ自身もだというのだった。
「戦場で死ぬ」
「はい」
「元よりそのつもりです。それでは」
「陛下、お先にお待ちしております」
「天界で」
「アヤグーズの最後、華々しく飾りましょう」
軍服の上のマントも戦塵で汚れている。しかし今そのマントを颯爽とたなびかせ宣言するかのように今塔にいる将兵達に告げた。
「間も無く敵がこの塔を包囲します」
「既に彼等が近付いています」
「それでは」
「全軍出撃です」
守ることはしなかった。ここに至っては。

## 第三十四部第四章　女虎の最期その九

「そして最後の戦いを飾りましょう」
「そうですね。彼等に我々の最後の戦いを見せましょう」
「アヤグーズ軍の最後の戦いを」
「虎は死してその皮を残します」
女王はここでまた言った。古来よりある諺だ。この諺は連合にある諺だがブルコルジは己のその二つ名を意識してこの諺を出したのである。
「しかし人は」
「死してその名を残すですね」
「そうです。その死こそが重要なのです」
女王は毅然として前を見据えて言った。言葉と共に前に出る。
「今その死を見せましょう」
「では今より」
「全軍総攻撃です」
塔の最上階にいる全ての将兵達を全て後ろに置いての言葉だった。
「ここで我等は死にます。一人残らず」
「アッラーーーフアクバル！」
「アヤグーズに栄光あれ！」
彼等は一斉にアッラーと祖国を讃え塔を出た。そして今完全に自分達を包囲しているティムール軍に対して突撃を仕掛ける。そのうえで激しい攻撃を加えるのだった。
「アヤグーズ軍が出て来ました！」
「全て来ました！」
「そうか」
その包囲するティムール軍の中にはシャイターンもいた。彼はここでも陣頭指揮にあたり目の前にいる敵軍を見据えていたのだった。
「それではだ。こちらも敵を完全に取り囲め」

「はい、それでは」
「このまま」
「取り囲みそのうえで殲滅せよ」
こうも指示を繰り出すのだった。
「一兵残らずだ」
「わかりました」
こうしてアヤグーズ軍は取り囲まれそのうえで攻撃を浴びせられる。彼等はそれでも果敢に戦い続ける。攻撃の手を緩めず損害ももものとはしなかった。
「まだだ、まだ戦える！」
「動ける者は立ち上がれ！」
言っている側から銃撃を受けて倒れる兵士がいる。ヘルメットに銃口が開きそこから鮮血を吹き出して倒れる。心臓を貫かれ口から血を出し銃を落として倒れる。一人、また一人と倒れていく。しかしそれでも彼等は戦い続け戦意を衰えさせることはなかった。
そしてその彼等の先頭に彼女がいた。己の顔の側をビームが通り過ぎ目の前でグレネードが炸裂してもそれでも臆することはない。目の前で己の軍の兵士達が吹き飛ばされてもだ。
「何っ、怖くないのか！？」
「目の前で爆発が起こっても平気なのか」
ティムール軍の将兵達は戦場の真っ只中で指揮を執り続ける女王を見て唖然とさえした。
「死を恐れていないな」
「まさに虎か」
そのうえでまた彼女の二つ名を出すのだった。
「女虎か。まさしくな」
「見事だ」
そしてシャイターンはその彼女を見てここでも感嘆の言葉を口にした。
「惜しいがな」

「はい。その命を捨てるというのは」
「やはり」
「しかしだ。彼女の決断は堅い」
それは微動だにしないものだった。シャイターン自身の説得にも宗主国であるハサンの説得にもレンゴウの説得にも心を変えなかった。そして今なのだから。
「ならば。その決断に応えよう」
「それでは主席」
「攻撃の手を強めよ！」
塔の周りにいる彼等を取り囲んだままでさらに命令を下したのだった。
「銃撃を強めよ。狙いを定める必要はない！」
「狙いはいいのですか」
「ただ撃て！吹き飛ばすつもりでだ！」
これが今の彼の指示だった。
「数で押せ。いいな！」
「わかりました！」
こうしてティムール軍は最早狙いすら定めず銃をアヤグーズ軍に向けて撃ちまくる。グレネードも放たれそれにより塔の前の多くの兵士が吹き飛ばされる。しかしそれでも彼等は戦いを止めず突撃さえする。だがそれはティムール軍の数を使った人の盾により防がれる。しかしそれでも攻撃を続け数が減らされようとも果敢に向かい続けていた。
アヤグーズ軍の将兵の数は減り続け遂には百人を切ろうとしていた。どの将兵も深く傷ついている。周りには彼等の屍が転がり血生臭い有様だった、しかしその鮮血と戦塵の中を彼等は戦い続ける。何があろうとも恐れはしないといった姿で。
「我等の数が百人を切りました」
「はい」
ブルコルジはその生き残った僅かな将兵のうちの一人から報告を

聞いて頷く。

## 第三十四部第四章　女虎の最期その十

「遂にですね」
「どうされますか？」
「言った筈です」
女王の言葉はここでも変わらない。
「戦うのみです。最後まで」
「最後の一兵までですか」
「降伏したい者は降りなさい」
それはいいというのだった。
「しかし。それをよしとしない者は」
「よしとしない者は」
「突撃です」
これが最後の指示であった。
「総員突撃に参加するのです。いいですか」１０
「はい、それでは」
「我々は」
今ここで降ろうとする者はいなかった。誰もが武器を手にしたまま毅然とした顔で女王の周りに集まる。その数は確かに見る影もなく減っていたがそれでもだった。
「突撃に加えさせてもらいます」
「是非」
「それではです」
女王は周りに集まるその彼等に対して告げる。
「前へ」
「前へ」
「突き進みます。そして最後の一人まで戦いなさい」
こう指示を出したのだった。
「それが私の今の命令です。いいですね」

「わかりました。それでは」
「今より」
「総員突撃です」
またこの命令を残った者全てに告げた。
「いざ、天界へ」
「はい！」
こうしてブルコルジを先頭にして全軍取り囲むティムール軍に対して突き進んだ。ティムール軍はその彼等に対して銃撃を加えグレネードを放った。とりわけグレネードの集中攻撃は強烈で彼等を瞬く間に吹き飛ばしてしまった。その後に残ったものは何もなかった。
「終わったな」
「はい」
将官の一人がシャイターンの言葉に頷く。
「これで完全に」
「アヤグーズ軍は滅んだ」
その何もなくなった場所を見ながらの言葉だった。最早そこにあるものは黒い硝煙だけで屍一つなかった。何もかもが消し飛んでしまっていた。
「ここにな」
「そしてアヤグーズ王国も」
「今完全に滅んだ」
このことも言ったのだった。
「ここにだ。完全にだ」
「確かに」
「アヤグーズ王国が遂に」
周りの者達もそのことを実感しようとしていた。戦場の激昂が次第に収まってきていた。
「滅亡したのですね」
「これで完全に」
「女王も死んだ」

次に言うのはブルコルジに関してであった。
「これでな。完全に死んだ」
「遺体が見当たりませんが」
「グレネードで消し飛ばされたようです」
「ならばそれでいい」
彼は遺体が見つからなかったのをそれでよしとした。
「彼女は死んだ」
「それは」
「このことは間違いがない」
それは最早言うまでもなかった。無数のグレネードを浴びてそれにより吹き飛ばされた。それはもう誰もが疑うことのない現実であった。
「ならばだ。それでよい」
「左様ですか」
「戦死した両群の将兵の遺体を集めよ」
そのうえでこの指示を出したのだった。
「そしてだ」
「埋葬ですか」
「そのうえで弔うのだ」
このことを告げるのも忘れなかった。

## 第三十四部第四章　女虎の最期その十一

「両軍の全ての将兵をな。ムスリムの慣行に従いだ」
「わかりました」
このことも伝えられ頷かれた。
「それではそのように」
「両軍の将兵を」
「戦いは終わった」
シャイターンは塔の前のその屍達を見ながら告げた。
「ならば最早敵も味方もない」
「敵も味方もですか」
「そうだ。だから双方共弔うのだ」
彼はさらに言う。
「敵味方の区別なくな」
「了解しました」
「最後にだ」
ここで顔を横に向けた。その先には王宮の中央部があった。王の間がある場所である。
「アヤグーズ王国の文官達で残っている者達はいるか」
「彼等ですか」
「そうだ。彼等と会おう」
こう言うのだった。
「戦いは終わったがそれは戦闘だけのことだ」
戦場での戦争は確かに完全に終わった。しかしそれは戦場だけのことでまだ政治では終わってはいない。彼が言うのはこのことだった。
「だからだ。彼等と会い」
「政治として終わらせるのですね」
「そうだ。場所はここだ」

この王宮だというのである。
「ここで話をしそのうえで調印する。いいな」
「では彼等を呼んできます」
「そうしてくれ。まさか逃げ去ったわけではあるまい」
シャイターンはそれはないと思っていた。アヤグーズ王国は武官だけでなく文官達もブルコルジ、そしてアヤグーズ王家に対して強い忠誠心を持っていた。その彼等が主を見捨てて逃げる筈がないと見ていたのである。そしてその見方は当たっていたのだった。
呼び掛けをしてからすぐだった。王宮の王の間に向かう途中で廊下を進む彼に対して若い将校が来た。そうして一礼してから彼に対して報告してきた。
「アヤグーズ王国の宰相が来られました」
「来たか」
「これまで王宮のシェルターにおられたそうです」
「そこに避難していたのだな」
「はい」
将校はシャイターンの声にはっきりとした言葉で応えた。
「その通りであります」
「そうか。シェルターの中には」
「まだ見つけていないシェルターがあったのですな」
「全て発見し制圧したと思っていましたが」
彼の周りにいる将官や参謀達はこう言って目を顰めさせた。
「そこにいたのですな」
「どうやら」
「しかしだ」
ここでシャイターンはそのことはまずは置いておいて言葉を出すのだった。
「宰相が出て来たのだな」
「そうです」
「そして私と会いたいというのだな」

「その通りです」
「わかった」
シャイターンはそれを聞いて確かな声で頷いた。
「それではだ。会おう」
「会われる場所はどちらで」
「決まっている」
言うまでもないといった口調だった。
「王の間だ」
「そちらですか」
「そこで会おう」
当初の考え通りであった。
「アヤグーズ王国宰相をそこに案内するのだ」
「わかりました。それではすぐに」
「私もすぐに向かう」
既に向かっている。だからこれは言うまでもないことであったがあちら側にも知らせる為にあえて言ったのである。

## 第三十四部第四章　女虎の最期その十二

「それでいいな」
「はっ、それでは」
こうし最後の会談の場所が取り決められ両者はその王の間で会うことになった。程なくしてシャイターンは王の間に到着しオ玉座を挟んで左手に位置した。後ろには将官や参謀達が控えている。そして玉座のところから敷かれている一条の紅い絨毯を挟んで右手にスーツの男達がいた。文官であるのは一目瞭然だった。
「はじめまして」
彼等の中央にいた初老の中肉中背の男が頭を垂れて一礼してきた。
「ティムール共和国主席メフメット＝シャイターン主席ですね」
「そうだ」
シャイターンは顔をあげたままで彼の問いに頷いてみせた。声だけで。
「そして貴殿は」
「私はアヤグーズ王国宰相です」
まずはこう名乗ったのだった。
「サリーといいます」
「サリー殿か」
「はい」
まずは簡単な挨拶が交えられたのであった。
「この度は」
「そうだな。こうした状況で会いたくはないものだ」
シャイターンは言った。
「だが。それも仕方のないことだ」
「そうですね。それは」
「戦争はこの世の常」
少なくともサハラではそうである。千年の間戦争がなかった日は

ない程だからだ。
「そしてその結果もだ」
「では主席」
サリーはあらためて彼に対して言ってきた。
「お話をはじめますか」
「そうだな。こちらの言うことはわかっていると思う」
シャイターンは言うのだった。
「既にな」
「降伏ですか」
「女王は死んだ」
彼はまた言った。
「そしてアヤグーズ軍の将兵達もだ」
「皆ですか」
「最早アヤグーズ王国には国家元首も軍もない」
全てなくなってしまったのだった。これまでの、特に先程までの戦いにおいて。アヤグーズは国を護るものを全てなくしてしまったのである。
「全てな」
「はい」
サリーは彼の今の言葉にも頷いた。
「わかっております」
「では言おう」
シャイターンはここまで話してまた言ってきた。
「我等の要求はだ」
「降伏ですか」
「無条件降伏だ」
サリーの今の言葉を訂正させてきたのだった。
「無条件降伏だ。いいな」
「無条件降伏・・・・・・」
「最早拒むことはできないと思うが」

サリーを見据えての言葉だった。そこには勝者の覇気があった。だがそれに対するサリーも怖気付いてはいなかった。卑屈になることなく姿勢を正してそこにいた。
「貴殿等を護るものはもうないのだから」
「それはわかっています」
わからないでここに来ている筈もなかった。
「それは」
「では。わかるな」
「わかっております。それでは」
サリーはまたシャイターンの言葉に対して頷いた。そのうえで言うのだった。
「無条件降伏の調印ですが」
「後で正式に調印するとしてだ」
今シャイターンの周りにいるのは武官達ばかりである。この仕事は文官の仕事だ。従って今はそれをできないのであった。文官がいないからだ。
「今はだ」
「口頭で、ですか」
「そうだ。どうするのだ」
サリーに対してまた問うていた。

## 第三十四部第四章　女虎の最期その十三

「降伏か」
出したものはそれだけだった。
「どうするのだ」
「私がここに来た理由は一つです」
その出された唯一のものに対する返答だった。
「それは」
「では。答えられるな」
「はい、その為に来ました」
また答えるサリーだった。やはりこの時においても毅然としていた。それはまさにアヤグーズの、一国の宰相として相応しいものであった。
「ここに」
「では聞こう」
シャイターンはここでも彼に対して言った。
「返答は」
「残された者を護る為に来ました」
これが彼の返答だった。
「護てくれるものがなくなった国の為に」
「そうか」
頷いたのは一言だった。
「それではだ。その様にな」
「はい。それで御願いします」
「これから貴殿等を護るのは私だ」
シャイターンは今堂々と告げたのだった。
「これからはな。いいな」
「わかりました」
「今アヤグーズ王国は滅んだ」

シャイターンはこのことを高らかに宣言した。そのアヤグーズ王国の王家の間においてだ。
「完全に。そしてその国の全ての領土と民はティムールのものとなる」
「ティムールのものに」
「そう、全て我等のものになった」
己の周りの武官達に対しても告げたのだった。
「全てな」
「はい、確かに」
「今この時を以って」
「正式な調印は後だ」
やはりこれは後であった。
「だが。今アヤグーズ王国は滅んだ」
まやこのことを宣言する。
「完全にだ。貴殿等もまた」
「我々ですか」
「そうだ」
今度はサリー達に対する言葉であった。
「貴殿等もまたこれよりティムールの者となるのだ」
「左様ですか」
「我等も」
「おって正式これからの役職を伝える」
登用するというのだった。実はシャイターンは敵国だった者に対しても降伏すれば寛容であり重職に就けることもよくあった。サハラにおいてはよくあることだったがシャイターンはこういうことにかけてはとりわけ積極的な男であるのだ。彼の個性の一つでもある。
「しかし今は休んでいることだ」
「わかりました」
「それで」
サリーがまたシャイターンに対して問うてきたのだった。

「最後に一つ御聞きしたいことがあります」
「何だ」
「陛下のことです」
滅んだ主のことをまだこう呼んでいたが彼は今はそれはあえて無視した。それを咎めることは決してせずに話を聞くのであった。
「陛下は最後まで戦われましたか」
「最後の最後まで戦士だった」
シャイターンは彼の今の問いにこう答えた。
「最後までな」
「左様ですか」
「立派だった」
次にはこう言った。
「二つ名だけのことはある。立派な軍人だった」
「そうですか。それを聞いて安心しました」
「葬儀は後程開くといい」
彼女への葬儀も許すというのだった。これも彼の寛容であった。

## 第三十四部第四章　女虎の最期その十四

「気が済むだけ盛大にな」
「有り難うございます」
「ブルコルジ女王を元帥に任じる」
そしてこうも告げたのだった。
「その栄誉を讃えよう。永遠にだ」
彼はブルコルジを己の軍の元帥にまで任じた。それを最後にこの降伏の会見を終えたのだった。これでティムールとアヤグーズの戦いは完全に終わった。結果はあまりにも壮絶なものであった。ブルコルジは最後まで虎として軍人として、そして女王として生きたのであった。
「戦い終わったらしいな」
「ティムールとアヤグーズの戦いか」
「ああ、完全に終わったらしいな」
このことはすぐに人類社会全体に伝わった。三日のうちに連合の辺境にまで伝わっていた。
「死んだらしいぜ、女王」
「死んだか」
「戦死だってさ」
このことも伝わっていた。
「骨も何も残らなかったらしい」
「それはまた壮絶だな」
「けれどあの女王らしいな」
「そうだな」
こう話されていった。
「しかし。死んだのか」
「寂しいか？」
「まあな」

多くの者がその死を悼んだ。
「サハラだから関係なにのにな」
「まあそれはそうだけれどな」
これは連合においての話だ。辺境の星系においてである。
「それでもな。いないよな」
「いなくなったらな」
「寂しく感じるな」
実際に語るその言葉は実に寂寥感に満ちたものであった。
「あれだけ目立ってたからな」
「奇麗だったし強かったしな」
彼女の美貌と武勇は連合においても実によく知られていたことだったのだ。サハラに関しては無関心と言ってもいい連合においてもだ。
「なあ。それでな」
「何だ？」
「何かで追悼しないか？」
こんなことも提案されてきた。
「何かでな」
「追悼か」
「葬式とかするなよ」
それはするなという意見は誰もが言うことだった。
「不謹慎だぞ、向こうでやるんだからな」
「俺達のしていいことじゃない」
「それはわかってるさ」
それについてはやはり誰もがわかっていた。
「葬式はしないさ。あくまで追悼さ」
「追悼か」
「それか」
葬式と追悼は違う。こう言うのであった。
「それで何するんだ？」

「追悼と言っても色々あるぞ」
「とりあえず俺はフラッシュを作る」
まずは一人が言った。
「あの女王様のフラッシュをな。作る」
「フラッシュか」
「じゃあ俺は詩を書くか」
「俺は小説にするか」
「私は漫画ね」
皆口々にそれぞれできることをして追悼をしようというのだった。
「じゃあそれぞれな。やるか」
「そうしましょう」
こうして彼女の追悼が連合において行われることになった。マウリアでもそれは行われた。彼女を追悼するフラッシュや漫画が次々と作られたのだった。しかもその中には特筆すべきレベルのものもあった。このことはすぐにサハラにも話が届いたのだった。
「連合で面白いことが行われているな」
「ブルコルジ女王の追悼ですね」
「そう、それだ」
まだ戦争の傷跡が残っている王宮においてだった。シャイターンはアブーに対して話していた。今彼は王宮に設けられた自室にいた。今はここを総司令部としているのだ。

## 第三十四部第四章　女虎の最期その十五

「フラッシュや漫画。詩に小説だな」
「多いですね」
「他には自作のアニメもあったか」
シャイターンはアニメについても述べた。
「後は。歌もあったか」
「幾らでもあるのですね」
「種類だけではなく数もな」
シャイターンは数もだと言った。
「かなりのものになっている」
「連合も酔狂ですね」
フラームは兄の話を聞いて苦笑と共に述べた。
「異国の者に対してそこまで作るとは」
「確かに酔狂だ」
シャイターンもそれは否定しない。
「完全な部外者なのにそこまでするとはな」
「全くです」
「しかしだ。連合を見ることができた」
ここでシャイターンの言葉の色が変わってきた。
「連合はな」
「連合をですか」
「そうだ。追悼一つにしてもそれだけのものが出て来る」
彼が言うのはこのことだった。
「絵画やそういったものだけではなくな」
「連合がそこに？」
「兄上、それは一体」
アブーはおろかフラームにもわからないことだった。二人の弟達は長兄の言葉に対してその目を怪訝にさせて言葉を出すのだった。

「何があるのですか？」
「連合の何が」
「連合はその酔狂から様々なものを出してきた」
「それが何か？」
「それだ」
彼はまた言うのだった。
「連合はかなりの種類のものをかなりの数で出してきた。しかも質が高いものが多い」
「それがですか」
「それだけのものが連合にはあるのだ」
シャイターンの言葉は今目の前にあるものを見たものではなかった。
「連合にはだ。豊かな文化によってな」
「分化ですか」
「それですか」
「そうだ。些細なことからすぐにそれだけのものが出せる」
シャイターンはまた弟達に告げた。
「種類も数も質もな」
「サハラではそれはないな」
「確かに」
アブーは今度はフラームの言葉に対して頷いた。
「サハラではそこまでのものはとても」
「ありはしない」
フラームにもそのことはよくわかっていた。サハラのことは。
「我等にはそれだけの文化も国力もない」
「そうですね。それは確かに」
「そのアニメにしろフラッシュにしても漫画にしてもだ」
どれもだというのだ。
「ない。数も質もな」
「そういうことにかけては連合には大きく劣りますね」

「その通りだ。サハラは貧しい」
シャイターンは弟達の話が一段落したところでまた述べた。
「そういったものはない。あったとしても連合と比べて微々たるものだ」
「微々たるですか」
「戦争が終われば後は平和だ」
皆それを夢見ていることは事実である。
「統一による平和だ」
「その際にですね」
「その通りだ。平和の中で如何にして発展するか」
彼はそのことについて言葉を続ける。

## 第三十四部第四章　女虎の最期その十六

「問題はそこに他ならない」
「そこですか」
「そして答えはある」
問題だけでなく答えもそこなのだというのだった。
「答えもだ。それこそが連合なのだ」
「連合のその文化ですか」
「文化だけでなく様々なものがだ」
シャイターンはフラームに対してまた告げた。
「連合にはある。それを学び取らなければならない」
「それをですか」
「それでしたら兄上」
アブーの言葉は明朗であった。しかしそれは兄の考えていること、ひいてはこれからサハラがするべきことを完全に把握しているかというと残念ながらそうではないということをはっきりと見せてしまっている、そうした明朗であった。そうした明朗でしかなかったのだった。
「既に留学生を送っていますが」
「そうです」
フラームも言ってきた。
「我が国だけでなくハサンやオムダーマンもですが」
「それでもう」
「既に」
「確かに彼等を送っていることはいいことだ」
シャイターンはまずそれはよしとした。
「そして文献等を手に入れ人材を招き入れて学ぶこともな」
「はい。それもまたですね」
「これも我が国だけしているのではないですが」

連合の進んだ技術等はサハラにとっても極めて関心を寄せるべきものであり彼等はそういったものを内外で学んでいるのである。
「ですがそれが何か？」
「充分ではないのですか？」
「いや、不充分だ」
はっきりと弟達の言葉を否定した。
「それではな。不充分だ」
「何故ですか？」
「それは」
「私は知らない」
彼は自身のことを話に出してきた。
「私はな。まだよくは知らない」
「兄上がですか」
「そうだ。私がだ」
シャイターンはふと妙なことを言ってきた。少なくとも弟達にはそう聞こえるものであった。
「私は知らない」
「連合のことをですか」
「かつて日本が近代化を成功させ憲法も作ることができたのはだ」
話はかなり過去のものに及んだ。
「何故だか知っているか」
「明治維新のことですね」
フラームはまずそれではないかと兄に問うた。
「それは」
「そうだ。あの維新のことだ」
彼もまたそうだと言うのだった。
「あの維新だが」
「あれは確か」
「日本には元々それだけのものが備わっていたのでは？」
フラームとアブーはそう考えていたのだった。

「江戸時代の長い平和と繁栄の中で」
「日本にはそれを果たせる下地がありました」
これはその通りだった。日本にはそれだけの国力や知力が既に備わっていたのである。江戸時代に蓄積されていたものはそれだけ大きいのだ。
「ですがそれではないのですね」
「それだけでは」
「当然それはあった」
シャイターンもそれはわかっていた。
「しかしだ。それだけではない」
「やはり」
フラームは兄の今の言葉に確かな顔で頷いた。
「そうですか」
「そうだ。あれは上からの改革だった」
これは有名な話である。日本の近代化は政府主導であった。中央集権的な政府を作りそのうえで近代化を推し進めたのである。それによりあの日本が誕生したのだ。

## 第三十四部第四章　女虎の最期その十七

「そしてその上だが」
「政府ですか」
「政府の首脳達は欧州に行った」
彼が言うのはこのことだった。
「使節団としてな。欧州にその近代化を学びに行ったのだ」
「首脳達がですか」
「それはまた」
「かつてロシアも同じことをしたがな」
今度はロシアが話に出て来た。
「ピョートル大帝がか」
「ああ、彼ですか」
「あの御仁ですね」
この名はフラームもアブーも知っていた。今でもロシアでは偉大な皇帝だったとされている。大柄でしかも怪力でありかなり個性的な性格だったことが知られている。
「あの皇帝も欧州に西洋の進んだ技術を学びに行っている」
「確かそれでオランダで船乗りをやっていたとか」
「それで完全に溶け込んでいたとか」
当時の船乗りはかなり柄が悪かった。しかし彼は完全にその中に溶け込んでいたのだ。実際に彼はかなりがらっぱちな性格をしていた。
「有り得ない話ですが」
「その皇帝ですね」
「彼はそれでロシアの近代化を成し遂げた」
自ら学んでで、ある。
「だからだ。私もだ」
「学ばれるというのですね」

「連合を」
「留学生だけでは不充分だ」
彼はここでまた言った。
「私もだ。サハラを真の意味で強い国にする為にな」
「それはいいことです」
フラームはまずはそれは認めた。
「ですが」
「ですが、か」
「はい。それをするのはどうも」
「私もそう思います」
アブーも言ってきた。
「現実的ではありません」
「どうしても」
「しかし過去に実例がある」
だがシャイターンは言うのだった。
「日本とロシアがな」
「それはそうですが」
「しかし」
弟達の言葉の歯切れは悪かった。
「今やるというのは」
「如何でしょうか」
「つまり反対なのだな」
「はい」
「その通りです」
兄に応えて今度は実にはっきりと述べた。
「私としてはです」
「私もです」
二人の考えは一致していた。長兄の案に反対ということでだ。
「これは賛成できかねます」
「そこまでされることはありません」

まずはそこまでと言うのだった。
「連合のことを学んできたテクノクラートが既にかなり育っていますし」
「それだけで充分です」
「それにです」
フラームの目がいぶかしむものになった。
「連合です」
「連合がどうかしたのか」
「若し兄上がそこに行かれればです」
「兄上の御命を狙う者が」
シャイターンは確かにサハラの民衆の圧倒的な支持を集めている。しかしそれは光である影もある。この場合の影が実に厄介なのである。

## 第三十四部第四章　女虎の最期その十八

「そうした者達が連合に潜み」
「何をするかわかりません」
今度はこのことを言うのだった。
「ですからそういうことも考えまして」
「我々は。やはり」
「反対か」
あらためて弟達に対して問うのだった。
「やはり御前達は」
「何度も申し上げますがその通りです」
「兄上自ら行かれることはありません」
二人はまた長兄に述べた。
「ですからここは」
「御再考を」
「当然今ではない」
今すぐにではないと言うのだった。
「今ではな」
「今ではないのですか」
「今ここで離れる愚か者はいない」
そしてこうも述べた。
「今はハサンとの戦いの時だ」
「その通りです」
「ここで私が離れては何にもならない」
シャイターンが実際に戦略戦術を立て軍を率いてそのうえで勝利する。それがティムールだからだ。彼なくしては何も考えられない国家なのだ。
「だからだ。それはない」
「それはわかっています」

「私もです」
弟達も彼が時と場合を考えない男ではないことはわかっていた。だからこれには頷いたのである。
「ですが。それでも連合には」
「兄上御自身が行かれるのは」
「今は考えているだけだ」
それだけだとも述べた。
「しかし。サハラとの戦いが終われば」
「また考えられるのですか」
「統一までの間に」
「話は統一して終わりではない」
彼はまた言った。
「だからだ。その先のことも考えておく」
「それは宜しいかと」
「むしろ統一してからこそが問題でありますし」
アブーもまたこうした政治的な考えができるようになっていた。
「やはりそこもです」
「考えていきましょう」
「既に準備は進めておけ」
もうそこまで見ているシャイターンであった。
「それはいいな」
「はっ、それでは」
「そのように」
二人は兄のこの言葉にはすぐに頷いた。しかし危機も感じていたのだった。兄のこの危うさに対して。しかしそれは決して危うさではなかった。シャイターンはサハラの未来を見ているのだから。

# 第三十四部第五章　覆される優勢その一

覆される優勢

アヤグーズが滅んだ。これで確実になったことがあった。
それが何かというと。最早誰もがわかっていることであった。
「西部戦線でのティムールの優勢は確かなものになったな」
「そしてハサンの劣勢もな」
双方の力関係が完全に逆転した、このことが確かになったのだ。
これがどういうことかというとそのまま戦局に影響する。それだけでなく今後のサハラの命運をも大きく変えかねないことでもあった。
「確かになったな」
「間違いなくな」
「さて、どうなるかだな」
ここでさらに言われるのだった。
「確かにティムールは優勢になった」
「ああ」
このことが確認される。
「しかしハサンも力はある」
「まだかなりな」
「しかも傭兵を多量に雇い入れたしな」
「傭兵をか！？」
「ハサンがか！？」
皆それを聞いて驚きの声をあげた。
「ハサンが傭兵をか」
「意外だな、それは」
ハサンはあくまで正規兵にこだわり戦うという認識があったからだ。しかしそうではないということで誰もが首を傾げるのだった。
「あのハサンが傭兵をな」

「雇い入れたか」
「つまりあれだよ」
そして言われるのだった。
「ハサンもなりふり構っていられなくなってきたんだよ」
「なりふりをか」
「このままだと負ける」
これがハサンの現実だった。
「このまま手をこまねいていてはな。ハサンは敗れる」
「そうだな。それはな」
「確かに」
またこのことが話される。
「ハサンはもう予備兵力を全部動員しているしな」
「それで後集められる兵力といえばだ」
「傭兵だけだな」
サハラにだけいる存在である。傭兵は連合にもエウロパにもいない。当然マウリアにもだ。戦乱の続くサハラだからいるのだ。戦乱は何時の時代でも傭兵を生み出すものだ。
「だからか。ここは何としても」
「傭兵を集めるか」
「その通りだ」
結論が出された。
「そしてその傭兵達をティムールに向けるということか」
「さて、どれだけ兵力が集まるかだが」
そのことも考えられるのだった。
「今どれだけ集まっている？」
「何百万だ？」
「何百万どころじゃない」
こう言われるのだった。
「一千万単位だ」
「一千万単位！？」

「かなりだな」
「ああ、思った以上だ」
皆その数を聞いて言う。彼等にしてみればそれだけ集められるだけでもハサンの底力を感じさせるものだった。しかしそれだけではないのだった。
「それで何千万だ？」
「どれだけなんだ？」
「七千万らしい」
これだけの数だというのである。
「約だがな」
「では七十個艦隊程度か」
「またかなり多いな」
「それどころかサハラの傭兵の全てではないのか？」
ふとこう言われだしたのだった。
「それだけの数になると」
「そうだな。今何処にも雇われていない傭兵の全てだな」
「今回の戦いではどこも傭兵を雇っていなかったな」
「ああ」
今の三国の戦いは正規兵同士の戦いとなっている。どの勢力もこの時点では傭兵を全く雇っていないのだ。しかしここでハサンが動いたのだ。

## 第三十四部第五章　覆される優勢その二

「しかしここでハサンがあるだけ雇った」
「腹を括ってな。さて」
そのうえでまた話される。
「これで勝てるかな？」
「ティムールにか」
「数で攻めるのは確かに常道だ」
戦争は数でするものなのはもう誰でもわかっていることである。
「しかしだ。それでもだ」
「ハサンはそれでいつも敗れているからな」
「この戦いではな」
これもまたその通りだった。ハサンはこの戦いにおいて敵を上回る戦力で以って常に戦ってきた。しかしそれでも常に敗れているのだ。見事なまでに。
「鮮やかなまでにな」
「言い方を変えればティムールは鮮やかに勝ってきている」
こうも言われるのだった。
「見事にな」
「そうだな。シャイターン主席に中途半端な数は通用しない」
二倍や三倍という意味でだ。
「しかし。数は必要なのは事実だ」
「それはな」
このことも話される。
「だからハサンが傭兵を集めているのは正しいが」
「軍規は大丈夫か？」
「士気は？」
このことも懸念されるのだった。傭兵は正規兵ではないので当然ながら軍規はよくはない。略奪や暴行が問題になることもある。そ

して士気もだ。劣勢になるとすぐに寝返る危険性もある。実際にそれで戦争の行方を決めたことは歴史において無数にある。ハンニバルの敗北のようにだ。
「そういった問題はクリアーされているのか？」
「どうなのだ？」
「ハサンの太子は彼等を正規軍に組み入れるらしい」
「正規軍にか」
「そうだ。そのうえで使うつもりらしい」
このことが述べられていく。
「太子はな」
「傭兵を正規軍に！？」
「またかなりだな」
この場合のかなりというのは決していい意味ではなかった。
「大胆というよりはな」
「無謀だな」
「全くだ」
こうした意味であった。
「傭兵が正規兵と同じように動くものか」
「有り得ない」
誰もが口々に言うのだった。
「そんなことはな」
「できる筈がない」
彼等はそれを有り得ないことだと決めつけているのだった。最初から。
「傭兵は金でしか動かない」
「報酬でだけだ」
これが傭兵の常識である。金でこそなのだ。
「だからその為に略奪もする」
「それはわかっている筈だがな」
「あの太子も追い詰められて遂に間違えたか？」

太子の考えは誰も信じられなかった。全くであった。
「そんな馬鹿げたことをな」
「するつもりか？」
「実際にそれを決定しているらしい」
そしてまた言われるのだった。
「もうな。正規兵とミックスさせることをな」
「軍が動くかどうかも怪しいな」
「ただでさえ動員した予備兵力が弱かったんだろう？」
予備兵力の弱さも露呈してしまっていた。アヤグーズ軍は精強であったがハサン軍は脆弱だった。このこともまた宣伝されてしまっていたのだ。
「それで傭兵までとはな」
「なりふりも何も見ていられないのか」
「みたいだな」
彼等はハサンの今のやり方をかなり疑問視していた。成功すると
は全く思っていなかった。しかしそれでも太子はあくまでそれを実
行に移そうとしていた。

## 第三十四部第五章　覆される優勢その三

「いいか」
「はい」
己の執務室に武官達を集めて指示を下していた。
「傭兵達を可能な限り集める」
「そして正規軍に組み入れるのですね」
「そうだ」
彼等に対して強い声で答える。
「それはもうわかっているな」
「はい、それ自体は」
武官の一人が彼に述べた。
「わかっております。しかしです」
「言いたいことはわかっている」
太子にしてもであった。既に彼等が何を言いたいのかわかっていた。わかっていなくて今ここで彼等を前に言葉を出すことなぞできはしなかった。
「傭兵を雇うというのも如何と思われます」
「ですがこれは」
彼等はまずはここから述べるのだった。
「仕方ないこともわかります」
「事情が事情ですから、今は」
「それはもういいのだな」
「はい」
誰もが釈然としないまま頷くのだった。
「やはり。今の我が軍の状況を考えると仕方がありません」
「正規兵はもう集められませんから」
既に集めるだけ集めている。そのうえで敗戦しているのだから仕方がなかった。失った兵力は二度と補充できない、戦争の常識の一

つだ。
「ですからそれはよしとしましょう」
「しかしです」
ここまで話したうえで太子に対して言うのだった。その釈然としない顔で。
「傭兵は傭兵です」
「臣民軍とは違います」
この場合の臣民軍とは連合で言えば市民軍になる。連合は市民の軍隊であることを何よりも強調している。これはハサンでも同じなのだ。
「ですから。それはどうかと思いますが」
「傭兵を正規軍に入れるというのは」
「いや、それでもだ」
しかし太子の考えは変わらないのだった。
「彼等は正規軍に入れる」
「それは何故ですか？」
「しかも待遇も同じなのですね」
「当然のことだ」
待遇についてもあっさりと述べる太子だった。
「正規軍に入れるのならばだ」
「それは当然ということですか」
「そうなのですね」
「そういうことだ」
平然として述べてみせた。
「それはな。正規軍ならばだ」
「当然と仰るのですか」
「臣民軍と」
「ハサンに忠誠を誓わせる」
このことも忘れないのだった。
「それにだ」

「それに？」
「今度は一体」
「軍規軍律もだ。特にこれには注意することだ」
「それも無理があるかと」
「そうです」
武官達の釈然としない顔は続く。あくまでそうではないと言うのである。彼等の常識の中ではそれもまた当然のことであるのだ。
「ですから。彼等は傭兵です」
「傭兵には傭兵の規律があります」
その傭兵達それぞれで、ということだ。少なくともそれは正規軍のものとは違いこれを理解したうえで雇うことが契約時の一つの認識ともなっているのだ。
「ですからそこにハサン軍の規律を押し付けるとなると」
「動かないのでは？」
「それも既にわかっている」
そのことも既に読んでいる太子だった。やはりそのキレは流石と言うべきものがある。伊達に一国を実質的に動かしているわけではなかった。

## 第三十四部第五章　覆される優勢その四

「だからだ。彼等に対してはだ」
「どうされるのですか？」
「一体」
「待遇は同じだが給与は弾め」
こう言うのだった。
「二倍にだ。いいな」
「二倍ですか」
「給与を」
「これならば彼等も文句はあるまい」
ここまで話したうえでまた述べる太子だった。
「報酬がそこまであればな」
「報酬ですか」
「傭兵は金の為に戦う」
これもまた言うまでもないことだった。
「その彼等に言うことを聞かせる為にはだ。この程度は安いものだ」
「安いでしょうか、果たして」
「七千万です」
その雇った傭兵の数である。
「それだけの傭兵達に倍の報酬を支払うとするとです」
「その額も恐ろしいものになりますが」
「戦争に勝つ為には安いものだ」
しかし太子はこのことに関してもあくまでこう言うのだった。
「敗れれば何にもならないのだからな」
「だからですか」
「それだけ出されるのは」
「人件費なぞな」
なぞ、とまで言い切ってみせた。

「勝利の為の投資と思えば実に安いものだ」
「そうですか。それではそれは」
「わかりました」
そして頷くのだった。
「それでは報酬の件はです」
「わかりました」
武官達もこのことをここで何とか頷いたのだった。しかしそれでもまだ納得できないことがあった。それこそがこの度の話の確信であった。
「しかし。それでもです」
「そうです」
またそれぞれの口で太子に対して述べるのだった。
「傭兵達を正規兵に混入させるのは」
「如何なものかと」
「それはどうしてもというのか」
「はい、そうです」
「指揮が執りにくくなります」
彼等が危惧しているのはこのことだったのである。指揮の執りやすさもまた勝利を決める要因なのだ。車や飛行機に操縦性が重要視されるのと同じである。
「ですからそれは」
「如何なものかと」
「いや、それでいい」
だが太子は彼等の言葉を退けるのだった。あくまで。
「それでな。さもなければだ」
「さもなければ？」
「一体何が」
「傭兵達の数が多い」
まず言うのはこのことだった。
「それもかなりだ。その彼等が裏切ったとする」

「はい」
「その場合は」
「七千万だ」
その数がまた太子の口から告げられた。
「そうだな」
「そうです。七千万です」
「それだけの数です」
ここでも数について話が為されるのだった。これはどうしてもついてまわるものになってしまっていた。しかし戦争は数字でもあるから当然であった。
「それだけの数の裏切りを防ぐのですね」
「報酬と共に」
「固まっていれば裏切る」
彼は言った。

## 第三十四部第五章　覆される優勢その五

「必ずだ。危機に陥れば」
「そうですね。そうなれば」
「常にそうですから」
傭兵の裏切りはまことに常である。その軍律の悪さとこの裏切りを嫌っているが為にハサンもまた正規軍にこだわってきたのである。
「ではそれを防ぐ為にもですね」
「彼等を正規軍に組み入れるのは」
「その通りだ。中にいれば裏切ることはできない」
太子はまた言った。
「だからだ。いいな」
「そうなのですか」
「それでですか」
「予備兵力もだ。残っている者達はだ」
彼等についても言及するのだった。
「時間を見て訓練を施せ」
「それもですね」
「今ティムールはその動きを止めている」
アヤグーズを掌握しそのうえでその領域をさらなる足掛かりにするべく動きを止めているのだ、無論その間に勢力を蓄え旧アヤグーズ領の軍事基地化を進めているのだ。
「その間に。いいな」
「そうですね、確かに」
「予備兵力の質は」
武官達もそれには頷くのだった。頷くしかなかった。
「あれではとても」
「これからの戦争に堪えられるものではありません」
「その通りだ。とてもだ」

アヤグーズ軍との共同戦線においてその訓練度の低さと士気の劣悪さが露わになったのである。上層部にとってもそれは由々しき問題だったのだ。
「あれでは。戦えるものではない」
「先の戦いでそれがはっきりしました」
「ですから。ここは」
「訓練を充実させ危機感を持たせる」
太子は言うのだった。
「とりわけだ。士気の低さがだ」
「それですか」
「士気についてですね」
「あれをどうにかしないと勝てるものではない」
腕を組んでの言葉であった。太子も真剣に悩んでいた。
「連合軍よりも士気が低いのではないのか？」
「あの連合軍よりもですか」
「そうだ。あの千年もの間戦うことのなかった彼等よりもだ」
太子はそれだけ彼等の士気に危機感を抱いているのだった。それは国を統括し治める者として憂うべきことだった。特に戦争中であるならば余計に、であった。
「さらにな。低い」
「予備兵力ですから質が落ちることは覚悟していました」
「ですが。あれ程とは」
武官達にしろ予想以上なのだった。とにかく今後のことを考えるとハサンにとっては憂うべきことばかりで頭を抱えるべき状況であった。
「それでだ。どうするかだが」
「はい。どのようにして」
「士気をあげるのですか？」
「危機感を持たせるのだ」
彼が言うのはこれだった。

「危機感をだ。いいな」
「危機感をですか」
「その通りだ。今我々は劣勢に立たされることになった」
「はい」
「それを彼等に言うのですね」
「そういうことだ。それだ」
こう武官達に告げるのだった。彼にしろ今後のことを考えそれをせずにはいられなかったのだ。ハサンの劣勢を見れば余計にであった。
「祖国を護る為に戦えとな」
「これまでもそれを考えて士気を鼓舞してきましたが」
「やはり。不充分でしたか」
「残念だがそうだな」
太子はまた言った。

## 第三十四部第五章　覆される優勢その六

「とてもな。だからこそ士気はあの程度だった」
「そうですね。やはり不充分でした」
「それならば。やはり」
「我が国の状況を教え我が国が敗れればどうなるか伝えるのだ」
「祖国の滅亡の危機であるということをですね」
「それを教える。そうすれば状況が変わってくる」
これはかなり政治的な話であった。しかし軍事というものが政治の一環であると考えるならばこれもまた当然のことであった。
「それでだ。いいな」
「はっ、わかりました」
「それもまた」
武官達は敬礼してそのうえで応える。話はこれでまた一つ終わったのだった。
「それではだ。傭兵と予備兵力のことをだ」
「わかりました。それでは」
「そのように」
武官達もそれで応える。これでハサン軍の方針は決定されたのだった。
こうして彼等はティムール軍が止めているうちにこれからの戦いに備え出した。アヤグーズは滅んだがだからといって戦いが終わったわけではなかったのだ。
傭兵達は瞬く間に集められ動員された予備ヘイタチは厳しい訓練の中に置かれた。そのうえで訓練を施すがその中において。兵達は不満に満ちた声で言い合うのだった。
「全くな。急に訓練が厳しくなったよな」
「しかも危機を持て、ハサンは危機だってな」
「五月蝿くて仕方ないよ」

「どうなったんだよ」
口々にこう言い合い一日の終わりの休憩時間にコーヒーを飲みながら文句を言い合うのだった。訓練や思想教育が厳しくなったことにだ。
「しかしまた何でこんなに厳しくなったんだ？」
「アヤグーズが滅んだからじゃないのか？」
「やっぱりそれか」
彼等は乗艦のその中で言い合うのだった。寝室でそれぞれの二段ベッドに入りそうして寝転がりながら話すのだった。くたくたになっているのがわかる。
「うちも今結構やばくなってるからな」
「アヤグーズなくなったからな」
「だからな。やっぱりそれだよ」
また言い合う彼等であった。そのうえでまた話をしていく。
「勝たなければいけないからか」
「しかし。あれだろ？」
疲れきってベッドの中にいるとはいえそれでも話はするのだった。口だけは動かせることができたのだ。それだけの体力はまだあったのだ。
「軍の数はこっちが優勢なんだろ？」
「予備兵力だけじゃなくて傭兵も雇うらしいからな」
「ああ、それじゃあ三倍超えてるよな」
彼等も傭兵を集めるという話は聞いているのだ。このことはすぐにアヤグーズ軍だけでなくサハラ全土、ひいては連合やマウリアにも伝わっていた。
「じゃあ勝てるだろ」
「それでもこれだけ厳しい訓練するのかよ」
「参ったな」
またそれぞれ話をするのだった。
「勝つのがわかってるのにな」

「それでもまだするのかよ」
「やり過ぎだよ、やり過ぎ」
こう思わずにはいられない彼等だった。この辺りに危機感のなさが出ていた。
「全くな。何でここまで」
「厳しくなったんだよ」
「数が多いから勝てるじゃねえか」
「だよなあ」
さらに言い合うのだった。
「折角給料もいいから来たのにな」
「こんなに辛いなんてな」
「嫌だ嫌だ」
とにかく今の状況が不満で仕方なかった。そして彼等はそのまま不満を抱いて眠ろうとした。しかしここで、であった。不意に部屋の中に放送がかかってきたのだ。
「緊急呼集、緊急呼集！」
「何だ！？」
「緊急呼集！？」
皆ベッドから飛び起きて出ることになった。
「何なんだよ、今度は」
「いきなりよ」
言いながらもまずは服を着る。そうしてそのうえで部屋を出る。するとそこにはもう先任下士官が岩の様な顔をしてそこに立っていたのだった。
「遅い！」
「す、すいません！」
「いいか、今は戦争中だ！」
下士官は流石に緊張感をみなぎらせて彼等に対して言うのだった。

## 第三十四部第五章　覆される優勢その七

「一瞬の油断が命取りとなる。それを忘れるな！」
「わ、わかりました」
「申し訳ありません」
彼等は下士官の声に震え上がる。兵と下士官の関係はこのハサン軍においても健在であった。
「十秒遅れだ」
「十秒ですか」
「その程度ですか」
「馬鹿者！」
今の口ごたえにはすぐに怒鳴り声が届いた。
「十秒でも遅れたことは遅れたのだ！」
「は、はい！」
「すいません！」
「罰として腕立て百回！」
そして下士官は今度はこう怒鳴った。
「全員だ！今すぐここでやれ！いいな！」
「わかりました！」
「申し訳ありませんでした！」
彼等はすぐにその場で腕立ての姿勢に入りすぐにそれを行う。こうした場面はハサン軍のあちこちで見られるようになっていた。
このこともまた他の国々にも伝わっていた。モンサルヴァートはシュバルツブルグからこの話を聞いていた。丁度エウロパ軍の軍事訓練の最中でだ。
「そうですか。ハサン軍がそこまでですか」
「今までの緩んだ空気は一層されたらしい」
こうモンサルヴァートに対して述べていた。場所はリエンツィの艦橋である。

「そして緊張した空気に支配されているようだ」
「当然と言えば当然ですね」
モンサルヴァートはここまで話を聞くとこう述べたのだった。
「本来は。そうあるべきなのです」
「軍だからだな」
「そうです。ましてやハサンは今戦争中です」
この事情もあるのだった。
「それでどうして。これまで聞いていたような緩みきったものがあるのか」
「その方が以上だったか」
「だからこそ敗れたのです」
そしてこうも言うのだった。
「アヤグーズも。彼等がもう少しまともならばです」
「勝てただろうか」
「いえ、それは」
しかしこのことについてはすぐに首を傾げたシャイターンであった。
「それを言われますと」
「わからないか」
「おそらく無理だったと思います」
ティムールの戦いぶりを思い出しながらの言葉であった。
「ティムール軍、そしてシャイターン主席の戦い方を見ていますと」
「やはり敗れていたか」
「それは間違いありません」
そしてこう言うのだった。
「ティムール軍は精強でありシャイターン主席の指揮は水際だっていました」
「見事なまでにな」
「あれを見ていると。如何にブルコルジ女王とはいえ」
勝利を収めたからこその言葉だがそれでも的確であった。

「おそらく。ハサン軍がしっかりとしていてもです」
「勝てはしなかったか」
「はい、そう思います」
そしてこう結論付けそのうえでまた言うのだった。
「しかしです」
「それでもあの緩みきった空気はだな」
「軍のものではありません。それが正されるのは道理です」
ハサン軍に対するかなり辛辣な言葉であった。
「これでハサンもかなり真面目になるでしょう」
「そうだな。しかも傭兵達まで雇い入れた」
「はい」
次にこのことが話される。
「このことでも問題になっているようだがな」
「なりふり構っていられないのでしょう」
シャイターンもこう見ているのだった。

## 第三十四部第五章　覆される優勢その八

「今のハサンは」
「やはりアヤグーズの敗戦によってだな」
「その通りです。それ以外にありません」
こうまで言うのだった。
「アヤグーズを失っただけでも大きいですが」
「うむ」
「尚且つ西方の重要な拠点であるアヤグーズ王国領を全て奪われたのです。これによりハサンは西方において劣勢に立たされることになりました」
「精鋭を失い交通の要衝を奪われた」
この二つだけに話は収まらなかった。
「尚且つその軍事基地まで奪われたな」
「この三つを奪われ周辺の属国の動向が不確かになってきました」
それもあるのだった。
「属国のうち幾つかは兵を向けられるより前に降伏か恭順を考えているようですし」
それだけ今回の敗戦はハサンにとって痛手であったのだ。最早何としてもその劣勢を覆さなければどうにもならないまでにである。
「ここに至ってなりふりなぞ構ってはいられないのでしょう」
「その通りだな。しかし今回のことはだ」
「はい」
「あくまでサハラだけのことだな」
シュバルツブルグはここでこうしたことも言うのだった。
「我々には関わりのないことだ」
「関わりたくともできないことです」
モンサルヴァートの顔がここで曇った。
「これまでですとティムールが勢いに乗じ兵をさらに進めたところ

で」
「我等が進攻する」
シュバルツブルグも言った。
「それができたのだがな」
「かつてのように」
かつてエウロパはそのようにして北方に進出しそして多くの国を滅ぼしてきたのである。他国を攻める時その国は最も脆弱になるのを知っていたからである。
「ですが。今はとても」
「まず足掛かりだったモントローズ要塞は非武装化させられた」
「はい」
それをそうさせたのが他でもない連合軍である。
「それに我が軍も」
「まだ戦力の回復もままならないしな」
「そうです、あの戦争で戦力の三割を失いました」
その傷はまだ癒えていないのである。そうおいそれと回復できるような規模でもなかった。それだけ連合軍から受けたダメージは大きいのだ。
「それを回復させようと思えば」
「まだ苦労が必要だな」
「そうです。今もこうして訓練を施していますが」
艦隊はモンサルヴァート達によって指揮されそのうえで動いている。動きは迅速であり統率も取れていたが彼はそれを見てもまた不満そうであった。
「しかし。この程度ではです」
「戦争前と比べて練度はな」
「はい、落ちています」
それだけ精兵が減ったということなのだ。戦争をすれば兵が減るのは当然だが彼等のそれは深刻どころではないレベルに達していたのだ。

「明らかにです」
「数を揃えるだけでもな」
シュバルツブルグはこのことについても顔を曇らせるのだった。
「苦労しているしな」
「そもそも五百個艦隊はです」
モンサルヴァートもこのことについて述べた。
「我がエウロパにとってみればまさに限界です」
「その通りだ。総勢で五億以上だ」
「そうです。軍籍にあるものまで考えれば十億近くです」
即ちエウロパの人口の一パーセント近くである。
「これだけの数を集めるだけでもです」
「辛いものがあるな」
「しかも減らせません」
頭痛の種はまだあるのだった。
「連合にニーベルングを奪われそのうえそこに居座られていますから」
「連合もわかっているのだ」
シュバルツブルグの言葉はまた忌々しげなものになった。
「我等に軍事費を次ぎ込ませるつもりなのだ」
「その分経済や産業への投資を減らさせる」
「そのうえで国力の伸張を遅らせる」
そういう考えがあるのだった。軍事費という出費だけで収入がない分野に金を注ぎ込ませるということはそれだけで相手の国を衰えさせることもできるのだ。

## 第三十四部第五章　覆される優勢その九

「しかし。それでもだ」
「我等はそこに注ぎ込まざるを得ません」
モンサルヴァートの整った、ギリシア彫刻を思わせる顔に苦いものが漂った。
「その彼等に対する備えの為に」
「どれだけニーベルング要塞の存在が大きいかだな」
シュバルツブルグはあらためてこのことを思うのだった。
「あの要塞を奪われると忽ちだった」
「その通りです。流石にオリンポス条約であの星系を領有するとはわかっていましたが」
「手に入れた指輪を手放すことはない」
シュバルツブルグのここでの言葉はニーベルングという言葉がワーグナーの楽劇に直結するからこそだ。ニーベルングの指輪というわけだ。実際連合やエウロパではこの要塞は指輪とも言われていたのである。
「彼等もな」
「そして我等に軍事費を使わせる」
言葉は続く。
「国力の伸張を妨げる為に」
「その間に彼等は力をさらに蓄える」
エウロパにとって辛いことばかりだった。
「これでサハラを攻めるなどとはな」
「最早それは夢物語になりました」
モンサルヴァートの今の言葉は誇張ではなかった。
「今は軍を整え」
「うむ」
「そして国力を回復させるしかありません」

「投資が満足にいかなくともだな」
「その通りです。今はです」
とにかく今の辛さはよくわかっているのだった。
「それしかありません」
モンサルヴァートの言葉はここでも苦いものであった。
「耐えるしか」
「臥薪嘗胆か」
シュバルツブルグはふと諺を言葉に出したのだった。
「それしかないか」
「はい、それしかありません」
モンサルヴァートもまた彼の今の諺に頷いた。
「それしか」
「耐えることは悪いことではないが」
「そうしなければならない時もありますが」
言葉を続けていくのだった。モンサルヴァートにしてもシュバルツブルグにしても。言葉を続けながらそのうえで口の中に苦いものを増していく。
「ですが。辛いものです」
「艦隊は五百」
まずはそれだった。
「それを揃えかつ守りを固める」
「ニーベルングがない状況で」
「せめてニーベルングがあればと思うのは詮無いことだ」
これもよくわかっていた。同時に思っても仕方ないこともだ。そうしたことがわかっていてもそれでも思わずにはいられないのだ。先程と同じく。
「それに代わる防衛ラインを築く必要があるな」
「まずはそれですが」
モンサルヴァートはまた言う。
「今ニーベルングの周辺には非武装地帯が設けられています」

「それもまた忌々しいものだな」
「その通りです。そこに入るのは簡単ですが」
非武装地帯がただの紳士協定なのはこの時代でも同じだ。紳士協定というものは約束に過ぎず破ることも用意だ。かつてラインライトでヒトラーが行ったことと同じだ。
「しかしです。そこに入れば」
「連合に口実を与える」
「はい、入ればそれだけで彼等は軍を動かして来るでしょう」
最早それは確信であった。
「最早それだけで」
「その通りだ。それだけで兵を進められる」
協定を破ればそれだけのツケがある。その時は何もなくとも信用は暴落する。信用なぞ何とも思わない存在なら最終的には必ず破滅するのが世の摂理でもある。信用のない相手なぞ身内であっても誰も相手にしなくなるからだ。もっともそうした存在はそんなこともわからないのだが。
「まずニーベルングに進駐している軍で守り」
「はい」
「その間に兵を集め」
そのニーベルングを攻めている間に軍を進めるというのだ。

## 第三十四部第五章　覆される優勢その十

「そのうえで我等を叩く」
「実に合理的な方法です」
「だからだ。非武装地帯には絶対に入ることはできない」
それをしても何にもならないことは彼等もよくわかっているのである。
「つまりだ。話を変えればだ」
「非武装地帯でなければそれでいい」
シュバルツブルグの目が光った。
「その外縁でだ。防衛ラインを築く」
「それですね」
また答えるモンサルヴァートだった。
「そこに築く。それでいいな」
「はい、言い換えれば」
またであった。
「それしかありません。連合への備えは」
「しかもただ築くだけでは意味がない」
プラスアルファも述べるシュバルツブルグだった。
「それだけではな」
「それはわかっています。四千個艦隊です」
連合軍の規模である。
「あの時は三千個でしたがさらに増えています」
「四兆の人口で四千個だ」
彼はまた言った。
「一兆で一千個艦隊だ」
「我等に比べて負担はかなり小さいですね」
「ＧＮＰにおける軍事費の割合は一パーセントだ」
連合ではその程度に過ぎないのだ。ここにこそ国力の圧倒的な差

があった。これは最早覆せない絶対なものがそこにあった。
「我等は十パーセントなのに対してだ」
「それだけ他の部分に予算を回しています」
「連合の国力はそれによりさらに伸びていく」
敵国の国力の伸張を読む。これも戦略の基本である。
「それに対して我々はだ。この有様だ」
「我等が国力を回復させている間に連合はさらに強くなっていく」
このことは幾ら言っても言い足りないのだった。
「やがてどうしようもない程にまでなる」
「只でさえ圧倒的だというのに」
連合とエウロパでは四十対一もの差がある。これは最早どうしようもないものだ。既にである。しかもそれがさらに拡がっていくというのだからエウロパにとっては実に恐ろしい話であった。
「そしてこれ以上国力が広がればです」
「我々は連合に完全に押し潰されるまでになる」
「しかし。国力はです」
どうしても伸ばせないのだった。今の状況ではだ。
「軍を維持しなければなりませんから」
「軍で国を護る」
これは政治の基礎の基礎である。
「それがまず第一だ」
「その通りです。ですからこれだけはどうしても」
「財務省はかなり渋っているがな」
「やはり。そうですか」
「軍事費より復興に予算を回すべきだというのだ」
これは財務省からみれば当然のことだった。財務省にとっては軍事費は只の金喰い虫でしかない。これは連合でもエウロパでも同じである。
「そう言っている」
「財務省は何もわかっていません」

少なくとも軍事には疎い。
「その様なことをしては国を滅ぼします」
「彼等は連合の予算をモデルにしたいらしい」
「馬鹿な」
モンサルヴァートは連合式と聞いて顔を横に背けさせた。
「連合には連合の事情があります」
「その通りだ」
少なくとも二人はこのことがよくわかっていた。
「連合ではだ。軍の数はすぐに調達できる」
「少なくともあの百三十億の数は」
集まるのだ。なお連合では四兆の人口のうち百三十億であるから三百人に一人である。それに対してエウロパは全ての関係者を入れて十億である。百人に一人だ。
「我等の十三倍の兵力も連合は人口で賄えるのです」
「連合式で我が軍を執り行うとだ」
「とてもエウロパを守れません」
結論はすぐに出るものであった。
「今でさえ連合軍が本気で来たならば全滅を覚悟しなければならないというのに」
「先の戦いと同じくな」
「そういうことです。しかし」
ここでモンサルヴァートはまた言うのだった。
「財務省は」
「財務省がどうした？」
「それだけ苦しいのでしょうか」
こう言うのだった。
「やはり。今は予算が」
「苦しくない筈もないな」
シュバルツブルグも言った。
「やはりな」

「そうですか。考えてみれば当然ですね」
「こうした状況だ」
シュバルツブルグはまた言った。
「何処も苦しい。特に予算はな」
「只でさえ金というものは幾らあっても足りないものといいますが」
これはどの世界でも同じである。もっとも貴族である彼等はそれぞれの生活において経済的に困ったことはないのでその身での実感は感じたことはないのであるが。

## 第三十四部第五章　覆される優勢その十一

「それでもです。今のエウロパの状況を考えれば」
「そうだ。予算は逼迫している」
逼迫どころか破綻寸前というのが実情だった。
「もうどうしようもないまでにな」
「だからこそ軍事費を、ですか」
「財務省はとにかくエウロパを復興させたいのだ」
この辺りに軍部と財務省の考えの相違があった。そしてこの二つは容易には埋まらない性質のものでもあった。政治の世界は常に軋轢が存在しているものだ。
「その為に軍事費を減らしだ」
「他に回すべきと」
「確かに一理ある」
シュバルツブルグもそれは認める。
「しかしだ。軍を減らすとだ」
「守りきれません」
「財務省はそれが全くわかっていないのだ」
シュバルツブルグの今の言葉は忌々しげなものであった。
「それがな」
「軍事のことは専門外だからですか」
「全く。財政のことに詳しいのはいい」
シュバルツブルグはそれはよしとした。財務官僚が財政に疎くては話にならない。もっとも時としてそうした人間もいたりするのであるが。
「それに国の財政を真剣に考えているのもな」
「彼等なりに国のことを考えている」
モンサルヴァートもまたそれについて言う。
「それ自体はですか」

「しかしだ。軍事なくして国家はない」
軍人としてこのことをあくまで強調するのだった。
「彼等はそれがわかっていない」
「彼等は予算なくして国家はないと思っているようですね」
「それはその通りだ」
予算がなくては何もできはしない。予算は言うならば国家の血液である。血液なくして生きることはできない。そこに答えがあった。
「少し。説得する必要があるか」
「そうですね。ローズ長官ともお話しまして」
「うむ」
三人のエウロパ元帥のうちの最後の一人だ。彼もまた今の訓練に参加している。今は彼の乗艦に乗りそこで訓練を指揮しているのだ。
「財務省に直談判といきましょう」
「話は難航しそうだがな」
シュバルツブルグは既にこのことも予想しているのだった。
「それもかなりな」
「とにかく。財政もありませんから」
「今のエウロパにあるものなぞありはしない」
シュバルツブルグは左手をひっくり返すように動かしてまた述べた。
「ないものばかりだ。何もかもがない」
「これが敗戦ということですね」
「敗戦は何もかもをなくしてしまう」
また言うシュバルツブルグだった。
「それでも。今はやっていくしかないがな」
「その通りです。今の訓練も」
ここで訓練を受けている艦艇の動きを見る。それは彼等から見てはとりあえずは合格点と言えるものであった。しかしここでモンサルヴァートはあえて言うのだった。
「まだまだですね」

「動きがか」
「そうです。甘いです」
こう言うのである。
「まだ動きがよくなります」
「そうだな。まだだ」
シュバルツブルグもあえて厳しいことを言うのだった。
「まだよくなる。さらなる訓練が必要だな」
「暫くは休暇なぞなしでいきますか」
ここまで言うモンサルヴァートであった。
「週七日体制で」
「週七日か」
「これではどうでしょうか」
「貴族達はそれでもいいだろう」
シュバルツブルグは腕を組んで述べだした。
「彼等にとってはそれこそが義務だからな」
「はい、高貴なる者の義務です」
この言葉が出される。エウロパ貴族の中に常にある意識だ。彼等はそれにより戦い献身的な行動に出るのだ。騎士道精神にもそれが生かされている。

## 第三十四部第五章　覆される優勢その十二

「それは」
「だから貴族はいい」
また言うシュバルツブルグだった。
「しかしだ。貴族は将校だ」
「はい」
エウロパの特徴である。貴族が軍に入る場合は必ず貴族である。その階級は保障されている。貴族とはそれだけのものがあるのである。
「下士官や兵士はそうはいかない」
「そうですね。彼等は」
ここでこのことに気付いたモンサルヴァートだった。
「そうはいきません」
「彼等にはそうした義務を課すことはできない」
これもまたエウロパの考えだった。貴族でなければその問われる責任も軽微なものなのだ。だからこそここでモンサルヴァートの主張は崩れるのだった。
「とてもな」
「では。これは」
「できはしない」
結論は出た。
「そうしないといい軍にはなれないがな」
「訓練に訓練を重ねないと軍にはなりません」
モンサルヴァートはまた述べた。
「是非そうしたいのですが」
「私もだ。軍を強くすることもだ」
「まず我々は数で劣っています」
連合軍と比較してである。彼等と比較するとその数は圧倒的なも

のがある。この数の差をどうやって埋めるのかが彼等の課題なのだ。
「この数の差を埋める為にはです」
「軍の質をあげるしかない」
それしかなかった。答えは出ていた。
「その一環が訓練だ」
「幸い連合軍の訓練度は高くありません」
連合軍の特徴とも言えるものである。連合軍は軍規軍律には極めて厳しく教育も徹底しているがその反面訓練度は大したことがないのである。これはあまり過酷な訓練をすれば募集者が減る恐れがあるからだ。ここに連合軍の人員確保の難しさがあった。
「その反面装備はかなりのものですし」
「そうだ。彼等は艦艇の質もいい」
もう一つ問題があるのだった。連合軍のだ。
「ティアマト級巨大戦艦だけでなくな」
「艦艇全般だけでなく艦載機や陸上兵器までも」
「何もかもがいい。攻撃力と防御力に極めて秀でている」
これが連合軍の兵器の特質である。つまり強固な鎧で身を固めた重装歩兵なのだ。その装備はかなりのものなのである。
「そしてダメージコントロールや通信、射程もだ」
「速度以外はですね」
それ以外は全て優れているのである。
「そう、速度以外は」
「我が軍が優れているのは速度だけだ」
シュバルツブルグもまた己の軍の兵器について述べた。
「それを活かすには兵器開発も重要だが」
「兵器の開発までは予算が回りませんか」
「とてもな。回らない」
また言うシュバルツブルグだった。
「何もかもがないな。厄介なことに」
「ですから訓練をしていくしかありません」

モンサルヴァートはここでまた訓練を話に出すのだった。
「どうしても」
「こうしていくしかないか」
シュバルツブルグの声はまた苦いものになった。
「今はな。訓練をしてだ」
「はい。そうするしかありません」
「国を守ることが。ここまで難しいとはな」
シュバルツブルグはこうしたことも言うのだった。
「全く。厄介なことだな」
「今はとりあえず耐えるしかありません」
モンサルヴァートの声も苦いものになっていた。
「そして何としても」
「エウロパを護れるだけの軍を持っておかなくてはな」
「その通りだ。まず連合を見ながらだ」
中の話が整ってから外にも向かった。

## 第三十四部第五章　覆される優勢その十三

「サハラにも備えなければならない」
「ハサンはアヤグーズの滅亡でその力をかなり弱めました」
この力関係の変化は決してエウロパとは無関係ではなかったのだ。国際政治、戦争も含めてそれは玉突き的に関係していくものだからだ。
「ティムールはまた準備が整い次第ハサンをさらに攻めるでしょう」
「そしてハサンを倒せばだ」
まだ確かになっていないことだがこのことも話された。
「ティムールは確実にサハラを二分する勢力になる」
「既にその時点で我々に匹敵する勢力になっているでしょう」
サハラは二千億である。そこを二分する勢力ともなれば少なくとも七百億の人口とそれに見合う国力を手に入れていることになる。そういうことだ。
「そうなれば我等に介入する隙はありません」
「もっともそれまでに我等は勢力を回復できているかというとだ」
「それもまた絶望的ですが」
そこまで浅い傷ではないのもわかっている彼等だった。
「そして統一されたならば」
「確実に我等を凌駕する勢力になっている」
これが今エウロパが内心最も恐れていることなのだ。サハラが統一され強大な勢力になればエウロパは東と南から二大勢力の圧迫を常に受け続けることになるからだ。これだけはどうしても避けたいところであるのだ。
「攻めていた側が攻められる側になる」
「それまでには備えを万全にしておきたいです」
「そうだな。ハサンがもう少し粘ると思っていたのだが」
シュバルツブルグは残念そうに呟いた。

「もう少しな」
「もう少しですか」
「もう少しでよかった」
また言うのだった。
「時間がそれだけ延びるからな。少し頑張ればそれでアヤグーズは悪くとも引き分けだった」
「そうなれば時間が延びてですね」
「そうなるとも思っていた」
こうも言うシャイターンだった。
「あの状況ではな」
「やはり下馬評では皆そうでした」
皆そうは思っていたのだ。しかしシャイターンはその下馬評を完全に覆しそのうえでアヤグーズを滅ぼしたのだ。それはまさに予想外であった。
「それを覆して、ですから」
「おかげで我が軍にも影響していますか」
「そうだ。時間がなくなった」
時間もまた彼等の味方ではないのだった。時間の重要さを考えればこれもまた厄介なことだった。
「軍備を整えるだけの時間もな」
「何もかもがありませんね」
「袋小路に陥った気分だ」
シュバルツブルグの表現は今はどれもこうしたものばかりであった。
「何をするにしてもだ。何もかもがない」
「全てにおいて」
「せめてだ」
そしてシュバルツブルグはまたぼやくのだった。
「英雄がいればな」
「英雄ですか」

「カエサルやナポレオンのようなな」
エウロパの歴史においてはまさに救世主と呼ぶべき英雄である。欧州、それの前身と言うべきローマの英雄達である。彼等のことを言うのだ。
「彼等のようなだ」
「若しくはヒトラーのようにですか」
「ヒトラーか」
シュバルツブルグの言葉がここで止まった。
「それは少し以上に極端だな」
「能力としては申し分ないと思いますが」
「それもその通りだ」
ヒトラーがわかっているからこその言葉であった。エウロパにおいてはヒトラーは比較的評価されている。ユダヤ人の殆ど全てが連合に移ってしまったせいだと言われている。つまり連合においてはヒトラーはまさに悪魔なのである。他にも連合ではエウロパの様々な人間が悪魔化されているが。
「だが。彼は劇薬だ」
「劇薬でも国家は蘇りますが」
「言われてみればそうか」
モンサルヴァートの言葉に頷きもする。

## 第三十四部第五章　覆される優勢その十四

「だが。彼は劇薬だ」
「劇薬でも国家は蘇りますが」
「言われてみればそうか」
モンサルヴァートの言葉に頷きもする。
「少なくとも今は劇薬でも必要だな」
「残念ながらそうした状況です」
今のエウロパは敗戦によりそこまで追い込まれているのも事実だ。第一次世界大戦の後のドイツのような状況に陥っているのである。もっともあそこまで絶望的なインフレーションでもなく戦死者が多いわけでもなく失業者もいはしないが。それでもかなり暗いのは事実だ。
「今は」
「一番近いのはあの時か」
シュバルツブルグはここでまたある時代を連想したのだった。
「あの連合に追い詰められていた時だ」
「ロシアに裏切られフィンランドやバルカン、ポーランドを切り崩されてしまった時ですね」
「あの時は連合にそれこそ好き放題やられていた」
宇宙開発創成期のことだ。この時連合はその圧倒的な国力を使い欧州を宇宙開発から締め出しそのうえで彼等をそのまま枯死させようとしていたのだ。それにより実際に欧州は枯死する寸前になろうとしていた。絶望的な状況でありどうしようもないと思われていたのだ。
「しかし。その時にだ」
「ブラウベルグが」
「そう、彼が現われた」
今でもエウロパの国父と呼ばれている彼である。

「彼が現われてエウロパは救われた」
「強力なリーダーシップで欧州をまとめあげ」
まずはそれからだった。
「そして宇宙開発を独自に推進し復活させ」
「そのうえでこのエウロパに渡った」
そこまでしてエウロパを築いたのである。
「思えば彼がいてだ」
「それでは今我々に必要なのは」
「やはり。英雄だ」
その存在がどうしても望まれるのだった。今のエウロパでは。
「英雄が必要だ」
「ナポレオンでもヒトラーでもですか」
「出来ればブラウベルグだがな」
どうしても彼が最高とされるのがエウロパであった。
「さもなければこのままエウロパは衰えていくだけだ」
「難しいところですね。今は」
「誰か。いないのか」
シュバルツブルグはまた言った。
「本当にな」
そうした話をしながら今は訓練に励む。どうしようもない状況でもだ。それでも諦めずに動くしかない。今はそうした状況なのであった。
そしてアヤグーズを滅ぼしその領土を全て手中に入れたティムールは今はその領土を組み入れそのうえで軍事基地化することに専念していた。戦いは今は行われていなかった。
その軍事基地化であるが急ピッチに進められていた。本国から物資が運び込まれ基地が整理されていく。それは全てシャイターンの指揮によるものだった。
「順調に進んでいるな」
「はい」

六人の仮面の将校達をいつものように後ろに従え護衛とした彼に対して指揮官の一人が報告していた。彼は丁度アヤグーズのものだった王宮において食事を摂っていた。
食事は相変わらず豪奢なものであった。何十もの銀の皿の上に見事な料理がそれぞれ置かれ彼はそれを食べていた。当然ワインもそこにある。
「アヤグーズの基地化は」
「全て予定通りでございます」
指揮官はまた彼に答えた。
「このままいけば一月後には」
「基地化が完了するな」
「はい、そして」
指揮官はさらに言うのだった。
「このまま進撃に移れるかと」
「その時までは兵を休めておくのだ」
シャイターンは兵の休養にも述べていた。
「ゆっくりとな。いいな」
「わかりました。ではそれも」
「弓は常に張っていてはいずれ切れてしまう」
兵を弓に例えるのだった。
「だからだ。ここはだ」
「弓を休めておくのですね」
「そうだ。今はだ」
馳走のうちの一つにフォークをつけながらの言葉であった。見ればそれは羊の肉を香辛料で味付けしたものだった。それを食べながら話を聞いているのだ。

## 第三十四部第五章　覆される優勢その十五

「それでいい。一月はな」
「その一月が終わればどうされますか」
「問うまでもないと思うが」
シャイターンはその羊肉を食べながら述べた。焼けた羊の肉独特の味と香りが香辛料のそれと合わさって極上のものを見せていた。
「それはな」
「では進撃に」
「そうだ。そしてだ」
「そして？」
「その一月の間ももう一つやることがある」
静かに述べるシャイターンの目が光った。
「もう一つな」
「それは一体」
「政治だ」
ここでこう言うのだった。
「政治をしておく」
「政治をですか」
「アヤグーズ周辺のハサンの属国に対して書簡を送る」
「書簡をですか」
「我がティムールに入るか」
まずはこう述べた。
「それとも戦うかな」
「どちらかを選べというのですね」
「従えばそれでいい」
その場合はそれで終わる。実に素っ気無い言葉であった。
「しかしそうでなければだ」
「兵を送るのですね」

「その通りだ。そうして潰しておく」
これまた素っ気無く述べた言葉だった。
「その場合はな」
「容赦なくですか」
「容赦する必要はない」
シャイターンの言葉は傲然とした響きさえ持たせてきていた。
「それはな」
「わかりました。それでは」
指揮官も彼の言葉に対して頷いた。
「そのように」
「もっとも今の状況でどれだけそこまで骨のある人間がいるかだが」
シャイターンはこうも言うのだった。
「果たしてな」
「アヤグーズが滅んだ今はですか」
「そうだ。アヤグーズは属国の中で柱だった」
彼はまた言った。
「それがなくなった今はな」
「そこまで反抗する国もないというのですね」
「滅多にな。あれば兵を送りだ」
「攻めると」
「その前に兵を送るだけで効果がある」
シャイターンの言葉はここで微妙に変わってきたのだった。
「送るだけでね」
「といいますと」
「兵はあるだけで力になる」
これは政治の言葉であった。軍は攻めるだけに使うのではないのだ。見せる為でもあるのだ。政治では相手の国の軍事力も見てそのうえで考えるからである。
「そしてそれを動かせばだ」
「それだけで考えを変えるものだと」

「そこでまた言う」
シャイターンはそれで終わらせはしなかった。まだあるのだった。
「服従かそれとも戦いか」
「その二つをですね」
「問うのだ。戦えば当然死だ」
この場合待っているものはそれである。これをあえて言うこともまた駆け引きである。つまり棍棒を見せてそのうえで話をするというのである。
「しかし従えばだ」
「その場合は？」
「幸福が待っている」
シャイターンの口元がここで綻んだ。しかしそれは決して酒に酔っているのではない。別の理由から口元がここで微笑んでいるのである。

## 第三十四部第五章　覆される優勢その十六

「そう言うのだ」
「つまり幸福か死か、ですか」
「決断を迫らせるのだ」
これが狙いなのだった。
「それでいいな」
「はっ、それでは」
指揮官はここでまた敬礼をして応えた。
「そのように」
「これで殆どの国は落ちる」
シャイターンはまた述べた。
「問題なくな。まずはそうしてハサンの属国を我等の中に組み入れていく」
「ではティムール領にされるのですね」
「その通りだ。全てな」
それはアヤグーズではないということだった。
「暫定的には統治は軍政にするが」
「はい」
少なくとも戦争中に文民統治にするのは無理があった。そこまで手が回らないのと共に軍政でなければどうしても成り立たないからである。
「戦争が終わり次第ティムールの統治に組み入れておく」
「その場合各国の国家元首は」
「まずはその時のそれぞれの知事とする」
ティムールは知事は国家主席であるシャイターンが直接任命する方式となっている。この辺りが中央集権的であり独裁的である証であった。
「そして四年でだ」

「交代ですか」
「その通りだ。それで終わりだ」
こう述べるのだった。
「そしてその四年の間に彼等の下にいる官僚達を変えていく」
「ティムールの者に」
「そして元いた者は移転だ」
官僚の転勤はティムールでも常にあるものだ。
「いいな。それでな」
「わかりました」
また頷く指揮官であった。
「それではそれもそのように」
「いいな。ハサンをこのようにして我が国に組み入れていく」
政治としてであった。
「これからもな」
「この戦争は政治でもあるのですね」
指揮官はシャイターンの話を聞いてこう述べたのだった。
「それもかなり高度の」
「戦争は全てそうだ」
シャイターンは今度は魚を食べていた。見事な大きさの鯉を揚げたものである。今度はそれを食べながら指揮官と話をするのだった。
「全てな。政治なのだ」
「今回だけではなくですか」
「そうだ。今回だけではない」
彼はまた述べた。
「だからだ。全て組み入れていくぞ」
「はっ」
「まずは一月の間はそうしていく」
ハサンの属国達への行動もその中に入っているのだった。
「周辺国をだ。組み入れだ」
「わかりました」

「これはそのままハサンの勢力を削ることになっていく」
このことも読んでいるシャイターンなのだった。
「そして我等の勢力になっていくのだ」
「はっ」
指揮官はその言葉を聞いてまた敬礼をした。
「ではそこにある兵力もまた」
「当然我が軍に組み入れていく」
やはりこれも入るのだった。サハラにおいては併呑された国の軍はそのまま併呑した国の軍となる。これはどの国でも行われていることだ。
「いつも通りな」
「はい、それではそのように」
「装備はそのままであってもな」
ハサンとティムールでは装備が違う。異なった装備の軍が混ざり合っているのもまたサハラにおいてはよくあることなのである。

## 第三十四部第五章　覆される優勢その十七

「当分はそれでいい」
「わかりました」
「言い換えればそうするしかないがな」
「これもいつも通りですか」
「そうだ。装備を揃えるのにも時間がかかる」
　これもまた軍事の常であった。流石に今の戦争中で併呑した相手国の軍まで全て己の国の装備にしそのうえ万全に動かせるようにする物資や時間の余裕はないのだった。
「だからだ。当分はそれで我慢するしかない」
「ではそれもまた伝えておきます」
「そうしてくれ。とりあえず話はここまでだ」
　話しながらそのうえでまたワインを飲むシャイターンだった。見れば今飲んでいるワインは魚に合わせてか白ワインであった。先程までの赤ではなかった。
「そう。例えばだ」
「例えば？」
「赤いワインがある」
　話をワインに例えてきた。一旦終わらせたうえでだ。
「しかし同じテーブルの上で白いワインも出されるな」
「はい」
　これは料理の常識だった。メニューにあわせて赤も白も用意するものなのだ。
「それを同じに飲んで楽しむものだ」
「では軍もまた」
「そういうことだ。話はそういうことだ」
　また述べるシャイターンであった。
「わかったらだ。すぐにそうしていくようにな」

「はっ、それではそれも」
指揮官はまた敬礼して応えた。
「そのように」
「では御苦労だった」
シャイターンは白ワインを飲み終えたうえでまた指揮官に告げた。
「下がっていいぞ」
「はい、それでは」
「ああ、そうだ」
ふとまた思い出したシャイターンであった。
「アヤグーズ軍の将兵達だが」
「彼等も我が軍に組み入れるのですね」
「志願者だけだ」
こう制限はするのだった。
「志願者だけにせよ。そして階級はそのままだ」
「階級はそのままですか」
「そうだ。待遇もティムール軍と同じだ」
「同じといいますと」
「何かあるというのか？」
指揮官が異議を言いそうなので事前に問うのだった。
「何かあれば言ってみるがいい」
「宜しいですか？」
「私は異論で誰かを咎めたことはない」
これはその通りであった。ティムールは確かに独裁国家であるが言論の自由はあるのだ。己を批判するかといって何かをするシャイターンではないのだ。
「それはわかっているな」
「はい、それではです」
「うむ」
こうして口を開く指揮官だった。彼は言った。
「そうなれば元々のティムール軍の将兵が不満を抱きませんか？」

「かつての敵と同じになってですか」
「そうです。感情的に」
「その心配はない」
それに関しては一言で終わらせたシャイターンであった。
「それはな」
「ありませんか」
「今までもそうだった」
そしてこうも言うのだった。
「そもそもティムール軍は北方の諸国家の軍を集めた軍だな」
「そういえば」
ここでそのことを思い出した指揮官だった。
「我が軍は。そうでした」
「その通りだな。ティムールという国家自体がだ」
「はい」
それもその通りだった。そもそもティムールという国家は北方の諸国家が集まりシャイターンを元首として成立したのである。シャイターンはその政治力と以ってその寄り合い所帯を瞬く間に己の独裁体制にしてしまったが。その際彼のこの考えに反対しような要人や実力者が何人か消えていたりもする。
「だからだ。気にすることはない」
「左様ですか」
「全てのティムール軍の将兵は同じだ」
そしてこうも言うのだった。

## 第三十四部第五章　覆される優勢その十八

「それにだ」
「それに？」
「同じムスリムではないか」
「はっ」
この言葉は最大の決まり文句であるのだ。サハラにおいては。
「そうですね。同じでした」
「我等はムスリムだ」
この同じムスリムという言葉そのものがサハラをサハラにしているのだ。確かに彼等は多くの国家に分かれており争いを続けているがこのムスリムという意識だけは全ての者にあるのだ。これがサハラの最大の特徴であり一種の連帯感も生んでいるのである。
「ならば平等だな」
「そうでした。確かに」
「わかればいい。これでいいな」
「はい」
またシャイターンの言葉に頷く指揮官だった。
「それではそのように」
「そうだ。それではな」
「わかりました。それでは」
こうして彼等は話を終え指揮官は彼の場に戻った。シャイターンはそのまま食事を進めていたがやがてデザートのうちの一つを食べ終えそのうえで周りの者に言うのだった。
「今日はこれでいい」
「左様ですか」
「後は好きにするがいい」
手をつけていない料理を見回したうえでの言葉であった。
「いつも通りな」

「それでは」
「諸君等の好きにするがいい」
見れば馳走の殆どに手をつけてはいない。あくまで食べたのは数品だけである。あとは全く手をつけてはいない。これがいつもだというのだ。
「後はな」
「有り難き御言葉。それでは」
「そうだ。それもいつも通りな」
「わかりました」
その言葉に従い馳走に美酒が下げられていく。この馳走や美酒は下の者達が食べている。シャイターンの食事はいつもこうなっているのだ。
そして食事の後で彼は仕事に戻った。仕事はデスクワークであった。それを一つ一つ的確に処理していると不意に部屋に誰かが入って来たのだった。
「誰だ」
「はい、私です」
それは若い将校だった。まず扉にノックしてそのうえで部屋に入ると敬礼の後でシャイターンに対してきびきびとした声で応えたのだった。
「お邪魔させて頂きます」
「そうか。遂にか」
「はい、全てわかりました」
こう言うのである。
「属国のことが」
「そうか。早いな」
「早いですが的確です」
ここで若い将校はこう言うのだった。
「我が情報部の情報収集は」
「確かにな」

シャイターンはデスクワークをしながらそのうえで彼の言葉に応えた。
「それはな」
「その通りです。属国ですが」
「うむ。それでどういった状況か」
「全てのデータを只今メールにおいて配信させて頂きました」
「メールでか」
「そうです。是非御覧になって下さい」
こう彼に告げるのだった。
「メールを」
「わかった。それではな」
ここで己の机の上にあるノートパソコンを開いた。見ればそのノートパソコンは連合において使われているものより遥かに古く雑であった。
そのノートパソコンのメール欄を見ると確かにそれがあった。彼はそれを見て納得した顔で頷きそのうえでまた言うのだった。
「ふむ、わかった」
「これで宜しいでしょうか」
「御苦労だった」
シャイターンは静かに彼に対して礼を述べた。

## 第三十四部第五章　覆される優勢その十九

「これで彼等のことは全てわかるな」
「そのメールの添付ファイルにある通りです」
見ればそれは相当な量であった。
「これを御覧になって頂ければ今後は戦略において」
「参考にさせてもらう。是非な」
「有り難き御言葉」
「どうやら一戦も交えずに周辺の属国は全て手に入りそうだ」
シャイターンはこうも言った。
「これはいいことだ」
「まず要人達の弱みも握りました」
「賄賂も使える者もいるか」
「どうやら」
このことも述べる将校だった。
「どうされますか？」
「決まっている。すぐにそうした者には賄賂の用意だ」
シャイターンの返答に迷いはなかった。
「即座に送っていけ。よいな」
「はっつ、それでは」
「賄賂なぞ安いものだ」
彼は賄賂について語るがそこでの言葉の調子は実に素っ気無いものだった。
「軍を動かすことに比べればな」
「容易いですか」
「そうだ。一人にかける金なぞ軍を動かすことに比べればだ」
また言うのだった。
「実に安いものだ。一個艦隊を動かすだけのものもかからないのだからな」

「確かに。それは」
「ならばすぐに賄賂の用意だ」
彼はまた言った。
「財務省に伝えておく」
「秘密資金からですね」
「その通りだ。そこから出す」
所謂工作用の資金である。そこにはこうした他国の要人達への賄賂も含まれている。そういうことなのである。
「これもまたいつも通りだな」
「はい、確かに」
「何事もいつも通りだ」
またいつも通りと言うシャイターンであった。
「賄賂に関しても。そして」
「そういったものが効かない相手にはですか」
「弱みは全て握った」
その言葉が剣呑なものになった。
「それではだ。わかるな」
「無論です」
そして将校も彼の言葉の意味がよくわかっていた。
「それを使い」
「そういうことだ。アヤグーズの滅亡はだ」
「はい」
「ただ一国が滅んだというだけではないのだ」
こう述べるのだった。
「ただそれだけではな」
「そこにプラスアルファがあるということですね」
「その通りだ。まずアヤグーズの領土を手に入れ戦略的な要地を手中にした」
まずはこれであった。
「そしてその国力と兵力も手に入れた」

「次にそれですね」
「そうだ。そしてだ」
そのうえでであった。
「属国達も我等の勢力圏に収められる。ただ優勢に立っただけではないのだ」
「国力をさらに増すことができると」
「その通りだ。これで我が軍は完全に優勢になった」
その声が誇らしいものになった。
「このまま押していく」
「それですが司令」
ここで将校はシャイターンに言ってきた。
「一つお伝えしたいことがありますが」
「何だ、それは」
「ハサン軍のことですが」
彼等についてであった。その劣勢に立たせた相手のことである。
「彼等はここで戦力をさらに増加させてきました」
「傭兵でも雇っているのか」
シャイターンはすぐにその戦力増強のもとを察してみせたのだった。
「そうなのか」
「おわかりですか」
「最早それしかない」
素っ気無くかつ冷徹な言葉であった。

## 第三十四部第五章　覆される優勢その二十

「今のハサン軍はな。既に予備戦力は全て動員している」
「その通りです」
　このことは既にティムール軍に見抜かれていた。そのうえで戦略を立ててきているのである。相手の戦力を見極めることも戦略なのである。
「サハラに残っている傭兵の全てを雇い入れるつもりのようです」
「傭兵達の動きは知っていた」
　シャイターンはここでまた落ち着き払った言葉を出してみせた。
「既にな。わかっていた」
「わかっておられたのですか」
「私もかつて傭兵だった」
「あっ・・・・・・」
　将校はその言葉にはっとなった。シャイターンは元々傭兵である。だからこそ傭兵の動きはよくわかり知っているのだ。かつてのことからだ。
「だからだ。その動きはよくわかる」
「そうでしたね。それは」
「ハサンも必死だ」
　次に言うのはこのことだった。
「それこそ金に糸目はつけずに集めている筈だ。違うか」
「はい、その通りです」
　そしてやはりその通りなのであった。
「今ハサン軍はです。傭兵達を掻き集めています」
「そのうえで我々に対して向けてこようとしているな」
「そうです。それで今」
　また言う将校であった。
「傭兵達を集めているとのことです」

「そうか。それではだ」
「はい」
「その傭兵達の使い方だが」
シャイターンはそれについても問うのだった。これは将校にとっては意外な質問であった。問われた彼は表情の驚きの色を隠せなかった。
「どうなっている？」
「使い方ですか」
「ただ前面に立たせているわけではないだろう」
彼は言うのだった。普通傭兵といえば軍の先頭に立たせて戦うものだ。これは正規軍の消耗を避ける為である。簡単に言えば消耗品として扱われている一面があるのだ。
「違うか」
「何故それを」
「あの太子はだ」
彼が言うのはハサンの太子に関してだった。
「彼は正規軍にこだわるな」
「はい、そうです」
将校はその驚いた顔をそのままにして応えた。その通りだったからだ。
「その通りです」
「その彼が傭兵を雇う」
それについてもまた述べた。
「これだけでも確かに驚くべきことだが」
「それだけではないのですね」
「傭兵を傭兵としてだけ使う」
彼はまた言った。
「そうではないな。傭兵を正規兵と一緒にさせて使う」
「何故それを」
今のシャイターンの言葉は将校については驚愕すべきことであっ

た。何故なら今それを言おうとしてそれを先に言われたからである。
「御存知なのですか」
「太子の性格を考えればわかることだ」
相手の性格を読んでということであった。
「これはな」
「そうだったのですか」
「そうだ。だからわかったのだ」
シャイターン一流の読みだった。彼はその読みがあるからこそここまでなれたのだ。ただ優秀なだけではなくそうした能力も持っているのである。
「それはな」
「そうでしたか。読まれたのですか」
「その通りだ。読んだ」
彼はまた言った。
「彼をな。傭兵を完全に正規軍に組み入れたうえで戦う」
「無謀です」
将校は疑問符そのものの言葉であった。
「そのようなこと。できる筈がありません」
「いや、確かに難しいが」
しかしここでシャイターンは言うのだった。

## 第三十四部第五章　覆される優勢その二十一

「見るべきものはある」
「見るべきものがですか」
「そうだ。これからはだ」
そして彼はまた己の言葉を述べてきた。
「傭兵の時代は終わる」
「傭兵がですか」
「傭兵は何故存在しているか」
こう将校に対して問うのだった。
「何故だ、それは」
「それは」
「戦争があるからだ」
自分から言ってみせたシャイターンだった。
「そうだな」
「はい、それは」
その通りだった。傭兵は戦争があるからこそ存在するのだ。ルネサンスの頃のイタリア半島然り三十年戦争の時のドイツ然りだ。彼等もなのだ。
「その通りですね」
「そういうことだ。戦争がなくなれば傭兵はいなくなる」
「そうなります。確かに」
「正規軍だけでよくなる。そうなったならばだ」
「元傭兵を正規軍にですか」
「組み入れていくことになる」
シャイターンは述べた。
「その場合にはな」
「成程、そうですね」
シャイターンの言葉に頷く将校だった。

「そうなってしまえば。統一されれば」
「統一してしまい正規軍だけになれば」
シャイターンはまた言うのだった。
「傭兵を完全に我が軍に組み入れることになる」
「その時の参考にされるというのですね」
「だからだ。これからはハサン軍の研究を一層進めていく」
敵を学ぶ、敵を知りということであった。
「これはスタッフを編成しそのうえで進めていくものとする」
「わかりました」
「そしてだ」
彼はさらに言うのだった。
「連合軍もだ」
「連合軍ですか」
「そう、連合軍も雑多な軍からあそこまでなったな」
「はい」
「あれは彼の政治力あってのものだが」
ここでもシャイターンはあえて言うのだった。彼という表現をしてみせたのだ。
「彼のな」
「彼といいますとやはり」
「そうだ、八条義統だ」
彼はここで言うのだった。
「彼があってだな。やはりな」
「そうですね。やはり八条長官がいてこそです」
答える将校だった。
「あの人なくしてはです」
「彼の政治力は卓越したものでありしかも統率力も傑出している」
「一流の政治家ということですか」
「一流どころではない」
その表現すら超えるというのだった。

「そうだな。彼もまた英傑だ」
「あの長官もですか」
「そうだ。英雄だ」
八条をこうまで評するのだった。
「彼もまただ。英雄だ」
「英雄なのですか」
「その英雄が為したことだ」
その連合軍の統一ということだ。それは決して生半可な人物ではできはしない、そしてそれを理解できるにもそれだけの資質が必要ということなのだ。
「その彼の果たしたことをだ。学んでみるか」
「傭兵と正規軍の統一にですか」
「連合軍は傭兵の様な存在も組み入れた」
このことも知っているのだった。かつて治安が悪かったので企業は危険な宙路を通る際にはそうした警備員というよりは傭兵に近い存在を雇っていたのである。連合軍は設立にあたってその彼等も入れてそのうえで軍を大きくしていったのである。これも連合軍の歴史である。

## 第三十四部第五章　覆される優勢その二十二

「彼等はな」
「我等と同じ様にですか」
「三百、いやもっとあったか」
今度は連合の中の諸国について語った。
「一体どれだけあったかな」
「連合の国々ですか」
「その全ての軍を一つにした」
「あれは確かに驚くべきことです」
「そうだ。その通りだ」
このこともまた有名な話である。連合軍を語るうえでだ。
「その全てを一つにしたこともな」
「参考にされるのですね」
「本格的に学ぶべきだな」
語るその顔は真剣そのものだった。
「今後な」
「連合軍といいましても」
「学んでも得られるものはないというのか？」
「強いとはお世辞にも言えません」
これは連合軍について回っている評判である。連合軍はその訓練度の低さからどうしても精強な軍とはみなされていないのである。
「ですから。学ぶべきかというと」
「そうしたところは学ばない」
はっきり言うシャイターンであった。
「そこはな」
「学ばないのですね」
「何も悪いところを学ぶ必要はない」
そういうことだった。

「学んでも何も得られない部分はな」
「それでは他の部分をですか」
「連合軍は確かに強くはない」
弱いとはまでは言わないが、だった。
「しかしだ。そうして一つにまとめたところといい」
「はい」
「そしてその補給システム等の後方支持だ」
「それもですか」
「そうだ。それもだ」
これもだというのだ。
「それもまた学ぶべきだな」
「学ぶべきところが多い軍だというのですね」
「その用兵マニュアルも気になるがな」
「ふむ、それもだと」
「あのエウロパ軍との戦いだが」
あの戦いのことも各国の軍ではよく学ばれているのである。
「それもだが」
「それもですか」
「そうだ。戦術は確かに千差万別だが」
「はい」
「ある程度の法則もまたある」
これは全てのものに対しても言える。当然戦術にもだったのだ。
「それがわかっていてこそのあのマニュアルだ」
「あれはそれ程深いものだったのですか」
「そうだ。全てはな」
彼はまた言った。
「それだけの深さのある軍だ」
「成程」
「そしてやはり今回学ぶのはだ」
「連合軍のその統一ですね」

「そうだ。それを学ばせてもらう」
言葉が強いものになった。
「是非な」
「わかりました。ですが」
「連合に行くことはか」
「それはどうかと思いますが、私も」
将校もこの話は聞いているのだった。彼にしてもこれに対してはどうにも賛成しかねるのだった。こればかりはどうしてもなのだった。

## 第三十四部第五章　覆される優勢その二十三

「やはり。危険ですし」
「意味がないというのだな」
「御言葉ですが」
ここでは謙遜しながらも頷くのだった。
「私もまた」
「まあそれは今は保留しておこう」
シャイターンは今では言葉を控えるのだった。
「しかし」
「しかし？」
「連合軍のことは学ぶ」
これは確かに言うのだった。
「今後軍を作り上げる為にな」
「それはですか」
「そうだ。していく」
彼はまた言った。
「今後の為にだ。その為にも」
「今ですか」
「未来に行くにはまず現在を通る必要がある」
シャイターンの言葉は哲学的なものになった。
「その現在だが」
「ではこの属国のデータを」
「使い一兵も失うことなく彼等を全て併呑していく」
これが彼が狙っていることだった。
「全てな。それでいいな」
「では御願いします」
「すぐに各国に使者を送る」
彼はまずは政治から入るのだった。

「そしてだ。工作も行い」
「そのうえで兵も見せると」
「見せる時は見せ、隠す時は隠す」
シャイターンの軍の運用はここでも政治的であった。軍隊の使い方はただ戦場で戦わせるだけではない。見せてそのうえで使うこともまたそのうちの一つなのだ。
「それで行くぞ」
「そのうえで一月後には」
「そうだ。進む」
また言うのだった。
「ハサンに向けてな」
「決戦ですね」
ここで将校の目が光った。
「いよいよ」
「我等は一度の敗北では崩壊はしなくなった」
かつては違っていた。しかしアヤグーズを手中に収めたことによりそのうえでそれはなくなったのだ。これだけでも有利になったことがわかる。
「だが」
「だが？」
「それでも戦いは終わっていない」
それもまた事実であった。
「これはハサンが滅びるまで続く戦いだ」
「そしてまだありますね」
将校の目がここで鋭く光った。
「まだ」
「わかっているようだな」
「はい」
将校はシャイターンの言葉に今度はニヤリと笑った。
「そう。我々の戦いはです」

「統一までだ」
そしてシャイターンもまた言うのだった。
「サハラに残るべき国家は一つだけだ」
「天に二日なく、ですね」
「そういうことだ」
これは古代からある言葉である。もっともこの時代においては星系によっては恒星が幾つもある星系もざらなのでどの場合にも言えることではなくなっているが。
「そして残るのはだ」
「我がティムールだけだということですね」
「その通りだ。そしてその為にだ」
シャイターンはまた笑みから顔を鋭いものにさせた。
「連合には学んでおく。いいな」
「何があろうともですか」
「そうだ。何があろうともな」
シャイターンの決意は確かなものだった。そしてその決意を見せて将校を下がらせると今度は一人での仕事に戻った。その胸に様々な思いを秘めながら今は目の前の仕事に取り掛かるのだった。当然それは現在だけでなく未来にも及ぶものであった。

第三十四部　完

２００９・４・２３

# 第三十五部第一章　各国の法その一

## 各国の法

アヤグーズが滅んだことは各国の軍や政府だけの問題ではなかった。それを話すのはエウロパ貴族、とりわけ今しきりに己の名を売り出しているギルフォードもまた同じであった。

「諸君！」

論壇に立つ彼は高らかに集まっている聴衆達に話していた。

「アヤグーズは滅んだ。それは何故か」

「何故か？」

「弱かったからじゃないのか？やっぱり」

あまり物事を知らない者のうちの一人がぽつりと呟いた。

「やっぱりな」

「だよな」

「弱かったからだ！」

そしてギルフォードも叫んだ。

「アヤグーズは弱かった！だからこそ敗れたのだ！」

「ってアヤグーズって弱かったか？」

「まさか」

物事を知る者達はやはりそれに対して懐疑的であった。

「そんな筈がないよな」

「彼等は強かった」

「ああ」

かつてのアヤグーズ軍、そしてそれを率いていたブルコルジを思い出しての言葉である。思い出せば思い出す程その強さはかなりのものであった。

「あんな強い軍はそうそうなかっただろ」

「それが弱かったなんてな。嘘だろ」

「彼等は確かに強かった」

ここでギルフォードは自分が今言った言葉を否定してみせた。
「しかし。同盟軍が弱かったのだ」
「っていうとハサン軍のことだな」
「そうだな」
「ああ」
こういうことになる。ハサン軍の弱さもかなり評判になっていたのだ。
「あれはな。確かにな」
「酷過ぎたな」
「全くだ」
「そうだ。そのあまりにも弱体なハサン軍のせいだ」
彼はさらにハサン軍について言及した。
「彼等のせいだ。アヤグーズ軍は強かったが頼むべきハサン軍は弱かった」
「だから負けたってか」
「その通りだな」
「だよな」
「ハサン軍は宗主国の軍だった」
これもまたその通りである。
「しかしその宗主国が弱かった！弱いからこそ敗れた！」
またこう主張する。
「例え一つの軍が弱くとも他の軍が弱くては話にならない！」
「ああ、そうだ」
「一つだけが強くてもな」
「諸君、私はここで主張する！」
まさに大上段の言葉であった。
「我がエウロパはハサンの轍を踏んではならない！絶対になるのだ！」
「絶対に！？」
「そうだ、絶対になるのだ！」

演説はさらに続く。
「絶対の軍にだ！我が軍はなるのだ！」
「強くか」
「そうなるっていうのか」
「全ての軍が精強に」
彼はまた言う。
「そして強靭な軍にだ。我が軍はすべきである！」
さらに言葉を続ける。
「五百個艦隊！そして装備をさらに高め！」
「えっ、今のままか！？」
「五百個艦隊を維持だって？」
「正気か！？」
これには驚く者も多かった。エウロパは既に連合との戦いで五百の艦隊のうち約一五〇を失い今は三百五十個艦隊しかない。それでも財政負担はかなりのものになっているのだ。
「そんなことしたら財政が」
「持つ筈がない」
「何を考えているんだ？」
「一体何を」
「その財源もまたある」
しかし彼はここでまた主張するのだった。
「今エウロパは全てが沈黙している！」
沈黙という言葉を出したのだった。

## 第三十五部第一章　各国の法その二

「全てがだ。それを動かすのだ！」
「動かすだって！？」
「具体的に言えるのか？それは」
皆これにはかなり懐疑的であった。それまでギルフォードを信じていた者もこれには眉を顰めさせる。流石に今は信じられなかったのだ。
「そんなことが」
「言えるのか？」
「公共事業の大幅な増加を！」
しかし彼は言うのだった。
「それにより経済を活性化させる。軍備も増強させる！」
「！？そんなことをしたら」
「財政が破綻するぞ」
何人かはすぐに眉を顰めさせて反論した。
「やっぱり何も考えていないのか？」
「それとも頭がおかしいのか？」
「いや、それは違う」
「そうか、その手があったな」
「そうだな」
しかし別の何人かはギルフォードのその考えに賛同するのだった。
「若しかしてあの侯爵殿はわかっているのかもな」
「経済もな」
「ああ、わかっている」
そしてこう言い合うのだった。
「そうだ、今はそれしかない」
「とにかく何かすることだ」
「ああ、それだな」

口々に言い合う。彼等もまたわかっているのだった。
「今はな。それだ」
「エウロパを蘇らせるには金を動かすしかない」
「何があってもだ」
こう言い合いそのうえでギルフォードの意見に賛同するのであった。全てをわかった顔でだ。
「私が総統に就任した暁には公共事業の大幅な推進と軍備の増強を推し進め必ずエウロパを復活させよう！諸君、期待しているのだ！」
「そうだな。これは期待できる」
「間違いない」
何人かはこれでギルフォードを完全に信頼するようになった。ギルフォードのこの演説は忽ちのうちにエウロパはおろか全人類に伝わった。それは連合においてもだった。
「またえらいことを言っていますな」
「全くです」
また連合各国の首脳達が集まっていた。そうしてそのうえで話していた。今彼等はまた国際会議の後の密室で話をしていた。集まっているのは何人かは有名な者であった。
「しかし妥当ではあります」
「そう、その通りです」
「ああした時には公共事業。我等で言うと」
自分達にあてはめても話すのだった。
「開拓ですな」
「そして移住です」
その二つなのだった。連合では不況に陥ったり余剰なろうどう人口が生じたならばすぐに開拓が推し進められる。それにより金を動かしたり労働人口を流入させるのである。他には人口過密の傾向が見られる場合にも当然のように開拓が行われている。
「それをやっていますが」
「エウロパではそれを長い間していなかったようで」

「したくともできないでしょう」
そのうちの一人が嘲笑うようにして言うのだった。
「エウロパでは」
「ははは、確かに」
「彼等に出来ず筈もありませんな」
「全くです」
まるで二十世紀末期のアメリカの雑誌の一つニューズウィークの様にエウロパを嘲りだした一同であった。ここでもエウロパへの嫌悪感が出ていた。
「そんなことがエウロパには」
「ない袖は振れません」
その中の一人のやや浅黒い肌をした金髪の男もまた笑って述べていた。
「彼等には」
「全くですな」
「首相もそう思われますか」
「はい」
この男は首相と呼ばれそれに応えてまた笑う。彼はトルコ首相であるケブン＝バットゥータである。この前首相になったばかりの初老の政治家であり首相就任までに何度か閣僚を経験してい辣腕家である。
「その通りです」
「やはりそうですか」
「我等にはありますが」
連合には無限の開拓地がある。これが彼等を支えているのである。

## 第三十五部第一章　各国の法その三

「彼等にはありませんからな」
「そうそう、確かあるのはあれですな」
「何十万光年もの何もない宙域が」
それがエウロパの北と西に広がっているのである。言い換えれば連合、サハラに接している部分以外はもう全てがないのである。
「あるだけですからな」
「何もできはしません」
「もうサハラにも進めませんしな」
サハラ侵攻もまた不可能になってしまっていたのだ。侵略先だったサハラ北方にティムールという強大な国家が誕生しそのうえ彼等の国力が大幅に減少してしまったからだ。
「それでどうして攻められるのか」
「できるものならやってもらいたいものです」
「ははは、確かに」
それぞれこう言ってエウロパを愚弄していく。そしてその中でバットゥータは言うのだった。
「それでです」
「はい、何か」
「そのエウロパに出て来たあの御仁ですが」
話がギルフォードに戻った。
「彼は一体何なのでしょう」
「ナポレオンのつもりですかな」
一人がバットゥータの言葉に応えて述べた。
「若しかすると」
「ナポレオンというには武勲が少ないのでは？」
しかしバットゥータは彼の意見にはこう返すのだった。
「それにはまだ」

「少ないですか」
「はい、どうにも」
バットゥータはここでまた言った。
「ナポレオンは馬上で天下を治めようとした男です」
「ですな」
「稀有な例ではあります」
かつて漢の高祖劉邦は言った。馬上で天下を治めることはできないと。彼は確かに馬上で天下を争いそのうえで天下を手中にしたがそれでもその手に入れた天下を治めたのは玉座においてであった。馬上では国家全体を見渡すことはできはしないのである。
「しかし失敗しました」
「確かに」
「武勲で天下をまとめられるものではありません」
ここでナポレオンに対する結論が出されたのだった。バットゥータの口によって。
「そう、決して」
「そして彼もわかっているようですな」
「確かに」
バットゥータの周りの者達が口々に言う。
「今彼が着ているのはスーツですからな」
「軍服ではなく」
エウロパでは軍でのその階級、予備役であっても公の場や人前においては軍服を着ることもまた普通にある。この辺りが連合とは違うのだ。
「それでは彼は玉座で天下を治めるつもりですかな」
「そして論壇にて」
「論壇ですか」
バットゥータは論壇と聞いてまた言うのだった。
「それではヒトラーですかな」
「ヒトラーですか」

「あのドイツの独裁者の」
「そう、あの男です」
バットゥータはさらに言葉を続ける。
「あの英雄とされた男です」
「髭の小男・・・・・と言いたいところですが」
彼の仇名が出されようとしたがそれはすぐに口に出した本人により止められた。
「確か当時のドイツ人の平均身長でしたな」
「はい、一七二センチか一七五センチでした」
その場にいた一人が言うのだった。
「それだけあれば当時は普通でしょう」
「そうです。決して小さくはありません」
ここで他の者達も話に入って来た。
「あの悪名高きナチス親衛隊の参加基準が一八〇以上でしたから」
親衛隊に入るには長身であることが条件の一つとされていた。つまり当時のドイツでは一八〇以上あれば立派な長身なのだった。

## 第三十五部第一章　各国の法その四

「ですから彼は小さくはありません」
「当時では普通でしょう」
「ははは、そうでしたな」
また笑顔で語られるのだった。
「今の我々と比べれば確かに小さいですが」
「今のエウロパ人にしろ」
この時代の連合の平均身長は一九〇に達している。それに対してエウロパは一八〇あるかないかといった程度である。このことから連合軍が攻めてきてバイキングの再来とまで言われたのである。
「当時であの伍長殿は普通でしたな」
「しかもその伍長にしろ」
これまたヒトラーを指すスラングの一つともなっている。
「兵士から昇進できる最高の階級だったとか」
「ではやはり優秀だったのですな」
一応ヒトラーに対しての結論も出された。
「あの人物なりに」
「そうなりますな」
またここでバットゥータが述べた。
「あの男はあの男として」
「優秀でした」
「確かに」
この場にいる者が皆それを確認し合う。そうしてそのうえでまた話すのだった。
「そして彼はヒトラーでしょうか」
「確かに演説は見事ですな」
「はい」
演説もまた政治家にとって重要な要素の一つである。ヒトラーは

とりわけその天才として知られその演説によって総統になった部分が大きい。
「そしてカリスマもまたあります」
「それもですな」
「増々似ていますか」
ヒトラーはその恐ろしいまでのカリスマによりドイツ国民から圧倒的な支持を得た。そのカリスマはドイツが敗北するまで健在で死後も彼を密かに支持し崇拝する者は多かった。この時代の連合では全否定されているが言い換えるとこれもまた支持なのかも知れない。
かつて三島由紀夫という作家がヒトラーについて戯作を書きそこからヒトラーが好きかどうか問われこう答えた記録が残っている。
「嫌いと答える他ない」
こう答えたのである。今の連合におけるヒトラーの評価もこうであるかも知れない。連合においてはエウロパを否定することで存在している一面があるからだ。
「しかし。何かが違いますな」
「何かがですか」
「それは？」
皆ここでまたバットゥータの言葉に注目するのだった。
「ヒトラーは伍長でしたな」
「え、ええ」
「そうですが」
彼等はまずこのバットゥータの言葉に頷いた。
「ですがそれは今先程」
「お話に出ていますが」
「そこです」
だが彼は悠然と笑ってこのことをまた言うのであった。
「彼は伍長でした。即ち」
「即ち？」
「といいますと」

「平民出身でした」
この時代の連合ではとりわけ忘れられていることであるが彼はまごうことなき平民出身であった。そこが彼という人間を語る重要な要素の一つとなっているのだ。
「だからこそ伍長だったのです」
「そうですな。当時の欧州は貴族社会でした」
「今も同じですが」
どうしても皮肉が出てしまうのはやはり連合だからであった。
「貴族が将校になる」
「これは絶対ですからな」
「その通り。ここが我々と違います」
バットゥータは述べた。
「我々とはです」
「連合ではそもそも階級はありません」
「その通りです」
周りの者達もここで言うのだった。6
「階級がありませんから士官学校を出るか大学を出れば」
「若しくはパイロット等になるかすれば」
そうした条件があるには、であった。
「それで将校になれます」
「それだけでです」
「階級によってではなく」
これが連合なのだ。階級がない為誰もが将校になれるのだ。これは明治維新以降の日本でもそうであったしアメリカでもそうである。

## 第三十五部第一章　各国の法その五

「しかも誰でも士官学校や大学に入ることができますしな」
「ええ、そうです」
そこにも制限がないのであった。
「かつてのアメリカでは士官学校に入るには確か」
「はい、議員の推薦状が必要でした」
そうだったのである。つまりそれなりの信頼があるということである。それがなければ士官にはなれないということである。アメリカの意外な側面なのだった。
「流石に今は違いますがな」
「やはり誰でもです」
この時代ではアメリカもそうなのである。
「将校になれます」
「そして提督にも」
それもなのであった。提督、即ち将官は准将以上をさす。なお陸上部隊の将官が将軍と呼ばれるのはこの時代の特色である。宇宙軍が主体となっているからそうなっているのだ。
「しかしエウロパでは将官も殆ど貴族だそうで」
「そもそも平民から将校になろうという者も少ないです」
それもあるのだった。軍に入ることはノブレス＝オビリージュ、即ち高貴なる者の義務と呼ばれていてそれにより将校となっているからだ。
「階級と共に職業の分化もできていますからな」
「まあマウリアもそうですがな」
バットゥータはここでマウリアのことも話に出してきた。
「彼等もまだかーストがありますから」
「あそこはまた特別では？」
「そうです」

それまでエウロパにはばっさりと切り捨てる感じだった口調が急に歯切れの悪いものになった。これこそが連合とマウリアの関係であった。
「あの国の社会だけはどうにも」
「我々にはわからないものがありますから」
「マハラジャが三十代で将官になる」
すぐにである。しかも。
「しかも本人が知らないうちにです」
「そんなことがありますから」
「その将官の階級にしろです」
バットゥータは言った。
「代々続いているものです」
「はい、そうです」
「その通りですので」
これが連合からは常識の範囲外に思えるのだった。少なくとも連合では将官どころかその階級は本人に直接告げられるものであるからだ。
「ですからそれはもう」
「我々の理解できるものでは」
「我々はです」
また言うバットゥータだった。
「あくまで連合の常識の中で生きているのです」
「はい」
「その通りです」
「そしてその中で考えています」
周りにさらに話す。
「ですから。マウリアになるとやはり」
「ですね。とてもわかりません」
「我等の常識では」
「ただカーストがあるだけではありませんから」

マウリアの複雑な面はそこにもあるのだった。
「社会構造が我々とはまた違った意味で複雑ですし」
「街並みにしろ我々のものとは全く違います」
それもなのだった。
「街の中には何故か牛達がいますし」
「あれは奇怪ですがまだわかりますが」
「ええ」
バットゥータ達は今度はマウリアの街の牛の話もする。これはヒンズー教では牛は神聖な生き物なので大切にされているからである。
「車でクラクションを鳴らして牛を行かせようとしてもかえって怒られますし」
「あれもまた」
「連合の常識が全く通用しない社会です」
バットゥータの今度の言葉はこれであった。

## 第三十五部第一章　各国の法その六

「階級はありますが何故かエウロパの如き嫌味なものでもありません」
「ええ、そうです」
「その通りです」
それが何故かというとエウロパへの偏見に基くものに他ならないのであるが彼等はそれは全く気付いてはいないのであった。気付いても変える気もないのであるが。
「何処か納得できるものであります」
「その社会を築くものとして」
「そういえばあれは職業分化という意味もあるそうですな」
「そうらしいですな」
そしてカーストについては好意的でさえあった。
「考えれば知恵というものですか」
「エウロパとは違い」
エウロパの貴族制度は二十一世紀以降復活したものなのである。これを連合ではとかく色々悪く言っているのである。何処までも。
「そうした社会ですから」
「我々がとかく言うものではありませんな」
「全くです」
マウリアについてはこれで不問に処すのだった。
「さて、そしてサハラですが」
「はい」
今度はサハラに関してであった。
「あそこも階級はありませんな」
「まずは全て同じムスリムです」
これはサハラにおいては絶対の前提なのである。
「アッラーの前に平等です」

バットゥータは言った。なお彼もまたムスリムである。連合においてもムスリムは多数いるのである。それこそ何千億とである。
「ですからアッディーン副大統領にしろシャイターン主席にしろ」
「すぐにあそこまでなれたと」
「サハラは極端な実力社会です」
バットゥータはサハラをこうも評した。
「それもかなりの」
「戦いに勝たなければ生きていけない」
「だからですね」
「その通りです」
やはりそういうことであった。戦乱に覆われたサハラだからであった。
「連合もまた競争社会です」
「はい」
資本主義だからである。それも大衆型資本主義ならばそれはかなり激しいものになる。鏡の国のアリスで当時のイギリスは常に必死に走っていなくてはならないと言われていたがそれは大衆型資本主義ではさらに極端なものになってしまうのである。階級による職業分化がないからだ。
「ですがサハラの競争はというと」
「戦争ですね」
「その通りです」
やはりこれであった。
「つまり生きるか死ぬかです」
「連合も競争は激しいですが命までは取られませんからな」
「失敗してもまだ新天地があります」
「そうそう」
これが連合の考えであった。その無限の開拓地が彼等をそうした楽天性へと導いているのである。それを考えれば彼等にとって開拓地の存在は実に大きい。

「ですから何も恐れることはないのですが」
「しかし。命がかかるとなると」
「だからこそです」
バットゥータの言葉も真剣なものになる。
「彼等の優秀な人材はどうしても軍に集まります」
「ですな。言い替えればそうした人材が必要とされる」
「彼等の言う英雄が」
こういう流れになるのであった。
「サハラではまず戦争に勝つことですからな」
「負ければ命も国家も何もかもがなくなる」
「連合で滅んだ国家はありません」
千年の間だ。財政破綻したことがある国家はあってもだ。
「ですがサハラでは」
「一体幾つ滅んだのか」
「数えきれませんな」
「全くです」
サハラではそれこそ無数の国家が滅んできているのである。千年の間に無数の国家が戦乱の中に消えていっているのである。無数の人命と共に。

## 第三十五部第一章　各国の法その七

「そうした場所ですから」
「何と言いますかな」
話が少し詰まりもしていた。
「失敗は命取りですが」
「実に過酷な世界です」
「その過酷な世界だからこそです」
バットゥータの言葉も普段以上に理知的なものになっていた。
「優れた人材は生き残り勝つ為の世界に入ります」
「軍にですね」
「そういうことです。サハラではまず戦争に勝たなければなりません」
滅亡するということだった。
「それがサハラですから」
「ですね。どうしようもないものがあります」
「厄介なことに」
サハラにとってその軍に人材が集中するということは全体から見ていいことではないのであった。バットゥータはその理由もわかっていた。
「何しろ。軍に人材が集中するとなると」
「他の分野には回らない」
「そうなりますからな」
「はい、その通りです」
やはりそういうことであった。人材は限りがあるものだ。人的資源という言葉があるが人材もまた資源であり限りがあるものなのだ。
「ですから。サハラでは他の分野の発展は遅れています」
「そうですな。軍はともかくとして」
「各種産業はです」

皆バットゥータの話を聞きながら述べていく。
「発展が大いに遅れています」
「我が連合と比べますと」
「サハラもまた発展する要素は大いにあります」
バットゥータはそう見ているのだった。
「それもかなり」
「そうですな。西方にはかなりの開拓すべき星系が多くありますし」
「はい」
開拓地も持っているのだった。オムダーマンの西にである。
「そして軍事技術を民間に転用すれば」
「かなりの技術の発展が見込めます」
それもなのだった。軍事技術を民間に転用すればかなりの発展になることはこの時代でも同じだ。サハラにしろそれは同じなのである。
「ですが今のままでは」
「それは期待できませんか」
「戦乱が終わらない限りは」
「軍事技術の転用は全て平和になってからです」
バットゥータはこの話もするのだった。
「戦乱が起こっている限りはそこに回さなければなりませんから」
「そうですな。ではサハラは統一されてからですか」
「それからですな」
「その通りです。ただ。サハラは統一されるとなると」
「はい」
「どうなりますか？」
「かなりの勢力になります」
バットゥータはこう見ていた。
「それもかなりの」
「かなりのですか」
「まず二千億の人口があります」

まずはそれがあった。
「そして軍事技術を転用し開拓地を開発していけば」
「瞬く間にかなりの勢力になるのですね」
「統一されれば」
「その通りです。しかも軍は精強です」
それもあるのだった。
「多くの戦いを経た戦争を知っている軍があります」
「だからですか」
「精強な軍もまたあると」
「これは大きいです」
バットゥータは文官である。しかし軍事のこともわかるのだった。少なくともそちらに関して全くの素人ではなかった。ある程度知っているのであった。
「精強な軍が豊かさに支えられるならば」
「厄介ですな」
「敵に回せば」
「だからでしょう」
バットゥータの言葉がここで変わった。

## 第三十五部第一章　各国の法その八

「中央政府国防省は今連合とサハラの国境で色々とやっていますね」
「どうやら防衛ラインを敷いているとか」
「それもかなりの」
「しかしあれは確か」
ここで一人が言うのだった。
「ただの難民の保護の為では？」
「ああ、確かそう言っていましたな」
「そういえば」
ここで他の者も言うのだった。気付いたような声で。
「では特に気にすることはないのでは？」
「首相は違うと仰るのですか」
「あれは間違いなく口実です」
実際にバットゥータは述べるのだった。
「口実に過ぎません」
「難民保護と治安の維持は口実に過ぎませんか」
「そうです。それはあくまで口実です」
こう言うのだった。
「あくまで」
「ではあの防衛ラインは」
「サハラに備えてですか」
「そうです。その精強な軍に備えてです」
バットゥータはここでまた言うのだった。
「彼等と何かがあればその場合にです」
「備えと」
「八条長官は慎重な方です」
バットゥータも彼を認めているのだった。少なくとも軽率とも愚かとも思ってはいなかった。そう思うには彼はあまりにも切れ者だ

からである。
「ですから若しもの時に備えまして」
「備えているのですか」
「あらゆる勢力に備えておく」
バットゥータはここでまた言った。
「それは戦略の基本です」
「あらゆるですか」
「エウロパだけでなく」
「例え同盟国であってもです」
それでもだというのだ。
「備えは必要です」
「マウリアであってもですか」
「如何にも」
やはりその言葉には何の迷いもなかった。彼もまた確信しているのだった。
「それがなければどうにもなりません」
「そうなのですか」
「というとマウリアに対しても」
「既に国境に備えがしてあります」
彼は言った。
「既にです」
「！？そうなのですか？」
「既にですか？」
だが他の者はそれを聞いても怪訝な顔になるだけであった。
「備えはしているのですか？」
「もうですか」
「はい、その通りです」
彼はまた答えた。
「既にです。マウリアとの境にも備えをしてあります」
「そういえば海賊対策として艦隊を配していますな」

「あと迎撃システムの配備も」
「それです」
それだというのだった。
「それこそがあの長官殿が用意している備えです」
「マウリアに対してももう」
「それを置いておくとは」
「あの長官殿は全てわかっておられます」
賞賛の言葉を述べるのにも抵抗がなかった。八条を素直に賞賛していた。
「戦略というものが」
「元軍人だからでしょうか」
「確かに元軍人ですがあれは軍人の戦略ではありません」
「といいますと？」
「政治家の戦略です」
バットゥータはアッディーンの戦略をこう見ているのであった。

## 第三十五部第一章　各国の法その九

「そう、政治家のです」
「今の職業のですか」
「その通りです。あの方は軍人出身ですがそれ以上に政治家なのです」
「つまりスーツを着ている方が似合うと」
なお連合においては軍人の社会的地位は高いとは言えない。公務員の一つとしか思われていないのである。その程度でしかないのだ。
「そういうことですね」
「はっきり言えばそうです」
バットゥータもそうだと述べる。
「それに確か軍人であられたのはほんの数年でしたね」
「ええ、確か」
「大学を卒業されて入隊されまして」
日本軍にである。日本軍で将校として勤務していたのは連合ではよく知られている。なお中央政府の閣僚で軍出身は大統領であるキロモトとこの彼だけである。この二人以外は軍にいたことは全く無いのである。なお連合中央政府では閣僚が全て軍務に就いた経験がないということも普通にある。それは各国政府においてもそうである。
「そうでしたな、確か」
「それにより」
「はい、その通りです」
バットゥータは彼の経歴をよく知っているのだった。
「補給長だったのです」
「成程、だから補給に強いのですね」
「そして整備にも」
「後方なくして戦争はできません」

特に二十世紀以降はそうである。
「そして戦場整備もです」
「昔で言えば工兵の役割もですね」
「左様です」
バットゥータは工兵の重要性もよく知っているのだった。ローマ帝国やオスマン＝トルコの軍が強かったのはとりわけその工兵に寄るところが大きかったのだ。とりわけローマの兵達は平時においては有名なローマの各街道を建築さえしているのである。
「連合軍はそれにも秀でています」
「我々の技術を使って」
「その技術を使ってそのうえでですね」
「そうです、サハラとマウリアに備えているのです」
そういうことなのだった。
「見事です。この戦略は」
「そうですな。では連合の護りは安心していいですな」
「あの長官がいる限りは」
「その通りです。しかし」
「しかし」
「何かありますか？」
皆ここですぐに怪訝な顔になってバットゥータに対して問うのだった。
「あの長官に何か」
「あるのですか？」
「連合軍ができたのはいいことです」
バットゥータはそれはよしとした。
「ですが」
「ですが。やはり何かあるのですね」
「はい。連合軍のおかげで各国の権限が大幅に弱まっています」
彼はそれを危惧しているのだ。各国軍はその殆どが連合軍に統合されている。残った国軍は僅かなものである。軍があってこのその

国家の権限なのだ。
「確かにその任務は宇宙海賊及びテロリスト、そして治安維持に限られ」
「はい」
「他国との交戦権は否定されていましたが」
連合国内の、という意味である。無論他国ともそれは禁じられている。もっとも攻めてきた場合は各国軍を糾合して迎撃することになっていたが。
「それでもです」
「そうですね。それでも」
「軍の存在は大きかったです」
バットゥータの周りの者もそのことを懐かしむような声になっていた。
「我々の権限を保障してくれましたからな」
「その通りです」
「ですがそれはもう僅かなものです」
バットゥータの言葉はいささか虚無的な響きを感じさせるものになってきていた。
「ですからそれだけ権限はです」
「全くですな」
「嘆かわしいことに」
周りの者達の今の言葉こそ彼等の立場を指し示すものであった。実は彼等もまたバットゥータと同じく各国政府の者達なのだ。勿論各国の権益を保障するべきと考えている。
「しかしそれでもです」
「致し方ありません」
「全くです」
皆渋々であるがそれは認めるしかなかった。

## 第三十五部第一章　各国の法その十

「おかげで連合はエウロパに勝つことができましたし」
「そして治安もよくなってはいません」
その問題もあるのだった。
「彼等があってこそです」
「しかしですか」
「権限が縮小されてしまったのはどうにも」
やはりこのことを言うバットゥータだった。これは各国政府の者ならば誰もが思っていることであり特に驚くようなことではなかった。
「如何なものかと」
「ですな。しかしこれはまた」
「今後次第ですな」
「そうですな」
「その通りです」
彼もまたそのように考えているのだった。
「あくまで今後次第です」
「ええ。思えば連合の歴史はそうですな」
ここで一人がふと昔を懐かしむようにして述べてきた。
「中央政府と各国政府のせめぎ合いです」
「その通りです」
こう言い合うのだった。連合の歴史は中央政府が権限を強めようとしそれに反発する各国政府の綱引きでもあるのだ。これが一千年続いているのだ。
その結果連合中央政府は次第に権限を強めていってはいる。しかしそれでもその中で各国政府もただそれに従っているわけではないのである。
「また頃合いを見まして」

「反撃に転じるとしましょう」
「甘い顔をすると何処までも調子に乗りますからな」
笑いながらのものではあったがこんな言葉も出るのだった。
「中央政府も狸ですからな」
「あれはあれで」
「その通りです。中央政府は狸です」
バットゥータも彼等をそうした動物に例えた。
「若しくは狐ですか」
「同じ様な意味ですな」
「はい。どちらにしろ油断できません」
その通りなのであった。連合中央政府は彼等にとっては油断ならない相手なのだ。同じ連合の中にあってもそこには緊張が存在しているのである。
「彼等に関しては」
「隙あらば、ですからな」
「しかも常にそういうことに賛同するのが」
「そう、日本です」
日本は大国の中でとりわけ中央政府に好意的であり忠実だと言われている。実際は日本は日本で中央政府と対立することが多く厄介な相手だと中央政府にもみなされている。なお中央政府に反抗的なのはやはり米中露といった面々とされているのは言うまでもない。
「あの国にも困ったものですな」
「そもそも連合軍設立にもです」
「そうでしたな」
日本首相である伊東の陰に陽にの働きかけが実に大きかったのである。
「あの首相殿が賛成したのが大きかったですな」
「あの長官にしろ首相殿の愛弟子ですしな」
「自慢の弟子だとか」
伊東と八条の師弟関係もまた非常によく知られている。これで二

人の仲をあえて冗談めかしていう者もいることにはいたが八条のあまりものそうした方面での鈍感さからその話は今はもうない。
「その長官殿が初代国防長官になりましたしな」
「おかげで連合軍はあの通りです」
そういうことであった。
「連合全体にとってはいいことですが」
「我々の権限に関しては」
「そうです。ここで権限をさらに拡大されないように手を打つべきと考えているのですが」
「手をですか」
「そうです」
バットゥータのその目が鋭く光った。
「ここで。如何でしょうか」
「というとどうされるのですか？」
「何かお考えが」
「はい、それでです」
バットゥータの目の色はさらに明るくなっていた。尚且つ鋭い。
「これからある方が来られます」
「ある方といいますと？」
「今回の国際会議に参加している国はまた全ての国ですが」
その三百以上はある連合の国々全てがなのである。
「一体どの国がなのでしょうか」
「そしてどの方が」
「こうしたことにはやはりこの国です」
バットゥータは言いながら笑みをさらに深めていくのだった。

## 第三十五部第一章　各国の法その十一

「各国の権限ならば」
「アメリカか中国か」
「それともロシアか」
彼等の場合はただの我儘とされることが多い。
「彼等でしょうか」
「そうではないのですか？」
「残念ですが違います」
しかしここでバットゥータは微笑んで述べるのだった。
「また別の国です」
「そう言われると少しわかりませんな」
「そうですな」
周りの者達は今のバットゥータの言葉で答えが見えなくなってしまったのだった。
「だとすれば一体どの国の？」
「どなたなのでしょうか」
「今来られます」
こう言った時だった。部屋の扉が開いた。するとここで一人が冗談めかして言うのだった。
「そういえばホテルにいると」
「ホテルでですか」
「そう。それもお世辞にも品のいいとは言えないホテルで」
語るその顔が下卑た笑みになっているのがこの話が何かを教えていた。
「一人で泊まっていると時折チャイムが鳴ることがありますが」
「ははは、そうですな」
「確かに」
他の者もそれが何かはすぐにわかった。それはもう連合では半ば

常識とも言える話であった。こうした話はどの時代でもどの場所でも存在するものなのである。
「それはそうですな」
「相手の性別はわかりませんが」
連合では同性愛も普通だからだ。しかもこれは男性相手の所謂ホモセクシャルだけではなく女性の場合の、つまりレズビアンの娼婦も範疇に入っているのである。
「その通りですな」
「そうなります」
「だからです」
その少しばかり下卑た笑みが続く。
「それではありませんが」
「ああ、一つヒントがあります」
今度は楽しそうな笑みになっているバットゥータであった。
「その方の御国はそうした存在には非常に五月蝿い国です」
「お堅い国なのですな」
「そうです。とりわけ同性愛には」
「ああ、成程」
「あの国ですか」
これで皆わかったのだった。
「同性愛に厳しいといえばです」
「あの国しかありませんな」
「如何にも」
そしてバットゥータも楽しそうに笑ってみせるのだった。
「おわかりですね。それで」
「ええ、確かに」
「あの国ならば」
「ようこそ」
そうして開かれた扉から入って来た者に一同で挨拶をするのだった。部屋に入って来たのは赤い髪に顔中に髭を生やした男であった。

目は青く背が高い。その為何処か学者めいた印象を与える風貌であった。スーツは暗い赤を端整に着こなしている。身体の動きは何処か宗教家めいたものであった。
「ようこそ、次官」
「はい」
次官と呼ばれた彼はバットゥータの笑顔の言葉に対して少しむっつりとした調子で応えた。目は何かを学び取るかのような目をしていた。
その目で周囲を見渡しながら部屋の中を進み。そうして空いている席に座ってそのうえで述べるのだった。
「ヨセフ＝レビと申します？」
「レビ！？」
「といいますと」
「はい。この方は十二支族の長老の方の曾孫にあたります」
バットゥータがその名前に声をあげた周りの者達に話した。
「支族はレビ族です」
「ですな。あの十二支族の」
「それですか」
「確かに私はレビ族です」
本人もまたそれを認める。

## 第三十五部第一章　各国の法その十二

「ですがそれ以上に」
「それ以上に？」
「イスラエル人であります」
こう言うのだった。
「つまりユダヤ人であります」
「そうですか。イスラエルですか」
「貴方は」
「そしてイスラエル政府外務次官でもあります」
こうも話すレビであった。
「つまりです。私はイスラエル政府の代表としてここに来ています」
「そうですか。イスラエル政府の」
「代表であられるのですね」
「では首相」
周りの者達はここでまたバットゥータに顔を向けて述べた。
「この方がお話されていた方ですね」
「首相が先程言っておられた」
「その通りです。この方です」
そしてバットゥータもこのことを認めるのだった。
「イスラエル政府を代表してこちらに来られたのです」
「イスラエル政府の立場としましては」
レビは実際にイスラエル政府の者として語りはじめた。その言葉は謹厳そのものでありやはいｒ学者めいた知性的なものを感じさせていた。
「確かに中央政府の力は必要です」
「それはですか」
「連合が連合である為です」
連合についても話すレビだった。

「その為には中央政府の力もなくてはなりません」
「まあそれはそうですな」
「我々は確かにそれぞれの国にいます」
周りの者達もここで頷きはした。
「ですが連合の者ですからな」
「その通りですな」
「我々は連合の者です」
連合の構成員であるという意識は各国の主権を最優先させる彼等も持っているのだった。ただし彼等の中ではそれぞれの国がトップにあり中央政府はその次に来るものである。各国が先に来るかそれとも中央政府が先に来るか。それが連合の議論の中心の一つなのだ。
「ですから中央政府の力が弱過ぎて何もできないとなると」
「困ってしまいますな」
「その通りです。ですから連合軍設立はよかったのです」
レビはここでも言った。
「それまでは」
「それまでは、ですか」
「この辺りで宜しいでしょう」
語るその目の光が鋭く強いものになった。
「中央政府の権限は」
「この辺りで、ですか」
「中央軍も警察も持ちました。もうこれで充分です」
彼はさらに言う。
「後は我々の権限をこれ以上侵害されてはなりません」
「権限をですか」
「今も申し上げましたがこれで充分です」
今度は充分と言うのだった。
「各国の権限を守りましょう。そういえば司法でも」
「今度は司法ですか」
「中央最高裁判所が各国を従わせようとしています」

「それですか」
「はい。今裁判所長官が言っていますね」
その中央最高裁判所の長官である。民主国家において立法、行政、司法の三つの権限は絶対のものである。中央政府は設立当初からこの三つを持っているのである。
そのうちの一つの長官の言葉であるというのだった。
「各国の法は基本的に中央政府の法に従うべきだと」
「そうですな。そんなことを言っていましたな」
「確かに」
「そんなことは認められません」
レビの声が強いものになった。
「到底。それは」
「認められませんか」
「はい。だからです」
彼はさらに言う。

## 第三十五部第一章　各国の法その十三

「我々は今回各国の権限を強めるべきだと考えています」
「そうですな。司法までコントロールされてはたまりません」
「各国には各国の法律があるのですから」
「確かに中央政府の法が優先されるのは知っていますが」
この辺りは地球にあった頃のアメリカの法体系と同じである。中央政府の法が優先されるがそれに準拠してはいても各国の法もまた強いのである。
「従う等とは」
「普遍性もいいでしょうが独自性です」
彼等は口々に言う。
「そう、それが護られなくて」
「何が連合でしょうか」
「だからです」
ここでまた言うレビだった。
「だからこそ我々はそれを護る為にです」
「そうですね。ではやはり」
「こちらに来られた理由は」
「その通りです。その司法の強制を止めましょう」
レビは強い言葉で言った。
「我等の法を護る為に」
「はい、その通りです」
「それでは」
彼等は言葉を交えさせそのうえで頷き合うのだった。
「そうしましょう、何があろうとも」
「これ以上中央政府の権限が増加するのは許せません」
「では。私はです」
バットゥータがここで述べた。

「手を打っておきましょう」
「手をですか」
「このことを各国の首脳に伝えます」
彼は言った。
「すぐにです。この司法のことをです」
「では首相。すぐに」
「そうしましょう」
彼等は手を打とうとする。しかしその時だった。
「しかし中央政府もまた」
「そうですな」
彼等は口々に言い合う。
「彼等も強かです」
「連合軍の設立に勢いを得てですか」
「中央政府にしては当然のことです」
レビは中央政府の立場に対しても考えを巡らせた。
「その権限を増加させるのは」
「そうですね。それは」
「中央政府にしてみれば」
他の者達もここで中央政府の立場になって考えてみてみる。一方の立場だけで考えると視野が狭くなってしまう。だからここであえてそうしてみるのだった。
「手を打つのが当然です」
「勢いのあるうちに」
「しかし。それを司法に回してくるとは」
バットゥータは怪訝な顔で今度はこう述べた。
「また随分と意外でしたな」
「国家の安全を保障するのは軍」
レビがふとした感じで言ってきた。
「それは内外に対して言えます」
「軍がですか」

「それだけのものがあると」
これは連合ではあまり強く認識されていないことであった。連合という勢力はとかく軍より政治や経済といったものが優先して考えられる。この時代においても軍事が政治に占める優先順位は決して高くはない。それは予算が総生産の一パーセントしかないことからもわかる。
「いうのですか」
「少し実感できませんが」
「それは私もです」
レビも同じだというのだった。
「軍があってそれで安全が保障されるというのは」
「司法の方が先では？」
「そうです」
やはりここでも周りの言葉は一致していた。
「それがあってはじめて世界は確かなものになりますから」
「そうですね。それは」
「まあ言うならばです」
レビは考えながらであったがそれでも言うのだった。
「これはあれです。卵が先か」
「鶏が先かですか」
昔からよくある論争である。これの結論が出るのはこの時代においても先となっていた。

## 第三十五部第一章　各国の法その十四

「この場合が軍が先か」
「司法が先かですか」
「おそらくどちらが先になっても揉めたでしょう」
レビはまた話してきた。
「司法が先でも軍が先でも」
「どちらもですか」
「そうです。言うならこれは両輪では？」
レビは考えながらまた述べた。
「軍と司法は」
「実際の法とそれを守らせる力ですか」
「法があるだけではそれを守らない者がいます」
法を無視して何かをしようとする者はどの世界にもいる。だから犯罪がこの世に減らないのである。世の中無法者も常に存在しているのだ。
「そうした者に対しては強制しかありませんので」
「警察だけでは足りませんからな」
「確かに」
警察もまた軍の力が背景にあってこそである。時代によっては軍も警察も全く同じ存在であったケースもある。それだけ近いものもあるのだ。
「だから軍もですか」
「確かにテロリストや宇宙海賊には必要です」
これは誰もが認めるところであった。それこそそうした無法者と関係がある者以外はだ。誰もが認めるものであるものである。
「そして軍も」
「軍も？」
「コントロールされなくてはなりません」

レビはここでまた言った。
「万全なコントロールをです」
「法律によってですか」
「法によるコントロールの無い暴力組織はそれ自体が災いです」
レビの言葉は歴史において証明されているものの一つであった。例えばゲシュタポやＫＧＢだ。彼等は超法規的な存在であり無法が許されていたのだ。全体主義国家では言論弾圧や思想統制、粛清の為にそうした組織の活動まで許されていたのである。
「ですからそれがなければ」
「ですが軍のコントロールは既に」
「完成されています」
連合軍設立の際に真っ先に整えられたものであった。
「あらゆる事態を想定してですな」
「あれもまたあの長官殿の卓越したところです」
「全くです」
ここが八条の非凡なところの一つであった。彼は組織を作るだけでなくその組織を法律によりコントロールする法を整えていたのである。
「そこまで考えているのですから」
「普通はそこまではいきませんからな」
「そこまで考えが及ぶことも」
これは明治維新の日本においてもであった。この時代の日本は近代軍を設立し大日本帝国憲法も発布している。しかしここで問題があったのはこの憲法が早急に整えられたものであり不備な点は元老達が補っていた。元老達が生きている間はよかったがその元老達、とりわけ陸軍を統括する山縣有朋がいなくなると軍が暴走しだした。彼等は憲法に自分達をコントロールするものがないと気付いたからだ。
大日本帝国憲法において軍は天皇陛下に直属するとある。内閣にはないのだ。それまでは元老達と実質的に彼等が選び後見する首相

が統括しているからそれに誰も気付かなく問題なく運営されていた。しかし彼等がいなくなるとそこでその綻びが露わになったのだ。
結局不磨の大典なぞ有り得ず人の作ったものは必ず欠点がある。戦前の日本はこれにより悲劇を招いてしまった。憲法の欠陥がその大きな問題点の一つであったのだ。
「完全な文民統制を導入しています」
「しかも有事においてすぐに動けるような」
「実際にそれに基き多くの海賊やテロリストを鎮圧してきました」
そこも考えていたのが八条なのだった。
「そしてエウロパとの戦争も」
「迅速に進められました」
「ただ軍律を整えるだけではなかったのですからな」
軍律だけでなくこうした法整備を整えなくてはならないのが軍なのだ。
「あの長官にはやはりかないませんな」
「ですな」
顔を見合わせて言い合う一同だった。
「しかしそれに勢いを得て司法に入るとなると」
「我等は対抗しましょう」
「すぐにです」
またレビが話す。
「米中露にも話しておきますか」
「ブラジルにも」
ブラジルもまた連合における大国の一つである。

## 第三十五部第一章　各国の法その十五

「あとはＡＳＥＡＮ諸国と」
「そう、他の国々にも」
「日本は？」
ここでふとこの国の名も出されるのだった。
「日本にも声をかけますか」
「いえ、それはどうでしょうか」
一人が怪訝な声で述べてきた。
「日本はこれは」
「駄目でしょうか」
「中央政府に最も忠実な国です」
その為中央政府の番犬とも言われたりする。その領域も地球のすぐ側にある。それだけに中央政府との縁が深い国なのである。
「ですから。あの国は」
「いえ、それはどうでしょう」
しかしレビはここでまた言った。
「それは」
「日本ですが？」
「あの中央政府に忠実な」
「確かに日本は中央政府に忠実な時が多いです」
それは彼も知っていることであった。だがここで言葉が微妙に変わっていた。
「しかしです」
「しかし？」
「それは時と場合によります」
こう周りの者に述べるのだった。
「あくまでケースバイケースです」
「ケースバイケースですか」

「日本の利益になる時には中央政府に反発もしています」
「まあそうかも知れませんね」
「日本も食えない国ですからな」
「ええ」
連合四大国の中で最も食えない国とされているのが日本である。米中露が剛しかないのに対して日本は柔である。それだけにしたたかであるとされているのだ。
「確かに。それでは」
「日本に声をかけることも価値があります」
「それではそうしますか？」
「日本にも」
「是非。もっとも見返りも要求してくるでしょうが」
「女狐ですなあ」
日本の首相である伊東をさす言葉である。
「確かにその程度は要求してくるでしょうか」
「日本の利益になることを」
「もっともあまり欲のない国です」
これは昔から変わらない。米中露があまりにも昔から強欲なせいで余計にそう思われるのだが確かに日本という国は無欲な国である。
「それ程の要求はしてきませんから」
「要求に関しては米中露の方が厄介ですな」
「はい、あの三国については私も」
レビも困った顔になるのだった。
「彼等はとにかく何かあれば常に途方もない桁の要求をしてきますから」
「あれだけのものを持っていてですからな」
「それでまだ要求するというのが」
「何処まで欲が深いのか」
なおアメリカや中国や国家としても国民自体も欲が強いと言われることが多い。それに対してロシアでは国民は無欲であるとされて

いる。ロシア人は強い国家と酒、それにつつましやかな生活があればそれで満足するとされている。これも昔からである。
「連合で一番豊かな国々だというのに」
「日本はあれだけで満足しているというのに」
「だからです。ここは個人的な賄賂も使いますか」
「そうですな」
「国家全体に贈るよりそちらの方がずっと安く済みます」
実際その通りであったりする。個人に贈りものをする方が国家単位でそれを行うよりもずっと安く済むのである。それもかなり安くである。
「ですからそれは」
「そうですな。個人のものも含めて」
「あの三国全部の胃袋を満たそうと思えばそれこそ」
「他の国への見返りがなくなってしまいます」
「全くです」
この辺りの国家としての性格は千年前と全く変わっていない三国であった。
「まあ三国への見返りはです」
「どうされますか？」
「開拓地の優先でしょうか」
レビが考えたのはそれであった。

## 第三十五部第一章　各国の法その十六

「それぞれ資源が豊かな星系、移住が多くできる星系、土地が肥えている星系、あとは風光明媚な星系といったものを三国に優先させ」
「それで小国が泣きを見ると」
「いつものパターンですな」
「彼等もそれで納得はしないでしょうし」
大国が横暴を極めるなら小国は合従連衡してそれに当たる。外交の基本であるがこれはこの時代の連合でも同じなのであった。
「さて、どう調整していくか」
「それですな」
「それを考えると日本はまだ楽ですな」
「全くです」
見返りの話になって日本の無欲さが有り難くなる彼等であった。
「少しだけでいいのですから」
「時には無償で引き受けてくれますし」
この辺りが日本が好かれる理由でもある。欲がないということはそれだけで徳になる場合が多い。もっともその逆に損をする場合もあるが。
「さて、日本は話をするだけでそれから要求を出せばいいですな」
「そういうことで」
「では我々はそれでです」
また話すレビであった。
「四大国も引き込み」
「はい」
「そのうえで中央政府にあたると」
「例え議会で承認されても」
さらに言うのだった。
「各国の首脳議会で否決してもらいましょう」

「ですな。そのように」
「そうしてしまえばいいです」
連合中央政府は実質として三院制である。上下の両院は中央政府議員よりなるがその上にさらに各国首脳の議会があるのだ。この辺りが連合の複雑なところで各国の勢力の源泉の一つともなっている。ここで否決されればそれで法案は通らないのである。
「ですから。粘り強くです」
「はい、それでは」
「そうした展開で」
「進めましょう」
「その通りです。それではです」
「はい」
「すぐに各国の首脳達に連絡して」
彼等はそれぞれ言葉を出していく。
「無論我々の国でも」
「ええ、勿論です」
バットゥータが笑いながら話す。
「私はもう大統領から許可を得ていますので」
「おお、それは何よりです」
「お話される必要はないですね」
皆笑顔でバットゥータの言葉に応えるのだった。
「首相が御存知ですから」
「ではトルコは最初から」
「はい、反対です」
また笑って話すバットゥータであった、
「各国には各国の法があるのですから」
「全くその通りです」
「それを侵すなどとは」
許し難いことであるというのだ。各国には各国の法がありそれがまた強い。例え連邦中央政府が定めた方がその上にあってもである。

「ここは各国が連衡しなければなりませんからな」
「その通りです。ではそういうことで」
「進めましょう」
こうして話をしていくのだった。しかしこれで話は終わりではないのだった。
「それでは。話が一段落したところで」
「ええ」
「何か」
皆バットゥータの言葉に顔を向ける。すると彼の笑顔はこれまでのどの笑顔よりも明るいものであった。その笑顔でさらに話すのであった。

## 第三十五部第一章　各国の法その十七

「お腹が空きませんか」
「むっ、確かに」
「そういえば」
話をしているうちにだった。皆話が一段落したところでそれに気付いたのである。
「私も少し」
「私もです」
「無論私もです」
そしてバットゥータ自身もそうだというのだった。
「そう思いまして食事を用意しておきました」
「ほう」
「それは何よりです」
皆それを聞いてすぐに笑顔になる。
「ではトルコ料理でしょうか」
「今回は」
「はい、その通りです」
彼はにこやかに笑って周りの声にまた応えるのだった。
「そのトルコ料理です」
「これは期待できますな」
「そうですな」
誰もがトルコ料理と聞いて笑顔で顔を見合わせた。トルコは連合でも屈指の美食の国として知られている。オスマン＝トルコで培ってきたものが生きているのである。
「さて、それではです」
「何が出て来るでしょうか」
「はい、今来ます」
「おおっ、では一体」

「何でしょうか」
「軽い食事です」
まずはこう述べるバットゥータであった。
「ケバブです」
「ほう、それは」
「中々宜しいですな」
皆ケバブと聞いて喜びの声をあげる。ケバブとは挽肉を集めてそれを串にさして焼いたものである。トルコの代表的な料理の一つだ・
「それと野菜のクスクスです」
「それもですか」
「あとはヨーグルトです」
これはデザートであった。トルコでも昔からヨーグルトはよく食べられている。ただし牛であるかどうかは別問題である。牛でない肉も使うのが遊牧民の流れである。
「まずケバブは羊肉で」
「定番ですな」
「それにクスクスにも羊肉を入れております」
「それは何よりです」
皆それを聞いてまた笑った。イスラム社会では羊肉は客をもてなす場合で最高の肉とされているのだ。これはサウジアラビアからの風習である。
「ではヨーグルトは」
「そちらは馬です」
「馬乳ですか」
「そうです、馬のものです」
それだというのである。
「それで如何でしょうか」
「はい、喜んで」
「是非共」
彼等に異論はなかったそれでいいというのだった。

「それでは是非そのケバブとクスクスと」
「そしてヨーグルトを」
貰うというのだった。そうして程なくしてケバブにクスクス、ヨーグルトが運ばれてきたがレビの前にだけはヨーグルトではなく水が置かれただけであった。そしてレビもそれを見て何も言わなかった。むしろ微笑みさえ浮かべこう述べる程であった。
「お気遣い有り難うございます」
「いえ」
バットゥータは彼の言葉に静かに応えた。
「ユダヤではこれで宜しいのでしたね」
「はい、肉と乳製品は同時に食べない」
やはりこれであった。ユダヤ教の有名な戒律である。
「ですから」
「ですがそれは牛肉と牛乳では？」
「同じ生き物からでは」
「用心してです」
だが彼はこう周りの者に答えるのだった。

## 第三十五部第一章　各国の法その十八

「肉と乳製品を同時に食べないのは」
「用心ですか」
「その通りです。ですからあえて水にしました」
「左様ですか」
「それでお水なのですか」
「思えば。この理由がわかりません」
レビはふとここで首を傾げるのだった。
「肉と乳製品を同時に食べてはならない理由は」
「ではミルクが入ったシチューも駄目なのですね」
「その通りです」
従ってユダヤ教の世界ではクリームシチューやホワイトシチューといったものは殆どない。もっぱらビーフシチューやそういったデミグラスソースを使ったシチューである。
「隠し味にもです」
「ではカレーにミルクを入れるのも駄目ですな」
「それもまた」
「勿論チーズバーガーもです」
当然それも食べられないのである。
「それを子供が食べようものなら」
「どうなりますか？」
「まずその子供が両親に厳しく怒られます」
まずはそれであった。
「そしてさらに」
「さらにですか」
「そうです。それを売った店にユダヤ人達が団体で押し寄せます」
「ううむ、それは何と言いますか」
「勘弁願いたいですな」

「全くです」
皆これには閉口してしまった。ユダヤ人達の宗教に基く団結力とその隠然たる力はこの時代でも健在である。だからこそ彼等も話を聞いただけで恐れるのだ。
「ではユダヤ教徒の子供にはチーズバーガーは厳禁ですな」
「よく注意しなければ」
「他にも様々な戒律がありますが」
とかくそういう戒律の多い宗教なのである。
「私達もそれにいつも注意しています」
「大変ですな、それは」
「マウリアでの牛のような話が常にですか」
「イスラム社会ではです」
そのムスリムのバットゥータが話す。
「豚肉もお酒も何だかんだで食べられ飲まれますが」
「そうですな。確か食べる前にアッラーに謝罪すれば」
「それでよいのでしたな」
「その通りです」
これは昔から同じである。
「日本でのカツ丼や中華料理やポークチョップ」
どれも豚の肉である。
「そうしたものが食べられないというのは思えば地獄です」
「確かに。豚乳も飲めないというのは」
「また悲しいことです」
連合では品種改良により豚も人が飲める乳を出せるようになっているのだ。また他には水麦という水田のような形で農耕ができる麦もあるし稗や粟も品種改良で普通に食べられるようになっている。連合の食生活は他の勢力に比べて遥かに豊かなものであるのだ。
「それを考えれば戒律もいいことはいいのですが」
「残念なことでもありますな」
「だからといってです」

それでもレビは真面目な顔で語るのだった。
「ユダヤ人にチーズバーガーは禁物です」
「ですな」
「それだけは」
周りの者もこれには真剣な顔で頷く。
「あとマウリア人に牛も」
「止めておくべきですな」
「そういえばマウリアのマハラジャを騙して牛肉を食べさせた愚か者がです」
世の中そうした愚劣な人間もいるのだ。この時代にあっても。
「マハラジャがそのことを知った数日後木にくくりつけられた骨だけになっていたとか」
「骨だけ！？」
「何があったのですか？」
「その骨を調べたところです」
その結果わかったことは戦慄すべきものであった。

## 第三十五部第一章　各国の法その十九

「全身に蜂蜜を塗られそのうえで軍隊アリに食べられたそうです」
「何と・・・・・・」
「それはまた残虐な」
インドにある伝統的な処刑である。もっとも本来は局部にだけ塗りそこをアリに食べさせるというものである。どちらにしろ残虐な処刑なのには変わりない。
「ですからそれだけはです」
「そうですな。まだサッグもいるようですし」
「ですね」
サッグとはカーリー神に仕えるという組織である。カーリー神に生贄を捧げるという名目で人の後ろから近付いて首を絞め殺し人知れずその屍を処理する。そうした組織である。
「あの国相手に下手なことすれば何をされるかわかりませんからな」
「恐ろしい国です、全く」
「我々なぞまだ甘いものです」
レビもまた本気で言うのだった。そのユダヤ人のレビが。
「あの国に比べれば」
「甘いですか」
「優しいとも言いましょうか」
こうも言い換えるが意味は変わらない。
「少なくともチーズバーガーを無理矢理食べさせても弁護士が来るだけです」
「ですな。精々」
「あの国に比べればアメリカや中国といえど」
敵に対してあくまで残虐と言われているのはこの時代でも変わらない両国であった。
「実に優しいものです」

「あの国だけは怒らせてはなりませんからな」
「それを考えるとロシアはよくあの国と揉めたものです」
かつての宝石の貿易問題においてだ。マウリアは宝石資源を多大に持っていることで知られているがロシアもまた連合で随一の宝石資源所有国なのである。
「あれはやはり落としどころがあったのですかね」
「そうではないでしょうか」
こうしたことも予想されながらケバブやクスクスを食べていく。
「だからこそあれだけの緊張関係に陥りながら話がまとまった」
「中央政府の仲裁も受け入れて」
「まあ五分五分の条件でしたな」
一人がその時の締結された条約の内容を思い出しながら述べた。
「ロシアにとってもマウリアにとっても悪い話ではなかった」
「ですね。あれは」
「どちらも満足できるものでした」
「さもなければあのロシアが首を振るわけがありません」
ロシアに関する評価も地球の頃から変わらない。
「それこそ何時までも粘る国です」
「気の長い国ですからな」
「その通りです」
ロシアの気の長さもかなり有名になっている。これもまた昔と同じだ。
「やはり水面下で色々あったのでしょうな」
「マウリアはそうしたことも上手いですし」
「ええ」
このことも知られていた。マウリアは外交上手としても有名なのだ。
「それで話は終わりましたが」
「見るべきものは残っているようですな」
「ですね」

クスクスもケバブも食べられ続けているがそれと共に言葉が続けられるのだった。そしてその中でレビはまたふとしたように言うのだった。
「それにしても」
「それにしても？」
「次官、何か」
「いえ、ふと思ったのですが」
周りの声に応えてまた述べてきた。
「彼等がマウリアが連合にいなくてよかったと思います」
「連合にですか」
「確かに」
「言われてみればそうですね」
「はい」
それぞれ言い合う。連合は確かに多くの個性的な国家が多々存在しているがそれでも連合の範疇に入る個性である。マウリアのその個性は突出し過ぎているのだ。
「連合には合わないですな」
「あそこまで個性が強いと」
「マウリアはマウリアです」
こうも話されるのだった。
「マウリアの個性は極めて強烈ですからな」
「あの国は一国で一つの世界ですからな」
「はい」
これは連合においてよく言われることである。マウリアのあまりもの強烈な個性は彼等をしても到底理解できるものではないのである。
「あくまで同盟国であり連合ではない」
「それですね」
「連合にいればどうしようもありませんな」
「何が何なのか」

話し合いながらマウリアについて考えるのだった。

## 第三十五部第一章　各国の法その二十

「国力だけでも我等のどの国よりも強大ですからな」
「はい、実はそうですし」
マウリアが連合において異質とみなされ続けているのはこの国力にも根拠がある。国力がなければ無視されてそれで終わりだからだ。
「あの国は連合のどの大国よりも国力が上です」
「連合全体の国力と比べれば二十分の一、いえ」
言葉に少し訂正が入る。
「もっとありますか。十九分の一でしょうか」
「いえ、もっとあるかも知れません」
「もっとですか」
「何しろです。我々は表に出ている国力が全てですが」
「はい」
これは近代国家ならば当然である。表に出ているだけで全てを統計で示すのが普通である。ただしマウリアはその普通の範疇には入らないのだ。
「あの国は裏もありますからな」
「裏ですか！？」
「そうです。ＧＮＰですが」
国力を測る重要な基準である。
「裏のそれは表の二倍か三倍あるとか」
「二倍！？三倍！？」
「本当ですか！？」
皆それを聞いて顔を顰めさせ合った。
「裏がそれだけあるのですか！？」
「というかＧＮＰに裏があるのですか」
皆そのことにも驚く。唖然としてだ。
「マウリアは全くどういう国家なのか」

「何なのでしょうか」
そのことにも理解不能であった。連合の常識ではＧＮＰというものは表だけで出されるものであり裏なぞとてもないものであるのだ。連合では。
「それは一体」
「理解できませんが」
「しかも表の二倍三倍ですか」
これも理解不能であった。
「一体どういう国なのでしょうか」
「しかもです」
マウリアはこれに終わらないのである。
「人口は二千億で留まらないそうですし」
「ああ、そうらしいですな」
「統計に出ていない人口が三百億でしたっけ」
「あれ、五百億では？」
「それ位いるのですか？」
何しろ統計に出ないので誰にもわからないのが現実である。
「しかし五百億といえばかなりの人口ですが」
「そうですな。エウロパの約半分です」
それだけの人口がわからないというのがマウリアなのだ。その正確な人口は国家主席であるクリシュナータですら知らないのだ。
「ではその分のＧＮＰもあると」
「何がどうなっている国家なのでしょうか」
「それがあまりにもわかりません」
バットゥータですらマウリアにはそうであった。
「あまりにも奇怪な国家です」
「奇怪ですか」
「本来国家に使うべきではない言葉でしょうが」
それがわかっていても言わざるを得ないのだった。マウリアについて考えると。

「何が何なのかまるでわかりません」
「連合の常識が通用しない」
一言で言えばそうなるのだった。
「ですからな」
「ですから連合にいなくてよかったのです」
ここでレビはまたこのことを話した。
「我々にとっても彼等にとっても」
「双方にとってですか」
「はい、まさにそうです」
また言うレビだった。
「異質過ぎるものは混ざれば不幸になります」
「ですな。少なくともあの時に一つにならずによかったです」
「全くです」
それはかつて人類社会が地球から宇宙に進出していた時代だ。その時にマウリア、当時はインドを連合に入れるという案もあったのだ。
「ですがそれは実現せずに」
「今に至りますね」
「その今もまたです」
今もなのだった。
「どうしても。あの国が連合にいている姿は想像もできません」
「ですから同盟国でよかったのです」
また言うバットゥータであった。

## 第三十五部第一章　各国の法その二十一

「我がイスラエルも彼等だけは苦手です」
「マウリアだけはですか」
「一言で言うならば異次元です」
これもまた連合においてマウリアではよく言われることである。
「あの国だけは」
「ではあの国とはこのまま」
「同盟国として」
「少なくとも百年はそれでいいでしょう」
レビはまた途方もない歳月で述べた。
「もう何百年かかかろうとも」
「何百年ですか」
「それはまた」
「いえ、その何百年という歳月すら」
ここでバットゥータがまた周りに述べてきた。
「マウリアにとっては些細な年月ですから」
「そうですな。あの国にとっては」
「何百年なぞ」
このこともまたよく知られていることであった。
「本当に些細なことではありません」
「何百年が大事でなくて何だとも思いますが」
これは連合の考えである。
「まあとにかくです。そういった国ですから」
「はい」
「生半可な交渉で話は終わりません」
マウリアとの波長の合わなさもそうさせている話であった。
「全く。やりにくい相手ですな」
「まことに」

それぞれで言い合う。
「とりあえず連合にいなくてよかったですな」
「いたらどうなっていたか」
考えてみるが少し想像がつきかねる話であった。誰にとっても。
「わからないのが何ともまた」
「マウリアらしいことです」
「さて、それではです」
バットゥータはケバブを食べながら周りに述べる。木の串に付けられたそれは見るからに美味そうであり実際に香辛料をよく効かせて肉の味を引き立てていた。
「中央政府の法への介入に関しては」
「はい、反対していくということで」
「そうしましょう」
これで話は決まった。各国は連衡して中央政府の推し進めようとしている中央政府の法律への各国政府の法律のさらなる準拠に対して反対することになった。このことはすぐに双方の間に広がり複雑な議論の題目となり連合中を騒がせることになった。
その中で中央政府首相であるアッチャラーンは。法相であるヨトム＝サコと内相である金の二人を官邸に呼びそこで話をしていた。
サコはケニア人である。漆黒の肌をもつやや背の高い黒人でありその黒い髪をオールバックにさせている。この髪はアジア系のものであり縮れてはいない。白っぽいスーツを着ておりそれが彼の黒と好対照になっており非常に目立たせていた。彼が中央政府の法相である。
それと金である。つまりアッチャラーンは中央政府の法を司る責任者とそれを運営する責任者の双方を呼んでいるのだ。その顔触れだけで内容がわかる話であった。
「忙しい中よく集まってくれた」
「いえ」
まずは金がアッチャラーンに対して応える。

「それ程では」
「ははは、私なぞは」
いつも通り謹言実直な態度の金に対してサコのそれは非常にざっくばらんなものであった。
「今さっきまで寝ておりました」
「今さっきまでか」
「ええ。暇で暇で」
右手を頭の後ろにやり顔を崩して笑っていた。
「おかげでよく寝れました」
「それは何よりだが」
とりあえずアッチャラーンは彼の言葉をそのまま信じてはいなかった。こうした場合の常ではったり、若しくはただのジョークであるとわかっていたからだ。
「最近法務省も忙しいだろう」
「忙しい？いえいえ」
また笑ってそれを否定するのだった。
「暇だから寝ているのですよ」
「そんなに暇なのかね？今の法務省は」
「暇で仕方がありません」
また笑って述べるのだった。

## 第三十五部第一章　各国の法その二十二

「何しろ連合は平和ですから」
「平和だと暇になるか」
「なります。少なくとも犯罪はかなり減りました」
これは実際に統計に出ている。テロリストや宇宙海賊といった勢力だけでなく窃盗団や強盗団といった存在の数もかなり減っているのである。
「連合軍や中央警察のおかげで」
「それはいいことだな」
「おかげでこちらは法律をチェックするだけで」
「他にすることがないか」
「そうです。何もありません」
相変わらず崩した顔で述べるのだった。
「何もです」
「では充分英気を養ったな」
アッチャラーンはサコの話をここまで聞いたうえで言うのだった。
「充分な。そうだな」
「養い過ぎる程養いました」
そして今度はこう言うのだった。
「もう何時でも何でもできます」
「ではだ。撤退してもらう」
彼は言った。
「撤退だ。いいな」
「撤退といいますと」
「各国政府の反対が思うように強かった」
彼はまた言った。その中央政府の推し進める中央政府の法のさらなる浸透だ。それから撤退せよというのである。
「まずトルコが動き」

「あの国がですか」
「そしてイスラエルも動いた」
「あの国が次にですか」
サコは表情を変えないままその話を聞いていた。相変わらず緊張感のない顔である。
「それはまた厄介ですな」
「いつも通りユダヤロビーを総動員してきた」
イスラエルの強さの源はここにあった。ロビイ活動をかなり得意としているのだ。他にはインターネットや献金等とにかく選挙や政治における各分野での活動を得意にしている。しかもそれを集中豪雨的に行うからその力は相当なものになっているのである。
「それで各国に働きかけてな」
「あっという間にその力を結集させたのですね」
「そういうことだ」
ここまで一気にサコに話したのだった。
「最早手がつけられん。米中露も加わった」
「相当な金が動いたようですな」
サコは表情こそそのままにしていたが目の光を変えてきた。
「あの三国まで味方についたとなると」
「元々今の我々の政策には絶対に反対すると思っていたがな」
アッチャラーンはこの中央政府の法を浸透させる件についても三国は間違いなく反対すると最初から見ていたのだ。彼等の我の強さからだ。
「だが。彼等は声をかけられるとだ」
「その際必ず見返りを要求してくる」
最早三国のそうした行動はお見通しということだった。そしてそれはアッチャラーンだけでなく連合にいるならば誰でもわかることであった。
「自分から動く際にも協力を申し出た国に対してな」
「そこまでいくと殆どたかりですな」

サコの言葉はきついが実際にそうした一面が見られるのも確かだった。
「そこまでいくと」
「それが彼等だ」
アッチャラーンの言葉も容赦がない。
「何をするにあたっても必ず見返りを要求する」
「では今回もまた」
「そういえば開拓地でそれぞれ星系を一つ譲ってもらっていたな」
「贅沢な話です」
サコは思わず言ってしまった。
「こんな話で星系一つとは」
「しかしそれにより彼等は向こうにつきました」
「最初からわかっていてもだ」
「はい。そうです」
またサコは頷いてみせた。
「三国がついたことは大きいですね」
「そしてもう一国ついた」
「ブラジルですか？」
「その国もついたがな」
連合の大国の一つである。四大国にトルコとこの国を入れて六国と言う場合もある。

## 第三十五部第一章　各国の法その二十三

「それはな」
「ではブラジルではなく」
「日本だ」
その国であった。
「日本がついた。向こうにな」
「それは意外ですな」
サコはこの話を聞いて目を少ししばたかせた。
「あの国が中央政府に反発しますか」
「実は結構ある」
アッチャラーンは少し憮然とした顔になって述べた。
「あの国はあれで中央政府に逆らうことが多い」
「そうなのですか」
「そうだ。目に見えないところで結構な」
こう言うのだった。
「あの国は中央政府に逆らう」
「そういえば」
言われてみればという形でサコも気付いたのだった。
「そうですな。あの三国にどうしても隠れてしまいますが」
「三国が直球なら日本は変化球だ」
アッチャラーンは日本のそうしたやり方を野球に例えて話した。
「しかも僅かに変化するな。だから目立たないのだ」
「しかし芯は外させると」
「実に日本らしい」
そしてこんなふうにも評した。
「その辺りはな」
「巧みに討ち取られるというわけですね」
サコもそれに話を合わせる。

「つまりは」
「しかも気付かれないようにな」
こんなプラスアルファも付くのだった。
「現に君も日本と中央政府が対立することが多いのを知らなかったな」
「迂闊でした」
「これが迂闊でないところがさらに怖いのだ」
彼はこうも話すのだった。
「それが余計にな」
「では御存知だったのは」
「私と大統領だけだった」
二人だけだというのである。
「我々だけしかいなかった」
「そうですか。私が知らなかったのですから」
「私もです」
そしてそれは内相である金も知らなかったのだった。
「それはまさかとは思いましたから」
「気付かれないようにする。これも外交の基本だ」
「はい」
それはまさにその通りである。外交は見せる場合と見せない場合がある。日本は中央政府への反発はあえて見えないようにしているということなのだ。
「全くな」
「それを考えますと実に厄介な国です」
「忍者、いや狐か」
アッチャラーンはその日本文化の象徴の一つと言われている存在よりもそちらを話に出したのであった。言うまでもなくその狐とは。
「九尾のな」
「伊東首相ですか」
「あの首相は食わせ者だ」

ある意味において褒めている言葉である。
「奇麗な顔をしているがな。その裏ではだ」
「何を考えているかわからないということですね」
「その通りだ。あの首相はとりわけ油断ならない」
「前任者もそうでしたが」
「狸の次は狐だ」
アッチャラーンは前任者についても言うのだった。
「全く。厄介な人間が続く」
「それで決まりだったのですね」
金が言った。
「今回のことは」
「殆どの国が反発している」
つまり数のうえで負けているということだった。
「殆どな。それではどうしようもない」
「連合軍設立の時のようにはいきませんか」
「あの時は本当に僅差で通ったがな」
「はい」
あの時はそれで話が通った。各国での市民投票まで経てだ。しかし今回は今回で事情が違っていた。そこが問題なのであった。

## 第三十五部第一章　各国の法その二十四

「今回はな。それ以前だ」
「既に市民達もですか」
「反対している」
そうなのだった。
「それではどうしようもない。市民に説明しようにも先手を打たれた」
「イスラエルも動きましたし」
「仕方がない。今回は見送ろう」
そしてアッチャラーンは撤退を決意したのだった。
「大きな議論になる前にな。その方が我々にとっても大きなダメージにはならない」
「傷が深くなる前にですね」
「今なら何とでもなる」
そうしたことを全て見切ってのことであった。彼はあくまで政治的なビジョンで見据えてそのうえで判断を下しているのである。政治家らしく。
「見送る。いいな」
「わかりました。それでは」
これで話は決まった。今回は見送ることにしたのだった。そしてそれが決まってからもアッチャラーンはまた言うのであった。
「しかしだ。全てが上手くいくとは限らないな」
「そうですね」
今度は金が頷くのだった。
「連合軍を設立しエウロパとの戦いに勝利した」
「はい」
まずはこの二つであった。
「そして軍の力で治安を向上させそうしてバチカンの移転も勝ち取

った」
「エウロパの国防を危機に陥れると共に我々の護りはさらに万全となりました」
「そうして経済成長率も上々にしている」
全てこの政権の功績である。
「これで満足すべきか」
「そうですね。充分満足すべきです」
金はそれでいいと言うのだった。
「もうこれで」
「そうだな。ではこれでよしとしよう」
アッチャラーンはあらためて言う。
「それにこれはまだまだ先でいいことだしな」
「中央政府には中央政府の法律がありますし」
「そして各国には各国の法があるな」
「双方のバランスが重要だ」
連合ではそうなのだ。中央政府と各国のバランスこそが重要でありそれをどう維持していくかが連合を保つかが最大の課題なのだ。これは建国から変わらない。そうしてそのうえで徐々に中央政府に権限を集めたり各国の権限を尊重したりしてきていた。そうやって千年の間やってきたのである。
「それを踏まえてもう一度考えていくぞ」
「ええ、それでは」
「そういうことで」
サコと金も頷いた。結局これで話は終わりになった。
そうしてアッチャラーンはここで。妙にウキウキとした顔になってそのうえで言うのだった。
「それではだ。今日はだ」
「何かあるのですか？」
「実はな。地球に陛下が来られている」
今は中央政府首相の顔ではなくなっていた。

「我が国の陛下が」
「といいますとタイ王国の陛下ですか」
「あの方が」
「そうだ、我等の王ラーマ陛下だ」
　このラーマという名は代々である。一世から連綿となく続いている。地球にあった頃のタイでは一世の他に中興の祖である五世と十世が知られている。
「陛下にお食事に誘われているのだ」
「それではそちらに」
「行かない筈がない」
　やはりタイ人としての言葉であった。
「この上ない名誉なのだからな」
「そうですね。陛下のお誘いとあらば」
「国王と大統領は違いますから」
　なおケニアも韓国も共和制である。もっと言えば六大国の中で国家元首が王家やそうしたものであるのは日本だけである。そして皇室を戴いているのはその日本とエチオピアだけである。三百以上の国がある連合の中でもその二国しか存在しないのである。
「そういえば八条長官も」
「ですね」
　そしてその日本出身である八条についても語られる。
「天皇陛下に度々お誘いを受けていますな」
「それを断ることはありませんし」
「それだけ栄誉ということだな」
　アッチャラーンの顔はにこにことしたままであった。

## 第三十五部第一章　各国の法その二十五

「大統領は選挙で変わるが王は永遠だ」
「永遠ですか」
「その血筋はな」
王は血筋によってなるものなのはこの時代でも変わらない。
「永遠だからだ」
「それではサハラはです」
サコはここでサハラの話を出してきた。
「その永遠の存在を戴こうとしているのですね」
「そうだったな。サハラを統一した者は皇帝になる」
「はい」
これは既に定められていることである。預言にあるとさえされて。
「その方がいいだろうな。あの地域をまとめるにはな」
「皇帝である方がですか」
「皇帝は象徴になる」
アッチャラーンは言う。
「大統領もなれるがすぐに変わる」
「しかし皇帝は変わらないと」
「そうだ。そしてその下に臣民がある」
この臣民という言葉も王制特有であるのだ。
「これまでばらばらだったサハラをまとめるにはだ。皇帝であった方が確かに好都合だ」
「複数の民族に複数の宗教」
金はふとこんなことを言い出してきた。
「それをサハラも持っていますね」
「確かに彼等はアラブ人だがその血は元々混血しているからな」
アッチャラーンは彼等について述べた。
「今もなおな」

「そういえば彼等自身も自覚しているようで」
サコもまたこのことを話す。
「自分達が混血した存在であることは」
「これがエウロパ等ならばだ」
「はい」
「階級がどうとかいった話になって問題になる」
「そうですね。エウロパなら」
今回ばかりはあながちエウロパへの偏見とは言えないものがあった。
「エウロパでは階級が違うとそれだけで結婚できないということが普通ですからな」
「貴族とはそういうものだ」
それでもアッチャラーンの言葉にはやはりエウロパへの偏見がのぞき見られた。
「階級にとかく五月蝿い」
「それこそが彼等の証ですから」
そして金の言葉も冷徹なものであった。
「仕方ないかと」
「昔は貴族と平民とで階級も違ったしな」
アッチャラーンはこのことも知っていた。
「例えばイギリスではだ」
「庶民はアングロサクソンで貴族はノルマン」
サコが言う。
「階級はそのまま民族でもありました」
「そうです。そのようになっていました」
金の言葉は相変わらず冷徹なものであった。
「階級は東洋のそれよりも遥かに意味のあるものでした」
「マウリアのカーストもだったな」
カーストについても同じなのだった。
「アーリア人がドラヴィダ人を征服してからなった」

「はい」
「確かに」
サコも金もアッチャラーンの言葉に頷いた。
「つまりかーストが上になれば上になる程度アーリア人の血が濃くなっていきます」
「それは今も結局のところ残っていますし」
「法的には否定されているとはいってもな」
宗教的には別であるということだ。何故かというとカーストはそのまま職業も分けているがこれが実にいい職業の決定にもなっているからだ。そのカーストにいれば一生その仕事を続けられることが保障されるので餓えることがないのだ。乞食であってもである。
「あれはあれで合理的なシステムだからな」
「我々には理解できないものも多いですが」
金は彼女にしては珍しくその知的な美しさを持つ眉を顰めさせて述べた。連合中央政府きっての知性派である彼女ですら理解できないものはあるのだった。
「それでも。合理的ですか」
「あの国としてはな」
「わからない国です」
金はまたこうした言葉を出した。

## 第三十五部第一章　各国の法その二十六

「そしてそれにより民族の血が残っていることもまた」
「骨格にも残っていますな」
サコは彼等の骨格についても言及した。
「アーリア人は白人です」
「うむ」
これは肌の色ではわからないことである。骨格である。アーリア人はコーカロイドである。肌はインドの日差しの中で焼けているだけなのだ。所詮肌の色なぞその程度でしかない。
「これが今も残っていますから」
「それに対して我々はだ」
連合においてはどうかということだった。
「混血が進み骨格にも出ている」
「その通りです」
「髪の色も目の色も」
そうしたところにまで出ているのである。
「白人の血が出ていますし」
「黒人の肌をしていればアジア系の顔もある」
アッチャラーンにしろ実は白人や黒人が先祖にいる。
「そうだからな」
「一千年の間に我々の混血は相当に進みました」
そうは言っても金は純粋な東北アジア系の顔である。黄色い肌に細長い顔をしておりそうして彫は浅い。それが東北アジアの顔である。
とはいっても彼女もまた連合の者でありその先祖には多くの白人や黒人がいる。それがメンデルの法則の関係で出なかっただけである。
「それが我々の誇りであります」

「民族は残っているが混血している」
アッチャラーンはまた言う。
「それによりそれぞれの融和を進めていった」
「そういえば日本の皇室も」
ここでサコは日本の皇室の話もする。
「各国の王家の血脈が入っていますからな」
「元々あの皇室は他国との縁組が多いです」
金の今度の言葉は冷徹ではなく冷静であった。
「二十世紀には我が国を併合した際皇室を宮家に入れそのうえで縁組しております」
「琉球王家に対してもそうしたのだったな」
「その通りです」
金はアッチャラーンの問いに返す。
「タイ王家とも血縁関係にあった筈ですが」
「そうだ。三代前の王后陛下は日本の皇室からの方だ」
この時代では皇室、王室同士の婚姻が盛んである。必然的にかつての欧州のように皇室王室同士が親戚同士の関係になっているのである。
「素晴らしい方だった」
「そのようですね」
金もその王后のことは知っているのだった。
「絶世の美女であると共に優れた人格者だったと」
「流石に日本の皇室から来られただけはある」
日本の皇室の教育の厳格さは連合においてよく知られていることである。そのあまりもの厳格さに各国の王家では日本の皇室への研修は子供達を怒る言葉にも使われている程だ。
「悪いことをすると日本の皇室へ研修に行かせますよ」
これで大抵の子供は素直に従う。それが日本の皇室である。日本の皇室の教育は明治時代に明治帝が侍従長に相撲で投げ飛ばされたことにはじまっている。小栗上野介である。

それに終わらず昭和帝は学習院に通っておられた御幼少のみぎりに乃木大将から学校まで晴れでも雨でも一人で歩いてくるように言われそれを実行された。日本の皇室の教育はこの時代に至るまで連綿と続いている皇室の基礎を築いた二帝からはじまっているのである。。

「しっかりとされた方だ」

「やはり王室の教育は厳しくあるべきなのですか」

「まあ日本は極端過ぎると思うが」

アッチャラーンは首を捻りながらサコに述べた。

「あれは少しばかりな」

「厳格に過ぎると」

「僧侶の生活の方がまだいいのではないのか？」

こうまで言うのだった。

「仏教の。しかも禅宗のな」

「ですが教育は厳しくなければ」

金は彼女らしい言葉を出した。

「いけませんし」

「いや、何事も限度がある」

アッチャラーンは金の行き過ぎは年配者らしく窘めた。

「行き過ぎはよくない」

「しかし教育はです」

金は持ち前の潔癖症を発揮してきた。

## 第三十五部第一章　各国の法その二十七

「あくまで厳格かつ清潔でなければ」
「だからだ。確かに厳格と清潔も必要だが」
アッチャラーンは内心その潔癖症に引きつつも金に言葉を返す。
「それのみではいかんのだ」
「そうなのですか」
「柔軟性もなくてはいけない」
「それはわかっています」
自分ではこう言う金だった。
「充分に」
「そうならいいが」
アッチャラーンは話を聞きながらも彼女はわかっていないということも確信していた。
「それでだ。とにかくだ」
「はい」
「教育は連合軍だが」
その連合軍のことである。
「ああした教育がいいのではないか」
「連合軍のですか」
「規律や規則は徹底的に教え込むが他は自由だ」
これが連合軍である。
「あとは身だしなみだけだな」
「まあそのせいで見かけだけ立派などと他国に揶揄もされますが」
サコは少し苦笑いになって述べた。
「服や靴だけが奇麗で戦いにおいて役立たないと」
「軍は見栄えも大事だ」
しかしアッチャラーンはここではそれを擁護してみせる。
「軍服に埃一つなくアイロンもかけられている。洗濯も行き届いて

いる」
「実にいいことです」
「見栄えに軍規軍律」
この二つであった。
「この二つで充分ではないのか？」
「戦闘能力はその次だというのですか」
「少なくとも我が軍にはな」
連動軍は、ということだった。
「連合軍はだ。それだけでいいのだ」
「見栄えがよくて軍規軍律が厳正に保たれている」
「それだけでですか」
「無論最低限の訓練も必要だ」
とはいっても流石にそれは忘れてはいなかった。
「しかし我等は装備で勝り補給や整備のシステムが万全であり数も圧倒している」
「それだけの強みがあるからこそですか」
「他の勢力を圧倒している。やはり訓練は然程必要ではない」
「意地悪い言い方をすればです」
実際にサコはここで少し意地悪い笑みも見せてきていた。
「正規軍は前面に出ることはありませんからな」
「義勇軍か」
「はい、まず彼等が火事場に飛び込み」
連合軍の基本戦術である。常に先陣は彼等なのだ。
「それから正規軍が突き進むのですから」
「それはそうだな」
そしてその戦術はアッチャラーンもよく知っていた。
「義勇軍はこう言ってしまえばあれだがやはり正規軍ではない」
「はい」
「その通りです」
金もまた言うのだった。

「彼等は連合の正式な市民ではありません」
「市民の血を流してはならないがそうでなければ関係ない」
アッチャラーンの今の言葉は冷徹な現実であった。
「そういうことだからな」
「はい、ですから」
「彼等に関しては」
「犠牲を厭わなくてもいい」
アッチャラーンの冷徹な言葉は続く。
「無論褒められた話ではないがな」
「難民の数は十億ですが」
金もまた言う。
「その十億のうち一億が義勇軍に参加し」
「青年男子の大半だがな」
「そうです。そしてエウロパとの戦いでは九〇〇万近くが死傷しております」
つまり一割近くがである。
「相当な割合であるのは事実です」
「それに対して正規軍は六十億が参加し」
これまた途方もない数字である。当然人類史上最大の動員兵力である。
「そして損害は百万程度」
「それだけですか」
「そう、これだけです」
また述べる金だった。今度はサコに対して。

## 第三十五部第一章　各国の法その二十八

「それだけしか失っていません」
「六十億の中で百万足らず」
なお一個艦隊は約百万人から編成される。
「それだけです」
「それに対して義勇軍は一割近くの存在ですか」
サコはそこまで聞いて考える顔になった。
「また随分と極端ですな」
「それが現実です」
金もまた冷徹に述べた。
「連合軍の」
「それだけ聞いては随分と非人道的ですな」
サコは今度は腕を組んで真剣な面持ちになっていた。
「連合軍としては損害を軽微にする為に仕方ないにしろ」
「戦争に損害はつきものです」
金は実に機能的な響きのする言葉に徹していた。
「そして市民の損害は最低限でなければなりません」
「最低限ですか」
「そうです、最低限です」
また言うのだった。
「そうでなければなりませんから」
「義勇軍はその盾ということですな」
「盾だけではなく剣でもある」
アッチャラーンが言い加えてきた。
「つまりだ。完全に武器や防具でしかないのだ」
「しかも替えのある」
金はまた冷徹に述べた。
「何しろ難民はサハラで戦乱がある限り生じるものですから」

「嫌な現実ですな」
彼は一応言った。
「最低限の犠牲の為にはですか」
「勿論彼等が正式に市民になれば違います」
金はそこはそうだと言うのだった。
「ですが。市民でない限りは」
「そうなると」
「市民とそれ以外の差は歴然としています」
金はやはり機能的に述べる。
これは古代ギリシアから変わらない。市民であれば義務と共に多くの権利が与えられる。しかしそれと共に市民でないならば義務を強制されることはあっても権利が与えられることはない。市民はある意味において特権階級なのである。つまり戦場で命を考慮されるのも特権なのである。
「ですから」
「では彼等に市民権の習得を勧めていきますか」
サコはこんなことも考えるのだった。
「人道的にとかくと思いますし」
「そうです。それはそうしなければなりません」
そしてそれは金も勧めるのだった。
「彼等に積極的に勧めていきましょう」
「そうだな」
アッチャラーンもまたそれに賛成する。
「やはりどうかというとな。人を消耗品にするというのはだ」
「いいものではありません」
「その通りです」
二人は連合の倫理観の中で話をしていた。
「ましてや彼等は犯罪者ではないのですから」
「そういうことは」
「今難民達の新国家の話も出ているが」

アッチャラーンはこのことも話した。
「そちらはどうなるかな」
「そちらはです」
内相である金がそれを受けて話す。
「今のところ順調です」
「順調ですか」
「今のところは」
こう言うのだった。
「どうやら新国家はできそうです」
「それは何よりだ」
「しかしです」
しかしここで金の言葉が彼女にしては珍しく詰まった。
「問題は場所ですが」
「場所ですか」
「一体何処に置くべきか」
そうして悩む顔で述べるのだった。知的なその顔がそれにより微妙に歪む。
「何処かですが」
「それだな」
それにアッチャラーンも応えて述べる。
「問題はどの場所に置くかだが、新国家を」
「開拓地の何処かを勧めるのが一番でしょうが」
金は連合としてのオーソドックスの考えを口にした。
「やはり」
「基本はそうだな」
アッチャラーンもそれはその通りだと言う。
「普通の国家ならばな」
「普通の国家ならば」
「しかしあの国はだ」
アッチャラーンも今回ばかりは首を捻っていた。

「何分普通の国家ではない」
「そうです。確かに」
「普通の国家ではありません」
それが最大の問題点なのだった。この国家に関しては。
「サハラからの難民の国家」
「我々の歴史の中で今までなかったものです」
「それだ」
彼はまた言った。
「そうした国家を何処に置くべきなのかだが」
「何処がいいでしょうか」
「さてな」
アッチャラーンも決断がつきかねている顔だった。
「果たして何処がいいのか」
「わかりませんか」
「それは」
「そうだ。少しな」
首を捻りながら困った顔をしていた。
「それはな。わからないな」
「それはこれから話し合っていきますか」
「時間はまだありますし」
「うむ、そうしよう」
話すべきこと、解決するべきことは山積みであった。連合の政治は中央政府においても各国においても複雑に絡み合いながら行われているのだった。

# 第三十五部第二章　日本国首相その一

日本国首相

伊東はこの日実に平穏な朝を迎えていた。まずは官邸において夫と共に朝食を食べていた。

朝食は典型的な和食でありまずは大根の味噌汁があり玉子焼きがおかずにある。そすひて少々の漬物と納豆、そして主食として白米であった。味噌汁と玉子焼きは彼女が作ったものだ。

「今日は玉子焼きか」

「甘く焼いてあるわ」

向かい側に座る夫に対して微笑んで述べていた。

「お砂糖を多くしてね」

「御飯の為にか」

「玉子焼きは甘い方が御飯に合うのよ」

そう答えるのだった。

「白い御飯にはね」

「それに納豆か」

「組み合わせとしては最高よね」

「そうだな」

夫も妻の言葉に対して微笑んで頷く。

「それでは。今日はな」

「美味しく食べてね」

「わかった。それではな」

まずは心地よい朝だった。そうして朝食を食べ身支度を整えた後で執務室に入る。早速仕事にかかっているとすぐにスタッフの一人が入って来た。

「首相、ニュースが入りました」

「アヤグーズの滅亡は聞いているけれど？」

「それではありません」

サハラのことではないというのだった。
「連合の中のことです」
「連合？というと」
「はい、中央政府は断念したようです」
そのスタッフはこう述べるのだった。
「中央政府の憲法で各国を縛ることは」
「当然ね」
伊東は執務用の机に座ってその話を聞きながら穏やかに微笑むのだった。
「流石にそれは認めるわけにはいかないわ」
「中央政府はもうこの話は当分は出さないと思われます」
「当分なのね」
「はい、当分です」
話は今一つはっきりとしないものではあった。当分だからだ。
「それが残念ですが」
「中央政府も諦めが悪いからね」
「自分達の権限を強めたいのが千年前から変わらない彼等の本音ですね」
「その通りよ。中央政府は自分達の権限を強めたいのが本能よ」
それを本能とまで言うのだった。
「そして私達はといえば」
「自国の権限を維持しそれを拡大することがですね」
「お互い様ってことよ」
今は微笑んで述べるのだった。
「それはね。結局のところはね」
「同じですか」
「各国は各国でお互い言い争っているわね」
「はい」
そして各国は各国でそうなのだった。連合の中でもしのぎを削り合っているのである。

「実に複雑なことに」
「けれど今回は各国が上手く手を組めたわね」
「事前の根回しもよかったですし」
イスラエルが中心になって行ったのである。政治は何時の時代でも根回しが重要である。もっともこれは政治にだけ当てはまることではないが。
「上手くいきました」
「そうね。三百以上の国の殆どが足並みを揃えられたわ」
伊東はそのことを素直に喜んでいた。
「いい具合にね」
「さて、中央政府は少し驚いているのかも知れませんね」
「少しですか」
「日本は中央政府に忠実である」
連合では俗に言われていることである。
「そうしたことになっているから」
「実際は案外違うのですけれどね」
「そう、その通りよ」
伊東はここでまた微笑んでみせた。
「実際のところ我々はね」
「中央政府にそれなりに逆らっています」
実はそうなのだ。引かないところは引かないのだ。もっと相手が押せば引き、引かば押すというのが日本政府の外交であり然程目立ちはしないが。

## 第三十五部第二章　日本国首相その二

「気付かれないようにしているだけで」
「そうよ。じゃあこれで話は決まったし」
「はい」
「この話はこれで終わりね」
実際に伊東もここで話を打ち切るつもりであった。
「他に何かあるのかしら」
「トルコ政府から話が来ています」
「その法律の話でなくてね」
「はい、それとはまた別のことです」
こう述べるのだった。
「それとは別に」
「別に？」
伊東は彼女の言葉にまずはその目を動かさせた。
「別に何かあるのね」
「トルコ政府からオレンジの貿易のことで話があるそうです」
「オレンジね」
「それを中心として果物全般のことですが」
「トルコからはかなりの農作物を輸入しているけれど」
日本とトルコは農作物の貿易もかなり盛んなのである。こうした食物の貿易はこの時代においてもかなり広範囲に行われているのである。
「オレンジも多い筈よ」
「さらに輸出させてもらいたいとのことです」
「さらにね」
「はい、さらにです」
それがトルコ政府からの要求なのだった。
「是非御願いしたいとのことです」

「我が国の農作物はトルコにはあまり輸出していなかったわね」
「はい、トルコに対しては少ないです」
なお日本の農作物はこの時代それなりに人気がある。大きさはそれ程ではないが味もよく安いとのことで評判が高いのである。
「ですが他の分野はかなり」
「そうね。トルコに対してもかなり輸出しています」
スタッフも述べる。
「特に重工業の分野で」
「さて、向こうは何が欲しいのかしら」
伊東はここで考える顔になった。
「農作物を買って欲しいのだったらこっちには何を売って欲しいのかしら」
「トルコも重工業では有名ですし」
「そうね。ではそれではないわね」
「だとすると何でしょうか」
スタッフは立ったまま考える顔になった。
「それでは。何を」
「これがアメリカや中国だったら法外なものだけれど」
その強欲さは伊東もよく承知しているのだった。
「トルコはあまり欲はない国ね」
「はい、ですからこちらに要求してくるカードもそれ程ではないかと」
「そうね。けれど問題なのはどのカードなのかよ」
伊東が言うのはそこであった。
「同じ二のカードであってもダイアとスペードじゃ違うから」
「そしてこの場合は」
「さて、何かしら」
あらためて考える顔になって述べるのだった。
「果たして。何が欲しいのかしらね」
「こちらが出せるカードは今のところ多くあります」

スタッフは冷静にこのことを告げた。
「それこそあちらが満足するだけのものは」
「ええ。けれどだからこそ余計に困ることではあるわ」
「困りますか」
「果たして。どのカードを出すべきか」
これは多くとも少なくともどちらのケースでもままにして迷うものである。
「それですが」
「どのカードでも出していいかというとね」
「はい、そうはいきません」
これはカードでもそうだが政治でもそうだ。ただその手に持っているカードを出せばいいものではないのだ。それ程簡単なものではないのだ。
「ですから。ここは」
「そうね。向こうが農産物について求めてくるなら」
「こちらは何を」
「少し奮発しておくかしら」
ふとこうしたことも言う伊東だった。

## 第三十五部第二章　日本国首相その三

「ここはね。少し思い切って」
「奮発といいますと」
「肉を出そうかしら」
こう言うのだった。
「肉を出そうかしら。向こうが農作物なら」
「肉ですか」
「しかも羊をね。どうかしら」
また笑って述べる伊東だった。
「我が国では羊肉の需要は思ったより高くはないし」
「それは確かに」
その通りだった。日本ではこの時代においても魚をよく食べる。肉といえば牛に豚、それに鶏となっていく。必然的に羊の肉はそれ程食べられないのだ。
「羊毛に使う位だしね」
「その羊毛も加えていきますか」
「いえ、羊毛までは足さないわ」
それは出さないというのだった。
「羊毛はね。出さないわ」
「それはですか」
「カードはそこまでね。羊肉までね」
それだけだとするのである。やはり駆け引きを考えていた。
「そこまでを限度にしたいわ」
「わかりました。それではこちらは羊肉を」
「ええ。羊毛は置いておいて」
それは置くことにした。無論ここにも確かな考えがあるのは言うまでもない。
「他の国に使うか。それか」

「それか？」
「トルコがまた言ってきた場合に使うわ」
「その為にですか」
「そうよ。羊毛の使い道は多いわ」
このことはこの時代でも同じだ。綿花にしろ羊毛にしろ広く使われ続けている。自然の衣料として価値が低下することはない。当然絹もである。
「特にトルコのような国ではね」
「羊に親しんでいる国ではですか」
「そうよ。我が国では羊毛は盛んだけれど」
当然ながらそれを貿易の品の一つにしているのである。国内の需要も考慮に入れているが国外への輸出も考えているのは当然である。
「今一つ海外への輸出が伸び悩んでいるから」
「ここで、ですか」
「そうよ。ここでね」
穏やかだがそこには含むもののある今の伊東の笑みだった。
「それの解決にしたいわ。それでどうかしら」
「宜しいかと」
スタッフはそれで異論はなかった。
「それではそのように」
「ええ。ではそういうことでね」
これで話は決まったのだった。
「羊を出すわよ」
「わかりました」
「さて、トルコはどう思うかしら」
今度はトルコの心境について考えるのだった。
「農作物のかわりが羊だとしたら」
「それ程悪く捉えることはないと思います」
スタッフは暫し考えそのうえで答えた。
「何しろ羊ですので」

「そうね。やっぱりイスラムでは羊よ」
「はい」
それに尽きた。イスラム圏では羊が第一の肉なのである。羊が最初に来てそれから山羊や鶏、牛等が来る。日本とは順番が全く違う。
「羊の肉の需要が追いつかなくなってるそうだし」
「あれだけ羊がいてもですか」
スタッフはトルコで羊肉の需要が間に合わなくなっているという言葉を聞いて今一つ話がわからないといった顔で首を傾げるのだった。
「トルコの羊の数は連合でも」
「ええ、屈指よ」
それだけ羊と親しみそれを産業にもしているということである。
「オーストラリアやニュージーランドと同じようにね」
「では何故需要が？」
「海外で売れているからよ」
だからだというのだ。
「羊業者が輸出に力を入れていてね。それで国内の需要よりもそちらに羊肉がいっているのよ」
「ああ、だからですか」
スタッフはここまで聞いて理解したのだった。
「それでですか」
「羊がなければ山羊を食べればいい」
かつての中国の晋の皇帝が似たようなことを言っていた。これはあのフランスの王妃マリー＝アントワネットが言ったと言われていたが実際は違うのだ。

## 第三十五部第二章　日本国首相その四

「そういうわけにはいかないわね」
「はい、美味しいものは口に入らないといけません」
ある意味連合らしい言葉である。連合は食べ物には困らない。実際に米がなければパンを食べるしその他にも色々と食べ物がある。こうなれば味が重要になってくるのだ。
「何度も言うけれどトルコ人は羊だから」
「羊を食べないと話になりませんね」
「そういうことよ。だから彼等は羊を欲しがるわ」
そういうことであった。
「こちらの要望に乗ってね」
「それではやはり今回は羊肉を」
「カードとして出すわ」
答え出たのだった。
「これでね。トルコも喜ぶから」
「それを考えれば彼等にとってはいいカードなのですね」
「我々にはそれ程ではなくてもね」
この辺りはまさに文化の違いだった。味覚もまた文化なのだ。
「彼等にとってはね。そうなるのよ」
「味覚ですか」
「政治は味覚も大事よ」
伊東は味覚についても語る。
「それを考えてカードを切らないと意味がないのよ」
「農作物や肉に関してはですか」
「豚を売るわけにはいかないわよね」
「少なくともあからさまには」
そうはいかないのだった。実際には食べているにしろイスラム圏では豚は食べてはならないことになっているからだ。それで売ると

いうのは宣戦布告に等しい。
「いかないわよね」
「確かに」
これは言わずもがなのことだった。
「それをしては恐ろしいことになります」
「だからそれは駄目よ。もっともこれは味覚以前の話だけれどね」
それで伊東は話を少し変えてきたのだった。その話は。
「例えば牛肉で日本人の好きな霜降りは」
「他の国での評判はそれ程度ではありませんね」
「そうでしょ。私も好きだけれど」
こういうところもやはり日本人の伊東だった。
「他の国の人がどうかというとね」
「やはり別問題です」
「ましてや刺身用の牛肉なんてのはね」
連合にはそういうものもあるのだ。
「他の国の人は食べないでしょ」
「そうですね。あまり」
だがスタッフはここで己の言葉を訂正させることになった。
「というよりは殆ど」
「お魚のお刺身でも抵抗のある人が多いし」
「そもそも我々がよく食べる鰹や鯛にしろです」
魚自体についても話が及ぶ。
「東南アジアでは猫の餌に過ぎません」
「あとヒラメなんかもそうしてしまう国があるわね」
「そうです。勿体無い気もしますが」
「日本への輸出用の鯛をキャットフードの加工用にしてしまったりその逆にしてしまったっていう話もある位にね」
つまりそうした国々では鯛はその程度のものでしかないのだ。少なくともその国の人々が積極的に食べるような魚ではないのである。
「価値が高いとは言えないものよ」

「鯛といえば美味しいものですが」
「タイやベトナムでは淡白で食べられないものよ」
そうなってしまうのである。
「秋刀魚もね。何でもないものだから」
「どうしてもそうなのですか」
「そういうことよ。だから魚のカードは」
日本が持っているカードにはこういうものもあるのだ。
「限られるのよね、どうしても」
「ほぼ我が国限定ですか」
「我が国に他の国が使うのには効果があるのよ」
そうした場合には、ということだった。

## 第三十五部第二章　日本国首相その五

「けれどね。我が国が他の国に使うとなると」
「食べないから効果はありませんか」
「食べないものを売っても何にもならないわね」
「はい」
それは自明の理であった。食べなければ売れる筈もない。売れないものはカードにはならない。何にもなりはしない。そういうことであるのだ。
「その通りです」
「だからよ。そういうことも考えてカードを考えていくと」
「魚は使うものが限られますね」
「鮭とか鱈は結構食べる国が多いけれど」
そうした魚は多いのである。
「鯛や秋刀魚になるとね。まずいないわね」
「特に鱧といったものは」
「まずいないわ」
鱧はあくまで和食限定の魚なのである。他の国の料理にはまずない。例えその星でこれでもかという程獲れていても食べられないのである。
「だからそうした国が我が国に売ることはあるけれど」
「逆はそうはいきませんね」
「そしてこれは魚だけじゃないわ」
他のことにも言えることなのだった。
「漁業だけじゃなくてその農業にも畜産業にも」
「ひいては鉱工業にも」
「全てに言えるのよね。向こうが欲しいものを出す」
「それですね」
「そう、それよ。それがわからなくては貿易で利益を得ることはで

きないわよ」
「その通りですね。だからこそ」
スタッフも言うのだった。
「こうして考えてカードを出していくということですね」
「ええ。カードは多くても出せるものでなければならない」
このことが何度も確認される。
「そういうことよ」
「トルコには上手くカードを出すことができそうですね」
「とりあえずはね。これでいけると思うわ」
トルコのことも考えての言葉だった。
「さて、あとは羊毛は」
「別の国の為に置いておきますか」
「そうしましょう。さて、話はこれで終わりね」
伊東はこれでトルコとの貿易及びカードの話を終えたのだった。
「他にはまだ何かあるかしら」
「いえ、ありません」
スタッフは軍人を思わせるキビキビとした声で返事をした。
「以上です」
「わかったわ。あっ、そうそう」
伊東は彼女を下がらせようとしたがここでふと彼女を呼び止めたのだった。一礼してそのうえで部屋を後にしようとする彼女に対して。
「少し聞いていいかしら」
「はい？」
スタッフは退室しようとしたところを呼び止められたのだった。
「貴女。はじめてこの部屋に来たのかしら」
「はい、そうです」
彼女も彼の言葉に返したのだった。
「内務省から派遣されてきました」
「そうだったの。そういえば三日前にこちらに派遣された内務省の

スタッフが何人かいたわね」
伊東もそのことをここで思い出した。
「それが貴女だったのね」
「その通りです。それが私です」
また答える彼女だった。
「これから宜しく御願いします」
「ええ。名前は確か」
伊東はここで持ち前の記憶力を発揮した。これには彼女の考えも含まれていた。
「遠山幸だったわね」
「はい」
彼女は名前を呼ばれそれに頷いた。
「その通りです」
「名前は覚えていたわ。顔は今覚えたわ」
「有り難うございます」
ここで彼女の口元が微かに笑った。誰であっても名前を覚えてもらうことは嬉しい。伊東はそれがわかっているからこそあえて彼女の名を呼んだのだった。
「遠山さんと呼ばせてもらうわね」
「呼んで頂けるのですか」
「名前を呼ばなくて何で呼ぶのかしら」
くすりと笑ってこうも返す伊東だった。

## 第三十五部第二章　日本国首相その六

「他にはないわよね」
「それはそうですが」
「そして今日は」
ここまで話したうえでまた話す伊東だった。
「国会ね」
「はい、九時からです」
「もうすぐだけれど」
壁にかけてある時計を見る。時計は今八時を少し回ったところである。彼女は実に朝早くから仕事に取り掛かっているのである。
「今から行くわ」
「もうお車の用意はできています」
それももうなのだった。首相の仕事はどの国であっても分刻みどころか秒刻みである。だから事前に移動の準備をしておくことは極めて重要なのである。
「それではすぐに」
「有り難う。さて、相変わらず問題になっている高齢者の福祉への予算だけれど」
「財源をどうするかですね」
「野党がそこを攻めてくるわよ」
伊東は楽しそうに笑ってそうして語るのだった。
「ここぞとばかりにね」
「そうなのですか」
遠山はここではこれといって何も言わないのだった。何故なら彼女は官僚であり政治家ではない。政府の人間であるが政党のスタッフではない。政治家と官僚はこの時代ではかなり分けられている。それは近代国家における政治家と軍人の関係そのままになっているのだ。

「私はそれについては」
「いいわ、政治家は政治家」
伊東もそれを踏まえて言う。
「官僚は官僚だからね。政策のことは話せるけれど政治のことは話せない」
「はい、ですから私は何も言いません」
そして当然ながら遠山もわかっているのだった。そうしたことが。
「官僚ですので」
「わかってるわ。それで政策の話だけれど」
「何でしょうか」
「後々それについて話したいわね」
こう述べるのだった。
「国会から帰った後にね。それで御願いね」
「はい。それではその時にまた」
「今問題は福祉だけじゃないから、我が国が抱えているものは」
問題は常に複数ある、事態の大小や優先順位を別にして常に複数存在している、それが政治の世界である。単純なものではないのである。
「警察についても話したいから」
「警察ですか」
「そうよ。どうも最近警察の風紀が緩んできているから」
日本では警察官の不祥事が問題になっているのである。飲酒運転やら家庭内暴力やらそうした問題であるが通常の職業ならそれ程問題にはならない。しかし警察官は特殊な職業の一つでありそうしたことが頻発するとどうしても世間から注目されてしまうのである。
「それについて話したいわ」
「わかりました」
伊東は冷静にその言葉に頷いてみせた。
「それでは後程」
「それだけよ。そういえば貴女今日は随分早いわね」

「当直でしたから」
だからだというのである。官公庁には何処にでもそうしたものがあるのがこの時代である。そうして不測の事態に備えているのである。
「それで今日は」
「そう。じゃあ今日は代休かしら」
「いえ、それは明日です」
今日ではないというのだ。
「明日になっています」
「そう。じゃあ今日はいるのね」
「はい」
また伊東の言葉に対して頷いてきた。
「その通りです。今日はいますので」
「わかったわ。じゃあ後で御願いね」
「畏まりました」
「それでは今から国会ね」
ここまで話してそのうえで席を立つのだった。
「行って来るわ」
「では私は」
「今日は官邸で仕事なのね」
「まずは当直の引継ぎです」
最初はそれだと言うのだった。

## 第三十五部第二章　日本国首相その七

「それがありますので」
「ああ、そうね」
引継ぎの話が出てそれに頷く伊東だった。
「それがあったわね、確かに」
「はい、それが終わってからです」
遠山は言う。
「本格的な業務は」
「わかったわ。じゃあ身体に疲れが残っているでしょうけれど御願いね」
「疲れはありません」
遠山の返答は強いものだった。
「それは」
「ないのね」
「はい、ありません」
そしてまたその強い言葉で答えるのだった。
「ですから。御安心下さい」
「けれど徹夜だったでしょう？」
「そうでもありませんでしたし」
徹夜でもないというのである。
「早いうちに休むことができましたから」
「それは何よりよ。やっぱり休める時に休めることが大事だから」
「そうですね。それは確かに」
遠山もこのことにはその通りという顔になるのだった。そのうえで答える。
「身体はその時に休めなければ」
「何時か参ってしまうわ。身体は大事なのよ」
伊東はこのことにかなり詳しく言うのだった。

「一番よくないのは徹夜よ」
「寝なければ駄目なのですね」
「その通りよ。徹夜をすればその時間は平気でも後でくるから」
こう言ってそれはあくまで駄目だというのである。
「昔の漫画家は三日徹夜したそうだけれど」
「明らかに身体に支障が出そうですね」
「そういう人は皆六十かその辺りで死んでしまったわ」
「何と」
遠山は六十で亡くなったと聞いて思わず声をあげてしまった。表情こそは変わらないが。なおこの時代の連合の平均寿命は一〇〇歳近い。
「僅か六十でですか」
「当時の日本の男性の平均寿命は確か七十九かその辺りだったけれど」
「それでも若死にですね」
「つまり。無理は後に来るのよ」
伊東はまたこのことを話すのだった。
「後になってね。絶対にね」
「身体に無理が出ると」
「その通りよ。これは昭和三十年代から四十年代の話だけれどね」
丁度漫画というものが定着してきた頃である。手塚治虫や石ノ森章太郎、それに藤子藤仁雄といった面々がそれにあたる。伝説的な巨匠である。
「若くして。皆亡くなっているから」
「だからこそ少しもなのですね」
「その通りよ。二時間でも三時間でも寝るのよ」
とにかく寝るということだった。
「そうすれば身体が休まるから」
「はい、いつもそうしています」
そして遠山はそれを忠実に守っているのだった。

「ですから今も」
「それはいいことよ。それじゃあ行って来るわ」
「はい」
こうして伊東は国会に向かった。国会では今日も議論が行われていた。議論、そして審議の内容は予算案に関してのものであった。
「従ってです」
発言する場において年配の背の高いかつ恰幅のいい男が述べていた。
「この予算案は非常に不備があると言わざるを得ません」
彼は言うのだった。
「まず福祉への予算が。これが甚だ少ないのです」
「そうだそうだ」
「その通りだ」
周りがそれに賛成して声をあげている。
「福祉をないがしろにして国が保てるでしょうか。保てません」
彼はさらに言う。
「何があろうとも。それを忘れてはです」
「いつもながら言ってくれるわね」
伊東は首相の席からその言葉を聞いて呟く。なおこの時代の日本は議院内閣制である。この制度もかなり古く存在しているものである。
「あの人は」
「はい、流石は憲和党の領袖の一人だけはあります」
彼女の横にいる小柳がそれに応える。相変わらず小柄であるが知的な美貌をそこに見せている。
「お見事です」
「そうね。この予算の特徴をすぐに掴んできたわね」
伊東の今の言葉は賞賛のものであった。

## 第三十五部第二章　日本国首相その八

「そのうえで攻めてくる。敵ながら見事ね」
「ですが首相」
だが小柳はここで言うのだった。
「このままにしてはおけません」
「ええ、わかっているわ」
伊東も彼女の言葉に頷く。
「それは」
「今憲和党は紀伊星系の知事選挙に勝利して勢いに乗っています」
このことも言う小柳だった。なお憲和党はどちらかというと保守派で知られており日本の権限の維持と福祉の充実に五月蝿い。なお伊東が総裁でもある与党は民政党といいどちらかといえば中央政府を重要視しており経済を中心に考えている。それが日本の二大政党である。
「ですからここでさらに攻勢に出ているのでしょう」
「そうよ。ここが彼等にとって好機よ」
そして伊東もこのことがわかっているのだった。
「ここぞとばかりにね。来てるしね」
「それに対してどうされますか？」
小柳は参謀の目になってそのうえで伊東に問うてきた。
「今回は。首相が」
「私が出る必要はないわ」
伊東はすぐに小柳の今の問いに返した。審議の場は野党側の席と与党側の席が向かい合わせに並んでいる。そうしてその野党の領袖が野党側の発言の場に出て来て発言を行っているのだ。発言の場は丁度野党側の席をバックにする形になっている。
「私はね」
「ではここは」

「若宮君」
「はい」
小柳より少し背の高い女性が出て来た。年齢は三十代後半だろうか。物静かで穏やかな顔をした美女で長い髪を後ろでまとめている。草色のスーツがよく似合っている。
「御願いするわね」
「わかりました」
若宮と呼ばれた彼女はすぐに応えるのだった。
「では発言の際は」
「ええ、それでね」
こう若宮に告げる伊東だった。彼女に声をかけてそれで安心といった顔になる。そうしてそのうえでまた相手の話を聞くのだった。
「総理」
彼は今度は伊東を見据えてきた。彼女は与党側の先頭の列の中央にいる。その左横に小柳がいるのだった。そうしてそこで話しているのだ。
「御聞きしたいのですが」
「来ました」
「ねえ」
その言葉を聞いたうえで小柳の言葉にまた応える。
「そうね。来たわね」
「それでは」
「ええ。若宮君」
ここでまた彼女に声をかけるのだった。彼女は小柳の隣にいる。
「いよいよ出番よ」
「はい、確かに」
若宮も伊東の言葉に応えながら相手を見るのだった。
「それでは」
「相手の意図もわかっているわね」
そのこともあらかじめ若宮に問うのだった。

「それも」
「勿論です」
若宮の返答は実に淀みのないものであった。
「お任せ下さい」
「頼もしい言葉ね。それじゃあ」
「はい」
若宮とのやり取りはこれで終わった。しかし向こう側からの声はまだであった。
「総理、宜しいでしょうか」
「私にですね」
「いえ」
ところがここでであった。彼は不意にその顔に迷いを見せだした。そうしてそのうえで己の言葉を訂正したうえでまた述べるのであった。
「厚相」
「私ですね」
「そうです、貴女に御聞きしたいのですが」
こう言ってきたのだった。
「宜しいでしょうか」
「はい、わかりました」
若宮は相手の言葉を受けた。そうしてそのうえで立ち上がる。ここでアナウンスが入った。
「厚生大臣若宮夏樹君」
誰かが発言する際はその役職や氏名が述べられるのが日本の国会の慣わしである。そしてこれは日本だけのことではないのである。
「発言をどうぞ」
「わかりました」
若宮はそれに応えて与党側の発言の場に立つ。それを見てから野党側から野次が来た。この野次も国会にはつきもののものである。
「さあ、どうなんだ？」

「早く言えよ」
「まず。この予算についてですが」
「そうです。少なくはありませんか？」
相手はここで問うのだった。伊東はそれを見てまた小柳に対して言うのだった。

## 第三十五部第二章　日本国首相その九

「佐古崎さんも頑張るわね」
「そうですね」
小柳は彼女の言葉に頷く。顔を少しばかり彼女に向けたうえでだ。
「ここが正念場ですし」
「言い換えればこちらにとっても正念場よ」
伊東はこうも言うのだった。
「こちらにもね」
「こちらにもですか」
「ええ。だからここはね」
若宮に目を向けるのだった。
「若宮君に任せるわ」
「厚相にですか」
「その通りよ。彼女だったらやれるわ」
若宮に対する絶対の信頼を見せていた。
「必ずね。さて、どういった攻防になるかしら」
「まだ勝ったわけではないですが」
「いえ、既に決まっているわ」
伊東の言葉は揺るぎないものであった。
「もうね。若宮君があそこに立った時点でね」
彼女に対する絶対の自信がそこにあった。そうしてそのうえで見守るのだった。今目の前でその若宮が今口を開こうとしていた。
「高齢者への配布が少ないと仰いますね」
「如何にも」
佐古崎はまだ立っている。そうしてそれと対峙するようにして述べる若宮であった。
「そうではありませんか。予算は伸びているのに高齢者への福祉予算は全く伸びていません」

「そうだ、その通りだ」
「弱者切捨てなのか？」
野党側から野次が起こる。ここでは高齢者がそのまま弱者とされている。この解釈も二十世紀後半以降定着している考えの一つではある。
「それが民政党のやり方なのか？」
「あくまで中央政府に媚を売るのか」
「まず申し上げておきます」
ここで若宮の言葉が強いものになった。
「この政策と中央政府は何の関係もありません」
「その通りなのよね」
伊東はここでまた呟いたのだった。
「というか私達の政策は常に中央政府に媚を売っているって言われるけれど」
「そうですね」
小柳も伊東の今の言葉に応えて頷く。
「それは私もいつも言われます」
「憲和党も政権を担っている時はそう言われるし」
これは連合ならどの国でも見られることである。与党の政策が何かと中央政府寄りだと批判するのである。どうしてもそうした極端な自国中心主義者がいて彼等は結局のところ自分達の国さえよければいいのである。かなり極端な見方をすればそうなる。もっともその彼等ですら連合からの離脱なぞ言いはしないのであるが。
「おかしな話だけれどね」
「内政と外交は連結するものですが」
表裏一体でありコインのようなものなのだ。
「ですがそれでも福祉は」
「その通りよ。まあここは若宮君の話を聞くわよ」
「わかりました。それでは」
こう話したうえでまた若宮のやり取りを見るのだった。その穏や

かだが確かな言葉は続いていた。
「まず中央政府の福祉政策ですが」
「それに倣ったのではないと」
「中央政府は今現在高齢者の優先的介護を掲げています」
それは実際に打ち出されている。彼等は今は高齢者への介護を重要視している。その為に施設や設備の充実を進めてもいるのだ。
「そうです。それとは違います」
また言うのだった。
「中央政府とは」
「ではやはり切捨てなのか？」
「そうなるぞ、結局のところは」
しかし再び野次が起こる。それはもう止められないものがあった。だがそれでも若宮は顔を上げ続けている。政治家というものは野次が起ころうとも負けていては話にならないのだ。この辺りはスポーツ選手と同じである。
「予算の額を御覧になって下さい」
「額をですか」
「そうです」
こう返しながら手元からデータを出してきた。見ればそれはその今年度の日本政府の予算案である。無論そこには福祉関連のものも記載されている。

## 第三十五部第二章　日本国首相その十

「額は先年と同じです。変わりません」
「変わらないというのですか」
「その通りです。減らしてはいません」
このことを確かに言うのだった。
「それも全くです」
「ですが増えてもいないではありませんか」
佐古崎はこう言い返す。
「高齢者の人口も増えています。それで増やさないというのは」
「その通りだ。問題が生じる」
「結局のところ減らしているのと同じじゃないか」
「違うのか？」
「違います」
若宮の言葉は変わらなかった。
「問題は額ではありません」
「額ではない！？」
「そうです。重要なのは有効な使い方です」
彼女はそこを指摘する。確かにこれは常に問題になっていることである。ただ予算を回すだけでは何にもなりはしないのである。
「それをどうするかです」
「ではそれができていると」
「まず高齢者への福祉政策を見直しました」
若宮はそこからはじめたのである。
「そしてその結果老巧化し役に立たなくなっている高齢者用の施設もありまして」
「ムッ！？」
「それは」
野党側は今の若宮の言葉に目を止めた。実はそこまで気付いてい

なかったのだ。
「そうだったのか！？」
「まさか」
「あら、向こうは知らなかったのね」
伊東は驚いて声をあげる野党側の声を聞いて述べた。
「どうやらこのことは」
「そうらしいですね。といいますか」
小柳はここでまた言うのだった。
「これは少し迂闊だったのではないでしょうか」
「そうね。今の野党側の悪い癖が出ているわ」
伊東は彼等を細かく分析したうえで述べるのだった。
「木を見て森を見ずというかね」
「肝心のところを見ていないと」
「そうなのよ。確かに予算の割り当ては重要よ」
これは言うまでもない。やはり何事も金がないと動かないからだ。ある人に至っては金がないのは命がないのと同じでさえある。もっとも金があっても使い方が問題なのであるが。
「けれどね。問題はよ」
「その資金を投入する分野の内容ですね」
「そういうことよ。若宮君はそれをよく見ていたわ」
伊東は会心の笑みを浮かべてまた若宮を見て述べた。
「どういった状況かね。そしてそれを踏まえて」
「予算を分配したのですね」
「老巧化した部分をダイエットさせてね」
要するに合理化ということである。
「そっちの方に予算を回しているのは予算案を見ればわかることだけれど」
「そうですね。それだけで」
「わかる筈だけれど」
伊東はこう言って首を捻るのだった。

「このこともね」
「何故それがわからないのでしょう」
「意外とね。あら捜しをすると」
伊東はあえてこの表現を使ってみせてきた。
「見えるものが見えないものなのよ」
「見えないのですか」
「そういうものよ。木を見て森を見ず」
よく使われる諺ではある。細かい部分を見て大きなものを見落とすということだ。こうしたことは政治の世界にだけ言われることではないが。

## 第三十五部第二章　日本国首相その十一

「それよ」
「今回の彼等もそれですか」
「そうなるわね。予算の割り当てばかりを見てそれを見ていなかったわね」
こうも述べて笑うのだった。
「迂闊だったわね」
「そういえば八条君が」
小柳はかつて日本の国防長官だった彼のことをここで思い出した。
「軍事費をかなり有効に使っていましたね」
「まず兵器を集中的に作ってそれだけの予算の無駄を減らして」
何でも集中的に作ればそうなるものだ。
「そのうえで製造システムも整備してね」
「そうして予算を上手く作っていますね」
「そうよ。それで予算を上手く使っていたわね」
そのことを話す二人だった。
「それは何も軍だけに言えないしね」
「はい。それは軍にだけ言えません」
小柳もわかるのだった。
「あらゆることに対して言えます」
「そうなのよ。確かに軍という組織は特殊な組織だけれど」
少なくとも支出ばかりで歳入はない。それを考えると確かにかなり異質な組織である。
「それでもね。軍もまた官僚組織だからね」
「他の官公庁と同じですね」
「軍人は公務員よ」
これは法律にも定められている。もっと簡単に言えば警察官や消防署員と同じである。そうした意味で彼等も官僚であり公務員であ

るのだ。
「これはエウロパやサハラじゃ違う意見だけれどね」
「あくまで連合では、ですね」
「そういうことよ。だからそういうふうに考えればいいのよ」
伊東はまた話すのだった。
「軍に当てはめることは他の官公庁にも当てはめることができる」
「そして逆も」
「その通りよ。若宮君は八条君のやり方を結構勉強しているわね」
ここではくすりと笑って若宮を見るのだった。
「いいことよ。流石と言うべきかしら」
「厚相といえば」
小柳も彼女のことはよく知っていた。日本政府の閣僚達の間で最も努力家であり勉強家である。その評価で知られているのである。
「それは野党も承知の筈ですが」
「承知していても忘れることはあるわ」
知っていてもそれだけで力になるというわけではないのである。
「しかも弱点を見つけたと確信した時こそよ」
「その時に最も忘れてしまうのですね」
「得意になるから」
こうも言う伊東だった。
「勝ち誇るその瞬間が一番危ないのよ」
「勝って兜の緒を締めろですね」
「その通りよ。いい言葉ね」
伊東はこう述べてまた微笑むのだった。
「それはね。人間は学ぶものだけれど」
「それだけではないと」
「時としてそれを忘れてしまうものよ。どうしてもね」
「因果なものですね」
小柳はこう述べて首を捻った。
「人間というものは」

「そしてその因果を衝くのが政治よ」
業を見たような言葉だった。
「どうにもこうにも。罪深いものだけれどね」
「因果を衝く、ですか」
「弱点を見つけたらその弱点を攻める」
伊東は言葉を変えてきた。
「それを攻めるのよ。いいわね」
「はい、それでは」
小柳もまた若宮に顔を向けた。彼女は相変わらず見事に野党側の追及を退けそのうえで反撃に転じていた。彼女の優勢は明らかであった。
「それでです」
「むっ！？」
「その結果旧式化した設備や施設を改善してこれだけで充分になったのです」
「この予算でですか」
「その通りです」
こう野党やり取りを続けていた。

## 第三十五部第二章　日本国首相その十二

「予算はただ注ぎ込めばいいものではありませんね」
「その通りです」
「それにつきましてはです」
　これには野党側も反論はなかった。こんなことは政治の基礎の基礎だ。しかし彼等は今はそれを言葉でだけわかっているだけだったのだ。
「それでは。答えはそこにあるのです」
「くっ・・・・・・」
「何と」
「予算の有効な活用」
　若宮は堂々と述べた。
「私はそれを為しているだけです。それだけなのです」
「そしてそれによりこの予算ですか」
「額自体はこのままだと」
「はい」
　佐古崎の問いにも答える。
「これで充分です。むしろより効果的になっております」
「そうだな。これはな」
「見てみると確かに」
　今度は与党側から声があがる。彼等はただここで声をあげたのではない。若宮への援護射撃なのだ。政治は言葉を使うものだからこそである。
「この予算の使い方はいい」
「見事なものだ」
「まだ何かあるでしょうか」
　若宮は流れが自分にあることを確信して野党側に問うてきた。
「さもなければこれで終わらせて頂きますが」

「そうですね」
佐古崎はここで自分達の劣勢を確信した。後は撤退するしかないがその損害を最低限に抑える損害を考えながらやり取りをするのであった。
「ではこれで」
「終わりですね」
「後々この予算案を検証させて頂きます」
こう言うだけであった。
「ではこれで」
「はい、それでは」
速やかな撤退だった。これ以上何を言っても傷口を拡げてしまうだけだと感じ取ったからだ。だとすれば退くに越したことはなかった。
これで高齢者の福祉問題に関する議論は終わった。しかし伊東はそれを見てもにこりともしなかった。かといっても勝利を感じていないわけではなかった。
「さて、後は」
「どうされますか？」
「宣伝よ」
このことを小柳に告げるのだった。
「この高齢者の予算のことをね。代々的に宣伝するわよ」
「はい、それではすぐに」
「政治はただ国益を考えてするだけでは駄目だから」
細かいところにまで考えを及ばせていた。
「宣伝もね」
「それで知ってもらわなければどうしようもありませんからね」
「レーニンの言葉だったわね」
ロシア革命の革命家である。彼によってソ連は作られた。なおロシア革命での非情な政策や容赦ない粛清は彼の手によるものである。
「その国のマスメディアを占拠することはその国に十個師団を駐留

させるに等しい」
「十個師団といいますと」
「今で言うと十個艦隊ね」
そうなるのだった。
「それだけの価値があるというのよ」
「十個艦隊ですか」
小柳はそれを聞いて少し考える顔になった。そのうえでまた述べてきた。
「というとサハラなら最早その国を制圧できる規模ですね」
「そうよ。小国ならそれで終わりよ」
伊東もまたそうだと言うのだった。
「それだけでね」
「そこまでの価値があるということですか」
「そうよ。もっともマスコミは当時程の力はもうないけれどね」
それはインターネットの発達の結果だ。インターネットがマスコミをチェックすることによりその横暴を抑制するようになったからだ。今ではマスコミはかつての十分の一の力もない。
「それでもなのよね」6
「効果がありますよね」
「その通りよ。確実にね」
伊東の言葉が鋭いものになる。
「だから後は宣伝よ」
「わかりました。それでは」
「引き続きまして」
これで高齢者の福祉に関する議論は終わった。しかしそれで終わりではなく次の議論に入る。国会はそれが開かれる限り議論が行われるものである。

## 第三十五部第二章　日本国首相その十三

「国防費に関しまして」
「はい」
今度は国防であったがこれはもう流れ的に終わった。伊東は国会での審議を終えるとすぐに迎賓館に向かった。それでは帝が待たれていた。
「ようこそ」
「はい、お待ちしていたでしょうか」
「いえ、今来たところです」
帝は気品のある笑みを浮かべられ彼女の言葉に応えた。見れば気品のある淡い草色のスーツである。一国の帝とは思えぬ質素だがそれでいて気品のあるスーツであった。
「それよりも首相は」
「少し休めましたので」
にこりと笑って帝に言葉を返すのだった。
「御気になさらずに」
「そうなのですか。それならばよいのですが」
「はい。お気遣い有り難うございます」
伊東は帝に対して頭を垂れる。
「それでは早速」
「そうですね。今日は叔父上が来られています」
帝はここで叔父上という言葉を出された。
「ですからすぐに」
「叔父上。左様ですね」
伊東はすぐにその言葉の意味を察したのだった。
「琉球王国の陛下はまさに」
「私の叔父上です」
こう言うのにはれっきとした根拠がある。日本の皇室と琉球王家

は血縁関係にある。代々それぞれ縁組をしてその血縁関係はかなり深い。そうして今の琉球国王は帝にとっては叔父にあたるのである。帝の母君にあたる先代の皇后陛下は琉球王家出身であり現琉球国王の妹であられたのだ。
「ですからすぐに」
「御会いしたいのですね」
「こんなことを言えば子供のようですが」
「いえ、それは自然のことです」
伊東は微笑んで帝に答えた。迎賓館は和風を基礎とした造りであり実に気品がある。欄間も襖も凝った装飾や絵画が施されている。しかし決して贅沢ではなく落ち着いた美がそこにある。そうした金や銀よりも穏やかなものを称えた場所なのであった。
「血縁の方を慕われるのは」
「そうですか。それでは」
「はい、参りましょう」
あらためて帝に告げられるのだった。
「それと共に昼食でしたね」
「はい、和食と琉球料理が出る予定と聞いております」
つまり両国の食事を共に楽しむというわけである。
「では首相も」
「有り難き御言葉。それでは」
こうして帝と共に迎賓館において最も尊いとされている間である応接の間に向かった。やはりそこも穏やかな美に包まれている。装飾はここでも和風でありテーブルと椅子があるがそれもその和風の中に合っている。絶妙なまでの和がそこに存在していた。
帝はそこに伊東と共に入られた。そうして琉球国王である尚実朝と会われた。琉球国王は穏やかな顔をした初老の紳士であり静かな色彩の青いスーツに身を包んでいた。そしてその横に中年の黒い髪の端整な顔のクリーム色のスーツの男を従えていた。
「ようこそ、叔父上」

「お久し振りでございます、陛下」
帝が挨拶をされ琉球王がそれに応える。そのうえで会談をはじめるのだった。
「御元気そうで何よりです」
「叔父上もお変わりないようで」
また親しい言葉が交えさせられる。
「琉球は今どうなのでしょうか」
「ははは、変わりありません」
笑って帝に応える。
「いつも通り平和なものです」
「左様ですか」
「日本もまた何も変わりないようで」
「はい、臣民達は皆泰平を謳歌しています」
「こちらもです」
最早連合に戦乱も飢餓もない。この二つは確かになくなっている。もっともそれだけで万全というわけにはいかないのが世の中であるが。
「我が国も臣民達も平和を楽しんでおります」
「よいことです。それで今回の御来訪ですが」
「ええ」
今回の琉球国王の来訪はあくまで親善である。こうして時としてお互いに訪問することもまた外交において重要なことなのだ。

## 第三十五部第二章　日本国首相その十四

「時間はかなり取れまして」
「そうですか。それは何よりです」
「桜を見たいものです」
そしてここでこう言うのだった。
「できればそれで宜しいでしょうか」
「はい、勿論です」
帝は琉球王の申し出に対して快く頷かれた。
「桜は我が国の象徴、是非御覧になって下さい」
「はい、それでは是非」
王も帝の御言葉ににこりと笑って頷いた。
「宜しく御願いします」
「わかりました。それでですね」
帝はここでお話を変えてこられた。
「こちらの方がですね」
「そうです、我が国の新しい侍従長です」
「はじめまして」
その中年の男が微笑んで頷いてきたのだった。
「真樹といいます」
「真樹さんですか」
「リゾット＝真樹といいます」
己の名前まで帝に述べたのだった。
「今後共宜しく御願いします」
「はい、こちらこそ」
帝は彼に対しても微笑んで応えられるのだった。
「宜しく御願いします」
「これから是非」
こうして琉球王国の新しい侍従長も紹介されるのだった。会談は

和やかなうちに進められた。
そのうえで場所を移り迎賓館の食事の間に入る。そうしてそこで昼食となるのだった。
一列に横に並びそのうえで食事となる右側に琉球側が、そして左側に日本側がそれぞれ座る。そのうえで食事となるのであった。
まず出されたのは天麩羅であった。言うまでもなく和食です。
「おお、これは」
琉球王は天麩羅を見て目を細めさせた。それはキスに海老に薩摩芋、そして茄子に烏賊といったオーソドックスな天麩羅であった。
「有り難い、天麩羅とは」
「叔父上は天麩羅がお好きですので」
「はい、大好きなのですよ」
帝の御言葉にさらに目を細めさせるのだった。
「まずはこれとは。何よりです」
「続いて御蕎麦が出ます」
「さらに何よりです」
蕎麦と聞いてその機嫌をさらによくさせるのだった。
「蕎麦はいいものですね」
「はい、私も好きです」
帝はまた目を細めさせて述べられた。
「それもざる蕎麦です」
「そう、私はその蕎麦が何より好きでして」
随分和食が好きな人であるようだ。
「それを用意して頂けるとは何よりです」
「叔父上がお好きと聞いていますので」
帝が述べられるのだった。
「用意したのです。こちらのシェフが」
「シェフがですか」
「そうです」
あえてシェフとされたたが実はこれは日本の宮内省の配慮である。

日本宮内省はとかく気配りが徹底していることで有名である。そして今回はあえてシェフ、和食の料理人に花を持たせたのである。
「叔父上のお好みを聞いてそのうえで」
「ふむ、料理は気配りからと言いますが」
王は帝の御言葉に感服した顔になった。
「そこまで考えられるとは。実に素晴らしい」
「我が国自慢のシェフです」
帝はここでもにこりとして述べられた。
「是非お楽しみ下さい」
「天麩羅も蕎麦もですか」
「いえ、蕎麦はまた別のシェフです」
それはまた別だというのである。
「蕎麦はまた専門の知識と技術が必要なものですから」
「おっと、そうでしたな」
琉球王は帝の御言葉を聞いてまた微笑むのだった。

## 第三十五部第二章　日本国首相その十五

「日本の蕎麦やうどんはそれだけで一つの世界でした」
「そうです。だからこそです」
帝もまたそのことを述べられるのだった。
「別のシェフが作っております」
「料理人がですね」
琉球王はあえて和風に語ってもみせた。
「作ったと」
「その通りです。そしてその天麩羅ですが」
「いや、見事なものです」
琉球王の目は細くなったままであった。
「やはり天麩羅はいいものですな」
「叔父上の御気に召されて何よりです」
「そして蕎麦もありますな」
それについても考えを及ばせているのだった。
「いや、楽しみが尽きません」
「そして丼もあります」
「丼は一体何でしょうか」
「親子丼です」
帝はそれだと述べられた。
「それですが」
「ほう、親子丼ですか」
烏賊の天麩羅を手に取りながらまた笑顔を見せていた。
「それはまた」
「それもお好きなのですよね」
「はい」
やはりそうであった。それは表情にも出ていた。
「その通りです。それもです」

「それは何よりです」
実はこのことも事前に調べているのだった。やはり何事も徹底している宮内省であった。気配りこそが彼等の最大の得意ごとなのである。
「ではまた」
「最後にはデザートも用意していますので」
当然ながらそれも忘れてはいないのだった。デザートが最後にあるのはこの和食に置いても同じである。これはどのジャンルの料理でも同じなのだった。
「ですから。是非」
「はい、それでは喜んで」
こうして帝と琉球王は親睦の為の昼食を楽しまれた。伊東はそれへの列席を終えるとすぐに官邸に戻ろうとする。しかしここで帝に挨拶があった。
「では私はこれで」
「お疲れ様です」
帝は官邸に戻ろうとする彼女に対して声をかけられた。
「お仕事はまだこれからも続くのですね」
「はい、そうです」
帝に対しては隠すところはなかった。
「ですから今より」
「ではまた頑張って下さい」
気品と優雅に満ち溢れた御言葉であった。
「我が国の首相として」
「有り難うございます。それでは」
「それでですが」
ここで帝は去ろうとする彼にまた声をかけられてきた。
「国防長官ですが」
「八条長官のことですか」
「はい」

国防長官といえば日本もまたいるがそれでも伊東は彼だとわかったのだった。この辺りの見抜く鋭さこそが彼女を彼女たらしめていた。
「どうされていますか？」
「今も国防省で頑張っておられます」
こう帝に対して述べるのだった。
「今は落ち着いたそうですが」
「落ち着いておられるのですね」
「はい、エウロパとの戦争の処理も一段落終わりましたし」
それはもう終わっているのだった。戦争はその後の処理も重要なのである。
それを終えて中央政府国防省は確かに落ち着いている。しかしそれだけではないのだ。
「それで今は別の仕事にかかっています」
「そうなのですか」
「はい。ですから御安心下さい」
また言う伊東だった。
「是非。それで」
「わかりました。それではです」
「また御呼びになられるといいでしょう」
そしてこうも帝に告げた。
「若しくは帝が首都に行かれた時に」
「そうですね。その時にでも」
「御会いになられるといいです。それでは」
「はい、また」
こうして帝を別れそのうえで官邸に戻った。官邸に戻り仕事にかかるとそこに宮内省の官僚達が来ていた。伊東は彼等の姿を見てふと目を向けるのだった。

## 第三十五部第二章　日本国首相その十六

「貴方達がまたどうして」
「はい、実はです」
「陛下のことで」
その帝のことであるというのだ。
「お話があるのですが」
「宜しいのでしょうか」
「一体何かしら」
彼等を見ながら問うのだった。
「それでお話とは」
「それですが」
「帝もまたよい御歳になられました」
彼等はまずここから話すのだった。
「ですから。もうそろそろと思っているのですが」
「その。御相手ですが」
「そうね。それね」
伊東は彼等の真剣な声に考える前で返すのだった。
「帝はただ帝であられるわけではないのだから」
「伴侶がいないとやはり」
「他の国々に申し立ちができません」
「そうなのよね。ここが難しいのよ」
伊東はこう言って腕を組んで難しい顔になっていた。それを隠すこともしなかった。
「これが大統領ならね」
「そうです、あまり体裁がいいとは言えませんが」
「それでも話はいけます」
そうなのだった。国際社会において大統領や首相が独身でも特に問題はない。しかし皇帝や国王といった存在はそうはいかないので

ある。
「ですが我が国は天皇陛下です」
「陛下が御一人で何時までもおられるというのはあまりにもです」
彼等の話は続く。
「我々も今探しているのですが」
「総理は誰か思い当たる方はおられますか？」
「陛下の生涯の伴侶となられるべき方は」
「そうね。今まで皇室の中の方や我が国の名門出身」
どの国にも名門というのはある。貴族制のエウロパ程ではないにしろどうしてもそうした家はどの国にも存在するものだ。そしてどの時代にもだ。
「若しくは」
「他の国の王家の方ですが」
「どなたが宜しいでしょうか」
「エチオピア皇室はどうかしら」
伊東は考える顔でまた述べたのだった。
「エチオピア皇室で。確か若くて能力的にも優れた方が何人かおられたわよね」
「はい、そういえばあちらも」
「伴侶を選ばれるのに苦労されているとか」
彼等もなのだった。皇室の方の御成婚が常に騒ぎになり政治的な問題になるのは日本だけではないのだ。他の国でも同じなのである。
「それを考えるとこちらから話をすれば」
「向こうにとっても有り難い話でしょうか」
「そうだと思うわ」
伊東はエチオピア皇室の立場になって考えたうえで述べた。
「皇室は何によって皇室であるかを考えれば」
「血統が途絶えることだけは避けなければなりませんから」
「ですから」
「そうなのよね。そしてそれを考えるのもまた私の仕事で」

「我々の仕事であります」
「皇室の方々の為に」
宮内省は何処でも特殊な省庁である。国民の為にあるのではなくまず皇室や王室の為にあるからだ。もっともそれが同時に国民の為でもあるのだが。
「ですから何としても見つけたいのですが」
「首相に何かよいお知恵は」
「そのエチオピア皇室かしら」
彼女が推すのはこの皇室であった。
「家柄としては文句はないわよね」
「はい、エチオピア皇室ならば」
「何の問題もありません」
「シバの女王からの名家」
少なくともそうされている。日本の皇室はおよそ三八〇〇年とされているがエチオピア皇室はそのはじまりが不明とされている。成立が伝説の時代だからだ。
二十世紀には悪名高きメンギスツ政権により消されてしまった。しかし後にその末裔を何とか見つけ出して復活させているのである。今ではれっきとしたエチオピア皇帝である。
それだけに毛並みで言えばそれこそ日本の皇室より上とも言われている。少なくとも連合でたった二つの皇室である。新興国家はこの二国に遠慮してどの国も王で留まっているのだ。皇帝は王よりも上にある、この意識はこの時代においても健在なのである。

## 第三十五部第二章　日本国首相その十七

「それだけのものは確かにあります」
「そうね。ただ御成婚はね」
伊東の言葉がここで難しいものになった。
「相手がいてはじめてだから」
「向こうの御意志も必要ですね」
「そういうことよ。さて、エチオピア皇室は何て言うかしら」
「向こうにとっても悪い話ではありませんが」
一人がまたこのことを話したのだった。
「決して」
「ええ、それは事実よ」
このことは否定しないのだった。
「ただ。向こうが出せる相手となると」
「そうはいませんか」
「カードはあっても出せるカードは少ない」
伊東はまたこの表現を使うのだった。
「向こうにしてみればそうじゃないかしら。不敬な表現なのはわかっていてあえてこう言わせてもらうけれどね」
少なくとも公の場では使えない表現であった。皇室や王室の方をカードと言えばそれだけで糾弾の対象となる。失脚は免れない表現である。
「それでもよ。こういう見方をすれば」
「まずその表現は批判させて頂きます」
最も年輩の者が早速口を尖らせてきた。
「他国の皇室の方であってもです。それは御気をつけ下さい」
「ええ、わかってるわ」
伊東も当然ながらそれはわかっているのだった。自身が先に言ったように。

「御免なさい、訂正するわ」
「はい、それはくれぐれも御願いします」
この辺りが流石に宮内省であった。形式や格式に五月蝿いことでは随一である。それをここでも遺憾なく発揮しているのであった。
話はさらに続く。答えがまだ出ていないからだ。
「それでですが」
「エチオピア皇室となると」
「向こうは誰がいいとしてくるかしらね」
伊東はまた言ってきた。
「果たして誰が」
「そうですね。言われてみると」
「年齢的にはです」
一人が年齢を話に出してきた。４６
「現陛下の次男であられる」
「ザウディ殿下ですね」
「あの方かしら」
伊東はこう予想を立てるのだった。
「あの方は落ち着いて教養もあって」
「しかも美男子であられます」
「それもかなりね。マスコミやネットでも評判になっているし」
そこまで有名になる程の美男子なのである。浅黒い顔に彫の深い端整な顔をしている。そして黒い髪は実に豊かで波打っている。しかも背は高くすらりとしているのだ。
「あの方なら陛下もきっと」
「はい、好意を持たれると思います」
「相性もまた」
「いいわね。陛下も芸術がお好きだし」
「それに陛下も落ち着いた方であられますので」
「宜しいかと」
ところがだった。伊東は帝の落ち着いたというところには。今一

つ懐疑的に彼等に対して言うのだった。言葉に僅かに出しているだけであるが。
「落ち着いたね」
「違いますか？」
「そうではありませんか？」
「普段はそうであられるわ」
伊東は話を限定してきた。
「けれどいざとなると」
「違うというのですか」
「陛下が」
「節度は守られる方よ」
伊東はこのことも言う。どうも限定した言葉が続いていた。
「けれどね。行動的な方でもあられるわ」
「はい、確かに」
先程伊東を窘めたその最年長の彼が応えてきたのだった。
「陛下は御幼少のみぎりかなり活動的な御方でした」
「それは本当ですか！？」
「まさか」
しかし他の者はそれを聞いて驚きの声をあげる。落ち着いてその言葉を聞いているのは伊東だけであった。彼女だけが落ち着いていた。

## 第三十五部第二章　日本国首相その十八

「あの陛下が」
「あれだけおしとやかな方はおられませんが」
「帝であられるということはそれだけで慎まなければならないことが多いのよ」
伊東はその彼等に知的な笑みを浮かべて述べてきた。
「そして皇室であるということを自覚されるということでもね。なっていくのよ」
「それは確かに」
「その通りです」
もっともそうさせているかなりの部分は他ならぬ彼等なのであるが。日本の宮内省の厳格さは連合随一と言われている。突破することが絶対に不可能とまで言われている所謂竹のカーテンはそのかなりの部分が彼等の築いたものである。あとは保守系マスコミや知識人、それにそれを支持する者達の手によるものである。それは伝統にも裏打ちされまさに難攻不落になってしまっている。
「我が国の皇室は三千八百年の伝統があります」
「神武帝以来の」
日本開闢の方とされている。なお実在はこの時代ではしていたとされているが年代についてはあえて言わないことになっている。これがそのまま日本の皇室の権威になっており米中露に対してこのことでは覆すことのできない優位となっているからである。
「その重みをわかって頂く為にはです」
「我々は努力を惜しみません」
この言葉に偽りはない。確かに彼等はその為に存在しているのである。またそれが宮内省を宮内省たらしめているのである。
「それは総理もおわかりですね」
「我々のこの忠誠心は」

「ええ、それはね」
ここで伊東は内心苦笑いを浮かべた。実は宮内省は首相である彼女にもどうにもならないところがあるのだ。あまりにも特殊な省庁であるからだ。
これは代々の宮内大臣も同じで彼等は確かに首相により任命される。しかし大臣以外の任命は他の省庁とは違い中々できないのである。手をつけることもどうにもならず宮内大臣の仕事はまずその膨大かつ複雑な儀礼を全部覚えることからはじまるのである。
「わかっているわ」
「はい、ならば」
「その点は御安心下さい」
「わかっているわ」
実際彼女はそれもわかっていた。同時に宮内省のあまりもの『保守』ぶりとその強固さもまた。わかり過ぎる程わかっているのであった。
「そのことについては私は絶対の信頼を置いているわ」
「はい、有り難うございます」
「閣下もですね」
「ええ、御室君もね」
今の内閣の宮内大臣である。御室真彦という。
「わかってくれているわよ」
「お陰で我等も助かっています」
「本当に」
「それでこの話だけれど」
「はい」
伊東は話を戻しにかかり彼等もそれに応えた。
「私も考えさせてもらうわ」
「はい、宜しく御願いします」
「それで」
「御室君も知っているわよね」

その宮内大臣である彼の名前も出して問う。
「それはどうかしら」
「はい、閣下も勿論です」
「今考えて下さっています」
「そう。ならいいわ」
流石にこの話を宮内大臣が知らないでは済まされない。彼女もそれを聞いて安心するのだった。無論顔には出さないようにはしているが。
「じゃあ後は御室君とも詳しく話をしてね」
「わかりました、それでは」
「そのように」
「それで御願いするわ。御室君もよくわかってるわよね」
「はい、では」
「閣下とも」
彼等も伊東のその言葉に応えるのだった。
「陛下にはお話するのかしら」
「はい、勿論です」
彼等はその言葉にも頷くのだった。

# 第三十五部第二章　日本国首相その十九

「それはもう全てお話します」
「陛下にも」
「そうなの。陛下に」
「当然だと思うのですが」
一人が言った。
「こうしたことはやはりお話すべきです」
「陛下にとっても悪い話ではありません。違うでしょうか」
「悪い話ではないわ」
伊東もそれはわかっていた。婚礼の話が悪い筈がなかった。しかもそれが一国の君主ならば余計にだ。君主は子孫を残すことも仕事であるからだ。
「それはね」
「ではその通りで」
「宜しいですね」
「ただね。私は」
だがここで伊東は少し難しい顔になってまた述べるのだった。
「どうかと思ったりもしているのだけれどね」
「どうかとは？」
「どういうことでしょうか、それは」
「ほら、何でもただ話せばいいということではないわね」
伊東はその難しい顔で述べるのだった。
「そうよね。いいことでもタイミングが大事よね」
「？それはそうですが」
「それが今ではないのですか？」
「そうね。違うと思うわ」
難しい顔から考える顔になった。そうしてそのうえでまた語るのである。

「もう少し時間を置いてもいいと思うわ」
「陛下にお話するのはですか」
「もう少し時間をですか」
「その通りよ。どうかしら」
また言う伊東だった。
「それで。もう少し時間を置いてね」
「陛下にお話するのはですか」
「ですがそれは」
しかし宮内省の者達は難しい顔を見せる。それは今の彼等の心境そのままであり顔がそのまま鏡となって出てしまっていたのであった。
「陛下への二心ではないのですか？」
「違うでしょうか」
「そうした考えも可能よ」
伊東は内心彼等の頑固さに辟易してもいた。やはり彼等は忠誠心は見事であるがそれがあまりにも意固地過ぎると思ってもいたのだ。忠誠心は彼等の職務上確かに必要であるがそれは決して堅過ぎては駄目だと考えているのである。忠誠心にも柔軟さを求めているのだ。
「貴方達にとって帝は主君ね」
「否定しません」
「隠すこともしません」
実際にそうだと言ってはばからない。
「我々はまさにそうです」
「その通りです」
「それは私も承知しているわ。けれどね」
「けれど？」
「何があるでしょうか」
「親と主君は同じものとされているけれど」
これは儒教的な考えである。儒教においては親も主君も敬愛すべき対象として考えられている。これが結果的に中国の歴代王朝にお

いて皇帝の権限を強めることに役立った。中央集権制により皇帝独裁を強めたと批判もできるし権限を集中させてそれにより平和を維持したと賞賛もできる。この辺りは表裏一体である。
「それで孟子だったかしら」
「孟子ですか」
「性善説の」
「そうよ。舜の話だったわね」
古代中国の伝説の帝王の一人だ。中国において理想の君主の一人ともされている。儒教においては過去の聖君主の一人ともされている。
「親に内密に婚礼を結んでいるわね」
「はい、そうです」
「そしてそれは孝でもありました」
「そうよ。親に内密であってもそれは孝になったわ」
こう彼等に述べるのだった。
「それは何故かというと」
「そうです。それは子孫を残すことになりましたから」
「それはそうなります」
「それと同じよ」
伊東はここでまた言うのだった。

## 第三十五部第二章　日本国首相その二十

「つまり。主の為によいことなら秘密にしていてもいいのよ」
「そういうことですか」
「ではこの場合は」
「そうよ。そう考えるわ」
また言う伊東だった。
「私はね」
「むう、確かに」
「儒教でもそれは問題にはなりません」
「もっとも儒教のみが正しいとは限らないわ」
ここで客観的に突き放しもした。
「それだけではないけれどね」
「ふむ。では儒教を尊重しながらもそれに溺れずに」
「そのうえで考えてみてですか」
「理論武装から離れたうえで考えてみてもよ」
伊東はまた述べてきた。
「親の為、そうでなくても大切な人の為になるのなら」
「いいことでも隠すことも必要ですね」
「そして悪いことでも言わないといけない」
その逆もまた、ということであった。
「そういうことよ。どうかしら」
「ふむ、確かに」
「その通りです」
宮内省の彼等もそれで頷くのだった。納得した顔で。
「それではここはやはり」
「陛下の為には」
「ある程度話が進んでからお話した方がいいわね」
これが伊東の考えであった。

「それでどうかしら」
「はい」
「ではそのように」
これで彼等も考えをあらためた。それで決まりであった。
「何事も難しいものですね」
「我等はただ陛下と臣民のことを考えてきたつもりですが」
「忠誠心でね」
「そうです」
やはり彼等もその忠誠心は自負していた。宮内省という場所はどの国も忠誠心に寄って立つものだ。それなくしてはとても動けるものではないのだ。
「わかってくれて何よりよ。ただ」
「ただ？」
「今度は何でしょうか」
「まさかと思うけれど」
ふと気になって彼等に対して言うのだった。
「宮内省では陛下に諫言はしているわよね」
「はい、無論です」
「そうですが」
彼等はすぐに伊東の問いに応えてきた。
「陛下に諫言せずして何が我等の責務でしょうか」
「その通りです」
こう口々に述べるのだった。そこには強い確かなものがあった。
「我が宮内省は陛下を我が国の帝に相応しい方になって頂く為にあります」
「皇室の方々にもそれに相応しく」
「その為には諫言も辞さない」
伊東はここでまた述べた。
「そういうことね」
「それは明治帝の頃より変わりません」

この時代に至るまでの皇室の基礎を築かれた偉大な帝の御名前が出て来た。
「そして昭和帝により固められましたから」
「これだけは」
「いいことよ。小栗判官に乃木大将の教えは健在ね」
「それは絶対に忘れません」
「我が宮内省は」
どちらも皇室教育を作り上げた人物である。簡単に言えば極めて厳格な教育者であった。しかしそれが御二人の偉大な帝を育てたのである。
「我等全員恐れることなく」
「必要とらば陛下と皇室の方をお諫めします」
「ええ、ならいいわ」
それを聞いて安心したように述べる伊東だった。
「それならね」
「お諫めするのには賛成ですね」
「反対する必要もないわ」
伊東はまた言った。

## 第三十五部第二章　日本国首相その二十一

「それどころか歓迎したい位よ」
「そこまで仰いますか」
「総理もお厳しい」
「明治、昭和両帝のことを考えればね」
彼女といえど両帝を外して考えることはできなかった。それだけの存在感をこの時代においても残し続けておられる方々なのである。
「やっぱり。そうあるべきよ」
「そうです。両帝は偉大な方々でした」
「皇室のあり方を示して下さいました」
「名君であられたわ」
明治帝は大帝と呼ばれている。明治維新は日本にとって開闢以来の転換期の帝であられその象徴として君臨されていた。その明治期にだ。
昭和帝は激動の六十四年もの間を一人で君臨された。そしてそのうえで立憲君主としてのあり方を確立された。また生物学者として皇室の方々の知性のあり方も確立された。
この御二人があってこそのこの時代の日本の皇室であるのだ。宮内省は千年以上もの間両帝の示された道をそのまま維持しているのである。
「私も御二人の示された通りに進むべきだと思っているから」
「では厳格にですね」
「竹のカーテンで」
「皇室は開かれるべきか閉じられるべきか」
この議論も千年の間為されてきている。
「宮内省としては閉じられるべきね」
「その通りです」
「開かれた皇室というのは戯言です」

この時代も宮内省が最も嫌うことである。
「そのようなことでは両帝の示された道は維持できません」
「そうです。それよりもです」
彼等はさらに言う。急にエキサイトさえしてきている。
「権威を守らなければなりません」
「それには閉じられるべきなのです」
「竹のカーテンは絶対です」
彼等もこの呼び名は知っているのである。
「何があろうとも守り抜きます」
「我等にお任せを」
「わかっているわ。そうそう」
またふと気付く伊東だった。
「宮廷警察だけれど」
「はい」
「彼等ですか」
「それと近衛軍だけれど」
近衛軍とは日本軍の中にある軍である。当然ながら精鋭で編成され首都を守っている。まさに首都及び皇室の守りそのものである。
「増強させてもらうわ」
「では我等の御要望は」
「依然述べさせて頂きましたが」
「閣議でも通っているわ」
それはもう通っているのだった。
「議会でも通過したし」
「有り難うございます」
「ではそれで」
「陛下と皇室に何かあれば笑い事では済まないわ」
伊東もその顔を真剣なものにさせていた。
「臣民として申し訳が立たないし」
「そうです」

「陛下を御護りすることもまた臣民の務めです」
「命にかえても」
なお宮内省のスタッフは全員皇室の方々の為には命を投げ出すように教育されている。いざとなれば誰もが陛下の身を御護りするのだ。
「そしてその為にはです」
「やはり宮廷警察と」
彼等は宮内省の管轄下にある。宮内省は他にも儀礼の為の存在として管弦楽団も持っているし雅楽の楽団も持っている。当然指揮者もグラスバンド団もだ。音楽は儀礼にとって欠かせない存在であり宮内省も専門的に持っているのである。これはどの国でも同じだ。
「そして近衛軍は必要です」
「ですから御願いしましたが認めて下さいましたか」
「そうよ。さて、後はくれぐれもね」
「わかっております」
「皇室は我等もお任せを」
胸を張って言うのだった。
「千代に八千代に御護りします」
「帝として」
「御願いするわね。さて、後はよ」
伊東はここで完全に言葉を置いた。

## 第三十五部第二章　日本国首相その二十二

「これで終わりよ。お疲れ様」
「はい、それではです」
「失礼しました」
こうして宮内省のスタッフ達は一礼してから退室した。伊東は彼等が去ったのを見てすぐに国防大臣である東を呼んだ。その間デスクワークを進めており彼が来るまで行うのだった。
程なくして来た東は端整にスーツに身を包んでいる。相変わらず見事な美男子ぶりである。
「近衛軍のことですね」
「そうよ。近衛軍の増強は議会でも通って」
「後は実際に増強されるだけですね」
「そしてよ」
そのうえでまた言うのだった。
「司令官だけれど」
「はい、それはもう決めてあります」
東は自信のある顔で微笑んで述べてきたのだった。
「一人適任者がいまして」
「日向大将ね」
「あの人で宜しいでしょうか」
「ええ、いいと思うわ」
伊東は表情を変えずに東のその言葉に頷いた。
「実際あの人が一番の適任者だしね」
「そうです。忠誠心に能力を考えますと」
「このうえない適任者よ」
伊東は将官まで把握していた。その能力はおろか忠誠心までだ。
「本当にね。あの人しかいないわ」
「ただ国防省の中で異論もありました」

「年齢的な問題でそうね」
「はい、大将で最高齢です」
年齢を重ねれば問題になる部分があるのだ。
「そして数年前に病を得ておられますし」
「脳梗塞だったかしら」
「大事には至りませんでしたが」
この病気はこの時代でも存在しているのである。病、とりわけ身体に関するものはどうしても完全にはなくなりはしないものである。
「それでもです」
「そうね。それで健康面からも不安視する声があるのも知ってるわ」
「もう八十ですし」
連合の平均寿命は三桁に届かんとしている。しかしそれでも軍人としてはかなりの高年齢なのは事実である。連合では九十でも普通に働いていたりする。それだけ医療が発達し健康が維持できるようになっているのだ。
「それで私も迷いましたが」
「結局あの人にしたのね」
「はい」
東はここで頷いたのだった。
「あの人に」
「了解したわ。それでいいわ」
首相としてその人事に賛成するのだった。
「近衛軍司令官はあの人でね」
「わかりました。それでは」
「ただ。もう次の司令官は決めておきたいわね」
しかし彼女はここでこうも言った。
「もうね。いいかしら」
「次ですか」
「ええ。日向大将の後継者だけれど」
「そうですね。それはまだ」

「決めていないのね」
「決めていませんし見つけてもいません」
ここで東の言葉は微妙に曇ってしまったのだった。
「誰かいればいいのですが」
「大将か中将で適任者がいればよ」
「すぐに選んでですね」
「抜擢してでもね」
言葉はハッパすらかけていた。伊東流のハッパである。
「選んだらいいわ。長官の権限でね」
「わかりました。それでは」
「日本軍元帥」
伊東は今度はこの階級も言葉に出したのだった。
「この意味はわかるわね」
「はい、勿論です」
そして東もまたそれに応えるのだった。

## 第三十五部第二章　日本国首相その二十三

「その意味も」
「日本軍で元帥は少ないわ」
「はい」
　これは中央軍が設立される前からである。伝統的に連合においては軍における階級は元帥はあまりいない。中央軍にしろ百三十億の中で僅か三十人である。エウロパ軍が五億なのに対して百人以上いるのとは実に対称的である。そして元帥だけでエウロパ元帥といったものもいない。
「それでも一人は絶対にいるわね」
「そして首席元帥でもあります」
「それが国防長官よ」
　国防長官が元帥に任じられるのは日本だけである。なお中央政府にしろ各国政府にしろ国防長官に階級はないのである。あくまで日本だけなのだ。
「文民であるけれど元帥にも任じられる」
「そうですね」
「あくまで儀礼的なことでしかないけれど」
　儀礼が重要視されるのはやはり皇室が存在している日本だからである。
「それもまた」
「はい。それでは」
　東はまた頷いたのだった。
「その権限でも以って」
「御願いするわね。反対意見があったらそういったもので文句を言わせないことも重要よ」
「階級でですか」
「階級だけでは動かないわ」

これはよく言われていることではある。
「けれど階級がないと動かないのもまた軍隊よ」
「要するに階級を背負えるだけの力があればいいのですね」
「そういうことよ。国防長官、そして首席元帥としてね」
「はい」
なおこの首席元帥というのも国防長官にいる間だけでありそれを退けば階級もなくなる。あくまで儀礼的なものである何よりの証拠だ。
「それに見合うだけの能力は君にはあるわ」
「私にはそれがあると」
「言っておくけれど私は適材適所を心掛けているわ」
伊東の言葉が微笑んできた。
「そう、君は国防長官に相応しい人材よ」
「そして元帥にも相応しいと」
「八条君に負けないように頑張りなさい」
「有り難うございます。それでは」
「それにしても八条君だけれど」
その八条のこともここで話された。
「彼も相変わらずみたいね」
「相変わらずといいますと」
「まだ噂一つないようだけれど」
少し困った顔になっていた。まるで保護者のような。
「もういい歳なのだけれど」
「結婚のことですか」
「陛下もそうだけれど彼もね」
さらに困った顔を見せるのだった。
「どうなのかしら。誰かいないのかしら」
「側に大勢おられるそうですが」
このことは東も知っていた。そうしてそれも話すのだった。
「どうやら常に気にかけていたり声をかけてくる女性は多いそうで」

「日本にいた頃からよ」
話はかなりさかのぼっていた。
「日本にいた頃からね。彼はもてるのもよ」
「それもかなりですね」
「あれだけの美男子で背は高いしスタイルもよくて」
「まるでモデルのように」
貴公子然とした美貌は連合全体で有名になっている。連合の政治家達の中では随一の貴公子であると言われている程なのだ。
「おまけにあの家柄だし」
「それもありますね」
日本の名門八条家の嫡男である。これもまたかなりのものだ。
「お金もあれば毛並みもよし」
「しかも頭脳明晰です」
ただ政治家として優れているだけでなく戦略家でもある。そのうえ歌劇や歌舞伎、文学、音楽、芸術に造詣の深い教養人でもある。
「尚且つスポーツにも秀でていますし」
「剣道も居合道も五段ね」
「古武術もやっておられますし」
「運動神経も秀でてるのよね」
つまり文武両道というわけである。
「人格も円満で温厚で」
「異性どころか同性にもてる条件ばかりです」
ここで同性も話に出るのがまさに連合であった。

## 第三十五部第二章　日本国首相その二十四

「それでもてないという筈がありません」
「本人だけよ。そう思っているのは」
現実はこうであった。
「実際は周りにこれでもかという程いるのに」
「学生時代からもてたことがないと仰っていますが」
「気付いていないだけね」
真相は他人の方が遥かに知っているのであった。
「それも全く」
「政治や戦略ではその鋭さも見事なのですが」
「女性関係については別なのよね」
それはあくまで気付かないのが八条義統という男なのである。
「それも全く」
「お見合いとかされてはどうでしょうか」
「それもいいわね」
伊東は見合いと聞いて少し考える目を見せるのだった。
「というかお見合いの話も今までなかったのかしら」
「ない筈がないかと」
東はすぐに答えた。
「八条家の嫡男ともなるとやはり」
「けれどそれを受けたという話もないのよね」
しかしその話もないのであった。
「それも全く」
「とにかく女性のそうしたところには気付かないのですね」
「見事なまでに全くね。例えば」
「バレンタインのチョコレートですか」
もう言われずともわかった東だった。
「毎年毎年それこそ万単位で送られていますね」

「もっとあると思うわよ」
伊東は言いながら少し引いていた。
「十万単位であるわね」
「確かに。それだけは」
東もまたその時のことを思い出した。八条が日本政府の国防長官であった時代に贈られてきたその多量のバレンタインチョコのことを。
「ありました」
「食べきれないものはプレゼントだったけれど」
「あれでチョコレート好きのあの」
「あの時のアッシリアの外務大臣ね」
「はい。糖尿病になられました」
チョコレートは砂糖が入っている。それを多く食べればどうなるかは自明の理である。この時代糖尿病は完治する病気になってはいてもだ。
「長官のそのチョコレートを食べ過ぎて」
「しかもそのチョコレートの殆どが手作りだったしね」
「でしたね」
手作りチョコの持つ意味はこの時代も二十世紀も同じである。
「それを義理って言っていたけれど」
「手作りの義理チョコなぞあるのですか？」
「絶対にないわ」
伊東は完全に言い切った。
「有り得ないわね、それは」
「そうですね。どう考えても」
「それに気付かないのかしら」
「味覚もまた鋭い方ですが」
育ちのよさ故舌も肥えているのである。それでもその食事は質素でも何も言わないのが八条という男のこれまたよいところなのであるが。

「それには気付かれないですね、本当に」
「お見合いかしらね」
伊東は腕を組んでまた述べた。
「相手を見つけようとしたら」
「それしかありませんか」
「彼は中央政府国防長官では終わらないわ」
語るその目も言葉も強いものになった。
「決してね。それだけではね」
「といいますとやはり」
「我が国の首相にもなるでしょうし」
実際彼は日本政府にいた頃は将来の首相候補と言われていた。政治家としてはまだかなり若いがそれでもそう言われていたのである。
「中央政府でもね」
「より上にですか」
「そこで一閣僚で終わるとは思えないわ」
伊東は八条をここまで評するのだった。しかもそれが決して不当に高いとも思ってはいない。彼女にしても八条のことをよくわかっているのである。

## 第三十五部第二章　日本国首相その二十五

「首相、それに」
「大統領にですか」
「中央政府の閣僚から祖国の閣僚になる場合も多いわね」
「そうですね。それも」
ここが連合の政治の大きな特徴である。各国の政府から中央政府に、そしって中央政府の閣僚から各国政府の閣僚に。そうしてなるのだった。
「ありますから」
「そうよ。それを考えるとよ」
「八条長官はまだまだこれからですか」
「なるわ。だから余計にね」
そしてまた言うのだった。
「身を固めてもらいたいのよ」
「結婚することはそこまで重要なのですか」
「重要も重要」
伊東の言葉がより確かなものになる。
「政治家は生涯の伴侶を得てこそよ。小柳君を見なさい」
「彼女をですか」
「そうよ。彼女だって結婚して一皮剥けたわよね」
「そういえば確かに」
小柳はそれまでも若いながら中々の切れ者として知られていた。しかし結婚するまではあくまで切れ者としてだけの評価であった。それが大きく変わったのはやはり結婚からなのだ。結婚してから女性特有の優しさも身に着けたと評価されているのである。
「彼女も結婚して随分と変わりました」
「そして君もね」
そのうえで東もだと言うのだった。

「君も結婚してから変わったわね」
「はい、それは確かに」
自分のことを言われると余計によくわかることであった。何事においてもそうであるが結婚というものは自分がしてみて最もよくわかることなのだ。
「私も。結婚して」
「色々とわかったでしょう」
「これまで見えなかったものが見えるようになりました」
こうも言うのだった。
「人間として」
「そうよ。人間としてこれまで見ることのなかった多くのものが見えるようになるとね」
「はい」
「それが政治家の資質にも大きく影響するのよ」
「そのようですね」
彼もそれがはじめてわかったといったようであった。
「人間としての資質は政治家としての資質に大きく影響するのですね」
「どんな仕事でもそうなのよ。結婚して伴侶を得ると大きく影響するわ」
「それを長官にもですか」
「その通りよ。人間としてね」
また言う伊東であった。
「大きく成長できるからよ」
「そうですね。私も長官の結婚に賛成です」
「八条家としてもそうでしょうね」
「当然そうだと思います」
東は今度は八条家の立場になって考えそのうえで延べた。
「八条家にとっても嫡男が身を固めるというのは」
「非常に重要なことに決まってるわね。日本でも屈指の名門であり

資産家でもある」
「かえって高嶺の花なのでしょうか」
東はここでまたふと述べた。
「それだとかえって」
「人間は何処か謙遜するものよ」
伊東は今度はこうしたふうに述べた。
「自分のことをね。考えてそのうえで立場を見るから」
「身の程ということですね」
「そうよ。美男子でしかも文武両道で。尚且つ人格円満で穏やかとなると」
「それですとかえって誰も声をかけなくなると」
「アイドルとしてはいいわ」
八条をアイドルという表現で述べてきた。
「けれど実際に交際するとなるとね」
「難しいということですね」
「チョコレートを贈る娘の殆どが本気なのは間違いないわ」
「しかしそれはということですか」
「そうよ。あくまでアイドルに対する本気よ」
そういうことなのだった。

## 第三十五部第二章　日本国首相その二十六

「本気で一緒になれるとは中々思えないものなのよ」
「だから長官は結婚できないと」
「本人も全く気付かないし」
つまり双方に重大な問題があるということだった。話が進まない場合一方にだけ問題があるのではなく双方に問題がある場合が多いのである。
「そういうことだから」
「では長官には」
「八条家ともお話してみるわ」
伊東は腕を組み少し首を右に傾けて述べた。
「時間を見つけてね」
「わかりました。それでは」
「ええ。じゃあ話はこれで終わりね」
ここまで話をしてそれでであった。
「これでね。じゃあこれからどうするの？」
「すぐに仕事です」
東は微笑んで述べたのだった。
「国軍の士官学校に行って訓話があります」
「そう。国の士官学校に」
「第二士官学校です」
国軍にしろ士官学校は幾つかあるのだ。軍の規模が大きければ将校の数も多く必要になるからだ。もっとも連合軍では大将までは多いが元帥になるとぐっと少なくなるのは先に二人が話した通りである。
「そこに向かいます」
「わかったわ。それじゃあね」
「はい、それでは」

「あと国軍と中央軍の間の人員の移動だけれど」
「それも順調に話が進んでいます」
中央軍と各国軍の関係は簡単に言うとかつてのあめりか合衆国のアメリカ軍と州軍の関係に似ているが人員の移動が自由なのが大きな違いである。
「それもまた」
「わかったわ。それもね」
「はい」
東はここまで話して一礼してから官邸を後にした。伊東は一人になるとまた仕事に入った。その仕事が夜の八時まで続いたがここで秘書が入って来た。
「総理、宜しいでしょうか」
「ええ。時間ね」
「そうです。時間です」
「そう。わかったわ」
秘書のその言葉に静かに頷いて答えるのだった。
「ではすぐに」
「前総理がお待ちかと」
「あの人はそんなにせっかちだったかしら」
「時々せっかちになられる方かと」
秘書は少し微笑んで述べてきた。若い知的な美女である。
「あくまで時々ですが」
「そういえばそうだったわね」
伊東は彼女の言葉を受けて面白そうに微笑んだ。
「時と場合によってせっかちになる人だったわね」
「あれで気分屋でもあられますので」
「ええ。じゃあすぐにね」
「お仕事はお車の中でもされますね」
「そうね。ただしよ」
しかしここで伊東は言うのだった。

「お酒は飲まないわ」
「それはですか」
「飲みたいところだけれど今日はまだ仕事があるから」
こう言うのだった。
「だからね」
「お仕事がですか？」
ここで秘書は伊東の机の上を見た。見れば朝と比べて整然とされていた。埃一つ落ちておらず書類もＣＤもパワーメモリーも置かれてはいない。パソコンの電源も落ちている。
「もう終わるところでは？」
「総理としての仕事は終わりよ」
それは終わりだというのである。
「日本軍最高司令官代理の仕事もね」
「では全て終わりなのでは？」
これはどの国の大統領や首相の仕事である。ただ国家元首や閣僚の首席であるだけではないのである。その政党の総裁でありその国の軍の最高司令官でもあるのだ。
「それでは」
「そう。総裁としての仕事はこれからの前首相とのお話で終わりよ」
それも終わるというのだ。

## 第三十五部第二章　日本国首相その二十七

「けれどそれだけじゃないから」
「やはりよくわかりませんが」
「貴女ももうすぐわかるわ」
こう秘書に告げるのだった。
「彼氏はいるのよね」
「え、ええまあ」
この問いには少し赤面して返す秘書だった。
「一人。いますけれど」
「二人いたらちょっと以上に問題よ」
軽いジョークには同じく軽いジョークであった。
「もっとも中にはそういう人もいるけれど」
「許せないことです」
秘書の言葉が厳しいものになる。
「政治家、我が与党の中にもおられますけれど」
「あら、そんなに許せないの」
「当然です」
まるで風紀委員のように厳格で妥協のない言葉であった。
「許せますか？そんなことが」
「というよりその程度はよくある話ではなくて？」
ここにこの秘書と伊東の違いがはっきりと出ていた。
「それこそその辺りに幾らでも」
「では総理は」
「私はこれまで彼氏や夫は一人だけだったわ」
伊東はまずはこう前置きしてきた。
「浮気はしない主義だから」
「では何故そのようなことを」
「こう言ったら何だけれど浮気をしてもいい政治家ならいいのよ」

「浮気をしてもですか」
「些細なことでしょ。というよりはよ」
「はい」
彼女も静かに伊東の話を聞く。伊東は明るい声であったが明るい声であった。
「人間完全に潔白とはいかないものよ」
「いえ、それは」
「清濁併せ呑むというのは濁の方に都合がいい言葉かも知れないけれど」
これは確かにそう思われるものではある。後ろめたい人間というのもあらゆる場所にいる。政治の世界はとりわけそうだと言われてはいる。
「けれどそれでもよ」
「浮気位と仰るのですね」
「そういうことよ。はっきり言えばね」
「あまりいいとは思えません」
秘書はそこまで聞いて顔を曇らせた。
「そのようなことはとても」
「まあそのうちわかるわ」
伊東はここではそれ程話そうとはしなかった。
「それはね」
「わかるのですか」
「そうよ。まあその話は置いておいて」
「はい、参りましょう」
「その気まぐれの前総理のところにね」
こうして伊東は官邸を後にして料亭に向かった。料亭に着くとすぐに玄関でおかみに出迎えられたのであった。
「こちらの部屋です」
「ええ」
伊東は彼女の応対を受けて静かに店の中を進んだ。店の中は広く

古風な日本様式だった。その中を進みながら彼女達は話をしていた。
「最近のことですが」
「何かいいことがあったの？」
「はい、仕入先のお豆腐に新たなものが加わったのです」
「何かしら、それは」
「それは食べてみてお確かめになって下さい」
ここでおかみは楽しそうに笑ってきて述べた。
「是非共」
「何かとてもよさそうなものなのね」
「はい、そうです」
おかみは後ろにいる伊東に対してにこりと笑ってまた述べた。
「召し上がられてこそです」
「有り難いわ。私もお豆腐は大好きだから」
「そう思ってです」
こうして客に対する気配りも忘れない、これが料亭の基本である。
「本日は用意しておきました」
「そう。じゃあ期待させてもらうわ」
「それにです」
おかみはさらに言ってきた。

## 第三十五部第二章　日本国首相その二十八

「本日は鱧でいいのが入りまして」
「そう、鱧なのね」
「鱧もお好きでしたね」
「そうよ」
伊東の言葉が静かに笑っていた。
「鱧もね。大好きよ」
「そう思ってです。いや、本日は楽しんで頂けそうです」
「鱧にお豆腐ね。本当に嬉しいわ」
「うちの店の看板ですから」
おかみはこうまで言うのだった。その豆腐と鱧についてだ。
「それは必ずです」
「京風は健在なのね」
そして伊東もまた千年前からある言葉を出した。
「いつもと変わらず」
「やはり和食は上方です」
おかみもまた古い言葉を出す。江戸時代にできた言葉で京や大阪をこう差したのである。それに対して江戸は下にあたるということだ。
「あの上品な味こそがです」
「ええ。それじゃあそれを食べながら」
「是非。ごゆっくり楽しんで下さい」
「そうさせてもらうわ」
おかみの言葉に応えながら案内された部屋に入った。そこは奥座敷であり台の上に既に料理が置かれようとしていた。そして座布団が向かい合って二つ置かれておりその一方に古狸を思わせるずんぐりとした大男が座っていた。その彼こそが伊東が今会う相手であった。

「おう、やっと来たな」
「暫く振りです、前総裁」
「ははは、待っていたぞ」
高崎であった。彼は豪放に笑ってそのうえで伊東に顔を向けてきていた。
「これでやっと楽しく飲み食いができるというものだ」
「まだ召し上がられてなかったのですか」
「飲み食いは一人でするより多くでした方がいい」
彼はここでこんなことを言った。
「そうじゃないのかい？」
「それはその通りです」
伊東もまた彼のその言葉に頷くのだった。
「やはり一人で食べるよりは」
「二人で食べる方がいい。それではな」
「はい、それでは」
「食べるとしよう」
「私はお酒はいいです」
伊東はそれは前以って断るのだった。
「今日は」
「わかった。ではジュースかお茶でもな」
「それで御願いします」
「君も何かと忙しいな」
高崎は伊東が自分の向かい側に座るのを見ながら述べた。
「相変わらず」
「忙しいのは前総裁とて同じではありませんか？」
「わしは別に忙しくはないぞ」
高崎はここでも笑った。そうしてそのうえでそれを否定するのだった。
「全くな」
「そうですか？今日もあちこちと回っておられたようですが」

「食べ歩きはしとった」
そういうことにしようというのだ。
「朝は牛丼に」
「チェーン店のですよね」
「いやいや、あそこの牛丼が美味くてな」
勿論ただ牛丼を食べるわけではない。そのチェーン店で人と会って密かにやり取りをしていたのである。それもまた内緒ということにしているのだ。
「最近毎朝それなんだよ」
「毎朝牛丼も身体に悪いと思いますが」
「朝定はそうでもないんだよ、これが」
あくまで白を切る高崎であった。
「納豆に鮭にお味噌汁。健康的でいいじゃないか」
「つまりそうしたものを食べながら短い打ち合わせですね」
しかし伊東の目は誤魔化せなかった。彼女は既にわかっているのである。
「そういうことですね」
「ふむ。では誰なのかな、それは」
高崎も隠せなくなったと見て含み笑いと共にそれを問うてきたのだった。
「わしが会っていたのは」
「マウリアの高官ですね」
これも既に察していた伊東であった。

## 第三十五部第二章　日本国首相その二十九

「最近ターバンを頭に巻いた浅黒い口髭の方々と御会いしていると聞いています」
「鋭いな。その通りだ」
「クリシュナータ主席の訪日が近いですから」
「それで議員同士での交流を深めようと考えているんだよ」
出されている料理の一つである湯葉を箸で摘みながら述べた。
「実はな。より一層な」
「日本とマウリアの議員達のですね」
「いいと思うのだがな」
「はい、それはいいことです」
伊東も全く反対する様子はなかった。
「それは実に」
「そうか、総理も賛成か」
「互いによく知り合って悪いことはありません」
伊東はこうも言うのだった。
「互いのことを知って」
「そうだな。ではこのまま進めていくか」
「ですが。マウリアですか」
彼女はマウリアという国にはあまり積極的な顔は見せなかった。むしろかなり消極的な顔を見せてそのうえでまた言うのだった。
「難しいですね」
「マウリア自体がか」
「はっきり言いまして理解することが難しい国家です」
連合各国で話されていることを彼女も言うのだった。
「まず連合にはありませんし」
「外国だな」
「そうです、マウリアは外国です」

連合にはない。そして唯一旦毒国家として一つの勢力になっている国家でもある。連合ともエウロパともそれが大きく違うのだ。
「外国ですから」
「それにマウリア自体がな」
「あまりにも個性の強い国家です」
この個性の強さも強烈なのだった。
「それこそ。連合にある三百以上の国のどの国よりも」
「あの個性は強烈極まりないな」
高崎もそれはよくわかっているのだった。
「カレー独特の辛さというかな」
「マウリアのカレーは何十種類のスパイスを組み合わせて作られますが」
それだけ複雑なのである。一口にカレーといってもそれぞれの味があるのだ。このことがわかる人間も連合には少なかったりする。
「それと同じように」
「とにかく一筋縄ではいかないな」
「その通りです」
そうなのだった。それがマウリアなのだ。
「ですからマウリアを理解しようとすると」
「他の国に比べても多大な努力が必要だな」
「それでも中々理解できません」
「うむ、実はわしもわからん」
鱧を食べながらの言葉だった。
「鱧の味はそれこそ細かいところまでわかるがカレーの味はな」
「どれも同じカレーに思えると？」
「そうとしか思えないのだがな」
ここで首を傾げるのだった。そうしながらも鱧を口の中で噛んでその味を確かめている。その味は淡白でありながら独特の風味がある。そして吸い物は濃厚でありあっさりとした中にもその濃厚なものを味あわせていた。やはりその味は見事なものである。

「そりゃわしだってあれだ」
「あれとは？」
「その店によってカレーの味が違うのはわかる」
「ではおわかりになられるのでは？」
「いや、それがマウリア人に言わせると違うのだ」
そういうことになるのだった。
「ポークカレーも一つ一つ味わいの違いがある」
「違いが」
「チキンカレーもマトンカレーもな」
マウリアでは牛は宗教的な戒律により食べられないことが多い。だから高崎もビーフカレーは食べなかったのである。そういうことだった。
「どうもそれぞれでルーが違うらしい」
「私はそうは思いませんが」
伊東は湯葉を食べていた。湯葉もまたかなり淡白であるがそれでも確かな味わいがある。それに何よりも歯ざわりが独特であった。
「ルーは同じではないのですか？」
「やはりそう思うか」
高崎は彼女の言葉を聞いてその目を真面目なものにさせてきた。
「君も」
「確かに使われる肉や野菜は違いますがルーは同じでは？」
「そうだな。ルーはな」
「はい、同じだと思います」
また言う伊東だった。

## 第三十五部第二章　日本国首相その三十

「それは」
「それがマウリア人に言わせると違うらしい」
「違うのですか？」
「その都度ルーを変えるらしいのだ」
こう伊東に話すのだった。
「どうやらな」
「そうなのでしょうか」
しかし伊東はそれにはかなり懐疑的な顔をするのだった。彼女にしてもそれは今一つわかりにくく困った顔になるのだった。
「私には全く」
「わからないな、やはりな」
「それと同じです」
伊東はここでまた言った。言いながら豆腐を食べていた。それは豆腐と緑の野菜を混ぜたものでありやはりこれも淡白な味わいである。
「マウリアは」
「中々理解しにくい」
高崎の言葉は少し嘆息したようなものになった。
「実にな」
「それでもなのですね」
「そうだ。そうしたものを乗り越えてこそではないかな」
「その通りです」
伊東はここでまた積極的な顔に戻るのだった。
「ですから困難はあっても」
「困難が複雑ではあるが」
「やっていくべきです」
「そうだな。では暫くカレーを食べよう」

言いながら今は和食を楽しんでいる。今度は生麩と人参や大根を醤油味で煮たものを食べている。醤油はあえて薄くしてそのうえで素材の味を活かしている。やはりここでも京風に素材のことを第一に考えていた。
「それはそれで楽しみだ」
「総理はカレーもお好きなのですね」
「大好きだな」
屈託のない笑みでの返答だった。
「特にチキンカレーが」
「なら尚更いいですね」
伊東は酢の物を食べている。鱧の皮と胡瓜の酢の物だ。それを食べながら高崎に対してそのうえでこう述べるのであった。
「マウリアで一番よく食べられるのがそのチキンカレーですから」
「それもだ。ルーの中の玉葱と人参、それにジャガイモを細かく刻み」
「細かくですね」
「それに鶏肉はオープンでじっくりと焼く」
しかしここが違っていた。普通チキンカレーは鶏肉も一緒に入れて煮るからだ。だが高崎が好きなカレーはそうではなかったのだ。
「それにあのインディカ米の上に肉を置いて上からルーをかける」
「そうしたカレーがですか」
「一番好きだな」
また言うのだった。
「あれがな」
「成程。そうしたチキンカレーがですか」
「当然他の肉でもできる」
こうも言い加えてきたのだった。
「羊でも豚でもな」
「それもですか」
「牛はな。これはタブーだが」

「ですね。マウリアですから」
「牛を出せば間違いなく戦争を売っていると思われる」
宗教的戒律はマウリアにおいては絶対のものである。
「だからそれはなしだ」
「はい、わかっています」
それはもう先にも話していてよくわかっていることだった。
「それはもう」
「しかしこのカレーはいいぞ」
高崎は楽しそうに笑って述べるのだった。
「是非共やってみるといい」
「わかりました。それでは今度家でも」
「これはハヤシライスでもできるかな」
高崎はふとこんなことも考えるのだった。
「肉をマトンかポークにしてそのうえでな」
「どうでしょうか、それは」
しかし伊東はこれには首を傾げさせて述べるのだった。
「やはりカレーだからこそ合うのでは？」
「そうか、やはりな」
「そうです。確かにそれはオムライスには合うでしょうが」
「マウリア人はオムライスを食べるかな？」
「さて、どうでしょうか」
伊東はこれにも懐疑的な顔を見せた。
「マウリアにオムライスですか」
「どうだろうか」
「食べないこともないと思いますが」
伊東は少し考えたうえでまた述べた。
「ですが」
「合わないか？やはり」
「そうですね。いえ」
だがここで言葉を変えもするのだった。

## 第三十五部第二章　日本国首相その三十一

「面白いですね。それも」
「そうか。それではだ」
「しかしです」
言葉を変えはしたが付け加えもするのだった。
「只のオムライスではやはり抵抗があるかと」
「只のオムライスというと」
高崎は伊東の言葉からまたあることを察したのだった。
「あれだな。チキンライスのオムライスではなく」
「そうです。ドライカレーを使ってはどうでしょうか」
伊東が言うのはこのことであった。
「ドライカレーを使いそうして」
「オムライスの上からカレールーをかけてか」
「これではどうでしょうか」
伊東は豆腐と鱧の吸い物を飲んでいる。小さく四角に切ったその豆腐を口の中に入れそうして食べる。豆腐の淡白な味に鱧の独特の風味がかかっていてこれまた実にいい味になっている。
「このカレーオムライスでは」
「そうだな。それも悪くないな」
高崎は伊東の話を聞いてまた言うのだった。
「そのオムライスもな」
「オムライスはただチキンライスを包むだけではありません」
「チキンライスはチキンライスでいいのだがな」
ふとそうしたオムライスにも愛着を見せる高崎だった。
「あの美味さはな。最高にいいのだが」
「ですがマウリア人に合うかというと」
「以前マウリアの議員との親睦会の時チキンバーグを出したが」
「はい」

「側に置いてあったソースにもケチャップにも目もくれなかった」
こう述べるのだった。その時のことを。
「全くな。そしてカレーソースを頼んで食べていた」
「やはりカレーですか」
「マウリア人にとってはまさに醤油らしい」
これは日本人に例えての言葉である。日本人はやはり和食である。和食といえば醤油でありこれなくしては和食にはならないのである。
「カレーこそがな」
「だからこそケチャップはいらないのですか」
言うまでもなくチキンライスはケチャップである。ソースがない焼きそばがないのと同じようにケチャップがないチキンライスもないのである。
「カレーがあれば」
「無論ケチャップも食べないわけではないようだがな」
「それでもポピュラーなものではないと」
「大体マウリア料理にトマトはあまり使わない」
それも使わないのである。連合ではベジタブルカレーにトマトを入れることもまた多い。しかしマウリアではトマトはあまり使われないのである。
「それはな」
「ではやはりこのチキンライスのオムライスは」
「止めておく」
「それが宜しいかと」
高崎の言葉を受けてあらためて微笑む伊東であった。
「食もまた交流に欠かせない要素でありますし」
「そうだな。タレーランも然りな」
「我々はあそこまで人が悪くはありませんが」
伊東はタレーランという名前にはついつい微笑むのだった。
「あれはまた極端です」
「フランス人は性格が悪い」

連合では常識になっている偏見である。偏見なのだが連合ではそうなってはいないだけである。そこまで連合とエウロパの仲は険悪なままなのだ。なおこう言われるのはフランス人だけでなくイギリス人やオランダ人もだ。スペイン人もバスク人もだ。結局のところエウロパにいる人間は全員性格が悪いとされるのが連合なのだ。

「それも極端にな」

「日本人もよく腹の中では何を考えているかわからないと言われますが」

これは十九世紀から言われていることである。

「それでも彼等は」

「明らかに腹の中で悪巧みをしている」

高崎は笑いながら述べた。

「まさに絹の靴下の中の汚物だ」

「フランス人というものです」

なおこれはタレーランがナポレオンから言われた言葉である。タレーランとフーシェはナポレオン政権をそれぞれ外交、内政で支えていたがそれでもナポレオンへの忠誠心はなかった。あったとしてもいざという時には平気で裏切るのが彼等だった。そこまでの極端な悪人なのである。そしてその極悪人達こそがナポレオンの後のフランスを救ったのである。悪人が多くの人や国家を救うこともあるのだ。

「まさに」

「日本人はそこまで言われないからな」

「前総理は狸で」

「君は狐だったな」

こうは言われるが流石に汚物とまでは言われない。

## 第三十五部第二章　日本国首相その三十二

「狸や狐なぞ愛嬌があるものではないか」
「全くです。愛すべき存在です」
もっとも連合においては日本のそうしたしたたかさは愛すべきものどころではないとされているが。のらりくらりとして何時の間にかその目的を果たしているのが日本外交とされている。
「ですからここでも」
「狸として振舞うか」
「では前総理」
「うむ」
二人は顔を見合わせて笑うのだった。
「それではな」
「御願いします」
「さて、オムライスか」
その彼ーオムライスについて話す高崎だった。
「これは面白いことになるかな」
「なるのではなくするものですよ」
「ははは、確かにな」
高崎は今の伊東の言葉を受けてまた豪快に大きく笑った。
「政治はそうだな」
「そうです。ですから」
「わかった。ではそういうふうに話を進めよう」
彼は言った。
「それでな」
「御願いします。では私もそれに」
「そうだ。首相が参加しなくては話にならない」
そういうことだった。やはり首相の存在は大きい。
「それで頼むぞ」

「わかりました。ではその時は」
「首相はオムライスは好きか」
「嫌いではありません」
微笑んでこう答えるのだった。
「学生時代から時々食べています」
「ではそれで決まりだな」
「楽しみにしていますので」
「うむ、頼むぞ」
こうして彼等はマウリアの議員達との会合の打ち合わせを終えるのだった。それが終わってから伊東は官邸に戻った。官邸に戻るともう仕事はしない。しかしであった。
「メールかい？」
「ええ」
自室の机に向かっていた。そこには私用のノートパソコンがある。彼女はそれに何かを打っていた。
「今日はその日だから」
「そうだったな。今日はな」
「明彦も麻紀夜も」
子供達の名前である。
「この日を楽しみにしてるから」
夫の伊東学も彼女の言葉に頷く。彼はベッドから上半身を起こして枕元の灯りを頼りに妻の姿を見つつそのうえで述べていた。
「だからね」
「そうだな。しかし」
「しかし？」
「よく続くな」
ここでこう言って妻に対して笑みを向けるのだった。
「総理になってから二日に一回だからな」
「それはね。やっぱり子供だから」
だからだというのである。

「メールは欠かさず送りたいから」
「子供だからか」
「そろそろ子離れしないといけないかもと思ったりもするけれど」
少しばかり苦笑いにもなる。
「それでもね。やっぱり」
「欠かせないんだな」
「二人共元気みたいだけれどね」
メールはそれを確認する意味もあるのである。
「とりあえずは」
「それでもか」
「それだからよ」
言葉は少し変わった。
「だからこそね。余計にね」
「メールを送るというんだね」
「不安な時は不安なりに」
伊東はここでは母として言うのだった。

## 第三十五部第二章　日本国首相その三十三

「そして安心な時は安心ななりにね」
「何だ、どっちにしても送るんだな」
「そういうことよ」
そしてまた言うのであった。
「いいわね。それじゃあ」
「そうだね。じゃあ僕も」
「貴方もメールを送るのね」
「そうすると。今回は休もうかなって思ったけれど」
この辺りは父親と母親の違いであろうか。彼はどちらかというとドライだった。そうしてそのうえで妻に対して穏やかに述べるのだった。
「やっぱりね。書くよ」
「そうなの」
「うん。それじゃあ早速」
自分のノートパソコンを取り出した。そのうえでだった。
「送らせてもらうよ」
「わかったわ。それじゃあ」
「携帯でもいいけれどね」
この時代は携帯でも他の惑星や星系にメールを送ることができる。これもまた二十一世紀から考えれば途方もない技術の進歩である。
「やっぱりノートパソコンでね」
「そうなの」
言いながらパソコンの電源を入れていく。そうしてそのうえで送るのだった。
「さて、これでよしだな」
「じゃあいいわね」
「うん、僕は終わったよ」

「相変わらず書くの速いわね」
自分の夫とはいえその速筆ぶりに驚きを隠せない伊東だった。
「今さっきパソコンの電源を入れたばかりなのに」
「キーボードだからね」
微笑んで妻に答えるのだった。
「だからだよ」
「だから速いの」
「普段から仕事で使ってるじゃない」
「それは私もだけれど」
伊東にしろそれは同じである。彼女にしろパソコンはいつも仕事で使っている。だから彼女にしろキーボード入力はかなり速いものがある。だが夫はそれ以上だったのだ。
「それでもあなたはもっとね」
「前から書くのは速かったから」
「でも異常じゃなくて？」
「論文は一週間で書いてみせる」
こうまで豪語する程だった。
「それ位じゃないとね」
「それで三十分のドラマの脚本は三時間ね」
「他の仕事をしながら一時間半の映画の脚本の仕事が入っても三日だな」
こうも言うのだった。
「三日で終わるさ」
「やっぱりあなたは凄いわ」
自分の夫とはいえ賞賛するしかなかった。
「速いのはそれだけで立派な才能よ」
「そういうものかな。じゃあ僕は」
「もう寝るの？」
「いや、まだだよ」
しかし彼はここでは微笑んで述べるだけだった。その間にノート

パソコンはなおしはする。そうしてそのうえで起きたままでいるのだった。
「起きているよ。暫くはね」
「私を待ってくれているの？」
「夫婦はできるだけ一緒の時間に寝る」
ここでまた言う夫だった。
「そうでしょ」
「そうよね。それはね」
伊東はここでは夫婦の間での約束を思い出した。それは結婚した時に決められ今でも続けている些細だが絶対の約束だった。
「じゃあ今日もなのね」
「うん。それまでは本でも読んでおくよ」
こう言って実際に本を開くのだった。
「本をね。いいかな」
「有り難う。それで何の本なの？」
「小説だよ」
それだと答えるのだった。見ればその本のカバーには可愛らしい絵のイラストである。そしてそれを見ながらまた妻に話すのだった。

## 第三十五部第二章　日本国首相その三十四

「最近流行のね」
「ライトノベルなの？ジュブナイルなの？」
「いや、恋愛小説だよ」
それだと言うのである。
「高校生同士のね」
「昔からよくあるああしたタイプのね」
「うん。けれどこれが結構以上に面白いんだよ」
こう妻に述べるのだった。
「それもかなりね」
「そうなの。じゃあ私も読んでみようかしら」
「そうしたらいいよ。今全部で十巻まで出てるから」
「十巻も！？」
「そうだよ。十巻までね」
また妻に述べる。
「出てるよ。かなりの長篇でね」
「恋愛で十巻もね」
「それでまだ続いているんだ」
しかし終わりではないのだった。十巻出ていてもまだだ。まだ連載が続いているというのである。
「そろそろ終わるかなって思うけれどね」
「そろそろなの？」
「うん、そろそろかな」
読みながら妻に述べる。
「終わりもね」
「じゃあその十巻でクライマックスなのね」
「そうだと思うよ。雰囲気がいよいよ凄くなってきたから」
恋愛小説はとりわけその雰囲気が重要だ。それが凄くなってきた

ら後は一気に流れがいってしまうのもまた恋愛小説なのである。
「だからね」
「それじゃあ十一巻で終わりかしら」
「それ位かな」
少し考えてから妻に言葉を返すのだった。
「多分ね」
「私も読んでみようかしら」
夫の言葉をここまで聞いての言葉だった。
「面白そうだし」
「いいけれどその時間はあるのかい？」
ふとした感じで妻に問い返した。
「首相をやってて。その時間はあるのかい？」
「無ければ作るだけよ」
自信に満ちた返事だった。
「時間はね」
「見事だね。じゃあそれでね」
「やればいいよ。じゃあ後は」
「ええ。私もこれで終わったわ」
伊東もここでメールを送り終えたのだった。そしてそれを確認してからゆっくりとパソコンの電源を落とす。彼女のこの日最後の仕事はこれで終わった。
「さて、後は」
「寝るんだね」
「お待たせ」
微笑んでベッドに入る。そうしてそのうえで灯りに手をかけようとしたが途中で止めた。それから夫に顔を向けて微笑んで問うのだった。
「それでだけれど」
「この小説かい？」
「今はこのまま寝るけれど」

まずはこう述べるのだった。
「その小説ね。貸してくれないかしら」
「いいよ。じゃあ一巻からだね」
「そうよ。一巻から御願いね」
また言う伊東だった。今度はベッドの中で。
「貸して欲しいわ」
「わかったよ。じゃあはい」
「有り難う」
夫は早速自分の枕元から文庫本を一冊出した。そしてその文庫本を自分の妻に差し出した。彼女もそれを静かに受け取るのであった。
「それじゃあ明日から」
「早速ね。頼むわ」
「わかったよ。じゃあ楽しんでね」
「本は楽しんで読むものよ」
これは伊東の持論であった。そうでなければ読む価値がない、こう考えているのである。そしてそれは小説に関してだけではない。
「だからね」
「わかったよ。じゃあ楽しんでくれよ」
「ええ、そうさせてもらうわ」
笑顔で言葉を交えさせる。そうして。
「お休みなさい」
「お休み」
ダブルベッドの中から手を出してそのうえで灯りを消す。そうしてそのうえで眠りに入るのだった。伊東の一日はこれで終わるのであった。

# 第三十五部第三章　教育者その一

教育者

「厳格と虐待は違う」
これは長きに渡って言われていることである。
「子供や部下、後輩等への躾はいい」
そしてこれも昔から言われていることである。
「それはいい。しかしだ」
次にはこの言葉が必ず来るのである。
「虐待は駄目だ」
これであった。このことは昔から常識である。しかし往々にして教師という職業ではこのことが無視される傾向がある。その閉鎖的な空間の中ではだ。
今連合のある国のテレビでとある問題がクローズアップされていた。それは暴力教師のことである。この問題はこの時代にもあるのだった。
「生徒を竹刀で突いたんですか」
「そうです、中学生をですよ」
女性の黒人アナウンサーに対して赤茶色の髪に切れ長の目を持つコメンテーターが忌々しげな顔で苦々しく述べている最中であった。
「防具着けていたとはいえ突いたんですよ」
「確か突きは」
話を聞いたアナウンサーは戸惑いながら答えるのだった。
「確か中学生では禁止されていますよね」
「はい、そうです」
コメンテーターははっきりと断言した。
「その通りです。中学生はまだ身体ができていませんから」
「そうですよね」
「これは剣道だけじゃないですよ」

別のコメンテーターが真顔で話に入って来た。金髪で黒人の顔である。
「柔道でも締め技とかありますよね」
「はい」
「ああしたものが禁止されているのも身体がまだできていないからです」
「ですよね」
アナウンサーも真剣な顔で頷くのだった。
「それは」
「しかもこれ体育教師がやったんですよね」
「はい、そうです」
アナウンサーはすぐコメンテーターに答えた。
「部活動においてです。剣道部の顧問として」
「あの、素人じゃないんですよね」
金髪のコメンテーターは真顔でアナウンサーにまた問うていた。番組の中は極めて深刻な空気に支配されている。その中で話されていた。
「剣道部の顧問で体育教師ということだ」
「はい、何でもその顧問は剣道四段とのことです」
「嘘としか思えません」
金髪のコメンテーターは断言さえした。
「そんなの剣道やっている人間がわかっていない筈がないですよ」
「じゃあ確信犯ですか」
「絶対に確信犯です」
金髪のコメンテーターは断言した。
「わかっていなければそもそも剣道をやる資格がありません。そしてわかっていてそれをやったらやっぱり剣道をやる資格がありません」
「どちらにしろ剣道家失格なんですね」
「一体どういう学校なんですか！？本当に」

金髪のコメンテーターはさらにこんなことも言った。
「そんな人間を顧問にするなんて」
「何でも何年も前から同じことをしていたそうで」
「えっ！？」
「本当ですか！？」
これには金髪のコメンテーターや赤茶色の髪のコメンテーターだけでなく全員唖然とした。そのうえで後ろにあるパネルを見て言うのだった。
「あの、これだけのことを何年もやって」
「何も問題にならなかったんですか？」
「はい、そうです」
また答えるアナウンサーだった。
「それも全然」
「これ酷過ぎですよ」
「突き入れるだけでも問題なのに」
それだけではなかったのである。この顧問は。
「竹刀で百発も叩いたり。防具の上とはいえ」
「しかもこれ何ですか？」
金髪のコメンテーターはそのパネルに列挙されているものの中でまた言うのだった。そこに書かれていてさらに指摘されたものは。

## 第三十五部第三章　教育者その二

「あの、受身を知らない生徒に背負い投げですか？」
「はい、床で」
「これ、教育でも何でもないですよ」
呆れ果てた声での言葉だった。
「完全に虐待ですよ、これって」
「っていうか傷害罪なんですが」
「背負い投げを浴びせられた生徒は何ともなかったようですが」
「そういう問題じゃありません」
こう言うのだった。
「そんなの。全くは」
「その他にも他の部活動の生徒の前で生徒を殴る蹴る、果てには倒して腹の上に乗ったそうです」
「完全に犯罪ですね」
「っていうか確実に人格障害者ですね」
全てのコメンテーターがこう言うのだった。
「こんな教師が世の中にいるなんて」
「本当にどうなっているんですか？」
「それでこの教師ですが」
アナウンサーも呆れ果てた顔で言うのだった。
「自分は間違ったことはしていないと主張しているそうです」
「いや、してますから」
「これ教育でも何でもないですよ」
「こんな人間が教師をやっているんですか？」
「ずっと問題にならなかったそうです」
またこのことが話された。問題になっていないということが。
「それも全く」
「やっぱりおかしいです」

「というか異常です」
どのコメンテーターもこう言うしかなかった。呆れ果てた声で。
「こんなことをしてお咎めなしですか」
「世の中どうなってるんでしょうかね」
「わかりません。ただこの教師ですが」
「ええ」
「それで処分は？」
「懲戒免職となりました」
当然の処置である。こうした教師が問題にならない世界なぞは二十世紀後半の日本だけだ。この時代の教師は日教組に守られ無能な教師、精神異常の教師が大手を振って歩き回りカルト的な思想を生徒に吹聴し生徒に好き放題虐待を加えていてそれが黙認されてきていた。こうした怪奇現象が普通になったのが当時の日本の教育だ。この時代の教育の反面教師として今でも語り草になっている。
「そして生徒達の家族から損害賠償を請求されています」
「そんなの当然ですよ」
「全くです」
彼等はそれぞれ言うのだった。
「こんなのしていたら」
「っていうかこんな教師が何年も野放しですか」
「はい、そうだったのです」
アナウンサーはまた呆れた声で述べるのだった。
「恐ろしいことに」
「女の子を部活で泣かして喜んでいたんですか」
「そもそも人間の風上にも置けませんね」
こうしたこともしてきたのである。
「あと。集まりが悪いと集まりに来ていた生徒に暴力ですか」
「こんなのが教師ですか」
「教師の世界ってどうなってるんですか？」
このことも話されるのだった。

「これは問題ですね」
「全くです」
そしてこう言われていくのであった。
「こんな教師をなくしていかなければ」
「連合の教育はよくなりません」
テレビではこれで終わった。しかしネットでは違った。インターネットの世界ではこうした教師は往々にして徹底的に制裁される。
そして今もそうであった。
『あの教師の元の国籍わかったぜ』
『何処なんだ？』
『南アフリカだよ』
南アフリカだというのである。
『南アフリカのヨハネス星系の出身でな』
『それでアステカにいたのかよ』
『そうなんだよ。国籍を変えてそこにいたんだよ』
『そうだったのかよ』
『で、名前だけれどな』
国籍の次にわかったのは名前であった。

## 第三十五部第三章　教育者その三

『タイラニッチ＝ミヤコスキーっていうんだよ』
『おい、ロシア系かよ』
ここで呆れたような書き込みが入った。
『俺ロシア系だぞ。止めてくれよ』
『だよな。こんな奴人間じゃねえよ』
『っていうか死ねよこんな奴』
『生徒が可哀想だよ』
当然ながら懲戒免職でも許されなかった。遂にはこの教師を糾弾するブログまで出来て連合中に伝わりそのうえで糾弾の輪が広がり。遂にこの教師のさらなる罪、何と離婚した家族にまで虐待を働いていたことや飲酒運転、学校の金の横領までが発覚したのである。
他にも様々な虐待や傷害罪が明るみになり死刑となった。処刑方法は車裂きであった。
「殺せ！殺せ！」
「暴力教師は世の中に不要だ！」
「さっさと地獄に落ちろ！」
全裸で引き回しにされるこの暴力教師に対して市民達の罵声が続く。その醜く肥満した下劣な裸体を局部まで晒されてそのうえで処刑場に向かっていた、
「車裂きが御前を待ってるぞ！」
「苦しみ抜いて死ね！」
「狂人教師はこの世に不要だ！」８
彼等の罵声は連合では普通である。中にはゴミや石まで投げ付けている者もいる。連合において凶悪犯の人権は皆無であるのだ。
そうして処刑場に着く。すぐに両手両足をそれぞれジープに引かれる。そしてそのうえで同時に引っ張られ引き裂かれた。
断末魔の声と共に暴力教師は両手両足を引き裂かれた。だがそれ

でも教師は生きていた。
「まだ生きているぞ！」
「殺せ！」
「天罰を与えろ！」
勿論これで終わりではなかった。教師は今度はそのまま首を鋸引きにされそのうえで遂に止めをさされた。その間実況生中継であった。
こうした処刑は連合ではいつものことだ。死刑囚の人権は一切考慮されないのが連合だからだ。だから死刑自体については誰もとやかくは言わない。問題は別のところにあった。
『しかし教師の世界ってどうなってるんだ？』
またネットで話されるのだった。
『昔から人格障害者の教師の話多いよな』
『あの豚は別格だろうけれどな』
その車裂きにされた暴力教師のことである。
『それでも。多いよな』
『教師の起こした傷害事件や性犯罪ってどれだけある？』
『マスコミ関係者より割合多いんじゃないのか？』
こんな話も為された。
『ああ、確か統計じゃな』
『どうなんだ？』
『こうなってるぜ』
職業ごとの飲酒運転、業務上横領、傷害事件、性犯罪等の統計が出される。何とその割合ではマスコミ関係者と教師が他の職業を大きく引き離していた。
『何だこりゃ、滅茶苦茶割合高いな』
『一体どうなってんだよ』
『しかもこれはっきりわかってるのだけだよな』
インターネットの掲示板に次々に書き込みがされていくのだった。
『どっちも閉鎖的な世界だからな』

『もっといるっていうのかよ』
『この割合で氷山の一角かよ』
誰もがそれを察し唖然とするのだった。
『どうなんだよ、教師の世界ってよ』
『有り得ないっていうかよ』
『洒落になってねえだろ』
『無能な教師はすぐに全員首にしろよ』
まさに正論であった。
「何とかしてよ』
『頭のおかしい教師もよ』
こう書き込みされていく。そしてこのことはすぐに政界にも話が及んだ。一人の暴力教師の行動はそれにより連合全体を巻き込んだ議論になるのだった。
各国政府でもそうであったし無論中央政界でもだ。中央議会下院では教育のあり方について激しい議論が行われている最中であった。
「つまりです。教師の世界とは」
ハンニバルが主張していた。
「元々閉鎖的なものなのです」
「そうだ、その通りだ」
「それこそが問題なのだ」
「先に処刑されたあの暴力教師なぞは」
その車裂きになった暴力教師のことである。
「極端な例でありますが」
「しかしそれは氷山の一角で」
「他にもこうした教師は大勢いるのでは？」
彼の後ろには多くの議員達がいる。彼等はハンニバルと同じ保守派の議員である。

## 第三十五部第三章　教育者その四

「そうです、だからこそです」
ここで立って話をしているハンニバルの言葉が強くなる。
「私は今提案します」
「何と？」
「何とですか？」
「教育界の徹底改革を」
やはりそれであった。
「風通しをよくし、問題のある教師の一層です」
「それではです」
対する与党である改革派の方から連絡が来た。
「その具体的な内容は」
「そうです、内容があってこそです」
「そうでなければ意味がありませんが」
「勿論あります」
ハンニバルも伊達に政党の領袖の一人ではない。毅然として言葉を返す。やはり彼もひとかどの人物である。今それをはっきりと見せていた。
「まず問題のある教師を生徒や保護者、また内部調査によって厳密に審査し」
「まずはそれなのですね」
「最初は人です」
彼は言った。
「人をよくしなくてはどんなシステムであっても意味がありません」
「その通りだな」
それを聞いて呟いたのはキロモトであった。彼は大統領席からこの議論の一部始終を聞いていた。そうしてそのうえで呟くのであった。

「システムを動かすのは他でもない人間だからな」
「そうですな」
彼の今の言葉に頷いたのは隣にいる首相のアッチャラーンであった。
「それはもう」
「当然のことだ」
キロモトはアッチャラーンに対して頷いてみせた。
「それはな」
「やはりハンニバル副代表はわかっていますか」
彼はまた言った。
「そうしたことも」
「だが。彼が言うとはな」
キロモトは野党の彼がそれを言っているのを不満に思っていた。
「敵もさるものだがな」
「ですが大統領」
「わかっている」
彼は見ながら応えた。
「それはな」
「ではここは」
「まずは様子見だ」
彼は言った。
「ここはな」
「はい、わかりました」
こうして彼等は様子を見る。その間もハンニバルの言葉は続くのだった。
「そして炙り出した問題のある教師達は即刻全員懲戒免職にし」
「そうして？」
「それからは」
「有能な若手の教師達を外部からも含めて召集します」
これであった。

「積極的に試験を行い」
「それによってですか」
「そうです。そして外部からのチェックをより厳密にし」
これもあった。
「教職員組合は解散し」
「それもですか？」
「組合もまた」
「教職員組合こそが今の閉鎖的な教育界を作り出しています」
彼は言うのだった。
「だからこそです。ここは全面的にです」
「解散させると」
「それにより」
「その通りです」
ハンニバルの言葉は続く。
「ここはそうするべきです」
「そうですな。ここは」
「そうあるべきです」
保守派の中でも勢いのある者達がハンニバルに同調してきた。彼等こそは保守派の中で教育の専門家であり教職員組合に対して否定的な者達であった。
「ここは是非共」
「あの閉鎖的な教育界は何としても」
「しかし」
だがここで改革派の議員達はまた言うのだった。

## 第三十五部第三章　教育者その五

「組合を結ぶ権利はどの職業にもありますが」
「その通りです」
「それを否定されるというのですか？」
「まさか」
「いえ、それは否定しません」
ハンニバルとてそれはわかっている。だからこその言葉である。
「しかしです。教師は特殊な職業です」
「特殊なですか」
「軍人や郵便局員、消防署員、その他の公務員達と同じく」
なお連合においては各種公務員の組合は認められてはいない。
「ですが例の事件は公立中学校で起こっていますね」
「公立！？」
「そういえば」
ここが問題点であった。
「公立といえば公務員になりますが」
「公務員である教師が組合を？」
「またおかしな話ですね」
「だからこそです」
ハンニバルはここでまた言った。
「ここはこの教職員組合を解散させ」
「というより何故そんなものができたのだ？」
「そう、それが不思議だ」
これは野党側からだけでなく与党側からも起こった疑問であった。
「気付けばできていたようですが」
「何故だ？」
「これについては文相」
「はい」

緑の目の年配の黄色人の男が応えた。神は銀髪である。
「御聞きしたいのですが宜しいでしょうか」
「わかりました。それでは」
文相と呼ばれた彼はそれに応えて立ち上がった。そうしてそのうえで語るのだった。
「実は中央政府も何度も解散命令を出しているのです」
「何度もですか」
「そう、何度もです」
こう述べるのだった。
「それは何度も公に発表しています」
「ですがそれでも駄目なのですか？」
「それは効かなかったと」
「解散命令に従わないのです」
これは事実であった。だからこそ何度も命令を出しているのである。しかしそれでもなのだ。彼等はそれに全く従おうとしないのである。
「それも全く」
「全くですか？」
「教師がですか」
「彼等は権利を主張するだけで要求に一切従いません」
こうした無法を自分達の私利私欲に使う輩はどの時代においても存在する。そしてそれは教師という所謂聖職者にも存在するのである。
「それどころか今現在中央政府と裁判中です」
「そうだったのですか？」
ハンニバルもこれには眉を顰めさせた。
「公務員の組合の解散命令を出したのにですか」
「労働者の権利を主張しまして」
「いえ、それは筋が通りません」
ハンニバルはすぐに言い返した。

「彼等は公務員なのですから」
「無論我々もそれを主張しています」
文相もまたそれを述べる。
「しかしです」
「それを全く聞かないどころか反論ですか」
「しかも裁判まで行い」
「その通りです。弁護士を立ててです」
そのうえで裁判を起こしているのである。こうしたことはこの時代においてもよく見られることだ。残念なことに弁護士にも色々いるのである。
「そのうえで今中央政府と裁判を行っています」
「全く筋が通りませんが」
ハンニバルは今純粋にこう述べていた。
「それは」
「だからこそ我々も反論しているのです」
そうでもしなければどうしようもないからである。
「ですがどうしてもです」
「そしてそれにより問題のある教師が残り」
これが問題なのである。
「教育界が腐敗するとなると」
「ですから我々は今度は強硬策に出ることにしました」
実はこれははじめて公の場で言うことである。

## 第三十五部第三章　教育者その六

「遂にです」
「そうですか。それではこの件は」
「お任せ下さい」
文相ははっきりと述べた。
「是非共です」
「わかりました。それでは」
ハンニバルはここは引くことにしてそのうえでの言葉を出した。
「そのように」
「そういうことで宜しいでしょうか」
「はい」
ハンニバルはそのまま退くのであった。
「それではそのように」
「では」
こうして教育の話は。終わったかに見えたがそれは少し違っていた。ここでまた別の野党側の議員が文相に対して言ってきた。
「クロウザップ文相」
「何でしょうか」
「また御聞きしたいことがあります」
こう言って議論の台にまでやって来たのである。
「是非共。宜しいでしょうか」
「その教職員組合のことですか」
「その通りです。強硬策を採られるとのことですが」
このことを問うのであった。
「具体的にはどういったものですか？それは」
「そうです。具体的にはです」
クロウザップはここで話をはじめた。
「法規的処置により警察や軍を動員して動きを止め解散させます」

「警察や軍まで？」
「また何と物々しい」
「既に教職員組合はコミューンと称して立て篭もりさえしています」
これはパリ＝コミューンにはじまる。これは社会主義者達の自治政府のようなものだった。だが二十世紀後半の日本においては左翼活動家達の集まりと化していた。
「それに対しても何度も警告しましたが」
「それを聞かないからですね」
「そうです。強制処置です」
警告に従わないのならばそこで力を使う。民主政治においても基本である。世の中は全ての人間が議論に応じるわけではないからである。その中には悪意に基いて行動をする輩もいる。そうした輩に対しては強制力で以って排除するしかないのである。
「それを行いますので」
「彼等は既に武装でもしているのですか？」
「している勢力もあります」
今のクロウザップの言葉には誰もが眉を顰めさせた。
「まさか」
「教師が」
「銃やそうしたものでありますが」
それでも武器は武器である。
「武装してそれにより立て篭もっています」
「またどうして教師がそんな」
「武装して立て篭もるなどと」
「教師の中にはテロリストや宇宙海賊と共感している者もいます」
これもまた残念ながらその通りである。連合軍設立から宇宙海賊やテロリストは次々に摘発、征伐、処刑されてしまったがその全てが一掃される筈もないのである。
「元々そうした思想を持っている者が多いのです」
「だからこそそうした組合を作っていたと」

「そういうわけですか」
「弁護士もです」
そして彼等もなのだった。
「彼等もです。思想を同じくし」
「アナーキスト」
「それですね」
「その通りです」
こう野党の議員達に対して述べるのであった。アナーキストとは無政府主義のことである。国家権力も法律も全くない完全に自由な社会を作ろうというのである。この思想は十九世紀の混乱したロシアの中から生まれた思想であるが元々は自然に帰れと言ったルソーにはじまるのかも知れない。自由と言えば聞こえがいいがこれは言うならば無法な社会にせよということだ。文明の敵とも言うべき思想である。
「彼等の思想はそれです」
「まだそんな思想が残っていたのか」
「今だに」
野党側だけでなく与党側からも声が起こる。

## 第三十五部第三章　教育者その七

「あの思想は既に消えていたと思っていたのに」
「まだか」
「無論彼等の言う思想の名前は無政府主義ではありません」
クロウザップはそれは断った。
「所謂新生人権主義です」
「新生人権主義！？」
「それがその思想の名前ですか」
「今はまだそうした教師の間にだけ広まっている思想であるが」
こう述べていくのであった。
「そうした思想です。社会を完全に破壊しそのうえで法律も政府もない世界を築く」
「完全に破壊ですか」
「そう、あらゆる手段を使ってです」
ここが問題なのである。往々にして特定の思想を持つ団体はその目的達成の為に手段を選ばない。その手段の中にはテロといった行為も選択肢にあるのである。
「それを為そうとしています」
「ではその証拠は」
次に問われたのはこのことだった。
「証拠はありますか？」
「はい」
ここで立ったのは内相である金であった。
「それは既に」
「あるというのですか」
「何と」
「中央警察の極秘捜査によりまして」
その結果だというのである。

「それにより判明しました」
「それではです」
しかし金のこの言葉で話が終わりではなかった。むしろこれではじまりであった。
「それを見せて頂けますか」
「宜しいですか」
「はい、勿論です」
そしてこの流れを予想できない金ではなかった。既に読んでいることであった。
「それで資料ですが」
「はい、それは」
「何処に」
「こちらにあります」
言いながら出してきたのは彼女の目の前にある一枚のＣＤであった。それをまず右手に持って野党側にも与党側にも見せるのであった。
「そのＣＤの中にあるのですね」
「そうです。それではです」
すぐに議会にいる官僚達が来てそれを受け取り映像に移す。その結果様々な驚くべきデータが公にされたのであった。
「なっ、何と」
「こんなことまでですか」
「しかもこれは」
野党側の議員達だけでなかった。与党側の議員達からも驚きの声をあげる。そしてそれはこの時の議論を中継で見ている面々にしろ同じであった。
『何だよあれ！』
『マジかよ、おい！』
『先公がテロリストと結託してたのかよ！』
しかもただ結託しているだけではなかった。教職員組合の幾つか

はテロリストや宇宙海賊達と結託し私腹を肥やしていただけではなく武装蜂起し独自の国家を作ろうとしていたのだ。然るべき惑星を占領してだ。新生人権主義とは名前ばかりの全体主義国家をだ。
『しかもこの国家ってよ』
『何だあのシステムってよ』
秘密警察もあれば政党に軍を完全に指揮下に置いている。そして党への反論は一切許されない。まさに二十世紀型全体主義国家であった。
『言ってることはマルクスだしよ』
『まだこんな奴がいたのかよ』
この時代においてはカルトとされているその思想がである。
『冗談みたいな話だよな』
『しかしそれが本当に国家を作ろうとしてるんだからな』
『洒落になってねえぞ』
ネット掲示板において実況が為されている場所で次々に書かれていく。
『これってよ』
『だよな、全く』
皆呆れた顔で書き込んでいた。その公になったものを見ながら。
「そしてです」
「はい」
「そして」
その間も国会での話は続いていた。
「既に今逮捕状を各教職員組合の幹部達に請求しています」
「そうですか。もうですか」
「早速ですか」
「そうです。ことは急げです」
この辺りは流石に金であった。

## 第三十五部第三章　教育者その八

「ここはやはり」
「それでもうですか」
「では今頃警察や軍が」
「その通りです」
やはりそこまで話を進めているんどえあった。実に迅速である。
「国防省とも連絡しまして」
「さて、これはどうかな」
「野党はどう言うでしょうか」
それを見ていたキロモトとアッチャラーンが述べた。
「これに関してな」
「まさか我々が極秘にここまでしていたとは思わなかったようですが」
「それでもだ。何も言わなければだ」
「はい、それで終わりです」
議会は発言をする場である。そこで言わなくては何にもならない、そういうことである。
「さて、それを見せてもらうか」
「そうしましょう」
こう言いながら様子を見守るのだった。流れは完全に与党側のものになっていた。
金の発言が続く。彼女は言うのだった。
「そしてです」
「はい、それで？」
「それは教職員組合の幹部達だけでしょうか」
「いえ、無論それで終わってはいません」
やはりそうなのであった。話は教職員組合だけに留まらない。
「既に海賊やテロリスト達にも」

「軍をですね」
「その通りです」
やはりそれには留まらない。彼等に対しても軍を向けているのであった。
「ですからです。既に」
「そうですか。では」
「組織を根こそぎというわけですね」
「はい」
これで流れは完全に与党側のものになった。後は金のターンのまま話が進むのだった。
「これによりです」
「絶好のタイミングだな」
「確かに」
与党側からも金の今の言葉に声を交えさせるのだった。
「相手にとっても」
「国会で公にしたうえで」
それはまさに電撃作戦であった。宣戦布告と共に攻め込んだからである。特にこれは相手がその姿を隠そうとしている時にこそ最も効果を発揮するものである。
「それをするとは」
「見事と言うべきか」
「既に各組織及びテロリスト達の摘発がはじまっている筈です」
『おい、本当だぞ』
『間違いない』
すぐに中継の掲示板から書き込みが入った。
『今テロップが流れた』
『一斉摘発か』
『っていうかマジだったのかよ』
皆それを見て驚くことしきりであった。
『教師ってやっぱり頭がおかしいのかよ』

『おかしいってものじゃねえぞ』
それぞれが書き込むのだった。
『これが教師の世界だっていうのかよ』
『プロ市民団体と同じだな』
こう話されていく。そうして次々にテロップが流されていく。最早話は教師の素行の問題だけに留まらなくなってしまっていたのだった。
「そして同時に組合の解散を命じます」
「ここでですか？」
「はい、ここで」
まさに一気であった。
「命じますので」
「そうですか。それでは」
「そのように」
ハンニバルだけでなく野党側も沈黙してしまった。
「それではこのまま組合は解散させて」
「そのうえでですか」
「そうです。それではです」
彼等はこのまま話を終えた。これで教育に関する話は終わった。程なくして組合は解散させられ教育界の抜本的な改革が行われた。連合の教育はこれにより一気に改善された。

## 第三十五部第三章　教育者その九

「しかし教育の世界というものは」
「そうですね」
クロウザップと金が話をしていた。今二人は中央政府内務省の食堂で向かい合って話をしている。クロウザップが金のところに出向いての話である。
「全く。すぐに腐敗するものだな」
「どの組織でもそういったものです」
金はクロウザップにまずはこう述べた。
「ですが確かに教育界はです」
「閉鎖的になり易く腐敗し易いな」
「だからこそ余計に風通しがよくないと駄目なのですが」
金のその目が曇る。
「残念ながら現実はそうもいきません」
「そこには必ず何かが入るな」
「その通りです」
金はまた言った。今彼女はチキンカツ定食を食べている。主食はパンである。そのパンを食べながらそのうえでクロウザップと話していた。
「これもまたどの組織も同じですが」
「教育界は特にな」
クロウザップは何度もこのことを言う。
「そうなっていく」
「不思議と言えば不思議です」
金はそのチキンカツを切りながらクロウザップに言葉を返した。丁寧でかつ落ち着いたフォークとナイフの使い方をそこで見せていた。
「教師の世界が腐敗し易いというのは」

「聖職者だからか」
「はい、そうです」
そのフォークとナイフの動きを止めないまま述べた。クロウザップはライスであった。鰻丼を食べている。伝統的な和食であるそれを食べているのだ。
「ですから腐敗しにくいと思うのですが」
「それを言えばバチカンもだな」
「バチカンですか」
「彼等がどれだけ腐敗していたか」
歴史での話である。
「それは知っているな」
「はい、それは」
これを知らない筈がなかった。バチカンの腐敗の酷さは欧州の歴史の一面でもある。それだけに誰もが知っていることになっているのである。
「知っているつもりです」
「それと同じだ。聖職者であろうともだ」
「腐敗すると」
「とりわけその組織が閉鎖的であった場合はな」
しかも注釈がつくのであった。
「そうなっていく。余計にな」
「腐敗は酷くなりますか」
「教師の世界も同じだ」
そして話は教師のそれに戻った。
「閉鎖的であり独善的ならばだ」
「腐敗すると」
「その通りだ。それに教師の社会は学校という限られた環境にある」
「学校は確かに」
金はそのカツを口の中に入れた。そうしてそのうえでカツを食べる。黒いソースが付いたチキンカツは鶏のその淡白な味とカツの香

ばしさが混ざり合い実にいい。金はその旨さを楽しみながらそのうえで食べていくのだった。食べながら話を続けていくのだった。
「閉鎖的です」
「組織が閉鎖的であり社会もまた閉鎖的である」
二重に閉鎖的なのである。
「そうなればだ。最早それはだ」
「完全にその狭い世界でやっていくからですね」
「視野も狭くなるしそして水の流れが悪くなっていく」
水は流れが悪くなれば濁っていく。
「その結果がああなるというわけだ」
「その通りですか。それで」
「教師の世界は腐敗していく」
そういうことだった。
「ましてや教師は権力者でもある」
「はい」
そして教師という職業の特色としてもう一つこれがあった。教師は子供を教える。これはそのまま権力者ということになる。人を預かっているからである。
「そうですね」
「閉鎖的な環境で権力者ともなればだ」
「腐敗しない筈がありません」
答えはもう出ていた。

## 第三十五部第三章　教育者その十

「そうなれば」
「だからだ。教師の世界はとりわけ腐敗し易いのだ」
「マスコミの世界と同じですね」
金は今度は付け合せのマッシュポテトを食べていた。その白い潰されたポテトを。
「マスコミの世界も閉鎖的で情報という権力を持っています。ですから」
「極めて腐敗し易い」
そういうことだった。マスコミもまた実に腐敗し易いのだ。このことは連合においては歴史において何よりも雄弁に実証されている。その最たるものがやはり二十世紀後半の日本である。当時の日本のマスコミは実に長きに渡って腐敗を極めていたのである。
「実にな」
「教師とマスコミは同じだと」
「そうです。同じだ」
クロウザップはこう考えているのである。
「それも全くな」
「では教師の世界もまた」
「今回のもだ」
こういうことであった。
「同じだ。マスコミとな」
「厄介な世界なのですね」
「そして職業柄特別扱いになり易い」
なおも付け加えられるのであった。
「何でもな」
「教師は確かに聖職です」
こう言われて実に久しい。

「尊敬され易いですしそれで何かとお目こぼしも起こり易いです」
「それで個々もそれで増長していく」
悪いことには悪いことが重なる、まさにその通りであった。
「従って。その結果だ」
「ああした組織が生まれたり問題のある教師が生じるのですね」
「そうなっていく。しかしだ」
「しかし？」
「これは一つの世界だけではないな」
クロウザップは鰻を食べていた。その濃厚な味を楽しんでいる。
たれがこれまた実にいい味を醸し出していた。そしてその山椒もである。
「他の世界にも言えます」
「というとあらゆる世界にもですか」
「官僚の世界も政治家の世界も」
彼等の世界もなのだった。
「大小の違いもあるがやはり腐敗するものだ」
「人の世にあるものは全てですね」
金は彼が何を言いたいのか察したのだった。そのうえでの言葉だ。
「だからこそ。それにより」
「そういうことだ。他山の石とすべしだ」
「はい、まさに」
「やはり外からのチェックは必要だ」
クロウザップの今回の結論であった。
「風通しをすると共にな」
「その通りですね。本当に」
「うん。ところでだ」
クロウザップはここまで話をしてふとこう言ってきた。
「内相は今日も」
「今日もとは？」
「この食事が終わればやはりあれか」

言葉を少しずつ出していくのであった。
「デザートを食べるのだな」
「デザートを食べることは食事の後に必ず起こることですが」
金にとってはそれはまさに当然のことであった。食後のデザートは食事と全く同じなのである。切り離すことはできはしないのである。
「違いますか」
「そう言われると」
クロウザップにしても返答に困ってしまう質問であった。
「少しな」
「そうですね。食事と同じです」
やはりこう言う金であった。
「デザートがない食事というのは」
「それは」
「マスタードのないソーセージと同じです」
まさにそれだというのだった。
「砲撃のない戦場と同じです」
「砲撃のない戦場か」
クロウザップはそれをイメージしてみようと努力してみた。しかしそれは不可能だった。どうしてもイメージできなかった。ソーセージもまた然りだ。

## 第三十五部第三章　教育者その十一

「それは少しな」
「想像できませんね」
「その通りだ」
言葉はこれしかなかった。
「とてもな」
「ですから。やはり」
金の言葉は続く。
「この昼食の後も頂きます」
「そのカツを食べてだね」
今度は金が今現在食べているそのカツを見る。見ればそのカツはかなり大きい。優に二百グラムはあるが何とそれが三枚もあるのである。しかもそれだけではない。定食であるからそこにはサラダもスープもついている。付け合せにはマッシュポテトだがこれもかなりの量である。やはりその量は相当なものである。しかもここにパンもある。このパンも大きいものが三個である。かくいうクロウザップにしろ丼だけではない。そこにはうどんもあるしおかずとして大きな魚、イサギが丸ごと一匹焼いて置かれており玉子焼きまである。連合らしい量である。
「まだデザートなのか」
「それが何か」
「いや」
やはり言葉がなかった。
「別にないが」
「ですが何かありそうですが」
「うむ。では言おうか」
何かがあるのだった。出そうとしなかったその言葉が。
「実はだ。それだけ甘いものを食べると」

「甘いものは身体にいいのですが」
金はこう主張する。
「糖分は身体にも精神にも栄養を与えてくれます」
「それはわかっているが」
当然ながらクロウザップもそれはわかってはいる。栄養学の基礎の基礎である。
「しかし摂り過ぎるとだ」
「私は太らない体質ですので」
「いや、幾ら太らないと言ってもだ」
甘いものの食べ過ぎはそれに留まらないのである。
「そこまで食べるとだ。しかも毎食だな」
「朝はそのままそのデザートが朝食です」
金は答える。
「紅茶にパンケーキに林檎、それとヨーグルトでした」
「それだけか」
「はい、それだけです」
ただしどれだけ砂糖やシロップやジャムを入れているかは言ってはいない。金の紅茶はそれこそ砂糖が三分の一は入る物凄いものなのだ。
「それだけですが」
「しかし昼は」
「まずはチョコレートパフェです」
これがまずは、なのである。
「それにロシアンケーキに」
「ケーキか」
「いつものフルーツの盛り合わせです」
甘いものの中でもとりわけフルーツが好きなのが金なのだ。
「それと杏仁豆腐です」
「その四つか」
「そうです。夜も夜であります」

「やはり。それだけ食べるとなると」
まずはそのチョコレートパフェがやって来た。優に座っている金の座高以上はある。足が長く座高は低い金であるがそれでも途方もない大きさだ。中にはバニラやチョコレートのアイスにケーキのスポンジにポッキー、チョコレート、オレンジ、ストロベリーにチェリー、その上にチョコレートソースをかけている。まるでバベルの塔のようである。
「まずはそのパフェか」
「このパフェが絶品なのです」
金はそのパフェを前にしてもう微笑んでいた。
「私の大好物の一つです」
「それは知っているが」
彼女のパフェ好きも連合中でよく知られている。ただし好きなものはパフェだけではない。
「そして他にもだな」
「勿論です。そしてです」
早速パフェを食べはじめる。そうしながらまたクロウザップに述べるのだった。
「私の考えですが」
「何かね」
「デザートはメインディッシュと同じだけ食べるものです」
なおこれは彼女独自の考えである。

## 第三十五部第三章　教育者その十二

「それでこうして」
「食べるというのか」
「そうです。幼い頃から母によく言われました」
その金の母だ。金はごく普通の銀行員の家庭に生まれている。幼い頃から頭脳明晰として知られ韓国の超一流大学を首席で入学し首席で卒業している。そうして官公庁に入りそこで見る見るうちに頭角を現わした。それにより当時の韓国政界の領袖の一人に見込まれそのうえで政治家になった。そして韓国政界から中央政界にスカウトされ今こうして連合中央政府の内相になっている。そうなのだった。
「甘いものを食べられるうちは人間は大丈夫だと」
「それは肉ではなかったのか？」
「肉でも何でもです」
金はこうも言うのだった。
「そういうものを食べられるうちはです」
「大丈夫なのか」
「国家としても個人としても」
どちらについても当てはまる言葉だった。
「甘いものをふんだんに食べられるうちは人は大丈夫だと言われましたので」
「そう御母堂に言われたのか」
「はい、私を育ててくれた母が」
その言葉には尊敬があった。
「そう教えてくれました」
「そうか。そういうことだったのか」
「それで幼い頃より食べてきました」
それだけの甘いものをである。これで栄養が偏らないのは他のも

のもふんだんに食べているからに他ならない。彼女も途方もない大食であるのだ。
「甘いものは私にとってはまさに命の源です」
「韓国といえばあの辛い料理だが」
韓国料理の辛さはこの時代でも健在である。
「それは」
「無論それもあります」
韓国人ならばそれは知っていて当然だった。韓国料理というものの辛さは唐辛子によるものだが金はそれも幼い頃からよく知っている。
「ですが辛いものがあればある程」
「甘いものもか」
「それもあります。ですから」
だからだというのである。こういう理由もあった。
「甘いものが余計に」
「そういうことか。それにしても君は」
「私は？」
「普段はあまり辛いものを食べないな」
今度指摘したのはそこだった。
「今さっきもチキンカツは」
「辛いものは食べなくとも平気なのです」
これが金の今度の返答だった。
「私は。韓国人ですが」
「それよりも甘いものか」
「そうです。何につけてもそれです」
金の場合はそうなのだった。
「それがなくては」
「わかりはしたが」
クロウザップのところにもデザートが来た。それはアイスクリームだった。バニラよりもさらに白いそのアイスクリームを見て金は

言った。
「豆腐のアイスクリームですね」
「そうだな」
クロウザップは金のその問いに頷いた。
「これはな」
「私はそれも好きだったりします」
豆腐のアイスもなのだった。
「豆腐はいいものです。甘いものにも使えます」
「淡白だからな」
それが豆腐のいいところだ。味が淡白で非常に食べやすい為どんな料理にも使えるのだ。だからこそ和食において非常に重要な位置を占めているのである。
「その淡白さによって何でも使える」
「そうです。ですから私も」
好きだというのである。
「ですが今は」
「そのパフェか」
「はい、そしてケーキです」
そのロシアンケーキも運ばれてきたのであった。古の塔を思わせる巨大なパフェはもう食べ終えられようとしている。まさしく一瞬であった。
「私のものを食べます」
「わかった。それではな」
「この食事が終わってからですが」
話はもうその後にいっていた。

## 第三十五部第三章　教育者その十三

「宜しいでしょうか」
「仕事のことか」
「はい、その教職員組合のことです」
議会での話の続きだった。
「彼等には既に手を打ちましたが」
「うん」
「しかし。問題がまだあります」
金の顔が鋭いものになっていた。甘いケーキを食べながらも。
「彼等と組んでいた弁護士ですが」
「弁護士か」
クロウザップは弁護士と聞いて顔を曇らせるのだった。その職業を聞いて。
「昔から思っていたが厄介な存在だな」
「忠実な法律の守護者とも言われています」
当然ながら多くの弁護士がそうである。
「ですがその中には」
「問題のある人物もいる」
それが問題なのだ。こうした存在について語るうえでもやはり二十世紀後半の日本は重要になってくる。当時の日本は弁護士だけでなく裁判官の多くまでもが特定のイデオロギーに洗脳され深刻な事態に陥っていたからである。弁護士の顔をした運動家が大勢いたのだ。その代表とも言えるのが高木健一という男である。
「それがな」
「世の中全てが善人ではありません」
金の言葉は冷静だがそれと共に彼女には珍しい冷徹なものもあった。
「ですから」

「弁護士といえどもな」
「その通りです。その職業にある者が全員全員である筈がありません」
これもまた自明の理である。
「それは」
「そうだ。その逆もそうだが」
その職業にあるからといって悪人ばかりでもないのだ。もっともヤクザ屋やそういった職業は別であるが。聖人君子はヤクザになどなったりはしない。
「しかしな」
「弁護士や教師といった職業は」
「そういった問題のある人物が非常に多い」
しかしこれは事実であった。
「あの暴力教師にしてもな」
「ですから改革が為されるべきです」
「その通りだ。そしてだ」
クロウザップの言葉が続けられる。
「弁護士の世界もだ」
「チェックするものを設けておきますか」
「そうした方がいいな」
やはりそうであった。
「絶対にな。そうしておくべきだ」
「そうですね。やはり」
金はパフェを食べ終えた。そして彼女の前にフルーツの盛り合わせが来たのだった。彼女はまずそれを先に食べはじめるのだった。
「ここは」
「弁護士の世界もだ」
その世界についても語るクロウザップだった。
「閉鎖的な世界だしな」
「そして特定の思想に染まっているカルト的な組織も見受けられま

す」
彼等もなのだ。教師のそれと同じく。
「ですからここはです」
「では内相」
「はい」
二人は顔を見合わせ合ってそれぞれ頷いたのだった。
「それではそのように」
「するべきだと思う」
「それでは」
「何事もチェックするものが必要だ」
これは事実であった。チェック機能がない組織は何処までも腐敗する。とりわけそれが権力になるならば。そして弁護士もまた権力者なのである。
「全てな」
「ええ」
こうして彼等の話は決まった。程なくして弁護士に対してもチェック機能が議論されることになった。勿論弁護士達はあれやこれやと理由をつけて抵抗する。しかしそれは一つの流れとして出来上がってしまったのであった。弁護士もまたチェックするという流れが。
「そもそもです」
「そもそも？」
「そうです。全ての組織にチェック機能は必要です」
八条は移動する車の中で語っていた。隣には今は国防省のスタッフがいる。うら若き美しい黒人の女性だ。彼女を横に置いてそのうえで話をしているのだ。

## 第三十五部第三章　教育者その十四

「当然軍にもです」
「そうですね。それは」
女性スタッフも彼の言葉に頷くのだった。
「軍もまた腐敗しますから」
「不正や汚職の温床が何処にもあります」
八条はこうも言った。
「何処にもです」
「ではやはり弁護士に対しても」
「当然です」
八条はまた言った。
「チェック機能を設けるべきです」
「既にそれはありましたが」
「しかしそれは充分ではありませんでした」
八条は女性スタッフにこう返すのだった。
「だからこそああいう人物が出てしまったのです」
「テロリストや宇宙海賊とつながっている弁護士がですか」
「過去にも何人かいましたが」
ここで八条の顔が顰めさせられたのだった。
「ですが。それでもです」
「チェック機能は設けられませんでしたか」
「既に旧式化して形骸化してしまったシステムでは対処できなくなっていました」
これはどのシステムにも言えることだ。システムもまた進歩していくものだがそれでもそれはそのままにしておけば旧式化していく。そうして満足に機能していかなくなるのだ。
「そしてそうしたシステムは」
「改善していくと」

「その通りです」
そしてこういう流れになるのである。
「それは今回もです」
「それではやはりここは」
「はい、弁護士のチェックシステムの改善です」
八条は述べた。
「そうするべきです」
「わかりました」
女性スタッフもまた静かにそう頷いたのであった。
「それではそのように」
「そういうことです。そしてそれはです」
八条は弁護士についてここまで話したうえであらためて話すのだった。
「軍についてですが」
「連合軍ですか」
「そうです。連合軍ですが」
彼が言うのはやはり自分が統括するその組織のことだった。連合軍百三十億の実質的な総司令官としてそのうえで述べるのだった。
「そのチェック機能は万全かどうかですが」
「憲兵隊が機能していますが」
「しかしそれだけではないのです」
憲兵隊のことは認めてもだった。
「それだけでは」
「といいますと」
「軍規も軍律もあります」
その二つについても述べる。
「ですがそれでもまだ不充分です」
「そうなのですか？」
「まず己を律する為の軍規と軍律を備え」
まずはそれであった。

「そして取り締まる警察的な組織として憲兵隊があり」
「そして？」
憲兵は簡単に言うと軍の警察である。悪く言うならば秘密警察と揶揄もできる。だがおおむねは警察と考えていいのである。憲兵というものは。
「教育です」
「教育ですか」
「思えばこの話はそもそも教育の問題ですね」
「はい」
既に連合全体で知られている話だ。だから述べられるのだった。
「その通りです。教育です」
「軍における教育ですが」
彼はその教育について語るのだった。
「やはり今までよりも強化しておきますか」
「座学として増やすのですか？」
「それだけではありません」
それに留まらないというのである。
「実際の研修も進めていくべきです」
「モラルの研修もですか」
「その通りです。ただ頭に教え込むことだけではなく」
彼は言うのだった。

## 第三十五部第三章　教育者その十五

「身体でも実際に身に置くべきですから」
「ではどのようにして」
「そうされるかですね」
「そうです」
女性スタッフはそこを指摘した。彼の横に座っている彼女は膝までのタイトから褐色の美しい足を見せていた。見ればかなりスタイルのよい女性である。
「それです」
「では長官」
女性スタッフは今度は具体的に尋ねてきた。
「今度はどうされますか」
「今度はですか」
「はい、やはりもう何か御考えなのですね」
こう八条に対して問うのであった。
「既に何か」
「今から行く場所ですが」
八条はまずは彼女にこう返した。
「国防省に戻っている最中ですが」
「はい」
また頷く女性スタッフであった。
「教育総監を御呼びしています」
「教育総監をですか」
「そうです」
こうスタッフに返すのだった。
「あの方をです」
「といいますと」
スタッフはそれを聞いてあらためて考える顔を見せるのだった。

そうしてそのうえでまた言う。
「やはりここは」
「そうです。総監の方からお話がありまして」
「総監から！？」
女性スタッフは総監からと聞いてその顔色を少し変えた。そうしてそのうえで述べるのだった。
「総監からなのですか」
「そうですが」
八条は驚いたような顔の彼女に対してまた返すのだった。
「それが何か」
「またそれはどうも」
女性スタッフはかなり考える顔になって述べたのだった。
「意外といいますか」
「意外ですか」
「長官が呼ばれたのではなかったのですね」
「私から呼ぶつもりではありました」
自分でもこう言いはした。
「私から」
「ですが総監から来られたのですか」
「そうです。それよりも前にです」
先に向こうから、ということだった。このことが重要なのである。
「それで会議ということになりました」
「といいますと」
会議ということで女性スタッフはまた考える顔になった。
「あれですね。総監だけではなく」
「はい、他の教育部門の制服組のトップ達がです」
「そうですね、制服組のトップがですか」
「それが意外ですか？」
「意外というかこの展開は」
女性スタッフはここでまた首を傾げさせた。

「少し。思いもつきませんでした」
「そうでしたか」
「総監もそこまで考えておられるのですか」
「総監はとても真面目な方です」
そして今度は総監についても話されるのだった。
「そして生粋の軍人でもあります」
「生粋の軍人ですか」
女性スタッフは総監のことは知ってはいた。だがそれでも生粋の軍人という言葉自体にはいささか懐疑的であったのだ。それは何故かというとだった。
「連合に生粋の軍人ですか」
「それが何か」
「いえ、どうもこれといって想像できませんので」
彼女がそうした顔になる理由はここにあった。
「連合は軍事とはあまり縁がなく千年を過ごしてきましたから」
「それはその通りですね」
八条もまたそれを否定しなかった。
「確かに」
「そうですね。軍人もまた職業の一つです」
これが連合の主流となっている軍人に対する考えである。軍人とはあくまで公務員の一つでしかない。そう考えられているのである。

## 第三十五部第三章　教育者その十六

「ですから。生粋と言われましても」
「つまり警察官や消防署員と同じということですね」
「御言葉ですが」
また述べる女性スタッフであった。
「私はそう考えています」
「それも確かにそうです」
八条はまた彼女のその考えを否定しなかった。
「軍人はあくまで職業の一つです」
「そうですね」
「そして公務員です」
続く言葉はこれであった。
「あくまで。そうでしかありません」
「ですから生粋の軍人というのは」
「そういえば貴女はです」
八条は今度は女性スタッフ自身に対して問うてきた。
「元々は国防省ではなく」
「はい、財務省からの出向です」
こう彼に答えるのだった。
「私は。あくまで」
「そうでしたね。確かに」
「そのせいもあるでしょうが」
自己分析も含んだ言葉であった。
「私は。どうしても生粋の軍人と言われましても」
「連合はエウロパやマウリアに比べると軍事への関心は希薄です」
この二つの勢力と比べてもだ。連合という勢力は軍事への関心はかなり薄い。これは連合軍が設立されエウロパとの戦争を経ても変わっていないのだ。

「ですが。それでもです」
「生粋の軍人意識を持っている軍人がいるのですね」
「その通りです」
こう彼女に答えるのだった。
「そうした方もおられるのです」
「そしてそれが教育総監だと」
話はここでつながった。
「そういうことですね」
「その通りです」
八条はここでも頷いたが頷いたものは今までとは違っていた。
「総監こそまさにそうなのです」
「私は総監とは詳しくお話したことはありません」
知ってはいてもだ。それでも詳しく話したことはないのだ。
「残念ですが」
「軍人ともよくお話をされるべきです」
八条はこの忠告をしてきた。
「機会があれば。なさそうならば見つけて」
「そうして話をしていくべきですか」
「背広組と制服組は確かに違うものです」
文官と武官というだけではない。シビリアンコントロールの概念の問題もある。そこにある壁は確かに存在している。しかしなのである。
「ですがそれでもです」
「話をしていくべきと」
「パイプがあって悪いことはありません」
政治家の世界の話の常であるが官僚の世界でも言えることである。もっと言うならばどの世界においても言えることなのである。何事もつながりがあって悪いことはないのだ。それを否定するということはそれだけで仕事の可能性を自ら潰していることに他ならない。
「だからこそです」

「軍人とのパイプを築いておくことですか」
「財務省でもそうだと思いますが」
次には彼女の本来の居場所のことを話に出してきた。
「これは」
「そうですね」
こうした話になると彼女も頷くのだった。
「パイプを築けない人間はそれだけで」
「損をしています」
もっと言えば仕事ができない、そうなることであった。
「それもかなりです」
「その通りです。ですから」
八条はまた言う。
「そうして考えていけばです」
「財務省は財務省だけで成り立つものではありません」
女性スタッフも言う。
「それだけではです」
「その通りです。国防省も同じです」
どの省庁にも言えることでもあるのだった。

## 第三十五部第三章　教育者その十七

「国防省だけでやっていっているわけではありません」
「そして制服組もですか」
「ただ制服を着ているだけではありませんから」
だからということなのだった。
「そして背広組もまたです」
「そうしないとそもそも軍も動かないのですね」
「はい」
もう一つの現実であった。
「上手くは動けなくなるのです」
「軍を動かすにも命令だけではないのですか」
「財務省でも部下に仕事をしてもらうのに命令だけで動きますか？」
「いえ」
こう言われるとわかることなのだった。彼女にしても。
「それで動くと思っているのならどうかしています」
「そういうことです。だからこそパイプが必要なのです」
「そうなるのですか」
「私もまた」
長官である彼自身もだというのだった。
「そうなのですよ」
「政治家としてですか」
「政治家はパイプが必要不可欠です」
彼とても例外ではなかった。政治家として。
「人と人のつながりというものがです」
「それなくしてはですか」
「そうです。やっていけるものではありません」
その政治家としての言葉である。
「これでもそれを築く為に努力をしています」

「そういえば長官は」
女性スタッフもここで気付いたのだった。
「お食事は大抵他の方と御一緒ですね」
「食事の時は最もそれに適しているのです」
そしてこのことについても述べるのだった。
「お互いに和やかにお話することができますから」
「だからですか」
「そうです。だからこそです」
こう述べるのだった。
「また一人で食べるよりも多くで食べる方が美味しいものです」
「ええ、それは確かに」
彼女もこの言葉はかなり真面目な顔で賛同することができた。元々真面目な女性のようであるがこれまで以上にそうなのだった。
「私もまた」
「貴女もですか」
「主人や子供と共に食べる食事はいいものです」
「御家族がおられたのですか」
「言いませんでしたか？」
少し驚いたような顔になって八条に問い返した。
「このことは。それに個人情報にも書いていますが」
「そういえばそうでしたか」
「はい、書いてあります」
また述べる彼女だった。
「確かに」
「そうですか。家庭をお持ちでしたか」
「これでも子供は三人います」
続いてこの事実も述べるのだった。中々子沢山のようである。
「そして恋人もいます」
「家庭を持っておられてですか？」
「そうです、女性の」

こう来たのであった。ここで。
「同性ならば浮気ではないと思いますが」
「異性は御主人だけですか」
「はい、そうです」
こうした考えの人間も連合には多い。あくまでイスラエル以外においてである。連合では同性愛もまた非常にポピュラーであり同性愛と異性の愛を童子に行うこともよく見られるのだ。
「異性は主人だけですが」
「同性はですか」
「無論主人も承知していることです」
このこともまた正直に告白するのだった。
「ですが何も言いません」
「まあそうでしょうね」
八条は首を捻り少し考えるような顔になりながら答えた。

## 第三十五部第三章　教育者その十八

「これが男性の方でしたら修羅場になったでしょうが」
「はい、あくまで同性がその対象ですので」
「御主人がそう考えておられるのなら構いません」
「そうですか。それではです」
彼女はまた言う。
「それはそういうことで」
「そしてです」
八条もここで話を戻してきたのだった。
「お食事のことですが」
「その時間でパイプを築かれるのですね」
「そうです。当然他の時間もですが」
政治家に暇はない。とりわけそれが所属政党の重職や閣僚ならば余計にだ。こうしたパイプ作りも政治家の重要な仕事なのである。
「私は食事の時間をそれによく使っています」
「では総監とも」
「はい、何度か御一緒しています」
やはりであった。こうした軍人とのパイプを築くことも重要なのだ。無論これは間違えると癒着や派閥人事といったものにもなってしまうが。
「それでお話をしたこともあります」
「そうでしたね。あの方とも」
「ただ。このお話のことははじめてです」
しかしここで話が微妙なものとなった。
「それについてはです」
「はじめてなのですか」
「連合軍の教育のことは何度か考えていましたが」
「今の状態でもですか」

「万全と思った時こそ危ないものですから」
今度はこう述べるのだった。こうした慎重で細部を考えるのも八条んあおだ。
「ですから」
ですがはじめてでも」
「そうです、細かくお話していきます」
八条は言った。
「何度かに分かれようとも」
「それでは。今から」
「はい」
ここまで話してそのうえで車が止まるとそこを出た。そうして駐車場から国防省の中に入りそのまま上へ進む。後ろにはあの女性スタッフがしっかりとついて来ていた。
八条は国防省のその機能的な建物の中を進む。そうしてある扉の前に着くとまずノックをする。それが終わってから扉を開ける。扉を開けて中に入ると部屋の中にいた背広組も制服組が一斉に起立する。右手に背広組、左手に制服組がそれぞれいた。
その中に一人謹厳そのものの顔立ちをして顔の下半分を白い髭で覆っている男がいた。歳の頃は六十程度だろうか。その彼がまず敬礼をし皆それに続く。
見れば彼の腕の金モールは元帥のものだった。連合軍に三十人しかいないその元帥である。
「お待たせしました」
「いえ」
その彼が八条に応えるのだった。
「それでは早速会議に入りましょう」
「はい、それでは」
こう話をしてからだった。八条は己の席の方に来た。そうしてそのうえで背広組に対しても制服組に対しても言うのだった。
「では座って下さい」

「はい、それでは」
「御言葉に甘えまして」
皆彼の言葉に頷きそのうえで着席する。八条もそこに座る。八条は座ってからすぐに彼等に対して穏やかな声で告げるのだった。
「今回の会議のことですが」
「はい、教育のことですね」
「連合軍の」
「その通りです」
会議に列席している者達の言葉にも応える。
「それですが既に配付して頂いているパンフレットにある」
「この案ですね」
「実技研修の導入ですか」
「そうです、規律のです」
彼が言うのはこれであった。
「それのことですが。如何でしょうか」
「そうですな」
ここで元帥のモールの男が述べてきた。
「宜しいのではないでしょうか」
「総監はそうお考えなのですね」
「はい」
謹厳な声で八条の言葉に頷いた。

# 第三十五部第三章　教育者その十九

「これは。ただ」
「ただ？」
「より具体的なものにしていく必要があります」
こう言うのだった。
「まずは軍規軍律です」
彼は言った。
「軍に必要なものはです」
「そうです。その通りです」
それはそのまま八条の考えであった。軍に絶対の軍規軍律を求めそれを徹底させる、彼はそれをまず徹底的に意識しているのである。
「だからこそのこの研修の導入です」
「そしてその研修ですが」
また元帥が言ってきた。
「ただ研修に行かせるというのではなく」
「何処に行かせるか、ですか」
「はい。そしてです」
彼はさらに八条に対して述べるのだった。
「それには一ついい場所があります」
「そのいい場所とは」
「教会です」
まず述べたのは教会であった。
「そして寺院。つまりは」
「宗教施設ですか」
「それが宜しいかと」
「しかし総監」
この意見に対してはすぐに背広組の方から声があがるのだった。
「無闇に宗教関係を利用するのは」

「そうです、それはどうかと思うのですが」
こう意見があがった。背広組全員ではないがそれなり以上の数が反論してきた。
「政教分離に反します」
「それにつきましては」
「別に特定宗教ではありませんが」
元帥の方は落ち着いて彼等にこう反論するのだった。
「別に」
「特定の宗教ではないのですか」
「といいますと」
「軍人にはそれぞれの宗教があります」
連合の特色として宗教的にかなりモザイクになっているというものもある。宗教に関しては連合は極めて寛容であると共に非常に入り組んでもいるのだ。
「ですからそれぞれの宗教に向かってもらうのです」
「それぞれの宗教に軍がお金を出してですか」
「それもかなり」
やはり政教分離に反するというのである。これまた実に厄介な問題であった。
「いえ、それも解決案があります」
「あるのですか？」
「何も返すものは金銭だけではありません」
総監は言うのだった。
「他の手段もあります」
「といいますと」
「軍としてはここは」
「はい、労働奉仕です」
これが出て来るのだった。言うまでもなく軍人は身体が資本である。また土木作業や様々な肉体労働も非常に多い。従ってその筋のプロフェッショナルでもあるのだ。

「それで賄わせて頂きます」
「ふむ。それですか」
「それならば」
背広組の反対派もこれで納得に傾いたのだった。
「問題はないかと」
「そう思います」
こう答えるのだった。
「金銭でないならば」
「奉仕ということなら」
「もっともかなり使われるでしょうが」
お金がなければその分、ということでありこれは最初から想定していることであった。総監の方もそれを充分に想定して話しているのである。
「それはそれでいいことです」
「それだけ軍のイメージがあがるということですか」
「そうです。その通りです」
総監は背広組の一人の言葉に対して納得した顔で頷いてみせた。
「軍としてはです。イメージアップにもつながりますし」
「それに軍人と民間人の交流の場の一つにもなりますな」
「これはいいことかも知れませんな」
背広組の慎重派もこれで納得してきたのだった。
「何しろ軍のイメージアップこそが重要ですから」
「市民に我々のことをよく知ってもらわなければ」
こう考えるのが連合軍の特徴である。連合軍はまず市民に人気があり愛される軍であることを目指している。この辺りが実にお役所ではありそして市民軍である証拠であった。市民出身だからこそ市民に人気がないと困るのだ。ただし彼等はヒーローではなかった。

## 第三十五部第三章　教育者その二十

「よく怪獣映画では倒されていますしな」
「そういうあまり強く思われていないイメージはいいとしてです」
こういう評価は連合内に根強い。市民達は連合軍を強いとはあまり思っていないのだ。その主な仕事はイベントの催しや災害救助だと思っている市民も多い。
「それを考えましたらやはり」
「それで宜しいかと」
「はい、それではです」
総監は笑ってはいない。しかし声は納得したものであった。
「そのように」
「ボランティアをしない宗教団体なぞありませんからな」
「丁度いいですな」
彼等はまたそれぞれ言い合った。
「そう、実に」
「軍規軍律の実習にもなりかつ市民との交流にもなる」
このことが一つになって語られた。
「いや、これはまたいいことです」
「総監の御意見に賛成です」
「有り難き御言葉。それでは」
総監はここでまた頷き。そうしてそのうえで八条に顔を向けて言うのだった。
「長官、これで宜しいでしょうか」
「はい」
八条は今まで黙って聞いていた。そしてそのうえでまた述べるのであった。
「私はそれで」
「それではです」

総監は彼の言葉に対しても頷いた。
「そのように」
「ええ。では決まりですね」
「はい、宗教施設へのボランティアによる研修」
それがあらためて話されるのだった。
「それで宜しいかと」
「派遣先は軍人それぞれの信仰する宗教団体」
「これで」
ここまで話される。しかしここで制服組の一人が言うのだった。見ればその金モールは大将のものである。教育部においてかなりの重鎮であることがその階級からわかる。
「しかしです」
「しかし？」
「何かあるのですか？」
「おおむねはいいのですが」
彼はまずはこう言ってきた。
「ですが。信仰している団体が複数であった場合は」
「おっと、そうでしたな」
「それは多くあります」
「実は私も」
「私もです」
場がまた一斉に騒ぎだした。連合では一人が複数の宗教を信仰しているのが普通である。連合の人口は四兆だがその宗教人口は十五兆になっている。一人が複数の宗教を信仰しているからこそだ。その中には個々の宗教団体の誇張もあるにしろそれでも連合の人口を遥かに超えるものとなっているのである。
「確かにその場合は」
「どうしましょうか」
「そうですね」
ここで八条がまた言うのだった。

「それでしたらここは個々の将兵の選択に任せましょう」
「どの宗教に向かうかはですか」
「選んでもらうと」
「そうです。そうしましょう」
これが八条の提案であった。
「それで如何でしょうか」
「そうですね。それですと」
「問題はありません」
宗教団体間の取り合いを事前に防ぐという狙いもあった。彼はそこまで考えてそのうえで提案したのであった。八条の慧眼であると言えた。
「ではそのように」
「するとしましょう」
「はい、それではこれで」
また話が決まったのであった。
「選択ということで」
「そうしましょう」
「ではこの件も決定ですね」
八条は背広組、制服組双方の言葉を聞いたうえでまた述べた。

## 第三十五部第三章　教育者その二十一

「国防省としましては」
「はい、ではこれで」
「終わりで宜しいかと」
「そうですね。ではマエグサ元帥」
「はい」
「本日はお疲れ様でした」
総監の名を呼びこう声をかけたのであった。
「それでは今日はこれで」
「わかりました。それではです」
「今日の会議は終わりです」
議長としての言葉であった。
「それで宜しいですね」
「はい、私はこれで」
「私もです」
誰もこれで反論はなかった。そうしてそのうえで語るのだった。
こうして会議は終わった。それから暫くして軍でのそうした研修がはじまった。八条はその報告を細かく聞くのであった。
「ではおおむね成功なのだな」
「はい」
秘書である木口が彼に述べていた。
「全体としまして」
「そうか。ならいい」
八条は彼の言葉を聞いてまずは納得した声で返した。
「それはな」
「しかしです」
だがここで木口がまた彼に言ってきたのだった。
「軍人の間からは不満がないわけでもありません」

「不満とは？」
「主に食生活のことに関してです」
それだというのである。
「それに対する不満が出ています」
「食生活にか」
「これもまた宗教によって様々ですが」
この前置きのうえで述べられる言葉であった。
「殺生を禁じている宗教もありますので」
「ああ、そうだったな」
八条も彼のこの言葉で全てを察したのだった。
「肉食や飲酒か」
「はい、まさにそれです」
やはりそれであった。連合では仏教も多い。マウリアでは仏教はヒンズー教の一派と考えられているが連合では仏教は仏教として考えられている。
「それですが」
「魚や肉を食べず酒を飲めないことが不満とのことです」
「それも当然か」
八条はそれを聞いて納得した声を出した。
「不満があがるのもな」
「やはり軍人の食事は栄養価が高いものになります」
身体を動かすからそれは当然のことである。実際にカロリー計算をして出される食事はかなり高めのカロリーに設定されているのである。
「それに対して僧侶のそれは」
「穏やかなものになるな」
「これは極端な例ですが」
また一つ前置きが為された。
「禅宗は玄米のお粥だけです」
「流石に今はそれは朝だけらしいな」

「はい、そのようです」
時代によって食事が変わるのは当然のことである。禅宗といえどもこの時代は流石に毎食そうした玄米の粥だけとはなってはいないのである。
「他には蒟蒻や野菜のカレー等もありますがやはり質素です」
「そこに軍人が入るとなると」
「やはり不満を抱くのは当然かと」
そうなるのが当然であった。
「ですから主に仏教の戒律の厳しい宗派に研修に入った軍人達から不満の声が出ています」
「しかもお酒もなしでか」
「まあお酒に関してはです」
木口が少し考える顔になって述べた。
「あれです。一応は抜け道もあるのですが」
「般若湯か？」
「はい、それです」
それだというのである。
「それで何とか我慢してもいるようですが」
「あとは精進酒か」
これは中国の道教の言葉である。

## 第三十五部第三章　教育者その二十二

「そうやって抜け道を使ってだな」
「はい、何とか我慢してくれています」
酒に関してはなのだった。実際のところ酒がないわけではないし飲まないわけではない。あの上杉謙信も毘沙門天を篤く信仰し生涯妻帯しない程その信仰は篤いものであったがそれでも酒を愛していた。出家して僧侶ということになっても酒は飲んでいたのだ。
「ですがカロリーが」
「そこは我慢してもらうか」
八条はそれに対しては仕方がないといった感じであった。
「研修ということでな」
「そうですか。そのように」
「量については何も言ってはいない」
それは誰も制限していなかった。
「それで我慢してもらおう」
「わかりました。それでは」
「朝も夜も早いのも研修のうちだ」
宗教家の朝は何処も早い。豆腐屋に魚屋、それと宗教家の朝が早いのはこの時代においても同じである。これが変わることはないのだ。
「だからそれもな」
「それについては不満はないようです」
木口はこれについては大丈夫だというのだった。
「生活に関しては」
「それは我慢できるか」
「軍人も彼等程ではありませんが朝が早いですし」
「そうだな」
これは八条もよく知っていることだった。

「総員六時に起きる」
「はい」
起床時間はもう決まっているのだ。
「五分前には声が出てそうして六時になると起床ラッパが鳴る」
「そうして起きて」
「そうだ、すぐに着替えて整列だ」
軍ではこうなっている。このことは不変である。
「だからそれは困っていないのか」
「安心していいそうです。それは」
「そうか。それは何よりだ」
それを聞いて安心した声を出す八条だった。
「それはな」
「はい、それどころか朝から起きて身体を動かさないだけまだいいそうです」
そして木口は今度はこんなことを言った。
「体操にランニングに」
「それも軍の常だからな」
やはり常に身体を動かすということなのだ。軍だからこそだ。
「それがないからか」
「低血圧の者には特に有り難いそうです」
「朝起きればまず礼拝をしてそれから掃除だったな」
「そうです」
これが宗教家の朝だ。朝起きてからそうして穏やかに一日をはじめるのだ。
「そうした朝が穏やかとのことです」
「どうも話は一長一短ということのようだな」
「実際のところ肉や魚は街に出て食べているそうです」
「それ位はいいな」
八条は決して堅苦しい男ではない。その程度のことは何でもないとしていた。

「外で何を食べようがな」
「そうですね。それはですね」
「どうでもいいことだ。それではだ」
「はい」
「全体として上手くいっているのだな」
こう木口に対して問うのだった。
「この研修は」
「そうですね。満足すべきかと」
木口も実際にこう述べるのだった。
「今の状況は」
「わかった。それではだ」
「どうされますか？」
「このまま話を進めていこう」
こう決定したのだった。
「それでな。これでいいか」
「はい、いいと思います」
木口もまた彼の今の言葉に頷いた。
「それで」
「よし、それならばだ」
八条は彼のその言葉を聞いてまずは納得した顔になった。

## 第三十五部第三章　教育者その二十三

「このまま続ける。それでな」
「それで長官」
「うむ」
「この研修であらためて中々面白いことがわかりました」
今度はこんなことを言うのであった。
「宗教のことに関しまして」
「面白いこととは？」
「実際に奉仕活動を多くする宗派と学問に重点を置く宗派があるものなのですね」
「それか」
「はい、例えばプロテスタントのカルヴァン派の中にある一派ですが」
まずはその一派について述べられるのだった。
「彼等はあくまで奉仕活動に重点を置いていまして」
「必然的にそれが街の清掃等になるな」
「そうです。そこに入った者達は身体を動かしてばかりです」
掃除だからである。これは当然のことだ。
「そして禅宗の一派になるとです」
「座禅を組むことが中心だな」
「そして学ぶことがです」
こうなるのだった。
「中心の一派もあります」
「その辺りは宗派によって様々か」
「そして宗教によって」
あらためてこのことを確認することにもなったのだった。
「かなり違いますね」
「そのようだな。確かにな」

八条は頷く。そうしてそのうえでさらに考えそれから述べた。
「それでだ」
「はい、何でしょうか」
「これを拡大していきたいものだ」
こう述べるのだった。
「よりな」
「といいますと？」
「宗教団体ではなくボランティア団体への研修もいいと思うのだが」
これが彼が今持った考えであった。
「ボランティア団体へのだ。どうだ」
「そうですね。いいと思います」
木口もこれには手放しで賛成することができた。
「宗教団体もいいですがそうしたボランティア団体も」
「双方は密接に関わっている場合も多いしな」
「ええ。宗教とボランティアはまさに同じものである」
宗教団体といえばボランティアである。この考えは連合だけではなくエウロパにもある。宗教的倫理観がそのままそういった方向に向かうからなのだ。
「ただしだ」
「ただし？」
「宗教団体もそうだがボランティア団体は選ぶか」
「カルト教団を排除したようにですね」
「そういうことだ」
実はこの研修ではあらかじめ派遣先の宗教団体はチェックしているのである。そうしてそのうえで派遣しているのである。カルト教団というものはどの時代にも存在している。残念なことに。
「そうしたボランティア団体は排除していく」
「はい、そうしましょう」
「中には怪しい市民団体が運営している場合があるからな」
ここで八条の目が曇った。

「嘆かわしいことにな」
「そうした団体はわりかしありますしね」
木口の目もまた八条と同じものになってしまっていた。
「連合にも」
「三百以上ある連合のどの国にもある」
八条は言葉までも曇らせたのだった。
「そうした団体は常に逮捕していてもだ」
「次から次に出て来ます」
「総数は減っている筈だ」
八条は言うのだった。
「彼等と結託している宇宙海賊やテロリストは根絶していってるのだからな」
「最近では地下に潜伏もしているようです」
「それでは軍は特殊部隊、そして警察の仕事か」
「中央警察もまた特殊部隊を編成しておりますし」
そのうえで地下に潜伏しているそうした勢力にあたっているのである。こうした対処もどの時代でも同じだ。そしてその鼬ごっこもである。

## 第三十五部第三章　教育者その二十四

しかし。それでもしなくてはならない。さもなくては国家の治安は保てないからだ。何もしないよりはする方がずっといいのも事実なのだ。
「対策は行っておりますが」
「相手も悪質化しているか」
「総数はかなり減りました」
これは事実である。
「そして凶悪な海賊やテロリストに対しては」
「処刑だな」
「その通りです」
連合では常である。凶悪犯に対しては酸鼻を極める処刑が待っている。八つ裂きや鋸引きなぞはまだ甘い方であり他にも多くの惨たらしい処刑があるのだ。
「それについてはです」
「それでも。消えてはいないか」
「完全には」
これもまた現実なのだった。
「消えていません。だからこそです」
「一度こちらも仕掛けてみるか」
「といいますと」
「あえてそうした団体に研修に送る」
八条の言葉が剣呑なものになった。それは工作を語る声であった。
「その研修に派遣するメンバーはだ」
「スパイというわけですね」
「そうだ。向こうはその派遣した人間を洗脳しスパイにしようとするが」
「そもそもこちらがスパイであると」

「つまりダブルスパイだ」
これもまた古来からある。スパイが実は向こうのスパイだったというようなことは。最も有名なのはＭＩ６のメンバーだったキム＝フィルビーである。彼はイギリスの諜報機関にいながら実はソ連の共産主義に傾倒したダブルスパイであったのだ。冷戦中にはそうした話がかなり多い。
「それを仕掛けようと思うのだがな」
「それも宜しいかと」
木口は今度も八条の言葉に応えて頷くのだった。
「策を仕掛けるのもまた」
「そうだな。では仕掛けるか」
八条は木口の賛成を受けてまた目を光らせた。
「そのようにな」
「はい。それにしてもです」
木口はここで一呼吸置きそのうえでまた述べたのだった。
「様々な組織があるものですね」
「いい意味でも悪い意味でもな」
「はい、全くです」
あらためてこう言うのである。
「よくもまあこれだけですね」
「その中からいいものと悪いものを見分けてそれぞれの対処を行う」
八条の言葉は続く。
「それだな。やはりな」
「いいものには入り悪いものは排除していくと」
「その通りだ。ただリトマス紙はある」
「それもあるのですか」
「宗教団体ならばカルトはまず教祖が怪しい」
まずは教祖なのだった。
「やたらと性や金に汚い」
「確かに」

木口もこれにはすぐに察しがいった。
「それが本来の目的だから当然ですね」
「そういうことだ。少し調べればそうしたことが次々に明るみに出る」
カルト教団とはそうしたものである。例えば二十世紀末期の日本に現われたオウム真理教がそうである。教祖である麻原は愛人を多く持ち多くの子を産ませた。そのうえ金銭欲も非常に強い男であった。この男は他にも権力欲やそういったものも非常に強くそれが為にサリンを撒きテロを起こした。なおこの時にこのオウムに破壊活動防止法を適用せずに法律的に無理があると指摘されるオウム新法を適用したことは後世の批判の的となっている。この時もまた当時の日本の知識人達が蠢いていた。
「次々にな」
「あらゆる団体がですね」
「またそうした教団程その戒律自体は厳しい」
「しかし実態は、ですか」
「そうした腐り果てているものが多い」
まさにばっさりと切り捨てた口調であった。

## 第三十五部第三章　教育者その二十五

「実際はな」
「市民団体も同じですね」
「市民団体はそこに怪しげな政治思想がある」
「戒律のかわりにですね」
「それがリトマス紙になる」
つまりリトマス紙は他ならぬ彼等ということであった。
「それ自体がな」
「そういうことですか」
「そういうことだ。カルトはどうかは他ならぬ自分達が宣伝してくれる」
「まずはそれを見よというのですね」
「そのうえで対処する」
話はこうなるのだった。
「そのうえでな」
「わかりました。ではそうした団体もチェックしていくのですね」
「只の金儲けならまだ可愛げがある」
とはいってもその言葉には侮蔑したものがあった。
「まだな」
「問題はそこに怪しげがものが加わった場合ですか」
「自由と人権を叫ぶ人間程それをないがしろにする」
八条が今度出した言葉はこれであった。
「これは確か」
「二十一世紀初頭の我が国での言葉です」
「誰が言ったのかはわかっていないな」
「はい、それはわかっていません」
こうした言葉も連合には残っているのである。
「ですがこれは事実です」

「そうだ。自由と人権を叫ぶのは己の主張を押し通す為だ」
だからこそ声高に主張するというのである。反論を封じ込めると共に。
「そして加害者こそ自分を被害者と言う」
「その通りですね」
「こうした輩はどの時代のどの国にもいるな」
「民主主義の負の部分ですね」
「しかもだ」
その負の部分への言葉が続く。
「そうした輩こそ言論弾圧を行うな」
「卑劣な話ですが」
「卑劣だからこそか」
八条はふとこうも思うのだった。
「だからこそ自分達の主張を押し通し異論を認めない」
「そして目的の為には手段を選ばない」
「その通りだ」
まさしくその通りだった。
「そうした輩はな」
「しかしそうした輩こそわかりやすいですね」
ここで木口はこうも言うのだった。
「実に」
「わかりやすいか」
「はい、あまりにもダブルスタンダードですので」
だからだというのである。
「その主張が」
「ダブルスタンダードだからか」
「実にそうではありませんか？」
そして八条に対しても話すのであった。
「彼等のその主張は残ります。それを検証すればすぐです」
「確かにな。この話の発端になった教師にしてもだ」

「あまりにも主張がダブルスタンダードです」
そうした教師もまた実に多いのである。この時代もだ。
「自由が人権を謳いながらその自由や人権を抑圧しようともいう言葉を出すのですから」
「そうだな。確かにな」
その言葉に頷く八条だった。
「彼等はな。実にわかりやすい」
「卑劣でかつ全体主義だからこそわかりやすいのかと」
「全体主義者が卑劣とは限らない」
八条はふと全体主義者を認めるような言葉を出した。
「全体主義者の中に卑劣な輩もいるということだ」
「そうなるのですか」
「どの思想にも卑劣な輩は内包されている」
「民主主義者にもまた」
ここで気付いた木口だった。
「そうなりますね」
「自称であってもな」
八条はかぎ括弧をつけてみせてきた。
「そうだ。どの思想の中にもいる」
「そうですか。やはり」
「卑劣なことにも度合いはあるにしろだ」
ただ卑劣だというのではなかった。そこには度合いがあるというのである。

## 第三十五部第三章　教育者その二十六

「卑劣を極める輩もいる」
「極めるのですか」
「そうだ、善行にも度合いがあるように悪行にも度合いがある」
それは一言では言い表すことはできない。善にも深みがあり悪にも深みがある。世の中はそういうものだ。そして卑劣こそが悪と言うべきものなのだ。
「実にな」
「では彼等は悪ですね」
「そうだ。その悪は何処にも内包されている」
「人は大なり小なり卑劣でもありますが」
「それは良心で抑えられている」
普通の人間はそうである。
「しかしそれで抑えない者もいる」
「それが悪だと」
「そうした輩には私としてはだ」
「長官としては？」
「容赦してはならないと思う」
具体的にはそれがテロリストや宇宙海賊への徹底した掃討になっているのだ。連合軍のそうした組織への攻撃は激しいことでも有名なのだ。
「断じてな」
「罪科を犯しているならば」
「そうだ。だからだ」
「はい」
「そうした市民団体も炙り出していこう」
話は具体的な内容に戻った。
「こちらも策を仕掛けてな」

「そうですね。それではそのように」
「進めていく。人員も選ぼう」
「それでしたら諜報部から選びますか」
「そこから選りすぐっていくとするか」
八条の考えはすぐにそこに至るのだった。
「ダブルスパイはな」
「それで一つ考えているのですが」
木口がここでまた言ってきた。
「用心すべき点ですが」
「思想的な洗脳か」
「はい、それです」
彼がここで危惧を述べるのはこのことだった。
「洗脳ですが」
「それに抵抗のある人員でなければならないな」
「見破られないことも重要ですが」
それもだというのである。
「これを併せ持った人員を送りましょう」
「そうだな。さもなければ作戦は失敗する」
見破られればそれで終わりである。これは諜報活動の当然の結末である。そうして失敗した諜報活動も枚挙に暇がないのである。
「だからこそだな」
「人員の選定が最も重要かと」
木口の言葉がさらに引き締まる。
「ですから」
「わかった。それではまずはそれをだ」
「選ばれるのですね」
「念入りにな。もっとも宇宙海賊やテロリストの掃討はこのまま続けていくが」
「それと並行して」
進めていくというのである。作戦は一つではなかった。

「行っていきましょう」
「はい。しかしそれにしても」
ここで木口は溜息を出したうえで言葉を出すのだった。
「一人の愚劣な教師の騒動が実に大きなものになっていますね」
「確かにな」
そしてそれを認めて頷く八条だった。
「それもかなりな」
「我々にも及びましたし」
「話は一つでは終わらない」
八条はここでまた言った。
「一つではな。折り重なる時もある」
「ドミノの様に」
「そうだな。ドミノだな」
木口の今の言葉にすっと笑いもした。
「世の中はな。ドミノでもある」
「それでもありますか」
「そうだ。そして思いも寄らぬ結果を導き出していく」
そうもなっていくのだった。

## 第三十五部第三章　教育者その二十七

「我々にしてもそうだった」
「そうですね。まさかこんなことになるとは」
また溜息と共に言う木口だった。
「流石に予想もしませんでした」
「しかもループもしている」
八条はそこも指摘した。
「あの処刑された暴力教師が所属していた組合にしてもだ」
「はい、やはりテロリストや宇宙海賊と関係がありました」
そうだったのである。
「そしてエウロパの影もありましたし」
「エウロパの工作が見られたのは戦役以前だが」
そのエウロパとの戦い以前のことである。エウロパは工作活動を行い連合のそうした組織とつながっており彼等に連合内部を撹乱させてもいたのだ。
「それでもな」
「つまり売国勢力でもあったのですね」
「残念ながら往々にしてあることだ」
八条の言葉が忌々しげなものにもなった。
「自由や平和を謳う売国勢力もな」
「奴隷の自由であり平和ですか」
「河野洋平か」
この時代の日本人にとっては実に忌々しい名前であった。
「あの男にしろそうだったな」
「ええ、確かに」
「あの男は不思議な男だった」
珍しく嫌悪感を見せる八条だった。
「実にな」

「確かに不思議な男です」
彼の言葉に木口も応えて頷くのだった。
「国の重職に就けば必ず国益を損ねていましたから」
「しかもだ」
さらに言う八条だった。
「従軍慰安婦然り不発弾の処理然りだ」
「我が国の恥を助長する形で」
害したのである。国の要職にあると常になのだった。
「そうなるのですから」
「あの男については歴史の評価ははっきりしている」
「はい」
それはもう既になのだった。河野洋平といえばまさに国賊、売国奴の類として歴史に名を残している。この男については連合の歴史においても反面教師とされている。
「あの男のようにはな。なってはいけない」
「国賊にはですね」
「そういうことだ。そしてあのような男を出さないのも教育だ」
それもだというのだった。
「それはいいな」
「はい、勿論です」
「それではだ。また仕事だ」
ここまで話してそのうえでということだった。
「書類はどれだけあるか」
「はい、これだけです」
木口が応えながら出してきた書類は厚さが何センチもあるファイルだった。いきなりそれだけのものを彼に対して出してきたのである。
「このファイルを」
「これ一冊か」
「とりあえずはこれだけです」

こう述べるのだった。
「あくまでとりあえずですが」
「とりあえずか」
八条はそれを聞いて難しい顔をしていた。
「ではまた来るというのか」
「書類が消えることはありません」
木口は苦笑いと共に述べるのだった。
「ですから。覚悟はしておいて下さい」
「もう慣れたとはいえ物凄い量だな」
溜息と共に応える八条だった。しかし溜息は出しているがそれでもそのファイルは受け取る。仕事は忘れないということであった。
「それではだ。早速な」
「はい、御願いします」
「本当に仕事はなくならないものだ」
言いながらも受け取ったそのファイルを開きはじめた。
「これが終わってもまたすぐに来るものだからな」
「はい、それでは御願いします」
話を終え仕事に戻る八条だった。仕事は終わらない。だがそれでも彼は黙々とこなしていた。何故ならそれが彼のやるべきことだからだ。

# 第三十五部第四章　軍律研修その一

軍律研修

その軍規軍律の研修に送られた連合軍の将兵達であるが。彼等はかなり早い朝を送っていた。

「天にまします我等が神よ」

ある者達はキリスト教の教会にいた。そうしてそこで神父の言葉を聞きながら跪いていた。軍服ではなく作業服でだ。その姿で跪いていたのである。

「どうか我等に御守護を」

「アーメン」

「アーメン」

こう祈りが捧げられる。そしてそれが終わってから作業であった。皆その作業服のまま礼拝堂を出てそのうえで手に手に箒を取る。その箒でそれぞれ掃除をしていく。

「何かよ」

黒髪でアジア系の顔の若い兵士が言った。階級章は上等兵のものである。

「俺達って朝早いだけでやってること同じだよな」

「だよなあ、確かに」

同じ上等兵の階級の青い目の兵士が応えてきた。二人は箒を手にしている。

「朝起きて掃除ってな」

「教育隊にいた頃と同じじゃねえか？」

「全くだぜ」

こんなことを言いながらも手の動きはしっかりしている。そうしてその手でせっせせっせと掃除を行っている。動作自体は極めて真面目だ。

「つまりあれか？もう一回教育受けろってことか？」

「そうかもな」
碧眼の兵士は黒髪の兵士に応える。
「結局俺達はよ。身だしなみにマナーは徹底しろってことだろ」
「他はどうでもよくてか」
黒髪の兵士が今度言ったのはこのことだった。
「俺達はよ、まずはそれってことかよ」
「軍隊って戦うのが目的じゃなかったのか？」
碧眼の兵士が今度はこう言った。
「しかしな、俺達がやってるのってはよ」
「アトラクションのアシスタントに救助作業に市民との触れ合いだよな」
「それでこれだよな」
続いて今の自分達がやっていることについて話すのだった。
「こうやってボランティアな」
「だけだよな」
「宇宙海賊とかテロリストへの掃討もあるけれどな」
一応はこれがメインということにはなっている。しかしなのだ。
「いつも数で押し潰すからな」
「敵が一だとしたら百送り込んでな」
これが連合軍の掃討戦である。徹底的に圧倒的な数を送り込みそのうえで殲滅するのである。絨毯的な集中攻撃も得意としている。
「それだからな」
「で、今やってるのがボランティアか」
「何だこりゃ」
彼等はあらためて話すのだった。
「軍気軍律を身に着ける為なんだよな」
「らしいな」
これは皆よくわかってはいた。
「で、こうやって来る日も来る日もボランティアか」
「掃除ばっかだよな」

結局はそれがメインとなっているのだった。ボランティア活動といえばどうしてもそれが主になってしまう。だからこそ彼等も今これを行っているのだ。
「何かよ」
「飯もなあ」
碧眼の兵士はここで困ったような声を出した。
「どう思うよ」
「どう思うって飯がかよ」
「まずいよな、はっきり言って」
やはり言うのはこのことだった。
「教会の飯ってよ。イギリスのよりましだけれどな」
「そうか？カナダの飯よりましだろ」
しかし黒髪の兵士はこう返すのだった。
「カナダのよりはよ」
「あのぱさぱさして水じゃないと流し込めないパンでもかよ」
「ああ、ましだ」
こう言うのである。
「もうな。全然ましだぜ」
「カナダの飯はそんなにまずいのかよ」
「何でカナダあそこまで目立たないかわかるか？」
黒髪の兵士は真顔で戦友に尋ねてきた。なおカナダといえばその国力の割りに非常にマイナーな国家として連合で知られている。これは二十世紀から変わらない。
「何でだと思う？それはよ」
「飯がまずいからか」
「あるのはメイプルシロップだけだ」
また随分な言われようだ。しかしこの時代においてもこう言われているのも事実だ。
「あと何あるんだ？」
「何かあるんだろ？」

こう返す碧眼の兵士の言葉も投げやりだ。彼にしろわかっているのだ。
「多分な」
「そうだな。あるんだろうけれどな」
「それは見えないっていうのか」
「全くな」
やはり実に酷い言葉であった。

## 第三十五部第四章　軍律研修その二

「少なくとも俺は知らない」
「飯がまずい以外はかよ」
「飯がまずいと誰も相手にしねえよ」
少なくともそんな料理店には客が来ない。ただしあまりにもまずければそれがかえって人を集める結果になったりもする。所謂怖いもの見たさである。
「そういうことだよ」
「そうか、カナダは飯もまずいのか」
「教会の飯よりずっとまずい」
ここまで駄目押しをする黒髪の兵士だった。
「だから俺はまだ平気さ」
「そんなものか」
「しかし味気ないのは事実だな」
黒髪の兵士もそれは認めるのだった。
「随分とな」
「飯だけじゃなく生活自体がな」
「何であんなに薄味なんだ？」
黒髪の兵士はそれでも言うのだった。
「教会の飯ってよ」
「それはあれだろ？」
碧眼の兵士が答えるようになっていた。役が替わっていた。
「だから。禁欲なんだろ」
「だからか」
「それしかないだろ。カトリックって結構厳しいところもあるしな」
とはいってもプロテスタントの一部の宗派よりは遥かに寛容である。その寛容さがカトリックを世界的な宗教にしている理由の一つでもある。

「流石に軍隊の食事みたいにはいかないだろう」
「それもそうか」
黒髪の兵士は戦友の言葉にまた納得するのだった。
「俺達って汗かくしな」
「だったらそれだけ塩とか必要だろ？」
「だよな、確かに」
その通りだった。軍人は身体を動かして汗をかくものである。だからこそその味付けもかなり濃いものになるのである。何時の時代も軍人は汗をかくものだ。
「俺達毎日トレーニングも課せられてるしな」
「ああ」
これは身体を鍛える為に当然のことであった。
「だったら味付けもな」
「塩とか砂糖が多くなるか」
「その通りだろ。だから教会の飯も味気なく思えるんだろ」
「そういうことか。納得はしたぜ」
黒髪の兵士はこれで話がわかった。
「しかしな。それでもな」
「寂しいんだな、やっぱり」
「酒もワインばかりだしな」
キリストの血だ。だからこれは飲まれるのである。
「もっと強いよ、リキュールが飲みたいだけれどよ」
「俺はビールだな」
碧眼の兵士が所望するのはそちらだった。
「祖国じゃもうな。ビールばかりだしな」
「ああ、御前の国はオーストラリアだったな」
「そうさ」
碧眼の兵士は戦友の言葉に楽しそうに笑って述べた。
「オーストラリアはよ、もうビールばかりなんだよ」
「ワインもあるだろう？」

「あるけれどメインはやっぱりビールなんだよ」
そうなのだった。とにかくオーストラリアはビールなのだ。これも二十世紀の頃から同じである。オーストラリアはビールが主な酒なのだ。
「だからな。ビールがな」
「飲みたいんだな」
「そうだよ。御前はリキュールなんだな」
「そうさ」
今度は黒髪の兵士が笑って述べてきた。
「俺の国はフェニキアだけれどな」
「酒は何でもいいのか」
「フェニキア人はどの酒にこだわるってのは国としてはないんだよ」
こう述べるのだった。
「実はな」
「へえ、そうなのかよ」
「俺はリキュールなんだよ」
そして彼は自分について言った。
「それもな。ラム酒とかがいいな」
「随分と安酒が好きなんだな」
「あとはコニャックな」
どちらにしろ強い酒が好きであるらしい。

## 第三十五部第四章　軍律研修その三

「ワインじゃ弱くてな。もっと強い酒はないのかね」
「だったら夜に飲みに行くか？」
碧眼の兵士がこう提案してきたのだった。
「いっちょな」
「ああ、いいな」
そして黒髪の兵士もこれに乗るのだった。彼にとってもいい話だからだ。
「それにしてもな。修道院だったらビールもあるんだよな」
「修道院じゃ昔から自分達で作ってるしな」
「そうだよな」
これは中世から変わってはいない。修道院ではビールを作って飲んでいるのだ。ただしこの時代ではそうして作られたビールは販売は禁止である。
「それ好きなだけ飲めるんだよな」
「羨ましい話だよ」
ビールが好きという碧眼の兵士にとっては実にそうであった。
「ビールとな。マトンを焼いてな」
「マトンか。ラムじゃなくてか」
「あの匂いがいいんだよ」
碧眼の兵士の言葉がいよいよ明るいものになった。
「ステーキにしてもな。茹でてもな」
「ああ、脛肉を焼くんだな」
「それだよ。あれが最高なんだよ」
声がいよいよ上機嫌に笑ってきた。
「もうよ。あれでビールを好きなだけ飲むってのがいいんじゃねえか」
「俺はまあコニャックとかをナッツみたいなのを肴にな」

彼は言うのだった。
「一杯やるんだよ、ちびちびとな」
「御前って飲み方は結構静かなんだな」
「悪いか？」
このことを碧眼の兵士に問い返す。
「そういう飲み方もいいだろ」
「まあな」
碧眼の兵士もその飲み方は否定しなかった。
「そうした飲み方もな」
「そうだな。じゃあまた飲むか」
「ああ、夜に外に出てな」
「楽しみにしておくか」
そんな話をしているとそこにやって来たのは。同じく研修を受けている下士官だった。二等軍曹の階級を付けた作業服を着ている。兵士達はその彼の姿を見て一斉に敬礼した。
「うん、皆よくやっているな」
かく言う彼も大きなピンセットとゴミ袋を持っている。何に使うのかは明白だった。
「これも訓練だ。頑張ってくれよ」
「はい、まあ」
「頑張っています」
「しかし何だ？」
だがここで軍曹は兵士達の言葉が今一つ弱いのを聞いて眉を顰めさせた。
「あまり嬉しそうじゃないな。いや、元気がないな」
「いえ、別に」
「何もありません」
しかし彼はここでこう返すのだった。
「そうは見えないな。朝が早いからか？」
「それは別に」

「何でもありません」
それでも声に今一つ元気がないのは間違いなかった。
「食べ物か？」
軍曹はその原因をそれではないかと考えたのだった。
「ではやはり」
「そのようだな」
ここで来たのは年配の男だった。見れば准尉の階級だ。その彼が来たのだ。作業服はダークパープルだ。士官の作業服だった。
「あっ、准尉」
「教会の食い物はな。とかく精進したものになっている」
順位は軍曹の敬礼を受けたうえで述べるのだった。
「それは肉や魚があるとかないとかではなくな」
「やはり軍のものとは違うということですね」
「だからだ。それに慣れていないからだな」
准尉は言うのだった。
「だから今一つ元気がない」
「その為ですか」
「しかし。それがいいのだろうな」
ところがここでこうも言うのだった。

## 第三十五部第四章　軍律研修その四

「それがな」
「元気がないのがですか」
「言い換えればあれだ。宗教の世界に入ってきている」
こうなるというのである。
「そして静かに軍規軍律を学ぶことができる」
「静かになのですか」
「そうだ。静かにな」
こう述べるのだった。
「頭や身体の中に入っていく」
「確かに」
そしてこのことに軍曹も納得できるものがあった。
「軍の中では何処か固く入っていくものですが」
「こうした中では違うな」
「はい」
軍曹もその言葉に頷く。
「その通りです」
「これもいいものかもな」
「規律を頭の中に入れるうえではですね」
「無論これだけでは駄目だがな」
やはり彼等は軍人だ。軍人には軍人のやり方がある。だからこれは彼等にとってはあくまで特殊なケースなのだ。彼等はこのこともよくわかっていた。
「それでだが」
「何かありますか？」
「どうもな。馴染んでいない者もいるが」
「それは仕方ないでしょう」
このことは准尉も軍曹も察知しているのだった。

「やはりそれは」
「軍と宗教はまた違うものだからな」
「はい、そうです」
かつてはどうだったかはわからない。テンプル騎士団のような例もあるしかつては教皇庁も軍も持っていた。宗教組織も軍を持つことがあるのだ。
「ですからやはり馴染まない者がいてもだ」
「わしにしろそうだ」
そして准尉はそれは自分もだというのだった。
「わしはずっと軍にいたからな」
「だからですか」
「今こうした研修を受けてもな」
こう苦い顔で話していく。
准尉といえば一兵卒からあがっていく階級である。しかも大抵は一般公募からだ。下士官候補生ならば二年で下士官になりそこから将校になっていく。そして下士官補士ならば三年、長くて七年でなっていく。こちらも将校になれることが多いのだ。
だが一般はそのまま歳月をかけて下士官になりそこから少しずつあがっていく。そうしてそのうえであがっていく。その頂点が准尉なのだ。
「やはり馴染めない」
「それは軍に合っている者程のようですね」
「軍は確かに特殊な世界だ」
准尉はこうも言うのだった。
「しかし宗教界もな」
「かなり特殊な世界ですね」
「水と油だな、まさに」
どちらが水でどちらが油かはまた別のことだった。
「それはな」
「はい、それは確かに」

軍曹もその水と油という言葉に応える。
「軍とこうした世界は」
「片方は平和の為に戦いもう片方は平和の為に尽くす」
それだけの違いがあるのだった。
「だからな。どうしてもな」
「相容れないものがあります」
「だから正直言って辛いものがある」
准尉はふう、と溜息さえ出した。
「この世界にいるというのもな」
「ですがそれでもです」
「それもわかっている」
命令は命令だ。軍人は命令に従うものだ。これがわからない彼等ではなかった。
「それもな」
「ではやはり」
「そうだ。どうしてもだ」
また言う准尉だった。
「続けなければならないがな」
「最後までですね」
「軍気軍律は確かに滲み込んでくるが」
それでもとなってしまうのだった。

## 第三十五部第四章　軍律研修その五

「やはりな。辛いな」
「そうですね。どうしても」
「しかしこれもまたいいことがある」
ここで准尉は自分の言葉を変えてきたのだった。
「それもな」
「そうですね。そろそろですよ」
軍曹は自分の左手を前に出した。そうしてそこにある腕時計を見てまた言った。
「そろそろ来ますよ。あの子達が」
「ああ、もうそんな時間か」
「はい、その時間です」
軍曹はまた准尉に対して答えた。
「ではそろそろ掃除を終えて」
「そうだな。もうすぐ終わりだな」
また述べる准尉だった。見れば彼等と共に法衣のまま掃除をしていた神父がここで自分の周りにいる作業服の軍人達に対して言ってきた。
「はい、それでは皆さん」
「おっ、もうですか？」
「そろそろですか？」
「はい、そうです」
穏やかな顔でその軍人達に述べるのだった。
「お掃除はこれで終わりです」
「じゃあ後は」
「あの子達と」
「あっ、もう来ていますね」
教会のところに子供達が来ていた。親達も一緒だ。皆穏やかな笑

顔で教会に集まっている。そうしてそのうえで教会の者達が広場であれこれと用意していた。
「はい、こっちですよ」
「こっちに集まって下さい」
神父の助手達だけでなくシスター達も彼等に声をかけていた。
「今日はここでしますよ」
「兵隊の皆さんも来て下さい」
こう言って軍人達も広場に集める。そうして彼等が集まったところでラジオのスイッチを入れるのだった。神父がもう彼等に前にいた。
「皆さん、おはようございます」
「おはようございます」
まずは挨拶からだった。子供達も親達も軍人達と一緒に混ざっている。
「それでは毎朝元気に体操をしましょう」
「はい、それじゃあ今日も」
「御願いします」
こうして皆で体操をはじめるのだった。ラジオの音楽に合わせて。皆その中で身体を動かしているがその中で准尉は。微笑んで隣にいる軍曹に声をかけるのだった。
「これもいいものだな」
「ええ、そうなんですよね」
軍曹は微笑んで准尉のその言葉に答えた。
「普段体操といえば軍人の中だけでな」
「かなり険しく身体を動かしますからね」
「だがここでは違うからな」
「はい」
軍曹も何時の間にか穏やかな顔になっていた。そうしてその顔で准尉の言葉に応え体操をしているのだった。
「こうして穏やかにな」

「体操ができるのはいいことですね」
「軍には決してないことだ」
微笑んで述べるのだった。
「こうして子供達と一緒に身体を動かすのはな」
「そうですね。子供達の相手をすることは多いですが」
ここでまた言う軍曹だった。
「それはイベント等でのことですからね」
「イベントも確かにいいが」
軍の宣伝にもなるし市民社会とも触れ合える。やはり市民軍にとってこうしたイベントを催すことは非常によいことなのだ。これは各国軍の頃から行っている。
「今みたいな触れ合いもな」
「はい、非常にいいです」
また述べる軍曹だった。
「ですからこうした研修もまた」
「いいものだ、実にな」
「その通りです。それでです」
軍曹はさらに言うのだった。
「子供達とこうして朝早くから一緒にいるのは」
「我々にとっても子供達にもいいな」
「お互いを知ることができます」
だからなのである。

## 第三十五部第四章　軍律研修その六

「こうした朝から」
「イベントはあくまでハレだ」
あくまでハレだ。日常ではないのだ。
「普通ではないからな」
「ですからそこにいる子供達もまた」
「そうだ。ハレの顔だ」
日常の顔ではない。もっと言えば遊園地や遠足に行くのと同じだ。
やはりそれは日常のものではないのである。今とは違うのである。
「あくまでな」
「しかし今は日常の顔です」
「我等は少し違うにしてもだ」
「やはりイベントの時とは違う軍人の顔であるからな」
「そうですね。お互い日常に近い顔で見合っています」
これがまた非常にいいことなのだった。
「いいことですね。本当に」
「軍の上の方はそこまで考えているのだな」
准尉はこのことも見抜いた。体操しながら言葉を続けていく。
「どうやらな」
「それも目的だったというのですか？」
「おそらくはな」
断定はしていなかった。
「しかしだ。だとするとだ」
「そうですね。凄い話です」
軍曹も言った。
「あの長官殿は」
「顔がいいだけではないな」
そして今度は微笑んで言う准尉だった。

「最初は大丈夫かと思ったがな」
「大丈夫、ですか」
「顔がよくてもそれで何でもできるとは限らない」
こうも言う准尉だった。
「俳優やアイドルにはなれても政治力とは別だからな」
「ええ、それは」
それはまさにその通りだった。顔と政治力は全く異なる。どれだけ醜悪な外見の者でも政治力があったりする。そうした人物も歴史には多くいる。
「また別問題ですから」
「そういうことだからな。しかしあの長官殿は違うようだな」
「ええ。こんなことまで思いつくのですから」
「では。今日もな」
「はい、頑張りますか」
こう言ってそうして体操を続けるのだった。それが終わってから質素な朝食を摂りそれから身だしなみを整える。彼等の一日はそこからはじまった。
午前中も掃除だった。今度は外に出て街の清掃にあたっている。道や公園に出てそのうえでめいめい掃除にあたっているのだった。
「あら、また兵隊さん達がお掃除してるわ」
「有り難いわね」
それを見た街のおばさん達がにこやかに笑っている。
「ああやってお掃除してくれてね」
「本当に助かるわ」
この活動はおばさん達にとっても非常に好評だった。これもまたいいことであった。
「おかげで街も奇麗になるし」
「清潔になるわよね」
「そうそう」
こう笑顔で話していくのだった。

「兵隊さんって地震とかの為だけにいるって思ってたけれど」
「あまり訓練しないでアイロンがけとかばかりやっていてね」
連合軍ではとにかく身だしなみについて言われる。作業服も軍服も常にアイロンがけをしていることを言われ靴も磨かれる。当然入浴や洗濯も毎日行うことが奨励されえいる。
「そんな軍隊と思っていたけれど」
「どうやらそれだけじゃなかったのね」
「頑張ってくれるじゃない」
「戦うだけじゃなかったのね」
「あっ、兵隊さんだ」
そして子供達も彼等を見て笑顔になる。
「またお掃除してるんだ」
「頑張ってね、兵隊さん」
彼等の人気もあがっていく。この研修は見事な成功だった。しかしこの成功を快く思わない者達も世の中にはいるのだった。
それが誰かというと。それこそが問題だった。
「忌々しい話だな」
「そうよね、本当にね」
「軍がもてはやされるなんてな」
ある新聞社でのことだった。彼等は自分達のデスクにおいて忌々しい顔をしていた。
「軍なぞがな」
「軍は市民の敵だ」
こんなことまで言うのだった。

## 第三十五部第四章　軍律研修その七

「そんな奴等がな。何をやっているのだ」
「全くだ、何がボランティアだ」
「そんなことをしてどうする」
「まやかしだ」
そして不平を言い続ける。
「どうせ不祥事を起こすに決まっている」
「起こさなければそういうふうに書いてやる」
今度はこんなことを言い出した。つまり捏造記事を書くということだった。マスコミの中にはこんな悪事を働くマスメディアも多いのである。
そして彼等は実際に。捏造に訴えたのだった。
「えっ、こんなに不祥事が多いのか？」
「不祥事が」
「嘘でしょ、これって」
市民達はその記事を見てまずはいぶかしむ顔になった。
「街で不良達に喧嘩を売って暴れてる？」
「しかも痴漢もしてるって」
「あと。何だこりゃ」
記事は次々に読まれていく。
「小さな女の子を隠し撮りしてるって」
「完全に変態じゃないか」
「軍にはこんな人間が多いっていうのか！？」
皆その記事を読んでいぶかしむ顔になった。そうしてこの日もボランティアにいそしむ軍人達を怪訝な目で見てまた言うのだった。
「まさかな、そんなな」
「有り得ないと思うがな」
誰もが嘘だと思った。しかし確証は得られなかった。この記事を

読んだ誰もがその心にわだかまりを覚えた。この地域で軍に対する不審な感情が芽生えた。
しかしだった。ここですぐに。事実がわかったのだった。
「あれっ、そんな目撃例ないぞ」
「その時喧嘩をしたなんて話何処にもないぞ」
「えっ、そうなのか！？」
まずは喧嘩のことが検証されるのだった。
「軍人さん達は呑気に酒飲んでたみたいだぞ」
「酒飲んでただけかよ」
「ああ、居酒屋でな」
これ位は普通であった。かなり厳格なムスリムでもこの時代では酒を飲むものだ。連合ではそれどころか豚肉さえアッラーに謝罪したうえで食べられるのだ。
「飲んでただけだった」
「あと痴漢もな」
それも否定されるのだった。
「っていうかあれ電車での痴漢だよな」
「ああ、記事じゃそうだったな」
「しかも平日の」
「平日の電車での痴漢だぞ」
このことが指摘されるのだった。
「何で街でボランティア活動やってる兵隊さんが平日の電車にいるんだ？」
「あっ、確かにな」
「そうだよな」
皆このことに気付いたのだった。
「じゃあ女の子の隠し撮りもか」
「それ誰が事実だって言えるんだ？」
「だよな。そんなのな」
「それにこの記事ってよ」

記事自体も検証された。
「何か伝聞ばかりだよな」
「しかも匿名のな」
「ひょっとしてこれってよ」
匿名の伝聞の記事ばかりである。そういった記事がどういったものであるか。それを考えていくと答えはおのずから出て来るものであった。
「捏造か？」
「だよな、ひょっとしたらじゃなくてな」
「可能性かなり高いな」
この可能性が言われるのだった。
「そういえばこの新聞社ってな」
「だよな。軍嫌いだよな」
「しかも大好きなのは市民団体だぜ」
問題はその市民団体なのであった。市民団体全てが健全で立派なものだとは限らない。中には悪質極まる団体もあるのだ。
「おまけにその団体はどれもな」
「そうなんだよな、怪しいどころじゃなくてな」
「ほら、あれだよ」
そしてこのことも言われた。

## 第三十五部第四章　軍律研修その八

「平和を守る市民集会だったか？あの団体」
「あれかよ、中央軍の設立に反対していて実はその委員長がテロリストの顧問弁護士だったっていう」
「あの団体だよな」
　そのテロリストは所謂反中央政府主義者だったのだ。しかしそれと共にその国家の政府にも批判的で暴力革命を目論んでいたのだ。当然ながらテロ組織もこの弁護士も隠れ蓑はしていた。しかしそれが公になり組織も彼も一斉摘発され裁判により全員鮫の餌となったのである。無論この市民団体も解散させられていたのである。
「あの団体とも仲良かったよな」
「社長がズブズブだったらしいな」
　つまり癒着していたということである。
「確かな」
「で、あの時は何とか逃げたんだよな」
「だったな」
「じゃああれかよ」
　皆忌々しげに話をしていく。
「この記事もな」
「嘘だな、こりゃ」
「っていうかおかしなところばかりじゃねえか」
　見れば喧嘩の記事も場所がその掲載の都度変わっている。確かに妙だった。
　そうしたことを検証されてだった。この新聞社への批判が強まっていった。そして購読数は暴落し株価も急落、広告も激減した。そうして遂に倒産したのだった。
「やっぱり嘘だったのかよ」
「軍への意図的な悪質なデマかよ」

「全くな」
皆それを知って口々に言った。
「こんなことをするなんてな」
「あの新聞は相当軍が邪魔だったみたいだな」
「そうみたいだな」
「で、あれか」８
話は続く。
「で、まあ潰れたけれどな」
「自業自得だよな」
「確かにな」
実にはっきりと言われるのだった。そのうえで話が続く。
「それで軍のイメージはどうなってるんだ？」
「イメージか」
「ああ。そっちはどうなったんだ？」
このことが話されるのだった。今度は。
「それで。どうなったんだ？」
「あがってるな」
こう言われた。
「やっぱりボランティアとかでいい姿見せたからな」
「それでか」
「おまけに素顔も見えてきたしな」
「ああ、それが一番大きいよな」
「そうだな」
そしてやはりこれが大きいのだった。
「軍人も普通だよな」
「だよなあ。一般市民と同じだよな」
「結局はそうだよな」
こう確認されていく。
「軍人も人間ってことか」
「それで一般市民か」

こう話されていく。
「それであれか」
「何か見てみると普通だよな」
「俺達と一緒だな」
若い面々もまた話をしていく。
「明るくて酒が好きでな」
「そうそう、あの連中寺や教会を夜になったら出てしょっちゅう飲んでるよな」
「しかも馬鹿みたいにな」
途方もなく飲む、それもまた軍人なのだ。
「何か俺達と同じか」
「規律もいいしな」
その肝心の規律のことも話されるのだった。
「何だ？連合軍って怖いことないじゃねえか」
「明るくて楽しい連中だよな」
「だよな」
このやり取りが一般市民達の間でされることこそ連合軍のイメージアップに他ならなかった。実はこれは軍律や軍規の研修だけが目的ではなかったのだ。

## 第三十五部第四章　軍律研修その九

「連合軍、いいじゃねえか」
「あの連中なら悪い奴少ないよな」
「むしろだよ」
「ああ、むしろな」
そしてここで誰もが。ある勢力を見るのだった。
「マスコミな。左の方の」
「中にはカルトじみてるのもいるしな」
「あいつ等だけはだよな」
「軍よりよっぽど悪質だろ」
そしてこう言われる彼等だった。
「あんなデマ流すしな」
「しかも反省もしない」
マスコミが反省をするということが苦手なのは二十世紀からだ。
結局彼がそれを身に着けることは滅多にない。そしてそれはさらに悪い結果を引き起こすのである。
「連合軍なんて甘い位にな」
「全くだぜ」
また口々に話されるのだった。
「あの連中こそあれだよな」
「本当の腐敗だよな」
「全くだぜ」
こう話されていくのである。
「自浄能力がな。全くないしな」
「マスコミに全然ないものだろ？それが」
「まあそうだけれどな」
また確かめられるのだった。
「そんな奴等だから嘘ばっかりつくんだな」

「マスコミは大嘘つきだろうがよ」
そしてこうも言われるのだった。
「あの連中はよ」
「嘘つきか」
「それ以外の何だってんだ？」
「いや」
こう言われると誰も反論しない。そうした事件について話しているだけに。
「そういえばあの新聞社以前にな」
「海を自分達で汚してそれで自作自演してたよな」
「そういうこともしてたな、そういえば」
このことも言われるのだった。
「何だよ、あいつ等そのまま詐欺師じゃねえかよ」
「マスコミも変わらねえな」
「全くだ」
「そんなのだからよ」
そしてさらに言われるのだった。
「あれだよ。スポーツチーム持てないんだよな」
「大昔は持てたんだったよな」
「昔はな」
連合ではマスコミは特定のスポーツチームのスポンサーになることすら許されてはいない。それによる偏向報道等の弊害があまりにも酷かったからだ。
「それで滅茶苦茶になったからな」
「あれだろ？いい選手を買い占めるようなこともしたんだよな」
「そういうこともやったしな」
しかもそれだけではなかったのだ。
「自分達の都合のいいように制度とか捻じ曲げたりな」
「やりたい放題だったんだな、本当に」
「そうさ、だからなんだよ」

だからなのだった。
「マスコミはスポーツチームに金出すことができなかったんだよ」
「まあ当然だな」
「そうだな」
そしてそれがいいとされるのだった。この市民へのマスコミの拭うことができない不信感は連合独特である。サハラの一部にはないものだ。
「だからあれだよ、ほら」
「ほら？」
「サハラにいただろ？あのアッディーンに倒された馬鹿」
いきなり馬鹿呼ばわりだった。
「似合わねえアフロに葉巻のあの馬鹿だよ」
「ああ、ナベツーラか」
ここでやっと名前が出るのだった。
「あいつかよ」
「そうそう、あいつな」
そしてここでやっと名前が確認される。

## 第三十五部第四章　軍律研修その十

「あいつみたいなのが出て来るんだよ」
「昔の日本じゃああいうの一杯いたらしいな」
残念なことに日本こそがそのマスコミの弊害を語るうえで最も取り上げられるサンプルになっているのである。歴史によって。
「よくそれで国が持ったよな」
「だよなあ」
マスコミが国を滅ぼす、このことも連合ではナベツーラ一派の件以降よく認識されていることだった。それはやはり事実だからである。
「で、今回か」
「本当にマスコミはな」
「最低と言ってもまだお釣りが来るな」
「全くだ」
そしてここまで言われていく。
「あれじゃあネットの方がな」
「ずっと信用できるよな」
「全くだ」
連合ではそちらの方が遥かに信用されているのだ。勿論玉石混合であるが。
「あんなのじゃあとてもな」
「信用できないからな」
「マスコミを疑え」
連合でよく言われている言葉だ。
「これだな、本当にな」
「マスコミは嘘つくってな」
「しかもな」
ただ嘘をつくだけではないとさえ言われるのだった。ここで。

「息をするようにな」
「なんだよなあ、平気でな」
「詐欺師みたいなのいるからな」
「本当にいるから怖いんだよな」
「あの新聞にしろな」
その新聞こそがまさにそれであるのだった。なお連合のマスコミはエウロパやサハラのそれと比べてその信頼は低い傾向にある。連合ではネットの方が信頼がある。
「全然信用できないんだよな」
「いちいち検証しないと読めない新聞って何だ？」
そしてこうまで言われるのだった。
「そんなマスコミがゴロゴロしてるなんてな」
「そりゃネットの方がまだ信頼できるよな」
「情報も早いしな」
マスコミの情報伝達の速さを音とすればネットのそれは光にまで達している。マスコミとネットの違いはそこまではっきりと出てしまうようになっているのだ。
「新聞読まなくても生きていけるしな」
「逆にそれだけ読んでいたら馬鹿になるよな」
「その通り」
断言までされるのだった。
「もうな。迂闊には信じられないからな」
「困ったことにな」
「しかもな。ネットだとな」
この中で一人が言ってきた。
「色々な意見が聞けるからな」
「それも大きいんだよな」
このことも話されるのだった。
「マスコミって自分達の意見垂れ流しだからな」
「そこから印象操作するから余計にタチ悪いんだよな」

これもマスコミの問題点なのだった。そうした印象操作が悪意に基くものならばその弊害は恐ろしいものになる最悪の場合国家まで過つことになる。
これもまたかつてはよくあったことなのだ。マスコミの印象操作で国家を過つことも。やはりここでもかつての日本が出るしナベツーラ一派も出るのだ。
「軍はそういうことないからな」
「まああの人達の主な仕事ってな」
「災害救助とかそんなのだからな」
「あとパレードとかだよな」
やはり連合市民達から見ればそうなのだった。彼等は戦争をする軍とは思われていないのだ。千年の平和がここにも出ていた。
「そういうのばかりだからな」
「戦争なんてな。それこそな」
「ないない」
あらためて言われることだった。
「エウロパとの戦争なんか数で押し切ったからな」
「互角の戦争ってあったか？」
「連合軍が互角の数で勝てるか？」
これが連合市民の言葉だから恐ろしい。

## 第三十五部第四章　軍律研修その十一

「それこそエウロパ軍に負けてただろ」
「数が互角なら負けかよ」
「絶対に負けるな」
連合軍の市民達からの評価は戦闘力に関してはこの程度でしかなかった。
「だってよ。訓練少ないからな」
「まあな」
「かつての日本軍なんかあれの四倍はしてたぜ」
中央軍設立までの日本軍の訓練の多さと内容の厳しさには定評があった。何しろ軍人が軍服でいると市民達が訓練をしろ！と叱るのが日本だった。日本軍は訓練は多く厳しく軍規軍律も極めて厳格な精鋭であることを何よりの誇りとしていたのである。
「今じゃな」
「全然だよなあ」
「緩い訓練だしな」
しかもその内容も日本軍程ではないのだった、とても。
「何かそれ考えたらな」
「かなりあれだよな」
「絶対に弱いな」
訓練はそのまま軍の質に直結する。風紀の正しさも大事だがやはり軍としての精強さも重要なのだ。しかし連合軍は質は今一つであるのだ。
「数と装備だけだからな、マジで」
「風紀はいいけれどな」
今回の話の発端がまた話された。
「実際に戦うとなるとな」
「本当に大したことないからな」

「千隻の宇宙海賊に三個艦隊を送る」
連合軍の基本はこれであった。
「そして犠牲を出さずに一気に殲滅するからな」
「危ない仕事は義勇軍」
しかも彼等も使うのだった。
「それで強い軍隊かっていったらな」
「絶対に違うからな」
「確実にな」
ある意味で非常に市民から理解されている連合軍であった。
「まあそれでも嘘はつかないからな」
「連合軍の新聞だってな」
軍の中で配布されているその新聞だ。連合軍はただ災害救助を行っているだけではないのだ。そうしたことも行っているのである。
「全然大人しいしな」
「変なカルト教団の発行している新聞よりずっとましだよな」
「確かにな」
このことも話された。
なおカルト教団の発行する新聞は常に教祖やそのトップを賛美しているのが特徴と言われている。そこにそうした存在が出ない日がなく個人崇拝が行われているのがだ。
「それは当然な」
「洒落にならない教団とかあるからな」
「あそことかあそことかな」
この辺りはあえて誤魔化されるのであった。
「あるからなあ」
「だよな」
こう話されるのだった。連合も連合で様々な問題があるのだった。
「しかしな。連合軍はな」
「ああ」
「連中か」

「やっぱりあれだな。ああしてボランティアをしている姿はいいよな」
このことが再確認されるのだった。
「真面目にやって汗を流してる姿はな」
「ああ、それは確かにな」
「最高にいいな」
これは誰もが頷くことだった。
「好感が持てるよな」
「それにやっぱり身近に感じるしな」
「だよな」
何時しか話が笑顔によるものになっていた。
「ああして身近な存在だってわかるとな」
「親しみが持てるしな」
「結局あれなんだよな」
そしてこうも言われるのだった。
「軍隊も警察や消防署と同じだよな」
「そういうことだな」
警察や消防署を無闇に毛嫌いする人間とは何か。多くは無政府主義者かテロリスト、犯罪者といった存在だ。知識人が彼等を叩く場合はその後ろに何かがいるケースもままある。

## 第三十五部第四章　軍律研修その十二

「そういう公務員なんだな」
「公務員か」
「だって公務員だろ？」
　このことが確認されていく。
「普通にな」
「そうだったのか。公務員か」
「そうじゃないのか？」
　こう話されていくのだった。
「やっぱりな」
「そういうものなんだな」
「公務員か」
「そりゃ確かに士官学校とかあるぜ」
　士官学校は連合に幾つもある。各国に幾つもあったものをそのまま編入したからだ。従ってその数もかなりのものになっているのである。
「けれど公務員だろ」
「考えてみればそうか」
「確かに」
　そして彼等も言われてそれに気付くのだった。
「じゃあ兵隊さんはお役人か」
「やっぱりそうなるか」
　これも連合独特の考えである。軍人が公務員であるという考えはだ。
「だったらやっぱりな」
「そんなに特別視しなくてもな」
「いいか」
「そういうことだな」

結論も出された。
「考えてみれば同じ人間だしな」
「だよなあ。人間なんだよな」
そのうえでこうした考えにも至るのだった。
「人間だからな。やっぱり」
「普通か、それを考えれば」
「人間は人間さ」
こうした言葉も出された。
「俺達と同じな」
「そうだな。軍人も人間だ」
「しかも規律な取れて気のいいな」
「いい人間が多い組織だな」
最終的に彼等への評価はこうしたものになった。そうしてその評価はそのまま連合全体に定着した。連合軍にとっては非常にいい結果になった。
軍規軍律を学ばせただけでなく彼等への評価もあがった。これで悪い筈がなかった。そのことを聞いた連合軍教育部は非常に満足していた。
「いや、これはいいな」
「確かに」
「予想以上の結果だ」
教育部の最高幹部達は満面の笑顔で話をしていた。その結果に満足しておりそのうえでの笑顔であった。笑顔になるのも当然のことだった。
「連合軍の評価まであがるとはな」
「しかも軍規軍律への意識も想定以上にあがった」
「よしとするどころではないな」
「うむ」
見れば誰もが大将や中将の階級の者達であった。それはそのまま最高幹部としての階級であった。やはり将官ともなれば最高と言っ

ていいのである。
なお連合軍の特徴として佐官の最高位である大佐と准将の間にはかなりの権限の違いがある。将官になるということはそこまで大きいのである。まずこの将官の壁がある。
准将から少将の間にもかなりの壁がある。しかし少将と中将ではそれ程でもない。だが中将と大将になるとその差は准将と少将のものより大きくなる。そしてその大将と元帥の差になるとだった。連合軍においては兵士と下士官のそれよりも大きいとさえ言われている。
その中将や大将達が集まっていた。そうしてそのうえで話をしているのだった。
「そうだな。やはりここはな」
「うむ」
「満足すべきだ」
その彼等が満足しているということが非常に大きかった。
「それではだ。このままで研修を続けていくか」
「第二次、第三次もな」
「毎年の恒例としていくか」
「各人員の数年ごとの必須研修としてな」
「そうしていこう」
「それはいいことだ」
そしてだった。ここで一言起こるのだった。

## 第三十五部第四章　軍律研修その十三

「それはな」
「はい、総監」
「総監もそう思われるのですね」
　将官達が場の中央にいる彼に一斉に視線を向けた。そこにいるのは教育総監であるサエグサであった。言うまでもなく軍の教育部門の制服組のトップである。
「このままいくべきだと」
「では。やはり」
「ただしだ」
　しかしであった。彼はここで厳格な声を出すのだった。彼は軍規軍律には極めて厳格でありその人間性ともあいまって軍人の鑑とさえ言われていた。
「完全ではないな」
「完全ではないと」
「今が」
「最低限の息抜きはいい」
　彼はまずはこう言った。
「夜の外出で酒を飲んで息を抜くのはな」
「それはいいのですか」
「しかしだ。あまり過度になるのはよくない」
　彼また言う。
「過度にですか」
「研修をしているのだ。今の門限は」
「確か各宗教団体の自由です」
「事実上のフリーパスです」
　宗教団体側も遠慮してそこまでは言わないのだった。流石にボランティアに来てもらっている人々にそこまで強くは言えなかったの

である。
「それはいかん」
「いけませんか」
「そうだ。門限は十時までとする」
彼は言った。
「十時までにする。いいな」
「といいますと軍の門限ですか」
「それですか」
「やはりあまり夜遅くまで出歩くのはよくない」
サエグサの指摘は続く。
「現にだ。トラブルもやはり起こっているが」
「はい、それは」
「確かに」
将官達もそれは否定できなかった。流石にトラブルが皆無というわけにはいかない。それが為に警察の厄介になっている者もいるのだ。
「その多くは十時以降に起こっているな」
「そういえば確かに」
「それは」
彼等もそのことに気付いたのだった。
「ではやはり門限を設けますか」
「十時に」
「そうだ。十時とする」
あらためて門限について言うのだった。
「十時だ。いいな」
「ではそれにより規律を徹底させるのですか」
「それで」
彼等はまた言う。
「軍としても全てを宗教団体に丸投げにするわけにはいきませんか」
「彼等頼みでは」

「彼等にも協力してもらうし我々もそれを行っていく」
サエグサの声がまた厳格なものになった。
「そうあるべきではないか」
「言われてみれば確かに」
「我々も甘かったようです」
「そしてだ」
サエグサの言葉はさらに続く。
「今は佐官まで研修を受けているが」
「はい」
「それを将官にも適用したい」
「将官というと」
「我々もですか」
「そうだ。そして」
サエグサは応えた彼等にさらに続ける。

## 第三十五部第四章　軍律研修その十四

「私もだ」
「総監も！？」
「それではやはり」
「元帥もまたその研修を受けていく」
やはりこう言うのだった。その研修を元帥にまで適用させるというのだ。制服組のトップであり連合軍全体でも三十人しかいない彼等にもだ。
「それも考えている」
「元帥も研修ですか」
「それは」
「一つ注意することはだ」
サエグサの言葉はさらに続くのだった。これで終わりではなかったのだ。
「その際研修先は同じだ」
「同じといいますと！？」
「どういうことですか？」
「階級に関わらず研修先は普通の宗教団体とする」
こう言うのである。
「まさか東本願寺の総本山で研修というわけにもいかないだろう」
「総本山ではですか」
「本部で指導者の方々に直接教えてもらう」
彼の言葉は続く。
「それでは本当の研修にはならないのだ」
「そういうものですか」
「私はそう思う。あちらも気遣いが出て来る」
「ですね。本部ともなると」
「研修の意義が薄れる。駄目だ」

「では一研修生としてですか」
宗教界にはどんな者でも一介の学徒であるという意識がある。あのバチカンにしろどれだけ腐敗していてもそう考える法皇や枢機卿がいたのである。無論宗教家というよりは政治家であり私利私欲に基き後世から目を顰めさせられる行為を行った者も実に多いが。
「そういった考えで、ですか」
「我々は」
「そうだ。そうあるべきだ」
強い言葉であった。
「あくまで一研修生としてだ」
「向かうべきというのですね」
「己に」
「己に克つ」
求道の言葉であった。この言葉も彼が言えば実に絵になるものだった。
「軍規軍律を守るということはそういうことだからだ」
「己に克つですか」
「軍規軍律を守るというのは」
「その通りだ。その為にもだ」
サエグサはその言葉を出して続けていく。
「やはりそうしたことはわきまえていかなければならない」
「高官だからといって豪奢な場は慎め、ですか」
「言っておくがだ」
サエグサの言葉が強いものになった。
「それは私も同じだ」
「閣下もですか」
「そうだ。その際にはだ」
彼は言うのだった。
「私の檀家のお寺に入るつもりだ」
「総監の檀家といいますと確か」

「禅宗でしたね」
「そうだ。禅宗の一派だ」
それだというのである。彼は仏教徒であるのだ。勿論その他にもキリスト教のプロテスタントの一派やメソポタミアの神々ではエアを信仰してもいるのであるが。
「禅宗のその檀家に入るつもりだ」
「そうなのですか」
「そこで修行を行う」
研修ではないのだった。彼の中では。
「修行をな。そのつもりだ」
「左様ですか」
「ではやはり総監はそのように」
「私がまず襟を正す」
彼はこうも言った。
「そうでなくては何の示しがつくというのか」
「そうですね。それは確かに」
「その通りです」
あまりにも真正直な正論であった。誰もが疑うことも異論を言うこともできない。そしてそれを可能にするのがサエグサという人物の持っているものなのだ。
彼は連合軍で最も謹厳実直な人物であると言われている。間違っても軍人としてあるまじき行動なぞ取りはしない、誰もがそれを知っているからだった。

# 第三十五部第四章　軍律研修その十五

「では我々もそのように」
「致します」
「そうしてくれ。よいな」
「はい、わかりました」
「それでは」
　将官達は座っており室内でもあったので帽子を脱いでいる。だから敬礼はしなかったがその言葉で以って彼に応えるのであった。
「そうしてくれ。そしてだ」
「はい。お話はまだあるのでしょうか」
「だとすればそれは」
「いや、もうない」
　それはないというのだった。
「私からはな」
「左様ですか」
「ただしだ」
　だがここで言い忘れていたのか言い加えることを述べてきたのだった。
「この将官の研修についてだが」
「はい」
「これはくれぐれも迅速に頼む」
　こう言うのである。
「くれぐれもな。迅速にだ」
「迅速に、ですか」
「やはり将官もまた己を鍛えるべきなのだ」
　身体という意味ではなかった。それだけの留まらない考えを持つというのがやはりサエグサという男だった。軍人としての視点から考えたうえでだ。

「己をな。だからこそだ」
「ではすぐ長官に上奏しましょう」
「教育部の決定として」
「すぐにな。上奏するべきだ」
彼はまた部下達に告げた。
「それを頼むな」
「わかりました」
「連合軍は第一に軍規軍律だ」
これが彼の考えであった。
「それが確かでなければ最早意味がない」
「ええ、それはその通りです」
「まずは軍規です」
「そして軍律です」
サエグサの部下達だけはあってそれはよくわかっているのだった。これは彼のその軍人としての生真面目な性格にいい意味で影響を受けてのことなのだ。
「ですからすぐにも」
「そうしましょう」
「幸いにしてエウロパ軍との戦いにおいてはだ」
「はい」
連合軍、いや連合という国家ができてはじめての戦争である。連合にとっては千年の長きに渡った平和を経ての戦争でありそのモラルも問われるものだったのだ。
だが連合軍は少なくともそのモラルにおいては合格であった。損害の少なさよりもその醜い行為の少なさこそがサエグサが満足したことだったのである。
「醜行は非常に稀に終わった」
「やはり軍規軍律を徹底していたからですね」
「そしてその教育も」
「あの時の時点で既にそうだった」

そうだったのである。これは八条がとにかく正規軍には軍規軍律を叩き込むことを徹底させたことが非常に大きかったのである。
「そしてそれ以上にだ。今はな」
「高潔であれ、ですか」
「武器を持って戦うのはそれからだ」
彼はこうまで言うのだった。
「心の醜い者に武器を持つ資格はない」
「それはないというのですか」
「心が醜ければ」
「我々は何だ」
サエグサは部下達に対して問うてきた。
「我々はだ。何だ」
「はい、連合軍です」
返答は一つしかなかった。

## 第三十五部第四章　軍律研修その十六

「連合中央軍であります」
「市民を守る為の軍です」
「その通りだ。我々の責務は市民を守ることだ」
それが即ち連合という国家を守ることでもあるのだ。連合が市民国家であるならばそれは必然的に導き出される答えであった。
「だからだ。醜い者はだ」
「その武器を市民達に向けるからですね」
「力を」
「それだけはあってはならない」
サエグサの揺れ動くことのない考えであった。
「絶対にな」
「それは敵の市民に対してもですね」
「そして捕虜も」
「敵は倒す」
敵に対してはこうした考えなのはやはり軍人のものだった。
「しかしだ。それはあくまで戦場で武器を持つ者に対してだけだ」
「軍人だけというのですね」
「戦場で向こう側にいる軍人にだけな」
サエグサは決して武器を持たない者に対して銃を向けるような男ではない。このこともよく知られていることであった。連合軍全体で。
「向けるべきだ」
「ですから捕虜や敵の一般市民に対しては、なのですね」
「当然だ。武器を持たない者に向ける銃はない」
サエグサの断固たる考えであった。
「連合軍にはな」
「そうですね。だからこそです」

「捕虜や敵対勢力の一般市民に対しても醜い行いはしない」
「決して」
「そんなことを許す軍隊はだ」
サエグサの目に嫌悪感が宿る。残念だがそうした軍隊もまた過去の歴史において枚挙に暇がないのである。むしろそういうことをしない軍の方が少ないだろうか。
二十世紀初頭に義和団事件という事件があった。この時にロシア軍の略奪暴行の凄まじさは筆舌に尽くし難かった。それに対して日本軍は糸一本も盗まず市民の誰も傷付けなかった。あまりにも好対象であり日本軍の名を大いに高めることになったのだ。
「最早存在する意味はない」
「ではあくまで規律厳正になのですね」
「そうでなければだ」
サエグサの言葉はここで連合の者達にとってはとりわけ痛いものになった。
「プロイセン軍に劣る」
「エウロパの者達にですか」
「プロイセン軍の軍律は徹底していた」
伝統的にドイツ軍の軍律の厳しさと徹底さは有名である。
「特に厳しかったのはだ」
「確かナチスドイツの頃でしたね」
「その頃だったと」
「ナチスドイツは確かに悪だ」
連合においては紛れもなく悪である。ソ連もそうなのだが何故かロシアにおいてはソ連にしろスターリンにしろ何処か愛されているものがまだあったりする。
「しかしその軍規軍律は徹底していた」
「それは言われていますね」
「ドイツ軍のもともとの母体がそのプロイセン軍であり」
ドイツの原型はビスマルクが作り上げたドイツ第二帝国だからだ。

この国はプロイセン王が皇帝であることからもわかるようにプロイセンが主体であったのだ。当然ながらその軍も同じでありやはりプロイセン軍がその核となって形成された軍なのである。
「そのプロイセン軍の軍律が厳格だからというのもありますね」
「それよりさらにだった」
サエグサはまだ言う。
「ナチスドイツの頃はな」
「ではやはりヒトラーですね」
「あの御仁が厳しくしたのですね」
「さらに」
「その通りだ。ヒトラーは劇場型独裁者だ」
つまり見られそのうえで独裁者であるのだ。言うならば俳優である。ヒトラーという男にしろナチスにしろ演出を重視し演技的な面も強かったのだ。

## 第三十五部第四章　軍律研修その十七

「劇場型独裁者の特徴はだ」
「軍の規律を厳しくするのですね」
「その通りだ。己が率いるべき軍を徹底的に統率する為にもな」
「成程、それでですか」
「それにより当時のドイツ軍が最も軍律が厳格だったのですか」
「そういうことだ。当時の軍ではだ」
続いて当時の他の軍の話にもなる。
「他にも日本軍の軍律が厳しかったがだ」
「はい」
「これはまた違う性質によるものだ」
「ですね。当時の日本とナチスはまた違う国家です」
「全く別の国家です」
当時の日本はファシズムと呼ばれた。しかし日本はドイツやイタリアともまた違った国家だったのである。これが理解されるのには時間もかかった。
まずナチスにしろイタリアにしろ独裁者がいた。しかし日本にはいなかった。ナチスの憲法は停止されていたが大日本帝国憲法は生きていた。そしてヒトラーは文民であったが当時の日本は軍人主導の政権であった。何もかもが全く違う性質なのだ。
ナチスに似ている、いや全く同じ性質の国家があるとすればそれはソ連である。スターリン時代のソ連こそがまさにその全体主義国家なのである。
「あれは軍人としての意識からですか」
「それにより厳しくなったと」
「日本軍にしろその軍律は元々厳しかった」
しかも相当に、である。
「東条英機達がそれを徹底させたのだ」

「東条英機ですか」
「あの」
当時の日本の首相であり陸相でもあった。階級は陸軍大将であり紛れもなく軍人であった。東条こそ最も軍人らしい軍人だったとさえ言われている。
「そういえば規律に相当五月蝿い性格だったそうですが」
「それでですか」
「その通りだ。彼を中心として軍規軍律はさらに厳格なものになった」
やはり彼が中心だったのである。
「それによってな」
「ふむ。独裁者が締め付けるものと軍人が定めたもの」
「そこに違いがありますが」
「日本はまず素直に受け入れられるな」
「はい、無論です」
全体主義国家ではなく連合にある国家だからであった。自国ではないのが残念だと思う将官達もいたがそれでも頷くことはできた。
「それに関しましては」
「素直に」
「しかしナチスに敗れているとなれば。どうか」
「我慢できませんね」
「到底」
彼等はすぐにサエグサに対して答えたのだった。
「成程、そういうことですね」
「だからこそ、ですか」
「そうだ。ナチスドイツに敗れてはならない」
その千年以上前の国家に、ということだ。
「決してな」
「はい、わかりました」
「それでは」

彼等もサエグサのその言葉に頷く。そのうえで、であった。
「そして総監」
「軍規の維持には憲兵ですが」
「今年度はそれ程増やしてはいないようですが」
「増やす、人員をか」
「はい」
憲兵といえばまさに軍の警察である。その為軍人達の中では非常に評判が悪い場合もある1。憲兵も中々大変なのだ。
「この度はそれはありませんね」
「どうやら連合軍も今は財政が難しい」
「だからですか」
「人員はこれでは増やせない」
これはまさに真理だった。
「従ってな」
「はて、連合軍は今そんなに財政難だったでしょうか」
「確かに完全に満足できるわけではありませんが」
将官達はここで首を捻るのだった。

## 第三十五部第四章　軍律研修その十八

「そこまではいかなかったような」
「流石に」
「いや、苦しい」
しかし彼はこう言うのであった。サエグサ自身は。
「確かにな。苦しい」
「そうなのですか？」
「少なくとも憲兵を増やすまでにはない」
そういうことであった。
「そこまではな」
「そういえば今は港湾設備を充実させていますね」
「それに予算を向けてですか」
「そうだ。だから憲兵には回らないのだ」
事情は色々と複雑なのだった。
「増やすようにはな」
「ふむ。それではです」
「やはり研修ですね、ここは」
「内部から学んでいく」
これもまた大事ということであった。
「いいな」
「はい、それでは」
「そのように」
話が完全に決まったのであった。
「長官に上奏します」
「そうして」
「話はこれで終わりだ」
今度こそであった。
「それではだ。諸君、今まで御苦労だった」

「有り難うございます」
「それでは」
話は完全に終わった。そして彼等はすぐにこの将官も研修に行かせるという案を八条に上奏したのであった。それを見た八条の意見は。
「それで宜しいかと」
「いいのですね」
「はい」
こう統合作戦本部長であるバールに述べるのだった。
「むしろ待っていました」
「待っていたとは」
「ですから。あちらから話が出て来ることをです」
それを待っていたというのだった。
「教育部からです」
「軍人からということですね」
「そうです」
そういうことなのだった。
「それが出たということは。それだけで」
「満足すべきというのですね」
「制服組の問題ですから」
その制服組から話が出るということだからである。
「実に有り難いことです」
「成程」
バールもここまで聞いて納得した顔になるのだった。
「そういうことですか」
「その通りです。ではこれはです」
「採用されるのですね」
「審議が必要なのは事実ですが」
だがこれは採用を前提とした言葉であった。
「是非そうさせてもらいます」

「では。そのように」
バールも彼の言葉に応えて述べた。
「そのように」
「御願いします。それにしてもです」
「何かありますか？」
「はい。予想はしていました」
八条はこう言葉を出していくのであった。
「マスコミの中に騒ぐ者達がいることは」
「そして捏造もですか」
「はい」
それもなのだった。八条はそういうことも読んでいたのであった。
これはマスコミの中にそういった勢力があることを踏まえての読みである。

## 第三十五部第四章　軍律研修その十九

「それも全部読んでいました」
「そうだったのですか」
「読んではいましたがしかし」
だがここで顔を顰めさせ。そのうえで言うのだった。
「見てみると実に醜いものですね」
「そうですね。確かに」
これはバールも同意するものだった。
「予想はしていても実際に目にすると」
「いい気持ちのしないものです」
そういうことなのだった。醜いものは見ていて不快になってしまう。そのことから避けるにはそれを見ないことだが時としてそれはできない。
「実に」
「その通りです。捏造までして攻撃するとは」
「ああした勢力の常套手段ですね」
「そうです」
そうなのだった。中にはそうして捏造してまで相手を攻撃する勢力もあるのだ。これが卑劣かつ醜悪な行動であるのは最早言うまでもない。
その醜い行動についてだ。今八条は言うのであった。
「何度見てもいいものではありません」
「はい、その通りです」
そしてそれはバールも同じであった。
「実に。あれは」
「正々堂々と批判してきたりはしない」
八条の言葉にも苦いものが入っていた。
「それは彼等は自分自身が間違っていることがわかっているからで

す」
「それがわかっているからですか」
「そうです。わかっているからです」
だからだというのである。
「そうした卑劣な行動に出るのです」
「それではかえって自らを貶めているのではないでしょうか」
バールの目から見ればそう見えるものだった。
そしてその目で見たものを。また言うのだった。
「彼等自身を」
「そうなのですが気付かないのです」
こうだと話すのだった。
「自分達では。一向に」
「自分自身を省みることができないというのですね」
「そうです。だからこそ」
八条はまた話を続けるのだった。その言葉には苦いものが入り続けている。
「彼等はそういう輩になっているのです」
「モンゴルではです」
バールは今度は自分の祖国のことを話に出した。
「鏡は今では一つのゲルに必ずありますが」
「今ではですか」
「かつてはないものでした」
こう話すのである。鏡というものはかつては非常に高価なもので国家の贈り物にさえ入れられる程であった。それだけ価値のあるものだったのだ。
「ですから自分の顔を見る時にはです」
「水ですね」
「そうです、水です」
それだというのである。
「水鏡を使って見ていたのです」

「そうですね。昔はそうでしたね」
「そうです」
かつて鏡なぞはなかった。それならば水を鏡として使うのは当然のことである。これは遊牧民の間ではとりわけそうであったのである。６４
「そしてその水鏡はです」
「はい」
今度は八条が話を聞いていた。
「心も映すものだと言われてきました」
「心も、ですね」
「心は顔に出ます」
こう言うのであった。
「それもはっきりと」
「そうですね。その通りです」
そしてこれは八条もわかることだった。
「表情に出ますから。感情として」
「だからこそです。水鏡に映る己を反省しよ」
次の言葉はこれであった。
「こうした言葉が祖国には残っています」
「モンゴルに古くからですか」
「彼等はそれをしなかったのでしょう」
そして彼等のことも考えて述べたのだった。
「だからこそそこまで卑劣になれるのです」
「そういえばです」
八条はさらに言ってきた。
「こうした行動を取る人物の顔がネット等に出るとです」
「どうなるのですか？」
「やはり非常に卑しい顔をしていると言われますね」
こうなるというのだった。
「常に」

「常ですか」
「そして生き方が顔に出るとも言われます」
これはこの時代でもそうなのだった。やはり顔にはあらゆるものが出るのである。まともな生き方をしていない者はやはりまともな表情にはならない。
中国の思想家である孟子は目を見ればわかると言った。正しい者の目は澄んでいて邪な者の目は濁っている。やはりこれも生き方が出てのことである。

# 第三十五部第四章　軍律研修その二十

「俗に言う」
「性根の腐り切った者ですね」
「はい、そう言われる輩達ですが」
やはりそれであった。
「そうした輩達の目はやはり濁っています」
「そうして非常に下卑た表情をしていますね」
「最初はそうではなくともです」
生き方が表情を変えていくということである。
「やがてそうなっていきます」
「そうですね。やはりその人が顔を作っていきます」
「元の良し悪しは」
八条は言うまでもなくそれに関してはかなり秀でている方である。しかし彼の長所の一つとしてその自分の美貌を決して鼻にかけないことがあるのだ。
その彼がここで言うのだった。
「あまり関係がありません」
「それよりもどのようにして作っていくかですね」
「醜い心ならば顔が歪んできます」
また言う彼だった。
「かつて。リンカーンだったでしょうか」
「リンカーンですか」
「はい、彼です」
言わずと知れた南北戦争の時のアメリカ合衆国大統領である。アメリカの歴史においてはジョージ＝ワシントンやトマス＝ジェファーソンと並ぶ英雄とまでされている。
「彼の言葉ですが」
「どうしたものだったのですか？その言葉は」

「人は四十になれば己の顔に責任を持て」
この言葉だというのである。
「この言葉です」
「四十になればですか」
「その頃には生き方が顔に出ているというので」
だからだというのである。
「最もこれはです」
「はい、それより先に出るものです」
表情として、である。
「良い場合でも悪い場合でも」
「ですが言葉としてはいいものです」
「そうですね。顔の良し悪しとはそういう意味ですね」
「そういうことだと思います」
そして同時に八条が言いたいことでもあったのだ。
「これは」
「モンゴルの古い言葉と同じですか」
「やはり顔に出るのです」
八条はまた言った。
「生き方というものはです」
「だからこそ卑劣な者は醜くなる」
「はい」
「そういうことですね」
「思えば我が連合軍の将兵達はです」
八条は話しているうちに彼等のことも話しだしていた。
「多くの者がいい顔をしていますね」
「いい顔をですか」
「はい、生き方が出ているいい顔をしています」
実に素直かつ心からの軍人達への賞賛の言葉であった。
「彼等は」
「では。問題はありませんね」

「はい。この研修は」
そのうえで研修のことも話すのだった。
「成功です。このまま将官の研修も進め」
「はい」
「そしてです」
さらに言うのであった。
「宗教団体だけでなくボランティア団体も研修の対象としましょう」
「はい、それではです」
こうして話は順調に進むのであった。連合軍はそのモラルを大きく高めていた。しかしそれは正規軍の話で義勇軍はかなり違っていた。
「おいおいマジかよ」
「あそこまでやるのかよ」
傍らにいる正規軍の兵士達が呆れたような声を出してその訓練を見ていた。今彼等は基地にいる。そこには今義勇軍もいて訓練中なのだ。
今の彼等の訓練はトレーニングである。しかもただのトレーニングではなかった。
まずは三十キロ走る。そしてそれから筋肉トレーニングをしているのである。

## 第三十五部第四章　軍律研修その二十一

そのトレーニングの内容を見て。正規軍の兵士達は唖然としていたのだ。その筋肉トレーニングもまた壮絶な内容だったからだ。
「腹筋、もうな」
「ああ、百回はやってるよな」
「腕立て伏せに背筋もな」
「スクワットなんか五百はやってるぜ」
三十キロ走った後でそこまでやっているのである。
「そこまでやるか？何なんだよ」
「プロレスラーにでもなるつもりかよ」
「全くだ」
唖然としながら見ていた。
「あそこまでやったら流石にな」
「強くもなるよな」
そしてこうも話されるのだった。
「だから最強なんだな」
「そうだな」
彼等はそのトレーニングを見て言い続けていた。とにかくその訓練は壮絶なものだった。その目の前で訓練はまだ続いていた。
「こら屑達！」
「はい！」
「その程度か！」
下士官が来て兵士達を怒鳴っていた。
「遅い！筋肉トレーニング追加だ！」
「わかりました！」
それに頷きトレーニングを再び行う。これまた正規軍の兵士達にとっては驚くべき者だった。その中のとりわけ頑健な身体の一人が言ってきた。

「なあ」
「何だ？」
「俺地上部隊にいたけれどな」
「ああ」
「しかもレンジャーだったよな」
「ああ、そうさ」
レンジャーはこの時代でも地上部隊の中での精鋭である。やはりその訓練はかなり厳しく志願しても耐えられないと見ると容赦なく落とされるのである。
「それでもあそこまではしないな」
「あそこまではかよ」
「ありゃ何だ？」
そのレンジャーの兵士も驚いた声をあげていた。
「あの訓練はよ。何なんだ？」
「そこまで凄いのかよ、義勇軍は」
「かなり壮絶なんだな」
「壮絶なんてもんじゃないな」
レンジャー出身の兵士の言葉は続く。
「あそこまでやったらそれこそな」
「強くもなる筈か」
「どうして耐えられるんだ？」
彼は首を傾げさえしてきた。
「あれだけの訓練に。どうしてなんだ？」
「サハラの連中ってのはずっと戦ってるけれどな」
「それでもあれはないよな」
「何処までやるんだよ」
とかく正規軍と義勇軍の訓練は全く違っていた。正規軍の者達から見て彼等の訓練は最早想像を絶するものになってしまっていたのだ。
そしてそれを見てだ。彼等はまた言った。

「そうでないと生き残れないのかもな」
「生き残れないか」
「ああ、義勇軍は真っ先に火事場に飛び込むからな」
それが義勇軍である。エウロパとの戦争でもそうであったし今も海賊やテロリストとの戦いにおいても火事場に飛び込む。それが彼等なのだ。
「ああまでしないと駄目なんだろうな」
「俺達と違ってか」
「俺達はあれだろ？」
今度は自分達のことも話すのだった。
「死ぬ訳にはいかないからな」
「だよなあ。生きていてもらわないとな」
「俺達はな」
これが正規軍なのだった。彼等が死ねば色々と支障が出るのである。支障が出るのは時の政権と国防省である。犠牲者が出ればそれだけ彼等への批判になるからだ。
「しかしな。義勇軍は違うからな」
「言うなら犠牲を前提でか」
「だからあそこまで鍛えなくちゃいけないんだろう」
そういうことであった。

## 第三十五部第四章　軍律研修その二十二

「勝つ為にな」
「死ぬ訳にいかない俺達と勝たなくちゃいけない連中はか」
「しかもな」
おまけに、であった。
「俺達を集めてそれで抜けられないようにする為にはな」
「訓練も緩やかだよな」
「週休二日だしな」
正規軍はそうなのである。
「連中は週一か？」
「もっと少ないんじゃないのか？」
「十日に一回じゃないのか？」
実はその辺りは正規軍にはあまり知られていないのであった。そしてこうも思われているのが義勇軍への認識の現実なのであった。
「月月火水木金金だろ？」
「おい、何だよそれ」
皆そのスケジュールを見て呆れた声を出した。
「大日本帝国海軍じゃねえか」
「それはないだろ」
なお海軍にしろそれなりに休日はあった。流石に週七日というのはなかったのである。もっともかなりの訓練は行っていたのであるが。
しかし義勇軍は。そこまで思われていたのである。
「屑達次はだ！」
「はい！」
その格闘選手並の筋肉トレーニングの後で彼等はすぐに下士官の言葉に対して直立不動で応えるのだった。やはりかなりの速さだ。
「あれで立てるのかよ」

「あそこまでやってかよ」
それを見てまたしても驚く正規軍の者達だった。
「やっぱり化け物だな」
「ああ」
そしてこう言うしかなかった。
「しかし次は何をするんだ？」
「一体何を」
次の行動を見守る。その次はだ。
「十分休憩！」
「流石に休憩が入ったな」
「そうだな」
流石に人間であることがわかっての安堵の言葉であった。
「やっぱりそうか」
「身体を落ち着けて、なんだな」
「二十分でシャワーと着替えを済ませろ！」
「二十分！？」
「時間が殆どないじゃないか」
「それから陸警訓練だ！」
「陸警！？」
「あれだけやってか」
陸警訓練とは所謂号令や行進の訓練である。これもまた軍の訓練の中ではかなりハードなものである。
「陸戦服に着替えてこの場に整列だ！以上！」
「はい！」
義勇軍の者達は敬礼で応えすぐにその場から駆け足で消えた。正規軍の者達はそれを見てもやはり驚きを隠せないのであった。
「あそこまでやるなんてな」
「本当に身体がよくもつな」
「全くだ」
こう言って驚くばかりの彼等だった。

「俺達だったらもたないな」
「しかもあれだろ？」
ここで一人が言うことはまた驚くべきことだった。
「義勇軍って難民から出てるんだよな」
「ああ、そうさ」
「サハラからの難民でな」
このことは連合では常識であった。正規軍も義勇軍も完全に志願制であるが義勇軍はサハラからの難民から募集されるのである。

## 第三十五部第四章　軍律研修その二十三

従ってである。彼等は正規軍から異質の存在とされているのだ。このことはとりわけ内部である軍部において強く意識されていることだ。

そのことを踏まえているからこそだった。今の彼等の会話も。独特のものになっていた。

「構成されているからな」

「だからあそこまでできるってことか」

「そうさ。俺達とは違うからな」

このことがとりわけ意識されるのである。

「やっぱりな。だからな」

「強いっていうのか」

「あれだけ訓練も厳しくて」

「しかしな」

ここで彼等はさらに話をするのだった。

「あれだけのトレーニングの後陸警だよな」

「ああ、今言っていたな」

「そういうふうにな」

「よくそんなのやるよ」

あらためてこう言う兵士がいた。

「俺達あそこまでしないからな。とてもな」

「だよな。普通はどちらかだよな」

「身体が潰れるぜ」

連合軍ではそれは避けられることである。無理はしない、それこそ地上のレンジャー部隊でしか認められないような訓練である。

「あんなことしたらな」

「だよなあ」

「俺達だったらな」

あくまで彼等は、という限定がつく。ここにこそ核心があるのだ。
「まず潰れるよな」
「サハラの連中はそこまで身体が頑丈だっていうのか」
「伊達に戦場で生きてるわけじゃないか」
これがサハラの者達への連合の認識である。
「身体が頑丈だぜ」
「しかしな」
ここでまた話が変わった。
「一つ思うんだがな」
「何だ？」
「どうしたんだ？」
「いや、義勇軍は確かに強いよな」
あらためてこのことが話される。
「それこそ滅茶苦茶にな」
「それがどうしたんだよ」
「今それを話してるじゃねえか」
「なあ」
周りも一斉にそれに突っ込みを入れるのだった。
「それで何で今更そんなこと言うんだよ」
「話ループしてるぞ」
「だからよ。そうじゃなくてよ」
話した彼は周りの突っ込みにたまりかねた顔をしながらもそれでも話すのだった。
「軍規軍律だけれどな」
「ああ、それか」
「そういえば義勇軍って軍規軍律もな」
「なあ」
そのことも話される。義勇軍の軍規軍律は相当に厳しい。ただでさえ厳格極まる連合軍の軍規軍律だが義勇軍は特に厳しいのである。
どう厳しいかというとだ。そのことも彼等はよくわかっていた。

「上官の命令には絶対服従だしな」
「そうだよな」
まずはこのことが話される。
「しかも何か義勇軍の規範ってな」
「俺達よりまだ厳しいしな」
「略奪はあれだろ？即座に死刑だよな」
「ああ」
なおこれは正規軍でも同じである。しかしそこには程度の問題がある。義勇軍の場合はまさに一テラの横領や略奪でも即座に裁判にかけられそうなるのだ。
「女の子を痴漢したら打ち首だったか？」
「じゃあ電車の中にも変な奴は乗れないよな」
「だよなあ。風俗でもそうしたプレイあるけれどな」
この時代も様々な風俗産業があり多くの者がそれに関わっている。このことはどれだけ時代が変わろうとも不変なのである。
「それでも。実際にやったらそれだけでか」
「俺達だったそれ位は懲戒免職だけれどな」
「向こうじゃ死刑だからな」
そこまでの違いがあるのである。

## 第三十五部第四章　軍律研修その二十四

「そこまで徹底しているからな」
「それなんだよ」
そして最初に話を切り出した彼が言うのだった。今は義勇軍の兵士がいないそのコンクリートの上を見ながらだ。白い滑走路のそこを見て言うのである。
「何時軍規軍律をやってるんだろうな」
「何時ってか？」
「俺達はあれだろ？」
自分達の話をしていく。
「座学で叩き込まれて」
「それで研修だよな」
「そこまでして教え込まれてるよな」
「まず軍規軍律だからな」
これが連合軍の方針である。精強さや訓練度の低さは装備や数、コンピューター等で統制された戦略戦術、物資、情報収集、そしてそういったものを支える補給や技術によって補う。それによってエウロパとの戦いや宇宙海賊、テロリストとの戦いを経ているのである。
「だよな。やっぱりな」
「俺達はな」
「だろ？けれどあいつ等はな」
まだ誰もいないそのコンクリートの場所を見て話す。
「そういうのないからな」
「座学はしてるんだろ？」
「俺達よりも多い位らしいぞ」
このことも話される。
「俺達は夕方で課業終わりだけれどな」

「向こうは違うのか」
「だから二十四時間だぞ」
これだけの違いがあるのである。
「二日に一回当直だしな」
「おい、凄いな」
これには誰もが驚きの声をあげた。
「二日に一回かよ」
「じゃあその時にかよ」
「みっちり軍規軍律を叩き込むらしい」
「その鬼のようなのをかよ」
こういうことなのだった。
「だからか。あれだけ軍規軍律も厳正なのかよ」
「二日に一回だけだからか」
「俺達の当直なんてよ」
「そうだよな」
兵士は五日に一回、下士官は六日に一回となっている。先任下士官になるとそれは順番になる。しかも当直の日には実は特に何かをするわけでもないのだ。
「しかも清掃だってな」
「違うのか」
「鬼らしいな」
清掃もなのだった。実際のところ人が生活するからには掃除というものは付き物だ。当然ながら連合軍でもそれは同じなのである。
「俺達なんてあれだろ？普通にやってりゃいいだろ」
「まあ引火とか病気とかそうならないレベルでな」
「普通にやってればいいからな」
「学校と変わらないよな」
「ああ」
一応当直士官のチェックはあるがこれは言うならば巡検である。ただ見て回ってそこにいて番をしている兵士の敬礼に返礼するだけ

である。
「義勇軍は掃除も違うからな」
「ああ、そういえばあの連中の艦艇ってな」
「そうだよな」
今度はそれについても話されるのだった。
「滅茶苦茶奇麗だよな」
「便所だってな」
勿論便所掃除もある。
「便器がピカピカしててな」
「床だってな」
「そこまで奇麗だからな」
「チェックが半端じゃないらしいぜ」
だからだというのである。
「それもな。何もかもが徹底しているからな」
「大日本帝国海軍みたいだよな」
「ああ、あれな」
軍規軍律が厳格な軍隊の代名詞になっている。エウロパ軍で言えばグルカ兵である。流石にこの時代はグルカ兵はイギリスにはいないが。
「あんなレベルだよな」
「じゃあ鉄拳制裁もあるのか？」
日本軍の代名詞である。なお他にも軍規軍律が厳しい軍隊として連合軍で名前が残っているのは大日本帝国陸軍である。つまり日本軍の軍規軍律はこの時代にも名が知れ渡っているのである。それこそ鬼としてだ。
「あれもよ」
「まさか。それはないんじゃないか？」
「いや、わからんぞ」
これについても話されるのだった。

## 第三十五部第四章　軍律研修その二十五

「あそこだけはな」
「まさか」
「それはないだろ」
周りはそれは流石に否定した。
「鉄拳制裁とかはな」
「だよな」
連合軍ではそれは否定されている。体罰自体が完全に禁止されているのだ。それを行った場合容赦なく憲兵隊に通報され取り調べられるのである。
だからだ。彼等もその常識の中で話をするのであった。
「それだけはな」
「幾ら何でもないだろう」
「向こうにも憲兵隊いるんだろう？」
そしてこのことも話された。
「やっぱりな」
「憲兵のいない軍隊なんてあるか」
「そうだよ」
憲兵は言うならば軍内部の警察である。警察の存在しない世界なぞ存在しない。それがなくては治安を守ることができないからである。
「あるよ、それはな」
「ちゃんとな」
「じゃあやっぱりないだろ」
憲兵の存在が確認されたうえでの言葉だった。
「それ幾ら何でもな」
「体罰とかはな」
「正規軍だったらな」

だがここでこの注釈がついたのだった。
「連合軍だったらな。それは当然になるな」
「連合軍だったらか？」
「それだったらか？」
「ああ、俺達だったらな」
ここでは正規軍がそのまま連合軍とされていた。義勇軍は連合軍ではないというのである。ここに連合軍の意識がはっきりと見られた。
「それはないさ。連合だったらな」
「向こうは違うっていうのかよ」
「サハラだからな」
連合ではなくサハラと考えられるのであった。彼等については。
「サハラってそんなのあるのか？」
「鉄拳制裁とかよ」
「いや、人権の発想自体が希薄だろ？」
こう思われているのだ。連合から見れば。
「サハラってな」
「鉄拳制裁程度はあるいっていうのかよ」
「それじゃあ」
「有り得るか？」
彼等はそう考えていくのだった。
「サハラだったら」
「何せ戦争ばかりしているからな」
「教育だって相当厳しいらしいしな」
この場合は新兵教育等だけではない。子供の教育もだ。かなり厳格なイスラム社会であるサハラは連合から見ればそういう評価もあるのである。
「それもあるんじゃないのか？」
「けれどそれは流石に見たことないぜ」
「俺もだ」

目撃の話が検証されるがそれはまずは起こらなかった。
「流石にそれはな」
「ないよな」
「ないんじゃねえのか？結局のところは」
そしてこうも言われるのだった。
「やっぱりな。義勇軍でもな」
「そうじゃないのか？」
また話されていく。
「幾ら何でも体罰とかな」
「普通に叱責が精々だろ？」
連合ではそれさえもかなり感情的な罵倒だと問題になる。もっとも教師の中にはそうした罵倒はおろか異常な体罰を行う教師も存在している。教師という職業はある意味においてきわめて大きな特権を持っている職業でありどのような無能な人物や異常な人物でも教師としてやっていけるのである。もっともそうした教師というのはやはりごく一部であるが。それでもそうした教師が何時までも存在するのも事実だ。

# 第三十五部第四章　軍律研修その二十六

「そんなのはな」
「まあ何言ってるかわからないけれどな」
「アラビア語だしな」
連合は銀河語である。なおそれでは連合ではそれが公用語であり学校の授業の必修科目であるが各国ではそれぞれの国の言葉も教えている。
「連中の言葉ってな」
「わかるか？アラビア語」
「いいや、全然」
「俺もだ」
「俺もな」
彼等の誰もアラビア語がわからなかったのだった。
「まあ何て言ってるかわからないけれどな」
「さっきのは銀河語だったよな」
「ああ」
銀河語も話すことがあるのだ。彼等も。
「じゃああれか？語学の勉強もやってたのか？」
「そうみたいだな」
「実践でやるのかよ」
「しかも軍の訓練中にか」
あらためて義勇軍の訓練というものを知るのだった。
「何か随分と凄い訓練だな」
「全くだ」
あらためてこのことが話される。
「俺達アラビア語なんてな」
「全然勉強しねえよな」
「わからねえわからねえ」

この辺りも正規軍と義勇軍の違いがあった。
「まあ銀河語が必修だからな」
「向こうにとっちゃアラビア語が第二科目か？」
「そうなるのか？」
そしてこうも考えられるのだった。
「この場合は」
「そうなのかね」
「おっ、話をすれば何とやら」
「戻って来たな」
「ああ」
ここで、であった。その義勇軍の兵士達がやって来た。独特の色のあの陸戦服を着ている。服自体は正規軍と同じだ。
「それではだ！」
「はい！」
「只今より行進練習をはじめる！」
「わかりました！」
敬礼と共にそれに応えるのだった。先程と同じ下士官が彼等の前にいてやはり彼も陸戦服を着てそこに毅然と立っているのであった。
「まさに鬼軍曹だよな」
「いや、あれ曹長だぜ」
「軍曹どころじゃないぜ」
彼等はその下士官の階級を見ながらまた話していく。
「あれはよ、しかも軍隊付だぜ」
「げっ、ホンモノの鬼かよ」
「そりゃ怖いぞ」
連合軍では下士官の階級は細かく分かれている。従って曹長もただ曹長であるのではないのである。やはり細かく分かれているのだ。
「それに教えられているのかよ」
「また難儀だな」
彼等はここでも口々に話す。

「何かよ。向こうの曹長ってな」
「こっちのより怖いよな」
「だよなあ」
軍は下士官で動くものである。とりわけ先任下士官でだ。その先任下士官が強く恐ろしいのならば自然とその軍もそうなっていくのだ。
「あれはな。どう見てもな」
「地獄の鬼のボスかよ」
「赤鬼青鬼ってか」
「佛教で言うとそうだよな」
こう話されていくのだった。
「その赤鬼青鬼が現実にいるなんてな」
「こっちにいなくてよかったよ」
「全くだぜ」
そんな話をしながら様子を見ている。やはりその訓練は厳格極まりない者だった。しかしその間一度も鉄拳制裁が行われることはなかった。
それは正規軍の彼等もはっきり見ていた。そうしてまた話をするのだった。
「結局体罰はないみたいだな」
「みたいだな」
「そうだよな」
この話がされるのだった。
「どうやらそれはないみたいだな」
「流石にな」
「しかしな」
だがここでまた話されるのだった。
「行進もうちよりずっと厳しいな」
「そうだよな。動きもいいしな」
「キビキビしててな」

実際にその行進の真似をする者もいた。連合軍の行進は脚は普通であるが手は前に九十度あげそして後ろに十五度あげて進む。手を大きく振る行進なのだ。
「それにひきかえ俺達はってか？」
「お坊ちゃん集団ってか」
「お嬢さんかもな」
こんなことを言うのであった。
「何せな」
「身だしなみだけってか？」
自嘲気味の言葉が続くのであった。
「どうせ俺達なんてそんなものだろ」
「身だしなみだけってか」
「だからお嬢さんなんだろ？」
この言葉が窮めて印象的なものになっていた。そうしてまた話すのであった。
「俺達はな。向こうから見てな」
「所詮そんなものか？俺達ってな」
「千年も戦争していなかったからな」
また話すのであった。
「千年な。けれど同じだけ連中はな」
「戦ってきたからな」
「それだけ違いがあるってか」
こう話をしていく。そのまま彼等の行進を見るがやはり見事なものであった。

## 第三十五部第四章　軍律研修その二十七

「向こうの一人で俺達何人分だろうな」
「十人じゃねえのか？」
一人が素っ気無く述べた。
「十人だろ？やっぱりな」
「喧嘩しても勝てる相手じゃねえか」
「じゃあ御前あの日本軍と勝てるか？」
不意にまた一人が言った。
「同じ数同じ装備でな」
「いや、負けるな」
「そうだな」
誰もがそれを納得することであった。
「二十世紀の日本軍だよな」
「しかも自衛隊じゃなくてな」
「ああ、あの日本軍な」
こう念押しさえされる。
「日本軍だよ、あのな」
「勝てるわけないだろうが」
「あんなのはな」
やはりこう言われるのであった。
「絶対に勝てはしない。絶対にな」
「あれだけの最強の軍隊に勝てるかよ、俺達が」
「俺なんか小指一本でやられるかもな」
とにかくその日本軍の強さは神話にさえなっていた。連合ではとりわけマレー沖海戦やマレーシアへの電撃的な侵攻がよく言われている。この二つの戦いがどうしてよく言われるかというとその理由は簡単であった。彼等のこの時の相手はイギリスだったからである。
これが連合同士ならばそれ程宣伝されない。事実石原莞爾が僅か

一万で二十万の張学良軍を破った話や真珠湾への奇襲、そして日露戦争のことはここまで言われない。
その日本軍に例えられる義勇軍はそれだけ評価されているということであった。
「あんな軍隊と戦えなんてな」
「死ねって言っているようなものだぜ」
「なあ」
彼等は口々に話すのであった。
「やっぱり義勇軍とは戦えないな」
「ああ、俺達じゃな」
「エウロパ軍じゃなくてよかったぜ」
そしてまた話されるのであった。
「あの連中も不幸だよなあ」
「どれだけ死んだんだっけな」
「損害で百五十個艦隊程度だったな」
五百個艦隊あったうちのそれだけを失ったのである。勿論これは正規軍との戦闘で失ったものもあるがそれでも義勇軍にかなり倒されたのは事実だったのだ。
「それに相当するだけ死んだっていうんだな」
「ああ、その通りだ」
「それだけな」
「俺達の相手だったらな」
彼等はこうした仮定をすると身の毛がよだつ程だった。
「どれだけ数を注ぎ込んでも犠牲が出るな」
「死にたくないからな、絶対に」
「しかし連中はな」
またしても正規軍と義勇軍の話が続くのだった。
「死ぬのは怖くないからな」
「そうだよな」
このことも話されるのであった。

「戦いで死ねば天国に行けるからな」
「ジハードだからな」
イスラム独特の信仰である。
「それで死ぬのもな。怖くないからな」
「死ぬのが怖い奴等と死ぬのが怖くない奴等か」
これが大きな違いなのであった。
「だから何でもやれるってか」
「恐ろしい奴等だぜ」
そんな話をしているのだった。その時滑走路にあるシャトルに義勇軍の将官達が乗り込もうとしていた。そこにはある将官の姿もあった。
「さて、それではな」
「それでは？」
「いや、今から行くが」
彼はこう副官の準佐に対して言うのだった。見ればその階級は准将である。
「しかしあの行進は」
「ああ、あれですか」
ここで副官も義勇軍のその行進を見るのだった。正規軍の彼等が見ているその行進を見ているのだった。シャトルに乗り込むその途中でだ。
「あの行進ですね」
「連合式の行進だな」
このことに対して言うのであった。

## 第三十五部第四章　軍律研修その二十八

「あれはな」
「はい、そうですが」
「義勇軍も連合軍だ」
彼は言った。
「だからあの行進になるな」
「それは当然では？」
副官はそれを聞いてこう返すのだった。
「我等はやはり。義勇軍なのですから」
「そうだ。連合軍だ」
彼もまたこのことをわかってはいた。
「しかし果たしてそうか」
「そうかとは？」
「彼等はどう思っているのか」
今度は向こう側、滑走路のフェンスの向こう側にいる正規軍の者達を見ての言葉であった。そうしてそのうえで語るのであった。
「彼等はな」
「といいますと？」
「我々はサハラの者達だ」
次にはこう言う准将であった。
「サハラのな。連合ではない」
「それもその通りですが」
「連合軍は連合の者達のものだ」
当たり前の言葉ではあった。
「だからだ。我々とは違うのだ」
「では我々は」
「連合軍であって連合軍でない」
一つの現実がここで語られるのだった。

「そういうことなのかもな」
「何かそれは」
「深く考えても仕方のないことだ」
准将はまた言った。
「これはな」
「はあ」
「しかしだ」
付け加えた言葉は鋭いものであった。
「わかっておくべきことではある」
「わかっては、ですか」
「我々はその中で今ここにいる」
「そのことをですね」
「うむ。所詮我々は難民だ」
自嘲の言葉ではなかった。ただ事実を述べた言葉であった。だがそれだからこそ非常に重いものも含んでしまっている言葉であった。
「それをわきまえておかなければな」
「では閣下」
ここで副官から彼に言ってきた。
「シャトルに乗って」
「そうだな。港に向かうか」
「そこから出撃です」
このことも告げられるのであった。
「宇宙海賊の討伐に」
「既に出撃準備はできているのだな」
「はい」
「では乗ろう」
「それでは」
ここではこれで話は終わった。彼は副官と共にシャトルに乗り込んだ。しかしここに正規軍と義勇軍の間の大河があった。それは途方もなく深く幅の広いものであった。

# 第三十五部第五章　サハラの軍律その一

サハラの軍律

話は前後する。連合軍の一連の話は丁度オムダーマン及びティムールがハサンに侵攻する前の話だ。そしてその研修の成果が出て来た時が丁度彼等がハサンに攻め込んだ時であった。アッディーンはこの話を今まさに第四、第五の防衛ラインに対して攻撃を仕掛ける直前に聞いていたのだ。

「ふむ。連合軍でか」

「はい、こうした研修が行われているそうです」

「如何思われますか」

「面白いな」

アッディーンは話を聞き終えてまずはこう述べた。

「そうした研修もな」

「サハラではないものですね」

「我等はイスラムに全てを託している」

信仰にということである。

「だからだ。そこから軍規軍律も生じる」

「はい」

その通りだった。やはりサハラはイスラムあってのサハラである。それならばそれにより軍規群立が形成されるのも当然であった。

「だからそうしたことはできないがだ」

「面白くはありますか」

「参考にはなる」

こう述べるのだった。

「それもかなりな」

「ではそうした研修を我が軍も」

「いや、それはできない」

しかしそれは否定するのであった。

「それはな。残念だが」
「できませんか」
「我がサハラには基本的には聖職者はいない」
こう部下に告げた。
これはスンニー派だからである。スンニー派は聖職者はいない。世俗の法律学者がいるだけだ。これは聖職者の腐敗を嫌ったムハンマドの考えによる。
「だからだ。それはだ」
「できませんか」
「ボランティアということもだ」
やはりアッディーンは首を傾げるのだった。
「そうしたことはな」
「サハラではありませんね」
「まずそれがある」
そうなのだった。サハラではそもそもボランティアがないのである。戦乱の中でそうしたものが生じる余裕は一切ないのである。そういうことだ。
「しかもその発想もな」
「互いに助け合うことはあろうともですね」
「そうだ。やはりない」
これもまたイスラムの特質であった。
「我等にはな。そうした団体もないしな」
「そうですね。それは」
「イスラムで全てが保たれている」
やはりそれがサハラであった。
「だからだ。それはな」
「ではどうされますか？」
部下はまたアッディーンに問うた。
「この場合の研修は一体」
「するとすればだ」

アッディーンは考えながら述べた。
「外の世界、企業か」
「企業ですか」
「そこに派遣することになるか」
こう述べるのだった。
「そしてそこで世俗のことを知らせてだ」
「それが研修になるのですか？規律の」
「なる」
アッディーンは答えた。
「それもな」
「ではそれは」
「また予定に入れるのですね」
別の部下もアッディーンに尋ねてきた。
「今後はそのように」
「されるのですか」
「それも考えている」
決定したわけではないというがそれでも乗り気ではあった。
「少なくとも研修として無駄にはならない」
「わかりました。それでは」
「教育部に話をされるのですね」
「軍は軍だけではない」
アッディーンはまた言った。

## 第三十五部第五章　サハラの軍律その二

「それだけで保たれているのではないからだ」
「軍はそれだけではないと」
「それだけでは」
「軍を支えているのは国家だ」
アッディーンは言った。
「そして国民だ」
「国民が軍を支えていると」
「もっと究極的に言えば軍は国民の為にある」
アッディーンもこのことをよくわかっていた。軍人としてだ。
「国民を守らない軍は何だ」
「それはその」
「言うならば」
部下達は返答に窮してしまった。そう言われるとどうしても言葉に困ってしまうものがあった。あまりにも直接の言葉であったからである。
そしてその部下達に。アッディーンは言うのであった。
「存在する価値はないな」
「は、はい」
「その通りです」
その通りだったがアッディーンの言葉を受けてようやく頷けたのであった。
「それはまさに」
「実に」
「そういうことだ。軍は国民の為にある」
また言うアッディーンであった。
「もっと言えば国民とはだ」
「国民とは」

「オムダーマン国民のことですね」
「オムダーマン国民はだ」
彼はまた言った。
「今いるだけではない」
「といいますと」
「やはり」
「そうだ。オムダーマンがサハラを統一する」
既にそのつもりであった。彼はハサンを倒しそのうえでサハラを統一するつもりだったのだ。これはサハラにある殆どの国家が目指しているものだ。
「我等がな」
「では今オムダーマンにいない者達も」
「やがては国民として」
「そうだ。だからこそ彼等にも危害を加えてはならない」
これが彼の考えであった。
「絶対にな」
「はい、わかりました」
「それは」
「口で言うのは容易い」
しかし彼はここでこうも言うのだった。
「だが実行はだ」
「難しいと」
「そう仰るのですか」
「その通りだ。現に西方はようやく落ち着いたが」
「はい、そうですね」
「統一してかなりの時間が経ちます」
「しかし。南方がどうか」
その彼等が統一したもう一つの地域だ。今のオムダーマンは殆どその西方と南方にある。ここから全ての戦力を出してきているのだ。
「まだ落ち着いてはいないな」

「治安に当たる軍と市民の間には緊張が見られます」
「どうしても」
「そしてだ」
ここでもアッディーンは言った。
「占領地域ではどうしてもこちらからの問題のある行動があるな」
「は、それはどうしても」
「完全には消えません」
「目立つ程度に出てしまっている」
アッディーンは顔を曇らせた。
「だからだ。それをなくす為にはだ」
「やはり国民達に入っての研修ですか」
「それですか」
「そういうことだ」
彼が言うことはそれであった。
「わかったな。だからこそ研修を考える」
「はい、それではそのように」
「進めていきましょう」
部下達はまた答えた。
「そうしてサハラの統一の為に」
「より軍規軍律を」
「これでもだ」
だがアッディーンはここでふとこうも言うのだった。

## 第三十五部第五章　サハラの軍律その三

「我等の軍律もまた連合軍に劣るものではないがな」
「そうですね。それは確かに」
「オムダーマンもティムールも」
「そしてサハラも」
どの軍もなのであった。
「軍規軍律は確かだ」
「しかしそれ以上を望むと」
「そう言われるのですね」
「これについては限度がない」
アッディーンはこうも述べた。
「完全にはなり得ないのだからな」
「完全にはですか」
「どうしても不心得者が出るのもまた事実だな」
「はい、残念ですが」
「それは」
これについてはどうしても否定できなかった。実際に連合軍でもサハラ各国であってもそうした者が出ているのは確かであったからだ。
しかしそれは出るとそれだけ。軍の評判が悪くなるのでどうしてもいい顔にはならなかった。それは今の彼等も同じことであった。
「それをできる限り減らしていかなければ」
「今よりもまだ」
「その通りだ。減らしていくのだ」
現実にはこうなのであった。
「わかったな」
「はい、それではそのように」
「そうしていきましょう」

部下達もそれに応えた。アッディーンはその話が終わってからそのうえでまた別の話に入るのであった。その話もすぐにはじめてきた。
「そしてだ」
「はい」
「次は」
「今の補給路だが」
彼が次に話したのはこのことだった。
「首都アスランからこのガワールまでのルートは確保できているがだ」
「長いと仰るのですか？」
「やはり」
「そうだ。長いな」
やはり彼が言うのはこのことだった。
「少しばかりな。長過ぎる」
「長過ぎますね。やはり」
「首都からは」
「やはり首都には物資が集められる」
そこから政策が執り行われるから当然のことであった。とりわけサハラ各国は中央集権国家が多く結果としてそうなってしまうのである。
「その物資をここに送り込むだけでもだ」
「はい、かなりの労力がかかっております」
「それだけで」
部下達も述べるのだった。
「しかし仕方ありません」
「それはもう予想されていますので」
「しかしだ」
だがそれでもであった。アッディーンは言うのだった。
「ハサンとの戦いの時はまだいい」

「今は、ですか」
「ここから統一戦に取り掛かる際はだ」
「この補給路のままでは問題がありますね」
「どうしても」
「補給路が長いということはそれだけでネックになる」
アッディーンの言うことは事実であった。それに労力がかかるだけではなく長ければそれだけ侵害することが容易になるからである。
その方法は幾らでもあった。テロという手段もある。工作員を潜入させてそのうえで補給路を傷付ける、古来からある戦略である。
「それを何とかしなければならない」
「そういえばです」
「統一してからですが」
ここで部下達はまた話してきた。
「今アスランはサハラでも随分端の方にあります」
「即ち辺境です」
「その通りだ」
アッディーンもそれを認める。

## 第三十五部第五章　サハラの軍律その四

「西方及び南方の中にあるうちはまだいいがな」
「統一していく過程とこれからですか」
「それからは」
「そうだ。既に支障が出て来ている」
実際にそのことをまた言うアッディーンだった。
「統一してからはそうはいかない」
「では然るべき場所に首都を移す」
「そうなりますか」
「少なくとも政治的、軍事的にはそうした方がいい」
彼はこう述べた。
「とりわけ軍事的にはですか」
「ではどちらにされますか」
「その場所は」
「それはまだ議論していく」
これについては即答しかねるものがあった。
「今ここで私が言っただけだしな」
「そうですか。それではこれから」
「その話を進めていきますか」
「そうしていく。そしてだ」
アッディーンはここまで話したうえでその話を再開させた。
「アスランでは手狭にもなってきている」
「手狭ですか」
「アスランが」
「アスラン星系は惑星の数が少ない」
彼がまず指摘したポイントはここだった。
「そして衛星の数もな」
「そうですね。居住可能な星系も少ないです」

「衛星もまた」
これにはサハラの技術的理由も大きく関係していた。サハラはどうしても惑星開拓技術に関しては連合に大きく劣る。水星であっても冥王星であっても居住可能な惑星に変えることのできる連合と比べてその技術は相当落ちるものであるのが事実なのである。
「僅かしかありませんし」
「だからですか」
「そうだ。だからだ」
アッディーンはそれを理由としていた。
「より広く豊かな星系にしたいものだな」
「新しい首都星系はですね」
「手頃な場所にあり広く豊かな星系」
条件をこう吟味していくとかなり限られていく。だがそれでも今は選べないのだった。
「まずはこれからの議論ですね」
「それからですね」
「その通りだ。だがこのこともだ」
「はい、軍からの提案ということで」
「政府にも」
「そうしていく。実際にな」
アッディーンもそれで動くつもりであった。
「この戦いが終わってもやるべきことは多くある」
「そうですね。実に多く」
「統一してからもですね」
「統一して終わりではないのだからな」
奇しくも言葉はシャイターンのものと同じものであった。これは彼等が見ているものが同じだからに他ならないということでもあった。
「それはな」
「はい、そうですね」

「まさにそれからがはじまりです」
「創業と守成だったな」
アッディーンが今度出した言葉はこれであった。
「どちらが困難かだが」
「創業ではないと」
「そう仰るのですか」
「違うと言われている」
アッディーンはまた部下達に対して述べた。
「これは中国の逸話だったか」
「中国というと連合の」
「あの国ですか」
「そうだ。あの中国だ」
やはりその国であった。連合の中でも随一の国力を持つと共に長い歴史を持つその国だ。その国の逸話を今話すアッディーンなのだった。
中国唐代のことだ。この王朝の基礎を築いたとされる太宗李世民の臣下に魏徴という者がいた。彼は謹厳実直にして硬骨漢であり皇帝である太宗も臆することなく諫言した。

## 第三十五部第五章　サハラの軍律その五

その彼がある時。太宗と話をしていたのだ。
「創業と守成だが」
「はい」
魏徵がまず太宗の話を聞いていた。
「やはりだ。創業の方が困難であるな」
「何故そう思われるのですか」
ここでは問い返しただけであった。
「そのように」
「何かを創り上げることは難しい」
太宗は言った。
「この唐にしろそうだったからな」
「だからだと仰るのですね」
「違うのか？」
太宗は魏徵の言葉の調子に彼が自分とは別のことを考えているのを察した。
「これについて」
「はい、違います」
ここで魏徵ははっきりと告げたのだった。
「それは違うのです」
「どう違うというのだ？それは」
「まず何か創り出します」
「うむ」
「しかしそれは何もしなければすぐに消えてしまうものなのです」
こう太宗に話すのであった。
「ですからそれを維持するのには多くの労力が必要となります」
「では守成もまた困難であるというのだな」
「その通りです」

彼が言いたいことはこれであった。
「その創り上げたものが大きければ大きい程です」
「ふむ。では同じなのだな」
ここで太宗はわかったのだった。魏徴の言いたいことがだ。
「創業も守成も同じだけの力が必要であり困難か」
「その通りです。隋を御覧下さい」
その唐の前に中国を統一した王朝である。創業の主である文帝は質素であり有能な人物であり国を創り上げただけでなくよく治めた。しかしその次の煬帝は有能ではあったが贅を極め多くの宮殿や長城、大運河を造らせ出兵を繰り返した。その結果国を傾けさせ滅ぼさせてしまったのである。
「あの様な結末だったではありませんか」
「そうだな」
太宗もここでわかったのだった。煬帝の名前を出されるとだ。
「やはり。創業も守成も同じだけ困難なのだな」
「その通りです」
こういうことだった。魏徴は太宗に対して創業も守成も同じだけの困難があると言ったのである。これはどの国家にも言えることである。
「ムハンマドも巨大なイスラム世界を築き上げた」
「はい」
アッディーンは太宗の話を終えてからまた部下達に告げたのだった。
「しかし後継者達がいなければ今ここにイスラムがあるか」
「それは」
「そう言われますと」
「その通りだ。なかった」
アッディーンはそのものを言ってみせた。
「絶対にな。ここまでは至らなかった」
「イスラムもまた守成があったのですか」

「ムハンマドの後の四人のカリフ達」
所謂正統カリフである。しかしスンニー派においてはその後のムアーウィア朝を認めている為あえてこの時代ではあえて正統という言葉は避けているのである。
「彼等もムーアウィア朝もな」
「そしてアッバース朝もですか」
「以後のイスラム国家達もだ」
それこそ星の数程あるものだった。その中にはあのオスマン＝トルコも入っている。オスマン＝トルコこそはイスラム最大の世界帝国と言ってもいい存在であった。
「そういった国家もあってこそだ」
「今の我々の社会があるのですか」
「その通りだ。無論今もイスラム社会は守成されている」
彼はこうも話した。
「我々によってな」
「そうなりますか」
「今もなのですね」
「その通りだ。イスラム社会は守成されている」
彼はまた言う。
「我々によってな。そしてだ」
「国家もですね」
「まず創業が為される」
国家と宗教が一旦分けられて話をしていたがここでまた国家に話が戻った。アッディーンはその国家についてさらに話をするのであった。

## 第三十五部第五章　サハラの軍律その六

「そしてそれを維持する守成もだ」
「力が必要ですか」
「力学でも言えることだ」
今度は力学であった。
「何かを動かしその力を維持するには同じだけの力が必要だな」
「ああ、そうですね」
「そう考えますと」
物理の話にすると余計にわかりやすいことであった。確かに何かを動かせばその力をそのまま維持するには同じだけの力が必要であった。
「連合が続いている理由はだ」
「同じだけの力を使っている。いえ」
「より以上ですね」
部下達はここで自分達の考えを訂正させた。
「力を次々に増大させていますね」
「それによってですか」
「そういうことだ。連合はその開拓と発展に力を注ぎ込み続けている」
だからこそあそこまでなるのであった。連合という国家は。
「今彼等があるのはその為だ」
「力を増大させ続けていますか」
「しかも飽和させることなく」
「連合はな」
彼等はそうなのだと言われるのであった。
「マウリアにしろ緩やかだがそうだ」
「そうなりますか。彼等も」
「マウリアもまた」

「エウロパは維持しているだけだがな」
エウロパについてはかなり批判的なものを含ませたアッディーンであった。彼もまたサハラ特有の反エウロパ感情を持っているのだった。
「それでもだ。守成の為に力を使い続けている」
「それは我々もまた同じなのですね」
「一つになればこそ」
「その通りだ。一つになればだ」
彼はまた言った。
「そうなっていくのだ」
「成程、だからこそ創業だけで終わりではないのですね」
「むしろはじまりに過ぎないと」
「うむ。だからこそまだはじまってもいない」
アッディーンの言葉には厳しさと言えるようなものまで含まれてきていた。
「我々はな」
「でははじめる為にもです」
「ここはやはり」
「まずはハサンを倒す」
最初はそれからなのだった。彼等にとって今の最大目標は何といってもハサンを倒すことだ。これが戦略目標なのである。
そしてその戦略目標の為に為さなければならないことは。アッディーンはもうわかっていた。そのことを今実際に言葉に出すのであった。
「アンダハル要塞を陥落させる」
「はい、それですね」
「あの要塞を」
「機雷源が集中しているが」
それにより護りを固めている。アンダハル要塞の堅固さはそこにあった。

「あの機雷源をまずどうするかだが」
「既に掃海艇は集められるだけ集めています」
「これも使いますか」
「砲撃により吹き飛ばす方法もあるがな」
その方法もあるというのだった。確かにこの方法はある。連合軍にしろこうしたやり方で実際にエウロパ軍の機雷源を突破してもいる。
「それもある」
「ですがそれは」
「今の我が軍の戦力でまずそれをやると」
彼等は口々に話すのだった。
「まずそこでエネルギーを消耗してしまいます」
「そこから敵軍に付け込まれます」
「わかっている」
そしてそれがわからないアッディーンでもなかった。彼は全てをわかっていてそうしてそのうえで今作戦を考えているということであった。
「それはな」
「ではやはり掃海艇をですか」
「今回はそれですね」
「うむ。しかしだ」
だがまだ問題はあるのであった。

## 第三十五部第五章　サハラの軍律その七

「掃海艇だけを行かせてもそこを狙われる」
「そうですね。敵もそれを狙っています」
「こちらが掃海艇を出せば間違いなく主力を出してくるでしょう」
実に容易に想像できることであった。
「そうなればやはり同じです」
「それをどうするかですが」
「既に考えはある」
アッディーンは述べた。
「それはな」
「そうですか。既に、ですか」
「では閣下」
「それは次の会議の時に言おう」
今は言おうと橋なかった。そこにも考えがあるかのように。
「次にな」
「わかりました。それでは」
「その時に」
「あの要塞を破っても次がある」
彼は第四の防衛ラインを突破してそれで終わりだとは最初から思っていないのであった。それは他ならぬ彼自身が最もわかっていた。
「次がな」
「そうですね。次があります」
「その最後が」
「全てを陥落させてやっとだ」
アッディーンの言葉は部下達よりもさらに先を見ているものであった。
「その次に取り掛かれる」
「ハサン中心部への進撃ですか」

「できれば王都は我が軍で陥落させたい」
遥か先である筈のこのことにももう考えを及ばせていた。
「是非でもな」
「その通りです。首都はまさにその国の中心ですから」
「そこを抑えておくと統一にかなり楽になります」
部下達も軍人である。しかもアッディーンが選んだだけのものがある。それならばこの程度の戦略眼があって当然のことであった。
「では要塞を全て陥落させた後はそれですね」
「王都を目指し」
「急ぐ」
今度は一言であった。
「その場合はな。急ぐぞ」
「電撃戦ということですね」
「その通りだ。今までもそうだったがその時も素早く攻める」
アッディーンの軍事行動の特徴であった。圧倒的な機動力を使いそのうえで迅速に兵を進めていく。これが彼の用兵の大きな特徴である。
「すぐにな」
「はい、わかりました」
「ではその際は」
「攻める。そしてその為にも」
「残る二つの要塞を最低限の損害で迅速に陥落させる」
ここで戦略が述べられたのだった。
「それですね」
「そうして王都も」
「今はこの場所を拠点にしているがその際が五つの要塞全てを補給ラインとする」
即ち敵の基地を利用するということであった。敵のものを奪いそれを利用するというのもやはり戦争にとって非常に価値のあるものである。

「そのようにしてだ」
「わかりました。それで閣下」
「どうした？」
アッディーンは部下達の言葉の調子が変わってきたのをすぐに察した。
「今は何かあったか」
「そろそろ夕食の時間ですが」
「どうされるでしょうか」
「そうか。もうか」
彼等の言葉を聞いて部屋の壁にかけてある時計を見る。見れば確かにいい時間であった。それを見れば確かにいい時間であった。
彼等の言葉とその時間を見てアッディーンは。また言うのであった。

## 第三十五部第五章　サハラの軍律その八

「それでは食事にしよう」
「何にされますか？」
「一体」
「いつもの通りだ」
だがここでアッディーンはこう言うのだった。
「同じものを貰おう」
「はい、それでは」
「すぐに持って来ます」
「いや、いい」
アッディーンは彼等の言葉を退けたのだった。そうしてそのうえで立ち上がるのだった。青い軍服と白いマントがそれにより動いた。
「今日は私から食堂に向かおう」
「食堂にですか」
「こちらに運ばせることは」
「既にこちらに運ばれているのか？」
部下達の言葉にその可能性を察して尋ねた。
「まさかと思うが」
「はい、いつものことですから」
「既にこちらに向かっていると思われます」
「そうか。わかった」
アッディーンはそれを聞くと足を止めた。それから踵を返して戻り元の場所に座した。結局のところ普段と同じケースになったのであった。
「それではそうさせてもらおう」
「わかりました。そうして頂けると」
「給養班も助かります」
「予定通りか」

アッディーンはここでこんな言葉を出した。
「そう行っていかなければならないのだな」
「少なくとも普段はそうあってもらいたいというのが」
「人の本音でありましょうか」
「その通りだな。そういえばあの長官は」
長官という言葉が出された。それと共にアッディーンの脳裏にアジア系の顔立ちをした気品に満ちた美男子の顔が浮かんだのだった。
「普段は時計のように正確に士官を過ごしているのだったな」
「長官！？ああ」
「あの御仁ですか」
部下達もまた長官という言葉で今彼が言っているその人物が誰かであった。
「八条義統長官ですね」
「そうだ。見事なまでに完璧に時間を正確に動いているそうだが」
「そのようですね。報告ですと」
部下の一人が静かに答えた。
「普段はそう過ごしているとか」
「夜は別だがな」
残業の時は、ということであった。
「その時はな」
「残業は。そうですね」
「それは」
「昼はそう過ごさなくてはならないか」
アッディーンは今度は時間の話をするのであった。
「予定通りにか」
「そうですね。それで周りが助かります」
「やはり平時は」
「あの長官はそれがわかっているのか」
また八条のことを考えるのだった。アッディーンは今彼を規範に考えていた。より簡単に言うと彼を参考にしているのである。そう

いうことだった。
「はっきりと」
「おそらくは」
「その辺りも考えているということでしょうか」
「そうだな。つまりそうした気配りもできる」
八条のそうしたところにも気付いたのであった。
「そういうことか」
「そうかと」
「あの長官にも学ぶべきことは多いな」
あらためてこのことにも気付いたのだった。
「やはり非凡な人物だ」
「はい、それもかなり」
「元は軍人であったそうですが」
「しかし今は文民だ」
軍人も退役すればそれで文民になる。軍人大統領という存在がサハラではこの間まで普通にいたがそれはあくまで現役の武官である場合のことである。
「時間は下手な軍人のそれよりもしっかりとしている」
「やはり平時はそうしておかなければということですか」
「そうだな。その通りだ」
アッディーンはこのことを考えて思慮する顔になっていた。

## 第三十五部第五章　サハラの軍律その九

「それは私もだ」
「そういえばです。オーストリアの」
「オーストリアか」
「はい」
言うまでもなくエウロパの一国である。今はハプスブルク家が王家として復活し王制となっている。かつては皇帝であったがこの時代では王になっている。
「フランツ＝ヨーゼフ帝もかなり時間に厳しい生活を送っていたそうですね」
「確かだ」
アッディーンはその皇帝のことも思い出したのだった。非常に保守的な人物であり生真面目であった。このことでこの時代も名前が残っているのである。
「十一時に寝て五時に起きる」
まずはそれからなのだった。
「そうしてそれから仕事に取り掛かる」
「そうした生活だったそうですね」
「まるで時計だったそうだな。カントと同じく」
ドイツの思想家であり哲学者である。虚弱体質であったが規則正しい生活を送ることにより長生きもしている。ドイツだけでなく世界の哲学史に大きく名前を残している。
「あの皇帝は」
「そうですね。それにひきかえです」
「金正日でしたか」
二十世紀の終わりから二十一世紀のはじめに存在しその汚名を後世に残している人物である。人類史上最低最悪の独裁者という評価を父である金聖柱と共に受けている。

「時間も何もかもが己の思うままだったとか」
「昼に寝て夜に起きていたそうで」
「そうした生活はするべきではないものだ」
アッディーンは昼夜逆転した生活をそう言い捨てた。
「間違ってもな」
「では人はやはり」
この言葉に部下の一人が問うた。
「人は昼に起き夜眠るものだと」
「そう仰るのですね」
「人間の生きるサイクルは本来そうなっている」
こうまで話すアッディーンだった。
「間違っても夜に起きるものではない」
「そういうことですか」
「ですがヒトラーは確か」
「明け方まで仕事をし遅くても九時には起きる」
多忙故の生活がそうさせていたのである。ヒトラーは少なくとも勤勉な男であった。己に権限を集中させているだけはあることである。
「そうした生活だったがな」
「それもまたよくないそうですね」
「身体には」
「私もそうは言っていられないが」
アッディーンにしろ多忙である。だから最近ではよ夜遅くまで仕事をすることが多くなっているのである。これは地位がそうさせるものであり仕方がなかった。
「それはな」
「やはり多忙ですか、閣下も」
「今はやはり」
「その通りだ。どうしてもな」
首も少し捻らせていた。

「そうなってしまっている」
「やはりそういうところは難しいのですね」
「休むようにするには」
「休むことも重要なのはわかっているが」
それでもなのであった。結局のところは。
「どうしてもな。副大統領でもありオムダーマン軍を統括しているとなるとだ」
「やはり仕事が減りませんか」
「地位が高ければ」
「貴官達も同じだと思うが」
アッディーンは彼等に対しても言った。
「多忙ではないか？将校というものは」
「いえ、別に」
「それはありません」
この返答は真実ではなかった。軍人、ましてや将校ともなれば弱気な発言は禁じられる。だからこそこう答えたのである。そういうことであった。
「我々は特にこれといって」
「困ってはいません」
「そうか」
アッディーンは彼等の実情はわかっていたが今はそれを伏せていた。
そのうえで彼等との話を続けていく。そしてまた問うた。
「それならいい」
「はい、御心配には及びません」
「ですから」
「ならいい。そういえば連合軍も時間に正確だったな」
「そのようですね」
「それも下手をすると我が軍以上に」
時間の厳守という概念も徹底させているのが連合軍である。これ

も軍規軍律を保つという意味において重要だと考えられてのことである。

## 第三十五部第五章　サハラの軍律その十

「時間に厳格だとか」
「それもかなり」
「強くなる要素は充分にあるな」
アッディーンはそこまで聞いてあらためて連合軍について述べたのだった。
「彼等もな」
「強くなりますか、今以上に」
「今の連合軍といえば」
「ただ。数と装備で戦う軍だ」
これが連合軍の評価である。その数と装備に加えて情報と補給も加わる。つまり将兵の個々の質ではあまり戦っていないのである。
「ハードウェアとシステムで戦う軍だ」
「ソフトウェアは頼りにしていないのですね」
「あの長官はそうしたことは考えていないな」
このことも見ているのであった。
「どうやらな」
「ソフトウェアを頼らずにハードウェアとシステムで戦いますか」
「人材ではなく」
「当然人材を必要とはしている」
このことは言うのであった。人材とは即ちソフトウェアのことである。連合軍の教育もまた非常に高度に制度化していることも知られているのだ。
しかしであった。アッディーンはここで言うのであった。
「だがそれはあくまで戦略戦術の中でのユニットとしての人材だ」
「ユニットのですか」
「連合軍は戦術もコンピューターに想定されている」
それも定めているのである。

「そしてそれに基き兵を動かせばいいだけになっている」
「兵はそれに従うだけでいい」
「それだけですね」
「そう、それだけだ」
彼はあらためて言うのであった。
「彼等はそれだけだ」
「ではそれを的確に実行できるだけの人材がいればいいのですね」
「システムの通りに戦うことができる人材が」
「連合軍に必要なのはだ」
アッディーンの言葉は続く。
「一人の名将ではなく百人の凡将だ」
「凡将ですか」
「百人の」
「凡将といえど侮ってはならない」
彼はまた言った。
「平均点の将であろうとも彼に圧倒的な数と装備、そしてそれを支える整備と補給があればそれで名将を圧倒できるのだからな」
「だからこその凡将なのですね」
「彼等が求めるのは」
「そうだ。彼等は天才を求めてはいない」
傑出した人材を求めてはいないということであった。連合軍は人材の平均化を考えて教育をしているのである。これは近代国家の軍の特徴であった。
この場合の近代国家といえば二十世紀後半以降の軍のことだ。アメリカ軍に代表される高度に機械化されシステム化された軍のことである。
「求めているのは平均なのだ」
「しかしそこで訓練をよりハードにすれば」
「より強くなるというのですね」
「そうなれば連合軍の強さは途方もないものになる。そして」

「そして？」
「名将ですか」
欠けているパーツが次々に入れられていくような言葉であった。
実際にアッディーンは連合軍のそうしたところまで見ていたのである。
「それが加われば」
「もっとも連合軍は決してそれはしないがな」
そしてこうしたこともわかっているのであった。
「連合軍はあれ以上の訓練を将兵達に課すことはない」
「やはり緩やかなのですね」
「規律以外は」
「そうだ。規律に殆どのウェイトを置いている」
連合軍の訓練はそうなっているのである。
「実戦訓練をここで厳しくすればですか」
「するべきでは？」
「確かに」
「それで人が集まればな」
このことがプラスされるのであった。連合は。
「そこまでしてな」
「ああ、そういえば連合は志願制でしたね」
「しかも軍人の成り手が思ったより少ないとな」
「我々から見てな」
サハラでは兵士は徴兵制、実質的には厳密な選抜徴兵制であり兵士になれるということは立派なことであるとされているのである。
将校ともなればそうはなれないものである。そうした事情からサハラにおいては軍人といえば人気のある職業になっているのである。
「かなり人気がない」
「軍に入らずとも地位が手に入るからですか」
「そして名誉も」
「連合では軍人の地位は低い」

これも連合の特徴である。

## 第三十五部第五章　サハラの軍律その十一

「収入や厚生は人員確保の為に充実させているがな」
「そもそも軍人にそうしたものを求めるのが」
「そうです。おかしいのでは？」
これまたサハラの考えであった。
「軍人は名誉を糧にしています」
「誇りを胸に生きるものです」
「それで何故そこまで甘くするのか」
「それがわかりませんが」
「それはサハラから見ての言葉だ」
だがアッディーンはその彼等にこう述べるのであった。
「サハラからな」
「我々から見てですか」
「では連合から見れば我々は一体」
「過酷だ」
一言で言い表したアッディーンだった。
「彼等から見ればな。我が軍はあまりにも貧しい」
「貧しいですか」
「軍だけではない。国全体がだ」
全体までそうであると言われるのだった。
「彼等から見ればな」
「我々が貧しいですか」
「そうは思いませんが」
「だからだ。彼等から見てだ」
この言葉がまた言い加えられた。アッディーンの言い加えられる言葉が続いていく。
「我々はやはり貧しいのだ。サハラ全体がな」
「我等二千億の人口と全ての星系を合わせてようやくエウロパと同

じでしたな」
「その程度の国力だと」
「それに対して連合はだ」
サハラの国力の後で連合のそれが語られるのだった。
「まず人口が四兆だ」
「はい」
「まずは二十倍です」
「そして国民所得にすると五倍だ」
「五倍ですか」
「そこまで開いているのですか」
「総生産で言うと彼等はまさに人類の殆どだ」
既に人口だけで四兆五千億のうちの四兆、即ち八割五分以上が存在している。それだけの差があればそれだけの差に留まらないのだ。
「人口だけで二十倍と考えていたがだ」
「実質はそれ以上の開きがあるのですね」
「百倍は優に超える」
そこまでだというのである。
「それだけの差があるのだ。我々と連合の間にはな」
「それだけ国力が開いている」
「そうなりますな」
「かつて韓国は日本に幾度も挑もうとした」
経済的、政治的に、という意味である。二十世紀後半から二十二世紀にかけてのことである。韓国が一方的に挑もうとしていたのである。
「しかし十倍の国力差はどうにもならなかった」
「どうにもですか」
「十倍で、ですか」
「そうだ。人口では三倍だったが国力では十倍の差があった」
この差が極めて大きかったのである。尚且つ韓国の経済はそのかなりの部分を日本に異存していた。これも大きなネックだったのだ。

「それを覆すことは今もできてはいない」
「そうして今に至ると」
「あの両国の関係は」
「韓国はあまりにも強大な相手を意識し過ぎている」
アッディーンはこうも言った。
「今は流石にそこまで開いていないにしろだ」
「それでも連合において日本と韓国の差は」
これはサハラにいてもわかることであった。
「かなりのものですね」
「韓国では相手にならないまでに」
「日本と韓国でそれだ」
連合とサハラ程度開いていないにしろである。

## 第三十五部第五章　サハラの軍律その十二

「その我等全てを合わせたものと同じ程度の力のエウロパでもだ」
「あの有様でした」
「誇り高く戦いはしましたが」
「誇りで覆せないものもある」
アッディーンの言葉はここでは極めて冷徹なものであった。
「どうしてもな」
「どうしてもですか」
「それだけでは」
「だからこそエウロパは敗れた」
これが現実である。
「マウリアの仲裁がなければ首都オリンポスは連合軍に占領されていた」
「確かに。それは」
「間違いありません」
部下達も同じように見ていた。オムダーマン軍では連合軍はマウリアの仲裁がなければそのまま得オリンポスに入城していたと分析されている。
その連合軍の力は何処から来るのか。その豊かさからなのであった。
「その国力差にな」
「確か個人所得では」
「エウロパが最も高かったのでは」
このことも述べられるのであった。
「連合と比べましても」
「かなりのものだったのでは。生活レベルも」
「貴族はな」
アッディーンは感情を消してこう述べた。

「確かに貴族達はそうだ」
「では平民達は違うのですか」
「彼等は」
「彼等はあくまで平民だ」
このことはサハラにおいては非常に大きな意味を持っている。エウロパは厳然たる階級社会だからだ。貴族の持っているものはやはり大きいものがあるのだ。
「しかしだ。貴族は貴族だ」
「豊かさを保てる」
「そうなのですね」
「その通りだ。彼等が連合の平均所得よりもそれが多いのは当然だ」
当然だとも言われるのだった。
「連合の学者の一部はその貴族の生活を言っていたのだ」
「最後にそれでも連合の生活こそが最もいいと」
「そう言い加えたうえで、ですね」
これが連合の特徴である。エウロパを褒める数少ない場合においても必ずそう付け加えるのだ。これが連合なのでありエウロパへの彼等の見方なのだ。
「彼等をエウロパと見ていたのですか」
「多くは」
「しかし実質的な差は百倍だ」
この差はサハラと同じであった。
「勝てるものではなかった」
「だからこそエウロパは敗れた」
「そして若しもです」
語られる話の内容がここで変わってきた。
「我々が彼等と戦えばやはり」
「敗れると」
「我等はあくまで統一をすればだ」
アッディーンは話を戻すと共にそこにこれまで話したことも入れ

ていくのであった。そうしてその話を複雑にミックスさせるのであった。
「後は戦争をしてはならない」
「連合とはですね」
「彼等とは」
「連合だけではないがな」
彼等だけでもないともされていく。
「少なくとも連合と戦っては敗れる」
「はい、確かに」
「それは間違いありません」
これはすぐにわかることであった。実質百倍もの国力差を考えれば到底勝てるものではない。数字により示されたものは嘘をつかない。
「ではやはり我々は統一したならば」
「戦いを避けるべきですね」
「とりわけ連合とは」
「その通りだ。連合とは戦うな」
アッディーンはまた言うのであった。

## 第三十五部第五章　サハラの軍律その十三

「何があろうともな」
「わかりました。それは」
「肝に銘じます」
彼らもそれぞれ言うのであった。
「連合とは戦うな」
「例え何があろうとも」
「幸い彼等も我々には興味を持っていない」
このことも戦略上非常に大きかった。
「彼等から見て我々はだ」
「外の世界ですね」
「我々もまた同じように考えていますが」
「そうだ。連合は連合、サハラはサハラだ」
両者がこう考えていることがそれ自体が戦略上に大きな意味を持っているのであった。
「連合が弱かったとしても攻め込みたいか」
「いえ、別に」
「それはありません」
このことは即座に否定された。
「連合がどれだけ豊かであろうともです」
「我々とは関係のない世界ですから」
「それでどうして攻めましょう」
「何の興味もありません」
「そういうことだ」
ここまで聞いた上での今のアッディーンの言葉であった。
「サハラの統一をすれば後は守成だけだ」
「つまり攻める必要はない」
「そういうことですね」

「その通りだ。サハラだけで充分だ」
アッディーンもやはり連合には興味がないのであった。
「それはもうな」
「そうですね。別に連合が何をしようと構いません」
「我等に対して何もしなければ」
やはりこういう考えであった。
「別にどうということはありません」
「好きにしていればいいです」
「連合は連合、サハラはサハラだ」
多くの者が言う言葉をアッディーンも口にしたのだった。
「何の関係もない二つの世界だ」
「交流があろうとも」
「特には」
「その通りだ。ただし備えはしておくべきだ」
だがこのことも言うアッディーンだった。
「いざという時に備えてな」
「といいますとやはり」
「連合の侵略ですか」
「そうだ、それをだ」
やはりそのことについての話であった。
「どうするかだ。我等にとってはな」
「それならば国境の守りを固めるのがいいかと」
「私もそう思います」
彼等の返答は決まっていた。そしてここで食事が運ばれてきたのであった。
「閣下、お待たせしました」
「うむ」
アッディーンはそれに応えて顔を向けたのだった。
「そうか」
「はい、こちらに置いておきますので」

「後でまた来ますので」
給養班の若い兵士達がそれに応えるのだった。彼等は敬礼をしたうえで一旦部屋を後にする。アッディーンはそれに返礼してまた話をするのだった。
「それでだが」
「はい、お話の続きですね」
「それについてですか」
「そうだ。国境を固めるべきだったな」
部下の一人に対しての言葉であった。
「それだったな」
「はい、それです」
「それですね」
もう一人の部下もそれに応えて述べるのだった。
「やはり連合との国境の守りを固めるべきです」
「私もそう思います」
「二人共同じ考えだというのだな」
アッディーンは彼等の話を聞いてこうまとめたのであった。
「つまりは」
「はい、そうです」
「その通りです」
彼等もそれに応えるのであった。

# 第三十五部第五章　サハラの軍律その十四

「やはりそれが一番です」
「私もそう思います」
「その通りだ。そうあるべきだ」
これはアッディーンも認めることであった。
「それはな。しかしだ」
「しかし？」
「まだ何かありますか」
「そうだ。ただ国境を守るだけでは不充分だ」
アッディーンは言った。
「それだけではな」
「といいますと一体」
「どうされるのですか？」
「国境の守りを固めてもだ」
アッディーンはその言葉を続ける。
「それを突破されれば終わりというのではだ」
「何の意味もない」
「そう仰るのですね」
「そういうことだ。そこだけ守りを固めればいいというものではない」
アッディーンはまた言うのであった。
「そこを破られた時に備えてだ」
「何重もですね」
「守りを築いておくと」
「そういうことだ。何重も守りを固めておく」
これが今のアッディーンの考えであった。
「何重もな。それで敵を防ぐ。しかも」
「しかも？」

「まだ何かありますか」
「この何重もの防衛ラインはあえて彼等にも見せるようにしておく」
彼は言うのであった。この場合の彼等というと連合のことに他ならない。あえて彼等に対してその何重ものラインを見せるというのである。
「そうしておくのだ」
「あえて見せる」
「それは何故ですか？」
部下達はそのことも尋ねたのだった。
「見せればそれで相手にわかりますが」
「それでもでしょうか」
「そうだ。あえて見せる」
彼の言葉は続く。
「彼等に対してな」
「つまり見せることによって相手を思い止まらせると」
「そういうことでしょうか」
部下達は彼の言葉からこう考えた。敵に対してあえて武器を見せてそれにより攻めるのを止める、これもまた戦略のうちなのである。
戦略には陰と陽がある。こうして見せるのは陽であるのだ。
「そうして敵を止める」
「それですか」
「その通りだ。そうして彼等を止める」
やはりその通りであった。
「あえて見せることでな。連合はそもそも我々にはこれといって興味はない」
「では興味が沸いたとしても」
「それで思い止まらせるというのですね」
「そういうことだ。だからこそ見せる」
そういうことであった。
「連合にはそう対する」

「連合にはですか」
「統一された際は」
「そしてマウリアに関しても同じだ」
同時に対マウリアの戦略についても言及するのであった。
「やはりだ。あえてその防衛ラインを見せておく」
「そうして思い止まらせる」
「そういうことですね」
話を聞いてそれを察したのであった。
「それでは閣下」
「残る一つですが」
部下達はここでこの話の流れから見て当然のことを尋ねるのだった。
「エウロパに関しても」
「やはり見せるのですか」
「そうだ。見せる」
まずは連合やエウロパに対するのと同じ言葉であった。

## 第三十五部第五章　サハラの軍律その十五

「しかしだ。それだけではない」
「といいますと」
「見せるだけではなく、ですか」
「そうだ。隠しもする」
彼等に対してはそうだというのであった。
「彼等に関してはな。あからさまに隠す場合もあれは完全に隠す場合もある」
隠すにしろ様々というわけだ。黒もただ漆黒があるというわけではない。薄い黒もあれば明るい黒もある。そういうことであった。
「それもまた様々だ」
「はい、わかりました」
「そういうことでしたら」
彼等も今のアッディーンの言葉で全てを理解したのであった。
「つまり三つの勢力それぞれに対するのですね」
「統一したならば」
「おそらく統一してすぐにはどの勢力も動いてはこない」
これはアッディーン個人の予想であった。
「すぐにはな」
「それは何故ですか？」
「すぐに動かないとは」
「エウロパはまず動くことができない」
最初に言及したのはエウロパについてであった。
「連合との戦争での痛手があるからだ」
「それによりですね」
「彼等は攻められませんか」
「その通りだ」
このことは既に分析しているアッディーンであった。

「絶対に無理だ」
「そうですか」
「それこそ全てを賭けてこない限りはな」
「ではやはりありませんね」
「こちらには来ないですか」
彼等もそれを聞いてこう判断するのであった。
「暫くはな。それに動けない理由もある」
「戦争での傷跡以外にもですか」
「その他にもですか」
「そうだ。ニーベルング要塞を奪われた」
このことを言うのであった。
「あの要塞をな」
「そういえばあの要塞は今は連合軍のものでしたね」
「確かアタチュルク要塞群ですか。今は」
このことを思い出すのだった。彼等にしてみれば両者のこのことは遠い世界のことである。やはり現実のものではないのである。どうしてもだ。
「それを奪われたことがそこまで大きいのですか」
「彼等が動けないまでに」
「あの要塞群に多くの兵を入れられている」
エウロパ軍の立場になっての言葉であった。
「多くのな」
「ああ、そうですか」
「それによってですか」
彼等もまたそれでわかるのだった。そのアタチュルク要塞群に兵を入れられてはエウロパはどうなるのは。自然と出される結論であった。
「彼等は動けないのですね」
「下手に動けば連合軍が何をしてくるのかわからない」
やはりこういうことであった。

「だから彼等は動けませんか」
「どうしても」
「そういうことだ。若し連合軍があの要塞群から兵を下げればわからないがな」
その場合はということであった。
「だがそれはまず有り得ない」
「そうですね。それは考えられません」
「連合軍の立場から考えますと」
今度は連合軍の立場になって考えるのだった。連合軍にとってみればエウロパとの最前線であるアタチュルク要塞群から兵を下げては話にもならないのだ。
「それだけはありません」
「あの要塞群は彼等のエウロパへの備えなのですから」
「だからだ。彼等もまた来ることはない」
そしてこの結論が出されるのだった。
「決してな」
「そうですね。ではエウロパ軍もありません」
「攻めて来ることはできません」
エウロパ軍についてもこれで結論が出された。こうして彼等を攻めるような勢力は全て消え去ったのであった。そう言ってもいいのだった。

## 第三十五部第五章　サハラの軍律その十六

「では統一されれば暫くは平穏ですね」
「そうなりますね」
「平穏だがそうだとは言い切れない」
アッディーンの今度の言葉は少し聞くと矛盾するものだった。
「平穏はただ平穏であるだけではないのだ」
「といいますとその間に」
「備えが必要だというのですね」
「連合とエウロパだ」
また彼等のことが話に出た。
「彼等の双方を相手にするぞ」
「はい、そうですね」
「確かに」
「それに備える。平穏の時代にな」
戦争はただ戦闘を行うだけではない。その平穏の間にもやらなければならないことがある。彼が今言っているのはそういうことに他ならなかった。
「備えておくぞ」
「はい、わかりました」
「それでは」
話が一段落ついた。これで話が終わった。アッディーンはそれを受けて今度は食事を摂ることにした。それはすぐに終わってしまった。
部下達は彼の食事がはじまると姿を消した。そうしてアッディーンは一人で食事を摂った。それが終わると彼はまた仕事に入った。
またティムール軍でも同じであった。やはり連合軍のその軍規軍律の厳格なことが伝わっていた。シャイターンもまたそれを聞いて考え込んでいた。

「これはまた凄いな」
「そうですね。確かに」
「非常に」
シャイターンの言葉に二人の男達が頷くのだった。
「これは我が軍以上です」
「かなり厳格な軍規軍律だ」
「しかもそれだけではない」
シャイターンは弟達に対して述べた。
「柔軟性まで備わっている」
「そうですね。応用も利くものになっています」
「よく考えられたものです」
フラームとアブーもやはり話すのであった。
「あの長官のことは度々聞いていますが」
「こうしたものを考え実際に導入するとは」
「政治家として不世出の存在だ」
シャイターンは彼を政治家と判断するのだった。
「それもかなりのな」
「しかもです」
「この研修は」
彼等は今度はその研修についても話をするのであった。
「よくもこんなものを考えたものです」
「この発想は我等にはできません」
「私にもだ」
シャイターンはその鋭利な美しさを持つ顔で言った。
「こうした軍規軍律の学ばせ方があるのだな」
「そうですね。こういうものがありましたか」
「連合には」
「連合はかなり広い世界のようだが」
これはシャイターンも知ってはいた。
「しかしだ。それを考慮してもだ」

「はい、かなりのものです」
「そうおいそれと考え実行に移せるものではありません」
こういうことであった。連合においてもだ。
「ですがこれはかなりの効果をあげているようですが」
「連合軍において」
「連合軍について、いや」
シャイターンの言葉がここで大きく動くのだった。
「連合についてよく知りたいな」
「連合についてですか」
「連合軍ではなく」
「連合軍を作っているのは連合だ」
これは言うまでもないことであった。
「連合という社会がな」
「成程。だからですか」
「連合自体を」
「その通りだ。連合をだ」
こう言うのであった。
「学んでおくべきだな」
「連合をですか」
「では留学生を」
奇しくも話はオムダーマンと同じになっていた。
「派遣しますか」
「そうするのですね」
「いや、それだけではない」
だがここでシャイターンは言うのであった。

## 第三十五部第五章　サハラの軍律その十七

「それだけではな」
「というとそれは」
「どういうことですか？」
二人の弟は長兄の言葉に首を捻ってしまった。
「留学生だけではないのですか？」
「それだけではないとすると」
「前にも言ったか。私も行きたい」
こう言うのである。
「私も連合にな」
「いえ、それは幾ら何でも」
「冗談が過ぎます」
弟達はこう言って彼の言葉を否定するのであった。
「できる筈がありません」
「そうです、それはかなり」
「そう思うのか」
こう話されてそのうえで弟達の顔を見るシャイターンであった。
「このことに関しては」
「はい」
「違いますか？」
彼等の返答はそれが常識あるということを既に内包しているものであった。
「やはり。兄上御自身となりますと」
「そのようなことは過去には」
「例がないというのだな」
ここでまた弟達の顔を見るのであった。
「過去にそのようなことは」
「はい、その通りです」

「御言葉ですが」
そして彼等の返答は彼の予想した通りのものであった。
「サハラの歴史、いえイスラム開闢以来」
「それはなかったことです」
「いや、あった」
だがここで。シャイターンはその弟達に対して告げたのだった。
「それはな。あったのだ」
「あったのですか？」
「それは」
「アラブ、いやサハラの歴史ではない」
まずこのことは言うのであった。
「それはな」
「ではやはりないのではないですか？」
「そうです」
「歴史はアラブ、そしてサハラだけではない」
しかしシャイターンは弟達にこう告げるのであった。
「それはな。ないのだ」
「それはそうですが」
「連合にしろエウロパにしろ」
弟達もこうしたことはわかっていた。歴史がサハラだけのものではないということは。これはもう言うまでもないことであった。世界は一つではないのだ。
「それにマウリアもあります」
「彼等の歴史が」
「答えはそこにある」
シャイターンの言葉がここで止まったのだった。
「そこにな」
「といいますとそれは」
「どの勢力にそれがあるのですか？」
「連合とエウロパだ」

シャイターンが出したのはその二つの勢力であった。人類の歴史において激しく対立し合ってきているその二つの勢力がそうだというのだ。
「彼等にそれぞれある」
「連合と」
「そしてエウロパに」
フラームもアブーもそれを聞いてまずは首を傾げさせるのだった。
「あったのですか」
「そういった事例が」
「いや、違うな」
しかしここでシャイターンの言葉が少し変わったのだった。
「どちらも連合だ。行った場所はエウロパだが」
「連合にそのようなことをした国家があったのですか」
「しかも二つもですか」
こう言われてもフラームにもアブーにも今一つわからなかった。どの勢力かというとだ。はっきりとどの国家かわかりかねていた。
「そういうことをしそうな国家は連合には」
「何処でしょうか」
「まずはロシアだ」
シャイターンが最初に出した国家はそこであった。

## 第三十五部第五章　サハラの軍律その十八

「ロシアがそれだ」
「ロシアがですか」
「あの国がそうしたことをしたことがあったのですか」
「ピョートル大帝を知っているな」
　ロシアの歴史においてその名を留める皇帝である。俗に名君とされているがその型破りな人間性は果たして名君という範疇に収まりきれるものかどうかわかりかねるものがある。こうした皇帝や国家元首はロシアの歴史において非常に多いのがロシアらしいと言える。
「あの皇帝だがな」
「ああ、あの歯を抜くことが大好きな」
「あの皇帝ですね」
　これも本当のことだ。ピョートル大帝は自分が興味を持ったことは全て自分で身に着けなければ気が済まない人物だったのである。それでそうした歯科技術も身に着けたのである。ただしそれはその怪力を使いヤットコで虫歯を引き抜くという極めて乱暴なものであった。
「あの皇帝がそれをしたのですが」
「自身での留学を」
「西欧にわざわざ行ってな」
　こう弟達に話すのであった。
「その文化や技術を学んだのだ」
「そのようなことをしたのですか」
「あの皇帝が」
「その歯を抜くことにしてもだ」
　シャイターンは今二人の弟達がピョートル大帝について述べたその歯科技術についても言及した。実はこれも西欧から学んだものであったのだ。

「西欧から学んでいる」
「それでですか」
「歯を抜くことを学んだのは」
「他にも多くのものを自分で学び取った」
それが彼だったのである。
「そうしてロシアに西欧の様々な優れたものを導入したのだ」
「成程。それでですか」
「まずはそれなのですね」
「そうだ。まずはこのことだ」
ロシアのことを再び話すのであった。ロシアもただその広大な領土だけで強大な国家となったわけではないのだ。そこに至るまで多くのものを学んできているのだ。
「ロシアだ」
「そしてもう一つは」
「どの国でしょうか」
「日本だ」
彼が次に出したのはこの国であった。奇しくも連合四大国のうちの二つだ。しかもかつて激しく対立し合った両国であるのだ。まさに不倶戴天の敵同士であったのだ。
「あの国だ」
「日本ですか」
「何かと学ぶことの好きな器用な国ですが」
サハラでも日本に対する評価はこういったものであった。日本人の国民性のせいであるがそれもやはりこの時代でも同じなのである。
「あの国がですか」
「そしてそれはどうやってですか？」
「明治維新の頃のことだ」
やはり千年以上昔の話であった。時系列においてはロシアの方が数百年昔である。
「西欧通信使を派遣したのだ」

「また西欧にですか」
「あの場所に」
「当時の西欧は先進地域だった」
この時代ではそれは連合になっている。技術の中心もまた彼等に移って久しいのである。ここからもエウロパは斜陽の勢力と言われてきている。
「そこから学んだのだ」
「日本もですか」
「確かに日本は西欧から多くのものを学んだと聞いていますが」
これは事実だ。日本の近代化はまさしく西欧文明を学んで全てを身に着けるということなのだ。そうしてそのうえで近代化を果たしたのである。
「国家元首まで送り込んでいたのですか」
「というとあの皇帝を」
サハラでは天皇は皇帝と呼ばれることが多い。連合の表現においても皇帝とされることが多いのである。天皇は確かにそういう存在であられる。

## 第三十五部第五章　サハラの軍律その十九

「確か明治帝でしたね」
「大帝と言われた」
「いや、明治帝ではない」
シャイターンはそれは否定したのだった。
「明治維新を成し遂げたその政治家達が言ったのだ」
「といいますと閣僚が何人もですか」
「学ぶ為に祖国を留守にしたのですか」
「総理大臣が憲法を学ぶ為に国を空けたこともある」
これもまたフラーム達にとっては信じられないことであった。
「憲法を学ぶ為に一国の宰相が国を空けたのですか」
「そうしたことまでしてそのうえで」
「そうだ。西欧の全てを取り入れたのだ」
日本もそうしてきた時代があったのである。なおこの宰相とは初代内閣総理大臣である伊藤博文だ。まさに明治最大の元勲である。この時代においては日本の歴史上最高の政治家の一人とも言われている。余談だが彼は詩人としても名を残していたりもする。
「そこまでしてな」
「それもまた凄いですね」
「日本はそこまでしたのですか」
「我々もそうする必要があるのかもな」
そしてシャイターンは言うのであった。
「だからだ。それも考えているのだ」
「ですが兄上」
「それをすれば」
やはりここで怪訝な声を出す弟達であった。
「兄上が国を空けられてはです」
「流石に危険かと」

「それはわかっている」
わかっていなければおかしなことではあった。
「それはな。しかしだ」
「しかし？」
「何かあるのですか？」
「統一するか。若しくは相手が攻めてくることができない場合はだ」
一応ケースは限られはした。
「その場合は行きたいものだ」
「そこまで連合にですか」
「あるのですね」
「文明や技術はだ」
シャイターンの言葉はあくまで政治家のものであった。彼は今軍服を着ている。それはティムール共和国国家元首のものである。それを今着ているのだ。
「国家の反映には必ず必要だな」
「はい、それは言うまでもありません」
「私も同意です」
彼等もこのことに関しては異論はなかった。
「ですが。留学生を送るだけではなく」
「そこまでされると仰るのですか」
「そうしたいものだ。当然留学生達も送りたい」
留学生は必須だということだった。
「彼等も大勢な」
「それでは若手の文官、武官及び知識人達を多量にですね」
「送るよう会議で提案しましょう」
「それは私が行う」
彼自身がそれをするというのである。
「私がな」
「そうされるのですか」
「兄上御自身で」

「そのつもりだ。ただ」
「ただ？」
「まだ何かありますか」
フラームとアブーはここでまた長兄の言葉が止まったのを見て彼に対して問うたのだった。問いながらそのうえで彼の次の言葉を注視するのであった。
「ただ知識人や官僚達を送るだけではどうか」
「？それは」
「違うのですか？」
「確かに人は限られるがだ」
彼は言うのだった。
「連合に行くことができる者はできるだけ行ってもらいたいものだ」
「といいますと一般市民もですか」
「彼等もですか」
「旅行でもいい」
そうした娯楽も含めてのことであった。
「出来る限り多くの者が連合を見てそれを学び取ってもらいたいのだ」
「旅行からもそれがわかると」
「そうした娯楽からも」
「連合はかなり旅行が盛んだと聞く」
これは事実である。連合の広大な領域を旅する者は多い。それは一つの巨大な産業になっており連合の経済の重要な部分を占めてさえいるのだ。
「連合内はおろかマウリアやこのサハラにまで旅をしにきているな」
「あくまで安全な場所ですが」
「時折危険地帯に紛れ込んでいることもありますが」
アブーの顔がここで顰めさせられた。

## 第三十五部第五章　サハラの軍律その二十

「あれはかなり迷惑なものです」
「その通りだ」
末弟の言葉にフラームも同意して頷くのだった。
「戦闘に巻き込んだりすれば連合との外交問題に発展するからな」
「危険だと事前に忠告はしますが」
これはサハラでの戦闘の常である。戦争、衝突が起こる前には必ず連合やマウリアから派遣されているビジネスマンや旅行者に対しては退去命令、勧告といったものが出されるのである。彼等が乗っている宇宙船等は攻撃の対象範囲外である。しかしそれでも奇襲等の場合はその退去命令が出されない場合もある。
「それでも何を考えているのか残る者はいますから」
「面倒なことです」
「だが連合で旅行が盛んなことは事実だ」
シャイターンはそれには答えずここではあくまで話をそのことに絞るのであった。弟達の話題にあえて入らずそのうえでの話であった。
「それはな」
「はい、その通りです」
「それは」
弟達もそれは認めるのだった。
「ツアーも大規模に組まれていますし」
「彼等は誰もが旅行を行っています」
連合という勢力がそれだけ豊かだということである。豊かで余裕がある状況でなければ旅行といった産業は到底成り立つものではないからである。
「それと同じようにですか」
「連合への旅行を」

「色々とやり方もある」
彼はさらに言うのだった。
「連合の企業にそうしたツアーを頼むこともだ」
「それもですか」
「あるのですね」
「これならば比較的安い費用で連合を旅することができる」
ツアーの魅力である。団体である為に割安となるのである。この時代の連合においてもこうした旅行はかなりポピュラーなものであるのだ。
「そういったものもいい」
「企業を使うのですか」
「そうした方法もですか」
「一人が連合を知らなければならないというわけではない」
彼は言った。
「むしろ多くの者が連合を知るべきだ」
「その文明や技術を知る為に」
「だからこそですか」
「そしてその力もだ」
これもだというのであった。
「知らなければならないからだ」
「だからこそ旅行もですか」
「考えていくべきだと」
「そうだ。さて、そうして連合を知りその持っているものをサハラの為に使う」
これが今シャイターンが考えている政治であった。
「これがもたらすものは非常に大きなものになる」
「はい、確かに」
「それは間違いありません」
「では。いいな」
ここまで話してあらためて彼に問うのであった。

「それでな」
「兄上御自身が行かれることには賛成できかねますが」
「それについてはですが」
二人の弟達はそれについては賛成の意は述べなかった。
「ですが旅行を行かせるというのは賛成です」
「それだけ多くの者が連合を知ることができます、確かに」
「平和になればより旅行が盛んになるべきだ」
シャイターンはサハラに目を向けて言うのであった。
「そうすれば多くの者が多くのことを知ることができるようになる」
「多くの者が多くのことを」
「それがサハラの力に」
「知識は力だ」
シャイターンは知識をそこまで高く評価しているのであった。
「知識はな。だからそうあるべきなのだ」
「はい、わかりました」
「ではその時には」
弟達もそれに応えて頷く。
「それに人の行き来ができます」
「そうして宇宙航路も整備されます」
「それは民間が行い資本が動く」
シャイターンは今度は経済の話をするのであった。
「それが何をもたらすかだ」
「はい。サハラに繁栄をもたらします」
「戦乱がなくなり統一されたサハラに」
「そうだ。人の行き来は経済だ」
人が経済を作る、ならば当然であった。
「だからだ。それは多くのものをもたらしてくれる」
「では産業や農業を発展させると共に」
「旅行も推進していくのですね」
「他の娯楽も推進させたい」

それもなのだった。
「他のものもな」
「娯楽もですか」
「それも」
「娯楽もまた産業だ」
所謂レジャー産業である。やはり連合ではこれがかなり発展しているのである。

## 第三十五部第五章　サハラの軍律その二十一

「だからだ。それもだ」
「推進し発展させていくのですね」
「そちらも」
「その通りだ。それはどう思うか」
　このことをあらためて問うシャイターンだった。
「レジャー産業については」
「そうですね。それはどちらかというと」
「サハラらしくはありませんが」
　弟達はいぶかしむ顔でこう答えるのだった。
「サハラにおいては娯楽はどうもあまり歓迎されません」
「テーマパークもあまり派手ではありませんし」
　そもそも戦争をしている中で娯楽も何もあったものではない。戦乱がまず消し去ってしまうものは娯楽だ。これには真っ当な理由がある。
　理由といってもそれは何も国家権力による弾圧ではない。全てがそういった権力の弾圧で話が進む程世の中も単純なものではないのである。
　国家権力が働くのではない。心が働くのだ。
　戦乱になればそれだけで人々の心から余裕が消える。そうなってしまえば娯楽といったものについて考えることはできなくなる。だからレジャー産業が消えていくのだ。
　サハラは千年もの間戦乱に覆われてきた。だからこそ娯楽産業が発達してこなかったのだ。これがサハラの産業の歴史でもあるのだ。
　しかしであった。ここでシャイターンが言ったことは。そのサハラの歴史を根本から否定しそのうえで全てを変えようというものであったのだ。
「兄上、それは幾ら何でも」

「冒険ではありませんか？」
「冒険ではない」
シャイターンは今度は弟達のその言葉を否定したのだった。
「必然だ」
「必然ですか」
「娯楽の発達もまた」
「平和になればまず心に余裕ができる」
これは歴史にある通りである。
「そうなればだ」
「娯楽が復活するというのですね」
「このサハラに」
「そうなる。千年ぶりにな」
ここでも千年という言葉が出された。
「その際も連合は参考にさせてもらいたい」
「連合を参考にですか」
「レジャー産業も」
「連合の千年は繁栄の千年だ」
サハラから見ればそうなのだ。
「開拓と発展のな」
「その中でレジャー産業を発展させてきた」
「それもまたサハラの歴史ですか」
「その通りだ。それがサハラの歴史だ」
また言うシャイターンだった。
「しかしそれも終わる時が来る」
「平和になったその時が」
「まさにそれだというのですね」
「そうなればレジャー産業も栄えることになる」
シャイターンの言葉はさらに続く。
「必要になるのだ」
「レジャーも必要なのですか」

「娯楽も」
生真面目な傾向のある弟達にとってはこうした考えはどうしても受け入れ難いものであった。そしてこれは彼等だけではなかった。
「どうもサハラにはそういったものは」
「馴染みがありません」
サハラ全体においてそうなのであった。
「娯楽よりも他の実用的な分野に力を入れるべきでは」
「違いますか？」
「実用的な産業にも力を入れていく」
彼もそれは否定しないのだった。
「これは当然のことだ」
「ではそれに余計に力を入れるべきでは？」
「私もそう考えます」
フラームもアブーもこれは同じ考えであった。やはりストイックな考えがそこには非常に強く出ているのだった。サハラ全体に強くある考えである。
「無駄な部分に力を入れても」
「そうではありませんか？」
「無駄はあってもいい」
シャイターンはそれでも言うのだった。
「無駄はな」
「あってはいいのですか？」
「無駄が」
やはりこれは弟達にはわからない考えだった。サハラ独自のストイックな、イスラムの思想に基く考えが非常に強く出ているのであった。

## 第三十五部第五章　サハラの軍律その二十二

「そうした考えがあってもいいと」
「それはどうにも」
「もっと言えばレジャー産業は無駄ではないのだ」
こうも言うシャイターンであった。
「無駄ではないのだ」
「娯楽が無駄ではないのですか」
「レジャー産業が」
「そうだ。無駄ではないのだ」
シャイターンの言葉は続く。
「それもな」
「そうなのでしょうか」
「それは」
「例えば旅行だが」
彼は今度は旅行も話に出すのだった。
「旅行もだ。旅行は必要だな」
「まあそれは」
「必要でしょう」
弟達も旅行については認めるのだった。旅行というものは何時の時代にもどの文明にも存在している。人が旅を求めるのも習性の一つであるのだ。
「ですがそれが一体」
「どうだというのですか？」
「旅行は旅行に留まらない」
彼は言うのだった。
「旅行により旅行業者が収入を得るな」
「はい、そうです」
「それは」

サハラにおいても旅行は存在する。やはり平和な地域に限られてはいるがそれでも旅行が行われているのは事実なのである。
「ですがそれでも」
「それがどうしたというのですか？」
「旅行をすればホテルに泊まりそこにあるものを食べ珍しいものを買う」
彼はこうも言うのだった。
「そうすれば多くの者が収入を得ることになる」
「ではレジャー産業も同じだと」
「そう仰るのですか」
「その通りだ。レジャー産業はレジャー産業に留まらない」
シャイターンは旅行に関する言葉をそのままレジャー産業に当てはめてみせた。
「それだけではな」
「では他の様々な産業も発達すると」
「だからですか」
「産業の発達は一つの産業の発達に留まらない」
これは産業革命以前から言えることである。
「他の産業も栄えさせていく」
「だからこそレジャー産業もですか」
「発展させていくと」
「そういうことだ。これで話はわかったな」
「はい、まあ」
「それですと」
弟達も頭では納得できるようにはなった。
「ですがそれはやはり」
「サハラ的ではありません」
しかし心では別であった。頭では納得できても心では納得できない、こうしたことは人間として幾らでもあることである。人は感情の生物であるからだ。

「ですからどうしても賛成はできません」
「どうかと思いますが」
「それはわかっている」
シャイターンもまたそれはわかっているのだった。
「サハラは禁欲的だからな」
「その通りです。ですから」
「それはどうも」
「そういうことだ。だからこそだ」
だがそれでも言うシャイターンであった。
「サハラ的に行っていく」
「サハラ的ですか」
「そうしていくのですか」
「そうだ。サハラ的だ」
またこの言葉を出すのであった。
「サハラ的なレジャー産業だ」
「と言われましても」
「どういったものか」
ここでまたいぶかしむ顔になってしまった弟達であった。
「サハラ的なレジャー産業」
「全く想像がつきません」
「私もです」
政治力に長けているフラームも眉を顰めさせている。
「アラビアンナイトでもないでしょう」
「いや、それもあっていい」
しかしここで答えてみせたシャイターンであった。
「アラビアンナイトもな」
「アラビアンナイトもですか」
「産業には色々なものがあるのだ」
政治家としての言葉を続けるシャイターンであった。

## 第三十五部第五章　サハラの軍律その二十三

「その中には現実を見据えるものだけではないのだ」
「というと夢を見せるものもあるのですね」
「簡単に言えばそれがレジャー産業だ」
こう言ってみせるのだった。
「それがな」
「だからこそアラビアンナイトもまたよしなのですか」
「連合を見るのだ」
そしてまた連合の名前を出す。やはりまずは連合であった。
「連合のテーマパークですが」
「非常にごてごてとしたものに見えます」
アブーはサハラの視点から語った。語りながら首を捻ってさえいる。どうしてもその拒否反応を打ち消すことができないでいるのである。
「あれは」
「しかしそこだ」
だが尚も言うシャイターンだった。
「そこなのだ」
「その過度な装飾に何かがあるのですか」
フラームは彼らしく飾った言葉で返した。この辺りはややもすれば直情的でありその本質は軍人、しかも戦術家であるアブーと違っていた。
「あの連合独特の装飾に何かが」
「そうだ。例えばアメリカのそれだが」
国名としてまず出されたのはアメリカだった。言わずと知れた連合において随一の国家の一つである。その国力も存在感も連合の中でかなりのものである。
そのアメリカを話に出して。シャイターンはさらに話すのであっ

た。
「アメリカのテーマパークについてはだ」
「あの童話を思わせる城にしろ」
アメリカのテーマパークの特徴はおおむね千年前から変わってはいない。そこに映画や童話の世界をそのまま実現してみせるものである。
「鮫が出て来る池にしろだ」
「あとは宇宙ですね」
「かつての映画での宇宙です」
あの伝説的古典映画スターウォーズのシリーズのことである。このシリーズの名前は今もなお残っており視聴され続けているのである。
「そういった幻想の世界でしょうか」
「アメリカの」
「他にも中国もそうだな」
続いてアメリカに匹敵する連合でも屈指の国力と存在感を持っている国家を話に出すシャイターンであった。やはり中国もテーマパークを多く持っているのである。
「あの国もだ」
「あの国のテーマパークといいますと」
「中国の古典が主になっていますね」
中国の古典といえば西遊記や封神演義である。つまり仙人の世界を映し出してみせるのである。アメリカの童話や映画と同じことである。
「乗るだけで空を舞うことのできる雲や」
「黄金色の毛を持つ猿や」
孫悟空のことだ。連合ではそれこそ誰でも知っている西遊記の主人公である。あまりにも圧倒的に強く痛快なキャラクターが人気である。
「仙人に」

「他は豪傑ですね」
「そういった国々はどうか」
シャイターンは再び弟達に対して問うた。
「どう思うか」
「それぞれの国の特色をよく出していると思います」
「私もです」
弟達は兄に対して答えてこう述べた。
「アメリカにしろ中国にしろ」
「そう思いますが」
「日本になるとこれが随分違うがな」
シャイターンは今度は日本をその話に出してみせた。
「ロシアにしろだ」
「彼等もそれぞれ存在感がありますし」
「独自の文化、いえ文明を持っていますが」
「日本は他の国のものを躊躇なく自分達の中に組み入れてしまう」
それこそ日本という国ができた頃から変わりはしない。日本の特色として他の国の文明にしろ文化にしろ取り入れてしまうことだ。それもかなり柔軟にである。
しかもただ取り入れるだけではない。シャイターンはこのこともわかっていた。
「尚且つアレンジまでしてな」
「そのアレンジがテーマパークにも出ていると」
「そういうことですね」
「そうだ。それが日本だ」
サハラにいながらも日本のことをよくわかっているシャイターンであった。もっとも彼がよくわかっているのは日本だけではないのだが。

## 第三十五部第五章　サハラの軍律その二十四

「そしてロシアはというと」
「ロシアといいますと芸術に関しては繊細ですね」
「そうなのですか！？」
　このことはフラームは知っているがアブーは知らないことであった。
「あのロシアが」
「御前はロシアのそうした一面を知らないのだ」
「はい、それは」
　こう次兄に対しても答えるのだった。
「あのロシアがですか」
「そうだ。確かにロシアはだ」
　当然ながらフラームもロシアという国はよく知っていた。連合において日米中と共にその国力、存在感を誇示し主導している国家だからである。もっともロシアはこの三国とは大抵衝突しているが。三国同時に相手にすることすらざらという恐ろしい国でもある。
「武骨で国力を背景にした力押しのみのイメージが強い」
「はい」
　アブーはフラームのその言葉に頷いてみせる。まさにロシアのイメージといえばそれである。ロシアといえばやはり力なのである。
「だが芸術に関してはだ」
「違うのですか」
「ロシアは政治、外交、軍事、経済、貿易においては力のみだ」
　これもまた千年前から変わりはしない。ロシアといえば力というのはサハラでも有名なのだ。
「しかし芸術では違うのだ」
「そこに繊細さが加わるというのですね」
「そういうことだ。それがロシアだ」

こう弟に述べるフラームだった。
「それがな」
「また随分とアンバランスな国家ですね」
フラームはかなり率直に己が感じたロシアについて述べた。
「政治や外交にその繊細さを一切向けないとは」
「それでやっていけたからだろうな」
確かにそうした一面があるのも事実であった。ロシアはその圧倒的な力で政治も軍事も解決してきた。大国には大国のやり方があるのだ。
「ロシアは」
「そしてその繊細さを芸術にですか」
「まずはバレエだ」
ここでシャイターンは二人の弟達に対して告げた。
「ロシアといえばだ」
「ではテーマパークにもバレエをですか」
「取り入れているのですね」
「逆に言えばロシア人はバレエを取り入れないと気が済まない」
シャイターンはこうまで言い切ってみせた。
「シンクロナイズドスイミングにしろアイススケートにしろだ」
「そういえばどちらもロシアが得意とする競技ですね」
「我々には縁のないものですが」
この辺りには砂漠に覆われた惑星の多いサハラの風土が出ていた。
「どちらもバレエの動きを取り入れて」
「それで得意なのですか」
「そうだ。サーカスにしろだ」
これもロシア人が好きなものである。ロシアがサーカスを好むのはソ連時代からである。共産圏ではサーカスが好まれた過去がありそれがこの時代も残っているのだ。
「バレエが取り入れられているのだ」
「何でもバレエが最初ですか」

「ではやはりテーマパークにも」
「そうだ。必ずバレエを取り入れた動きを見せるダンサーがいる」
シャイターンはこのこともよく知っていた。
「しっかりとな」
「そして音楽は武骨なものと繊細なものがある」
フラームは今度はロシアの音楽について話した。
「ロシアの大地と外来の西欧を表すように」
「一方はムソルングスキーだ」
シャイターンはそのフラームの言葉に応えて述べてみせた。
「そしてもう一方はだ」
「チャイコフスキーですね」
すぐに答えてみせたフラームであった。
「彼のことですね」
「そうだ。チャイコフスキーは洗練の極みにある」
チャイコフスキーにはかなり高い評価を持っていると言えるシャイターンだった。
「その二つがロシアの音楽には確かにある」
「どちらも非常に素晴らしいものです」
「確かに素晴らしい」
シャイターンもまた言うのだった。

## 第三十五部第五章　サハラの軍律その二十五

「どちらもな」
「そのロシアの音楽もまたテーマパークに取り入れられるのですね」
「それもまた」
「そういうことだ。ロシアもな」
それもだというのだった。
「独自のものをそのテーマパークに取り入れているのだ」
「どの国もそれぞれですか」
「独自の文化、文明をレジャー産業の中に入れていると」
「わかったな。サハラもまた同じだ」
そのサハラのこともここであらためて話すのだった。
「その文化、文明をレジャー産業に映し出す」
「成程。そういうことですか」
「それもまた、なのですね」
「連合のものをそのまま取り入れても何にもならない」
彼はまた言った。
「それでサハラの人間がどう思うかだが」
「正直言いまして連合のものを見せられてもです」
「あまり面白くはありません」
彼等の言葉はそのままサハラの者達の言葉であった。
「やはりサハラです」
「サハラのものでなければ」
「そういうことだ。サハラのコーヒーはサハラの者が最も美味く思う」
このこともだった。サハラのコーヒーは実際に連合やマウリアにも輸出されている。しかしそのコーヒーを最も美味いと思うのはやはりサハラの者達なのだ。
そのコーヒーは今シャイターンの手の中にあった。彼はそれを飲

みながらまた話すのだった。
「このコーヒーもだ」
「そういうことですか」
「コーヒーもレジャー産業もそういう意味では同じだと」
「そうだ」
こうも言うシャイターンだった。
「コーヒーもレジャー産業もだ。同じだ」
「わかりました。では兄上」
「統一され平和が実現された暁には」
「レジャー産業も興していく」
シャイターンはこのことをここでも弟達に対して告げた。
「これでわかったな」
「はい、それでは」
「その時には」
「平和は近付いてきている」
シャイターンはこのことをはっきりと感じ取っていた。これは情勢よりも空気から感じ取っていた。これはシャイターンの勘の鋭さから感じ取ったものである。
「そしてその平和はだ」
「その平和は」
「やはり兄上が」
「そうだ。もたらすのだ」
これは確信であった。
「私の手によって統一されてな」
「その通りです。サハラは兄上によって統一されます」
「そして兄上が皇帝になられ」
それはもう決まっているというのだった。彼等の中では。
「全てがもたらされます」
「サハラの歴史上最大の英雄によって」
「私がその最大の英雄だ」

シャイターンはこのことも確信しているのだった。
「サハラに統一と平和、そして繁栄をもたらすな」
「はい、そしてサハラは永遠の繁栄を迎えます」
「千年の戦乱の後に」
「その為には手段も選ぶ必要はない」
黒い輝きだった。琥珀を思わせるような。その黒い輝きを放つ目で今彼が見ているものは。遥かな未来であり銀河そのものであった。
それを見ながらさらに語るのであった。
「一切な」
「無論それはわかっております」
フラームがにやりと笑って兄のその言葉に対して返した。
「ですから。御安心下さい」
「そうか。では頼りにさせてもらう」
シャイターンは次弟のその言葉を受けて満足そうに頷いてみせた。
そしてそのうえで。こうも彼に言うのであった。
「政治は御前だ」
「はい」
「政治において私を補佐するのは御前だ」
こう告げるのであった。
「それはいいな」
「わかっております」
彼もまたそれを受けて頷いてみせる。
「ですから。御安心下さい」
「閣僚達と共にだ」
彼等と同格とまで言うのである。
「御前はシャイターン家における宰相となってもらう」
「御期待下さい」
フラーム自身もまた兄のその言葉に自信のある声で返してみせる。

## 第三十五部第五章　サハラの軍律その二十六

「シャイターン家の為に」
「頼むぞ。そしてだ」
次弟の言葉を受けてその次にはアブーに顔を向ける。今度は彼であった。
「アブーよ」
「はい」
「御前は軍事だ」
彼はそれだというのである。
「わかっているな」
「勿論です」
彼もまた淀みなく長兄に対して応えた。
「私はシャイターン家の剣」
「その通りだ」
それだというのである。彼はシャイターン家の剣だと。ある意味においてフラームとは全く正反対のものを要求されていると言ってよかった。
「御前は剣だ」
「だからこそ戦うというのですね」
「だが。戦うだけではない」
それだけではないというのだ。この辺りの考えがシャイターンであった。彼は軍人であり優れた戦術指揮官であるがそれだけではないのである。
「軍事はただ戦場で勝つだけではないな」
「それがわかるようになりました」
ここでも淀みなく答えるアブーであった。
「ようやく」
「いいことだ。戦場はただ結論が出される場所だ」

それだけだというのである。
「ただな」
「既に解答は出されているというのですね」
「そういうことだ。戦略、そして軍事行政」
この二つについても考えを及ばせることを忘れてはいない。むしろそちらに重点を置いてさえいる。この辺りが軍人であるだけでなく政治家でもあるシャイターンならではの考えであった。連合国防相である八条義統のそれに近いと言ってもいいものである。
「そういったことにもだ」
「活躍してもらうというのですね」
「剣は戦場でだけ使うものではない」
アブーと剣を重ね合わせてみせた言葉である。
「そういうことだ。いいな」
「はい、それではです」
また応えるアブーであった。
「私は軍事において兄上を支えましょう」
「御前達は私の両輪となってもらう」
今度は二人をひとまとめにして言ってみせた。
「わかったな」
「はい、それではそのように」
「お任せ下さい」
その両輪が主に応えてみせる。
「是非共」
「兄上の為に」
それぞれ口を揃えて誓いの言葉を出す。
「そしてシャイターン家の為に」
「サハラの為に」
「私もまたサハラの為に戦おう」
シャイターンもまたその考えを持っているのだった。ただ野心を持っているだけではなかった。そこには複数の感情が入り混じって

いるのだった。
「そしてアッラーの為にだ」
「そうですね。我々は全てアッラーの僕です」
「それならば」
ムスリムの考えであった。確かに野心に満ち陰謀を操ってきた家の者達であるがその彼等にしろアッラーからは離れられないのであった。
「喜んで果たさせて頂きます」
「我等の責務を」
「そうするのだ。それではだ」
「はい」
「それでは」
「これで話を終わる」
そしてシャイターンは最後にこう告げた。
「下がってよい」
「はっ、それでは」
「これで」
二人はこれで下がりシャイターンは一人になった。そうして一人物思いに耽りながらコーヒーを飲み。今はそうして時間を過ごすのだった。これからのことを考えながら。

第三十五部　完

２００９・８・１

# 第三十六部第一章　エウロパの英雄その一

エウロパの英雄

エウロパは今未曾有の危機にあった。この危機はまさにエウロパはじまって以来とまで言われそれこそブラウベルグ登場以前の連合に追い詰められていた千年前に匹敵するとまで言われるものであった。

「生きていくことだけで必死だ」

「それ以外のことは考えられない」

こうした言葉が巷にあふれ返っていた。連合との戦争で経済は疲弊し敗戦により多くのものを失った。失ったのは人命や兵器、そして領土だけではなかったのだ。

確かに多くの将兵と兵器を失った。しかし戦争をすれば軍人が戦死し兵器が失われるのは当然のことだ。連合軍は一般市民やその産業、施設等には手をかけなかったのでそうしたダメージは少なかった。確かに賠償金のようなものは取られ戦争で産業も流通も麻痺はしたがそれでもその損害は最低限であったのだ。実際のところ軍も三割の人員や兵器を失ったがそれでも顕在だった。

領土もニーベルング要塞群にブラウベルグ回廊を失いはした。そしてニーベルング周辺を非武装地帯にさせられた。だが失ったのはそのニーベルングとブラウベルグだけで他は失ってはいなかった。非武装地帯とはいっても領土には変わりない。それはサハラとの境であるモントローズも同じだった。

彼等の受けた傷は物理的なものよりも精神的なものの方が大きかったのだ。やはり連合に敗北したこと、これがかなりの精神的ダメージを与えていた。

「確かに国力差はあった」

「実質百倍だった」

これがわかっていてもだ。百倍の国力差は尋常なものではない。

これを考慮すればエウロパは敗れるべくして敗れたと言えるのは確かだ。
しかしだった。それでもだ。心ではそうはいかない。彼等が衝撃を受けるに足るものが連合に対する敗北であるのもまた事実だったのだ。
「かつての植民地の者達に敗れるとは」
「あの蛮人達に」
これであった。見下してきた相手に敗れる、これ程屈辱的なことはない、だからこそ彼等はその衝撃から立ち直れないでいるのだった。
「敗れそして領土を奪われた」
「バチカンさえも」
そしてバチカンもだった。連合への移転が決まってしまった。キリスト教は欧州の頃から心であったがそれまでもが奪われてしまう事態だったのだ。
こうした事情が彼等に衝撃を与えそのうえ立ち直れなくさえしてしまっていた。所謂アノミーである。エウロパは今完全にアノミー状態に陥ってしまっていたのだ。
「何をしても駄目だ」
「無駄だ」
こんな言葉も巷に溢れてしまっていた。
「もうエウロパは終わりだ」
「何にもなりはしない」
こうした感情がそのまま国家に表れるのも当然だった。産業の復興も思うようにはいかずエウロパ全体が虚脱状態に陥っていた。このことはエウロパ全体で問題になっていた。
「立ち直らせるべきだ！」
エウロパ中央議会でもこんな言葉が出ていた。
「市民達を立ち直らせるべきだ。このままではどうにもならない！」
ある若い、保守派の議員が叫んでいた。

「だからこそ。今はだ！」
「どうしろというのだ？」
「そうだ、口で言うのは容易い」
改革派だけでなく彼の同志である筈の保守派の議員達からも声があがっていた。
「しかし何をしろというのだ？」
「今の我々は」
「それは」
若い議員はこう突っ込まれて黙ってしまった。
「それは」
「ほら見ろ、言えないではないか」
「何も言えないな」
議員達はその彼に対してさらに突っ込みを入れた。
「今我々にできることは何もない」
「何もかもが失われたのだ」
誰もが思っていることであった。
「それでどうしろというのだ？」
「生きていることだけしかできないではないか」
「誇りはもうない」
誇りという言葉が出されるのだった。
「我等の誇りはもう」
「奴等に叩き潰された」
奴等というのが連合軍であるのは言うまでもない。
「あの若い東洋人に敗れたのは」
「国防長官にな」
八条のことであった。彼こそがそのエウロパを破った連合の者であった。エウロパでは最も忌むべき男になってしまっているのだった。

## 第三十六部第一章　エウロパの英雄その二

「敗れたのだ。完全にな」
「もうどうしようもない」
無気力な言葉が議会に響く。
「エウロパは敗れた」
「完全にな」
「・・・・・・・・・・」
若い議員はもう何も言えなかった。これは議会だけではなかった。敗れた軍にしても。最早何かをしようという気力も失われていた。
兵士達は碌に動くこともなくただ酒を飲むだけだった。朝も早くから集まって朝食となっているビールをそのまま飲み続けるだけであった。
食堂で兵士達が何時までも残っている。そして赤ら顔で言うのだった。
「酒はあるな」
「ああ」
「食い物もな」
朝食のそのソーセージである。あとはザワークラフトもある。エウロパ軍の下士官や兵士達の実に始末な朝食をそのままつまにしていた。
「あるぜ。どんどんやろうぜ」
「そうだな。まだ一日は長いしな」
酒を飲みながら厭世観さえ漂う言葉が出されていた。
「飲むか。これからな」
「ああ、飲もうぜ夜までな」
「いつも通りな」
これが彼等の日常になってしまっていた。誰もが生きてはいない、ただそこにあるだけの目の光でビールを飲み続けている。そうした

兵士達が食堂に集まっていた。
「もう号令もかからないしな」
「曹長達はどうされたんだ？」
「同じさ」
死んだ目の者達の言葉が空虚に続く。
「先任下士官室でな」
「飲んでるのか」
「あっちはあれだったぜ。ウイスキーだ」
それだというのである。
「皆で飲んでるさ。昨晩からな」
「その前の晩からもだよな」
「ああ、俺達と同じさ」
彼等もまた同じだというのだった。先任下士官も若い兵士達も皆死んだ目でただ酒を飲み続けている日々に陥っているのだった。
「飲んでるさ、ずっとな」
「そうか、ずっとか」
「ああ、ずっとな」
やはり空虚な言葉であった。
「飲んでるままさ。他には何もすることがないさ」
「お貴族様達はワインか？」
即ち将校であった。エウロパ軍では貴族は必ず将校からはじまる。だから将校はそのまま貴族だという考えが強くあるのである。
「それで一日をお過ごしかね」
「その通りさ。あっちはワインさ」
やはりそれであった。
「司令も艦長もな。皆な」
「飲んでるだけか」
「今は誰もがそうさ」
今度は自嘲めかした言葉だった。
「誰でもな。飲んでるだけさ」

「負けたんだ」
自暴自棄の言葉も出された。
「どうせよ。何やってもよ」
「そうさ。もう何にもならないんだ」
「エウロパは終わったんだ」
国家は残っている、しかしそれでもこう言われるのだった。
「このまま飲んだくれてる他ないからな」
「光栄あるエウロパ」
かつて常に言われていたことである。白い肌こそが高貴の証だと。だからこそ混血ばかりしている連合には人口やそういったもので負けているだけで質では負けてはいないと、そう思ってきた。しかし敗戦がそういった自信を完全に打ち砕いてしまったのだ。
それが今の彼等をもたらしてしまった。一日中飲むしかない彼等を。まさにアノミーの崩壊であり彼等はそれから抜け出せなくなっていたのだ。
「朝礼の時間だぜ」
「いいさ、そんなの」
兵士の一人が同僚に言葉を返した。
「どうせ誰も出て来やしないんだからな」
「そうだぜ」
別の兵士がそれに応えたうえでビールを一杯飲んだ。大ジョッキを一気に空けてしまった。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1089a/

星河の覇皇

2011年11月29日15時07分発行